魔道戦記リリカルなのはANSUR～Last codE～

Last testament EX

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

http://www.akatsuki-novels.com/

注意事項

このＰＤＦファイルは「暁～小説投稿サイト～」で掲載中の小説を「暁～小説投稿サイト～」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁～小説投稿サイト～」を運営する肥前のポチに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔道戦記リリカルなのはＡＮＳＵＲ～Ｌａｓｔ　ｃｏｄＥ～

【作者名】

Ｌａｓｔ　ｔｅｓｔａｍｅｎｔ　ＥＸ

【あらすじ】

一体どれだけの時を過ごしたのだろう。一体どれだけの出会いと別れを経験したのだろう。一体どれだけ資格も無いのに泣いたのだろう。一体どれだけの手を振り解いてきたのだろう。一体どれだけの命を奪ってきたのだろう。一体どれだけ命を救えたのだろう。一体どれだけの憎悪と憤怒を受けてきたのだろう。一体どれだけの死をこの身に受けたのだろう。だが、それももう終わり。あぁもう終わりなんだ。

※本作『魔道戦記リリカルなのはＡＮＳＵＲ～Ｌａｓｔ　ｃｏｄＥ～』は、『魔法少女リリカルなのはＡＮＳＵＲ～Ｃｒｏｓｓｆｉｒ　Ｅ～』の続編となります。ですのでまずは『Ｃｒｏｓｓｆｉｒ　Ｅ』を先に読んでいただければ幸いです。

※２９年５月。本当は随分と前から判っていましたが、こちらでも以前行った修正巡りが効いていませんでした。おのれＩＥめ。グーグルクロームでの修正は上手くいくのですが、ＩＥではどうも反映されない。まぁ私のパソコンが悪いのでしょうが・・・

ＡＮＳＵＲ０天秤の狭間で揺れし者～Ｓｔａｒｔｉｎｇ　ｔｈｅ
Ｌａｓｔ　Ｔｅｓｔａｍｅｎｔ～

ＶＳ。―。―。―。―。―。
界律の守護神ＶＳ霊長の審判者
。―。―。―。―。―。ＶＳ

無限に広がるは青く澄み渡る空。同様に広がるは生命の無い鉄錆色の荒野。地平線の彼方まで続く２つの領域。その天壌を翔けるのは、蒼と赤の２つの閃光。蒼い光の先を翔けるのは赤い光。軌道からして、蒼は赤を追いかけているようだ。
２つの光は空に２色の光の尾を残し、光の過ぎたところは幾何学模様の図形を描いている。とそこに、蒼の光が赤の光の追尾を止め、その場に停止。その直後、

――弓神（コード・ウル）の狩猟――

蒼の光から一条の蒼い光線が放たれる。その一条の光線は少し進んだ後、爆ぜて数百とも言える無数の光線となった。蒼い光線群は様々な軌道を取り、先を翔けている赤い光に殺到していく。赤い光は速度を緩めることなく、迫り来る光線群を避け続ける。

「ああもう！　さっきからチマチマと面倒でうざったくてイライラする攻撃ばっかしてきてさぁ・・・ッ！」

蒼い閃光に追いかけられていた赤い光が急停止。赤い光が治まると、

そこには１０代前半くらいの少女が苛立った表情を浮かべていた。少女は自分を追いかけて来る光線群をチラリと見、「チッ」と舌打ち。小さくて可愛らしい白い両手を、お世辞にも大きいとは言えない胸の前で水を掬い上げるかのような形にする。その両手に溢れるのは水ではなく、赤い赤い光。少女は両手に溢れる赤い光を頭上へ向かって放物線上に放った。

――Ｑｕｉ　ｐａｒｃｉｔ　ｍａｌｉｓ，　ｎｏｃｅｔ　ｂｏｎｉｓ／悪人を許す者は、善人に害を与える――

放たれた赤い閃光は曲線を描き、少女に迫ってくる蒼い光線群へ向かって行く。何度目か判らない閃光群同士の衝突。ガシャァンッ！とガラスが割れたかのような甲高い音が空に響き渡る。

「さっきからさぁ、殺（ヤ）る気のない干渉攻撃ばっかしてきて何のつもり！？」

先を翔けていた少女――テールアップにされている赤い髪、黄金に輝くツリ目。蒼いロングエプロンドレス。エプロンの腰紐を留めるのは大きなリボン。目立つ真っ赤なロリータシューズの足の甲で留めるストラップには薔薇を模った装飾が付いている――は先程から自分に攻撃を繰り返す者へと振り返り、人差し指をビシッと突きつける。

「あたしを馬鹿にしてんのっ！？　この霊長（ユースティティア）の審判者のナンバーＩたる始原プリンキピウムをさ！　そうだって言うなら許さないんだからね天秤！」

プリンキピウムと名乗った少女は両手を腰に当て仁王立ちとなり、彼女から４０ｍほど距離を開けた地点で佇む者へと怒鳴り散らす。プリンキピウムに怒鳴られた天秤と呼ばれた者は「勘違いをするな」と返し、左手に持つ２ｍほどの漆黒に輝くケルト十字を肩に担いだ。

「勘違い？　天秤、昔のあんたならもっとキレのある干渉攻撃を撃ってたじゃんっ」

「認めるのも癪だが、お前が強くなったんじゃないか？　プリンキピウム」

天秤という者は、漆黒の神父服（キャソック）を着ており、裾には幾何学模様の金の刺繍や金の装飾が施されて、チャラチャラと音を出している。キャソックと同様に漆黒のフード付きの外套（マント）を羽織っていて、風が吹く度にはためいていた。

フードの奥にある顔は中性的な顔立ちをしていて、所見では性別を判断するのは難しいだろうが、声からして男であることが判る。切れ長の双眸は、右がラピスラズリ、左がルビーレッドというオッドアイ。彼の背には、サファイアブルーに光り輝く薄く細長いひし形の光翼が１０枚あり、その１０枚の光翼の間から１２枚の蒼い光剣の剣翼が伸びている。

「・・・え？　そうなのかな？　ふ～ん。ならいいんだけど。そんじゃさっさと死んじゃってよ。あたしより弱いんだったらさっ！」

天秤という男とプリンキピウムという少女が再び睨みあい対峙する。

天秤はケルト十字型の錫杖"第四聖典"の先端を向け、

――女神（コード・ソール）の陽光――

サファイアブルーに輝く火炎の砲撃を放った。対するプリンキピウムは、自らへと一直線に迫り来る炎熱砲撃ソールへと右掌を翳す。

――Ａｄｖｅｒｓａ　ｖｉｒｔｕｔｅ　ｒｅｐｅｌｌｏ／私は逆境を勇気によって跳ね返す――

プリンキピウムの前面に展開されたのは、干渉能力による不可視の障壁。干渉能力というのは、全ての物理現象に干渉する実数干渉と、理論などでは説明しえない幻想に干渉する虚数干渉の２つの総称だ。天秤と呼ばれた男が放った炎熱砲撃は実数・虚数両方の干渉が付加されており、プリンキピウムはそれに対し、同様に実数・虚数両方の干渉防御を発動した。

その能力はまさしく神の奇跡。しかしその神の奇跡を２人の人間が扱った。いや、２人は正確には人間ではないのだ。確かに人間の姿をしているが。だがそれだけだ。人の姿をした何か。それが天秤とプリンキピウムだった。

「ほぉら、跳ね返しちゃうぞッ♪」

不可視の障壁に弾き返された砲撃ソールは、一直線に砲撃主である天秤へと返る。天秤は右手をソールへと翳す。するとソールは天秤の干渉能力によって、球体状の巨大な炎塊となった。すぐさま天秤は野球のバッターのように"第四聖典"を振りかぶり、炎塊となっ

たソールへ向けて勢いよく振るった。衝突。炎塊は真っ直ぐプリンキピウムへと返って行った。

「面白いじゃんっ♪」

プリンキピウムの右手に赤い光が溢れて、すぐにある形へと集束する。赤い光は２ｍ近い真紅のカンタベリー十字型の錫杖となった。プリンキピウムは天秤と同じようにカンタベリー十字を振りかぶり、炎塊を打ち返そうとした。

「爆殺粛清（ジャッジメント）」

しかしその前に天秤がボソッと告げる。プリンキピウム間近まで接近していた炎塊が突如大爆発を起こし、爆炎がプリンキピウムを呑みこんだ。当然爆発にも干渉能力が付加されており、プリンキピウムにダメージが通る。だが、天秤はそれだけで良しとはしなかった。彼女の実力の高さを知っているからだ。彼は畳みかけることの出来る今を好機とし、

「我が手に携えしは確かなる幻想」

呪文と思しき詩を詠唱。すると彼の周囲に、武器らしきものが突然いくつも現れる。それは、３０ｃｍ程度の黄金の柄の上下に刃渡り１ｍはあろうアクアマリンのような宝石の穂を持つ槍だった。

「目醒めよ、神槍グングニル・・・！」

天秤はさらに言葉を紡ぐ。２０と存在するまったく同じ形の槍――"神槍グングニル"という銘の武器の"力"を解放した。穂にうっすら刻まれているルーン文字と呼ばれるいくつもの文字が輝きだす。そして爆発もようやく治まり黒煙となっているその場より、

「痛ったいなぁ・・・・天秤」

プリンキピウムの不機嫌そうな声が漏れて来る。天秤は「やはりな」と嘆息。しかし天秤はそれに慌てることなく、パチンと指を鳴らした。

――最高神（コード・オーディン）の神槍――

２０の"グングニル"が一斉に黒煙へと突撃していく。黒煙より姿を露わしたプリンキピウムが"グングニル"の接近に気付いた。彼女はカンタベリー十字を振るって、

――Ａｄｖｅｒｓａ　ｖｉｒｔｕｔｅ　ｒｅｐｅｌｌｏ／私は逆境を勇気によって跳ね返す――

全方位に干渉防御を展開する。また防御できると思っていたプリンキピウムだった。だがその考えは甘かった。２０の"グングニル"は干渉防御に弾かれることなく、不可視の障壁を突破しようと突き刺さる。プリンキピウムの表情が驚愕に染まる。彼女は自分の干渉防御に絶対の自信があったのだ。

「私が人間だった頃より共に歩んできたグングニルと魔術だ。そこ

に守護神の干渉能力を付加した。そう易々と防ぐことはできないぞ」
天秤が誇らしげに言う。人間だった頃より。つまり彼は自分が人間でない事をハッキリと告げた。しかし天秤とプリンキピウムの間に、そのような事実など無意味だ。

「人間の創った魔術如きが、最上位存在である霊長（ユースティティア）の審判者のあたしを傷つける？」

「元人間である私も、今は貴様と同じ最上位存在である界律（テスタメント）の守護神だぞ？　人間の創った魔術とはいえ、干渉付加有りだ。貴様にでも十分通用する。さぁ覚悟しろ、プリンキピウム。その体に風穴を開けてやる」

プリンキピウムの言った"霊長（ユースティティア）の審判者"。それは正しくあらゆる存在の上位に位置することに変わりはない。天秤の言った"界律（テスタメント）の守護神"もまた同様に、あらゆる存在の上位に位置づけられる。

"界律の守護神テスタメント"。
あらゆる次元に存在する無数の世界、その意思たる"界律"からの助力要請で、その"界律（セカイ）"へと召喚され、召喚された理由である契約を執行する抑止力。霊格に関しては神霊クラスと同等。神殺しの契約内容によってはそれすら上回る。
喚ばれた世界に住まう存在とは一切関わらず、契約を執行するのが普通となる。契約内容によっては、世界や人類、文明などを滅亡させる場合もあるが、それは"界律"によって望まれた結果ゆえ、正否はともかくとして"守る"という理由あるものだ。だが・・・

「ぷふっ、調子に乗ってんの天秤？　このくらいで？　あはっ♪
人間は一匹残らず殺し、文明など残さないっ。だから、あんたの魔術も抹消対象っ！　つまり魔術なんかであたしを傷つけることなんて許さないんだからっ！」

"霊長の審判者ユースティティア"。
名の通り霊長――人類に対して審判を行い、結果如何に関わらず一方的に殲滅しようと言う概念存在。
その理由は、人間が存在するだけで苛立たしいから、だ。しかしその理由には実は意味が存在している。
それは人類の在り方だ。人類は人間同士で奪い、争い、殺し合うという愚行を飽くことなく続ける。その愚行が人類だけの範囲に留まれば、彼女ら"霊長の審判者ユースティティア"も文句はない。
しかしその愚行が他の生命、果てには世界の滅亡までに行き着いてしまう事が多々ある。それを許せないのが"霊長の審判者ユースティティア"だ。ゆえに他の生命に影響が出る前に、人類の勝手で世界が滅ぶ前に、という考えの末に人類を一方的に殲滅する。

片や世界も人類も他の生命も、守りもすれば守るために滅ぼしもする"界律の守護神テスタメント"。
片や世界と他の生命のためにという理由で人類のみを滅ぼすだけの"霊長の審判者ユースティティア"。
どちらが正しくて、どちらが間違っているのか。話し合いなどという机上の戦争はすでに終わっている。その２つの概念存在は、ただお互いの目的のために衝突を何度も繰り返す。もうそれしか道を知らないから。それ以前にその道しか無いからだ。

「許可は下りている。貴様たちはまた人類を滅ぼしたな。その世界の人口は約１４０億。だったのに一人として生存者がいない。よくもまぁ派手にやってくれたな。だからこそこうして、その世界の意思・界律の契約によって、我々テスタメント四柱が召喚された。契約内容は、ユースティティア・ナンバーＩ始原プリンキピウム。貴様を筆頭とした、断罪ダムナティオ、真実ウェーリタース、恩寵グラーティアの計４体の抹消だ」

「うっっざぁ～い。あたし達ぃ、その世界のために人間を殺しただけなのにさ。その世界の人間、もうちょっと放っておくと世界大戦おっ始めるとこだったんだよ？　そうなったら、犬さんや猫さん、鳥さんや魚さん、虫さんやお花さん、色んな命も死んじゃってた。世界だって無傷で済まない。そうなる前に人間を殺し尽くした。悪い事じゃないじゃん」

プリンキピウムは頬を膨らませる。自分たちは間違っていないと。殺されるような事を仕出かそうとしていた人類の方が悪いのだと。天秤は「結果を早急に導き過ぎだ」と大きく溜息を吐き、２０の"グングニル"の突撃力を増加すると、徐々にプリンキピウムの干渉防御を侵食していく。

「うざいうざいうざい・・・うざいんだよっ！」

「我、界律（テスタメント）の守護神が一柱、天秤の狭間で揺れし者４ｔｈ・テスタメント・ルシリオン。我が御名と権限において、始原プリンキピウムへの断罪をここに執行する」

天秤――黒き第四の力に座す４ｔｈ・テスタメント・ルシリオンは、左手に携えている"第四聖典"の投擲体勢に入った。プリンキピウムも干渉防御の中で、手にする真紅のカンタベリー十字を水平に構えた。

――Ｄｉｖｉｄｅ　ｅｔ　ｉｍｐｅｒａ／分割して統治せよ――

――汝よ敬え、汝よ崇めよ、汝よ称えよ、汝よ祈りて、ただ跪け――

テスタメント・ルシリオンが"第四聖典"を投擲。漆黒の光の尾を引いた"第四聖典"がプリンキピウムの干渉防御に着弾。不可視だった干渉防御に揺らぎが生まれ、可視化する。役目を終えた"第四聖典"が手元に戻ってくる。その直後、２０の"グングニル"はプリンキピウムの干渉防御を突破し、プリンキピウムの矮躯を蹂躙した。

首から下に無傷なところはなく、だが貫かれた傷口より漏れるのは血液ではない。虹色の光の粒子だ。傷口より光粒子が漏れだすたびにプリンキピウムの輪郭が徐々に崩れていく。"グングニル"が貫いている傷口から多くの光粒子が解離していき、崩壊が始まっていく。プリンキピウムの終焉だ。

「・・・・こんな芝居などする必要は無いぞ、プリンキピウム」

しかしテスタメント・ルシリオンはそう言い、崩れていくプリンキピウムとは別のところに視線を移す。それに対し何の反応もないま

ま、"グングニル"で貫かれていたプリンキピウムが完全に崩壊、消滅する。貫いていたモノを失った"グングニル"はすべてテスタメント・ルシリオンの周囲へと戻り、蒼い魔力となって大気に霧散していった。

「干渉能力で創られた贋物というくらい判断が付いている。テスタメントもユーステティアもよく使う手だ。私もかつての契約で使ったことがある」

するとどこからともなく「やっぱり騙されてくんないか」という、プリンキピウムの声が空に響き渡る。

そう、テスタメント・ルシリオンの言う通りプリンキピウムは生き伸びていた。

干渉能力はまさに神の奇蹟。自我を持った分身を創る事も容易い。プリンキピウムは"グングニル"に貫かれる直前、自分に重なるように分身を創りだし、"グングニル"の着弾０，０００００００００１秒前という時間の中で次元の狭間である位相空間へ転移し、直撃を避けていた。

「油断していたところで、この第七偽典で消し飛ばしちゃおうと思ったんだけど」

「ユーステティアを相手に油断などするものか。特に貴様に対してはなプリンキピウム」

姿を再び現した始原プリンキピウムは真紅のカンタベリー十字"第七偽典"を構え、天秤の狭間で揺れし者４ｔｈ・テスタメント・ル

シリオンもまた漆黒のケルト十字"第四聖典"を構えた。

「それじゃあ第二ラウンド――」

――Ｍｅｍｅｎｔｏ　ｍｏｒｉ／死を記憶せよ――

「――始めッ♪」

プリンキピウムが"第七偽典"を薙ぐと、それは綺麗な真紅の干渉砲撃を扇状に４４条と放つ。砲撃群は曲線を描き、テスタメント・ルシリオンへと殺到しようと軌道を変える。

――軍神の戦禍（コード・チュール）――

対するテスタメント・ルシリオンは、自分の周囲に千は超える剣・槍・鎌・斧などと言った武器を展開。そのどれもが強大な"力"を有しており、そこに干渉能力を付加することでさらに威力を高めてある。それらが一斉に、

「蹂躙粛清（ジャッジメント）！」

テスタメント・ルシリオンの号令に従い射出された。

。―。―。―。―。

天秤の狭間で揺れし者４ｔｈ・テスタメント・ルシリオンと始原プリンキピウムの戦場より遠く離れた場所。そこは海上だ。とは言っ

ても誰もが知る澄み渡る青ではなく、泥や廃棄物で汚れてしまっていて透明度など無い。

「ギャハッ！　オラオラッ、とっとと逃げねぇと喰われちまうぜッ！」

品の欠片もない笑い声を上げているのは、黄金のキャソックとフード付きの外套姿の男だ。フードから覗く顔はなかなかの美青年だ。しかし表情は酷い。狂喜に目を見開き、口を三日月形に歪めている。右手に携えているのは、２ｍくらいの黄金のロレーヌ十字架。その全てが黄金一色の男の周囲に浮かぶ波紋が七つ。波紋より七頭の龍が突き出していた。七頭の龍は巨大で、胴周りは約９００ｍ強。それらの龍の胴は全体でもないというのに、その長さは２ｋｍはある。

「くっ、さすがは死と絶望に微笑む者か・・・！」

その７頭の龍が大きく開けた口より逃げるのは、これまた竜だ。２対の翼を生やしたどす黒い血の色をした竜だ。鋭角な頭、２つの鋭い瞳はサファイアのように蒼く、並ぶ牙は水晶のような美しさがある。背には牙と同じ水晶のような尖塔がいくつも並び、背ビレであるソレはまるで山脈のようだ。全長は１・５ｋｍ強。翼を広げての全幅は２ｋｍほどの大きさだ。大きく翼を羽ばたかせ、迫りくる七頭の牙から逃れようと曇天を翔け回る。

「そうともっ。さっさとその汚らしい血色の身体に刻み込めよっダムナティオよぉっ！　死と絶望に微笑む者２ｎｄ・テスタメント・

ティネウルヌスの名をッ！」

テスタメント・ティネウルヌスは高笑いし、自らの使い魔である龍に喰われようとしている血色の竜・断罪の意を持つダムナティオを舐めまわすように見る。ダムナティオはテスタメント・ティネウルヌスの通り名「"嘲笑"風情が！」と怒りの咆哮を上げる。

「我は霊長の審判者（ユースティティア）がナンバーX断罪ダムナティオ！　そう易々と狩れると思うなッ！」

――Ｑｕｉ　ｐａｒｃｉｔ　ｍａｌｉｓ，　ｎｏｃｅｔ　ｂｏｎｉｓ／悪人を許す者は、善人に害を与える――

水晶の尖塔群という背ビレから発射される白い光弾。その数は無数。それらが７頭の龍へと殺到していき着弾、白い爆光が空を染め上げる。ダムナティオは急反転し、なおも治まらない爆光へと大きく口を開く。口内にあるすべての牙が輝きだし、口内の中央に白い光球が発生。

――Ｍｅｍｅｎｔｏ　ｍｏｒｉ／死を記憶せよ――

放たれる白い火炎砲撃。爆光が爆炎に塗り替わる。ダムナティオはさらに火炎砲撃を撃ち込む。もう一度大きな爆発が起きる。

「ハハ、ハハハハハ。燃えろ、燃え尽きてしまえ」

黒煙の下から、火炎砲撃の直撃を受け炭化してしまっている龍が海

面へと落下していく。だが、「惜しかったなぁぁっ！」とテスタメント・ティネウルヌスの狂喜の叫びがこだまする。黒煙の中から2頭の龍が突き出してきた。しかし無傷ではなく、所々が崩れている。それでもダムナティオを喰い殺そうと牙を光らせる。

「死に体ごときが我を捉えられるものか」

――Ｑｕｉ　ｐａｒｃｉｔ　ｍａｌｉｓ，　ｎｏｃｅｔ　ｂｏｎｉｓ／悪人を許す者は、善人に害を与える――

背ビレから無数の光弾が再び発射され、迫る2頭の龍を迎撃。2頭の龍はダメージを物ともせずに突っ込んでくるが、やはりすでに瀕死だったゆえ、苦痛の悲鳴を上げながら落下していく。曇天の下、テスタメント・ティネウルヌスと断罪ダムナティオのみでの対峙。

「チッ。もっと根性見せろよな。俺の使い魔ならよ」

「責めてやるな嘲笑。霊長の審判者（ユースティティア）たる我を相手にただの龍属なりに頑張ったのだ。褒めこそすれ責めるのはお門違いというものだ」

ダムナティオが先程まで自分を喰い殺そうとしていた龍に称賛を贈る。結果は見えていた。ただの龍と竜の姿をしているだけの最高位の概念。それゆえにどれだけ追い回されようとも結果的に負けるなどとは考えていなかった。

「フンッ。そうだな。確かに責めるのは間違いだな。何せ――」

ダムナティオはテスタメント・ティネウルヌスの凶悪な笑みを見、すぐさまその場から離れようとした。だが全てが遅かった。何も無い虚空に４つの波紋が生まれる。３つは先程までの七頭の龍と同じ大きさ。しかし残り１つの波紋は違った。巨大過ぎる。他３つの波紋の倍はあるだろう。４つの波紋より出でるのはやはり龍。

「――こうしてお前を喰い殺すことが出来るマザーを召喚できるんだからな」

「ぐぉっ！」

３頭の龍がダムナティオの左右の翼と尻尾に齧り付く。咬まれた部分より虹色の光粒子が血飛沫のように漏れだす。龍はそのまま口の開閉を繰り返し、ダムナティオを噛み続ける。ダムナティオも「放せッ！」ともがくが、がっちり噛みつかれていて抜け出さない。ブチブチグシャッと音を立て、右の巨翼が噛みちぎられ、光粒子となって霧散する。

「あーあ。急がねぇから食いちぎられたぜ、オイ」

「貴様・・・！」

――Ｎｏｌｉ　ｍｅ　ｔａｎｇｅｒｅ／私に触れるな――

ダムナティオの背ビレである水晶群が勢いよくミサイルのように発射される。それらが３頭の龍の胴体を貫いていく。３頭の龍は苦痛に絶叫し、血反吐を吐きながら悶え苦しむ。ダムナティオは笑い声

を上げ、離脱を試みた。しかし先程の攻撃が自らの首を絞めるとは思ってもいなかった。最後の一頭、龍たちの母龍（マザー）の、もう治まることのない怒りを買ってしまっていた。

「あばよダムナティオ。お前の負けだ」

そしてそれこそが、テスタメント・ティネウルヌスの狙いだった。龍の女王たる者の怒り。その"力"は今の弱まっているダムナティオとほぼ同等。それゆえに"ユースティティア"であるダムナティオに致命傷を与えることが可能。

「ぐぉあ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟ッッ！」

だからこそ、ダムナティオが龍の女王に噛みつかれ、下半身を一噛みの下に失った。反撃に転ずることも許されず、ダムナティオは龍の女王に丸呑みされて、粉砕された。ダムナティオの断罪を終え、テスタメント・ティネウルヌスは龍たちの召喚を解く。

「２ｎｄ・テスタメント・ティネウルヌス、契約をそつなく執行完了っと」

曇天に１人残された彼は、首をコキコキ鳴らしつつそう告げ、その姿を消した。

。―。―。―。―。

文明の名残、廃れた建造物群が地上に広がる空にてぶつかり合う真

紅と緑色、２色の光。衝突しては離れてまたぶつかり合い、すぐに離れてはまたぶつかり合うというのを繰り返している。

「相変わらずやるじゃんっ、ウェーリタースの概念は♪」

「あなたも実にお強い。７ｔｈ・テスタメント・ルフィスエル」

真紅。ルフィスエルという名の少女だ。１５０ｃｍ前半程の身長。雪のように白い肌。ルビーのような紅の瞳。空色のショートヘア。真紅のキャソックとフード付きの外套を着用し、右手に真紅のカンタベリー十字型の錫杖"第七聖典"を携えている。緑色。"真実ウェーリタース"と呼ばれた青年。１８０ｃｍ程の身長。黄色い肌。ガラスのように透き通った黒色の瞳。サラサラな黒髪。ハンターグリーンの軍服。古びた階級章からして中尉だ。

――Ｕｔ　ｒａｄｉｏｓ　ｅｄｉｔ　ｒｕｔｉｌｏ／光を発するごとく――

ウェーリタースが左腕をテスタメント・ルフィスエルへと伸ばすと、彼の左腕の周囲に緑色の光の筒が１８と発生。それが勢いよく回転し始め、ガトリング砲の如く１８の筒の先端より無数の弾丸が高速発射された。弾丸全てが虚数干渉で構成されている。ゆえに直撃は致命だ。テスタメント・ルフィスエルは位相転移で回避しつつ、３０階建ての廃墟ビルへと飛翔。

「どっっっせぇぇーーーーーいっ！」

そして携える"第七聖典"を廃墟ビルの外壁に突き刺し、廃墟ビルを地面より引っこ抜く。そのまま「うぉぉおおりゃぁぁあーーーーーッ！」とブン回し、ウェーリタースへと廃墟ビルを放り投げる。廃墟ビル全体に干渉能力が付加されているため、ウェーリタースでも直撃は避けたい。

しかし何を思ったのかウェーリタースはその場から動かず、ミサイルのように突っ込んでくる廃墟ビルを見据えたまま。両手を組み、身体を捩じり振りかぶる。そして迫ってきた廃墟ビルへと全力スイングでの両拳を打ち込んだ。ドガンッ！と轟音。ウェーリタースは真っ向からの破壊を選んだのか？　違う。

「わぁお、返ってきたっ！」

そう、弾き返したのだ。テスタメント・ルフィスエルへと返っていく廃墟ビル。しかも今度はミサイルのようではなくブーメランのように旋回しながらだ。ウェーリタースの両腕にそれぞれ18、計36の砲門を持つガトリング砲が創りだされる。

テスタメント・ルフィスエルの離脱後に撃墜するために待ち構えるのだ。だが彼女は回避に移らなかった。表情は満面の笑み。楽しくてしょうがないと言った風。

「ならお返しだッ♪」

振りかぶった"第七聖典"をフルスイング。突っ込んできた廃墟ビルに打ち込む。さらに回転を加えられた廃墟ビルがウェーリタースへと戻っていく。

テスタメント・ルフィスエルは「逃げるなよッ！」と挑発。彼は「

くだらないです」と鼻で笑ったが逃げることなく、迫って来ていた廃墟ビルに蹴りを入れた。再度彼女へと戻っていく廃墟ビル。互いの干渉能力が拮抗しているからこそ出来るゲームだ。
少しでも干渉能力が負ければ、返すことが出来ずに直撃、大ダメージを受けてしまい、最悪消滅する。ちょっとした綱渡りだ。だがウェーリタースはもう付き合うつもりはない。戻っていった廃墟ビルを追う。いつでも攻撃が出来る体勢を整えたままで。

「面白いじゃんッ　　どこまで続けられるか勝負だよッ♪」

テスタメント・ルフィスエルが廃墟ビルを打ち返そうと"第七聖典"を振りかぶる。彼女の視界いっぱいには高速回転して迫る廃墟ビルのみ。ウェーリタースは見えていない。彼が奇襲を狙っている事を知らずにフルスイングを実行。"第七聖典"が廃墟ビルにヒット。その瞬間、廃墟ビルが崩壊する。ウェーリタースのゼロ距離干渉攻撃によって破壊されたのだ。

「わっぷ！？」

いきなりの事態と膨大な砂埃や瓦礫の所為でテスタメント・ルフィスエルが僅かに動きを止める。砂埃と瓦礫で視界が潰されてしまう。彼女は位相転移でこの場からの離脱を選択。
しかしその前に、

「遊びが過ぎましたね、抹殺者」

テスタメント・ルフィスエルの目の前に現れたウェーリタース。彼

は左腕で"第七聖典"を持つ彼女の右手首を掴み、右腕は彼女の腹にピッタリ付けられている。彼の両腕にあるガトリング砲が発光する。

――Ｕｔ　ｒａｄｉｏｓ　ｅｄｉｔ　ｒｕｔｉｌｏ／光を発するごとく――

直後に放たれる弾丸。ほぼゼロ距離だ。ウェーリタースの左腕のガトリング砲がテスタメント・ルフィスエルの右腕を強襲。そして右腕のガトリング砲は、彼女の腹部に押さえ付けられているようにしてある。

干渉防御が施されているとはいえゼロ距離だ。耐えきれるものではない。だからこそ待っている結果はただ１つ。ガシャァンとガラスが割れたような音。彼女の右の前腕が粉砕されてしまう。破壊面から漏れる虹色の光粒子。腹部はまだ耐えているが、いつ防御が貫かれるか判らない。

「こんの・・・！」

ここで初めてテスタメント・ルフィスエルの表情が笑みから別のものに変わった。怒りではなく焦りだ。負けるという焦りではなく、僅かでも遅れを取ってしまったことへの焦り。彼女は"界律（テスタメント）の守護神"の真紅の第七の玉座に座する、上位なる神の抹殺者７ｔｈ・テスタメント・ルフィスエル。お調子者だが、"テスタメント"としてのある程度プライドがある。それが穢されようとした。

「じゃあ遊びはもういいや」

そうボソッと漏らす。それはウェーリタースにも届き、彼は空いた左腕のガトリング砲をテスタメント・ルフィスエルの頭に向けつつ「なに？」と訊き返す。そこで撃っておけば良かった。

――滅せ滅せ傲慢なる神を。滅せ滅せ愚昧なる神を。滅せ滅せ価値無き神を――

砕かれた右腕と共に地上へ落下していた真紅のカンタベリー十字"第七聖典"が紅の光の尾を引きながら高速で戻ってきた。そのままウェーリタースの両腕を粉砕。間髪いれずにテスタメント・ルフィスエルは彼に全力の蹴りを入れ、間合いを開けさせる。

――Ｐｏｔｅｎｔｉａ　ｓａｎａｔ／力は療す――

よろめきながらもウェーリタースは両腕を再生する。それよりも早くテスタメント・ルフィスエルの右腕が再生し終えていた。その僅かな差を見逃さないテスタメント・ルフィスエル。彼女は手にした"第七聖典"でウェーリタースを殴打。殴打されたウェーリタースは「うごぉっ」と苦悶の呻き声を漏らし、大きく吹き飛ぶ。

――位相空間転移――

テスタメント・ルフィスエルの体がその場から忽然と消える。位相空間へと入り込み、吹き飛ばされているウェーリタースの向かう先に再出現して先回り。振りかぶっていた"第七聖典"をフルスイング。ウェーリタースは咄嗟に干渉防御で全身をコーティング。

その直後にヒット。ウェーリタースは干渉防御ごとまた吹き飛ばされた。テスタメント・ルフィスエルが位相空間転移で一瞬で先回り。しかしただ打たれるつもりもないウェーリタースも位相空間転移を実行。

――Ｕｔ　ｒａｄｉｏｓ　ｅｄｉｔ　ｒｕｔｉｌｏ／光を発するごとく――

――干渉砲撃――

そこから始まる位相空間転移からの奇襲攻撃の連続。互いの背後を取ろうと転移を繰り返し、運良く背後を取って攻撃を行うが、着弾させる前に転移で回避。

それを何十と繰り返したのち、終わりは突然訪れた。テスタメント・ルフィスエルが位相空間より現実空間へと再出現。０，０００００１秒遅れで彼女の背後に再出現したウェーリタース。

（（勝った！））

互いに思うことはその一言。特にウェーリタースの思いが強い。それも当然のこと。何せジャストタイミングでテスタメント・ルフィスエルの背後に再出現出来たのだから。だが彼は気付くのが遅れた。テスタメント・ルフィスエルの右手に"第七聖典"が無い事に。

「ぐあっ！？」

ウェーリタースが呻き声を上げながら勢いよく反り返る。彼の腹か

ら突き出ているのは真紅の杭・・・ではない。"第七聖典"の一角だ。それはテスタメント・ルフィスエルの策が見事に成功した瞬間だった。すべては彼女のシナリオ通り。わざとウェーリタースに背後を取らせたのだ。勝ったという思わせて余裕を持たし、その隙に遅れて再出現させた"第七聖典"でトドメを刺す。

「うぐ・・・おのれ・・・！」

ウェーリタースが自分を貫いている"第七聖典"を抜こうと両手で掴む。そこに「もう手遅れだよ」とウェーリタースの背後に位相空間転移したテスタメント・ルフィスエルが笑みを浮かべながら"第七聖典"に触れる。

――滅せ滅せ傲慢なる神を。滅せ滅せ愚昧なる神を。滅せ滅せ価値無き神を――

テスタメント・ルフィスエルの干渉能力が解放される。外からの干渉攻撃ならまだ防御が出来るウェーリタース。しかし今彼を貫いている"第七聖典"を通じて内部を直接攻撃されては一溜まりもない。位相空間転移で逃れようと思っても、実行できるほどの余力が無い。

「バイバイ、ウェーリタース」

「っ・・・ルフィスエ――」

テスタメント・ルフィスエルの名前を最後まで口にすることが出来ず、ウェーリタースは体の内部から崩壊し、ガシャン！と弾け飛ん

だ。

「よっし。７ｔｈ・テスタメント・ルフィスエル。契約執行完了っ♪」

そう陽気な声で告げた後、テスタメント・ルフィスエルがすぅっと消えていった。

。―。―。―。―。

――イスクゥプリエーニイ――

雪が舞い降る雪原。地面より干渉能力が付加された光柱が何度も噴き上がり、雪原を這うように移動している巨大な白い狼を呑み込もうと大気を震わせる。

「クフフ。大人しくしてちょうだいグラーティア。楽に逝かせてあげるからさ」

一面銀世界の白の領域に響き渡る女性の声。

恩寵グラーティアと呼ばれた体長１００ｍ程の白き巨狼が雪の丘に紛れるように身を隠す。グラーティアの四肢の付け根にある４つの人面の目が開き、ルビーのように赤い瞳が敵の姿を確認しようとキョロキョロ動く。

警戒の最中、グラーティアが「我らは世界のために人類を狩る。それの何が悪い」と苛立たしげに語る。世界か人類か。それを天秤にかけ、選んだのが世界の存続。それが間違いではないと。グラーテ

ィアの言葉に対し、「気持ちは解らないわけでもないけど」と返す女性。攻撃も止んで静まり返る銀世界。その真白の世界に、声の主である女性がスッと姿を現れる。

「解るのなら見逃してもらいたいものだな、３ｒｄ・テスタメント・グロリア」

その女性――３ｒｄ・テスタメント・グロリアも雪と同じ白一色だ。純白のキャソックにフード付きの外套という出で立ち。フードの奥にある顔も雪のように白く、黄金の瞳はまるっとしていて、優しい顔立ち。オレンジ色のセミロングヘアが白一色の中で際立っている。そして右手には２ｍ近い純白のバートシス十字型の錫杖"第三聖典"。

「クフフ。残念。見逃さずに断罪しろっていうのが、今回のアタシ達の契約だから」

テスタメント・グロリアがキョロキョロと周囲を見回し、グラーティアの姿を捜す。互いに白一色の姿なため、雪が降り積もってしまっているこの銀世界では視認し辛い。ゆえに取る手段はたった１つのみ。

――ズィムリアー・アビタヴァーンナヤ――

――Ａｕｄｉ　ｔｅｌｌｕｓ／聞け、大地よ――

地面が大爆発を起こす。実数干渉で地面を破壊し、ダメージを与えるために瓦礫に虚数干渉を付加している。雪が粉塵となり大気に満

ち、１ｍ先も見えないほどに視界が潰れる。どこにいるのか判らないのなら、周囲一帯を破壊してしまえば良い。そうすればピンポイントで相手を狙う必要もない。
それがテスタメント・グロリアの作戦だった。しかしこれにはデメリットがある。これで決着しなければ、さらに視界不良となって互いの位置が判らなくなる。が、それはテスタメント・グロリアに限ってだけのこと。

（このまま食い千切ってくれるわ・・・！）

グラーティアが動く。位相空間へと入り込み、テスタメント・グロリアの足元の座標へと進む。位相空間から現実世界への再出現に要する時間は約０，０００００００１秒。大きな口を開け、テスタメント・グロリアの足元より出でる。テスタメント・グロリアの表情が驚きに染まる。その瞬間、

――Ｉｎ　ｍｅ　ｔｒａｎｓｉｅｒｕｎｔ／我によりて死する者は――

グラーティアに呑み込まれた。ひと思いにパクっと丸のみだった。何故グラーティアはテスタメント・グロリアの居場所が判ったのか。それはグラーティアの姿に関係している。狼だ。当然嗅覚に優れている。
グラーティアはテスタメント・グロリアと同じように地面を爆破した。だがそれは彼女のように敵を斃すためではなく、視界封じのためだ。これで決着かと思われた。しかし、

「よっこらしょ」

グラーティアの口が大きく開かれる。もちろんグラーティアの意思ではない。テスタメント・グロリアを護るように展開された球状の干渉防御結界。グラーティアは力を入れ、干渉防御ごとテスタメント・グロリアを噛み殺そうとするが、干渉が付加された牙でもなかなか突破できない。

「祈れ祈れ、逝き先が楽園であれと。願え願え、苦無く逝けるようにと」

テスタメント・グロリアは手にしている"第三聖典"を胸の前に掲げた。グラーティアの全身に悪寒が奔った。どうにかしようと首を大きく振り回す。しかし結界にがっちり牙が食い込んでいる所為で吐けない。

それだけではない。結界が徐々に大きくなっていっている。グラーティアはこの後に待ち構える結末を思い、顎に力を込め破壊に全力を注ぎ始める。テスタメント・グロリアの結界が歪み始める。

「クフフ。結構結構。もうしばらく頑張れば、口が裂けて真っ二つなんて結末は防げるかもね♪」

ここでテスタメント・グロリアが結界からすり抜け出てきた。彼女は「悔い改めよ(ペニテンツィアージテ)♪」と歌うように言いながら、グラーティアの四肢の付け根にある人面を"第三聖典"で破壊した。グラーティアが声にならぬ悲鳴を上げ、立っていられなくなったのかその場に伏せてしまった。

「クフフ。さよならグラーティア」

テスタメント・グロリアはグラーティアの首根っこに跨り、体いっぱいを使って頭を掴み一気に捻った。ボギッ！と嫌な音が響く。首をへし折った音だ。本来は下に位置する顎が空に向いている。１８０度捻られたグラーティアの頭部。テスタメント・グロリアはトドメを言わんばかりに"第三聖典"をグラーティアの首に振り下ろし、頭部と胴体を分断した。恩寵グラーティアの最期だ。無数の虹色の光粒子となり、グラーティアは消滅した。

「クフフ。契約執行完り――っとその前に、ルシリオンは大丈夫かな？」

テスタメント・グロリアはテスタメント・ルシリオンを心配し、位相空間転移で彼のとプリンキピウムの戦場へと向かった。

。―。―。―。―。

荒野に片膝をついている４ｔｈ・テスタメント・ルシリオン。
漆黒の外套は見るも無残に破れ、すでに外套としての機能を果たしていない。外套のフードが脱げて、テスタメント・ルシリオンの顔をさらけ出している。それは綺麗な銀髪だ。膝裏まで伸びている銀の長髪が風で踊っている。

「はぁはぁはぁ、ここまで弱まってしまっているのか私は・・・！」

漆黒のケルト十字"第四聖典"を支えに倒れこまないようにして、悔しげに顔を歪ませている。そんなテスタメント・ルシリオンを空から見下ろす始原プリンキピウム。彼女もまたテールアップだった赤い髪が解けていたり、エプロンドレスの所々が破れて柔らかそうな素肌を晒していたりとボロボロだが、まだまだ余力を残しているようだ。

「確認したよ。天秤はやっぱり弱くなってる。そりゃそうよね。時間的概念で言えば約1万8千年。そんな長期に亘ってテスタメントをやってんだもん。人間の精神が良く保ってるよ。人間の魂ですらそこまで保たないのにさ」

プリンキピウムが拍手する。称賛と馬鹿にしているのと半分の思いで。テスタメント・ルシリオンは両足に力を込め立ち上がり、プリンキピウムを睨みつける。黒き第四の座。それは"テスタメント"最強の証だ。いや今では、だった、が正しい。確かにテスタメント・ルシリオンは最強だった。しかしそれも過去のこと。

「まだ終わってないぞプリンキピウム。私は・・・私はまだ・・・戦えるッ！」

――光神の調停（コード・バルドル）――

地上のテスタメント・ルシリオンと天上のプリンキピウムの間に発生する蒼い光球。その光球を中心として2点で組み合わさり球体状となっている7つの円環が現れ、回転し始める。光球が徐々に大きくなっていき、円環の回転速度も上がっていく。ここでプリンキピ

ウムが動く。真紅のカンタベリー十字"第七偽典"を振りかざし、光球と円環の破壊を行うために。
しかし、

「殲滅粛清（ジャッジメント）！！」

テスタメント・ルシリオンの号令と同時に、直径１０ｍ程となった光球より全方位へと向けて特大砲撃が放たれ始めた。あらゆる方向へ断続的に放たれ続ける蒼の砲撃。まさに無差別な攻撃だ。プリンキピウムは接近を断念。位相空間転移も考えたが、再出現の際に運悪く射線上に出る可能性があるからだ。
地面に着弾した砲撃は、巨大なドーム状の衝撃波となって地上を蹂躙していく。テスタメント・ルシリオンは位相空間転移を実行。手を拱いているプリンキピウムの頭上へと移動した。再出現したと同時に"第四聖典"を振り下ろす。が、

「そんなフラフラで接近戦って馬鹿じゃないの？」

プリンキピウムが頭上に"第七偽典"を水平に掲げ、"第四聖典"の一撃を受け止めた。そこからは一瞬。"第四聖典"を捌いたプリンキピウムは、体勢を崩したテスタメント・ルシリオンを殴打。"第七偽典"は彼の脇腹をごっそり抉って粉砕。抉られた部分より虹色の光粒子が血飛沫のように解離していく。プリンキピウムはトドメを刺すために"第七偽典"を振りかぶる。

「ほら、こんなにアッサリと決ま――ほぇ？」

――クリシシエーニイ――

しかしその時、プリンキピウムを薙ぎ払うかのように発生した光の鞭。プリンキピウムは直撃を受け、右肩から左腰に掛けてバッサリと裂かれた。

「クフフ、ストップストップ。それ以上は許さないよ」

テスタメント・ルシリオンを抱え支えるように姿を露わしたテスタメント・グロリア。小声で「もう大丈夫よ」とテスタメント・ルシリオンに微笑みかける。そして傷口を押さえて崩壊の進行を抑えているプリンキピウムに"第三聖典"を突きつける。

「もう感知してると思うけど、残っているのはあなただけだよプリンキピウム」

「ぅぐ・・・。星狩りが出てきた時点である程度予測がついてた。あーあ、テルミナスやフォルトゥーナ辺りに怒られそうだなぁ、今帰ったら」

負ったダメージを瞬時に回復し、プリンキピウムがやれやれと言った風に肩をすくめる。

「だったら帰らなきゃ良いじゃない。クフフ、ここで死んじゃえば良い」

――ピルヴァロードヌイー・グリエーフ――

――Ａｎｇｅｌｕｓ　ｉｕｓｔｉｓｓｉｍｅ，　ｏｒａ　ｐｒｏ　ｎｏｂｉｓ／いと正義なる天使アンジェラス、我らの為に祈り給え――

二柱と一体の間で炸裂する強大な干渉攻撃。空を染め上げる強烈な閃光。プリンキピウムはそれを隠れ蓑として位相空間転移、離脱を図った。テスタメント・グロリアはそれを察知し、干渉攻撃を撃ち込むが手遅れだった。閃光が治まった時、そこにプリンキピウムの姿は無かった。

「すまないグロリア。私がもう少し粘っていれば――」

「クフフ。気にしない気にしない。困った時は助け合い♪　それが人間のルールなんでしょ？　だったらもっと頼ってちょうだい」

テスタメント・グロリアはテスタメント・ルシリオンの唇に人差し指を押しあて、彼の謝罪を黙らせる。ニコニコ笑顔を振りまいて「ほら、契約執行完了だよ」と言って、その姿を消した。テスタメント・ルシリオンもまた「感謝する。契約執行完了」とボソッと告げて、その姿を消した。

。―。―。―。―。

全てが白に染まる広さも何も判らない空間。
ただその空間にあるのは、淡く碧く輝いている直系５ｍ近い光球と、その光球を囲むようにして存在している１１の玉座。

玉座１つ１つで色が違い、背もたれの上にそびえ立っている十字架の形も様々だ。
そしてその玉座に座っている１１の人影も、それぞれ色違いの外套を羽織っている。
ここは"神意の玉座"――またの名を"遥かに貴き至高の座"――と呼ばれる最高位次元。
あらゆる世界の意思"界律"が交差する、全てが在って、全てを識る究極の根源だ。

「お疲れ様です、ルシリオン様」

「マリア・・・、ああ、ありがとう」

漆黒の玉座に座している４ｔｈ・テスタメント・ルシリオンに労いの言葉を贈るのは、桃花色の玉座に座している少女。
名をマリア。５ｔｈ・テスタメント・マリアだ。桃花色のキャソックとフード付きの外套姿。１０代前半の幼さの顔立ち。金糸のような髪、アメジストの様な艶のある紫色の穏やかな瞳。玉座の背もたれに掲げられているのはラテン十字"第五聖典"だ。

「やはり限界が近いのでしょうか？」

テスタメント・マリアはテスタメント・ルシリオンの辛そうな顔を見て、彼の現状を察してそう尋ねる。

「おそらく。先程の契約で、分身体（わたし）はプリンキピウムに負けた。かつてなら勝てていた相手だ。しかし今回は・・・。どうやら本体（わたし）の

終焉が近いようだ」

テスタメント・ルシリオンは左手を額にやり弱音を吐いた。しかしすぐさま「弱音など私らしくないな」と微苦笑。しかし参っているのには違いない。

「マリア。君の調子はどうだ？　私と同様、魂ではなく精神だ。すでに崩壊の兆しが見えていてもおかしくない」

「私ですか？　私はルシリオン様のように酷い契約は受けていませんから。まだ余裕がありますよ」

テスタメント・ルシリオンを安心させようと、テスタメント・マリアが笑顔を浮かべる。テスタメント・マリアの偽り無い笑顔に、「そうか」と安堵の息を吐く。

"界律の守護神テスタメント"。そのメンバーは基本あらゆる次元と世界の神や精霊、天使。もしくはそれに並ぶ悪魔や魔人の魂だ。死後に"神意の玉座"の意思によって選定され、"テスタメント"に迎え入れられるのだが、ごく稀に人間の魂も選定される。しかし人間の魂は脆く、時間という概念から切り離された"テスタメント"であっても魂に老いが来る。魂が限界に達し崩壊すれば、輪廻転生が行えずに永遠の無を彷徨うことになる。

「すまないな、ここまで付き合わせてしまって」

「いいえ。テスタメントになったのは私の意思。ですから気に病まないでください」

そうなる前に"神意の玉座"より魂が解放され、来世を迎えるために輪廻転生を行う。それが普通だ。しかしテスタメント・ルシリオンとテスタメント・マリアは例外中の例外だ。メンバーはまず死後に"テスタメント"となる。だがこの二柱はまだ死んでいない。存命中に"テスタメント"になったのだ。だからここ"神意の玉座"に在る二柱は、魂よりさらに脆い精神である。それゆえに現在の二柱は崩壊に近い危うい存在なのだ。テスタメント・ルシリオンの弱体化もそこに起因している。

「あ、これって・・・・『あの、ルシリオン様』」

『リンク？　どうかしたか？』

テスタメント・マリアからの突然のリンク――"テスタメント"間用の念話――に、テスタメント・ルシリオンは訝しんだ。契約執行中でならリンクが送られて来てもおかしくはないが、"神意の玉座"でリンクはまず送らない。何せ目の前に居るのだから、リンクではなく口で話せばいい。わざわざリンクで話すということは、他者に聞かれたくない内容だということだ。

『ルシリオン様がテスタメントをやっているのは、堕天使エグリゴリという連中の所為でしたよね？』

『・・・・ああ。そうだ』

テスタメント・ルシリオンの表情から温かみが消える。代わりに浮

かんだのは悲嘆、焦思などと言った沈んだものだ。テスタメント・マリアも釣られ表情に暗い陰を落としたが、気を取り直して告げる。

『分身(わたし)体の契約先の世界に、ルシリオン様が使う魔法陣と同じモノを扱う男性が――』

「本当かっ！？」

大声を上げ、勢いよく立ち上がるテスタメント・ルシリオンに視線が集中する。テスタメント・マリアと一部を除く他"テスタメント"の疑問に満ちた視線が集まるが、彼は気にも留めず彼女へと詰め寄っていく。

「どこだっ！　教えてくれマリア！」

テスタメント・マリアの細い肩に両手を置いて問い質す。テスタメント・グロリアが「ちょっとルシリオン！」と止めに入った。それでもテスタメント・ルシリオンは「頼むマリア！」と懇願する。

「落ち着いてくださいルシリオン様。私が召喚しますから」

"界律"からの契約が無い場合、その"界律"に召喚されている"テスタメント"によって召喚という術がある。それを聞き、テスタメント・ルシリオンはようやく手を離し、「ありがとう、マリア。恩に着る」と深々と頭を下げた。

「いいえ。私にも関係することですから」

「結局はどういうこと？」

話が見えず、そう小首を傾げるテスタメント・グロリアに、テスタメント・ルシリオンとテスタメント・マリアは「秘密だ」「秘密です」と答えた。テスタメント・ルシリオンとテスタメント・マリアの"テスタメント"脱退が係っている話だ。

上位の"霊長の審判者ユースティティア"に後れを取るとはいえ、通常の契約であるなら何も問題ない二柱。それが一度に抜ける。それを"神意の玉座"が黙って見過ごすわけもなく。何かしらの妨害があると見た二柱。だからテスタメント・マリアはリンクを使ったのだ。

「ではルシリオン様。愚者と賢者は紙一重５ｔｈ・テスタメント・マリアが、天秤の狭間で揺れし者４ｔｈ・テスタメント・ルシリオンを召喚します」

テスタメント・マリアが告げる。玉座に戻ったテスタメント・ルシリオンが息を吐き、「召喚を承認」と目を閉じる。彼の意識の欠片と分身体が玉座より解離、テスタメント・マリアの導きの下、召喚先の世界へと送られた。

こうして始まる、４ｔｈ・テスタメント・ルシリオンの最後の契約（ラスト・テスタメント）。彼を待ち構えているのは悲劇と絶望のみか。それとも・・・・

ＡＮＳＵＲＩ今ひとたび父は子供達と踊る～Ｅｇｒ　ｇｏｒｏＩ
～

そこは戦場跡。ひどく焼け爛れた大地が広がり、元は船と思われるいくつもの巨大な鉄の塊が大地を穿ち焼いていた。そこはつい先ほどまで烈火の如き大規模な戦が行われていたと思われる。
そんな生命の無い戦場跡に、サファイアブルーの光が柱のように天より落ち来たる。蒼光の柱が消え失せ、蒼光が落ちていた場所に１人の男が佇んでいた。漆黒の神父服（キャソック）を着ており、裾には幾何学模様の金の刺繍や金の装飾が施されて、チャラチャラと音を出している。キャソックと同様に漆黒のフード付きの外套（マント）を羽織っていて、火の粉混じりの風にはためいている。

「この世界に、堕天使（エグリゴリ）が居るのか・・・？」

天秤の狭間で揺れし者という二つ名を有する、４ｔｈ・テスタメント・ルシリオンだ。彼は周囲を注意深く見回し、

「戦場か・・・。まさかエグリゴリの仕業か？　いや、違うな。魔術特有の神秘は感じられない。だが魔力は感じられるな・・・・」

テスタメント・ルシリオンは鉄くずの１つに歩み寄り、攻撃されたことで大きく抉れている損壊部分を手でなぞる。自分と同じ魔術を扱う"堕天使エグリゴリ"の仕業でないことを確認し、しかし魔術発動に用いられる魔力という特別なエネルギーを感知できることに小首を傾げた。"エグリゴリ"と関係が本当にないのかを確認する

ため、テスタメント・ルシリオンは周囲にいくつも散乱している鉄くずの1つに歩み寄る。

（それにコレは飛行戦艦か。この世界の科学力はそれなりのようだな）

――我を運べ、汝の蒼翼（アンピエル）――

ある程度周囲を確認した後、テスタメント・ルシリオンは背より蒼光で構成された12枚の剣翼を作り出し、黒々とした雲が渦巻く曇天へと上がった。まずは地形を確認。主戦場であろう焼け爛れた平原。平原の周囲には切り立つ山脈。山々のところどころに自然に出来たとは思えない大きく崩れた部分が多くある。

「戦で失った自然の姿か。やはりどの世界へ行っても人間は争いをやめないんだな」

テスタメント・ルシリオンは"霊長の審判者ユースティティア"の存在意義を思い出す。争いをやめない人類を切り捨て、巻き込まれる他の生命を守護する。それが世界の為、と。"界律の守護神テスタメント"の中にはその意思に賛同する者も居た。例として始原プリンキピウムだ。彼女もかつては"テスタメント"の一員だった。それゆえに"テスタメント"用の武装・聖典――堕ちて穢れたということで偽典と呼ばれる――を手にしている。"テスタメント"がその在り方に疑問を持ち、人間に絶望を抱き、そんな人間を守って来た自分にすら絶望し、全てを諦めて"ユースティティア"へと堕ちた"テスタメント"は、"堕天した守護神フォーレン・ナンバー"

と呼ばれる。そんな"テスタメント"の裏切り者"フォーレン・ナンバー"が生まれてしまうほどに、人間の業は深く、愚かだった。

「ん？　なんだ・・・？」

テスタメント・ルシリオンは遠くで連続して起こる爆発に目を凝らす。戦闘が行われている事に違いなかった。空に何隻もの空中戦艦が浮かび、艦載砲で攻撃し合い、また地上でも人間が争っていた。それが判ったと同時に、この場から離れるために空を翔けようとしたところで、

――黒き影拳乱舞（ポウン・タンペット）――

成人男性の身長くらいの大きさを有する、巨大な黒い影の拳が幾つも高速で飛んできた。テスタメント・ルシリオンの顔が驚愕に染まる。それはいきなりの奇襲を受けたからではない。放たれて来た攻撃は、テスタメント・ルシリオンの言う魔術であり、かつて彼がある者に教授したモノだからだ。

「レーゼフェア・・・！」

7つ目の黒い拳を避けきった後、テスタメント・ルシリオンはある一点を見詰める。

そこには、10代後半くらいの少女がひとり宙に佇んでいた。バイオレットのショートヘアはカチューシャを付けていることでインテーク化。クリムゾンの瞳は猫目で、口もどことなく猫口。ハイネックの黒セーターに白のロングコート、裾から覗くズボンも黒、そし

て茶色のブーツという格好だ。そして両腕には赤と黒、２色のゴツゴツとした籠手を装着している。

「魔道世界アースガルド・グラズヘイムのセインテスト王、ルシリオン・セインテスト・アースガルド・・・見ぃーっけ♪」

「・・・久しぶりだな、レーゼフェア。私が判らないか？」

テスタメント・ルシリオン――いや、ルシリオンは"テスタメント"としてではなく魔術師として、少女レーゼフェアに微笑みかけた。それはあまりにも優しい微笑。まるで父親が愛おしい子供に向けるようなものだ。

レーゼフェアの正体は、ルシリオンが長年追い続けていた"エグリゴリ"にして、彼の子供でもある"戦天使ヴァルキリー"の一機、レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアだ。だからこそ、ルシリオンの見せる微笑に親としての想いが入っていてもおかしくはない。

「僕の手柄だよ。力ある王はすべて排除排除、殲滅だっ♪」

「やはり・・・洗脳とノルニル・システムから切り離された障害で記憶デバイスがやられているのか」

ルシリオンの顔が悲しみで歪む。唇を強く噛んでしまっている事で血が一筋つぅーと流れる。拳はきつく握られ、ラピスラズリとルビーレッドのオッドアイはレーゼフェア一点に注がれている。涙は流すまいと肩を震わせ、今のルシリオンは痛々しいほどに小さく見え

た。

「アンスールが1人、神器王ルシリオンを確認」

さらに別の声が曇天に響き渡る。ルシリオンはその声の主を見るまでもなく、声の主の名前を告げた。

「グランフェリア」

ルシリオンとレーゼフェアよりさらに上空に、グランフェリアは居た。２０代前半くらいの女性だ。セミロングの金髪はテールアップ、スカイブルーの若干鋭い瞳。黒のブラウスに赤のネクタイ、白スーツ・スラックスに白ロングコートといった服装だ。手には、黄金に輝く槍を携えている。

レーゼフェアと同じ元"ヴァルキリー"の一機で、現在は"エグリゴリ"であるグランフェリア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアだ。

「・・・・幸先が良いな。降臨直後で、お前たちを破壊出来るとは」

ルシリオンの姿が強烈なサファイアブルーの光に包まれ、一時的に消える。光が消え、次に姿を顕わした時、ルシリオンの衣服がガラリと変わっていた。

膝下まで伸びる詰襟の黒い長衣。前後共に燕尾となっている縁には幾何学模様の金の刺繍が彩られている。首を覆い隠す襟に隠れて見えないが、首には小さな南京錠の付いたチョーカー。黒長衣と同じ黒いインバネスコート。コートの背部には、４つのひし形が十字架を形作り、十字架の先端から剣が伸びて、四方の剣を繋げるように

三重の円、アースガルド魔法陣という紋章が描かれている。ボトムスも黒のズボン。黒の編み上げブーツとなっている。

「アンスールが神器王ルシリオン・セインテスト・アースガルド、行くぞっ」

その服こそが、ルシリオンが人間だった頃に身に纏っていた魔術師戦闘用の衣装・戦闘甲冑だ。何故キャソックではなく戦闘甲冑なのかというと、契約執行時以外、"テスタメント"の能力・干渉は一切使えなくなるからだ。

神の奇蹟たる干渉能力。それはあまりにも強力で、世界のバランスを大きく狂わせる。ゆえに"テスタメント"であろうと、契約執行時以外は干渉能力は封印される。だからルシリオンは、彼本来の魔術師としての姿へと変身した。

「にゃは。神器王が闘る気みたいだよ。僕とグランフェリアでぶっ殺しちゃうぞ　」

レーゼフェアの猫口がさらに猫っぽく歪む。細められた目もまた然り。グランフェリアは黄金の槍をバトンのように回転させた後、穂先をルシリオンへと向けるように構えた。

ＶＳ。―。―。―。―。―。

其は堕ちた戦天使エグリゴリ

。―。―。―。―。―。ＶＳ

グランフェリアが「轟き唸れ、雷界幻矛（ライカイゲンム）」と、"天槍・雷界幻矛"を軽く薙ぐ。"雷界幻矛"が通過した場所に、琥珀色の雷光で構成された槍が12本生み出された。グランフェリアは12本の雷槍の石突を"雷界幻矛"で打ち払い、超高速でルシリオンへと放った。

――雷槍連穿衝・壱式――

放電しながら空を切って飛ぶ12の雷槍。ルシリオンは防御ではなく回避を選択し、大きくその場から離れる。そこでレーゼフェアが動きを見せる。「逃げちゃダーメ」と笑いながら、ルシリオンの頭上に高速移動。

――闇の女王（サリュ・マンソンジュ）の鉄拳――

振り下ろされた右拳より放たれる、先程の攻撃よりさらに巨大な影の拳による打ち下ろし。ルシリオンはさらに回避。回避の途中、ルシリオンは自身の周囲に蒼光に光り輝くアースガルド魔法陣を7つ展開。ルシリオンに接近していたレーゼフェアとグランフェリアがハッとして、すぐさま距離を取ろうと反転。それとほぼ同時にルシリオンが「七天粛清（ジャッジメント）！」と指を鳴らし号令を下した。

――轟（コード）き響け、汝の雷光（バラキエル）――

――凍（コード）て砕け、汝の氷槍（サルツィエル）――

――燃（コード）え焼け、汝の火拳（セラティエル）――

――削り抉れ、汝の裂風（ザキエル）――

――煌き示せ、汝の閃輝（アダメル）――

――呑み食せ、汝の夜影（ライラエル）――

――穿ち流せ、汝の水瀑（マヌエル）――

7つの魔法陣より放たれる7条の砲撃。レーゼフェアには、雷光、吹雪、火炎の砲撃を放ち、グランフェリアには竜巻、閃光、闇、水の砲撃を放った。

レーゼフェアは「ひゃあっ？」と体を捻ってギリギリで回避し、グランフェリアは黙々と雷光を纏う"雷界幻矛"を振るって、砲撃の軌道を強引に変更した。ルシリオンの攻撃（ターン）はまだ終わらない。弓の弦を引く構えを取ると、蒼光の弓と槍の如き長さの矢が出現。

――弓神の狩猟（コード・ウル）――

矢を放つ。矢は少し進んだ後、無数の光線となってレーゼフェアとグランフェリアに襲いかかる。レーゼフェアは「行くよっ、聖狩手甲エオフェフ」と告げ、両拳を打ち合わせて迎撃に移行。グランフェリアもまた「行きましょう。雷界幻矛」と告げ、穂先に琥珀色の雷光を纏わせ迎撃開始。ルシリオンはさらにウルを発動するために弦を引き絞ろうとしたとき、

（なんだ・・・！？）

彼の視界にノイズが走った。それに、上手く魔力を練れなくなった。魔術師の体内に在る魔力を生成・供給するための器官"魔力炉(システム)"に異常が出たかと考えたルシリオンだが、もう1つの理由に行き当たった。

（上級術式が界律に制限されたか・・・？）

ルシリオンの有する、彼独自に組み上げた固有魔術の下級・中級・上級術式の内、上級はあまりにも強力ゆえ、"界律"によって使用が制限される場合もある。だがすぐにその異常が治ったことで、上級術式使用に制限が掛からなかった事を察する。ルシリオンは上級術式に制限を掛けなかったこの世界の意思"界律"に心底感謝した。"エグリゴリ"を相手にして、中級術式だけでは心許ないからだ。

――雷槍連穿衝・弐式――

――黒く染めたる凶珠(オビュ・シエージュ)――

「く・・・っ！」

思考を中断せざるを得ない状況となる。もはや砲撃と化している雷槍が22。闇黒の球体状の魔力弾が48。それらがルシリオンを包囲するように飛来してきた。

――護り給(コード)え、汝の万盾(ケムエル)――

ルシリオンの全周囲に小さな円い蒼光の盾が無数に展開され、それらが重なり合わさることで巨大な球状の障壁となった。次々とケムエルへと着弾していく容赦のない攻撃。しかしケムエルを突破できず、打ち止めとなった。ルシリオンはケムエル内で、新たな別の上級攻性術式を組み上げていたところに、

「退け、レーゼフェア、グランフェリア」

男の声が曇天から静かに流れた。レーゼフェアとグランフェリアの名が告げられたと同時に、呼ばれた二機はルシリオンから距離を開けた。

――轟破焔壊槌（マルテーロ・コンブスタォン）――

真っ赤な炎を噴き上げ纏うハンマーが空を覆う雲を突き破って飛来してきた。ルシリオンの目が見開かれる。すぐさまケムエルを解除し、その場から離脱するための飛行。そして左手に"神槍グングニル"を具現させる。ルシリオンは追尾してくる炎の塊であるハンマーを"グングニル"で弾き返し、間髪いれずに新たな魔術を発動する。ルシリオンの両サイドに現れる直径１０ｍほどの蒼光の円環。

――屈服（コード）させよ、汝の恐怖（イロウエル）――

円環より出現するのは、左右一対の銀の巨腕。レンガ造りを示す様な線が所狭しと走っている。

右の巨腕は空へ向かって振るわれ、左の巨腕は追撃に迫って来ていたレーゼフェアとグランフェリアを払い落そうとするように高速で

薙ぎ払われる。薙ぎ払いの直撃を受けたレーゼフェアとグランフェリアは高速で吹き飛ばされた。
ハンマーを放って来た男は、イロウエルの一撃を受ける前にすでにその場から離脱していた。消えたイロウエルによって雲海に穴が開き、その穴から降り注ぐ太陽光の柱の中にその男は居た。

「久しいな、バンヘルド。やはりお前も父親(わたし)の事を忘れてしまったか・・・？」

バンヘルドと呼ばれた男。３０代前半くらいの外見で、ワインレッドのセミロングの髪はオールバッグ。赤のワイシャツ・スラックス、白のロングコートといった格好だ。
右手には、先程ルシリオンに投擲されたＴ字型のハンマーが握られていた。幾何学模様の刻印が施された鋼色の柄は短く、手の平に収まるほど。柄に比べて銀色のハンマーヘッドは大きく、両サイドに有る鉄球の如きヘッドにはいくつも穴が開き、それらを繋ぐブリッジにも穴が開いている。

「憶えている。我らが存在意義、力ある王の殲滅、その最後のターゲット」

「そうだよな。憶えているわけないよな。解っていたが・・・」

ボソッと呟き、ルシリオンはバンヘルドにも戦意をぶつける。洗脳されてしまった愛おしい子供達(エグリゴリ)を救うためには、すでに完全破壊しか手段が無いから。一対三の戦況。しかし、現在も活動している"エグリゴリ"は全部で七機。ルシリオンは思い出す。テスタメント

・マリアが言っていた言葉を。

――ルシリオン様が使う魔法陣と同じモノを扱う男性が――

今ルシリオンの目の前に居る唯一の男であるバンヘルド・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。彼の扱う魔法陣は、ルシリオンの使うアースガルド魔法陣とは違うものだ。それゆえにルシリオンはこの戦場へと残りの"エグリゴリ"が集まっているだろうと判断。そうなれば、ルシリオンの勝利は遠のくことになる。だからこそ彼は、

――瞬神の飛翔（コード・ヘルモーズ）――

最も得意とする高速空中戦を行うために空戦形態となる。12枚の剣翼が背より離れ、その剣翼を1枚1枚挟みこむようにして薄く細長いひし形の蒼翼が10枚現れた。

「神器王ルシリオンの空戦形態コード・ヘルモーズを確認」

「ヤバいね。それじゃあ僕たちも」

「高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）、発動する」

バンヘルドとレーゼフェアとグランフェリアに変化が現れた。三機の背より、孔雀の尾羽ような翼が放射状に20枚と生えた。それは何と神々しい姿か。それぞれの魔力によって構成されているため、レーゼフェアはアザレアピンク、グランフェリアは琥珀色、バンヘルドは真っ赤な翼だ。

それを見たルシリオンが「なんだソレは・・・！？」と、驚愕に目を見開いた。彼が"エグリゴリ"――元は"ヴァルキリー"――にプログラミングした魔術の中に、そのような術式は無かったからだ。

「自ら追加した魔術というわけか」

「・・・行くぞ」

――焔雨（ペザデーロ）――

バンヘルドは前面に発生させた炎塊を"ケンテュール"で打ち、炎塊を無数の炎の弾丸としてルシリオンへ放った。だが今のルシリオンはヘルモーズを発動している。その場から消えるように回避。レーゼフェアとグランフェリアが靡く翼を背にし、ルシリオンを追いかける。しかし追いつけない。ルシリオンは過去・現在、どの世界においても、揺るぎ無き空戦の覇者。空戦で戦う以上、ルシリオンに敗北は無い――はずだった。三機を迎撃するために上級術式を組み始めた瞬間、

（うぐ・・・一体何が・・・！？）

また視界にノイズが入る。それだけでなく強烈な頭痛、それに胸に鈍痛。明らかに異常。揺れる視界。迫るレーゼフェアとグランフェリア。ルリシオンは今自分の身に起きている異常を無視し、

――復讐神（コード・ヴァーリ）の必滅――

蒼光の砲撃を6条と放つ。ヴァーリは、術者に対して攻撃を加えてきた者を永続的に追尾するカウンター砲撃だ。強力な砲撃が迫り、回避に移る三機をヴァーリは曲線を描き追尾する。

「我が手に携えしは確かなる幻想」

ルシリオンが詠唱。未だに治まらない頭と胸の痛み、視界不良。それでもなおルシリオンは術式を組み上げる。

――凶竜の殲牙（コード・ニーズホッグ）――

ルシリオンの頭上に無数の武器が出現し、それらが竜を形作っていく。その武器は、神器、と呼ばれる特別な"力"を有するモノだ。神や精霊に創造された神造兵装、魔物に創造された魔造兵装、魔術師（ニンゲン）によって創造された概念兵装を総称して、神器と言う。その神器で構成されたニーズホッグは3頭。ルシリオンが「喰殺粛清（ジャッジメント）！」と号令を下すと、ニーズホッグは"エグリゴリ"三機に向かって突撃して行った。さらに魔術を発動させようとして、

「あぐ・・・っ！」

今まで以上にひどい頭痛がルシリオンを襲った。強烈すぎる痛みで涙が溢れていく。理由のハッキリしない異常。

しかしここでルシリオンはある事に原因があるのでは？と、1つの推測を立てた。

（まさか、魔力消費が大きい魔術を使うと起こる・・・？）

それが正解ならば、ルシリオンにとっては最悪な事態だ。
魔術師には魔力量やその運営力を数値化して表したランクがある。C、B、A、AA、AAA、S、SS、SSS、X、XX、XXXとある。XXXが最高となるが、中にはそれを超える魔力を保有する者もいる。その者には人間の極限を超えた無限の魔力を持つ者として、EXランクが与えられる。
ルシリオンがそのEXランクだ。だから自然と魔術発動に必要な魔力量が多くなる。魔力を抑えても魔術は発動出来るが、その分威力や効果が薄まるのは必然の事。その抑えられた魔術の効果で、"エグリゴリ"を斃すことが出来るかというと、五分五分としか言えなかった。

（それがどうした。今目の前に、永きに亘って洗脳され狂い続けた子供たちが居るんだ。ここで救えずして、何が父親だ！　シェフィとの約束を果たす時だっ、気合いを入れろッ！）

――傷つきし者（コード）に、汝（ラファエル）の癒しを――

ルシリオンは三機の動きに細心の注意を払いながら治癒術式ラファエルを発動する。と、幾分か痛みが和らいだ。戦意を保つためにもルシリオンは誓いを胸に抱く。シェフィ。シェフィリス・クレスケンス・ニヴルヘイムという女性との誓い。共に"ヴァルキリー"を創造した、"ヴァルキリー"にとっては母親であり、ルシリオンにとっては最愛の恋人だった女性。

――ルシル、生きて――

――それとお願い。哀れなあの子たちを見捨てないで、助けてあげて――

（ああ、生きるとも。助けるとも。シェフィ、もうすぐで私たちの旅も終わりだ！）

ヴァーリとニーズホッグをやり過ごした三機に向け、ルシリオンは魔術を組み上げる。

――軍神の戦禍（コード・チュール）――

無数の神器が曇天の下、縦横無尽に展開される。ルシリオンが指を鳴らし「蹂躙粛清（ジャッジメント）」と号令をかけると、一斉に"エグリゴリ"三機に突撃していく。それぞれ翼を翻して高速で回避し続ける三機は、

――猛炎放出（シャーマ・エゼクサオン）――

――黒き影拳乱舞（ポウン・タンペット）――

――雷槍迅穿衝――

烈火の砲撃、幾つもの影の拳、雷光の砲撃をルシリオンへ向けて放つ。ルシリオンは3条の砲撃に向かって、対魔力の効果を有する3つの神器を射出、三機の攻撃を迎撃、消滅させた。結局、三機は攻勢に出るのを諦め、雨あられと降り注ぐ武器群の回避に専念しだす。

――集雷法――

レーゼフェアとバンヘルドがグランフェリアを庇うような位置取りをし、迫りくる神器を迎撃。護られるグランフェリアが"雷界幻矛"を高く掲げると、空より雷が落ち、"雷界幻矛"に集束。ルシリオンの表情が焦りに染まる。すぐさま妨害しようと上級術式を・・・・

「あぐっ！？」

ラファエルで抑えていた頭痛が再起。今度は胸の痛みも異常に強くなった。あまりの激痛に、左手に携えていた"グングニル"を手放し頭を押さえ、右手は胸をギュッと鷲掴む。それでも必死に魔術を組み上げようとするが、激痛がそれを妨害する。ルシリオンはグランフェリアの術式発動の妨害を諦めた。

――神雷槍――

完全な雷となり、周囲に莫大な雷撃を放ち続ける"雷界幻矛"が投擲された。ルシリオンは待機している神器のいくつかを射出し迎撃、"雷界幻矛"の速度と威力を減衰させていく。９つの目に神器が"雷界幻矛"の勢いを完全に殺し、弾き飛ばした。

「お？　どうしたの神器王？　頭とお胸が痛い痛い？」

レーゼフェアがルシリオンの異常に気付き、高速で接近してきた。残り少なくなっていた神器を射出。避けるレーゼフェアは両腕の籠

手、"聖狩手甲エオフェフ"と両脚に影を纏わせ、

「今がチャンスだって言うのは僕でも判るよっ」

――凶つ連蹴拳（アンタンス・ノワール）――

振るわれる右拳打。ルシリオンは痛みを必死に堪え、左裏拳で捌く。間髪いれずに振るわれる拳打と蹴打の連撃。ルシリオンも何とか捌き続け、「近接格闘が苦手なのは過去の情報だ」と、再具現させた"グングニル"を右手に取り、レーゼフェアを斬り付けようと振るう。だが・・・

「ふむ。理由は判らないが、神器王は何かしらの問題を体に抱えているようだな」

――轟破焔壊槌（マルテーロ・コンブスタォン）――

バンヘルドが翼を翻しながら、レーゼフェアの連撃を捌いているルシリオンの背後へ回った。携える"ケンテュール"のヘッドの穴という穴から炎が噴き上がり、"ケンテュール"は炎塊と化していく。ルシリオンは背後を見ることもなく、

――女神の護盾（コード・リン）――

蒼く円い盾を展開。円の中に女神の祈る姿が描かれた軽く芸術的な盾だ。"ケンテュール"が盾と衝突。ルシリオン、バンヘルド、レーゼフェアを覆うほどの爆炎が起こる。爆炎の中から飛び出してき

たのは、無傷のルシリオンとバンヘルド。レーゼフェアが遅れて黒煙からヨロヨロと出てきた。体中が煤で汚れ、「けほけほっ」と咽ている。

「こんのおバカヤロぉぉーーーーーッ！」

曇天を翔け回るルシリオンを追いかけるバンヘルドに向け、レーゼフェアは怒りの咆哮を上げた。グランフェリアが「行くわよ、レーゼフェア」と彼女の肩を叩き、バンヘルドの補助へ向かう。レーゼフェアも「あとでバンヘルドを一発殴る」と拳を打ち合わせ、翼をはためかせて追撃を開始した。そんなレーゼフェアの昔と変わらない様子に微苦笑しているルシリオンはただひたすら空を翔け、痛みが治まるのを待つ。

（これ以上のエグリゴリが集合する前に決めなければ・・・負ける！）

ルシリオンの恐れる増援。しかし待ち望んでいる相手が来ることを望む。洗脳される以前の"戦天使ヴァルキリー"においても洗脳後の"堕天使エグリゴリ"においても最強であるガーデンベルグ・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。

そして、ルシリオンが"界律の守護神テスタメント"にならざるを得ない理由を作り出した男。ガーデンベルグを破壊することで、ルシリオンは"テスタメント"より解放される。1万年以上という永きに亘り、苦痛ばかりの契約を執行してきたルシリオンの絶対唯一の願い。

（なんだ？）

ルシリオンに追翔していたバンヘルドが急速反転、レーゼフェアとグランフェリアも急停止した後、反転。その直後、巨大な雪だるまが何百と雲海を突き破って落ちてきた。

――雪人降臨祭（キオナンソロポス）――

三機が離れた理由がそれだった。ルシリオンは痛む頭と胸に顔を苦痛に歪めつつ、飛行速度を上昇。しかしあまりに巨体ゆえに、雪だるま群が次々とルシリオンを掠っていく。そしてついに雪だるまの一つがルシリオンを直撃。ルシリオンは成す術なく地面へと落下、ズンッと叩きつけられた。

。―。―。―。―。―。

レーゼフェアは雪だるま一面となった戦場跡を見下ろした後、「おおー、リアンシェルトが決めちゃったよ」と雪だるま群を放った主を見上げる。

「別に、嬉しくなんてない」

髪はシアンブルーのインテーク、背中まで伸びる髪は毛先が外へ向かってカールしていて、頭頂部から1本の髪（俗に言うアホ毛）が伸びている。純白のフリルの付いたハイネックのロングワンピース。胸元にはサファイアのブローチ。その上から青のクロークを羽織っている少女、リアンシェルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアが無表情で呟いた。背より生えるスノーホワイトのエラトマ・エギエ

ネスの1枚を手に取り、そっと撫でる。

「これで決まったとは思わない方が良いわ、リアンシェルト。シュヴァリエル、フェイヨルツェン。今の内にトドメを刺す」

「哀れなものだよな。魔道王フノスと白焔の花嫁ステアと並ぶ最強の魔術師が地に平伏してる」

オリエンタルブルーのツンツン頭、ワインレッドの鋭い双眸。前開き黒ハイネックタンクトップ・レザーパンツ・白のロングコート、ハンターグリーンのエラトマ・エギエネスという格好の20代半ばくらいの青年、シュヴァリエル・ヘルヴォル・ヴァルキュリアが小さく唸る。2m30cmほどの翡翠色の大剣を肩に担ぎ、トントンと肩を叩いている。

「これもまた1つの運命（さだめ）だとしたら、わたくし達は残酷な渦に呑まれてますね」

チェスナットブラウンのセミロング、ブロンズレッドの柔和な瞳。赤紫のブラウスに黒のベスト、黒ネクタイ、黒のプリーツスカート姿で、アップルグリーンのエラトマ・エギエネスという、20代前半くらいの女性、フィヨルツェン・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。金銀の装飾が施された2mほどの白銀の弓を携えている。

「ガーデンベルグは？」

「もうすぐで合流出来るはずだ。あの子を連れて、ここにな」

レーゼフェアに答えるシュヴァリエル。しばらくの沈黙。その沈黙を破ったのはグランフェリアで、「それではその前に任務を遂行するわ」と真下を見下ろす。グランフェリアの視線の先には、雪だるまの押し潰されたままのルシリオン。

――神雷槍――

グランフェリアの"雷界幻矛"が琥珀色の雷槍と化す。

――轟破焔壊槌（マルテーロ・コンブスタオン）――

バンヘルドの"ケンテューール"が炎を噴き上げ、火炎の槌と化す。

――黒き閃光放つ凶拳（ソワール・エロジオン）――

レーゼフェアは、前面に発生させた闇の球体を殴る体勢になる。

「参りましょう、ハガウル」

――掃討猟犬（ミュート・スレイヤー）――

フィヨルツェンが"天弓ハガウル"を構えると、アップルグリーンに輝く風の矢が現れた。

「いくぜ、メネス」

――剱乱舞刀（ケンランブトウ）――

シュヴァリエルは"極剣メネス"を上段に構え、刀身に旋風を発生させた。最後にリアンシェルト。しかしリアンシェルトは黙したままで、新たな魔術を発動しようとしない。他の"エグリゴリ"の視線が集まるも、リアンシェルトは無視。痺れを切らしたグランフェリアが「リアンシェルトはキオナンソロポスの維持を」と指示。それでリアンシェルトはようやく「判った」と頷いた。

「・・・ガーデンベルグ達が合流する前に終わらせる。各機、攻撃開始」

グランフェリアの指示の下、彼女の雷槍、バンヘルドの炎槌、レーゼフェアの砲撃、フィヨルツェンの風で構成された幾つもの蛇、シュヴァリエルの幾つもの真空の刃が、一斉にルシリオンを押し潰す雪だるまへ向かう。

。―。―。―。―。―。―。

雪だるまの下敷きになっているルシリオンの目がカッと開く。

――邪神の狂炎（コード・ロキ）――

ルシリオンの四肢に、紅蓮の劫火で構成された焔の腕と脚、背に業火の翼が展開される。両腕両脚共に1mほどあり、ルシリオンを押し潰す雪だるまが一気に溶けていく。ルシリオンは立ち上がり、両腕を振るって周囲の雪だるまを一掃する。焔腕を振るう度にルシリ

オンの顔が苦痛に歪み、血涙を流し始めた。

――神雷槍――

――轟破焔壊槌（マルテーロ・コンブスタオン）――

――黒き閃光放つ凶拳（ソワール・エロジオン）――

――掃討せし猟蛇（ミュート・スレイヤー）――

――剣乱舞刀（ケンランブトウ）――

"エグリゴリ"五機の魔術が迫っている事に気付いたルシリオンが迎撃態勢に入った。その直後に「ごふっ？」と吐血。フラついてしまい、防御ないし回避することが遅れたのがルシリオンの最大のミスとなった。

最初にグランフェリアの雷槍がルシリオンの右の炎脚を粉砕、放電し、彼を感電させた。声にならない悲鳴を上げるルシリオンに次々と猛威を振るう"エグリゴリ"の魔術。炎槌がルシリオンの左の焔腕を粉砕、爆発を起こし、彼を吹き飛ばす。

地面を転がるルシリオンにレーゼフェアの砲撃が直撃。続けてシュヴァリエルの真空の刃、フィヨルツェンの風の蛇がルシリオンに殺到していく。それを見下ろす"エグリゴリ"達。リアンシェルトだけは目を逸らし、ルシリオンを視界に収めないようにしていた。

（ま・・ずい・・・・意識が・・・もう・・・）

黒煙の中、ルシリオンは揺らぐ意識を必死に保とうとしていた。治癒術式のラファエルを発動しようとしても、なかなか上手く発動できない。それにロキもヘルモーズもダメージ過多で解除され、戦闘甲冑のコートもボロボロで原形を留めていない。
それでも意識を繋ぎとめ、ルシリオンは必死に両手をつき上半身を起こす。ガクガク震える足で立ち上がり、もう一度具現した"グングニル"を支えとして真っ直ぐ空を見上げる。孔雀の尾羽の様な翼エラトマ・エギエネスを放射状に展開している"エグリゴリ"六機が、地に立つルシリオンを見下ろしていた。

「はぁはぁはぁ・・・ふぅ、傷つきし者に、汝の癒しを」

無理やり息を整え、治癒術式ラファエルをなんとか発動させ、ダメージの回復を行う。しかしそれを黙って見ているわけではない"エグリゴリ"。真っ先に動いたのはシュヴァリエルとレーゼフェアの二機だ。地面スレスレまで降下した二機は、そのままルシリオンへと最接近。

――純陸戦形態・疾駆せし、汝の瞬風――

ルシリオンの背中から、蒼く輝く魔力の剣翼が生えた。通常の剣翼アンピエルは１ｍ程だが、ヤエルは３０ｃｍ程で、数も１２枚ではなく半分の６枚。ルシリオンの体が数ｃｍと浮き、激しい頭痛と胸の痛みを堪え"グングニル"を振るって蒼光の魔力斬撃を飛ばす。シュヴァリエルとレーゼフェアの二機は各々の神器で粉砕、そのまま飛行を続行する。

「破ッ！」

シュヴァリエルの振り下ろしを半身ズラして回避。それはさながらスケートをしているかのように滑らかな動きだ。それがヤエルの効果だ。体を浮かせ、足元の摩擦を失くすことで陸戦での高速移動が出来る、というものだ。

「そーれっ♪」

レーゼフェアの拳打を"グングニル"でいなし、シュヴァリエルの刺突を体を回転することで避け、そのまま遠心力いっぱいの"グングニル"を見舞う。その間にもラファエルを繰り返し発動し、回復を行う。ルシリオンは二機の連携の取れた猛攻を捌き続けたが、残念ながら敵はその二機だけではない。

――雷槍連穿衝・壱式――

シュヴァリエルを弾き飛ばした直後、グランフェリアの雷槍が18と降り注いできた。ルシリオンが地を滑るように避ける。しかし避けた場所に、

――粉砕せし風爆（マーシレス・フラワー）――

圧縮された風の矢8本が着弾。爆発的な突風が発生し、宙に浮くルシリオンを強制的に後退させた。

――猛炎放出（シャーマ・エゼクサオン）――

それと同時にルシリオンを襲うバンヘルドの炎熱砲撃。炎熱砲撃がルシリオンに直撃し、爆発を起こした。だがルシリオンは倒れなかった。爆炎を突き破って現れ、最接近して来ていたレーゼフェアにカウンターの斬撃を食らわせる。「にょわぁっ」と錐揉みしながら吹っ飛ぶレーゼフェアに、

――無慈悲たれ（コード）、汝（プシエル）の聖火――

蒼炎で構成された大蛇プシエルを追撃させた。レーゼフェアは体勢を整える前にプシエルに丸呑みされる。

「おおおおらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

その直後に戻って来ていたシュヴァリエルによる薙ぎ払いによる斬撃。ルシリオンはグッとしゃがみ込み避け、立ち上がりの勢いを上乗せした斬撃を放つ。だがシュヴァリエルにあと少しで当たるというところで、

「とおりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」

――闇の女王の鉄拳（サリュ・マンソンジュ）――

プシエルが巨大な影の拳によって粉砕され、そのままルシリオンへと襲いかかる。ルシリオンは攻撃を中断。その場から高速離脱。もちろん上手くいくわけにもいかず。

「私も参加させてもらおうかしら」

グランフェリアが地上に降り立ち、琥珀色の雷光を纏う"雷界幻矛"の刺突を放ってきた。"グングニル"で軌道を逸らした直後、レーゼフェアの別の巨影拳がルシリオンを直撃。先程のレーゼフェアと同様、錐揉みしながら吹っ飛されてしまう。頭やら鼻やら口やらと血を流し、意識も少し揺らいだが、それでも戦意は衰えない。ルシリオンは体勢を無理に整える事もせず、

――殲滅（コード）せよ、汝の軍勢（カマエル）――

炎熱、氷雪、閃光、闇黒、風嵐、雷撃、という様々な属性の魔力槍を１０２０本展開。頭痛が起きる。ここでルシリオンはある線引きが出来る事に気が付いた。

（ＳＳＳランクの魔力では起きず、Ｘランクからあの痛みが起こるのか）

治癒術式ラファエルや炎蛇プシエルの使用した魔力量はＳＳＳランクだった。そして槍群カマエルはＸランクを要し、それで頭痛が起きた。それはつまりその一点にだけ気を使えば、酷い頭痛や胸の痛みが起きないということだ。が、

（ＳＳＳランクを最高として、エグリゴリに勝てるわけがないッ！）

"エグリゴリ"が扱っている魔力量は現在のところ最大ＸＸランク。２ランクも上で、しかも戦力の数で圧倒的に負けている。とはいえ

ルシリオンにも戦力――援軍を増やすことの出来る魔術がある。だが"エグリゴリ"と対等に渡り合える援軍を用意するなら、ルシリオンはXXXランクの魔力を使用しなければならない。上級術式発動に使用するXXXランクで強烈な頭痛やら胸の痛みを起こす。ならそれ以上のXXXランクの魔力を使えばどうなるか。下手をすれば援軍を用意する前に自滅するかもしれない。

「（それだけはまずいよな）蹂躙粛清（ジャッジメント）！」

ルシリオンはこのまま単独での戦闘続行を決断。号令を下し、カマエルを一斉に"エグリゴリ"に向かって降り注がせた。カマエルの対処に追われることになった"エグリゴリ"に向け、

「第二波（セカンドバレル）・・・装填（セット）・・・！」

さらに999本のカマエルを発動。ルシリオンに頭痛が襲いかかる。

「うぐ」と呻き声を漏らしながらも「蹂躙粛清（ジャッジメント）！」と号令を下した。降り注ぐ槍群。迎撃を続ける"エグリゴリ"。幾つかの槍が"エグリゴリ"に着弾するが、致命的なダメージを与えらていない。

「やはり、ぅく、Xランク程度ではダメか」

致死ダメージにならないと判った"エグリゴリ"が一斉に攻勢に転じる。それぞれ防性術式を発動し、カマエルを防御しながらルシリオンへ接近してくる。ルシリオンは覚悟を決めた。どれだけの苦痛が襲うか判らないが、XXXランクの魔力を使ってやろうと。

「はぁあああああッ！」

――崩山裂衝――

シュヴァリエルによる粉砕力の高い竜巻を纏わせた"メネス"の刺突。紙一重で避ける事も出来ないその攻撃に、ルシリオンはあろうことか前進。殺傷効果範囲ギリギリ外を通り、シュヴァリエルの懐深くに入りこんだ。

――破り開け（コード）、汝の破紋（メファシエル）――

防性術式破壊のメファシエルを付加した拳打を打ち込む。ガシャァンと音を立てて、シュヴァリエルを守っていた不可視の魔力障壁が破壊。ルシリオンは間髪いれずに、

――燃え焼け（コード）、汝の火拳（セラティエル）――

ゼロ距離で炎熱砲撃セラティエルを撃ち込んだ。至近距離で爆発が起き、両者ともに大きく後方に吹き飛んだ。シュヴァリエルは背から地面に落下、バウンドを数回し終えた後に四肢をついて着地。ルシリオンは少し危なげだったが、なんとか体勢を整えるのに成功したその時、

――影渡り（シュルプリーズ）――

「――からの、鉄拳制裁♪」

「ぐっ！？」

ルシリオンの足元の影から突如出てきたレーゼフェアによる奇襲攻撃。顎に強烈なアッパーカットを喰らったルシリオンが空高く舞う。レーゼフェアはまた影に侵入し、これから起こる事態から避難。ルシリオンの頭上に到着したバンヘルド。振り上げられたのは轟々と燃える"ケンテューール"。

「燃えろ」

――轟破焔壊槌（マルテーロ・コンブスタオン）――

ルシリオンに振り下ろされた炎槌。ルシリオンは咄嗟に魔力障壁を展開。衝突。ルシリオンを襲う大爆発。バンヘルドは爆風に乗って空高く飛び、ルシリオンは地面に叩きつけられた。そこに追撃。グランフェリアの雷槍とフィヨルツェンの風矢。爆炎と黒煙でルシリオンの姿を確認出来ないと言うのに、ピンポイントで彼の両肩を貫いた。シュヴァリエルが"メネス"を振るって突風を起こし、黒煙を綺麗に払う。

「まだやる気なんだ、さっすが神器王ルシリオン」

片膝立ちをしたルシリオンがそこに居た。両肩を貫いていた雷槍と風矢は、ルシリオンによって粉砕され今は無い。ルシリオンの戦意漲る双眸に睨まれたリアンシェルトを除く"エグリゴリ"達が臨戦態勢に入る。

「退くことを知らないのは騎士と同じ、か」

「騎士と数千年と過ごしたからな。それ以前に、お前たちを前にして退くという選択肢など・・・・私には無い！」

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

ルシリオンの背に剣翼１２枚とひし形１０枚の計２２枚の蒼翼が再展開された。"エグリゴリ"達の翼エラトマ・エギエネスが風に揺れる。そのまま膠着状態が続く。ポツポツと空より滴が落ちてくる。雨が降り始めた。ルシリオンの表情に笑みが浮かぶ。

雨。それはルシリオンに味方する天候だからだ。ルシリオンの足元に、サファイアブルーに輝くアースガルド魔法陣が展開される。雨粒が一斉に地に落ちることなく止まる。ルシリオンが雨を――正確には水を――操作している。

――研ぎ澄ませ（コード）、汝の聖雨（マルティエル）――

無数の雨粒が槍となった。完全に包囲された"エグリゴリ"だが、全機の表情には余裕がある。それを訝しんだルシリオン。その余裕の答えが、ルシリオンの背後にあった。背後に気配を感じたことでルシリオンは振り返った。そして、背後に居た男を見て、目を限界にまで見開いた。

「・・・・ガーデンベルグ！！」

銀の髪、アップルグリーンの瞳、ルシリオンの戦闘甲冑と同じデザ

インの黒の長衣・スラックスに灰色のロングコート姿といった、２０代前半くらいの青年だ。そして背には、ルシリオンの剣翼アンピエルと同じ翼が８枚、色は真っ白が展開されていた。
右手に携えるのは深紅の大剣。銘を魔造兵装第二位"呪神剣ユルソーン"。ありとあらゆる呪いを内包した、最凶の神器だ。ガーデンベルグの足元には白く光り輝くアースガルド魔法陣。テスタメント・マリアが見かけた者こそ、このガーデンベルグ・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアだった。

「ガーデンベル――」

ルシリオンが神造兵装第一位"神槍グングニル"を振るう。

「――がはあっ！」

しかしガーデンベルグに頭を鷲掴みにされ、ルシリオンは地面へと顔面から叩きつけられた。上半身を起こす前に蹴りを入れられ、強制的に起き上がらされる。

「ふっ・・・・！」

「うぐ・・・・！」

ガーデンベルグの後ろ回し蹴りを両腕をクロスさせることで防御したルシリオンだが、宙空に居たために受けた衝撃のまま後方へ蹴り飛ばされた。ガーデンベルグは"ユルソーン"を脇に構え、高速でルシリオンに突撃する。ルシリオンが体勢を整える前に一撃を入れ

ようと"ユルソーン"の刀身に純白の雷光を迸らせた。

――雷霆・斬烈閃――

それはさながら雷光の羽根。ガーデンベルグはそれを一気に薙ぐ。対するルシリオンは体勢を整えることが出来ないまま、

――殲滅(コード)せよ、汝(カマエル)の軍勢――

炎熱と閃光の魔力槍を22本と展開、射出し、"ユルソーン"を迎え撃つ。ガーデンベルグは雷槍と光槍の迎撃のために、雷光纏う"ユルソーン"を振るい、カマエルを破砕していく。ルシリオンはその間に体勢を整え、

――削(コード)り抉れ、汝(ザキエル)の裂風――

螺旋を描き放たれる削岩機のような竜巻の砲撃を放つ。カマエルの迎撃を終えた直後のガーデンベルグに回避出来る余裕はなく直撃。ザキエルは銘の通り、触れたモノを削り、抉り、潰すことが出来るだけの風圧を持った竜巻だ。それゆえに直撃したガーデンベルグも大ダメージを負うはずだった。

「あまりに穏やか過ぎて、そよ風と思ったよ」

ザキエルを、魔力を纏わせた拳打で消滅させ、そのままルシリオンへと翔けた。振るわれる"ユルソーン"。狙いはルシリオンの腹部。受ければ上下に分断されるだろう。

――護り給え、汝の万盾(ケムエル)――

ルシリオンは咄嗟に無数の小さな円盾ケムエルを発動し、防御態勢に入った。ケムエルに"ユルソーン"が触れる。と、盾としての役割を果たすことなく一瞬で寸断され、ケムエルは砕け散った。切り返しによる斬撃がルシリオンを襲う。しかしその前に、

「衝殺粛清(ジャッジメント)！」

待機していた無数の水槍が一斉にガーデンベルグを全方位から襲撃。

――氷装甲冑(セレシウス)――

ガーデンベルグの全身を覆う冷気が、迫り来る水槍をすべて凍結粉砕。

――咲(コード)き乱れし、汝の散火(マルキダエル)――

続けてルシリオンが放つのは蒼炎の魔力弾。数は12。「爆散粛清(ジャッジメント)！」と告げ、マルキダエルが一斉にガーデンベルグの至近距離で爆発を起こしていく。

――炎装甲冑(イフリート)――

マルキダエル以上の爆炎がガーデンベルグを覆い、マルキダエルを無力化。ルシリオンは真っ向から迎え撃つつもりなのか"グングニ

ル"を構える。ガーデンベルグも応えるように"ユルソーン"を脇に構え、

「「おおおおおおおおおおおおッ！！」」

互いが間合いに入ったと同時にそれぞれ得物を振るい、連撃を放ち続ける。"エグリゴリ"という観客の中で、かつての英雄とその息子が円舞を踊る。それは美しい円舞。互いの翼より生まれ出る白と蒼の魔力羽根が舞い、1人と一機の円舞をより幻想的にする。しかし事実は殺し合いだ。そしてルシリオンにとっての真実は救出。洗脳を解き、元の"ヴァルキリー"へと戻すことが出来ないため、完全破壊することでしか救えない。

「（だから、私は・・・）お前たちを・・・ここで救うんだッ！」

"ユルソーン"を捌いて弾き飛ばし、無手となったガーデンベルグに肉薄。ガーデンベルグの両手に白い魔力剣が創られ、ルシリオンの迎撃に移る。と思いきや、空に上がって"グングニル"の斬撃をやり過ごした。ルシリオンも続いて空に上がろうとする。しかし、服を引っ張られ妨害された。

「しま・・・っ！」

己の不覚を呪った。ガーデンベルグに集中し過ぎて、他の"エグリゴリ"の接近に気付かなかった。他の理由として、ガーデンベルグとの闘いに他の"エグリゴリ"は今まで干渉しなかった、という油断もあった。振り向きざまに一撃を入れようとするルシリオンが背

後に振り向き、自分の服を引っ張った"エグリゴリ"の顔を見て思わず"グングニル"を寸でで止めた。

「・・・・・誰だ、お前？」

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

私の服を引っ張っていたのは、１２～１３歳ほどのあどけない少女だ。藍紫色のセミロングの髪は少しウェーブが掛かり、柔和な双眸は赤紫色。水色のイブニングドレスは、子供に似つかわしくない程に装飾が無い。

「・・・・・誰だ、お前？」

私とシェフィによって創り出された千機の"戦天使ヴァルキリー"の中に、私へ笑顔を向けている少女は居ない。だから無意識にそう問うていた。馬鹿か私は。この少女は敵に決まっている。ガーデンベルグ達と同じ孔雀の尾羽の様な翼（色はオレンジ。それがこの少女の魔力光だろう）を展開しているんだから。

「わたし、ミュール・エグリゴリ。よろしく、神器王のお兄ちゃん」

ミュール・エグリゴリ。信じたくはないが、この子も"堕天使エグリゴリ"らしい。最悪の事態が起きているのかもしれない。ガーデンベルグ達が、新たな"エグリゴリ"を創り出しているという・・・。自分たちを形作っているシステムやプログラムくらいは把握出来るだろう。あとは設備や材料となるが、どこで調達したのやら。

「ならば私の敵だな。さらばだ、ミュール」

ミュールの手を払いのけ、"グングニル"を穂先を向ける。私とシェフィの最高の子供たちである"ヴァルキリー"には遠く及ばない戦力に違いない、ガーデンベルグ達の創った"エグリゴリ"など。

「うん、バイバイ、お兄ちゃん♪」

"グングニル"の刺突を放ったとほぼ同時、ミュールの全身から発光。視界がオレンジ色一色になるが、気配はそのまま。なら、このまま貫いてくれる。だが空を切った。この光に感覚が惑わされてしまっている。

（何故反撃してこない？　それにガーデンベルグ達も）

絶好の機会だろう、今は。それなのに攻勢に打って出ない"エグリゴリ"。ならこちらから仕掛けさせてもらうまでだ。頭痛を覚悟で発動させるのは、

――光神の調停（コード・バルドル）――

全方位無差別砲撃の上級術式バルドル。使用魔力はＸＸランク。覚悟していた頭痛が来た。これを耐えさえすれば・・・・

「あ？　ぐっ・・・あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！？」

頭痛よりさらに強烈な胸の痛みに、私は叫ばずにはいられなかった。痛みを生んでいるのは、魔術師にとって最も重要な器官"魔力炉(システム)"だ。その場で両膝をついて蹲る。溢れて止まらない涙に視界がぼやける。

（なんだこれは・・・！？）

わけが判らない。"界律"からのペナルティーではないのは確かだ。さらに視界にノイズが走る。そんな中、脳裏に浮かんでくるのは・・・

――よぉ、ルシル。お前も昼、食ってくか――

（比泉・・・秋名・・・）

――ツンツンデレツンデレツンツン♪　ほら、ルシルも歌ってよ――

（槍桜・・・ヒメ・・・）

――ルシルさん、お疲れ～――

（五十音・・・ことは・・・）

――あ、ルシルさん。いらっしゃい――

（七海・・・アオ・・・・）

――ルシリオンさん。たまにはノーと断った方が良いかと――

（岸・・・恭助・・・・）

かつての契約先の世界で出逢った仲間たちの笑みと声。どうしてこんな時に、アイツらの事が脳裏に浮かぶんだ。私に笑いかけてくれる秋名たちの姿がブレる。消える？　やめろ。何が？　判らない。

――・・・ルシ・・・花見・・・楽し・・・一緒に・・・――

（秋名・・・・！）

かつての友が霞んでいく。ヒメも。ことはも。アオも。恭助も。その世界で出逢った他のみんなも。

まず最初に恭助が消えた。何か大事なものを失ったようで・・・・。

「恭助！！・・・・・・って・・・・誰だ？」

恭助？　誰だソレは。違う。恭助は友達だ。友達？　誰が？　何を馬鹿なことを。恭助だよ。いや、だから恭助って誰だ？

「なん・・だよ・・・これ・・・・」

いっつもラーメンばかり食べている腹ペコ町長のヒメも・・・消えた。

「ヒメって誰だ？　違う！　違う違う違う違う！」

消えていく。大切な思い出が。私を支えてくれていた仲間の声が、笑みが、全部！　このはって誰だ？　アオって誰だ？　秋名って・・・・

――・・・・・・・・・・・・――

「誰だ？・・・・・・消える、消えていく。なんだよ、何なんだこれはっ！　消えるなよ。何か大切な思い出があったのは憶えているんだ。だから消えるな。消えるなって。思い出せないけど、大事な誰かとの大切な・・・・っ、あああああああ

――黒き閃光放つ凶拳（ソワール・エロジオン）――

――轟風暴波――

――嵐槍百花（クライシス・エア）――

――輝きたる音軍（ルスティヒ・マルシュ）――

。――。――。――。――。――。

「っ！？」

とある少女が突如何かを感じ取ったかのようにハッとして空を見上げる。綺麗なブロンドヘアはシニヨン、紅と翠のオッドアイ。顔立ちは幼い。ビスチェのドレスを着ていて、その物腰は気品が溢れている事から高貴な身分だろう。しかしその少女の体躯とドレスには全くそぐわないガントレットが両上腕部にまで装着されていた。

「今、なにか・・・？」

少女は遠く広がる空の向こうを見上げたまま動かない。そんな少女へと歩み寄っていく一人の青年。碧銀の髪、青紫と瑠璃のオッドアイ。少女に向けている表情は優しさ一色。そして彼もまた両腕にガントレットを装着している。

「どうかしましたか？　オリヴィエ」

「なにか・・・上手く言えないのですが、とても悲しい思いを感じたような・・・？」

青年にオリヴィエと呼ばれた少女は影を落とした表情で答えた。

「・・・・またどこかで戦があったのでしょう。これ以上の悲しみを生まないためにも、この戦乱の時代を終わらせなければ」

「きっと、クラウスになら出来ます」

オリヴィエもまた声をかけて来た青年クラウスに微かながらも笑みを向ける。オリヴィエとクラウス。後の世に"聖王女オリヴィエ"と"シュトゥラの覇王"と語り継がれる二人を包むのは、この戦乱の時代の中でも温かなもので・・・。

ここは騎士の世界ベルカ。時代は常にどこかで戦の起こる戦乱期。諸王時代とも呼ばれるこの戦乱期に、現在(いま)よりさらに遥かに古き時代の王ルシリオンが降り立った。

。―。―。―。―。―。

――シュトゥラ／ラキシュ領――

シュトゥラと隣国イリュリアの国境近くのラキシュ領にある山林の中、1人の少女が山菜採りに来ていた。

茶色い長髪はポニーテール。青い瞳。白い肌ゆえに、頬が桜色に染まっているのが目立つ。三角頭巾にエプロン、カットソーにロング

スカートという格好だ。早い喩えが田舎の町娘。

「うん、今日もなかなかの量ね。今夜はご馳走かな♪」

採れた山菜を見てニヤニヤする少女。少女は籠を背負い、彼女の住んでいる街へ帰るために山道を往く。その帰路の途中、少女は帰りついでに山菜を見落としていないかキョロキョロと辺りを見回している。と、山林の奥で何かが光っているのを見た。最初は警戒して動かず近づかず。何も変化が起きないのを時間をかけて確認した少女は、音を立てず、息を殺してそろりそろりと歩み寄っていく。

「・・・・・・っ！！」

そして見た。長い銀髪に覆われているような女性が倒れているのを。気を失っているのか、もしくは死んでいるのか指一本と動かしていない。

「まさか・・・死んで・・・！？」

少女の顔が青褪める。全身が恐怖に震えだし、腰が抜けそうになる。それでも少女は女性へと近づいて行く。前髪で顔が隠れてしまっている女性の前で両膝をつき、震える手でそっと女性の顔に触れる。

「温かい！　生きてる！　大丈夫ですか！？」

女性が生きている事が判り、少女は声をかけ続ける。声をかけ続けている間、どうしてこのような山林の中で気を失って倒れているの

かと考える。病気か。それにしてはボロボロな服を着ている。そこから少女が行き着いたのは、

「何かに襲われた・・・？」

呼び掛けを止め、少女は周囲をぐるりと見回した。獣か。それとも人間にか。今は戦乱の時代。平気で人が死んでいく時代だ。兵に襲われ、ここまで逃げてきたが力尽きて気を失った。そう考える少女。

「綺麗な人だし、襲われて当たり前のような・・・」

土で汚れてもなおサラサラな銀の長髪。前髪を指先でズラし、顔のつくりが整っているのを見る。そこで少女はあることに気付き、「男！？」と叫んだ。

「えっ、うそっ！　のど仏がある・・・胸は・・・無い。やっぱり男だっ。こんなに美人なのに男！　うわぁ～ん、女としてなんか悔しい！」

女性と思っていた人は実は男性。しかも異性から見て悔しいほどの美貌を持っていた。少女は世の理不尽を呪って叫んだ。そこで男が「うっ」と呻き、少女は冷静になる。

「こんなことしてる場合じゃないっ。街に連れてってカール先生に診せないと！」

少女は街まで戻って助けを呼びに行こうか迷ったが、呼びに戻って

いる間に男に何かあってはまずいと判断し、

「よっと・・・、あれ？　以外と軽いんだ・・・」

男を背負い、一歩一歩転ばないように注意しつつも確実に山道を降りて行った。

魔道世界アースガルド。それは、魔法の祖たる魔術が生まれた原初の世界。

"アースガルド"は、大陸・"聖域イザヴェル"以外がすべて海となっている世界だ。地上に一つしかない"聖域イザヴェル"に人間は誰一人として住んでいない。ならばアースガルドは無人世界か？いや違う。"アースガルド"の人間が住んでいるのは、遥かなる空に浮遊している四つの大陸だ。"聖域イザヴェル"よりそびえ立つ"支柱塔ユグドラシル"。全高２万ｍという超が幾つも付く高層建築物"ユグドラシル"の半ば辺りを囲むように四大陸がして浮いている。

そして、四つの王族がそれぞれその四大陸を治めている。

"アースガルド"最初の王にして、"魔術"と呼ばれる能力を生み出した【原初王オーディン】の末裔である、"神聖なるものセインテスト王家"の治める"グラズヘイム"。

"清廉なるものレアーナ王家"の治める"ヴィーズブラーイン"。

"境界なるものフィルトゥティス王家"の治める"アンドラング"。

"絶対なるものクルセイド王家"の治める"ギムレー"。

その内のひとつ、"グラズヘイム"大陸の中央には途轍もなく巨大な宮殿がある。名を"ヴァルハラ宮殿"。一つの街がすっぽり入るくらいの大きさだ。いくつもの塔や離宮があり、噴水広場や花園、

礼拝堂なども多く存在している。
それらを囲っている城壁は全てが黄金で作られている十二角形で、対魔力効果を有している。城壁の中央にドッシリと構えているのがセインテスト王家が住まう宮殿の本宮だ。一辺が８ｋｍほどある正四角形状の本宮の外壁には、ルーン文字と呼ばれる"力"ある文字が描かれている。それだけで絶対的な防衛能力が設けられていることになる。

そんなヴァルハラ宮殿の離宮の内の一つ、スロール離宮。離宮と言えど内装は豪華絢爛の一言だ。天井には余すことなくシャンデリア。壁には美術品が多く並び、床は汚れ一つとして無いレッドカーペット。そのレッドカーペットの廊下をひとり歩く少年。
膝裏まである銀色の長髪。ルビーレッドとラピスラズリのオッドアイ。ルーン文字が縁にいくつも刺繍された足元まである白の長衣を着て、縁に複雑な装飾が施された白マントを羽織っている。王衣を身に纏っている少年の名はルシリオン・セインテスト・アースガルド。ここグラズヘイムの王だ。１６歳にして一国を治める王となったルシリオン。それから1年経っての現在１７歳。

「参ったな、言い出しておいての遅刻とは・・・」

ルシリオンが長い長い廊下を大股での早歩き。そしてようやくたどり着いた場所。スロール離宮の端にある広大な円形の大ホールだ。直径は６００ｍくらいはあるだろう。天井はステンドグラスが敷き詰められ、壁際には燭台が何百と並んでいる。その大ホールの中央に、一人の少女が佇んでいた。

「すまない、シェフィ。会議で遅くなった」

「ううん、大丈夫だよ、ルシル。ここまでの作業なら私一人で十分だったから」

ルシリオンに、シェフィ、と呼ばれた少女が彼の愛称、そして報告を告げ振り返る。あどけなさの残る少女で、足首まで流れるシアンブルーの長髪はツーサイドアップ。桜色の瞳は大きく、吸い込まれそうなほどに綺麗だ。

紫色のハイネックロングワンピース・白のクローク。頭には毛皮（ファー）の無い露西亜帽（パパーハ）。少女の名はシェフィリス・クレスケンス・ニヴルヘイム。アースガルドと同盟を結んでいる世界の一つ、"氷零世界ニヴルヘイム"の第二王女だ。

「このヨツンヘイム連合の新兵器・・・私たちの知らない技術で造られてる。でも解析も終わったし、製造方法も判明。この程度なら改良して、全く新しい形での戦力を開発できるよ」

「さすがだな。まさか連合も、自軍の兵器を捕縛され、あまつさえ解析された挙句に利用されるなんて思ってもいないだろうな」

ルシリオンとシェフィリスの見詰める先、ホールの一番奥にソレは居た。

西洋甲冑のような深紅の鎧を全身に纏った、全長が５０ｍはあるだろう巨人――その上半身。腹から下は無く、両腕も肩からごっそりと無い。原型を留めている上半身と頭部も無傷ではなく所々がひび割れ、または崩れていて、機械部品をさらけ出していた。ソレの背

後の壁に大穴が空いていることから、無理やりホールへ運び込んだらしい。

「Automatic operation's Magic use Tactics attack, Intelligent battle System・・・ 頭文字をとってA・M・T・I・S・・・・アムティスって呼ぶみたい」

「アムティス、ねぇ。連合が連合統一(ヨツンヘイムご)言語ではなくてアースガルド語を使う、か。皮肉だな。どれどれ。2タイプがあるようだな。近接型のセイバータイプと遠距離型のアーティラリータイプ」

ルシリオンがシェフィリスの周囲に展開されている半透明の空間モニターを覗き込む。アムティスの詳細なデータが表示されている。ルシリオンはそれらのデータを眺める。現在、アースガルド同盟軍とヨツンヘイム連合軍の戦況は、連合に傾いている。要因としては、両組織が取り込んでいる味方の数だ。

アースガルドは、同じ原初世界である"氷零世界ニヴルヘイム"と"煉生世界、ムスペルヘイム"。そして"光煌世界アールヴヘイム"。"無圏世界ニダヴェリール"。"闇庭世界スヴァルトアールヴヘイム"。その他140強の世界と同盟を結んでいる。

「新しい仲間を戦場に投入すれば、きっと同盟軍も少しは楽になるかもしれないよね」

ヨツンヘイム連合。

"極凍世界ヨツンヘイム"と"戦導世界ヴァナヘイム"、"夢幻世

界ウトガルド"、"深森世界スリュムヘイム"を筆頭とし、約４００強の世界がその四大世界の下についている。しかもそのほとんどが強制的に連合に加入させられた世界だ。無理に他の世界を従わせ、アースガルド同盟との戦争に参戦させている。
それほどまでに影響力の強いヨツンヘイムと呼ばれる世界たちと千年も戦い続けたアースガルド同盟軍。しかし、徐々に押され始めていた。スヴァルトアールヴヘイムが滅ぼされたのだ。世界丸ごと一つの戦力を失い、アースガルド同盟軍は窮地に立たされた。

「ああ。戦力を整え次第、フノスの計画を実行。そして一気に戦況をひっくり返し・・・連合に勝つ」

その窮地を脱するために、ルシリオンとシェフィリスは敵戦力の一角であるアムティスを基とした、新たな同盟軍の戦力を生み出そうと考えた。そして、フノスの計画。二つの計画が、今後の戦況を左右することになる。

「それじゃあルシル。あなたが今後の計画主任になるんだから、プロジェクト名を決めて」

シェフィリスはこれから始動されるプロジェクトの名を決めるよう、ルシリオンに微笑みを向けた。ルシリオンは「そうだな・・・」と顎に左手を添えて考え込む。そして「よしっ」と頷いたルシリオンは、シェフィリスの肩越しからモニターを覗き込み、コンソールを叩き始めた。

「かつて。大戦が始まるずっと前。ここアースガルドには優れた魔

術研究・実践・防衛部隊があった」

「？？・・・・あ、なるほど。じゃあプロジェクト名はそれで決まりだね」

「ああ」

ルシリオンとシェフィリスは頷きあって、彼がモニターに打ち込んだ文字を二人一緒に口に出した。

「「プロジェクト・ヴァルキリー」」

こうしてアースガルド同盟軍の未来を担う二大計画の一角、プロジェクト・ヴァルキリーが始動した。

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

懐かしい夢を見た。私とシェフィがまだ幼馴染だった頃、そしてフノスの計画・"アンスール設立"以前、"戦天使ヴァルキリー"の開発プロジェクトを立ち上げたあの日・・・。

最初の一ヶ月は試作機を開発し続け、そして性能や人格が安定してきたところで"ヴァルキリー"の第一号を完成させた。第一世代ブリュンヒルデ・シリーズのシリアル1、戦計の剣ガーデンベルグを。

"ヴァルキリー"は大切な子供たちだ。兵器などではなく、愛すべき私とシェフィの子供たち。

「（それが今では敵同士・・・）どうしてこんなことに・・・・っ

て！」

間抜けなくらいに覚めていなかった夢心地からようやく覚める。

（どうして私はベッドの上に寝ているんだっ・・・？）

上半身を起こそうとしたが同時に全身に激痛が走り、頭だけが勢いよく上がっただけだ。無様にまた枕に頭を落とす。上半身すら起き上がらせることも出来ないか。

「ぅぐ・・・！」

ダメだ。ダメージが大き過ぎる。ここは無理はせずに動かない方が賢明だな。あと何か白い物体が目の前から足元へと過ぎってどこかへ飛んでいったが、この体勢では見えないな。しかし体が動かないため何が飛んでいったのかを確認するのを諦め、深呼吸を何度かゆっくりと繰り返すうちに、ようやく痛みが和らいだ。

とりあえずは状況確認だ。私が居るのは寝室らしい部屋で、さほど大きくない。内装も質素。ベッド脇のナイトテーブルには木製の円いトレイがあり、上には水の入ったガラス製の水差しと伏せられたコップ。ナイトテーブルの反対側のベッド脇には本棚。頭だけを動かして、蔵書のタイトルを見る。

「Ｓｃｈｗａｒｚｅｎ　Ｓｉｅ　Ｐｒｉｎｚｅｓｓｉｎ（あの文字は・・・レーベンヴェルト語・・・？）」

大戦末期にヨツンヘイム連合に組み込まれた“複数世界ミッドガル

ド"を構成する世界の一つ、騎士世界レーベンヴェルトの言語のように見える。以前の契約で訪れた地球という世界で言えばドイツ語だ。

そうであるならここはレーベンヴェルトで、時代は堕天使戦争、私たちアンスールが全滅してからさほど時間が経っていない頃ということになる。しかし、そんな都合良くアンスール終焉の時代に近い世界に"エグリゴリ"が現れてくれるのか？　いや、そんなに深く考える必要はない。"エグリゴリ"がこの世界のこの時代に居る。

「それだけで十分だ」

「・・・あっ、起きてる！　よかったぁ・・・！」

ガチャっと木製の扉を開けて入ってきた少女。歳は１０代半ばくらいだろう。茶色い長髪はポニーテール。活発そうな青い双眸。ゆったりとした水色のロングワンピースを着ている。そして両手にはタオルの掛かった洗面器。

「もう起きないのかと思っちゃったけど、本当に良かったですよ。それで、その、大怪我をして山の中に倒れていたんですけど・・・憶えて・・・いますか？」

私が山の中で倒れていた？　どういうことだ。それ以前に私はなぜ無事なんだ。大切な思い出を失って、それがあまりにも辛すぎて、今までこの身に刻んできた苦痛や絶望以上で、狂いそうだった。だから"エグリゴリ"の攻撃に対処は出来なかったはずなんだ。

「えっと、聞こえてますかぁ？」

（あの時なにが・・・？）

うっすらと思い出す。絶叫の中、私は"エグリゴリ"の攻撃を一斉に受けてボロボロになったあと、トドメとしてガーデンベルグが迫ってきていた時・・・・

――危ないルシリオン様！――

「そうか！」

「ひゃうっ？」

思い出した。涙で滲む視界の中で見えた、桃花色の外套を羽織ったマリアの姿を。そうだよな。私がこの世界に居られるのは、マリアが召喚してくれたからだ。まったく。自分は契約を抱えていて大変だろうに。わざわざ助けに来るとは。

だが、ありがとう、だ。マリア、君のおかげで私は消滅させられることなく命を繋ぎ止めることが出来ている。おそらくこのチャンスを逃せば私は消滅するだろう。もちろん"神意の玉座"に在る本体の方が、だ。

「ビックリしたぁ・・・どうしたんですか急に・・・？」

「あ、ああ・・・驚かせてすまない」

つまりはこれがラストチャンス。たった一度の死も許されず、再召喚など無論不可能。それほどまでに本体と分身体の私は壊れかけている。高出力の魔術を使えば、魔力で構成されているこの肉体に歪みが起きる。

その歪みのペナルティーは固体と化している肉体だけではなく、純粋な魔力である私の核にも及ぶ。核には今まで訪れた契約先世界で複製してきた武器や魔術・能力・技術・知識・記憶などが多く貯蔵されている"創世結界"が存在している。

歪みによるダメージを負う"創世結界"。結果、貯蔵されている記憶などが失われてしまう。というのが私の今のところの推測だが・・・おそらくこれで当たりだろう。

（覚悟が必要だな。エグリゴリを救うために、今まで培ってきた全てを犠牲にしなければならないと）

失ってしまいたい記憶もあれば、失いたくない記憶も多くある。天秤に掛ける・・・までもない。何としても"エグリゴリ"を救わなければならない。たとえそれが私という存在が壊れてしまうことになってもだ。

「それはいいんですけど・・・。タオル、取り替えますね・・・って、なんでタオルが床に？」

少女がベッド脇に歩み寄り、私の足元の床を見てそう言った。どうやら先ほど視界を飛んでいった白い物体というのは、私の額に乗せられていた濡れタオルだったようだ。勢いよく頭を上げた際にポーンと飛んでしまったんだな。

「あー、それはついさっき目を覚ました際に体を起こそうとし――」

「起こそうとしたっ？　そんなひどい怪我で何をやってるんですかっ！」

怒鳴られてしまった。洗面器をナイトテーブルにドンと置き、「傷が開いちゃったらどうすんですっ？」と私の被っていた布団を剥ぎ取った。ここで自分の体の状況を知った。半裸だ。しかし服代わりと言っていいほどに上半身に包帯が巻かれていた。そこまで酷かったのか、私の身体に負わされたダメージは・・・？

「あなたは一週間も昏睡状態だったんですよっ！　それなのにもう！」

「いや、そこまで怒らなくても・・・（一週間。それで済んだのは幸いだな）」

「怒りますよ普通！」

あまりの剣幕にたじたじだ。少女は私の体を看て、傷が開いていないかを確認している。この娘は医療に従事しているのだろうか？

少しすると「ほら、やっぱり血が出てるじゃないですかっ」とまた怒鳴られた。

彼女はワンピースの袖を拭って、私の脇腹に両手をかざした。すると彼女の足元から浅葱色の光が溢れ出した。それと同時に魔力を感知。魔術師？　いや違う。魔術特有の神秘を感じられない。まさか・・・これは・・・！

「ひょっとして驚いてます？」

「いや・・・何をやって・・・」

「はい？　え、判りませんか？　魔法ですよ、治癒系の・・・」

「ああ、治癒の魔法か」

「そうですよ。なんだと思ったんですか？」

やはり魔法か。レーベンヴェルト語のような言語を使い、なおかつ魔法ときて、しかも戦争を行なっているとなれば、自ずと見えてくる私が居る世界の名前。信じられないが、まず間違いだろうな。まったく、何の因果だろう。

「これで・・・よしっ。もうあんまり動かないでくださいね。死んじゃっても知りませんよ？」

ビシッと人差し指を立てて、横になっている私の顔を覗き込んできた。とりあえず「了解した。ありがとう、世話をかけた」と礼を言う。すると少女は顔を真っ赤にして「あ、うん・・・。なんかズルいなぁ、男の人なのに」とボソボソとよく聞き取れない声量で何かを呟き、洗面器のタオルを絞って私の額に乗せた。

「何か言ったか？」

「べ、別になんでもないですっ・・・」

少女は椅子に座ってしばらく室内を見回した後、「あ、そうだ」と私を見た。

「お名前、聞いてもいいですか？　わたし、エリーゼ。エリーゼ・フォン・シュテルンベルクっていいます。カッコいいでしょ？」

エリーゼと名乗った彼女は、ニコッと笑みを浮かべた。私も名乗り返すために口を開き、「ｒ――」と途中で言い淀んでしまう。ルシリオン・セインテスト・アースガルド。別に隠す必要はないんだが、私の推測が正しければ、私が人間だった頃の時代の情報がこの世界に生き残っている可能性がある。それで何かしらの支障が出るとは思えないが、それでも何かあった時のために・・・。

「私の名は、オーディン。オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード」

魔術を生み出した原初の王。そしてセインテスト王家の祖の名、オーディン・セインテスト。それにフォン・シュゼルヴァロード。長年、王族にのみ許される王性アースガルドの代わりに名乗っていたファミリーネームだ。

「オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード、さん。長い上にカッコいい。じゃなかった。その、オーディンさんはどうして森で倒れていたんですか？　すごく傷ついていたし。かなり危ない状態だったんですよ。もしかしたら二度と目覚めないかもって、

カール先生が言っていたし」

知らない名が出てきたな。早く周囲の状況を整理するために「カール先生とは？」と尋ねる。するとエリーゼは椅子から立ち上がり、窓際まで歩いて外を眺めながら答えてくれた。

「はい、この街アムルのお医者さんです。カール・アーレンス、知りませんか？」

「すまないが」

「え？　うそですよね。だってカール先生の医療魔法はかなり有名なんですよ？　このシュトゥラ国内で知らない人はいないってほどのお医者さんなんですよ？」

信じられないといった風に何度も確認してくるが、知らないものは知らない。それより新たに情報を手に入れることができた。しかもかなり重要な。シュトゥラ。うっすら記憶に残っている名だ。やはりこの世界は、

（後に滅ぶことになる世界・・・第二世界ベルカ、だな）

ヴィヴィオのオリジナルである聖王女オリヴィエや、シグナムら守護騎士たちが生み出され戦った世界。シュトゥラというのも、無限書庫で働いていた頃に読んだベルカ先史書に出ていたのを憶えている。ああ、憶えている。フェイト達と共に過ごした記憶はまだハッキリと残っている。この記憶は出来るだけ失いたくない。失うとい

うのならもっとあとに願いたいものだ。

「本当に知らないんですか？　もしかしてオーディンさんって、シュトゥラの人じゃない・・・？」

この戦乱の時代に、他国の人間が自国の領域に居るのは不審だからな。しかも重体で。さぁてどうしたものか。エリーゼが不審者を見るような目を向けてきた。ならば「ぅぐ、頭が・・・くっ、思い出せない！」と頭を抱えようとした。が、腕が上がるわけもなく。ただ苦痛に顔をしかめる演技。エリーゼが信じ込んで「まさか記憶喪失っ？」と切羽詰った顔で覗き込んでくる。

（し、しししししまったぁぁぁーーーーーーーーーっ！！）

馬鹿か私っ！　咄嗟とはいえ何が記憶喪失だっ。いくらなんでも無いぞ、この誤魔化し方は。エリーゼが「記憶喪失の患者なんて初めてだよっ」とオロオロしだしているじゃないか。

「おそらく一時的なものだよ。名前は憶えているんだから、すぐに戻るさ」

落ち着くよう告げる。

「確かに大きな怪我を負った人は時々記憶が飛んでいることがあるけど・・・！」

エリーゼは顎に右手を添えて唸り出し、室内をウロウロ彷徨き始め

た。馬鹿なことをやってしまった。とにかく嘘をついてすまない。
唸るのをやめたエリーゼが「カール先生に連絡を取った方がいいよね・・・？」と扉に目をやった。有名かどうかは知らないが、シュトゥラ国内で有名ということは、私の嘘くらい即見破るだろうな。その前にもっと上手い誤魔化しを考えて――いや、そうか。この街を出て行けばいいだけだ。

「オーディンさん、少し待っていてください。カール先生を連れて来ま――」

エリーゼがドアノブに手を掛けたと同時にコンコンとノックされたあと、「エリーゼお嬢様、旦那様がお呼びです」と少女の声。エリーゼお嬢様？　この娘は上流階級の人間か？　それにしては服も部屋の作りも質素だ。

「また？　しつこいなぁ父様は。わたしの言うことを聞いてくれない限り本邸には戻らないって言ってるのに。ごめんなさいオーディンさん。少し待っていてください」

本邸には戻らない、か。どうやらここは別宅であるようだ。エリーゼは父親とケンカ中で家出中のようだな。エリーゼはぶつくさ文句を言いながら出て行った。完全に気配が遠ざかったのを確認して、「居るんだろ、マリア」と窓を見る。
スッと窓際に現れるマリア。"界律の守護神テスタメント"の衣装である神父服（キャソック）と外套（マント）ではなく、白のブラウスに赤いリボン、黒のベスト、黒と赤のチェック柄のプリーツスカート、白のハイニーソックス、黒のローファー。契約執行待機中の服装だな、マリアの。

「調子はいかがですか、ルシリオン様」

「悪くはないな。これなら治癒術式（ラファエル）を１０分程度使えば完治できる」

「・・・申し訳ありません。お救いした時にはもう干渉能力に制限を受けていましたので治せませんでした」

――傷（コード）つきし者に、汝（ラファエル）の癒しを――

魔力上限をＳＳＳランクに設定。治癒系中級術式ラファエルを発動。両手を膝の上に添えて頭を上げるマリアに、「助けてもらっただけで十分だから、気にしないでくれ」と動くようになった右腕をマリアに伸ばす。私の右手を取ってくれたマリアは、私が今一番知りたいことを話し始めた。

「エグリゴリについてですが、ルシリオン様をお守りする際、ある程度の攻撃を与えましたが、ほぼ無傷。ですが私の存在に警戒したのか、それ以上の戦闘を継続しようとはせずに退却しました」

「そうか。助かったよ、手加減してくれて。あの子たちとの決着は私がつけなければならない」

干渉能力が使えないとはいえ、それなりの戦力を有するマリア。"エグリゴリ"を相手にしても勝てるだけの力はある。それなのに一機も撃破しなかった。私の思いを解っていてくれたからだ。

「・・・ルシリオン様。私はしばらく契約待機状態となるようなんです。ですが、だからと言って今回のように、いつもお助けすることは出来ません。契約した"界律"との条件で、その世界から出ることに制限を受けるんです」

「それで構わないよ。私は私の戦いを。マリアはマリアの契約に専念してくれ」

「・・・はい、ルシリオン様。ではこれにて失礼させていただきます」

現れた時と同じようにスッと姿を消したマリア。掴むものが無くなった右手をベッドの中に戻し、もう一眠りするために目を閉じた。次に起きた時には完治しているだろう。それからエリーゼとカールという医者に礼を言って、早々に立ち去ろう。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒？？？†††

オーディンさんの事を見習い仲間のモニカとルファに任せて、別宅を出た。オーディンさんが目を覚まして、わたしは話をしたよ、って言ったら二人はびっくりしてた。それほどまでにひどい怪我だったんだから。それにしても・・・

（オーディンさんのお世話を任せておいてなんだけど、ルファはともかくモニカって騒がしいから、迷惑をかけないか心配）

でももうわたしは別宅から本宅への道を、愛馬レミントンで駆けて

るし、すでに手遅れ。心配するんなら迷惑をかけないようにちゃんと言っておくんだった。

（オーディンさん、かぁ。歳はいくつだろ？　わたしよりかは歳上だよねやっぱり・・・）

オーディンさんの微笑を思い出す。すごく綺麗で、けどどこか寂しそうな・・・。それにまさか記憶喪失だなんて。どうにかして取り戻させたいなぁ。見習いとはいえカール先生の助手を名乗っている以上（自称だけど）は、患者さんの問題は解決してあげたい。

「エリーゼお嬢様。もう本宅の方へ戻られては？　旦那様も望んでいらっしゃいます」

後ろをついてくる侍従のアンナ。歳はわたしより２つ上の１７歳。主従の関係じゃなくて、わたしは姉妹のような関係だって思ってる。普段なら敬語とか無しで話すんだけど、父様と同じようにちょっと喧嘩中だから、こんなにギクシャクしてる。そもそもわたしの事を考えてくれるなら、わたしの味方をしてくれてもいいのに。

「嫌。帰ったら望んでもない結婚をさせられるに決まってる。それが判ってるのに帰るなんて愚行。わたしはカール先生の医療魔法を学んで、すっごい医者になるって決めてるの。嫁ぐなんて、鳥籠に飼われた鳥のようなものじゃない。そんな自由のない生き方は絶対に嫌」

という風に父様と衝突して、わたしはこのアムルの長をしている父

様の居る本邸から出た。アムルの郊外にある空家となっていた別宅へ、カール先生の医療魔法を学ぶ同じ見習い仲間と一緒に住むことにした。暮らしはぐっと貧しくなったけど、結婚させられるよりは遥かにマシ。そんな感じで家出中なわたしは、アムルで一際大きい屋敷に到着。一年前まで過ごしていた我が家。塀に囲まれた屋敷を見上げる。

「お帰りなさいませ、エリーゼお嬢様」

正門も潜ると、門から屋敷の玄関までの道の両側にズラッと並ぶ（と言っても１０人位）侍従たちのリーダー、侍従長がわたしに向かって一礼。遅れて他の侍従が「お帰りなさいませ、エリーゼお嬢様」って続く。わたしは「ただいま」って返しながら歩いて、玄関のドアノブに手を掛けようとして、

「私の役目です。お帰りなさいませ」

アンナと別の侍従が両扉を開けて、わたしの道を作る。気が重い。屋敷の中の空気がわたしの心に重く圧し掛かる。貴族に生まれたくなかった。お金があるから幸せ？　違う。お金があっても自由が無いなら幸せじゃない。

（根性を見せて、今度こそ分からず屋の父様に医者になることを許してもらおう）

頬をパチンと叩く。わたしは道具じゃなくて一人の人間だ。それを判らせてやる。エントランスに入って廊下を歩き、当主の部屋の前

までノンストップで向かう。ノックする事もなくバンッと扉を勢いよく開け放つ。執務机で仕事をしている父様がギラリと睨んできた。

「エリーゼ。なんだ、その礼儀の欠片もない行いは」

「別にいいでしょ。それより、いい加減にして父様。アンナを寄越すなんて。前にも言ったでしょ。わたしは、医者になるって。だから嫁ぐなんて絶対に嫌。それを認めてくれるまで絶対に帰らない。わたしは、父様の道具じゃない」

サクッと本題に入る。それ以外の話なんてしてやるもんか。父様は大きく溜息を吐いた後、「お前、身元も判らない人間をこの街に入れたそうだな」って、関係ないことを言ってきた。なにそれ？　わたしの未来のことよりそっちの方が大事だっていうの？　ムカついたから「だからなに？」って不機嫌さ丸だしで言ってやる。

「今すぐにこの街から追放しろ。何処の人間かも判らん奴を、この街に留めておくわけにはいかん」

「は？・・・・はぁ！？　ちょっ、怪我人なんだよっ？　しかもさっき目を覚ましたばっかで、起き上がる事も出来ない人なのに、それを追放！？」

いくら何でも酷過ぎるよっ。オーディンさん、動けないどころか記憶喪失かもしれないのに。それを街の外に放り出すなんて。襲って下さい、殺して下さい、って言ってるようなものだ。人間のすることじゃない。だから執務机の前に行って、「人でなしっ！」ってガ

ンッと拳を机に叩きつける。でも父様は「シュテルンベルクの娘がなんて乱暴さだ」って嘆息。

「もういい！　親子の縁を切らせてもらいますっ！　父様がこんな冷徹な人間なんて思いもしなかった！　馬鹿ぁぁーーーーーーッ！！」

踵を返して、大股でわざとズンズン足音を鳴らして部屋を出ようとした。でも、「娘を捕まえろ」なんて命令が背後から聞こえた。振り向くよりも早く、侍従の連中がわたしを取り押さえた。

「ちょっと！　痛い痛い痛いってば！」

「少しは頭を冷やせ馬鹿者！　エリーゼを、この子の部屋に幽閉しておけ！」

「はあ！？　幽閉って何を言って――ちょっ、本当に娘を閉じ込めようっていうの！？」

もうそれで話しは終わりだとでも言うように、父様は背を向けた。それからすぐにわたしは元私室にまで連れていかれて、幽閉された。窓が外から木組みで封されているし、扉も外から何か引っ掛けているのか開かない。たぶんどっちも魔法で強化されているかもしれないから、医療魔法や思念通話以外なにも習得してないわたしに破れるかどうか・・・。

「本当に娘を閉じ込めるなんて・・・。母様が居てくれたら、きっと味方してくれるはずなのに」

天蓋付きの寝台の上に寝転がって、亡き母と何か良い脱出方法がないか考える。一番いいのは、アンナに助けてもらうことだ。アンナは攻撃の魔導を扱える。でもお願いしてもやってくれるかどうか・・・。ううん、ここは信じよう。いざ思念通話でアンナに助けを呼ぼうとしたその時、

「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

「なにっ？――きゃっ？」

屋敷の外から悲鳴が。それだけじゃなくて爆発音が連続で轟いて、振動で屋敷が揺れた。窓にへばり付くようにして外の様子を見る。街中の至る所から炎や黒煙が噴き上がってる。中庭がガヤガヤと騒がしくなる。見れば父様が騎士甲冑を武装していた。男の侍従たちも騎士甲冑姿。どうしてそんな戦場に向かうような格好で――そんなまさか・・・。

「アムルが襲撃を受けてる・・・！？」

そうとしか考えられない。鳴り止まない悲鳴と爆発。急いで扉に向かって、ドアノブをガチャガチャ動かすけどビクともしない。「開けて！」ってドンドン叩く。その間にも続く悲鳴と爆発音。それから間もなくガチャって扉が開いた。そこには息を切らしたアンナが顔を青くして居た。

「エリー！　急いで逃げて！　イリュリアが攻めてきた！」

イリュリアが攻めてきた？　それってつまりシュトゥラに戦争を仕掛けて来たってことだよね。だけどいつかこういう日が来るかもしれないって心のどこかで思ってた。アムルは、シュトゥラの交易都市ラキシュ領の一画だ。イリュリアはアムルを落として、ラキシュ領占領の足がかりにするつもりなんだ。わたしはアンナに引き連れられて、避難するために廊下をひた走る。でもここでふと気付く。オーディンさんを放置したままだ。

「アンナ！　別宅に行かなくちゃ！」

「ダメっ！　もしあの男の人の心配をしているのなら諦めて！」

オーディンさんを見殺しにする？　そんなの出来ないよ。どうしてか判らないけど、オーディンさんは死なせちゃダメな気がする。それに、わたしの初めての患者さんだ。見捨てるわけにはいかない。カール先生にですら意識を取り戻すのは難しいかもって言われたけど、オーディンさんは起きた。
だったら完治するまで面倒を見るのが医者の務めだ。

「お願い、行かせてアンナ！　放っておけない！」

「あーもう！　一度言い出したら聞かないんだからっ！」

アンナの手を振り解いて、わたしは馬小屋へ向かうために走る。中庭を走っている最中、正門から騎士甲冑を着こんだ数人の騎士が侵入してきた。それぞれ剣や槍や斧を携えた血色の甲冑の騎士たちが、

わたしとアンナを見る。
甲冑の右肩の装甲に、骸骨に二つの鎌っていう騎士団章があるのが判った。隣国イリュリアの敵国強襲騎士団のひとつ・・・「血染め（マサーカー・オルデン）の死神騎士団・・・！」で間違いない。

「虐殺者の集まりが攻め込んでくるなんて・・・」

終わったかもしれない、わたしの短過ぎる人生。死神騎士団が相手じゃ・・・。絶望していると、アンナが「エリーだけでも逃げて！」ってわたしを庇うように前に出た。そして手には銀の鍵。「アインホルン、起動」と告げると、銀の鍵はレイピアになった。アンナの武装・"アインホルン"だ。アンナは戦う気だ。殺しの玄人を相手に。ダメ。止めないと。アンナじゃ勝てない。殺されちゃう。

「げほっげほっ。逃げるんだエリーゼ！　アンナっ、エリーゼを逃がすんだっ！」

「っ！――父様・・・！」

死神騎士団の背後に、血塗れの父様が居た。他にもアムル防衛騎士団の人たちが8人。その全員の騎士甲冑はボロボロで、無傷のところなんてどこもない。それでも父様は大剣を構えた。アムル防衛騎士たちもそれぞれ武器を構えた。自分たちより強くて数の多い死神騎士団と戦うために。街を守るために、大切な人を守るために。

「行けぇぇぇーーーーーッ！」

父様が叫んで、アムル防衛騎士団と一緒に死神騎士団に突っ込んだ。わたしは「父様！」って叫ぶしか出来なくて、「旦那様、御武運を！」って言ったアンナに手を引かれて馬小屋へ。こんなのってないよ。いろいろ衝突したけど、でもそれはいつか仲直りできるって思っていたから。それなのに、もう父様とは会えない。喧嘩したままで、こんな形でお別れなんて。

「父様ぁぁーーーーーーーっ！」

中庭から悲鳴が聞こえてきた。防衛騎士団の人たちの声。たった８人しか残ってなかった。１００人は居るはずの防衛騎士団なのに。遅れて「生きろエリーゼぇぇーーーーーーーっ！」という父様の叫び。視界が涙で滲んでなにも見えなくなる。父様も・・・・・・死んだ・・・。アンナが「エリーは生きて、絶対に！」って言ってわたしの手を離し、中庭に戻ろうとした。

「アンナ！」

「追手の足止めを誰かがしないとダメだから」

アンナはここで死ぬ気だ。いや、そんなの。一人ぼっちになっちゃうよ。わたしは「わたしを独りにしないでアンナお姉ちゃん！！」って思わず昔の呼び方でアンナにしがみ付く。アンナを見殺しにしたくない。だったらわたしも一緒に死ぬ。

「見つけたぞっ！」

「「っ！」」

死神騎士団の連中が追いついてきた。返り血で真っ赤になってる甲冑。あの血の中に、父様の血が混じっているんだ。死の恐怖から憎悪へと変わる。わたしにも戦う術があれば、一矢報いるくらいは出来るのに。わたしは、無力だ。

「民には出来るだけ犠牲は出さないようにしてある。労働力は必要だからな。だからアムルを統べるシュテルンベルク最後の人間よ、安心して生を終えるがいい」

「・・・・ふざけるな・・・・、ふざけるなっ！」

アムルの民が奴隷にされると判って、何を安心しろって言うんだ。アンナが「エリーには指一本触れさせない。私が相手になってやる」って前に出た。

「下手に希望を抱くなお嬢さん。お嬢さん達の人生は、ここで終点だ」

死神騎士団の将らしき男が右手を上げた。すると騎士の連中が一斉に突きの構えを取った。将の右手が振り下ろされた時、それがわたしとアンナが死ぬ時なんだ・・・。悔しさと怒りで胸がいっぱいだ。わたしの過ごしたこの街が、母様が好きなこの街が、父様が守ってきたこの街が、あんな野蛮な奴らに蹂躙されるなんて。

「突撃！！」

将の右手が振り下ろされた。アンナが自分の胸にわたしを埋めるように抱きしめてきた。わたしの耳元に「来世は本当の姉妹になろうね」ってアンナの囁きが。「うん、絶対になろう」って頷く。人生最後がアンナの胸に顔を埋めるなんて、ちょっとおかしいよね。でも、安心できるんだから嫌じゃないよ。近くまで来ている気配に、わたしは目をギュッと瞑った。痛く感じる前に死ねたらいいんだけどなぁ。

――護り給え、汝の万盾（コード ケムエル）――

ガキィーンていう甲高い音が耳に届いた。辺りから息を呑む気配。わたしを抱きしめているアンナからも緊張を感じる。続いて、「何だコレは！？」「魔力障壁だぞ！」「誰の魔導だ！？」って、死神騎士団の混乱に満ちた叫び。

アンナの胸に埋まってた顔を出して、ようやくわたしも現状を知ることが出来た。わたしとアンナを死神騎士団の攻撃から守るように、小さな円い盾が無数に折り重なって大きくなってる盾があった。その盾は死神騎士団の武器を完全に防いでいて、見惚れてしまうほどに綺麗な蒼い光で出来ていた。

「その娘と先約があってな。それを済ます前に居なくなられては困るんだよ」

空から男の人の声。聞き覚えのある声。でもこの場に聞こえるはず

がない声。だってその声の持ち主は、体を動かす事も出来ない重傷人なんだから。空を見上げる。うなじ付近で束ねられた銀の長髪が尻尾のように揺れて、紅と蒼の虹彩異色の瞳は、死神騎士団を見下ろしてる。
上から下まで全部が漆黒の長衣。外套も黒。だけど縁どりに金の刺繍があって、高貴さが見える。何より目を引くのが、背中から出ている蒼い光で創られた１２枚の剣。それが左右に広がって、まるで翼のようだ。

「命を救ってくれた恩を返す前に死ぬのはやめてくれ、エリーゼ」

「オー・・・ディン・・さん・・・・！」

どうして動けるの？だとか、そんな疑問は今はどうだっていい。本能が告げてくる。わたしとアンナは、もう死ぬことはないんだって。オーディンさんの神々しい姿を見たら、絶望どころか希望が湧いてきた。オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードさん。不思議なあなたに、わたしはここにお願いをします。

「助けてくださいっ、オーディンさん！」

「ああ、任せろ。これより一方的な殲滅戦を見せてあげよう」

そう言ったオーディンさんは左腕を大きく空に向かって突き出した。

Ｍｙｔｈ２この地にて友となる君に名を贈る～ＲｅｕｎｉｏＮ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

随分とボロボロにされてしまったものだ。治癒術式ラファエルをフルで使っても１０分は掛かる。しかしそれはカールと言う医者がすでに治療を施してくれていたからだ。もしエリーゼに拾われて、カール医師の施術を受けていなければ、私は一体どうなっていた事か。

「感謝してもしきれない恩が出来てしまったな」

だというのに嘘をついて騙して。いくらすぐに別れる事になるとはいえ、命の恩人を騙したのはまずかった。とはいえ身分が証明できない以上は仕方ないと割り切るしかないが。エリーゼが出て行った扉へと視線を向ける。あとで彼女には謝ろう。

「ん？・・・・なんだ？」

少し横になって休んでいると、爆発音が僅かにだが聞こえた。首だけを動かして窓を見るが、頭の位置と窓の高さに差があるため外を見れない。しかし見えずとも聞こえる。連続して爆発が起きている。仕方ない。ラファエルと並行して別の魔術式を発動する。

「発見（コード）せよ、汝（イシュリエル）の聖眼」

私の魔力光であるサファイアブルーに輝く、手の平サイズの光球を

１０基発生させ、窓をすり抜けさせて外へと放つ。イシュリエルは探査術式だ。一種のカメラで、イシュリエルの見ている映像が脳内に送られて来る、というものだ。
これで外で何が起きているのかを確認すればいい。そう思っていた矢先、廊下を忙しなく走る足音が近付いてきた。それは私の部屋の前で止まり、ノックもなくバンッと勢いよく扉を開いた。

「突然ごめんなさい！」

「今すぐここから逃げますっ！」

少女が２人。どちらもエリーゼ程の年齢だろう。服装も似通っている。そんな少女たちは、肩で大きく息するほどに走ったのだろう、顔色は蒼白。それにしても、逃げます、か。やはり何か起きているんだな。イシュリエルから送られてくる映像を確認。燃える街。逃げ惑う住民。

（甲冑を着こんだ連中が街を襲っている・・・！？）

状況は最悪と見ていい。くそっ、私がこんな状態に限って・・・。イシュリエルに割いている魔力をラファエルに回すため、イシュリエルの数を３つにまで減らす。その間にも２人の少女は私を車椅子（何処の世界にでもあるものだな）に乗せるために抱き起そうとした。その時、ドォン！と階下から爆発。

「「きゃあああああっ！？」」

少女たちが頭を抱えて蹲る中、ガシャガシャと金属音を鳴らして階段を駆け上がってくる何者か。おそらく街を襲っている連中の仲間だろう。まだ動けるほど回復はしていないが、迎撃するしかないな。そして奴らは現れた。血色の甲冑を纏った騎士たち。手にする武器には血が付着している。住民たちや襲撃を防ごうとしていた街の警備兵たちのものだろう。騎士の一人が部屋に入って来た。２人は「ヒッ」と小さく悲鳴を上げる。

「大人しくしろ。抵抗しなければ命までは奪らん」

さらに１人２人と入って来て、「へぇ、良い体してるなガキのクセに」「どうせならちょっと遊んで行こうぜ」とふざけたことをのたまった。２人が息を呑み、身体を強張らせる気配を感じた。ただでさえ襲撃を受けた恐怖と、殺されるかもしれないという恐怖に襲われているのに、犯されるかもしれないという新しい恐怖を突きつけられたのだ。さらに廊下に居る仲間であろう奴らが、

「先遣部隊の特権だよな。現地人で弄ぶっていうのは」

「隊長、ちょっと時間くださいよ。どうせ街の制圧は団長の本隊がやっちまうんだから」

「制圧完了のそれまで待機なんて暇すぎですって」

口々に下種なことを。この連中は生かして帰す必要はない。少なくとも隊長と呼ばれた奴以外は。だが隊長とやら。返答次第では貴様も一緒にここで死んでもらおう。

「・・・・好きにしろ。だが殺すな。自殺された場合はやむを得ないが」

「そうこなくっちゃ！」

残念だ。貴様の放つ雰囲気からして真っ当な騎士だと思ったんだが。どうやら私の見当違いのようだ。と、隊長の視線を感じた。目だけを動かして、フルフェイスの奥にある隊長の目を見詰め返す。しばらく視線をぶつけ合うと、「その怪我、どうした？」と尋ねてきた。部下の連中がようやく私を見て「男にしては綺麗だよな」「高額で売れそうだな」「やばい、俺好みだ」とぬかす。最後の奴の言葉に他の連中が一気にソイツから離れた。今のは私も引くぞ。

「聞いてどうする。どうせこの場から生きては帰れないのだから知る必要はないだろう？」

そう言って鼻で笑ってやる。部下の連中は少し呆け、すぐに大笑いし始めた。人生最後の笑いだ。今の内に存分に笑っていろ。しかし隊長だけは笑わずに、ジッと私を見る。そして「そんな怪我で何が出来る。たとえ何か出来たとしても、こちらには2人の人質が居る」と、少女の1人に戦斧の先端にあるパイクを突きつけた。その少女は「死にたくない殺さないで」と大粒の涙を零し、助けてくれるよう隊長に懇願している。そうだな・・・まずは「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」と詠唱。

「武器殺し（インパクト・ヴォイド）」

「何を言って・・・・なんだ！？」

隊長の驚愕の声。そして同時に隊長の持っていた戦斧が床にズンッと落ち、バキバキと床板を突き破って階下へと落ちた。大笑いしていた部下たちもあまりの事態に黙りこむ。静まり返る室内。そして一気に「貴様何をしたっ！」「コイツも騎士かっ！」「なんの魔導だ今のはッ！」と一斉に私に武器を向けてきた。よし、少女たちから私に意識が向いたな。とりあえず「その武器を下げろ、クズ共」と、

――武器殺し（インパクト・ヴォイド）――

先程と同じ魔術を発動する。連中の武器が一斉に床に落ち、隊長の戦斧と同じように階下に落ちていった。インパクト・ヴォイド。私の固有魔術ではなく、実妹シエルの固有魔術だ。効果は重力操作による武器封じ。武器限定に重力を掛け、持ち上げられないようにしてやる。もちろん人体にも重力を掛ける術式がある。だが今は武器殺しで十分だ。

「隊長！　今すぐこの男の殺害を！」

本来、固有魔術は術式を組んだ本人にしか扱えない。シエルの重力操作術式もそう。だが私の固有能力・複製。それで複製することで、私の術式として自在にとは言わずとも扱うことが出来る。先程詠唱したのは、人間だった頃の戦友"アンスール"達の術式や神器を具現させるための専用の呪文だ。

「さて、ようやく私のダメージも回復した事だし、本番と行こうか」

ラファエルによってようやく動けるだけ回復できた。上半身を起こすと少女たちが「うそ・・」と驚愕の声を上げた。目を覚まさないかもしれないと言われるほどの重傷人だった私が動いたんだ、当たり前か。

「さあ、始めよう」

左手の人差し指を連中の1人に向ける。ここに来るまで何人かの命を奪ったのだろ？　ならば自分の命を奪われる覚悟は当然出来ているよな。そう、人を殺すというのなら、それはいつか自分も殺されるという覚悟を持たなければならない。どこかの契約先世界で、

――撃っていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ――

こんな言葉を聞いた。覚悟もないのに人を殺める事は許されない。だから貴様たちの命は私が貰い受ける。

――暴力防ぎし（コード）、汝の鉄壁（ピュルキエル）――

――轟き響け（コード）、汝の雷光（バラキエル）――

少女たちを巻き込まないように障壁を展開したあと、中級攻性術式・雷撃系砲撃バラキエルを発動。射線上に居た3人の敵性騎士を吹き飛ばした。家に大穴が開いてしまったが人命には代えられない。

再び静まりかえる部屋。戦場など知らないであろう少女たちは仕方ないとはいえ、敵性騎士たちが現状に呆けている。よほどの想定外だったんだろうな。私という存在が居たことが。

「命のやり取りをする戦場で呆けるなど正気か？」

「くっ・・・！　各騎、階下へ降下！」

階下へ降りて武器を拾おうと隊長が指示を出したが、すでに遅い。この部屋に来て私をすぐに殺さなかった時点で貴様たちの敗北は確定していた。

「降りたいのなら私が降ろしてやろう」

まず最初に少女たちを球状の魔力障壁に包んで浮遊させる。突然の事に「きゃっ？」と短い悲鳴をあげたが、いちいち断りを入れるほど余裕はない。

続けて足元の床に、

――煌き示せ、汝の閃輝（コード）（アダメル）――

閃光系魔力砲撃を放ち、ボロボロだった床板を完全に崩壊させる。私と少女たちは浮遊しているため落ちないが、敵性騎士たちは為す術なく階下へ落ちた。今ので死んではいまい。武器を携え、私を殺すために戦闘を仕掛けてくるだろう。それでいい。全力を以って挑み、そして無力を噛みしめ死んでいくがいい。

「恐い思いをさせてすまないが、もうしばらくそうして待っていてくれ」

少女たちが安心出来るよう微笑みかける。すると「はい　」と良い返事をした。それを確認した事で私も階下へとゆっくり降下。一階にまで降りると、連中のほとんどが気を失っていた。気を失っていない奴らも居るが、落下の衝撃によるダメージの所為か動かない。そんな敵性騎士たちの中でまともに動いているのが隊長だ。戦斧を手に私を待ち構えていた。

「貴様は何者だ。これほどの魔導を媒介もなく発動させるとは、余程名のある者なのだろう？」

「先程も言った通り答える必要はない」

――無慈悲（コード）たれ、汝（プシエル）の聖火――

蒼炎の大蛇プシエルを発動する。床からの最初の出現でプシエルに呑み込まれた４人の敵性騎士は灰も残らず燃滅。轟々と燃えるプシエルを呆然Tと見上げている隊長。後悔してももう遅い。

「プシエル、力を示せ」

そのまま隊長以外の敵性騎士数人をプシエルに呑み込ませる。ようやくここで隊長が「やめろっ！」と戦斧を手に突撃してきた。その場から動くことなく待ち構え、

――暴力防ぎし（コード）、汝の鉄壁（ピュルキエル）――

あと少しで戦斧が私に届くかどうかというところで魔力障壁を展開して防御。隊長は弾き返され後退。明らかに動揺が見える。私のようなタイプと戦った事が無いのだろうな。

「殺した者には必ず殺される報いが訪れる。貴様にも、私にもだ。貴様は今この場で。私はいつかの未来で、だ」

隊長以外を焼殺し終えたプシエルを解除、消滅させる。これ以上はここで時間はかけられないな。早々に片付けて街へ向かわなければ。

「悪いがこれで幕にさせてもらう。街へと向かい、貴様たちの仲間をどうにかしないといけないからな」

――舞降（コード）るは、汝の麗雪（シャルギエル）――

蒼い氷で構成された槍を15基展開。槍の穂先は全て隊長に向けられている。それが判っているからこそ隊長は身構え、いつでも迎撃か防御か回避かに移れるようにしている。しかし残念。私の周囲に展開されている14基のシャルギエルにしか意識を向けていない。己の背後で待機している15基目のシャルギエルに気付かないまま逝け。

「凍衝粛清（ジャッジメント）」

指を鳴らし号令。隊長は目の前から迫り来るシャルギエルを対処し

ようとしたところで、背後からのシャルギエルに胸を貫かれた。終わりだ。続けて前面から迫るシャルギエル１４基に全身を蹂躙されて、隊長は即死。せめてもの慈悲で苦痛なく逝かせてやった。

「そこの２人！　街を見てくる。大人しくそのまま待っていてくれっ！」

２人を包んでいた魔力障壁を解除。周囲に敵が居ない事はイシュリエルで確認済みだ。プシエルによって開いた所から外へと出て、背に１２枚の剣翼アンピエルを発動。一気に黒煙の立ち上る街へと空を翔ける。目指すは街で一番豪華な屋敷。エリーゼは高位の身分だ。おそらく彼女の住まう家はそれなりのモノだろう。

「とりあえずは片付けと行こうか」

目的地と定めた屋敷に向かうまでの間、地上に居る多くの敵性騎士に向け、

――殲滅（コード）せよ、汝（カマエル）の軍勢――

６００と展開した様々な属性を宿す魔力槍を、「蹂躙粛清（ジャッジメント）」と撃ち放つ。標的は血色の甲冑を着た騎士限定。一発も誤射してはいけない。とは言え長距離戦を最も得意とする私だ。誤射をすることなどありはしない。街中に居る敵性騎士を空から殲滅しながら屋敷上空に到着――と、まずい状況だった。エリーゼと従者らしき少女が包囲され、今まさに討たれようとしていた。

「させるか・・・！」

――護り給え（コード）、汝の万盾（ケムエル）――

エリーゼ達と敵性騎士の間に円盾を組み合わせて大盾としたケムエルを展開。ギリギリのところで間に合った。騒然となる敵性騎士たち。私はゆっくりと降下して行き、高度４ｍ付近で停止。

「その娘と先約があってな。それを済ます前に居なくなられては困るんだよ」

そう全員に聞こえるように言う。空を見上げたことで私の姿を確認した敵性騎士たちから緊張が伝わってきた。私はエリーゼへと視線を移し、「命を救ってくれた恩を返す前に死ぬのはやめてくれ、エリーゼ」と微笑みかける。エリーゼの目は泣き腫らしたのか真っ赤で、先程までの気丈さがサッパリと無くなっていた。

「オー・・・ディン・・さん・・・・！」

うわ言のように私の偽名を言うエリーゼ。頷くと、エリーゼの目に強い光が宿った。そして「助けてくださいっ、オーディンさん！」と必死の形相で懇願してきた。断るという選択肢は私に無い。コクっと頷いて、

「ああ、任せろ。これより一方的な殲滅戦を見せてあげよう」

左腕を空に突き上げる。敵性騎士たちの視線は空には向かなかった。

真っ直ぐに私を注視している。完全に私を警戒しているようだ。

「命の恩人の願いにより、これより貴様たちの掃討を開始する」

――懲罰（コード）せよ、汝（マキエル）の憤怒――

蒼い閃光と火炎と雷光で構成された3頭の龍、マキエルを生み出す。そのまま剣翼アンピエルを解除し、地上に降り立つ。せめて同じ土俵に立たなければな。一斉にざわつき始める敵性騎士たち。それらを気にも留めずにエリーゼに「君の友達らしき2人は無事だ、安心してくれ」と報せる。

「本当ですかっ？　よかったぁ・・・・ありがとうございます、心配でしたから」

「ああ。すぐに終わらせるから、少し待っていてくれ」

エリーゼがコクリと頷いたのを確認。すぐに騒がしい連中に視線を戻す。そこで連中の長（さっきの連中が言っていた団長だろう）が「静まれッ！」と声を荒げた。それだけでシンと静まる。目の前の団長はよほど部下達に信頼されているようだな。団長は大剣を下げ、「お前はアムルの者か？」と尋ねてきた。

「違うが」

「ならば去れ。我々イリュリアに忠誠を誓いし血染めの死神騎士団（マサーカー・オルデン）は、アムルの制圧に来ただけだ。部外者まで殺せという命は受けて

いない。我々とて騎士の端くれ。無闇矢鱈な殺生はしたくないのでな、速やかに立ち去ってくれると助かる」

これはまた随分と優しい事を言ってくれる。虐殺（マサーカー）の銘を冠した騎士団を率いている団長とは思えない言葉だ。しかし私の背後に庇っているエリーゼともう1人の少女からは強烈な憎悪と殺意がビシビシ伝わってくる。そうだよな。ここまで自分達の街を滅茶苦茶にされたんだ。解るよ、私も。

「そうはいかない。それに、もう私を殺す理由が出来ているぞ」

「なに・・・？」

「気付かないか？　この屋敷の外が静かなのが」

両手を耳の後ろに添えて、耳をすませるようなポーズをする。団長の放つ空気がガラリと変わる。警戒から敵意へと。「何をした？」と声色を低くして訊ねる団長に、私は出来るだけ嫌な笑みを見せて「戦場で起こりうることは2つだけだ」と人差し指と中指を立てる。

「殺すか殺されるか、だ」

「馬鹿なッ！　我らはイリュリアの上位騎士団だぞ！」

「お前ひとりに潰されるほどやわではないわっ！」

他の連中は騒ぐが団長は取り乱すことなく「・・・各隊長に連絡は

ついたか？」と1人の騎士に問う。問われた騎士は首を横に振るのみ。それで団長も含めた全員から狂気じみた殺気が放たれた。

「名を問おう。我はイリュリア所属、敵国強襲騎士団が一、血染め（マサーカー・オルデン）の死神騎士団団長、ワイリー・ゾエ」

大剣を構えた団長――ワイリーの双眸がフルフェイスの兜の奥でギラリと光った。この男、相当強いな。さすがは一個騎士団の将と言ったところか。私も今まで以上の警戒を以って対峙し、名乗りを上げる。

「オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード」

「大層な名だな・・・・どこぞの国の貴族か？」

「いいや。単なる旅人だ。この地へ訪れたのも偶然に過ぎない」

「ならばどうしてこのような・・・・！」

私は背後に居るエリーゼを見る。隙だらけだが、さすが騎士という事もあって連中は奇襲をしてこない。レイピアを携えた少女がエリーゼを抱きしめる。警戒、されているな・・・。だがエリーゼだけは真っ直ぐ私を見詰めてくる。

「決まっている。私が死にそうだったのを彼女は救ってくれた。その恩を返す」

そう告げ、すぐさま「粉砕粛清（ジャッジメント）！」と左腕を振り下ろし、三頭のマキエルを突撃させる。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒？？？？†††

オーディンと名乗った男が放った三頭の龍。我は「散開！」と指示を出し、部下をバラけさせる。かなり強力な魔導。防御の上から喰い殺されてしまうだろう。

「各騎、葬送の陣！　龍は我に任せ、オーディン本体を狙えっ！」

各騎が刺突の構えを取り、オーディンとシュテルンベルク家の令嬢と召使いの３名を包囲。いかに強くともエリーゼ嬢という邪魔者が居ては防御に力を割かざるを得ず、本気で力を振るえまい。ならばあとは消耗させて弱ったところで討てばいいだけのこと。その間に我が龍を狩る。我が宝剣"シュナイト"を脇に構え跳躍。標的は蒼く輝く光龍。大きく口を開いて我を喰おうとしている光龍へ、

「炎塵一閃！！」

緑炎を纏わせた"シュナイト"を叩きこむ。口を横一文字に斬り裂き、光龍を霧散させた。これでまずは一頭だ。続けざまに迫って来ていた雷龍の眉間に"シュナイト"を突き立て、

――炎塵一閃――

前転して縦一文字に斬り裂き、消滅させる。予想よりは大したもの

ではなかったな。迫り来る最後の炎龍を片付けるために、視線を炎龍に向けたところで我は見てしまった。

「馬鹿な――ぐあっ！？」

現状に思考が停止していた隙を突かれた。至近距離に着弾した炎龍が起こした爆発に呑まれ、大きく吹き飛ばされた。地面を無様に転がる。止まったところですぐさま起き上がり、我はもう一度見る。そして確かめた。夢でも幻でもない現実を・・・。

「さすが名高きベルカの騎士だが、戦闘経験と戦力の差があり過ぎたな。私の勝ちだ」

オーディンがそう告げる。地面に倒れている我が血染めの死神騎士（マサーカー・オルデン）団の盟友たちの中心で。盟友たちの胸に突き立っているのは漆黒の影のような槍。我に気付かせもせずに容易く盟友たちを殲滅したのか。

何なのだ、あの男は。見る限りまだ若い。そうだというのに、これほどの魔導を気配もなく発動させる。戦闘経験の差・・・か。我らは物心ついた頃より実戦に近い修練をしてきたのだ。

「（それでも足りないと？）・・・街に散っている我が盟友たちもそうやって槍で貫いたのか・・・？」

「そうだ。こんな風に・・・」

――殲滅（コード）せよ、汝（カマエル）の軍勢――

あまりの光景に、我は目を疑った。我らの頭上、そこには数えきれないほどの槍が浮いていた。光、闇、雷、炎、氷、風・・・様々な形をした槍がすべて我に穂先を向けていた。アレらを一斉に放たれれば我も無傷では済むまい。仕方がない、あれを使うしか・・・。

『聞こえるか。ワイリーだ。緊急事態だ、今すぐプロトタイプをアムルに飛ばせ』

ラキシュ領制圧の為に設置しておいた野営地に思念通話を繋げる。野営地に構えている交信主が息を呑むのが判った。

『プロトタイプをですか！？　ですがアレはまだ実戦で使うには不安定ですし、団長の身が却って危険に――』

『急げっ！　我ら血染めの死神騎士団（マサーカー・オルデン）の先遣隊はすでに壊滅状態！　生き残っているのはおそらく我一人だけだ！』

オーディンの言葉は事実として受け入れるしかないだろう。これほどの実力者だ。ここに来るまでにあの男の目に留まった盟友たちは間違いなく討たれただろう。全てにおいて想定外だ。いや、元々全てがおかしかった。

イリュリアとブルグントの二国と隣接しているシュトゥラ・ラキシュ領は防衛能力が高い。だから今まで攻め入ることが出来なかった。それなのに今日、ラキシュ領の国境防衛の要である第一～第三騎士団がラキシュ本都に一時戻るという情報が入り、好機だということで派遣されればオーディンという怪物が居た。確かに第一～第三騎

士団は居なかったが、それ以上の猛者がここに居た。

（偶然かそれともハメられたか・・・）

どちらでももう構わん。我が騎士団は終わった。立て直す事も出来ず、我もおそらくこの地で息絶える。だがせめて任を全うせねば。それゆえにプロトタイプの助力を借りる。オーディンよ。我が誇りを踏みにじったお前に一矢報いる。

『りょ、了解しましたっ。プロトタイプを先行させますっ。援軍も今すぐそちらに送りますので、持ち堪えてください団長！』

思念通話を切る。オーディンは一歩も動かずに我を見据えていた。折角の好機。「・・・どうして攻撃しなかった」と問う。オーディンは少し考える素振りを見せ、「私にも誇りくらいはある」と答えた。

「・・・我の誇りはもう無い。お前に壊された。だが最期に、我は意地を通す」

エリーゼ嬢を見る。すると召使いが背に庇い、オーディンもまた２人を背に庇う。我はここぞという時の為にとっておいたカートリッジを"シュナイト"に装填。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

一時的にだが魔力を爆発的に底上げする。これでプロトタイプが到

着するまで保つだろう。

†††Ｓｉｄｅワイリー⇒エリーゼ†††

「・・・すごい・・・」

わたしは夢かと思えるような現実を見た。他国にまで名を轟かせていたイリュリアのマサーカー・オルデンが、こんなにも簡単に滅ぼされるなんて・・・。どこからともなく真っ黒な槍が出てきたかと思ったら、次にはアイツらの胸を貫いていた。
それにオーディンさんの話を信じるなら、他の死神騎士たちもすでに斃したって・・・。そして今は団長を追い詰めてる。アンナが「一体なんなの彼は・・・！？」って警戒心丸出しで睨む。

「どうして怯えるの？　オーディンさんはわたし達を守ってくれているんだよ」

「エリー！　彼は普通じゃない！　たった1人で、あんなにも簡単に死神たちを殺したのよっ！」

アンナがわたしの両肩を掴んで、真っ直ぐ目を見て怒鳴ってきた。本気だ。確かにオーディンさんは普通じゃないよ。それくらいわたしにだって解ってる。武装も無しで魔導を使って、しかも魔力変換資質が1つだけじゃない。だけど、ちょっとしか話してないけど、でも悪い人じゃないっていうのも判る。だから怯える事もないし、恐れる事もない。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

アンナと見つめ合っている中で聞こえたソレ。２人して一緒に声の出所を見る。団長が携えている大剣からだ。カートリッジシステム。高位の騎士が持つ武装に備え付けられた機能。

「うおおおおおおおおおおッ！」

団長が大剣を構えてオーディンさんに突っ込んだ。対するオーディンさんは「ジャッジメント！」って指を鳴らす。それが号令だったんだ。空に浮かぶ槍が一斉に振って来て、団長を貫こうとする。

――パンツァーガイスト――

団長を覆う緑色の魔力障壁。団長はそのまま突っ込んで来てオーディンさんに肉薄。振るわれる大剣。オーディンさんはグッと後ろに下がって一撃目を避けた。大剣が斬り返される。オーディンさんに当たるというところで空から四本の炎の槍が落ちてきて、それが盾となった。さらに空から雷と氷の槍が十数本と振って来て、団長を後退せざるを得なくようにした。

――烈火一閃――

後退の最中に大剣を振るって炎の斬撃を飛ばす。オーディンさんは左人差し指を向けて、

――煌き示せ（コード）、汝（アダメル）の閃輝――

見惚れるほどに綺麗な蒼い砲撃を撃った。二人の間で衝突した斬撃と砲撃。視界が潰れるほどの爆発が起きた。そんな中でも聞こえる≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫っていうカートリッジの装填を報せる声。

「エリー、ここに居たら巻き込まれるっ。離れよう！」

「でも！」

「それよりも私たちの仕事をするべきよっ！　街の人たちの安否確認！」

そう言われたらわたしは頷くことしか出来なかった。生き残っている人が居たら助けないと。出来ればカール先生も無事でいてほしい。煙幕の中に居るオーディンさんを見る。「ごめんなさい」って謝って踵を返して街に出る。

†††Ｓｉｄｅエリーゼ⇒ルシリオン†††

カートリッジシステムなんて随分久しぶりに見たな。効果は未来も過去も同じで、ワイリーの魔力を爆発的に上げている。

――炎塵一閃――

煙幕の中に緑色の炎が揺らめいているのが見える。大気を操って突風を起こし、煙幕を晴らさせる。その直後にワイリーが突っ込んできた。ベルカの騎士はやはり接近戦か。しかし油断はするな。シグ

ナムやヴィータの用に中距離魔法を有している可能性もある。
それに警戒しつつ、"神槍グングニル"を具現させる。ワイリーから驚愕している気配が。何処からともなく武器を出したからの驚愕だな。それでも揺るぎなく緑炎を纏う大剣を振り下ろし一閃。"グングニル"の腹で軌道を逸らして弾き返す。衝撃が凄まじく左手が痺れたが、間髪いれずに横薙ぎ一閃。
甲冑の右わき腹部分を破壊するが、体には届かなかったようだな。手応えが無い。甲冑の破損を気にも留めずに振り上げ一閃を放つワイリー。緑炎を纏っていないため半身ズラしての紙一重で回避し、その場で時計回りに一回転して薙ぎ一閃。

――パンツァーシルト――

ベルカ魔法陣のシールドだ。しかし至高の神秘の塊である"グングニル"の前に、神秘の無い魔法という単なる技術に止められるわけもなく。"グングニル"は容易くシールドを切り裂き粉砕。胸部の装甲を破壊する。また本体へのダメージを逃した。間合いを計るのが上手い。だがもう終わりにさせてもらう。トンっと地面を蹴り、僅かに接近する。

――刻め(コード)、汝(ウリエル)の天災――

空いている右手の五指に蒼雷の長爪を作りだし、薙ぎ払うように振るう。射程圏内に入っていたワイリーに直撃。大剣と甲冑を斬り裂き粉砕し、その衝撃で大きく吹き飛ばされたワイリーは、体勢を整える間もなく地面に落下。地面に倒れ伏すワイリーを見つめる。見れば30代くらいの気難しそうな顔をしている男だった。

「私の勝ちだ。生身で逆転できると思うな」

「くっ・・・・間に合わなかったか・・・」

間に合わなかった？　援軍でも呼んだか？　まあいい。とりあえずは終戦だ。問題は生かして帰すか殺して終わるか。ワイリーは「殺すがいい。戦場においては殺すか殺されるかの2つなのだろう？」と私を見上げた。死の恐怖は感じていない。真っ直ぐに見詰めてくる。

「恨むなら恨め。憎むなら憎め。それらを含めてお前の命を背負おう」

「・・・騎士として決闘を挑んで敗北した。殺されるとしても恨みも憎しみも抱かん。だから気負うな、オーディン」

ワイリーが静かに目を閉じた。それでも私は背負うよ。この世界に来て初めて騎士と呼べるお前の命だからな。"グングニル"を振り上げる。苦しまずに逝かせるために心臓を一撃で潰す。心臓目掛けて振り下ろそうとしたところでそれを起きた。

――炎塵一閃・零式――

紫色の炎の斬撃。狙いは私ではなく・・・

「オリバー兄上！？」

ワイリーだった。ワイリー以上の火力を有した紫炎の斬撃が彼を呑みこみ、焼殺した。斬撃の出どころである空を見上げる。そこには紫色のベルカ魔法陣の上に立つ一人の男。
刈り上げられた真っ赤な髪に高圧的な栗色の双眸。他の騎士たちと違い、身に纏っているのは重甲冑ではなく軽甲冑と襟の立ったマント。そして手にはロングソード型のアームドデバイス・・・だな。カートリッジシステムがある。

「ワイリーは兄上と言っていたが、それが事実なら何故弟を殺した？
　オリバーとやら」

殺気を叩きつける。するとソイツは「敵に殺される恥を晒すよりはマシだろ？」と口端を歪めた。笑っている。実の家族である弟を殺したというのに、ソイツは笑っている！　血の繋がった家族を殺す・・・。如何な事情でもそれだけは許せない・・・。

「だからと言って殺すのか・・・！？」

「弟を殺そうとしていたあんたに言われる筋合いはないぞ、あ？」

「ワイリーは騎士として私と決闘をし、騎士としての最期を認めた。そして私も彼の死の十字架を背負う覚悟もした。それを貴様は・・・！」

騎士の在り方に私は尊敬の念を抱いている。愚直で、それでいて誇り高い。自分の手を穢してでも大切なモノを守る。私が人間だった

頃に戦ったレーベンヴェルトの騎士がそうだ。ベルカの騎士は彼らの末裔だ。今回出遭ったマサーカー・オルデンには下種な連中も居たが、ワイリーは違った。彼には誇りがあった。だから真っ向から私と一対一で闘った。まぁその誇りは私が穢したようだが・・・。

「Ｓｏ　ｅｉｎ　ｂｌｏｅｄｓｉｎｎ」

「なに・・・？」

ゾー・アイン・ブレードズィン・・・くだらん、といったかあの男は。ソイツは「騎士の誇りとかめんどくせぇ。戦場で必要なのは誇りじゃなく勝利だ」と言いながら地面に降り立った。ゴツゴツとブーツを鳴らし、間合いを計るためか私の周りを歩く。

「にしても凄いよな、あんた。たった独りで俺たちの騎士団を潰すとはさ。どんな軍勢が居るのかと思えば優男がたった独り。だがその実は怪物の如き強さ」

「怪物、か。遠からず当たっているか。それで？　貴様はその怪物相手に独りで挑もうというのか？」

「騎士っつうのはよ、己の身一つで強さを示さなきゃいけないんだと。愚弟はそれに命と誇りを懸けていた。だから迷った。プロトタイプを使う事に」

（プロトタイプ？　それを使う事で私との戦力差を埋められる、というのか・・・？）

ソイツはマントを仰々しくバサッと左腕で跳ね上げた。ソイツの腰には鳥籠のようなモノがあった。何かが入っている・・・？　目を凝らし、その何かを視認した私は息が詰まるかと思った。紅色の長髪。生気の無い紫色の瞳。長く尖った耳。一糸纏わずに白い肌を全て晒している。そして背より一対の悪魔のような羽。身長は３０ｃｍほどの少女。彼女の名はそう・・・

「・・・・アギト・・・・！」

アギトで間違いなかった。ジェイル・スカリエッティ事件で知り合った、古代ベルカ式の真正の融合騎。後にはやてたち八神家に引き取られ、シグナムの正式な融合騎となったアギト。そんな彼女が目の前に居る。だが私の知っている元気の良い彼女じゃない。鳥籠の中でペタンと座り込み、生気の無い目で私を見ていた。

「イリュリアの技術部が心血を注いで作りだした、融合騎の試作機（プロトタイプ）だ」

奴は鳥籠を外し、アギトを乱暴に鷲掴んで自分の目の前に持ってきた。奴は手の中でグッタリしているアギトに向かって、「おい、初陣だぜ。しっかり働けよ」と勢いよく自分の胸に押し当てた。その時にアギトから「ぅぐ」と呻き声が漏れた。それを聞いて、自分の凶気が目覚めるかと思った。

（私の知るアギトと目の前に居るアギトは別人だ。だが・・・！）

それでもアギトは友人だ。だったら私は彼女を助け出したい。それが彼女にとって良いことなのかはどうかは判らない。
しかしあんな生気の無い顔をさせておけない。彼女には輝かしい笑顔が似合う。

「融合！」

奴がそう告げると、アギトもまたか細い声で「ゆう、ごう」と囁いた。一瞬の閃光。次に姿を現した奴の体に変化が。ユニゾンした者特有の変化で、髪や瞳、騎士甲冑の色が変わる。血色の軽甲冑は最早どす黒く、赤い髪は朱色になり、栗色の瞳は金色に。奴はニタニタと笑みを浮かべつつ、ロングソードの刃の付け根にあるカートリッジ装填口にカートリッジを三発装填。

「さあ狩りの時間だ。あんたを討てば俺は一気に出世できるだろうぜ・・・！　ピュロマーネっ、カートリッジロードぉっ！　燃えろ燃えろ燃えちまいなッ！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

ロングソード（放火狂（ピュロマーネ）という銘らしいデバイス）がカートリッジをロードし、薬莢を排出した。奴の足元に紫色の魔力光のベルカ魔法陣が展開され、紫炎が噴き上がって刀身を包み込む。振り上げられた"ピュロマーネ"を一気に振り下ろす。すると刀身の紫炎が三日月状の斬撃となって回転しながら迫ってきた。

――紅蓮旋・零式――

フェイトのハーケンセイバーのような攻撃だ。奴は「そらそらそらそらぁぁーーーーッ！！」と連続で"ピュロマーネ"を振るい続け、いくつもの炎の斬撃を放ってきた。"グングニル"を霧散させ無手になり、「我が手に携えしは確かなる幻想」と詠唱。対火炎の複製能力を、複製術式・能力などが貯蔵されている創世結界"英知の居館アルヴィト"より取り出し発動させる。

――熱エネルギー吸収――

両手を炎の斬撃に翳し、手の平に直撃したところで吸収する。それを見た奴が目を見開いた。防御や回避を取ると考えていたんだろうが、残念だったな。だが奴はそれで失意に陥ることなく「あんた、面白いな」と笑う。自分の火炎魔法が通用しないというのにまだまだやる気を見せている。余程の自信家か救いようのない馬鹿か・・・。

「そうか。じゃあまずは貴様の炎を返しておこう」

――第四波動――

吸収した熱エネルギーを火炎砲撃として放つ。直撃はさせない。アギトを傷つけてしまう可能性がある。奴の頭上を過るようにして空へと消えていった第四波動を見送る。

「・・・はは・・・ははは！　すげえすげえ！　殺すのが勿体無いくらいに――」

――炎塵一閃・零式――

「――すげえよっ！」

紫炎を纏わせたピュロマーネを振り上げて突撃してきた。こうも真っ向から突っ込んでくるとは、奴は自滅好きか？　アギトを傷つけないように注意して、奴を墜とさないといけない。ならばまずは・・・・確保、だな。

（なのは、君の魔法を使わせてもらうぞ）

――レストリクトロック――

桜色の縄状のバインド。かつての親友・高町なのはが誇る最高の捕縛魔法だ。こいつに一度捕まってしまうとかなり厄介だ。破壊するのに結構苦労するから時間が掛かる。だが奴はレストリクトロックを完全に見切り、紫炎纏う"ピュロマーネ"で斬り裂き破壊。甘く見過ぎていたか。だがそれで終わりだと思うな。私の捕縛結界は容易くないぞ。

――チェーンバインド――

――リングバインド――

奴の全方位から鎖状のバインドを１２本と伸ばし、四肢を狙って円環のバインドを４つ発動。奴は「確信したぜっ。アンタ、シュトゥ

ラどころかベルカの人間ですらねぇなっ！」と私を睨み、「まあどっちもでいいがな！」と言い放ち、跳躍してリングバインドを回避し、チェーンバインドをパンツァーシルトで防御。防ぎきれなかったチェーンバインドは"ピュロマーネ"で破壊。おお、結構すごいな。

「プロトタイプ！　炎熱強化だ！」

――烈火刃――

"ピュロマーネ"の刀身に紫炎ではなく紅蓮の炎が生まれた。アギトの烈火刃で間違いない。炎熱付与武器強化魔法。第四波動の前に火炎は無意味だと判らないのか、奴は。いや、それは油断だな。クズだが剣の腕は良い。

「喰らいやがれぇぇーーーーッ！！」

――真・炎塵一閃――

刀身より伸びる火炎の刃。魔力は莫大で、火力もまた尋常じゃない。大気を焼いていて、周囲の酸素が一気に薄まっていく。火の粉が宙に舞う。

（シグナムとアギトのユニゾン時とは比べるまでもない強化だな・・・）

私へ振るわれる炎剣。横薙ぎの一閃だ。回避してもいいが、それで

は屋敷を傷つけてしまうな。なら防御か迎撃だ。私はもちろん・・・

――熱エネルギー吸収――

真っ向から受け止め、炎剣の吸収を開始する。その間にも奴を捕らえるために先程と同じ捕縛結界を発動。この状態では2つの道しかないぞ。捕らわれるか、攻撃を中断して回避するか。どちらもゲームオーバーだがな。奴は炎剣を解除――攻撃中断という道を選んだ。それで3つのバインドの対処に移り、先程と同じように斬り裂いていった。ここで最後の一手を打つ。

――鋼の軛――

ザフィーラの使っていた古代ベルカ式の捕縛魔法・鋼の軛を発動。地面から拘束条を突き出させ、捕縛結界の対処に追われている奴の四肢を突き刺す。

「んだとぉっ！？」

非殺傷設定としたから人体に傷は付かない。宙で磔になった奴に歩み寄る。さて、どうやってアギトを引っ張りだそうか。と思ってたところで奴は「融合解除！」と告げた。ユニゾン解除で起こる発光で目の前が白くなる。すぐにバックステップで後退。

――捕獲輪――

ガクッと体勢を崩してしまう。視界が戻ったところで原因を視認。炎のリングバインドだ。奴は「いいぞ、プロトタイプ！」とアギトを褒める。アギトは無表情で「有難う御座（ダンケ・シェーン）います」と応じた。こんな奴に礼など言う必要ないだろうに。

――ブレネン・クリューガー――

アギトは続けて炎球を放ってきた。しかし狙いが甘く、直撃コースはない。直撃する前にバインドを破壊しないとな。念のために戦闘甲冑の防御力を上げる。その間に奴が鋼の軛から脱出した。それには正直驚いた。まさか抜けられるとは思いもしなかった。奴は「対拘束魔法くらい修めているぜ。拷問官としてな」と肩を回している。こちらとしてもすぐにバインドを破壊できる。もう少しで、というところでアギトの攻撃がバインドに直撃した。右腕と左足のバインドが壊れた。あとは簡単に残りのバインドを自力で破壊する。

「このがら（クラム）くたがぁッ！」

奴はそう怒声を上げてアギトを殴った。小さな悲鳴を上げてアギトは地面に真っ逆さまに落ちた。奴はすぐさまグッタリとしていたアギトを拾い上げ、握り潰すほどの力で締め上げた。苦しむアギトに「何やってんだテメェはっ！　折角捕まえたのに逃がしてんじゃねぇよッ！」とさらに怒鳴る。アギトは「ごめんなさいごめんなさい」と繰り返して謝った。完全に怯えている。今までどんな辛い処遇を受けたのか。

「忘れたのかっ？　死んででも役に立てってことをっ。チッ、役立たずはもう要らねぇよっ！」

奴はアギトを地面にもう一度叩きつけようと腕を振り上げた。それ以上は見過ごせない。いや、アギトが外に出た時に救い出すべきだった。

「やめろっ！」

具現した"グングニル"を投擲、標的はアギトを掴んでいる左腕。気付いた奴が右手に持つ"ピュロマーネ"で"グングニル"の迎撃に入る。が、デバイスと神器では勝負にならない。"グングニル"は"ピュロマーネ"の刀身を切断した。奴の驚愕の隙を突いて最接近。

ハッとした奴は握っているアギトを私へと突き出し、「今度はヘマするなよ、クラム！」と怒鳴る。またアギトをガラクタと言いやがった。アギトの目には怯え一色。しかしそれでも命令を聞こうと、

――フランメ・ドルヒ――

炎の短剣を三十基と展開した。それははやてのブラッディダガー、リインのフリジットダガー、ルーテシアのトーデス・ドルヒのような短剣だ。それらが一斉に高速で打ち出され、私を討とうと迫る。しかし残念だが、今の私の防御力なら魔術を使って防ぐまでもない。私に着弾していく炎の短剣が爆発を起こしていく。爆炎で視界が潰されるがそれは向こうも同じ。奴の気配を感じ取り、私の手元に戻ってくる"グングニル"の軌道を操作。黒煙の中で確かに聞こえる

奴の「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ッ！？」と言う悲鳴、遅れてドサッと倒れる音。魔力で突風を起こし、黒煙を晴らさせる。視界がクリアになった事で見る。

「・・・・貴様の負けだ」

"グングニル"に腹を貫かれて地面に倒れ伏すオリバーの姿を。私はアギトを鷲掴んでいる奴の左の手首を踏みつけ、左手を無理やり開かせる。ようやくアギトが解放された。手の平の上に座り込むアギトは死に逝く奴の顔をまじまじと眺めるだけ。

「主が死んで、君はやはり悲しいか・・・？」

「・・・わからない・・・。それに、この人は主じゃない・・・」

放心状態の様なアギトがボソボソと呟くように答えてくれた。

「君、これからどうする・・・？」

「・・・敵地で孤立した場合、自壊しろって命令されてる・・・」

捕らえられたアギトから機密が漏洩しないようにするための指示だな。私は「その命令を、君は実行するのかい？」と質問をする。アギトは答えない。迷いがあるんだろう。迷いが無ければ即答するはずだ。

「君、名前はあるのか？」

「名前・・・。融合騎プロトタイプ、ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・ゼクス・・・」

ナンバー０００６・・・それは名前ではなく開発コードだな。そう言えば、アギトという名前を付けたのはルーテシアという話だったか。ここで私がそれを付けるのはあまり良くない気もするが・・・。

「私はオーディン。オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード」

「？？？」

いきなりの名乗りに首を傾げるアギト。そして小さく「オーディン・・・？」と呟いた。

それに「ああ、オーディンだ」と微笑みかけ、

「私はこの地で独りでね。よかったら私の友達になってくれないか？」

戦闘甲冑の裾を分解し、分解した切れ端でアギトの首から下の身体を包み込む。いつまでも裸のままで居させるのもダメだろう。アギトだって一応女の子だ。アギトはどうしていいのか解らずと言った風の困惑を顔に浮かべている。

「自壊する必要なんてないよ。それにわざわざ辛い場所に戻る必要もない」

「あそこに戻らなくて、いい？・・・・じゃあもうクラムって呼ばれない？」

「ああ、呼ばれないとも。呼ばせもしない」

「・・・・もうクラムって殴られない？」

「っ・・・ああ、殴られないとも。君を傷つけようとする奴が居たら、私が守るよ」

「・・・・もう、クラムは死んで役立て、って言われない？」

「当たり前だ。君はクラムじゃない。何せ私を捕らえたのだからな。君は、すごい子だよ」

アギトを右手の平に乗せて、その小さな頭をそっと撫でる。最初は呆けていたが、次第に目の端に涙を浮かべ始めた。漏れだす嗚咽。そして「戻りたくない・・・・死にたくない・・・・」と本音を口にした。開発目的がどうであろうと融合騎だって生きているんだ。それなのに勝手に命と心を与えておいて、使えないからお前は死んで役に立て、と？　ふざけるのも大概にしろよ、今はもう死んでいるオリバー。そしてイリュリアの者ども。

「じゃあ決まりだな。・・・・・アギト」

「？？　アギト・・・・？」

「そう、アギト。君の新しい名前だよ、アギト」

アギトは何度も確かめるように「アギト、アギト、アギト」と反芻する。目から大粒の涙がこぼれた。あ、あれ？　気に入らなかったのか？　いや、そうじゃない。彼女の表情を見れば判る。

「気に入ってもらえたかな・・・？」

「アギト・・・・あたしは、アギト！」

涙を両の手の甲で拭い去り、私に笑顔を見せてきてくれたアギト。ずっと側に居られるわけではないが、それでもしばらくは一緒にいようと思う。アギトが独り立ち出来るまで成長し、そして"エグリゴリ"をこの地で殲滅するその時までは。

「これからよろしく頼む、アギト」

「うんっ、マイスター！」

今までの辛さを少しでも忘れてくれるようにアギトを胸に抱く。アギト。歴史が大きく変わらなければ君は将来、必ず真のロード・シグナムと出逢える。その前にはルーテシアとゼストさんか。どちらにしてもその時にはもう私は居ないだろう。

だから祈ることしか出来ない。君に、その時が訪れるまで平穏な日々が待っているように、と。私はアギトを右肩に乗せ、エリーゼ達の後を追う。生存者が居れば私のラファエルが必要になるだろうから。

Ｍｙｔｈ３そして結末への旅が始まった～Ｐｅｒ　ａｓｐｅｒａ
ａｄ　ａｓｔｒＡ～

――シュトゥラ王都ヴィレハイム／シュトゥラ城

庭に隣接する外廊を忙しなく駆け回る者たち。それは騎士であり行政者である。そんな彼らを庭から心配そうに見つめている少女が２人。１人は綺麗なブロンドヘアはシニヨン、紅と翠の虹彩異色。顔立ちは幼い。
ビスチェのドレスを着ていて、その物腰は気品が溢れている事から高貴な身分だろう。しかしその少女の体躯とドレスには全くそぐわないガントレットが両上腕部にまで装着している。彼女はオリヴィエ・ゼーゲブレヒト。聖王家の正統な王女だ。

「何かあったのでしょうか・・・？」

「イリュリアがどうのと聞こえましたが、詳細は不明です姫様」

オリヴィエが誰に訊くわけでもなくそう疑問を呟く。しかしその呟きはオリヴィエの近くに控えている、もう１人の少女に届いていた。肩に掛かるくらいの空色の髪、キリッとした桃色の双眸。顔立ちはオリヴィエほど幼い。身に纏うのはハイネックの白のミニワンピース。前立てや縁には幾何学模様の金の刺繍。ワンピースの上に水色のショートジャケットを重ね着して、両腕に銀の籠手を装着している。腰に纏うのは前開きの水色のオーバースカート。白く美しい足を覆うニーハイソックスにロングブーツと、その上から爪先から膝

まで隠す銀の脚甲、という格好。

「イリュリア・・・、それは確かですかリサ」

「はい、間違いなく」

オリヴィエにリサと呼ばれた、オリヴィエ付きの従者である騎士甲冑姿の彼女が頷く。オリヴィエは「イリュリアの名が出たのはあまり良い気がしません」と悲しげに目を伏せた。古き国家イリュリアの好戦的な国の在り方に、オリヴィエは胸を痛めていた。そんなイリュリアの名が出た事で、彼女にはある予感が生まれていた。シュトゥラにイリュリアが攻め入って来たのではないか、と。リサもイリュリアの在り方を嫌というほど知っているため、オリヴィエと同じ考えに達していた。

「・・・・あ、クラウス」

オリヴィエが1人の青年を姿を見つけて、彼の名を告げる。碧銀の髪、青紫と瑠璃のオッドアイ。シュトゥラを治めるイングヴァルトの王子、クラウス・G・S・イングヴァルトだ。彼も庭に居るオリヴィエとリサに気付き、視線のみで2人に挨拶をした。それを済ませると、騎士数人を引き連れて足早に去って行った。ラキシュ領へ向かうために。

シュトゥラの王子クラウスの率いる一個騎士団はラキシュ領へ向かうために馬を駆る。その道中、彼は王城にて聴き及んだ情報を反芻する。隣国イリュリアの一個騎士団がシュトゥラ・ラキシュ領に侵

攻し、ラキシュ領の一画、アムルの街で戦闘を開始。
ここで不審点。イリュリアからシュトゥラへと侵攻する場合、必ず国境のラキシュに入らないといけない。そうなれば間違いなくラキシュの防衛力たる第一騎士団（エーアスト）・第二騎士団（ツヴァイト）・第三騎士団（ドリット）と衝突するはずだ。しかしそうはならなかった。その三騎士団がたまたまラキシュ本都の政で戻っていたのだ。もちろんそんな情報がイリュリアに漏れないようになっていた。

（だというのに狙ったかのように侵攻してきた。情報が漏れていた・・・？）

偶然漏れたという失敗はまずあり得ない。優秀なイリュリアの間諜がラキシュに潜り込んでいたか。もしくは・・・

（何かの目的の為に意図的に情報を流した、か）

最悪の推測を出したクラウスはかぶりを振った。それで一体どのような利があるというのか。情報を漏らした者に。彼はもやもやとした嫌な気分のまま、馬の速度をさらに上げてラキシュ領に急いだ。

。―。―。―。―。―。―。

――シュトゥラ・ラキシュ領／ズュート平原

つい数時間前までは美しかった大平原。しかし今は見るも無残にボロボロで。焼けた草花。抉れた地面。それらは全て戦闘によって付けられたものだ。無残なのはそれらだけではない。そこらじゅうに

転がっている甲冑に包まれた死体の山。
それらの死体には共通点がある。全員が全く同じデザインと灰色をした甲冑姿で、右肩の装甲には髑髏に大鎌がひとつ。そう、彼らは血染めの死神騎士団マサーカー・オルデンの後方支援部隊だった。野営地にてアムルへと援軍を送りだして待機していたところを・・・

「第三(ドリット)および第二(ツヴァイト)の第５班から１３班は残存兵を捜索し発見次第、討伐せよ」

そう指示を出す、白馬に乗るアオザイのような純白の衣服を着ている青年と、彼の周囲に数百人と居る騎士によって殲滅された。青年はさらに「第一(エーアスト)と第二(ツヴァイト)の１班から４班は僕と一緒にアムルへ入り、我がラキシュ領を侵略しに来た者どもを根絶やしにするッ！」と、峰は真っ直ぐで刃は緩やかな流線型を描く剣・ファルシオンをアムルに向ける。すると騎士たちは「了解(ヤヴォール)！」とそれぞれ武器を空に突き上げ応じた

「急げ、すでに敵はアムルへ侵攻してるッ！」

青年が馬を駆り先頭を往く。続いて彼と共にアムルへ向かう騎士たちも徒歩や馬を駆り往く。

（待っていてくれ僕の可愛い小鳥(エリーゼ)・・・。君を手に入れるためだけに僕は・・・）

青年の端正な顔が醜く歪む。彼の名はヨーゼフ・シュミット。シュ

トゥラの現王デトレフより伯爵の地位を授かった、若き領主だ。

（ああ今行くよ。独りっきりになってるはずだから心細いだろう？）

美しい翡翠色の双眸が妖しい光を湛え、整った唇が釣り上がる、今の彼の顔を見れば、いかなる人間でもその邪悪さに気付いて側を離れるだろう。彼の思いはただ一つ。エリーゼ・フォン・シュテルンベルクを手中に収める。そのために彼は、人道を踏み外した外道を歩む事となった。

「遅れるなッ！　アムルを護れッ！」

そう言うシュミットの本音は、アムルではなくエリーゼを救え、だった。

†††Ｓｉｄｅエリーゼ†††

屋敷から出ると判るアムルの街の被害状況。レンガで舗装されていた綺麗な街路は見るも無残にボロボロ。街路樹に無傷な物なんてない。穴が開いている家も少なくない。

そして視界に入るのは、アムルを今まで守ってくれていた防衛騎士団のみんなの亡骸と、死神騎士団の奴らの死体で、アンナが「エリーは見ちゃダメ、死体なんか」ってわたしの目を隠そうとする。わたしは首を横に振って降り払い、「わたしはちゃんと見届けないとダメだから」と防衛騎士の亡骸の前で膝を付く。

「今までアムルを守ってくださってありがとうございました」

安らかに眠ってくれるよう祈りを捧げる。アンナもわたしに倣って片膝を付いて「安らかにお眠りください」って祈る。1人の祈りが終わってまた別の1人というふうに繰り返し祈り続ける。その最中にわたしはアンナに決意を示す。

「・・・・父様が亡くなった今、娘であるわたしがアムルを治めないといけない。だから起こること全てから目を逸らすわけにはいかなくなる」

父様の遺体は確認していないけど、

――アムルを統べるシュテルンベルク最後の人間よ――

死神騎士団の団長がそう言っていた。つまりはシュテルンベルク男爵家で生き残っているのはわたし独りだけということだ。わたしがアムルを治めるためには、父様の男爵位を受け継がないといけない。シュトゥラ王がそれを認めてくださるかどうかが最大の問題なんだけど。それでも何とかして受け継がないと。わたしはシュテルンベルクの人間なんだから。

「エリー・・・・」

祈りを終えて、わたしはまた街を足早に歩き出す。視界に入る回数が徐々に増えてきた死神騎士たちの死体。その死体には共通点がある。心臓付近に突き刺さっている槍・・・。蒼い雷や炎や氷や光、真っ黒な影のような槍に竜巻のような槍、オーディンさんの魔導だ。

それを見ていたアンナが「心臓に一撃。すごい命中率だわ・・・」って驚嘆してる。それからブツブツ呟いて考え事していて、「エリー」ってわたしを呼びかけてきた。立ち止まって振り返る。アンナは槍を見て、屋敷の方を見て、最後にわたしを見た。

「あなた、彼をどうするの？」

「どうするって？　オーディンさんのこと・・・？」

「・・・ええ。今は恩を返すっていう事で味方でいてくれてる。でも死神たちを討った後、彼は街を出る。あんな恐ろしい力を持ってる彼が・・・」

随分と遠回しな言い回しに、「何が言いたいの・・・？」って訊き返す。すごく嫌な予感がする。大切なアンナからは聞きたくないようなことを言われるかもしれない、って。アンナは真っ直ぐわたしの目を見詰めて、言った。

「またどこかで恩を受けてそれを返すってことになって、もしそれがアムルやラキシュ、果てにはシュトゥラにとって禍いになるとしたら。それは凄く恐ろしい事だわ。だから彼がこの街に残ってもらうように仕向けたいの。あれ程の力、見逃してしまうより目の届くところ、アムル防衛のために残ってもらった方が――」

「・・・こっちの勝手な都合でオーディンさんをアムルに縛れっていうの？」

アンナの言い分はおかし過ぎる。だから「却下」する。オーディンさんは確かに強い。それも尋常じゃない程に。なにせ騎士団丸ごと1つを単独で、しかも短時間で潰したんだから。その戦力をアムルに常駐させておけば、確かにアムルは安泰だと思う。

「エリー。イリュリアが攻めてくるのが今回だけとは限らないのよ？
　ううん、間違いなくこれが始まりに――またこんな酷いことになってしまう。そうなったら私は耐えられない。私の育ったこのアムルの街がもう一度メチャクチャにされるなんて・・・」

ボロボロになった街並みを見回したアンナは泣きそうな顔になる。わたしももう一度見回す。本当に酷い有様だった。自然と両拳を握りしめてしまい、「わたしだってそうだよ。二度とこんな事されたくないよ・・・」って同意する。アンナは「だったら！」って詰め寄ってきた。

「でもそれで人ひとりの自由を縛っていいわけないよ・・・。それに、オーディンさんが居なくても第一～第三騎士団が国境を護っているから・・・」

ラキシュ領の領主であるヨーゼフ・シュミット伯爵が国境防衛のために置いた三騎士団。そんな彼らが護ってくれるって言ったら、アンナがキッと目を鋭くして「ソイツらがちゃんと護ってくれていたらアムルは壊されなかった！」って叫んだ。
言い返せなかった。死神騎士団が損害もなくアムルにまで侵入してきたっていうことは、イリュリアとの国境に居るはずの三騎士団と遭遇しなかったってことだ。よく考えればおかしい話だ。どうして

三騎士団を素通り出来たのか判らない。わたしが言い淀んでいると、アンナが「まさか・・・！」って恐い顔をした。

「アイツ、わざと素通りさせたんじゃ・・・！」

最初は何を言っているのか理解できなったけど、アンナが何を言いたかったのかを理解した途端、わたしは愕然とした。アンナの言うアイツというのはきっとシュミット伯のことだ。そのシュミット伯が三騎士団に指示を出して、死神騎士団を素通りさせたって言っているんだアンナは。

シュミット伯。若くして（確か今２１歳だったはず）ラキシュ領の領主となった伯爵で、２年前からわたしに求婚してきてる人だ。そんな人がこんな事をする（推測の域だけど）理由は・・・・

「信じられないけど、求婚を断り続けたわたしへの嫌がらせ・・・？」

普通に考えればあまりにも突拍子もない、有り得ない推測。すぐに切り捨てようって思ったけど、アンナは「絶対そうだ」って決めつけていた。

（違う、きっと・・・。嫌がらせなんかで街ひとつを・・・）

死神騎士団は運良く三騎士団に見つからないように接近してきたのかもしれないし。水掛け論になるのも嫌だから、今はとにかく住民たちを捜そうと街を歩き回る。団長の言っていた通りなら労働力として生かすつもりらしいから、どこかに監禁とかされているかも。それともすでにアムル外に連れ出されているか。どっちにしても急

いで助けないと。とりあえず緊急時の際に集合するように言われてる避難場所――アムル郊外の城塞跡に向かうことにする。難を逃れた住民たちが居るかもしれない。それにオーディンさんが無事だと報せてくれたモニカとルファとも逢えるはずだ。行き先を決めてすぐに行動に移る。

「目標を発見！」

というところに、最悪な展開が目の前に訪れた。灰色の甲冑を着た騎士。右肩の装甲に描かれている紋章からして死神騎士だった。数は3人で、全員大柄な大男。オーディンさんが討ち漏らした敵かと思ったけど、手にする武器も纏ってる甲冑を汚れていないところを見ると、

「援軍・・・！　エリーは下がって！」

アンナが武装・"アインホルン"を起動して、使用人服から騎士甲冑姿になる。黒の使用人服に白銀の籠手と具足と胸甲が付いただけなんだけど、そもそも使用人服自体がすでに騎士甲冑。日常から魔力消費をどれだけ効率よく抑えられるかの鍛錬だって言っていた。

「3人位なら私独りでも十分なはず・・・！」

レイピア型の"アインホルン"を構えたアンナの足元に赤紫色のベルカ魔法陣が展開される。"アインホルン"にバチバチと雷撃が纏われ始める。アンナの魔力変換資質は電気だ。アンナの浅葱色の髪が電気の影響でフワリと浮く。それを見て3人の死神騎士が、大斧、

大槌、大剣をそれぞれ構えた。
わたしはアンナの邪魔にならないように少しずつ後退していく。よく考えれば、援軍が3人だけなはずがなかった。トンと背中が何かに当たる。直後に両肩をガシッと掴まれた。恐る恐る振り返ると、灰色の甲冑を着た騎士が2人居た。

「酷い有様だったぜ先遣隊。一体誰がやったんだ、おい」

「心臓に魔力槍が一発。全員即死だったぞ。どんな腕だよ畜生が」

「痛い・・・っ！」

肩を掴まれる手の力が強まった。アンナが「エリー！」ってこっちに駆け寄ろうとするけど、それを止める他の死神騎士たち。アンナは首筋やお腹に刃を当てられて、わたしにはただ肩を掴まれているだけ。脱出するために何か良い手が無いか必死に思考を巡らせる。オーディンさんはダメ。たぶんまだ団長と戦ってるはず。じゃあ・・・打つ手が無い・・・？　せっかく助けてもらったのに。ううん、諦めてはダメ。多少のケガは仕方ない。体当たりをして全力逃走。でもわたしはそれでいいとしても、アンナは一瞬で殺されてしまう。

「目標はソイツだな。早く終わらせるぞ。団長と副団長の戦死が確認された。団長たち、そして先遣部隊を討った奴が来るかもしれない。そうなる前に引き上げる。本作戦は失敗だ」

「隊長・・・」

「あの団長と副団長が死んだ？　どんな化け物が居るんだよこの街には・・・！」

騎士団を率いる団長と副団長と言えば高位騎士だ。ただの騎士とは一線を画す実力者。でもそうだよね。オーディンさんの同時に複数人を打ち倒すあの魔導なら、1人相手に集中砲火すれば高位騎士だろうと無事じゃ済まないはず。

「ならさっさと殺して撤退しようぜ隊長」

わたしに突きつけられる大鎌の刃。今度こそここで終わり・・・？

せっかくオーディンさんが助けてくれたのに。こんなことになるなんて。わたし、「助けて・・・オーディンさん・・・助けて」また頼ろうとしてる。

騎士の1人が「神様にお祈りか？　良い覚悟だ」って笑う。オーディンさんは神様じゃないけど。でも祈りたいのは確か。でも祈ったところでオーディンさんは現れない。だけどその代わりに・・・

――豪狼――

狼の頭の形をした複数の衝撃波がわたしとアンナを包囲してる騎士たちを討った。ホントに一瞬の出来事だった。地面に倒れ伏す騎士たちを見た後、今の魔導を放った人を確認する。端正な顔立ちの男の人が居た。紫色のサラサラの髪、翡翠色の瞳。ゆったりとした白の長衣を着ていて、手には反りのある剣。知っている人だった。何せついさっきまでアンナとの話に出てきていた・・・

「危ないところでしたねエリーゼ」

「・・・・シュミット伯・・・・」

†††Ｓｉｄｅエリーゼ⇒ルシリオン†††

「すぅすぅ・・・あたしは・・・アギトむにゃむにゃ」

「疲れて眠ってしまったか」

私の手の平の上で眠ってしまったアギト。随分と安心した表情をしている。にしても不思議な感覚だ。私とアギトがこうして一緒に居るなんて。アギトを起こさないように魔力の膜で覆い、手の平から浮遊させる。

「今はゆっくり休んでいてく――ん？」

中庭に向かおうとしていたところ、屋敷の角の陰に倒れ伏していた1人の男性を見つけた。おそらく中庭からここまで這ってきたんだろう。血の轍が中庭から続いている。もうピクリとも動かないため、残念だがもう逝去されたのかと思ったが・・・・

「生きている・・・！」

――傷つきし者（コード）に、汝の癒し（ラファエル）を――

わずかに指先が動いた。虫の息だがまだ生きている。すぐさま中級治癒術式を発動。仰向けにして呼吸がしやすいようにする。顔を見れば歳はまだ５０にも満たないだろう。顔は気難しそうだが、とても優しげな目を持っている。

「・・・気をしっかり保て！　目を瞑るなッ。開いて私を見ろッ」

しかしその目を塞ごうとまぶたが何度も閉じようとするのを、声をかけて意識を保たせる。ここで眠りについてしまったら間違いなくそのまま逝ってしまう。それほどの傷だ。正直人間がここまでのダメージを負って生きているのが信じられない。あまりの体の酷い有様に、このまま死なせた方が良いのかもしれないと考えてしまうが、それでも助けられるのなら助けたい。

――ねえルシル。その魔術（チカラ）は何のためにあるの？――

――ゼフィ姉様。それは・・・――

（守りたいモノを守るため。救いたいモノを救うため）

――今は戦時だから敵を殺すことが多くなる。だからその一線を忘れないでねルシル――

ゼフィ姉様――実姉ゼフィランサス・セインテスト・アースガルド――との約束を思い出す。殺すこと以外、人命を救うために魔術を使いたい。

「ごほっ・・・おま・・・エリー・・・ぅぐ・・拾って・・・男・・・」

「喋るなッ、死にたいのかッ！」

ラファエルでは限界があるか。私のように死に難い体なら時間をかければ大丈夫だろうが、あいにくと彼には時間が無い。だったら・・・

（記憶の消滅覚悟で・・・アレを使うか・・・）

記憶を取るか人命を取るか。２つの選択肢。考えるまでもない。すぐさま上級術式の発動準備。術式を組み立てて、

――女神の祝福（コード・エイル）――

私が有する治癒系術式の最高峰――エイルを発動した。エイルは対象が死人でなければ如何なる傷でも治すことが出来る術式だ。その分、魔力消費が酷いが、なんとかギリギリＳＳＳ範囲内に収めることが出来た。

以前の契約で次元世界に召喚された時、上級術式は空戦形態ヘルモーズ以外は制限されていたのに、この次元世界この時代では許される。だから本当に助かる。これで彼を助けることが出来るのだから。

そう思ったのに・・・。

「駄目だ、目を閉じるなッ。もう少しだけ耐えるんだ！　思え、残している家族の事を！　生きようとする活力を捻り出せッ！」

すると彼の目に一度だけ光が戻った。僅かに口を開いて何かを言おうとしている。喋るなと言っているのに聴かない男だ。仕方ないから口元に耳を近付ける。彼は「わた・・の・・可愛・・・娘・・・エリーゼ・・・たのむ・・・」と血反吐を吐きながらも言う。私の可愛い娘エリーゼを頼む、か。エリーゼの父親だったのか。確かに目元が似ているか。

「判った！　エリーゼの事は任せろっ！」

私は答えの選択を間違ったのかもしれない。彼は安堵したのか小さく息を漏らし、「ずっと・・・愛して・・と伝え・・・」と静かに目を閉じた。さっと血の気が引く。「諦めるな馬鹿者ッ！」と声をかけ、エイルの効力を上げる。と同時に「ぐっ・・・」頭痛と胸痛が。来た。私という存在を削る悪夢の予兆だ。彼の命の灯火が弱まっていく。さらに効力を上げようとしたその瞬間。

――あっ、ルシルだ。ジョニーは今居ないよ。もお、どこ行ったんだろ？――

（メイ・・・）

――こんにちはルシルさん。はい。みなさん、良くしてくれてます――

（ディズィー・・・）

――チッ。厄介な奴と出遭っちまったな――

（ソル・・・）

――おお、久しぶりっ、ルシリオンの旦那――

（アクセル・・・）

まるで走馬灯のように流れるかつての契約先世界で知り合った友人たちの顔と声。あぁ今度は君たちが私の思い出から去っていくのか・・・。ノイズが走り、目の裏に浮かぶ友人たちの姿が次々と消えていった。一瞬の暗転。

「・・・・あ・・・・？」

視界が晴れる。

（また何かの記憶を失った・・・・のか？　）

たとえ失ったのだとしても思い出す事も出来ない。思い出せもしないというのにしっかりと残っている喪失感。いや、失ったモノはもう取り戻せない。今は後回しだ。すぐにエリーゼの父親の容体を確認した。

「っ・・・・あは・・・・はははは・・・・。記憶を失って、目の前の命も救えない、か」

エリーゼの父親は絶命していた。「くそっ！」と地面を殴りつける。あまりの自分の無力さにどうしようもなく苛立つ。と「マイスター？」と側を浮遊している魔力球から声。アギトが起きてしまっていた。さすがにあそこまで声を荒げれば起きてしまうよな。私を見るアギトに「起こしてしまってすまない」と謝る。アギトは小さく首を横に振った後、自分を包んでいる魔力球を心配げな目で見る。閉じ込められている、と思ってしまったんだろう。すぐに解除して、アギトの足元に手に平を持っていく。アギトはゆっくりと手の平の上に座り込んだ。

「眠っているのを邪魔したくなかったんだ。嫌な思いをさせてしまったんだったら・・・」

「ち、違いますっ。あ、いや、違わないわけでもなくてっ。えっと・・・！」

気を遣うか素直になるかどうかで混乱しているのか、アギトは首や腕を振りまくる。私は「気を遣わなくていい。素直に、君の本心を聞かせてくれればいいよ」と微笑みかける。するとアギトは「・・・閉じ込められたと思ってちょっと怖かったです」と俯いた。安心させるようにその小さな頭を撫でる。「うにゅ？」と声を漏らしたアギト。

「これ、頭撫でてもらうの、気持ち良いです・・・」

「そうか。それは良かった」

改めて自分の今なすべきことを考える。他にも生存者がいるかもしれない。だからいつまでも沈んでいるわけにもいかない。エリーゼの父親の手を胸の上で重ねた後、他の生存者を捜すために屋敷を後にする。屋敷の外は亡骸ばかりだ。私が討ったマサーカー・オルデンの騎士に、アムルを守っていた騎士たちのもの。

「コレ全部マイスターが・・・？」

「そうだ。私が恐いか？」

「う、ううん！　恐いんじゃなくてすごいなって！」

過剰な反応。やはりまだ抜けきっていないんだな、イリュリアでの酷い扱いを。当然か。私との付き合いの時間は1時間もない。そう簡単に忘れられないよな。私を非難するようなことを言ったら、また酷い扱いを受けるかもしれないと心の隅で思っているんだろう。これぱかりは時間を掛けていくしかないか。だけど少しでも早く過去として忘れてくれるように。

アギトと向かい合って額をコツンと付け合わせて、「私に嘘は言わなくていい。さっきも言った通り素直な君でいてくれ」と言って離れる。少し考えた後に「はい」と返事をしたアギト。それから二手に分かれて生存者を捜索。アギトも最初は私と別行動するのが不安だったようだが、念話で話をしながらだったため頑張ってくれた。

『マイスターっ！　生きてる人を見つけました！』

『判った！　よくやった、偉いぞアギト！』

『えへへ、はいっ！』

すぐさまアギトの魔力反応を探査・・・発見。剣翼アンピエルを発動させ、アギトの居る場所まで急行する。そこは壊れた家屋。外でアギトが待っていた。

『中に何人か居るよマイスター』

『よし。アギト、出来ればまた捜して来てくれないか？』

『え・・・。・・・はいっ、任せてくださいっ』

アギトは逡巡した後、強く頷いて飛んで行った。地面に降り立って家屋に入っていく。確かに気配がある。数は４人か。私は「エリーゼ嬢の使いですっ。怪我人が居れば出てきてください。治療します」と嘘交じりに告げる。

彼女の名前を勝手に出したのは悪いが、もし怪我人が居て、そして危険な状態で、しかし私を恐れて出て来ずそのまま・・・ということになっては笑い話にもならない。武器を持ってないとアピールする為に両手を上げ、出て来てくれるのをじっと待つ。複数の視線が向けられたのが判った。「あんた、エリーゼ様が連れてきた怪我人だったはずだ」と青年の声が聞こえた。

「・・・そうです。私は彼女に命を救われました。だからこそ恩を返したい。私に出来る事と言えば、この街を襲った騎士団を討ち、そして怪我人を治療するだけなんです。前者の方は果たしました。

ですからお願いします。怪我人が居れば、助けたいんです」

偽善かもしれないな。純粋な思いではなくて結局は自分の為だ。恩を返したいという建前。そんなつもりはないんだが、そう捉えてしまう人もいるだろう。断られるかもしれないとも思う。でも、それでも出来ることをやりたい。

「前者は果たした、だって？」

「街を襲っていた騎士団は一人残らず討ちました。ですが援軍が来るかもしれない。ですからその前に可能な限り生存者を捜し出して・・・怪我をしていたら助けたい」

「奴らを殺したあの魔力の槍・・・あんたの仕業だったんだ・・・」

少しの沈黙のあと、奥からトテトテと一人の少年が駆け寄ってきた。するとさっきから私と話していた男が「アヒム！？」と、この少年の名らしきものを叫んだ。アヒムという少年がしがみ付いて来て、「お母さんを助けて！」と服を引っ張ってきた。

遅れて１０代半ばくらいの少年と少女が出てきた。事情を聞けば彼らは家族だそうだ。マサーカー・オルデンに襲われて、だが連中が死んだ（私のカマエルによって）ところで逃げきることが出来た、と。しかしそれまでの間に彼らの母親が子供たちを庇って斬られて重傷を負ったそうだ。

「カール先生が居てくれれば良かったんだけど、行方が判らないんだ」

私と最初から話していた男は長男だそうだ。名はダニロ。歳は２０にも満たない１７。父親はアムルの防衛騎士。ダニロは言う。「父さんはもう死んでいる」と。それについては深くは聞かなかった。今はとにかく怪我人の治療だ。

案内された部屋に女性が一人ベッドの上にうつ伏せで寝かされていた。背中を斬られたんだな。すぐに怪我のレベルを診る。バッサリやられているが、背骨までは達していない。

「これならすぐに治せるぞ」

「ほ、本当ですか！？」

「お母さん死なない？」

「ああ、任せろ。もうこれ以上死なせるか・・・！」

――傷つきし者（コード）に、汝（ラファエル）の癒しを――

両の手の平を傷口に翳す。生み出されるサファイアブルーの淡光。子供たちが口々に「綺麗」とうわ言のように言う。筋肉、神経、血管もろもろを修復しつつ、ゆっくりと傷口を塞いでいく。

「心拍数安定・・・よしっ。もう大丈じょ――っ！？」

最後まで口にすることが出来なかった。頭痛と胸痛に襲われてしまう。馬鹿な。Ｘランクの魔力は使っていない。　だがすぐに治まっ

た。「あの、大丈夫ですか？」と少女――名はベッティ――が心配そうに私の顔を覗きこんできた。「ああ、大丈夫だ」と頷く。駄目だ、原因が判らない。

『マイスターっ！　アイツらが、血染めの死神騎士団（マサーカー・オルデン）の援軍が街に入ってきましたっ！』

アギトから切羽詰まった念話。『判った。見つからないように気を付けてくれ』と返す。家を出る前に「君たちは怪我としていないか？」と子供たちに問う。子供たちは首を横に振った。よし。「君たちはこのまま隠れているんだ。いいね？」と告げ、踵を返す。背後からの感謝の声に手を小さく上げる事で応じ、外へ出て剣翼アンピエルを発動。した瞬間にまた起こる頭痛と胸の痛み。

「魔術発動で起こるのか・・・！？」

もしそうなら、これからどうやって"堕天使エグリゴリ"と戦っていけばいいんだ？　足りない。原因と対策を確立するための情報が無さ過ぎる。また失うのか？　アンピエルを解除したくなったが、アギトが待っている。それにエリーゼ達の身の安全も確認しなければ。

そう、今は生命を選択するべき。奪っていきたいなら好きなだけ奪っていけ。覚悟を決めて空へと上がり、アギトの居る地点を目指す。アギトと合流する前に街の現状を確認出来た。灰色の甲冑を着た騎士団と、鋼色の甲冑を騎士団が衝突している。

『マイスターー、こっちですっ！』

アギトと合流して、灰色の甲冑の騎士団がマサーカー・オルデンの後方支援部隊と教えてもらう。なら鋼色の騎士はアムルの援軍と見ていいか。それを念頭において空から戦闘区域を確認する。戦闘が行われている区域は全部で４つ。その内の１つに「エリーゼ！」を見つけた。

エリーゼと使用人の少女の２人に、民族衣装(アオザイ)のような騎士甲冑？を着た青年が１人。３人の様子からして知り合いのようだ。使用人の少女からはビシビシ殺気が放たれているが、エリーゼが宥めている感じだ。で、その周囲にマサーカー・オルデンの騎士たちが２６人。エリーゼ達はおそらく気付いていないな。

「それなら遭遇する前にここから潰すか」

左手の平を地上に向け翳す。ターゲットをロック。術式の構成開始。ランクは中級。効果は攻性。属性は破壊特化の炎熱系。

――舞(コード)い振るは、汝の獄火(サラヒエル)――

周囲に展開する火炎の槍。数は２６本。１人につき１基だ。また起きる頭痛と胸痛。確定だ、魔術を使うと起きる・・・。

「マイスター？　マイスターっ？」

「あ？」

「顔色が悪いですよマイスター・・・」

アギトが心配げな顔をして目の前に居た。「大丈夫だよ」とかぶりを振って、サラヒエルの射出するため号令を下そうとした。しかしここで気付いた。サラヒエルが解除されていて霧散していたのだ。意識しての解除じゃない。最悪な事はそれだけじゃなく、剣翼「アンピエルが！？」解除された。

そうなると、飛行能力を失うことになる。当然、私は真っ逆さまに落ちる。アギトが「ちょっ、ええっ？」といきなり私が落下し始めたことに驚愕の声を上げた。すぐにアンピエルを再発動しようとするが上手くいかない。

「マイスターッ！！」

アギトが真っ直ぐ急降下して来て、私の右腕を取って落下を止めようとした。だが体格差はもちろんのこと落下速度もあり過ぎた。止まらない。アギトが「うぐ」と苦悶を漏らす。アンピエルがダメなら、これでどうだ。大気を魔力で無理やり操作して、真下から突風を起こす。単純な気流操作。だというのに起きる2つの痛み。

（魔術が原因じゃない・・・！？　じゃあ一体どうし――まさか！）

自分の体の現状を確認することで1つの推測が立った。そしてその推測通りなら全てに得心がいく。しかし、笑いたくなるほど弱体することになるな。

（まさか一定の魔力値以下になってもアウトだとは・・・）

Ｘランク以上の魔力を用いた魔術を使ったらアウト。魔力残量がＡＡランク以下にまで減ってもアウト。いや、今さらだ。これまでに訪れた契約先世界でも滅茶苦茶な制限は受けてきたんだ。原因が判った。対策も立てることが出来た。普段はそれに注意し、"エグリゴリ"戦の時に全てを捨ててでも全力を出す。

「マイスターっ！」

「大丈夫だ！」

アギトを胸に抱いて着地態勢に入る。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒エリーゼ†††

シュミット伯から語られる、死神騎士団がアムルにまで侵攻して来た原因。ラキシュ領防衛三騎士団がラキシュ本都の祭時の為に国境から離れていたから。この時点でアンナは完全に怒って、わたしも正直怒り・・を通り越して呆れたような悲しいような複雑な気持ちを得た。

「一度に三騎士団を国境から離すなんて馬鹿じゃないのっ！」

「アンナ、シュミット伯に失礼過ぎだよ」

「いいえ、いいのですよエリーゼ。彼女のお怒りはごもっともです。第四騎士団（フィーアト）、第五騎士団（フュンフト）、第六騎士団（ゼクスト）を配置する予定だったのですが間に合わずこのような・・・」

シュミット伯は続ける。絶対に漏れるはずのないその情報がイリュリアに漏れてしまって、こんな惨事が起きてしまった、と。頭を下げて謝るシュミット伯にアンナが「結局は全部あんた達が下手をうったからじゃない！」って斬りかかる勢いで詰め寄った。わたしはアンナにしがみ付いて止める。伯爵を斬ったってなったらアンナは処刑まっしぐらだ。

「何が政よっこんな時期に！　どうせわざと騎士を引かせたんでしょっ！？　情報をイリュリアに流して、アムルへ侵攻するよう仕向けたっ！　エリーに求婚を断られ続けた腹いせの為にッ！　違うっ？」

（そんな推測の域を出ない話を包み隠さず言っちゃうの！？）

ほら、シュミット伯も呆然としてるよっ。でもすぐにシュミット伯が笑いだす。そんなところに、「エリーゼ！」ってわたしを呼ぶ声。真上からだ。

「オーディンさんっ！」

ズンッと砂埃を上げてオーディンさんがわたしの目の前に着地した。オーディンさんは「敵が迫っている。戦える者は手伝ってくれ」と倒れている死神騎士から槍を取った。あれ？　さっき魔導を使うのに媒体とか使っていなかったのに。

というかその小さい女の子は誰ですか？　布切れ一枚を纏っただけ（しかもオーディンさんの騎士甲冑の一部だし）の赤い髪の女の子。

その子は誰ですか？と問う前にシュミット伯が「エリーゼ。彼は一体・・・？」と訊いてきた。

「えっと、オーディンさんと言いまして、シュミット伯たちが来るまで死神騎士団と戦ってくれた御方です」

そう、オーディンさんが居てくれたから、わたし達は助かった。アンナが「あんた達なんかよりよっぽど頼りになるわ」って挑発的に続く。それを気にせずシュミット伯は「我々が来るまで？　では先遣部隊を殲滅したのは彼が？」と戦慄してる。でもすぐにニコッと笑顔を浮かべてオーディンさんに向き直った。

「はじめましてオーディン殿。僕はラキシュ領領主ヨーゼフ・シュミット伯爵です。このたびは――」

「シュミット伯。残念だが今は挨拶している暇はない・・・！」

その言葉と同時に四方八方から灰色の甲冑の騎士が現れた。敵を視認した途端にオーディンさんとシュミット伯は駆けだして戦闘に移った。そして小さい女の子もオーディンさんに続いて戦闘開始。火炎の球や短剣を撃ち放っていく。

すると死神騎士たちが「なぜプロトタイプが敵に回っているんだ！？」「命中率が上がっているぞ、どういうことだ！？」「裏切ったな！」だとか口々に怒りを示す。あの女の子、まさかイリュリアの仲間だったの？

「アギト、気にするな。君の居場所はここだッ」

「っ・・・はいっ、マイスター！」

オーディンさんに、アギト、って名を呼ばれた小さい女の子の表情が輝く。あぁそうか。アギトという子はオーディンさんに惹かれたんだ。

「あたしはもうプロトタイプじゃないっ。あたしは・・・アギトだッ！」

炎球が騎士たちの動きを制して、その間にオーディンさんが槍で一突き。それで終わりだ。強い。魔導なんて使わなくても十分強い。それなのに・・・

「あの人、動きが変。それに顔色も悪いし呼吸も荒い。どうして魔導を使わないの？」

「・・・・うん。空に居たんだったらわざわざ降りないで攻撃すればよかったのに」

オーディンさんの身に何かが起きている。一体何が。おそらく「魔導が使えなくなってる？」だ。シュミット伯の戦う姿が視界から消えて、わたしの視界にはもうオーディンさんしか入らない。オーディンさんを包囲して一斉に襲いかかろうとする死神騎士たち。アギトの援護は間に合わない。オーディンさんから魔力が発せられる。魔導を使うみたい。でもすぐに何事もなかったように消える。どこか痛いのか顔を顰めるオーディンさん。結局、地面を転がるよ

うにして包囲から突破、切り抜けた。でも転がる最中にも攻撃することは忘れない。拾った剣で敵の脚を斬りつけていた。

（まさかオーディンさん・・・魔力が・・・？）

魔導を発動させようとしても出来ない理由。いくつか理由があるけど、一番しっくりくるのが魔力切れ。あれほどの高威力な魔導を連発していたんだから、魔力が空っぽになっててもおかしくない。だから、わたしはアンナに向いて「オーディンさんにクス・デア・ヒルフェを使う」とハッキリ告げる。

「・・・はあ！？　ちょっ、エリー、そこまでしなくてももう戦いは終わる！」

「でも万が一があるからっ。オーディンさんっ！」

「離れているんだエリーゼっ、巻き込まれたいのかっ！」

オーディンさんが遠ざかる。それだとクス・デア・ヒルフェが使えない。乙女の祝福（クス・デア・ヒルフェ）。それはわたしの――正確にはフォン・シュテルンベルクの女性にのみ発現する能力で、口づけ（クス）することで自分の魔力を相手に供給できるというものだ。

クスとは言っても絶対に唇と唇じゃないとダメというわけじゃない。相手の地肌に唇が触れさえすれば。だからオーディンさんの手の甲にでもいいからクス・デア・ヒルフェを使えば、オーディンさんは魔導を使えるはず。そう思ったのに、声をかけたら余計に離れていってしまった。

それから、オーディンさんはたびたび危ないところもあったけど、シュミット伯とアギトのおかげで何とか乗り切った。死神騎士団の脅威もようやく去って、わたし達が一息吐いていたところに、

「報告します。アムルに居たマサーカー・オルデンの全滅を確認しました」

「報告します。マサーカー・オルデンに拉致されていたアムルの民を発見、救出することに成功しました」

「報告します。拉致を逃れ隠れていた者たちを保護しました」

次々とシュミット伯の元に報告してくる騎士たち。その内容はあまりにも嬉しいモノで。だから知らずわたしは涙を流していた。そこにオーディンさんが来た。視界で滲んでいるけど判る。オーディンさんの表情が悲しみに歪んでいるのが。

「・・・エリーゼ。君のお父上から最期の言葉を承っている」

「え・・・？」

訊き返してしまった。だって父様はオーディンさんが来る前にもう殺されていて・・・。アンナが「嘘を言わないで！」って怒鳴る。それを「アンナ待って！」と制する。袖で涙を拭って、しっかりとオーディンさんの顔を見て「聞かせてください」と促す。

「・・・ずっと愛している、と」

「・・・っく・・・うぅ・・・とう、さ・・ひぅ・・父・・・さまぁ・・・父様ぁ・・・・！」

「エリー・・・エリー・・・・！」

声が出るのを抑えられない。しっかりしないとダメなのに。アンナがわたしを抱きしめて一緒に泣いてくれる。それで限界だった。もう人の目とか気にすることもなく、自然に泣き止むまでわんわん泣いた。

そこからどれくらい泣いたんだろう。街がもう夕陽に染まってしまってる。

シュミット伯の指揮の下、三騎士団が街の状況――正確な被害や修復までの時間などを調査して報告し合っているのを聞く。最終報告は、アムル防衛騎士は全滅、住民からも４８人の死者、壊された家屋やお店は多数。たった数時間で変わり果ててしまった。途方に暮れていると、シュミット伯が歩み寄ってきた。

「エリーゼ。今回の事は誠に申し訳ない。僕が浅はかだった・・・」

「っ！・・・全部・・・全部あんたが・・・あんたの所為でアムルはッ！」

わたしが止める間もなく、アンナの放った拳は真っ直ぐシュミット伯の頬を打った。それを見た騎士たちが武器を構えて「無礼な！」「分を弁えよ小娘！」「覚悟は出来ているだろうな！」と怒声を上げる。

血の気が一気に引く。すぐに謝ろうとした時、シュミット伯が「よせっ。悪いのは僕だ」って騎士たちを制した。命令に従って騎士たちが引き下がる。わたしは「寿命が縮まるかと思ったでしょっ！」とアンナを叱る。

「・・・エリーゼ。君も僕を殴るくらいの権利がある」

わたしを見詰めるシュミット伯は両手を後ろで組んでジッと待つ。仕方がない。その一言で済むような事件じゃないのは確か。父を失い、民も少なからず失った。悲しみもある。怒りも・・・ある・・・。わたしは右手を振りかぶり、シュミット伯の頬を叩いた。

「・・・・もし叩かれずに許されていたら僕は、僕自身を許せずにどうにかなっていた」

シュミット伯は安心したように苦笑いを浮かべた。そして、

「こんな時になんだけど、エリーゼ、僕と結婚してくれ。そして共にラキシュで暮らそう」

「・・・・え？」

「何を言い出すのかと思えば、結婚してくれ？　共に暮らそう？冗談も大概にしてよ・・・！」

「冗談なんかじゃないよ。アムルはイリュリアとの国境近くの街で、これからは常に危険と隣り合わせになる。でも領内奥にあるラキシ

ュ本都なら、もうこんな惨劇は起きない。だから・・・アムルの民と共に移ろう」

わたしに手を差し伸べるシュミット伯。アンナは「駄目よエリー」って止めてくる。答えは考えるまでもなくずっと前から決まってる。ジッとシュミット伯の目を見る。

「ありがとうございます、シュミット伯。ですが以前から申し上げている通り、わたしには夢があります。まぁその夢も恐らく今日で終わりを迎えますけど。ですが新たな夢が出来るんです。このアムルの街を必ず復興させ、イリュリアからの侵攻にも負けない街に成長させる。ですからあなたの求婚には応えられません。ごめんなさい、こんなわたしを好きになって頂いて、光栄に思います」

頭を下げる。わたしのような小娘を目にかけてくれて本当は嬉しい。でも応えられない。わたしはエリーゼ・フォン・シュテルンベルクだから。シュミット伯から何の返事もないから頭を上げようとして、耳に届く小さな小さな声。

「どうしてダメなんだ・・どうして判ってくれないんだ・・どうして僕のモノにならないんだ・・どうして、どうして、どうして・・・どうして僕の思い通りにいかないんだ！？」

「シュミット伯・・・！？」

「ちょっ、いきなり何！？」

シュミット伯が髪を掻き毟って唸り声を上げる。アンナがわたしの腕を掴んで、自分の後ろに引っ張り込んだ。アンナの背中越しに見るシュミット伯は恐い。ギロッと睨んで来て、背筋が凍った。周りに居る騎士たちもその様子の変わりように混乱してる。わけが判らずに見守っていると、

「ヨーゼフ・シュミット伯爵とは、あなたのことか・・・？」

凛とした男の人の声が響いた。声のした方を見る。そこに立つ人を見て絶句。最初は信じられなかった。幻かと思った。でも歩いてこっちに来てる。本物だ・・・本物の・・・

「クラウス・G・S・イングヴァルト殿下・・・！」

目を逸らせない。まさかクラウス殿下をお目に掛ける日が来るなんて。激昂していたアンナですらも身動きひとつしないで殿下を見詰めている。シュミット伯も黙り込んで身震いしていて、騎士たちは片膝をついて礼の姿勢を取る。

「聞こえなかったのかい？　あなたがヨーゼフ・シュミット伯爵か？」

「そ、そうです・・・。で、殿下、なぜラキシュ領に・・・？」

シュミット伯が殿下の問いに答えた途端、殿下の表情が険しいものになった。

「あなたを拘束するため、と言っておこうか。容疑はイリュリアへの情報漏えい。その結果、どういうことになったのか・・・判るだろう？」

殿下は何を言って・・・？

「やっぱり・・・私の推測が当たってた・・・？」

アンナから放たれる強烈な魔力流。そして殺意。推測。シュミット伯が三騎士団に指示を出して、死神騎士団を素通りさせたっていう。嘘・・・そんなの・・・。今回の死神騎士団の侵攻が・・・シュミット伯に仕組まれた？

「は、はは、ははは。殿下、一体何を――っ！」

殿下の率いていた近衛騎士が一人の男の人を連行してきた。知っている人だった。だって、わたしが憧れて師事していた医者なんだから。

「カール、先生・・・」

カール・アーレンス、その人だった。どうして拘束されているのか判らない。

殿下は話を続ける。カール先生がシュミット伯の命令で、イリュリアに居る軍事医師に情報を流した。今日この日、たった数時間の間だけ国境から三騎士団が居なくなるっていう。その情報の下、死神

騎士団はラキシュ領に侵攻してきた。完全支配の足がかりとしてまずはアムル。そのアムルを統治するフォン・シュテルンベルクの人間の殺害。

「すまない、エリーゼ君」

カール先生は跪いて額を地面に何度もぶつけながら謝る。もう判らない。何を信じていいのか、全然判らないよ。今自分が立っている場所が揺らいで崩れていく感覚。

「き、貴様ぁぁーーーーッ！！」

アンナがシュミット伯を全力で殴り飛ばした。上手く思考が働かない。混乱の極みってやつなんだと思う。でも徐々にひとつだけ確かなモノが浮かび上がってくる。怒りだ。

「どうして自分の領内・・・アムルに敵国の騎士団を入れたの？」

近衛騎士の1人に立たされたシュミット伯に問いかける。どんな理由でこんな最悪な事を仕組んだのか聞いておきたい。もう言葉を交わすことが絶対にないから今の内に・・・。

「君を手に入れるためだよ、エリーゼ。君のことが好きだから。手に入れたいから、僕はこの外道の手を選んだ。君の知り合いが多く死ねば、心細くなった君は僕を選んでくれると思ったか――ぅぐっ」

殴った。初めて人を本気で殴った。もう許せなかった。聞いていた

くなかった。シュミット伯に言うことはたった一言「さようなら」だけだ。

「君は解っていない！　君のその能力は、この戦乱の時代において貴重なものだ！」

「連行だ。ヨーゼフ・シュミット、あなたの爵位を剥奪する。カール・アーレンス、罪は罪だ」

殿下の指示によってシュミット伯とカール先生、そして騎士団が連行されていく。わたしに好意を持ってくれたことへの嬉しさはもうどこにも無い。好きだって言ってくれたのに、結局はわたしの能力を欲していただけ。その上カール先生にも裏切られちゃった。あはは、参ったなぁ。

「エリーゼ・フォン・シュテルンベルク嬢。お父上のことは誠に残念です」

「・・・・うえっ？」

沈んでいた気持ちがごっそり失せる。だって殿下に声をかけられるどころか名前を呼ばれたんだから。殿下は「今後のアムルについてですが・・・」とわたしにとって一番重要な話を切り出してきた。今しかない。話すなら、わたしの思いをぶつけるのなら今しか。

「わたしがっ、わたしが父の爵位を受け継いでアムルを統治しますっ！」

「・・・・大変ですよ、街を一つ治めるのは。それでも――」

「やります。わたしは、エリーゼ・フォン・シュテルンベルクですっ！」

殿下を真っ直ぐ見詰める。殿下も真っ直ぐ見詰め返して下さる。そして「父に進言しておくよ。アムルはエリーゼ男爵に任せたい、と」そう言って下さった。今まで成り行きを見守ってくれていたアンナが「エリー」と微笑んでくれた。

「騎士団の一部と医師団は置いていきます。好きに指示を出してくれて結構です。そして、明日より行う街の復興に必要な人員と資材も用意します」

「な、何から何までありがとうございます殿下」

「シュトゥラの民の生活と安全を守るのが我々の務めですから。ところでエリーゼ嬢。先程から気になっていたのですが、彼は一体？　あの銀の髪に紅と蒼の虹彩異色。シュトゥラ国内には居ない特徴です。どういう経緯でこの街に？」

殿下の視線の先にはオーディンさんとアギトが居た。明らかに殿下はオーディンさんを警戒している。わたしは事の経緯を包み隠さずに殿下に話す。敵対してほしくないから。

瀕死の重体のオーディンさんを山奥で見つけたこと、放っておけなくて街に連れ帰って治療したこと、一週間後の今日目を覚ましたこ

と、死神騎士団に襲われていたところを救ってくれたこと（コレ重要）、そして記憶の一部を失っていること（コレも重要）を。殿下はわたしを見つつも決してオーディンさんから意識を離していなかった。

「――単独で騎士団を潰す魔導・・・、それはなんとも・・・凄まじいですね。彼から少し話を聞いてみたくなりました」

殿下が踵を返してオーディンさんの下へ歩いていく。

「オ、オーディンさんはきっと良い人ですっ。か、勘なんですけど・・・！」

もし戦うことになったら、今の魔力切れのオーディンさんじゃ殿下に絶対に勝てない。殿下は「戦う気はありません。今のところ、は」と歩みを止めることなくオーディンさんの前に赴いた。

「はじめまして、僕はクラウス・G・S・イングヴァルトという。まずはアムルを守ってくれたことに礼を言わせてくれ。ありがとう」

「・・・オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードです、クラウス殿下。それと礼など無用。礼が欲しくて戦ったわけではないのだから」

オーディンさんは片膝をついて礼の姿勢を取ろうとしたけど、殿下が手で制した。

「結構だよ、オーディン殿。あなたはシュトゥラの王族に対して礼義を取る必要のない人なのだろうから」

「なるほど。私がシュトゥラの人間ではないと確信しているわけ、か」

言っちゃった。それよりもそう断言できるということは、オーディンさんの記憶が戻ってる・・？　あ～殿下が身構えた。オーディンさんもいつでも動けるように意識してるし。お2人を止めるだけの勇気が無いよ、わたし。

「シュトゥラ・・アムルへ来た目的は？」

「偶然でしかない」

「詳細を聞かせてくれないか・・？」

「・・・・捜しモノをしている。その捜しモノが偶然ベルカにて発見された」

「ベルカにて、ということはあなたはベルカの人間では・・・」

「ああ、ベルカ人ではない。他世界から来た」

オーディンさんはシュトゥラどころかベルカの人ですらない・・・ミッドチルダ人？　あぁそうか。今思えばオーディンさんの魔導はベルカじゃ考えられないものだった。殿下は質問を続ける。「その

捜しものとは？　それに瀕死の傷はどこで？」という問いに、オーディンさんは苦い顔をした。

「捜しモノは一種の兵器で、名をエグリゴリという。怪我はエグリゴリとの戦闘によって負わされたものだ」

「オーディンさんを負かす程の強さ・・・！？」

驚いてしまってつい声を出してしまった。するとお2人の視線がわたしに向いて、ハッとして両手で口を塞いだ。だってあのオーディンさんをあそこまでボロボロにするほどの強さって、"エグリゴリ"って一体どれだけ強いの？

「安心してくれていい。エグリゴリを見つけ破壊するまではベルカに留まることになると思うが、この戦争に好き勝手干渉するつもりはない」

「そのエグリゴリという兵器が我々ベルカ人に危害を加え、ベルカをさらに混乱させるようなことが無いとは言い切れないのでは？」

「確かにな。そうならないという確約は出来ないが、まずないだろう。もしあったとしてもこのアムルだけは必ず守るつもりだ」

オーディンさんのその言葉に、わたしとアンナと殿下は揃って「え？」って訊き返した。アムルだけは守る。その理由が判らない。助けた恩なら十分返してもらった。だから話に割り込むのを失礼と思いながらも「どうしてですか？」と尋ねる。

「・・・君の父親との約束だ。君への遺言の他に、私にある願いを託した。エリーゼのことを頼む、と。ひとりの男が死に際に願った思いだ。同じ男として果たさなければならない」

「父様が・・・」

オーディンさんのことを追い出せ、なんて言っていたのに。わたしとアンナがあの場から去った後、一体何があったんだろう？　そのことを今すぐにでも詳しい話を聞きたいんだけど、殿下の用件が済まない限りは待つしかない。

「信用してくれとは言わない。が、私はこの誓いは破らないと、エリーゼに約束する。この街を害するモノが現れた時、私は全力を以って迎撃し、排除する」

「それはエグリゴリだけでなくイリュリアからの侵攻にも該当するのかい？」

殿下の確認にオーディンさんは「もちろんだ」って即答した。アンナから『どうするエリー？　彼がそう言ってくれるのなら、留まってもらった方がいいわ』と念話が。むぅ、オーディンさんが居てくれるのは本当に助かるんだけど・・・。わたしは「本当にそれでいいんですか？」とオーディンさんに確認を取る。

「私は構わない。問題は君たちの意思だ。私のような者が街に留まるのが不安だと言うなら出て行こう。別段この街に留まる必要性も

ないしな。で、それについて心配ないよう先に約束する。たとえ私が街の外に居ようともイリュリアの騎士が来ようが、万が一にエグリゴリが来ようが必ずアムルを守りぬこう」

揺るぎない決意に満ちた顔だった。だからわたしは「お願いします。もちろんこの街で一緒に」と握手を求める。オーディンさんも「こちらこそよろしく頼む」って握手に応じてくれた。

「オーディン殿。その誓い、僕も信じます。ですから裏切るようなことがないように」

「判っている。決して信用は裏切らない。あと、殿、は要らない。オーディンでいい」

頷き返す殿下とオーディンさんも握手を交わした。

「ではエリーゼ嬢、我々はこれで。第一隊から第九隊はアムルの防衛を務めよ。医師団は負傷者の治療に専念。残りは僕と共にこれよりヴィレハイムへ帰還する」

殿下は威風堂々然と騎士団を引き連れて王都に帰っていった。姿が見えなくなるまで見送り、あまりにも長く感じた一日は終わりを告げる。

「エリー！」「エリーちゃ～～ん！」

「モニカっ、ルファっ！」

わたしと同じカール先生を師事していた医師見習いのモニカとルファが駆けてきた。３人で抱き合ってお互いの無事を喜び合う。オーディンさんの言っていた通り、２人は怪我１つなかった。しばらく抱き合って、モニカとルファがオーディンさんの姿を見つけた途端、

「オーディンさんっ、助けてくださってありがとうございましたっ」

「すごい魔導でしたっ。というかあれだけの怪我を治した治癒魔法って何ですかっ？」

きゃあきゃあ騒ぎながら詰め寄った。オーディンさんの肩に座るアギトがビクビクしていて可哀想。オーディンさんもタジタジな様子。わたしは「オーディンさんが困ってるでしょっ」と止めに入る。多くのモノを失って、でも得ることもあった今日という忘れえない日。

（父様、母様。わたしは、アムルと共に生きていきます。だから見守っていてください。２人が愛したアムルは、娘のわたしが絶対強くしてみせますから）

わたし、エリーゼ・フォン・シュテルンベルクは、空に向かって誓いを立てた。

†††Ｓｉｄｅエリーゼ⇒？？？？†††

幾百年と続く、終わり見えない永き旅。我らは多くの人間の手を渡り歩き、その都度、我らを手にした者を主として我らは仕え、主の

命の下に戦場を駆け、数多の人命を奪ってきた。
我は呪われし魔導書。人間は我らの力を欲し続ける。覇道を歩みたいがため。しかし待ち受けるのは逃れることの出来ない破滅の道。
あとどれだけ命を奪えばいい？　あとどれだけ騎士たちに苦しみを背負わせればいい？　あとどれだけ旅を続ければいい？　誰か教えてくれ。誰か騎士たちを救ってくれ。

「・・・我は闇の書。無限に旅をする呪われし魔(もの)導書・・・」

どうか次代の主が、我が一部の騎士たちに、ささやかでも構わない幸福を与えてくれる者であるように。

ベルカに数多く存在している国家の中でも領地の大きさで言えば随一であるイリュリア。
イリュリアは領地の大きさだけでなく歴史においても他国の追随を許さない。そのうえ保有する騎士団や戦術・戦略兵器などと言った武力、融合騎開発や古代の魔導と言った技術面にも優れている。他国との差を挙げていけばキリがない。

――イリュリアが滅ぶ時、ベルカの歴史は動く――

そうとまで言われるほどの古く強大な大国イリュリア、その王都スコドラ。
スコドラの中心にそびえ立つ王城の一画、イリュリア王家の第一王女テウタに与えられた領域内の一室にて、数人の人間による秘密会議が行われていた。

「三連国（バルト）との全面戦争を前にして躊きなど。嘆かわしい」

「まったくだ。シュトゥラなどと言う眼中にない国に、すでに４つの騎士団が潰されている。これでは先が思いやられるぞ」

「バルデュリス王子も馬鹿なマネをしてくれたものだ。ラキシュ領主に踊らされるとは。その所為で我らの盟友ワイリーの血染め（マサーカー・オルデン）の死神騎士団を失ってしまった。最早テウタ王女に懸けるしかなかろう。

頭脳と武才のあるテウタ王女こそ、この戦乱の時代を往くイリュリアを導くに相応しい」

「賛成賛成。ゲンティウス陛下ももう使えないし、そろそろ王位継承争いを決着させて、さっさとベルカ統一と行こうぜ」

「そうね。ベルカは元々我らイリュリアの世界だった。テウタ王女の御名の下に取り戻しましょう」

「決まりだな。ではテウタ王女を次期皇帝とするを目標として動く」

リーダー格の男が率先して立ち上がり、剣を胸の前に掲げた。それに倣い、他の者たちも一斉に立ち上がって各々の得物を胸の前に掲げてみせた。そのどれもにカートリッジシステムと呼ばれる機能が付いている。全員が名のある高位騎士であり、他国にまでその名を轟かせている騎士団を率いている。

「我ら栄えあるイリュリアン・リッター。誇りを胸に、誓え、我らが魂がベルカ統一の礎となならんことを」

「「「「「ベルカの地にイリュリアの繁栄をッ！」」」」」

高らかに誓いを口にする。そして「では解散」というリーダー格の男が告げると、他の騎士たちはそれぞれの騎士団の詰所へと戻っていく。最後に部屋を後にするリーダー格の男ともう1人の男。石造りの廊下を2人きりで歩み、ひそひそと会話する。

「なあ大将、知ってっか？　半年前にワイリーら死神騎士団、そしてここ最近の騎士団を潰したの、たった1人の男らしいぜ」

「無論だ。シュトゥラから生きて戻った連中から報告を貰っている。銀の長髪に、遥かな蒼（ラピスラーツリ）と輝ける紅の虹彩異色（ルビーン）、そして魔力で構成された剣の翼。幾つもの魔導を同時に発動させ、なおかつ効果範囲が出鱈目に広い。そのうえ変換資質が2つ以上」

「彼の伝説に出てくる英雄様の特徴にそっくりだろ？」

「再誕神話の大英雄・・・神器王ルシリオン、か。偶然で片付けるには特徴が一致し過ぎているが、まず有り得んだろうな」

「俺もそう思うけど、実際、当時存在してた一族の子孫だって噂の奴らがそこらじゅうに居るし、気になるんスよね。盟友ウルリケ然り、盟友ゲルト然り、聖王家の番犬然り、シュトゥラ王家然り」

「だからその男もルシリオンの子孫だと？　ルシリオンは他世界の王であり、その世界も滅んでいる。血族が生き残っている可能性はない」

「いや、そうだったら面白いなぁと。まぁ結局、正体が何であっても面白そうな奴だって事が重要なんだよな」

「悪い癖だな、盟友ファルコ。強敵に闘志を漲らせるのは結構だが、相手は単独で一個騎士団を潰すような男だ」

「油断はしませんから安心を。というわけでちょっと挨拶に行ってきますわ。負けっぱなしなんて許されない。イリュリアン・リッターの意地と誇り、見せつけてやりますよ」

「卑怯な言い方だな。・・・いいだろう、行ってこい。盟友ファルコ・アイブリンガー及び地駆けし疾狼騎士団（フォーアライター・オルデン）の出撃を、イリュリア騎士団総長グレゴールが許可する。念のため、融合騎プロトタイプ、ヌル・ヌル・ヌル・フュンフを連れて行け。技術部への許可は私が取っておく」

「了解（ヤヴォール）」

そうして二人は明かりの少ない薄暗い廊下を進む。

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

「――はい、治療完了です。もう無茶しないでくださいね」

「はい。ありがとうございました、オーディン先生」

「はい、お大事に。・・・・ふぅ」

患者であるご婦人の診療を終え、診察室を後にするのを笑顔で見送る。パタンと扉が閉まったのを確認して、カルテに主要症状や処方方法を書き記す。

「オーディン先生、お疲れさまでした～。午前の診察は先程の患者

さんで終わりですよ～♪」

とそこに、元気よく扉を開けて入ってきたモニカがそう報せに来てくれた。モニカは１８歳の少女で、オレンジ色の長髪はふんわりおさげ、青い双眸はとろ～んと柔和、放つ雰囲気はフワフワでホワ～ンだ。服装は純白のロングワンピースにエプロン。清潔感重視の格好だ。

そんなモニカの後に続いて、

「マイスターっ、お疲れさまーっ♪」

元気の良い労いの言葉を言いながら入って来たのはアギト。３０ｃｍほどの小さな彼女は、ベルカで言えば融合騎、ミッドで言えばユニゾンデバイス、と呼ばれる存在だ。アギトもまたワンピースとエプロン姿。看護師手伝いとして、自ら進んで着ている服だ。今より数百年後、ルーテシア達と一緒に行動していた時の服装からは考えられない清楚さだな。

「ありがとう、モニカ、アギト。そうだモニカ。ルファに昼休憩にしようと伝えておいてくれ」

「ヤヴォ～～ル　」

モニカはニコニコ笑顔で診察室を出て行った。廊下から「ルファ～、お昼ご飯だよ～♪」と機嫌の良い声が聞こえてくる。それにアギトと一緒に微苦笑。アギトはデスクの上に設置している彼女用の小さな椅子に座って、私の仕事が終わるのを笑顔で待ってくれている。

記すべきことを書き終え、カルテを鍵付きの引出しにしまってから「行こうかアギト」とオフィスチェアから立ち上がる。アギトは「はいっ」と良い返事と共に宙に飛び上がり、そわそわと私の肩の上を飛び回る。私は「ふふ」と笑みを零してしまう。
トントンと自分の肩を人差し指で叩くと、アギトは「やった♪」と嬉しそうに私の肩に降り立って座った。それを横目で確認して診察室から出て、中庭を目指す。天気が良い日の昼食は、中庭で食べることになっているからだ。

「あの頃に比べれば、アギトも自分の意見を態度で示す様になったな。最終的には、今のように遠慮しようとせず、言葉にしてくれればいいんだけどな」

今では表情も豊かで、エリーゼやアンナ、それにモニカにルファ、アムルの住民とも普通に会話できる。イリュリアのアムル侵攻から半年。それだけ経過すればそれくらいは当然だろう。しかしまだ私に対して遠慮がある。そもそも、マイスター、という呼び方からして間違っているような気がする。とは言え変更できない程に定着してしまっているから、今さら呼び方を変えろなんて言えない。

「やっぱりマイスターだし、遠慮とかしちゃうよ」

「う～ん、友人として見てもらいたいというのが正直な本音なんだけどな」

「・・・マイスターは、いつかベルカから居なくなっちゃうんだよね・・・？」

まさかそんな風に切り返されるとは思ってもみなかった。が、それが事実であることは間違いなく、「そうだよ」と答える。

「だったらあたしはオーディンさんの友人より、マイスターの融合騎である方が良いです。それなら置いていかれないから」

「アギト・・・」

アギトは私へ楔を刺そうとしてきた。終わりのない従者の関係という楔を。しかしそれは叶わないこと。いずれ私はベルカを――いや、世界そのものから消え去る。だがそれを今ここで言ってしまうことは出来ない。あぁ考えなしだったたか。アギトを引き取ったのは。違う。後悔はない。後悔はないんだが、アギトが悲しむのはやはり彼女の未来を知る者として辛い。

「アギト。エリーゼ達は好きか？」

「えっと、うん、好きだよ。良い人たちだから」

「そっか。それなら良いんだ」

もし私が世界より去る時が来れば、アギトはエリーゼ達に託そうと考えている。ベルカは滅ぶことになっているが、ベルカに住まう人間が息絶えるわけじゃない。大半が他世界へと渡る。エリーゼ達の子孫もその中に入っているはずだ。

「お待ちしてましたよ、オーディン先生、アギトちゃん」

中庭に出たところで、一人の少女が駆け寄ってきた。ルファだ。15歳の少女で、金色のボブに少し猫目な紫色の瞳。服装はもちろん白のワンピースにエプロン。そのルファの他にモニカ、そして・・・

「オーディンさん♪」

「やあ、シュテルンベルク卿。今日は一緒に昼食が出来て嬉しいよ」

「もう、シュテルンベルク卿と呼ばないでくださいって言ってるじゃないですか」

エリーゼ。エリーゼ・フォン・シュテルンベルク男爵。

半年前のクラウスの明言通り、彼女は父の後を継ぐことを許されて男爵となった。茶色い長髪は今では束ねることなくサラッと流している。それに顔立ちがどこか大人びた気がする。そして高貴さが漂う赤いドレス。エリーゼはフリルの多いそのドレスを鬱陶しく思っているが、アンナがどうしてもと聞かないため、渋々着ている感じだ。まぁ似合っているから良いんじゃないか、とは思う。うん。

「エリーゼ様、貴女は仮にもこの街の長であり男爵ですから――」

「アンナ、わたしを様付けして呼ぶのも禁止っ。というか一週間に一回はやってるよ、このやり取りっ！」

もう1人はアンナ。エリーゼの幼馴染であり従者であり、そして執政補佐。
浅葱色の長髪はサイドアップ、灰色の瞳は若干鋭い。服装は半年前から変わらず使用人服（メイド）・・・というよりメイド服型の騎士甲冑だ。毎日十数時間、騎士甲冑を維持している。魔力運用が半端なくうまい証拠だ。

「はいはい。エリー、判ったから振る舞いには気を付けてね」

「絶対一週間後に同じこと言うし」

ムスッとしていたエリーゼだったが、すぐに私とアギトに微笑みを向け、「ほら、オーディンさんもアギトも座って」と席に勧めてくれたため、私に用意された食器のある席に座る。そしてアギトは彼女専用の席へ。アギトの大きさに合わせて私が作った椅子に座り、テーブルに並べられた食器によそわれた料理を見て目を輝かせている。さて、全員が席に着いたところで、昼食を始める。む、今日もまた美味いな、アンナの料理は。負けているかもしれない・・・。

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒？？？？†††

アギト。それは、あたしの名前だ。マイスターが付けてくれた、あたしだけの大切なモノ。
七騎の融合騎プロトタイプの中で一番のがらくた（クルム）って呼ばれて蔑まれていたあたしに光をくれた大事なマイスターは、不思議な人だった。あたしが傷つけられたら怒ってくれたり、友達になってくれたりとか、果てには名前まで付けてくれた。すごく嬉しかった。この

人にずっとついて行こうって思えるほど。
そんな不思議なマイスター、この街アムルの長エリーゼさん、その補佐官のアンナさん、2人の親友でマイスターの助手のモニカとルファ（さん、は要らないって言われた）と一緒にお昼ご飯を終えて日光浴をしていたところに、

「あ、そうだ。オーディンさん、魔力足りてますか？」

エリーゼさんが思い出したようにマイスターに訊いた。マイスターは「いや、大丈夫だよ。ありがとう」ってやんわり断ったけど、エリーゼさんは「何かあったらダメだから」って聞かずにマイスターの右手を取った。そして手の甲に唇をくっ付けた。手の甲と唇が触れてるところから浅葱色の光が溢れる。
エリーゼさんの能力・乙女の祝福（クス・デア・ヒルフェ）だ。シュテルンベルク家の女の人にだけ受け継がれていく能力だって聞いてる。でもエリーゼさんがオーディンさんに口付けするの、よく解らない気持ちだけど見るのちょっと嫌だったりする。なんだか胸の奥がチクチクする。

「気を付けてくださいね。魔力が少なくなったらオーディンさん、記憶が・・・」

「ああ、十分気を付けているよ」

でも必要なことだから。そう、マイスターはある障害を持ってる。魔力枯渇による記憶障害ってマイスターが名付けた、魔力が減少すると大事な記憶を失ってしまう病気。だからこうして時々エリーゼさんから魔力を貰ってる。記憶を失くさないように。

「マイスター、診療に魔力を使うんだから本当に注意してね」

あたしも心配してそう言う。あたしを――あたし達のことを忘れてほしくないから。マイスターは、シュテルンベルクの屋敷の一画を借りて医院を開いてる。コード・ラファエルっていう治癒魔法を使って（もちろん薬とかも使う）患者さんを治しているんだけど、それは魔導だから魔力を消費する。

だから内心ビクビクしてる。重傷患者さんが出て、治療するためにすっごい魔力を使って記憶を失うかもしれないって。でもマイスターは医者をやめない。病気を知ってから、どうしてやめないの？と訊いてみた。

――治療魔法が使えるんなら役立てないとな――

そう言って、あたしを安心させるためにか頭を撫でてくれた。それも笑顔で。下手したら自分の記憶を失うかもしれないのに、それでも魔力を使って人を助けるマイスターのことが、あたしは好きだった。

「心配性だな、２人は。診察代に患者さんから少しばかり魔力も貰っているし、早々枯渇することはないよ」

「それでも常に魔力を補充することを考えてください。もしオーディンさんがわたしのことを忘れてしまうようなことがあれば、わたし、とても辛いです」

「あ、あたしだって辛いよマイスターっ！」

抱きつこうとするエリーゼさんに負けじとマイスターに詰め寄る。あたしはマイスターの頬に抱きつけたけど、エリーゼさんはいつの間に来たのかアンナさんに「はしたないわ、エリー」って肩を掴まれて止められてた。

「ちょっと位いいでしょぉ・・・」

「はいはい、早く仕事に戻りなさい。オーディンさん、アギト、失礼しますね」

「ええーもう？・・・・はぁ。オーディンさん、アギト、またね～。モニカとルファ。オーディンさんに迷惑かけないようにね」

「キリキリ歩きなさい、男爵閣下」

そんなやり取りをしながら、エリーゼさんとアンナさんは屋敷に戻っていった。あたし達は顔を見合わせて笑い合う。あんな弱い男爵なんて見たことないね、って。

それから少し話をしていると、ルファが「ではオーディン先生、アギトちゃん、午後の診察回りにまた」とお辞儀して、モニカは「オーディン先生、アギトちゃん、またね♪」って大きく手を振って中庭を後にする。

２人は午後の診察回りが始まるまで自由時間。そう言うあたしとマイスターもだけど。マイスターは大きくあくびと伸びをして、「アギト、私は自室で少し眠るけど、君はどうする？」って尋ねてきた。

「じゃああたしも」

いつでもどこでもあたしはマイスターと一緒だ。大きな屋敷の一階の端に、マイスターとあたしの部屋が用意されてる。赤いカーペットの敷かれた廊下を歩いてあたし達の部屋へ。元は客室で、広くて豪華。それに風通しも日当たりも良いから、すごく快適に過ごせる。マイスターは天蓋付きの寝台に横になって「今日は特に眠いな」ってすぐにウトウト。首を傾げてるマイスターに「今日は陽気も良いですし、昨日は夜遅かったから」と言う。夜遅くまで医者としての仕事をしてたから。そして朝は朝で体を鍛えるということでトレーニングをしてるから、どうしても睡眠時間が短い。

「そうか・・・そうだな・・・」

「ゆっくり休んで、マイスター。あたしが起こすから」

マイスターは小さく頷いて、すぐに静かな寝息を立て始めた。マイスターに作ってもらったあたし専用にベットに寝ることなく、あたしはマイスターの枕元に向かう。マイスターの寝顔を見ながら、あたしも横になる。一時間半だけの仮眠。寝坊しないようにしないと。だから寝ないようにしていたけど、いつの間にか眠ってしまっていた。

「・・・んぁ？・・・なっ？」

物音――ううん、それだけじゃなくて強烈な魔力が充満してる所為

で目が覚めた。血の気が引いた。思いっきり眠ってたことより、その魔力の強さに。ハッとして起き上がって、室内に一冊の分厚い本が浮いてるのを確認。
部屋に満ちる深い紫色の魔力光は、あの浮いてる本から放たれてる。マイスターを起こそうと振り返る。マイスターはすでに起きてて、目を限界にまで見開いて浮いてる本を見詰めてた。

「マイスター・・・？」

「・・・馬鹿な・・・・！」

様子がおかしい。何か信じられない物でも見たかのよう。マイスターがここまで動揺してる顔なんて今まで見たことがない。何だか知らないけど恐い。あたしにとって嫌なことが起ころうとしてるかもしれない。

≪起動（アンファング）≫

本から発せられた声。遅れて深紫色のベルカ魔法陣が部屋の中に展開された。すぐに本と魔法陣から目を開けてられない程の光と、そして吹き飛ばされそうなほどの魔力波が放たれたけど、マイスターがあたしを抱き止めてくれたことで吹き飛ばされなかった。後ろから「こんな偶然があるのか？」ってマイスターの震えた声が。光が治まって、ようやく目を開けることが出来た。

「・・・だっ、誰だっ！？」

部屋の中にさっきまで居なかった人影があった。マイスターを庇うために前に出る。女が３人、男が１人。見て判る。強い、この４人。たぶんあたしじゃ勝てない。でもあたしはマイスターの従者だ。退くわけにはいかない。魔力を放つ本がマイスターの元へと降り立つ。魔法陣が消滅したと同時に火炎魔法を使おうとした。だけどその前にソイツらの１人が喋った。

†††Ｓｉｄｅアギト⇒？？？？†††

なんか小せぇ奴があたしらに向かって吠えてやがる。初めての経験だな。今まであたしらの起動を目の当たりにしたクズな連中なら喜んでいたのにさ。しかもなんか攻撃しようとかしてるし。あたしらのこと知らねぇのか、ひょっとして。

とりあえず馬鹿正直に攻撃を受けるわけにはいかねぇなと思っていたら、『反撃はするなよ、ヴィータ』ってあたしらの将から思念通話。チッ。判ってんよ。いちいちうるせぇな、うちの将様はよ。

「闇の書の起動を確認しました」

面倒くせぇ通例の語りが始まる。切り出したのは将のシグナムだ。すると小せぇ奴が「や、闇の書！？　あんた達が！？」って驚いた。名前だけは知ってたけど、どんなもんかは知らなかったみてぇだな。

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にてございます」

続くのはシャマル。あたしらの参謀だ。で、「夜天の主の下に集いし雲」次はザフィーラ。最後にこのあたしヴィータが「我らヴォル

ケンリッター。何なりとご命令を」と締める。
守護騎士ヴォルケンリッター。主の命に従って"闇の書"に魔力を蓄え、主に絶大な力を与えるためだけの存在。それがあたしらだ。これまで何度も繰り返してきた。絶対に逃れられない宿命だ。今回の主をチラッと見る。"アイツ"と同じ銀色の長い髪、蒼と紅の虹彩異色。男なんだろうけど、すげぇ美人だった。

（やっぱかなり驚いてやがんな。闇の書を知ってるか知らないか判んねぇけど、そりゃまぁ驚くよな）

目を見開いてあたしらを見る主。信じられないって面だ。主が無言のままだからか、シグナムが頭を上げて主へと「我らが主？」って声をかけた。主がシグナムに応える前に、部屋の外から勢いよく走ってくる音が聞こえてきた。そんですぐに扉がノックされる。

「オーディン先生、大遅刻ですよっ！」

扉が壊れるんじゃねぇかって思えるほど勢いよく開かれて、1人の女が顔を出した。橙色の長い髪をおさげにした女だ。オーディン。それが今回のあたしらの主の名前みてぇだ。その女はあたしらを見て完全に思考が止まっちまったみたいで、呆けた顔になっちまった。静まり返る部屋。あたしは『なあ？　どうすればいいんだ』って思念通話を送った。返ってきたのは、『とりあえず待機だ』のシグナムと、シャマルの『そうね。下手に会話に参加して話が拗れたら主に迷惑が掛かるわ』だ。つうわけで、片膝付いたままで主オーディンと女の会話を聞き続けることに。

「そ・・・そんな、オーディン先生が部屋に女の人を連れ込んでいるなんて。しかも年端もいかない幼女に加えてガチムチな男性まで・・・・！」

「え？・・・・・あ、いやいやいや。ち、違うぞモニカっ。彼女たちは――」

「彼女！？　今、彼女って言いましたっ？　しかも、達、って複数形！」

「そこに反応しない！　とりあえず話を聞いてくれ！」

「信じていたのに・・・・。とりあえずエリーゼに連絡を！」

「わあわあ！　ちょっと待った！　今エリーゼが参加すると絶対にややこしいことに――」

「モニカー？　オーディン先生とアギトちゃん、やっぱりまだ部屋に・・・・・え？」

さらに女のガキが現れた。ここで小っこい奴の名前がアギトって判った。短い金髪で、服はアギトとモニカっつうのと同じワンピースとエプロン姿。モニカっつうのが「聴いてルファっ。先生が部屋に女の人を連れ込んでた！」って、今現れた奴――ルファっつうのに詰め寄っていく。

「ルファっ、モニカもっ。今は落ち着いて話を聞いてくれ！」

今回の主は今までの主たちと全然違って、なんつうか馬鹿っぽい。でもまぁ"闇の書"に選ばれる程の資質を持ってんだから、それなりに凄いのかもしれねぇけど。

「オーディンさんが女の人を何人も部屋に連れ込んだってぇぇーーーーッッ！？」

そんな叫びと一緒にやってきたのもまた女のガキだった。茶色い長い髪を振り回して、悪魔みてぇな形相で部屋に入ってくる。主が「エリーゼ何でここに！？」ってうろたえる。なんか哀れになってきた。ルファっつうのが「思念通話で呼びました」って主に言う。それで主は「思念通話・・・その手があったか」って肩を落とした。

『なあ、いつまでこの姿勢でいなきゃダメなんだ？』

『主たちの話が決着するまでだろう』

『その間さ、姿勢崩しても良いか？　長くなりそうだし』

『駄目よヴィータちゃん。もう少し辛抱してちょうだい』

『・・・はぁ。へーい』

しゃあなしだな。こうなったらとことん待ってやるよ。意識をまた主たちの会話に向ける。

「正座してください、オーディンさん！　あとそこの人たちもそんな姿勢で居ないで正座！」

エリーゼっつうのがビシッと主と、あたしらにまで指差した。こういう場合はどうすりゃいいんだ？　シグナムに視線で尋ねる。シグナムもシャマルもザフィーラも小さく首を横に振るだけだ。

「なあエリーゼ。彼女たちは――」

「黙って下さい」

「はい」

主弱っ！　本当にどうすりゃいいんだ？と思っていたところに、『とりあえず今は彼女の言う通りにしてくれないか』って主からの思念通話。それにシグナム達が『了解しました、我らが主』って応えて正座をする。あたしも遅れて正座する。今まで絶対にこんな事なかったから調子狂うな。

「さあオーディンさんも正座ですっ！」

主も寝台の上で正座したら、

「ゆ・か・に！　床に決まってるじゃないですか！　なにベットの上で優雅に正座してるんですかっ！　ふかふかで気持ち良いですかっ！？」

ってメッチャ怒鳴られた。とりあえずこの場での位階は何となく判った。エリーゼっつうドレスを着たのが一番上だ。次に主だな。で、モニカとルファっつうのがその下だ。主のことを先生っつってるし。アギトってぇのは判らねぇけど、主と一緒なんだからそれなり？

「失礼するよ」

そんなことを考えてると、主があたしとシグナムの間で正座した。こんなに近くに主が来るのもまた初めてかもしれない。

「オーディンさんも殿方です。女性とお付き合いしたいというのは仕方ないとします。本当は嫌ですけどっ！・・あ、コホン。わたしの言いたい事はそうではなくてですね。その、お付き合いしたとしても、わたしの、ひぅ、屋敷に連れ込んで、ぅく・・うぅ」

あ、嗚咽が混じり始めた。右隣に座る主の肩がビクッと震えた。モニカとルファっつうのが「最低です」って主を冷めた目で見る。昔、あたしらにも向けられた目だ。これはいよいよ主の立場が最悪になりそうだな。

「ひっく、うっく、うわぁぁ～～～ん、オーディンさんの馬鹿ぁぁ～～～～っ！！」

ガキみてぇにわんわん泣き始めた。収拾がつくのかこれ？　とここで、「何があったのエリーっ！？」別の女が現れた。女ばっかだな。浅葱色の長髪を頭の片側で結んで、使用人服――のようだけど、ありゃ騎士甲冑（魔力の塊だって判る）だ。佇まいである程度判る。

コイツ、結構な腕を持ってんな。ま、あたしらに敵うわけねぇけど。

「・・・その方たちは一体どちら様ですか？」

「オーディン先生の愛人らしいです」

「違うと言っているだろうっ！」

「ほう。オーディンさんの愛人ですか。そうですか・・・」

「恐い――じゃなかった。アンナ、違う。みんな誤解している。今は話を聞いてくれ！」

主の必死の弁明だけど、今現れたアンナっつうのがギラッて睨んできた。でも今まで話を一切合切聴こうとしなかった連中とは違って、「聴きましょう」って腕を組んだ。それで他の奴らも落ち着き始めた。位階を改める。コイツが頭だ、絶対。主が「助かる」って心底安堵したように溜息を吐いた。

『君たちにお願いがある。ここからは私の話に合わせてくれ。頼む』

主からの頼み。命令じゃなくて、頼みだった。これもまた初めての経験だ。あたしらを代表してシグナムが『如何様にも』と答えると、『ありがとう、助かるよ』って礼を言われた。そんな言葉を掛けられたのはいつ以来だろう、全然憶えてねぇ。

「エリーゼ、モニカ、ルファ、それにアンナ。彼女たちは愛人では

ない。戦友だよ」

「「「「戦友・・・？」」」」

「そう、私の大切な戦友だ」

戦友。なんか知んねぇけど、胸の奥が熱くなった。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒オーディン†††

まさか"夜天の魔導書"が私の元へ転生して来るとは思いもしなかった。久しぶりに見る事の出来たシグナムとヴィータとシャマルとザフィーラ。その２つだけでも十分動揺してしまったのに、誤解によってモニカやルファに冷たい目で見られ、エリーゼを泣かせてしまってさらに動揺。

それだけで心がポッキリ折れそうだった。さらに、そこで登場したのが恐ろしい鬼（アンナ）だった。確実に心をへし折られることを覚悟して、しかし話を聴いてもらおうと説得してみると、聴いてもらえることになった。助かった。が、弁明の結果いかんによっては・・・・アンナに殺されるかもしれない。

「彼女たちは、私がベルカ（ここ）に来るまでに知り合っていた、共に戦った戦友なんだ」

"夜天の魔導書"――いや、現在（いま）はまだ"闇の書"か。"闇の書"に守護騎士ヴォルケンリッター。それはベルカの一部（正体を知る連中）に於いては畏怖の対象だったはずだ。だからかつての主に酷

い扱いをされていたと聞いている。城の地下に閉じ込められ、人間扱いされなかったなどなど。
エリーゼ達ならたとえシグナム達の正体を知ったとしても、おそらくそんな扱いはしないだろう。信じている。信じてはいるが、ここは正体を隠しておいた方がいいと思う、勝手だがな。それに、戦友と言うのはあながち嘘じゃない。私にとっては、と付くが。

「『君たちの名を教えてくれ』だから君たちが考えているような男女の仲じゃない」

『守護騎士ヴォルケンリッター、剣の騎士シグナムです。我らが主』

『同じく湖の騎士シャマルでございます』

『同じく盾の守護獣ザフィーラです』

『同じく鉄槌の騎士ヴィータです』

私は彼女たちの名を知っているが、この世界では初対面だ。だから私が彼女たちの名を言う前に、名を訊いて初めて知ったフリをしておかないとな。そして返ってきた自己紹介。シグナムやザフィーラの堅い口調、あぁ懐かしい。しかしシャマルとヴィータの口調には違和感しかない。はやてと出逢う前の守護騎士たちは、本当に感情の出が小さいんだな。

『シグナムに、シャマルに、ザフィーラに、ヴィータ、だな。判った。私はオーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード

だ。よろしく頼む』

『あ・・・はい、よろしくお願いします、我が主オーディン』

シグナムが呆けたような声で応じた。こういう自己紹介すらしたことがないのか。

「それは本当なんですか？　えっと・・・」

「髪を後ろで結っているのがシグナムで、短い髪の彼女がシャマル。彼がザフィーラ。で、最後のこの子がヴィータだ。全員が腕に憶えのある騎士だ」

名前を言い淀んだエリーゼにそう教える。そしてシャマルが「本当です。私たちは主オーディンの下で共に戦った戦友です」とエリーゼの疑問に答えた。その返答に対してモニカが「主オーディン？　オーディン先生との関係は単なる戦友だけ？」と小首を傾げる。もうこの娘は、もうっ！　頭を掻き毟りたい。とりあえず誤魔化しを、と思っていたら、

「無論だ。我らは主オーディンに剣を預けた身。ゆえに主オーディンを我らが主と言っても過言ではない」

シグナムのフォロー。心の内で、感謝に頭を下げる。

「ではオーディンさん。なぜその戦友である彼女たちがここに居るのですか？　この戦乱の時代に於いて、世界を渡る術など早々あり

ません」

「ん？　あぁそれなら私と同じだよ。単独の世界間転移だ」

単独の次元転送魔法。ベルカ式の一般的魔法ではなく、守護騎士プログラムの特殊魔法だ。すでに私という異物がベルカに現れているため、アンナは「そうですか」とすぐに引いてくれた。そして、アンナの問いに含まれていたもう一つの疑問への返答を告げる。おそらくそれが、エリーゼ達の一番に知りたいことだろうからな。

「それから、死神騎士団を潰してから今日までに三度もラキシュ領へ侵攻を掛けてくるイリュリアへ対抗するために呼んだんだ」

完っっ全な嘘。でもそろそろ安定した助力が欲しいと思っているのは事実だ。この半年間に三度も国境を攻め込まれた。その都度、クラウスが手配した新しい国境警備騎士団と一緒に潰している（とは言っても、空からの私独りによる殲滅が九割）んだが、少々苦しくなってきた。

そして、その三度のうちの一戦の最中に、エリーゼ達には言っていないが記憶を1つ失っている。何を、そして誰を忘れたのかは判らないが、頭痛と胸痛を起こした記憶と喪失感を得た事だけはハッキリ憶えている。だから私と同じように陸空両面での協力者が欲しかった。それがまさかシグナム達ヴォルケンリッターになるとはな。世の中判らないものだ。

『イリュリア・・・。我が主オーディン。今、イリュリアと申しましたか？』

『シャマル？　ああ、いま私たちの居るアムルと言う街は、イリュリアの国境近くでね。だからかよくちょっかいを掛けてくるんだよ。そして私が迎撃に当たっているんだ』

シャマルの念話にそう答える。イリュリアと守護騎士の関係は・・・知らないな。まぁイリュリアはかなり古い歴史を持つ国と教えてもらったから、"夜天の魔導書"が知っていてもおかしくないだろう。とここで『主オーディンはイリュリアと戦ってるって事ですか？』とヴィータが訊いてきた。

ヴィータが敬語・・・。駄目だ、鳥肌が立った。あとで敬語を直すように言おう。とりあえず『そうだ。君たちはイリュリアと何か因縁でもあるのか？』と訊き返す。答えたのは『はい、少しばかり』シグナムだった。

「そうだったんだ・・・よかったぁ。そっか、戦友かぁ・・・」

「私は信じてたよ。オーディン先生のこと」

「嘘を言わないモニカ。真っ先に疑ってたのはモニカでしょ」

「全員が疑ってかかってわよ、オーディンさんのこと」

エリーゼ達が肩を寄せ合って反省会を開き始めた。誤解が解ければいいんだ、本当に、うん。でも最後に「けど、どうして黙っていたんですか、彼女たちを呼ぶことを？」というエリーゼの問い。私は「確実に来てくれる保証が無かったからだ」と即答。本当に偶然だ

しな。

「そうだ、エリーゼ。半年前に私が運ばれたあの別宅を使わせてもらっていいか？」

「あの別宅を、ですか？　修復も終わってますからいつでも入れますけど・・・どうしてですか？」

「仲間が増えたからな。これ以上君やアンナに世話になるのも申し訳ない。だから私たちはあの空き家へ引っ越すことにするよ。あ、でも医院の方はこのまま残し――」

「ダメですッ！！」

「てくれると・・・・？」

エリーゼが大声で反対してきた。私だけでなくアギトとアンナ、それにモニカとルファもビクッとなる。肩を震わすエリーゼに「えっと、それは別宅を使ってはいけないってことか？」と尋ねる。すると「そうではありませんっ。屋敷に残れば良いじゃないですかっ。４人くらい増えても問題ないですっ！」と詰め寄ってきた。

空き家を使うことに反対するのではなく、引っ越すことに反対だったわけだ。だがすでに私とアギトの２人をほぼ食客（一応働いてお金を入れているが）を受け入れてもらっているのに、さらにシグナム達を住まわせてくれ、と言うのも気が引けた。

「いいですか。これは、アムルの長であるエリーゼ・フォン・シュ

テルンベルクの名に於いての命令ですっ。オーディンさんとアギト、そしてシグナムさん達はこの屋敷で一緒に暮らすことっ、拒否権は無しですっ！」

そこまでハッキリと言われてしまってはもうどうしようもなく。私は「これからも世話になるよ、エリーゼ」と握手を求めると、エリーゼも「どんと頼って下さい♪」と応じてくれた。あと、「間違いがあったら困るし、監視の意味も込めて残ってもらわないと」って呟いたような気がしたが、上手く聞き取れなかったから自信は無い。

「それではまず、シグナムさん達の服装からどうにかしないといけないよね・・・。暖かいとは言えそんな薄着ではダメです。アンナ、モニカ、ルファ」

「ええ、判ったわ」「はいっす～　」「うん、判った」

エリーゼが指を鳴らすと、アンナとモニカとルファの目が光った、ように見えた。そして正座したままのシグナム達（私もだが）に歩み寄って行く。「シグナム達をどうするんだ？」と訊くと、エリーゼは「もちろん服を見繕うんです」と胸を張った。それは良い。生活を始めるにはまず服からだな。女性の服は同性に任せるべきだ。

「それは助かるよ。私がお金を出すから少し待ってくれ」

立ち上がって、財布のしまってある執務机へ向かおうとした。しかし「えへへ、これはわたしからの贈り物ですよ～　」とかなり上機嫌なエリーゼが止めてきた。

（うん？　今回のどこに良い事があったんだ？）

小首を傾げていると、『あの、主オーディン、我々はどうすれば・・・？』とシグナムから困惑に満ちた念話が来た。見れば、全員が戸惑っている様子だ。ヴィータなんかアンナに丁寧に髪を触られて、どうすればいいのか判らずビクビクしている。

『そうだな。君たちのことや私のことは後でゆっくり話そう。だから今は彼女たちに従って、服を選んでもらっておいで』

『服を、ですか？　しかし我らにそんな物――』

『拒否権は無いぞシグナム。これから共に過ごすんだ。日常生活を送るためには服は必要だろう？　まさかその薄着だけで十分とか思っていないだろうな？』

『あの、本当によろしいのでしょうか？　私たちヴォルケンリッターは人では――』

『シャマル、拒否権は無いと私は言ったぞ。いいから今は素直に従ってくれ。せっかくの美人なんだから、着飾らないともったいないぞ』

『え？・・・あ、ありがとうございます・・・』

シグナムとシャマルが美人だというのは以前から思っていた事だ。

ヴィータは生意気だが可愛らしいし、ザフィーラは男前だ。あ、そう言えばザフィーラは服を着るのがあまり好きではなかったよな。ザフィーラを見ると、ルファに耳や尾をいじられていた。一見無表情だが、困っているなあれは。まずは『ザフィーラ。君は服はどうする？　その耳と尾は飾りじゃないんだろ？』と確認を取る。

『はい、我が主。我は守護獣です。出来れば服飾など無く、守護の獣――狼の形態で過ごしたいと』

「『判った』すまない、ルファ。彼は守護獣と謳われる者で、普段は――と言うより本来は狼の姿なんだ」

「「「「へ？」」」」

エリーゼ達の視線が一度私に集中する。アンナですら呆けているな。その間に、ザフィーラの姿が狼の姿へと変わった。ザフィーラへと視線を戻したモニカが「おおっ、本当に狼になった！　すごいすごい！」と駆け寄って、ザフィーラに抱きついた。

「もふもふだぁ～　・・・・ｚｚｚ」

「寝たっ！？　ちょっとモニカ、寝ちゃダメだって！」

「んにゃぁ～、寝てないよぉ～」

モニカはエリーゼにそう言ってザフィーラから離れ、「強敵だった～」と額を袖で拭った。彼女は一体なにと戦っていたんだろう。あ

ぁ眠気と戦っていたのか・・・？　ザフィーラはただ無言で佇むだけだ。やはり表情がサッパリ読めない。

『気を悪くしたのならすまん、ザフィーラ。彼女は悪気はないんだ』

『いえ、今の気持ちを何と申せばよいのか判らぬのですが、気を悪くしていないことには間違いありません』

初めての体験だからか、感情が追いつかず戸惑っているのかもしれないな。ザフィーラの元へと歩み寄り、フサフサの頭を撫でる。人間形態時では考えられないな。近くに居たヴィータの頭も髪を乱さないように撫でると、ヴィータは当惑の目を向けてきた。おお、手を払われない。

「じゃあエリーゼ、アンナ、モニカ、ルファ。シグナムとシャマルとヴィータを頼むぞ」

「はいっ。それではこちらへどうぞ～♪」

エリーゼ達とシグナム達を見送る。最後までヴィータは困った顔してたな。ベッドの上に置いておいた、悲しみに満ちている"夜天の魔導書"を手に取る。私が解放するわけにはいかない。そう、"夜天の魔導書"を解放するのは、私ではなくはやての役目だからだ。

「ザフィーラ」

「はい、我が主」

「若輩の身だが、これからよろしく頼む」

それまでは、出来るだけ守護騎士たちのその悲しみを和らげていきたい。それが今代の主である私の役目だと思うから。

Ｍｙｔｈ５－Ａアムルの守護騎士団～Ｇｌａｕｂｅｎ　ＯｒｄｅＮ～

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

（何故こうなってしまったのだろう・・・？）

我々守護騎士一同（ザフィーラは居ないが）は、服飾品の多く並ぶ店に訪れていた。主オーディンらに我らの衣服を買うように言われ、こうして居るのだが・・・私はこういった経験が無いため、何が出来るわけでもなく佇んでいる。

今まで我々が仕えてきた主とは全く違う雰囲気を持つ今回の主、名をオーディン。我ら"闇の書"の管制人格（アレ）と同じ銀の髪をした青年は、一言で言い表すなら真っ先に、不思議もしくは謎、だろう。今までの主は、決して如何なる者にも屈することのない強大な権力と力を持っていた。一国の王であったり、領主であったり。しかし今回の主はそのどちらもでない。

「シグナムさん。なにか要望とかあります？　どういう服が好みで、こういう服が着たい、とか」

「え？　いえ。特にそう言った物は・・・」

いま私に要望を訊いてきた少女、エリーゼ卿（男爵位をお持ちとのことだ）がこの街（アムルと言っていたか）の主であり、我らが主オーディンはこの街の医者だそうだ。医者が"闇の書"の主になる

というのは初めてで、しかも我々に対する接し方もこれまでの主と違って、高圧的ではない随分と優しいものだ。
"闇の書"を知っているか否かは判らないが、すでに名乗りと転生・起動時の場面に居合わせたことで我々が普通ではないことくらい理解しているはず。だというのにあの態度。我ながら戸惑ってしまうのも仕方ないと思っている。

『しかし、シャマル。お前はもう馴染んでいるな』

ルファという少女（主オーディンの看護助手との事だ）と、我ら守護騎士の参謀であるシャマルが様々な服を手にとって体に当てていた。私の思念通話にシャマルは『だって初めてなんだもの。こんなに普通の扱いを受けるの』と少しばかり悲嘆の入った声色で返してきた。
これまでの主の我らに対する扱いを思い出す。確かに酷いものだったと思う。中には主以外の者が良くしてくれた事もあったが、それはごく少数でしかなかった。しかし我らが人間ではないのもまた事実。故に仕方ない処遇だとも思っている。

「シグナムさんはスタイルが良いから、なに着ても似合いますよね。むぅ、羨ましい。オーディンさんはやっぱりわたしのような子供体型よりシグナムさんのような・・・ダメダメ、そんなこと考えちゃ」

エリーゼ卿はそう独り言を漏らしつつ、私の衣服を選んでくれている。それを横目に、今度はヴィータへと目をやる。ルファと同じ主オーディンの助手たるモニカという少女に揉みくちゃにされていた。編んでいた髪を解かれ、櫛で梳かれては別の髪型へと結われ、その

繰り返しの中で「オーディン先生は、ヴィータちゃん達のこと強い騎士って言ってたけど、ホント？」と訊かれていた。
ヴィータはそれに対し「あ、当たり前だろっ。あたしらは最強だっ」と雑な口調で答えた。モニカはヴィータを抱え上げ、「くはぁ、雑な口調がまた可愛い～　」とクルクルとその場で回り始めた。

「や、やめろよ。あたしがこんなんで喜ぶガキじゃねぇんだぞっ」

「いいよいいよ～、さっき言ったように敬語にならなくて～♪」

我々は先程ルファとモニカに、敬語は必要ない、と言われた。ゆえにヴィータはすでに実行している。しかし私はやはり何者かに仕える守護騎士の将として確りしなければならないため、そう容易に口調を崩すことは出来ん。

「ちょっとモニカ。遊んでないできちんと選んであげてよ～」

「判ってるよぉ～。ヴィータちゃんは可愛い娘だからねぇ、目移りしちゃんだよ～」

ルファに叱られるも、モニカは変わらずヴィータから離れようとしない。少しばかり鬱陶しく思っているような顔をしているが、力づくで逃れようとしないところをみると、ヴィータとて心底嫌がっているわけではないようだ。改めてエリーゼ卿に視線を戻そうとしたところで、この店の店主である若い女性が私の元へ歩いて来た。

「はじめまして。私、この店シュテルネンリヒトの店主ターニャっ

て言います♪　今後新しい御洋服をお求めの際は、シュテルネンリヒトを御贔屓にお願いします。では本題。ねえ、あなた達、見ない顔だけど、エリーゼちゃん達とはどんな関係なの？」

お辞儀でもして無言を貫こうと思えば出来るような気もするが、愛想がなく付き合いも悪いという事で主オーディンの評判を悪くするのもまずい。

「はい、はじめまして。私はシグナムと言います。エリーゼ卿と――というよりは、我々は主オーディンの知人です」

「オーディンさんの？　へぇ～ほぉ～。ムフフ♪　エリーゼちゃ～～ん。もしかして大ピンチなんじゃないの？　色々とさ～」

「ふえっ？　な、何を言い出すのかなぁターニャさんは？　あはは～」

「嘘つくの下手過ぎ～♪」

はしゃぎ合う2人をしばらく眺め、シャマルが「本当ですかっ？」と驚いた声を上げた。そちらに視線を移すとシャマルと目が合い、シャマルが3着の服を手に「主オーディンがデザインした服なんですって」と見せてきた。そうなのか。此度の主は本当に不思議なお方だ。医者でありデザイナーでもあるとは。

「オーディン先生は医者とは別に服のデザイナーもしているんです。その売り上げの一部は、お世話になっているという事でシュテルン

ベルク家に収めていて、残りは戦災で苦しむ街の支援の為に使っているんです。この半年間、オーディン先生は少しでもシュトゥラの為になればと頑張ってきて、今ではシュトゥラの有名人です」

「半年間・・・？」

「はい。オーディン先生は半年前にここベルカを訪れたんです。詳しいことは私が勝手に言うことは出来ませんので、ごめんなさい」

半年前にベルカを訪れた？　主オーディンはベルカの人間ではないのか。通りで我々の事を恐れないはずだ。なにせ"闇の書"を知るのは、ベルカに住まう人間が大半だからだ。"闇の書"の転生場所は基本ランダムで、ベルカ以外の世界に転生する場合も少なからずある。しかし確率的にはベルカ内で転生するのが高い。そして主オーディンはベルカ人ではない。

（だから闇の書の事を知らなくともおかしな話ではない、か）

まぁベルカ人であろうと"闇の書"を知らない者も居るから、この考えはさほど意味はないが。

『驚いたわね。この戦乱の世であるベルカにわざわざ訪れるなんて。主オーディンは一体どのような目的でベルカに来たのかしら？』

『詮索するな、シャマル。どのような目的であろうと主オーディンは良き行いをし、この国に貢献している。今はそれで良いではないか』

『・・・そう、ね。ええ、判ったわ』

再び服を選ぶためにシャマルがルファと共に踵を返した時、店の外からリィーンゴォーン♪と鐘の音が連続で聞こえてきた。直後、店内を包んでいた柔らかな空気が凍りついたかと錯覚するほど張りつめた。店の奥に居た女店主ターニャ殿が「エリーゼちゃん！」と切羽詰まった顔でエリーゼ卿を呼ぶ。エリーゼ卿とルファもそうだが、一番はしゃいでいたモニカの表情すらも険しくなる。

（なんだ、一体何が起きている？　この張りつめた空気はどういうことだ？）

「シグナムさんっ、シャマルさんっ、ヴィータちゃんっ」

エリーゼ卿が我々の名を呼び、「お願いしますっ」と頭を下げた。お願いします、とは一体どういうことなのだろうか。何をお願いされているのかが判らない。訊き返そうにもそうすることで主オーディンと我々の関係に疑念を与えてしまうかもしれないと危惧してしまう。それゆえに訊き返すことに躊躇いを覚えていると、「お願いしますってどういうことだ・・・？」とヴィータが気にするようなこともなく尋ねた。

「え？　どういうことって・・・、皆さんはオーディンさんの助けになるために来たんですよね？」

するとエリーゼ卿は呆けてしまった。一応はそういう話に合わせる

よう、主オーディンに頼まれていたが。さらにシャマルが「・・・・はい、そうですけど。それが何か・・・？」と訊き返す。

「・・・もしかしてこの鐘の音のこと、オーディン先生から聞いてないんじゃ・・・」

「あっ、そうか！　実は――」

エリーゼ卿から伝えられた鐘の音の真実。ここアムルの街が、隣国イリュリアからの侵攻を報せるためのものだそうだ。イリュリア。かつての"闇の書"の主の中に、その国のとある領地を治めていた者もいた。

その主がどういう末路を辿ったかは憶えてはいないが、確かに我ら守護騎士はイリュリアの一戦力として存在していた時期がある。そして今度は敵対するという事だ。とは言え、迷う事などない。現在の我らは、主オーディンの下に集いし騎士なのだから。

「そういうことでしたか。判りました、すぐに主オーディンと合流します。シャマル、ヴィータ、急いで戻るぞ」

「え？　でも、・・・・判ったわ。ヴィータちゃん」

「言われなくても判ってんよ」

主オーディンと合流するために店の外に出る。シャマルは少しばかり迷った様子だった。理由は判る。今の状態では我々は戦力にはならない。だからこそすぐに主オーディンと合流し、我らが戦力とな

るために"ある事"をしてもらわなければ。私に続いて出て来たシャマルとヴィータに一度視線を送り、頷き合う。屋敷への帰路を走りながら、主オーディンと共に居るザフィーラに思念通話を通す。

『ザフィーラ。主オーディンはどうなさっている？』

『シグナムか。主らと我は上だ』

そう返答を受ける。上を見上げると、確かにザフィーラとアギトという名の――おそらく融合騎であろう小さき少女と、そして我らが主オーディンが居られた。

膝下まで伸びる黒い長衣。丈の長い黒い外套。黒のズボン。黒の編み上げブーツという、銀色の髪が良く映える騎士甲冑姿。それ以上に私が見惚れてしまったのが、背より展開されている剣のような蒼い12枚の翼。見詰めていると、吸い込まれそうな錯覚を得てしまうほどに輝いていた。

「すごい、綺麗・・・」

シャマルがうわ言のように呟いた。私も呆けてしまったが、すぐさま地上に降り立った主オーディンに、「これよりイリュリアの騎士団と一戦を交えに行かれるのですね」と確認を取る。主オーディンは「この街を守るの私の役目だからな」と即答し、視線をはるか遠くへと向けた。おそらくその視線の先が戦場となるところなのだろう。ならば言うことは決まっている。

「主オーディン。我ら、御身に仕えし守護騎士。戦場へと赴くなら

ば、我らも共に」

主オーディンを前に我々は片膝を付く。すると主オーディンも我々と同じように片膝を付いて、先頭に居る私に右手を差し伸ばしてきた。どうすれば良いのか判らず手を取っていいのか迷うだけだったが、戻さないところを見ると取るのが良いのだと判断し、主オーディンの右手を取る。

外見は中性的だが、やはり確かなる男性としての硬さのある手。グッと手を引かれ、立ち上がらされる。私に続き、シャマル、そしてヴィータと手を引かれ立ち上がる。

「助かるよ。味方の大騎士団もいるが、空戦が出来る騎士が少ないんだ。君たちは空戦が出来るとザフィーラに確認した。アムルを守るために私と共に戦ってくれ、守護騎士ヴォルケンリッターー」

「「「「了解（ヤヴォール）！」」」」

胸の内に広がるこの思い・・・。嬉しさ、というのだろうか。主と共に戦えるという事が、守るために戦うという事が・・・何よりも嬉しい。だが先程のシャマルとの話が頭の隅を過る。まったく、シャマルには困ったものだ。私まで気になってしまったではないか。主オーディンの目的が何なのか・・・。いや、目的がどうであれ、我らの主である事には変わりない。だから気にするな。

「マイスターっ、あたしだって居るんだからねっ！」

主オーディンと似たデザインの赤い長衣・膝丈までのゆったりとし

た黒いズボンという騎士甲冑に身を包んでいるアギトが、そう主張しながら私へと飛んできた。しかし何故わざわざ私の顔の前に来るんだ？　主オーディンが見えんではないか。

「あはは、判っているよアギト。頼りにしている」

「どんと頼っていいよマイスターっ♪」

頭を撫でられたことで満足したのかアギトは私の眼前から離れ、主オーディンの肩に降り立った。主オーディンが「なら急ごう。連中は待っていてくれないから」と再び空へ上がろうとする。いけない。このままでは我らは役に立ちようがない。急いで止めなければと口を開こうとしたところで、「あ、あの主オーディン、お待ちください！」とシャマルが先に主オーディンを呼び止めた。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒オーディン†††

「――そういうわけで、私たちは武器は持っていますけど、甲冑に関してはその都度主に賜らなければなりません」

「イメージをしていただければ、あとは我々自身が魔力で構成します」

シャマルとシグナムから告げられたのは、守護騎士の騎士甲冑は私がデザインしなければならない、ということだった。そう言えばそうだったか。しかし今から騎士甲冑のデザインを考えている暇はない。すでにイリュリアの騎士団は動いている。仕方ない。本当に仕

方ない。どうしようもなく仕方ない。
すまん、はやて。そう心の内で土下座して、これよりずっと未来に於いてシグナムたち守護騎士が着ていた騎士甲冑をイメージする。
"闇の書"を介して、私のイメージが守護騎士に伝わる。あ、そう言えば持ってくるの忘れた。取りに行かないといけないな。

「騎士甲冑、確かに賜りました。ヴィータ、シャマル、ザフィーラ」

「おうっ」「ええ」「ああ」

シグナムとシャマルとヴィータの3人は、首にかけていた待機状態のデバイスを手に取って起動した。それを合図としたかのように彼女たちの足元に深紫色の魔法陣が展開される。"闇の書"起動時に現れた六方に円のある六茫星型のベルカ魔法陣。
続けてそれぞれの足元から発せられる魔力光。シグナムはラベンダー、シャマルはミントグリーン、ヴィータは赤、ザフィーラはライトペリウィンクル。黒のアンダーから騎士甲冑へと変わっていき、私の知る見慣れた騎士姿となった。

「準備はいいな。では行くぞ――っと」

いきなり目の前に転移してきた"夜天の魔導書"に少しばかり驚いた。シャマルが「あら、闇の書が・・・」"夜天の書"に手を伸ばし、「主オーディン。戦場へ赴くならば闇の書も共に」と私に差し出してきた。私が受け取るのを見たシグナムが「主オーディン。行き道で闇の書に関してお話しいたします」と言ってくれるが、すまないが知っているよ、それはもう全部な。

とりあえず「頼むよ」と返し、戦場である国境へと向かうために空へと上がる。とそこに「オーディンさ～ん！　アギト～！」と、私とアギトを呼ぶ声。地上を見下ろせば、エリーゼを始めとした街のみんなが手を振っていた。出撃前の恒例の見送りだ。エリーゼ達に「行ってくるよ」と手を振り返し、「君たちも振り返してあげてくれ」と彼女たちに言う。

「ヴィータちゃん、頑張ってねっ！」

「いってらっしゃい、シグナムさんっ、シャマルさんっ、ヴィータちゃんっ、ザフィーラさんっ」

「みなさん、お気をつけてっ」

モニカは両腕をブンブン振ってヴィータにエールを送り、ルファはご丁寧に全員の名を言って手を振って、アンナは手を振ることなくお辞儀。

あと「誰、あの美人！？」「えっ？　オーディンさんの恋人？」「なにぃ？　エリーゼちゃんに慕われているのに恋人が居るだとぉ？」「ママ、あの男の人、お耳と尻尾があるよ」「ええ、そうね。格好いいわね　」「母さん・・・後で話を――」「先生っ、その金髪の女性、あとで紹介してくれ！」「じゃあ俺には、髪の長い人を紹介してくれっ！」だとか色々と騒がしい。

そんな街の人たちに見送りに呆けていた彼女たちも、

「い、行ってきます」

「行ってきま～すっ」

「おうっ、しっかりあたしらが守ってやるかんなっ！」

ザフィーラは無言で頷くだけだったが。シグナムもシャマルもヴィータもザフィーラもどこか嬉しそうだった。私が主で居る間、少しでも良い思い出が彼女たちの心に刻まれると良いな。それに、もちろん"彼女"にも早々に目を覚ましてもらい、共に同じ時間を過ごしたいものだ。

「じゃあ行こう。敵は待っていてくれない」

そうして私たちは街のみんなに見送られながら空を翔け、戦場へと向かう。その道中、先程の話の続きをすることに。そう、"夜天の書"のことについて、だ。

「――闇の書は、魔力を持つ者の内に在る魔力の核を蒐集し、６６６頁を埋める事で、主に莫大な"力"が与えられることになります。それこそ一国を支配できるほどに」

「一国を支配する、か。私にとっては興味も何も無い。私の願いは何かを支配する事じゃなく、守りたいモノを守り、救いたいモノを救う、その一点のみ」

「本当にいいのですか？　主オーディン。医者なんかじゃなくて王様になれるかもしれないのに・・・？」

ヴィータの敬語に、またもブルッと寒気が。いかん、これは早々に直さないと――とは思うが、今は"夜天の書"の説明を最後まで聴こう。

「私に国を治める資格なんて無いんだよ。今はたださっき言った通りの事が出来ればいい」

「守りたいモノを守り、救いたいモノを救う、ですか。あの、主オーディン。無礼を承知で一つお聞きしたい事があるのですがよろしいでしょうか」

シャマルが申し訳なさそうな顔で、質問することへの許可を取ってきた。すると「シャマル！」とシグナムが声を荒げて、シャマルを制止しようとした。シャマルは「ごめんなさい、シグナム」と謝ったあとに私の目を見て、すぐに逸らした。私が居ない間に何かあったのだろうか。とりあえず「構わないよ」と返す。シャマルは意を決したかのようにまた私の目を見て、尋ねてきた。

「主オーディンはどうしてベルカを訪れたのでしょうか・・・？申し訳ありません。ルファに聞きました。ですが詳細は聞いておりません」

「私がベルカを訪れたのは、ある存在を破壊するため。名はエグリゴリ。私の先祖が生み出した人型の戦術兵器だ。暴走している奴らをベルカで発見したという情報が仲間から入った。報告に従って、私はベルカを訪れたんだ。何故シュトゥラのアムルに居るかはあとで話そう」

洗脳され暴走しているとは言え、それでも大切な子供たち(ヴァルキリー)を兵器呼ばわりするのは心が痛むが、私とシェフィが創り出した子供だと説明するわけにもいかない。魔術師の時代も"アンスール"の時代も大戦の時代も、すでに遥かに遠き古き過去。この時代に引っ張ってくる必要のないものだ。だから真実は話さない。

「そうでしたか。お話ししてくださってありがとうございました。その、主オーディン。この無礼への罰は如何様にも。如何なる罰も受ける次第です」

「気にしないでいいよ、シャマル。この戦乱の世に好き好んで訪れる奴なんて普通いないから怪しく思うよな。その疑問を持つのも当然だ。だからお咎めは無し」

そう微笑みかけると、シャマルは少し呆けた後にホッと安堵を顔に浮かべた。しかしシグナムに頭を叩かれ、「痛っ？」と痛みに顔を歪めることに。

「今の無礼、主オーディンでなければ首を刎ねられていてもおかしくないぞ、馬鹿者」

「だって・・・。でも良かったです。主オーディンはやはり今までの主とは違うんですね・・・」

シャマルが過去を思い出しているのか悲しげに目を伏せた。私は右隣を飛行するシャマルの肩をポンと叩き、「この誓いは死ぬまで変

わらない。だから安心してくれ」と言う。"界律の守護神テスタメント"時ならそんな温く甘い言葉は吐けないが、今は魔術師として存在を許されている。
だからその誓いを貫ける。だがその誓いの裏には、逃れられない闇があるのもまた事実。場合によっては、守るために、救うために誰かを殺さなければならないという闇。それらを背負ってでも私は誓いを胸に前へと進むだけだ。恨むなら恨め、憎むなら憎め。それらを背負う覚悟も決意も、すでに1万数千年も前からある。シャマルは綺麗な笑みで浮かべ、「はいっ」と頷いた。

「では主オーディン。闇の書の蒐集はどうなさいますか？」

「蒐集する事で、他に何かメリットはあるか？」

私が引き出したい情報は、管制人格である"彼女"の事だ。だが"夜天の書"を知らないというスタンスを取る私がそれを求めるのもおかしい。だから彼女たちが話してくれるのを待つしかない。
当然そんな私の思惑を知らないシグナムだったが、「主オーディンは、戦力が増えるのを良しとしていますか？」と訊いてきた。この流れは"彼女"に直結するものだと思い、「君たちを戦いの道具と思わせるようで悪いが、出来ればあった方が良い」と答える。

「いえ、そのような事は思いません。主オーディンの誓いが偽りでない事は解ります。それに、たとえ戦いの道具と見てもらっても我々は構いません。事実、今までそうでしたから」

「ええ。ですから、そう不安そうなお顔をしないでください」

「む？　不安そうな顔をしていたか？　そういう君たちも不安そうな顔をしているよ。良い機会だから言っておこう。君たちを戦いの道具とは絶対に思わない。戦場では共に戦う戦友として、日常では共に過ごす家族として、私は接するつもりだ。
この考えもまた決して変わらない。だから、家族の1人としてお願いがある。まず第一に、名前の前に"主"を付けない。第二に、私に対して敬語は要らない。特にヴィータ、君だ。君の素直な口調で構わない。私に対して無理して敬語は使わないでいいんだ」

名指しされたヴィータが「え？　あ、はい――じゃなくて、うん。これでいいの？　オーディン」と早速直した。はぁ、それだよそれ。だから「ああ、それでいいよ。でも、他の大人には一応敬語な」と頷く。
そうだとも。私に対して気の遣った敬語なんて有り得ない。それがヴィータなら尚更。シャマルも困惑しながらだが、「では、えっと、オーディン・・・さん。ごめんなさい、さん付けだけは許して下さい」と、まぁ及第だな。しかし予想はしていたが・・・

「歴代の主に対してこの口調が長く、我は直せそうにありません、我が主オーディン」

「ザフィーラ、なんも変ってね～。オーディンのお願いなんだぞ」

「ヴィータちゃんはすっかり出来あがっちゃったわね。ザフィーラはもうそれで固定かしら」

「主オーディン。さすがに敬語を改めさせるのは、主に失礼が過ぎるのでは？」

「いや、それでいいよ。自然が一番だ。君も、シャマル達と接するような気楽さで私と接してくれていいんだ。それが私の願いだしな。主を付けられると、どこか主従の壁を感じてしまうんだ、気にし過ぎかもしれないが。敬語に関しては私の我が儘だから、ヴィータ以外には強制しないが。しかし、主、に関しては切に願うよ」

「ある――いえ、判りました、オーディン」

シグナムも敬語はやめないが、主を付けなくなった。今はこうだが、付き合いが長くなれば追々変わっていけるだろう。さて、さっきの話の続きに入ろうとしたところで、頬をプクッと膨らませてむくれているアギトが視界に入った。

「アギト？　どうかしたか」

そう訊いてもむくれたままで、プイッと顔を逸らされた。試しにもう一度名を呼んでも無視だった。仕方なく、その膨らんだ小さな頬を人差し指で突く。すると「ぶふぅ」と口から息が漏れだす。何故か知らないがすっごい睨まれた。

「一体どうしたというんだ？」

戦場はもう近い。"彼女"の話も聞きたかったが、それは戦いながらにでもしよう。しかしアギトがこの状態での戦闘は避けたい。生

死の関わる戦場では少しの油断が命取りだ。だから何故むくれているのかの原因を突き止め、解決しなければアギトどころか共に戦うみんなの命が危ない。

「なあアギト。話してくれ、私に何か非があったのなら謝る。だから教えてくれ」

「・・・マイスター、ずっと守護騎士たちと話してばっかで、あたしのこと忘れてるんじゃないかって」

アギトはどうやら仲間外れにされたと思っていたようだ。少しばかりアギトを放っていたのも確かだから強くは言えないが。

「馬鹿だなぁ。そんなわけがないだろ。アギトは大切な家族なのだから。だけどな、言わばアギトは私の家族としての先輩なんだから、もう少し辛抱してくれ」

「先輩・・・。先輩かぁ。うん、判ったよマイスターっ♪　あたし、先輩として恥ずかしくないようにするっ」

「ああ、頑張ってくれアギト先輩」

アギトは満足したようで笑みを浮かべる。それを見て、私とシグナムとシャマルは顔を見合わせて微苦笑。ヴィータは「この小せぇのが先輩？　あたしらの方がずっと年上じゃねぇか」とアギトの小さな頭をグリグリ撫で回す。それに対してアギトは「や、やめろよ、歳なんか関係ないもんっ。マイスターの家族として上か下の方が重

要なんだっ」と小さな体を活かしてヴィータの手から逃れて、舌をべーと出す。

「フフ、ヴィータちゃん、楽しそう」

「シグナム。さっきの話の続きだが、よければ戦闘中にでも頼む」

「判りました。そちらの方が都合が良いかもしれませんし」

見えてきたのは、森に囲まれた平原の中での数百人という騎士が入り乱れた戦場だった。ひとつは国境防衛のシュトゥラ側の騎士団。重そうな白い甲冑を着た騎士団だ。そしてもうひとつが、まるで迷彩服のような柄が描かれた軽甲冑を纏った騎士団だった。あれは森に入られたらアウトだな。柄もそうだが軽甲冑ゆえに動きが速く、得物も小回りの利く短めの物ばかりだ。

「各騎、これより戦闘を開始する。味方は白い甲冑を着た騎士団だから、間違って討たないようにな。敵性騎士団に関してだが、見ての通り相当やる。味方の援護は可能なら頼む。では私が戦場の中心に一撃を落とし、一時的に注意を逸らさせる。それを合図に降下開始。接敵後、各騎の自己判断で敵性騎士を薙ぎ払え」

「「「「「了解（ヤヴォール）！！」」」」」

防衛騎士団は私の空からの奇襲に慣れているため驚きはしないだろうが、敵はそうはいかないはずだ。情報で知ってはいても実際に見た事がなければ必ず動きを止める。そこが狙い目だ。左手を掲げ、

風を集めて一振りの蒼き風槍と成す。結構キツイから根性をみせろ、防衛騎士団。

――巻き起こせ、汝の旋風（アムブリエル）――

地上に向けて投擲。一直線に進み、ズドンッと地面に着弾。予想通り敵性騎士団は動きを止め、防衛騎士団は一斉に戦っていた騎士を弾き飛ばしてアムブリエルの槍から離れ、得物を地面に突き刺し体を固定。その直後、アムブリエルが爆ぜて全てを薙ぎ払う暴風となり、敵性騎士団を吹き飛ばす。戦闘開始のゴングが鳴った。

すぐさま「降下！！」と号令を出す。アギトと守護騎士が戦場へと降り立つ。並の騎士では決して勝つ事の出来ない、優秀な騎士たちが。私も地上へと降り立ち、防衛騎士団の団長に「団長、すまない。遅れてしまった」と声を掛ける。

「いえ、来て下さっただけでも十分です。それにしても騎士オーディン。貴方は相変わらずとんでもないお方だ」

さっきのアムブリエルの一撃を含め、これまでに共闘した三度の戦闘のことを言っているんだろう。

「褒め言葉だと受け取っておくよ、団長。それはそうと連中はどういった騎士団なのか、情報を貰えるか」

「はい。敵はイリュリアの上位騎士団の1つで、地駆けし疾狼騎士（フォーアライター・オルデン）団という連中です。奇襲や待ち伏せと言った手段を取るのが奴らの戦い方だったんですが、今回は真っ向からぶつかって来たんですよ。

戦術を変えるとは。一体何を企んでいるやら。団長のファルコの姿も見えないし、注意が必要ですね」

フォーアライター・・・先駆者、か。その割にやってる事はゲリラだな。団長が言うには、フォーアライター・オルデンはいくつもある敵国強襲騎士団の先槍らしい。だから"先駆者の騎士団"という名を冠しているのか。団長から情報を色々と貰っていると、「銀髪に蒼と紅の虹彩異色・・・！　情報にあった悪魔か！」と数人の先駆者が襲いかかって来た。

「悪魔とはまた酷い通り名を付けられたものだな。まぁ否定はしないが」

――舞い振るは、汝の獄火（サラヒエル）――

頭上から炎槍サラヒエルをいくつも振らせ、私たちと連中を隔てる壁とする。間髪いれずに、

――知らしめよ（コード）、汝の忠誠（アブディエル）――

全長８ｍ程度の魔力剣を創り出し、サラヒエルの向こう側に居る奴らをサラヒエルごと薙ぎ払う。粉砕された騎士甲冑を撒き散らしながら吹っ飛び、気を失ったか絶命したかのどちらかで動かなくなった。魔力消費を抑えるためにアブディエルを消し、側に落ちていた二振りのナイフを手に取ったところで、団長が「お見事」と拍手。

「いやぁ常々思いますけど実に心強い。しかし、そろそろご自身の

武器を用意したらどうです？」

「言われずとも。私専用の武器を鋭意制作中だから、それなりに期待していてくれ」

カートリッジシステム搭載のアームドデバイスならすでに製作に取り掛かっている。"神槍グングニル"や複製武装を具現する際の魔力消費を抑えるために、だ。かつての契約先での"闇の書事件"の際、その当時敵だったシグナムによって破壊された元３ｒｄ・テスタメント・シャルロッテ・フライハイトのデバイス・"トロイメライ"の修理・改良に関わって、デバイスの知識は手に入れていた。それ以前に、デバイスよりさらに複雑なシステムである"戦天使ヴァルキリー"を制作したんだ。"ヴァルキリー"に比べればデバイスの一機や二機くらい１週間もあれば製作できる。だがまだ完成していない。部品がなかなか揃わない。カートリッジシステムを搭載しているデバイスを持つ騎士が意外と少ないからだ。

「それは楽しみです。あ、もう１つ。今回は仲間の騎士を引き連れて来ましたけど。一体どういう御関係で？」

「知る必要があるのか？」

さらに襲いかかってくる先駆者共を団長と２人で斬り払いながら、世間話でもするように喋る。団長は「無理にとは言いませんけど」と言っているが、知りたいと顔に出ている。妙な男に興味を持たれてしまったものだ。とは言え別段隠す必要もないため「家族だよ」と答える。

すると団長は「あぁなるほど。騎士オーディンの御両親に妹君ですね」とズレた納得をした。冗談だというのは即理解したが、一応誰がどの役に嵌まっているのか気になったから訊いてみたら、

「奴らを拳打と蹴打でぶっ飛ばしているのが父君で――」

ザフィーラだな。まぁ男は彼だけだしそうなるだろう。別の誰か（シグナム）と言ったら、団長は切り身にされてしまうだろうな。

「鉄槌で奴らを殴打して弾き飛ばしているのが妹君」

ヴィータだな。ヴィータを母親だと言ったら、冗談だとしても笑えない。じゃあシグナムとシャマルのどちらかが私たちの母親役になるわけだが・・・。

「剣士殿も妹君で、あの優しげな女性が母ぎ――」

――ペンダルシュラーク――

「「うおっ！？」」

高速で飛来してきたシャマルのデバイス・"クラールヴィント"の振り子（ペンダル）。それが団長の兜の額部分に突き刺さった。その一撃を放ったシャマルは私と団長にニコニコ笑顔を向けていた。

「ごめんなさい、オーディンさん、団長さん。手が滑っちゃいました♪」

「「いえ、お気になさらず」」

ペンダルがシャマルの下へと戻って行くのを見送り、冗談もそこそこに、と反省。いつもどおり空からの爆撃を始めようか。そう思ったところで、それは起きた。

――悪魔墜としの檻――

戦闘区域全体を覆うほどの広域結界が張られた。ただそれだけなら問題じゃない。高度制限と言うべきか天壁が低い。大体４~５ｍほどか。空戦を好む私としては低過ぎる高さだ。しかし私にとっては障害にならない。防性・結界破壊のメファシエルを使えばこれくらい・・・。

「オペラツィオーン・エクソルツィスムス、アンファング！」

何処からともなく聞こえてきた大声。作戦名：悪魔払い、開始――だとさ。"悪魔"といつの間にか呼ばれた私を討伐するためだけに来たというわけなんだな、フォーアライター・オルデンは。周辺に居た先駆者たちが一斉に「了解（ヤヴォール）！！」と応じた直後、森林の奥から無数の矢が飛んできた。鋼で出来ていると思われる矢は完全に無差別で、敵味方お構いなしに降り注いで来る。

（ただの矢のようだが。あんなので騎士甲冑を貫けるとは思えないが・・・）

とにかく私たちを含め周囲に居る防衛騎士たちが迎撃しようと矢を寸断した瞬間、矢が爆発し膨大な煙を発生させた。ただの煙幕か？と思えば妙な臭いがあった。直感で、この煙が毒ガスの類いだと判断。だがな、魔術で編まれた戦闘甲冑の前に、毒ガスなど無意味な攻撃だ。しかし防衛騎士団はどうだろう？と思った時、

「・・・っ！？　ぅぐっ、がはっ！」

目が痛く呼吸もし難い。ついでに咳が出る。馬鹿なっ。戦闘甲冑の防御力なら魔法の毒くらい弾く・・・あ、忘れていた。魔力消費を抑えるため、戦闘甲冑の付加効果を色々減らしたんだった。減らした付加効果の中には、空気感染系攻性術式や自然毒への耐性も含まれていた。

視界が毒ガスで完全に封じられ、しかも毒の効果らしき体の痺れで上手く体が動かせない。周辺から騎士甲冑を破壊する金属音と悲鳴がいくつも聞こえてきた。どうやら先駆者たちは前もって毒ガスの効果受けないようにしていたようだ、まぁ当たり前な話だが。

――吹き荒べ（コード）、汝の轟嵐（ラシエル）――

上空に蒼い竜巻を発生させて毒ガスを散らす。毒ガスがラシエルに巻き上げられ、視界がクリアになったその時、８人の先駆者がすぐそこにまで迫って来ていた。毒が体に回ったからか視界が揺らぐが、なんとか両手に持つナイフで２人の攻撃を捌いた。

しかしそれ以上は体が重く、第二波の４人の攻撃が捌けそうにない。迫り来る剣閃。魔術を発動しようにも毒の効果と思われる魔力生成阻害の所為で上手く術式が組み立てられない。魔術師がこんなにも

簡単に無力化させられるとは。なんたる恥か。情けなくなる。

「マイスターには指一本触れさせねぇぇーーーーッ！！」

――フランメ・ドルヒ――

「テメェら退きやがれッ！！」

――テートリヒ・シュラーク――

そこを助けてくれたのがアギトの炎の短剣と、ヴィータの"グラーフアイゼン"の一撃だ。フランメ・ドルヒが先駆者たちの背に着弾して爆発を起こし、体勢を崩したところをヴィータの鉄槌の一撃を受けて吹っ飛ばされた。

Ｍｙｔｈ５－Ｂアムルの守護騎士団～Ｇｌａｕｂｅｎ　ＯｒｄｅＮ～

戦場である森林の中にぽっかり空いている平原から離れた深い深い森の中。
迷彩服のような騎士甲冑を着こんだ幾人もの騎士が、毒ガスに悶え苦しむ防衛騎士団やオーディン、彼らに攻撃を仕掛けている毒ガス無効化の魔導を騎士甲冑に付加している地駆けし疾狼騎士団フォーアライター・オルデンの先遣隊らを眺めて歓喜していた。

「どれだけ強くても空戦を封じられて、すぐに対処出来ない毒ガスの症状による魔導封じ。いくら単独で騎士団を潰す事が出来ても、根が人間である事には変わりない。俺の読み通りだ♪」

フォーアライター・オルデンの騎士団長であるファルコ・アイブリンガーが嬉しそうにそう漏らす。騎士甲冑だけでなく顔にも迷彩柄がペイントされ、四肢に装着されている鉤爪の付いた籠手と具足にも迷彩柄がペイントされていた。他の騎士も似たようなものだ。だから完全に自然の姿に溶け込み、パッと見では彼らを発見できないだろう。

「団長。情報に無い未確認戦力が先遣隊を討っていますが、何者でしょう？」

１人の騎士がそう尋ね、団長ファルコは「さぁな。とりあえず敵な

のは違いないんだけど、なんで毒ガスを喰らってないのか不思議だよな」と小首を傾げる。シグナムら守護騎士が次々と先遣隊騎士たちを討伐していっているその様には、戦士である者にこそ理解できる強さがあった。

「あの子、本当に裏切り者になっているのね。ホント役立たずのガ(クルム)ラクタなんだから」

この中で一番小さな存在が呟く。３０ｃｍ程の少女で、肩紐の無い迷彩柄のタンクトップにホットパンツ、ブーツという格好で、髪は綺麗な翡翠色のショートカット。ココアブラウンの鋭い双眸は、守護騎士と共に戦う小さな少女、アギトに向けられていた。視線に込められた感情は様々。怒りや呆れなどと言った、肯定的なものは何一つとしてないものばかり。彼女は、イリュリア技術部によって開発された融合騎のプロトタイプ０００５。０００６であったアギトの一個上の姉に当たる融合騎だ。

「そう言うなよフュンフ。結構扱いが酷かったんだろ、あの子。なら優しくされりゃそっちに行くさ」

「関係ないわ。私たちはイリュリアの融合騎なのよ？　どんな扱いを受けようが忠誠を貫かなければならないんだから」

ファルコに五番目(フュンフ)と呼ばれた融合騎が「フンッ」と鼻を鳴らす。

「やれやれ。っと、そろそろ仕掛けに行くか。『各騎、俺たちで悪魔オーディンを討つぞ。先遣隊の犠牲を無駄にしないようにな・・

・！』行くぞ、フュンフ」

「ええ。六番目（いもうと）の不始末は、姉である私が片付けるわ」

森林の中に散っている団員から、思念通話で『了解（ヤヴォール）』と返ってくる。それを合図として、ファルコがオーディンらに告げる。解毒剤が欲しければ、森の中で待ち構えている俺たちから力づくで奪え、と。

†††Ｓｉｄｅ？？？†††

毒ガスの効果を受けて、私たちの主であるオーディンさんが倒れた。私たち守護騎士プログラムは予てよりこういった攻撃の耐性が付いているから大丈夫だった。でもオーディンさんや防衛騎士団の皆さんに、そう言った耐性のある術がそうあるわけもなく。次々と毒に侵されて、オーディンさんのように体を弛緩させて倒れ伏してしまっている。

オーディンさん。これまでの主のように私たち守護騎士を戦いの道具としてじゃなくて、戦友として、家族として接すると言ってくれた不思議な人。その人が今こうして私たちの目の前で苦しんでいる。出会ってからまだ半日として経過していないのに、私にとってすでに大切な人となった彼を・・・

（助けなきゃ、助けなきゃ、助けなきゃ・・・！）

「ごほっごほっ、油断した罰、か・・・げほっごほっ」

「喋らないでください！　毒が余計に回りますっ！　シグナムっ、

ヴィータちゃんっ、ザフィーラっ、周辺の敵騎士を、治療を終えるまでまで引き付けて」

「ああっ。オーディンの事は任せたぞシャマル。ヴィータ、ザフィーラ。一気に片をつけるぞ」

「おうよっ！」

「ああ、シャマルの邪魔はさせぬ」

「来い、闇の書。奴らの魔力を糧としてくれる」

シグナムは"闇の書"を手にして戦闘へと戻って行った。オーディンさんが望む戦力を手に入れるために必要なものだから。戦闘の方はシグナム達に任せて、私は私の出来る事を行うのみ。

――静かなる癒し――

癒しと補助が本領の私に出来る事と言えば、治癒魔法で回復させることくらい。負傷治療と体力・魔力回復、そして防護服修復の効果のある静かなる癒しなら、すぐにでもオーディンさんを治療できる。

「マイスターっ、ごめんなさいっ。あたしが側に居たらこんな・・・！」

オーディンさんをマイスターと呼ぶ子――アギトちゃんが泣きながら謝り続ける。それに対して、小さく首を横に振って微笑を浮かべ

るオーディンさんは『自分を責めるな。私の非が原因だ』と思念通話を私にも送ってきた。それは私への前置きでもあったみたいで、『世話を掛ける。少し回復してもらえば、あとは自分の治癒術式で治せる』って言った。

「いえっ。このまま私が完治させますっ。私は守護騎士ヴォルケンリッター、湖の騎士シャマルですっ。主であるオーディンさん、その相棒のアギトちゃん、それに守護騎士一同の補助と治療は私が一手に引き受けますっ！」

一体どんな成分の毒なのか。症状が一向に和らがない。私の治癒魔法でも治す事が出来ないなんて。ううん、上手く効果を発揮しているんだけど、元凶の毒が完全に払われていないから、治したところでまた感染するんだわ。この戦闘区域を覆っている結界は、空戦封じの他に毒ガスを外に逃がさないためのもので間違いない。そんな中、拡声の魔導でも使っているのか大きな声が平原に響き渡った。

『俺はイリュリア騎士団が一、地駆けし疾狼騎士団の団長、ファルコ・アイブリンガーだ。よろしくっ♪　さて、聞こえるかい？　騎士オーディン。あんた達を苦しめている毒の解毒剤が欲しければ、森の中で待ち構えている俺たちから力づくで奪え、って事で頼むよ。まぁ動ければ、の話になってしまうけどさ。もちろん代理としてそこの女騎士たちでもいいんだぜ』

その軽い物言いに苛立ちを覚える。ファルコと言う敵性騎士団の将の声に続いて、

『聞こえるかしら？　ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・ゼクス。イリュリアを裏切るなんて本当に馬鹿な妹ね。姉は呆れてものも言えないわ』

「この声・・・ヌル・ヌル・ヌル・フュンフ・・・！？」

口調が大人びている幼い女の子の声が平原に響いた。その声を聞いたアギトちゃんは明らかに怯えて震えだした。

「アギトちゃん・・・？」

『あなたの大切なロードを失いたくないのなら来なさい。引導を渡してあげるわ。融合騎としての格の違いを見せてあげる。だから逃げないように。いいわね、ゼクス』

"０００６"だとか"０００５"というのは、たぶんだけど融合騎としての開発順。アギトちゃんと五番の子の短いやり取りで、ある程度の事情が判った。どういった経緯かは判らないけれど、イリュリアの融合騎だったアギトちゃんがオーディンさんの下に付いたのね。それが五番の子にとって許せない裏切り行為だって事になっている、と。

「あのフュンフが来てる・・・」

挑戦状じみた声はそれで終わりだった。アギトちゃんは変わらず顔を青くしている。声が途絶えて、聞こえてくるのはシグナム達が敵を斬り払う金属音と悲鳴だけ。私はみんなに『解毒剤をお願い！

一向に治らないのっ！』と思念通話を通す。
治癒魔法だけじゃ進行を抑えるだけが精いっぱい。解毒剤を奪うのが確かな道だわ。息を呑む気配。すぐに『了解した。お前はそれ以上の毒の進行を防ぐ事に力を注げ』シグナムから返事。

『待っててオーディンっ。すぐに解毒剤を持ってくるから！』

『ザフィーラは念のためにオーディンとシャマルの護衛に付け。アギト。お前はどうする？　共に来るか？　お前の姉と言う者から誘われているが・・・』

『あたしは・・・』

少しばかり迷いを見せたアギトちゃんだったけど、オーディンさんの苦しむ姿を見てキッと表情を変えた。そして私を見て、「マイスターをお願いします」とお辞儀して、『あたしも行くっ』とシグナム達の元へ飛んで行った。
シグナムとヴィータちゃんとアギトちゃんが森の中に入って行くのを確認して、私はオーディンさんの毒の進行を防ぐために治癒魔法を使い続けて、ザフィーラは私たちの護衛の為に残存している騎士を討ちに向かう。

†††Ｓｉｄｅシャマル⇒ヴィータ†††

森の中に入ってみれば、そこらじゅうからヤバい気配がした。シグナムと並んで獣道を警戒しながら進む。アギトと"闇の書"は少し後ろを飛んでついて来る。にしても、なんか融合騎としてのアギト

の姉っていうのが来てるらしいんだけど、名前が五番ってなんだよ。アギトにはちゃんと名前があんのに。数字が名前ってまんま道具扱いじゃねぇか。

でもだからか。アギトがイリュリアを裏切ってオーディンのとこに来たのは。イリュリアなんかより、オーディンのとこで暮らした方が絶対良いに決まってる。オーディンとはあんま話してないし、つか会ったばっかだけどさ、判るんだよな。きっと良い奴だって。ここに来るまでのやり取りでそう確信できた。

「気を付けろヴィータ。地の利はおそらく向こうにある」

「判ってんよ。わざわざ戦ヤり難い森の中を戦場に選んだんだ。向こうが優勢になる条件があるに決まってる」

"アイゼン"を握る手に力を込める。急がねぇとオーディンが死んじまうかもしれねぇ。あたしらの事を道具じゃなくて戦友だとか家族だって言ってくれた。今までそんな風に言ってくれる奴なんていなかった。それが嬉しかったんだ。だからこんな形で失いたくねぇ。あたしらは守護騎士だ。主を――オーディンを守るためなら。"闇の書"の頁を埋めて"アイツ"を起こしたっていい。

『ヴィータ』

『ああ、近いところから見られてんな。アギト、警戒しろ』

『判った』

それから少し進んでも全然仕掛けてこねぇ。イライラすんなぁ。ずっと気を張ってて疲れちまった。けど、これが奴らの狙いだって気がするから気は抜けない。

『ヴィータ。この森の中で、単独で複数人と戦って勝つ自信はあるか？』

『場合によりけりだな。毒とかはあたしらに通用しねぇけど、地の利で負けてる以上は簡単にはいかねぇはずだ』

『私も同じ意見だ。しかしこのまま時間が経つのは我らにとって――そうか、それが狙いか』

『オーディンをこのまま毒殺するつもりか、奴らは・・・！』

『そんなっ！　マイスターが死ぬなんて絶対に嫌だっ！』

騎士の風上にも置けない奴らに成り下がっちまったな、イリュリアの騎士団は。しゃあない。こうなったらあたしが、って思った時、『仕方ない。こちらから誘き出すぞ。いいな』って、あたしと同じ事を考えてたシグナムから思念通話。断る理由どころか同じ意見だから、『あたしがやろうか？』って訊く。

『いや、私のシュランゲフォルムで行こう。ヴィータ、アギト。その間の防御は任せられるか？』

『うん。任せてくれ』

「『おう、任せとけ』アイゼン、ラケーテンフォルム」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ・　Ｒａｋｅｔｅｎ　Ｆｏｒｍ≫

カートリッジをロードして、"アイゼン"を基本形態のハンマーから強襲形態ラケーテンに変える。続けてシグナムが「レヴァンティン、シュランゲフォルムだ」って指示する。"レヴァンティン"もカートリッジをロードして、

――シュランゲバイセン――

シュランゲフォルムになった"レヴァンティン"が周辺の木々を寸断していく。隠れる場所があるからダメなんだ。だったら無くせばいい。アギトが「すげぇ」って感嘆の声を漏らす。ま、うちの将がすげぇのは確かだしな。

次々と木々を薙ぎ払って、ようやく・・・「見つけたッ！」連中が姿を現した。平原に居た奴らと同じ迷彩柄の・・・鎧じゃなくて服のような騎士甲冑だ。

「やるな、剣士の姉さん。そしてそこの小さいお嬢さんも凄かったぜ。・・・カートリッジシステム搭載の武器、・・・シュトゥラの高位騎士か？　良い腕を持ってるのは判るんだけど、あれだけの腕を持ってんならもっと有名になっててもおかしくないんだがなぁ」

アイツが将のファルコって奴か。四肢に装着してる籠手と具足全部にカートリッジシステムが搭載されてやがる。で、奴の近くで浮い

てる小さいのが、「久しぶりね、ゼクス」ってアギトをギロッて睨みつける。アギトも「フュンフ・・・！」って威圧感を出して、フュンフを真っ向から睨み返す。良いぜ、アギト。気持ちで負けてたらどうしようもねぇからな。

「まぁいいや。さて、こんな事になってしまったけど、コレも戦争だ。勝つために俺たちは騎士としての誇りは捨てた。だから俺たちとぶつかり合いたいって言うなら――」

フォーアライター・オルデンの団長だっつうファルコが突然姿勢を低くしたと同時、他の奴らも姿勢を一斉に低くした。来る。そう思って身構えたと同時に、

「あんたらも何かを捨てる覚悟を持って・・・来なっ！」

連中は一斉に地面に向けて攻撃して地面を爆発させて、粉塵を起こしやがった。視界を封じる気かよ。シグナムと背中合わせにして周辺警戒。視界を潰したくらいであたしらに勝てるとか思うなよ、テメェら。"アイゼン"を改めて構え直して迎撃態勢に入る。あの低姿勢。ありゃ突撃するための踏ん張りだ。真っ向から突っ込んで来るか、それとも別の軌道で突っ込んで来るか。

『ヴィータ、シグナム、どうすりゃいいんだ？』

『・・・決まっている。向こうから来るなら、迎え撃つまでだ』

――シュランゲバイセン・フェアタイディグング――

シュランゲフォルムの"レヴァンティン"による攻防一体の剣刃結界があたしらを囲う。来いよ、フォーアライター・オルデン。突っ込んで来たら"レヴァンティン"にバラバラにされるぜ。砂塵が少しずつ晴れて行く。

（んだよ、偉そうなことを言ってても手も足も出さずに逃げたのか？）

そう思ったのも束の間。連中の数人かが砂塵の中から出てきて、"レヴァンティン"の刃にそれぞれの武器をぶつけて、高速で螺旋状に回り続ける"レヴァンティン"の勢いを削ろうとしてきやがった。馬鹿野郎。完全な捨て身だ。シグナムと"レヴァンティン"の攻撃には魔力が付加されている。

カートリッジシステムの搭載されていない武器に止められるわけがねぇ。案の定、ソイツらは斬り飛ばされて、血を撒き散らしながら地面に強く叩きつけられて動かなくなった。ほら見ろ、言わんこっちゃねぇ。

「そこまで弱まれば十分だっつうの。なあっ！」

「ええ。もう十分だわ」

――ヴィント・バイセン――

本命はテメェらか。フュンフっていう融合騎が衝撃波を撃ってきた。それを迎撃するのがあたし・・・じゃなくて、「あたしはもうクルムじゃない！」っつうアギトだ。あたしより先に迎撃態勢に入って

たアギト。頼りになるじゃねぇかよ、先輩(アギト)。

「解毒剤を渡せぇぇーーーーッ！」

――ブレネン・クリューガーーー

「なら力づくで奪ってみせなさい、ゼクスっ」

アギトの火炎弾6発とフュンフの衝撃波が衝突した。数では優勢。だったけど、フュンフの衝撃波の方が威力が強かった。衝撃波の直撃を喰らった"レヴァンティン"は勢いを完全に殺がれて、結界としての効果を失っちまった。

ショックを受けてんなよ、アギト。真っ先に迎撃しただけでもカッコ良かったぜ。あとは・・・・「任せなッ！」って、あたしは弛んでいる"レヴァンティン"の合い間から躍り出る。四肢に装着してる鉤爪付きの籠手と具足のカートリッジのロードを終えて（なんつう武器持ってやがんだコイツ）高速で突っ込んで来たファルコと対峙する。

――ヴォルフ・クラオエ――

――ラケーテン・ハンマーーーー

「「おおおおおおらぁぁぁあああああああッッ！！」」

数回旋回してからの遠心力いっぱいのあたしの一撃と、突撃力のあるファルコの貫き手の一撃が衝突する。くそっ、ラケーテンフォル

ムで強く打ち込んでんのに拮抗を崩せねぇっ。でもま、あたし独りじゃねぇからいいんだけどさ。

「紫電――」

"レヴァンティン"をシュベルトフォルムに戻したシグナムが、あたしとファルコの頭上を飛び越えて、ファルコの背後に降り立った。

「一閃！」

†††Ｓｉｄｅヴィーダ⇒？？？？†††

此度の"闇の書"の主は、これまでの主とは全てにおいて違っていた。我ら守護騎士ヴォルケンリッターは、"闇の書"を完成させるためだけの道具であった。しかし主は我らのことを道具ではなく、戦友であり家族であると仰ってくれた。

それだけでなく"闇の書"を使い、力の支配者になる事を良しともしなかった。守りたいものを守り、救いたいものを救うために力を揮う。それが主の信念。ならば・・・

（その主の想いを、ここで終わらせるわけにはいくまい）

毒などと言う姑息な手を使い、主と味方を討たんとする奴らフォーアライター・オルデン。"闇の書"の主オーディンの下に集いたる我ら守護騎士ヴォルケンリッターが一。

「我、盾の守護獣ザフィーラ。我が牙と爪、魔導を恐れぬのなら掛

かって来るがいい」

――鋼の軛――

周囲に残存している敵性騎士数人を拘束条で貫き、魔力の核を抽出する。その際、核を無理やり抽出された者には激痛が起きる。実際にいま我が行っているその行為により、敵性騎士らが悲鳴を上げ、激痛に耐えられずに気を失っている者が出る。

「主と、その主が守ろうとしているものに害を及ぼそうとする貴様らに容赦はしない」

主が願いの為ならば、我は如何なる者にでもなろう。

『ザフィーラ。そちらの状況は？』

『シャマルか。順調に核の回収を進めている。主の容体は？』

『ダメ。悪化は抑えているけど良くもならないわ。やっぱり解毒剤が無いと・・・』

『シグナム達は戻っていないのか・・・？』

シャマルからは肯定の『ええ』と一言のみが返ってきた。森の方で大きな音がしていたが。フォーアライター・オルデンの将らが居ないところを見れば、おそらくシグナムとヴィータ、そしてアギトは将らと剣を交えているのだろうな。負けはしないだろうが苦戦は必

至だろう。この者たちはかなりの手練だ。

『ある程度こちらが安定すれば我も加勢に行く。その間、主の事は任せたぞシャマル』

『判ってる。絶対に死なせない。オーディンさんにはまだやるべきことがあるんだから』

思念通話を切り、改めて残存戦力を見る。シグナム達が森へ向かう前に粗方沈めたため然程多くはない。ならば早々と片を付け、シグナム達の加勢に向かうとしよう。人間形態へと変身し、「おおおおおおおおおおッ！！」迫り来る敵性騎士らへと突撃を仕掛けた。

†††Ｓｉｄｅザフィーラ⇒シグナム†††

我が烈火の剣閃・紫電一閃。永きに亘って幾人もの敵を斬り伏せてきた、必倒の一撃だ。フォーアライター・オルデンの騎士団長ファルコ。奴はヴィータとの衝突で身動きがとれん。フュンフはアギトと睨みあい動けない、動こうとしない。他の騎士も居るが、援護に回れるだけの距離でもない。

決まればこれで決着だ。しかし油断なく、常に先を見据えなければ。勝利を確信したその一瞬こそが、最大の隙となる。そう気を張っていたからこそ、この刹那の時で私は気付ける事が出来た。気配。すぐ近くに何かが――いや、誰かが居る。考える暇もなく私は"レヴァンティン"の軌道を変更し、気配を察知した場所へ振るう。

「うごぉっ！？」

呻き声。ソレは居た。何も無い宙から突如として姿を現し、血飛沫を巻き上げながら吹き飛んで行った。ファルコが「勘が良いな、あんた」と、ヴィータとの拮抗のまま鉤爪の付いた具足での蹴りを放ってきた。"レヴァンティン"を盾にして防ぐ。器用なマネをする男だ。身体能力が高い。

「ステルスかよ・・・性質悪ぃな、騎士のクセに・・・！」

「言っただろお嬢さん。俺たちは騎士の誇りをもう捨てたんだよ。イリュリアをベルカ統一戦争の勝者にするべく、どんな汚い手を使うと決めた」

（っく、なんて脚力だ。片足であるのに押しきれない・・・！）

片手でヴィータのラケーテンフォルムの"グラーフアイゼン"と拮抗し、片足で私の"レヴァンティン"を完全に押さえてきている。体を支えている片足の鉤爪を地面に食い込ませ体をしっかりと固定している。足腰――身体能力の強さが異常だ。カートリッジによる魔力増強だけでは話が付かない。ファルコ・アイブリンガー。一個騎士団を率いているだけの事はある。

「「「「「「「「「「うぉぉおおおおおおおおッ！」」」」」」」」」」

ここで他の騎士たちが一斉に攻勢に出てきた。時間切れだ。ヴィータともどもファルコから一度距離を取り、襲いかかってきた連中の迎撃に出る。そこに「うわあっ！」アギトの悲鳴。私の胸元に飛び

込んできた――もとい弾き飛ばされてきたアギトを抱き止め、鉤爪による薙ぎ払いをしてきたファルコからさらに距離を取り、向かって来ていた2人をすれ違いざまに一閃、討ち斃す。

――グラナーテン・ヴィント――

衝撃波が圧縮された魔力弾が足元に着弾した。威力を発揮する前に上に飛び退く。そこに「これ以上部下を殺させねぇぜッ！」とファルコが私を追撃してきた。ヴィータは・・・地上で他の連中の相手をしている。ならば、ここは私独りで切り抜けなければな。片手でアギトをしっかり抱きしめ、半回転してファルコへと"レヴァンティン"を打ち込もうとした。

――ヴィント・ホーゼ・フェッセルン――

が、途中で妨害された。"レヴァンティン"の刀身に絡みつく竜巻状の拘束輪。迫るファルコの鉤爪。魔力障壁パンツァーシルトを発動しようかと思ったがその前に、

――ブレネン・クリューガー――

アギトが複数の火炎弾をファルコに向け放ち、ファルコを迎撃した。私とファルコの間で爆発が起き、そして"レヴァンティン"が解放された事が判った。爆風によって空気圧の操作に乱れが生じたのだろう。視界の端に映り込んだフュンフの表情には僅かな焦り。これは好機だ。アギトに「感謝する」と礼を言い、

――シュトゥルムヴィンデ――

"レヴァンティン"を振るって衝撃波を生み出し、フュンフを墜としに掛かる。結果を見ていたいが、爆煙の中から飛び出してきたファルコに意識を割かねばならない。アギトが『もう大丈夫。フュンフはあたしに任せて』と私の腕から飛び立った。

アギトを信じ、カートリッジを一発ロードし刀身に火炎を纏わせる。先程は見逃したが、今度は確実に叩き込む。ファルコもまた両手の籠手のカートリッジをそれぞれ一発ずつロードし、指先から突き出る計10本の鉤爪に魔力を纏わせた。

「紫電――」

「クラオエ・デス――」

先手は貰った。両手で柄を握り締め、全力での一閃を振るう。ファルコは右手を貫き手にし、真っ向から"レヴァンティン"の火炎纏う刃を迎撃。

「一閃ッ！」

「イェーガァァーーーーッ！」

衝突した――とほぼ同時、ファルコは右手を大きく横へ払う。そうするとどうなるか。"レヴァンティン"の軌道がファルコの右手の横移動に釣られ、そのまま外側へと逸らされることになる。衝撃の全てが右手に伝わる前に受け流された。火炎の方に関してはさすが

に無力化出来なかったようだが。右手の籠手の鉤爪が5本とも破壊されている。1秒と満たないこの刹那。

「フッ・・・！」

ファルコが笑みを浮かべるのが見て取れた。左の貫き手が迫る。元より右手は囮にし、本命は左貫き手による私の刺殺――が目的だったか。だが甘い。咄嗟に鞘を起動させ、その上で魔力を覆い防御力を上げるパンツァーガイストを鞘に付加。

貫き手が鞘に突き刺さる。防御を突破されない自信はあるが、受けに回り続けるのは性に合わん。故に、先程のファルコと同じように鞘を払い、左貫き手の衝撃と軌道を外側に受け流す。

「おおおおおおおおおッ！！」

大きく懐の開いたファルコへ向け"レヴァンティン"を一閃。場所は中空。飛行が使えなければ、ファルコに出来るのは防御一択のみだ。直撃まで1秒とないこの瞬間に、奴は動いた。奴は側面にベルカ魔法陣を瞬時に展開して足場とし、魔法陣を蹴って私の一閃を回避した。

"レヴァンティン"は空を切り、奴の展開した魔法陣を砕くだけだった。今の攻防で判った。ファルコは飛行魔法が使えない。しかしあまり意味のない情報だ。結界が未だに展開されている事で高度制限が設けられているからな。

「ボサッとしてると終わらせちまうぞッ！」

「その程度の蹴りで私を討とうなど思わぬ事だッ！」

ファルコの放ってきた蹴りを鞘でいなし、間髪入れずに"レヴァンティン"を一閃。その一閃を、鉤爪を失った右の籠手で受け防ぎ、左の貫き手をまた繰り出してきた。

（カートリッジを装填しなければ・・・！）

"レヴァンティン"に装填してあったカートリッジを使い果たした。一度距離を取って装填し直さなければ。貫き手を蹴りで弾き、一度距離を取るためにファルコの顔面を足蹴にする。地面に降り立ちすぐさま再装填。同じように着地したファルコが「足クセ悪いな、剣士の姉さん」と鼻血を垂れ流しながら呻く。

「にしても、あ～あ、派手にやってくれたなお嬢さん」

「はぁはぁはぁはぁ・・・・どんなもんだよ。鉄槌の騎士ヴィーターと鉄の伯爵グラーフアイゼン。あたしらの行く手を拒める奴なんていねぇんだよ」

そう言っているもののヴィーターはボロボロだった。私とファルコが一対一だったのに対し、ヴィーターは数人との一対多数戦だ。それでもなお勝利を収めたヴィーターにはもう称賛を送るしかないだろう。

「その名乗り・・・・おいおい、冗談だろ。お前らまさか・・・・守護騎士ヴォルケンリッター・・・・！？」

ファルコが目を見開きつつ訊ねてきた。イリュリアの騎士であるのなら、我ら守護騎士がかつてイリュリアに仕えていたことを知っていてもおかしくはないだろう。ゆえに私は「そうだ。守護騎士ヴォルケンリッターが将、剣の騎士シグナムだ」と肯定を示す名乗りを上げる。

「・・・くく・・はは・・あはははは・・・ははははははっ。道理で強いわけだ。毒が効かないのも頷ける。闇の書を守るプログラム守護騎士ヴォルケンリッターだもんなっ。騎士オーディンが今回の闇の書の主というわけだ・・・・ハッ、クソが。フュンフ、融合だっ！」

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒アギト†††

シグナム達の邪魔にならないように森の中に移動して、あたしの姉フュンフと闘う。

「とっとと壊れてしまいなさい裏切り者（ゼクス）っ！」

――ヴィント・バイセン――

フュンフと一対一で闘うなんて、いつ以来だろう。あたしたち融合騎を開発した連中は、七騎の融合騎プロトタイプを時々戦わせた。お互いの戦い方を知ればなんとか・・・って言って。あたしだって頑張ったけど、あたしが七騎の中で一番弱かった。
開発順で言えば末妹のズィーベンにすら負けた。あの時、確かにあたしはクルムだったかもしれない。だけど今は・・・理由も見出せ

なくて空っぽのまま戦ってたゼクスじゃなくて、ちゃんと戦う理由が出来たアギトとして、ここに居る。

「あたしはアギトだっ。もうゼクスじゃないっ！」

――フランメ・ドルヒ――

衝撃波を避けて、待機させてた炎の短剣をフュンフに向けて一斉発射。ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・フュンフ。融合騎プロトタイプの7番目、大気操作の実験機だ。だから移動が速い。あたしの攻撃を風のように避けて、一瞬で間合いを詰めてきた。

「名前がなんであろうと、あなたが私の妹で、一番の役立たずで、そしてもう存在している価値もない裏切り者である事に変わりないわ」

「イリュリア（そっち）に無くてもアムル（こっち）にはあるっ！」

――ブレネン・クリューガー――

至近距離で火炎弾を放つ。突っ込んで来るなら迎え討てばいい。さっきシグナムがやったことと同じだ。だけどそれでもダメだった。目の前から消えたと思ったら、フュンフはあたしの背後に回り込んでた。

「どちらでも構わない、わッ！」

「ぐっ・・・！」

思いっきり頬を殴られた。口の中が血の味でいっぱいになる。以前までならここで戦意喪失だった。でも今は違うんだ。フュンフの腕を掴んで逃げられないようにして、

――煉拳――

「おごぉっ？」

炎を纏わせた拳打をお腹に打ち込んでやった。フュンフがゴホゴホ咽る。そのまま手を離さないで連続で打ち込もうかと思ったけど、フュンフがキッと睨んできて「こんの・・・調子に乗るなッ！」って風を拳に纏わせた風拳を打ってきた。同じ軌道でこっちも煉拳を打つ。炎と風の拳打がぶつかる。

（ダメだ！　炎が風に散らされてく・・・！）

あたしの拳に纏わせた炎が少しずつ削られてくのが判る。フュンフが「あらあら。やっぱりクルムね、ゼクス♪」って顔を近付けてきて笑って、頭突き。痛みで掴んでた手を離してしまって、しかも煉拳の力を弱めてしまった。

当然押し負けたあたしは風拳の直撃をお腹に食らって、遠く吹き飛ばされた。一瞬意識が飛びそうになったけど耐える。マイスターの事を思えば、痛くても泣きそうでも、何度だって立ち上がれる。

「あたしは、ごほっごほっ、負けられない・・・げほっ・・・」

「・・・・大人しく壊されればいいものを。そうすれば姉としての慈悲で苦しまずに――え？・・・・ファルコったらなにを苦戦しているのだか・・・・」

「ちょっ、どこへ・・・・！？」

「仮のロードが苦戦しているみたいなの。融合するよう言ってきたわ」

フュンフはそれだけ言って、あたしに背を向けて飛んで行った。まずい。シグナムとヴィータがどれだけ強くても、誰かと融合したフュンフはすごく強いから負ける。

「だったら、あたしも融合騎としての務めを・・・・果たさなきゃ、だよね」

融合騎としてのあたし。ロードはマイスターだけって誓いがどうとうか言ってられない。すぐさまフュンフを追いかけて、シグナムかヴィータのどっちかと融合するために、あたしは空を翔ける。木々の合間を抜けて、シグナム達の姿を視認した。続けてファルコも視界に入る。

すでにフュンフと融合をしているみたいだ。髪の色がフュンフの翡翠色に変わってて、目は金色、瞳孔が獣のような縦になってる。何より違うのは二足歩行じゃなくて、獣のような姿勢を取ってること。両手を地面について、上半身を折ってるけど顔は真っ直ぐシグナムに向けるように上げてある。

『シグナムっ。あたしと融合してっ！』

『無事だったかアギト。・・・しかし、オーディンの断りなく、勝手にお前と融合するのは――』

『いいからっ！　そのままで勝てると思ってたら殺されちゃうって！』

ファルコ・アイブリンガー。顔は知らなくても名前だけは聴かされてた。派手な魔導は使わず、単純な身体・武器強化だけで高位騎士になったっていう。そこにフュンフの能力が追加されたりしたら、融合騎なしで勝つどころか戦いにすらならないかもしれない。

『マイスターの家族の先輩として言う。今すぐあたしと融合して、シグナム！』

『・・・・判った。来い、アギト・・・・！』

シグナムの元に全力飛行。その途中、フュンフと融合したファルコが突っ込んで来た。まさに一瞬だった。姿が消えたと思ったら、あたしとシグナムの間に現れた。ファルコが左手を伸ばしてきた。あたしに迫る鋭い五本の鉤爪。捕まったら引き裂かれて終わる。避けようにももう軌道変更が出来ない速さで突っ込んだ。どうにか切り抜けようとした時、

――シュワルベフリーゲン――

どこからともなく飛んで来た赤い魔力を纏った鉄球四発が、ファルコの左腕の籠手に二発、体に一発、頭に一発直撃して、ファルコを弾き飛ばした。好機だ。すぐにシグナムと合流して、

「「融合！」」

融合を果たした。

†††Ｓｉｄｅアギト⇒ヴィータ†††

シグナムとアギトが融合した。シグナムの背中から生まれた炎の二対の羽が、そこらに舞う葉を燃やす。髪と目の色も変わって、騎士甲冑も少し変ってる。あれが、融合騎（アギト）と融合した姿、か。シグナムが自分の姿を確認して、フッと小さく笑った。ああ、判るぜ、すげぇよ今のお前。

「ああクソが・・・・。ここに来てそっちも融合か・・・」

ファルコがまた獣のような姿勢を取って、シグナムを睨みつけながら両脚の具足と左腕の籠手のカートリッジを一発ずつロード。シグナムはひたすら真っ直ぐにファルコを見詰めて、"レヴァンティン"のカートリッジを二発ロード。

手出ししてぇけど、

「イリュリアが地駆け（フォーアライター・オルデン）し疾狼騎士団、団長・ファルコ・アイブリンガー」

『風の融合騎・ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・フュンフ』

「主オーディンの下に集いし雲――守護騎士ヴォルケンリッターが将、剣の騎士シグナムと、我が魂・炎の魔剣レヴァンティン」

『マイスター・オーディンの炎の融合騎、アギト！」

騎士としての名乗りを上げた以上、こいつはもうシグナムとファルコの二人だけの決闘だ。ファルコは騎士の誇りを捨てたみてぇだけど、アイツを支援する仲間はあたしがブッ潰した上、"闇の書"の頁を埋める糧にしたから、汚ねぇ真似は出来ないはずだ。

「今の内に言っとくぜ。俺は解毒剤を持ってない」

「なにっ・・・・！？」『はあっ！？』

「は？・・・ふざっけんなよテメェっ！」

あたしらは解毒剤のためにこうして戦ったっつうのに、その問題の解毒剤が無いだぁ？　マジでふざけんなよ。だったらオーディンはどうなるんだ？　まさかこのまま・・・

――シュトルム・シャルフリヒター――

怒りや焦りに思考が乱れたその隙をついたファルコが竜巻の蛇になって、シグナムに突っ込んだ。シグナムは咄嗟に横っ跳びで回避したから直撃だけは免れた。地面を抉りながらまた戻ってきたファル

コ。今のでもう頭にキた。決闘云々とか言ってられっか。
カートリッジを一発ロード。二人掛かりでブッ潰してやる。だけどシグナムが『私とアギトだけで十分だ』って言ってあたしを制して、"レヴァンティン"の刀身に今まで以上の炎を纏わせた。つうか「熱っつ！」シグナムから離れる。あたしまで燃やす気かよ、あたしらの将は。

「解毒剤を持っていないのであれば、最早生かしておいても意味はない」

あ～あ、シグナムの奴、虚仮にされて完全に怒ってる。そのおかげであたしはちょっと冷静になれた。今のファルコの言葉を真に受けていいのかどうか。もし本当だったら、後々メンドーになるかもしれねぇし、このままやっちまう方が良い。だけどもし。今のがあたしらの隙を創り出すための嘘で、本当に持ってるとしたら？　解毒剤ごとやっちまうかもしれねぇ。そうなったらオーディンや他の味方の騎士も救えない。

「おいっ、シグナム！　ソイツを殺すのちょっと待――」

触れたモノを全部削るような竜巻の蛇になってるファルコを、真っ向から迎撃するつもりのシグナム。

「はぁぁぁあああああああッ！」

――紫電一閃――

止める間もなくシグナムは"レヴァンティン"を振るった。圧倒的な炎は竜巻の蛇の前でも消える事なく、竜巻の蛇に真っ二つにした。シグナムの後方に吹っ飛んでくファルコ。地面を何度も跳ねて転がって、一本の樹にぶつかって止まった。呻き声を漏らしながらも立ち上がろうとしてる。生きてやがる。んだよ、シグナムの奴。

「解毒剤に関してのあの発言。真偽を確かめていないからな。無暗に殺しはしない」

「そうかい。そいつはよかった」

あたしはすぐに解毒剤の事を問い質すためにファルコに駆け寄ろうとしたけど、その前にファルコを覆い隠すすげぇ竜巻が生まれた。あまりの風圧に吹き飛ばされそうになる。つうか目を開けてられねぇ。

そこに『今回は私たちの負けでいいわ』って思念通話。あのフュンフって奴からだ。竜巻が結界スレスレまで上がってく。逃げやがるつもりだ。なんとか追撃しようとすっけど、少しでも気を抜けば吹っ飛ばされそうだからどうしようもねぇ。

『フュンフ！　あたし達が勝ったんだから解毒剤を渡せ！！』

アギトの思念通話があたしにも流れてきた。でも返事はない。竜巻が結界に当たりそうになった時、結界が消滅した。壊したんじゃなくて解除されたんだ。結界を張ってる奴らがどこかに居やがる。辺りにはもちろんそんな奴はいない。結界の外、つまりずっと遠くに居るのか。そんじゃあソイツはいい。今はファルコとフュンフの追

撃だ。シグナムと一緒に空へ上がろうとした時、

『シグナムっ、ヴィータちゃんっ、アギトちゃんっ。オーディンさんが！』

シャマルから思念通話が来た。

†††Ｓｉｄｅシャマル†††

オーディンさんの体に巣食っている毒の進行を抑えるために治癒魔法・静かなる癒しをかけ続けて十数分。

「意識を取り戻したんですねっ、オーディンさんっ」

膝枕していたオーディンさん。彼の目が私を目をしっかりと捉えてた。意識を失う直前とは違って焦点がちゃんと合ってる。順調に毒の効果が薄れていってる証拠。私の魔導を使い続けてるから、少しずつだけど、でも良くなっていってるのね。だと言うのに、「動けない今、悪魔を討つ好機だッ！」とザフィーラが討ち漏らした敵が４人襲いかかってきた。

――風の足枷――

私とオーディンさんの周囲に、小型の竜巻を７つ発生させる。いきなり目の前に現れた私の魔導に、連中は突撃の勢いを消す事が出来ずに突っ込んで、粉砕された鎧を撒き散らしながら吹き飛んで行った。ザフィーラから『すまん。大丈夫だったか？』という思念通話が送られて来た。返事は決まってる。『ええ、何も問題ないわ』だ。確かに私は前線で戦うような騎士じゃないけど、それでも・・・・

「あなた達なんかに負けないわ」

私たちの周辺に倒れ伏す騎士たちに言い放つ。するとオーディンさんが『君たちは本当に心強いな』と思念通話を送って来た後、自力で体を起こした。慌てて止めようとするけれど、「ここまで回復できればあとはどうとでもなる」って言って、

――傷つきし者（コード）に、汝の慈悲（ラファエル）を――

魔導を発動させた。見惚れる程に綺麗な蒼い淡光がオーディンさんを包み込む。見る見るうちにオーディンさんの顔色が良くなっていくのが判る。あまりの回復力に開いた口が塞がらない。

「ありがとう、シャマルのおかげだ。シャマルがずっと魔導を掛けてくれたからこそ、こうして自身の魔道を扱えるまで回復できた」

オーディンさんは言う。私が静かなる癒しで毒の進行を妨げている間、オーディンさんは毒の成分を調べて抗体を少しずつ魔力で生み出して、毒の効果を打ち消し合っていたって。そして拮抗が崩れたついさっき、意識を覚醒させて自身の魔導で一気に毒を殲滅した。アムルの街の医者をしていると聞いたけれど、まさかこれほどの腕を持つ方だとは思いもしなかった。呆けていると、シグナム達が解毒剤を求めて敵騎士団の団長ファルコと戦っている森の中から、天を衝くほどの大きな火柱が上がった。

シグナムの炎である事が判る。でもシグナムにあんな強大な炎を発生させる魔力も魔導も無いはずなんだけど・・・。一体何が起こっているのかしら、あの森の中で。そんな疑問を抱いた時、「おそら

くアギトがシグナムと融合したんだろう」ってオーディンさんが言った。

「シグナムとアギトちゃんが・・・・！　あっ、シグナムったら勝手にオーディンさんのアギトちゃんと融合なんかして――」

「いいよ。それだけ厳しい相手なんだろう、連中の将は。それに、私よりかシグナムと融合した方が相性的に見ても良いだろう」

「ですけど・・・」

「今はそれよりみんなの治療だ。私はシャマルのおかげで何とか助かっているが、他のみんなは一刻を争う」

オーディンさんはそう言って、味方の騎士団員（私をオーディンさんの母親だと言いそうになっていた・・・団長さん）の元へと駆けた。私も追いかけ、オーディンさんが団長の頭部を守っている兜を外した。オーディンさんも私も、その人の顔を見て息を呑む。生きているのかどうかも判らない程に血色が悪い。

「まだ間に合う。今度はもう誰も死なせないっ！」

様子が激変したオーディンさんは、背中からあの綺麗な蒼い光の剣の翼を展開させた。オーディンさんの足元に見た事のない魔法陣が展開される。十字架の四方から剣が伸び、それらを不思議な文字が記された三重円で囲われたもの。

「治癒効果を変更・・・クリア・・・。効果範囲選定・・・クリア。術式対象選定・・・クリア。オールクリア確認」

――女神の祝福（コード・エイル）・ｖｅｒ．　Ｇｅｂｕｒａｈ――

オーディンさんの１２枚の剣の翼が無数の羽根となって周囲に舞い散った。倒れ伏している味方の騎士ひとりにつき１枚の蒼い光の羽根が降りて体内に入り込むと、ポッと体を包み込むような優しい蒼の淡光が生まれる。

目の前に居る団長も例外じゃなく、蒼い淡光に包まれた団長の顔色がすぐに良くなって、負っていた傷などが治っていく。これほどの効果を持ってる魔導、それを一度に複数人に、そして広範囲に亘って・・・やっぱり凄い。

「すごいですっ、オーディ――オーディンさんっ！？」

「あ゛・・・ぐぅ・・・っつ・・・！」

オーディンさんが急に苦しみだした。頭と胸を掻き毟るように悶える。フラついて倒れそうになるオーディンさんを支えて、「オーディンさんっ！」って何度も呼びかける。オーディンさんの顔色は毒に侵されていた時より悪くて、涙を流して、体も大きく震えていて。胸がキュッと痛んだ。オーディンさんが小さく見える。何かを必死に堪えようと頑張って、でもそれが叶わくて悲しみに震える、その姿。居ても立ってもいられずにオーディンさんを抱きしめる。

「っづ・・・私は・・・強くないと駄目なんだ・・・強くあり続け

ないと・・・。忘れていく・・・また・・・ごめん・・・クロード、レナ、アシュトン、セリーヌ・・・」

オーディンさんは知り合いの名前らしいものを言った後、意識が完全に飛んだ。

「む、どうしたシャマルっ！？」

「ザフィーラっ。オーディンさんの様子が・・・！」

少しダメージを負っているものの戻ってきてくれたザフィーラは、私の腕の中で目を半開きのまま気を失っているオーディンさんを見て、「毒の効果か！？」と焦りを見せた。

「ううん、毒はオーディンさん自身の魔導で治ったみたいなんだけど、味方の治療の為に魔導を発動させた瞬間にこんな風に・・・！」

「自身の魔導による負荷かもしれん。シャマル。お前の治癒で何とかならんか？」

「そ、そうね。やってみるわ・・・！」

――静かなる癒し――

「っぐあ・・・あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ッ！！」

治癒魔法をオーディンさんに掛けた瞬間、オーディンさんが絶叫し

た。完全に苦痛の叫び声。すぐに発動をやめる。

「どうして！？　さっきはちゃんと効果があって、オーディンさんの助けになっていたのにっ！」

効果がある時とこうして拒絶反応が起きる場合の境界線が判らない。それに魔導を止めたのにオーディンさんの苦しみが治まらない。

「ザフィーラっ、どうすれば・・・！？」

「・・・・むぅ、我にも判らぬ・・・」

「っ・・・シグナムっ、ヴィータちゃんっ、アギトちゃんっ。オーディンさんが！」

今は誰かに助けを乞いたくて、シグナム達に思念通話を送る。真っ先に返ってきたのは『マイスターがどうしたのっ！？』アギトちゃんの切羽詰まった声。アギトちゃんに経緯を話す。オーディンさんが自分で毒を治した事。味方の毒や怪我を治すために魔導を使った事。すると苦しみ始めた事。ここでアギトちゃんから信じられない情報を聴いた。

「・・・記憶が・・・失くなる・・・！？」

『マイスターは魔力がすごく減ると記憶を失うっていう障害を抱えているんだっ。最初の苦しみはきっと記憶を失くしたってことだよっ』

確かにあれだけの広範囲、味方全員を治癒する魔導。普通の魔力じゃ発動すら出来ない。オーディンさんの最大保有魔力量がどれだけか判らないけれど、さっきので一気に枯渇してもおかしくない。

「じ、じゃあ私の魔導で苦しみ始めた理由はなんなのアギトちゃんっ」

それが知りたい。守るべき主を苦しめてしまった私。すぐにでも原因を知って、今も呻き声を漏らしているオーディンさんを楽にしてあげたい。半年という間、オーディンさんと一緒に居たアギトちゃんなら何か知ってると思っていた。けれど、『判んないっ。すぐに痛みも治まるって言ってたし、治癒魔法で苦しむなんて初めてだからっ』と、求めていた答えが返って来なかった。

『とにかく合流しよう。こちらは不手際を犯し、奴らの将を逃してしまった。シャマル、ザフィーラ。味方の騎士たちにはもう解毒剤は必要ないのかどうか、確認してくれ』

私の代わりにザフィーラが狼形態になって地を駆け、近くに居る騎士数人の安否を確認しに行く。そして『全員の安否は確認できんが、我が見たところ毒の効果を残している者は居ない』ってザフィーラが報告をしてくれた。それを証明するかのように、次々と味方の騎士たちが身を捩って体を起こしていく。

『判った。すぐに合流し、アムルへ帰還しよう。ここで休ませるよりかは幾分かマシなはずだ』

思念通話が切れて、私とザフィーラはシグナム達が来るのを待つ。そこに、私たちの一番近くに居た団長が体を起こして、「また騎士オーディンに助けられたのですか？」って自分の体を見回す。

「――って、騎士オーディン！？　一体どうしたんですかっ！？」

「オーディンさんは、みなさんを助けるために・・・苦しんでます」

なにを言ってるの私。違う。そうじゃないの。私たちがもっと早く解毒剤を手に入れてさえいれば、こんな事態にならなかった。すぐに「ごめんなさい。八つ当たりです」と謝る。でも団長は「仰る通りです。不甲斐ない我らをお許しください」と頭を下げた。

「あとの事は我らに任せ、あなた方が騎士オーディンをアムルへと連れ帰ってください。各騎！　英雄殿に救われたこの命、決して無駄にすることなくこの地を守れッ！」

団長が叫ぶと、周囲に居る他の騎士たちが「了解（ヤヴォール）！」と応じて、それぞれ持っていた武器を掲げた。ふと辺りを見回せば、倒れ伏したままの騎士が十何人か居るのが判る。すぐに理解する。もう亡くなっている方なんだと。

「「オーディン！」」「マイスターっ！」

シグナム達が来た。多く話す事なく、私たちはアムルへと帰還するため、持てる力の限り高速で空を翔けた。

†††Ｓｉｄｅシャマル⇒エリーゼ†††

「オーディンさん・・・・」

寝台に眠るオーディンさんの名を呟く。戦場から帰って来たオーディンさんにアギト、そしてシグナムさん達。いつものようにオーディンさんが、ただいま、って笑顔で言ってくれるのを待っていたけど、オーディンさんは意識不明のままでザフィーラさんに担がれて帰って来た。あれから６時間。意識を失っていた時でも苦しそうにしていたけど、今は落ち着いていてぐっすり眠っている。

「アギト。わたしは席を外すから、オーディンさんが目を覚ましたら呼んで」

「うん」

本当はずっと側に居たいけど、アムルの街の長としての仕事がまだあるからそろそろ戻らないと。あとの事はアギトに任せて、わたしは音を立てないように注意を払って部屋を後にする。廊下には、わたしの補佐をしてくれるアンナと、親友でありオーディンさんの弟子であるモニカとルファ。そして騎士甲冑と思しき衣服を身に纏ったままのシグナムさん達が沈んだ様子で佇んでいた。

「皆さんもお疲れですよね。部屋は用意してありますから、もう休んでは・・・？」

これも何度目かの提案。だけど返事は決まってシグナムさんの「いいえ。オーディンが目を覚ますまで休めません」だ。戦場へ行く前と帰って来た時とで呼び方が変わってるのには気付いているけど、深くは聞かないし、聞くつもりもない。オーディンさんの事だから、敬語は使わなくていい、だとか、名前の前に主は要らない、ってお願いしたんだろう。

「オーディンさんはもう大丈夫ですよ、きっと。ですから休んでください。ここで皆さんまで体を悪くしたら、もしもの時にオーディンさんが困っちゃいます」

「・・・シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ。ここはエリーゼ卿の仰る通りにしましょ。今は出来る事が無いし、私たちの為すべき事が出来た時に備えて休むのが一番だわ」

シャマルさんがようやく首を縦に振って、シグナムさんとヴィータちゃんとザフィーラさんにそう言ってくれた。シグナムさんもついに折れてくれて、「判った。エリーゼ卿。我々はこれで失礼します」と一礼。

わたしは「アンナ。皆さんを部屋に案内してあげて」と指示を出し、アンナは首肯してシグナムさん達を連れて行く。案内って言ってもこの階の端の四部屋だ。男のオーディンさんとは別の階にしようかと思ったけど、間違いが起こらないと信じて（本当はかなり苦悩したけど）同じ階にした。

「モニカ、ルファ。２人は一応隣室で待機しててくれる？」

「うん、判った」「了解ですっ」

二人が部屋に入っていくのを見届けて、わたしは執務室へ向かう。今はただ待つだけだ。シャマルさんとアギトから聴いたから。治癒魔法を使ったら今まで見たこともないくらいに苦しみ始めた、って。シャマルさんが使ったのは、魔力も一緒に回復させる魔導らしくて、もしそれが原因だったらわたしの能力クス・デア・ヒルフェも危ないかもしれない。

普段は問題ないのに、何かが原因で苦痛を与える魔力回復。その原因がハッキリするまではオーディンさんの魔力を回復できない。わたしは、無力だ。助けてもらってばかりで、あんまり恩返しが出来てない。最後にもう一度オーディンさんの部屋の扉に目を向けてから、わたしはその場を後にした。

。―。―。―。―。―。―。

そこは豪華絢爛な六角形の大きな空間。薄い青色の光を淡く放っている石材で作られた床にはレッドカーペットが六茫星状に敷かれている。ホールの6つの角には支柱が立ち並び、また六つの壁の半ば辺りには翼のような荘厳な装飾。翼の装飾の上には窓代わりに縦長のステンドグラス。壁一面につき8枚のステンドグラスが宛がわれている

計48枚のステンドグラス全部に人物が描かれている。48人全員が銀の髪にラピスラズリとルビーレッドの虹彩異色。魔道世界アースガルドを統べる四王族の特徴である銀髪、そして四王族の一角であるセインテスト王家の特徴である虹彩異色。天井一面にもステンドグラス。十字架と、その四方より伸びる四本の剣という、アース

ガルドの紋章だ。それらのステンドグラスを通して入り込む陽光は、綺麗な数色の光でこの空間を幻想的に照らしていた。

「――また消えたよ、ルシル」

その空間の中に、大人のような凛として、しかしその中に子供のような幼さの残る女性の声が響く。この空間の中央。巨大な肘掛椅子に腰かけている女性から発せられたものだ。

アースガルド王族特有の銀髪は膝裏まであるロングストレート。セインテスト王家特有のルビーレッドとラピスラズリの虹彩異色。足首まであるロングファーコートを着ていて、生地や毛皮の配色からしてまるでサンタクロース。コートは下腹部から前を閉じておらず、黒のタイトスカートと黒のタイツを晒している。茶色い編み上げのロングブーツを履いているスラリと長い足は組まれている。

「一応ここ英雄（ヴァルハラ）の居館を含めた創世結界の管理者をあなたから任されているけど、あなたの異界英雄（エインヘリヤル）の1人には変わりないから、消失は防げないの」

その女性が、自身の前にあるもう1つの肘掛椅子に座る銀髪にルビーレッドとラピスラズリの虹彩異色の青年・ルシリオン（オーディン）に哀しげに告げる。ここはルシリオンの精神世界に展開されている創世結界のひとつ、"英雄の居館ヴァルハラ"。その玉座の間だ

ルシリオンは「ごめんなさい、ゼフィ姉様」と、申し訳なさそうに頭を下げた。ゼフィ姉様。ゼフィランサス・セインテスト・アースガルド。ルシリオンの実姉だ。ルシリオンの使い魔とも言える"異界英雄エインヘリヤル"の1人だが、その自我は確固として独立し

ているため、姉として精神世界からルシリオンを支えるために存在し続けている。
"異界英雄エインヘリヤル"とは、ルシリオンの固有能力・複製によって複製された武器・魔術・魔法・能力・技術・知識などの持ち主を魔力で構築し、彼の使い魔とされたものだ。

「失ったエインヘリヤルはこれまでに４１１６体。失った複製武器は２０８１本。失った複製技術・魔法・能力は計１９４４９個。全体の２％くらいだけれど、半年で２％はちょっと多いかもだから気を付けて」

「・・・・そんなに・・・・失ったのですか、私の思い出・・・・。くそっ、誰を、何を忘れたのか思い出せないっ！」

ルシリオンは肘掛を思いっきり拳で殴り付けた。表情は泣く一歩手前。だが泣かないように必死に堪えている。ゼフィランサスは忙しなく立ち上がり、ルシリオンの元へと駆けつけ、その胸に彼を抱き寄せた。

「お姉ちゃんの前でくらい弱くなってもいいんだよ。強がらないでいいの」

「いえ。私は強くあり続けなくてはいけません。これが最後のチャンスですから。ガーデンベルグ達を救い、私が人間に戻れる、最後の・・・・。どれだけ辛くとも苦しくとも、私は立ち止まることも振り返ることも後戻りすることも出来ない、したくない」

ルシリオンはそう言ってゼフィランサスの腕を取って離れる。すでに泣き顔ではなく、キリッとした凛然たる表情だった。ゼフィランサスは嘆息し、「姉様～、って甘えてくれていたルシルはもういないのね」と肘掛椅子へと戻っていった。

「ルシル。一応管理者として、ある程度の干渉は出来る。消失していく記憶。それすなわち創世結界に記録された複製物のこと。複製物が保管されている3つの創世結界の管理者として、消失の優先順を決める事が出来る。と思う」

ルシリオンは目を見開く。それは残酷な提案だった。思い出に順番を決めろというのだ。ルシリオンの姉ゼフィランサスは。全ての複製物――ルシリオンの数多き思い出は、彼を形作り支える宝だ。それに順位を付ける事など出来るはずはなかった。が、ルシリオンは「じゃあ」と前置きし、

「私に光をくれた彼女の居た契約・・・・先の次元世界での思い出を最優先にしてほしいです」

先の次元世界。ルシリオンにとって一番大切で、とても重要な契約だった。自分の幸せを全て捨てて、ただ契約を執行するだけの歯車だったルシリオンに、再び幸せになっていいという選択肢を取り戻させたフェイト・テスタロッサとの出逢い、そんな彼女らと共に過ごした時間のある契約。

もちろんそれだけではない。今その契約の記憶を失ってしまうと、シグナムら守護騎士ヴォルケンリッターの事や"夜天の魔導書"に関する情報を失う事になる。ルシリオンは"夜天の魔導書"の今後

の為にそれは避けたいと考えていた。

「そうだね。私としてもその記憶は最後まで残っていた方が良いと思う。フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。あなたと事を真剣に、そしてどこまでも想ってくれていた彼女は、忘れちゃダメ」

ルシリオンは「はい」と頷いた。とそこに、「私が居たからこそフェイトと結ばれたってことも忘れないでよね」という女性の声が玉座の間に響き渡った。ルシリオンとゼフィランサスがその声の主の方へと顔を向ける。翼の装飾下の凝ったデザインの両開き扉前に、その女性は独り腕を組んで佇んでいた。

脹脛まで流れる艶やかなアクアブルーのロングストレート。前髪は真ん中で大きく開けて分けているため額が大きく出ている。柔らかな瞳はアザレアピンク。

白を基調とした、裾が波打つフレアードレス。インナースーツも白で統一されており、前立てのラインは蒼。上まで閉められたファスナーの飾りには桜の花弁が施されている。アウターは前立てのない白いショートジャケット。両肩・背中部分にFの両側に翼竜という紋様が刺繍されている。両手には白い籠手。脚部は編み上げのロングブーツに、白い装甲が装着されている。

「シャル・・・」「シャルロッテ・・・」

２人はその女性の名を嘆息しながら言った。ルシリオンの所属していたアンスール同盟軍・アンスールに対抗するために強制参戦させられた、ヨツンヘイム連合軍・複数世界ミッドガルド秩序管理組織左翼・天光騎士団の最強の１０人たる星騎士シュテルン・リッター

が第五騎士、剣神シャルロッテ・フライハイトだ。
彼女もまた"エインヘリヤル"の一体。ゼフィランサスと同様に確固とした独立した自我を持っている。そして、元"界律の守護神テスタメント"の元３ｒｄ・テスタメント、剣戟の極致に至りし者の二つ名を持っていた。今はもう"神意の玉座"より解放され、転生し、どこかの世界で人間として過ごしているはずだ。

「貴女、また勝手に・・・」

「申し訳ありません、ゼフィランサス姫。元パートナーのルシルの事が気になりまして」

シャルロッテはゼフィランサスに深々と頭を下げた後、ルシリオンの元へと歩き出す。

「ルシル。あなたとフェイトが結ばれたのは、私のおかげでもあるんだからね♪　だから忘れないでよ。あの次元世界での出来事を。ルシルが生まれ変わって、私も生まれ変わる事が出来た、あの素晴らしい時間を・・・」

「判ってる。忘れたくない。本音を言えば、今残っている全てを最後まで持っていきたい。だけど、それは叶わない願い。エグリゴリと戦えば否応にもなく魔力を全開させる。そうなればまた失うだろう。でも安心してくれ。大きな代償の果てに待っているのはきっと望みの世界・・・」

「エグリゴリを救済し、神意の玉座から解放され、人間に戻ってア

ースガルドへと帰り、ここヴァルハラに眠るシェフィリス、シエル、カノンの遺体と魂を解放する・・・」

「ああ。だから私は前へと進み続けるだけだ。ゼフィ姉様。記憶の保護の件、お願いします」

ルシリオンは椅子より立ち上がり、そこまで来ていたシャルロッテの肩をポンと叩いて出口へと向かいだす。シャルロッテも「あ、待ってよルシル」と追いかける。ゼフィランサスはそんな2人の背を見守り、「どうしてあの子にこんな残酷な道を用意するの？　神様・・・」と人知れず涙を流して項垂れた。

ルシリオンとシャルロッテが扉を開け、一歩外に出ると、そこはまた別の創世結界の景色。一番上が見えない程の高さを誇る書棚が渦巻き、渦巻く銀河のように並び立っている。

ここは創世結界"英知の書庫アルヴィト"。複製された魔術・魔法・能力・技術・知識などが書物状と化して収められている場所だ。

2人はその中央へと足を運び、エメラルドの円卓へと着いた。ロッキングチェアに腰かけ、ルシリオンが円卓に手を翳すと、円卓上に8冊の書物――魔道書が現れた。

「ねえねえ、なにするの？」

「新たな魔術を創り出す。以前は複製術式に頼っていたと思うんだが、失ったらしくて無いんだ。だから固有魔術として一から組み直す」

一度に8冊の魔道書のページを開き、高速で目を通していくルシリ

オン。ルシリオンの意識下で複雑な術式が組まれていく。そんな彼をジッと眺めるシャルロッテ。話がしたくてウズウズしていると言った風だ。その様子に気づいたルシリオンが「黙って作業するのもつまらないから、何か話そうか」と微苦笑。
シャルロッテは表情を輝かせて何度も頷く。そして、「ルシル、夜天の書の主になったんだよね？」と話を切り出した。ルシリオンは「ああ、そうだけど・・・それが？」と問い返す。

「・・・・夜天の書を解放するの？」

「まさか。管制人格である彼女を目覚めさせ、具現化させるために４００ページまで埋めるがそこまでだ。完成させないし、解放も当然しない」

「・・・・そっか。はやてが魔導師としての道を行くには必要だもんね、闇の書事件」

「そういう事だ。彼女やシグナム達には悪いが、はやての元に転生するまでは闇の書として存在してもらう。だが、私が主としている間、出来うる限りの幸せを送ってもらえるよう努力するつもりだ。とは言え、こんな戦乱期である以上、どうしても戦闘に駆り出させ、人を傷つけさせなければならないが」

「そればかりはどうしようもないよね。時代が悪い。でも、うん。それでも何とかあの娘たちの事を守ってあげて」

「言われるまでもないよ、シャル。・・・・さて。女神（コード・イドゥン）の救済の試

作術式が出来た。シャル。少し付き合ってもらえるか？」

「模擬戦だね。いいよ、付き合ってあげる。エインヘリヤルの役目でもあるしね」

２人はロッキングチェアより立ち上がり、ルシリオンが指をパチンと鳴らす。一瞬の闇。そしてすぐさま世界がガラリと変わる。地平線の彼方まで続く天地を覆い隠す黒い雲は中央に向かって吸い込まれるように渦を巻き、天壌には輝くルーン文字が舞い、ところどころに大小さまざまな球体が点在している。唯一の明かりは地平線の果てに輝く曙光のみ。雲が照らされて、微光の絨毯となっていた。純粋な戦闘空間として在る創世結界・"聖天の極壁ヒミンビョルグ"。

――我を運べ、汝の蒼翼（アンピエル）――

――真紅の両翼（ルビーン・フリューゲル）――

ルシリオンの背より１２枚の蒼い光で構成された剣の翼が展開され、シャルロッテの背からは一対の真紅に光り輝く翼が展開された。ここ"ヒミンビョルグ"には足を付ける事の出来る大地が無い。そのため２人は空を飛ぶための飛翔魔術を発動。

そしてシャルロッテの右手から彼女の魔力光であるルビーレッドの閃光が発せられた後、そこには一振りの長刀が存在していた。桜色をした刀身はひたすら長く、柄もあわせると、シャルロッテの身長と同じ１６５ｃｍほどの長さだ。銘を魔造兵装第九位・"断刀キルシュブリューテ"。桜、という意味を持つこの長刀こそシャルロッ

テの生前からの愛刀だ。

「あ、言い忘れていた。魔力攻撃で頼むぞ。物理攻撃はしないように」

「ん。じゃあ行くよ、ルシル。シャルロッテ・フライハイト。参ります」

「ルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。参る」

――雷牙月閃刃（ブリッツ・エアモルドゥング）――

"キルシュブリューテ"の刀身に真紅の雷光が付加される。

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

そしてシャルロッテは両翼を羽ばたかせて一気にルシリオンに接近。ルシリオンは「上手く発動してくれよ」と呟き、先程組み上げたばかりの術式を発動させる。

――女神の救済（コード・イドゥン）――

†††Ｓｉｄｅアギト†††

フォーアライター・オルデンとの戦いの翌日。陽も高くまで上がってもうお昼時。マイスターは結局昨日は起きなかった。今もあたしの目の前で眠り続けてる。

「ん？　なんだろう・・・・？」

外がガヤガヤ騒がしい。ベッドの上から窓まで飛んで、外を眺めてみる。正門からエントランスまでの中庭に、アムルの人たちが数十人って集まってた。エリーゼさんやアンナさんが中庭で応対してる。聞き耳を立てようとしたところで、「・・・ん・・・アギト・・・？」って、後ろから聴きたかった声が。

「マイスターっ！」

振り向いてみると、マイスターがしっかり目を開けてあたしを見ていた。急いでマイスターのところに戻って、胸の上に降り立つ。マイスターはいつものようにあたしの頭を撫でてくれた。そして「外が少し騒がしいようだけど・・・何かあったのか？」って訊かれたけど、「判んない」って首を横に振った。

「なら話を聴きに行こうか」

「えっ？　もう起きても大丈夫なのっ？」

「問題ないよ。身体的なダメージは何一つとして負っていないからな」

マイスターはベッドから降りて、ゆったりとした部屋着のままで部屋を出て行くのをあたしも続く。あたしはマイスターの背中に向けて「マイスター。また記憶が、その・・・・」って訊き辛かったけ

ど訊いてみた。
マイスターは自分の右肩をトントン叩いた。座っていいよ、って合図。「失礼します」って一言断ってから降り立つ。そしてマイスターは「・・・ああ。失ってしまったようだ。思い出せないけど」って寂しそうに答えてくれた。とそこにシグナムとヴィータとシャマルが自分たちの部屋から出てきて、

「「オーディンっ」」「オーディンさんっ」

マイスターの姿を見ると駆け寄って来て、遅れてザフィーラも狼形態で歩いて来た。

「オーディン、もう歩いても平気なのかよっ？」

「オーディン。お体の方はもうよろしいのですか・・・？」

「我が主。もうしばらくお休みになっていた方が」

「ごめんなさい、オーディンさん。私が余計にオーディンさんを苦しめたのかもしれません」

「まずはヴィータとシグナムとザフィーラに。身体はもう何も問題ない。少しばかり核にダメージを負ったくらいだが、すでに回復している。健康そのものだ。で、シャマル。君の所為じゃない。私が招いた慢心が原因でああなった。だから自分を責めるな」

ホッとしてるシグナム達だけど、シャマルだけはまだしゅんとして

る。あたしにはシャマルの気持ちが判るんだ。マイスターに気にするなって言われても、実際に魔導を使った事でマイスターが苦しんだ。自分を責めたっておかしくない。マイスターがシャマルの頭を撫でると、シャマルはポカンとして自分の頭を撫でてるマイスターの手を見る。

「とは言っても、それでシャマルが納得しないって言うなら仕方がない。罰を与える」

ビクって肩を震わしたシャマルが「なんなりと」って廊下に片膝をついた。マイスターから告げられたシャマルへの罰。それは「医者としての私の助手として働くこと」だった。シャマルはまたポカンとして「それだけですか？」って訊き返して、マイスターに「結構大変なんだぞ？」って微笑みを返した。

「私の魔道は特殊なんだ。だからモニカとルファに伝授できるのは精々病気や怪我の種類や薬品の調合、診察・治療方法などで、ベルカ式の治癒魔法は教えられない。で、シャマルは治癒と補助に優れたベルカ騎士なんだろ？　モニカとルファに治癒魔法を教えてくれると助かるんだ」

「なるほどです。判りました。オーディンさんのお役に立てるのなら、精一杯がんばりますっ」

マイスターに手を取られて立ち上がらせてもらったシャマルはもう気落ちしてない。

「なあオーディン。シャマルは助手でいいとしても、あたしらは何すりゃいいんだ？」

「確かに。我らはこれと言って特性は無いな」

「二人が得意なことはなんだ・・・？」

「斬る事です」「ぶっ壊すこと」

「う～～～ん・・・・」

マイスターがシグナム達の身の振り方について考えているんだけど、元の目的を思い出させるために「マイスター、外」って前髪をちょっと引っ張ってみる。

「おっと、そうだったな。君たちの仕事の話は追々だ。今は外の騒ぎを確認しないと」

そう歩き出すマイスターに、シグナム達も「お供します」ってついて来た。エントランスへ近づいた時、モニカとルファとバッタリ会った。そしてあたし達は知る。街の人たちがシュテルンベルク邸に集まったその理由を。

「――ということで、オーディンさんの記憶を失う障害という話がモニカから漏れちゃいまして・・・」

「そしたらみんな、オーディンさんに一言言いたい、だとか、謝り

たい、だとか、お礼が言いたい、だとかって・・・」

マイスターが魔力の使い過ぎで記憶を失ってしまうっていう障害の事を、モニカがうっかり知り合いに喋ったのが原因。マイスターに厳重に口止めされているんだよね、あたし達は。魔力枯渇による記憶障害の事を。下手にみんなに心配かけたくないって言って。マイスターはみんなの事ばかり考えているのに、時折自分の事を無視したりする。そこのところを治してくれればいいんだけどなぁ・・・はぁ。

「それで騒いでいるのか」

「ごめんなさい、オーディン先生」

「まぁ知られたのならしょうがないさ。話をつけてくるよ」

マイスターはモニカの頭をポンポン優しく叩いて、玄関へ向かう。あたしたち全員もマイスターに続く。そして玄関に到着して、マイスターの姿を見つけた街のみんなが「先生っ」「オーディンさんっ」ってマイスターの名前を呼んでもっと騒がしくなった。エリーゼも「オーディンさん、もう大丈夫なのですかっ？」マイスターのところにまで駆け寄って来た。

「ああ、もう大丈夫。心配を掛けた。あとは私が話をしよう」

マイスターはそう言って、みんなのところまで歩いて行った。

†††Ｓｉｄｅアギト⇒オーディン†††

さて、どうしたものか。みんなの話を聞き、少々困った事になってしまったと頭を悩ます。話の大まかな内容は、まず謝罪だった。私の記憶障害の事を知らずにいた事と、その原因である魔力枯渇を促す戦闘に送り出していた事。
それについてはこちらが隠していたから気にしないでほしい、と・・・。で、今度はお叱り。どうして黙っていたのか、と。教える必要がなかったかなぁ、と答えるとすっごい怒られた。まぁここまではいいとして。問題はここからだ。

「オーディンさんっ。俺、騎士になってオーディンさんの手伝いをしますっ！」

ダニロ（半年前、虐殺者侵攻の際に知り合った兄弟の長男だ）が詰め寄って来た。彼ら兄弟の母親を助けた事で、私は随分と慕われるようになった。それはそうと、弟のアヒム（歳はまだ１０歳だ）までも「ぼくもたたかうっ」と聞かない。
そして２人にとって姉であり妹である少女ベッティすらも「何か手伝わせてくださいっ」だ。彼らの母親は困惑顔。子供たちですらこう言いだすのだから、大人たちも似たような事を言い出し始める。なんとか説得を試みたんだが、聞きゃしない。ヴィータが「なあオーディン。こうなったら戦力にしちまった方が・・・」と言ってきた。

「ダメだ。そんな危ない真似はさせられない。私と共に戦うという事は、最前線での戦いに巻き込まれるという事だ。常に死と隣り合

わせだ。そんなところに連れて行けない」
「しかしよ先生。あんた、魔力を使えば使うほどまずいんだろ？」
「そ、そうだよオーディンさんっ。記憶が失くなるなんて、そんなの悲し過ぎるでしょっ」
「確かに記憶を失っていくのは悲しいし辛いし、恐い。でも、それで人が守れるのなら安い代償だ。過去は失ってしまうけど、思い出はこうしてみんなと在り続ける限り生まれ続ける。だから大丈夫。それに、私には心強い仲間もいる」
アギトを始めシグナムたち守護騎士ヴォルケンリッターに視線を移す。そして後にまた仲間が1人増える。たった7人。でもそれは少数精鋭部隊――かつてのアンスールのような、だ。
「ああ。我らが、オーディンの記憶障害が起きぬようにすればいい」
「そういうこったな。あたしらのこと忘れられても困るし」
「ええ。二度とこんな失敗を犯さないように、しっかりとしないと」
「うむ。主オーディンのためにも我らが強くあらねば」
「マイスター。もう無茶しちゃダメだよ？　あたし達が頑張るから」
「ありがとう。だからみんな。私は大丈夫だ。心配してくれてあり

がとう」

というようなやり取りを経てようやく騒ぎが収り、この場は解散となった。まぁ完全に私たちに任せっきりというのも嫌だということで、シグナムとヴィータとザフィーラが街のみんなに戦い方を教え鍛えるという方向になった。

シグナムは剣の扱い方――というかシグナムの教えって確か、相手に近づいて斬る、だったよな・・・。いやしかし剣の腕は確か。見取り稽古というのもあるし、シグナムの剣を習得出来る者も居るかも。それにヴィータとザフィーラも居るし大丈夫だろう。

「オーディンさん。何か名前を付けてみたらどうですか？」

エリーゼが主語を抜かしてそんな事を言ってくるから「名前？」と訊き返す。ニコニコと笑顔を浮かべて私の隣にまで来たエリーゼは言う。

「はいっ。オーディンさんが眠っている間にシグナムさん達とお話ししたんですけど、オーディンさんとアギト、そしてシグナムさん達っていう風に線引きしちゃってるんです」

「我らは一応、オーディンの戦友である前に仕える者だからな」

「って、一点張りなんです。ですからこの機会に線引きを失くす――みなさんを一致団結させるために騎士団の名を付けてはどうかと」

「おおっ、ソレすごく良いじゃんっ♪　じゃあオーディンとゆかい

な仲間たち、でどう？」

「しっかり線引きが残ってるじゃないのモニカ。たとえば・・・アムル騎士団、でどうですか？」

エリーゼの提案に、モニカもルファも盛り上がってしまった。ルファの案にアンナが「直球過ぎて面白みに欠けるわね～」と微苦笑。君は出さないんだな、候補。それから出るわ出るわ可笑しい騎士団名候補。

「まぁ急いで決める必要もないよな」

「グラオベン・オルデン、が良いかも」

私がそう言ったところで、アギトが呟いた。エリーゼが「信念の騎士団、・・・グラオベン・オルデン・・・？」と訊き返す。アギトは「マイスターの信念が、あたし達の原動力だし」と答えた。

「守りたいものを守り、救いたいものを救う。その誓い――信念のために力を揮うオーディン。それに賛同している我ら・・・」

「いいじゃねぇか、アギト。信念の騎士団。あたしらにピッタリじゃねぇか」

「そ、そうかな。えっと、マイスターはそれでどうかな・・・？」

自信なさげなアギトだが、私は嬉しさでいっぱいだった。だから迷

いなく言える。

「ああ、それで行こう。私オーディン。アギト。シグナム。ヴィータ。シャマル・ザフィーラ。我らは信念の下に大切なものを守護する騎士団、グラオベン・オルデンだ」

みんなの顔を順繰りに見る。それぞれ頷き応えてくれた。こうしてシュトゥラ・ラキシュ領アムルに、人数は少ないが一個騎士団"グラオベン・オルデン"が生まれた。

。―。―。―。―。―。

――アウストラシア／ネストリア国境：グラープ・デス・ガイスト岩盤地帯

鉄錆色の岩盤が広がるグラープ・デス・ガイスト岩盤地帯。各国に聖王家と謳われる王族が統治するアウストラシアと、ネストリアと呼ばれる国の国境に、ソレはある。広大な岩盤地帯であるそこは、生物の方向感覚を狂わす特殊な磁場が在り、ゆえに精神の墓場（グラープ・デス・ガイスト）と呼ばれ、生物が何一つとして存在していない。

その生物が決して住まう事のないグラープ・デス・ガイスト岩盤地帯のある一画。鋼色の甲冑を着こんでいる人間が百数十人と硬い岩盤に斃れ伏していた。全員の甲冑には何かによって切断されたような痕があり、そこから血が流れ出て血溜まりを生み出していた。

その死体の山の中、同じ鋼色の甲冑を着た者が数十人。そして・・・

「これが・・・聖王家の番犬の力、なのか・・・」

1人の男が戦慄した声色で呟く。その男の視線の先に、その者は居た。

肩に掛かるくらいの空色の髪、キリッとした桃色の双眸。顔立ちはオリヴィエほど幼い。身に纏うのはハイネックの白のミニワンピース。前立てや縁には幾何学模様の金の刺繍。ワンピースの上に水色のショートジャケットを重ね着して、両腕に銀の籠手を装着している。腰に纏うのは前開きの水色のオーバースカート。白く美しい足を覆うニーハイソックスにロングブーツと、その上から爪先から膝まで隠す銀の脚甲、という格好。

シュトゥラに留学という体裁で出されているオリヴィエ・ゼーゲブレヒト付きの女騎士、リサだ。

「番犬番犬って、獣みたいに呼んでほしくないですね。まぁオリヴィエ様の犬――と呼ばれるのなら問題ないですが」

恍惚とした表情を見せるリサ。場所が場所なら捕まってもおかしくない。

「くそっ。たった独りの変態相手に潰されてたまるかッ。一斉に掛かれッ！」

「変態とは失礼な。私にはリサ・ド・シャルロッテ・フライハイトという立派な名前と、剣姫（ケンキ）という二つ名があるというのに」

――炎牙月閃刃（フランメ・モーントズィッヒェル）――

リサは側に突き立てていた桜色の刀身を持つ刀を手に取り、刀身に桃色の炎を纏わせた。

「聖王家に仇なす愚者共。死にたい奴から掛かって来い」

数分後、グラープ・デス・ガイスト岩盤地帯にはたった1つの生命が残り、他全ては骸となり果てて鉄錆色の岩盤を血色に染め上げていた。

Ｍｙｔｈ６聖王家の番犬～Ｍｅｉｓｔｅｒ　ｄｅｓ　Ｓｃｈｗｅｒｔ～

ベルカ一の勢力を誇る大国イリュリア。その王都スコドラの中央にそびえ立つ王城。その王城の一画、イリュリア王家のテウタ王女に与えられている領域内にある一室にて、テウタ王女を次期イリュリア王へと据えようとする派閥の騎士団の将らが秘密会議を行っていた。

メンバーの顔触れや格好は先の会議と同じ。唯一の違いと言えば、先のアムル侵攻に出立し見事返り討ちにあった地駆けし疾狼騎士団フォーアライター・オルデンの団長ファルコ・アイブリンガー。彼の左腕はギブスで吊られ、右頬には大きな切り傷が刻まれている。その怪我には誰も触れようとしなかった。ファルコ率いる騎士団の３分の２が戦死・再起不能にされた事は周知だからだ。

「――で、此度のアムル侵攻・・・いや、シュトゥラの悪魔オーディンの討伐を目的とした盟友ファルコとフォーアライター・オルデンだが、御覧の通り失敗した」

彼らのリーダー格である初老の男・イリュリア騎士団総長グレゴールが無念そうに言う。ファルコは椅子から立ち上がり、「すまんかった。やられちまった」と頭を下げ、また椅子に座り直す。それを見計らって、１人の女性が「１つ質問」と挙手。

ファルコが「なんだよ、盟友ウルリケ」と応える。ウルリケと呼ばれた２０歳前半ほどの女性。綺麗な白髪は両耳の後ろでおさげにし、

瞳はルビーのような真紅色。
名をウルリケ・デュッセルドルフ・フォン・ブラッディア。
イリュリアの有する複数の上級騎士団の中でも異質な騎士団――いや、騎士の団と呼べるかどうかも怪しいが――狂いたる災禍騎士団プリュンダラー・オルデンの将だ。そして、遥かに古き時代の戦争・"大戦"に参加していた騎士の末裔と噂されている者の1人だ

「プロトタイプとはいえ融合騎を連れて行ったのでしょ？　それに、個人個人の実力も高いし戦術的にも巧妙だし、そうそう遅れを取るようなあなた達ではないはず・・・」

「それに関しての報告が遅れたけどさ。騎士オーディンに新しい戦力が出来ていた。裏切りの融合騎ゼクスに続き、最悪な事に闇の書の守護騎士があの男の下に集った。俺と融合騎フュンフの融合に対し、守護騎士シグナムもゼクスと融合して、結果負けた」

ファルコの報告に、室内の空気が一気に重くなった。彼らのリーダー・グレゴールすらも驚愕に目を見開いている。それほどまでに"闇の書"と守護騎士ヴォルケンリッターは畏怖の対象として、ベルカにその名を轟かせていた。

「オーディンが闇の書の主になったって事かぁ。最悪な状況だよな、それ」

「そうですね。ただでさえ強力な単独戦力である悪魔に、さらに強力な守護騎士が付いたとなると厄介かと・・・」

「少々見直す必要があるんじゃないか？　このまま本当にシュトゥラに感(かま)けていていいのかどうか・・・？」

「今はバルトとの戦争に意識を割いた方が良いかもしれないな」

思い思いに言っていく騎士団長ら。

「いやだね。なんとしても騎士オーディンも守護騎士も、そしてアムルも落としてやる。俺らは卑怯な戦術もとるし、騎士としての誇りなんてもう捨てちまったけどさ。それでもイリュリアの一員としての誇りだけは失ってないぜ」

しかしファルコは全員を順繰りに見、力説した。そして最後に「だから俺は逃げない。騎士オーディンだけは必ず討ちとる」と言い切り、メンバーの顔を順繰りに見る。

「しかしそうは言っても、真っ向からぶつかっても返り討ち、あなた達のようなから搦め手を使っても返り討ち。もう下手に敵に回すより放置して別の国家とぶつからせておいた方が良いのでは？」

「僕も盟友ウルリケと同じ意見です。これ以上弱小国(シュトゥラ)に戦力を割いて、騎士団を失うわけにはいかない」

「俺も。テウタ王女の手足として今後のイリュリアを支える俺たちが、これ以上の敗戦記録を伸ばすわけにはいかないしな」

「盟友フレークと盟友ゲルトも同意見か。盟友ファルコ。気持ちは

解るが、しばらくシュトゥラ――アムルと騎士オーディンの事は度外視しろ」

グレゴールにそう言われ、ファルコは納得してなくとも「了解（ヤヴォール）」と応えた。もちろんこの場に居る全員も、本音を言えばオーディンを墜としたいと思っている。しかしそれ以上に厄介な相手がベルカ統一という覇道の行く手に控えているため、残念ながら後回しにするしかなかった。

「とにかく。これからはウラル・リヴォニア・リトヴァの三連国（バルト）との決戦を主軸にして調整していく。それともう1つ。他の上位騎士団もテウタ王女派へと参入させる事も念頭に入れておけ。政治家連中には我が声を掛けておく。バルデュリス陛下ももう長くない。あとはゲンティウス殿下派との派閥争いを決着させるだけ。それでようやくベルカ統一戦争の真の始まりとなる。シュトゥラの件は後々の情勢次第で、ということをテウタ王女に進言しておく」

グレゴールがそう締めくくり、各騎はそれぞれ頷き応えた。

†††Ｓｉｄｅエリーゼ†††

先のイリュリア上位騎士団との戦闘から一週間。

この一週間は平和なもので、オーディンさんもシグナムさん達ものんびり過ごす事が出来ていた。今もこうして屋敷前の大広場でシグナムさんとヴィータちゃんとザフィーラさんが、街の大人や子供たちに魔導や技術を教え込んでいるのをゆったり見学できている。

お三方がみんなに教えている技術や魔導は敵を斃すためのものじゃ

なくて、大切な何かを守るためのもの。オーディンさんの信念の下に戦う力を求めたみんな。そしてそれに応えて教えるシグナムさん達。

「アムルはきっと良い方向へ向かってるよね・・・・」

純粋に力だけじゃなくて心の在り方も強い街にしようと誓ってから半年弱。それが少しずつだけど叶おうとしてる。それが嬉しくて、そわそわしちゃう。そんな嬉しさいっぱいの中、「エリー？　仕事放って何してるの？」って今聴きたくない声が後ろから聞こえてきた。

後ろに振り向きつつ「ちょっと休憩を。アンナ」とわたしの親友であり、姉であり、仕事を補佐してくれる大切な人、アンナに答える。アンナは毎日ずっと使用人服型の騎士甲冑を着て、魔力の変換効率などを常に成長させていて、常に自身を鍛えている努力家。

「休憩って、もう２０分も――」

「たった２０分じゃないっ。もうちょっとくらい休ませてよぉ」

「２０分も休めればもう十分でしょ？　それとも投げ出す？　シュテルンベルク男爵を」

「・・・・卑怯な言い方するよね、時折」

とんでもなく厳しいけど、それはわたしの為を思ってくれているからだというのは理解してる。だからちょっとだけ文句はあるけれど、

でも反感は無い。アンナが何かを言おうと口を開いて、でもその前に「すぐ戻るよ。休憩をサボりにしたくないしね」って屋敷へと歩を進める。

「っと。シグナムさん達に何か飲み物を用意してあげて。他の皆さんのもね♪」

「はい。かしこまりました」

「またそんな堅苦しい口調。いい加減にしてよ、ホント。それ、結構傷つくんだよ？」

「・・・・いつも以上に深刻そうね。判ったから、もうやめるから、そんなに泣きそうな顔しないで」

涙を人差し指で拭う"フリ"をする。ふふん、やったのだ。涙を流す演技を練習した甲斐があったよ。アンナがようやく折れてくれた。わたしが男爵位を得てからの日々、その大半を堅苦しい口調と態度で接して来るようになった。

頼むたびに少しは直してくれるけど、でもまた元に戻る。それの繰り返し。でもこれでようやく完全に元通りになるはず。中庭でアンナと別れて、まずは医院に足を運ぶ。屋敷の庭の一画に新設した医院。そこで、オーディンさんとアギト、モニカにルファ、そしてシャマルさんが働いてる。時間帯的には休憩中なはず。仕事に戻る前にオーディンさんの顔を見ておこうっと

「・・・ぅく・・・ちょ・・・たい・・・」

休憩中っていう札が掛けられた医院の扉の向こう、院内からオーディンさんの声が漏れて来た。しかもなんかちょっと苦悶という感じで、思わず中に入るより扉にへばり付いて聞き耳を立ててしまう。まず「やっぱり、少し痛いな・・・」っていうオーディンさんの声。痛い事してるの？　次に「ごめんなさい。でもこればっかりは」って謝るシャマルさんの声。

（え？　オーディンさんとシャマルさんの二人でやってるの？）

胸騒ぎ。扉を開けて入ろうかと思った矢先、「マイスター。やっぱりエリーゼに話しておいた方が」ってアギトのちょっと困惑気味の声。踏み止まって、また聞き耳を立てる。オーディンさんとシャマルさんの2人っきりじゃないから少し安心。

「いや、エリーゼにはあとで話そう。今は知らせない方がいいかもしれない」

なんで、どうしてわたしは仲間外れにされちゃうの？　グサリと来た。あぅ～、なんか事後に話されるとかってキッツイよぉ～（泣）

「そっか。というかさ、シャマル。マイスター、苦しそうだし、もう少し優しく出来ないの？」

「こればっかりは優しくするとかというのは・・・でも一応。・・・オーディンさん、私に体を預けてください」

ピク。シャマルさんがオーディンさんを誘ってる？　ちょっとちょっと。一体何をやって・・・「すまん。少し預ける」・・・ええええっ！？

扉にガッツリ張り付いて、「何やってるの、何やってるの？」中から聞こえてくる声に一点集中。アギトが「あーっ、膝枕っ。あたしだって一度マイスターにやってみたいのにっ」って騒いでるんだけど・・・「ひ、ざ、ま、く、らぁ～？」わたしだってやってみたくても出来ないのに。

「あん　・・・くすぐった・・・あ、オーディンさん。力を抜いてくださいね」

あーなんかこう、もうイライラ・・・モヤモヤする。もうダメ。開ける。邪魔する。怒っちゃう。わたしが仕事で忙しい時に一体何をやってるんですかっ？って。ドアノブに手を掛けたところで、「エリーゼっ。お客様が」ってわたしを呼ぶ声。振り向けば、モニカと・・・・誰？

「お初にお目に掛かります、エリーゼ・フォン・シュテルンベルク卿。私、クラウス・G・S・イングヴァルト殿下の使者、トーマス・ウェラーと申します。シュトゥラ王都ヴィレハイムの防衛を任されている近衛騎士団に所属しております」

そう名乗った男性、騎士トーマスが深々とお辞儀して来て、わたしも名乗りと挨拶を返した。騎士トーマスに「失礼ですが、騎士オーディンはいらっしゃいますか？」と尋ねられて、わたしは医院の扉を見た。

居る事は居るけれど、ちょぉーっとタイミングがまずいと言いますか・・・。
モニカが「オーディン先生は今、シャマル先生とアギトちゃんと休憩中ですよ」ってドアノブに手を掛けて、わたしが止める間もなく「失礼しま～す♪」ってノックもしないで開け放った。

「オーディン先生っ、クラウス殿下の使いの方が来てますよっ」

「クラウスから？　手紙を寄越してくれれば良いのにな」

オーディンさんが顔を覗かせて来た。あ、顔色が本当に悪い。アギトとシャマルさん（何か分厚い本を持ってる）もオーディンさんを支えるような立ち位置だし。

「お初にお目に掛かります、騎士オーディン。シュトゥラ近衛騎士団所属、トーマス・ウェラーと申します。クラウス殿下より書状を与っております故、お目を通して頂けますか」

騎士トーマスは近衛騎士団の制服の懐から一通の手紙を取り出して、オーディンさんは受け取って早速中身を読み始めた。それをじっと眺めるわたし達。オーディンさんは読み終えた後、「承知した。王都ヴィレハイムへ行こう」なんて耳を疑う事を言った。騎士トーマスが「来ていただけますかっ。感謝いたします、騎士オーディン」って歓喜の声を上げた。

「まっ、待って下さいっ！」「ちょっ、マイスターっ？」

話が読めずに慌ててアギトと一緒に止める。説明を求めたところ、オーディンさんは手紙の内容を話してくれた。大まかに言うと、なんとアノ聖王家のオリヴィエ王女の治療に、オーディンさんの力を借りたいとのお願いだった。

聖王家。ベルカに住まう者ならば誰もが知る名前。オリヴィエ王女は今シュトゥラに留学中で、王城にいらっしゃる。以前、男爵位の継承の儀に王都に赴いたけどもちろん会えず。そんなオリヴィエ王女は王位継承順位は低いけれど、武道と魔導ともに優れた御方だと聞き及んでいる。わたしが決めた、一目で良いからお会いしたい御方、という順位の第一位。それがオリヴィエ・ゼーゲブレヒト王女。

「ここ最近オリヴィエ王女の体調が優れないとの事だ。そこで、私の魔道を」

「確かにオーディンさんの魔導であれば、大半の怪我や病気は治せるかと思いますし、私に出来る事があればお手伝いもしますし」

「でもマイスター。アムルを空けてる間にイリュリアが攻めてきたらどうするの？」

「その事についてはご安心を。手紙にも記されているかと思いますが、国境警備の騎士団には私を含めた王都の騎士隊が参加します。騎士オーディンがアムルを空けている間、我々が国境を死守いたしますので」

「だそうだ。世話になっている国の王子クラウス直々の頼みだ。断るわけにはいかない」

そう言われるともう止める事が出来ない。ううん、そもそも王都に呼ばれた理由からして止めるなんて選択肢は無かった。でもちょっと寂しいかも。オーディンさんがアムルに住むようになってから一日として逢わない日なんて無かったから。そこに「オーディン。どっか行くんか？」って休憩に入ったのかヴィータちゃんが会話に入って来た。後ろにはシグナムさんとザフィーラさん、アンナも居る。

「ヴィータ。・・・ああ、王都に出張だ」

「では我らも共に王都へ・・・？」

「う～ん、そうだな・・・・。一度遠くまで出掛けてみるか」

「我が主。我はアムルへ留まりたく思います。喧騒な場所はあまり好みではない故」

「そうか。ならシグナム、ヴィータ、シャマル。そしてアギト。王都まで一緒に来てもらっていいか？」

あれよこれよと話が進んで行っちゃった。で、そのままオーディンさんは王都ヴィレハイムへ向かう事に。あぅ、わたしも行きたいな。オリヴィエ王女とお会い出来るかも。ひょっとしたら少しお話も出来るかもしれない。

でも・・・「判ってるから、無言の圧力はやめてアンナ・・・」アンナの視線がすごく痛い。わたしの憧れの御方オリヴィエ王女に会いに行きたい――つまりオーディンさん達について行くっていう提

案の予防。アムルの長としてちゃんと仕事しないといけないからね。無理は言わないよ。本当はすっっごく行きたいけどね。もう一度言うけど、行きたいけどねっ。

「では早速行って頂けますか？　街の外に馬と案内人を用意していますので、途中まで陸路、ラキシュ領半ばからは飛空船での空路となります」

国境近くであるアムル周辺には飛空船は入れない。飛空船でアムルに近づくと、イリュリア（だけじゃなくてどこの国境でもそうだけど）に攻め込まれると思われて、本格的な戦争に発展する可能性があるから。

すでにイリュリアとは何度も交戦しているから今さらなようだけど、今はまだ騎士団同士の軽いものだ。それが艦隊戦となるとまずい。アムルが最前線となって戦火に包まれることは必至、わたしたち住民は避難を余儀なくされる。

「判りました。用意が完了次第向かいましょう。エリーゼ、君の能力をお願いしたいんだけど、いいかな？」

「ほえ？・・・・は、はいっ。もちろんですよっ」

いつもはわたしからからなのに、オーディンさんから言ってくれるなんて。頼りにされた。お願いされた。嬉しい。だからすぐにオーディンさんに抱きつこうとして、「はしたない。抱き付く必要ないでしょ」ってアンナに襟首を掴まれて止められた。

項垂れながらオーディンさんの右手を取って、手の甲に唇をチュッ

と付ける。それだけで発動するわたしの能力・乙女の祝福クス・デア・ヒルフェ。わたしを含めたシュテルンベルク血族の女性は、魔力の核を生まれつき2つ持ってる。片方は自身の魔導の為に。そしてもう片方は能力の為に在る。能力用の核は回復も早い上に扱える魔力の量も多い。

「はい、回復完了ですっ♪」

「ありがとう、エリーゼ。じゃあ少し出てくる」

「あ、はい。お気を付けて」

オーディンさんはアギトとモニカ、シャマルさんを連れて医院に戻って用意を始めた。わたしはアンナを見る事なく「見送りの時間くらいくれるよね？」って尋ねる。アンナは「一緒に見送ろう、エリー」と言ってくれた。それから3分とせずに用意を整えたオーディンさん達を見送るために北門にまで来た。街の全員とはもちろんいかないけど、それでも数十人と見送りに来てくれた。

「モニカ、ルファ。私とシャマルがアムルを空けている間、医院の事を任せるぞ」

「はい。お任せを」

「うんっ。安心して行って来て、オーディン先生、シャマル先生♪」

「ええ。行ってきます♪」

こうしてオーディンさん達はわたし達に見送られて、クラウス殿下とオリヴィエ王女の待つ王都ヴィレハイムへと旅立った。

†††Ｓｉｄｅエリーゼ⇒オーディン†††

馬でがっつり2時間の陸の旅を経てラキシュ本都に着き、そこから飛空船でのんびり1時間の空の旅を経て、私たちはシュトゥラの王都ヴィレハイムに到着。城下町は活気に満ち、戦乱の世とは思えない。シュトゥラの王政が上手いからだろうな。

王城まで続く大通りを、案内人を先頭に歩きながら街を観ていると、

「・・・あの娘が目覚めるまであと６０頁を切ったわ」とシャマルがシグナム達に話しているのが聞こえた。シグナムとヴィータがそれを聴いて驚きを見せた。

"夜天の書"の説明をシグナム達から受けて数日と経った今現在。フォーアライター・オルデンの騎士の大半から魔力を蒐集した事で、すでに１６０ページを埋めていた。そして今朝。私も蒐集してもらった。試したい事があったからだが、早く彼女を目覚めさせたいというのもある。

『はぁっ！？　ちょっ、オーディン何やってんだよっ』

『いきなりどうした、ヴィータ。ビックリしたじゃないか』

本当に突然な思念通話による絶叫に近い問い掛け。耳で塞いで防ぐという手段が取れないため、ある種の音響攻撃だ。

『どうしたもこうしたもねぇッ。闇の書の主が闇の書に蒐集されるっておかしいだろっ』

『その事か。まぁいいじゃないか。管制人格が具現するのが早まったんだから』

『そりゃそうだけどさ』

『あたしやシャマルも止めたんだけど、マイスターがどうしてもって聞かなかったんだ』

『・・・・それはそうと凄まじい魔力ですね、オーディン。たったお独りで２００頁も埋めたとは』

『保有魔力量だけなら自信があるんだよ。記憶障害に関わるから普段は使わないけどな』

今回の蒐集のおかげで判った事がある。Ｘランク以上の魔力を消費する魔術を使うと消失現象が起きるが、魔力解放だけなら問題無い、と。

『ん？・・・待ってください、それではまさか今回も記憶を・・・！？』

そう訊いてきたシグナムに、『大丈夫だ。魔力を持っていかれた事で疲れたが、記憶は無事だ』と答えた。消失が起きないようにちゃんと蒐集される量も決めていたし。それに、危険域に突っ込む前に魔力が蒐集される、という事で記憶消失は起こらなかった。

それを伝えてシグナムとヴィータを安心させたところで、王城に辿り着いた。アーチ状の正門を潜って歩いていると、「オーディンさんっ」と私を呼ぶクラウスが従者を引き連れて駆けて来た。

「クラウス。息災のようでなによりだ」

「あなたも、オーディンさん。・・・・ところで後ろに居るご婦人方は・・・？」

クラウスが私の背後に控えているシグナム達を見てそう訊いてきたから「ああ。私の家族だ」と答えると、クラウスは目を丸くして少し硬直。そして「ご結婚されていたのか、オーディンさん」と言った。言い方がまずかったな。「違う違う。家族のような大切な仲間、それがこの娘たちだ」と訂正。クラウスはとんでもない勘違いをした、と恥ずかしそうに謝った。一応こちらも謝る。あまりに直球過ぎたものな、家族、なんて。

「さて、クラウス。私を呼んだ本題だが・・・」

「その事については少し待ってもらっても構わないでしょうか・・・」

クラウスの話によると、オリヴィエは今、深い眠りについているとのこと。就寝中に勝手に診察するのはさすがにまずい、という話だ。それについては同意見。相手は他国の王女だ。そんな失礼があってはシュトゥラ・アウストラシアの国交に問題が発生するかもしれない。私とてオリヴィエの寝室に勝手に入ったという罪過の下に首チ

ョンパエンドは勘弁したい。

「ならオリヴィエ王女が起きるまで待とう」

「本当にすみません。部屋を用意してあるので、そちらで休んでください」

という事で、オリヴィエの目覚めを待つ事になった。クラウスに城内をある程度案内され、最後に闘技場のような場所に案内された。ここで王都守護の近衛騎士団が日々腕を磨いているのだという。場内にまで降りて、所々に訓練によって出来た傷を見る。

シグナムを見ると、闘技場という言葉に興奮してしまっているのかウズウズしている。私はクラウスに「少し使わせてもらっても構わないか？」と尋ね、快諾を貰った事でシグナムとの軽い打ち合いをやろうとした時、

「あら、先客が居たんですね」

幼い少女の声が場内の入り口から聞こえてきた。一斉に振り返り、その少女の姿を視界に収めた。本物の戦闘者であれば、立ち居振る舞いだけで相手の実力が判るという。私とて1万8千年近くの存在年数の中で経験を積んで来た。だから判る。あの鞘に収まった刀を持つ少女は強い。それにアンナと同じようにすでに騎士甲冑姿。シグナムもそのようで、ジッとその少女を見て「強いですね」と呟いている。

「騎士リサ。オリヴィエのところへは？」

「先程行って参りました。お休み中でしたのでお顔だけ窺っただけですが」

クラウスに、リサ、と呼ばれた少女はどうやらオリヴィエ付きの騎士らしい。クラウスとの話を終えた騎士リサは、その桃色の双眸を私たち――正確には私に向けた。

「貴方がオーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード、さん。我が主オリヴィエ・ゼーゲブレヒト王女殿下を御救いして下さる医者様の方ですね。お初にお目に掛かります。わたくし、聖王家に仕えているオリヴィエ王女付きの騎士、リサ・ド・シャルロッテ・フライハイトと申します」

「っ・・・！」

耳を疑った。シャルロッテ・フライハイトの名をこの時代で聞くとは思ってもみなかった。しかし、シャルロッテがミドルネームで、フライハイトがファミリーネームということになるよな、今の名乗りで言えば。

それに、目の前に居る騎士リサは、間違いなく私の知るシャルじゃない。シャルと1万年近く共に居たんだ。だから判る。リサの魂はシャルの魂じゃない――つまりは転生体じゃない。だが魂がどこか似ている。そう言えば、シャルには確か姉が居たな。おそらくその姉の末裔だろう。

「はじめまして、騎士リサ。オーディン・セインテスト・フォン・

シュゼルヴァロードだ。そしてこの娘らは私の家族で、右からアギト、シグナム、ヴィータ、シャマルだ。もう1人いるが、今回はアムルに留守番してもらっている」

アギト達も紹介し、リサの鍛錬を邪魔しないように闘技場を後にしようと考えたところで、彼女はシグナムに目を向け「よろしければ鍛錬の相手をしてもらってもよろしいですか？」と願い出た。シグナムが私を見る。断ったらシグナムの機嫌を悪くさせそうだし、それにリサの腕も見ておきたい。

「構わないぞ、シグナム。行って来い」

「感謝します、オーディン。騎士リサ、と申しましたね。改めて、私はシグナムと申します」

「騎士シグナム、ですね。一目見ただけで只者ではないと判りました。そちらのヴィータさんやシャマルさんも同様に。オーディンさんに限って言えば謎ですが」

微苦笑するリサ。シグナムとリサを残し、私たちは観客席へ移動。クラウスからの提案だ。巻き込まれては細切れにされる、と。場内の中央で対峙する2人の剣騎士。シグナムはすでに騎士甲冑と"レヴァンティン"の用意を終えている。

リサは静かに鞘から刀を抜いた。刀身が桜色の普通の長さの刀だ。神器・"断刀キルシュブリューテ"のようだが、デバイスだ。カートリッジシステムが搭載されている。

「では騎士シグナム。貴女がお強いのは判ります。ですので、ちょっとまずは軽く打ち合ってみたいのですが」

「はい。私からもお願いします」

「あの、敬語は結構ですよ。私より貴女の方が年上でしょうし」

「・・・判った。騎士リサ。グラオベン・オルデン、剣の騎士シグナム。そして我が魂レヴァンティン。いざ尋常に」

「聖王家直下・近衛騎士団・第四中隊ズィルバーン・ローゼ隊隊長、リサ・ド・シャルロッテ・フライハイト。そして我が心キルシュブリューテ。いざ勝負、といきましょう」

リサのデバイスも"キルシュブリューテ"という銘か。偶然じゃないだろうな。シャルの名と共に"キルシュブリューテ"の銘も語られ続けてきたか。

その短い会話の後、2人は互いのデバイスを構え、間で一度カチンと当て合った。それが戦闘開始の合図となった。互いに瞬時にデバイスを引き、間髪いれずにシグナムは打ち下ろしを、リサは薙ぎ払いを放った。衝突。そこからは嵐のような猛襲が繰り返される。互いに一歩も引かずに斬撃を放ち続け、周囲に激しい火花を散らし続けた。

「すげぇ。シグナム相手に互角だ、あのリサって奴」

「彼女、騎士リサは剣の姫――剣姫と謳われるほどの剣士です。数

日前、アウストラシアに侵攻したネウストリアの二個騎士団を殲滅しました」

「それはすごいですね。二個騎士団を、剣士である彼女が単独で殲滅なんて」

「道理でシグナムと真っ向から打ち合えるわけだ」

私たちの視線の先で拮抗している戦闘を繰り広げている2人の剣騎士。しかし突如としてリサが大きく距離を取って仕切り直しを求めた。シグナムは追撃せず、息を整えるためにその仕切り直しを受け入れた。

「正直驚きました。そして自惚れてました。私、剣の腕なら負け無しだって思ったんですけど・・・」

「いや、ここまでやれればそう自負してもおかしくは無い」

シグナムのオーバースカートがバッサリ斬られていた。リサのショートジャケットの脇腹と左袖とオーバースカートに一つずつの切断痕。魔導無しの剣技に於いてはシグナムの方が一枚上手だ、という事だ。

「あの、もしよかったらですが、このまま本格的な試合を申し込んでもよろしいですか？」

シグナムがまた目を向けて来た。ここまでやったんだ、最後まで付

き合いたいんだろ？　下手に止めてストレスを溜めさせるのもどうかと思うしな。『好きにやってくれ』と思念通話を送ると、シグナムがお辞儀と共に『ありがとうございます、オーディン』と感謝を返した。

「オーディンさんからの御許しも出たようですし。本気で行きますよ、騎士シグナム」

「ああ。こちらも本気で行こう。が、互いに一線は超えないようにな騎士リサ」

「はいっ、判っています」

ニコッと笑ったリサが"キルシュブリューテ"を鞘に収めた。シグナムは正眼の構え。リサは小さく体を左右に揺らしながらシグナムへ少しずつ歩み寄って行く。あの得物を鞘に収めた上でのあの揺れる歩き方。おいおい、冗談だろ。嫌な予感がする。その嫌な予感が、予感ではなく現実として私の目の前で起きる事になった。

――閃駆――

リサの姿が一瞬かき消える。直後にガギンッと金属が衝突したような音が響いた。鞘から抜き放たれた"キルシュブリューテ"と、咄嗟に盾として構えられた"レヴァンティン"が衝突した音だ。鍔迫り合いはほぼ一瞬。またリサは姿をかき消した。次にリサが姿を見せたのはシグナムから４ｍと離れた場所で、ユラユラと体を揺らした後、また姿を消した。

（あれは間違いなく、シャルの歩法・閃駆。しかも古い方だ。まさか彼女の体技を使えるとは・・・・恐れ入った）

シグナムは待ちの構えではまずいと判断したようで、その場から動こうとした。だがその一歩と動いたその先に姿を見せたリサが"キルシュブリューテ"の一閃が放つ。シグナムはかろうじてその一撃の反応でき、"レヴァンティン"で防御に成功。

リサは鍔迫り合いに入る事なく閃駆で姿を消し、すぐにまた姿を見せた彼女は体勢をギリギリにまで低くした状態で"キルシュブリューテ"を横薙ぎに振るった。シグナムは回避の為に上に跳んだ。私は咄嗟に「ダメだシグナムっ！」と叫んでしまった。

リサもまた跳んで追撃。空中でぶつかり合う2人の相棒（デバイス）。リサの一撃によってさらに打ち上げられたシグナム。シグナムは飛行魔法で宙に留まり、リサは落下。そして、落下中のリサの足元に桃色のベルカ魔法陣が展開された。

――閃駆――

足場として展開された魔法陣に足を付けた瞬間、リサの姿が消えた。シグナムが目を見開き、だがすぐに体勢を変えて　"レヴァンティン"を構え直した。違う、ダメだ、シグナム。シグナムの右上にベルカ魔法陣が展開された。リサはそこへ閃駆で移動し、シグナムに斬りかかった。

――パンツァーシルト――

ここで初めてシグナムが防御魔法を使った。盾と衝突する"キルシュブリューテ"。その拮抗の刹那にシグナムが"レヴァンティン"を振るった。障壁が消え、２人のデバイスが衝突。リサは衝撃に身を任せて弾き飛ばされ、その先にベルカ魔法陣を展開。また足をついた瞬間に閃駆。シグナムの周囲に桃色のベルカ魔法陣が幾つも展開される。それはシグナムを包囲する檻であり、リサにとっては足場となるものだ。

「止まるなッ、シグナムっ！　狙い撃ちにされるぞッ！」

リサが使っているのは遥か昔、次元世界が誕生する切っ掛けとなった"ラグナロク"が起こった大戦の最終決戦・ヴィーグリーズ決戦の際、アンスールを相手に使用したシャルのオリジナル戦術だ。空戦殺しの法陣結界。当時、空を飛べなかったシャルが"アンスール"を殺すためだけに創った戦術であり魔術だ。

それを、リサが使っている。これはいよいよあるかもしれない。シャルの剣技や体技、魔導が、この時代のフライハイト家に受け継がれている。シグナムは、全方位から目にも留まらぬ速さで連続で襲いかかってくるリサの"キルシュブリューテ"の一撃を捌いては防御。回避しようとしても、回避先を閃駆の軌道上となるようにリサが魔法陣を展開する所為で上手く行かない。

「やばいんじゃないのか、これ。あんなんどうやって捉えろって言うんだよ・・・！？」

「ええ。まさかこんな風にシグナムを追い詰めるなんて・・・」

ヴィータとシャマルが焦りを見せ始める。アギトも「マイスター。シグナム、負けないよね？」と訊いてきた。当のシグナムは焦りを見せず、そして諦めてもいないようだ。リサの動きを捉えようと、先の先を見据えるかのように鋭く綺麗な両目を動かし続けている。だから私は「ああ、もちろんだ」と答えてやる。その時、リサがシグナムの背後を取った。これでシグナムの反応が少しでも遅れれば敗北だ。しかしシグナムとてこれまでに多くの実戦を積んできているはずだ。これで終わり、なんてことはないだろう。

「見切った・・・！」

――パンツァーガイスト――

シグナムは大してリサの姿も見る事が出来なかったのに、"キルシュブリューテ"の剣先が僅かに見えた程度で片手で白刃取りを成功させた。高魔力で手を守っている事と、白刃取りのタイミングを見極る動体視力、そしてそれを成せる身体能力があって、初めて出来る芸当だ。

リサが驚愕に目を見開き、一切の動きを止めた。それはほんの僅かな時間での隙。シグナムは"キルシュブリューテ"の刀身を掴んでいる左手をグッと引っ張りリサの体を引き寄せ、"レヴァンティン"の柄尻で彼女の腹部に打った。

手加減はもちろんしているようだが、それでも激しく咽るリサ。それで終わりだ。咽ている間は完全に無防備。実戦であれば、すでに殺されているような大きな隙だ。だからこそ、「けほっけほっ、参りました」とリサは自分の敗北を負けた。そしてシグナムは空を飛べないリサを抱えて地上に降り立ち、「ありがとうございました」

と礼を言った。

「オーディンさん。貴方のご家族はお強いですね」

「もちろん。私の自慢の家族だからな」

ヴィータの頭を撫で、シャマルの肩にポンと手を置き、アギトに微笑みかける。ヴィータは私の頭を撫でるという行為に慣れてしまっているが、それでも気持ち良さそうに目を細めてくれて、シャマルも肩に乗った私の手に自分の手を重ね微笑み、アギトは私の肩に降り立って頬擦りしてきた。

「騎士シグナム。よろしければもうしばらくお付き合いしてもらってもいいですか？　こんな貴重な時間、そうそう無いので、アムルへお帰りになるまでに少しでも剣を交えたいのですが」

『良い機会だから一緒に鍛錬を積めばいい、シグナム。君に用事が出来た時、思念通話で呼び出す。それまでは・・・』

「『そうですか・・・ではお言葉に甘えて』いいだろう。私とてお前ほどの腕を持つ騎士と剣が交えることはないからな」

というわけで、シグナムはここでパーティから一時離脱。そして私たちはオリヴィエが目覚めるまでの間、城下町の見学という事になった。

後に聖王女オリヴィエと謳われる彼女。遥か未来に生まれる高町ヴィヴィオのオリジナル。武術と魔導ともに最強クラスという。しか

し詳細は知らないが身体の方に何かしらの障害があるとかないとか。とりあえず今は王都の見学を楽しもうか。いつまた来る事が出来るか判らない――いや、もう二度と来る事が出来ないかもしれないしな。

「よし。エリーゼ達への土産でも観ようか」

Ｍｙｔｈ７災厄撥ねし魂・導き果てぬ絆・希望の守り手～Ｓｃｈｌｉｅｒｌｉｅｔ～

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

ここまで虚仮にされて、今さら連中には手を出すな、だって？
イライラする。だから地駆けし疾狼騎士団（フォーアライター・オルデン）の詰所の一室――俺の部屋である団長室の壁を殴りつける。油断したんだ。まさかヴォルケンリッターっていう俺たち高位騎士と遜色ない実力を持つ騎士が仲間に居るとは思わなかったんだ。今度こそは一切の油断なく襲撃を掛ければ、絶対に勝てる。それなのにシュトゥラから手を引く？

「頭の中に花畑でも出来ているのか・・・！」

三連国（バルト）との決着は確かに大事だ。それくらい判っているさ。長年競り合っていた連合国だからな。だが問題はその後だ。バルトに勝ってもベルカ統一は成し得ない。シュトゥラの悪魔――騎士オーディンと、その従者たるヴォルケンリッターが居る限りは。先送りにしているだけで、どちらにしても連中とはぶつかる事になるんだ。バルトとの戦争後、疲弊している状況でシュトゥラに攻め込まれでもしたら・・・・。

「考えたくもない」

だからまずは騎士団同士での小規模戦で、シュトゥラの防衛の要である騎士オーディンとヴォルケンリッターを陥落させる。その後で、

バルトは"エテメンアンキ"を使って陥落させればいい。別にバルトに対して騎士団戦に固執する必要はない。向こうだって兵器を使うんだ。
だが騎士オーディンらは違う。純粋な魔導と武技だけで戦いに臨んでいる。俺たちフォーアライター・オルデンは卑怯な手は使うし騎士の誇りも捨てたが、向こうが騎士団だけで向かって来るなら、こっちも騎士団だけで戦う。それは騎士の誇り云々じゃなく、人間としての最後の一線だ。

「あんまり使いたくない手だが、別の騎士団との共闘を考えてみようか・・・・」

そんな考えが頭に過った時、扉がノックされた。しかも結構強く。団長室の扉はそんなに強く叩くなんて、よほどの無礼者か切羽詰まっているか・・・。「入れ」と促す。「失礼します、団長ファルコ」と入って来たのは、先の戦闘で戦死した副団長の後任である男アンドレだった。先の戦闘の生き残り。生きて戻って来た部下ももちろん多くいるが、どういうわけか核に多大なダメージを負って、再起不能者や現場復帰に時間の掛かる者が多い。

「どうした？　アンドレ。大事なお報せでもあったか？」

アンドレは「はい。しかも最悪も最悪、イリュリアの今後が左右される事が起きようとしています」と真剣な面持ちで返してきた。随分と大げさな話だ。イリュリアの今後が左右される、か。陛下でも死んだか？
そしてアンドレから聴かされたその話。確かにイリュリアの今後が

左右されるものだった。何せ、「ゲンティウスがシュトゥラに攻め込むだと・・・」なんて冗談にしか聞こえない話なのだから。
詳しく聴くと、ゲンティウスは俺たちテウタ王女派の騎士団がこぞって騎士オーディンのいるシュトゥラに敗戦している事を聴き、自ら騎士団を率いて騎士オーディンらを討ち、シュトゥラを潰すつもりだそうだ。そうする事で自らの株を上げ、次期皇帝の座を確かにする。そういう筋書きらしい。

「如何します？　このままゲンティウス殿下の騎士団にあの者たちを討たれるのを黙って見過ごしますか？」

「どうするもこうするもゲンティウスお抱えの騎士団が揃っているんだ。テウタ王女派の俺たちが出しゃばるわけにもいかないだろ」

「それが・・・戦力は多い方が良いという事で、殿下は派閥に関係なく騎士を募っているそうです」

「それはそれは。ヤリ手か馬鹿か判らないな」

派閥違いの騎士を募ってまでシュトゥラを潰すつもりか、ゲンティウスは。しかしこれは好機かもしれないな。派閥関係なくシュトゥラに攻め入る事が出来るとなると。俺は「俺も参加する。が、騎士団は動かさない。俺独りで行く。お前たちは待機だ、これ命令な」とアンドレの肩を叩く。
アンドレは「何を言いますっ、団長っ」と制止して来るが、これは俺個人の我が儘だ。だから騎士団は巻き込めない。それ以前に半壊している今、動かそうにも動かせないのが現状だ。

「これは命令だ。いいな？　アンドレ」

この戦でテウタ王女派の俺が騎士オーディンを討つ。そうすれば、ゲンティウスじゃなくテウタ王女の株の方が上がるはず。アンドレに念を押して命令を下し、俺はゲンティウスの居る王城の西区画を目指す。

その最中『フュンフ、聞こえるか』と技術部に居るはずの融合騎プロトタイプ・フュンフへ思念通話を繋げる。繋がるか心配だったが、『ファルコ？　なに、どうしたの？』とすぐに応答があった。

『もう一度シュトゥラを攻める。力を貸してくれ』

『・・・・いいわよ。ゼクスに今度こそ引導を渡さないといけないし。それに私のロードは貴方として設定されているから、連れて行ってくれないと逆に困るわ』

溜息を吐くフュンフに苦笑。あぁそうだった。俺がお前のロードだ。

『そうか。なら今度こそ勝つぞ』

『当然だわ。二度の敗戦なんて許さないから』

思念通話が切られ、俺はひたすら西区画を目指す。

†††Ｓｉｄｅファルコ⇒オーディン†††

城下町を回っているところにクラウスから『オーディンさん。オリヴィエが起きましたので、城に戻ってもらっても構わないでしょうか？』と念話が来た。『判った。すぐ戻る』と返し、念話を切る。アギトとヴィータとシャマルに城に戻る事を告げ、すぐに城へと続く道を歩き進む。

「オーディンさん。シグナム、どうします？」

「いや、まだいいんじゃないか。オリヴィエ王女の治療が私たちの役目だから・・・」

「シグナムじゃ役に立たないよね。シグナム、戦闘特化だから」

「しかもうだうだ考えねぇでその都度直感が動くからな、シグナムの奴」

私の肩に乗るアギト、そしてヴィータが微苦笑。シャマルも「うふふ。そうよね～。でもそれはヴィータちゃんも一緒よね～」と笑う。戦闘マニアはこの頃からなんだなぁシグナム。まぁ好きな事が出来る喜びを知れている今、それがシグナムにとって良い事なんだと思うから構わないが。

城に着いて、クラウスとシグナムとリサ（オリヴィエが起きたと知ったリサが鍛錬を切り上げたそうだ）と合流した。

「あぁそうでした。申し訳ありませんが、皆さま方、武装解除の方をお願いできますか？」

城内に入る前にリサにそう告げられた。城の関係者以外の騎士が城内に入るには、武装を解除しなければそうだ。私はシグナムとヴィータへと振り向く。シグナムとヴィータは少し戸惑いを見せる。

「あーそんじゃ・・・・・オーディン。あたしら、城の外で待ってるわ」

「そうだな。申し訳ありませんが私とヴィータは外で待機しています」

二人の返答に、リサが顔色を青くして「御気分を害されましたかっ？」とうろたえ始め、私を見た。あーなるほど。家族の気分を害したという事で、私も今回の話を断る、とか考えたんだろうな・・・。それに対してヴィータが「違ぇよ、そうじゃない」と嘆息し、シグナムも「そうだ」と返答の真意を語る。

「考えてみればオリヴィエ王女に必要なのはオーディンとシャマルの治癒魔法だ。ならば何もする事の出来ない私とヴィータが居ては邪魔になるだろうし、王女を眺めているだけでは失礼だろう」

「そういうこった。だったら待ってた方がお互いの為だ。だから武装解除しろって言われて気分を害したわけじゃねぇよ」

それを聞いたリサがホッと一息吐いた。随分と小心者というか何と言うか・・・。剣を振るっている時の表情や雰囲気とはえらい違いだな。特定の条件で人格が変わるタイプか？　しかし、「ただ待っているだけでは暇だろ？」と2人に尋ねる。時間が掛かるかどうか

も判らないし、ジッと外で待たせておくのも不安だ。
するとシグナムが「では先ほど私は街を見れずにいましたし、ヴィータに案内してもらう事にします」と答えた。ヴィータが少し嫌そうな顔をしたが、「じゃあ暇にならないようにお金を渡しておこう」とお小遣いを渡すと、「しゃあねぇな」と頬を緩めた。

「アギトはどうすんだ？　お前も付いて行っても役に立たねぇだろ」

「やっ、役に立たないわけ・・・・うぅ～、マイスタ～～（泣）」

「よしよし、泣かない、泣かない。側に居てくれるだけで良いんだよ、アギト。もちろんシグナム達もだ」

心の底から思っていた事を言うと、アギト達は嬉しそうに微笑んでくれた（ヴィータだけはテレ隠しのつもりか鼻を鳴らしていたが）。それでアギトは「でも何も出来ないと邪魔になるかもだから、今日はシグナム達と待ってる」と、留守番組に回る事を決めた。

「あの、オーディンさんとシャマルさんは媒介が無ければ魔導が扱えない、のですか？」

「無くても扱えますけど、有った方が何かと都合が良いので」

「私は元より持っていない。魔導は全てこの身一つで扱うから」

「そうなのですかっ？　媒介も無しにこれまでいくつもの騎士団を討伐されていたとは驚きですっ。本当に普通ではないのですねっ」

「普通じゃない、か・・・称賛してもらっていると思っておくよ、騎士リサ」

結局、シャマルの"クラールヴィント"は回収される事なかった。城の前でアギトとシグナムとヴィータと別れ、ようやく城内に案内され、台座の上に置かれた調度品や壁に掛けられた絵画を眺めながら、廊下を歩く。

「――そう言えばオーディンさん。以前から思っていましたが、あなたは媒介を持っていないようですが、何か拘りでも？」

「まさか。今は作っている最中なんだが、どうも部品の集まりが悪いんだ。部品はイリュリアの騎士から回収したカートリッジシステム搭載の武装から頂戴しているんだが。まぁ、仕方ないとはいえコソ泥みたいな事をやっているようで、あまり気分は良くないけどな」

「部品・・・。それならこちらから提供させてください」

「それは助かるが・・・いいのか？」

クラウスの提案につい食いついてしまう。デバイス有る無しでは違うからな、やっぱり。すると「もちろんです。オーディンさんにはいつも謝礼をしなければ、と思っていたので、ちょうど良い機会です」と笑みを浮かべた。

「あなたがシュトゥラにもたらしてくれた多大な希望。感謝しても

しきれません。イリュリア騎士団の侵攻を幾度も阻止し、そしてデザインされた服飾品の販売によって生まれた財産を国に回して頂いた事で、各地の戦災復興が順調に進んでいます」

服飾品のデザインと言っても、これまでの契約によって訪れた世界での衣類をそのまま転用しているだけで、私個人のオリジナルなデザインなど1つとして無いけどなぁ・・・。それにシュトゥラに協力しているのは何もアムルの在る国だからだけじゃない。
後に覇王イングヴァルトと語られるクラウスの思いが判るからだ。良き世界にしたいがために戦った王。歴史を大きく変えるつもりは無いが、それでも手を貸してやりたいとも思っている。

「本当なら爵位を、と思ってもみたのですけどね・・・」

「さすがに爵位は受け取れないな。いずれベルカを去る身。爵位があっては気持ちよく去れないさ」

「エリーゼ卿と婚儀を執り行い、夫婦となって頂ければもっと楽なんですけど」

「エリーゼは１６歳。私は２９歳。これだけ歳が離れているんだ。結婚だとか考えられないな」

私が"界律の守護神テスタメント"となった年齢が、基本召喚される世界での年齢であり外見だ。今回はその例にもれず、止まってしまっている本来の年齢と外見で召喚された。

「歳の差なんて関係ないと思いますよ、オーディンさん。愛があれば、問題無しですっ！」

「・・・オーディンさん。このままベルカに留まる、という選択肢は本当に無いのですか？」

「すまないな。私に課せられた運命を果たすために、一か所に留まる事はきっと出来ないんだ」

「・・・そうでしたね」

そこで会話が途切れ、廊下には靴音しか聞こえなくなる。この空気のままで居るのは居心地が悪いから「去る事は回避できないが、友人として永遠であれば良いと思ってる」と言う。するとクラウスは「もちろんです。僕たちはいつまでも友人です、オーディンさん」と応えてくれた。この話題はこれで終わり、私はリサにある問いを投げかけた。そう、シャルロッテ・フライハイトの名や閃駆などの技術について、だ。

「――それはフライハイト家に受け継がれているからです。なんでもこのベルカは大昔に滅びの危機に陥ったそうです。それを食い止めたのが、フライハイト家の初代当主の妹君シャルロッテ・フライハイト様だそうです」

ベルカ（当時は騎士世界レーベンヴェルトだな）の大昔の滅びと言うのは"ラグナロク"の事だな。複数世界ミッドガルドの一部だったレーベンヴェルトを救ったのは確かにシャルだ。彼女が"テスタ

メント"になる報酬として、レーベンヴェルトを含めたミッドガルドを"ラグナロク"から救うように"神意の玉座"と取引した。それが何故語られているかは判らないが、彼女が世界を救った英雄として語られているのはどこか嬉しい。

「それでですね。そのシャルロッテ様が生前に扱われていらっしゃった魔導の術式や閃駆などの体技、そして武装"キルシュブリューテ"が記された書物があるのです。ほとんどが失われていて完全な解読は出来ませんけど、解読できた部分だけは何としても扱えるように鍛錬を積んできました」

そして最後にリサは教えてくれた。彼女の本名は、リサ・フライハイト。"ド・シャルロッテ"というのは、フライハイト家の女当主や次期女当主にのみ名乗る事が許される、特別な名だそうだ。

「着きましたね」

そうして私たちは、ようやくオリヴィエの居る私室の前に辿り着いた。リサはまずクラウスに「殿下は少し待っていてください」と言い、彼を廊下に待機させる。結構すごい事だよな、一国の王子を廊下に閉めだすなんて。恐るべし、フライハイト家の血筋。

しかしクラウスは気を悪くする事なく「判っているよ」と首肯。このやり取りはいつものようだ。リサが「オリヴィエ様。リサです。お医者様をお連れいたしました」と扉をノック。

「どうぞお入りください」

少女特有の可愛らしい声が扉の向こう側から返って来た。

「ではオーディンさんとシャマルさんはどうぞお部屋へお入りくださいませ」

リサに招き入れられ、私たちはオリヴィエの部屋へと入る。天蓋付きのベッドに、デザインの凝ったナイトテーブルや丸テーブル、肘掛椅子、クローゼットなどなど家具一式が揃っている。そして、肘掛椅子にちょこんと座っているオリヴィエを見た。

「はじめまして。わたくし、聖王家王女オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと申します。このたびはわざわざアムルよりお越しくださって感謝いたします」

深々とお辞儀するオリヴィエ。ははは、判ってはいたが、やはりヴィヴィオとは違うな。しかし両腕が動いていないな。まったく動いていない、と言うわけじゃないが・・・。とりあえずは自己紹介を返さないといけないな。礼儀として片膝をついて頭を下げる。

「お初にお目に掛かります、オリヴィエ王女殿下。オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードと申します。この娘は同じく医者のシャマル。クラウス殿下やオリヴィエ王女のご期待に添えられるかは判りませんが、私の魔道が御役に立てばと思い、参上しました」

後ろに控えているシャマルも続いて礼の姿勢を取った。オリヴィエが早々に「頭をお上げください、オーディン先生、シャマル先生」

と困惑している事で、すぐに上げる。そこでリサが「外で殿下にお待ち頂いていますが、いかがなさいますか？」とオリヴィエに尋ね、オリヴィエは少し考える仕草を見せた後、「お招きして、リサ」と微笑んだ。クラウスも遅れて部屋に招き入れられ、部屋の備え付けられたソファに腰掛けた。

「では早速、オリヴィエ王女殿下の診察に入ります。王女殿下、御手に触れますが、よろしいですか？」

「はい、お構いなくどうぞ」

膝の上に置かれて動かない彼女の右手にそっと手を添える。目を閉じ意識を澄ませ、魔力を通してオリヴィエの身体情報に探りを入れる。そして知る。両腕の筋肉の組織や神経が酷いのなんの。まともに動かせないのは当たり前だ。

「王女殿下。腕の事ですが・・・」

「判りますか・・・？　はい、生まれつき動かしづらく、ここ数年でさらに動かせなくなったのです。他のお医者様からは、もう諦めた方が良い、と。ですがやはり不便ですから、普段は魔力による身体操作を行っています」

確かにこれは並の治癒術師や医者なら匙を投げるだろうな。私は「そうですか。では診察を続けます」と告げ、腕以外のダメージを見つけるために魔力を通す。足は問題無し。内臓、問題無し、と。

「ふふ」

「どうかしたのですか？　オリヴィエ」

オリヴィエが小さく笑い声を漏らし、クラウスが不思議そうに尋ねた。私としても気になったから「くすぐったかったですか？」と、有り得ない事だと知りながらも訊いてみた。オリヴィエは「あ、ごめんなさい。そうではないのです」と微苦笑を浮かべた。

「オーディン先生のお話はクラウスから聴いていまして、その、想像とは違った御姿でしたので。勝手ながら、もう少し険しい御顔や雰囲気をしているかと思っていたのですが、良い意味で裏切られました。美しい銀の長髪に、蒼と紅の虹彩異色。お綺麗過ぎて・・・・驚きです」

「それは最高の褒め言葉ですね。光栄ですよ、王女殿下にそうのように褒めて頂けるとは」

男として可愛いとか綺麗とか言われるのは正直嫌な方だったが、可愛い以外なら素直に受け入れられるようになった。何故ならセインテスト王家の特徴を褒めてもらっていると同じ――つまりゼフィ姉様やシエルも褒められている、と思えるようになったからだ。まぁ軽い現実逃避な気もしたりするが、もうそれで良いと思っている。あははのは。

「オーディン先生は異世界からの渡航者だと伺っていますが。御名前からして、その世界ではそれは名のある一族の御一人なのではな

いですか？」

「っ・・・・」

その問いに私が黙ってしまった事で、オリヴィエは「踏み入った事を訊いてしまったようですね、ごめんなさい」と僅かばかり泣きそうな顔で謝ってきた事で、それはもう焦る焦る。首を横に振り、「確かに私は、その世界の一国を治める王族の出で、１６歳から２１歳まで王位に就いていました」と答えた。これにはクラウスとシャマルも驚きを見せた。まさか元とは言え一国の王がこんな事しているのだから。

「今では御覧の通りその世界より離れ、探しモノを見つけるために旅をしているわけですが」

「そうでしたか。よほど重要な事なのですね、その探し物を見つける旅というのは」

「でも判りました。オーディンさんがどうしてベルカを離れなければならないのか。元とは言え一国の王であったあなたはやはり帰らなければならない、残っている家族や民の為に」

「いや、確かに帰らなければならないが、そこにはもう家族も民も居ないんだ。私は最後の王だ。いや、最後の生き残りとでも言うべきか。もう無いんだ、温かく私を迎えてくれる者の居る世界は」

シーンと静まり返る室内。しまった。なんで空気を最悪なものにし

ているんだ、私は。それに、ただ一人だけだが私の帰りを待っていてくれる家族が居るじゃないか。リサが「あの、お話しを聞かせて頂いても？」と言ったものだからか、オリヴィエが「リサっ」と彼女を窘めた。
私は「ここで終わらせては気になるでしょうから」とオリヴィエを制し、大まかに話す。戦争によって滅び、その後に探しているモノ――"エグリゴリ"によって、家族や仲間や恋人を奪われた事を。
「・・・・何故、戦争というものは起きてしまうのでしょうね・・・？」
オリヴィエが悲嘆に暮れる。
「それが世界が定めてしまった真理だからですよ、オリヴィエ王女殿下」
「「真理？」」
クラウスとオリヴィエが訊き返してきて、私は頷き返す。
「獣たちは一度の出産で多く子を生み出します。なのに何故世に溢れかえらないのか。答えは簡単です。溢れかえる前に敵の獣たちによって襲われ食料となるからです。食物連鎖。弱き者は強き者の糧となる。自然の摂理ですね。人間も一応組み込まれています。が――」
「人間を――特に私たちのような騎士を喰い殺せるほどの獣なんて

早々居ないですよね」

「騎士に限定せずとも人間は知恵がある上武器も使う。ゆえに食物連鎖の頂点と言っても過言ではありません。そうなると一度に産む子の少ない人間であっても、時間を経てば世に溢れかえる。しかし駆逐する敵が居ません。なら、どうするか。ここまで言えば、殿下らも御解りなはずです」

「人間同士での駆逐のし合い・・・・戦争、ですね」

「そう言う事です。人の数だけ主張や正義、願いに望み、様々な思考があります。それを貫き通すには、他の思考を叩き潰して取り込んで従わせるしかない。その果てに起こるのが戦争です。人間同士を潰し合わせ、世界や他の生命を犠牲にしつつ数を減らすシステム」

先の次元世界での契約で死闘を繰り広げた、"霊長の審判者ユースティティア"の先代・終極テルミナスの言葉を思い出す。

――罪人（ニンゲン）を護るということ自体がそもそもの間違い。人間という存在がどれだけ罪に塗れた愚かなものか。いつまで経っても争いをやめない、やめようともしない存在。どれだけ根絶やしにして、更生させようと努力しても、やはり争いを始める愚者。抑えようと思えば抑えられる欲で同族たる人間を襲い、奪い、殺める。

その理由が、ただ誰でもいいから殺したかった？　世の中つまらない？　ムカついたから？　相手にされなかったから？　金銭が欲しかったから？　何て罪深いことなの。その果てには、赤の他人を殺すどころか、血の繋がった実の親を、子をも殺めるなんてことも増

えてきた。
何たる身勝手か！！　愚か愚か愚か愚か愚か愚か愚かッ！！！！
その頭脳はそんなくだらないことのため用意されたものじゃない！！
世界をより良い形に持っていく権利を与えられておきながら、自らを生かす自然を破壊し、終には世界を滅ぼすまでに至る！　だから護る価値なんて無いッ！――

あの頃は、それに反論したものだ。

――綺麗ごとだと解っているが、それでも私は人間を信じている。テルミナス、お前が挙げた人間は全体の一握りなんだ。確かに人間は罪深い。許されるような軽いものばかりじゃない罪を幾つも、どんな時代でも、どんな世界でも犯す。正直救いようのないことだってある。私も幾度もこの身に味わってきたからな――

――一握り！　その一握りが存在する時点で、すでに存在する価値は無いの！！　信じる！？　私だって信じてた！！　これでも元は守護神だから！！　いつかきっと人は変わる。今はダメでも、いつかは、いつかは、いつかは！！　けど、いつかは、と信じたその結果が今の私だ！！　人は変わらない！！　殺し殺され、奪い奪われ！
何万年と見てきた！　どんなに護っても、争いを始めて滅んでいく！――

信じていれば、いつか人の世に争いの無い世界が生まれる。だが、私も結局はテルミナスの思考の領域に至ってしまうまで存在してしまった。だがすべてが同じわけじゃない。彼女と私の唯一の違いは、テルミナスは人間に非があるとして、人間に絶望した。だが私は、

それが真理であり摂理であると諦めた。人間は争いをやめない生き物――それが自然な姿なんだと。

「ですが私のは極論ですから、クラウスが望む平和な世界が絶対に存在しないと言うわけではありません。私もその理想が叶う事を願っていますし、力を貸したいとも思っています」

「オーディンさん・・・ありがとうございます」

「あの、オーディンさん。先程の話の事ですけど、もしかして・・・エグリゴリを捜しているのは・・・復讐、なのですか・・・？」

「いいや。堕天使（エグリゴリ）は元々戦天使（ヴァルキリー）という名で、家族のようなものだった。敵対国に洗脳され暴走したヴァルキリーをエグリゴリと呼ぶ。だから、復讐ではなく助けたい。もう休んでいいんだと。もうこれ以上狂ったまま戦い続ける必要は無いんだ、と――よし」

診察終了。いきなり、よし、と笑顔を見せた事でクラウス達が「は？」と抜けた声を漏らした。さぁさっきまでは私の所為で暗い雰囲気だったが、これから明るい空気にしてやろう。オリヴィエから離れ、診察の結果を告げるために一度コホンと咳払い。

「オリヴィエ王女殿下。まず腕以外には問題はありませんでした、ご安心を」

「え・・・あ、そうですか。ありがとうございます」

「そして腕の事ですが、おそらく私の持つ魔道を使えば治す事が出来るかと思います」

またシーンと静まり返る室内。そして爆発したかのようにクラウスとリサが詰め寄って来た。

「本当ですかッ、オーディンさん！　本当にオリヴィエ様の腕を治す事が出来るのですかッ？」

「オリヴィエの腕を治す事が出来るのですか、本当にっ！？」

「落ち着いてくれっ、説明が出来ないだろうっ！」

クラウスはそれで冷静さを取り戻してくれたが、リサはグスッと泣きながら私にしがみ付いたままだ。泣き止まない子供をあやす様にリサの頭を撫でる。そしてオリヴィエが「リサ。オーディン先生がお困りですから」と優しく語りかけた。リサは「はい。申し訳ありません、オーディンさん」と涙を袖で拭ってオリヴィエの側に控えた。

「オーディン先生。それで、私の腕を治すことが出来る、というお話ですけど・・・」

「ええ。私の有する治癒術式の中に、こう言った普通の治療では治せないような障害を治すものがあります。さすがに長年筋肉で腕を動かしていないとの事ですから、一気に治さずに段階を経て完治させましょう」

徐々に馴らしていくのがベストだろう。だと思っていたんだがオリヴィエは「何度も御足労をお掛けするのは心苦しいので、一気にお願いします」と言ってきた。

「無礼を承知で言わせて頂きます。医者は患者の事を最優先で考えます。我々に苦労を掛けるからと言って、その考えを無下にしようとなさらないでください」

これには今まで黙っていたシャマルがそう窘めた。ポカンとするオリヴィエとクラウス。従者たるリサは、シャマルと同じ意見なのか黙ったままだ。

「・・・シャマル先生の仰るとおりですよ、オリヴィエ。焦っては却って悪くなるかもしれません」

「そう、ですね。勝手を言ってごめんなさい。オーディン先生のお話通りで治療を受けます」

胸を撫で下ろしているシャマルに『ありがとう、シャマル』と念話を送る。シャマルは『いえ。王女殿下のお気持ちは解りますけど、でもオーディンさんの考えを否定するような事だけは許せません』と返した。私の事を尊重してくれた、という事で嬉しかったりする。

「ではそう言う事で、段階的に治療します。構いませんか？」

「はいっ、お願いしますっ」

今度はオリヴィエの両手を取って軽く持ち上げる。術式ランクは上級、効果は補助・治癒、使用魔力はＳ＋。魔力炉（システム）を活性化させて魔力解放。「女神の祝福（コード・エイル）」と術式名を告げる。あらゆる異常を正常に回復させる効果のエイル。もちろん、あらゆる異常とは言え死者ばかりは蘇らせないが。

オリヴィエの両腕を包み込むサファイアブルーの魔力。最優先で血管と神経を治癒させるつもりだ。ここでオリヴィエが少し「痛・・・っ」と苦悶の声を小さく漏らした。

「ご辛抱を。ですがこれで御解りかと。少しずつ回復させてもこの痛みです。一気に回復するとこの比ではありませんよ」

「みたい、ですね・・・。ですが、こうもハッキリとした痛みが判るというのは、嬉しい事です」

「オリヴィエ様が嬉しそうれすぅ～（ボロ泣き）」

苦悶に表情を歪めながらも笑みを浮かべるオリヴィエを見たリサがわんわん泣き始める。シャマルが「よしよし」とリサの頭を撫でた。まるで娘――じゃなかった、妹をあやすようなお姉さんだ。

さて、今回はこの辺りで良いだろう。「今日の治療はここまでです」とエイルを解除して、オリヴィエの両手を彼女の膝の上に戻すと、彼女は「ありがとうございました」とお辞儀。しかしやはりまだ治療を続けてほしい、というような顔をしている。しょうがないな。

まぁ元よりこれで終わりにするつもりはなかった。創世結界にアクセスする呪文、「我が手に携えしは確かなる幻想」と詠唱する。私

の両手の上に、"神々の宝庫ブレイザブリク"から具現させたある物をオリヴィエに見せる。

「これは・・・綺麗なアルムバントですねっ♪」

「ありがとうございます。王女殿下、これを両手首にお嵌めください」

治癒効果のあるブレスレットをリサに渡し、リサがオリヴィエの両手首に「失礼いたします」と嵌めた。それだけでオリヴィエは気付いたようで、「治癒の魔導が付加されているのですね」とブレスレットの効果を見破った。私の神器作成能力によって創作したブレスレット型神器・妖精（ファルマコ・ネライダ）の神薬。

「そうです。私が次に来るまでの間、そのアムルバントが少しずつ治療を続けていきます。私の立てた推測ですと、おそらくひと月で完治できるはずです」

「「「ひと月っ！？」」」

「そ、そんなに早くに治せるのですかっ？」

「治療の合間や完治後にリハビリもしなければならないですよ、王女殿下。では、私が居ない間にやっていただきた――」

『我が主ッ！』

ザフィーラからの突然の念話に口を噤んでしまう。切羽詰まっているのは解っているため、『何があった？』と返す。念話の内容は『イリュリアの侵攻です。それも以前とは比べられない程の』と聞き捨てならないもので。そして廊下から「クラウス殿下っ。大変ですっ」と慌ただしい声が聞こえてきた。

「アムルから連絡だ。イリュリアが攻めて来た。今までの比ではないくらいの大攻勢らしい」

クラウス達が目を見開き、クラウスはすぐさま部屋の外へと駆けだした。私はシャマルに「すぐアムルに戻るぞ」、ザフィーラに『すまないが先行してくれ』と告げ、窓枠に近づく。「このような所から失礼する事をお許し下さい、王女殿下」と窓から出て行く事を詫びる。

窓を開け放ったところで、廊下から戻って来たクラウスが「我々も向かいますっ」と言ってきた。クラウスが外に居た家臣らから聴いた話は、イリュリアの王族の1人が複数の騎士団と、戦艦（ベルカでは戦船と言うようだが）を引き連れて来たとの事だ。

「戦船まで率いて来たのですか、イリュリアは・・・！」

オリヴィエは立ち上がってしまうほどに驚愕して見せた。クラウスは「これは本格的な宣戦布告です。こちらも戦船を用意し、迎撃に向かいます」と決意を固めてしまっている。が、ちょっと待った。

「戦船の数は聞いたか？」と尋ねると、返答は3隻だった。

「3隻か。なら問題無いな。対艦戦も今までこなした事があるし、

何十隻と撃沈した経験もある。私が戦船を墜とす。地上の騎士団はシャマルらグラオベン・オルデンと防衛騎士団に任せる事に――」

「戦船を生身で、しかも単独で撃沈するなど無理にも程がありますっ」

「人間を相手にするより簡単だよ、クラウス。あぁそうそう。助力してくれるというのであれば、地上の騎士団を潰してほしい『アギト、シグナム、ヴィータ』」

『うんっ、マイスターっ』

『事情はザフィーラより伺っています』

『あたしら、先に行こうって思ってるんだけど』

「『頼む。私とシャマルもすぐに続く』クラウス、戦船は引っ張って来ないように頼むぞ」

窓枠に手と足を掛けたところで、オリヴィエが「お待ちくださいっ」と引き止めて来た。「なんでしょう？」と振り向くと、オリヴィエは「リサを同行させてください」と、リサを一緒に連れて行くように提言してきた。

「オリヴィエ様っ！？」

「リサ。あなたの力で、オーディン先生方をお助けして差し上げて」

「・・・・判りました。オーディンさん。私も一緒に連れて行って下さい」

「力を借りるぞ、リサ。シャマル、掴まれ」

「はいっ　」

戦闘甲冑へと変身し、手を差し出すと、同じく騎士甲冑に変身したシャマルは、私の手に掴まるどころか腕に自分の腕を絡めて抱きついてきた。かなり動き辛いんだが・・・。そしてリサは「抱きつくのはちょっと恥ずかしいです」と頬を赤らめた。「別に抱き付く必要は無いんだけどな。手に掴まってくれれば」と嘆息。それでリサもようやく掴まってくれて、いざ出陣。

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

空戦形態ヘルモーズを発動。シャマルとリサを連れて一気に空へと上がる。リサが「ひゃぁぁあああああっ！」と悲鳴を上げ、しがみ付いてきた。下手に飛空時間を伸ばして恐怖を長引かせるのも可哀想だし、「ちょっと我慢してくれ、リサ」と言って、戦場へと針路を取る。その途中、アムルの上空に辿り着き、『来い、夜て――闇の書っ』と"夜天の書"を呼ぶ。するとすぐに私の顔の側に転移して来てくれた。

「オーディンさん、飛行速度が速過ぎて・・・どうやらシグナム達を追い越したみたいですね」

「まぁ城からアムルまで2分も掛かってないしな」

全力で飛んだから追い越してもしょうがないか。早く戦場近くまで戻ってこれたその代わり・・・「騎士リサ、気絶してますね」とシャマルが苦笑。「きゅぅ～」と目を回すリサ。そこまで空が苦手だったとは。昔のシャルを見ているようだ。それはともかく。念のために一つ手を打っておくとするか。

「我が世界（うち）より出でよ　貴き英雄よ」

異界英雄エインヘリヤルを"英雄の居館ヴァルハラ"から召喚するために呪文を詠唱。そして「偉大なる七美徳司りし天使が純潔・カスティタス」と、召喚する者の名を告げる。雲海の上に七大天使カスティタスを顕現させ、待機させておく。流れ弾がアムルに被害を出さないように盾とするために。

飛行を続けると、国境に向かって進む４桁近い騎士の軍団と、空に浮かぶ3隻の戦艦が視界内に入る。そして待ち構える国境防衛騎士団と王都近衛騎士団の混合騎士団は、２００ちょいの人数。だがそこに私たちグラオベン・オルデンが参加すれば、それなりに拮抗の取れる戦力になるはずだ。

「シャマル。リサと2人で地上だ。・・・起きてくれリサ。リサ、おーい」

「はわぅ～～・・・・はっ、ここは天国（ヒンメル）ですかっ？」

「おいおい」

弱過ぎだよ、リサ。メンタル面が。とにかくリサにこれからの事を説明する。私が空を侵略する邪魔物(いくさぶね)を殲滅し、リサを含めた騎士団はそのまま陸の掃除。リサは二つ返事で了承してくれた。ならここからは別行動だ。リサをシャマルに預ける。

「オーディンさん。お気を付けて」

「ああ。シャマルとリサも気を付けてくれ」

降下して行く2人を見送り、"夜天の書"を手に取って胸に抱える。

「さぁ行こうか」と"夜天の書"をポンポンと叩き、視線を戦艦3隻に向ける。まずは外装を突破しないといけないな。あぁその前に魔力による防御障壁を潰さないといけないか。

――破り開け(コード)、汝の破紋(メファシエル)――

まず防御障壁や結界を破壊する効果を持つメファシエルを発動。

――殲滅(コード)せよ、汝の軍勢(カマエル)――

閃光系・闇黒系・炎熱系・氷雪系・風嵐(フウラン)系・雷撃系、無属性（重力・音波などなど）の魔力で構成された槍を１００と作りだし、メファシエルの効果を付加。１隻の艦をターゲットに絞る。人差し指を向け、全弾の矛先をその艦に向ける。

最後に「蹂躙粛清(ジャッジメント)」と指を鳴らし号令を下した。号令の下、一点集

中で射出されるカマエル。次々と障壁に着弾して行くカマエルが爆発を起こしていき、１０本目で障壁を突破し、残りで外壁と砲台を破壊した。
爆煙を上げるその艦に向かって飛翔再開。他の２隻から砲撃が放たれて来るが、空戦形態の私を撃墜するには速さが足りない。余裕で回避し、侵入経路を開けた艦に侵入成功。

――浄化（コード）せよ、汝の聖炎（メタトロン）――

通路の床に手を付き、屋内で効果を発揮するメタトロンを発動。浄化の蒼炎を建造物内に這わせ、通った道を一気に爆破するというものだ。爆破のタイミング、通る道、全てが遠隔操作で行われる。建造物破壊には持って来いの術式だ。そうやって艦内を破壊しながら通路を翔け、迎撃に来た騎士たちを潰していく。もちろんリンカーコアの蒐集は忘れない。１０人くらいを蒐集し終えたところで、

≪４００頁まで蒐集されました。管制人格の起動、および具現化を行えます。共に主の承認が必要となります。承認しますか？≫

「シュトゥラの悪魔めっ、覚悟ぉぉ――――っ！」

「その首、貰ったぁぁ――――っ！」

「挟撃しろっ。決して攻勢に回る隙を与えるなっ！」

――暴力防（コード）ぎし、汝の鉄壁（ピュルキエル）――

迫り来ていた１０人程の騎士の攻撃を障壁で防御し、連中の背後から、

――無慈悲たれ、汝の聖火（プシエル）――

蒼炎の大蛇プシエルを発動させ、逃げ惑う隙も与えずに焼殺する。手加減したいが、殺意と敵意を以って襲いかかって来た者には冷徹になる、と決めている。蒼炎が立ち上る通路の中で私は"夜天の書"の管制人格である彼女の起動を承認した。

≪闇の書の主の承認を確認。闇の書の管制人格の起動を開始≫

私の目の前で構築されていく1人の少女。私と同じ銀の髪。そして深紅の瞳。祝福の風リインフォース。希望の翼リエイス。どちらも最後の夜天の主である八神はやてが付けた名前。今は名の無き彼女が、"夜天の書"を片手に私の前で片膝を付いた。

「我が主。私は闇の書の管制人格にてございます」

「そうか。君がシグナム達の言っていた・・・。こんな状況で何だが自己紹介だ。私はオーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。闇の書の主をさせてもらっている」

「はい。存じ上げております。私は言わば闇の書そのもの。騎士たちと通じているため、外界での事は存じています」

「なら話は早い。私が名前の前に"主"を付けられるのが苦手で、

従者や道具ではなく家族や戦友と言う関係でありたい、というのも・・・・」

「もちろん存じています。・・・・・オ、オーディン・・・・」

「よし。よろしく頼むよ・・・・・5人目の守護騎士、支天の翼シュリエルリート」

「シュリエルリート・・・？」

「君に名前が無いのは聞いている。だから、名前を贈らせてもらうよ。名無しでは家族の触れ合いが出来ないしな。まぁ君と出逢えた記念のようなものだ。気に入らなければ、別の名前を考えるつもりだが・・・・どうだろう？」

ポカンと私を見上げていた彼女と目線を合わせるために、私も片膝を付いてそう尋ねた。災厄撥ねし魂・導き果てぬ絆・希望の守り手、シュリエルリート。彼女に抱いているイメージを基に様々なベルカ語を合わせて名付けてみた。

「いいえ。不満などありましょうか。名を頂ける。これほど嬉しい事はありません。支天の翼シュリエルリート。ありがたく頂戴いたします。オーディン」

シュリエルの手を取って共に立ち上がる。さぁ守護騎士ヴォルケンリッターは揃った。少しでも良い思い出を作ってもらうために、イリュリアとの争いをさっさと片付けよう。

「シュリエル」

「はい、オーディン」

「私の大切なものが傷つけられそうになっている。それを止めたい。手伝ってくれるか？」

「もちろんです。あなたや騎士たちと共に、どこまでも」

†††Ｓｉｄｅ？？？†††

国境で待ち構えていた国境防衛騎士団と王都近衛騎士団の混合騎士団と合流した私とシャマルさん。オリヴィエ様付きの騎士である私が姿を見せた時は凄く驚かれたけど、オリヴィエ様の御指示だと伝えるとすんなり（言わずともそうなっていたと思うけど）受け入れてくれた。

「はふぅ、それにしても・・・・」

酷い目に遭った。まさか空を飛ぶ事があんなに怖いものだったなんて。空を飛ぶ事にずっと憧れていた。でも今日のオーディンさんと飛んだ体験からして、ちょっと考えさせられた。私に空は合わない。うん、別に空を飛べなくたって、魔法陣で足場を作る魔導・法陣結界で十分だ。

「騎士リサ。えっと、大丈夫？」

「あ、はい。ちょっと酔っているようでフラフラしますけど、何とか大丈夫です」

シャマルさん。私を抱えて地上にまで降ろしてくれた、もはや恩人

のような女性。王城で、オーディンさんと同じお医者様だと伺っている。おっとりした、優しい御方だ。私がそう答えると、シャマルさんは「これから大事な戦いが始まるから、治しておきましょ」と、治癒魔法を掛けて下さった。
それで本当は辛かったフラつきが治った。感謝を告げると、シャマルさんは「いいえ。癒しと補助が私の役目ですから」と笑みを浮かべた。安心できる笑顔だなぁ、と思っていると、空が一瞬だけど強く光った。

「始まったみたいね」

シャマルさんが空を見上げて言う。私や騎士団の皆さんも同様に空を見上げる。そこには凄絶な光景が広がっていた。蒼い閃光と化しているオーディンさんの周囲に3ケタ近い槍が展開されていた。これらが一斉に1隻の戦船に突撃して行って、次々と着弾して爆発を起こしていった。
最初の数本の槍で防御障壁が砕け、残りで外壁や艦側面に在る砲台を破壊していく。他の2隻からオーディンさんに向けて幾条もの砲撃が放たれるけど、高速かつ複雑な軌道で空を翔けるオーディンさんには掠りもしない。
防衛騎士団の皆さんからは「相変わらず速いなぁ、騎士オーディン」とのんびりした声が漏れ、近衛騎士団の皆さんからは「なんだあれっ？」「うわっ、すごいなっ」「あれが噂の・・・！」などなどの驚愕の声。

「単独の魔導で戦船の障壁と外壁を突破する攻撃力、2隻からの砲撃を回避しきる機動力・・・確かにあれだけの戦力なら人だけの騎

士団なんて一溜まりもない・・・」

開いた口が塞がらない。一目オーディンさんを見た時、あの方の実力を計り損ねた。今なら解る。計れなくて当たり前だ。計れるはずがない。あんなデタラメな・・・。砲撃を避けきったオーディンさんが外壁を破壊した戦船の中に侵入して行った。そしてすぐにその戦船の至る所から爆発が起き始めた。本当にオーディンさんは単独で戦船を撃沈させるつもりだ。

「イリュリアの動向に変化がありましたっ」

ここへ向かって進軍して来ているイリュリア騎士団の動きを視ている騎士の方から報告が上がる。進軍していたイリュリア騎士団は軽い恐慌状態に陥って、進軍を止めているとのこと。当たり前過ぎて何も驚く事ない。対人戦で反則とでも言える戦船を、対する人間が単独で墜としたんだから。

「このまま退いてくれれば無駄な血を流さなくて済むのだけど」

「そうですね。シュトゥラに攻め込むのがどれだけ無駄な労力か、これで思い知ってくれればいいんですけど」

シュトゥラはそれほど強い国じゃなかった。だけど、オーディンさんが付いた事で一気にその戦力は増大した。たった1人が加わったことで変わるなんて悪夢みたいだろうね、敵国とからすれば。緊張感が漂う中で待機している私たちに「イリュリア騎士団の進行が再開されましたっ！」と報告が入る。しょうがないか。向こうもいろ

いろ大変なんだろうなぁ、最近は負けっぱなしだし。

「各騎！　もうしばらくすればクラウス殿下がいらっしゃる。殿下に無様な戦いは見せられないっ、判っているなっ！」

この混合騎士団の将を任されているらしい方がそう言うと、他の皆さんが「応ッ！！」と叫び返す。あまりの声量に思わず耳を塞ぐ。すごい熱気。アウストラシアの近衛騎士団もこれだけ元気ならいいんだけど。みんな冷めてるから。

同僚の事を思い出していると、「シャマル」と太い声が聞こえて来た。見ると、頭に獣耳とお尻から尻尾を生やした男性が1人。シャマルさんは「ザフィーラ」と駆け寄って行く。オーディンさんが仰っていた、アムルでお留守番しているもう1人、というのはおそらくあの方。

「主オーディンは・・・・空か」

「ええ。御覧の通り。オーディンさん、戦船を相手に戦っているわ」

何度も爆発を起こし続けながら次第に高度を落としていく戦船。あの戦船はもう終わりだ。他の2隻が落ちて行く戦船を見てどういう行動に移るか、ちょっと興味深い。

「各騎。こちらも進軍を開始する。数は圧倒的に劣っているが、恐れる事は無い。歴史は深くとも、その暴挙は数知れず。イリュリアのこれ以上の暴挙を許すな。進軍開始！」

こうして私たちもイリュリア騎士団を迎え撃つために進軍を始めた。

†††Ｓｉｄｅリサ⇒シグナム†††

戦船が徐々に落ちて行く。所々から爆発を起こし、魅了されてしまうほどに美しい蒼の閃光を撒き散らしながら。ヴィータが「すげぇ。オーディン、本当にすげぇ」と繰り返し、我らの主であるオーディンに驚嘆している。私とて同じ感想しか出て来ない。よもやこれ程の力を持っていようとは。今まで仕えてきた主とは正しく格が違い過ぎる。

「――って感心してる暇ねぇか、もう始まっちまってる」

「ああ。急ぐぞ。こちらは数で圧倒的に負けている。少しでも実力のある者が参戦しなくては押し切られる」

「シグナム。そんな心配はいらないよ。マイスターが居るんだから」

アギトが胸を張りながら言う。確かにあんな圧倒的過ぎる火力を用いれば対人戦では最強だろうが、オーディンには様々な制限がある。それを思えば手放しで安心できない。それゆえに少しでもオーディンの負担を減らさなければ。そのための我ら守護騎士ヴォルケンリッター。オーディンの信念に連なるために、戦場へ立つ。

『シャマル、ザフィーラ。私とヴィータとアギトもこれより参戦する。お前たちは今どこに居る？』

『私は後方で支援を担当しているわ。負傷者の治療を最優先としてね。ザフィーラなら最前線で敵騎士を薙ぎ払ってるわ。やっぱり守るものの為に戦うという事が力の源になるみたいね。そう言う私もそうだけど』

『そうか。・・・・ああ、私もそうだな』

"レヴァンティン"を横目で見、すぐに戦場へと視線を戻す。そして、「行くぞ、レヴァンティン。信念の下に、我らは戦う」と告げる。"レヴァンティン"はただ≪Ｊａ≫と一言。

「そんじゃま、あたしらもとっとと始めちまおう。な、アイゼンっ」

≪Ｊａｗｏｈｌ．　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

ヴィータは"グラーフアイゼン"のカートリッジをロードし、「シグナム。あたしはあっちから片すから」と言い、そのまま進路を変え飛び去って行った。ヴィータもまた守るための戦いが嬉しいのだろう。以前までのヴィータなら苛々として、周囲に当たり散らしていたが。さて「アギト、お前はどうする。オーディンは空の上だ。合流するのは難しいだろう」と、側に居るアギトに訊く。

「うぅ～・・・確かにあんなところに行ったら無事じゃ済まないだろうし、それ以前にマイスターの速度に追いつけない・・・・」

そもそもアギトどころかどんな者でも追いつけまい、オーディンのあの速さには。私とてあれは無理だ。ゆえに「なら私と共に来い。

単独で動き回るよりかは良いだろう」と提言する。アギトは少しばかり考える仕草をし、「う、うん。マイスターからも融合の許可もあるし、一緒に行く」と首肯した。
そうと決まればすぐに動かねば。並居るイリュリアの騎士団に突っ込む。我らの姿を確認したイリュリアの騎士が「新手だ。気を付けろ」「フォーアライターの騎士の報告にあった女剣士だ」と騒ぎだす。

「グラオベン・オルデン、シグナム。参る」

「同じくグラオベン・オルデン、炎の融合騎アギト！」

――紫電一閃――

――フランメ・ドルヒ――

"レヴァンティン"のカートリッジを1発ロードし、刀身に紅蓮の炎を纏わせ一閃。敵騎士を斬り払っていく。アギトも炎の短剣を複数射出し、多数の敵騎士を撃っていく。それにしても数が多いな。味方の騎士も善戦しているが、やはり数が圧倒的に少な過ぎる。どこを見ても必ず敵騎士の姿が視界に入る。それから我々は、参戦してから10分ほどの間ずっと敵騎士を斬ったのだが・・・

『くっそぉっ。アイゼンでどんだけブッ叩いても全然数が減らねぇっ！』

『だからと言って焦りを見せ、下手を打たんようにな』

『判ってんよ。てか、思念通話なんかしてる暇があったら少しでも数を減らせよシグナム』

張り切るのはいいが、馬鹿な真似だけはしないでもらいたいものだ。それに一方的に思念通話を繋げたのはお前だろう、ヴィータ。と文句を言う暇もなくまた一方的に切られた。しかしヴィータの言う通りまったくと言っていいほど敵の数が減っていないようにも見える。

『アギト。ここで時間を取られるのは得策ではない。融合、行けるか？』

『・・・うん。ロード・シグナムとの融合準備』

先の戦闘の後、オーディンに私とアギトが無許可で融合した事を詫びた。しかしオーディンは我らを叱るどころか、

――構わないよ。私よりシグナムとの相性がずっと良いだろうしな。もしアギトとシグナムが良いのなら、２人にはロードと融合騎の関係となってもらいたい――

そう言って微笑んでいた。確かに同じ炎熱系の魔力変換を得意とし、魔力光も同じ。相性で言うならば確かに私とアギトは最高だと言えるだろう。融合状態も完全だった。だからと言って私がロードになっていいのか？という迷いもあった。しかしアギトの話によると、オーディンとアギトは上手く融合が出来ないそうだ。融合できる時間は最大で３０秒。それ以上は弾き出される、と言っていた。

「「融合っ！」」

アギトと融合を果たし、我々の最大火力を数倍にした融合形態となる。「融合形態だっ！　油断するなっ、強敵だぞっ！」とより一層騒然となる。しかしもう遅い。すでに周囲一帯が攻撃可能範囲だ。"レヴァンティン"のカートリッジを2発ロードし、シュランゲフォルムへと形態変更する。

――シュランゲバイセン――

"レヴァンティン"の刀身を伸ばし、周囲に居る敵騎士のみを討っていく。だが中には腕の良い騎士もおり、"レヴァンティン"の軌道を読み、回避に成功する者も当然出てきている。
私に肉薄しようと跳びかかって来た数人の騎士。しかし私は独りではない。『防御が薄くなった隙を埋めるのもあたしの役目だっ』とアギトが私の内で言う。私の周囲に火炎の弾丸が生まれる。

――ブレネン・クリューガー――

そして放たれ、直撃せずとも僅かに生まれたその隙を突き、"レヴァンティン"で斬り払っていく。この短い攻撃だけですでに十数人と討ち取った。しかしまだまだ敵は居る。もし全員がオーディンを討つために用意された戦力であると言うのであれば、納得のいく数だ。だがそれでもオーディンは討てまい。オーディンが万全の状態で居る以上、まず勝てないだろうからな。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒？？？？†††

支天の翼シュリエルリート。此度の"闇の書"の主であるオーディンが、私の為だけに考えて贈って下さった、私だけの名前。
永きに亘り旅をしてきた我らだが、これまでの主にまともな扱いを受けた事は無かった。しかし、「これがこの戦船の動力炉か。確かに膨大な魔力を感じる・・・よし」と、この戦船を動かしている動力炉を見上げ、満足そうに頷いている我らが主オーディンは、戦の道具であった騎士たちを家族として見てくれ、迎え入れてくれた。

「シュリエル。少しばかり私は無防備になる。その間、敵が来たら迎撃してもらいたい。頼めるか？」

「はい、もちろんです。オーディンに害為す者が来れば、必ずや排除いたします」

命令ではなくお願い。そこからして今までの主とは違う。私は踵を返して動力室の入口へと向かって歩く。その途中、僅かに振り向き、オーディンの後ろ姿を横目で見る。オーディンは動力炉へと手を伸ばし、ピタリと手の平を付いた。そして小さく「コード・イドゥン」と呟く。
目を疑う光景。戦船の動力である魔力が、オーディンの手へと吸収されていく。オーディンは魔力の枯渇によって記憶を失う。それに対する策が、おそらく今の魔力吸収。あれならば魔力を消費しても供給できる。激しい震動が私とオーディンを襲う。動力を失っていく事で戦船が墜落しようとしている。

「シュリエル、脱出するぞ」

――女神の陽光（コード・ソール）――

オーディンは内壁に手を翳し、強大な蒼炎の砲撃を放ち、壁に大穴を開けた。たった一撃で分厚い戦船の装甲を貫通する、溜めが無くとも発揮されたその威力に、私は軽く戦慄した。しかしオーディンはその圧倒的な力を支配や破壊の為ではなく、守り救うために使うという信念を持っている。だから私や騎士たちは何も憂うことなく付いて行ける。きっとオーディンの選び進む道は間違ってはいないのだから。

「スレイプニール・・・！」

背に構成されている三対の黒翼を羽ばたかせ、蒼光の剣翼と細長いひし形の翼、計２２枚を背負うオーディンの後に続いて私も船外へと飛び立つ。それとほぼ同時だった。別の２隻の戦船が、先程までオーディンと私の居た戦船に向けて幾条もの砲撃を放ったのは。一斉掃射を受けた戦船が爆散する。衝撃波や破片に巻き込まれてしまう。そう思った時、オーディンが私の体を抱きかかえてくれた。視界が一瞬真っ白となる。視界が元に戻った時、私はオーディンに抱きかかえられている状態で、戦船は遥か下。

「さぁ２隻目に行こう・・・！」

オーディンは私の腰に回していた腕を離し、それだけを言って急降下。私も続けて急降下を開始。私たちを迎撃するために放たれた艦

載砲撃は曲線を描き、私たちに迫ってくる。オーディンは速度を緩める事なく突撃を敢行。砲撃を最小限の動きのみで回避しきって行く。私も続くが、あれほど滑らかな動きは出来ず、停止と急加速を繰り返して回避。

――屈服（コード）させよ、汝の恐怖（イロウエル）――

オーディンの左右に巨大な蒼い円環が展開される。それより出でるは、一対の白銀の巨腕。戦船よりずっと小さいが、それでも一番小さい小指でも周囲５０ｍは優に超えている。そのうえ膨大な魔力を秘めているのが否応なく理解できる。大きさなど最早関係ない。オーディンは「ジャッジメントッ！」と指を鳴らし、右の巨腕で１隻の戦船を鷲掴み、左の巨腕で拳打を放った。障壁に妨げられ、周囲に強烈な衝撃波が放たれた。だが障壁はそう長くもたなかった。不可視の障壁が目視できるほどにヒビが入っていき、砕けた。左の巨腕もまた戦船を鷲掴み、その動きを一切封じ込めた。

「突入する。シュリエルッ！」

「はいっ！」

――轟（コード）き響け、汝の雷光（バラキエル）×３――

オーディンは蒼雷の砲撃を３発同時に放ち、戦船の外壁に大穴を開けた。先に突入したオーディンに続こうとしたが、「止まれッ！」と呼び止められた。振り返ると、敵の空戦騎士団がズラリと並んでいた。

『イリュリアの空戦騎士かっ？』

『ここは私にお任せをっ。オーディンは戦船の方にお願いいたしますっ』

『・・・・任せるぞ、シュリエルッ！』

「『はいっ！』・・・ここから先は行かせん」

オーディンの壁となるため私は船外に留まり、イリュリア騎士へと意識を集中させる。それぞれが剣や槍や斧などと言った武装を構え、「いざ覚悟っ！」と襲いかかって来た。空戦が行える騎士は実に珍しい。空間把握能力などと言った必須技術が多いからだ。

そう言った技術面や才能などの要素が必要なために、無理して空戦技能を習得する者は多くない。ゆえに騎士は基本的に陸での戦闘だ。騎士は派手で複雑な技能など要らない。

「（それでもなお空戦技能を有するのであれば、それは・・・かなりの強者、ということになる）グラオベン・オルデン、支天の翼シュリエルリート・・・参ります」

――ブルーティガー・ドルヒ――

手始めに、迎撃の為の高速射撃の短剣を複数射出。奴らはパンツァーシルトや手にする武装で防御。防いだのには驚嘆だが、その代わり動きを止めたその隙を見逃すような私ではない。魔力球ハウリン

グスフィアを4基設置し、「響け」私自身と4基の魔力球より同時多角砲撃ナイトメアハウルを放つ。咄嗟に回避できた者以外は今の一撃で墜ちた。甲冑を撒き散らせながら地上へ落下して行く。

「すまないが、早々に終わらせてもらう。闇に・・・・染まれ」

――デアボリック・エミッション――

私を中心として球体状に爆ぜる、純粋魔力による広域空間攻撃を行うデアボリック・エミッションを発動。防御関連の魔導を発動する事への阻害効果があり、並の騎士が防御をしたところで否応なく突破され撃破される。現に私に向かってきた騎士たちは今の魔導で全員が墜落して行った。

『オーディン。船外の騎士団の撃破を完了しました。御指示を』

『早いな。なら君も地上に降りて、シュトゥラの騎士団の援護に回ってくれ』

『もう1隻の戦船やオーディンの援護は、もうよろしいのですか？』

『ああ。私は単独で大丈夫だ。それにもう1隻の方もすぐに片付ける。気がかりは地上だ。少しでも戦力を地上に回した方が良い』

『・・・・判りました。御武運を』

『シュリエルも。無茶はしないようにな』

思念通話が切れる。「無茶はしないように、か」その御心遣いが嬉しかった。地上を見回す。シュトゥラ方面から四桁近い騎士が進軍して来ている。味方だ。対するイリュリアの騎士団だが・・・・少なからず離脱している騎士が目立ってきた。
深手を負い、戦線を維持できなくなってしまった騎士だろう。こちらも負傷した騎士が多いが、風の癒し手を始めとした治癒術師が多いために戦線復帰する騎士が多い。おそらく此度の戦はシュトゥラの勝利で間違いないだろう。このまま何事もなければ、だが。

「なら少しでもこちらを優勢にしておこう」

オーディンの御指示の下、私は地上へと向け降下する。

†††Ｓｉｄｅシュリエルリート⇒オーディン†††

私を迎撃に来た騎士たちを片っ端から討ちながら、通路をひたすら翔ける。目指すはこの戦船を動かす心臓・動力炉。魔術を使って消費した魔力を供給するためにだ。魔力を吸収する魔術・女神の救済（コード・イドゥン）。今のところは上手く機能していて、魔力枯渇による記憶の消滅を防いでくれる。

「――っと、さっきの艦と同じ構造なら、次の十字路を右に曲がって、無駄に広い部屋を突っ切った後だな」

先に沈めた艦のマップを思い浮かべる。３隻全てが同型艦だったから、まず間違いなく内部構造は同じだろう。十字路へと着き右折。

数百ｍと進み、通路と部屋を隔てる扉に突撃を掛けるようとしたところで、扉の奥から圧倒的な戦意が漏れ出している事に気付いたため、一度飛翔を停止。

（なんだ？　この馬鹿正直とも言える戦意は・・・・）

ヘルモーズを解除し、通路の床に降り立つ。そして両開きの扉を開け、戦意を放っていた馬鹿正直な存在の正体を視界に入れる。迷彩服のような騎士甲冑。四肢に武装しているカートリッジシステム搭載の籠手と具足には、指の数と同じ計２０本の鉤爪。アギトとシグナムとヴィータから聴いていた、フォーアライター・オルデンの団長・ファルコ・アイブリンガーの特徴と一致。

「戦船なんて、対人戦に引っ張りだすような戦力じゃないと思っていたけどさ、あんたの前じゃただの的だったわけだ」

「ファルコ・アイブリンガー、だな。先日は世話になったな。味方が１３人、死んだ」

そう言いつつ室内に入ると、背後の扉が勢いよく閉じられた。逃がさない、と言いたいようだ。元より逃げるという選択肢など無い。

「こっちも何十人と殺され、再起不能にされた」と応じてきたファルコに歩み寄って行く。

「戦争だから戦死者が出るのは当たり前、というのが真理だ。けどさ、それでもやっぱり許せないんだよ、仲間を討った奴の事を」

「そうか。私とてそうだ。付き合いは短いが共に戦った仲だ。毒なんぞで最期を迎えた騎士たちの恨み、ここで晴らすのも良いな」

ファルコ達フォーアライター・オルデンは騎士の誇りを捨て、外法を用いてでも勝利を得ると言う連中だそうだ。それもこれもベルカ統一の座を母国イリュリアに捧げるため。真正の外道ならまだ良かったんだけどな・・・。何も無い大きいだけの正方形の空間。空戦が行えそうなほどにだだっ広いその部屋で、私とファルコは対峙する。

「毒はあんたを討つためだけの戦術だった。俺が解毒剤を持っていると告げ、あんたの周りから味方を引き離して俺たちに引き付けておいて、あんたをじわじわ毒で侵し、死なせるという。しかし結局、あんたは生き伸びた。巻き込まれた防衛騎士団には最悪な展開だよな」

「（ファルコには融合騎が付いている、という話だったが・・・・にしても）お前への考えを改めよう。やはりお前は外道だ。私を討ちたいなら真っ向から挑んでこい」

「それが出来たら苦労なんかするかよ。なんだよ、このティルピッツを押さえ込んであるあの巨大な腕は・・・・よッ！」

ファルコを中心として膨大な煙幕が発生する。煙幕ではなく毒であってももう通用しない。戦闘甲冑の防御効果に対毒関連の術式を復活させておいたからな。室内の気圧を魔力で操作して突風を起こし煙幕を晴らす。室内ゆえに籠るかと思ったが、どこからか換気され

ているのか晴れていった。

「これは・・・・！」

先程までは何も無かったこの大きな部屋がガラリと変化していた。どこをどう見ても深い森の中。無機質な床だったモノが草木の生える土となっていた。

「シミュレーターのようなものか・・・？」

管理局の訓練シミュレーターに類するものだと認識する。質感や匂いまでもが再現されている。この時代にすでにこのようなモノが在ったんだな。少しばかり"機動六課"時代の思い出に浸ってしまう。まぁもちろん深く浸る暇などないが。

ズンズン、と木々を踏み締めて跳躍している音が聞こえる。ファルコは木々を足場にして移動しているようだ。そして突然音が途切れた。周囲に意識を巡らせ・・・・気配を察知。

――暴力防ぎし（コード）、汝の鉄壁（ピュルキエル）――

振り向きざまに対物障壁・蒼光の盾ピュルキエルを発動し、高速で突撃してきたファルコの一撃を防御。至近距離で視線が交わる。ファルコは「初手を完璧に防御する奴はあんたで2人目だよ」と言い放った後、また森の奥へと消えて行った。

「あんた、卑怯だよ。人間に許された一線をとっくに超えてるよ、あんたの魔導」

――クラオエ・デス・イェーガー――

また突撃してきた。ハンターグリーンの魔力光を纏った両手の鉤爪による刺突攻撃。伸ばされているのは右手のみ。回避しては、引き絞られている左の鉤爪で追撃を受けるな。ならば防御でファルコの動きを封じた後、カウンターを喰らわせる。対物・対魔力の効果を持つ、無数の小さな円盾を組み合わせて巨大な1つの円盾とする防性術式、

――護り給え（コード）、汝（ケムエル）の万盾――

ケムエルを展開。ファルコの攻撃はケムエルによって防がれ、間髪入れずに突き立てた左の鉤爪も防ぐ。背後から一撃を喰らわせるために魔術をスタンバイしようとしたところで、背後から魔力反応。すぐに風の融合騎フュンフのものだと察する。振り返ることなくケムエルを背後にもう1つ展開。そしてケムエルに着弾する衝撃波。前方のファルコをケムエルごと押し返して弾き飛ばし、背後に居るはずのフュンフに向けて、

――咲き乱れし（コード）、汝（マルキダエル）の散火――

蒼炎の魔力弾を7基射出し、背後の森へ進入したところで「爆散粛清（ジャッジメント）」と告げる。マルキダエルは炸裂弾としての効果を発揮。7基のマルキダエルは炸裂し、無数の小型火炎弾となって背後の森を蹂躙した。爆発の余波が届き、私の後ろ髪を激しく揺らす。と、爆発の衝撃波に紛れてフュンフの攻撃であろう真空の刃が私の頬を掠めた。

私は姿の見えないフュンフへ向け「やるな」と称賛を贈る。

「そんな掠り傷を付けた程度で私は喜ばないわよ」

室内に反響する少女の声。それに「まぁ掠り傷とは言え、騎士オーディンに一撃与えた事には変わらねぇよ」とファルコの声もまた反響しだした。完全に姿を晦ませたな。爆破した森も復活しているし。早々に勝敗を決して次の艦を墜としに行きたいんだが・・・。

――グラナーテン・ヴィント――

頭上から風の魔力弾が数基降り注いできた。その場から前方へと跳び、回避する。床に手を付いて前転している最中に頭上へ向けて、

――舞い振るは、汝の雷光（パシエル）――

蒼雷の魔力槍を12本射出する。パシエルは天井に着弾して周囲に雷光を撒き散らすが、フュンフとファルコにダメージは与えられなかったようだ。

――ヴォルフ・クラオエ――

気配。しかし姿は見えない。とにかくその場から離れようとしたが、その前に右袖を裂かれた。ステルス、か。ヴィータが言っていたな。すぐさま魔力弾を連射したが、ファルコに当てられなかった。奥の木々がガサガサと揺れる。そこに向け魔力弾を再度連射――したところで、後方からフュンフの衝撃波。風を集束させた魔力槍・巻き（コード）

起こせ、汝の旋風(アムブリエル)を全力で振るって気流を乱し相殺する。
ガシャ、と具足が床を踏み締める音が耳に届いた。大きく腕を振るった事で開いてしまっている私の懐へ、ファルコが最接近してきたようだった。なかなかの連携だ。が、純粋魔力刃・知らしめよ(コード)、汝(アブディエル)の忠誠を両手の肘から手の甲、五指に掛けて創り出す。
ファルコの姿が僅かに見えた。両手を床に付き、具足の鉤爪に魔力を纏わせた両脚蹴りを放つ体勢。右前腕の魔力刃アブディエルで受け止め、左手の五指に纏わせたアブディエルでファルコの脚をガッチリ鷲掴み、「そぉぉらぁぁッ！」床に叩きつける。

「うごおっ・・・・！」

「続けて行くぞ・・・・っ！」

――知らしめよ(コード)、汝の力(ゼルエル)――

魔術効果および身体の強化を行うゼルエルを発動。地面に倒れて咽ているファルコを全力で蹴り飛ばす。フュンフの攻撃に警戒しながら追撃の高速砲撃をスタンバイ。

――ギガント・アーテム――

発射直前、十分すぎる質量を持った暴風が私に重く圧し掛かって来た。思わず両膝を床に着いてしまう。というか・・・「キツ・・・・！」最早重力を掛けられているかのようで、私を中心に地面にヒビが入っていく。
正直侮っていた。融合騎が、しかもプロトタイプと言われている子

が、これだけの強力な魔導を扱えるとは。アギトではこうはいかないだろう。あの子にも轟炎という大魔法があるが、それとはまた別段に強烈だ。

「「融合！」」

耳に届くフレーズ。森の奥から強烈な発光と膨大な竜巻が発生したのが判った。暴風からようやく解放されたところで、早速ファルコらが攻勢に打って出て来た。

――ヴィント・ホーゼ・フェッセルン――

私の四肢を捕らえようと発生した竜巻状のリングバインド。咄嗟に離脱を図り、ギリギリで逃れる事が出来た。とほぼ同時に「喰らいやがれッ！」という攻撃を示す声。

――シュトゥルム・デス・オクテット――

周囲に細い竜巻が８つ発生し、私を包囲。そして竜巻はうねりを見せ、一斉に先端を私に向けて襲いかかって来た。防御に専念するか回避を徹底するか。私は幼少の頃から防御はあまり好みじゃない。だから機動力を最優先に鍛え上げてヘルモーズを創り、次いで攻撃力を鍛えた。遠距離攻性術式が多いのは、私を兵器としてしか見ずに調整した馬鹿親の所為だが。

「どうであれ・・・私に防御は似合わない・・・よなっ！」

――我を運べ、汝の蒼翼（アンピエル）――

背より12枚の剣翼アンピエルを展開し、迫る竜巻を飛翔で回避。追撃してくる竜巻を見、ファルコとフュンフに聞こえるように「私も似たような魔導を使えるぞ」と宣告。

――削（コード）り抉れ、汝（ザキエル）の裂風――

削岩機（ドリル）のような形状の竜巻砲撃ザキエルを8基放ち、迫る竜巻を取り込み、そのまま外壁を粉砕し船外へと出す。

「シュトゥラの悪魔、か。悪魔なんて、もうそんな生易しいものじゃないぜ、あんた。悪魔の上役・・・魔王・・・いいや、もはや魔神の域だよ」

――シュトゥルム・デス・オクテット――

――グラナーテン・ヴィント――

――ヴィント・バイセン――

その呆れの含んだ言葉と共に、さっきの竜巻がまた8基、風の魔力弾が18基、衝撃波が3基放たれてきた。私は「魔神か。悪魔よりずっと良い二つ名だよ」と笑みを返し、回避行動に移る。誘導効果のあるのは竜巻のみだ。魔力弾と衝撃波は一度回避しただけで、軌道は変わらず木々を薙ぎ払って消滅した。

どこからともなくファルコが出現した。フュンフと融合しているた

めに、色々と変化が見られる。特に目が行くのは、ファルコの黄金の獣のような瞳。随分とギラギラと睨みを効かせてくる。

「おおおおおおおおッ！！」

――シュトゥルム・シャルフリヒター――

ファルコの周囲に風が集まり、さっきの竜巻・・・以上の魔力と風圧を伴って竜巻の蛇と化して突撃してきた。回避。蛇は流麗な動きで追撃してくる。面白い。様子見として、竜巻砲撃ザキエルを放って見るが、弾き飛ばされた。

なるほど。結構簡単に弾かれたな。それなら「懲罰（コード）せよ、汝（マキエル）の憤怒・・・！」はどうだ？　龍、雷龍、光龍の3頭マキエルを発動。「粉砕粛清（ジャッジメント）」と指を鳴らし、蛇に巻き付くように突撃させる。ザキエル以上の威力と魔力濃度。そう易々と・・・おっと、マキエルでもダメか。

（シグナムの紫電一閃の一撃で討ち破ったと聞いていたが、当時より強力になったか、それとも私の魔術の威力が足りていないか）

「どんだけ器用なんだよ、あんたっ！」

『けどそれももう終わりよ。とことん追い詰めて討たせてもらうわ』

――シュトゥルム・デス・オクテット――

ファルコ本体とは別にまたさっきと同じ八基の竜巻が発生、計九基

が追撃してくる。面倒だが仕方がないな。これ以上魔力を消費するのも得策じゃない。右手の蒼光の弓を具現。

「フュンフに同意しよう。これでもう終わりだ」

左手に槍の如き長さを誇る蒼光の矢を具現させ、弓に番える。回避運動を取りながら標的をロックオンしていく。速度をさらに上げて、ファルコらを引き離した後、「弓神の狩猟（コード・ウル）」と術式名を告げ・・・ウルを射る。上級術式ゆえに威力はさっきまで使っていた中級術式とは比べるまでもなく高い。ウルは途中で分散、無数の閃光となってファルコらを迎撃。室内が蒼光の爆発で満ち、視界が蒼一色となる。

「・・・・私の勝ち、だな。ファルコ・アイブリンガー、フュンフ」

視界がクリアになり、状況を確認。シミュレーターは壊れたのか室内は元の無機質なものへと戻り、その床に倒れ伏しているファルコとフュンフに向け告げる。ファルコが呻き声を漏らしながら上半身を起こし、フュンフの様子を見る。安堵しているところを見ると、どうやらフュンフは機能停――死んではいないらしい。

「は・・・はは・・・あはははは・・・負けた負けた。こりゃ勝てないぜ。だけどな、このまま終わりなわけじゃない。見てみな。あんたが守ってきたアムルに、最後の戦船デアフリンガーの砲撃が向けられる」

空間モニターが展開される。ん？　シミュレーターだけじゃなく空

間モニターまでベルカ時代にあったのか。それはともかくとして、アムルが映し出された。しかし、判っていないな。こうなる可能性も見越していたからこそ・・・・

「ほら、見てみなよ。アムルが砲火に呑まれる様を！」

その言葉を合図にしたかのようにデアフリンガーという残りの1隻から砲撃が放たれた。だが砲撃がアムルに届くことはなかった。アムルを護るかのように人面の付いた無数の黒石板（モノリス）が出現し、砲撃を完璧に防ぎきった。ファルコが目を見開き、「何が起きたんだっ！？」と叫ぶ。それに対し「紹介しよう。私の使い魔、アンゲルス・カスティタスだ」とモニターに向かって告げる。

「なんだよ、アレ・・・っ？　あんたの使い魔？　冗談だろ？　ありえないって・・・」

ファルコが呆然と呟く。七美徳が純潔――アンゲルス・カスティタス。以前召喚された契約先世界で従えた、七美徳を司る七大天使の一体。チェスのナイト（馬の形をした奴だ）の駒の額に1本の角を付けたユニコーンを胴体として、数億個のモノリスで両腕を形作っているという異形の姿。もちろん天の御使いたる証明――エンジェル・ハイロウもある。黄金の光で構成された幾何学模様の紋章だ。かなり前の契約で、戦友だった男の息子――ネギ・スプリングフィールドを殺さなければならなくなった時に刺客として送り込んだが、護衛だったシャルに6体潰され、そのネギとパートナーの少女たちと、裏切ってくれた監視の天使ラグエル達に一体潰された。その果てに私もシャルの仇として、ネギと少女たちやその仲間たちによっ

て斃されるよう仕組んで、計画通り斃されるに至った。

「――というわけだ。カスティタスが私の代わりにアムルを護る。残念だったな」

「・・・・正しく魔神だよ、本当に。怪物たる悪魔の頂点。あんた、その力があれば何でも支配できるな」

「そうかもな。だが支配なんぞに興味はない。・・・・ファルコ。退いて、二度と戦場に立たないと言うなら見逃す。退かねば、残念だが・・・殺す」

「・・・・逃げれば生かす、か。そうだよな、あんたにその権利があってもおかしくない。勝者だしな。でもな・・・」

ファルコはフラ付きながらも立ち上がる。四肢に装着している籠手と具足は健在なようでカートリッジをロードし続ける。「残念だよ」と左手に火炎の魔力槍・舞い振るは、汝の獄火（サラヒエル）を創り出し、ファルコへと歩み寄って行く。

「これでもテウタ王女派の騎士の1人として数えられているんだよ。逃げられるわけが・・・・ねぇだろうがぁぁぁーーーーッ！！」

――クラオエ・デス・イェーガーーーー

獣のように一度体勢を低くした後、姿が描き消えるほどの速さで跳躍しながら突撃してきた。だがな、見えているよ。ダメージの所為

もあるのだろうな。シャルの閃駆、フェイトのソニックムーブやブリッツアクションに比べれば遥かに遅い。サラヒエルを何も無い宙に一閃。だが確かにファルコを捉えた。サラヒエルの一撃を受けたファルコが吹っ飛んで外壁に叩きつけられた。

「トドメだ」

投擲体勢に入ると、「ファルコは殺させないわッ」とフュンフが立ち塞がった。ファルコは自分を庇うために私に立ちはだかった「フュンフ・・・！？」の姿を見、驚きを見せた。

「ファルコは私のロードよ。私はプロトタイプとはいえ融合騎。ロードを守るのが最優先の務めなのよ」

「よせ。もう俺たちじゃコイツには勝てない・・・」

「解ってるわよ、それくらい。格の違いを見せつけられたもの。魔神・・・言い得て妙だわ。悪魔の頂点たる魔神の如き強さ。数多くの種類の魔導を苦もなく発動させるその才」

――グラナーテン・ヴィント――

フュンフの周囲に風の魔力弾が１０基展開される。しかしやはりダメージが酷いのか展開し続ける事が出来ず、魔力弾が消滅した。歯噛みするフュンフに、「ファルコを生かしたければ、先程の私の案を呑め」と告げる。フュンフの目に怒りの色が満ちた。あぁダメか。「逃げるなんて出来るわけがないでしょうっ！」と叫ぶ。

「前回はシグナムとアギトに良いようにやられて逃げたじゃないか」
「ちょっ、ちが――あれは、ヴォルケンリッターの事を報告するために仕方なく・・・もうっ！　風拳！」
両拳に風を纏わせ突っ込んで来ようとしたが、その前にファルコに捕まった。
「もうやめろ、フュンフ」
「ファルコっ？　なに諦めようとしているのよっ！　逃げるなん――あっ・・・判ったわよ・・・」
ロードであるファルコが折れてくれれば、フュンフも折れるだろう。まさしくその通りとなった。このまま大人しく騎士をやめてくれれば助かる。ファルコはニッと笑みを浮かべ、「じゃあな」と別れの挨拶らしきものを言った。
「・・・・ぐっ・・・！？」
その直後、突如として私は真横から強烈な衝撃を受け、成す術なく吹き飛ばされた。宙で体勢を整え、内壁に叩きつけられるのを阻止。床に着地し、私を襲った衝撃の正体を見やる。
「そういうわけで、これで失礼するぜ・・・・」

「憶えていなさいよっ、魔神オーディン！　今度こそ、その首を貰うんだからっ！」

ファルコとフュンフが、宙に浮くシンプルな長方形の鏡の中に消えて行く。いや、そんなものなど最早どうでもいい。その鏡らしきものを創り出した術者に目が釘付けになってしまう。私に一撃くれたのはあの術者で間違いないだろう。ああ、知っている、判っている。鏡のようなアレも、突然現れた術者の正体も。絶対にあのクソ野郎の末裔で間違いない。男尊女卑の権化だった、天光騎士団・星騎士シュテルン・リッターが第八騎士アハト・リッター・鏡の境界・・・名はそう・・・

「サー＝グラシオン・ヴォルクステッド・・・・」

「サー＝グラシオン？　確かに僕の姓はヴォルクステッドですが・・・。あ、紹介が遅れました。イリュリア騎士団が一、強暴なる氷盾騎士団を率いています、ゲルト・ヴォルクステッドと言います」

聞かれていたか。というか、人格面は普通だな。礼儀正しくすらある。二十代に突入したばかりと見える青年。グラシオンと同じハンティングピンクの髪（遺伝であんな派手な髪色だとしたら同情してしまうな）はサラサラショート。グラシオンはどれだけ目立ちたいのか、髪をツンツン立てていたな。

「それでは誠に勝手ですが、これで失礼いたします」

ゲルトの側面に鏡が生まれる。グラシオンと同じものだ。グラシオ

ンの有していた神器である魔鏡"フェアドレーエン・シュピーゲル"による魔術反射や転移。それと同じ事を、神器ではなく魔導、もしくは能力で行っている。

私は追撃もせず、ゲルト達をただ見送った。これ以上連中に構っていられない。早々にこの戦船ティルピッツの動力炉から魔力を供給し、最後の1隻デアフリンガーからも魔力を供給しないとな。剣翼アンピエルを展開し、動力炉を向けて飛行を再開。通路を出て数十秒。

≪警告。本艦ティルピッツは砲撃の標的となっています。至急退艦してください。繰り返します――≫

そんな艦内放送が流れた。ティルピッツごと私を艦載砲撃で撃つつもりか。魔力供給は諦めて、外へ脱出するためにティルピッツを鷲掴んでいるイロウエルを操作し、艦体を真っ二つにへし折ってもらう。

。―。―。―。―。―。

イリュリア王都の中央にそびえる王城、その城内のある一室。ゲンティウス王や数人の執政官や騎士団総長グレゴール、そしてテウタ王女という顔ぶれが揃っていた。

美術品のような長テーブル4つを正四角形の形に配置し、それぞれが腰かけている。長テーブルに囲まれるように中央には球状の空間モニターが展開されていた。映し出されているのはオーディン。そして守護騎士ヴォルケンリッター。先程まではオーディンとファルコの戦闘が流れていた。国境で行われていたグラオベン・オルデン

の戦闘は、全てイリュリアの上層部に筒抜けだった。

「ご覧に頂けましたか、御父さ――ゲンティウス陛下。最早シュトゥラを弱小国など侮っているわけには参りません。オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。騎士ファルコや融合・五番騎が言っていたように、彼は魔神の如き強さを持っています。対人戦ではおそらく勝つ事は無理でしょう。戦船をああもう容易く墜とす事が出来るのですから」

テウタ王女が立ち上がり、オーディンの強さに絶句しているゲンティウス王や執政官らを見回した。

「お兄様はああして騎士団を率いていますが、おそらく負け戦となるでしょう。魔神オーディンと闇の書の守護者ヴォルケンリッターがシュトゥラに居る以上、私たちイリュリアにベルカ統一は不可能です」

「むぅ・・・それは、そうかもしれぬが・・・」

「ですので、私は提言させていただきます。エテメンアンキおよびミナレットを使用し、この泥沼化しているベルカ統一戦争の幕を一気に降ろしましょう。もちろん我らイリュリアの勝利と言う形で、です」

テウタ王女の提言に、グレゴールを除く全員が度肝を抜かれた。"エテメンアンキ"と"ミナレット"。イリュリアが遥か昔より有していた超兵器の名だ。その2つは戦船どころの戦力ではない。まさ

に世界を破壊しうるだけの威力を有している。ゆえにゲンティウス王に「ならんっ！」と却下の一言が下る。

「イリュリアが成すべき事は、破壊による支配ではなく、勝利による統治。エテメンアンキとミナレットは、我らに勝利どころか破滅をもたらすだろう」

「聖王家の有する聖王のゆりかご。万が一にもゆりかごを戦場に持ち込まれてしまえば、イリュリアの勝利は崩れます。その最悪な事態が起きてしまった場合、早急に対処するために最低でもミナレットの運用を視野に入れませんと――」

「ならんっ。・・・・テウタ、我が娘よ。破壊の後には、我らの望む世界はないのだ。よいか？　わしが王座に座する限り、エテメンアンキとミナレットの使用は認めん。魔神オーディンとその配下・守護騎士ヴォルケンリッターー。その問題についてはお前が出張ればよい」

「っ・・・・判りました。申し訳ありませんでした」

ゲンティウス王とテウタ王女のそのやり取りを以って、"エテメンアンキ"と"ミナレット"使用の件は一時収まりを見せた。

Ｍｙｔｈ９そして時代の針は動きだす～Ｑｕｏ　Ｍｏｒｉｔｕｒｅ
ＲｕｉＳ～

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

戦船ティルピッツをイロウエルで真っ二つにへし折り、残りのデアフリンガーの砲撃が放たれる前に脱出に成功。イロウエルを解除して消滅させた後、デアフリンガーは砲撃を放ってきてティルピッツにトドメを刺しに来た。
衝撃波や爆炎、破片などの物理攻撃で私をどうにかしようと考えたんだろうが無駄な事。空戦形態ヘルモーズを発動し、すぐさま衝撃波や弾け飛んで来る破片の効果範囲より離脱している。デアフリンガーへ向かう前に、シグナム達やクラウスに連絡しておいた方が良いな、カスティタスの事を。

『こちらグラオベン・オルデンのオーディン。アムルを守る巨像は私オーディンの使い魔である。名をアンゲルス・カスティタス。だから警戒せず、各々安心して目の前の敵に集中してほしい』

デアフリンガーより放たれてくる砲撃を回避しながら思念通話を送る。するとクラウスから『アレがあなたの使い魔ですかっ！？』と、心底驚愕しているような声色で返してきた。今のクラウスの顔を想像してしまって小さく笑ってしまうが、コホンと咳払いした後に『ああ。だから攻撃しないように――って、戦船ではないようだから大丈夫か』と返す。クラウスはちゃんと私の要望を聞いてくれたんだな。

――知らしめよ（コード）、汝の忠誠（アブディエル）――

念のために魔力消費の少ない魔力刃生成術式アブディエルを１５０ｍ程の長さで発動し、デアフリンガーの艦体側面に並ぶ砲台に向け一閃。障壁ごと砲台を斬り裂き、無力化する。そうする事で私に向けられる砲撃の数が激減した。早々に艦内に侵入し、動力炉から魔力を頂戴しないと。あまり消費したくないからな、これ以上は。

『ええ。オーディンさんの要望ですから。ですが・・・あの巨大な像が使い魔・・・。貴方には本当に驚かされてばかりだ』

『飽きないだろ？・・・私はこのまま最後の１隻を撃沈させる。地上はグラオベン・オルデンと国境防衛・近衛混合騎士団が頑張って数を減らしてくれているが、まだ増えるし、投降してきた捕虜の見張りや連行にも人員が割かれている。それに――』

『この騎士団を率いている将、ですね』

『そういう事だ。これほどの大騎士団。率いている将はよほどの地位を担っていると見ていい。クラウス、行けるか？』

『もちろんです。元より僕も出陣するつもりでしたから。では戦場で会いましょう』

『ああ。道づくりは任せてくれ』

クラウスとの思念通話が切れる。「我が手に携えしは確かなる幻想」と詠唱。固有魔術より魔力消費の少ない複製術式をスタンバイ。私の周囲１３ヶ所に魔力を集束させていく。集束砲、と呼ばれるミッドチルダ式の魔法。

今より使う術式のオリジナルの使い手の名は、高町なのは。術式はもちろん私用にイジってある。ターゲットを確認。３発をデアフリンガーへ。残りは地上。シュトゥラとイリュリアの両騎士団が衝突している最前線に向かって来ているイリュリアの増援へ。

――スターライトブレイカー・エクステンドバースト――

「行けッ！！」

ブレイカーを発射。デアフリンガーの砲撃を粉砕しながら3発が着弾し、デアフリンガーの外壁を爆発破砕。残り１０発も増援部隊に着弾。固有魔術よりかは威力は劣るが十二分に効果を発揮し、粉塵が晴れたその場には倒れ伏したイリュリア騎士団が百何十人と。

「・・・・さすがなのはのブレイカー。いつ見ても清々しいほどの威力だな」

さてと。地上の疲弊を少しでも和らげることが出来たはずだし、デアフリンガーへと魔力泥棒に行くか。進路を改めてデアフリンガーへと移し、アギト達グラオベン・オルデンのみに思念通話を繋げる。

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒ヴィータ†††

あのデッケェのがオーディンの使い魔、か。なんつうか「すげぇ」よな。てかアレって生物か？んわなけねぇよな。どう見ても石像だしな。敵をぶっ倒しながら、空に浮くアンゲルス・カスティタスって奴をチラチラ見る。オーディンかぁ。本当に何者なんだろうな。疑うわけじゃないけど、ここまですごいとなんて言うか・・・気になっちまう。

『アギト、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。すでに見知っていると思うが、闇の書の管制人格を起動した』

ああ、判ってる。さっき空でアイツの魔法、デアボリック・エミッションが発動したのが見えた。それに地上に降りて、敵を張りきってぶっ飛ばしているのが離れていても判る。オーディンから続けて『彼女に名が無いのは君たちから聞いていたからな。だから名付けさせてもらった』って、なんつうか羨ましく思ってしまう事を言われた。

『主オーディンから賜った私の名は、支天の翼シュリエルリート。シュリエルだ、皆、これからよろしく頼む』

アイツからも思念通話。シグナムがまず『そうか。ではよろしく頼む、シュリエル』って挨拶を返して、シャマルも『よろしくね、シュリエル』、ザフィーラも『ああ、頼む。シュリエル』って返す。アギトも『よ、よろしく、シュリエル。アギトです』ってちょっと緊張気味に返した。あたしは・・・・『ふん』つい鼻を鳴らして無視しちまった。

『ヴィータちゃん・・・』

『ヴィータ！』

『よいのだ、烈火の将。これから頼むよ、紅の鉄騎』

アイツの気落ちした声。あたしは今までアイツに八つ当たりばっかしてて。悪いのはアイツじゃないって事くらい昔から理解してる。でもしゃあねぇんだ。今更アイツとどう仲良くすりゃあいいってんだ。もう判らねぇんだ、接し方が。

「クソッ！　このまま良いようにやられてたまるかぁぁぁーーーーッッ！！」

あたしに向かってくるイリュリア騎士が数人。鉄球を８つ展開。"アイゼン"をハンマーフォルムに戻して、「どうすりゃいいってんだよッ！」鉄球を"アイゼン"で打つ。

――シュワルベフリーゲン――

魔力を纏わせた鉄球フリーゲンを打ち出して、迫って来ていた奴らに直撃させて甲冑を破壊、衝撃のまま後方に吹っ飛ばす。次の奴ッ。って周囲を見回した時、悪寒が走った。数だけで大したことない奴らばかりかと思ってたけど、今回初めてヤバい感じがした。あんだけあたしを討とうと躍起になっていた連中が引いて行く。人垣の道が出来て、なんかデカイ狼のような奴が歩いて来たのが見て判る。つうか獣のクセして青白い鎧を纏ってんな。四肢に、背中に、

頭に・・・。その狼があたしの目の前、だいたい１０ｍ先で立ち止まった。

「我は狂いたる災禍騎士団所属の獣騎士ヤークトフント・ＸＸＶＩ。我らが騎士団長ウルリケ・デュッセルドルフ・フォン・ブラッディア卿の命により、ヤークトフント隊もこれより参戦致す」

獣が喋りやがった。あたしは「守護獣か？」って訊くと、ＸＸＶＩは「違う。そのような立派なものではない」って笑った。足元に黒い光を放つベルカ魔法陣を展開したあと、「技術部によって生み出された獣型生体魔導兵器だ」って言い終えると、頭を覆う兜がパカッと開いた。

「な・・っ？」

目を疑う。額には若い男の顔があった。しかも「驚かれたか」って口を開けて喋ってやがる。今まであたしと話してたのは狼の方じゃなくて額の人間の顔の方だったわけだ。

「気持ち悪ぃな。つうか見てて哀れに思えちまうよ、そんな姿で生み出されてな・・・！」

――シュワルベフリーゲン――

心底同情しながらフリーゲンを様子見で４発放つ。ＸＸＶＩは「哀れ、か。元は人間であった我だが、こうして再び戦場へ立つ事が出来るとなれば姿形などどうでもいい」って狼の方の口を大きく開けた。

――咆哮――

黒い砲撃。横っ跳びで回避。連続で放たれてきたからさらに横っ跳びを繰り返して避け続ける。砲撃は着弾点で大きく炸裂して地面を穿っていく。なるほど。こりゃ連中が退くわけだ。石飛礫を払い除けながら考える。走るんじゃダメだ。狙い撃ちにされる。だから空へと上がる。

「元人間って・・・そんじゃお前は獣と融合されたってのかッ！」

「如何にも。しかし人だった頃、我は戦で負傷し二度と戦えない身体となって眠っているばかりだった。それが今ではどうだ。人間の身体以上に速く動けるこの狼の身体。そしてかつては空を飛べなかった我が、こうして空を翔ける事が出来る」

――翼――

XXVIの背中から黒い翼が生えてきて、羽ばたかせて追撃してきた。そんなんありかよ。空飛ぶ狼はザフィーラだけで十分だっつうの。砲撃を尽かすことなくぶっ放し続けてきやがる。しかも徐々に砲速が上がってるし。負けじとこっちもフリーゲンで多方向からの奇襲を仕掛ける。

「人間捨ててまでやる事かよッ、戦争なんてッ！」

「元より死を待つ身だった。ならば何もせず無駄死にするより戦っ

て少しでも敵騎士を討ち、その果てに戦死した方が国と我が意義の為だッ！　オオオオオオオオオオッッ！！」

――衝撃波――

強烈な鳴き声。その声の大きさに思わず耳を塞ぐ。フリーゲンは今ので粉砕されちまうし。「貰ったッ！」って、酷い耳鳴りと頭痛の所為で揺れる視界の中に聞こえてきた奴の声。なんとか見据えて奴の姿を捉える。トドメのつもりか高速で突進してくるのが判った。

（くそっ、身体が動かし難い。しゃあねぇな・・・！）

――パンツァーヒンダネス――

手を前に翳して一点集中の防御障壁を展開。ギリギリで奴の突進攻撃の直撃を防ぐことが出来た。奴は「ぬぅ。これほど強固な障壁は初めてだ」って驚嘆しながらもヒンダネスを突破しようって押して来る。膠着状態の今の内に調子を整える。耳鳴りは少し残ってんけど頭痛や視界の揺らぎは収まった。

大きく"アイゼン"を振りかぶってカートリッジを1発ロードした後に・・・ヒンダネスを緩めてすぐに思いっきり押し返す。と、奴はつんのめった後に障壁の打撃を鼻っ面に食らって弾かれて距離を取らざるを得なくなった。ここでヒンダネスを解除して、振りかぶっていた"アイゼン"を全力で振るう。

――フランメ・シュラーク――

着弾と同時に爆発炎上させる炎熱魔力付加の一撃。奴は咄嗟に前脚で防御姿勢を取った。その直後に直撃して爆発炎上させる。爆風に乗って空へとちょっと上がって「障壁を張らずに身体で防御って・・・もしかして無いのか、防御系の魔導が・・・？」って軽く呆れながら奴を覆い隠す煙幕を見詰める。

――咆哮――

煙幕を吹き飛ばす様に放たれてきた黒い砲撃。距離もあった事で余裕で回避。そん中で奴の姿を視認する。右の前脚が焼け落ちて無い。左の前脚は残ってっけど炭化しているからもう使えないはず。「アイゼン、ラケーテンフォルムっ」もう一度ラケーテンに変えて、

――フェアーテ――

高速移動の魔導を使って砲撃を紙一重で避けていく。砲撃を放ち続けながら突っ込んで来るＸＸⅥ。タイミングを見計らってブースターを点火させて「ラケーテン・・・ハンマァァーーーーッッ！！」突撃する。

奴は砲撃を途切れさせてそのまま突っ込んで来た。防御が使えない奴がラケーテンの一撃で無事で済むはずねぇ。決まればこれで決着だ。着弾――というところで、奴は信じられないことに"アイゼン"のヘッドに噛みついて防ぎやがった。

――狼牙――

普通そんな事すれば牙はへし折れるし口も吹っ飛ばされる。だけど

奴はよほど運が良かったのか何ともなく止めた。あぁなるほど。魔力で強化されてる牙か。力を込めて振り切ろうとするけどガッチリ牙と牙の間に挟まって動かせねぇ・・・。

「クソっ・・・！」

「ふふふ」

「あ？　何がおかしいんだよ、テメェ」

「我が前脚を焼き潰した事で油断したか？」

「ハッ、んなわけねぇだろ」

「ならば、なぜ気付かんのだろうな」

嘲笑を込めたその言葉に、あたしは苛立ちを覚える前に周囲を確認した。

「あーくそ・・・！」

最悪。いつの間にか別の狼たちに包囲されちまってる。狼は群れで生きる生物。それに、最初からコイツは言っていた。

――ヤークトフント"隊"もこれより参戦致す――

隊っつってんだから、まぁコイツ1頭だけじゃないわな。あたしを

包囲してんのは6頭。ソイツら全部が足元に黒い魔法陣を展開して、口を大きく開けた。おい、待てよ。砲撃を撃つつもりか？　だってそんなことしたら目の前のコイツも・・・。

「我の代わりならいくらでも在る。が、今この場でお前を討つ事が出来るのは我とアレらだけだ。この身の犠牲でオーディンとその配下であるお前たちを討ち斃し、シュトゥラの戦力を削る事が出来るのであれば、我は喜んでこの身を投げ出し礎となろう」

奴の顔は晴れやかだった。本気でこのままあたしと心中してもいいって面だ。冗談じゃねぇぞ、そんなん。何とかして砲撃が放たれる前に脱出を試みようともがくけどビクともしねぇ。そして、「イリュリアに栄光あれッ！」ってソイツが叫んだ直後に、あたしらに向けて砲撃が六条放たれた。ここでやっと脱出法が思いついた。ギリギリ間に合・・・・わねぇッ。

「アイゼンッ、パンツァーヒンダネ――」

――コード・ケムエル――

脱出は無理と判断して、あまり良い手じゃない防御を選択しようとした時、蒼く輝く小さな円い盾が組み合わさって出来た巨大な盾が、迫って来ていた砲撃を全て防いだ。オーディンの魔導だ。でもオーディンは戦船に向かったはず。じゃあ誰が？　その疑問はすぐに解ける。

真下から「はぁぁぁあああああッ！」何かが来る。アイツ――シュリエルリートだった。左脇に"闇の書"を抱え（今のはオーディ

ンから蒐集した時に覚えた魔導だったんだ）、右拳に黒い魔力を纏わせてる。

――シュヴァルツェ・ヴィルクング――

「おごぉッ！？」

アイツの強烈な拳打を腹に受けたＸＸⅥがくの字に腹を折って落下し始める。あたしはと言えば、奴が口を大きく開けた事でやっと解放された。そして、アイツは周囲に深紫色の魔力球が５つ設置、「私の仲間に手を出す事は許さん・・・！」ってあたしを庇うような位置に来てからそう言って、

――ナイトメアハウル――

あたしらを包囲してる狼と同じ数の砲撃を放った。回避していく狼たちを追撃するためにまた別の魔導を発動する。あたしは「余計なマネをしやがって」ってそっぽを向いて鼻を鳴らした。素直じゃねぇよなあたしって、ホント。アイツは「すまない、紅の鉄騎。黙って見ている事が出来なかったんだ」そう謝った後、

――ブルーティガー・ドルヒ――

血色の短剣が十数基と展開されて、一斉に放たれた。高速射撃だ。デカイ図体の奴らがどれだけ空を飛べても防御が使えないんならただの的だ。次々と直撃していって、奴らは爆煙に包まれる。護られた。お礼を、言わないとなダメだよな、やっぱり。

本当は危なかったんだから。口を開こうとするけど、声が出ない。ただ一言礼を言うだけじゃねぇかよ。"アイゼン"の柄を握る手に力が入る。せっかく今までにない良い奴が主になったんだ。コイツだって楽しめる時間を過ごしたいに決まってんだ。だから・・・・

「まだだッ！！」

ＸＸＶＩが口を大きく広げて真下から突撃を仕掛けて来た。アイツは６頭の方に意識を向けてるからすぐには対応できない。

「邪魔すんなよ・・・、あたしらとオーディンの時間を・・・！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

カートリッジを２発ロードして、ギガントフォルムへと変形させる。

――ギガントハンマー――

単純な振り下ろしの一撃。つっても重量からの物理威力は絶大だ。もう一段階上があるけど、今は使うほどひっ迫してねぇから使わねぇ。鼻っ面に直撃させて、牙やら鼻骨を粉砕してやる。奴は絶叫しながらまた落下していった。追撃のフリーゲンを８発打ち放って着弾させていく。爆煙に包まれて見えないけど、無事じゃねぇはずだ。

――咆哮――

――ナイトメアハウル――

アイツはアイツで6頭の狼と砲撃合戦を繰り広げてる。そんな中「コード・ゼルエル」って言った後にまた砲撃を撃った。今度は相殺されずに粉砕して、直撃させていった。奴らもXXⅥに爆煙に覆い隠された。

アイツと背中合わせになって警戒。煙幕が晴れて、奴らは姿を現した。もう血塗れだし所々の皮が消し飛んで赤黒い肉を見せている。

「こうなれば・・・！」

足元から聞こえて見てみれば、XXⅥが血走った眼で突撃してくる。なんかヤバい。ありゃ昔にも見た事がある眼だ。「アイゼンッ！」魔力球を生成して、フリーゲンを打ち放って奴に着弾させていくけど、怯みもせずに突撃を止めようともしねぇ。

間違いない。やっぱり捨て身の特攻だ。「連中も同じ手のようだな・・・！」アイツが漏らす。見れば他のもアイツの攻撃を受けながらも突っ込んで来ている。「紅の鉄騎。手伝ってくれないか？」って言われて、今だ、って考える。

生唾を呑んで、心の内で決意を固めてコイツの名前を呼ぶ練習をしてから、「しゃあねぇな、シュ、シュリエル」って答える。ああもう、どもっちまった。気恥ずかしさでシュリエルの顔が見れねぇ。

「紅の鉄騎・・・」

「うっせぇよっ。ほら、奴らにだけ時間ばかり使ってられねぇだろっ。とっととやっちまうぞッ！」

喜色の声で「ああッ。行こうッ」シュリエルが奴らを見据えるのを横目で見る。あたしに名前を呼ばれたのがそんなに嬉しいのか顔が緩みまくってる。こっちまで頬が緩みそうになっちまう。けど今は・・・。消費しきったカートリッジを装填。

「むっ・・・？」「――おっと！？」

と、いきなりの大爆音。衝撃波がここまで来て、吹き飛ばされそうになるのをシュリエルが手を取ってくれたから事なきを得た。「すまねぇ」って礼を言うと、「助け合うのが、家族だ」ってシュリエルは微笑む。

礼もそうだけど、今の今までお前に当たり散らしたことへの謝罪も含めたの、すまねぇ、だ。今までの謝罪としてのすまねぇはまだ面と向かって口に出すのはちょっと出来ないけど、いつかちゃんとシュリエルに言えたら・・・いいな。

奴らも今の衝撃波でよろけていて突撃を止めてた。狼の1頭が「デアフリンガーまでもが墜とされたか」って戦慄。さっきの爆音と衝撃波は、戦船が轟沈して爆発したのが発生原因だった。その直後、イリュリア方面から緑色の閃光が上がって空で炸裂した。

「退却の信号弾だと・・・！？」

XXVIが憎々しげに漏らす。シュリエルが「賢明な判断だな」って言う。戦船はオーディンの動きを制するためのものだって事くらいは判ってる。オーディンが空で戦船に撃墜――最低でも苦戦を強いられているその間に、圧倒的な数を誇る騎士団で押し切ろうって考えたんだろうが・・・。

ザマァ見ろ、当てが外れな。オーディンは戦船を単独で墜とすだけの火力を持っていて、その上あんな馬鹿デカイ使い魔を有してる。そして戦船を全隻撃沈したオーディンが地上へ降りてくるとなれば、連中はもう終わりだ。

「どうすんだ？　地上の騎士どもは退却を始めてんぞ」

「退くならば退け。逃げる者の背中を撃つ趣味は我らにはない。そうだな、紅の鉄騎」

「おうよ。そんな汚い真似はしねぇ。テメェらの仲間とは違ってな。正々堂々真ん前からブッ潰す」

"アイゼン"を奴らに向かって突きつけると、奴らが牙を剥いて唸りを上げる。少し膠着。そして唸るのをやめてイリュリアへ目を向けた。撤退を決めたんだな。シュトゥラ側からも緑色の閃光が上がって炸裂した。こっちも終戦連絡か。"アイゼン"を降ろそうとした時、奴らは一斉にまた目を向けてきた。

「なんだ？　目の色が変わって・・・？」

シュリエルが身構え直した。あたしも"アイゼン"を構え直す。奴らの雰囲気がガラリと変わった。また唸り声を上げながら「殺せ。殺せ。殺せ」と大合唱。

「新たにオペラツィオーン・オプファーを受諾。グラオベン・オルデンの騎士を殺害せよ。オオオオオオオッッ！！」

「「「「「「オオオオオオッッ！！」」」」」」

奴らは雄叫びを上げて突撃してきた。本気かよ。もうボロボロじゃねぇか。また捨て身で突っ込んでくるつもりか。"生け贄"作戦って言うくらいだからな。あたしはフリーゲン、シュリエルはドルヒで迎撃開始。面白いほどに直撃していく。あ～あ、本当に自滅行為じゃねぇかよ。けど、それでも奴らは突っ込んで来る。

――自爆――

「危ないッ！」

――パンツァーシルト――

目の前に迫って来ていた奴が突然爆発した。ギリギリでシュリエルがあたしを庇って障壁を張ってくれたから何とか巻き込まれずに済んだけど・・・。コイツ「自爆しやがった！？」戦慄する。生け贄ってそういう事かよ。周囲を見回す。コイツら全員、自爆する気だ。もう1頭が自爆した。これ以上シュリエルに負担はかけられねぇ。「お前は自分の防御に専念しろッ」って言って、全身を囲うパンツァーヒンダネスを展開、シュリエルもパンツァーガイストを発動。何とか防御に成功。2頭目の自爆。あたし自慢の障壁がたったの1発でヒビが入った。嘘だろ、おい。たった2発でもう窮地じゃねぇか、あたし。

「殺せ、殺せ、殺せ、殺せ」

さっきまであたしが相手していたＸＸⅥの声がすぐ近くで聞こえた。「お前・・・本当に、可哀想な奴だよな」って告げる。でもやっぱりもう理性が無いようで「殺せ」を連呼する。そして奴も、あたしの目の前で自爆した。クソが。戦って死にてぇって奴が自爆させられるって何だよ。でも、最期の攻撃であたしの障壁を破壊した。功績は生まれたけど、それが死んでからってのが愚か過ぎるぞ。

（つうかホントにヤバい。すぐに別の狼が自爆体勢に入ってやがる・・・！）

シュリエルは爆風に煽られて離れてる。ならあたし1人で防ぐ事が出来る別の防御魔法を発動しないと、消し飛ばされる。その狼から強烈な魔力が放たれる。臨界点だ。パンツァーヒンダネス以上の防御力を持つ魔導をすぐに・・・・。

（って、そんなの無ぇよッ！）

1秒としない時間での必死な思考。結果は最悪なものだ。ヒンダネスより強固な障壁なんてあたしは持ってない。でも何もしないでいるよりかは・・・そうだ。カートリッジを2発ロード。

――パンツァーシルト・パンツァーガイスト――

魔力で体を覆った上に障壁展開。直後に爆炎と爆風があたしを襲った。シルトは少しだけもって、端から砕けていく。そんな中、煙幕の切れ目から別の狼が自爆体勢に入ってんのが見えた。この状況で

その自爆はまずい。馬鹿みたいな威力の自爆。食らったらあたしでも終わる。

『紅の鉄騎！』

焦りに満ちたシュリエルの思念通話に、『自分の心配してろッ！』って返す。アイツだってこんな攻撃を喰らったら無事じゃ済まねぇはずだ。つっても本音じゃ助けてほしいって思う。オーディンの魔導ならきっと耐えきる事が出来る。ま、その前に・・・・

――自爆――

自爆しやがった。その威力が届く前に装填してある最後のカートリッジ1発をロードしてシルトとガイストを強化――したところで、『シュリエルっ、ヴィータっ！』って思念通話。そしてそれは一瞬だった。なにが起きたのかさえも判んなかった。いきなり腹に衝撃が来て、視界が揺れて、気が付けばあたしはオーディンに抱きかかえられてた。

「怪我はないか？　ヴィータ、シュリエル」

オーディンが心配そうな顔して訊いてきた。あたしの反対側で抱きかかえられてるシュリエルは「はい。問題ありません」って答えた。2人の視線があたしに向けられる。でも「え、あ、その」言葉に出来ない程混乱してるあたしがいる。状況を確認だ、うん。自爆攻撃を食らいそうになってて、気が付けばさっきよりずっと空の上でオーディンに抱えられている、と。

「ヴィータ？」「紅の鉄騎？」

「あ・・・うん、大丈夫・・・」

自爆の殺傷効果範囲からオーディンに抱えられて逃れる事が出来たんだ・・・。そして足下。奴らが自爆し終えていた。これが・・・これがイリュリアの――プリュンダラー・オルデンとかいう連中のやり方かよ。撤退をし始めているイリュリア騎士団に向かって「ふざけやがって」悪態を吐く。オーディンはあたしとシュリエルの腹に回してた腕を離してあたし達を解放して、改めて地上を見回す。

「ヴィータとシュリエルの無事を確認、っと。『・・・アギト、シグナム、シャマル、ザフィーラ。現状報告』」

『はい、オーディン。私とアギト、そしてザフィーラは前線で警戒しつつ待機しています』

『すごく疲れたよぉ、オーディン。お腹もぺこぺこ』

『私は拠点で負傷者の治療に当たっています。よろしければオーディンさんにもお手伝いをお願いしたいのですが・・・』

「『判った、すぐ行く。シグナム達はそのまま警戒を。アギト。アンナがきっと美味しい料理を作って待っていてくれているはずだ。もう少しの辛抱な』」

オーディンがあたしらに合図するように地上を指差して降下して行った。あたしとシュリエルも頷いて続く。そこには地面に敷かれた布の上に横たわってる数多くの騎士たちが数多く居た。この戦いで傷つき倒れた騎士たちだ。
シャマルを始めとした治癒の魔導が使える術師たち医療団が必至に治療しつつ、「包帯が足りないッ」「薬を持ってこい早くッ」「こっちを手伝ってくれッ」「心停止だッ、マッサージだッ」って声を荒げ続けてる。オーディンは医療団と合流し、すぐに「コード・ラファエル」って治癒術式で治療開始。

「あ、おい、シュリエル？」

シュリエルがオーディンに近づいて行く。そして「オーディン。あなたの魔導を使わせていただければ、私もお手伝いが出来るかと」って"闇の書"を胸の前でギュッと握りしめる。さっき無断で使ってたじゃん障壁の魔導、とは言わない。緊急時だったしさ。オーディンは「許可なんて要らないさ。頼むよ、シュリエル」って治療に戻る。
シュリエルは「はいッ！」って力強く頷いて、すぐにオーディンと同じ魔導で治療を始めた。それをジッと眺める事しか出来ないあたし。ううん、少しでも力になりてぇから・・・「あのっ、あたしに手伝える事あるっ？」近くに居た女の騎士に訊いた。

†††Ｓｉｄｅヴィーダ⇒シグナム†††

今回の戦の最前線だった地点で、私とアギトとザフィーラとリサ、そしてシュトゥラの王子であるクラウス殿下と側近らしき騎士で、

撤退して行くイリュリア騎士団の背を眺める。我々の足元には敵味方の遺体が多く横たわっている。クラウス殿下は自国の騎士らの遺体の前で片膝をついて祈りを捧げている。

「まさかこの度の戦の指導者がバルデュリスとは。大規模侵攻でしたから率いるのはイリュリア騎士団総長グレゴールかと思っていましたが・・・」

「ああ。まさかイリュリアの王子自ら騎士を率いて来るとは思いもしなかったよ」

「殿下。貴方もシュトゥラの王子である事をお忘れなく」

クラウス殿下とその騎士が話し合っている。殿下らと合流した時には既にイリュリア騎士団の将だというイリュリアの王子バルデュリスの姿はなく、オーディンの愛するアムルへと侵攻してきた騎士団の将を見る事は叶わなかった。

「しかし王子自ら戦場に赴くとは、それほどに指揮や武技に自信があるのだろうな」

呟いたところに、私の側に浮遊しているアギトからの思念通話が来た。

『バルデュリア王子は、あんまり称えられるような才があんまり無い人なんだ。だけど妹のテウタ王女は武道も魔導も優れていて、次期皇帝に近いって言われてる』

『そうなのか？　・・・なるほど。それでそのテウタという妹より勝っていると国内に知らしめるためにバルデュリスは侵攻に来た、というわけか』

『たぶん。今までシュトゥラに攻めて来てたのはテウタ派って呼ばれる騎士団ばっかりだったし』

『それで自分が率いる騎士団でオーディンを潰し、株を上げようとしたのだな』

確かに今まで大敗を喫していた元凶であるオーディンを討てば、実力はともかく討ったという事実がバルデュリスが認められる要因になるだろうな。しかしそれは成功するどころかそれ以上に大失敗として終わりを迎えた。バルデュリスはトドメを刺されたのと同義だな。

アギトは『でも失敗しちゃったし、きっともう王様になる事は不可能だよ』と言った後に思念通話を切った。クラウス殿下が歩み寄って来たからだ。もう警戒を解くらしく、拠点へ帰還するとの事だ。クラウス殿下と騎士が先に行き、我々とリサがその後方を歩いている中、「・・・・これからきっと大変になりますよ」リサが深刻そうに言う。

「どういう事だ？」

「イリュリアは、王子バルデュリスと王女テウタの二大派閥に分かれています。勢力としてはバルデュリス・テウタ、現状６：４と言

った割合でしょうか。長男が王位を継ぐという古き習わしに則るべきだと訴えるバルデュリス派。実力と頭脳、味方を作る才の有ると言われているテウタを王位に就かせ、このベルカ統一戦争を一気に終わらせようとするテウタ派」

「じゃあテウタが王位に就くと、今まで以上の戦火が・・・？」

「だと思うよ、アギトちゃん。まぁオーディンさんと皆さんがいるから、容易くシュトゥラは落とされないと思う。でもこれまでとは比べられない程に大きな戦がベルカ各地で起こるはず。とは言え、今はまだゲンティウス王が健在ですから、もう少し先のお話ですけど」

リサは最後に我々を安心させるためか笑顔を見せた。しかしその先が訪れるのが無しになったわけではない。私はアギトとリサに「テウタと言う者の実力の程は？」と尋ねてみる。すると2人は表情を重く曇らせた。それだけで理解できる。無口になってしまうほどに強いのだろう。リサが「3年前に一度だけ見かけました。おそらく私では勝てないかと思います」と、私の目をしっかり見つめ告げた。

「あたしはインストールされてる情報でしかテウタの事は知らないけど、あたし達プロトタイプの融合騎は、テウタ専用の完全な融合騎を開発するための実験機なんだ。テウタがどんな魔導と武技を持ってるかの詳細は判んない。でも融合騎に頼らなくたって掛け値なしの実力者なのは確かだよ」

アギトはアギトで心底心配そうな表情を浮かべ、オーディン達の居

る拠点の方を見、しかしすぐに「それでも勝たないとね。守りたいものを守るために」と凛とした表情になり強く頷いた。私も「ああ。救いたいものを救うために、な」と言うと、リサが「なんです？それ」と小首を傾げて訊いて来たので、それに対し「マイスターの信念だよ。あたし達グラオベン・オルデンの由縁なんだ♪」アギトが胸を張って答える。

「なるほど。信念の騎士団グラオベン・オルデンとはそういう事だったんですね」

「うんっ。マイスターはすんごく強いけど、でもその力は何かを支配するためじゃなくて、守りたいものを守るため、救いたいものを救うための力を使いたいって言ってた」

「だから我々はオーディンの下で戦うと決めた。あの方の為ならば、我らは命を賭そう。それだけの覚悟はある」

このベルカ統一戦争はもちろん、オーディン自身の目的である"エグリゴリ"救済を手伝うために、我ら守護騎士ヴォルケンリッターは、グラオベン・オルデンの騎士としてオーディンと共に戦う。だからこそ、まずはイリュリアと決着をつけねばな。

。―。―。―。―。

シュトゥラとイリュリアの国境で繰り広げられた今までに無い規模での戦から帰還したバルデュリス王子、そして彼が率いた騎士団。出立時の彼らの人数は総勢６８００人。しかし帰還時の今、約半数

ほどの３０００人強しか居ない。戦死者やシュトゥラへ投降し捕虜となった事による減数。大敗。そう言っても過言ではない被害だった。彼らは市民から向けられる無念そうな眼差しを一身に受けつつ、王城の庭へと辿り着いた。

「殿下っ、大事ですッ！」

庭で部下の様子を見回っていたバルデュリス王子の元に駆け寄って来る初老の男が数人。ゲンティウス王の側近たちだ。血相を変えて走って来るのその側近たちに、何事かと目を向ける騎士たち。その１人がバルデュリスに耳打ちする。と、みるみるバルデュリスの表情が険しくなり、目も大きく開かれていく。そしてすぐに王城内へと駆け出し、側近たちも慌てて続いて行った。

「父上ッ！」

バルデュリスは玉座の間へと一直線に駆け、入口の扉を壊すほどに力強く開けた。壮大なパイプオルガンの前に置かれている玉座に腰かける男、イリュリアの王ゲンティウス。いや、王だったと言うべきか。ゲンティウスの顔は血が通っていないのか青白く、目も口も半開きだ。そう、すでに亡くなっていた。ゲンティウス王は死ぬその時まで玉座に座し続けた。

ゲンティウス王の遺体の前には１人の少女。王女テウタだ。広間に背を向けているため表情は誰にも見えないが、口端は大きく笑みに歪められていた。広間にはイリュリアの政治を担う執政官や軍部の役人がズラリと並び、悲しみに暮れていた。中には悲しむどころか嬉々として喜んでいる――もちろん顔にも態度にも出ないようにし

ている――者たちもいるようだが。
しばらくの黙祷の後、ゲンティウス王の遺体は、２人の子供を始めとした側近たちに運び出された。そして玉座の間に戻ってきたバルデュリスとテウタは、改めて挨拶を交わす。
「改めて。おかえりなさい、お兄様。御父様はお兄様がお帰りになる少し前に、ここ玉座にて逝去なされました。とても残念です」
「・・・・そうだな」
「お兄様。次期イリュリア王の座、私が貰い受けます」
「ッ！　父上が逝去されてすぐだぞッ。なにもこんなすぐに――」
「こんな状態だからです。お兄様が王座についてもこの統一戦争を戦い抜けるだけの引率力はありません」
妹のテウタに王の能が無いと言われ、バルデュリスも「なんだと」苛立ちを見せる。テウタは続ける。「もう魔神は対人戦では勝てない。理解してますよね？」と諭すように告げる。それには同意のようで、バルデュリスは「解っている。あれはもう人間ではない」と落胆の色を見せた。
「理解して頂いているようでなによりです。ですから私は御父様に提言したのです。エテメンアンキとミナレットの使用を」
「馬鹿なッ！　共に破壊兵器ではないかッ！　戦船の艦載砲なんて

目ではないッ。あんなものを使うほど切迫していないぞッ！」

「切迫していますよ。魔神は正しく魔神。アムルを護ったあの巨像も戦力として数えるとなれば、戦船程度ではもう対抗戦力にはなりえません。ですからエテメンアンキとミナレットの使用を提言したのですが、御父様はお許しになりませんでした。自分が王位に就いている間は、決して両兵器の使用は認めない、と」

バルデュリスに背を向けてテウタがそう告げると、バルデュリスの顔が引きつった。まるで怯えるかのようにテウタの背から少しずつ後ずさって行く。

「父上の体調は確かに悪く、おそらく長くはないと思っていた。しかし・・・今朝の様子を見る限りではまだまだご健勝だった・・・」

「本当に。戦時中にも健勝でした。いきなり容体が急変して驚きました」

「父上の死を確認した第一人者は・・・・誰だ・・・？」

テウタが小さく笑い声を漏らした後、クルリと反転して実兄バルデュリスへと向き直る。そして「私ですよ、お兄様」と答えた。目は笑っていないが、口だけは笑みを浮かべている。それで悟った。バルデュリスの顔に憎悪の色が宿る。先程までの怯えから一転。バルデュリスは「統一戦争に勝つために・・・実の親を殺したのか・・・貴様は・・・・！」と構えを見せた。

「だって仕方がないではないですか。私たちはイリュリアの王族ですよ？　ベルカは――いえ、レーベンヴェルトは元々私たちイリュリアのものでした。この統一戦争は、レーベンヴェルトを取り戻すための戦い。勝たねば意味はありません。ええ。どんな手段を使ってでも。それがレーベンヴェルト時代より王族であったフリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルトが存在意義」

「テウタ・・・それでも、それでもお前が越えた一線は・・・・悪だッ！」

バルデュリスの左手に一振りの刀、右手には鞘が出現する。テウタは「残念です。御父様を喪ってすぐにお兄様を失う事になるなんて」と悲嘆に暮れている・・・つもりなのだろうが口は笑っているままだった。

「テウタぁぁぁーーーーーーッッ！！」

――斬甲一迅旋――

「あぁよく考えればお兄様は居ても居ずとも変わりませんから、どうでもいいですか」

――夢影――

決着は一瞬。この日、この瞬間。テウタはイリュリア王女ではなくイリュリア女王となった。

Ｍｙｔｈ１０－Ａ嵐の前の安穏～エリーゼ狂想曲

†††Ｓｉｄｅエリーゼ†††

３日ぶりの青天。陽の光も風も気持ち良くて、今日の執務は中庭で行うことにした。庭で執務を行っていると、「おーい、シャマル」オーディンさんがシャマルさんを呼んで、「はーい♪」笑顔を振りまいて応えるシャマルさん。

そんなオーディンさん達は今、今後の事を考えて医療用品の補充と備蓄確認を、補佐のモニカとルファ、アギトとシャマルさんと一緒に医院の方でやっている。のんびりした空気で屋敷内に設けた備蓄庫と医院を行き来しているから、書類に記入しながら羨ましく眺める。

いいなぁ。わたしも交じって楽しくお喋りしたいんだけど、書類の束にガックリ肩を落とす。わたしの気分を落とす原因はそれだけじゃない。チラリとある人物に目を向ける。

「オーディン。私にも何かお手伝い出来る事があれば・・・・」

「う～ん、そうだな・・・。今のところはないかな。というかなシュリエル。私にべったりついて来なくても、君はまだ来たばかりだからゆっくり街見物でもしていれば――」

「近くに居ると迷惑ですか・・・？」

「う〝っ。迷惑ではないが・・・・、仕事ならアギトやシャマル、

ルファにモニカも居るし・・・・」

「そうですか・・・・。では何かあれば仰って下さい・・・・」

「・・・判ったよ。それじゃあ紙に記した医薬品を運んで来てくれ」

「はいっ。オーディンっ」

オーディンさんがトボトボ去ろうとしたシュリエルさんの頭を撫でつつ1枚の紙を渡すと、シュリエルさんが強く頷いて備蓄庫に走って行った。表情の変化が判り辛いけど、シュリエルさんは確かに嬉しそうに微笑んでた。ペキッ。手に持ってる羽根ペンをへし折っちゃった。これで3本目だ。

「はぁ～～～」

大きく溜息を吐く。先のバルデュリス王子率いる大騎士団の侵攻から数日が経過して、わたし達にまた平穏な日々が戻ってきた。でもオーディンさん達が帰って来た時、朝には居なかった人が1人増えてた。シュリエルリートさん。オーディンさんと同じ綺麗な銀の髪、吸い込まれそうな程に深い紅の瞳。わたしなんかと比べるまでもない超絶美人だった・・・・。

（シュリエルさん・・・・強敵、だよね・・・・やっぱり）

決して男女の関係になりえないってオーディンさんは言っていた。でも、それでも気にはなるのだ。「はぁ・・・・」嘆息しながら、

オーディンさん達が戦から帰ってきた後の事を思い出す。

。―。―。回想なのです・・・・。―。―。

イリュリアの大侵攻を知って、厳戒態勢に入ったアムル。わたしは執務室でオーディンさん達の無事を祈り続けるだけ。国境に近いと言ってもそれなりに離れてるアムルではあるけど、それでもここまで爆発音や振動が届いて来る。それまでに激しい戦なんだ。

オーディンさん達グラオベン・オルデンがいるシュトゥラが勝つのは判り切っているけれど、それでもやっぱり心配しちゃう。そんな僅かに生まれている不安も、すぐに晴れる事になる。戦場から伝書鳥が1羽。戦いが終わると、防衛騎士団の方から戦闘終了を報せる手紙を持った伝書鳥（名前はブラオ君）が飛ばされて来る。

「・・・・ほっ。良かった、やっぱりオーディンさん達の勝ちで終わってくれたんだ」

「わはっ♪　どれだけ人数を集めてもオーディン先生を討ち斃すなんて無理だよ無理♪」

モニカがわたしの手から手紙を引っ手繰って読んだ後にそう言いながら隣に居るルファに手渡した。ルファが「もう。エリーゼが呼んでる最中なのにダメじゃないの」ってわたしから手紙を引っ手繰ったモニカに窘めつつも手紙を受け取って読み始める。

そして「オーディン先生、戦船を単独で3隻も墜としたそうですよ」って苦笑して、わたしに手紙を差し出してきた。すぐにわたしに返すべきなんだけど、もう文句を言う事もない。そういう仲だし。

受け取った手紙を改めて読み返す。バルデュリス王子率いる大騎士団を退ける事に成功した、と。こちらの被害はイリュリアに対して軽微（それでも戦死者は１００人以上）。オーディンさんやアギト、シグナムさん達グラオベン・オルデンが頑張ってくれたおかげだって。

「・・・・アンナ」

「ええ、判ってる。美味しいご馳走を用意しないとダメよね」

ずっと無言で控えていたアンナもみんなの無事と勝利に喜んでいるみたいで、にこやかに調理場に向かった。それから3時間後、夜も更けた頃にオーディンさん達は帰って来た。玄関でみんなでお出迎えしていて・・・・気付く。

あれ？　今朝出て行った時より1人多くないですか？　順繰りに見ていく。オーディンさん、アギト、シグナムさん、ヴィータ、シャマルさん、ザフィーラさん・・・女の人。わたし達の視線がその人に集まっているのがオーディンさん達にも判っているみたいで。

「私たちと合流するのが遅れてしまっていたが、今日、めでたく合流する事が出来たんだ。紹介するよエリーゼ、みんな。彼女はシュリエルリート。シグナム達と同じ私の大切な仲間だ」

「大切な、仲間・・・・。はじめまして。シュリエルリートです。シュリエル、と呼んでください」

シュリエルリート――シュリエルさんはお辞儀した。夜だからその

綺麗な銀髪が魔力灯に照らされて光の波のように見える。ヴィータやシャマルさんのような可愛いじゃなくて、シグナムさん寄りの機微に乏しい表情なんだけど・・・・そんなの関係ないくらいに美人で、しかも「お、大きい・・・・！」スタイル抜群。アンナ達がそれぞれ自己紹介していって最後にわたしが「エ、エリーゼ・フォン・シュテルンベルク、です」とにかく挨拶。

「エリーゼぇ～、お腹がもう限界ぃ～」

お腹をグゥ～って鳴らすアギトがフラフラとわたしの元に飛んできた。苦笑するアンナが「皆さん、お食事の御用意は出来てますから、どうぞ中へ」みんなを屋敷の中に招き入れた。モニカとルファ、アギトとヴィータとシャマルさんは「ただいま～♪」真っ先に入って行った。シグナムさんは絶対にオーディンさんと一緒の時はまずオーディンさんの後だから、まだ残ってる。アンナもそう。わたしが居るからまだ残ってる。そしてシュリエルさん・・・・はどうして？

「ほら、シュリエル。君も、ただいま、だ」

オーディンさんがシュリエルさんをエスコートするように背中に手を回してポンと叩いた。

「では・・・・。ただいま・・帰りました」

少し戸惑いを見せていてもどこか嬉しそうな複雑な表情と声色。迷っていたから入らなかった？　初めの頃のシグナムさん達と同じ反応だ。続いてオーディンさんも「ただいま」シグナムさんも「ただ

いま帰りました」と、私とアンナに挨拶。
アンナは「はい。おかえりなさい」って気持ち良く迎え入れた。でもわたしはこれ以上恋敵（シグナムさん達も否定してるけど）が増えるのはちょっと嫌だな、って思ってる。だけどオーディンさんのあの嬉しそうな顔を見たら、わたし一人の気持ちの事でそんな風に思うのも嫌だなって思う。

「お帰りなさい、オーディンさん、シグナムさん。そして、シュリエルさん♪」

だから精いっぱいの笑顔で迎え入れる。シュリエルさんが儚い笑みを見せた。ぅぐ、やっぱり美人。その日はオーディンさん達は疲れていて、食事と入浴を済ませてすぐに寝入っちゃった。わたし達も緊張で疲れていたみたいで、すぐに眠った。

。―。―。回想終わりなのです。―。―。

そして次の日からシュリエルさんを新しく含めた生活が始まったんだよね。思い返していると「もうエリー。あと何本折れば気が済むの？」新しい羽根ペンを持ってきてくれたアンナが嘆息。「ありがと」受け取って仕事を再開。でも気が乗らない。どうしても目が書類からシュリエルさんに向いちゃう。

「オーディン先生～、Ｘ－９０８Ｂの在庫を確認してもらってもいいですか～？」

「ああ、判った、見せてくれ」

モニカが在庫書をオーディンさんに見せるために体を寄せるんだけど、ちょっとちょっとモニカ、近い、近過ぎだって。そこまで引っつかなくても書類を見せるだけで良いでしょうが、もうっ。
まぁオーディンさんは顔色一つ変えてないから、モニカの色仕掛け（わざとか偶然かは判らないけど）にはやられてない。ふふん。わたしよりスタイルは良いモニカだけど、オーディンさんに反応なし。大きければ良いって事じゃないのが判る。

「ちょっとモニカっ。マイスターにくっつき過ぎ！」

「おおっと。アギトちゃんが久しぶりに自分から飛び込んで来たッ♪」

モニカはすぐにオーディンさんから離れてアギトを抱きしめてクルクル回り始めた。ホントにモニカは小さい子（女子限定）が好きなんだから。困ったものよね～。まぁそんなこんなで、オーディンさん達が気になってしまったわたし自身の仕事は捗らず、でもオーディンさん達は補充などなどを済ませて休憩に入った。庭でポツンと1人っきり。何やってるんだろ、わたし。大きく溜息を吐きながらテーブルに突っ伏す。

「エリーゼ。体調が悪いのか？」

「えっ？　オーディンさん・・・！」

ガバッと体を起こして見ると、トレイを片手に佇んでるオーディン

さん。トレイをテーブルに置く。載っていたのはティーカップとポットとクッキー。くぅ～、ってお腹が鳴って、顔が一気に熱くなる。オーディンさんをチラッと見ると微笑ましいって感じで見てくる。は、恥ずかしい・・・。両手で顔を隠してまた突っ伏すと、「お腹が空くなら元気な証拠、だな」とわたしの頭を優しく撫でてくれた。気持ち良くて嬉しい事なんだけど、これってつまり子供扱いされてるって事なんだよね。それがちょっとだけ残念かな。

「えっと、ありがとうございます、わざわざ。アンナの仕事なのに」

「私がアンナに頼んだんだよ。エリーゼと話がしたいから私が持っていきたい、って」

「えっ？　そうなんですか・・・！？」

「最近、エリーゼの様子がおかしい思うんだけど。シュリエルが来てからじゃないか・・・・？」

「（鋭い・・・）そ、そうですか？　わたしはいつも通りですよ～？」

とは言うけど、実際にちょっとシュリエルさんに警戒しているから、様子が変だって思われても仕方ない気が。でも、気付いてくれるなんて・・・それってわたしの事を見てくれているんだよね。ミルクティーの用意を終えたオーディンさんがティーカップをわたしに差し出して「座っても？」と訊いてきたから、「もちろんですッ」即答。オーディンさんが対面に腰かける。２人でこうして話すのって久しぶりかも。

「だから相談に乗ろうかな、と思ってね。シュリエルは私の家族だから、相談役はアンナより私の方が良いと思うんだけど、どうだろう？」

「えっと・・・・（恋敵として見ていたから変になってた、なんて言えないよ）」

「やはり増え過ぎ、だよな。居候が次々と来て。すまないな、エリーゼ。ベルカで頼れるのは君たちだけなんだが。やはり例の空き家に――」

頭を深々と下げたオーディンさん。慌てて「ち、違うんですッ。そうじゃありませんッ。あと引っ越しは前も言いましたけど却下ですッ」否定する。すると「そっか。それは良かった。必死過ぎて少し驚いたが」とオーディンさんは笑みを浮かべた。

ドキッとする。うん、やっぱりわたしはオーディンさんの事が好きなんだ。そして「じゃあシュリエルは関係ないのか？」と今度は唸り始める。どうすればいいの？

ただ「わたしは迷惑だなんて一度も思った事ありませんから」ってきっぱり告げる。「・・・ありがとう、エリーゼ」そう微笑んでくれるオーディンさんにはどう言えばいいのかなぁ。

「悩みは個人的なもので、シュリエルさんは切っ掛けに過ぎません。もちろん悪い意味ではないですからお気遣いなく、です」

「そうなのか・・・。でもなにか相談事があれば何でも言ってほし

い。力になるから」

オーディンさんが「そろそろ失礼するよ。仕事の邪魔は出来ないからね。食器類はまた取りに来るから」と立ち上がって去ろうとするのを、「待ってくださいッ」呼び止める。呼び止めちゃった。どうするというの、わたしは。もうちょっとだけ話がしたい。うん、素直にそう言えば良いんだ。だから「あの、もう少しお付き合いしてもらっていいですか？」ってお願いしてみる。

「もちろん構わないけど、いいのか？　結構書類が溜まっているようだけど・・・・」

「こんなの本気を出せば一気に終わらせる事が出来ますよ。気分転換せずにいる方が余計に滞ります」

端に寄せた書類の束をバシバシ叩く。気分が昂っていれば、こんなのサクッと終わらせられる。そのために、わたしはまだまだオーディンさんと2人きりの時間を過ごしたい。

「それは解るよ。急ぎの用でもぶっ通しでいると余計に遅れるんだよなぁ～」

「そう、それですッ。今のわたしは正にその状態なんですッ」

「そっか。ならもう少しお付き合いしよう。ミルクティーのお代りはどう？」

「はいっ、頂きますッ♪」

し、幸せだぁ～♪　でもすぐにハッとして気付く。気配が近づいて来てる。今のわたしは高性能なお邪魔虫探査システムと化している。わたしとオーディンさんの時間を邪魔しに来る何かが近付いて来ているのが判る。

――警告（ヴァルヌング）――

――警告（ヴァルヌング）――

――警告（ヴァルヌング）――

頭の中に警告音が鳴り響く（気がした）。目だけを動かしてキョロキョロと周囲を警戒。ここ中庭へと入るための扉が開いているのが判る。目を凝らすと、モニカとルファがこちらを覗いているのが見える。ううん、それだけじゃなくてアギトがこちらに飛んで来ようとしているのを、アンナが止めてるのも見えた。

ありがとうだよ、アンナ。「さっきから随分と周りを気にしているようだけど？」とオーディンさんが周囲を見ようとするのを、「む、虫が飛んでいるようで、つい追っちゃいました」って誤魔化す。もう一度扉の方を見ると、誰も居なかった・・・のも束の間、アギトがまた飛んで来ようとして、今度はシャマルさんに止められた。お、落ち着かない。これは逆に疲労が生まれそう。よし、こうなれば・・・。

「オーディンさんッ」

「おおう？　どうかしたい・・・？」

「今から少しお出かけしましょうッ！」

オーディンさんは「・・・よし。じゃあ行こう」少し考えた仕草の後、わたしに手を差し伸べてくれた。そっとオーディンさんの手に自分の手を置く。これだけでもうドキドキだ。

「まずはアンナに報せておかないと駄目だな」

屋敷に向かおうとするオーディンさんに「わたしが思念通話で言っておきますッ」と告げる。いま屋敷に入ると絶対にアギトがついて来る。アギトの事は大好きだけど、ずっとオーディンさんにベッタリだから、たまにはちょっと離れてほしいかな。

「わざわざ魔導を使うの――」

「良いんですッ。魔導つかうの大好きッ☆」

「そ、そうか・・・」

必死過ぎてオーディンさんにおかしな娘だって思われるかも。で、でも今はとにかく誰の邪魔も受けずにオーディンさんとお出かけしたい。だから多少の犠牲は仕方ない。うん、そこはもう代償として諦めよう。

『アンナ。状況を見てくれていればわたしの言いたい事、解ってくれるよね？』

『はぁ～～～。本当なら止めて仕事に専念するように言うべきなんだろうけど。いってらっしゃい。エリーも1人の女の子だし、幼馴染の恋くらい応援してあげたいわ。アギトや皆さん、それとモニカの事は私とルファに任せて、気分を晴らしてきなさい』

「『ありがとうッ、アンナ♪』オーディンさん、アンナに許可を貰いました。ではでは早速参りましょう　」

オーディンさんの左腕に抱きつきつつ正門を目指すために歩きだす。屋敷に目をやりながら「随分とあっさり許可を出したなぁ」と呟くオーディンさん。「そういう日もありますよ♪」ってわたしはオーディンさんの腕を引っ張ってひたすら歩く。

オーディンさんはわたしよりずっと身長が高い。たぶん１８０ｃｍちょっと過ぎくらい。わたしは１５４ｃｍくらいだから、「エリーゼ。ちょっ、転びそうだ」オーディンさんは前屈みになってしまう。でも今は一刻も早く屋敷から脱出しないといけないから、少しの間だけ我慢してもらおう。

無事に正門から出て、名残惜しいけどオーディンさんの腕を解放して、距離を取りながら「シュテルネンリヒトに寄ってもいいですか？」と尋ねる。

「どこへでもどうぞ。時間が許す限りエリーゼと付き合うよ」

男の人であるのにとても綺麗な笑みを浮かべるオーディンさんが見

せた不意打ち。気恥かしさについ顔を逸らして俯いてしまう。ど、どうしよう。せっかく2人きり・・・

「オーディンとエリーゼ卿・・・・？」

じゃなくなっちゃった（涙）。振り返ってみれば、訓練教室を終えて帰って来たシグナムさん達が居た。シグナムさんとヴィータ、そしてザフィーラは騎士としての心構えや戦い方を、希望者に教える教室を開いてる。ヴィータが「オーディンとエリーゼさんはこれから買い物？」と駆け寄って来た。

「え、ええ、うん、まぁそんなところかな」

「そうなんだ。ふ～ん・・・・」

お願い、ヴィータ。ついて行きたいって言わないで。心の内で必死に願う。すると「いってらっしゃい。もうお腹が空いて倒れそうだから帰るよ」とお腹を鳴らしたヴィータが屋敷を見る。シグナムさんも「確かに空腹だな。筋の良い者が多いからつい熱中してしまう」と微苦笑。

その事で倒れる住民続出なんだけど、美人なシグナムさんや、口が少し悪いけど憎めないどころか可愛らしく思えるヴィータ、寡黙だけど優しいザフィーラに鍛えてもらえるという事で、退場者は今のところ1人も居ない。そして今は人型のザフィーラはやっぱり無言で一礼だった。うん、礼儀も正しい人だ。

「そっか。じゃあ行ってくるよ」

「はい。いってらっしゃいませ。オーディン、エリーゼ卿」

「いってらっしゃいませ。我が主、エリーゼ卿」

「いってきま～～すッ♪」

気持ち良く見送ってくれたシグナムさん達に感謝しながら、改めてシュテルネンリヒトを目指す。さて。以前までなら街中を歩いていると、騎士様とデートかい？とか、羨ましいなぁエリーゼ、だとか、恋人関係のように茶化されて困って、でも本音はすごく嬉しかったっていうのが多くあった。

「お、エリーゼちゃん。先生と久しぶりにお買い物かい？　よかったね～」

「ありゃ？　先生、今日はエリーゼと一緒なんだ。妹ばかりに構ってると恋人たちに愛想つかれちゃうよ」

・・・なんだそれ。わたし妹じゃないよッ、あとオーディンさんに恋人いないよッ！　ほら、腕に抱きついて恋人みたいでしょッ！だと言うのに、向けられる視線は温かく優しいもので、完っっ全に兄に甘える背伸びした妹としてしか見られてない。

とここでオーディンさんが「プッ」噴き出して笑いだす。わけが判らず「え？　え？」って慌てていると、「百面相してるぞエリーゼ。あはは、可愛い」なんてまたもや不意打ち。ボッと顔が熱くなる。可愛い、なんて初めて男の人に言われた・・・・・と思う。結局、

このあとシュテルネンリヒトに着くまでわたしは、まともにオーディンさんの顔を見れなかった。

「お？　エリーゼちゃん、社長（ディレクトア）・オーディン、いらっしゃいませ～」

シュテルネンリヒトの店主、ターニャが元気よく出迎えてくれた。真っ先にオーディンさんに駆け寄って来て「新作のデザイン出来たんですか？」って期待の眼差しを向けた。オーディンさんのデザインした服の第一号はまずシュテルネンリヒトでターニャや時々オーディンさんによって作られる。

そこからシュトゥラ王都ヴィレハイムに数着送られて、複製されてシュトゥラ全土の服飾店に回される。オーディンさんのデザインした服の大ファンは、オリジナルが売られるここアムルにまで来ることもある。と言うよりオーディンさんに会いに来てる（一部求婚していったけど、わたしが睨みを利かせてるから今は問題なし）。

「今日はエリーゼに付き合っているんだ。残念ながら新作はまだだな」

「それは残念。でも・・ムフフ。ちょっとエリーゼと2人で話しさせて、ディレクトア」

「え？　なんでわたし1人？」

「まあまあ、お姉さんと秘密のお話をしようじゃないか♪」

店内の奥の部屋に連れ込まれる。さっきからニヤニヤしてるターニャに、わたしは恐れを抱く。ターニャがいきなり優しげな笑みを浮かべてわたしの肩に手を置き、「よく頑張って誘えたね」って親指を立てた。

「私、このまま別の女性に彼を奪われて、あなたが泣くんじゃないかって心配してたんだよ？」

「そ、そんなこと思ってたのっ？」

「思ってた思ってた。応援したくてもあなたったら全然行動に移さないし。どうせ一緒に住んでいて、しかもお互いが命の恩人だっていう特別な関係に甘えてたんでしょ」

「・・・・仰る通りで・・・・」

ガックリ肩を落とす。きっとオーディンさんにとってもわたしは特別なんだ、って思ってた。でも実際はみんなと等しい関係に過ぎず、下手すれば妹的に思われてるかもしれない。嘆息すると、「けど、勇気を出して今日は誘ったんでしょ？　えらいえらい」って頭を撫でてくれるターニャ。

「お姉さんに任せな♪　ディレクトアに、あなたの魅力をガッツリ教え込んであげるから」

そう言って巻き尺をポケットから取り出して、「さぁお姉さんに曝け出そうね～　」にじり寄って来た。頬が引き攣ったのが判る。ダ

メだ。このままターニャと2人きりで居ると何をされるか判らないから、踵を返して逃走を図る。

「逃げちゃダメ☆」

――服飾店主奥義・ヤマタノオロチ――

「うえっ！？」

胸、お腹、お尻、二の腕、ふともも、あと何故か額に巻き付く8本の巻き尺。ターニャは「一度に身体の寸法を計れるこの奥義、すごいでしょ？」なんて自慢げに笑う。今日に限っていつものドレスじゃなくて丈の短いスカート（アンナにはしたないって言われたけど無視）に、半袖ブラウス姿。

だからかなり正確に・・・・「計れるわけないよ、ターニャ」そう嘆息。寸法を正しく計るなら服を脱がないと。やれやれ、ってやりたいけど額がギュッと締め付けられてる所為で出来ない上に目が閉じられないし。

「判ってるよ。だから今から脱がすんじゃないの、ちゃんと計るために」

「ちょっと待って！　逃げないからッ、自分で脱ぐからッ、だから外してッ！」

自分で脱いで進んで計られるならまだいいけど、誰かに脱がされて無理やり計られるのは嫌過ぎる。だから説得を始めるけど、「うわ、

なんか興奮してきた」ターニャはもうダメだった。そ、そうだ。オーディンさんに助けを求めよう。「オーディンさんッ、助けてくださいッ！」叫ぶ。だけど、オーディンさんが来る前に、

――服飾店主奥義・キタカゼトタイヨウ――

どうやったのか判らないけど、ブラウスとスカートが一瞬で脱がされた。下着姿になったわたしは「～～～～～～～～～～ッッッ！！？？」声にならない悲鳴を上げる。とそこに「エリーゼ？　何かあったのか？」普段は耳にするだけで嬉しい声なのに、現状では絶望と悪夢と悲劇を混ぜ合わせて地獄の鎮魂歌の如きと化してるオーディンさんの声がすぐそこまで来ていた。

「ひゃうっ、来ちゃダメですッ、やっぱり来ないでくださいッ、来たらわたし死んじゃいますからッ！」

全力で叫ぶ。わたしの身勝手な言葉にオーディンさんは「そうか」一言だけ言って、店の方に戻って行った。あとで謝ろう。けどその前に、「ターニャ！」８つも離れたお姉さんを睨みつける。ターニャは「いや、さすがにディレクトアに助けを求めるなんて思わなかったし」なんて困ってはいるけど、反省の色をみせないから、もう溜息しか出ない。

「ま、まぁ償いはするよ。エリーゼにピッタリ、かつ可愛らしさを前面に、そして男を魅了させる美しさを備えた服を作ってあげるッ。もちろんディレクトアにも知恵を借りてねッ♪」

はぁ。リボンを見に来ただけなのに、どうしてこうなっちゃったんだろう。服は今のところ間に合ってるんだけど。でも「わたしだけの服を、オーディンさんが・・」作ってくれるというのは魅力的だ。ターニャが「おーい、私も一緒だぞぉ～」なんて言ってるけどもう知らない。あと、そろそろ額の巻き尺をどうにかしてほしい。目が乾いて痛いのなんのって。

「――で、改めて寸法させてもらうんで、大人しくしててね」

「だったら早く頭と二の腕と太ももの巻き尺を取ってよ。痕付いたらどうするの。特に頭の方を早くお願い。目が乾く」

ようやく額が巻き尺から解放されて、目を何度もパチクリ。あー、痛い。目頭を揉んでいると、「ひゃうっ？」いきなり二の腕をフニフニされたから悲鳴を上げてしまった。

「ちょっと！」

「少し弛んでないかい？　フニフニフヨフヨならまだ良いけど、ダルダルだとディレクトアに笑われちゃうよ？」

「大きなお世話ッ！　そんなにダルダルじゃないでしょッ。フニフニじゃんッ」

自分の二の腕をフニフニする。垂れてないもん、普通に柔らかだもん。

「いやぁ～、結構危ないよ、コレ」

「だったらターニャはどうなのッ？」

額と同じように解放された事で動かせる両手でターニャの服の袖を捲って、少し日焼けしてる二の腕を触る。

「・・・・ん～～、柔らかさと硬さが半々？」

首をひねる。垂れてはいないのは確か。ターニャは「ま、鍛えてるし、それに・・・。って、私の事はどうでもいいから、あなたの寸法を計るよ」なにかはぐらかされたような気もするけど、そんな事を思っていられるような余裕がすぐに無くなった。

「えっとなになに・・・・。胸囲は７７．８ｃｍか・・・・。はぁ」

「溜息吐かないでもらえますかねぇ」

「１６歳でこの小ささはちょっとね～」

「うるさいよッ！　判ってるよッ、子供体型だって事くらい！　でも育たないんだもん、仕方ないでしょッ！」

体を抱くようにして胸を隠す。そして何を思ったのかターニャは信じられない事を言った。

「ねえディレクトア～！　エリーゼって胸囲が７７．８なんだけど、

小さい胸の子でも恋人候補になれ――」

「あんた馬鹿じゃないのッッ！！！！」

ターニャの口を全力で押さえに掛かる。もう完全に手遅れだけど、腰囲や臀囲までバラされたらもう生きていけない。というかもうお嫁に行けないよ～（号泣）。どうしてくれるッどうしてくれるッ。ターニャは口を押さえられても楽しげに「ふにゃふにゃほにゃほにゃ」なんて言っているのか不明だけど、きっと良くない事に違いない。

『腰囲と臀囲は平均なんだね。胸だけ平均以下って・・・・なんか可哀想』

『思念通話を使ってまで言う事ッ！？　もうほっといてッ、これ以上オーディンさんに聞かれたら・・・ん？』

あれ？　オーディンさんから返事が来ない。呆れてるのかも。もしかしたら、わたしの体を想像して・・・・きゃぁぁぁぁぁっ（テレ）。そんな馬鹿な事ありえないと判っていても恥ずかしくて、両手をターニャの口から離して、自分の顔を覆う。

「ディレクトア、何やっているんだろ？　せっかくエリーゼの身体

情報を知れる好機なのに」

そうのたまったターニャのお尻に全力の蹴り一発。喋らせたら喋らせたでターニャは馬鹿な事ばかり言う。もう頭が痛い。

「痛いっ」

「わたしの精神に苦痛を与えたその罪、当然の罰ですッ」

「訊き難い事を訊いてあげたのに、何たる仕打ち」

「だからって胸囲の寸法を正確に言う事ないでしょッ！（泣）」

「あ、そうか。言われてみればそうだね～♪」

「絶対に確信犯だッ！」

ポカポカ殴りつける。ターニャは「ごめんてば」謝りはするけど、反省の色を見せない。

「噂だと、男の人に胸を揉まれると育つって聞いたよ。ディレクトアにやらせれば・・・」

「そんなのオーディンさんにさせられるわけないでしょッ！！」

見られるだけでも恥ずかしさで悶絶しそうなのに、指先だけでも触れたらきっとわたしは昇天する。

「う～ん、じゃあ胸を大きくせずにディレクトアをメロメロにさせるには――」

「ねぇ？　さっきから何言っているの？　馬鹿なの？　ねぇ、馬鹿なの？」

そろそろターニャの頭が本気で心配になってきた。服を作ってくれて、それで魅了させるっていう正攻法の話はどこへ行ったんだろう。

「あ、お風呂に一緒に入って、背中を流してあげればきっと・・・・！」

「ターニャ。シャマルさんに頭診てもらおう？　ね？　その方が良いよ、きっと」

「あぁこれはダメか。エリーゼ、無いし」

「何が無いのか言ってみ？　ん？　言ったら言ったで蹴るけど」

残念なものを見るような哀しげな視線を、わたしの体の一部に向けるターニャの脚を蹴る。痛いはずなのにそんな素振りを見せずに「手堅く料理ね、やっぱり、うん」ようやくまともな事を言ってくれた。

「そうだ。好物を訊きに行こう」

ターニャが扉に向かっていく。そしてガチャッと開けた。オーディンさんは店内に居た。「おーい、ディレクトア～」ターニャが呼び掛けた。ここでわたしは途轍もない失態を犯していることを思いだした。わたしは下着姿のまま。血の気が引いて、けどすぐに血が頭に上る。部屋の奥に行って服を着ないと。

そう思ったのに、未だに解かれていない巻き尺の所為でターニャから離れられない。これも確信しての行動というわけっ！？　「お願い、ターニャ！　服を着させてッ」懇願する。

「ちょっと待って。ディレクトアの様子がおかしいんだけど・・・・」

「服を――へ？　オーディンさんが変？」

真っ先に思い浮かんだのが記憶喪失の事だった。ターニャを壁とするようにして覗き見る。オーディンさんは別に苦しんでいなかった。ホッと一安心。「呼び掛けても聞こえていないようなんだよね」って首を傾げるターニャがもう一度「ディレクトア！」って大声で叫ぶけど、オーディンさんは無視。本当に聞こえていない・・・？

ターニャが直接呼びに行くつもりか部屋を出て、オーディンさんの元へ行こうとする。でもそんな事になればわたしは下着姿のままでオーディンさんの目の前に行く事になる。それだけは何としても阻止しないと。そう思って、これ以上ターニャを進ませないように踏ん張ったその直後、オーディンさんが振り返った。

「「「あ」」」

オーディンさんと目が合う。けどすぐにオーディンさんはスッと目を逸らした。な、ななななな何か言ってし、ししししし釈明さないと。だけど口から出るのは「あ、あ、あの、あのあの」だけ。頭の中が真っ白になる。目が、顔が、耳が、体が熱い。ポロポロ涙が零れるのが判る。

「あ～あ、エリーゼったら。下着姿で外に出るなんてはしたないよ？」

「エリーゼ。風邪をひいたらいけないから、早く服を着ような」

「い、い・・・・いやぁぁぁ

だ、お風呂か。そう思っていた時、男性用脱衣所の方から、「今日は参ったなぁ。エリーゼに謝らないと」というオーディンさんの声。オーディンさんが入ろうとしているお風呂に、シュリエルさんも入ろうとしている・・・？　後先考えずにシュリエルさんに向かって疾走。何かを喋らせる前に手を引いてその場から離脱。

「エリーゼ卿？　いきなりどうしたのですか？」

「それはこちらの台詞です！　オーディンさんが今から入るんですっ！　そしてシュリエルさんは女性なんですっ、だったら上がるまで待たないとダメなんですっ！　だというのに何故、一緒に入ろうとしたんですかっ！？」

大人しそうなシュリエルさんがこんな大胆なマネをするなんて思いもしなくて驚いた。まさか「シュリエルさんとオーディンさんって、前々から一緒にお風呂に入る仲なんですか？」って恐る恐る尋ねてみた。返答によっては、わたしの恋はこれにて閉幕だ。

「いいえ。今日が初めてですが・・・・」

「だったらどうして急に・・・・？」

「夕方、オーディンと親しい者に、オーディンに喜んでもらえるような方法はないのかと相談したところ、風呂で背中を流してあげればいい、という事でしたから」

どこかで聞いたな～、その話。

「誰から聞いたか、教えてもらってもいいですか？」

「？？　はい。シュテルネンリヒトという服飾店の主ターニ――」

「ターニャぁぁぁぁあああああああああああッ！！！！！」

アイツ（もうアイツで十分だ）の店、潰しちゃおうっかな～！！

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

聖王家の治める国アウストラシアの王女であるオリヴィエの治療をするために週二でシュトゥラ王都ヴィレハイムへと赴く事となってから、今日で早５回目の診察日。今日も上級治癒術式エイルを使って、オリヴィエの両腕の障害を治している。回数を重ねるごとに確実に快復に向かっていて（エイルを使用しているから当たり前だが）、あと１回の治療で完治しそうだ。

「私のお願いを聞いて下さっているおかげで、もう完治まで僅かですよ、オリヴィエ王女殿下」

「はいっ。毎日、オーディン先生の仰ったリハビリのメニューをこなしていますし。それに、オーディン先生が下さったこのアルムバントのおかげで、両腕を動かすのがとても楽になりましたから、苦もなく出来ました♪」

オリヴィエはニコッと可愛らしい笑顔を見せ、「失礼します」と椅子より立ち上がった。何をするつもりなのか、と思っていると、出逢った頃より確実に動きまくっている両腕で、ジャブ→ストレート→アッパーのコンビネーションを披露した。

私と一緒にオリヴィエを見守っていたリサが「オリヴィエ様～」と感極まって泣き笑いなんだが、私としてはまさかコンビネーション

とは思いもしなかった。聖王オリヴィエ。魔導と武技に於いて最強と謳われたのは知ってはいたのだが、もう少し女の子らしい仕草を見せてくれると想像していたため、「プフ」つい吹き出してしまった。

「え？　どうかなさいましたか？」

「いえ。なんと言いましょうか・・・」

「仰ってください、気になりますっ」

「・・・その、予想できなかった事を、オリヴィエ王女殿下がなさったので、つい」

そう言うと、オリヴィエは「は、はしたなかったですか？」と頬を少し赤らめて動揺する。そんな彼女を可愛らしく思い、「いえ。よく思えば、貴女らしいと言うべきでしょうね」と笑みを返す。リサも「オリヴィエ様は元気いっぱいに動き回る方が良いですッ！」と私に同意する。

しかしオリヴィエは「リサ。それではまるで私が小動物みたいではないですか」僅かに頬を膨らませ、納得できないと言った風だ。リサの顔から血の気が引くのが目に見えて判る。そして「も、ももももも」動揺しまくりだ。

「「桃？」」

オリヴィエと2人して小首を傾げたところで、「申し訳ありません

ッ！　かくなる上は！」と土下座した後に"キルシュブリューテ"（神器ではなくデバイス）を起動し、なんと首に宛がった。これには私もオリヴィエも「ちょっ・・・！」慌てる。刃が完全に頸動脈付近に当たってる。ちょい刃を引いただけで終わる、リサの人生が。

「この命で償いますッ」などと言うリサ。

捕縛系術式で止めようとした時、シュタッと目にも留まらない速さでリサの背後を取ったオリヴィエ。速いな。魔力無しでの技能だ。身体強化を行えば、おそらく今以上の速度で移動できるだろうな。そんなオリヴィエは"キルシュブリューテ"の刀身を掴んで、リサの自殺行為を阻止。

「待ちなさい、リサ。少しからかっただけだから、命のやり取り級にまで考えないで」

「オ〝リ〝ヴィエ〝様〝〜〜〜、ぐす（涙）」

「ごめんなさい、リサ」

「はい〝〜」

まぁ一件落着ということで。さて、改めて、今日の治療の仕上げと行こうか。オリヴィエにもう一度椅子に座ってもらい、両手を取る。使用術式を選定。クラスは中級、効果は補助・治癒。

――傷つきし者（コード）に、汝（ラファエル）の癒しを――

「ん・・・・」

オリヴィエが小さく息を漏らす。両腕を包み込むサファイアブルーの魔力。治癒効果のあるブレスレット型自作神器・妖精（ファルマコ・ネライダ）の神薬の能力を強化し、最後となるであろう次の治療の布石とする。時間を掛け、丁寧に強化を行う。強化を終え、オリヴィエの手を壊れモノのように大事に扱ってそっと膝の上に戻し、「本日はこれにて終了です」と告げる。

「ありがとうございました、オーディン先生」

「本当にありがとうございます、オーディンさん。オリヴィエ様をお助け下さって、何とお礼を言っていいのか」

深々と礼のお辞儀をする2人に、「自らの信念の下に行動するのが、私ですから」と応えておく。さて。用事も終わったことでそろそろお暇しようかとした時、扉がノックされた。リサがオリヴィエに応対してもいいか、という視線を向け、オリヴィエは頷き応えると、リサは扉に向かう。

リサが「はい。何用でしょうか？」そう尋ねると、「失礼します。クラウス殿下がオーディン様に御話があるとの事を、オーディン様にお伝えに参りました」と、若い女性の声が返ってきた。

「判りました。部屋の外で伺いますからお待ちください」

「承知しました」

「ではオリヴィエ王女殿下、リサ。私はこれで失礼します」

オリヴィエに一礼してから、リサと入れ替わるように扉の前に立つ。2人に見送られながらオリヴィエの私室を後にし、少し離れた場所で待っていてくれた二十代前半くらいのメイドへと歩む寄って行く。「お待たせしました」と言うと、そのメイドは「いえ。ではこちらへ」無表情かつ感情の籠っていないかのような声で応じ、オリヴィエの私室のある離宮ではなく、本宮に在るクラウスの私室へと案内し始めた。

「「・・・・・・」」

本宮に入ってからも変わらず互いに無言。しかしすれ違う騎士には、武器を胸に掲げての礼の姿勢を取る者が大半。中には先の戦で見知った者も居た。私相手に緊張しているのか動きが硬かった気がする。で、他のメイドともすれ違い、私に微笑みながら僅かに手を振って挨拶をしてくれる。

「段差がありますので、ご注意ください」

（やはり素っ気ないな・・・・）

主ではない私に様付けをする事に抵抗があるのか、それとも元より好かれていないのか、どちらにしてもあまり良く思われていないようで、ちょっとへコむ。無言のまま案内されたクラウスの私室。彼女は扉をノックし、「殿下。オーディン様をお連れいたしました」と告げる。

室内から「ありがとう。入って頂いてくれ」と、クラウスからの返

答。彼女が扉を開ける。思っていたより小さな部屋（オリヴィエの部屋より少し小さく質素か）の中、クラウスが私を出迎えてくれた。

「お待ちしていました。どうぞ、お座りください」

「ありがとう。それにしても、一国の王子を待たせるとは、私も偉くなってしまったな」

「元とは言えオーディンさんは一国の王だった方。実際に偉いではないですか」

「今は流れ者だぞ」

クラウスに倣って部屋の中央にある2つの肘掛椅子に腰かける。「では、私はこれにて失礼いたします」と一礼して去って行くメイド（何故か駆け足）。つい「私はあまり好かれていないのだろうか？」と尋ねてしまった。

するとクラウスからは「そのような事はないはずですよ」との返答。むぅ。扉へと向かい、僅かに開けて聞き耳を立ててみると、「きゃあああっ、オーディン様とお話ししちゃったぁぁあああっ」さっきのメイドの声だった。

「やったじゃないっ」

「聞いて聞いてっ。オーディン様って、以前は一国の王様だったんですって♪」

「王族っ！？　通りで気品のある方だと思ったわ♪」

「あ、でもどうしよう。緊張してた所為で、冷たく思われたかも」

「あとで笑顔で御声を掛けてみればいいじゃない」

他のメイド達と話しているのが遠くの方から聞こえていた。嫌われているわけではなくて良かった。パタンと扉を閉め、席に着き、改めてクラウスと挨拶を交わした後、彼は私との間にある丸テーブルにアタッシュケースを置いた。

「ご所望の品ですよ、オーディンさん。武装に必要な部品、ようやく揃える事が出来ました」

「おおっ！　ありがとうクラウスっ」

カートリッジシステム搭載のアームドデバイスの製作に必要な部品を、クラウスが用意してくれるという事で待っていたが、ようやく頂けるんだな。クラウスがケースを開け、中身を見せてくれた。デバイスの頭脳とも言うべきコア。

そしてカートリッジを装填するためのパーツ。フェイトの"バルディッシュ・アサルト"と同じ六連式リボルバー×2だ。「手に取っても？」と尋ねると、クラウスは「もちろんです」と快く許してくれた。

やはりコアは新品じゃないとな。それに、六連式リボルバー。このパーツは、どの上位騎士のデバイスからも手に入らなかった。だから注文したんだが・・・「良い品だな。期待以上だ」パーツを作っ

てくれた者には心底脱帽、そして感謝する。

「貴方にそこまで喜んでいただければ、技術部のみなも大変喜ぶでしょう」

クラウスの用事であったデバイスの部品を受け取った私は、ようやくデバイスを完成させる事が出来る喜びに興奮しながらアムルへ帰還した。ちなみにここまで案内してくれたメイドは別の仕事があったらしく、会えずじまいだった。アムルの街路を歩いてシュテルンベルク邸に向かう中、手に下げたケースに何度も目が行く。

（早速デバイス作成の続きといきたいな）

屋敷の正門から玄関へと続く道を歩いている中、屋敷の窓から庭を眺めていたエリーゼと目が合ったため「ただいま、エリーゼ」と挨拶すると、エリーゼは「あ、お、お帰りなさいオーディンさん」と挨拶を返してくれたが、すぐに顔を赤くして気まずそうに姿を消した。

昨日の事が原因だ。ターニャの謀略（子供に何をさせているんだか）によって、私の前で下着姿を晒す羽目になったエリーゼ。奥の部屋に連れ込まれた後、男が聞いてはいけない内容の話し声が漏れてきたために、私は２人の声限定で聴覚封印を行った。私に用事が出来れば、体に触れて教えてくれると思っていたから、２人の声を封じても問題ないと思ったんだ。

（しかしまぁそれが仇になるとは・・・・）

今朝も何度か声を掛けようと努力していたようで、だったら私は待とうと考えた。結局、軽い挨拶程度なら交わせたが、長話となると駄目だった。こちらから歩み寄って逃げられてはこちらが参るし、時間が解決してくれる事を祈るだけだ。さっきまでのテンションが嘘のようにトボトボと作業室（私室とは別に用意された部屋だ）へ向かう。その途中に通り過ぎる事になる自室。その自室の扉が開いて、アギトが出てきた。

「あ、マイスター。お帰りなさいっ♪」

「ああ。ただいま、アギト。留守中、急患はなかったか？」

「えっと、シグナムの一撃を受けて脳震盪を起こした人が２人」

「そうか、いつも通りだな」

「うん、いつも通り」

熱心で本気なのはいいが、少しやり過ぎ感が否めない。まぁ脳震盪を起こしているのは基本的にシグナムのファンだ。木刀を振るうシグナムに見惚れている間に頭に一撃もらう。同性異性関係なく、だ。それでも騎士教室をやめることなく、何度打ちのめされようとも通い続けている。

「アギト。少し作業室に籠る。午後の診察回りは、すまないがシャマル達に任せたい」

「え？　あ、うん。あたしから伝えておくよ」

「ありがとう。あとで直接シャマル達に謝らないとな」

「その方が良いと思う。じゃあマイスター。大事な用事みたいだから、その、頑張って」

「ありがとう」

礼を言い、私はアギトと別れて作業室へとまた歩き出す。作業室の奥に設けられた作業台の上に置かれている製作途中のデバイスに掛けた布を捲る。私の神器"神槍グングニル"と同じデザインのソレ。３０ｃｍほどの柄の上下に１ｍほどの穂がある。２つの穂の付け根に、リボルバーを設置する部位がある。

「さぁて・・・・すぐに完成させてやるからな。エヴェストルム」

デバイスの名を告げつつ、穂をそっと撫でる。"水銀"・"万能薬"・"賢者の石"・あらゆる物事の始めから終わりを司る象徴として用いられる"アルファとオメガ"や"アレフとタウ"・"巨大な力を解放する引き金"。様々な意を持つ"エヴェストルム"を、私はデバイスの名称として付けた。少し大げさな気もするが、妙な名前よりかはマシだろう。

「よっしっ！　やるかッ！」

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒アギト†††

マイスターは王都より帰って来てからずっと作業室に籠りっぱなし。一度だけ顔を出して、自分の代わりに医務仕事をしてくれたシャマルやモニカ達に、任せっぱなしにした事を謝っていたけど、でもすぐにまた籠った。そして今、あたしとシャマルとシュリエルは、夕ご飯をトレイに乗せて作業室の前にまで来てる。で、誰が扉をノックするか決めかねてる状況だったりする。だって・・・・

「むぅ・・・声を掛け辛い空気が扉の向こうからひしひしと・・・・」

「う、うん。・・・シャマルかシュリエル、やってくれる？」

「え？　私？　えっと・・・ちょっと遠慮したいかなぁ～」

「確かに・・・それで叱られると思うと、少し気が引けるんだが・・・」

「あたしだってそうだよ・・・」

ポツンと扉の前で佇む中、シュリエルが「料理が冷めてしまうな」急かすような事を言ってくる。あたしは「ここはやっぱりシュリエルが」って押しつける。すると「いや、ここはやはり先輩であるアギトかシャマルが」シュリエルもあたしかシャマルに押しつけようとしてきて、シャマルも「ここはやっぱり大先輩のアギトちゃんが」あたしに押しつけようとしてきた。このままだと料理も冷めちゃうし。でもマイスターの邪魔をしたって事で叱られるのも嫌だし。

「「「う～～～ん・・・・」」」

3人で唸っていると、「なんだ、まだオーディンに夕飯を届けていなかったのか」背中に掛けられた、ちょっと呆れたような声。振り返ってみると、そこにはシグナムとヴィータが居た。ヴィータも「冷めちまうだろうが」ってシュリエルが手に持つトレイに乗った夕ご飯を見る。

「だって。なんて言うか邪魔しづらい空気が扉から伝わって来るのよ？」

「オーディンが根を詰め過ぎているといけないから、医者のお前をアギトとシュリエルについて行かせたのだろうが。役に立たん奴だな」

「藪医者か？」

「酷いっ！　そこまで言う事ないじゃないっ、シグナムっ、ヴィータちゃんっ（泣）」

シャマルがガックリ廊下に四つん這いになって項垂れた。藪医者は言い過ぎだよ。代わるようにシグナムが「私がお呼びする」って扉の前に立ったけど、「む、これは・・・」ノックする体勢で硬直。そして小さく「た、確かにこれは少しやり辛いな」って漏らした。今度はヴィータが「シグナムまで何やってんだよ、たく」って扉の前に立って、「おーい、オーディン。晩飯できたけど、食う？」なんの躊躇もなくコンコン扉をノック。あまりにアッサリとノックし

たから、戸惑ってたあたし達は無言でヴィータの背中を見詰める。シュリエルが「返事が無い、な・・・」って言うと、またヴィータが「おーいっ」連続ドンドンノック。ゆ、勇者がここに居る。

「なっ？　おい、ヴィータっ、さすがにそれはオーディンの気を悪くさせてしまうやもしれんっ」

「そ、そうよヴィータちゃんっ。コンコンくらいならまだいいとして、ドンドンはまずいわっ」

「だって返事ないし、しゃあねぇじゃんか」

シャマルがヴィータを退かして、扉に耳を当てて室内の様子を窺う。とその時、ガチャッとドアノブが回って扉が内側に向かって開いた。シャマルは扉に耳を当てていた体勢のまま硬直。あたし達も硬直して、薄暗い部屋を背にしてるマイスターを見詰める。

俯いて一言も喋らないマイスターに、さすがのヴィータも若干後ずさりながら「えっと、オーディン・・・？　晩飯、なんだけど・・・食う、よな？」そう訊いた。で、夕ご飯の載ったトレイを持ったシュリエルはと言うと、顔は見えないけど明らかに不機嫌そうなオーディンの雰囲気に縮こまってる感じで硬直。

「マ、マイスター？　これは、その、みんな、マイスターの事を心配して・・・・」

何も言わないで居るより、ちょっとでもこうなった状況の説明をしてマイスターの機嫌をどうにかしないと。だからそう言ってみたん

だけど、マイスターは変わらず無言。あたしは泣きそうになる。ここでシャマルが立ち上がって、マイスターと正面から向き合う。で、「え？　まさか、立ったまま眠ってる？」マイスターの顔を覗き込んでそう言った。あたし達は揃って「え？」って訊き返して、マイスターの元に集まって様子を窺う。

「ち、違うわっ。眠ってるんじゃなくて気を失ってるわっ！」

シャマルがそう訂正した後、マイスターがうわ言のように「目が死ぬ・・・」って言った後、シャマルにもたれ掛かるように倒れた。マイスターを抱き止めたシャマルは「きゃぁぁぁっ！？　オーディンさん、しっかり！」って叫んで、「うおおおおっ！？　オーディンがぶっ倒れたッ！？」ヴィータは慌てふためいて、シグナムは「い、医者だッ、医者を呼べッ！」目の前にシャマルっていう医者が居るのにそんなこと言ってるし。シュリエルは「シャマルっ、オーディンの容体を調べろッ」冷静のようだけど、トレイを手放した所為で夕ご飯は床に落下、もう食べられない。

「い、急いでマイスターの部屋にッ！」

そしてあたしは、こんなこと言うのもなんだけどマイスターが倒れるのを何度か見てるから慣れて、それに倒れた原因が記憶障害っぽくないから冷静で居られたから、マイスターを部屋に運ぶようにシグナム達に言えた。シグナムとシュリエルがマイスターの両側から肩を貸して、マイスターを運んで行った。で、シャマルの診断の結果、やっぱり過労だった。マイスター、一体どんな無茶したんだろう？

†††Ｓｉｄｅアギト⇒シュリエルリート†††

翌日。「おはよう、みんな」といつもと変わらない調子のオーディンとアギトが食堂に入って来た。普段であれば我々は挨拶を返すところなのだが、まずエリーゼ卿が「オーディンさん、お話しがあります」と告げた。

食堂の空気が重くなるのが判る。しかしオーディンは「昨夜は迷惑を掛けてすまなかった」とエリーゼ卿が説教をする前に、私たちの前で頭を下げた。心の底からの謝罪であると理解できるほどに真摯なもので、許そうという空気が生まれる。

「わ、判って頂いているならいいんです、はい」

「エリーゼ。謝ったって許さない、って言っていたような――」

「そんなこと言ったっけ？」

「まぁ別にいいのだけど・・・・」

アンナからそう言われたエリーゼ卿がとぼける。私も先程そういう風に聞いていたが、ここは流すのが良いのだと察し、無言を貫く事にした。シグナム達もそのようだ。エリーゼ卿から視線を逸らし、明後日の方を見ている。

「アギトから話は聞いたよ。シグナム、シュリエル。部屋にまで運んでくれたそうだな。ありがとう。アギト、シャマル。看病してく

れて、ありがとう。ザフィーラ。私が休んでいる間、アムルの周囲警戒をしてくれて、ありがとう。そしてヴィータ」

「おうっ」

「何もしていない君に、特に礼は無い」

「だと思ったよ。あたしも、あーなんもやってねぇな～、って思ってたし」

「そのうえヴィータって、マイスターの夕飯後の為のデザートもこっそり食べたよね」

「ああ、美味かった♪」

オーディンとエリーゼ卿、アギトとヴィータとシャマルの笑い声が、食堂に響く。それから朝食を終え、話は昨夜までは無かった、オーディンの左手の中指にはめられている蒼銀の指環へと移る。エリーゼ卿が「オーディンさん。ソレが、オーディンさんの製作した武装、ですか？」と尋ねる。

食後のコーヒーを飲み一息吐いているオーディンが「ん？　ああ。エヴェストルムだ」と立ち上がって答え、おもむろに「起動」と告げ、指環を武装へと変形させた。ソレは槍のようで剣のようでもある武装だった。柄の上下に長い刃が付いている。

見た目からしてかなりの重量であると思われる"エヴェストルム"を軽々と片手で回し、構えた。エリーゼ卿とアギトとシャマルが「おお」と感嘆を漏らす。

「それって、オーディンさんが魔導でよく見せるものと同じ形ですよね」

「そうだな。私は槍使いだから、魔導も槍の形にしているんだ」

確かにオーディンが魔力で様々な槍を構成していた。いや、それより槍だったのか。よかった、剣、と口にしなくて。

「エヴェストルムを使えば魔力消費も抑えられるし、敵から武器を奪わないでよくなる。そう思うと、すぐにでも完成させたくなって――」

「作業室に籠って、無茶な作業を続けて過労で倒れた、と」

アンナがそう睨みを効かせて確認すると、「・・・その通りだ」とオーディンはしゅんと肩を落とした。オーディンは、何故かアンナを相手にすると若干弱くなる気がする。私たち"闇の書"がオーディンの元に来るまでに、アンナと一体何があったのか気になっていたりする。

「えっと、それはともかくとして。オーディンさんの記憶障害に陥る回数が減ると言うのなら、わたしはすごく嬉しいです」

「そ、そうだよね。マイスターの大事な記憶を守れる事になるなら、1日くらいの過労なんてどうでもいいよねッ♪」

「どうでもいいって事はないと思うけれど。けど、そうね。オーディンさんがエリーゼや私たちの事を忘れてしまうような事態が無くなったと思えば、心配させた罪も和らぐかしら」

「あの、アンナ。オーディンさんは一応年上だし、もうちょっと・・・ね？」

オーディンは"エヴェストルム"を指輪に戻して席に着き、「いいよ、エリーゼ。今さらアンナにかしこまられた態度を取られると、かえって気が滅入る」と言い、残りのコーヒーを飲むのを再開。アンナは「だそうよ？」とエリーゼ卿に微笑み、「オーディンさんがそう言うなら、いいんですけど・・・」とエリーゼ卿は少し納得がいかないような風だが、この場は引いた。

「あ、そうだ。アンナ、昼食は外で頂くから、弁当を作ってもらってもいいか？」

「お弁当、ですか？　構いませんが・・・はい、判りました」

「あの、オーディンさん。お昼はどこかへ行かれるのですか？」

「ああ。エヴェストルムの機能試験を行わないと。いざ実戦で機能不全を起こして窮地に陥る、なんて事は御免被りたいからな」

エリーゼ卿は「そう、ですか・・・」と寂しそうに呟いたのが聞こえた。話はこれで終わり、この場は解散となった。

朝食後は午前での仕事となる。オーディンはモニカとルファ、そし

てアギトとシャマルと共に医務院での仕事を普段通りこなしている。その様子を窓から眺める事が出来た。ちなみに私は使用人服を着て、アンナやシグナムとヴィータ、ザフィーラと共に屋敷内の清掃に勤しんでいる。

自分が掃除した事で綺麗になると、「うむ。ホコリ一つとない」とても気分が良くなるものだ。汚れた雑巾を洗って絞り、「ふぅ。良い仕事をした」黒くなったバケツの水を捨てに行く。裏庭の草に水を捨て終え井戸の湧水で手を洗っているところに、「シュリエルさん。お疲れ様です」と裏口からアンナが覗いていて、そう労いの言葉を掛けてくれた。

「お疲れ様です、アンナ。一階の窓の拭き掃除、終わりました」

「ありがとうございます。今日は人手がありましたから助かりました」

アンナは年相応に可愛らしい微笑みを浮かべ、中庭と二階へと視線を移した。中庭の花壇の水やりに草抜きをやっているであろうヴィータとザフィーラ、二階の清掃を任されているシグナム、共に今日は騎士教室が休みなため屋敷の仕事の手伝いだ。

「シュリエルさん。オーディンさんの昼食のバスケットです。私はまだ水回りの掃除があるので、あなたが届けてください」

「はい、判りました。ありがとうございます」

バスケットを受け取ると、アンナは「皆さんの分も作りましたので、

どうぞオーディンさんとご一緒してください」と言って、屋敷内に戻って行った。それから屋敷清掃班の私たちは合流し、医院での仕事を終え休憩に入ろうとしていたオーディン達と合流。

「それじゃあモニカ、ルファ。午後からも頼むな」

「はいっ♪　でもでもオーディン先生、練習のし過ぎでまたぶっ倒れないでくださいね♪」

「オーディン先生。モニカの言う通り、午後からの診察もありますから無茶はしないでくださいよ？」

「あはは、了解。しかし私がいなくても、シャマルが居て、２人もシャマル直伝の癒しの風を習得しているから安心しているんだが・・・」

「ダメですよ、オーディンさん。安心だから居なくてもいいだなんて。キッチリ仕事を頑張ってもらいますっ」

シャマルにそう言われ、オーディンは「了解です、シャマル先生。無茶しません。仕事も頑張りますっ」と片手を上げ宣誓、シャマルも「よろしいっ♪」と満足そうに笑う。オーディンを"闇の書"の主としてから騎士たちはよく笑うようになった。今のシャマルの笑顔も、私が憶えている限り今までの転生の中では見た事が無い。

「そうだぞ、オーディン。無茶はダメだ」

「そうだな。またオーディンの食事を、食い意地の張ったヴィータが食べてしまう」

「うっせぇな。残すくらいなら食べた方がいいじゃんか。捨てるなんて勿体ないほどに美味いし」

そんなシグナムとヴィータのやり取りも、今までなら考えられない。ヴィータも私相手に怒鳴ることが無くなった。それがとても嬉しいのだ。私とて今まで騎士たちの事を二つ名で呼んでいた。烈火の将、紅の鉄騎、風の癒し手、蒼き狼、と。

しかしオーディンから、皆を二つ名ではなく名前で呼ぶようにお願い（命令ではなく、だ）され、期待に添えられるように努めた。最初は苦労したが、今では言い間違える事なく名前を呼べるようになった。それは本当の家族になったように思え、嬉しかったものだ。

「――さて。アンナはみんなの分も用意してくれたんだよな。じゃあ一緒に行くか」

「「うんっ」」「「「「はい」」」」

そして私たちは、実戦が行えるようアムルの外れにまで向かう事になった。

†††Ｓｉｄｅシュリエルリート⇒シグナム†††

アムルより出て、我らは隣街ヴレデンとの間に広がるヴュルセルン平原を訪れた。街道から遠く離れているため、アムルとヴレデンを

往来する人には迷惑は掛からないはず、というのがオーディンの言だ。周囲の確認を終えたオーディンは「エヴェストルム、起動」と告げ、指環を槍へと変え、騎士甲冑姿へと変身した。
ここで私は「試すのであれば、相手が必要ではないですか？」と尋ねる。単独で"エヴェストルム"の機能試験を行うより、やはり相手が居た方が良いと判断したからだ。それに「一度オーディンと剣を交えてみたいですし」という、もう一つの理由を告げる。魔導だけにおいては私はまず相手にならないだろう。しかし斬り合いならば、おそらく良い線までいけるはずだ。

「う～ん、そうだな・・・じゃあ頼めるか？　シグナム」

「はい。喜んで。レヴァンティン、行くぞ」

首から提げていた"レヴァンティン"を起動し、騎士甲冑姿へと変身する。

「それじゃあ陸戦限定での試合。私は広域・射砲撃の魔導は使用せず、シグナムは普段通りでいい」

「判りました」

"レヴァンティン"を正眼に構え、オーディンは"エヴェストルム"を水平に構えた。槍の構え方ではない。こう言ってはなんだが、元より槍としての形ではなかった。ゆえに、槍の唯一の攻撃法である刺突にだけ注意すればいいというわけにはいかず、斬撃にも警戒しなければ。互いにジリジリと僅かだが確実に距離を詰め始める。先

手で行くべきか、後手に回って迎撃か。

「では、最初の機能試験を始める。エヴェストルム、カートリッジロード」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

――集い纏え、汝の火炎槍（フロガゼルエル）――

――集い纏え、汝の雷電槍（ブロンテーゼルエル）――

２つある装填部が回転し、それぞれ一発ずつカートリッジをロードすると、片方の穂に蒼い炎、もう片方には蒼い雷が付加された。魔力付加。オーディンは魔力を直接槍の形に構成、固定して、攻撃手段としていた。魔力消費量で言えば、確かに武装に付加する方が低いだろう。

「レヴァンティン、カートリッジロード・・・！」

"レヴァンティン"のカートリッジを一発ロードし、刀身に火炎を発生させる。そして、互いに同時に動く。

「はぁぁぁぁッ！！」

「紫電・・・一閃！」

横薙ぎに振るわれる"エヴェストルム"。私は振り下ろしの一閃。

互いにほぼ全力での炎の斬撃が衝突。鍔迫り合いの如く拮抗し、互いの火炎が爆発する臨界点間近というところで、

≪Ｚｗｉｌｌｉｎｇｅｎ　Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍ≫

"エヴェストルム"の柄が半ばで分離し、槍から二刀一対の双剣となった。オーディンが「よし、上手く行ったな」と蒼雷が付加されている片方の穂を振りかぶる。振るわれる前に、鍔迫り合いしていた"エヴェストルム"と"レヴァンティン"の炎が爆発、爆炎と爆風によって強制的に距離を取ることになった。

「へ～、エヴェストルム、分離して武器が２つになるのかぁ～」

離れた場所で観ているヴィータから漏れる感嘆の声を聞きながら、煙幕の向こう側に居るであろうオーディンに警戒し続ける。煙幕が晴れていき、双剣形態のままの"エヴェストルム"をダラリと下げた状態で佇むオーディンが視界に入る。

「よし。次だ」

≪Ｚｗｉｌｌｉｎｇｅｎ　Ｌａｎｚｅ　ｆｏｒｍ≫

また形態変化。柄がグッと伸び、双剣から二槍一対の双槍と化した。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

――集い纏え、汝の閃光槍（ポースゼルエル）――

右の"エヴェストルム"がカートリッジをロードし、穂に蒼い光が付加される。そしてオーディンは右の"エヴェストルム"を私に向かって投擲。あまりに一直線過ぎる一撃。罠か？と疑ってしまうが、ここは下手に防御をせずに回避を取る。左手に持っている"エヴェストルム"の柄頭を、投擲したばかりの"エヴェストルム"に向け「パイチェフォルム」と一言。この間、一切オーディンから視線を外さなかった。だからこそ見えてしまった。

≪Ｐｅｉｔｓｃｈｅ　ｆｏｒｍ≫

柄頭から高速で伸びる蒼い魔力の縄が、私の背後に突き刺さった"エヴェストルム"の柄頭からも伸びた魔力縄と繋がった。鞭（パイチェ）とはそういう事かと理解する事となった。魔力縄が鞭となり、先端にある柄が短くなって再び剣と化した"エヴェストルム"で刺突と斬撃を行う。

そしてオーディンの手元にもまた槍形態の"エヴェストルム"がある。接近してきた相手を迎撃するためのモノだろう。実際、私が先端の"エヴェストルム"を弾き飛ばし、オーディンの懐に飛び込もうとした時に迎撃されてしまった。何度か間合いに入って斬り合いになるが、長柄の槍を武器としているのに斬り返しが速く、なかなかオーディンに掠り傷すら負わす事が出来ない。

（魔導だけでなく槍術ももはや達人級、か・・・・！）

それだけでなく押し切れると思えたところで、槍の"エヴェストルム"の柄頭から伸びている鞭と、先端の剣"エヴェストルム"が妨

害して来て距離を取らざるを得なくなる。

（離れては鞭による打撃と先端の剣形態エヴェストルムによる斬撃・刺突。接近すればオーディン自ら槍形態のエヴェストルムによる迎撃。これは・・・厄介だな。こちらも連結刃形態シュランゲフォルムで対抗するのが吉か・・・？）

対"エヴェストルム"の戦術を組み立てているところで、「あ、すまないシグナム。今日はこれまでにしてくれ」とオーディンが告げた。理由は、魔力縄が突然消えてしまったからだ。オーディンが解除したわけではなく、何かしらの問題が発生しての事だ。不完全燃焼だが、元より戦いが目的ではなく、"エヴェストルム"の機能試験を行うのが本来の目的だ。ゆえに「判りました」と"レヴァンティン"を鞘に収め、待機形態の首飾りにし、服装も戻す。

「むぅ、エラーが出たな。プログラミングに問題があったか？」

そう1人思案に耽るオーディン。そんな彼を見ていると、「お疲れ、シグナム」とシャマルが労いの言葉と共に、タオルを差し出してきた。受け取って顔の汗を拭いながら「ああ」と返す。今度はシュリエルが「水だ」と水の注がれたコップを渡してくれた。「すまないな、シュリエル」喉の渇きを水で潤し、一息吐く。

「それで、どうだったの？　オーディンさんとの一戦は・・・？」

「・・・魔導だけでなく槍術もすごかった。あの防御を切り崩すのは相当骨が折れそうだ」

「それってつまり全力で行けば、オーディンさんを倒せるって事？」

「いや、それは無理だな。今の試合のように制限があれば一撃くらいは与えられそうだが、先の戦で見た魔導がそれに加われば手に負えない」

魔力の槍を雨のように降らせるような魔導に、強大な威力の同時多数砲撃、戦船を掴んだ巨大な腕による拳打。それらが補助としてオーディンの戦術に加われば、もはや実力がどうのこうのという次元ではなくなる。判っていた事だが、オーディンはもう人間の限界を超えている・・・。

「アムルに帰って詳しく調べないといけないな」

「なあなあオーディン。ちょっといいか？」

「どうした？　ヴィータ」

オーディンが"エヴェストルム"を連結して槍に戻し待機形態の指環に変えたところで、ヴィータがオーディンに歩み寄って行った。

「オーディンって、色んな魔力変換が出来て付加する事が出来るよな。炎熱や電撃とか」

「まあな。それが？」

「それって、他の奴にも付加できたりするのか？」

「たとえば？」

「あたしのアイゼンとか、シグナムのレヴァンティンとか、ザフィーラの拳とか」

「出来るぞ。試しにやってみるか？」

「うんっ！」

ヴィータは嬉しそうに元気良く頷き、「よっしゃっ！」と"グラーフアイゼン"を起動した。オーディンは「手始めにグラーフアイゼンのヘッドな」と言った後、指を鳴らした。すると"グラーフアイゼン"のヘッドに蒼雷が付加された。オーディンの左手に魔力で構築された槍が一振り生まれ、「とりあえずその状態で私に攻撃してみろ」と告げる。

「え？　いいのかよ。あたしの一撃って結構重いぜ？」

「大丈夫だ。構わずやってみろ」

「お、おうっ！」

騎士甲冑へと変身したヴィータは、蒼雷を纏う"グラーフアイゼン"を振りかぶり、オーディンへ向け振り下ろす。魔力槍と"グラーフアイゼン"が衝突したと同時、雷光が炸裂する。ヴィータが「電撃

の一撃かぁ。ブリッツ・シュラーク、がいいな」と勝手に名付けていた。オーディンも「いいんじゃないか、ブリッツ・シュラーク。判り易くて」と同意している。

「なんか面白くなってきた。なぁオーディン、もうちょっと試したい事があるんだけど」

それからというものヴィータは様々な属性を付加された魔導を試し打ち。シュワルベフリーゲンに炎熱を付加させたシュワルベフリーゲン・フランメ、電撃のシュワルベフリーゲン・ドンナー、氷結のシュワルベフリーゲン・アイスなどなど。

ちなみに、「シグナムやザフィーラ、シャマル、シュリエルもやってみるか？」とオーディンが仰せだったので、少しばかり、な。

私とは連携の紫電十字閃、紫電嵐閃など。ザフィーラは拳打に電撃、蹴打に炎熱と分けられての炎蹴雷打、オーディンとの連携技・狼王塵砕牙など。シュリエルはデアボリック・エミッションをオーディンと同時に（驚くべき事にオーディンは見ただけで他者の魔導を憶える能力があるとの事だ）複数発動するデアボリック・エミッション・ヘクサ、ブルーティガー・ドルヒに様々な属性付加させたエレメンテン・ドルヒなど。

「――しかし、シャマルはよく考えると攻性の魔導が少ないよな」

「はい。私は治癒と補助が本領ですから」

「シャマルはいいじゃん。前線じゃないんだし、後ろで回復をやらせておけば」

「なんか酷い言い方な気が・・・」

ヴィータにぞんざいに扱われたシャマルがガックリ肩を落とす。そこに、アギトから「そろそろアムルに帰らないとダメかも」と告げられたオーディンが「しまった」と焦り始める。結局、アンナに用意してもらったサンドイッチは帰路の途中で食べ歩きという事に。アムルに帰ってオーディンとシャマルと別れ、屋敷に戻ると・・・

「お帰りなさい、みなさん」

アンナがエントランスホールで仁王立ちしていた。結構な威圧感を放っている。なるほどオーディンも飲まれてしまっても仕方がないな、これは。

「ただいま帰りました。アンナ、何かありましたか？」

「ええ、ありました。随分と派手に練習をしていたようですね。アムルへ訪れた方々が騒いでいました。ヴュルセルン平原で魔導戦が行われている、と。悪い事だとは言いませんが、一般の方に不安を与えるような事はしないでくださいね」

おかしい。迷惑が掛からないように街道より遠く離れて行っていたのだ。ふと、我らの視線は1人に向けられる。シュリエルだ。シュリエル自身も騒ぎの原因の片方であると理解しているためか、すまなさそうにしている。おそらく一般の者を騒がせた魔導というのは、デアボリック・エミッション・ヘクサだろう。たださえ強大かつ巨

大な魔導だ。それが空に７つも発動されたとなれば、否応なく人目に着くだろう。
この後、仕事より帰ってきたオーディンもアンナの説教を受けた。
オーディンがアンナを苦手とする原因を垣間見た瞬間だった。

「どうもすいませんでしたッ！！」

Ｍｙｔｈｌｌ民草よ聴け・其は神よりの告知なり～ＭｉｎａｒｅＴ～

夜天に浮かぶ月と星々の明かりが地上をうっすらと照らしている今は真夜中。

シュトゥラとの国境とは真逆であるイリュリア西部に在るトゥルム海の離島へと、イリュリアの技術部や騎士団が今までにない大規模な人員移動を行っていた。騎士団の中には、二度に亘ってオーディン達に苦汁を舐めさせられたファルコ・アイブリンガーの率いる、新たに再編された地駆けし疾狼騎士団フォーアライター・オルデンも姿が。

そして、かつて起きた"大戦"に参加していた魔術師であり騎士でもあった、鮮血姫シリア・ブラッディアの末裔――ウルリケ・デュッセルドルフ・フォン・ブラッディアの率いる改造獣（キメラ）のみで構成された狂いたる災禍騎士団プリュンダラー・オルデン。その２つの上位騎士団も含め計８つの騎士団が海岸に集い、島へと船で渡っていた。

「ミナレットの稼働・・・ようやくイリュリアによるベルカ奪還・統一が見えてきたかしら」

「だな。エテメンアンキは放置していた期間が長過ぎて調整に時間が掛かるようだが、ミナレットの方は随分と前からテウタ陛下が部下を回して調整していたようだから、こうして１ヵ月と掛からずに実戦運用が可能段階にまで持って来れたって話だ」

「エテメンアンキは王都に在るから、ミナレットのように隠れて調整することが出来なったのね」

「こんな田舎にまで気を回す余裕が無かっただろうしな」

ファルコとウルリケが島の上空を見上げながら、そう思いを馳せていた。そこに、「おい、サボってんなよ、盟友ファルコ、盟友ウルリケ」と叱責するような声が2人に掛けられた。ウルリケが「盟友フレート」とその男の名を告げた。

テウタ派の上位騎士団の騎士団長フレート・ベックマンだ。彼のすぐ側には小人が1人、ふわりと浮遊している。融合騎プロトタイプの一体、強化の融合騎ツヴァイだ。その融合騎が「フィーアとフュンフもいねぇじゃん。主従揃ってサボりか？」と、ファルコの融合騎・風のフュンフ、ウルリケの治癒の融合騎・フィーアの姿が無いと嘆息。

「ツヴァイ。2人は調整中で、すでにミナレット内の技術室だ。あと、盟友フレート。俺たちはサボってたわけじゃない。休憩中だ」

「そうかい。ま、このくだらない争いもやっと終わると思えばのんびりサボりたくもなるよな」

「話を聴けよ、おい。たく・・・で？　俺とウルリケに何か用か？」

「んあ？　あーそうそう。先ほど、王都から伝書鳥が来てな。テウタ陛下と総長閣下からの指令だ。明日の正午、ミナレットの第1撃目をシュトゥラ、間髪入れずに三連国（バルト）の主格ウラルに2撃目を撃ち

込む」

「ともにイリュリアの統一を拒む最大勢力、ね」

「個人戦力では圧倒的な魔神の居るシュトゥラ。兵力ではイリュリアと同等かそれ以上のバルトを治める三連王のひとり、雷帝ダールグリュンの国ウラル。この2発で決まれば、あとは対した弊害にならないな」

「問題は、アウストラシアの聖王のゆりかごだ。ミナレットでも撃沈させる事が出来るとは思うが――」

「可能ならばエテメンアンキが使えた方が良いと思うわ」

「エテメンアンキは今も陛下たちが調整している。それまではミナレットで凌ぐしかないだろう」

高位騎士3人は改めて島の上空を見上げる。そこにはただ星空が広がるだけだ。しかし実際、そこには・・・

†††Ｓｉｄｅシャマル†††

私たち"闇の書"とその守護騎士がオーディンさんの元に転生してからもうひと月ちょっとが経過した。戦乱期という事もあってやっぱり戦いがあるけれど、それでも以前までなら考えられない程に笑顔に包まれていて、とても穏やかな時間を過ごしている。

普通の暮らし、とでも言うのかしら。魔導を活かした医者というお

仕事、温かい食事とぐっすり眠れる場所、選り取り見取りな衣服・・・そして、家族。普通なんてものじゃない。幸せな暮らしだと、私はハッキリと言える。

「ふぃ～、良いお湯だったぁ～♪」

「真昼間から風呂に入ると、なんかいつもと違うから余計に気持ち良いな♪」

アギトちゃんとヴィータちゃんが露天風呂をお昼から頂いた事で、気分が高揚しているよう。そういう私も実は一緒にお風呂を頂きました。だって・・・

「ツイてないと思ってたけど、お昼からお風呂に入れるなら悪くないかも」

「まったくだ。アイツらが泥を跳ね上げるから、あたしらは泥塗れになっちまったけどな。ま、その代わりこうして綺麗サッパリになったんだ」

ヴィータちゃんの言う、アイツら、というのは騎士教室生たちの事。魔導の練習で、魔力を暴発させて泥の水たまりを爆発させちゃった事で、近くに居た私たちは遇えなく泥塗れに。空いた時間、見学をしていなければ巻き込まれなかったけど、こうしてお風呂を頂く事もなかった。

（んん～、不幸中の幸い、というものかしら？）

「マイスタぁ～～、髪乾かしてぇ～♪」

アギトちゃんが甘えるようにオーディンさんの元へと飛んで行く。男性用浴場と脱衣室に合流できるラウンジのソファに、私たちの主であるオーディンさんが座って、自分の髪を乾かしていた。オーディンさんもその場に居たから泥水を被って、私たちと同じように入浴する事に。

「いいぞ。ほら、おいで」

「ありがと、マイスター　」

側に飛んできたアギトちゃんを迎え入れるようにオーディンさんが快諾すると、アギトちゃんは「ヴァクストゥーム・フォルム♪」そう言って、体格を小人サイズから１０歳くらいの人間の子供の大きさにまで変身した。アギトちゃんの、オーディンさんを膝枕する、という夢の為（もちろん他にも理由は在るようだけど）に組んだ術式って言ってた。

「マイスター、膝の上に座ってもいい？」

「ああ、どうぞ」

ちょこんとオーディンさんの膝の上に座ったアギトちゃんは本当に幸せそう。そしてオーディンさんは左手に櫛、右手から魔導で温風を生み出して、アギトちゃんの長く綺麗な紅い髪を乾かしながら櫛

で梳いていく。
次第にアギトちゃんは「ふにゅ〜」ウトウトしだす。その都度、「寝ちゃダメだぞ、アギト」って言われて「寝てないよ」って返す。そんなやり取りを繰り返して、最後にアギトちゃんの髪を両耳の後ろで結って終わり。アギトちゃんが元の姿に戻ったところで、「オーディン、あたしもやってもらっていい？」ってヴィータちゃんが駆け寄ってく。

「ああ、もちろん。ほら、隣に座って」

「お邪魔しま〜す」

ヴィータちゃんも、櫛で梳かれる度に気持ち良さそうに目を細めてる。ちょっと羨ましいかも。でもでも、私はもう大人なんだし、そんな子供っぽい事をお願いするのもどうかと思うし、あぁでも気持ち良さそう。
ううん。ここは大人として・・・「はい、終わり」とオーディンさんがヴィータちゃんを送りだす。あ、どうしようどうしよう。お願いするなら今。あぁでも大人として・・・うぅ、でもやってもらいたい。

「どうしたんだよ、シャマル。さっきからうんうん唸って」

ヴィータちゃんが不思議そうに私を見上げていて、アギトちゃんも小首を傾げて見てくる。そしてオーディンさんは、「さてと」と言って、ラウンジを後にしようとした。恥も外聞を擲ってお願いするか。それとも諦めるか。私は「あのっ・・・！」前者を取った。

オーディンさんが私に振り向く。意を決して「私の髪もお願い出来ますかっ？」乾かしてもらえるようお願いする。すると「いいよ。さ、こっちに座って」オーディンさんは笑顔で快諾してくれた。そうして私もオーディンさんに髪を乾かしてもらった。とても気持ち良くて、本当に眠ってしまいそうだった。それから昼食を頂くために食堂へ向かう途中で、シグナムとザフィーラとシュリエル（３人は離れていて泥を被らなかった）と合流。

「どうかしましたか？　我が主」

私たちの一番後ろを歩くザフィーラが、私の隣を歩いているはずのオーディンさんにそう尋ねた。オーディンさんは窓の前で立ち止まっていて、雲一つとしてない青天を見上げていた。

私たちも立ち止まって、そんなオーディンさんの元に集まる。シュリエルが「オーディン・・・？」ともう一度声を掛ける。ようやくオーディンさんが「ん？　あぁすまない」と反応。改めてザフィーラが「空がどうかしましたか？」と尋ねる。

「・・・胸騒ぎが、な。昔にも似たような感じの胸騒ぎを得た事があったのを思い出していたんだ」

そう答えた。私たちも倣って窓から空を見上げてみる。もちろん私たちはオーディンさんじゃないから胸騒ぎは起きない。

「・・・気の所為かもな。すまない。さ、エリーゼ達が待っているかもしれなから行こうか」

オーディンさんはかぶりを振ってから歩き出し、私たちもそれに続こうとしたその直後、何かが空を切って近付いて来る音が聞こえてきた。それだけじゃない。とんでもない魔力も一緒だ。オーディンさんは側の窓を乱暴に開け放って外に出て、屋敷の屋根の上へと跳んだ。

私たちも窓から外に出て、オーディンさんに続いて屋根に上る。オーディンさんは空を見上げて「今のは砲線・・・！」と呟いていて、私たちも空を見上げる。砲線は見る事が出来なかったけど、その代わり「なにか来るぞッ！」ヴィータちゃんが叫ぶ。イリュリア方面から、さっき感じたものと同じ強大な魔力が近付いて来るのが判る。

「砲撃だッ！」

「デケェッ！」

それは巨大な青紫色の魔力砲撃だった。砲撃はアムルの上空を突っ切って行く。アギトちゃんが「ミッテ領の方に向かってる！」って、王都ヴィレハイムに隣接するミッテ領を指差す。まさかこんな手段を使ってシュトゥラに攻撃を加えてくるなんて思いもしなかった。

「私たちを突破できないと踏んで、直接あのような王都に手を使う事にしたようだな・・・！」

――瞬神の飛翔（コード・ヘルモーズ）――

オーディンさんの背中に12枚の蒼い剣の翼、そして細長いひし形の翼が10枚と展開された。空戦形態ヘルモーズとオーディンさん

が言う、空に於いて最高速の移動を可能とする魔導だ。私は「どちらへ！？」と訊くまでもない事をオーディンさんへと尋ねてしまった。

「もちろんミッテ領にだ！」

そう答えたオーディンさんが空へ上がろうとした時、砲撃が消えていった空の向こうから、砲撃が返ってきた。魔力の色からしてさっきの砲撃なのは間違いじゃないけれど、どうして戻って来たのか、どうして小さくなって幾つもの砲撃に分かれているのか、判らない。でも今はあの砲撃がアムルに着弾しないようにしないと。そう思ったら、みんなも一斉に騎士甲冑へと変身して、こちらに向かってくる3本の砲撃へ飛び立った。アムルを出、背後に在るアムルを護るべく、砲撃を迎え撃つ準備をする。

「私が2つ受け持つ。君たちは残りの1つの防御を頼むぞッ！」

オーディンさんがかなり無茶な事を指示してきた。たった独りで艦載砲以上の魔力砲を2つも防ぎきるなんて出来るわけがないって思ったけど、シュリエルが「判りました」と応じ、"闇の書"の頁を開いていく。それを見てオーディンさんは「頼んだ」と言って、この場から飛び去って行ってしまった。止める事は出来なかった。

「オーディンなら大丈夫だ。信じろ。あの方の魔導に、不可能な事はない」

シュリエルにそう言われた私やみんなは黙る。色々と訊きたい事も

あるけど、そんな時間がないのも確か。とりあえず今は砲撃の対処だ。シュリエルから「みなの魔力を貸してくれ」と、"闇の書"に魔力を送るようお願いされた。
オーディンさんから蒐集した魔導を使うみたい。でも、"闇の書"に貯蓄された魔力を使うと、シュリエルが具現できる４００頁を切るらしい。だから私たちの魔力を流用するとのこと。私たちはすぐに頁が開かれている"闇の書"に触れて、魔力を送る。

「よし。いける。・・・女神（コード・リン）の護盾！」

シュリエルが魔導を発動する。オーディンさんの魔力の色と同じ、魅了されてしまう綺麗な蒼の光が、私たちと砲撃の間に生まれる。光は円い形を取り、その中央に女性が祈る姿の模様が描かれる。神々しい。その一言だけしか頭の中に浮かんでこなかった。
そして着弾。ビリビリと衝撃が私たちを襲うけれど、でも砲撃は障壁コード・リンを突破できず、少しの間拮抗することに。私たちは魔力を送り続け、そしてようやく砲撃は途切れた。

「おお、あんなに強力な砲撃を本当に塞ぎやがった」

「当然だ。オーディンの有する防御の魔導の中でも最硬度のものだ」

「ならば主オーディンの方もこの魔導を・・・？」

「おそらくな。それに、オーディンには魔力を吸収し、自らの魔力へと変換できる魔導もある。純粋な魔力砲なら防御せずに吸収すれば、魔力供給と防御が同時に行える」

砲撃を防ぎきった事を確認して、シュリエルはコード・リンを解除。オーディンさんが向かっていった場所は静か。たぶんシュリエルが言うように今の魔力砲を吸収したのかも。そう思ったのも束の間、オーディンさんが居る地点から空に向かって砲撃が幾つも放たれ始めた。

様子がおかしい。「マイスターっ！」アギトちゃんが真っ先に飛んで行った。私たちも後に続く。オーディンさんとアギトちゃんの姿を見つけた時、アギトちゃんは地面に座り込んでいて、オーディンさんはそんなアギトちゃんに「心配かけてごめんな」って謝っている最中だった。

「オーディン、これは・・・？」

「ん？　あぁシグナム達か。いや、私の身に何かがあったんじゃないかって心配して飛んできたようなんだ・・・って、もしかして君たちもか？」

「ええ、まぁ」

「そうか。それは心配を掛けてすまなかった」

「あの、オーディンさん。先程の空に放っていた砲撃は、一体どういう・・・？」

そう尋ねると、オーディンさんは気まずそうに答えてくれた。砲撃の1発は、シュリエルと同じコード・リンで完全防御して、2発目

はコード・リンで使った魔力を補うために、魔力を吸収するコード・イドゥンを使ったとのこと。
でも、吸収したのは良いけどあまりに魔力量が多すぎて、核が暴走しそうになった、と。それで過度に吸収した魔力をどうにかするために、砲撃に変換して消費したという事みたい。とりあえず無事で良かったと思う。

「無茶はしないでくださいね。オーディンさんの身に何かがあれば、私たちにも影響が出るんですから」

人差し指を立てて、めっ、と注意。「あ、そうだよな。すまない」と謝るオーディンさんに、「はい。許します♪」と笑顔を返す。主であるオーディンさんが亡くなれば、"闇の書"は新たな主を求めて転生する。それはつまり、私たちの今の幸せな時間も終わるということ。それだけは嫌。みんなが笑っていられて、そして私たちの優しい主オーディンさんが側に居てくれる、そんな時間が終わるなんて考えたくもない。

「しかし、あの砲撃。イリュリアからのものだが。あのようなモノ、どうやって・・・？」

「ああ。それに、どうして今まで使わなかったのか・・・？」

「疑問は尽きないが、私はとりあえずミッテ領へ向かう。念のためにシャマル、君も来てくれ」

「あ、はいっ」

「私とシャマルは先行する。すまないが誰かひとり、医療品を後でミッテ領にまで持ってきてくれ」

「判りました」

「それとあと、次の砲撃に備えてアムルに防御結界を張って行くから、防衛に出ないように」

オーディンさんはそう言った後、「我が手に携えしは確かなる幻想」と何かしらの呪文を唱えた。するとオーディンさんの手に一振りの剣が現れた。ソレを「シグナム。私が居ない間、みんなの将として、これを君に預けておく」とシグナムに手渡した。

「この剣は？」

「今から私が張る結界の制御キーと言ったところか。事態が明確になるまで結界は解除しないつもりだ。だがそうなるとアムルから入出できない事になる。それを防ぐためのその剣だ。結界の一部分にだけ穴を開ける事が出来る」

「なるほど。出入りしなければならない者が出た場合、その者が出れるだけの穴をこの剣で作るというわけですね」

「そういう事だ。ちなみに結界に穴を開ける度に魔力は供給してほしい。結界を維持するのに必要だからな」

「判りました。不肖シグナム。オーディンの不在時のこの務め、みなの将として果たさせていただきます」

「ああ、頼むぞ。エリーゼ達への事情説明も任せる。シャマル。急ぎたいから掴まってくれ」

私は「はいっ」ってオーディンさんに抱きつく。そして「それじゃ行ってきます」ってシグナム達に告げる。これから向かうのは、もしかしたら凄惨な現場かもしれない。アムルのように私たちが護ることが出来た街が、そう多いとは思えない。

「行くぞシャマル」

「いつでもどうぞ！」

一瞬の浮遊感。気付けばそこはもう空の上。そしてオーディンさんは「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」とさっきとはまた別の呪文を詠唱。

「結界王の名の下に、その力を揮え」

――広域守護結界（インヴィンシブル・ガーデン）――

その直後、オーディンさんから強大な魔力が発せられ、そして桃色に光り輝く半球状の膜が展開、アムル全体を覆った。「ぅく・・・」と呻くオーディンさん。「大丈夫ですか！？」と慌てて尋ねると、「問題ないよ」と苦笑で答えた。

絶対に問題なくない。でも、今のオーディンさんに何を言っても無駄なことくらい、もう理解してしまっている。だから「お願いですから記憶障害が起こってしまうような無理はしないでください」と懇願。

「シャマルは注文が多いな」

「当たり前です」

オーディンさんが「善処するよ」と言った後、ミッテ領に向かって飛行開始。ミッテ領へと向かう最中「酷い・・・・！」空から見るとよく判る。大地の至る所に大穴が開いていた。あの砲撃の着弾痕。こんな破壊を撒き散らす、イリュリアの砲撃・・・・許せない。私の背に回していたオーディンさんの腕に力が籠る。チラッとオーディンさんの顔を見上げる。歯を食いしばって、「ふざけるな・・・」と怒りに震えていた。ミッテ領に入る前、ラキシュ領内だけでもう被害の深刻さが充分伝わった。私とオーディンさんは見た。燃える村・・・酷い有様だった。ラキシュ領本都とアムルに間に在るその村は、アムルへ来る行商人が立ち寄る休憩の場として名のある村だった。

「・・・シャマル。負傷者を捜すぞ。見つけ次第、すぐに治療を開始する」

「はいっ、了解ですッ！」

私たちは別れて負傷者を捜索し始める。瓦礫のの隙間から人の上半

身が見えたからすぐに向かう。けど「こんなの酷過ぎるわ・・・。こんな小さな子供まで・・・」すでに息絶えている男の子の上に乗っている瓦礫を退かす。するとその子を護るかのような女性の体が瓦礫の下から現れた。たぶん母親。でもその女性もすでに・・・。

「誰か！　生きている方は居ませんかっ！　誰かっ！　お願いっ、応えてっ！」

必死に叫ぶ。耳を澄まして、また叫んで、また澄ませて・・・でも、返事は無い。瓦礫の山を歩き続ける。そこに『シャマル。次へ行こう。この村に、生存者はいない』という思念通話。『でも！』私はそう反論してしまう。まだ、まだ生存者が居るかもしれない。だけど『シャマル！』というオーディンさんの大声で、ビクッと肩を竦ませてしまう。

「・・・シャマル・・・・行こう」

「オーディンさん・・・私・・・」

いつの間にか私の側まで来ていたオーディンさんが、私の肩に手を置いた。私はたまらずオーディンさんの胸に飛び込んだ。悔しい。何も出来なかった。そっと抱きしめ返してくれるオーディンさん。

「シャマル。辛いだろうが今は、別の街へ行って生存者を見つけて、治療した方が良い」

「・・・・はい」

私から離れたオーディンさんが改めてヘルモーズを発動。私は袖で涙を拭って、もう一度オーディンさんに抱きつき、そして次の街へと向かう。オーディンさんの体にしがみ付いてラキシュ領本都上空へ辿り着いたその時・・・・

。―。―。―。―。

――イリュリア西部・トゥルム海・離島

イリュリア騎士団の一部と技術部が大移動を行った島に、昨夜には無かったモノが存在していた。ソレは、超が付く程の巨大な大砲だった。直径１ｋｍはあるだろう回転床の上に鎮座している砲台。巨大な砲台より伸びる砲身は２つあり、下段・約１５０ｍ程の長さで、上段は１００ｍ程だろう。

その２つの砲身を生やしている砲台は花の根のように四方八方に足を伸ばし、回転床にしっかり根を張っている。回転床周辺にある施設内。そのミナレット制御室に、フレート、ファルコ、ウルリケの姿があった。

「フェイルノートおよびカリブルヌス、第一波・第二波、正常に射出。シュトゥラ、ウラルでその威力を発揮した模様！」

ミナレットの管制班全員から「おおおおおっ！」と歓喜の声が上がる。シュトゥラに１発、ウラルにも１発と放たれたミナレットの砲撃は、両国に甚大な被害をもたらしていた。そして「フェイルノートの再装填完了」という報告が、この場の将であるフレートに告げ

られる。また別の管制官から「カリブルヌスの魔力充填も完了です」と報告が続けられた。フレートはその報告に頷き、「よし。念のために、もう一度シュトゥラへ放つ」と指示を出す。

「了解。ミナレットを８２度右旋回、目標・シュトゥラ」

「ミナレット、８２度右旋回、了解」

回転床の上に鎮座するミナレットがゴゴゴゴと轟音が立てながら旋回し、その砲口を再びシュトゥラ方面へと向けた。

「フレート団長。全行程、完了です」

「フェイルノート・・・・次弾発射カウントダウン！」

「フェイルノート、発射カウントダウン」

「フュンフ、フィーア、ドライ、ツヴァイ、アイン、発射（フォイア）！！」

フレートの指示の下、ミナレット下段の砲身から1発の砲弾が発射された。フェイルノートと呼称されていた物だ。フェイルノートは一直線にシュトゥラへと飛行。遅れて「カリブルヌス、発射！」少し遅れてフレートがそう指示を出し、ミナレット上段の砲身から青紫色の、強大かつ巨大な魔力砲が放たれた。

フェイルノートとは、魔力反射鏡砲弾とも言われる特殊な砲弾だ。目標地点まではそのまま飛行し、目標地点付近で魔力を反射する無数の鏡として炸裂し、遅れて放たれてきた魔力砲カリブルヌスを反

射し拡散、周囲一帯に無差別着弾させる。アムル上空を過ぎ去ったはずの砲撃カリブルヌスが、いくつにも分かれて戻って来たのはこの所為だった。

「さすがの魔神も、カリブルヌスを防ぐ事は出来んだろうな」

「艦載砲とは正に格が違うしな。もしカリブルヌスすらも防ぐようなら、あとはエテメンアンキだけになってしまうけど・・・」

「そこまで追いつめられるイリュリアなら、もう先が見えてしまうわ」

ウルリケは思う。どれだけ強かろうが人間相手にエテメンアンキを使わざるを得なくなった時、イリュリアの行く末はもう暗いものだと。そこに「魔神はどう動くかしら。ねぇフィーア姉様」と少女の声が管制室に響く。その少女は扉の前に居た。

肩紐の無い迷彩柄のタンクトップにホットパンツにブーツという格好で、髪は綺麗な翡翠色のショートカット。ココアブラウンの鋭い双眸を有する、風の融合騎プロトタイプ・フュンフだ。

彼女の側には、完全肩出し(ビスチェ)の白いワンピースに真っ赤な靴という格好、ふくらはぎまで伸びる髪は瑞々しい黒、茶色い双眸の少女。

ウルリケの融合騎として登録された、変換資質も無ければ攻撃魔法も有さない純粋な強化・補助に特化した機能を搭載された融合騎プロトタイプ０００４。四番騎として開発されたフィーアは、妹の問いに「わたくしはお会いした事がありませんからよく解りません」と首を横に振った。

「おそらくアムルを出て、被害の出た街に赴いて救援活動、と言ったとこだろう」

「盟友フレート。どうしてそう思うのかしら？」

「異世界人である魔神は、わざわざ無関係な戦争に首を突っ込んでいる。そんなお人好しが、被害の出た街を見捨てるはずはない」

「なるほど。じゃあもしかしたらアムルは隙だらけかもしれないな」

ファルコのその一言が、フレートの耳に残る。そして、フレートは「王都へ伝書鳥を飛ばせ」と命を下した。

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

ラキシュ領本都へ辿り着いたその時、何かが近付いて来ているのが魔力反応と風切り音で判った。空を見上げ、その何かを視認。さっきは砲線しか確認できなかったが今度は違う。ソレはガラスのような砲弾だった。その砲弾はいきなり爆散。いくつもの破片となって空に咲いた。

砲弾に遅れて、青紫色の砲撃が飛来。砲撃は空に咲いている破片に着弾し・・・四方八方に拡散した。あぁくそ。そういう事か。「シャマルっ、自立飛行！」返事を聴く前にシャマルを離す。シャマルはちゃんと自力で空を飛び、「無理はホントにダメですよッ！」と必死な忠告を言ってきた。だが、今度ばかりは無茶も無理もしなければ、ラキシュ本都が死の街と化してしまう。

「・・・今度は一体どの記憶を失うんだろうな・・・！」

――女神の祝福（コード・イドゥン）――

――女神の護盾（コード・リン）×３――

街に着弾する軌道を取っている４本の砲撃に、コード・リンとコード・イドゥンを発動。１発目をイドゥンで吸収し、間髪入れずにリンを同時に３枚展開する。吸収し続けている魔力を３枚のリンに送り続ける。胸や頭に痛みは・・・来たッ。「づっ・・・！」痛みに耐える。そこに、ピシッ、と今一番聴きたくない音が耳に届いた。見れば１枚のコード・リンにヒビが入っていた。まずい。そう思った時、

「クラールヴィント！！」

――風の護盾――

シャマルが砕け散る寸前のコード・リンに重ねるようにして風の護盾を発動。シャマルこそ無茶はするな、と言っていやりたいが・・・意識が僅かに飛んだ。

――セインテスト君はみくるちゃんと同じ、ミニスカサンタの格好ね♪――

涼宮ハルヒ・・・。女装ばかりさせられた、あの日々の恨みを忘れる日が来るとは。

――悪いな、セインテスト。アイツに機嫌損ねたらまずいんだわ――

キョン・・・、裏切り者め・・・。

――セインテスト君、女の子みたいで可愛いです～♪――

朝比奈みくる先輩・・・、君より身長が低いとはいえ俺は男だ。まぁハルヒの思いつきに振り回される一番の被害者同士、仲は良かったな。

――異世界人であり、世界に認められている正真正銘の神。いやぁ、僕は凄い方と机を並べているんですね――

古泉一樹。まぁ君とはそれなりに良い関係だったな。

――情報統合思念体は、あなたを危険視している――

――だから、危険度を測るために・・・私たちと戦ってもらうわね――

長門有希、朝倉涼子・・・。あの2人を同時に相手したのが一番キツかったなぁ。そんな良くも悪くも多くの思い出。みんなの顔が消えていく。そして理解する。また何かしらの思い出を失ったのだと。もう思い出せないが、別段困るような――どちらかと言えば忘れたかった思い出を失った感じがする。

意識が現実に戻り・・・「シャマルっ！？」倒れているシャマルへと駆け寄って抱き起こす。シャマルも彼女が着ている騎士甲冑もボロボロだ。あぁくそ。砲撃を防ぎきれなかったんだな。

「すまない、シャマル・・・・」

「・・・私は・・・大丈夫、ですから・・・そんな顔、しないで・・・・ください・・・・」

――傷つきし者（コード）に、汝（ラファエル）の癒しを――

治癒術式ラファエルを発動し、シャマルのダメージを回復させていく。ある程度回復した時、「私の事より街の人の事を」とシャマルが私を行かせようとする。しかし「家族を置いていけるかっ！」そう怒鳴り返してしまう。

「家族と言ってくれてすごく嬉しいです。ですけど今は、医者としての務めを果たしてください」

「っ・・・、シャマル、本当に大丈夫なのか・・・？」

「もちろんですっ。私は守護騎士ヴォルケンリッターー、湖の騎士シャマル。治癒と補助はお任せあれ、です♪」

明らかに無理をしているのが判るのに、もう何も言えない。シャマルをそっと横たえ直し「行ってくるよ」と告げると、シャマルは「私もすぐに追いかけます」と笑みを浮かべ、静かなる癒しを自分に

発動した。後ろ髪を引かれる思いでシャマルと別れ、火災の起きている区画を目指す。
火災地区に到着すると、そこにはすでに本都の防衛騎士団の面々が居て、消火活動や負傷者救助を行っていた。ここへ来た事情を、現場の指揮をしていた小隊長に告げ、続々と救助される負傷者の治療を開始。しばらく後、復活したシャマルも救援活動を開始した。

（一体どれだけの死者を見ただろうな・・・）

僅か30分足らずで3ケタ近い死者を見た。老若男女を問わず、砲撃によるもの、火災によるもの、瓦礫によるもの、様々な死因で亡くなってしまっていた。

「騎士オーディン！」

「？　バーガー卿！」

私の元へ駆け寄って来る1人の青年。ラキシュ領領主バーガー卿。前領主シュミット元伯爵の代わりとして、クラウスが寄越した男だ。
「わざわざお越しいただいて申し訳ありません」と謝るバーガー卿に、「ラキシュ領に住まう一員として当然だ」と告げる。
そうとも。もう私はベルカ統一戦争に一歩も二歩も踏み込んでいる。今さら無関係面など出来ない。最前線で騎士団の士気向上の為に指揮をするというバーガー卿と別れ、次の区画へ移動し、負傷者の治療を始めたところに、

『オーディン、今よろしいですか？』

『シグナムか。どうした』

『申し訳ありませんが、医療品のお届けは難しそうです』

シグナムから思念通話。その様子がおかしく、冷静さの中に焦りのようなものも見せている。シャマルにも繋がっているようで、私が訊き返す前に『どうしたの？』とそう尋ねるシャマル。それに応えたのはシグナムじゃなく、『イリュリアの侵攻です』シュリエルだった。

シュリエルによれば、シュトゥラの混乱に乗じてイリュリアの騎士団が侵攻してきたそうだ。私が居ない事を知っていたのか、それとも所在など関係ないと腹をくくって突っ込んできたか。どちらにしても侵攻して来たのは違いない。

『アムルの結界は機能しているか？』

『はい。ですが、問題はそれではないのです』

『籠城を選択した場合、イリュリア騎士団はアムルを通過して、そのままそちらへ進軍する可能性が・・・』

ハッとする。シグナムの言う通りだ。今までイリュリアはシュトゥラへ進軍するためにアムルへ来ていた。それを食い止めていたのが私やアギト、国境防衛騎士団。そして今ではシグナム達と共に作ったグラオベン・オルデン。それが今、砲撃に備えて籠城する事になったアムルへわざわざ攻撃を仕掛けるかどうかとなれば、可能性と

しては低い。

『でもそっちにオーディンが居るから、あたしらはどうしようかって話になってるんだけど』

『私の意見としては、オーディンとシャマルは救援に力を割いているかと思いますので、我々が結界外に出、迎撃に赴こうかと』

シュリエルの意見は判った。そしてシグナムの意見が『私はオーディンより結界の制御を任されていますから。ですがオーディンが許可してくだされば、制御をアンナに任せ、出陣する事も出来ます』というものだ。負傷者の治療を続けながら、２人の意見を実行させた場合の事を思い描く。シュリエルの広域攻性術式があれば、並の騎士が集まったところでまず勝てないだろうな。

『グラオベン・オルデン。イリュリア騎士団を迎撃し、侵攻を食い止めろ』

『『『『了解！』』』』』

イリュリア騎士団の事はみんなを信じ、任せよう。私とシャマルはそのまま救援活動に専念。そしてしばらく。「騎士オーディン」と私を呼ぶ声が背中に掛けられた。振り向いてみれば、そこにはクラウスの側近の青年騎士が居た。確か名は・・・

「ライナー・フレイジャー卿」

子爵の爵位を持つ騎士だ。濃い緑色の髪が風に揺れ、空色の瞳は私に向けられている。

「少し待っていてもらえないか」

「はい。もちろんです。お邪魔してすいません」

フレイジャー卿を待たせ、今取りかかっている負傷者の治療に専念する。治療をひと段落させてから、「どうかしたか？と訊くまでもないか」そう声を掛ける。フレイジャー卿は「あの砲撃の件で、議会は大慌てです」と僅かに焦りを見せている。

次の治療へと移りながら、少しばかり話を聴く。あの砲撃を受けたのはシュトゥラだけでなくウラルという国にも放たれたそうだ。ウラル。三連国バルトを構成している国で、雷帝ダールグリュンの治める国だったか。

「イリュリアと真っ向からぶつかる事が出来ていたのはバルトのみでした。ですが、貴方がシュトゥラに来て下さって、我々シュトゥラもイリュリアと戦い合えるようになりました」

「異世界人である部外者(わたし)が大きな顔をしているようで申し訳ないがな」

「そんなこと。・・・騎士オーディン。お力をお貸しください。このままではシュトゥラやウラルのみだけでなく、ベルカ全てが戦火に呑まれてしまいます」

「だろうな。あんな砲撃を続ければ、ベルカはイリュリアのものに・・・なる前に滅ぶな」

無差別砲撃を戦場ではなく民間人の住まう街に撃ち込むなど正気の沙汰じゃない。私とて全方位無差別連続砲撃・光神の調停（コード・バルドル）を、敵国の街だからと言って発動はしなかった。戦争だからと言って民間人を殺すまで行けば、それはもうなんの意義も無いただの殺戮だ。イリュリアはベルカを統一したいのだろうが、これでは統一どころか待っているのはベルカの終焉しかない。

「騎士オーディン。申し訳ありませんが、返答は出来うる限りはや――」

「考えるまでもない。イリュリアはもう放っておけない手段を選んだ。元々潰すつもりだったが、この一件でその意思はもっと強くなった」

「助かります。それでですが、王城の方へお越しいただけませんか？」

「それは無理だ。まだ多くの負傷者が待っている」

この街だけでなく、別の街にも多大な被害が出ているはずだ。王城に上がっている暇はない。だから断った。しかしフレイジャー卿は「すでに医療団を各街に派遣しています。ここ本都にもです」と引き下がらない。確かにさっきまで居なかった医療団の姿が目に入る。

「それだけでなく。結界術師団も派遣しています。どうか王城の方

へ」

「・・・・はぁ。判った。信じるぞ、君らが派遣した結界術師団とやらを」

フレイジャー卿は「はい。どうぞご安心を」自信に満ちた声色で頷いた。シャマルに『少し王城に行ってくる。ここは任せるけど、無理も無茶もしないようにな。大事な体なんだから』と思念通話を送る。

『はい。私は大丈夫ですから、安心して行って来てください♪』

明るい声が返ってきた。まったく、私の前でまで強がってほしくないな、家族なんだから。まぁそう言われてしまった以上、大人しく向かう事にしようか。とここで、フレイジャー卿はこの本都に残ると言ってきた。

近衛騎士団の隊長クラスが、医療団や結界術師団を率いて各街に派遣されて、私と会った者がフレイジャー卿のように頼みごとをするように言われたようだ。もちろんクラウスではなく、彼の父親であるシュトゥラの王デトレフからの命だそうだ。さすがに目を付けられるよな、こんなに派手に動いてしまっているから。

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

空戦形態ヘルモーズを展開し、フワリと宙に浮く。

「それではお願いします、騎士オーディン。自分はこのまま指揮官

として残留しなければならないので」

そして私は、王都ヴィレハイムへと向かう事となった。

Ｍｙｔｈｌ２遥かに古き刻に在りし騎士の末裔～Ｓｉｒ　Ｗｏｒｃｓｔｅｄ～

†††Ｓｉｄｅアギト†††

マイスターからイリュリア騎士団の迎撃を任されたあたし達は、マイスターの張った結界から出て、国境防衛騎士団と合流するために空を翔けてる最中。あたし達の住まうアムルを守るために、そしてマイスターの期待に応えるために、絶対に侵攻を食い止めないといけない。だから「シグナム」って、あたし達の先頭を飛ぶシグナムに呼びかけると、「どうした」って少し速度を落として、あたしが隣に並ぶのを待ってくれた。

「マイスターが居ない今回の戦い、絶対に負けられない」

「そうだな。この一戦は重要だ。シュトゥラの懐深くまで侵攻を許せば、今までこの地を護ってきていたオーディンと国境防衛騎士団の頑張りを無駄にしてしまう」

「うん。負けられないから、始めから出し惜しみしない方が良いと思うんだ」

「融合か？」

シグナムはそれだけで察してくれて、あたしは「うん」って頷き返す。融合しての短期決戦。マイスターが居なくても勝ってみせる。

ヴィータやザフィーラ、それに広域型のシュリエルも居てくれるんだから。
あたしとシグナムの話を聴いていたヴィータが「なあ、シュリエル。お前さ、どうしてオーディンと融合しないんだよ？」ってシュリエルに訊いた。シュリエルが目に見えてビクッと反応。脇に抱えている"闇の書"をギュッと握りしめた。

「闇の書を完成させないよう、オーディンから言われているのだ・・・。わ、私とてオーディンの役に立てるよう闇の書を完成させ、あの方と融合したいのだが」

「ふ～ん。ま、お前と融合しなくてもオーディンは十分すぎるほどに強いし、いいんじゃね」

「むぅ。しかし融合騎としての私の存在意義を思えば、やはりは・・・」

「シュリエル。お前の実力は確かだ。我が主と融合し戦力としての数を減らすよりは、融合せずにいた方が助かる。それと、お前は単なる融合騎ではない。忘れるな。我らは主の平穏を守る家族だ。そして共に戦う戦友。お前の存在意義は、融合騎ではなく、主を支える者・支天の翼のシュリエルリートだ」

今までずっと黙っていたザフィーラがそう言うと、シグナムは「そうだな」って微笑んで、ヴィータは「良いこと言うじゃん、ザフィーラ」って大きく笑う。そうだよね。シュリエルはあたしと違って、単独でも十分強いし。

俯いてしまっていると、「お前はお前だ、アギト」ってシグナムはあたしの頭を撫でた。シグナムの言いたい事は判るから「ありがと」お礼を言う。あたしはシュリエルよりずっと弱い。それでもいい。オーディンとみんなの家族として戦友として、そしてシュリエルには出来ない融合騎としてのあたしを貫けばいいんだ。

「すでに交戦しているな。急ごう」

「「「応っ」」」

あたし達は拳を突き合わせてすぐ散開して、激しい戦域に突っ込む。参戦する前にシグナムと融合。あたしはシグナムの内で、シグナムの力となるために・・・闘志を燃やす。

『行こう、シグナム。相手が誰であれ勝つ』

『ああ。もちろんだ・・・！』

†††Ｓｉｄｅアギト⇒ヴィータ†††

――テートリヒ・シュラーク――

「うぉぉおおおおらぁぁあああああッッ！！」

"アイゼン"で１０人目のイリュリア騎士の鎧を粉砕、吹っ飛ばす。コイツら、今まで戦ってきたイリュリア騎士団の連中とそんな大差ねぇ実力だ。戦船も無いし、こりゃオーディンが居たら速攻で終わ

ってたな、この戦い。
"アイゼン"をブン回し「おらおらぁッ！　鉄槌の騎士のお通りだぞっ！」連中に突貫する。吹っ飛ばして、吹っ飛ばして、吹っ飛ばして、吹っ飛ばし続ける。これならすぐに終わりそうだ。

「と思ったところに出てくんだよな、テメェらみたいなヤバい奴らってのが」

青色の甲冑で統制された騎士が、さっきまで相手にしていた連中の合間に少しずつだけど現れ始めて、徐々に数を増やしていく。手に持ってんのは剣や槍とかの武器じゃなくて鏡の様なデカイ盾。

（アレで何すんだ？　盾であたしを押し潰して制圧でもすんのか？）

とりあえず様子見か。具現した鉄球４つに魔力を纏わせて、「いっけぇッ！」"アイゼン"で打ち出す。

――シュワルベフリーゲン――

フリーゲンは真っ直ぐ青騎士たちへ真っ直ぐ飛んで行って、ソイツらは盾に隠れるようにして身構えた。着弾はしたんだが、フリーゲンは炸裂する事なく反射されて、あたしのとこにまで戻ってきやがった。結構、衝撃だったな。フリーゲンには障壁貫通の効果もあったんだけど、効果を発揮しなかった。跳ね返って来たフリーゲンをまた"アイゼン"で打ち返す。また連中の盾に着弾するまでの間に、"アイゼン"をカートリッジを1発ロードして、ラケーテンフォルムへ変形させる。

「ラケーテン・・・！」

ヘッドのブースターを点火、その場で高速回転して、「ハンマァァーーーーッッ！！」突撃する。標的は青騎士の1人。フリーゲンで突破できねぇなら、ラケーテンでその脆そうな鏡の盾をブチ貫いてやるまでだ。盾と"アイゼン"が衝突する。ただの盾じゃねぇと思ってたけど、まさか「ヒビ1つ入らねぇだと！？」粉砕できねぇなんて。

「ざけんなッ！　鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼンに、破壊出来ねぇものなんて無ぇッ！」

さらに力を込める。でも一対一じゃないのが現状だ。周囲に殺気立ってる青騎士たちや他の連中が居る。結局、鏡の盾を破壊せず（出来なかったとも言うけど）に、標的にした青騎士を吹っ飛ばすだけになった。足腰が弱い。

そんなんで「あたしを討てると思うなよッ！」突っ込んできた騎士の武器をぶっ壊して、一回転して胴体に一撃入れて吹っ飛ばす。それを繰り返して、青騎士以外の騎士を蹂躙して行く。クソ、やり辛いな、コイツら。

「はぁはぁはぁ・・・」

「疲労を見せているぞ。制圧しろ」

一斉に青騎士たちが鏡の盾を構えて、あたしに突撃してきた。防御

力に関しちゃ今までの奴ら以上だ。それは武器の性能だけど、それでもソイツらの実力のうちだ。あたしは空へと上がる。空戦の出来る騎士はかなり少ない。だから空に上がっちまえば、一時的な退避場になる。
思わず「チッ」舌打ちしちまう。これは逃げだ。守護騎士ヴォルケンリッターの鉄槌の騎士のあたしが、グラオベン・オルデンの一員であるこのあたしが、退避なんて手段を取るなんて。

「んあ？　なんだ・・・？」

怒りをぶつける前に、青騎士たちが鏡の盾にいろんな角度を付けて隊列を組んだ。

――ツァオバー・ゲショス――

どこからともなく金色の魔力弾が数発飛んできた。直接あたしを狙った魔力弾が2。それは直線軌道だったから簡単に回避。そして連中の鏡の盾に向かって9。その9つの魔力弾は盾に反射して、バラバラな軌道であたしに飛んできた。
なるほどな。敵の攻撃を反射するだけじゃねぇってわけだ。味方の攻撃をも反射して多角攻撃をする事も出来るってか。魔力弾を回避しながら、青騎士たちをどう倒そうかと考えを巡らせる。まぁそんな中でも鏡の盾を使った多角攻撃が続けられるわけだ。

「メンドクセぇなぁもうっ！」

襲ってくる魔力弾を回避し続ける。コイツらを放置する事も出来る

けど、それは完全な逃げ。出来ねぇ真似だ。ラケーテンでもダメってんなら、しゃあねぇ。"アイゼン"のカートリッジを2発ロードして、ギガントフォルムに変形させる。すぐさま消費しきったカートリッジを装填。再ロード。サイズを大きくした鉄球を具現。

「こいつでどうだっ！」

――コメートフリーゲン――

単発だけど、その威力は折り紙つきのコメートフリーゲンを打ち出す。馬鹿みたいに魔力を消費しちまうけど、「はっ、見たかっ」直撃を受けた鏡の盾を粉砕してやった。着弾時の爆風と炸裂した破片で、周囲に居た青騎士たちにもダメージを与えた。甲冑は他のと同じ硬度なわけだな。それが判れば、あとはもうこっちのもんだぜ。

――フェアーテ――

両脚に魔力の渦を発生させる。効果は高速移動だ。

――ツァオバー・ゲショス――

直接・間接と迫って来る魔力弾を回避しつつ地上へ最接近。青騎士たちへ突っ込む。鏡の盾に固執しなけりゃどうってことはねぇはずだ。"アイゼン"をハンマーフォルムに戻して、シュワルベフリーゲンを打ち出す。標的にした青騎士は盾と構えた。よし。あとは・・・・

「しまった！」

「遅ぇよっ！」

そんな重そうなデカイ盾、速度にものを言わして背後に回り込んじまえばいいだけだ。シュワルベフリーゲンに対処しなけりゃいけないソイツは、なんとかフリーゲンを反射防御する事には成功。だけど、あたしの接近に対応できないだけの隙を生み出す結果になった。ギリギリで反転が間に合うかどうかってところであたしは"アイゼン"を振るって、ソイツの横っ腹に打ち込んで鎧を粉砕、「おおおらぁぁぁあああッ！」勢いに任せて吹っ飛ばす。

「次っ！」

「調子に乗るな、小娘ぇぇーーーーッ！！」

ここで、青騎士たちが剣とかの武器を装備した。あたしが一番望む展開だ。デカイ鏡の盾の防御力が最大の厄介の種だった。なのに怒りに任せて鏡の盾を退かして武器を装備。

「（そいつは自殺行為だっつうの）来いよ、経験の差ってぇのをその身に刻んでやらぁっ！」

見た目はまぁガキなあたしだけど、戦歴ならそこらの騎士よりはるかに長い。その経験の差ってぇのを見せてやる。"アイゼン"を肩に担いで、前面に魔力球を4基展開。「掛かれぇぇーーッ！」って指示が出されて、青騎士たちは盾を放っぽって突撃してきた。

――シュワルベフリーゲン――

魔力球を"アイゼン"で打ち出す。青騎士たちに面白いほどに着弾して行く。ほらな、盾があってこそのテメェらの強さなんだよ。「次っ！」3人目の青騎士を吹っ飛ばす。ここまでやられりゃ向こうも思い知る。また鏡の盾を装備した。あ～あ、あたしの無双時間はここまでか。

――シュランゲバイセン――

そんなところに鞭のような連結刃が、あたしの周りに居る青騎士たちに襲いかかった。完全に油断――じゃねぇな。あたしに集中し過ぎていたせいで気配を察知する事が遅れたんだろうな。成す術なく直撃を喰らって鎧を切断されて、血を撒き散らしながら倒れ伏していく青騎士たち。

シグナムと話をする前に、またどっかからか魔力弾が飛んできた。3つはシグナム、2つはあたしに。シグナムは"レヴァンティン"をシュベルトフォルムに戻して、「破っ！」魔力弾を切断。あたしはフリーゲンの要領で、「おら、戻っとけっ！」魔力弾を"アイゼン"で打ち返す。

「で？　なんであたしんとこに来たんだよ」

「特に理由は無いな。ザフィーラとシュリエルは別段心配する必要はない。ならば――」

「んだよ、それ。あたし1人じゃ心配ってか？」

あたしだって単独で十分やれてんじゃんかよ。見てみろよ、周囲に倒れてる騎士たちをさ。シグナムは「いや。お前の事もさほど心配していない。が」って言って、"レヴァンティン"の剣先をある方向に向けた。

剣先の方に視線を移す。そこには、いつの間にここまで近づいて来ていたのか判んなかったけど、派手な桃色の髪をした男が1人佇んでいた。青を基調とした、あたしらと同じ衣服型の騎士甲冑。武装は、持ってないな。ザフィーラやシュリエルのような格闘型の騎士か・・・？

「前線の防衛騎士の者から連絡があってな。この侵攻部隊の指揮官がこちらへと向かっている、と」

「アイツか・・・・確かに今まで相手にしてきた奴とは違うな」

あたしらを包囲していた青騎士たちは口々に「団長！」って歓喜する。団長って呼ばれてるソイツは「はじめまして。グラオベン・オルデンの騎士方」ってあたしらに向かって一礼。

「僕は、強暴なる氷盾騎士団（アムレット・オルデン）の団長・ゲルト・ヴォルクステッドと言います。此度の侵攻の総指揮を、イリュリア騎士団総長グレゴール閣下から任されています」

ゲルト・ヴォルクステッド。オーディンから聞いていた名前だ。派手な桃色髪、確かに派手だ。にしても礼儀正しい奴だな、こんな命

のやり取りをしてる戦場の中だっつうのに。調子が狂うなぁ、って思っているところに、シグナムと融合してるアギトから『気を付けて、シグナム、ヴィータ』って思念通話を送って来た。
シグナムと2人して、心配するな、って応えておく。オーディンからゲルトの話を聴いた時に、アギトからも詳しい事を聴いた。ゲルト・ヴォルクステッド。コイツは氷結の魔導を得意とする騎士で、部下の青騎士たちが武装してる鏡の盾を、魔導もしくは能力として発動する事が出来る。オーディンの話じゃ能力の方が可能性大って事だ。能力なら魔力を消費しないから、魔力切れを狙うって事は出来ねぇ。

「ゼクスお姉ちゃん。久しぶりだね、フフ」

アギトからのもう1つの情報にあったソイツが居た。真っ白な髪は腰くらいまであって、水色の目はツリ目。腰の辺りからは白い翼が一対。表情は・・・正直、狂気って言葉が合うような笑みを浮かべてやがる。
アギトが、『ズィーベン・・・。フュンフにも言ったけど、あたしの名前はアギトだ。ゼクスじゃない』ってズィーベンに言い放った。融合騎プロトタイプの末妹・氷の七番騎ズィーベン。氷結の魔導に特化していながら、炎熱のアギトに勝つ奴。だけど・・・・

「そうなの？　そっか。うん、じゃあアギトお姉ちゃん。わたしね、アギトお姉ちゃんを壊せって言われたのね。だからねアギトお姉ちゃん。今日、ここでね、わたしに壊されちゃってよね♪」

「ごめん、六番騎アギト。そういうわけだから、君を、破壊するよ」

ゲルトとズィーベンが融合する。シグナムとアギトが融合したような姿になって、背中から冷気の翼を三対展開した。だけど、ゲルトっつうのは残念ながらシグナムとアギトの相手じゃねぇ。融合した姿を見りゃ一目瞭然だ。

『あたしは死なない。ズィーベン。イリュリアに居た時、あたしはお前に負けっぱなしだった。でも、もうその記録はここで終わる。今度は、あたしがお前に敗北を与えてやる』

ああ、そうさ。もうアギトはゼクスじゃない。アギトの言葉を聴いたズィーベンから『うん、いいよ。じゃあどっちが先に壊れちゃうか、フフ、試してみようね♪』っつう心底戦うのが好きって感じ取れるような思念通話が送られてきた。

「ヴィータ。ここは私とアギトで抑える。お前は――」

「判ってんよ。別んところでイリュリア騎士をブッ潰してくる。でも、引き受けるんだから負けたら承知しねぇぞ、シグナム、アギト」

『大丈夫。向こうの融合は、あたしとシグナムのように上手くいってないから』

「たとえ上手くいっていたとしても、元より負けるつもりはないがな」

そりゃそうだ。ゲルトとズィーベンの事はシグナムとアギトに任せ

る事にして、あたしは別の地点でイリュリア騎士を相手にするためにそっから離れた。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒シグナム†††

ＶＳ―○―○―○―○―○―○―○―○―○

其は強暴なる氷結騎士ゲルト＆ズィーベン

○―○―○―○―○―○―○―○―○―○ＶＳ

私とアギトが対峙するのは、此度の侵攻を指揮する男、ゲルト・ヴォルクステッド。アギトの妹に当たると言うズィーベンと融合を果たし、その姿を大きく変えている。髪は派手な桃色ではなく、桃色がかった白へ。瞳は灰色から完全に水色へ。

ゲルトは完全にズィーベンに呑まれている。姿がズィーベン寄りになっているのが良い証拠だ。融合騎。名の通り術者（ロード）と融合する事で、術者に圧倒的な力を与える事が出来る者だ。しかし、他の魔導端末――私のレヴァンティンやヴィータのグラーフアイゼンなど――とは違い、適性と言うものが必要となってくる。

その適性が無ければ、

『さぁ行くよ、アギトお姉ちゃん！　どこまでもつか、見せてよね♪』

術者は融合騎に意識を乗っ取られてしまう。融合事故。ゲルトが良い例だ。融合中の外見によって、その融合が上手く制御されているかどうかのレベルが判る。今のゲルトは、ズィーベンに全てを乗っ取られているはずだ。哀れだが、しかし腑に落ちん。なぜゲルトは

ズィーベンとの融合を承諾した、か。乗っ取られるのを知っていたのか否か。どちらにしろ今の私に出来る事は、ズィーベンもろともゲルトを討つのみだ。

――ヴァイゼ・シュピーゲル――

ゲルトの周囲に、鏡の盾が１３枚と現れた。それらが一斉に動き出し、６枚はそのまま、残り７枚が私を包囲するかのように配置された。ふむ。相手の攻撃を反射し、その上防御力も高い・・・それが武装としての鏡の盾だったが。オーディンから聞いた限りだと、ゲルトの創り出した鏡の盾は転移も可能との事だったな。全ては鏡の盾の面が基点になる、とも。ならば『行くぞ、アギト』と私の内に居るアギトに声を掛ける。

『うんっ。猛れ、炎熱！』

――烈火刃――

アギトによって生み出された炎が"レヴァンティン"の刀身を包み込む。オーディンの武装・"エヴェストルム"の機能試験のために、オーディンと戦ったあの日。互いに全力ではなく勝敗がつかなかったとは言え、私はまだまだ上が居る事を思い知った。魔導では負けようとも剣ならば。ゆえにあの日より、私はある想定をして剣と魔導を磨いた。そう、対オーディン。魔導有りでのオーディンとの戦闘では、どのような戦術を、魔導を組み立てればまともに戦い合えるか。それらを常日頃考えていた。

「（1つ目の答えが、この一撃だ！）行くぞッ！」

"レヴァンティン"をシュランゲフォルムとし、

――煌竜――

火炎を纏ったシュランゲバイセン――煌竜を放つ。狙うは鏡の盾の面ではなく薄い側面。面が全ての効果の基点ならば、その効果が出ないであろう側面に攻撃を加えて、粉砕する。"レヴァンティン"の剣先は真っ直ぐゲルトの周囲に在る鏡の盾へと向かう。

ゲルトではなくズィーベンから『おお、火だね♪　アギトお姉ちゃんの炎だね♪』と思念通話が送られてくる。鏡の盾が即座に動き、煌竜の行く手を拒もうと立ち塞がる。動きは早い。が、連携は下手だ。本来はゲルトの魔導か能力。それをズィーベンが扱っているのだ。当然の結果か。

「甘い！」

煌竜の軌道を変更。側面をギリギリ斬りつけるようにして鏡の盾を再襲撃。想定通り鏡の盾を真横から斬り裂き、その1枚を粉砕する事に成功した。そのままゲルトへ剣先を突き進めようとしたところで、

――ツァオバー・ゲショス――

ゲルトを護るよう鏡の盾が移動。そして放たれる魔力弾が五基。それらが私ではなく、私の後方に控えていた鏡の盾へと向かう。反射

させて私を背後から襲うつもりだろう。一時ゲルトへの攻撃を中断し、その場で半回転しつつ"レヴァンティン"を振るい、

――シュランゲバイセン・フェアタイディグング――

螺旋状の軌道で高速回転する"レヴァンティン"による剣刃結界を展開。反射してきた魔力弾が剣刃結界に拒まれる。ここで私はシュベルトフォルムへと戻す。半回転しつつ、"レヴァンティン"を背後に向けて振るう。

――シュテルメン・リッターー――

私の背後に配置されていた鏡の盾から現れたゲルトの迎撃のためだ。転移。見た目からしてシャマルの旅の鏡のようなものだな。オーディンから聞いていなければ、反応が遅れていたかもしれん。ゲルトに一撃入るかどうかというところで、私とゲルトの間に盾が割って入る。剣先が盾に触れる。しかし盾に触れた衝撃は伝わって来ず、代わりに「っ！？」"レヴァンティン"が盾に呑まれる。

『フフ♪　もう逃げられないよ、アギトお姉ちゃんのロード』

徐々にズブズブと呑まれていく。逃れようと腕を引いてもビクともしない。

『大人しく呑まれた方が賢明なの』

ズィーベンの笑い声が頭の中に響いてくる。そんな中、ゲルトの足

元に白く光るベルカ魔法陣が展開された。魔導発動の証だ。この状態では回避は出来んし、魔導の種類によっては防御も難しいだろう。仕方ない。

『アギト。覚悟は良いか？』

内に居るアギトに訊くと、『ただ転移されるだけだからきっと大丈夫、なはず』という少し弱々しい返答。抵抗を止め、自ら鏡の盾に突入する。視界が一瞬真っ白に染まり、気が付けばそこは空の上。頭上には1枚の鏡の盾。地上からその鏡へと転移させられたようだ。

『シグナムっ、下！』

――ウンオルドヌング・ゲヴァルト――

幾つも展開された鏡の盾に反射された無数の光線が、私に向かって飛来してきた。地上より行動範囲が広くなった空。容易く避けられる。が、それにしても「数が減らんな」嘆息する。回避したは良いが、回避した光線は別の盾によって反射され、改めて私を討とうと戻って来る。迎撃しかないようだ。カートリッジを1発ロードし、刀身に炎を纏わせる。

――紫電一閃――

迫る光線を斬り屠っていく。アギトが『さすが剣の騎士』と称賛を送ってくれた。それに礼を告げ、鏡の盾の破壊に移ろうとした時、1枚の盾よりゲルトが出現した。手には一振りの大鎌。奴の武装の

ようだ。カートリッジを1発ロードし、

――零斬風――

冷気の斬撃を放ってきた。面白い。こちらも"レヴァンティン"を振り払い、

――シュトゥルムヴィンデ――

衝撃波を放ち、相殺する。そのまま互いを斬り払おうと接近。ゲルトの武装は長柄の大鎌。攻撃範囲で言えば向こうの方が広い。が、その優位性など崩してくれる。振るわれる大鎌を捌き、一撃を入れようとした時に、またもや鏡の盾が邪魔に入ってきた。二度も同じ手を食うか。今度は面ではなく、軌道をギリギリで変え、側面から盾を一閃し粉砕する。

『居ない！？』

「どこかの盾に転移したか・・・！」

周囲を見回すが、ゲルトの姿を確認できない。

――アイス・ランツェ――

全ての鏡の盾から氷の礫が飛来してきた。先程の光線よりかは速度も威力も無いゆえに容易く迎撃が出来る。迎撃している間にもゲルトの奇襲に備え警戒しているのだが、なかなか姿を現さない。この

まま私とアギトを空に留めておくつもりか？　その間に地上を。とも考えられるな。
一度降りた方が良いのかもしれん。だが、『行っちゃヤ♪』ズィーベンの思念通話。ようやく姿を現したか、ゲルト。盾から盾へと転移を繰り返しながらこちらへ向かってくる。その間にも、

――ツァオバー・ゲショス――

魔力弾を放ち、鏡の盾に反射させての多角攻撃。それに対しパンツァーシルトを展開し、魔力弾を防御し消滅させる。下手に"レヴァンティン"を使って迎撃すれば、その隙を突いて来るかもしれんからな。ここで待ち構えていてもいいが、常の後手に回るのも癪だな。とりあえず側に近付いて来た盾を粉砕する。こちらも動き、盾を次々と粉砕して行く。その途中で、

『もうっ、新しく作るの大変なんだよね、ヴァイゼ・シュピーゲル！　判ってるっ？』

ヴァイゼ・シュピーゲルという名らしい鏡を破壊していると、ズィーベンから不機嫌丸出しな思念通話が送られてきた。

『んべー。壊されるのが嫌だったら止めてみろ、ズィーベン！』

『ぅくく・・・アギトお姉ちゃん・・・こんの・・・！』

大鎌のカートリッジが3発とロードされた。大技を使うつもりのようだ。こちらも大技覚悟で装填されている残りのカートリッジをロ

ードする。対オーディンの為に組んだ魔導その２。『これで決まれば良いんだけど』とアギトが言う。私としてもその方が良いが、おそらくこれで決まるとは思えんな。直接、斬らねばなるまい。ゲルトの周囲に今までに無い程の鏡の盾が出現した。数は・・・・２６枚、か。

「ごふっ・・・！」

『ゲルト！？　んもう、使えないロードね、しっかりしてよね』

ゲルトが吐血しようとも容赦なく叱咤するズィーベン。ゲルトは袖口で口端から流れる血を拭い去った。

『それでいいよ、ゲルト。仮とは言え、さすがわたしのロードね　』

『ズィーベン、お前・・・！』

アギトの怒りはもっともだ。しかしズィーベンは無視。融合騎（ズィーベン）の操り人形と化したゲルトはそれらに向けて、冷気の光線を無数に放った。回避も防御も出来ない程の圧倒的物量による多角攻撃でもする気か。光線は盾を幾度も反射しているが、一向に私に向いて来ない。別の攻撃手段を取るようだ。

『シグナム、いつでも行けるよっ！』

アギトからの合図に『ああ』と応え、左手に火炎の剣を生み出す。アギトとの融合時でのみ発動出来る、この魔導。アギトの炎熱加速、

そして私と"レヴァンティン"の炎熱変換があって行える一撃だ。剣の騎士シグナムと炎の融合騎アギトの烈火の一撃、受けてみろゲルト、ズィーベン。

『剣閃烈火！』『真技！』

アギトとズィーベンの言葉が重なる。左手の炎剣を振りかぶり攻撃態勢に入る。ゲルトの前に1枚の鏡の盾が配置された。そして、周囲を飛びかっていた光線すべてが反射されず転移を行った。

「『火龍一閃！！』」

『エクリプセ・ハルモニーっ！！』

全てを薙ぎ払うように炎剣――火龍一閃を横一線に振るう。転移された光線はゲルトの前面に配置された鏡の盾より集束された状態で、光線ではなく砲撃として発射された。冷気の大砲撃と火炎の大斬撃。相性で言えば、我々の火炎の方が有利だろうが。油断できぬのが目の前のズィーベン。一切合切の余裕や油断はおそらく命取りになる。

「『おおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！』」

『消えろぉぉぉぉーーーーーーーーーーッッ！！』

衝突し、互いを喰い合おうと我々の間で拮抗している。アギトが『やっぱりズィーベンの氷結は強力だよ』と過去を思い出しているのか気弱な事を言う。ああ、そうだな。ここまで強化した火炎と拮抗

できる冷気など聞いて事がない。
しかし・・これ以上この場に留まるのも危ういな。向こうは鏡からの盾からの攻撃ゆえに術後も移動は可能だろう。仕方ないな。火龍一閃を撃ち終え、その場からすぐに離脱する。それとほぼ同時に2つの攻撃が大爆発を起こし、煙幕が周囲一帯を覆い隠す。

――シュテルメン・リッターー――

突如として背後に気配が現れたのを察知。やはり来たか、と驚くにも値しない。とは言え、見ずに下手に攻撃を加え、鏡の盾に呑まれて強制転移と言うのも避けたい。仕方なくその場から前へと離れる。離脱の中、振り向きざまに横目でその場を見ると、確かにそこにはゲルトが居た。大鎌を振り抜いた姿で、だ。むぅ、選択を誤ったか。振り向きざまの一撃を入れていれば決まっていたかもしれん。

『あん、外しちゃったみたいだね』

――ウンオルドヌング・ゲヴァルト――

鏡の盾に反射する光線が私に殺到する。パンツァーシルトで防御し、途切れたところでゲルトへ突撃。するとズィーベンは『こっち来ないでよねっ』とさらに大鎌のカートリッジを何度もロードし、魔力弾をバラ撒いて盾に反射させて襲撃させてきた。
こちらも再装填したカートリッジを1発ロード。『アギト、頼みがある』と言うと、『何でもやるよ、シグナム』と快諾。私の考えた手を話すと、アギトは『難しいけど、やってみる』と少し不安そうだったが、賛同してくれた。

『では頼むぞ、アギト』

『シグナムもちゃんと決めてよ』

『任せろ』

ここで私とアギトは融合を解除し、散開した。ズィーベンが『え？　融合解除？　投降するの？』と訊いてきた。それに対しアギトが「違うよ、ズィーベン。お前を倒すための一手だ」と告げる。

『わたしを倒す？　フフ、無駄だね。融合状態のわたしとゲルトを相手に、融合解除したアギトお姉ちゃんとそのロードが勝てるなんて思ってないよね？』

「勝つ！　守りたいものを守るため、救いたいものを救うため。その信念に集うグラオベン・オルデンの騎士に、敗北は無いんだから！」

――スターレンゲホイル――

アギトから放たれる魔導スターレンゲホイル。アギトがオーディンと共に過ごし始めてから組んだ魔導なため、効果を知らないズィーベンはそれを攻撃と考えたようで鏡の盾を配置した。ゲルトや盾との距離はおよそ２０ｍほど。まぁそのくらいの距離であれば、効果はそれほど落ちないはずだ。

私はスターレンゲホイルが盾に着弾するギリギリで目を閉じ、耳も塞いだ。直後、閉じたまぶたの向こうが明るくなり、塞いでいる耳

にも轟音が届いた。なんの防御策も無く、閃光と轟音で周囲の対象の視覚と聴覚を麻痺させるスターレンゲホイルの効果の直撃を受ければ、感覚に大打撃を被る事になるだろう。

「レヴァンティン」

具現させた鞘を"レヴァンティン"の柄頭に連結し、カートリッジを1発ロード。"レヴァンティン"は剣の形態シュベルトフォルムから大型弓の形態ボーゲンフォルムへと姿を変える。魔力弦を引き絞り、"レヴァンティン"の刀身の一部を流用した槍の如き矢を番える。

『見えない！　聞こえない！　ヴァイゼ・シュピーゲル、自動防御！！』

案の定スターレンゲホイルが攻撃だと勘違いしたズィーベンは視覚と聴覚を一時的とは言え麻痺に襲われ、慌てふためきつつ、鏡の盾を自動で防御するよう指示を出した。ここでアギトが「フランメ・ドルヒ！」火炎の短剣を10基と放ち、それに反応した全ての盾が一斉にゲルトより離れる。射線確保。弓本体の上下にあるカートリッジスロットが1発ずつロードを行う。これで終わりだ。ズィーベン。

「翔けよ、隼！！」

≪Ｓｔｕｒｍ　Ｆａｌｋｅｎ≫

矢――シュツルムファルケンを射る。ファルケンは一直線に突き進

み、

『あが・・・っ！？』

ゲルトを貫き、そのまま貫通して後方へと飛んで行き爆散した。確実に致命傷。腹に大きな穴を開けたゲルトは力なく落下し始める。ズィーベンに意識を乗っ取られ、最期まで自分の意思で戦う事の出来なかったゲルトへ向け「恨むのなら恨んでくれても構わない。こちらも必死なのだから」そう告げる。落下の途中、ゲルトの体からズィーベンが勢いよく飛び出してきた。

「こんの役立たず！　何が自動防御！？　あっさりかわされて負けてるじゃない！」

今まで好き勝手操ってきたロードたるゲルトに掛ける言葉は、最後の最後まで辛辣なものだった。ズィーベンは「アギトお姉ちゃん！　今度はもっとマシなロードを連れてくるからねっ！」と言い、この場から退却しようとアギトに背を向けた。

『シグナム。ここからはあたしたち融合騎の問題だから――』

『判っている。手は出さん。好きにやれ』

『・・・・ありがとう、シグナム』

アギトがズィーベンへと突撃して行く。その形相は怒りに満ち、止められる雰囲気ではなかった。もちろんそんな雰囲気が無くとも止

める気など毛頭ない。アギトが行かなければ私が向かっていたところだ。
融合騎ズィーベン。アレは好き勝手にやり過ぎた。その果てに敗北の責任をゲルトに押し付けた。あれではどのような者がロードになろうと結果は変わらん。術者と融合騎。その関係があそこまで崩れている間は、私とアギトに勝つなど決して出来ん。

「ズィーベン！」

――フランメ・ドルヒ――

「アギトお姉ちゃん！？」

――パンツァーシルト――

「お前はもうここでちゃんと倒しておく！」

「っ！　フフ、いいよ、イリュリアの時みたくメチャクチャにしてあげ――」

「煉拳！」

「あぐっ！？」

火炎を纏わせた拳打をズィーベンの横っ面に叩きこんだアギト。ズィーベンは何が起きたのかさえも判らないと言った風な顔で、直撃を受けて吹っ飛んだ。宙で体勢を立て直したズィーベンは殴られた

右頬に手を添え、フルフル震えだし、涙目になって行き、終いには嗚咽も漏らし始めた。

「今はもう六番騎(ゼクス)じゃないけど、でも、だけど、お前の姉として、七番騎(おまえ)をもう放っておけない。融合騎は、ロードと一緒に戦うものなんだ。それを忘れて操って、最後には役立たずなんて言うお前は、融合騎じゃない」

姉のアギトが人差し指を突きつけ、妹ズィーベンを糾弾する。

「・・・のくせ・・・」

「なに？」

「うらぎ・・・に・・・」

ズィーベンは俯き、両拳をグッと握り締め、何かを呟いている。そして背に在る一対の翼から冷気が溢れだす。まずい。そう思い、すぐさまアギトの元へ急ぐ。

「わたしを見捨てて裏切り者になったくせに！！」

――氷牙――

我々の頭上に巨大な氷塊が創り出される。顔を上げたズィーベンは「フヒ、ヒヒ、融合騎の在り方とか、もうどうでもいいよね？」涙を流し、泣き笑いの表情を浮かべる。だがすぐにハッとし、涙を拭

い去った後で氷塊を破棄、破砕した。

「ズィーベン・・・？」

「・・・わたしも、もう裏切り者みたいだしね・・・」

「なに？　聞こえないよ、ズィーベン！」

「・・・・わたしたち融合騎を造った奴らは、親のようなものだって解るよ・・・。だから言われた事は聴いてきた。でもね、だからって、わたしだって生きてるんだ。アギトお姉ちゃん。解るよね？　アギトお姉ちゃんが一番酷い目に遭っていたんだもんね？」

「そうだけど・・・でも・・・」

「ムリばっかり言われた三番騎（ドライ）お姉ちゃんは壊れて廃棄された。一番優しくて、温かくて、わたしやアギトお姉ちゃんにも優しかったのに」

「・・・・うん・・・・」

「だから許さない。イリュリアの人間は全員敵。でもわたしが生きるにはイリュリアが必要なのね。だから利用する。ゲルトはその1人。今はイリュリアの言う事を聴いて、いつかは・・・って思っていたんだけどね・・・」

ズィーベンの表情に陰りが生まれる。そして「わたしね、廃棄され

るんだって」と自嘲気味に告げた。ズィーベンは続ける。ゲルト・ヴォルクステッドの件で危険思考の持ち主と判断され、たった今廃棄処分されると思念通話が来たのだそうだ。「ど、どうするんだよズィーベン！」と焦りを見せるアギトだが、対するズィーベンはただ「ここまでみたいだね」と嘆息するのみ。

「あ、諦めるのか・・・！？」

「だって・・・わたしを潰しに来るのが、かなり危ない奴ってね。アギトお姉ちゃんだって噂で聞いたことあるよね？　超古代の技術の一部を使った新兵器が、技術部で造るられてるって話・・・」

「えっと・・・テウタの為の融合騎開発と並行して進められてるっていうアレ？」

「うん。アレ噂じゃなくて本当だったのね。でね、その試作機の一機が、試験運用の名目でわたしを破壊しに来るんだって」

「じゃあ逃げろよっ。勝てないなら逃げれば――」

「逃げられるわけないって、アギトお姉ちゃんだって解ってるよね」

「解ってるけど！　でもだからってお前を見捨てるなんて出来ない！」

「フフ♪　アギトお姉ちゃんを壊そうとしたわたしを見捨てないなんて。どこまでお人好しになっちゃったの？」

ズィーベンが満面の笑みを浮かべた。しかし「悔しいけど、でももう諦めるね」とズィーベンはアギトに背を向け、地上を見下ろす。私とアギトもそれに倣い、地上を見下ろす。今なお続いている戦闘。一人一人の顔など識別できないが、ヴィータ達の居場所くらいは感知できる。

「ん・・・？」

イリュリア方面より強大な魔力が近付いて来るのが判る。砲撃ではない。地上を移動している。目を凝らすもののやはり見分けがつかんな。「来た」とズィーベンが言う。どうやらこの魔力反応が、ズィーベンの言う兵器らしいな。

うんうん唸っていたアギトが「そ、そうだ！　ズィーベン、シュトゥラに来ればいいよ！」そう提言した。オーディンなら招き入れそうだが。しかしズィーベンを受け入れた場合、グラオベン・オルデンの動きに乱れが生まれるかもしれん。

「イリュリアの敵になるんだったら、あたし達の味方になるって事だもん！　マイスターだって助けを求める人が居れば、絶対に助けるし救うはず！　だから！」

ズィーベンは少し考える仕草を見せ、そして・・・・

「わたしは――」

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒ザフィーラ†††

「どうやら空での闘いは終わったようだな」

シグナムとアギト、そして氷結の騎士（シグナムらと渡り合うとなると団長級の騎士だろう）の戦闘の終結を、地上でイリュリア騎士を討ちつつ確認した。

「くそっ。何なんだ、この理不尽な防御力は！？」

「我は盾の守護獣ザフィーラ。かような温い一撃など、我が盾の前には無意味と知れ」

――守護の拳――

「おごぉっ！？」

また1人の騎士の甲冑を粉砕し、殴り飛ばす。あまりに単純な作業と化し、少々物足りなくなってきてしまった。いや、そのような事を思うのはいかんな。戦を好むなど、我が主の信念に連なる者として許せん。

「む？　なんだ、この魔力は・・・？」

徐々にこの戦域に接近してくる魔力反応を感知。今まで戦場で相見えた敵性騎士より確実に上だ。最大警戒で待ち構えている間、周囲に居るイリュリア騎士が次々と離れていく。奇襲の心配をせずに済むのは助かるが、その分これより来るイリュリア騎士の実力の程が判る。

巻き込まれるのを恐れているのだろう。離れていく者たちの顔色は青褪めている。そして、ようやく姿を視認できるほどまでにその者が接近してきた。性別は男。歳は、おそらく青年と呼べるほどに若いだろう。

「イリュリアの新手か・・・・？」

「・・・・なあ、アンタ、これくらいの小さいチビ、見てないかい？」

その者は、両手の平を上下に向かい合わせ、我にそう尋ねた。アギトほどのものだろう。この者の狙いは、裏切りの融合騎アギトか・・？

その問いに対して我は「知らぬな」と簡潔に答える。するとその者は「そうかい。邪魔したな」と背を向けようとした。我を討つつもりはない、ということか？　しかし正確な目的が判らぬが、アギトにとって危険であると思える以上は放ってはおけまい。

「待て。我はグラオベン・オルデンが盾の守護獣ザフィーラ。このままお前を行かせるわけにはいかん」

――鋼の軛――

名乗りを上げ、その者の行く手に拘束条――鋼の軛を突き出させ、行く手を封じる。その者はゆっくりと我へと向き直り「邪魔しないでくれよ、おっさん」とやる気の見えぬ双眸を向けてきた。

「そうはいかん。お前がイリュリアの者であると判断した以上、討

つべき敵だ」

「そうかよ。そんなに死にたいなら付き合ってやるよ」

構えらしい構えを見せず、棒立ちするその者に「名は？」と尋ねる。

「名前？　騎士の決闘の前には名乗りが要るんだったか。面倒だな。ま、いいや。俺っちの名は、ゼフォン。エグリゴリ・シリアルヌンマー・ツヴァイ、ゼフォン・エグリゴリ」

「エグリゴリ・・・？」

"エグリゴリ"。我が主オーディンがこの世界に訪れたその理由の中に出てきた名称だ。この者が、我が主が身命を賭してでも、破壊という形での救いを与えたいという"エグリゴリ"なのか・・・？

「お前、オーディ――」

「無駄口叩いてる暇あったら、避けな！！」

――岩衝鉄破（フェルゼン・ベルク）――

我の足元より岩石の剣が４基と突き出してきた。危うく串刺しになるところだったが、紙一重で後退する事で回避でき・・・

「うぐ・・・っ！？」

腹に強烈な痛みと熱。視線を下へ向け、我が身に起こっている異常を視界に収めた。我の腹より突き出ている岩石の剣。「呆気ないもんだな」と背後よりゼフォンという男の声。
知覚できぬ速度で背後に回り込まれ、背後から我が体を岩石の剣で貫いたのか・・・？
我がただの人間ならばこの一撃で命を落としていただろうが、生憎我は人ではない。我は「ぬ・・・ぅぐ・・・！」腹より突き出る岩剣を鷲掴み、破壊もしくは抜こうとするが、

「よしな。傷口が広がって苦しみが強くなるだけさ。大人しく助け来るのを待ってろ。別に俺っちはアンタを討ちに来たわけじゃないんだ。裏切りの融合騎ズィーベンの破壊。それが、今の俺っちの仕事。アンタんところに寝返ったゼクスの始末じゃない。ほら、アンタが頑張って俺っちとやり合う理由は無い。だから足掻くな」

我を置いてどこかへ向かおうとするゼフォン。アギトの心配は無くなったが・・・。むぅ、いかん。意識が閉じかけて来ている。だが、落ちる前に、これだけは訊かなければ・・・。

「オー・・ディン・・・知って・・・いるか・・？」

「オーディン？　シュトゥラの魔神だろ。有名だから知ってる」

オーディンでは通じないのか・・・？　ならば・・・

「セイン・・・テスト・・・は・・・」

「あ？　なんだアンタ、セインテストの仲間か？　」

我は、この場で死ぬ事を覚悟した。それほどの覚悟を強いられるほどに、ゼフォンより放たれる殺気が強すぎた。ゼフォンは我へと振り返り、距離があるにも拘らず、蹴打を放つ体勢を取った。

「セインテストは最優先でぶっ殺す。それが、俺っち達エグリゴリの役目だ。アンタがセインテストの関係者なら、ここでぶっ殺してセインテストに挑発すんのもありかもな」

――破岩砲弾（コメート・フェルス）――

ゼフォンが地面を蹴り上げることで造られた岩塊が、我へと放たれた。

（申し訳ありません、我が主。我ザフィーラ。この場でこの命を散らすことになるようです）

高速で飛来したその岩塊が我の胸に直撃した瞬間、我は全ての知覚を失った。

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

ラキシュ領本都からミッテ領上空（やはりラキシュ領より被害が甚大だった）と翔け、シュトゥラの心臓とも言うべき王都ヴィレハイムに到着した。到着してすぐ目に着いたのは、王都ヴィレハイムの全域とは言えないが、それでも砲撃を防ぐための結界が王城を中心として展開されている様。
強力な結界である事は判る。が、あの砲撃を受け続ければ確実に粉砕されるのもまた判る。まぁ私がアムルの防衛のために張った結界インヴィンシブル・ガーデンも、本来の持ち主であるアリスが展開していないから完全無欠とは言えないけどな。
さて。ヴィレハイムに来たは良いが、

「・・・それにしてもどうやって入れば良いんだ・・・？」

ドーム状に展開されている結界。中へ入る手段が判らないから困り果てる。強硬手段で行ってもいいが、その時は完全にシュトゥラの敵に回る事になってしまうために却下。とりあえず街に降りてみよう。そう思い、降りたったところで「お待ちしておりました、オーディン様」と声を掛けられた。
結界側の民家の扉から１人のメイドが姿を見せた。この前、私をクラウスの私室に案内してくれたあの娘だ。今回もまた素っ気ない態度だが、その本性はもう既知なため別段思う事はない。そんな彼女

に民家の中へ案内され、真っ先に「地下通路か」床に設けられた地下へと続く階段が視界に入った。

「地下を通って結界内へ向かいます。オーディン様。私について来てください」

そういうわけで私は彼女に続いて階段を降り、地下道を進むことになった。レンガ造りで、壁面には松明が一定間隔で設けられてある。通路を進むと、だだっ広い空間に辿り着いた。そこには、避難してきた住民の百数十人という姿があった。

結界に入れなかった民家の住民かもしれない。その空間の一角にある階段を上り地上へと出る。すぐ目の前に王城がある。すでに私を迎え入れるための一個騎士団が整列していた。

「お待ちしておりました、オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード様！」

そんな熱烈歓迎をしている場合じゃないだろ、とは思うがまぁいいか。とりあえず何人かに頷き応える事でこの場をやり過ごす。王城へと入り、さらに案内される。辿り着いたそこは、今まで立ち寄った事のない場所。目の先にある扉が目的地のようだ。

「こちらです」

メイドと共に近付くと、扉の両側に立つ騎士が扉を開けた後、剣を胸の前に掲げると言う礼の姿勢を取った。扉を潜る。奥にもう1つの扉があり、それに続く廊下の両側に男女混合の騎士たちが整列し

ていた。全員がすでに武器を胸の前に掲げていて、結構な熱い視線を向けてくる。中には見た顔も居る。先の戦の終結後に話をした者たちだ。一番奥の騎士２人が扉を開ける。

「オーディン様。さらに奥の扉より先が、ここシュトゥラの王族および執政をなさる御方たちが集う議会場です」

メイドがそれは信じられない事を言った。部外者である私が来ていいような場所じゃない。それを伝えようと振り向いてみれば、全員からの視線が、さぁどうぞ、ってなっていた。隣のメイドはホテルマンのように見送り体勢に入っているし。仕方ない、行くか。

ここでメイドと別れ、議会場へと続く廊下をひとり歩きだすと、背後の扉が閉まった。私を逃がさないためか、警備のためか。後者であってほしいと切に願う。奥の扉の前に立ち、ノックする。するとスライド式のその扉が開かれた。扉を潜ると、目の前に大きな扇状のホールが広がった。最下段へと段階的に下がって行くような階段状構成で、一段ずつに三日月状の机が設けられている。

「オーディンさん、待っていました」

最下段よりひとつ上の段に設けられている意匠の凝った椅子に腰かけていたクラウスが立ち上がり、私の元へと駆け寄ろうとしたところで、「よく参った、異界の魔導師」と厳かな男の声がここ議会場に響き渡った。

私の正面である議会場の最下段の奥。十数段の階段の上に鎮座している玉座がある。それに座しているのが、シュトゥラの現在の王デトレフ・テーオバルト・ストラトス・イングヴァルト。真っ直ぐ私

を睨みつけるような鋭い虹彩異色の双眸。外見は若く見えるが、歳は結構行っているはずだ。

「お初にお目に掛かります、デトレフ陛――」

「よい。汝もかつては一国の王だったと聞く。過去とは言え容易く頭を下げるような男ではない。我は気にせん」

「・・・そういうわけですので、オーディンさん、こちらの席へどうぞ」

クラウスに招かれ、彼の座る机まで階段を降りていく。隣に座ると、「来て頂いてありがとうございます」と小声で礼を言ってきた。それに対し「気にしないで良い。あんなふざけた砲撃を見過ごせないからな」と返す。

ここまで来る時に見た被害の大きさ。アレがこれからも続くかと思うと、落ち着いて過ごせない。早々に砲撃を放つ砲台を沈める必要がある。その前に情報だ。だからここへ来た。

「――では続けます。先のシュトゥラを襲った砲撃は、イリュリアが有している古代遺産ミナレットによるものだと思われます」

重要な名称が出てきた。"ミナレット"。古代遺産という事は、かの聖王家の有する"聖王のゆりかご"と同じか。この時代にですらロストロギアと認定されていたという"聖王のゆりかご"。それと同じという事は、攻略するのに苦労しそうだな。

次々と情報がもたらされる。私が見た反射鏡の砲弾は"フェイルノ

ート"。魔力砲が"カリブルヌス"。効果はすでに見たとおり。フェイルノートにカリブルヌスを反射させて、その周囲一帯を殲滅する砲撃。物質弾であるにもかかわらずフェイルノートの最大射程は１９０００ｋｍ。純粋魔力砲カリブルヌスに至っては倍以上の射程はあるものだと予測されている。

果てしなく面倒な射程範囲だが、私の戦友であり弟子でもある砲撃魔術師カノンの無限射程に比べれば可愛い方だ。

「――問題は、このミナレットが海上に在るという事です。シュトゥラの陸地より船で渡るにはあまりにも無防備。戦船による空襲でも、イリュリアもまた戦船で防衛網を敷いているはずです」

「防衛網を突破している最中にカリブルヌスで迎撃され轟沈、という可能性も否定できません」

「それに戦船だけでの攻略戦は無謀。やはり騎士も参加しなければ」

「しかし先にも出たように、船で渡っている最中に攻撃を受けては一気に全滅という結果に」

「空戦の行える騎士を招集し、一個騎士団を設ければ――」

「その空戦騎士が少ないのが現状だ」

「やはりシュトゥラのみで攻略するのが問題では？」

「ウラル――いや、こうなれば三連国（バルト）と同盟を結ぶのが得策ではな

いか？」

「雷帝が同盟を結んでくれるかどうか、という問題が出るぞ」

各々意見を出し合っている。まぁほとんど私たちグラオベン・オルデンが出れば、ある程度解決できる問題ばかりだが。

「ならばアウストラシアはどうか？　こちらには聖王家の王女オリヴィエ様がいらっしゃる」

その意見が出た時、「なっ・・・！　オリヴィエを盾に協力を強要なさるつもりか！」とクラウスが怒声を上げる。すると先の意見を出した初老の男が押し黙った。さすがに王子に睨まれては続けられないか。

だが、そんなクラウスに「しばらく黙っていろ」デトレフ陛下が上から言うと、クラウスは歯ぎしりをしつつ「すいませんでした」嫌々謝っている感全開で座りなおした。見ていられないな。私はクラウスの肩に手を置き、「私を使え、クラウス」と笑みを見せてやる。デトレフ陛下は元より私を使う気だからこそ呼んだんだろう。その目を見ていれば解る。私を兵器として見ていた両親と同じ目だ。戦争終結の為の駒。使われるのは好きじゃないが、クラウス達を見捨てるつもりはないし、エリーゼ達も守ってやりたい。

「しかし――」

「君の父親は元からそのつもりだと解っているだろ？　だからこの議会に私を呼んだ。それで良いじゃないか。私としては、会ったば

かりの王より友である王子（クラウス）の命で動く方が良い」

「オーディンさん・・・・ありがとうございます」

クラウスはキリッと表情を固め「父上。私に案があります」と立ち上がった。

「私の隣に居る、我が友オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。彼の個人戦力は一個騎士団とも渡り合えます。それだけでなく戦船とも個人で戦えます。そんな彼と、彼の仲間であるグラオベン・オルデンを空に配置すれば、船の護衛が可能なはずです」

議会場がざわめき、化け物を見るような目が私に向けられる。慣れてはいるとは言え、やはりあまり心地良いものじゃないな。そんなざわめきを「静まれ」というたった一言で静まらせるデトレフ陛下。

「魔導師オーディン。ひとつ訊こう。汝とその騎士団に、ミナレットを陥落できる術はあるか？」

「判りません。ただ確約は出来ませんが、我らグラオベン・オルデンは、如何なる兵器が在ろうと破壊し尽くし押し通るまでです。それが守るためであり救うためならば必ず実行します」

デトレフ陛下から視線を逸らさない。先に視線を逸らした・・というより伏せたのはデトレフ陛下で、「若造め、我を相手に一歩も引かんとは胆が据わっておる」と満足そうに笑った。そんなデトレフ

陛下の機嫌の良さを見た事が無いのか、クラウスを始めとした者たちは呆然としている。
年齢で言えばすでに2万年近い私だ。どんな人間が目の前に現れようとも気力で負ける事は絶対に無い・・・と思う。いや、アンナが居た。彼女は別格で恐ろしい。むぅ、やはり女性にはとことん弱いようだ。とは言っても直しようも無いし。女運に関しては諦める他ない、というのが現状だ。

「ベルカの戦に異界の者である汝を巻き込むというのも少々気が引けるが、今はそうは言っておられんのも事実。ミナレット攻略に、汝の力を借りたい。良いか？」

「もちろんです。シュトゥラは、私にとっても――」

『オーディン！！』

ヴィータから切羽詰まった思念通話がいきなり届いた。いきなり言葉を切った私を訝しんでいる目が集まるが、今はヴィータの様子のおかしさの方が重要だ。すぐに『（なんだ？　泣いている・・・！？）どうした、ヴィータ・・・！？』と問い返す。嫌な予感しかない。ヴィータはただ『ザフィーラが！』を繰り返すだけで要領を得ない。落ち着くよう言っているところに、『シュリエルです。ザフィーラが瀕死の怪我を負いました』とシュリエルから状況が告げられた。信じられなかった。ザフィーラは、守護騎士一の防御力を誇る騎士だ。そのザフィーラに瀕死の傷を負わせるような奴が居るのか・・・！？

『私が今オーディンの魔導を使って治療していますが、私一人では手が足りません。今この場でザフィーラを失えば、次に再生出来るのは闇の書完成後となります』

守護騎士はたとえ死んだとしても、"夜天の書"が健在ならばまた再生できる。しかし、それが行えるのは完成後。完成させたくない私としては避けたいものだ。だから『すぐに向かう。ザフィーラを倒した騎士は今どうしている？』と尋ねながら、

「デトレフ陛下、クラウス殿下、以下執政官の皆様方。現在、アムルに侵攻して来ているイリュリア騎士団と交戦中の家族から連絡がありました。私の家族の1人が重傷を負い、瀕死の状態です。申し訳ありませんが、私はここで退室させていただきます」

議会場全体に聞こえるように告げ、議会場出口へと向かう。その間にクラウスに名前を呼ばれたような気がしたが、彼には悪いが今は前線の状況の方が重要だ。

シュリエルに『すぐに向かう。大変かもしれないが、もうしばらく耐えてくれ』と言い、空戦形態ヘルモーズを展開して開け放った窓から飛び立つ。全力も全力。直線限定の最高速マッハ１０で空を一直線に翔ける。すぐに戦場へと辿り着き、「あそこか！」ソニックブームで周囲を破壊しないように速度を落としてから降下。

「シュリエル！　ヴィータ！」

「「オーディン！！」」

シュリエルが治療に当たり、ヴィータが近付いて来るイリュリア騎士たちを潰している状況。そして横たえられているザフィーラは、自身から流れ出た血溜まりの上だった。腹には剣らしきもので貫かれた傷跡と、そして胸には何かで抉られた事で開いた穴。いつ消滅してもおかしくないダメージだ。よく保ってくれた、ザフィーラ。頑張ったな。私の登場に、イリュリア騎士たちは「ヒッ！」と短い悲鳴を上げてたじろいだ。

「あとは私が引き受ける。シュリエルとヴィータは戦闘に戻ってくれ」

「オーディン。ザフィーラ、死なないよな・・・？」

「当たり前だ。私が来たんだから、もう大丈夫だ」

――女神の祝福（コード・エイル）――

跪いて、ザフィーラに2つの傷に手を翳してエイルを発動する。ヴィータは心配そうに私とザフィーラを眺め、そして私が動けないと判断したイリュリア騎士たちは攻勢に出ようとした。それに気付いたヴィータは「テメェら、邪魔すんな！」と"グラーフアイゼン"をブン回して迎撃再開。

シュリエルも「オーディンの邪魔をするならば、今すぐ殺す」と冷めた声を静かに発した。その一言で、イリュリア騎士たちは一切の動きを止め徐々に引き下がって行く。そこまで脅されても退こうとしない連中も居る。シュリエルが迎撃態勢に入ったところで、

「治療に専念した私が、いつ攻撃できないと言った・・・？」

――舞い振るは、汝の獄火――

火炎の魔力槍を１０基と展開し、残っている連中に穂先を向ける。そして「焼き殺されたい奴は掛かって来い」と最終警告すると、「退け！」と連中は引き下がって行った。すぐにサラヒエルを解除。ただでさえ魔力消費の多いエイルの発動中だ。中級術式とは言えサラヒエルの同時発動は辛かった。徐々に傷口が塞がっていくのを見たヴィータは「ザフィーラの事、頼むよ、オーディン」と言った後、この場から去っていった。

「私も出撃します」

「シュリエル。こうなった経緯を知りたい。戦闘中、思念通話を繋げることになると思うがいいだろうか・・・？」

「はい。構いません。では私の方から繋げますので」

「すまないな」

シュリエルが離れて行くのを見送り、ザフィーラの治療に専念する。ザフィーラの鋼の肉体にこれだけの傷を負わせる事の出来る騎士、か。やはり高位騎士という事なんだろうが。アギトから聞いた、イリュリア騎士団最強の騎士総長グレゴールか・・？

『オーディン。今よろしいでしょうか・・・？』

『ああ。聞かせてくれるか、シュリエル』

『はい。ザフィーラを襲った者の名を、意識を手放す前にザフィーラから聞きました。名をゼフォン・エグリゴリ。オーディンがベルカに訪れた理由、ですよね・・・？』

ゼフォン・エグリゴリ。ベルカに来てすぐに戦ったガーデンベルグたち"堕天使エグリゴリ"と共に現れた、見知らぬ"エグリゴリ"のミュール・エグリゴリの顔を思いだす。そうか。そういう事だったのか。どこで新しく"エグリゴリ"を製造していたのかと思っていたら、技術大国のイリュリアを利用したいたのか・・・。

『ん？・・・シグナムは・・・？　アギトとシグナムはどうした？　それにゼフォンは？　まさか――』

『はい・・・・・・今もなお戦闘中です』

『今すぐシグナムとアギトを退かせるんだっ！　シグナム、アギト、聞こえるかっ？』

繋げるが返事はなかった。ノイズが走っている。ジャミングされていると考える。魔力反応が健在なため撃墜されたという事はないが、まずい。この状況はかなり最悪だ。まさかここで複製品とは言え戦力が強大な"エグリゴリ"が出てくるとは。

ザフィーラの容態は・・・安定してきてはいるが、まだ続行しなければならないレベルだ。どうする。シグナムとアギトまで墜とされ

ては・・・墜とされるだけならまだいいが、アギトが殺されてしまったら未来が・・・。

『なぜシグナムは戦っている！？　ゼフォンがシグナム達を狙っているのかっ！？』

『いえ。シグナムとアギトは、守るための闘いをしているのです』

『なに・・・？』

『ゼフォンの狙いは、アギトと同じ裏切りの融合騎ズィーベンの破壊だそうです』

『ズィーベン・・・？』

聞けば、ズィーベンはゲルト・ヴォルクステッドの融合騎としてこの戦場に現れ、そしてゲルトの意識を乗っ取った挙句に死なせてしまった事がイリュリアに知れ、廃棄処分が下された。その処分を行うために来たのが、イリュリアの新兵器"エグリゴリ"。つまりゼフォン。

実力を見て測れるはずのシグナムが居て、なぜ命の危険を冒してまでズィーベンを見捨てずに戦うのか・・・なんて解りきっている考えはすぐに切り捨てる。守りたいものを守るために、救いたいものを救うために、その力を揮う。それが私たち信念の騎士団グラオベン・オルデンだ。アギトは選んだんだ。姉として末妹ズィーベンを守るために、ゼフォンから逃げずに戦うと。

（なんて事だ・・・。頼む。頼むから無茶も無理もしないでくれ・・・アギト、シグナム）

必死に祈る。すぐにでもアギト達と合流し、複製品（ゼフォン）を破壊しなければ気が済まない。だが、ザフィーラにはまだ治療が必要だから動けない。このジレンマが私の頭の中をかき乱す。そしてジレンマは怒りへと姿を変えて、この状況を仕組んだであろうガーデンベルグ達に向か・・・わない。

全ての怒りは私に向く。あの日、あの時、私がもっと"戦天使ヴァルキリー"のシステムプロテクトを強化しておけば、敵国ヨツンヘイムのウイルスに感染せずに済んだ。私たち"アンスール"や他の"ヴァルキリー"たち親や仲間を殺さず、"エグリゴリ"と化してああして狂い続けたまま存在しなかったんだ、ガーデンベルグ達は。ザフィーラの腹のダメージを完治させた事で空いた右手を握り、自分の顔を殴る。

「自分自身を殺したくなる日も、また無くならないな・・・」

自虐的な笑みがこぼれてしまう。そこに、「オーディンさん！」シャマルの声が上から聞こえ、「っ・・・！」上を見てすぐに視線を戻した。まずった。思いっきりシャマルのスカートの中を見てしまった。って、馬鹿か。今はそんなふざけた事を思っている余裕も考えている暇も無いだろうが。とりあえず「すまない、シャマル」と謝る。何故謝られたか判らないシャマルは小首を傾げた。

「・・・あ、そうですっ、ザフィーラの治療は私が引き受けます！」

「そうは言うが疲労困憊と言った顔じゃないか、シャマル！」

魔力を消費し過ぎて顔色が病人のように悪くなっていて、汗で髪が額や頬に張り付いている。息使いも少し荒い。だからこそ「馬鹿を言うな。君は休め」と言い放つ。しかしシャマルは「事情はシュリエルから聞いてます」と私の向かいに跪き、ザフィーラの胸に手を翳して治癒術式を発動した。

「オーディンさんの目的であるエグリゴリが今、この戦場に居るらしいじゃないですか。しかもザフィーラをこんなにするほどに強くて、今はシグナムとアギトちゃんと戦っている、と」

「もういいから魔導の発動をやめろ。倒れるぞ！？」

「大丈夫ですっ。湖の騎士シャマルは、こう見えても強いんですっ！」

「ああもう君は本当に頑固だなっ」

「オーディンさんこそですっ。お願いですから、シグナムとアギトちゃんの元へ行ってくださいっ！」

会話はそこで途切れる。ザフィーラの胸の傷も、シャマルの全力治療で何とかなるレベルにまでほとんど治した。ここで離れてもいいが、そうなればシャマル1人で限界以上の魔力を使わせることになりかねない。

だから迷いが生じてしまう。ゼフォンはイリュリアがガーデンベルグ達オリジナルに利用されて開発された"エグリゴリ"の複製（レプリカ）品だ。

救いではなく完全な破壊対象。しかしだからと言って・・・・。

「オーディンさん。私の事、心から心配して下さってありがとうございます。でも、あなたの湖の騎士シャマルは、これくらいでどうにかなるほど弱くありません。行ってください。あなたの目的の為にも。私の為にも。シグナムとアギトちゃんの為にも」

「シャマル・・・・・・すまない」

エイルを解除して立ち上がり、１２枚の剣翼アンピエルを発動する。するとシャマルは「もし倒れたら、オーディンさんが看病してくれますよね？」とはにかみながら訊いて来た。それに対し「当たり前だ。まったく。困ったお医者様だ」と微苦笑を返してやると、シャマルはイタズラがバレた子供のように舌をチロッと出してまたはにかむ。そんな辛そうな顔で、そんな可愛げのある顔をするな。心配したくても出来ないだろうが。シャマルに背を向け、空へと上がってアギト達の魔力を感知できる地点へと向かう。

「ゼフォン・エグリゴリ・・・！」

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒アギト†††

「初めて戦うタイプだな。やり難い・・・！」

シグナムが限界まで攻めきれない事に歯噛みしている。あたしとシグナムはズィーベンを守るために、ゼフォンと戦う事を決めた。だってズィーベンは言ったから。

――わたしは・・・まだ生きたい、まだ死にたくない、死にたくないよアギトお姉ちゃんっ――

だからあたしはまたシグナムと融合して、戦ったんだけど・・・。

「なぁお姉ちゃん達。俺っちは、そこに居る融合騎の破壊が目的なんだって言ってるだろ？　頼むから邪魔しないでくれ、な？　無駄に力を使いたくないし殺しもしたくないわけさ」

「よく言う。先にザフィーラを傷つけただろう」

「ザフィーラ？　あ、さっきのおっさんか。ありゃ向こうが悪いぜ。俺っちの邪魔をしてくんだもんよ。それに、セインテストの関係者だって話だしさ」

「やはり貴様は、オーディンの捜し求めているエグリゴリの一体で間違いないのだな」

"エグリゴリ"。マイスターのご先祖様が開発した人型兵器（名前は確かヴァルキリー）で、マイスターがどっかの世界の国の王様だった頃に、戦争していた敵国によって洗脳されて、そして暴走して家族と仲間を殺したっていう人たち。マイスターは全てを奪われたのに、"エグリゴリ"を恨むどころか助けたいって言ってる。家族だからって恨まず憎まず、ただ狂ったままの家族を救いたいって。

「だから魔神は関係ないだろ？　俺っち達エグリゴリが抹殺しなけ

りゃならないのは、オーディンって奴じゃなく、ルシリオン・セインテスト・アースガルドって奴さ」

ミドルネームのセインテストは同じだけど、ルシリオンとアースガルドっていうのが違う。マイスターの親戚の誰か？　よく判らないけど、マイスターの関係者なのは違いないはず。あとさっきから気になってるんだけど「そもそも魔神って誰なんだ？」って独り言のつもりで呟いた。

「あんた達の頭オーディンの事を、イリュリアは魔神って呼んでんの。魔神の如き強さを持っているとか何とか。つか今はそんなの関係ないだろ」

聞かれていた事には驚いたけど、イリュリアにそこまで恐れられているマイスターは本当に凄いと思えた。ゼフォンはガシガシ頭を掻いて、「おい、ズィーベン。大人しく罰を受けな」ってさっきからあたした達が背後に庇うズィーベンを睨みつけた。

「そうはいかんな。我らの信念の下、一度守り助けたいと決めた以上は見捨てはせん」

「本当に面倒だな、騎士っていうのは。そんなに死にたいのかよ、敵だったズィーベンを守ってさ」

ゼフォンの足元に、また見知らないココア色に輝く魔法陣が展開される。そして、「さっきのおっさんみたいになっても文句言わないでくれな」って片足をスッと上げて、地面を踏みつけるように思い

っきり落とした。

――地龍刃砕断（ボーデン・ドラッヘ）――

地面が隆起する事で出来た岩石の、まるで龍の背ビレのような波があたし達に向かって突き出してきた。あたしを内に宿してるシグナムは数ｍくらい宙に居るんだけど、岩石の波はあたし達を貫けるまでの高さを誇ってる。

直線的な軌道だから、シグナムは横移動で回避。というよりは避けるしかない。何せ、「くっ・・・！」突き出し終えた岩の波の側面から、岩の棘がシグナムを貫こうと突き出してきたから。"レヴァンティン"をギリギリで盾にして直撃は免れたけど、その衝撃でシグナムは突き飛ばされた。

（レヴァンティンでも切断できない程に硬度のある岩による攻撃・・・。マイスターの魔導のように、ゼフォンのもやっぱり異世界の魔導なんだ・・・）

「やはり斬れんな。普通の岩なら容易く斬れるはずなんだが・・・付加されている魔力が尋常ではない・・・！」

"レヴァンティン"の柄を力強く握り直したシグナム。シグナムとあたしの炎熱を付加した"レヴァンティン"を当てる事が出来れば、きっと勝てるはず。でも接近できない。ゼフォンを護る岩壁やシグナムを攻撃してくる岩山が、あたし達の行く手を妨害してくる。こっちは防御と回避に専念しないといけなくて、ゼフォンは好き勝手攻撃してくる。戦う以前の話だ。何か良い手が無いか考えている

と、『アギトお姉ちゃん、もういいよ』ってズィーベンが思念通話を送ってきた。

「俺っちには攻撃を通せないってもう判ったろっ！　諦めてズィーベンを差し出して、とっとと退いてくれってばさ！」

――砂塵岩龍旋（ヴィントホーゼ・ブレッヒェン）―

ゼフォンを覆い隠す様に岩や砂を巻き上げた大きな竜巻が生まれた。シグナムは「離れるぞ、ズィーベン！」って言って、巻き込まれないようにすぐに側から離れたけど、その竜巻から岩塊が砲弾のように高速で飛んでくる。軌道は無差別。そしてどこから飛んでくるかも判らない。だから少しでも気を抜くと、質量で圧殺されちゃう。

「もういいよっ！　本当にこのままじゃ殺され――」

『「ズィーベン！」』

あたしとシグナムは同時に叫ぶ。ズィーベンに直撃する軌道の岩塊が２つ。今から回避行動に移るにはあまりにも遅すぎる。フォローに回るにも遅すぎて。世界がゆっくりに見える。いやだ。ズィーベンの死に様を、ハッキリ見る事に・・・。

「（そんな・・・こんなのって・・・・・。お願い、助けて・・・・）マイスターっ！！」

――削り抉（コード）れ、汝（ザキエル）の裂風――

空からすごい勢いで落ちてきた竜巻がズィーベンを捉えていた岩塊を粉砕して、地上に着弾する前に消滅した。シグナムの"レヴァンティン"ですら傷一つ付かなかったゼフォンの岩石がたったの一撃で・・・。こんな事が出来るのは、あたしが知る中だとたったの1人。あたしの大好きな・・・

「マイスターっ！」「オーディンっ」

12枚の蒼い光剣の翼を背中に生やしたマイスターが降りてきた。ズィーベンも「すごい・・・」って驚いてる。でもなんだろう。今のマイスター、すごく・・・恐い。シグナムも『様子がおかしいな』って思念通話を送ってくる。

「ふざけるな、クソガラクタが。・・・エグリゴリの複製品如きが、カーネルの魔術を扱うだと？」

普段のマイスターの口からは絶対に出て来ない汚たない言葉が出た。それに、複製品って。え？　ゼフォンってマイスターが捜し求めてる"エグリゴリ"じゃなかったの・・・？　あ、でもゼフォン、イリュリアの新兵器ってやつだったっけ。じゃあマイスターの捜し求めてる本物の"エグリゴリ"は、イリュリアと繋がってるって事・・・？

マイスターと"エグリゴリ"の事を考えていると、ゼフォンが大きく笑いだして「見つけたぜッ！　神器お――」そこまで言ったところで、

――舞降（コード）るは、汝の麗雪（シャルギエル）――

何十本っていう氷の槍がマイスターの周囲に現れて、一斉にゼフォンへ向けて降り注いだ。岩壁がゼフォンを守るために盛り上がってきたけど、マイスターの放った氷の槍は岩壁に突き刺さって凍結させていく。マイスターは「複製品如きは早々に舞台を降りろぉぉぉッ！！」怒声を上げて、

――殲滅（コード）せよ、汝の軍勢（カマエル）――

数える事も出来ないくらいのいろいろな属性の槍を展開、「ジャッジメント！！」って指を鳴らして号令、一斉に振らせた。

「こんな温い攻撃じゃ通じねぇんだよッ！！」

――空衝岩槍穿（シュレッケン・シュペーア）――

凍った岩壁を粉砕して突き出してきた鋭く尖った岩の塔が、マイスターの槍群を迎撃。そのままマイスターと側に居るズィーベンを掠めて行って2人の姿を隠すけど、でもすぐにスパッと切断されて崩れてく。"エヴェストルム"を持つマイスターの無事は確認できた。でも「ズィーベンは・・？」どこにも居ない。

キョロキョロ見回すけど、やっぱりどこにも・・・「オーディンとズィーベンが融合している」ってシグナムがそんな事を言ってきたから「え〝っ！？」よくマイスターの姿を見てみる。あ、そう言えばマイスターの目の色が蒼に統一されてるっ。

「融合騎との融合を果たしているにもかかわらず、あれだけ外見変化が無いとは・・・」

『ちょっとズィーベン！　なんであたしのマイスターと融合してるのっ！？』

『わ、わたしが言ったんじゃないもんね・・・この人が融合しようって言ったんだもんね・・・』

な、ななななな、マイスターが、ズィーベンに融合しようって・・・言った・・・？　へ、へぇ～・・・べ、別に羨ましくないよ。今は緊急事態だから、この一回だけに違いないもん。だから気になんないし。

『でも、アギトお姉ちゃん。この人、すごいね。わたしを完璧に制御してる』

ズィーベンから満足そうな思念通話が・・・。ギリギリッ。つい歯ぎしり。単独戦力は強いけど、融合能力はあたしたち融合騎姉妹の中で最悪だったズィーベン。その原因が、イリュリア人大っ嫌いだったって事はさっき知った。けどその強さからしてあたしよりはマシな扱いをされてた。

『すまないな、アギト。離れているよりこうして融合していた方が守り易いんだ』

『あ、うん、だいじょぶ。ズィーベンを守ってあげてマイスター』

『ああ。あとは任せろ』

――第二波装填（セカンドバレル・セット）――

マイスターはまた、すごい数の魔力槍を展開して、「ジャッジメント！」って降り注がせる。そしてゼフォンも「温いっつってんだろっ」ってさっきのように岩の尖塔とか岩壁で迎撃・防御。お互いに決定打が通らない。

「其は遥かなる天上に在りし楽園へと至る光の路を守護せし者」

マイスターが歌うように呪文を紡ぎだした。それに、初めて見た。マイスターの魔導の魔法陣。マイスターの足元に展開されてる魔法陣は十字架で、その四方から剣が伸びて、それを囲うように三つの円っていう形。シグナムが「見た事のない陣だな」って呟く。マイスターが呪文を詠唱している最中でも、周囲に魔力槍が展開されていって、ゼフォンに降り注いでいく。

「守護を務めし其の者の九界見通す眼。故に汝よ、其の者より逃れうると思うなかれ」

ゼフォンを中心として半径５０ｍほどの蒼い光の環が展開される。それはまるで、ゼフォンを包囲して、周りに被害を出さないようにするための線引きのようだった。

『ちょっ、すご、えっ、なにこれっ！？　解らないっ、こんなに複

雑で難しい術式見たことないっ、補助が一切できないっ！』

ズィーベンから、すごく焦っているような戸惑っているような思念通話が届く。融合騎の務めとして、ロードの魔導発動の補助っていうのがある。いくら難しくてもそれが出来ないなら融合騎としては失格。でも、マイスターはベルカの騎士じゃない。異世界の魔導師だから・・・。

だからこそあたしにもズィーベンの気持ちは良く解る。あたしだって初めてマイスターと融合を果たして補助をしようとした時、何一つとして手伝えなかった。あまりに複雑すぎて、全然理解できない術式。だから、しょうがないよズィーベン。

「番人を務めし其の者が有せし終焉を告げる角笛。故に汝よ、其の者の奏でし終焉の報を恐れよ」

呪文がそこまで完成されてまた変化が起きた。環の内側だけに蒼い魔力球が数える事も出来ない程に現れた。空から見れば蒼い光の絨毯みたいで綺麗。でも圧倒的な威力を誇る攻撃だっていうのが真実の姿。ゼフォンが「なんだよコレ！　くそっ、壊しても壊しても現れるじゃんかよッ！」って岩の剣で魔力球を壊すけど、壊すごとに別の魔力球が生まれてく。

「守神の角笛より生まれし滅音よ、賢神の杖より発せし破光よ、天に響き渡り煌き閃け、地に満ち流れ猛り奔れ」

マイスターがスッと左腕を上げると、マイスターの足元に展開されてる魔法陣と同じものが空に幾つも展開されて、それを繋ぐように

環が出来て、一つの巨大な魔法陣になった。

「守神の終笛（コード・ヘイムダル）！！」

――カリブルヌス・フェイルノート――

マイスターが術式名を告げた同時、あの大きな砲撃が来た。最初は、魔力砲を反射するための鏡の砲弾。マイスターに直撃する軌道で飛んできた。するとマイスターは「邪魔をするなッ！！」って怒鳴って、「ジャッジメント！」指を鳴らした。

すると空の巨大な魔法陣からいくつもの砲撃が地上に向かって降り注いでいく。迫って来ていた鏡の砲弾を砲撃の1つが粉砕、そのまま他の砲撃と一緒に地面に着弾した。あたしは、そしてシグナムも、マイスターの本当の凄さを垣間見る事になった。

砲撃の着弾と同時に生まれた爆発が、地上を埋め尽くしている魔力球絨毯を誘爆させていった。誘爆した魔力球は空を貫くほどの光の柱になって、空と地上、そしてその間の領域を蹂躙してく。

「なんだこれは・・・！？　これが本当に一個人で発動できる魔導なのか・・・！？」

さすがのシグナムが戦慄してる。ゼフォンも、こんな大魔法を防ぎきる事なんて出来ないはず。なにせこの魔導、この前、マイスターが戦船を沈めるために使ってた魔導以上に強力だもん。やっぱりあたしのマイスターは最強だ♪

――カリブルヌス――

そんな時に遅れて来た巨大な魔力砲が空を照らした。

「いかんっ。拡散して威力が減衰していない砲撃は防ぎきれるものではないっ！」

マイスターが吸収したり防いだり出来るのは、反射して威力が分散している状態での砲撃だ。拡散する前の砲撃を防ぐのは、たぶんマイスターでも無理。砲撃は一直線にマイスターへと突き進んで行って、避ける素振りも防ぐ素振りも見せないマイスターを呑み込もうとした。

「オーディン！」『マイスターッ！！』

それでもマイスターは落ち着き払っていて「我が手に携えしは確かなる幻想」って詠唱。空に向かって伸ばしていた左腕を降ろして、迫って来てる砲撃へ向けて左手の平を翳す。

――クレプスクルム・ポルタ――

マイスターの左手の前面に、砲撃以上に大きな縦長の光の門が現れて、音を立てながら開いてく。そして砲撃は門に吸い込まれていって消えた。門が消えて、マイスターは「なるほど。融合状態なら多少の無理が出来るんだな」って思案顔で頷いた。ズィーベンが『頭がグルグル回るぅ～。でも、すごく気持ち良い～♪』って楽しそうに言う。胸の奥がズキッて痛くなった。決定的だったのは、ズィーベンのこの一言だった。

『ねぇ魔神。わたしのロードになってよ。あなたとなら絶対上手くいく。イリュリアを倒せるって思うのね』

『ズィーベン！　あたしのマイスターを取らないで！！』

あたしは堪らずそう叫んでた。

†††Ｓｉｄｅシャマル†††

ザフィーラの治療を終えて、私はひたすら現実で起きた光景に唖然としていた。かなり離れた地点で放たれた圧倒的な魔導。オーディンさんの魔力光である、魅了されるほどに綺麗な蒼。空から無数の蒼の砲撃が降り注いだかと思えば、今度は地上から空に向けて光の柱がそびえ立った。
地上に展開されている環の中にそびえ立つ砲撃の柱は、あろうことか消える事なく滑るように環内を移動していく。オーディンさんがきっと"エグリゴリ"を相手に使ったんだと思うのだけど・・・「すごすぎるわ・・・」心底脱帽。

「・・・・ああ、我らが主はお強い。我らは計り損ねいたようだ、我らが主の実力の程を」

「ザフィーラっ？　良かった、気が付いたのねっ」

ザフィーラは目を開けて、焦点のあった目でオーディンさんが居るであろうその地を見詰めていた。ザフィーラは「世話を掛けた」って一言謝って起き上がろうとするのだけど、私は「まだダメよっ」って制する。
なんとか傷は完治できたけれど、それでも死にかけた事には変わりないわ。魔力だって身体維持の為に限界まで消費している。そんな

状態で戦闘行動を取るなんて自滅行為もいいところ。守護騎士・治癒担当の湖の騎士として、そして医者として必死で止めさせてもらう。

「ザフィーラ。お願いだから言う事を聴いて。オーディンさんの力になるために、今は大人しく休んで」

オーディンさんの名前を出すと、ザフィーラは「仕方あるまい」って折れてくれた。そこに「ザフィーラ！」ヴィータちゃんがすごい勢いで飛んできた。ヴィータちゃんは、私とザフィーラを護衛するために近場でイリュリア騎士を倒してくれていた。だから少し騎士甲冑を汚しているヴィータちゃん。ザフィーラに駆け寄って「ザフィーラ、目を覚ましたんだなっ」そう嬉しそうに笑った。

「すまんな。迷惑を掛けた。我なら問題はない。しかし戦闘には参加できないが」

「んなの気にすんなよな。奴ら、もうほとんど撤退してるしな。ま、奴らの頭がシグナムとアギトに負けちまったし、当然の行動だけどさ。それに、オーディンのアノふざけた魔導を見りゃ誰だって退くっつうの」

「ホントね。信号弾だわ」

イリュリア側の空に撤退を指示する信号弾が上がって、遅れてこちらからも終戦の信号弾が上がる。ヴィータちゃんが"グラーフアイゼン"を肩に担いで呆れを含んだ苦笑いを浮かべた。私も釣られて

また微苦笑していると、「お前たち」シュリエルがフワリと私たちの側に降り立った。

「ザフィーラはもう大丈夫のようだな。お前の無事を確認できればいい。お前たちはこのまま待っていてくれ。私はオーディンとシグナムのところへ向かう」

それだけ告げたシュリエルが背中の翼を羽ばたかせて踵を返して飛び上がると、「あ、おいっ、あたしも一緒に行く！」ヴィータちゃんも続いて空に上がった。私とザフィーラは2人がそのまま空を翔けていくのを見守り、「シャマル先生！　ザフィーラさんっ！」私は国境防衛騎士団の皆さんに小さく手を振った。

†††Ｓｉｄｅシャマル⇒？？？？†††

魔神オーディン。わたしを造ったイリュリアが恐れる人間。アギトお姉ちゃんがイリュリアを裏切る要因になった人間。排除するように命令を受けて、でもわたしは無視して利用しようとした人間。そんな魔神と、わたしはいま融合している。裏切り者として廃棄処分が決定したわたしを護るために。アギトお姉ちゃんも魔神もお人好しだ。だけど、わたしは今、魔神との融合を心地よく思っちゃってる。だからわたしは魔神に、わたしのロードになってくれるように頼んだ時、

『ズィーベン！　あたしのマイスターを取らないで！！』

アギトお姉ちゃんが止めてきた。おかしいよね。だって魔神はアギ

トお姉ちゃんのマイスターであってロードじゃない。だったら何も問題ないよね。だから『アギトお姉ちゃんにはもうロードが居るよね』って返す。

『そ、それはそうだけど・・・！　でも――』

――空衝岩槍穿（シュレッケン・シュペーア）――

ゼフォンの攻撃が土煙の中からわたしと魔神、アギトお姉ちゃんとそのロードへと放たれてきた。魔神は回避行動を取って「チッ。まだ壊れていなかったか」不機嫌な声色でそう漏らした。魔神はどうやら"エグリゴリ"と因縁があるみたいだね。複製品がどうのとか言っているから、イリュリア技術部に"エグリゴリ"の事を教えた誰かと魔神は敵同士・・・なのかな？

「ふざけんじゃねぇぞ！！」

魔神の魔導が巻き起こした土埃が晴れて、そう怒鳴ってるゼフォンの姿を視認できるようになった。損所は軽微だね。でもひどく服が土や泥で汚れてる。たぶんだけど、ゼフォンは地中に潜ってやり過ごしたんだね。

『ズィーベン。少し無茶をする』

『ほえ？　あ、うん』

また頭の中に流れ込んでくる魔神の魔導の術式。さっぱり理解でき

ない。でもなんとか理解しようと試みた時、いきなり視界がシャットアウトされて、気が付けば融合が解除されてわたしは外に居た。あまりの突然さに「え？」辺りをキョロキョロ見回していると、魔神が「呆けるのは後だ！」ってわたしを後ろから抱きかかえてきた。

――破岩砲弾（コメート・フェルス）――

（状況を再確認。わたしを破壊しに来たゼフォンによる魔導攻撃が接近中）

複数の岩塊がわたしと魔神に放たれていて、魔神がわたしを護るために胸に抱いて逃げてる。うん、こんな気持ち初めて。初めて、誰かの為に融合騎としての自分を使いたい、そう思える。そうなんだね。この気持ちが、アギトお姉ちゃんにイリュリアを裏切らせたものなんだね。

魔神の胸とトントン叩いて「魔神。その、わたし、頑張るからね」って告げる。すると魔神は「いいよ。気負わなくて」小さく笑った後に「ふえっ・・・！？」空いてる手でわたしの頭を撫でた。「少し荒っぽくなるぞ・・・！」ものすごい速さで次々と飛んで来る岩塊を回避する魔神。これは・・・ちょっと目が回るかもね、うん。

「ねえ、魔神。もう一度、わたしと融合して。今度は、最後まで・・・」

「・・・いいのか？」

「もう決めたの。わたし、魔神をロードにするって。だからね・・

・！」

「・・・ありがとう、ズィーベン。もう少しだけ力を借りるぞ」

わたしと魔神はまた融合を果たす。するとまた『あ゛あ゛っ！　またマイスターと融合してるぅぅっ！』アギトお姉ちゃんからうるさい思念通話。わたしが応じる前に『すまないな、アギト。今だけは許してくれ』魔神がアギトお姉ちゃんにそう言うと、アギトお姉ちゃんもマイスターにお願いされて『うぅ～・・うん』許してくれた。そんな時、「はあっ！？　撤退っ？」ゼフォンの大声が聞こえてきた。

「撤退指示？　誰が逃がすものかッ！！『シグナム。一気に決めたい。連撃、行けるか？』」

『もちろんです。いつでもどうぞ！』

直後、魔神とシグナムっていうアギトお姉ちゃんのロードが同時にゼフォンへ向かって急降下。ゼフォンをここで斃せたらわたしは壊されないで済んで、そして魔神の融合騎になる事が出来る。

（そんな未来を望んでいいよね・・・ドライお姉ちゃん）

†††Ｓｉｄｅズィーベン⇒オーディン†††

"エヴェストルム"を起動し、二刀一対のツヴィリンゲン・シュベーアトフォルムへ変形させる。視界に映るゼフォンは歯噛みし、「

クソがっ！」と撤退指示に対して不満爆発と言った風だ。それでいい。その方がこちらとして好都合。消滅しない程度に破壊して、ガーデンベルグ達の話を聴かせてもらおう。
返答によっては、もうベルカから離れなくてはならなくなるかもしれない。ここまで関わっておいて、今さら私用があるから抜けさせてもらいます、なんて都合の良い事を言いたくないが。それに、「エリーゼ・・・」彼女から向けられている好意にも決着をつけておかないとダメ・・・だよな。

「俺っちは・・・堕天使としてのエグリゴリを貫かせてもらうっつうのっ！！」

――岩衝鉄破（フェルゼン・ベルク）――

ゼフォンの頭上前後から挟撃するように降下した私とシグナムに向けて、岩石の剣山が突き出してくる。防御や迎撃で動きを少しでも鈍らされると、追撃で墜とされる可能性があるため回避行動を取る。シグナムも同じ考えで、剣山を回避を終えた。そして、

「いくぞッ、シグナム、アギトっ！」

「はいっ、オーディン！」『うんっ、マイスターっ！』

――集い纏（コード）え、汝の火炎槍（フロガゼルエル）――

――破（コード）り開け、汝の破紋（メファシエル）――

――紫電一閃――

"エヴェストルム"二剣に火炎と障壁破壊の術式フロガゼルエルとメファシエルを付加し、シグナムの火炎を纏った"レヴァンティン"や鞘にもメファシエルを付加。"エヴェストルム"機能試験で編み出した、火炎の剣騎士シグナムとの連携技の準備はこれで終わり。ゼフォン。貴様の装甲と障壁はどれだけのものかは判らないが、確実に潰してみせる。

――守護岩隆壁（マオアー・シルト）――

ゼフォンの背後に降り立つと同時。奴を前後から挟撃する位置取りの私とシグナムの前に岩壁が現れた。私は後方。火炎を纏っている右の"エヴェストルム"を斜めに振り下ろす。シグナムはゼフォンの前方で障壁破壊を付加された鞘を斜めに斬り上げる。

「「『紫電・・・！』」」

ゼフォンの盾となっている岩壁を"エヴェストルム"は寸断し、シグナムの鞘は打ち砕いた。

「「『十字閃！！』」」

間髪入れずに私はもう片方の火炎纏う"エヴェストルム"を横薙ぎに一閃。シグナムはアギトの炎熱加速によって火力が増大している紫電一閃を振り下ろし一閃。前後からの火炎斬撃による挟撃。それがシグナムとの連携技の一つ、紫電十字閃。

ゼフォンは岩壁以外にも魔力障壁を纏っていたが、障壁破壊のメファシエルが付加された"エヴェストルム"と"レヴァンティン"の前では意味がなかった。ゼフォンは胸と背中共に火炎斬撃を受け、力なく地面に倒れ伏した。

「フン。神秘の無い単純な魔力量だけの魔力障壁。所詮は複製品だな、ゼフォン」

ゼフォンの魔力に神秘も有れば、中級のメファシエルで突破するのは難しかっただろうが、奴の攻撃に付加されている魔力からは神秘は感じえなかった。しかしミュール・エグリゴリの攻撃に使われた魔力には神秘が内包されていた。試作機だからか？　まぁどちらでも構わないか。どうせこの場で完全破壊するのだから。

「・・・トドメを刺す前に答えてもらおうか。なぜガーデンベルグ達はイリュリアにお前やミュールのようなエグリゴリの複製品を造らせた？」

「うぐ・・・こんなはずじゃ・・・俺っちは・・土石系最きょ・・・機体・・・」

這ってでも私たちから逃れようとするゼフォンにそう訊くが、奴はうわ言のように自分が土石系最強という設定を繰り返すのみ。愚か、そして哀れ。両手に持つ"エヴェストルム"の柄頭を連結させてニュートラルのランツェフォルムへ戻し、ゼフォンの眼前に突き立てる。

「逃がさん、と言ったはずだ。もう一度訊く。答えろ、ゼフォン・エグリゴ――」

「うっせぇよッ！！　魔力核から魔力炉（システム）へ移行開始。８０・・９０・・１００％。堕天使形態・・・顕現ッ！」

――高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）――

ゼフォンの背中から、孔雀の尾羽のような翼が放射状に２０枚と展開された。リアンシェルト達が使うモノと同じ。確か術式名はエラトマ・エギエネス、だったか。それに、さっきまでは感じられなかった神秘がゼフォンの放つ魔力に内包されたのが判った。ノイズが奔っているゼフォンの目が向いている先。そこには私ではなく顔を青くしているシグナムが。

「っ！　逃げろっシグナ――」

――破岩砲弾（コメート・フェルス）――

神秘が内包された魔力を纏った岩塊が一直線にシグナムへ向かう。シグナムも今のゼフォンの様子がおかしい事くらいは理解しているようで、防御に回る事なく回避行動を取った。

直撃するギリギリだったが無事に空へと上がったシグナムに『そのまま離れているんだ！』そう念話を送り、「ゼフォォォォーーーーンッ！！」突撃。"エヴェストルム"は待機モードに戻してある。魔術を付加しようとも神器ではないデバイスの耐久力に問題があるからだ。そう思えてしまうほどに今のゼフォンを覆う魔力障壁は堅

牢だった。

――知らしめよ、汝の力（ゼルエル）――

魔術効果や身体を強化するノーマルのゼルエルを発動し、肉体を限界にまで強化。ゼフォンに肉薄し「おぉぉらぁぁああッ！」左ストレートを鳩尾に叩き込むが、奴はニヤリと口端を歪め余裕を見せつけてくる。だがな、笑っている場合じゃないだろゼフォン。お前・・・「顔にヒビが入ってるぞ」指摘してやる。しかしそれでもゼフォンは「ｈａｈａｈａｈａ」と笑うだけ。あぁこれはダメだ、狂ってる。

「貴様でダメなら直接イリュリアの連中に訊いてやるまでだッ！！」

そのままゼフォンを殴り飛ばして浮かせ、跳び回し蹴りでさらに打ち上げる。その間でもゼフォンは笑う事を止めず、私に成されるがまま。気味が悪いが好機である事に変わりない。高々と空に吹っ飛ぶゼフォンに左手の平を翳し、

「これで終わりだ」

――女神の陽光（コード・ソール）――

上級の火炎砲撃ソールを放射。着弾する直前で、

――護り給え、汝の万盾（ケムエル）――

無数の小さな円盾を組み合わせる事で球体状の檻としたケムエルを発動。ゼフォンとソールをケムエルで閉じ込め、「朽ち果てろ」言い放ったと同時に・・・着弾。ケムエル内が爆炎で満ち、最終的にケムエルはソールの火力に耐えきれずに粉砕された。

空に咲く爆炎と黒煙の花。あますことなくソールの火力を叩きつけてやった。が、「装甲が随分と強化されたんだな」嘆息する羽目に。黒煙を引いて落下してきたゼフォンはほぼ無傷であることが見て取れた。ズンと着地したゼフォンは俯き加減で項垂れていたが・・・・

「俺っちは、土石系最強のゼフォン・エグリゴリだぁぁあああああッ！！」

ゼフォンは正常に戻ったようだ。私を睨みつけた双眸にはノイズは奔ってなく、しっかりと意志が宿っている。

――岩衝鉄破（フェルゼン・ベルク）――

周囲から岩石の剣山が突き出してきた。回避のために空へと上がる。どれだけ強力な土石系術師だろうが、空へと上がれば攻撃手段は減る。何せ土や岩や砂で構成されている地面が攻防に必要だ。だから土石系は陸戦に於いては最強と言っても過言じゃないが、空戦にはめっぽう弱い。しかしゼフォンは何を思ったのか孔雀の尾羽のような翼――エラトマ・エギエネスを翻して追翔してきた。土石系を扱う奴が、わざわざ空戦最強と謳われた私を相手に何が出来る？

「馬鹿が！　地面から離れた土石系術師がどれだけ無様に終わりを

迎えるか知れッ！」

――弓神（コード・ウル）の狩猟――

魔力弓を具現し、『ズィーベン。アギトの炎熱付加のような術式できるか？』私の内に居るズィーベンに訊く。ズィーベンの『出来るよ。今する？』という返しに『もちろん今』即答すると、『難しいけど、やる、やらせてくださいっ』逆にお願いされた。アギトより相性の良いズィーベン。アギトには本当に悪いが、これからも度々融合してもらおうかな、なんて。

『魔神、行くよっ』

――氷結圏――

弓に番えた魔力（ウル）矢にズィーベンの氷結付加が施された。正直ズィーベンの性能に驚いた。ここまで完璧に私の魔術に氷結効果を付加できるとは。そんな予想以上の働きを見せてくれたズィーベンに『ありがとう』と礼を告げ、彼女によって付加された冷気を纏うウルを放つ。

槍の如き長さを持つウルは真っ直ぐに空を翔け、ゼフォンとの距離約２００ｍ程で無数の光線と化し、奴を全方位から襲撃する。ゼフォンは流れるような動きでウルを回避し続けるが、次第に包囲が狭まっていく事を察し、

――空衝岩槍穿（シュレッケン・シュペーア）――

地面より勢いよく突き出してきた岩石の塔で防御するという手段を取った。それでもウルは岩の塔を避けるようにゼフォンへと殺到しようとするが、それを拒むように連続で岩の塔を突き出させる。ゼフォンの周囲を囲うように岩の塔は並び、ウルは全弾潰された。だが、それは悪手だぞ。

私は一気に高度を上げ、ゼフォンを囲う岩の塔の真上へ移動。ゼフォンがこちらを見上げて、目を見開いた。ああそうだ。逃げ場は無いぞ、ゼフォン。自ら逃げ場を潰したその愚行。死んで後悔しろ。もう一度魔力弓を具現し、『氷結圏！』ズィーベンの氷結効果がウルに付加された。

「今度こそ終わりだ」

――弓神（コード・ウル）の狩猟・ｖｅｒ・Ｇｅｓｔｏｂｅｒ――

ウルを放つ。もはや絨毯爆撃となっているウルに対し、ゼフォンはどんな方法で防御ないし回避を取るか。回避はまず無理だろう。防御は、方法は１つある。ゼフォンがそれを扱えるかどうかだが。ゼフォンは降り注いで来るウルをキッと睨みつけ続け、防御を取らずに直撃を受け続けた。杞憂だったか。自分を囲っている岩の塔を利用して、内側の岩壁から防御の岩柱を生やせば防御できただろうに。

『ねえねえ魔神っ。わたし、役に立ってる？』

『ああ、十分すぎるほどにな』

『やったね　』

嬉しそうなズィーベンを私は微笑ましく思う。そんな時に岩の塔が全て音を立てて崩れていく。ゼフォンは脱出できたとは思えない。生き埋めになったか、それともウルによってすでに粉々になったか。どちらにしても無傷じゃないだろうな。しばらく様子を窺っていたが、一向にゼフォンは姿を現さない。ここでズィーベンとの融合が強制解除。「プハッ、疲れたう～・・・」フラフラ飛ぶズィーベンを手の平に乗せ「お疲れ様」と労う。

「マイスターっ！」

「「「オーディンっ」」」

「アギト、シグナム。それにヴィータとシュリエルも・・・！」

私の元に集まるアギト達。ヴィータの騎士甲冑はボロボロだが、酷い怪我は負っていないな。シュリエルはほぼ無傷。さすがとしか言いようが無い。そのシュリエルからザフィーラの無事を聴き、ひとまず安堵。そしてシャマルに最大の感謝と敬意を。さすがだよ、湖の騎士。

「ズィーベン・・・」

「アギトお姉ちゃん・・・？」

融合騎姉妹の六女アギトと七女ズィーベンが真っ向から向かい合う。ズィーベンが「アギトお姉ちゃん。わたし、魔神と一緒に戦いたい、

これからも」とハッキリと意志表示。ヴィータとシュリエルは目を見開いて驚愕。シグナムは考え込んでいるような格好で無言。で、アギトは「マイスター。ズィーベン、マイスターの力になれる？」そう不安そうに訊いてきた。

アギトの前に手の平を差し出す。アギトがちょこんと手の平の上に座ったのを見て、「ズィーベンは確かに私の力になるよ」と率直に告げる。アギトの頭を撫でつつ「みんな。ズィーベンをグラオベン・オルデンに迎え入れたい。良いだろうか？」と尋ねる。

「私は構いません。ズィーベンがオーディンの補助が出来ているのは確かですし」

「あたしもまぁ良いと思うな。ほんのちょっとしか見れてなかったけど、ソイツがオーディンの魔導に干渉して氷結付加してたろ。あれを見れば十分な戦力だって思えるぜ」

「そうだな。融合騎は単独戦力としても十分だ。オーディンの融合騎となれば、それこそ重要な存在となるだろう」

シグナムとヴィータとシュリエルは、ズィーベンを家族に招き入れることに肯定的だ。シャマルとザフィーラにも訊いてみたかったが、仕方ないが事後承諾になりそうだ。おそらくザフィーラは文句を言わず、私の決定に従うだろうな。そしてシャマルは、

（妹分が増えてまた喜びそうだ）

ズィーベンを愛おしく抱きしめまくる画が浮かび上がってくる。そ

してアギト。アギトは深く考える素振りを見せた後、「一緒に戦おう、ズィーベン」そう右手をズィーベンに差し出した。ズィーベンはアギトの右手を見詰め、シグナム達を順繰りに見回した後、私に振り向いて「えっと・・・」と不安げに見てきた。さっきから私の融合騎になると言っていた割には迷いがあるんだな。その迷いを払拭するべく「ようこそ、ズィーベン。グラオベン・オルデンへ」と微笑みかけた。

「マイスターの融合騎を務めるんだったら失敗は許されないからな、ズィーベン」

アギトは自らズィーベンの手を取って握手。

「む。今のわたしは、ゲルトの融合騎の時とは違うもんね」

アギトの手をギュッと握りしめ、ズィーベンはニッの笑い、アギトもニッと笑い返す。

「まだまだぁぁぁあああああああッ！！」

そんな叫びと共にココアブラウンの魔力が立ち上り、瓦礫を空へと舞い上がらせた。瓦礫の山だったその中心にゼフォンは居た。右腕を失い、ところどころから火花を散らしているボロボロな姿で。エラトマ・エギエネスも半分以上が散っていて、見るも無残としか言いようがない。と言うか火花を散らすって完全に機械だな。それでよく魔術を扱え・・・・あぁそうか。"ヴァルキリー"ではなく"アムティス"に近いんだな、イリュリア製の"エグリゴリ"は。

「魔神っ。もう一度わたしと――」

「ちょっとズィーベンっ。さっきからマイスターの事を魔神魔神って。そんなイリュリアが付けた名前で呼ばないでよっ！」

「そうだな。オーディン、と気軽に呼んでくれていいぞ」

「ん～～・・・じゃあアギトお姉ちゃんとおなじマイスターって呼ぶね。それじゃあマイスター♪」

「ああっ。みんなは離れていてくれ」

ズィーベンと3度目の融合を果たし、こちらを見上げているゼフォンを見下ろす。もはや融合せずとも勝てる戦いにも見えるが、"エグリゴリ"を相手に油断するのは、な。それにゼフォンはイリュリア製の"エグリゴリ"。もしかすると同じイリュリア製のミュールが参戦してくる可能性がある。そうなると少しキツイ。ならばミュールが現れる前に決めるっ！

「ズィーベン！」

――舞い振るは、汝の麗雪（シャルギエル）――

『うんっ！　氷結圏、行くねっ！』

一振りの氷の長槍を携える。ズィーベンによって強化されたシャル

ギエルを、「行けッ！」ゼフォンへ向かって投擲。

――岩衝鉄破（フェルゼン・ベルク）――

ゼフォンは迎撃の為に周囲から岩石の剣山を発生させた。シャルギエルが剣山に着弾。一瞬で凍結させる。シャルギエルを両手に携え、右を投擲。凍った剣山を粉砕し、ゼフォンの足元に着弾。地面とゼフォンの両脚を凍結させていく。

なんだ。もうまともに動く事も出来ていないじゃないか。「ならば・・・！」次いで左のシャルギエルを投擲。ガクッと膝をついたゼフォンへと一直線に向かうシャルギエルを見送っていた。が、

「わ～たし～のう～たを～聴～～いてくださ～～い～～～～♪」

――砕音破ただ狂おしく（クヴァール・ゲロイシュ）――

「ピアチェーヴォレ☆　ボエぇぇ～～～ホゲぇぇ～～～ラ～～ラ～～ララ～～～～～♪」

そんな歌声と共に、途轍もない超音波が私たちを襲った。シグナム達が苦悶に満ちた悲鳴を上げながら地面へと墜落していく。そして私の内側に居るズィーベンも『頭が割れる・・・！』と苦悶の声を漏らしている。

（くそ。無属性・音波系の"エグリゴリ"か・・・！）

随分と器用に再現できたなイリュリアの技術部も。耳を押さえつつ

空のある一点を睨みつける。

「ミュール・エグリゴリ！！」

「久しぶり、神器王のお兄ちゃん♪」

超音波が切れたと同時にミュールがその姿を現した。ベルカに訪れた時と変わらぬ１２～１３歳ほどのあどけない少女だ。藍紫色のセミロングの髪は少しウェーブが掛かり、柔和な双眸は赤紫色。あの時との唯一の違いは、子供に似つかわしくなかった水色のイブニングドレスではなく、年相応のワンピース姿。

「ごめんねお兄ちゃん。本当はお兄ちゃんとお遊びしたかったけど、今回は弟の回収が最優先なの」

「弟・・・ゼフォンか・・・！」

ミュールの魔術によって、シャルギエルはゼフォンに届く前に粉砕された。だからゼフォンを倒せず、奴は「ミュール・・・」と私たち――というよりミュールを見上げている。ミュールは「ゼフォン。命令無視。お姉ちゃんは怒ってます」頬をプクッと膨らませてゼフォンを叱咤。

「ほら、撤退だよゼフォン。そんなボロボロになって。おじさん達もプンプンだよ」

「待て、ミュール！　お前なら知っているんだろ！？　ガーデンベ

ルグ達は、なぜお前たちのような複製品を――」

「それは、秘密なのですお兄ちゃん。でも、これだけは言える」

ミュールはオレンジ色の魔力でエレキギターのようなモノを創り出し、「盛り上がっていきましょ～～　」魔力の弦を物凄い指捌きで掻き鳴らす。

――輝きたる音軍（ルスティヒ・マルシュ）――

魔力ギターより閃光系と思われる魔力で形作られたト音記号、八分音符、全音符、シャープ、フラット、ナチュラルと言った音符が放射状に放たれて、それらが一斉に私に向かってきた。1つ1つがSSランクはある。受けに回れば障壁ごと魔力を削られて、撃墜される可能性大。ならば、

――瞬神の飛翔（コード・ヘルモーズ）――

空戦形態となって全力回避。だがその間に「しまった！」ゼフォンを取り逃してしまった。ゼフォンは地面に潜り、戦場から離脱してしまっていた。だったらミュールだけでも。

「フォルテっ、フォルティッシモっ、フォルティッシッシモっ♪
で・も、ジェンティーレも忘れずに～～♪」

音符の数が半端じゃない。弦一本弾くだけで数十個の音符が生み出されている。ミュールのギターは一般的な六弦。1回流すだけで7

０以上の音符が発生、私へと突撃してくる。連続で六弦を掻き鳴らすために、ほんの数秒で４ケタ近い音符が生まれる。厄介だな。

「わたし達エグリゴリは、お兄ちゃんを殺すために動いてるって事♪」

まぁ速度はさほど速くないため追いつかれる事は無いのが救いか。魔力弓を具現させ、魔力矢ウルを番える。

「でも、今日は残念。遊んでいられないの♪」

――弓神（コード・ウル）の狩猟――

使用できる魔力量最大のＳＳＳクラス魔力で創ったウルを放つ。無数の光線となったウルは音符の群れへ突撃し、正確に貫いて爆砕。爆発が連鎖して、周囲の音符を巻き込んで数を次々と減らしていく。空に私のサファイアブルーとミュールのオレンジの魔力光の花が無数に咲き乱れる。

ミュールの「ご清聴あ～りがとぉ～～～～ですっ♪」そんな声が聞こえ、魔力反応と共に気配が遠ざかっていく。やってしまった。軽率な真似をしてしまった。爆散している魔力光が邪魔で、ミュールの正確な位置が判らない。手を拱いている間にミュールは完全に離脱したようで、戦場のどこにもあの子の魔力反応は無い。

「・・・ズィーベン。ありがとう、おかげで何とかなったよ」

「『こちらこそありがとう。ゼフォンに壊されずに済んだ・・・』

本当にありがとうです」

融合状態を解き、私の目の前に現れたズィーベンは疲労に満ちた顔で、それでも笑みを見せてそう礼を告げた。差し出した右の手の平の上にズィーベンを乗せ、降下して耳を押さえて苦悶の表情を浮かべているアギト達に「大丈夫か？」と尋ねる。

アギトは「なんとか」と、シグナムは「耳鳴りが酷いだけですね」と、ヴィータは「目が回って気持ち悪ぃ・・・」と、シュリエルは「私も問題はありません」と答えてくれたものの、みんなは結構な疲労を見せている。

「すぐに治癒を掛ける。少し待って――」

「だ、ダメだよマイスターっ」

「オーディンだって顔色最悪じゃねぇかよ」

「アギトとヴィータの言う通りです。オーディン。あなたももう限界なはずです」

アギトとヴィータとシグナムにそう言われ、「すまない」と謝ってその場に腰を降ろす。魔力を限界にまで使い果たした。正直２人分のラファエルを使った瞬間に記憶を失うだろうな。というかもう意識が途切れそうだが、かぶりを振ってギリギリ保たせる。少し休みを取り、回復したシグナム達が立ち上がったのを見て、私も続いて立ち上がる。よし。魔力はあまり回復していないが、体力気力だけは問題ないな。

「ミナレットの攻略を今すぐにでも、と思っていたが無理だな。一度アムルへ帰ろう・・・って、うん？」

見ればシュリエルだけはまだ座り込んだまま。「申し訳ありません、未だ回復しきれていません」とばつが悪そうに謝った。どうやらシュリエルはミュールの魔術をまともに受けてしまったようだな。歩けないなら「よっと」シュリエルを横に抱え上げる（俗に言うお姫様抱っこ）と、シュリエルは「ひゃっ？」と可愛らしい悲鳴を小さく上げた。

しまった。一言断ってからやるべきだった。謝ろうとしたら「オーディン。重くないですか？」そう上目遣いで訊いてきた。ちょっと待て。どうしてそんなにしおらしい？　と、とりあえず「重くない」そう返す。実際に重くないし。そもそも女性ひとり抱え上げられないようなもやしじゃない。

「いいな～羨ましいな～、シュリエル・・・」

「何が羨ましいのアギトお姉ちゃん・・・？」

アギトから何とも言えない視線が突き刺さって居心地が若干悪いような・・・。話題を逸らそう。シュリエルを横抱きしたまま拠点へと向かう道すがら「ズィーベン」と、アギト達と共に後ろをついて来るズィーベンを呼ぶ。すると「なに？　マイスター」背より生える一対の白翼を羽ばたかせて私の前まで飛んできた。

「ズィーベンという名前のままでいいか、それとも私が新しく名前

を付けるか、どっちがいい？」

ズィーベン。七番目という意味の名前に縛られてほしくないから、名前を休憩の間に考えさせてもらった

勝手な事だからまず確認を取ってみたんだが、「新しい名前ほしいっ　」ズィーベンという記号であり名前を捨てる事を、彼女は悩む事なく決めた。

「そうか。じゃあ名前を贈らせてもらうよ。君の新しい名前は、アイリ、だ」

「アイリ・・・？　アイリっ♪　うん、ズィーベンよりずっと可愛い　」

ズィーベ――いや、アイリは満面の笑みを浮かべて、私の周りを飛び回る。アイリ。氷雪に愛された者という意味を込めた名前だ。ベルカ語で、氷を意味するアイス、愛を意味するリーベを合わせただけだが、私の願いと共に贈ったその名を喜んでもらって良かった。アイリは「アイリ、アイリ、わたしはアイリ♪」そう歌うように私たちの頭上を旋回し続ける。シャマル達と合流するまでの間、アイリは終始ご機嫌で、シュリエルは顔を赤らめたままで、アギトは若干不機嫌だった。

「オーディンさんっ、みんなもっ。無事で良かったわっ♪」

私たちに気が付いたシャマルが手を大きく振って出迎えてくれた。側には顔色が良くなったザフィーラも居る。この目でザフィーラの

無事を確認できた事で、心底安堵。労いの声を掛け合ったところで、
「ところでオーディンさん。その可愛い女の子はどなた？」とアイリにロックオンしたシャマル。
好奇な視線を向けられたアイリは「アイリっ。わたし、アイリっ♪」またもや御機嫌オーラ全開、満面スマイル、ハート乱舞で自己紹介した。するとシャマルは「可愛いっ♪　グラオベン・オルデン――というよりセインテスト家の末っ子ちゃんねっ」アイリを抱きしめた。

「改めて私から紹介するよ、シャマル、ザフィーラ。この子はアイリ。アギトの妹にあたる氷結の融合騎だ」

「よろしくね。えっと・・・」

「シャマルよ。アイリちゃん」

「主が認めたのなら歓迎しよう。ザフィーラだ」

自己紹介を終えて、今回の戦闘で被った損害を国境防衛騎士団の隊長クラスの騎士たちから被害状況などを確認。
死者は出なかったが、３分の１である３００人弱に重軽傷者が出た。死者が出なかった分、イリュリア騎士団よりかはマシだな。それから私たちグラオベン・オルデンは防衛騎士団と別れ、アムルへの帰路に着いたところで「しかし・・・・エグリゴリとは恐ろしい者でした・・・」シグナムがボソッと呟く。

「だな。あとで出て来たミュールって奴も凄かった・・・」

「ゼフォン。ミュール。どちらもエグリゴリだが・・・。オーディン、あなたはあの2体を指して複製品と仰っていましたが・・・」

自力で歩けるまで回復し、私の側を歩くシュリエルが真剣な眼差しを向けて来た。アギト達も、私から"エグリゴリ"について聴きたいようだ。

「ああ。ミュールとゼフォンは私の追っているエグリゴリとは別物だ。ミュール達を造ったのはイリュリアの人間だ。オリジナルのエグリゴリ――いやヴァルキリーは私の遠い祖先が、今は滅んでいる技術で生み出したものだ」

嘘をまた1つ。"堕天使エグリゴリ"の基である"戦天使ヴァルキリー"を生み出したのは私とシェフィだ。

「もしミュール達がオリジナルなら、こう言ってはなんだが敵味方関係なく・・・アギト達も含めて全員殺されていただろう。真っ向から戦えるのは私1人だけ。しかしみんなを護りながらとなると、私とて無事で済まない」

「そ、そんなに強いんですか？　オーディンさんの追うエグリゴリは・・・！？」

「魔力出力だけで大いに違うな。私が先にゼフォンに対して発動したいくつかの魔道を皆はどう思った？」

「どうって・・・すげぇなって。あんなデタラメな魔力と魔導、人が使うの初めて見たし」

ヴィータを皮切りにシグナム達も同じような感想を言っていく。ＳＳランクで慄いているみんなに「オリジナルはその魔力以上を出し、私の魔道をその身に受けても平然としていられるんだ」そう告げると、しばらく沈黙。そして信じられないと言った風に失笑。私が表情を硬くしたまま無言で居ると、私の言っていることが真実で事実なんだと察したみんなは俯いた。

「私も今以上の魔力を出す事は出来る。しかしその代償として・・・」

「記憶を失う、という事ですね」

「ああ。だからエグリゴリとの戦闘以外では基本全力は出したくない。すまないな。みんなには辛い戦いに臨ませる事になってしまうかもしれない・・・」

「お気になさらないでください、オーディン。我ら守護騎士ヴォルケンリッターは、あなたの力となるために存在しているのですから」

「そうですよ、オーディンさん。エグリゴリとの戦いでお力になれない事は辛いですけど、それ以外は何の苦じゃありません」

「だからオーディンは、自分のやりたいように戦っていいんだ。あたしらはそれを全力で補助するから」

「微力ではありますが、我もこの拳を主の為に揮いたく思います」

「ええ。あなたの信念に集った我ら。どんな苦難にも立ち向かい、あなたの願う道を拓きましょう」

「ありがとう。私は良い家族を持って幸せだ」

「ちょっ、マイスターっ。あたしもマイスターの為に何だってするよっ」

「アイリはね、今のところイリュリア打倒を優先するね。エグリゴリはそのついで、ということで」

アイリのその一言が原因となり、アムルへ着くまでアギトとアイリが騒ぎっぱなしだった。さて。エリーゼ達にはなんて言ってアイリを紹介しようか。居候の身で次々と家族を増やすのもちょっと考えものか・・・？

Ｍｙｔｈ１５エリーゼの涙・アムルは燃え朽ちて～Ｎｏ　ｍｅｒｃＹ～

†††Ｓｉｄｅシャマル†††

私たちグラオベン・オルデンは、全員が魔力も体力も消費してしまった事で一度アムルに戻る事になった。私も負傷者の治療で魔力が空っぽ。ザフィーラは死にかけたし、オーディンさんも"エグリゴリ"（偽物だったようだけど、それでも尋常じゃない強さ）との戦闘で、それ以上の戦闘続行が不可なほど疲労。
アギトちゃんもシグナムもヴィータちゃんもそう。あのシュリエルだって立てないくらいだったもの。そして私たちの新しい家族になった、アギトちゃんの妹に当たる融合騎の七番騎・アイリちゃんも
「今さら疲れが・・・」ってフラフラ。

「アイリ、アギト。２人ともお疲れさまだ」

オーディンさんはそう労って２人を自分の肩に座らせた。アギトちゃんはそれだけで幸せそうに破顔して、アイリちゃんは安らげる場所と解ってほんわか。
可愛いわ２人とも。このまま他の融合騎も家族に出来ないかしら。そうしたらもっと楽しい日常を送れるかもしれないのに。そんな夢のような願いを胸に、私はオーディンさんの肩の上で話している２人を眺める。ある程度魔力も回復したことで、空を飛んでアムルへと向かう事になって・・・・

「ん？　なんだ？　様子がおかしい・・・！」

オーディンさんの口から焦りの含まれた、私たちにも不安を抱かせる声がぼそりと出た。私たちにはまだアムルは遠くて良く見えないけど、オーディンさんが言うならたぶん本当に異常が起きている。オーディンさんは速度を上げて、私たちも必死に追いかける。そこで判る。オーディンさんの結界が無くなってる。

それだけじゃなくてアムルの中央区から黒煙が上がってる。そこは、私たちの住んでいるエリーゼちゃんの家がある場所。オーディンさんは「エリーゼ！！」と叫んで、さらに速度を上げて私たちを置き去りにした。その衝撃でアギトちゃんとアイリちゃんは「わぁ～～っ！？」オーディンさんの肩から投げ出されて、アギトちゃんはシグナムに、アイリちゃんはシュリエルに受け止められた。

「くそっ、どうなってんだよっ！」

「判らん。だが我々がアムルを空けている間に、別動隊に攻め込まれたと見るべきだ・・・！」

「しかしあれほどの高密度の魔力で創られた主の結界を貫くなど出来るものなのか・・・！？」

「判らない。ただ何者かが結界を破壊した事実だけが、我らの目の前にある・・・！」

「そんな事より急ごう！　エリーゼ達が心配だよっ！」

「そうね・・・・！」

私たちも速度を上げて続く。どうか誰も亡くなっていませんように。そう心の奥底から願いながら。

†††Ｓｉｄｅシャマル⇒エリーゼ†††

燃え上がるアムルの中央区。また・・・また、わたしの宝物（アムル）が壊された。

「っ・・アンナ・・・」

燃え盛るわたし達の屋敷を見ながら泣く事しか出来ない。わたしは、やっぱり何も出来ない無力な小娘だった。ぺたりと座り込んでるわたしは、ターニャに治癒を掛けてるルファを見る。ルファも泣きながら、それでも医者見習いとして頑張ってる。

少し離れたところではモニカが街のみんなに治癒を行ってる。２人は無傷。わたしも無傷。ただ、アイツに向かって行ったターニャや街の何人かが重傷を負ってる。街は壊されちゃったけど、救いは誰も死ななかった事。アイツは、誰も殺さなかった。そう。アイツの狙いは・・・アムルを侵略する事じゃなくて・・・「アンナ・・・！」どこにも居ない親友の名前を呟く。

「エリーゼ！！」

耳に届くわたしの大好きな人の声。バッと空を見上げれば、そこには背中から蒼く光り輝く剣の翼を２２枚生やしたオーディンさんが。

涙がもっと溢れ出てくる。フラフラ立ち上がって、降り立ったオーディンさんの元に覚束ない足取りで向かう。・・・「オーディンさん」ごめんなさい・・・「オーディンさん」お願い・・・「オーディンさん」助けて・・・「オーディ・・ン、さん・・」アンナを・・・「オーディンさん！」助けて・・・！

わたしは何度もオーディンさんの名前を呼びながら胸にしがみ付く。嗚咽が止まらなくなる。わたしを抱き止めてくれるオーディンさんは「何があったんだ？」って、治癒を終えてきたモニカとルファに尋ねる。

「ぅく・・イリュリアの・・ひぅ・イリュリア最強の騎士が来たんです・・・ひっく・・・」

「はい・・・イリュリア騎士団総長・・グレゴール・・・です・・・ぐす」

「騎士団総長・・・！？・・・エリーゼ、モニカ、ルファ・・・。すまない。私がもっと早く戦いを終わらせて帰っていれば・・・」

わたしの両隣りに来たモニカとルファもオーディンさんは抱きしめた。

「なんだよこれ・・・ひでぇ事しやがる・・！」

「あたし達の家が・・・」

ヴィータとアギト、シグナムさん達も無事に帰って来てくれた。そ

れと、見知らぬ小さな女の子が1人増えてる。アギトと同じ大きさだから、すぐに融合騎の子なんだと理解。オーディンさんがまた味方を増やしたよう。本当ならその子もみんなと一緒に、いつもみたいに笑顔で迎えたかった。

でも・・・もうそれは出来なかった。それも辛かった。美味しいご飯をみんなで食べて、楽しくお喋りして、また明日を迎える。それがもう出来ない。そう思うと止まりかけた涙がまた溢れ出てくる。モニカとルファももう泣きだしちゃった。

「・・・とりあえず消火、だな。我が手に携えしは確かなる幻想・・・！」

わたしとルファの背中に回されていた腕が離れて、屋敷に向かって伸ばされた。屋敷を燃やしている炎がオーディンさんの手の平に吸い込まれていって、一瞬で鎮火。でも屋敷の大半は燃え落ちて、もう住む事が出来そうもない。父様と母様、使用人のみんなとの思い出も、オーディンさん達が来てからの思い出も・・・消えた。

「そう言えば、アンナはどこです・・・？」

シャマルさんのその一言で、わたし達は体を震わす。早く説明しないといけないのに嗚咽が止まらなくて上手く声が出せなかった。けど無理やりにでも押さえ込んで話さないと・・・

「ぅく・・・実は・・・」

。―。―。―。・・・回想です・・・。―。―。

シグナムさん達がイリュリア騎士団の迎撃に向かって、わたし達はいつものように祈りをしていた。どうかみんなが無事に帰ってきますように、って。祈りを終えて「砲撃・・・止んだね・・・」モニカが窓から空を眺めながら呟いた。わたし達も倣って窓から空を眺める。オーディンさんが張った魔力の結界によって空が桃色で、ちょっと変な感じ。

「アンナも大役を任されちゃったよね。すごく緊張してるんじゃないの？」

「そう？　私は嬉しいわ。魔導はオーディンさんのものだけれど、結界管理は私。アムルを護れているのは私。誇りに思うわ、この役」

モニカにそう言われて、アンナはそう誇らしげに笑みを浮かべながら手に持っている一振りの剣に視線を移す。あの剣が、あの結界を操作するための鍵だってシグナムさんは言っていた。実質アムルを護っているのは確かにアンナかも。

それから少し。何事もなく時間は経っていって、そろそろオーディンさん達が帰ってくる頃かな、と思っていると、ズズンって屋敷が揺れた。

「なに？　今の揺れ・・・？」

「ちょっ、あれっ！　煙が上がって――爆発っ！？」

ルファが慌てて窓の外を指差した。ルファの言う通り街から黒煙が

上っていた。事故？　ううん、だったら連続で爆発が起きるわけがない。まず間違いなく侵入者がいる。アンナが「これほどの強力な結界を抜けて来る奴なんて、かなりまずい相手だわ！」そう言って駆け出した。わたし達もアンナに続いて屋敷を飛び出して、爆発が起こってる場所を目指そうと中庭を走っていた時、

「ふむ。やはり自らが治める街の危機と知れば、否応なく安全な穴倉より出でるが主の習性か」

堅苦しい口調をした男の声が頭上から降ってきた。わたし達の先頭を走っていたアンナが急に立ち止まりつつ振り返って「屋根の上！？」屋敷の上を見上げた。わたし達も振り返って屋根の上を見上げる。そこには1人のおじさんが居た。

ただ屋根の上に登りたがるだけの頭が少し残念なおじさんならどれだけ良かったか。そして、アムルの住民であればどれだけ良かったか。屋根の上に立つおじさんは、アムルの住民でもなければ頭が残念な人でもない。

「そんな・・・どうしてお前のような奴がここに居る・・・グレゴール！」

「礼儀を弁えぬ娘だ。まぁ、よかろう。敵対者同士、礼も義も必要あるまいて」

アンナがわたし達を庇うように前に躍り出ておじさんを睨みつける。

「イリュリアに牙を剥く愚か者である魔神オーディンの弱点を突き

に来たのだ」

おじさん――ううん、イリュリア騎士団総長グレゴールは真っ直ぐにわたしを見る。グレゴール・ベッケンバウアー。最前線で活躍できる騎士の平均年齢５０歳を超えてもなお最強と謳われる騎士だ。そんなイリュリアの超大物が、「エリーゼ・フォン・シュテルンベルク卿。一緒に来てもらおう」わたしを狙ってる！

「逃げてエリーッ！！」

アンナのその叫びでハッとして踵を返そうとするけど、足が動かない。恐い。怖い。コワイ。グレゴールが、じゃなくて・・・アンナを失いそうになるのが何よりも怖い。だって相手はイリュリア最強の騎士。アンナだって強いけど、相手が最悪過ぎる。

二の足を踏んでいると、「モニカっ、ルファっ、エリーを連れて逃げてッ！！」アンナは2人にそう告げる。でも2人も動けない。アンナを独りにして、その先がどうなってしまうのか想像に難くないから。

「何やってるのッ、早く逃げ――」

「無理を言うものではない。あの娘たちは、お前の身を案じているのだ。親しき者の危険を目の前にして、そうそう見捨て逃げる事など出来はせん」

何もかもグレゴールの言う通り。アンナが「私はあなた達を護る騎士なのっ！　行きなさいッ」怒鳴ってくるけど・・・。嫌だよ。置

いていけないよ。アンナ、殺されちゃうかもしれないのに。もう二度と会えないかもしれないのに・・・。
両拳をギュッと握りしめてグレゴールを睨みつける。すると「良い。小娘にしては鋭い殺気だ」そう言いながら地上に降り立った。グレゴールは体を包んでいたマントを払って、背中にある鞘から一振りの剣を抜き放った。

「再度言おう。エリーゼ・フォン・シュテルンベルク卿。我と共に来てもらおう」

「馬鹿を言わないで。誰がエリーを連れて行っていいなんて許した？」

アンナがレイピア・"アインホルン"を起動して、剣先をグレゴールに突きつけて・・・目にも留まらぬ速さでグレゴールの胸を貫いた。「え？」わたしたち全員からそう漏れる。あまりに呆気なく刺さったアンナの"アインホルン"。
グレゴールの胸が少しずつ血に染まっていく。そしてガクッと膝が折れてそのまま地面に倒れ伏した。アンナは呆けた顔で「やった・・・の？」グレゴールの生死を確かめるためにしゃがもうとして、

「ふむ。瞬速にして華麗な刺突、実に見事だったぞ娘」

「「「「っ！？」」」」

何事もなく立ち上がったグレゴールにわたし達は戦慄。だって確かに刺さったし血も出た。それなのにグレゴールは顔色一つ変えないで、今こうしてわたし達を見詰めている。グレゴールは刺された辺

りを弄りながら何度も頷く。それを見てアンナが「逃げて・・・早く・・・！」震えた声でそう言ってきた。そして足元に赤紫色の魔法陣を展開して、"アインホルン"に赤紫色の雷撃を纏わせた。

――カスパール――

「お願いだから早く逃げてッ！」

"アインホルン"を振るう事で生まれた雷撃の魔力弾を８基、グレゴールに向けて放った。グレゴールは動かないで、何をするまでもなく堂々と仁王立ちのまま直撃を受け入れていく。感電しているのは確か。だけどそれでも倒れないし笑みも消さない。全身に鳥肌が立つのが判る。おかしい。刺されても雷撃を受けても倒れないその体もそうだけど、ただ真っ向から受けようと考えるその思考を導き出す頭はもっとおかしい。

「あ、あなた・・ま、まさか・・・痛みに快感を覚える人・・・？」

グレゴールのあまりの異常さにアンナがそう言って後ずさる。するとグレゴールは大笑い。ひとしきり笑った後に「解らんか？　お前の魔導程度では倒れん、と教えているだけよ」と告げた。それでやっと思い知る。あれだけの攻撃を受けても平然としている。それはつまりアンナの攻撃は一切通じない。アンナはグレゴールに勝てない。これは解ってた。だけど何一つダメージを与えられないなんてあんまりだよ。

「解ったか？　解ったのなら退け。そしてお前の主であるエリーゼ

・フォ・シュテルンベルク卿を差し出せ」

「寝言は寝て言うものよ・・・！　ちゃちな攻撃で倒れないなら、直接その心臓と脳髄を貫いて殺してやるッ！！」

――バリサルド――

アンナの雷撃纏う刺突を剣でいなしたグレゴールは「無駄だというのがまだ解らんか？　いや、解っていながらか。大した忠義心だ」空いている左手で拳打を放ってきた。アンナも負けじと顔面に迫る拳打をかわして肩から突っ込んだ。グレゴールは少しもよろけない。でも「体内に直接電流を流して、内臓を焼き滅ぼしてやるッ」またグレゴールに"アインホルン"を刺したアンナがそう言った直後、

――バリサルド――

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ッ！！」

グレゴールが絶叫。体内に高出力の電流を流されて、バチバチ周囲に放電しながらもグレゴールはまだ倒れない。それどころか左手を伸ばして「うそでしょ・・ぅぐ」アンナの胸倉を掴み上げた。首が閉まっている所為でアンナは苦しそう。助けに行きたいのに恐怖で足が動かない。

アンナは口端から涎を流しながら「逃げ・・て・・・はや・・」"アインホルン"から手を放して、グレゴールの左手首を鷲掴んで放そうとする。恐怖を振り払って「アンナっ！」駆け寄ろうとしたその時、「うぉぉおおおおッ！」幾つもの雄叫びが聞こえて来た。

街の人たちだ。騎士団の皆さんから譲り受けた武装を手に、グレゴールに突撃して行く。

「良い。実に良い関係を構築しているようだな、アムルの街は。羨ましい限りだ」

グレゴールはそう笑ってアンナを放り投げた。わたしとモニカとルファでなんとか受け止める。げほげほ咽るアンナに「大丈夫アンナっ？」声を掛けると、「何で逃げないの・・・！」責めるような目を向けて来た。

だから「置いていけるわけないよッ！」怒鳴る。モニカも「見殺しになんか出来ないって！」って泣いて、ルファだって「そういうこと」ってアンナにデコピン。少しアンナが放っていた空気が和らいだ気がした。でも「うわぁぁぁあああっ！」悲鳴がわたし達を凍らせる。街のみんなが宙を舞って・・・ドサドサ地面に叩きつけられた。

「加減はした。が、骨折程度の代償は覚悟してくれたまえよ、アムルの民たちよ」

グレゴールは体に刺さってる"アインホルン"や剣に斧を澄まし顔で抜いたと思えばポイポイ放り捨てて、でも"アインホルン"だけはアンナの足元に狙って放った。ザクッと地面に刺さった"アインホルン"を抜いたアンナが「エリー。モニカ、ルファ。お願い。逃げて。でないと絶交よ」そう言って、

「う・・・あああああああああああああああああああああああッ！！」

また突撃して行った。どうすればいいの？　一体どうすればわたし達は全員無事で逃げ伸びられるの・・？

ポンと肩に置かれる手。振り返れば、服飾店シュテルネンリヒトの店主ターニャが居た。いつものニコニコ笑顔じゃなくて、今までに見た事がない真剣な硬い表情。服装も、丈の長い長衣で、両腰までスリットが入ってる。足を上げれば中が見えちゃうし、体にピッタリ張り付くほどだから体型が判る、かなり妖艶な格好。

「私とアンナで押さえる。あなた達はその間に逃げて」

――紅蓮拳――

ターニャはそう言った後、突き出した拳から真っ赤に燃える火炎の砲撃を放った。砲撃が消える前にターニャはもう動いていた。火炎砲の尾を追いかけるように走って、火炎砲を回避する事で生まれたわずかな隙にグレゴールに肉薄。

そして「春光拳・炎螺双砕！」両手の平に渦巻く炎の塊を生み出して、掌底と同時に炎塊をグレゴールにぶつけて爆発を起こさせた。グレゴールはその爆発で吹っ飛んで屋敷の外壁を打ち破って・・・その姿を屋敷内に消した。屋敷の壁が壊れたけど、命があってこそだ。壊れた屋敷は・・・・直せばいいんだ。

「今よっ！　早く今の内に逃げてッ！」

「見たでしょ。私とアンナの２人なら何とかなるから・・・・！」

アンナとターニャから反論はもう許さないって目を向けられる。わたしは「２人とも。・・・みんなでまた笑い合う。これ、約束だから」２人にそう告げて踵を返して走りだす。モニカとルファもわたしに続いて来る。オーディンさん達が帰ってくるまで何とか耐えて、アンナ、ターニャ。

街中を走る中、街のみんなに出来るだけ中央区から避難するように呼びかけながら「ダメっ、やっぱり思念通話が繋がらない！」オーディンさん達の誰でもいいから連絡が繋がれば良いと思って送るけど、全然繋がらない。

「また屋敷の方で爆発が起きてる・・・！」

ルファが袖で涙を拭いながら悔しげにそう呟いたのが聞こえた。わたしだってもう涙でぐずぐずだ。でもアンナとターニャが命がけで戦ってる。だから今は足を止めてまで泣いてる場合じゃない。そう思ったのに・・・「結界が、消えた・・・！？」アムルを護っていたオーディンさんの結界が消えた。わたし達は立ち止まって、桃色から澄んだ青色に戻った空を見上げる。

「結界・・・制御してたの・・・アンナ、だよね・・・？」

モニカの呟きに、わたしは脚から力が抜けてその場にへたり込んでしまった。嫌な想像が頭の中を駆け巡る。地面に倒れ伏すアンナとターニャ。２人から広がる赤い・・・。「ヤだ・・そんなの・・嫌だ！」すぐさま立ち上がって屋敷へと続く街路を逆走。

後ろからルファの「行っちゃダメっ！」って制止が掛かるけど・・・行かなきゃっ。走る。走る。走る走る。何度か足がもつれて

転びそうになるのを無理やり耐える。

「エリー・・・・！」

名前を呼ばれた。しかもその声は、今一番安否を知りたかった「アンナっ・・・？」の声だ。キョロキョロ辺りを見回すと、一軒の家の陰から・・・「え？」わたしが出て来た。呆けてしまっていると、「変身魔法で、今はあなたの姿をしてるのよ」アンナの声がもう1人のわたしの口から発せられた。

「変身魔法って・・・何でわたしなんかに・・・・あ」

どうしてアンナがわたしに変身しているのかその理由を察した。だからアンナのその馬鹿げた考えをすぐさまやめさせようと駆け寄ったところで、

「ごめんね」

「ぅぐ・・・！？」

お腹を殴られた。殴られたところを手で押さえながら、どうして？って訊こうとしたけど声が出ない。それどころか目の前が暗くなる。ダメ・・・意識が遠のく。耳にドサッと音が届く。わたし自身が倒れた音。揺らぐ視界に入るアンナの表情はとても悲しそうで・・・辛そうで、もう泣いてしまいそうなもの。

「今までありがとうエリー。オーディンさんと幸せになってね。・

・・・さようなら、私の命よりもずっと大事な・・・私の妹（エリー）・・・」

ここでわたしが完全に意識を失った。

あれからどれだけ経ったんだろう。わたしは目を覚まして・・・「アンナっ！？」すぐさまアンナの姿を捜す。気が付けばそこは誰かの家の中で、わたしはベッドに寝かされていた。わたしはアンナを捜すためにすぐに跳ね起きて家の外に出る。

それにしても「アンナ、本気で殴ったよね・・・痛い」殴られたところがズキズキ痛む。でも構っていられない。今はアンナを捜さないと。だけど、どこを捜せばいいのか判らないまま走り続けて・・・結局は逃げ出した屋敷に戻ってきた。

「・・・・ひどいよ・・・・・」

最後に見た時より酷くなってる屋敷の損害。フラフラ近付いていくと、「ターニャっ！」燃える屋敷の前で倒れてるターニャの姿に気付く。駆け寄ってみれば、ターニャは傷だらけだった。

「エリー・・ゼ・・・無事・・で・・よかった・・・」

「無事だよターニャっ。ごめんなさい・・・ありがとう・・・！」

わたしを見て安堵してるターニャに、守ってくれたことにお礼を言う。するとターニャも「ううん・・・私も・・・アンナの事、ごめん・・ね」って謝った。そしてターニャは何度も意識が飛びそうになるのを堪えながらも教えてくれた。

アンナとターニャが、グレゴールからわたしを護るために考え抜い

た末に決断した策。それはやっぱりわたしの考え通りだった。アンナは、わたしの身代わりとしてグレゴールに連れ去られた。

「「エリーゼっ！」」

後ろから呼びかけられて振り返る。息を切らしたモニカとルファが駆け寄って来て、私の勝手な行動を怒る前に・・・「ターニャっ、それに街のみんなも！」ターニャの様子と、倒れたままの街のみんなを見て、すぐに治癒の魔導を掛け始めた。

「エリーゼ、すっごく心配したんだからっ！　あとで文句聞いてもらうからねっ！」

「そうだよっ。・・・・それで？　アンナはどうしたの・・・？」

モニカのその一言にビクッとなる。「実は――」わたしが見た事、ターニャが話してくれた事を伝える。見る見るうちに2人の顔が強張っていく。そして「そんなの自殺行為じゃんかッ！」モニカが叫んだ。ルファも「気付かれでもしたら、すぐにでも殺されてしまう・・・！」顔が青褪めた。

わたしが俯いた事で2人は口を噤んで「ごめん」本当にすまなさそうに謝ってきた。わたしの身代わりになったアンナ。そのアンナの行動に文句があるという事は、それはつまりわたしが拉致されるべきだったという事になるから。

それに察したから2人は黙ったんだ。「い、今からでもわたしがイリュリアに行けば・・・」そう言って立ち上がろうとすると、「ダメっ！　アンナの決意が無駄になる！」ターニャに止められた。

「・・・解ってるでしょ。あなたが人質になると、間違いなくディレクトアは力を揮えなくなる。そうなればシュトゥラは負ける。それにあなたの命を盾にディレクトアを操って、戦争の道具にするかも。あのディレクトアが敵になる。そうなれば・・・判るでしょ。イリュリアの一人勝ち。だからアンナは命を懸けた。シュトゥラの未来のために。そしてあなたとディレクトアの未来のために」

「アンナ・・・」

また涙が溢れ出る。「ターニャ。アンナが無事で帰ってくる事って・・・」モニカのその問いにターニャは「もう逢えないって思った方が良い・・・かも」残酷な答えを返した。

「アンナを助けに行かないと・・・！」

「助けに行ってもダメ。アンナは・・・元から死ぬつもりなの」

「「「え・・・？」」」

「自分だって人質としてディレクトア達の活動を邪魔する駒にされるかもしれない。だからアンナは考えた。死んでもアムルに損害がない自分って決めつけたアンナは、エリーゼを連れて来いって指示を出した奴を暗殺するつもりなの。何もせずとも偽者とバレれば殺される。だったら殺される覚悟で・・・・」

それがアンナの狙いだった。始めから死ぬつもりだったんだ。だか

ら、さようなら、って。もう全部は手遅れなんだって思えてしまう。もう何も出来ない。「アンナ・・・アンナぁぁぁ・・・！」出来る事と言えば、泣くことくらいだった・・・・。

。―。―。―。・・・回想終わりです・・・。―。―。―。

話を終える。オーディンさん達も、アンナのその覚悟と行動に顔を青褪めさせた。そしてすぐに「マイスターっ、アンナを助けに行こうよっ！」アギトがオーディンさんにそう言うと、オーディンさんも「もちろんだっ」って踵を返そうとする。
オーディンさん達グラオベン・オルデンなら、きっとグレゴールを相手でもアンナを取り戻せるはず。だからお願いしますって言おうとしたんだけど、ターニャが「ダメだよディレクトア」オーディンさんを止めた。

「どうしてなのターニャ？　まさかアンナを見捨てる、なんて事は無いわよね・・？」

「私だってアンナを助けたい。でも・・・アンナを盾にされたら、いくらみんなでも勝手が出来ないでしょ・・・？」

「だからと言って見捨てるわけにはいくまい。アンナは我々の大切な家族だ。家族に危害が迫っているのならば、何をしても助ける」

「最悪アンナが深い傷を負っても、私とシャマルで完璧に治す。もちろん最悪な展開などにさせない。大丈夫だよターニャ。それにエリーゼ、モニカ、ルファ。必ずアンナを無事に連れてかえ――」

――フェイルノート――

空気を裂く音と一緒にアムル上空を飛んできたのは、あの巨大な砲撃を反射するための砲弾。

「くそっ、魔力が残り少ない時に限って・・・！」

オーディンさんが憎々しげにそう呟いたのが聞こえたから、すぐにオーディンさんの右手を取って、手の甲に口づけする。わたしの能力・乙女の祝福クス・デア・ヒルフェを発動。２つ有る魔力核の片方の魔力を全てオーディンさんに流す。

「助かったよエリーゼ。・・・ちょっと無茶が出来そうだな。アイリ・・・！」

アイリって呼ばれた新しい家族の子は「うんっ！」力強く頷いて、オーディンさんと融合した。そして「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」オーディンさんは詠唱して、両手を空に翳した。

――天花護盾（クリュスタッロス・アントス）――

空に咲くのは、氷で出来た雪の結晶ような盾。それに反射鏡の砲弾が着弾――したと同時に一瞬に氷結されて粉砕、小さな氷の破片となって宙に散った。

――カリブルヌス――

遅れて来た巨大な魔力砲。すると氷の盾が少し傾いたのが見えた。魔力砲が着弾。すると空に軌道を変えて消えて行った。オーディンさんは「馬鹿正直に受けるより逸らした方が良いな、やはり」と納得したように頷いてる。

もうイリュリアの砲撃なんて怖くない。そう思ったのに、「・・・・・嘘だろ・・・連発してきやがった！！」ヴィータの叫びに、わたし達は戦慄する。同じ砲撃が続けざまに飛来してきた。さすがにオーディンさんも「それは卑怯だろうッ！」そう叫んで、

――女神（コード・リン）の護盾――

――天花護盾（クリュスタッロス・アントス）――

氷の盾が3枚追加されて、そして女性が祈る姿が描かれた盾が4枚、計8枚の盾が空に展開された。「オーディンっ！？」シュリエルさんの悲鳴。空からオーディンさんへと視線を移す。絶句。オーディンさんの顔色は真っ青だった。

それに小さく「またやってしまった」と悔しげに、そして哀しげに呻くのが聞こえた。一瞬で理解する。「マイスターっ、また記憶を失っちゃったんじゃ！？」アギトの悲痛な叫びを聴くと、頭の中がグチャグチャになりそうになる。

「いっつつ・・・。気にするな。私にとってもうひとつの故郷とも言えるアムルを護れるなら――」

7つの砲撃が盾に着弾して、さっきと同じように空へと軌道変更さ

れて消えて行った。

「安い代償だ」

オーディンさんは無理やり笑顔を作ってわたし達を安心させようとしてる。こんな時になんて言えばいいのか判らない。頼ってばっかりで、オーディンさんにだけ辛い思いをさせて・・・・

（こんなわたしに、オーディンさんを好きになる資格なんて・・・きっと無い・・・）

シュリエルさん達も、オーディンさんの負担を減らすために防御を手伝おうって相談し合ってる。少し離れたところで意識を取り戻したみんなの様子を看てるモニカとルファ。それなのにわたしと言えば、泣いて喚いてオロオロうろたえていただけ。本当に嫌になる。

「我が主っ！　戦船ですっ！」

「次から次へと・・・本気で潰しに掛かってきたな、イリュリア・・・！」

「反射砲に艦載砲。さすがに我々だけでは防ぎきれんぞ！」

「オーディンさん、どうしたらいいですかっ！？」

「そ、そうだオーディンっ。前の戦いで召喚した使い魔を出せばいいじゃんっ」

「アンゲルスをか？　今の魔力で行けるか・・・？　いや、そんな事を言っている場合じゃないな」

「いくらなんでも無理をし過ぎですオーディンっ」

「そ、そうですっ。最悪、今度の記憶障害で私たちの事を忘れてしまうかもしれないんですよっ」

シャマルさんのその言葉に、わたし達はハッとする。今はまだわたし達との思い出は消えてないけど、いつ消えちゃうか判らない。もっと後かもしれないし、次かもしれない。だから「マイスターっ、もう魔力を使っちゃダメっ」アギトが泣きだす。

「しかしそれでは――」

1隻の戦船が放った砲撃がアムルの端に着弾して、その振動がわたし達を襲った。しかもそれだけじゃない。戦船の様子がおかしい。徐々に高度を下げて行ってる。あのままじゃ墜落するのに。それなのに降下が止まらない。本当に墜落・・・まさか。

「おい、ちょっと待てよ。戦船が突っ込んできやがった！」

戦船が墜落して、アムル郊外の一画を押し潰した。その上砲門を開いて砲撃を放ち始めた。郊外が火の海になる。最初は頭が理解できなかった。でも事態を呑み込めた瞬間、

「いや・・やめて・・・やめて・・・やめてよ・・・もうやめてよぉぉぉーーーーッ！！」

泣き叫んだ。あそこには、初めて医者らしい事をして、初めて担当した患者さんだったオーディンさんと話した別宅があったのに。頭の中が真っ白になって、ただやめさせたいって思って駆け出そうとしたけど「エリーゼっ。街のみんなの避難を優先しよう！」ターニャがわたしの肩に手を置いてそう言ってきた。

避難？　何を言ってるのターニャ。避難なんかしたら、街がもっと壊されちゃうよ。壊されるより支配されちゃうかも。そうなったら好き勝手される。家族を喪って、屋敷を失って、最後はアムルの街そのものを失っちゃう。それだけは絶対にダメ。嫌だ。だから何か言い返そうって思うんだけど、声が出ない。頭は、心はもう理解してる。ここに居てももう何も出来ない。それほどまでに追い込まれてる。

「もう解ってるでしょ、エリーゼ。ディレクトア達も。状況は最悪すぎる。私だって悔しいよ。でも見て。今からあの戦船の侵略を食い止められる？　ディレクトアはもう限界。シグナムさん達だってもうフラフラ。アンナは居ない。ここでまたグレゴールのような騎士が現れたら、間違いなく負ける」

ターニャの反論を許さないって目に、わたしもオーディンさん達も黙るしか出来なかった。

「・・・グラオベン・オルデンのみんなに、アムルの主としてお願いがあります。アムルの住民の避難を・・・ひぅ・・アムルからの

退避を・・・ぅく・・・・」

「「「「「「「・・・ヤヴォール・・・」」」」」」」

「・・・決断してくれて、ありがとう・・・エリーゼ」

オーディンさん達は了承してくれて、ターニャと一緒に散って行った。

「「・・・・エリーゼ」」

「悔しい・・・ひっく・・・悔しいよ・・・ぐす・・・わたし、何も出来なかった!!」

「「エリーゼ!」」

モニカとルファが抱きしめてくれた。

今日この日、アムルに住んでいたわたしたち全住民は、イリュリアの侵略行為に屈し、イリュリアから逃げるように避難した。わたしは・・・親友のアンナを失って、屋敷を失って、果てにはアムルの街全部を失った。

。—。—。—。—。

イリュリア王都スコドラに在る王城の大庭園。池の畔に、イリュリア女王テウタがロッキングチェアに揺られながら恋愛小説を読み耽っていた。彼女は待っていた。イリュリア騎士団総長グレゴールに

下した命令を、彼が果たし、成功報告をしに来るのを。
小説を半分ほど読み終え、「運命の赤い糸、ね～」と自分の小指をしげしげと眺め始めた。それから自分が恋愛をしている妄想をし、「ないわね」ガックリ肩を落とす。とそこに、「テウタ陛下」と呼ぶ声が。テウタは小説に栞を挟み閉じ、「待っていましたよ、グレゴール」と姿を現したグレゴールを迎え入れた。

「ただいま戻りました」

「ええ、御苦労さま。では早速、任務報告を聞かせてください」

「はっ。陛下より承った任務、エリーゼ・フォン・シュテルンベルクの連行、無事に完遂いたしました」

甲冑に身を包んだ2人の騎士に挟まれるように連れて来られたのは、エリーゼの姿に変身しているアンナだった。エリーゼの姿を見たテウタは「私は前にしてその気迫に満ちた瞳。素晴らしいわ」と満足そうに微笑んだ。

「魔神オーディンの扱う強大な魔導に必要な魔力を補充する事が出来る、唯一の人間。エリーゼ・フォン・シュテルンベルク男爵。シュテルンベルク家の女性のみに受け継がれる能力・クス・デア・ヒルフェ。
効果は口付けした対象の魔力を一瞬にして回復させるというもの、でしたね。そのあなたが居なれば、魔神はそう安易に強大な魔導を使えなくなるはず。それに、人質としても使える。あなたを盾にすれば、人外の強さを持つ彼も反撃に抵抗する」

別人であるアンナが変身しているとは露とも思っていないテウタは無防備に歩み寄っていく。そしてアンナはと言うと、

（武装もしていない。完全に油断してる。今がきっと好機・・・！）

内心でほくそ笑んでいた。暗殺が成功すれば奇跡。その後にグレゴールや側に居る騎士たちに殺されようとも笑って死ねる。失敗して殺されても問題ない。オーディン達の邪魔になるくらいなら喜んで死ぬ。そう強く思い込んでいた。しかし、

（エリーゼ達には本当に申し訳ないわね・・・ごめんね）

アンナの脳裏に次々と浮かんでくるエリーゼ達との思い出の数々。決死の覚悟が揺らぎそうになるが、彼女にとっての宝物であるエリーゼを護るために、彼女は死を選ぶ。

（でも1人で死んでなんかやらないわ。お前も一緒よ、テウタ！）

アンナは目の前にまで来たテウタを睨みつけるために、俯かせていた顔を上げた。その瞬間、アンナは目を限界にまで開け放った。突拍子もない事態に、思考が完全に途切れる。アンナの艶やかな唇に重ねられたテウタの柔らかい唇。テウタはアンナに口づけをしたのだ。

止まっていた思考が再起動したアンナは「いやっ！」ドンとテウタを突き飛ばし、数歩後ずさって、袖口で口を何度も拭った。次第にアンナの目の端から涙がボロボロ零れ始める。

「あら？　魔力供給が起きないのね。やはり能力者からではないと発動しないのかしら・・・？」

テウタはペロリと自分の唇を舐め、「もしかして初めて？　私も初めてなの」とはじらうようにアンナを見詰める。アンナの瞳に怒りが満ちる。「ふざけるな・・・！」と詰め寄ろうとしてがすぐに思い留まった。感情に任せて暴れれば、テウタを暗殺する機会を失うかもしれないと判断したからだ。しかし、「娘。本当にエリーゼ卿か？」グレゴールが訝しみ始め、アンナは血の気を失った。

「そ、そうですよ・・・！」

か弱さを見せるかのように演じて見せるアンナだったが、グレゴールの疑問に満ちた視線は外れない。

「どうかしたのですか？　グレゴール」

「いえ。先程の殺気、エリーゼ卿の側近である娘・・名はアンナだったでしょうか。あの娘と同じもののように思えましたので」

（鋭い・・・！　さすがイリュリア最強の騎士・・・）

冷や汗が止まらないアンナ。しばらくグレゴールの視線を受けていたが、「グレゴール。女性をマジマジと見るのは礼に欠けるのではなくて？」とテウタに言われ、「仰るとおりです」グレゴールはようやく引き下がった。

心底安堵したアンナにさらに喜ばしい事が。テウタが「彼女と2人で話がしたいの。あなた達が下がりなさい」グレゴール達に命令を下す。普通、騎士ならば女王から護衛を外すような真似はしない。が、「了解しました」グレゴール達はあっさり了承して去って行った。

（それほどまでにテウタの実力を信頼しているというわけか・・・でも、私は！）

2人きりになり、アンナは一気に気を周囲に巡らせ始める。グレゴールがこの場に居れば、まず間違いなく反応するだろう。しかしテウタは「そう身構えなくても取って食べようとは思いませんから」気にする素振りすら見せず、ついにはアンナに背を向けた。

（今こそ好機！）

テウタを暗殺するために、アンナは・・・・・・・

「はぁぁぁぁあああああああああああッッ！！！！」

Ｍｙｔｈｌ６反撃開始・イリュリアを打ち砕け～ＣｏｕｎｔｅｒＡｔｔａｃｋｅｒＳ～

†††シグナム†††

今まで必ず護り抜いてきていたアムルを捨て、我々は今、隣街であるヴレデンに避難している。ヴレデンは幸運にもイリュリアの魔力砲カリブルヌス（オーディンがそう言っていた）の被害から免れており、ほぼ損害無し。
しかも王都の結界術師団や一個騎士団が駐屯しているため、反撃の為の戦力も十分だった。オーディンが騎士団の将たちと話を進めている間、我らグラオベン・オルデンは集まって今後の事について話し合っていた。が、「情けない話だ」嘆息しか出て来ない。

「そうよね・・・いくらみんなの魔力が戦闘を乗り越えるだけ無かったとは言え、逃げるしかないなんて・・・」

「それどころかアンナも助けらんなかった」

「しかし・・・仕方がなかった。あの場合は、一度退くのが賢明だった」

ザフィーラのその言葉にアギトが目を見開き、「そんな！」とザフィーラに詰め寄ろうとするのを「よせ」と止める。認めたくはないが事実だからだ。ターニャも言っていた事だが、あのまま無理に戦ったところで苦戦は必至。

いたずらに被害を生むだけだ。それでは今後の戦闘に支障が出る。ゆえに「態勢を整え、万全の状態で反撃に出るしかないのだ」そう言う。するとアギトは「だけど！」理解はしているが納得は出来ていないようだ。

「アギトお姉ちゃん。アイリはあまり事情とか判らないけどね。でもね、みんなの言う事は正しいよ」

「あたしだって・・・あたしだって、解ってるよっ！　でもアムルはあたしにとっての大切な居場所だった！」

「ん？　それは違うんじゃないの？」

「え・・・！？」

「アギトお姉ちゃんを見てると判るよ。アムルは確かに大切な場所かもしれないけど、アギトお姉ちゃんにとっての居場所って、アムルじゃなくてマイスターの側じゃないの？」

驚いた。新入りであるアイリがそんな事を言うとは。アギトどころか我々全員が呆気にとられている。アギトはアイリのその言葉で一気に冷静になったようで、「それでも、やっぱりアムルを見捨てたのは・・・心が痛いよ」声量を抑えて呟いた。

私とてアギトと同じ思いだ。我々の居場所はオーディンのお側。しかしアムルもまた居場所だ。アムルを取り戻したい。ここまで心が締め付けられるほどに何かを願う事など今までにあっただろうか。

「アギト。今オーディン達が作戦とか練ってるはずだからさ、もうちょっと辛抱だ」

「ヴィータ・・・・うん・・・・」

ヴィータはオーディンのように小さなアギトの頭を撫でる。まるで姉妹のように思えてしまう。この愛おしい時間を守るためにも必ずアムルを取り戻し、イリュリアを倒さねば。決意を新たにしていると、ざわざわと周囲が騒がしくなってきたのに気付く。
どうやら騒ぎの原因は、王都ヴィレハイムからこちらに向かってくる戦船の艦隊の所為だろう。今までは一切戦船に頼ろうとしなかったシュトゥラだが、さすがにアムルを落とされてはもう黙ってはいられないという事だろう。しばらく様子を眺め、オーディン達が会議を行っている屋敷へと、

「クラウス殿下にオリヴィエ王女殿下、それにリサも・・・！」

シュトゥラの王子であるクラウス、そして同盟国であるアウストラシアの王女オリヴィエとお付きの騎士リサの3人が入って行った。
屋敷にはオーディンの補佐としてシュリエルが一緒に居るのだが・・・むぅ、私がオーディンの補佐としてついて行きたかったのだが。ゆえについて行く事の許可をオーディンに貰おうとしたところ、それを止めたに来たのがヴィータだった。
ヴィータからは「シグナムじゃダメだろ。だって頭脳派じゃねぇし」とそう馬鹿にされ（しかもオーディンが僅かに笑ったのがショックだった）。シャマルでさえも「まぁシグナムよりはシュリエルの方が・・・うん、頭脳派っぽいわね」などと言う始末。そこまで言わ

れて黙っていられるものか、と思ったが、気が付けばもうオーディンとシュリエルは居らず、言いようのない虚無感に襲われたものだ。

「中の様子、シュリエルから思念通話で聞いてみっか？」

「よせ、ヴィータ。主とシュリエルが戻ってからでも遅くはあるまい」

「へーい。あーあ、あたしもついて行きゃ良かったな～」

ヴィータとザフィーラのやり取りを聴きながら、私は屋敷を一点に見詰める。どのような作戦が立てられようが、私は全力を以って当たるだけだ。ですからオーディン。お願いします。アムルを取り戻し、イリュリアに打ち勝つための勝利の道を、我々に・・・・。

†††シグナム⇒シュリエルリート†††

私はオーディンの補佐として同行していた。補佐と言ってもオーディンのお側に居るだけだが。アムル奪還や魔力砲カリブルヌスを放つ巨大砲台ミナレット攻略に必要な戦力や物資などを話し合っているオーディンら。

オーディンは、戦争を経験し、実際に大部隊を率いていないと考えられないような的確な意見を次々と挙げていく。騎士団の配置から物資補給経路。みながオーディンの話を聴き入っている。

そんな時に、「失礼するよ」断りの一言を告げて入って来た3人。

この会議室に集まっている者たちみなが絶句した。オーディンと私を除く者たちが「クラウス殿下！？」と一斉に立ち上がり、礼の姿

勢を取る。

「構わない。皆、会議を続けてくれ。僕とオリヴィエ王女、そして騎士リサも参加させてもらうがいいだろうか？」

無論シュトゥラの王子である彼のその言葉に反論する者など居らず、彼らも作戦会議に参加する事となった。クラウス殿下の「まずはアムルの奪還を優先しなければならないな」その言葉から会議が再開される。

騎士たちが一斉にオーディンを見、殿下らもそれに倣ってオーディンへと視線を移す。私もスッと目線を下げ、斜め前に座っているオーディンの横顔を見詰める。みなの視線を一斉に受けたオーディンは咳払い一つ。

「・・・アムルを奪われておいて偉そうな事は言えないと思っているが・・・」

「構いませんよ、オーディンさん。貴方が居たからこそアムルは今まで守られてきました。確かに今回はイリュリアに明け渡す事になってしまいましたが・・・貴方なら奪還出来る、そうですよね・・・？」

「感謝する。私たちグラオベン・オルデン各騎の魔力が全快になっている今、アムルに駐屯している騎士団や配置されている戦船の攻略はそう難しくない。騎士団戦は元よりこちらに分があり、戦船に関しては私の使い魔の一体を召喚すれば事足りるはず」

「使い魔・・・あの巨大なチェスの駒のような、ですか？」

巨像の使い魔。オーディンは確かアンゲルス・カスティタスと呼んでいた。あれほどの巨体ならば戦船を鷲掴んで放り捨てることも容易いはずだ。アムル奪還の問題はそれで解決したと見てもいい。

オーディンは首を横に振り、「いや。カスティタスとは別のアンゲルスを召喚する」と驚愕に値する言葉を告げた。私だけでなくクラウス殿下やリサ、この場に集う騎士たちも目を見開き驚愕している。唯一オーディンの使い魔を実際に見ていないオリヴィエ王女だけが「？？」小首を傾げている。

「別の、・・・まだ他にもあのような強大な使い魔が居ると・・・！？」

「私の有する使い魔アンゲルス・・・七美徳の天使は、名の通り七体在る。純潔カスティタス。節制テンパランチア。救恤リベラリタス。勤勉インダストリア。慈悲パティエンティア。忍耐フマニタス。謙譲フミリタス。その全てが巨体。その全てが強大・・・・」

テンシとは何なのか判らないが、名称からして凄まじそうなので室内が沈黙に包まれる。クラウス殿下はともかく他の騎士たちは複雑な思いだろうな。今は味方であるオーディンだが、シュトゥラの人間ではない。それどころかベルカ人ですらも。

だから頼もしく見えていたであろうオーディンに別の感情がおそらく生まれている。それは畏怖。最悪、中には純粋な恐怖を抱いている者も居るかもしれない。嫌な空気が流れ始めたその時、「オーディン先生、頼りにしています♪」オリヴィエ王女が微笑んだ。

「・・・私が恐ろしくはないのですか？　オリヴィエ王女殿下はご覧になった事が無いのでそう言えるのかもしれませんが、アンゲルスは実際に強力です。私がその気になれば、一国を潰せるだけの戦力として用意できます」

「でも貴方はそれをなさらない。貴方の目を見れば判ります。貴方は本当に優しい御方です。それにリサから窺っています。オーディン先生、貴方は魔力を使い過ぎると、今まで培ってきた記憶の一部を失ってしまう障害を抱えているのだと。それでもなおシュトゥラ・アムルを守っていただいているその事実。私は心を撃たれました」

この発言には私とオーディンも驚いた。もちろん初めて知った騎士たちも。「リサ、君は・・・・！」オーディンは（私もだが）沈黙を保っていたリサに非難の目を向けた。

「勝手をして申し訳ありません。オリヴィエ様にも知っていてほしかったのです。オーディンさんがどれだけ自分を犠牲にして、シュトゥラ――アムルを守っているかを」

リサはオーディンの目から逃れることもなく真っ直ぐに見返した。罪も罰も受け入れる覚悟あり、だオーディンはただ嘆息一つ吐き、「口止めをしなかったこちらにも問題ありか」もう諦めのようだ。

「ごめんなさいです・・・。でも後悔はしてません」

「・・・皆聴いてほしい。オーディンさんは確かに怖れを抱いてしまうほどに強い。正直、僕も一瞬だが畏怖した。だがオーディンさ

んは、自分の記憶を犠牲にしてでも戦ってくれている。それでも嫌な顔一つとしてせず、戦い守り続けてくれているんだ。彼のどこに恐れる事がある。僕は、オーディンさんを信頼している。共に戦う仲間として、そして友人として、だ」

「私もです。私は、この両腕を癒して頂きました。私の両腕は不治だとして幾人もの医者様に見放されました。ですが、こうして自由に動かせるようになり、再び戦場に立つことも出来そうです。ですから皆さん。オーディン先生の強さばかりを見ずに、その優しき性根を見て下さい」

クラウス殿下とオリヴィエ王女がそこまで言うと、騎士たちが放っていた畏怖の空気が和らいだ。殿下は室内の空気からオーディンへの恐怖が消え失せたと察し、「もう誰も文句はないな。なら本題に戻ろう。オーディンさん、続きを」作戦会議を再開させた。

「・・・本当にありがとう、クラウス、オリヴィエ王女殿下。では。アムル奪還はアンゲルス・テンパランチアと我々グラオベン・オルデン、国境防衛騎士団で、という話だったんだが・・・」

オーディンはそこで区切り、改めて殿下らを見た。視線に込められているのは今さらだが、どうしてここに？だ。その意味を察した殿下は「僕たちがマクシミリアン艦隊を引き連れここへ来た理由は、今後の皆の動きにも関わってくる」と言って立ち上がる。

「皆、マクシミリアン艦隊は、このままイリュリア王都にまで侵攻する事となった」

殿下が告げた理由を聞いた騎士たちが一斉に「マクシミリアン艦隊！？」と驚愕。事情を知らない私とオーディンが首を傾げていると、『マクシミリアン艦隊とは、シュトゥラの有する最強の戦船ローリンゲンを旗艦とした艦隊名です』リサから思念通話が送られてきた。シュトゥラの主戦力がついにイリュリアに攻め込むのか。これは本格的な戦争になってしまうな。オーディンと共にリサに礼を言い、殿下たちの話に耳を傾けると今はオリヴィエ王女が話をしていた。

「――古くベルカには異世界からの異物が流れ着き、いくつかの国に受け継がれているということがあります。特に有名なのが我ら聖王家の有する戦船・聖王のゆりかご。イリュリアの有する砲台・ミナレット。公に知られているのはこの二つですが、実はイリュリアにはもう1つの異物があります。アウストラシアに残されている文献に記されていたその名は、エテメンアンキ。どのようなものかは判らないのですが、ミナレット以上に危険で、ソレがイリュリア王都に在る、らしいとのことです」

「もしエテメンアンキが起動してしまえば、今以上に戦況が危うくなるのは確実。だから僕たちは、全力を以ってエテメンアンキを破壊しないといけない。ですからオーディンさん。そしてグラオベン・オルデンの騎士たちに依頼したい。皆さんには王都攻略の妨害になるであろうミナレットの破壊をお願いしたいんです」

「ミナレットの破壊は望むところだが、やはり部外者である私たちが本戦に参戦する事が問題だったりするのか・・・？」

「ち、違います。本音を言えばグラオベン・オルデンにも王都攻略に参戦して頂きたいです。ですがミナレットは海上に在るんです。戦船では狙い撃ちされ撃沈される可能性が高く。空戦が出来、ミナレットの防空網を突破できる騎士はあまりにも少ないのがシュトゥラの現状です」

「そう言えばそうだったな。・・・・二つ返事で了承したいんだが、こちらにもある問題が発生しているんだ」

「問題、ですか・・・・？」

「・・・・エリーゼ・フォン・シュテルンベルク男爵の補佐官、アンナ・ラインラント・ハーメルンが、イリュリア騎士団総長グレゴールに拉致された」

グレゴールという大物の名前と、その男がシュトゥラの人間を拉致したという事で室内が騒然となる。オリヴィエ王女が「何故ですっ！？グレゴール程の者がどうして！」と勢いよく立ち上がり、騎士たちはわけも判らずと言った風に混乱。

しかし殿下が「落ち着くんだっ。まずは詳細を聴かねば進まない！」正に鶴の一声と言うのだろうか。押し黙った騎士たちは次々と着席して行き、オリヴィエ王女もまた「そうですね」と着席し直した。

「オーディンさん。詳細をお願いします。何故グレゴールがアムルを訪れ、しかもアンナ嬢を拉致などと・・・？」

オーディンはアムル陥落の真実を含め、グレゴールがアンナを拉致

した話を語る。本当はエリーゼを拉致しに来た事、アンナがエリーゼを守るためにエリーゼの姿に変身し、代わりに拉致された事を。最後にオーディンは「アンナを助け出すために、おそらく連行されたであろう王都に向かいたい、というのが本音だ」そう締めくくった。

殿下は唸りだし、「しかしそれでは・・・」今回の戦闘での戦力配置の変更に難色を示す。殿下が挙げた我々グラオベン・オルデンをミナレットの攻略に当てるという策には賛成できるのだが、状況がそれを許さない。

「私からもミナレット攻略をお願いしたいのですが。御家族であるアンナさんを助けたいお気持ちは痛いほど解ります。ですがミナレットを攻略しない限りすべての国が危険に晒され、イリュリア王都の攻略の障害になるのです。どうかお願いします。代わりと言っては大変失礼ですが、必ず私たちがアンナさんを救い出しますから」

「僕からもお願いします。今回の侵攻は、今後のベルカ統一戦争にとって最重要な一戦なんです。どうしても成功させたい。ミナレットとエテメンアンキによる破壊をこれ以上起こさせないためにも」

殿下とオリヴィエ王女は真っ直ぐオーディンを見詰め、真摯に懇願する。そんな2人をオーディンのお側から眺めていると、リサと目が合う。リサの視線にも込められていた。2人の願いを聴き遂げてほしい、と。

私を含め守護騎士ヴォルケンリッターは、オーディンがどのような決断をしようともついて行く。そう思っているところに『・・・エリーゼ達に怒られるが、仕方がないな』と思念通話。私は『それで

はミナレット攻略戦へ向かうのですか？』と訊き返す。

『ああ。王都攻略に私たちも向かい、苦戦している最中にミナレットでシュトゥラや別の国を攻撃されては敵わん』

『確かにそうですが・・・本当によろしいのですか？　アンナを救う機会を失ってしまうかもしれません』

『救うさ、必ずな。ミナレットを瞬殺し、すぐさま王都に侵攻する』

オーディンのお言葉には絶対の自信が漲っていたが、私の胸に去来する不安から『ミナレットの詳細が判らない現状、何か問題が起こってはまずいのでは？』としつこいようだが、この不安を拭い去りたい事でまた訊ねる。

『シュリエルの言う通りだな。確かにミナレットについて判っている情報は数少ない。だが、海上と言うのが味方だ。私の有する魔道の中には大量の水を使うエーギルという術式がある。海水を利用すれば、どんな砲台だろうが城塞だろうが戦船だろうが確実に粉砕してみせる』

『やはりソレは今まで私たちが見た事のある魔導より威力が・・・？』

『ああ、強力だぞ。私の有する魔道の中でも上位のものだ』

今まで以上に強力な魔導。その言葉に不安が和らいだ。確かに和らいだのだが、完全に晴れたわけではない。ミナレットの問題はそれ

で解決だろうが、アンナの身の安全の問題は変わらずだ。オーディンとてそれが判っているはず。アンナを見捨てるわけはない。まだ何か考えがあると信じたい。

「オーディンさん・・・？」

「・・・了解した。ミナレット攻略、私たちグラオベン・オルデンに任せてもらおう」

「ありがとうございます。では、確認を。まずアムル奪還はオーディンさん達グラオベン・オルデンとアンゲルス・・・テンパランチアと国境防衛騎士団で。奪還後は、マクシミリアン艦隊と全騎士団は王都へ。グラオベン・オルデンはミナレットへ向かう。以上」

室内には異議なしの空気が。作戦と言うよりは配置決めだった。アムル奪還とミナレット攻略は力押しでも十分。王都攻略の詳細は、殿下たちが決めてくれるだろう。オーディンもそう考えたようで、退室のために立ち上がった時、「オーディン先生！」オリヴィエ王女が呼び止めた。

「こんな時にごめんなさい。ですがこんな時だからこそ、両腕を完治させてほしいんです」

「判りました。別室で行いましょう。クラウス、準備が整い次第、私たちはアムル奪還に向かう。少々ここヴレデンまで騒音や振動が伝わってくるかもしれないが、了承の程を。シュリエル、行くぞ」

「はい。オーディン」

オリヴィエ王女とリサと共に退室し、空き部屋にまで移動。テーブルを挟んで置かれているソファに向かい合うように座るオーディンとオリヴィエ王女を、私とリサは黙って見守る。

「オーディン先生。ミナレット攻略を受けて頂き、ありがとうございます。アンナさんは必ず私たちが救いだします。ご安心を」

「ええ、お願いします。では私からも一つ礼を。先程、私を庇って頂いてありがとうございました」

「いいえ。私の本音を言ったまでですから。それに以前、オーディン先生は、クラウスの夢に協力して下さるとも言って下さいましたし」

「・・・・争いのない世界を築く。誰もが抱く理想論でありながら、それを成そうと行動に移す者は一握り。クラウスはその苦難の道を歩む決意も覚悟も有る。見てみたかった。彼のその道行を。とは言え残念ながら最後まで付き合う事は叶わないでしょうが・・・」

オーディンがとても寂しそうなお顔をなさった。

「よし。これにて施術の全工程が完了です。両腕の障害は完治。オリヴィエ王女殿下、お疲れ様でした」

「ありがとうございました、オーディン先生。このご恩、決して忘

れません」

「私からもお礼を言わせてくださいっ。オーディンさん、オリヴィエ様の腕を治して頂いて、本当にありがとうございましたっ！」

「どういたしまして。私がベルカに留まっている間でなら診察をさせていただきますので、何か問題が生じた際はご連絡を」

「あの、オーディンさん・・・先程からのお話を聴く限り、まるで居なくなってしまうような・・・・もしかしてベルカを近々離れるんですか？」

リサは不安そうに尋ねると、オーディンは「おそらく、だけどね」と答えた。判っていた事とは言えやはり寂しいものだ。アムルから離れ、エリーゼ卿たちと別れとなると。

先の戦場で"エグリゴリ"と交戦した事、オーディンが捜していた"エグリゴリ"がイリュリアと関係を持ち利用している事、技術部を利用し"エグリゴリ"の複製品を製造させている事、ベルカに居座る"エグリゴリ"を破壊した後に、ベルカを離れる事を伝えた。オーディンのその一言に2人は「そうですか」と寂しそうに肩を落とした。

「先程は私情の手前言えませんでしたが、私が王都へ向かいたい理由のもう1つです。勝手な申し分ですが、イリュリアの王を殺さずに生け捕りにして頂きたいのです」

「も、元より殺害するつもりはありませんっ。捕縛し、今後のイリ

ュリアの国土分配などの話し合いに参加してもらいますから。テウタ女王には」

（テウタ女王？　今のイリュリアの王は確かゲンティウスではなかったか・・？）

オーディンも「テウタとは王女の名ではありませんでしたか？」と訊き返す。

「・・・公には発表されていませんが、どうやらテウタ王女が王位に就いたようなんです。先王ゲンティウス、兄バルデュリスがどうなったのかなどは判っていませんが、おそらくは・・・」

そこまで言って黙ったオリヴィエ王女の話を継ぐようにオーディンが「幽閉されたか殺害されたか、ですか」と嘆息。リサの言っていた通りだった。テウタが王になれば今まで以上の戦火が生まれる。正にミナレットは稼働し、世界に攻撃を始めた。そしてエテメンアンキというさらに強力な兵器が動こうとしている。

「どちらにしてもテウタ女王率いるイリュリア騎士団はこれより徹底的に戦火を撒き散らすでしょう。何としても食い止めなければなりません。そのためにシュトゥラと同じようにミナレットに攻撃されたバルトも王都攻略に参加する予定です。ですが残念ながら我々アウストラシアは傍観ということになってしまいましたが・・・」

「あの、それならばオリヴィエ王女、リサがこの場に居るのは大変問題があるのでは・・・？」

思わず声に出してしまい、しまった、と口を噤む。だが「大丈夫ですよ、シュリエルリートさん。許可は取ってあります」とオリヴィエ王女は微笑んでくれたのだが、陰りがあるのを見逃さなかった。横目でリサを見れば、リサは俯き加減で表情を隠すよう。戦場に立つことについて何かしらの条件を出されたのか、または別の理由か。

「・・・・シュリエル、行こう。それでは私たちはこれで失礼します」

私もオーディンに続き「はい。オリヴィエ王女、リサ。失礼いたします」一礼して踵を返す。「お気をつけて」オリヴィエ王女とリサの見送りの言葉を背に、いざ戦場へ。

†††シュリエルリート⇒エリーゼ†††

アムルの全住民の生存確認を終えて、その報告の為にまずシグナムさん達に告げた。負傷者はやっぱり出ちゃったけど、幸い亡くなった方は居なかった。みんな喜んでくれた。この喜びを早くオーディンさん、シュリエルさんとも分かち合いたい。そしてアンナとも。今、オーディンさんはクラウス殿下とオリヴィエ王女殿下（見かけた時は本当に驚いたけど）達と一緒にアンナを救い出す作戦を考えてくれているはず。

（だからアンナ。無理はしないで。生き伸びる事だけを考えて。お願いだから・・・）

祈りをしていると、「あ、マイスター、シュリエル！」アギトが声を上げた。ヴレデンの当主屋敷からオーディンさんとシュリエルさんが出て来た。２人とも凄く真剣な表情で、駆け寄りたい衝動を抑えて待つ。

「・・・グラオベン・オルデン。今よりアムル奪還へ向かう」

こちらへ向かいながらオーディンさんがそう告げると、みんな「ヤヴォール！」と応えた。みんなカッコいい。ピリッとした空気の中、わたしの近くに来たオーディンさんに「アムル住民全員の生存が確認できましたっ」そう伝える。

オーディンさんは立ち止まって「良かった。戦船の墜落場所が誰も住んでいない郊外だったからだな」とわたしの頭を撫でてくれた。ふにゃっとなる。でも「ア、アンナの救出はどうなりましたか！？」今一番気になる事を訊いた。

「・・・グラオベン・オルデンはアムル奪還後、魔力砲台ミナレットを攻略するためにトゥルム海沖の離島へ向かう」

オーディンさんのその話に、わたしやシグナムさん達はみんな「え？」って訊き返した。だって・・・イリュリア沖ってどうして？　アンナはきっとイリュリア王都に連れていかれたはずなのに。

「ど、どういう事ですか、それ。アンナを助けに行くんじゃないんですか！？」

「そうだよオーディン！　アンナ、きっとあたしらを待ってる！」

動けない声も出ないわたしの代わりにオーディンさんに詰め寄ったシャマルさんとヴィータに、「よせ、シャマル、ヴィータ」シグナムさんが止めた。わたしは頭の上に乗ってるオーディンさんの手を両手で退けて、「アンナを・・・助けてくれないんですか・・・？」そんな事ないはずなのに、そう訊かざるを得なかった。

「そんなわけないよねマイスターっ！」

「オーディン。まさかアンナは王都ではなくミナレットへと拉致された、というのですか？」

「いや。間違いなく王都だろうな。詳しい事をちゃんと話したいが、今は一刻を争うんだ。だからエリーゼ。これだけは解ってほしい」

オーディンさんは屈んで、目線をわたしに合わせた。オーディンさんの綺麗な蒼と紅の瞳の中に、泣きそうな顔のわたしが映って見えてる。

「エリーゼ。アンナは必ず助け出す。それは絶対だ。だから待っていてくれ。アンナが帰ってくるのを」

オーディンさんの言葉に満ち満ちている力強さが、胸の内に渦巻いていた嫌な感情が晴れてく。信じよう。疑うんじゃなくて。今までそうだったんだから。オーディンさんは、きっとアンナを連れ帰って来てくれる。だから「うん」頷く。するとオーディンさんは「ありがとう、エリーゼ。待っていてくれ、まずはアムルを取り戻して

くるよ」そう微笑んでくれた。

「みんな、聴いてくれ。私たちグラオベン・オルデンのこれからの行動を大まかに言えば、ミナレットを時間をかけずに破壊する事だ。別動隊であるクラウス達の率いるマクシミリアン艦隊と騎士団が王都の攻略中、他国への攻撃の心配を失くす。

ミナレット破壊後、私たちも王都へ侵攻。それまでにアンナが救出されていない場合、アンナの捜索、そして救出だ。アムル奪還、ミナレット破壊、王都への移動、アンナ救出とイリュリア王都での戦闘、かなり密度の濃い最後の戦いだ。みんなには無茶も無理も強いるかもしれない。それでも何としても成したい。力を貸してくれ」

アンナを最優先出来ない理由がそれだった。わたしは自分の事、アンナの事ばかりを見てた。でも今、ベルカは本当に大変な状況にある。アンナを優先するのはわたしの我が儘。だけどそんな状況の中でもオーディンさんは、そしてクラウス殿下たちもアンナ救出に協力してくれる。

それが何よりも嬉しくて。そしてオーディンさんを少しでも疑った自分が醜くて。オーディンさんに「ヤヴォール！」と応じるみんなの表情にもすでに迷いはなくて。ごめんね、アンナ。もう少しだから。みんな、アンナの為にも動いてくれてる。だからあと少しだけ待ってて。

「グラオベン・オルデン、出撃だ！」

オーディンさん、アギト、シグナムさん、シャマルさん、ヴィータ、ザフィーラさん、シュリエルさん、そして新しい家族のアイリ。み

んなが空へと上がってアムルの方へと飛んで行くのを、姿が見えなくなるまでずっと見送った。

「よしっ。モニカとルファの手伝いに行こう・・・！」

負傷者の治療を、シュトゥラの医療技術団のみなさんとしているモニカとルファ。以前は一緒に医学を学んだ仲なのに、気が付けばすごく差をつけられちゃった。でも悔しくなんてなくて、ただ純粋に尊敬の念しかない。道は分かれちゃって、わたしなんかの医療技術なんて役に立たないかもしれない。でも何か、何でもいいから手伝えることがあれば。それで良いと思う。

「貴女が・・・エリーゼ卿、ですか・・・？」

「ふぇ？・・・・・・え？・・えええええええ！？」

名前を呼ばれて振り返ってみればビックリ。だって、だって・・・

「オ、オ、オオオ、オリヴィエ王女殿下・・・！！」憧れのオリヴィエ様がいたのだから。とにかくわたしがエリーゼである事を認めるために何度も頷く。

オリヴィエ様はわたしの狼狽ぶりにきょとんして、でもすぐに「はい。はじめまして。オリヴィエ・ゼーゲブレヒトです」と微笑んで下さった。わたしに右手が差し出された。握手を求められているのだと判って、

「は、はははじめまひてっ。わ、わわ、わたた、わたし、その、エリ、エリーゼ・フォン・シュテルンベルクれすっ！」

思いっきり噛みまくっちゃってるけど、それでも自己紹介して、なんとか握手に応じる事が出来た。オリヴィエ様の手は思っていた以上に小さくて幼くて。だからか一気に冷静になれた。

「落ち着いて下さい、エリーゼ卿」

微笑みかけて下さるオリヴィエ様に、「ありがとうございます。もう大丈夫です」と握っている手に少し力を込める。するとオリヴィエ様もキュッと力を込めてしっかり握り返してくれた。あぁわたし、嬉しさのあまり気を失っちゃいそう。こんな状況だというのに夢心地に浸っていると、

「エ、エリーゼ卿！　鼻血が・・・！」

「え？　ああ！　申し訳ありませんっ。大変お見苦しいものを！」

オリヴィエ様を遠目で見れただけでも幸せな事なのに、お声を掛けて下さって、その上握手まで。冷静になれたって勘違い。興奮しすぎて鼻血が出てしまったよう。急いでハンカチで拭う。その間、オリヴィエ様はまったく頬笑みを崩すことなく、わたしを待っていて下さった。なんとか鼻血を止めて今の不虞について謝罪すると、オリヴィエ様は「お気になさらずに」と許して下さった。

「ふふ。・・・・オーディン先生の目的はすでに聞き及んでいますが、貴女のような可愛らしい方がいらっしゃるのに、何もベルカを去らずともいいと思うのですけどね・・・」

「え・・・？」

オリヴィエ様は今なんと仰ったの？　オーディンさんがベルカを去る？　そんな話、聴いてない。「あ、あの・・・今の、どういう・・・？」声が震えているのが判る。

「？？　先の戦で、オーディン先生がお捜ししているエグリゴリがイリュリアの技術部を利用し、エグリゴリの複製品を製造していると判明したそうで。今回のイリュリア侵攻で、出来うる事なら決着をつけるつもりなのかと」

わたし、何も知らなかった。"エグリゴリ"。オーディンさんがベルカに訪れた理由。そしてわたしと出逢う事になったきっかけ。その"エグリゴリ"の尻尾を捕まえた。どうしよう・・・オーディンさん、居なくなっちゃう・・？

「オリヴィエ様っ。お時間がありません。お急ぎ旗艦ローリンゲンへ！」

「判りましたっ。リサ、先に乗艦していなさい！・・・あの、エリーゼ卿？」

「あ・・はい・・・」

頭の中がごちゃごちゃして足元も不安定な感じだけど、オリヴィエ様にはきちんとお応えしないと。返事をすると「ごめんなさい。オ

ーディン先生からすでにお話を窺っているものかと」オリヴィエ様は申し訳なさそうに目を伏せる。今のわたしには「いえ！　お気になさらないでください！」としか言えなくて。

「・・・それではエリーゼ卿。私はこれで失礼しますね」

踵を返して、停泊している戦船（ローリンゲンっていう名前みたい）へと向かうオリヴィエ様は「伝え忘れていました」そう立ち止まって振り返り、「アンナさんは、私たちが必ずお助けします。ですからご安心を」そう告げて、颯爽と去って行った。

嬉しい言葉なのに、頭の中にはオーディンさんとの別れという言葉の羅列ばかりで。判っていたはずなのに。いつかオーディンさんはベルカでやるべき事を成して、去っていくって事は。でも実際にその現実が近付いてきていると思うと、すごく胸が苦しくて。どうすればオーディンさんを引き止められる？

――ミナレット破壊後、私たちも王都へ侵攻。それまでにアンナが救出されていない場合、アンナの捜索、そして救出だ。アムル奪還、ミナレット破壊、王都への移動、そしてアンナ救出とイリュリア王都での戦闘、かなり密度の濃い最後の戦いだ――

「最後の・・・戦い・・・？」

ふとさっきのやり取りを思い出した。最後。一体何を指して最後なの？　普通に考えればイリュリアとの戦いが、だと思う。でもイリュリアが落ちればきっと"エグリゴリ"との戦いも再開されて、そのまま終結する事も。

そうなればオーディンさん、きっとアギトもシグナムさん達もアムルから、ベルカから居なくなる。たぶんオーディンさんの出身世界（どこかは詳しく聞いていないけど）に帰るんだ。

「・・・ヤだ・・・そんなの・・・嫌だ・・・別れたくないよ・・・」

あんなにも楽しい日々が、もうすぐ無くなるなんて考えたくもない。両脚に力が入らなくなってその場で両膝をついて、そのままお尻をついて座り込んだ。

「だって・・・こんなにも・・・・オーディンさんの事が好きなのに・・・・！」

「だったら告白しないとね」

いきなり耳元に声を掛けられて「ひぅ？」ビックリして振り返る。そこには屈んで私をジッと見ているターニャが居て、「好きなら繋ぎ止めないと、ね？」そう言って立ち上がって、アムルへと続く道のある門へと歩き出した。

「ちょ、ちょっとターニャ！？」

駆け寄って肩を掴んで止める。

「どこへ行こうっていうの！？」

「決まってるじゃない。ディレクトア達の手伝いに行くの」

なに当たり前の事を言ってるの？みたいな顔をするターニャ。それはこっちの台詞だよっ。グレゴールを引き付けるために独りで戦ってボロボロにされた傷は癒えているけど、まだ本格的な戦闘はまだ出来ないはず。

「私の事はいいから。エリーゼは、ディレクトアがもし王都に向かう前に戻ってきたら、告白でも口付けでもして引き止めなさい」

「～～～～～～～っ！！」

告白だけならまだしも口付けだなんて。ターニャは「いっつも手の甲とかにしてるじゃない」なんて気軽に言ってくるけど、手の甲と唇とじゃ全然違う。

「ディレクトアとこれからもずっと一緒に居たいんでしょ。だったら素直に、時に大胆に迫らないと。別にベルカを離れなくても、アムルを拠点にしてエグリゴリとかいう連中を捜せばいいんだしね。エグリゴリを倒したらそのままアムルで、エリーゼやみんなと一緒に暮らせばいい」

「あ・・・！」

言われて初めて気付く。そうだ。世界間の移動は大変だろうけど、その分わたしが頑張って魔力を補充すればいいんだ。そうだ、一緒に旅に出るのもいい。仕事は滞っちゃうけど、帰ってきたら一気に

片付けちゃえばいいんだ。

「でしょ？・・・・それじゃ行くわね」

「ちょっと待って。それとこれとじゃ話が別。行かせない、そんな体でまともに戦えるわけがないでしょ」

また歩き出そうとするターニャの腕を取る。すると「やっぱりダメ？」なんて首を傾げて可愛らしく訊いてくるけど、「ダメ」一刀両断。今のターニャをアムルに向かわせるなんて、死にに行かせるものようだ。だから「お願いだから行かないで・・・」懇願すると、ターニャは「エリーゼ。・・・うん、判った・・・」そう頭を撫でてくれた。

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

アムル奪還のためにヴレデンより出撃した私たちグラオベン・オルデン。アムルを目指して空を翔け、遠目にアムルに突っ込んだ戦船３隻の船体を目視。本当に不愉快な光景だ。守れ切れなかった悔しさに歯噛みする。

『オーディン。使い魔を一体召喚するという事ですが、魔力の方は大丈夫ですか？』

『アンゲルス一体の召喚に消費する魔力は多大だが、敵の魔力を吸収してやれば最後まで行けるだろう』

シグナムからの心配の思念通話に対しそう返す。こうしてアムルへ向かっている途中に、アムル奪還に七美徳の天使アンゲルスを使う事を話した。先の戦で見せたカスティタスと同じアンゲルスで、全部で七体存在しているという事で、みんな驚いていたが。

『そうですか。ですが御無理はなさらぬようお願いします』

『判っているよ。シグナムこそ無茶な戦いはしないようにな』

『場合によりけりです』

少しばかり笑い声を含ませたその一言に、『私も場合によりけりだな』と付け加えた。

「・・・さて。グラオベン・オルデン全騎。これよりアムル奪還を行う。イリュリア騎士との交戦を許可する。油断なく、徹底的に連中をアムルより追い払え」

全員の「ヤヴォール！」をしっかりと胸に刻み込み、「それではサクッと片付けて、ミナレットを潰しに行くぞ！」起動している"エヴェストルム"のカートリッジを1発ずつロード。

「アギト、融合だ・・・！」

「うんっ！」

シグナムとアギトはユニゾンを果たし、

「マイスター、アイリ達も・・・？」

「ああ、頼むよアイリ」

私とアイリも融合する。シュリエルが「私も融合したいのだがな・・」とシャマルにそう打ち明けていた。シュリエルと融合するためには"夜天の書"を完成させなければならない。しかし一度完成させてしまえば、そう時間をかけずに暴走を始めてしまう。

"エグリゴリ"を救えていない状況でそれは最悪過ぎる結末だ。だ

からシュリエルには完成させないように言いつけてある。まぁ、蒐集は適度に行っている。何せ"夜天の書"は、ある一定期間蒐集を行わないと主の魔力を強制的に蒐集し始めるのだ。

「（はやてを蝕んだ障害もそれが起因していた・・・）シュリエル、すまないな。融合騎ではなく1人の騎士としての君の力を頼りにしたいんだ」

ただの建前ではなくひとつの本心として告げる。

「い、いえ！　私も申し訳ありませんっ。納得はしているのですが、やはり、その、羨ましいというのか、あ、いえっ、忘れて下さい！」

あわあわ焦るシュリエル。なんというか可愛らしい。いつもシグナムのように凛としているシュリエルだが、時折微笑ましくなるような可愛らしさを見せてくれる。シュリエルの隣へと移動し頭を撫でると、「オーディン・・？」きょとんとなる。シャマルが「良かったわね」と言うと、シュリエルも「ああ」と嬉しそうに頷いた。

「・・・我が内より来たれ、貴き英雄よ・・・！」

このままほのぼの空気で居るのもまた良いが、残念ながら今は大事な戦闘の直前だ。私の精神世界に展開さている創世結界・"英雄の居館ヴァルハラ"に在る我が使い魔、異界英雄エインヘリヤルを召喚する呪文を詠唱。詠唱を聴いた全騎は本格的な臨戦モードに入り、ピリピリと緊張感が伝わってくる。

「七美徳が節制・・・アンゲルス・テンパランチア！」

最後に、召喚するエインヘリヤルの名を告げる。と大気が震え始める。人たるイリュリアの騎士ども。地に跪き天を仰ぎ見よ、その圧倒的にして荘厳なる威容を。其は、天上世界の王位に就きたる神の御側に座する事を許された、偉大なる七つの美徳を司りし者。とまぁ少しクサい言い回しをしたが、実際にとある召喚先世界の神として召喚された私が従えた正真正銘の天使だ。

大気の震えが止まった瞬間、目前に迫って来たアムルのあちこちに、直径５０ｍ程の黄金に輝く１２枚の光輪が地面に描かれる。光輪より勢いよく溢れ出る黄金の閃光。それと共に出現したのが、金銀の甲冑を纏った１２頭の龍の半身。１２頭全ての頭の上には天使である証拠・御使いたる証明エンゼル・ハイロウが浮いている。

「おお、すげぇ・・・。アレが、テンパランチアってやつなのか・・・！」

「ああ。テンパランチアで戦船をアムルより排除する。・・『テンパランチア、やれ』」

念話で指示を出すと、『任務了承です、我が主君ドミヌス』テンパランチアより返答。テンパランチアの３頭の首が戦船にその長い首を巻かせて担ぎ上げ、残り１０頭のテンパランチアの口から黄金の砲撃が吐き出され、綺麗に戦船だけを粉砕消滅させた。

その間に私たちは地上に降りて、駐屯しているであろうイリュリア騎士団を壊滅させる。全騎に「降下開始」と告げ、一斉に降下を始める。降下途中での襲撃を警戒していたんだが、無傷で降り立つ事

が出来た。

『マイスター。おかしいよね、これ。騎士特有の気配どころか人の気配もないもんね』

アイリの言う通りだ。人っ子一人として居ない。周囲の見回りに出ていたザフィーラとシュリエルが戻ってきた。「我が主。周辺には誰もおりません」とザフィーラの報告。シュリエルも同様に「罠のような物も在りませんでした」おかしな点が無いことを報せてくれた。

シグナムが「どういうことでしょう・・？」と考える仕草をしながら私の元へと来た。騎士団を駐留させず、トラップも仕掛けず、シュトゥラ侵攻の最前線拠点となるアムルを放置している理由。まだ人間だった頃、大戦時に似たような状況があった気がする。なんだったか・・・。

「（あぁそうだ。ステアの作戦のひとつにあった事だ）やられたっ、罠だ！　テンパランチアっ、西北西に砲撃準備！」

戦船3隻の排除を終えたテンパランチア12頭の全てが西北西へと口を開き、口内に黄金の極光が生まれる。私の焦りように戸惑っているみんなに「カリブルヌスが来る」と告げると、それだけで無人のアムルに得心がいったようだった。

しかしアギトだけは『え？　え？　どういうこと？』と判っていないようだが、一から説明してる暇はない。イリュリア方角の空に青紫色の光が・・・4つ生まれた。カリブルヌスの魔力光だ。反射鏡砲弾フェイルノートを使わずに高威力を維持したまま着弾させ、ア

ムルを焦土にするつもりのようだ。

――Ｏ　ｓａｌｕｔａｒｉｓ　Ｈｏｓｔｉａ　Ｑｕａｅ　ｃｏｅｌｉ　ｐａｎｄｉｓ　ｏｓｔｉｕｍ．　Ｂｅｌｌａ　ｐｒｅｍｕｎｔ　ｈｏｓｔｉｌｉａ；　Ｄａ　ｒｏｂｕｒ，　ｆｅｒ　ａｕｘｉｌｉｕｍ／ああ救霊の生贄、天つ御国の門を開き給う御者よ、我らの敵は戦いを挑むが故に、我らに力と助けを与え給え――

テンパランチア１２頭より放たれる黄金の極光砲撃。迫り来るカリブルヌスの迎撃に向かう。４対１２。勝敗は最後まで見る事もなく判る。カリブルヌスは一瞬にして消し飛ばされた。

「・・・アムルを奪還しに来た者たちもろともカリブルヌスで消し飛ばそうとしたんだ。だから無人なんだよアギト。味方も一緒に消し飛ばすわけにはいかないからな」

かつて私たち"アンスール"は、ヨツンヘイム連合の重要な拠点のひとつだった属国を潰して管理下に置いた事があった。もちろん連合は奪還しに来た。真っ向から戦っても勝てるような戦力だったが、ステアはある策を私とカノンに任せた。

それが今のイリュリアと同じ戦略。奪還しに来た連合大隊もろとも属国を消し飛ばす。最強の砲撃魔術師である殲滅姫カノンと、対軍・対界に特化した孤人戦争と謳われた私は、ステアの作戦通り連合大隊をその国ごと潰してやった。もちろん、民間人が居ない事を確認したうえで、だ。

『そうだったんだ・・・』

だがこれは「オーディンさん。これって好機じゃないですか？」先にシャマルに言われてしまったが、全く以ってその通り。騎士団潰しに要する魔力などを下手に浪費せずに済んだ。テンパランチアの召喚にはまぁ結構な魔力を持っていかれたが問題ないだろう。

「ああ、好都合だ。アムル防衛はテンパランチアに任せ、私たちはこのままミナレットへ向かう。『アイリ、このまま融合状態を続行するが、いいな？』」

『もちろんっ。アイリ、頑張るからっ。だからね、絶対にイリュリアに勝ってね、マイスターっ』

「『ありがとう、アイリ。絶対に勝つさ』では改めて。グラオベン・オルデン、ミナレットへ向け出撃だ」

テンパランチアに『砲撃が来た際には迎撃・吸収しての自己維持だ。騎士団が攻めてきた場合、遠慮するな。戦船の場合、撃沈しろ。あと、この街には一切の被害を出すな』と指示を出しておく。テンパランチアは魔力攻撃を食べる事で体を維持する事が出来る。カリブルヌスはちょうど良い餌というわけだ。テンパランチアは『任務了承、我が主君ドミヌス』と１２頭すべてからの大合唱。

アンゲルスの内、節制のテンパランチアは数少ない防衛タイプの天使。こういう防衛戦にはうってつけだ。アンゲルスを従える事になった契約でも、天界に攻めて来た人間と悪魔混合軍の防衛に一役買ってくれた。話を戻して、後続の防衛騎士団へアムル奪還を報せるために、魔力で創った鳥に手紙を持たせ飛ばせる。

「じゃあ行こう。クラウス達マクシミリアン艦隊ももう出ている頃だ」

王都攻略が本格的に始まる前に潰さないとな。決意を新たにアムルから、ミナレットの在るイリュリア沖の島へと向かう。

。―。―。―。―。―。

――イリュリア王都スコドラ／森林地区コースフェルド／？？？

王城の在る王都中心部より遠く離れたそこは、木々に覆われた自然豊かな森林地区コースフェルド。ファルコ・アイブリンガー率いる騎士団・地駆けし疾狼騎士団フォーアライター・オルデンの鍛錬場所である。そのコースフェルドは遥か昔――数百年以上も前より開拓する事を禁止されていた。

その理由を知るのはイリュリア王族と執政部、騎士団幹部クラスのみだけだ。コースフェルドの中央には大きく開けた空間が広がっている。直径にして４ｋｍほど。普段ならフォーアライター・オルデンはそこでキャンプを張って、数日間連続で鍛錬を行う。しかし今は、騎士ではなく学者のような連中がその空間にたむろしていた。

「いやぁ、実に興奮しましたよ。伝説のエテメンアンキをこの手で修復できたなんて」

「はは、まったくだ。それにしても。子供の頃から何も無いと思っていたこの場所に、エテメンアンキが在ったとは」

「この数百年、ずっと結界で位相をズラされていたんですよね・・・。だから目に見えずに触れる事さえ出来なかった。でも今は、見えないだけで触れられる」

1人の男が手を何も無い宙に伸ばし、ピタッと何かに触れたかのように止まった。そこには何も無い。しかしソレは在る。聖王のゆりかごに並ぶ最強クラスの兵器・エテメンアンキの外壁が、確かに存在している。

そこは獣たちの楽園たる地上より遥かに高き場所、さながら生命の頂である空。上は星空、下は雲海、周囲３６０度が藍色のみである成層圏の空に、１人の女性が何かに腰かけている体勢で居た。肩に掛かる程の長さの灰色の髪。眼下に流れる白い雲を眺める双眸は翠色。右手の甲で頬杖をついていることから肘掛椅子と思われる物に座っているようだ。

「ご先祖様、大変お待たせいたしました。レーベンヴェルトの奪還という代々より続く夢が、イリュリア最後の女王にして新生レーベンヴェルト最初の女王となる我、テウタ・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルトと、ご先祖様が遺したるこのエテメンアンキが叶えましょう。ですからもうしばらくの間、お待ちくださいませ」

テウタのみしか存在していなかった藍色の空間に、空間モニターが展開された。表示されているのは、今現在テウタの居る場所であるエテメンアンキの全体図だ。全高２１ｋｍの塔であるエテメンアンキ。頂上は開かれた傘の骨の様で、テウタが居るこの空間はエテメ

ンアンキの先の先に在る管制室だ。エテメンアンキの各階層の機能状態が次々と蘇っていく事が表示されていく。数百年の眠りからついに目を覚ましたエテメンアンキ。とは言えその力を揮うにはもうしばらく掛かるが。

『テウタ陛下、ご報告が』

別のモニターが展開され、映っている騎士団総長グレゴールがそう告げた。テウタは「何か問題でも？」と興味なさそうに訊き返した。エテメンアンキの完全稼働まで残り1～2時間。今さら何が起きようとも大して障害にならないと考えているためだ。

『シュトゥラのマクシミリアン艦隊とバルトの三国混合騎士団が、王都への進攻を企てているとの報告が入りました』

「そうですか。ミナレットの稼働状況はどうですか？　その二大勢力に何発か撃ち込んだようですが」

『・・・バルトについては順調にその効果を発揮していますが、シュトゥラに於いては・・・魔神よって不発と続いています』

「魔神ですか。やはり彼が我々イリュリアにとっての最大の壁のようですね。エリーゼ卿を手中に収めていれば、その動きを制限出来たのかもしれませんが・・・」

それを聴き、グレゴールは『誠に申し訳ありませんでした』と深々と頭を下げて謝罪した。テウタは別に責める気などなかった。確か

にオーディンの魔力供給源であるエリーゼを手中に出来なかった。しかし、その代わりに――いや、エリーゼ以上に価値のある者を手に入れる事が出来た。それゆえに「まぁ仕方がないですね。王都に駐留している騎士団に、都民の避難誘導をさせなさい」と指示を出す。

「艦隊は、このエテメンアンキで迎撃します」

『かしこまりました。それともう1つ、アンナ・ラインラント・ハーメルンの事ですが』

グレゴールの口からエリーゼの身代わりとして拉致されたアンナの名が出てきた。

「彼女ですか。ガーデンベルグ様とグランフェリア様の仰る通りにして下さい」

さらに驚愕の名前がテウタの口から発せられた。ガーデンベルグとグランフェリア。共にオーディン――ルシリオンが2万年近く追い求めてきた"堕天使エグリゴリ"の隊長と参謀だ。グランフェリアはまだしもガーデンベルグのその実力は、現ベルカにおいて・・・次元世界で最強。イリュリアを恐怖させているオーディンすら上回っている。その2体の"エグリゴリ"はやはりイリュリアと繋がっていた。

『・・・かしこまりました。バルトの騎士団は我々にお任せください』

「頼りにしています」

通信はそれで切れた。テウタの居る空間が成層圏の映像から白亜の空間へと変化。床や壁や天井には赤く点滅する幾何学模様が縦横無尽に描かれている。そしてテウタが腰かけていた物も判明。それは黄金の玉座だった。背もたれが５ｍほどもある巨大さ。王が座するべき椅子。テウタは玉座の上で少し身じろぎして座り直す。彼女の前に、ベルカという星の立体映像が映し出された。

「・・・・さあ！　私が新世界レーベンヴェルトの王――いいえ！　神へと至るための最後の戦争を、いざっ！！」

テウタはそのベルカの立体映像を鷲掴むように手を翳し、声を殺して笑った。

。―。―。―。―。

――トゥルム海沖／ミナレット管制室

「グレゴール総長閣下より指令っ。シュトゥラより魔神率いるグラオベン・オルデンがミナレットへ向けて出撃したとの事で、エテメンアンキ完全稼働まで足止めをせよ、との事ですっ！」

ミナレット管制官の１人からの報告に、管制室に緊張感が満ちた。いや、緊張を抱いているのは管制官数人のみ。ミナレットに配置された高位騎士８人とその騎士団の総指揮を任されているファルコと

ウルリケ、そしてフレートの3人にあるのは、

「盟友ゲルトと盟友ワイリーの敵討ちの絶好の機会だな」

「足止めという命令だけれど、別に殺してしまっても良いのでしょ？」

「当たり前だ。足止め？　ふん、殺し尽くして、奴らによって散らされてきた盟友たちの墓前に奴らの首を添えてやる」

純粋な復讐心。仲間を、友を殺害された悲哀や怨恨や憤怒を全てオーディン達にぶつけようとしていた。しかしここで問題が発生。3人ともグラオベン・オルデン狩りに参戦したいと強く思っているが、ファルコ、ウルリケ、フレートの誰か1人は管制室に留まらなければならない。それが彼らが従順に付き従っている、敬愛するテウタ女王陛下からの指示だからだ。

「俺とフォーアライター・オルデンが出る！」

「いいえ！　私とプリュンダラー・オルデンが行きます！」

「お前たちがすでに負けているだろうが！　ここは俺と雷鳴轟かす（グラオザーム・オルデン）騎士団が出るべきだ！」

3人は、自分と自分が率いる騎士団を猛アピール。ただの自慢大会になりそうなのを察した1人の管制官が「コインで決めてはいかがですか・・？」と1枚の金貨を取り出した。その解決方法は完全な運勝負。だがそうでもしないと決まらないと判断した3人は、コイ

ンでの出撃権獲得勝負に納得。

「では行きます」

キンと響かせ、金貨は宙を舞う。管制官は落下してきた金貨をパシッと掴み、逆の手の甲に押し当てた。少しの沈黙。そして「裏！」と答えたのはファルコとウルリケ。同時に「表！」と答えたのはフレート。管制官はゆっくりと手を上げていき、「裏、です」と上を向いている面が裏である事を告げた。この瞬間、管制室に留守番するフレート、出撃するファルコとウルリケという構図が決定した。

「ま、気を落とさず留守番よろしくな」

ファルコは同情するかのようにフレートのの肩をポンポンと叩き、管制室から退室。ウルリケはフレートの背中を一発叩いて「あなたの分もキッチリ仕事をして来るわ」と言い、ファルコに続いて退室した。シンと静まりかえる管制室。コインで決めようと提案した管制官は気まずくなり謝ろうとしたその時、『ミナレット管制室。グレゴールだ』イリュリア騎士団総長グレゴールから通信が入った。

「閣下」

『うむ。今そちらに戦力を1人送った。協力しろ、とは言わんが気にはかけてやってくれ』

「戦力・・？　騎士団の誰かですか？」

『いや・・・騎士団の者ではないが、とにかくそちらに1人行く。連絡はそれだけだ』

一方的に通信が切れる。フレートはグレゴールの僅かに不機嫌さに気付き、「一体何があったんだ？」と首を傾げるばかりだった。

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

北に在るシュトゥラと南に在るイリュリア。その二国の国境線を西に向かうとトゥルムという名の海が広がる。その沖合約１４ｋｍほどに、「思っていた以上に大きいな」巨大な魔導砲台ミナレットが鎮座している島があった。

私たちは一度島の状況を確認するために止まり、警戒網に引っかからない程度の高度から眼下のミナレットの姿を見詰める。全方位へ砲撃を撃てるようにするための回転床。数百ｍの砲身は２つ。回転床周囲には数棟の建造物。管制室か何かだろう。そこを潰せば・・・ミナレットは止まるのだろうか？

（さすがにそんな簡単なものじゃないだろうな）

聖王のゆりかご同様に古代の遺産ロストロギアであるミナレットだ。後付けっぽい管制室なんぞが無くとも動くだろう。やはりエーギルで完膚なきまでに潰すしかないか。まぁ念のためにアレも標的にしておこう。さてと、問題は・・・・

「空と海、戦船が1、2、・・・・8隻か。結構揃えてきたな」

ヴィータがそう漏らす。戦船は海上に４隻、天上に４隻あり、島を取り囲んで防衛線を築いていた。結構面倒だな。ミナレットに対処している状況で馬鹿すか艦載砲を撃たれるのは辛い。下手に魔力を消費せず、しかも時間をかけずに攻略する方法を思案する。
黙考しているところに「ミナレットの防衛の為の戦力か。オーディン、どうなさいますか？」シグナムにそう訊かれた。戦船が８隻。島にはおそらく騎士団がいくつか。高位騎士もまた数人かは居るだろう。シュトゥラにも空戦の出来る騎士が数十人単位で居てくれれば戦略のバリエーションも増えるんだが・・・。ない物ねだりしている暇も無いか。仕方がない。

「戦船はシュリエルと私でどうにかする。各騎は騎士に対処してくれ。シュリエル、空の戦船はヘクサで墜とすぞ。行けるか？」

「もちろんです。ですが私はオーディンのように遠隔発生が出来ないのですが・・・」

デアボリック・エミッションは本来術者を中心として発生・拡大する魔導だ。はやては遠隔発生という魔法資質があったからこそ、デアボリック・エミッションを遠い場所に発動させる事が出来た。しかしシュリエルの有する資質は、広域という射程圏が異常に広いものだ。。
だからこそ「戦船の高度にまで降下するんだよ」と告げる。一気に降下し、迎撃が来る前に発動、撃沈させる。そう説明したら、シュリエルは「了解しました」と一言での快諾。海の戦船は、ミナレットに時間を割きたいために・・・・

『アイリ。ちょっと無茶をさせる』

『アイリは大丈夫。どんと来い、だね』

アイリとの融合中、魔力炉（システム）に掛かる負担が少なくなるのは幸運だ。魔力の上下制限はあるものの、上級術式や"アンスール"クラスの複製術式も扱える。先の次元世界での契約時に掛けられた制限に比べれば随分と優遇されている。

「我が手に携えしは確かなる幻想。我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」

だからこそ、かつては出来なかった複製術式を複数同時に発動できる。空と海の対戦船の術式を整え、「いくぞ！」シュリエルと共に高速で降下。私とシュリエルの奇襲を報せるサイレンがこの空域一体に響き渡る。が、もう遅い。シュリエルは1隻の後部（駆動炉付近だな）へと降り立ち、私はシュリエルのエミッションの効果範囲ギリギリ外の高度で停止。

「シュリエル！」

「はいっ、オーディン！」

「「天を黒く染めし闇の天体、此処に輝け。デアボリック・エミッション・ヘクサ！！」」

魔力障壁発生阻害の効果を有する空間作用型の広域殲滅魔法、デア

ボリック・エミッション。シュリエルのエミッションを中心に、私は6つのエミッションを六茫星状に発生させる。ゆえにヘクサ。この時代には非殺傷設定など無く、当然物理破壊限定であるため、シュリエルの一撃をゼロ距離で喰らった戦船後部は爆発を起こした。ちなみに私の6つのエミッションも他2隻を確実に捉え、致命的な被害を出してやった。何せ艦橋を吹っ飛ばしたのだ。心臓が残っていようと脳が死ねばそれで終わりだ。

「む・・？」

シュリエルが攻撃を加えた戦船から魔力反応。船体の上部からで、しかも複数。艦載砲が魔力を充填し発射態勢に入ったのだとすぐに察して、食い止めるために魔道をと思ったんだが、「ちょうどいい」消費した魔力を回復させてもらおう。

思念通話で『シュリエル、回避行動準備』と注意を促した直後、眼下の戦船から八条の砲撃が私たちに向け発射された。当然だが1発あたりの砲撃は分裂した後のカリブルヌス程の魔力量じゃない。だから魔力炉（システム）の暴走に細心の注意を払う必要はない。シュリエルと共にいくつかの砲撃を避け、

――女神（コード・イドゥン）の救済――

1発の砲撃を吸収し、自らの魔力に変換。テンパランチア召喚と複製エミッション6発に消費した魔力分を回復。回避を終えた時、『申し訳ありません。一撃で墜とせませんでした』と申し訳なさそうにシュリエルは謝って来た。

責める事なんてないから『いいよ。結果的に魔力を回復できたしな』

気にしないように言う。それに成した私が言うのもなんだが、一撃で戦船を撃沈できる奴なんてまずいないだろう。それでもまだ納得していないようだ。だったら『これから墜とせばいい。ドルヒ、行くぞ』と言うと、シュリエルもまたチャンスを貰えたという事で『お願いしますっ』と張り切った。

「では行くぞっ！」

「はいっ！」

シュリエルの周囲に血色の短剣が２０と展開された。本来、ブルーティガー・ドルヒに属性は無い。だが私が全ての短剣に様々な属性を付加させる事で、その威力を大幅に増加させる事だ出来た。

「「エレメンテン・ドルヒ！」」

炎熱・雷撃・氷結・閃光・闇黒・風嵐の６つの属性を付加された短剣が一斉に戦船を強襲。全弾、艦載砲台に着弾し爆発。おそらく自己修復機能が無ければ修理するまで使えないだろう。シュリエルは「トドメだ！」と周囲に深紫色の魔力球を４基発生させた。ハウリングスフィアだな。機雷であり、多弾砲撃ナイトメアハウルの発射体にもなるものだ。案の定、「ナイトメアハウル！」５本の砲撃を艦橋へと向けて照射。着弾した場所からは派手な爆発が起こる。しかしそれでも戦船は墜ちない。「むぅ」シュリエルから不機嫌オーラがビシビシと放たれてくる。

（海上の戦船からも迎撃砲が来たか・・・！）

時間をかけ過ぎた。シュリエルには悪いが、私がしぶとい戦船を墜とそう。眼下から撃ち込まれてくる砲撃は優に５０を超えている。回避行動に力を注ぎ、

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

砲撃が一瞬でも途切れた隙を狙って、土石系の攻性イロウエルを発動。私の魔力光であるサファイアブルーに光り輝く２つの円環より出でるのは白銀の巨腕。左の巨腕で船体を鷲掴んで、右の巨腕で空手チョップ。船体を真っ二つにして、２つに分かれた船体を海上に浮かんでいる２隻の戦船にポイ捨て。

海上３隻の砲撃は全弾その残骸に向けられ始めた。隙だらけになった海上の戦船を潰すために、「シェフィ。君の術式、借りるぞ」氷雪系最強の魔術師・蒼雪姫シェフィリスの氷雪造形術式の１つである氷雪戦艦リーヴスラシルを発動しようとした瞬間、

『フェイルノート発射準備完了。・・・・発射！』

あまりに突然。ミナレットの下段の砲身から反射鏡弾フェイルノートが発射された。リーヴスラシル構築を破棄して、イロウエルの操作に全力を注ぐ。フェイルノートを破壊するために右腕を伸ばすが、あと一歩のところで届かず、フェイルノートは・・・・

（あの方角は・・・・ネウストリアだったか・・？）

聖王家の治めるアウストラシアにちょっかいを掛け続ける国、ネウ

ストリアへ飛んで行った。それにしてもどういう事だ？　攻撃するという事はすなわち敵に回すという事だ。無関係（かどうかは判らないが）であるはずのネウストリアを敵に回す理由が思いつかない。

『カリブルヌス発射準備完了・・・５、４、３、２――』

ミナレットから膨大な魔力を感知。しかしおかしい。今のミナレットが発している魔力と、カリブルヌスの魔力に差があり過ぎる。感じえる魔力を全て魔力砲カリブルヌスに回せば、今の俺では防ぎきれないものになるというのに。いや、考えるのは後だ。ネウストリアという国は、私にとっては関係のないどうでもいい国だ。しかし人が住み、生きているのは確か。見殺しにする事は出来ない。

『――１、発射！！』

「イロウエル！」

２本のイロウエルを盾とするように砲口の前に配置し、直後にカリブルヌスが着弾。一瞬の拮抗。拡散されたカリブルヌスは周囲に撒き散らされ、海上の戦船を轟沈させた。そしてイロウエルは、カリブルヌスに耐えきれず粉砕。

威力を激減されたカリブルヌスはしばらく突き進んだが、途中で霧散していった。とりあえず防御に成功。安堵した矢先、カリブルヌスを放射した砲身の至る所から冷気が噴出、「寒っ！」ここまで流れてきた冷気に身を縮める。

（あ、なるほど。冷却の為の魔力だったか）

ミナレットが生み出す膨大な魔力は、８０％ほどがカリブルヌスで、残りが砲身冷却の為のものなんだ。すぐさまミナレットが魔力充填を始めた。チャージが速過ぎる。しかも砲口の前に見憶えの無い魔法陣が展開された。そして間髪入れずにカリブルヌスを発射。魔法陣に着弾したカリブルヌスは一度消滅し、多弾砲撃として魔法陣から撃ち出された。

さっきアムルを襲ったカリブルヌスの連続飛来は、今のように魔法陣を経由してのもだったんだな。反射鏡弾フェイルノートで目標地点をランダム砲撃、魔法陣による多弾砲撃。まぁそれくらいの性能があってもおかしくないか。他にも何かしらの機能がある、と警戒しておいた方がいいな。

『『『オーディン！！』』』

シグナムとヴィータとシュリエルから思念通話。ハッとして周囲を見回すと、いろんな動物を混ぜ合わせたかのようなキメラが何十体と居た。

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒ヴィータ†††

ずっと空の上でオーディンとシュリエルを見守っていたあたしら。もうさ、驚く事もないんだけどさ。あまりにも呆気なさ過ぎだろ、戦船。シュリエルのデアボリック・エミッションとオーディンのデアボリック・エミッションの多数同時発動のヘクサ。

ありゃ反則だろ。つうかオーディンのエミッションの威力が半端じゃねぇ。オリジナルの使い手のシュリエルのエミッションより強い

ってなんだよ。まっ、そんなオーディンとシュリエルのコンビだからこそ、あたしは安心して見ていられた。
だけど、だんだん雲行きが怪しくなってきやがった。ミナレットから放たれるカリブルヌスが巨腕イロウエルを粉砕。そん時に戦船が全部潰れたけど、ミナレットの脅威がそれ以上に厄介なモンになっちまってる。

（けどあたしらが出てっても何も出来ない。だから・・・）

待つんだ。あたしらの出番が来るのを。そう思ってひたすら出て行きたいのを耐える。そんな時、「む？　あれは・・・！」ザフィーラがミナレットの奥を見て唸った。あたしらをそっちを見詰める。なんか・・・いくつもの影が・・・飛び立った？　目を凝らす。距離があり過ぎてなかなか判別できなかったけど、オーディンとシュリエルが居る場所に近づくにつれて・・・ようやくそれが何なのか判った。

「アイツら・・・！」

この前、自爆しやがったあの狼たちと同じ、名前は確かプリュンダラー・オルデンって奴らだ。戦えなくなった騎士を改造して生み出した、青白い甲冑を身に纏った合成獣。今回はあの狼の他にデケェ蛇とか熊とかが空を飛んでやがる。

「「「オーディン！！」」」

ソイツらが一斉にオーディンに向かって突撃していく。シグナムが

「いくぞ。ここからは我らの仕事だ！」って降下する。きっと奴らの団長も居るはずだ。あたしはソイツに用がある。

（仲間を自爆させるようなクソ野郎のツラを見て、そんでもって張った倒さねぇと気が済まねぇ）

戦って死ぬ事は騎士の本望だって思って、人間から獣に改造されてまで戦場に戻ったってのに、最期は操られて自爆って・・・。ふざけんな。奴らは敵だけど、でも同じ騎士としてやっぱり戦いの中で死なせてやりたかった。だから自爆させた張本人（だと思う）の団長・・・名前は確かウルリケ（だっけ？）をブッ潰す。

シグナムに続いてあたしらも急降下。シグナムが狙うのは、光の翼を生やした大蛇。ザフィーラは、ザフィーラ以上にデカイ白い毛の熊（コイツも光の羽がある）。んであたしは、「おらぁぁぁあああッ！！」自爆したアイツと同じ狼に突っ込む。交戦に入る前に、「いきますっ！」シャマルが小型の竜巻・風の足枷を幾つも発生させる。足枷は奴らの行く手を邪魔するように発生したから、否応なく急停止。そこを狙って、

――テートリヒ・シュラーク――

――紫電一閃――

――牙獣走破――

あたしは"アイゼン"の一撃を狼の横っ面に、シグナムは火炎を"レヴァンティン"に纏わす紫電一閃で蛇の胴体に、ザフィーラは魔

力付加の飛び蹴りを白熊の脳天にぶちかます。よっしゃっ、手応えあり。「ブッ飛べぇぇえええっ！」全力で振り抜いて吹っ飛ばす。あたしの方は問題なかったけど、シグナムは"レヴァンティン"に付いた血を振って払いながら「む、一撃で首を落とせなかったか。存外硬いな」悔しげに呻いた。そんでザフィーラはもう離れたところで白熊と殴り合ってんし。つか拳打と蹴打の連撃をする熊ってすげぇな（あの短い手足でさ）。

『私は今からミナレットの破壊に入る。すまないが、それまで時間を稼いでくれるか？』

オーディンから思念通話。ミナレットの破壊、かぁ。あんな化け物砲台を破壊できる魔導ってどんなんだろう？　すげぇじっくり見てみてぇけど、「今はアイツらの相手が優先だよな！」宙で体勢を整えた狼は頭を振って、「鉄槌の騎士だったか。見事な一撃だった」ってあたしを称えた。"アイゼン"を肩に担いで「へっ。別に嬉しかねぇけど、ま、あんがと」そう返す。

すでにシグナムとザフィーラも本格的に大蛇と戦闘始めてっし、シュリエルも新手の甲冑を纏ったカラス

みたいなのとやり始めた。そんでオーディンは足元に、蒼く輝く十字架の魔法陣を展開して――なんだろ？・・・詠唱？をしてるっぽい。だったら邪魔させちゃダメだよな。"アイゼン"のカートリッジを1発ロード。

「・・・テメぇら、まとめて掛かって来いやっ！！」

「面白い。狂いたる災禍騎士団（ブリュンダラー・オルデン）所属ヤークトフント隊・隊長ヌンマ

ーI、いざ参る」

隊長だぁ？　面白れぇ。だったら団長の居所も知ってんだろ。

「グラオベン・オルデン、鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン」

"アイゼン"の先端を突きつけ名乗りを上げる。そんじゃま、決闘開始と行くか。

。―。―。―。―。―。

深い深い海の中。ミナレットが鎮座している島の在るトゥルム海の深淵。母なる海の住民たる魚たちが悠々と泳ぎ回っている。魚たちの楽園たる海中に在るはずのない影が1つ。

胴体の両側には胸ビレではなく人間の腕がある。背中には二対の翼がある。右側に天使のような翼が2枚、左側に悪魔のような羽が2枚の計4枚だ。下腹部から下。それは竜の尾だった。透き通るような白さを持つ、2m程の長さの尾。胴体。下半身とは違い、人間の体そのもの。白い肌にほっそりとした腹部、胸部には2つの膨らみ――乳房がある。

そして顔。若い女――十代後半ほどの少女の頭が乗っかっていた。浅葱色の長髪は海中の水流に任せて漂い、開き切っていない双眸は灰色だが、時折に銀色の光を発し点滅している。

「・・・ПИЮ⊆Ω＜Д、ПИЮ⊆Ω＜Д・・・」

その少女は人語ではない言語をうわ言のように発し、翼と尾をヒレのように動かして泳ぎ、海面へと上昇していく。海面まで残り数ｍというところまで上がった時、少女は降ろしていた両腕を勢いよく振り上げた。すると海中の水流に変化が生まれた。少女の両手によって生じた水流はものすごい勢いで海面へと向かい、

――メトシェラの槍――

海面が爆ぜ、突き上がった水柱は巨大な槍と成って空に居る者たちに襲いかかった。オーディン達グラオベン・オルデンはその咄嗟の奇襲にも勘づき、ほぼ紙一重で回避する事に成功した。が、避けきれなかった狂いたる災禍騎士団プリュンダラー・オルデンのキメラ騎士たちは体を海水の槍に穿たれ絶命した。
グラオベン・オルデン全騎は目の前で起きた予想外の事態に、僅かな混乱を見せている。そして次に、晴れた水飛沫の中から1人の少女が現れた。その姿を見たグラオベン・オルデンは絶句。

「・・・・アンナ・・・・!?」

オーディンが目を限界にまで見開き、その少女の名である"アンナ"と呻いた。
そう。天使と悪魔の翼、竜の尾を有するその少女は、エリーゼに代わって拉致されたはずのアンナだった。

Ｍｙｔｈｌ８風は吹き荒び、焔は燃え上がり～Ｆｌａｍｍｅ　ＶＳ
ｓｔｕｒＭ～

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

ドカンといきなり強大な魔力反応が現れた事で、私の固有魔術における水流系最強の儀式魔術、エーギルを中断してしまった。その直後に海面の至るところが爆ぜ、その地点より海水で出来た巨大な槍が私たちの居る空に向け突き上がって来た。
ギリギリだったが回避に成功。周囲を見回し、シグナム達も回避できていた事を確認。だがプリュンダラー・オルデンの獣たちは、まさか味方（だろうな間違いなく）の攻撃がここまでの事だと思っていなかったのか直撃を受け、海水の槍に穿たれバラバラに粉砕された。

（この感じ・・・魔導・・・？　いや、違う・・・まさか・・・！）

今の海水の槍に使われた魔力に、この時代では考えられない"力"が使われているのが判った。その"力"を扱えるのは、この世界、この時代においては私と"堕天使エグリゴリ"、そしてイリュリアが造った"エグリゴリ・レプリカ"のミュール（ゼフォンはまだ弱い）だけだ。

（だが、足元に広がっている海の中から感じ取れる魔力からして、誰も該当していない。では誰が？　では何が？）

今の一撃を放った奴を見極めようと眼下を見下ろす。その時、また大きな水柱が立った。身構える。だが攻撃ではなかった。噴き上がった海水が落ち、その術者の正体が私たちの前に現れた。人間の女性の上半身（胸だけは申し訳程度に鱗で隠れている）。竜の尾の下半身。背には天使と悪魔の翼がそれぞれ２枚ずつの計４枚。

「・・・・アンナ・・・・！？」

目を疑った。こうして実際に視界に収めているにも関わらず、信じられない。むしろ信じたくない。なにせアンナが変わり果てた姿で私たちの前に現れたのだから。それだけじゃない。もう１つ信じられない事実が、この場で私だけが知るその事実が、私の頭を混乱させている。

しかし、どこかで判っていたのかもしれない。ただの人間の娘であるアンナが時折放つ威圧感。ただの人間の威圧感に気圧されるような私じゃない。それなのに、アンナの威圧感には参っていた。ずっと何故か、と考えていた。その答えが今、こうして私の目の前に現れていた。

「アンナ・・・・。そうか、君は・・・・！」

『オーディン！　アンナが・・・アンナが改造されちまった！』

『何という事だ・・・・！』

『改造して、しかも私たちの迎撃をさせるなんて・・・・許せない・・・！』

『我が主。いかがなさいますか・・・！？』

『マイスター！　まさか戦うなんて言わないよね！？』

『・・・それ以前にハッキリと自我があるかどうかが判らないな。有れば説得が出来るだろうが、無ければ戦うしかないだろう』

ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、アギト、シュリエルの順で思念通話が送られてきた。改造された、か。アンナのあの姿に心当たりのある私以外はそこに至って当然か。しかし事実は違う。だがどう説明すればいいのか。彼女の正体は、私の時代にしか通用しないものだ。

（まさかアンナが魔族、しかも最下層の海竜だったとは・・・！）

魔族。人間や他の生命が住まう次元・表層世界とは違う次元・裏層世界（通称：魔界）の住人だ。魔族と人間の関わりは、私がまだ人間だった頃が末期。魔術が廃れ、魔導という新たな技術が生まれた現代では会う事など、存在を知る事すらないはずだ。

『マイスター、どうするの？　あの人が、アイリ達が助けないといけないアンナって人なんだよね？』

「『ああ。だが・・・』む・・・っ！」

――エノクの鎖人――

また水柱が上がる。今度は海水の槍ではなく薄っぺらな人の形を成した。それが８体（いや、枚と数えるべきか？）。アンナが私を見、指差した。８体の水の人形が一斉に向かって来た。狙いは私か。『私一人で相手にする。各騎は、他の空戦戦力の迎撃を！』全騎にそう思念通話を送る。

「エヴェストルム！」

剣槍"エヴェストルム"を起動して柄を半ばで分断、二剣一対のツヴィリンゲン・シュベーアトフォルムにする。"エヴェストルム"の穂の根元にあるシリンダーのカートリッジを１発づつロード。

――集い纏え（コード）、汝の氷雪槍（バゴスゼルエル）――

刀身に冷気を付加。まず最初に到達した人形を寸断。ソイツは一瞬で凍結、粉砕される。私たちの魔力だけにしかない　"力"――神秘を見れば、ギリギリ私が上。魔導は、純粋に魔力量や効果で勝敗が決まる。魔道は、魔力量だけでなく神秘と言われる特殊な"力"の強弱が最重要だ。

神秘を打倒するにはそれ以上の神秘を以って当たるべし。それが、当時の魔術師の絶対の摂理。弱体化し、人間だった頃より遥かに弱くなった私でも、魔族化しているアンナの神秘にもまだ負けていない。

――エロンの渦陣――

次々と生まれ向かって来る水人形を凍結粉砕しているところに、私を包囲するかのように海水の竜巻が環状にいくつも発生。水圧もさる事ながら神秘が格段に上がっている。竜巻を突破する、という手段は取れない。ならば空から。竜巻の高さは目測で８０ｍ強。一瞬で上がれる高さだ。

しかしまぁアンナもそれくらいは判っているだろう。むしろ唯一の逃げ場という事で何かしらの攻撃を加えて来るだろうな。だが、徐々に狭まって来ている以上留まれない。罠だろうが何だろうが、悉く突破してくれる。急上昇――した瞬間、私の居る内側に傾れ込むように水の竜巻が崩れた。

（海中に引きずり込む気か・・・！）

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒シグナム†††

「オーディン！」『マイスターっ！』

オーディンを包囲するかのように発生した幾つもの海水の竜巻が一斉に内側に崩れ、オーディンを呑み込み、海中へと引きずり込んだ。予想だにしなかった事が次々と起こり、私とした事が完全に混乱していた。救出すべきだったアンナは、肉体を改造され怪物に成り果て、我らの敵として現れた。

『シグナム！　マイスターを助けないと！』

悲鳴じみたアギトの声にハッと我に返り、すぐにオーディンが呑まれた地点へと向かう。だが、

――ヴィント・バイセン――

「『っ！』」

私に向けられて放たれてきた衝撃波。ほぼ無意識で対魔力攻撃に優れた障壁パンツァーシルトを発動。直撃は免れた。それしても「こんな時に・・・！」歯噛みする。衝撃波の出所へと視線を移すと、案の定、連中は居た。

「ファルコ・アイブリンガー・・・！」

『フュンフ！』

鎧ではなく我らと同じ衣服型の騎士甲冑を身に纏った、イリュリアの高位騎士の1人であるファルコ・アイブリンガー。そして、アギトの姉に当たる融合騎プロトタイプ五番騎・風のフュンフが居た。

（む？　確か以前の戦いで、ファルコは飛行の魔導を持っていなかったのではなかったはずだが・・・）

ファルコは魔法陣の上に立つ事はせず、何も無い宙に佇んでいた。この短い期間で飛行の魔導を会得したか？　いや、飛んで浮かんでいるというよりは宙に立っているという感じだな。

（どちらにしろ空戦能力を得たという事には変わりないな）

四肢に装着されている計２０本の爪を生やした籠手と具足に濃い緑色の魔力が付加される。その上「融合だ、フュンフ！」ファルコとフュンフは、私とアギトのように融合を果たす。今は一刻も早くオーディンを助けに行きたいのだが。ファルコへの警戒をそのままに海面を横目で見る。

『私は大丈夫だ。アンナは私に任せ、各騎はそれぞれの戦いに集中してくれ！』

オーディンからの思念通話が送られてきたとほぼ同時。海面の至る所から連続で爆発が起きる。オーディンとアンナがあろうことか水中戦を繰り広げていた。水中戦が出来る騎士――いや、人間など初めて見た。やはりオーディンは別格という事か。

「・・・魔神はあの怪物女に任せる事になっちまってちょっとイラついてるんだよ、俺。でもま、あんたと戦えるのが不幸中の幸いさ。盟友ゲルトを殺したあんたを殺せるんだからな・・・！」

ファルコは獣のように体勢を低くし、宙を蹴って突撃して来た。驚いたな。ファルコは何も無いというのに地面のように宙を走っている。

ＶＳ―。―。―。―。―。―。―。
其は疾駆する風騎士ファルコ＆フュンフ
。―。―。―。―。―。―。―ＶＳ

「盟友ゲルトの仇、取らせてもらうぜッ！」

『覚悟なさい、ゼクス！　私たちの因縁は今日、この場で終わりよ！』

――ヴォルフ・クラオエ――

左手の貫き手を"レヴァンティン"で外へと捌くと、間髪入れずに右の貫き手を放ってきた。私に貫き手が到達する前に、「うごっ？」ファルコの顎を左膝蹴りで蹴り上げる。ガラ空きになったファルコの胴体を左手に持つ鞘で追撃しようとしたが、ファルコは反り返る反動を利用して私と同じように蹴り上げ。半身ずらす事で蹴打を紙一重で回避。その場で宙返りをしたファルコはまた宙を何度も蹴り上昇していく。

「こっからが本番だ！　フュンフ！」

『ええっ！』

――シュトゥルム・シャルフリヒター――

竜巻の蛇と化したファルコ。奴と初めて交戦した際にも私とアギトに放ってきた技だ。あの時は、アギトの炎熱加速で威力を強化した紫電一閃で真っ二つに寸断したが・・。さて今回はどうだろうか。おそらくは無理だろう。奴も成長しているはずだ。ゆえに真っ向からの迎撃はせず、回避行動を取る。あれほどの魔導、いつまでも維持できないはずだ。解除された瞬間、一撃で墜として

くれる。奴は「今度はお前をズタボロにしてやるっ。徹底的にだっ！」と私を追って軌道変更。それまでは以前と同じ。しかし、

「踊り、逃げ惑い、跪き、そして灰になれっ！」

『行くわよっ！』

――トイフェル・ルフト――

後方へと過ぎ去っていった蛇から幾つもの三日月状の真空の刃が放たれてきた。高速で飛来する真空の刃から回避できるだけの余裕がなかったため、

「はあっ！」

――シュトゥルムヴィンデ――

"レヴァンティン"を振るって衝撃波を放ち相殺――しているところに本体である蛇が再度向かって来た。だが直撃を受ける前に真空の刃の迎撃を終える事が出来、すぐさま回避行動に移る。避けたは良いがほぼ紙一重だったがためか、通過していった蛇の放つ衝撃でスカートの裾が破けてしまった。

「っ、貴様・・・！」

歴代の主に賜った甲冑がたとえ戦で傷ついたとしても、これまでの私であればなんとも思わなかった。だと言うのにどうだ。リサの時

とは違い、相手が違うだけでこうも苛立ちを覚えると言うのは。

『シグナム！』

『問題無い。次が来るぞ』

アギトにそう応えた時、ミナレットに動きがあった。巨大砲台であるミナレットが鎮座している台座が回転し、砲門を・・・シュトゥラではない方角へと向けた。そして『カリブルヌス、発射！』魔力砲撃の発射を告げる声がここ一帯に響き渡る。砲門より放たれるカリブルヌス。阻止する術を持つオーディンは海中だ。ゆえに見逃す他ない。

「・・・・仕切り直しだっ。だが、次こそズタボロにしてやる！！」

――グラナーテン・ヴィント――

竜巻の蛇より、今度は魔力弾がバラ撒かれ、こちらへと一斉に飛来してくる。あの程度の攻撃ならば迎撃も防御も容易い。しかしアレを布石として使われているかもしれんという選択肢が生まれてしまった以上、今度も回避する他ない。魔力弾に追尾性が無いのは助かる。一度避けてしまえば恐れる事はない。

『シグナム。避けてばっかりじゃ・・・・！』

『判っている。・・・・あれをやってみるか・・・』

"レヴァンティン"を鞘に収める。すると「諦めたのか！？　だったらその場に突っ立ってろ！」ファルコはそう言い放ち、馬鹿正直に私の真正面に来るように軌道を変えてきた。それは私が望んだ軌道だ。カートリッジをロードし魔力を圧縮し、居合いの構えを取る。

「いくぞ・・・！」

――飛竜一閃――

"レヴァンティン"を抜き放ち、連結刃たるシュランゲフォルムと化した刀身に魔力と炎熱を付加した斬撃・飛竜一閃を、向かって来ている竜巻の蛇――ファルコへと放つ。紫電一閃と並ぶ私の決め技の一つだ。貫通性が高く、並の防御など無意味とする。

竜巻の蛇と化しているファルコは以前、紫電一閃の一撃の下に撃破した。威力だけで言えば紫電一閃以上である飛竜一閃だ。確実に潰せる、そう判断出来る。竜巻を解除するまで待とうと思っていたのだが、時間を掛けて勝利への道を確実にするという余裕が無いのも確か。

「面白れぇッ！　勝負だっ！」

その直後、竜巻の蛇と飛竜一閃が真正面から衝突、爆発を起こした。手応えあり。これで決まった、と確信した。柄を握る右腕を引き連結刃を戻す。何事も無く戻ってくるはずだった。しかし妙な引きがある。だが爆発で起きた煙幕で目視出来ん。

『シグナム・・？　どうし――』

――トイフェル・ルフト――

「く・・・・！」

――パンツァーシルト――

煙幕を斬り吹き飛ばし飛来した7つの真空の刃を間一髪で障壁で防御。その際にハッキリとファルコの姿が見えた。正直私はその姿に目を疑い、絶句した。ファルコが鷲掴んでいるのは、連結刃の剣先ひとつ前のワイヤーだった。剣先は奴の胸に届いていなかった。

『う、嘘だろ・・・・！』

「馬鹿な・・・・！（撃破するどころか防がれただとっ？）」

私が憶えている限り飛竜一閃への対処で、ダメージ覚悟で鷲掴む、などなかった。たとえ思いついたとして実行しようとも、そのような事は絶対に不可能。障壁を貫かれ、討たれるのがオチだ。しかしファルコはその不可能を実現させた。しかし奴の騎士甲冑は所々が崩れ、顔面も額から流れる血で赤く染まっている。

剣先は届かずとも魔力は届いたようだ。それだけのダメージを受けながらも表情はしてやったりと言った風に笑み。奴は「は、はは、ははは」とかすれた笑い声を発し、連結刃のワイヤーを掴んだまま宙を蹴ってさらに上昇していく。柄をグッと引くが、ガッチリと掴まれているために刀身を引き戻せない。

『各騎！　ミナレットの近く、島に降り立っている場合はすぐに避難してくれ！』

ファルコとの睨み合いが始まった時、オーディンからの一方的な思念通話。私は空だが、ヴィータ達はミナレットの砲身の反対側ゆえに姿は見えん。オーディンはおそらくアンナとの戦闘の最中にも拘らず、ミナレットの破壊を実行するつもりなのだろう。

「んあ？　なんだ・・・？」

『空間が揺れている・・？』

――押し流せ、汝の封水（ヒュドリエル）――

そしてそれは起きた。「津波だと！？」ファルコが戦慄の表情で叫ぶ。正しく津波だった。高さが５０ｍはあるだろう波が突如として現れ、ミナレットの島へと押し寄せていく。ミナレットの周囲にあった建造物が津波に飲まれると、「フレート！　ウルリケ！」ファルコが建造物に向かって叫ぶ。

波は第二波、第三波・・・最終的に第七波まで続いた。津波が止む。ミナレット本体は全くの無傷だが、周囲の建造物や森やらは完全に押し流され、島は荒野と化していた。あれでは島内にいた者たちは全員海に流されただろう。それにあれだけの津波だ。海中へ引き摺り込まれ、おそらく無事ではいまい。

『マイスター、すご・・・・』

『凄まじいな。このような魔導があれば、海辺の町や国など一溜まりもない・・・』

いや戦慄するのは後回しだ。今ならファルコらを撃破できる。カートリッジをロード。だが、向こうもこちらへの警戒を怠っていなかったようだ。「くそっ」と吐き捨てながらも「これでも・・・喰らいやがれっ！　フュンフ！」と四肢の武装のカートリッジをそれぞれ1発ずつ、計4発ロード。

「ならばこちらも行くぞ・・・！」

シュランゲフォルムのままである"レヴァンティン"の刀身に火炎を纏わせる。柄より炎は立ち上り、ワイヤーを駈け上がる炎はファルコが手にする剣先へと向かって行く。そのままワイヤーを掴んでいると焼死する羽目になるぞファルコ。そう目で教えてやったのだが、

『ええ、行くわよっ、ファルコ！』

――ヴァーンズィン・オルカーン――

フュンフの自信に満ちた思念通話がこちらにも届いた。ファルコとフュンフは自信の証明するかのようにその姿を現す。奴から放たれるのは暴風の砲撃。シャマルの逆巻く嵐をさらに強く、射程を伸ばしたようなものだ。剣先へと上っていた炎がその砲撃で掻き消されていく。砲撃はそのまま私へと向かって来る。立場が真逆となってしまったな。通常のシェベルトフォルムへと戻すことが出来ず、砲

撃は刀身を覆うように進んで来るため、移動したところで"レヴァンティン"の柄を手放さない限りは追い続けて来る。

（武器を手放すだと？　戦場で武器を手放すなど負けを認めているも同然・・！）

それ以前にファルコも飛竜一閃を真正面から受け止め、この好況を掴み取った。ならば、「私も退くわけにはいくまい！」覚悟を決め、魔力で全身を覆う防御・パンツァーガイストを発動。

『アギト。すまんが付き合ってもらうぞ』

『仕方ないなぁ。でも、うん、フュンフとファルコに出来て、あたし達に出来ないっていうのも癪だし』

目前にまで迫って来ている砲撃を見詰め、腹に力を入れ対衝撃姿勢を取る。そして「『ぅぐぅぅ・・・！』」砲撃が我々を呑み込んだ。パンツァーガイストが無ければこれで撃破されていたな。これはかなり辛い。魔力甲冑を少しずつ削っていく暴風の砲撃。左腕で顔面を守りつつ、どれだけこの忍耐の試練に挑めばいいのだと前を見上げた時、

「所詮、炎なんて嵐の前じゃ消し飛ばされるだけだっ。それが自然の摂理！」

「なんだと・・・！？」

ファルコが竜巻内を飛ぶようにして私へと接近して来ていた。繰り出される貫き手。左手に持つ鞘を掲げるようにして防御をする。"レヴァンティン"を封じられている以上、鞘と障壁のみで防ぎきるしかない。奴が繰り出し続ける貫き手を、無心で鞘を振るいなんとか捌き続けるのだが・・・

「ぐっ・・・！」

『シグナム！』

ついに障壁を貫かれ、それほど深くはないが左肩を抉られた。苦痛に漏れそうになる声をかみ殺す。するとファルコは「はっはぁっ！　守護騎士の将、俺が討ち取ってやる！」と歯を剥き出しにして笑い、さらに貫き手を速めてきた。

鞘で致命傷を受けないように捌くのだが、鞘を握る左肩を抉られたせいで力が入らない。これはいよいよ。とらしくない事がふと頭に過った時、ようやく竜巻の砲撃が途絶えた。それで奴の姿がまともに見えるようになった。

『ゼクス。あなたのロードもここまでよ！』

『うるさいっ！　シグナムは、絶対に勝つっ！』

フッ。そこまで自信満々に言われてしまっては負けるわけにはいくまい。元よりヴォルケンリッターに・・・いや、違うな。グラオベン・オルデンの信念に連なる騎士に敗北などあってはいけない。何かを守るために、救うために戦うという事は、負けた時には自分だ

けではなくその守るための何かをも失うという事だ。ゆえに・・・。

「ファルコ。お前はここで確実に墜とす・・・！」

我々の足元に魔法陣の足場を展開。ファルコの繰り出してきた右の貫き手を鞘で捌くのではなく半身ずらして回避。そのまま勢いよく跳び上がり片足を相手の脇の下、もう片足を首を刈るように振り上げ、ぶら下がるように自体重で相手の体を折った勢いを利用して回転し、十字固めの形に持っていく。以前、騎士教室でオーディンがザフィーラに教えていた寝技なるものの1つだ。

「（名は確か・・・）腕挫ぎ十字固め、だったか」

オーディンにこの技を掛けられたザフィーラは、その筋肉の鎧のおかげでさほど痛みはなかったようだった。試しに私が掛けられてみた。あれは痛かった。正直に言おう、涙が出そうだった。その一件で、人体には実に弱点が多いという事を再認識させられた。

さらに腕を伸ばし、ファルコの肘からバリバリと音がし始めた。奴が脂汗をかき始める。そしてついに奴は"レヴァンティン"のワイヤーを掴んでいた左手を放した。シュランゲフォルムからシュベルトフォルムへと戻しつつ、「っ？　ぐあぁぁぁあああああっ！」奴の靭帯を断裂させた。これでもう奴の腕は動くまい。魔法陣を解除し、私は宙へ留まり、痛みに悶える奴は真っ逆さまに落下していった。

『シグナム。ファルコとフュンフにトドメを刺すの・・？』

「ここで討っておかなければ、今後の我々の障害になるやもしれん。辛いか？」

『・・・・ううん。もうあたしとフュンフは敵だもん。やって、シグナム』

「・・・そうか、判った。レヴァンティン！」

カートリッジをロードし、火炎の斬撃を見舞う紫電一閃を発動。今もなお落下を続けるファルコへ向かって急降下。私の接近に気付いた奴は空を蹴り、落下を止めた。だがそれは私との距離をいたずらに縮める行為。それに、痛みによって今の私の一撃に対処できるだけの集中力などあるまい。

交差するまで残り僅かとなったところで、ファルコに異変が起きた。ガクッと俯いたと思えば髪の色がフュンフの翡翠一色へと変化。ふと脳裏に過る、先の戦闘で討ったゲルトの姿。完全に融合騎に支配されていた時と同じ。ファルコが勢いよく顔を上げた。『融合騎として、ロードを護るわっ』聞こえてきたのはフュンフの決意の思念通話のみ。

「ファルコの意識を乗っ取ったか・・・！」

間合いに入った事で、「紫電一閃！！」とにかく"レヴァンティン"を振るう。ファルコの意識を乗っ取り身体を操るフュンフは、先手の私の一撃より早くその場から離脱。空を切った"レヴァンティン"を引き戻したと同時、「ぐっ・・・！？」背中にドンと衝撃。背後に回り込まれた。振り向きざまに"レヴァンティン"を振るうが、

すでにそこには誰も居なかった。

（今の・・・どうやら背中を蹴られたようだな・・・！）

それにしても、だ。爪で攻撃されていたらさすがの私も深手を負っていたはず。いつでも私を害せるという余裕からか？　だとすればすぐにでも後悔するぞ、フュンフ。

『フフ、ウフフ。私は融合騎プロトタイプ、最速の風の五番騎フュンフ！　ファルコの人間として能力の限界を融合騎としての私の能力で超えてこの身体を操れば、最速の騎士ファルコの誕生よ！』

離れたところで靭帯が断裂した右腕をダラリと下げながらも意気揚々と語るフュンフは、『速さを制した者こそ最強よっ！』改めて胸を張って告げた。

『フュンフの感覚で人の身体を操ったりなんかしたら、その人の身体が壊れる・・・！』

『・・・・そうね。でもここで殺されるよりはまだずっとマシよ。壊れた部分は治せばいいの・・・よっ！』

――ヴィント・バイセン――

蹴打を繰り出して衝撃波を放ったフュンフ。奴の速さ、静止状態ではいい的になってしまう。ゆえに動き続けての一撃離脱戦を続行。迫る衝撃波。術者のフュンフ。この2つから目は逸らしていない。

だからこそ衝撃波を回避できた。
しかし、フュンフの姿をいつの間にか見失ってしまっていた。辺りを見回そうとして、「ぐっ・・」右太ももに痛みが走った。見れば5つの斬撃痕があり、そこから流血していた。背後から笑い声。勢いをつけずにゆっくりと振り返る。左の爪に付着した私の血を舐めまわすフュンフが居た。

『そのまま肉を削り取ってあげるわ！』

獣のように身構えたフュンフの姿がかき消える。まるでリサの使う閃駆、そして法陣結界のようだ。リサも今のフュンフのように縦横無尽に跳び回り、多方向からの襲撃を行い続ける戦術をとる。フュンフとリサの違いは、リサは直線的な動きのみだが、フュンフは空に流れる風の如く掴みどころが無い。
そして最たる相違は、この何とも言えぬ強烈な殺意。あまりに濃厚。それゆえにこの周囲一帯は殺意に満ち、フュンフの動きを追えない。肌で感じる風の流れ。耳に届く風切り音。その2つが、私の命を繋ぎ止めている。"レヴァンティン"と鞘の二刀流で、フュンフの攻撃を苦労はしているが防ぐ。

『しつこいわね、あなた！』

苛立ちを見せるフュンフ。お前は今すぐにでも私を討ちたいのだろう。急がねばロードであるファルコの身体が保たない。

（見ろ、後悔しているだろう・・・？）

最初の一撃で私を討たなかった事を。「フッ」笑みを浮かべて見せる。姿をハッキリと見せたフュンフの表情が面白いほどに怒りで歪む。

『この・・・！　カートリッジロード！！』

右腕以外の武装が全てカートリッジを数発ロードしていく。ファルコの魔力が跳ね上がる。

――ギガント・トイフェル・ルフト――

血走る目をギラリと光らせ、『本当に頭にくるわ！』左腕を大きく3度払い、巨大な真空の刃を3発連続で放った。

『とっとと墜ちなさい！』

中遠距離の攻撃を布石とし、フュンフが本丸として直接攻撃を加えて来るようだ。様々な攻略法を思い描いた。が、真空の刃は軌道を変えて空へと上っていく。直感が働く。すぐさまその場から全力で離れるために空を翔ける。

その直後、私の直感が正しかった事を知る。3つの真空の刃は上空で破裂し、小型の刃として無数に降り注いできた。そしてフュンフ。今までと同じように姿が目にも留まらない程の速度で、私の背後へ回り込んで来た。

――ツェアライセン・シュラーク――

――パンツァーシルト――

「む・・・！」『一発で粉砕！？』

フュンフの繰り出した、相手に対して自分が横向きになって蹴る技・踏み蹴りは、当然の如く魔力付加。私が咄嗟に展開した障壁は、全く役に立たなかった。蹴り一発で破壊された。障壁破壊効果を持っていたようだ。瞬時に"レヴァンテイン"を掲げ盾とした。衝突。しかしこれは衝撃が凄まじい。

（これは、抑え切れぬ。ダメだ・・・！）

成す術なく私は弾き飛ばされ、海中へと叩き落とされた。

『シグナム！！』

『っ・・・大丈夫だ、アギト』

すぐさま海面を目指して泳ぐ。その途中、随分と離れた地点で蒼い光が灯ったのが判った。オーディンは今もなおアンナと水中戦を続けているようだ。思念通話で何かしら言った方が良いのかもしれないが、それでは邪魔になるやもしれんと思い止まる。アギトも判っているらしく、オーディンに思念通話を繋げようとはしなかった。

『待って、シグナム。今出たら狙い撃ちにされる！』

『それは判っているが、そう長くは留まれんぞ、息が続かんからな』

海面に顔を出した瞬間こそが絶好の機会だ、フュンフは狙い撃ちしてくるだろう。まず回避は出来んだろうな。身動きがとり辛いからな水中は。障壁での防御は、障壁破壊の魔導を扱える事が判った以上は得策ではない。

息も続かぬ中で思案していると、アギトが『やってみたい事があるんだ。ゲルトの時と同じ方法を』と言う。ゲルトの時、か。融合を解除しての2対1に持っていく。しかし今、アギトの補助を失うのは痛い。

『あたしが離れたところで海面を動かすよ。たぶんきっとフュンフは反応するはず。その間に――』

『私が水中より脱出。フュンフを引きつけ、その間にお前も脱出する、か』

危険すぎる案だった。下手をすれば初手でアギトが撃破される。たとえ上手く行ったとしても、二手目の私の脱出。フュンフはかなりの広域型だ、アギトだけでなく私にもすぐに気付き、攻撃を加えて来る可能性が高い。

ならば防御に魔力を一点集中し、攻撃に晒されながらも共に脱出する方が良い。"レヴァンティン"に残りのカートリッジを装填。アギトに『このまま出るぞ』と告げる。アギトが息を飲むのが判るが、反論は受け付けん。痺れを切らしたフュンフがどういった手段を取ってくるか判らんからな。いざ。そう決意を固め、カートリッジを2発ロード。

――パンツァーガイスト――

全身を高濃度の魔力で包み込み、海面へと浮上。脱出する前に"レヴァンティン"を振り払い、衝撃で海面を大きく爆発させる。私として何の策も無く飛び出すような間抜けはしない。派手に水柱を上げ、目晦ましにする。フュンフが釣られて初撃を囮の水柱に放てば、私への攻撃確率が少しは減るだろう。が、もしそうでなかったら。その時は、攻撃の雨に晒されるだろうが・・・。

（迷ってはいられまい。すでに障壁を展開したしな）

水柱が盛大に上ってから消えるまでの間で海中より飛び出した。さあ、賭けの結果は・・・・・「うおおおらぁぁぁあああああッ！！」負けてしまった。一直線に向かってくるフュンフ――いや違うな。髪色がフュンフの一方的な翡翠から、融合バランスが整った濃い緑色に戻っている。

――ツェアライセン・シュラーク――

私を海中へと叩き落としたあの踏み蹴りだ。無理やりに身体を捻り直撃を避ける。普通なら勢いのまま海へと突撃するのだが、ファルコはまた空を蹴り急停止し「避けても無駄さ！」回し蹴りを繰り出してきた。体勢があまりに悪かった事もあり「づあ・・・！」直撃を受けてしまった。やはり障壁を一撃で破壊された。蹴り飛ばされている中、『これ以上、シグナムを傷つけさせない！』アギトが叫ぶ。

――ブレネン・クリューガー――

私の周囲に９つの火炎弾が発生、それらが一斉にファルコへと向かって行く。真っ正直に風の魔力弾で迎撃した。その一瞬の攻防が私の体勢を整える時間を与えてくれた。アギトに礼を言いながら、ダメージ確認。

（む、肋骨が何本か折られたな。違和感がある）

痛みはもちろんあるが、構っていられない。ファルコが疾走してくる。

――ブレネン・クリューガー――

――グラナーテン・ヴィント――

私とファルコの間で相殺し合う、２人の融合騎の魔導。そしてロードたる私とファルコはその中を直進し、互いの姿を見据える。

「はぁぁあああああッ！」

「おおおおおおおおおッ！」

互いに必殺の一撃を人体の急所に向け繰り出し続ける。直撃さえすれば致命傷を負う。しかし決まらない。当然だがな。火花が散る。一瞬の閃きに、ファルコが僅かに目を伏せた。その隙は好機。直撃するまでの時間が最短である刺突を放つ。捉えた。"レヴァンティン"の剣先が、奴の右肩を貫いた。

「づっ・・・！」

『ファルコ！？』

右腕はすでに使いものになっていないため、出来るなら左肩を潰したかったのだがな。まぁいい、欲張る事もない。出血が酷いため、すぐにでも止血や治療をしなければ、いずれ死に至るだろう。

「今さら右を殺したくらいで勝った気になるなよ！」

右肩を貫かれながらも左の貫き手を突き出して来るファルコ。鞘で防御したのだが、さすがに何度も防御に使っていたのだ、ついに粉砕されてしまった。だが最後まで私を護ってくれた。破片が飛び散り、ファルコの顔面――運悪く目を襲う。

私の顔にも散って来たが、奴とは違い、運良く目より下だった。運すらも味方してくれているこの状況。ここまで来て負けるわけにはいかん。鞘を砕いても勢いが止まらなかった奴の貫き手は私の右頬を浅く裂いた。肋骨、太もも、頬。それくらい持っていけばいい。だが、この命と信念・・・そして勝利だけは奪わせん。

「ファルコ！」

『フュンフ！』

鞘の残骸を手放して空いた左手を握り締め、ファルコの顔面に拳打を繰り出す。奴は首を逸らして避けようとしたが、完全に避けきら

れる前に軌道修正して頬に直撃させた。奴がよろけたところで"レヴァンティン"を肩から抜いて振りかぶり、間合い的に仕方なく柄頭の打撃を放つ。完全に捉えたと思ったのだが、奴はギリギリで身を引き躱し、大きく間合いを取った。

――シュトゥルム・シャルフリヒター・エヴォルツィオーン――

そして再び竜巻の蛇と化した。軌道は今まで以上に複雑。付加されている魔力も絶大。蛇は、真空の刃や衝撃波に魔力弾と言った様々な攻撃をバラ撒いて行く。あの出血とダメージでよくあれだけの魔導を発動し続けられるものだ。

「アギト。烈火刃を頼む。この一撃で、決着だ」

『うん、判った。猛れ、炎熱・・・・！』

――烈火刃――

ファルコの攻撃を全力で回避しつつ、奴を撃破するための一撃を用意する。"レヴァンティン"にではなく私の左腕に火炎の剣が生まれる。対オーディンの為の大火力斬撃・火龍一閃。空を縦横無尽に翔け回るファルコへ「来いッ、ファルコ！　これで終わりだッ！」そう言い放つ。向こうとて私との戦いを早めに切り上げたいだろう。でなければ失血死という結末になってしまう。

案の定、竜巻の蛇の軌道が私の真正面へと変更される。そして様々な攻撃がこちらに放たれる。真空の刃、衝撃波、魔力弾。それらを最小限の移動のみで回避。最悪掠る程度は良しとする。攻撃が途切

れたことで左腕を振りかぶり停止。回避の余裕を与えないために奴をギリギリまで引き付ける。

「『火龍・・・一閃！！』」

ファルコが回避不可能圏内に入ったのを確認し、斬撃ではなく砲撃としての火龍一閃を奴へと放つ。この瞬間、私とアギトは融合を解除。アギトには火龍一閃の放射維持を任せる。そして私は、おそらくこの一撃で決定打を与えるだろうが、念のためにもう1つの策を始動する。

ファルコは強大な竜巻の中。火龍一閃の威力が完全に奴に届くかどうかが正直怪しい。その憂いを無くすために、私は今なお放射されている火龍一閃の中を突き進む。視界に映る世界全てが紅蓮の炎。その世界の先、竜巻と火炎の境界線があった。

（威力は互角、か。ならば、この最後の一撃で決着だ！）

最後のカートリッジをロードし、"レヴァンティン"の刀身に火炎を纏わせる。出血し過ぎたせいなのか顔が真っ青なファルコが私に気付き、「おいおいおい！」左の籠手に魔力を付加。交差するまで残り僅かというところで互いの魔導が途切れた。火炎が散り、竜巻は失せた。青空の下、私とファルコは決着の為に交差する。

「「これで――」」

――紫電一閃――

――ヴォルフ・クラオエ――

「「――最後だ！」」

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒アギト†††

「はぁはぁはぁはぁ・・・・」

火龍一閃を撃ち終えた（というか維持できなくなった）あたしは、シグナムとファルコが決着の為の一撃を放ったのをしっかりと見た。シグナムの紫電一閃は完璧にファルコを捉えていて、ファルコの身体をバッサリ斬っていた。そしてファルコの貫き手は、シグナムの肩を裂いただけだった。

２人は武装を振るったままの体勢で止まっちゃってる。『シグナム・・・？』思念通話で呼び掛けてみる。すると『大丈夫だ。勝ったぞ、アギト』そう静かな声で返してくれた。『うん』あたしは頷き返してシグナムの元に飛ぶ。

「がはっ、くそ・・・炎熱砲の・・げほっ・・・中、飛んで来るって・・・ごほっごふっ、反則じゃね・・・？」

「ファルコ！」

ファルコの中から泣いてるフュンフが飛び出してきた。それを見てズキッて胸が痛んだ。シグナムは"レヴァンティン"の剣先をファルコに突きつけて、「本来ならここでトドメを刺すところだが、武装解除して投降するならよそう」って提案した。

「もちろんミナレットやエテメンアンキ、エグリゴリについて知っている限りの事を全て吐いてもらうが」

「げほっ、国と仲間を売れってか。ごふっ。はぁはぁ・・馬鹿言うなよ」

「もう喋らないでファルコ！　ただでさえダメージ過多で死にそうなのよっ！？」

「・・・・本当に俺には過ぎた相棒だよ、フュンフ」

フュンフがファルコの胸に飛び込んで悲鳴を上げて、ファルコはぎこちない動きで左腕を上げて、人差し指でフュンフの頬に触れて涙を拭った。痛い。心が痛い。苦しい。胸が苦しい。あたし、フュンフのこと嫌いだったのに。なのにフュンフが泣いてるところを見ているだけで、こんなにも辛いんだ・・・。

「俺は、仲間も、国も、裏切らない。・・投降？　それも・・御免、だな・・・。騎士の、誇りは、捨てたけどさ・・・イリュ・・ア人の・・・誇りだけは・・・・捨てない・・！　知って・・・・いるだろう！」

ファルコの膝がガクって折れて、「フュンフ・・・・また、会おうな」真っ逆さまに落下し始めた。そして海に落ちた瞬間、ファルコが大爆発。水飛沫があたし達のところにまで飛んできた。

「自爆、か。機密情報が他国に伝わらないための処置だな」

シグナムがボソッと呟いた。

「ファルコ・・・・。ええ、また会いましょう」

「フュンフ！」

涙を手の甲で拭い去ったフュンフの顔はもう泣き顔じゃなくて、いつものように凛としたものに戻ってた。

「ゼクス。良い事を教えてあげるわ。ここで私たちを討ったとしても、テウタ陛下とエテメンアンキ、そしてグレゴール総長閣下が居る以上、あなた達の勝ち目なんてないわ」

フュンフの手に真空の刃が握られた。刃先が向くのはフュンフの胸。

「あっ」咄嗟に手を伸ばす。するとフュンフは「馬鹿ね。そんな辛そうな顔をしないの」久しぶりに微笑みを見せてくれた。

「あとはお任せします。テウタ陛下」

それがフュンフの最期の言葉だった。深々と刃を突き刺して、ファルコと同じように海に落ちた。

Ｍｙｔｈ１９狂いたる災禍騎士団～Ｐｌｕｎｄｅｒｅｒ　ｏｒｄｅＮ～

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

「「オーディン！」」「オーディンさん！」「我が主！」

化け物みたいな体になっちまったアンナ。それがすげぇショックだった。助けるって約束したのに、誓ったのに・・・助けられなかった、守り切れなかった。そのアンナが発生させた水柱の包囲がオーディンを呑み込んで、海中に引きずり込んだ。

頭ん中がごちゃごちゃして訳わかんねぇのに、オーディンが危ねぇってのだけはハッキリしてて。だから「助けねぇと！」オーディンが沈んだ場所へ全力で翔ける。シャマルにザフィーラ、シュリエルもあたしに続く。けど・・・

「魔神はあの異形の女に任せ、我々にはお前たち残りの騎士の討伐が命じられている」

元人間だったキメラ達が集まった騎士団プリュンダラー・オルデンって奴らがあたしらに向かって来ていた。さっきアンナに殺されたアイツらと同じデケェ鳥に熊、新しく獅子？（翼があって尻尾が蛇。そんでもって獅子の頭の両隣りに狼と山羊の頭もある。って何でもありかよ！！）も。

つうかこんな時に「邪魔をすんなぁぁぁあああああッ！」"アイゼン"を大きく振りかぶる。後ろに居るシュリエルも「退けぇぇぇえ

えええッ！」そう叫びながら、血色の短剣ブルーティガー・ドルヒを数十発って掃射した。熊にはザフィーラの「うおおおおおおッ！！」鉄拳制裁。ソイツらは回避や魔法陣の障壁を展開して防御。あたしは回避した奴（甲冑を着た鳥）に向かって、

――シュワルベフリーゲン――

魔力を付加させた実体弾フリーゲンを打ち出す。フリーゲンをさらに回避した鳥へ向かって"アイゼン"の一撃、テートリヒ・シュラークを「おらぁぁぁぁあああああッ！」お見舞いしてやった。んで、ザフィーラは熊の障壁を粉砕して、熊の顔面に打ち込んだ。ありゃ頭蓋骨粉々じゃね？　よろけたところにシュリエルの多弾砲撃ナイトメア・ハウルが撃ち込まれた。直撃だ。

熊も力なく落ちてく。ザフィーラの一撃とシュリエルの血も涙もねぇ砲撃の直撃だし、当たり前だ。あたしの一撃は鳥の頭蓋を確実に粉砕した。まず死んでるはずだ。落ちて行ってんし。次は獅子を墜とす。そう意気込んだ時、『私は大丈夫だ。アンナは私に任せ、各騎はそれぞれの戦いに集中してくれ！』オーディンからの思念通話。

「これは驚いた。魔神は水中戦もこなすのか」

獅子が海の色んな所から上がる水柱を見てそう呻いた。あたしだってビックリだ。普通、どれだけの魔導が扱えたとしても水中戦が出来る人間なんていねぇ。

――ペンダルシュラーク――

「油断大敵よっ！」

オーディンの異常さに動きを止めてたあたし達の中で、シャマルが一番最初に戦闘再開。シャマルの攻撃が一斉に獅子へ襲いかかった。だけど「温いわっ」獅子はそう吼えて、避けもせずに真っ向からシャマルに突っ込んで行きやがった。シャマルのペンダルが次々と直撃していくけど、奴はものともせずに牙を剥きながら突進を続ける。

「シャマル！」

シュリエルがブルーティガー・ドルヒを獅子に向かって放ちながら「あれはまずい！」追いかける。あたしにだって解る。奴の突進はまず過ぎる。直感が、あれの直撃だけはダメだっつてる。

「ザフィーラ！」

「判っている。止めるぞ、ヴィータ！」

あたしとザフィーラもシャマルに突進する獅子の行く手を妨害するために立ちはだかる。"アイゼン"を振りかぶる。ザフィーラも構え直す。そんでソイツの後ろを飛ぶシュリエルは拳に黒い魔力を付加。シュリエルとの挟撃。

「せぇぇぇぇいッ！」「はっ・・・・！」

突っ込んで来た獅子に向かって"アイゼン"を振り下ろす。ザフィーラも拳打を繰り出す。完全に捉えた。

「んだっ！？」「これは・・・！」

見えない障壁に完全に弾き返された。けど、そのおかげで獅子の突進が僅かに鈍った。

「ならばこれでどうだ・・・！」

――シュヴァルツェ・ヴィルクング――

追いついたシュリエルが獅子に向かって拳打を繰り出した。シュリエルの拳打シュヴァルツェ・ヴィルクングは、打撃力強化と色んな効果を破壊する能力がある。あたしとザフィーラの何の効果も無いただの打撃とは違って、アレなら間違いなく攻撃が通るはずだ。獅子も見ただけで判ったのか身体を捻って避けた。でも片方を避けただけで、もう片方の拳打が腹に入って、奴は思いっきり体を折った。決まった。そう思って「よっしゃ」軽く拳を握ったら、ザフィーラが「待て。様子がおかしい」って言った。

獅子の兜が上に向かって開いた。人面（若ぇ男の面だ）が露わになって「実に軽い拳だ」って笑顔を見せた。おいおい嘘だろ。シュリエルのヴィルクングの直撃で潰されないってどんだけ強力な障壁だよ。

「今すぐ離れろシュリエル！」

焦りを見せたザフィーラが獅子へと突っ込んでく。シュリエルもそう言われる前にソイツから離れようとしてたけど、その前に「逃さ

ん！」左腕に噛みつかれてミナレットの島へ高速で落ちて行く。あたしは「シャマルはオーディンの様子を見てろ！」シャマルにそう言ってからシュリエルを追いかける。正直シャマルはどんくさい。そんでもってあたしら守護騎士ん中で一番とろい。一番重要なんが、コイツらと真っ向から戦えるだけの戦闘力が、シャマルには無ぇって事だ。

「ウルリケ団長からの命令を新たに受諾。隊長格による敵騎士各個撃破。ん、了解。・・・さぁ行くよ、グラオベン・オルデンの騎士！」

ＶＳ―。―。―。―。―。―。―。―。
狂いたる災禍騎士団プリュンダラー・オルデン
。―。―。―。―。―。―。―。―ＶＳ

「テメェ・・・！」

あたしの前に立つ塞がんのは、真黒な甲冑を着た二足歩行のデカイ黒猫。武装はあたしの"アイゼン"と同じ鉄槌だ。つってもアイゼン"より一回りも二回りもデケェけどな。見ればザフィーラの方にもまた新しい熊（体格的にゃいい勝負だ）が立ち塞がってやがる。シュリエルと獅子の姿は見失っちまった。たぶん島に落ちた。まずいな、ぜってぇ別の騎士団が居るはずだ。いくら何でもシュリエル１人で相手に出来るわけがねぇ。

「テメェ、じゃないやい。僕はカッツェ隊のＩ。判った？　この哀

れぺったん娘」

「ぺ、ぺったんこだぁ？　おい。あたしの何に対してそう言ったのか言ってみやがれ。つってもどんな返答でもテメェのその面を原型が無くなるくらいでぶん殴るけどな」

胸はデカけりゃ良いってもんじゃねぇんだよコラ。あんなんただのぜい肉だ。騎士にそんなモンは要らねぇんだ。シグナムとかシャマルとかシュリエルとか、デカい胸っつう余計なモン付けてる所為で戦い難そうじゃん。

あたしくらいの方がちょうど良いんだよコンチクショウッ！・・・・ホントはあたしだってもうちょっと欲しかったっつうのっ！

イラついてるところに、轟音を立てながらミナレットが動いた。砲門が、シュトゥラじゃねぇ方へ向く。

『カリブルヌス、発射！』

あたしらん中で唯一対処できるオーディンは海の中だ。だから砲撃カリブルヌスを見送るしかねぇ。今度はどこの国の街に破壊と死を撒き散らすつもりだよ。キッとクソ猫を睨みつけっけど、「やーいやーい、哀れぺったん娘～♪」クソ猫は自分の胸に肉球の両手を置いて「ぺったんぺったん♪胸ぺったん♫」とか歌い始めやがった。

「ブチノメシテヤル」

「ヴィータちゃんっ、ザフィーラ！」

「お前は来んなっ！　目を付けられたらお前ツブされんぞ！　てかあたしの邪魔すんな！　このクソ猫はあたしがぶち殺す！」

シャマルに怒鳴る。その間、あたしはクソ猫から目を逸らしちゃいなかった。だってぇのに「そういうお前もだぞっ・・！」ソイツはいつの間にか距離を縮めて来てた。振り上げられてる鉄槌が、あたしに向かって振り下ろされる。

――フェアーテ――

高速移動の魔導フェアーテを発動して、そのシャレになんねぇ一撃を全力回避。そんで間髪入れずに隙だらけのソイツの顔面に向かって"アイゼン"の一撃を振り抜いた。躱す事なんざまず無理なタイミングだったんだ。だってぇのにソイツは猫らしいしなやかな動きで避けやがった。

ソイツはあたしの背後を取って「次は外さないぞっ」槌の方じゃなくて石突きの突きを繰り出してきた。振り向く暇も無くあたしは最大の防御力を持ってる障壁パンツァーヒンダネスを展開。本来の形は全身を覆う多方面体なんだけど、今回は一点集中の盾形にした（結構難しいんだぜ、コレ）。

「あたしだって今度は外さねぇッ！」

刺突の軌道からちょっとズレた後に一回転。遠心力で威力増強したテートリヒ・シュラークをお見舞いしてやる。

「おっと、残念♪」

ま、これも避けられたんだけどさ。でも「アイゼン！」"アイゼン"のカートリッジをロード。ハンマーフォルムから強襲用形態ラケーテンフォルムへ変形させる。ラケーテンは、爆発的な攻撃力と加速力を得る事が出来っけど、逆に魔導の補助機能や射撃や範囲攻撃が出来なくなる。ま、チマチマするよか一撃必殺の直接打撃で決める方があたしに合ってるって思うから気になんねぇんだよな。

「ラケーテン・・・！」

クソ猫の攻撃を避け続けながらもう一発ロードしてブースター点火。一気にクソ猫へ最接近。突然の加速に驚いたみてぇで、アイツは防御か回避、どっちをとるのか迷ったのか動きを鈍らせた。バーカ。こういう場合、直感でもいいから一瞬で答えを出さなきゃ負けるんだっつうの。

「ハンマァァーーーーーーッッ！！」

「・・・っ！？」

クソ猫の脳天めがけて振り抜いた。でもコイツはギリギリで首を反らして避けやがった。空振って隙だらけ。とか思ってんだろどうぜ。けどそれは大間違いだ。見てたろ？　ラケーテンの一撃は、たとえ避けられたとしても二撃目をすぐに繰り出せるんだっつうの。ブースターの加速を利用してその場で高速回転。だから「甘ぇぇっ！」無理して避けた事で体勢が整ってねぇクソ猫の脇腹にかましてやった。それで終わった。いくら改造された体でも脇腹を抉られりゃま

ともに戦闘を続けられるわけがねぇ。クソ猫が信じられないって面を浮かべながら海に落ちた。

『各騎！　ミナレットの近く、島に降り立っている場合はすぐに避難してくれ！』

クソ猫の最期を見届けてると、オーディンからの一方的な思念通話が来た。あたしは空。ザフィーラとシャマルも空。シグナムも空。けどシュリエルは、その問題の島だ。まぁオーディンの思念通話が届いてるはずだ。「んあ？　なんだ、空間が揺れてる？」ピリピリと肌で感じる。

――押し流せ、汝の封水（コード　ヒュドリエル）――

その直後、馬鹿デケェ津波が発生して、ミナレットの島を襲った。「おいおい、マジかよ」何度も津波に襲われた島は見るも無残ってやつで、ミナレット以外は綺麗サッパリ押し流されてた。

†††Ｓｉｄｅヴィーター⇒シュリエル†††

私の左腕に噛み付く獅子に、「おのれ、放せ！」と拳打を何度も打ち込む。しかしどれだけ堅い障壁なのか、私の拳打のどれもが決定打とならず、獅子に通らない。「プリュンダラー・オルデン副団長の意地に懸けて、貴様を潰す」と、獅子の額に在る人面が笑みを見せる。

島へと落下する中、血色の短剣ブルーティガー・ドルヒを我らの周囲に展開、一斉射出して獅子に着弾させていく。もちろん私自身に

も被害が出るかもしれないため、魔力を全身に纏う防御態勢パンツァーガイストを発動している。

（やはり通じていないようだな・・・！）

着弾する直前で、不可視の障壁で完璧に防がれているのが見えた。結局、獅子から逃れる事が出来ずに島へと墜落、地面に叩き付けられた事で「がはっ」息が一瞬止まる。何度も咽る。が、いつまでもこのまま――押し倒されている体勢でいるわけもいかない。唯一の弱点らしき人面の前にハウリングスフィア一基を設置、「響け！」零距離でのナイトメアを撃ち込む。

「むごぉ・・・！」

獅子は呻き声を漏らし、ようやく右腕に噛み付いていた牙を僅かだが放した。この好機を見逃せはしない。「コード・・・ゼルエル」オーディンの魔導・肉体強化の魔導を発動。"闇の書"の頁が1枚半減ってしまったが、この獅子から回収すればいい。

「いつまで私の上に乗っているっ！」

獅子の腹に膝蹴りを打ち、宙に浮かせる。すぐさま後転跳びをし、立ち上がってすぐに「ナイトメア！」獅子の腹に砲撃。間髪入れずに「封縛！」獅子を捕獲輪で捕える。どれだけ強固な障壁を持っていようと、"闇の書"たる私のこの術には抗えまい。傍に浮遊している"闇の書"が開く

「蒐集開始（ザムルング）」

≪Ｓａｍｍｌｕｎｇ≫

大気中の魔力素を体内に取り込み蓄積、そして放出するための重要な器官である魔力核が獅子の体より抜き出される。"闇の書"より光が放たれ、獅子の白い核より魔力を蒐集していく。無理やり魔力を引き出されることで、「うごぉぉおおおお・・・！」獅子が苦痛に満ちた呻き声を漏らす。

蒐集を終えた"闇の書"を手元に呼び戻す。ふむ、どれどれ・・・・２３頁が埋まったか。これで５８０頁を超えたな。完成まで１００頁を切ったが、オーディンから完成させないよう厳命されているため、「この辺りを維持するしかないのか」嘆息する。

完成すれば、私は融合騎としての機能を扱えるようになる。そうすればオーディンと融合でき、彼の力になれるのだが・・・。しかし私の個人戦力の高さを自他ともに認めているため、完成しても融合騎としての役目はないようだ・・・・はぁ。

『カリブルヌス、発射！』

ミナレットより砲撃が放たれた。カリブルヌスが向かう先は・・・ネウストリア、だったか。聖王家のアウストラシアにちょっかいを掛け続けるという・・・。ネウストリアはイリュリアとは関係ない国のはず。何故わざわざ敵対するようなマネをするのだ・・・？

「うぐ・・これが、闇の書の蒐集か。なんと恐ろしい・・・」

「お前の見た目の方が十分恐ろしいと思うのだがな、私は」

「・・・・確かに魔導が扱えん。・・・・殺せ。魔導の使えない今、俺を殺す事など容易いだろう」

よろよろと立ち上った獅子が憎々しげにそう言い捨てる。そうだな、魔力を回復されてまた戦場で遭うのは勘弁してほしい。ゆえに「せめてもの慈悲だ。苦しまずに逝かせてやろう」魔力球ハウリングスフィアを４つ設置する。獅子の額に在る人面に目をやる。口の端が上に上がっている。あれは、笑っている・・・？

（・・・しまった・・・！）

周囲の警戒を怠ってしまっていた。百何十という騎士やキメラに包囲されているのが判った。いや、魔力反応どころか気配までも完全に殺されていて、まったくと言っていいほど気が付かなかった。その事から判る相手の実力。一騎討ちならば問題はないが・・・物量で押し切られるのは辛い。

デアボリック・エミッションで一掃できればいいが、一発では殲滅できないだろう。私の困惑を感じ取ったのか「包囲に気が付いたか」と獅子が笑い声を上げた。それを合図としかのように「突撃（アングリフ）せよ！」と、女性の声による号令が下されたのが聞こえ、直後に「オオオオオオオオッ！」雄叫びと共に周囲の木々の間という間から騎士やキメラが現れた。

「っく、闇に・・・染まれ！」

――デアボリック・エミッション――

先手はもちろん私が頂く。私を中心として爆ぜるデアボリック・エミッション。魔力障壁の発生阻害の効果もあるこの魔導・・・防ぎきれるものなら「防いでみろ！」呑まれる騎士・キメラに言い放つ。一発目の効果が切れる。私の周囲に倒れ伏す何十人という騎士、そしてキメラ。その中には獅子も含まれており、獅子・山羊・蛇の3つの頭は泡を吹いている。

（それでもまだまだ居るが・・・）

デアボリック・エミッションの効果範囲に入っていなかった者たちをぐるりと見回す。ふと、ある女騎士が目に留まる。私たちと同じ鎧ではなく衣服型の騎士甲冑を身に纏い、円錐型の大きな槍を携えている。そして一番目が行くのは、その女騎士が乗る戦車だ。キメラらしい2頭の馬に牽引されている。

「闇の書の管制プログラム・・・思っていた以上に凶悪ね」

その女騎士は重量級の槍を軽々と振り回して私に穂先を向け、そう言い捨てた。身構え、「何者だ？」と問う。佇まいからして、おそらく騎士団長級で間違いないだろう。

「イリュリア騎士団・狂いたる災禍騎士団（ブリュンダラー・オルデン）団長・ウルリケ・デュッセルドルフ・フォン・ブラッディア」

「（やはりか）・・・信念の騎士団（グラオベン・オルデン）・支天の翼シュリエルリート」

互いに名乗りを上げた。ウルリケが槍の穂先を空へ向けると、周囲に居る騎士やキメラが一斉に身構えた。突撃命令の一歩手前か。シグナム達は・・・手一杯か。ならば私単独で出来るところまで戦い抜いてやろう。

『各騎！　ミナレットの近く、島に降り立っている場合はすぐに避難してくれ！』

意気込んだとき、オーディンからの思念通話が届いた。かなり慌てているよう。おそらくカリブルヌスが放たれた事による焦りだろう。今、島に降り立っているのは私だけだ。ゆえに『各騎、問題ありません！』そう応じた。オーディンが何をしようとしているのかは判らない。ただ、ミナレットを破壊する魔導を放つのだと判断する。

「なに・・・？　大気が・・震えてる・・・？」

ウルリケが辺りを見回し始め、キメラ達は一斉にある方角を見、身構えた。そして、「津波ですっ、ウルリケ団長！」ある騎士が悲鳴じみた声を上げた。

――押し流せ（コード）、汝の封水（ヒュドリエル）――

正に津波がこの島を襲いかからんと迫ってきていた。連中に意識が津波に向いている今、

――スレイプニール――

背に展開されている黒翼をはばたかせ、空へと上がる。それに気づいたウルリケが「撃墜しろ！」と命令を下したが「もう遅い！」ブルーティガー・ドルヒを２０基展開、一斉射出し、空に上がろうとしていた騎士やキメラを撃墜する。

そのまま一気に高度を上げ、オーディンが起こしたのであろう５０ｍ程の大津波より逃れる。最後に、地上に居るウルリケらに目をやると・・・ウルリケと目が合った気がした。その直後、連中は津波に呑まれた。そして津波は何度も島を襲い・・・ミナレット以外を押し流し、島を廃墟へと変貌させた。

「凄まじいな・・・。すべてを押し流すほどの津波を作り出すとは・・・」

「「シュリエル！」」

「お前たち。・・・どうやら互いに敵を攻略できたようだな」

ヴィータ、シャマル、ザフィーラが私の元へと集まった。ヴィータは「もちろんだ」と歯を見せ笑い、シャマルは「私は役立たずだったけど」と落ち込み、ザフィーラは無言で頷くのみだ。

「オーディンの魔導でほとんどの戦力を削れたが・・・」

かなり離れた地点で空戦を繰り広げているアギトと融合しているシグナム、フュンフと融合しているファルコへと目をやる。騎士の決闘の邪魔はできんな。ならばオーディンの助力へと向かうのが賢明

だろう。未だに海面が至る所から爆発による水柱が立て続けに起こしている。

（いやしかし海中に居るオーディンとアンナの戦いに介入できるのだろうか・・・？）

みなの意見を聞くために振り返ったとき、目を疑わざるを得ない光景が視界に入った。何かを言う前に、何かを考える前に、体が動くままにシャマルとヴィータを左右に突き飛ばす。

「ここで気づくなんて運が良い！」

「ウルリケ・・・！」

私たちの背後より迫って来ていたのはウルリケだった。翼の生えた巨大な猫2匹に牽引された（馬はどうなったのだろうか）戦車に乗ったウルリケが、血に塗れた騎士甲冑と槍を携え、空を疾駆していた。突撃してきた戦車を横に移動する事で回避。しかしウルリケの槍の穂先が太ももを掠め、浅く裂かれてしまった。

「テメェがウルリケか！」

――シュワルベフリーゲン――

ヴィータが物質弾に魔力を纏わせたフリーゲンを8基打ち放った。戦車後方からの急襲だ。そこに私も戦車の軌道を予測しハウリングスフィアを1基展開。

「響けっ」

――ナイトメアハウル――

ハウリングスフィアと私自身からの多弾砲撃、ナイトメアハウルを戦車の横っ腹と背後目掛けて放つ。時機の良い直撃確実の攻撃だ。ウルリケ。どのような手を以って対処をする？

「イリュリア騎士団・高位騎士第三位である私を――」

――パンツァー・ブルート――

「容易く落とせると思わない事ね！」

戦車より真っ赤な液体が大量に流れ落ち、フリーゲンとナイトメアハウルからウルリケを守るように膜となり完全に防ぎ切った。膜は再び液体となり、ウルリケの周囲で渦を巻く。それにしてもこの臭い・・・「血液・・・！？」シャマルが口を手で覆い隠す。ウルリケの槍や騎士甲冑に付着している血は、あの者のものではなく返り血のようだ。おそらくあのとき島に居た騎士やキメラを・・・・。プリュンダラー・オルデン――略奪者の騎士団、か。

（血を略奪するのは団長のウルリケではないか・・・）

よく見れば戦車の車輪の下には血の道が出来ている。液体として流動し、しかし個体としての硬度もあるようだ。血を操る。そのよう

な事が魔導で出来るものなのだろうか。

「まとめてかかって来なさい、グラオベン・オルデンの騎士。遥かに古き時代の騎士・鮮血姫シリア・ブラッディアの末裔、ウルリケ・デュッセルドルフ・フォン・ブラッディア・・・・参る」

戦車を牽引する2匹の猫が鳴き、速度を上げて突撃してくる。ウルリケに追随する血液の塊はまるで蛇のよう。そして「鮮血姫の御技、とくとご覧あれ！」と槍を薙ぎ払うように払った。

――グラオザーム・ケッツァーーーー

血の蛇が蠢き、至る所から触手を何十本と私たちへ向け伸ばしてきた。ヴィータは「気色悪っ！　こっち来んな！」嫌悪感を抱いたようで迎撃しようとはせず、回避を行う。ザフィーラはシャマルを庇うために渦巻く障壁パンツァーシュトルーデルを展開したが、血の触手は障壁に衝突して間もなく回り込むようにザフィーラとシャマルへ襲い掛かる。私は自分に向かってくるモノとザフィーラ達に向かっている触手に向け、ブルーティガー・ドルヒを射出する。しかし触手を完全に絶つ事が出来ず、

「うぐ・・・！」「痛っ・・・・！」

「ザフィーラ！」「シャマル！」

ザフィーラの右太腿と左前腕、シャマルの左肩を貫いた。

†††Ｓｉｄｅシュリエル⇒シャマル†††

私とザフィーラを貫く血液の触手。誰の、何のモノともしれない血液が私の体を侵食する。ゾワッと背筋を這い上がる嫌悪感に悲鳴を上げそうになる。でも私は必死に歯を食いしばって悲鳴を上げるのを耐えた。でも・・・

（なにこれ・・・！？）

私の肩を貫いている触手が脈動してる。その都度、何かを失っているような感覚が私を襲う。

「・・や・・・私の血液と魔力を・・吸収して・・いやぁあああああっ！」

堪えきれずに悲鳴を上げた。「シャマル！」ヴィータちゃんが"グラーフアイゼン"で私の大切なものを奪っていこうとしている触手を断ち切ってくれた。「大丈夫か、シャマル！」心配してくれるヴィータちゃんになんとか頷いて応えて、傷口を見る。小さく開いた穴。そこから私の血が流れる。私の心も、体も、命も、すべてオーディンさんが進む行く手の為のもの。それが、あんな得体のしれないモノに穢された。怒りで今度は頭に血が上る。

「ウルリケぇぇーーーーっ！」

――ナイトメアハウル――

「来なさい、シュリエルリート！」

――フェアドレンゲン・カヴァレリスト――

シュリエルの多弾砲撃と、それに構わず突撃を敢行するウルリケの戦車の突進が、真正面からぶつかり合う。ヴィータちゃんに「私とザフィーラは大丈夫」って微笑みかけて、シュリエルの元に送り出す。そして私は「ザフィーラ！」自力で触手をどうにかしたザフィーラと一緒に治癒の魔導・静かなる癒しを掛ける。

「ラケーテン・・・ハンマァァァーーーーっっ！！」

「わざわざ突っ込んでくるなんて自殺行為だと知りなさい！」

治癒の間にも繰り広げられるシュリエルとヴィータ、ウルリケの戦闘。ウルリケはヴィータちゃんの一撃を槍で受け止めて捌き、待機していた血の触手で反撃。シュリエルはブルーティガードルヒで触手を集中砲火して粉砕、その隙にヴィータちゃんがもう一度突撃を仕掛ける。だけど今度は血の膜で防御されて、しかも「うわっ？なんだよこれっ、放せ！」膜が蠢いてヴィータちゃんを取り込もうとし始めた。

「クラールヴィント！」

ペンダルを4本と伸ばしてヴィータちゃんをしっかり捕まえて、「えーいっ！」引っ張り出そうとするんだけど、力が足りない。その合間にも「守護騎士ヴォルケンリッターの血、どのような味かしら

♪」ウルリケは舌なめずりをして、新たな触手を私に向かって勢いよく伸ばしてきた。
そんな私を庇ってくれたのは「させん！」シュリエルで、効果破壊のシュヴァルツェ・ヴィルクングを迫る触手へと何発を打ち入れ、砕き散らせた。「シャマル、今の内だ」ザフィーラが手伝ってくれたおかげで、「すまねぇシャマル、ザフィーラ」ヴィータちゃんを無事救出・・・と言えるのかしら。

「くっそ、血生臭ぇ・・・おえ、さすがに気持ち悪い」

血塗れになったヴィータちゃんが濃すぎる血の臭いに何度もえずく。それを見たウルリケは「血は生物の命そのもの。その命の香りを気持ち悪いとは」って不満そうに言い捨てた。血が蛇がウルリケの元に戻って、グルグルと周囲を旋回し始める。
ヴィータちゃんが「ぺっぺっ」って口に入った血を吐き捨てて、でもウルリケは「勿体ない」と血の蛇に両手を入れて、血を掬って・・・ゴクゴク飲んだ。う〝っ。血をあんなに飲むなんて・・・吐き気がする・・・。

「吸血鬼、というものをご存じ？」

口端から垂れる血を手の甲で拭ったウルリケがそう訊いてきた。吸血鬼。血を吸う怪物だったと記憶しているけど。ヴィータちゃんが「お前がそうだってぇのかよ・・・？」と訊きかえす。

「私の祖先、鮮血姫シリアはね、対象の血を飲む事で相手の魔力を吸収するという魔導を有していたようなの。私はその魔導を扱える

能力を色濃く継いでしまったようなのよね。人間以外――あらゆる生物の血液であれば操る事が出来る」

血液から魔力を吸収するなんて・・・。

「つまり周囲に血を流す者が居れば、それだけ私が有利とな――」

――鋼の軛――

島から突き出してきた白い拘束条――ザフィーラの鋼の軛。死角である足元からの奇襲だった事もあって、鋼の軛がウルリケの乗る戦車と、牽引していた猫キメラ２匹を貫いた。半壊した戦車から落ちて顔面蒼白になるウルリケと目が合っちゃった。フイッと目を逸らす。と、「トドメを刺すべきだ」ザフィーラがそう言い、

――牙獣走破――

「うおおおおおおッ！」

魔力を脚に付加して、蹴打を打つ体勢で急降下。落下途中でもウルリケは「グラオザーム・ケッツァー！」追随して落下してる血の塊から触手を伸ばして、ザフィーラを迎撃・・・出来なかった。シュリエルのドルヒとヴィータちゃんのフリーゲンが先に着弾して相殺したから。

ウルリケは迎撃するために槍を突き出したけど、半身ずらして紙一重で避けたザフィーラの蹴打がズドンってすごい音をさせてウルリケのお腹に直撃。ものすごい勢いで地面に落下、叩き付けられたウ

ルリケを私たちは見下ろすのだけど・・・・。

「おいおい、立ち上ったぞアイツ・・・・！」

鋼の軛で拘束されていた２匹の猫キメラを潰し終えたヴィータちゃんが戦慄する。槍を支えにしてるけど、それでもしっかり立ち上っているウルリケは、血の蛇に顔を突っ込んで・・・あれって飲んでるのよね、やっぱり・・・うぷ。

――ハウリングスフィア――

「今が好機だ、ヴィータ！」

「応よ！　アイゼンっ、ギガントフォルム！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．　Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ≫

シュリエルの周囲に３つの魔力球が展開されて、ヴィータちゃんは"グラーフアイゼン"を純粋破壊特化の形態ギガントフォルムへ。そして前面にヴィータちゃんの頭くらいに大きな物質弾を作り出して魔力を付加。

「おぉぉらぁぁあああああああッ！」

――コメートフリーゲン――

「響け！」

――ナイトメアハウル――

２人の攻撃が一直線にウルリケの背後へ向かって・・・着弾、大爆発。ウルリケを守る障壁も血の膜も無かったから、２人の攻撃は確実に直撃したわ。地上に居るザフィーラからも『見事の急襲だ、ヴィータ、シュリエル』って２人へお褒めの思念通話が。

粉塵が少しずつ晴れていく中、ザフィーラが粉塵の中に鋼の軛をいくつも突き出させていった。完全に晴れると、軛に貫かれて拘束されたウルリケの姿が見えた。私とヴィータちゃんとシュリエルも島に降り立って、宙に仰向けに拘束されているウルリケを見上げる。

「しかし血液のアレは、なおも蠢いているな。油断しない方がいい」

「だな。コイツが気を失っても動いてんしな」

少し離れたところでプルプル震えてる血の塊。き、気持ち悪い・・・。そして話はウルリケの処遇に。「やっぱ完全に討った方がいいんじゃね？」というヴィータちゃん。ザフィーラも「この騎士の能力は危うい。討つなら今だ」ってヴィータちゃんに賛成。

シュリエルだって「そうだな。高位騎士第三位と言っていた。後々、厄介な障害になるはずだ」って。３人が私を見る。私だってウルリケの危険性は理解できている。だから「異議なし」３人の意見に賛成。

「じゃあさ、コイツの魔導資質――魔力を蒐集しとかね？」

「残念だがそれは出来ない。闇の書完成まで１００頁を切った。オーディンからは１００頁を切った場合、蒐集しないように厳命されている。蒐集するのであれば、４００頁を切らないように頁を消費しなければ・・・」

そうなのだ。オーディンさんはどうしてか"闇の書"を完成させたくないようで。まぁ私たちはオーディンさんの言う通りにするだけで、もちろん文句なんてないのだけど。ヴィータちゃんが「そっか。んじゃ、殺るか」ってアッサリ話を切り上げて、傍に突き立っていた槍を破壊した"グラーフアイゼン"を、ウルリケに突きつけた。そして私たちも一斉に魔導を――というところで、

「残念。闇の書の蒐集とやらを一度体験してみたかったけど」

――フェッセルン・ブレッヒェン――

プルプル震えていた血の塊は渦状になって高速回転、軛を一瞬で粉砕した。自由になったウルリケが地面に降り立った。私は「クラールヴィント！」相手を拘束し、なおかつ魔力発露を阻害する効果を有する捕縛の魔導――戒めの鎖でウルリケを拘束する。これでウルリケは血を操る魔導を扱えないはず。だから一斉に攻勢に出ようとした。でも・・・・

――トーデスゼンゼ――

渦から元の蛇状に戻っていた血の塊が私たち人数分に分裂して、大鎌となって私たちに襲いかかってきた。あまりに高速の斬撃だった

せいで、お腹を横一文字に斬られた。「げほっ！」吐血。受けたダメージと、魔力と血を奪われた事もあって両膝をついて・・・倒れこんだ。揺らぐ視界の中、ヴィータちゃんとシュリエルも腕や足から血を流しながらも身構えているのが見えた。

†††Ｓｉｄｅシャマル⇒ザフィーラ†††

ウルリケの操った血液の大鎌は、シャマルの腹を裂き、ヴィータの右腕を裂き、シュリエルの右太ももを裂いた。我もまた腹を裂かれたが、守護騎士最高の防御力を有する肉体を持つ我は、シャマルほどの重傷にはならなかった。

ゆえに「しっかりしろシャマル！　治癒の魔導を急いで自分に掛けろ！」一番重傷のシャマルを庇いつつ、追撃してきた血の大鎌を蹴り上げ、軌道を逸らす。砕けた大鎌は血の滴となってウルリケの周囲に集まり、また一つの塊となった。

「ヴィータ、シュリエル！」

「問題ねぇっ！」「問題ない」

「ほう。斬り落とすつもりで放ったのだけど、裂いただけか・・・って、あああああ！！」

突如ウルリケは絶叫し、ヴィータに破壊された槍へと駆け寄っていく。我らに隙だらけな背後を見せるなど愚の骨頂。

「わ、私の・・・アビコールが・・・ｏｒｚ」

槍の銘らしき言葉を漏らすウルリケへと接近を試みる。

――ブルーティガー・ドルヒ――

まずはシュリエルのドルヒが急襲。ウルリケは咄嗟に反応し、砕けた"アビコール"で迎撃したのだが・・・「ぎゃぁぁあああっ！」今度こそ粉々に砕け散った様を見て悲鳴を上げた。ふむ。あの者は相当おのれの武装に思い入れがあるようだ。ならば・・・。方向転換をし、放置されている戦車へと駆け寄る。その間にヴィータが「ギガント・・・ハンマァァーーーッ！」"グラーフアイゼン"を振りかぶり、ウルリケへ最接近した。それを迎撃するのが血液の蛇。ヴィータは攻撃へ入る前に咄嗟に障壁を張り、蛇の突進を防いだ。しかしその衝撃は凄まじく、小柄な矮躯のヴィータは弾き飛ばされる。

「よくも私のアビコールをぉぉ・・・・食い殺せ！」

ウルリケが号令を下す。血液の蛇は大口を開け、ヴィータを丸呑みしようと襲い掛かった。ここで我は、損壊している戦車を持ち上げ「うおおおおおおおおおッ！！」ヴィータと蛇の間に放り投げた。蛇はヴィータではなく戦車を丸呑みし、粉砕した。視界の端に映るウルリケはその光景に呆然としていた。そして・・・・

「ぎょえええええええええッ！　今度はエウリノームがぁぁぁあああああああッ！」

血を吐きそうなほどの絶叫。見ていて気の毒だが、情けは無用だ。

――鋼の軛――

ウルリケの足元より拘束条を突き出させ、「うぐっ？」あの者を再び貫き拘束する。間髪入れずに「刃を以って、血に染めよ！」シュリエルがドルヒを一斉射出し、全弾ウルリケに着弾させた。そしてヴィーータは再びギガントフォルムの"グラーフアイゼン"を振りかぶり、「今度こそぶっ潰す！」ウルリケへ向け振り抜いた。衝突の轟音と共にウルリケは血を撒き散らしながら吹き飛び、地面に落下、ぐったりとして動かなくなった。

†††Ｓｉｄｅザフィーラ⇒ヴィーータ†††

「ヴィーータちゃん、ザフィーラ、シュリエル。ありがとう。今度はあなた達の怪我を治すわ」

あたしらの背中に掛けられた声。振り向くと、ちょっと顔色が悪ぃけど、それでも立ち上ってるシャマルが。「シャマル！」急いでシャマルん所にまで駆け寄る。シュリエルは「無茶はするな、シャマル」って言うけど、シャマルは首を横に振って「治癒と補助担当だもの」って微笑んだ。そんであたしらに静かなる癒しを掛けてくれた。やっと右腕から流れる血が止まった。

「・・・アビコールも・・・エウリノームも・・・」

地獄の底から這い上がってくるような、狂う一歩手前みてぇな声。

バッと振り返ると、ウルリケが頭から鼻から口から血を流しながらも立ち上っていた。おいおい。手応えあったんだぜ、さっきのあたしの一撃。あれをまともに食らって立つってどんだけ打たれ強いんだ。

――ナイトメア――

シュリエルが何も言わずに砲撃を放った。直撃する寸前、また血の塊が膜になって砲撃を防いだ。すぐにハウリングスフィアを3つ設置、多弾砲撃ナイトメアハウルを撃ち込んだ。でも、ウルリケは血の膜をデケェ剣にして、砲撃を薙ぎ払って対処しやがった。

「砲撃ではもう突破できないか・・・『デアボリック・エミッション』を仕掛ける。お前たち、避難してくれ『」

シュリエルからの思念通話。あたしは「それでダメならあたしのギガントシュラークな」ってシュリエルを見る。すると「その時は頼む」ってあたしの頭に手を置いた。むぅ、ガキ扱いしやがって。あたしの頭を撫でていいのはオーディンだけなんだよ。だから首を振って振り払う。

「行ってくれ・・・」

シュリエルがウルリケに向かって歩き出す。あたしらはシュリエルに任せて空に上がる。その途中、「誰が逃がすか！」アイツの元にまた集まった血の塊から鞭のようにしなる超長い剣が伸びてきた。シャマルが「この・・・！」あたしらを守るように渦巻く風の盾・

風の護盾を展開、初撃は防げたけど、２撃目で寸断された。その間にもっと高度を上げることができた。その直後、

――デアボリック・エミッション――

シュリエルの攻撃が発動した。あれを食らったらさすがにただじゃ済まねぇはずだ。少しの間効果が続いて、そんでからデアボリック・エミッションが消えた。シュリエルの姿が見えた・・・・なんでか倒れてる状態で。

「「「シュリエル！！」」」

そんでウルリケなんだけど。・・・あれ？　おい、アイツって髪の色・・・白だったよな。なのに今は灰色だ。騎士服もどことなく変わってる。間違いねぇ、今のアイツは「融合状態かよ！」最悪過ぎんだろ、これ。とりあえず「シャマル！　シュリエルを頼む！」シャマルにシュリエルを避難させるように言う。

シャマルに無茶させっけど、でも「ええっ！」強く頷いて・・・"クラールヴィント"の魔力糸が輪を作った。旅の鏡っつう魔導だ。空間を繋ぐ鏡で、離れた場所に在るモノを取り寄せる事が出来る。そいつを使ってシュリエルを取り寄せる。そんでから、あたしの最強の一撃をお見舞いしてやるよ、ウルリケ！

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒シュリエル†††

「ぅ・・・ぐ・・・は・・っ・・・はぁはぁはぁ・・・」

気が付けば、私は倒れ伏していた。このような状況になる前の事を思い出す。そう・・・ウルリケは血の膜でデアボリック・エミッションの一撃を防御しきっていた。第三位の高位騎士と自称していたが、第三位でこの強さだというのか・・？
それでもしばらく続けていれば防御を貫けると思った。しかしその前に「アレは・・・！」血の膜の中に、アギトやアイリ、フュンフのような小さな少女が転移してきたのが判った。ただでさえ厄介な実力者だというのに・・・「まだ上に行くのか・・・！」僅かに怯んでしまう。だが、私はオーディンの信念に連なる騎士・支天の翼シュリエルリート。臆するな。

「おかえり、フィーア」

ウルリケに四番騎（フィーア）と呼ばれた融合騎は「ただいま、ロード・ウルリケ」と応じ、２人は「融合」と一言告げた。そしてそれは一瞬。フィーアと融合したウルリケが血の膜の中で、私へと人差し指を向けた。

「（思い出した・・・）純粋魔力の、砲撃・・・を受けたのだ・・・」

手をつき体を起こそうとするが、思った以上にダメージが大きいようだ。上半身を上げる事すら難しい。

「まずは1人・・・管制プログラム、という事は・・・あなたを破壊すれば残りの守護騎士も消えるのよね」

ウルリケは血の膜を塊に戻し二振りの大鎌へと変え、両手に携えた。しかしその血の大鎌が私に振り下ろされる事はない。何故なら『シュリエルっ、今すぐ転移させれるからっ』シャマルからの思念通話。私の元へ歩み寄って来ていたウルリケが、私の背後に現れた旅の鏡を見て「何よソレっ！」と駆け出す。鏡よりザフィーラの腕が伸び、私の腕を取った。そして鏡に引っ張り込まれ、場所は上空へ。

「ヴィータちゃん！」

「応よッ！　食らいやがれぇぇぇーーーーッッ！！」

――ギガントシュラーク――

とてつもなく巨大化した"グラーフアイゼン"が、ウルリケへと振り下ろされた。

Ｍｙｔｈ２０生命の源なる海の中で・・・～Ｄｒａｃｈｅｎ　ｄｅｓ　ＯｚｅａｎＥ～

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

「ごぼごぼごぼ・・・・！」

『マイスター！』

アンナが引き起こした海水を利用した攻撃によって海中に引き込まれてしまっていた。荒れ狂い流れる水流に必死に抗い、心配してくれたアイリに『問題ない、アイリ。心配するな』と応じ、酸素を求めて海上に上がろうとする。が、それを妨害するのは変わり果てた姿となってしまっているアンナだ。今のアンナは体は、上半身は彼女自身のもの。

（裸だが、バストトップだけは申し訳程度に鱗で隠れていて・・・助かる）

しかし下半身は人の足ではなく３ｍ近い竜の尾で、透き通るような白さの鱗で覆われている。背には天使と悪魔の翼がそれぞれ２枚ずつの計４枚――と言う姿だ。竜の尾を魚の尾びれのように使って海中を高速移動し、私の頭上へと移動してきたアンナ。海面へ上がるのは無理だと判断し、私とシェフィの２人で生み出した水流系の術式を発動。

『（これで溺死・圧死は免れるな）アンナ！　自我があるなら、返事をしてくれ！』

水中でも外界のように自由に動ける魔力コーティングを施し、アンナに念話を繋げる。しかし返答は、

――ヤコブの荒流――

海中で起こる強烈な水流。成す術なくその荒い水流に飲まれ、視界がグルグル回る。その中でも『アンナ！』呼びかけるが、アンナからは「ПИЮ⊆Ω＜Д」という、普通の人間では聞き取れない、理解できない言語を言うだけだ。しかし私は理解できる。知り合いにこの言語を扱っている者が居るからな。

『（ПИЮ⊆Ω＜Д――斃さないと、か・・・。私の事だろうな、やはり。とりあえず・・・）私は大丈夫だ。アンナは私に任せ、各騎はそれぞれの戦いに集中してくれ！』

私を助けようとするかもしれないシグナム達に、助け無用の思念通話を入れておく。海中に入れば、間違いなく何をする事も出来ずにアンナに潰されるだろう。正直私でも勝てるかどうか判らない。何せアンナのあの体は・・・・

『いま助けるからな、アンナ！』

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。

其は大海統べりし海竜の血族アンナ
。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

荒れ狂った水流も収まり、体勢を整えた時にはさらに海底へと押し込まれてしまった。アンナはおそらく無理やり魔族化されてしまっているはずだ。自然で発現するものじゃないからだ。そんな事が出来るのは、魔族を知り、神秘を扱える奴――それは"堕天使エグリゴリ"だけだ。

居る。今、間違いなくイリュリアに"エグリゴリ"の誰かが居る。今すぐ飛んで行きたい。だが今はその思いを理性で封じ込める。アンナを救い、エリーゼ達の元へ連れ帰る。まずはそれからだ。だから・・・・

――静穏（ポスィドトゥーヌス）なる碧色の瀑雷――

「少々痛いと思うが辛抱してくれ！」

未完成な術式である下級の水流系術式を発動。アンナの周辺の水圧を操作して機雷を作り出し、包囲する。この時代にはまだ存在しない非殺傷性を追加付与。これで間違ってやり過ぎる事はない。魔力ダメージと、魔族に通用するよう神秘を今まで以上に上乗せした一撃だ。

魔力ダメージで昏倒させ、ゆっくりと魔族化を解く。これがセオリーだろう、今のところは「なっ！」機雷を炸裂させる。アンナが機雷の爆発によって発生した泡で見えなくなるが・・・・まぁ当然「これくらいで昏倒しないよな・・・！」アンナは無傷の姿で現れた。

「斃さないと、斃さないと・・・」

魔界の言語を発するアンナ。虚ろな灰色の瞳は銀色の光を放ち、両腕を大きく広げた。身構える。「っ・・・？」私とアンナの周囲半径３００ｍ圏内の水流が自然のものではなく、操作されたように不自然な流れとなったのに気付いた。さっきと同じ水流操作か？　アンナは広げていた腕を私へと向けた。来る。そう思った瞬間に、「あなたを斃さないと！」アンナがそう叫び・・・

――ゼルバベルの叱責――

「水流造形の術式か・・・！」

数えるのも億劫なほどに生み出された水人形。それらが一斉に襲かかってきた。私も水流を操作し、海中を高速移動。向かってくる水人形を起動した"エヴェストルム"を振るって真っ二つにするが、『マイスター、すぐに再生しちゃうよ！』アイリの言うとおり水人形の素材は海水だ。

海水真っ只中でどれだけ水人形を潰そうとすぐに再生され、また新しいのが生み出される。アンナ・ラインラント・ハーメルン。彼女のずっと遠い祖先の中に、魔界最下層の一国・海国シュゼルヴァケティアの一員がおそらく居たんだろう。

――激動する水霊（ヴァダーヒスモス）の歯牙――

――ギデオンの咆哮――

私は水流砲撃を放つ。砲撃はアンナと私の間に居る水人形を粉砕、巻き込みながら突き進み、アンナに着弾する寸前で彼女も水流砲撃を放って相殺した。そこからは砲撃の撃ち合いだ。アンナはただ砲撃を撃つだけだが、私は砲撃と水人形の両方に注意しなければならない。

やはり水中戦が出来るとは言え、向こうは水の魔族だ、どうしても差が生まれてしまう。しかも問題はアンナだけじゃない。海上――正確には島の上に在るミナレットから膨大な魔力が放たれたのを感知。

（カリブルヌスか・・・！）

海上に居ればどうとでも対処が出来るが、残念ながら今は海中、しかも戦闘中。そして海中にまで届くカリブルヌスの閃光。放たれてしまったな。ミナレットを潰すための魔道エーギルを使いたいが、海中に居ては発動できない。やはり早々にアンナを助けないといけないな。

『アイリに何か出来る事ない？　何でもやるよ！』

アイリが頼もしい事を言ってくれるが、今のアイリに出来る事はそうない。いや、氷結か。やってみるか。『アイリ、行くぞ』と術式補助を任せる。アイリからは嬉々とした『アイリはもう準備万端だよっ♪』という返事が。とりあえず吹雪関連は散らされる可能性があるな。個体としての氷雪術式が良いだろう。

――舞降（コード）るは、汝の麗雪（シャルギエル）――

手始めに氷の槍シャルギエルを7基展開、アンナへ向け射出する。アンナは悠々と高速で泳ぎ、余裕で回避。直線的ではどれだけ速度があっても避けられるな。

――瓦解せる喰飲（アルティスフォドス）の龍咆――

まずは布石だ。海水の龍を13頭と作り出し、一斉にアンナへと突撃させる。海龍は水人形を次々と食らっては吸収し、回避に入ったアンナを追い縋る。その間に、周囲の海水を弾丸状にした下級術式――拡散する穿滅の弾幕アールデンレウスを発動。海龍を操ってアンナを誘導しつつ水人形を殲滅し終える。今まで見た機動力、防御力、迎撃力――さらにその上方予測値を計算に入れ、アンナの回避場所を予測する。

「斃さないと、斃さないと・・・！」

――ギデオンの咆哮――

海龍の迎撃に移ったアンナ。高速遊泳しながら的確に海龍を砲撃で潰すその腕には舌を巻く。一度海龍のアンナ追撃を中断させ、アンナの移動をやめさせると同時に「行けッ！」水弾をまず11発を間隔を開け発射。水弾の接近に気付いたアンナは再度回避を開始し、それに合わせて第二波――8発を放つ。アンナが向かった地点に海龍を3頭突撃させる。水弾と海龍の挟撃だ――が、アンナは両方に手の平を翳す。

――ダビデの星盾――

すると水流が六芒星の形で力強く流れ、迫り来ていた海龍と水弾を粉砕した。なるほど。だったら動きを封じられている今のうちに全ての海龍と水弾を向かわせる。

――ゼルバベルの叱責――

また生み出される水人形、その数は数えるのが果てしなく面倒なほど。しかしもう私の魔道の前に水人形は役に立たない。私の背後に現れた水人形数体に"エヴェストルム"を叩き込み寸断、間髪入れずに『いくよっ！』アイリの冷気で氷結し、出来た破片を"エヴェストルム"で殴打してアンナの元へとかっ飛ばす。アンナは背に在る４枚の翼で身を包み・・・すべての攻撃が着弾する寸前で大きく広げた。

――ネヘミヤの剣――

「がはっ・・・・しまっ――ごぼごぼっ！？」

『マイスターっ！？』

剣状の水圧×１２０ほどが目にも留まらない圧倒的な速度で放たれ、それらは私の魔道――海龍と氷弾を粉砕し、私に直接ダメージを与えてきた。魔力コーティングが破かれ、この身を海中にさらし溺れかけてしまったが、すぐに魔力コーティングしなおす。とりあえず

『大丈夫マイスター！？』そう心配しまくるアイリに『大丈夫だよ』と答え、再び翼で自分を包んだアンナより高速離脱。

（物量攻撃で魔力コーティングを破壊されるとは・・・・今の攻撃は要注意だな）

――ネヘミヤの剣――

再度放たれてきた剣状の水圧。紙一重で回避し続ける中、ミナレットがまた魔力を充填し始めたのが判った。仕方ない。これで止める事が出来るか判らないが・・・・。

『各騎！　ミナレットの近く、島に降り立っている場合はすぐに避難してくれ！』

グラオベン・オルデンのみんなに念話で指示を出す。そう間もなく『各騎、問題ありませんっ！』シュリエルから返答が来た。即座に水流系中級術式を発動する。

――押し流せ（コード）、汝の封水（ヒュドリエル）――

ヒュドリエルは大津波を発生させる術式だ。この魔道で島の上に在るモノ全てを押し流してやる。ヒュドリエルの影響で海中が大きくうねり出す。島から結構離れているこの地点にも島の上に在った建造物の瓦礫や木々の破片が流れてきた。

私とアンナは共に水流操作でうねりに飲まれないよう姿勢制御。互いを見失わないように注意する。問題のミナレットはおそらく無事

だろう・・・が、「よしっ」魔力充填は防げたようだ。次弾発射までにアンナを助けないとな。その問題のアンナは尾と3枚の翼で水を掻き高速遊泳、あろう事か接近戦を挑んできた。いや、元より水の魔族だ。戦術レンジなど関係ないか。

――瓦解せる喰飲の龍咆（アルティスフォドス）――

迎撃のための海龍を15頭突撃させる。アンナは海と一体と化しているかのように一切無駄のない流れるような動きで回避、そのままの勢いで突っ込んで来る。"エヴェストルム"を二剣一対のツヴィリンゲン・シュベーアトフォルムへ変え、「あああああああああああッ！」叫び声を上げながら向かってくるアンナの迎撃態勢に入る。

間合いに入り、左の"エヴェストルム"を横薙ぎ一閃。対するアンナは右手で刃を鷲掴んで止めた。しかも握力のみで穂を粉砕した。アンナは「斃さないと！」またそう叫んで、左拳打を繰り出してきた。咄嗟にもう片方の"エヴェストルム"を掲げて盾にした――のが失敗だった。鷲掴んででさえ余裕で破壊できるんだ。拳打となれば・・・・

「ぁが・・・っ！」

やはり破壊された。その威力は止まらず頬を殴られた。場所が海中と言う事もあり、踏ん張りなど出来ずに海底に叩き付けられてしまった。幸いなのは魔力コーティングを突破されなかった事か。この深度でコーティングを破れる事があれば、水圧でグシャッと肉体が潰されてしまう。まぁ奥歯が折られてしまったが、歯の一本くら安

い代償だ。奥歯をペッと吐き捨てる。
アンナの追撃が来る。高速突撃。"エヴェストルム"を待機形態の指環に戻し、リカバリーさせつつ海底を蹴って全力離脱する。直後に海底を殴りつけたアンナ。とんでもない爆発が起きる。直撃していれば確実に殺されていた。発生した衝撃波で弾き飛ばされ、舞い上がる砂塵で視界を潰される。

『マイスターっ、海の上に出て！　このままじゃ死んじゃう！』

判ってはいるが、「斃さないと、いけないの！」アンナがそれを許してくれそうにない。砂塵より飛び出してきたアンナが携えているのは、彼女のデバイスである"アインホルン"だ。刺突に特化したレイピア型の武装。直接斬撃による決定打は受ける事はないと思う。しかしまぁ水圧の刃を刀身に付加すれば、レイピアであろうと斬撃は打てるだろう。

――激動（ヴァダーヒスモス）する水霊の歯牙――

水流砲撃を3本と放って迎撃。アンナは"アインホルン"を薙ぎ払って水圧の刃を生み出し、砲撃全弾を斬り消した。そして天使のごとき純白の翼2枚の先端だけをこちらへ向け、

――アルバア・ハ＝イマホットの滅弾――

弾丸のように羽根を扇状に放ってきた。海面に向かって飛びつつアンナから距離を取る。扇状に放たれてくると、距離を開ければ開けるほど羽根と羽根の間隔が大きくなって回避しやすい。回避してい

る最中、『あの人の周囲、一気に凍結させてもいいよね？』アイリから少しばかり怒りの含んだ念話が。
しかし『凍結、か・・・』水流系の射砲撃に拘るのはもうやめた方がいいのは確かか。魔族、しかも魔獣属・竜種・海竜系の血族たるアンナに、水流系の魔道の威力は半減される。下級術式ならばなおさらだ。だから必要以上のダメージを与えてしまう心配はないんだが・・・攻略する前にこちらが墜とされる可能性が高い。

『（仕方ない）・・・アイリ、アンナに突っ込む』

『・・・それってつまりアイリの案を・・・？』

『ああ、君の案を採用する。零距離でアンナを凍結させ捕縛、解凍と同時に元に戻す』

元より動きを止めるために戦っているんだ。中遠距離からチマチマ撃ち合ってジリ貧になるくらいなら、ハイリスク・ハイリターンで一気に決めてやろうじゃないか。アイリは『了解ですっ。氷結魔導、補助するね♪』嬉々として応じてくれた。

――アルバア・ハ＝イマホットの滅刃――

悪魔のごとき漆黒の翼（早い話がコウモリっぽい羽）２枚を高速で払って水圧の斬撃を飛ばしてきた。紙一重で避けつつ接近を続行。アンナは私の行動に疑念を抱いたようで、距離を取り始めた。水中における機動力では向こうの方が圧倒的に上だ。ならば今度はこちらが君の動きを封じよう。

――静穏なる碧色の瀑雷（ポスィドトゥーヌス）――

アンナの逃げ道の先に機雷を８０と発生させる。上、下、左、右、どちらへ方向転換する？　それとも構わず突撃するか？　まぁ結局は「爆散粛清（ジャッジメント）！」どの選択も意味はないけどな。機雷を全発炸裂させ、アンナを衝撃波で覆い包む。視界潰しと衝撃波による昏倒を狙った。

体勢を整えられる前に接近する。魔力探査を行い、水泡の幕の中に居るアンナの居場所を探す。「見つけたぞ！」アンナの居る地点へ高速移動。水泡の幕の中にアンナの影を見つけた。アイリの力を借りて、両手の平に冷気を閉じ込めた魔力球を発生させる。

『マイスターっ！』

「行くぞッ！」

――凍牙霜雪　氷帝　双冷掌――

全てを凍結させる冷気の魔力球を双手の平に乗せてアンナに繰り出した。本来の双冷掌であれば冷気を両手に直接纏うんだが、海中でそれをやるとヒットさせる前に私の周囲を凍結してしまうため、魔力球に冷気を閉じ込めるという手を取った。

そんな魔力球は確実にアンナの胴体を捉えた。魔力球が破裂し冷気が溢れ出す。一瞬にして凍結されたのは・・・「やられたっ、デコイだ！」アンナそっくりの水人形。冷気は私たちの周囲を凍結、私は魔力コーティングで凍らないが・・・。にしても「一体どこへ・

・・？」周囲を警戒。

「どうしてこんな事に・・・？」

耳元でそう囁かれた。明らかに敵意ではなく悲嘆的な声色。「アン――うぁっ？」振り返ろうとしたんだが、後ろ髪を思いっきり引っ張られ無理やり仰がされた。次にアンナはそのまま私の後ろ髪を引っ張り、私は再び海底へと連れ戻されてしまった。

髪を引っ張られる痛みに耐えながらも「アンナ！」呼びかけるが、アンナは返事をしない。そして「ぁぐ・・・っ！」海底に叩き付けられた。それだけで終わらず、あろう事かアンナは私を海底に擦り付けながら移動開始。

ガリガリと顔を砂で削られる。やる事が結構キツイな、君。そして私を頭から岩礁に叩き付けた。額から血が流れる。頭蓋骨陥没にならずに済んだ。アンナがもう一度私を岩礁に叩き付けようとする。さすがにそれは遠慮したい。だから魔道を、というところで・・・

・

『この・・・マイスターを放せ！』

――フリーレン・ドルヒ――

アイリが放つ氷の短剣がアンナの白翼の1枚を貫いた。引き千切れた何十枚という羽根が海中に漂う。私の後ろ髪を手放すアンナは一気に私から距離を取り、「なんで、こんな事に・・・！」悲しげな表情を見せてきた。自我を取り戻しているのか、それとも初めからアンナとしての意識があったのか・・・。

「意識があるなら止まってくれっ、アンナッ！」

戦闘行為を中止するよう呼びかける。だが「・・・らない・・・」ボソッとそう呟き、"アインホルン"を振るって突撃してきた。回避行動をとる。アンナの意識がハッキリとしているなら、説得で何とかしたい。"アインホルン"の先端が岩礁に当たり、根こそぎ吹っ飛ばした。とんでもない威力の刺突だな。

「アンナ！」

「・・・止ま・・・ない・・・」

――アルバア・ハ＝イマホットの滅刃――

――アルバア・ハ＝イマホットの滅弾――

黒翼を払って水圧の斬撃を、白翼の先端から羽根の弾丸を放ってきた。弾幕で私の動きを鈍らせ、水圧の斬撃で決めにかかるという手だな。ならば私は真っ向からの相殺といこう。周囲の水流を操作、砲撃ヴァダーヒスモスを１２本と放つ。

相殺しきれなかった斬撃が掠めていく。その間に海面へと向かう。せめて深度５０ｍまで上がらないと。コーティングが破れても死なないためには、コーティング破壊イコール一発死を免れる事の出来る海面近くまで上がらなければ。

――ギデオンの咆哮――

真下から砲撃を放ちながら追泳してきたアンナ。様子を窺うために僅かに視線を真下に向け、気づく。

「アンナ・・・！」

海中でもハッキリと判るほどに彼女は泣いて、涙を流していた。アンナはクシャっと顔をゆがめ「止まらないの！　オーディンさん！」悲鳴を上げた。

（止まらない？　魔族としての"力"がアンナの意識を邪魔をしているのか・・・？）

「私の体なのに・・・止まってくれないのっ！」

遊泳速度が一気に跳ね上がり、アンナの姿を見失ってしまった。

「水中戦で敵の姿を見失うのって・・・最下層魔界で試合ったヤツ以来だな・・・」

あの時は、ボロクソに負けたよな・・・。あぁそうだ、負けたんだよ、アンナ。君と同じ姿をした魔族に。

「アルベルトゥス・フォカロルの血族、そうなんだよな君は・・・！」

「っ・・・！」

私の目の前に突如として現れたアンナの目が大きく見開らかれた。君の体に流れている血、その持ち主である魔族の名はアルベルトゥス・フォカロル一族。私が戦ったのはエレウシス・アルベルトゥス・フォカロル。アンナ、君の血族の主の名だ。するとアンナは「やっぱり・・・あなたの正体は・・・」そう信じられないが信じるしかないといった複雑そうな表情を見せた――のも束の間。

「ダメっ！」

――ミリアムの聖歌――

「ＬＡＡＡ

と殺気を漲らせ、「落ち着けアイリ」と宥めるが、聴きそうにない。アンナは「もう嫌、こんな事、したくない・・・！」首をフルフルと横に振る。先の次元世界での契約を思い出す。フェイトたち"機動六課"が"霊長の審判者ユースティティア"の先代・終極テルミナスに精神操作され、私と先代３ｒｄ・テスタメントのシャルと否応なく戦わされたあの事を。

（あの時も、みんなを泣かせてしまったよな・・・）

「お願いです、オーディンさん・・・私を・・・」

空いている左手を握り拳にし、アンナは振りかぶった。こっちも動く左手で右拳打を受け止める。そしてアイリが「マイスターから離れてよねっ！」飛び出して、アンナの顔面にダブルパンチ。見事に鼻っ面に直撃して、アンナの鼻から血が流れ出る。

それでもアイリの攻撃は止まない。頬に額と殴る蹴る。さすがにアンナ――と言うより魔族の意思は離脱を考えたようだ。私がアンナの左拳を放すと「オーディン・・ふぁん・・・」彼女はその空いた左手で鼻を押さえつつ離れた。

「ぐ・・・っ」

"アインホルン"が抜かれた痛みに苦悶を漏らす。しかしレイピア型と言う細身の剣で助かった。幅のある刀身で貫かれればそれだけ回復が遅れるからな。治癒の魔道ラファエルで傷口を治す。アイリが「マイスター、大丈夫なの！？」そう心配してくれ、「大丈夫だ」と微笑みかける。そしてアンナは"アインホルン"の細身の刀身に

付着した私の血を、海中に溶けて消える涙を溢れさせす目で見、

「お願い・・・私を・・・殺して、下さい・・・・！」

そう苦しそうに呻いた。馬鹿を言うな、誰が殺すものか。君をエリーゼ達の待つアムルへ絶対に連れ帰る。それは誓いだ。だから「生きる事を諦めるなッ」そう怒鳴りつける。私とて自分を殺してやりたいという苛立ちを、"堕天使エグリゴリ"を助けるというシェフィとの約束を果たす、その思いで捻じ伏せて・・・今も生きている。約束を果たすその時まで、私は無様でも何でもいい、生き抜いてやる。

「諦めたくなってしまっても仕方がないじゃないですか！」

「何故そんな事を言う！　諦める必要がどこに在る！」

――ヤコブの荒流――

私とアンナの間に巨大な渦が発生した。海底の砂を巻き上げ、沈殿していた大木やら瓦礫をも巻き込んだシャレにならない大渦だ。しかも「まずい、引っ張り込まれる・・・！」渦に巻き込まれそうになるのを必死に耐え、距離を取ろうとしたとき、「ダメ！」アンナの悲鳴。

アンナは渦に向かって水人形十数体を吶喊させ、あろう事か瓦礫にタックル、私へ向け突き飛ばした。渦の水流を利用した事で瓦礫は高速で飛来してくる。直撃すると圧死だな。こちらも水流操作を行い瓦礫の速度を鈍らせたあと、水圧の砲弾を打ち出す拳打ルゴナラ

ークで迎撃。瓦礫を跳ね返す。その瓦礫は渦に巻き込まれている他の瓦礫や木々にぶつかり、拡散させた。

「私は人間じゃなかったんですよっ！　見てください、この化け物の体を！」

泣き笑いの表情を浮かべ、未だに渦に残っている瓦礫のいくつかを飛ばして来た。だが、どれも私に向かう事のない明後日の方へと飛んで行ってしまいそうだ。

「もうエリー達のところへ帰れない！　私の体なのに自由に出来なくて！　オーディンさんを苦しめる！」

――ギデオンの咆哮――

アンナが瓦礫の数だけ砲撃を放ち、なんとそれで瓦礫の軌道を変更させ、私を包囲させた。回避か防御か迎撃か。取れる選択は・・・防御だけだった。アンナは瓦礫をさらに水圧の刃でバラバラにし、回避できないほどの瓦礫数で包囲網を敷いてきた。もちろん迎撃するする事も出来ない事はないが、迎撃中にアンナからの直接攻撃が来ると対処しきれない。だから球体上の魔力結界を発生させ、襲い掛かってきた瓦礫をすべて防ぎ切った。

「オーディンさん！」『マイスターー！』

瓦礫は防いだ。しかし「いつの間に・・・！？」魔力結界内にアンナが入り込んでいた。移動速度がさらに上がっている。額に向けら

れて繰り出された"アインホルン"の刺突を首を反らしてギリギリで避ける。刀身を鷲掴み、「アイリ！」アイリに目で合図を送る。アイリは「うんっ」そう頷いて"アインホルン"の刀身にしがみ付いた。

――竜氷旋――

アイリの全身から解き放たれた冷気が"アインホルン"を完全凍結。すぐさま粉砕する。少し痛いが「我慢しろアンナ！」アンナの鳩尾に拳打を撃ち込む。「ごふっ」体をくの字に折ったアンナの背中に生えている４枚の翼の根元を鷲掴む。結界内の水流を操作し、４枚の翼を刈り取る。これでアンナは高速遊泳は出来なくなった。

「ダメ、ダメダメ・・・ダメ・・・！」

「っく・・・！」「きゃう！」

拘束を後回しにしたのがちょっとミスったな。アンナに集束する龍のごとき水流によって弾き飛ばされた。結界の内壁にぶつかり、止まる事が出来た。よし、このまま結界を維持しよう。この直径１００ｍ内が最後の戦いのステージだ。

「さあアンナ。次は、その尾だ。大丈夫。元の姿に戻すから」

右手を差し伸べて笑いかけると、「オー・・ディン・・さん・・・」アンナが魔族の"力"に抗うかのようにぎこちなく右手を伸ばした。しかし「まだ止める事が出来ませんっ！」そう叫んで砲撃を撃った

が狙いが甘い。僅かに横移動するだけで回避できる。そのまま結界に着弾するが、貫通せずに掻き消えた。威力すらも落ちている。後に管理局が定めるランクで言えばＳ－辺りだ。もう決着は見えている。

「無理はしないでいい。私が止める。アイリ！」

「うんっ！」

再びアイリと融合を果たす。別に必要はないが、離れているとアイリが狙い撃ちされる可能性もある。私にとってはもう恐れのないアンナの攻撃だが、アイリにはまだ強すぎる威力だ。受けては危険。だからこその融合だ。結界内の水流を操作、アンナの四肢を拘束するために渦を発生させる。まぁなんの布石もなく発生時が丸見えな拘束に引っかかるほど、今のアンナはノロくなかった。

――ネヘミヤの剣――

「・・・助けて・・くださいい・・・私、死にたくないです！」

「ああ、助けるさ！」

そしてアンナは私を全周囲を包囲するかのように水圧の剣を何十基と展開し・・・「止まって！」叫んだ。剣の射出がピタッと止まったと思えばすぐに放たれてきた。リカバリーを終えた"エヴェストルム"を起動、二槍一対のツヴィリンゲン・ランツェフォルムにし、高速旋回させて剣を粉砕していく。

「・・・もう少しの辛抱だ、アンナ！」

私の言葉に「・・・はい！」そう強く頷いたアンナ。そしてアンナは槍投げ選手のような体勢を取る――と、「水圧の槍の投擲です！」これから放つ攻撃が何かを教えてくれた。案の定、アンナの手に圧縮された水圧の長槍が生まれた。

"エヴェストルム"の片方を剣形態にし、柄頭から魔力の縄を作り出し連結、鞭の形態パイチェ・フォルムにする。槍形態の"エヴェストルム"を手に、魔力縄の先端に繋がれた剣形態"エヴェストルム"をブンブン振り回す。

――オトニエルの海槍――

「もう勝手に私の体を使わないで！」

投擲された水圧の槍に向けて振り回していた"エヴェストルム"を繰り出す。先端同士が衝突。水圧の槍を潰し、そのままアンナの元へと突き進む。アンナの体が彼女の意思に反し横移動を行う。それでいいんだ、それが狙いだ。手にする"エヴェストルム"をクイッと動かす。それが魔力縄に伝わり、先端の"エヴェストルム"の軌道が変化。

「あ・・・っ！」

アンナを魔力縄で簀巻き状態にする。"エヴェストルム"をグッと引っ張り、アンナをこちらへ引き寄せる。魔力炉（システム）を限界ギリギリに

まで稼働させ、アンナの魔族化を抑える術式をスタンバイ。

「少しキツイが・・・」

「耐えてみせますっ！」

強い意志の光を宿すアンナの瞳を見詰め、彼女の胸元――心臓付近に触れる。アンナは最初は呆然。しかし男である私が、少女である自分の胸に触れられたと理解したところで顔がボンッと真っ赤になった。辛さ、悲しさ、悔しさで泣いていたアンナだったが、今は恥ずかしさ――羞恥で泣きそうだった。とりあえず「すまない。血液が集中する心臓でないとダメなんだ」頭を下げて謝る。

「ひぅ、い、いえ、大丈夫です、お願いしま――あん　・・くすぐった・・・」

「・・・爪を立てるぞ、痛むだろうが・・・必ず傷は治すから」

「お、お願いします！」

右手の五本の指の爪を立て、アンナの肌に傷をつけ血を流させる。魔力を放出。流れる血を介してアンナの体内に魔力を流していく。ビクンと体を跳ねさすアンナが「んぁ・・・」息を漏らす。

――ＮＹＤ（ニード）――

アースガルド王族にのみ扱える原初の魔道ルーンを発動。ニードは

束縛・抑制のルーンだ。これで魔族の血を抑えつける。今のアンナは、"エグリゴリ"の誰かの神秘によって、魔族の血を無理やり覚醒された状態だ。
先祖返り。ラインラント・ハーメルン家の先祖の誰かがアルベルトゥス・フォカロル一族と関係を持ったんだろう。魔族と人間が交配した場合、その子供の外見や中身は十中八九人間になる。現実の人間と幻想の魔族。どちらの存在が強いかは考えるまでもないんだが・・・。アンナは特に血が濃かったんだろう。

「ぅあ・・・ぅぐ・・・！」

――ネヘミヤの剣――

水圧の剣が１０基と展開される。だが心配はない。何故なら『アイリが迎撃するからね！』頼もしい相棒が居るんだから。

――フリーレン・ドルヒ――

倍の２０基の氷の短剣が作り出され、射出される直前の剣へ向かって行き、相殺していく。威力がほとんどない。それにアンナの下半身にも変化が起き始める。鱗が徐々に消えて行っている。というかバストトップを覆う鱗もだ。慌てて「我が手に携えしは確かなる幻想」と詠唱、術式や能力などを保管している"英知の書庫アルヴィト"から、

「変化せしめし乱音（ディゾルディネ・カンビャメント）」

ある術式を発動させた。それは対象を強制変身させる術式だ。外見や服装とか。アンナに着せたのは何てことはない普通のロングワンピース。これでアンナが裸体を晒すなんて悲しい事故は起きない。

――ＥＯＬＨ（エオローー）――

次に保護・防御策構築・庇護のルーンを発動。魔族の血を封印レベルにまで防御し、２度とこのような事が起きないようにアンナの人間としての血を保護。

「・・メ・・・ダメ・・・来ないで・・・来ないでっ！　私は・・魔族なんかじゃ・・・ないっ！」

"エヴェストルム"の魔力縄の拘束を引き千切らんばかりに暴れるアンナ。アンナの背後に回り、「ああ、そうだっ、君は人間だ！」強く抱きしめる。

「っ！・・・あぅ・・ぐ・・オーディ・・ンさん・・・！」

「もう少しだ！　がんばれ、アンナ！」

――ＩＳ（イズ）――

最後に、望まれない活動力の制御と封じ込めのルーンを仕掛ける。ルーンによる三重封印結界。これを打ち破る事が出来る奴はそうはいない。今のアンナなら特にだ。アンナがブルッと大きく体を振るわし、「ぅあああああああああ！」魔族の血の、最後の抵抗とも

言える魔力放出を行った。

――女神（コード・イドゥン）の救済――

しかし残念。その魔力、頂こう。消費した魔力を一気に回復させる。我ながら最高の術式を生み出したものだ。アンナの魔力放出も収まり、彼女は項垂れた。よし、完全に人間に戻る前に魔力コーティングをしておかないとな。せっかく助け出せたのに水圧による圧死と溺死で死なせてしまっては意味がない。

『・・・・マイスター・・・？』

『・・・・ああ、もう大丈夫だ。アンナは元通りだ』

私が抱きしめているアンナの姿形は、私やみんながよく知る人間そのもの。スカートの裾から出ているのも人の両足だし、背中にも断たれた翼の根元も存在していない。

「さてと、次はミナレットの破壊だな」

エーギルを発動するために必要な魔力も確保できた。海上に上がり、アギト達と合流、そのままミナレットを破壊し、一度エリーゼの元へ帰らないといけないな。アンナを預けてから、イリュリア王都へ攻め込む。そして・・・

「待っていろ、エグリゴリ・・・！」

"堕天使エグリゴリ"を全機救い出す。それで、私の最後の契約は終わりだ。ベルカで過ごした時間を思い出しながら海上へ出る。久しぶりと錯覚してしまうほどの空。一番に目に飛び込んできたのは、ヴィータのギガントシュラーク、そしてそれを粉砕する女騎士の姿だった。

Ｍｙｔｈ２１神よりの告知は絶え、そして天地の礎は起きた～Ｅ・ＴＥＭＥＮ・ＡＮ・ＫＩ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

アンナっていう、マイスター達の家族を無事に助けることが出来た。だから海上へ脱出したんだよね。・・・でも、マイスターの中から見ることの出来る光景はあまりよくないもので。ヴィータっていう赤い騎士が途轍もなく大きな鉄槌を振り下ろした先、プリュンダラー・オルデンの騎士団長ウルリケが居た。
外見から見て今のウルリケは、四番騎――魔導や身体の強化のみに特化したフィーアお姉ちゃんと融合してるね。フィーアお姉ちゃんは、アイリたち他の融合騎とは違って、単独戦闘機能が付いてない。障壁を展開することは出来るけど、攻撃の魔導は一切搭載してない・・・んだけどね。

（その分、融合状態のロードをあり得ないくらいに強くさせるけどね・・・・！）

そのフィーアお姉ちゃんがロードとして登録してるウルリケは、ヴィータの鉄槌の攻撃に対してただ茫然と立ち尽くしてるだけ。両手には血で構築した大鎌が握られていて・・・だけど何もしないまま鉄槌の攻撃を受けた。
普通なら地面を砕いた音とかが轟くはずなんだけどね、でも違った。砕けたのは地面じゃなくて・・・「ヴィータ！」マイスターが叫んだ。砕けたのは、ヴィータの武装――確か名前は“グラーフアイゼ

ン"――の大きな頭だった。ウルリケに衝突した部分から真っ赤な血の刃が無数に生えてきて、"グラーファイゼン"を砕いた。

「あの戦い方・・・まさか、鮮血姫シリア・ブラッディアの末裔か・・・！？　アイリ、あの女騎士の名前、知っているか・・・！？」

『う、うん。アレはウルリケ・デュッセルドルフ・フォン・ブラッディア。えっと、イリュリア騎士団の第三位に位置付けされてる騎士・・だよ』

「それだけ判れば十分だ・・・！　すまない、アンナ。少し乱暴になるが・・・」

マイスターは抱きかかえてたアンナを蒼い光で出来た球体上の膜の中に入れて、シュトゥラ方面の海岸に飛ばした。そして「行くぞ、アイリ！」ウルリケ達が戦っているミナレットの島へとマイスターは飛ぶ。その間にも血の大鎌は人の手のような形に変化して、ウルリケを手の平の上に乗せた。ウルリケを乗せた手が空に向かって高速で伸びる。向かう先はヴィータ達の居る空。

「フライハイト家、ヴォルクステッド家に続いてブラッディア家とは・・・！　シュテンルン・リッターの末裔、他にも居ないだろうな・・・！？」

マイスターの中に居るから解るんだよね。口調は怒りのようだけど、込められた思いは懐かしさ。フライハイト家って確か聖王家の番人だったよね。"シュテルン・リッター"て言うのは知らないけど。

マイスターは「今はとにかくウルリケを潰す！　我が手に携えしは確かなる幻想」って詠唱。魔力がグッと跳ね上がったと思ったら、すごい魔力が込められた美術品のような長槍が1本現れた。

「その身に刻めっ、ニーベルン・ヴァレスティ！」

投擲された槍は一直線に血の手へ突き進んで着弾、根こそぎ吹き飛ばした。落下するウルリケ。マイスターはそんなウルリケに左手を向けて、

――リングバインド・シーリングフォース――

こんなすごく離れた場所だというのに、ウルリケの四肢に寸分の狂いもなく捕獲輪を掛けた。でもなんで？　そんなことしたらウルリケを助けることになるのにね。でもそうじゃなかった。

――牙獣走破――

ザフィーラも高速落下、四肢を拘束されてるウルリケのお腹に蹴打を打ちこんだ。拘束は、ザフィーラの蹴打の威力を余すことなくウルリケに伝えるためのものだったんだね。でも『フィーアお姉ちゃんと融合してるウルリケなら、捕獲輪の魔導くらい破壊できそうなのに・・・？』そう首を傾げていると、

『魔力生成阻害の効果を付加しているんだ。ベルカ式ではない、私のオリジナルの魔道だぞ。しかも対ブラッディア仕様だ』

マイスターがそう教えてくれた。異世界の魔導なんだね、あの捕獲輪。そこからザフィーラの連撃が始まった。魔力の生成を阻害させてるせいでウルリケは血の魔導が扱えなくなって、一方的に攻撃を加えられてしまうことになっちゃってる。シャマルはシュリエルの回復。ヴィータは砕かれた"グラーフアイゼン"を悔しそうに見つめてる。そしてアイリとマイスター。・・・・それと、

「オーディン！」『マイスター！』

シグナムとアギトお姉ちゃんだね。シグナムだけはかなりボロボロだけど、アギトお姉ちゃんと一緒に何かをやり遂げたって言う顔をしてる。

「オーディン。イリュリア高位騎士ファルコと融合騎フュンフを撃破しました」

シグナムがそう報告した。そっか、フュンフお姉ちゃんは壊れちゃったんだね。ファルコも死んじゃったのか。確かミナレットに配置された高位騎士は、ウルリケ、ファルコ、フレート、その他に５人ほどのはず。でもマイスターの魔導で島は潰された。シグナムとアギトお姉ちゃんによってファルコとフュンフは墜ちた。

（ウルリケとフィーアお姉ちゃんは、今まさに墜とされようとしてて・・・。フレートとツヴァイお兄ちゃんは・・・・流されちゃったのかな・・・？）

ツヴァイお兄ちゃんを思い出す。あまり良い思い出はないけどね。

マイスターが「とりあえず治療だな」ってシグナムに治癒の魔導を掛けているところで、『ミナレットが・・・！』アギトお姉ちゃんの思念通話が届く。ミナレットを載せた回転床がゆっくりと回り出して、『化け物めっ！　最大火力で塵となれ魔神！』ミナレットからこの空域一帯に向けてフレートの声が大音量で発せられた。

。―。―。―。―。

魔導砲台ミナレットの内部、回転床に根を張るかのように設けられている土台内にある制御室。明かりはそう多くないため薄暗く、そして床はなく、五角形の浮遊床が1枚だけという大きな空間。その浮遊床の上に高位騎士の1人、フレートは居た。

海水に飲まれた事で全身びしょ濡れだ。しかしそれを気にも留めずに彼は、前方に浮いている人間大の水晶に両手を翳している。狂気に満ちた表情をし「消えろ消えろ消えろ」と繰り返す中、水晶に赤い光の線が幾重にも走る。

『カリブルヌス魔力充填開始。海水を引き上げ、動力炉の制限解放およびミナレット全兵装起動に必要なエネルギーを生成します』

「急げっ。あの化け物は待ってくれないんだぞ！」

フレートが激昂する。彼の周囲に展開されている数ある空間モニターのうち1枚に、オーディンとシグナムとアギトが映っている。健在なその姿を見たフレートは「ツヴァイや騎士団の仇を取るんだ、絶対に！」ミナレット制御キーである水晶を殴りつけた。

オーディンの魔導――ではなく魔道ヒュドリエルによって施設内に

居た連中は全滅した。単純な津波であったなら生き延びる可能性はあったかもしれないが、ヒュドリエルは攻撃の魔道だ。利用された海水すべてに攻撃性の魔力が付加されているため、防御をしなければ撃破されるのは道理。

（フィーアが居なければ、俺も死んでいた・・・！）

自分だけが生き残った怒りと、死んでいたかもしれない恐怖でフレートがわなわなと肩を震わせる。ヒュドリエルに襲われた施設――管制室に居たフレートとツヴァイ、管制官数人は、成すすべなく波に呑まれ全身を魔力で打撃された。

気を失っていたフレートが目を覚ました時、彼は施設内通路を流れる瓦礫の上で横たわっていた。自分の死を覚悟したとき、フィーアが現れた。ロードの魔導や身体を極限にまで補助できる融合騎プロトタイプ四番騎・強化補助のフィーア。

すでに機能を完全停止しているツヴァイを抱いて。フィーアはフレートを救うために彼と融合、彼の防御力を最大限にまで強化し、施設からミナレット本体へと移動していた。

『迎撃砲カルンウェナン起動。防衛障壁プリトウェンの出力を上昇。フェイルノート残弾１８。フェイルノート製造システムを緊急停止、ミナレット稼働に魔力を流用。動力炉出力レベル８０，８４，８８，９２・・・・１００。ミナレット全システム最高出力で起動します』

薄暗かった管制室がパッと明るくなる。まるで人間の血管のように縦横無尽に張り巡らされた回路が、赤い光をどこかに流し込むかの

ように点滅を繰り返す事で生まれた明かりのおかげだ。

「化け物めっ！　最大火力で塵となれ魔神！」

ミナレットの回転床が音を立てて回り、砲口をオーディンらの住まう国シュトゥラへと向けた。

†††Ｓｉｄｅヴィーダ†††

状況確認だ。まずあたし。あたしの"アイゼン"はウルリケに砕かれて、"アイゼン"を待機形態に戻して、修復を掛ける最中。ウルリケは、今はオーディンの捕獲輪（色が蒼だからそうだろ）で拘束されていて、血で防御とか迎撃ができねぇのか、ザフィーラがボッコボコに殴られてる。

シュリエルは、シャマルに回復してもらってすぐに臨戦態勢に入った。何故ならウルリケはザフィーラに殴られても平気そうな顔してるからだ。背筋がゾクッてなった。頭もおかしいんじゃね、ウルリケって奴は。そんで一番の厄介事のミナレットは、男の声でオーディンを殺す、って感じの通信が流れた後に、砲口をシュトゥラに向けやがった。

「おい、そりゃねぇだろ！」

――カルンウェナン――

それだけじゃなく、ミナレットの土台からシャレになんねぇ数の光線が放たれてきた。こうなりゃもうウルリケに構ってる余裕なんか

ねぇ。だからあたしらは一斉に逃げに回る。そんなところに『こちらオーディン！　ミナレットは私とシグナムに任せ、各騎は退避！』って思念通話が。
確かにあたしらに出来る事なんてもう無いかもないけど、『ウルリケはどうしますかっ？』シャマルが掠めてく光線をギリギリで避けながらオーディンに訊いた。つか、ウルリケの奴・・・光線の雨をまともに食らってんじゃね？　だって見えねぇもん。
『生き残っている場合は、ウルリケも私が請け負う！　まずは被弾しないことを第一に考えてくれ！』
『消えてしまえぇぇぇーーーーッ！』
――カリブルヌス――
あのデケェ砲撃カリブルヌスが、シュトゥラに向けて発射されちまった。しかもミナレットはすぐに砲口をまた別の方角に向けて、間髪入れずにカリブルヌスを発射した。溜めなしで撃ちやがった。『テンパランチアに任せる！』ってオーディンが言うんだけど・・・。今は信じるっきゃねぇ。オーディンのデタラメな使い魔って奴を。カリブルヌスの光の尾を見送っていると、『アンナを任せた！』アンナが居る座標が頭ん中に送られてきた。
『ミナレットはオーディンさんに任せて、私たちはアンナの元へ急ぎましょ！』
『そうだな。主オーディンの指示通り、退くぞ』

『おう』『ああ』

シャマルとザフィーラに続いて、あたしとシュリエルもアンナの居る場所へ向かうために、光線を避けながら飛ぶ。

（無茶はしないでくれよ、オーディン、シグナム）

光線の弾幕でもう姿が確認できねぇオーディン達に、心ん中でそう願った。教えられた座標につくと、元の人間の姿に戻ってるアンナが横たわってた。医者のシャマルが急いで容体を診る。「うん、異常なし・・なんだけど・・」って引っかかる言い方だった。シュリエルが真っ先に「どうした？」って訊く。そうだよ、もったいぶんなよな。ここだってまだ攻撃に晒されてねぇけど完全に射程圏内、いつ光線が飛んでくるか。

「ううん、とりあえずはここから離れましょ。ザフィーラ、アンナをお願い」

ザフィーラがアンナを横抱きにして、あたしらは一度アムルに戻る事にした。早くエリーゼ達にアンナを逢せてやりたいしさ。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒オーディン†††

ミナレットから感じられる魔力量がグッと跳ね上がったと思えば、カリブルヌスの連射、それに迎撃砲が加えられた。魔力弓を生成。左手に槍のごとき矢を作り出し、魔力弦に番える。標的はもちろん

回転床の四方八方に根を張るミナレットの土台に在る数ある砲台。

「往けっ！」

――弓神（コード・ウル）の狩猟――

多弾射撃ウルを射る。込めた魔力は十分過ぎるほどだったが、「障壁の出力が・・・！」不可視の障壁に全弾防御されてしまった。迫り来る迎撃砲を回避したところで、「アギト！」シグナムが"レヴァンティン"をボーゲンフォルムへと変形させた。アギトとの融合状態だ。その威力は絶大だろう。そしてシグナムはシュツルム・ファルケンの投射体勢に入った。

――女神（コード・リン）の護盾――

シグナムに向かう迎撃砲を、上位防性術式のリンで防御。今すぐにでも儀式魔術エーギルを発動したいが、あれには詠唱はもちろん、その場から動けないという制約がある。それだけではなく詠唱中は、他の魔道が扱えない。飛翔術式の剣翼アンピエルや戦闘甲冑くらいは維持できるが、他の攻性・防性はダメだ。だからこんな状況でのエーギル発動は危険すぎる。まずは迎撃砲の砲台を潰す事からだ。

「『翔けよ、隼！』」

――シュツルムファルケン――

射られたファルケンには結界・障壁破壊効果がある。先ほどの単純

に魔力が大きいだけのウルに比べれば・・・。しかし「ダメか・・・！」シグナムが悔しげに呻く。ミナレットの障壁に着弾したファルケンは大爆発を起こしたが、可視できるだけの波紋を障壁に生ませただけに留まった。が、その一瞬の緩みが出来たのを確認できればいい。波紋が消えるまでの数秒に集中。"エヴェストルム"を鞭形態パイチェ・フォルムで起動、先端の剣形態の"エヴェストルム"に障壁・結界破壊のメファシエルを付加。

「往けっ！」

波紋の中心へ向け、振り回して勢いをつけた先端を着弾させる。波紋が新たに生まれ、着弾点から全方位に向かってヒビが入り、砕けていく。ミナレットから『化け物めぇぇぇーーーーッ！』あの男の通信がけたたましく流れた直後、またカリブルヌスが放たれた。方角から見て・・・ガレアか。冥王イクスヴェリアが有名な国だ。と、呑気な事を考えている場合じゃない。ミナレットの破壊を任された身として、これ以上のカリブルヌス発射は阻止しなければ。エーギルの術式をスタンバイ。そんな中、

『シグナム、アギト。ウルリケの姿は確認できるか・・・？』

『例の女騎士ですね・・・・いえ、見当たりません』

ウルリケの姿を確認してみたが、シグナムの言うとおり見えない。迎撃砲をまともに受けたようにも見えたが。海に落ちたか？　いや、違う。居る。判ってしまう。砂粒程度の微弱だが、この時代に居ないはずの魔術師特有の神秘を。

『（どこだ・・・？　海上には居ない。まさか・・！）シグナム！
ヴィータ達と合流するんだ！』

『・・・っ！　判りました！』

シグナムはすぐに察してくれたようで、進路をヴィータ達の居るシュトゥラ国内へと変更。だがその前に『っと、そうだ、コレを持って行ってくれ！』シグナムの元へと急いで飛び、彼女の手に私特製のカートリッジを2発握らせる。
魔術師の魔力が込められたカートリッジだ。魔術師の血族の末裔であるウルリケに絶大な効果を与えるだろう。私とシグナムの間を通過する迎撃砲。それがこの場での別れのきっかけとなった。頷いたシグナムは飛び去って行き、そして私は・・・・

「アイリ、もう少しだ、頑張ろうな」

『どんとこい、ですよ！』

ミナレットの障壁が再生される前に迎撃砲台を潰さないとな。

――殲滅（コード）せよ、汝（カマエル）の軍勢――

頭上に１２００の魔力槍を展開。属性は破壊特化の炎熱・雷撃・閃光のみ。「殲滅粛清（ジャッジメント）！」と指を鳴らし、射出命令を下す。一斉に迎撃砲台へ向け突き進むカマエル。次々と砲台に着弾し爆発、破壊していく。どれだけ強力な兵器だろうと、やはり魔術師の敵じゃない

な。今のカマエルで３分の２の迎撃砲台を破壊して、まだ無事な砲台から私を撃とうと光線が放たれ続ける。

――第二波装填（セカンドバレル・セット）――

先程と同じ１２００の槍群を生成、展開。迫る迎撃砲を避けつつ「殲滅粛清（ジャッジメント）！」と射出号令を下す。半数は砲台破壊へ。また半数はミナレット本体へ。しかし障壁がなくとも自前の装甲の厚さの前には無力だった。

回転床が音を立てて回り、ミナレットの砲口が三連国バルトの一国、ウラル方面に向けられた。そしてまた強大な魔力が発せられた。カリブルヌス発射の兆候だ。発射を防がないといけない。とはいえエーギル発動を控えている今、そう強力な魔道は使えない。

「ならば・・・・！」

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

私の魔力光サファイアブルーに光り輝く直径３０ｍ程の円環が私の両側に発生。そこより出でるは、白銀のブロックが組み合わさって構成された２本の巨腕イロウエル。右のイロウエルで砲口を防ぎ、左のイロウエルで砲身を鷲掴み、無理やり砲身を陸地のない場所へ向けようとするが・・・「動かないか・・・・！」ビクともしない。そして放たれるカリブルヌス。右のイロウエルは砕かれ、間髪入れずに左のイロウエルを射線上に移動。カリブルヌスを受け止め・・・・きれなかった。両方とも破壊された。が、威力は削った。あとはウラルに防衛障壁がある事を願うばかり。

「（迎撃砲も黙らせた。あとは・・・）ミナレットだけだ・・・！」
足元と海面にアースガルド魔法陣を展開。スタンバイしていた水流系最強の術式エーギルを形にするために、
「其は九界に在りし全ての生命の源にして母たる海を司る者」
詠唱を始める。剣翼アンピエルと戦闘甲冑以外の魔道の使用がすべて制限される。ここ一帯の海水全てに魔力を通し、操作を行う。左腕を空へと掲げると、ミナレットの周囲十三方から海水の龍が立ち上り、ミナレットの直上で合体、巨大な水塊となる。
「海神が生み出せし蒼き水刃には慈悲も慈愛も無く、あらゆる護りを裂き刻み、如何なるものを海塵と成す」
その水塊から無数の水の刃が降り注ぎ、ミナレットを襲撃。その装甲に傷をつけていく。水刃として消費された海水は海に戻り、また十三方の水龍を伝って空に在る水塊へと還る。ゆえに水塊が消滅する事はない。エーギルの効果が途切れるか、私は解除するまでは。それにしても堅い装甲だな。仕方ない、第二波のエーギルを発動だ。
「水界の支配者の憤怒を買いし汝よ知れ。汝に待つのは凄絶にして残酷なる斬刑のみにあらず。母なる海より空に流るる水龍は天に座して雨と成り、汝を突き穿ち貫く刺刑に処さん」
次は、水刃が傷つけた個所に水の杭を無数に打ち込んでいく。ミナ

レットの損害をさらに広げていく水杭の雨。回転床が動き、ミナレットの砲身はエーギルから逃げるかのように明後日の方を向いた。だが甘い。水塊へと上って行く水龍の海水の引き上げ量を増加させ、水塊をさらに巨大なものとする。これでミナレット全てが攻撃範囲に入った。ガンガン轟音を立てながら砲身に着弾していく水杭の雨。

「母なる海より空に流るる水龍は天を衝きて渦を巻き、汝を削ぎ壊し滅す裂刑に処さん」

第三波始動の詠唱。水杭攻撃は終わり、今度はドリル状の海水をミナレットへ8本と落とす。この攻撃で回転床を潰した。これで今の方角から動けない。それでもカリブルヌスを撃ちたいのなら撃つがいい。

（砲口が向いている先に在るのは自国イリュリアだけどな！！）

回転床に根を張るかのように存在している土台のいくつかが崩壊していった。ミナレット完全破壊までそう時間はかからないだろう。

『何なのだ、貴様は！？　何故ミナレットを持ち出してまで、たかが人間一人を殺せない！？』

男の絶望に満ちた声が流されると、アイリが『フレート・・・』と呟いた。この声の主は誰なのか、アイリから教えてもらう。フレート・ベックマン。イリュリアの高位騎士の1人だそうだ。そして雷の融合騎であるツヴァイを有しているとの事だ。まぁ今さら出てきたところで敵ではない。

「聞こえているか、フレート・ベックマン！　私を討ちたいようだな！　ならば地獄をその目で見ろ、その魂に刻め、そして絶望の底から這い上がって見せろっ。それでも自分を確固として保てたのなら、少しは私に近づけるだろう！」

百年も生きられない人間に、私が背負った2万年の地獄と同じ絶望を経験をさせるのは不可能だ。だから勝てないんだよ、私には。背負ってきたものの重さ、数、そのすべてにおいて私を勝る存在などいないんだから。

『ぬぅぅ・・・俺も地獄などこれまで多く見てき――』

「そうか。だが足りないな。だから人間を辞めろと言うんだ。人間に許された時間など、あまりに一瞬なんだから」

いい具合に壊れてきたミナレットを見下ろし、第四波の攻撃に移る。

「母なる海より空に流るる水龍は天に座して槌と化し、汝を押し潰し砕く杖刑に処さん」

水塊から鉄球のような水の槌を落とし続ける。着弾したところは大きく凹み、少しずつミナレットを潰していく。水槌のいくつかが回転床に大きな穴を開け、ミナレットがガクッと大きく傾き、砲口が空に向かう。

反射鏡弾フェイルノートと砲撃カリブルヌスでならまだ悪あがきくらいは出来そうだが。砲身を集中的に狙い、水槌を落としていく。

だが凹みこそすれ折れる事はない。ここまで堅いとは驚嘆だな。水槌の雨を続けるが、やはり折れない。

「フレート・ベックマン。お別れの挨拶をしよう。今からミナレットにトドメを刺す」

『・・・・化け物め・・・・！』

「ああ、そうだ。私は、化け物なんだよ」

『？？・・・・マイスター・・・・』

アイリから戸惑いや悲しげな声色の念話が届く。

「『何でもないよ、アイリ。忘れてくれ』・・・・詠唱最終節。これで、さよならだ」

掲げていた左腕を勢いよく振り下ろし、ミナレットへと左手を翳す。

「海神の四刑をその身に受け、尚生命を失わず在る汝よ。怖れ慄き震えよ。最後に待つ、真刑の災いを！」

――海神（コード・エーギル）の波瀑――

今まで繰り出してきたエーギルの四刑すべてに加え、空に上る十三方の水龍からも海水の砲撃が放たれ、さらに海面から海水の槍が８本と突き出された。ミナレットを全方位から集中砲火。これでダメ

なら・・・・真技？って不可能だな、発動したら記憶どころか体が消滅しかねない。
だがそれは杞憂だった。エーギルの効果が絶え水煙が晴れると、完全に沈黙したミナレットの悲惨な残骸が視界に映った。２つの砲身は完全に折れ、もう２度とその猛威を奮う事は出来そうもない。

『終わったね、マイスター』

『ミナレットだけはな。今度はイリュリア王都に攻め込むぞ。オリヴィエ王女殿下たちなら問題ないだろうが、王都にはエグリゴリが居る』

みんなには悪いが、"堕天使エグリゴリ"を優先させてもらおう。ついでにエテメンアンキも潰しておくか。これからのベルカに無い方がいいだろうからな。どういうモノかは知らないが。

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒シグナム†††

オーディンと別れ、ヴィータ達と合流するために捜そうとした。が、そのような手間は要らなかった。ヴィータ達はウルリケと戦闘を繰り広げていた。正直、元気な姿で戦っているウルリケに戦慄した。ミナレットから放たれていた迎撃砲の直撃を受けて、何故ああも変わらずに戦えているのか。
アギトが『ウルリケとフィーアは、イリュリア国内でも有名な最強ペアなんだよ』と教えてくれた。最強、か。個人で最強と謳われている騎士団総長グレゴール。融合状態で最強のウルリケ。なるほど腕が鳴る。

『シグナム、マイスターに貰ったカートリッジ・・・使おう』

アギトが、先ほどオーディンから受け取ったカートリッジを使うように言う。

『ああ。対ウルリケ用として頂いたのだからな』

カートリッジを"レヴァンティン"に装填。ロードする事なくウルリケに向かう。ヴィータ達はやはり苦戦しているようだ。ウルリケは、修復された"グラーフアイゼン"を蹴りで捌き、ザフィーラの拳打を裏拳でいなし、赤い液体――血液を大鎌状にしたソレでシュリエルのブルーティガー・ドルヒを払い落とした。

「レヴァンティン！」

オーディンのカートリッジをロード。「ぅぐ・・・！？」凄まじい魔力量に、魔力核が暴れまわる。融合しているアギトにもオーディンの魔力が伝わったようで、『あぅぐ・・なに、これ・・・！？』そう呻く。我々が知っている魔力とは質が異なる。これほど強大な魔力を扱った事など、これまでに一度とない。だが「この昂揚感、僅かな苦痛もあるが・・・それ以上に心地良い」なかなかに良い感じだ。

「アギト、時間を掛けられれん、早々に決めるぞ！」

『う、うんっ。猛れ、炎熱』

――烈火刃――

炎熱強化を刀身に施し、「紫電・・・！」"レヴァンティン"の刀身に火炎を纏わせる。ヴィータ達が私に気づき、私の纏う魔力の絶大さに目を見開き驚愕、しかしすぐにウルリケより離脱する。

「一閃！」

これまで共に歩んできた決め手・紫電一閃を、ウルリケに向け振り下ろす。横っ飛びで避けたウルリケは一回転して大鎌を振るい、私は"レヴァンティン"を切り返して迎撃、一瞬にして蒸発させた。

「く・・っ！？　あなたは盟友ゲルトを討った騎士、名は確か・・・シグナム！」

「私が討った騎士の中に、ファルコとフュンフをを追加しておいてもらおう。ヴィータ！」

オーディンのカートリッジを放り投げ、ヴィータは慌てる事なく受け取る。

「この場にあなたが居るのでしょうから、盟友ファルコが戦死したのも事実なんでしょうね！」

再度作り出した血液の・・・鞭を振るうウルリケ。シャマルからの「触れちゃダメよ、シグナム！」と助言。ならば障壁をと判断し、

パンツァーシルトを展開。シュリエルが「防御もダメだ、貫かれる！」と言う。
しかし「ん？」いや完全に防げたのだが。ウルリケですら「え・・・？」防がれると思っていなかったのか呆けている。ヴィータ達の障壁は貫け、私の障壁を貫けなかった理由・・・それは間違いなく「ヴィータ！　そのカートリッジを使え！」オーディンのカートリッジだ。
我らの魔力とは何かが違うオーディンの魔力。ヴィータも「応！」と装填、ロード。直後、「うおっ？　なんだこれ！？　すげぇっ！」と驚愕したヴィータは、うおおおおおお、と昂っていた。

「ブラッディアの血の優位性が崩れた・・・！？」

『ウルリケっ、フィーアっ。あたし達の勝ちだ！』

『ゼクス・・・！　姉（フュンフ）を討った愚か者がっ！』

「第三位がこのようなところで討たれるわけには・・・！」

――グラオザーム・ケッツァ――

血液の大鎌がいくつもの触手となり、我らに向かって伸びてきた。ヴィータの「おらぁぁああ！」シュワルベフリーゲンが迎撃、一撃のもとに粉砕した。血液の大半を失い攻撃が途絶えたウルリケへ突撃。"レヴァンティン"を横一線に薙ぎ払うが、「なんてこと・・・！」ウルリケは後退し回避。

「テートリヒ・・・シュラァァァーーークッ！」

後退した場所にはすでにヴィータが回り込んでおり、"グラーフアイゼン"の一撃を繰り出した。僅かな血液で盾を作るがヴィータの一撃に容易く砕かれ、「あ・・がっ・・・！」ウルリケの脇腹に直撃した。ボキボキと骨が砕かれる音がハッキリと聞こえた。吹き飛ぶウルリケは地面に勢いよく落ち、しばらく転がって樹にぶつかった事で、ようやく止まった。これで終わったな。骨が折れた状態であの衝撃、内臓を傷つけているに違いない。

「さっきまでは通用しなかったのに、このすげぇカートリッジを使っただけでウルリケを倒せた・・・。なぁおい、シグナム。このカートリッジ、一体どうし――」

「ブラッディア・・の、血族と・・して・・・」

「まだ立つのか・・・！」

ウルリケが樹にもたれながらも立ち上り、自分の血液を大鎌へと変化させた。そして「フィーア！　極限強化！」と叫び、自分の命を削るかのような魔力を放出した。

「ヴィータ！」

「応よっ！」

ヴィータと挟撃を行う。"レヴァンティン"を振り下ろし、"グラ

ーフアイゼン"を振り払う。大鎌で私の一撃を防ごうとするが、残念ながら寸断され直撃、ウルリケの右肩を裂く。裂かれた傷より血液の杭が飛び出し、「ぐっ」私の左肩を貫いた。血と魔力を吸収される感覚を得る。
ヴィータがその隙にウルリケの右脚を打ち、骨を砕いた。脚が折れた事でガクッと体勢を崩すウルリケ。斬り返す"レヴァンティン"で奴の腹を斬り裂く。今度は腹から噴き出す血液が刃となってヴィータを襲撃、両足を裂き、「いって！」ヴィータを下がらせようとした。

「でも退かねぇぇぇぇぇぇッ！」

――テートリヒ・シュラーク――

「あぐぅぅ・・・！」

"グラーフアイゼン"の一撃を左肩に受けようともウルリケは止まらず、「せめてあなた達だけは討つ！」と、全身の傷口から流れる血液を無数の棘にし、私とヴィータに風穴を開けようと伸ばす。避けられない。私の肩を貫く杭が足止めの枷となっているためだ。ヴィータも両足を斬られた事で回避が遅れる。
そこに、「シグナム！」「ヴィータ！」ザフィーラとシュリエルが飛び込んできて、我々を抱えて跳び退く。ハリネズミのようになっているウルリケの攻撃範囲から・・・「逃れられんか・・・！」血液の棘は伸縮自在とでも言うように追い縋ってくる。

「これ以上好き勝手させないわ！」

――旅の鏡――

「しま・・・っ！」

ウルリケの胸から生えるのはシャマルの右腕だ。そして手の平の上には魔力核。血液の棘が液体へと戻り、バシャバシャと地面に落ちる。ヴィータが「あたしを投げろ！」とシュリエルに言い、シュリエルはヴィータをウルリケへと向けて投げた。
ならば「ザフィーラ！」私もザフィーラに投げてもらう。向かう先にはウルリケただ1人。距離的に近かった私が先に到達し、「終わりだ！！」"レヴァンティン"を振るい、ウルリケの魔力核を寸断する。

「ぁがぁぁあ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝・・・っ！」

「これでトドメだ、ウルリケぇぇーーーーッ！」

――テートリヒ・シュラーク――

突撃の速度、中空での一回転、元より有る"グラーフアイゼン"の破壊力、そのすべてが込められた一撃がウルリケの胸部に打ち据えられた。グシャッ、メキメキ、と肉と骨を潰す音が耳に届く。ウルリケはその衝撃に軽々と吹き飛び、先ほどと同じように地面を何度も跳ね転がり・・止まった。
私とは違って着地できずに地面に落ちたヴィータが仰向けに倒れ「はぁはぁはぁ、意識があんなら最期に答えろ」と言い放つ。意識な

どあるわけがない、そう思っていたのだが、ウルリケは何度も吐血しながら「なに？」と促した。

「なんでテメェの部下を自爆なんかさせやがった？　アイツら、戦って死ぬ事が騎士の最期だって言ってたんだぜ・・・」

「・・・・ごふっ、わた、しが・・命じた、とで・・も・・・？　あれ・・は・・・陛下・・の・・御意思、よ・・・従うしか、ないじゃ・・・すか・・」

「・・・クソが」

ヴィータは吐き捨てるようにそう言い放ったあと、意識を手放した。これで本当に決着だな。"レヴァンティン"を支えにして立ち上がり、「トドメを刺すか？」と尋ねてきたザフィーラへ「いや」と首を横に振る。

「今すぐこの場から離れるぞ」

指示を出す。ウルリケはもう立ち上る事も魔導を扱う事も戦う事も出来ん。放っておけば確実に死に至る出血量と怪我だ。だからその先に待っているのは、ファルコと同じ結末なはず。

『高位騎士は機密保持の為に自爆をするようだ、近くに居れば巻き込まれるぞ』

『自爆だと・・・！？　判った、ヴィータは私に任せろ。ザフィー

ラ、シグナムに肩を貸してあげてくれ』

「『ああ』掴まれ、シグナム」

「すまん」

こうしてウルリケより距離を開け数十秒のあと、大爆発が起きた。イリュリア騎士団の第三位の騎士を討ち取れる事が出来、ミナレットも・・「オーディンさんの方も終わったようだわ」海水を利用した全方位からの攻撃によって、見るも無残な様を見せた。しかし王都へ向かう前に随分とボロボロにされてしまったものだ。少し回復をせねば最後まで戦えきれんな。

。―。―。―。―。

――エテメンアンキ・玉座の間

「よくここまで耐えてくれました、ファルコ、ウルリケ、フレート。あなた方の死、決して無駄にはしません」

超がいくつも付くほどの高層建造物エテメンアンキの最上階・玉座の間にて、イリュリアの女王テウタ・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルトが静かに涙していた。彼女の面前に展開されている4つの空間モニターのうちの1つに、ミナレットでの戦闘が映し出されていた。ファルコがシグナムに討たれ、ミナレットはオーディン単独に潰され、ウルリケは信念の騎士団グラオベン・オルデンの騎士たちの連携で討たれた。

『テウタ陛下。イリュリア北部ブンセンヴルスにて行われていた、シュトゥラ騎士団と我がイリュリア騎士団所属・天睨む深淵騎士団（シャルフシュッツェ・オルデン）との戦闘の結果ですが・・・』

「その様子では負けましたね」

『申し訳ありません。シュトゥラ騎士団の前線に、アウストラシアのオリヴィエ・ゼーゲブレヒト王女殿下と、その番犬リサ・フライハイトが紛れ込んでいるようで・・・』

「なっ！？　オリヴィエ王女殿下が戦場に出ているのですか！？」

テウタは信じられないといった風に立ち上がり、モニターに触れるほど顔を近づけて訊き返した。グレゴールは『直にご覧になる方がよろしいかと』と提言。テウタは急いで戦場の様子をモニターに映し出す。上位騎士団シャルフシュッツェ・オルデンとの戦闘を終え、王都への進軍を再開している騎士団の中に、オリヴィエとリサ、クラウスも居た。

「クラウス殿下も・・・。ですが、オリヴィエ王女殿下がいらっしゃるという事は、聖王のゆりかごの出撃はないと見てもいいですね」

『おそらくは。報告を続けます。東部マルキッシャーよりガレア騎士団の進撃です。未確認ですが、ガレアの冥王イクスヴェリアの兵・マリアージュが居るとの事です。そして、バルトからも艦隊が王都へ向かっているとの事です』

新たに展開されたモニターに映るイリュリア騎士団総長グレゴールが報告する。テウタは流れたままの涙を袖口でようやく拭い去り、「そうですか。計画通りですね」と無理やり笑みを浮かべた。それでミナレットでの戦闘の結末を察したグレゴールは『彼らはよくやってくれましたね。おかげで我らの勝利は目前です』とファルコらを称えた。

「ええ、レーベンヴェルトを再建させた後、英雄として後世に語り継ぎませんといけません」

『それは最高の弔いです』

「本当は勝利を収めて帰って来てくれればよかったです」

最後にもう一度目を拭い、次にはキリッとした表情へと変えていた。そして膝の上に新たにモニターを1つ展開。そこには、

――エテメンアンキ全システムを起動します。よろしいですか？――

そう表示されていた。テウタは迷わずに起動を許可するキーを叩いた。エテメンアンキの玉座の間のみならず全区画に『天界王・テウタの許可を承諾。エテメンアンキ、起動します』そう音声が流された。傘の骨組みのような形をしたエテメンアンキ――正式名称を天地統治塔エテメンアンキ。エテメンアンキの最上層部より八方に伸びている柱――長さは約5ｋｍ――の先端に設けられている水晶部

より、

――カレドヴルフ――

特大の砲撃が地面へと向けられ照射された。地上２１ｋｍという成層圏から放たれる８本の砲撃。これが天地統治塔エテメンアンキの兵器としての片鱗だった。決して攻撃が届かない天上に玉座を置き、地上を焼き払う砲撃、まさに天地を力で統治するためだけの兵器。

「グレゴール。ゼフォン・エグリゴリ：ツヴァイを、今すぐにオリヴィエ王女殿下らの元へ。オリヴィエ王女殿下とクラウス殿下、ついでに剣姫フライハイト次期当主を討ちます。聖王のゆりかごを起動されては少々厄介です。オリヴィエ王女殿下だけでも討ってください」

『御意に。陛下の御心のままに』

グレゴールとの通信が切れ、テウタはふぅと一息吐き、コンソールのキーをいくつか叩く。新たに展開された小さなモニターに表示されたのは、

――融合騎フォルエンドゥングタイプ・マラーク起動準備――

Ｍｙｔｈ２２オリヴィエ・ゼーゲブレヒト～Ｈｅｉｌｉｇｅ　Ｐｒｉｎｚｅｓｓｉｎ～

†††Ｓｉｄｅリサ†††

「アレが、エテメンアンキ・・・！」

イリュリアの一個騎士団を楽々壊滅させたあと、突如として姿を現した真っ白な塔。天辺が霞んで見えない。一体どれだけの高さを誇っているんだろう？　私の隣にいらっしゃる我が主・アウストラシアの聖王女殿下オリヴィエ様は「ただの塔であれば何も苦労はありませんが・・・」と嘆息なさった。ほとんどの騎士がエテメンアンキを仰ぎ見ているところに、「空が光ったぞ！」って騒がしくなる。

「砲撃だ！」

クラウス殿下が叫ぶ。空から降ってきたのは、深紅に光り輝く魔力砲だった。確認できる数は８。そのうちの１つが私たちのずっと後方――シュトゥラはディトマルシェン領へと向かって落ち・・・・着弾してしまった。何十ｋｍと離れているここからでも判ってしまうほどの大爆発が起き、空を黒煙と爆炎で染め上げた。

あまりの事態に呆け静まり返る私たちだったけど、頭が状況を理解すると同時に騒然となった。クラウス殿下が「皆、落ち着け！」と宥めようとするけど、「俺の故郷が！」「母さん！　父さん！」家族や故郷の惨事に叫ぶ者、酷い者は言葉にすらならない悲鳴を上げる。

「なんてことを・・・！」

「オリヴィエ様・・・」

オリヴィエ様はオーディンさんに治してもらった拳を力強く握りしめ、「許せない・・！」エテメンアンキをキッと睨み付けられた。そういう私も怒りで頭が沸騰しそう。アレはいくら戦争でも持ち出していい代物じゃない。"キルシュブリューテ"を握る拳をさらに強く締め付ける。

「・・・クラウス、どうしてもエテメンアンキを破壊しなければなりません。最悪の場合、私はゆりかごの王となります。その時は――」

「おやめください！」「やめてください！」

「――リサ、クラウス・・・」

オリヴィエ様は今、私とクラウス殿下が最も訪れてほしくないと願っている未来を仰った。クラウス殿下が「そのような事をせずとも必ずエテメンアンキを破壊します！」とオリヴィエ様の両肩に手を置いた。私も「そうですよオリヴィエ様！　ゆりかごを使わずとも何とかなりますっ！」オリヴィエ様の右手を取る。

「ですが、あのようなモノに対抗できる力は、ゆりかごくらいしか・・・！」

「たとえそれでも貴女をゆりかごへは行かせません！　貴女とてご存知でしょう！　ゆりかごの王とは、それ即ちゆりかごの玉座を護るためだけの操り人形です！　そうなれば、２度と降りる事は叶わない！　オリヴィエと言う人間の意志も失い、もう僕やリサとも・・・こうして話す事も！」

クラウス殿下の言うとおり、一度ゆりかごに搭乗して繋がれば、オリヴィエ様は部品へと成り下がってしまわれる。話す事も、動く事も、考える事も、人として生きる事が出来なくなってしまう。生きながらにして死んでいると同じ。ゆりかごの王として使えなくなるまで生き永らえさせ、死んだら用済みとして消される。オリヴィエ様にそのような未来を歩ませたくない。できれば、今のままクラウス殿下とご一緒に・・・・。

「クラウス・・・」

「お願いです、オリヴィエ！」

まずい。この収まる気配のない混乱の中で、騎士団を引っ張るクラウス殿下すら暴走してしまうと、騎士団の立て直しが不可能になる。でもオリヴィエ様を御止めしたいのも事実。このまま放っておけばオリヴィエ様は行ってしまわれる。だけどこの収拾をつけておかないと、イリュリア騎士団に襲撃されでもしたら全滅は必至。何か良い手はないかと思案し始めたとき、

『ベルカに生きる全ての民よ、聴いてください。私は、イリュリア

の女王にして、天地統治塔エテメンアンキを統べる天界王テウタ・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルトです』

「「「っ！」」」

エテメンアンキから発せられたイリュリア女王テウタの声。オリヴィエ様とクラウス殿下、そして混乱していた騎士団がその声に押し黙る。今から私たちが討とうとしていた国、そしてその女王からの声明だからだ。

でも声は殺しても感情は殺せていない騎士団。膨れ上がっている殺気がエテメンアンキに向けられるのが判る。こんな形で収拾がつくのはあまり好くないけど、この際は手段を選んでいられない。

『我が力、エテメンアンキの砲撃カレドヴルフを、イリュリアに弓引く者たちの国へ向け、神罰として下させて頂きました。シュトゥラ、バルトはウラル・リヴォニア・リトヴァ、ヴィンランド、シュヴァーベン、ヘルウェティア、ガレアの8ヵ国です』

どの国も浅からずイリュリアと因縁を持つ国の名前だ。その8ヵ国のどこかの街が丸ごと破壊されたって事になるんだ・・・。人的被害がどれだけになるのか、意識が遠くなりそう。けど問題はそれだけに留まらない。イリュリアに敵対していた国の街が破壊された。となれば・・・

『これより敵対しようと考える国家への牽制と言う意味も込めて、見せしめとして街8つを焼き払いました』

そう、この戦いでイリュリアへと進撃を成功させることが出来れば、様子見していた他国も参戦してくれる、という狙いも少なからずあった。だけど、こんな惨劇が起こせる兵器をイリュリアが持っていたと判れば、他国は私たちに味方せずに沈黙を保つ――最悪、イリュリアの傘下に下るかもしれない。そうなれば戦況は一気に悪くなる。クラウス殿下も解っているようで「まずいですね」って呻いた。

「・・・はい。力で脅して味方を増やす、最悪な手段です」

『このままカレドヴルフで敵対国を根絶やしにするのも可能です。ですが、私――イリュリアはあくまでベルカを統一するのが目的であり、破壊などではありません。ですからここで敵対する８ヵ国の王たちに提言します。よく熟考して、返答のほどを』

テウタはそこで一拍置き、そして続きをこう告げた。

『降伏してください。全騎士団を解散、武装放棄、そしてイリュリアの傘下に永久に下ると誓ってください。さすればカレドヴルフの標的より外しましょう』

「ふざけるなッ！」

クラウス殿下がその提言に激昂、大剣の剣先をエテメンアンキに向けた。背後の騎士団も同じように激昂して、それぞれ武装を向けたり怨嗟の叫び声を上げたりとしている。そしてオリヴィエ様は沈黙し、静かに怒りに燃えていらっしゃる。傍に居る私・・・その怒りに呑まれて少し震えてしまいます。

『返答を出すまでには時間も必要でしょう。明日の正午まで待ちます。それまではイリュリア国外より退避して下さい。もし明日の正午になる前に国内へ侵入を試みれば、連帯責任で8ヵ国の王都にカレドヴルフを撃ち込みます。ではシュトゥラ王、バルト三王、ヴィンランド王、シュヴァーベン王、ヘルウェティア王、ガレア王、良き返答を期待しています』

そうして一方的に声明は切れた。私はクラウス殿下へと目をやる。この場での指揮官は彼だからだ。オリヴィエ様が「クラウス。悔しいですが」とクラウス殿下を見られた。クラウス殿下は私とオリヴィエ様を見、そして背後の騎士団を見やり、黙考を僅かに。そして「・・・ええ、この場は一度退きましょう。脅しではないはずだ、テウタの言は」撤退を決断した。

「シュトゥラへ帰還する！」

クラウス殿下の決断に「了解（ヤヴォール）！」と納得をせざるを得ない声色で応じる騎士団。シュトゥラへ帰るために踵を返したところで、「おっと、そこの3人は帰さないように言われてんだ」男の声が平野に響き渡った。一斉に身構える中、足元から伝わって来る震動。そして、

――岩衝鉄破（フェルゼン・ベルク）――

剣山のような岩石が突き出してきた。「散開！」クラウス殿下がそう指示を出すまでもなく、騎士たちはすでに散開、攻撃を回避し終えていた。私は真っ先に「オリヴィエ様！」守るべき御方の御傍へ

馳せる。聖王家を御守りするフライハイト家。私はオリヴィエ様を御守りするためだけに力をつけてきた。だから・・・・

「オリヴィエ様っ。クラウス殿下ともどもお下がりください！」

私は戦おう。この命よりも大切な御方のために。この命が燃えつける限り、ずっと。けど私の実力ではオリヴィエ様の足元にも及ばない。それでも「守らないと！」地面から飛び出してきた1人の男へ、

――閃駆――

偉大なご先祖様・シャルロッテ・フライハイト様の使っていた高速歩法・閃駆で一気に距離を詰め、"キルシュブリューテ"を横薙ぎに振るう。その男は「あんた、剣姫リサだよな、抹殺対象の1人だよ！」殺気を向けてきた。

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。
其は偽りの堕天使ゼフォン・ツヴァイ
。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

刃が到達するより早くその男は後退し、地面より生えてきた岩石の大剣を掴み取って薙ぎ払い、私の首を狙ってきた。ただの岩石の剣など、「斬り捨ててくれる！」斬り返した"キルシュブリューテ"で迎撃。斬れると思っていた岩石の剣。
だけど「斬れない・・・！？」ビクともしなくて、僅かに拮抗する

のみ。でもその拮抗もすぐに決着。腕力で負けてしまっているせいで弾き飛ばされてしまう。宙を滑空する中、その男が距離を縮めてきた。行先に魔法陣を展開して着地。魔法陣の足場からまた閃駆を使って、真っ向から迎撃へ向かう。

「キルシュブリューテ！」

カートリッジを1発ロード。

――炎牙月閃刃（フランメ・モーントズィッヒェル）――

刀身に火炎を纏わせ、「面白いな、あんた！」楽しそうに歯を見せるその男とのすれ違いざまに胴体に一閃。確実に捉え、直撃はした。だけど斬ったというより打ったという感覚しかなく。思わず離脱をせずに呆けて顔を上げ、男の顔を見上げてしまう。

その男は「効かねぇよ、この程度じゃな！」と岩石の大剣を高々と振り上げた。ハッとして急いで離れようと閃駆――は使えない状況だった。"キルシュブリューテ"を空いている左手でがっしりと掴んでいるその男。

（まずい・・・！）

一瞬、"キルシュブリューテ"を手放すって言う選択肢が生まれて、すぐさま消えた。御守りするべきオリヴィエ様の前で、相手を打破するための武器を手放す。フライハイト家――ううん、最強の剣騎士と謳われたシャルロッテ様の名を継いでいる私自身の誇りがそれを許さない。だけど手放さなければ、斬り潰される。このわずかな

逡巡の果て・・・・振り下ろされた大剣。全てが緩やかに流れるその光景を、私は真っ直ぐ見つめることしかできなくて・・・でも、

――電光石火――

「ぶごぉっ！？」

岩石の大剣が私の脳天に落ちる瞬間、その男が吹っ飛んで空を錐もみしながら滑空、地面に墜落した。何故そうなったか。悔しいけど、「リサ、私も一緒に戦います」オリヴィエ様が助けて下さったからだ。私の閃駆と同じ、短距離高速移動の魔導・電光石火をお使いになったオリヴィエ様は目にも留まらない速度で男に最接近、蹴打を横っ面と大剣に繰り出したのだ。大剣は粉砕、男は動かない。一瞬で勝敗は決した。

「申し訳ありません。お手を煩わせてしまいました」

オリヴィエ様の前でかしずく。するとオリヴィエ様は「私があなたと共に戦いたかったのですからと手を差し伸べて下さり、私は・・・その手を取った。

†††Ｓｉｄｅリサ⇒？？？†††

突如として私たちを襲撃した謎の男性。リサの"キルシュブリューテ"の一撃を受けてなお何ともないといった風だったことには驚きました。彼女の剣閃の鋭さとその切断力は、アウストラシアの近衛騎士団でも一、二を争うほどのもの。それを障壁もなく耐えきると

なると、おそらく彼は「人間ではない・・・」でしょうね。

「オリヴィエ！　騎士リサ！」

クラウスが私とリサを心配して駆け寄って来てくれました。そして騎士団の皆さんは男性を捕縛するために、彼の元へ。クラウスのお気遣いに応じる前に、「さすが聖王女ってわけかっ！」横たわっていた男性がすくっと立ち上りました。

一斉に身構えた騎士団の皆さんが各々の武器をその男性に振り下ろし、突き出し、横薙ぎ、と攻撃を加えましたが、「邪魔するなよっ！」確かに直撃しているにも拘らず傷一つとして与えていませんでした。間違いなく彼は人間ではない。衝突音が金属特有の甲高いものでしたから。

――斬渦砂陣旋（ヴィアベル・ゼンゼ）――

男性が地面を踏みつけた事で発生した渦巻く砂塵の刃。「回避し――」クラウスが最後まで言い切る前に・・・男性に武器を突き立てていた騎士数人の胴体を横一文字に切断してしまった。そのあまりの呆気なさに最初は茫然。ですがすぐに「リサ！　彼を討ちます！」戦闘の再開をリサに告げる。

リサは「御意！」と簡潔に応えてくれた。男性は噴き上がる血飛沫の中でひたすら笑い声を上げている。よほどの殺人狂で違いないですね。この場で討たなければ、きっとさらに血の雨を降らすでしょう。クラウスは自国の臣民であり騎士である彼らの死に「貴様！」当然のごとく激昂して、剣を掲げて突撃姿勢に入りました。が、

「クラウスは、生き残った騎士団の皆さんの方をお願いします！
時間は私とリサで稼ぎますから！」

私は、男性の攻撃範囲内という難から逃れた方々の統率をクラウスにお願いします。これ以上、混乱のままで戦闘を行い、無駄に命を散らす事のないように。それほどまで歴然な差が、イリュリア戦力たる男性とシュトゥラの騎士団の間にあります。
クラウスもそれが解っているからこそ「申し訳ありません、お願いします！」即時に了承してくれました。とは言え、私たちと騎士団の間に彼の男性は居る。まずはクラウスを騎士団と合流させないと。

「リサ！」

「はいっ！」

――電光石火――

――閃駆――

リサと共に男性の両側へと高速移動。男性が反応しきる前に、リサがガクッとしゃがみ込んで足払いを掛け、体勢を崩したその隙を狙い、立ち上りの勢いでの振り上げの斬撃を顎へお見舞い。響き渡る金属音。男性は仰け反っただけでしたが、それだけの隙があれば十分です。次は私が攻勢に出ましょう。四肢に魔力付与して強化を行い、

「参ります・・・！」

――疾風怒濤――

右拳打を男性の水月に打ち込み、体を折った事で前屈みになった男の顎へ左拳打の昇打を繰り出し仰け反らせ、彼の背後へ回り込むように旋回して背部を蹴り上げて浮かし、後頭部に回し蹴りを打ち、その勢いで宙で前転する彼の顔面を拳打を打ち、直立したところで私は跳び上がって宙で前転して踵落としを決め、そのまま男性の後頭部を踏みしめ地面へと顔面から落とします。

「ぅぶ――っだからそんな攻撃程度じゃ、俺っちゼフォン・エグリゴリには通用しないんだっつうの！」

地面に亀裂を起こすほどめり込んでいたにも拘らず、すごい勢いで立ち上がられた事で宙に跳ね上げられましたけど、リサの展開してくれた魔法陣に着地。すかさず飛び膝蹴りを問答無用で男性――ゼフォン・エグリゴリの顔面に繰り出します。「ぶごっ？」とよろめくゼフォンの側頭部に回し蹴りを一発お見舞いして一度後退。

「ちょこまかと動き回って・・・猿か、あんた」

「サっ――オリヴィエ様に向かってなんと無礼な！」

お猿さん呼ばわれしたのは初めてですね。お猿さんみたいに顔を真っ赤にして激昂しているリサを「落ち着いて、リサ」と宥めつつ、クラウスが騎士団と合流したのを確認します。クラウスへ『殿は私とリサに任せてください』と思念通話を送ります。

『なっ！？　シュトゥラの王子としてそれだけは出来ません！』

『聴いて下さいクラウス。騎士団は今、統率者を必要としています。クラウス、あなたの事を。ここは王族としての義務や責任ではなく、彼らの命を第一に優先してください。私なら問題ないですから。私にはリサも居ますし、オーディン先生に治してくださった両腕があります』

命を優先する、という言葉にクラウスは『何から何まで申し訳ありません』と騎士団を率いてシュトゥラを目指して行軍を始めました。

「あっ、クラウスって王子も抹殺対象なんだよ！」

撤退を始めたクラウス達に気付いたゼフォンは右足を振り上げ、勢いよく地面を蹴りつけました。

――破岩砲弾（コメート・フェルス）――

地面より放たれるのは人の頭部ほどの大きさの岩塊、その数３０。私は「させません！」高速移動・電光石火でクラウス達の背後へ回り込み、

「はぁぁぁあああああッ！」

――狂瀾怒濤――

地面を思い切り踏みつけ地割れを引き起こし、隆起した地面、または跳ね上がった岩塊の壁でゼフォンの岩塊をすべて防ぐ。攻防が終わり、私は隆起した地面の上へと登り、クラウス達の無事を再確認し「ふぅ」一息。クラウス達に攻撃が届かなくてよかったです。

「・・・・あー、逃げられちまったよ。ミューールに怒られるなぁ・・・」

ゼフォンはがっくりと肩を落としながらそう呻きました。一度時間が出来た事で私はゼフォンに「何故私たちを襲うのですか？」と訪ねてみました。テウタ女王の話を信じるならば、今は仮の休戦中のはず。

（だと言うのに襲われるとは是如何に・・・？）

それに先ほどから気にはなっていましたが、"エグリゴリ"とはオーディン先生の最重要目的でしたね。えっと、私が討ちとっても構わないのでしょうか・・？　その辺りが少し気がかりです。

「何故かって？　俺っちらの大将・テウタとグレゴールがそう命令したからさ。クラウス、オリヴィエ、リサ。この3人をイリュリア国内で殺せ、って」

「そのような事をすれば、テウタ女王への印象が悪くなると思いますが・・」

「イリュリアの国内に進撃できていたのは実質シュトゥラの騎士団

だけさ。なら、陛下の声明が発せられる前にあんた達はすでに戦死していた。これなら問題ない」

「考える事が卑怯と言うか汚いと言うか。でもなるほどテウタは恐れたんだ、オリヴィエ様を」

リサが飛び掛からんとする体勢のままゼフォンへと嘲笑を向けた。ゼフォンは「さあ？　でも聖王のゆりかごがどうたらって言っていたけどな」とテウタ女王の真意など知らぬといった風に肩を竦めるだけでしたが、それだけで判りました。

エテメンアンキに対抗できるであろう戦力である聖王のゆりかご。そのゆりかごを起動できるのが私オリヴィエ。帰還させて聖王のゆりかごを起動されては困る。だからここで私を討っておきたい。おそらくそれがテウタ女王の真意なのでしょう。

「随分と馬鹿にされてますよね。オリヴィエ様と私とクラウス殿下を討つために派遣されたのが、お前1人とは」

「俺っちだけで十分だって思われたんじゃないのか？」

「馬鹿を言う、この雑魚が」

リサとゼフォンがキッと睨み合い、そして「あ〝あ〝？」と少しばかり汚い声で見上げるような睨みをし合う。リサが「オーディンさんの標的だけど、もう我慢なりません！　やっぱバラバラに斬り刻んでくれる！」と叫び、ゼフォンは「ガタガタ言ってないでとっとと殺されろ！」と叫び返す。仕方ありません。当初の予定通りこの

場でゼフォン・エグリゴリを討たせていただきましょう。

「光牙烈閃刃（リッター・ネーメズィス）！」

リサが振り降ろした"キルシュブリューテ"より放たれるのは剣状の砲撃。滅亡の危機に瀕したベルカを救った英雄として名を残すフライハイト家の御先祖・シャルロッテ・フライハイト様が編み出したとされる魔導の1つ。桃色に輝く剣状砲撃はまっすぐゼフォンへと向かい、

――守護岩隆壁（マオアー・シルト）――

しかし彼の前に隆起した岩壁によって完全に防御されてしまった。防御力は確かに並ではないですね。ですが防御力だけでこの戦乱の時代を勝ち抜けるほど、世界は甘くはありません。

「リサ、時間はかけられないから、アレ行きます！」

「え？・・・あ、はいっ！」

――電光石火――

――閃駆――

「なんだか知らねぇけど、土石系のエグリゴリ相手に、もう2度と打撃が通じると思わないことだ！」

――岩衝鉄破（フェルゼン・ベルク）――

接近途中に突き出されてきた岩石の剣山を紙一重で回避しつつゼフォンへと最接近。リサは"キルシュブリューテ"のカートリッジを数発連続ロードし、準備万端。一手一手の攻撃で討てないのであれば、数で討つまでです。岩石の大剣を再び作り出したゼフォンへ、

――雷牙閃衝刃（ブリッツ・ランツェ）――

雷撃を纏わせた"キルシュブリューテ"の刺突を繰り出すリサ。咄嗟に構えた大剣で直撃を免れたゼフォンでしたが、遅れて放たれた雷撃の槍が大剣を貫きゼフォンを強襲。動きを僅かに止めたその隙に、私はゼフォンの背後へ回り込んで首に腕を回し、「リサ！」そう合図を出しながら背負い投げの要領で彼を宙へ放り投げ、間髪入れずに背部を蹴り上げさらに宙へ跳ね上げる。

「オリヴィエ様！」

そしてリサと共に飛び上がる。

――法陣結界――

私たち3人を覆い囲うように展開されたいくつもの魔法陣による檻・法陣結界。これもまたシャルロッテ様が考案なされた魔導です。相手にとって魔法陣は檻となり、術者側にとっては全方位の足場となる、空を飛べない者に最大限の恩恵となる結界です。さぁ参りましょう。継承階位は低くとも聖王女たる私オリヴィエと、剣姫と謳

われる騎士リサの協演です。

「「はぁぁあああああああッ！」」

――莫逆之友（ばくぎゃくのとも）――

足場となる魔法陣から、中央に浮かせているゼフォンへ私とリサの連携攻撃を行う。私は電光石火を連続で行いながら打撃を、リサは閃駆を連続で行いながら斬撃を繰り出し、ゼフォンに反撃の機会を与えないように連撃を行い続けます。

幼い頃より私の騎士、幼馴染であるリサと共に、自由に動かない腕ながらも磨いてきた武技と剣技、その連携による敵騎討伐・莫逆之友。ですが、さすが防御力を自慢するだけあって、なかなか致命打を与える事が出来ません。そしてついに「いつまでも好き勝手してんなよガキども！」ゼフォンからの反撃が来ました。

――岩衝鉄破（フェルゼン・ベルク）――

法陣結界の真下から岩石の剣山が突き出し、下方に位置する魔法陣４枚を砕きましたが、剣山の間にまた魔法陣が展開されます。術者が解放しない限り発生し続ける効果を持っているからです。剣山の上に降り立とうとしていたゼフォンの側面に在る魔法陣へと移動。その足場とした魔法陣より電光石火でゼフォンへ接近を試みます。

「見えてんだ――ぁが？！」

私の接近に対し迎撃行動に入ろうとしていたゼフォンが仰け反りま

した。彼の背後には、人体急所の1つである頸椎に"キルシュブリューテ"の一撃を叩き込んでいるリサの姿が。おそらく機械の体であるゼフォンにとっては急所ではないかもしれませんが、生まれた隙は確か。

（この一撃で討たなければ、面倒な事になりそうですね）

――意気軒昂――

私は今まで何故かテウタ女王に見られているような錯覚を得てしまっていた所為で、手を拱いていました。もしそれが錯覚ではなく事実であれば、あまり手の内を晒したくないと思っていたから。ですが、もうそうも言っていられません。これ以上イリュリアに留まると、テウタ女王が砲撃で私たちを討とうと考えるかもしれないですから。

聖王のゆりかごの起動を恐れているであろう今、最悪その手段を採る可能性も捨てきれません。自身に設けた魔力制限を一段階解放。リサを大剣で払い飛ばしたゼフォンは「潰れてしまいな！」真正面から迫る私へと大剣を振り降ろします。

「いいえ。潰れるのはあなたです！」

――　一意専心　――

防御に用いてた魔力をも攻撃魔力へと転換し右拳に付加、その一撃でゼフォンの大剣を砕き、そしてそのまま彼の腹部へ打ち入れる。右拳から伝わって来る破壊の感触。耳に届く破砕の音、ゼフォンの

息を呑む音。視界に収まるのは機械部品を撒き散らすゼフォンの体。間髪入れずに魔力を今度は右足へ集中させ、倒れ込もうとしているゼフォンの胸部へ向け打ち落とします。

――砂塵岩龍旋（ヴィントホーゼ・ブレッヒェン）――

ですがゼフォンを覆い隠す様に発生した砂塵の竜巻に拒まれてしまいました。その竜巻は法陣結界すべてを砕き、私とリサを大きく吹き飛ばす。

「神器王に会うまで解放するなって言われてたけどさ、もういいよな、あんたらを殺すのが元々の目的だし」

ゼフォンの殺意に満ちた声と共に、彼の魔力量がグッと跳ね上がったのが肌で感じ取れました。今ので決めきれなかったのは痛いですね。傍に来たリサが「オリヴィエ様！　お怪我は！？」と心配してくれて、私は「ご覧のとおり何ともないですよ」と笑みで応じる。

「あんたら、苦しまずに死ねるなんて思わないでくれよ！」

――地竜刃砕断（ボーデン・ドラッヘ）――

竜巻より飛び出してきたのは、まるで龍の背ビレのような岩石の波。私たちは左右に跳び退いて回避を行い――回避した場所を踏みしめた時、

――蟻地獄乃喰渦（アマイゼンレーヴェ）――

「っ！」「なっ・・・！」

足元の地面がサラサラな砂と化し、私を引き摺り込んでいく。これは「アリジゴク！」岩石の波の向こう側からリサの声が。リサの言うとおり足元に広がるすり鉢状の渦は間違いなくアリジゴク。足を取られている今、攻撃を受けるのは非常に好ましくないですね。魔力を拳に集中、アリジゴクへ打ち落とし、派手に爆散させる。動きで逃れられないならば破壊するまでです。

――破岩砲弾（コメート・フェルス）――

砂塵が舞う中、岩塊が飛来。アリジゴクを吹き飛ばして脱出した直後でまだ足が砂に取られている中、回避は不可能ですから、直撃する軌道の岩塊のみを拳打で打ち払う。しかしなかなか途切れず、さらには、

――岩衝鉄破（フェルゼン・ベルク）――

足元より突き出してきた岩石の剣山。咄嗟に突き出してくる事が察知できたので回避できました。そんな中でも飛来してくる岩塊を迎撃。勢いが徐々に失っていっている時、『オリヴィエ様・・ご無事ですか・・・？』リサからの思念通話。

『私は無事。リサは大丈夫？』

『オリヴィエ様の・・騎士です・・・から、もちろん問題ないで・

・す――って言いたかった・・のですが・・・申し訳ありません・・・』

『リサ・・・？』

砂塵も岩塊の飛来も止み、視界が晴れて現状が判るようになる。

「・・・リサ・・・？」

砕けた体を岩石で応急処置されているゼフォンに、頭を鷲掴みにされて宙に持ち上げられているリサの姿が真っ先に映り込んだ。

リサは足が地面に付いていない事で四肢をダラリと垂れ下げており、指先や爪先、騎士甲冑の裾から赤い液体がポタポタと滴り落ちて地面を濡らしていて・・・。そして彼女の武装の"キルシュブリューテ"は、持ち主であるリサのお腹に突き刺さっていた。

「もうちょい待ってくれ、あと少しで死ぬから」

ゼフォンのその一言が頭の中に浸透し、湧き上がる怒りが私の身を焦がしていく。

「私の大切なリサを・・・」

――電光石火――

「今すぐに放しなさい！」

ゼフォンへ最接近。リサの頭を鷲掴んでいる左手首を掴み取って締め上げ、それでもリサを放さないため、飛び上がって前腕に跳び膝蹴りを繰り出してグシャッとへし折り、その隙にリサを抱えて高速離脱。"キルシュブリューテ"が抜けないように注意して横たえ、「しっかりしてリサ！」と何度も呼びかける。これほどまでに酷い怪我を負っているにも拘らず、リサは意識を手放すことなく『もうしわけ・・ありませ・・・』謝ろうとしてくる。

「こんな時くらいは自身のことを考えて！」

出血量が酷すぎる。これではそう時を置かずしてリサは・・・。今すぐにお医者様――オーディン先生にお診せしなければ。ですがその前に、どうしても成さなければならない事がある。リサに「もうしばらく耐えて」と耳元に告げ、立ち上ってゼフォンをキッと見据える。離脱を許すようなゼフォンではないでしょう。ですから・・・

「すぐに潰させていただきます・・・！」

――電光石火――

高速移動でゼフォンへと最接近。この者が反応しきる前に、真正面から拳打を繰り出す。しかし先ほどまでなら確実に捉えていた一撃を、首を反らして容易く回避したゼフォン。反応速度が上がっているようです。間髪入れずにすれ違いざまに回し蹴りを繰り出そうとし、「え・・・？」目前に飛び込んできた何か――岩塊を、裏拳で払い除けたその僅かな隙に、ゼフォンの岩石の剣が飛来してきまし

た。

――聖王の鎧――

ですが聖王家の血統者としての能力が発動し、大剣は私に突き刺さる前で瓦解しました。聖王の鎧。遺伝子レベルで所有している防衛能力。私の意志とは無関係に発動するためにあまり頼る事の出来ない能力ですが、今回に限れば有ってよかったです。さぁ攻守交代です。リサに与えた苦痛、そのすべてを返させてもらいます。

「面倒な防衛機能を持ってんのな・・・！」

――岩衝鉄破（フェルゼン・ベルク）――

「望んで得た能力ではありませんが・・・・！」

――狂瀾怒濤――

地面を踏みつけて地割れを引き起こし、隆起した地面や跳ね上がった岩石で防衛――でなく、隆起したそれらに拳打と蹴打を打ちこんで破砕し、ゼフォンの岩塊攻撃と同様、あの者へ飛来させる攻撃へと利用します。私とゼフォンの間で岩塊同士が衝突、相殺し合う数ある岩塊の中を突っ切る。

「撼天動地（かんてんどうち）！！」

ゼフォンの近くで地面を殴りつけて四方八方に亀裂を発生させ、亀

裂から魔力流を噴き上げさせます。噴き上がるのは魔力だけでなく破砕された瓦礫もですから、純粋な魔力攻撃と物理攻撃両方となり、堅いだけのゼフォンにも通用するはず。案の定、「ぐおお！？」ゼフォンは魔力流に呑み込まれて宙へと弾き飛ばされます。そこを追撃する。宙を舞う幾つもの瓦礫を足場としてゼフォンの元へと駆け上がり、

「あああああああああああああああッ！！！！」

瓦礫に着地したゼフォンと目が合い、あと少しの距離と言うところで、

「一気に決めさせてもらうぜ！」

――堕天使化――

「ぅぐ・・・！？」

ゼフォンから放たれる異質な魔力に弾き飛ばされてしまい、残念ながら後退を強いられる事に。ふと耳に届く鈴のような音が「オーディン先生から頂いた腕輪から・・・？」聞こえてきました。鳴動している腕輪から、ゼフォンから発せられる妙な力と同じものが感じ取れます。

いえ、以前より感じ取っているものです。オーディン先生と初めてお逢いしたときから。よくは判りませんが、「今はリサを救う事だけを考えます！」瓦礫と共に地面へ落ちたゼフォンへ、

「破ッ！」

――驚浪雷奔（けいろうらいほん）――

前方に突き出した拳打より人間大の魔力衝撃波を放ち、そのあとに続くように疾走してゼフォンへ接近。衝撃波の行く手を遮るかのように並び立つ瓦礫の山を吹き飛ばし、瓦礫もろとも殺到させます。ゼフォンは「今の俺に、あんたらの魔導は一切通じねぇんだよ！」と意味深な事を言い、避けようともせずにいましたが、

「がはっ！？　なぜ、ぶごっ、神秘を、ごふっ、内包し、ぶぐっ！」

瓦礫も衝撃波もまともに通じましたけど・・・。とにかく訳が解らないとでも言った風に目を白黒させているゼフォンへ肉薄し「これで、終わりです！」右の手の平に魔力の渦を発生させ、

――七花八裂――

よろけていたゼフォンの胸部へ掌底一閃。渦巻いていた魔力を打撃に合わせて体内へ打ち込み（人体ではないですから出来るかどうかは賭けでしたが）、そのままの勢いで突き進み、後方に在った瓦礫へ叩き付けてさらに攻撃の魔力を押し流します。

「エグリゴリが・・・たかが、人間に・・・負けるぅぅぅーーーーーッ！？」

ゼフォンはそう断末魔を上げ、粉々に爆散しました。爆散した機械

部品が、聖王の鎧に弾かれ散り散りに飛んで行きます。それらにはもう目もくれず、「リサ！」私はリサの元へ駆け寄ります。途中でゼフォンの首が落ちてきましたが、行く手だったので邪魔でしたから裏拳で粉砕。

「リサ！　死なないで！　リサ！」

ゼフォンを討つのに時間をかけ過ぎた。リサはもう意識を手放し、まるで死者のように横たわるだけ。でも生きてくれている。ですが今すぐに治療を施さなければ、確実に命を落とすほどに危険な状態。応急処置が出来ればいいのですが生憎と私はその方面には疎いせいで、体温が少しずつ低下していくさまを黙って見ている事しか出来ず。自分の無力さに泣き喚きたいです。

「っ！　オーディン先生の魔導が施されたこの腕輪なら！」

ふと鳴動していた腕輪に目が行き、急いでリサの腕にはめ、祈るようにリサと腕輪を見守る。すると腕輪が再び鳴動し、リサの横たわる地面に見たことのない魔法陣を発生させました。また感じる異質な魔力。でもきっとこれは「オーディン先生のお力」だと思います。これで時間は稼げるはず。なら、あとはオーディン先生に連絡が出来れば。一か八か、思念通話を繋げてみようと試みようとした時、「オリヴィエ王女殿下！」空から私の名を呼ぶ声。振り仰げば、「あぁ、神様・・・！」そう漏らさずにはいられないほどに願ったお方――オーディン先生がいらっしゃいました。

「リサを、私の友人を助けて下さい！」

王女という権威を脱ぎ捨て、私は1人の少女として、リサの友人として、オーディン先生に願いました。

。―。―。―。―。

――エテメンアンキ・玉座の間

『よろしかったのですか？　陛下。魔神オーディンとオリヴィエ王女殿下が合流し、シュトゥラへと帰還してしまいましたが』

「仕方ありませんよグレゴール。・・・・ゼフォンが討たれるとは想定外ですから。ゼフォンはガーデンベルグ様が仰っていた神秘なる"力"を搭載していただけに。オリヴィエ王女殿下にも神秘の恩恵があるのでしょうか・・・？」

玉座に腰掛け、オリヴィエとゼフォンの戦闘を観戦していたテウタが嘆息する。グレゴールは『魔神によって、障害のある両腕を治していただいた、という情報があります』と報告する。

「神秘を内包した魔力で発動する魔術で治してもらった事で、オリヴィエ王女殿下に神秘の恩恵が、という事でしょうか・・・。だとすれば少々厄介ですね。やはりエテメンアンキの砲撃に屈していただくしかないようです」

テウタは「それかもしくは・・・」と前置きし、玉座の傍に控えている1人の成人女性に目をやった。テウタの寂しげな灰色の髪とは

違い、その女性の髪は派手な真紅色で、ポニーテールにしている。そして瞳の色はテウタと同じ翠色。服装は動きやすさを追求するためか男装だ。

「バンヘルド様とグランフェリア様のお力をお借りして完成させた、私の融合騎・マラークで直接打ち倒すか、ですね」

テウタはマラークとの融合や戦闘を想像し、「やはり砲撃カレドヴルフでの支配ではなく、直接敵国を侵略しましょうか」と騎士団戦を行おうかと考え始めた。それを窘めるのが『いけません、陛下』騎士団総長グレゴールだ。

『その策は最後の最後まで取っておくべきです。まずは明日の正午までお待ちください。もし各国が降伏せずに戦いの道を選んだ時、カレドヴルフで力の差を歴然とさせ、それでも反抗するのであれば、騎士団戦で直接侵略すればよいのです』

「・・・・カレドヴルフの爆撃の前に、最後まであの方々は抗うでしょうか・・・？」

『魔神オーディンと、あの者が従える守護騎士ヴォルケンリッター。その2つの戦力を起点として、最後まで抗うでしょうな』

「なるほど。そうですね、そうなれば私はとても満足です。オリヴィエ王女殿下の武技もある程度見る事が出来ましたしね」

テウタとグレゴールは、ベルカ統一戦争を盤上のゲームのように捉

え、それはもう楽しそうに今後の展開を語り合った。

Ｍｙｔｈ２３エリーゼ・フォン・シュテルンベルク～Ｉｃｈ　ｍａｇ　ｄｉｃＨ～

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

ミナレットを無事――とは言い難いが破壊する事に成功。拉致されていたアンナも救出にも成功。そしてイリュリア騎士団の第三位、ブラッディアの末裔であるウルリケを撃破。だがその代償にシグナム達が結構なダメージを負ってしまい、連戦など出来ない状況となった。が、元より一度ヴレデンへと帰還するつもりだった。アンナを出来るだけ早くエリーゼ達のもとへ帰してあげたいからな。自力で帰還できるまでの治療を負傷していたシグナムとヴィータに施し、シュトゥラはヴレデンへ飛んでの帰還途中、

「・・・・ん？　なっ・・・オーディン！　アレを・・・！」

シュリエルの視線の先、天高くそびえ立つ白い塔が突如としてその威容を現していた。シグナムがその塔を見つつ「まさかアレがエテメンアンキ、なのでしょうか・・・？」と、おそらく私に対して言っているのだと思い、「間違いないだろうな」と応じる。
方角はイリュリアの王都だ。兵器エテメンアンキは王都に在ると言われていたからな。それにしても高いな。私の出身世界・魔道世界アースガルドの四大陸を支えていた塔"ユグドラシル"以上だ。もしアレを破壊するとなると、ミナレットなど比べるまでもなく難しいな。

「あれ？　今、空が光りまし――」

――カレドヴルフ――

シャマルの声が、空より振ってきた深紅に光り輝く特大（ミナレットのカリブルヌスよりさらに大きい）の砲撃の飛来音に掻き消された。天上より落ちた来た８本の砲撃は、無情にも着弾してしまった。着弾点の１つであるシュトゥラはディトマルシェン領の方角から爆炎と黒煙が上った。遅れてここまで届く着弾音と爆発音。言葉がない、とはこういう事なんだろうな。

人間だった２９年間にも、"界律の守護神テスタメント"となってからの２万年にも、戦争なんて慣れてしまうほど体験してきた。だからあのような戦禍も見慣れている。だと言うのにショックだった。ここまで深く関わったベルカだ。情も当然ある。

「なんなのだ、アレは・・・・！」

「酷い・・・。いくらなんでもやり過ぎよ」

「さすがに看過できないな。・・・・グラオベン・オルデン全騎！」

「「「「はい！」」」」「おう！」「「うん！」」」

凄惨な光景に絶句していたみんなに呼びかけると、無理にでも気を取り直して私に向き直って、それぞれ応じてくれた。私の言葉を待っているみんなに「ここで別れる。全騎はこのままシュトゥラへ帰還だ」と指示を出す。すると、みんなは今しがた起こったエテメン

アンキの砲撃の惨劇とは別の意味で絶句した。

「待ってください！　お一人じゃ危険すぎますっ」

「そんなの嫌だっ、あたし達も一緒に行く！」

「アギトお姉ちゃんの言うとおりだよっ」

私の指示にシャマルとアギトとアイリが真っ先に反論してきた。

「・・・判りました。満足に戦い抜けるだけの魔力がない以上、我らは足手まといになるでしょう」

「・・・それに、アンナを送り届ける、という役目もある」

シグナムとシュリエルが努めて冷静に言い、「シャマル、アギト、アイリ。ここは主の命に従うぞ」ザフィーラが反論した3人を諭すようにそう言った。続いてヴィータも「しゃあねぇ。今のあたしら、オーディンを護れるだけの力も残ってねぇし」と渋々だが折れてくれた。アギトとシャマルとアイリは黙り、そして小さくコクリと頷いた。私の指示に従ってくれるようだ。

それを確認してエテメンアンキへと向き直って仰ぎ見る。うっすらとだが頂上の建築構成が見える。エテメンアンキは、例えるなら開いた傘の骨組みのような形をしていた。どうやって破壊するか、そして待ち構えているであろう防衛戦力を、どれだけ魔力消費をせずに潰すか思案しているところに、

『ベルカに生きる全ての民よ、聴いてください。私は、イリュリアの女王にして、天地統治塔エテメンアンキを統べる天界王テウタ・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルトです』

少女の――テウタの声が、エテメンアンキより発せられた。

（しかしそれにしても"フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルト"か）

騎士世界レーベンヴェルトの王の血筋が絶えずに残っていたのか。これまでファーストネームしか聞いていなかったし、驚いてしまった。そのテウタから声明が出た。簡潔にまとめると、武装解除、騎士団解体、その上で降伏し、イリュリアの傘下に下れ、というものだ。

でなければ、現在イリュリアと敵対している筆頭シュトゥラとバルト三国を含む8ヵ国に、エテメンアンキの砲撃、カレドヴルフを先と同じように撃ち込む、と。しかもテウタは今のところ参戦していない国々にも脅しをかけた。敵になれば、8ヵ国と同様に撃ち込むぞ、と。

「何と卑劣な。あのようなモノを見せられては、参戦する気力も、戦いを続ける意志も挫かれてしまう」

「ミナレット以上に戦争に持ち出しちゃいけねぇもんなだな、アレ」

シグナムとヴィータの怒りを完全に買ってしまっているテウタ。すぐにでも破壊しなければ、と判断した私は、エテメンアンキへ向か

おうとした。が、テウタは最後に、明日の正午までは降伏勧告の返答を待ち、そしてそれまではイリュリア国内に入るな、それが破られれば問答無用でカレドヴルフを撃つ――こう告げた。

「オーディン、どうなさいますか？　このままイリュリア国内に留まれば、カレドヴルフが撃たれてしまいます」

シュリエルにそう訊かれ、みんなの視線を一手に受ける。一撃でエテメンアンキを破壊するとなれば、おそらく真技が必要になるだろう。だが、２つある私の真技は発動できない。ともに使用魔力がＥＸランクと必要だからだ。しかし今の私に扱える魔力は最高でＳＳＳランク。４倍近く足りない。

必要魔力量を限定的に少なくすれば、片方の真技は扱えるかもしれないが、それでは威力が足りない。つまり今この場でエテメンアンキを単独で、その上で反撃を許さないように一撃破壊する方法はない。だから・・・

「全騎、一時退却だ。各国の王たちの返答が出るまでは、迂闊に動けない」

退却を決める。各々「ヤヴォール」と応じ、最後にエテメンアンキを睨み付けるように見、私に続いてシュトゥラへと飛行再開、一路エリーゼ達の待つヴレデンへ向かう。国境近くにまで戻って来て、もう少しでシュトゥラ国内に入るというところで、「アレは・・・クラウス・・・？」眼下に広がる平原に、クラウスと一個騎士団の姿があった。彼らの姿を見て、「ん？」まず１つの疑問が生まれた。それを確かめるために念話でみんなに『先に行ってくれ』と指示を

出し私1人だけ降下、クラウス達の元へ向かう。

「クラウス！」

「っ、オーディンさん！　よかった、ちょうど連絡を取りたかったのです！」

降り立ったと同時にクラウスが駆け寄って来て、私の疑問であったオリヴィエとリサが居ない理由を語った。テウタの声明に従って退却を始めた時、ゼフォン・エグリゴリが襲撃してきたのだという。この瞬間にすぐにでも破壊しに行きたくなったが、クラウスの話を最後まで聞かなければ、と思い留まる。

「オリヴィエと騎士リサは僕たちを逃がすための殿となり、今なお戦い続けているはずです。ですから――」

「話は判った。任せてくれ、クラウス。今すぐ助勢へ向かう」

「お願いします」

クラウス達と別れ、すぐにイリュリアへと引き返す。そう間もなく、「これは、神秘！」この時代で扱う者が限定される"力"――神秘を感じ取った。ゼフォンが堕天使化したに違いない。そうなれば、いくらオリヴィエであろうと勝ち目はない。

――神秘を打倒するにはそれ以上の神秘を以ってあたるべし――

それこそが魔術を扱う者の鉄則であり、当時の世界の真理でもある。魔術を扱う者と戦うには必須である神秘は、現代の人間の魔力には宿っていない。ゆえにオリヴィエでもゼフォンに勝つ事は出来ない。当然、私の魔力にも基本的に神秘が宿っているが、この体を構成するのは神秘であり魔力であり概念だ。だから"堕天使エグリゴリ"との戦い以外は、現代の神秘の無い魔力と同じ状態にしている。そうなると現代の騎士の攻撃でも私に通用してしまうが、神秘を消費して消滅するよりかはマシだ。

（・・・ん？・・・なんだ・・・？）

飛行速度を上げようとし、ある事に気付く。神秘の反応がもう1つ発生している。しかも「私の神秘と同率・・・？」だった。魔術師が発する魔力が有する神秘の波も、指紋のように1人1人違う。とは言え、その違いが判別できるのは自分のモノか他人のモノかだけで、アレはこの人、ソレはあの人というように正確に誰のモノかはさっぱりだ。

「一体どうし――って、あぁファルマコ・ネライダか」

オリヴィエの両腕の治療の助けになると思って差し上げた腕輪型神器・ファルマコ・ネライダ。私の神器制作能力によって創造した神器。当然私の神秘を発っしてもおかしくないんだが、ここまでハッキリと強く発するとは予想外だ。とにかく「急がなければ」飛行速度を上げ、オリヴィエとリサ、破壊対象のゼフォンの居る地点へ向かった。そして私は遠目にだったが、確かにこの目で見た。オリヴィエがゼフォンを破壊したその光景を。

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒エリーゼ†††

エテメンアンキと呼ばれる、イリュリア王都に現れた天を衝く塔から放たれた砲撃カレドヴルフによって起きた混乱も、腹立たしい事に元凶だったイリュリア女王テウタの声明のおかげでようやく収束した。収束はしたけど、別の問題が生まれた。イリュリアに降伏しないと、またカレドヴルフを撃つって。あんな光景を見せられたら、一般人の心はもう屈する事しか選択できなくなっちゃう。

「前途多難だなぁ～・・あいたた・・・」

「大丈夫エリーゼ？　結構強く殴られたよ・・・？」

「うん、大丈夫。冷やしておけば治るよ」

わたしの心配をしてくれたモニカに、そう微笑みを向ける。カレドヴルフが撃ち込まれたディトマルシェン領は、ここラキシュ領から結構離れているけど、それでも空に立ち上った爆炎と黒煙はハッキリと目視できた。だからヴレデンの街の人たちが死の恐怖に襲われて、一斉に街の中を逃げ惑い暴れ出した。

駐屯している騎士団の人たちや、戦争を肌で知ってしまった事で逆に冷静になれたアムルのみんなと一緒にそれを収めようとしたんだけど。荒れる人ごみの中でもみくちゃにされている時、偶然振り下ろされた男性の拳がわたしのこめかみに当たっちゃった。そして今、わたしはちょうど休める公園で濡らしたハンカチで冷してる。

「モニカ。ルファは？」

「暴動を押さえるのに負傷したアムルの人たちを診てるよ。エリーゼみたいに偶然怪我した人、結構いるんだよ」

「あ、ごめん。わたしはもういいから、モニカもルファの手伝いに行ってあげて」

軽傷なわたしに付きっきりにさせるのは申し訳なくて、だから気を遣って言ったんだけど。でもモニカは「ううん。今はエリーゼを1人にしちゃいけないって、ルファと決めたから♪」ニコッ　って、とても可愛くて、そして今まで見せた事のない真剣さが滲み出た笑顔を見せた。その心遣いが嬉しくて、「ありがとう」でもちょっと申し訳なくて「ごめんね？」だ。

モニカはフルフルと首を横に振って、歳が2つしか変わらないのに明らかにわたしと大差のある豊満な胸（いったい何を食べたらそんなに育つのか教えてほしい）にわたしの頭を抱き寄せた。蘇る記憶。うんと小さかった頃、母様にもこうして胸に抱いて（母様も大きかったんだけどなぁ～。なんでわたしだけ・・・ｏｒｚ）もらったんだよね。

「エリーゼ！　モニカ！」

ふにふにふわふわだからウトウトしだしていた時、すごい剣幕で公園に全力疾走して来たルファ。あまりの眼力に「ごめんなさい！？」つい居住まい正して謝ってしまう。モニカはそんなわたしを見て「あはははっ！」大笑いするんだけど、なぜ笑う？　滑稽に見えるの？

「帰ってきた！　帰ってきたの！」

「帰ってきたって・・・・オーディンさんが！？」

真っ先に思い浮かんだのがオーディンさん、そしてシグナムさん達グラオベン・オルデン。するとルファは今にでも泣きそうな顔になって首を横に振った後、「アンナが帰ってきた！」って頭の中に浸透して、理解できるまで時間がかかってしまうような事を言った。そしてハッキリと理解して、「アンナが・・・帰ってきた・・・？」ポロポロ涙が零れた。モニカも「ほ、ホントに・・？」って立ち上って、ルファに訊き返した。わたしも何度も頷く。

「うん、うんっ！　アギトやシグナムさん達と一緒に帰って来たっ！」

もう決壊した川の水のように涙が溢れ出して、モニカと一緒にルファに駆け寄って、3人で抱き合って喜び合う。そして喜び合うのも切り上げて、すぐにアンナが運び込まれたっていう医院（仮）へ走る。もう生きて逢えないって思って、でもオーディンさんやオリヴィエ聖王女殿下が助けてくれるって約束してくれて、それを信じて待っていた。まさかこんなに早く逢えるなんて。涙で視界がぐにゃぐにゃだけど、でも転ばないように、必死に走る。

「・・・あっ、アギト！　シグナムさんっ、ヴィータっ、シャマルさんっ、ザフィーラさんっ、シュリエルさんっ、アイリっ！」

医院（仮）の前に居るアギト達に大きく手を振る。

（あれ？　オーディンさんが・・・居ない・・・？）

きっとヴレデンのどこかで誰かと大切な話――会議をしているんだ・・・うん、きっとそうだ。だから今は「アンナを助けてくれてありがとうございます！」モニカとルファと一緒に深く頭を下げる。

「アンナを救ったのはオーディンです。我々は、何も・・・」

シグナムさんがそう言った。オーディンさん、本当に約束を守ってくれたんだ。感謝してもしきれない。それに「オーディンさん・・・」への想いもさらに強く募っていく。笑顔を思い浮かべるたびに胸がポカポカするし、声を思い出すたびに心がドキドキする。

「アンナはここに来るまでにオーディンとシャマルにすでに診てもらっているから、体の問題については安心してくれていいです」

「ええ。疲労で眠っているだけだから、そう時間を置かずに目覚めるはずよ」

シュリエルさんとシャマルさんの話に、すべての心配事が消えた。疑問はまだあるけど。どうしてアンナは王都に居なかったのか、とか。ヴィータがわたし達の背中をポンって叩いて「顔見てこいよ。実際に見た方が安心できるだろ？」って送り出そうとしてくれた。わたし達は最後にもう一度「ありがとうございましたっ！」お礼を言って、医院（仮）のアンナが居る部屋へ向かう。

「・・・オーディンさん、居なかったね」

「戻ってきたの、クラウス殿下たちとグラオベン・オルデンのみんなだけだったから」

「えっ？　それじゃあオリヴィエ聖王女殿下や騎士リサさんは・・・？」

「ううん。アンナとみんなの姿を見てすぐに2人に教えに行ったから、何も聞いてない」

「でもここに帰って来るまでは一緒だったみたいだし、たぶんすぐに帰って来るんじゃない？」

モニカが気楽に言う。でもそれはオーディンさんを信じているから。だからわたしとルファも「うん」って首肯。きっとすぐに帰ってくる、そう信じて。医院（仮）内を歩いて、「この部屋だ」アンナの名前が記された名札の付いた一室の扉の前で立ち止まる。わたしが代表として扉をノック・・・返事はなし。そろ～りと扉を少し開けてみると「アンナ・・・！」寝台の上で眠っているアンナが見えた。バッと扉を開けて室内へ。アンナの病室は狭いけど個室で、他の患者様に迷惑を掛けずに居座れそう。

「アンナにはちょっとごめんなさいだけど・・・」

布団から右手を出して、わたし達はその手に自分の手を重ねる。アンナは確かにここに、触れ合えるところに居る。夢じゃない、幻じ

ゃない、現実だ。そして3人一緒に「おかえり」アンナを迎え入れる。起きた時にもう一度言わないとね。
それからちょっとの間、アンナを見守って・・・「エリーゼ、オーディンさん達が帰って来てる」窓辺に居たルファが、アンナを気遣って声量を落として教えてくれた。早足で窓に駆け寄って外を見る。オーディンさんとオリヴィエ聖王女殿下、そして「騎士リサ・・？」だけは、オーディンさんに横抱きにされていた（っく、羨ましい）。

「ほら、行っておいでよエリーゼ。アンナは私とルファで見てるから」

「うん。オーディン先生に抱きついておいで」

「んなっ！？」

ルファの発言に顔が赤くなるのが判った。でも急いで駆け寄って行きたいのも事実で。モニカとルファが「ほら、早く」って送り出そうとしてくれる。アンナの横顔を見て、「ごめん、ちょっと行ってくるね」部屋を後にする。出来るだけ靴音が大きくならないように注意して走り、医院から出る。
きょろきょろオーディンさんの姿を走って捜して、角を曲がるオーディンさんの特徴である銀髪が見えた。急いで追いかけて、「オーディンさん！」背中に呼びかける。オーディンさんは「エリーゼ？」振り返って、わたしの名前を呼んでくれた。もう止まらない、止まりたくない衝動に駆られたわたしは勢いよく「オーディンさん！」の胸に飛び込んだ。

「おっと」

抱き止めてくれたオーディンさんの腕の中で走って乱れた息を整えようとするけど、ダメだ、緊張から収まるどころか激しくなる。さすがにこれじゃわたしの心身が持たないと判断してオーディンさんから離れる。深呼吸を繰り返して、見苦しくないように努めて笑顔をつくる。

「えぅ、えっと、オ、オーディンさんに、ど、どうしてもお礼を言いたくて！　あのっ、アンナを助けて下さって、本当にありがとうございましたっ！」

「ああ、どういたしまして。エリーゼも大変だったそうじゃないか。さっき会ったターニャから聞いた。こめかみ、大丈夫か？」

オーディンさんはそう言ってわたしの頬に触れて、少し腫れてるこめかみを覗いて来たから、「っ！」ドキッとなる。オーディンさん、顔が近いです。ちょっと困ります、けど嬉しかったり。収まりそうだった心臓がまたバクバクだ。

そして「モニカやルファの魔導で治してもらわなかったのか？」と訊かれて、「わたしのは軽傷ですから」と答えた。だから無駄に魔力を消費させたくなかった。オーディンさんもそれを察してくれたようで「なら私が」って、指先でこめかみに触れてきた。

――水精（ネオナーレ）は癒しを司る――

微かな蒼い光に目を細める。少し残っていた痛みが引いていく。手

を放して「よし」満足そうに頷くオーディンさんの微笑みをまっすぐ見れない。嬉しさと恥ずかしさで頭の中がぐるぐるごちゃごちゃ。

「オーディン先生・・・！」

「オリヴィエ王女殿下」「オ、オリヴィエ王女殿下！？」

「あ、エリーゼ卿。ごきげんよう。オーディン先生、今よろしいですか？」

突然のオリヴィエ王女殿下の登場に面を食らって、わたしはあたふた慌てちゃう。オーディンさんは「すまないな、エリーゼ。またあとでな」そう言ってオリヴィエ王女殿下に向き直った。あ、もうオーディンさんの意識はわたしから外れて、オリヴィエ王女殿下へ完全に向いちゃった。まだ話したい事とか・・あっ――しまった、〝エグリゴリ〟の事を訊くのを忘れてた。俯いてしまっていた顔を上げて、「っ・・・」でも、もうお2人は居なかった。

「はぁ・・・戻ろう・・・」

しょんぼりしながら医院へ向かって歩き出す。胸が苦しい、不安でしょうがない。この嫌な気持ち・・・どうにかするには「オーディンさんに、やっぱりちゃんと訊かないと・・・！」手遅れになる前に。すぐに追いかける。

行き先はたぶん会議場にもなっているヴレデンの屋敷だ。そこに向かえばきっと合流できる。そう思って走って・・・「やっぱり・・・！」オーディンさん達はクラウス殿下とご一緒だった。オーディンさん

とオリヴィエ王女殿下とクラウス殿下は、屋敷の庭園の椅子に座って真剣な表情で話し合ってる。

（さすがにあの中に飛び込んでいけるだけの勇気はないよ・・・）

「――はい。ですからアウストラシアはザンクト＝オルフェンに、今後の事を話し合う場を設けるとの事です」

「そうか。しかし会議に集う国の代表って、国王直々なのか？」

「いえ。シュトゥラからの代表は僕だそうです。父デトレフ王の使者から聞きました。バルトは、ダールグリュン陛下自らが三国代表としてお越しになるそうです。他の国の代表は誰かは判りませんが、おそらく王族の誰かかと思います」

８ヵ国の代表による会議って、歴史的な大事件だっ。すごい事を耳にしちゃった・・・じゃなくて、これって立ち聞きしていていい話じゃないよね。でもいつオーディンさんとお話が出来るように待っていたいし。心の中で、ごめんなさい、と土下座で謝りながら、オーディンさん達の話が終わるのを待つ事にした。

「――日没まであと残り僅か・・・移動は夜になりますね」

「ええ。徹夜になりそうです。ですが明日の正午までに答えを出さなければ、我々８ヵ国だけに留まらず、他国まで潰されるかもしれません」

「そう考えた他国がイリュリアに下る可能性もまた捨てきれないのが悲しいがな」

「エテメンアンキの砲撃カレドヴルフを目の当たりにすれば、８ヵ国に付くよりイリュリアに付いた方がいいと思えても仕方がありませんね」

「そこのところは他国を信じるしかありません」

オーディンさん達に沈黙が満ちる。最初に沈黙を破ったのは「そこでなのですが、オーディンさんに僕たちに同行していただきたいのですが」と頼み込むクラウス殿下だった。ちょっと待ってもらえます？　それではオーディンさんと落ち着いてお話が出来ないのですが・・・。

「私を？　私のような者が同席してもいいのか？」

「ミナレットを単独で破壊できたとなれば、誰もがオーディンさんを認めるはずです。・・・・すいません、完全にオーディンさんを頼りにしてしまっています」

「こちらとしてもエグリゴリという異物を招き入れてすまない。だからクラウス、互いに利害が一致しているんだ、気にしないでくれ」

「そう言ってもらえると助かります。ではオーディンさん、すぐに出立しますから準備ができ次第、僕に声を掛けてください」

「ではオーディン先生、また後ほど。そして改めて、リサを救っていただきありがとうございました」

クラウス殿下とオリヴィエ王女殿下が屋敷の中に入って行った。今こそ好機。いざ「オーディ――」駆け出そうとした時に、「何やってんだエリーゼ？」すぐ傍から声を掛けられた。振り向いてみると・・・誰も居ない。「いやいや、わざとだろ」うん、わざと。目線を下に移すとわたしを見上げてるヴィータの呆れ顔が。

「オーディンさん！　お呼びですか・・・？」

「「マイスター！」」

あぁ、シャマルさんやアギトにアイリがオーディンさんの元へ。ううん、みんな揃っている中でもお話し出来る内容のはず。だから「オーディンさん、お話があります」わたしもオーディンさんの元へ。

「エリーゼ。・・・すまない、エリーゼ、今はちょっと。あとにしてもらえると助かる。みんな、聴いてくれ。これより私はアウストラシアへ向かう事になる」

オーディンさんはもうわたしを意識の外に置いて、グラオベン・オルデンのみんなと話し始めた。一歩下がって遠見で見守る事にする。オーディンさんの話を聴いたみんなは、オーディンさんに同行するって流れに。

「・・・むぅ、何人かをここの防衛に置いていきたい。出来れば志

願を」

「ならば我が残ります」

「えっと・・・それじゃあ私も。負傷者の治療が少し残ってますし」

「ザフィーラとシャマルか。せめてあと1人・・・・シュリエル、頼めるか？」

「えっ、あ、・・・はい、オーディンのご指示であれば」

しょんぼりするシュリエルさん。きっと今のわたしと同じ気持ちなんだ。寂しい。オーディンさんはシュリエルさんの気持ちを察したようで「頼りにしている」とシュリエルさんの頭を撫でた。ズキッ。心が軋む。わたしも見てよ、オーディンさん。お願いだよ・・・。

「はいっ」

「では。アギト、シグナム、ヴィータ、アイリ。私と共に来てくれ。シャマル、ザフィーラ、シュリエル。ここヴレデンへ残り、防衛に当たってくれ」

「「「

のある場所へ向かった。そして「待たせた、エリーゼ。話があるんだよな」オーディンさんがわたしのところへ歩いてきた。時間がない。でも訊きたいこと、その答えはすぐに出るのか判らないし、その答えに反発とかしてしまう自分が居るかもしれない。ううん、難しく考えない方がいい。今はただ・・・

「あの、オーディンさんがベルカに訪れた理由・・エ、エグリゴリ、が、その・・・イリュリア王都に居るって、オリヴィエ王女殿下に聞きました」

「そうか。確かに私の生きる目的、戦い続ける存在意義、エグリゴリの救済が、あと少しで叶おうとしている。偽者の1機はオリヴィエ王女殿下が破壊したが、あと1機存在しているし、オリジナルもおそらく何体か王都に居るはずだ。この好機を逃すわけにはいかない。だから・・・・」

オーディンさんがイリュリア王都へと目をやった。それはもうとても遠い目で。だから「あ・・・」気づく。オーディンさんの心はもうベルカから離れていく一歩手前だって。ダメだ、どうにかして引き止める方法を考えないと。ふと、ターニャが言っていた事を思い出す。

――ディレクトアがもし王都に向かう前に戻ってきたら、告白でも口付けでもして引き止めなさい――

「・・・・それじゃあエリーゼ。行って来るよ」

オーディンさんが踵を返して、屋敷の前で待ってるアギト達のところへ歩き出した。ハッとして「ま、まだいいですか！？」って呼び止めると、オーディンさんは少し困ったような顔をして振り向いた。

「オーディンさんは、ベルカに居るエグリゴリを救った後、本当にベルカを離れるんですか！？」

「それもオリヴィエ王女殿下から・・・？」

オーディンさんの問いに首肯する。それが不安でしょうがない。タ－ニャから、別にベルカを離れなくてもアムルを拠点にして捜索を続けるっていう選択肢があるって教えてくれた。オーディンさんは少し黙ってから、「一応、そのように考えている」と選んでほしくない選択肢を言った。

「・・まま・・・・このままアムルに、ベルカに残ってもいいじゃないですか！　世界間の転移移動に魔力が必要だって言うのであれば、わたしがいつでもどこでも供給しますっ！　なんならエグリゴリ捜索の旅に同行だってします。男爵の仕事は、帰ってから一気に済ませますからっ。お願いですから・・・ベルカから、アムルから、わたしから離れるなんて言わないでっ！」

子供のように駄々をこねているのは判ってる。それでも手放したくない男性（ひと）が居る。だからこそ最後まで諦めずにあがいて見せる。たった１６年しか生きていないわたしだけど、この想いだけは誰にも否定させない。

「はぁはぁはぁ・・・帰って来てください。わたしは待ってます。待ち続けます。帰って来ないっていうのなら追いかけます。追いかけ続けます。わたし、この1年にも満たない時間の中で、かなり悪い子になっちゃったんですよ？」

嫉妬を覚えた、やきもちを覚えた、独占欲に目覚めた、他にもいろいろ。オーディンさんと出逢う前、そんなものは何もなくて、ただひたすらに目標に向かって走っていた。その頃に比べれば、なんとなく良い子より悪い子になったかなって思う。

でもそれが嫌じゃない。きっと誰にでも生まれる思い。わたしはそれを得られた。まぁもうちょっと自制出来ればいいんだけど、もうどうでもいい。手に入れたいんだ。オーディンさんの心、想い、願い、祈り、望み、そのすべてを。でもどうか軽蔑しないでください。

「エリーゼ・・・しかし私は――」

オーディンさんに全力で駆け寄って胸の中に飛び込む。わたしが抱きついた勢いを殺そうと踏ん張る事で生まれた隙に、オーディンさんの首に手を回して、

「大好きですっ、オーディンさん！」

精一杯頑張ってオーディンさんの目を見ながら告白、そして唇を重ねる。オーディンさんとわたしのやり取りを黙って見守ってくれていたアギトは、

「あ？・・・・・ああああああああああああああッ！」

アイリは、

「へ？」

シグナムさんは、

「ほう」

ヴィータは、

「おおう」

それぞれの反応を見せた。唇を離して、真正面からオーディンさんの綺麗な紅と蒼の双眸をもう一度見詰める。あはは、困惑の色しかないよ。わたしの人生最大一大決心の告白と口づけへのドキドキは無いっぽい。ズキズキ心が痛む。オーディンさんにとってわたしは女じゃなくて、家族であり妹だって解ってるよ。だけどその関係を打ち砕いて修復するには"力"が必要だった、この告白と口づけっていうものが。

「今はオーディンさんに届かない想いでも、きっと必ず届けて見せます。そしていつかわたしを認めて求めてくれるように、行動を起こしちゃいますから♪　あ、逃げても無駄ですからね、絶対に逃がしませんから。ですからお覚悟のほどを　」

――乙女の祝福（クス・デア・ヒルフェ）――

もう一度オーディンさんの唇を奪う。今度は、魔力を供給する能力を発動するために。アギトが「またぁぁぁあああああああ！」って絶叫。今度はオーディンさんの為の口づけなんだからそう怒鳴らないでよ。オーディンさんの首に回していた両腕を戻して、自分の胸の上に手の平を添えて一歩二歩と後ろに下がる。

「わたしの想い、告白、決心を無かった事にしないでくださいね？
約束ですよ。・・・・よしっ。オーディンさん、いってらっしゃい。必ず勝って帰って来てください」

それだけを告げて、踵を返して門構えから逃げるように走り出る。背後ではオーディンさんに詰め寄ったアギトが何か言っていた気がするけど、もう遅いよ。さぁ告げたよ。わたしのすべてを。ここからが勝負だ。オーディンさんにわたしを好きになってもらうための。

（負けてやるもんか。絶対に勝つ、勝ってみせる！！）

「やったじゃん、エリーゼっ♪」

「ひゃうっ？」

いきなり背後から抱きつかれたからビックリした。振り向いてみれば、全快したターニャがニコニコ笑顔を見せていた。というか「さっきの、まさか見てた・・・？」そう訊いたらターニャは「バッチリ♪」それはもうキラキラ輝く笑みだった。そこから場所を移して、公園の椅子に2人並んで腰掛ける。

「にしても大胆だったね～。抱きついてた上に口づけ、そんでもって告白、さらに口づけ♪」

「っ！！」

今さらに恥ずかしくなって、顔を両手で覆って首を横に振りまくる。熱い、どうしようもなく顔も全身も熱くて堪らない。今、水を掛けられたら一瞬で蒸発させるほどに体温が上がってるかも。ターニャが「うわぁ、首まで真っ赤っかだ♪」面白そうに言う。ぅく、見世物じゃないぞっ。

「でもよくやったよ。うん、エリーゼは体格の起伏に乏しいけど、良い女だよ」

「良い女発言はありがとだけど、体の起伏とか余計だよ・・・！」

わたしはまだまだ成長する、してみせる。だから待っててて、オーディンさんっ。救いなのは、オーディンさんはただ大きければいいっていう思考じゃないこと。もうちょっと大きくなれば、それだけでいいはずだ、うん。

「・・・ディレクトアに、エリーゼの想いが届くといいね・・・」

「届けてみせるよ。どんな手を使ってでも、ね」

「ホント逞しくなっちゃって。応援するよ」

「うん。ありがとう、ターニャ」

それからわたしとターニャは、聖王家の収める国アウストラシアへ向けて飛び立つ戦船の艦影が見えなくなるまで見送った。オーディンさんはもちろん、アギト、シグナム、ヴィータ、アイリ。必ず帰って来てね。

「約束だよ」

空に向かって手を伸ばして、相手の居ない指切り。明日の正午、どういった形でイリュリアの提案に決着がつくのか判らない。それでも信じて、わたしは待とう。みんなの居場所として、何が起ころうとも。

Ｍｙｔｈ２４進撃の円卓に王たちは集う～Ｋｏｎｉｇｅ　ｄｅｓ　Ｒｕｎｄｅｎ　ＴｉｓｃｈｅＳ～

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

オーディンとあたし、そんでシグナムとアギトとアイリは今、戦船に乗って聖王家っつう王族が治める国アウストラシアへ向かってる最中だ。あたしらグラオベン・オルデンに用意してもらった部屋で、あたしとシグナムはまぁ黙って座席に座って、のんびり空の旅を楽しんでる・・・かは別にして（窓が無ぇからつまらん）静かにしてる。だけど・・・「マイスターっ！　エリーゼと口づけって何考えてるの！？」アギトがそりゃあもうさっきからカンカンだ。

（まぁあたしも驚いたけどさ）

エリーゼがあんな大胆に告白したり口づけしたり、本気でオーディンが好きなんだな。なんつうか、なんて言やあいいんだろ。エリーゼの事が羨ましい・・・？　ああもうわけ解んねぇ。やめだ、こんな考えなんか。とりあえずオーディンに目をやる。

「いや、なんと言うかあれはだな・・・」

「むぅ～、なんかすごいイライラするぅ～・・・！」

「どうしたのアギトお姉ちゃん？　なんでそんなに苛立ってるの？」

「解んないけど、なんかイライラするのっ！」

なぁアギトよ、嫉妬とかやきもちだよそりゃ。名づけの親、育ての親、自分を傷つけるだけだったイリュリアから救い出してくれた恩人。アギトにとってオーディンは親みたいなもんだしな。そんなオーディンがエリーゼに取られるのが不安なんだろ。

「落ち着こう、アギト。あれは――」

「マイスターはあたしのだもんっ。ヴァクストゥーム・フォルム！」

アギトが魔力消費の大きい形態、ヴァクストゥーム・フォルムになった。１０歳くらいの人間大になったアギトを見たアイリが「なにそれっ！？　なんで大きくなれるの！？」って興味津々。まぁ今のアギトがそれに応じるわけもなく「あたしもマイスターが大好きだぁぁあああ！」そう告白しながらオーディンに抱きついて、何考えてんのか口づけしようと顔を近づけた。けど、「ちょい待った！」オーディンはギリギリ顔を逸らして、口じゃなくて頬にアギトの口づけを受けた。

「待つんだアギトっ。さすがに看過できないからっ」

慌ててアギトを引き剥がすオーディン。けどアギトは言う事を聴かずに「い～や～だ～！」ってまた抱きつこうとする。さすがにもう黙って見てるわけにはいかねぇか。オーディン、本気で困ってるし。あたしは立ち上って「その辺にしとけ、アギト」肩を掴んでオーディンから引き剥がす。

「離してよヴィータ！」

「アホか。よく考えろって。お前の大好きなオーディンを困らせていいのかよ？」

「う〝っ」

「ねぇねぇアギトお姉ちゃん、どうやって大きくなってるのっ？」

オーディンに「ごめんなさい」つってトボトボ席に戻るアギトに、アイリが何度も同じ質問をするって事で落ち着いた・・・のか？

（アギトがアイリに絡まれてるし）

オーディンが思念通話で『ありがとう、ヴィータ』って礼を言ってきた。こんくらいどうって事ないから『気にすんなって』そう返す。にしてもオーディン。エリーゼの想いに応えんのかな？　２９歳の割に若い外見なオーディン。２人が並んでも違和感ない。なんとなく気になったから、『なぁオーディン。エリーゼと結婚すんのか？』って訊いてみた。

『突然何を・・・？』

『いやなんか気になって。エリーゼ、面白いし可愛いし、ちょっとお馬鹿だけどさ、真面目すぎるオーディンの嫁にするならああいう奴がいいんじゃないかって思うんだけど』

オーディンのようなくそ真面目な男には、エリーゼのようなユルくて、だけどどこか芯の通った奴が合ってると思う。あと男爵っていう、それなりの地位もお金（アムル復興に無くなるかも）あるしな。良い女だとは思う。

『驚いたな。ヴィータが色恋に興味を示すとは』

『べ、別にそんなんじゃねぇよ・・・！』

あたしら守護騎士は人間じゃない。だから人に恋するとかありえない。オーディンの顔をチラッと盗み見る。でも、恋はしないけど、人を好きになる事はある。けどそれは異性とかじゃなくて、家族としてだな。こんな想いを抱くの初めてだから変な感じだけど。何かそわそわする。堪らず『あたしの事より、どうなんだよオーディン！』そう大きな声で促す。するとオーディンの顔に悲しげな色が浮かんだ。あ、やべ、訊いちゃまずい事を訊いたかも。

『・・・私はエリーゼの想いに応えられない』

『・・・・え？』

たぶん、とか、おそらく、とか曖昧な前置き無く、オーディンはそう断言した。それに『エリーゼに限った事じゃなく、私自身にはもう恋愛は無理だ』って意味深なことを言った。あたしが黙っていると、

『堕天使エグリゴリとの戦闘は正に命懸けだ。完全勝利する可能性は１０％もあればいいくらいだ。即ち生き残る可能性が１割となる。たとえ勝利を収めて生き残ったとしても、その時の私はもうオーディンじゃない。確実にすべての記憶を失っているだろうし、人間としての普通の生活もままならないはず。・・・ヴィータ。生きているのに死んでいる私を、誰が愛すると？　好きになると思う？』

何も言えなくなっちまう。複製品のゼフォンやミュールにすらあたしらはまともに戦う事が出来なかった。オリジナルの強さは、デタラメなオーディン以上って話だ。あたしらじゃ助力になんない。だからこのままじゃオーディンの話はきっと本当になってしまう。くそっ、守護騎士が不甲斐無さ過ぎんだろ。

『すまないな。そうなった時、君たちもまた消えるというのに――・・・』

オーディンが席を立ってあたしとシグナムの前にまで来た。

「すまない。結局、私はこういう生き方しかできないんだ」

「・・・・うん」「？？？」

頷くしか出来ないあたしと、いきなり謝られて首を傾げるシグナム。そうだ。何にもせずに消えるくらいなら、オーディンの願いのために命を張るっていうのも悪くないよな。命を懸けてオーディンを護って、"エグリゴリ"との戦いでオーディンを勝たせる。守護騎士ヴォルケンリッター。主の為に命を張るのは当たり前だ。だったら

・・・

「あの、オーディン？　なぜ急に謝られたのか判らな――」

「オーディンは死なせない。あたしらが絶対に守り抜いてやる」

ああ、そうさ。オーディンに"エグリゴリ"の事を聴いた時からそう決めていたんだ。

「なにっ？　オーディンが死ぬ？　ヴィータ、一体何の話をしている」

「マイスターがなんだって！？」「死ぬとかなんとか聞こえたよっ」

あたしとオーディンの思念通話に参加していなかったから混乱しだすシグナム達。オーディンが「いや、私は死なないよ。ヴィータが守ってくれるから」って言って、あたしの頭を撫でた。オーディンに撫でられるのはすげぇ気持ちいい。死なせたくない、別れたくない、一緒に生きてたい、そう強く思う。

「お、おう！　あたしが、グラオベン・オルデンが守るからさ。だからもう死ぬとか言うなよっ」

「ああ。私は、"戦って死なない"、誓うよ」

オーディンの宣誓。なんか言い方に引っかかったけど、死なない、って誓ったんだ。だったらそれでいい。生きていれば、これからも

みんなで楽しく過ごせていける。

「マイスターっ、ヴィータと話してたこと、あたし達にも聞かせてよっ」

とりあえずうるさいアギトや、

「そうです。聞き捨てならない単語が出た以上、我々にも知る権利があります」

オーディンに詰め寄るシグナムや、

「マイスターは死なないよ。アイリ達がいるんだからね」

そうは言いながらも聞きたそうにそわそわしてるアイリに、さっきの思念通話の話をするか。聴いた後、抱いた思いはみんなあたしと同じだ。オーディンを生かすために自分の命を懸けて、そして勝利する。もちろん命懸けっつっても死んでなんかやらない。全員が生き残ったままで勝つんだ。

「ホント、君たちに逢えた私は幸せ者だよ」

「私もです」「「あたしも！」」「アイリもだよ！」

オーディンのそんな超嬉しい言葉に、あたしらは頷き返す。そうさ、あたしらもオーディンに逢えて、幸せ者なんだって。それからアギトはアイリにヴァクストゥーム・フォルムの魔導を教えたり、人間

大になったアイリがオーディンの膝の上に乗ってご機嫌になったり、それを見たアギトがまたプンプン怒ったり。
落ち着いたと思ったら2人は元の姿に戻って、オーディンの両肩に座って居眠りしたりと忙しい。んであたしとシグナムはオーディンの両脇に座って、ただじっと傍に居る。それだけで満足だ。あたしらの大好きな主オーディンの傍に居られるだけで。

『艦橋クラウスより客室グラオベン・オルデンのみなさんへ。アウストラシア・ザンクト＝オルフェンへ到着しました。迎えの者を向かわせますので、それまでお待ちください』

この後、クラウス王子の使いが来て、あたしらはクラウス王子やオリヴィエ王女たちと合流、アウストラシアの大地に降り立った。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒オーディン†††

「ここが、聖王家の収めるアウストラシアか・・・」

まさかアウストラシアの地に降り立つ事が出来るとは思いもしなかった。今より1万4千年ほど前――先の次元世界での契約の折、フェイトやなのは達と出逢い、そしてヴィヴィオの父親になったあの時から、聖王女オリヴィエの事が気になっていた。
もちろん異性としてじゃない。彼女の境遇が、フノスになんとなく似通っていたから。最強でありながら体に欠陥を抱え、それでも戦乱を強く生き、そして若くして死んでしまった。亡くなった歳も近い。だから興味があった・・・。実際にお会いでき、友人（だと思う）になれたのは幸運だ。

「お帰りなさいませ、オリヴィエ王女様！」

３ケタ近い騎士がオリヴィエを筆頭として歩く私たちを迎えた。オリヴィエは簡潔に「はい。ただ今戻りました」と応じ、「では皆さん、こちらへ」と数人の騎士を護衛として引き連れ、私たちを案内する。今から向かうのは、歴史古きザンクト＝オルフェン（地理的には、レーベンヴェルト時代における天光騎士団の本部の在った土地だな）の城塞遺跡だそうだ。城塞遺跡、か。シャルの古巣である天光騎士団の本部・聖騎殿ハイリヒ・パラストに間違いないだろうな。

「・・・・そうですか、判りました。下がってください」

オリヴィエに耳打ちしていた騎士が下がり、元の位置――オリヴィエの護衛としての間合いへと戻った。オリヴィエは歩みを止める事なく「バルト代表のダールグリュン陛下、ガレア代表のイクスヴェリア陛下とヴィンツェンツ王子がすでにご到着との事です」そう私たちに告げた。私やアギト達はその３人の名を聴いても反応しない。が、クラウスだけは「イクスヴェリア陛下ですか！？」と心底驚愕していた。

（イクスヴェリア・・・。冥府の炎王――冥王イクスヴェリア・・・。マリアージュ事件なる一件で、確かスバルと親しくなったという少女だった・・・か？）

事件後、シャルによって目を覚ましたイクスヴェリアと同じ時間を

過ごしたルシリオンは、フェイトと結んだ対人契約によって"神意の玉座"の本体(ルシリオン)から切り離された後の分身体。だから今の本体・分(わたし)身体には記憶ではなく僅かな記録としてしか残っていないために、イクスヴェリアについては私も詳しい事は判らない。

「イクスヴェリア。今より古き時代、戦乱と残虐を好んだ邪知暴虐の王・・・！　死を超越したかのように時代を越えて現れ、その上死体を操り戦の道具とするという事で、冥王、と恐れられています」

クラウスが戦慄する。クラウスの話を聴いたアギトは『死体を操るって、なんか気持ち悪い』と、アイリは『戦場でなら効率的な戦力増強だよね』と、わざわざ思念通話を私やシグナム、ヴィータに通してきた。とりあえず「それは恐ろしい王だな」とクラウスに同意しておく。異世界よりベルカに訪れたというスタンスをとる私が、ベルカの古き王イクスヴェリアの事を知っているのは不自然だからな。

「皆さん、急ぎましょう。お待たせするわけにはまいりません」

そういうわけで少々早めに移動し、目的地である古い城塞へと辿り着いた。外見を判りやすく例えるなら、地球・ゴゾ島はチタデル大城塞の内側に、ドイツは聖ペトリ大聖堂や聖ゼーバルドゥス教会、レーゲンスブルク大聖堂のような荘厳な建築物が多く立ち並んでいると言ったところだ。

「息を呑むほどに荘厳ですね。この戦乱の時代に他国に、しかもアウストラシアの聖騎殿へ訪れる事が叶うとは・・・」

「すげぇ・・・」

「ああ。クラウス殿下の仰る通り、息をするのも忘れてしまいそうだ」

クラウスだけでなくヴィータとシグナムも聖騎殿に目を奪われていた。血筋ならともかく数千年以上も前の聖騎殿が、完全に朽ち果てる事なく残っているのには驚いた。オリヴィエ王女殿下の「こちらです」という案内に続き、城門を潜って中を進み続ける。

フェイトやなのは達に、私やシャルの正体――真実を教えるために見せた記憶の中に出てきた場所が、私の目の前に在る。このまま進めば、シャルが団長として率いていた心慧騎士団シュベーアト・オルデンの詰所だ。が、しかし残念ながらスルー。向かうのは、あぁなるほど。国の代表が集まる場所に相応しい場所だ。

「あの建物が目的地となります。古くはアウストラシア――いえ今の時代に在る国々の建国以前より存在している、ここ聖騎殿の中でも保存状態が一番いい建物です」

オリヴィエの視線の先、"星騎士シュテルンリッター"専用の議会場が在る、風神騎士団シュトゥルム・オルデンの詰所（これまた大聖堂のような外見）がそびえ立っていた。シュトゥルム・オルデンの詰所内へと入り、歩くこと少し。５本の剣が五芒星を形作っている"シュテルン・リッター"の紋章が描かれた両開き扉の前で一度立ち止まる。護衛の騎士が前に出て扉を開けた。視界に広がる円形状の広間。壁際に立ち並ぶ燭台の炎はゆらゆらと燃え、広間を照ら

している。その広間の中央には美術品のような円卓。そして・・・

（ん？　あれ？　全員男？イクスヴェリアは・・・・？）

円卓に座っている人間は４人なんだが、全員が男だった、しかも成人。イクスヴェリアは１０代前半ほどの少女のはず。あぁそうか、今は席を外しているんだな。円卓に座っていた１人の男がオリヴィエ王女殿下を見るなり、「おお、お帰り、我が愛しい妹よ！」と両腕を仰々しく広げて、オリヴィエの帰還を喜んでいる・・・・ように見える。

いや、喜んでいるのは確かなのだが、"愛おしい"、という言葉になにか嘘を感じてしまう。聖王家の血族の特徴である紅と翠の虹彩異色である目を見ると、ハッキリと判る。あの男は、私の両親と同じ目をしている。そう、家族を兵器、として見ているんだ。

「ただいま帰りました、リナルドお兄様。とは言えそう長くは留まりませんが」

「そうか、それは残念だ。いやしかし――」

目に見えて不愉快オーラ放出中であるオリヴィエと、彼女の兄、嘘塗れの笑顔を振りまくリナルドの会話が霞んで聞こえるほどに、強い視線を感じて居心地が悪い。目だけを動かして、円卓に座って私を見詰めている人間を見る。私を見ているのは、豪傑、という言葉が似合いすぎるほどの巨漢。とは言ってもガチガチの筋肉質じゃなく、適度にバランスの取れた体格だ。

「噂に聞きし魔神とはどれほどの豪傑かと思えば、女子（おなご）と見間違うほどの優男だな」

その男はスッと立ち上り、私の目の前まで歩いてきた。オリヴィエとリナルドも会話を切らざるを得なくなったようだ。彼我の距離５０ｃｍ。１８１ｃｍの私を見下ろすほどの身長（１９０ｃｍは超えているな）を誇る男の目をジッと見上げ返す。なんと深くて愚直なまでに真っ直ぐな瞳だろう。間違いなくこの男が、三連国バルトの代表、雷帝ダールグリュン。

「ふん。少し触れたくらいで折れそうだ。単純に破壊特性の魔導に特化しただけの小物か」

好きなだけ言わせておけばいい。明らかに私を挑発するためだけの言葉だ。目からは侮蔑などではなく、興味・好奇心の光が放たれている。それが判っているからこそ、軽く受けようと口を開こうとしたんだ、がっ。

「んだとおっさんっ！　テメェ、表出やがれっ、その好き勝手言うふざけた口を変形させてやらぁっ！」

「マイスターを悪くいう奴は許さないんだから！」

「アイリも怒ったよっ。マイスター、今すぐこの人をブチのめすよねっ！」

完全にプッツンしたヴィータとアギトとアイリ。ヴィータはすでに

臨戦態勢で、起動した"グラーフアイゼン"のヘッドを男に突き付け、アギトの周囲に火球が４基展開、アイリの周囲に氷の短剣が１５基と展開されていて、攻撃寸前だ。

「待つんだ３人とも！」「グラーフアイゼンをしまえヴィータ！」

私とシグナムは慌てて止めに入る。今までどうすればいいか判らなかったのか傍観していたクラウスも「さすがにそれは許されません！」と参戦。しかし「止めんでよいっ！」たったその一言で空気が震え、ヴィータは数歩と後ずさり、アギトとアイリの魔導は消失、２人はへなへなと高度を落とす。

床に落ちる前に両手の平の上に２人を降ろす。手の平から２人が震え上がっているのが伝わって来る。さすがに王格が凄まじいな。この場に居るほとんどがダールグリュン帝（違っていたら恥ずかしい）の声に怯んだが、

「ダールグリュン帝。その御方たちは聖王家の客人です。それにここはアウストラシア、迂闊な行動は控えていただけませんか？」

オリヴィエは怯む事なくダールグリュン帝にそう注意した。ダールグリュン帝は私から視線を逸らさずに周囲の空気に気を回したあと、

「あっはっはっ、すまなかったな魔神殿」と大声で笑い始めた。

「そこの女子たちも驚かせてしまったすまなかった。少々お主らの主君を試させてもらったのだ」

ヴィータ達は、人懐っこいとは言えないがダールグリュン帝の笑み

と謝罪の言葉に、ようやく自分たちが彼の言葉の真意を理解せずに勝手に先走ったのだと解り、すまなさそうに俯いた。

「先はお主を試すためとはいえ失礼をしたな」

私にまで謝罪をしてきたダールグリュン帝に、言葉の真意を察していたために「謝罪は結構です」と返しておく。

「しかし、お主は随分と深い何かを抱え込んでいるようだな。目を見ればその者の大抵は判る我だが、お主の抱える何かは深く重すぎる。これまで見てきた者の中でも特異、異常だ。一体お主は・・・」

「戯れももうそこまでにしてもらえませんか、ダールグリュン帝」

凛とした男の声が、ダールグリュン帝の声を遮った。声の主は円卓に座ってずっと傍観の姿勢を取っていた青年のものだ。私たちの視線を一手に引き受けるも一切動じない。その居住まいで判る。おそらくクラウスより強い。

「此度アウストラシアに集まったのは遊戯の為ではありません。怨敵イリュリアが持ち出した古代兵器、エテメンアンキによる脅迫という名の降伏勧告への返答について話し合うためのはず。ダールグリュン帝。お忘れではありませんよね？と、イクスヴェリア陛下は仰っています」

「・・・・・」

「無論だ。しかしこの場に揃っているのはガレアの第三王子であるお主――ヴィンツェンツとイクスヴェリア王、バルト代表の我、シュトゥラのイングヴァルト、アウストラシアのリナルド王子とオリヴィエ王女のみ。ヴィンランド、シュヴァーベン、ヘルウェティアの代表がまだ来とらん。それまでの時間潰しくらい許せ」

ガレアの王子ヴィンツェンツとダールグリュン帝の話に私は、えっ？と漏らしそうになったが、なんとか抑え込んだ。ヴィンツェンツの隣に座っているあの男が、イクスヴェリア王だと？　一瞬混乱したがすぐに、あぁ、と気づく。目に魔力を集中してイクスヴェリアを見れば、幻術か変身の魔導を使っているのが判る。さすがに一応の敵国であるアウストラシアに、幼い正体のまま来るようなことはしないか。

「それにお主も実は気になっているのだろう？　あのイリュリアの侵攻を単独で半年も抑え込み、いつしかイリュリアに魔神と恐れられるようになったこの者の戦力が」

今度は私に視線が集まる。ヴィンツェンツは無言のまま円卓に頬杖をついた。あ、もう何を言うのも面倒だって顔してるぞ。ダールグリュン帝は「はっはっはっ。ほら見たことか」と笑い、改めて私に向き直った。

「一国の王、三国の代表である前に我は1人の男であり騎士だ。だからこそ燃え滾る。魔神――オーディンと言う名だったな」

「ええ。オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード

です」

「我は、バルトはウラルの王、バルトロメーウス・ダールグリュン。雷帝の名を冠せし者。魔神オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードに、一対一の試合を申し込みたい」

私は堪らず「へ？」と間抜けにもそう零してしまった。他のみんなも同じだ。完全に唖然としまっている。面倒くさそうにしていたヴィンツェンツ、イクスヴェリアですら呆けてしまっているじゃないか。そして何故か真っ先に「いいぜ、やってやるよ！　なっ？　オーディン」ヴィータが応じやがった。なっ？じゃないってお馬鹿ヴィータ。「いやいやいや。こんな大変な時に応じられるかっ！」すぐさま断る。

「ダ、ダールグリュン帝！　時間潰しとは言えオーディン先生との試合はやり過ぎですっ」

「試合とは言え戦闘行為は慎んでいただきたく！」

オリヴィエとリナルドが止めに入るが、しかしダールグリュン帝は「少し戯れるだけだ。迷惑はかけん」と止まる気配なし。ダールグリュン帝は武装ハルバードをその手にした。クラウスも「お待ちくださいダールグリュン帝！」と止めに入ってきた。

雷帝ダールグリュンの魔導を複製し、彼を"エインヘリヤル"として登録するのも面白い。一応、魔導の方は子孫ヴィクトーリア・ダールグリュンのものを複製しているが、やはりオリジナルの雷帝式が欲しい。だからと言って無駄に魔力は消費したくないし、ここは

穏便に済ませたいな。

「構えよ、魔神。武装くらいは持っていよう・・・？」

「オーディンさん！」「オーディン先生！」

縋るような目で見ないでくれ、２人。もう止まらんよ、このおっさんは。仕方なしに待機形態の指環を起動し、"エヴェストルム"をランツェフォルムにする。みんなに「下がっていてくれ」と告げ、穂先をダールグリュン帝に差し出し、彼もハルバードの斧頭を差し出し、互いの武装をガキンと触れさす。

「どれほどのものか、見せてもらお――」

――チェーンバインド・シーリングフォース――

のんびり何かを語ろうとしているところ悪いが、互いの体に被害を出さず、歴史的建造物に損害を出さないために、速攻で捕縛させてもらう。とは言っても束縛した対象の魔力生成阻害効果を付加した１６本のチェーンバインドの奇襲も、ダールグリュン帝の前には無意味だったがな。ダールグリュン帝はハルバードを振り回して移動しながらバインドを易々と寸断していく。

「舐められたものだな！　このような児戯に等しき魔導など通用しな――むっ？」

――闇（コード）を誘え、汝（カムエル）の宵手――

全方位から出現する3ケタ近い平べったい影の手がダールグリュン帝に襲いかかる。チェーンバインド・ＳＦにしたようにハルバードで粉砕しようと試みているが、闇黒系の魔力で具現したカムエルは伸縮・硬軟自在。ゆえに「なんだこの魔導は・・・！？」ゴムのように伸びたり鉄のように硬くなる影の手にハルバードの刃が拒まれ悪戦苦闘のダールグリュン帝。

「小賢しいッ！　九十一式・破軍斬滅！」

複製術式が貯蔵されている"英知の書庫アルヴィト"に登録済みの魔導だな。武装を回転させ、周囲の敵性存在を一掃するというものだ。ダールグリュン帝はカムエルを迎撃しながら徐々に近づいてくる。下手に時間を伸ばして、百式・神雷を使われるのはまずい（そこまで本気になるとは思えないし思いたくもないが）。

仕方がない。対雷撃系の術式をスタンバイしようとした時、入り口の両扉が開いた。王格漂う青年1人に少女1人に女性が1人。その背後にはそれぞれの護衛を務める騎士が3人。その計6人は茫然と私とダールグリュン帝を見詰めていた。

「戯れもここまでか」

心底残念そうにハルバードを腕輪に戻したダールグリュン帝にはもう嘆息しか出ない。私も"エヴェストルム"を指環に戻し、カムエルをすべて解除する。遅れて来た代表たちの登場で私とダールグリュン帝の試合が中止になった事に安堵しているオリヴィエが告げる。

「コホン。で、では8ヵ国代表が集まった事ですし、早速始めましょう」

というわけで、イリュリアに目を付けられた8ヵ国の代表が円卓に集まった。それぞれの代表が円卓に座し、なぜか私にまで席が用意されていたために座る事に。背後にヴィータとシグナムが控え、アギトとアイリは私の肩の上。視線を両肩に感じるが、気には済まい。まず先に挙がった話は、エテメンアンキが放った8本の砲撃カレドヴルフの初撃による損害報告だ。どこの国もそれなりの都市だったため、8ヵ国合わせれば死傷者は1万3千を超えていた。そして復興支援の協力提案だが・・・裏を返せば恩の売り合いだ。今後の展開を見据えての。

それが判っているからこそ、誰も提案には応じなかった。当然だな、この戦乱の時代に借りを作れば、一気に呑み込まれる。だからこの話は即終わり。次はいよいよここへ集まった目的であるイリュリアの降伏勧告への返答についての会議だ。

「――では本題へ入ろうか。各代表たち。思い思いに意見をぶつけようではないか」

この中で一番の大物ダールグリュン帝（次はイクスヴェリアだな）が告げる。自然体でありながら僅かに発せられている威圧感に黙る代表たちだったが、「ではまずイリュリアの降伏勧告に従うかどうか、それともあくまで敵対戦力として、戦闘を続行するか」若いクラウスが仕切った事で、委縮していた面々が意見を言い合い始めた。

「シュヴァーベンの意思は、降伏には応じない、だ。だが一撃で一

都市を破壊する事が出来るカレドヴルフ、その次弾を撃たれるのは避けたい」

「ヴィンランドも、降伏には応じるわけにはいかない、というのが国の意向です。武装解除・騎士団解散、さらに無条件でイリュリアに下るなど言語道断です」

「だがエテメンアンキを破壊する術も、カレドヴルフを防げる術もない。ヘルウェティアも応じないという意向だが、カレドヴルフの標的からはどうやっても外れたい」

シュヴァーベン第三王女ドルテ、ヴィンランド第四王女コルネリエ、ヘルウェティア第六王子アルフォンスの言うとおり、次弾だけは何が何でも止めたい。しかしイリュリアに下るのだけは避けたい。だがそうなれば次弾が撃たれる。危険に晒されている国の王族ではない私ですらこのジレンマにイライラする。

「降伏せずに敵対を続け、エテメンアンキの砲撃に対処し、イリュリア女王テウタを討伐もしくは捕縛する方法・・・、そんなもの在りますかね～・・・？」

リナルドがオリヴィエを流し目で見る。その意図が判らないほど私は馬鹿じゃない。おそらく彼女を生贄に聖王のゆりかごの起動を、と考えているんだろうな。ヴィヴィオを苦しませたクズ野郎――ジェイル・スカリエッティが起こしたＪＳ事件時、はやてから聴いたゆりかごの攻撃機能の詳細を思い出す。

月の魔力を供給する前に運用可能な艦載兵装だが、船体片面２１門

の計４２門、上部に１４門、計５６門の艦載砲。艦載砲は前部に集中していて、下部や後部は死角となる。その死角を防衛するのがガジェットドローン・・・なんだが、Ⅰ型からⅢ型はスカリエッティの作品故に搭載されていない。唯一この当時から搭載されているⅣ型は飛行機能がない歩行型。内部防衛の為のシステムだ。

（ゆりかごが真価を発揮するのは衛星軌道上に上がってからだ。私の知る大気圏内で扱える攻撃機能以外に、別の攻撃機能が無ければただの的だ）

全ては軌道上に上がってから。そうすれば高い防衛性能を発揮でき、精密射撃・魔力爆撃、対地・対艦攻撃、さらには次元跳躍攻撃も可能となる。

（リナルドはそれを知らないのか？　それを知りながら起動しようとでも？）

「リナルド王子よ。聖王のゆりかごを持ち出そうとしているのだろうが、エテメンアンキをどうにかする前に撃たれるぞ」

ダールグリュン帝も気付いていたようだ。心を読まれたのか？とリナルドがビクッとして、クラウスは彼に気付かれないように睨み、残りの面々はゆりかごという単語に緊張を見せた。

「ゆりかご撃沈だけでは済まないでしょう。臨戦態勢に入ったと知るやすぐにカレドヴルフを撃つかもしれない」

「期日までに攻め入る事も出来ない、ということか。やはり降伏するしかないのか・・・？」

「長距離の艦載砲でエテメンアンキの砲門は破壊できないか？」

「おそらく無理かと思います。エテメンアンキの砲門があるのは高度２１ｋｍ。射程圏内にまで戦船を上昇させようとすれば、おそらくカリブルヌスで撃沈されるでしょう」

「そして地上にも放たれ、イリュリアの一人勝ち・・・」

エテメンアンキのふざけた砲撃システムに、室内の空気がどんよりとなる。それからああだこうだと議論が続くが、砲門のある高度や砲撃の射程の問題が常に壁となり、考え出された対策案が次々と潰れていく。

射程が結構問題だ。ベルカの半球すべてが射程圏内。星の裏側にまで逃げなければ、標的から外れる事はない。半球内ならどこにでも砲撃を撃ち込める。この事実が８ヵ国以外の射程圏内の国々に知られれば大混乱だな。

「――そうだ、ミナレットはどうか？　イリュリア領海内に在ってイリュリア戦力であるミナレットの砲撃ならば、そう怪しまれずにエテメンアンキを撃てるのでは？」

ドルテ王女が良い案が閃いたと表情を輝かせるが、「残念ながらそれは無理です」クラウスがそう言うと「それは何故か？」と苛立たしげに顔を歪ませた。クラウスがチラッと私を見る。ああ、私から

言おう。破壊した本人としてな。

「話に割り込む様で申し訳ありません、ドルテ王女。ミナレットは――」

「その者が破壊したからもう使えんぞ。戦船でようやく破壊できる巨大砲台を、その者――魔神オーディンがその身一つで破壊した」

ダールグリュン帝にそう言われたドルテ王女が「お前が魔神か・・・！」と驚愕した。そう言えば会議前に名前は名乗ったが、"魔神"という通り名は言っていなかったな。ここへ遅れて来た事で私が魔神だと知らない他2人の王子も驚いていた。

「ダールグリュン帝の仰ったとおりミナレットは再起不能になるまで破壊しました。ついでに言わせていただきますが、ミナレットではおそらくエテメンアンキは破壊できないでしょう。ミナレットの砲撃カリブルヌスは私個人の魔道で防げるような火力でしたので。エテメンアンキはイリュリアの秘奥中の秘奥の兵器、その外壁がミナレット以上の対物対魔力に優れているのは間違いないはず」

推測だが、ほぼ確実と見ていいだろう。まぁさすがに艦載砲の集中砲火を食らえば折れるだろうが、撃ったところで反撃されるのがオチか。

「・・・・実際に交戦した彼が言うのであればそうなのでしょうね。はぁ・・・。詰んでしまいましたね、エテメンアンキ攻略・・・」

コルネリエ王女がお手上げとでも言うようについに円卓に突っ伏した。思いはみんな同じ。エテメンアンキは攻略が難しすぎる。記憶障害という制限が無ければ、ある程度無茶をすればエテメンアンキを瞬殺できるのにな。
今の私に出来る範囲でエテメンアンキ攻略を組み立ててみるか。攻略法を模索し始めた時、「ふむ。ここで一度休みを入れるのはどうか？」ダールグリュン帝からの提案。喋りっぱなし、考えっぱなし、だから良い案が出ない、とまぁこういう流れになって一度休みを取ることに。

「では皆さま方、この建物内でなら移動に制限はありませんから、どうぞ自由にお休みください」

リナルドがそう言うと、ドルテ王女、コルネリエ王女、アルフォンス王子は席を立ち、それぞれの騎士を引き連れ部屋を後にした。イクスヴェリアは若干速足で部屋を出て、王子であるヴィンツェンツが後を追いかけるように出て行った。で、ダールグリュン帝は椅子の上で足と腕を組んで黙考している。

「オーディン先生」

「お疲れ様です、オリヴィエ王女殿下。クラウスも」

「はい。・・・あ、オリヴィエ」

「ふふ、そうですね。オーディン先生。お部屋を用意させますね」

一体なにを言われているのか判らないため「何故です？」と尋ねる。すると「小さなお客様ももう夢の中ですし」オリヴィエが私に向き直って微笑んだ。彼女の視線は、私の肩に向けられていた。今になって気が付いたが、アギトもアイリも私の肩の上でスヤスヤ眠っていた。それだけじゃなくヴィータもウトウトし始めていて、シグナムに軽くもたれかかっている。

「外に控えている騎士に頼んで寝所を用意してもらいます。彼女たちはそこで休ませてあげてください」

「わざわざありがとうございます」

「いいえ。この程度、私たちが受けた恩に比べればまだまだです」

「それこそお気にならさないでいただければいいのですが・・・。でも今はお言葉に甘えます。シグナム。ヴィータを連れて来てくれ」

「はい」

起きていようと努力して唸るヴィータを抱え上げたシグナム。ダールグリュン帝を1人部屋に置いて、私たちは部屋を出た。

Ｍｙｔｈ２５－Ａ圧倒的暴力と超絶的暴力～Ａｄｖｅｒｓａ　Ｖｉｒｔｕｔｅ　ＲｅｐｅｌＯ～

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

眠りこけてしまったアギトとヴィータとアイリを用意してもらった寝所で休ませた後、クラウスとオリヴィエと別れた私とシグナムは、２人きりで詰所の通路を歩いている。虫の鳴き声もない静かな夜。ガラスの無い窓枠から入ってくる月明かりは優しく、あと数時間で滅亡の危機に陥ってしまうかもしれないとは思えないほどだ。議会場へ戻るまでの間、シグナムとの会話は無い。彼女はあまり話好きではないからな。しかし気まずくはならない。それどころか気を遣う必要がないと判っているため逆に心地いい。中庭と通路を繋げるアーチの前で私は足を止める。数歩先に進んだシグナムが「オーディン、どうかしましたか？」と私に振り返った。

「・・・・いや、議会場に戻る前に少し考え事をしようと思ってな」

アーチを潜り中庭へと出る。「では私もお供します」シグナムも私に続いて外へ出た。空を見上げれば雲一つとしてない夜天が広がり、月はミッドチルダと同じ２つ。枯れた噴水の縁石の上に寝転がり、頭の後ろで組んだ腕を枕代わりにして夜天を見詰める。考える事はただ１つ。エテメンアンキを相手に、私単独で攻略できる方法だ。一撃で破壊できる魔道は扱えない。
ならば攻撃を段階的に加えるのはどうか。効果も威力も高い儀式魔術の連発による殲滅。〝異界英雄エインヘリヤル〟による包囲攻撃。

だがどれを成してもエテメンアンキのカレドヴルフによる報復攻撃を受け、全滅か・・・。
そもそも攻略に必要な戦力を"英雄の居館ヴァルハラ"や"英知の書庫アルヴィト"から召喚する魔力が扱えない。魔力放出だけならガンガン行けるが、魔道発動に変換するとアウトだ。

「結局、問題は魔力の制限になるのか・・・！」

その問題が解決できさえすれば、私単独でカレドヴルフの対処が出来るはずなんだ。

「こうなれば記憶を犠牲にしてでも・・・」

「いけませんっ！」

私の足元の方に腰掛けていたシグナムが急に立ち上って叫んだため「うおっ？」驚いて縁石から地面に転がり落ちた。「大丈夫ですかっ？」と心配して手を差し伸べてくれるシグナムに「あはは、格好悪いところを見られたな」苦笑いで応じて、手を取って立ち上る。しかし「何で急に叫んだんだ？」気になるのはそれだ。だから2人で縁石に座り直して、シグナムにそう訊ねる。

「何でも何もオーディンが、記憶を犠牲にしてでも、と仰ったので」

「・・・声に出してたか・・・？」

「はい。ハッキリと」

「あー・・・すまない」

無意識にポロッと零していたようだ。シグナムは「考えましょう。貴方が犠牲にならない方法で、エテメンアンキを破壊する方法を」と真剣な、そして諭すような目で真っ直ぐ私を見た。しかし、と口答えをするかそれとも、そうだな、と素直に頷いておくか。正直無傷で成し遂げられるほど甘くはないんだ、エテメンアンキ攻略は。ただ今は「そうだな。そうならない方法、まだ見つかっていないだけかもしれないしな」とシグナムを安心させたい。それを聞くとシグナムは「はい。約束ですよ」と安心したように微笑みを見せた。それから少しの間、シグナムと寄り添うように縁石に座って思考を巡らせたが、まったく思いつかなかった。

「・・・会議再開の時は、アウストラシアの騎士が迎えに来てくれるそうだが・・・」

「その前に戻りますか？」

「・・・いや。もう少し考えたい。この辺を少し歩いてみようと思うんだ。すまないがシグナム。手間になるがアギト達のところへ行ってくれるか？　迎えの騎士が来て、あの子たちが起きてしまうのも可哀想だ」

「そうですね。判りました。それでは失礼します」

一礼して寝所へ戻るシグナムの背中が見えなくなるまで見送り、散

歩を再開する。歩を進めた矢先、「見られているな」どこからともなく視線を感じた事で、周囲に気を巡らせる。ダールグリュン帝じゃないな。この視線にはなんと言うか緊張が含まれている。仕方なく「あまりじろじろ見られるのは嫌なんですけどね」と立ち止まり、私を見ている誰かに語りかける。

「あ、ごめんなさい」

幼い少女の声が背後から聞こえた。振り返ると・・・本来の姿になっているイクスヴェリアが佇んでいた。ヴィンツェンツ王子は・・・まだ隠れて私を見ているな。

（イクスヴェリアを私の元へ寄越した目的はなんだ・・・？）

とりあえずは「どうしたんだい？」目線を合わせるためにしゃがみ込み、そう訊ねる。やはり王としての格を持っているイクスヴェリアはオドオドせず、

「お初にお目にかかります。わたしはガレアの王女フィロメーラと申します」

堂々と正体を偽った。あくまで正体を隠すというのなら付き合うしかないか。

「私はシュトゥラの食客・・と言えばいいのだろうか？　まぁシュトゥラに協力させてもらっているオーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードです」

イクスヴェリア・・・フィロメーラが差し伸べた右手を取り、握手に応じる。フィロメーラからの「少しお話がしたいのですが、よろしいでしょうか？」というお誘い。私に向けられているヴィンツェンツの視線には気の所為かもしれないが、応じろ、と含まれているような・・・。元より「はい、構いませんよ」なためそう応じ、先ほどまで座っていた噴水の縁石に座る。フィロメーラも座ろうとし、その前にコートを脱いでシート代わりに敷く。

「あの・・・」

「どうぞ。綺麗な服を汚すわけにはいかないから、よろしければコートの上に腰掛けてください」

「あ・・ありがとうございます。失礼します」

少し戸惑いながらも私のコートの上にちょこんと座ったフィロメーラ。さて。どのような話があるのか聞かせてもらおうか。と思っていたんだが、なかなか話が出ない。だったら「お話とはなんでしょう？　フィロメーラ王女」こちらから切り出す事にしよう。

「はい。・・・騎士オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。貴方はシュトゥラに協力しているとの事ですが、もしシュトゥラと同盟を結べば、その同盟国も守っていただけるのですか？」

あぁなるほど。私の"力"が欲しいのか。

「私の力など無用でしょう。クラウス殿下よりガレアの王――イクスヴェリア陛下の御力は聞き及んでいます。イクスヴェリア陛下の屍兵器マリアージュがあれば、戦場では事が足りるはず。戦場で死んだ屍を利用した人型兵器。戦場ではさぞ絶大な効果を発揮するでしょう」

そう言うと、明らかにフィロメーラの表情が悲しげなものに染まった。いや、フィロメーラとしてではなく、マリアージュを生み出し管理するイクスヴェリアとしての顔だ。

フィロメーラは意を決したように「イクスヴェリア陛下は、残虐非道の王だと言われていますが、本当は・・・」そこまで言って口を噤んだ。さすがに自分自身であるイクスヴェリアの汚名を庇うようなセリフは言えないか。「どうしました？」と訊ねると、フィロメーラは首を横に振るのみ。

「・・・いいえ何でもありません。騎士オーディン。先ほどの返答、いかがでしょうか」

「1つ質問があります。その質問に返答を頂ければ、私も答えましょう」

「・・・どうぞ」

私の問いへの返答いかんによって、私がガレアに協力するどうかが決まると見たフィロメーラは少々緊張してしまっている。

「私の"力"を求めようとしたのは、イクスヴェリア陛下か？　ヴィンツェンツ王子か？　それとも・・・あなたの判断ですか？　フィロメーラ王女」

フィロメーラは真っ直ぐ私の目を見詰め、深く考え込み始めた。ああ、君の本心を聞かせてくれ。咄嗟の嘘くらいならば見破れるぞ。2万年と培ってきた人を見る目は伊達じゃないからな。

「貴方を求めているのは、イクスヴェリア陛下であり、そしてわたしでもあります」

「（彼女自身が私を求めている、か）・・・そうですか。ならば約束通りお答えします。私がシュトゥラに協力しているのは、私の生きる目的がイリュリアに巣食っているからです」

私がベルカの人間でない事も、"堕天使エグリゴリ"の事も、シュトゥラに協力している理由も、話す。そして「イリュリアを潰し、エグリゴリを全機救えば、私はシュトゥラを離れます」とも。当然だ。ベルカ戦争にこれ以上関わると、確実に歴史が変わるだろう。元よりアースガルド・グラズヘイム城にて時間凍結封印を施されている私の肉体に不死と不治を掛けた堕天使ガーデンベルグを救えば、そう時間を置かずして私は世界から消える。"神意の玉座"との取引も終わり、"界律の守護神テスタメント"として留まる事はもう出来ない。だからエリーゼの想いには応えられないし、クラウスの手伝いは出来ない。

（ヴィータ達との約束・・・戦っては死なない。あぁ死なないさ。

ただ役目を終えて消えるだけだ）

"神意の玉座"から解放されたルシリオンの本体である精神体は肉体へと戻れる・・・。それから"英雄の居館ヴァルハラ"に封印しているシエル、カノン、シェフィの遺体を他のアンスールと同じように霊廟に移して、魂を解放。・・・その後はどうなるだろうな。もう生き続ける理由は無い、な。いっそ自害でもするか。私の肉体を守り続けてくれているはずのフェンリルには悪いが。

（だってもう生きているのが辛いんだ・・・！）

2万年も存在してしまうと、生きる事に飽きてくる。

――有限は体を縛り、無限は魂を縛る――

有限無き無限と永遠の生の果て、幾度もの出逢いが霞むほどに幾度もの別れを重ね、それでも在り続ける事などただの苦痛でしかない。肉体に戻り、すぐさま自害をしようとした時、フェンリルはどういう反応をするだろうか。あぁ何ならフェンリルと結婚でもしようか。いつかの契約で、人の姿になれる賢狼ホロと行商人のロレンスも、種族の壁を越えて結ばれていたしな。あの子たちは元気でやっているだろうか。いつか必ず失う事なるだろうその思い出をいったん区切り、現実に目を向ける。

「ですからシュトゥラと同盟したおまけに私は付いてこないですよ。フィロメーラ王女を含めガレアがクラウスの夢に協力してくれるのはすごく嬉しいですが」

「クラウス殿下の夢、ですか？」

「ええ。ベルカから戦を無くし、誰もが笑っていられる平和な世界を築く。しかも他の国を戦禍で滅ぼす事なく。まぁ最初の辺りは戦う事になるでしょうが、それでも最後には解り合って手を取り合い、そして築く平和」

「それはまた随分な理想論ですね」

「ええ、まったく。甘えた考えです。ですが――」

私の言葉を継ぐように「わたしも、そんな世界を見て・・・いいえ、築きたいです」フィロメーラは微笑んだ。ガレアの王（正式な王位じゃないだろうが）であるイクスヴェリアが、シュトゥラとガレアの同盟に協力してくれれば、クラウスの夢はまた一歩現実に繋がるはず。

聖王家のアウストラシア、冥王家のガレア、のちに覇王の名を持つ事になるクラウスのシュトゥラ、この3ヵ国が協力すればきっと・・・。だが、それは叶わない事を私は知ってしまっている。こういう時により強く思う。

（未来など知っていなければいいのに・・・！）

そうだったら心の奥底からクラウスの夢を応援できるのに。フィロメーラに「どうかなさいましたか？」と訊かれ、私は「いいえ。何でもありませんよ」と努めて微笑む。私は立ち上ってフィロメーラ

の前に立ち、頭を下げる。

「そういうわけですので、私はイリュリア戦争後、おそらくベルカには居ません。ですからガレアの御力になる事も出来ないでしょう」

「そうですか。判りました。残念ですが、貴方を迎え入れるのは諦めます」

フィロメーラは本当に残念そうに言って立ち上がり、私のコートをわざわざ畳んで差し出してきた。それに礼を言って受け取り、袖に腕を通す。そして「それでは騎士オーディン。お話が出来て嬉しかったです」フィロメーラはスカートの裾を僅かに上げて一礼、踵を返して去って行った。それと同時にヴィンツェンツの視線も外れた。警戒されっぱなしだったなぁ、ホント。また1人になり、月を見上げて改めてエテメンアンキ攻略を考えようとした時、

「騎士オーディン様。お時間になりました。議会場の方へお願いします」

甲冑を着込んだアウストラシアの騎士が呼びに来た。「判りました」と答えて、その騎士と共に議会場へと向かう。途中でシグナムと合流。アギト達はやはりぐっすり眠っていて起こせないそうだ。最後のT字の合流地点でクラウスとオリヴィエと合流し、議会場へと入る。ヴィンランド、シュヴァーベン、ヘルウェティアの代表3人はすでに議会場入り。で、ダールグリュン帝は議会場を出た時と変わらず足と腕を組んだまま考え込んで・・・・ん？

「・・・・Ｚｚｚｚ」

眠りこけてるダールグリュン帝の姿に「眠ってる・・・？」力が抜けそうになる。オリヴィエは「時間が時間ですし。ふわぁ、私も少し眠いです」と小さな欠伸と苦笑い。そしてクラウスは「なんとも起こし辛いですね・・・」と少し腰が引けている。気持ちは解る。誰だってそう思うだろうな。三連国バルトの主格であるウラル国の皇帝だ。

そんな男を起こせる勇者はそうはいないだろう。騎士たちも困っている様子だ。あぁ仕方ない。ダールグリュン帝の傍に歩み寄り、「ダールグリュン帝。時間です」と揺さぶる。代表３人や騎士たちが「うわぁ、勇気あるなぁ」「勇者だ」などなど私の行為に称賛を送ってくる。

「む？　おお、魔神か。いかんな、居眠りをしていた」

寝起きがいいのが幸いしたな。もし悪ければ、バトル突入になっていたかもしれない。いつぞやの契約先世界で、私が仕えていた半狼半人の御令嬢（寝起き最悪すぎる）を起こした際、刀で斬り殺されそうになったものだ。

「遅れて申し訳ありません」

謝罪の言葉と共に入ってきたのは、ヴィンツェンツと変身し直したイクスヴェリアだった。全員が円卓に座し、日を跨いでの会議その２の開始だ。とは言え、話の内容は変わらない。ポロッとドルテ王女が漏らした、民を優先するために降伏するか、あくまで徹底抗戦

か、という言葉に・・・議会場は揺れた。民の命優先。国を治める王族として最も重要な事柄だ。クラウスとオリヴィエが悔しそうに拳を握り締めたのが見えた。

『・・・・（ここまでか）シグナム・・・・』

『はい、何でしょうオーディン』

『先に謝っておくよ。君との約束、破ってしまう事を』

『まさか・・・いけませんっ！』

「『すまない、シグナム』・・お集まりの皆さんに、私から1つ提案させてください」

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒？？？？†††

エリーゼの身代わりとしてイリュリアへと拉致された私。私の大切な妹分のエリーゼを求めていたのは、女王となっていたテウタだった。口づけした相手に魔力を供給できる能力を持つエリーゼを、オーディンさんから引き剥がす事が目的。エリーゼとオーディンさんを引き剥がすのはダメ。あの子の恋を邪魔したくない。それに、

（これ以上、アムルを傷つけさせないわ・・・！）

口づけされた怒りと悲しみを、使命感で捻じ伏せる。テウタを護る騎士団総長グレゴールや騎士が居なくなった今、テウタを暗殺する

絶好の好機だわ。私が身構えているのを恐怖心からだと思い違いをしたテウタが「そう身構えなくても取って食べようとは思いませんから」と微笑んで、堂々と背中を向けた。"アインホルン"を音もさせずに起動する。不死身じみたグレゴールには通用しなかったけど、

「はぁぁぁぁあああああああああああああッッ！」

――バリサルド――

いくら強者でもあんな隙だらけの背中なら、一刺しでその命を刈り取れるわ。細身の刀身に雷撃を纏わせ、テウタの背中に"アインホルン"の剣先を突き入れた――はずだった。

――影渡り（シュルプリーズ）――

「え・・・？」

私とテウタの間に在る私の影から1人の少女が現れて、雷撃をものともせずに"アインホルン"の刀身を鷲掴み、テウタを救った。

「わざわざありがとうございます、レーゼフェア様。ですが、そのような事を為さらずとも私は平気でしたよ？」

テウタが、様付で呼んだ。その事実があまりにも衝撃で、私はテウタにナメられていた事なんかより、私の一撃を防いだ少女にだけしか意識が向かわない。テウタに、レーゼフェア様、と呼ばれた少女

が「にゃはは、それはごめん。まっ、僕も大丈夫かなぁって思ったけどさ」と私に振り向きながらそう笑った。第一印象は猫ね。真紅の双眸も、艶やかな唇も猫っぽい。でもそれ以上に、

（この子、なにっ・・・！？）

本能的な恐怖で体が震える。「えっとさ、そろそろ雷撃止めてくれると嬉しいかなぁ」と口端を吊り上げて、さらに猫のように見え始めた。ほんわか雰囲気を発しているのに、とても可愛らしい笑顔なのに、私にはただ恐怖しかない。だからすぐに雷撃を武装に纏わせる魔導バリサルドを解除する。するとレーゼフェアが「ありがとね～」と"アインホルン"を離してくれてた事で私は一足飛びで大きく距離を開けた。

「エリーゼ卿は戦闘が出来ないって話のはずなのだけど・・・。あぁ、エリーゼ卿本人ではないという事ね。なら、貴女・・・誰？」

バレた。こうなれば改めて決死を覚悟して、「カスパール！」再度雷撃を纏わせた"アインホルン"を振るって、雷弾を８基放つ。レーゼフェアは「おおう」と驚きを見せ、そのまま佇んでカスパール全基の直撃を受けた――かのように見えたけど、当たる直前で消えた。障壁！？　それにしては不自然な消え方で。防がれた、弾かれたというより消滅したと言った方がしっくりくる。

「ランクは大体ＡＡＡくらいかなぁ～。確かにテウタには通用しないよね」

「申し訳ありません。どうぞお下がりくださいませ、レーゼフェア様。私が相手をします。・・・さて。貴女がエリーゼ卿の偽者と判った以上、貴女にはもう用は無い。イリュリア女王たる私を殺そうとしたのだから、もちろん反撃される事も覚悟の上なのでしょう？」

テウタの魔力が膨れ上がったと思った時には、すでに私の懐深くにまで最接近していた。体勢からして肩からの突進。一瞬でそう判断した。けど体が思考についていけない。ただ瞬間的に、前面に障壁を展開。

――夢影・弐乃打ち方・連拳――

テウタはその場で半回転、障壁に裏拳を打ち込んだ。確かにそう見えた。だけど信じられない事にテウタが何人も居る。実際に見ているのに、テウタの姿は1人じゃないのだ。まず初撃の1人。初撃のテウタが消滅したかと思えば、二撃目の裏拳を打ち込んできた2人。2人目が消えたと思えば三撃目の裏拳を繰り出す3人目。障壁はその3人目の裏拳で砕かれ、4人目と5人目、最終的には9人目までの裏拳を胸部に打ち込まれた。

「ぐふ・・・っ！！」

変身の魔導の副次効果である防御力強化と騎士甲冑本来の防御力のおかげで意識は落ちず、殺される事もなかったのだけど。でもテウタの攻撃はそれで終わりではなかった。胸から背中へと突き抜ける9連撃の衝撃で呼吸困難になった私の顔面へ蹴打を繰り出してきた。直撃は確実に致命傷。そう思えるほどの威力だと肌で感じ取れる。

「待つんだ」

突如として目の前が真っ赤になった。ゲホゲホ咽ながらもなんとか後退。離れた事で全体が見えた。私とテウタの蹴打の間に入ったのは、真紅の大剣だった。息を整えつつ私を救ってくれた？大剣の持ち主に目をやる。真っ先に目につくのは銀髪だった。ベルカではそう見ない髪色。オーディンさんと同じ色。そう思うと、大剣の持ち主の青年がどこかオーディンさんに似ているように見えた。

「ガ、ガーデンベルグ様！　申し訳ありませんでしたっ！」

テウタが顔を蒼くしてかしずいた。いよいよこの青年――ガーデンベルグが只者ではない事が見て取れる。ガーデンベルグの持っていた大剣が無数の深紅の羽根となって消えた。そして、

「驚いた。君、アルベルトゥス・フォカロルの血族か」

気付くとガーデンベルグは私の右頬に触れていた。だけど身動きが出来ない。でも思考だけは働く。アルベルトゥス・フォカロル。幼少の頃、エリーゼの御父上エーベル様に引き取られる前、実の祖父母に、禁句だよ、と言われていた名前。

「テウタ。彼女を殺害するのは待ってくれ。神器王ルシリオン・セインテスト・アースガルドを討つ駒にしたい」

「はい。ガーデンベルグ様の御意志のままに」

ルシリオンとは誰？　誰とも知らない人を討つために、私を利用するの？　そう思う反面、セインテスト、という名前に、まさか、という思いも生まれる。オーディンさんと同じセインテスト。そしてベルカでは見ない銀髪をしたガーデンベルグ。オーディンさん、私たちに嘘の名前を騙ってる？　ルシリオンと言うのが本当の名前・・？

「アルベルトゥス・フォカロルの血族よ。今こそ目醒めの刻」

私とガーデンベルグの足元に、純白の光が生まれた。それは魔法陣。発光量が凄まじすぎてどういった形状の魔法陣かは判らないけれど。

「え？・・・う〝っ、あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ッッ！」

強烈な頭痛に叫び声を上げる。何か、何かが頭の中に流れ込んでくる・・・？　ベルカ？　ううん、違う。ベルカよりももっと寂しい鈍色の空。すぐ近くには広大な海。海面の至る所から爆発が起き、水柱を噴き立てている。時には剣やら槍やらいろいろな武装が勢いよく海面へ落ちていく。何が起きているのか確認するために辺りを見回そうとするけれど体は動かない。何故？　それに、

「エレウシス様にも困ったものね」

私の口が勝手に動いた。口調が違って、声も私のものより大人びている。

「まったくだわぁ。孤人戦争ルシリオンさまってぇ、シュゼルヴァロード家の双姫さまやぁアルファデウスのお転婆姫さまのぉお客様でしょぉ～♪」

ゆったり間延びした、ちょっとイラッとくる口調をした少女の声が隣からした。首が勝手に動く。その少女を見て、愕然となる。上半身は人間。でも裸。胸は鱗のようなもので隠れているけど。背中からは４枚の翼。片方は鳥の羽、もう片方はコウモリの羽。そして下半身が、伝奇で見たような竜の尾。

「孤人戦争？　神器王ではなかったかしら・・・？」

「どっちでもいいじゃない。結局、同じ人間のことなんだし」

「うんうん。そのルシリオンってぇ人間なのにぃ、最下層魔界の魔族相手によく持つよねぇ」

「彼、魔術師でしょ。元々私たち魔族の専売特許だった魔術を、人間の棲む表層世界にもたらした原初王オーディンの末裔と聞いている」

シュゼルヴァロード。オーディン。その末裔のルシリオン。途轍もない何かを生み出す欠片が集まってくる気がしてならない。

「ルシリオン、今人間やめてる。自分と恋人で生み出したエグリゴリっていう子供たちに殺されたって話で、今はテスタメントになっ

てる」

「テスタメントって世界の奴隷じゃない。お可哀想にルシリオン様。散々こき使われて、いつか壊れてしまうわ」

「それほどまでに復讐したいのではなくて？　自身どころか恋人や家族をも殺されたって話よ」

まったく同じ格好の魔族？という連中が、ルシリオンについてわいわい話し続ける。理解できない単語ばかりだというのに、私には何故か意味ある欠片として組み上がっていく。そして、一際大きな爆発が海上で起こった。立ち上った水柱からここへと何か黒い影が飛んでくるのが見える。

周り連中が「終わったようねぇ」「こりゃルシリオン様の負けね」と1ヵ所に集まって、空から落ちてくる何かを受け止める態勢になる。私もその1人だ。徐々にソレが何か判る。人だ。長くきれいな銀髪。全身が黒い服に包まれていて・・・。サッと私たちが受け止めたソレは間違いがなく、

（オーディンさん・・・！）

「負けた。さすがは大海の竜アルベルトゥス・フォカロルの当主エレウシス、強いな」

「ルシリオン様ぁ、私たちを甘く見過ぎだよぉ」

銀髪、蒼と紅の虹彩異色、男性なのに女性みたいな貌、声、そのど

れもがオーディンさん。なのに誰もが彼をオーディンとは呼ばず、ルシリオンと呼ぶ。私たちの知るオーディンさん。あなたはいったい何者なんですか・・・？

「ルシリオン様も大変ですね。世界の奴隷になってまで復讐をするなんて」

「復讐、か。最初の千年はそうだったが、エグリゴリへの復讐はもう考えてない。今はただ救いたいんだ。洗脳されていたとはいえ、その手で家族を殺してしまったあの子たちを。そのためなら奴隷だろうとなんだろうと、数千年・数万年掛かろうと、私は戦い続ける」

ルシリオンの決意に満ちた横顔は、まさしくオーディンさんのものと同じ。意識はそこで途切れ、次に意識を取り戻した時、私はオーディンさんと水中戦を繰り広げている最中だった。オーディンさんを傷つけ、化け物の体に変えられた私は、殺してください、と死を求めた。

――生きることを諦めるなッ――

――ああ、助けるさ！――

――ああ、そうだっ、君は人間だ！――

――もう少しだ！　がんばれ、アンナ！――

でもオーディンさんはそう励ましてくれた。そこには何一つとして

嘘はない。だから信じよう。あなたの正体がオーディンではなくルシリオンであったとしても。

「・・んぁ・・・・ここは・・・？」

長い夢を見ていた。なぜか流していた涙を袖で拭い、現状を確認する。私は今、寝台の上に寝かされている。寝台の寝心地や部屋の天井のデザインからして、シュテルンベルクの屋敷ではないことが判る。少し気怠いけれど上半身を起こし、窓から外を眺める。アムルじゃない。街の外観からして隣街のヴレデン。

状況を知るためにモニカかルファに思念通話を繋げようとするも、「魔力が空っぽだわ」諦める。しょうがなく部屋を出る事にした。寝台から足を出し、「元に戻ってる・・・！」竜の尾ではなくちゃんと私の両足だった。

「オーディンさん・・・本当にありがとうございます」

改めてオーディンさんに感謝をし、寝台の傍に置いてあった靴を履く。歩けることに感動を覚えつつ部屋を出る。廊下は消毒液臭いため、ここは病院・・？　とりあえず外へ出てみることにした。陽の高さからして夜が明けたばかり。
少し辺りを歩いていると、「そんなの嫌ですッ！」悲痛な叫びが聞こえた。「エリー・・・？」の声で間違いない。声のした方へと向かう。その間にも、「なんでそんな事を言うんですか！」や「嫌ったら嫌です！」エリーゼの叫びが続く。
辿り着いたのは、早朝と言う事もあって閑散としている公園。その中央で、エリーゼが1人ジタバタ暴れながら喋っていて、「え？なに？」少し引いた。

「エリー・・・」

「――の馬鹿ッッ！・・・って、アンナ・・・？」

私の声に反応して振り向いた泣き顔のエリーゼに「・・・おはよう、エリー」と挨拶をする。するとさっきまでとは打って変わって「アンナ・・・アンナ！」目の端に涙を浮かべながらも満面の笑みとなって私に駆け寄り、「アンナ！」飛びついて来た。しっかりと受け止め、「エリー。どうしたの？」と今しがたの独り言について訊いてみる。

「え？・・・あ、うん、そう聴いてよ！　オーディンさんが馬鹿なの！」

『馬鹿て・・・。待ってくれ、エリーゼ』

どこからともなくオーディンさんの声が。というか「何？　この胸の高鳴りは・・・？」オーディンさんの声を聴いただけで心臓が早鐘を打つ。それに顔も火照りだして。まさか・・・嘘、そんな・・・私、オーディンさんに・・・・

「オーディンさん、馬鹿じゃないですか！　エテメンアンキ攻略の為に、犠牲になるなんて！」

まずそのエテメンアンキというのは何なのかしら？　攻略と言うからにはイリュリアの兵器か騎士団か、あるいは融合騎か。

『誰も犠牲になるとは言っていないだろう。多少の記憶消失は免れないだろうが、何千万と言う人命を救うのなら安い代償だ』

「その代償の中に、わたし達との思い出が在ったらどうするんですか！」

エリーゼの言葉に心臓が跳ねる。オーディンさんに忘れられる。それがすごく恐ろしい。ダメだわ私、やっぱり・・オーディンさんに恋してる。どうしよう。叶わない、叶えるわけにはいかない想いなのに。ドキドキしながらオーディンさんの声がする場所に目をやる・・・ん？　小鳥が一羽・・・？

『大丈夫だよ、エリーゼ』

小鳥が喋った・・・って、あ、使い魔か何かなのね。　エリーゼは

小鳥を介してオーディンさんと話をしていたわけか。こんな便利なモノがあるなら、もっと以前から使っていればよかったのに。

「そんな根拠のない、大丈夫、を言われても安心なんか出来ませんっ！　アンナからも何か言ってあげてよっ。オーディンさん、無茶ばっかりして、きっと壊れちゃうよっ！」

エリーゼの必死さ、そして私自身の受け入れがたい恋心。それらの想いと一緒に「自己犠牲などがカッコいいと思っているんですか？　確かに馬鹿ですね」つい冷たく言い放ってしまったわ。心のうちで、もっと言い方というものがあるでしょ、私の大馬鹿、などと頭を抱える。

『あはは、いつも通りのアンナのようで良かったよ』

「っ・・・！」

オーディンさんが私の身を案じてくれている。ダメ、にやけてしまう。必死ににやけるのを抑えつつ、「はい。心身ともに問題ありません。助けて下さってありがとうございました」努めて口調は冷静に（内心は心臓バクバクで狂いそう）して礼を言い、

「オーディンさん。自己犠牲なんかカッコよくありません。一体どういった経緯でその結論に達したのか、今起きたばかりの私には判りません。ただ、あなたのその行為によって助かる人もいれば、悲しみ苦しむ人がいるのは忘れないでください」

「アンナの言うとおりですよっ」

『と言われてもな。もう手が無いんだ。クラウスやオリヴィエ王女殿下、ダールグリュン帝やイクスヴェリア陛下らも困っている』

とんでもない名前が出てきてクラッとなる。そしてオーディンさんから語られる、私の知らないベルカの現状。

（私がイリュリアに拉致されてからたった1日でこうも状況が逼迫するだなんて・・・）

ミナレットに続いてエテメンアンキなんてふざけた兵器が、今日の正午、テウタからの降伏勧告を受け入れなかった国を蹂躙する・・・。それを防ぐためにオーディンさんが、自分の持つ魔導でどうにかしようと必死になって。その対応策には膨大な魔力が必要なのだけど、オーディンさん個人の全魔力を使って足りる量らしい。だけど、その魔力を生み出している中で魔導を発動すると、記憶が消失。

『――魔力供給が連続で行えればいいが、エリーゼの能力の使用限界回数は1日2回。発動から維持となるとそれでは追い付かない。なら・・・・仕方ないじゃないか』

諦観めいたオーディンさんの声が小鳥から零れる。エリーゼが「ごめんなさい」と頭を深く下げた謝ると、『エリーゼは何も悪くないよ』優しい声色で諭すオーディンさん。何か良い手が無いかと必死に思考を巡らせる。正直オーディンさんでも諦めているとなると、私の頭では考えられないかもしれないわ。

「わたしと同じ魔力供給できる能力を持つ人がもっと居ればいいのに・・・」

「魔力核を2つ持っていて、それを口づけだけで相手に供給できるなんて便利な能力、そうそう無いわ」

「そうだよね・・・。えっと、それじゃあ・・・う～ん・・・」

『もういいよエリーゼ。それにアンナも。気持ちだけ――』

「いいえ、ダメです！」

ピシャリとオーディンさんの言葉を遮る。エリーゼが少し驚いているけれど、今はオーディンさんの記憶を失わない方法を探すのが重要だわ。

「連続供給が出来ればいいのですよね。確かオーディンさんは魔力吸収の魔導を持っていましたね・・・？」

『ああ。女神の救済（コード・イドゥン）という魔道があるが・・・。ん？　待てよ・・・。もしかして・・・いや可能かもしれない』

オーディンさんが何か閃いたようで、少し黙り込む。エリーゼと顔を見合わせ、オーディンさんの言葉をじっと待つ。そして『エリーゼ。アンナ』名前を呼ばれ、「はい」エリーゼと一緒に返事をする。

『君たちのおかげで何とかなりそうだ！　ありがとう、感謝する！
大好きだ2人とも！』

オーディンさんに、大好きだ、と言われ、私はもう嬉しすぎて何も言えなくなってしまった。エリーゼだって「はぅぅ」耳まで真っ赤にしてもじもじしている。そんな事などつゆ知らずオーディンさんは『エリーゼ。君に頼みたいことがある』そう前置きし、エテメンアンキ攻略についての簡易な計画案を私たちに話した。
正直、「そ、そんな事が出来るんですか！？」「それこそ無茶・無理・無謀ですっ！」だわ。ちなみに前者はエリーゼ、後者は私の発言よ。オーディンさんが計画で行おうとしているのは、もはや人間業じゃないもの。

『ふふ。これでもかつては孤人戦争と恐れられたほどの猛者だったんだぞ私は』

孤人戦争と恐れられていた。その言葉に、あぁ間違いない、と一気に覚める。オーディンさん、あなたはやっぱりルシリオン・セインテスト・アースガルドさんなのね・・・。

「孤人戦争・・・ですか？」

『私個人の有する魔道の火力が、独りで戦争を戦い抜けるだけのものだという事で付けられた、ある種の忌み名だ』

「そ、それはまた凄そうですね・・・」

エリーゼの戦慄を余所に、私は「その計画は、どの国、どの地域で行いますか？」と尋ねる。

『今からクラウス達と話し合って決める。場所が決まり次第、もう一度連絡をつける。それまで待っていてくれ。・・・それでだエリーゼ、その――』

「オーディンさんのお役に立て、そしてエテメンアンキ攻略の重大な役目を担う事が出来るんです。それって、とても光栄な事ですよ」

『ありがとう』

オーディンさんの感謝の言葉を最後として小鳥がチュンチュンと本来の鳴き声を出す。

「ねぇ、エリー」

「ん？　なぁにアンナ」

「・・・・ううん、何でもないわ。オーディンさんの計画に備えて、ご飯をたくさん食べて少し休みましょ」

「うんっ♪」

今はまだ私の胸の奥に閉じ込めておこうと思う。私がオーディンさんに恋をしたこと。そしてオーディンさんが、名前――正体を偽っていて、最悪人間ですらないナニかだという事も。

Ｍｙｔｈ２５－Ｂ圧倒的暴力と超絶的暴力～Ａｄｖｅｒｓａ　Ｖｉｒｔｕｔｅ　ＲｅｐｅｌＯ～

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

どうして気付かなかったんだ。エリーゼと、無事に目を覚ましたアンナに言われるまで、ある手段が思い浮かばなかった。魔力供給。その連続。そして魔力吸収の魔道・女神の救済（コード・イドゥン）。この３つのキーワードが、エテメンアンキ攻略の鍵となる。

"界律の守護神テスタメント"としての干渉能力を扱えず、魔術に頼り切るしかなかったこれまでの数ある契約のうち、今回ほど恵まれた事はない。そう、これまでとは違って使用できる複製術式や物品の制限が緩い。魔力制限の問題さえクリアできれば、

（かつての魔術師ルシリオンとしての強さを取り戻せる）

面前の前に持ってきた左手を強く握り拳にする。そして軽く魔力を放出。魔力は蒼い光となって私の周囲を照らし出す。そんな中「お綺麗ですね」そう声を掛けられ放出を止める。振り向いてみると、やはり「オリヴィエ王女殿下。それに・・・」オリヴィエとその側近である１人の少女が居た。

「騎士リサ。もう起きてきて平気なのか？」

「はいっ。オーディンさんの魔導のおかげでもう全快ですっ♪」

ゼフォンに殺されかけたリサが笑顔を振りまく。本当に良かった。もし"堕天使エグリゴリ"関係で死者が出たとなると、もう自分を許せなくなる。リサは元気を証明するように小躍り。シャルとは違って上手いな。音痴や踊り下手はフライハイト家の遺伝ではないらしい。

「そうか。・・・オリヴィエ王女殿下。先の会議でお話しした件ですが」

「っ・・・・申し訳ありません。騎士シグナムや皆さんからお聞きしました。オーディンさんがご立案なされた今回の計画、オーディンさんの記憶が犠牲になると」

「それ、本当なんですかっ！？　エグリゴリの問題じゃないのに、どうしてそこまで――」

「ベルカが好きだからだよ。イリュリアとエグリゴリとの戦いが決着すれば、私はベルカを去る事になる。それまではベルカの為に力になろうと思う。途中で投げ出すようでクラウスやオリヴィエ王女殿下ら皆さんには申し訳ない気持ちでいっぱいだが。しかし――」

「いいえ。本来であればオーディン先生はエグリゴリだけに専念できていたはずです。ですけど貴方はそうはせず、記憶を犠牲にしてまでベルカの為に御力を使ってくれました。途中で投げ出す？　いいえ、それは違います。それがオーディン先生にとっての決着なんです。ですから後の事は御気になさらず、心置きなく旅立ってくだされば、こちらとしても嬉しいです」

オリヴィエがそう微笑み、しかし「ですが本心を言えば、エリーゼ卿と御結婚していただければよかったのになぁ～なんて思っていました」最後に本音を漏らした。リサも「これからも一緒に戦っていきたかったです」と心底残念そうに俯く。それにはただ「申し訳ありません」と謝る事しかできない。そんな暗い空気を払しょくするためとは言わないが、

「それでですね、先ほどの計画についてなんですが・・・。少しばかり変更があるのですが・・・」

「オーディン先生の立案した計画です。お好きなようになさってください。ダールグリュン帝とイクスヴェリア陛下も、オーディン先生にお任せするとの事です。それで変更との事ですが、何を変更なさるのでしょうか。あ、兵力増員に関しては時間がかかりますが可能ですよ」

「聖王家に忠誠を誓いし近衛騎士団、中でもオリヴィエ様に身命を捧げた我らズィルバーン・ローゼ隊も参戦します。もちろん将の私もです。ゼフォンには後れを取りましたけど、イリュリア騎士には絶対負けませんッ！」

「それは心強いな。戦力が増えるのはとても嬉しい。けどそれとはまた別なんだ騎士リサ。オリヴィエ王女殿下。詳細は他の代表の方々の前でお話ししたいと思います。よろしいでしょうか？」

「もちろんです」

というわけで、８ヵ国の代表が集い話し合う議会場へ。思念通話でアギト達を呼び出し、アウストラシアの騎士たちは代表らを呼びに行く。先に到着した私たちは席に着き、そして遅れて来た代表らに計画の変更の詳細を伝える。内容が内容だけにかなり論戦になるかもしれないと覚悟していたが、

「――よかろう。エテメンアンキの攻略の起点はお主だ。必要なモノがあるなら揃えるまで。お主らもそうだろう？　魔神の力で、今日、我らはイリュリアを相手に勝利を手にする事になるのだ。その魔神が必要なモノがあるというのであれば、用意してやるのは我らの責務だろう」

ダールグリュン帝の言葉は正に鶴の一声。シュヴァーベン第三王女ドルテ、ヴィンランド第四王女コルネリエ、ヘルウェティア第六王子アルフォンスも、私の計画変更に乗ってくれた。イクスヴェリアとヴィンツェンツも「構いません」と承諾。

もちろんクラウスも「オーディンさんの頼みとあれば、シュトゥラは全面協力です」と承諾。しかし、オリヴィエと兄殿下リナルドは少々苦い表情を見せている。ガレアの王子ヴィンツェンツが「どうかなさいましたか？」と尋ねる。

「・・・聖王家直下の生命すべて、父・聖王シャルルマーニュ陛下と第一王子ロランお兄様のモノ。王族とは言え、王位継承権第十四位の私オリヴィエ、第三位リナルドお兄様ですらも自由に出来ないのです」

「そういうわけですので、騎士オーディンの提案には応じる事が出来ません」

「いえ。元より無茶なお願いでしたので、こちらこそ申しわけありません」

アウストラシアはダメだったが他の国からは承諾を得た。これで問題はクリアだろう。で、次の問題だが「どの国、どの地域で魔神の力を発動させるかだが」ダールグリュン帝が代表らに語りかける。これには誰もが渋る。下手をすればカレドヴルフの集中砲火を受けるかもしれないという恐怖の所為だ。これには時間が掛かるかと思ったが、「シュトゥラはノイヴィート丘陵で行っていただきます」クラウスが名乗り出てくれた。

「一都市が入るほどの広大さですし、周辺に街はありません。行うなら、そこが一番でしょう」

「・・・決まりだな。では皆よ、高魔力を持つ生物をシュトゥラはノイヴィート丘陵へ移送するよう手筈を整えるぞ」

こうして対エテメンアンキ戦の準備が着々と進んでいく。8ヵ国＋オリヴィエ&リナルド議会はこれにて閉会。各々、正午の開戦の準備をするために国へと戻っていく。アウストラシアより飛び立って行く各国の戦船を、アギト達やクラウス、オリヴィエらと一緒に見送る。

「アギト、シグナム、ヴィータ、アイリ。今日は忙しい1日となる。

本日、ベルカ一の大国イリュリアを打倒する。心して掛かってくれ」

「「「「ヤヴォール！」」」」

アギト達は声を張って応じてくれた。それからエリーゼ達の居るヴレデンに向かわせた野鳥に精神を繋ぐ。野鳥を介してエリーゼと会話をするためにだ。私の魔道に耐えられる脳を持っていたのが、魔力核を持つあの野鳥だけだった。もしかしてかなり貴重な種かもしれないな。訴えられたら確実に負けるな。

「・・・っと、そうだ。騎士リサ。あとで2人きりでの話があるんだ、時間をくれ」

「2人きりで、ですか？　えっと・・・」

その前にやっておく事があったんだった。リサに時間を作ってもらえるよう頼む。リサは指示を仰ぐようにオリヴィエを見る。オリヴィエは「行ってらっしゃい、リサ。オーディン先生は信頼できますから」と微笑んだ。

するとリサも「はいっ」と力強く頷いて、今すぐにでも時間を作ってくれるそうだ。誰も居ない廊下で待ち合わせをし、先に待たせていたリサの元へ遅れていく。フライハイト家のリサに、渡しておきたいモノを用意してから・・・・。

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒エリーゼ†††

アンナの復調をモニカとルファ、シャマルさん達と一緒に喜んでい

るところに『エリーゼ？』ザフィーラさんの頭の上に乗っている小鳥からオーディンさんの声が。すぐに「はいっ。あなたのエリーゼですっ」元気いっぱいに返事をすると、『待たせてすまない。早速だが――』オーディンさんがノイヴェート丘陵で事を行うと教えてくれた（あなたの、が流されたよぉ（涙））。わたしの隣では「無視された」「無視されたね」「無視されたわ」ルファとモニカとアンナが苦笑いして、肩をポンと叩いてくるから余計落ち込む。

『それで、だ。シャマル、ザフィーラ、シュリエルはそこに居る――』

「はい。もちろん居ますよオーディンさん」

「何かご用でしょうかオーディン！」

シャマルさんとシュリエルさん（は特に必死っぽい）が、オーディンさんが言いきる前に応じて、ザフィーラさんだけは冷静沈着に「ここに」と応じた。オーディンさんに『エリーゼ。３人に、私の計画については？』そう訊かれ、わたしは「勝手ながらにお話ししました」と答えた。

オーディンさんからの連絡が小鳥を介して来ました、なんて話をしたら、一体どういった内容だったの？となるわけで。シュリエルさんの威圧感が半端じゃなかったために、オーディンさんの計画を教えちゃいました。

『そうか。ありがとうエリーゼ。手間が省けて助かる。シャマル、ザフィーラ、シュリエル。エリーゼと共にノイヴェート丘陵へ来て

くれ。そこから本格的にイリュリアとの決戦となる。心して掛かるように』

「「「ヤヴォール！」」」

ザフィーラさんはいつもそうだけどカッコよくて、ほわほわ温かいお母さん的（この前、そう言ったら泣かれた）なシャマルさんは凛として、シュリエルさんもさっきまでとは違ってビシッと決めてくれた。

『待っているよ。・・・アンナ、モニカ、ルファ。またな』

「はいっ」「うんっ」「はいっ」

小鳥が「チュンチュン」って鳴いて、ザフィーラさんの頭の上から空高く飛び去って行く。さてと、それじゃあ「行きましょうか。オーディンさん達の待つノイヴェート丘陵に」シャマルさん達を順繰りに見る。みんな頷いて応えてくれた。最後に「アンナ、モニカ、ルファ。いってきます」言っておかないとね。

「「「いってらっしゃい！」」」

これから戦場になるかもしれない場所に向かうわたしを、精一杯の笑顔と大手で送り出してくれる。

（わたしは大丈夫。怖くなんてない。当然死ぬつもりもない。だから笑って行ける！）

シャマルさんとザフィーラさんとシュリエルさんと一緒に、ノイヴェート丘陵へ向かう戦船に乗艦する。ヴレデンから戦船で３０分のところに、ノイヴェート丘陵が在る。そこはイリュリアとシュヴァーベンの二国と隣接する国境域。

「「オーディンさん！」」「オーディン！」

ノイヴェート丘陵のほぼ中央に、オーディンさんとアギト、シグナムさん達が居た。戦船から降りてすぐに駆け寄るんだけど、「シュリエルさん、空飛ぶの反則！」シュリエルさんは飛んで行くから速いのなんの。追いついた時にはもうシュリエルさんはオーディンさんの傍で嬉しそうに微笑んでいた。遅れてわたしとシャマルさんも到着。深呼吸で息を整え終えると、

「よく来てくれた、エリーゼ。シャマル、ザフィーラ、シュリエル」

オーディンさんはそう言って、わたしとシャマルさんとシュリエルさんの頭を撫でて、ザフィーラさんとは頷き合った。撫でられるとホント気持ち良くてふにゃあ～ってなる。シャマルさんとシュリエルさんだって顔を綻ばせてるしね。頭の上から手が離れるのが寂しいけど、もうそんな気楽な事を言っていられないほどにオーディンさんの放つ空気が変わった。それが判ったからこそ、みんなも横一列に整列した。

「では改めてグラオベン・オルデンの将オーディンとして全騎に命令を下す。まずはシグナム、アギト」

「「はいっ」」

「2人にはアウストラシアの騎士隊ズィルバーン・ローザと同行、最前線で戦ってもらう」

「「ヤヴォール！」」

「次。ヴィータ、アイリ」

「おう！」「うん！」

「2人はシュトゥラの騎士団の戦力として参加、これもまた最前線での戦闘だ」

「ヤヴォール！」

ヴィータだけはやる気満々で応えたけど、アイリだけは「マイスター、ちょっと待って」と反論。オーディンさんが「どうした？」って訊き返すと、アイリはオーディンさんの目の前まで飛んで行って、「アイリ、融合騎だから単独戦力は低いんだけど・・・」って言った。言われてみればそうだ。融合騎としての能力は、騎士と融合することで発揮される。アイリはオーディンさんの融合騎。それをヴィータと組ませる・・・・ってまさか。

「アイリ。一時的にロードを私ではなくヴィータに変更。ヴィータの融合騎として戦ってもらう」

「えええ？　ヴィータとぉ？」

「んだよ、なんか文句あんのかよアイリ」

不満そうなアイリとヴィータ。アイリは「だってヴィータってマイスターと違って面白みに欠けるんだよね」なんて言い放っちゃった。面白みって何の話だろ？　ヴィータも「あたしの何がつまらないって？」って半眼で睨んだ。うわぁ、ロードと融合騎って相性が一番大事なのに、これはちょっとまずいかも。

「マイスターの魔導、複雑すぎて意味が解らない時もあるけど、それでも補助が出来た時はすごく気持ちいいんだよね♪　でもヴィータはベルカの騎士としての魔導と強さだから、なんかつまらないんだよね」

「まぁ確かにあたしはオーディンと違って正真正銘のベルカ騎士だ。だから魔導の方もオーディンの――異世界の魔導に比べればつまらんだろうけどさぁ」

つまらないだとかつまるとかの問題じゃないよ、今は。融合騎プロトタイプの姉としてアギトが「アイリ。お前、わがまま言っちゃダメだろ」って窘めると、オーディンさんも「アイリ」少し語調を強めて名前を呼んだ。

「・・・ヤヴォール。マイスターのお願いだからしょうがないよね」

「なんか上手くいく気がしねぇ・・・。なぁオーディン」

縋るような上目使いでオーディンさんに不満をぶつけるヴィータ。

「正午まであと3時間。それまで融合の練習をしていてくれ」

ヴィータの頭を撫でつつ体をアイリの方へ向けさせた。ヴィータは「へ～い」、アイリは「は～い」ってお互いやる気の見えない返事をしながら離れて行った。

「・・・それでは次。ザフィーラ、シュリエル」

「「はい」」

「ザフィーラは私の護衛に就いてもらう。そしてシュリエル。エリーゼをヴレデンへと送り届けた後、私の護衛としてザフィーラと交代」

「「ヤヴォール！」」

「そして最後に、シャマル」

「はい。オーディンさん」

「シャマルは、戦場医師として後衛に回ってもらいたい。もちろん後衛部隊の護衛としても働いてもらう事になる」

「ヤヴォールです。お任せてください」

グラオベン・オルデンみんなの、イリュリア決戦時の役目が決定した。オーディンさんは最後に「ありきたりだが最後の命令だ。死ぬな、いいな？」と告げると、離れて融合の練習をしてるヴィータとアイリも含めたみんなが「ヤヴォール！」今までで一番声を張って応じた。

「それじゃあ各騎、しばらく待機だ。エリーゼ、こっちへ来てくれ」

「あ、はいっ」

歩き出したオーディンさんの後をついていく。小高い丘の先、「魔法陣・・？」のような巨大な図形が描かれていた。それぞれ数字と文字が記された１０の円と、それらを繋ぐ道のような線・・と思ったけど、１～６の円の中央にもう１つ円が在るから、全部で１１の円だ。

オーディンさんは「セフィロトの樹という名前なんだ」と教えてくれて、１つの円へと歩いていく。このセフィロトの樹というのが、オーディンさんが孤人戦争としての"力"を発揮するのに必要な祭壇だという事だ。目を凝らしてみて見ると、図形はすべて文字みたいなもので形作られている。「ルーン文字と言ってね、私の故郷の魔道のオリジナルなんだ。文字１つ１つに意味と力があるんだ」

「そうなんですか・・・」

オーディンさんの故郷の事が少しだけ判って嬉しくなる。それから

少しの間、オーディンさんはわたしや集まってきたみんなに出身世界の事を話してくれた。支柱塔"ユグドラシル"っていう、エテメンアンキのような塔（兵器じゃないよ）が世界の中心に在って、その途中に４つの大陸が浮いてるんだって。その内の１つ、グラズヘイムがオーディンさんの故郷で、王として納めていた国。いつか行ってみたいなぁとは思ったけど、オーディンさんの世界は滅んだって聞いてる。

「マイスター、戦船が来たよ」

空を見れば、シュトゥラ、アウストラシア、シュヴァーベン、ヴィンランド、ヘルウェティア、ガレア、バルトはウラル・リヴォニア・リトヴァ各国の戦船が。

「ああ。グラオベン・オルデン全騎、現時刻を以って待機を解く。シグナムとアギトとシャマルはアウストラシアの戦船に乗り、その後はオリヴィエ王女殿下と騎士リサの指示に。ヴィータとアイリはシュトゥラの戦船に乗り、その後はクラウスの指示に従ってくれ」

オーディンさんの指示に従って、アギト達はシュトゥラとアウストラシアの戦船に向かって行ってしまった。その背中にわたしは「また逢おうね」ってひとり約束して見送る。そして「騎士オーディン。対イリュリア同盟８ヵ国よりお届けモノです」と８ヵ国の騎士がそれぞれやって来た。

「感謝します」

「しかしよろしいのですか？　我々が運んできたのは、どれも高い魔力を有する各国で恐れられる怪物どもです。それを解き放つのは危険では？」

シュトゥラの女性騎士が尋ねると、オーディンさんは８人の騎士たちを見回して「構いません。お願いします」と頭を下げた。騎士たちは「判りました」と戦船に戻って行って、戦船は浮上を開始、ある程度高度を上げた後に、船体下部から巨大な動物を投下した。とんでもない魔力を内包していて、簡単な魔導を使って平和を乱す魔物と恐れられる動物たちだ。

「すまないな。お前たちの魔力、頂くぞ」

――闇（コード）を誘え、汝（カムエル）の宵手――

無数の黒くて平べったい手が地面から出てきて、全部で１３頭の魔物をぐるぐる巻きにして捕獲した。そしてオーディンさんの足元と頭上に大きな蒼く光り輝く十字架の魔法陣が展開。そこに魔物たちを載せた。オーディンさんはセフィロトの樹の、ダアトと記された円の中へと入り「準備完了」と両手の平を胸の前で一度パンッと突き合わせてから大きく腕を広げた。

「エリーゼ。私の傍に居てくれ」

「ふえっ！？」

そんな告白みたいなことを言われたら照れますぅ～。嬉しくもあり

照れくさくもあり。ドキドキしてると「近くに居た方が魔力供給がし易いはずだ」って言われて、「ですよね～」わたしはガックリ肩を落とした。トボトボ歩み寄って、オーディンさんの傍に控える。

「・・・さぁ始めようか」

わたしは知る。オーディンさんの本当の"力"を。

†††Ｓｉｄｅエリーゼ⇒オーディン†††

１４０ｍ²の大きさで描いたセフィロトの樹、ナンバーを持たない隠れたセフィラ・知識のダアトに立つ。私をセフィロトの樹の一部品として組み込み、オートで儀式魔術を発動するために。

「第四級審判執行権限、解凍」

魔力炉（システム）の活動を制限するリミッターの第一段階を解除、２５％の魔力を解放。放出された魔力は、地面にルーンで描いた枝を伝って、すべてのセフィラへと行き届いていく。

「第三級断罪執行権限、解凍」

魔力を５０％まで解放。今の時点で魔道を発動すると記憶を失ってしまうが、それを防ぐために前もってセフィロトの樹という、魔力を肩代わりしてくれる儀式魔術の祭壇を用意していた。魔道は私の意思で、魔力はセフィロトの樹が。これなら記憶は失わない。

「第二級粛清執行権限、解凍」

７５％を解放。ここまで派手にやれば確実にテウタはもちろん、"堕天使エグリゴリ"は気づいているだろう。８ヵ国は降伏勧告には従わず、あくまで徹底抗戦の構えを採ると。それでも動かないのは、エテメンアンキの能力に自信があるからだな。

「第一級神罰執行権限、解凍」

１００％の魔力を解放。「ふにゃぁぁあああ！」と魔力放出の衝撃で飛ばされそうになっているエリーゼが見え、彼女の肩を抱いて胸に抱き寄せる。記憶が消失するもう１つの条件、ＡＡランク以下まで消費しないように注意しながら、魔力放出を続行。１０のセフィラ上に私が放出した魔力の塊が現れる。あと少しでＡＡまで行くと言うところで放出を中断。

「エリーゼ頼む！」

「あ・・・はいっ！」

――乙女（クス・デア・ヒルフェ）の祝福――

左手の甲に口づけをしてくれたエリーゼ。ＡＡギリギリまで消費した魔力が全快。中断していた魔力放出を再開。各セフィラに生まれ出た魔力塊がまた大きくなっていく。またＡＡまで消費。二度目のクス・デア・ヒルフェの恩恵を受け、さらに放出。今度はＳランクまで消費したところで中断。

「シュリエル。エリーゼを頼む」

「はい。エリーゼ卿、参りましょう」

空で周囲警戒をしていたシュリエルが降りて来た。エリーゼが私をジーッと見詰め、おもむろに「約束、もちろん覚えてますよね？」と訊ねてきた。もちろん「ああ。必ず帰るよ。待っていてくれ」覚えているため、そう答えておく。するとエリーゼは「待ってます♪」満足そうに笑顔になり、シュリエルに抱えられて、ヴレデンへと飛び去って行った。

「（すまない、エリーゼ・・・）我が手に携えしは確かなる幻想」

複製術式を"英知の書庫アルヴィト"より発動させる。術式名は、集束砲ムーンライトブレイカー。ルーテシアの妹となったレヴィヤタン――レヴィ・アルピーノの魔導だ。その術式を応用させてもらう。魔物たちを載せている魔法陣が輝きを増し、魔物たちの魔力（ついでに生命力を魔力に変換するか）を強制的に収集。その魔力をセフィロトの樹に流し込み、各セフィラの魔力塊をさらに大きくする。

「よし。これだけあれば十分だろう」

息絶えた魔物たちの死体を蒼炎で焼滅させ、灰に還す。仕上げに移る。魔力塊を固定させるために結晶化。４ｍ級のサファイアと化している１０の魔力が、記憶消失を免れながらも大魔術の複数同時発

動するための鍵となる。残り魔力はＳ。戦闘に入れば、魔力吸収のイドゥンで回復できる。さぁ準備は万端だ。

「正午まで、あと僅かだな・・・」

ザフィーラを傍に控えさせ、時間が来るのをひたすら待つ。何度も作戦のイメージを繰り返し、最悪な事態が起きた時の対処法などをいくつも作っていく。ザフィーラが「我が主。正午まで残り５分となりました」と報告してくれた。それに礼を言い、「我が内より来たれ。貴き英雄よ」と詠唱する。アクセスする創生結界は、"異界英雄エインヘリヤル"の存在する"英雄の居館ヴァルハラ"。"エインヘリヤル"顕現に必要な魔力は、

「セフィロトの樹、数は１、意は王冠、色は白、宝石はダイアモンド、神名はエヘイエー、守護天使はメタトロン」

セフィロトの樹、第一のセフィラ・王冠ケテルが肩代わりしてくれる。ケテルの魔力２０％を消費して、

「父なる神の御座の下に侍ることが許されし偉大なる七つの美徳を司りたる天使。汝らの主君ドミヌスの名において、我が召喚の呼び声に応じよ。来たれ。純潔カスティタス。節制テンパランチア。救恤リベラリタス。勤勉インダストリア。慈悲パティエンティア。忍耐フマニタス。謙譲フミリタス」

七美徳の天使アンゲルスを召喚。とは言っても私の傍には誰も居ない。当然。召喚場所はここじゃない。アンゲルスは、シュトゥラ以

外の国の王都防衛に差し向けた。シュトゥラは、私が護る。「我が手に携えしは確かなる幻想」再び詠唱する。今度は武装や物品を貯蔵している"神々の宝庫ブレイザブリク"にアクセス。ケテルの魔力を４０％消費して、

「アースガルド艦隊。出撃」

大戦時、ヨツンヘイム連合の連合国を焼き払った、アースガルド同盟軍の空中戦力である巨大帆船スキーズブラズニル５隻、そして旗艦であるフリングホルニ１隻を召喚。波打つ空間より出現する６隻の帆船を見て、あのザフィーラがポカンと大口を開けて呆けていた。そんな間抜けな表情が新鮮すぎて面白い。そして残りの４０％を消費して、

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」

アンスール・メンバーの武装や能力や魔道を発動させるための専用呪文を詠唱。"ブレイザブリク"の最奥より一挺の大砲・"星填砲シュヴェルトラウテ"を顕現させる。殲滅姫と謳われる事になったカノンに贈った、私特製の２ｍほどの大砲型神器だ。

「私は本来、最前線で戦う者じゃないんだ」

「と言いますと？」

「私はな。後方からの援護射砲撃を得意とする者なんだ」

ザフィーラに答えつつ、"シュヴェルトラウテ"の薬室後部をスライドし、砲弾を装填するための床を出す。"ブレイザブリク"より、ベルカのカートリッジシステムと同じ効果の砲弾・"ガンド"を取り出して床に乗せ、装填する。砲門をエテメンアンキの最上部――砲撃カレドヴルフの砲門が在る柱の1つへ向ける。

さらに、機関銃マシンガン型神器、トンプソンM1A1、MG34、ZB vz・26、MAT M49 SMG、計40挺展開。

小銃ライフル型神器、レミントンM700、モーゼルM1918対戦車ライフル、SVDドラグノフ狙撃銃、H&K SL-9SD、ステアーSSG69、FN FNC、シモノフPTRS1941計80挺展開。

散弾銃ショットガン型神器、モスバーグM590、ミロクSP-120、FN-TPS、M3A2スーパー90、計45挺展開。

「これは・・・・銃、と呼ばれる物ですね」

「知っているのか？」

「はい。以前、闇の書の転生した先で見た事がありますが・・・。このような複雑な型の物は見たことはありません」

"夜天の書"の転生先の世界が、質量兵器を当たり前としている世界なら見た事くらいはあるか。

『約束の正午となりました』

「来たか・・・・！」

エテメンアンキより流れるテウタの声。"シュヴェルトラウテ"の砲門の前面に、１０枚のアースガルド魔法陣を連なるように展開、魔法陣の砲身を作る。

『シュトゥラ、アウストラシア、シュヴァーベン、ヴィンランド、ヘルウェティア、ガレア、バルトはウラル・リヴォニア・リトヴァの王たちよ。降伏勧告の返答をお願いします。降伏の意思を示すには、花火を上げてください。さすればカレドヴルフの標的から外しましょう。そして、エテメンアンキの加護の下、共にベルカを統一しましょう』

テウタの放送はそこで一度切れる。続きは、花火が上がってからだろうな。だが、「見ているんだろう？」ノイヴェート丘陵をどうせその高みから見下ろしているだろう、お前は。聖王のゆりかごクラスの巨体を持つスキーズブラズニルとフリングホルニが、イリュリアとの国境付近に在るのだから、すでに臨戦態勢に入っている事くらいは・・・

「判っているんだろう、テウタ！！」

――真技・時空穿つ断罪の煌めき（ヘルヴォルズ・カノン）――

"シュヴェルトラウテ"のトリガーを引き、カノンの最強の魔道・真技ヘルヴォルズ・カノンを放つ。サファイアブルーの巨大砲撃は真っ直ぐ天を衝き、「直撃だ」エテメンアンキの柱の１本を撃ち抜いた。雲一つない青空だからこそ、エテメンアンキの最上層部を視

力強化した肉眼で見る事が出来る。たとえ曇っていたとしても撃ち抜ける自信はあったがな。火を噴きながら折れ始める柱を見て、満足する。

「ふん。さぁテウタ、これからどんな一手を打つか、見させてもらおうか」

アンスール・メンバーの複製はどれもふざけた魔力消費なため、すぐに"シュヴェルトラウテ"を魔力に還元して、"魔力炉(システム)"に取り込む。遠目ゆえにゆっくりと見えるが、実際は高速で王都へと落下している撃ち抜いたエテメンアンキの柱を眺めつつ、待機。反撃の狼煙の意味を持つヘルヴォルズ・カノン。クラウス達はイリュリアへ進軍しているはずだ。

――発見(コード)せよ、汝(イシュリエル)の聖眼――

手の平サイズの魔力球を13基作り出し、クラウスら進撃軍のもとへ放つ。サーチャーであるイシュリエルを通してその場の様子を見る事が出来る。これで援護砲撃がし易くなる。防衛はアンゲルスとアースガルド艦隊、攻撃は進撃軍、援護は私。

「カレドヴルフだろうがなんだろうが撃ってこい。全ての砲撃を防ぎきってくれる！！」

ま、その前に「全銃軍、目標エテメンアンキ」今度はエテメンアンキそのものをへし折ってやるけどな。

。—。—。—。—。

——エテメンアンキ・玉座の間

「こんな馬鹿な事があって堪りますか！！」

テウタは、玉座の間を襲った震動の所為で玉座から転げ落ちていた。彼女の融合騎マラークもまたバランスを崩して転倒したが、すぐに立ち上がってテウタを立ち上らせようとする。玉座の前面に展開されている1枚のモニターには、オーディンの推測通りノイヴェート丘陵での彼の姿が映っていた。

テウタは確かにずっと見ていた。オーディンがセフィロトの樹を描いている姿も、エリーゼと協力して発動している姿も、アースガルド艦隊を召喚した姿も、"シュヴェルトラウテ"を構えた姿も、銃器軍を展開した姿も、特大砲撃ヘルヴォルズ・カノンを発射した姿も、だ。油断していたわけではなかった。ただ、エテメンアンキの障壁を信じていただけだ。マラークの手を借りて立ち上ったテウタは再び玉座に腰掛け直す

『エテメンアンキ第三砲塔が攻撃を受け破損、半ばより折れ、地上へと落下を始めました』

「王都に！？　今すぐカレドヴルフで破砕しなさい！　あれほどの巨大なモノがこの高度から落ちれば、王都は壊滅します！」

エテメンアンキからの損害報告を受け、テウタは顔を真っ青にしそう命令を下す。その命令の下、エテメンアンキは自身の柱をカレド

ヴルフで消滅させた。モニター越しにそれを見て安堵。そして「これが、かつて世界に名を馳せた者の実力・・・！」オーディン――いや、ルシリオンの"力"に戦慄していた。

『警告。敵性存在周辺に強大な魔力反応が発生』

「彼の周りに浮いているあの変わった物体からですね・・・。障壁レベルを最大。防御後、カレドヴルフを８ヵ国王都へ向け発射しなさい。徹底抗戦というのであれば、こちらも手を抜きません」

テウタが怒りと嬉しさ、真逆の感情を表情に出しつつそう指示を出す。エテメンアンキは自らの王であるテウタに『了解』と応じたが、すぐに別の報告を入れた。

『警告。テウタ陛下の領地イリュリアへと進軍する敵性戦力を感知。総人数・約１０万。戦船・２２隻』

「騎士団には騎士団を。戦船には戦船をぶつけるまで。そして思い知ってもらいましょう。護るべきものを護るために戦いに挑み、ですがその護るべきものを先に失う絶望というものを。それでも立ち上ってもらいたいものですね。それでこそ新世界創造の敵として、私を楽しませ・・・っ」

テウタはハッとして口元を手で押さえる。だがそれでも彼女の口は笑みに歪む。戦争に、楽しむ、という感情を持ち出したくないと思っていながら、無意識にポロッと零してしまった本心。レーベンヴェルトの再建。

そのために天使と悪魔、２つの顔を持つ神になろうとしている人間テウタ。しかし彼女の心の内からはもう古くからのレーベンヴェルト王族の願いが霞み消えようとしていた。代わりに自身の持ち得た"力"に酔い、支配欲という怪物が新たに生まれ出していた。

「結果が同じであれば過程など・・・。さぁエテメンアンキ。創造の狼煙を上げましょう。楽しみましょう、このベルカを最期とする大戦を。カレドヴルフ・・・・撃ちなさい」

――カレドヴルフ――

残り７基の砲門より、大地を焼き払う神の火――深紅の魔力砲撃カレドヴルフが、８つの王都へ向け発射された。

Ｍｙｔｈ２６そして剣神から剣姫へ受け継がれていく～Ｋｉｒｓｃｈｂｌｕｔｅ～

†††Ｓｉｄｅシグナム†††

エテメンアンキの頂上を目指して放たれたオーディンの蒼い砲撃。それは確実に砲門の柱を撃ち抜いてへし折った。そして落下を始めた柱を、エテメンアンキ自身が砲撃カレドヴルフで粉砕した。あれだけの質量をもった物体があのような高度から落下し地上に衝突すれば、その衝撃はイリュリア王都を丸ごと消滅させるだろう。テウタはそれを危惧したのだろう。さすがに自国を滅ぼすわけにはいかんからな。

「もうマイスターの魔導には驚くつもりなかったけど、射程はもちろん威力もとんでもないな～」

「まったくだ。射程が悪い冗談のようだ。オーディンの真の力はどこまでなのだろうな」

私の融合騎にして相棒アギトと共に苦笑。オーディンの"力"を聞いているだけのアウストラシアの騎士たちは完全に呆けている。私とアギトは今、オーディンの作戦によりアウストラシア戦力として戦う事になり、イリュリア南部の国境線に居る。オリヴィエ王女と、騎士リサを将としている騎士隊ズィルバーン・ローゼ、そして本格的にイリュリア戦争に参戦する事となったアウストラシア騎士団（近衛騎士団は王都防衛らしい）と共に、馬に跨り（アギトは飛

んでいるが待機中。

「反撃の狼煙は上がりました！　アウストラシア騎士団、進撃します！」

聖王直々にアウストラシア騎士団を率いる事を任されたというオリヴィエ王女の号令の下、我らは一斉に国境線を越えイリュリア国内に進撃。記憶した地図を思い出す限り、ここより７ｋｍ先までは平原続き。街に被害を出さずに戦闘を行うにはもってこいの地形だ。おそらくイリュリア騎士団が待ち受けているだろうが、どのような騎士団が居ようが蹴散らすまでだ。そして、そう間もなくテウタの宣言通り、

――カレドヴルフ――

空より７条の砲撃が各国王都へ向けて放たれた。馬を止めて騒がしくなるアウストラシア騎士団へ「静まりなさい！」オリヴィエ王女が一喝。続いて、女性ばかりで構成されているズィルバーン・ローゼの副隊長だと紹介を受けた女騎士、エレス・カローラ（女性でありながら侯爵だそうだ）が、

「オリヴィエ様と騎士リサ、そして名の有る８ヵ国の代表が信じた、シュトゥラの騎士オーディンを信じなさい！」

そう言うと、騎士団は一斉に静まり、進軍前と同じように凛然とした面持ちとなった。こう言っては何だが、リサよりエレスの方が将向きだと思えるな。声もそれほど大きく出していないと言うのに騎

士団全体に通った。

「見てください。オリヴィエ様たちの言うとおり、現にカレドヴルフは見事に防がれたました・・・と言うか、本当に防ぎましたね・・・」

もう1人のローゼの騎士・セリカ・グラシアが呆れ果てていた。ここより一番近い着弾点からは爆炎は上がっていないのは確か。それはつまりオーディンが作戦通り防いだという事だ。気持ちを切り替えた騎士団は、「参りましょう」オリヴィエ王女の一声で馬をまた走らせた。ズィルバーン・ローゼの中に交じって王都へと進軍の最中、「ん・・・？」隣を走るリサは先ほどから左手に携えた長刀を収めた鞘を眺めているばかりで、心ここに在らずと言った風なのが気になった。

「（さすがに放ってはおけんな）リサ、どうした？」

「あ、騎士シグナム・・・。えっとぉ・・・いえ、何でもないです」

そうは言うが、何でもないです、ではないだろう。手にしている"キルシュブリューテ"に何かある・・・ん？　いや違う。以前、試合った時に見た"キルシュブリューテ"の柄とは作りが違う。それに、意識を向けて初めて判る。その長刀からは魔力が発せられている。しかも今までそれに気づけなかった自分の事が愚かしいと思えるほどにかなり高い。

「リサ。その長刀はどうしたんだ？　カートリッジシステムを搭載

していないな。それに、魔力を帯びている」

「・・・これ、キルシュブリューテという銘なんです」

リサはようやく話してくれたのだが・・・。"キルシュブリューテ"か。リサの武装と同じ銘なのだな。それに長刀と言う共通点もある。しかし「同名の武装だろうが、意識が散漫になるようなものなのか？」そう訊ねる。

「キルシュブリューテと言うのは、フライハイト家の・・いえ、ベルカを滅亡から救った英雄シャルロッテ様の武装なんです。私のキルシュブリューテは、そのシャルロッテ様の武装・断刀キルシュブリューテの銘から取りました」

剣神シャルロッテ・フライハイトの伝説は聞き及んでいる。剣騎士として最強とされていた者だそうだ。リサが鞘から"キルシュブリューテ"を抜き放った。いつ以来だろうか、武器に目を奪われる事など。リサの"キルシュブリューテ"と同じ鮮やかな桜色の刀身なのだが、"断刀キルシュブリューテ"はそれ以上に鮮やかで、美しく、目を離せなくなってしまう。

「断刀キルシュブリューテは、シャルロッテ様の自伝によりますと魔剣らしいです。ありとあらゆる存在を斬り捨てる事の出来る、絶対切断、という能力を持った・・・魔剣」

「何でも斬れるって、それってすごい事じゃないの？　なのに何でそんな暗い顔してるの？」

アギトはそう訊ねつつ、"断刀キルシュブリューテ"の美しい刀身に目を奪われている。リサは「オリジナルのキルシュブリューテは、シャルロッテ様の死と共に失われたはずなんだ」と言い、軽く"断刀キルシュブリューテ"を振った。ドクンと心臓が跳ねる。なんて美しい軌跡だ。アレが本当に武器なのか？　美術品の間違いではないのか？

「そんな断刀キルシュブリューテを、オーディンさんが持っていたという事が信じられなくて・・・」

「なに・・？」「え・・？」

オーディンが、古きベルカの英雄・・・シャルロッテ・フライハイトの武装を持っていた？　どういう事だ。意味が解らない。顔に出ていたようで、リサは「話は一応聞きました」そう前置きをし、

「セインテストのご先祖様が、その当時のベルカと関係を持っていたそうです、ベルカと対立する敵対者として。断刀キルシュブリューテはその時に手に入れ、今日までオーディンさんが保管していたそうです」

「そうか・・・。それで？　お前はオーディンやセインテストに対して恨みを抱いたのか？　フライハイト家の家宝の如き剣を、今の今まで持ち去られていた事に」

「違います。ただどうしてこんな時にその話をしてくれて、そして

キルシュブリューテを返してくれたのかが判らないんです。だって、私がフライハイト家だって知ったその時に返してくれてもよかったのに・・・」

そう言ってリサは"キルシュブリューテ"を鞘に納めた。今になって返した理由は判らない。だが、オーディンの真意はなんとなくだが解る。

「シャルロッテ・フライハイトはその武装を携え、ベルカを護るために戦ったのだろう？　ベルカを護るための力として、リサにキルシュブリューテを返したのではないのか？」

「私の実力が信じられないとでも言うのですか？　オーディンさんは。　オリジナルの魔剣・断刀キルシュブリューテを返そうと思うほどに・・・？」

リサが目に見えて落胆してしまった。オーディンに認められていない、と思って。だがそうではない。私はリサの頭に手を置き（オーディンのクセが移ってしまったな）、「そうじゃない！」私より先にアギトがリサに詰め寄った。

「マイスターはリサを信じたからこそ、きっとキルシュブリューテを返したんだよ。あたし、アムルで読んだ事あるよ。魔剣とかっていう類は、使用者に何かしらの代償を求めるって」

「・・・キルシュブリューテは、持ち主の魔力と引き換えにその鋭さを増していくそうです」

「あたし、シグナムの言うとおりだと思う。リサにシャルロッテっていう騎士と同じようにベルカを護ってほしいんだよ。最強の剣騎士シャルロッテの末裔のリサ・ド・シャルロッテ・フライハイトに。リサがその代償を乗り越えて、キルシュブリューテを使いこなせるって信じてさ」

私が言いたいことはアギトにすべて言われてしまったな。しかしもしこの推測がはずれていたとしたら、我々はとんだペテン師だな。リサの戦意を高める事がそもそもの目的だ、当たっていなくとも問題は無い・・・といいな。もし、ベルカを離れる前に返しておこう、などという理由だったとしたら・・・私は少しオーディンに幻滅だな。おそらくそのような理由ではないだろうが。

「シャルロッテ様と同じように、か。だったらいいな」

リサは微笑み、今まで彼女を包んでいた戦場には相応しくない暗い空気は無くなった。真っ直ぐ、ただひたすらに前を見据え、馬の手綱と"キルシュブリューテ"の鞘を力強く握り締めた。それから数十分と馬を走らせ、その最中でも幾度かカレドヴルフが放たれた。しかしその全てがオーディンの使い魔アンゲルスに防がれているようだ。しかし作戦ではオーディンの魔導でエテメンアンキをへし折るというものだったが、「マイスター、大丈夫かな・・・？」アギトが心配そうにシュトゥラの方角へと目をやる。

「オーディンの魔導でも破壊が出来ない場合の作戦、覚えているな」

「先に王都へ進撃できた騎士団がエテメンアンキに乗り込んで、機能停止させる」

「そうだ。アンゲルスがカレドヴルフを防ぐ事への限界に達する前に、エテメンアンキを掌握する。オーディンのセフィロトの樹という魔導も永遠ではない。いずれ限界が来る。そうなればオーディンはもちろん、カレドヴルフの射程に入る国はイリュリアによって殺される」

「そんなの嫌だ。だから・・・！」

「急ぎましょう。オーディン先生が防衛網を維持できる時間が、イリュリア攻略に許された時間です」

オリヴィエ王女の声に、我らは「ヤヴォール！」と声を張って応じた。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒リサ†††

馬を駆って王都への進軍。空ではイリュリアの戦船２隻とガレアとウラルの戦船３隻が戦闘が開始。その様子を見上げていると「そうですか・・・。あなた方はイリュリアに付いたのですね」とオリヴィエ様は私たちの前に立ちはだかった騎士団を見て、お嘆きになられた。私たちの前には騎士団が居る。イリュリア騎士団ではなく、アウストラシアにばかり戦を仕掛けてくる頭にくる連中「ネウストリア騎士団・・・！」だった。

「こんな形でアウストラシアと決着するとは思いもしなかったが、ミナレットの砲撃を受け、エテメンアンキの砲撃を見て、父上は決心したよ。ネウストリアはイリュリアに付き、共にベルカを統一しようとな。そういうわけで、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。イリュリアへの手土産としてその首、貰うぞ」

ネウストリアの王子・・・名前は確か・・・ダメだ、思い出せない。嫌いなものは完全否定で拒絶を、と考える私の頭の中にはネウストリア王族の名前なんて当然入ってない。私の隣に居る騎士シグナムは「なるほど。ネウストリアの危機感を煽るためにあの時、ミナレットを撃ったのか」なんて、ひとり納得中。

「グラダッソ王子。1つ、言っておきたい事があります。・・・後悔しますよ？」

「後悔？　約束された勝利を手に入れた今、何を後悔す――」

「約束されたのは勝利ではなく敗北です。私たち対イリュリア同盟は、イリュリアに勝ちます」

オリヴィエ様がキッパリと断言なされた。だと言うのに、グラダッソとかいう阿呆王子はお腹を抱えて大笑い。あまりに無礼な態度。"断刀キルシュブリューテ"の柄を手に取って臨戦態勢に入る。だけど「待ってリサ」オリヴィエ様は私を手で制し、

「考え直すよう、ネウストリア王に進言を」

わざわざ馬から降りてグラダッソなんかに頭をお下げになった。感謝ではなく懇願として。辛さで涙が出た。オリヴィエ・ゼーゲブレヒトという1人の少女を敬愛する私たちズィルバーン・ローゼからはもちろん、アウストラシア騎士団からも「おやめください！」って叫び声が上がる。すぐさま馬から降りた私だって失礼を承知でオリヴィエ様の肩を掴んで、「頭をお上げください！」力づくで頭を上げさせていただく。

「人にものを頼むのなら、土下座だろ？　オリヴィエ・ゼーゲブレヒト王女」

プツンと頭の中で切れてはいけない何かが切れた音がした。"断刀キルシュブリューテ"の柄を取り、「いい加減に・・・・」一気に引き抜いた。阿呆王子グラダッソは、「怒りで剣閃が丸見えだ」と私の踏込みにも居合抜きにも完璧に対応した。アイツが手に持っているのは剣。

防がれる――そう思ったけど、「え・・・・？」自分が生み出した光景に呆けてしまった。"断刀キルシュブリューテ"はグラダッソの剣を紙のように切断して、彼の首を刎ね飛ばした。人を斬ったっていう感覚が無い。あまりにも滑らかに刃が通った。グラダッソだったものはゆっくり地面に倒れ、遅れて首から血が噴き出した。

「・・・・あれ・・・・？」

静まり返る私たち。でもすぐにネウストリアの騎士たちが一斉に「殺せぇぇぇぇぇッ！！」グラダッソの敵討ちのために一斉蜂起。オリヴィエ様は「こうなれば仕方ありません。全騎、ネウストリア騎

士団を撃滅します！」命令を下された。
私の周りで発生する戦闘。でも私は動けない。怒りに駆られたのは確か。でも殺す気はなかった。軽い脅しのつもりだったのに。"断刀キルシュブリューテ"を見下ろす。刃に血は付着していない。血が付着する前に首を刎ねたという事だ。切れ味が鋭すぎる。これが・・・魔剣。

「ボサッとしてるんじゃないの！　死ぬわよ！」

いきなり突き飛ばされて、そのうえ怒鳴られた。ズィルバーン・ローゼの副長エレス・カローラに。そんなエレスは手に携えた剣アルマツィアで、私に斬りかかろうとしていたネウストリア騎士を一刀両断していた。いつの間にか背後を取られていたようだ。それに回りでバタバタとネウストリア騎士が次々と倒れていく。背後を取られていたどころか包囲されていた。私を救ってくれた2人は、共に幼少時からの親友だ。

「気を付けてください、リサ。貴女が死ぬと、オリヴィエ様が悲しみます」

古くからフライハイト公爵家と交流を持つグラシア伯爵家のセリカ・グラシアからも、

「もちろんリサが死んだら私たちも悲しいよ。だから気を付けてよ」

シャルロッテ様が生存していた時代よりフライハイト家に仕えてくれているヴィルシュテッター家のアンジェリカ・ド・グレーテル・

ヴィルシュテッターからもお叱りの言葉を貰った。

「オリヴィエ様はシュトゥラの騎士シグナムと共に戦っていらっしゃる。それなのに貴女ときたらボサッと突っ立ったままで。しっかりしなさい！」

そうだ。もう戦いは始まったんだ。私はネウストリアの王子を殺した。この事実は消えない。なら前に進むしか道はない。だったらもう開き直りだ。"断刀キルシュブリューテ"を地面に突き立てて、両頬をバチンッと思いっきり張る。

「ごめん！　ズィルバーン・ローゼ、戦闘開始！　行く手を邪魔する連中は悉く蹴散らして、王都へ進攻するっ！」

"断刀キルシュブリューテ"を手に取り、「散開！」エレスとセリカとアンジェをバラけさせる。アウストラシア近衛騎士団、その最強格の騎士たちが纏まっているのは効率が悪いから。私も群がるネウストリア騎士に突撃して、"断刀キルシュブリューテ"を振るう。敵騎士の武装や甲冑をなんの抵抗も無く切断していく。これまで使っていた"キルシュブリューテ"ではこうも簡単に斬れない。

（魔力を注ぐ事で切断力を上げていくって、シャルロッテ様の自伝で読んだけど。そんな事せずともこの切断力。魔剣としての能力を解放したら、一体どれだけのものに・・・？）

今すぐにでも解放したい思いに駆られる。けどそれを自制心で抑えつける。"力"に酔いしれて、溺れて、その先には絶対に良くない

事が待っているに決まっているから。

――キルシュブリューテを使いこなせるって信じてさ――

アギトちゃんの言葉を思い返す。シャルロッテ様はどうだったんだろう。考えるまでもない。きっと"力"に溺れる事なく使いこなせていたんだろう。私もシャルロッテ様の足元にでもいい。少しでも近づくために、欲を意思で捻じ伏せる。

「あああああああああああッッ！！」

――閃駆――

体を数回小さく揺らして勢いをつけるという初動を行い、高速移動の歩法・閃駆を使って敵騎士の密集点のど真ん中に踏込む。

（実戦の中で掴んでいくしかない。剣神シャルロッテ様の真の剣技と魔導を・・・！）

シャルロッテ様の魔導書に記された術式を脳内に思い描く。所々が欠損していたり、理解できないものを数多く在った。だけど私は、シャルロッテ・フライハイトを受け継ぐ者――リサ・ド・シャルロッテ・フライハイト。偉大なご先祖様の"力"を、この私が現代のベルカに再現して見せる。

――氷牙空衝刃（アイス・ベルク）――

足元に展開した桃色のベルカ魔法陣から氷の剣山を突出させる。首飾り型の待機形態である"キルシュブリューテ"に魔導の補助を全て委ね発動した魔力変換・氷雪系の魔導。幾つかが敵騎士を貫いて絶命させたけど、「ダメだ、不完全すぎる！」氷の剣山が脆い。敵騎士に直撃する前に砕けてしまった氷もある。何かが足りない。ううん、前々から思っていた事だ。魔導と魔道の違い。記し違いかと思っていたけど、その何かが私をシャルロッテ様に近づけさせるものなんだ。

「――サ・・・リサ！　おい、コラ！」

「へ・・？」

また怒鳴られてた？　何で、と思って私を呼んだエレスに振り返った。エレスは「戦闘はもう終わったのよ。進軍を再開するわ」アルマツィアで肩を叩きながら呆れていた。いつの間にか戦闘は終わっていて、私の周辺には首を刎ねられたネウストリア騎士が十数人と倒れ伏していた。背中をポンと叩かれ、「あなたの馬、逃げたでしょ？　後ろに乗りなさい」エレスが引いていた馬に乗る。

「時間を掛けました。進軍を再開しますッ！」

オリヴィエ様の一声で、進軍は再開された。エレスは馬を操ってオリヴィエ様の御傍へと走らせる。その間、「すごかったわ、あなたの剣閃。一体どうしたの？」エレスがそんな褒めと疑問半々で訊いてきた。正直「・・うううん、全然憶えてない。無我夢中・・・・というか考え事をしてて」と答える。

「考え事してて・・って。あなた、それって結構危ないんじゃないの？」

「考え事をしながら撃滅するなんて、確かにまずいよね」

考え事中だろうが無我夢中だろうが無意識で人を斬るなんて、殺戮人形と変わらない。これじゃダメだ。確実に"断刀キルシュブリューテ"に呑まれ始めている。

「エレス。意識を全部考え事に向けるから、何かあれば叩いてでも戻して」

「ヤヴォール。しっかりと答えを見つけてきなさい。それまでは私が支えるわ」

目を閉じ、"断刀キルシュブリューテ"の柄頭を額にコツンと当てる。シャルロッテ様が自らの命と騎士の誇りを預けた相棒として携え、共に大戦を駆け抜けた相棒・・。その魔剣と心を通わせるように意識を傾ける。一体どうすればあなたに近づけますか・・・？

――キィィーーーーン・・・――

（・・・・？）

――シャァァァーーーーン・・・――

（なんの音・・・？）

不思議な音が頭の中に響いてくる。意識が内側――心の中へと入って行く。暗い闇から明るいどこかへ飛ばされた感覚を得た事で目を開けてみたけど、眩しくすぐ閉じる。明かりに慣れるまで目を細めようと思った時、『来たね』女の人の声が世界の中に届いた。私だけの心に、誰とも知らない声が。うっすら目を開けて、そして見た。水色の長い髪、鮮やかな桃色の瞳、右手に携えているのは桜色の刀身を持つ長刀・・・。

「断刀キルシュブリューテ・・・！」

『いらっしゃい、リサ・ド・シャルロッテ・フライハイト。我が世界、ヘルシャー・シュロスへ』

一際強い光が生まれた事で目を閉じ、次に開けた時は世界が一変していた。そこは円形の闘技場。私とその女性は中央で対峙しているように向かい合っている。空は澄み渡る青。桜色の花弁が舞い散っている。平和を象徴するようなそんな世界。

『私の名前は、シャルロッテ・フライハイト。断刀キルシュブリューテに宿る者』

「・・・え？・・・シ、シャルロッテ・フライハイト、様？・・・・・あなたが・・・！」

『構えなさい。キルシュブリューテを使いこなすために、ここへ来

たんでしょ』

別にそういうわけではないんですけど・・・というか"断刀キルシュブリューテ"に宿ってる？　憧れのシャルロッテ様ご本人の登場？　それに、構えろ、って・・戦うということ？　そもそもここは私の心の中じゃないんですか！？　どうしてこんな状況に！？　予想なんて出来ない事態が押し寄せてくるせいで頭の中がどうにかなりそう。

『そっちから来ないのなら、こっちから攻めるから。シャルロッテ・フライハイト、参ります』

「ちょっ、ちょっと待ってください！」

『体の動くままに動けばいいの！』

――閃駆――

自称シャルロッテ様の姿が掻き消えた。と言う事は、間違いなく閃駆だ。何故だか解らないけど、直感のままに手に持っている"断刀キルシュブリューテ"を左側に掲げる。その直後に、ガギンッ！という金属音と、両手に伝わる冗談じゃない衝撃が私を襲った。目だけを左へ向ける。そこには満足そうな表情をしたシャルロッテ様が居た。

『良い感じ♪　それじゃ続けるよ・・・！』

「っく・・・！」

"キルシュブリューテ"　を高速で振るうシャルロッテ様の動きについて行こうと頑張る。頑張りはするけど、速度、威力、軌道、それらが変幻自在過ぎて、「痛っ・・！」浅い切傷があちこちに付けられていく。これ程の剣技を放てるなんて。私が戦っているのは間違いなくシャルロッテ・フライハイト本人だ。そうとなれば。歩法・閃駆の初回発動の一歩目に必要な初動、体を数回揺らす、という動作を行い、

――閃駆――

――閃駆――

仕切り直すために一度シャルロッテ様から大きく距離を開ける。だけど『まだまだ遅い』と背後から聞こえるシャルロッテ様の声。考える間もなく、もう一度体を揺らして2度目の閃駆を行う。シャルロッテ様は真正面から突っ込んで来る。

――閃駆――

途中で掻き消えた。ここへ来たばかりの混乱の中でなく、意識を戦闘に傾けた現状で見た。シャルロッテ様の閃駆、私の閃駆と違って初回発動の一歩目に必要な体を揺らす、という初動が無い。だから・・・

（さっき、背後に回り込まれたんだ・・・！）

『よっと・・・・！』

「・・・・っ！」

シャルロッテ様の一閃を紙一重で回避できたけど、前髪がパッツンと斬り払い落とされた。初動の有無で負けるなら、立ち止まらずに連続で閃駆を行い続ける。連続使用でなら体を揺らすという動作は削れるから。その分、疲労は溜まりやすいけど。でも初動を削って速度を互角にするにはそれしかない。体を揺らし勢いをつけての一歩目を踏み出す。

――閃駆――

シャルロッテ様の右隣へ移動、通り過ぎる際に　"キルシュブリューテ"を薙ぎ払い一閃。でもそれも簡単に捌かれてしまう。シャルロッテ様の背後、数m先で片足をついて閃駆2歩目、背後からの襲撃。

『私の閃駆を見て、自らの力で閃駆を進化させて！』

――閃駆――

初動なくシャルロッテ様も閃駆を行う。お互いに連続閃駆をし、衝突し合っては閃駆で距離を置き、また衝突。速度にさほど差は生まれなくなった。けど、すれ違いざまにお互いが繰り出す一撃の精度と威力に歴然の差が。

速さにはついて行けるのに、剣騎士としての格が違いすぎる。仕舞いには私は"キルシュブリューテ"を弾き飛ばされて無手になり、「なるほどね」と何かに納得したようなシャルロッテ様の持つ"キルシュブリューテ"の刃が私の喉元に突き付けられた。

「はぁはぁはぁ・・・つ・・・強い・・・はぁはぁ・・」

手も足も出なかった。純粋な剣技では足元にも及ばない。剣先を掠らせる事も出来ないなんて。ここまでハッキリと実力差を見せつけられて負けたのはいつ以来だろう。シャルロッテ様は『ま、こんなところか』"キルシュブリューテ"を物質化した鞘に納め、離れて行く。

『問題は、魔道の方だよねやっぱり。あなた、私の戦術を記した自伝を読んで、閃駆や魔道を習得したんだよね・・・？』

「どうしてその事を・・・？　でも確かにシャルロッテ様の仰る通りです。所々が欠損していたり理解できない部分が多くて、すべてを修めたわけではないですけど」

『というわけで――』

――風牙烈風刃（ヴィント・シュトゥース）――

シャルロッテ様は勢いよく"キルシュブリューテ"を振り上げると、「なに・・・！？」とんでもない風圧の壁が私の傍を通り過ぎて行った。

『フライハイトの騎士であるあなたに、シャルロッテ・フライハイトの魔道――ううん、魔導を託すのが、私の選択した役目。その目に、その身に、その心に、その魂に、我が魔導をしっかりと刻み込みなさい、リサ・ド・シャルロッテ・フライハイト！』

†††Ｓｉｄｅリサ⇒アギト†††

イリュリアに入っての最初の街、アーヘンは無人だった。たぶんどこかに避難しているんだ。ここまで来る前に遭遇したネウストリア騎士団との戦闘後は何事もなかった。拍子抜けもしたけど、どちらかと言うとよかった。無駄に戦闘して疲れたくないし、マイスターを早く楽にしてあげたいから。

空から落ちてくるカレドヴルフを、マイスターを信じるっていう一心で意識しないでアーヘンを素通り。あたし達が進入してきた地点は、王都スコドラに一番近い南部――シュトゥラとは真逆の位置。王都まで街２つを過ぎればすぐに着く。このままの速度を保って進軍出来れば、２時間半で到着だ。

「この平原を抜け、もう１つの街を抜ければ、あとは王都だな」

「うん。でもこの辺り、ある騎士団の防衛地なんだけど・・・」

南部の国境防衛線を担当する騎士団の１つ、戦兎騎士団ブルーティガー・ハーゼ・オルデン。

その団長ヨハンは、今までグラオベン・オルデンが討ってきたイリュリア騎士団の高位騎士たち――第三位ウルリケ・第八位フレート

・第九位ファルコ・第十一位ゲルト・第十四位ワイリーより強い第二位。
そんなヨハンは、テウタ派じゃなくてゲンティウス先王やバルデュリス王子派の騎士だということ。今のテウタ女王政を快く思っていないかもしれない。それがあたし達にとって嬉しい誤算を生んでくれるかも・・・なんて思っていたりする。

「アギトさん、その騎士団の情報はお持ちですか？」

シグナムの駆る馬の前を行くアウストラシア騎士団の将、オリヴィエ王女がわざわざ振り向いて訊ねてきた。あたしは無駄な事は言わずに、

「団名はブルーティガー・ハーゼ・オルデン。団長はヨハン・オメガ・シュプリンガー。序列はイリュリア騎士団の第二位。武装は、確か槍だったと思う――あ、思います」

「ありがとう、アギトさん。ブルーティガー・ハーゼ、血塗れ兎と言う意味ですね。それに第二位ですか。それはまた強敵が居ますね。ですが負けるつもりは毛頭ありません。必ずテウタ陛下を止めます。そのために、私たちの行く手を邪魔するのであれば押し通るまで」

オリヴィエ王女は断言した。あたしも負けるなんて思ってない。だってベルカ最強と謳われるオリヴィエ王女が居て、シグナムも居て、リサとズィルバーン・ローゼ、アウストラシア騎士団だって居る。
そう考えると、あたしも何かしたいって強く思えて「偵察してくる！」空高く飛び出す。ぐっと高度を上げて、空からあたし達の進む方向

のずっと先を見る。

「・・・・居た。ブルーティガー・ハーゼ・オルデンだ・・・・！『シグナム、この先１３００ｍの地点に敵が居る！』」

『そうか、判った。戻ってこいアギト』

シグナムに『うん』って応えて降下・・・する前に空を見渡す。ずっと遠いけど、海の方で光が行きかっているのが判る。戦船の戦いだ。エテメンアンキからは相変わらず砲撃カレドヴルフが放たれてくるけど、視認できる１本のカレドヴルフは地面に着弾する前に、空中で見えない何かにぶつかったかのように弾かれた。目に見えないけど、そこにマイスターの使い魔アンゲルスが居るんだ。

それからすぐあたし達はブルーティガー・ハーゼ・オルデンと対峙した。全員が完全に臨戦態勢で、あたしの考えは果てしなく甘かったと思い知る。オリヴィエ王女が馬を下りて、団長ヨハンに歩み寄った。

「イリュリア騎士団、ブルーティガー・ハーゼ・オルデンだ。ここより先は我らが防衛を任されている地。素通りさせるわけにはいかない」

「そこを退いていただけませんか。テウタ陛下のやり方では、ベルカは統一できません。出来るのは暴力による恐怖支配です。それがベルカの為になるとはどうしても思えません」

「・・・オメガ・シュプリンガー家は、遥か昔よりレーベンヴェル

ト王家に付き従う家系だ。私自身、テウタ陛下のやり方は好ましく思っていない。が、個人の意思より騎士としての矜持に私は従う」

「どうしてもですか？」

「無論、どうしてもだ。オリヴィエ王女殿下」

ヨハンは長槍の穂先をオリヴィエ王女を向けた。もう説得じゃ止まらない。それが判ったからこそオリヴィエ王女も「判りました」全然納得していないと言った風だけど、構えを取った。

「お待ちください、オリヴィエ様」

「リサ・・・？」

魔剣"キルシュブリューテ"を手にリサがオリヴィエ王女とヨハンの間に割って入ると、ヨハンから明らかに不愉快な空気が発せられる。完全に敵意・殺意がリサに向けられた。

「オリヴィエ様たちは先へ行ってください。この場は、私にお任せください」

リサはそう言ってオリヴィエ王女を護るかのように下がらせた。今のリサ、さっきまでと全然違う。なんて言うか、何かに憑りつかれたかのような別人みたいな。オリヴィエ王女も察しているようで困惑気味でも、アンジェリカっていう騎士が「こちらへ」と誘導、オリヴィエ王女はリサから距離を取った。

「フライハイトの次期当主(シャルロッテ)か。ベルカ生誕以前よりレーベンヴェルト王家に仕える十騎士公家の裏切者め。フライハイト家にはいつか必ず制裁を下したいと思っていた。面白い。ただ独りこの場に残るというのであれば残ればいい。瞬殺してくれる」

ヨハンと同じように殺意丸出しなリサも"キルシュブリューテ"を鞘から抜き放って臨戦態勢。

「上等です。フライハイト家としても、いつまで経っても偏った忠誠心しか抱かないオメガ・シュプリンガー家など滅ぼしたいと思っていました」

リサとヨハン、お互いに口端を釣り上げて笑みを作った。そして、

「「・・・っ！」」

――雷牙月閃刃(ドンナー・モーントズィッヒェル)――

――風刃烈火――

雷撃を刀身に纏わせた一撃を繰り出したリサと、暴風を槍全体に纏わせた一撃を繰り出したヨハン。２つの武装が衝突して、２人を中心にカマイタチや雷撃が周囲に拡散、敵味方問わずに大慌てで回避。

「オリヴィエ様、行ってください！」

リサが叫んだ。少しの逡巡の結果、「アウストラシア騎士団、王都へ進軍！」真っ先に戦兎騎士団の脇を通ってオリヴィエ王女は馬を走らせた。それに続くズィルバーン・ローゼとアウストラシア騎士団。薄情にも思えるけど、きっとリサを信じているんだ。

「「「「行かせるかッ！！」」」」

後続のアウストラシア騎士団に襲いかかろうとした戦兎騎士に、

「させん！」

――紫電一閃――

あたしのロード、シグナムが火炎を纏わせた一撃・紫電一閃で４人の騎士を一度に斬り伏せた。シグナムは「リサ。私も残ろう。お前は、因縁のあるその男との決闘に集中してくれ」って言いながら、また数人に騎士を斬り伏せる。鍔迫り合いをやめたリサは一度ヨハンから距離を取って、「ありがとうございます、騎士シグナム」お礼を言った。

『アギト、時間はそう掛けられん。早々に打ち倒し、オリヴィエ王女らと合流するぞ』

『判った！』

そうしてあたしとシグナムは融合を果たして、リサとヨハンの邪魔をする奴ら、アウストラシア騎士団の追撃に行こうとする奴らの足

止めとして戦う事になった。でも、それはあたし達だけじゃなかった。アウストラシア騎士団の３０人くらいが戻ってきた。

†††Ｓｉｄｅアギト⇒リサ†††

『リサ、気を付けて。オメガ・シュプリンガーの騎士は、風を操るはず』

『はいっ！』

精神世界で、私はシャルロッテ様から全てを教わった。剣技、魔導、体技、今の私に扱えるモノ全てを、だ。とは言っても完全に扱い切れていない。実戦の中で、シャルロッテ様の御意思と共に鍛え、確実なモノへと昇華させる。だから私は、ヨハンという最強格の騎士と戦うために残ったんだ。王都でオリヴィエ様の足を引っ張らないために、今この場でもっと強くなる。

「はぁぁあああああああッ！」

――風牙真空刃（レーレ）――

真空の刃を放つ。ヨハンは私に向かって疾走しながら紙一重で回避。シャルロッテ様からは『風嵐系の魔導はダメ。アイツは風を読む』という忠告が。

「おおおおおおッ！」

繰り出される刺突を半身ズラして避け、そのままヨハンの首を刎ねる軌道で"キルシュブリューテ"を払う。けど水平の槍を立てる事で盾としたヨハンは防御、そのまま槍を一回転させて捌いた。大きく払い上げられる私の右腕と"キルシュブリューテ"。少し体勢が崩される。それを隙と見たヨハンが一回転して槍の薙ぎ払いを放ってきたけど、

――閃駆――

シャルロッテ様と同じ初動が必要のない閃駆を使って、槍の攻撃範囲から離脱。間髪入れずに、

――炎牙崩爆刃（フェアブレンネン）――

火炎の斬撃を飛ばす。ヨハンはまるで閃駆のように高速移動して、着弾して爆発した崩爆刃の殺傷範囲から逃げた。気付けばヨハンは私の左隣に居て、すでに刺突を繰り出した直後だった。防御も回避も難しいけど、すべての労力を費やして何とか体を反らして避ける事が出来た。でも「あぐっ！」振り下ろされた槍の柄がお腹に打ち込まれて、地面に背中から叩き付けられた。

「これで終わりだ」

「うおおおおお！！」

振り下ろされる正確無比な刺突を、地面を転がる事で避け続ける。止まったら確実に貫かれる。でもこのまま黙って無様を晒すつもり

はない。紙一重の差で頬を掠めて打ち込まれた槍を掴み取って、

「まだ終わりじゃないっ！」

体のバネを使って下半身を起こして、両足の踏み蹴りをヨハンの顔面に打ち込んだ。鼻血を噴きながら後退するヨハン。今のうちに立ち上って仕切り直す。と思えばヨハンはまた高速移動で私に最接近してきていて、こちらも閃駆で距離を開け続ける。移動し続ける間に、ヨハンの動きの速さに目を慣れさせていく。

『基本風使いは足元に風を起こして乗り、移動するっていう術を持っているの。私の元上司オペル・オメガ・シュプリンガーも使っていた。ま、ソイツの風乗りは、私・・・ううん、私たちの閃駆よりかは――』

「遅いですよねっ！」

「なに・・・！？」

ヨハンの風乗りの速度にはもう慣れた。シャルロッテ様の理不尽すぎる閃駆に比べれば遅い。風乗りからの刺突を、魔力障壁を施した前腕で弾いて逸らして、"キルシュブリューテ"の刺突を繰り出した。結構な好機だったけど、さすが第二位の騎士。引き戻された槍によって余裕で弾かれた。お互いに距離を取って一度仕切り直す。

『あなたはこの私、剣神シャルロッテ・フライハイトを受け継ぐ者。こんなところで蹴躓かないでよっ』

『もちろんですっ。確実に討ちますっ！』

次の衝突で、必ずヨハンを斬り捨ててくれる。

ＡＮＳＵＲⅡ其は天上より堕ち流れる死を奏でる者～ＭｕＲ～

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

「アギト、シグナム。君たちは自らが望む戦いをすればいい」

私は今、サーチャーの魔道・イシュリエルを通してアウストラシア騎士団の戦況を観ている。オリヴィエを将とした騎士団は、リサとアギトとシグナム、十数人の騎士を残して進軍を再開した。それにしても驚いたな。リサが率いる騎士隊ズィルバーン・ローゼのメンバーの中に、知った家名を持つ騎士が何人か居た。

（シャルロッテは今も昔も恵まれているな・・・）

セリカ・グラシア。名前もそうだが外見までがソックリなため、騎士カリムの先祖だろうな、やはり。

エレス・カローラ。先の次元世界で友となり、主となったセレス・カローラとそっくりだったため、彼女の祖先で違いがない。それはつまりヨツンヘイム皇族の末裔を意味するのだが、今は無視できるだろう。

グレーテル・ヴィルシュテッター。シャルが生前率いていた騎士団の副将だ。彼女の血族もまた生き残っていたんだな。大戦では敵同士で、堕天使戦争では味方だったグレーテル。懐かしさが溢れてくる。

しかし今は思い出に浸っている場合じゃない。リサは、シャルの意思が宿った"キルシュブリューテ"を手に、あの第一騎士エーアス

ト・リッターー・風の騎士公オペル・オメガ・シュプリンガーの子孫らしいヨハンと戦っている。

「シャルの奴、リサにちゃんと託したようだな。それにしても良いタイミングだった。シャルの宿ったキルシュブリューテが無ければ、ヨハンの初撃でリサは殺されていたぞ」

エインヘリヤル・シャルに頼まれて"キルシュブリューテ"の複製品（オリジナルは、シャルの魂と共に転生したはずだ）を、永遠固定（私が消えても残り続ける）の魔道を掛けてリサに返還した。生前のシャルが記した自伝なる魔導書を読んで、独学でシャルの戦術を組み立てたリサにとって本物のシャルの戦術はどう映っただろうな。

とりあえずはリサの閃駆にも無駄な動作が消えたし、複数の変換資質の属性攻撃も出来ているようだ。今あの場でヨハンとまともに戦えるのはリサだけだ。アギトと融合しているシグナムでもおそらく五合目まで切り結べればいいくらいだ。それ以上は速度で圧倒的に負けているシグナムが死ぬ事になる。シグナムですら勝てない相手と今、リサとシャルは戦っている。

「・・・・ヴィータとアイリ、クラウス達はどうだろうか・・・」

リサ達の事を信じ、次はシュトゥラ騎士団方面に飛ばしたイシュリエルと回線を繋ぎ、戦況を確認する。シュトゥラ騎士団はアウストラシア騎士団とは違い、途中まではマクシミリアン艦隊で移動、艦隊戦が激化したところで降下し馬で進軍だ。今はイリュリア艦隊と戦闘中。ヴィータ達が降下するのはもう少し後だな。

なら次は、ヘルウェティア・ヴィンランド・シュヴァーベンの同盟艦隊とイリュリア艦隊が戦闘を行っている海上へ設置したイシュリエルへ繋げる。その三国は海を越えたところに在るため、どうしても騎士団戦が困難となるから自然とこういった役目を担う事になる。

「ただの1では敵わないだろうが、しがらみを捨てて、力を合わせて1つとなれば、強大な力にでも太刀打ちできる」

この同盟はこのイリュリア戦争の時だけで、終われればまたそれぞれが敵同士となるだろう。だがそこには机上の戦争――話し合いという選択肢も生まれるはずだ。騎士は誇り高い。決闘も好きだろう。戦争の果ての勝利を絶対だという者もいるだろう。しかし必ず平和を求める心を持っているはずだ。・・・甘い考えかもしれないが。ある程度海上の様子を見、次に東部・北東・南東から攻めるガレアとダールグリュン帝率いるのウラル騎士団と、戦船の戦況を観る。判っていた事だが「ダールグリュン帝、強いなぁ～」ハルバードをブンブン振り回して敵性騎士団を薙ぎ払うその光景は、アリサの家でシャルがハマっていたテレビゲーム――タイトルは確か・・・真・三國〇双。それに登場するキャタクターの呂布のようだ。

「マリアージュの数もどんどん増えていくな・・・。イクスヴェリア、辛いだろうが頑張ってくれ」

イクスヴェリアの心情を思うと辛いものがあるが、イリュリアだけはどうしても止めておかないとダメだ。しかしベルカ先史書にイリュリア戦争の事はどう記されていただろうか。ポッカリ記憶に穴がある。

ここまで酷い出来事であれば残っているはずだし、読んだのなら確実に記録として残っているはずなんだが。前々から思っていたが"堕天使エグリゴリ"が介入した事で、すでに歴史がズレているのかもしれないな。

「（やはり私たちは歴史を狂わすだけの邪魔者か。頭が痛いな・・・。にしても）イリュリアに下る国もやはり出て来たな」

ネウストリア、ブルクント、パルティアの三国が、イリュリアに協力をし始めた。ネウストリアはオリヴィエ率いるアウストラシア騎士団の担当した南部に。ブルクントとパルティアは、隣国である三連国バルトの内の二国リヴォニアとリトヴァに戦争を仕掛けた。それでバルトの戦力の大半が迎撃の為にそっちに向けられた。８ヵ国＋聖王家同盟の戦力を削るために、テウタが仕組んだ事だろう。

「とりあえず私の役目を果たすとするか。『スキーズブラズニル、二番艦、三番艦、四番艦、五番艦――』」

シュトゥラ防衛と艦砲援護射撃のために召喚したアースガルド艦隊のうち４隻のスキーズブラズニルに指示を出す。二番・三番艦の砲門をマクシミリアン艦隊前方のイリュリア艦隊へ、四番・五番艦の砲門を海上のイリュリア艦隊へ向けさせる。

『撃てッ！』

そして砲撃を発射させた。イシュリエルを通して、ベルカの空を突き進む計８０の砲閃を見守り、イリュリアの戦船に次々と着弾、撃

沈させたのを確認。

「よしっ。ジャストミート。悪く思わないでくれ、イリュリア騎士諸君」

「我が主。シュリエルが戻りました」

「お待たせして申し訳ありませんオーディン」

戻って来るのが遅れたことに心底すまなさそうにしているシュリエルだが、気にすることはない。何故なら、

「ああ、お疲れ様だ、シュリエル。こちらは問題なかったぞ、ザフィーラが居てくれたからな」

「・・・そのようですね・・・。ではこれより私が、オーディンの護衛として御身を御守りいたします」

セフィロトの樹の周囲に倒れ伏している、ここまで侵攻して来たイリュリアの一個騎士団員。ベルカ半球すべてを七美徳の天使アンゲルスでカバーしているため、８ヵ国以外の国も防衛も可能。初撃のヘルヴォルズ・カノン以降、アースガルド艦隊の砲撃を含めた私の攻撃は一切通じなくなったが、それでもカレドヴルフを防ぎきる事くらいは出来る。

テウタはそれをどうにかするために、やはり私を狙ってきた。が、私には頼りになる仲間が居る。シュリエルは彼らを見て何故か悔しげな表情を見せ、そのうえザフィーラに張り合うようにやる気を見

せた。

「頼りにしている。ザフィーラ、これより私の護衛の任を解く。すまないが、これからシュトゥラ騎士団と合流し――っ！」

「？？　どうかしましたかオーディン・・・？」

途中で私が話を区切り、イリュリア方面へと目をやったことに訝しむシュリエル。

「・・・いや、想定通りの事態に向かっている事が判ったんだ」

「想定通りの事態、ですか？」

小首を傾げるシュリエルに「ああ。私を殺すための戦力が、こちらに向かっている」率直に告げる。絶句するザフィーラとシュリエル。しかしすぐにその戦力が何なのか察したようで、「離れていろ、という命令は聴きませんから」とシュリエル、ザフィーラも「同じく」と頑なだ。元から手伝ってもらうつもりだ。どうせ来るのはあの娘だ。ガーデンベルグ達じゃないだろう。

「頼む。来るのはミュール・エグリゴリ。複製品のエグリゴリだが・・・強い」

「「承知しています」」

力強く頷く2人に私も頷き返す。ならば今の内にミュールと戦える

術を2人に与えておかなければならないな。複製品のミュールだから通じる策だろうが、オリジナルの"エグリゴリ"に通用しないだろうな。だがそれでいい。グラオベン・オルデンは"エグリゴリ"とは戦わせない。

「セフィロトの樹、数は2、意は智慧、色は灰、宝石はトルコ石、神名はヨッド、守護天使はラツィエル」

――力神(コード・マグニ)の化身――

第二のセフィラ・コクマの魔力を3%を消費し、上級術式・強化補助のマグニをザフィーラとシュリエルに掛ける。身体・魔力強化はもちろん、神秘を魔力核に付与させた。2人の魔導は魔道となり、ミュールにも通用する。

準備万端になった直後、「さすがお兄ちゃん、すっごぉ〜い♪」あの娘――ミュール・エグリゴリの幼い声が、拡声器を使ったかのように大音量で響いてきた。一斉に身構える。どんどん近づいて来る神秘。先手は私が貰い受ける。空へ向かって左腕を伸ばし、周囲に魔力球を29生成。レベルは中級、効果は攻性、属性は雷撃系、魔力に神秘を付加。

――天壌(コード)よ哭け、汝の剛雷(エネディエル)――

ミュールの気配のする方向へ向け射出する。エネディアルは高速で天へ上って1つの雲に進入、「爆散粛清(ジャッジメント)」指を鳴らし全発を爆破させる。爆破した蒼雷が雲を散らす。「やりましたか・・・!?」とシュリエルに訊かれ、私は首を横に振った。

「紳士淑女の皆様っ。わたしミュール・エグリゴリの音楽会をこれより開催しますっ！」

そんなふざけた事を言いながら姿を現したミュールは、風に遊ばれる藍紫色のウェーブのかかった髪を手で押さえつつ、赤紫色の柔和な瞳でこちらを見下ろしている。そして背には、放射状に広がっているクジャクの尾羽・エラトマ・エギエネスと言う名の魔力翼を展開。

「無傷か。ゼフォンとは違ってやはり強いな」

結構な威力のはずだったが、やはり中級では傷を付けれないか。徐々に高度を落としてきたミュールに「やはりお前が来たな」そう言い放つ。

「うん、来たよ。今日のわたしは、お兄ちゃんが死ぬまで帰らないから♪」

ＶＳ。—。—。—。—。—。—。—。—。—。
其は偽りを超越せし音楽の堕天使ミュール
。—。—。—。—。—。—。—。—。—。ＶＳ

——我が武装（トロンペーテ）その弐——

ミュールは胸の前で両手の平を向い合せ、オレンジ色の魔力でなんとトランペットを作り出した。マウスピースに口を付けたところで、シュリエルが血色の短剣ブルーティガー・ドルヒを22基射出。ザフィーラはミュールの逃げ場を限定するために鋼の軛で包囲。そして私はミュールの頭上に、

――殲滅（コード）せよ、汝（カマエル）の軍勢――

炎熱、氷雪、雷撃、風嵐、閃光、闇黒、無属性（重力・音波ｅｔｃ）の魔力槍を2千基展開。

「蹂躙粛清（ジャッジメント）ッ！」

号令を下して一斉降下させる。ブルーティガー・ドルヒとカマエルの挟撃。逃げ場は鋼の軛で封じている。ミュールは「せぇ～～のっ♪」大きく息を吸いプクッと頬を膨らませ、勢いよくプァァ～～～ン♪とトランペットを吹いた。

――砲閃（シュピーレン・カノーネ）は全てを粉砕して――

トランペットのベルから特大砲撃が放たれ、ブルーティガー・ドルヒを殲滅、砲撃と共に発生した何百という八分音符がカマエルを迎撃。しかし数ではこちらが勝っているため、大半がミュールに直撃。そして砲撃は、

――女神の救済（コード・イドゥン）――

手の平を翳して受け止め、イドゥンで吸収していく。収まりきらない残りの砲撃の魔力は、上級の炎熱砲撃・女神の陽光コード・ソールの発動に利用。砲撃が途切れた瞬間にソールを発射。２発目の砲撃がミュールより放たれた砲撃と真っ向から衝突して拮抗。だが、僅かにソールが押し返していく。威力では勝っているようだ。砲撃を徐々に押し返していく。
私とミュールの相性は良いらしいな。近接・射砲撃戦ともに私が上なはずだ。所詮は複製品。今の私を相手に勝てるわけがない。そしてソールはミュールにまで到達し直撃、蒼い爆炎の花が咲く。蒼炎と黒煙がミュールを覆い隠す。

（どうせ無事なのだろう・・・？）

――我が武装（エレクトロ・ギタレ）その壱――

――砕音破（クヴァール・ゲロイシュ）ただ狂おしく――

「やはりな」「「っ！！」」

爆炎を吹き飛ばして拡散するのはト音記号、八分音符、全音符、シャープ、フラット、ナチュラルと言った魔力で創られた音符群。私はそれらを見てすぐに『ザフィーラとシュリエルは回避！』指示を出し、隠れしセフィラ・ダアトより動けない私は留まって・・・

「（魔力は先ほどの砲撃で回復したからな）・・・派手に行くぞッ！」

――女神（コード・フレイヤ）の大戦火――

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒シュリエルリート†††

オーディンのご指示通りに私とザフィーラはミュールの魔導を回避する事で難を逃れたが、彼はその場から動こうとしない。ミュールの魔導がオーディンの周囲に着弾し爆発。「オーディン！」「我が主！」ザフィーラと共に名を叫ぶ。橙色の閃光と黒煙がセフィロトの樹を覆い隠す。だが私たちの心配は杞憂だった。黒煙が蒼く光ったと思った瞬間、何本もの砲撃が黒煙を吹き飛ばしてミュールへと向かって行く。

「わふっ♪　すっごい重奏（アンサンブル）　リピートありと言うのもすごいなお兄ちゃん♪」

ミュールは翼を翻しながら断続的に放たれて来る蒼の砲撃群を避けつつ笑う。オーディンの頭上には、あの方の魔導を象徴する十字架と四本の剣で形作られた魔法陣が１８と環状展開されていた。魔法陣１枚より断続的に発射され続ける砲撃。それが１８枚となると、その合計は百幾つとなる。

『シュリエル。私の砲撃フレイアがあと僅かで途切れる。それと同時に捕縛の魔道を仕掛けるから、間髪入れずにデアボリック・エミッションを頼む』

『判りました、お任せを』

頼まれた事に心が弾む。期待に応えたい。ただその一心でミュールの動きをしっかりと追う。それにしても「回避力が途轍もないな」ミュールは笑顔でフレイヤという砲撃群の中を踊るように回避していく。その中でも弦楽器を弾きオーディンへ向け音符を飛ばすが、どれも砲撃に掻き消されていく。そしてフレイアが途切れた。ミュールが回避行動をやめたその一瞬の停止状態。

――リングバインド・シーリングフォース――

「うわっと・・・・!?」

その隙を突いたオーディンが仕掛けた捕縛の魔導が、ミュールの両足首と腹、弦楽器の首の方を持っていた左腕を捕えた。それと同時に弦楽器は消滅。今だ。ミュールの元へと急いで翔け、この娘の背後からガシッと頭を鷲掴む。

「闇に染まれ・・・・!」

――デアボリック・エミッション――

私とミュールを中心に爆ぜる魔力球。障壁生成阻害効果がある、この広域殲滅の魔導。オーディンの補助魔導のおかげもあるのか、威力や効果がこれまでより爆発的に上昇している。これなら戦船だろうが一撃で撃沈可能だと確信できる。今は亡きゼフォンにすらも損害を与えられるだろうな。

「結構痛いなぁ、これ。お兄ちゃんの魔道に、魔力生成阻害効果が

ある所為かな。防御がなかなか上手くいかないよ」

「馬鹿な・・・！？」

しかしデアボリック・エミッション発動中にも拘らず、ミュールはあまり堪えていないようだった。さらには捕縛輪を力づくで粉砕し、「むぅ、ちょっと頭放してください」頭を振る事で私の手を振りほどいた。

――我が武装（ツィンベル）その参――

ミュールは両手に円盤状の楽器・・・名は確かツィンベルを創り出した。ツィンベルは、両手に持つその円盤を打ち付ける事で鳴らす楽器だったはずだ。好きにさせてはいけない。傍に浮いている"闇の書"を手元に戻し、頁を開く。私自身の魔導は、デアボリック・エミッション発動中のため使えないが、"闇の書"から発動する分には問題ない。

「ラ～ララ～♪　力強（フォルツァ）く♪　勢いをつけて（フォルツァンド）♫・・そして活発（ヴィーヴォ）に～～～～ッ♬」

――拡（レルム・ベレスティグング）がる音は魔を喰い殺す――

オーディンの魔導を発動しようとしたが間に合わず、ミュールがツィンベルを打ち鳴らし始め、ビリビリと空間が揺れているのが体に伝わる。耳朶を貫き頭の中を掻き回すような不快な音に、堪らず両耳を押さえる。直後、発動中のデアボリック・エミッションが、ツ

ィンベルの音で掻き消されてしまった。あまりに呆気なさすぎる。オーディンの『離れろシュリエル！』の思念通話に従い、フラつきつつもすぐさまミュールより距離を取る。

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

ミュールの左右に蒼の円陣が生まれ、銀の巨腕イロウエルがミュールを押し潰すように飛び出してきた。回避も防御も出来ていなかったミュールは、ズンッ！と重い音と共に2本のイロウエルによって押し潰された。その光景を距離を開けつつ眺めた後、オーディンのお顔へと目をやる。オーディンはすでに別の魔導の準備に入っていた。蒼光の弓と槍の如き長さを誇る矢、コード・ウルという魔導だ。

「・・・っ！？」

ゾワッと身の毛がよだつ。イロウエルから――いや間違いなくミュールから発せられる魔力が原因だ。考える間もなく私はオーディンの元へ飛ぶ。ザフィーラはさらに高度を上げることでミュールより距離を開ける。

私はこれまで悲嘆や絶望を多く抱いた。しかし恐怖だけは抱く事はなかった。なのに今、私は恐怖を感じ、オーディンの傍へ行きたいという衝動に駆られた。オーディンの蒼と紅の瞳は真っ直ぐにイロウエルの両手の平の接着点を見据えている。

『父と子は～～お互いの存在意義を～～懸けて～幾星霜～～～戦い続け～～♪』

頭の中に直接聞こえてくる、ミュールのお世辞にも巧いとは言えない歌声。オーディンの放つ空気が変わった。それとほぼ同時、イロウエルが粉々に粉砕された。舞い散る瓦礫の中、無傷であるミュールは自身の身長と同じく大きさの三日月を後ろから抱くような姿勢で宙に座っていた。三日月には弦が張られ、両手の指で弦を弾き音色を奏でていた。

『父は～幾多の世界を～～幾多の刻を～～孤独に～～』

「黙れ・・・」

――弓神（コード・ウル）の狩猟――

ミュールの歌を拒むかのように放たれたウルは無数の光線となって、ミュールを全方位から急襲。次々と着弾していき蒼の光花を咲かしていく。あれほどの攻撃を受けては無事では済まないはず。だと言うのに、

『救いたい？　それが多難であっても。どうしても？　それが父の道だから。どうやって？　自らの命を削ってでも♪』

ミュールの歌声は止まる気配がない。それどころかさらに魔力が膨れ上がって行くのが判る。もはや私をも超えているだろう。

――ハウリング・スフィア――

私は周囲に魔力球を４基発生させ、「響け！」多弾砲撃ナイトメア

ハウルを発射。ウルが途切れたところでミュールに着弾、爆発を起こす。歌声は途切れたが、「ハープの音色は止まらないな」オーディンがポツリと漏らした。弦の張られた三日月――ハープの音色は、ミュールの歌声とは違ってとても美しい。

『無駄無駄よお兄ちゃん♫　そんなヌルい攻撃じゃわたしの障壁は突破できないの♬』

無傷のままで私たちを見下ろすミュールはハープを弾く事を止めずに胸を張る。おそらくあのハープの音色が、あの異常とも言える防御力の要となっているのだろう。ならば止めるまでだ。飛び立つ前にオーディンの手に触れる。それだけで恐怖は払われ、勇気が生まれる。何が何でも御守りしたい彼の存在を確かめる事が出来るからだ。

「はぁぁぁあああああああッ！」

――守護の拳――

ザフィーラの拳がミュールへと打たれるが、当たる前に何かに拒まれたかのように止まった。不可視の障壁ではない。爆発することで今までの攻撃では確認できなかったが、小さく薄っぺらな音符が盾としてザフィーラの拳打を防いでいるのだ。ミュールがハープの弦を弾くたびに生まれ出る音符の盾。だがこれはある意味では好機だ。ハープを出してからは一度も反撃が無い。おそらく防御特化の楽器なのだろう。

「ザフィーラや君には強化のマグニを付加しているんだが、それでも突破できないとなると一筋縄ではいかな――」

「お兄ちゃん、もう大人しく死んじゃおうよ。頑張り続けて苦しみを長引かせるより、死んで楽になった方がいいよ」

ミュールが突然オーディンに死ぬように言う。苦しみから逃げるために死んで、そして楽になれ、と。

真っ先に反応するのは「貴様！」ザフィーラと、「ふざけた事を・・・！」私だ。翼をはばたかせてミュールへと翔ける。その途中にブルーティガー・ドルヒ２０基を一斉射出。

ハープが奏でられる事で生まれる音符の盾。ドルヒ全基が防がれる。しかしそれでも私の突撃は止まらない。ミュールへ最接近。両拳に魔力を纏わせる。術式はシュヴァルツェ・ヴィルクング。打撃力強化、そして障壁破壊を付与しての打撃。

「「おおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！」」

――シュヴァルツェ・ヴィルクング――

――鉄破震砕打――

ザフィーラもまたオーディンに教わって習得した、障壁破壊特化の効果を持つ魔力を両拳に纏わせた打撃を繰り出す。音符に防がれるが、間髪入れずに音符の隙間を縫うように左手を伸ばしミュールの肩に触れる。ザフィーラもまた私と同じように片方の拳打を防がれたが、もう片方の拳打をミュールの右頬に打ち込んだ。ミュールは

「ぐっ・・・！」呻き声を漏らし、ハープを手放して錐揉みしながら吹き飛び、

――懲罰（コード）せよ、汝（マキエル）の憤怒――

蒼光、蒼雷、蒼炎で形作られた３頭の龍が、ミュールを食い殺そうと競うように上ってきた。ザフィーラの拳打が効いたのかミュールはなんの抵抗をすることもなく蒼炎の龍の大口に呑まれた。蒼炎の龍は何度も咀嚼を繰り返す。それに続いて蒼光の龍が蒼炎の龍の頭部を噛み砕いて取り込み、咀嚼を繰り返す。

今度は蒼雷の龍が蒼光の龍の頭部を噛み砕いて取り込み、咀嚼を繰り返す。何度もそれが繰り返され、蒼炎の龍の口よりミュールの翼と思われる羽根が１０数枚と燃えながら漏れていては霧散していく。いよいよミュールの身は粉砕されているだろう。だが油断はせず、臨戦態勢は解かない。

「わ～たしは～音楽のぉ～～堕～天使～～ミュール・エグリ～ゴぉリ～～～♪」

――輝きたる音軍（ルスティヒ・マルシュ）――

３頭の龍の内部から何百と言う音符が飛び出し、３頭の龍が一瞬で弾け飛ぶ。ミュールや龍とは距離を十二分に開けていた事で音符群の密集点は遠く、回避する事はそう難しくはなかった。ミュールの衣服が少々焼け落ちた事で肌を晒しているが、それでも決定打は受けていないのは判る。ミュールは流し目をオーディンに送りながら、「お兄ちゃんを～殺しちゃう～の～～♪」私の神経を逆撫でするよ

うな事を歌う。

†††Ｓｉｄｅシュリエルリート⇒オーディン†††

マキエルを音符群で粉砕して、衣服は破れていようとも無傷の様相で姿を現したミュール。携えているのはオレンジ色の魔力で構成されたエレキギターで、弦を弾きながら「ラ～ラ～ララ～♪」歌い続ける。防御力が半端じゃないな。あの防御力をどう突破するかが勝利への鍵だな。今はとにかく何がミュールに通用するのかを確かめないといけないか。そう言えば・・・

『ザフィーラ、シュリエル。ミュールの攻撃は私が防ぐ。２人は近接格闘戦に持ち込んでくれ』

『『はいっ！』』

ミュールの口端、血を拭い去った跡があるのが見て取れる。無傷じゃない、ちゃんと通じている。どうやらミュールはゼフォンとは違い、ガーデンベルグたち"堕天使エグリゴリ"に近いようだ。それが攻略のポイントかもしれない。純粋魔力攻撃には強いが打撃には弱い。イロウエルのように防がれやすい巨大さではなく、柔軟な動きが出来る対人格闘戦であればおそらく・・・。それを確かめるために、セフィロトの樹より足を離す事が出来ない私に代わって２人には働いてもらう。

「か～みの～毛チリチリ♪」

――拡がれ音天使の調べ（ヴィルト・メロディー）――

激しく弦を掻き鳴らすミュールの周囲にト音記号が１０数個現れ、さらに弦を弾いてエレキギターの先端――ヘッド部分からいくつもの光線を放つ。ミュールの周囲に設置されたト音記号は光線を反射、全方位に拡散してザフィーラとシュリエルの接近を拒む。

途切れるところを狙って接近を試みればいい、と思うのは甘い考え。途切れない。弦を弾くたびに光線やト音記号が生まれてくる。それをどうにかするのが「私だよな・・・。『突っ込め、ザフィーラ、シュリエル！』」指示を出す。２人の表情に困惑の色が見える。馬鹿だな、何の策もせずに突っ込ませるような薄情な事はしないさ。

「我が手に携えしは確かなる幻想」

――パンツァーガイストｖｅｒ．テレズマ――

先の次元世界の契約の際にシグナムから複製した術式を、ザフィーラとシュリエルに掛ける。もちろん私の魔道で改良している。ただの魔導ならすべてシャットアウト。魔道でも十分に対応できる防御力を誇る。２人の表情から困惑の色が消え、ミュールへと接近を試みる。光線を紙一重に避けつつ、直撃はパンツァーガイストによって弾かれる。

「速く生き生きとッ（ヴィヴァーチェ）♪」

ミュールの表情が少し強張ったがすぐに笑みに戻し、さらに速く、さらに豪快に、小躍りしながら弦を弾き続ける。

――爆ぜろ死奏（レークヴィエム）の音乱舞――

光線、反射板のト音記号、さらにミュールの周囲には音符の書き込まれた楽譜の五線までが螺旋状に現れ、五線の音符全てから光線や魔力弾が次々と放たれてくる。パンツァーガイストでの防御は可能だが、受け続けると当然破綻するし、突破される前に押し返されるだろう。

「我が手に携えしは確かなる幻想・・・『一度離脱してくれ２人とも。それと――』」

『『・・・ヤヴォール！』』

――神技――

念話であらかじめ指示を出しておく。そして頭上に魔力を集束させ、「エーテルストライク！」かつて共に戦った女神から複製した一撃を放つ。光線や魔力弾群を消し飛ばしながらミュールへ突き進み、五線に着弾。閃光爆発は空を真っ蒼に染め上げる。

しかしそれまでだ。光が収まり視界がクリアになった事で視認できる現状。五線が絶対の防壁となって、着弾したエーテルストライクを完璧に防いでいた。見る限りミュールにダメージは入っていない。だが今はそれだけでいい。

「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」」

閃光爆発によってこの空域一帯が真っ蒼になっていた合間に、ザフィーラとシュリエルは、ミュールの前後へと最接近を果たしていた。エーテルストライクは、ミュールへの行く手を妨害する弾幕排除とミュールの視界潰し、という効果をもたらすためだけのもの。ダメージが入っていれば儲けもので、まずはその２つの効果さえ生まれればそれでいい、と考えていた。

「っ！　がはっ・・・ぐっ！」

悔しそうに歯噛みしたミュールの背中に打ち込まれるザフィーラの蹴打。ミュールの体がへし折れたと思ってしまうほどに反り返る。シュリエルがザフィーラが離れたその瞬間に腹へ踵落としを決めた。吐血するミュールを見て少々胸が痛いが『一気に畳み掛けろッ！』指示を出す。２人は元よりそのつもりだったようだ。２人はミュールの腹にもう一度蹴打を落とし、

――コメート・ヴァンダーファルケ――

そのまま地面へと急降下、ミュールを背中から地面に叩き付けた。よほどの威力だったのか砂塵や石礫が巻き上がり、「ぅぷ・・・」目や口を閉じざるを得なくなる。魔力で気圧を変化させて突風を起こし砂塵を晴らす。真っ先に見えたのは小さいながらもクレーター。そこから飛び出してきたシュリエル。「ザフィーラとミュールは？」と訊く。

「ミュールは気を失っていましたので封縛で捕縛しています。ザフィーラはその監視を。トドメはいかがなさいますか？　やはりオー

ディンが・・・？」

シュリエルがクレーターを一度見下ろしてから答えてくれた。私は"エヴェストルム"をランツェフォルムで起動し、シュリエルに差し出す。人間ではない上に敵だが、子供の姿であるため「頼めるだろうか・・・？」シュリエルにミュールの破壊を頼むのは気が引ける。シュリエルは私の表情からそれを察したのか「お気になさらないでください」そう言って"エヴェストルム"を受け取った。

「守護騎士ヴォルケンリッターは、あなたの盾であると同時に剣でもあります。あなたの行く手を邪魔する者は、守護騎士が――あなただけの剣で盾、そして翼であるこの支天の翼シュリエルリートが、全て薙ぎ払います」

長い銀の髪を翻しながら踵を返し、クレーターの下へと降り立って行ったシュリエル。あぁ、くそ。私には勿体なさ過ぎるよ、君の想いは。前へ向く前にチラッとだけ見せた微笑みが脳裏に焼き付いて離れない。いつかその微笑みが、はやてたち八神家を明るく照らしてくれると願うばかりだ。

「アアアア

出してきて、地面に足をつけた直後に片膝をついてゆっくりと倒れ伏した。

「ザフィーラ！　シュリエル！」

『問題ありません・・・』『大丈夫、です・・・』

辛そうだが即答してくれたことに一安堵。意識はハッキリとしているようだ。しかし「よくもやってくれたな・・・！」クレーターから飛び出してきた・・・ん？　アレはミュールなのか？

スラリとした大人の女性の肢体へと変化しているミュールは完全にブチキレているツラを見せている。服装は破れたワンピースではなく、アースガルド同盟軍の軍服――つまり私と同じ衣服だ。色はオレンジ。背にはへ音記号が一対の翼として輝いている。

「神器王ぉぉぉーーーーーッッ！」

お兄ちゃん、はもう付いて無く、ただ私の二つ名を叫びながら私へ向かって急滑空してきたミュール。

――轟き響け、汝の雷光（バラキエル）――

――凍て砕け、汝の氷槍（サルツィエル）――

――燃え焼け、汝の火拳（セラティエル）――

――削り抉れ、汝の裂風（ザキエル）――

――煌き示せ、汝の閃輝（アダメル）――

――呑み食せ、汝の夜影（ライラエル）――

――穿ち流せ、汝の水瀑（マヌエル）――

無属性と土石系以外の属性砲撃を「七天粛清（ジャッジメント）！」一斉掃射。ミュールに着弾・・・はしたが、7条砲撃の中を突破してきて、私の首に両手を掛けた。へし折られる・・・ことはなかったが、一番起きてはいけない事態が起きてしまう。

「ぅぐ・・しまっ――足が・・・！」

セフィロトの樹を描いた地面から足が離れた。それではセフィロトの樹という儀式魔道の管理が出来ない。アンゲルスやアースガルド艦隊は、一度顕現すれば自立的に魔力を供給できるからしばらくはもつ。

問題は、自我を持つアンゲルスとは違い、アースガルド艦隊には指令官が必要という事だ。今の状態でカレドヴルフを、停泊しているアースガルド艦隊が展開している広域障壁の圏外に撃たれてはフォローが出来ない。だから私の首を絞めつつ飛行を止めないミュールの顔面へと・・・

「我が手に・・携えしは、確か・・・なる幻想・・・！」

――閃牙明星　光帝　双煌掌――

「離せ！」

閃光系魔力を圧縮して球体状にした魔力球を両の掌底に乗せて打ち込む。私とミュールの間で閃光爆発、ようやく首から手が離れる。

「くそっ、ダアトが遠い・・・！」

――我を運べ、汝の蒼翼（アンピエル）――

剣翼１２枚を展開。ミュールへの追撃はせずに、すぐに足をつけるべきセフィラ・ダアトへと飛ぶ。だが「王は殺す！　それが、エグリゴリの存在意義！！」ミュールが追いかけてくる。

――女神の陽光（コード・ソール）――

ミュールへ向け上級・炎熱砲撃ソールを撃ち込み・・・直撃。爆炎と爆風の煽りを受けて飛行速度が上がる。あと２００ｍと言うところで、空から落ちる深紅の閃光――カレドヴルフ。最悪の結末が脳裏に過ぎり、心臓が止まるかと思った。砲閃の行く先を急いで確認する。運よくシュトゥラには向かわなかった。安堵の息を吐いた時、

「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッッ！」

――砕音破ただ狂おしく（クヴァール・ゲロイシュ）――

その絶叫と共に超音波が放たれてきた。油断しすぎて「しま・・・

っぐぅぅぅ」まともに受けてしまった。パン、と音がしたと思えば聴覚が働かなくなった。鼓膜が破れてしまったようだ。だがそれがどうした。すぐに治癒術式ラファエルを発動、ダメージを回復させる。

――力神（コード・マグニ）の化身――

続けて上級・強化補助のマグニを自身に付加。トランペットを手にしたミュールが撃ち続けてくる砲撃を回避しつつ、

――復讐神（コード・ヴァーリ）の必滅――

私に対して攻撃して来た者を永久追尾する砲撃、ヴァーリを４発と放つ。ミュールは向かって来るヴァーリを気にも留めずに直進を続け、直撃を受けるもののほとんどダメージが入っていない。やはり純粋魔力攻撃は通用しないようだ。「なら直接殴って墜とすまでだ！」辿り着いたダアトへと足をつけ、反転。

「真技！！」

耳を疑う単語がミュールの口から飛び出した。彼我の距離、あと数mというところでミュールは急停止して、魔力で指揮棒を創り指揮者のような構えを取った。私の周囲に強大な魔力反応がいくつも発生。見れば、オーケストラで使うような楽器すべてが三日月状に展開されていた。

「我は～ミュール・エグリゴリ～♪　世に争いを呼ぶ～王を打倒す

る者〜〜♪」

――真技・堕ちた音天使大楽団（エグリゴリ・オルケスター）――

「祝せ、讃えよ、これぞ終曲♪」

「セフィロトの樹、数は３、意は理解、色は黒、宝石は真珠、神名はエロヒム、守護天使はザフキエル！！」

――女神の護盾（コード・リン）――

第３のセフィラ・理解のビナーの魔力１５％を使用して、全方位に上級・防性のリンを発動。その直後にすべての楽器から攻撃が放たれた。リンに着弾して爆発、視界がオレンジ色に染まる。それだけでなく衝撃波が途轍もない。これはいつまでも耐えられるものじゃないぞ。

「輝きを以って速く（アレグロ・コン・ブリオ）！！」

ミュールがそう指示を出したのが楽器が奏でる音の合間に聞こえた。さらにテンポが速くなって、リンに着弾する攻撃の凄まじさが跳ね上がった。

「あはははははは♬　さようなら、神器王のお兄ちゃん♬　来世に乞うご期待だよ♪」

ミュールが発するのは大人の女性らしい妖艶な笑みと、子供らしい

無邪気な言葉。数枚のリンにヒビが入り始めるのを見て「まずいな。間に合うか・・・？」歯噛みしてしまう。ミュールは指揮棒を大げさに振り上げ、

「愛情（アモローソ）を籠めて　」

振り落とそうとした。だが「え・・・？」ミュールの口から洩れる息。彼女は驚きによって眼を限界にまで見開いている。楽器からの攻撃が全て途切れる。その直後に数枚のリンと楽器すべてが砕け散った。もう少し遅れていれば、確実に私は敗れていただろう。しかしその未来は起こらなかった。

「・・・・ふぅ。助かったよ、ザフィーラ、シュリエル」

「我が主。少々ご無理をし過ぎです」

「まったくです。あと少し私とザフィーラの回復が遅れていればどうなっていたことか・・・」

私の"エヴェストルム"は双剣形態ツヴィリンゲン・シュベーアトフォルムにされ、それぞれ片方を携えたザフィーラとシュリエルに軽く叱責される。そんな中、「ごふっ、こんな事が・・・」吐血しつつ私を睨むミュール。貫かれた個所からは流血し、"エヴェストルム"の穂を伝った後、地面に滴り落ちる。

「怒りを戦場に持ち込んではいけない。正常な判断が出来なくなるからだ。ミュール・エグリゴリ。お前は、私に執着してしまったが

ためにザフィーラとシュリエルを意識の外に追いやった。その結果が、今の状況だ。そのようにエヴェストルム2本によって胸と腹を貫かれた」

ミュールは2本の"エヴェストルム"によって背後から胸と腹を貫かれていた。柄を握っているのはザフィーラとシュリエル。超音波で倒れた2人をその場で確実に討っておくべきだった。それを怠り、私の――古の王の殺害と言う目的に固執したのが失敗。
ここを離れている間にシュリエルは治癒術式（静かなる癒し辺りを使ったんだろう）で回復、預けていた"エヴェストルム"で反撃に出た。回復完了のタイミングは際どかったが、「私たちの勝ちだ、ミュール」勝鬨を上げる。

「がふっ、ただ貫いただけで我に勝ったなど――・・・どうして・・？」

魔道を使おうとしたが、発動できない事に困惑したんだろう。

「あのな――」

説明をしてやる。セフィロトの樹を描いた後、"エヴェストルム"の穂にいくつかのルーン文字を刻んでおいた。刺した対象の魔力生成を阻害させるルーン・ニード。他にも"エヴェストルム"を一時的に神器化させるためのテュールなどなど。ゆえにデバイスである"エヴェストルム"でも、神秘を有する相手であるミュールを含めた"エグリゴリ"全機に通用する武装となる。

「――そういうわけだ。・・・・さようならだ、ミュール」

説明を終え、"神槍グングニル"を具現させて構える。ガーデンベルグ達の救援はない、か。ならば今こそ複製品とは言え相当な実力者であるミュールを討つ好機。

「最期に言い残しておきたい事はあるか？」

「っ・・・・死んじゃえ！」

"グングニル"を薙ぎ払い、ミュールの首を飛ばす。最初は血が噴き出たが、次第に血は魔力へと変わり、ミュールの体は魔力として霧散して消滅した。

Ｍｙｔｈ２７世界の行方は２人の女の決着に委ねられる～Ｐｒｅｌｕｄｅ～

――エテメンアンキ・玉座の間

天地統治塔エテメンアンキの最上層部に位置する、エテメンアンキの管制室でもある玉座の間。天井・壁・床、そのすべてが真っ白で、しかも直径が８００ｍほどある円形状という事もあって実際の大きさを錯覚してしまいそうになる、そんな空間だ。
玉座の間が在る位置は高度２１ｋｍの成層圏。地上を見下ろし天上に座す、その言葉に相応しい場所だ。玉座の間の中央、背もたれが高い純白の肘掛け椅子――玉座に腰掛ける女性が１人。
肩に掛かる灰色の髪、若干吊り上っている双眸は翠色。名をテウタ・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルト。
ベルカへと名が変わる前の世界レーベンヴェルトを統治していた王族の子孫であり、イリュリアの女王であり、このエテメンアンキを起動させて管理する天界王を名乗る者だ。

「っ・・・本当に、このような異常な戦力を持った者が列挙した時代があったのですか・・・！？」

そんな彼女は今、指を組んだ両手に額を当てて俯き、心底悲嘆に暮れているかのように呻いた。テウタの面前に展開されている空間モニターには、オーディンがミュール・エグリゴリを撃破したシーン

が映されていた。それだけではない。彼女の、イリュリアの奥の手たるエテメンアンキの砲撃カレドヴルフを単独で防ぎきっている光景。

自信が、いや確信があった。カレドヴルフでなら必ずオーディンに苦汁を舐めさせる事が出来ると。しかし結果は、見るも無残。オーディンは七美徳の天使アンゲルスや巨大戦闘帆船アースガルド艦隊と言った反則を使い、世界の半球をすべて防御圏内としている。

「ガーデンベルグ様たちは一体どうしたのですか！？」

肘掛けに何度も拳を振り下ろしながら、"堕天使エグリゴリ"達が姿を見せない事に苛立ちを見せる彼女は、融合騎・マラークに問う。マラークの容姿は、真紅の長髪はポニーテール、瞳は翠色、服装は白のシャツとテイルコートにスラックスと言う男装。スタイルは、お世辞にも良いとは言えない起伏が乏しい。戦闘者にとっては問題ないかもしれないが。

「何かしらの御用があるとの事で、開戦と同時に皆様は姿を晦ましました」

「このような時に限って！　神器王を討伐するだけの実力を持ち得ながら、どうして！」

テウタはついに本気で願った。オーディン――いやルシリオンを殺してほしいと。その願いが実行された時、テウタにもたらされる結果は大きく分けて２つだ。１つは"堕天使エグリゴリ"を失う。もう１つはイリュリアがこの戦争に勝利する。

前者は、現状のルシリオンはセフィロトの樹から動けないという制限は有るが、記憶に関する制限が限りなく無いに近い。それはつまり遥か過去、中遠距離射砲撃戦において最強と謳われた神器王ルシリオンそのものだ。
セフィロトの樹の魔力を全て"エグリゴリ"攻略に必要な魔道に使えば、ルシリオンは"エグリゴリ"に辛くもだが勝利を収めるだろう。

後者は、"エグリゴリ"攻略によってセフィロトの樹を失う事になり、ルシリオンの指令でシュトゥラを防衛するアースガルド艦隊はただ浮かぶ船へと成り下がり、カレドヴルフを防御できなくなる。そして"エグリゴリ"との戦いが終わればルシリオンは消滅し、他国を護るアンゲルスもまた消滅する。
そうなればカレドヴルフの射程圏内の国々は、カレドヴルフの脅威に対して丸裸同然となり、果てに撃ち込まれて滅亡するだろう。態勢を立て直す事すら出来ず、イリュリアの独り勝ちという結果になる。

テウタが失うモノはただの協力者、得るモノは新世界レーベンヴェルト創造の切符。彼女にとっては最高の結末だ。しかし肝心の"エグリゴリ"が姿を晦ませて行方不明。だからこそ「どうにか連絡をつけなさい！」マラークに怒鳴る。
マラークは一礼をして玉座の間から階下へと降りて行った。玉座の間に残ろうが残るまいがマラークに出来る事は限られる。懸命に"エグリゴリ"と念話の回線を繋ごうと努力する。当然そんな事が出来るわけもなく、マラークはひとり頑張り続けるのみだ。その姿は無様を通り越して哀れだ。

「アウストラシア勢には、キメラ達やネウストリア騎士団を向かわせ、オリヴィエ王女殿下以外を足止めしましょう。ネウストリア騎士団に構っているアウストラシア騎士団ごとキメラ達を自爆させれば上手くいくはず」

玉座の前に仮想のチェス台が現れる。テウタはイリュリアの現状を現したチェス台を眺め、駒を動かしていく。

「ダールグリュン帝とガレアの元へはグレゴールを、マクシミリアン艦隊には対艦装備の空戦騎士団を。討伐できずとも、誘き出したオリヴィエ王女殿下をこの手で討ち取るまでの時間稼ぎをしていただければ結構。オーディンに関しては・・・あ！」

テウタは何かを閃いたように表情を輝かせて、「そうです！　カレドヴルフの集中砲火で消し飛ばしてあげます！」モニターに映るオーディンを見る。映っている彼は、シュリエルリートの頭を撫で、ザフィーラと拳を突き合わせて勝利を喜んでいた。

「エテメンアンキ！　カレドヴルフの標的を変更！　目標、シュトゥラはノイヴェート丘陵中央部、オーディ・・・いいえ！　ルシリオン・セインテスト・アースガルド！」

『目標変更完了。カレドヴルフ、発射します』

――カレドヴルフ――

「・・・・・っ！？」

エテメンアンキの上部より放射状に広がる柱６基の先端の砲門から、深紅の砲撃カレドヴルフが曲線を描き、ルシリオンの居るノイヴェート丘陵へと突き進む。その時、テウタは見た。モニターに映るルシリオンの表情を。テウタにしてみれば焦りに染まった表情を見たかった。しかしルシリオンの表情に焦りの色は無く、それどころか、待ってました、と言った風だ。

『セフィロトの樹、数は３、意は理解、色は黒、宝石は真珠、神名はエロヒム、守護天使はザフキエル。我が内より来たれ、貴き英雄よ』

モニター越しから漏れ聞こえるルシリオンの詠唱。セフィロトの樹の第３セフィラ・ビナーの円陣に浮いていた宝石サファイアの如き魔力塊が全て消費されて砕け散る。

『誇り高き騎士王・・・・アルトリア（セイバー）・ペンドラゴンッ！』

着弾まであと僅かとなったところで、青いドレス調の服にブレストプレートや籠手・具足の部分甲冑を装着した金髪の少女がどこからともなく現れ、ルシリオンらの前に躍り出た。

『全て遠き理想郷（アヴァロン）！！』

少女のその言葉の直後に６本のカレドヴルフがルシリオン、ザフィーラ、シュリエルリート、そして少女の居る地点に着弾した――か

に思えたが・・・「うそでしょう・・・・！」テウタが目を見開く。モニターに映っているのは、着弾したかに思えたカレドヴルフが一斉に弾き返され戻ってきた光景だ。

『警告！　第五、第七砲門に――』

エテメンアンキの緊急を知らせる報告の最中、弾き返された６本のカレドヴルフの内２本が砲門２門に直撃した。その衝撃に「きゃぁぁぁあああああああッ！」テウタが玉座より悲鳴を上げながら転げ落ちる。エテメンアンキより第五・第七の砲門が損壊したという報告が、ノイズが紛れながらも全区画に流された。

「・・・・・・」

床に伏せたままのテウタはしばらく黙りこみ、そして突然「ふざけるなッ！」床に頭突きを一発。そう叫んでしまうのもまた当然かもしれない。あまりに理不尽、あまりに不条理。世界を滅亡させるだけの兵器エテメンアンキを用いても打倒する事が叶わず、それどころか単独で攻略されそうになっている。

「・・・ルシリオンには・・・どうやっても勝てないのですか・・・？」

両の拳を力の限り握り、何度も床を叩く。床にポタポタ落ちるのは水滴――テウタの悔し涙だ。彼女の面前に新しく展開されたモニターには、満足そうな、してやったりといった風な笑みを見せるルシリオンが映っていた。

そしてカレドヴルフを反射したと思われる少女の姿はもうない。ルシリオンが"英雄の居館ヴァルハラ"より召喚したのは、何万と居る"異界英雄エインヘリヤル"の中でも上位の存在・英霊に位置する者。現状のルシリオンでも長い時間召喚する事は出来ないため、早々に召喚を解いたのだ。

「第三が完全に使用不可、第五、第七砲門は修復さえすれば使用可・・・。ですが、すぐにとはいかない。・・・残り四門、最早役に立つかも判りませんね」

テウタは再び玉座に腰掛け、努めて冷静になって現状を確認。最早彼女に残されている道は、イリュリアに進軍した勢力全てを討伐すること。ルシリオンへのアプローチは完全に見切りをつける。ただこのまま負けるつもりはない。ここからはルシリオンに勝利する条件を徹底的にクリアするつもりだ。

そう、彼が護るべき進撃軍を根絶やしにすれば、彼は護衛対象を守りきれなかったという敗北感でいっぱいになる。実質的な勝利は望めなくとも精神的に叩き潰す。それがテウタの精神を繋ぎ止める最後の砦だ。それすら失敗すればテウタは確実に精神を病んで、悲しい結末一直線だろう。

『マラーク、もういいから戻って来なさい。融合の調整をしておきます。オリヴィエ王女殿下がここへ訪れるその時まで』

『・・・畏まりました。すぐに参ります』

テウタは必ずここへと訪れると信じているオリヴィエを迎え撃つた

めに、マラークとの融合形態の調性を行うことを決める。

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

シュトゥラの戦船の艦隊――マクシミリアン艦隊の旗艦・ローリンゲンに乗ったあたしとアイリ。あたしらの将オーディンが率いる信念の騎士団グラオベン・オルデンは、シュトゥラにとってもう特別で大切な戦力だって事で、クラウス王子の計らいで艦橋に入る事が許されてる。

「よっしゃッ！」

艦橋からエテメンアンキのテッペン付近で爆発が起きたのが見て判る。カレドヴルフっつう砲撃が一斉にシュトゥラ――オーディンの居る所へ落ちて来た時はちょい焦ったけど。でも完璧に跳ね返されたカレドヴルフはそのままの軌道で空に戻って行って、エテメンアンキのどっかを破壊した。

艦橋に居るローリンゲンの管制を担ってる連中も「さすが騎士オーディン」「反射させるとは素晴らしい手だ！」とか歓声を挙げてる。一時的にあたしの融合騎になったアイリも「やっぱりマイスターはすごいよねっ♪」って艦橋内を飛び回る。

「殿下！　４時の方角よりイリュリア所属の艦隊の熱源を確認！」

索敵担当から報告が上がる。だけど艦橋には焦りも何もない。少し遅れてから、さっきの索敵担当が「イリュリア艦隊が、げ、撃沈されました！」ちょっと前と同じ報告をした。オーディンだ。正確に

はオーディンがどこからか用意した戦船（帆船つうのが驚きだけどな）の艦隊からの援護砲撃が放たれて、イリュリア艦隊を次々と撃沈していく。もう何でもあり過ぎて逆に笑えてくる。クラウス王子も「労せず王都へ向かえるのは喜ばしい事だが・・・」ちょっと呆れて苦笑してる。

「艦隊下方より空戦敵騎！　イリュリアからの奇襲です！」

「隠れていたのか・・・！　艦砲射撃！」

「ダメです！　艦隊間を飛行されているため撃てません！」

「マクシミリアン三番艦ビスマルクに取り付かれました！」

地上から真っ直ぐ飛んできたイリュリアの騎士団が艦隊の1隻――ビスマルクっつうのに取り付いたらしい。頭がいいな。艦隊が頭上を通るまで隠れて、死角の船底から奇襲を仕掛ける。艦砲を受けないために艦隊間を飛んで張り付いて、「奴ら、対艦武装を装備しています！」戦船の装甲を破壊しようとしてるってわけだ。

「アイリ」

「だね」

踵を返して艦橋の入り口に向かう。クラウス王子が「すみません」そう一言謝ってきた。あたしは「これがあたしらの仕事だからな。気にしないでくれ」それだけ言って艦橋から出る。向かうは艦上に

出るための上部ハッチ。艦砲が使えないんなら直接ブッ叩くまでだ。通路を突き進む中、「特訓の成果を見せてやっか。な？　アイリ」隣を飛んでついて来るアイリに振り向く。

「マイスターの期待にも応えたいしね。やっちゃおう♪」

辿り着いたハッチを開けて艦上に立つ。風で靡く髪を片手で押さえつつ、あたしは他艦を襲っている騎士団を見る。風に吹き飛ばされているアイリを胸に抱え「そんじゃ始めるか」そう言うと、アイリも「始めよう、マイスターの敵を全部・・・斃す」強く頷いた。おいおい、お前、イリュリアを潰すまでの間、オーディンを利用するとか言っていたクセに、もう完全にグラオベン・オルデンの一員じゃん。

「「融合！」」

アイリと融合を果たす。あたしの騎士甲冑がちょっとだけ変わる。色は全体的に青色になってる。赤い生地部分は青、それ以外は水色だ。髪色はオーディンやシュリエルの銀に近い蒼。んでもって全身から放たれる冷気。自分の意思じゃねぇのに出るんだよな。しかも上着と帽子が無くなってんのに寒くないし。アイリとの融合で一番嬉しい事は、背中から氷の剣翼が3対、計6枚が展開されたこと。数は違ぇけどオーディンとお揃いの剣翼だ。それがなんだかムチャクチャ嬉しいんだよなぁ～。

「行くぜッ！」

艦上から飛び立つ。携えるは長年の相棒、鉄の伯爵・"グラーフアイゼン"。あたしの内に居るアイリが『氷結圏！』そう言うと、"アイゼン"全体に冷気が纏わりついてヘッド部分が凍った事で、"アイゼン"は星球武器形態（モルゲンシュテルン）になる。

「まずはテメェらだぁぁぁあああああああッッ！！」

――クリスタレス・ハンマーーーー

ビスマルクに取り付いている奴らをブン殴って吹っ飛ばす。ブッ叩いている途中で気づく。コイツら、飛べるだけで空戦は玄人じゃねぇ。空戦の戦い方を知っちゃいるが、学んだだけで実戦経験が少ないのが見りゃ判る。コイツらの動きは決して悪かねぇけどそれだけだ。あたしの敵じゃねぇよ。まぁなんだ、「まともに戦えねぇ奴はすっこんでろッ！」あたしの動きについてこれねぇ３人を次々にブッ飛ばす。

「第三・第四小隊はその小娘を迎撃！　第一・第二小隊はこのまま戦船の装甲を破壊、中に進入せよ！」

役割分担を決めやがったな。あたしを包囲するのは１４人の筋肉騎士。残りの３０数人かがビスマルクや別の戦船に取り付いて、装甲を破城鎚で殴り始める。止めねぇと。とりあえず「たった1人に負けてなるものか！」そう叫びながら向かって来る敵を、１人、２人、３人とクリスタレス・ハンマーでブッ叩く。

『ヴィータ。クリスタレス・ハンマーの維持限界だよっ』

『かなり堅いな、コイツら・・・。よし、コイツをぶっ叩いて終わりだ・・・！』

４人目が持ってる対艦武装の破城鎚ごとソイツの甲冑を粉砕したら、ヘッドを覆っていた氷が砕け散る。それと同時にその場で旋回して、"アイゼン"をソイツの顔面に叩き込んで撃墜してやる。っつうところで「貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」あたしに向かって破城鎚を振り降ろしてきた５人目と６人目の筋肉騎士。高速移動のフェアーテが無けりゃ避ける事も出来ない速さと正確さだ。

「（でもな・・・）融合形態のあたしはこの場じゃ最速だぜッ！」

冷気の帯を引きながら横に移動。遅れて破城鎚があたしの傍を通り過ぎる。全身を重甲冑で覆い隠して、そのうえ大振りだった事もあって、一度避けちまえばあとは簡単に反撃が出来るんだぜ、おっさん。

「あらよっと・・・！」

――テートリヒ・シュラーク――

２人の顔面に叩き込む。"アイゼン"から伝わって来る肉を潰して骨を砕いた感触。顔を砕かれたソイツらもまた地面に向かって落下していった。アイリが『次は？』って訊いてきたから、『次はフリーゲン、そっからフリーレンで行くぞ』即答してやる。あたしとアイリで組み上げたいくつかの魔導（つまる、つまらんだとかで何度

か衝突したけどな）を、テメェらで試させてもらうぜっ♪

「アイゼン！」

まずはカートリッジを1発ロード。

「『シュワルベフリーゲン・アイス！！』」

鉄球や魔力弾を繰り出すフリーゲンの応用版――冷気の魔力弾を8発打ち出す。元はオーディンと一緒に組み上げた共同魔導だけど、氷の融合騎アイリの力で単独でも扱える事になった。誘導操作に着弾時炸裂って効果はそのままだ。

くそ重い破城鎚を手に必死に避けようとするけど、追尾してくる所為で大慌てだ。回避も難しいって判断したらしいアイツらは、ついに障壁で防御しようとしやがった。それが狙いだっつうの。障壁に着弾した瞬間にフリーゲンが炸裂、ボフッて音と一緒に冷気が爆散。

『うん、狙い通りだね』

『見りゃ判んだろうにな』

冷気をまともに受けて体が凍りついた何人かが真っ逆さまに地面に墜落してく。んで、「懐に潜り込むなんて余計に自殺行為だっつうの！」旋回して、あたしの背後に最接近してきた奴の胸部装甲に向かって、

――フリーレンシュラーク――

冷気を纏ったテートリヒ・シュラーク――フリーレンシュラークを打ち込む。打撃に凍結、２つの効果の一撃だ。打撃で体内外をぶっ壊し、その上で凍結させる。やばい、こいつはやばい。アイリとの融合形態、ここまでハマるなんて思ってもみなかった。
なんつうかシグナムが羨ましい。オーディンに頼んで、アイリをあたしの融合騎にしてもらえねぇかなぁ～。シグナムとアギト、オーディンとシュリエル、そんでもってあたしとアイリ。これでいいんじゃね？
オーディンを説得して"闇の書"を完成させて、シュリエルを融合騎にしちまおう。

『ヴィータ！　なにボケッとしてるのっ？』

「『――っとと、悪ぃ』・・・おっと、ほらよ・・！」

――フリーレンシュラーク――

「うごぉ・・・体が凍っ――――！？」

頭上から急降下して来た奴が振り落してきた破城鎚を、ちょい後退して避ける。位置が逆になる。あたしが上で敵が下。冷気を纏う"アイゼン"を振り下ろしてソイツの右肩（ド頭に打ち下ろすつもりだったんだけどな）に一撃与える。
骨を砕いたのは手応えで判った。どっちにしろ凍結して真っ逆さま。地面に落ちた瞬間に砕けて終わりだ。悪く思わないでくれよな。こっちだって勝つのに必死なんだ。

「さてと。凍りてぇ奴からかかって来いよ。グラオベン・オルデンの鉄槌の騎士ヴィータと――」

『氷の融合騎アイリが――』

「ブッ潰すッ！」『ブッ倒すからねっ！』

"アイゼン"を残り、えっと・・・3人の騎士に向ける。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒リサ†††

「はぁはぁはぁ・・・・」

「ぅく・・・存外にしぶといな、シャルロッテ」

シャルロッテ様の助言や時折の身体操作のおかげで首の皮一枚繋がってる。イリュリア騎士団第二位のヨハンの強さは本物だった。"キルシュブリューテ"に宿ってるというシャルロッテ様のご意思の御力が無ければ、私はもう死んでいる。

『リサ、やっぱり代わろうか？』

『いえ。シャルロッテ様の御手を煩わせるわけにはいきません・・・！』

――炎牙月閃刃（フランメ・モーントズィッヒェル）――

魔剣、"断刀キルシュブリューテ"の刀身に桃色の火炎を付加。私の十八番の魔導だ。シャルロッテ様が瞬間的ではなくて持続的に私の体を操作して戦えば、おそらくヨハンに快勝できるはず。でもそれでは意味がない。それは私の勝利ではなくシャルロッテ様の勝利だ。

――風刃烈火――

暴風が長槍全体に巻きつくように発生する。まるで馬鹿の一つ覚えのようにその魔導だけしか使ってこない。けどそれで充分だとも言える。暴風は攻防一体。触れたモノを砕く。障壁を突破されての直撃は、肉をごっそり削り取られるだろう。その暴風は、私の炎を一瞬で散らし無力化してきた。やっぱりもう炎熱系の魔導は通用しないと見切りをつけた方がいいか。

「早々にこの世より退場させてくれるわ！」

「っ、それはこちらの台詞だッ！」

――光牙月閃刃（シャイン・モーントズィッヒェル）――

桃色に光り輝く攻撃魔力を刀身に纏わせる。中遠距離の魔導は通用しない、というか避けられる。だから接近戦――斬り合い限定にする。魔力で身体強化して身動きを限界にまで高め、

「「あああああああああああッ！！」」

ヨハンが繰り出す刺突の連続を"キルシュブリューテ"で弾き続ける。"キルシュブリューテ"が長刀で良かった。普通の長さの武器だったら、長槍を弾いた瞬間に暴風から漏れる小さな風の刃の射程圏内に入ってズタズタにされる。
最初はそうとは知らずに近付き過ぎた所為で全身なます切りにされるところだった。シャルロッテ様が咄嗟に私の体を操った（何でも出来て驚きだ）ことで、難を逃れる事が出来た。

『コイツ、思っていた以上にやるわ。この槍捌きで第二位って、第一位はどんな怪物なのかしらね～』

「『そんな呑気な・・・』危な――っ！」

刺突をギリギリで弾く。あと少し反応が遅れていたら心臓を貫かれてた。長槍が引かれたその一瞬を狙って、高速移動歩法・閃駆で大きく距離を取る。ヨハンは私を追撃をする事なく「武装解除して投降するなら、命だけは見逃そう」と言ってきた。

「・・・・フライハイト家の返答、聞くまででもないでしょ・・・？」

「そうだな。・・・十騎士公家の主格オメガ・シュプリンガー家当主として、フライハイト家を十騎士公家から除名する」

「今さら過ぎて気にもならない。レーベンヴェルト王家に残っているのは、オメガ・シュプリンガー家、ブラッディア家、ヴォルクステッド家、ダーツェ家だけじゃないの。フライハイト家とアルファ

リオ家はアウストラシアに、ヒルベルト家とノワール家、プリマベラ家もそれぞれ別の国だし、ストラトス家に至っては今ではシュトゥラの王族だし」

すでにオーディンさん達の手によって、ブラッディアとヴォルクステッドの騎士は戦死している状況だし。ヨハンの顔が怒りに歪む。シャルロッテ様も『哀れなものよね～。歴代最強だった当時のシュテルン・リッターも時が経てば瓦解か』と怒り・・ううん、寂しそうに言う。

"星騎士シュテルン・リッター"。レーベンヴェルトを護っていた騎士団、その最強の１０人の騎士たちの総称。なのに今ではレーベンヴェルト――イリュリアに弓を引く者ばかり。シャルロッテ様にとってはやっぱり複雑なのかもしれない。

『（下手に長引かせても状況が悪くなるだけだ、こうなったら・・・）シャルロッテ様』

『どうしたの？』

『シャルロッテ様の最強剣技・・・真技なるものの本当のやり方を後で教えてください。今はただ、私がシャルロッテ様の記した魔導書から推測して組み上げた私の真技を・・・ヨハンに打ちます』

『おお！　それは楽しみだ♪　必要な魔力はキルシュブリューテから取り込むことが出来るから！』

シャルロッテ様が楽しげに笑う。私としては笑っていられる状況じ

ゃないのですけど。とりあえず魔力に関しては先ほどから"キルシュブリューテ"から送られてくるため、枯渇する心配はない。だから「参りますッ！」私の最強の剣技を全力で最強格の騎士ヨハンに打ち込める。まずは相手を宙に浮かせないといけない。

――閃駆・光牙月閃刃（シャイン・モーントズィッヒェル）――

移動速度でなら私が勝っているのはシャルロッテ様からも認められている。刀身に閃光を纏わせ、閃駆でヨハンへと接近を試みる。彼我の距離２０ｍ。その距離をたった一歩で１にする。直面に現れた私に対してヨハンは焦らずに刺突を繰り出そうと腕を引いた。

「せぇぇぇぇぇぇぇぇいッ！」

その前に、地面に"キルシュブリューテ"を叩き込んで、刀身に纏わせていた閃光を爆発させる。爆発で起こった砂塵による視覚封じ。間髪入れずに膝下の高さ辺りを薙ぎ払う。砂煙の微細な動きを見逃さない。

ヨハンが跳んだ動きに合わせて砂煙に変化。後退されていたら少し面倒だったけど、"キルシュブリューテ"の長さがまた役に立った。後退より上に跳んだ方が回避しやすい。予定通りの行動をヨハンは採ってくれた。

――風牙烈風刃（ヴィント・シュトゥース）――

砂煙の合間に見えた、降下しつつの刺突体勢に入ったヨハンへと風圧の壁を放つ。砂煙を吹き飛ばしながら迫る烈風刃を、ヨハンは風

乗りという魔導で射線上より離脱。風乗りの効果は飛行ではなく浮遊。風の足場に乗っての移動という事はもう判っている。ゆえに空戦は私と同じで自由自在とはいかない。けど、

――法陣結界――

ヨハンを中心として半径１０ｍ圏にいくつもの魔法陣を展開。ヨハンにとっては球体上の檻。私にとっては全方位の足場。

「これは・・・！」

「もう逃げ場はない。覚悟しろ、ヨハン！！」

――閃駆――

風乗りは確実な足場にはなりえない。効果がそう長く持続しないからだ。でも私の法陣結界は、私が解かない限り、そして破壊されない限りは消えない。一番重要なのは、一度展開すればあとは維持するだけの魔力が必要な私とは違い、ヨハンは常に魔力消費や発動時機、効果範囲などにいちいち気を割かないといけないという事だ。その差が必ず私に好機をもたらす。現にヨハンは、法陣結界内を閃駆で駆け回る私が繰り出す斬撃を避けるのに必死だ。

「づっ・・・！　このような結界など破壊してくれるわッ！」

――風刃烈火――

風乗りを連続で発動して"キルシュブリューテ"の斬撃を避け続けていたヨハンが叫んだ。長槍に暴風が纏わりつく。けど法陣結界を破壊するつもりなんて端から無いでしょ。目が口ほどにものを言う。結界破壊阻止に焦った私を討つ、それがあなたの策だ。
それに、破壊したいなら破壊すればいい。すぐさま修復して、再び檻に叩き込んでくれる。穂先を私に向けるヨハン。すでに私はヨハンの頭上の魔法陣に足をつけ、閃駆を行おうとしてる瞬間。

（本音を言えば、真技の前に少しでも損害を与えておきたかったけど、粘って殺されるヘマだけはしたくないし・・・仕方ない）

私がシャルロッテ様の魔導書から読み取れた、真技という最強の剣技の数小節。同時数太刀斬撃。数は読み取れなかったけど、複数の斬撃を同時に対象に打ち込むってどうやればいいのか。それをひたすら考え、私が出した答え。おそらくシャルロッテ様とは違うだろうけど、これが私の・・・

「風刃烈火！！」

刺突が繰り出される。私はヨハンの真後ろの魔法陣へと移動。長槍から暴風が放たれて法陣結界の上５枚の魔法陣を砕いたけど、すぐさま修復される。足場としている魔法陣に、起動した私の"キルシュブリューテ"を刺して、真技に必要な魔導を発動する鍵とする。

「真技！！」

魔法陣１枚につき障壁破壊効果を付与してある魔力の剣が一振り現

れる。形状は、この魔導を発動する鍵である"キルシュブリューテ"と同じで長刀。その数は計３２本で、すべての魔力長刀の柄頭がヨハンに向く事になる。魔剣"キルシュブリューテ"を鞘に納めて背中に担ぐ。自分の魔導と"キルシュブリューテ"を使って、ヨハンを討ちたいから。

「うおおおおおおおおおおおおおッッ！！」

閃駆でその魔法陣へと移動した時にそこの魔力長刀を抜き放ち、また別の魔法陣へと閃駆で移動している最中に高速で相手を斬り続ける。魔力長刀は脆い。すべてを交差時の一撃に懸けているために維持する魔力は無いから一回で砕ける。だけどその分、攻撃力は高い。障壁破壊効果に特化した魔力の連続斬撃は、敵の騎士甲冑を少しずつでも削り取って行く。障壁や騎士甲冑が砕けたその時、私の真技が・・・・完成する。抜いても抜いても新たに魔力の長刀は生まれ続ける。決して切れる事はない。斬り続けること３９回。ようやくヨハンの甲冑を砕いて生身――脇腹に一撃入れると、

「ぐあぁぁあぁぁあぁぁ

長刀はヨハンを斬った直後に消滅――したと同時に私は武装"キルシュブリューテ"を魔法陣から抜く。私の手による直接のトドメの一閃として使用するために。真上の魔法陣から閃駆で急降下、ヨハンを縦一文字に斬りつける。

「っづ・・・はぁはぁはぁはぁはぁはぁ・・・・っ！」

私が着地し、全身に斬傷を刻まれたヨハンの体を受け止めた一番下の魔法陣が砕けると、連鎖的に法陣結界が砕けていく。ドサッと力なく地面に落ちたヨハンは身じろぎ1つ、呻き声すらも出さない。私も声が出せないほどに疲労。なんとか地面に着地できたけど、すぐに足がフラついてその場に座り込む。

全身が悲鳴を上げている。牢刃・弧舞斬閃は魔力も肉体も酷使するから、連戦の可能性がある場合はなかなか使わない。魔剣"キルシュブリューテ"の魔力を運用してもこのザマだ。もう少し魔力消費については改良しないといけないかな。

『お疲れ様、リサ。あなたの真技――牢刃・弧舞斬閃。確かに観せてもらったよ。なかなか面白い。私はこれで良いと思うよ。もっと昇華させていけば汎用性も出ると思うし。私の真技――牢刃・弧舞八閃なんかよりずっと良い。アレは純粋で確実な斬殺剣技だから』

上がらない腕を必死に動かして魔剣"キルシュブリューテ"を鞘から抜く。でもそれだけ。思念通話で応えようとも思っても思考が乱れてしまって、思念通話なんて簡単な魔導すら発動できない。とにかく何故かシャルロッテ様はとても悲しそう。斬殺剣技がダメ？剣技は敵を斬り捨てるためのものなのに。言葉は交わさなくても思

っている事は魔剣"キルシュブリューテ"を通して繋がってしまうようで。

『力はね、ただ殺す――害するだけのものじゃないんだよ。あなたも解ってるでしょ。力は――』

『何かを守るためのもの・・・ですよね・・・？』

『そうゆうこと♪・・・さて、シグナム達の方も終わったようね』

首だけを動かして周囲を見回す。私とヨハンの決闘を邪魔させないように敵騎士団と交戦してくれていた騎士シグナムやアウストラシア騎士団のみんな。騎士シグナムは体や騎士甲冑のあちこちに斬傷を作っていて、左足を庇うようにヨロヨロと私の方へと歩いてくる。歩いているだけで辛そうだけど、それでも「素晴らしい戦いだった」そう笑みを浮かべて褒めてくれた。"キルシュブリューテ"を待機形態の首飾りに戻した私は深呼吸を何度も繰り返して息を整え、

「ありがとう、ございます・・・！」

フラフラでボロボロな騎士シグナムが差し伸べてくれた手を迷いながらも取って立ち上り、こちらも笑みで応じた。立ち上る事で状況がさらに克明に理解できた。戻って来てくれたアウストラシア騎士団の数は３０人弱だった。なのに今、立っているのは・・・８人。他はみんな地面に倒れ伏している。そしてブルーティガー・ハーゼ・オルデンの騎士は・・・８０人弱が倒れている。戦闘開始前は確か１００人くらい居たはずだ。残りの２０人は・・・？

「お前がヨハンを討った時に連中は撤退した。正直助かったよ。さすがは第二位が率いる騎士団だ。構成騎士の実力は誰も彼も高かった。こちらにはまだ余力があると思わせていたが、そんなものは演技にすぎん。あと少しお前がヨハンを討つのが遅れれば、アウストラシアの騎士は全滅、私としても危うかった」

「ごめんなさい。みんなも・・・」

私や騎士シグナム以上にボロボロであるみんなに謝る。騎士シグナムは「勘違いしているようだな。私は責めていない、感謝していると言ったぞ？」と苦笑。

「そうですよ。謝らないでください、騎士リサ。結果的に、ヨハンを討つ事が出来ました」

「無傷で彼のブルーティガー・ハーゼ・オルデンに勝利できるなど誰も思っていませんでしたし」

「斃れた仲間たちは、決して騎士リサを恨んでなんかいません」

「それどころかきっと褒め称えていますよ。強敵にして難敵の第二位ヨハンを、単独で討てたのですから」

他の騎士も私を称えるような事を言ってくれた。イリュリアに勝つための礎になる事は、打倒イリュリアを心がける者たちにとっては本望だと。それでも死んでほしくなかった。たぶんそう思うのは私

だけじゃないはずなのに。でも、だからこそ斃れて逝った仲間たちのために、私たちはここで立ち止まるわけにはいかない。

『リサ。キルシュブリューテの魔力を使って私が治癒術式を発動するから、掲げて見せて』

『あ、はい。お願いします』

力の入らない両腕を精一杯上げて、"キルシュブリューテ"を掲げた。治癒が終わったら、私ひとりでも王都へ向かわないと。待っていてください、オリヴィエ様。

。―。―。―。―。―。

イリュリア騎士団、その序列第二位である騎士ヨハン・オメガ・シュプリンガー敗れる。そんな最悪な報告がイリュリア各地に散っているイリュリア騎士団へと拡がった。そして同じように彼を討伐した騎士の名もイリュリア全土に知れ渡る事になった。

アウストラシアの近衛騎士団の一個小隊ズィルバーン・ローゼの将にして、元十騎士公家の1つたるフライハイト家の次期当主、リサ・ド・シャルロッテ・フライハイト。

イリュリアの騎士ならば誰もが憧れ慕い、他国にすらその名を轟かせたヨハンが戦死。この事実が、イリュリア騎士の士気に大きく影響する。ヨハンの死は、彼を慕っていた騎士たちの士気を大いに下げていた

「騎士ヨハンが敗れた・・・？　そんな馬鹿な！！」

「あのヨハン様が負けるなど嘘だ！」

それはここイリュリア南東部を防衛している騎士団も例に漏れず。ベルカ全土に名を馳せる大帝――雷帝バルトロメーウス・ダールグリュンを前にして、彼らはその事実を認めようとはせずに叫ぶのみ。ダールグリュンは「戦場にそのような感情など持ち込むではないわッ！」怒声と共に黄金の戦斧――銘をクロケア・モルス、意を黄橙色の死――を薙ぎ、その騎士たちの体を粉砕して一瞬のうちに絶命させた。

「温い！　ヨハンとやらが討たれたと知るや否や足並みを崩すとは！　これがイリュリア騎士団だと？　笑わせるでないわッ。我らは今までこのような雑魚の集まりに阻まれていたと言うのかッ！」

ダールグリュンは怒声を上げ、クロケア・モルスの石突をズンッと地面に打つ。それだけで彼の周囲に震動が起こり、敵味方関係なくフラついた。

「彼らを冒涜しないでもらおう。騎士ヨハンは、イリュリア騎士の誰もが敬意を表す男だったのだ。そのような偉大な男が討たれた。取り乱すのもまた仕方ない事だと思うのだがな」

ダールグリュンに異を唱える1人の男。ダールグリュンは「出たな。グレゴール」と嬉しそうに顔を破顔させた。ダールグリュンの視線の先には、白銀の甲冑を着込だ老齢の男――グレゴール・ベッケンバウアーが佇んでいた。

シュトゥラ・ラキシュ領はアムルを襲撃し、アンナを連れ去った時とは違い、今のグレゴールは完全武装だ。甲冑はもちろん左手に携えるは飾りっ気のない大剣。形状は片刃、峰は櫛状となっていて、所謂ソードブレイカーと呼ばれる短剣を巨大化させたものだ。

「我が戦いたいと思っていた男が今、こうして目の前に現れた。これは僥倖よ」

「小童めが。雷帝と謳われ、鼻が高くなっているのではないか？」

三連国バルトはウラルを統治する王ダールグリュンと、イリュリア騎士団総長にして第一位の実力者グレゴールが邂逅した。２人の周囲に居る者たちが一斉に散って行く。２人の決闘の近くに居る事、それ即ち死に直結すると理解しているからだ。そんな散って行ったダールグリュンの配下の騎士団の元に、１人の成人男が立ち塞がる。

「アインス。我とダールグリュンの決闘が終わるまでに、その者たちを一掃しておけ」

「ヤヴォール。ロード・グレゴール」

グレゴールにそう応じた男の名はアインス。融合騎プロトタイプ・一番騎アインス。全ての融合騎の兄であり、シュリエルリートと同じように単独戦力としても強大だ。アインスは雷撃で大鎌を創り出し、「それでは皆さん、死ぬお時間です」そう言いながら、ウラル騎士団や何百体と居るマリアージュへと突撃、次々と薙ぎ払っていった。

「・・・決闘が終わるまでに、か。面白い。決闘の後、どちらが立っているか、確かめようではないか！」

「一国の王が戦闘狂とは。ウラルもそう長くはないかもしれんな」

ダールグリュンは戦斧クロケア・モルスを前に掲げ、グレゴールもまた刀剣破壊剣――銘をシュチェルビェツ、意を刻みの（ギザギザの）在る剣――を前に掲げ、互いの武装の先を当てた。

「バルトはウラルの王、雷帝バルトローメウス・ダールグリュン」

「イリュリア騎士団・序列第一位、総長グレゴール・ベッケンバウアー」

「「いざッ！」」

イリュリアと対イリュリア同盟、二大勢力における最強格の騎士が衝突した。

ヨハンの死。それがキッカケとなったかのようにイリュリア戦争は熾烈を極め始める。

イリュリア南部。リサとシグナム・アギト、アウストラシア騎士団一個小隊を置いて先に進軍していたアウストラシア騎士団は、テウ

タの狙い通りの事態へと陥っていた。故ウルリケ・デュッセルドルフ・フォン・ブラッディアが率いた、狂いたる災禍騎士団プリュンダラー・オルデン所属のキメラ達が、ネウストリア騎士団・アウストラシア騎士団に取り付いて自爆する事で、２つの騎士団に壊滅的被害を与えていた。

ヨハンと、彼の率いていた戦兎騎士団ブルーティガー・ハーゼン・オルデンと戦い傷ついたリサ、シグナム・アギト、そして小隊は、負ったダメージの治癒の為、その場から動けずにいる。

イリュリア西部。トゥルム海沖にて行われていたイリュリア艦隊とヘルウェティア・ヴィンランド・シュヴァーベンの同盟艦隊による戦闘は、無人とした戦船を同盟艦隊に衝突させるという荒業にて、共に壊滅状態となっていた。

イリュリア北部。シュトゥラのマクシミリアン艦隊は、アースガルド艦隊の援護も空しくイリュリア艦隊との艦隊戦によって1隻、また1隻と沈んだ。クラウス率いる騎士団は艦隊より地上に降下、馬を駆り王都へと進軍を開始。イリュリア騎士団の序列六位・七位・十位の騎士が率いる高位の三個騎士団と、下位の四個騎士団の計七個騎士団と戦闘を開始。

ヴィータとアイリ、そしてルシリオンの護衛を解かれてシュトゥラ騎士団と合流したザフィーラとシュリエルリートの協力もあって、辛くも勝利した。しかしヴィータ達グラオベン・オルデンやクラウスも含めてこの戦で大ダメージを負い、進軍を中断する他なくなった。

イリュリア南東部。雷帝ダールグリュンと総長グレゴールの決闘。ダールグリュンは「人間を辞めたのだな・・！」と戦斧クロケア・モルスに雷撃を纏わせての刺突――雷帝式・四式・瞬光でグレゴールの脇腹をごっそり穿っていた。しかしグレゴールは血反吐を吐きながらも「老体に鞭打つには必要なのだよ」と笑みを漏らすと、穿たれた部分が急速に再生され元通りとなった。グレゴールは確かに人間を辞めていた。キメラ達のような生体兵器化を自らに施し、不死の肉体を手に入れていたのだ。２人の決闘に終わりは見えない。融合騎・一番騎アインスは単独でウラル騎士団を壊滅状態にしたが、屍兵器マリアージュの連続自爆で大ダメージを被った。しかしそれでもなお雷撃の大鎌を振るい続ける。散って逝った妹たちの名誉の為に。

シュトゥラはノイヴェート丘陵。ルシリオンは６つのセフィラを完全消費しつつも各戦場に援護射砲撃を撃ち込み続けていた。だが、徐々に苛烈を極めていくイリュリアの攻勢について行けなくなったため、味方に損害が出始める結果となる。それでもエテメンアンキの砲撃カレドヴルフだけは確実に防御しているのは称賛に値する。

そしてイリュリア王都スコドラ・森林地区コースフェルド。天地統治塔エテメンアンキが在るその地に、１人の少女が森を抜けて姿を現した。

金色の髪は後頭部辺りで団子――シニヨンという髪型にされ、双眸は虹彩異色で、片方は紅、片方は翠。聖王家の王女、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトだ。普段は温厚で柔らかな表情を浮かべている彼女だが、今はもう憤怒一色に染まっている。

彼女の頬や髪、騎士甲冑は血に染まっている。もちろんその血は彼

女の物ではない。すべて返り血だ。自爆したキメラ、自爆に巻き込まれて死んだネウストリア騎士、自分を庇って死んだアウストラシア騎士たちの。

「テウタ・・・！」

ギリッと歯噛みをし、目の前にそびえ立つエテメンアンキを睨み付けた。そして「待っていてください」テウタに告げるようにポツリと漏らし、彼女の全身から虹色の魔力が噴き出る。

――精神一到――

魔力を体の1ヵ所に集束させる魔導を発動し、オリヴィエから噴き出す魔力は右拳へと集束していく。その拳はさながら虹色に輝く星。「今すぐそちらへ行きますッ！」エテメンアンキの入り口である両開き扉を殴りつけた。

高さ3m、幅1m、厚さ50cmという鋼鉄の扉が、見た目は非力そうな少女オリヴィエに一発殴られただけでグシャッと潰れ、内部へと吹き飛んで行った。彼女は冷静になるよう努めるために一度深呼吸をし、エテメンアンキの入り口を潜って行った。

Ｍｙｔｈ２８神世は楽園・人世は地獄・その境界にて乙女は踊る～
Ｄｕｅｌｌ　ｄｅｓ　Ｓｃｈｉｃｋｓａｌｓ～

天地統治塔エテメンアンキ。全高２１ｋｍ・直径４ｋｍの円柱形の巨体さを持ち、その偉容をまざまざとベルカに住まう者すべてに見せつけている。エテメンアンキの本領は、その兵器としての火力にある。エテメンアンキの最上部から放射状に広がる８本の全長１ｋｍとある柱の先端に、水晶のような巨大な砲門が在る。
その砲門より放たれる魔力砲――通称カレドヴルフは、その一撃の下に都市の１つを容易く焦土に化す。それはさながら天に座す神が、罪を犯した人間に対して下す神罰の如く。

しかし今、その偉容も無残なものとなっている。圧倒的にして絶対と謳われていたエテメンアンキも、たった１人の人間の手によって砲門３門が潰され、一撃で都市を破壊するカレドヴルフも防御され続けている。天と地を支配するがための兵器エテメンアンキも、かつて世界を席巻した魔術師部隊"アンスール"の１人には快勝する事が出来なかった。

そのエテメンアンキの外部――エテメンアンキを有する国イリュリア各地で行われている幾多の戦闘の最中、ただひとり戦闘に参加せずにいる少女が居た。
オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。今回の戦争に参加している国アウストラシアの王女で、単独戦力では最強クラスの一角を担っている。
そんな彼女は今エテメンアンキの入り口の扉を拳打一発で潰し、内

部へと侵入していた。

「・・・上階へ上がるにはどうすればいいのでしょう・・・？」

ここに辿り着くまでに浴びてそのままだった頬に付着した返り血を籠手の甲で拭いつつ、オリヴィエはぐるりと辺りを見回した。エテメンアンキの構造は、最上階・玉座の間とその一階下の空き階層以外の階層は吹き抜けとなっており、中央に支柱が一基そびえ立っているというものだ。

真っ白な内壁及び支柱の表面には青く光る光線が縦横無尽にビッシリと走っており、幾何学模様を描いていた。オリヴィエはまず支柱へと歩み寄って行く。外壁を一周するより時間の掛からない支柱を選択し、階上に上がるための手段を調べようとして・・・

「昇降機・・・ですよね・・・？」

オリヴィエは早速見つけた。支柱の壁の窪みに昇降機が1台備え付けられているのを。彼女は昇降機の行く先、頭上を見上げてみる。支柱の天辺、空き階層の床板まで直通である事が見て取れる。

「罠の類の心配がありますが、この際は仕方ありません」

昇降機に乗る事の覚悟を決め、オリヴィエは昇降機に乗った。すると何もせずとも昇降機が動きだし、徐々に高度を、そして速度を上げて上昇していく。上昇している最中、オリヴィエは見る。下へ下へと過ぎていく各階層の断面。そのどれもが居住区らしき施設であり、エテメンアンキがただの兵器ではなく一種の街であるという事

が。しかしどの階層も無人。人の気配など一切ない。

「エテメンアンキの内部を護る戦力が無い・・・？」

それどころか、なんの妨害もなく侵入が出来、こうして昇降機に乗って最上階を目指すことが出来る事に訝しむオリヴィエ。思い起こすのは彼女が生まれた場所、聖王のゆりかご内部の防衛戦力の事。名など無く、ただ聖王のゆりかごに侵入してきた者を排除する陸上歩行兵器。騎士団を配置せずともそう言ったモノが在ってもいい。エテメンアンキは重要な施設なはず。

「そのようなモノが必要ないような絡繰りでもあるのでしょうか・・？」

オリヴィエの疑問は尽きないが、昇降機はひたすら上昇を続ける。上昇を続けること約２０分、そろそろ天井が近くなってきた事でオリヴィエは意識を臨戦へと持っていく。そして昇降機は天井を貫く穴を通って階上へと上がり、空き階層で停まった。

オリヴィエが昇降機より降りる。と、昇降機が降下していき、床穴が閉じる。彼女は焦りを見せず、降り立った階層を見回す。直径８００ｍという広範囲の円形空間で、床にも天井にも凹凸らしいモノは何も無い。唯一在るのは、この階層の端っこに設置されている、最上階である玉座の間へと繋がる螺旋階段。

「ようこそいらっしゃいました、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト王女殿下」

「っ・・・！」

高さが１０ｍほどある螺旋階段の半ば、テウタは始めからそこに居たようだ。オリヴィエが気付かなかったのは、テウタが段差に腰掛けていたせいで手摺の壁に隠れて見えなかったからだ。立ち上ったテウタは手摺を飛び越えて音も立てずに床に降り立ち、オリヴィエと相対、２人の視線が衝突する。

「お初にお目にかかります。わたくしは――」

「結構です。貴女の事は嫌と言うほど十分に承知しています。テウタ女王陛下。早速ですが、エテメンアンキ及びイリュリア各戦力の戦闘行動すべての停止をお願いします」

オリヴィエはテウタへ飛び掛からんとするのを理性で抑え込み、テウタの自己紹介を遮って本題を切り出す。テウタは嫌な顔一つせずに「出来ません」即答して返す。空き階層に沈黙が下りる。そしてテウタは告げる。

「もうこの戦は言葉だけでは止まりません。お解かりでしょう？すでにそのような生易しい解決で終わらせるには戦火が拡大しすぎている」

壁面すべてに空間モニターがズラリと展開される。映し出されているのは各戦場。収まるどころか激しくなっていく戦場。次から次へと増援が現れ、互いを討ち、数を減らしてもまだ増える。

「っ！　それはっ、貴女が天地統治塔（このようなモノ）を持ち出して所為で――」

「そうは仰いますが、考えてみてください。このような規模の戦はいつか起こる必然。ベルカ統一を掲げる国は数知れず。遅いか早いかの違いにすぎませんよ」

「・・・それはそうですが・・・」

押し黙ったオリヴィエを見詰めていたテウタが「では始めましょうか」と気楽に言い放ち、女王然としたドレスから騎士甲冑姿へと変身した。動きやすさを追求するためかノースリーブの裾も短い純白の厚手のワンピース。それだけだ。飾り気もなく、籠手や具足、胸腹部を覆う部分甲冑なども無い。

「すごい魔力・・・！」

オリヴィエは息を呑んだ。騎士甲冑を編む魔力の強弱が防御力の大半を担っている。テウタはそれを体現していた。強大な魔力で防御を固める。テウタにとって騎士甲冑は、動きやすさを得るための飾りだ。

「構えてください。臨戦態勢に入っていない方に仕掛けるほど、私は無粋ではありません」

「・・・オリヴィエ・ゼーゲブレヒト――」

「テウタ・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェ

ルト――」

２人は名乗りを上げて、構えを取った。

「「いざッ！！」」

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。
聖王女オリヴィエＶＳ天界王テウタ
。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

――電光石火――

オリヴィエの姿が掻き消える。短距離限定の高速移動の魔導によるものだ。対するテウタは不動。目を閉じ、耳を澄ませ、気配を感じ取り、「っ！」自身の真ん前に出現したオリヴィエの虹色に輝く右拳打を、同じ銀色に輝く右拳打で迎撃した。２人の拳打の衝突点から周囲に広がる衝撃波が、床の表面にヒビを入れた。

「ふ・・・っ！」

「はあああああああッ！」

オリヴィエは短く息を吐き、テウタの拳を鷲掴んで自分の方へ引っ張り込んだ。と同時に左拳打をテウタの顔面へと繰り出す。テウタは雄叫びを上げてオリヴィエの拳打を額で受けた。互いの顔に苦痛

の色が浮かぶ。受けたテウタなら判るが、攻撃した本人であるオリヴィエが痛がるのはおかしな話だ。２人は同時に後退し、仕切り直しを行う。オリヴィエは籠手に包まれた右拳を見、すぐにテウタへと視線をやる。

「並の魔力付加打撃なら完璧に防げるのですが、さすがはオリヴィエ王女殿下。防御を貫いてきましたか」

テウタは赤くなっている額をさすりつつ、全身から銀色の魔力を放出した。そしてコツコツと靴音を鳴らしながらオリヴィエへと歩み寄って行く。オリヴィエもまたゆっくりと歩み寄って行く。

「レーベンヴェルト王家流奥義・夢影・・・！」

テウタよりその言葉が発せられたと同時、テウタの動きに変化が訪れる。オリヴィエは目を見張り、テウタの姿を凝視する。テウタが歩くたび、彼女の姿がブレ始めた。残像か？とオリヴィエは推測するが、それは無いとすぐに判断した。
ブレているテウタの残像らしき体には影が生まれている。実体があり、しかしテウタ本人に重なるように存在しているため、確固とした実体でない。まるでテウタからテウタの半身が生まれ出てきているような状態だ。

「夢影・拾参乃打ち方・舞陣」

「これは・・・！」

ブレて存在していた残像らしきモノがテウタ本体より一斉に散開した。テウタと合わせて１０人となって、一斉にオリヴィエへと襲い掛かった。まず１人目のテウタがオリヴィエの顔面へ向けて拳打を繰り出し、オリヴィエは首を反らして紙一重で回避。そして腕を取ってその１人目を背負い投げし、他のテウタへとぶつけさせて処理。

「数を増やしたところで、連携が無くては恐れるに足りませんッ！」

次々と襲い掛かってくるテウタを殴っては蹴っては投げ飛ばしてと迎撃し続けるオリヴィエ。その最中、オリヴィエはテウタの本体を見逃さないように細心の注意を払う。しかしたとえ本体を迎撃したとしても、全て人体を攻撃したという感触が伝わってくるため、「どれが一体本物なんです・・・！？」オリヴィエでも真偽が判らない。次々と現れるテウタの分身らしき者。オリヴィエは通算４０人目の偽テウタを蹴り飛ばし、

――撼天動地――

魔力を纏わせた拳打で床を打った。オリヴィエを中心として四方八方に走る魔力の奔流。その直後に奔流は上方へと向かって勢いよく噴き上がり、残りのテウタをすべて呑み込んだ。テウタの分身が奔流に呑み込まれると同時に瓦解。オリヴィエは虹色の閃光の中で本物のテウタを捜し出そうと気配を探り、

（見つけました！）

噴き上がる魔力の中を器用に走って、ダメージを受けないようにし

ながら接近して来ていた彼女を見つけ出した。テウタも自分が見つかった事が判ったようだが、それでもなおオリヴィエへの接近を中断せずに向かって来る。

「破ッ！」

――驚浪雷奔――

そんなテウタに向かってオリヴィエは拳を勢いよく突き出し、人間大の魔力衝撃波を放った。テウタはそれを避けようとはせず、両腕を交差するように掲げて顔を護って、そのまま・・・直撃した。テウタの防御力からして驚浪雷奔では決定打にはならないと踏んでいたオリヴィエは、追撃のための魔導を用意していた。しかし衝撃波の直撃によってテウタが弾け飛んだ。この瞬間、オリヴィエは自身の気配感知が、分身によって騙された事を理解。

――夢影・壱乃打ち方・乱拳――

背後からの気配と魔力を感じ、オリヴィエは今出せうる限りの速度で振り返る。と同時に、聖王家の遺伝子レベルに備え付けられた防衛能力・聖王の鎧が発動する。直後、テウタへ振り向いたオリヴィエの腹部に目掛けて打ち出されたのは一発の拳打。聖王の鎧に、ズドンッ！という轟音と共に拳打が打ち込まれた。しかしただの拳打ではなかった。

先の分身と同じ。拳だけの分身による連続拳打だ。テウタ本体の拳より、分身の拳のみが砲弾のように打ち込まれる。打ち込まれた一撃目が消えると同時に二撃目が打ち込まれて消え、三撃目と繋がる。

オリヴィエは聖王の鎧の効果によって、それらの直撃を免れる事が・・・・出来なかった。

「ぁがっ・・・・!?」

聖王の鎧は絶対の防衛機能と謳われている。なのに、「がはっ・・（貫かれた!?）」オリヴィエの腹部に直撃したのは八撃目、テウタ本体の拳打だ。オリヴィエは聖王の鎧に頼る事なく身構えていたにも拘らず、その一発で大きく殴り飛ばされ床を幾度かバウンド、宙で態勢を整えて着地。

バッと顔を上げ、テウタを見据えようとしたがそこに彼女は居らず、オリヴィエは直感のままに前方へと跳んだ。その直後、オリヴィエが先程まで居た場所にテウタが勢いよく落ちてきた。着地の際に床にヒビが入る。直撃を受けていれば頭蓋くらいは容易く粉砕されそうだ。

「聖王の鎧は、もう私の前――天神の剣の前では無意味な能力です」

「はぁはぁはぁ・・・天神の剣・・・・!?」

テウタの四肢には、銀色の魔力で構築された籠手と具足が存在していた。指の先から指の甲・手の甲・上腕へと5枚の刃が伸びていた。籠手の表面に刃だけを装着させたようなものだ。

具足もまた同じ。足の甲・脛・脹脛の3ヵ所に5枚の刃。蹴りを受ければ打撃だけでなく斬撃も追加される。オリヴィエは久しく受けた事がなかった全力の拳打を食らい、思いのほかダメージを受けてしまった。

「その蒼い魔力光・・・！」

「オーディン先生・・・」

そんな時、オリヴィエの全身を覆うように生まれ出る蒼の燐光。オーディンの魔道・治癒術式ラファエルが発動し、オリヴィエを治療していた。オーディンはリサに"断刀キルシュブリューテ"・レプリカを渡した後、オリヴィエ達と別れる直前に彼女の両腕の治療のために渡していた腕輪型神器・ファルマコ・ネライダ――意を妖精の薬――を強化していた。

自律行動に問題が発生するような大ダメージを受けるたびに発動し、常に万全の状態に回復させる。そして今それが発動したという事は、オリヴィエが受けたテウタの拳打は、オリヴィエの行動に問題が発生するほどのダメージだったという事になる。

「回復すると言うのであれば、回復が間に合わないほどに――」

テウタが真っ向から突撃を仕掛ける。ラファエルの治癒を終えたオリヴィエもまた突撃を敢行。ほぼ一瞬で距離を詰めた2人。テウタは上段蹴りを繰り出しつつ「潰すまでッ！」オリヴィエの殺害を宣言。オリヴィエはキッと表情を硬くし、テウタの蹴打をしゃがみ込んで避けて、立ち上がりと同時に拳打を繰り出す。それを防御するのはテウタの具足。銀の刃とオリヴィエの拳打が衝突し、虹色の魔力と銀色の魔力が火花のように激しく散る。

（埒がありませんか。それどころか私の魔力が削られていく・・・！）

オリヴィエが後退を決断した瞬間、テウタが脚を外側へ逸らしてオリヴィエの拳打を大きく捌く。それでもオリヴィエに隙は生まれず、外側へ流された拳打の速度を利用して半回転、上段回し蹴りを繰り出す。テウタはしゃがむ事でギリギリ回避。

――夢影・拾弐乃打ち方・迅壊――

間髪入れずに跳び膝蹴りを繰り出す。オリヴィエは後退して避ける事が出来た。しかしテウタの前面より分身体が出現。後退し終えた直後のオリヴィエへと向けて分身テウタが降下しつつの膝蹴り。具足の脛に在る刃5枚――天神の剣に触れないようにオリヴィエは注意して跳び回し蹴りを繰り出し、分身テウタを遠くに蹴り飛ばす。しかし本体のテウタによる踵落としが宙に居るオリヴィエを急襲。避けきる事が出来ずにいたオリヴィエの右肩にテウタの一撃が打ち下ろされた。聖王の鎧は砕かれる事はなかったがその威力は絶大で、オリヴィエが床へと叩き付けられる――その瞬間、待ち構えていてたもう1人の分身テウタが、オリヴィエの腹部へ向けて蹴り上げ。

「これで終わりです・・・！」

本体のテウタが勝利宣言と共にオリヴィエの背部に打ち下ろし蹴りを繰り出す。腹部と背部からの蹴打の挟撃が、宙に居たオリヴィエを容赦なく襲った。が、本体と分身のテウタの挟撃が聖王の鎧に防がれる。

（このままでは砕かれてしまいますね・・・ならば！）

聖王の鎧が軋みを上げ、ついに砕かれるという直前、オリヴィエは自身の魔力制限を解き放つ魔導・意気軒昂を発動。一気に解放された魔力が分身テウタを消し飛ばし、本体のテウタを「きゃぁぁぁあああああッ」吹き飛ばした。

「はぁはぁはぁはぁはぁ・・・！」

大きく肩で息をするオリヴィエ。そんな彼女の後方から迫るのは、テウタの魔導武技・迅壊のトドメを担当するはずだった最後の分身テウタ。オリヴィエは振り向く事はせず、迫って来ていた分身テウタが繰り出した拳打を半身ズラすだけで避け、通り過ぎようとしていた分身テウタの顔面に「砕ッ！」裏拳の一撃与え、頭部を打ち砕いた。

「まあ酷い。分身とは言え、私の頭が無くなりました」

「・・・ええ、本物でなくて良かったです」

ヨロヨロ歩いていた首なしの分身テウタがようやく消滅した。テウタがチラリと壁の方へと目をやる。オリヴィエはテウタより視線を外す事を躊躇ったが、テウタが浮かべた微笑が気になり、オリヴィエもまたそちらへ目をやる。モニターに映っていたのは、オリヴィエを先に行かせるために敵陣の真っただ中に残ったズィルバーン・ローゼとアウストラシア騎士団の面々が、イリュリア高位騎士団と戦闘している光景だ。

「キメラ達の自爆による損害は大きく、まともに戦える者など少ないあの状況で、高位騎士団との戦闘・・・さぞ大変でしょうね」

「っ・・・・・・・テウタぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ！！」

――天衣無縫――

オリヴィエがグッと腰を下ろし利き足に力を込めた瞬間、彼女の足元の床が僅かに波打つ。そして虹色の魔力を全身に纏ったオリヴィエは、ただ愚直にテウタへと向かって突進した。突進開始直後、彼女の居た地点が大きく破損。利き足が床を蹴った瞬間、オリヴィエの足裏から発生したロケットブースターのような魔力噴射の影響だ。虹色の魔力砲弾と化したオリヴィエの突進技・天衣無縫。魔力と衝撃波を周囲に撒き散らして床を大きく抉りながらテウタへと向かう。テウタは真っ先に回避を選択。防御に回って耐えられるほど生易しい攻撃でないと恐れたからだ。

「ぐぅぅ・・・がぁぁあああはッ！」

突進の速度より速く動けなかったテウタ。直撃だけは免れたが、それでも軌道の周囲に撒き散らされる魔力と衝撃波だけはまともに受けてしまった。四肢に構築していた天神の剣がすべて粉砕され、彼女自身も大きく吹き飛ばされたが無難に着地した。ドゴォンッ！という轟音と共にこの階層を襲う振動。オリヴィエが壁面に突っ込み、大きく抉った事によって起きたものだ。

「表面だけを砕くならまだしも、そこまで大きく破壊するなんて・・・！」

濛々と立ち上る粉塵から除く大穴を見たテウタは愕然となる。エテメンアンキを構成する内壁は、内部でどれだけ激しい戦闘が起こっても問題ないように設計された対魔力・対物仕様の特別製だ。それが破壊された。オリヴィエの突進――天衣無縫の威力がどれだけ強大なのか、それだけで解るというものだ。

――砲煙弾雨――

粉塵を突き破って放たれて来るのは、光の尾を引く虹色の魔力弾。連続かつ高速で放たれて来る魔力弾をステップで回避していくテウタ。オリヴィエの放ってくる魔力弾・砲煙弾雨は着弾すると、魔力衝撃波を発生させる。

そのためテウタは紙一重の回避をせず、着弾点より大きく距離をとる事を念頭に置いて回避し続ける。９発目の魔力弾を回避した直後、直径１ｍほどの魔力弾が高速で飛来してきた。テウタはそれがトドメの１発だと判断。同時に前方に倒れ込むかのような低姿勢で突進する。

頭上を通り過ぎる特大魔力弾をやり過ごし、そして天神の剣を発動。続けて夢影という実体を持った分身体を創り出す魔導を発動、天神の剣を有した分身体が４体と出現。向かうのは大穴より出で、テウタへと歩を進め始めているオリヴィエ。

「今すぐ各地のイリュリア戦力の戦闘を停止してください。でなければ、私はあなたを殺す事になるかもしれません」

「始めから私を殺害するために来たのでしょうっ？」

――夢影・拾の打ち方・斬宴――

オリヴィエを包囲する分身体が一斉に跳び回し蹴りを繰り出した。走る具足の刃。オリヴィエの顔、首、胸、腹の４ヵ所を狙っての包囲攻撃だったが、オリヴィエに到達する前、彼女は虹色の魔力を纏わせた両腕を大きく左右に広げて踊るようにくるりと回った。

――光芒一閃――

五指の先端より発生していた魔力刃が閃いたと思えば、分身体すべてがバラバラに斬り刻まれた。テウタはもう分身体による包囲攻撃系・捌式から拾伍式までは通用しないと判断。オリヴィエは動きを止めたテウタに向かってもう一度「降伏してください」と告げた。しかしテウタは「何故勝てる戦に降伏しなければならないのですか？」と微笑んだ。オリヴィエは眉を寄せる。そして小さく「仕方ありませんね」と諦観めいた溜息を吐き、

――電光石火――

高速移動の魔導によってテウタへと最接近。その速さにテウタは一瞬オリヴィエの姿を見失ってしまった。それが最大の隙となり、オリヴィエはテウタが反応しきる前に彼女の胸倉を引っ掴み、

――鬼哭啾啾（きこくしゅうしゅう）――

頭突きを食らわし、続けて腹と胸に1発ずつ拳打を打ち込んだ後に跳んで宙で前転、テウタの顔や胸を数度踏みつけ、彼女の背後に着地。背中から倒れそうになるテウタの背部をサマーソルトキックで蹴り上げ、1回転して逆立ち状態になった彼女の腹に、魔力付加された両の掌底を打ち込む。
テウタは激しく吐血しながら後方へと吹っ飛ばされ、床を何度もバウンドしながら転がって滑り・・・ようやく止まった。

「がふっ、がはっ、げぼっ、ごほごほっ、ふぐ、ぅごほ・・・！」

吐血、咳込みながらもテウタは立ち上ろうと両手を床につき、上半身を起こした。しかしダメージが大きすぎるようで、力が入らないのか腕は震え、すぐにまたドサッと床に倒れ伏した。オリヴィエはそんな無様を晒すテウタを辛そうに見、もう一度「降伏してください」と告げる。

「先ほどは言いそびれましたが、私は、私たち同盟はあなたを殺すつもりなど最初からありません。イリュリア戦争終結後、イリュリアの領土分配などの話し合いにも就いてもらわないといけないので。オーディン先生にも、あなたを生け捕ってほしいとお願いされていますし。あなたを生かす理由はこちらの一方的な目的となってしまいますが、それでもこの場で死ぬよりかはいいでしょう？」

「ぅぐ・・・悪魔、です・・ね、貴女・・も・・・魔神と、同じ・・・」

「自国を、ベルカを護るためです」

「ふ、ふふ、ははは・・・護る？・・・げほっ、何を愚かな・・・。戦を、いたずらに・・長引か・・せるだけ、ごほっごほっ、ではないです、か・・」

「・・・・」

オリヴィエとてそれは百も承知だった。イリュリアが落ちた後も戦争は続く。ベルカを統一しようと考えている国々は多い。世界を統一できるのは一国のみ。その一国が決まるまで戦争は終わらない。しかし「それでもイリュリアには、統一させません」オリヴィエは言う。

一般市民が住まう都市を消し飛ばすという暴挙に出たイリュリアがベルカに強いるのは、暴力を翳した恐怖支配。それでは平和にはならない。だからこそイリュリアを討とうとする国は現れ、今こうして戦争を仕掛けている。

「・・・統一も、支配も、管理も、どれも・・・同じですよ・・・！」

「っ！」

テウタはよろけながらも立ち上った。オリヴィエは驚愕に目を見開く。明らかに先程までのテウタは重体。だが今の彼女は、戦闘開始前と同じとはいかずともそれに近い状態にまで回復していた。

「不思議そうなお顔ですね。ではこちらの映像をご覧ください。こ

こに、答えがあります」

テウタの右隣に現れたモニターには、雷帝ダールグリュンと騎士総長グレゴールの決闘が映し出されていた。攻め続ける事でグレゴールの体を損壊させていくダールグリュンが優位に立っているように見えるが、実際にはグレゴールの方が優位に立っている。オリヴィエはまた驚愕する。斬り飛ばされたグレゴールの片腕が再生していくのを見たためだ。

「キメラやグレゴールに施された生体兵器化。それは私にも施されているのですよ。グレゴールほどの不死性は得られませんでしたが、異常自己治癒力だけは得られました。回復まで時間は掛かりますが、それでもなかなか死ねない体です」

――天神の剣――

テウタはそう言って、四肢に刃付きの籠手と具足――天神の剣を魔力で構築した。

「でしたら意識を刈り取った後、捕縛するだけです」

オリヴィエはそう言い放ち、身構えた。そして飛行するかのように床と水平に一足飛びしてテウタへと突っ込む。そんな彼女の両拳には虹色の魔力が付加されている。対するテウタは「やってみてください」と挑発めいた事を言い、

――銀月――

一瞬で人間大の魔力を集束して生み出した銀の魔力球を、オリヴィエへと放り投げた。それはさながら銀色の月。真っ向から突き進むは虹色の双子星――オリヴィエの両拳。互いがあと僅かで衝突するというところで、オリヴィエは床に足をつけて大きく跳躍、巨大魔力弾――銀月をやり過ごした。回避しきった、そう思えたのは一瞬。銀月には細い尾があった。その尾――魔力で出来た鎖の先にはテウタの左手・・・を中継して、また先に放たれた銀月と同じ大きさの魔力球が在った。銀月の本質は射撃型の魔導ではなく、「鎖分銅！！」オリヴィエの言うとおり2つの魔力球を魔力鎖で繋いだ打撃武器・鎖分銅だった。

「参りますよッ！」

テウタが魔力鎖を手に舞を踊るようにクルクル回る事で、鎖の両端に在る2つの魔力球も釣られて回転する。中空に居た事でオリヴィエは回避する事が出来ず「ぅぐ・・・！？」片方の銀月をまともに受け・・・その直後、もう片方の銀月が挟撃してきた。テウタが鎖の中心となる個所を強く引っ張った事で、鎖はVの字となる。当然両端の銀月の軌道は鎖の動きに引っ張られ、テウタの反対側――オリヴィエの居る場所で衝突する事になる。オリヴィエを左右から挟み込んで押し潰した2つの銀月が大爆発を起こす。

「（まさかこの程度で死ぬなど、ありませんよね・・・？）・・・・オリヴィエ王女殿下ッ！」

「砲煙弾雨！」

爆煙より飛び出してきたオリヴィエを見、テウタは狂ったかのような満面の笑みを見せた。床へと落下しているオリヴィエは、両手に魔力弾を創り出しては投げ続ける。先ほどにも使用した、魔力弾の連射だ。しかも威力は格段に上がって、数も増えている。
着地した後もオリヴィエは魔力弾を投げ続け、テウタは回避や天神の剣で殴っては蹴って、軌道を後方へと逸らしていく。その最中にもオリヴィエはテウタへと駆け寄って行く。

「弾幕で私の動きを制限するつもりでしょうが、所詮は無駄なこ――」

テウタの意識はすべて接近してくるオリヴィエに向けられた。だからか彼女は気づいていなかった。彼女が自身の背後へと軌道修正した魔力弾のその後を。床に着弾した魔力弾以外はテウタの背後で停止し、宙に待機浮遊していた。砲煙弾雨の魔力弾は誘導操作が出来る。オリヴィエは生き残った魔力弾を操作し、待機させていた全弾を一斉反転。

「――きゃぁあああッ！？」

先ほどのテウタと同じ手段を使った。挟撃という攻撃法を。オリヴィエが投げる魔力弾と反転して来た弾幕が、テウタを前後から襲った。テウタの体だけでなく床にも着弾して炸裂する魔力弾雨の中を突っ切るオリヴィエは「今度こそ・・・！」と、頭を振って意識を繋ぎ止めようとしているテウタの腹部へと、

「破邪――」

捻じ込むようにフックを一撃打ち込んだ。その威力が凄まじ過ぎたのかテウタの騎士甲冑の腹部と背部が衝撃で弾け飛んだ。テウタは「おごぉ・・っ！？」口から涎や血を吐いた。初撃で体をくの字に折って宙に浮いた彼女の片頬に、

「顕正ッッ！！」

オリヴィエは一切の手加減なしで右正拳突き（ストレート）を打ち込んだ。破邪顕正。打撃力強化・付与効果破壊の魔力が付加された打撃による必倒の魔導。"夜天の書"の管制プログラム・シュリエルリートのシュヴァルツェ・ヴィルクングと同じ効果を持つ魔導だが、その威力には圧倒的な差がある。

初撃でテウタの防御――騎士甲冑や不可視の魔力障壁を粉砕し、さらに体内の筋肉や臓器を打撃の衝撃で壊す。トドメの２撃目で確実に意識を刈り取る。オリヴィエのその攻撃によってテウタは派手に錐もみしながら宙を滑空、１００ｍと言う距離を飛んだあと床に落下、何度もバウンドしながら最後には壁に突っ込んだ。

「どうですか？　これでもまだ立つというのであれば、さらに強力な一撃を加えます」

テウタの激突によって崩れた壁の一部が巻き起こした粉塵を見詰めつつ、オリヴィエは告げた。返事どころか動きすらない。オリヴィエは警戒しながら徐々に晴れていく粉塵へと歩み寄って行く。そして粉塵が晴れ、オリヴィエは・・・・しっかりと現状を確認してか

らキッパリと告げる。

「私の勝ちです、テウタ陛下」

瓦礫に埋もれるように倒れ伏しているテウタ。完全に意識が無い事が、白目を剥いている事から判る。オリヴィエは虹色の魔力で構成された捕獲縄でテウタを雁字搦めに捕縛した後、

「早くテウタを確保した事を皆に教えなければ・・・！」

彼女を肩に担いで、最上階たる玉座の間へ続く螺旋階段を上り始めた。

Ｍｙｔｈ２９偽神と共に夢想は墜ち、彼と彼女の別離が始まった～
ＦｉｎａｌＥ～

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

「これが・・・聖王女オリヴィエの・・・力・・・！」

サーチャーカメラとしての魔道・発見（コード）せよ、汝の聖眼（イシュリエル）を通して私はオリヴィエ王女殿下とテウタの決闘を見ていた。エテメンアンキの内部の状況を確実に知るため、そして最強と謳われていたオリヴィエの"異界英雄エインヘリヤル"と武技・魔導を手に入れるために。この事についてはオリヴィエに断わりを入れていない。私個人の一方的な目的の為だからだ。盗み見をし、あまつさえオリヴィエの能力をすべて盗み取ろうというのだ。言えるわけがない。

「どうかお許しを。少しでも思い出が――複製の数を増やしておきたいのです」

言い訳じみた独り言を漏らす。しかしそれにしても「はは・・はは、すごい・・・！」体が震える。ベルカ人は魔力に恵まれていない種だと言う。だからこそカートリッジシステムなるモノが生まれたんだ。しかし中にはとんでもない魔力を有している者も居た。オリヴィエやテウタがその筆頭だ。

私は運が良い。伝説の聖王女の戦いを観れ、彼女の"力"を手に入れる事が出来た。直に"堕天使エグリゴリ"を全機救って消える事になるだろう私だが、少しの間でも有する事が出来るのは光栄だ。

「テウタが負けた。オリヴィエ王女殿下はエテメンアンキの放送を使って、戦争終結を伝えるだろう。そうすれば・・・・」

七美徳の天使アンゲルスとアースガルド艦隊の召喚を解き、イリュリア王都へ攻め込む。"エグリゴリ"を捜し出すため、ミュールやゼフォンを製造した施設を破壊するために。あと関係者に"エグリゴリ"との接点すべてを吐かせるために。どうやって知り合ったか、何故招き入れたか。

「とりあえず今は、各地の戦闘を中断させるか」

アースガルド艦隊に指示を出す。艦砲射撃を戦場に撃ち込み、戦闘を強制中断させる。イリュリア側と同盟側に分かれたところで、勢力間に砲撃を撃ち続ける。砲撃が治まるまでは誰も戦闘を続けられない。続けるには砲火の真っただ中を突っ走らなければならない。そこまでして戦おうとは思わないだろう。さぁオリヴィエ、終戦の放送を・・・

「なに・・っ!?」

イシュリエルを通して私は見た。エテメンアンキの最上階らしい階層に上ったオリヴィエと、彼女が担ぐテウタ。最上階に在ったのは背もたれの高い肘掛椅子。おそらく玉座。その玉座に腰掛けていたのは、「テウタ・・だと!?」オリヴィエが担いでいるテウタと瓜二つの少女だった。

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒オリヴィエ†††

「え・・・？」

女王たるテウタを打ち倒し、私たちの勝利をイリュリア全土で尚も戦闘を繰り広げている仲間たちに伝えるために最上階へ上がってきた。ですが私の目の前に「何故・・テウタが・・・！？」私が担いでいるテウタと同じ姿をした女性が居ました。すぐに実体を持つ分身体（確か夢影と言う・・・）を思い出し、魔力弾を1基創り出して投げ放つ。

――パンツァーシルト――

魔力弾がそのテウタの分身体に着弾する直前、銀色に光り輝くベルカ魔法陣の障壁が張られ防がれた。テウタと同じ魔力光ですね。ただ分身体と言うには表情が柔らかなもので・・・。

「ようこそ、旧世界ベルカが終わり、新世界レーベンヴェルトの始まりの起点である我が城へ」

玉座より立ち上ったそのテウタが、私が担いでいたテウタへと視線を送ってきました。私も横目で見、「・・・変身の魔導でしたか」担いでいたテウタの姿は変わって――正確には元に戻っていました。真紅の長髪、男装、テウタとは似ても似つかない女性。私はその女性をそっと床に横たえさせます。

「改めまして自己紹介を。私はテウタ・フリーディッヒローゼンバ

ッハ・フォン・レーベンヴェルト。貴女が倒したその娘の名はマラーク。私の融合騎で、フォルエンドゥングタイプと呼ばれるものです。貴女の戦闘能力を測るために、他者の人格と戦闘能力を複製する変身の能力を以って私に変身させて迎え撃たせましたが、結果は散々でしたね」

「・・・・また闘いますか？　言葉で止まらないと言うのであれば、力づくで止めます」

コロコロ笑うテウタに、私は敵意を剥き出して告げる。彼女は「まぁ怖い♪」と怯えたような演技を見せますが、やはり笑みを崩そうともしない。それがさらに私の神経を逆撫でしてくる。こちらは真剣なのに、彼女は遊んでいるかのよう。

「オリヴィエ王女殿下。マラークの話した事は全て私の言葉なんです。今回のこの戦が始まらずとも、いつかはこれと同じような規模の戦が起こる。それは必然。なら、この戦をベルカで起こる最後の戦にしませんか？　ベルカは責任を持って私が統治しましょう」

「残念ですが承知できません。最後の戦というのには惹かれますが、イリュリアの支配だけは看過できません」

「・・・ふん、愚かな。黙ってレーベンヴェルトの再誕を祝せばいいものを」

テウタの様子が激変。敵意はもちろん殺気が凄まじいです。彼女は私の傍で横たわっている女性マラークに目をやり、「起きなさい」

そう一言。すると「再起動します」マラークが機械的に言い、私が負わせた損害を無かったかのようにスッと立ち上りました。

「当初の計画通り、イリュリアに攻め入った貴女方には全員死んでもらいます。さすれば彼の神器王にも敗北の苦汁を飲ませる事が出来ましょう」

「神器王・・・？　それは一体――っ！」

テウタとマラークが手を繋いだかと思えば、マラークの体がテウタの体に溶け込むかのように消えました。融合したのでしょう。テウタの灰色の髪が桃色と変わり、翠色の瞳は濃い緑色へと変化。衣服はドレスから「オーディン先生と同じ・・・！」色は黒ではなく白ですが、デザインが全く同じの長衣へ。背部からは、美しい羽が２０枚と放射状に生み出され、テウタを床より少しばかり浮かせていました。

「エテメンアンキ。自立モードに移行」

テウタがそう告げると『了解』どこからともなく聞こえてくる返答。そしてまた放たれる砲撃カレドヴルフ。オーディン先生を信じ、私はひたすらにテウタを見据える。

「聖王家の王女オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。この戦の果てに再誕する新世界の神として、まずは貴女から罰してあげましょう！」

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。―。
其は新世界を呼び起こす創世神テウタ
。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

――神の覇道――

「はあああああッ！」

「っ！？」

超高速の突進。横っ飛びしてほぼ紙一重での回避。すぐさま転身。通り過ぎて行ったテウタへ向き直る。彼女は羽を翻しながら転身し、再度突進して来ました。高く跳躍してやり過ごしたのですが、いつの間にか宙には私の身長と同じくらいの火炎弾が１０基と待機していた。

「さぁ行きますよぉッ」

――神の火弾――

全周囲に待機していた火炎弾が断続的に放たれて来ますが、四肢に魔力を纏わせて１発残らず拳打と蹴打で迎撃する。その間にテウタは銀色の魔力剣を携えて、床に降り立ったばかりの私へと突進して来ました。

「ふ・・・っ！」

――神の光剣――

薙ぎ払われる魔力剣を後転跳びで避け、着地したと同時に突進、テウタの顔面に拳打を一発打ち込む。彼女は「ぅぐ」と苦悶の声を漏らしました。打撃力強化しただけの拳打でも十分に通用するのですね。ですが、「休んでいる暇はありませんよぉ？　何故なら――」彼女が殴られた個所を手でなぞると、一瞬で腫れが消えてしまいました。

「すぐに再生しますからねぇッ！」

――神の雷嵐――

足元に銀の魔法陣が展開された事で、私は考える間もなくその場より離脱。直後に放電する竜巻が発生。こちらにまで伸びてくる雷撃をかわし、

「破ッ！」

――驚浪雷奔――

魔力衝撃波を放つ。彼女はくるくると踊るように回りながら射線上より離れ回避。再び魔力剣を携えた彼女は私に接近しながら、何を思ったのか魔力剣の長さでは届かない距離だと言うのに、「えいっ！」と振るってきました。

私の前方、２ｍ先の空を切り、でも何も起きない。ただの空振り？

かと思えば、振り戻された魔力剣が私を攻撃範囲に捉えるほど伸びていました。大きくしゃがみ込んで避け、

――電光石火――

短距離限定ですが高速移動が出来る魔導・電光石火でテウタの右隣へ移動。したと同時に、「せいっ！」跳び回し蹴りを繰り出す。蹴打は魔力剣で受け止められましたが、そのまま魔力剣の腹を蹴り上げて彼女の腕を大きく上に逸らさせる。私はすぐに両足を床に付けてしゃがみ込み、脚に力を集束させる。右手の平に魔力球1基を生み出し、

「砕ッ！」

――旭日昇天――

飛び上がると同時にテウタの腹部へ魔力球ごと掌底を打ち込む。魔力球は彼女の腹部へ着弾すると同時に炸裂。体表面に損害を与え、体内に損害を侵透させる追加の掌底。よほどの防御力が無ければ必倒です。

「がふっ・・・ふふ、まだまだ足りませんよぉッ！」

――神の威光――

テウタの全身より発せられる衝撃波に「っ・・づ・・！」大きく弾き飛ばされ、

――神の火柱――

着地した途端に足元より火柱が噴き上がる。咄嗟に後退する事で掠める程度で済んだのですが、後退した先も火柱が噴き上がり、横っ飛びで避けた後のその地点でも火柱が噴き上がり、また足元より火柱が噴き上がろうとしていたので前方へ跳び、

「少しばかり本気を出しましょう。さぁ受けてみてください！！」

――神の閃光――

回避する事で精いっぱいだったので気付かなかった。テウタの真正面へと誘われていた事に。私に向け差し向けられた彼女の人差し指が煌めいたかと思った瞬間、視界が銀に染まり、全身を貫く激痛と衝撃に、

「うぁぁあああぁぁぁあぁあああああああッ！」

生まれてからこれまでに上げたことのない悲鳴を上げてしまいました。吹き飛ばされる感覚を得、そして何かにぶつかった衝撃が私を襲い、「ぁが・・・ぅぐ、げほっげほっ・・！」激しく咽てしまう。

「ふふふ、ははは、ははは、ははははは、はははははははははッ！」

視界が明滅する中で聞こえてくるのはテウタの狂ったかのような笑

い声。自分が倒れ伏しているという事が判ってすぐに両手をつき、上半身を起こす。頭を振り、視界が正常に戻りつつある合間にも立ち上り、

「貴女は運が良い！　この私が新世界レーベンヴェルトの神になる前、人間としての最期の戦闘の相手をしているのですからッ！」

――神の火弾――

「っく・・・！」

高速で断続的に放たれて来る火炎弾を床を転がる事で回避。連続で床に着弾していく数発の火炎弾が起こす爆炎と爆風により、思ったよりテウタより距離を取ることが出来た。オーディン先生から頂いた腕輪の効果である治癒の魔導が働き、負っていた損害が回復されていく。蒼という見た目は冷たい色なのですが、包まれるとそれはとても優しく温かなもので。このままずっと抱かれていたい気持ちになってしまいますが、残念ながら今は決闘の最中。

「今度はこちらが打って出る番です！」

転がる最中に片手を床について跳ね起き、

「破ッ！　せいッ！」

――驚浪雷奔――

連続で突き出した両拳から魔力衝撃波を打ち放つ。テウタは高速で横移動する事でどちらも避けますが、彼女の回避中に私は電光石火を用いて最接近。

――光芒一閃――

「斬ッ！」

右の五指の先端より発生する魔力の刃で彼女の右側の羽数枚を寸断、間髪入れずに後ろ回し蹴りを彼女の顔面に打ち込む。「ふぐ・・・っ」鼻を押さえて後退する彼女に追撃をしようとした時、僅かながらもエテメンアンキが揺れたのが感じ取れた。

『報告。本塔へと接近しつつある戦船7隻による艦砲攻撃を受けました。防御障壁システムに損害なし。カレドヴルフによる迎撃を行います・・・・』

「戦船？　どこの国のモノです？　せっかく燃えていたのに水を差すなんて。オリヴィエ王女殿下、しばしお待ちを。私たちの決闘を邪魔した者どもを滅して――」

「やめなさいッ！」

止めに入ろうとするもすでに手遅れで、カレドヴルフは無情にも放たれました。モニターという外の景色を映し出すモノに映し出されたのは、すでに夜となった暗い空、そしてこちらへ向かって飛行を続けながら艦砲攻撃を続ける戦船艦隊。

その形状からして、私は少しばかり混乱してしまう。どうして「ネウストリア所属の戦船が・・！？」と。５本のカレドヴルフは夜空を裂いて一直線に７隻の戦船へ向かって行き、そして「オーディン先生！」の御力――姿は見えませんが、アンゲルスという名の使い魔によって防がれました。

「ネウストリアを庇ったのですか？　あくまでイリュリアだけに刃向うと言うのですね。仕方ありません。エテメンアンキ。神器王ともどもネウストリア艦隊は放っておきなさい。どうせ魔力攻撃ではこのエテメンアンキの障壁を突破する事など叶わないのですから」

テウタは怒りと呆れを含んだ声色でそう言い捨てました。それに神器王とはオーディン先生の事だったのですね。意味のほどは理解しかねますが、おそらくベルカに訪れる前の二つ名なのでしょう。オーディン先生が追い求める"エグリゴリ"から聴いたのかもしれませんね。魔神という忌み名より神器王という方が良い響きで、個人的に好きです。

「いつでも仕掛ける事が可能でありながら、本当にお待ちいただけるとは・・・」

「本心を言えば殴り飛ばそうかと思いましたが、私の矜持と誇りで抑えつけました」

「そうですか。・・・では、再開と参りましょうか」

「そうですね・・・！」

――神の吹雪――

――電光石火――

テウタの前面に展開されたベルカ魔法陣より放射された吹雪を、電光石火で回り込むように回避して彼女へ接近。ネウストリアの戦船艦隊の艦砲によって微弱ながらも揺れるエテメンアンキの玉座の間にて、私とテウタの決闘は続きます。

彼女の魔導を避けては攻撃を打ち込み、避けられては追い縋って打ち込み、避けられずに防御してはまた攻撃を。それひたすらに繰り返し、そして・・・・今までになかった振動が私を、いえエテメンアンキを襲いました。

「一体何が・・・！？」「これは何事ですか！？」

あまりに強い揺れに戦闘を中断せざるを得なくなり、お互いに距離を取る。テウタの怒声の返答として、エテメンアンキは耳を疑うような事を告げた。

『ネウストリア艦隊による間隙無き艦砲攻撃による障壁弱体化、その隙を突いての本塔への艦隊による特攻。防御障壁システム損害率９１％。本塔損害率８％。艦隊が衝突した高度２２ｋｍ――第１８０階層にて火災が発生。消火作業を開始』

ネウストリア艦隊による特攻で、エテメンアンキが損壊したというものでした。テウタの表情が怒り一色へと変わっていき、「裏切っ

たのね・・・！」新たに展開したモニターに映る高度２２ｋｍ地点のエテメンアンキの外壁を確認。７隻の戦船すべてが外壁に突き刺さっており、そこより激しく火炎と黒煙を上げています。

「ネウストリアぁぁぁぁッ！　一体何をしているぅぅッ！　敵はイリュリアではないでしょうがぁぁぁッ！」

怒り狂うテウタへ「・・・当然ではないですか」と言うと、彼女は「何ですって」とギロリと睨み付けてきた。ええ、ネウストリアがイリュリアを裏切るのは当然の事です。何故なら、

「憶えていないのですか？」

――電光石火――

彼女の背後へと移動。

「最初に裏切ったのはあなたの方ではないですか・・ッ！」

――紫電一閃――

上段蹴りと上段回し蹴りをテウタの頭部両側面に一撃ずつ入れ、続けて後頭部、右脇、左脇、背中に一撃ずつ蹴打を、トドメに雷撃に変換した魔力を付加した踵落としを頭へと打ち下ろす。

「ぅぐ・・っは・・・！？」

後頭部から床に打ち付けられ、さらに打撃と雷撃による損害。紫電一閃は本来、対象の前面から打ち込む技。両脇は同じですが、顔面と鳩尾に入れるのが本来の型です。ですが威力からして前面からであろうと背面からであろうと大して変わりません。

「アウストラシア騎士団共々ネウストリア騎士団をキメラの自爆で壊滅させた。これを裏切りと言わず何と言いますか？」

床に倒れたままの彼女へ言い放つ。少し沈黙が続いた後、

『警告！　警告！　警告！　ノイヴェート丘陵より強大な魔力が接近！　防御不可！　防御不可！　防御不可！　塔内に居る者は耐衝撃姿勢を取ってください！』

淡々としていた声ではなく切羽詰まった声でのエテメンアンキからの報告。ノイヴェート丘陵。オーディン先生の居る地域。モニターに映し出されている光景は、ネウストリア艦隊の突き刺さる場所へと一直線に飛来する蒼の閃光。

――真技・神断福音（グロリアス・エヴァンジェル）――

それがエテメンアンキに着弾した瞬間、今までにない大きな振動がエテメンアンキを襲いました。その揺れに立っていられず転びながらも私は見た。そのたった一撃で、艦隊もろともその階層を根こそぎ消し飛ばした、その信じられない光景を。

「ちょっ、あの、待ってください、これは・・・！」

1つの階層が丸ごと消えたとなれば、上部と下部の間に隙間が出来ますよね？　下部は大地と繋がっていますが、上部は浮いている状態で・・・となれば、このままでは落下しますよね？　そうなれば、空を飛べない私は一体どうなるのでしょうか？　それに、これだけの質量がこの高度から地上に落下するとなれば、王都は確実に消滅するでしょう。

「（まさかオーディン先生は、イリュリアごと滅ぼすおつもりなのですか・・・！？）っう？」

浮遊感がこの身を襲い、全身が総毛立つ。私たちの居る上部が落下を始めたからでしょう。僅かながらに体が宙に浮く。そこでようやく「神の城が、墜ちるというのか・・・」テウタがポツリと漏らした。エテメンアンキの脅威がなくなるのは大歓迎ですが、このままでは死んでしまいます。と思ったところで、ネウストリアの意図を1つ解釈できた。私とテウタとエテメンアンキを一緒に消すのも、おそらく特攻の目的なのではないでしょうか・・・？

『オリヴィエ王女殿下！』

「え・・！？（あ、思念通話！）」

いきなり頭の中に響いた大声にビクりとしてしまいますが、すぐに思念通話だと理解。お声の主がオーディン先生という事もありますが。

『オーディン先生！　あの、このままでは私やテウタ、イリュリア王都が滅んで――』

『その事でお話がありますっ。よく聴いてください！』

オーディン先生から告げられた、今からあの御方が行われる行為を理解したとき、私は少しばかり恐怖を抱いた。ですがあの御方が言うように今この時こそが、この戦争を終わらせる最後の起点。その起点を終点へと繋げる鍵を担うのが私と言うのであれば・・・

「（私に出来る事は何でもしましょう）立ってください、テウタ。決着をつけましょう」

「決着？　あぁそうですね。このまま何もせずにいれば、空を飛べる私とは違い、貴女はこのエテメンアンキと共に死ぬ事になる。瓦礫に潰されて死ぬ前に、宿敵である私と決着をつけたいと思うのは道理。いいでしょう、決めましょう、最強をッ！！」

互いに臨戦態勢を取る。その周囲に浮かぶ画が乱れたモニターには、エテメンアンキの現状が流され続けます。損壊した階層より地上へと落下を始める無数の瓦礫。それがある一定の高度に達すると、オーディン先生の戦船艦隊の艦砲によって粉砕されます。

地上に被害を出さないための処置です。ですからオーディン先生は、エテメンアンキの破壊に乗り出せました。モニターにまた飛来する幾条もの砲撃が映し出される。それらはこの床下の階層をすべてを撃ち砕き、いくつもの瓦礫へと変えた。

「神器王！？　オリヴィエ王女殿下が居るというのに何故！？」

「（まずはここより脱出しなければ・・・！）はあああああああああッ！！」

――狂瀾怒濤――

魔力を集束させた踏込みの二連打によって床を粉砕する。驚愕に目を見開くテウタへ「ではお先に失礼します」と一言断りを入れてから、開けたばかりの穴から飛び降りる。頭上から「飛べない貴女が一体何を！？」と心底理解できないと言った風な当惑の声が降って来ました。

「そこに居ては巻き込まれてしまいますよ？」

宙へと投げ出した私の体を護って下さるように蒼い魔力の膜が生まれ、私の体の線にピッタリと張り付くように包み込んでくれました。先に撃ち壊された瓦礫に着地し、こちらを見下ろすテウタを仰ぎ見る。

――Ｏ　ｓａｌｕｔａｒｉｓ　Ｈｏｓｔｉａ　Ｑｕａｅ　ｃｏｅｌｉ　ｐａｎｄｉｓ　ｏｓｔｉｕｍ．　Ｂｅｌｌａ　ｐｒｅｍｕｎｔ　ｈｏｓｔｉｌｉａ；　Ｄａ　ｒｏｂｕｒ，　ｆｅｒ　ａｕｘｉｌｉｕｍ／ああ救霊の生贄、天つ御国の門を開き給う御者よ、我らの敵は戦いを挑むが故に、我らに力と助けを与え給え――

直後、アウストラシア方面より黄金の砲撃が１２本と飛来し、先ほ

どまで居た玉座の間を彼女もろとも破壊しました。

（この程度では死なないのでしょうね）

さらに続けて飛来する12本の砲撃はカレドヴルフの砲門すべてを崩壊させました。大小さまざまな瓦礫となり、私ともども地上へと落下を始める。そこに、

「エテメンアンキを失ったのなら、この手で直接ベルカの歴史を終わらせてくれるッ！」

――神の覇道――

瓦礫と粉塵の中より急降下してくる彼女はそう叫び、私の立っていた瓦礫の足場へ突進、瓦礫を粉砕した。私は直前に別の瓦礫へと跳び移っていた事で巻き込まれず、すぐさま「えいっ！」複数の魔力弾を連続で投げ放つ砲煙弾雨を彼女へ投射。

やはり向こうは空を飛んでいるため、容易く回避されてしまう。対してこちらは落下している周囲の瓦礫を足場として跳び回るしかありません。機動力では圧倒的に不利。となれば、確実に一撃必倒の出来る武技か魔導を打ち込むしかありませんね。

「王都へ落下する瓦礫は全て神器王とその下僕たちによって破壊されるというわけですかぁッ！　それに関しては感謝の念しかありませんねぇッ！　避難させているとはいえ、国民の家を壊すのは気が引けますからぁッ！」

――神の火弾――

彼女の周囲に発生した火炎弾１３基。それらが断続的に放たれて来ました。いま私が立つ足場の瓦礫は狭いため、また別の瓦礫へと跳び移る。

「避けてばかりでは私に勝てませんよぉッ！　それとも一方的に嬲ってほしいですかぁッ？」

――神の閃光――

差し向けられた人差し指より放たれる銀の砲撃。アレは防御に回ってはいけない。ですが「近場に足場が・・・！」考えが及ばなかった。周りに跳び移れる瓦礫は無く。ここは意を決し、瓦礫より飛び降りる。景色が下から上へと流れて行き、「助かった・・・！」数ｍほど落下した先に、それなりの広さのある瓦礫に着地する事が出来た。

「安堵している暇があるとでもぉ？」

――神の光剣――

降下してきたテウタの振るう魔力剣を半身ズラして避け、こちらも魔力斬撃の魔導・光芒一閃を発動。揃えた五指より伸びる魔力刃で、気付けば再生していた彼女の右側の羽３枚をまた切断する。それが何ともないと言うように彼女は斬り返しの一閃を払い、それを魔力刃で受け止める。

「この不安定な足場で良くここまで闘えますねぇ。さすがは最強と謳われる御方です」

「そういうあなたは、融合騎と融合していながら逆に弱体化していますね」

「その分、すべての魔導の攻撃力は、聖王の鎧を突破できるほどに強化されていますよぉ。自己治癒力もまた強化されていますしねぇ。この私を討つのは、相当骨が折れますねぇ」

私の魔力刃にのみヒビが入る。砕ける前に彼女の魔力剣を上方へと逸らして、空いている左の掌底を腹部へ打ち込む。苦悶の声を小さく洩らした彼女は僅かに後退しますが、「これは堪えるかもしれませんねぇッ！」すぐに私の両肩を鷲掴み、「な・・っ！？」私ともども宙へと飛び出した。

「さぁ行きますよぉッ！」

「っ！？　離しなさい！」

私を下にして急速に降下するテウタ。彼女の顔面や腕、胸や腹を殴りはしますがそれでも離さず・・・かなりの高さを落とされた後、「ぁが・・・は・・・っ？」瓦礫の１つに叩き付けられた。息が詰まる。その衝撃に意識が落ちかけましたが、ここで意識不明となれば待っているのはテウタの手による確実な死。

私を置いて上昇していくテウタを睨み付け、「さようなら」と彼女

が笑みを浮かべて手を振っているのに気付いた。ゾクッと寒気が。背中から――正しくは私が倒れている瓦礫のずっと下から爆発音が。

「??・・・あっ、しまっ・・・・！」

ある高度に達した瓦礫はオーディン先生とその使い魔や戦船の魔導で粉砕されます。いま私が居るその高度が、瓦礫を粉砕する高度であるなら瓦礫ごと砲撃で消し飛ばされてしまう。痛む体に鞭を打って起き上がり、両脚に魔力を集束、跳躍力を強化して上空の瓦礫へと跳び上がる。

「あのまま眠っていれば苦しまずに死ねたものを。そして神器王は、自らの手で貴女を討ったと知り、絶望の果てに壊れるでしょうねぇ。そうなれば私の心に溜まった鬱憤が晴れるというもの」

「そうは、いきません・・！　私はあなたに勝ち、そして仲間のところへ帰ります！」

オーディン先生の治癒によって体はすぐに回復してくれます。テウタの居る高度に向かうために瓦礫を何度も跳び移り、

「破ッ！」

――驚浪雷奔――

上空へと拳打を突き出し、魔力衝撃波を放つ。彼女は羽を翻して避け、「では、これならでどうですかぁっ！」人差し指を私ではなく

他の瓦礫へと向け、

――神の閃光――

砲撃で撃ち砕きました。まさか上へ上がるための瓦礫を全て粉砕するつもりですか！？　そうなれば逃げ場はなく、私は瓦礫もろとも砲撃で・・・。そうなる前に出来るだけ高度動を保たないと。テウタへの攻撃に使う魔力を全て移動へと費やす。上へ上がるための瓦礫を何度も蹴り、その最中にも彼女は砲撃で瓦礫を撃ち壊してくる。

「さぁ逃げ惑え！　そして知れッ、貴女の命はもうすでに我が手の中に在ると言うことをッ！」

――神の天罰――

テウタの周囲に発生した7つの月・・・ではなく巨大な魔力球。それらが一斉に落ち、激しい閃光を撒き散らして周辺の瓦礫を根こそぎ消し飛ばした。頭上にたった1つだけ瓦礫が残りましたが、明らかに誘っているとしか思えないですね。ですが罠であろうがそこに跳び移らなければ、私は砲撃で撃たれてしまう。

（仕方ありませんね・・・！）

瓦礫を蹴って、その瓦礫へと跳び移る。その直後、「跪いて謝れば許しますよぉ？」とテウタは言い、

――神の聖槍――

銀の魔力槍を投擲して来た。瞬時に両手の平を前面に突き出し、

――金城鉄壁――

聖王の鎧とは別に、魔導としての魔力障壁を一点集中で展開。魔力槍が障壁に着弾した瞬間に腕を横に逸らして魔力槍を往なす。障壁を消し、間髪入れずに突進して来ていたテウタの顔面――正確には急所の1つである人中に向かって、「砕ッ！」掌底一閃。大きく反り返る彼女の首に回し蹴りを繰り出し、「ぐげぇっ！？」苦悶を声を漏らした彼女をそのまま瓦礫へと叩き付ける。

「はぁはぁはぁ・・・・」

「まだまだぁッ！　この程度では私は墜ちませんよぉッ！？」

急所を打ち抜いてもそれだけの損害ですか。自己治癒力の強化というのは本当に恐ろしいものです。時間制限の在る中で、これ以上苦戦を強いられるのは得策ではありませんね。後々の負担を思えばあまり使いたくはありませんが、そうも言っていられないのも事実。

「・・・・あなたは言った。最強を決めましょう、と。ならこちらも本気・・そして全力を出すのが当然」

――臥薪嘗胆（がしんしょうたん）――

魔力核の制限を解き放ち、私の扱える魔力を全て解放。頭痛を振り

払い、「はぁぁぁぁぁ・・・！」熱を持った息を吐いてテウタを見据える。今まで以上に驚愕を露わにする彼女は「素晴らしいぃッ！　それが、聖王女としての真の姿なのですねぇッ？」狂喜乱舞。

「その余裕は、すぐに後悔に変わりますよ。私を慕ってくれる友人たちと共に編み出した奥義です。いざ――」

魔力を両脚に籠め脚力を強化。

「疾きごと風の如く・・・！」

――其疾如風――

電光石火の速度をさらに上げての高速移動。その速度を利用しての膝蹴りテウタの鳩尾に打ち込む。

「徐かなること林の如く・・・！」

――其徐如林――

彼女の首に手刀を一閃。衝撃を脳髄に叩き込み、全ての感覚を遮断させる。

「侵掠すること火の如く・・・！」

――侵掠如火――

魔力を炎熱に変換し、火炎を纏う昇打を顎に打ち込んで彼女を大きく仰け反らせ、同じように火炎を纏う中段蹴りを鳩尾に打ち込む。

「動かざること山の如く」

――不動如山――

魔力を練り上げ、身体能力を極限にまで引き上げる。

「知り難きこと陰の如く・・・・！」

――難知如陰――

瓦礫を蹴って跳躍、一瞬でテウタの頭上へと移動。

「動くこと・・・・雷霆の如しッ！」

――動如雷霆――

魔力を雷撃に変換。魔法陣を頭上に展開、それを足場として蹴って真下に居るテウタへと、

「これで終わりですッ！」

魔力を纏っての突進・天衣無縫、その雷撃版の天衣無縫――動如雷霆を行う。背中から倒れそうになっているテウタへと雷撃を纏っての体当たり。足場となっていた瓦礫を砕き、そのままの勢いで降下

して2つ目の瓦礫に激突、砕いては降下、3つ目の瓦礫に激突して勢いがなくなった。

「はぁはぁはぁはぁ・・・なんとか間に合いましたか・・？」

夜空を裂いて飛来する蒼や金色の砲撃群が地上へ落下しようとしている瓦礫を確実に砕いている一定の高度。いま私とテウタの居る高度は、その砲撃群による瓦礫粉砕高度のすぐ上。

「テウタを抱えて跳び上がれるでしょうか・・・？」

白目を剥いている彼女を見下ろし、そしてそれなりの高さの上に在る瓦礫を見上げる。いえ、出来る出来ないかではありません。テウタへと近寄り・・・・

「これで勝ったとお思いですかぁ？」

――神の光剣――

キッと目に光を取り戻した彼女は勢いよく立ち上がり、魔力剣を両手に携えました。どうしましょうか。本音を言えばもう立っているのも辛いのですが。

（全力の風林火山で討ち取れなかったのは痛いですね・・・）

軋む体を癒していただけるオーディン先生の魔導に感謝しつつ、残り時間の少ないこの決闘をどうやって終わらせるかを必死で考える。

瓦礫が砲撃によって粉砕される轟音をこの耳に聞きながら、私は・・・・

「あああああああああああああああッ！！！」

テウタへと突撃。両拳に魔力を集束させ、「破ッ」純粋な格闘戦での撃破を狙います。ですが彼女は右へ左へと横移動を繰り返して避け、「楽しいではないですかぁッ！」と魔力剣での反撃を行ってくる。共に決定打を与える事が出来ず、そして・・・「時間切れですねぇ」彼女は背筋の凍る笑みを浮かべた。すぐ足元より聞こえてきた爆発音、それと振動。もう限界高度にまで落ちてきてしまった！？

「急いで上に――って、きゃぁぁっ！？」

――旅の鏡――

いきなり肩を掴まれて後ろに引っ張り込まれた。目の前に居たテウタも茫然としていて、私の視界から消えるまで呆けた表情をしていた。視界が一瞬遮られ、次に開けた時、そこはもうエテメンアンキの瓦礫の上ではなく地上でした。鬱蒼と生い茂る森の中。夜という事もあり、どこの森なのかも判りませんが・・・。

（ですが、どうしてこのような場所に・・・？）

「お怪我はありませんか？　オリヴィエ王女殿下」

「っ！？」

とても優しいお声が掛けられ、振り向いて見ますとそこには「シャマル・・さん・・？」がいらっしゃいました。事情を窺えば、私をここに転移させたのはシャマル先生の魔導によるものだということ。それがオーディン先生のご指示であるという事でした。

（オーディン先生・・・）

テウタを撃破し捕縛する事を頼まれていたのですが、結局私は果たせませんでした・・・。それが私を憂鬱にさせる。多大な恩のあるオーディン先生との約束を破ってしまったから。落ち込んでいる最中にもシャマルさんはお話ししてくださいます。

「エテメンアンキの崩落による被害はありません。ご覧のとおり、すべてオーディンさんや戦船艦隊、アンゲルスによって破砕されました」

シャマルさんの視線の先には、エテメンアンキの土台と思しき跡が在りました。ここはコースフェルドなのですね。私はフラフラと覚束ない足取りでエテメンアンキの方へと向かう。

「オリヴィエ王女殿下！？　どちらへ！」

「テウタの行方を捜します。オーディン先生との約束なのです。私たちだけ助けてもらってばかりで・・・このままでは恩を仇で返すばかり」

「・・・オーディンさんと同じで頑固なんですね・・・」

シャマルさんが何か言ったようなので振り返って「なんでしょう？」訊き返してみましたが、「お供いたします」とやんわり話を逸らされました。道中、エテメンアンキの外で起きていた状況を聞きました。エテメンアンキ崩落まで戦は続いていたとのことですが、崩落開始と同時にイリュリア全騎士団の敗走が始まったと。そのおかげで壊滅寸前でいた同盟側の戦力が助かった事や、

「よかったです・・・。リサやシグナムさん達もご無事なのですね。それにズィルバーン・ローゼや騎士団の皆さんも・・・」

モニターで観た限りでは敗色濃厚でしたズィルバーン・ローゼやアウストラシア騎士団でしたが、オーディン先生の艦砲によって救われたそうです。また多大な恩が出来ました。この恩をすべて返すのにはとても時間が掛かってしまいそうです。

「・・・・エテメンアンキ、本当に打ち倒す事が出来たのですね・・・」

瓦礫の山を築いているエテメンアンキ跡にようやく辿り着き、私はその周囲を歩く。月明かりに照らされている瓦礫を見て回っていると、「オリヴィエ様っ！」声を掛けらた。この声、別れてから数時間としか経っていないと言うのに随分と懐かしい気がしてならない。

「リサ！」

「オリヴィエ様っ。御無事で・・・・！」

ズィルバーン・ローゼの生き残りと共に姿を現したリサは、勢いよく私に抱きついてきた。そういう私もリサに駆け寄って抱きしめ返すのですけどね。お互いの無事を喜び合える事が出来て、泣いてしまいそうです。リサ達と共にいらっしゃったシグナムさんとアギトさんに一礼。そして皆さんと一緒にテウタを捜し始めたのですが・・・・。

「マイスターの戦船艦隊やアンゲルス達の砲撃で吹き飛んじゃったんじゃ・・・・？」

アギトさんがポツリと漏らしました。その可能性は捨てきれないのも事実。シャマルさんの魔導で転移させられる時、その時にはもう決着をつけてテウタを捕縛していなければならなかったのに。それが出来ず、こうして皆さんを巻き込んでまで捜す羽目になったと思うと辛い。手分けして捜索する事になり、私はズィルバーン・ローゼの将リサ、副将エレス、そしてアンジェリカとセリカの5人で捜索をする。

「テウタの遺体なり何なりを確認できれば、イリュリア戦争の終結を宣言できるのですが・・・・」

「いまシュトゥラの王子たちが王城に入って、バルデュリス王子を捜索しているそうです」

「女王が亡くなっていれば、王子に敗戦宣言を出して頂かないとい

けません」

「その王子も亡くなっていれば、レーベンヴェルト王族は事実上の滅亡だわ」

私の前後左右に居るリサ達が言うようにイリュリア戦争は終わりを迎えましたが、敗戦宣言が行われないことには本当の終結ではありません。

「・・・・ん？　誰だッ！？」

リサが怒声を上げると同時に全員が私を護るために前に躍り出る。私たちの視線の先、そこには小高い瓦礫の山が在り、その上に1人の男性が月明かりに照らされて立ってた。ですが何故でしょう。その男性を見た瞬間、「オーディン先生？」と思えてしまったのは。共通点はただ1つ。銀の髪。それだけなのに、何故かオーディン先生のお姿が重なったのです。

「ゼフォンはいいとして、ミュールやマラークには期待していたんだけどな・・・」

ゼフォン、ミュール。その名は"エグリゴリ"の複製品のものでしたね。マラークはテウタの融合騎の名前。となれば「イリュリア技術部の関係者ですか・・？」という事になるでしょう。

「・・・・そうだな、虹彩異色のお前が好い。お前に、神器王への言伝を頼もうか」

「オリヴィエ王女殿下に向かってなんと無礼な！」

「名を名乗れッ！」

「そして土下座で謝りなさい」

全員がいつでも飛び掛かれるように身構えたのを見、私は「落ち着いてください！」と制止する。対してその男性は「生憎とこの世界の存在じゃないんだ。だから王族に敬意は払わないんだ」と肩を竦めるのみ。

その言葉で、私はあの男性がオーディン先生が追い求める者――「エグリゴリ！」なのだと気付いた。オーディン先生の事情を知るリサも「お前が、オーディンさんのご家族を殺めた兵器・・！」と殺気を漲らせる。

「ガーデンベルグ・ブリュンヒルデ・エグリゴリ。それが俺の名前だ。名乗ったからには、こちらの言伝を聞いてもらう。必ず神器王に伝えろ」

ガーデンベルグと名乗った者は一度間を置き、その言伝なるモノを語った。

「最初のゲームは、イリュリアを破った貴方の勝ちだ。次は俺たちエグリゴリが直接あなたの元へ参じ、その命を刈り取りに行く。俺たちが再び姿を現すそれまでの間、のんびりと余生を楽しく過ごすことだ、と」

ガーデンベルグはそれだけを言って、背よりオーディン先生と同じ剣の翼を展開、空へと飛び去って行った。追いかけようにも向こうは空。諦めて見送る事しか出来なかった。

「待てっ！・・・こ、これは・・・オリヴィエ様っ！」

ガーデンベルグが先程まで居た地点にまで駆けて行ったリサに呼ばれ、リサの元まで行くと・・・

「っ！・・・・マラーク・・・・！」

下半身を瓦礫に押し潰され失って上半身だけとなってしまっていたマラークが倒れていたた。それからその一帯でテウタの遺体を捜してみましたが、結局見つけることは叶いませんでした。

。―。―。―。―。―。

イリュリアの王都スコドラの中央にそびえ立つ王城、そのとある煉瓦造りの廊下に彼女は居た。壁にもたれかかりながらヨタヨタと歩く、煤汚れた灰色の髪、力の無い翠色の双眸、所々に擦傷や出血の有る白い肌を持つ女性、名をテウタ。松明の灯りに照らされている顔に張り付いているのは絶望の表情のみ。

「はぁはぁはぁはぁ・・・っ、足音・・・追手・・・？」

テウタはいま王城へと進行してきたシュトゥラの王子クラウスと、

彼の率いるシュトゥラ騎士団数十人、それに信念の騎士団グラオベン・オルデンのヴィータ・アイリ、ザフィーラとシュリエルリートに追われていた。
エテメンアンキでのオリヴィエとの決闘の果て、オリヴィエには逃げられ、彼女だけがアースガルド艦隊と七美徳の天使アンゲルスの砲撃群を受けた。彼女の治癒能力を以ってしても瀕死とならざるを得なくなったが、そのダメージを融合騎マラークがすべて負担した。その結果、マラークのプログラムは全損、最終的に瓦礫に押し潰されて息絶えた。

「こんな・・・こんな、事になるなんて・・・」

マラークの犠牲によって辛くも生き永らえ、そして王城にまで逃げてきたテウタ。だがそこでクラウスらに追われる羽目になった。まともに動く事も難しい今の彼女にとって戦闘行動を取る事など夢のまた夢。

「テウタ」

「っ・・・!?」

気配もなくいきなり声を掛けられた事でテウタはビクッと体を震わせ、自分の名を呼んだ者のいる方へと振り向いた。そこに居たのは1人の青年。テウタと同じ灰色の髪に翠色の瞳。テウタは激しく動揺しつつ、その青年の名を口にした。

「バルデュリス・・・お兄様・・・・!?」

テウタの実の兄、バルデュリスだった。実父にして先王ゲンティウスを殺害して女王となったその日、テウタは実兄バルデュリスを投獄した。自らの義務、レーベンヴェルト再誕の邪魔になる者だとして。そんなバルデュリスが、実妹のテウタの前に姿を現した。

「臣下に出してもらったんだよ、牢獄から。・・・父を殺害し、ミナレットならびにエテメンアンキを目醒めさせ、その力でベルカに災厄をもたらし、挙げ句イリュリアを敗戦させた」

「お、お兄、様・・・？」

俯きながらテウタへと徐々に歩み寄って行くバルデュリス。テウタはその言い知れない雰囲気に呑まれ、壁に体を預けながら後退していく。

「その罪は、当然の如くこの戦争を起こした女王たるお前にある、解るなテウタ？」

「そ、それは・・・！」

「故に償わなければならない。多くの臣下を戦場に送り出して殺したのはお前だ。無駄に他国の人命を両兵器で殺したのはお前だ」

バルデュリスが刀を携える。そして放つのは殺意だ。テウタは自分が殺されるのだと察し、「いや、いや・・・死にたくない・・」とうわ言のように繰り返し、フラつきながら廊下を全力で走る。

「妹でも、容赦は出来ない。解ってくれ、テウタ」

涙を流すバルデュリスは刀を上段に構え、勢いよく振り下ろした。刀身より放たれるのは魔力の含まれた剣圧一閃。テウタが辛うじて横に跳ぶ事で回避。

「え・・・あ・・っ？」

「さらばだ、テウタ・・・」

テウタの心臓付近より生える血の付着した刀身。バルデュリスがテウタを背後から貫いたのだ。刀身を抜かれたテウタはフラフラと前進し、そしてドサッと倒れ伏した。彼女から流れ広がっていく血溜まり。後々の次元世界の歴史に、古代ベルカの殺戮王として語り継がれていく事になるテウタは、実兄の手によりその生涯に幕を下ろした。

「終わりましたか？　陛下」

「ああ。・・・イリュリアの敗戦宣言は、次期イリュリア王の私が行おう」

バルデュリスは背後に現れた臣下たちにそう応じ、彼らはテウタの遺体に背を向けてその場を歩き去って行った。

この1時間後、イリュリアの王となったバルデュリスによって、イリュリアの敗北で終結した事がイリュリア全土に宣言された、こう

してベルカ半球を巻き込んだイリュリア戦争は終結した。

ＥｐｉｌｏｇｕｅⅠアムル復興頑張りますっｂｙアムルの愉快な住民

†††Ｓｉｄｅエリーゼ†††

イリュリア戦争が終結して今日で３日目。わたし達アムル組は、避難先にしていた隣町ヴレデンからアムルへと帰って来ていた。見上げる空は雲一つとしてない晴天。刻はお昼過ぎ。うん、今日もまた素晴らしい・・・

「復興日和ぃぃぃ～～～～～～～～～っ♪」

だね。空に向かって叫ぶ。今日も元気にアムルの復興に勤しむとしましょうか。アムルの街を歩いて、トンカンと金槌で釘を打つ音、ゴツゴツと煉瓦を積み上げる音などなど、壊れた家屋を建て直す音を聴く。壊れたのは悲しいし辛いけど、でも直っていく。元通りじゃなくて前よりもっと良いアムルに生まれ変わる・・・。生まれ変わったアムルの姿を想像しながら街路を歩いていると、

「おはようエリーゼちゃん！」

「屋敷を立て直す時になったら、遠慮なく呼んでくれよ！」

「ああ！　俺らの英雄たちが住む家だからな！」

「シグナム姐さんの部屋は俺が作るぜッ！」

「じゃあ俺ぁシャマル先生の部屋だッ！」

「シュリエルリート様のお部屋は、絶対に誰も譲らねぇぞッ！」

「なにぃ！？　てめ、この前まではヴィータちゃん贔屓だったろうが！」

「もちろんヴィータちゃんの事は愛してるぜ。でもな、シュリエルリート様は女神なんだ！」

「変態め。俺はな、アギトちゃんとアイリちゃんの寝台を作る！」

「「「「変態はお前だ！！」」」」

知り合いのおばさんやおじさん達、家を建て直している大工のお兄さん達から声を掛けられる。自分たちの家やお店の建て直しもあるのに、それでもそう言ってくれて本当に嬉しい。だから「はいっ、その時はお願いしますっ！」断らず、お言葉に甘えさせてもらうことにする。でも大工のお兄さん達は捕まればいいと思います。大切な家族の部屋に変な細工をしたら、オーディンさんに懲らしめてもらおうっと。

（でも屋敷の修復なんていつになるやら・・・・）

アンナとターニャとグレゴールの戦いでメチャクチャになった屋敷

の修復は後回しにしてる。だって時間かかり過ぎるよ、直すどころか新しく一から建てないといけないからね。だから、しばらくはアムルの修復に力を注ぐことになると思う。

「あーでも早く住むところを造らないと、ターニャに迷惑掛かるよね」

屋敷の住人・・・わたしやアンナ、そしてオーディンさん達は今、ターニャの家にお世話になっている。モニカとルファの家にお世話になるって話もあったけど、こんなこと言っちゃうのは失礼だけど、2人の家はそんなに大きくない。

あとご家族も居るし。だから天幕を張って野宿でもしようかって話になった時、ターニャが誘ってくれた。ターニャは2人に比べて一人暮らしで、しかも家はそれなりの大きさ。空き家だったものを自己負担で改修して住んでいる。

ターニャってばまだ24歳なのに、

「最北部地方(クイックヴォルン)から最南部地方(ラキシュ)にまで1人で引っ越してきた変わり者なんだよね～」

わざわざイリュリアっていう危ない国の国境近くのラキシュ領はアムルにまで引っ越してきた。これを変わり者と言わずして何て言うんだろうね。変わり者じゃなかったらただの「馬鹿だね♪」あははっ。

「だ～れが変わり者で馬鹿だって～？」

「痛いっ？」

後ろから聞こえたそんな声と一緒にゴツンと頭に振り降ろされた拳骨。頭を押さえて振り返る前に、声とその言葉で誰だか判っているから「ターニャ、何するの！」プンプン怒る。

「なんでエリーゼが怒るの！？」

ガーンと後ずさったターニャはすぐに「あなたが怒るのは筋近いでしょ！」ってわたしの顔を両手で挟み込んで、頬をグニグニ捏ねてきた。顔を潰されて気分が良いわけじゃない。だから「ひゃめてぇ～～」抗議する。でもターニャはわたしの両頬を捏ね繰り回すのを止めない。それどころか「あなただけ追い出してもいいんだよぉ～」なんて言ってきた。

「今あなた達を住まわせている家の主は私。家主権限で、あなた独りだけ庭に追い出して、天幕暮らしさせてもいいんだよ♪」

「ひょめんなひゃい（ごめんなさい）」

うん、素直に謝ろう。一人寂しく庭先で天幕暮らし。家の窓から見えるのは、昼夜を問わずみんなの幸せそうな一般生活。想像しただけで泣く。と言うかもうわたしの右目から涙がポロッと零れた。どれだけ惨め？

わたしが謝ったことで「よろしい」って満足そうに頷いたターニャは、ようやく手を離してくれた。さすさすと自分の頬を擦りながら「酷いこと考えるよね、ターニャ」って睨む。

「先に酷いことを言ったのはあなたでしょうが。で？　私の何が変わり者で馬鹿で美人だって？」

「美人って言った覚えなんて――」

「ん？」

妙な威圧感を感じ取ったから「うん、ターニャは美人だよね」首肯しておく。また満足そうに頬を緩ませるターニャに、「でもさ――」さっき考えていたことを話す。ターニャがどうしてアムルに引っ越して来たのか。返ってきた答えは単純至極。

「クイックヴォルンの環境がどれだけ過酷か知ってる？　年中寒いの、雪降るし。しかもイリュリアと同じように敵対国との国境だったし。それなら比較的暖かくて、王都に近い南部にしようって思ったわけ」

北部と南部両方に敵国に挟まれてるシュトゥラ。でも、その状況もつい先日で大きく変わった。イリュリア戦争。大国イリュリアを相手に、シュトゥラ、三連国バルト、ガレア、シュヴァーベン、ヘルウェティア、ヴィンランドの同盟８国（アウストラシアの一部戦力が加わったけど）が始めた戦争。

その結果イリュリアは敗れた。敗戦宣言も、新しく王になったバルデュリス王によって出されたし。北部国境線の敵国トロイアも、今回の同盟８国のイリュリア勝利の影響か判らないけど、シュトゥラとの無期限不戦協定を結んだし。

「これからもずっとアムルに残る・・・んだよね？」

「当たり前っ♪　私はずっとここで生きていくよ」

「そっか」

それが聴けて嬉しいかなぁなんて。それからわたしとターニャは、他愛ない話をしながらアムルの街を見回った。立て直しに必要な資材が足りなくなったとか、お手伝いが必要なところはないかとか、それを目で見て耳で聞いて確認するのが、アムルの主たるわたしの務めだ。各所で聴いた注文をメモ帳に記して、午後に訪れるシュトゥラの南方復興支援隊の人たちに進言すれば、資材や人員を寄越してもらえる。

「ディレクトアが活躍してくれたおかげで、優遇されてるよねラキシュ」

「それはないんじゃないかなぁ・・・」

贔屓目に見ても、イリュリアを倒せたのはオーディンさんの"力"が在ったからこそだと思う。各国各都市に撃たれ続けたエテメンアンキの砲撃を、開戦から終戦までの間ずっと防御していたんだから。オーディンさんが居なかったら、きっとイリュリア戦争に勝てなかったかもしれない。ううん、たとえ勝てたとしても、勝ち負けなんて関係ないくらいにベルカは壊されていたはずだ。

「でもだからってシュトゥラのどこもかしこも大変なんだし、いくらなんでもラキシュを優遇しないと思う」

「ふ～ん、ちょっとは優遇してくれてもいいのにね？」

それには苦笑で返しておく。オーディンさんの名前で優遇してもらえたらいいなぁってちょこっと思っていたり。けどそれは叶わぬ希望だって納得して、とにかく今は最後の場所へと向かおう。これから向かう先は、わたしの想い人が居る場所。知らず歩く速さを上げてしまう。

「ディレクトアのところに行くなら私、一緒に居ない方が良い？」

「なんで？　アギトにアイリにシャマルさん、それにモニカとルファも居るし。まぁ2人きりでゆっくりお話ししたいなぁ～って思うけど、現状じゃ仕方ないと思う」

まったく話せない程にすれ違っていない事だけでも嬉しいことだよ。ターニャの家で今朝も、おはよう、の挨拶もしたし、一緒に朝ごはんも食べた。離れてからまだ4時間ちょっと過ぎくらいしか経っていないけど、でもやっぱりそのちょっとの時間だけでも離れると寂しいのです、です、です。

「あはは、逸る気持ちは解るけど、そんな速度出さなくても・・・！」

「うん？・・・っとと」

言われて初めて気付く。腕をこれでもかって言うくらいに大きく振って、全力早歩きをしてた。うん、お淑やかに、でも出来るだけ早く逢いに行きたいから、軽く早歩きをしよう。

追いついてきたターニャと並んで、再び目指すは・・・て「あれ？　オーディンさん？」前方の十時路を横切って行くのは、今から逢いに行こうとしていたご本人様のオーディンさんだった。と言うかその状況がどうにもこうにもおかしすぎて、わたしとターニャはポカーンと見送ってしまう。

「「「「「えっほ、えっほ、えっほ・・・・！」」」」」

「英雄殿のお通りだぁ～！　道を開けろ～～～い！」

「なぁ皆。自分の足で歩くから降ろしてくれないか？」

「何を言う英雄殿！　降ろしたら降ろしたで逃げるだろう！」

「はぁ。勘弁してくれ・・・」

なんとオーディンさんが男の人数人に担がれていたのだ。先頭を行く恰幅の良い男の人、父の友人だったトニおじさんが道を開けさせていく。家の陰へと消えて行ったオーディンさん達を見送った後、「何やってんの？　トニおじさん達・・・」ターニャが呆れ口調で漏らした。わたしもそんな感想しかないよ。オーディンさんを担いでどこに行こうって言うのかなぁ。どうしよう、すっごく気になってしょうがないんだけど。

「どうする？　男爵としての仕事なら、ディレクトアの仕事場の医院（仮）に行かないといけないけど・・・」

うん、ここはバッチリ男爵としての務めを果たすべきなのは判ってる。でもそれ以上にオーディンさんが何で担がれてまで連れ行かれたのかが激しく気になる。だから「ターニャぁ・・・」ちょっとだけ、ちょっとだけでいいから見に行きたい、オーディンさん達が何をやろうとしているのか。

「ちょっ、エリーゼ。そんなうるうるした瞳での小動物のような縋る眼差しはキツイって」

別に狙ったわけじゃないんだけど。でも「私も気になるんだけど、仕方ない」ってわたしの持っていたメモ帳を取った。ヒラヒラとわたしの顔の前でメモ帳を振って、オーディンさん達が進んで行った道とは逆方向の医院（仮）へと歩き出したターニャは最後に振り返って言った。

「後で聴かせてよ。ディレクトア達が何をやろうとしていたのかさ♪」

「うんっ。・・・まぁ止める必要が無い限りは・・・」

アムル復興に不適切な馬鹿騒ぎをする場合は即刻中止だ。わたしの代わりに医院（仮）に向かってくれるターニャと別れて、オーディンさん達を追うことにする。あとでアンナに怒られそうだなぁ。興味や好奇心より仕事でしょって。よし、土下座で謝ろう。

「・・・って、もうどこにも姿が見えないし・・・！」

どうにか追いつくか見つけようかと思って駆け足になる。オーディンさん達が進んで行った通りは、屋敷と中央広場と教会を繋ぐ大通りだ。医院（仮）を建てた屋敷跡地の方から中央広場へと向かって行ったから、脇道やどこかの家や店（壊されずに残ったやつね）に入らなければ中央広場かなぁ～。僅かながらの坂を上ってそして下り、中央広場を眼下に収める。遠目にでも判る、オーディンさんの綺麗な長い銀髪。

「オーディンさん発見♪」

３００ｍほどの距離を走る。それにしても「足速いなぁトニおじさん達」すぐに追い駆けたのにもう中央広場に着いてるって。そんなに元気が有り余ってるなら復興作業に向けてほしいものだよ、まったくもう。徐々に近づいて来る中央広場。そしてオーディンさんが困っているような顔が見えた。オーディンさんを囲っているのは、さっきまでオーディンさんを担いでいた人たちに、石材店のおじさんだ。とりあえず「みんな何をやっているんですか？」おじさん達の背中に訊く。

「おお、エリーゼちゃん、良いところに！」

「オーディン先生の未来のお嫁さんからも言ってやってくれ！」

「ふえっ！？」

いきなりのお嫁さんって言う単語に、顔が一気に熱くなった。わたしがテレて俯いたのをいいことにおじさん達が、結婚式には呼んでくれだのお似合いだの赤ん坊が楽しみだの好き勝手言ってくれた。どれもがわたしの望むことだけど、さすがにこんな人の居るところで大声で言われるのは恥ずかしすぎる。

「ぅきゅぅ～～～」

顔を両手で覆い隠す。そんなところに「はいはい、これ以上エリーゼを苛めないでください」オーディンさんが手をパンパン叩きながらそう言った。俯いていた顔をちょっとだけ上げて、指の隙間からオーディンさんを見上げる。トニおじさん達をジロッと窘めてから、「そうだエリーゼ。君からも言ってやってくれ」ってまた頼まれた。

（またも流された・・・ｏｒｚ）

一切テレ無しのオーディンさん。そのおかげもあって冷静になれたと言うのが悲しい。オーディンさんが差し伸べてくれた手を取って立ち上り、すべてを仕切り直すためにコホンと咳払いをしてから、もう一度ここで何をするのか訊いてみた。

「・・・なるほど。中央広場に、オーディンさん達グラオベン・オルデンの石像を立てる・・・」

と言うわけだった。石材店の店主にして彫刻家としても名の有るおじさん、グラオベン・オルデンの人数分の石柱。で、朝早くから医

院（仮）で働いていたオーディンさんがここに連行されて来た理由は、

「石像を彫るために、私にポーズを取ってくれと頼まれたんだよ」

「ほらさ、やっぱり格好いい体勢の兄ちゃんを残しておきたいからよ」

「アギトちゃんやアイリちゃん、シグナム姐さんやシュリエルリートの姐さん、シャマル先生やヴィータちゃん、そんでもってザフィーラの旦那にも当然、ポーズを取ってもらおうって話だ」

「でも先生は、石像なんて彫らなくていいなんて言いやがるからよぉ」

「だから無理やり連れて来たと」

呆れてものも言えない。けど、「よし。アムルの長にして男爵位を持つこのわたしエリーゼが許可しましょう！」オーディンさん達の石像を彫ることを承認。おじさん達は「うおおおおお！」歓喜の雄たけびを。オーディンさんは「まさかの裏切り！？」悲嘆に暮れた。だってだって、オーディンさん達みんなの石像を、グラオベン・オルデン発祥の地であるアムル、その中央広場に造るとか良い提案だよ。

「石造彫刻は認めますけど、まずは復興作業を最優先にしてくださいね」

「ちょっ、エリーゼ！？　助けてくれっ」

「石像くらいいいじゃないですか。と言うか銅像でもいいくらいですよ」

オーディンさん達を後世にも残していく方法としては悪くない。あと手記。これはわたしの仕事かな。

「う～んと、なんて書こうかなぁ～♪」

手記帳を新調しようと考えながら踵を返して、ターニャの居る医院（仮）へ歩を進める。後ろから、

「エリーゼさぁぁぁぁ～～～～～～ん！」

オーディンさんの悲鳴が聞こえて来るけど、ちょっと悪戯心が生まれたことで無視。ちょっとはテレてくれてもいいのに、完全に素面なんだもん。だ、か、ら、

「頑張ってくださいね～～～～～～～　」

最後に、振り返って大手を振る。トニおじさん達にポーズをいろいろ指示されてるオーディンさんと目が合ったような気がしたからニコッと笑みを向ける。そしてまた歩き出す。それにしても何であんなに嫌がるのかなぁオーディンさん。

歴史に名を残せるほど活躍して、それを後世に残すことが出来るん

だから。やっぱりベルカを去るつもりだから、自分が存在していた証拠を残したくないとか思ってるのかな・・・？　だとしたら本当に寂しいことを考えてるんだ、オーディンさん。

「これはやっぱり愛の力でどうにかするしかないっ、ないっ、ないっ！」

決意を新たに、医院（仮）へ向かって走る。で、着いたら着いたで、

「やっぱあたしらしいポーズっつったらこれだろ♪」

「アイリはねぇ・・・こうかな♪」

「んーじゃあ、あたしは、こう？」

「ヴィータちゃんもアイリちゃんもアギトちゃんも可愛い～　」

ヴィータ、アイリ、アギトの3人がポーズの練習をしていた。子供組はどうやら石像製作にノリ気のようだった。モニカは作業そっちのけで目をハートにしているし。そして「モニカ！　ちゃんと仕事して！」ルファに怒鳴られてる。でも気にもせずにハァハァ息を荒くするモニカ。

うわぁ。離れたわたしでも引いたんだ。近くに居たルファは思いっきり後ずさった。ルファは結局諦めたようで、医院（仮）に戻って行った。医院（仮）は、丸太で造り上げた簡易な木造小屋だ。

「もうヴィータちゃん。ヴィータちゃんも仕事に戻りなさい。瓦礫

の破砕作業、まだ残ってるんでしょ？」

「判ってんよ。今はちょっと休憩中」

ルファの代わりにシャマルさんが出て来て、ヴィータを窘めた。ヴィータは復興に邪魔な瓦礫を、その攻撃力を以って破砕するのを仕事としてる。アギトとアイリは連絡係兼雑用。シグナムさんとザフィーラさんとシュリエルさんは建築のお手伝い。シャマルさんはもちろんオーディンさんと同じ医者としての仕事だ。

「シャマルも今のうちにポーズを考えておいた方が良いぜ。あとでメッチャ恥ずかしいポーズを指示されても困らないようにな」

ヴィータが"グラーフアイゼン"っていう名前の武装を首飾りに戻してこっちに歩いてきた。

「お疲れ様、ヴィータ」

「おう！　エリーゼもお疲れ！　もしかしてオーディンと逢ったか？」

「うん、逢ったよ。町のおじさん達に担がれていったのを見て・・・」

「あはは。おっさん達も面白いよなぁ。オーディンが断り続けていたら、いきなり担いで強制連行だぜ？」

思い出し笑いをするヴィータ。よほど面白かったみたいだね。ヴィ

ータと別れて、アギトとアイリにも「お疲れ様〜♪」って労いの挨拶、モニカには「仕事しろ」と注意をしてから医院（仮）に入る。中は、瓦礫と化していた（屋敷の火事に巻き込まれなかったのは幸いだ）元医院から掘り起こされたカルテや書類を収めた書棚が２つ。薬品が収められた大き目な棚が１つ。

机と椅子がオーディンさんとシャマルさん用にそれぞれ１つずつ。患者さん用の椅子と寝台も１つずつ。その中で、シャマルさんとルファがカルテに目を通していた。そういえばターニャはもう行っちゃったのかなぁ・・・？

「お疲れ様ですシャマルさん。ルファも」

「あらエリーゼちゃん。お疲れ様」

「お疲れ、エリーゼ。ターニャに仕事任せて大丈夫だったの？　アンナにバレたら雷だよ」

「その時は誠心誠意土下座するから、それで許してもらうつもり」

ルファとシャマルさんが苦笑する。それからターニャがちゃんと仕事をしてくれたことを聴いた。あとで何かお礼をしないと。わたしの外回りの仕事も終わり、アギトやアイリと同じ雑用の仕事始めることになる。こうして今日もまた陽が沈むまでアムルの復興を進める。一日でも早くのんびりと家族たちと過ごしたいから。

「うっしゃぁーーーっ！　頑張ろうっ、オーッ！」

拳を空に向かって強く突き上げる。ちなみにターニャに、オーディンさん達の石像を造るって話を聞かせたら、

――案外つまらないことだったね――

って笑うだけだった。そう言う割にはすごく楽しそうな顔をしていたよ、ターニャ。

ＥｐｉｌｏｇｕｅⅡ魔導騎士？　その称号は私のではなくｂｙオーディン

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

私たちグラオベン・オルデンとエリーゼは今、シュトゥラは王都ヴィレハイムの王城に招待されていた。シュトゥラの王デトレフ陛下が、今回のイリュリア戦争においての私たちの功績を称え、勲章を授与したいのだという。
エリーゼは、私を救いシュトゥラに招き入れ、そして騎士団誕生のきっかけを生んだと言う功績からだ。確かにエリーゼが居なければ私は死んでいたかもしれない。そんな思い出に浸りながらも私はまた別の事を考えていた。

（ガーデンベルグ・・・）

。―。―。―。回想だ。―。―。―。

終戦後、イリュリア王城へと一度集合すると言う旨を開戦前に決めていたため、私は七美徳の天使アンゲルスやアースガルド艦隊の召喚を解き、イリュリア王城へと足を運んでいた。
目指すは〝堕天使エグリゴリ〟の複製品を製造していたとされる技術室。もちろんどこに在るのか判らないため、適当に見つけた男を脅して吐かせようと考えた。運の良い事にその男は技術部の人間だった。その男の胸倉を掴んで廊下の壁に叩き付ける。

「包み隠さずに答えろッ！　どこでエグリゴリと関係を持った！　それはいつからだ！　今現在の居場所は！　エグリゴリの製造記録はどこにある！」

「げほっ・・・ぅ、あ、ひぃぃ！　こ、殺さないでくれ！」

殺さないでくれ、か。「ならば答えろッ！」ニュートラルのランツェフォルムで起動させた"エヴェストルム"で、男の頬スレスレで壁を突く。短い悲鳴を上げる男。「殺さないでくれ、頼む、お願いだ！」を馬鹿の一つ覚えのように繰り返すだけだ。

苛立ちを理性で抑え込みながら"エグリゴリ"について問い質すと、その男は、自分は融合騎の開発者だと言った。融合騎の開発者。なら、アギトやアイリを苦しめてきた連中というわけか。奥歯を噛みしめた後に溜め息ひとつ。

「まぁいい。技術部はどこだ？」

"エヴェストルム"を僅かにズラして刃を男の頬に当てる。男の顔から血の気が引くのが見て判る。声を震わせながら「お教えします。ですから助けて下さい」と懇願してきた。

「なら案内してもらおうか。お前たちの城――技術室に」

胸倉を掴んでいた手を離し、咽ながら壁を背に崩れ落ちようとしていた男の腕を取って無理やり立たせ案内させた。そして辿り着いたのは王城の地下深くの巨大な一室・・・。だが男が「な、なんだこれは・・・！？」と室内へと力なく入って行き、へたり込んだ。

私も続いて入り、「酷いな、これは」かつては技術室だったらしい、ボロボロに焼け落ちた部屋を見回す。手間が省けたと言っていいのだろうか。元より技術室の全てを破壊するつもりだった。ある程度は情報を得たかったが、こうなっては仕方がないだろう。完膚なきまでに壊されている。こんな事をしたのは、この男の態度からして別の技術士ではない・・・おそらく。

「（エグリゴリの誰かが自分たちの足跡を潰したか・・・）おい。大丈夫か？」

へたり込んだ男の肩に手を置き、気遣いの言葉を掛ける。ゆっくりと振り返った男は泣いていた。元気を出すようにポンポンと肩を叩く。男はまさか私がそんな優しさを見せるとは思っていなかったようで、目を点にして私の顔を見る。

そんな私の気遣いに対して「ありがとう」と礼を言った。私は一度頷き、「へぶっ！？」ソイツの顔面を殴り飛ばしてやった。上半身だけを起こして鼻血の垂れる鼻を押さえながら「どうして・・！？」と混乱している男に、

「お前が融合騎の開発者なのだろ？　私はアギトとアイリ――お前たちの言う六番騎ゼクスと七番騎ズィーベンの家族だ。私の可愛い家族を生んでくれた事には感謝しよう。が、それからの苦痛を与え続けた日々には復讐をと思ってな」

顔を引きつらせ蒼白になる男へと一歩一歩と近づいて行く。男は腰が抜けたのか立てず、「助けてくれ！」座ったまま後退していく。私はその男の胸を踏みつけて仰向けに倒れさす。そして“エヴェス

トルム"を振り上げ、「殺さないでくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！！！」その悲鳴を無視して振り下ろす。

「・・・・ま、こんなものだろ」

男の顔の横ギリギリに突き刺した"エヴェストルム"を待機形態の指環に戻す。男は恐怖のあまりに意識を手放していた。殺さないさ。ただ少しばかり灸を据えてやっただけだ。踵を返し、上階へと向かう。地下から地上へと上がると、城内はすでにシュトゥラのみならず他の同盟国の騎士団が居座っていた。

そんな彼らを余所にクラウス達に合流しようと廊下を歩いている時、

「騎士オーディン。我らガレアの代表がお会いしたいとの事です。御同行願えますか？」

ガレアの騎士数人に道を塞がれた。代表と言えば、イクスヴェリアとヴィンツェンツ王子だったな。どの道、あとで一堂に会する予定だ。話ならその時でもいいだろうに。だがイクスヴェリアの顔を思い出すと、「判った。案内してくれ」そう思えてしまう。

ガレア騎士たちに礼を言われ、イクスヴェリアの元へと案内された。案内された部屋の中に居たのは、変身の魔導を使っていない事で本来の姿のままのイクスヴェリアひとりだけだった。椅子に座っていた彼女は立ち上り、スカートの裾を僅かに摘み上げて一礼。チェス盤の置かれたテーブルを挟んでの椅子に座るよう勧められた事で腰掛け、本題へと入る。

「まずは呼びつけてしまった事、申し訳ありませんでした、騎士オ

ーディン」

「いえ、構いません。フィロメーラ王女、それで私に何か用が？」

イクスヴェリアが名乗った偽名フィロメーラと言うと、彼女は少しばかり顔を曇らせたが、しかしすぐに凛とした表情へと戻した。

「一番にお礼を申し上げたくて。ガレアを、エテメンアンキの脅威より救っていただけたこと、ガレアの代表イクスヴェリア陛下に代わりお礼申し上げます」

「わざわざそれだけのために・・・？」

「ご、ご迷惑でしたか？　ごめんなさい」

「あぁ、そうではなく、私は私の仕事を果たしたまでですので、礼など不要ですよ」

しゅんとしていたフィロメーラは安堵したようにホッと息を吐いた。

「それでも受け取ってください。貴方様の御力が在ったからこそ、我らは勝てたと思うのです」

「・・・判りました。どういたしまして。・・・フィロメーラ王女、お話はそれだけでしょうか？　失礼ですが、お話がそれだけであれば、そろそろ仲間たちと合流しようと思うのですが・・・」

そう言って立ち上がろうとした時、「あの！　まだよろしいですかっ？」と呼び止められた。その必死さに「何でしょう？」と椅子に座り直した。フィロメーラは何かを言いたそうにしているが、言葉にしない。
彼女を落ち着かせて話し易くするために、腰を浮かせてテーブルの向かい側に居る彼女の頭を撫でる。ここで私とフィロメーラは小首を傾げる。フィロメーラの頭を撫でた時、彼女の反応がなんと言うか・・・不思議そうな顔をしたからなんだが・・・。

「あの、騎士オーディン。何をなさっているのですか？」

「え？　何を・・・って、頭を撫でているんですが・・・」

「撫でる・・・何故です？」

「え・・・？」

今まで生きてきた2万年の中でトップ3に入るであろう不可思議な質問をされたかもしれない。撫でる意味か。ふと小さい頃、父様と母様の命令で異世界に飛ばされ、その先で能力や武装を強制複製させられた旅から帰った時の事を思い出す。育ち切っていない子供の精神に負荷が掛かり、当時の私の心が壊れそうだった時、ゼフィ姉様に膝枕された。その時の事が脳裏に過ぎった。

――ルシルはこんなに小さいのに偉いね～。お姉ちゃんが、頑張ったルシルにご褒美をあげよう♪――

確かその時・・・額にキスをされ、頭を撫でられたんだった。ついでにハグをされ、豊満な胸に鼻を塞がれて窒息しそうだった。その時のゼフィ姉様は泣いていたんだ。私の事を想ってくれて。でも努めて笑ってくれた。その時に教えてくれた。頭を撫でる行為が示す意味。頑張ったこと、それが偉いこと、良い子だということ、それはつまり大まかに言えば・・・

「褒めているんですよ。頑張ったね、良い子だね、と」

「はあ・・・？」

フィロメーラがイクスヴェリアとして今回の戦争を頑張った事を暗に褒めてみたが、彼女は意味が解らずと曖昧な相槌を打つのみ。そのままフィロメーラの頭を撫で続けるていると、「でも、頭を撫でられるのは気持ち良いですね」と目を細めた。

リラックス出来たようで何よりだ。そしてようやく「お話がまだ・・・あるのです」と話してくれるようになった。だったら座り直そう、そう思って頭の上に置いていた手を離したら、フィロメーラは「あ・・・！」と引いた私の手を見た。

「・・・いえ・・・何でもありません」

撫でてほしいと目が口ほどにものを言っているから、「少しは我が儘を言ってもいいのでは？」ともう一度撫でる。安心しきったように頬を緩ませたフィロメーラだったが、すぐに悲しげな表情へと変えた。

「お礼ともう1つ、お別れを言いに来ました」

「お別れ？　あぁ私がベルカを去る前に――」

「いいえ。あの、信じてもらえないかもしれませんが、私の本当の名はイクスヴェリア。フィロメーラは偽名なのです。ごめんなさい。あなたを騙していました」

心底申し訳なさそうにカミングアウトしてくれたイクスヴェリアに、「知っていましたよ、陛下」とこちらもカミングアウト。すると「えっ？　いつからですかっ？　あ、御冗談を・・・？」と混乱、私が騙しているのかと疑ってきた。

「初めてお会いした時より判っていました。変身の魔導によって貴女がイクスヴェリア陛下のお姿になっているものだと。私の魔道の1つに、魔導による変化の真贋を見極めるものがあります。ですから陛下が魔導を使って変身している事に気付きました」

「そうなのですか・・・？　さすがは異界の魔導、と言ったところなのでしょうね。ですが、信じてもらうための手間が省けたのは幸いです。あまり時間が無いので」

それからイクスヴェリアは、先ほどの別れの話について語ってくれた。クラウスは言っていた。時代を超えて現れるイクスヴェリア。その真実を、本人から教わった。表世界に出ていない時、彼女は眠りについている。起きた時にはマリアージュを生み出しては戦場に送ると。それが兵器である自分の存在意義なんだと。そしてイクス

ヴェリアの活動時間は短いとも。

「私が起きていられる時間は、おそらくあと数日ほどになると思います。一たび眠れば、次に起きるのは何年先か判りません。ですから永遠の別れとなる前に、あなたにお礼とお別れを告げておきたかったのです。改めて、ありがとうございました。そしてさようなら。どうかあなたの戦いが、あなたの望む形で終わるよう祈っています」

イクスヴェリアは、自分の頭の上に乗っている私の手を大事そうに両手で取って包み込み、そっと額に当てた。少しの間、その体勢のまま互いに無言。私の手を離し、「ありがとうございました」と踵を返したイクスヴェリア。

見た目は本当に幼い少女だと言うのに、その小さく細い肩に課せられたのはあまりにも重い責務。スバルと出逢う前に、少しでも軽くしておきたい。だが今の私には何も出来ない。出来る事と言えば、

「イクスヴェリア陛下。おやすみなさい。またお逢いしましょう」

「え？　あ・・・・はい。おやすみなさい。いずれまたお逢いしましょう」

さようならではなく、たとえ叶わない事だとしても再会を約束する。これは残酷な事かもしれない。でも振り返って応じてくれたイクスヴェリアが見せてくれたのは、偽りのない微笑み。そしてイクスヴェリアは去って行った。私もまた部屋を後にし、改めてクラウス達と合流するために廊下を歩きだす。

「オーディン先生！」

「（よく呼び止められるな）・・・オリヴィエ王女殿下。それにリサと・・・」

振り向いた先、オリヴィエとリサ、エレス・カローラ、セリカ・グラシア、アンジェリカ・ド・グレーテル・ヴィルシュテッターの５人が居た。

「オーディン先生。その、ガーデンベルグ・ブリュンヒルデ・エグリゴリという方から言伝を預かりました」

「え？・・・・・なっ、あの子と会ったのですか！？」

最初何を言われたのか解らずに呆けてしまったが、理解できると同時にオリヴィエに駆け寄って両肩を掴み、「どこで会ったのですか！？」強く揺さぶった。

「っ、痛い、です・・・オーディン・・先生・・・」

「教えてくださいオリヴィエ王女殿下ッ！！」

「オーディンさん、落ち着いてください！」

「いくら何でもそれ以上の無礼は許しません・・・！」

「ぅぐ・・・！」

私とオリヴィエの間に無理やり割って入ってきたエレスに頬を殴られ後退させられた。痛みで我に返る。オリヴィエを護るかのように私の前に立ち塞がるエレスとセリカとアンジェリカ。リサはオリヴィエの肩を支えて、僅かな非難の目を向けて来ていた。

「・・・申し訳ありませんでした。先ほどの無礼、どうかお許しを・・・」

確かに無礼が過ぎたため、その場で土下座する。彼女たちが息を呑むのが判った。すぐに「お止め下さい！」とオリヴィエが私を立ち上らせようと腕を引っ張る。土下座と、オリヴィエの心遣いによって、私が働いた無礼は不問となった。そして改めてガーデンベルグからの言伝を承った。要約すると、

「必ず私を殺しに行くから、それまで待っていろ・・・か」

「いけ好かない奴だったわね」

「オリヴィエ様に向かってなんとも無礼極まりない人でした」

「見た目では好青年でしたけど」

「オーディンさんのご家族を殺害した者となれば、敵一択です」

それからオリヴィエやリサは"堕天使エグリゴリ"との戦いに力を貸すと言ってくれたが、丁重に断った。相手はテウタやヨハンなど

より圧倒的に格上の実力――と言うより火力が違いすぎる。それに、対"エグリゴリ"戦は空戦能力が必須となる。２人は空を自由に飛び回れない。"エグリゴリ"が陸戦に付き合うわけもなく、空から狙い撃ちにされて終わりだ。

元より誰も堕天使戦争に巻き込むつもりはない。"エグリゴリ"とは私独りで戦う。あの子たちの父としての責任。未だに終わらないヴァナヘイムとの因縁を、アースガルドの人間として終わらせるための義務を理由としているのだから。

。―。―。―。回想終わりだ。―。―。―。

案内された玉座の間は六角柱状で、上座には段差が在り、その段上に背もたれの高い肘掛椅子が３つ。王と王妃と王子が座するためのものだ。

右の玉座には初めて見るが王妃、左にはクラウス、中央にデトレフ陛下が座っていた。入り口から玉座までには金糸の刺繍が美しいレッドカーペットが敷かれている。その両側に整列したシュトゥラの近衛騎士団。

「此度、イリュリアとの戦争において大きな功績を上げたグラオベン・オルデンと、その誕生のきっかけを作りしエリーゼ・フォン・シュテルンベルク男爵。彼らの功績を称え、シュトゥラ勲章を授与する！　皆、盛大な拍手を！」

クラウスが玉座より立ち上ってそう言うと、割れんばかりの拍手が両側に居る騎士たち、そしてクラウスと王妃からも贈られる。アギトとアイリが「おお！」と耳を塞ぐが、煩わしそうではなく喜色満

面だ。私とエリーゼを先頭に二列縦隊で玉座の段前まで向かい、着いたところで横一列に並んで片膝をついて礼の姿勢を取る。

「グラオベン・オルデン団長、オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード」

「はいっ！」

クラウスに呼ばれて立ち上り、段上に立つデトレフ陛下の前に行く。陛下は、隣に立つクラウスが持っている５０ｃｍ四方の薄い箱の上よりあるモノを取った。それはマルタ十字（４つのＶ字の底部を結合させた形）に赤いリボンを付けた十字勲章だ。陛下は「有言実行。期待以上の働きであった」というお褒めの言葉と共に、

「そなたには勲章と共に、魔導騎士の称号を授ける」

聞き覚えのある称号を授け、私の正装（白色に変更した戦闘甲冑だが）の右胸に十字勲章を付けた。称号を授かるとは聞いていなかった上に称号名にも驚いた事で呆けそうになったが、「ありがとうございます」なんとか一礼をする事が出来た。

魔導騎士。はやてが持つ、二つ名のようなものだ。ミッドとベルカの魔導を扱う騎士であるはやてに相応しい二つ名。まさか私がその二つ名を貰う事になるとは。遥か未来、今の私が得た魔導騎士の二つ名を、私と同じように得る事になるはやてはどう思うか。それが少しばかり楽しみだったりする。

「シグナム・フォン・セインテスト」

「はい！」

元の位置へと戻ると同時に騎士甲冑姿のシグナムが呼ばれ、私と同じように十字勲章を上着の右胸に付けられた。唯一違うのは、陛下からではなく王妃の手によって付けられたと言う事だ。さすがに男である陛下が、女であるシグナムの胸付近に手を伸ばすのは憚れるというわけで、王妃が勲章授与に名乗り出た。

「ヴィータ・フォン・セインテスト」

「はいっ！」

続いてヴィータ、それからシャマルにシュリエルにアギトにアイリ、最後にザフィーラと勲章授与が行われた。ちなみに、みんなにフォン・セインテストを名乗らせたのは、ファミリーネームが無いと不便だと言う事もあるが、この際、家族としての証を立てておこうという考えからだ。

シュゼルヴァロードは残念ながら名乗らせるわけにはいかない。最下層魔界の貴族の性だ。名乗るには資格と覚悟が要る。現当主のルリメリアとリルメリアに認められると言う資格と、基本的に天上と仲を違えている魔族の名を負うと言う覚悟。彼女たちにはそのどちらも無い。だから私のファミリーネームを名乗らせた。

「では最後に。ラキシュ領はアムルを治める、エリーゼ・フォン・シュテルンベルク男爵。貴女には陞爵、そしてラキシュ領の下地域とイリュリア最北部のベクスバッハを合併する事で生まれる新たな

領地・アムル領領主の任を授ける」

「・・・・・・・・えええええええええッ！！？」

絶叫したエリーゼ。陞爵（功績で爵位が上がる事だな）くらいはあるかなぁとは思っていたが、１つの街の主から複数の街を治める領主に抜擢されるとは。周りから苦笑が起きた事でエリーゼは顔を真っ赤にして「申し訳ありません」と謝った。

それからエリーゼにも子爵を証明する勲章が授与され、式は終わった。拍手喝采で包まれた玉座の間を後にした私たちは、女中に応接室へと案内される。城に訪れてすぐクラウスと約束したからだ。茶を飲みながら待つこと十数分。クラウスが姿を見せた。

「それでは改めて。おめでとうございます、皆さん。エリーゼ子爵も陞爵おめでとうございます」

「あ、あの、クラウス殿下・・。子爵になったとは言えわたしはまだ１６歳の小娘。アムルの街ひとつ治めるのも一苦労しているのが現状です。それがいきなり領主なんて・・・」

「それについてはご安心を。王都から教育係、もちろん女性の方を派遣します。アムル領の初代領主として何分大変かと思いますが、我々が全力で補助いたします」

「そ、そうですか。それなら大丈夫・・・だといいのですが」

エリーゼはチラチラと私に視線をやってくる。ああ、私がただの人

間ならこれからも一緒に過ごして、エリーゼを手伝ってやりたい。でもダメなんだよ。私の最期は徐々に近づいて来ている。

「それでですね。皆さんに集まってもらったのは、あるお願いをしたいからなのです」

「お願い？」

「はい。・・・実は、皆さんの肖像画を描かせていただきたいのです」

話を聴けば、私たちをシュトゥラの後世に語り継いでいくために、私たちの肖像画が欲しいのだと。どうせ居なくなる私は問題ないが、シグナム達はどうしようか。もし肖像画が後世――"闇の書事件"の時にまで残った場合、何かしら問題が起きないだろうか。

「（まぁ何とかなるか）私は構わないが。みんなはどうだ？」

「オーディンがよろしいのであれば、断る理由などありません」

「我もシグナムと同意見です」

「あたしもいいぜ。下手に描かなけりゃな」

「私も綺麗に描いてもらえれば、それで満足です♪」

「マイスターと一緒なら、あたしもいいよ」

「アイリも、マイスターと一緒に描いてくれるならね　」

「だそうだ」

「ありがとうございます。では早速。画家はすでに待たせていますので」

クラウスは私たちとの間に置かれている足の短い長テーブルの上にある呼び鈴をチリンチリンと鳴らした。それを合図としたように女中数人が入ってきた。それから私たちは画家が数人と居る部屋に案内され、そこで1人1人の肖像画を描かれた。そして最後に、

「オーディンは椅子に座り、我々は椅子の傍に控えましょう」

「そうね。我らが主、オーディンさんは将らしくどっしり構えていてください」

「アイリ、マイスターの膝の上に座る！」

「ああ！　ズルい！　あたしも膝の上が好い！」

「おーい、喧嘩すんな～。オーディンの足は2本あるんだから、仲良く片方ずつの膝の上に座れ」

「「は～い♪」」

とまぁ騒がしいながらもグラオベン・オルデンの集合画が描かれた。私はバルーンバックアームチェア（背もたれの形状が風船を側面から見たようなやつだ）に腰かけ、右ももにアギトを、左ももにアイリを座らせ、右隣にシグナムとシャマル、左隣にヴィータとシュリエルを控えさせ、背もたれの後ろに一番背の高いザフィーラを、といった感じの構図で描いてもらった。

「むぅ、わたしだけ仲間外れ・・・。あのっ、わたしとオーディンさん2人だけの絵を描いてくださいませんか！？」

「ええ、構いませんよ」

「やった　オーディンさん、一緒に描いてもらいましょうっ　」

「それなら次は、私とオーディンさんでお願いしま～す♪」

「シャマルずるい！　あたしも」

「アイリもっ！」

エリーゼのこの言葉が発端となって、夜が更けるまで絵のモデルが続いた。安請け合いするものじゃなかったな。体のあちこちが悲鳴を上げてしまってるよ・・・トホホ。

「楽しかったな、本当に・・・」

でもま、悪くはない時間だった。

ＥｐｉｌｏｇｕｅⅢどっちが勝っても文句なしっｂｙ恋する乙女達

†††Ｓｉｄｅエリーゼ†††

ふと、わたしは思う。最近のアンナの様子はどこか変だって。
天気が良くて風が強くない日には、屋敷でやっていたようにターニャ邸の庭で執務を行うようにしてた。オーディンさんをシュトゥラに迎えた功績から数日前に子爵に陞爵し、なおかつ新領地アムルの領主になってしまった。本格的なアムル領の統治開始はもう少し先――少なくても2年くらいは、アムル領開拓に時間を掛かってしまうため、しばらくは今まで通りになるみたい。
まぁ領主としての心構えなどの勉強はもう始まってるけど・・・っと、話が逸れちゃった。

「オーディンさん。お茶のお代わり、如何ですか？」

「あ、ああ。貰うよアンナ。ありがとう」

「いいえ、どういたしまして　」

「「「・・・・・」」」

すっごい満面の笑みを浮かべるアンナ。中庭に設けられた円い食卓を囲って椅子に腰掛けて休憩してるわたしとオーディンさんとター

ニャは、使用人として立ち仕事してるアンナの、オーディンさんに対する態度の変わりようにちょっと変な汗が。
終戦後、オーディンさん達がヴレデンへと帰って来た時から、アンナは明らかに態度を変えていた。終戦の夜明け、オーディンさん達が帰って来た時、わたしはオーディンさんに抱きついて、おかえりを言おうとしていた。だからオーディンさん達の姿が見えた時、わたしやアンナ、モニカにルファにターニャは駆け寄った。わたしが目指すはオーディンさんの胸。両腕を広げて跳び込もうとした時、

――おかえりなさいませ、オーディンさん　――

わたしより先にアンナがオーディンさんの胸に飛び込んだ。これにはみんなが呆けた。わたしだって理解できずにポカーンとそれを眺めて、アンナが頬を赤く染めて謝りながらオーディンさんから離れてようやく、

――えええええええええええッ！？――

オーディンさん、そしてシグナムさんとザフィーラさんとシュリエルさん以外のみんなが叫んだ。そう、あの時からアンナは明らかにオーディンさんを意識し始めている。理由は判ってる。わたしと同じで、オーディンさんに命を救ってもらったから。アンナは洗脳されて、イリュリア戦力としてオーディンさんと戦った話は聞いてる。きっとアンナもそれが理由で、オーディンさんの事が好きになっちゃったんだ。

「アンナ。チーズケーキ（ケーゼクーヘン）、美味しかったよ。ごちそうさま」

「ありがとうございます♪　これからお仕事ですよね。頑張ってくださいね」

「ああ、ありがとう。それじゃあエリーゼ、ターニャ。また後で」

「あ、はい・・」「いってら～」

「いってらっしゃいませ」

困惑一択のわたしとターニャ、使用人として一礼するターニャに見送られながら、医者としてのオーディンさんは、医師見習いのルファとモニカを連れて他の街へと出張に行った。

「エリー、ターニャ。２人はどうだった？」

オーディンさんの食器を片付けるアンナにそう訊ねられてから、「美味しかったよ」ってターニャと一緒に答える。アンナは本当に嬉しそうに「ありがとう♪」ってお礼を言って、鼻歌を歌いながらターニャ邸に戻って行った。わたしはそれを横目で見送ってから、アンナの背中を最後まで見送っていたターニャに目をやる。

「ターニャ。アンナってやっぱりさ・・・」

「あまり考えたくなかったけど、間違いなくディレクトアに惚れてるよね。どうする？」

「どうするって・・・」

ケーゼクーヘンの一片を口に運びながら考える。オーディンさんの想いを独り占めにしたいわたしにとって、アンナの想いは・・・。でも、アンナは小さい頃からわたしの親友で、姉で、とっても大切な家族。そんなアンナの想いを、わたしは否定も邪険にもしたくない。

「私としてはエリーゼを応援したい。でもアンナとも長い付き合いだし、むぅ～」

「オーディンさんは1人。と言うことは、恋人として隣に立てるのはただ1人・・・」

想像してみる。オーディンさんと、その隣に居るわたしかアンナを。正直、第三者的に見ればわたしよりアンナの方がオーディンさんの隣に相応しいと思う。身長もわたしより高い１６４ｃｍだし、出るトコは出てるし、料理は出来るし、強いし、カッコいいし。最悪。どう考えても勝てる要素が無い。自分の貧相な体格を見る。そんなに膨らみのない胸、低い身長。有るのは子爵・アムル領領主と言う肩書。食卓に突っ伏して「わたしの魅力ってなに？」ってゴロンと頭を横にしてターニャを見る。

「子供っぽさ？」

「それだけ？」

「子爵、未来の領主」

「他に」

「う～～～～～ん・・・・・・・ごめん」

「うわ～～～～～～ん（泣）」

わたしにはそれ以上何も無かった。泣きたくなるのは当然だ。だけど「あっ、あったあった！」ターニャがわたしの頭を撫でながらそう言う。ずびっと鼻をすすりながら「なに？」って訊き返すと、

「ディレクトアへの想い！」

「ぶふっ？」

まさか真顔でそんな事を言われるなんて思いもしなかったから、思わず吹いちゃった。でも「うん。そうだよね。オーディンさんへの想いなら負けない！」そう言ってわたしは勢いよく立ち上がる。っと、その前に「ごちそうさまでしたっ」残りの紅茶とクーヘンをお腹の中に入れる。

「どこ行くの？」

「ん？　ちょこっとアンナのところまで」

アンナと本音で話し合うために。だからそう言うと、ターニャは「

喧嘩だけはやめてよ？」なんて言ってきたけど、喧嘩になんてならない。きっとわたしは、アンナの想いを・・・・

†††Ｓｉｄｅエリーゼ⇒アンナ†††

「ル～ルル～♪」

台所でオーディンさんが使った食器を洗い、「ふふ。美味しいって褒めてくれたわ♪」自信作のクーヘンが褒められた事に頬の緩みが抑えられない。それにしても。私は恋なんてしないなんて思っていたのに、してしまっている。しかも相手はエリーの想い人。応援するとか言っておいてこのザマ。口遊んでいた鼻歌は嘆息へと変わってしまう。けど問題はそれだけじゃない。私とエリーの想い人、オーディンさんがずっと隠してきた真実かもしれないもの。

（孤人戦争ルシリオン・セインテスト・アースガルド。テスタメント。世界の奴隷。数千年・数万年。原初王オーディンの末裔）

人間としての血と一緒にこの身に流れる"魔族"と言う怪物の血が見せたらしい記憶を思い出す。もしあれがオーディンさんの真実だとしても、私の想いは揺らがないと思うのだけど。でもエリーはどう思うだろう。オーディンさんへ抱いている想いは私より強いはず。だからこそ辛いわ。もしこの想いが叶わなかった時の事を考えると・・・いいえ、どちらかと言えば叶わない可能性の方がずっと高い。

「・・・・あっ」

両手の力をふと緩めてしまって、皿を落としてしまう。ガシャァンと皿が割れた甲高い音が耳を貫く。

「やってしまったわ・・・」

割れた皿の破片を眺める。とそこに「アンナ！？」エリーゼが勢いよく台所の入り口から入って来た。

「ど、どうしたのよエリー・・・？」

「どうしたじゃないよ！　お皿が割れた音がしたから、アンナが倒れたのかって・・・！」

「ちょっと待って。不注意で皿を落として割れたって普通思わない？」

「え？　アンナって完璧主義女だから、お皿を落とすなんてドジは踏まないでしょ？　だから落としたとなれば、そんな完全カチコチ女のアンナの体に何か不調が――あいたっ！？」

ゴチッ☆と、エリーの頭頂部に拳骨一発を振り落とす。するとエリーは頭を押さえて「痛い！」と睨んで来た。

「完璧主義。まぁそれはいいとするわ。でもね。最後に、女、とか付けない。せめて、者。それに、完全カチコチ女？　それじゃあまるで私は融通の利かない駄目女みたいじゃない」

「ほ、褒め言葉のつもりで言ったんだよっ？」

「どこがっ！？」

エリー。あなたの褒め言葉の語録の少なさとセンスの無さに、お姉ちゃん、ちょっと心配よ。それから文句を垂れるエリーと一緒に破片を片付けたあと、エリーに「話があるの」と真剣な表情で誘われた。

断る理由もなく、「判ったわ。お茶、用意するから少し待って」その誘いを受けた。食卓について、お茶で一服。向かいの椅子に腰かけるエリーは「ふぅ」と一息吐いて、深刻そうな表情を浮かべて「あのさ」と前置きした。

「アンナ。わたしの気の所為じゃないと思うんだけど、アンナってオーディンさんの事・・・」

「ええ。好きよ。家族としてではなく、1人の男性として」

なんとなくそんな質問をされると予想できていた。だから戸惑う事なく、そう簡潔に答える事が出来た。エリーは目を見開き、「っ・・・！」ティーカップを包み込むように持っていた両手が強張ったのが見て取れた。

「ごめんね。応援するとか言っておいて、私、オーディンさんのこと・・・」

「ううん。仕方ないって思うもん。嫌だっていうより嬉しいの方が大きいかな」

エリーのその真っ直ぐな瞳を見る事で私は解った。建前じゃなくて本音でそう言っているという事が。ああ、恋する乙女は強い、なんて何かの書物で読んだけど、あながち間違いじゃないかもしれないわね。エリー。私の想いを否定するのではなく、邪険にするわけでなく、受け入れてくれるのね。

「強く、なったわね・・・」

「ううん、弱いままだよ。強がってるだけ。本当はオーディンさんを独占したいって気持ちはまだあるから。でも相手がアンナだから。アンナだからわたしは受け入れられる。もし見ず知らずの女がオーディンさんを好きになったら――」

「なったら？」

「真っ向から斬り捨てる！」

ふふ。聞き分けの良いエリーなんてらしくないわ。お互いにお茶のお代わりをしてのんびりしていると、「それじゃ最後に」エリーが右手を差し伸べてきた。

「どっちがオーディンさんの心を射止めても文句なし。いい？」

「・・・・いいわ」

握手に応じる。満面の笑みを浮かべるエリー。キュッと胸が痛む。

どうしようかしら。言うべきなのかしら。オーディンさんの事。けど本人じゃない私に言う資格がない。でも、ただそういう可能性もあるというのは、言っておいた方が良いかもしれないわ。だから「待って、エリー」台所を出ようとしていたエリーを呼び止めると、「どうしたの？」と振り向いてくれた。

「もし、もしよ？　もしオーディンさんが私とエリー、両方を選ばないって事にな――」

「諦めないよ。わたしの一方的な想いでも、受け止めてもらえるまで諦めない」

「・・・選ばないじゃなくて選べないなら、どうする・・・？」

血の記憶で、オーディンさんの正体らしき人ルシリオンは言っていた。何千・何万年掛かろうとやり遂げる、と。明らかに人間の寿命を超えている数字。そんなデタラメな数字を出せると言う事は、オーディンさんは人間じゃない事になる。

おそらくオーディンさんは――世界の奴隷テスタメントというのは、一種の生体兵器なんだと思う。元イリュリア騎士団総長グレゴール（彼が率いていた騎士団と一緒に行方不明って噂だけど）のような不死性に改造された・・・・生体兵器。なら、たとえオーディンさんが目的を果たしたとしても、たとえ選んでもらっても、同じ時間を生きる事は叶わないかも知れない。

（気付きたく・・・知りたくなかった・・・！）

初めから報われない恋かも知れない、と知る。けど、私だって諦めたくなんてないわ。所詮は私の憶測。それが真実にして事実だとしても、何か報われる方法が在るかもしれない。だったらエリーのように自分の想いを、どうしようもないほど完全にフラれるまで貫き押し通すまでよ。

「その選べない原因を取り除いて、改めて選んでもらう」

「っ！・・・そう。そうね」

エリーはもう、私なんかが護るまでもなく強くなってしまったのかもしれないわね。話はそれでお終いにして、私はターニャ邸の掃除、エリーは執務に戻る。そして今日もまた大きな事件・事故も起きる事なく夜が更け、オーディンさん達グラオベン・オルデンの皆が帰って来た。

「腹減ったぁ～。アンナぁ、今日の飯なに～？」

「アイリもお腹空いた～」

「あたしも～」

ヴィータとアイリとアギトがお腹を鳴らしながら真っ先に食卓に突っ伏した。それを見たシグナムさんが「手伝え、お前たち」と注意をするのだけど、

「いいえ。構いませんよ。家事は私の仕事なので。シグナムさんも

食卓に就いていてください」

「しかし――」

「なら私が手伝おう。ほら、シグナムやシャマル達も席に就け」

オーディンさんが立ちっ放しだったシグナムさんにシュリエルさん、シャマルさんとザフィーラさんの肩を叩いて行き、席に座らせた。台所の卓に置いた料理を盛った皿を、オーディンさんが皆の座る食卓へ持っていく。

「「「私も手伝います」」」「我もお手伝いいたします」

「あ、あたしもやっぱり！」「アイリもやっぱり手伝うね♪」

「おいおい。そんなに人手は要らないぞ？」

2回目の往復の時に全員が一斉に食卓を立って、台所になだれ込んで来てしまった。オーディンさん。あなたが私たちの元へ現れて、世界がガラリと変わった。この日常をこれからも続ける事の出来る術が在るのなら、私は精一杯、見つけようと思うわ。

「遅れてゴメ～ン。って、みんなして台所に集合して狭くない？」

「立ち止まっていないで早く入ってよターニャ。・・・何やってるのみんな・・・？」

仕事で遅れていたエリーとターニャも合流。そしてターニャは何を思ったのか「エリーゼも交ざってくれれば！」とエリーの背中を強く押した。

「うわっ？」

「ちょっ、のわっ！？」

「ふえっ？」「ええっ？」

「きゃあっ？」「なっ・・・？」

「痛〝っ？」

半ば突き飛ばされた形でエリーはヴィータに倒れ込み、ヴィータはエリーに突き飛ばされて前に居たアギトとアイリを突き飛ばし、２人は前傾姿勢でシャマル先生とシュリエルさんの膝裏に突っ込み、ガクッと膝を他力で折られた事でシャマル先生とシュリエルさんがオーディンさんにしがみ付くように倒れ込み、

「えっ、ちょっ――ひゃぁああっ！？」

最後に私が巻き込まれ、倒れ込んできたオーディンさんに圧し掛かられて踏ん張る事が出来ず、後ろに倒れそうになった。

「「っ・・・！」」

背後に流し台が在ったおかげと、オーディンさんが踏ん張ってくれたおかげで倒れ込む事はなかったけれど、その代わりにオーディンさんと密着してしまっていた。思っていた以上に広い胸板に頬が当たり、「ぅ・・あ・・・えっと・・・」心臓がバクバクと激しく脈打つ。オーディンさんの背後からアギトの悲鳴らしきものや、アイリの「アイリもギュってして～」と言うお願いの声が聞こえてきた。

（エリーも勇気を出して言った事だし、私も言っておこうかしら）

「すまないアンナ。今退くから・・・ってアンナ？」

「オーディンさん。私は、あなたの事が好きです。知っておいてください」

離れようとしたオーディンさんの両腕を取って止め、そう告白した。さぁ、これで私もエリーと同じ、逃げ道を塞いだ舞台に立つ事になったわ。一歩後ろに引いたオーディンさんの表情は、なるほど。エリーの言う通り困惑一色ね。私にはその理由が解ってしまう。困らせてしまってごめんなさい。それでも私は、エリーもまた、あなたの事を好きになってしまったの。

「エリーゼだけじゃなくて、アンナまでマイスターに告白したぁぁぁあああああっ！？」

ドタバタ暴れるアギトと、それに乗じてアイリもまた「チューでもいいよ～」オーディンさんに迫り、２人を止めようとする皆。そん

な中、エリーが私とオーディンさんの元へ来た。表情は挑戦的で満足そうな笑み。私もエリーの笑みに応じるように笑みを浮かべ、エリーをまっすぐ見据える。

「えっと、エリーゼ？　これは――」

「アンナ」

「エリー」

「え？　なんだ？　何で解り合ってるみたいな・・・すまないけど状況を教えてくれ」

困惑しているオーディンさんの顔に向かって、私とエリーはビシッと人差し指を差し、

「「好きです！　この想い、ちゃんと考えてくださいっ！」」

2人一緒にもう一度告白する。少しの間黙っていたけれど、お手上げと言った風にオーディンさんは両手を上げ、

「了解。曖昧な返事をしないよう、全力で考えさせてもらいます」

本当に真剣な顔で、そう約束をしてくれた。言質は確かに取りました。エリーと笑みを浮かべ合う。この想いの結末は、誰も報われない恋で終わるかも知れない。だけど、それでも・・・・この想いは止める事が出来ない。だから・・・・！

「オーディンさん。私の想いの詰まった料理です。じっくり味わってくださいね」

積極的に攻めさせていただくわ。オーディンさん、あなたがベルカから去りたくなくなるようになるまで、エリーと一緒に。

ＥｐｉｌｏｇｕｅⅣお料理、頑張りますっ！！ｂｙシャマル＆シュリエル

†††Ｓｉｄｅシャマル†††

イリュリア戦争が終結してから早1ヵ月半。アムルの復興も順調に進んでいる。戦争前まで家族みんなと過ごしたお屋敷も、大工さん達や街のみなさんのおかげで少しずつだけど骨組みが出来始めた。

「あとどれくらいこのベルカに留まれるのだろうな・・・」

私の隣を歩くシュリエルが、屋敷の骨組みを見て寂しそうに囁いた。私たち"闇の書"の主、オーディンさんがこのベルカに訪れた理由。オーディンさんの家族を殺害した兵器、"エグリゴリ"の救済――と言う名目の全機破壊。

それが終われば、オーディンさんはベルカを去ると言っていたわ。それはつまりこの楽しい日常と決別しないといけないと言う事で。私たちは主がためだけの守護騎士ヴォルケンリッターー。だから私たちから苦言を漏らす事は出来ない。

「でもエリーゼちゃんやアンナちゃんが、きっとオーディンさんを・・・」

オーディンさんの事が好きだって告白したあの2人なら、止めてくれるかもしれない。どちらかと恋仲になって、全てに決着をつけて、

それからずっとこのアムルで・・・。でもそう思うと、胸がキュッと締め付けられるように痛むの。けどありえない。あってはならない感情。ううん、きっと何かの間違い・・・そう、これはそんな感情じゃないわ。

（私は人間じゃない。私は騎士。オーディンさんは主。あの人に抱ける感情は、家族愛のみ）

そう強く自分に言い聞かせる。そう、この感情は恋なんかじゃないわ。だから大丈夫。オーディンさんと、恋仲になった2人のどちらかが年老いて眠るまで、私は騎士として医者として守り続ける。自分の想いにそう見切りをつけ、午後は休みとなっている私とシュリエルはターニャちゃんの屋敷へと帰り、

「すんすん・・・良い香り♪」

厨房の方から香ってくるお昼ご飯の匂いに、「あ・・・」くぅ～ってお腹が鳴った。意地汚いと思いつつもシュリエルと連れ立って厨房へ向かい、「ただ今帰りました」鍋の前で佇んでいるアンナちゃんに挨拶。こちらに振り向いたアンナちゃんはニコリと笑みを浮かべた。

「お帰りなさいシャマルさん、シュリエルさん。昼食、もう少しですから待っていてください」

それだけを言って調理に意識を戻したアンナちゃんは鼻歌を口遊み始めた。なんて言うかすごく楽しそうよね。あれが恋する女の子の

持つ雰囲気というものなのかしら。少しばかり羨ましい。アンナちゃんを羨望の眼差しで見る。私ももう少しオーディンさん達を労いたい。

（あ、そうだわ。いい事を思いついちゃった♪）

「アンナ。頼みがあるのだが」

シュリエルがそう言って厨房に入って行く。遅れて「あの、私もお願いがあるの！」私もアンナちゃんの元へ行く。たぶんシュリエルも私と同じ考えだと思う。同じように今の生活を愛しているなら、オーディンさんを慕っているなら。私が勢いよく飛び込んで来ちゃった所為で、アンナちゃんは目を丸くしてしまっていた。

「ど、どうしたんですか？　シュリエルさんとシャマルさんが、私に頼み・・・？」

調理が終わったようで、火を止めて改めて私とシュリエルに振り返るアンナちゃんに、

「料理を教えてほしいの！」「料理の仕方を教わりたい」

やっぱり同じ事を頼み込んだ私とシュリエル。ジッと私たちを見詰めるアンナちゃんは少しの間だけ逡巡した後、「いいですよ」そう笑みを浮かべてくれた。そういうわけで、料理を学ぶ事になった私たち。

でもその前に、昼食を摂るために一度ターニャ邸に帰って来たオー

ディンさん達と一緒に昼食を頂いた。オーディンさんとシグナムとザフィーラは午後からも一仕事。ターニャちゃんは衣類不足の村へ、オーディンさんと合作した衣類を配送しに行く仕事で朝から不在。そしてエリーゼちゃんは、

――アンナに料理を習うんですかっ？　じゃあわたしも習いますっ！

――

一緒にアンナ先生を師事する生徒さんになりました♪

「――で？　なんであたしらは休む事が許されねぇんだ？」

午後からは休みであるヴィータちゃんが「ゆっくり昼寝するつもりだったのに」って不満そうに食卓から睨んでくる。食卓には今ヴィータちゃんと、そして人間の子供の背格好になるヴァクストゥームフォルムになってるアギトちゃんとアイリちゃんが腰かけているのだけど。

「あたしに休みなんて要らないのにな～」

「だよね～。マイスターと一緒に居られないなんて、アイリ、辛いだけだよ」

この一週間、休みなしでアムルや別の街にまで飛ばされていたから疲れているだろうと言うオーディンさんの心遣いに、２人はちょっと不満そう。ヴィータちゃんは「ホント元気だよな」って隣に座る２人を見た後にもう一度こっちを見て、

「でさ、さっきの続きなん・・・って、あぁなるほど。何で気付かなかったんだろ」

私とシュリエルとエリーゼちゃんが前掛(エプロン)けを借りて着用した姿からようやく察してくれたよう。シュリエルだけは料理の邪魔にならないよう後ろ髪をリボンで結っておさげにした。

「お前らが料理すんのは良いけどさ、大切な食材を無駄に灰にすんなよ？」

「判ってますよ～。アンナちゃんに教えてもらうんだから、そんな失敗しません」

私たちに料理を教えてくれるのは、家事――特に料理を一手に引き受けてくれているアンナちゃんだもの。その料理の腕は誰もが認めているもの。きっと教え方も上手に決まってるわ。期待を籠めてアンナちゃんに振り向くと、

「エリーが素人なのは判っているからいいとして、お２人は料理経験とかありますか？」

そう訊かれたから、シュリエルと一緒に首を横に振る。だってこんな人間らしい一般生活をした事なんてないんだもん。すべてが初体験なのよね。アンナちゃんは「そうですか」と唸りながら、１ｍほどの高さの木箱――箱の中の食材を魔力の冷気で保存する保冷庫から、真っ白い殻の卵を４個取り出す。

「オーディンさん直伝の初心者料理、卵焼きを作りましょう」

エリーゼちゃんと一緒に「卵焼き・・・」と呟いて、その完成形を思い浮かべる。あの甘くて黄色くてふわふわで、何個でも食べてしまえるようなあの美味しい卵焼きを、今から作る事が出来る・・・。それに、オーディンさん直伝と言う事で私のやる気も、さらにもっと強くなったわ。

「むぅ。あの素晴らしい料理が初心者級なのか・・・」

「パンに肉や野菜を挟んだだけでも十分な料理ですが、やっぱりそれでは物足りないでしょうから」

確かにそれくらいなら師事しなくても簡単に作れそうなのよね。エリーゼちゃんはそれを聞いて「うん。わたしはそう言うのより、手間が少し掛かるようなのがいい」って言う。簡単すぎちゃ逆にありがたみが無いものね。でも難しすぎると悲惨な結果になりそうだし。難しいところだわ・・・。

「ええ。だから私が前にオーディンさんから教わった異世界の料理や、ベルカの料理のいくつかを日を分けて教えるわ。食材と調味料に関してはオーディンさんの魔導のおかげで、ある程度の消費は許されますし」

厨房の隅っこには、食材（おもに野菜）を容れた木箱がそれぞれの種類別に数箱、砂糖や塩と言った調味料を別々に容れた甕（かめ）が数口置

かれている。それらすべてに、増殖上等・常に万全という文字（それらからは魔力を感じる）が書かれている。
アンナちゃんが言うには、この言葉通りに容れてある物は使った分だけ増えて、決して腐らず常に最高の状態を保つみたいなの。それら魔法の容器類は、私たち"闇の書"がオーディンさんの下へ転生する前に、オーディンさんから頂いた物と言う事。

「では、これよりアンナ先生の料理教室を始めます」

「「「お願いします」」」

早速、私とシュリエルとエリーゼちゃんは習う順番を決め（エリーゼちゃんは加入が最後だったからと先を譲ってくれた）、２つ在る竈（かまど）の前に私とシュリエルが立つ。アンナちゃんが用意したフライパンは四角い形状の物（これもオーディンさんからの贈り物）で、コレであの卵焼きをいつも作っているとのこと。

「まず卵をよくかき混ぜます」

私たちは手渡されたボウルを作業台に置いて、卵を割・・・あ。言われたとおりにボウルの端でコンコンと卵にヒビを入れようとしたのだけど、力み過ぎたのか手の中で割れちゃったわ・・・。シュリエルが「む？」って唸るから見てみれば、私と同じように手の中で割れた卵の所為で手がグチャグチャ。

「あー、もっと優しくしないと」

「力加減が難しいな」

「う～ん、難しいわね～」

「テメェら、殻入りの卵焼きなんか作ったら許さねぇかんな～」

食卓についているヴィータちゃんから野次が飛んできた。ヴィータちゃんもやってみればいいわよ。絶対に砕いちゃうんだから。勿体ないけれどダメにしちゃった卵を掃除して、もう一度卵を割りから。今度は強くならないようにコンコンと。コンコンと。コンコンコン・・・コンコンコン・・・。

「いつまでコンコンやってんだよシャマル、シュリエル。狐でも呼ぶ気か？」

「さすがに優しくし過ぎですよ」

また野次を飛ばすヴィータちゃんと少し呆れているアンナちゃん。だって本当に難しいんだもの。焼く以前に割る事から苦労するなんて。なんとかヒビを入れてボウルの上でパキャっと割ったのだけど、

（殻が入っちゃったわ・・・）

指先でちょんちょん小さな殻を取り出す。私の隣のシュリエルは「よし」満足のいく割り方が出来たようだった。とりあえず殻は全部取れたと思う。そしてもう1個の卵を割る。あ、また殻が。チマチマと小さな殻を取り除く。ふぅ。次のアンナちゃんの指示を待つ。

「お2人とも、この泡だて器で卵白と卵黄が一体になるまで混ぜてください」

手渡された泡だて器でボウルの卵2つをかき混ぜる。視線はボウルの中にのみ。一心不乱にかき混ぜる・・・と、「きゃっ？」頬に何かが跳ねた。顔を上げて頬をに触れると、「シュリエルさんっ、張り切り過ぎです！」アンナちゃんの悲鳴が聞こえてきた。

シュリエルを見れば派手に卵をボウル外に飛び散らしていた。一心不乱にかき混ぜ過ぎよ、シュリエル。注意されたシュリエルは「申し訳ありません」ってしゅんとなって謝った。シュリエルだけ始めからやり直し。シュリエルの卵割りを隣から眺める。正直、私より上手だった。教わる通りにボウルに適量の水と塩を入れて、もう一度かき混ぜる。

「――はい。次は、これです」

アンナちゃんがまた、別のボウルを4つ用意した。内2つには熱いお湯。残り2つにはバター。次の作業は湯銭というものらしく、熱いお湯の入ったボウルにバター入りのボウルを浮かせて、バターを溶かすとのこと。これは労せず完了。溶かしバターを卵のボウルに入れて混ぜる。そしていよいよ、「焼きましょう」アンナちゃんがフライパンを竈で温め始めた。

「いよいよね」

「ああ。いよいよだな」

シュリエルと頷き合う。それぞれフライパンの前に立ち、アンナちゃんに言われるままに食用油をフライパンに敷く。少し煙が立ったところで溶き卵を半分だけ投入。ヘラで全体に引き延ばして、ヘラの角で溶き卵をほぐす。アンナちゃんからは「焦らないでくださいね」と声を掛けられるけど、ちょっと焦げた臭いがしてきて、

「アンナちゃん！　嫌な臭いがしてきたのだけど！？」

「落ち着いてください！　ヘラで奥の方から手元にまで折り畳むように――」

「無理ですぅ――――っ！」

堪らず私は竈の火からフライパンを遠ざけてしまった。私は大きく溜め息を吐いて、「む、これで、どうだ」って悪戦苦闘しながらも卵焼きを巻いていくシュリエルを見る。シュリエルはすごいわ。失敗しているのが判っていながらも最後までやり遂げちゃうんだもの。私のように逃げ出さずに。焦げてしまっているシュリエルの卵焼きを見、私は「アンナちゃん。このまま続けられる？」と訊ねる。

「ええ。出来ますよ。今度は落ち着いて行きましょう」

フライパンを竈に戻して熱を入れ、先に入れた溶き卵を手前にまでクルクルと巻きながら寄越し、残り半分の溶き卵を空いた奥に投入。手前に寄せていた巻いた卵焼きを、今度は奥に向かって転がして、2回目に入れた溶き卵ごと巻いて行く。結局、私も失敗作。焦げて

いたり崩れていたりと散々な卵焼きになっちゃった。

「で？　その失敗作をあたしらに食わせようってか？」

半眼で睨んでくるヴィータちゃん。そして「えっと、あたしは・・ちょっと・・」とアギトちゃんで、「アイリ、要らな～い」とアイリちゃん。くすん。そうよね。さすがに嫌よね。シュリエルもどことなく落ち込んでる。

「それじゃあわたしがいただきます」

「私もいただきます」

そう言ったエリーゼちゃんとアンナちゃんが躊躇いもなく私とシュリエルが作った卵焼きを手でひょいっと掴んで口の中へ。目を瞑りながら「ふむふむ」ともぐもぐ食べて・・・ガリ☆って嫌な音が、私の卵焼きを食べていたエリーゼちゃんの口の中から聞こえた。咀嚼を止めるエリーゼちゃん。原因が何なのか判る私は「ごめんなさい」と深々と頭を下げて謝る。きっと殻が残っていたのね。全部取り除けたと思ったのだけど。でもエリーゼちゃんは嫌な顔一つせずに、最後まで食べて呑み込んでくれた。

†††Ｓｉｄｅシャマル⇒シュリエルリート†††

初心者の料理と言う事でアンナに卵焼き（私の好物となったものだ）に習ってみたのだが、想像以上に難しい。私とシャマルの卵焼きはお世辞にも見た目も味も良い物とは言えない出来だった。

「エリーゼ、アンナ。そいつらに遠慮しなくてもいいんだぜ？　不味かったら不味い、でさ」

「初めて料理したのなら及第点かと」

「卵の殻・・わたしもやっちゃうかもしれないなぁ～」

ヴィータの言う通りだ。正直な、嘘偽りなく感想を言ってほしかった。とは言え、とりあえず不味いと言われなかったのは精神的に助かった・・・。ホッと胸を撫で下ろす。それからはエリーゼ卿と交代しながら、まずは卵焼きを完全にものにするまで、ひたすら練習する事になった。

作っては皆で試食。それを繰り返していた頃、試食係のヴィータ、アギト、アイリはついに、

「げふっ。もう卵焼き、飽きた。肉とか、生野菜でもいいから食いてぇ・・・」

「しばらく卵料理は・・うぷ」

「コケーコケーコケコッコー」

卵焼きの試食を拒否。特にアイリの精神は崩壊寸前だったため、卵焼きの修業はまた後日という事になった。最後に作った自作の卵焼きを口に含む。うむ、一品目の時に比べればまともなモノにはなっていると自己評価。

「シュリエルのは美味しそうよね・・・私との差は何かしら（涙）」
私のと自分のを見比べては食べ、そして気落ちするシャマル。シャマルは最後まで焦がしていたな。私との差はないと思うのだが・・・。

「ただいま・・・って、厨房に集まって何をしているんだ？」
オーディンのご帰宅だ。食卓に突っ伏していたアギトとアイリが真っ先に「お帰りマイスターっ♪」飛んで行って抱きつく。微笑ましい光景だ。私たちもそれぞれ「おかえりなさい」と挨拶して、ここに集まっている理由を告げた。
オーディンは私たちの話を聴き終わると、

「シャマル、シュリエル。今度は私が料理を教えよう。いつからがいい？」

あまりに突然、しかし心が躍る提案を申し出てくれた。だから「お疲れでなければ、お願いします」気遣いを忘れず、そしてその提案を受けた。シャマルもまた「すぐにでもっ！」即答し、オーディンは「よし」と頷き、厨房に入って来た。

「アンナ。夕飯は私が作るよ。料理の先生、大変だったろ？　ありがとう」

「い、いえ。エリーやシャマルさん達に教えるのはとても楽しかっ

たので、大変ではありませんでしたよ♪」

頭を撫でられた事で嬉しそうに俯くアンナ。しかしエリーゼは僅かばかり不満そうだ。それを察知してか、オーディンは私たち全員の頭を順に撫でて行った。オーディンに頭を撫でられると、とても胸の奥が温かくなる。不思議な感覚だ。

「さてと。シャマルとシュリエルに教えるのは、今後きっと2人の役に立つと思う料理・・・和食だ」

オーディンは胸を張って言ったのだが、「ワショク？」聞き慣れない単語に私たちは全員小首を傾げる事に。そんな中、エリーゼが「それって、わたしには教えてもらえないんでしょうか？」心底寂しそう、そして悲しそうにそんな事を訊くものだから、オーディンは慌てて「違う違う」首を横に振る。

「ちゃんと教えるよ。シャマルとシュリエルを名指ししたのにはちゃんとした理由があるんだ。それは一応、私個人の理由だから言いたくないんだが・・。とにかく和食とは、私が何度か世話になった世界の一国の料理なんだ」

オーディンは思い懐かしむようにどこか遠い目をして、「また行きたいな・・・」そう漏らした。オーディンがそこまで思い馳せる世界。「私も、行ってみたいです」自然とそう口にしていた。きっと良い世界なのだろう。オーディンのお顔を見ればそれくらい察しが付く。

「あたしも行ってみてぇな」

「私も行ってみたいですっ」

「あたしもっ！」

「アイリも行ってみたい！」

「というわけで、いつか連れて行ってくださいねオーディンさんっ♪」

エリーゼが最後にそう締め、オーディンはただ儚げに笑みを浮かべて頷くだけだった。

「・・・夕食にまでそう時間も無いから、和食の初歩の初歩、味噌汁を作る」

また私たちは聞きなれない単語――おそらく料理名であろう「ミソシル？」に小首を傾げる。オーディンは「我が手に携えしは確かなる幻想」と詠唱し、何も無かった空間より私の腰ほどにまである高さの甕が2口出現させた。

その甕にも、増殖上等・常に万全、という魔力の籠った文字が記されていた。1口の甕の蓋を開けたオーディンの隣から中を覗き込む。入っていたのは茶色いペースト状の何か。人間の子供大から元の小人大にまで姿を戻したアイリが飛んできて、「ねえねえマイスター。それ、な～に？」そう尋ねた。

「これが味噌だ。これを溶いたスープを、味噌汁と言う」

これがミソか。変わった香りがする。そしてもう1つの甕の蓋を開けたシャマルが「粉？　粒？　でもなんか良い匂い」と言っている。オーディンが言うにはダシなるものを顆粒状にした物だと言う。そのような説明をしながらオーディンは鍋に水に入れ熱し、熱湯にミソ、顆粒ダシを入れて溶かす。

そして火を止め、「今回は少々手を抜いたが、今はとりあえずこれで完成だ」と私とシャマルを見た。シャマルは「たったそれだけですかっ！？」その手軽さに驚いていた。確かに、これなら料理下手な私たちでもきっと・・・。

「飲んでみてくれ、みんな」

小皿にミソシルを注いでもらい、飲む。「美味しい」それが私たちの感想だ。手抜きでこの味とは。ミソシルの調理に手塩を掛けた時、その美味さはどこまでの物になるのだろうか。それから私たちは教わる通りにミソシルを何度か作り、「ま、こんなものだろ」オーディンにお墨付きをもらう。

「つうかすげぇよな、オーディン。3人に教えつつ夕飯作り。しかもミソシルの試飲までやるって」

「マイスター。お腹壊したりしたら・・・」

「ちょっとアギトちゃん？　私たちが劇物を作ってるように言うのはどうかしら」

「大丈夫だよ。味噌汁を不味く作るなんて、それこそ才能が要るから」

確かに。だからこそシャマルも卵焼きのような失敗はない。鍋の熱湯の量に対してミソや顆粒ダシの分量が適量であればまず美味しい。

「それで今オーディンさんが作っている・・・えっと、チャーハン？も、このミソが生まれた国の料理なんですか？」

「世界は同じだけど国は違うんだエリーゼ。よっと・・・！」

底が丸い大きなフライパン（チュウカ鍋というらしい）をオーディンが大きく振るうと、チュウカ鍋に入っている卵が混ざった白米（ライス）（魔導を惜しむ事なく使って一瞬で炊いた）、ハムやソーセージと言った具材が、

「「「「「おお・・・！」」」」」

宙を舞う。皆が皆、感嘆の声を上げ、力強い調理法を披露するオーディンを眺める。塩やコショウ、しょうゆと言った調味料を入れ味付け。それで完成のようで、作業台に置かれたターニャ邸に住まう私たち人数分の皿に盛って行く。

「美味そうな匂いしてきたぁぁーーーっ！」

「一気に元気を取り戻したなヴィータ。誰か、皿を食卓に運んでく

れ」

「「はーい！」」

食卓へと運んで行く手伝いを申し出たアギトとアイリ（私たちの時は何もしなかったのだが・・・）が、皿に装われたチャーハンの香りを嗅ぐ。手伝わないヴィータに比べれば2人は良い子だが、他の者が食べる料理の香りを、「すぅはぁすぅはぁ」これでもかと言う風に嗅ぐのはどうだろうか。皿が食卓へと移動すると、他の者たちも釣られるように食卓へと移動していく。その光景を私はオーディンの隣で眺め、オーディンと共に苦笑する。

「ライスにはこういった調理法もあるんですね、勉強になります。エリーもメモくらいしておけば？　オーディンさん。あとでライスを使う料理を教えてください」

「卵以上に焦がしそうなんだけど。ライスって・・・」

「アイリ、もう我慢できないもん。・・・うわっ、美味しい！」

「コラ、アイリちゃん。つまみ食いはダメよ。メッ」

「でも冷めちゃう前に食べたいよ」

「ターニャ、シグナムさんとザフィーラさんはまだ帰ってないんだよね」

厨房に、くぅ～、というお腹が鳴った音の大合奏が響いた。エリーゼとアンナ、シャマルが顔を赤らめ、恥ずかしげにこちら――オーディンへと振り向いた。私もお腹は鳴りはしたが、そこまで恥ずかしがるような事なのだろうか・・・？

「とりあえず冷めないように・・・」

オーディンが指を鳴らすと、食卓に並べられた皿全てに蒼い魔力膜が張られた。熱を逃さないようにするための結界だそうだ。万能すぎる・・・オーディンの魔導。それで熱は逃げなくなったが、チャーハンの香りもまた閉ざされ、ヴィータとアギトとアイリがガックリと肩を落とした。

「主食（チャーハン）は終わったし、次は副食だな」

「あの、オーディン。私もお手伝いしてよろしいでしょうか。お邪魔はしませんので」

今なら私が一番先にオーディンのお手伝いが出来る位置に居る。だからこそ断れるのを覚悟の上で申し出てみた。しかしそんなものは杞憂で「ああ、頼むよ」笑みで応えてくれた。それから私はもちろん、シャマルにエリーゼ卿、アンナの４人で自発的に手伝いをし、オーディンの指示の下に夕飯を作り上げた。作り上げたのだが・・・

「作り過ぎたな・・・」

「「「「ですね・・・・」」」」

食卓に並ぶ料理の数々。チャーハンに野菜炒めにスープに、肉ダンゴなるものなどなど。大人数での2食分はあろう量だ。料理の楽しさを知ってしまった私とシャマルとエリーゼ卿が半ば暴走気味となってしまい、気付けば・・・という事に。

「私とした事が。この量、大食らいのヴィータやアイリ、ターニャだけでは、ちょっとな」

「それじゃあモニカとルファも呼びません？」

「それはいいわね。早速、呼びに行ってみましょう」

こうして本日の夕飯は晩餐会となり、騒がしいながらもとても楽しい晩餐会だった。楽しい。そう言った感情を抱く事が出来、そしてそれをこれからも続けたいと強く願い、祈る。だからこそこの日常を邪魔する者は・・・・

（全力を以って排除する）

ＥｐｉｌｏｇｕｅＶこれも騎士の仕事・・・か？ｂｙシグナム＆ヴィータ

†††Ｓｉｄｅシグナム†††

「ようやく見つけましたね・・・」

「ああ・・・・長かったな・・・・」

私の隣で疲労困憊と言った風のオーディンへ声を掛ける。そう言う私も、そしてアギトやアイリ、ヴィータ達も疲労を見せている。

「久々に暴れられるかもって思ってたんだけどなぁ～。入口探しでもうヘトヘトだ」

「こら、ヴィータちゃん。戦いたいなんて不謹慎よ。せっかくの平和なのに」

「判ってんよ。てか、もたれかかんなよっ、重いだろうが！」

「だって疲れたんだもの～。あと、そんなに重くないもん～（泣）」

「泣くなっ、うっとおしい！」

「ヴィータちゃん、つぅ～め～た～い～（泣）」

「シャマル。私にもたれかかると良い」

「へっ？　あ、えっと、その・・・はい、じゃあお願いします」

オーディンを筆頭とした我々グラオベン・オルデンは今、元イリュリア・ベクスバッハ地区――現シュトゥラ領土（あと数ヵ月で正式にシュトゥラ・アムル領となる）へと赴いていた。

事の始まりは昨日、クラウス王子の使者がオーディンの元を訪れた事だ。その者の用件は、この地区のどこかに人体実験施設が在るらしく、その調査を願いたい、というものだった。情報源にして依頼主は、イリュリア王バルデュリス。バルデュリス王も大変な妹を持ったものだな。

件の人体実験施設と言うのも、元女王テウタ派の連中が秘密裏に造ったものらしい。もちろん王はそんな施設が在るなど知らず、戦犯として投獄されている元テウタ派の研究者たちへの聴取の果て、初めて知ったとのこと。だからこそすぐに調査、発見次第破壊してほしいという依頼だ。

「んん～・・・なんかお尻拭いさせられてるっぽいよね～」

「縮小されたって言ってももうイリュリア騎士団はベクスバッハ地区には入れないから、自然と調査はシュトゥラ側になっちゃうから仕方ないよ」

オーディンの傍を飛んでいるアイリとアギトが溜め息交じりに話している。その調査班に抜擢されたのが、ベクスバッハ地区に最も近い街・アムルを本拠地とし、戦力としても十分すぎる我々グラオベ

ン・オルデンだ。
依頼を受け、今朝早くからベクスバッハ地区の荒野地帯へ赴き、施設を探し続け、昼を過ぎてからようやく発見することが出来た。施設の入り口である足元――地下へと通じる鉄扉へと視線を移す。地上に施設が無いと調査の結果判明し、地下に在るだろうと考え入り口を探し・・・発見した。何時間と歩き回った疲労が今、我々全員を襲っていた。

「疲れている者は休んでいてくれ。私は先に調査に行っているから」

オーディンはそう仰り、起動していた"エヴェストルム"で足元の鉄扉を貫き、粉砕。我らが御守りするべき主であるオーディンをお1人で調査へ行かせるわけもなく、

「いえ！　私も共に参ります！」

「あたしも！」「アイリも！」

シュリエルとアギトとアイリが真っ先にオーディンの隣に立ち、次いで私にシャマルとザフィーラ、最後にヴィータが「しゃあねぇ、行くか」と"グラーフアイゼン"を起動し携えた。それから鉄扉を潜り、地下深くへと続く階段を下りて行く。階段を含め地下の通路はかなり広く、大人が横に１０人と並んでもまだ余裕があるほどだ。光源は壁面の内部に埋め込まれた魔力灯で、一定間隔を開けて設けられている。

「それにしても人体実験施設なんて。一体、何をしようとしていた

のかしら・・・？」

「名称からして外道に違いないだろう。不死者グレゴールやキメラ達のような生体兵器の生産所かもしれないな」

殿を務める私とザフィーラの前を行くシャマルとシュリエルの横顔が不快感に歪む。あまり表情を出さないシュリエルですらあもハッキリと出るとなると、おそらく今の私の顔も似たようなものだろう。

「キメラと屋内での戦闘かぁ～。メンドそうだけど、やり応えはあるよな」

「何だ、ヴィータ。騎士から戦闘狂に鞍替えか？」

「違う！　そんなシグナムみてぇな末期症状なんかじゃねぇ！」

何かしら納得のいかんことを言われたな。まるで私が戦闘狂のような言い草だ。オーディンに慌てて答え、なおかつ私を指さしているヴィータに「待て。私は戦闘狂ではないぞ」と反論する。すると何故かオーディンとザフィーラ以外から「え？」などと、信じられないと言った風な目を向けられてきた。む。いろいろと反論したいが、その前にオーディンが「扉だ」と立ち止まった。通路の先、そこにはただ壁があるのみだった。行き止まりに思えるのだが・・・。

「全騎、戦闘用意」

いや、とにかく今は「ヤヴォール」オーディンの言葉を信じ、我々はいつでも戦闘に臨めるように意識を切り替える。オーディンが壁へと近づき右手でそっと触れた。そして何かを呟き、バチバチと右手から壁面全体に電流が流れたと思えば、ゴゴゴゴと壁が下降していく。

「上下開閉式の扉だ。・・・・防衛機構や罠などは無いようだが・・・」

「私とザフィーラが先を歩きます。ヴィータ、シュリエルは後方警戒だ」

先頭に立って歩みを進めるオーディンより前に出、守護騎士としての役を担う私とザフィーラ。そこからまた少し進んで行くと、通路は少しずつ狭まって行き、左右に分かれ道がいくつも出て来たが一度も曲がることなく直進し、そして1つの鉄扉の前に行きついた。

「扉の向こうから複数の魔力反応。気を付けろ」

オーディンに警告され、我々は武装を構え、臨戦体勢に移る。オーディンに触れられた鉄扉は中央から分かれ左右へと平行移動、音もなく開いて行く。開き切った鉄扉の向こう側の様子が見えた。鉄扉の奥には敵など居らず、円い部屋が在った。天井には巨大な魔力灯。床には壁面に沿うように棺らしき物が何十と円形に並べ置かれていた。

「これ、全部・・棺なの・・・？」

我々は室内へと入り、宝石のような鉱石造りの透明感のある棺の中身を見る。棺に収められていたのは、「・・・全員、子供だ・・・」だった。赤子からヴィータほどの幼さ子、エリーゼ卿ほどの歳の子も居る。シャマルは見るのも辛いと言った風に目を逸らした。

「コイツら全員が人体実験されたってぇのか・・・？」

「だとすればイリュリアの研修者とは犬畜生でも温い外道だ・・・！」

「いや、待てみんな。この子供たちは生きている・・・！」

オーディンはそう言って1つの棺の蓋を開け、まるで死人のように横になっている少年の頬にそっと触れた。シャマルもまた医者としての顔になり棺を開け、収められていた少女の首筋に手を添えてから「本当です！　この娘も生きてます！」嬉しそうに告げた。

「みんな、棺の蓋を開けてくれ！　一気に治癒させる！」

――我を運べ、汝の蒼翼（アンビエル）――

オーディンはそう仰り、背より蒼く光り輝く12枚の剣翼を展開した。我々は指示に従い、オーディンと共に何十と言う棺の蓋を開け放って行く。

――女神の祝福（コード・エイル）・ｖｅｒ・Ｇｅｂｕｒａｈ――

そして剣翼が無数の羽根となって舞い散り、1枚1枚が棺の中に眠る子供たちの元に降りる。羽根の触れた子供たちが蒼い魔力膜に覆われていく。そして数分とせずに子供たちは一斉に起きたのだが、しかし子供たちが起きたことで、今まで生きてきた中で一番苦労する羽目になろうとは・・・・。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒ヴィーダ†††

「うわぁぁ～～～～ん（泣）」

「ママぁ～～パパぁ～～（泣）」

「きゃはははは！」

ああもう、うるっせぇなぁ！　ガキどもが起きたと思った途端に泣くわ笑うわ走り回るわ。最初は、人体実験されてその上死んじまったのかって思って同情しちまったけど、その同情もすぐに薄れちまった。

「うげっ！？・・・って、痛ぇなオイっ！　誰だっ、あたしの後ろ髪引っ張った奴ぁっ！」

「わぁ～～い♪」「逃～げろぉ～♪」

今日もオーディンに結ってもらった自慢のおさげが思いっきり引っ張られたから、変な呻き声出しちまったじゃねぇか。怒鳴って振り向く頃にはもう後ろには誰も居ねぇしよっ。まぁ犯人らしいガキ（

５歳くらいの男の）２人を標的として捕捉。さぁ追いかけて取っちめようかと思えば、「わぁ～～い！」ガキ（男）の１人があたしの騎士甲冑のスカートを勢いよく捲って行きやがった。

「ぬわっ？」

すぐにスカートを押さえる。そんで「クソガキ！！」あたしのスカートを捲って行ったガキを睨んで、ハッとしてオーディンを見る。捲られた時に下着を見られたかもしんねぇって思ったんだけど、オーディンはガキどもの中で最年長（１５歳だと）でリーダーであるらしい女――フェリと話してる最中だった。視界に入らないところに居てよかった。変に恥をかかずに済んだからな。そんじゃま、悪ガキを成敗しに行くか。

「わぁ～～い！」

「きゃあああっ！？って、見ないでくださいオーディンさん！」

「あ痛ぁぁああっ！？」

「あ、こらっ、アダム！　やめなさい！」

オーディンの隣に居たシャマルのスカートを捲ったガキ――アダム。シャマルは下着を思いっきりオーディンに見られたから顔を真っ赤にして、オーディンの頬を手加減なしの平手打ち。うわぁ、いってぇ。んで、叩いたことに悲鳴を上げて何度も「ごめんなさい！」って謝るシャマルに、オーディンは笑顔で許してる。つうかアダムっ

てガキはとんでもねぇな。ガキどものリーダーのフェリの言う事すら聞かねぇ。

「むおっ！？」

少し離れているところであたしらと同じように子守りをしているはずのザフィーラから、普段なら絶対に聞かねぇような変な声が。そっちを見てみると、あたしよりちょっと小さいくらいの男と女のガキ2人を背中に乗せてるザフィーラが居て、「毛、毟られたんだな・・・」女のガキの手にはザフィーラの毛らしきものが。それでもザフィーラは怒ることも、振り落すこともしないで「しっかり掴まっていろ」って言って、また走り出した。

「ぎゃあぁぁあああっ！」

「うわっ！？　アイリが食べられる！？」

「アイリ、美味しくないよ～～～っ！？」

また違うところじゃアイリが赤ん坊に掴まって、脚から先をしゃぶられてた。何とかアギトに助けられたアイリだけど、アイリを奪われたことで赤ん坊が派手に泣き叫ぶ。そこに登場すんのが、子守り出来そうな奴には到底見えねぇ（つうか、あたしら全員子守りに向いてねぇよ）シュリエルだ。
オドオドしながら赤ん坊を抱き上げるけど、その無表情っぷりがさらに赤ん坊を泣かせる。んで、近くに居たシグナムに寄る。っつうかさシュリエル、その選択はどうよ。お前ら揃って無表情組だろう

が。案の定、赤ん坊は泣き止まない。

「あー、何をやっているんだ。ほら、こっちへ」

と、そこへオーディンが2人のところにやって来た。そんでもってシュリエルから赤ん坊を受け取って、赤ん坊の頭を左胸の方に向け直してから抱いた。

「ありがとう（イオメム）、生まれて来てくれて（ゼーレット・テーア）。私はとても幸せです（イェリユー・アル・セーヴェ・アエキ）」

そんでもって体を揺らしながら歌い始めた。

「貴方と共に生きる時間（アー・フィエファル・エ・）、幸多くありますように（ルアシロン・エ・イオン）」

聴いたこともねぇ言葉での歌だけど、何て言うか「落ち着くな・・・」ついウトウトしちまう。ぎゃあぎゃあ騒いでいたガキ連中も、オーディンの歌声に静まり返って、聞き惚れてるせいか一斉に座りだした。オーディンに抱かれてる赤ん坊も泣き止んで、ジッとオーディンの顔を見上げる。それから少しの間、あたしらはじっくりオーディンの歌声を聴いて、終わった時には半分以上のガキどもが眠ってた。

「オーディンさん、歌がお上手なんですね」

「つうか、オーディンって男なのに、母親みてぇだよな」

シャマルに褒められて照れくさそうに「ありがとう」お礼を言って

いるオーディンに、あたしがそう言うと、「え〝っ？」オーディンは納得いかないって顔であたしを見てきた。起きていた何人かのガキがオーディンの足元に「お母さん？」「ママ？」って群がった。オーディンが本気で落ち込む顔見んの初めてな気がする。

「コホン。で、今からは真面目な話になるから、グラオベン・オルデンは心して聴くように」

つうわけで、あたしらは輪になって座り込んで話を聴く姿勢になる。オーディンがガキどものリーダー・フェリとの会話で得た情報をあたしらに話した。やっぱ反吐の出るもんだったよ。他国からガキどもを誘拐して、異物が体に馴染みやすい小さい頃から魔導実験。生体兵器として完成すれば戦場投入、失敗して壊れたり死んだりしても他国の人間だから問題なしってさ。ふざけんな。でだ。今ここに居るガキどもは最近――2ヵ月足らず前に誘拐されて来たってことだ。

「ですが、誘拐されてから幽閉されっぱなしで、皆さんが訪れる今日まで実験されることは無かったです」

「お前たちを誘拐してすぐにイリュリア戦争が起こったからだな」

「そうみたいです。不幸中の幸いというものですね」

シグナムにそう言われたフェリは、膝枕しているガキの頭を撫でながらフッと笑った。オーディンは「とりあえずは、だ。ここから出よう」ってフェリや他のガキどもをぐるっと見回した。

まず施設からの脱出だ。正直、移動には時間が掛かると思ったけど、そこはオーディンの万能魔導のおかげで何とかなった。眠っている奴、長距離・長時間の歩行が続けられない体力の無い奴は、オーディンの魔導――泡に包んで浮かばせて移動させた。そんで地上からの移動は、

「うわぁ、おっきいお船～っ♪」

「お日様、まぶしい♪」

「お姉ちゃん、アレなんてお名前ぇー？」

「お姉ちゃんじゃなくてお兄さん、な？　アレは、スキーズブラズニル、というお名前なんだよ」

起きてるガキどもは久ぶりに外に出たからか満面の笑顔で騒いで、そしてオーディンが召喚した空飛ぶ巨大帆船スキーズブラズニルを見てまた大騒ぎ。つか、今日のオーディン、落ち込む回数が半端なく多いな。なんかの予兆か・・・？　とにかくあたしらはスキーズブラズニルへ飛行の魔導で乗船、一路アムルへ向けて出航した。

「フェリ。今からコイツで君らをシュトゥラ王都ヴィレハイムへ運ぶ。そこから君たちが故郷へ帰れるようにしよう」

「あ、はいっ。それでお願いします！」

「さてと、そう言うわけで、グラオベン・オルデン全騎。子守り再

開だ」

本音を言うとさ、もう子守りはちょっとな～とか思うんだよ。なぁ、オーディン。アギトとアイリを見てみろって。明らかにゲッソリしてんじゃん。そりゃそうだよ。特にアイリなんて赤ん坊にしゃぶられたんだからさ。ザフィーラだって毛を毟られ過ぎて、下手すりゃハゲちまうかもしんねぇし。

けどシグナムとシャマル、そんでシュリエルは「ヤヴォール」嫌そうな顔しないで応じた。あたしとザフィーラ、アギトとアイリも遅れて「ヤヴォール」って了承。で、子守りを再開することになったんだけど・・・

「きゃぁぁぁあああ！？　どうして私ばかりスカートを捲られちゃうのぉぉーーーっ！？」

シャマルは、アダムと、ソイツの仲間らしい連中からスカート捲りを何度も食らった。1人が捲ってシャマルがすぐに押さえて、手を離した瞬間に別のガキがスカート捲り。アホなことで連携しやがるよ、アイツら。つうかシャマル。お前、もう座ってろよ。

「千切れちゃう！　あたしの尻尾千切れるって！というか、目が回るぅ～～～！」

「痛い痛い痛い！　アイリの羽、引っ張らないでよね～～～～っ！」

アギトとアイリは相変わらず悲惨な目に遭ってた。アギトは尻尾を掴まれてブンブン振り回されてるし、アイリは背中から生えてる翼

を左右に引っ張られてた。あの２人が一番頑張ってんよ、ホント。で、ザフィーラはと言うと、両腕にぶら下がってるガキ２人をそのまま持ち上げてる。体が浮いたことがそんなに楽しいのかザフィーラの腕にぶら下がってるガキどもがきゃいきゃい笑ってやがる。

「すごいすごい！　剣の姉ちゃん、カッコいい！」

シグナムは"レヴァンティン"を使って、オーディンから調達したらしい果物を空中で斬り裂いてた。今度はリンゴを頭上に放り投げて、"レヴァンティン"を高速で振るってリンゴを分割、もう片方の手に持っていた皿に乗せてる。それを見ているガキどもから拍手喝采。シグナムの奴、本気で楽しそうに笑ってやがる。え～と、シュリエルは・・・お、居た居た。シュリエルは甲板に座り込んで、絵本を読み聞かせていた。

「なんだ。あの２人なら上手く子守り出来ねぇと思った・・・って、うぉーい！　危ねぇから縁に上ろうとすんなっ！」

右舷の方をふと見ると、ガキ３人が１ｍちょっとくらいの縁によじ登ろうとしてんのを発見。でもスキーズブラズニルは、全長が２Ｋｍで全幅が３００ｍっつう巨大さだ。あたしが今居るところは前部甲板・右舷の半ば。距離もあるし、ガキどもも騒いでいるからあたしの声が届いてねぇ。

「子守りする役の人数が圧倒的に足りねぇ・・・！」

走るより早く移動するために飛んで、下手に知恵のついたガキども

（２人が土台になって、１人が縁をよじ登る）の元へ向かう。あと数ｍってところで、縁の上によじ登ったことがよっぽど誇らしいのか仁王立ちするガキ（当然、男だ）が、

「あ」

「んなっ・・・！？」

体勢を崩して縁の向こう側に落ちて消えた。落っこちやがった！

血の気が引く。速度を落とすことなく縁から飛び出して、ガキが落ちて行った足元へ急降下しようとしたところで。

「っ・・・んだよ。落下防止用の魔力網が有んのかよ・・・」

安堵の息を吐く。あたしの眼下には、万が一に縁から落ちた奴用のための網が張ってあった。乗る前には無かったから、きっと落ちた奴が出たその都度に自動展開されんだろうな。とにかく「危ねぇだろうが！　もう縁に上んな！」網の上でポカンって呆けていたガキを怒鳴って、甲板の上まで連れて行く。ガキを甲板に降ろした瞬間、ソイツは今さら怖くなったのか泣き出した。

「はぁぁ・・・・。超しんどい・・・」

大きな溜息と一緒に、あたしはその場にへたり込んだ。そこからはもう記憶に残らねぇほど走ったね、甲板の上を。人体実験施設から王都ヴィレハイムまでの空の旅、約３０分。鬼ごっことかいう遊びで。あんだけ煩わしかったガキどもも眠ってりゃ可愛いもんでさ。

あたしの膝枕で眠る女のガキの寝顔につい頬が緩む。

「お疲れ様、ヴィータ」

「ん。オーディンもお疲れ。はは、歌いすぎて、声ガラガラじゃねぇか」

「歌ったり大声出したり。時間にすれば短いが、その中身は濃かったからな」

「だな。あ、あとさ、アギトとアイリ、今日はすげぇ頑張ったからさ・・・」

ぐったりと仰向けに倒れ込んでる、髪がボッサボサのアギトとアイリの方に目をやる。オーディンは苦笑いして、「ああ。何かご褒美を上げないとな。もちろんヴィータやシグナム達にも」ってあたしの頭を撫でた。それに対して「ん」小さく頷く。やっぱオーディンに撫でられると落ち着く。

「・・・ヴィレハイムが見えて来たな」

あたしは座ってるから見えねぇけど。終着点のヴィレハイムはもうすぐだ。ま、ヴィレハイムに到着してからはサクサクと話は進んだもんだよ。ガキどもから故郷を聞き出して、その故郷の管理者と連絡を取って、迎えに来させたり送り届けたりと。

「起きている時は大変だったが、眠っている赤ん坊と言うのは実に

愛らしいな」

「ああ。体温が高いからか、こうして抱いていると気持ちが良いな」

「ええ、そうねえ～。ふふ。オーディンさんの言う通り心臓の鼓動を聞いて、安心して眠ってるわ」

さすがに喋れない赤ん坊はどうすることも出来なかった。今シグナムとシャマルとシュリエルが母親みてぇになって抱いている赤ん坊3人の今後は、人体実験施設の調査と、イリュリア研究者への尋問の結果次第だ。それまでは乳母を募って、そして育てさせるってことになった。

「もし見つからなかったらぁ・・・、オーディンさん、私と一緒に育てましょうね 」

「なに！？」

「それは良い案かもしれん」

「シグナムまで何を言って・・・！」

「私たちは母親になるのか？ 父親がオーディン・・・。悪くないかもしれない」

「シュリエルもか！？」

ま、もしそうなったらエリーゼとアンナが本気で怒るだろうな。けどそんな結末も見てみたいと思ったのは、オーディン達には秘密だ。

ＥｐｉｌｏｇｕｅⅥマイスターだ～い好き　ｂｙアギト＆アイリ

†††Ｓｉｄｅアギト†††

「はい、マイスター、お茶だよ。休憩しよ～」

「アイリはね、クッキーを持って来たよ～♪」

「ああ、ありがとうアギト、アイリ」

お医者さま兼服飾デザイナー（休業中）兼復興隊（疲労で倒れないか心配）として今日も働くマイスターに、休憩のためのお茶を用意。あたしの後ろを歩いて来たアイリはお菓子を。そんなあたしとアイリは、マイスターに命を救われた融合騎。名前も付けてもらったし、道具じゃなくて家族として迎え入れてくれたマイスターは、あたし達の大切なひと。

今日のマイスターのお仕事は、エリーゼの屋敷跡に建てた木造小屋でお医者さま。モニカとルファは休みだから居ない。同じお医者さまのシャマルは、アンナのお料理教室でお勉強中。そしてマイスターは今、シュトゥラの王子のクラウス殿下から送られて来た手紙を読んでる。

「マイスター、クッキーあ～ん　・・・・ねえねえ、王子さまからの手紙、なんて書いてあったの～？」

アイリがクッキー1個を摘まんで、あ～んってマイスターの口に運

んで食べさせようとした。ピク。あたしのこめかみがひくつくのが判る。あたしだってやった事ないのに。妹に先を越されたぁ、むぅ・・・。

「あーん・・・うん、美味い・・・。手紙の内容か？　この前の人体実験施設の調査結果だよ」

「「あ・・・」」

２週間前、あたし達はある施設を調査して、他国から誘拐された子供たちを救出、故郷に送り返した。でも自分の故郷が判らない子や喋れない赤ん坊も居て、そんな子供たちは王都が預かってる。で、その施設を調査することで、その子供たちの故郷を見つけようとしていたんだけど。

「故郷が判明していなかった子供たちだが、調査の結果、全員の故郷が判明したって。今日より送り届けることになったそうだ。あとは、施設の内部調査の結果だが・・・」

マイスターはそこで怒りに顔を歪ませた。それだけで判る。きっと嫌な結果だったんだ。アイリだって「そっか」って話を続けようとしなかった。イリュリアの技術部生まれのあたしとアイリ。生まれ故郷がベルカ共通認識で最悪だとなんか落ち込む。

「ほら、２人とも。あーん、だ」

俯いていたあたしとアイリの口元に、マイスターがクッキーを差し

出してくれた。アイリと一緒に「あ～ん」パクッと食べる。うん、アンナのお手製クッキー美味しい～。モグモグしてるところに、ポンって頭に手を置かれて撫でられた。撫でてくれてるのはマイスター。さっきまでの怒り顔はもう無くて、こっちも笑顔になれるような笑顔。

「2人はもう私の家族だ。だからイリュリアの事で気にしなくていい」

「「・・・うんっ」」

それからマイスターと一緒にお茶休憩をして、お仕事を再開。と言っても患者さんは居ないから、備品の確認とかカルテや書類の整理くらいだけど。でも、たったそれだけでも嬉しい。マイスターと一緒に居られる時間が。手伝えて助けになれることが。あたしは棚に収められた薬品や備品の在庫を確認していて、

「マイスター。ここ、殺菌消毒液（エタノール）のところ、何て書けばいいの？」

そしてアイリは机に座って、書類記載の手伝い中。書き方をマイスターに教わりながら書いてる。あたしも昔、モニカやルファと一緒にマイスターから教わった。ふふん、先輩だよ。

「ん？　エタノールか。・・・アギト、エタノールの在庫、判るか？」

「あ、ちょっと待って。えっと・・・・」

胸に抱えてる在庫確認の書類をパラパラ捲って、「あまり無いよ、マイスター」在庫状況から見てそう答えておく。マイスターに「ありがとう、アギト」ってお礼を言われて、顔がふにゃあ　ってなる。アイリはマイスターに言われるままに机に座って書類にカリカリ書いてく。そうやって在庫確認も終わって・・・

「やる事なくなっちゃったね、マイスター」

アイリは患者さん用の寝台の上にうつ伏せで寝転がって両足をパタパタ交互に上げ下げ。あたしはお姉ちゃんとして「アイリ。はしたない」スカートの裾から出る雪みたいに白い肌をした脚をペチッと叩く。

「きゃっ？　何するのアギトお姉ちゃん！」

「そんな足をパタパタさせてると、スカートの中がマイスターに見えるよ。いいの？」

マイスターをチラッと見ながらそう訊く。アイリだって女の子。恥ずかしさくらい持ち合わせてるはずだし。アイリは「う～ん」って唸りながら寝台の上で膝を抱えて座って、両膝の上に顎を乗せた。視線はマイスターに釘付け。そして「うん、いいよ。マイスター、見てみ――ぎゃんっ！？」お馬鹿な事を言いそうだったアイリにお仕置き。持っていた書類の束で頭をバシッと結構本気で一発叩く。

「いったぁ～～い！　マイスターっ、アギトお姉ちゃんがアイリを叩いた！」

「いや、さすがに仕方ないぞ。アイリ。女の子はそんなこと言ったらダメだ。そういうはしたない事を言ったりやったりする娘は嫌いだ」

ほら、マイスターだってそう言ってるし・・・って、「うわぁ～～ん、ごめんなさ～い！　嫌いにならないでぇ～～～！」アイリが大泣きし始めた。あたしとマイスターはビックリ。寝台の上でジタバタ暴れるアイリに、あたしは「アイリ！？」オロオロ。
マイスターも「ならない、ならない！　嫌いにならないから！　大好きだよ、アイリ！」って慌てながら、アイリをギュッと抱きしめた。あ、いいなぁ。マイスターに抱きしめられて泣き止んだアイリは「ホント？」って訊いて、

「本当だとも」

「よかったぁ・・・」

「むぅ。アイリだけずる～～い！　あたしも！」

マイスターとアイリに向かって両腕を広げて突進、ピョンと飛び跳ねてマイスターに抱きついた。するとマイスターは「あはは、仕方ないなぁ」ってあたしも一緒に抱きしめてくれた。
それからだけど、アイリはずっとマイスターの服を摘まんで離さなくて、マイスターが移動するたびにちょこちょこついて回ってた。
まぁ、あたしもアイリと同じようにしていたけど。だって1人だけ仲間外れってヤだもん。で、その日の夜。マイスターとあたしとア

イリの３人部屋で、マイスターが居ない時を見計らって、

「ねえ、アイリ。ちょっといい？」

「なぁにぃ～？　アギトお姉ちゃん」

大きくてフカフカな寝台の上に寝転がってるアイリに尋ねる。あの寝台で、あたしは毎晩マイスターやアイリと一緒に眠ってる。今お風呂に行ってるマイスターが戻って来たら、今日もまた一緒に寝るんだ♪

「あたし達って、いつもマイスターに何か貰ってばかりでさ・・・」

「・・・うん。だね。それで？　アギトお姉ちゃんは何を言いたい・・・って言うより――」

「何かをしてあげたい・・って思ってる。マイスターの事だから何も気にしてないって思うし、気にしないで良いよって言うと思うけど・・・」

マイスターは何かを貰うより与える方だ。アイリも「そうだよね。欲が無いって言うか」って同意してくれる。でも「お礼、みたいな事やりたい」そう強く思う。するとアイリは「じゃあやろう！」って寝台から飛び降りて、鏡台の椅子に座ってるあたしのところに来た。

「でも何をすればいいのかなぁ・・・？」

「そうだよね～・・・」

「「う～～ん・・・」」

マイスターが喜んでくれる事を、アイリと一緒に考える。でも何か答えが出る前に「アギト、アイリ、２人揃って何を唸っているんだ？」マイスターがお風呂から戻ってきた。いつもはサラサラで長い髪だけど今はお湯で濡れていて、マイスターは濡れた髪をタオルで拭いてた。

「アギトかアイリ。すまないけど、櫛を取ってくれ」

「あ、うん」

アイリより先に鏡台の上に在る櫛を手に取って、「はい、マイスター」マイスターに手渡す。あたしに「ありがとう」お礼を言ったマイスターは櫛で髪を梳かしながら、熱の魔導で髪を乾かす。先にお風呂から上がったあたしとアイリにもしてくれた。梳かしてもらっていると、気持ち良くてウトウトしちゃう。

『アイリ。また明日、話して決めよう』

『うん』

思念通話でアイリとそう決める。そういうわけで今日は、

「お休み。アギト、アイリ」

「「お休みなさ～い♪」」

寝台の上。マイスターが中央、あたしは右、アイリは左に並んで眠る。みんなが良い夢を観れますように。そして明日も良い日でありますように。

†††Ｓｉｄｅアギト⇒アイリ†††

チュンチュンって小鳥の鳴き声で「んにゅ・・・？」目を覚ました。目元を手の甲で擦りながら「マイスター・・」いつものようにマイスターにしがみ付きながら眠ってた体を起こす。アイリの反対側にはアギトお姉ちゃんが眠ってて、アイリと同じようにマイスターにしがみ付いてる。

「マイスター？　眠ってるね。それじゃあ・・・」

マイスターより早く起きた時、アイリは内緒で「チュウ　」マイスターの頬に口づけしてるんだよね。アイリ達プロトタイプ融合騎の三番騎、ドライお姉ちゃんが言っていた。大切な人（たぶんロードかマイスターの事だと思うんだよね）が出来たら、自分がしてほしい事をしてあげなさいって。頬に口づけすると、マイスターのまぶたがピクって動いたのをすぐに察知。目を開ける前に唇を離す。

「ん・・・アイリ・・・。おはよう。最近は本当に起きるのが早いな。早起きは良いことだ」

「あぅ・・・マイスター・・・アイリ・・？　おはよう・・・」

「おはよう、マイスター、アギトお姉ちゃん」

起きちゃったね。でも気付かれてないみたい、よかった。朝起きて最初にするのは着替え。そしてすぐ後に「んにゅ♪」マイスターに髪を櫛で梳いてもらうこと。梳いてもらった後は、「よしっ。もういいぞ、アイリ」頭の上にリボンを結んでもらう。

「マイスター、マイスター。アイリ、可愛い？」

「ああ、可愛いとも。次はアギトだ。おいで」

「はぁ～い♪」

鏡台の椅子をアギトお姉ちゃんに譲る。あ、そうだ。良いことを思いついちゃった。マイスターに髪を梳かれてウットリしてるアギトお姉ちゃんに、『マイスターの髪、梳こうよ！』そう提案してみる。

『それ、すごく良い！　じゃああたしが――』

『あ、やっぱりアイリがひとりでやる！　アイリの提案だもん、譲れないよ！』

『う゛っ。・・・うん、判った』

このお礼だけは譲れないよ。アギトお姉ちゃんを梳き終わって髪を結ったマイスター。すかさず「マイスターの髪、アイリが梳かしてあげる！」って、自分の髪を梳こうとしてるマイスターに提案。

「え？・・・・それじゃあ、お願いしようかな」

マイスターから櫛を受け取って、椅子に座ってアイリに背中を向けたマイスターの髪に櫛を立てる。サッサッと髪に櫛を通す。枝毛も無くて、すっごくサラサラ。「ふんふふ～ん♪」鼻歌を口遊みながら梳いていると、

「やっぱりあたしもやりたいっ！」

「ちょっ・・・！？」

アギトお姉ちゃんが櫛を奪おうとしてきた。でも「ヤだ！」取られないようにアギトお姉ちゃんと取っ組み合う。

「こらこら。ケンカはダメだぞ、２人とも。仲良く２人ですればいいじゃないか」

「ヤーだ！　アイリがマイスターの髪を梳いて、結うの！」

「ちょっとくらいあたしにもやらせてくれてもいいじゃん！」

櫛の取り合い。奪われないように必死に抵抗しながらマイスターの髪を梳かす。なのにアギトお姉ちゃんは「ちょっとだけでも！」諦

めてくれないんだよね～。

「おーい。もう自分でやるから櫛を渡し――でっ！？」

「「あ」」

取っ組み合いを止めて、つい力み過ぎてマイスターの頭に刺しっちゃった櫛を眺める。マイスターは自分の頭に刺さった櫛を抜いて、「アギト。アイリ」そう低い声でアイリ達の名前を呼んだから、「はい・・・」ビクッとしながらアギトお姉ちゃんと一緒に応える。俯いているところに、頭に手が伸ばされたことが判ってまたビクッてなる。叩かれる。怒られる。嫌だ。そんなのヤだ。マイスターに嫌われたくない。不安になっていると、「ありがとう」マイスターはお礼を言って、アイリとアギトお姉ちゃんの頭を叩かないで撫でてくれた。

「「マイスター・・・？」」

「でも、ケンカしないでくれ。２人がケンカすると悲しい」

「「・・・うんっ！」」

最初のお礼は失敗だった。それから一緒に顔を洗って歯を磨いて、朝ごはん。アイリの生きてる楽しみの１つだね。食堂に着いた時にはもうみんなが揃っていた。長方形の食卓で、長辺の右側の奥からシグナム、ヴィータ、シャマル、シュリエル、ザフィーラ。左側の奥からエリーゼ、アンナ。空いている席に、マイスター、アギトお

姉ちゃん、アイリって順に座って、上座にこの屋敷の主ターニャ。

（ここでも何かお礼できないかなぁ・・？）

食卓に並べられた何枚もの皿に乗ってるおかずの数々を見る。とそこにアギトお姉ちゃんがマイスターの取り皿を取って、「マイスター、おかず何にする？」って訊いた。あ、やられた。アギトお姉ちゃんがアイリをチラって見てきた。むぅ、なんか腹立つね。

「アイリも取ったげるっ。マイスター、なに食べた――」

「アイリはいいよ。あたしがやるからさ♪　マイスター、どれ？」

「くぅ・・・」

さっきは取り合いでマイスターを悲しませちゃったから、ここは引き下がるしかないよね。仕方なく椅子に座り直す。と、『なあ。お前ら、なに張り合ってんだ？』向かいに座るヴィータから思念通話。

『アギトちゃんとアイリちゃん。ケンカはメッよ？　オーディンさんが悲しんじゃうわ』

『今ではもう我らはセインテスト家の一員だ。家主たるオーディンを悲しませるのは良くない』

『判ってるよ』

結局、朝ごはんはアギトお姉ちゃんの独壇場だったね。アイリに一度も何もさせようとしなかったしね。でも、今からはそうはいかないよ。今日は一日お休みなマイスターとアイリ、そしてアギトお姉ちゃん。お休みの日でもマイスターは体を休ませずに何かしらやってる。その手伝いをしよう。

「さて。午前中は、屋敷の掃除だな」

「「手伝う！」」

アギトお姉ちゃんと一緒に挙手。視線に、絶対に負けない、って思いを籠める。なんか目的がおかしくなってる気がするけど、今はアギトお姉ちゃんよりマイスターの役に立ちたいんだよね。大理石の廊下に敷かれていた絨毯を丸めて退かしたマイスターはちょっと考えて、

「そうか。じゃあ窓拭きを頼もうか」

「「ヤヴォール！」」

マイスターから雑巾も一緒に受け取った瞬間、アイリとアギトお姉ちゃんは二手に分かれる。任された場所はターニャ邸の二階。そこはアイリ達グラオベン・オルデンが過ごしている部屋が在る階だね。長い廊下の端まで走って、その端の窓から順に「うりゃぁぁぁああ！」濡らした雑巾で拭いて行く。ターニャ邸の窓は全部両開き窓。窓１つに２枚のガラス。全部合わせれば２２枚。それを中央に向かって拭いて行く。

「1枚でも多く、多く、多く！」

アギトお姉ちゃんも「おりゃおりゃおりゃーーー！」って少しずつ中央に向かって来てるね。

「アイリが勝つんだもんね！」

「勝つのはあたしだよっ！」

「おーい。ケンカはダメだって言ったぞ～」

モップで廊下を拭くマイスターにそう言われた。でもこれは・・・

「「これはケンカじゃなくて女の戦いなんだよ！」」

「どこでそんな台詞を覚えてくるんだ？」

残る窓は中央の1つ。ガラスは2枚。先に拭き始めた方が有利だよね。視線は窓にのみ。アギトお姉ちゃんもそう。だから2人して気付かなかった。

「「えっ――きゃん！？」」

アギトお姉ちゃんと一緒に床に置いてあったバケツに蹴躓いてすっ転んだ。

「「冷たっ！」」

倒れたバケツから零れちゃった水の真上に転んだから、「あぅ～」服がビショビショになっちゃった。後ろの方から「言わんこっちゃない」ってマイスターの呆れ果てた声が聞こえてきた。アギトお姉ちゃんと一緒に急いで立ち上がる。

「片づけと残りは私とアンナでやるから、２人はもう手伝いはいいから外で遊んでおいで」

「「え・・・はい・・・」」

「あと、風邪を引いたらいけないから着替えるように」

事実上のクビ宣告。言われたとおり自室に戻って着替えてから、ガックリと肩を落として屋敷の外に出る。口から出るのは「はぁ」大きな溜息だけだね。中庭に設けられている長椅子に座って、青空を見上げながら呆ける。お礼どころか邪魔ばっかりして。このままじゃダメなのに、何かをやろうって考えたらまた失敗するかもしれないって思えて怖い。

「やあやあアギトちゃん、アイリちゃん。２人してどうしたの？」

「「ターニャ」」

服飾店の店主の仕事に復帰した（最近知ったことだけどね）ターニャが声を掛けてきた。アイリ達はターニャに今までの事を話した。

マイスターにお礼をしたいこと。でも上手くいかないことを。ずっと黙って話を真剣に聴いてくれたターニャは、マイスターのようにアイリとアギトお姉ちゃんの頭を撫でて「良い子だね２人とも」って褒めてくれた。

「ディレクトアは、一度か二度の失敗くらいで２人を嫌いになるわけないじゃないよ。でも、ちょっとダメなところもある。それが何か解るよね？と言うより、最初から解ってた・・・？」

「あたしとアイリが競い合った事・・・？」

「だよね、やっぱり・・・」

マイスターの手伝いをして、お礼をしたい。それだけで良かったのにね。だけど一番になりたくて。アギトお姉ちゃんより褒められたいって。マイスターの為だったのがアイリ達自身の為になってた。

「そもそもディレクトアは誰が一番とか選ばないし。長所で短所だな～。コホン。で、あの人にとっては誰もが一番大事で、大切で、大好きなんだよ。さ、仲良くお礼をしておいで。そう難しく考える事なく、どんな小さなことでも良い。きっとディレクトアは、そういう事だけで十分に嬉しいはずだから」

「「うんっ！」」

ターニャに言われたとおりアイリとアギトお姉ちゃんはただ、マイスターの喜ぶ顔をみたいために頑張ったよ。

アイリ達は掃除の手伝いを再開して、窓拭きだって廊下のモップ掛けだってやって、お昼ごはんや夜ごはんの時には、食卓にお皿を運んだり皿洗いとかの後片付け（３枚ほど割っちゃったけど）もしたし。そうしたらマイスターに、偉いぞ、ありがとう、さすがは私の家族だ、ってたくさん褒めてもらっちゃった・・えへへへ

そして・・・・

「ねえ、アイリ。本当にやるの？　あたし、恥ずかしいんだけど・・・」

「ターニャが言ってたよね。お風呂の時こそ、お礼の最大の機会だって」

アイリ達を助けてくれたターニャは言ってた。女の子に背中を流してもらうのが、男の夢だって。マイスターは男。だったら女の子のアイリ達に背中を流してもらったら絶対に喜ぶはずだよね。と言うわけで、ターニャ邸の浴場に来てるの。エリーゼの屋敷は男女別々の露天風呂だったって聞いたけど、ターニャ邸は男女一緒の木（高級木材らしい）の浴場。マイスターの入浴時間は午後１０以降。それまでは女の子の時間だって決まりがある。

「はぁ。ターニャの言う事ってあんまし信用できないんだけど・・・」

「そう？　アイリ、ターニャの話は面白いと思うんだけどね」

「エリーゼには、ターニャの話は信じないようにってよく言われた

よ」

「ふ～ん。でもアイリはアイリがしたいようにするだけだよ」

同時に5人くらいが入れる脱衣場の壁に設けられた棚に在る籠の中に、「よいしょっと」脱いだエプロンドレスや髪から外したリボンをバサッと入れる。下着は女の子専用の洗濯籠の中にポイ。そして浴場と脱衣所を仕切っているガラス戸を開けようとした時、

「ちょっと待ってアイリ！　タオル！　タオルを体に巻いて！」

「ええー？　なんで？」

アギトお姉ちゃんが体を隠すように広さのあるタオルを巻いてた。アイリは別に気にならないから「アイリ、要らな～い」無視して浴場に入ろうとしたら、

「忘れたの？　マイスターは、はしたない子がキラ――」

「巻かせていただきます」

アギトお姉ちゃんからタオルを引っ手繰って体に巻く。そしてガラッとガラス戸を開けて、「マイスターっ！」って桶でお湯を掬って体に掛けてるマイスターに声を掛けた。

「うおっ！？　アイリ！？　それにアギトまで！　何をしている！？」

驚いたマイスターがアイリ達に背中を向けた。そんなマイスターの背中に向かって、えっと・・なんだったっけ・・・あ。思い出した。

「ご主人様〜♪　お背中お流ししま〜す　」

「し、しま〜す・・・。ぅく、恥ずかしい・・・」

しなを作って、ターニャに言われたとおりの台詞を言う。アギトお姉ちゃんは恥ずかしがってばかりで、タオルが落ちないように必死。怪訝そうなマイスターは腰にタオルを巻いて、「？？？・・・・あっ、ターニャの仕業だな」納得したように頷いた。

「本日最後のアイリ達のお手伝いなの。マイスター、アイリ達に背中を流させてね・・・？」

「アイリはともかく、アギト・・・耳まで真っ赤にして。なあ、アギト。ターニャの戯言に付き合わなくてもいいんだぞ」

「うぅ・・・ううん。ここまで来たらやるっ、やってやる！」

ようやくやる気を見せたアギトお姉ちゃん。あとはマイスターの許可だけだね。

「・・・今さらダメだと言っても引き下がらないって顔だなアイリ。判った。それじゃあ頼むよ」

「ヤヴォール♪」「ヤ、ヤヴォール・・・」

マイスターがそう言いながら長い後ろ髪を頭の上で結んで、鏡の前に置かれていた風呂椅子に座った。アイリとアギトお姉ちゃんはタオルと石鹸を擦り合せて泡立たせて、マイスターの背中をゴシゴシ洗う。

「んしょんしょ。マイスター、気持ちいい？」

「ああ、気持ちいいぞ。・・・誰かに背中を流してもらうなんて、いつ以来だろう・・・」

「アイリが家族になるまでは、エリーゼやシグナム達にしてもらってたんじゃないの？」

「あはは。さすがに彼女たちと一緒に風呂に入るのは勘弁だな。落ち着きたい風呂で落ち着けないのは酷だよ」

「そうなんだぁ・・・。アギトお姉ちゃん、桶にお湯を汲んできて」

「う、うん」

「マイスター。今度は前を洗――」

背中を洗ったから次は前を洗おうと思ったんだけど、「前は自分でやる」マイスターにきっぱり言われちゃった。もう一度「前を――」最後まで言うことが出来ないまま、「ダメだ」また断られたから、しょうがなしに諦める。

「ん。アイリ」

「ありがとー♪」

アギトお姉ちゃんが汲んで来たお湯で泡を洗い流した。えっと、次が・・・「髪の毛を洗うね」お湯に濡れてキラキラ輝く銀色の髪を見る。

「髪もか？　じゃあ解かないとな」

「うん。っと、洗髪剤を手に取ってっと・・・」

「あ、髪はあたしが洗う。アイリはもういいよ。自分の体や髪を洗ってて」

いきなりアギトお姉ちゃんが洗髪剤を横取りしてきた。アイリ自身の髪や体を洗えって言われたけど、アイリ、自分の髪を洗えないんだよね。いつもはシャマルやシュリエル、エリーゼやアンナとかにも洗ってもらうんだけど、今日はもう洗ってくれる人が・・・あ。

「マイスター、アイリの髪の毛、洗ってくれる？」

「ん？　はは、アイリの髪も結構長いからな。いいよ。それじゃあ先に体を洗っていてくれ」

「うんっ」

タオルを泡立てて右腕からゴシゴシ洗い始めたら、「アイリばっかりズルい」アギトお姉ちゃんが文句を言ってきた。するとマイスターは「アギトも自分で髪を洗えないのか？　なら洗ってあげよう」って言った。確かアギトお姉ちゃんって自分で髪を洗えたはずだけどね。でもそれを言ったら後が怖そうだから、言わないでおこうっと。

それからマイスターに髪を洗ってもらって、アイリとアギトお姉ちゃんはとっても満足なのでした♪

今日、アギトお姉ちゃんと一緒に色々やってみて判ったことは、アイリはとっても幸せだってことだね。これからもこんな楽しい時間が送れると思うと、アイリはすっごく嬉しい♪

「マイスター」

「うん？　どうしたアイリ？」

「アイリね、マイスターの事がだ～い好きっ　」

「あ、あたしもマイスターのこと、大好きだからっ！」

「・・・・ありがとう、アギト、アイリ。私も２人が大好きだよ」

ドライお姉ちゃん。アイリとアギトお姉ちゃんは今とっても幸せだよ。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒オーディン†††

「「すぅすぅ・・・」」

ベッドの上で静かに寝息を立てているアギトとアイリを眺める。今日は一日手伝いを頑張ってくれたからか、布団を被ってからそう時間が立たずに眠った。

「今日はお疲れ様」

眠っている2人に労いの言葉を掛けつつ、開け放たれた窓枠に腰掛けてホットミルクを飲む。今日は月が明るい。窓から吹き込む温かな風に靡く後ろ髪を押さえ、あとどれくらいこのままの生活を送れるかを思う。

イリュリア戦争が終結してから2ヵ月と少し。ベルカの反対側では今もなお戦争を続けている国が在ると聞く。イリュリア戦争の影響下にあって、なおかつシュトゥラの戦力（実質私たちグラオベン・オルデン）の反攻を恐れている国々は今、ほとんどが休戦状態。

「私が居なくなったら、また戦争が起こるんだろうな・・・・」

そう思うと、やっぱり残りたいという気持ちが僅かながら生まれる。だが、この先で起こるであろう聖王戦争には手が出せないため、結局は消えるべきだという結論に達する。私は消え、シグナム達は転生し、アギトとアイリはエリーゼ達に託す。アギトがルーテシアに逢えるかどうかには不安が残るが。問題はアイリだな。私の知る未来の次元世界にはこの子は居ない。別の戦争で、もしくはイリュリア戦争で死ぬ予定だったんだろうか・・・？

「少しずつだがベルカの歴史は変わってきている。きっとアイリだって生き残れるはずだ」

そう思う事しか出来ないのが腹立つ。しかし、それしか出来ないのが現実だ。ホットミルクを飲みほして、無理にでも乱れそうな精神を保たせる。

「なあ、神よ。どうして私にこのような人生を与えた？」

答えの無い問い。だから返答なども考えない。だが、

「それが、お前の運命だったからだ」

「っ！！？？」

外から聞こえてきた、私がよく知る声。窓枠から外へと飛び出し、剣翼アンピエルを発動。夜天へと飛び立つ。先ほどの声の主はすぐに見つかった。ソイツは満月を背にし、ワインレッドのオールバックの髪を風に靡かせ、緋色の双眸で私を見下ろしていた。

「バンヘルド・・・！」

完全自立稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の第一世代ブリュンヒルデのシリアル０３、炎暁（えんぎょう）の槌、バンヘルド・ブリュンヒ

ルデ・ヴァルキュリア。
私が救うべき子供の１人が、背中より放射状に広がるクジャクの尾羽のような２０枚の翼――エラトマ・エギエネスを月明かりに照らさせ、
「神器王。約束の時は来た」
そう短く宣戦布告をした。

ＥｐｉｌｏｇｕｅⅦ－Ａ星々煌めく夜天にてお別れをしよう～Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ，ＢＥＬＫＡ～

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

「「マイスター、おはよう」」

ベッドの上でもそもそ動き出したアギトとアイリが、椅子に腰掛けていた私にそう挨拶した。おはよう？　ああ、そうか。もう朝か。窓から部屋の中に降り注いでいるのは月明かりじゃなく陽の明かり。いつの間にか朝を迎えていたようだ。脚が１本の丸テーブル脇の肘掛け椅子に座っている私は窓へと目をやって確認した。

私が呆けて返事をしなかったせいか「マイスター？」ベッドから降りて私の元へと来た２人。頭を振って、「ごめんな。おはよう２人とも」心配そうに私を見る２人の頭を撫でる。それからまず着替えさせた２人の髪を櫛で梳き、リボンで結うという毎朝の習慣をし、

「あれ？　マイスターは髪結わないの？」

「ん？　朝ご飯を食べてからでいいよ」

自分の髪は軽く櫛で梳いただけで結わずに放置。怪訝そうにしている２人の背中を「さ、行こう」押して部屋を出る。階下へと降りる階段は屋敷の両端に設けられている。その内の１つに向かおうとしたところで、

「あら。オーディンさん、アギトちゃん、アイリちゃん。おはようございます」

「おはようございます、オーディン。それにアギト、アイリ」

目の前の一室の扉が開き、そこからシャマルとシュリエルが出て来た。そんな2人に挨拶をしていると、今度は背後から扉が開く音がした。私とアギトとアイリの部屋の右隣にはシャマルとシュリエルの部屋が在り、

「お？　おはようっすオーディン。あと他の奴ら」

「おはようございますオーディン。皆も」

今開いた左隣の部屋の住人であるヴィータとシグナムが扉から出て来て挨拶してくれた。ちなみにザフィーラは、ターニャ邸のエントランスに置かれているソファでいつも狼形態で眠っている。一種の守衛のようなものらしい。何かあれば、すぐに玄関から出て急行できるように。私たちグラオベン・オルデンの居るアムルに侵入にする命知らずは居ないと思うが。まぁ、ザフィーラの好意を無碍にするつもりはないため、好きにさせる。

「ところでオーディンさん。今日は髪を結ってないんですね」

「そういやそうだな。余計に女っぽく見えるぞオーディン」

「ほっとけ。・・・髪を結ってないことには特に理由は無いけど、

変か？」

「いいえ。髪を結わないオーディンも新鮮で、私は好きです」

「あ、シュリエルがマイスターに告白した」

「んなっ！　ち、違う！　そういう意味で言ったわけでは・・・！」

「判っているから落ち着け、シュリエル」

顔を赤らめて慌てふためくシュリエルを落ち着かせる。そんな他愛無い談笑をしながら階段を下りて行くんだが、その間にも脳裏に過ぎるのは昨夜の事。だからか上手く会話が出来ない。時折、「マイスター、話聴いてる？」アギトや「ご気分が優れないんですか？」シャマルに心配されてしまう。その都度、「大丈夫だよ」と上手く出来ているか判らない笑みを浮かべることに。

「おはようザフィーラ。いつもお疲れ様だ」

「おはようございます、我が主。いいえ。我に出来るのはこれくらいなので」

ザフィーラと合流。昨夜の事について何も言及してこなかったため、バンヘルドと私の邂逅には気付いてないようだ。私としてもバンヘルドの接近には気付かなかった。何かしらの結界が張られていたようだ。

（その事に気付かなかったとは、随分と気が緩んでいたようだ）

反省しながらみんなと共に着いた食堂にはすでにアンナが居て、朝食を作っていた。私が教えたスクランブルエッグや焼きベーコンに焼いたパン、焼きチーズなどなどだ。アンナとも朝の挨拶を交わして食卓について少し経った頃。

「おはようございます！」「おはよー」

エリーゼと眠そうなターニャがやって来た。そしてアンナの美味しい朝食を食べ始める。いつもの食事中の会話は、今日の予定や昨夜見た夢の話などだが、今日だけは・・・。

「シャマル。今日の医院担当は私とシャマルとなっているが、すまないけど今日は休ませてくれないか？」

「はい。それは構いませんけど・・・。あ、やっぱりお体の調子が・・・？」

「えっ？　そうなんですか？　だとしたら休んでいないとダメですよっ」

「お薬・・は、オーディンさん達の方が詳しいですよね」

シャマルとエリーゼとアンナに心配されるが、体調が悪いのではなく「王都ヴィレハイムに用事があるんだ」と答える。当然、「王都へですか？　何か問題などでもありましたか？」とエリーゼに訊か

れることになった。だが今は多くは語れない・・というか、まだ言いたくない。クラウスに別れの挨拶をしているところを見られたくないため、

「いや、しばらく顔を見ていないから、少し挨拶をと思うんだ。それと供はいい。アギト、アイリ、そしてシグナム達はそれぞれの仕事に励んでくれ」

先制してそう言うと、少しばかり不満そうなアギトとアイリを含めた全員が「ヤヴォール」と承諾してくれた。私に許された残り僅かな時間の予定を一気に組み立てていく。まず最初にクラウスとの別れだ。

そしていつも通りに朝食を終え、私はすぐに王都ヴィレハイムへ向かうことにした。剣翼アンピエルを発動し「いってきます」と小さくだが手を振ると、エリーゼ達が「いってらっしゃい」と手を振り返してくれる。

（本当にもう別れの時が来たんだな・・・）

この何でもないやり取りがもう出来ないと思うと、本当に寂しくなってしまう。弱気になる心に「忘れろ」喝を入れ、一路ヴィレハイムへ進路を採り、一気に速度を上げる。アンピエルでの最大速度の飛行で３０分弱。ようやく見えてきたシュトゥラの王城。王都民を不安にさせるわけにはいかないため、王都を囲む城壁の傍に降り立つ。王都を護る城壁に８つある門。その内の１つの門の両側に立つ騎士２人が私の顔を見るや否や、

「ようこそいらっしゃいましたッ、騎士オーディン！」

武装を胸の前で掲げるという礼の姿勢を取って、私を大声で迎えた。しかも目をカッと見開くものだから怖いの驚いたの。素でビクッとしてしまった。若干引きながらも「あ、ああ。通ってもいいだろうか・・・？」そう尋ねる。

「「もちろんですッ！」」

「ありがとう。門番、お疲れ様」

「「はいッ、ありがとうございますッ！」

元気の良すぎる感謝の声を背中で聴きつつ、王城へと歩を進める。さて。王都民に私の面が割れているとは言え、騎士たちのように盛大な姿勢を取る事は無いだろうと思っていたのが間違い。通りを歩くだけで群がって来て、戦争を勝利に導いた英雄として私に感謝したり称えたり、商品の果物や野菜を贈ったりともう大変だった。この騒ぎを聞きつけた警邏中の騎士が来なかったら、おそらく午前中に王城に辿り着くことは出来なかった。

「助かったよ。善意だから邪険にも出来なくてね」

「いえいえ。自分たちも英雄殿とお話が出来て光栄でした」

王城まで案内してくれた騎士たちと別れ、王城の門衛にも盛大な歓迎をされつつ城の入口の扉へと続く中庭の一本道を歩いている中、

「騎士オーディン！」私を呼ぶ声。声の主へと目をやれば、クラウスの側近で子爵である青年騎士――ライナー・フレイジャー卿がこちらへ駆けて来ていた。
彼とも簡単な挨拶を済ませ、王城へ来た理由であるクラウスに逢いに来たと彼に言うと、

「申し訳ありませんが、殿下は今、重大な会議に参加なさっているのです。ですから、いつお暇が出来るかも判りません」

タイミングが悪かったな。直接逢って、別れを言いたかった。

「そうか。最後だから直接別れを言いたかったが、仕方ないな。では言伝を――」

「別れを言いに？　どういうことですかっ！？　ベルカを離れると言うのですかっ！？」

あまりの剣幕にたじろぎながら頷くと、彼は「くっ。自分にはお止めするだけの力が無い・・・。少しお待ちを！」と悔しげに顔を歪ませ、王城へと走り去って行った。フレイジャー卿は私を止めたいようだが、すまないが出来ない相談だった。しばらく中庭の一角にある広場で待っていると、

「オーディン先生！」「オーディンさん！」

「オリヴィエ王女殿下、リサも・・・？」

フレイジャー卿とクラウスが来るとばかり思っていたが、来たのは正式にシュトゥラと同盟を結んだアウストラシアの王女オリヴィエと、彼女の側近であるリサの２人。先ほどのフレイジャー卿と同じような剣幕。おそらくクラウスに会いに行く途中で彼は２人と会い、そして私の事を話したんだろう。案の定、再会しての第一声は挨拶ではなく、やはり・・・・。

「ベルカを離れるとは本当の事なんですかっ！？」

「嘘ですよね！？　そうですよね！？　ああ、やっぱりそうなんだぁ、ってどっち！？」

「とりあえずリサは落ち着け。オリヴィエ王女殿下も目が怖いですし顔が近いです」

オリヴィエは興奮状態から私に詰め寄り過ぎた事への羞恥で一気に顔を赤くして「すみません」後退してくれた。そしてリサも何度か深呼吸して落ち着きを取り戻してくれたようだ。さぁ、話をしようと言うところで、

「オーディンさんっ！」

今度はクラウスが駆け寄って来た。彼の表情もまたえらい剣幕で、オリヴィエとリサが、自分たちもあのような剣幕だったのかと恥ずかしがっていた。息も絶え絶えなクラウスにも落ち着くよう言い、息を整えたクラウスもまた「ベルカを離れるとは嘘ですよね？」と訊いてきた。私は首を横に振り、昨夜の"堕天使エグリゴリ"から

宣戦布告されたことを話した。

。―。―。―。回想だ。―。―。―。

「神器王。約束の時は来た」

そう短く宣戦布告をした。意識をすぐに戦闘モードへと切り替える。だが、すぐにハッとして眼下に在るアムルの街を、ターニャの屋敷を見下ろす。ここで戦闘をすれば、間違いなくアムルという街が丸ごと消し飛んでしまう。それだけは何としても避けなければ。場所を移すと提案してみるか？　いや、ダメだ。そんな提案を呑むわけがない。ならば・・・・

（創生結界を展開するか・・・）

"エグリゴリ"を相手に出し惜しみするのは自殺行為。ならば！

「第二級粛清執行け――」

「待て。今すぐ戦うわけではない。お前にも別れを言いたい者どもが居るだろう？　明日一日、最期の日常を楽しむといい。そして別れに悲しめ、生への終局に哀しめ」

「っ・・・！」

バンヘルドにそう言われ、滾っていた戦闘意識が妙に治まり、かえって頭が冴えてしまった。みんなとの別れをすぐ目の前に突き付け

られたことでだ。つい先ほどまで覚悟していたじゃないか。

「明後日。時は０３００。場所は・・・クテシフォン砂漠。そこで我らの運命に決着をつけよう」

一方的に決めつけられたが、別にどこで戦おうと問題が無いため文句はない。時間も午前３時。人が寝静まっている時間帯だ。クテシフォン砂漠というのもベルカ最大のものだ。人の居る国に被害を出すことはない。炎熱系のバンヘルドが相手になると言うのなら、本音を言えば海や川の近くが良かったが、まあいい。

「いいだろう。明後日、お前たち全機、救ってやる」

「救う？　笑わせる。完全破壊の間違いだろう？」

バンヘルドはそう言い放って、漆黒の闇へと飛び去って行った。

。―。―。―。回想終わりだ。―。―。―。

「エグリゴリの宣戦布告、ですか・・・！」

「ええ。私がベルカを訪れ、留まる理由だったエグリゴリからの宣戦布告。これが最後の機会でしょう。この機会を無駄にすることなく、確実に全機を救います」

「オーディンさん。僕は前にも言ったと思いますが、エグリゴリを救う――撃破したとして、わざわざベルカを離れなくてもいいでは

ないですか」

「そうですよっ！　別にこのままベルカで生きて行けばいいじゃないですか！」

クラウスとリサの必死の説得だが、「ダメなんだ。私はベルカを去る」と頑なに首を横に振る。オリヴィエ達は目に見えて落ち込んでいて、私は「申し訳ありません」と頭を下げて謝る。ベルカに残るのが嫌じゃないんだ。正直まだエリーゼ達と一緒に居たいとも思う。しかしそれは叶わない願い。叶わないからこそ、私はきっぱりと諦める。だから別れを確実なものとするために挨拶しに来た。振り返りたいと言う思いを切り捨てるために。

「クラウス。頼みがある。エグリゴリとの戦いの後、私は間違いなく無事じゃない。そもそも無事に生き残れるような相手じゃないんだ。高確率で相討ちだろう」

真実は語れない。信頼していないわけじゃないが、どうしてもその気になれない。そう言うと、クラウスは「だ、だったら！　だったら僕たちも一緒に！」私個人の戦争に首を突っ込もうとし始めた。もちろん「この前は断られましたけど、私も戦います！」オリヴィエもそう。リサも口を開きそうだったため、「ダメだ！・・・頼む、聴いてくれ」と遮る。

「エグリゴリ戦後、私は勝っても負けてもこれまで通りの生活は出来ない。だからクラウスには、私たちグラオベン・オルデンが居ずともこれまでと変わらず、アムルを気に掛けてあげてほしい」

「当たり前です！　たとえあなた方グラオベン・オルデンが居なくなったとしても、シュトゥラの国民を守るのは当然のことですから！・・・え？・・・・グラオベン・オルデン？」

クラウスは意味が理解できないと言った風に興奮状態から冷め、「どういうことですか？」代わりにオリヴィエが私に尋ねた。私は必要なことだと思い、"夜天の書"――いや、"闇の書"の事を話すべく口を開く。

「シグナム、ヴィーダ、シャマル、ザフィーラ、シュリエルリート。彼女たちの存在と私の存在は同調しているのです。私が死ねば、彼女たちも一緒に。その理由として、彼女たちは闇の書の守護騎士ヴォルケンリッターだからです」

「「「闇の書！？」」」

やはり知っていたようだ。オリヴィエが「まさかオーディン先生が闇の書の主で、シグナムさん達が守護騎士だったなんて・・！」と驚愕した。クラウスはもちろんだが、リサは特に驚きを見せていた。好敵手と見ていたシグナムが人間ではなく、ベルカで恐れられる"闇の書"の守護騎士だったのだから。

「そういうことか。闇の書の主であるオーディンさんが亡くなれば、主と運命を共にする闇の書、その一部である騎士シグナム達もまた・・・・」

「だからこそクラウスに頼みたい。アギトとアイリの今後について。2人はエリーゼ達に託すつもりだ。そして今後、シュトゥラを巻き込む戦争が起きた場合、出来れば2人を戦場に召喚しないでほしい」

可能な限りアギトとアイリが死なないようにしたいがための願いだ。クラウスは何も迷うことなく「判りました」と即答、約束をしてくれた。あとは、あの2人が自ら戦場に立つという意思を持った場合だが、そこはエリーゼ達が止めてくれるだろう。

「ありがとう。・・・じゃあ・・・クラウス、オリヴィエ王女殿下、リサ。今までお世話になりました。どうかお元気で・・・」

握手を求めるために右手を差し出した。だが3人は押し黙ったまま私の顔と右手を交互に見るだけだ。そして「・・・ヤ・・・です・・」リサの口からポロッと漏れた。オリヴィエが「リサ・・・？」と小首を傾げる。

「そんなの嫌です。私、その手を取りたくありません・・・！」

キッと上目遣いで睨んできたリサ。すると「僕も取れません」クラウスにまで拒絶されてしまった。オリヴィエはそんな2人の考えが解っているようで「申し訳ありません」と同じように握手を拒絶した。差し出していた右手を戻したところで、クラウスが口を開いた。

「あなたの握手に応じれば、あなたとの永遠の別れを受け入れることになる。オーディンさん。だから僕は――僕たちは、あなたの握手には応じられないのです」

そんな考えは私になかった。口を噤んでいると、オリヴィエが私の目をジッと見て「必ず再会しましょう。その時にまたもう一度握手を」と微笑んだ。

「オリヴィエの言う通りです。必ず生きて帰って来てください。たとえどれだけ傷を負っても必ず治します。そして再会した時、改めて握手を。僕たちはずっと待っています。何日でも、何ヵ月でも、何年でも・・・ずっと」

「私も、オリヴィエ様やクラウス殿下と同じ思いです。このままお別れなんて嫌ですよ、オーディンさん・・・！」

目の端に涙を浮かべ、縋るような目を向けてきたリサの頭を撫でる。ここまで慕ってくれていることが嬉しくて。ここで私が言うべきことは何だ？　考えに考え、悩みに悩んで出した答え。私は最初に「ありがとう」と改めて礼を言い、

「判った。また逢おう。再会の証として、その時にまた握手を。クラウス、オリヴィエ王女殿下、リサ。それでいいだろうか・・・？」

「「「はいっ」」」

ようやく笑顔になってくれた3人に、今も心の内に広がっている自分への嫌悪感をひたすら覆い隠して笑みを向ける。3人への別れの挨拶はこれで終わりだ。絶対に叶うことのない再会の約束を交わし、

「では私はこれで」

「はい。オーディン先生、御武運を」

「オーディンさん。祝勝会を開きますので楽しみにしていてください」

「お気をつけて。また逢いましょうっ♪」

3人に見送られながら再びアムルへ向け飛ぶ。次は、自分の周りの整理だな。アムルへと戻り、まず最初にターニャ邸へ。「ただいま、エリーゼ、アンナ」中庭で執務を行っていたエリーゼとアンナに挨拶。

「あ、お帰りなさいオーディンさん」

「お帰りなさいませ。お茶はいかがですか？」

ゆっくりと話をしたいが、「すまない。結構だ」時間が限られているためすぐに自室へ向かおう。と思ったが、あるアイディアが突然浮かんだため屋敷の玄関に向いていた歩を止める。それをエリーゼ達に提案すべく振り返ってみれば、「そうですか・・・」若干落ち込んでいるアンナと、「よしよし」彼女を慰めるエリーゼが居た。まずった。少しぶっきらぼう過ぎたか。とりあえず「ごめん」謝ろう。

「エリーゼ、アンナ。今日の夕飯だが、中央広場でバーベキューを

やろうと思う。アムルの住民全員が参加しての大宴会だ。って、勝手な提案だが、いいだろうか？」

「それは構いませんけど。と言うより大賛成ですっ！」

「私も賛成です。が、1つお尋ねしたいことが・・・」

「あ、わたしもです」

突然宴会を開く理由を訊かれるのだと思ったため「宴会をしようと言うのは、アムルのみんなに今までの感謝をしたいと思ったからだ」と先に答えた。察しの良い者なら、今までの＝別れ、というイメージに行き着くだろうが、エリーゼとアンナはそこまで行き着くことはなく。

「まぁそれも聞きたかったことですけど。えっと・・・」

「それとは別に・・・」

「「バーベキューってなんですか？」」

「・・・あ・・・それか」

2人にバーベキューの簡単な説明をする。肉や野菜や魚介類などを網焼きする代表的な野外料理で、大人数での食事を主としていると。食材と調理に関しては私が引き受けることを告げ、しかし竈造りだけは暇な者たちに任せたいと頼む。子供のように満面の笑みを浮か

べるエリーゼは「良いですよ。というかやりたいです♪」許可を出してくれた。

「ありがとう、エリーゼ。アンナ。街のみんなに、この事を知らせてもらってもいいか？」

改めてバーベキューの許可をくれたエリーゼに感謝する。

「はいっ。お任せを！」

元気よく返事をしてくれたアンナは「では早速」と、アムル連絡網——回覧板（女性だけに回る裏・回覧板もあるらしい）を用意しするため、私の横を通り過ぎて屋敷内へと入って行った。さて。私もターニャに渡すべき物を取りに行くため「エリーゼ。仕事、頑張ってくれ」とエリーゼに一声かける。

「ありがとうですっ♪」

エリーゼの声を背中に受けながら自室へ向かう。自室の机の引き出しの中には、書き溜めておいた服のデザインノート（紙束の端を紐で纏めたものだ）が在る。それを渡しておこう。再びターニャ邸を出て、向かうはターニャが営んでいる服飾店シュテルネンリヒト。客の入店を知らせる鈴付きの扉を開け、陳列棚に並べられている衣服の整理をしていたターニャに声をかける。

「繁盛しているか？　ターニャ」

「お、ディレクトア。戦後直後に比べればね。それにしても早いねぇ、アムルと王都の往復で3時間も掛かってないって」

私の移動速度に改めて感嘆しているターニャ。それに対して「空戦機動には自信があるからな」と微笑む。ターニャは「さっすが英雄！」と笑い、そして商売人の顔となって「それで、どうしたんですか？

何かお求めかな？」そう訊いてきた。

「いや。そうではなく、コレを渡しに来たんだ」

ターニャへと歩み寄って手にしているデザインノートを渡すと、彼女は何も言わずにパラパラ捲り始める。ノートを眺めるターニャの目は次第に爛々と輝きだし、興奮しているのか徐々に頬を朱に染め始めた。しかも「ふふ。良い、良いですよ、ディレクトアぁ～　」不敵に笑い始めた。ちょっと怖い。見終えたターニャは満面の笑みを浮かべ、「早速作らせてもらいます！」店の奥へ引っ込もうとした。

「おいっ、店はっ！？」

「今日は店仕舞い！」

「ええーー・・・・」

本当に店の奥に引っ込み戻ってこない上に「あはははははは！」笑い声が止まらないため、もう諦めて店を出る。ついでに扉に掛けられている開閉店を示す札を、開店中から閉店と書かれている側に

してからシュテルネンリヒトを後にする。
デザインノートの中には、アギトとアイリ、エリーゼにアンナ、モニカとルファにターニャの為だけの服も用意しておいた。今まで仲良くしてもらった、せめてもの礼だ。気に入ってもらえるといいんだけどな。

「あれ？　オーディン先生？　今日はお休みじゃなかったんですか？」

「シャマル先生から、クラウス殿下にお会いに王都へ行くって聞いてましたけど・・・？」

「モニカ、ルファ」

エプロンドレスに白衣（ターニャ製の袖や裾にフリル付）を着た2人が、そう声を掛けてきた。私は2人に「つい先ほど帰って来たんだ」と返し、すぐに仕事を急に休んだことに対しての謝罪をした。モニカは「気にしないで良いですよぉ♪」普段通りふわふわな笑顔を見せ、ルファも「そうですよ。大切な用事だったんですよね」笑って許してくれた。こんな2人の笑顔を見るのも今日で最後、か。私は知らず2人の頭に手を乗せて、髪型が崩れないように撫でていた。

「ふえ？・・おお、気持ちいい♪」

「ど、どうしたんですかオーディンさん・・・！？」

モニカは気持ち良さに目を細め、ルファは目に驚きを湛えた。そう

言えば、この2人の頭を撫でるなんていつ以来だろう。私の助手として医学を学んでいた頃、教えたことをマスターした時のあの喜びようが気持ち良くてその時に何度か撫でていたが、最近はもう一人前だと思って撫でていなかったな。

「2人はすっかり医者として立派になった。2人の頑張りの賜物だな」

モニカとルファは私の手を取って、

「ううん。オーディン先生とシャマル先生のおかげだよ」

「先生たちの教えが良かったからこそ、私とモニカは医者になれました」

「「せぇ～の、ありがとうございましたっ！」」

眩しい満面の笑みを向けられ、私は2人にも出逢えたことに「こちらこそありがとう」感謝した。2人との別れ際に今晩の宴会のことを伝えておく。バーベキューの事はやはり知らなかった。説明すると、2人は興奮気味に「楽しみにしてますっ」喜んでくれた。大手を振って去って行くモニカとルファを見送り、私はターニャ邸へと引き返す。さぁ次は、明日の戦闘の準備だ。万全な状態で挑まなければ、ただの負け戦になる。

「あれ？　オーディンさん？　お帰りなさい」

「ただいま、エリーゼ。少し部屋に籠るから、昼食は呼ばなくていい」

「あ、はい。判りました」

一直線に自室へと向かい、部屋の扉を後ろ手で閉め「我が手に携えしは確かなる幻想」と詠唱。アクセスするのは、複製品が貯蔵されている創生結界・"神々の宝庫ブレイザブリク"。具現するのは空のカートリッジ。"エヴェストルム"を神器化させるための鍵を作る。

"エヴェストルム"の穂に刻んだルーン文字。カートリッジをロードすることで生み出される魔力でルーン効果を発揮させれば、"エヴェストルム"は神器化する。カートリッジを両手で包み込めるだけ包み込んで、魔力をただひたすら充填させていく。

「静かだな・・・」

気が付けば１００発以上のカートリッジを完成させていた。だがまだ足りない。この程度、すぐに消費するだろう。"エヴェストルム"のシリンダーは６連装式の２つだ。カートリッジの消費量はとんでもない。だからもっとだ。もっと・・・。と、そこに「オーディンさん、今いいですか？」扉をノックする音と、エリーゼの尋ねる声。

「エリーゼ？　ああ、どうぞ」

ほぼ無意識に机の上に置いてあるカートリッジを収めた箱に布を被せて隠した。すぐにハッと気づいたが、別段外す理由もないために

そのままにした。

「お邪魔します。あの、お昼ごはん・・・簡単なものですけど、よろしければ・・・」

エリーゼの手には1枚の皿とマグカップ。皿の上にはサンドイッチが4つ。それを視認した途端に腹が鳴った。私とエリーゼはきょとんとし、そしてすぐに「プッ」吹き出して笑った。空腹で腹を鳴らすなんて呆れる。「いただきます」と、エリーゼが差し出してきた皿の上からサンドイッチ1つとマグカップを受け取る。手に取った卵サンドをパクッと一口。

「わたしが作ったものですから、アンナほど美味しくはないと思いますけど」

「いやいや。お世辞抜きで美味しいぞ」

「え、そうですか？　よかったぁ。そう言ってもらえると本当に嬉しいです」

ベッドの縁に腰掛けさせたエリーゼがホッと安堵している。アンナの料理教室は、エリーゼはもちろんシャマルの料理スキルをも向上させた。シャマルたち"夜天の書"がはやての元に転生した時、シャマルの料理下手は改善されているから、はやての負担も多少は和らぐだろう。最後のサンドイッチを食べ、マグカップのホットミルクを飲み干す。

「・・・ふぅ。ごちそうさま。エリーゼ」

「はい。お口に合ってよかったです。それじゃあわたしはこれで」

部屋を後にしようとするエリーゼの背中を見送る。エリーゼ、と呼び止めそうになったがグッと抑える。また1人になってしまった。そんなことを思いながらまた魔力充填作業に戻る。結局、３００発まで作ったところで、

「そろそろバーベキューの用意をしないと」

時間切れになった。アムルの中央広場へと向かう中、街のみんなとも合流することになる。もちろん色々と声を掛けられる。宴会に誘ってくれたことへの感謝ばかりだ。中央広場に着くと、まず最初にキャンプファイアのような井桁（いげた）型の木組みが目に入る。おそらく夜遅くまで馬鹿騒ぎになるだろうと判断したアンナの指示のようだ。

「オーディンさん。竈はすでに準備完了です」

「マイスターっ、竈造り頑張ったよ！」

「アイリも頑張ったんだよ！」

「ああ。ありがとう、アギト、アイリ」

コの字状に煉瓦を積み上げて造られた巨大な竈。その竈を囲うように長テーブルが何十と置かれている。すでに街のみんなは皿を手に

持ち臨戦態勢――いや、食事体勢に入っていた。これは早々に始めないと暴動が起こりそうだ。「我が手に携えしは確かなる幻想」と詠唱。

"ブレイザブリク"の別区画に在る食材用の保管庫にアクセスし、保管しておいた食材をドサッと取り出すと、「おおおお！」歓声が上がった。すでに切り終えている牛肉・豚肉・鶏肉・様々な野菜（各種９００ｋｇ）を、手伝いを申し出てくれたアギトとアイリ、シャマルやシュリエル、そしてアンナの手を借りて何千本という串に刺す。

「っと、そうだ。シグナム！　竈に火を入れてくれ！」

「え〝っ？　あ、はい。判りました」

「プククク。シグナムの奴、炎熱の魔導使いだから着火係にされてやん――の〝っ！？」

「うるさい」

シグナムの拳骨を頭に受けたヴィータは「くぉぉ・・・」と頭を押さえてしゃがみ込んだ。何と言うか、シグナムとヴィータには「すまん」とりあえず謝っておこう。シグナムの魔導によって薪に火が入るとパチパチと燃え始めたのを見、６ｍ四方の網の上に串を置いて行く。

肉や野菜が焼ける匂いが広場に広がり、みんながソワソワしだす。

完成すれば、子供から与えていく。次は大人。先にアギト達にも食べさせ、私はひたすら串に肉と野菜を交互に刺して網に乗せて行く。

「オーディンさん！　酒って用意してないのか？　自前だってんなら家に取りに行かねぇと」

ご近所さんから酒のリクエスト。そうだった。忘れていた。「少し待っていてくれ！」と言い、すぐに"ブレイザブリク"の蔵にアクセスし、３ｍほどの高さを持つ色違いの大樽７荷（か）を具現させる。それぞれの樽には４つの蛇口を備え付けてあり、中身が切れないように、増殖上等、という消費された分だけ増える効果を持つ魔力文字を記してある。

「赤樽は葡萄酒、青樽は林檎酒、黄樽は麦酒、白樽は竜舌蘭（テキーラ）酒、黒樽は砂糖黍（ラム）酒。茶樽と紫樽は子供たちのための飲み物だ。林檎と葡萄味の果実飲料だ。美味しいから飲んでみてくれ」

説明し終わる前に酒飲みの大人たち（ご老人含め）男女が樽の前に群がり始める。子供たちもまた「おいしい！」と葡萄と林檎のジュースを交互に飲み始めた。さて、突然だが宴会に付き物とはなんだろう？　答えは簡単だ。酔っ払いだ。シャルの悪酔いに比べれば圧倒的にマシだが、しかしやはり酔っ払いは面倒だ。

何度か絡まれたがその都度、恋人や友人、伴侶の人に助けてもらった。そしてさんざん歌って踊って、魔力砲による花火打ち上げと騒々しかった中央広場も寂しくなり始め、私が宴会を閉める音頭を取って、解散となった。

ＥｐｉｌｏｇｕｅⅦ－Ｂ星々煌めく夜天にてお別れをしよう～Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ，ＢＥＬＫＡ～

†††Ｓｉｄｅオーディン†††

ついに私たちグラオベン・オルデンのメンバーだけとなった中央広場。数十分前までの喧騒が嘘のように静まり返っている。心地よかった夢が終わったかのように思えてつい「・・・終わった・・・」と漏らしてしまう。私の一番近くに居たシグナムがその独り事に反応し、「はい。終わりましたね」と寂しげに微笑んだ。

「それにしても楽しかったですね～、バーベキュー♪」

「ああ。まぁ、ヴィータは調子に乗って酒を飲んだせいで・・・」

私とシグナムとシャマルとシュリエルは一斉にヴィータの方へ目を向ける。ヴィータはアルコール度数のキツいテキーラに手を出し、盛大に吐いた。何故そうなったのかと言うと、ヴィータは大人ぶって葡萄酒を飲もうとした。が、それを止める大人たち。
子供は子供用の果実飲料ね、と子ども扱いされたヴィータは反発して・・・テキーラをコップに並々注いで一気飲みし、間を置かず吐いたというわけだ。で、今は石像（私たちグラオベン・オルデンの）の土台に座り込んで、「大丈夫？」アギトとアイリに背中を撫でてもらっている。

「火の始末もしたし、ゴミも片づけたし。よし、それじゃあ帰ろう

か」

片づけも一段落して、みんなを引き連れて屋敷へと歩を進める。私は眠ってしまったヴィータを背負い、狼形態のザフィーラの背にも深い眠りに落ちているアギトとアイリが乗っている。月明かりの下、これで最後になる家族の散歩だ。

「・・・・聴いてくれ」

だから話そう。みんなにとってもこれが最後になるのだから。私は足を止め、遅れて同じように足を止めて私へと向き直ったシグナム達を見据える。

「昨夜、エグリゴリから宣戦布告を受けた。日を跨いでの午前3時・・・あと5時間ちょっとだな。場所はクテシフォン砂漠。そこで、私は戦争を行う」

「「「「「っ！！」」」」」

私の背で眠っているはずだったヴィータも含めて全員が息を呑んだ。"エグリゴリ"からの宣戦布告。それだけで察してくれたようだ。もうベルカから去る時が来たんだと。この宴会の理由が、別れの前のアムルへの恩返しのためだったのだと。

「そうですか。・・・・我ら守護騎士ヴォルケンリッターは、あなたの剣で盾です」

「ええ。オーディンさん。私たちも共に戦います。この身命を賭して」

「相手がどれだけ強大であろうと、必ずや」

「うっぷ。そうだぜ、オーディン。あたしらが揃えば最強だ。げぷ」

心強いよ、本当に。相手が"エグリゴリ"でなければどれだけ私の支えになってくれるか。だが相手が悪い。だから「ありがとう。だが、私1人で戦いに行く。君たちは来なくていい」そう突っ撥ねる。

「何故ですっ！？　」

「納得のいく説明をしてください！」

声を張り上げたのはシャマルとシュリエル。黙ってはいるが同じ事を思っているシグナム達からはキツい睨みが。

「相手は、イリュリア戦争で君たちが苦戦していた騎士やミュール、ゼフォンを上回る戦力を有している」

その説明で「なればこそ共に戦うべきではないですか！」あのシグナムが怒鳴り声を上げた。私の背からヴィータが飛び降り、すぐさま私の前へと移動して来て「あたしらを甘く見んなよ！」と、起動した"アイゼン"を突き付けて来た。

「ダメだ。・・・信じてくれ。君たちを過小評価しているわけじゃ

ないんだ。ただ、私の全てを犠牲にした上で相討ち覚悟で挑まなければ、彼らを全滅させる事が出来ないんだ。それはつまり君たちを巻き添えにするという事だ。私の手で、君たちを死なせろと言うのか？」

「それを過小評価だっつってんだ！　そんな間抜けな事になると本気で思ってんのか！？　あたしらだって伊達に何百年って戦場を渡り歩いてきたわけじゃねぇんだ！　自分の身ぐらい守れるんだよ！　こんな楽しい日常を送れるなんて生まれて初めてだから！　そりゃ必死になるさ！　あたしらは闇の書が無事ならまた戻れる！　だけど、あんたが死んだらそれまでなんだよッ！　だからあんたを死なせたくねぇんだよッ！　なんでそれが解らねぇんだ！」

大きく肩を息をするヴィーータの目からは涙が次々と零れる。私が生きていれば、私と繋がっている"夜天の書"もまた生き続けることが出来る。そうだよな。そこをハッキリさせておかないとダメだよな。私は両膝立ちをし、「ちくしょう」と袖でゴシゴシと涙を拭い去っているヴィーータを抱きしめる。

「・・・・エグリゴリを斃すことは、同時に私の人生を終わらせることになるんだ。だからすまない。この戦いの結果がどうであれ、私たちは永遠の別れになるんだよヴィーータ」

「・・・は？・・・ちょっ、なに言ってんだよ、オーディン・・・」

「なんか今、信じられない・・・信じたくない事を言いましたよね・・・？」

「エグリゴリを斃すことが、オーディン・・あなたの願いだ。なのに、その結末が・・・」

「自分の死・・・？」

私から離れたヴィータ、それにシャマル、シグナム、シュリエル、そして黙ったままのザフィーラの顔から見て取れる。みんなの思考が完全に乱れている。自分自身を殺すことになる戦いをしている私（オーディン）というものに。どの道勝っても負けてもこの日常が終わる事への絶望。憎んでくれていい、怨んでくれていい。

しかしこれで・・これで君たちは"エグリゴリ"に殺されなくて済む。君たちを連れて行けば、殺される可能性が高い。そんなもの見たくない。だから突き放す。結局、私は君たちには何も残せなかったのかもしれないな。最後の最後に、君たちに最悪な思い出を与えてしまった。

（フッ。やはり私は早々に人間に戻り、死ぬべきなんだ・・・）

自嘲気味な笑みが漏れてしまう。

「今までありがとう。残念ながら私はこれまでだが、君たちには未来が在る。辛い現実ばかりが在るかもしれない。でも必ず君たちの前には最高の主が現れる。この予言だけは必ず当たる。確実だ。絶対だ。それが運命だ。君たちは、幸せになる」

沈黙。誰も言葉を発せず、俯いているだけだった。この沈黙を破っ

たのは「ヤだ」か細い声。声の主に目をやる。ザフィーラの背に乗っているアギトとアイリだった。

「ヤだ・・そんなの嫌だッ！　マイスターが居なく・・死んじゃうなんて嫌だッ！」

「アイリも！　マイスターだけじゃないよ！　シグナムやヴィータっ、シャマル、シュリエル、ザフィーラっ！　ねえっ！　どうしてみんな居なくなっちゃうの！？　アイリ、良い子になる。もっとなるからッ！　だから居なくならないでよッ！　アイリ達を置いて行かないでよッ！　一緒に生きたいよッ！」

ザフィーラから降りて大声で泣き喚くアギトとアイリを、シャマルとシュリエルがギュッと抱きしめた。知らず私の目からも涙が溢れてきた。拭うこともせず、次第に嗚咽を漏らし始めたシャマルとシュリエル、泣き止まないアギトとアイリの泣き声を聞くだけ。

「我が主。その運命は、変えられないのですか？」

「ああ。エグリゴリの全滅の時が、私の最期だ。勝っても負けても、私は終わる。だから――」

「死なせねぇ。オーディン。あんたを無様な敗死なんてさせねぇ」

「ぐすっ・・・・ええ。あなたの人生、相討ちや敗死なんかで終わらせません」

「完璧に勝たせてみます。そして、胸を張って、ゆっくりと共に逝きましょう」

「その為に我ら守護騎士・・・いいえ、信念の騎士団グラオベン・オルデンが在るのです」

「最期の最期までお供いたします。連れて行かれずとも、自力でついて行きます。場所も時刻も聞き及んでいますので。逃げられると思わぬことです、我が主オーディン」

「ヴィータ・・・シャマル、シュリエル、シグナム・・・ザフィーラ」

凛とした顔を見せる彼女たち。そして「あたしも戦う！」「アイリも！」この2人も。私は改めてアギトとアイリを抱きしめ「ありがとう。でも2人はダメだ」参戦しようとするのを拒絶する。

「「どうして！？」」

「君たちの命は一度限りだ。死ねばそれで終わり。シグナム達は転生してまた別の主の下へ。でも2人は違う。君たちに死んでほしくない。だから連れて行けない。判ってくれ」

「行くっ！　絶対に行くっ！」

「置いて行かれてもついてくもんねっ！」

「アギト。アイリ。頼むから我が儘を言わないでくれ」

「嫌だ！」「嫌！」

アギトもアイリも本気の目だ。説得はもう通用しないだろうな。全員から縋るような視線を受け、私は小さく溜め息を吐く。作戦変更だな。私単独ならどんな自滅覚悟の無茶・無理・無謀でも出来たんだが、守るものが生まれた以上はそう無茶は出来ない。

「死ぬかもしれないんだぞ。辛い現実を見るかもしれない」

「あたし達の知らないところでマイスター達が死んじゃう方が辛いよ！」

「そうだよ。だったら最後まで一緒に戦いたい、マイスター達を見送りたい。それが、アイリとアギトお姉ちゃん――融合騎の務めだもん・・・！」

自らの力で私から離れたアギトとアイリは、私の目を真っ直ぐ見詰めてきた。２人の目を見詰め返したまま「シグナム」と彼女の名を呼ぶ。シグナムは「はい」と簡潔に応える。

「アギトと融合し、私を助けてくれ」

「っ・・・はいっ、お任せを！　剣の騎士シグナム。必ずやお助けします！」

「シグナム。一緒にマイスターを守ろう！」
「ああ、もちろんだ！」
シグナムとアギトが固く握手を交わした。
「ヴィータ」
「応よ！　言わなくても判ってんよ！　アイリ！」
「うんっ！　融合して、マイスターの負担を少しでも減らすんだね！」
「ああ！　鉄槌の騎士と氷雪の融合騎の力、エグリゴリの奴らに思い知らせてやる！」
ヴィータとアイリもまた握手を交わした。
「シャマル」
私に呼ばれたシャマルは「はいっ、何なりと！」と一歩前に出て、私を見る。
「私も気を掛けるが、治癒は全てシャマルに任せたい」
「お任せを。湖の騎士シャマル。その任、確かに承りました」
「ザフィーラ」

「はい」

「基本はシャマルの護衛だが、私やシグナムとヴィータと同じ最前線での戦闘にも参加してもらう」

「承知！」

そして最後に「シュリエル」と彼女の方へと振り向く。シュリエルは指先で涙を拭い去ってあと、ビシッと佇まいを直し「はい」と応えた。

「シュリエルは遠距離からの援護射撃を。この仕事は重要だ。前線組の私たちを生かすことになるからだ」

「はいっ！　お任せをっ！」

堕天使戦争には誰も巻き込みたくないと言うのが本音だったが、私が"夜天の書"の主になったその時からすでにこうなる事が決まっていたとも思えてしまう。

それから私たちは屋敷に着くまでの間、今までの思い出を語り合った。屋敷に着いて、決戦の時間まではそれぞれ好きなことをするように言うと、真っ先に浴場に向かうのが何とも女性らしい。男であるザフィーラは、彼の定位置となっているエントランスのソファの傍に控えた。それを見て苦笑いしていると、残っていたアギトとアイリに服を掴まれた。

「マイスター。エリーゼやアンナに・・・」

「ちゃんとお話ししないとダメだからね」

「ああ。別れを言って来るよ。ありがとうな」

「「うん」」

シグナム達を追って浴場に向かう2人を見送り、向かうはエリーゼとアンナの2人部屋の在る三階。階段へ行くために一階の廊下を歩いて食堂を通り過ぎようとした時、「あ、おかえりなさいませ」と声を掛けられた。その声の主は誰か見ずとも判るため、「ただいま、アンナ」食卓の椅子に座っていたアンナに応じる。私はアンナと話をするために食堂へと入り、「話があるんだ」そう切り出した。

†††Ｓｉｄｅオーディン⇒アンナ†††

今まで見たことのない程に深刻そうなお顔で話があると言われ、私の中である種の覚悟が生まれたわ。今から聴くのはおそらく私の想いへの返答と、おそらくオーディンさんの今後についてのお話。私とオーディンさん分のミルクを用意し、「どうぞ」とオーディンさんにコップを手渡してから改めて食卓につく。

「それで、私に話と言うのは・・・？」

オーディンさんが切り出し辛そうにしていたから、私の方から話を振ってみた。少しの沈黙の果て、「アンナ。君の想いへの返事なん

だが・・・」重い口を開いたオーディンさん。その時点で答えは判ってしまっている。コップを包むように持っている両手に力が籠る。オーディンさんが話を続ける前に私は・・・

「あーあ。やっぱり振られてしまいますかぁ～」

先制して言う。これならそんなに心が傷つかない。そう思ったのだけど、「あはは」そんな短い笑い声が震えてしまうほどに辛い。オーディンさんが「こんな男を好きになってくれてありがとう」食卓に額をゴツンと当てるほどに頭を下げて謝った。

覚悟はしていたわ。こういう結果になるって事も予想できていたもの。けれど、やっぱり少し夢を見ていた。でも夢はいつか必ず覚めるものだと決まっているわ。それが今だということも判る。

「話は、もう1つあるんだ。今夜、私たちグラオベン・オルデンは、エグリゴリとの決戦に向かうことになった」

「っ！！」

脳裏に過ぎるオーディンさんの言葉。"エグリゴリ"との戦いの果て、ベルカを去る。オーディンさんは話を続ける。その決戦の果て、アギトとアイリを除くオーディンさん達グラオベン・オルデンが居なくなることは確実だ、と。ここで初めて知る。シグナムさんとヴィータ、シャマルさんにザフィーラさんにシュリエルさんの正体。

「――闇の書は、主と繋がっている。私が死ねば、闇の書はまた別の主の下へ転生する。エグリゴリの将とも繋がっている私は、エグ

リゴリを全滅させることで消えることになる。だから――」

「決戦の結果如何に関係なくオーディンさん達は居なくなる、ということですね」

オーディンさんと"エグリゴリ"の将という者がどういう風に繋がっているのかは判らないけれど。でも魔族の記憶で見たルシリオンという、オーディンさんの正体らしき方の話の内容が鮮明に頭の中を駆け巡る。

"エグリゴリ"に殺された。"エグリゴリ"に救うため（初めの頃は復讐するつもりだったらしいけど）に世界の奴隷になった。救った後、その奴隷から解放される可能性が高い。それはすなわち、真の死の訪れ。フラれた衝撃の中でも頭だけは自分で呆れ返るほどに動く。

「・・・・判り、まし・・・っ・・・！」

涙が急に溢れ出してきて、声も嗚咽で途切れてしまって発せられない。突然大切なものが一度に多く失われる。その現実を突きつけられて、私は「うわぁぁぁぁあああああ！」泣いた。どんな形でもいいから、オーディンさん、そしてシグナムさん達ともこれからも一緒に過ごしていきたかった。オーディンさんは私が泣き止むまでずっと私の頭を撫でながら「ごめんな」そう謝り続けた。

「・・もう、大丈夫です・・・。オーディンさん。エリーゼのところへ行って下さい。そして、ちゃんと話をしてあげて下さい。包み隠さず、オーディンさんが抱える全てを。エリーゼには知る権利が

あります。あの子は何も知りません。ですから・・・！」

「・・・・判った。・・・今までありがとう、アンナ。さようなら」

そう言ってオーディンさんは食堂を後にした。私はオーディンさんを追いかけ、

「こちらこそ今までありがとうございました。お気をつけて。ルシリオンさん」

お見送りの為の一礼をした。声はきっと届いていない。それほどまでに小声で言ったのだから。また涙が溢れてくる。私の涙が絨毯に染みを作る中、「アンナ」声を掛けられ、背後に立っていたアギト達に振り向いた。

†††Ｓｉｄｅアンナ⇒エリーゼ†††

「アンナ・・・？」

オーディンさん達が帰ってくるまで起きていようと思って読書していた時に聞こえてきた泣き声のようなもの。気の所為かもしれない。だってアンナが大声で泣き喚くなんて考えられないし。

でも、もしかしたらとも思う。だから寝間着（ネグリジェ）の上からコートを羽織って廊下に出ようとした時、コンコンと扉をノックする音が。「はい」って応じると、「話があるんだ。いいだろうか？」ってオーディンさんの声が。これまで出したこともないような「ひゃいっ！」裏返った声で返事をしちゃった・・・。

「・・っと！　ちょっと待ってください！」

ハッと気づく。コートを羽織ってるとは言えネグリジェ姿で男性であるオーディンさんを部屋に迎え入れるのは、非常にまずいかも。もし、こんなはしたない格好のわたしを見てオーディンさんが・・・・きゃあきゃあきゃあ！

頭の上の浮かんだどうしようもない程にアホな妄想を両手を振って掻き消す。手団扇で顔をパタパタ扇ぎながら「もうちょっと待ってください！」廊下に待たせているオーディンさんに声を掛ける。

「こんな夜分に本当にすまない」

「？？？」

どうしてか判らないけど、胸がキュッと締め付けられた。不安一色っていう嫌な感じで。一気に熱が冷めて行って、すぐにでもオーディンさんの顔を見たいって衝動に駆られる。急いでコートの袖に腕を通して、前を獣の牙の形をしたホックで留める。そして「お待たせしました」扉を開けてオーディンさんを室内に招き入れた。アンナとの共同部屋だから寝台は２つ。鏡台も机も２つずつ。広さも申し分ない。オーディンさんと近付き過ぎてドキドキに殺されるなんて間抜けな事にはならない。

「エリーゼ」

「あ、はい。っと、ごめんなさい。立ち話もなんですから座ってく

ださい」

脚が1本の丸机と肘掛椅子へ近づこうとした時、「え・・・？」オーディンさんに腕を掴まれた。それだけでドキッとなる・・・はずだった、いつも通りなら。けど、今はオーディンさんの雰囲気でなんだか怖い。わたしは自分の不安を払拭したいために「オーディンさん・・・？」わたしの腕を掴むオーディンさんの手に自分の手を添えた。

「何かありましたか？　何でも言ってください。わたしに出来る事ならなんだってしますから」

俯いたオーディンさんはわたしの腕を放して、「すまない」そう一言。その謝罪は急に腕を掴んだことに対するものだって思ったから「お気になさらず」と言ったところで、「告白の返事をしに来たんだ」囁き程度だけど、でもしっかりと耳に届いた。ドクンと心臓が跳ねる。顔を上げたオーディンさんは儚げな笑みを浮かべていた。

「すまない。私はエリーゼの想いには応えられない」

「・・・そう、ですか。でも諦めませんよ！　わたし、諦めませんから！　いつか必ず好きにさせて見せます！　しつこいって思われても、わたし、オーディンさんのことが大好きだから！」

ある程度は予想できていた答え。だから取り乱すことはなかったけど、やっぱり泣きそう。だから強がってみた。わんわん泣いたら困らせちゃうって判っているから。足が震えるのを抑えられない。オ

ーディンさんは「そこまで想われて、私は幸せだ」とはにかんだ。それを見ると、まだ機会はあるって思える。時間は掛かるかもしれないけど、いつかきっと。決意を新たに、「オ、オーディンさんっ。い、一緒に、ね、ねねねね寝ませんか！？」早速攻めに転じよう。

（べ、別にいかがわしい意味じゃなくて、ただ並んで寝ようと言う意味で！）

熱い！　自分で提案しておいてなんだけど、恥ずかしさで顔が大火事だ。オーディンさんを横目でチラッと見る。

（あれ？　どうしてそんなに優しい笑顔なんですか・・・？）

照れはなくても（本当は照れてほしい）呆れとか困惑とかの表情になるって思ったんだけど。オーディンさんが「エリーゼ」とわたしの名前を呼びながら体を寄せて来た。心臓が早鐘を打つ。えっと、嬉しいんですけど・・・やっぱり照れちゃいます。わたしとオーディンさんの距離がほとんどなくなった途端に、

「失礼するよ」

「ひゃっ！？」

肩と膝裏に腕を回されて横抱きに抱え上げられた。ま、まさかこのまま寝台の上に連れて行かれちゃうんですか！？　わたし、心の準備が出来てませんっ！　ドキドキしながら目を瞑って、寝台の上に寝かされるのを待っていたけど・・・あれ？

なかなか寝台のふんわりが来ない。薄目を開けると、「ちょっ、えっ！？」今まさにオーディンさんは窓枠に足を掛けて飛び出そうとしていた。

「ふぇ、ふえええええええええええっ！　（飛び降りたぁぁぁあああああああああっ！？）」

浮遊感がわたしを襲う。思わずオーディンさんの首に両腕を回して、しっかり抱きつく。一瞬で地面が近づいたかと思えば、また一瞬で空高くまで急上昇するオーディンさん。見ればオーディンさんの背中からは蒼く光り輝く剣型の翼が１２枚と展開されていた。

「エリーゼ、空を見てみろ」

「空、ですか・・・って、わぁ♪」

言われるまで全然気づかなかったけど、今夜は空気が澄んでいて、星が綺麗。あ、もしかしてオーディンさん。この星空をわたしに見せるためにわざわざ空を飛んでくれたのかな・・・？　だとしたらすっごく嬉しい。片腕をオーディンさんから外して星の海が広がる夜天に伸ばす。

「空が近いです♪　星が綺麗です♪　感動・感激です　オーディンさんっ。わたし――」

「エリーゼ。私は今晩、ベルカを離れることになった」

「・・・・え？」

今、オーディンさんは何て言ったの？　あれ？　おかしいな。ベルカを去るって言った？　気の所為だよね。うん、だから「あはは、聞こえませんでした・・・」苦笑いする。オーディンさんは「ベルカを去るんだ」って聞き間違いじゃないことを示す、信じたくない言葉をもう一度言った。

「な・・んで・・・どう・・して・・・そんな、いきなり・・・？」

オーディンさんの顔を見上げる。わたしを見下ろすオーディンさんの顔と息がかかるほどに近くなった。息を呑む。でも・・・そんな寂しげな目で見ないでください。何も言えなくなっちゃうじゃないですか。

「私はずっと嘘を吐いていた。君と出逢ってから、ずっとだ」

「嘘・・・？」

「ああ、むしろ私の全てが嘘なんだよエリーゼ。嘘塗れだ、君に慕われる価値なんてない」

「どういうことですか・・・？」

「オーディン。この名前からして嘘だ」

耳を疑った。名前が嘘？　なにそれ、そんな冗談、聞き入れられな

い。出るのは「はは、ははは」乾いた笑い声だけ。オーディン？さんがわたしから前へと目をやって「ルシリオン」そう呟いた。

「ルシリオン・セインテスト・アースガルド。それが、私の本当の名前だ。オーディンとは、私の遠い祖先の名前なんだ。フォン・シュゼルヴァロードは、永い旅路の中で授かったものだ」

「ルシリオン・・・さん・・・？」

「ああ。エリーゼ」

涙がポロポロ零れる。だってオーディ――ううん、ルシリオンさん、やっと本当の名前を告白できて、わたしに呼ばれて救われた、満ち足りたって顔してるんだもん。どうしてそんな嘘を吐いたのかは解らないけど、きっと何か大きな理由が在ったに違いない。

「ここからが私の中核を成す真実だ。嘘だと、ベルカを去る言い訳だと思われるかもしれないが、今から話すのは全て真実で事実だ」

「・・・・はい。話してください。わたし、納得したいので」

「私がベルカに残れない理由、君の想いに応えられない理由だ。我が手に携えしは確かなる幻想」

――夢語り――

ルシリオンさんがわたしの額に自分の額をコツンと当てると、急に

瞼が重くなって閉じてしまう。意識が遠のくのが判る暗闇の中、「見せよう。私の真実を」という重々しい声が。

「私は――」

ルシリオンさんが語って、そして脳裏に浮かんだその当時の真実らしき映像。数千年前に起こった、数百の世界を巻き込んだ大戦。ラグナロク。"戦天使ヴァルキリー"。堕天使戦争。"堕天使エグリゴリ"。家族・恋人・戦友の死。不死と不治の呪い。解放される条件。"界律の守護神テスタメント"。契約。絶対の別離。

「・・ぅく、ひっく・・・ひっく・・っく・・・」

わたしが想像していた以上に壮絶な人生を歩んでいたルシリオンさん。恋人がいた事に少しばかり衝撃を受けたけど、そんなものが軽く打ち消されるようなルシリオンさんの人生に、わたしは泣くことしか出来なかった。わたしの見た大戦、そして堕天使戦争。そのどれもにルシリオンさんと親しい人たちが亡くなる映像が在った。

「――これが私の全てだ。どれだけその世界が恋しくて残りたくても残れないんだ。もう私の精神は限界が近い。今回のこの契約を逃すと、私はまず人間には戻れない。だから、すまない。エリーゼの想いには応えられない」

「ルシ、ひっく、リオン・・ぅ、さん・・・ぅく・・」

「衝撃が強すぎたよな。極力むごいモノは省いたんだが」

「いいえ・・。大丈夫、です・・・。でも、判りました。ルシリオンさんが去ってしまう理由。わたしの、一小娘の我が儘で引き止めちゃダメなんですよね・・・」

見送ることこそがルシリオンさんの為だと、心の中では解ってる。解ってるけど、でも・・・それでも「離れたくないよ・・・」ルシリオンさんの胸にもたれかかる。

「だって、こんなに好きなんだもん。やっぱりこれからもずっと一緒に・・・！」

「ありがとう。でも、すまない。・・・エリーゼは良い娘だから、私なんかより素晴らしい男性と必ず巡り合えるだろう」

「そんなの望みません！　わたしが好きになるのは、ルシリオンさんで最初で最後だから！」

絶対に忘れられない、忘れたくない想い。そんな想いを秘めた状態で他の男の人を好きになったり、結婚したりするなんてありえない。ルシリオンさんが「むぅ。それは困るなぁ。アギトとアイリを未来にまで託したいんだが・・・」唸った。

「え・・・？」

「もう1つ、話しておかなければならないことがあるんだ。シグナム達の事についてだ」

ここまで酷い現実ってあるものなのかな・・・。噂程度だけど知っていた"闇の書"。シグナムさん達がその"闇の書"の一部だったなんて。最愛の人ルシリオンさんを失って、それだけじゃなくてシグナムさんたち家族まで・・・。

「私たちは消えるが、アギトとアイリはこれからもベルカで生きていく。寿命なんてものが無い2人は、エリーゼ達の世代が亡くなってからもだ。そんな2人を、未来に現れるであろうロードと巡り合うまで支える家族が要るんだ。だからエリーゼ。君を利用することになると重々承知しているが、誰かと恋をし、結ばれ、子を成し、一族で2人を未来へ運んで行ってほしい」

「そんなの・・・勝手すぎます・・・！」

「そうだな。勝手すぎるよな。ごめんな・・・本当に」

重い沈黙。アギトとアイリの事は任されたいけど、でもだからってその為に好きでもない人と結婚して、子供なんて作りたくない。そう思う反面、爵位を持つ貴族であるわたしはいつか結婚しないとダメなんだよね。子供に爵位を延々と受け継がせていかないと、アムル領は朽ちることになっちゃう。結局、わたしはルシリオンさんとは違う人と結ばれて、子供を・・・・あ、良い案を思いついちゃった。

「ルシリオンさんのお願い、承りました」

「っ・・・ああ、ありがとう。アギトとアイリをよろしく頼む」

お礼を言っているルシリオンさんだけど、表情は感謝なんてしてない。ルシリオンさんの表情は、自身に対しての怒りや憎しみを募らせている悲しげなものだ。

「ルシリオンさん。わたしの最後のお願い、聴いてください」

「疑問形じゃないんだな。いいよ。何でも聴こう。それが私に出来る今までの恩返しだ」

「言質、取りましたよ。絶対の絶対に聞いてもらいますから　」

そう言っておくことで言い逃れの逃げ道を塞いでおく。ルシリオンさんは「お手柔らかに」と微かにだけど、やっと笑みを浮かべてくれた。わたしの頬・・・だけじゃなくて全身が火照りだして熱くなるのを自覚する。でも、機会はこの今だけ。あと数時間でルシリオンさんもシグナムさん達も居なくなる。だから意を決して、

「すぅぅぅ・・・はぁぁぁ。ルシリオンさん！」

「ああ」

「わたしを抱いてください！」

「ぶふっ！？」

「にゃ〝っ？」

「す、すまない！　けど、なっ、はぁっ！？」

唾を吹き出したルシリオンさん。唐突に言ったわたしに非があるのかな・・・？　でも引き返せないし、引き返そうとも思わない。もう一度「抱いてください！」告げる。ルシリオンさんは明らかに動揺しながら「待て待て待て待て！」勢いよく首を横に振る。

「待ちませんっ！　さっき、何でも聞く、って言ったじゃないですか！」

「それはそうだが！　願いのレベルが高すぎる！　今まで存在してきた2万年の中で最強クラスの願い事だ！」

「それでもちゃんと聞いてもらいます！　女の子にこんなこと言わせたんですから、責任取ってください！」

「えええええ！？」

それから5分くらい押し問答。このままお別れの時間まで逃げられるのはまずい。もう恥じらい云々なんていうのは消え失せて完全に意地になっているわたしは、「お願いですから・・・」泣き落とし作戦。たじろぐルシリオンさんを一気に畳み掛ける。わたしの想いをひたすらに告げる。

「後悔、しないんだな・・・？」

「後悔なんてしません。わたしが望んだことだから」

「ぅぐぐぐ・・・まさかこんな事になるなんて・・・」

やっと折れたくれたルシリオンさん。それが判ると、改めてわたしはこれからルシリオンさんと・・ひゃぁぁぁ！

そういう行為をすると思うと、ボンッと頭が爆発しちゃいそうになる。けど、うん。ルシリオンさんと愛し合うことが、わたしにとってこれからも生きていく糧となると思う。屋敷へと戻る中、「ルシリオンさん。この事、他のみんなには・・・？」尋ねてみる。無言でいると気まずいから。ルシリオンさんは「エリーゼだけにしか言ってない」と答えた。

「じゃあ2人だけの秘密、ですね」

「そうなるか・・・はぁ」

「諦めてくださいよ。男らしくないですよ」

「君は強いな。変な方向にだが・・・」

何度も溜め息を吐いているルシリオンさんのおでこをペチペチ叩く。わたし達人間より高位の存在の"テスタメント"であるルシリオンさんにはかなり失礼だと思うけど。そして、ルシリオンさんに横抱きにされての満天の星空の散歩もついに終わりを迎えた。わたしとアンナの部屋の窓枠に降り立ったルシリオンさん。アンナは居ない、

ね。わたしを床に降ろしてくれたルシリオンさんの腕を引いて寝台に向かう。

「シグナム達に思念通話で聴いてみたら、アンナやターニャと一緒に食堂で話をしているようだ」

「そうですか・・・えっと、それじゃあ・・その・・・お願いします」

「本当にいいのか？　こんな形で、君は――」

「お願いします。いつか結婚することになるなら、せめて初めてはあなたに・・・」

この一回で子供が出来るとは思えない。だったら子供が出来なくても純潔だけはルシリオンさんに捧げたい。そうしてわたしとルシリオンさんは愛し合う。わたし・・・ルシリオンさんの事、シグナムさん達の事、一緒に過ごした日々、絶対に忘れません。だから、必ず勝ってください。そして・・・心置きなく帰ってください、あなたの故郷アースガルドへ。

「さようなら、ルシリオンさん。あなたに出逢えて、一緒に過すことが出来て、わたしはすごく幸せでした」

いつの間にか眠っていたようで、気付けば寝台の上にはもうルシリオンさんの姿はなかった。ただ1人残されたわたし。上半身だけを起こして、わたしは月明かりが差し込む窓に向けて別れを告げた。

と、指先に何かが当たった。「え・・・？」そちらに目をやると、銀に輝く腕輪のようなモノが置かれてた。手に取ってみると、それはルシリオンさんの後ろ髪で編まれた腕輪だった。

「ルシリ・・オンさん・・・ぅく、ひぅ、っく、ひっく・・・ルシリオンさん！！」

優しく温かな魔力を感じる腕輪を胸に抱え込んで、もう二度と返事が帰って来ないって判りながらもわたしは恋した人の名前を何度も呼び続けた。

ＡＮＳＵＲⅢ其は天壌を焼き払いし煉獄を顕現せし者～Ｂｕｒｎｈｅｌｌ Ｄ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「待たせて、すまなかった」

アムルの南出口に待機していたグラオベン・オルデンのみんなに声を掛ける。

アンナとターニャに別れを言ったんだろう。ヴィータとシャマルとシュリエルは目に見えてしょんぼりしているし、シグナムとザフィーラもハッキリと顔には出ていないが寂しそうだ。この中で唯一これからもエリーゼ達と生きるアギトとアイリは、私たちとの別れが徐々に、そして確実に近づいて来ている事に今にも泣きそうだ。

「シグナムとヴィータにはコレを渡しておく。我が手に携えしは確かなる幻想」

神秘満載の魔力を充填したカートリッジが３０発ずつ収められた箱を渡しておく。ソレについて「対エグリゴリ戦で必要なものだ。攻防・補助をする時は必ずそのカートリッジをロードしてくれ」と厳重に伝えておく。２人は「はい」「おう」とそれぞれ首肯してくれた。「それとコレも一緒に」とシグナムやヴィータだけでなく全員の腕を取って、黄金で出来た腕輪をはめていく。

「オーディンさん、コレは――って・・え？」

シャマルが腕輪から私へと視線を移した瞬間に目を大きく見開いた。シャマル達だけでなく、沈んでいたアギト達ですら私を見て目を丸くしている。しかし今は生死に関わる真剣な話をしている最中だ。気に留めずに話を続ける。

「銘はドラウプニル。シグナムとヴィータに渡したカートリッジと同じ効果を得られる。ソレを装備している限り、君たちの魔導は全てエグリゴリに通用することになる」

神造兵装・"黄金の滴ドラウプニル"。装備者の魔力に神器の有する神秘を付加させ、尚且つ装備者の魔力を底上げする効果を持つ。これで全員の魔導は、私や"堕天使エグリゴリ"が扱う魔道と化し、連中とまともに戦えるはずだ。それはつまり致死率を大幅に下げる事になるわけだが、それでも死なないかもしれない、というレベルに過ぎない。

「マイスター・・・？」

「ん？　どうしたアイリ・・・？」

「マイスターの髪、短くなってるんだけど」

ああ、目を丸くして私を見ていた理由はそれか。シグナムとザフィーラを除くみんながコクコクと頷いていた。髪を短くした理由、か。その理由をみんなに話す・・・前に、とりあえずクテシフォン砂漠へと向かわなければ。

約束の時間である午前3時を過ぎた場合、"エグリゴリ"がどういう行動を取るか判らない。無差別攻撃なんてことになる可能性もある。それだけは避けなければ。みんなにその事を告げ、すぐさまアムルから飛び立つことに。

「さようなら。・・・いってきます」

剣翼アンピエルを発動し空へと上がる最中に、アムルに最後の挨拶をする。私に続いて空に上がってきたシグナム達も「いってきます」と別れを済ましていく。そして私たちグラオベン・オルデンは1年と少しの期間を過ごしたアムルを離れる。

アムルからクテシフォン砂漠までは、私の全力飛行でも3時間半は掛かる。今から全力戦闘をすると言うのに、飛行で魔力・体力を消費するのは愚行だ。ただでさえ圧倒的火力を有している連中を相手に、疲労困憊で挑むなど自殺行為。

『全騎。少し離れた場所からはスキーズブラズニルで移動だ』

それの対策の為にそう伝えておく。全騎からの『ヤヴォール』を受け、アムルから高度と距離を徐々に開ける。そしてある程度離れたところで、"神々の宝庫ブレイザブリク"より1隻のスキーズブラズニルを召喚し、乗船する。

スキーズブラズニルの飛行速度なら・・・2時間ほどで到着できるはずだ。船体の縁にもたれ掛りながら高速で景色が流れる様を観ていると、「マイスター。さっきの・・・」アイリから短髪化した理由の話をもう一度振られた。

「私の生まれ故郷グラズヘイムの習わしによるもの、かな。決死の覚悟で死地に赴く戦士は、髪を切って家族や親しい者に渡すんだ。私の出身世界を巻き込んだ戦争、その前線で戦う者は戦死したら遺品なんてものが残らない程に酷い遺体となる。だから出陣式の前に遺品として、確かに生きてきた証として髪を遺すんだ」

そう説明して、肩上にまでなった後ろ髪をサラッと払う。アンスール時代は、死ぬなどこれっぽっちも考えなかったからやらなかった。明確な死を知る事になったこれまでの契約の中でも、このグラズヘイムの習わしをやらなかったな

フェイトと出逢う前はそんな事すら忘れていたし、出逢った後はフェイトだけ想っていたから、大切な人を作ろうとも思わなかった。

「正直エリーゼに今から死ぬ私の思い出に繋がる物を遺していいのか迷った。けど・・・未練がましいな。私や君たちの事を忘れ去られるのは嫌だったんだ」

切った後ろ髪は腕輪状に纏めて魔力コーティングしたため、ある種の神器となっている。これからの激動の時代を生きていくエリーゼへの御守りのようなものだ。アンナ達の分も作ってあげたかったが、残念ながらそこまでの時間的余裕が無かった。

「「マイスター・・・」」

「アギト、アイリ。生きてくれ。これからもずっと。そうすれば、いつかきっとシグナム達とまた出逢えるはずだ」

私の両手を自らの両手で包み込むようにして握ってくれているアギトとアイリに微笑みを向ける。寿命の無い自分たちと、永遠に彷徨う"夜天の書"の守護騎士ヴォルケンリッターー。その2つの事から、私の言ったことを理解したアギトとアイリは頷いたが、すぐに・・・

「そこに・・・マイスターは居ないんだよ・・・」

「もう逢えないんだ・・・」

「私は居る。みんなが私の事を忘れない限り、私はずっと君たちの傍に居る」

2人の頭を撫で、傍まで寄って来たシグナム達を順繰りに見回す。

「絶対に忘れないからっ！　マイスターの事、絶対に・・・！」

「アイリも忘れないよっ！　どれだけ経っても・・・ずっと忘れない！」

「我々ヴォルケンリッターも。これからどれだけの苦行を強いられようと、あなたの事は忘れません」

「おうよ。オーディン。あんたやエリーゼ達に貰った楽しかった時間を支えにすりゃ、頑張っていける」

「そうね。・・・アギトちゃん、アイリちゃん。また必ず、どこか

で逢いましょ♪」

「ああ。私たちはオーディンの信念の元に集いしグラオベン・オルデン。この絆は永遠だ」

「うむ」

そうか。遺すことが出来たんだな、私の願いを。良い思い出を作って、はやてと出逢うまでそれを支えにして生きて行ってほしい、と。っと、そうだ。シュリエルにはこれだけは伝えておかないといけないから「シュリエル」と彼女の名を呼ぶ。

「はい。なんでしょうか」

「シュリエル。君の名前について伝えておきたい事があるんだ」

「私の名前、ですか・・・？」

小首をかしげるシュリエルに、私は伝える。シュリエルリート。この名前は時限付きの名前なんだということを。当然、「え、どういうことですか？」とショックを受けているシュリエル。しかしこれは未来のために必要な話だ。

「遠い未来。君たち闇の書を救う主が現れる。シュリエル。その者から君は新しい名前を与えられるだろう。それは必ず君やみんなの救いとなる。だからもし、君たちが心より慕う主と出会えた時、そして名前を与えられるような事態になったとき、気にすることなく

シュリエルリートの名を捨ててくれ」

「・・・それも予言ですか？」

「ああ。すまないな。今の私にはそれしか伝えられない」

「・・・判りました。心に留めておきます」

寂しそうなシュリエルの頭を撫でつつ「頼むよ」と私は頭を下げた。それからクテシフォン砂漠に着くまでの間、私たちは肩を寄せ合って過ごした。

「もうそろそろか・・・」

流れ星が何度か流れた夜天の下の船旅ももう終わりだ。約束の決戦地であるクテシフォン砂漠へと到着。決戦開始の時刻まで3分とない。私は空戦形態へルモーズとなり、"エヴェストルム"をランツェフォルムで起動して臨戦態勢。シグナムとアギト、ヴィータとアイリも融合を果たして、いつでも戦闘へ移れるようにしている。

「グラオベン・オルデン各騎。必ず最後まで生き残れ。いいな？」

「「「「「『『ヤヴォール！』』」」」」」

さあ、いつでも来い"エグリゴリ"。私たちは準備万端だ。クテシフォン砂漠へと着地させたスキーズブラズニルの甲板の上で待ち構えて少し。ついにその時が来た。圧し潰されると錯覚してし

まうほどに強大な魔力が頭上から降ってきた。間髪入れずにゾワッと背筋に悪寒が奔る。私は「船から離れろッ！」指示を出す。スキーズブラズニルの甲板から空へと一斉に散開したその直後、

――轟破焔壊槌（マルテーロ・コンブスタオン）――

真っ赤な炎の塊と化している、炎暁（えんぎょう）の槌・バンヘルドの有する神器・"灼槌ケンテュール"が隕石の如く甲板に飛来。そして着弾。そのたった一撃で、スキーズブラズニルを粉砕し、欠片も残さず焼滅させた。私の傍に集まって来たシグナム達は、

「あの巨船をたった一撃で消し飛ばしただと・・・！？」

「なに、これ・・・魔力が・・・尋常じゃないわ・・・！」

「アレが・・・真のエグリゴリ・・・！」

「おいおい。こんなのが複数居んのかよ・・・」

戦慄している事が感じ取れるほどに震えた声で呻いている。初撃で確実にシグナム達の精神に多大なダメージを与えた攻撃を放った主、バンヘルドの居る上空へと目をやる。月を背にして宙に佇むバンヘルドの背からはクジャクの尾羽のような翼２０枚、エラトマ・エギエネスが展開されていた。

「各騎、戦闘開始だ・・・！」

炎を噴き上げながら戻って来た"ケンテュール"を手に取ったバンヘルドを見上げながら告げる。

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

其は善性より堕とされし炎獄の堕天使バンヘルド

「下僕共も一緒か。笑わせるな神器王。我らと貴様の"力"に遠く及ばない雑兵をいくら集めたところで――」

――屈服（コード）させよ、汝の恐怖（イロウエル）――

「取り消せバンヘルドっ。この娘たちは下僕ではないッ。・・・家族だッ！！」

一対の銀の巨腕イロウエルを発動。バンヘルドの左右から押し潰すように拳打を放つ。ドゴンッ！と、大気が震えるほどの衝撃が届く。当然ながら、この程度で勝てる相手じゃない。故に端から問答無用で攻撃を加えるために上級術式を構築。そして「シュリエル！　集中砲火ッ！」指示を出す。

「はいッ！」

――ハウリングスフィア――

「響け！　ナイトメアハウル！！」

――弓神の狩猟（コード・ウル）――

シュリエルの多弾砲撃ナイトメアハウルと数百の魔力光線ウルが、２つのイロウエルの設置点の間に居るバンヘルドに向かって飛んで行く。着弾する寸前、「煉獄・・・顕現」小声ながらもハッキリと耳にまで届くのは術式名。

――煉獄顕現（デシダ・エクスプロザオ）――

バンヘルドの全身から放出された炎が夜天を炎一色に染め上げた。異常な熱度の所為で、イロウエルが粉砕ではなく蒸発する。そして火炎は空で渦を巻き、

――焔雨（ペザデーロ）――

渦より人間大の炎弾が雨のように降り注いできた。威力は格段に下がっているが、それでも直撃すれば無事では済まない。私が指示を出す前にシグナム達はすでに回避行動を取っていた。ほぼ無意識だろう。本能のままに避けた感がある。けど、それでいいんだ。考えてから行動していては手遅れになる。

広範囲に広がる炎弾を紙一重で回避しながら「エヴェストルム、カートリッジロード！」２つのシリンダーのカートリッジを４発ずつ、計８発をロード。ルーン文字の効果を発動させ、"エヴェストルム"を神器化させる。

――集い纏え、汝の閃光槍（コード・ポースゼルエル）――

２つの穂に閃光系魔力を付加。穂先を炎の渦の中心に居るであろうバンヘルドへと向け、

「食らえええええええッッ！！」

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

上級攻性術式・閃光系の砲撃ゲルセミを放つ。一直線に空へ上るゲルセミから溢れる幾つもの光球と、周囲へ広がる衝撃波が炎弾を掻き消していく。そして音もなく渦の中心を穿った。が、すでにその場にバンヘルドは居なかった。

――焚灼槌龍（メテリオト・ソル）――

ドクンと跳ねる心臓。後ろへ振り返る。こちらへ真っ直ぐ突撃して来るのは、宵闇を照らす、大口を開けた火炎の龍。あの術式は、バンヘルド自身が炎塊となって突進するものだ。だが・・いつの間に地上へ降下したと言うんだ・・・？

（そうか！　自身も炎弾となって、他の炎弾に紛れて降って来たわけか・・・！）

『魂すら残さずに燃やし尽くしてくれるわ！！』

タネが判ればもう同じ手は通じない。"エヴェストルム"の穂先を

向け、カートリッジを計2発ロードする。2つのシリンダーから排莢し、スピードローダーを使って一気に全弾装填しながら、『シグナム、ヴィータ、シュリエル！』の3人に指示を出す。
まずはバンヘルドを押さえ込まなければ。となれば何かしらのダメージを与えないことには始まらない。私は急上昇、シグナム達は降下させる。案の定、私の殺害を目的としているバンヘルドは私を追尾してきた。

「我が手に携えしは確かなる幻想・・・！」

――ストライクスターズ――

アーチを描いて急降下する軌道を取ったと同時、突き出した拳からなのはの砲撃を放つ。1本のディバインバスターと数基のアクセルシューターで構成されたこの砲撃。全弾バンヘルドに着弾、桜色の閃光が爆ぜた。が、全く通用しないと言うように炎龍は大口を開けて、私を追って降下し始める。

『攻撃準備！』

『『『ヤヴォールッ！』』』

大きく引き離したところで急停止して、指示を出した私の周囲に3人が集まる。シグナムとヴィータはカートリッジをロード。居合いの構えを取るシグナム。"アイゼン"がギガントフォルムとなり、シュリエルの周囲にはハウリングスフィアが4基と展開。

――女神（コード・リン）の護盾――

私たちの上方２５ｍほどの位置に女神の祈る姿の絵が描かれた円い盾を展開。炎龍となって突進して来るバンヘルドの神秘と魔力に比べれば少し劣る。が、完璧に防ぎきる必要はない。回り込むという軌道を取らず、破壊に拘ったらしいバンヘルドがリンに衝突した。空に火炎の花が咲く。バキバキとヒビ割れる音がすぐに出たが、確かに拮抗している。これが狙いだ。さらにカートリッジを計６発ロード。

「曙光神（コード・デリング）の降臨！！」

リンとバンヘルドの衝突点を中心として急激に爆ぜる蒼の大光球。デアボリック・エミッションの閃光系魔道バージョンと言ったところか。まぁ障壁発生阻害なんて素晴らしい効果など無く、純粋な破壊特化だが。バンヘルドに通用しているかは判らないが、突破してこないところを見れば多少は効いているらしい。今のうちに２度目の排莢・装填を行っておく。

「あと少しでデリングが治まる。合図と同時に――」

「一斉攻撃ってわけだな。つうか、オーディン単独でどうにかなりそうじゃね？」

「そんな事はない。君たちが居てくれると、私は・・・獣にならずに済む」

計6発ロードした"エヴェストルム"を足元に突き刺し、手に魔力矢ウルを番えた魔力弓を具現。攻撃態勢に入ったことでシグナム達もまたグッと身構えた。その直後、「効かぬわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」炎龍の解けたバンヘルドが治まりきらないデリングより急降下して来た。

――弓神（コード・ウル）の狩猟――

――ナイトメアハウル――

――コメートフリーゲン・アイス――

無数の光線と化したウル、5条の砲撃、冷気を纏う大鉄球が1基とバンヘルドへ向かう。バンヘルドは「これは・・・！？」と驚きを見せ、翼を翻しながら紙一重で回避しつつ、"ケンテュール"を振るって私たちの攻撃を弾き返していく。

理解したか。私の神秘を有したシグナム達の攻撃の直撃は、致命に至らずとも多少なりのダメージを負うという事に。ウルを"ケンテュール"に集中砲火させ「ぬっ・・！」大きく腕を弾き逸らした。

『「飛竜・・・一閃！！」』

間髪入れずに放たれる、シュランゲフォルムによる砲撃級斬撃・飛竜一閃。直撃する直前にバンヘルドは無理やり体を捻って"ケンテュール"で受け止めた。拮抗する神器"ケンテュール"と、神秘を纏ったデバイス"レヴァンティン"。"レヴァンティン"が破壊される前に・・・

『ザフィーラっ！！』

『承知！』

――鋼の軛――

何をしてほしいと言うまでもなく、ザフィーラは私が望んでいる魔導を発動した。言葉を交わさずとも解り合える。大戦時、アンスールや"戦天使ヴァルキリー"との共闘を思い出す。バンヘルドへと突き上がって行く拘束条。同時にヴィータは最強の一撃の準備に入った。飛竜一閃を弾き返したバンヘルドは鋼の軛を横移動で回避した・・・が、

「轟天爆砕！！」

『ついでに凍結粉砕っ！！』

「『ギガント・・・・フリーレンシュラークッ！！』」

膨大な冷気を纏った超巨大な"アイゼン"の一撃がバンヘルドを襲撃。防御も回避も出来ないまま直撃を受け、そのまま地面へと叩き付けられようとした。ここで私の魔道。下が砂漠では、直撃時の打撃力が申し分なくともトドメの押し潰しの衝撃の大半が砂に吸収される。

――暴力防ぎし（コード）、汝（ピュルキエル）の鉄壁――

そうならないために、砂漠の上に寝かせるように対物障壁を展開。これで衝撃は逃げない。展開したその瞬間、バンヘルドは"アイゼン"の一撃によって障壁に叩き付けられた。神器・"神槍グングニル"を具現し、"エヴェストルム"のカートリッジ全12発を一気にロード。

「（各個撃破のこの好機・・・）逃さない・・・！」

何故バンヘルドの1機しか居ないのかが理解できないが、しかし単独である今は最高の好機だ。たとえ伏兵として他の"エグリゴリ"が出てこようが、その前にバンヘルドを救って見せる。"グングニル"の能力を限定解放するための詠唱を・・・

「くだらぬ」

しようとしたところで、不機嫌な声と共に、遥か頭上に発生する強大な魔力。直径が50mはある炎の輪。その中央に炎球が発生し、輪の直径と同じほどの大きさとなった。それはさながら小型ながらも太陽だった。私の知らない術式。効果は見た通りのものだろう。

――炎星招来（エストレッラ・カデンチェ）――

「全騎、高速離脱ッ！！」

「今度は貴様だけでなく下僕共も逃がさん・・・！」

落とされる太陽。蜘蛛の子を散らすようにシグナム達が一斉に距離を取る。"アイゼン"が元に戻ったことで姿を現したバンヘルドだが、所々が凍っていた。しかし炎を纏うことで凍っていた部分が溶ける。そんなバンヘルドと視線を交わす。それも一瞬だけだ。太陽の効果範囲から離脱しなければ。そう、後退ではなく前進して。

「うぉぉぉおおおおおおおおッ！！」

「いいだろう！　来いッ、神器王！」

砂漠に平行して飛び、"グングニル"と"エヴェストルム"の二槍流。共に２ｍ近い長さを誇る武装だ。降下してくる太陽の下、"グングニル"を投擲。能力を解放していないために必中必殺の効果は無い。が、その一撃によって防御でも回避でもいい、何かしらの行動を取ったその一瞬の隙を突く。

バンヘルドは"グングニル"の強大さを憶えているようで、防御でも迎撃でもない、回避行動を取った。エラトマ・エギエネスを靡かせての横移動。その移動先へと飛行軌道を変更して、バンヘルドへと急速接近。

――豊穣伸（コード・フレイ）の宝剣――

そして、術者の意思や体の安全を無視して常に最良の一撃を対象に放つ斬撃の魔道フレイを繰り出す。全弾空になっているためカートリッジの魔力に頼ることが出来ない今、記憶消失覚悟で自分の魔力を使用しての発動。ズキンと頭痛が起こる。１機につき１回の記憶喪失。"エグリゴリ"を救う代償としては安過ぎる。

（どれでも持って行け・・・！）

"エヴェストルム"を斬り上げるように振るう。バンヘルドは迎撃を選び、"ケンテュール"を"エヴェストルム"に向け振り降ろしてきた。ここでフレイの効果が発動。斬り上げの最中にガクッと軌道を変え、薙ぎ払いの斬撃となった。

「ぬっ・・・！？」

空振りしたバンヘルドは体勢を大きく崩しながらも、無理やり体を捻り前屈みになって、フレイの効果を持つ"エヴェストルム"の直撃を避けた。だが背中側をこちらに向けるような体勢になったことで翼――エラトマ・エギエネスだけは避けきれなかった。２０枚全てを半ばからバッサリと斬り捨てる。そして空いている右手を翼の付け根へ伸ばしてガシッと掴む。

「太陽はお前が受けろッ、バンヘルドッ！」

落下してくる太陽に向かってバンヘルドを投げ放ち、結末を見る前にその場から高速離脱。背中にバンヘルドと太陽が衝突したことを示す大爆発の轟音と爆風を受ける。ある程度距離を取って振り返る。あるのは赤々と燃える黒煙。スピードローダーを使って全弾装填し直しながら『各騎、無事か・・・？』確認を取る。

『シグナムとアギト、問題ありません』

『あたしとアイリもピンピンしてるぜ』

『シュリエルも問題ありません』

『シャマルとザフィーラ、大丈夫です』

無事を確認して、心の内でホッと安堵。だがそんな安堵もすぐに緊張に変わる。黒煙の尾を引いて砂漠へと落下、着地したバンヘルドが「やってくれる」と怒りの籠った目で私を睨んできた。対炎熱系術師の"ヴァルキリー"として設計・誕生させたバンヘルドだ。さすがの耐火防御力と言うわけだ。

「力神の化身（コード・マグニ）」

筋力・魔力と言った全ての"力"を強化するマグニを発動。私たちグラオベン・オルデン全騎に掛ける。

――赫灼装甲（カロル・アルマドゥラ）――

バンヘルドの素肌が赤くなる。熱エネルギーで身体強化を行った事を示す特徴だ。そしてバンヘルドは「いざ・・・！」地を蹴った。ドンッ！と轟音と共に砂柱が立ち上る。向かって来るのは私だと思っていたため、対応が遅れた。バンヘルドが一足飛びで突進したのは「シャマルっ、ザフィーラ！！」の2人だった。

――煉獄兵（プルガトーリオ・インファンタリア）――

彼女たちのもとに向かおうにも溶岩で構成された、数えるのも億劫な人形兵どもに行く手を邪魔される。それだけでなく私はそれらを含めて、ドーム状の火炎結界に閉じ込められた。

「退けぇぇぇえええええええええええええッッ！！！」

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒ザフィーラ†††

我とシャマルの元へ突進してきたバンヘルド。携えるは轟々と燃え盛る鉄槌。その圧倒的な威圧感――死というものは、かつて我を瀕死に追いやったゼフォンの比ではない。我の傍に居るシャマルは「ひっ・・！」死の恐怖に当てられたのか体が竦んで動けなかった。ならば我のすべきことは「我が主より承りし任、果たして見せる」シャマルの護衛、それだけだ。振るわれた鉄槌を後退することで回避した我は、「おおおおお！」魔力を纏わせた拳打で応戦。

「ザフィーラ！」

「お前は下がっていろシャマル！」

火の粉にすら強大な魔力が満ちているな。直撃はもちろんのこと掠っても死、か。いや、今は主の魔導によって強化されている。多少の無茶はいけそうだ。

「雑兵なれど我と神器王の戦にチョロチョロと周りを動き回れては目障りだ。ゆえにまずは貴様らから焼滅してくれる」

――灼槌（ケンテュール）――

「我が主の足を引っ張りたくはない。が、そう易々と殺されるわけにはいかんのだ！！」

――守護の拳――

主の魔導を信じ、鉄槌を真っ向から殴る。目の前が爆炎で真っ赤に染まる。視覚だけでなく聴覚も奪われたようだが、右手の感覚は残っている。消し飛ばされなかったようだ。ならば、「我、盾の守護獣ザフィーラの拳、受けてみよ！！」左拳打を真っ直ぐ打ち込む。人を殴った確かな手応えを感じる。ああ、見えずとも判る。バンヘルドという者の魔力反応が、奴の居場所を我に教える。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」

連続で拳打を繰り出し続ける。中には空振るものもあるが、それでも直撃の手応えもある。ようやく黒煙が失せ、視界を取り戻すことが出来た。我の目前に居るのはバンヘルド。鼻や口端より血を流しているところを見れば、我の拳でも奴に通用するのが判った。奴は「調子に乗るなッ！」と言ったのだろうか。なおも続く耳鳴りの影響で聞こえなかったが。防御魔力全開で覆った裏拳で振るわれる鉄槌を弾き、奴の鳩尾に拳打を打ち込む。このまま押し切ってくれる。と、思ったのだが・・・・

――灼灼熱閃（フォーゴ・クレラオ）――

「な・・・に・・・・！？」

一瞬、赤い何かが閃いたかと思えば・・・「ぐっ、ぐぉぉぉあああああああ！！」我の両腕が切り落とされた。両膝を折り、砂漠に蹲る。何が起きたのかが理解できん。ただ何かしらの攻撃を受け、両腕を失ったという事だけが理解できる。

苦痛に呻いていると「ザフィーラ！！」シャマルが砂を蹴ってこちらに駆けて来るのが判った。来るな、と叫びたいが痛みで声が出ん。顔だけを上げ、バンヘルドを睨み上げる。と、奴は我からシャマルへと目をやった。

「（まずい・・・！）くぅぅおおおおおおおおおおお！」

足の力だけで立ち上がり、シャマルを庇うように立ち塞がる。後ろから「ダメっ、逃げてっ！」と嗚咽の混じったシャマルの悲鳴が。主やシグナム達は、溶岩の人形兵に行く手を拒まれているな。おそらくこちらの様子は見えていまい。

「お前は・・・逃げろ・・・・！」

「きゅあ・・・っ！」

力加減をしてシャマルを蹴り飛ばす。「自身より女を護るか。見事だ」バンヘルドが鉄槌を振りかぶる。薙ぎ払うかのように振るわれた鉄槌が、我の腹に直撃。途轍もない衝撃。奴のどこか悲しげな双眸。

――猛炎放出（シャーマ・エゼクサオン）――

燃え上がる鉄槌と我が体。それが、我がハッキリと見た最期の光景だった。

†††Ｓｉｄｅザフィーラ⇒シャマル†††

「ザフィ・・・ラ・・・？」

両腕を熱線で消し飛ばされ、鉄槌から放たれた火炎の砲撃でお腹に穴を開けられたザフィーラ・・・。バンヘルドなんて目に入らない程に、私は茫然としていた。横たわるザフィーラの元へ歩く。途中で砂に足を取られて「きゃ・・っ」転んでしまうけど、それでも立ってザフィーラの元へ。ザフィーラの体を「ザフィーラ・・起きて・・・、ねえ、起きて」何度も揺らしながら治癒の魔導・静かなる癒しを掛ける。でも「無駄だ。その男はもう絶命している」バンヘルドの冷酷な声が掛けられた。

「黙りなさいッ！！」

「・・・・はぁ。無駄だと言っているだろう」

「この・・・・！」

――風の護盾――

振り下ろされた鉄槌を障壁で防御する。直後に鉄槌から炎が上がる。

熱が盾を通り過ぎて私を襲ってくる。汗がブワッと出る。盾が砕けた瞬間、確実に灰にされる。でもザフィーラを放って1人だけで逃げるなんて出来ない。悔しくて涙が溢れて来た。そんな時、『シャマル・・・』思念通話が。「ザフィーラ！？」声を掛ける。

『我は・・もう、ダメだ。・・・だから・・・魔力核を・・・回収・・・してくれ・・・』

「え・・・？」

『闇の書を・・・完成・・・たった1機が・・・これでけの、力を・・・有し・・・』

それだけで察することが出来た。シュリエルを融合騎として完成させる。これからきっと姿を現す他の"エグリゴリ"にちゃんと対抗できるようにするために。

『我は・・・体が無く・・とも・・主と共に・・・戦い・・・』

「・・・ええ。判ったわ、ザフィーラ」

回り込めばいいだけなのに、バンヘルドはわざわざ風の護盾を破壊しようと鉄槌を振るい続ける。けど、それがさらに恐怖感を煽ってくる。盾がひび割れて行く音が耳に届く。急がないと。「クラールヴィント、お願い！」旅の鏡を使って、ザフィーラの魔力核を回収する。するとザフィーラの体が薄れて行って、「またねザフィーラ」ついには消えた。私はシュリエルのところへ駆けだす。

「次は貴様だ。せめてもの慈悲だ。苦しまずに逝かせてやる」

盾が破壊された。熱を持った爆風によって私の体が宙に投げ飛ばされる。それでいい。おかげでバンヘルドから大きく距離を取る事が出来た。でも「どうすれば辿り着けるの・・・・！？」全周囲を溶岩の人形に包囲されていて、どこにシュリエルが居るのかも判らない。それに『オーディンさん！　シュリエル！　シグナム！　ヴィータちゃん！』包囲網の向こう側と思念通話が通じない。

「はぁはぁはぁ・・・熱い・・・・！」

気温がどんどん上がっていく。息苦しい。でもザフィーラの苦しみに比べれば。

――咲炎弾（シャーマ・ガヴィアン）――

「きゃぁぁぁあああああああ！！」

飛来してくる火炎弾。爆風に煽られながらも私は懸命に耐えて歩みを止めない。けど「しま・・・っ！」すぐ真後ろに着弾した火炎弾。視界が真っ白に染まった。途轍もない衝撃。そして浮遊感。私の意識はそこで一度途切れた。

「・・・・・ぅ・・・あ・・・・・」

自分の声が耳に届く。生きてる。死んでない。私は砂漠にうつ伏せ

で倒れていて、「ぺっぺっ」口の中に入ってる砂を吐き出す。痛む体を起こして、「よか・・った・・」胸に抱えていたザフィーラの魔力核の無事を確認する。

（バンヘルドは・・・？）

居た。１０ｍほど先に佇んでいる。鉄槌を携え、前方に発生させた火炎球に打ち込もうとしていた。逃げないと。ザフィーラの魔力核を抱きかかえて、立ち上って逃げようとして、気付いた。立てない。そもそも私の足が「無い・・・？」膝から下の脚が無かった。

「（え？　なに、これ・・・うそ・・私の・・・脚・・脚が・・・）や・・いやぁぁぁあああああ！！！」

信じたくなくて「いやあああああ！」叫び続ける。頭の中がグチャグチャにかき乱される。

「２人目の撃破だ」

――咲炎弾（シャーマ・ガヴィアン）――

涙で視界が滲む中、バンヘルドが鉄槌で火炎球を打ち放ったのが見えた。

（あ、私、死んだわ・・・）

迫り来る真っ赤に燃え立つ火炎弾を、他人事みたいに眺める。頭に

浮かぶのは、ザフィーラへの申し訳なさと、オーディンさんとの誓いを果たせなかった悔しさと悲しさ。オーディンさん。きっと自分を追い込んでしまうわ。だってすごく優しいから。私たちの死を、自分の所為だって責めてしまう。それは嫌だけど「ごめんなさい」私はもう自力で動くことが出来ないです。仰向けになって目を閉じる。せめて苦しまずに逝きたい・・・。全てを諦めた時、

「貴様ぁぁぁぁあああッ！！」『お前ぇぇぇーーーーーッ！』

――紫電一閃――

目をパッと開けると、2対の炎の翼を背中から発生させているシグナムの後ろ姿が視界に入った。火炎弾を"レヴァンティン"で斬り裂いて迎撃したシグナム。爆風が私の髪を強く靡かせる。そのままバンヘルドの元へと飛んで行く。「待って、シグナム・・・」止めようとするけど、もうすでにバンヘルドと戦闘を繰り広げてしまった。

『ダメよ、シグナム。戻って・・・あなた、左腕が・・・！』

『問題ない！　それよりお前だシャマル！　お前、脚が・・・！』

シグナムの左腕、明らかに真っ黒に炭化していた。きっと無茶したに違いない。あんな状態で衝撃が加わると、腕が確実に崩れてしまうわ。私の脚はもう治らないけれど、シグナムの腕ならオーディンさんの魔導で治るはず。だからそう言ったのだけど、『無駄だよシャマルっ。あたしが言っても聞かなかったもんっ』泣きそうな声で

応じたアギトちゃん。

「だったら・・・クラールヴィント！！」

――静かなる癒し――

戦闘中のシグナムに治癒魔法を発動させる。腕は治せないけど、その他の傷や体力・魔力は回復できる。シグナムから『すまん！』感謝の思念通話。ただ『気を付けて。シグナム、アギトちゃん』応援するしか出来なくて。ううん。私にだって出来る事はあるはず。そうだわ。歩けないなら飛べばいい。

「あ・・・あああああああああああああ！！！」

力を振り絞って、勢いよく飛び上がった。上空からなら戦場の様子がよく判る。溶岩人形――と言うより炎の包囲壁が幾つもある。私たちの居た場所、ヴィータちゃんとアイリちゃんの居る場所、シュリエルの居る場所。

そして「オーディンさん・・・！？」の包囲壁だけは尋常じゃなかった。半球状の火炎包囲。横だけでなく空にまで火炎で蓋をされてしまっているわ。時折、蒼い砲撃が半球を穿つけど、すぐに元に戻ってしまう。あれだと脱出できない。今の私にオーディンさんを救う手段はない。なら今はシュリエルと合流して・・・

――灼灼熱閃（フォーゴ・クレラオ）――

「っ・・・え・・・？」

私を背中から貫いたのは・・・ザフィーラの腕を斬った熱線だった。

「あ・・・（オーディ・・・・・）」

†††Ｓｉｄｅシャマル⇒シュリエル†††

溶岩の人形を片っ端から砲撃で消し飛ばすが、一向に数が減らない。私を包囲している火炎の壁が原因だろう。あれが無尽蔵に兵を増やしていく。真の"エグリゴリ"というバンヘルドの実力を、私は――おそらく守護騎士全員が完全に甘く見ていた。

「チマチマ撃っていては埒が明かないな・・・！」

ならば火炎の壁に近づき、デアボリック・エミッションで穴を開けてくれる。いざ行動を移そうとした時、空から何かが落ちて来るのが判った。目を凝らし、それを視認した瞬間、血の気が引いた。

「シャマル！！」

――ブルーティガー・ドルヒ――

迫り来る人形どもの頭部を粉砕。動きを止めたその隙に落下してきたシャマルを抱き止める。息を呑んだ。シャマルの胸には穴が開いており、しかも焼かれたのか両脚を失っていた。それだけではない。

「ザフィーラ・・・お前、まさか・・・！」大事そうに抱えていたのは1つの魔力核。

色からしてザフィーラの物で間違いない。今になって気付く。"闇の書"の管制プログラムだというのに、今さらシャマルとザフィーラの気配が微弱になっていることに。

「っ・・・。闇の書。蒐集開始・・・」

≪Ｓａｍｍｌｕｎｇ≫

ザフィーラとシャマルの魔力核を取り込む。次に２人に逢う時は、次の転生での戦場だ。６６６頁まで残り僅か。シグナムとヴィータの魔力核でちょうど６６６頁に達する。シャマルの体の消滅を見送り、火炎の壁の向こう側に居るであろうバンヘルドをキッと睨み付ける。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！」

火炎の壁に突撃し、「闇に染まれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！」デアボリック・エミッションを発動し、壁に穴を開ける。エミッションの中を通り、外へと脱出。すぐに『オーディンっ、シグナムっ、ヴィータっ！』思念通話を通すものの繋がらない。

「どれだ！？　どの火炎の壁の中にシグナムとヴィータは居るっ！？」

オーディンはおそらく単独でも大丈夫なはず。しかしシグナムとヴィータはそうはいかないかもしれない。そうだ。空から見ればいい。

「羽ばたけ、スレイプニール！」空へと上がり、一気の高度を上げる。まず最初に見えたのが、「シグナム！！」がバンヘルドの放っ

た火炎の砲撃の直撃を受けた様だった。すぐさま救出するため、「響け！」砲撃ナイトメアをバンヘルドに放ちながら急降下。

「４人目は貴様か？　銀の髪を持つ者よ」

鉄槌でナイトメアを弾き返したバンヘルドにそう問われる。私は「いや。もう誰も貴様の手によって死なせはしない！」言い放ち、

――ブルーティガー・ドルヒ――

２５基の短剣を一斉に射出する。物量で押し切る。１発も当らずともいい。僅かでも時間を稼げればそれだけで。シグナムを、最悪アギトだけでも救わなければ。オーディンの仰る通り私たち守護騎士とは違い、アギトは死ねばそれで終わりだ。軌道を変えて砂漠に倒れ伏しているシグナムの元へと急ぐ。

「しっかりしろシグナム！」

いや、このまま楽にしてやった方が良いのかもしれない。左腕と左足を失い、左脇腹は炭化、美しかった長い髪も焼かれて、肩辺りにまでなっている。脈も弱い。もう休ませるのがシグナムの為だ。問題は『アギト、聞こえるか！？』アギトの生死確認だ。

「死にぞこないに何を言っても無駄だ。このまま貴様と鉄槌を携える少女を討ち、最後に神器王を討つ」

「っ！　言っただろう？　これ以上は、誰も殺させないと！！」

バンヘルドと対峙しながらも『アギト！』何度も呼びかける。シグナムの魔力核を取り込まねば、"闇の書"と共に転生できなくなってしまう。だからすぐにでも蒐集しておきたいがアギトが内に居る今、蒐集は出来ない。魔力核を蒐集した後、融合中のアギトがどうなるか判らないからだ。

――ハウリングスフィア――

魔力球を5基展開する。近付かせるわけにはいかない。だから弾幕を張る。

――ナイトメアハウル――

6本の砲撃を放った直後にブルーティガー・ドルヒを展開、射出。すぐにもう一度ナイトメアハウルを放つ。射砲撃による弾幕だ。魔力消費が凄まじいが、弱音など吐いている余裕も暇もない。バンヘルドは実力差を見せつけるためか避けようとはせず、炎の壁による防御や鉄槌による迎撃を見せつけてくる。

『アギト！　聞こえるなら融合を解け！　そのままではお前も一緒に死ぬことになる！』

「死にぞこないを庇って死ぬなど、無様な終わり方だぞ」

「黙れ！　それ以上私の家族を愚弄するなッ！」

頼むアギト。早く目を覚ましてくれ。私もそう長くはもたない。少しずつ弾幕の中を歩いて近づいて来るバンヘルド。彼我の距離は約２０ｍ。死を運んでくる足音。少しでも遅らせるために休まず弾幕を張り続けていたところに、

「んだよ、これ・・・どうなってんだよこれ！！」

頭上から聞こえてきたのは「ヴィータ！？」の怒声。ハンマーフォルムの"グラーフアイゼン"は、全体にヒビが入っているように見える。それにヴィータとアイリの融合はすでに解けている状態だ。ヴィータが胸に抱えているのはグッタリとしているアイリ。頼むから気絶であってくれ。

「ほう。お前もあの包囲を抜けたか。見れば判るだろう。女剣士はもう助かるまい。狼男ともう1人の女はすでに死んだ。残るはお前と、女剣士を庇っているその女。そして私の標的である神器王のみ」

「な・・んだって・・？　おい、テメェ。今、なんつった？　誰と誰が死んだって・・！？」

ヴィータが私とシグナムの傍に降りて来た。俯いていて表情は見えないが、理解できないという呆けたものかもしれない。私は「シャマルとザフィーラが死んだ。魔力核はすでに蒐集済みだ」と漏らす。ギリッと歯噛みした音がヴィータから聞こえた。

「嘘だよな・・・？　嘘だって言えよシュリエル・・・。嘘だって言えよッ！！」

「・・・嘘ではない。２人はもう居ない。シグナムももう・・・・」
「アイツか・・・。アイツが、シャマルを、ザフィーラを・・・シグナムも・・・！」
「ああ！！　あの者が、私たちの家族を奪ったッ！」
共にバンヘルドを睨み付ける。奴は涼しい顔をして「怨むなら私ではなく神器王を怨め」と、オーディンを怨めと言う。怨めるものか。私たちが無理を言ってついて来たのだ。この結果は自己責任だ。ヴィータもそれが判っているからこそ「ざけんなっ！　あたしらが怨むのはテメェだけだッ！」と怒鳴る。バンヘルドを含めた"エグリゴリ"がかつてのオーディンの仲間であろうと、オーディンの本当のご家族や仲間、シグナム達を死に追いやったことは事実。
「そうか。まぁいい。どちらにしろ貴様たちはこれにて終焉だ」
――煉獄巨神顕現（アポストロ・ムスッペル）――
バンヘルドから強大な炎が噴き上がった。強烈な熱波が放たれ、堪らず腕で顔を隠す。熱波が弱まったことで腕を退け、そして見た。目の前に居たのは火炎の巨人。唖然と巨人の足元から頭上まで目をやる。あんなモノの攻撃を受けたとなっては確実に死んでしまう。
「シュリエル！　シグナム達を連れて逃げろッ！　あたしが時間を稼ぐ！」

「馬鹿を言うな！　アイリとの融合が解けている今、お前では――」
「判ってんよ！　それでもお前なら守れんだろっ、アギトとアイリを！」
≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．　Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ　！≫
ヴィーータはアイリを私に寄越し、ひび割れた"グラーフアイゼン"をギガントフォルムへ変形させ、バンヘルドの頭上へ向かって飛び上がって行った。
「止せヴィーータ！　今はオーディンと合流することを――」
「ぅく・・・っ・・・」
背後で倒れているシグナムの方から声が。振り向けば、シグナムの胸の上で呻いているアギトが居た。アイリと同様に気を失っているようだ。悪夢を見ているかのように苦しそうに顔を歪めている。アイリと一緒にアギトも胸に抱きかかえ、"闇の書"にシグナムの魔力核を蒐集させる。消滅するシグナムの体を見送った直後、爆音と衝撃波が私を襲った。遅れて近くに勢いよく落下した何か。
「なんだ・・・！？」
巻き上がる砂塵に目を細め、何かが落下した方へ目をやり注視する。砂塵が治まり、ソレが何なのかが判った。

「ヴィータ・・・！」

強く歯を噛みしめる。騎士甲冑が全て粉砕され裸体を晒しているヴィータ。見ただけで判る。息をしていないということが。

「残るは貴様だけだ」

「ヴィータ。お疲れ様だ・・・」

ヴィータの魔力核を蒐集することで"闇の書"の６６６頁すべてが埋まった。私たちの主であるオーディンの承認を経て、"闇の書"は真に覚醒する。

「オーディン。今、あなたの元へ参ります！」

アギトとアイリ、"闇の書"を胸に抱え、バンヘルドに背を向けてこの場から飛び立つ。向かうのはオーディンのいらっしゃるところ。

「無駄な足掻きを」火炎の巨拳が連続で振り下ろされてきた。拳打を右へ左へと避け続ける。魔力で全身を覆うパンツァーガイストを発動、続けてベルカ魔法陣形の障壁パンツァーシルトを展開。

「おおおおおおおおおおッ！！」

最大防御で火炎の壁に突っ込む。この先に、オーディンが・・・！

力の限り炎の中を翔ける。頼む、障壁よ、もってくれ。オーディンと合流できるまで。

「（抜けた・・・！）・・・オーディン！！」

火炎の壁の中、オーディンは確かに居らした。まったくの無傷とは言えない、無残な御姿で。上半身はほとんど裸で、火傷が酷い。それでも懸命に"グングニル"を振るって溶岩人形を粉砕し続けていた。ハウリングスフィアを5基展開。「響け！」6本の砲撃ナイトメアハウルを放ち、オーディンのお傍に立つ人形どもを消し飛ばす。

「オーディン！」

「シュリエル！？　くっ、邪魔をするなッ！」

――知らしめよ（コード）、汝（アブディエル）の忠誠　――

オーディンの胸に飛び込んだ直後、"グングニル"の2つの穂より十数mの魔力刃が生まれた。振るわれる"グングニル"から生えた魔力刃が周囲に居る人形どもをバラバラに一掃した。新手が生まれるまでの短い猶予。私はオーディンに告げた。シグナムもヴィータもシャマルもザフィーラも、皆がバンヘルドに敗れたことを。

「私の・・所為で・・みんなを巻き込んだから・・・私が、シグナム達を・・殺した・・・」

「違いますっ！　そうではありませんっ！」

「結局、私はまた、家族を守りきることが出来なかった！！」

自分の顔を殴り始めたオーディン。「違いますっ。あなたの所為ではありませんっ！」そうお止めするが、子供のように泣くオーディンの腕力には敵わない。

「皆はあなたの所為だと思っていませんっ。自分の意思でこの戦場に立ち、戦ったのですっ。敗死は自己責任なのですっ！　ベルカを訪れる前にすでに戦争を知っているなら判っているはずっ！　皆の死は、あなたの所為ではないっ！　それにっ、皆の命はここに在ります！」

"闇の書"をオーディンのお顔の前に突き付ける。ようやく自傷行為をお止めになったオーディンの目が"闇の書"に向く。

「我らが闇の書の主、オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。闇の書はついに完成いたしました。あとはあなたの承認によって、覚醒いたします。支天の翼シュリエルリートを融合騎として完成させ、私をあなたと共に戦わせてください」

「シュリエル・・・。みんな・・・」

オーディンは"闇の書"に手を伸ばしそっとお触れになった。そして「主として、覚醒の承認をする」と先程までと打って変わって凛としたお顔でそう告げた。最期の最期で私はオーディン、あなたと一体となれるのですね。ようやく融合騎として、あなたのお力になれる。

「闇の書の主、オーディンの承認を確認。闇の書、覚醒します」

あらゆる制限が解けていく。私は"闇の書"の表紙に手を乗せ、オーディンが私の手の上に手を添える。共に「融合！」と告げる。この身がオーディンと一体になる感覚。さぁ、行こう。私たち守護騎士ヴォルケンリッターの意志は、必ずオーディンに勝利をもたらす。

†††Ｓｉｄｅシュリエル⇒ルシリオン†††

愛おしい家族を犠牲にし、私は"夜天の書"を完成させた。シュリエルを融合騎として覚醒させ、いま融合を果たす。鏡が無いため今の私の姿がどうなっているかは判らないが、今はそんなことなどどうでもいい。

「アギト。アイリ。ここでさようならだ」

砂漠の上で横たわっているアギトとアイリを魔力球に閉じ込め、胸に抱える。まずはここから出ないとな。私の上級魔道をいくらぶつけても破壊できなかった火炎結界。バンヘルドがここまで強大になっていたなど想定外にも程がある。

「かくれんぼは終わりだ」

どうやって破壊しようかと考えていたところで、結界が消え失せた。炎の巨人と化す魔道アポストル・ムスッペルを発動しているバンヘルドの顔を見上げる。好機だ。魔力球に包んだアギトとアイリを、魔力で人工的に発生させた風に乗せてアムルへと飛ばす。シュリエ

ルが『さようなら、アギト、アイリ』別れを告げた。

『オーディン。私たち守護騎士は、エグリゴリの実力を甘く見過ぎていました。申し訳ありません』

『謝らないでくれ、シュリエル。今はとにかく・・・勝つぞ』

『はいっ！』

――第二級粛清執行権限解凍――

魔力リミッターを解放。この状態で魔道を発動すると確実に記憶を失う。が、シュリエルと合流するまでに何度か記憶を失った。だからもう恐れることも無い。

「行くぞ、バンヘルド・・・！」

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

"グングニル"の穂先より砲撃を放つ。頭痛や胸痛を覚悟していたが起こらなかった。バンヘルドは巨体故に回避することが出来ず、防御の為に右手の平を翳して受け止めようとした。直撃する前に私はバンヘルドの頭上へと飛び、遅れてゲルセミが右腕を貫き、粉砕。そして私は"グングニル"の能力を解放。脳天に目掛けて、「目醒めろ、グングニル！！」投擲する。

「ぐおおおおおおおおお！！」

頭頂部から股下までを一直線に貫いた"グングニル"によって火炎の巨人が解除される。姿を現したバンヘルドの両腕が根こそぎ消し飛んでいた。手元に戻って来た"グングニル"を手に取り、一気に畳み掛けるために上級魔道の術式を連続で構築、発動させていく。

――雷神の天罰（コード・トール）――

遥か頭上に直径２００ｍのアースガルド魔法陣を展開。そこからバンヘルド目がけてピンポイントで雷撃を落とす。バンヘルドは新たに展開させたエラトマ・エギエネスによる滑らかかつ高速移動で避け続ける。だがな、私という本体の攻撃を忘れてもらっては困る。

――女神の夜宴（コード・ノート）――

「これは・・・！」

夜間限定で発動できる、私の有する闇黒系魔道の最強であるノート。闇夜が球体上に物質化し、バンヘルドを取り込み閉じ込めた。闇の球体はバンヘルドを取り込んだまま収縮。今頃は球体内で闇黒系魔力の連続爆発が起こっているだろう。逃げ場のない爆発の波にバンヘルドは呑まれている。最後は球体ごと爆発を起こし、球体の欠片は再び闇夜に還っていった。

『これが、オーディンの魔導式・・・！　ここまで複雑なもの、見たことが無い・・・』

『気分は悪くなっていないかシュリエル？　アイリはクラクラしたと言うが』

『はい、問題ありません。術式に補助が出来ないことに悔しさがありますが』

シュリエルの抱く悔しさというものを感じる。融合しているからだろうか。しかし頼もしい限りだ。融合状態なら記憶喪失は起こらない。これならガーデンベルグ達が今すぐ現れても戦い抜ける。

「おのれ・・・神器王ぉぉぉおおおおおおおおおおおおッ！！」

――焚灼槌龍（メテリオト・ソル）――

バンヘルドはボロボロになりながらも火炎龍となって突撃して来た。私は「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」と、アンスールメンバーの術式や武装を具現する呪文を詠唱。親友にして戦友である炎帝セシリスの神器・"煉星剣レーヴァテイン"を具現。ズキンと起こる頭痛。ああ、やはりこれだけのランクとなると記憶喪失は免れないか。一瞬で何らかの記憶を失った。しかしそれに構っている暇はない。"レーヴァテイン"の火炎発生能力を最大限に発動させる。峰を向かい合わせた２つの刀身に、竜巻状に紅蓮の業火が発生する。

「さぁ、行こうかセシリス！！」

――ええ。行こう、ルシル！――

バンヘルドに殺されたセシリスの神器と魔道で、バンヘルドに眠りを与える。復讐のつもりはない。ただトドメの一撃は、アンスールメンバーの魔道でつけようと昔から考えていた。セシリスの声が聞こえた気がした。彼女の声の幻聴にも後ろ暗い感情は感じられなかった。あるのは、"エグリゴリ"を解放したい、救いたいという想いのみ。

（長い間、放っておいてすまなかった。おやすみ。私とシェフィリスの可愛い息子・・・）

燃え盛る"レーヴァテイン"を頭上に掲げ、

「さようならだ、バンヘルド！・・・天壌滅（レーヴァ）する・・・原初（テイン）の業火ッ！！」

一気に振り降ろした。刀身より放たれる剣状の火炎砲撃。火炎龍バンヘルドと火炎砲撃レーヴァテインが真っ向から衝突する。拮抗する間もなくレーヴァテインはバンヘルドを呑み込んだ。後に残るは静寂。地平線の彼方が少しずつ明るみを見せ始める中、

『勝った、のですか・・・？』

『ああ。バンヘルドの反応が消失した。私たちグラオベン・オルデンの勝利だ』

とは言えまだ一戦目だが。バンヘルド1機に私たちは壊滅状態だ。

"夜天の書"の暴走までの残り時間が気になるが、今シュリエルを失うのは痛い。

『あの、オーディン。一度融合を解いてもらってもよろしいですか？』

『ん？　ああ、やはり融合初回から飛ばし過ぎたからな。すまない、無茶をさせた』

融合を解く。私の目の前に現れるシュリエル。待ち望んだ融合を果たし、勝利したことで満足そうな顔、そしてシグナム達の犠牲の果てでの今だということに悲しげな顔、その２つの複雑な感情が入り混じった表情なシュリエル。

「いいえ。守護騎士の総意ですから。皆も喜んでいます」

"闇の書"を愛おしそうに抱きしめたシュリエルは「オーディンも褒めてあげてください」と私へと差し出してきた。腕を伸ばして「よく頑張ってくれたな、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ」と表紙を撫でる。

「ありが――」

――影渡り（シュルプリーズ・ソワール・エロジオン）・黒き閃光放つ凶拳――

――掃討猟犬（ミュート・スレイヤークライシス・エア）・嵐槍百花――

至近距離と遥か彼方からバンヘルド以上の神秘を宿した魔力を感知。

思考する間もなく"夜天の書"ごとシュリエルを突き飛ばす。直後、暴風の矢が私の右腕を穿ち、消し飛ばした。油断はしていなかった。油断はしていなかったんだ・・・なのに！！

「っ！？　オーディ――っ！？」

意識が途切れる直前に見た光景は、影から現れた闇黒系の堕天使レーゼフェアの砲撃で、"夜天の書"ごとシュリエルが消し飛ばされた、というものだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　ＺＥＲＯ：Ｖｉｖｅｒｅ　Ｅｓｔ　Ｍｉｌｉｔａｒｅ・・・Ｆｉｎ

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

「・・・ち・・うえ・・・」

なに・・・？

「・・・起きて・・・さい・・・ちち・・え」

起きろ・・・？

「起きて下さい、父上。ここで眠っていては風邪をひいてしまいます」

「あ？・・・ああ、すまない。眠ってしまっていたか・・・」

いつの間に寝ていたのか、私は机に突っ伏していた。指を組んで「くぅーーーっ」腕を頭上に掲げでグッと伸びをすれば、体のあちこちからポキポキと鳴った。ぐるりと見回せば、ここがセインテスト王家の城であるグラズヘイム城、その執務室であることをが判った。何故、私は執務室の机で眠っていたのか？　寝惚けているのか思い出せない。

「父上。お休みになられるのであれば、寝室へどうぞ。風邪をひか

れてしまいますゆえ」

「ありがとう、バンヘルド。しかし、まだ仕事が残っているからな。寝ていられないさ」

執務室に居た理由を思い出して、そう返す。先ほどから私を心配そうに見ているのは、ワインレッドの髪をオールバックにした３０代くらいの男、バンヘルド。

私、アースガルドのセインテスト王ルシリオンと、氷零世界ニヴルヘイムの第二王女シェフィリスの子供だ。私とシェフィの子供。本心からそう思っているが、しかしバンヘルドが生まれた理由を思えば誤魔化していると言えるな。

「つい先日。父上は同じ事を言い、体調を崩されていました」

「う〝っ。いやいや、今日は大丈夫だ、問題ない」

「・・・・・（じぃー）」

ものすごい見られているな。視線で穴が開きそうだよ、バンヘルド・・・・。

「・・・・・頼む、じぃーっと見ないでくれ。居心地が悪い」

「判りました。ですが、しばらく傍に控えさせていただきます」

完全自律稼働人型魔道兵器・〝戦天使ヴァルキリー〟。それが、バ

ンヘルドの正体だ。私とシェフィが愛し合って、そして彼女が腹を痛めて生んだ子ではない。魔術を用いて誕生させた、戦争を終わらせるための戦力として創り出した人工生命体だ。

「もしかして・・・シェフィに言われたか？」

「はい。母上は父上の事を心配しておられます。無茶をしているようであれば、お止めするように、と」

「シェフィとて無茶をしていると思うが・・・？」

私とシェフィは、まだ完全とは言えない"ヴァルキリー"のシステムを究極にするために日々研究している。今現在、"ヴァルキリー"はバンヘルドを含めた3機がすでに稼働していて、3機が稼働準備中だ。今後の世代を究極に近づけるための実験部隊である第一世代の6機。この子たちの実践記録を活かして、次世代の"ヴァルキリー"を究極にする。

「母上の元には、リアンシェルトが控えておりますゆえ」

「そうか。ガーデンベルグはどうしている？」

「お忘れですか？　イヴィリシリア様、セシリス様との実戦訓練です」

「ああ、そうだったか。ダメだな、まだ寝惚けているのかもしれない」

リアンシェルトというのは、先に挙げた稼働機の内の1機で、第一世代の副隊長を務めることになるシリアル０２。ガーデンベルグもそう。第一世代の隊長を務めることになるシリアル０１。ちなみにバンヘルドは０３だ。試作機のシリアル００も居たが、すでに機能停止していて、今はゆっくり休ませている。にしても、だ。

「バンヘルド。お前、その体に不満とかないか？」

私を含めた"アンスール"の誰よりも年上の外見であるその体について、バンヘルド自身が何か思っていないか訊いてみる。

「不満ですか？　特にシステムに不具合も無く・・・・・・自己検査の結果も問題がありませんが」

「そうじゃなくて、何と言うか、外見年齢・・・とか」

「確かに、私の外見年齢だけが高く設定されていますね。ふむ、不思議には思います。ガーデンベルグとリアンシェルト、稼働準備中のグランフェリア、レーゼフェア、フィヨルツェンのどれもが１０代２０代の外見・・・」

バンヘルドが腕を組んで唸り始めた。アンスールメンバーの大半は１０代だ。私は今１７歳。一番年上は、無圏世界ニダヴェリールの王ジークヘルグの２２歳だ。今後の"ヴァルキリー"の外見年齢は確定していないが、まず３０代はない・・・と思う。

「父上がお決めになったのですか？」

「いや・・・ヴァルキリーの外見や人格などは、基本的にシェフィが決める。私からもいくらか注文するけどな」

"ヴァルキリー"に男性型を作ろうと考えたのもシェフィだ。詳しい理由は聞いていないけど、何らかの将来における予行演習などと言っていた。一体なんの予行演習なのかはサッパリだ。とりあえず、それは置いておいて、だ。バンヘルドの大人びた外見も、シェフィの考えによるものだ。その理由として、

「バンヘルド。お前は、私はもちろんシェフィに期待されているんだよ。第一世代ヴァルキリー・・・ブリュンヒルデという名にする予定なんだけどな。そのブリュンヒルデの抑止力として、お前を選んだ」

「抑止力、ですか・・・？」

私は椅子から立ち上がり、執務机の後ろに在る窓枠へと腰掛けた。

「ああ。バンヘルド、お前の感情制御プログラムは徹底してあるんだ。ブリュンヒルデの感情による暴走を抑える司令塔とするために。で、シェフィは言った。隊長・副隊長を差し置いての司令塔になるなら、威厳のある外見じゃないとダメだよね、と」

シェフィのそんな思考に少しついて行けなかったが、楽しそうだったから見守った。それで完成したのがバンヘルドだ。話し終えると、

バンヘルドが「威厳・・・。私に有りますか？」と訊いてきた。物静かで礼儀正しく、落ち着き払った佇まい。ガーデンベルグとリアンシェルトよりは威厳がある。

「ああ。お前が隊長だと言われても違和感がないくらいにな。バンヘルド。お前がブリュンヒルデを支えてやってほしい。父からの願いだ」

１７歳で子持ちだとか。ゼフィ姉様がご存命であったならなんと言うだろうか。私が結婚し、子供を作るまでは元気でいると言っていたから、きっと年齢など関係なく喜んでくれるかもしれないな。

「了解しました、父上。父上と母上のご期待に添えられるよう、全力を注ぐ次第です」

強く首肯したバンヘルド。それに安心した私は、急な眠気に襲われた。第二世代の開発準備にもそろそろ手を付けないといけないために２日も徹夜した所為だろう。さすがにもう起きていられない。が、休む前にもう１つ、バンヘルドに伝えたいことが。

「バンヘルド」

「はい。如何しましたか？　父上」

「シェフィと決めて、お前たちヴァルキリーを最低でも２００機は生み出すつもりでいる。そのくらいいなければ、今のヨツンヘイム連合の大戦力には到底敵わない。そして戦力を整え次第、私たちは

苛烈を極めている戦場に出ることになる」

科学という技術を用いた巨大人型戦術兵器Ａ・Ｍ・Ｔ・Ｉ・Ｓ（アムティス）に、最下層魔界から召喚した魔族、高ランクの魔術師軍団。味方に付けている世界数（大半が強迫によるものだが）も、私たちアースガルド同盟より多い。一度そこで区切る。バンヘルドは黙って耳を傾けてくれている。

「だから、力を貸してくれ。私たちに勝利を与えてくれ」

「もちろんです。そのために我らヴァルキリーは生まれたのですから。父上や母上はもちろん、アースガルド同盟の皆を守り、支え、必ずや勝利を捧げます」

バンヘルドが私の前で片膝をついて右手を自身の胸の上に添え、忠誠の姿勢を取った。ああ、何も心配しないで良いんだ。私たちは絶対にヨツンヘイム連合に勝つ。フノスの立案したアンスール・プロジェクト。私とシェフィのプロジェクト・ヴァルキリー。そして共に戦ってくれる同盟世界の魔術師たち。みんなが力を合わせれば、連合如き。立ち上ったバンヘルドに向かって右拳を突き出す。少し戸惑った様子だったが、何をすればいいのか察したバンヘルドも拳を突き出し、

「勝つぞ、バンヘルド」

「はいっ、父上！」

コツンと突き合わせた。「あ、もうダメだ・・・」もう立っているのも辛い。幸いなことに執務室には横になれるほどに大きく長いソファが在る。フラフラとソファに歩み寄り、「さて。少し疲れた。一休みするよ」バンヘルドに告げる。

「あっ、お休みになられるのであれば寝室で・・・！」

フカフカなソファに倒れ込み「無理」一言だけ告げて、無意識にでも閉じようとしていた瞼を、もう抵抗せずに閉じる。

「無理って・・・。父上に風邪を引かれては、私が母上に叱られて――はぁ。お休みなさいませ、父上」

。―。―。―。―。―。

そこは円形の大ホール。直径は１００ｍほどはあり、天井までの高さは２０ｍほど。

薄い水色のクリスタルのような材質をした六角形のブロックを敷き詰めた石畳、滑らかに曲線を描く壁面やドーム状の天井もまた同様の材質で出来ている。壁際には、水槽のような支柱が一定間隔を開けて何柱もそびえ立っている。

そんなクリスタルの大ホールは窓も無ければ明かりになるような松明なども無いのに、とても明い。大ホールを構築しているクリスタルすべてが光明として機能しているからだ。

「バンヘルドが逝ってしまったな・・・」

大ホールに若い男の声が響く。大ホールの中央には、背もたれの形状が風船の側面のような肘掛け椅子――バルーンバックアームチェアが8脚。1脚は他の7脚よりも大きく、そして装飾も派手だ。それはさながら王の座る玉座。
今の声は、その玉座と向かい合うように横に並んでいる残りの7脚の内、中央の席に座っている青年が発したものだ。銀の髪にアップルグリーンの瞳、黒の長衣・スラックス、灰色のロングコートという出で立ち。名をガーデンベルグ・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。しかし今は"ヴァルキュリア"ではなく"エグリゴリ"と名乗っているが。

「だな。・・・・もとより単独で挑んで勝てるとは思ってもいないしな」

一番左端に座る青年が僅かに俯きながら呟いた。オリエンタルブルーのツンツン髪、ワインレッドの鋭い瞳、前開きの黒ハイネックタンクトップ・レザーパンツ・白のロングコートという出で立ちの青年、シュヴァリエル・ヘルヴォル・ヴァルキュリア。
シュヴァリエルのその言葉に、他の椅子に座る"エグリゴリ"がガーデンベルグの右隣の空席に目をやる。今は亡きバンヘルドの椅子だ。数千年と行方を晦ましていた"エグリゴリ"が全機揃っている。そう。ここは、"エグリゴリ"の本拠地。そこは、ルシリオンも知っている場所。彼にとって全ての始まりにして終わりになる地。しかし訪れることが出来ない地。

「・・・本当に、これで良かったのかなぁ・・・？」

バイオレットのショートヘアは、カチューシャ付けていることでインテーク化、クリムゾンの瞳は猫目で、口も猫のように端が上がっている。ハイネックの黒セーター、白のロングコート、コートの裾から覗くズボンは黒、茶色のブーツという出で立ち。レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。"夜天の書"とシュリエルリートを砲撃で殺した張本人だ。

彼女の視線がバンヘルドの空席から玉座――よりずっと奥へと向けられる。他の"エグリゴリ"もそちらへ目を向けた。天井より下がる赤い垂れ幕に挟まれるような形で存在している扉。その奥に、一体何が在るのだろうか。"エグリゴリ"全機の瞳には、深く様々な感情が見え隠れしていた。

。―。―。―。―。―。

"エグリゴリ"の居る大ホールの奥に在った扉の先。ここは何かしらの儀式を行う祭壇のある部屋。大ホールとは打って変わって煉瓦造りの六角形の寂れた部屋で、6つの角には燭台が設けられている。しかし火は灯っていないため、室内は暗闇になるはず。しかし室内は微かにだが明るかった。

部屋の最奥に設けられた祭壇の上に、桃色に光り輝く球体上の膜が浮いていた。それが明かりの替わりとなっていた。膜の中には、何か黒いモノが漂っている。それは、ルシリオンだった。両腕・両足どころか胸部から下が全て消え失せている姿。

ベルカ・クテシフォン砂漠での堕天使バンヘルドとの決戦。その結末は、バンヘルドの完全破壊で終わった。が、勝利直後にそれは起きた。レーゼフェアとフィヨルツェンの2機による奇襲攻撃。シュ

リエルリートはレーゼフェアに殺され、ルシリオンはフィヨルツェンの魔道によって肉体を破壊された。そんな彼は消滅せず、確かに存在している。もはや死体と言われても不思議ではない惨い姿で。

「イリュリアとの第一ゲーム、バンヘルドとの第二ゲーム・・・」

桃色の膜が放つ光がギリギリ届かない隅っこのところに、人影が1つ佇んでいた。闇で姿は見えないが、声からして幼い少女のようだ。その声は"エグリゴリ"の誰の物でもない。

「どうでしたか？　良い思い出を作ることが出来ましたか？」

少女がルシリオンに語りかける。その声には自分が犯した行為への僅かな罪悪感に含まれていた。だがルシリオンは応じない。死んでいるわけではない。もし死んでいるのだとしたら、間違いなく消滅しているからだ。意識が完全に途切れている。彼が目を覚ます時、それは彼の肉体が完全に修復された時になるだろう。静まり返る中、ルシリオンから「バン・・ヘルド・・・」囁き程度の声が漏れた。

「夢を観ているのですね。良い夢ですか？」

寝言らしいソレについて、少女は答えなど返ってこないことを知りつつも尋ねた。

「・・・次・・・。第三ゲームは・・・」

少女の面前に、空間モニターのような物が5つと展開された。そこ

には映っていたのは、青い石。栗色の髪をツインテールにした娘。金色の髪をツーサイドアップにした娘。フェレット。オレンジ色をした毛並みの大きい狼。

「ジュエルシード。高町なのはさん。フェイト・テスタロッサさん。ユーノ・スクライアさん。アルフさん」

少女が口にした名前。それら全てがモニターに映る者たちの名前だ。

「あなた達に踊ってもらいましょう。すべて貴方の為。・・・ルシリオン様・・・」

少女は最後にそう呟いて、その姿を忽然と消した。

†††Ｓｉｄｅ？？？†††

ルシリオンさん達が居なくなってからもう４年。わたしはもう２１歳となり、アムル領の領主としてすでに政を行っている。この４年の内でいろいろなことが起きてしまった。聖王戦争の勃発。尊敬するオリヴィエ様の死。クラウス殿下の王位継承。

オリヴィエ様の死をきっかけに、クラウス陛下は戦にのめり込んで行ってしまった。今日もまたどこかの戦場へと出向いて行ったと思う。ルシリオンさん。ごめんなさい。せっかく平和な時間を作っていただいたのですが、今のベルカの戦火はもう留まることを知りません。

「「ママ～。どこぉ～？」」

アムル領の本都（と言えるほど広くないけどね・・・）となったアムル。修復した屋敷の執務室の窓から、中央広場にそびえ立っているグラオベン・オルデンのみなさんの石像を眺めていると、廊下の方からわたしを呼ぶそんな声。落ち込み気味だったけど、その声でいや～な空気が吹っ飛んじゃった。

「は～い♪　ママはここですよぉ～　」

執務室の扉を開けて廊下に出て、愛おしい娘と息子にわたしの居場所を教える。わたしと目が合うと、２人は「ママーっ　」って両腕を広げながらトテトテ駆けて来た。

（や～ん、可愛い～　）

頬に手を添えてウットリ見守る。ルシリオンさん。わたし、あなたの子供を産んじゃいましたっ

双子の姉弟ですよっ。お姉ちゃんの名前は、ルル。弟くんの名前は、ベディヴィア。

もう４歳です。やんちゃです。でも愛嬌があって、母親のわたしはメロメロなんですっ

でも残念です。ルシリオンさん。夫であり父であるあなたがわたし達の傍に居ません。すごく逢いたいです。２人ともルシリオンさんの髪型ソックリなんですよ。瞳と髪の色はわたしと同じで、髪は茶色、瞳は青。どうせならルシリオンさんの銀の髪や紅と蒼の虹彩異色を継いでもらいたかったなぁ～なんて。

「あぅ・・っ？」

「「あ」」

ベディが転んだ。絨毯が緩衝材として衝撃を和らげてくれるはずだから、そんなに痛くないんだけど・・・。でも幼い子供は痛いとか痛くないとか関係なく、ビックリしただけで泣いちゃう。さっそくうるっと瞳を涙で濡らしちゃうベディ。すぐに駆け寄りたい衝動に駆られる。でも大丈夫。ベディの傍には、頼りになるお姉ちゃんが居るんだから。

「大丈夫？　ベディ。泣いちゃダメ。ママが悲しんじゃうから」

「あ、う、うん・・・ぼく、泣かないよ」

「えらいよ、ベディ！　ルルお姉ちゃんもありがとねっ♪」

ルルはベディの手を引っ張って立ち上らせて、よしよしって頭を撫でる。ルシリオンさんのクセのような頭なでなでをするルル。

（これは遺伝なのかな？）

わたしのところに辿り着いた2人をギュッと抱きしめて、頬に口づけをする。シュテルンベルクの血を引く女性にのみ発現する能力クス・デア・ヒルフェはもう発動しない。たぶんルルに引き継がれちゃったんだね。けど、もう必要ない。ルシリオンさんが居ないんだから。

「ママ。あのね、アギトお姉ちゃんとアイリお姉ちゃんが帰って来たって、隣のお姉ちゃんが言ってたよ」

「ルファせんせーとモニカせんせーも一緒だって！」

「そっか。今回も無事に帰って来てくれたんだね。お迎えに行かないと！」

モニカとルファは医師として、アムルのみならず近隣の街や村にまで出向いて医療に従事している。アギトとアイリはその護衛として同行。ルシリオンさん達が居なくなってすぐの頃、４人は本当に泣いてばかりいた。当然と言えば当然かな。モニカとルファはろくに挨拶も出来なかったんだから。

アギトとアイリは、みんなと最後まで一緒に戦えなかったことに後悔していた。だけど泣いてばかりじゃ示しがつかないって自力で立ち上がってくれて。医者の師であるルシリオンさんとシャマルさんに笑われないようにって、モニカとルファはすごく頑張ったんだ。

（一時はどうなるかと思ったけど。やっぱり大好きな人の事を思えば、沈んでばかりいられないもんね。・・・けど）

アギトとアイリは、みんなの代わりに戦場に出ようとした。だけどわたし達、そしてクラウス陛下やオリヴィエ様にすら止められた。

（ルシリオンさんの遺言みたいなものらしいんだけど・・・）

ルシリオンさんがクラウス陛下たちに、アギトとアイリを戦場に出さないようにしてほしいって、頼んでいたってことを後で知った。でも2人は首を縦に振らなかった。戦える力を持ってるんだから、その力をわたし達アムルやシュトゥラの為に使いたいって。最初の数ヵ月は押し問答で平行線だった。けど最終的にクラウス陛下が折れて、最前線には絶対に出ない事だけを2人に誓わせた。もし戦争が起きた場合、後方の援護・支援の任に就くことになって、これまでに何度かその任に就いてきた。

「ただいまっ、エリーゼ、ルル、ベディ！」

「アイリ、お腹空いたぁ。アンナに何か作ってもらってよ～」

「こら、アイリ。まずは・・・」

「判ってるって。ただいま、エリーゼ、ルル、ベディ♪」

玄関にまで下りてくると、すぐにアギトとアイリと逢うことが出来た。2人はお腹を鳴らしてフラフラ気味。わたし達は2人に「おかえりなさいっ♪」出迎えの挨拶。家族みんなで、アンナの居る食堂へと向かう。うん、シチューの良い香りがエントランスにまで漂ってくる。

アンナはルシリオンさん達が居なくなっても気丈に振る舞ってた。わたしとルシリオンさんがお別れする直前に、ルシリオンさんに想いを断られちゃったみたいで。それにちゃんとお別れもしたって言っていた。強いなぁ。わたしなんてやっぱり泣いたもん。

「ただいま、アンナっ。美味しいお昼ごはん、お願いしますっ！」

「「しま～すっ」」

アイリが食堂に着くなり元気いっぱいに挙手。ルルとベディヴィアもマネして挙手。あ～ん、可愛い　　で、アイリは「変なこと教えちゃダメだぞ」って、アギトから注意されちゃった。アギトってば、ルルとベディヴィアのお姉ちゃんみたい。厨房に居るアンナもそんな様子に微笑んでる。

「それじゃ久しぶりに家族みんなで昼食ね。みんな、手を洗って」

「「「「は～い！」」」」

厨房に入って手を洗う子供たちを、わたしとアンナは見守る。ルシリオンさん。シグナムさん。シャマルさん。ヴィータ。ザフィーラさん。シュリエルさん。みんなとの思い出を胸に、わたし達は生きていきます。あ、シグナムさん達に1つお願いが。もしどこかでわたし達の子孫に出逢ったら、その時はよろしくお願いしますね。みんなが大好きなルシリオンさんと、そしてわたしの大事な子供の子孫ですから♪

。―。―。―。―。―。

ベルカ。騎士と言う、己の誇りに命を懸け、守るべき国の為、民の為に戦場を駆け、散って逝った者たちが生きていた世界の名。
ベルカに住まう全ての命の為と、ベルカ統一を掲げる幾多の国が争

い、滅び、分裂して新たに生まれ、また争って滅ぶ。そんなサイクルを続けてきたベルカは、とうとう決着つかずのまま滅びの終着点へと辿り着いてしまった。次元世界を襲った大規模次元震。ベルカを含めた幾つもの世界が崩壊してしまった。

そんなベルカは、史実として語り継がれていくことになる。だが、その内容の大半は戦についてであり、半ば内容が食い違っていたり半透明だったりと曖昧だが。そんな語り継がれるベルカ史の戦の中でも特に有名なのが、イリュリア戦争と聖王戦争の2つ。たった一国に世界を滅亡されそうになったイリュリア戦争。その結末まで。そのイリュリア戦争の話の中――いや、ベルカ史実の中でも有名なのが、ある1人の英雄の名。

――オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード――

聖王女オリヴィエ。覇王イングヴァルト。雷帝ダールグリュン。冥王イクスヴェリア。殺戮王テウタなど、名の有る王たちと肩を並べる者の名前。彼は王ではなかった。アムルという町の医者だ。しかし、肩書などまったく意味の無いモノにするほどの実力を持っていた。

ベルカ歴史書にも彼の名が記される。イングヴァルトやオリヴィエと懇意にし、ダールグリュンやイクスヴェリアとも顔見知り。そして世界を滅ぼすに足るイリュリアの兵器を単独で破壊したという。その強さに敵国にはシュトゥラの悪魔・魔神と恐れられ、シュトゥラでは魔導騎士という称号を得ていた等々。

しかしそんな彼もまた人間だった。イリュリア戦争終結から聖王戦

争勃発までの間に、オーディンは死亡したとされている。その辺りの情報は多くは無い。病死・事故死・戦死。歴史学者によって見解が分かれるが、中でも有力とされているのが、戦死した、というものだ。兵器"エグリゴリ"。時折見られるこの単語。オーディンとこの"エグリゴリ"の間には因縁があり、彼の目的が"エグリゴリ"の破壊にあった、とされている。

イリュリア戦争後、オーディンが"エグリゴリ"と戦うためにシュトゥラを離れた、という文献が見られる。覇王イングヴァルトの手記にもそう記されている。オーディンはその時期より後、表舞台には出ていない。その事から、オーディンは"エグリゴリ"に敗れて戦死した、という推測が生まれるのだ。しかし真実のほどは定かではない事を注記する。

武技において最強と謳われる聖王女オリヴィエと肩を並べる、魔導において最強の魔神オーディン。
彼の足跡は聖王戦争勃発前までだ。が、彼とシュトゥラのアムル領領主エリーゼ子爵の間には双子の姉弟が居たとされる。
姉ルル・セインテスト・フォン・シュテルンベルク。弟ベディヴィア・セインテスト・フォン・シュテルンベルク。
2人は成長した後、シュトゥラの騎士・魔神の後継騎として、数々の武勲を立てたそうである。そしてその血は延々と受け継がれて・・・・。

――序章・騎士の世界ベルカでの魔術師と騎士による物語は、これ

にて閉幕。
第一章・魔術師は時を越え、再び魔導師と邂逅する物語。そして彼は選択を迫られる。
その先に待っているのは喜劇か、または悲劇か。それが判るのはもう少し先の未来――

Next Episode・・・・EpisodeⅠ：Te Ratio Ducat，Non Fortuna

番外コーナー：えぴそ～ど・ぜろのウ・ラ・ば・な

ゼフィランサス
「みなさん、こんにちは。いつも弟ルシリオンがお世話になってます。あの子の姉、ゼフィランサス・セインテスト・アースガルドです」

シャルロッテ
「どもども～♪　前作の主人公、シャルロッテ・フライハイトだよ～♪　ルシルの創生結界、英雄の居館ヴァルハラの玉座の間からお送りしてま～すっ」

――Ｌｉｖｅ　英雄の居館ヴァルハラ・玉座の間――

ゼフィ
「ん。ついに始まってしまった、我が弟の終局へと至る旅の物語」

シャル
「ですね。ルシルにとって、良いエンディングであれば好いんだけど」

ゼフィ
「お姉ちゃんとしてはそれが一番重要なのよね～。あの子、もう２

万年近く戦いっ放しだから」

シャル
「そろそろ休んでもらいたいですよね。もう色々と限界そうですし。さて。前作における制限無視のペナルティは身体や魔力炉（システム）へのダメージだったけど・・・」

ゼフィ
「今作におけるルシルに与えられたペナルティは・・・最悪なことに記憶消失。召喚後のルシルという存在を構成しているのは神秘と魔力。行き過ぎた魔力行使はルシルの命と体を削る――つまり死ぬことと同義なの」

シャル
「それを阻止するためのフェイルセーフとして創世結界から魔力――複製されたものを消費して、命と体を保たせるっていう方法を採ったのがルシルの魔力炉（システム）。
しかもルシルの意思に関係なく。だからルシルも混乱していたんだけど、でも記憶を犠牲にしないと死んじゃうし・・・」

ゼフィ
「そういうことね。なんとか消失する複製品を選ぶことは出来るのだけど」

シャル
「こればっかりはもうどうする事も出来ないですよね・・・」

シャフィ
「・・・・・・・」

シャル
「私たちが沈んでいてもどうする事も出来ないので、エピソード・ゼロの裏話をやっていきましょう。まずは今回のエピソードで登場した、数ある単語の名前の由来などね」

――イリュリア。
ベルカという名前に変わる以前の世界名レーベンヴェルト時代より生き永らえて来た王族が統治している技術大国。
融合騎や生体兵器化などの研究が盛んで、イリュリア戦争の折に戦場に投入、戦績を上げた。
しかし女王テウタが起こした戦争に敗戦してしまい、国土の４割を失うことになる。
元ネタ：古代ギリシア・ローマ時代に、現バルカン半島に実在していた王国の名前。
イリュリアの現在は、アルバニア共和国と言う実在している国である。

――王都スコドラ。
イリュリア国の王都。
元ネタ：イリュリア人部族であるアウタリティアの最初の王国の都。またの名をシュコドラ（こちらが正しい？）。

――レーベンヴェルト。

ＡＮＳＵＲシリーズの第一章・大戦編、第二章・堕天使戦争編に登場した世界名。騎士たちによる騎士たちのための世界。複合世界ミッドガルドを構成する世界の１つ。
レーベンは生、ヴェルトは世界。レーベンヴェルトは生ある世界という意。
堕天使戦争におけるアンスール全滅から千年後、ベルカという名前に変更された。

――テウタ・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルト。
レーベンヴェルト再興を先祖代々からの役目として担い、全うしようとする強硬派の最右翼。
ベルカの歴史を終わらせ、レーベンヴェルトを再誕させるための戦争・イリュリア戦争を起こす。
打倒イリュリア同盟との短期決戦の果て、アウストラシアの王女オリヴィエとの決闘に敗北。
後に、実兄バルデュリスの手によって殺害された。ベルカ史実に、殺戮王という忌み名が残る。
元ネタ：テウタ。紀元前２３１年から紀元前２２８年にかけてイリュリア及び周辺を支配した女王。

――バルデュリス・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルト。
イリュリアの第一王子。実妹テウタに比べて凡庸と言われ、次期イリュリア王の座をテウタに奪われそうになっていた。
テウタ失脚の後、イリュリア王となり、レーベンヴェルト再誕の役目を完全廃棄した。そして、その後・・・・。

元ネタ：バルデュリス。紀元前４世紀ごろに現れたイリュリアの王。
イリュリアを強大な国家へと変えた。

――ゲンティウス・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルト。
バルデュリスとテウタの父にしてイリュリア国王だった男。
レーベンヴェルト再誕を胸に秘めながらも積極的な行動は起こさず、時間を掛けてベルカを統治しようとしていた。
しかし、それが気に入らなかった実子テウタによって殺害された。
元ネタ：ゲンティウス。イリュリアの王。

――グレゴール・ベッケンバウワー。
イリュリアの一個騎士団・最高位騎士団ウンシュテルプリヒ・オルデン（不滅の騎士団）の団長にしてイリュリア騎士団総長、そして最強の騎士。
生体兵器化の恩恵によって不老不死となる。イリュリア戦争時、雷帝ダールグリュンと一騎打ち。
テウタの敗北、エテメンアンキ崩落と同時に撤退、その後の消息は不明。だったが・・・・。

――ワイリー・ゾエ。オリバー・ゾエ。
イリュリアの一個騎士団・血染めの死神騎士団マサーカー・オルデン（殺戮の騎士団）の団長と副団長の兄弟。
シュトゥラ侵攻の先駆けとしてアムルに攻撃を仕掛けた。が、ベルカに召喚されたばかりのルシリオンの手によって騎士団もろとも殺された。

――フレート・ベックマン。
イリュリアの一個騎士団・雷鳴轟かす騎士団グラオザーム・オルデン（残酷の騎士団）の団長。
ミナレット管制チームのリーダーを務めるも、ルシリオンの魔道によってミナレットもろとも殺された。

――ヨハン・オメガ・シュプリンガー。
イリュリアの一個騎士団・戦兎騎士団ブルーティガー・ハーゼ・オルデン（血塗れ兎騎士団）の団長。
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編に登場した、風神騎士団シュトゥルム・オルデン（暴風騎士団）の団長、騎士公オペルの子孫。
かつてのヨツンヘイム連合において最強の剣騎士だったシャルロッテ・フライハイトの魔導剣技を受け継いだ、アウストラシアの騎士リサとの一騎打ちに敗れ死亡する。

――ファルコ・アイブリンガー。
イリュリアの一個騎士団・地駆けし疾狼騎士団フォーアライター・オルデン（先駆者たちの騎士団）の団長。
ルシリオン率いるグラオベン・オルデンの前に２度立ちはだかったが、騎士シグナムと融合騎アギトのペアによって敗死した。
元ネタ：無し。上記の連中の名前と苗字は、ドイツ人の一般的なものの組み合わせ。

――ゲルト・ヴォルクステッド。
イリュリアの一個騎士団・強暴なる氷鏡騎士団アムレット・オルデン（御守りの騎士団）の団長。
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編に登場した、鏡面騎士団シュピーゲル・

オルデン（鏡の騎士団）団長、鏡の境界サー＝グラシオンの子孫。
シグナムとアギトのペアに敗れ、戦死した。
元ネタ：無し。ゲルトは、ドイツ人男性の一般的な名前。

――ウルリケ・デュッセルドルフ・フォン・ブラッディア。
イリュリアの一個騎士団・狂いたる災禍騎士団プリュンダラー・オルデン（略奪者の騎士団）の団長。
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編に登場した、鮮血騎士団ノインテーター（ドイツ・ザクセン地方の吸血鬼）・オルデンの団長、鮮血姫シリア・ブラッディアの子孫。血液を操る能力を継承した。
シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、シュリエルリートを相手に善戦するも、ルシリオンの神秘に力を借りたヴィータ達に敗北、戦死した。
元ネタ：デュッセルドルフ。ドイツの連続殺人犯・デュッセルドルフの吸血鬼から。ウルリケは、一般的なドイツ人女性の名前です。

――融合騎マラーク。
女王テウタ専用の融合騎。フォルエンドゥングタイプ（完成機）で、融合した対象の魔導戦技や人格をコピーする能力を持つ。
イリュリア戦争における決戦にてテウタと融合し、オリヴィエと闘うも決着つかずのままエテメンアンキと共に死亡した。
元ネタ：マラークとはヘブライ語で、天使、と言う意味。

――ゼフォン・エグリゴリ。
イリュリア技術部が、"堕天使エグリゴリ"の助言の下に開発した人型魔導端末の一機。
土石系の魔道を使い、ザフィーラや騎士リサを瀕死の状態に追い詰

めた。しかしルシリオンの神秘の力を知らずに借りていたオリヴィエとの戦いによって、完全破壊された。
元ネタ：ゼフォン。地獄の衛兵隊・歩哨隊の隊長の悪魔バールゼフォンから。

――ミュール・エグリゴリ。
イリュリア技術部が、"堕天使エグリゴリ"の助言の下に開発した人型魔導端末の完成機。
閃光・音波系の魔道を扱う"エグリゴリ"。オリジナルの"エグリゴリ"に比べて魔力の出力は弱いが、ほぼ同質の存在。
ルシリオン、シュリエルリート、ザフィーラとの戦いの果て、完全破壊される。
元ネタ：ミュール。地獄の大公爵にして伯爵。音楽の悪魔。元座天使であるミュルミュールから。

――魔導砲塔ミナレット。
異世界よりベルカに流れ着いた、巨大な砲台。圧縮された魔力砲カリブルヌス、カリブルヌスを反射させて広範囲に被害をもたらす反射鏡砲弾フェイルノートを放つ2門の砲身を備えている。
イリュリア戦争勃発の引き金となった兵器。イリュリアに敵対している国にカリブルヌスを撃ち込み、甚大な被害をもたらした。
戦時中、シュトゥラはアムルの騎士団グラオベン・オルデンの活躍によって再起不能にされる。
元ネタ：イスラム教の礼拝堂モスクに付随する、礼拝時刻を告げるための塔。意味は、光塔。

――魔力砲カリブルヌス。
ミナレットの上部砲身より放たれる青紫色の巨大魔力砲撃。
元ネタ：カリブルヌス。ウェールズ伝承・アーサー王伝説。エクスカリバーの原型であり、カリバーンの名の由来でもある。

――反射鏡砲弾フェイルノート。
カリブルヌスを反射させるための数十枚の鏡を、砲弾状に組んだ物。プログラムされた射程距離に届くと爆裂し、空中散布される。そこに着弾したカリブルヌスを無差別に反射させ、砲撃の被害を広範囲に発生させる。
元ネタ：フェイルノート。ウェールズ伝承・アーサー王伝説。騎士トリスタンの有する弓・無駄なしの弓フェイルノート。

――迎撃砲カルンウェナン。
ミナレットの巨大砲塔を支える土台に無数と散りばめられた砲門より放たれる光線。
元ネタ：カルンウェナン。ウェールズ伝承・マビノギオン。アーサー王が使っていた短剣で、意味は小さな白い柄手。

――防衛障壁プリトウェン。
ミナレットを守護する魔力障壁。
元ネタ：プリトウェン。ウェールズ伝承・アーサー王伝説。プライウェン、ブリウエンとも言う。アーサー王の持つ盾で、聖マリアの絵姿が描かれているとのこと。魔法の船としても使えるという。

――天地統治塔エテメンアンキ。
成層圏にまで伸びる超高層塔。最上部より八方に伸びる柱の先端に

あるクリスタル状の砲門より魔力砲撃を放つ。
元ネタ：エテメンアンキ。メソポタミア文明の中でも最古の文化を築いたと言われるシュメール人が、紀元前６世紀新バビロニア帝国時代に、バビロンのマルドゥク神殿の中心部に築いた聖塔。意味は、天と地の基礎となる建物。

――神の雷カレドヴルフ。
エテメンアンキの放つ深紅の魔力砲撃。一撃で大都市を丸ごと焦土に化すことが出来る。
元ネタ：カレドヴルフ。ウェールズ伝承・マビノギオン。アーサー王の持つ名剣。意味は硬き切っ先。アーサー王伝説におけるエクスカリバー。

シャル
「う～ん・・・私が命を懸けて守り抜いたレーベンヴェルト、その王族の子孫がなんとまぁ・・・。
ま、私が忠誠を誓っていたのは自分自身の誇りだから、レーベンヴェルト王族がどうなっても構わないんだけど」

――ラキシュ＆アムル。
覇王イングヴァルトの統治する国シュトゥラに在る領地の１つで、アムルはラキシュ領に在る街の１つ。
元ネタ：ラキシュ。かつてパレスチナに存在していた都市の名前で、アムル人の都市国家。アムル。メソポタミアの西の地域を示す地名。

――ヴィレハイム。
シュトゥラの王都。
元ネタ：ヴィレはドイツ語で意志、ハイムは家（居場所や郷愁など）と言う意味。

――エリーゼ・フォン・シュテルンベルク。
シュトゥラはラキシュ領・アムルを治める若き当主で、男爵の爵位を持つ。
第二次堕天使戦争に敗れ重体となっていたルシリオンを救った事から、エピソード・ゼロは始まった。
イリュリアとの戦闘において幾度と彼女自身やアムルをルシリオンに救われたことから、彼に一途な想いを抱く。
イリュリア戦争後、ルシリオンをシュトゥラに招いた報酬として子爵へと陞爵、アムル街をアムル領地へと格上げとなった。
ルシリオンのベルカ退去後、彼との間に双子の姉弟を出産。アムル領主として生涯を捧げた。

――ルル・セインテスト・フォン・シュテルンベルク。
ルシリオンとエリーゼの間に生まれた、魔道と魔導の血を受け継いだ双子の姉弟の姉。
セインテストの苗字は、ルシリオンの事を父とする証の為にエリーゼが付け加えたモノ。
母エリーゼから、口づけした相手に魔力を供給する能力・乙女の祝福クス・デア・ヒルフェを受け継いだ。
成長した後、融合騎アイリをパートナーとして戦場に出て数多くの武勲を立てた、魔導特化型の騎士。『魔神の後継騎・聖女』と謳わ

れた。
元ネタ：ルル。シドレクス・サガ／ヴェルンド伝説に登場する王女エルルーンから。

――ベディヴィア・セインテスト・フォン・シュテルンベルク。
ルシリオンとエリーゼの間に生まれた、魔道と魔導の血を受け継いだ双子の姉弟の弟。
幼少の頃は気弱だったが、歳を経ては一端の騎士として成長し、融合騎アギトをパートナーとして戦場に出、姉ルルと同じく数多くの武勲を立てた。
姉とは違って魔導より槍技に優れる騎士。『魔神の後継騎・聖槍』と謳われた。
元ネタ：ベディヴィア。アーサー王伝説に登場する円卓の騎士ベディヴィエール卿の別名から。

――ルファ・オークレール。
アムルに住まう、医者志望の１５歳の少女。ルシリオンとシャマルに師事し、ルシリオンのベルカ退去後に本格的に医師として働く。

――モニカ・クラウジウス。
アムルに住まう、医者志望の１８歳の少女。ルシリオンとシャマルに師事し、ルシリオンのベルカ退去後に本格的に医師として働く。
元ネタ：ルファと共に無し。名前も苗字もドイツ人の一般的なものからの組み合わせ。

――アンナ・ラインラント・ハーメルン・アルベルトゥス・フォカロル。

アムルに住まう、シュテルンベルク家の使用人を務める１７歳の少女。
幼い頃に親族をすべて戦争で失い、シュテルンベルク家に引き取られた経緯を持つ。エリーゼとは主従関係ではなく、姉妹のように育ってきた。
常にメイド服型の騎士甲冑を展開させるほどに魔力運用能力は高く、電気の変換資質を有する。
遥か先祖に、魔族アルベルトゥス・フォカロルと交わった者が居たらしく、彼女は魔族の血を色濃く受け継いでいる。
イリュリア戦争時、ルシリオンに救われたことから彼に恋をするが、残念ながら失恋する。
ルシリオンのベルカ退去後も変わらず、彼女はエリーゼを支えるために奮戦している。上記のエリーゼ、ルファ、モニカとは親友同士。
元ネタ：アルベルトゥス・フォカロル。
アルベルトゥス。西方教会のキリスト教神学者・哲学者たちによる学問スタイル・スコラ学の哲学者。賢者の石を手に入れたと言う事で、錬金術師としても大成した。
フォカロル。悪魔学における風と海を支配する悪魔の一柱。

――ターニャ・エッティンガー。
アムルに住まう、服飾店の店主の女性。シュトゥラ最北部クイックヴォルン地方より単身引っ越してきた。
クイックヴォルンにおいては名家であるエッティンガー家の三女。
堅苦しい家柄に嫌気がさし、最南部のラキシュ領にまで来た。独自の魔導戦技・春光拳を使い、騎士としてのレベルも高い。
隠れ設定：魔法少女リリカルなのはＶｉｖｉｄに登場するウェズリー家の初代。

元ネタ：無し。

――アウストラシア。
聖王家の治める国家。レーベンヴェルトのかつての王都が在った土地に存在している国。
ミッドガルドの秩序管理機構の左翼・天光騎士団の本部が在る土地でもある。
元ネタ：アウストラシア。意は東方の地。現在のフランス東部・ドイツ西部・ベルギー・ルクセンブルク・オランダから構成されていた国家。イタリアから見た北東の地域を指す用語でもある。

――ズィルバーン・ローゼ。
アウストラシアの王女の1人、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの下に自分の意思で集まった女性メンバーだけで構成された騎士隊。ズィルバーン・ローゼ（銀の薔薇）の隊名の通り、部隊章は銀色の薔薇。

――隊長、リサ・ド・シャルロッテ・フライハイト。
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編における敵組織ヨツンヘイム連合・騎士世界レーベンヴェルトにて最強の剣騎士だったシャルロッテ・フライハイトの姉の子孫。
イリュリア戦争時、イリュリア騎士序列二位、ヨハンを一騎打ちで撃破すると言う功績を上げる。
聖王戦争にてオリヴィエを喪った事から一時戦場を離れたが、クラウスとオリヴィエの願いの為に再び戦場に立った。

――副隊長、エレス・カローラ。

ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編における敵組織ヨツンヘイム連合のリーダー格・極凍世界ヨツンヘイムの王族の末裔。
アウストラシア騎士団の中でも最上位に位置する実力者。氷結の魔導を扱う。武装は片刃剣アルマツィア。
元ネタ：アルマツィア。ドイツ・サガのカルル大王のサガに登場する剣の名前から。

――第三位、アンジェリカ・ド・グレーテル・ヴィルシュテッターー。
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編、シャルロッテの率いていた心慧騎士団シュベーアト・オルデン（刀剣騎士団）の副団長グレーテルの子孫。

――第四位、セリカ・グラシア。
元ネタ：無し。聖王教会の騎士カリム・グラシアの先祖。

――ネウストリア。
アウストラシアと長年敵対している国。イリュリア戦争時、イリュリアに協力してオリヴィエの殺害を目論んだが、結果として失敗した。
元ネタ：フランス南西部――アキテーヌ地域圏からイギリス海峡までを指す、フランス北部のおよそ全体の国。イタリア北西の地域を指す用語で、アウストラシアと対照的に使われた。

――グラダッソ王子。
ネウストリアの王子の1人。イリュリア戦争時、オリヴィエ達の前に立ちはだかるが、リサの一撃にて死亡。
元ネタ：グラダッソ。シャルルマーニュ伝説。ロランやオリヴィエなどの居るフランス軍の敵・中国はセリカンの王様から。

――バルト三国。
ウラル・リヴォニア・リトヴァの3ヵ国からなる連合国。バルト代表は、ウラルの王でもある雷帝バルトロメーウス・ダールグリュン。
元ネタ：バルト。東ヨーロッパ北部に広がる海、または地域の名前。ウラルは現エストニア・リヴォニアは現ラトビア・リトヴァは現リトアニア。

――ヴィンランド。
打倒イリュリア同盟に参加した国の1国。
元ネタ：かつて存在していた北アメリカの地名。

――ヘルウェティア。
打倒イリュリア同盟に参加した国の1国。
元ネタ：ヘルウェティア。正式名はヘルヴェティア。アルプス山脈とジェラ山脈に囲まれた台地からなる古代ヨーロッパ中央地域のローマ名。

――シュヴァーベン。
打倒イリュリア同盟に参加した国の1国。
元ネタ：シュヴァーベン。ドイツ南西部の地域。

――ブルクント。
イリュリア戦争時、イリュリアに下った国の1国。イリュリア敗戦と共に敗戦、肩身の狭い思いをすることに。
元ネタ：フランス4大河川の1つであるローヌ川流域を領土とした、

かつて存在していた王国ブルクントから。

――パルティア。
イリュリア戦争時、イリュリアに下った国の１国。イリュリア敗戦と共に敗戦、肩身の狭い思いをすることに。
元ネタ：中央アジアと東ヨーロッパの境界にある塩湖・カスピ海の南東部、イラン高原東北部に興った国パルティアから。

――七美徳の天使アンゲルス。
４ｔｈ・テスタメント・ルシリオンがある契約によって訪れた世界における、神なるルシリオンの下に付き従った七大天使。
純潔カスティタス。節制テンパランチア。救恤リベラリタス。勤勉インダストリア。慈悲パティエンティア。忍耐フマニタス。謙譲フミリタスの七柱。
そのどれもが巨体。体のどこかには必ず、天使を証明する黄金の光で構成された幾何学模様の環・御使いたる証明エンジェル・ハイロウを有する。

元ネタその１：七美徳。詩人アウレリウス・プルデンティウス・クレメンスのプシュコマキア（魂の戦い）という詩に登場。
元ネタその２：七美徳の天使アンゲルス。小説家になろう・にじファンにて連載していた、３ｒｄ・テスタメント・シャルロッテが主人公の『魔法先生ネギま！』が初出。
各エピソードの最後に登場するボス的存在。あの雪の日で慈悲が敗れ、桜通りの吸血鬼編で忍耐が敗れ、修学旅行編で謙譲が敗れ、学園祭編で節制が敗れ、魔法世界編で晴れて全滅。

ゼフィ
「次は、ある話における没案や裏設定や元ネタなどを紹介するわね。まずは・・・・」

――ＭｙｔｈⅢそして結末への旅路は始まった。

シャル
「ルシルがベルカを訪れてから現地人との初戦闘を終えて、アムルに留まる事を決意したルシル。で、今話の裏設定と言うのが、何故エリーゼ達に医術や医療魔導を教えていた医師カール・アーレンスがシュミット伯爵の命令を受けて、イリュリアを招き入れる手筈を整えたのか」

ゼフィ
「カール医師の家族が人質に取られていたらしいのね。いわゆる脅迫。その結果が、イリュリアとの戦に発展する火種になったアムルの悲劇。脅迫されていたとはいえ、アムルの悲劇が起きたのは事実だから、彼は罰せられたの」

シャル
「でもこのアムルの悲劇が起こったからこそ、ルシルはベルカで孤独に過ごすことはなかったんだよね。
エリーゼ達と過ごし、アギトやシグナム達と出逢え、アイリとも出逢えた。不幸中の幸い、かな。つうか子供をつくるとは何事か！！」

――ＭｙｔｈＸＸＩ神よりの告知は絶え、そして天地の礎は起きた

シャル
「猛威を奮ったロストロギア・魔導砲台ミナレットを破壊して、そして天地統治塔エテメンアンキが稼働した話」

ゼフィ
「ふふん♪　さすが私の弟っ！　魔道１つで巨大兵器をボッコボコに潰したなんて、お姉ちゃんは嬉しいっ！
でもま、神秘の無い兵器なんて魔術師相手に通用するわけないから、勝って当然なのよねっ！」

シャル
「ゼフィランサス姫、落ち着いてください。ルシル自慢を始めると日が暮れますから、出来ればやめてください」

ゼフィ
「フッフッフ。あなただってルシルの事が好きなくせに」ニコニコ

シャル
「んなっっっっっ！！！」

ゼフィ
「顔を真っ赤にして可愛いじゃない、シャルロッテ」

シャル
「ぅく・・・も、もう！えっとえっと、あっ、そうそう！　ミナレット攻略シーンだけど、ルシルの最強の水流術式コード・エーギルじゃなかったんですよねっ！」

ゼフィ
「あらあら。・・・シャルロッテ遊びはこれまでにして本題の続きといこうかな。一度考案されたけど没になった攻略案は、ルシルが砲身内部を飛行してミナレット内に侵入、管制室に居る騎士フレートと決戦、というものね」

シャル
「でも話が長くなるからっていうことで没。面白そうなのにもったいない。けどま、外部から魔術で破壊するって言うのもルシルらしいと言えばらしいけど」

ゼフィ
「騎士フレートの不憫さには同情するわ」

――ＸＸⅦ世界の行方は２人の女の決着に委ねられる

シャル
「今話の没ネタ。不死の老騎士グレゴールの不死性の正体について。魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅに登場するエクリプスウィルス

の基である『原初の種』を使おうって事だったけど、Ｆｏｒｃｅの進行状況からして没。と言うか、私、こんな話知らないな〜。フッケバイン？　ディバイダー？　テスタメント事件なら知ってるんだけどさ」

――ＭｙｔｈＸＸⅨ偽神と共に夢想は墜ち、彼と彼女の別離が始まった

シャル
「ルシルの真技・神断福音グロリアス・エヴァンジェルによって破壊されたエテメンアンキ。その崩落の中でのオリヴィエとテウタの決闘。
今話は裏設定じゃなくて元ネタね。崩落する瓦礫の上で繰り広げられる空中での決闘。
アレ、ＢＥＹＯＮＥＴＴＡっていうテレビゲームのボス、Ｆａｔｈｅｒ　Ｂａｌｄａｒ（ファーザー・バルドル）との戦闘シーンを元にしたんだよ」

ゼフィ
「堕天使の翼エラトマ・エギエネス、テウタとマラークの融合姿で生まれる翼。ソレらＢＡＹＯＮＥＴＴＡのファーザー・バルドルやファーザー・ロダンの羽から」

シャル
「ちなみに融合状態のテウタの言い回し。アレもゲームのヴァルキ

リープロファイル－シルメリアー－のボス・全てを超越する存在＆破滅を求める者から。あの狂った感じが、暴走しているテウタを表すにはちょうどいいって話なんだけどね」

ゼフィ
「そしてもう１つ没ネタがあるのよね」

シャル
「はい。この闘いで、オリヴィエは両腕を失うっていう案があったそうです。
Ｖｉｖｉｄの原作と同じオリヴィエの姿形にしようってことで。でもまとめが難しくなるってことで没」

――ＥｐｉｌｏｇｕｅⅥマイスターだ～い好き

ゼフィ
「我が弟は本当に小さい子供に好かれるのよねぇ。カノン然りアリス然り」

シャル
「小さい頃のフェイトにも好かれていたし。いつか犯罪を――」

ゼフィ
「ルシルはそんな事しないからっ！」

シャル
「近いっ。恐い顔で近付かないでください、判ってますから！　冗談ですってば！」

ゼフィ
「判れば良しっ。で？　今話は何だったかしら」

シャル
「ふぅ。えっと、没ネタです。アギトとアイリがお風呂でルシルの背中流しってやつ。
アレ、実はシグナムたち守護騎士も一緒に入るって話だったようで。さすがのルシルもドギマギして、果てにはのぼせてしまって、ザフィーラに助けてもらうっていう」

ゼフィ
「う～ん、お姉ちゃんとしてもそれは却下。いくらなんでもお付き合いしていないのに大人の異性が同じお風呂に入るのは倫理に反するから」

シャル
「へ～、そうなんですか。てっきりそう言うのには豪放かと。弟（ルシル）には激甘なゼフィランサス姫ですから」

ゼフィ
「ダ～メ。そういうところはキッチリとしないと。たとえお付き合いしていても、一緒に入浴なんてどちらかと言えば否定はなんだから。結婚してからね。あ、そう言えば。どこかの契約であなた、ル

シルと結婚した時は――」

シャル
「ぶふっ。その話はいいですからぁぁぁあああああああああああああッ！」

――ＡＮＳＵＲⅢ其は天壌を焼き払いし煉獄を顕現せし者

シャル
「堕天使エグリゴリの一機、火炎の堕天使バンヘルドとの決戦の話。ルシルもシグナムもヴィーターもシャマルもザフィーラもシュリエルも、そしてアギトとアイリも頑張った。
でも、シュリエル以外の守護騎士は全滅。アギトとアイリも途中退場。けどシグナム達の魂でもあるリンカーコアは、夜天の書の覚醒の礎になったんだよね。
晴れてルシルとシュリエルは融合を果たして、ついにバンヘルドを撃破できた、と」

ゼフィ
「自分と、最愛の恋人シェフィの子供である元戦天使ヴァルキリーを、洗脳から救うためとは言え討つことになって・・・」

シャル
「・・・・コホン。今話は没案が２つ。１つは氷結の融合騎アイリ。あの子がこの戦いで死ぬ予定だったというもの。お姉ちゃんのアギ

トを護るために。
だけど没になっちゃったんだよね。アイリをここで失うのは勿体ないってことで。ま、当然よね。この子、きっとデカいことを仕出かすよ。きっとね♪」

ゼフィ
「今話の没案のもう1つ。えー、バンヘルド撃破後に、精神世界でルシルとユーリ・エーベルヴァインって子が邂逅するって・・・。シャルロッテ。ユーリ・エーベルヴァインってどちら様か知ってる？」

シャル
「えっ？　知らないッス！　フッケバインとかエーベルヴァインとかって何！？　親戚か何か！？」

ゼフィ
「と、とにかくそういう案があったらしいけれど、そんな余裕がないってことで没に。次は・・・っと、今ので最後だったのね。では次のコーナーと行きたいところだけど、ここで一度区切ろうか」

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

番外コーナー：シャルロッテ先生の魔導紹介教室

シャル
「は～い。前回に続いて番外コーナーを担当するシャルロッテだよ～♪　えー、ゼフィランサス姫は、ヴァルハラでちょこっと仕事があるってことで退場したの。だから場所をルシルのヴァルハラから変更して、私の創生結界・剣神の星天城ヘルシャー・シュロスの玉座の間からお送りしま～す♪」

？？？？
「あのさ、シャルロッテ。わたしとシャルロッテってさ、前作のキャラだよね・・・？　本編じゃないにしても出ていいのかな～って。まぁ、出れて嬉しいんだけど。うん、踊りたくなるくらいに」

シャル
「いいのいいの。ルシルの真実と魔術を知ってる前作キャラだからこそ。それじゃあ紹介しよう。一緒に魔法の紹介をする、前作からのゲスト・・・！」

？？？？
「えっと、レヴィ・アルピーノです。前作ではルーテシアの妹でした」

シャル
「というわけで、私とレヴィの２人でやっていくから♪　それじゃあ早速、本作『魔道戦記リリカルなのはＡＮＳＵＲ』で初出のルシ

ルの魔術から紹介するよっ」

――研ぎ澄ませ、汝の聖雨／コード・マルティエル――

シャル
「水流系の中級攻性術式マルティエルだね。雨天でこそ本領を発揮する魔術で、雨粒や水滴を水槍にして、対象を全方位から襲撃するっていうやつ」

レヴィ
「コレは怖いなぁ。雨粒を攻撃に使うってなると、その弾数はシャレにならないじゃん」

シャル
「だよね～。ほぼ全方位からの襲撃だから、全方位に防御障壁を展開しないとまず生き残れないんだよ。
ま、今回のガーデンベルグのように氷雪の魔力障壁で凍結されて防がれるなんてことも」

レヴィ
「あちゃあ。水流系って、もしかしてそんなに凄くない属性だったりする？」

シャル
「う～ん・・・相手を選ぶ属性かも。氷雪系には弱いかもね」

――舞い降るは、汝の獄火／コード・サラヒエル――

――舞い降るは、汝の雷光／コード・パシエル――

レヴィ
「火炎の槍限定のヤツと雷撃の槍限定のヤツの魔術だっけ？」

シャル
「そ。氷雪の槍シャルギエルと同じ、１つの属性だけの魔力槍を発生させる"舞い降るは"系ね。もちろん閃光系、闇黒系もある。で、無属性もあるけど術式名は無し。あと風嵐系は・・・」

――巻き起こせ、汝の旋風／コード・アムブリエル――

シャル
「コレも舞い降るは系なんだけど、コードは巻き起こせにされてるんだよね。風を集束させたこのアムブリエルが着弾すると、集束していた分の風が一気に解放されて周辺を爆風で薙ぎ払うって効果があるんだよ。竜巻の強さで表すと、Ｆ１（３３～４９ｍ／ｓ）からＦ３（７０～９２ｍ／ｓ）くらいかな」

レヴィ
「軽く家を吹っ飛ばすんだ、アムブリエル・・・」

――女神の祝福・ｖｅｒ・Ｇｅｂｕｒａｈ／コード・エイル・バージョン・ゲブラー――

レヴィ

「エイルのバリエーション？」

シャル
「うん。通常のエイルって言うのは効果対象が1人だけなんだけど、このバージョン・ゲブラーは同時に複数人に掛けることが出来るってヤツ。エイルの効果を持つ魔力翼を散らすことで出来るんだけどね」

レヴィ
「へ～。なんか幻想的で綺麗だなぁ～」

シャル
「だよね♪　ちなみにゲブラーって言うのはカバラの1つで、『神の力・峻厳』を象徴していて、別名が『天界の外科医』なの」

――女神の救済／コード・イドゥン――

シャル
「この最終章で新たに出来た魔術、それが魔力吸収のイドゥン」

レヴィ
「記憶消失って言うシャレにならない制限を回避するために組んだんだよね・・・」

シャル
「うん・・・。けどすごいよ、コレ。純粋魔力なら攻撃や障壁とかも吸収しちゃうって事だから」

レヴィ
「怖っ。わたし、変換資質が無い魔法ばかりだから、全部が通用しないかも・・・」

シャル
「いやいや～。レヴィの場合、純粋に格闘術でルシルを圧倒できるんじゃない？」

――集い纏え、汝の閃光槍／コード・ポースゼルエル――

――集い纏え、汝の氷雪槍／コード・パゴスゼルエル――

――集い纏え、汝の火炎槍／コード・フロガゼルエル――

――集い纏え、汝の雷電槍／コード・ブロンテーゼルエル――

シャル
「この堕天使戦争完結編におけるルシルの相棒（デバイス）・エヴェストルムに属性魔力を付加させる魔術がこれらね」

レヴィ
「強化の魔術コード・ゼルエルのバリエーション、かな・・・？」

シャル
「ま、そうだろうね。ちなみにパゴス、フロガはギリシャ語で氷、炎。ポースとブロンテーは古代ギリシャ語で光、雷っていう意味ね」

――守神の終笛／コード・ヘイムダル――

シャル
「詠唱を必要とする、上級攻性儀式魔術コード・ヘイムダルね。無属性の対軍の術式で、まず蒼い環を発生させて攻撃圏内を決定。最大半径１ｋｍ圏内を攻撃可能エリアにすることが出来るの。で、環の中に何百っていう魔力球の絨毯を敷き詰めるんだけど・・・」

レヴィ
「その魔力球も当然攻撃のための物なんでしょ？」

シャル
「う～ん、なんと言うか・・・うん、かな。上空に展開されたアースガルド魔法陣から砲撃を幾つか落とす。するとどうでしょう。魔力球が降ってきた砲撃の着弾と同時に誘爆して、空へと上る砲撃群と化すじゃあ～りませんか。
地上の環と天上の陣の間に砲撃の柱が幾つも発生。しかもこの砲撃群、消えずに永続的に発生し続けるんだよ。恐ろしいのはこれから。環の中を砲撃が滑るように移動するっていうんだよこれがっ」

レヴィ
「うげ～。それじゃあ環の中の地上って、砲撃の塔の蹂躙を受けることになるじゃん。空を飛んで逃げられない敵って、その砲撃の塔群の挟み撃ちとかで押し潰されちゃったりするんじゃ・・・！」

シャル

「環と魔法陣の間の空間には結界が張ってあるんだよ」

レヴィ
「地上も空も逃げ場無しって・・・」

シャル
「滑ってくる砲撃の塔をひたすら必死に避けるしか生き残れないってわけだ」

――弓神の狩猟・ｖｅｒ．　Ｇｅｓｔｏｂｅｒ／コード・ウル・バージョン・ゲシュテーバー――

シャル
「本作におけるオリジナルキャラ、氷結の融合騎アイリと融合を果たしたことで生まれたウルのバリエーションがコレ」

レヴィ
「わたしさ、原作ＳＴＳ時からのアギトしか知らないけど、女の子してるアギトも結構好きだな～」

シャル
「あはは。前作でのレヴィと同じ立ち位置よね。準レギュラーになるっていうキャラ。で、そんなアイリの氷結付加が施されたウルは着弾すると、当然のごとく対象を凍結させるわけ。威力も神秘も高いし、誘導操作も出来るし、相手も凍らせるし。あまり受けたくない魔術だよ。
ゲシュテーバーっていうのは、ドイツ語で吹雪って言う意味ね」

――押し流せ、汝の封水／コード・ヒュドリエル――

レヴィ
「ああ、やっぱり水流系は強いわ。大津波で百何十と居た騎士たちを押し流して殲滅しちゃったよ・・・」

シャル
「海辺の地域に居る敵たちにとっては悪夢よね～。神秘満載の魔力の満ちた津波だから、ただの魔法じゃ防御不可。怖いわ～」

――静穏なる碧色の瀑雷／ポスィドトゥーヌス――

シャル
「未完成にして不完全な下級術式の水流系、それがコレ。水で作る機雷なんだけど、海上より海中の方が見辛いし威力も高いの。だから基本的にルシルは使わないんだよね」

レヴィ
「確かに海中戦なんてしないよね普通。そう思うと、不完全で未完成のままでもしょうがないか」

シャル
「ちなみに術式名の由来は、ギリシャ語で海王星を意味するポスィドナスとラテン語で海王星を意味するネプトゥーヌスを組み合わせた造語ね」

――激動する水霊の歯牙／ヴァダーヒスモス――

シャル
「コレもそう。単純な水圧の砲撃ね。ヴァダーはロシア語で水。ヒスモスはギリシャ語で咆哮のヴリヒスモスからヴリを抜いたヤツね」

――瓦解せる喰飲の龍咆／アルティフォドス――

シャル
「水で作る龍の魔道ね。アルティはイタリア語で鉤爪のアルティーリョ。フォドスはギリシャ語で突撃のエフォドスから」

レヴィ
「炎熱と閃光と雷撃の龍が出て、今度は水流の龍か～。やっぱり氷雪とか闇黒とか風嵐とかの龍もあるのかな～・・・？」

シャル
「あるよ。あと一番シャレにならない属性のヤツが、ね。フフフ」

レヴィ
「え！？　なにっ？　怖い！」

――拡散する穿滅の弾幕／アールデンレウス――

シャル
「水を弾丸状にして拡散射撃を行う魔道ね」

レヴィ
「これって地上でもちゃんと使えるの？」

シャル
「もちろん。ま、さほど威力もないから、ルシルはまず使わないだろうけどね」

――海神の波瀑／コード・エーギル――

シャル
「ルシルの有する全水流系術式の最強。それがこのエーギル。海や湖が近いところでしか発動できないって条件があるけど、でも確実に対象を破壊する儀式魔術なの。対人・対軍って言うよりは対建造物の魔道かな。ちょこまかと動ける空戦の出来る魔術・魔導師にはあまり通用しないかも」

レヴィ
「それでも十分強力なヤツだよ。航行中の艦とか海辺の施設とか、島とかもまとめて潰せるって事だし」

シャル
「さすがは孤人戦争って恐れられた大魔術師だよね～」

――女神の宝閃／コード・ゲルセミ――

シャル

「上級の閃光系砲撃ゲルセミ。1条の砲撃ゲルセミと、砲閃から周囲に溢れ出る光球による射砲撃。なのはのストライクスターズと似てるけど、光球は対象に向かって行かないんだよね」

レヴィ
「なんで？」

シャル
「ゲルセミ本体が対象への攻撃で、光球はルシルから対象までの間に居る連中への攻撃なんだよ。ルシルの魔術はあくまで一対多を主としているからね」

レヴィ
「ある意味なのはさんのスターズより性質が悪い」

――曙光神の降臨／コード・デリング――

シャル
「本編でルシルが言っていた通り、デアボリック・エミッションの閃光系魔術バージョン。破壊特化の魔力球を一気に爆ぜさせて敵を呑み込んでダメージを与えるっていうやつ」

レヴィ
「好きなところに発生させられるって話だけど」

シャル
「ん、そうだよ。今さらだけど、ルシルってやっぱり反則過ぎだよ。

ま、ルシルを超える反則もまだ居るけどさ。フノスとか」

レヴィ
「うわぁ、思い出したくない」

――女神の夜宴／コード・ノート――

シャル
「ルシルの闇黒系術式で最強なのが、このノート。夜間限定って条件が付くけどね。宵闇を球体上に物質化させて対象を取り込んで、球体内で魔力爆発を連続で発生させるの」

レヴィ
「逃げ場無し！　しかも上級だから威力はふざけたモノに！」

シャル
「しかも宵闇全てが攻撃に利用されるから、どこに居ても確実に捕らわれちゃうんだよ」

レヴィ
「前作でルシリオンが敵として登場したけど、その時に使われなくてよかった～」

――シュランゲバイセン・フェアタイディグング――

シャル
「お、これはシグナムのヤツだね。レヴァンティンをシュランゲフ

ォルムにした状態で刀身を自身の周辺で螺旋状に高速で走らせる攻防一体の結界とする技。軽い魔法は弾かれて、直接攻撃をしてきた敵もまた弾かれるんだけど・・・」

レヴィ
「でも強力な攻撃を受け続けると速度が落ちて、最後は止まっちゃったよね」

シャル
「長時間展開するわけじゃないから。フェアタイディングはドイツ語で防御っていう意味ね」

――紫電十字閃――

レヴィ
「おお！　前作では描かれなかった連携技だ！」

シャル
「そうだね。ルシルとシグナムが敵を挟撃するって言う技。どっちかが振り下ろし一閃、横払い一閃。剣閃の軌道が十字型だからこの名前が付いたんだよ」

――紫電嵐閃――

シャル
「これもまたルシルとシグナムの連携。とは言え、本編には登場しなかったけど。まず最初にルシルが対象の足元から砲撃を放って対

象を空に吹っ飛ばし、空で待機していたシグナムのシュランゲバイセンで相手を斬り刻み、最後は降下するシグナムの紫電一閃と上昇するルシルの火炎斬撃での挟撃ね」

レヴィ
「わたしもルーテシアと連携技とかしてみたかったな～」

――零斬風――

レヴィ
「アギトの妹、アイリの魔法だ！」

シャル
「あはは。で、これは冷気の斬撃を放つって言うヤツね」

――氷牙――

レヴィ
「大きな氷塊を創り出して落下させる、アイリの大魔法。アギトの轟炎と同じランクだね」

シャル
「まぁ、使用時は不発に終わったけど、その質量からして直撃を受けた人はまず無事じゃ済まないかな。・・・え？　はやてのヘイムダルと同じ？　はやての魔法にヘイムダルってあったっけ？」

――氷結圏――

シャル
「融合騎としての力の一端がコレ。冷気をデバイスやロードの身体に付加させる魔法」

レヴィ
「アギトの烈火刃みたいなヤツだよね」

シャル
「すごいのは、ルシルの魔術にすら付加させることが出来たって事。これぱっかりはアギトより性能が高いと言わざるを得ないかも」

レヴィ
「確かに・・・」

――竜氷旋――

シャル
「アイリの体から冷気を放出する魔法ね。至近距離でこれを使われると、確実に凍結されるから」

レヴィ
「放出されるとき、冷気がとぐろを巻くような形を取るからこんな名前になったらしいね」

シャル
「アイリを護るかのようにとぐろを巻く冷気の龍か～。見た目はカ

ッコいい」

――アイス・ランツェ――

レヴィ
「氷の礫を弾丸の如く発射する魔法だね」

シャル
「誘導操作のない直射弾。アイスは氷、ランツェは槍っていう意味よ」

――フリーレン・ドルヒ――

レヴィ
「リイン・ツヴァイのフリジットダガーと同じやつ。違いは魔法の名前くらいか。
フリーレンは凍る、ドルヒは短剣っていう意味だよ」

――クリスタレス・ハンマー――

シャル
「ヴィータとアイリの融合状態で発動できる、ヴィータの魔法ね。グラーフ・アイゼンのヘッドに氷結付加して、氷塊によるモーニングスターを作り出す。クリスタレス・ハンマーっていうのは、モーニングスターを作った状態と、それによる攻撃の総称ね。ちなみに意味は、水晶の槌ね」

――シュワルベフリーゲン・アイス――

レヴィ
「ヴィータさんの魔力・鉄球弾シュワルベフリーゲンに、アイリが氷結付加した魔法。着弾時に冷気を放出することで、着弾した地点を氷結する副次効果を持ってるの」

シャル
「至近距離で障壁による防御って言うのも要注意。冷気は障壁を回り込んで襲い掛かって来るから。ラウンドシールドやパンツァーシルトはまず役に立たないよ」

――フリーレンシュラーク――

シャル
「テートリヒ・シュラークに氷結付加した攻撃がコレね。着弾点を凍結する効果は当然持っていて、打撃力と冷気によるダブルに襲われると」

レヴィ
「防御はせずに回避して、カウンターをやった方がいいか」

シャル
「ヴィータの一撃を避けることが出来ればね。あ、フリーレンっていうのは、凍るっていう意味よ」

――ギガント・フリーレンシュラーク――

シャル
「ヴィータの巨大化したグラーフアイゼンによる最強の一撃、ギガントシュラークに氷結付加されたヤツね」

レヴィ
「絶対に防御不可。必死に逃げるしか生き残る道はないから要注意」

――デアボリック・エミッション・ヘクサ――

シャル
「本作においても最強クラスの魔法、それがコレ。ルシルとシュリエルが同時にデアボリック・エミッションを発動。シュリエルが中央に1つ、ルシルが複製の6つを六芒星状に発生させて、広範囲の航空戦力を一掃するの」

レヴィ
「これは本当にシャレにならないよ。障壁発生阻害の効果を持ってるし。逃げようにも攻撃範囲が広すぎ」

シャル
「これはもう発動させないが正解だよ。ヘクサは、ドイツ語で六芒星を意味するヘクサグラムから」

――コメート・ヴァンダーファルケ――

シャル

「シュリエルとザフィーラの連携技ね。２人同時に急落下して、魔力付加した蹴打を打ち込むって言うヤツ」

レヴィ
「シュリエルさんとザフィーラ師匠の脚に付加された魔力には障壁破壊が付加されてあるから、落下速度による力、魔力ダメージ、蹴打の物理ダメージの３つを受けることに・・・」

シャル
「コメートは流星、ヴァンダーファルケはハヤブサ。威力は申し分なしね」

――エレメンテン・ドルヒ――

シャル
「シュリエルのブルーティガー・ドルヒに、ルシルが複数の属性を付加させる魔法がコレ」

レヴィ
「ルシリオンの魔術による属性付加だから、威力はただの魔法よりは強くなるんだよ」

――炎蹴雷打――

シャル
「これは未使用だったザフィーラのものだね。両脚に火炎付加、両腕に雷撃付加された状態での拳打と蹴打の連撃ね」

――狼王塵砕牙――

シャル
「ルシルとザフィーラの連携技ね。ザフィーラが相手の腹に蹴りを打ち込んで、間髪入れずに顎を蹴り上げ。ルシルが追撃の砲撃で、反り返っていた相手を空へ吹っ飛ばす」

レヴィ
「空でルシリオンとザフィーラ師匠が相手を前後から挟撃。中空で殴っては蹴ってを繰り返した後にザフィーラ師匠の踵落としで地上に落とし、そして鋼の軛で貫きまくって宙で固定」

シャル
「トドメがルシルの何らかの砲撃一発・・・って・・・・」

シャヴィ
「・・・・うわぁ・・・」ドン引き

――鉄破震砕打――

レヴィ
「ザフィーラ師匠の魔法だ。障壁破壊特化の魔力を纏わせた拳打。それが、コレだね」

シャル
「シュリエルのシュヴァルツェ・ヴィルクングと同じね」

――岩衝鉄破／フェルゼン・ベルク――

シャル
「イリュリアの技術部が開発したエグリゴリの複製品、ゼフォン・エグリゴリの魔術ね。岩石の剣山を対象の足元から発生させるというもの。回避力が無い人にとっては最悪だよね～」

レヴィ
「まぁ、私ならきっと余裕で避けれると思う。で、フェルゼン・ベルク・・・。岩の山って言う意味か」

――斬渦砂陣旋／ヴィアベル・ゼンゼ――

シャル
「対象の周囲に切断力の高い砂の刃を渦巻くように発生させるって言うヤツ。防御力が高ければ即死は無いだろうけど、低い人は一瞬で体をバラバラにされるからね」

レヴィ
「避けようにも発生速度が速い所為で、避けれたとしても掠ることくらいは覚悟していて方がいいかも」

シャル
「ヴィアベルは渦。ゼンゼは鎌っていう意味ね」

――破岩砲弾／コメート・フェルス――

シャル
「人の頭部大くらいの岩塊をいくつも飛ばすって言う魔術。魔力付加されているから威力は当然ながら強い。けど、避けやすいし迎撃もしやすいの」

レヴィ
「わたしも真っ向から回避も迎撃も出来ると思う」

シャル
「コメートは彗星、フェルスは岩塊ね」

――守護岩隆壁／マオアー・シルト――

シャル
「土石系術師にとっては共通の防御方法がコレ。地面を隆起させて、岩石の壁とするヤツ」

レヴィ
「ただの岩石かと思えば鉄みたいに堅いんだっけ」

シャル
「土石系の強みは、魔力付加の強さにあるからね。防御力の高さは闇黒系と並んでトップクラスだよ」

レヴィ

「マオアーは壁や障壁で、シルトは盾だよ」

――砂塵岩龍旋／ヴィントホーゼ・ブレッヒェン――

シャル
「砂塵の竜巻を発生させて、あらゆる魔法効果を破壊したり、攻撃を防いだりする魔術。コレもまた土石系術死の基本的な術式ね。ヴィントホーゼは竜巻、ブレッヒェンは壊すっていう意味ね」

――地竜刃砕断／ボーデン・ドラッヘ――

レヴィ
「地面から突き出ながら進んでくる、龍の背ビレのような岩石波の攻撃。一直線に突き進んで来るから、横っ飛びでもすれば避けることが出来るんだよね」

シャル
「ゼフォンのは、まぁ、そうだけど。アンスールの地帝カーネルとかのだったらシャレにならんよ。全周囲とか波の高さが尋常じゃなかったり幅が冗談じゃなかったりと、それはもう大変」

レヴィ
「やっぱり、アンスールは普通じゃないっすね～。あ、ボーデンは大地、ドラッヘは竜だよ」

――蟻地獄乃喰渦／アマイゼンレーヴェ――

シャル
「大地を砂状へ変化させて、その上でアリジゴクを発生させるって言う魔術ね」

レヴィ
「飲まれたら最後。砂をまた堅い大地に戻すから脱出は不可能か～」

シャル
「術式名アマイゼンレーヴェは、効果のまんまでアリジゴクっていう意味よ」

――空衝岩槍穿／シュレッケン・シュペーア――

シャル
「岩石の尖塔を突き出させる魔術ね。シュレッケンは恐怖、シュペーアは槍っていう意味」

――我が武装その壱／エレクトロ・ギタレ――

――我が武装その弐／トロンペーテ――

――我が武装その参／ツィンベル――

――我が武装その四／ハルフェ――

シャル
「ゼフォン以上の完成度を誇った堕天使、ミューール・エグリゴリの

楽器を作る魔術ね。壱はエレキギター、弐はトランペット、参はシンバル。四はハープ。本編未登場だったけど、五のヴァイオリンがあったらしいの」

レヴィ
「音波系って初めて見た。ルシリオンもシャルロッテも使わないし」

シャル
「音波系ってな〜んか性に合わないんだよね〜。風嵐系とは紙一重って言うけど、私には扱えなかったんだ」

――砲閃は全てを粉砕して／シュピーレン・カノーネ――

レヴィ
「トランペットのベルから放たれる特大砲撃。単純な砲撃だから気負う事も無いよ」

シャル
「そゆこと。シュピーレンは演奏する。カノーネは砲撃っていう意味ね」

――砕音破ただ狂おしく／クヴァール・ゲロイシュ――

シャル
「超音波攻撃ね。身動きを封じるためのもので、直接的な攻撃力はないわ。ちなみにクヴァールは苦痛、ゲロイシュは雑音っていう意味よ」

――拡がる音は魔を喰い殺す／レルム・ベレスティグング――

シャル
「シンバルをこれでもかってくらいに打ち鳴らして発動させる、効果破壊の魔術ね。空間作用型で、衝撃波が届く圏内の術式を破壊するっていう。シュリエルのデアボリックもそれで破壊されたわけ」

レヴィ
「コレって攻撃・防御・捕縛のどれもが破壊されるって話だけど・・・」

シャル
「らしいね。この術式のランク以下なら問答無用で。同格と以上なら限られた範囲内でね。で、レルムは騒音。ベレスティグングは嫌がらせっていう意味ね」

レヴィ
「確かにレベルの高い嫌がらせって感じ」

――輝きたる音軍／ルスティヒ・マルシュ――

シャル
「エレキギターの弦を掻き鳴らして発生させる、ト音記号、八分音符、全音符、シャープ、フラット、ナチュラルの音符を拡散させて攻撃する魔術ね」

レヴィ
「物量攻撃だけど、一個一個の音符の隙間が結構あるから避けやすいかも。まぁ、ミュールに近づけば近づくほど密集してるから避けにくくはなるけど」

シャル
「ルスティヒは陽気な、マルシュは行進曲って言う意味」

――拡がれ音天使の調べ／ヴィルト・メロディー――

シャル
「エレキギターを掻き鳴らしてト音記号をいくつも発生させて、ヘッド部分から放った光線をそのト音記号に反射させて広範囲に光線群を拡散する魔術ね」

レヴィ
「軌道が複雑だしランダムだから近寄れないって感じだけど・・・」

シャル
「防御で全身を固めて突っ込めばいいんだよ。ちなみにヴィルトは荒々しい、メロディは旋律っていう意味ね」

――爆ぜろ死奏の音乱舞／レークヴィエム――

シャル
「光線や反射板のト音記号、さらにミュールの周囲に音符の書き込まれた楽譜の五線までが螺旋状に現れて、その五線の音符全てから

光線や魔力弾が次々と放つって言う制圧の魔術」

レヴィ
「上記のヤツよりさらに強力かつ複雑な軌道に物量。ルシリオンが言っていた通り防御しっ放しだと押し切られてゲームオーバー。だから迎撃じゃなくて術者のミュールをどうにかするのが一番の攻略法だよ。レークヴィエムは、鎮魂曲って言う意味ね」

――真技・堕ちた音天使大楽団／エグリゴリ・オルケスター――

シャル
「ミュールの最強の魔術である真技。それがエグリゴリ・オルケスター。魔力で創られたオーケストラの楽器で大演奏。射砲撃はもちろん衝撃波や超音波、魔力斬撃とかも飛ばしてくるんだよね～」

レヴィ
「純粋魔力で出来る攻撃なら全部発動させるって？　どれだけ欲張りな攻撃なんだろ・・・」

――轟破焔壊槌／マルテーロ・コンブスタォン――

シャル
「大戦編でアンスールと共に活躍して、堕天使戦争編でアンスールの炎帝セシリスを殺害した、元戦天使ヴァルキリーであり堕天使エグリゴリ、バンヘルドの魔術。バンヘルドの神器・灼槌ケンテュールを火炎の塊として相手に投擲するって言うヤツ。
さすがルシルと蒼雪姫シェフィリスの叡智と魔術の粋を結集して生

み出された奴よね。神秘も魔力も桁違いで、攻撃力も半端じゃない」

レヴィ
「ここまで強いなんて思いもしなかった、わたし・・・」

シャル
「・・・そうだね。・・・マルテーロはムスペルヘイム後（ポルトガル語）で槌。コンブスタォンは燃焼っていう意味よ」

――煉獄顕現／デシダ・エクスプロザオ――

シャル
「大規模な火炎の渦巻きを発生させる魔術。デシダは降臨、エクスポロザオは爆発ね。ランク下の魔術なら確実に焼き消すことが出来る。しかもこれは別の魔術を発動させるための布石にもなる。それが――」

――焔雨／ペザデーロ――

シャル
「悪夢っていう意味の魔術。火炎の雨を降らせるの。広範囲だし、威力も高いし。大戦に参戦した魔術師クラスじゃないと防御は出来ないから、絶対に回避をする事」

――焚灼槌龍／メテリオト・ソル――

シャル

「バンヘルドが火炎を纏い、龍の姿になって突進して来る魔術がコレ、太陽の隕石っていう意味のメテリオト・ソル」

レヴィ
「攻防一体かぁ。食べられても巻かれても、触れられただけでもアウト。シャルロッテの言う通り真正の魔術師じゃないと対処できないかな」

――炎星招来／エストレッラ・カデンチェ――

シャル
「流れ星っていう意味の、小型の太陽を発生させて対象に落下させる魔術。直撃どころか着弾時に発生する爆炎だけで、その周囲に在る物体すべて蒸発させることが出来るほどの火力が有るの。無傷済まそうとするなら、炎熱系の最上位術師の障壁くらいしか方法が無いわけ」

――赫灼装甲／カロル・アルマドゥラ――

シャル
「魔術師なら誰でも1つは持ってる自己強化の術式。バンヘルドにとってはコレね。カロルは熱。アルマドゥラは鎧。熱エネルギーで自身の魔力炉（システム）の出力を上げる。それは同時に身体能力も上げるって事。ただでさえ強いのにね・・・」

――煉獄兵／プルガトーリオ・インファンタリア――

シャル
「溶岩で構成された操り人形を何百って創り出す魔術。プルガトーリオは煉獄。インファンタリアは歩兵。ある程度の戦闘技術は持ってるの。魔導師ランクにして陸戦Ｓランク。魔力ランクで言えばＳＳＳランク。大戦編じゃ雑兵レベルだけど」

――灼槌／ケンテュール――

シャル
「神器ケンテュールの火炎発生能力で生み出された炎を纏わせたケンテュールでの直接打撃ね。ケンテュールって名前なんだけど。火を表すルーンのケンと、戦士を表すテュールから付けられたの」

レヴィ
「うぅ、魔術関連はサッパリだから、全然喋れないよ・・・（泣）」

シャル
「ご、ごめん。あとちょっとだからね、レヴィ」

――灼灼熱閃／ファーゴ・クレラオ――

シャル
「圧縮された炎が熱線となった魔術。人体どころか鋼鉄すらも寸断するほどの威力。フォーゴは火。クレラオは閃光ね」

レヴィ
「ザフィーラ師匠・・・シャマル先生・・・ぐす・・・」

シャル
「エグリゴリとまともに殺り合えるのは、魔術師のルシルだけと言う事を示す結末ね」

――猛炎放出／シャーマ・エゼクサオン――

シャル
「前方に発せさせた火炎球を、ケンテュールで打つことで砲撃と化す魔術がコレ」

レヴィ
「ただの火炎砲撃なのに、魔術ってだけで理不尽な攻撃力・・・」

シャル
「シャーマは炎で、エゼクサオンは処刑ね」

――咲炎弾／シャーマ・ガヴィアン――

シャル
「展開させた火炎弾をケンテュールで打って放つっていう魔術ね」

レヴィ
「これなら参加できる！　ヴィータさんのシュワルベフリーゲンみたいなヤツだ。違いは、バンヘルドのコレには誘導操作が無いって・・・違う・・？」

シャル
「合ってる合ってる。シャーマは炎で、ガヴィアンは鷹って言う意味なんだけど、誘導操作は確かに無いね。直射弾だから一度避けてしまえば攻略完了かな」

――煉獄巨神顕現／アポストロ・ムスッペル――

シャル
「火炎で自身を包んで巨人となる術式ね。すべてを焼き滅ぼす火炎の巨人となったバンヘルドが動くだけで周辺に多大な被害をもたらすの」

レヴィ
「炎の塊が動くんだから当然と言えば当然だけど・・・。決戦の場所が砂漠で良かった。森林地区とかだったら、笑えない山火事が起こってたわけだし」

シャル
「いやぁ、山火事くらいじゃ済まないでしょ～。確実に焦土と化して終わりよ。さすがは原初から存在している炎の世界・煉生世界ムスペルヘイムの名を冠する術式」

レヴィ
「ムスッペルっていうのがムスペルヘイムを表すなら、アポストロは？」

シャル

「使徒っていう意味よ。ムスペルヘイムの使徒。それがこの術式名の意味」

――高貴なる堕天翼／エラトマ・エギエネス――

シャル
「今作から追加された堕天使エグリゴリの新魔術。ギリシャ語でエラトマは悪、エギエネスは高貴。クジャクの尾羽のような羽を放射状に２０枚と展開するもので、移動速度の上昇や大気中の魔力素の供給を手助けする効果を持つの」

レヴィ
「見てる分なら綺麗だな～とか思うけど、相対したらそんなこと思えなくなるほど余裕がなくなるかも」

――電光石火――

シャル
「他のエグリゴリの術式は、その都度紹介するからね。で、次に紹介するのは、なんと・・・伝説の聖王女オリヴィエの魔導戦技！」

レヴィ
「ヴィヴィオの事から色々とオリヴィエ王女の事を調べたけど、まさか魔導戦技が判る日が来るなんて！」

シャル
「すごいテンション。と言うか、私たちの知るオリヴィエと、本作

のオリヴィエとじゃ違う存在だからね～」

レヴィ
「判ってるって。シャルロッテ、早速・・！」

シャル
「はいはい♪　まずは、短距離限定の高速移動の魔法・電光石火。フェイトやエリオのソニックムーブ、それに・・・」

レヴィ
「わたしの瞬走壱式のようなヤツだね」

シャル
「ま、フェイトに比べれば遅いかもだけどね！」

レヴィ
「う～ん、どうだろ」

――撼天動地／かんてんどうち――

シャル
「魔力を纏わせた拳打で足元に一撃。着弾点から四方八方に魔力流を奔らせて、その魔力流を噴き上げさせることで周囲一帯を攻撃するっと」

レヴィ
「ルシリオンのメタトロンに似てる気がするね」

シャル
「確かに。でも攻撃範囲と威力を見ればルシリオンのメタトロンには劣るかな」

レヴィ
「自分で言っておいてなんだけど、比べるのがおかしいんだよねルシリオンと」

シャル
「・・・まったくもってその通り」

――驚浪雷奔／けいろうらいほん――

シャル
「魔力を纏わせた拳を高速で突き出して、魔力を伴った成人大の衝撃波を放つっていう技だね」

レヴィ
「おお！　なんか戦技っぽいのが来た！」

シャル
「だね。衝撃波に籠める魔力量によって威力を変化させることが出来るみたい」

――天衣無縫／てんいむほう――

シャル
「魔力を纏っての突進技ね。威力・速度はあらゆる魔導戦技の最高クラス。直撃だけは絶対に避けないとね。防御は問答無用で粉砕するらしいし。掠っただけでも衝撃波で大ダメージ」

レヴィ
「初見じゃまず避けれないほどのスピード。わたし、回避しきる自信が無い・・・」

シャル
「私もギリギリと言ったところかな。けど直撃だけは絶対に避けれるわ」

――砲煙弾雨／ほうえんだんう――

シャル
「オリヴィエ様の射撃魔法・・っていうのかなぁ。魔力弾数発を手で投げて、最後に直径１ｍほどの大きさを誇る魔力弾によるトドメ」

レヴィ
「トドメの大魔力弾以外は誘導操作が効くみたいで、バリエーションを組めるようだよ」

――光芒一閃／こうぼういっせん――

シャル
「魔力斬撃だね」

レヴィ
「貫手の形にした手から魔力刃を発生させて、相手に斬撃をお見舞いするっていう魔法」

シャル
「もちろん切断力は折り紙つきよ」

――鬼哭啾啾／きこくしゅうしゅう――

シャル
「オリヴィエの真骨頂、格闘戦技のコンビネーションの1つね。胸倉を引っ掴んで頭突き一発、んで腹と胸に一発ずつ拳打を打ち込んだ後に跳んで宙で前転、顔や胸を数度踏みつけ、相手の背後に着地。後ろ向きに倒れそうになる相手の背部をサマーソルトキックで蹴り上げ、逆立ち状態になった相手の腹に魔力付加された両の掌底を打ち込む・・・と」

レヴィ
「すご・・・。これを一瞬でやっちゃうんだから・・・」

シャル
「レヴィも似たようなコンビネーション使うじゃん」

レヴィ
「いつか誰にも負けない程に強くなってやるもん」

――破邪顕正／はじゃけんしょう――

シャル
「シュリエルのシュヴァルツェ・ヴィルクングと同じ、打撃力強化・付与効果破壊を持つ魔導戦技ね」

レヴィ
「でも威力も能力効果も桁違い。初撃のフックで障壁を破壊して、トドメのストレートで意識を確実に飛ばすって」

シャル
「普通なら最初の一発で完全ダウンだってね～」

――旭日昇天／きょくじつしょうてん――

レヴィ
「片手に魔力球を1つ作って、屈んでいた体を起き上がらせる勢いを乗せた掌底と一緒に打ち込むって技」

シャル
「魔力球で騎士甲冑を貫いて、掌底で本体にダメージってところね」

レヴィ
「オリヴィエ王女の魔導戦技って、なんの効果も無しに並の奴の防御なら貫通させると思うけど」

――紫電一閃――

シャル
「シグナムの技と同じ名前だけど全然違う。コレもコンビネーションの1つね」

レヴィ
「まず上段蹴りと上段回し蹴りで相手の両側頭部に一発ずつ。続けて顔面と鳩尾と両脇腹にも蹴打を一発ずつ。トドメに電気変換した魔力を纏わせた踵落としを脳天に一発」

シャル
「やっぱりレヴィの技と似てると思うんだけど・・・」

レヴィ
「・・・・うん。似ていて当然かも。シャルロッテだって知ってるでしょ」

シャル
「アレでしょ。レヴィとオリヴィエの技は、ゼノギアスってゲームに登場するキャラの技を基にしてるって」

レヴィ
「うん。同じキャラだからさ、やっぱり似ちゃうんだよね」

――疾風怒濤／しっぷうどとう――

レヴィ

「コレもコンビネーションの1つ。ストレートを鳩尾に打ち込んで、それで前屈みになった相手の顎にアッパー」

シャル
「そんで仰け反らせて、背後へ回り込むように一回転して背中を蹴り上げて浮かす。間髪入れずに後頭部に回し蹴り、その勢いで宙で前転する相手の顔面を殴る。直立したところでオリヴィエが跳び上がって宙で前転して踵落としを決めて、そのまま相手の後頭部を踏みしめ地面へと顔面から落とす」

レヴィ
「骨やら筋肉がボキボキのグチャグチャにされてもおかしくないよ」

シャル
「ついでに鼻の骨と歯もボッキボキだろうね」

――狂瀾怒濤／きょうらんどとう――

シャル
「魔力で脚力強化をして、地面を踏みつけて地割れを起こし、隆起した地面で攻撃を防いだり相手を崩壊に巻き込んでダメージを与えたりするっていう技」

レヴィ
「ゼフォンのなんとかって技と同じ？」

シャル

「マオアー・シルトね。ま、そうかな」

――金城鉄壁／きんじょうてっぺき――

シャル

「魔力障壁ね。うん、普通の」

――意気軒昂――

シャル

「ルシルで言う執行権限。レヴィで言うブースト。そう、リンカーコアに掛けた自己制限を解除する魔法」

レヴィ

「ブースト2までは問題ないけど、ブースト3を発動するとわたし性格が変わっちゃうんだよねぇ」

シャル

「テンションうなぎ上りだよね♪」

――臥薪嘗胆／がしんしょうたん――

シャル

「上記のリミッター解除の魔導のさらに上、全リミッター解除を行うためのヤツね～」

――莫逆之友／ばくぎゃくのとも――

シャル
「フッフッフ。フライライト家の子孫で私を尊敬してくれている娘、リサと一緒に行う連携技ね。ＡＮＳＵＲ時代、空を飛べなかった私が使っていた法陣結界――えっと、足場となる魔法陣を球体上に展開した檻の中で、オリヴィエとリサが内部を跳び回りながら相手をボコるの」

レヴィ
「２人が使う魔導戦技によってはそりゃあもう拷問だよね～」

シャル
「逃げ場無しだし。アンスールのメンバーには全然通用しなかったけど。と言うか、イヴィリシリアってクソ強すぎなんだけど！！」

レヴィ
「手も足も出なかったんだっけ？」

シャル
「ぅく・・・」

――七花八裂／しちかはちれつ――

レヴィ
「この魔導戦技の直撃の結末は、無残な死体に変化するっていう・・・」

シャル
「渦巻く魔力を掌底に乗せて体内に打ち込むことで体内をメチャクチャに破壊する。打ち込んだ魔力によっては堅田が弾け飛ぶんだよ。グロいわぁ～・・・」

レヴィ
「ルシリオンの暴風の砲撃ザフキエルみたいな？」

シャル
「北〇の拳みたいにピブ～みたいなＳＥ鳴らしてドカンと爆発するコレ（注：音はしません）と、削岩機のような砲撃で体を削られて粉砕されるアレと・・・。グロさはどっちもどっちじゃない？」

――其疾如風／はやきごとかぜのごとく――

シャル
「高速移動・電光石火の強化版ね」

レヴィ
「これほどのスピードになると、もうわたしじゃ追いつけないな～」

シャル
「私の閃駆ならまだまだ負けないよ！」

――其徐如林／しずかなることはやしのごとく――

レヴィ

「的確な手刀で意識を刈り取るんだけど、高速移動からの奇襲だから、よっぽど機動力が無いとまず避けれないね」

――侵掠如火／しんりゃくすることひのごとく――

シャル
「魔力を炎熱変換してアッパー、そして腹に中段蹴りをかます技ね」

――不動如山／うごかざることやまのごとく――

レヴィ
「身体強化の最強版？　瞬時に魔力を練り上げて身体能力を強化して、打撃力を爆発的に上昇させるっていうの」

――難知如陰／しりがたきごとかげのごとく――

シャル
「コレは・・・技？　ただ一瞬で移動して相手の視界から消えるって言うヤツなんだけど・・・」

レヴィ
「立派な技だと思うけど、わたしは」

――動如雷霆／うごくことらいていのごとし――

シャル
「魔力を纏っての突進技・天衣無縫の電気変換版がコレね」

レヴィ
「ただでさえふざけた威力な天衣無縫に電気付加。着弾時に放電するから、ダメージも追加されるっと」

――風林火山――

シャル
「其徐如林から動如雷霆を行うコンビネーションの技名がコレ」

レヴィ
「コレらを受けてまだ立ち上がったテウタは正真正銘の怪物だよ」

――夢影／むえい――

シャル
「そんなテウタが使う魔導を今から紹介していくから。まずはコレ。現実に質量を持ち、半自律行動を取れる分身体を、一度に最大１０体まで創り出せるっていう・・・」

レヴィ
「これって魔法？　魔術じゃない・・・？」

シャル
「どっちかって言うとレーベンヴェルト王家の能力って感じかな。魔力消費も無いから、どれだけ失ってもまた新しく創り出すことが出来るわけ。イニシャルＧかっつうの！」

――夢影・壱乃打ち方・乱拳――

シャル
「夢影を使った魔導戦技の1つね。テウタ自身の拳から分身の拳だけを何発も繰り出して、トドメに本物の拳打を一発ってね」

レヴィ
「まさか聖王の鎧を打ち貫くなんて・・・」

シャル
「さすがはレーベンヴェルトってわけか」

――夢影・弐乃打ち方・連拳――

シャル
「壱乃打ち方は正拳の連打だったけど、弐は裏拳の連打ね」

レヴィ
「壱もそうだけど、初見だとまず食らっちゃうんじゃ・・？」

シャル
「軽い防御ならバンバン貫いてくるからね～。アレ？って思った瞬間にはもう後退しないと受けるだろうね」

――夢影・拾の打ち方・斬宴／ざんえん――

シャル
「あとで紹介するけど、天神の剣っていう魔導の力で創った魔力刃が付加された蹴りをかますってヤツ」

レヴィ
「分身体にも付加できる魔力刃だから、夢影で包囲されてのこの技は厄介かな～」

シャル
「ま、オリヴィエには簡単に攻略されたけど・・・残念！」

――夢影・拾弐乃打ち方・迅壊――

シャル
「まずテウタ本人が飛び膝蹴り。避けられようが防がれようが初撃は囮。テウタの前面から飛び出した分身体による落ち膝蹴り。間髪入れずにテウタ本人が分身体を飛び越えての蹴り。次に分身体が相手の背後から蹴り。テウタ本人による回し蹴り。吹っ飛ぶ相手の行く先に待ち構えている分身体による拳打一発」

レヴィ
「これで完成する技だけど、オリヴィエ王女は最初の方で崩していたから奔ぺ電完成することはなかったんだよ」

――夢影・拾参乃打ち方・舞陣／ぶじん――

シャル

「本体と合わせて分身体が一斉に飛び掛かってきて、包囲の中で様々な攻撃を仕掛けて来るって技だけど」

レヴィ
「オリヴィエ王女強すぎ。聖王女無双ってゲームが作れそう」

シャル
「難易度が低すぎてクソゲーになりそうだけどね」

――銀月――

シャル
「1本の魔力の鎖の両端に巨大な魔力球を付けた、ある意味ヌンチャクみたいなヤツかな」

――神の覇道――

シャル
「融合騎マラークとの融合後で発動する魔導戦技ね。オリヴィエの天衣無縫と同じ、魔力を纏っての突進、と」

レヴィ
「天衣無縫に比べて発生速度や移動速度は遅いかも。あと威力も」

――神の光剣――

レヴィ

「コレは魔力で剣を創るって魔法だね」

シャル
「何の付加効果もない、ただの魔力剣ね」

――神の雷嵐――

レヴィ
「放電する竜巻を発生させるって言う魔法なんだけど、発生するまでの時間が僅かにあるから避けやすいよ」

――神の威光――

シャル
「テウタの全身から発せられる衝撃波で、接近してきている相手を吹っ飛ばすってヤツ。直接的なダメージはないけど、相手が騎士なら効果は覿面。近付かせなければどうって事ないんだから」

――神の火柱――

レヴィ
「対象の足元から火柱を上げさせるっていう魔法。３連続で発生して、避けてもついて来るんだよ」

シャル
「一発目を避けても、避けた先で二発目、また避けてもそこに三発目って感じ」

――神の閃光――

シャル
「融合テウタの扱う魔法の中で二番目に威力のあるヤツね。指先から放たれる単純な魔力砲撃なんだけど、聖王の鎧を貫いてオリヴィエにダメージを通す程に強いの」

レヴィ
「単純だからこそ強いのかも」

――神の火弾――

シャル
「成人サイズの火炎弾を幾つも発生させて、断続的に相手に放つって言う魔法」

レヴィ
「発生場所は任意だから、相手を包囲することも出来るんだよね」

――神の吹雪――

シャル
「前方に魔法陣を展開して、そこから吹雪を放射するって言う魔法ね」

レヴィ

「直撃は当然の如く凍結されるんだよ～」

――神の天罰――

レヴィ
「先に紹介した銀月の魔力球だけを複数発生させて、相手に落下させて攻撃って言う魔法」

シャル
「破壊力はテウタの魔法の中で最強で、一撃必殺ね」

――神の聖槍――

レヴィ
「魔力の槍を創り出すって、まるでルシリオンの魔術みたい」

シャル
「うん。でも威力で言えばルシルの方が圧倒的に上よ」

――天神の剣――

シャル
「テウタが対オリヴィエ用に組み上げた魔法ね。聖王の鎧を突破できる程の威力を持った魔力刃が付いた籠手と具足を創るってヤツなんだけど」

レヴィ

「これには驚いたよ。でも最終的に役立たずで終わったけど」

シャル
「言っちゃダメ。あ、そうそう。覇道、光剣、火弾、火柱、閃光は、ＢＥＹＯＮＥＴＴＡのファーザーバルドルからお借りしました～　」

――炎塵一閃／炎塵一閃・零式――

シャル
「お。今からはイリュリア騎士たちの魔導戦技の紹介ね」

レヴィ
「まずは、イリュリア騎士のワイリーとオリバー兄弟の技」

シャル
「零式だろうがそうでなかろうが基本的に同じ効果で、デバイスに炎を纏わせるってヤツね」

レヴィ
「シグナムさんの紫電一閃と同じ・・・じゃないか。同じとか言っちゃうと、シグナムさんに失礼だもんね」

――真・炎塵一閃――

シャル
「オリバーと融合したアギト（この時はゼクスね）の烈火刃で強化された炎塵一閃ね。シグナムとアギトの火龍一閃のようなものだけ

ど、威力で言えばこっちの方が上なの」

レヴィ
「でも結局はルシリオンの複製術式で不発にさせられたけどね」

――烈火一閃――

シャル
「私の炎牙崩爆刃と同じ、火炎の斬撃を飛ばすって魔法ね」

レヴィ
「威力はもちろん・・・」

シャル
「私の方が断然上！」

――紅蓮旋・零式――

レヴィ
「フェイトさんのハーケンセイバーのようなヤツだね」

シャル
「うん。切断力もあるし、ある程度の誘導操作も可能ってね」

――ヴォルフ・クラオエ――

シャル

「ん。次は、ルシルを追い詰めた事のある唯一の現地人、ファルコ・アイブリンガーの魔導戦技。両腕に装着してある鉤爪型のデバイスによる貫手攻撃。攻撃速度がかなりあるから、連撃で来るとちょっと厄介かな。ヴォルフは狼、クラオエは鉤爪っていう意味よ」

――シュトゥルム・シャルフリヒター――

レヴィ
「暴風を纏って竜巻の蛇と化す魔法だよ。シュトゥルムは暴風、シャルフリヒターは処刑人」

――シュトゥルム・シャルフリヒター・エヴォルツィオーン――

レヴィ
「↑の強化版。シグナムさんとアギトの火龍一閃と互角の威力を持ってるんだ。エヴォルツィオーンは進化って言う意味」

――トイフェル・ルフト／――ギガント・トイフェル・ルフト――

シャル
「三日月状の真空の刃を放つって魔法。私の風牙真空刃みたいなヤツかな。トイフェルは悪魔、ルフトは空気よ。ギガントバージョンだけど、名前から見て判るようにサイズを大きくしただけのものよ」

――ヴァーンズィン・オルカーン――

レヴィ

「風を操る人にとっては当然な魔法なのかな～？　コレは暴風の砲撃なんだけど」

シャル
「まあ、圧縮した暴風は殺傷力が高いし。ルシルはもちろん風迅王イヴィリシリアも似たようなヤツ使うしね。
ヴァーンズィンは狂気、オルカーンはハリケーンね」

――ツェアライセン・シュラーク――

シャル
「障壁破壊効果を持つ踏み蹴りね。蹴りは弧を描く軌道の足の甲で蹴るもの、踏み蹴りは足の裏で蹴るってこと・・・わざわざ説明する事ないかな・・・？　ツェアライセンは引き裂く、シュラークは一撃・打撃ね」

――クラオエ・デス・イェーガー――

レヴィ
「魔力付加した鉤爪の貫手のコンビネーション。初撃は囮で、全力の二撃目で相手を討つ。
クラオエは鉤爪。イェーガーは猟師って意味だよ」

――シュトゥルム・デス・オクテット――

シャル
「８つの竜巻を相手に向かって放つ魔法ね。イヴィリシリアの槍嵐

と同じ。シュトゥルムは暴風、オクテットは八重奏。ちなみに二重奏ドゥーオから七重奏セプテッとっていうバリエーションありよ」

――グラナーテン・ヴィント――

シャル
「融合騎の五番、風のフュンフの魔法ね。風を圧縮した魔力弾を複数放つ、誘導操作無しの直射射撃。グラナーテンは手榴弾ハント・グラナーテから。ヴィントは風ね」

――ヴィント・バイセン――

レヴィ
「衝撃波を放つ魔法だよ。ヴィントは風。バイセンは噛む・噛み砕くって意味」

――ヴィントホーゼ・フェッセルン――

シャル
「竜巻状のリングバインドってところね。無理に逃げ出そうとすれば、風圧で障壁を削られて、仕舞いには体に大ダメージ。ヴィントホーゼは竜巻、フェッセルンは高速って言う意味なの」

――ギガント・アーテム――

レヴィ
「フュンフの大魔法だよ。アギトでいう轟炎、アイリでいう氷牙。

質量を持った風圧の槌で相手を押し潰すって言うヤツで、ルシリオンにでも通用したほどの威力。ギガントは巨人。アーテムは息吹。ちょっと想像したくない絵面が見えちゃうかも・・・」

――ツァオバー・ゲショス――

シャル
「私のかつての同僚・・・とか思いたくないけど事実だから諦める。っと、サー＝グラシオンの子孫、ゲルトの魔法ね。長距離の射撃魔法だけど、ま、大して威力もない単純な魔力弾。ツァオバーは魔術・魔法、ゲショスは弾丸ね」

――ヴァイゼ・シュピーゲル――

シャル
「グラシオンの神器・魔鏡フェアドレーエン・シュピーゲルを能力として生み出すことが出来るわけなんだけど。たぶんグラシオンの魂ごと神器も一緒に転生したんだと思う。こればかりは真実は判らないから、あくまで推測。ヴァイゼは賢者、シュピーゲルは鏡って言う意味よ」

――シュテルメン・リッターー――

レヴィ
「ゲルトが↑の能力を使って鏡から別の鏡へ転移する魔法。ほとんど奇襲に近いことから、急襲する騎士、って意味になるわけだよ」

――ウンオルドヌング・ゲヴァルト――

シャル
「グラシオンも使っていたヤツね。鏡で魔力光線を無限反射させて、無軌道無差別の光線群による包囲攻撃をするっていうの。全面包囲の防御から撤退、もしくは鏡の破壊が攻略法。間違っても回避は選択しない事。ジリ貧に追い詰められるだけだから。ウンオルドヌングは無秩序、ゲヴァルトは暴力って言う意味よ」

――エクリプセ・ハルモニー――

シャル
「ゲルトの最強魔法がコレ。反射させていた光線群を一枚の鏡に転移させて、光線を集束させた砲撃に変換して撃ち出すって言う魔法。光線には凍結効果があって、それを集束させているから着弾までの間に大気を氷結したりするみたい」

レヴィ
「でも、シグナムさんとアギトの火龍一閃に相殺されたんだよね」

シャル
「相殺でも十分凄いと思うけど。シグナムの火炎をアギトが強化した火龍と、アイリ単独の氷雪。その結果が相殺って。やっぱりアイリの方が性能が良いみたい。エクリプセは蝕、ハルモニーはハーモニーね」

――パンツァー・ブルート――

シャル
「私のかつての同僚、鮮血姫シリア・ブラッディアの能力・血液操作を受け継いだ騎士ウルリケの魔法にして能力ね。自身の周囲に待機させている血液の塊を防御に使うっていう」

レヴィ
「すっごい血生臭そう。う〝っ。想像したら、気持ち悪くなってきた・・・」

シャル
「それが困ったところなんだよね～。もう臭いのなんのって。思い出したら、う〝っ、私も気持ち悪く・・・」

レヴィ
「うぷ。パンツァーは鎧、ブルートは・・・血・・・おえ～～～」

――グラオザーム・ケッツァー――

シャル
「突き刺した相手から血液や魔力を略奪する血液の触手を伸ばすのがコレ。突き刺された時の嫌悪感や不快感と言ったらもう頭がおかしくなりそうなほど！」

レヴィ
「グラオザームは残忍、ケッツァーは異端者」

――フェアドレンゲン・カヴァレリスト――

シャル
「２匹の猫のキメラが牽引する戦車エウリノーム（古代ギリシアの時代から知られている死の王で悪魔）の突撃技？　戦車全体に魔力が付加されているから、結構な攻撃力があるの。フェアドレンゲンは押し退ける・排除する、カヴァレリストは騎兵ね」

――フェッセルン・ブレッヒェン――

レヴィ
「フェッセルンは拘束、ブレッヒェンは壊す。っていう意味の通りコレは拘束破壊の魔法。血液を高速回転する渦状に変化させて、拘束の魔法を断ち切って破壊するんだ」

――トーデスゼンゼ――

シャル
「血液を大鎌状にして相手を襲わせるったいう魔法。切断力もあるし、斬られたら当然のごとく血液と魔力を吸われるからね。トーデスは死、ゼンゼは鎌ね」

――風刃烈火――

シャル
「かつての上司、風の騎士公オペルの子孫、ヨハンの魔導戦技ね。槍全体に暴風を纏わせる魔法で、攻撃にも使えて防御にも使えて、

槍捌きの速度も上げる、優れものの魔法。オペルも似たような魔術を使っていたから、きっと受け継がれて来たんでしょうね」

――カスパール――

シャル
「アンナって娘の魔導戦技ね。レイピア型のデバイス・アインホルン（一角獣）を振るうことで発射する電気の魔力弾。フェイトのプラズマバレットのようなヤツね。カスパールっていうのは、ドイツ歌劇『魔弾の射手』に登場する、魔弾の使い手カスパールからよ」

――バリサルド――

レヴィ
「アインホルンの刀身に電気を纏わせての刺突攻撃がコレだね。バリサルドは、シャルルマーニュ伝説のロランが最初に持っていた剣の名前みたい。後々にデュランダルっていう剣を持つことになったそうだよ」

――ヤコブの荒流――

シャル
「魔族・大海の竜アルベルトゥス・フォカロルの血を受け継いだアンナが発動させた水流操作の魔術。ヤコブは、創世記に登場する、ヘブライ語で『人を出し抜く者』の意を持つユダヤ人の祖ヤコブから」

――エノクの鎖人――

シャル
「拘束用の薄っぺらな人形を水で幾つも創り出すっていう魔術。エノクは、旧約聖書の創世記などに登場する、『従う者』の意を持つエノクから。エノク書じゃエノクは天使メタトロンになるっていう話よ」

――エロンの渦陣――

シャル
「海中で真価を発揮する、相手を水圧の竜巻で圧殺するっていう魔術。エロンは、旧約聖書の登場する人名で町名で、『大木』の意味を持つエロンから」

――ゼルバベルの叱責――

シャル
「水人形の兵隊を創り出して相手に殺到させる魔術ね。ゼルバベルは、旧約聖書の人物で、『バビロンの種』って言う意味ね。ダビデ王家の直系の子孫でユダヤ人の指導者、ゼルバベルから」

――ギデオンの咆哮――

シャル
「水流や水圧を利用しての砲撃ね。ギデオンは、『破壊者』の意味を持つ、ヘブライ人の士師ギデオンから」

――ダビデの星盾――

シャル
「水流を六芒星状に操作して攻撃を防ぐ魔術ね。真正のアルベルトゥス・フォカロルならどんな属性でも防いじゃうほどに強力なの。ダビデは、古代イスラエルの王で、イスラム教じゃ預言者の1人にも数えられているダビデから」

――ネヘミヤの剣――

シャル
「剣状の水圧を3ケタほど創り出して包囲攻撃する魔術。その威力は、不完全とは言えルシルの下級術式や障壁を粉砕するほど。ネヘミヤは、エルサレムに派遣されたペルシャの提督で、民族の復興に尽力したネヘミヤから」

――アルバア・ハ＝イマホットの滅弾――

――アルバア・ハ＝イマホットの滅刃――

シャル
「滅弾は、背から生える2枚の天使の翼から弾丸のように羽根を飛ばす魔術ね。滅人は、背から生える2枚の悪魔の翼を払うことで生まれる水圧の刃を飛ばすヤツ。アルバア・ハ＝イマホットは、イスラエル民族の礎となった3人の祖父、それぞれの正妻4人を指すユダヤ教の概念の事よ」

――ミリアムの聖歌――

シャル
「えっと・・・・・」

レヴィ
「・・・・続けていいよ。わたし、サッパリだから・・・・」

シャル
「あーっと・・・・レヴィ、これはね・・・・」

レヴィ
「ふんふん・・・・。ん、判った。えっと、これはアルベルトゥス特有の歌声で発生する周波数――超音波を相手に叩き込んで、脳を破壊するって・・・・怖っ！」

シャル
「実体・肉体を持たない幻想一属にすら通用するほどの威力を持ってるの。ミリアムは、旧約聖書に登場する女預言者ミリアムから。ある事後にミリアムは小太鼓を打ち鳴らしながら、神を賛美する歌を歌った。ってことから、この術式にこの名前を付けたらしいよ」

――オトニエルの海槍――

レヴィ
「水圧の槍を創り出して相手に投擲するっていう魔術・・でいいん

だよね・・？」

シャル
「うん。オトニエルは、旧約聖書・士師記に登場する士師の１人ね」

――メトシェラの槍――

レヴィ
「海水を使って巨大な槍を幾つも創って空戦戦力を撃ち落すっていう魔術。その勢いは防御を貫通して来るらしいから、絶対に避けないと酷い目に遭うよ」

シャル
「メトシェラは、旧約聖書・創世記に登場する人で、９６９歳まで生きたとか。あと、キリスト教においては、イエス様のご先祖って事で一部の教派からは聖人扱いされてるってさ」

――牢刃・弧舞斬閃――

シャル
「さぁ、これで最後の紹介になったわっ！　フライハイト家の子孫、リサ・ド・シャルロッテ・フライハイトが、私の遺した魔導書を頼りに構築した魔導剣技がコレよっ！」

レヴィ
「すっごいテンション」

シャル
「フフフ。対ヨハン戦で、魔法で出来る術式を全てリサに伝授してやったわ！！」

レヴィ
「おお。でも、それら全部を本当に習得できたのか怪しそうだけど・・・？」

シャル
「・・・・・ま、まぁ、何とかなったんじゃない」

レヴィ
「目が泳いでる上にどこ見てんの？」

シャル
「もういいじゃない！　リサは想像していた以上に頭が良かったから、ちゃんと扱えるはず！」

レヴィ
「どんだけ下に見てたの、シャルロッテ」

シャル
「なんて言うか、オリヴィエに対する態度からして、なんかアホっぽい娘だなぁ～みたいな？」

レヴィ
「それを言ったらシャルロッテの方がアホでバカでマヌケでボケで

ドジで――」

シャル
「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！！」

レヴィ
「うるさいのはそっちだって！」

シャル
「どうせ私は馬鹿ですよ～！　ええ、リサがオリヴィエなら、私はなのはですよ～！　悪い！？　なのはは私にもう一度人らしい感情はもちん友情をくれたんだよ！　大好きになっても仕方ないじゃん！」

レヴィ
「責めてないから！　それを言ったらわたしだってルーテシアが大好きだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

シャル
「なのはっ、大好きぃぃ～～～

レヴィ
「アギトもガリューもお母さんもエリオもキャロもだいだいだいだぁぁ～～～～～～い好きぃぃーーーーーーーッ！！」

シャヴィ
「大好きだぁぁぁあああああああああああああああああああああああッ！！」

～～～5分後～～～

シャル
「・・・レヴィ・・・・」

レヴィ
「・・・な〝に〟・・・・？」

シャル
「めっちゃ声、枯れてるじゃん・・・」

レヴィ
「・・・う〝ん〟・・・・のど、痛い〟・・・・」

シャル
「と、とりあえず・・・サクッと終わらせるよ・・・」

レヴィ

「・・・・・」コクコク

シャル
「３２枚のベルカ魔法陣を球体状に組み上げて檻とした法陣結界、その内部で繰り広げられる斬撃乱舞。魔法陣１枚につき障壁破壊効果を持った魔力剣が１振りずつあって、リサは閃駆で結界内を跳び回りながら魔力剣を抜いては移動中に敵を斬り、また別の魔法陣から魔力剣を抜いて移動の最中に敵を斬る。
これを何回も繰り返した後、ひとりでに魔法陣から抜けた３２本の魔力剣が同時に相手を斬り刻んで、トドメにデバイス・キルシュブリュ～テを持ったリサが直接斬り捨てるっていう結構な極悪技」

レヴィ
「あ゛～あ゛～あ～あ～・・・・うん。確かに・・・・」

シャル
「結界を破壊したところですぐに再生するし、防御しようにも障壁破壊の魔力剣の一撃だし、回避しようにもリサの閃駆は速いから避けれないし」

レヴィ
「とんでもない騎士を誕生させちゃったねシャルロッテ」

シャル
「ふふん！」ドヤ顔

レヴィ

「あはは。えっと、じゃあ・・・このコーナーもついに幕かな」

シャル
「うう、私の出番がコレで終わりかと思うと超さみしい・・・」

レヴィ
「わたしだってそうだよ。でも、前作キャラわたしとシャルロッテは本編に出ちゃダメなんだよ」

シャル
「私はちょこっと本編に出たけどね」

レヴィ
「よかったね」イラ☆

シャル
「まっ、あとは今作のなのは達に任せるとしようか」

レヴィ
「そうだね。それじゃ・・・」

シャル
「シャルロッテ先生の魔導紹介教室はこれにて・・・」

シャヴィ
「お～わりっ♪」

Ｅｐｉｃｌ－Ａたとえ再び君たちに逢えるのだとしても～Ｗｈｅｅｌ　ｏｆ　ＦｏｒｔｕｎＥ～

主だった戦争の道具である質量兵器の使用が全面的に禁止され、数多くの世界を有する次元世界の年号が新暦に替わってから６５年。それと同じくして次元世界に秩序をもたらし管理するための組織、時空管理局が設立されてからも６５年。
質量兵器に取って代わったのは、大気中に存在する魔力素を特定の技法で操作し、作用を発生させる技法、名を魔法。その魔法を使う者を魔導師と呼び、管理局はその力で次元世界に平和をもたらそうと奮闘している。

そんな次元世界の内の１つ、ここは第２８管理世界と呼ばれる世界、名をフォスカム。管理世界とは、魔法を知り、次元空間を渡り異世界間を移動できる術を持つ世界を、管理局がそう決めたものだ。ちなみに管理外世界というのも存在する。魔法を知らず、異世界へと渡る術を持たない世界に当てられる名称。
フォスカムの辺境地区にてスクライア一族という、管理局や公的組織から依頼されての遺跡発掘を生業としている者たちが地底に広がる遺跡を探索していた。

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

僕たちスクライア一族がフォスカムで発見された地底の遺の跡発掘を始めて早４日。今回の発掘の現場指揮を任された以上、何かしらの成果を残したい。ポケットの中から以前の遺跡発掘で見つけた、

紅珠の形をしている、魔法の発動を補助してくれる杖（デバイス）――"レイジングハート"を取り出す。いつどこで、何の目的で作られたのか判らないけど、デバイスとしての性能はかなり高いと思う。

（でも、僕の魔法の力だと使いこなせないからな～）

魔導師としてのレベルがそんなに高くない自分の不甲斐無さに少し落ち込みながら、手の平の上に乗る"レイジングハート"を眺める。"レイジングハート"っていう名前もこのデバイスから聴いたものだけど、出生に関してはデータに残っていないらしいし。相応しいマスターが見つかればいいな。その方が"レイジングハート"も嬉しいと思うし。

「ユーノっ♪」

「私たちも手伝うよ♪」

「うわぁっ！？・・・って、セレネっ、エオスっ！？」

いきなり背後から飛びついてきたのは、僕より1つ年上の双子の姉妹、セレネとエオス。2人の急な抱きつきにとっても驚いた僕は「ビックリしたじゃないか！」って怒鳴る。どうしてこう悪戯好きなんだろう。

「2人とも。自分たちの担当するエリアの発掘はどうしたの？」

セレネとエオスも僕と同じスクライアの人間だ。スクライアは流浪

の一族だから実の家族と一緒に居るという事は少ない。僕だって両親と一緒じゃない。物心がつく前にはもう死別している。セレネとエオスは、僕が昔からお世話になってる族内の一群の長ペリオさんの娘で、この一群で唯一実の家族と一緒に居る子供だ。家族のやり取りを見て寂しくないと言えば嘘になるけど、血の繋がった親じゃなくとも絆の繋がった家族がいるから大丈夫だ。

「「そんなのとっくの昔に終わったってば」」

２人は双子だからか同じことを同じタイミングで言ってくる。ちょっとした口ゲンカになった時ほど面倒な時はないかな。セレネが「ほら」って、バリアジャケットのポケットの中から何かを取り出した。手の平サイズのソレは「綺麗でしょ～♪」確かにセレネの言う通り綺麗な鉱物だった。なんだろ？　水晶だと思うけど。

「ねえねえ、ユーノ。これ見てみて♪」

「へ？　Ｎｏｏｏ

「ぷくく。コレ、本物じゃないからさ♪」

そう言われて、頭蓋骨をよく見て触れてみる。材質は判らないけど、確かに本物じゃない。人工的に作られた頭蓋骨だ。いま僕たちが発掘している遺跡は、旧暦に滅んだ文明の祭儀場だったみたいだから、この頭蓋骨は何かの儀式に使われていたのかも。考古学者を目指す僕としては気になるところ。じっくりと調べたい。でも、「痛っ？」耳を両側から引っ張られた。

「「ほら、調べるのは後にして奥に行くよ～」」

「判ったから耳を引っ張らないでよセレネ、エオス・・・！」

とりあえず僕たちは遺跡の奥に向かうことにした。トラップの類もなくて、まぁ、多少は道に迷ったりしたけど、どうにか到着。そこは何もない空間だったけど、「ここから先に行けるよ」2人が指差す場所には小さな穴が開いていた。

四つん這いになって覗き込んで見ると、「あ・・・！」壁の向こうにもう一部屋が在るのが確認できた。こういう人の大きさで動き回れない遺跡内部などをスムーズに探索するために、スクライアの魔導師は小動物への変身魔法を習得してる。

今回も例に漏れずに僕たちは小動物姿に変身する。僕はフェレット、セレネはハムスター、エオスはリスに。

「それじゃあセレネ、エオス。この隠し部屋の発掘作業に移ろう」

「「りょーかーい♪」」

元の姿に戻ってぐるりと室内を見回す。隠されていた広さのある五角形の部屋の床は石畳だけど、ほとんどが捲れ上がって土を覗かせてる。壁には火の点いていない燭台がズラッと設置されていて、奥には大きな鏡が1枚置かれた祭壇。

部屋の角には3ｍくらいの怪しい戦士の石像が5体。直感が告げてくる。絶対にトラップだ。遺跡発掘の先輩の2人だって気づいてるはずだけど「お～宝のた～めにここ掘れランラン♪」歌いながら発掘してる。気を付けるように注意しようとしたところで、ズズンと石像が動き出した。

「「おお、やっぱり動いた♪」」

「そんなのんびり驚いてないで逃げて！」

振りかぶられる石像の剣が2人を襲う。僕以上に魔導師としてのランクが低い2人に防ぐ術はない。でも身動きだけは素早いから余裕で回避。そして僕は魔法で迎撃。足元に展開されるミッドの魔法陣。

――シュートバレット――

「シューット！」

魔力弾を3発放って、1体の石像の片脚を集中攻撃。

「2人は逃げて！」

――プロテクションスマッシュ――

石像がよろけたところで、前面にバリアを展開しての突進攻撃。その石像を後ろ向きに倒させる。起き上がるまでにあと4体・・・うう ん。僕たちが逃げ切れるだけの時間だけを稼げればいい。緊迫してるっていうのに・・・

「「きゃあきゃあ♪」」

楽しんでるとしか思えない悲鳴を上げて別の石像の攻撃を避け続けてる2人の姿に、ガクッと肩が落ちる。そんな余裕見せてると、絶対に捲れ上がった石畳に足を引っ掛け・・・「きゃっ！？」ほら、やっぱり転んだぁぁあああああああ！！

「セレネ！　エオス！」

「「ユーノ！！」」

4体の石像が2人に向かって剣を振り下ろそうとした。僕の身体能力じゃ間に合わない。こんなところで、こんな形で家族を失ってしまうのか・・・？

そんなの「嫌だ！」前面に魔法陣を展開。魔力の鎖、チェーンバインドを数本創り出して2人をこっちに引っ張ろうと思った。けど、石像の攻撃の方が一歩速い。ダメだ、どうやっても間に合わな・・・

――瞬神の風矢（ソニック・エア）――

それは一瞬だった。僕たちが入って来た壁を打ち貫いて飛んできた幾つもの風の矢。直撃を受けた石像が砂状になるまで削岩されて、「うわ、すご・・・」残った下半身が力なく崩れ落ちた。壁の向こう側から「見つけましたよ、ユーノ、セレネ、エオス」呆れと安堵が含まれた女性の声が聞こえてきた。

「「「フィヨルツェンさん・・・！」」」

1年くらい前からペリオさんの一群に（正確にはスクライア一族に）興味があるということから一緒に旅することになった女性で、名前はフィヨルツェンさん。デバイスも持たないでＳＳＳランクくらいの威力を持った魔法をバンバン使う、すごい人なんだ。打ち壊されて崩れた壁からフィヨルツェンさんが「無事に何よりです」って茶色い髪を靡かせて姿を見せて、赤い瞳で僕たちを順繰りに見てニコッて笑みを浮かべた。

「ありがとうございます、フィヨルツェンさん」

「「ありがとーございまーす♪」」

「うふふ。どういたしまして」

僕たちとフィヨルツェンさんはそのまま発掘を続けることになった。フィヨルツェンさんの魔法のおかげで瓦礫の撤去も発掘作業もサクサク進んだ。そして・・・・

「コレは・・・文献で読んだことがある・・・・！」

「何かあったのですか・・・？」

「「わぁ、綺麗な宝石・・・・！」」

地中から出て来たのは３個の青い宝石。確か名前は「ジュエルシード・・・」だったはず。ジュエルシード。過去に滅んだ超高度文明の遺産、ロストロギアの１つに数えられてる物だったはずだ。こればっかりは管理局に連絡した方がいいかも。ただ１個だけでも強大な魔力を秘めているって文献で読んだ。このジュエルシードは休眠状態だ。何かの拍子に覚醒してしまう前に全部発掘しないと。下手に暴走させたらどんな災厄が生まれるか判ったものじゃない。

「「ユーノ。コレ、貰っていいヤツ？」」

「ダメだ！！」

「「っ！！」」

ジュエルシードに手を伸ばそうとした２人を止める。文献によるとジュエルシードは全部で３１個。あと２８個が眠ってることになる。不満そうに僕を見てくる２人にジュエルシードの危険性を教えると、２人は大人しく言うことを聞いてくれた。

「フィヨルツェンさん。これから魔法は使わないでください。魔力に当てられて覚醒しちゃったら、さすがのフィヨルツェンさんでも

対応できないと思うので」

「ええ。判りました。セレネ、エオス。ユーノの言う通りにしましょうね」

「「は～い」」

こうして僕たちは力を合わせて（と言ってもほとんど僕とフィヨルツェンさんが働いた）全３１個のジュエルシードを発掘し終えた。遺跡から出て、まずペリオさんにジュエルシードの発見を報せた。ペリオさんや他のみんなもジュエルシードの事を知っていたから、一群総意でジュエルシードの輸送を管理局預けにすることが決まった。

すぐにフォスカムの陸士隊に連絡して、ジュエルシードを引き取ってもらった。陸士隊からのロストロギア発見の感謝を受けて、管理局の車を見送った僕たちはまた流浪の旅に出る準備を始める。

「・・・突然ですけど、わたくしはこれにてこの部族より失礼しますね」

本当に突然だったから「えっ！？」僕とセレネとエオスは驚いて、フィヨルツェンさんにバッと視線を移す。フィヨルツェンさんがこんな場合でもニコッて微笑みを浮かべるだけ。一群のみんなは引き止めようとしないで、すでにお別れの雰囲気を醸し出してる。ペリオさんも「そうかい。元気でな」って送り出すために、右手をフィヨルツェンさんに差し出した。

「え・・・！？」

「「お父さん！？」」

すごく驚いたけど、でも初めから判っていた事なんだ。いつかはお別れしないといけないって。けど、本当はもっと一緒に旅をしたかったです、フィヨルツェンさん。ペリオさんやみんなと握手を交わしているフィヨルツェンさんのところに歩み寄って、

「今日まで一緒に旅が出来て楽しかったです。ありがとう、フィヨルツェンさん」

「はい。わたくしも楽しかったですよ、ユーノ」

フィヨルツェンさんと握手をすると「ユーノまで！」完全に反対派なセレネとエオスが駆け寄って来た。２人の頭を優しく撫でながら「ごめんなさいね」そう謝るフィヨルツェンさん。頭の撫で方がすごい上手なんだよね、フィヨルツェンさん。ふにゃってなる２人。でもすぐに「違くて！」払いのける。僕はそんな２人に「引き止めるのはご法度。別れの時は、笑顔で見送るのがスクライアだよ」そう言って諭す。

「「判ってるけど！！」」

「セレネ、エオス。笑顔ですよ。お別れは笑顔で。ニコ　」

「「・・・・フィヨルツェンさん。また逢える？」」

「ええ。いつかまた、わたくしと遭えるでしょう」

なんだろ。最後に見せた微笑みが、どうしても邪なものに見えた気がする。そんなわけがないのに。ほら。とっても綺麗な微笑みだ。

1年近く一緒に旅したフィヨルツェンさんの背中が見えなくなるまで見送った後、僕たちもまた次の遺跡に向かうことにした。

。―。―。―。―。―。

世界と世界の狭間、次元空間。今その次元空間を往くのは次元間を航行できる船ではない。一見すれば切り立つ岩山の集合体。その名を時の庭園。管理局や魔法式の一種、ミッドチルダ式の発祥の地である第一世界ミッドチルダの魔法技術によって造り出された、次元間航行も可能とする移動庭園。

今現在、その時の庭園に住まう人間は母娘の2人。そしてもう1人、いや1匹と称した方がいいかも知れない。居住区近くに広がる、優しい風の吹く草原。そこには少女が2人。長く綺麗な金色の髪は黒色のリボンでツインテール、真紅の瞳、着ている衣装はバリアジャケットとマントという出で立ちの幼い少女と、獣の耳と尻尾を有するスタイル抜群な少女が居た。その少女たちは今、魔法の力によって空を翔けていた。

「行くよアルフ！　バルディッシュ！」

≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ．　Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ，Ｇｅｔ　ｓｅｔ≫

金髪の少女が手にする、全身が黒く金属質な戦斧――"バルディッシュ"より男性の声が発せられる。アルフと呼ばれた狼耳の少女が「いつでもいいよ、フェイト！」と応じ、フェイトという名の少女に向かって片手を突き出した。
ミッドチルダ式の魔法を表す、円形の魔法陣状のシールドがオレンジ色に光り輝きながら展開される。それと同時。フェイトの「ファイア！」という号令の下、アルフに向けられていた"バルディッシュ"の先端から、金色に光り輝く電撃の魔力弾フォトン・ランサーがいくつも発射された。アルフのシールドに着弾するフェイトの魔力弾は、そのすべてを防がれていた。

「精が出るわね」

フェイトとアルフにそう声を掛ける1人の女性。フェイトと同じ金色の髪はセミロングで、テールアップの髪型にセットされている。空と同じ色スカイブルーの瞳は空に居る2人へと注がれている。黒のブラウスに赤色のネクタイ、白のスーツにスラックス、ロングコートと言った出で立ち。
その女性を見たアルフの表情は少々不機嫌なものへと様変わり。そのアルフの分までフェイトは努めて笑顔になろうとするが、出来上がるのは微笑。2人はゆっくりと降下して、その女性の居る草原へと降り立った。

†††Ｓｉｄｅ？？？†††

アルフと魔法の練習をしていると、母さんのお客様、グランフェリ

アが声を掛けてきた。グランフェリアがこの時の庭園に訪れるようになったのは1年くらい前から。どういった用件で母さんに会いに来るのかは知らない。私はそんなグランフェリアのことがそれほど苦手じゃないけど、

「今あたしとフェイトは大事な魔法の練習中なんだ。用が無いんなら声を掛けてほしくないね」

「ア、アルフ、ダメだよ、そんな失礼なこと言っちゃ・・・！」

アルフはグランフェリアの事が好きじゃないみたい。どうしてか訊いても、

――アイツは何かヤバい気がするんだよ――

頑なにそう言うだけ。アルフの事は信じたいけど、グランフェリアはそんなに危ない人でも悪い人とも思えない。だって「ふふ。気にしなくていいわ、フェイト」そう言って、嫌な顔一つしないで許してくれるし、判り辛いけど微かな笑みがとても優しい気がするから。

「母さんに用事？」

「ええ。とは言っても、もう済んだのだけど」

「ふん。だったら早く帰ったらいいじゃないか」

「もうっ、アルフ！」

心の広いグランフェリアだけど、それでもいつかアルフのその失礼な態度に怒らないか、いつもハラハラする。グランフェリアは苦笑しながら「最後に挨拶くらいはと思ったのよ」って私とアルフの頭を撫でた。アルフと2人して「最後？」って訊き返す。

「ええ。あなたの母親、プレシア女史とは情報のやり取りをしていたのだけれど。彼女が求めていた情報をようやく手に入れたのよ。私の仕事はこれで終りになったの」

「グランフェリアは情報屋さん・・・？」

「それだけとは限らないけど」

でも、そっか。もうグランフェリアとは会えないんだ。だったら「今から時間、いい？」グランフェリアの都合を訊いてみる。私のその質問で、グランフェリアは私が何を求めているのか判ってくれたみたい。

「・・・お別れの前に、最後にもう一度だけやる？　模擬戦という戦闘」

「お願いしますっ」

「・・・・あたしのご主人様のフェイトがそう言うなら付き合うしかないねえ・・・」

これまでに何度かグランフェリアと模擬戦をした事がある。まだ子供の私は成長途中だから、自分の実力に対して過大評価はしてない。過大評価はしてないけど、母さんの使い魔で、私とアルフの魔法の先生だったリニスから褒められた事から少しは強いかなって思ってた。

でも、グランフェリアは圧倒的だった。手加減されていても一切の魔法が当たらない。迎撃でも防御でもない。単純に避けられる。グランフェリアは、機動力がすごかった。

「さて。始めましょうか」

「お願いします・・・！」

「ま、これが最後ってんなら。一発くらいは殴っておきたいね」

「ふふ。掛かっていらっしゃい」

グランフェリアの手から琥珀色の光が生まれたと思ったら、晴れた時には2mくらいの黄金の槍が1本あった。魔導師たちの使う杖――デバイスとは違う、完全な武器。魔力を感じるから、ロストロギアに関係してるのかもしれない。

「バルディッシュ・・・サイズフォーム。アルフ、連携で行くよ」

「あいよ！」

2人して身構えて、グランフェリアへと突っ込んだ。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒？？？？†††

「ほい、これでトドメ！」

「ぎゃぁぁぁ！」

わたしが相手をしていた最後の敵魔導師をサクッと斬り伏せる。ご先祖さまから代々受け継いできた長刀型のアームドデバイス、〝キルシュブリューテ〟の峰側の刀身の付け根にあるコッキングカバーが、刀身に沿って上にスライド。装弾数５発の回転式シリンダーが姿を現す。使用した５発を排莢。腰のポシェットからカートリッジを取り出して装弾。

まったく。魔法を犯罪に使うなんて。魔法という力は、犯罪じゃなくて平和の為に使うものだ。そういった魔法を使った犯罪者――違法魔導師（だけとは限らないけど）を取り締まるのも大事な仕事な時空管理・管理外世界の秩序を守る次元航行部隊。

「クロノ～♪　そっち終わった～？」

「ああ、もちろんだ」

同僚の男の子、クロノがやれやれと言った風に応えてくれた。わたしとクロノはアースラっていう次元航行艦に所属する魔導師だ。ま、わたしの場合は魔導師じゃなくて騎士って呼ぶのが普通だけどね。

「ご助力、ありがとうございましたっ。クロノ・ハラオウン執務官。イリス・フライハイト執務官補」

今わたし達の居る世界、第１２管理世界フェティギアの地上部隊――またを陸士部隊の隊員たちに感謝された。本当なら今回の一件にわたし達アースラチームが参加する予定はなかったけど、結構ランクの高い違法魔導師たちが徒党を組んで犯罪を起こしたことで、たまたまフェティギアに訪れていたわたし達が助力を買って出た。

『クロノ、イリス』

「「リンディ艦長！」」

違法魔導師たちを車に乗せて連行する陸士部隊を見送って、わたしだけ騎士甲冑を管理局の制服に戻してからすぐ。アースラの艦長、リンディ・ハラオウンさんからモニター越しの通信が来た。ハラオウン性から判ると思うけど、リンディ艦長とクロノは実の親子。クロノは公私をきちんと分けてるから、仕事中はちゃんと艦長って呼ぶ。

『お疲れ様、２人とも。アースラに戻ったらゆっくり休んでちょうだいね』

『クロノ君、イリスちゃん。すぐに転送するから、そこから動かないでね』

「ああ、頼むよ」

「うん、お願いねエイミィ」

モニターがもう1つ。映っているのはエイミィ・リミエッタ。アースラの通信主任で、わたしと同じ執務官のクロノの補佐を務めてる。わたしは8歳で、エイミィは16歳。でも年齢差や階級とか関係なく、エイミィとは友達って感じ。アースラに転送されて、まずは「ただ今戻りました」アースラの長、リンディ艦長に報告。

「お帰りなさい。本局に着くまではゆっくりしていて」

そう労ってくれるけど、部屋に戻ったところで何もないしする事もない。だからわたしは普段ブリッジに居ることにしてる。定位置はほとんど「エイミィ〜」の居る場所。クロノは大体リンディ艦長の座る艦長席の傍に控えてる。

以前、エイミィと一緒に、お母さんの傍だと安心できるんだね、ってからかうと、結構マジで怒られた。それからはもう母子関連のからかいネタは禁止にした。次やったら、リンディ艦長が愛飲する妙な飲み物シリーズを飲まされる。まだ生きていたいし、変な病気にかかりたくもないしさ。

「「「お帰り、イリスちゃん」」」

「ただいま〜、エイミィ。アレックスとランディも」

片手を上げてにこやかに迎えてくれたブリッジオペレーターの2人にも挨拶を返す。エイミィの座る椅子の背もたれにもたれ掛ると「

はぁ、やっぱりこの位置が落ち着く～」一気に力が抜ける。

「あはは。イリスちゃんがタレてる♪　タレイリスちゃんだ♪」

「背もたれがちょうどいい高さにあるからさ～」

顎を乗せてふにゃ～としていると、胸ポケットに入れていた通信端末から、

≪メールで～す♪　メールだよ～♪　メールだっつってんだろ～♪≫

メールが届いたことを報せる音声が。ちなみに3つとも友達のものだ。この着信音を聞いたエイミィ達が失笑した。聞き慣れてるはずなのに、やっぱり笑っちゃうみたい。エイミィが「いつ聞いても最後のヤツ可笑しいよね～」って笑い続けていると、アレックスが「イリスちゃん。その声、誰の？」声の主のことを聞いてきた。

「わたしと同じ聖王教会に所属していて、そして管理局にも所属してる騎士・・・」

これだけのヒントで結構絞れるんじゃないかなぁ～。管理局内にも騎士が何人か所属してるけど、聖王教会と兼任の騎士はほとんど居ない。一番の有名どころでカリム・グラシア一佐。けどカリムじゃない。一応頼んでみたんだけど。

――メールです。うふふ♪――

まぁこんな感じだから、カリムからの連絡限定に残してあるだけ。アレックス達が結構本気で考え込み始めたのを横目に、メールの受信ページを開く。文面を呼んで、「はぁ・・・」大きく溜息を吐く。ページを閉じて、端末をまた胸ポケットにしまう。せっかくのまったりが一気に冷める。小首を傾げるエイミィに「どうしたの？」って訊かれた。

「シャッハから。ファーザー・リヒャルト――父様から頼まれた伝言だって。一度、帰って来い・・・。って、わたしの教会の友達関係に言いまくってるらしいんだけど」

「あちゃあ。でも一度、本局に戻ってからじゃないとダメだから・・・」

「うん、判ってる。そこんところはちゃんと説明しとく」

落ち着いて返信のやり取りをしたいから、わたし用に用意されてる自室に向かう。通路を歩く中でも溜息が止まらない。父様はわたしの管理局入りには大反対。聖王教会の現教皇のお婆様や枢機卿の母様からは反対されてないから、こうして管理局で働ける。

（ま、いつかはわたしも・・・・）

その為に、父様はわたしをすぐにでも連れ戻したいってわけなんだろうな～。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒？？？？†††

学校からの帰り。アリサちゃんとすずかちゃんと一緒に、私のお父さんとお母さんが経営してる喫茶店、翠屋に来た。アリサちゃんとすずかちゃんには塾や習い事があるから毎日一緒に帰れなかったり遊べなかったりするけど、塾や習い事が無い時は今日みたいに誰かのお家に寄ることがある。で、今日は翠屋。入口の扉を開けると、お客さんのお会計をしていたお父さんが私たちに気付いて、「いらっしゃい」って笑ってくれた。

「美味しい美味しい美味しいっ♪　何コレ、すっごい美味しいっ」

真っ先に聞こえてきたのは、そんな幸せいっぱいな声。お客さんが座ってる席をチラッと見る。そのお客さんが食べてるケーキがお母さんの作ったものだって思うと、娘としてはすごく嬉しいわけで。そのお客さんの第一印象は猫さん。フォークを加えているから口の形が猫さんみたいで、目の形もどこか猫さんのよう。

「あの女の人。すごい数のケーキ食べてる」

「でもとても幸せそうだよ」

「だからって、いくらなんでも食べ過ぎじゃない？」

すずかちゃんの言う通りすごく幸せそうな顔してる。嬉しさで、こっちも幸せになる。私たちがジッとそのお客さんを見ていたから、「ん？」そのお客さんと目が合っちゃった。理由がなんでもお客さんをジッと見るのは失礼だったよね。謝ろうって思ったところで、

そのお客さんが笑顔で手招きしてきた。

「なのはちゃん、アリサちゃん・・・」

「どうしよう・・・？」

困った私とすずかちゃんは、いつも堂々としてるアリサちゃんに小声で尋ねる。するとアリサちゃんは「行くわよ。一応、謝らないといけないし」そう言って、先頭を歩いて行く。その席に向かってる最中、そのお客さんが「マスターさん。この子たちにも何かケーキとお茶を」ってお父さんに注文した。

「「「「え・・・！？」」」」

「もちろん僕の奢りだよ。どうだろ？　ちょっとお話ししないかな・・・？」

「あの、お客さま。この子たちは、私の娘とそのお友達なのですが・・・。どういった理由で、この子たちを・・・？」

お父さんが私たちとお客さんの間に割って入って来た。

「そうだったんだ。僕、レーゼフェア・ブリュンヒルデ。よろしく♪」

お客さんがそう名乗って、手を付けてないチーズケーキ３皿を差し出してきた。悪い人じゃないって思う。別にケーキに釣られたわけ

じゃないよ？　本当だよ？
私たちはレーゼフェアさんの席に同席することになった。それから少しお話したんだけど、アリサちゃんとすずかちゃんも、レーゼフェアさんを警戒しないでもいいって思ったみたい。お父さんはレーゼフェアさんの放つほんわか雰囲気から、危険はないって判断したみたいでお仕事に戻って行った。

「そんじゃ改めて。僕、レーゼフェア・ブリュンヒルデね」

「高町なのはです」

「月村すずかです」

「アリサ・バニングスよ」

レーゼフェアさんは名前からして判る通り外国の人で、日本には"ある探し物"をするために来たそう。その探し物が何なのかは教えてもらえなかったけど、とっても大事なものだというのが話を聴いていて判った。それから色んな話をした後、「ふぅ、僕はもう満足なのだ」レーゼフェアさんは最終的に４０皿のケーキとパフェ４杯を食べた。見ていたこっちはちょっと辛いものが・・・。

「楽しい時間ありがと、なのは、アリサ、すずか」

「私たちもいろんなお話が聞けて楽しかったです！」

「ケーキ、ごちそうさまでした！」

「また来てくださいね！」

レーゼフェアさんに奢ってもらったお礼や、また翠屋に来てくれることを願ってそう言うと、レーゼフェアさんは「ん。近くに寄ったら来るよ」ニコッて笑ってくれた。で、お会計になったんだけど。

「た、足りない・・・！」レーゼフェアさんの口から、レジ前で絶対に出ちゃいけない言葉が・・・。レジで待ってたお父さんが固まる。一息吐いてた私たちも固まる。お財布片手のレーゼフェアさんも固まる。

「「「「・・・・」」」」

「えっと・・・」

「あらあら、それは大変ね～」

「お母さん」「桃子さん」

厨房の方から出て来たのは、翠屋のパティシエール（男の人の場合はパティシエ）で、私のお母さん。お母さんは、しまったって顔してるレーゼフェアさんを安心させるためか笑顔で「お知り合いに連絡してはどうですか？」って提案した。それとも「無休でアルバイトとか」私はボソッとそう呟いてみる。今回の場合、レーゼフェアさんに与えられる選択肢は３つになる。

１：知り合いを呼んで肩代わりしてもらう。

２：無給のアルバイト。
３：アリサちゃんかすずかちゃんに借金。

もし３を私たちが提案したら、確実にお父さんとお母さんに怒られる。レーゼフェアさんだってきっとそんなことを子供に言われたら、怒ることはなくてもショックだと思う。２だけど、レーゼフェアさんが店員をしても問題は・・・あ、お客さんの注文したケーキとか運ぶ途中でつまみ食いしちゃうかも。うん。かなり失礼な考えだけど。なんかレーゼフェアさんがそうしちゃう画が想像できちゃう。

「・・・・あ、今から知り合いが来ることになったから、ソイツに払わせるよ」

え？　なんで判ったんだろ。今の言い方だと、連絡した後みたいになる。でもレーゼフェアさんがやったことと言えば、ちょっとの間黙っただけ。だから私たちは「え・・・？」首を傾げることに。そんな不思議が気になった私がレーゼフェアさんに声を掛けようとした時、

「おい、レーゼフェア。俺を財布係にするとはいい度胸だよな」

「お、来た来た。シュヴァリエル。お金持ってきてくれた？」

入口の方を見ると、綺麗な青い髪をツンツン立てた男の人、シュヴァリエルさん？が「ウチの連れが迷惑をかけたようで」ってレジのところにまで来て支払いの値段を見た瞬間、レーゼフェアさんの頭に拳骨を一発。

「いっっった～～～～」

「馬鹿かお前。２万とか食い過ぎだよ」

支払いを済ませたシュヴァリエルさんが「ほら、用事は済んだから帰るぞ」ってレーゼフェアさんの襟首を掴んで引っ張って行った。その途中、「ごちそうさまでした～♪」レーゼフェアさんは笑顔で手を振ってくれたから、苦笑いで手を振り返す。

「なんて言うか、嵐みたいな人だったわねレーゼフェアって」

「あはは。でも、どうしてシュヴァリエルさんが来ることが判ったんだろ・・・？」

「うん。それに、シュヴァリエルさんが翠屋に着く時間も早かったね・・・」

今日は本当に不思議な体験をしたかも。アリサちゃんとすずかちゃんが帰った後も、どうしてかレーゼフェアさんの事ばかり考えちゃうよ。

Ｅｐｉｃｌ－Ｂたとえ再び君たちに逢えるのだとしても～Ｗｈｅｅｌ　ｏｆ　ＦｏｒｔｕｎＥ～

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

「ん・・・ここは・・・？」

長い長い夢を見ていたような気がする。深い微睡から覚醒した私が最初に目にしたのは、今居る場所の景色。全方位が薄い灰色の世界。空も地も地平線すらない。ここは「位相空間・・・か」で間違いない。あらゆる時間と空間から隔絶された次元の狭間、位相空間。私たち"界律の守護神テスタメント"や一部の"霊長の審判者ユースティティア"のみが入れる空間だ。ということは・・・「マリア・・・居るのか・・・？」どこを見ずともマリアに語りかけてみる。

「はい。ルシリオン様。マリアはここに」

前方数ｍ先、揺らめく陽炎の如く音も無く姿を現した、５ｔｈ・テスタメント・マリア。桃色の神父服（キャソック）にフード付きの外套（マント）は、まさしく"テスタメント"の聖衣。金糸のような綺麗な髪が、風もない位相空間内でゆらゆらと漂っている。アメジストのような美しい紫色の瞳は真っ直ぐ私を見ていた。

「また助けてくれたんだな、ありがとう」

「いいえ。間に合ってよかったです。あと少し遅れていれば、ルシ

リオン様は・・・死んでいました」

悲しそうな色を湛える瞳を伏せ、マリアはスッと私のところまで寄って来たんだが・・・違和感を覚えた。先程まではマリアと距離があったから何も思わなかったが、彼女との距離が近づいて初めて抱ける違和感。

何と言うか「マリア。君、身長伸びたか・・・？」とポツリと漏らす。マリアの身長は確か１５３ｃｍ程だったはずだ。それなのに、どうして私はマリアを見上げてるんだ？　どうしてマリアは私を見下ろすんだ？　自分の体を足元から手までジッと見てみる。

「ち、縮んでいる・・・のか・・・？」

思い当たるのは、私の体が縮んでいるというもの。おそらく１３０ｃｍ半ば辺りにまで。マリアを見ると、無言で目を逸らされた。そうか、君の仕業か。とは言え、私の体を縮めるに至った理由があるに違いないから責めることはない。

こうして再び意識が戻ったことだけで十分だ。そしてすぐに現状を把握するために、意識が途切れる前のことを思い出す。息子バンヘルドとの戦闘。私を消し飛ばしたフィヨルツェン、シュリエルを消滅させたレーゼフェア。

「あれからどれだけ経った！？　ベルカは！？　アギトやアイリはどうなった！？」

ハッとして、マリアの両肩に手を置いて揺さぶる。

「申し訳ありません。アギトさんとアイリさんの行方は追跡できませんでした」

マリアが頭を下げて謝って来た。これもまたマリアを責めることが出来ない。マリアを頼りにしないのが普通なのだから。

「ベルカについてでですが、彼の世界はすでに滅んでいます」

「そうか・・・。という事は、エリーゼ達の事も・・・？」

「はい。行方は知れません・・・あの、ルシリオン様のお体の事について説明させていただきますが・・・」

「あ、ああ。よろしく頼む」

マリアから説明された、今の私の現状。神意の玉座に座す、オリジナルのルシリオン（わたし）の精神の限界についてはもう理解している。今の状況で消滅――死ぬことで召喚が解かれ、そこからの再召喚には耐えらえない程にボロボロだ。つまり私は絶対に死なないようにしなければならない。だが、今回はその死の一歩手前だったということだ。

聴けば私の体は頭部と胸部以外が消し飛んでいたそうだ。派手に潰してくれたものだよフィヨルツェン。そこまで傷ついた私を死なずに再生するにはどうすればいいか。その答えこそがマリアの選択したもので、その結果が今の私の幼児化だ。

「――ルシリオン様を現世に留まらせるためには、ルシリオン様の

体を構成している魔力の消費を抑えた上でお体を再生する必要があったのです。ですが元の姿に戻すとなるとその消費量は膨大で、オリジナルのルシリオン様の負担が大きいですから・・・」

「子供の体にすることで再生に必要な魔力の消費を抑えた、と」

「はい。私の干渉能力でもそれが限界でした。申し訳――」

「謝らなくていいぞ、マリア。こうして生かしてくれただけで最大級の感謝だよ。しかしこの体でエグリゴリと戦うとなると辛いな。それに、魔力の使用にも限界があるだろうし」

ざっと私に許された戦闘能力を確認する。魔力の最大出力がＡＡＡ－。泣きたくなった。これでは"堕天使エグリゴリ"に掠り傷１つとして付けられない。遭遇したら最後、確実にやられる。

「なあ、マリア」

「何でしょう？　ルシリオン様」

「どうやったら元の姿に戻れるだろうか・・・？」

「気長に成長するのを待つしかないかと。今のルシリオン様は普通の人と変わらないので」

「気長にって・・・」

その場に崩れ落ち、四つん這いになってしまう。そんなに待っていられない。が、"エグリゴリ"救済を急いてミスして散るのは御免だ。ここは成長するのを待つしかない・・・のか？　本当に？　思考をフルに回転させて、この姿でも十二分に戦える術を捻りだそうとするが・・・。

（ダメだ・・・。どうやってもあの子たちの魔道には届かない・・・！）

歯を噛みしめ、両手を握り拳にして、己の無力さと不甲斐無さに叫びたくなるのを耐える。そんな時、マリアが片膝をつき、私の目の前に右手を差し出してきた。顔を上げ、マリアの手、そして顔へと視線を移していく。彼女は真っ直ぐ私の目を見詰め、

「成長を促進することは出来ませんが、ただ1つ、そのお体のままでもエグリゴリと戦える術があります」

闇に捕らわれそうになっていた私に、一筋の光を差し込んできてくれた。

「それは一体・・・！？」

「ルシリオン様の魔術には魔力を吸収するものがありましたよね」

「イドゥンの事か？　だがアレだけではどうすることも出来ないぞ。エグリゴリの魔道を吸収したくても、あの子たちの魔道には何かしらの属性が付加されている。残念ながらイドゥンは属性付加された

魔力は吸収できない。いずれは出来るように改良するつもりだが」

「いいえ。エグリゴリの魔術ではなく、また別の・・・そうですね、魔力の宿った物品などから、などはどうですか？」

魔力の宿った物品から女神の救済（コード・イドゥン）で魔力を吸収し、魔力炉（システム）を通して神秘を付加し、それを戦闘に利用する。確かにこれならこの体でも何とかなるかもしれない。ＡＡＡ－は何の補助もない状態、この身一つでひねり出せることが出来る目安だ。他から魔力を持ってくることが出来れば・・・。セフィロトの樹の儀式を思い出す。自身の魔力を結晶化し、それを順々に消費していく。今回もそれに似た事をすれば。

「ん？・・・魔力の結晶・・・？」

「どうかなさいましたか？」

「いや・・・似たような物を知っているような・・・あっ！」

脳裏に浮かぶ、懐かしき単語とその姿。アレを利用すれば、１機くらいは救えそうだ。名前はそう、「ジュエルシード・・・！」私が再び幸せを手にするきっかけになったフェイトと出逢うことが出来た要因。フェイトやアルフと出逢え、なのは達と出逢えたからこそ、私や先代３ｒｄ・テスタメントのシャルは人間性を取り戻せたんだ。だが、「マリア。今の年号、判るか？」時すでに遅ければ没。早すぎてももちろん没。

「年号は新暦となり、現在は次元世界標準年月日、新暦６５年４月上旬です」

「新暦６５年の４月・・・！」

ジュエルシード事件が起きる月だ。ジュエルシード争奪戦に参加するなら絶好の機会。しかしそれは、フェイトとアルフを敵に回すと言う事になる。

（私に出来るのか・・・？）

いや、出来る。私とフェイトが好き合った次元世界と、いま私が居るこの次元世界でのフェイトとは別の存在だ。だからきっと大丈夫。心が痛むだろうが、今回ばかりは悠長に構えていられない。

「マリア」

「はい。ルシリオン様」

「私はこれから地球は日本、海鳴市へ向かう。転送のサポート、任せられるか？」

「もちろんです。と言いますか、初めから私もそのつもりでしたから」

「なに・・・？」

マリアも対"エグリゴリ"戦用の魔力供給源としてジュエルシードに目を付けていたのだという。私の体を子供の体型で再生させ終えたのは、今から１５０年以上も前。耳を疑ったが、"エグリゴリ"が動きを見せなかったことで私を覚醒させずに封印したらしい。しかし私が起きていれば、その１５０年でアジトくらいは探すことも出来ただろうに。最初はそう思ったがマリアに頼らないとすれば、捜索にはもちろん魔力が必要になってしまう。今の状況で魔力必須の捜索行動に入れば、おそらく自滅してしまうだろうな。マリアはそれを危惧して、ジュエルシード事件が起きるまで私を封印していた、と。

「そうか。何から何まで済まないな」

「ルシリオン様の解放は、すなわち私の解放でもありますから。あ、ルシリオン様」

「ん？」

「今回は誰を攻略します？」

「んん？」

マリアがおかしな事を訊いてきた。誰を攻略する？　あ、そういうことか。私は「とりあえずシュリエルの敵討ちだ」と答えた。対闇黒系魔術師用"戦天使ヴァルキリー"・闇絶（あんぜつ）の拳、レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。この世界における私の家族を討った罪は、さすがに償ってもらわなければな。

「そうではなくてですね。前回の契約では、フェイト・テスタロッサさんと恋仲になりましたよね」

「・・・・あのなマリア」

攻略というのが何に対してなのか判り、大きく溜息を吐く。マリアは私が呆れているのが気付かないのかペラペラ喋りだした。

「高町なのはさんにしますか？　それとも、もう一度フェイトさんを攻略します？　あ、魔法関係者ではありませんけど、月村すずかさんやアリサ・バニングスさんも出来るかもしれませんね」

「待て。待て待て」

「そ、それとも・・・ハ、ハハ・・ハハハ」

「何が可笑しい・・・？」

「ハーレ、ハーレ、ハーレ・・・！」

「ハーレ・・・晴れ？」

「ハーレーダビッドソン！」

「よくその名前を知っているな、マリア」

マリアにバイクの知識（名前だけだが）があったなんて驚きだ。マリアは顔を赤くして「そうではなくて、あれですよ！」と私に顔を近づけてきた。

「ハーレムと言うヤツですよっ！」

「どこでそんな単語を覚えて来たんだ・・・？」

ガックリと肩を落とす。そういう発想をするのはシャルくらいだと思ったんだが。とにかく「馬鹿を言うな。そんな暇はない」と、少し怒気を含ませて言う。先の次元世界での契約では確かにフェイトと恋をした。

しかし今回は、恋愛をしても意味がない。どれだけ相手を想っても叶わない。今まで以上に叶わない。私には後が無いからだ。対人契約はもう出来ない。だから恋愛をしても・・・相手を苦しませるだけだ。

「ほら、早く転送準備だ。ジュエルシードを集めなければならないからな。どこにジュエルシードが眠っていたのかも思い出さないといけないし・・・」

フェイトやアルフ、なのはやシャル達との会話などは今でも鮮明に思い出せるが、ジュエルシードがどこに在るのかはあまり覚えていない。場所を思い出し、なおかつ探索・発見し、そして競争相手のなのはとユーノ、フェイトとアルフを退けなければならない。

「・・・・判りました。それでは出口を第９７管理外世界・地球、

日本は海鳴市にします」

「マリア。ありがとう」

別れる前に礼を言っておく。マリアが居てくれるからこそ、私はこの世界に訪れることが出来、"エグリゴリ"に負けたとしてもこうして生きていることが出来ている。マリアは「御武運を」と凛とした表情で送り出してくれた。

「・・・・ああ、この潮の香り・・・懐かしいな」

位相空間より抜け、私が降り立った街はとても懐かしき海鳴市。海鳴市は海に隣接する街だ。あまりにも懐かしい空気に目の奥がジーンと熱くなる。耐えきれずに流れた涙を袖で拭い、目前に広がる海を背に歩き出す。ここは海鳴臨海公園だ。フェイトとアルフと出逢った、思い出深い場所。

「・・・っと、服を変えないと怪しまれるな」

いま私が着ているのはアースガルドの軍服であり、魔術戦用の衣服・戦闘甲冑。黒いハイネックの長衣にインバネスコートにズボンに編上げのブーツ。サイズは体に合わせて子供用。とは言え、少々この格好は怪しいか・・・？

「我が手に携えしは確かなる幻想」

周囲に人が居ないことを確認し、創生結界へアクセスするための呪

文を詠唱する。アクセスしたのは複製、結界内に取り込んだ物を貯蔵する"神々の宝庫ブレイザブリク"。子供っぽい服を取り出そうとするが、子供らしさなんて"テスタメント"になる以前から持ち合わせていないから、いつも服選びで苦労する。
ふと脳裏を過ぎるのは、子供は風の子、という言葉。薄着にすれば子供っぽいか・・・？　散々悩んだ結果、選択したのは黒の半袖のTシャツで、背面には私を象徴する十字架のイラスト。それに灰色のパーカ。背にはTシャツと同じ十字架のイラストが描かれている。下はミリタリーハーフパンツ。裾が短いから子供っぽいだろう・・・違うか？

「とりあえずはこれでいいか。さて、と。ジュエルシードはまだばら撒かれていないのか・・・？」

魔力探査を海鳴臨海公園全域に行う。反応はなし。どうやらまだのようだ。では次。衣食住問題。サクサク見つけることが出来ればいいが、そうでないならホームレス生活。衣は魔道でどうとでもなるか。住も大して問題じゃないか。大戦時は野宿とか当たり前だったし、ほとんどの契約時もまともな生活などしなかったし。食は・・・あ、これも"ブレイザブリク"の保管庫から調達すればいいのか。

「・・・って、馬鹿か。ただでさえ少なくなった魔力をいたずらに消費してどうする」

あれほど魔力激減に悩んでいたのに、海鳴市に降り立った瞬間に忘れるとか。どれだけ浮かれているんだ私は。食は山菜取りや釣りで賄えばいい。自給自足のサバイバル生活、上等だ。衣だけは魔力を

使って、"ブレイザブリク"から調達。住は野宿で十分！

「そうと決まれば――ぐへっ？」

サバイバル上等と決意し、いざ出発しようとしたところで、何かが落ちてきたのか頭頂部に途轍もない衝撃が。子供の体の所為で踏ん張りが利かずにそのまま転倒。「痛たた・・・」頭と首を押さえながら体を起こす。

「ご、ごめんなさいルシリオン様！」

「マ、マリア・・・？」

空より聞こえてきたマリアの謝罪。ふと目が行くのは舗装された石畳の上に転がっている青色のボストンバッグ。どうやらアレが私の頭を襲撃した犯人のようだ。首をポキポキ鳴らしながら近づく。マリアが「その中に、これからの生活に必要な物を容れておきました」と教えてくれた。おお、至れり尽くせり。土下座で感謝してもしきれないぞ、マリア。

「ありがとう。どれどれ。中は一体何が入っているんだ？」

中身を確認してみると、「あれ？　これだけか・・・？」入っていたのは財布と預金通帳と身分証明書となりそうなカードが数枚収められたホルダー、そして薄いカードで、コレは次元世界での通信端末だ。馬鹿な。私の頭にヒットした時の衝撃力からしてもっと重い物が入っていなければおかしい。ボストンバッグを逆さまにして振

るうが、それ以外は何もない。

「まぁ、いいか。財布の中身は・・・５万円。この姿で持つには結構な金額だな。それに通帳、か。１０万もあればそれなりに・・・・ぶふっ！？　に、に、２億円だと！？」

正確には２億３千９百万。そのふざけた金額に目が飛び出そうになった。高給取りか宝くじを当てないと滅多に見られない数字が、私に与えられた通帳内に記されていた。すぐに「マリアっ、こんな金額、どこで手に入れたっ！？」２億円の出所を問い質す。姿を見せないためにどんな顔をしているのか判らないが、無言が続くとなると何か後ろ暗い手段で手に入れたに違いないと思えてしまう。

「なあ、マリア。まさか干渉能力で創り出した偽物・・・だったりするか？」

干渉能力で創ったならもう本物と言ってもいい。偽造防止の為の技術――透かしやインク等を完璧に模すことが出来るからだ。だから使っても１００％バレることはない。が、私に罪悪感をもたらし、最悪精神崩壊の結末に至らせる。そんな物を私が使えるわけもなく。だから「すまない。この金は使えない」返そうと思って通帳を空に掲げる。

「そうじゃないんです！　えっとですね・・・それ、何と言いますか・・・」

「歯切れが悪いな。偽物じゃないんなら怒らないから、どうやって

手に入れたか言ってみろ」

優しく語りかけると、マリアは意を決したように言葉を紡ぎだす。

「この１５０年。私が何もせずにルシリオン様の可愛らしい寝顔を見ていただけと思いますか？」

「・・・・。（ま、男が寝顔を見られたからと言って怒らないが・・）で、何をしていたんだ？」

「・・・・カ・・・でもう・・・ました・・・」

「なに？　聞き取れないんだが」

「・・・ジノで・・・儲け・・・した・・・」

「頼む。ハッキリ言ってくれ」

「っ・・・。本当に怒りませんか・・・？」

「？？・・・ああ、怒らないから」

「カジノで儲けちゃいましたっ！　しかも干渉能力を使ってイカサマをしましたっ！」

「・・・・・楽しかったか？」

「はいっ、すごく楽しかったですぅ～♪　何せ向こうから先にイカサマを仕掛けてきましたからねっ。だから干渉能力を使ってイカサマ返しで反撃ッ☆　相手は混乱の果てに涙目！　ザマァ！」

「馬ぁ～～鹿も～～～～～～～ん！！！！！」

「怒らないって言ったではないですか～～～～！！」

２億円のあまりの真実に、周囲を気にすることなく怒鳴った。まるでシャルを相手にしている気分だ。私はマリアを巻き込まないと思っていた。だからここまで尽くしてくれる彼女には感謝しかない、と。だがもう敢えて言わせてもらおう。「１５０年の間にエグリゴリのアジトを捜しておけッ！」と。

「ひゃう、ごめんなさい！・・・・じゃ、じゃあ・・・そのお金は要りませんか？」

「いや、要るし使う」

偽物じゃないなら使わせてもらう。稼ぎ方には少々問題があるが、使えない金じゃないならありがたく頂く。マリアが「ええ～～～」不満そうだが、私は無視する。しかし、２億円かぁ～。凄まじい金額だが、使い方次第では一瞬で消える。使い道はしっかり考えておかないとな。

「じゃあ、私は行くよ。ありがとうな、マリア」

ボストンバッグを持ち、臨海公園の出口を目指して歩き出す。空から「どうかご自分の御心に正直に」と声を掛けられた。正直に、か。右手を小さく上げることで応じ、無言のまま臨海公園から出た。まず最初に向かうのはコンビニ。正確な日付を確認するためにだ。しかし「道行く人全員に見られているな・・・」外国人はやはり珍しいんだろうな。先の契約の時でもよく見られていた。コンビニに入った時も、店員の挨拶も「いらっしゃいま・・・」で途切れた。

（まったく。私は女ではなく男だと言うに・・・）

私を見る人は必ず口々に「可愛い」と言ってくるからウンザリする。店内の天井角に設けられている鏡を見る。判っていたことだが、やはり外見は少女だ。仕方ないよな、この外見じゃ。レジ脇の新聞コーナーで一部取り、日にちを確認する。

「４月１０日、か」

確かユーノがジュエルシードを追って海鳴市に訪れたのが１９日。その日、なのはの運命が決定づけられた。さすがにあの娘の運命は歪められないな。最初の数個は見逃すしかないか。新聞をコーナーに戻し、コンビニを後にする。

「お腹空いた・・・」

空腹で腹が鳴った。コンビニで何か買えばよかったと思う反面、「翠屋・・・」あの店の味を思い出し、「行こう」足を向ける。記憶を辿って、そう時間を掛けずに辿り着いた喫茶店、翠屋。店内に入

るのを少し躊躇ったが、意を決し入る。

「「いらっしゃいませ～！」」

またも泣きそうになった。懐かしい声。なのはの父・士郎さんと、母・桃子さんだ。この翠屋の空気と香り。あまり訪れることはなかったが、２人の優しい笑みは思い出せる。

「あらあら、可愛らしいお客さま♪」

「いらっしゃい、お嬢さん。こちらの席へどうぞ」

とりあえず席に案内してもらい、席についたところで「すいません、男なんです」とやんわり訂正しておく。士郎さんと桃子さんは最初は何を言われたのか判らないと言った風にポカンとし、「男なんです」ともう一度言うと、「ごめんなさい」と本当に申し訳なさそうに謝った。

とりあえず「よく言われまし、慣れてますので」と笑みを作る。すると２人は私の顔を見て笑顔になった。それからキノコとベーコンの入ったスパゲッティを注文する。

「どうぞ。それと、コレも」

士郎さんがスパゲッティだけでなくイチゴの乗ったショートケーキ、それにティーカップとミルクと砂糖の瓶をテーブルに置いた。頼んでいなかったため「これは・・・？」と尋ねると、「嫌いだったかな？」って若干困り顔になった。

「いえ。甘いものもコーヒーも好きですが。注文してない物ですから」

「それはさっきのお詫びなの。ごめんなさいね」

桃子さんがもう一度、私の性別を間違えたことに対する謝罪をした。だからこっちも気にしないでほしいという旨を伝えた。そう、この外見が悪いのだ。でも最後に桃子さんは「はぁ。抱きしめたいほどに可愛い　」私の心に一発お見舞いしてきた。私は士郎さんと一緒に苦笑い。それじゃあ早速「いただきますっ」とても美味しいスパゲッティをご馳走になった。

時間が昼時になり、客の出入りが激しくなってきたためにケーキを急いで食べる。勿体ないの一言しかない。今度はゆっくり食べたいものだ。支払いとなり、やはりケーキとコーヒー分の料金が含まれなかったため、「ご馳走になりました」と奢ってもらったことに礼を言うと、「また来てね」と笑顔で見送ってくれた2人に頷きながら翠屋を後にする。

「はぁ、美味しかったな～・・・」

次は住について考えないとな。野宿上等なため、適当な公園に泊まってもいい。本拠地は可能な限り海鳴市内の方が好い。落下したジュエルシードの大半は市内が多かったはずだから。いっそどこかの公園の木の上で寝泊まりするか。

ベンチの上では補導されるかもしれないが、さすがに木の上で寝ているなんて警官も夢にも思わないだろう。候補に挙がったのは臨海

公園だが、早朝は犬の散歩やジョギングをする人が多いために没。公園と言うのがそもそも間違いか。とりあえず人目の付きにくい場所だな。

「ある程度は決まったな。住はその都度変更、食は釣りや山菜取り、衣は魔力を使えば早いが、無駄には出来ないために買う、と」

この世界での衣食住については大体こんな感じで行けばいいだろう。

「さあ、いつでも来いジュエルシード。過去の運命を薙ぎ払ってでも手に入れてやる・・・！」

――怨まれるのは当然の罪で、憎まれるのもまた当然の罰――

それが私の在り方だったが、フェイト達と出逢って変わった。変わることが出来た。しかしそれはもう過去の話に過ぎない。再び私の在り方を表すようになっている。

――理解されようとは思わない、それが唯一の償いなのだから――

そう、誰にどう思われても関係ない。私は、私の目的の為に動くのみだ。とりあえずご近所になるであろう藤見町の探索に入る。記憶から引っ張り出してきた地図と今現在の地図を照らし合わせていく。それにしてもボストンバッグが大きすぎてかさ張る。財布とカードホルダー、通帳はポケットの中。つまり中身は空だ。中身が無く軽いと余計に邪魔に思える。どこかに預けようかと考えても、コインロッカーを使うような金の無駄遣いは控えたい。

「早々に衣類をまとめ買いして重くするか・・・」

その為にわざわざ大きなバッグを選んでくれたんだろう、マリアは。暗くなるまでに終わらせないとな。近くのデパートの子供服売り場に足を運ぶ。で、メンズの売り場に行くと、「お嬢ちゃん。女の子の服はここじゃないわよ」と親切心から教えてくれているのは判っているが、店員とエンカウントするたびに言われると、ちょっと・・・な。笑顔で"自分は男です宣言"を繰り返すこと5回。なんとか服や下着を数着購入。足早にデパートから出る。

「よし。これくらいの重さだとバッグも肩からずれ落ちないな」

次は夕飯。さすがに今からサバイバルするのは辛い。私の好きな天むすと昆布と鮭のおにぎりと緑茶を購入するために、スーパーへと足を運ぶ。デパートの食材売り場はどうも苦手だ。人が多すぎる。どこかでの契約で、混雑しているデパートの食材売り場に赴いた時、何故か尻を触られまくった経験がある。

それからはどうも苦手だ。その時も外見年齢が１０代前半で、少女に見えていたかもしれない。ま、触ってきた奴らには痴漢の代金を払ってもらったがな。と言うか、男でもいいから付き合ってくれ、と告白された時は本気で叫んだ。

「ここのスーパーにしよう」

客足はさほど多くない。時間からして増え始める直前と言ったところか。だったら今の内にサクッと用を終わらせるが吉。ボストンバ

ッグを背負ってから店内に入り、カゴを手に取る。とりあえず店内を物色。無駄遣いを避けるべきだが、やはり目移りしてしまう。どの食材で、どんな調理をすれば最高に美味しく出来るだろうと、脳内で色々とシミュレーション。シミュレーションで注意力が散漫になっている状況で足を止めて方向転換したことで、

「うおっ？」「ひゃあっ」

何かに追突された。背後から聞こえたのは幼い女の子の悲鳴。謝るために慌てて後ろを振り返り、「すいま・・・はや――っ！」必死にその子の名前を口に出さないように努めた。私に追突したのは、車椅子に座っている少女。まさかこんな形で再会することになるとは。そうか。このスーパーは中岡町と藤見町の境に在ったんだな。すっかり失念していた。

「ごめん。大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫です」

独特のイントネーションの話し方をする。懐かしいその話し方に、また目頭が熱くなる。なんだろう、やっぱり嬉しいよ。かつての親友と、こうして直に言葉を交わすことが出来ると・・・本当に。

（久しぶり。そして初めましてだ。はやて）

かつて私が主を務めていた"夜天の書"。その最後の主となる運命を背負った八神はやて。彼女は私の顔を見て「綺麗やなぁ～」と無

意識らしいがそんなことを言って呆けていた。可愛いよりは受け入れられる褒め言葉なため、「ありがとう」笑みを作って礼を言った。

Ｅｐｉｃ２君が差し出す手は私の心を惑わせる～Ｒｅｖｅｒｓｅ：Ｔｈｅ　ＳｕＮ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「あ、カート・・・」

私が振り向いたことで、私の背中に密着していたカートが明後日の方へ進んで行ったため、はやてが手を伸ばそうとする。しかし距離があり進んで行った方向も真横なため、一度車椅子を操作しなければならない手間が生まれる。だから「待った。私が戻すよ」カートの取っ手を掴み、ふと「ぶつかったお詫びに、お手伝いしようか？」とはやてに尋ねてみた。

「え？　あ、いえ、いいです！　ぶつかったんはわたしですし、よそ見してたのもわたしですし、それに悪いですからっ」

両手を突き出してわたわた手を降るはやて。そう、ここで私は引き下がればよかったんだ。必要以上に関わってはいけない。心の片隅ではそういう警告が鳴り続けてくると言うのに。なのに、「遠慮なら手伝わせてほしい。本当に迷惑なら去るよ」止められずに続けて話しかけてしまう。徐々に客足が増えてきた店内。はやてのようなまだ幼い子供にとって、カートや他の客に注意を払いながら車椅子を動かすという行為は、激しく力を消費する。

「迷惑どころか助かりますけど・・・。ホンマにええんですか？」

はやてもそれが判っているからか、私の提案を呑むという方に天秤が傾きつつある。そして「じゃあお願いします」はやては微笑みを浮かべ、私の提案を呑んでくれた。まずは私が持っていた籠と、はやてが押していたカートを戻し、改めてはやての籠を手に、「それじゃあ行こうか」私の後ろで待っていたはやてに告げる。

「あ、はい。お願いします」

「敬語はいいよ。そんなに歳も離れていないだろうし」

「それじゃあ・・・うん、お願いな。えっと・・・あ、自己紹介がまだやったね。わたし、八神はやて」

入口で立ち止まっていては来店する客や出て行く客の邪魔になるため、まずは店内の外周をぐるりと回るコースをはやてと2人で行く。その途中、笑顔で自己紹介をしたはやて。私も自己紹介に応じるために名乗ろうと口を開きかけ・・・・声を出さずに噤んだ。ベルカではオーディンと騙った。この時代でもセインテスト王家の歴代の王の名を騙ろうと思った。なのに、心が軋みを上げる。私が黙ったことで「どうしたん・・・？」はやてが小首を傾げた。言うんだ。私の名は・・・歴代セインテスト王の1人で、私の祖父の名でもあるヴィーザル・セインテスト、と。だが、私の口から出て来たのは、用意した偽名であるヴィーザルという名前ではなくて・・・。

「ルシリオン。私の名前は、ルシリオン・セインテスト・フォン・

シュゼルヴァロード」

ルシリオンという、本当の名前だった。私は、はやてを騙すことが出来なかった。ああ、私は・・・最低野郎だ。どんな理由であれ私はエリーゼ達を騙したと言うのに。今の私は、はやてに偽りの名前で呼ばれたくないと考えてしまった。おそらくフェイトやなのは達と出会っていたとしても同じように思っていたはずだ。想像してみる。フェイトやなのは達に、ヴィーザルと偽りの名前で呼ばれたらと思うと。

（何を馬鹿な事を・・・！　今の私は、あの子たちと親しくなる必要はないだろうが・・・！）

思っていた以上にショックを受けている自分と、はやてを含めたあの子たちとまた親しくなろうと考えている自分に呆れ果てる。

「ルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード・・・。なんや貴族さまみたいな名前やな～。それじゃあよろしく頼むな、ルシリオンちゃん」

「え？」

「ん？」

今、はやては私の名前への敬称に、ちゃん、と付けなかったか？いや付けたよな。

「あーっと・・・はやて、と下の名前で呼んでいいかな？」

「うん、ええよ。わたしもルシリオンちゃんって呼ぶけど・・・ええかな？」

間違いない。ルシリオンちゃんだ。男につける敬称じゃない。せめて君付けだろう。これは早々に訂正しなければ。コホンと咳ばらいをした後、「はやて。ちゃんではなく君だ」と告げる。するとはやては呆けた後、「それやったら男の子みたいやよ～♪」とコロコロと笑った。ダメだ、完全に女と思われている。

何が原因だ？　やっぱり外見か？　それともルシリオンという名前か？　ルシリオンとは、花のユリの一種でもある。花の名前イコール女の名前というわけか？　いや、さすがにはやてがそこまでぶっ飛んだ思考をするはずもない。

「勘違いしているみたいだけど。私は男だよ」

「あはは。そんなすぐにバレるような冗談は通じへんよ。だってルシリオンちゃん。自分のこと、私、って言うてるし」

（それかぁぁぁあああああああああああ！！）

一人称に問題があったか。ああ、確かにこの外見で一人称が私となれば、女と間違われるのは当然の帰結だ。そう言えば、かつてフェイトにも同じように勘違いされたっけ。だから一人称を私から俺に変えたんだった。

「それに、どう見ても女の子やん。男の子には見えへんよ。もし本当にルシリオンちゃんが男の子なら、女の子のわたしの立場はどうなんの？」

ほら、やっぱり来た。外見の問題。あと、君の立場がどうのこうのというのは知らんわ。改めて私が男であるということを告げる。するとようやく「ホンマに・・・？」信じてきた。真剣さや本気度を示すために真顔で「ああ、ホンマに」そう答えた。はやてのが移ってしまった。

「ルシリオンちゃんやなくてルシリオン君・・・？」

「イエス、ルシリオン君」

「・・・・嘘や信じられへん！　目も大きくて赤と青で綺麗やしっ、髪の毛も銀色でキラキラでサラサラやしっ、お肌だって白くてスベスベやし！」

「お、大きい！　声が大きいぞ、はやて！」

私の目を覗きこみ、髪や手に触れながら心底驚愕と言った感じで声を荒げるはやて。入店してからずっと目を引いていた私の容姿だが、今のはやての大声でさらに視線を集めることに。籠の取っ手を前腕に提げ、車椅子のグリップを握って押し、その場から即時撤退。いきなりの急発進ではやては「おわっ？」と身を竦ませたが、元凶は君だから謝らないぞ。店の奥、精肉コーナーへと来た。「おお、面白かったわぁ」とはやてが感嘆の声を漏らす。こちらとしては面

白くはないんだが。「ほら、買い物を続けよう、はやて」そう言ってやる。

「もう一度確認するけど、ホンマに男の子なん？」

「本当に男だよ。あ、もしかして女の子と思っから私の提案を呑んでくれたのか・・・？　もし嫌だったらこのまま去るけど・・・」

「あ、ううん。ルシリオンちゃ――やなくて、ルシリオン君が男の子でも構わへんよ。わたし、同い年くらいの子とあんまりお話したことあらへんから・・・こうして一緒に買い物出来て、すごく嬉しい」

本心からそう言っているのが判るほどにはやての表情には寂しさが溢れていた。下手にはやての事情に踏み込むつもりはないため、「そうか」と短く応じておく。それからはやてと目玉焼きには何を掛けるか、好物は何か、などなど、料理関係の他愛のない話をしながら店内を回る。これが結構楽しい。そう、買い物をするというよりは話だけをしているという状況だ。

「――なあ、ルシリオン君。わたしのこと、なんも訊かへんの・・・？」

ふと、はやてが突然そんなことを言ってきた。車椅子の少女が1人で買い物。確かにこの状況を傍から見れば気になって、家族のことを訊いてしまうかもしれないな。しかし私ははやての家庭の事情を知ってしまっている。だから訊かなかった。それ以前に、

「私は会って間もない子の家庭事情に踏み込むような礼儀知らずじゃないから。まぁ、独り言として聞こえて来たなら仕方ないけどね」

いきなり事情を訊くような奴はどうかしている。心配なら様子を見、困っているようなら協力を申し出、了承なら手を貸し、用が済めば早々に去る。拒否なら、これまた去ればいい。それが最善なはずだ。興味心から下手に事情を訊いて、そして同情するなんてド級の阿呆のすることだ。

「・・・あはは。そうか。・・・それにしてもやっぱり女の子みたいやよ？　その喋り方やったら」

「むぅ・・・変えた方が好いか・・・？」

「う～ん・・・でも、違和感が無さ過ぎるしなぁ～。試しに私を変えてみればええんちゃう？　一人称を変えて自己紹介、みたいな？」

「俺はルシリオン」

「違和感が半端やないな～」

苦笑いしつつ即答したはやて。「え？　変なのか・・・？」以前の次元世界では、俺、で通していたんだが。はやてやなのは達も何も言わなかったから、一人称が俺でも問題と思っていたが、もしかして心の内では似合わないとか思っていたのか・・・？　そう思うと少しへコむ。「ルシリオン君、ごめんな・・・？」私が肩を落とし

ているのが自分の所為だと思い込んだはやてが謝ってきた。

「あ、違う違う。はやての所為じゃないから気にしないでくれ」

「ホンマに？」

「もちろんだとも。・・・じゃあ、僕はルシリオン」

「う～ん・・・それもなんかちゃうな～」

「え〝？」

俺でもダメで僕でもダメ？　じゃあ他に一般的な一人称って何がある？　仕方がない。知識に在る一人称を片っ端から言って行くか。私にピッタリなものがあるかもしれない。

「儂はルシリオン」

「ぶはっ。いきなりなんでやっ？♪」

「わだす、ルシリオン」

「ぶふっ！」

「おいら、ルシリオン」

「んんー・・・ちゃうな～」

これでＯＫを貰った日には私は咽び泣く。

「おいどん」

「ちゃう」

「うら」

「それもちゃう」

「ぼくちん、ルシリオン」

「なんやイラッとするなぁ～」

「私もそう思う」

「某（それがし）ルシリオン。拙者はルシリオン。麻呂」

「過去に行き過ぎやな～」

「余はルシリオンである」

「なあ、ルシリオン君。それ、使う気ある・・・？」

「まったくと言っていい程に無い」

「そやろね。実際にそれ使おてたら、ちょう頭を疑うかもしれへん」

「他と言ったら、吾輩はルシリオンである」

「あはっ。閣下やなぁ～」

デーモンさんの方をイメージするのか・・・。"吾輩は猫である"辺りかと思ったが。結局。私の一人称は決定することなく流れてしまった。別段困ることもないから気にしない。とまぁ、こんな話をしながらも私とはやての買い物も無事に終わり、スーパーを後にして私たちはバス停へと向かう。

スーパーとさほど離れていないため、1分もあれば十分だ。その途中、はやてが「これ、独り言なんやけどな」とそう前置きして話し始めた。独り言なら黙って聞いていよう。返事をすればそれはもう会話だからな。

「さっき、同い年くらいの子とお話ししてへんって言うたやんか。わたし、両親が居らんくて、脚もこんなんやし・・・学校は休学中で行ってへん。今は何とか、おじさんのおかげで財産面とかは問題あれへんけど・・・。そうゆうわけで友達も居らんくて・・・。だから今日、ルシリオン君と会えて、お話が出来てホンマに嬉しくて、楽しくて・・・」

はやての言葉の端々には寂しいという感情が多分に含まれていた。私も最愛の姉ゼフィランサス姉様を喪った時は狂気に落ち、果てに寂しさに襲われた。だが、妹のシエルが居て、仲間も居たからすぐに寂しさなんてものは無くなった。しかしはやては違う。はやての

周りには誰も居なかった。
おじさん・・・おそらくギル・グレアム提督の情報操作などによるものだろう。無言になったはやてに私は何も言わず、ただ車椅子を押し続けるのみ。バス停が見えて来て、「ここでお別れだな、はやて」と声を掛ける。

「っ！　あ、あんなルシリオン君。わたし――」

「私もはやてと話すことが出来て楽しかったよ。ありがとう」

バス停へと辿り着くと同時にバスが停車した。グッドタイミングだ。ドライバーの人が降りて来て、車椅子乗車用のスロープを設置。エコバッグが掛けられた車椅子のグリップを「お願いします」ドライバーに預ける。

「はい、畏まりました。お預かりします」

「あ、あのなっ、ルシリオン君！　また会えるかなっ！？」

私は返事をせず、笑顔で手を小さく振るだけ。はやての目に悲しみの色が浮かぶ。ドライバーがスロープを片付ける間も「ルシリオン君！」はやてに何度も呼ばれる。

「・・・・また会えるかもしれないし、もう会えないかもしれない。すべては流れるままに」

「えっ？　それってどうゆう――」

最後まで言い切る前に扉が閉まった。バスははやてを乗せて走り去っていく。はやてと会えただけでなく話すことが出来たことは、本当に嬉しかったし楽しかった。これは認める。だが、はやてと会うためにこちらが行動を起こそうとは思わない。すべては流れるまま――偶然の再会だったら・・・・。

「本当は避けないといけないところだろうが、私は・・・」

――どうかご自分の御心に正直に――

マリアの言葉が脳裏を過ぎった。正直になったところでどうする。私は「自分のことで精いっぱいの愚か者だ」そう吐き捨て、今夜の住まい探しに彷徨うことにした。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒？？？？†††

いつもは父さんの遺品のパソコンを使って食材を買って、家まで届けてもらうんやけど。それやのに今日はどうしてかスーパーにまで行ってしもた。でもそのおかげで、とても綺麗な男の子と出会えた。ルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード君。名前はどこかの国の貴族さまみたい。すごいんは名前だけやなくて、その外見がすっっっごく綺麗なことや。サラサラな長い銀色の髪。目の色も青と赤で。肌も白くてスベスベ。本当に綺麗で、男の子に言うんはちょう失礼かも知れへんけど、すごく可愛い男の子やった。

「また会えたらええな～」

ホンマに偶然な出会いやったけど、出来ればもう一度会って話してみたい。バス停での別れ際に、流れるままに、とか言うてたけど。

（どうゆう意味なんやろ・・？

夕ご飯の後片付けをしながら、スーパーでのルシリオン君とのお話を思い出す。外国の子やのに日本語は上手やし、昔の日本の一人称とかもいろいろ知ってたし。すごく優しい声で、温かい笑顔やったルシリオン君。わたしは・・・「友達になりたいなぁ」ポツリと漏らす。どこに住んどるんやろ・・・？　海鳴市は結構外国の人とか居るし、またあのスーパーに行けば会えるやろか・・・。とゆうわけで、それから4日。あのスーパーに足を運んでみたんやけど、ルシリオン君とは会えんかった。

（もしかして偶然この町に来てただけなんかな～・・・）

そう思うと、ため息が出る。けど、もうちょっとだけ探してみよう。そう思うて外出。外国の人が行きそうなところを探してみることにした。でもやっぱり見つからへん。もうそろそろ諦めかけた時、

「あの銀髪の女の子、可愛かったね♪」

「だな。でもさ、臨海公園で釣りって・・・魚釣れんのかなぁ～？」

道の向こうから歩いて来た男の人と女の人の話が、わたしの行き先を決めさせた。銀髪。女の子。ルシリオン君のことやとすぐに判っ

た。やっぱり女の子に間違われてる。バスに揺られて数分。着いたんは海を一望できる、海鳴臨海公園。ここのどこかにルシリオン君が居るはず。釣りをしとるって話やったから、海沿いを進んでみる。そして「見つけた！」太陽の光で余計にキラキラ輝いてる銀色の髪が見えた。

「そんな髪型やと余計に女の子に見えるよ・・・」

長い銀髪をリボンでポニーテールにしてるから。風で髪が靡いてて、まるで尻尾みたいや。ルシリオン君は釣り竿をひゅんひゅん振るって、「よっと！」ものすごい勢いで釣り糸を海に向かって伸ばした。それから当たりが来るまでルシリオン君は待つみたい。声を掛けるなら今の内や。

「こんにちは、ルシリオン君」

「っ！　あ、ああ・・・はやてか。こんにちは。少しぶりだな」

わたしに気付いてすごく驚いた顔をしたルシリオン君。

（えっと、何もそこまで驚かんでも・・・。なんや、ちょうショックかも・・・）

ルシリオン君が「はやては度々ここに訪れるのか？」って訊いて来たから、「あんましや」嘘ついて嫌われるようなことになっても嫌やから正直に答える。

「そうか」

「・・・もしかしてやけど・・・わたしと会いたくなかったか・・・？」

「そんなわけがあるか！」

「っ！？」

「あ、すまない。・・・とにかく私は、はやてと会いたくないなんて思って・・・いないから・・・」

ルシリオン君は怒鳴るように即答してくれた。ビックリしたけど「よかったわぁ」それが嬉しくて、安心できた。もっとルシリオン君の傍まで近寄る。上下黒色のジャージを着たルシリオン君の足元には、「大量やなぁ」魚が5匹も入った小さいクーラーボックスがあった。

「なあ、ルシリオン君。コレ、どないすんの？」

「もちろん食べる。昼ご飯のおかずだからな」

「お昼ご飯？　ルシリオン君って・・・あ」

そこまで言って口を噤む。ルシリオン君は言うてた。

――会って間もない子の家庭事情に踏み込むような礼儀知らずじゃ

ないから――

そやからわたしもルシリオン君の事情を訊かへん。でも、もっとルシリオン君のことを知りたいなぁなんて思たりする。そんな考えが顔に出てたようで。ルシリオン君は「はい、もう一匹」魚を釣ってクーラーボックスに入れた後、

「これは独り言なんだけどな」

蓋を閉じて、手摺にもたれ掛って海を眺めた。わたしも車椅子を動かして海の方へ体を向ける。わたしの時と同じ。ならわたしも黙って聴いとかんとな。ルシリオン君は最初に「私も家族は居ない」そう教えてくれた。えっ！？て声が出そうになったけど、口を両手で押さえてなんとか止めることが出来た。

（ルシリオン君にも家族が居らんのか・・・！？）

「家族も居ない。住む家も無い。帰る場所も無い。私はある探し物をするためだけに旅をしているんだ」

「そ・・・んな・・・」

わたしに振り向いたルシリオン君の顔は真剣やった。なんとなくやけど判る。嘘やないことくらい。ルシリオン君はわたしより酷い状態やったんやな・・・。それやのに・・「どうして笑ってられるん？」さっきまでの真剣な顔から、綺麗な笑顔になったルシリオン君に訊ねる。見てるこっちが代わりに悲しくなってまう。わたしは知らず

ルシリオン君の手を取って握ってた。

「はやてだって先日、笑顔になったじゃないか」

「それはルシリオン君とお話が出来たからで・・・！」

「・・・ありがとう、はやて。私が笑っていられるのは、どれだけ探しても見つけられなかった終わりへと続く道標を、ようやく捉えることが出来たから」

「えっと、どうゆうこと・・・？」

ルシリオン君はただ笑みを浮かべるだけやった。それはまだ話せへんいうことなんやね。

「・・・そう言えばルシリオン君。家が無いって言うてたけど・・・どこに住んどんの？」

釣った魚がご飯のおかずらしいし。わたしの質問に、ルシリオン君は山の方を指すことで答えてくれた。釣られてそっちに目を向ける。確かあの辺りには「森林公園・・・？　あそこ・・・？」があったはずや。そう尋ねると、ルシリオン君は「ああ」って頷いた。

「森林公園付近に在る木々の上で寝泊まりしているんだ」

「へぇ、木の上で寝てるんかぁ～・・・・はあ！？」

木の上で眠ってるて言うたか！？　ルシリオン君、サバイバル生活してるんかっ！？　いくらなんでも「それはやり過ぎちゃう！？」ルシリオン君、子供としての生活捨てすぎや！

「やり過ぎ？　どういう意味だ・・・？」

「探し物のためかも知れへんけど、旅してるから言うんも判るけど、もうちょっと自分のことを考えても・・・！」

「宿代も馬鹿にならないし、それに野宿だって慣れてるから」

野宿に慣れてるなんて。ルシリオン君・・・一体いつからこんな生活してるんやろ？　わたしに何か出来ることないんかなぁ。それに、出来ればもっと仲良うなれる方法があれば・・・。腕を組んでうんうん悩んでると、「それじゃあ、はやて。またな」ルシリオン君はいつの間にか竿を片付け終えてて、クーラーボックスを肩に提げてた。

「ちょっ、ちょう待って！」

「ん？　もうちょっと話でもするか・・・？」

「それもええねんけど！　でもそうやなくて！　えっと、そのな・・・！」

答えも出てへんのに呼び止めて、でもルシリオン君は嫌な顔1つせんで待ってくれてる。けどそれが余計にわたしを焦らせる。そやか

ら「うちに来ぇへんか！？」なんて突拍子もないことを言うてしまうことに・・・。ルシリオン君かて「はい？」って首を傾げてるし。とゆうか可愛すぎや、その仕草！

「お金の心配で泊まるとこが無いんなら、わたしの家に来たらええよ！　タダやし！　やっぱり野宿はアカンて！　ルシリオン君、男の子やのにめっちゃ可愛えし！　もし変な人に襲われでもしたら大変や！」

「・・・・たった今、可愛いって言葉による精神口撃をされたけどな・・・」

「ぅあ・・・！　やっぱり嫌なんやね。ごめんな。怒ってる？」

「ううん、怒ってない。はやての家に厄介になるって話だけど、さすがにそれはダメだろ」

「わたし1人だけやから気を張らんでもええし、一軒家やから部屋も余っとるし、プライバシーも――」

「いやいや。そうじゃなくて。はやては女の子。私は見た目が少女でも男だ（涙）。金銭面とは言え君の世話をしているおじさんという人に何か言われないか？」

「あー、そうゆう心配は大丈夫やと思う。おじさんとは手紙のやり取りくらいやし。それに、な。わたし、ルシリオン君のことがホンマに心配なんよ。ちょっとの間でもええから、わたしの家においで？

わたしに、ルシリオン君のことを手伝わせて。手伝い言うても探し物の手伝いは出来へんけど、住むところとか食事くらいなら手伝える」

どうしたんやろ、わたし。こんなに必死になってルシリオン君を引き止めようとしてる。なんでかは判らへん。判らへんけど、ルシリオン君を独りにするんはアカン、そう思えてまう。もしかしたら同情なんかも知れへん。わたしと同じで家族が居らんくて、でも住むとこも無いルシリオン君よりはマシかもしれん、て。あぁ、でもこれが一番大きい感情かも。ルシリオン君の手を今度は両手で取って、

「・・・独りは・・・寂しいしな」そう呟く。

「寂しい・・・？」

「うん。独りはやっぱり寂しい。・・・それにわたし、ルシリオン君と友達になりたいんや。出来ればもっと会いたいし、お話ししたいし。そやから一緒に住めれば、その2つがいっぺんに解決できるな～なんて」

こんな体のわたしの話し相手って、通てる病院の石田先生くらいや。携帯電話の番号やアドレスかて石田先生とか友達やない人や店の物ばかり。寂しい。口には出さへんけど、孤独はやっぱり寂しい。それに心が寒い。ルシリオン君はずっと黙ったまま。どんな返事になるか、わたしはジッと待つ。

「・・・はやて」

「は、はいっ！」

「お世話になります」

ルシリオン君はそう言うてお辞儀した。するとなんでか「へ？」目から涙が溢れて来た。あれ？　おかしいな。なんでわたしが泣くんやろ。袖で涙を拭う。あ、そうか・・・これ・・・。

（嬉し涙なんや・・・）

久しぶりに泣いたからかしばらく嬉し涙は止まらんかった。その間、ルシリオン君はずっとわたしの手を握っててくれた。それがまたわたしの心を温かくしてくれて、余計に涙が止まらんくなったもうた。散々泣いたおかげでなんとか涙も止まって、「それじゃあ家に案内するな」ルシリオン君を連れてこうとした。

「あ、その前に荷物を取りに行きたいから、森林公園に向かいたいんだ」

そうゆうわけで一度森林公園に行ったんやけど、ホンマにルシリオン君は樹の上で寝泊まりしてた。一本の樹の真下に来て、ルシリオン君が木登り。それにつられて見上げてみると、私物らしいボストンバッグが樹のてっぺん付近に固定されてた。

ルシリオン君は、その、何と言うか・・・失礼やけどお猿さんみたいに軽快に木を登って、バッグを取って、また降りて来た。そして今度こそわたしの家に向かう。バスに揺られて数分。海鳴市・中岡町に在る自宅に到着。

「ただいま～」

「お邪魔します」

「はい、どうぞ～♪」

この家に石田先生や宅配屋さん以外を招き入れるなんて何年振りやろ。ルシリオン君に車椅子を押してもらって、まずはリビングに案内する。ここまで押してもらったことに礼を言った後、「ちょう休んでから他の部屋を案内するな」お茶の用意を始める。

「手伝おうか・・・？」

「ええよ。ルシリオン君はお客さまやしな。ゆっくり休んでてな」

「手伝えることがあれば遠慮なく言ってほしい。居候が何もせずにいるのは、結構肩身が狭いからな」

ルシリオン君は優しいなぁ。でも「今日だけは、わたしにやらせてな♪」張り切って用意を続ける。初めての友達や。家主としても美味しいお茶を振る舞わんとな。これはやりがいがある仕事や！

「どうぞ。日本のお茶やからお口に合うか判らへんけど」

途中で気が付いたけど、家には紅茶もコーヒーも無いから緑茶しか用意できんかった。するとルシリオン君は「緑茶は好きだよ。いた

だきます」って微笑んで、湯呑みを煽った。綺麗な飲み方やなぁ。ちゃんと片手を湯呑みの底に添えとるし。

「美味しい。・・・はやて。忘れているかもしれないが初めて会ったとき、私は日本茶のペットボトルを買ったぞ」

「へ？　あ、そう言えばそうやったな。・・・ところでルシリオン君って日本に来てどれくらいなん？」

「はやてと初めて会った日だよ、日本に来たのは」

「そうなん！？　日本語も上手やし、てっきり・・・」

「勉学が好きだからね。知識と情報は財産だ。蓄えて損はないし、蓄えた分、必ず自分や人を活かすことが出来る」

「おお。なんやルシリオン君、カッコええなぁ」

「ありがとう。男にとって最高の褒め言葉だよ」

確かに語ってたルシリオン君がすごくカッコよかった。ドキッとするくらいに。でも、そう笑顔を浮かべると、「やっぱり可愛ええなぁ」ホンマに女の子に見えてまう。ルシリオン君の表情が固まった。あ、やってもうた。今さらやけど口を両手で押さえる。

「上げて落とす精神口撃とは・・・やるな、はやて」

「ご、ごめん・・・」

そんなやり取りをしながらお茶休みも終えて、さっそくルシリオン君を連れて家の中を案内する。まずはリビング横のわたしの部屋。あんまりジロジロ見られるんも恥ずかしいからすぐに別のところへ。次が客室。そんでお風呂にトイレ。小さいながらも在る庭も案内。そして2階やけど・・・。

2階は父さんと母さんの部屋がある。ほとんど使おうてないから汚れとるかも知れへんな。2階への案内はやめて、最後にもう一度客室にルシリオン君を案内してからリビングに戻って来た。

「今日からあの客室がルシリオン君の部屋や。好きに使ってくれてええからな」

「ありがとう。あんな立派な部屋を用意してくれて。お礼に夕飯は私が用意するよ」

「そんなええよ、今日くらいは全部わたしに・・・！」

「はやてって、魚を捌けるか？」

「えっと・・・捌けへんな・・・」

ついさっきまで生きてた魚を捌くにはちょう勇気が要る。確かに捌けへんけど、全部任せっきりはなぁ・・・う～ん、じゃあ「一緒に作らへん？」そう提案してみる。

「そうだな。じゃあ今晩は一緒に作ろうか」

「うんっ♪」

ホンマに嬉しいことばっかりやな今日は。いきなりこんな幸せになって、わたしの運使い切ってないやろな。嬉しすぎてルシリオン君の笑顔から目を逸らす。と、「あっ！」カレンダーが目に留まった。今日１４日のマスに、病院って赤いペンで書いてあるカレンダー。わ、忘れてた・・・。

「どうした？　はやて」

「今日病院に行く日やった・・・！」

「じゃあすぐに用意しないと」

とは言うてもこのまま病院に行くだけなんやけど。石田先生にルシリオン君のことを紹介したいから「ルシリオン君も用意してな」そう言う。のんびりお茶を飲んでるルシリオン君が「私もか？」って訊いてくる。

「わたしの脚を診てくれてる石田先生に、一応ルシリオン君のことを紹介したいなぁ思てな」

「それはいいんだけど。私と一緒に暮らすということも話す、のか？」

「それはもちろん」

友達が出来たことを石田先生にもちゃんと教えておきたい。きっと喜んでくれるはずや。でもルシリオン君の表情がどんどん険しいものに変わってくのが判った。

「さすがに変に思われるだろう。赤の他人で、いくら同い年くらいだからと言っても男と一緒に暮らすとなると。と言うか通報されそうだ。外国の子供が1人で旅して、いきなりはやての家に住む。怪しさ爆発だと思うけど・・・」

「そうゆうもんかなぁ～。・・・それやったら、外国の親戚って紹介したらどうやろ？」

財産管理をしてくれてるグレアムおじさん。その親戚って・・・。これ、思いっきり嘘やなぁ。あ、でも親戚って紹介しても、男の子と一緒ってゆうんがルシリオン君が悩んでることやしな。わたしとしてはルシリオン君を友達としてありのまま紹介したいのに。でもそれがルシリオン君を困らせるゆうんならしょうがない。

「判った。それじゃあルシリオン君。ちょう待っててな」

「ん？」

わたしは自分の部屋に戻って、クローゼットから着替えを取り出す。石田先生を騙すんは心苦しいけど、ルシリオン君の言う通り歳とか関係なく男の子と一緒に暮らすんはアカンことなのかも知れへんし。じゃあどうやってルシリオン君を紹介するか。もうこの方法しかあ

らへん。

「ルシリオン君。この服に着替えてな」

「っ！！・・・・ま、まさか・・・・！」

信じられないって顔のルシリオン君にわたしの服を差し出す。そう。ルシリオン君を女装させるしか。わたしが「親戚の女の子にすれば問題ないやろ？」そう言うて近づくと、「勘弁してくれ」ルシリオン君が逃げようとする。

ルシリオン君のスカート姿。髪型も女の子っぽくする。それをするんがわたし。想像しただけで「アカン。楽しいかも知れへん」なんやドキドキする。

「はやてっ。今の君の表情、かなりまずいぞ！」

「そうか？　別にルシリオン君を女装させるんが楽しみなわけやないよ？　ほら、早く病院に行きたいから準備してな。大丈夫や。可愛くしたげるから♪」

「い、嫌だぁぁぁあああああああああああああッッ！！」

逃げるルシリオン君（それでも2階やわたしの部屋には入らへん）やったけど、泣き落としでなんとか説得完了。渋々わたしの提案を呑んでくれたルシリオン君に裾の長い白いワンピースを着せて、長い銀髪をおさげにしてみた。結論から言うと、

「ルシリオン君」

「なんだ・・・？（涙）」

「・・・・めっちゃ可愛ええ！！　何なんっ、何でそんなに可愛ええの！？」

「知らんわ・・・（号泣）」

女装したルシリオン君は、もうこれでもかってくらいにすっっっっごく可愛いかった！！

Ｅｐｉｃ３力ある青き石。蒼の星に降り注ぎて～Ａｃｅ　ｏｆ　ＳｗｏｒｄＳ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

。―。―。初っ端から回想だ。―。―。

ようやく逃れたと思っていた嫌な運命、女装。そしてそのままの格好で外出。ロングワンピースという服を着て、髪型をストレートから両耳後ろのダブルおさげしただけで、道行く人が私に向ける視線がグッと跳ね上がった。私と一緒に外出できるのが本当に嬉しいらしい上機嫌なはやてに付き添って向かったのは、はやての掛かり付けである海鳴大学病院。

「そや。ルシリオン君。名前どうしようか？」

車椅子のグリップを握って押しているところに、はやてが肩越しに振り向いて訊いてきた。最初は何のことか判らず「名前？」と訊き返してしまったが、すぐに察して問いに答える。

「石田先生には私の愛称で紹介してもらおうと思ってる」

「ルシリオン君の愛称？」

「ああ。ルシル。それが私の愛称だ」

私がまだ幼い頃にゼフィランサス姉様に付けてもらった、大切な宝物の1つだ。変に偽名を使うよりかはボロが出ないはずだ。はやてが「ルシル君、ルシルちゃん・・・」何かを確かめるように何度も私の愛称を呟く。

ルシル君。はやてにそう呼ばれて、改めて親友(はやて)と再会することが出来たんだと思えた。やっぱり嬉しかった。ここ2千年の契約のどれもが殺戮と破壊だった。最後の最後で私の心を癒してくれる世界に訪れることが出来て・・・ああ、しあわ――違う。

「幸せなんて・・・」

「ん？　なんか言うたか？」

「ううん。何でもない」

「なあ、ルシリオン君。これからもずっとルシル君って、そう呼んでええかな？」

「あ、ああ、もちろんいいぞ。でも、石田先生の前では・・・」

「ルシルちゃんやね。了解や♪」

「・・・・・・うん」

ダメだ、自分で頼んでおきながら泣きそうだ。海鳴市に来て一週間とせずに私は随分と涙もろくなってしまったようだ。そんな風に病院の待合室に着くまでに口裏合わせしておく。はやての診察の番と

なり、一緒に診察室に入る。石田先生が笑顔ではやてを招き入れようとデスク上のカルテからこちらに向き直り、

「こんにち――は？　え？　え？　はや――ええ？」

私を見て、石田先生の優しい笑顔が一瞬にして混乱顔になった。まずは「こんにちは石田先生。この子は外国の親戚で・・」はやてが自己紹介の前振り。私ははやてのリクエストに応えてスカートの裾を僅かに摘まみ上げ、

「はじめまして。私、ルシル・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードと申します」

私の愛称であるルシルと名乗る。石田先生に向けている表の顔はニコニコ笑顔だが、心の顔ではもう滝のように涙が流れている。全身鳥肌だよ、こんちくしょー。とにかく口裏わせをした内容を、はやての脚を診ている石田先生に、はやてと一緒に話す。大雑把に説明すると、

――とある用事で海を渡って来たルシルちゃんは、用事のついでに遠い親戚の八神さん宅に挨拶にやって来ました。ですが、残念なことにもうご両親はもう居ませんでした。ルシルちゃんはただ挨拶を済ませて帰ろうとしました。

そこでふと、はやてちゃんは日本に居る間の住まいはどうするのか気になり、ルシルちゃんに尋ねます。返って来た答えはホテルに泊まる、でした。それを聞いた優しい優しいはやてちゃんは、宿代が馬鹿にならないということで、ルシルちゃんを家に招きました。期

間は不明だけど、八神さん宅はこれからとても賑やかになりそうです――

「――お終い♪」

「お終いって、はやてちゃん。そんな・・・ええ――・・・」

ものすごい微妙な顔をする石田先生。私が石田先生の立場だとしたら、今の話には私の正体や用事などの具体的な説明が無いから、私もきっとそういう顔になるだろうな。しかしはやては満足そうだ。反面石田先生の表情は晴れそうにないままだ。ならば、これ以上変に勘繰られる前に最後の手段を取るしかない。

「石田先生。今日は一緒に来ることが出来ませんでしたが、私には歳の離れた姉が居ます。姉、ゼフィもこれからはやての家に御厄介になるので、生活については何も問題ありませんので」

ゼフィという予定外の嘘に声を上げそうになったはやての頭を押さえてアイコンタクト。話を合わせてくれ、と。はやてに目には、ホンマに大丈夫なん！？という焦りの色が。大丈夫だ、と目を薄く細めて頷く。私たちの無言のやり取りに、「あら、そうなの？　はやてちゃん」石田先生から確認が。

「えっ？　あ、その・・・ですね・・はい、今日は居ませんけど・・・ゼフィさんも一緒に暮らすことになりました」

家族が居ないと言っていた私が急遽盛り込んだゼフィという姉の登

場だったが、はやてはちゃんと私の話に乗って来てくれた。はやての挙動不審さに最初は石田先生に怪しまれたが、後日はやてと一緒に挨拶させると約束したため、石田先生も「じゃあお待ちしてます」とようやく信じてくれた。その日の診察は無事に終了。病院を後にしてバス停に向かっている時に、

「ルシル君！　ルシル君って家族が居らんやなかったん！？」

「居ないぞ」

「それやったらどないすんの！？　石田先生には近いうちに連れて来るって言うてたのに！」

うあ～と頭を抱えるはやて。いつか知られてしまうのは確定している。なら知るのが遅いか早いかの違いでしかない。私は唸っているはやての頭にポンと手を置き、「私の正体を教えよう」はやての耳に顔を近づける。

「ひゃ・・！？」

耳に息が吹きかかってしまったことで小さな悲鳴を上げたはやてだったが、私は気にすることなく「私はな、魔法使いなんだ」と耳打ちする。

「へ？　魔法・・使い・・・？」

「ああ。一度家に帰ろう。そこで見せよう、魔法使いとしての私を」

そういうわけで、八神宅に戻って早速見せた。魔術ではなく魔法による変身を。身長を１６０ｃｍちょいにまで引き上げ、体のつくりを女性型にした。正しくゼフィ姉様の姿だ。どこからどう見ても成人の女だろう。はやてがポカンと「すご・・」私を見上げている。

「どうだ？　これが変身の魔法だ」

「ほわぁ～・・・。美人さんやなぁ・・・。声も女の人のもんやし。とゆうか、ホンマに魔法なんて在ったんやな」

一通り私の体をペタペタ触れたはやては「確かにこれならバレへんな～」と納得してくれた。すぐに魔法を受け入れてもらって何よりだ。さすがシグナムたち"夜天の書"をすぐに受け入れた精神の持ち主。

。―。―。回想終わりだ。―。―。

早いものであれから5日が経ち、その間に私の姉という設定のゼフィの姿で、石田先生に挨拶するために会った。はやてと私の生活への保障を約束し、私とはやてが一緒に住むことへの理解を石田先生はしてくれた。良い先生だけに騙すのは気が引けるが、騒がれて面倒を起こされても辛いものがあるために割り切るしかない。

「ルシル君、ルシル君」

「どうした？　はやて」

いま私たちが居るのは市立風芽丘図書館。はやてはよくここで本を読んでいるとのこと。図書館ということで、私たちは小声で話している。"夜天の書"はまだ起動していないため、はやてのリンカーコアは未覚醒だ。だから今はまだはやては一般人。ゆえに念話（ベルカ式では思念通話）などの基本的な魔法も出来ないため、小声にならざるを得ない。

「今日の晩ごはん、どないする？　やっぱり2人で作れるやつがええな♪」

「そうだな。じゃあ帰りにスーパーに寄って決めようか」

「うんっ♪」

はやてと一緒に朝・昼・夜のご飯を作るのが毎日続いて、もはや習慣となっている。当番制にしようと提案しても、一緒に作ると頑なだったために諦めている。まぁ私としても楽しいから一緒に作るのは嫌なわけじゃない。

帰りの予定を立て、再び伝奇の読書へと戻ったはやての横顔を横目で見る。彼女はいつも嬉しそうに、そして楽しそうに笑ってくれている。自惚れだが私が居なくなれば、きっと曇るだろう。だが、"夜天の書"が起動すれば、シグナム達が新たに家族となる。

（夜天の書がはやての私室に在るのは確認済みだ）

八神家を訪れたその日、はやての部屋に案内してもらった時、確か

に見た。起動さえすれば、私が八神家が去ったとしても寂しくないだろう。６月４日。はやての誕生日くらいまでなら一緒に暮らしてもいいんじゃないか、と思えてしまう。そんな事を考えている合間にも、もう１つの日にちについて思考が巡る。

（４月１９日。今日、ジュエルシードがこの地に降り注ぐはず）

２１個のジュエルシードを、私、なのはとユーノと管理局、プレシアとフェイトとアルフの３勢力で争い奪い合う。この１週間ちょっとで、全ジュエルシードの落下地点の場所は思い出した。あとは、フェイト達には本当に申し訳ないがジュエルシードを奪い取るのみ。

（大丈夫だ。私は戦える・・・戦えるとも）

「・・ルく・・ルシ・・ん・・・ルシル・・ん・・・ルシル君・・！！」

「っ！？」

少し膨れっ面なはやての顔がどアップで視界に映ったことで、ビクッと椅子ごと後ずさる。はやてが「もう！　何度も呼んでるんやけど？」そうジト目で睨んできた。

「あ・・・ごめん。なんだっけ？」

「・・・もう帰ろかなって思うて。・・・ルシル君・・・？　大丈夫？」

少し責めたジト目から、私の様子から心配する潤んだ目になる。

「大丈夫。少し深く考え込んでたんだ。ごめんな」

はやての頭を撫ると、彼女は気持ち良さそうに目を細め、「良かった」安堵してくれた。図書館を出ると、午後の暖かな陽気と風が私たちを包んだ。

「気持ちええなぁ～」

「こういう日にはピクニックとかに出かけて、平原で寝転がりたいな」

「あ、それええな！・・・なぁ、ルシル君。今度お弁当持ってどっか行かへん？・・・って、ルシル君。これから探し物で忙しくなるんやんな・・・。そんな暇、無いか・・？」

はやてにはもう探し物が本格的になる日にち、今日からだということを教えてある。私の今後の人生に必要不可欠で、とても大事な探し物であることも。だから遠慮がちだ。しかし「そうだな。少し遠出でもするか？」と頭を撫でながら微笑みかけると、はやての曇っていた表情が一気に輝いた。

「ホンマにええの？　約束して、そんで破ったら針千本やで？」

「いいよ。針万本でも億本でも飲んであげるよ」

「っ！　そやったら指切りっ！」

はやてが差し出してきた小指に、私も小指を絡ませお決まりのフレーズである「指切りげんまん♪」を一緒に歌う。それでご機嫌になったはやて。もう少しこのまま心安らぐ時間が欲しい。そんな思いが強く募っていく。そんなことを考えていると「はやて」無意識に彼女の名前が口から出ていた。

「ん？　どないしたんルシル君」

「あ、いや・・・なんでもな――っ！！」

私に振り向いていたはやての顔から空へと視線を移す。魔術師としての感覚が、私にある報告をしてきた。曰く、この地球には存在しえない物質が侵入してきた、と。間違いなくジュエルシードだ。ジュエルシードの魔力反応を確実に捉えていく。目を閉じ、まぶたの裏に浮かび上がる青い光の軌跡の数を追っていく。

「（１つ、２つ、３つ・・・１０・・１５・・２０、２１・・・２２？　２５！？・・・３１・・だと！？）馬鹿な・・・！？」

「ルシル君・・・？　馬鹿ってどうゆうことや？」

（ジュエルシードは全部で２１個のはずだ。なのにさらに１０個増えた３１個・・・！？）

問題なのは数だけじゃない。落下地点が前回と同じところもあれば、

全く違うところだったりもする。

（どういうことだ？　平行世界だからか？　だからと言ってこのような変更があるものなのか？）

「おーい。聞いてる～？」

いや待て、これは捉え様によっては最高の状況だ。何故増えたのか、そんなことはどうでもいい。追加された１０個を確実に・・・取る。残りの２１個の内からも数個を奪わせてもらう。"エグリゴリ"１機だけならと考えていたが、１０個以上を手に入れることが出来れば、上手くいけば２機は救えるかもしれない。

「わたしが馬鹿ゆうことか？」

私の袖口をくんくんと引っ張っているはやてが見せる凄みが結構すごい。ちょっと怖いぞ、はやて。

「えっ？　あ、違う！　違うからそんなに睨まないでくれ・・・！」

「・・・ん。でも、急にどうしたん？　そんな怖い顔して」

心配してくれているはやてに「探し物がな。どうやら来たようだ」と正直に答え、もう一度空を見上げる。グリップを握っている私の手にはやての手が添えられた。僅かに震えているその幼い手。探し物は魔法に関係し、少々戦いが必要かもしれないとポロッと零してしまったから、余計にはやてを心配させてしまったものだ。安心さ

せるために、「大丈夫。大丈夫だ」空いているもう片方の手をはやての手の上に添える。

「自分で言うのもなんだが、私は強い。私の心配としては危険より、ちょっと家を空けることが増えるかもしれないということだ。でもちゃんと帰って来るから。必ず」

「約束やよ？　絶対に破ったらアカンからな。ちゃんと無事で、ちゃんと帰ってくること。ええな？」

私ははやての前にまで移動し、真っ直ぐはやての目を見据えて「約束だ」改めて誓う。期日まではやての傍に居よう。私と過ごした数ヵ月など、成長していけば幼少時のただの思い出と朽ち果てるだろう。それでいい。それで・・・いいんだ。私はそれで満足だ。

。―。―。―。―。

第９７管理外世界・地球にジュエルシードが降り注ぐ数日前。ある次元空間内。第２８管理世界フォスカムにて発掘、発見されたロストロギア・ジュエルシードを運搬している１隻の次元航行船が航行していた。進路は時空管理局本局。そんな次元船は順調に航行を続けていた。そう、たった今までは。次元空間内では本来起こりえない現象が起き始めていた。紫色の雷撃が発生しているのだ。

――サンダーレイジＯ，Ｄ，Ｊ――

そして次元船をその雷撃が襲った。次元跳躍という意のＯｃｃｕｒ

ｓ　ｏｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ　Ｊｕｍｐｅｄを冠する、このサンダーレイジという雷撃の魔法。サンダーレイジに襲撃された次元船の内部。ジュエルシードが厳重に保管された格納庫の床に広がる影に動きが生まれた。
そしてその影から人間の頭部が生えてきた。まずはバイオレットの髪。そして顔が。クリムゾンの猫目で猫口という少女だ。果てには足先までが影から出て来た。ハイネックの黒セーターに白のロングコート、コートの裾から除く黒のズボン、茶色のブーツという出で立ち。
対闇黒系魔術師用の"堕天使エグリゴリ"、闇絶(あんぜつ)の拳のコードネームを持つ、レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアだ。

「え～っとぉ～・・・グランフェリアの情報では～・・・あ、コレか」

レーゼフェアの視線の先に在る鋼のケース。そのケースの中にジュエルシードが収められている。ゴツゴツとブーツの音を鳴らしてケースに歩み寄っていくレーゼフェアだったが、突然足を止めて格納庫の入り口に振り返った。

「動くなっ！・・・そこで何をしている！？」

「この船を攻撃した者の仲間か・・・！？」

入口に立っていたのは2人の女。1人は成人女性で、紫色のショートヘアに鋭い金色の双眸、全体的に水色を基調とした、肢体にピッタリと張り付き密着する装甲付きのバトルスーツを着ている。もう

１人は１０歳少しの少女だ。銀色の長髪に、金色の双眸、バトルスーツに灰色のコートという出で立ちだ。レーゼフェアは「誰？　君たち」と、自分に質問を投げかけた２人に質問で応じた。

「・・・時空管理局本局・第零技術部所属、トーレ・スカリエッティ」

「同じくチンク・スカリエッティだ」

成人女性の方はトーレ。少女はチンクという名前らしい。襲撃犯に律儀に名乗る２人は、よほどのお人好しか、または自身らの戦闘能力の余裕からか。そんな中でチンクが手元に空間モニターを展開。キーを幾つかタッチすると、格納庫内が結界に包まれた。戦闘で船内を傷つけないようにするためと、ジュエルシードの覚醒を防ぐためのものだ。

「（空間がズレた？　結界ってヤツかぁ）・・・へぇ、管理局ね～。ホントは誰にも気づかれずに済ませようと思ったんだけど・・・しょうがないよね。ね？」

「「ッ！！」」

――インパルスブレード――

レーゼフェアが戦意を漲らせると、トーレとチンクがビクッと身構えた。一瞬で理解したのだ。２人で挑んでもレーゼフェアに勝てるかどうか判らない、と。僅かに生まれた怯えを払拭するかのように、

トーレは手足に８枚のエネルギー翼が発生させた。そしてチンクは両手の指の間に、投擲用の短刀であるスローイングナイフ――スティンガーを８本と挟み込んだ。

「僕とやるの？　死んじゃうかもよ。大人しく逃げておけば良かったって後悔するよ？」

「無論だ。あと、死ぬこともない。そして私たちは管理局員だ。容疑者を前に逃げるなど・・・ありえん！」

トーレはレーゼフェアにそう答え、いつでも戦闘行動に移れるように全身に力を入れる。チンクはスティンガーによるトーレの援護を担当するべく意識を研ぎ澄ます。

――ライドインパルス――

レーゼフェアが一歩踏み出した瞬間、トーレが先に仕掛けた。高速移動を行い、レーゼフェアの右側面へ移動。腕を振るい、右腕に発生させているインパルスブレードをレーゼフェアの腹に打ち込んだ。直撃を受けたレーゼフェアは「にゃ？」と気の抜けた声を漏らし、振り抜かれるトーレの動きに合わせて吹き飛ばされ、格納庫の壁に打ち付けられた。

間髪入れずにチンクがスティンガーを投擲。そして「ＩＳ発動。ランブルデトネイター」と指を鳴らした。それを合図としたかのようにレーゼフェアの至近に刺さっていたナイフ８本が一斉に爆発した。

「いきなりの鎮圧戦闘だったが、ドクター、それにウーノやドゥー

エに怒られないだろうか・・・？」

「同感だが、そのような考えを通す余裕がなかったのも確かだった。判るだろう？」

戦意を見せたとはいえ、レーゼフェアにいきなり攻撃を仕掛けたことへ不安を募らせるチンク。しかしトーレはレーゼフェアが放つ雰囲気からして先手必勝は的確な判断だとする。この場合、どちらが正しいのか。それはすぐに判ることだ。そう、「んにゃ？　魔力じゃない？　別の何か」と傷一つとして負っていないレーゼフェアの姿を見ることで。

絶対の自信を持っていた一撃を与えてもなお平然としているレーゼフェアを見て、「馬鹿な・・・！？」トーレは目を見開いた。チンクとてそうだ。絶対の撃墜とは言わずともそれなりのダメージを与えたと思っていた。だが結果は無傷という、看過できないものだった。

「チンク！　徹底抗戦だ！　この女は危険すぎる！」

「仕方ない・・・！」

チンクは再びスティンガー8本を投擲。レーゼフェアが「効かん効か～ん☆」とスティンガーを迎撃するために殴ろうとした瞬間、

――ランブルデトネイター――

またもナイフが爆発。今度は一斉ではなくレーゼフェアに届いたナ

イフから順に爆発していった。遅れてトーレが突撃を行う。濛々と立ち上る爆煙の中に居るレーゼフェアの影をしっかりと捉え、

――インパルスブレード――

右腕を振るった。しかしインパルスブレードはレーゼフェアに当たることはなかった。

「ぐっ！？　っぐぁぁぁあああああああああああああああああッ！！」

何故なら、トーレの右腕が上腕半ばから引き千切られていたからだ。引き千切られた部分から除くのは機械部品。トーレは引き千切られた個所を左手で押さえ激痛に悶え苦しむ。床に蹲ろうとした瞬間、「ん～と、とりあえず、ドーン☆」レーゼフェアが繰り出した張り手を顔面に受けたトーレはものすごい勢いで突き飛ばされ、壁に激突。

「ぁが・・・っ！？」

「トーレ！？」

あまりの衝撃で壁がひしゃげ、トーレはノイズの走る白目を剥いて力なく倒れ伏してしまった。レーゼフェアは引き千切ったトーレの腕をプランプランと揺らしながら「ごめんね、僕、強くてさ♪」と笑みを浮かべる。

――罪人捕えて罰せしは闇棺（ノワール・コンジェラサオン）――

「なっ、何だこれは！？」

チンクの足元に在る彼女自身の影が蠢き、チンクを包み込もうと這い上がって来ていた。自身の影から逃れようと必死に抵抗するチンクだったが、成す術なく呑み込まれていく。

「こんな魔法、見たことも聞いたことも・・・！　この・・・っ！」

まだ動かすことが出来る左手に４本のスティンガーを持ち、レーゼフェアへと投擲。動ける限りスティンガーを投擲しようとしたチンクだったが、スティンガーを防御するのにトーレの腕を使われたことで僅かに意思を鈍らされた。迫るスティンガーをトーレの腕で叩き落としたり盾にしたりで防ぎ、チンクの目前へと来たレーゼフェア。

「だから言ったじゃん。後悔するよってさ～☆」

ついに両腕が影に呑み込まれたチンク。レーゼフェアはトーレの腕を使ってチンクの頭を撫でる。怒りに顔を真っ赤に染めるチンク。レーゼフェアを包囲するかのように何十本ものスティンガーを展開させた。

「貴様・・・！」

チンクの殺気を受けたレーゼフェアは笑みを絶やすことなく「ホン

トごめんね～♪」と影の塊と化していくチンクに手を振った直後、影がドンッ！と爆ぜた。爆煙より姿を現したチンクは見るも無残にボロボロだ。だがそれでも「ランブル・・デトネ・・イター・・・」と一斉にスティンガーを射出。
スティンガーの爆発に呑みこまれたレーゼフェアが爆炎に包まれる。普通なら確実に死んでいる攻撃だが、黒煙の中から多少煤汚れただけのレーゼフェアが現れ、それを見たチンクは僅かに前進した後、パタリと倒れ伏した。

「・・・何者、だ・・？　名は・・・・！？」

「名前？　んと、秘密なのだ☆」

――闇の女王（サリュ・マンソンジュ）の鉄拳――

「っが・・・・！？」

倒れ伏していたチンクの背中に落下した影の拳。チンクはその一撃で完全に意識が途絶えた。

「・・・ジュエルシード、頂いて行きま～す♪」

レーゼフェアはジュエルシードの収められたケースを抱え上げ、格納庫の結界を力づくで破壊。そして格納庫に侵入した時と同じように自身の影の中へとズブズブと潜り込んで行って、その姿を完全に消した。

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「それじゃあ行ってきます」

「・・・うん、いってらっしゃい」

時刻は午後９時。ジュエルシードの余分な１０個を真っ先に手に入れるため、本日１９日より活動開始。しかし私の魔力量からして一度に回収するのは難しい。１つ１つ間を空けて回収するのが好ましいだろう。そういうわけで本日はとりあえず１つは回収する予定だ。無茶はせずに確実に、だ。

玄関まで見送りに来てくれたはやてに、「帰りは遅いだろうから、起きてなくていいから」と言っておく。はやてのことだから私が帰ってくるまで起きていそうだ。図星だったのかはやてが「うっ」と呻いた。

「約束」

「うぅ・・・ん、約束や」

渋々と言った風にはやては私が差し出した小指に自身の小指を絡ませた。最後に「おやすみ」と交わした後、私は八神宅を後にした。はやての小指と絡めた小指を眺める。知らず「ふふ」笑みがこぼれてしまう。シエルを思いだすな、はやての言動は。シエルもよく約束事をしようとしてきたものだ。

「・・・よし。行くか」

覚醒がすでに始まっているジュエルシードが1つ。場所の方を探ってみれば、どうやら聖祥大付属小学校、なのは達の通う学校からだ。カーゴパンツのポケットから蒼銀の指環、"エヴェストルム"を取り出して左中指にはめる。

後は現場付近で結界を展開、ジュエルシードを封印するのみ。少ない魔力で身体能力を強化、人目につかないよう細心の注意をしながら、家屋の屋根や電柱を跳び移りながら移動。視界内に小学校を収め、

「エヴェストルム起動。騎士甲冑をデザインBで展開」

フード付きの外套に神父服、そして仮面という、"界律の守護神テスタメント"の聖衣と同じデザインの騎士甲冑へと変身する。おそらく堕天使戦争は長期戦になるだろう。下手に本来の戦闘甲冑で暴れて、後々に犯罪者として管理局に追われるのは得策じゃない。そのための一種の変装だ。"エヴェストルム"は待機形態のまま。戦闘甲冑と同じように武装も見せられない。あと指環を見られないために、念のために黒の革手袋をはめる。

（変装はこれで充分だろ。魔力は限られているが、ジュエルシードもフェイト達も経験で退ける）

――封時結界――

ミッドチルダ式の結界魔法を発動。術者が許可した者、そして結界内を視認・進入する魔法を持つ者以外には内部で起こっていること

の認識や進入も出来なくする他、魔法戦や訓練が周囲に被害を与えたり目撃されたりしないようにするための結界だ。それにこれから起こる"闇の書事件"で動きを見せるシグナム達ベルカ式の使い手に、ジュエルシード強奪の容疑を掛けないためでもある。

「ジュエルシードは・・・あそこか・・・・！」

私の目が行くのは飼育小屋。心臓の如く脈動するジュエルシードの魔力波が次第に強くなっていく。急がなければ。そう思って駆け出した瞬間、ドガン！と飼育小屋が吹っ飛んだ。飼育小屋を破った張本人を見上げる。そう言えば、すずかの家の猫も巨大化してたよな・・・・。

「動物たちはこぞって大きくなりたい、と願うものなのか・・・？」

私のそんな独り言が届いたのか、巨大化したニワトリ3羽がギラッと睨み付けて来た。そして夜なのに「コケーッ！」と鳴き始め、あろうことか「なっ！？」私を食べるつもりなのか啄んできた。確かに今のニワトリに比べれば私の大きさは餌くらいだろうが、少し心外だ。

飛翔の魔道・剣翼アンピエルではなく、ただのミッド式の飛行魔法を使って空へと上がる。鳥類だろうがニワトリは空を飛べない。なら空爆による魔力ダメージでジュエルシードを停止させ、ニワトリを元に戻す。そう考えた矢先、「・・・・ってあれ？」到底信じられない事態が目の前で起きた。

「「「コケーコケーッ！」」」

「ニ、ニワトリが空を飛んだ・・・！？」

大きい図体をした3羽のニワトリが翼を羽ばたかせ、私を追って飛んできた。この瞬間、ニワトリ達が何を願ったのか判った。間違いなく「空焦がれ、奇跡に願う、飛べる羽」だな。何度も繰り返される啄み攻撃を回避。羽ばたき1つで起こる暴風に体勢を崩される。その隙を突いて私を呑み込もうとしてくるが、

「すまないな。ちょっと苦しいが我慢してくれ」

ニワトリ達にそう謝り、一度大きく距離を開ける。また私を追ってくる2羽のニワトリへと手を翳し、白銀に光り輝くミッドチルダ式の魔法陣を前面に展開。魔力光もサファイアブルーからゼフィ姉様の白銀色に変更しておいた。珍しい色の魔力光は個人を特定することが出来る。これで私に繋がる証拠はほとんど潰せたことになる。

――煌（コード）き示せ、汝（アダメル）の閃輝――

属性と神秘を除いたことで魔法と化した砲撃（アダメル）を3本発射する。2羽のニワトリの飛行速度はそれほど速くなく、その図体の所為もあって直撃。元の大きさに戻った2羽が爆煙より落下し始め、対象を浮遊させる魔法であるフローターを掛け、落下を阻止。ゆっくりと降下させながら、目を残りの1羽のニワトリへと向ける。おそらくアレの内にジュエルシードがある。何せ私の砲撃を他の2羽と違って軽やかに回避したのだから。

「コケーッ！」

「ああもう！　願いどおり空を飛べたのだから、それで満足すればいいだろうが！」

――煌き示せ、汝の閃輝（コード）（アダメル）――

啄み攻撃がさらに過激になって来た。食い意地を張りやがって。あと砲撃を紙一重で避け続けるって、どんなやり手だっ。

（焼き鳥にして食うぞ！）

ニワトリは私の心を読んだかのようにさらにギラリと怒気を含んだ目を光らせた。

「仕方ない。アダメルで眠らせていればよかったものを」

――無慈悲たれ、汝の聖火（コード）（プシエル）――

火炎の龍プシエルを発生させると、目に見えてニワトリが焦り出す。やはり動物は火を恐れる。「コケコケーっ！」と恐怖に鳴き始めるニワトリ。プシエルでニワトリの飛行を制限し、「これで終わりだ」確実に砲撃アダメルを直撃させる。閃光が晴れ、ニワトリの内から休眠状態になったジュエルシードが現れた。ジュエルシードが抜けたことで元の大きさに戻ったニワトリを抱き止め、

「シリアルナンバーは・・・間違いなく３０だな」

ジュエルシードに浮かび上がっているＸＸＸの数字を確認。とりあえず無事に回収できた。創生結界の１つ、"神々の宝庫ブレイザブリク"の保管庫に取り入れた後、地上に降り立ち、失神しているらしいニワトリ２羽を抱き上げて飼育小屋へと近づく。壊れた小屋は結界内ゆえに空っぽだが、結界を解除すれば元通りの小屋が在だろう。小屋の中にニワトリ達を降ろし、出たところで結界を解除する。

「フェイトやなのは達が相手じゃなければどうってことはないな」

元通りになっている小屋とニワトリ達の様子を確認し、騎士甲冑から私服へと戻る。思ったより時間は掛からなかった。これならはやてが眠る前に帰れそうだな。

「ん？　魔力反応・・・。あぁ、ユーノか」

敷地内から出てすぐ懐かしい魔力を感じた。ユーノがこの地に降り立って初の戦闘だな。戦闘を繰り広げているであろう場所の方角へと目をやり、「ま、頑張って負けてくれ」敗北することでなのはと出会えるという運命だ。

必要だからこそ心を鬼にしてユーノを見捨て、私ははやての元へ帰るために、ここまで来た時と同じように屋根を伝って移動。八神宅に到着するまでジュエルシードの覚醒状況を探査。結果はユーノが逃がした奴のみだった。

「ただいま・・・」

合鍵で玄関扉を開けつつ小声で挨拶。リビングに入ると、はやてがソファに座ってテレビを見ていた。時刻はまだ９時５０分。はやては基本早寝だが、テレビを見るために時折１０時まで起きていることもある。はやての背に向かって改めて「ただいま」と普通の声量で声を掛ける。が、返事はなかった。

「はやて・・・？」

はやての前に回り込んでみて判る、返事が無い理由。はやては完全に「寝ているのか」こっくりこっくりと船を漕いでいた。起こすべきか否か。少し逡巡した結果、起こさずにはやてをベッドまで運ぶことにした。テレビを消してからはやてを横抱きに抱え上げ、はやての部屋のベッドまで運ぶ。

「ん・・ルシル君・・」

「はやて。起きて・・・・寝言？」

名前を呼ばれたから起こしてしまったかと思ったが、はやては変わらず寝息を立てている。そのまま黙ってベッドの上に寝かせると「・・・独りに・・せんで・・・・」と、私の後ろ髪を「ぬあ？」グッと掴んできた。はやての手から髪を解放出来たと思えば今度は手を掴まれた。離そうとしてもはやてが愚図る。もしかして起きてるんじゃないか？って思えてしまうほどにガッチリ掴んでくるため、

「はぁ。もう知らんぞ、はやて」

諦めてはやての眠るベッドに腰掛ける。空いている手で、閉じられたはやての瞳から零れる涙を拭い去る。どうやら今日は完徹らしい。はやてが安心して眠れるように頭を撫でる。

「・・・父さん・・・母さん・・・。ルシル君・・・」

「っ！・・・私は、ここに居るよ。はやて」

だから泣かないでくれ。だから安心してくれ。君が眠っている間、私が君を守ろう。頭を撫でているのが功を奏してくれたのかはやては泣き止み、また安らかに寝息を立て始めてくれた。

Ｅｐｉｃ４魔導円舞～Ｒｅｖｅｒｓｅ：Ｔｈｅ　ＴｏｗｅＲ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「んぁ？・・・なんや・・・久しぶりに良い夢見れ・・っっっ！！？？」

「すぅ・・すぅ・・すぅ・・・」

心臓が止まるかと思った。目を開けると、視界いっぱいにルシル君の寝顔が入ったから。

（えっ？　なんで？　なんでルシル君が一緒に寝とるの！？）

心臓がバクバクで、顔がすっごく熱くなる。どうしてこうなってるのか必死に頭を動かす。混乱の中でも目が行くんはルシル君の寝顔で、めっちゃ可愛ええ。まつ毛も長くて、唇も・・・。いやいやそうやなくて。えっと、昨夜はルシル君が出かけて、テレビを見て帰りを待ってようとして・・・。そこで思い出す。自分でベッドに入った記憶がない。とゆうことは、ルシル君がわたしを運んでくれたゆうことや。頭を上げてルシル君の背後を見てみる。やっぱり車椅子が無いわぁ・・・。

（でもどうしてそのまま一緒に寝る事に・・・あ！）

今さらやけど気付いた。わたし、ルシル君の手を握ってた。ポスッと枕に頭を降ろして、ルシル君の手を握ってた自分の手を見る。

（夢見が良かったんは、もしかしてルシル君が一緒に寝てくれたからなんかな・・・？）

車椅子も無いし、ルシル君が起きるんを待つしかないな。それまではルシル君の寝顔を見させてもらおうっと♪

「って、ルシル君にもわたしの寝顔見られたってことやんか！！」

冷め始めた顔がまた一気に熱くなった。男の子に寝顔を見られた。今までに感じたことがない程に恥ずかしい！　ルシル君から顔を逸らすために寝返りを打って背中を向ける。と、すぐに「しまった。寝てしまったか」ってルシル君が跳ね起きた。今の大声で起こしてしもうたみたいや。けど、なんて言うか今はまだまともに顔を見られへんから、寝息を立てるフリをする。

「・・・ニワトリとの戦いが疲れたからか・・・？」

（ニワトリと戦ったんか！？　え、あれ？　魔法の道具か何かを探すためやんな？　それでどうなってニワトリと戦うことになるん！？　どんな状況やったんかめっちゃ気になる！）

ベッドから降りたルシル君が「はやてが起きる前に退散しないとな」足音を殺して、わたしの部屋を出てった。扉が完全に閉まったことを確認して、「なんでニワトリ？」やっぱりそれが気になるわ。顔を上げようとしたところにガチャっと扉がゆっくり開くのに気付いて、すぐにまた寝たフリする。車椅子のタイヤが回る音が聞こえて

きた。タイヤの音はベッドの傍で止まって、車椅子を運んできてくれたルシル君はまた音もなく部屋を出てった。

「ふぅ。ごめんな、ルシル君。もうちょい休ませてな」

恥ずかしさが完全に治まるまで朝寝坊することにした。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

妙にソワソワしていたはやてとの朝食を終え、食器類の片付けや洗濯干しに風呂・トイレ掃除も一段落。ちなみに洗濯物は別々に洗い、干す場所も別々。まだ８歳とは言えはやてが女の子であることに変わりない。

分けるべきものは分ける。洗濯物を一緒に洗うことに関してははやては別に気しないと言っていたが、はやて自身は気付いてなかったようだが、明らかに恥じらいを見せていた。干す場所に関しては、はやては自室から出られる庭に。私は２階の一室から出られるベランダに。風呂とトイレ掃除は基本的に私が担当。当番制にして車椅子生活のはやてにもやらせるのは気が引けた。

「あ、あのなルシル君。その・・・」

ソファに座って朝のワイドショーを見ながらのお茶休みをしているところに、自分の部屋から出て来たはやてがチラチラ時計を見ながら声を掛けてきた。時刻とはやての膝の上に在る物を確認して「もうそんな時間か」と休憩を切り上げる。午前１０時。その時間から昼までの２時間。私とはやてはある事を行う。はやてに誘われるよ

うに私は彼女の部屋へ入り、デスクのところまでついて行く。

「休んどったのにごめんな、ルシル君。でも、わたし――」

「あはは。いいよ。勉強熱心なのは良いことだ」

そう。はやてに勉強を教える授業をやっている。学校に通っていないはやては、図書館で本を借りたり、書店で教材を購入したりして独学で勉強している。独学でありながら小学3年で習う全教科の理解力と習得率は平均以上だ。

よほど身に付く勉強法を知っているのだと思えば、人一倍頑張っているだけ。本当に強い子だと思い知らされる。だから出来る事はやってあげたいと思えるんだ。まず私ははやての理数系能力を上げるつもりでいる。この世界のはやてもきっと魔導師になるだろう。

（魔法とは、自然摂理や物理法則をプログラム化し、それを任意の書き換え、書き加えたり消去したりすることで作用に変える技法だな・・・）

魔法について改めて確認してみる。魔導師の魔力を使用し、変化・移動・幻惑、いずれかの作用を起こす。これらの作用を術者が望む効果が得られるように調節し、また組み合わせた内容こそが、現代の魔法の形であるプログラムというやつだ。

そのため魔法＝プログラムの構築や制御には当然数学や物理の素養が必然となる。なのはは算数や理科などの理数は得意だし、フェイトに至っては数学をある程度マスターしていた。呑み込みが早いこの頃からはやてに理数系を率先して学んでもらう。文系は軽く、成

績が中の上に入るところまでで今のところは良いだろう。

「むぅ・・・ルシル君。ここんところ、ちょう教えてもらってもええか？」

「ああ。どれだ？」

明らかに小学3年で学ぶレベルじゃないのに、はやては文句1つとして、それどころか嬉々として学んでくれる。算数の後は、生物学・地学的分野を除いた物理学分野特化の理科の授業といきたいが、詰め込みすぎるのはかえって逆効果。だから次は文系だ。はやてのリクエストで、英語も含めた国語を教えることになった。

今日は英語。黒板代わりの空間モニターを使ったりして、簡単な単語学習や英文和訳・作成をさせる。まぁ、英語を教え始めたのは一昨日からなため、正解率はお世辞にも良いとは言えない。だがそんな失敗をはやては糧とし、さらに意欲を高める。教えがいがあるというものだ。

「じゃあ昼食を作って来るから、その問題を解いていてくれ」

「はーい、せんせ～♪」

はやてにいくつかの和訳問題を出して、昼食を作るためにキッチンへと向かう。サクサクッと作れるオムライスでも作るか。材料を冷蔵庫からだし、12時までに終わるように調理開始。調理の最中、はやての部屋から「オムライスや～！」なんていう嬉しそうな声が聞こえてきた。

副食としてツナと刻みキャベツのサラダを作り終え、時間を確認するとちょうど正午。はやての部屋へと戻り「はい。今日はこれまで。お疲れ様だ、はやて」デスクに突っ伏したはやての頭を撫でながら労いの言葉を掛ける。

「はぅ～。ありがとう、ルシル君～」

ふにゃっと破顔するはやて。それから一緒に昼食を摂り、洗濯物が乾くまでのんびりソファに腰掛けて待つ。はやては図書館で借りた文庫を。私は目を閉じて意識を外に集中。ジュエルシードの覚醒状態を把握しておく。

今日、なのはが魔法を得る日・・のはず。すでに３１個というイレギュラーが発生している以上はもはや確実じゃないが。とりあえずは様子を見に行ってみるか。なのはがちゃんと魔導師になるかどうかを。

（覚醒間近のジュエルシードは・・・２つか）

１つは、本来ならユーノが手に入れているはずの１つ目。先の次元世界では、ユーノが墜とされたのは２つ目のジュエルシード回収時。その前に１つは回収しているはずなんだ。だが、そんな気配はなかった。その回収されなかった１つ目が目覚めようとしている。もう１つは海鳴市商店街付近から。追加された１０個の内の１つに違いない。徐々に私の知る歴史とはズレていっている。これが私にとって吉となるかどうかが重要だ。

「ルシル君。今晩も、その・・・行くん・・・？」

「・・・ああ。放っておくのは危険だから」

それに、ジュエルシードは"堕天使エグリゴリ"と戦うために必要な魔力源だからだ。はやては目に見えてしゅんと小さくなったが、これぱかりはどうしようもない。私は「ごめんな」と謝りながらソファから立ち上がる。と、「どこ行くん？」とはやてに訊かれ、

「洗濯物の乾き具合を見てくる。今日はいい天気だからな、もうそろそろ乾いていてもおかしくない」

「あ、うん。そうか・・・」

「手伝おうか？」

微妙に重い空気を払拭したいがためにからかい交じりにそう言うと、「ううん、ううん！」はやては頬を赤く染めてブンブン首を横に振る。私に下着を見られないために別々に干しているのに、手伝うとなれば確実に見られる。それを想像しての赤面だろう。そんなはやての様子に笑いながらリビングを後にする。

2階のベランダに干してある洗濯物はすでに乾いていたから取り込んで、畳んだ後に1階の客室――私の部屋のクローゼットにしまう。リビングに戻って来ると、はやての部屋からゴソゴソと音が。はやても洗濯物を取り込んで片付けているようだ。

「はやて」

「んー？」

「今日の買い物は私ひとりで行くから、はやては留守番していてくれ」

「えっ！？　な、なんでなん！？」

はやてがものすごい剣幕で自室から出て来た。いつも利用している店は、海鳴市商店街に在る。買い物ついでにジュエルシードの封印を行おうと決めた。はやてを護りきる自信はあるが、可能なら巻き込みたくはない。だからはやてには留守番してもらおうという事を告げたんだが、

「それやったら大丈夫やな。ルシル君が護てくれるんやから」

意地でも譲らないって顔をしてるはやてにそう返された。ああ、その顔はもう説得をしてもダメだと諦めるに足るものだ。どうしてこう、私の身近な女性は頑固者が多いのだろうか。

「・・・・判った。一緒に行こう・・・・」

そういうわけで、はやてを連れてジュエルシード封印へと向かうことになった。気を付けるべきは、はやてにジュエルシードを見せないことか。はやての何気ない証言から私がジュエルシード強奪を行った容疑者として管理局に気付かれる可能性があるからな。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒はやて†††

ルシル君に無理言うて、魔法使いとしてのルシル君を観たいためについて来た。バスに乗って海鳴市商店街に到着。ルシル君に車椅子を押してもらいながら、ルシル君の様子をひそかに伺い続ける。

「・・・あそこからだな」

「え？・・・アノ花屋さんか？」

ルシル君の目を追っていくと、そこには小さいながらも花屋さんが在った。あそこにルシル君が求める、魔法の道具が在るんやな。でも、こんな人だかりの中でどうやって取るんやろ？　昨日はニワトリと戦ったみたいやし。朝の時もそうやったけど、ホンマに気になる。と、ルシル君が「人目に付かないところに向かう」って言うて、路地裏に連れて行かれる。

「はやて。これから回収に向かう。本当に良いんだな？」

今までに見せたこともないキッとした顔のルシル君はちょう恐かったけど、わたしは「一緒に行く」頷き返した。ジッとルシル君の目を見詰める。するとルシル君は小さく溜息を吐いた後、薄手のパーカのポケットから青い指環を取り出した。

「1つだけ約束してくれ。私の言うことは絶対に聴くこと」

「了解や！」

ルシル君が指輪をはめて、「封時結界」って呟いた。ルシル君から何や突風が起こって、つい目を閉じてしまう。次に目を開けると、「あれ・・・？」目に映る世界にはものすごい違和感が。ルシル君の後について路地裏から出たら、すぐにそれがなんなのか気付いた。

「人が・・・1人も居らへん・・・」

「結界と呼ばれる魔法を使ったんだ。他の人や建物に迷惑が掛からないように」

魔法ってそんなすごいことも出来るんやなぁ。感心しとると「エヴェストルム。騎士甲冑を」ルシル君の体が銀色の光に包まれた。光が治まると、えっと・・・「どちらさま？」って訊きたくなるほどに変な格好をしたルシル君が居った。

「わざとだと思うけど、ルシリオンな。コレは、魔法を使って戦う時に着る、専用の服と言ったところか。怪しいからと言って通報しないようにな」

「そ、そうなんや。重要な物なんやね～」

仮面がちょう怖いかも。目を出す穴とか空気穴が無いし、真っ黒やし。見えてるんやろか？　ルシル君の顔の前にまで手を伸ばしてみて、ヒラヒラ振ってみると、ルシル君に手を掴まれた。

「ちゃんと見えてるよ」

「みたいやね」

「とりあえずは、はやてにはコレを着てもらおうか。我が手に携えしは確かなる幻想」

ルシル君は、どこからともなく出したフード付きのコートをわたしに差し出した。言うことは絶対に聴く。そやから何も言わずに袖に腕を通して、フードを被った。ルシル君が花屋さんに向かうのを、わたしも車椅子を操作してついて行く。やっぱり押してもらえへんのやね。うん、これはしゃあないよな・・・ホンマに。

「ルシル君・・・？」

「まずいな。願いが叶った後か・・・」

「願いが叶った？　えっと、何を見て・・・・よ、妖精さん？」

花屋さんの中を見ると、店内には手の平サイズの小さな女の子が1人？浮いとった。全体的にピンク色な肌と髪と服。バラを逆さにしたようなスカートが、動くたびにヒラヒラ揺れる。ルシル君と一緒に妖精さん？をジーっと眺めとると、「あ」妖精さん？と目が合ってしもうた。そんでわたし達に両手の翳してきた。なんや花の香りが漂ってきた。ええ香りやな。

（うん？・・・眠くなってきた・・・？）

「まずい、一時撤退！」

「おわっ！？」

ルシル君に車椅子を突然押されて、花屋さんからどんどん離れてく。どうして急に？　花屋さんの方に振り返ってすぐ、「おお！？」入口からものすごい勢いで花弁の波が溢れ出てきた。

（もしかしてルシル君はこうなることが判って逃げたんやろか・・・？）

ある程度花屋さんから離れてから停止。花屋さん前の道には花弁の絨毯が出来とった。

「あの妖精さん？が、ルシル君の探してた物か？」

「まぁ、あながち間違いじゃないが・・・。出て来たな」

花屋さんから妖精さん？がヒラヒラ飛んで出て来た。そんでもって両腕を振り始めた。よう見ると、手の平からキラキラと粉のようなものが出てる。その粉が触れた場所から、「花咲かじいさんみたいやな～」色んな種類の花が咲き乱れた。

妖精さん？は空を飛び回って、街中を花だらけにするんやないかってくらいに花を咲かせてく。雨のように花弁が舞い降ってくる中。

「悪質な害じゃないようだが」ルシル君が妖精さん？に向かって歩いてく。

「どうするん？」

「もちろん・・・」

――咲き乱れし、汝の散火――

ルシル君が前に向けて左腕を伸ばすと手の平から大きな火の玉が生まれて、妖精さん？に向かって飛んで行った。火の玉は途中で幾つもの小さな火の玉に分裂して、ドォン！って爆発して花を燃やし尽くしてく。あまりにことに呆けてしまったけど、「何してんのルシル君！？」ルシル君の暴挙を止めるために怒鳴る。

「決まってるじゃないか。あれを止めるんだ」

「でも、それやからってこんな酷い・・・」

「酷い、か。そうかもしれないな。けどな、はやて。こうしないと世界がダメになる。結界内だからこそ騒ぎが起こってないが、これが現実で起こったら・・・どう思う？」

想像する必要もあらへん。大騒ぎや。それが判るからこそわたしは「ごめんな」謝る。魔法のこととかなんも知らへんわたしが、ルシル君のやることに口を挟むんは間違いやもんな。ルシル君は火の玉で咲き乱れる花々を燃やしていくんやけど、それ以上に妖精さん？が花を咲かせてく方が早い。その所為で火もあっという間に鎮火。

「・・・って、こっち来たよルシル君！」

目に見えて怒ってる妖精さん？がわたしらのところに向かって飛んできた。わたしを護ってくれるかのようにルシル君が前に立って、「お前の願い、悪いが潰させてもらう」って謝った後、魔法陣・・っていうヤツやろか？　銀色に光り輝く魔法陣がルシル君の足元に出来た。妖精さん？はそれにビックリしたみたいで、突進を止めて急上昇。さらに空でスケート選手みたいにクルクル回って、キラキラ粉を振り撒き始める。

「火がダメなら・・・」

――吹雪（コード）け、汝（バルビエル）の凍波――

ルシル君の足元にまた魔法陣が出来たらと思うたら、わたしらの周りから宝石みたいな氷の柱がいくつも突き出してきた。その氷の柱から冷たい空気が漂い始めて、キラキラ粉や周囲の花々を凍らせてく。さらに「ジャッジメント」ってルシル君が指を鳴らすと、氷の柱が全部一瞬で砕けて、わたしらを中心にして吹雪の竜巻になった。

「凍らせるだけだ」

吹雪が止んで真っ先に口から出た言葉は「やり過ぎちゃう？」やった。ルシル君は「結界内だから問題なし」って言うて、氷像になって落ちて来た妖精さん？を受け止めた。辺りを見回すと花どころか街一面が凍ってる。息を吐くと白くなるんやけど、不思議なことに寒くはない。たぶんこのコートのおかげやろね。すごくぬくぬくやし♪

「・・・よし。用事は終わったから、買い物と行こうか。はやて」

「え？　もうええの？　妖精さんは・・・？」

わたしに背を向けてたルシル君が振り返ったんやけど、抱えてたはずの妖精さん？はもうどこにも居らんかった。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

ジュエルシードの影響で花屋の花が起こした、今回の騒ぎ。はやてに見られないようにして妖精の姿を取っていた薔薇からジュエルシードを取り出し、"神々の宝庫ブレイザブリク"に取り込むことに成功。結界を解除しようとした矢先、「なに・・・！？」結界内に侵入してきた何か――いや、明らかに魔導師だな。

（まさかなのはか・・・？）

なのはが魔導師になるのは今夜のはずだが、この世界では早いのかもしれないな。と、そう思ったが、魔導師の反応が２つ。なのはとユーノのコンビかと僅かに考えたが、感じ取れる魔力からして別人が２人。魔力量はそれほど高くないようだが、気になることが１つある。

「（ジュエルシードを持っている・・！？）はやて。ここから動かないでくれ。いいな？」

「え？　あ、うん・・・判った」

有無を言わせないように低い声を出し、頷いたはやての頭をフード越しに撫でてから空へと上がる。向かうは侵入者の元。はやてのところから１ｋｍほど離れたところで、「魔導師発見！」２人の少女の声がダブって聞こえた。飛行を停止し周囲の気配を探った瞬間、

――バインドブレット――

真下から３０基ほどの魔力弾が飛来してきた。魔力光はクリーム色。知り合いにこの色を持つ者は居ない。私や"エグリゴリ"ではない、この世界に元から居る私が知らないだけのイレギュラーかもしれないな。魔力弾を回避しつつ術者の姿を捉えようと目を凝らす。が、魔力弾は誘導操作の効果を有していて、回避しても追尾してくるため、なかなか捉えることが出来ない。仕方ない。純粋魔力ならイドゥンで吸収できるはずだ。消費した魔力を今ここで回復させよう。

――女神（コード・イドゥン）の救済――

吸収時に他の魔力弾を受けないよう気を付けながら、一番近かった魔力弾に触れた瞬間、「しまった！」右手首にリングバインドが掛けられてしまった。この隙を逃すような間抜けな魔導師じゃないようだ。着弾時にバインドと化す魔力弾を一斉に私へと殺到させてきた。

「抜け出せない・・・！」

結果、左右前腕・上腕、左右脛・太腿、腰、胸、首と、馬鹿みたい

にリングバインドに掛かってしまった。バインド破壊をしようにも結構複雑な魔法式(プログラム)が組まれていて、かなり時間が掛かりそうだ。

「ジュエルシードちょうだい」

またあの声がしたと思えば、２人の少女が私の目線のところにまで上昇して来た。歳は今の私やはやてより少し上と言ったところか。ミルクティブラウンの髪は、片方は肩までのセミロング、もう片方は腰まであるロング。瞳は共に桃色。間違いなく双子だ。仲が良いのか指を絡める形で手を繋いでいる。中でも一番気になるのが、

（あのバリアジャケットは・・・ユーノと同じ・・・？）

色はなのはのバリアジャケットみたいだが、デザインはユーノの物と似通いすぎている。違いと言えば色、そしてハーフパンツではなく膝丈のスカートであることくらいだ。

「ジュエルシード(ソレ)はユーノが探してる物なの」

「だから大人しく返して。そうすれば許してあげるから」

とりあえず「ユーノ？　あなた達は誰？」と、声を少女の物にしてから訊ねる。まずはこの子たちの正体を知りたい。馬鹿正直に答えてくれるとは思えなかったが、

「冥土の土産に教えてあげる。私、セレネ・スクライア！」

「冥土なんて言ってるけど別に殺す気ない、エオス・スクライアだよ」

やはりスクライアか。ロングの方がセレネで、セミロングの方がエオスだな。しかしそれにしても、よく冥土の土産なんて言葉を知っているな。多少この国のことを勉強して来たのか？　リンディ艦長もそうだったし。まぁ、かなり偏ったり間違った知識だったが。特にお茶が・・・・。

「あなた達スクライア姉妹が、そのユーノっていうのに頼まれて来たの？」

「ううん。内緒で来たんだよ～。ユーノの知らぬ間に私たちが回収して・・・」

「行き詰ったユーノにジュエルシードを渡して、私たちのことをもっと尊敬させるんだっ♪」

なんだ、そのふざけた理由は。つまりなんだ・・・この子たちは「そのユーノって子が好きなんだね」と言ってやる。ユーノはジュエルシードを発掘した責任感から地球にまでやって来た。が、この子たちはそんなユーノにもっと尊敬――好きになってもらいたいってことでやって来た、と。

「「ぶふっ！？　な、ななななな！　ちがっ、そうじゃなくて！　ただ私たちは！」」

顔を真っ赤にして動揺しまくるスクライア姉妹。どうやら図星だったようだ。わたわた忙しなく手を振る２人だが、それでも繋いでいる手を放そうとしない。何か理由があるのかと思えば、繋いでいる手を私へと向けた。

≪Ｇａｔｅ　ｏｐｅｎ≫

そんな機械音声が握られている手の中から発声されると同時、前面に展開されるミッド魔法陣。なるほど。あの子たちが繋いでいる手の中にデバイスがあるから手が離せないのか。おそらく２人でデバイスを同時使用し魔法を発動させる、２人で１人の魔導師なんだ。

「「べ、べべ別にユーノのことなんて、す、すすすす好きなわけじゃないんだからっ！！」」

≪Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｕｓｈ・ｖｅｒ，ＥＯＳ≫

などと言いながら、バスターラッシュ・バージョン・エオスという名前らしい火炎砲撃をぶっ放してきた。だが遅すぎたな。全てのバインドを破壊し、射線上より離脱する。

「「えっ！？」」

「ここまで長々と話をしていれば、バインド破壊くらい簡単だよ！ペラペラ喋ってくれてありがとう！　セレネ、エオス！」

「「ああ！　謀ったな仮面女！！」」

――フローズンブレット――

「わぁーっはっはっはっはっ！」

放たれて来る魔力弾連射を回避しつつ挑発するように大声で笑い飛ばす。すると2人は「ムキィーーッ！」イラつき始め、狙いも雑になり始め、誘導操作も利かなくなってきた。これなら真正面からでも攻められる。飛行軌道を姉妹の真正面へと移したところで、

――輝き流れる閃星（サピタル）――

下級閃光系攻性術式、魔力弾サピタルを3基放つ。2つは真正面へ。下手に操作せずに直線軌道で飛ばしたために2人の魔力弾で迎撃された。もう1つは操作して、足元から2人の背後へと。しかし2人は気付かないし気付けない。何せ私が真正面から突っ込んで来ているのだから、そんな余裕はない。

「こんの・・・！」

――フレイムブレット――

魔力弾から火炎弾に変わった。2人とも変換資質の持ち主なんだろう。それらを紙一重で避けながら前進を続け、「来た来た来た来ちゃった！」と焦り出す2人が間近になったところで90度に直角上昇。

「「へ？・・・あっ！？」」

短い悲鳴を上げるセレネとエオス。サピタルが繋いでいた手に直撃したことで、無理やり手を解かれたことによるものだ。私を見上げたことでさらに隙が生まれ、後ろから迫って来ていたサピタルに最後まで気付けなかった。

落下していく小さな宝石。"レイジングハート"の待機モードのようなものだが、色は赤ではなく紫だ。あれがデバイスか。２人は「待って！」と急降下して、落ち続けるデバイスに手を伸ばす。だが、届かない。あのスピードはまずいな。あのスピードだと止まるのに苦労するぞ。

「１つ貸しだぞ」

――フローターー――

彼女たちとデバイスに対象を浮遊させる魔法、フローターを掛ける。デバイスをキャッチして、さっきまでと同じように手を繋いだ２人が私を見上げて来た。困惑一色の顔色だ。そしてヒソヒソと耳打ちで話し始めた。お礼でも言ってもらえるのかと思えば、また私に繋いでいる手を向けて来た。

――バスターラッシュ・バージョン・セレネ――

放たれたのは冷気の砲撃。礼ではなくて攻撃とは恐れ入った。そうか。判った。徹底抗戦と言うのであれば、こちらももう容赦はしない。砲撃を回避して、半分本音な「恩知らずだね、あなた達は！」

と言いながら急降下。

「別に助けてもらわなくてもなんとかなったもんっ！」

「でも本当にありがとう、仮面ちゃん！　けど・・・こっちも必死なんだよ！」

――フレイムブレット――

火炎弾の弾幕。少ない魔力でよくもまあこれだけのことが出来るものだ。おそらくデバイスの性能が良いんだろうな。だからと言って「こちらも必死なんだ！」後れを取るつもりはない。火炎弾を防御魔力で固めた両拳で弾き飛ばしながら、接近を試みる。

「ジュエルシードを回収して、その後はどうなるの？　どうせ調査の果てに封印でしょう！」

弾幕を張るのを止めて私から離れようとするセレネとエオスに語りかける。

「ロストロギアの大半は危ない物なんだよ！」

「封印、安全に保管されるのは当たり前じゃん！」

２人を追いかけ始めると、エオスが言い、そしてセレネも言い放った。

――フローズンブレット――

「だけど私には必要なんだ！　ジュエルシードで・・・1人の人間を助けるために！」

「「え・・・？」」

私はもう"界律の守護神テスタメント"から解放されたいんだ。独善的だと蔑まれてもかまわない。

「だから渡してもらうよ、あなた達の持っているジュエルシードを！！」

私の言葉に一瞬だが呆けた2人へと言い放つ。左手を頭上に掲げ、人間の頭部大の魔力球を1基作り出す。

「力づくでも、だ」

――来たりて(リクシスレール)爆ぜよ天威轟雷――

掲げていた腕を振り降ろすと同時に魔力球、下級雷撃系攻性術式のリクシスレールを投げ捨てる。2人は回避を選んだが、行動に移るのが遅い。ゆっくり飛来してきたことで油断したな。パチンと指を鳴らす。それを合図としてリクシスレールが破裂すると幾つもの小型魔力弾となり、2人を包囲するかのように拡散する。

「「え・・・！？」」

さらに小型魔力弾数基が炸裂。全方位から魔力を含んだ雷撃効果の衝撃波がセレネとエオスを襲撃。銀色の閃光に包まれた２人の気配を探る。すると２人は閃光の真下から力なく落下し始めた。やり過ぎたか？と思えば、落下の最中でも繋いでいた手を私へ向け、

「「お返しだよッ！」」

≪Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｕｓｈ・ｖｅｒ，ＳＥＬＥＮＥ≫

冷気の砲撃を放った。こうなれば力の差を徹底的に見せつけるしかないな。迫り来る砲撃を真正面に捉え、「恨まないでくれな」前面にミッド魔法陣を展開。

――燃え焼け（コード）、汝の火拳（セラティエル）――

そして放つのは火炎砲撃セラティエル。魔力にしても威力にしても上回っているセラティエルはバスターラッシュを相殺どころか完全に呑み込み、

「「きゃあああああああ・・・！」」

セレネとエオスに直撃した。２人の悲鳴が爆発音で掻き消される。爆炎と黒煙の花が空に咲く。２人の魔力量からして防御の上からでも必倒の一撃だったセラティエルだ。確実に撃墜できただろう。先程と同じように２人が爆炎の真下から黒煙を引いて落下し始め、ビルの屋上にドサッと墜落。私もその屋上へと降り立ち、「さあ、ジュエルシードを渡して」倒れ伏し、苦痛に呻いている２人の言う。

≪Ｔｒａｎｓｐｏｒｔｅｒ！！≫

デバイスから、ある魔法の術式名が発せられた。トランスポーター。転移魔法のことだ。倒れ伏しているセレネとエオスの下にミッド魔法陣が展開された。止めようと思えば止めることが出来るが、これ以上魔力を消費するのも辛いものがあるし、「結界解除」と結界を解く。これで何も問題なく転移が出来るだろう。転移を終えて姿を消した２人にはもうジュエルシード回収など止めるように祈ったところで・・・「っ！」はたと気付く。

「あ、しまった！　はやて！！」

いきなり結界を解除したことで混乱しているかもしれないはやて。血の気が一瞬で引いた。騎士甲冑を解除し、急いではやてを待たせている場所（どうしよう、結構離れているな）へ全力ダッシュで向かった。で、全力で向かったが２５分と掛かり、はやてと合流した私は・・・

「なんか言うことあるか？　ルシル君」

「ごめんなさい。許してください」

誠心誠意はやてに頭を下げ続ける事になった。放置した罪はやはり重かったわけだ。許してもらう条件として、どこかに遊びに行くことを約束させられた。

「――でな。やっぱり遠出とかしてみたいなぁ、なんて思うてるんやけどな」

「ああ。弁当を作って遠出をしよう」

以前にもした約束を新たにして、ご機嫌なはやてと一緒にスーパーへ向かう。そんな中で考えることじゃないが、どうしても気になるのはセレネとエオスの存在だ。ジュエルシード争奪戦の勢力図がとんでもないことになるぞ、これは。

フェイトとアルフ組が可哀そうに思える。あの子たちにとってセレネとエオスは敵で、なのは達にとっては味方だ。唯一気になるところは、ユーノには内緒だということ。ま、どちらにしてもなのは組にジュエルシードが集まることには変わりないか。

Ｅｐｉｃ５魔法少女リリカルなのは、始まりますっ～Ｔｈｅ　Ｆｏｏｌ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

えっと、みなさん、おはようございます。私、高町なのはっていいます。小学３年生の女の子です。ちょっぴり運動が苦手な、平凡な小学生・・・でした。うん、昨日までは・・・。どこにでも居る平凡な小学生だった私はなんと・・・魔法少女をはじめました。

事の始まりは、昨日の学校帰り。塾に向かう途中に傷だらけのフェレット――ユーノ・スクライア君を見つけたことから。友達のアリサちゃんやすずかちゃんと相談してそのユーノ君を動物病院に預けて、そのままお別れしたんだけど。

けどその夜に、一昨日から頭の中に直接聞こえていた男の子がまたして、その声に導かれるままに動物病院へ辿り着くと、真っ黒でモコモコしたお化けにユーノ君が襲われる場面に立ち会っちゃった。それだけでも十分驚いたのに、ユーノ君はさらに人の言葉を話した。頭の中に聞こえていたあの声で。

ユーノ君が言うには、ある探し物の為に別の世界から来て、その上・・・

――探し物を見つけるために手伝ってほしいんです。僕の力を、魔法の力を使って――

作り話とかでしか聴いたことがない魔法。本当に在れば素敵だな～

とは思ってたけど、実際にそう言われると疑っちゃう。けど、魔法は本当に在った

――我、指名を受けし者なり。契約の下、その力を解き放て。風は空に、星は天に。そして不屈の魂はこの胸に。この手に魔法を――

（レイジングハート・・・）

首から下げた赤い宝石、"レイジングハート"を手の平に乗せて、眺める。魔法の力で変身して、モコモコお化けをなんとか封印することが出来たんだ。

（私、本当に魔法使いになっちゃったんだなぁ～）

送迎バスの窓から空を眺めて、昨夜、そして今朝、ユーノ君に教えてもらったことを思い返す。ジュエルシード。願いを叶えることが出来る魔法の石。聴いていてすごいなぁって思ったけど、実は結構危ない物みたい。すごい力だからこそ不安定で、昨夜みたいに暴走しちゃうっていう。

ユーノ君はそうならないように1人で集めようとしてたみたい。それも全部ユーノ君の強い責任感から。ジュエルシードを発掘したのはユーノ君とお友達。けどジュエルシードを運んでいた船に何か不運があったみたいで、その所為でジュエルシードがたまたまこの世界に落ちた、という話だった。

『なのは。今いい？』

『ユーノ君？　うん、いいよ』

頭の中に聞こえてきたユーノ君の声。コレも魔法の1つ。心でお話が出来るっていう便利な魔法で、念話っていう名前。私がユーノ君に導かれた時もこの魔法によるものだった。

『さっきは言いそびれたけど、あと1週間、ううん、5日でいい、なのはの家に置いてほしいんだ。魔力が回復するまでで。あ、でも迷惑なら――本当に今さらだけど、迷惑ならすぐにでも出て行――』

『待ってユーノ君！　そんな追い出すようなことはしないから！・・・ねえ、ユーノ君。治ったら出て行くって言うけど、それからどうするの？』

『・・・うん。ジュエルシードを探し続けるよ。たとえ1人でもやらなくちゃ。そうだ。お礼のことなんだけど、この世界での通貨は持ってないから、えっと、どうしようかな・・・』

やっぱり。私はそんなユーノ君に『お礼、私からリクエストして良い？』って訪ねてみる。もちろん拒否権はないからね。するとユーノ君は『僕に出来ることなら何でも』って言ってくれて。言質は取ったよ。そんなユーノ君に私からのお礼のリクエストを告げようとしたところで、

『じゃあ・・・へ？　え？・・・にゃぁぁぁあああああああああああッ！！？』

『うわぁっ！？・・・あ、頭がキーンって・・・！　なのはっ、ど、どうしたの！？』

バスの窓から、見たら呪われちゃうかも的なものを見ちゃった気がして、バッと屈んで窓から頭を隠しながら念話の方で叫んじゃった。声に出してたらきっと注目を浴びちゃうところだったけど、あまりの光景に声は出なかった。ユーノ君からの『なのはっ！　一体何があったの！？』って心配してくれる声に応じようとしたら、

「「「きゃあああああ！！」」」「「「うわぁぁあああああ！！！！」」」

ドガン！と何かがバスにぶつかった衝撃が、私や他の生徒、運転手を襲った。耳をつんざく激しいブレーキの音。そんな中で私は椅子の手摺にしがみ付いて転げ落ちないようにしてる。バスが停まったことで全身の力を抜けた。まさか自分が乗ってるバスが事故を起こすなんて・・・。

――封牢結界――

「っ！？　この感じ・・・！」

初めてユーノ君と会った時に感じた違和感。バスの中を見ると、私以外には誰も居なかった。すぐに『ユーノ君！　何か魔法使った！？』って念話を使ってみるけど、返事はなくて。

「『ユーノ君！？　ユーノ君！』どうしよう・・・」

あまりの状況に混乱する。とにかくバスの外に出よう。入口の扉は潰れてるから、割れた窓から「んしょ」っと脱出。そしてバスがどうなっているのか見ることが出来た。何かに衝突されたように大きくへこんでる側面。

そして「やっぱり見間違いじゃなかったんだ・・・！」バスの前方からものすごい勢いで走って来た屋根の無い車・・・スポーツカーっていうのかな？がすれ違って行った。屋根だけじゃなくて、運転しているはずの人も居なかった。私が叫んだ理由がそれ。幽霊とかお化けがちょっと苦手な私にとって、ああいう心霊現象的なものは怖くて気が引けちゃう。

「きっとあれもジュエルシードの影響・・・だよね・・・？」

昨夜遭ったモコモコお化けに似た感じが、あの車からも感じることが出来る。ユーノ君が居ないけど、「何とかしないと」このまま黙って見ていることも出来ないし。"レイジングハート"を手に取って、「あの車を停めるために力を貸して、レイジングハート」そうお願いする。

≪もちろんです。マイマスター≫

えっと、変身するときの呪文は・・・って、さっきまで憶えていたのにど忘れしちゃった！　頭を抱える。「えっとえっと・・・、あっ、風は空に？　星は天に？」途中の部分しか思い出せないよ～（泣）。落ち込んでいると、

≪問題ありません。バリアジャケット展開します≫

変身の呪文も唱えてないのに"レイジングハート"が変身させてくれた。

「ありがとう。ごめんね、呪文忘れちゃって・・・」

≪いいえ、お気になさらず≫

なんとか変身も出来て、えっと、次は・・・。

≪警告。強力な魔力反応が接近中≫

"レイジングハート"がそう教えてくれた。さっきの無人の車かと思えば、魔法使い歴２４時間にも満たない私でも判るくらいに別の

「何か来る・・・！」強い力を感じてゾクッてなった。無意識に空を見上げる。車が走って行った方に向かって飛んで行く銀色の光。

「あれは・・・」

≪魔導師です。おそらくこの結界を展開した魔法使いでしょう≫

「ユーノ君の他に魔法使いが居るってこと・・・！？」

ユーノ君にこのことを訊いてみたいけど、変わらずに念話が繋がってくれない。

≪念話及び通信が妨害されています。この結界の有する効果の１つ

だと思います≫

「そんな・・・」

やっぱりジュエルシードを探しているんだよね。だったら私とユーノ君にとって・・・敵、なのかな・・？　判らないけど、今やれることをしないと。車と魔法使いさんが向かった場所へ走り出す。すごい速さで走り回る車と、空を飛ぶ魔法使いさん。そして懸命に足を使って走る私。なんだろ、何か切ない。

≪飛行魔法を使いますか？≫

「えっ！？　私も飛べるの！？」

≪相応に難度の魔法ですが、マスターならばきっと≫

こんな時なんだけど、テンションが上がる。空を飛ぶ。それはやっぱり憧れだから。早速"レイジングハート"に空を飛べる魔法をお願いしてみる。

≪Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ≫

靴の外側に桜色に輝く魔力の小さな羽が生えると、何かこう体が軽くなったような感じがした。トントンとステップを踏んで、いざ飛び立とうと膝を曲げてグッと地面を蹴った瞬間、フワッと浮遊感が私を襲った。地面から体が浮いて「わぁ、本当に飛べた♪」私は本当に空を飛べることが出来たんだと感動しちゃう。

嬉しくて歓声を上げてると「わわっ」ちょっとバランスを崩しちゃった。でもすぐに整える。けどまた崩れる。空を飛ぶのって結構難しいかも。少しずつ空を飛ぶ感覚を掴んでいって、ようやく体勢が崩れるのを抑えることが出来た。

≪お見事です≫

「ありがとうレイジングハート！」

空を飛び始めて1分もしないところで、「居た！」車と魔法使いさんが追いかけっこしてた。先を走る無人の車。それを追いかける魔法使いさん。全身が真っ黒な服で、フード付きのマント。特に不気味に思えるのが、黒光りする仮面。視界を確保する穴や、息をするための鼻や口の穴も無い。だけど「子供・・・！？」その魔法使いさんは、たぶん私くらいの子供だった。

――輝き流れる閃星（サビタル）――

魔法使いさんが銀色に光り輝く何かを車に幾つか放った。"レイジングハート"が言うには、アレは魔力を弾丸状にして撃つ射撃魔法っていうもので、基本的な攻撃の魔法みたい。けど車は右に左に避けて、魔力弾をかわし続ける。そんな中で魔法使いさんは車に近づいて、運転席に乗り込もうとした。でも車はすごいブレーキ音を出しながらスピードを落として、それを避けた。

「危ない！！」

車の前に居る魔法使いさん。あの状態だと車に轢かれる！　最悪の予想が目の前で起きた。ドン！ってすごい音が、魔法使いさんにぶつかったことで生まれた。車はそのまま走り去っていって、魔法使いさんは宙で錐揉みして、なのに「うそ・・・」態勢を整えて車を追いかけ始めた。呆けていた私も急いで追いかけ始めて、「あの子、大丈夫なのかな・・・？」魔法使いさんの体を心配する。

≪衝突時、体を回転させて車体に乗り転がるようにすることで衝撃を完全に殺しています≫

「えっと、つまり・・・すごい音の割には何ともないってこと・・・？」

≪そうなります。咄嗟の判断で実際に行動に移すあの反応力。恐ろしい限りです≫

そんなにすごいことなんだ。"レイジングハート"から魔法使いさんと車に視線を戻す。さっきと同じように魔力弾を撃ちながら車に乗り込もうとする。もしかして乗り込まないと止められない、のかな・・・？

「レイジングハート。あの車を停めたいんだ。私に出来ることある？」

今は魔法使いさんのお手伝いをしてでもジュエルシードの車を停めたい。でも私の魔法使いとしての力だと出来ることは少ない。その少ないやれることを知りたいから訊いてみた。

≪マスターは、おそらく放出系の魔法資質であると思われます。あの魔導師のような射撃魔法、そして砲撃魔法を得意とするかもしれません≫

「砲撃・・・？」

――煌き示せ、汝の閃輝――

"レイジングハート"に≪魔導師が撃ったアレがそうです≫って言われて、魔法使いさんから放たれた銀色の光の柱を見る。ビリビリ肌に感じる魔法の力。でも走る車は砲撃っていう魔法も、ドリフトって言うのかな？で避けた。

けど、砲撃が地面に当たった衝撃に煽られてスピードが落ちたその一瞬、魔法使いさんはついに車の運転席に乗り込んだ。ブレーキの音が響き渡る。車は最初ブレーキに逆らうように走っていたけど、でも少しずつスピードが落ちていって、最後はちゃんと停まった。

「終わった・・のかな・・・？」

停まった車と魔法使いさんのところにまで飛ぶ。魔法使いさんが車のボンネットからジュエルシードを取り出したのが見えて、「あのっ！」魔法使いさんに声を掛ける。黒光りする仮面が私の方に向いてちょっとビクッと体を引いたけど、

「なに？」

（女の子の声だ・・・）

魔法使いさんの綺麗なその声で、さっきまで抱いていた不気味感が薄らいだ。だから「ソレ、ジュエルシード・・・どうするの？」お話を続けることが出来た。

「もちろん使うんだけど。それが？」

「でも、ジュエルシードの持ち主に返さないとダメなんじゃ・・・」

「持ち主？　どうして？　私が頑張って手に入れたんだから、コレはもう私の物でしょ」

魔法使いさんはそう言って、私に背を向けて去ろうとした。だけど「待って！」このまま行かせるわけにはいかないから呼び止める。無視されちゃうんじゃないかって思ったけど、「まだ何かある？」って振り返ってくれた。

「ジュエルシードは、ユーノ君って子が発掘したの。だから今の持ち主はユーノ君で、ユーノ君は頑張ってジュエルシードを集めてて、私はそのお手伝いをしようと――っ？」

そこまで言ったところで、魔法使いさんが私に向かって歩いて来た。だから途中だけど口を噤んじゃって、"レイジングハート"を持つ手に力が入る。

「そう。でもね、私にはどうしても必要なんだ、ジュエルシードが。人ひとりの人生を救うためにはどうしても。だから悪いけど、ジュ

エルシードは貰ってく」

「にゃっ？」

すれ違う時にいきなり頭を撫でられてビックリしたけど、撫でるのがすごく上手で気持ち良い。ほわほわ気分になって眠く・・・「じゃなくて！」魔法使いさんの手を振り払うように振り向いたら「っ！」私の顔を手の平で覆い隠されてビックリ。

「ユーノという子に伝えて。ジュエルシードは人助けの為に貰っていく。あなたのようにただ封印・保管するだけの、有効活用しない子には譲れない、って」

「・・・・あ、あの！」

「結界解除するから、あなたも早く元の姿に戻った方が良い。その姿で公衆の前に現れたくないでしょう？」

そう言われて、「レイジングハート！」すぐに学校の制服姿に戻る。その変身を解除した一瞬の隙で、「あ、あれ？・・・・あっ！」魔法使いさんは空高くまで飛び上がっていて、すぐに見えなくなっちゃった。

「結界が・・・・」

結界が解除されてすぐに『なのは！　大丈夫！？　なのは！』ユーノ君からの念話。そしてあちこちから聞こえてくる悲鳴やパトカー

に救急車のサイレン。

「やっぱり放っておけないよ・・・」

ジュエルシードが巻き起こした騒動をこの身で改めて体験して、その思いが強くなった。ユーノ君にとりあえず無事であることを告げて、私はお礼のリクエストの話に戻した。

『ユーノ君。さっきの続き。お礼のことなんだけど・・・。ジュエルシードの回収、私にも手伝わせて』

†††Ｓｉｄｅなのは⇒ルシリオン†††

はやてとの朝食途中で突発的なジュエルシード覚醒を感じ、はやてに謝りながら急いで全部食べ、ジュエルシード騒ぎに出張ることになった今朝。そこで見たのは、廃車同然にスクラップなユーノスローードスターー。ジュエルシードを取り込み、無人で暴走していた。願いは何なのか判らなかったが、事故車っぽいことから走り足りないとかもっと速く走りたいとか、その辺りのものに違いない。被害が拡がる前にジュエルシード回収に移り、そこで魔導師となっていたなのはと邂逅した。まだド素人だったためほとんどスルーしていたが、最後の最後で絡んできた。

――ジュエルシードは人助けの為に貰っていく――

情に訴えるようなことを言ってみたが、なのはがそれで止まらないことくらい百も承知だ。しかしお人好しはこの世界でも変わらない

な。とは言え、冷めたなのはというのは見たくないが。

「ただいま～」

「おかえり～、ルシル君」

自室の方から出て来たはやての膝の上には空になったはやて用の洗濯物籠。洗濯物を干し終えたばかりということか。私も自分の物を干さないとな。とその前に。テレビをつける。チャンネルを変えていると、早速ジュエルシード騒ぎのことが速報として放送されていた。

やはりユーノスロードスターは廃車だったもので、処分工程直前に工場から消えたというもの。運悪くジュエルシードが工場に落ち、車の願いを叶えてしまったんだろう。ニュースでは、誰かに盗まれそのまま暴走させたとか、ドライバーが乗っていなくて心霊現象だとか、と騒いでいた。

「ルシル君。もしかしてこの事故・・・魔法関係・・・？」

「ああ。ついさっきまで現場に居た」

「怖いなぁ・・・。ルシル君。あんま無茶したらアカンよ？」

「判ってるよ。それじゃ私も自分の洗濯物を干してくるよ」

テレビを消す前にチラッと見えた、車に衝突されて停車していた聖祥大付属小学校の送迎バス。なのはの家族がどんな反応をしている

か、想像するだけで怖いな。あとアリサとすずかも。

（とりあえずジュエルシードは回収できた。今日はそれで良しとするか）

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒なのは†††

『――そう。その魔導師がそんなことを・・・』

『うん。あ、でもだからと言ってジュエルシードを盗っちゃうのはどうかと思う』

学校帰り。お稽古のあるアリサちゃんとすずかちゃんと別れた私は今、真っ黒な魔導師さんのことを、ユーノ君に改めて話してる。ジュエルシードで人を助けたい。もしそれが本当でも、まずはユーノ君とお話しすることからだと思う。

『なのは。やっぱり危ないよ。なのはの話からしてかなり腕のある子みたいだし。ジュエルシードの回収を手伝いたいって言ってくれて、正直嬉しかったし頼もしかった。けどこれ以上は巻き込めないよ。魔導師戦は、ジュエルシードをどうにかするより危ない。今朝だってなのはのご家族の皆さん、なのはのことすごく心配して大変だったんだし』

『・・・それはそうだけど・・・』

今朝はジュエルシードの起こした騒動で大変だった。午前中は念の

ためっていうことで病院で検査。付き添いは、担任の道俣先生と大学を休んでくれたお兄ちゃん。お父さんも来たがってたってお兄ちゃんは言ってたけど、翠屋のこともあるから諦めさせたって。異常なしと診断された検査後は、自主判断で登校するか休むかどっちか選べるって先生が言ってくれて、私は学校に行くことに決めた。

――なのは。今日くらいは休んだ方が良いんじゃないか？　体は何ともなくても心に何か・・・――

けどお兄ちゃんが反対。お兄ちゃんを説得するのがもう大変だった。心配してくれるのは本当に嬉しかった。でも元気だからこそアリサちゃんやすずかちゃん、クラスのみんなに元気な私を見せて安心させたかった。そういう風な感じでお兄ちゃんの説得に成功して、私は先生の車で登校することが出来た。

『でもユーノ君1人じゃもっと危ないんじゃ・・・？』

『う〝っ。た、確かにそうだけど・・・』

『じゃあ私にも手伝わせて。それにね、もう決めたんだ。今朝のことで強く。ジュエルシードをこれ以上放っておくと、もっと酷いことが起きるかもしれない。それを止めることが出来る力を私が持ってるなら、なおさら手伝いたいって思えるんだ』

『・・・本当にいいの？』

『うん。あ、でも私、魔法使いとしてちゃんとやれるかどうか判ら

ないけど・・・』

あの黒い魔法使いさんを見て、魔法使いとして私がどこまで手伝えるか判らない。あそこまですごくなれってなると、正直無理でしょ、って思えちゃうんだけど。

『ううん。なのははすごいよ。確信がある。なのははきっと誰よりもすごい魔法使い――魔導師になれる』

『だといいな。それじゃあ改めましてだよ、ユーノ君。ジュエルシードの回収、私も手伝いたいです』

『・・・・ありがとう、なのは。本当にありがとう！』

こうして私はジュエルシードの回収を本格的に手伝えることになった。

――困っている人が居て、助けてあげられる力が自分に有るなら、その時は迷っちゃいけない――

お父さんの教えだ。困っているユーノ君が居て、助けることが出来る魔法の力を持つ私。だったらやらないと。

『あ、手伝いたいって言っておきながらなんだけど、学校と塾があるから、その・・・』

『うん、大丈夫、判って――あっ！』

『っ！　この感じ・・・ユーノ君！』

ジュエルシードが発動したのをピリッと感じた。『行こう、ユーノ君！』ユーノ君とは途中で合流することにして、ジュエルシードが在る場所に向かって駆け出す。発動場所は、とある神社。合流したユーノ君と石段を一緒に駆け上がって、あと二段昇るだけでいいってところで足を止めた。

「おぉ・・・ビックリ」

「あれは・・・！　まずい、原住生物を取り込んでる！」

神社の境内に、それはそれは大きくて黒くて目が４つあって牙がすごい、えっと・・・犬？さんが居て、グルルって唸ってた。呆然と眺めてると、なんか目を付けられちゃったみたい。４つの目が私とユーノ君に向けられた。もしこのままここに居て飛び掛かられちゃったりしたら、最悪階段から転げ落ちちゃう。

「とにかく広い場所に・・・！」

「うわっ？　なのは・・・！？」

ユーノ君を抱え上げて階段を昇りきったところで、犬さんが吠えながら大口を開けて飛び掛かって来た。だけどその前に境内を走って飛び掛かりをやり過ごして、ちょっとでも距離を開けるためにもっと走る。

「実体が有る分手強いから、まずは変身を！　呪文、憶えてるよね！？」

「大丈夫！　レイジングハート、お願い！」

≪はい、マイマスター！≫

呪文は思い出すことが出来たし、忘れてもないよ。でも、もう大丈夫。呪文をショートカットして変身するとユーノ君が「うそっ！？　えっ！？」ってちょっと混乱気味。それだけじゃないよ。授業の合間に、私は2つの魔法のイメージを固めた。けど実際に使えるかどうかはまだ自信ないけど。

（きっとやれる・・・！）

反転して戻って来た犬さんがまた飛び掛かって来た。

≪Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ≫

空に上がる。こう言ったらなんだけど、あの魔法使いの女の子に会うことが出来てよかったって思う。今日一日で、魔法使いとしてほんのちょっとだけでも成長できたんじゃないかなって思えるから。

「呪文無しで変身したことにも驚いたけど、本当に飛行の魔法を使えるようになったんだね・・・」

「レイジングハートのおかげ♪　本当にありがとう」

≪マスターの想いに応えたままですよ。私としても楽しい時間でした≫

そんな嬉しいことを言われた私はニヤけそうだったけどそれを抑えて、鳥居に昇って私に向かって飛び上がって来た犬さんを避ける。

「ユーノ君！」

「うんっ。えっと、なのはって飛行の他に何かイメージした魔法とかって・・・ある？」

ものすごい速さと高さの飛び掛かり攻撃をしてくる犬さんを避け続けながら、「えっと・・・」コソコソと耳打ちしてみる。すると「本当に！？　たった数時間でそんなことまで！？」すごく驚くユーノ君。でもユーノ君。その・・・耳元で叫ばれちゃったから耳がキーンて・・・。

「でもそれなら・・・。あの子のジュエルシードを停止させるには、魔力ダメージで強制停止させるのが良いと思う」

「え、魔力ダメージって何？」

「あとで詳しい説明するよ。でも今はなのはのアノ魔法を！」

とにかくユーノ君の言う通りの魔法を使おう。飛び掛かり攻撃を上昇して避けて、さらに高度を上げる。すると犬さんはさっきみたく

鳥居に飛び乗って、飛び上がるために力を後ろ足に籠め始めた。

「レイジングハート！　お願い！」

≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ　Ｓｅｔ　ｕｐ．　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ．　Ｓｔａｎｄｂｙ，　ｒｅａｄｙ≫

足元、それに砲撃を撃つためのモード（レイジングハート談）に変形した"レイジングハート"に取り巻くように４つの魔法陣が現れた。"レイジングハート"の先端に桜色の光が生まれてく。自分の魔法なのに綺麗なんて思えちゃう。

「ごめんね。痛いかもだけど、ちょこっとだけ我慢してね？　リリカルマジカル、空を翔け流れよ、無垢なる煌めき。聖なる光の下、浄化せよ！」

雄叫びを上げながら飛び上がって来た犬さんへ"レイジングハート"の先端を向ける。

「ディバイィィィン・・・！」

≪Ｄｉｖｉｎｅ…≫

「バスタァァァ―――――ッッ！！」

≪Ｂｕｓｕｔｅｒ≫

私の砲撃魔法、ディバインバスター。魔法使いの女の子が見せてくれた砲撃のままにイメージしてみた。でも"レイジングハート"が言うには砲撃魔法のほとんどが直射型っていうものみたいで、あの子の砲撃も私の砲撃も結局は似たモノ、同じ直射型砲撃になるみたい。

「すご・・・！　やっぱりすごいよ、なのは・・・！」

犬さんのお顔に当たったディバインバスターは犬さんを呑み込んで、犬さんごと境内に着弾した。真っ先に思うことは「やり過ぎちゃったよねコレ！？」で、もくもく煙が上がってて犬さんが見えない。急いで、でもちょっと警戒しながら境内に降り立ってみる。

「犬さ～ん。大丈夫かな～？」

やっと晴れてくれた砂煙の中、横たわってる犬さんと宙に浮いてるジュエルシードが見えた。駆け寄って犬さんの体を見る。ユーノ君が「ちょっと気を失ってるみたいだけど、うん、怪我はないよ」って教えてくれて、ホッと安心。

「ジュエルシードの方は・・・うん、休眠状態にされてる」

「えっとぉ、じゃ、じゃあ。レイジングハート。お願いできる？」

≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｍｏｄｅ≫

"レイジングハート"の形がジュエルシードを取り込むためのモードに変わった。えっと、ジュエルシードのナンバーを確認して「ジュエルシード、シリアル16。封印！」"レイジングハート"の中に取り込んだ。

「ふぅ。なんとか終わったぁ～」

「お疲れ様、なのは。でも・・・出て来なかったな、魔法使いの女の子。一度会って話をして、ちゃんと事情を聴いておきたかったんだけど・・・」

「そう言えばそうだね・・・。私ももう一回お話したいし、お名前も聴いてみたい」

キョロキョロ辺りを見回してみるけど、やっぱりどこにも居ないし来る様子も無い。待ってみようかと思ったんだけど、「そろそろ帰らないとダメかも」携帯電話から流れる着信を知らせるメロディ。ディスプレイに表示されていた名前はお母さん。「もしもし。お母さん・・・？」電話に出る。帰りが遅くてちょっと心配したから電話した、ってお母さんは教えてくれた。

「うん・・うん。大丈夫だよ、お母さん。・・・うん、今から帰るね。うん・・・それじゃ」

通話を切って、ポケットに携帯電話をしまう。私とユーノ君は、気絶したままの犬さんを近くに倒れていた飼い主さん（気絶してた）の近くに寝かせてから、帰路に着いた。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒？？？？†††

習い事であるバイオリン教室から帰る車の中、あたしは学校での出来事を思い返してる。今朝、先に教室に到着したあたしとすずか。なのはが来るまで、昨夜の動物病院のことについて話していた。どこの馬鹿がやったのか判らないけど塀や病院を壊した奴の所為で、フェレットが逃げたことについて。なのはの家で預かることが出来ることになったってメールを読んで喜んでいたのに。

――酷いことをする奴が居るわね、ホント！――

――あのフェレット、逃げちゃったみたいだけど。無事ならいいね――

ふつふつとわき上がる怒りを抑えているところに、なのはからメールが来た。なのはが乗ってたバスが事故に遭ったって内容だった。あたしはすごく怖くなった。本人から無事を知らせるメールが来たんだけど、それでも最悪な事態が起きていたかもしれないと思うと本当に・・・怖かった。

「よかったね、アリサちゃん。なのはちゃん、傷一つ負ってなくて。それに他の子や運転手さんも無傷だって」

「え、ええ。そうね。でもあれでしょ。無人って話なんでしょ、暴走車」

「うん。しかもまともに走れないくらいにエンジンとかダメだったみたい」

改めてそれを思うと、心霊現象みたいよね。でもきっとそれは違う。たぶんあの子たちが言っていたモノが原因かもしれない。最初は信じられなかったけど、実際に見ると信じるしかない、アノ・・・。

「あと、ユーノ君。すごい偶然だったよね。なのはちゃんが歩いているところでバッタリ会っちゃうなんて」

「う、うん。そうね。ホントに偶然よ」

一瞬別のことを考えていたからつっかえちゃった。すずかも「どうしたの、アリサちゃん？」って怪訝そうにしてるし。

「べ、別に。でも本当に良かったわ。なのははもちろんユーノも無事で」

話を逸らすためにそう返す。送迎バスに乗っていた生徒は全員念のためってことで午前中は病院で検査。その日は学校を休んでも良いってことになってたみたいだけど、なのはは登校してきた。そしてユーノの事を聞いた。けどあたし達にとってはなのはが無事かどうかが重要なわけで。でもユーノのことも知りたかったことだから素直に喜んだけどね。

「・・・うん。そうだね」

すずかには悪いけど、言えないものは言えない。親友に隠し事はしたくないけど、変に話して巻き込んだりしたくないから。それに、同じような理由でその子たちにも誰かに話さないように口止めもされてる。と言うかそれ以前に、

（なのは、すずか。あたし、双子の魔法使いを拾ったんだけど。なんて言っても信じてもらえるわけがないわよ）

魔法なんてファンタジー。そういうのが好きそうななのはやすずかに話して、その結果、

――やだなぁ、アリサちゃん。さすがに魔法は無いよ～――

――アリサちゃん。疲れてない？　ゆっくり休んだ方が良いよ――

頭の心配でもされた日にはあたしはもう立ち直れないわ。想像しただけで心が折れそうだし。結局なのはのこともあってあたしはバイオリン教室では失敗ばかりして、家に帰っては、

「「おお、おかえり、アリサ！」」

「・・・はぁ。ただいま。セレネ、エオス。あと出来ればあんまし大きな声出さないで」

家族や使用人にバレないようにリスとハムスターの姿を取らせてる、自称魔法使いのセレネとエオスの挨拶に、溜息を吐きつつ応じる。あぁ、そうそう。これだけは言っておかないと。大事な話をするつ

もりだから、２人が音量を小さくして観ているテレビを消す。

「「あああああああっ！　何すんのアリサ！？」」

「あんた達ねぇ、アニメなんか観てないで早くジュエル何とかってのを回収しなさいよ。たぶんジュエル何とかってやつの所為で、あたしの親友が酷い目に遭ったんだからね！！」

さぁ、お説教の時間よ！と意気込んで怒ってみれば、まずセレネが「言ったじゃん。変な仮面女の所為でまだ動けないって」とか言い訳しながらテレビをつけ直した。んで、セレネに比べれば結構まともな妹エオスが「ごめんね。けどホントに魔法使えないんだよ」って謝る。にしてもリスとハムスターがアニメ観て、あたしと喋ってるっていうのが何ともシュールな光景だわ。

「でもさぁ」

「ああもう。だったらこうしようじゃんか。アリサ。私たちと契約して、魔法少女になってよ」

突然セレネが馬鹿なことをのたまったから「・・・はあ！？」本気で呆れた。姉がそんなもんだから「ちょっ、セレネ！？」エオスだってすごく驚いてる。

（魔法少女って、そんな恥ずかしいマネが出来るわけ・・・！）

――魔法少女アリサ♪　ただいま参上！　悪さをする迷惑な子には、

バッチリお仕置きよ♪――

「・・・・ぎゃあああああああ！！　死ねる！　恥ずかしさで余裕で死ねる！！　魔法使いなんてものになったら、恥ずかしさであたし確実に死ぬわ！」

魔法使いになったあたしを想像しただけで、「ダメダメダメ！」恥ずかしすぎて死ぬ！　可愛い服は嫌いじゃないけど、それを着て魔法なんちゃらってなると完全にアウト。

「聞き捨てなりませんなぁアリサ！　魔法使いが、魔導師が恥ずかしい！？　それは全次元世界の魔導師に対しての暴言！　許すまじ！　こんの魔法の使えない、辺境世界の猿がぁぁぁぁあああああ！！」

ハムスターの姿してるセレネが、前足の指1本を立てて首を斬る仕草の挑発行為をしてきて、その上暴言を吐いた。

「カッチーン！　魔法が使えないだけで猿ですって！？　表出ろッ、おらぁぁぁあああああッ！」

「お、落ち着いてセレネっ、アリサっ！」

リスの姿のエオスに冷静になるよう言われて、あたしの日常はもう壊れちゃったんだと嫌でも思い知らされる。落ち込みたいけど今はそんな事よりセレネに謝罪させる方が重要だ。

「いいわよ。あたしが今からとっておきの魔法を見せてあげるわッ！

その魔法の効果は、セレネ！　あんたが絶対にあたしに謝るってものよ！」

「へぇー、面白いじゃん！　見せてみなよ！」

「・・・・セレネ！　あんた、これから一週間ご飯抜き！！」

ビシッとセレネに指差して言い放ってやったわ。

「ごめんなさい！！」

ほら、謝ったでしょ。兵糧攻めこそ最強の戦術よ！

Ｅｐｉｃ６恐怖！？　プールに巣食うは水お化け～８　ｏｆ　Ｐｅｎｔａｃｌｅｓ～

†††Ｓｉｄｅユーノ†††

「――そう。集中して。心の中に魔法のイメージを浮かべて、そのイメージをレイジングハートに伝えて」

「うんっ。そしてイメージに魔力を籠めるんだよね」

「そうだよ。それから呪文を唱えて、レイジングハートの先から一気に放出！」

今朝も早くからなのはとの魔法の練習中。なのはが本格的にジュエルシード探索を手伝ってくれることになってから数日。僕はなのはにお願いされて、学校に行くまでの時間を魔法の練習に費やすことになった。でもこれはとても良いことだと思う。

なのはは正直言って才能に溢れた天才肌の魔導師だ。なのはがこのままずっと魔導師を続ければ、かなりの高ランク魔導師になれるはずだ。けどきっとそれはないとも思う。ジュエルシード回収が終われば、なのはとお別れすることになるんだから。

「リリカルマジカル！　捕獲魔法・・・発動！」

"レイジングハート"の先に綺麗なピンク色（なのはが言うにはサクラ色）の魔力光が集束されていって・・・。その様子を見て、な

んかね、あ、これはダメかもって思ってしまってる僕が居るわけで。当たってほしくなかったそんな嫌な予想が当たった。制御しきれなかった魔力が暴発。

「にゃぁぁぁぁあああああああああああッ！？」

「なの――へぶっ！？」

ドカンと爆発した魔力に吹っ飛ばされたなのは。そんななのはの手から離れた"レイジングハート"があろうことか回転しながら僕を襲撃。爆発の勢いで飛来してきたデバイスの直撃なんて元の姿でも十分に痛いのに、今の僕は動物形態。小さいからこそ全身で受け止めることに。これがただ痛いなんてレベルで済むわけもなく。痛みを感じる前に一瞬で視界がブラックアウト。気が付けばそこは『花畑・・・？』だった。

『『いらっしゃ～い　』』

『うぇっ！？　セレネ！？　エオス！？』

花畑の中で、幼馴染である2人が僕に向かって大手を振っていた。ああ、これが夢なんだってすぐに理解できた。だってセレネとエオスは今もどこかで発掘の旅を続けているから。セレネとエオス。そう言えば怒ってたなぁ、僕がジュエルシードを探しに行くって言った時。

――ユーノの所為じゃないじゃん！――

――どうしても行くって言うなら私たちも一緒に連れてって！――

――ダメだよっ。危ないかも知れないんだから！――

――私たちも杖を手に入れたもん！　このクレイオスソウルを！――

――今ならユーノくらい軽くやっつけちゃうことも出来るんだからっ――

ジュエルシード発掘の後日、別の世界の古代遺跡で見つけることが出来た宝石――インテリジェントデバイスの"クレイオスソウル"。"レイジングハート"並に高性能。セレネとエオスが3日で僕以上に強い魔導師になったくらいだ。

『ユーノ♪』

『おいでおいで♪』

手招きされたから元の姿に戻っている僕は歩いて近寄っていく。で、いきなり『おらぁぁぁッ！』って跳び蹴りをしてきたセレネとエオス。突然の奇襲。普通なら避けれないけど、2人のこういった奇襲には慣れ過ぎてるから簡単に避けれた。でも、『浮気許すまじ！』なんて訳の解らない言い分で左右から頭を鷲掴みにされて、『痛たたた！』キリキリ締め上げられる。

『『復唱要求！　浮気はしません！』』

『い、意味が解らないんだけど・・・！』

浮気ってなんのことさ。本当に判らないからそう言い返したんだけど。それが気に入らなかったみたいで、さらに手の押しつけ力を強めてきたから、

『復唱します！　浮気はしません！』

耐えれなくなったからもう折れた。あれ以上締め付けられると、夢の中とは言え頭蓋が潰れてしまう。浮気云々って本当に理解できないけど、『それでよしっ』満足そうなセレネとエオスを見て、いつものように思考を放棄。と、後ろの方から何か声が聞こえ始めた。振り返ってみても誰も居ない。在るのは花畑。

「・・ユ・・くん・・・ーノ・・・ユーノ・・・ん・・・ユー・・・ユーノ君！！」

（なのは・・・？　僕を呼んでるのは・・・？）

なのはの声に耳を澄ますと、突然暗闇が目の前に広がって、次に真っ白になった。

†††Ｓｉｄｅユーノ⇒なのは†††

"レイジングハート"の直撃を受けて気絶したユーノ君だったけど、

何度か呼びかけたら「なのは・・・・？」ようやく気がついてくれた。危うく動物虐待・・・ううん、殺人？　殺フェレット罪？になるところだったよ。

そんなこんなで今朝の魔法練習は終了。本日の成果。捕獲魔法バインド、失敗。射撃魔法ディバインシューター、なんとか形になりました。砲撃魔法ディバインバスター・・・完璧。

「砲撃は簡単だったけど、バインドは難しいなぁ。攻撃と防御はなんとなくコツが掴めて来たんだけどなぁ～」

「なのはは放出系が得意みたいだからね。結構単純な砲撃は放出系そのものだから、簡単だって思えるんだと思う。集束や圧縮は・・・そうだね、元の魔力が大きい分、さっきみたいに微妙なコントロールが苦手なんだよ」

なんだろね。ユーノ君には悪気は無いんだろうけど、何か引っかかりを覚えちゃう。単純な砲撃は意識しなくてもコントロールが出来て簡単で。けど集束や圧縮みたいな微妙なコントロールは苦手で下手。それって「つまりは・・・私は、力任せで大雑把な性格ってこと、だよね・・・？」ボソッと呟いてみる。そんな私がこれからもちゃんと魔法使い・・・ううん、魔導師（っていうのが本来の呼び方みたい）になれるか、本当にちゃんと手伝えるのか心配だよ・・・。

「ううっ！？　ち、違う違う！　そうゆうことじゃないよ！」

「そうかなぁ・・・」

「そうだよっ！・・・それに僕も一緒に戦うから。魔力も回復してきてるし、結界や捕獲は僕が担当するよ。元々そっち系が得意なんだし。だからなのはは心配しないで。焦らずじっくり、そして確りと苦手な魔法をも使いこなせるように憶えていこう」

「そっか。うんっ。ありがとう、ユーノ君。あ、ふと思ったんだけど。私とユーノ君っていいコンビじゃないかな？　攻撃と防御、封印が私。捕獲と結界はユーノ君。苦手な部分をお互いにカバーすることが出来るんだよ」

そうだよ。私たちは1人じゃないんだ。一緒にジュエルシードを回収する。今は全然ダメでも、たくさん練習して、ユーノ君のお手伝いを出来るようになりたいなぁ。俯いてたユーノ君も「そうだね。2人なら何でも出来そうだよ！」元気になってくれたし。

「あ、もうこんな時間だ。帰ろっかユーノ君」

魔法の練習の終わりを知らせる携帯電話のアラームも鳴ったし、朝ごはんに間に合うように帰らないと。

練習場所に選んでるここ桜台登山道を下ってる中、「アリサちゃんからメールだ」こんな朝早くからメールなんて。携帯電話をポケットから出してメールを確認する・・・んだけど。

――なのは！　今日の放課後だけど、みんなで新しく出来たプールに行くっていう約束、憶えてるわよね？　今日は午前授業だし、そのままプールに直行したいから水着を学校に持って来て凸△÷〇㈱

――

「うにゃ？　文字化け・・・？」

どういう内容かは伝わって来るから困ることはないけど、メール打ってる時に何かあったのかなぁ・・？　それはそうと「プールの約束。忘れてたぁ・・・」魔法とかジュエルシードのことで頭がいっぱいになってて、すっかり忘却の彼方へ飛んでた。「にゃはは」って苦笑いしてると、ユーノ君に「どうしたの？　なのは」って訊かれたから、

「えっと、ユーノ君と出会う前に友達の子と約束したんだよ。今日、プールに遊びに行こうって♪」

携帯電話のメモリーに有る私とアリサちゃんとすずかちゃんが一緒に映ってる写真をユーノ君に見せる。写真を見せながら「右の子がアリサちゃん。左の子がすずかちゃん」大好きで大切な親友２人を紹介する。いつかちゃんと２人にユーノ君を紹介したいけど、ユーノ君が言うには魔法の無い世界で魔法を知るのはあまり良いことじゃないようで。

魔法を知って、そして扱える幾つもの世界には共通してそういう法律があるみたい。ユーノ君の場合は、自分が罰せられる覚悟があるっていうことで私に魔法を託したって言ってた。もしその時が来たら、私、ユーノ君のことを許してもらえるように頼み込むつもり。

（もし教えても良いって言われて、お話ししてみたとする・・・）

――はあ？　魔法ってあんたねぇ。リアルとファンタジーくらい分けないと可哀想な子になっちゃうわよ？――

――えっと。魔法とか本当に在ったら素敵だなって思うけど。でもね、なのはちゃん・・・魔法は、フィクションなんだよ？――

あはは。なんだか病んじゃってる子になってるよ私。とりあえずメールを返信しないと。危ないから立ち止まって「水着を持って登校、了解です♪っと。送〜信」メールを送信。楽しみだなぁ。私、運動音痴でも泳ぐのは好きだから。「そうだ。ユーノ君も一緒に行かない？」誘ってみる。

「ええっ！？　プールってあれだよね！？　溜め池っぽいやつで、専用の服着て入って、泳いじゃったり遊んじゃったりする！」

「そ、そうだけど・・・。あ、ジュエルシード探しはちゃんとするから」

「それはどうでもよくて！　ううん、どうでも良くはないんだけど！」

う〜ん、ユーノ君がどうしてそんなに混乱してるのかが判らないんだけど。あ、もしかして「ユーノ君って泳げないの？」考えられるのはそれだけど、それ以前にユーノ君・・というかフェレットって水に入れていいのかなぁ・・・？

「泳げないことはないけど・・・」

「じゃあ一緒に行こう♪」

「あ・・・。う、うん」

よぉし！　もっと楽しみになって来ちゃった！　早く放課後にならないかなぁ♪

†††Ｓｉｄｅなのは⇒アリサ†††

「・・・セレネ。あんたねぇ・・・」

あともうちょっとでなのはへのメールを打ち終えるっていうのに邪魔をしてきたセレネを睨み付ける。するとセレネは「私もプール行きたい！」とか言いだすし。あたしは大人しくしてるエオスを見た後にセレネを見て溜め息。

「ハムスター姿のあんたがプールに入ったりなんかしたら、一瞬でどざえもんよ？　嫌よ、あたし、人間形態のあんたの姿見てんだから。毎晩悪夢見ることになるわ。あんたの妹を見なさい。大人しくしてテレビ観てるじゃない。少しは見習いなさいよ」

「ええー！？　エオスもプール行きたいよね！？」

「プール？　アリサの言う通りだよセレネ。大人しく留守番してるのがベスト。動物形態で次亜塩素酸カルシウム漬けプールに入ったら、泳げない、溺れる、塩素中毒、最後にデスだよ。そもそも泳げないって判ってるんだから行ってもつまらないだけだよ。判れ、セ

レネ」

リス姿な妹(エオス)ですら理解できてるのに、「じゃあ元の姿に戻れるまで延期すればいいじゃん」この馬鹿姉はもう。誰があんたの都合を聴くっつうのよ。っと、「早速返信ね」なのはからの返信を確認。すずかにもなのはに送ったメールと似たような内容の奴を送って、「この話はこれまでね」切り上げて学校に行く準備を始める。

「あ、そうそう。アリサ。1つ年上のお姉さんから忠告。替えの下着、忘れちゃダメだぞ？」

「了解。エオスの方がお姉ちゃんって感じ。セレネ。見習った方が良いわよ」

「うっせぇ。もう、エオスはどっちの味方なのって感じ。普通はお姉ちゃんでしょうが」

エオスの忠告は素直に受け入れておこうっと。セレネの愚痴を聞くことになったエオスに心底同情。しょうがないわねぇ。可哀想なエオスを助けるためにいざ行動をと思えば、

「判ってないなぁセレネは。プールなんかより温泉だよ。この海鳴温泉ってとこ。行く予定があったら教えてよアリサ。絶対に私も連れて行ってもらうから。たとえ置いて行こうとしても荷物に紛れて行くからさ。私、セレネよりしつこいよ？」

「エオス。あんたもなわけ・・・ｏｒｚ」

結局はセレネと双子ってわけで。違いは惹かれるものがプールか温泉かってだけ。助けるのを諦め・・・ううん、やめた。あたしが帰ってくるまで大人しく留守番してなさいよ。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒はやて†††

輝く太陽。雲１つとあらへん青空。今日、わたしらは新しく出来たレジャープールを訪れた。わたしとルシル君。そして、「じゃあフェンリル。はやてを任せたぞ」わたしの車椅子を押してるルシル君が、ルシル君の隣を歩いてる綺麗な女の人、フェンリルさんに声を掛けた。フェンリルさんはホンマに美人さんで、長い黒髪に蒼い瞳、白い肌、なんでかメイド服を着てて、ここに来るまで男の人の視線を集めとった。

「はーい♪　それじゃあ、はやて。私がマスターに代わって着替えとか手伝うから安心してね～♪」

「うん、お願いします♪」

施設のエントランスホールで、ルシル君からフェンリルさんに車椅子の持ち手が変わる。フェンリルさん。ルシル君が言うには魔法使いのサポートをする動物らしくて、フェンリルさんの正体はものすごく大きな狼さんみたい。そんなフェンリルさんがどうしてわたしらと一緒に居って、こうしてプールに来てるか。それは昨日、わたしがふと漏らした独り言が始まりやった。

――プールかぁ。一度でええから行ってみたいなぁ――

――それじゃあ行ってみるか？　今朝のチラシで見つけたんだけど、市内に温水プールが在るそうじゃないか。しかもただのプールじゃなくてレジャー系だそうだし。スライダーとか面白そうだ。それに今日は平日。それなりにゆっくりと過ごせそうだと思うけど？――

――わたしもそのチラシ見たんよ。そやけどわたしの足って動けへんから当然泳げへんし。それに、その・・・水着の着替えとか難しそうやし――

――じゃあ着替えとかを手伝えればいいんだな――

――うん・・・って、ルシル君のエッチ！　さすがに女の子っぽい言うてもルシル君は男の子やで！！――

――早とちりしない！・・・最後まで聴け。ある魔法を試したいんだが、その試験ついでに男の私に出来ない手伝いをさせる子を召喚しようと思う――

――召喚・・・？――

そんな感じでルシル君が喚び出したんがフェンリルさんやった。そやけど今のフェンリルさんは魔法も使えんくって、一般人より身体能力が高いだけのただの女の人やってことみたいで・・・。ルシル君もフェンリルさんが召喚されてる間はあんまり魔法が使えんみたい。ルシル君に無茶ばかりさせて申し訳ないなぁなんて謝ったんや

けど、

――どの道いつかは試すことになってたんだから、気にしないでいい。はやての為になるんなら良いことだ――

そう言われたらもう何も言えんくなるわけで。そやからお言葉に甘えることにした。

「おーい」

わたしとルシル君とフェンリルさん、3人分の利用料金の支払いから戻って来たルシル君にもう一度「ありがとう」お礼を言う。

「ん？　ああ、どういたしまして。料金を払ってきたからもう入ってもいいよ。女子更衣室は向こうだから。はやて、フェンリル。集合場所は更衣室を出た後の合流所だから」

「イエス。マイマスター　」

「うん。また後でな～」

ルシル君と別れて、わたしとフェンリルさんは女子更衣室へ。更衣室は広々してて、車椅子利用者専用の着脱場所もある。バリアフリー万歳や♪　わたしの乗る車椅子を押すフェンリルさんは女の人からの視線をも独り占め状態。そんなフェンリルさんの手伝いのおかげで、着替えもスムーズに済んだ。わたしは薄いピンク色のフリルワンピースで、フェンリルさんは白いビキニ。どちらもルシル君が

用意してくれた物。

――私専用の保管庫に貯蔵されている物を、魔法の力で取り出しているんだ。便利だろ？――

とのことやけど。女の子物の水着って・・・。ルシル君。なんで持っとるんやろ？

「じゃあ車椅子はここに置いて行くことになってるから、プールへは私が抱っこして行くからね」

フェンリルさんにお姫様抱っこされて、プール側へ続く更衣室の出口から出たところで、わいわい騒ぎ声が聞こえてきた。

「なんか騒がしいけど。何かあったのかな？」

「男子更衣室の方からやね。あ、もしかしてルシル君ちゃう？　女の子が男子更衣室に入って来たとかなんとか～って♪」

「まっさか～♪」

冗談交じりに笑っとると、「どうしてダメなんですか！」ルシル君の怒声がハッキリ聞こえた。男子更衣室と女子更衣室の合流所に着くと、シャツの胸ん所に高町って書かれた名札を付けたお兄さんが、黒のトランクスタイプの水着を履いたルシル君の上半身を隠すようにタオルを翳しとった。

「ダメも何も下だけ履いて上を着ない――って、男物の水着ってところからしてダメすぎ！　ほら。女の子用の水着もレンタルされているから、急いで着替えようね。更衣室は女性の方を使って」

「私が女子更衣室に入ったら犯罪ですから！」

「いやいやいや。おかしいから、その言い分！　これ以上お兄さんを困らさないでくれ。そんなに可愛いんだから、変な人に襲われちゃうかもしれないんだよ？　ね？　良い子だから」

「男を襲う男って気持ち悪すぎますから！」

「いくらなんでもそんな嘘は通用しないぞ？　ささ。良い子だから着替えような」

「だったら確認すればいいじゃないですか！」

「コラっ！　水着を下ろそうとしちゃダメ！　男の人の目もあるんだから！」

「男同士なら問題ありません！と言うか、もし私が女の子であったなら、今やってることは痴女そのものじゃないですか！」

「ぶふっ！？　ち、ちち痴女！？　女の子がそんなこと言ったらダメだぞ！」

「じゃあお兄さん1人だけでいいですから見てください！」

「君はお兄さんを犯罪者にさせるつもりかい！？」

ちじょ？　その単語の意味判らへんけど、聞いとるこっちが恥ずかしくなるやり取りをしとるルシル君とお兄さん。どんどん騒ぎを聞きつけて人が集まって来てるし。それにしても、中学生くらいの男の子たちがルシル君を見て前屈みになっとるけど、なんなんやろ。

「フェンリルさん。えっと、どないしよう・・・？」

「う～ん。第三者として観てる分には面白いけど、さすがにこれ以上マスターを見世物にするのもちょっと。よし。はやて。マスターを助けて来るから・・・はやては待ってる？　晒し者になっちゃうし」

「晒し者って・・・う～ん。ううん。一緒に行く」

これから一緒にプールを回るんやしな。連れやってことが知られるんが今か後かの違いだけや。なんでか男の人たちの小さな歓声を受けてるフェンリルさんにお姫様抱っこされたまま、わたしはルシル君のところへ。

「そこのお兄さん。申し訳ありません。その子、我々の連れなのですが、確かに男の子なので。だから水着はそのままで良いんですよ」

「え？　あ、ええ？・・・本当に男の子・・・なのかい？」

「もちろんです！」

困惑する高町お兄さん。初見やったら誰でもルシル君が女の子やって間違えると思う。フェンリルさんの説得のおかげで、ルシル君もようやくお兄さんから解放されたんやけど・・・。やっぱりどんよりしとる。さっきから「大人の姿に変身しておけばよかった」ってブツブツ呟いとるし。

そんなルシル君に「まあまあ。せっかく遊びに来てるんだし、楽しまなきゃ損だよマスター」フェンリルさんが笑いかける。ルシル君は一度わたしの顔をチラッと見て、両頬をパシッと叩いた。

「・・・そうだな・・・。もう忘れよう！　よしっ。はやて、どこのエリアへ行こうか！？」

「（ホンマにルシル君は優しいなぁ・・・）そうやね～。いっぺんスライダーに行ってみたい！」

「スライダーだな！　フェンリル！」

「はーい！　フェンリル、はやて、いっきま～す♪」

「おわぁ？　フェンリルさん、走ったらアカンよ！」

フェンリルさんに後ろから抱きつかれながらのスライダー初体験。頭を大きなおっぱいで挟まれてちょう苦しかったけど、スライダーの爽快感は最高やった。スライダーの後は、浮き輪を借りて流れるプールでゆったりのんびり遊泳。

「フェンリルさんってホンマに狼さんなんやな。泳ぎ方がその・・・」

犬掻きをしながらわたしとルシル君の浮き輪を追っかけてくるフェンリルさん。狼さんっていうよりわんちゃん。体は大人やのに、中身はわたしみたいな子供って感じや。

「私はどんな泳法でも出来るよ。なんならやって見せようか♪」

「流れるプールで本気泳ぎはご法度だ、フェンリル。大人しく漂ってろ」

「は～い。そういうわけだから、私の華麗な泳ぎ姿はまた今度ね」

「・・・うん♪」

また今度。またみんなでプールに来れるんやな。そう思うとホンマに嬉しくて。それやのに涙が溢れて来て。嬉し涙やけど、あんま見られたくないから、ルシル君とフェンリルさんに気付かれる前にプールの水でパシャッと顔を洗う。

「ぷはっ。プールもええけど海にも行ってみたいなぁ～」

「海か。・・・そうだな」

「海なら派手に泳いでも大丈夫だよね。そうしたら本気で泳いでや

る！」

「バタ足で何mと水柱を上げない程度で頼むぞ」

「それじゃあ本気じゃないよマスター」

「お前の本気遊泳を一般人が見たらミサイル着弾による爆発かと思われるだろうが」

「じゃあちょこっと本気で泳ぐ。はやて。はやての脚が動くようになったら、私とマスターで泳ぎ方教えるね♪」

フェンリルさんの何気ない一言。原因不明なわたしの両足マヒ。治るんやろか？　たった今までは・・・ううん、ルシル君と出会う前は別に治らんでもええとか思うてた。そやけど、ルシル君と出掛ける度、そんで今フェンリルさんの笑顔を見て、本気で足を治したいって思える。

そやからわたしはフェンリルさんを真正面から見て、

「そん時はお願いします♪」

もちろんルシル君にも同じようにお願いした。そんでわたしらは流れるプールを2周くらいしてから上がる。自然と出る話題は、次はどこに行くかってことや。スライダーに流れるプール。今日の行動の決定権はわたしにあるみたいで、ルシル君とフェンリルさんの視線を一手に引き受ける。

――広域封時結界――

「っ！・・・・あ、ごめん。ちょっとトイレに行ってくる。フェンリル。はやての傍に居ろ」

「うん。わたしらはここら辺で待っとるから～」

「お任せを。我が主。我が身命に代えてはやてを御守りします」

（ん？　なんでフェンリルさん、そんな堅い言い方なんやろ？）

ルシル君が屋内プールの方に向かって走って行くのを、わたしはじっと見送った。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒なのは†††

ジュエルシードの発動を感じてユーノ君がいち早く結界を張ってくれたおかげで、騒ぎが広がる心配がなくなったんだけど。でも切り取り範囲が広いとかで、結界内に取り残されちゃった人も少なからず居るってことになっちゃった。急いでボイラー室から力を感じる場所、屋内プールに向かったんだけど・・・。

「きゃあああ！？　何なのよコイツぅ！」

「水着を脱がそうとしる！？　いやぁぁあああああ！」

「アリサちゃん！　すずかちゃん！」

「見ちゃダメだ、見ちゃダメだ、見ちゃダメだ」

姿を現していたのは水のお化け。アレもジュエルシードの影響みたいなんだけど。その水お化けがやっているのは、「え～っと・・・」なんとも説明に困る行為で。水お化けはあろうことか触手で捕まえたアリサちゃんやすずかちゃん、他の女の人の水着を脱がそうとしてた。

しかも水着を脱がせたら脱がせたで、ポイって放り捨てるって暴挙に出てるし。悲鳴を上げながらも水お化けに「返せ馬鹿ぁぁあああ！」って怒鳴りまくるアリサちゃんや、「酷いよ。脱がしたらポイって捨てるなんて・・・」今にも泣きそうなすずかちゃん。

「ど、どういうこと・・・？」

「推測になるけど。あのジュエルシードを発動させた人、たぶん捕まったっていう更衣室荒しの人の願いと興味が形になったもの・・だと思う」

お兄ちゃんから聴いた。女子更衣室荒しの変態さんがついこの前捕まったんだって。でも、それ以降も服や水着が盗まれちゃうってことが度々あるって。

「つ、つまり、それって・・・」

「うん・・・。女の子の服を集めたいって願いの下に動いてるって事に・・・」

だから女の子から水着を剥ぎ取って、後に残る女の子そのものには興味が無いってわけかぁ。ちょっとお近付きになりたくないなぁ。でもこれは早く封印をしないと、怒りすぎたアリサちゃんの頭の血管とか切れそう。

「・・・って、こっちに来ちゃったぁぁあああ！」

大声を出しちゃったことで私にも気付いた水お化けが、触手のような物を伸ばしてきた。水着を脱がされる光景を見た後、アレに捕まるのだけは心の底からご遠慮したいわけで。申し訳ない気持ちでいっぱいなんだけど一時撤退。バリアジャケットに変身できる場所を探す。

「きゃあ！？」

「なのは！？　コイツ、速い・・・！」

足首に纏わりつく水の触手。抵抗する間もなく吊し上げられて、別の触手が私から水着を脱がそうと迫って来た。今すぐ変身すれば、裸にされるのだけは回避できる。だけどその代わり魔法を見られちゃうことになる。結局、「ちょっ、待って！　にゃぁあああああ！！」私もアリサちゃん達みたく水着を脱がされちゃったよぉ～（泣）。しかも同じようにプールに放り投げられるし。急いで立ち上がって水面から顔を出す。

「なのは！」「なのはちゃん！」

水お化けの本体が動き出すと一緒にプールの水が引き潮みたいに引いてく。私たちの居るところの水が膝下くらいにまで引いた時、

――深淵（ラフェルニオン）へ誘いたる微睡の水霧――

プールの水が爆発して「今度は何なのよ！？」「爆発！？」悲鳴と一緒に屋内プールに充満する水煙。ユーノ君が『なのはっ、コレ魔法だ！　魔導師が近くに居る！　気を付けて』って念話を送ってきた。そう言えばユーノ君はどこに・・・あ、ちょっと離れたところで、前足で自分の目を隠してた。ぐるりと周りを見ようと首を動かして、真っ先に視界に入るのは「アリサちゃん！？　すずかちゃん！？」の2人や他の人たちがパタパタ倒れ始めた光景だった。

――フローター――

次に銀色の光がアリサちゃん達を覆ったと思えば体がフワリと浮いて、プールサイドの上に寝かせていった。

『対象を眠らせる魔法！？　それに、浮遊魔法（フローター）！・・・でも今なら。なのは！　今のうちに変身を！』

「あ、うん！　レイジングハート！」

変身を終えて改めて周りを見回すと、「あの黒い子・・・！」がこの施設の出入り口に居た。でも様子が変。苦しそうに胸を押さえていて、壁にもたれ掛ってる。駆け寄りたい気持ちがあったけど、

『なのはっ、今は封印をお願い！　外に出られたら厄介だ！』

『・・・うん！』

確かに今は水お化けに専念しないとダメだよね。"レイジングハート"を水お化けに向けると、変な雄叫びを上げながら逃げようとし始めた。

「えっと、趣味・興味は人それぞれですが、人さまに迷惑をかける変質的行動は良くないと思います！」

変態さんはお断りです！　"レイジングハート"をシーリングモードへ。そして意識を集中。

「リリカルマジカル。封印すべきは、忌まわしき器！　ジュエルシード、シリアル・・・え？」

いつもなら浮かび上がるはずのシリアルナンバーが浮かび上がらない。私とユーノ君はちょっぴり混乱。でもとりあえず「封印！」を行ってみる。水お化けは魔力を失って破裂。今まで盗られた下着とか水着がたくさんバラ撒かれた。でも「ジュエルシードが無いよ、ユーノ君！」どこにも無い。やっぱりおかしい。

「反応も・・・消えてない！　もしかして・・・分裂してる！？」

「ええ！？　じゃ、じゃあ反応の在る場所へ――えっ！？」

突然何かを壊すような大きな音が後ろからして、そちらに振り向いてみれば関係者以外立ち入り禁止って書かれた扉を壊して出て来た水お化けの小さい版が幾つも居た。そして黒い子を一斉に襲ってた。黒い子は伸ばされる触手を避けては殴って、でも避けきれなかったモノが直撃。私のところにまで弾き飛ばされてきた。私は避けようとはせずに受け止める態勢を取る。でも黒い子は途中で態勢を整えて自力で着地。

「あのっ、大丈夫！？」

「はぁはぁはぁはぁ・・・。大丈夫。あなた、アレの封印が出来るんでしょ？　手伝って」

「でも、そんなフラフラじゃ・・・！」

黒い子は「前衛は任せて」そう言って、囮みたいなことをし始めた。おかしい。前に見た黒い子の魔法なら、きっと私の手伝いなんて要らないはずなのに。それにどうしてあそこまでフラフラなのかも気になるし。あれじゃあんまり長く動けないよ。

「なのはっ。バスターかシューターで――」

「バインド！　バインドが使えたら使って！　これだけ速いと単発射砲撃は避けられる！」

「「え・・・？」」

捕獲(バインド)魔法。今朝の練習の時に失敗した魔法。そのこともあってユーノ君から「無茶だ！」って反対意見。でも私は「やってみる！」あの黒い子の言葉は、どうしてか私のやれるって思いを強くしてくれる。イメージを魔力に乗せて。集中、集中、集中！　捕獲の魔法。私の・・・捕獲魔法。動きを止めて、1つに纏める・・・捕獲、そして固定の魔法。イメージは・・・固まった！

「リリカルマジカル！・・・あの、離れて！」

囮になってくれてたあの子に告げる。黒い子は小さく頷いた後、

――ソニックムーブ――

一瞬で私とユーノ君のところにまで移動してきて、それにビックリしてボーっとしちゃった。だから「早く！」その子の声に怒鳴られた。「ごめんなさい！」謝りながら頷き返して、

「行きます！　リリカルマジカル・・・。レストリクト・・・ロック！！」

捕獲魔法を発動させた。輪っかのバインドでミニ水お化けを全部捕まえることが出来た。うん。イメージ通り。発動から完成までの間に私が指定した領域から出なかったモノ全てをその領域内で固定、バインドで捕獲して移動や動きを封じる魔法レストリクトロック。満足してると、「ジュエルシード・・・！」黒い子が現れたジュエルシードのところへ向かおうとした。

「なのはは封印！　そこの子！　ジュエルシードは渡せない！」

――チェーンバインド――

ユーノ君が作った3本の魔力の鎖が、黒い子の両腕と腰に巻き付いた。手伝ってくれて嬉しかった。

「ごめんね。だけどジュエルシードはやっぱり・・・」

ユーノ君の物だから、渡すわけにはいかないの。"レイジングハート"をシーリングモードにして、改めて封印作業に移る。

「ジュエルシード、シリアル17！　封印！！」

封印完了。"レイジングハート"の中に取り込んで、今回の騒ぎはこれで完全に終わり。ううん。まだだ。黒い子のことが残ってる。取られちゃった水着とかが持ち主の元に戻っていくのを横目に、私とユーノ君は黒い子と対峙する。

「僕はユーノ・スクライア。ジュエルシードを発掘した、ミッドチルダの魔導師だ」

「わ、私は高町なのは。この世界の住民で、ユーノ君の魔法の力を借りて、ジュエルシード回収の手伝いをしてるの」

自己紹介を終えると、「・・・テスタメント。それが私の名前」黒

い子も名前を言ってくれたんだけど・・・。名前らしくない名前。テスタメント。英単語にあったような気がする。やっぱり偽名、だよね・・・？

「じゃあ、テスタメント・・？　君がジュエルシードを集めている理由を教えてほしい。なのはから一応聞いたけど、それが事実かどう――」

「もちろん事実。ジュエルシードの力を使って、人ひとりの人生を助ける。悪用はしない。それだけは信じてもらっていい」

そう言った黒い子は鎖を砕いた。ユーノ君が「バインドブレイク・・・！？」って驚きを見せる。黒い子は「今日のところはジュエルシードはあなたに預ける」って言って、ブツブツ何かを呟いた後に右手の平を私たちに向けた。創り出されるのは銀色に光り輝いている魔力球。攻撃だとしたら、今のユーノ君に防げるか判らない。だから私は前に躍り出て「待って！」防御魔法の発動を準備した時、黒い子がその魔力球を殴った。

――クラッシュホール――

すると魔力球が炸裂して、目が開けられない程の光が溢れて、それに耳を塞がないといけないくらいの大きな音が生まれた。

「何コレぇぇぇぇぇぇッ！？」

『うぐ、爆発的な光と音による視聴覚封じの魔法だ・・・！』

光と音が治まったことが判って目を開けると、そこにはもう黒い子は居なかった。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒ルシリオン†††

ジュエルシードが発動する日が今日だったとはな。フェンリルを召喚したことで大した戦闘は出来ず、ジュエルシードをなのはに取られた。先の次元世界ではなのは組が回収した物だから元より強奪しようとは思っていなかったが、目前に在るとつい取りたくなった。ダメだな。少しは自重しなければ。

「あ、おーい！　ルシルく～～～ん！！」

「マスタ～～～♪　こっちだよ～～～♪」

屋外のプールで、浮き輪でプカプカ浮いているはやてとフェンリルが大手を振って私を呼ぶ。プールサイドを早足で歩き、「待たせた」はやて達と合流したら、「お疲れ様や、ルシル君。怪我とか大丈夫やった？」なんて気遣いの言葉を掛けてくれた。

「バレてたか？」

「うん。フェンリルさんの堅い言い方が変に思うてな」

そう言えば私を送り出してくれる時、堅苦しい言い回しだったな。浮き輪に乗っているフェンリルが「私のキャラじゃなかったか～」

そう苦笑い。

「ああ、万事解決したよ」

とりあえずはやてを安心させたいがために笑顔を作る。

「そっか。それやったらもうちょっと遊んでいかへん？」

「もちろんだ♪」

笑顔になったはやてと、常にニコニコなフェンリルと一緒にとことん遊んだ。途中、なのは達と幾度かニアミスしたが、不自然にならないように彼女たちから距離を置くように行動を心がけた。はやてには悪いが、出来うる限りこの時期で友好関係を築くのはやめておきたい。

「ルシルく～ん♪」

「（ごめんな、はやて）どれ。こうしてみると結構面白いぞ」

何も知らずにいるはやての笑顔が眩しすぎて。私がちっぽけに見えてしまう。本当に嫌な男だな私は。そんな風なことを考えるのを止め遊ぼうと決め、はやての掴まっている浮き輪を掴みんで「ほら」と浮き輪を思いっきり回す。浮き輪の中に居るはやては当然「おわわわっ」浮き輪の動きに合わせてクルクル回る。どうやらお気に召してくれたようで、それから何度か回してやった。

（よかった。今日、プールに連れてくることが出来て）

私としても十分に楽しめたし、今日は実に良い日だった。

Ｅｐｉｃ７金の閃光・運命来たる～Ｔｈｅ　ＣｈａｒｉｏＴ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「ふわぁ・・・っと。まったく。少しは自重してくれジュエルシード・・・！」

あくびがさっきから止まらない。時刻は午前２時半ちょっと過ぎ。こんな遅い時間に覚醒するジュエルシードに苛立つ。愚痴を零しながらやって来たのは市立公園。面積は並の体育館５棟分ほどあり、夏には水浴びが出来るような人工池も在る。

ジュエルシードの気配を探りつつ彷徨っていると、「っ！」突然近くから強力な魔力が発せられた。片腕で庇（ひさし）を作って発光による視界ダメージを減らす。と、視界がグニャリと歪み、「時計の文字盤・・・？」のようなものが浮かび上がったのが微かに見えた。そして気が付けば、

「・・・・は？　公園の外・・・？」

公園の入り口に佇んでいた。園内から園外へ知らずに移動。ということは、まさかの強制転移！？　今回のジュエルシードは、何かをきっかけとして対象を強制転移にて排除するようだ。前回ではなかった覚醒効果だな。

（しかし・・・本当に転移か？　転移特有の浮遊感が無かったが・・・）

だからと言って諦めるつもりもない。何せこのジュエルシードは２２から３１までのイレギュラーナンバーに違いないのだから。しかしどうしたものか。とりあえずは「転移の条件を特定しないとな」そこからだ。園内に戻り、先ほどジュエルシードの力が発動した地点へと向かう。

（近づくほどに徐々に力が強まっていくのが判るな・・・）

発せられる魔力にピリピリと体が痺れる感覚を得る。ここからは警戒を強め、一歩一歩ゆっくりと進んで行く。ジュエルシードが在ろう場所から約５ｍ。そこで歩みを止める。直感が告げてくる。あと数十ｃｍほどでおそらく転移可能範囲に入ると。目を凝らし、ジュエルシードの位置を探ると、

「・・・アレか・・・！」

芝生の上に放置されている古びた懐中時計。ジュエルシードを取り込んでなお形が変異していない上にその力は今まで以上。よほどの思念があるのだろう。パッと見だが装飾が凝っていて高価そうだし、何より年季が入っていると思われる。

接近が出来ないなら、遠距離からの砲撃で強制停止させるのみ。念のために数ｍと離れ、懐中時計に向け左手を翳す。術式選定。ランクは中級。遠距離系。魔導砲撃。属性不要。

――煌き示せ（コード）、汝の閃輝（アダメル）――

放つは魔法に変換してある砲撃アダメル。アダメルは一直線に懐中時計へ向かい、そして「またか！」強烈な発光、視界の歪み、文字盤の浮上。アダメルの砲線が歪み、潰されたかと思えば一瞬のうちに消滅した。残るは静寂のみ。あまりの呆気なさにポツンと佇む。出て来るのは溜息だけだ。

「魔法でもダメなのか。随分と厄介だな」

もう一度転移範囲ギリギリまで接近を試みたところで、「なに！？」背後に魔力反応。しかも攻撃の魔力。あまりに突然の出現だったため、「くそ・・・！」回避はおろか防御も出来なかった。出来たのは首だけを振り向かせることだけ。背後から私を襲ったのは砲撃の魔力光は銀色。術式名はコード・アダメル。そう、私が先ほど撃ったアダメルだった。

「ぐっ・・あああああああ！！」

自分が撃ったアダメルの直撃を受け、私は懐中時計を飛び越え、十数mと先に在った人口池にダイブ。膝下辺りまでしかない水量だからこそ落下の衝撃は抑えきれず、底に全身を強打。人工池内を何度かバウンドして・・・「がはっ・・・！」ようやく止まった。

「いたたた・・（恐れ入った・・・。これは空間転移じゃなくて時間移動だ・・・）」

魔法での転移ならすぐに気付ける。そこには必ず気配も魔力反応もあるからだ。だが、時間移動に関してはさすがの私も経験が少ない

ために察知するのが難しい。

「接近したモノ全ての時間を戻すジュエルシード、か・・・」

痛む体を労わることもせずに私は立ち上り、人工池から上がる。全身がびしょ濡れで気持ち悪いが、万が一なのは達が来たらと考えると脱げない。仕方がないと諦めてこのままで回収を続行だ。とは言え、「さて、どうするか」悩みどころだな。出来ればなのは達やスクライア姉妹が来る前に片付けたい。が、手遅れだったようだ。空に2つの魔力反応。

（しかも・・・この魔力は・・・！　まさか、もう出て来るのか・・！？）

あまりに懐かしく、絶対に忘れることも間違えることもない彼女たちの魔力が、この場に向かって降下してくる。頭上を見上げ、肉眼で捉える、闇夜に紛れるほどの黒衣、しかしそれを照らすかのような美しい金の髪。手にするは雷光の刃を持つ戦斧。彼女の隣にはオレンジ色の毛並みを持つ大きな狼が1頭。すでに私の姿を捉えているようで、かなり殺気立っている。

（フェイト、アルフ・・・！）

地面に降り立った彼女たちとジュエルシードを挟んで対峙する。アルフはいつでも私に飛び掛かるほどに後ろ足に力を籠めている。そんなアルフに待ったをかけるように彼女の頭を撫でるフェイトは懐中時計を一度見やった後、私を見詰めてきた。

（またその虚ろな瞳を見ることになるとはな・・・）

フェイトの母、プレシアへの怒りが再燃してくる。今すぐにでもフェイトを抱きしめたい。そんな想いに駆られてしまう。だがそれは出来ない。この世界のフェイトは、私の愛したフェイトじゃない。そしてこれからも愛することが出来ない。心を鬼にして、打倒するべき競争相手だと思わなければ。

「ジュエルシード。私たちが頂いていきます。抵抗しなければ攻撃しません。でも、抵抗するなら・・・仕方ないけど・・・」

「あたしのマスターは強いんだから、負けて泣いちまう前に大人しく引き下がりなッ！！」

本心では戦いたくないんだろう？　フェイト。でもな、今回は引き下がれない。構えを取ると、判り辛いがフェイトの表情が曇った。アルフは「馬鹿な奴」と鼻で笑い、人間形態へと変身した。

「あたしが相手してやるよ。仮面野郎」

そう言い放って突撃してきたアルフだが、「なんだいこれ・・・！？」ジュエルシードの力が発動して瞬時に消された。フェイトはその状況に呆け、だがすぐに「アルフ！？」キョロキョロと辺りを見回しながらジュエルシードに近づいた。
またも力が発動。発光、歪み、文字盤の浮上。フェイトもまた一瞬にして消滅した。そう間もなく「どうなってんだい！？」アルフと、

「アルフ！？　え？　強制転移された・・・！？」フェイトの戸惑いに満ちた声が頭上から聞こえた。

「このジュエルシードの特性だよ。接近したモノ全ての時間を戻して、疑似的な強制転移を起こすんだ」

再び降り立った２人に説明する。女物に変えている私の声にまずアルフが「女なのかい！？」と驚愕。そしてフェイトが「時間を戻す・・・！？」アルフとは別に、正しい意味で驚いている。

「このジュエルシードは私が頂く。邪魔をするなら・・・打ち倒す」

「「っ・・・！！」」

現状で扱える魔力を解放すると、２人が身構えた。

――知らしめよ（コード）、汝（ゼルエル）の力――

まずは自己強化。陸戦機動力では確実にフェイトに劣っている私は、少しでも身体能力を底上げしなければ負ける。ジリジリと摺り足で接近。あちらはアルフが前に出、フェイトが後方にて周囲に魔力球、フォトンスフィアを４基と展開。フォトンランサーで違いないだろう。誘導性能が無い分、弾速が速く連射も出来る。初見ではまず回避は出来ないだろうが、残念ながら私は君の魔法を知り尽くしている。

「（それが、私を勝利へと導くカード・・・！）行くよ・・・！」

地を蹴り、一足飛びでアルフへと最接近。すかさずフェイトが「ファイア！」ランサーを射出。最小限の動きで真正面から全弾を回避する。子供の小さな体だからこそ出来る芸当だ。これで虚を突いたかと思えば、「アルフ！」フェイトは全くと言っていいほど動揺を見せなかった。アルフとて「アイツに比べりゃどうってことないね！」と、私と誰かを比べ、獰猛かつ余裕の笑みを見せ、同様に突っ込んで来た。

「はあああッ！」

鋭い上段蹴りを繰り出したアルフ。しゃがみ込むことで避け、足払いをかけてやる。アルフは「わわっ」焦りを見せた。立ち上がりと同時に魔力を纏わせたアッパーを繰り出す。体勢を崩している今なら確実に当たるだろう。

だがその途中、アルフは転倒を耐え「おらよっ！」先ほどの蹴りが踵落としとなり、攻撃動作中の私を襲撃。回避が出来ないため両腕でガード。「ぅぐ・・・！」その威力に堪らず片膝をつく。その直後、アルフは地を蹴ってもう片方の足を蹴り上げてきた。

「この・・・！」

腹を思いっきり蹴られ、大きく飛ばされる。ヒット直前になんとかシールドを張れたから良かったものの、遅れていたら腹を蹴られたことで隙だらけになってしまっていた。

――ブリッツアクション――

「はぁぁあああああああッッ！」

――サイズスラッシュ――

着地したばかりの私の後方へ瞬間移動してきたフェイト。サイズフォームの"バルディッシュ"に生まれている雷撃の魔力刃を振るってきた。刃が到達する前、振り向きざまと同時にフェイトの懐に飛び込み、前腕をフェイトの首に掛けて押し倒す。

「ぐっ・・・！」

「フェイト！」

「動くな！　動くと・・・撃つ」

フェイトに馬乗りになっている私へ駆け寄ろうとしたアルフを制止するために、フェイトの顔面へ向け魔力球を1基発生させる。

「退け。退けば見逃す。退かなければ・・・トドメだ」

撤退勧告を提示する。どうせ聞かないだろうな。この時代のフェイトは退くという言葉を知らない。案の定、「放せ・・！」ジタバタと暴れ始める。しかしアルフが「フェイトっ、動いちゃダメ！」なんて冷静な判断を下す時点で・・・

（やはり私の知る次元世界とは歴史が違うな）

そう思い知る。私の知っているアルフなら、何が何でもフェイトを助けようと突っ込んで来そうなものだ。足掻くのを止めないフェイトは、私たちの頭上に魔力球を5基と発生させ、オウンダメージ覚悟の離脱を試みようとする。

私の口から出るのは「はぁぁ」溜息。フェイトに標準を合せていた私の魔力球を消して、フェイトの上から退く。困惑しながらも急いで立ち上がってアルフのところにまで駆け寄ったフェイトに「どうして・・・？」と訊かれた。

「放せって言ったのはあなたでしょうが。だから放した」

問いに答えてやった。信じられないといった風に目を見開くフェイトとアルフ。解放した理由はもう1つある。あの2人が時間移動の力を有するジュエルシードをどう攻略するかを見たい。彼女たちが頑張って色んな策を試せば試す程、真の解決法へと絞られていくし、私の魔力消費を正解ルート一択だけで済ませることが出来、彼女たちは消費しっぱなしで終わるだけ。だから「やってみれば」そう言い放ってジュエルシードからさらに距離を取る。しかしそれにしても・・・

（女に見間違われるのが嫌いなクセして真似る私とは是如何に・・・）

正体を隠すためとは言え声や口調を女物にする。今さらながらにそんなことを考え、人知れず落ち込む。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒フェイト†††

私たちと同じようにジュエルシードの回収をしようとしていた漆黒の魔導師。グランフェリアに比べればどうってことないけど、強いことは強いと思う。警戒してるアルフに『そのままその子を見張ってて』そう念話を送って、私はジュエルシードの封印に臨む。あの全身が真っ黒な子は言っていた。時間移動の能力を持つジュエルシードの暴走体だと。

（どう攻略すればいい・・・？）

接近したら問答無用でどれくらいの時間かは判らないけど過去に戻される。

「（なら魔法は・・・？）バルディッシュ。フォトンランサー」

≪Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ　Ｍｕｌｔｉｓｈｏｔ≫

フォトンスフィアを４基展開。「撃ち抜け、ファイア！」一斉に放つとジュエルシードを取り込んでる時計が発光した。周囲の空間が歪んで、時計の文字盤が浮き上がった。よく見れば、長針と短針が反時計回りにクルクル回ってるのが判る。

ランサーは歪みの中へ消えて行った。待ってもランサーが出て来ないところを見ると、発射されていない時間にまで巻き戻されたんだと思う。ランサーの発動の為に消費したはずの魔力が元に戻ってるし。

（射撃魔法じゃダメだ・・・）

だったら。"バルディッシュ"をデバイスフォームに戻して、先端を時計に向ける。威力だ。きっと威力が足りないんだ。・・・と、ふと気づく。

（見られてる・・・？）

あの黒い子が私の動きを見てるのが。仮面の所為で顔も目も見えないけど、確実に見られて・・・観察されてる。あまり手の内を見せたく・・・あ、そうか。どうして私に封印を譲ったのかが判った。

（私の、魔導師としてのレベルを測るため・・・？）

だとすれば、今の私はかなり不利なことをさせられているんじゃ・・・。今後の争奪戦のことを考えれば、一方的に私の得意な魔法などを知られるのはまずい。準備しようとしていた魔法、サンダースマッシャーの構築を破棄。私が魔法を破棄したことで『どうしたんだい？　フェイト』ってアルフから念話。

『私、あの子に観察されてる。下手にカードを切れない』

『ええ！？　あ、そうか。アイツ、なんであんなに余裕なのか不思議だったけど。汚いマネをする奴だねぇ・・・。じゃあやっちまおうよフェイト！　あんな奴、ラクショーだよ！』

やっぱりそれしかない、のかな。あまり人を傷つけたくないのが本

心。でも母さんが待ってる。ジュエルシードを。期待してくれてる。私が回収して帰って来るのを。だから・・・これはしょうがないことなんだ。黒い子をキッと睨み付ける。"バルディッシュ"を改めてサイズフォームにして、臨戦態勢。

「なるほど。気付いたわけか。私の目的を。ちょっと見入り過ぎたかな」

黒い子もまた構えを取って臨戦態勢。グランフェリアを倒すために開発し続けたアルフとのコンビネーションなら、確実に撃墜できる。フォトンスフィアを5基展開。するとあの子の足元に銀色に輝くミッド式の魔法陣が現れて、左腕を空に掲げた。

――瓦解せる喰飲の龍咆(アルティフォドス)――

「水の・・・!」

「龍・・・!?」

池の水が龍の形となって現れた。あの子が「負けたら大人しく退く。いいね?」そう確認してきた。勝つ自信があるから「判った」即答。アルフも「後悔すんじゃないよ!」ってあの子を指差す。あの子が「決まりだ」って指を鳴らすと、水の龍が雄叫びを上げながら突進してきた。

「ファイア!!」

試しに迎撃してみる。ランサーが次々と着弾。龍の頭を砕くことが出来たけど、すぐに再生して完全には潰せなかった。術者のあの子を墜とせばたぶん潰せる。「アルフ！　行くよ・・・！」コンビネーション開始を告げる。

「おうッ！」

――フォトンランサー・マルチショット――

アルフのランサー8基があの子に向かって飛んで行く。それと同時に私はブリッツアクションで最接近を試みる。あの子の背後、死角に回り込めた。"バルディッシュ"の電撃の魔力刃による斬撃、サイズスラッシュを打ち込もうと振りかぶった。

――止め処なき水塵の流壁（デファンクテース）――

「な・・・っ？」

だけど魔力刃が到達する前に私とあの子の間に滝のような大量の水が流れ落ちてきて、魔力刃が水圧に負けて砕け散った。

「高機動力を活かしての奇襲・急襲があなたの基本戦術だって、その薄いバリアジャケットと相まって判断できる。なら真正面以外への攻撃を警戒しておけば問題ない」

「っ！」

滝の向こう側に居るあの子の影が動くのが判った。直感ですぐにその場から離脱。その直後、滝が砲撃みたいになって私がたった今まで居た場所を押し流していった。

「こんのぉぉぉおおおおおお！！」

――バリアブレイク――

アルフが水の龍を引き連れながらあの子に突撃。アルフの繰り出す拳を、あの子は防御でも回避でもなくて腕を掴み取って、アルフを背負うようにしてジュエルシードの方へ放り投げた。また発動するジュエルシードの時間移動の力。アルフが歪みに呑まれて消えた。水の龍はそのまま崩れて、ただの水になって地面に落ちた。

――ソニックブーム――

「え・・・？」

信じられないものを見た気がする。あの子の姿が掻き消えたと思えば、背後に気配。

（私のブリッツアクションと同系統の移動魔法・・・！？）

振り返る前に"バルディッシュ"がオートでディフェンサーを展開してくれたおかげで、

「あ、惜しい」

あの子のパンチの直撃を受けずに済んだ。急いでそこから離れて、「アークセイバーッ！」"バルディッシュ"を振るって、ディフェンサー消失と同時に魔力刃を飛ばす。あの子は空へと上がって避けた。空戦は望むところだ。あの子は両手に魔力弾を作り出して投げて来た。私も空へ上がることで避けて、「フェイト！」ちょうど好いタイミングで戻ってきたアルフと挟撃する。

――ブリッツフィスト――

――サイズスラッシュ――

――ラウンドシールド――

銀色に輝くシールドを両面展開して、私とアルフの攻撃を防いだ。でも「無駄だ・・・！」私のサイズスラッシュは、発生させている魔力刃にバリア貫通・刃の魔力強化をする魔法なんだ。例えシールドでも斬り裂いて見せる。

私に使われたシールドを斬り裂き、返す刃であの子に一撃を与えようとしたけど、急上昇することで避けられた。追撃しようとした時、『待ってフェイト！』アルフからそんな念話が来た。アルフがニヤニヤ余裕を見せてる。それがどうしてなのかすぐに判った。

「しまった・・・！」

――リングバインド――

あの子はアルフが設置していたバインドに引っかかった。グランフェリアにも通用したバインド結界。"バルディッシュ"をデバイスモードに戻して、「ごめん」逃れようともがいてるあの子に謝る。前面に魔法陣を展開。先端を向けて、

「サンダー・・・スマッシャァァァァーーーーーッッ!!」

砲撃を放った。スマッシャーは一直線に突き進んで・・・直撃した。あの子が力なく落下し始める。アルフに『助けてあげて』念話を送る。アルフは『あいよ』って応えてくれて、落下し続けるあの子を抱き止めて、私と一緒に地上に降り立った。

「フェイト。コイツどうする？」

「そのまま寝かせておけばいいよ。私たちはジュエルシードの回収に専念すればいい」

少し仮面の下の顔が気になったけど、下手にいじって起こしても面倒だ。近くに設けられているベンチの上に寝かせて、私たちはジュエルシードの攻略に戻る。今なら本気を出せる。まず試しにサンダースマッシャーを撃ってみたけど、見事に時間移動の効果に呑まれて消えた。射撃と砲撃じゃダメだということが判った。なら次は広域攻撃だ。空に上がって、時計の真上に移動。

「バルディッシュ。シーリングフォーム。サンダーレイジ、いくよ」

≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ≫

"バルディッシュ"をシーリングフォームへ移行。柄頭から４枚の羽が生まれる。足元に魔法陣を展開。初撃の雷撃はバインド効果を持っていて、攻撃範囲内の対象を全て拘束できる。だけど、その雷撃ですらジュエルシードの力に掴まって時間移動させられた。それでもまだ終われない。

「サンダー・・・レイジィィーーーーッッ！！」

本命の一撃を発射。魔法陣の放射面からさっき以上の雷撃が、時計に落ちる。強烈な発光、空間の歪み、文字盤の浮上、そしてサンダーレイジの消滅。消費した魔力が元に戻っているのが判る。広域攻撃でも通用しなかった。

「どうすんだいフェイト！　魔法すら通用しないって、これ詰んだんじゃないかい！？」

「うん・・・。魔力消費も一緒にキャンセルされるから、枯渇して何も出来なくなるっていう最悪の事態は避けられるけど・・・」

どうすればいいんだろう。一度帰って、母さんに相談してみる？
ううん。そんなことして期待を裏切ったりなんかしたら・・・失望させてしまう。かぶりを振って、そんな甘い考えを振り払う。と、
「何か来る・・・」遠くからこっちに向かって来る魔力反応を感じ取った。

「フェイト。今こっちに来てる奴、結構デカい魔力を持ってるよ」

「そうだね。あの子や・・・私くらいの魔力を持ってる。でも・・・」

「負けない、だろ？」

「もちろん」

――フォトンランサー・キャリバーシフト――

周囲にフォトンスフィアを5基展開。アルフも同じように展開して、計１０基のフォトンスフィアの照準を、向かって来る魔導師へ合わせる。徐々にその姿を捉えることが出来始めた。第一印象は、白。私や黒い子と違って、本当に白。歳は私くらい。持っているのは杖状のインテリジェントデバイス。お互いの声が届くくらいの距離になって、白い女の子は困惑顔をしながら私とアルフを見詰めて、

「テスタメントちゃんじゃない・・・？　また別の子・・・！」

「そんな・・・。あ、なのはっ、下見て！」

「下？・・・っ！　テスタメントちゃん！？」

白い子の肩に乗ってる子が、さっき墜とした黒い子の事をテスタメントちゃんって呼んで驚きを見せた。アルフが『テスタメントって。人の名前じゃないよねぇ』そう呆れながら念話を送って来た。テスタメント。ミッド語で、遺言とか契約とかの意味だ。コードネーム

かもしれない。となれば、『あの黒い子、組織だって動いてるかもしれない』私とアルフに緊張が走る。

「君たちがやったのか・・・・！？」

「は？・・・あ、ああ、だったらなんだって言うんだい？　互いにジュエルシードを狙ってんなら戦うしかないだろ？」

アルフが牙を剥く。白い子の方が目に見えてビクッと肩を竦ませる。それだけで判る。あの白い子は実戦慣れしていない、魔力が大きいだけの素人だ。私たちの敵じゃない。

「あなた達も引いて。そこの子のように痛い目に遭うから」

そう告げて、"バルディッシュ"をサイズフォームにして白い子に向ける。あの子もデバイスを向けてくるけど、迷いが見える。威嚇の意味を込めて「ファイア」フォトンランサー2発をあの子に掠るように放った。

「ま、待って！　あなた達の目的は何！？　ジュエルシードを使って何をするつもりなの！？」

「どうだっていいだろ、そんなこと。あんた達もジュエルシードが狙いだってんなら・・・あたし達の敵だよ！」

――フォトンランサー――

アルフが待機させていたフォトンスフィアをランサーとして白い子へ連続発射。白い子は速射されたランサーを避けることが出来ずに、ラウンドシールドを張ってギリギリ防いだ。私も続いて待機させていたスフィアをランサーとして連射。白い子のシールドを砕く。破砕の余波を受けて悲鳴を上げながら落下した白い子はそのまま地面に墜落・・・・しなかった。動物の子がギリギリでフローターフィールドを発動させて受け止めたから。私たちも降り立つと、「止まれ！」動物の子が白い子を護るように立ちはだかった。

「・・・邪魔しないならそれ以上のことはしない」

「そうそう♪　大人しく帰んな」

横たわる白い子から目を逸らす。黒い子と同じように私が撃墜した子。恨んでくれてもいい。だけど私は母さんの期待にどうしても応えたいから、本当は辛いけど非情になりきる。ジュエルシードの時計へと向かう中、後ろから「待って・・・！」呼び止められた。白い子はデバイスを支えにして立ち上がっていて、私をジッと真っ直ぐに見つめていた。このまま無視をして行けば良かった。なのに私はその目からどうしても逃げることが出来ない。

「そのジュエルシードは、このユーノ君が発掘した物なの。ちゃんとした理由がないなら、ジュエルシードは諦めてほしいんだ」

「ちゃんとした理由・・・？」

「うん。ジュエルシードは危険なロストロギアで、発掘したユーノ

君は、被害が本格的になる前に回収しようとしてる。私はそのお手伝いをしているの。そして、テスタメントちゃん・・その子は、誰かの命を助けようとしてる」

テスタメントという子を見る。誰かを助けるためにジュエルシードを集める、か・・・。私の目的は・・・。口を開きかけた時、「話さなくていいよ！」アルフに止められた。危うく乗せられるところだった。小さくかぶりを振って踵を返して時計の元へ。背後から「お願い待って！」また呼び止められるけど、今度は付き合わない。

「しつこいよガキ！　テスタメントって子の理由に比べりゃ、あんた達つまらないよ！　危ないから集める？　たったそれだけの理由でしか無いんならあんた達が引きなッ！」

アルフが怒鳴ってあの子たちのところへ向かおうとしたから「待って」止めに入る。納得いかなそうなアルフだけど、これ以上騒がれてテスタメントという子が起きるのは遠慮したい。

「私の理由。テスタメントという子とたぶん同じ。私の大切な人の為に、私はジュエルシードを回収する。だからこれ以上は話をするつもりはないし、邪魔をするなら今度は本気で墜とす」

キッと睨み付ける。さっきのアルフの時もそうだったけど、あの子は今度は怯まなかった。

「私、高町なのは！　この子はユーノ・スクライア君！　あなたの名前はっ？」

ただこんな状況なのに名乗って来たから私とアルフは小首を傾げることに。付き合っている時間もないから『行くよ、アルフ』念話でアルフに告げて、黙ったまま白い子に背を向ける。

「っ！・・・・私の理由はつまらないって言われたけど、私だって引けないんだ。ユーノ君の為にも・・・。私は、ユーノ君を助けたいから！！」

「「ッ！？」」

「なのは・・・君は・・・！」

あの子の魔力が爆発的に増大していく。激しく揺さぶられる髪を押さえながら振り返る。あの子が放つ魔力の強大さに"バルディッシュ"をグッと握り直した。アルフも「もしかしてあたしの所為かい？」なんて戸惑いを見せている。誰かの所為というよりあの子が本気になっただけだと思う。あの子がどういった系統の魔導師か判らない以上、先手必勝で行くしかない。

「教えて、あなたのお名前。本気でぶつかるなら、私、あなた達のお名前を知っておきたい・・・！」

まただ。どうしてだろう。あの子の真っ直ぐで強い光を宿す目から逃れられない。

「・・・・・・フェイト・テスタロッサ」

「・・・ご主人様が名乗るならあたしも名乗らないとねぇ。あたしはアルフだよ」

「フェイトちゃんにアルフさん・・・だね。運命（フェイト）ちゃん、か。カッコいい名前だね♪」

「っ！！」

だからか私は名乗ってしまった。すると名前を褒められた。ドキッとして顔が熱くなった。久しぶりに抱いた感情。私とアルフの魔法の先生で、母さんの使い魔だったリニスが、まだ私たちと居た頃に抱いた・・・・嬉しい、という感情。

『フェイト・・・？』

『っ、なんでもない・・・』

アルフの念話にそう応じていると、

「それじゃあフェイトちゃん、アルフさん。本当は戦いたくないけど、お互いに引けない以上は・・・・。レイジングハート」

≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ≫

あの子の周囲に魔力スフィアが４基展開された。

「バルディッシュ・・・！」

≪Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ　Ｇｅｔ　ｓｅｔ≫

私もフォトンスフィアを６基展開。弾数は勝ってるし弾速もきっと勝ってるはず。アルフに『もう１人の方をお願い』念話でお願いする。『あいよ』って首肯してくれたのを確認。先手は・・・「ファイア！」私がもらう。ランサーを一斉に放つマルチショットで襲撃。あの子は空に上がって回避しながら「シューット！」魔力弾を放ってきたけど、速さはない。私も空に上がってあの子の魔力弾を避けつつ接近を試みる。けど、「っ！」目の前に通り過ぎた魔力弾に、飛行を停止。

（誘導操作弾・・・）

でも「軌道も速さも甘い・・・！」迫る魔力弾全てを"バルディッシュ"で斬り裂いて対処。さらに接近しようとした時、ゾクッと背筋が凍るほどの魔力が、あの子のデバイスの先端に生まれた。形状が変化している。あのモードでしか出来ない魔法を発動するつもりだ。

"バルディッシュ"のシーリングフォーム時のように魔力の羽が生えていて、デバイスを取り巻くように円環魔法陣も展開されている。アレは魔力の増大や加速、放出や集束を補助するためのモノだというのを、昔リニスに教わったことがある。

「ディバイン・・バスタァァァ――――ッッ！！」

――ブリッツアクション――

防御という選択を一瞬で捨てて回避に全力を注いだ。機動力に特化してる私の防御力で、この砲撃の直撃は危険だ。下手すれば一撃で・・・。この子、砲撃だけはきっと一線級だ。でも避けてしまえば「終わりだよ」あの子の背後に回り込んで、

――サイズスラッシュ――

あの子が完全に振り返る前に"バルディッシュ"を振り降ろす。当たる直前であの子のデバイスが≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ≫オートでバリアを発生させた。刃が防がれるけど少しずつ侵略。その間にフォトンスフィアを４基展開させて、

――フォトンランサー・マルチショット――

バリアに一斉発射。サイズスラッシュとフォトンランサーの同時攻撃でバリアを破壊、そのまま"バルディッシュ"の一撃を打ち込む。

「ごめんね・・・」

「きゃぁぁぁあああああああああッッ！！」

確かな手応え。今度こそ撃墜した。あの子は一直線に落下して地面に激突した。念のために追撃のフォトンスフィアを展開させたけど、起き上がる気配がなかったから破棄。地上に降り立って、アルフの方も終わっているのを視認した。動物の子はアルフの右前足で押さ

えつけられていた。抵抗がないところを見ると、あの子も気を失っているみたいだ。

「ま、こんなもんだね」

「うん・・・・」

改めて時計の方へ向き直ると同時、「バインド・・！？」私とアルフにリングバインドが仕掛けられた。色は銀色。頭だけを動かせば、いつの間にか黒い子が起き上がっていて「ご苦労様」なんて私たちに労いの言葉を掛けてきた。しかも「これは・・・！？」私たちの足元に見たこともない魔法陣が描かれて・・・

「高町なのはとユーノ・スクライアの迎撃は元より対時間移動のヒントをくれたあなた達に、プレゼントを贈ろうと思う」

――ラディウス・テンペスタース――

地面から光が噴き上がって呑み込まれた。全身を襲う激痛と視界いっぱいの閃光。この魔法で私は一瞬で意識を奪われた。次に気が付いた時に私が居たのは、アルフに運んでもらったのかこの世界で過ごすために用意した拠点の寝室のベッドの上だった。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒ルシリオン†††

思っていた以上に早い参戦だったフェイトとアルフ。なのはとユーノと名乗り合うのも、何回か激突を経てからだったはずだが。ま、

この世界ではそうなんだろうと納得しておく。複製技で意識を刈り取ったフェイトとアルフから懐中時計へと目を向ける。フェイト達への攻撃はやはり胸は痛んだが、思っていた以上に拒否反応は出ず、自分の心の冷たさにほとほと呆れる。

「時間移動の標的は、自らを封印する術を有する魔力を持っているモノか」

フェイト達の攻撃によって撃墜されたフリをしたおかげで、フェイト達に怪しまれずに観察することが出来た。なのはが墜落した時に飛び散った地面の破片が時間移動されずに懐中時計に当たったことから判った。魔力の塊であるバリアジャケットを纏う魔導師や魔法は、ジュエルシードにとって天敵となるからだろう。
だから近付いてきた天敵を排除していたに過ぎない。どんな願いの下でこうなったのか判らないが、面倒なことをしてくれたものだ。なのは達が気絶しているのを確認して変身を解き、魔力を生み出す魔力炉（システム）を完全停止。

「スクライア姉妹が来る前に懐中時計を回収だ」

今度は時間移動が起こらず容易に懐中時計を手に取ることが出来た。さてと。手に取ることは出来たが、懐中時計からジュエルシードを取り出す術がない。仕方がない。とりあえずはこのままの状態で回収し、何か手が浮かべばその都度試そう。

（本当に厄介だな、お前は）

懐中時計を夜空へと翳し、文字盤を護る風防をコツンと指先で突いた。そしてなのは達へと目をやる。なのは達はこのまま放置しておくわけにはいかないな。フェイト達は手加減したからすぐに目を覚ますだろうが、なのはとユーノは結構本気で撃墜されたから早々起きないだろう。

「よっと」

なのはを背負い、私の頭の上にユーノを乗せる。やはりなのは達は起きることなく、高町家の塀にもたれかかるように座らせ、ペシペシとなのはの頬を数回叩き、「ぅ・・？」呻いたところで全力ダッシュでその場を後にし、八神家へ帰宅した。

Ｅｐｉｃ８－Ａ神は言っている。魔法少女になる運命だと～Ｔｈｅ
Ｆｏｏ Ｌ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

翠屋は基本、年中無休だけど、連休の時は店を他の店員さん達に任せて、高町家は家族旅行に行くことがあります。今回の旅行、近場で2泊が出来る場所ということで海鳴市の郊外にある温泉旅館、山の宿さんへとやって来ました。
参加するメンバーは私、私のお父さんにお母さん、お兄ちゃんとお姉ちゃん。そしてユーノ君。お友達のすずかちゃん、すずかちゃんのお姉さんでお兄ちゃんの彼女さんでもある忍さん、そして月村家のメイドのノエルさんとファリンさん。最後にアリサちゃん・・・なんだけど、集合した時からずっと気になってることがある。

（アリサちゃん。なんか元気がない・・・というより疲れ果ててる？）

お話すればちゃんと乗ってくれるし、笑ってくれる。だけど、なんかこうゲッソリしてる。すずかちゃんも気付いてるみたいで「アリサちゃん。体、調子悪かったりする？」心配してる。

「え？　あー、だいじょぶだいじょぶ。ちょっとペットが言うことを聞かなくてね・・・」

「ペットって。アリサちゃん家のワンちゃん達だよね？」

すずかちゃんがそう確認した。アリサちゃん家には犬が１０匹ほど居るんだけど、その子たちは頭が良いからちゃんと言うことも聴く。そんな子たちがアリサちゃんの言うことを聴かないとなると、考えられる原因は・・・

「きっとアリサちゃんが何日も家を空けるって判って寂しかったんじゃないかなぁ」

「ふふ。なのはちゃんの言う通りかも♪」

すずかちゃんと一緒に笑ってると、アリサちゃんは「違うわ。最近拾った子よ」って言って小さく溜息を吐いた。初耳だった。「え？　新しい子を飼い始めたの？」すずかちゃんと一緒に盛り上がる。もう、教えてくれれば良かったのに。アリサちゃんも人が悪いなぁ。

「ねえねえ、どんな子？　大型？　それとも小型？」

「はぁ。犬じゃないわ。ついて来るなって言っても聴きゃあしないし、荷物に紛れ込もうとするのを阻止するだけで疲れたし、家を出る時でも、連れてけ！！って喚いていたし」

「「ええ！？　喋るの！？」」

（連れてけって言った！？　喋る動物って何！？　アリサちゃんは一体何を飼い始めたの！？）

あ、もしかして喋っているように聞こえる鳴き声を出す猫とかかも

しれない。うん、きっとそうだよ。落ち着いて自分に言い聞かせていると、アリサちゃんが「ま、アイツらのことはどうでもいいわ。せっかくの温泉旅行だし、楽しまなきゃ損だしね」って話を切上げちゃった。でもアリサちゃんの言うことには賛成できるから、「そうだね」すずかちゃんと一緒に賛成する。

『なのは』

『ん？　どうしたのユーノ君』

『なのはも最近は大変だったんだし、この旅行の間くらいはジュエルシードの事を忘れて、ゆっくり休んでね』

『うん。ありがとう、ユーノ君♪』

数日前、私とユーノ君は、フェイトちゃんとアルフさんっていう新しい魔導師と遭遇して、そして負けちゃった。テスタメントちゃんをも負かしちゃうようなすごく強い女の子。でもきっと優しい子。だって私を攻撃する時、ごめん、って謝ってくれたんだもん。それに、気の所為かもしれないけど、目が悲しそうで、寂しそうだった。

（ちゃんとお話ししてみたいなぁ・・・）

ジュエルシードを回収していれば必ずまた会えるはず。その時にもっとお話してみたい。もちろんテスタメントちゃんとも。

（テスタメントちゃんとフェイトちゃん・・か）

２人がジュエルシードを集める理由は、２人にとって大切な誰かを助ける為。私とユーノ君の、ただ回収するっていう理由に比べれば、確かに大事なものだと思う。けど大きく見れば私もユーノ君の助けになるし、暴走による被害を抑えて、誰かを助けることにもなる。だから私は引かない。この意思だけは否定されたくない。その結果、戦うことになるなら、私は前を向いて戦う。

（でも私、どうやって帰ったんだろう・・・？）

それだけが思い出せない。ユーノ君も憶えてないって言うし。無意識に歩いて帰って来たのかなぁ・・？

「あ、着いたみたいだよ、なのはちゃん、アリサちゃん♪」

「「おお！」」

悩みは尽きない今日この頃だけど、ユーノ君のお言葉に甘えて子供らしく過ごそうと思います。そんなこんなで私たちが今日からお世話になる海鳴温泉の旅館・山の宿に到着。まずは部屋に荷物を置きに行く。そうしたら真っ先にするのは何か。もちろん「なのは、すずか、温泉に入りに行くわよ！」温泉に入る、だ。鼻歌を口遊みながら早速荷物の中から替えの下着を取り出す。そして「みなさん浴衣ですよ～♪」ファリンさんが用意してくれた浴衣を受け取ったところで・・・

「ふぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

「ひゃあ！？」「「ッッ！？？」」

アリサちゃんがいきなり叫ぶから浴衣とか下着とか全部放り投げちゃった。着替えが全部ユーノ君にバサッと覆いかぶさった。すると『ぎゃぁぁぁあああああ！！』ユーノ君が悲鳴の念話を飛ばして来た。ユーノ君にとって重みのある服がいきなりバサバサ落ちてきて、しかも視界が閉ざされたんだから叫びたくもなると思うんだけど、私の着替えで叫ばれたと思うとちょっとショックだよ。関係ないんだろうけど・・・。

『ごめんねぇ、ユーノ君』

『う、うん。僕の方こそごめん・・・』

どうしてユーノ君が謝るんだろう？　着替えを拾って、「どうかしたの？　アリサちゃん」って訊いてるすずかちゃんに向く。アリサちゃんはどうしてかすごく焦っていて、着替えの入ったトートバッグを抱えて「なっ、ななな、何でもないわ！　気にしないで！」とか言ってどっかに走り去って行っちゃった。ポカーンとアリサちゃんを見送った私とすずかちゃんとファリンさん。どうしたんだろ？って訊き合うだけ。

「なのは達は先に行ってて！！」

最後にそう聞こえてきて、今度こそアリサちゃんは完全に姿を消した。

「さっきアリサちゃんがすごい速さでどっかにすっ飛んでったけど、なんかあった？　しかも一度見たら夢に出そうなほどに恐い顔していたんだけど・・・」

お姉ちゃんがそう言って部屋に入ってきたけど、理由はサッパリだから私たちは小首を傾げるだけ。先に行っててって言われたけど、私とすずかちゃんはアリサちゃんが戻って来るのを待つことにして、お姉ちゃんと合流した忍さん達を先に行かせた。やっぱりアリサちゃんも一緒じゃないとね。ここは待つのが親友ってものだよ♪

†††Ｓｉｄｅなのは⇒アリサ†††

「あんた達、いつの間にあたしの荷物に紛れ込んだのよ・・・！？」

ついさっきまではルンルン気分だったのに、着替えの入ったトートバッグを覗いた瞬間に急降下。家に置いてきたはずのセレネとエオスが、あたしのパンツに包まってグースカ寝てんだもん！　どこの変態だっていうのよっ。周囲に人が居ないのを確認して、バッグの中に居る頭痛の種にして悩みの種の２人を問い質す。

「だって連れて行くって約束したよ。あれは嘘だったの？」

「し・て・な・い・わ・よ・・・！」

外見はリスだけど正真正銘人間の女の子なエオスが勝手なことを言う。そう、あれはなのは達とプールに遊びに行った日の早朝。エオ

スは言ってた。

――プールなんかより温泉だよ。この海鳴温泉ってとこ。行く予定があったら教えてよアリサ。絶対に私も連れて行ってもらうから。たとえ置いて行こうとしても荷物に紛れて行くからさ。私、セレネよりしつこいよ？――

で、今朝は色々とエオスと戦う羽目になったわけよ。荷物に紛れ込むわ、替えの服のポケットに入り込むわ。その都度探して取り出すあたしの苦労を知れっていうのよ。言ってた通り本当にしつこかったわ。そんな温泉マニアなエオスの姉で、ハムスターの姿を取ってるセレネが「ま、諦めようぜアリサ♪」なんて勝手なことをほざく。

「くぅぅ・・（確かに今さら帰れなんて言えないし）・・・はぁ。もういいわよ一緒で。その代わり絶対に喋らないこと！　動物らしい行動をすること！　破ったら・・・判るわよね？」

ご飯抜きの刑に処す。もちろんお菓子とかも禁止。すでに一度、悪さをした罰としてやったことがある。朝と昼と3時のおやつを禁止した上で2人の前で食べてみたら、涎と涙を流して謝ってから許してあげた。それを思い出したようでセレネとエオスは「イエス！ボス！」ビシッと敬礼した。よしっ。そんじゃそろそろ戻ろうかしら。早くなのは達と合流して、温泉に浸かりたいし。

（なのははフェレット（ユーノ）を連れて来てるし、あたしも新しいペットを紹介ってことでいいかもしれないわね）

バッグの中を覗いて改めて２人に注意しようとしたんだけど、「・・・って、どこ行ったのよッ！？」ついさっきまで中に居たのに、もうその姿がバッグの中のどこにも無い。着替えとかを漁ってみたけど、やっぱり居ない。
在るのは、デバイスとかいう紫色の宝石。ユーノが首から提げてたやつとソックリだけど、「まさかね」馬鹿な考えを振り払う。近くを捜しながら「もう、馬鹿ぁ。どこに行ったのよぉ・・・！」本気で焦り出す。従業員の人や変な客に見つかったら、絶対に拾われたりおもちゃにされたりするかも。

「あっ！　もしかしてあいつら・・・！」

行き先が判った。あたしが許可したことで我慢の限界に達したエオスが、セレネを連れて先に温泉に入りに行ったに違いないわ。なのは達が先に入ってるはずだから、何か馬鹿なことを仕出かすんじゃないかってまた焦る。すぐに向かいたいけどバッグが邪魔になるから、バッグを置きに行くために急いで部屋に戻ったら、のんびりお茶を啜ってるなのはとすずかが居た。

「のどかだねぇ、すずかちゃん」

「そうだねぇ、なのはちゃん」

「なのは、すずか！？」

まるで老後の和やか雰囲気を纏っていた２人は「アリサちゃん。おかえり～」ってのんびり口調で迎えてくれた。ていうか「どうして

居るのよ・・・？」先に行ってるんじゃなかったの？

「どうしてって。アリサちゃんを待ってたんだよ」

「先に入って待ってるより、一緒に入るのを待ってたかったんだ」

「っ！・・あ、ありがとう。待っててくれて」

「「どういたしまして♪」」

そんな嬉しいことを言ってくれる2人にはすっごく感謝なんだけど、残念なことにそれを心の底から喜べる状況じゃないのよね。着替えを取り出して浴衣を手に取り、「急いで行くわよ！」散々振り回すようなあたしなのに、2人は「うんっ♪」笑顔で頷いて、ついて来てくれた。あたし、あんた達と友達に、親友になれてすごく嬉しいわ。恥ずかしいから面と向かって口には出せないけどね。

「アリサちゃ～ん。楽しみなのは判るけど、ちょっと速いよ～」

「温泉は逃げないよアリサちゃん」

「判ってるわよ、すずか。・・・さっきペットの話をしたわよね。そいつらがあたしの荷物に紛れてたのよ。さっき部屋出た時のは、そいつらが居ることに気付いて動転しちゃったからなんだけどさ」

「え、そうなの？　トートバッグに入って、しかも鳴き声が無いってことは・・・」

「普段は鳴かない小動物、かな。それに、らってことは複数？　どんな子なの？」

なのはとすずかに「まあね。リスとハムスターなんだけど」そう答えると、ユーノが「きゅっ！？」なんて、まるで驚いたって感じで鳴いた。なのはが肩に乗るユーノに「どうしたのユーノ君？」なんて訊くんだけど、動物にそんなこと言ってもどうしようもないでしょうが。

「アリサちゃん。その子たちって、お店で買ったの？」

「ううん。拾ったのよ。あたしん家の庭でね」

ごめん、これ嘘なのよ。実際には塾から帰ってきて、自分の部屋でのんびりしてるところにクローゼットの中から気配と視線を感じて、恐る恐る確認して発見といった感じ。その時はまだ人間の女の子の姿だったけど、すぐに動物の姿に変身しちゃったのよね。

そして事情を聴いた。魔法とかジュエルシードとか、到底信じられないようなことばかりを。ま、あの子たちは自分の力でジュエルシードを集めて、全てが終わったら帰るって話だし。それまでの間くらいは世話くらいしてやろうって思って、結果、今こうして騒ぎの渦中に居る。

「着いたわね。さあて、どこに居るかしらね！」

婦人の湯って札がある浴場入り口に到着。脱衣場に入って、セレネ

とエオスの姿を捜すと、「ふぇ？　なになに？」なのはから戸惑いの声が。なのはのところに戻ってみると、セレスとエオスがなのはの肩に乗ってるユーノを引き摺り下ろそうとしてた。
弱い者イジメでもするつもり？　だとしたらどんなガキ大将よ、まったく。２人へと手を伸ばして「やめなさいよ！」急いでユーノを助けようとしたんだけど、

「待ってアリサちゃん！」

「え？　何で止めるのよ、なのは。ユーノ、困って・・・って、あら？」

ユーノは自分から降りて、セレネとエオスの後を追うように脱衣場の端っこに移動。アニマル会議でもするのかしら？　ついて行って様子を見ようとした時、なのはに腕を掴まれた。なのはの顔はどこか緊張気味で、いつになく真剣な目であたしをジッと見つめてくるから、こっちも見つめ返す。そんなんだから「あ、あの、なのはちゃん？　ど、どうしたのかな・・・？」すずかが困惑してるじゃない。

「アリサちゃん。正直に答えてほしいんだけど、いいかな？」

「な、なによ・・・」

「・・・テスタメントちゃんって知ってる？」

「「テスタメントちゃん？？」」

いきなり知らない名前が出て来て、すずかと2人で首を傾げて訊き返す。とりあえず「知らないわ」って答える。ていうか、テスタメントって人の名前じゃないでしょ。だとしたらどっかのペットの名前？　なのはに「そのテスタメントっていうのがどうしたのよ」訊き返してみる。

「あ、ううん。知らないんならいいんだ。ご、ごめんね。変なこと訊いて」

「「？？？」」

するとなのはは話を切り上げて、いそいそと服を脱ぎ始めたから、あたし達も服を脱ぎ始める。一体なんなのかしら。さっきのなのはの様子からしてかなり重要な名前みたいだけど。

「ねえ、なのはちゃん。そのテスタメントちゃんって？」

「えっと・・・ちょっと前に出会った女の子なんだけど」

体にタオルを巻いて、自分の髪をアップにしているなのはが妙な間を空けてからそう答えた。すずかも自分の髪をアップにしながら「また今度紹介してね♪」って笑いかけると、なのはは苦笑いしながら「うん」って頷くだけ。怪しい、怪しすぎる。絶対なにか隠してるわ。そもそも「どうしてあたしが出てくんの？」だ。何を以ってあたしとテスタメントって子が繋がるのかが解らない。

「気にしないでアリサちゃん。私の勘違いだったから」

はぐらかそうとしてるのがバレバレ。このまま問い質したいけど、こういう時のなのはって全然周りを頼らなくなるのよね。本当に頑固なんだから。もう少しくらいは頼ってほしいもんだわ。親友なんだから。

「ほら、アリサちゃんも行こう♪」

あたしもすでに入浴の準備万端だったから問答無用ですずかに手を引っ張られて、そのまま浴場入り。

「ちょっ、セレネとエオスがまだ。あとユーノも・・・・！」

2人のことよりユーノの方が心配だわ。見た目小動物だけど実際は人間なセレネとエオス。そこに賢くて可愛いだけのユーノが1匹だけ放り込まれるなんて。イジメられてないわよね？

「た、たぶん大丈夫なんじゃないかなぁ。ユーノ君ってハムスターとリスに比べれば体が大きいし、すばしっこし」

（そ、そうよね。それにあの2人もただの動物にちょっかいを出すような馬鹿な真似はしないはず）

少しは魔力が回復したって言ってたけど、それでも大した魔法は使えないみたいだし。そう自分に言い聞かせれば一気に楽になった。となれば、あとは楽しむっきゃないわ♪

「名前も決めてるんだ。どっちがセレネちゃんでエオスちゃんなの？」

「ハムスターがセレネ、リスがエオスよ。どっちも食いしん坊」

「そうなんだぁ。なのはちゃんはフェレットのユーノ君を拾って、アリサちゃんはハムスターのセレネちゃんとリスのエオスちゃんを拾って・・・。良いなぁ、羨ましいなぁ」

「すずかん家には猫がいっぱい居るし、ユーノとかセレネ達を連れて行ったりしたら・・・」

「格好のおもちゃにされちゃうかも」

あの2人が猫に追い立てられる光景が簡単に想像できるわ。ちょっと見てみたい気もするけどさ。すずかが残念がる中、なのはのお姉さんの美由希さんと、すずかのお姉さんの忍さんと合流。さっきあたしがバッグを抱えてダッシュしてたことを訊かれて、なのは達に話した内容に追加分を入れて話した。荷物に紛れてまでついて来ようとするその気概が可愛いだとかって笑われたけどね。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒ユーノ†††

『どうして2人が居るんだ！？　それに、アリサさんに拾われたってどうして！？』

なのはのご家族や友達のみなさんと一緒の旅行先で、僕は予想だに

しない再会をした。セレネとエオス。僕の1つ年上で双子の姉妹で、僕にとって幼馴染であり親友であり家族。そんな2人がこの世界に訪れていたなんて。ついて来ないでってあれほど強く言ったのに。睨みを利かせて怒鳴ると『そんなことよりさ、なに女湯なんて入ろうとしてるの？』セレネが殺気を漲らせてきた。エオスも見上げるような感じで『サイテー』思いっきり睨み付けて来てる。

『うっ。それは・・・』

反論の余地がないから、セレネの質問（カウンタークエスチョン）に質問で答えるに文句が言えない。

『『スクライア一族の掟、その1！！』』

『は、はいっ！　動物形態を悪用して、社会に御迷惑をおかけしてはいけないッ！』

スクライア一族にはいくつか掟が在る。その1つが、動物形態の悪用厳禁。今の僕はそれに抵触してる。なのはに連れられるままに女性専用のお風呂にまで来た僕。いくらでも拒否するチャンスも術もあったのに、こうして来たんだから、罰せられるのは当然なんだけど・・・だけど！

『（やっぱりスルー出来ない！）僕も悪いのは認めるよ。でも、ペリオさんの言うことを無視して、こうして僕について来た2人も悪いよね・・・？』

『『うっ！』』

僕はジュエルシードを回収するために、セレネとエオスのお父さんであるペリオさんに許可は貰った。フィヨルツェンさんが居なくなったことで２人は余計に僕と一緒に居たがるようになって、だからジュエルシード回収に出る時、ついて来ようとした。

それを止めたのは何も僕だけじゃない。ペリオさんももちろん止めた。戦闘魔導師として日が浅いから危ないってことで。〝クレイオスソウル〟を手に入れてそれなりの攻撃魔法を習得したけど、搦め手にはどうしようもなく弱い。視野が狭いと言うか。僕との模擬戦では適当に設置しておいたバインドに馬鹿みたいに引っかかるし。

『それに。どうしてアリサさんの家に居るんだ？』

『それを言ったら、どうしてユーノは、なのはって子の家に居るわけ！？』

『しかもレイジングハートも持たせてるし！』

『そ、それは、ジュエルシードの回収を手伝ってもらっ――』

『はあっ！？　スクライアの掟どころか管理局法違反じゃん！』

『管理外世界の原住民に魔法を教えることはご法度・・・って、コレは私たちもだけど・・・』

『なっ！？　アリサさんにも魔法を教えたの！？』

『『うん・・・』』

なんてこったと本気で頭を抱える。とにかくお互いの現状を知ることにした。どうやらセレネとエオスは僕が発ってすぐにメッセージをペリオさんに残して、家出同然で来たみたい。そして、この世界を訪れてからすぐに発動前のジュエルシードを1個回収。2個目の回収時に、あのテスタメントって子と遭遇。そのまま戦って撃墜されて、今の僕のような魔力回復に勤しんでるってことらしい。僕も2人と同じような感じで今の状況になっていることを話した。

『『『はあ～』』』

3人揃って出るのは重い溜息だけ。

『結構な違法だよね、管理外世界での戦闘なんて。しかも原住民に魔法を教えるのも』

『お父さんにメチャクチャ怒られるよね・・・』

『『助けてフィヨルツェンさん・・・（涙）』』

僕は覚悟があってのことだけど、セレネとエオスは完全に想定外って感じだ。軽く現実逃避してるし。というか、こんなことでフィヨルツェンさんを頼れないよ。人間形態でならガックリ肩を落としているであろう2人を見守っていると『ユーノ君。そっちはどうだった？』なのはから念話が。2人のことは、僕がなのはの肩から引き

摺り下ろされそうになった時に話しておいた。

――なのは。アリサさん、もしかしてこっち側の子かも――

――こっち側って・・・え？　まさか、そんな・・・――

――えっと、このハムスターとリス、僕と同じスクライアの魔導師で、しかも幼馴染なんだ――

――えええええええええっ！？――

2人の姿を実際に見て、僕だって驚いたよ。こんな事態に陥るなんて。

『あ、うん。アリサさんに魔法を教えちゃったみたいなんだけど・・・』

『えええええええええええええッ！！』

さっきみたく驚きを見せるなのは。当然だよね、友達がすでにこっち側に居たんだから。とりあえず2人から聴いた、アリサさんとの出会いの内容と、アリサさんと2人の現状をなのはにも伝えておく。

『そっか。アリサちゃん、魔法は知ってるけど、魔導師じゃないんだ』

『うん。アリサさんはもちろん、すずかさんにも魔導師として必要

なリンカーコアが無いみたいだから』

『そうなんだ。・・・えっと、じゃあ後でセレネちゃんとエオスちゃんとお話し出来ないかな？』

『うん。伝えておくよ。なのははゆっくりと疲れを癒してね』

『ありがとう、ユーノ君』

なのはとの念話を一度切る。もう一度セレネとエオスに繋いで、『場所を変えよう』と提案する。２人は文句を言わずに素直に受け入れてくれた。というか『変えなきゃ許さない』って睨まれた。それからなのは達がお風呂から出るのを、なのは達の泊まる部屋で待っていた。

だけど。沈黙が重かった。静寂が質量を持って押しかかってくるような感じで。なのは達はお風呂から上がってお土産屋さんやタッキュウとかっていうスポーツに勤しんだんだけど、その間も僕は２人からの無言の威圧感に晒され続けて、なのは達が帰って夕ご飯を食べる頃には僕はもう・・・疲れ果てていた。

『ごめんねぇ、ユーノ君。待たせちゃったね・・・って、大丈夫！？』

『う・・・大丈夫だよ。気にしないで』

なのはがグッタリしてる僕を抱え上げて心配してくれるんだけど、セレネとエオスの視線がすごく痛い。とりあえず降ろしてもらって、念話での話し合いを始めようとしたんだけど・・・

「コラっ、セレネ、エオス！　あんた達は食べちゃダメでしょうが！」

「ハムスターとリスって、果物でいいのかな・・・？」

「あとはお野菜とかも良いんじゃないんでしょうか～♪」

２人がアリサさんの体を伝ってテーブルに上って、夕ご飯を物色し始めた。アリサさんに怒られて、すずかさんに苺を差し出されると喜んで食べて、ファリンさんにブロッコリーを差し出されてそっぽ向いたりするから「ブロッコリーはお嫌いなんですね・・・」しょんぼりさせたり。それでも足りないって感じで物色を再開。早く話を始めたいんだけどな・・・。

『野菜はもういいの！　肉っ、お肉が欲しい！』

『あっ、オサシミ！　オサシミをプリーズ！』

『にゃはは。アリサちゃんの言ってた通り本当に食いしん坊さんなんだね』

なのはにも念話を通してたみたいだ。身内があんなんだと恥ずかしい。こっちの精神がもちそうにないから『もう！　大事な話をするからこっちに集中してよ！』って怒鳴ってしまう。

『そんなのご飯の後でいいでしょ』

『あ、なのはって言ったっけ？』

『えっと、はい。はじめまして。高町なのはです』

『ん。どうもね、なのは。私はセレネ・スクライア。って、ああもう！　アリサのケチ！　野菜と果物ばっかじゃ飽きるの！』

『私はセレネの妹で、エオス・スクライア。よろしく、なのは。それじゃ話の通じないアリサに代わってオサシミを取ってほしいんだけど』

『え、でも。一応、普通の動物と同じような扱いをしないと怪しまれるから、我慢した方がいいかと・・・』

『やっぱりそこがネックなんだよね～。早く元の姿に戻って、美味しい物をいっぱい食べたいよ』

『動物形態に変身してれば、無駄に魔力を消費しないで済むから回復も早いんだけどね。ユーノだって大変でしょ？　元が人間なんだから、フェレット形態じゃ食べる物を制限されて食事とか味気ないでしょ？」

『え？』

『別にそんなことはないよ。なのはのご家族はみんな良い人ばかりだし、なのはがこっそり色々くれるから』

今の生活に不満を言うものなら、僕は救いようのないとんだ愚か者になる。僕を救ってくれた、命の恩人であるなのはに目を向ける。と、さっきから『え？』って繰り返してばかり。

『あの、セレスちゃんとエオスちゃんは双子なんだよね・・・？』

『『そうだよ』』

『でも、ハムスターとリスって、別の動物だよね・・・』

『『まあ、それは好みでその動物の姿に変身してるんだし』』

『ユーノ君は、その・・・ユーノ君も好みでフェレットに変身してるだけなのかな・・・？』

なのはが何を言いたいのか判らない僕たちは揃って小首を傾げる事に。そんな僕たちを見たみなさんが「３匹一緒に首傾げてるよ♪」とか「可愛い　」って騒いでる。

『好みって言うか、僕たちスクライアは遺跡発掘を生業にしてるからね。狭所などで役に立つんだ、動物形態。２人は好みで、僕は大して考えずにこの姿にしたんだけど・・・それがどうしたの？』

きょとんとしてるなのはを見たエオスが『あのさ、ユーノ。もしかして言ってないの？』って訊いてきたから『何を？』って訊き返すと、今度はセレネが『ユーノが人間だってことを』なんて不思議なことを言ってきた。

『言ってるも何も知ってるよ、なのはは。僕が本当は人間だって。ねえ？』

『し、知らないよぉぉぉーーーーーーーッ！！』

『へ？・・・えええええ！？』

なのはのあまりの驚きように、僕は必至に当時の記憶を思い返していく。その結果、『あああああああああああああ！！』初めからこの動物形態だったことを思い出した。どうしてなのははお風呂とか着替えとか平気で僕の前でするのかなぁ？とか思ってたけど、人語を喋って魔法を扱える動物だって認識なら、ありえる話だった。

『うわっ、うわっ、ごめんなのは！　僕は、その・・・！』

『う、ううん、いいよ、うん。疑いもせずに勘違いしちゃってた私にも問題があったかもだし・・・！』

顔を赤くさせるなのは。気まずい。僕はなんて最悪なことを仕出かしてしまったんだ。セレネとエオスからはまた『サイテー』なんて蔑まれるけど、これも受け入れる。なのはに嫌われてしまったかも。沈んでいると『・・よしっ。もう大丈夫！』なのはから元気いっぱいな声が。

『なのは・・・？』

『ユーノ君はユーノ君。今の私にはそれだけで十分♪』

そんな嬉しいことを言ってくれたなのは。この子にはもう感謝の言葉しかない。なのはの優しさに心の中でボロボロ泣いてる中、『強敵だ、この子』ってセレネとエオスが呟いたのが聞こえた。そしてセレネが突然『はい、この話は終わり！』って話題を切ってきた。

『えっとえっと・・・あ、そうそう。なのはが魔導師だってこと、アリサに伝える？』

『いやダメに決まってるだろ』

『にゃはは・・・うん。それは、ダメかも』

エオスの馬鹿げた話を即否決。これ以上この世界の人、なのはの友達を巻き込むわけにはいかない。

『そうだ。ちょっと聴いてよ、ユーノ、なのは。アリサってさ、私たち魔導師をイタい存在だとか思ってるんだよ？　一体どんな想像したのか知らないけど、魔法使いになった自分を想像して、恥ずかしさで死ぬとかって。どう思うこれ！？』

『えっと、さすがにちょっと酷い、かな？』

『『でしょっ！　なのはって良い子だね♪』』

『あ、ありがとう。う～ん、私ってイタくて恥ずかしい存在なのか

なぁ・・・？』

『そんなことはないと思うけど・・・』

なのは達がチラッとアリサさんの方を見る。アリサさんはそれに気付いて、「どうしたの？　なのは」って気に掛けながらお吸い物（スープ）に手を出した。そうしたらセレネが『憤怒再燃』とか言い出して、僕やなのはとの念話を切った。２人はなのはの腕を伝っていく。セレネは肩で止まって、エオスは頭の上まで登って止まる。絶対に何か企んでる。そう思って止めようとしたんだけど、すでに手遅れだった。あろうことかなのはの下唇に飛びついたセレネは下唇を下に引っ張って、エオスが頭の上から眉間を上に引っ張った。

「ぶふぅぅーーーーっ！？」

なのはの変な顔をまともに見ていたアリサさんが口に含んでいたスープを勢いよく噴射した。他にもなのはのご両親の士郎さんや桃子さん、お姉さんの美由希さんも「ぶふっ！？」と食べていたモノを吹き出しそうだったけど、なんとか耐えていた。運良く？見ていなかったお兄さんの恭弥さんやすずかさん達は状況が判らずに困惑中。

「げふっ、げほっ、ごほっごほっ。こ、コラぁぁぁ！　セレネ、エオス！　なんて事してくれてんのよ！」

怒鳴りながら立ち上ったアリサさんがセレネとエオスを確保しようとなのはに乗ってる２人に手を伸ばすけど、その身軽さにはついて行けずに取り逃がした。結局、アリサさんが疲労で折れるまで追い

かけっこは続いて、温泉に入り直しに行く時に2人を捕獲。

「よくもあたしに恥をかかせてくれたわねぇ」

「アリサちゃん。いくらなんでも偶然だから、そんなに怒っちゃダメだよ」

「普通はそう思うでしょうね。でもね、すずか。コイツらはマジで頭良いのよ、人間みたいにね！！」

アリサさんの両手に鷲掴みにされてるセレネとエオスからは『あー、楽しかった♪』反省の声が無いけど、しょんぼり落ち込んでるポーズをしてるからこそ、すずかさんに優しくしてもらえてる。これは後で僕が叱っておかないとダメだ。ペリオさんを引き合いに出せば、簡単に反省させられるはず。

Ｅｐｉｃ８－Ｂ神は言っている。魔法少女になる運命だと～Ｔｈｅ
Ｆｏｏ Ｌ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

アリサちゃんとすずかちゃん、そして動物形態のセレネちゃんとエオスちゃんと一緒に、改めてお風呂に入りに来た。エオスちゃんの首には"レイジングハート"と似たような宝石が紐で提げられていて、聴けば"クレイオスソウル"っていうデバイスとのこと。"レイジングハート"と同じように古い遺跡でセレネちゃん達が発掘したって話を、念話でしながら脱衣場で服を脱いでいるところで、

「あ・・・！」『『これは、ジュエルシード！！』』

セレネちゃんとエオスちゃんも感じ取ったみたい。ジュエルシードが発動したことが。２人に念話でアリサちゃん達のことをお願いして、私はひとり浴衣を着直して脱衣場の出口に向かう。

「え、なのはちゃん！？」「ちょっとどこ行くのよ、なのは！」

「ごめん、ちょっと用事！」

浴衣はちょっと走りにくいかも。足を上げれば裾が捲れて、中が見えちゃうし。とにかく『ユーノ君！』お父さんやお兄ちゃんと一緒に男湯へ向かったユーノ君に念話を通す。

『うん、判ってる！　すぐに合流しよう！』

『うんっ！』

旅館の出口へ向かう中でユーノ君と合流して、旅館外の林の中をひたすら走る。すると、「あの光は・・・！」ジュエルシードの輝きを見つけて、そっちの方へ走りつつ変身を終える。

そして、

「フェイトちゃん！？・・・って、あれ？　アルフさんは・・？」

開けた場所に辿り着いた私たちが目にしたのは、フェイトちゃんと1頭のオレンジ色の大きな狼さん。それと、何かしらの気配を林の中から感じる。"レイジングハート"を強く握り締め直す。

『なのは。あの狼がきっとアルフだ。額の宝石、見えるよね。おそらく彼女は、使い魔だ』

『えっ、そうなの！？・・・ユーノ君やセレネちゃんとエオスちゃんとは違うの・・・？』

使い魔のことを聴く前に、林の中から大きくて黒い何かがものすごい速さで飛び出してきて、フェイトちゃんに襲いかかった。最初はテスタメントちゃんかと思ったけど、「お猿さん！？」だった。と言っても2mくらいの身長だけど。見た目はもはや身動きが素早いゴリラさん。フェイトちゃんを護るように狼姿のアルフさんが飛び掛かったけど、「ぐあっ！？」逆にお猿さんに殴り飛ばされて、樹

に激突した。

「バルディッシュ！！」

――フォトンランサー・フルオートファイア――

"バルディッシュ"の先端から連射される魔力弾だけど、お猿さんは大きい体なのに簡単に避けて、雄叫びを上げながらフェイトちゃんに殴りかかった。でもフェイトちゃんは空に上がることでパンチを受けずに済んで、お猿さんはそのまま林の中に消えて行った。

「あ痛たた。すごいパンチだったよ、アイツ・・・って、あ、あんた達・・！」

「・・・君たちは・・・。君たちもジュエルシードを追って来たんだね」

口端から流れる血を前足で拭うアルフさんと、樹の枝の上に降り立ったフェイトちゃんの視線を受ける。でもすぐに私から林の中に移動していって、それに釣られて私もそっちへ振り向いた。その直後、≪マスター！≫っていう"レイジングハート"から警告。林の中からお猿さんが飛び出してきて、その大きな拳でのパンチを繰り出してきた。

（早い！　ダメ、避けれない！）

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ≫

ギリギリでプロテクションが張られたことで完全に防御、直撃はしなかった。けど、「きゃあああ！」その威力には逆らえずにプロテクションごと殴り飛ばされちゃった。背中から樹にぶつかって、「げほっげほっ！」苦しくてそのまま座り込む。苦しさと痛みで涙が出て、視界が滲んじゃう。

そんな中でもさっきのお猿さんが襲い掛かって来るのが見える。しかもその1匹だけじゃないのも判った。そしてフェイトちゃんとアルフさんは、別に現れた3匹のお猿さんを相手にして離れて行った。

「なのは！」

――サークルプロテクション――

ユーノ君が展開したのは半球状のバリアで、お猿さんの攻撃をちゃんと防いでくれてる。お礼を言おうと口を開いて・・・声を出すことが出来なかった。視界の端で信じたくないものが映ったから。首をゆっくり動かして林の中を――正確にはそこに佇む2匹のお猿さんの真っ赤に光る眼を見る。私と目が合ったことで、その2匹のお猿さんが一斉に襲いかかって来て、バリアを殴り始めた。

「ダメだっ、保たない！」

ユーノ君がそう叫んだ瞬間に私はユーノ君を肩に乗せて、飛び立つ準備。バリアが砕けたと同時に空に飛び上がって、砲撃魔法を撃つためのモードに変えた"レイジングハート"を、密集してる3匹のお猿さんに向ける。

「ディバイン・・・バスタァァァァーーーーーッッ！！」

すぐにディバインバスターを撃った。そのお猿さん達はディバインバスターの直撃を受けて、煙のように消えた。

「実体じゃなくて思念体！？　なのは、本体を探さな――危ないっ！！」

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ≫

倒したことで完全に油断してた。頭上から新しいお猿さんが降って来ていたことに気付かなかった。お猿さんはプロテクションに弾かれて林の中に落下。また"レイジングハート"に助けられた。ホッとするのも束の間、「ふえ！？」足を掴まれた感覚を得て、足元を見下ろす。

「ひっ・・・！」「この・・・！」

また別のお猿さんが樹のてっぺんから身を乗り出して私の右脚を掴んでいた。目が合うと、ニヤリって笑顔になった。恐い。ただそう思えてしまう、凶暴な笑み。でも恐がってばかりじゃいられない。"レイジングハート"の力を借りて、魔力スフィアを４基展開。ディバインシューターとして撃つ前に、

「きゃぁあああああああッ！「うわぁぁあああああああッ！」

お猿さんが樹から飛び降りた。当然脚を掴まれてる私たちも一緒に

落ちることに。地面までの数秒。

「シューット！」

ディバインシューターを放って、足を掴んでるお猿さんを倒す。地面に叩き付けられる前に空中で飛行魔法のフライアーフィンを発動して落下停止、態勢を整えていたところに、すぐ後ろに何か現れたことを肌で感じた。すぐに新手だってことが判った。トンッと肩から重みが消える。ユーノ君が飛び上がったんだ。

「なのはは僕が護る！！」

背後から聞こえたユーノ君の叫び。声を掛ける前に、止める前に、私が魔法を使う前に、ユーノ君が魔法を使う前に、ゴッと嫌な音が耳に届いた。ようやく振り返ることが出来て、それと同時に胸に飛び込んできたユーノ君を抱き止めた瞬間、私もお猿さんに殴り飛ばされた。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒アリサ†††

今日一日なのはの様子が変だったから、脱衣場から飛び出していったなのはの後を追いかけた。その先で待っていたのが、いま目の前に繰り広げられてるただひたすら信じられない光景だった。

「アリサ。あれが、あの姿が、あなたが恥ずかしいって言ってた魔導師の姿だよ・・・」

「あなたの友達、高町なのはは、私とエオスの幼馴染のユーノ・スクライアの力を借りて魔導師になって、ああしてジュエルシードを集めてる」

セレネとエオスの声が遠い。魔法だとか今はもうどうでもいい。あたしの目は、学校の制服のような白いワンピースを着て、機械のような杖を手に、黒くて大きな猿のような怪物と戦っているなのはに釘づけだった。

「え、どういう、こと？・・・アリサちゃん・・・なに、これ・・・？　え？　ハムスターとリスが喋って・・・あれ？　ねえ、アリサちゃん・・・？」

あたしだけじゃない。ここにはついさっきまで何も知らなかったすずかまで居る。すずかは半泣き状態で、「なのはちゃん・・・ユーノ君・・・」って口を手で押さえて全身を震わせてる。前情報を持ってるあたしですらショックなんだから、すずかの受けたショックはもっとひどいものだと思う。なのはは空を飛びながら猿の怪物と戦っていて、怪物のパンチを膜のようなもので防いだりしていて、かなり危なっかしい。

「すずか。よく聴いて。セレネ、エオス。説明をお願い」

セレネとエオスに頼んで、この世界のことをすずかに簡単に説明してもらった。次元世界。魔法。魔法使い――正式には魔導師。なんかすごい宝石ジュエルシード。ジュエルシードを集めるために、この世界にやって来た異世界の人間であるセレネとエオス。そしてあ

たしもたった今知ったけど、ユーノも2人と同じで元が人間の魔導師。しかも2人とは幼馴染で、家族としてつい最近まで一緒に暮らしてたって。

「どうして・・・今まで教えてくれなかったの・・・？」

「どうしてって。まずコイツらに口止めされたこと。第2に、ファンタジー好きなすずかやなのはに話したとしても信じてもらえなくて、頭を疑われちゃ堪ったもんじゃないし」

想像してみて心が折れそうだったし。すずかはふるふる首を横に振って、「お友達の話を信じないわけないよ・・・！」って当たり前なことを言われたあたしは、自分の馬鹿さ加減に呆れ果てた。そうだ。どんな信じられないようなことであってもそれを信じるのが、親友としてのあたし達の絆なんだ。

「口外しないでって言っ――ふがふが！？」

今は水は差してほしくないからハムスター（セレネ）の顔を手で塞いで黙らせる。

「まずい！　なのはがやられる！」

エオスが最悪なことを叫んだ。ハッとしてなのはの姿を空に探して、すぐに発見。樹のてっぺんに怪物が居て、宙に浮いてるなのはの右脚を掴んでた。怪物はその樹の上から飛び降りた。脚を掴まれてるから逃げられないなのはと、なのはの肩に乗ってるユーノが悲鳴を

上げながら釣られて落下。

「なのはっ！」「なのはちゃん！」

最悪の事態、なのは達が地面に叩き付けられる光景が脳裏に過ぎって、すずかは両手で顔を覆い隠して、あたしはギュッと目を瞑り・・・たかったけど、なのはから目を逸らすことが出来なかった。けどそれで良かったのかも。

なのはは桜色の光の弾で怪物の腕や頭を潰して、逃れることが出来たのを確認できたから。あたしがホッと安堵したのが伝わったのかすずかは恐る恐る手を退けて、なのはの無事を確認して「よかった」って緊張を解いた。でも・・・・

「「「「あ・・・！！」」」」

新手の怪物が、煙のように突然なのはの後ろに現れた。ユーノが庇うように飛び出して、成すすべなく怪物に殴り飛ばされた。

「「ユーノッ！！」」

セレネとエオスが悲鳴を上げて、

「なのはっ！」「なのはちゃん！」

あたしとすずかもすぐに悲鳴を上げることに。ユーノを抱き止めたなのはへさらにパンチした怪物。今度は膜が張られる前にそのパンチの直撃を受けて、すごい勢いで地面に叩き付けられた。もう黙っ

て見ていられない。けど、なんの力も無いあたし達が出てったところで足手まといになることくらい判る。だから、この中で一番頼りになる魔導師のセレネとエオスに詰め寄る。

「何とかしなさいよセレネ、エオス！！」

「セレネちゃん、エオスちゃん、お願い！　なのはちゃんとユーノ君を助けてあげて！」

「「私たちだって戦えるなら今すぐ戦うよ！！」」

「でも無理なの！」

「今の私たちじゃまともに戦えるだけの魔法は使えないんだよ！」

そうだ。２人は戦いで傷ついて、魔力っていうのが回復するまで人間形態にも戻れないんだったわ。

「だったらあたしがなってやるわよっ、魔法使い！　前、セレネは言ってたわよね！　私たちと契約して、魔法少女になってよって！　契約でも何でもしてやるわ！」

今もこうしている間になのはとユーノがまずい状況になっていくわ。様子を窺えば、なのははユーノを抱えながらも杖から光の柱を撃って、怪物２匹を消し飛ばしてた。でも、また新しい怪物が出て来るし。いつやられてもおかしくない状況。もう恥ずかしいとか、そんなのは頭の中から吹き飛んだわ。

「わ、私もなる！　アリサちゃんと一緒に魔法使いになるよっ！」

「すずか！？　あんた、何言ってるのか解ってんの！？」

すずかまで魔法使いになるなんて言い出した。

「解ってる！　魔法使いになれば、なのはちゃん達を助けられるってことが！！」

こうなったすずかはもう折れない。それが判るからこそもう何も言わない。

「で？　どうすればなれるのよっ？　そのデバイスとかを使えばいいわけっ？」

エオスが首から提げてる宝石に手を伸ばそうとしたところで、セレネが「ごめん。あなた達はなれないんだよ」って呟いたのが聞こえた。

「どうしてよ？」「どうしてなの？」

「魔導師が魔法を扱うには、リンカーコアっていう器官が必要なの。なのはは管理外世界じゃ珍しくリンカーコアを持っていて、しかも総魔力量が桁違い。だから素人なのに、あれだけの魔法戦が出来る。けど、アリサとすずかには無いんだ、リンカーコア」

「えっと、あの契約の話、私なりのギャグのつもりだったんだよね・・・・」

「「そんな・・・・・」」

結局あたし達は、大切な親友なのはがボロボロにされるのを黙って見ていることしか出来ないわけ？　なのはは光の弾を何発も撃って、怪物たちを寄せ付けないようにしてるけど、明らかに動きが鈍ってきてる。あたしはもう見ていられなくなって、宝石に手を伸ばして掴み取る。

「「アリサ・・・！？」」

「無理だろうがなんだろうがなってやるわっ！！　あたしは魔法使いになって、なのは達を助けるんだから！！」

「私も魔法使いになります！！」

宝石を握ってるあたしの手に、すずかも手を添えてきた。すると宝石から強い光が発せられて、ビックリしてあたしとすずかは宝石から手を離す。

『その願い、叶えましょう』

「「「「え、なに！？」」」」

女の子の声のようなのが聞こえた気がした。辺りを見回していると

エオスの首から宝石が離れて、あたしとすずかの前にまで浮いて近づいてきた。宝石の中からまた別の青い宝石が出て来くると、セレネとエオスが「ジュエルシードが！」って驚きを見せる。そのジュエルシードの放つ光が光線みたいになって、あたしとすずかの胸に入り込んできた。

「「っ・・・！？」」

「アリサ、すずか！？」

「ちょっと大丈夫！？」

心配してくれるんだけど、今のあたしには答えられそうにない。すずかも胸を押さえて「熱い・・」って呻いてる。あたしもそう。体が焼けるように熱くて、声が出ない。でもすぐに治まって、何て言うか「体に力が溢れてる・・・？」そう感じだ。

「うそ・・・ジュエルシードが、アリサとすずかの願いを叶えた・・・！？」

「ジュエルシードの魔力が空っぽなんですけど！！」

２人はもう大混乱。けど、あたしとすずかは「これで助けに行ける！」それしか考えてない。すずかと一緒に地面に落ちてる宝石を手に取って、「どうすればいいの！？」２人に尋ねる。

「ああもう！　すべてはイメージ。イメージをその宝石、クレイオ

スソウルに伝えるように！」

「起動用パスワード、衣服、自分が持ちたい杖のデザインをイメージ！！」

「「イメージ・・・」」

2人に言われた通りにイメージするために目を閉じてる。まずは起動用のパスワード。あんまり可愛らしいのは嫌かも。真っ先に思い浮かんだのは、習っているバイオリン。すずかをチラッと見ると目が合った。どうしてか判らないけど、同じことを考えてるって理解できる。だから、

「「デタッシュ・レガート・サルタート」」

バイオリン奏法のいくつかを組み合わせたパスワードを同時に唱えた。お互い顔を見合わせて苦笑い。考えてることがやっぱり同じだったわね。次に衣服と杖のデザイン。一瞬だけど想像したのは、なのはが着てるようなやつ。なのはには似合うと思うんだけど、あたしにはちょっと辛いものが。だから可愛いじゃなくて格好いい物をイメージ。杖だって別に見た目まで杖じゃなくてもいいと思うし。

「（よし、決めた！！）・・・って、すずかと同時にイメージしてるけど大丈夫なの！？」

「え？　あ、そうか。どうしよう、私のイメージがアリサちゃんにも伝わったら・・・」

そんなあたし達の心配に対してセレネが「心配も問題もなし。だってクレイオスソウルっていうのは・・・」そこまで言いかけたところで、あたしとすずかの全身が光に包まれた。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒なのは†††

樹の枝葉に隠れて一時休憩中な私。ユーノ君はお猿さんに殴られて気を失ってからまだ目を覚まさない。

「はぁはぁはぁはぁ・・・。数はやっと２匹、かぁ・・・」

ジュエルシードの本体を探そうにもお猿さんの包囲網が分厚すぎて抜け出せなかった。しかもジュエルシードの気配がお猿さん１匹１匹から感じられるから、どれが本体なのかも判らない。今使える魔法でなんとか凌いでいるけど、もう体力も魔力も限界に近いよ。今はなんとか新しいお猿さんが出るのが止まってるけど、残りの２匹のお猿さんが私を探してウロウロしてる。

（フェイトちゃんとアルフさんは・・・？）

遠くの方で雷が空に向かって放たれたり、空から降って来たりしてるから、今も戦ってるんだと思う。フェイトちゃん達でも苦戦してるとなると、私が苦戦してもおかしくないよね・・・。

≪マスター。一時撤退を提案します。体勢を整える必要があるかと思います≫

"レイジングハート"からも今の状況がかなりまずいことだって言われちゃった。確かに終わりの見えないお猿さん退治。このまま続けても一方的に弱るだけだってことは判ってる。

「でも・・・・え・・・!?」

少し離れたところからジュエルシードが発動した気配。

「まさか2個目のジュエルシードが在ったの!?」

お猿さんが私からそっちの方に気を取られ始めた。攻撃するチャンスだけど、倒した後の新手に襲われるかと思うと、ちょっと考えさせられる。

（でも全然気付かなかった。あんな近くにジュエルシードが在ったなんて）

お猿さんがドスドス足音を鳴らしながら、ジュエルシードの方に向かって行く。迷いを振り払って"レイジングハート"をそっちに向ける。お猿さん撃破とジュエルシード封印を同時に行うために。あともうちょっとでお猿さんがジュエルシードに辿り着くというところで、

――フレイムウィップ――

「え!?」

そんなお猿さん2匹を炎の鞭が薙ぎ払って倒しちゃった。完全にそれは魔法で。一体誰が？って思いが私の頭の中を駆け巡る。呆けながら眺めていると、今日何度目かの混乱が私を襲った。

「アリサちゃん・・？　すずかちゃん・・！？」

草陰から出て来たのは、バリアジャケットらしい服を着たアリサちゃんとすずかちゃんだった。

「なのはぁぁぁーーーーーーッ！！」

「なのはちゃーーーーーん！！」

耳にしっかり届く、私の名前を呼ぶ声。頭の中がごちゃごちゃになって涙が溢れてきた。アリサちゃんは剣のようなデバイスをブンブン振っていて、すずかちゃんもグローブ？をはめた手を振ってくれてる。私は樹から飛び降りて、「アリサちゃん、すずかちゃん！」涙を拭うこともしないで2人に抱きついた。

「「きゃっ？」」

「どうして2人が！？　あの、え！？　その、魔法だよね！？」

アリサちゃんとすずかちゃんの体温を感じて、これが現実だって理解できるようになると、本格的に混乱が襲ってくる。

「説明は後よ！　すずか！」

「うんっ！　お願い、スノーホワイト！」

≪お任せくださいまし≫

すずかちゃんのデバイス、"スノーホワイト"が上品な言葉づかいで応えると、すずかちゃんの足元に紫色（あとですずかちゃんに聴いたら藤紫って色だった）の魔法陣が展開された。

――フィジカルヒール&ディバイドエナジー――

"スノーホワイト"の甲にあるクリスタル部分から"レイジングハート"のコアへの魔力が移動した。それだけじゃなくて私とユーノ君を包み込む優しい魔力が、負っていた傷を癒してくれた。

≪完了いたしましたわ、スズカ≫

「「「おお・・！」」」

みんなで感嘆する。私の時と違ってすずかちゃんはすぐに魔法を、しかも同時に発動させた。それにアリサちゃんも「新手ね。行くわよ、フレイムアイズ！」ってデバイスの名前を呼んで、柄元のところに有る鉄砲の引き金みたいなところを引いた。アリサちゃんの足元に夕焼けのような綺麗な茜色の魔法陣が展開されて、銃の機関部から薬きょうみたいのが飛び出すと刃から炎が噴き上がった。

≪おう！　いっちょかましてやれっ、アリサ！≫

アリサちゃんのデバイス、"フレイムアイズ"はなんだか荒っぽいかも。

「うりゃぁぁぁあああああああッッ！！！」

――フレイムウィップ――

刀身から伸びる炎の鞭が新しく出て来たお猿さん３匹に向かっていくけど、学習されちゃったのかジャンプされて避けられた。

「セレネちゃん、エオスちゃん。ユーノ君をお願い」

「「うん！」」

傷は治っても気絶したままのユーノ君を、セレネちゃんとエオスちゃんに預ける。そしてすぐにすずかちゃんと"スノーホワイト"に「ありがとう！」お礼を言って、"レイジングハート"を空中に居るお猿さんに向けて、

「いけるよね、レイジングハート！」

≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ≫

「シューット！」

シューター6発を発射。落下し始めたお猿さん1匹に対して2発のシューター。2匹のお猿さんは1回で倒せたけど、最後の1匹は体を捻って避けた。でも「甘いよ！」避けられて残った2発のシューターを操作して挟み撃ち、今度こそ倒す。

「やるじゃん、なのは♪」

「すごいよ、なのはちゃん！」

ハイタッチを求めて来たアリサちゃんとハイタッチして、すずかちゃんは両手で私の手を握って縦にブンブン振って褒めてくれた。

「アリサちゃんもすずかちゃんもすごいよ！と言うか、どうして魔導師になっちゃってるの！？」

ユーノ君の話だと、アリサちゃんとすずかちゃんにはリンカーコアは無いってことだったのに。

「あとでゆっくり説明してあげるわよ。ほら、ジュエルシードを集めるんでしょ！」

「私とアリサちゃんも手伝うから。ジュエルシード探し。習い事もあるし塾もあるから、いつも一緒ってわけにはいかないけど」

「ううん、気持ちだけでも嬉しい！・・・って、また出て来ちゃったよぉ・・・！」

アリサちゃんの言う通り、今はジュエルシードを封印するのが先決だよね。だけどそれには1つ問題があったりする。話を中断して、二列縦隊なお猿さん4匹を、私とアリサちゃんで迎え撃つ準備をする。

「レイジングハート！」

――ディバインシューター――

「フレイムアイズ！」

≪今度は外すなよ、アリサ！≫

「判ってるわよ！！」

――フレイムウィップ――

まずは私のシューター4発を先頭のお猿さん2匹に発射。バラバラに散って避けらたけど、そこにアリサちゃんのフレイムウィップが襲い掛かった。横一線に振り抜かれたその一撃に、1匹のお猿さんが直撃を受けて消滅。操作したシューターで残り3匹のお猿さんを追撃して、2匹のお猿さんを倒す。最後の1匹は、「おりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」アリサちゃんが切り返したフレイムウィップで倒すことが出来た。

「ふぅ。さっきの続きなんだけど、ジュエルシードの気配がお猿さんそれぞれから感じて、どこに本体があるのか特定できないんだ・

・・」

「う～ん、探してる最中にあの怪物が襲ってくるのも面倒よね」

今もこうしてる間に新手が出て来るかもだし、最悪フェイトちゃん達に取られちゃうかも。うんうん悩んでいると、エオスちゃんが「ちょっといい？」って前足を上げてきた。私とアリサちゃんで周囲を警戒しながら、エオスちゃんの話に耳を傾ける。

「すずか。あなたのデバイス、スノーホワイトの機能容量の大半は補助系なんだよ。だから、アリサのフレイムアイズより、そしてたぶんレイジングハートよりも索敵・探査能力が優れてる」

「そうなの？　スノーホワイト」

≪ええ。すでに探査用の魔法を持っていますし、その精度にも自信を持っていますわ≫

「決まりね。すずか、スノーホワイト。ジュエルシードの本体の場所、探してくれる？」

「うんっ！」

そういうわけで"スノーホワイト"の力を借りて、すずかちゃんがジュエルシード本体を探索する魔法、広域探索を使った。精度がすごいらしくて、そんな時間もかけずに「あっちだよ！」すずかちゃんが林の奥を指差した。

「行くわよっ、なのは、すずか！」

「「うんっ！」」

すずかちゃんだけが持つ物が無いってことでユーノ君たちを抱えて、私たちは新手のお猿さんが出て来る前に本体の在るところへ走って向かう。

「あの、なのはちゃん」

「どうしたの？　すずかちゃん」

「さっきの探索魔法で、ジュエルシードの本体の近くに別の魔力を2つ感じ取ったんだけど・・・」

「きっとフェイトちゃんとアルフさんだ。雷が光ってるのが見えていたと思うけど、アレを使ったフェイトちゃん達は、私たちと同じようにジュエルシードを集めているんだ」

この際に伝えておく。私とユーノ君、フェイトちゃんとアルフさん、そしてテスタメントちゃんって子が、ジュエルシードを巡って戦うことになってる事を。

「テスタメントってのも魔法使いだったわけね。で？　どうしてなのはは、あたしをテスタメントだって思ったのよ？」

「テスタメントちゃんって、顔や頭を仮面とかフードで隠してて素顔が判らなくて」

「あー、そういうこと。魔法使いのセレネとエオスを連れていたから、あたしがテスタメント、もしくはその関係者だって思ったわけね」

「えっと、そういうわけです」

実際は違っていたけど。でも結局は魔導師になっちゃったアリサちゃん。しかもすずかちゃんまで。続きを話そうと思ったところで、ピカッと雷が落ちる時のような光が私たちを襲って、

「「「「「きゃっ！！？」」」」」

遅れてガァァン！！って体の奥まで震えるような爆音が目指す場所から聞こえた。正しく空から雷が落ちた。雷の魔法を使うフェイトちゃんの仕業で間違いない。走るスピードを上げて、やっと辿り着いた場所は、小川が流れる林道。小川を挟んだ向こう側の林の中には「フェイトちゃん！」が"バルディッシュ"を支えにしてようやく立っていられるって感じで佇んでいた。狼姿のアルフさんはフェイトちゃんの足元でぐったりと座り込んでて、私たちが来ても何も言わない。

「はぁはぁはぁ・・・。悪いけど、ジュエルシードは頂いていきます・・・」

息も絶え絶えでボロボロなフェイトちゃんの側には1つのジュエルシードが光り輝いて浮いていた。間に合わなかったんだ。すずかちゃんが抱えてるユーノ君に「ごめんね」って謝る。俯きそうになると、焼け焦げて崩れた橋の残骸が目に留まった。さっきの雷で壊れたんだ。

「ちょっとあんた！　ジュエルシードはユーノのモノなんでしょうが！　返しなさいよ！」

「君たちは・・・？」

アリサちゃんとすずかちゃんを見て、ほんの少しだけど表情が曇ったように見えた。

「あたしはアリサ・バニングス！　これからはあたしもジュエルシードの探索を手伝うわ、憶えておきなさい！」

「私は月村すずか！　アリサちゃんと同じ、大切な友達の為にジュエルシードを集める！」

「っ！！・・・そう。だったら容赦しない。次に会ったら、覚悟して」

フェイトちゃんはそう言い捨てて、私たちに背を向けた。アリサちゃんが「待ちなさいよ！」って呼び止めるけど、フラフラながらフェイトちゃんについて行くアルフさんが「オオオオオオオオッ！！」雄叫びを上げた。

本能が告げてくる。今立ち向かったらダメだって。アリサちゃんも感じ取ったみたいで、今度こそ去って行こうとするフェイトちゃんとアルフさんを止めなかった。フェイトちゃん達の姿が完全に消えたところで、緊張の糸が切れた私たちはその場所に座り込んだ。

「・・・手負いの獣はヤバいっていうのがよく判ったわ」

「あはは、こ、怖かったね・・・」

「うん・・・。けど、本当にいいの？　アリサちゃん、すずかちゃん。ジュエルシード探しを手伝うっていうの・・・」

ゆっくり落ち着いたところで改めて確認してみる。

「あたしはやるわよ。なのはのあんな姿を見て、もう無視なんて出来ないもの」

「私も放っておけないよ。なのはちゃんのこと、ユーノ君のこと、それにセレネちゃんやエオスちゃんのことも」

アリサちゃんとすずかちゃんの目は真っ直ぐで。だから私は「ありがとう」頭をきちんと下げてお礼を言う。２人はただ「うん♪」って笑って頷いてくれた。ありがとう、本当に。アリサちゃん、すずかちゃん。

Ｅｐｉｃ９その頃、主人公はひとり頑張っていました～Ｔｅｍｐｅｒａｎｃｅ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

海鳴市内を流れる明理川の底に沈んでいたジュエルシード。それを回収するために訪れた矢先、私が来たのが影響だと言うかのように発動。川の水が人の手のような形を取り、私に向かって伸びて来た。

――舞い振るは、汝の獄火（コード）（サラヒエル）――

炎熱系中級攻性術式、サラヒエルを発動。私の頭上に展開されるのは、本来の私の魔力光サファイアブルーの色となった炎の魔力槍２２本。

「蹂躙粛清（ジャッジメント）！」

指を鳴らして号令を下し、一斉に降下させて迎撃。襲ってきた水の手に着弾させ、一瞬にして蒸発させる。

「あー、やっぱり楽だなぁ、固有術式を気にせず使えるのは」

いつもならなのは達の乱入を考えて複製や下級術式を使うんだが、これから3日、最低でも今日と明日の2日、乱入は無いと判っている。彼女たちは海鳴市郊外に在る海鳴温泉へ行ったことが判っているからだ。フェイトとアルフも同様。

問題はスクライア姉妹だが。信じられないことにアリサの家に厄介になっていることが判明した。海鳴温泉参加組の出発を確認するためにサーチャーとしての魔術、イシュリエルで昨夜から彼女たちの自宅を監視しているからだが。

（下手したらストーカーと同レベルだな）

まぁ、そのおかげでアリサの家に魔力を感じるハムスターとリス、変身しているスクライア姉妹が居ることが判ったんだ。まさかアリサもなのはみたいな魔導師にならないだろうな、とか心配だったが、リンカーコアが無いようだからそれはないだろう。

「川を丸ごと蒸発させた方が手っ取り早いだろうが、さすがにな」

意識をジュエルシードに戻す。船幽霊のごとく水の手をいくつも伸ばしてきて、私を川に引きずり込もうとしてくる。一定範囲内の川の水を蒸発させればジュエルシードを回収しやすいと思うが、魔力消費も結構あるため断念。

「第二波（セカンドバレル）・・・装填（セット）」

サラヒエルを再び２２本と展開。号令を下して一斉に射出して迎撃。完全に途絶えた一瞬の隙を狙って、第三波を川に撃ち込んで流れに大きな穴を開ける。飛び散った川水はそれでも私を襲いたいのか、一度空に大きく伸びて、急降下しようとしてきた。

――捕（コード）らえよ、汝（ファキエル）の茨氷――

焦ることもなく中級氷雪系補助術式、ついでに封印効果を付加したファキエルを発動。ファキエルは、地表に描かれた円陣から氷の蔦を数本と空に向かって伸ばし、蔦の表面から無数の棘を突き出して対象を貫き凍結させる、一種のバインドだ。
他にも蔦の根元や本体からも凍結効果のある冷気が放たれているため、対地対空の範囲を持つ。霜が降る中、川底を覗き込むと、凍結封印されたジュエルシードを発見。

「ジュエルシード。シリアルナンバー２４、封印」

気持ち良く中級術式を使え、ジュエルシードも回収できた。うん、今日はまったくもって良い日だ。今日は朝からはやてが検査の為に大学病院に居るため、空いた時間が出来た私はイレギュラーナンバーの回収に努めている。今日は空き時間が続く限りイレギュラーナンバーのジュエルシードを回収するつもりだ。次のジュエルシードを回収するために飛行で移動を開始、ある程度離れたところで結界を解除。

（競争相手が居ないから楽だな。固有術式をどれだけ使おうとも私とバレない）

残りのイレギュラーナンバーは５つ。この２日で全部集めたいが、今の総魔力量では１日で最高２つまでだろう。ジュエルシード封印に苦戦して魔力の消費が激しければさらに減るかもしれない。が、やってやるさ。
この事件の中盤には管理局が介入してくる。クロノを相手にするの

は避けたいからな。次の現場は少し離れたサッカーグラウンドの在る川原。確か、なのはの父、士郎さんが監督を務めているチームが練習試合をしていた・・・いや、する場所か。

「草むらの中だな」

――封牢結界――

封時結界に、結界外に脱出できない効果を追加した封牢結界を発動。封鎖結界ゲフェングニス・デア・マギーを使えば早いが、あれは古代ベルカ式の術式だ。この事件にベルカ式が介入したということにならないようにする為、ミッド式として新たに作る必要があった。私固有の結界が使えればいいが、残念ながら私の持つ魔術の結界は創世結界だけ。新しく魔術の結界を作るよりも魔法の結界を作る方が早いし簡単だ、複製という基が在ることだし。

「さてさて。ジュエルシードはどこだ？っと」

ジュエルシードの気配に意識を集中させながら草の根をかき分けながら探す・・と、「見つけたっ」ポツンと落ちているジュエルシードを発見。そっと手を伸ばし、もうちょっとで取ることが出来たってところで、「イジメか！？」ジュエルシードが発動して、膨大な魔力が放出される。なのは達が居ると、自分の正体に繋がる術式が使えないからまともに受けるしかないが、今は私の独壇場。

「女神（コード）の・・・救済（イドゥン）」

翳した右手で放出された魔力を吸収。先のジュエルシードの封印に消費した魔力を一気に回復しながら、空いている左手の指を銃の形にして、

――煌き(コード)示せ、汝(アダメル)の閃輝――

封印効果を乗せた砲撃アダメルを放つ。至近距離での一撃だ、確実に停止させた。本日2度目の「ジュエルシード。シリアル26・・・ゲットだ」封印となった。幸運なことに魔力供給も出来たことだし、このまま次のジュエルシードの回収と行こう。

「っと、その前に」

グローブ下の左中指にはめてある指環、"エヴェストルム"の時計機能を呼び起こし、空間モニタータイプの文字盤を表示。はやての検査が終わる10分くらい前までには病院に着いておかないとな。

「あと40分弱か。十分十分♪」

しかし念のために大学病院に一番近い現場を選択し、ジュエルシードが眠っているそこへと飛んで向かう。飛行途中、ジュエルシードの気配が移動し始めたのが判った。その移動速度から言っておそらく徒歩。

そう焦らずに気配を辿って行き、「あれ・・・？」気配が元から在った現場とその移動経路を海鳴市の地図に照らし合わせてみると、はやての居る大学病院から近くに在る公園へと向かっているのが判った。一瞬だけはやての顔が過ぎったが、検査が終わる15分前に

は石田先生から連絡があるため、その馬鹿な考えは即消滅。

「ま、行ってみれば判るか」

移動を終えたジュエルシードの気配が在る公園へと到着。公園には数組の母子と、ワンピースにカーディガン・大き目なキャスケット帽（全くと言っていいほど似合ってない）、レンズの大きな眼鏡をかけ（もしかして変装か？）、ポシェットを肩から提げた、中学1年くらいの少女の姿を確認できる。

「あの少女・・・正確には手にしているマイクからだな、ジュエルシードの気配がするのは」

ポシェットから取り出したおもちゃのマイクからジュエルシードの気配が。一度その場から離れて人気のない場所で降り立ち、騎士甲冑を解除。すでに人の手に渡っているとなれば、ジュエルシードの存在にある程度気付いているかもしれない。

いきなり結界を張って奪って行けば、持ち主に何か良からぬ障害が出るというような懸念があるため、まずは様子見だ。再び公園へと赴けば、先ほどの少女がマイクを手に歌っていた。数組の母子はその歌声に聞き惚れ、私もまた聞き惚れていた。

（あのマイクのジュエルシードの影響か・・・？）

暴走ではなく正常に覚醒しているジュエルシードを取り込んでいるマイクを使っての10分間の単独ライブ。アカペラだからこそ、その甘美な歌声が強調されていつまでも耳に残る。気が付けば公園内

には営業中に偶然立ち寄りました的なサラリーマンやご年配の方々が居て、全員が彼女の歌声に聞き惚れていた。彼女は拍手喝采を照れ笑いで受け、「ありがとうございました♪」と深々と頭を下げて、公園から去って行った。

（さてどうしたものか）

とりあえず彼女を尾行。と、途中で彼女は眼鏡や帽子を外した。やはり変装の類か、と思っていると「ああ、やっぱりか」大学病院へと辿り着いた。すれ違う看護師さんから「おかえりなさい、白井さん」と挨拶されてもただ頷くようなお辞儀するだけ。

声に出して挨拶を返すかどうかは人それぞれだが、彼女、白井さんという娘からは何か妙な苛立ちのようなものを感じた。そのまま院内へと入り白井さんの尾行を続けると、彼女はエレベーターに乗ろうとしたので、

「すいません、乗ります！」

私も続いてエレベーターに乗る。押されているボタンは5階。個室の病室フロアだ。彼女が私を見下ろしてくる。その視線の意味を察し、「４階をお願いします」と笑みを向ける。すると彼女も笑顔になって頷いた。４階に着くまでの間、彼女はポシェットから携帯電話を取り出して操作。それを横目で見ていると、トントンと肩を指で叩かれた。彼女を見ると、携帯電話のディスプレイを向けてきていた。

「誰かのお見舞い？」

メモ帳機能にそう表示されていたため、「はい、そうです」実際は違うがそう答えておく。するとまた携帯電話を操作して、

――そっか。えらいね♪――

メモ帳にそう追加表記していた。ついでに私の頭をよしよしと撫でてきた。ピンポーンと4階に到着したことを知らせる音とともに分厚い扉が開く。出ないとな。小さく手を振ってくるので「またね、お姉ちゃん♪」と振り返すと、だらしない笑顔になった。扉が閉まり、彼女の姿が扉の奥に消えた。

（どういうことだ？　あれではまるで言葉を発せないみたいだ）

携帯電話のメモ帳機能を使ってコミュニケーションを取る。考えられるのは3つ。超重度な人見知り。地声が気に入らない。病気で声が出ない。1つ目は即却下。もしそうなら私に話しかけることはないだろうし、あんな堂々と歌わない。2つ目も却下。アノ歌声がジュエルシードの影響ではない地声であるなら、誰もが羨む美声だ。

（マイクを掴んでいる、もしくは使っている時だけ声が出せる・・・かな）

それが一番しっくり来る。で、問題はどうやってジュエルシードを回収するかになってくるわけだ。情けをかけて私が彼女を放置したとしても、管理局やフェイトが回収しに来るだろう。この頃のフェイトは問答無用で、おそらく前線に出て来るクロノも半ば強奪に近

い方法で来るだろう。たとえば結界を張り、彼女に気付かれずにマイクだけを取り込んでジュエルシードを回収、とか。

「はぁ・・・」

私とて手段を選ばずにいることが出来たら楽なんだけどな。彼女に撫でてもらった頭に手を置く。思い返すのは、歌っている時の彼女の晴れやかな表情。

「エイル・・・使えるか・・・？」

私の有する最高位の治癒術式、エイル。対象が死んでいなければ、いかなる異常を万全へと回復させる。異常のレベルが高ければ高い程に魔力消費が激しいが、得られる効果は正しく最高。

「あれ、ルシル君？　どうしたの、この階に何の用？」

「むぃ？　木花しゃん」

いきなり背後から両頬を手で挟まれてムニムニされたため振り向いて見れば、案の定、看護師の木花さん、木花結（ゆい）さんだった。私を初見で男だと見破った唯一の女性で、石田先生と仲が良いため、はやてとはもちろん仲が良く、私とも仲が良くなった。私が男であることを黙ってくれる条件としてスキンシップをし放題ってことになり、さっきみたいにエンカウントしたらペタペタ触られる。

「（答えてもらえないだろうが一応訊くか）木花さん。白井さんっ

て知ってますか？　携帯電話でコミュニケーションをとる女の方なんですけど」

患者の守秘義務を守るのも看護師である木花さんの仕事だ。期待なんてしていなかったが、「あー、うたちゃんね。知ってるよ。あの子がどうしたの？」木花さんに常識を問うことは間違いだったようで。

「うたちゃん、ですか？」

「そ。白井歌織（かおり）ちゃん。歌を織るで歌織ちゃんね。なになに？　もしかして一目惚れ？　可愛いもんね～♪　でもいけないよぉ、ルシル君。君にははやてちゃんがいるでしょ？　それとも年上好きかな？　だったら私が立候補してあげても――」

「違います。あと、はやてともそういう関係にはなりません。そして木花さん、冗談は職務怠慢だけにしてください」

「ちぇっ、つまらな～い。でも急にどうして？」

「私、白井さんの歌声を聴いてファンになったんですよ」

「え、それって何かの間違いじゃないのかな？　だってうたちゃん、声帯が悪くて歌うどころか喋ることも出来ないはずよ。先生やご家族の方も手術を薦めているんだけど、手術しても病気になる前の歌声はもう取り戻せないってことでムキになって拒んじゃってるのよ。だからルシル君がうたちゃんの歌声を聴いたのって、何かの間違い

だよ」

やはりか。手術を受けさせた方が自然だろうが、それを待っている時間も無し。仕方がない。ここはエイルを使って、ジュエルシードを必要としない状況を創り出すか。とりあえず「ありがとうございました」と木花さんに礼を言い、結界を張るために屋上を目指す。

「（とその前に）木花さん」

「ん～？」

「患者さんのプライバシーをペラペラ喋るのはどうかと思います」

「アウチ！　お願い、黙ってて！」

手を顔の前で合わせて拝み倒す木花さん。イジメっ子には嬉しいシチュエーションだが、私にはそんな趣味は無いから「判りました」と笑顔で応じ、屋上へ行くために階段室へと向かう。背後からは「アイラヴュー　」なんて馬鹿な台詞が。

「そういうのは彼氏さんとかに言ってあげてください」

何か文句を言っているようだが、すでに聞き取れる範囲内には居ないから返事はしない。はやての検査終了まで残り僅か。それまでに終わらせないと、決着は夜中に持ち越しになってしまう。屋上へと辿り着き、人が居ないことを確認して騎士甲冑に変身、封牢結界を展開。取り込む対象は、白井歌織さんとジュエルシードを取り込ん

でいるマイク、その2つ。屋上から5階へと降り、誰一人としていない廊下を歩く。彼女の病室が判らないため、虱潰しだ。

「っと。彼女の方から現れてくれたか」

なんだろう。今の私、悪役っぽくないか？　一応、白井歌織の病気を治しに行く立場なんだが。廊下の突き当たりを曲がって来たのは白井さん。表情は焦りと困惑に満ちていた。罪悪感が膨れ上がる。そして私の姿を見た途端に急停止、踵を返して来た道を逆走。ど、どうしよう。涙を浮かべていたんだが。

（とにかく追いかけよう）

――知らしめよ、汝の力（ゼルエル）――

身体能力を強化し、白井さんを追いかける。労することなく彼女にすぐに追いつけたんだが・・・。私の靴音に気付いた彼女はこちらへ振り返り、「っ！！」完全に顔を引きつらせて全力逃亡。ある病室に入ったと思えば、すぐに「誰か助けて！　いや！　わたし、まだ死にたくない！」そんな悲鳴が聞こえてきた。

とにかく今は話を聴いてもらわないといけないから、彼女の名前が記された札が掛けられた病室の前にまで行く。彼女が私へと振り向き、マイクを片手にベッドに身を隠すように逃げる。

「いやぁぁぁあああああ！　死神退散、死神退散、死神退散！！」

（死神？　私が？・・・・って、あぁ、そうか。全身真っ黒じゃそう

見られてもおかしくないか）

それに、あながち間違っていない。ただ、今だけは、死神ではなく君の天使となろう。白井さんはガタガタと怯えながらも枕やポット、物を色々と投げて抵抗してくる。柔らかい物は受けてもいいが、ポットはさすがに遠慮したいのでパシッと片手で受け止める。

「来ないで！　お願いだから、帰って！」

「あのっ！　ごめんなさい、話を聴いてくれませんか！」

フードと仮面を取って素顔を晒す。すると白井さんは最初は呆け、「君はさっきの！」と驚愕。部屋に入る前に「すいません、怖がらせてしまったみたいで」頭を下げて謝罪する。さっきまでの怯えは治まったが、それでも警戒はまだ解いてくれない。当り前だろうが。

「・・・君、何か知ってる？　人が誰も居なくなったことについて。いきなり人が消えて、その、わたし、すごく混乱して・・・」

「はい、知っています。私が行ったことですから」

「え？・・・はっ！？　どうやってって言うか、あなたは一体なんなの！？」

警戒心が一気にＭＡＸになった白井さん。それ以上に怒りが爆発してしまった。嘘を混ぜず「私はルシリオン。魔法使いなんです」本名とその正体を明かす。すると彼女の顔色が変わって、マイクを両

手でギュッと握りしめた。魔法。その単語ですぐに行き着いたんだろう。私の目的が、そのマイクであることが。

「ダメっ！　これは渡せない！　だってこのマイクが無いと喋れない、歌えない！　お願いだから、わたしから声を、歌を奪わないで！　お願い、お願いします！！」

マイクを胸に抱いて、マイクを奪わないでと必死に懇願する白井さん。

「歌は、わたしにとって命そのものなの！　このマイクは、消えかけてたわたしの歌(いのち)をもう一度蘇らせてくれた！　だから――」

私は首を横に振り、「奪いませんよ。あなたの病気は、私が治します」と告げる。涙の溢れる瞳を私に向け、「そんなの無理だよ」と自分の喉にそっと触れた。

「言いましたよね。私は魔法使いだと。そこでお願いがあるんです、白井さん。もし私の魔法であなたの喉を治せたら、そのマイクに宿っている力を下さい」

「・・・・」

ここでもう黙ることにする。決定権は白井さんが持っている。断られた場合、フェイト達の存在を明かすしかない。私以上に厄介な連中が来ると。彼女は私とマイクを交互に眺め、数分と深く黙考した後に「本当に出来るの？」と確認してきた。

「もちろん。もし失敗するようであれば・・・。エヴェストルム。ランツェフォルムで起動」

グローブを外し、"エヴェストルム"を待機形態の指環からランツェフォルムへと変える。４０ｃｍほどの柄の上下に１ｍほどの穂、という外見を持つ大槍。私が武器を手にしたことで白井さんがまた怯え始めたのが判ったため、

「白井さん。あなたが私の命を奪ってください」

"エヴェストルム"を床に置いて、滑らせるようにして白井さんの元へ。

「あなたの歌、さっきの公園で聴きました。一瞬で聞き惚れ、大ファンになりました。あなたはさっき言いました。歌こそがあなたの命そのものだと。なら、私も命を懸けるのが道理」

恐る恐る"エヴェストルム"の柄を握った彼女は「ん～～～、重い」と持つのを断念した。彼女は小さく首を横に振って、「いいよ。信じる」そう言って"エヴェストルム"を私の元へ滑らせてきた。

「ありがとうございます。ではすぐに始めましょう」

"エヴェストルム"を指環へと戻して左中指にはめ直す。まずは白井さんをベッドに寝かせる。リラックスさせた状態で治療を行いたい。

「マイクを貸していただけますか？　あっ、安心してください。持ち逃げはしませんから」

白井さんに手を差し出すと、「判ってる」と名残惜しそうながらも私の手にマイクを置いた。受け取ったマイクからジュエルシードを取り出すと、喋れなくなった彼女は携帯電話のメモ帳で、宝石・・・！？と打って見せてきた。

「これがあなたの声を取り戻させた正体です」

ジュエルシードの魔力を少しばかり利用させてもらおう。右手にジュエルシードを握りしめ、「白井さん。喉に触れます。いいですか」と確認。白井さんはコクリと頷いて、首を反らして喉に触れ易いようにしてくれた。

「ありがとうございます」

そっと左手を伸ばし、人差し指・中指・薬指で白井さんの綺麗な喉に触れる。"魔力炉（システム）"を現状で可能なレベルでフル稼働し、魔力吸収のイドゥンの発動を準備しつつ、エイルの発動へ。

「いきます。必ず治しますから、出来れば信じてください」

――信じるよ。魔法使いのルシリオンちゃん――

操作した携帯電話のモニターを私に向けながら微笑んだ白井さん。

何としても応えなければ男じゃないな。多少の無茶をしてでも、必ず治す。

「女神(コード)の・・・・・祝福(エイル)」

――女神(コード・イドゥン)の救済――

サファイアブルーに輝く魔力が白井さんの喉を包み込む。ものすごい勢いで消費されていく魔力。しかしジュエルシードからイドゥンで魔力を吸収。３０秒間の治療。エイル発動を停止し、"魔力炉(システム)"の稼働レベルを通常にまで戻す。彼女が横たわるベッドから数歩と離れ、「どうですか？」と尋ねると、彼女は上半身を起こして口を開けたが、でも声は出さない。

（まさか・・・失敗したのか・・・・！？）

最悪な想像が脳裏に過ぎる。だが「あ・・あ、あ・・・あ、あ、あ・・・」発声練習のように断続的に声を出した後、白井さんの瞳からどんどん涙が溢れてきた。

「出る・・わたしの、声が・・出るよ・・・ひっく、うっく、ひぅ・・ぅく・・」

とうとう堪え切れなくなって白井さんは大声で泣き始めた。ジュエルシードの回収は終わったからこのまま放置して離脱した方が良いんだろうが。彼女にはどうしても伝えておかなければならないことがあるため、泣き止むのを待つ。泣き顔を見ないために背を向けて

いるところに、電話のコールが室内に流れ始めた。

（石田先生からだ。はやての検査終了１５分前か）

廊下に出てから"エヴェストルム"の通信機能をオンにして、「もしもし」コールに応じる。

『あ、ルシルちゃん？　石田です。約束の１５分前だから連絡しました』

「ありがとうございます。検査が終わる前にはそちらに伺いますので。はやての事、よろしお願いします」

『はい。それじゃあ待っていますね』

通信を切り、再び白井さんの病室へと入る。と、「ありがとう、ルシリオンちゃん！」いきなりハグをされた。彼女は私を抱え上げ、その場でクルクルと回り始める。彼女の方が背が高いために足をついて逃げることが出来ない。

「わたし喋れてる！　また歌える！　わたしの自力でまた！」

「良かったです！　良かったですから、そろそろ止まってほしいんですが！」

結局、１分ほど興奮が冷めなかった白井さんに揉みくちゃにされてしまった。最後は一緒にベッドに倒れ込み、彼女は肩で大きく息を

し、私はその間に距離を開ける。伝えておきたかったことを伝えるチャンスだと思い、「白井さん。最後にお願いがあります」話を切り出す。彼女はベッドの上で大の字になって、「なんでも聴くよ！代金なら言い値でも！」と笑う。

「代金はすでに貰っています。お願いと言うのは、今回のことを口外しないこと。それだけです」

「ん、判った。・・・本当にありがとう、ルシリオンちゃん。わたしの歌（いのち）を取り戻してくれて」

「いいえ。白井さんの歌声を守れたこと、私自身が光栄に思います」

これは本心だ。白井さんの歌声は、本当に素晴らしい力を持っている。それを守れたと思うと、誇らしく思えてしまう。

「それでは白井さん。私はこれで」

「あ、うん・・・。またね、ルシリオンちゃんっ♪」

手を振る白井さんに手を振り返し、私は再び屋上へ向かい、そこで変身と結界を解除。そしてはやての検査が終わるまで待合室でのんびり待ち続け、検査が終わったのを木花さんから伝えられてはやての元へ。検査結果は後日ということで、私とはやては帰路へと着いた。

「ルシル君。今日は何してたん？」

「いつも通りだよ。そうだ、はやて」

「ん？」

「明日、遊びに行こうか」

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒はやて†††

時間は朝の６時ちょっと過ぎ。わたしは鼻歌を口遊みながら、台所でサンドイッチ作りに勤しんでる。本当ならもう少し寝てるんやけど、寝る前から気持ちが昂っててこんな早くに起きてしもうた。

「楽しみやなぁ、動物園♪」

どこかへ遊びに行こうってゆう、前にしたルシル君との約束が果たされる日。今日はちょう遠出して、市外の動物園に行くことになった。それが楽しみでしゃあない。楽しく浮かれながら作ったサンドイッチをバスケットに並べてく。わたしもルシル君も料理が出来るから、遊びに行く時は作っていこうって決めてある。そやからこうして作って、動物園で一緒に食べる光景を想像して・・・「うん♪」ニヤけてまう。

「ふわぁ。おはよう、はやて」

「おはようや、ルシル君♪」

リビングダイニングに入って来たルシル君と、いつものように挨拶を交わす。起きたばかりでちょう髪が乱れとるルシル君は冷蔵庫を開けて、水のペットボトルを取り出した。すかさずルシル君用に買うてきた（代金はルシル君持ちやけど）コップを「はい♪」差し出す。

「ありがとう。・・・・ふわぁ」

「眠そうやな、ルシル君。また夜更かしさんか？」

「まぁ、夜更かしさんだったな」

コップに注いだ水を一気飲みしたルシル君が「あはは」って苦笑い。ルシル君はたびたび夜中に出かけて、魔法の道具を探しに行ってる。あんまし無茶はせんでほしいけど、ルシル君の個人的な事情やから止めれへんし。

「今日の昼の弁当か。本当に手伝わなくて良かったのか？」

「うん。昨日も言うたけど、今回はわたし1人に作らせてほしかったでな」

ルシル君との遠出、その初記念となれば、これはわたしが作るべきや。ホンマはもっと手の込んだお弁当にしたかったんやけど、気軽にどんな場所でも食べれるってことでサンドイッチにしてみた。ちなみに具の種類は5タイプにしてみた。どれもルシル君に教わったレシピや。

１つ目は、食パン２枚の片面にブルーベリージャムを薄く塗って、ハムを２枚ほど挟んだもの。
２つ目は、ベーコンをカリカリ手前くらいまで焼いて、黄身が崩れやん程に焼いた目玉焼き、トーストした食パンの片方にケチャップ、もう片方にとんかつソースを塗って、具をサンドしたもの。
３つ目は、新鮮しゃきしゃきなレタスと、マスタード・マヨネーズ・辛子を混ぜ合わせたソース、ハムとチーズを挟んだもの。
４つ目は、トーストしたパン２枚の片面にマヨネーズと粒マスタードを塗って、焼きベーコと薄焼き卵、切ったトマトとレタスを挟んだもの。
そんで最後は、昨日の晩ご飯の時に作り置きしといたエビカツ！
テーレッテレー♪

「最後に、タルタルソース♪っと。完成や！」

「うん、どれも美味しいそうだ。今日の昼食は本当に楽しみだよ」

ホンマに楽しみにしてもらえとるってゆうんがルシル君の笑顔から判る。それだけでわたしは幸せや。それからわたしらは朝ご飯を済ませて、８時になったところで家を出るんやけど・・・。わたしの乗る車椅子を押すルシル君を見る。

「どうした？　はやて」

「えっ？　あー、ううん、なんでもないよ。ただ、大人バージョンのルシル君、ゼフィさんとはまた違う意味で綺麗やなぁって」

今のルシル君は魔法で大人の姿に変身中や。性別は本来の男の人で。女の人やと思えてまうほどに綺麗やけど、それでも男の人なんや。ルシル君の将来がこの姿やと思うと、その頃になったらすっごくモテるんやろうなぁ～。

そんなこととか考えながら電車に乗って、ルシル君と楽しくお喋りしたり、父さんの遺品のデジタルカメラを操作してるルシル君を眺めたりしながら、揺られること数十分。目的の駅に着いて、改札を出たらそこからバスでまた数十分、ようやく着いた動物園。休日やから家族連れや恋人さん達もたくさん居る中、入園料を払ってわたしらは園内に入った。

「やっぱりルシル君、目立っとるなぁ～」

「気になるようなら髪を染めようか？」

「あ、ううん。わたしは平気や。ルシル君は・・・もう慣れとるか」

「ああ。注目を受けるのはもう慣れっこだ」

ルシル君の堂々とした態度にちょこっと笑って、わたしらはまずパンダを観に行くことに。やっぱ人気者さんやから人だかりが出来てて、車椅子に乗ってるわたしはあんま見えへん。ちょう残念やな。とか思うてたら、わたしの両脇に差し込まれる手。襲い掛かるんはフワッと持ち上げられた浮遊感。

「よっと」

「ひゃあ！？」

一気に持ち上げられたわたしは、気付けばルシル君の肩に乗せられてて。これは世に言う「肩車・・・！」やった。ルシル君の今の身長はホンマに高いで、檻の中のパンダがよう見える。

「ちょっ、ルシル君、なんや恥ずかしいんやけど・・・！」

「何を恥ずかしがるんだ、はやて。せっかく来たんだから、見ないと損だぞ」

「そうは言うても・・・。あの、重ない？」

「ぷふっ。なんの心配かと思えば。重くないよ。でもある意味重い」

ルシル君に重いて言われた。それがちょうショックで「ダイエットが必要か・・・？」と自分のお腹を触る。するとルシル君は苦笑いした後、「体重じゃなくて、責任みたいのが重いと言ったんだ」って言い直した。なんのことやろ、と思うて、デジタルカメラでパンダの写真を撮っとるルシル君に「責任？」って訊き返してみる。

「何て言うかな。今、私ははやてをこの身1つで支えている。その責任が重く、でも私の気を引き締めてくれて、守るべきはやてが居ると思わせてくれるから強くなれるというか・・・」

なんやすごく恥ずかしいことを言われとる気がして、頬が熱くなってく。そやから「も、もう、なに言うてんのルシル君！」誤魔化す

ために、ルシル君の頭をペチペチ叩く。

「あはは。私自身も何を言い出しているのか不思議だよ。今のは無し、忘れてくれ」

「無しにするんは却下。ありがとう、ルシル君。なんや嬉しかった」

わたしはルシル君の頭にもたれ掛るようにして抱きつく。なんて言うか、今のルシル君は父さんみたいや。お星さまになる前にもこうして父さんに肩車をしてもらった。そう思うと恥ずかしさが薄れてって、「このまま園内を周ってええか？」このまま肩車してほしくなったから訊いてみる。

「うん、はやてが嫌じゃなければいいよ」

「ありがとうな。そんじゃ、次に行こかっ♪」

「おう！」

ルシル君に肩車をしてもらいながら、次はペンギンとかホッキョクグマとかが居るエリアへ。ちょうど良いタイミングやったみたいで、飼育員さんがペンギンの散歩をやってた。ルシル君は「可愛いなぁ」ってカメラのシャッターを切り続ける。そんなルシル君も可愛ええよ♪　それからホッキョクグマ、クマを見て、サル山へ。サル山で、1匹のお猿さんがルシル君をジッと見詰めてきてる。

「ルシル君。めっちゃ見られてる」

「ああ。とりあえず何かアクションを起こしてみるか」

ルシル君がそう言うて、わたしの右脚を掴んどった右手を振ると、ルシル君を見詰めとったお猿さんも手を振った。周りのお客さん達から「おお！」って歓声が上がった。そんなお猿さんと、わたしとルシル君は記念撮影。次にライオンとかトラのエリア、いろんな鳥の居るエリアを観て回ってから、次はふれあい広場。

「ルシル君！　ウサギ、めっちゃ可愛ええ　」

人工芝が敷かれた柵の中で両足を伸ばして座り込むわたしは、ウサギを膝に乗せてそっと撫でる。するとウサギはカチカチって歯を鳴らし始めた。飼育員さんが言うには、それは喜んでる仕草やということ。嬉しさと可愛らしさを伝えたくてルシル君の方を向いてみれば、「おわっ？」ルシル君が大の字になって６羽のウサギに襲われてた。飼育員さんが「お兄さん、モテますねぇ～」って、ルシル君の体の上に乗っとるウサギを退かしてく。

「ホンマや。ルシル君。なんかコツとかあるん？」

「コツなんて無いよ。ただ、ちょっと魔力を通して意思疎通を図るんだ。可愛いな、良い子だな、みたいに。すると・・・」

ルシル君が小声でそう教えてくれて、ルシル君がさっきのウサギを見詰めると、今度はわたしにウサギが群がって来た。わたしの膝に乗って来たり、腕や体に鼻先をツンツンして来たり、わたしの周り

を飛び跳ねたり。

「すごい。どの仕草もウサギにとってご機嫌を表すものなんですよ！」

飼育員さんがホンマに驚いてる。ルシル君に「何したん？」って小声で訊いてみる。

「はやてはとても良い子だから、たくさん優しさを貰えるぞ、みたいな意思を飛ばしてみた。本来、それだけじゃここまでの行動を起こさないが、ウサギたち自身が本能で解ったんだろうな、はやてが甘えることの出来る相手だって」

そう教えてくれたルシル君は、ひたすらわたしとウサギをフレームに入れてカメラのシャッターを切り続ける。ルシル君ってホンマに何でも出来るんやなぁ。わたしも魔法使いになってみたいかも。ウサギともふもふ出来て、すっごく満足したわたしとルシル君が次に向かったんは乗馬公園。２つの大きな円の柵の中には、ポニーと馬が３頭ずつ居って、ポニーにはわたしのような子供が乗って、馬の方には大人が乗ってて、飼育員さんが綱を引いて進ませてる。車椅子を預けて、早速、飼育員さんに乗馬体験コースを申し込む。

「――お子さんだけならポニーに乗ることが出来ます。お兄さんは馬の方になりますね。保護者同伴でしたらお子さんも一緒に馬に乗ることが出来ますが。いかがしましょう？」

「ルシル君。一緒に乗ってもらってもええか・・・？」

「もちろん♪　私たち2人で、馬をお願いします」

馬の柵に案内されて、別の飼育員さんが1頭の白馬を連れて来てくれた。馬はわたしの方に首を伸ばしてきて、ルシル君がその首を撫でながら「よろしく頼むよ」って語りかけると、馬は鼻を伸ばした。

「お兄さんに撫でられて気持ち良いんですね。こんなに早くお客さんに懐くなんて、初めてかもしれません」

「ルシル君。もしかしてまた魔法を・・・？」

「秘密だぞ♪」

そんなこんなで馬に乗ったわたしとルシル君。わたしが前で、ルシル君が後ろ。後ろからルシル君に抱きつかれとる感じで、ちょう恥ずかしいような嬉しいような。馬の上でパシャパシャとルシル君はシャッターを切って、ツーショット写真乱舞。柵の中を馬に乗って一周するプチお金持ちなお嬢さま気分（偏見やろか？）を味わった。

「お腹が空いたと思えば、もう昼時を過ぎているな」

「ホンマや！　じゃあ、わたしらもお昼ご飯にしよか」

乗馬体験が出来て満足して、次にどこへ行こうかって話になったとき、ちょうど言い頃合いやとゆうわけでお昼ご飯。わたしが作ったサンドイッチや。立ち入り出来る草むらにレジャーシートを広げて座って、車椅子の持ち手に提げてたランチバッグからバスケットと

水筒を取り出す。

「いただきます！」

「はい、どうぞ～♪」

ルシル君がわたしの作ったサンドイッチをパクッと1口。すぐに笑顔になって「美味しい！」って、こっちも嬉しさで笑顔になることを言うてくれた。わたしも「いただきます！」続いて食べ始める。うん。我ながら美味しい。

「そう言えばルシル君。フェンリルさんは？」

ルシル君の使い魔、フェンリルさん。一緒に来れれば良かったかも。そう思って訊いてみれば、ルシル君は空を見上げて小さく溜め息を吐いた。

「アイツの正体は狼だからな～。動物園なんて餌の巣窟に放り込むわけにはいかないだろ」

「あー、そうゆうことか～。狼さんやったら、しゃあないか」

フェンリルさんが動物を襲ってる光景を想像・・・出来ひんなぁ。和気あいあいと動物と戯れとる光景しか出て来おへん。そんで話題はフェンリルさんからこれからの事になって、わたしの誕生日が6月4日で、遠回りに誕生日パーティを開きたいみたいなことを伝えたりしてみた。

出来ればルシル君をこのまま家に留めたい、これからも一緒に過ごしたい。ルシル君は魔法使いで、探し物のために旅をし続けてきた。わたしと同い年やのに。もしここで探し物が終わるんなら・・・このまま。

「6月4日か。そうだな、誕生日パーティ、やろうな」

「あ・・・・うんっ♪　あ、そうや！　ルシル君の誕生日っていつなん？」

お互いの誕生日をお祝い出来たら、最高に楽しいはずや。ルシル君は少し黙った後、「2月5日だよ」って答えてくれた。

「とゆうことは、わたしがお姉さんやね♪」

ルシル君を弟にするんもええかもしれへんなぁ～♪　とりあえず「お姉ちゃんって呼んでみてくれへん？」なんてお願いしてみる。

「ええっ！？・・・・お、お姉ちゃん・・・・」

「うん。元の姿に戻ってからもう一度呼んでもらおかな」

大人バージョンのルシル君にお姉ちゃんって呼ばれてもあんま面白なかった。ルシル君が「一体何を期待しているんだ、はやて」ってサンドイッチを手に取って食事再開。わたしもサンドイッチをパクパクモグモグ。ちょお作り過ぎ感があったんやけど、ルシル君がほとんど食べてくれた。最後の1つになった時、

「ん？　目覚める前に回収しないとな・・・。はやて。ちょっと席を外すよ。すぐに戻って来るから待っていてくれ」

ルシル君がボソボソと何かを呟いたかと思うたら、ルシル君はそう言うてマップを広げた。その視線を追ってみると、お手洗いやってことが判った。食事時に言えへんとか思うたんやろうけど、わたしにそんな気遣いとか無用やのに。

お手洗いに向かうルシル君を見送って、わたしはルシル君が帰ってくるまで横になって待つ。考えるんは、さっきのお姉ちゃんと弟ってゆう関係。悪くないって思うてる。お互いに家族が居らへんから、グレアムおじさんに頼んでみれば何とかなるかも。

「あとは、ルシル君が賛成してくれるかやなぁ・・・」

なんやウトウトしてきた。遅寝早起きの影響やろか。眠くなってきてしもうた。待っとらなアカンのに、もうまぶたを開けておけるほどの力が・・なくなって・・・。

「んぁ・・・っ？」

自分の声にビクッてなって、目を開ける。

「お、マスター。はやてが起きたよ」

「フェン、リル・・さん・・・？」

わたしの顔を覗き込んでくるんはフェンリルさんやった。状況が判らんくてキョロキョロ辺りを見たところで、「おはよう、はやて。よく寝ていたな。君も夜更かししていたのか？」一瞬で状況を理解。わたしはあのまま眠ってしもうたってことが。わたしはルシル君に背負われとって、フェンリルさんが車椅子を押しててくれた。

「ルシル君・・・起こしてほしかったんやけど・・・」

全然遊べへんかった。お昼ご飯を食べた後は残りの動物を観たり、お土産屋さんに行ってみたかったのに。

「さすがにあんなに深い眠りについているはやてを起こす程、私には度胸がないよ。だから起こさないようにするために車椅子に乗せずに背負って、車椅子運搬担当にフェンリルを召喚したんだ」

「まぁ、私はマスターの為だけに存在するんだから文句はないけど、どうせなら遊んでる最中に召喚してほしかったよぉ」

「恐ろしいことだぞ、それ。お前を動物園に連れて行ったら、お前、絶対に食うだろ？・・・それでな、はやて。遊び足りなかったんなら、また遊びに行けばいい。今度はフェンリルも一緒に」

「えっ、いいの！？　やった！」

「うおっ？」「おわっ？」

フェンリルさんが飛び跳ねて喜んで、踊りながらわたしをルシル君

の背中から奪い取ってハグ。そんでクルクル回り始めるから「目が回る～」やった。ルシル君が止めに入って、やっと解放された。車椅子にまた乗せてくれるんかな、って思うたらフェンリルさんはわたしをお姫さま抱っこして、ルシル君に「マスター、車椅子お願いね～♪」って言うて先に行く。

「従者が主をこき使うとは」

不満そうにそんなこと言うルシル君やけど、表情は晴れやかやった。夕陽に染まる世界の中、わたしら3人の影が伸びる歩道を歩く。ゆっくり流れる時間で、とても心地よくて、そやから守りたいって強く思う。

――守るべきはやてが居ると思わせてくれるから強くなれる――

ここで、ルシル君の言葉を思い出した。

「ルシル君」

「ん？」

「守るよ」

「え・・・？」

「わたしも守るよ。ルシル君の事」

「はやて・・・？」

「ルシル君を傷つける人が居ったら、わたしが守ったげるからな♪」

Ｅｐｉｃ１０－Ａゲームセンター☆なのは『魔法少女の挑戦』～Ｔｈｅ　ＥｍｐｅｒｏＲ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

放課後、私とユーノ君、そしてすずかちゃんは、アリサちゃんのお家にお呼ばれしていて、ユーノ君が張ってくれた結界内――広いお庭に居て、そこで私たちは魔法の練習をするためにバリアジャケット姿で居る。

まずは、ハムスター姿のセレネちゃんとリス姿のエオスちゃんによる、アリサちゃんとすずかちゃんのデバイスの機能のおさらいから。

私たちは丸テーブルの周りにある椅子に座って、テーブルの上に立ってるユーノ君、セレネちゃんとエオスちゃんを見る。

「じゃあ、すずかからね。あなたのデバイス、スノーホワイトの特性を言ってみて」

「うん。スノーホワイトは補助系の魔法に優れていて、私は後衛タイプの魔導師に向いてる・・・んだよね」

「イエス！」

「そんじゃ次はアリサだよ。フレイムアイズの特性を言ってみて」

「ええ。あたしのフレイムアイズは、近接中距離戦に優れてて、あ

たしは前衛タイプの魔導師、なんでしょ」

「そーゆうこと」

アリサちゃんとすずかちゃんの回答に満足そうに頷いてるセレネちゃんとエオスちゃん。２人のデバイスは、元は"クレイオスソウル"っていう１つのデバイスで、それが２つに分かれて"フレイムアイズ"と"スノーホワイト"に・・・ううん、正確には３つだって聞いた。

「で、もう１つのデバイスの３つを合わせてクレイオスソウルっていう名前なんでしょ」

「そうだよ。クレイオスソウルは３つのＡＩコアを持ってる、特殊なデバイスなの。中遠距離のペルセース、近距離のパラースはフレイムアイズ、補助のアストライオスはスノーホワイトになったんだ」

「私とエオスは正直魔導師としての才能がないんだよね。だから全機能の５０％分を同時に扱えるクレイオスソウルのままで扱ってたわけ」

"クレイオスソウル"の説明を終えた２人を眺めてると、ユーノ君が私の袖を引っ張ってきた。私はコクンと頷いて、今度は私の"レイジングハート"の特性、というか私のタイプを話す。

「私のレイジングハートは、射撃や砲撃に優れてて、私は中距離と遠距離タイプの砲撃魔導師、だよね」

「うん。それに、なのはの防御力も練習で格段に上がったから、前みたいにそう簡単に撃墜されないはずだよ」

そんな私は遠距離系、アリサちゃんは近距離系、すずかちゃんは後衛の補助系。アリサちゃんが急に「これはいいわ♪」って笑いだして、テーブルに立てかけてあった"フレイムアイズ"を手に椅子から立ち上った。そしてテーブルから離れて、「最高のチームじゃない、あたし達っ♪」って"フレイムアイズ"をブンブン振るった。

「確かにメンバーの特性が綺麗に分かれてるから、それぞれの魔法のレベルを上げれば、チーム戦になったら最強かも」

「けどね、アリサ。この中でまともに魔法戦を経験しているのはなのはだけ。今の状態でジュエルシードの暴走体や、フェイトやテスタメントって子との魔法戦をしたら、絶対に負けるから」

エオスちゃんに凄まれた私たちは海鳴温泉での経験を思い返す。圧倒的な数で攻めて来たお猿さん。私ひとりじゃどうにもならなかった。アリサちゃんとすずかちゃんのおかげで何とかなったけど、でも結局はフェイトちゃんにジュエルシードを取られちゃった。テスタメントちゃんとはまだ戦ったことはないけど、たぶん今の私たちよりは強いはず。確かに今のままじゃ勝てない。お話も出来ない。だからこそお話を聴いてもらうために・・・。

「判ってるわよ。だからこうして集まって魔法の練習をするんでしょうが。だからあんたもあたしに力を貸してよね、フレイムアイズ！」

≪おうよ！　やるからにはとことんだぞっ、アリサ！≫

「私も頑張るから、スノーホワイトもよろしくね」

≪ええ、わたくしも全力でお力添えいたしますわ≫

アリサちゃんと"フレイムアイズ"、すずかちゃんと"スノーホワイト"。心が通じ合ってみてるみたいで、２人のことがすごく羨ましいなぁ。そう思っていると、"レイジングハート"が≪マスター。私たちも負けてはいませんよ≫って言ってきてくれた。

「レイジングハート・・・。うんっ。負けていられないもんねっ♪」

そうだよ、私たちだって負けないもん。一緒に過ごした時間は負けてないし、築いた絆だって。私たちが相棒（デバイス）ともっと絆を深めるためにお話ししていると、エオスちゃんが「はーい。練習、始めま～す」って打ち切ってきた。そうだった。魔法の練習を始めるために集まったんだった。というわけで、練習開始です。

「フレイムアイズ。あたし、もっと攻撃の魔法をやってみたいわ。近距離タイプって、自然と敵とガチンコの殴り合いでしょ？」

≪馬鹿。まずは移動魔法だよ、アリサ。攻撃は今ん所フレイムウィップだけで十分だ。前衛っていうのはキッチリ自分の身も守らないと務まらねぇんだよ。出る時は出、引くときは引く≫

アリサちゃんと"フレイムアイズ"は移動魔法の練習をするみたい。一緒に空とか飛べたら最高だろうなぁ〜。もちろんすずかちゃんもだし、出来ればフェイトちゃんやアルフさん、テスタメントちゃんとも仲良く飛んでみたい。

≪スズカ。あなたは後衛ですわ。補助を担当するのですから、その類の魔法の練習となりますわ≫

「うん。ビシバシお願いね♪」

すずかちゃんは補助関連の魔法の練習みたい。そして私は、「なのはは射撃の精密操作だね」ユーノ君から練習内容を聞く。"レイジングハート"も≪大切な事です。頑張りましょう、マスター≫って応援してくれる。

私の練習は、空き缶を操作したシューターで打ち上げて、地面に落ちないようにするっていうもの。同時に操作して小さな的に当て続けないといけないから、誘導操作能力を鍛える事が出来る。用意しておいた空き缶を5本、地面に置いて「レイジングハート！」シューターを5基作り出す。

「よし。始めよう。シューット！」

――ディバインシューター――

一斉に撃ち放って、空き缶を宙に打ち上げる。意識を集中して、クルクル舞う空き缶5本にシューターを当て続けているところに、

「のわぁぁぁあああああああッ！！？」

「にゃぁぁぁあああああ！？」

ずざざざざーー、と私の足元にアリサちゃんがヘッドスライディングしてきた。突然すぎてビックリしたから後ずさりして、「どうしたの！？」って、顔面を押さえて唸ってるアリサちゃんに尋ねる。でもアリサちゃんが答える前に、シューターの操作を打ち切っていたから空き缶が揃って、「あたっ、あたっ、あいたっ！？」アリサちゃんの頭に落下。

「ご、ごめんねアリサちゃん！」

「いたた・・・い、いいわよ。あたしも悪かったし。空を飛ぼうとしたんだけど・・・やっぱ無理！　人間が空をすいすい飛べるわけないじゃない！！」

≪ 頭固過ぎだぜ、アリサ≫

"フレイムアイズ"がそんなアリサちゃんに呆れて、「うっさい」って返すアリサちゃん。でも、そっか、残念だなぁ。アリサちゃんとも空を飛びたかったのに。アリサちゃんの手を取って立つのを手伝っていると「どうしたの？　アリサちゃん」って頭上からすずかちゃんの声が。

「あ・・・」「んな・・・」

すずかちゃんが空を飛ぶなんてどうってことないって感じで浮いていた。すたっと静かに地面に降り立って、改めて「どうしたの？」ってアリサちゃんに訊くととアリサちゃんは俯いて、ぷるぷる体を震わせたと思えば、

「べ、別に空なんか飛べなくてもいいわよーーーーっだ！！」

――ブレイズロード――

そう言いながら走り去って行くんだけど、アリサちゃんの脚から炎が噴き上がっていて、それがロケットみたいだから速さが跳ね上がってる。もう走ってるって言うよりある意味飛んでるよ、空じゃなくて地面スレスレだけど。アリサちゃんの背中を見守っていると、いきなり脚の炎がドカンと爆発。

「なんでよぉぉーーーーーーーッッ！！」

「「アリサちゃぁぁーーーーーーーん！！？」」

アリサちゃんがスペースシャトルみたいに空に打ち上げられちゃった。ポカーンとしちゃう私たち。でもアリサちゃんが落下し始めたのを見て、再起動。すでに空に上がっていたすずかちゃんが「アリサちゃん！！」真っ先にアリサちゃんの元へ。

――フライアーフィン――

私も少し遅れて空に上がって、アリサちゃんを抱き止めたすずかち

ゃんの側に。アリサちゃんは溜息を吐いた後、「あー、ありがとう、すずか、なのは」って気まずそうに苦笑い。

「ううん。アリサちゃんが無事で良かったよ」

「すずかちゃんの言う通りだよ、アリサちゃん」

気にしないでもらうために笑顔で応じると、「ありがとう」今度は笑顔でお礼を言ってくれた。改めてそれぞれの魔法の練習をしていると、ピリッと感じる、例のアノ気配。

「なのはっ！」「なのはちゃん！」

離れていたところで練習していたアリサちゃんとすずかちゃんが駆け寄って来た。やっぱり魔導師になったから気付いちゃうんだね、ジュエルシードが発動した気配が。時間は5時前。今から市街地へ向かうとなると、夕ご飯には間に合わないかも。でも、そんなことを言っていられない。アリサちゃんに車を出してもらうことになって、私たちは市街地へ向かう。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒ルシリオン†††

イレギュラーナンバーである２２から３１の全てを回収し終えた今、正規ナンバーを手に出来るのはなのはとフェイトのみ。しかし最終的に管理局に回収され、そのまま保管という結末になってしまうのは勿体ない。だから回収しに来た。そういう考えに至ってしまっている私は、かなりまずいレベルで魅かれているな。〝堕天使エグリ

ゴリ"を救うために必要不可欠な魔力供給源、ジュエルシードに。

「一応だ・・・一応、見に行こう・・・」

市街地にある一軒のアミューズメント施設からジュエルシードの気配を感じる。先の次元世界では無かった場所。ナンバーは正規だが、落下地点がイレギュラーというパターンだ。店内に入り、正確な場所を探し当てるために探索開始。施設内にはボーリング・ビリヤード・卓球・バッティング・バスケットスローが出来るエリアがある。そして問題のジュエルシードがあるエリアは「ゲームセンター、か」色々な思い出がある場所だった。

「15歳未満は18時まで。あまり時間は無いな」

とりあえず結界だな。男子トイレへと向かい、個室に入ってすぐに封牢結界を展開。"界律の守護神テスタメント"の聖衣型の騎士甲冑へと変身して、ゲームセンターへ。無人と化している施設内を歩く中「もう来たか。フェイト、アルフ」彼女たちの魔力を探知した。遭遇する前にゲームセンター内へと入ってみると、「店内全てがジュエルシードの影響を受けているのか」結界とは別の異空間に入り込んだような感覚を得た。当たり外れの1台の筐体探しじゃなく全部が対象だ。ならば・・・。

「力を借りるぞ、リオ」

――ワールド・オブ・ディバインスヴァスティカ――

私とシェフィの子供である"戦天使ヴァルキリー"の1体、リオ・ランドグリーズ・ヴァルキュリアの魔術を発動。元々は私が有していた未完成の下級術式の1つだから、"英知の書庫アルヴィト"より引っ張り出す必要がない。

まぁ、リオが自らの学習能力で完全に昇華させたこの術式の場合は、"アルヴィト"からの発動となるが。リオに譲った時は名無しで、ワールド・オブ・ディバインスヴァスティカはリオの命名だ。聖鉤十字の世界、という意味を持つこの技は名の通り、卍型に閃光のオーロラを発生させ、接触した物質にダメージを与える。広域攻撃だからこそ使ってみたが、筐体には傷ひとつとして与えることが出来なかった。

「あんたは・・・！」

「テスタメント・・・！」

入口からフェイトとアルフの声が聞こえてきたが、無視して店内を徘徊。戸惑いの気配を感じるが放置だ。下手に言葉を交わして、フェイト達との生活を懐古して腕を鈍らせるわけにはいかない。交わすとしても、まずは問答無用で撃破するしかない。でないと、私が私でなくなる。そう、初邂逅の時のような失態は、もう二度としない。

「待ちな！　この前はよくやってくれたね！　あん時に奪って行ったジュエルシードを渡しな！」

「吠えないで。ここで戦っても何もならないんじゃない？」

声を少女のものに変声し口調もまた変える。本当に窮屈だな、自分を偽るのは。フェイトから「どういうこと？」と訊き返され、さっきみたいに筐体へ魔力弾を撃ち込む。また完璧に防がれた。というより「キャンセルされるんだね」フェイトの言う通り、魔法の効果をキャンセルされる。あの懐中時計みたいに特別な条件があるようだな、コイツにも。

「で？　どうすればジュエルシードを封印出来るんだい？」

アルフが敵である私に向かって馬鹿な質問をしてきたから「は？」呆けてしまう。堪らずアルフとフェイトの方へと振り返り、「敵にそれを訊く？」と嘲笑で返す。フェイトは何も言わずひたすらに私を見詰め、アルフだけが敵意をぶつけてくる。

「何か条件があるのかもね。そう、たとえば・・・ゲームをクリアする、とか」

「「ゲームをクリア・・・？」」

きょとんとするフェイトとアルフ。今までの生活環境からしてそうなるよな。手近な筐体の前に立つ。それはクイズゲームの筐体だ。傍にはメダルが積み上げられたプラスチック製のケースが置かれている。推察通りだな。クリアすることがジュエルシードを封印する条件だ。しかも試されている。クリア出来るものならクリアしてみろ、と。だからメダルを堂々と置いているんだろう。

（上等だ。２万年分のあらゆる世界と時代の知識を持つ私に、勝てるゲームなんてない）

とは言え実際に必要なのはこの世界の知識だけだが。とにかくクイズゲームをプレイ。私の両側にフェイトとアルフが立ち、画面内に映るゲームを眺める。

「どんな難問でもかかって来なさい」

で実際にプレイし、難易度がラクショーなものから激ムズまでの４コースを全部ノーミスで瞬殺。すると店内のスピーカーから『クリアおめでとー♪　クリアおめでとー♪』軽快な音楽と共に流れてきた。

「クリアなの・・・？」

「クリアなの」

「フェイトの真似すんじゃないよ。噛み殺すよ？」

「はいはい。っと、出て来たね」

「「っ！」」

ゲームセンターの中央に突如現れたのは半透明な道化師。思念体ですらない幻影か。フェイトが"バルディッシュ"を道化師に向け、アルフは牙を剥いて臨戦態勢を取った。どうせ無駄な行為。とは言

え、制止しても聴かないだろうから見守る。

――フォトンランサー・キャリバーシフト――

「「ファイア！！」」

フォトンスフィアをそれぞれ６基、計１２基を展開させ、ランサーを何十発とマシンガンのように連射。ランサーは踊り続ける道化師をすり抜け、天井に当たるというところでバチッと弾かれ消滅した。道化師が宙で側転しながら『ここではゲームの勝敗が全て♪　ゲームのクリアこそ勝利☆』今回のルールを説き始めた。

『ゲームでボクに勝ったらクリア♪　ボクに多く勝かった子に、ボクを封印する資格を与えよう♪　さあ、ボクと遊ぼう、みんなで遊ぼう☆』

歌うように説明した道化師が『さぁ、最初は誰からだい？☆』と踊りだす。話が通じるか判らないが、「今のクイズゲームの勝ち星に入るの？」と確認してみた。

『いいよ☆　まずは君が一勝だ♪』

ありがたいな。フェイトとアルフからは僅かな焦りのようなものを感じるが。もう１つの質問である「ゲームの選択はこちらが貰っても？」とさらに確認を取ると、道化師は『どれでもいいさ♪』と笑う。得意なゲームで攻めればいいんだが、向こうの実力が判らないな。最高難度のＮＰＣと思えばいいか・・・？

「今回も面倒だねぇ。フェイト、どうする？」

「魔法が通用しないならしょうがない。クリアするよ」

アルフに答えた後、フェイトは何故か私をチラチラ横目で見てくる。嫌な予感がする。気付かないフリをして早速別の筐体へと向かうと、フェイト達がついて来る。私は小さく溜息を吐き、「苦手なら今回は諦めたら」と言葉で突き放す。明らかに不機嫌な顔つきになったフェイト。いや、だからって敵を頼るってどうだよ。

「あなた達、こういう経験は？」

「ない」「ないねぇ」

「だったら・・・ガンシューティングでもやる？」

手近にあった筐体を指さす。返答を聴く前に、銃型のコントローラーを手に取る。どうやら2人で協力してクリアするモードと2人でスコアを競い合う対戦モードのあるゲームのようだ。

『まずはソレからかい？♪　じゃあボクと対戦だっ☆』

道化師がもう一挺のコントローラーを握った。私は銃身を持ち、「ほら。やるでしょ？」とグリップの方をフェイトに向けて差し出す。フェイトはおずおずと手に取り、「ジュエルシードの為、母さんの為」そう呟き、モニターに向かい合った。

で、道化師とのスコア競いの結果だが「瞬殺されたね、フェイト・テスタロッサ」それはもう酷いものだった。魔導師ゆえに優れている動体視力のおかげで、襲い来る敵の動きには対応できたが、リロードで躓いて即ゲームオーバーとなった。

「・・・・むぅ」

「うっさいよテスタメント！　そう言うならあんたがやってみな！」

というわけで、フェイトからコントローラーを受け取り、「次は私だよ」道化師に挑戦。ド素人なフェイトとは違い、私はこういった経験をいくらか積んでいるため、道化師を余裕で打ち負かしてやった。

『クリアおめでとー☆　クリアおめでとー♪』

よし。2勝目だ。魔法戦ではないから、競争相手を傷つけることもないから楽だ。チラッと横目でフェイトとアルフを見る。アルフはギリギリと歯噛みし、フェイトはすでに別のゲームを物色。私も次のゲームを物色しているところで、

「やっと来たか」「っ・・！」

なのはとユーノ、スクライア姉妹の魔力を探知。フェイトと同時に店の入り口へと振り向く。プレイ中からなのはの気配には気付いていたが、どうも魔力反応の数が合わなくておかしいと思っていた。管理局、クロノかと思ったが違うようだし。そもそも局が介入して

きたら即気付ける。ということは、イレギュラーが紛れ込んでいる。しかも「まさか、な」そのイレギュラーには嫌な予感がする。脳裏に過ぎった、ある2人の少女の笑顔。頼むから、彼女たちであってくれるな。

「あの子たちだ」

「知っているの？」

「この前、会った。名乗っていたけど・・・」

（この前、か。ということは・・・海鳴温泉）

最悪の予感が現実味を帯びてきた。店の入り口を注視しながらフェイトの声に耳を傾ける。だが、フェイトの口からイレギュラーの名前が出る前に、「何故だ・・・！」その姿を視界に捉えた。信じられない光景だった。なのはを左右から挟むようにして佇んでいるのは、絶対に魔導師になりえなかったはずの人物。

「フェイトちゃんとアルフさん、それに、テスタメントちゃんも・・・！」

「うわ・・・。あの子が、テスタメントって子？　マジで仮面とか付けて超怪しいじゃない」

「ア、　アリサちゃん。失礼だよ？　確かに怪しいけど・・・」

アリサ・バニングスと月村すずか。なのはの親友で、確かな一般人だったはず。２人はバリアジャケットを身に纏い、アリサはアームドデバイスのような剣を持ち、すずかのはグローブタイプで、"ケリュケイオン"や"アスクレピオス"、"アストライア"のようなブーストデバイスだと思われる。

「・・・？」

フェイトから訝しんだ視線を向けられるが、気を取り直すので精いっぱいだから反応できない。嫌な予感はものの見事に的中。しかしショックを受けるのは後だ。気をしっかり持て。アリサとすずかは魔導師になった。それはもう変えられない現実だ。だったら受け入れるのみ。唾を呑み、口を開く。

「高町なのは。ユーノ・スクライア・・・」

「テスタメントちゃん・・・。どうしてフェイトちゃんとアルフさんと一緒に・・・？」

「偶然に過ぎないよ。私が真っ先に来て、フェイト達が後で来た。最後にあなた達が来た。遅刻だよ」

なのは達の前にまで歩み寄り対峙すると、「やる気！？」とデバイスを構えるアリサ。アリサの肩に乗るリス、すずかの肩に乗るハムスターも「今度は負けない！」とファイティングポーズを取る。すずかが遅れて身構えると、なのはが「待って！」と前に躍り出て彼女たちを制止する。なのはと1対1で相対し、息を呑んでいる彼女

を指さし、クルッと回れ右をして店内の筐体を指さす。

「今回のジュエルシードは、コイツに多く勝った方が封印出来る。というわけで、あなた達もゲームクリアに勤しむように」

「「「「「はい？？」」」」」

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒なのは†††

半透明なピエロさんに改めて説明されて、私たちもゲームをクリアするために行動開始。まず最初にアリサちゃんが格闘ゲームで、増殖したピエロさんと対戦中。

「なんていうか早速魔法で活躍できると思ったのにさ。おっとと。うりゃっ！・・・まさかゲーセンで遊ぶことになるなんてね。って、結構やるわね、コイツ」

「でも、私はこれでもいいかな。あ、アリサちゃん、必殺技来るよ」

「あんま～い！！　カウンター！」

アリサちゃんは不満そうだけど、すずかちゃんはホッとしながら応援。アリサちゃんから預けられた、私の肩に乗るリスのエオスちゃんは「私はすずかに賛成」って平和的で、すずかちゃんの肩に乗るハムスター、セレネちゃんは「ガッツリ暴れてほしかったよ２人には」ってガックリ肩を落としてる。

「こいつでトドメよっ！」

アリサちゃんのキャラクターが必殺技を繰り出して、ピエロさんのキャラクターを撃破。するとピエロさんが消滅して、『クリアおめでとー☆　クリアおめでとー♪』って店内に流れた。

「よしっ、次！　急ぐわよっ」

「そうだね。テスタメントちゃんはすでに2勝してるみたいだし」

私たちが来る前にテスタメントちゃんはすでにポイントを稼いでる。早く追いつかないと。すぐ近くのスノーボードの筐体で対戦してるテスタメントちゃんとピエロさんを見る。体を前後に揺らしながらボード型のコントローラーを操って、コースの障害物を避けたりスコアを稼ぐ技を繰り出してる。

「じゃあ私は・・・このパズルゲームで！」

『次は君だね☆　その挑戦、受けて立つ♪』

すずかちゃんが落ちゲーって呼ばれるパズルゲームで対戦開始。アリサちゃんにエオスちゃんを戻して、すずかちゃんからセレネちゃんを預かる。そしてみんなですずかちゃんを応援していると、アリサちゃんが「ねえねえ」って突いてきた。

「テスタメントってさ。セレネ達と同じ異世界人なわけ？　それとも地球人？　フェイト達ってゲーム苦戦してるけど、アイツはメッ

チャ上手いじゃない」

「えっと、どうだろう」

フェイトちゃんとアルフさんの方を見ると、別のピエロさんとクレーンゲームで対戦中。ピエロさんは次々と景品を取って山を作ってるけど、フェイトちゃんは苦戦していて取った景品は数えるほど。

「異世界人だと思う。なのはは特別で、アリサさんとすずかさんは完全なイレギュラー。この世界のゲームが上手くても、魔導師としては完成されてるっぽいからこの世界の原住民じゃないのは確かだよ」

ユーノ君がそう言うなら、テスタメントちゃんも異世界の人なんだ。

『クリアおめでとー☆　クリアおめでとー♪』

「ま、こんなもんでしょ」

テスタメントちゃんが3勝目を上げて「余裕余裕♪」って私たちのところに来た。そして「景気はどう？」って私の肩に乗るセレネちゃんとユーノ君の頭をそっと撫でた。ユーノ君もセレネちゃんも振り解こうとしたけど、すぐに大人しくなって受け入れてた。

「ぼちぼちよ。あんたは順調そうね」

「まあね。ゲームは割と得意な方。で、フェイト・テスタロッサは

苦戦中なわけか」

テスタメントちゃんの仮面の下の表情は実際には見えないけど、どこか楽しそうな笑顔だって思えた。

「このまま行けば、私とあなた達の頂上決戦か。けど、それじゃ面白みに欠けるか。そうだ、面白ことを思いついた。あなた達、彼女たちと協力したらどう？」

テスタメントちゃんがいきなりそんなことを言い出したから、私たちは戸惑うばかりで。なんでそうなるのかってユーノ君が尋ねたら、テスタメントちゃんが信じられないことを言った。

「私の当初の目的だったジュエルシードの捕獲数は無事に１０個になったからね。別段、今回のジュエルシードがどうしても必要なわけじゃないんだ。だから今回はあなた達か彼女たちに譲ろうと思う。でも、ただ譲るだけじゃつまらない。それで考えてみた。私がジュエルシード側に立って、あなた達と戦ってみようかなっと。私たちが負けたらジュエルシードはそっちで好きにしていい。勝ったら、今回も貰う。さ、敵同士で協力して、さらに強敵である私に挑んで来なさい。道化師、それでもいい？」

『いいさ♪　それも面白そうだし☆』

「１０個・・・もうそんなに集めて・・・！」

ユーノ君から絶望の声。私でもまだ４つなのに。明らかな差を見せ

つけられた。ジュエルシードの探索も封印も大変なのに、テスタメントちゃんはそんなにも・・・。フェイトちゃんの方を横目で見ると、負けちゃったようで悔しそうに俯いていて、アルフさんに慰められてた。そして「やった！　２２連鎖♪」すずかちゃんがすごい連鎖を繰り出して、ピエロさんを撃破。

「なのは。どうする？　あたしはどっちでもいいわよ」

「お話は聴いてたよ。なのはちゃんの意見に、私は付き合うよ」

２人に見詰められた私はすぐに答えが出なくて、ついテスタメントちゃんの方へ目を向ける。すると「あなた。フェイト・テスタロッサと友達になりたいんじゃない？」なんて、私でも最近解った感情を言い当ててきた。ビックリして口を噤むと、テスタメントちゃんは「良い機会じゃない、距離を縮めるのに」って小さく笑い声を上げた。

「フェイト・テスタロッサっ、アルフっ！」

「今度はなんだい。こっちは１つもクリア出来なくてイライラしてんだよ」

「あなた達はこれから高町なのは達とチームを組み、私やジュエルシードと戦ってもらうから」

「「っ！？」」

そりゃ驚くよね。しかもテスタメントちゃんからその理由（友達云々は無し）を聴いてさらに「はあっ！？」ってアルフさんが驚いた。フェイトちゃんは「必要ない」って一言で拒否してきたけど、テスタメントちゃんから「１つもクリアしてないのに？」って明らかな挑発を受けると、

「判った。確かに私とアルフにとって、今回はあまりにも不利。だからその子たちと協力してもいいと思う」

「フェイトちゃん・・・」

「決まりね。さぁ、どれから行く？　私は基本苦手なゲームが無いから、どれでもＯＫだよ」

「タイム！　ちょっと作戦会議の時間ちょうだい」

「もちろん。終わったら呼んで」

テスタメントちゃんが私たちから離れて、アリサちゃんが手招きして私たちを集める。佇んでいるままのフェイトちゃんとアルフさんの手を取って、「行こう♪」一緒に円陣を組む。戸惑っていたけど、少しでも仲良く出来るきっかけを作りたいからその手を離さない。

「そんじゃ作戦会議ね。テスタメントは、明らかにあたし達以上のゲーマーよ。しかもジュエルシードを短期間に１０個も回収するだけの魔導師としての実力もある。そんなアイツが、わざわざ敵対するあたし達を協力させようってんだから、何か裏があると思う」

「そんなことないと思うよ、アリサちゃん。テスタメントちゃんは優しいだけだよ」

「馬鹿ね。たとえばこの一件であたし達が勝ってジュエルシードを譲られても、結局はあたし達とフェイト達との争奪戦でしょうが」

「私も君と同じ意見だ。もしかすると、あの子は私たちが潰し合うのを待ってるのかもしれない」

「うわぁ、性格悪いねぇ」

一瞬にしてテスタメントちゃんが悪者扱いに。嫌な空気になっちゃった。でもテスタメントちゃんはきっとそんなこと考えてないって思う。だから「純粋に楽しみたいだけだよきっと！」擁護する。甘い考えかも知れないけど、信じたい。

「・・・ま。どっちにしろやることは変わりないわよね？　フェイト、アルフ」

「「え？」」

「今はとにかく余裕こいてるアイツの鼻っ面をへし折る。真実は後回し。あんた達と協力するとなった以上、あんた達の参加は絶対条件になるってこと。だったらあたし達の誰かが対戦している時に、他の子があんた達を鍛えるわ」

というわけで私たちは協力して、テスタメントちゃん、ジュエルシードとゲームで戦うことになった。

Ｅｐｉｃ１０－Ｂゲームセンター☆なのは『魔法少女の挑戦』～Ｔｈｅ　ＥｍｐｅｒｏＲ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

「テスタメントっ！　あたしとダンスダンスパーティで勝負よ！」

早速アリサちゃんがテスタメントちゃんを呼んで、挑戦状を叩きつけた。ダンスダンスパーティは、楽曲に合わせて矢印オブジェがモニター内に流れてきて、指示されたとおりに足元の前後左右の矢印パネルをタイミングよく踏むゲーム。プレイヤーがパネルを踏むその動きが踊っているみたいだからこの名前になったみたい。

『レッツダンスパーティ♪』

ピエロさんがゲーム開始を告げる。アリサちゃんとテスタメントちゃんのダンス対決が始まった。応援したいけど、私とすずかちゃんは、フェイトちゃんとアルフさんにゲームを教えないといけない。ユーノ君たちを応援に残して、私たちは自分の役目を果たす。

「フェイトちゃん、来て」

「え、あ・・・」

フェイトちゃんの手を引いて、私は太鼓マスターっていうゲームの筐体の前に。すずかちゃんはアルフさんと一緒に、次々と筐体から

顔を覗かせるイノシシにゴムボールをぶつけてスコアを出す、痛快！イノシシ退治っていうゲームへ。

「じゃあフェイトちゃん。プレイしながら説明するから見ててね」

私が得意なゲームを、フェイトちゃんに教える。その方が効率が良いと思うから。まずは難易度や曲が簡単なものから。モニターに表示されるマークに合わせて、太鼓の面やふちを打つ。マークが大きい時は強く打つ。連打するときもあるから気を付けるように。結構疲れが出るから、抑えるために腕じゃなくて手首で打つように、などなど。

「――って感じなんだけど。フェイトちゃん、やってみて」

バチを受け取ったフェイトちゃんが、「え・・・うん」太鼓の前に立つ。そしてプレイ開始。初めてのプレイなのにフェイトちゃんは順調にスコアを伸ばしてく。フェイトちゃんってリズム感覚がすごい。プレイを終えたフェイトちゃんに「どうだった？」って訊いてみる。

「・・・うん。これなら何とかなりそう」

「よかった。それじゃあもうちょっとレベルを上げるね。テスタメントちゃん、どれだけ上手か判らないから」

「判った。私だってテスタメントに負けっぱなしは嫌だから」

フェイトちゃんに了承を取って、難易度と曲のレベルを一段階アップ。何度か練習してみた結果、フェイトちゃんにはこの太鼓マスターがとてもハマることが判った。プレイすればするほどに正確さが増していって、コンボも途切れないし、８曲ほどプレイした頃にはノーミス連発。

「負けたぁぁーーーーッッ！！」

アリサちゃんの悲痛な叫び声が聞こえてきた。私はフェイトちゃんに「待ってて。テスタメントちゃんを呼んでくる！」そう告げて、アリサちゃん達のところへ。私に気付いたアリサちゃんが「ギリギリで負けた！」って悔しそうに地団駄を踏む。テスタメントちゃんがピエロさんを引き連れて「次は誰？」って、早速別の対戦を望んで来たんだけど・・・。

「なによ。もうちょっと嬉しがりなさいよ、あんた」

「勝ち星は私が４、あなた達が２。わ～い」

「それはそれでムカつくぅ～～～～！！」

万歳するテスタメントちゃんのそんな態度にアリサちゃんは不機嫌に。アリサちゃんを落ち着かせてから、「次はフェイトちゃんと、太鼓マスターだよ」テスタメントちゃんに挑戦。そう言うわけでフェイトちゃんとテスタメントちゃんによる、太鼓マスターの対戦。難易度や曲はフェイトちゃんが決めていいってことになって、選んだ難易度はむずかしい、曲はさいたま２０００。

「それじゃあそれで。手加減はしないから。フェイト・テスタロッサ」

フェイトちゃんはもう答えることもしないでバリアジャケットのマントを外して、ゲームを始めた。メロディが流れ始めて、フェイトちゃんとテスタメントちゃんが太鼓を打ち始める。２人とも良ばかり出して、コンボを途切れさせない。そんな中、「あー、マントがすごい邪魔。蒸れる～」テスタメントちゃんから愚痴っぽいのが聞こえた。フェイトちゃんみたいに外せばいいのに。それが原因なのかな。テスタメントちゃんが先に可を出すようになった。

「さっきのあたしとのダンス対決でも、マントがバサバサはためていたのよね」

「すごい動きにくそうなのに、なんであんな軽やかに動けるのか謎すぎる」

アリサちゃんとセレネちゃんがテスタメントちゃんを見て、心底呆れてる。フェイトちゃん達の対戦はそこから動きを見せた。お互いにコンボを途切れさせたり、可を出すようになって。そしてこの対戦の結果は、「フェイトちゃんが勝った！！」後半にはフェイトちゃんもコンボを途切れさせたりしたけど、テスタメントちゃん程じゃなかった。

「負けたぁ～。４対３か。・・・次は誰？」

負けたのに楽しそうに言うテスタメントちゃんを見ていたら、「次は、アルフさんです」自信満々な表情で合流したすずかちゃんが告げた。全員でアルフさんの待ってる筐体へ向かう中、「ありがとう」フェイトちゃんが囁き程度だけどお礼を言ってくれた。それがとても嬉しくて。きっと判り合える日が来るって強く思えることが出来る一歩。テスタメントちゃんがチーム分けや勝負を仕掛けてくれたおかげで、ちょっとは近付けたかも。

「今度はあたしがコテンパンにしてやるよ、テスタメント！！」

アルフさんが仁王立ちで待ち構えてた。これから始めるゲームは、痛快！イノシシ退治。テスタメントちゃんがこのゲームのルールを確認して、じゃんけんで先攻・後攻を決める。

「よし。あたしからだね！」

「頑張って。アルフ」

アルフさんが先攻。縦長の筐体の奥の壁には段々畑のセットが在って、そこから顔を出すイノシシにゴムボールをぶつける。単純なゲームほど勝負は唐突に決まるって思ってる。ちょっとしたミスが、敗因になるんだから気が抜けない。初回のアルフさんの成績はパーフェクト。

「どうだい？」

「サドンデスと行こうか。私もどうせパーフェクトだから」

そう言って鼻を鳴らして満足そうなアルフさんに向かって、挑発した後攻のテスタメントちゃんがプレイ開始。バサバサとマントをはためかせてボールを投げまくる。全てが的確にイノシシに当たって、スコアはアルフさんと同じパーフェクトだった。テスタメントちゃんの言う通り。サドンデスに突入して、どっちが先にミスするかになっちゃった。

「上等だよ！」

アルフさんが牙を剥いて、２回目のチャレンジ。そしてこの２回目もドロー。最終的に１３回。勝者は「残念だったね。アルフ」テスタメントちゃんだった。

「ごめん、フェイト。それと、すずか、だっけ？　負けちまったよ」

「ううん。アルフは頑張ったよ」

「そ、そうですよ！　十分すぎると思います！」

しょんぼりしてるアルフさんを、フェイトちゃんとすずかちゃんが慰めてる。そんな中でもテスタメントちゃんは「５対３。さぁ、次！」弾む声で、次の挑戦を待ってる。次はすずかちゃんで、「エアホッケーでお願いします」ゲームを指定した。テスタメントちゃんは「またそういう系かぁ」ってうんざりしてる。

「「動きにくいなら脱げばいいじゃん」」

セレネちゃんとエオスちゃんにそう言われても、テスタメントちゃんは「このままでいい」って聞かない。そんなに素顔とか見られたくないのかなぁ。もしかして、私たちと顔見知りだから？　でもそんな考えはすぐに振り払う。ユーノ君やセレネちゃん、エオスちゃん以外の異世界の人なんて心当たりがないもん。

「ねぇ。座ってプレイするゲームにしない？」

「却下よ。すずか。あんたの実力を見せてやんなさい！」

「頑張ってね、すずかちゃんっ！」

「うんっ♪」

すずかちゃんが脱いだ上着を預かる。完全に本気だ。エアホッケーの台に移動して、すずかちゃんＶＳテスタメントちゃんのゲームが始まった。序盤は探り合うように緩い打ち合いだったけど、ゾワッと妙な悪寒が奔ったと思えば、「せいッ！」テスタメントちゃんがパックを勢いよく打って、枠に反射させてジグザグな軌道になるように返した。

でもすずかちゃんは何てことないって感じでパックを上から押し付けるようにして止めて、「えいっ！」真っ直ぐ打った。テスタメントちゃんは真正面から来たパックを余裕で打ち返して、また枠を使っての反射攻撃。

「テスタメントちゃん、枠にバウンドさせてばっかりだね」

「真正面からぶつかっても勝てそうにないし。あなた、見た目によらずかなり運動神経いいでしょ。それに、こういうテクニックを駆使して相手のゴールに入れるのが醍醐味だと思う・・よっ！」

テスタメントちゃんの高速の一打が、すずかちゃんのゴールを狙う。けどすずかちゃんはちゃんとついて行って、カウンターの一打をお見舞いした。テスタメントちゃん側のゴールに近い枠のところで一度反射して、そのままゴールに入っちゃった。

「私のことはどう見てくれてたのかな？」

「お金持ちのお嬢様。メイドの居るお屋敷に住んでいて、楽器の習い事とかしてそう。頭は良くて、冗談かと思えるほどの運動音痴・・かな！」

対戦再開。お互いに枠に反射させての軌道変更の一打を狙い始める。それに、一度パックを止めてからの全力打ちやわざと空振りする牽制とかも。

「えっと、頭の良さや運動音痴以外はほとんど当たってるよ。バイオリンを習ってます。テスタメントちゃんは、何かやってた？」

「特には」

「ご家族のことを訊いてもいいかな？」

「・・・両親、そして姉と妹が1人ずつ」

今度はテスタメントちゃんがすずかちゃんのゴールにパックを入れて、同点。

「そうなんだ。私は、両親とお姉ちゃん。あと、メイドのノエルとファリン、それに猫をたくさん飼ってます」

「犬を飼ってるって思った」

「犬は私じゃなくて、アリサちゃんが飼ってるよ。テスタメントちゃんのお家は何か飼ってるの？」

「万年発情狼娘（イヌ）を1頭。ヨルムンガンド（ヘビ）が1匹」

ここですずかちゃんが2点目を取った。テスタメントちゃんが「やるね」って嬉しそうに笑う。それにしても「すずかにかかればテスタメントもペラペラ喋るのね」アリサちゃんの言う通りだ。家族のこととかペットのこともお話ししてくれてる。テスタメントちゃんとも近付けたかも。そしてすずかちゃんは「じゃあ本当の名前を教えてください」核心をついた。

「残念。それは秘密」

この質問と応答で2人のお話が終わって、ほとんど無言でプレイに集中し始めた。最終的にすずかちゃんが7点先取することで、テスタメントちゃんを打ち破った。

「５対４かぁ。まだまだガッツリ遊びたいけど、そろそろ帰らないと。結界外の時間においてもそろそろ１８時前だろうから、１５歳未満は出ないとね。というわけで、次のゲームで決着にしたいんだけど。何か良いゲームある？」

今の私たちとテスタメントちゃんの勝ち星の差。最後の１回で逆転できるゲーム。それを聞いた時、パッと閃いたから挙手して「作戦会議をお願いします！」ってお願いすると、「いいよ」って認めてくれた。

「私に考えがあるんだけど。でも、上手くいくとも限らないから、ちょっと自信ないけど」

みんなを集めて、私が考えたテスタメントちゃんに勝つゲームとそのルールを話した。最後まで黙って聴いていてくれたみんなの返事を、「えっと、どうかな・・・？」待つ。

「あたしはそれでいいわ。それが一番いいと思う」

「私もなのはちゃんの提案に賛成」

「私とエオス、ユーノは任せるよ」

残るはフェイトちゃんとアルフさんだけど。２人にとって、私の提案に出たゲームは未経験のものだから、すぐには答えは出ないってことは判ってた。だから「テスタメントちゃん！」にお願いしてみ

ようと思う。みんなを待たせて、私ひとりで向き合う。

「どのゲームか決まった？　どれにする」

「そのことなんだけど、練習させてほしいんだ」

都合が良すぎるかもしれない。でも「いいよ。その方が面白いし」テスタメントちゃんは快諾してくれた。自分が不利になるかもしれないのに許してくれたことに「ありがとう、テスタメントちゃん」お礼を言って、みんなのところに戻ろうとして・・・

「ねえ。なんのゲームを選択したの？」

テスタメントちゃんからの質問。あとで判るし、練習を許してくれたお礼もあるから、私は振り返って答える。

「マリオカートで勝負だよ、テスタメントちゃん！」

それが私が選択した逆転のゲーム。４台４台が向かい合うように置かれてる、計８台のマリオカートの筐体。もうここでテスタメントちゃんに伝えておこう。

「今までは１対１だったけど、今回は私、アリサちゃん、すずかちゃん、フェイトちゃんの４人が参加するつもりなんだ」

「つまり私ひとりに対してあなた達は４人。マリオカートは確かアイテムでの妨害あり。数では圧倒的に不利だよね、私。いくら楽し

むのが目的になってる私でも、それはちょっと不利すぎると思う」

「ううん。テスタメントちゃんにはジュエルシードの幻、ピエロさんが居る」

テスタメントちゃんはジュエルシードが作り出したピエロさんと通じ合ってる。ピエロさんは増殖するから、テスタメントちゃん側のプレイヤーとして参加すればいい。戦力が同じになるようにするために、アルフさんに頼んで外れてもらったんだから。続けて、キャラクターは好きに、カートは標準、獲得できる勝ち星についても話す。

「――つまりは、上位3位までが勝ち星を手に入れることが出来るわけか。順位によっては勝ち逃げ出来るし、あっと言う間に逆転もされる。・・・・乗った」

今の成績はテスタメントちゃんが5、私たちは4。1位～3位を独占できれば私たちは逆転で勝てる。でも独占できなかったら負け。ギリギリの綱渡りだけど、これ以上こちらに有利なことを言うと、ゲームを変更されちゃうかもしれないから妥協する。テスタメントちゃんと別れて、私たちはフェイトちゃんと練習を開始することに。まずアリサちゃんが「じゃあフェイト。車って、あんたの世界でもある？」なんて質問をした。

「・・・ある。乗ったことはないけど・・・」

「ちょっとアリサ。私たちの出身世界、ミッドチルダの科学力は、

この世界と比べるのも馬鹿馬鹿しい程に圧倒的に勝ってるんだけど」

セレネちゃんが馬鹿にするなって不機嫌になっちゃって、ユーノ君とエオスちゃんがセレネちゃんを落ち着かせるために、どこかに連行して行った。フェイトちゃんとアルフさんも、今ので不機嫌になっちゃったんじゃないかって心配になった。

「ごめんね、フェイトちゃん。アリサちゃん、悪気はないんだ」

「悪かったわ」

「別にいい。そんなことより練習がしたい」

フェイトちゃんは気にしていない様子で、マリオカートの筐体の座席に座った。私たちも続いて座って、早速プレイ開始。まずはキャラクターを選択。アリサちゃんは迷いなくクッパを。すずかちゃんはキノピオを。私は手堅くマリオ。フェイトちゃんには、「まずはコレで練習しようか」初心者用のピーチ姫を。アリサちゃんがコースを決めてる間に、右隣の筐体に座るフェイトちゃんに話しかける。

「フェイトちゃん。テスタメントちゃんに、私は、私たちは勝ちたい」

「・・・私も勝ちたい」

「うん。だから、力を貸してほしいんだ。一緒に勝とう！」

握手を求めて、右手を差し出す。フェイトちゃんはちょっと私の手を見てから、「うん」小さく頷いて握手に応えてくれた。このまま友達になれればいいな。そんな期待を胸に、テスタメントちゃんに勝つぞ作戦を開始した。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒ルシリオン†††

マリオカート。いつ以来のプレイになるだろう。思い出を振り返りながら、フェイト達の練習を見守っているんだが、さっきからアルフから向けられる視線が痛い。明らかに私を監視している。何か訊きたそうにしているため、「話があるなら今の内にした方が良いと思うよ」話を振ってみる。

「・・・あんたさ。なんかの組織に属してるのかい？　テスタメントって人の名前じゃなくて、コードネームみたいじゃないか」

そんな質問を投げかけてきたアルフ。確かにコードネームだが、契約執行中以外では偽名とも言える。ま、今のところは私の手の平の上で踊ってもらいたいため、このまま騙し続ける事にした。

「テスタメントっていう部隊に所属してる。０ｔｈから１０ｔｈの１１人が居て、私は４番目のテスタメント、４ｔｈ・テスタメント」

「あんたのような魔導師があと１０人もいるってわけかい・・！」

疑うこともせずに信じた。私の正体を晦ますにはちょうどいい誤解だ。ちなみに、と前置きしてから「私の実力は、下から数えて３番

目なんだよね～」と実際に陥っている真実も告げる。"界律の守護神テスタメント"における黒の第四の座は、最強と最凶を意味する概念だ。なのに今の私は、下から3番目という下位に落ちぶれている。情けないな、本当に。

「テスタメントちゃん。お願いします」

なのはが代表として呼びに来た。私はアルフに「行こうか」と声を掛け、なのはの後についてマリオカートの筐体へ向かう。なのは達の座る4台の筐体と向かい合うように置かれている4台の筐体に、私は道化師3体と一緒に座る。

「それじゃあ、最後のゲーム、マリオカート対戦を始めますっ！」

なのはが戦闘開始の号令を下し、プレイを開始する。私は無難にルイージを選択。3体の道化師は、ドンキー、ワリオ、クッパと、上級者向けのキャラばかり選んでいた。上手く乗れれば良いキャラだが、ミスばかりすれば後ろから尻を蹴っ飛ばしたいほどに鈍臭い。しかも対戦するコースは難しさで有名なレインボーロードと来た。道化師の腕に懸かっているな、私の勝利は。

「さぁ、行くわよ！　打倒テスタメント！！」

「「「「「オオーーー！！」」」」」

なのはとすずか、ユーノ達はアリサに応えたが、フェイトとアルフは無言のようだ。まぁ、すぐになのは達のノリのついて行けるわけ

がないだろうし、仕方ないよな。ハンドルを握り直し、アクセルに足を掛けて、スタート1秒前でアクセルを全開。ロケットスタートを成功させるも、「甘いわよ、テスタメント！」アリサ達も無事にロケットスタートを決めていた。

「って、道化師ぃぃーーーーッ！！」

フェイトですらロケットスタートを決めていたのに、道化師3体はのろのろとスタート。一瞬にして置いてけぼりを食らっている連中を放って、私は2位を突っ走る。前を行くの1位はマリオで、操作しているのはなのはだ。アイテムを取り、車体の後方にバナナの皮を出す。ピッタリ後方についてはいてはスピンさせられる可能性があるため、車線をズラした・・・その瞬間、

「ミドリ甲羅、ファイア！」

（フェイトも結構ノリがいいな・・・）

フェイトのそんな掛け声とともに、私のルイージにぶつけられたミドリ甲羅（すごい命中率だ）。コースの縁ギリギリでスピンしているところに「おりゃぁぁーーーッ！」アリサのクッパが突っ込んできやがった。

いま居る地点には壁がないため、「あっ、やりやがった・・・！」突撃されたルイージはコース外に落下。順位が5位へ転落。いつの間にかすずかにも抜かれていた。というかアリサが落ちてないってなんだ。当て逃げ上等、その上わざとだとか。まぁ、これはこれで楽しめるが。ジュゲムにコースへ戻してもらって、いざ再スタート

というところで、

『『『「あ」』』』

追いついてきた道化師3体の操るドンキー・クッパ・ワリオに次々と追突され、今度は揃ってコースアウト。一番最後にコースへ復帰されたことで一転してビリになってしまったが、道化師(バカ)どものキャラは加速力が低いため、すぐに追い抜けるだろう。アイテムを取り、スターを出す。落下地点が多すぎるレインボーロードでのスター使用はある種の自滅行為だが、

「そうも言ってられないよな」

スターを使用し、道化師3体をクラッシュさせて5位に返り咲き。コースアウトしないよう注意し、次のアイテムをゲット。手に入れたのはトリプルダッシュキノコ。直線やコーナーの角度が緩い場所で使い、ぐんぐんと4位のすずかを捉える。が、「あ、落ちた」すずかのキノピオがコースアウト。視界から消えて行った。順位を4位に上げ、次は・・・「なのはのマリオか」トップから転落していたなのはを捉えるためにひたすら追い縋る。そんな時、頭上から雷が降って来た。キャラが小さくなりスピードも落ちてしまう。

(誰だ、いいところで雷なんて使ってきた子は・・・?)

その犯人はすぐに知れることに。元のサイズに戻りかけていたルイージを突き飛ばしながら抜いて行ったのは「お前か、ドンキィィー

ーーー!!」道化師のドンキーだった。まさか味方に妨害されるとは思いもしなかった。とりあえず八つ当たりの意味を込めて、引き当てたアカ甲羅で撃墜。コーナー途中だったため、あえなくコース外へ落下したのを見送って・・・。

「はっ。もしかしてこのチーム分けって私にメリットがなくないか？」

今さらながらに失態を思い知る。なのは達はアイテムを手に入れても味方に撃つ真似はしないだろう。私たちに抜かれた際に使うってところだが、道化師はあくまで参加しているだけで、私の味方になるとは言ってないし、頼んでもない。実質7対1だ。隣の筐体に座る道化師どもに「協力してくれ」と頼むと、揃って『？？？』首を傾げて、返事もしないでプレイに戻った。

「さっきまで普通に話していたくせに・・・」

役に立たないどころか完全に敵だと判断。次に私の前に出たら、問答無用で潰す。獲得したダッシュキノコを使い、なのはのマリオに追い縋る。マリオの周囲にはトリプルミドリ甲羅が回転していて、下手に接近すればクラッシュだ。様子を見ていると、マリオがダッシュ板に乗り急加速したんだが、スピードが乗り過ぎてコーナーを曲がりきれずにコースアウト。

「やっぱり難しいよな、このコース」

3位となり、2位であるフェイトのピーチ姫を標的として捉える。だが「ファイナルラップか」となってしまう。このままゴールすれ

ば、勝ち星の数では同点となってしまう。
道化師の誰でもいいから上位に来てくれればいいんだが。そう思った瞬間、「今度はキラーか！」コースいっぱいに突っ込んで来る巨大ミサイル、キラー。私のルイージがまたもやコースアウト。なのはかすずかのどちらかならいいなぁ、と考えながらコース復帰。

「今度はお前か、ワリオ・・・」

最下位だったワリオが前を走っているということは、さっきのキラーがワリオということになる。怒りを通り越して笑ってしまう。いっそ参加させなければよかったなぁ。だがこれはそんなに悪い状況じゃない。私とワリオがフェイトを抜いてゴールすれば、勝ち星２で勝ち越しだ。今回のジュエルシードの回収は譲ってもいいというのは本音だ。が、回収できるに越したことはない。

「・・・って、今度は誰だ！！」

アカ甲羅をぶつけられてスピン。私を追い抜いて行ったのはなのはのマリオだ。マリオはそのまま最後のアカ甲羅でワリオを攻撃し、悠々と追い抜いて行った。これで終われば私は、こんなものか、で済んだのに、後方からスター発動中のキノピオ、すずかが突っ込んで来た。私はギリギリで避けることが出来たが、ワリオはその餌食になってコースアウト。哀れだな、と思ったら、またも私を急襲するキラー。そして何度目かのコースアウト。

「イジメか！！」

この瞬間、私たち・・・いや、私がなのはチームに完敗したことが決定した。１位はアリサ。２位はフェイト。３位はなのは。４位はすずか。５位は私。以下はどうでもいい。完全勝利を収めたことでハイタッチを繰り返して喜び合っているなのは達を眺めていると、

『これにてジュエルシード争奪戦を終了するよ☆　この僕を封印する資格を得たのは、高町なのは、フェイト・テスタロッサの２人さ♪』

道化師は今までの彼女たちのやり取りからして理解しているんだろうな。なのはとフェイトがそれぞれの勢力のリーダーであることが。道化師が拍手しながら消滅すると、その場からジュエルシードが姿を現した。

「おめでとう、高町なのは。フェイト・テスタロッサ」

拍手しながら２人を労いつつゲームセンターの出口へ向かう。すると「どこへ行くの！？」なんて見れば判るようなことを訊いてきたなのはに振り返る。

「どこって、ジュエルシードの封印はもうあなた達の役目になったから、帰ろうかと」

実際はトイレに戻って結界を解かないといけないため、なのは達が去るのを待たないと。

「テスタメントちゃん。その、今日はありがとう。一緒に色んなこ

とが出来て、嬉しかった」

「ま、あんたが怪しいだけの敵じゃないって判ったのは良かったわ」

「またテスタメントちゃんとお話ししてみたいな」

笑顔でそんなことを言ってくる3人。手を振って改めて別れようとした時、フェイトが動いた。"バルディッシュ"をシーリングモードにし、一直線にジュエルシードへ突撃。私と同様にいち早く気付いたユーノが「させない！」と、ジュエルシードとの間にラウンドシールドを展開して、フェイトを妨害。遅れてスクライア姉妹が、アルフを拘束するためにチェーンバインドを発動させた。

「フェイトちゃん！？　アルフさん！？」

「ちょっと！　あたし達に黙って勝手に封印するなんて何考えてるわけ！？」

アリサがデバイスの柄元にある引き金を引くとカートリッジがロードされ、刀身に炎が噴き上がった。一触即発の事態。こうなる前に多少の話し合いくらいはすると思っていたが、やはり今のフェイトは問答無用だ。

「ごめん。でも、ジュエルシードがどうしても必要なんだ」

「なのはっ！　今のうちにジュエルシードの封印を！」

ユーノがそう叫ぶと同時、フェイトはラウンドシールドから一度離れ、ブリッツアクションでユーノ達の背後に回り込んだ。アルフはアルフでチェーンバインドを引き千切って対処し、「悪いね！　でもやっぱ仲良しこよしは無理なんだよ！」そう謝りながら、アリサに向かって拳打を繰り出した。

「スノーホワイト！！」

――アイスミラー――

すずかがアルフとアリサの間にラウンドシールド？（縁が氷に覆われている）のような障壁を展開して、アリサを護った。しかし「バリア・・・ブレイク！！」アルフの十八番であるバリアブレイクによって破砕され、その衝撃でアリサとすずかが別々に吹き飛ばされた。

「フェイトちゃん！」

「・・・ごめん」

なのはもまた"レイジングハート"をシーリングモードにし、フェイトが"バルディッシュ"をジュエルシードに伸ばすと同時、"レイジングハート"をジュエルシードに突き出した。脳裏に過ぎる、かつての記憶の光景。ジュエルシード。膨大な魔力を宿した２つデバイスの衝突。場所も日付も違うが、それは間違いなく・・・ジュエルシードの暴走の引き金。

「今すぐそこから離れろっ！　なのはっ、フェイトっ！！」

２人のデバイスに大きくヒビが入ったかと思えば、ジュエルシードが覚醒して衝撃波と共に魔力を放出。なのはとフェイトどころか、彼女たちの近くに居たユーノ達を大きく吹き飛ばした。

Ｅｐｉｃ１１学校の怪談～ＤｅａｔＨ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

この世界での活動拠点として選んだ共同住宅の一室。夜も更けて真っ暗な中の寝室で私はベッドに横になって、今までに回収したジュエルシードを眺めていた。この世界に訪れて最初に回収したシリアル１。温泉で回収したシリアル１８。
そして、一昨日のゲームセンターとかいう施設で手に入れたシリアル１９。回収できたのはこの３つ。テスタメントという子はもう１０個も集めて、素人のあの白い子ですら４つ。明らかに出遅れてる。魔導師としてのレベルはきっと私が一番なのに。

「あの子たちには悪いことをしたかな・・・・」

ふとシリアル１９のジュエルシードを回収した時のことを思い返して、あの子たちを裏切ったことに対して罪悪感が湧き上がってくる。あの子たちと協力して得た勝利。テスタメントという子は負けを認めて潔く退いてくれた。
そして騎士のような赤い子が言っていた、私とあの子たちのどちらがジュエルシードを封印するかを決める争奪戦という問題に直面した私は、半ば奇襲という形で封印を強行した。その結果、私の"バルディッシュ"とあの白い子のデバイスがジュエルシードを挟んで衝突して、休眠状態だったジュエルシードを暴走させてしまった。

。―。―。―。回想だ。―。―。―。

「ぅぐ・・・！」「きゃあっ！？」

ジュエルシードから放たれた魔力の衝撃波によって私は大きく吹き飛ばされたけど、宙で態勢を整えて床に着地。あの白い子も同じように吹き飛ばされて、態勢を整える前にゲームの台に突っ込んだ。

「なのはっ！」「なのはちゃんっ！」

友達の２人があの子を心配して駆け寄って行く。私はあの子たちからジュエルシードに目を向ける。これ以上の暴走を放っておいたら、この辺りを破壊しつくしてしまう。それが判るほどにまずい状態だ。もう一度休眠状態に戻すための魔法の準備をしようにも"バルディッシュ"のボディがヒビだらけで、封印を行えるだけの大魔力魔法に耐えられそうにない。友達に支えられながらも立ち上ったあの子のデバイスも酷い状態だというのが一目で判る。"バルディッシュ"を待機モードに戻して、覚悟を決める。

（だったら・・・！）

「フェイト！？　なにを・・・！？」

暴走臨界点までそう長くないジュエルシードが放つ魔力波の中をなんとか突き進みながら、手を伸ばす。するとアルフが「ダメだフェイト！　危ない！」って止めに来るけど、現状でジュエルシードを休眠状態に戻すにはこれしかない。一歩一歩、吹き飛ばされないようにしっかり踏みしめながら近づいていく。

「痛っ・・・！」

魔力がまるで刃となっているみたいで、近付けば近付くほどバリアジャケットや肌に損傷が生まれる。髪を結っていたリボンが片方だけ切られた所為か束ねていた髪が暴れて体のバランスが取りにくくなった。だから、もう片方のリボンを解いてバランスを取る。

「もう・・ちょっと・・・！」

あと数歩というところで両脚に走る激痛。魔力が私のふとももとふくらはぎを切った。その痛みで一瞬とは言え踏ん張る力を失った私は、「しま・・・っ！」衝撃波によってまた吹き飛ばされそうになった。でも、「ほら、しっかり！」テスタメントが私を抱き止めてくれた。私の肩にこの子が手を回して支えてくれたことで、吹き飛ばされる心配はなくなった。一応、お礼を言おうとしたら「あの状態のジュエルシードに近づくなんて馬鹿のすることだよ」なんて言われた。

「ならどうするの・・・！？」

睨み付ける。

「困った時は、周りを頼るんだよ、フェイト・テスタロッサ！」

そう言って、暴走しているジュエルシードに空いている左手を翳す。私たちの足元と、翳している左手の前面に展開される銀色の魔法陣。

そしてまた感じる、この子の爆発的に上昇する魔力。

「私だって魔力量はあなた達に負けてないんだよ」

――煌(コード)き示せ、汝(アダメル)の閃輝――

魔法陣の中心から放たれる銀色の砲撃が、ジュエルシードの魔力波を突き破りながら進んで行く。そして直撃。あんなに暴れていたジュエルシードがその一発で強制封印された。それを確認した私は「ごめん」この子にも一言謝って、ジュエルシードの元へ飛んで、掴み取る。そのまま逃げるように私とアルフはその場を後にした。

。―。―。―。終わりだ。―。―。―。

「バルディッシュ、ごめんね。もう大丈夫？」

≪Ｒｅｃｏｖｅｒｙ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ≫

待機モードの"バルディッシュ"に何度目かの謝罪。暴走したジュエルシードが発した魔力の衝撃波の直撃を受けた"バルディッシュ"は酷い損害を負ったけど、コアにまでダメージが行かなかったのが幸いだった。修復も無事に終わって、早速次のジュエルシードを回収するために、「アルフ。行くよ」リビングでこの世界の食事を摂っていたアルフに告げる。

「あいよ。って、フェイトはまだ食べてないじゃないか！　ちゃんと食べないと体がもたないよ！」

「いい。あんまりお腹空いてないし」

私に用意されていた市販のお弁当。そんなことより発動間近のジュエルシードの気配を感じる。こんなに離れた場所に居る私でも感じ取れるんだから、きっとあの子たちも気付いて、もう動き出してるに違いない。ならのんびり食べている暇はあまりないはず。

「ダーメ！　気に入らないけどさ、あのグランフェリアも言ってたじゃないか。何事も体が資本とかだって」

リニスが居なくなってから現れたグランフェリア。あの人との模擬戦に熱くなりすぎていて、食事を蔑ろにしたことがあった。その時に言われた言葉だ。まずは自分の体を万全に持って行く。でないと大事なところで大きなミスをするって。私は渋々食卓について、「いつでも出かけられるように準備しておいて」急いでご飯を食べることにした。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒アリサ†††

「――で、今回のジュエルシードはここに在るのね」

「うん。スノーホワイトの広域探索にもバッチリ引っかかってるし、それになにより・・・」

「この魔力の感じはどう考えても当たりよね」

時刻は夜の１１時。あたしはバレないように家を抜け出してきて、すずかと合流。ここへはすずかに後ろか抱っこしてもらう感じで空を飛んできた。少し遅れて「ごめん、お待たせ！」なのはとユーノも合流。改めて眺める今回の現場。そこはあたしん家に近い市立の高校。夜の学校って結構不気味なのよね。

「あれ？　セレネちゃんとエオスちゃんは・・・？」

揃ったことだし、門を飛び越えて中に入ろうかってところで、なのはがそう訊いてきた。セレネとエオスにはあたしん家とすずかん家にそれぞれ留守番してもらうことにした。万が一にあたし達の部屋に誰か尋ねて来た時、あたし達の声を使って対応してもらうために。そう説明すると、「ごめんね、大変なことに巻き込んじゃって」なんて馬鹿なことで謝ってきた。

「だからさ。あたし達は望んで、あんた達の手伝いをしたいって思ってんの」

「うん。だからなのはちゃんが気にすることじゃないし、それよりもっと頼ってほしいな」

「アリサちゃん。すずかちゃん・・・。うん、ありがとう！」

「んじゃ感動もそこまでにして、そろそろ入るわよ。フェイトやテスタメントがいつ来るか判んないし」

フェイトの名前を出したら、なのはの表情が急に曇った。どうやら

一昨日のことでショックを受けてるみたいね。

（まぁ、昨日も今日もどこか上の空だったし）

テスタメントに勝つまでは結構いい感じだったんだけど、ジュエルシードが出た瞬間、まるで裏切る感じで勝手に封印しようとしたフェイト。あたしもあれには怒った。少しは話し合うくらいしなさいよって。でも、フェイトにはどうしても譲れない理由でもあるんじゃないかって思う。なのはに聴いた限りじゃ誰かの為だっていう話だしね。どこか焦ってるようにも見えたし。ま、だからと言って完全に許すわけじゃないけどさ。

「私、フェイトちゃんとも少しは仲良くなれたって思ってた。でも勘違いだったのかな・・・」

「私はそうは思わないかも。私もなのはちゃんと同じで少しは近づけたと思う。でもそれ以上にフェイトちゃんにはやらないといけないことがあったんじゃないかな？　なのはちゃん、言ってたよね。フェイトちゃんがジュエルシードを集めるのは、誰かの為なんだって。ちょっと悲しいけど、この前はその気持ちの方が勝っちゃったんだと思う」

「そうかもね。ま、すぐに仲良くなろうとしないで、じっくりぶつかり合いながら仲良くなって行こうじゃない」

すずかが「私たちも最初はケンカからだもんね♪」ニコっていじわるな笑顔をあたしに向けて来た。するとなのはも「にゃはは。そう

だったね」って明るい表情に戻った。思い出したくない思い出ナンバー1でありながら忘れたくない思い出ナンバー1でもある、あたし達の出会いのきっかけ。

「ほら、そんな昔話してる暇があったらとっととジュエルシードの回収！」

「アリサちゃん、恥ずかしがらなくてもいいのに♪」

「うるさいわよ、すずか」

あの頃の自分の馬鹿さ加減にはホント呆れるわ。自信家で我が儘で強がりで。そんなんだからクラスメイトをからかったり馬鹿にしたりしてた。心が弱かったから。そんな頃、あたしはすずかのカチューシャを奪ってからかった。周りからやめなよって言われても聞かなかった。他人の言うことを素直に聞いたら、なんていうか負けちゃうって気がして。そんな時、なのはがあたしの頬を思いっきりビンタしたのよね。

――痛い？　でも大事なものを取られちゃった人の心は、もっともっと痛いんだよ――

（あの時のなのはの言葉は忘れないわ、これからもずっと・・・）

それからあたしとなのはは取っ組み合いのケンカをして、それを止めたのがすずかだった。その後は、少しずつだけど3人で話すようになって、気が付けばあたし達は大の友達、親友だった。

「ああもう！　あん時はごめんなさい！」

改めて自分の最低さに対して謝る。後ろをついて来るなのはとすずかは「ぷっ」吹き出した後、「許します♪」って優しい声色で許してくれた。顔が熱くなるのを自覚する。正門を閉ざしてる門をジャンプで飛び越えて、ズンズン大股で校庭を突っ切る。

「わわ、待ってよアリサちゃん！」「アリサちゃ～～ん！」

後ろをついて来る2人に振り向かないまま校舎の前まで来て、「うわぁ」一度足を止める。追いついて来たなのはとすずかも「これはちょっと・・・」校舎を眺めて引いてる。直感って言うか本能って言うか、それが告げてくる。校舎に入ったら、なんか嫌な目に遭うって。

「スノーホワイト。お願い」

≪お任せ下さいまし≫

――封時結界――

すずかの"スノーホワイト"が結界を展開。これで多少の無茶は出来る。不気味な雰囲気を纏う校舎のどこかに在るジュエルシードを探すために「い、行くわよ」入り口を探す。ま、結界内外ともに鍵がかかってるはずだから、「結局は力づくよね」窓を破壊して侵入。

「なんか泥棒になった気分だね」

「言わないで、すずか。窓を割っただけでも罪悪感があるんだから」

「一応、この結界内での破壊は結界外には反映されないから、ある程度は大丈夫だよ」

なのはの肩に乗るユーノから改めて説明されてもやっぱりね。暗い廊下の中をあたし達は歩いて、ジュエルシードの場所をすずかと"スノーホワイト"が探す。

「う～ん。難しいかも。なんか校舎全体からジュエルシードの気配がする。しらみつぶしに探すしかないかも」

「そう。・・・って、なのは？」

さっきから黙ってままでいるなのは。ユーノも「どうしたの？　なのは」ってなのはを心配する。するとなのはは"レイジングハート"をギュッと力強く握り締めて「ダイジョウブダヨ」妙にカタコトな返事をするだけ。

「えっと、なのはちゃんって、お化けとか幽霊の類が苦手じゃなかった？」

すずかに言われてようやく思い出した。「あー、ビビッてんのね」夜中の学校となれば、最高で最悪なシチュエーション。暗くてよく判らなかったけど、気を付けて見ればなのはの顔色は悪くて、体も

少し震えてる。しょうがないわね。なのはの隣に立って、「これなら怖くないでしょ」右手を握る。

「アリサちゃん・・・？」

「あー、ズルいよ、アリサちゃん！」

すずかがなのはの反対側の左手を握ろうとしたけど、生憎そっちの手は"レイジングハート"を持ってる。だからすずかは手を握るんじゃなくて、「うん、これでいいね♪」なのはの左腕に抱きついた。

「えっと、アリサちゃん、すずかちゃん。その、ありがとう。もう怖くな――え？」

なのはが目を見開いて廊下の奥を見詰めて、口をわなわな振るわせ始めた。あたしとすずかもなのはに続いてそっちの方を見やると、「ｏｈ」目を疑った。ううん。何となくだけど予想は出来てた。願いを叶える魔法の石、ジュエルシード。夜の学校となれば、アレ的な現象が起きることくらい。

「にゃぁぁぁぁッッ！！？　出たぁぁぁぁーーーーーーーーーーーッッ！！」

「耳が・・・！」

「うるさいわよ、なのはっ！」

「なのはちゃん。大声・・・」

なのはの悲鳴っていう音波攻撃の直撃を受けたあたし達は、今さらだけど自分の耳を押さえる。なのはは謝りながらも「だって、だって、だって！　アレ！　アレだよ！？」お約束的なアレ、人体模型を指さす。体に開いてる穴に詰まってる内臓とかがドクンドクンって脈打ってて、目がギョロギョロ動いて最後はあたし達に焦点を合わせて見てきた。改めて見ると、ちょっとずつ近づいて来ている人体模型。あたし達はちょっとずつ後退。

「とりあえず・・・」

「「とりあえず？」」

「逃げるのよ！！」

「賛成、大賛成！」

その場から全力ダッシュで逃げる。中でも「なのはちゃん、速い！」なのはが速い。腕をこれでもかっていうくらいに振って、「やっぱり帰るぅぅーーー！！」そんな叫び声を上げてひたすらダッシュ。人体模型をどれだけ引き離したか確認するためにチラッと振り向くと、「うわっ、速っ！」マラソンランナーみたいな綺麗なフォームですぐ後ろを走ってた。しかも両腕を伸ばしてきて、あたしとすずかを捕まえようとしてる。

「フレイムアイズ！」

≪遅ぇよ、アリサ！　行くぞ！≫

逃げ切れそうにないから迎撃することにした。"フレイムアイズ"の引き金を引いて、刀身に炎を生み出す。走るのをやめて急停止すると同時に半回転しながら、「うりゃぁぁあああ！」"フレイムアイズ"を振るう。

――フレイムウィップ――

横一線に振るったことで生まれた炎の鞭で人体模型を薙ぎ払う。人体模型は簡単に壊れて、バラバラに弾け飛んで廊下の至る所に転がった。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒？？？†††

アリサちゃんの攻撃魔法で、私たちを追いかけて来ていた人体模型がバラバラになっちゃった。廊下に散らばってる人体模型のパーツを見てみる。さっきまでは本物の臓器みたいに鼓動していたけど、今はプラスチック素材に戻ってる。ホッと安心した途端、「ひゃっ！？」人体模型の手首がカタカタ動き出して、指の動きだけでどこかに行っちゃった。

「なに今の。アダム〇ファミリー？・・・ていうか、なのはは？」

「え？　なのはちゃん？・・・・なのはちゃん！」

近くをアリサちゃんと一緒に捜したけど、なのはちゃんの姿どこに

も見当たらない。心の声で会話をする念話っていう魔法を使ってみたけど、繋がらなかった。

「うそ・・・どこ行ったのよ！」

「スノーホワイトっ、なのはちゃんとユーノ君の居場所判る！？」

≪少しお待ち下さいまし≫

――魔力探査――

こういう時にこそ補助を担当する私の魔法の出番。魔導師の位置を正確に探り当てる魔法を発動して、なのはちゃんを探す。

≪申し訳ないですわスズカ。ジュエルシードの影響で発見できませんでしたわ≫

でも"スノーホワイト"の探索能力でも捜し出すことが出来なかった。その代わり≪何か来ますわ！≫警告が出された。アリサちゃんが"フレイムアイズ"を構えて、私もいつでもアリサちゃんを補助できるように警戒する。

廊下の突き当たりの角から姿を見せたのは、「犬・・・？」1匹のブルドッグ。私たちにお尻を向けて、あくびとかしてる。アリサちゃんが「なんでこんなところにブルドッグが・・・？」って首を傾げる。じっーと見詰めていると、クルッと私たちに振り返った。

「そんなに見詰めんなよ。照れるだろ」

「「人面犬・・・！」」

ブルドッグの顔は犬じゃなくておじさんがものだった。すごく有名なお化け、人面犬だ。人面犬は「ま、見惚れるほど可愛いってんだろ？」って言って、蜃気楼みたいに消えていっちゃった。ポカーンとしちゃう私とアリサちゃん。"スノーホワイト"に「もしかして今のが？」って訊ねる。

≪いいえ。違いますわ。もっと強力な何かがこちらに向かって来ていますわ≫

そう言われた通り、私たちを襲う超常現象はそれだけじゃなかった。ドスンドスンって足音のような音と振動が、私たちが元居た場所の方から聞こえてくる。

≪お逃げくださいまし、スズカ、アリサ！≫

アリサちゃんが「２階よ、すずか！」そう言って走り出したから、「うんっ」ついて行く。人面犬が出て来た角を曲がればそこが階段室で、一段飛ばしでＵ字型の階段を駆け上がる。２階に到着すると、ドスンドスンって足音がパタリと消えた。

≪スズカ。ナノハとユーノの魔力を発見いたしましたわ。右へ進み、一番奥の部屋ですわ≫

「アリサちゃん！」

「ええ！」

急いで"スノーホワイト"の教えてくれた教室に向かう。私たちが居るのは特別教室棟みたいで、私たちが目指してる教室は「美術室！」だった。美術準備室を通り過ぎて、美術室の入り口の扉を勢いよく開ける。

「なのは！」「なのはちゃん！」

「アリサちゃん・・すずかちゃん・・・！」

なのはちゃんは確かに居た。けど1人じゃなかった。美術室の中には椅子と机が無くて、代わりに室内の色んなところに有名な絵画が実体化してた。私に判るのは、ピカソのゲルニカ、ムンクの叫び、ダ・ヴィンチのモナ・リザ、あと名前は忘れたけど、3回見たら死んじゃうみたいな椅子の上にある生首（これだけは視界に入らないようにする）。そして・・・

「あんた！　なのはを放しなさいよ！」

「なのはちゃん、いま助けるからね！」

美術室の中央には、両手首をロープで縛られて天井から吊られているなのはちゃん。そんななのはちゃんの絵をイーゼルに掛けられたキャンバスに描いている、ベレー帽を被った男の人のゾンビ。長い舌で唇を舐め回した後、私とアリサちゃんを細くした目で見詰めて

きた。一目で判る。この人は変態さんでもあるって。

「エクセレント！　また新しい幼女が来た！　君たちも僕のモデルになってくれ！」

仰々しく両腕を広げて、「ムハァ　」目に見えるほどの息を大きく吐いた。全身に鳥肌が立っちゃった。アリサちゃんは「変態、変態、変態！」って連呼しながら、"フレイムアイズ"の引き金を引いて、刀身に炎を噴き上がらせた。

「すずか。なのはをお願い！」

「うんっ！」

私はなのはちゃんの救出を。アリサちゃんはゾンビ退治を。そんな私たちの前に立ちはだかるのは、実体化した絵画たち。アリサちゃんに「伏せて！」って言われて、頭を抱えて伏せる。

――フレイムウィップ――

頭上を通り過ぎて行く炎の鞭。それが絵画を一撃で燃え散らせた。私は立ち上って、「もうちょっとだけ待ってて！」なのはちゃんの手首を縛ってるロープを、"スノーホワイト"の親指・人差し指・中指に外付けされてる氷の爪で切る。

「ありがとう、すずかちゃん・・・」

「うん。えっと、ユーノ君やレイジングハートは・・・？」

どこにも見当たらないからなのはちゃんに訊いてみると、なのはちゃんはハッとして「食べられちゃった・・・」そう呟いたと思えば、なのはちゃんの目から涙が溢れてきた。耳を疑った。ユーノ君と"レイジングハート"が食べられたって言ったの、なのはちゃんは・・？

「どうしよう、すずかちゃん！　ユーノ君が・・・レイジングハートも！」

「落ち着いて、なのはちゃん！」

そうは言っても落ち着ける状況じゃないのは判ってる。私にしがみ付いて泣くなのはちゃんの両肩に手を置いて、「アリサちゃん！」ゾンビを焼き払い終えたアリサちゃんを呼ぶ。私たちに背を向けてるアリサちゃんが「大丈夫よ、2人も」こっちに振り返る。

「「あ、ユーノ君・・・！」

アリサちゃんが左腕に抱えるユーノ君を見て、「よかったぁ・・・」ホッと一安心する。なのはちゃんの「レイジングハートは！？」には、「ほら」開いた手の平の中にある赤い宝石を見せてきてくれた。

「よかった・・・。ありがとう、アリサちゃん！」

「でもヨダレでベトベトなのよねぇ・・・。ピカソが描いたような

変な女の腹の中に居たのよ」

「う、うん。私の目の前で食べられちゃって」

目を回してるユーノ君と赤い宝石の"レイジングハート"は、ヨダレに濡れてテカテカ光ってる。アリサちゃんはユーノ君の首根っこを摘まみ上げて、「はい、なのは」ってなのはちゃんの頭の上にまで持って行って、「ほら」手を離した。そんなユーノ君がなのはちゃんの頭の乗っかる前に「にゃっ？」なのはちゃんがそこから一歩下がっちゃった。

「「「あ」」」

すると当然ユーノ君は真っ逆さまに落ちて、ベチャって床に落ちた。

「「ユーノ君！」」

「もう、何やってんのよ、なのは。可哀想じゃない」

「ごめん」

「謝んならユーノでしょうが」

「ごめんね、ユーノ君」

なのはちゃんはもうヨダレ塗れを気にしないで、気を失ったままのユーノ君を大切そうに抱え上げて抱きしめた。そして"レイジング

ハート"もアリサちゃんから受け取って、「ごめんね、レイジングハート」改めて起動した。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒なのは†††

美術室から出て、またジュエルシード探索を始めるために２階の廊下を歩く。

「でもさ、なのは。なんであの変態ゾンビに捕まってたのよ」

「実は――」

動く人体模型から逃げるために２階に続く階段を駆け上って踊り場に足をついた瞬間、壁に掛けられてた絵から飛び出してきた手に捕まって、絵の中に引きずり込まれた。気が付けば、そこは美術室らしい教室で、私は手首をロープで縛られて天井から吊られていた。ゾンビさんに絵画のモデルを強要されて、それを断ったら、ユーノ君と、そしてどうやって待機モードに戻されたのか判らないけど"レイジングハート"が変な女の人の絵に食べられちゃった。

「――それがショックで、私・・・」

「なるほどね。そりゃショックだったでしょうね」

「でも、もう大丈夫だよ」

アリサちゃんとすずかちゃんに微笑みかけられて、「うんっ」本当

に心の底から安心できた。だから、「もう、何も怖くない！」新しく出て来たお化け、運動会で使う大玉に"レイジングハート"を向ける。

「いっっけぇぇーーーーーッッ！！」

――ディバインバスターーーー

大口を開けてギザギザの歯を見せてる大玉を砲撃で粉砕した。バラバラになった大玉の破片を見たアリサちゃんは「ホント、あんたの魔法は見てて清々しいわ」呆れてるみたい。

「にゃはは。これが、私のタイプだから」

大威力砲撃による一撃必倒。そして射撃魔法による本命・牽制・かく乱。ユーノ君やセレネちゃん、エオスちゃんが私に組んでくれた練習メニューをこなしていったその先にある私の未来の姿。

「そんじゃあたしも負けじと頑張ろうかしら！」

アリサちゃんが意気込んでいるところに、「何か聞こえる・・・」すずかちゃんが耳を澄ませる。私とアリサちゃんも耳を澄ませて、「この音。パソコンのキーを押してる音だ」私は聞き慣れてるからすぐに判った。美術室とは反対方向の奥にあるパソコン室。そこからカタカタ音がする。私たちは顔を見合わせて、パソコン室へ。

「ジュエルシードはここか！」

アリサちゃんが真っ先に扉を開けて入って、次に私、最後に後衛のすずかちゃんが入る。パソコン室は無人で、でも３０台くらいのパソコンは起動していて、それにキーを叩く音も続いてる。私とユーノ君だけだったら絶対に逃げ出してた。よかった、アリサちゃんとすずかちゃんが手伝ってくれて。

「一体なにを打ってるわけ？　透明幽霊どもは・・・？」

アリサちゃんに倣って私もパソコンのモニターを眺めてみる。青一色のモニターに打たれてるのは赤い数字。えっと「４２７３１を繰り返し・・・？」なんだろう、これ。４２７３１の読み方を変えてみると、「うわ・・・」知りたくなかった意味を知っちゃった。

「死になさい、だって。気持ち悪いもんを見せられちゃったわね」

「でもこれくらいなら怖がることじゃないかも」

すずかちゃんの言う通り脅しだけのようだから何も怖くない。パソコン室を出て、「次は３階ね」階段室に向かって、そこに辿り着いたんだけど。

「「「おおう・・・」」」

階下から２階に上って来たのは二宮金次郎さんの石像。石像らしくゴツゴツって足音を鳴らしながら、３階へ上がってく。呆けてた私たちだけど、すぐに気を取り直して足音が出ないようにそーっとつ

いて行ったら、「図書室に入って行ったね」二宮さんは図書室の扉を開けて入って行った。
そろそろと図書室の入り口に近づいて行って、扉をちょこっとだけ開けて3人で中の様子を窺う。二宮さんはカウンターの前に居て、借りていたっていう本を返却してた。
「二金（にのきん）の読んでる本って、いつも図書室で借りてたものなのかしら・・・？」
「あはは。ど、どうなんだろうね・・・。ここのが特別なのかも」
「にゃはは。ところでにのきんってなに？　アリサちゃん」
「ん？　二宮金次郎を略した名前よ。って、来た来た。引くわよ」
にのきんさんがこっちに向かって来たから私たちは図書室から離れて、近くの女子トイレに入った。ゴツゴツって階段を下りて行くのを聴いて、遠ざかって行ったのを確認してホッと一息。私が先にトイレを出ようとしたら「あのさ。女子トイレのお化けって言えばなんだと思う？」ってアリサちゃんが訊いてきた。
「「トイレの花子さん」」
すずかちゃんと同時に答えると、アリサちゃんは「試してみる？」なんてニヤリって口端を歪めた。答える暇もなく（嫌だって言ってもやる気だと思う）アリサちゃんは3番目の扉の前に行って、ノックを3回。そして「花子さ～ん♪」名前を呼んだ。アリサちゃんに

手招きされて、私とすずかちゃんも扉の前に移動。でも、「出てこないわね」アリサちゃんが溜め息を吐きながらもう一度ノックして、名前を呼んだ。

「は～い　」

「「返事が来た！」」

「どんな子なのかしら。花子さんって♪」

扉がゆっくりと開いていく。ちょっと後ずさりながらアリサちゃんの後ろから眺める。ついに私たちは花子さんとエンカウントしたんだけど、口から出るのは「え？」だけ。

「は～い♪　トイレの花子さんでぇ～す　　呪っちゃうぞ☆」

「「「誰！？」」」

想像してた花子さんとは全然違うから、本人がそう名乗っても信じられなかった。だって花子さんって白のブラウスに赤いスカート、黒髪のおかっぱっていう姿だと思ってた。なのに私たちの目の前に居る花子さんは、長い金髪を5房の巻き髪にして、青い瞳、白い肌、フランス人形のようなロリータ服。どこをどう見てもトイレの花子さんっていうより・・・

「花子っていうよりはトイレのジョゼフィーヌか！！」

うん、そんな感じかな。アリサちゃんのツッコみと同じことを考えてた。アリサちゃんがバンッと扉を蹴って閉めて、「見なかったことにするわ」って真っ先にトイレから出てった。私とすずかちゃんも続いて出て行くんだけど、花子さんの個室から「しくしく。なによなによ。好きでこんな姿になったわけじゃないんだからね」って愚痴っぽいのが聞こえてきた。

「えっと、ごめんなさい」

自称花子さんに謝って、改めて探索開始。途中でユーノ君が目を覚めして、何度も謝られちゃった。私も悪かったから私も謝り続けて、最終的にアリサちゃんに止められるまでごめんなさい合戦を繰り広げた。

「でもユーノ君。もう本当に体とか大丈夫？」

「うん。問題ないよ。って言いたいところなんだけど。なんでか高い所から落ちた見たいにお腹が痛いんだ。なにかあったのかな・・・？」

それ、私の所為だ。それについても謝ろうとした時、≪スズカ。発信者不明の通信が送られてきましたわ。いかがなさいます？≫"スノーホワイト"からそんなお知らせが。すずかちゃんが「繋げて」って応じると・・・

『私、メリーさん。今、校門に居るの』

ハイ来たぁ～。メリーさんの電話だよ、これ。通信が切れる。私たちは奇襲される前にその姿を見ようと思って窓に張り付く。けど残念ながら暗くて見えない。その代わり「あ、にのきんさん」が見えた。台座に戻る途中のようだ。どうやって戻るのかなって眺めていると、助走を始めた。そして体操選手さんみたく台座の前で跳んで、宙でクルクル回って最後に台座に着地。

「「「おお！」」」

みんなで拍手。にのきんさん、すごい運動神経というより運動能力？がすごい。そんな時にも「また通信だ」メリーさんからの通信が来て、すずかちゃんが応じる。また『私、メリーさん。今、昇降口に居るの』そんな自分の居場所を知らせる通信。

「ねえ。メリーさんのオチって知ってる？」

「えっと、最後は背後に居て、振り返ったら殺されちゃうっていう・・・」

「ま、大半がすずかの言ったオチよね。でもさ。こういうオチもあるのよ♪」

アリサちゃんから語られるメリーさんの電話のオチ。メリーさんの電話を意に介さずに、後ろに居るって言われても無視し続けると、メリーさんは泣きながら後ろをついて来る。舞台が超高層ビルで、メリーさんは幽霊だからエレベーターを使えず階段を利用するから、電話のたびに息が絶え絶えになって、最後は背後に来る前にダウン。

携帯電話の場合、最後の電話の時に電車に乗ったから、メリーさんはホームを泣きながら走って追いかけて来るとかって。

「――とまぁ、こんな感じでさ。無視してたらどうなるんだろうって思うわけ」

「無視してたら、振り返る前に殺されちゃうかもしれないよ？」

「あ、また来た」

『私、メリーさん。今、1階の階段室に居るの』

「とりあえずジュエルシードの探索を再開しましょ」

メリーさんがどういう結末を持ってくるか判らないけど、私たちはとにかく探索を続ける。次は最後の4階。音楽室から聞こえてきた肌がピリピリ痺れるような壮大な音楽。曲名はえっと「新世界より・第四楽章だね」すずかちゃんが教えてくれた。ジュエルシードの居所が判らない以上、1つ1つ調べて行かないとダメだから、

「ここかぁぁーーー！　ジュエルシード！！」

音楽室も探索することに。アリサちゃんがバンッ！と勢いよく扉を開けた。扉の先、教室2部屋分の広さを持つ音楽室には幽霊のオーケストラが居て、しかもお客さんらしき幽霊たちも居た。演奏は止まらないで、お客さん達だけがこっちに振り向いて、「しぃー」人差し指を立てて唇に当てた。

「「「あ、ごめんなさい」」」

そうだよね。演奏中に騒ぐのはマナー違反。私たちはお客さん達に謝って、薦められた椅子に座って演奏に耳を傾ける。曲が変わるごとに左隣に座るすずかちゃんに曲名を教えてもらって、３曲くらいの曲を聴き終えてところで、

「――って、違ぁぁぁ～～～～～～～う！！」

アリサちゃんが叫びながら立ち上った。お客さん達や私とすずかちゃんも「しぃー！」人差し指を唇に当てる。

「いやいや違うでしょうが！　あんた達、ここに何しに来たのよ！！」

「「「演奏を聴きに？」」」

「なんでよ！！」

えっと、なんだっけ？　お客さん達に睨まれながら考える。私たちは・・・演奏を聴きに来たんじゃなかったっけ？

――サンダースマッシャーーーー

「「「え・・・！？」」」

天井から突き抜けて来た金色に輝く雷の砲撃が、オーケストラを吹

き飛ばした。その瞬間、ジュエルシードを探すためにここに来たんだってことを思い出した。オーケストラが消えるとお客さん達も一緒に消えていって、音楽室が静かになった。

「フェイトちゃん・・・！」

開いた天井からマントと長くて綺麗な金髪を揺らめかせて降りて来たフェイトちゃん。アルフさんは居ないみたい。別行動中かも。まずアリサちゃんが「ちょっとぶりね、フェイト」って"フレイムアイズ"を向けた。フェイトちゃんは何も言わずに、私たちと目を合さないように少し顔を逸らしてる。

「フェイトちゃん。フェイトちゃんのデバイス、えっと、バルディッシュ？　大丈夫だった？」

まずはそう話を切り出した。見たら判るようにフェイトちゃんの手には起動してる"バルディッシュ"が握られてる。フェイトちゃんは「問題ない。君のは？」って私の"レイジングハート"も心配してくれた。

「うん。大丈夫だよ」

会話が途切れちゃう。そこにすずかちゃんが「アルフさんはどうしたの？」って訊いた。すると「アルフにはテスタメントの足止めをしてもらってる」フェイトちゃんが言った。テスタメントちゃんも来ちゃってるんだ。外からは戦ってる証と思う爆発音や発光が届いてきた。

「たぶんアルフは負ける。その前に、ジュエルシードを探し出して封印する・・・！」

フェイトちゃんはそう言って、天井に開いた穴から出て行こうとする。けどその前に「待って！　どうして助けてくれたの！？」呼び止めて、オーケストラを倒してくれたことについて訊いてみた。

「・・・偶然だ」

「嘘でしょ、それ」

「「アリサちゃん・・？」」

「ジュエルシードを探すだけなら、あたし達を助ける道理がないわ。同じジュエルシードを探すあたし達を見捨てた方が邪魔者が居なくなって万々歳じゃない。なのに、わざわざ姿を現した。しかもあたし達を音楽で捕えてた幽霊どもを倒した。ということは、あたし達を助けてくれた、ってことになると思うんだけど。違う？」

アリサちゃんがそう言い放つと、フェイトちゃんは「知らない」そう返して、天井の穴から出て行った。まだお話ししたいことがあったけど、今は「みんな。あの子より先にジュエルシードを見つけないと！」ユーノ君の言う通りすでに事態は動いてる。ユーノ君に頷き返して、音楽室から出ようとして・・・「ん？」私たちは立ち止まった。音楽室の入り口に、「しくしく」小さな女の子が泣きながら膝を抱えて座り込んでたから。

「どうしたの？」

「ひっく、私・・ぅく、メリー、うっく、さん・・・」

「「「メリーさん！？」」」

さっきの花子さんみたく外国の女の子だった。なんで泣いてるのか訊いてみると、なんと演奏中に何度も通信を入れてたけど、すずかちゃんが出ないから無視されたのかと思って音楽室に来た。それなのに誰にも気付かれなくて、騒ごうかと思ったけどオーケストラの方が幽霊としての格が高いようで暴れられなかった。私たちが目の前に居るのに何も出来なくて、それが悲しくて泣いちゃったってことみたい。

「私、メリーさん。ひっく・・今、あなた達の、ぐすっ、目の前に、ひぅ、居るの・・・」

あ、やっぱり続けるんだ。みんなで「わ、わぁ、ビックリしたぁ～」驚いて見せる。わざとらしかったって思うけど、メリーさんは「やった・・」って泣き笑いの表情を浮かべて消えてった。私たちはそれを見送って、音楽室を出る。と、これ以上足を踏み出す勇気が要る場面に。廊下全面に浮かび上がってる無数の人形の顔。けど目は全部私たちに向けられているのがなんとなく判る。

「フェイトを追ってあの穴から出るわよ！」

あのアリサちゃんですら廊下を歩きたくなくなったみたいで、音楽室の中に逆戻り。私だって床や天井、壁にある顔の中を歩きたくないから賛成。床の顔なんてスカートの中を見られちゃうし。音楽室に戻ってすぐ・・・それは起きた。

「「「きゃあああ！？」」」「うわぁぁあああ！」

音楽室の天井が崩落して、室内が砂埃でいっぱいになって視界が潰されちゃう。ケホケホ咽ていると、「風よ」聞き覚えのある声が耳に届いて、ヒュッと空気が鳴いた。室内の砂埃が集まってヘビのような姿になって、空に昇って行ったことで視界が戻った。瓦礫の上で四つん這いになってるテスタメントちゃん。側にはフェイトちゃんとアルフさんが倒れ伏してた。３人ともバリアジャケットがボロボロ。急いでフェイトちゃん達に駆け寄りたいけど、私たちに顔を向けたテスタメントちゃんから放たれる嫌な感じ・・・怒りに足が震えて、動けない。

「遅い！　ジュエルシード発動から一体どれだけ時間が掛かってると思う！　今回もジュエルシードの封印を任せようと思えば、いつまで経ってものんびりと！　黙って見守っていれば、お化け達を見て楽しんでいるようだしね！　ダメでしょうが！　外は大変だよ！　ゾンビ達が結界内に溢れ、なんと現実にまで影響与えていたんだよ！

黙って見ているわけにはいかなくなって封印に乗り出そうとしたけど、この２人が到着したから手出しせずにいた！　そうしたらアルフにケンカを売られるわ、あしらっていたらジュエルシードの思念体が出て来て暴れ出すわ、アルフとフェイトがやられるわ、私も一

撃貰うわ。本当に大変だった！」

テスタメントちゃんが息継ぎなしで怒鳴る。私は、私たちは何も言えなかった。そんな中、すずかちゃんが真っ先に動き出して「スノーホワイト、手伝って！」テスタメントちゃん達に駆け寄って、座り込んだ。そして瓦礫に描かれる藤紫色の魔法陣。すずかちゃんが治癒の魔法フィジカルヒールを3人に使おうとしたけど、テスタメントちゃんだけは「私はいい」って離れた。

「えっ！？　でもっ。テスタメントちゃんもダメージを受けたんじゃ・・・！？」

「私は自分の治癒魔法で治す。月村すずかは彼女たちの治癒に専念してくれればいい。さて。高町なのは。アリサ・バニングス。私はこれからジュエルシード本体を抑える。あなた達はどうする？」

テスタメントちゃんは最後に「やる気があればおいで」そう言い放って、空に上がった。私とアリサちゃんは顔を見合わせて、強く頷き合う。

「あります！」「あるわよ！」

すずかちゃんとユーノ君にフェイトちゃん達を任せて、私は飛行の魔法で空に上がって、空を飛べないアリサちゃんには魔法陣を足場とする魔法、フローターフィールドを用意してあげた。

「テスタメントちゃん。ごめんなさい」

「悪かったわよ。あたし、ちょっと浮かれすぎてた」

「その気持ちを忘れないで。どんなにおかしさ爆発な発動内容でも、放置すれば必ず世界に害を成す。私たち魔導師はそれを防ぐ力を持ってる。そろそろ自覚して。この力は、遊びの為じゃないって」

テスタメントちゃんの言うことはもっともだ。だからもう2度と、ジュエルシードの影響を甘く見ないことを誓った。

「・・・・来るよ！」

テスタメントちゃんが校庭に溢れかえるゾンビの群れを指さした。そこを注意深く見ていると、「オオオオオオオオオオオオ！！」そんな雄叫びが聞こえてきた。"レイジングハート"を持つ手に力が籠る。そして、ソレは姿を現した。

「「鬼！！？」」

「そう！　ソイツがジュエルシードの思念体！」

何百っていうゾンビを一瞬で消し飛ばした鬼。額にジュエルシードが埋まっているのが見える。あんな校舎よりも大きな鬼がさっきまで居たなんて全然気付かなかった。テスタメントちゃんは「さぁ、始めようか」そう言って、鬼がこっちに伸ばしてきた右腕を・・・

――汝の首に走るは義の処刑刃（ボア・ドゥ・ジュスティス）――

まるでギロチンのような巨大な魔力の刃で斬り落とした。血が出ないことが私にとって救いだったかも。切断面から出るのは魔力の霧だから気持ち悪くならずに済んだ。

「あたしだってやれるんだから！！」

――ブレイズロード――

アリサちゃんは両脚に炎を噴き上がらせて、鬼の腕を高速で伝って頭部へ。テスタメントちゃんに「援護！」そう指示を出された。この場合、どうすればいいか。真っ先に出たのは、「レイジングハート！」ディバインシューターによる援護射撃。標的は、アリサちゃんを拒むかのように現れた鬼火。意識を集中して、シューター5基を発射。アリサちゃんに近づく鬼火をシューターで迎撃していく。

「やるね、高町なのは！」

「ありがとう！」

その間にテスタメントちゃんはリングバインドを発動させて、鬼の動きを完全に止めた。私はアリサちゃんの護衛。テスタメントちゃんは鬼の身動き封じ。アリサちゃんが本命の一撃。あともう少しで鬼の頭部に辿り着けるというところで、鬼が雄叫びを上げて暴れ出した。砕かれるリングバインド。そして「アリサちゃん！」が腕から落っこちた。急いで助けないと。けどその心配は無かった。

――フローティングアイス――

アリサちゃんの真下に魔法陣が展開されて、その上に大きな氷塊が出現した。アリサちゃんは氷塊の上に着地。そして『月村すずか、これより参戦します！』って念話が届いた。続けて、「バルディッシュ！！」フェイトちゃんの元気な声が届いた。

――アークセイバーー――

黄金に輝く雷の刃がブーメランみたいに鬼へ向かって行って、鬼の両目を斬り裂いた。痛みで叫ぶ鬼。すぐにアルフさんが「さっきのお返しだよ！」魔力弾を鬼の両足に向けて撃って、テスタメントちゃんもまた砲撃を撃つ。

体勢を崩して尻餅をつく鬼。テスタメントちゃんの「集中砲火！！」の指示で、私はディバインバスターー、アリサちゃんはフレイムウィップ、フェイトちゃんは雷の砲撃、アルフさんは魔力弾、テスタメントちゃんは銀の砲撃を一斉に撃った。

「「「「「「いっっっけぇぇぇーーーーーーーッッ！！」」」」」」

次々に鬼の体に着弾していって、爆発によって生まれた煙で鬼の顔が隠れる。

「まだ終わってない。油断しないように！！」

テスタメントちゃんの忠告に、私たちはそれぞれ応えた。

。―。―。―。―。

そこは金属質な通路で、コツコツと靴音を鳴らして歩くのは1組の少年少女。少年は全身黒づくめで、顔だちは幼いが、キリッとした表情から真面目であることが窺い知れる。

隣を歩く少女はそんな少年より少し背が低い。真っ直ぐ伸びるアクアブルーの髪は膝裏にまで届く長さがあり、アザレアピンクの瞳は爛々と輝いている。身に纏う服は白のブラウスに青のジャケット・赤いクロスタイ・青のタイトスカート・黒のブーツ。

「――で？　これから行く管理外世界にロストロギア・ジュエルシードを回収しに行くのが新しい任務だっけ？　クロノ」

「ああ。明日、次元世界標準時間０６２０・・・現地時間１７２０に転送可能圏内に入る。現地入りするのは僕たち2人だ。朝が早いからと言って寝坊するなよ、イリス」

少年の名はクロノ、少女の名はイリス。共に次元世界の秩序を守る時空管理局の一員だ。彼らが乗る艦、アースラが向かうは第９７管理外世界。ジュエルシード争奪戦が繰り広げられている地球の在る世界。

「本局帰りのついでにやるにはデカい仕事だよね～」

「僕と君の2人でもどうにもならないようなら、手間がかかるが武装隊を借りよう」

「楽勝だぜっ♪くらいは言おうよ、男の子」

明日１７時２０分。高町なのは、ユーノ・スクライア。アリサ・バニングス、エオス・スクライア。月村すずか、セレネ・スクライア。フェイト・テスタロッサ、アルフ。そしてルシリオン達のジュエルシード争奪戦に、ついに管理局が介入する。

Ｅｐｉｃｌ２とうとうアイツがやって来た～Ｗｈｅｅｌ　ｏｆ　Ｆｏｒｔｕｎ Ｅ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

習慣となっているはやてへの授業を終えて一緒に昼食を摂っている最中、昨夜のことを思い返す。なのは達と共に戦った鬼。これが結構な強敵だった。ユーノとすずかのバインドという協力の下、私やなのは、フェイトの全力砲撃を１０発以上着弾させてボコボコにした後、カートリッジっぽいのを４発とロードしたアリサのフレイムウィップという炎の鞭（もはやシグナムの火龍一閃だったな）で、ジュエルシードを強制停止させた。そしてジュエルシードに一番近かったアリサがなんとそのまま封印した。

（少なくともアリサでもジュエルシードを封印出来るだけの魔力を持っている、ということだな）

最低でもＡＡ＋ランク。すずかもそれくらい有ると見ていいだろう。問題はそれだけじゃない。先日、ゲームセンターで起こったジュエルシードの暴走。あれを発端として、管理局がこの事件に介入してくることになったんだ。おそらく近日中にアースラが来る。となれば、ジュエルシードを集めるのが苦しくなるのは私とフェイト組だ。

（そんなフェイトは今朝、１つ封印し、そしてなのは達も１つ封印したな）

フェイトの封印した物こそが、都市部において暴走するはずだったジュエルシードだ。なのは達が封印したのは、サッカー少年のジュエルシードだ。大樹暴走には至らなかったようだな。これでなのは組が６つ。フェイト組が４つ。私が１０。残り１１個。場所は知れている。

だが、少々場所がイレギュラーなところもあり、隠れて封印しに行くのはかなり難しい。一応、魔力探査で鉢合わせしないようにも出来るが、いちいち気を張って魔力を使うのも面倒だ。とまぁそんな厄介な状況だが、それをひっくり返す解決法が１つある。だがそれをやると、完全に彼女たちに恨まれるな。

（ま、それが一番いいんだろうけどな・・・）

正体を知られず、ただひたすらに戦場へ向かい、戦い、勝ち、救い、消える。

「はぁ・・・（だと言うのに、フェイトと会うとどうしても気に掛けてしまう）はぁ・・・」

最低でも９つのジュエルシードをフェイト達に回収してもらいたい。前回の契約時では、足りないと言っていたその数でプレシアは事を強行した。だからここ何度かのジュエルシードの封印を彼女たちに任せたんだが、結果は芳しくない。今さら先の次元世界の歴史通りに進めようとするのもおかしな話だが。

「なんやルシル君。２回も溜息なんて吐いて。食事時にそーゆうんは良うないと思うよ？」

「あ、すまない。少し考え事していた」

悩んでも仕方ない。とりあえずは彼女たちの状況だけは確認しておくか。サーチャーの魔術、イシュリエルにステルス効果を持たせて彼女たちに付けておけばいい。イシュリエルから得られる情報を基にジュエルシードの回収を行おう。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒？？？？†††

（くそっ。なんなんだよっ！　ジュエルシードってさ！　フェイトは良くやっているじゃないかよ！　なのに、なんで！）

目の前に在る大きな扉の中から聞こえてくる「きゃあ！」フェイトの悲鳴に、気が狂いそうになる。その元凶はフェイトの母親、プレシア・テスタロッサ。そしてここ、"時の庭園"っていう移動庭園の主。

グランフェリアの情報からジュエルシードを知って、フェイトに回収を頼んだ・・・ううん、命令した張本人。だからアイツに言われたとおりにフェイトはジュエルシードを回収して来たじゃないか。そりゃ全部じゃないけどさ。だからってあんな・・・鞭で打つことないじゃないか！

（もう、やめておくれよ・・・！）

"時の庭園"の中央部、玉座の間からはフェイトの悲鳴と鞭でフェイトを打つ音が止まらない。フェイトへの酷い仕打ちは今に始まっ

たことじゃないけど、でも今回のはあんまりだ。それらから逃げるようにあたしは自分の耳を塞いで、ギリギリ歯を食いしばる。そんな中、ドクンと心臓が跳ねた。この感じ、奴が来た。バッと顔を上げて、廊下の先へ目をやる。やっぱり居た。「グランフェリア・・・！」こっちに向かって歩いて来る、あたしから見りゃ化け物のような女が。

「・・・酷いわね。この悲鳴、フェイトのものよね」

「なんであんたが。もう来ないって話じゃ・・・いや、そんなことはどうでもいい。なあ！　あんたなら止められるんじゃないのかい！？　プレシアをさ！」

グランフェリアに駆け寄って胸倉を掴み上げて、期待はしないけど言ってみた。どうせ断るんだろうって思ったけど、グランフェリアは「いいわよ」そう言って、プレシアの部屋へ入って行った。あまりにあっさりと開く扉。あたしはグランフェリアの背中に隠れるようについて行く。玉座の間の中央には、「フェイト！！」が魔力のロープで吊り下げられていて、そんなフェイトを鞭で叩く直前の体勢のままでいるプレシアが居た。

「グランフェリア・・・！？」

「・・・グラン・・フェ・・リア・・・？」

「久しぶりね、プレシア、フェイト。・・・プレシア。ジュエルシードの回収を行うその子を痛めつけても意味はなく、かえって滞る

だけよ。もう止しなさい」

グランフェリアは何も無いところからアノ黄金の槍を取り出すと、フェイトを捕えている魔力ロープを断ち切って、力なく倒れ込もうとしてたフェイトを片腕で抱き止めた。

「家庭の事情にまで口を出すなんて。情報屋として逸脱しているのではなくて？」

「承知の上よ、プレシア。アルフ。フェイトを連れて行きなさい」

「えっ、あ、ああ！」

グランフェリアからフェイトを受け取って、あたしはグランフェリアとプレシアに背を向けてその部屋を後にした。そこからフェイトの部屋に向かって、傷の治療を行う。リニスが居なくなる前から用意してもらっていた塗り薬。打たれた個所を薬で塗ると、「いっ・・！」フェイトが小さな悲鳴を上げる。

「フェイト。ちょっと痛いかも知れないけど、我慢しておくれよ」

「うん・・・ごめんね」

「あたしの方こそごめんよ。もっと早く助けてあげれば・・・」

玉座の間の扉。アレが開けられないって思ったのは、あたしの心の問題だったんだ。グランフェリアのように押せばちゃんと開くのに

さ。馬鹿だね、あたしは。腫れあがった個所に薬を塗り終えて、包帯を巻く。

「よし。終わったよ、フェイト」

「ありがとう」

「ほら、少し休んだ方が良いよ」

フェイトをベッドの上に寝かせて布団を被せるけど、フェイトは「休んでられない。母さんが待ってる」って起きようとする。でもここ最近、あたし達は結構大変な目に遭ってて、疲労が蓄積してる。少しは休まないといつか壊れる。そうならないために、1時間でもいいから寝てほしい。だから寝かせようとフェイトの肩に手を置いて、起き上がらないようにする。

「邪魔するわ」

「「グランフェリア・・・！」」

そんな時に聞こえてきたアイツの声。入口を見れば、グランフェリアが扉の側の壁にもたれかかっていた。まったく。気配を感じる時は怖いくらいに感じるのに、感じない時はホントに感じないなんてね。

「プレシアから依頼を受けたわ。ジュエルシード探索に、この私も参加するように、と」

「「え・・・？」」

グランフェリアの口から、あたし達にとって願ってもない話が飛び出した。

†††Ｓｉｄｅアルフ⇒なのは†††

「それじゃあ、なのは。今日は悪いわね」

「ごめんね、なのはちゃん。ジュエルシード探し、手伝えなくて」

「ううん。バイオリンのお稽古、頑張ってね」

放課後、バイオリンのお稽古があるアリサちゃんとすずかちゃんと学校で別れて、私はひとりジュエルシード探索に向かう。今朝早く、運よく登校途中に１つ見つけることが出来て、みんなで一緒に封印することが出来た。これで６つ。それでもテスタメントちゃんの１０個には届かない。フェイトちゃんはどれくらい集めたんだろう・・・？

「フェイトちゃん。テスタメントちゃん・・・」

ジュエルシードを巡って今は敵対しているけど、もっとお話しして、友達になりたい子たち。けどまずはこの争いをどうにかしないと始まらないと思う。だからジュエルシード探索をする。途中でユーノ君と合流して、気になる所を回って意識を集中させて魔力を探る。

3か所くらいを探した後、「たぶんここだよ、ユーノ君」辿り着いたのは海鳴臨海公園。まだ覚醒してないジュエルシードの気配がする。ある程度見て回って、一際強くジュエルシードの気配を感じる、夕日に照らされた海沿いの道を歩く。

「近い・・・。ユーノ君、お願い」

首から提げてる"レイジングハート"を手に取る。

「うんっ。封時結界！！」

ユーノ君が結界を張ってくれたのを確認。"レイジングハート"を起動して、バリアジャケットに変身する。それとほぼ同時、目の前に現れるジュエルシードを取り込んだ大樹が姿を現した。うん、大丈夫。あのお猿さん達や昨日の鬼に比べれば、どうってことない。

「いくよ、レイジングハート。ユーノ君は離れてて！」

「大丈夫。サポートするよ！」

そうだったね。私とユーノ君、一緒に戦うって決めていたんだもんね。樹が枝や根を伸ばして来たから、飛行の魔法フライヤーフィンで空に上がる。ユーノ君はすばやく移動して避ける。樹は一番近いユーノ君じゃなくて、私に標的に絞ったみたい。空に居る私に向かって枝を伸ばしてきた。それを避けながら、"レイジングハート"を向けて・・・

「ショート・・・バスタァァァーーーーッッ！！」

≪Ｓｈｏｒｔ　Ｂｕｓｔｅｒ≫

練習して発射速度を上げたディバインバスターのバリエーションで、迫って来ていた枝を壊す。そのまま樹へと向かうけど、地面から生えてきた根の壁に防がれちゃった。

（あの根が厄介だ。砲撃を撃っても防がれちゃったら意味がない・・・！）

だったら「レイジングハート！」ディバインシューターを６基、周りに展開する。砲撃は大威力でジュエルシードを休眠状態に戻すことが出来るけど、その分、魔力の消費が大きいから連発は出来ない。だから消費も少なくて色んなことに応用できるシューターで、「シューット！」樹の本体を護る根や枝を引き離さないと。シューターは順調に壊していって、樹本体への道が開いたところでもう一度・・・。

「いっっっけぇぇぇーーーーーーッッ！！！」

――ディバインバスターーーー

決まった。そう思ったけど、樹がガサガサ降らした無数の葉っぱがカーテンみたいになって、砲撃を拡散させちゃった。

「なのは！」

「え・・・あっ！」

今までに何度も見たのに、確信を持った一撃を防がれて所為で呆けちゃった。だから樹が伸ばしてきた束になってる枝に反応するのが遅れちゃった。でも"レイジングハート"が魔力のバリア、プロテクションを張ってくれたおかげで大事は免れた。

（ディバインシューターを操作して・・・！）

プロテクションを破ろうと押し続けてくる枝の束をシューターで打ち破った。一度距離を取って、樹の動きをよく観察する。根で盾を作って、枝を伸ばして、葉っぱでも盾を作る。

「っとと・・・」

鞭のようにしならさせて来た枝を上昇することで避ける。もう一度シューターを6基と展開、「シューット！」樹に向かって撃ち放つ。枝で弾き返そうとしてきたけど、操作してそれらをかわして樹の本体へ向かわせるけど、やっぱり根の盾で防がれた。

『なのは。結構厄介だ。応援を呼んだ方がいいかも知れない』

『応援って。アリサちゃんとすずかちゃんはお稽古だし・・・！』

『あー、そうか。こういう時に限って出てこないな、テスタメントって子は』

『それに、フェイトちゃ――っ！？』

ドクンと心臓が跳ねる。とてつもなく嫌な感じがして、空を見上げる。雷雲が空に渦巻き始めて、ゴロゴロ鳴り始めた。なんだろう、すごく嫌な雲。そしてピカッて光ったと思えば、「きゃぁぁぁあああああ！」雷雲から雷が落ちた。

「いったぁぁ・・・」

雷が近くを通って行ったから、耳鳴りが酷い。あと目もチカチカしてるし。目をこしこし擦って、ようやく視界が戻ったら「フェイトちゃん、アルフさん・・・！」の姿を捉えた。地面を深く抉っているクレーターの中心に、フェイトちゃんとアルフさんが佇んでる。さっきの雷。フェイトちゃん達が降りて来たことで起こったものなんだって知る。でも「フェイトちゃん・・・？」に近寄れない。なんていうか近寄れる雰囲気じゃない。そんなフェイトちゃんに向かって、樹が枝や根を伸ばして攻撃し始めようとした。

「ジュエルシード・・・回収する。バルディッシュ」

≪Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ≫

――サイズスラッシュ――

"バルディッシュ"を振るったフェイトちゃんがそれらを一瞬でバラバラに斬り裂いた。そのままその場で一回転して、「アークセイ

バー！」その魔力の刃を飛ばして樹の枝数本を斬り飛ばす。それでも樹は無事な枝を杭のようにフェイトちゃんに向けて伸ばして来たんだけど、

「フェイトちゃん！？」

「っ、この・・・！」

――プロテクション――

フェイトちゃんは避けも防ぎもしないで佇んだまま。代わりにアルフさんがバリアを張って防いだ。けど枝はアルフさんのバリアを打ち破って、「うぁあああああ！？」アルフさんを弾き飛ばした。それなのに、フェイトちゃんは何も言わずに飛び上がって、フォトンランサーって射撃魔法で樹を集中砲火。

「なんで・・・？　なんで何も言わないのフェイトちゃん！！」

倒れたままのアルフさんの元へ降り立つ私。アルフさんはボロボロだ。ユーノ君も来て「酷い怪我だ。すぐに治療を！」って魔法を使おうとするけど、アルフさんは拒むように立ち上った。

「アルフさん！」

「もうあたし達に構わないでおくれ」

「そんな怪我でどうするつもりだ！？」

「ぅく・・・決まってる。ご主人様を守るのが、使い魔の・・・あたしの存在意義だ。くそ。グランフェリアの奴、何てことをしてくれたんだい・・・！」

そう言って、止める間もなくアルフさんはフェイトちゃんの元へ走って行く。判らない。どうしてフェイトちゃんがあんな心が無いみたいなことになってるのか。どうしてアルフさんの声が泣きそうなのか、どうして悔しそうなのか。最後に何か呟いていたようだけど、距離とフェイトちゃんの魔法の音の所為で聞き取れなかった。

（とにかく今はフェイトちゃんを止めないと・・・！）

無心で攻撃を続けるフェイトちゃんと防御に専念してるアルフさんの元へ飛ぶ。まずは樹をどうにかしないといけないんだけど。もうフェイトちゃんがトドメを刺しちゃいそう。

「雷槍・・・連穿衝」

フェイトちゃんの前方に展開された雷の槍５本。それを"バルディッシュ"で打って発射させた。だけど樹の根、それだけじゃなくて枝や葉っぱのカーテンっていう複数の盾で防がれた。

（あ、でも・・・今がチャンスだ）

前方に集中している樹の防御。私はフェイトちゃん達の反対側に回る。"レイジングハート"を向けて「ディバイン・・・バスタァァ

ーーーッ！！」砲撃を撃つ。未だにフェイトちゃんの雷の槍の防御に力を注いでる樹は、私の砲撃に対処しきれず直撃を受けた。それが原因なのかフェイトちゃんの雷の槍を防いでいた根や枝、葉が散ってしまって、樹はフェイトちゃんの攻撃も受けた。

「うぁ・・・！」「きゃ・・・！」

私の砲撃と勢いが止まらなかった雷の槍が樹を貫通して衝突したことで光の爆発が起きた。それに衝撃波もすごくて大きく弾き飛ばされちゃうけど、すぐに体勢を整える。光が途切れて、私とフェイトちゃんの間で浮いているジュエルシードを見詰める。

「フェイトちゃん・・・」

「・・・・」

虚ろな瞳を向けてくるフェイトちゃん。やっぱり何かあったんだ、昨晩から今までの間に。どうにかして元に戻してあげたい。そう思って「フェイトちゃん！」名前を呼ぶ。そこに「フェイト！」アルフさんが飛び上がって来たけど、その前にユーノ君のチェーンバインドで拘束された。

「この・・・！」

「アルフさん！　フェイトちゃんはどうしてこんな・・・！？」

「っ！　それは・・・」

アルフさんが何かを言おうとした時、フェイトちゃんが動いた。ジュエルシードに伸ばされる"バルディッシュ"。私も咄嗟にジュエルシードに手を伸ばす。"レイジングハート"じゃないのは、この前みたいに暴走させたくないから。距離と速度はほとんど同じ。でも今の、おかしなフェイトちゃんには渡せない。その思いで、掴んでみせる。あともうちょっとで届くというところで・・・

「はい。ちょっと待ってね～♪」

「え・・・！？」「っ・・・・！？」

いきなり現れた女の子の持つ長い刀に、私たちは拒まれた。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒イリス†††

ジュエルシードを回収するために赴いた第９７管理外世界、惑星名は地球。何て言うんだろう。こう、懐かしい響き。今まで全然知らなかったのに。それに、リンディ艦長からジュエルシードって名前を聞いた時にも胸の奥が熱くなった。

「でもさぁ、クロノ君とイリスちゃんって相性良いから、結構お似合いだよね～」

「エイミィ、あまりに突然すぎてわたしはどう反応すればいいのか

判らないんだけど？」

「なんとなく」

歳は離れてるけど友達みたいな同僚、エイミィと到着まで暇ってことで恋愛話をしていたんだけど、いきなりクロノが相手とか、苦笑いしか出ない。それにブリッジを見回して本人が居ないのを確認して、クロノのことを思う。

「う～ん、それはないよ、エイミィ。それにクロノってわたしのタイプじゃないし」

っていうわけで、わたしはクロノとそういった関係にはなりません、ということを伝える。するとエイミィは「あらら。可哀想なクロノ君」って苦笑するけど、どこか嬉しそう。

「タイプとかそういうの初めて聞いた。それじゃあどういう人がタイプなの？」

結構踏み込んで来るね、エイミィ。なにを企んでるのか判らないけど、別に隠す必要もないから答えることにしよう。

「そうだなぁ、クロノと違って年相応に背が高くて、銀髪で、虹彩異色で、からかいがいのある真面目な人」

「うっわぁ、理想が高いと言うか８歳でタイプが具体的すぎて引くと言うか・・・。そんな人が居れば是非に会ってみたいね。でも、

どうしてそんな具体的なの？」

「さぁ？　気付けばそんな風になってたって感じかな。こうね、心がそういう人を望んでるというかなんというか、だね。だから、クロノはエイミィにあげるよ。２人の方がお似合いだし」

タイプに関しては、ホントに本能みたいな感じ。物心つく前から脳裏に過ぎってる人。正確な顔立ちはぼやけてるけど、その身体的特徴だけはハッキリと心に刻まれてる。その人のことを想うと、ドキドキして、ポカポカしてくるから、嫌なことがあった時は思い浮かべてるんだよね。

「あはは。未来の選択肢が一気に限定されちゃった」

（ふふん♪　満更でもなさそうじゃん♪）

「でもフライハイト家のご令嬢の男性のタイプが聞けるなんてニュースだよね」

ハイ来た。その呼び方。

「あー、そのご令嬢っていうのが嫌いだから管理局に入ったんだよ。知ってるくせに。古代ベルカから続く家柄なのに、わたしに女らしくしなさいって。わたしは令嬢云々の前に騎士だって言うの。あんな家に居たんじゃ息が詰まるよ」

令嬢扱いがなくなればいいんだけどさ。やっぱり騎士として見てほ

しいんだよね。偉大なるご先祖様、シャルロッテ様やリサ様のように、女でありながら最高位の騎士となった御方たちのようになりたい。わたしが黙るとエイミィが「大変だねぇ、ホント」って座席ごと振り返って、わたしの頭を撫でてきた。

「もう。子ども扱いして～」

とは言うけど、撫でられるのが気持ち良くて振り払うことはしない。

「でもリンディ艦長やグラシア家やカローラ家のおかげで、こうしてわたしは世界の為に戦える」

わたしの管理局入りっていう我が儘を聴いてくれた恩人の1人、リンディ艦長の座る艦長席に振り向く。わたしの視線に気付いたみたいで、リンディ艦長はニコッて小さく手を振ってくれたから、わたしはちょっと照れながら降り返した。

（母様の友達がリンディ艦長で良かった）

エイミィとの会話から少し。ようやく今回の現場、地球へと転移が出来る宙域に着いた。早速ブリッジのメインモニターに、「あ～、アレがジュエルシードの暴走体って奴かぁ」現場の状況が映し出される。まずは樹、そして白と黒の魔導師の少女2人と、どちらかの使い魔らしき獣耳と尻尾を有する少女。

「っ！？（また来た。この感じ・・・！）」

その3人を見ていると鼻の奥がツンとして、声を出して泣きそうになる。リンディ艦長やクロノ、エイミィと初めて出会った時もわけも解らず泣いてしまった。あの時はホントどうかしてた。というか、リンディ艦長たちだけじゃないし、初めて会った時に泣いたのって。

（こんな時に限って。気持ちを切り替えないと）

必死に気を落ち着かせて、なんとか泣くことを堪えることが出来た。小さく深呼吸を繰り返してモニターを眺めていると、「イリス」リンディ艦長に呼ばれた。どうして呼ばれたのか聴くまでもないから「はい、任せてください」首肯する。現場に向かうために、艦長席の後ろに在る転送装置トランスポーターに向かおうとした時、「あれ？　イリスちゃんが行くの？　クロノ君は？」って訊いてきた。

「クロノのようなお堅い融通の利かないのが行ったら話がこじれるかもしれないじゃない。見たところわたしと同年代みたいだし、同じ女の子が行った方が良いと思うんだよね。というか、クロノは動けないじゃない。リンディ艦長有するお茶型決戦兵器を間違って飲んで」

それはついさっきの事。わたしが眠気覚まし用に作ったわたしとクロノ2人分のお茶と、エイミィが作ったリンディ艦長用の味覚破壊茶が入れ替わって、コップが同じだったこともあって気付かず、運悪くクロノが引き当てた。そんなクロノは今、医務室で寝込んでる。なんていうか、ごめんなさい。

「あ～、そうだったね・・・」

小声でそんなやり取りをしてからトランスポーターの前にまで移動。そして改めて、「これより現地での戦闘行動の停止、ロストロギアの回収、両名からの事情聴取を」リンディ艦長から指示が出される。

「任務拝命。了解しました」

応じると共に次元航行部隊の青制服から騎士甲冑へと変身する。手にするのは、桜色の刀身を持つ長刀型のアームドデバイス、"キルシュブリューテ"。歴史ある由緒正しきデバイスだ。カートリッジを確認してるところに「転送可能領域に到着しました」アレックスからようやくな報告。

「それじゃあ、イリス、お願いね♪」

「はい、リンディ艦長。よし、行こうか、キルシュブリューテ」

≪りょ〜か〜い、戦(や)って殺(ヤ)ってやりましょう♪≫

右手に持つ"キルシュブリューテ"に語りかける。インテリジェントデバイスの専売特許、人工知能を搭載させているから、ちゃんと返事も出来る。ちょっとばかり馬鹿だけど。溜息ひとつ洩らしたわたしは"キルシュブリューテ"の刀身をコンコンとノック。

「違うバカ剣。止・め・る・の。まったく、誰に似たのか・・・」

≪貴女です、マイスター≫

「うっさい。もう・・・コホン。気を取り直して。イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト・・・いってきます！！」

トランスポーターが起動。足元から照らしだされる光に視界が途絶える。転移の浮遊感を得て、次に視界が戻るときにはそこは現場の空。ジュエルシードのど真ん前。左右からはあの２人の魔導師が接近中。最高の地点とタイミングでの転移だった。空を飛べないわたしは足元に足場としてベルカ魔法陣シュヴァーベン・マギークライスを展開。

「はい。ちょっと待ってね～♪」

"キルシュブリューテ"で黒い子のデバイスを受け止め、左手で白い子の手首を掴み取る。白い子は目を大きく見開いて驚いているけど、黒い子は虚ろな瞳を向けて来るだけ。

「これ以上の戦闘はストーップ！　時空管理局本局・次元航行部隊所属の執務官（補だけど）、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトです。今すぐ武装解除して、大人しく言うことを聴いてね♪でないと最悪、実力行使です♪」

「え、あの・・・はい、すいません・・？」

まず最初に白い子が引いてくれた。けど黒い子は一度間合いを開けて、「フォトンランサー」周辺に放電している魔力スフィアを５基展開。管理局員のわたしが戦闘行動を止めるように言ってるのに、

戦闘続行なんて。

（虚ろな瞳。表情の変化無し。なのにこの馬鹿みたいな戦意）

考えられるのは、精神操作に近い何か。こんな子供を無理やり戦わせるなんて。でも可哀想だけど、今はジュエルシードの確保を最優先にさせてもらうから。白い子に「離れてて！」言い放ち、黒い子が放ってきた電気変換された魔力弾を"キルシュブリューテ"で斬り払う。

「ジュエルシードを渡せ・・・・！」

――ブリッツアクション――

「おっと・・・っ！」

黒い子の姿を一瞬見失う。けど、残念ながら背後に回っているのが丸分かり。ううん、それ以前になんとなくだけど読めてた、この展開が。だから焦りはない。振り向きざまに「カートリッジロード」一時的に魔力を増大させる、アームドデバイスの専用機構を使用。刀身に魔力を付加させて、「光牙・・月閃刃・・・！」縦一閃。すぐに伝わる手応え。

「っ・・・！？」

「フェイト！？」「フェイトちゃん！」

黒い子、フェイトという名前らしい子のデバイスの柄を一刀の下に寸断する。返す刃で撃墜を狙うけど、フェイトはまた高速移動の魔法らしきもので後退。わたしは放置されたままのジュエルシードをゲットし、シュヴァーベン・マギークライス数枚による空中回廊を作り、

――閃駆――

リサ様の代で完璧に復元された、シャルロッテ様の特別な歩法・閃駆（魔力で身体強化しないと今のわたしじゃ扱えない）っていう移動法を使って空中回廊を駆ける。わたしがジュエルシードを取ったことに対して「ジュエルシード！！」フェイトの様子ががらりと変わる。

――雷槍連穿衝――

扇状に展開された雷の槍５本の柄頭を折れたデバイスで打って、射出してきた。さっきの魔力弾より圧倒的に速い。けど、まだ足りない。"キルシュブリューテ"で叩き伏せながらフェイトへ最接近。

「せいっ！」

「っ・・・！」

≪Ｄｅｆｅｎｓｅｒ≫

おそらくオートで発動されたバリアで防がれたけど、「やあああッ！」

気合い一発、バリアを粉砕。

「っきゃぁぁあああああああああッ！？」

「フェイトぉぉーーーーーッ！！」

手応え十分。確実に墜とした。防御魔法の破壊に定評のあるベルカの斬撃だ。あの程度なら容易く破れる。使い魔の子があの子の名前を叫んで、自身を捕縛していたバインドを力づくで砕いた。そして傍に居たフェレット君（事前にクロノから聴いていたスクライアの内の1人かな）に魔力弾を牽制発射して、落下するフェイトの元へ。けどそんな彼女より早く、地面に叩き付けられそうになったフェイトを抱き止めて助けたのは、突然現れた別の黒い子。

「新手！？　いつの間にこんな近くにまで・・・！？」

「あんたは・・・！」

「テスタメントちゃん！？」

神父服にフード付きのマント、そして顔を覆い隠す仮面っていう異様な魔導師。その子を見、名前を聞いた瞬間、「痛っ？・・・テスタ、メント・・・？」頭痛に襲われた。懐かしいような忌々しいような、わけの解らない感情が、胸の奥で渦巻く。かぶりを振って、あの子たちの近くへ降り立って改めてテスタメントという子を見る。白い子やスクライアの子を警戒している使い魔の少女にフェイトを預けたテスタメントは真っ直ぐわたしを見てくる。

「悪いけどこの子たちに用が出来たから、捕縛させるわけにはいかなくなったんだ。アルフ。フェイトを連れて下がっていて。すぐに終わらせるから」

「む。甘く見てくれるじゃない。残念だけどあなたごと捕縛させてもらうよ。白い子とスクライア君はそこで待っててね。やるよ、キルシュブリューテ」

≪あい。カートリッジ、何発ロードしますか～？≫

「1発！　練習時はともかく非常時はいちいち訊かないで！」

"キルシュブリューテ"のカートリッジを1発ロードして、刀身に電気を纏わせる。わたしと"キルシュブリューテ"のやり取りに、「ぷくく」テスタメントは肩を震わせて笑うのを我慢している。恥ずかしさで耳が熱くなるのを自覚。それを振り払うように「行きます！」閃駆で突進。

「せぃやぁぁぁーーーーッ！」

――雷牙月閃刃――

テスタメントの真横に移動、間髪入れずに"キルシュブリューテ"で袈裟切り。完璧に入った、って思った。だけど半歩ズレるだけで避けられた。閃駆からの奇襲斬撃にはクロノからも高評価を貰ってたのに。

「（うそ、見切られた・・・！？）うぐっ・・・・！？」

少なからずショックを受けたことで動きを止めてしまい、顎にアッパーを貰っちゃった。揺れる視界に、気持ち悪くなる。"キルシュブリューテ"を支えに倒れないようにして、余裕そうなテスタメントを見詰める。

「これでラスト！！」

――瓦解（アルティフォドス）せる喰飲の龍咆――

今まで夕陽で明るかったわたし達の周囲が一気に暗くなった。なんとか振り向いて見れば、海から海水の龍が1頭と突き出ていた。

（この光景、前にどこかで・・・？）

デジャヴ。けど気の所為だって振り払って、どうにかしないとって思うのに、脳震盪の所為で未だに上手く動けない。

「待ってテスタメントちゃん！」

そんな時、白い子がわたしを庇うように海水の龍の前に立ちはだかって、デバイスを向けた。なんだろ、すごい安心感がある。でも向こうは魔法を使えるだけの一般人。ここは管理局員のわたしが守らなきゃダメなのに。そう、わたしが、この子を守らないとダメなんだ。

「（守る！・・・・この）わたしがぁぁーーーーッッ！」

「・・・やっぱり君はそうか・・・・」

テスタメントが何か呟くと同時、海水の龍が支えを失ったようにこちらに倒れて来た。こっちに振り返った白い子がわたしの脇の下に腕を回して、「レイジングハート！」デバイスの名前らしきものを呼んだ。

≪Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ≫

飛行魔法の浮遊感がわたしを襲う。ゾワッと全身が総毛立つ。やっぱダメだ、空。だけど、そのおかげでわたしは海水に呑まれずに済んだし、スクライアの子も樹に上って避難しているのを確認できた。

「ありがとう、助かったよ」

「どういたしまして。あ、でも、フェイトちゃん達には逃げられちゃった」

倒れ込んだ海水が荒れ狂った騒ぎに乗じて逃げられた。白い子に地面に降ろしてもらって、「ふぅ」しっかりと足がついたことで安堵の息を吐く。じゃなかった。一息吐いてないですぐにアースラへ連絡を入れないと。

「・・・・あの、すみません。逃げられました」

『まぁ、しょうがないわねぇ。とりあえず戻って来て、イリス。そして、彼女たちも一緒にね。事情を聴いておきたいし。ね？　今からこちらに転送させるから、もうしばらくその場で待機しておいて』

「はい・・・了解しました」

プツンと通信が切れる。うぅ。気の所為なのは確実だけど、なんか拒絶されたようで心に痛いです、リンディ艦長。こうして黙っててもも居られないし、わたしの側でオロオロしてるこの子と、とりあえず自己紹介と行こうか。コホンと咳払いを1つと「それじゃ改めて」と前置き。

「わたしはイリス・ド・シャルロッテ・フライハイト。個人的にはイリスよりミドルネームのシャルロッテの方がお気に入り♪っと、そうじゃなかった。え～と、あなたの名前は？」

「あ、えっと・・・なのは。高町なのは、です」

「ん。よろしく、にゃにょは♪」

なんて言うか、からかいたくなった。人の名前でそういうことは絶対にしないんだけどね、普段は。するとなのはは首をブンブンと横に振って、声をちょっと大きくして訂正してきた。

「違っ・・・！　な・の・は、です！」

「うん、にゃのは♪」

「な・の・は！　もしかしてわざと！？」

「いやいやぁ、よろしく、高町♪」

「名字！？　そんなに発音しにくいの！？（泣）」

「泣かない泣かない。冗談よ。高町、なのは・・・。なのは。うん、良い名前ね、なのは♪」

初めて会ったはずなのに。その名前には懐かしい響きがあって。口にするたびに胸が高鳴って、また鼻の奥がツンとして、目頭が熱くなっていく。ああもう。いきなり泣いちゃったりしたら、変な子だって思われちゃうよ。でももう今度は抑えきれなかった。視界が涙で滲み始めて、頬を伝って行くのが判る。

「うえ！？　イリスちゃん！？でいいのかな？　えっと、私、変なこと言っちゃったかな！？」

「ううん、違うの！・・・時々あるんだ、急に涙が出るってことが。ごめん、驚かせたよね」

「そっか。良かったぁ。てっきり私が泣かしちゃったのかと」

「あはは。さっきまではわたしが泣かしそうだったのにね♪」

なのはの笑顔は・・・なんか良いなぁ。わたし、この子の笑顔が一発で好きになった。

Ｅｐｉｃ１３魔法少女戦隊でも作っとく？～Ｔｈｅ　Ｍａｇｉｃｉａｎ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「答えて。フェイトはどこであの魔法、雷槍連穿衝を学んだ？　ああ違う。回りくどいな、コレ。グランフェリアとはどこで知り合った？」

フェイト達が活動拠点としている遠見市のマンションで、リビングのソファに座るアルフに問い質す。フェイトは今、寝室でゆっくり眠っている。ここに来る前に目を覚まし散々暴れたため、力づくでまた眠ってもらった。その時にアルフとも揉めたが、殺気を叩きつけて黙らせてやった。もう形振り構っていられなかったからな。

（はぁ、これはこれで面倒なことになってしまったな・・・）

。―。―。回想だ。―。―。

はやてとの買い物から帰ってすぐ、私の魔力探査能力にジュエルシード覚醒直前の魔力が引っ掛かり、はやてに一言断ってから海鳴臨海公園へやって来た。先の次元世界でも起こった樹の暴走体。まずはなのはとユーノが現れて、戦闘を開始。アリサとすずかはどうやらバイオリンの習い事のようだな。ばら撒いたイシュリエルを通して２人の様子を見る事が出来る。

「なのはは・・・まだ粗いな。あれではフェイトに勝てないぞ」

なのはの魔導師としての腕を見る限りでは、今のフェイトには及ばない。先の次元世界では、なのはの側には完成された戦士であるシャルが居たからな。その差があるんだろう。苦戦しているなのはを見守っているところで、「この感じは・・・！！」信じられない魔力を感じ取った。

空に渦巻く雷雲。ゴロゴロと稲光が鳴り、そして落雷。その落雷の中に、フェイトの姿を見た。落雷によって出来たクレーターの中央に、フェイトとアルフが佇んでいるんだが・・・。

「なぜ・・フェイトからあの子の・・・グランフェリアの魔力を感じるんだ・・・！？」

"堕天使エグリゴリ"の1機、宝雷の矛グランフェリアの魔力を、フェイトがその身に宿している。驚愕一色に染まる私の精神。しかし"エグリゴリ"の手がかりを見つけることが出来たことで、「ふふ、はは、ははは・・・！」すぐに全身が歓喜に震える。

「馬鹿が！　今はフェイトの心配だろうが・・・！」

だがフェイトが被害に遭っていることを一瞬とは言え度外視したことに怒りを覚え、自分の額を殴る。本音を言えば今すぐにフェイトとアルフから事情を聴きたいが、どうやらフェイトはグランフェリアに何かしら仕掛けられているようで、昨日までの心の揺らぎを失い、ただ戦意しか放ってない。アルフが庇って傷ついても知らんぷりで、攻撃一辺倒。

「グランフェリアの雷槍連穿衝まで使うのか・・・！」

雷槍の柄頭を武装で打つことで、射出時の通常スピードに打撃力と打撃時の魔力爆発を加えることで高速射出させる、というものだ。なのはの砲撃とフェイトの雷槍による挟撃で暴走体を撃破、休眠状態のジュエルシードが姿を現した。

対峙するなのはとフェイト。まずはアルフが動くが、ユーノのチェーンバインドで捕縛された。それをきっかけとしたようにフェイトが動き、続いてなのはがジュエルシードの回収に動いた。

「っ！　この、魔力は・・・まさか！！」

グランフェリアの時とはまた違う意味で驚く。この懐かしい魔力は間違いない。なのはとフェイトの間に浮かぶジュエルシード。そこに転移反応が1つ。そして「はい。ちょっと待ってね～♪」1人の少女がその姿を現し、デバイスでフェイトの"バルディッシュ"を受け、素手でなのはの手を止めた。

「・・・シャルロッテ・フライハイト・・・」

外見は正しく私の知るシャルだ。アクアブルーの長髪にアザレアピンクの双眸。騎士甲冑も真紅の魔力も、そして何より魂までもが、彼女の物だ。

「君の魂が望んだ居場所は、やっぱりこの世界なんだな」

戦いの無い世界に転生してほしかったが、けどこれが最も正しいこととも思える。そんなシャルの転生体（名前はイリスというらしい）とフェイトの戦闘が始まった。が、イリスの前ではフェイトも無力だった。速度を活かしてもイリスの反応速度を超えることが出来ず、ついには撃墜された。

（っと、このままではフェイトが捕まるな）

いま彼女たちが捕えられるのは勘弁してもらいたいな。グランフェリアのことを聴き出さなければ。そういうわけで「仕方がないな」私はフェイトを助け出すために動くことにした。術者と定めた対象の姿を消すというティアナの幻術魔法、オプティックハイドを解除し、フェイトのソニックムーブを使って２０ｍの距離を移動、地面に叩き付けられる前にフェイトを抱き止めた。私の登場に驚きを見せるイリスやなのは達。

「痛っ？・・・テスタ、メント・・・？」

（イリス・・・。あまり良い傾向じゃないな）

私の名や姿を見て、頭痛を起こしているのか顔を歪ませている。前世の記憶が僅かに残っているのかもしれない。フェイトをアルフに任せ、カートリッジをロードしてデバイスの刀身に雷光を付加、そして閃駆で突撃してきたイリスの迎撃に意識を注ぐ。

右隣に姿を見せたイリスの斬撃（おそらく雷牙月閃刃）をスッと半歩横移動するだけで回避。見てからの反応ではなく、体が憶えている。シャルの斬撃のクセなど。それをそっくりそのまま得ているこ

の子の攻撃なら、容易く紙一重で回避できる。

（すまないな）

がら空きな顎にアッパーを一発打ち込む。綺麗に入ったことで、イリスは倒れるまではいかないがデバイスを支えにしてやっと立っていられると言った感じに陥った。このまま放置でもいいが、回復したイリスや、何故か出てこないクロノが出て来て追撃されても面倒だ。

ならば、負傷者を出しておいてそちらに労力を使わせることで逃げる時間を稼ぐのが良い。そうと決まれば。海水で龍を作り出す、水流系下級術式アルティフォドスを発動。

（さぁ、どうする・・・？）

ここで動いたのがなのはだった。海龍とイリスの前に立ちはだかり、臨戦態勢。ここら辺りがいいだろう。なのは達へ海龍の首をもたげさせ、全員の意識がそっちに向かった瞬間を狙って、術式解除。アルティフォドスが海水の塊となって歩道に大波を創り出す。それと同時、フェイトを背負っているアルフの元へ走り、腕を掴んで再度オプティックハイドを発動。なんとか追跡も免れることが出来、無事に撤退することが出来た。

。―。―。終わりだ。―。―。

リビングソファに腰掛けるアルフの前に仁王立ちし、「グランフェリアとはどうやって知り合った？　そしていつから？」若干苛立ち

を持たせてもう一度問い質した。私の様子が普段通りじゃないことにアルフは「どうしたんだい？」なんて訊き返してくるが、私が今一番欲しい言葉はそれじゃない。だから応じることなく黙ったままアルフを見下ろす。

「うぅ・・・。えっと、グランフェリアは元々フェイトの母親、プレシアの客だったんだよ」

「客？」

「ああ、そうだよ。グランフェリアは情報屋らしいんだけどね。ジュエルシードの情報をプレシアに持ってきたのもアイツさ」

（おいおい。どういうことだ、それ。あの子が情報屋？　しかもジュエルシードをプレシアに教えた？）

あまりに想像を超えた事態に頭痛が。アルフが続けた「初めて会ったのが1年くらい前だよ」という話には頭を抱えたくなった。1年も活動しているのか。それに、プレシア程の魔導師が目を付け、その情報を信じるに足ると判断したとなると、グランフェリアの活動期間はもっと長いはずだ。マリアならすぐに気付けるだろうが、彼女にも契約があるため、運悪く素通りさせてしまったんだろう。

「貴重な情報をありがとう」

グランフェリアが近くに居る。それが判っただけでも大収穫だ。時の庭園の座標も判っているし、転移することも出来る。が、問題は、

いつぶつかるか。

（ジュエルシードが１０個。上手く使えれば、現状の私でもグランフェリアになら勝てるか・・・？）

"エグリゴリ"の三強であるガーデンベルグ、リアンシェルト、シュヴァリエルの３機以外ならおそらく勝てる・・・気がする。グランフェリアとの戦闘をイメージしているところで、ふと壁に掛けられている時計に目が行き、もう１８時を回っていたのを確認した。

「そろそろ失礼するよ」

はやてを待たせているし、早々に帰ろうとしたんだが「待ちな！」アルフが外套の裾を引っ張ってきた。

「あんた。フェイトを元に戻すことが出来ないかい！？　アイツと知り合いなんだろ！？　だったらアイツの妙な魔法に掛けられたフェイトを治せるんじゃないのかい！？　グランフェリアについて喋ったんだ。それに見合う報酬くらいは受け取れるんじゃないか！？」

まぁ、当然の主張か。フェイトの様子を思い返す。感情を抑え込まれ、戦闘意識だけが強化されている。精神干渉系の術式を扱える"エグリゴリ"は、闇黒系のレーゼフェアだけなんだが。調べてみると、確かにレーゼフェアの精神干渉系の術式が、フェイトの脳に施されていた。とりあえず名前は出さずに「グランフェリアが誰か連れてきたことは？」と訊くと、アルフは首を横に振った。

「（ということは・・・）グランフェリアから何か貰った？」

「何かカードのようなもんを貰ったよ。フェイトのおでこに張り付けた後、なんか呟いて、そんで剥がしてた」

術式をカード化した、ということか。神器作成能力の一種と見ていいな。

「もう一度診てみよう」

フェイトの眠る寝室へ入り、ベッドに横になっているフェイトの顔を覗き込む。私がフェイトに余計なことをしないかと警戒しているアルフに、「グランフェリアのことで知っていることを全部教えてほしい」と告げる。だがアルフは口を噤む。まさか「なにかと取引き？」と訊くと、アルフはコクリと頷いた。足元を見られているな。しかしこれはこれで良い展開だと思い至る。

「グランフェリアの情報の代金として、未回収のジュエルシードの在処を教えよう」

組織力を得、しかもイリスが加わったことで戦力的にも負けている今、この子たちに必要なのは確かな情報だ。なのは達が集め出すより早く、フェイト達に回収してもらいたい。その方が都合がいい。

「はあ！？　それ、本気で言ってんのかい！？　あんたもジュエルシードが欲しいんだろ！　だって言うのに、そんな敵にジュエルシードの在処を教えるなんて・・・あっ、罠じゃないだろうね！」

「違う。私にとってジュエルシードよりグランフェリアの方が重要だから、だ」

「・・・いつも余裕そうなあんたがそんなに感情をむき出しにするんだから、よっぽどグランフェリアと何かあったようだね」

「ノーコメント。で？　悪くない話だと思うけど、どうする？」

「そうは言っても、あたしだってアイツのことなんかあんまり知らないよ。ただ、何度か模擬戦をしてもらったことがあるくらいだ。雷槍何たらって魔法も、そん時に形だけ教えてもらった感じだよ」

あの子と模擬戦か。フェイト達との初戦で感じ取った妙なアルフの落ち着き払いは、グランフェリアとの模擬戦が影響していたんだな。それからいくつかアルフから情報を貰ったが、確かに目ぼしいものはなかった。今度は私の番だと、残りのジュエルシードの在処をアルフに伝えるんだが、「お、憶えきれない・・！」頭を抱えた。

「じゃあ何か紙を用意！」

性別を偽る演技を続けるのが辛くなってきた。早くはやての家に帰って、あの子の作った料理を食べ、ゆっくりと休みたいなぁ・・・。

「あ、ああ。ちょっと待っておくれ」

ドタバタと探しに行くアルフ（もう私への警戒を解いているな）を

横目に、フェイトの額に触れ、

「呪われし者に、汝の施しを」

中級補助系術式、ラファエルのバリエーションを発動。これには一切の治癒能力は無い代わりに、対象に掛けられた付加術式を強制的に解除する降下を持つ。結構大した効果を持っているんだが、大戦当時はごり押しで勝てていたし、これまでの契約でもわざわざコイツを使うまでもなく何とかなっていたため、ほぼ放置。

フェイトの額に浮かび上がるのは、二重円の中に五角形と逆五角形を合わせた十角形、その中に円と五角形を収めたスヴァルトアールヴヘイム魔法陣。

「砕け」

ラファエルの効果を高めると同時に砕け散る魔法陣。これでレーゼフェアの呪縛から解き放れるだろう。そこに「持って来たよ！　これでいいかい！？」アルフが1枚の紙を手に戻って来た。その紙に把握している場所を書き記しつつ、「フェイトは治しておいたから」と告げる。

「本当かい！？　助かったよ、テスタメント！」

「礼は結構。コレ、フェイトに渡しておいて。それじゃあね」

記し終えた紙をアルフに手渡しながら寝室を後にしようとした時、

「あ、うん・・・。なぁ、あんたさ、よかったらあたし達の仲間にならないかい？」

「はあ？」

そんな提案を、あのアルフが出してきた。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒なのは†††

「あのぉ、イリスちゃん？　もうちょっと離れてくれるといいなぁ、なんて・・・」

「え～、イリスじゃなくてシャルって呼んでよ♪」

「じ、じゃあ・・・シャルちゃん」

イリスちゃん改めシャルちゃんに案内されたアースラっていう船の通路を歩く私たち３人なんだけど、シャルちゃんがピッタリ横にくっ付いて来る。全然嫌じゃないし、むしろ嬉しいって思えるんだけど、ちょっと歩きにくいかも。

にゃはは、と苦笑していると、私たちの後ろをついて来るユーノ君が「コホン」と咳払い。そんなユーノ君は、今はなんと元の人の姿に戻っているのです！　ようやく元の姿になって活動できる程に回復したってことみたい。

「えっと、シャル、でいいのかな？」

「うん、それでいいよユーノ」

「君たち管理局が来たってことは、その・・・」

「詳しいことはアースラのボスから伝えられると思うけど、一応、わたしからも。スクライアのペリオさん・・・メッチャ怒ってる。帰った時、ある程度、覚悟しておいて方が良いかも」

「うわぁ～・・・どうしよう～・・・」

「にゃはは。その、頑張って、ユーノ君・・・」

頭を抱えて苦悶するユーノ君に、私はそんなことしか言えないよ。シャルちゃんから「怒るのは心配の裏返し。逃げないように♪」って諭されたユーノ君は、「うん。判ってる」キリッとした表情で頷いた。

通路を歩く中、何も知らない私は時空管理局やアースラって船のことをシャルちゃんに説明してもらった。私の住む世界以外にもたくさんの世界が在るってユーノ君から聞かされていたけど、本当にすごいことに関わってるんだなって、改めて自覚する。

「――でも、シャルちゃんって私やユーノ君とそんなに歳、変わらないよね・・？」

「８歳。で、今年の１１月１６日で９歳になるんだよ」

「同世代なんだぁ・・・。それなのにすごいな、シャルちゃん。管

理局ってところでもう働いてるんだもん」

「しかも執務官って、管理局の中でも結構なエリートじゃないか。もしかして最年少で執務官になったんじゃ・・・？」

「そうなの！？」

羨望の眼差しを向けてシャルちゃんに訊いてみると、「ごめん！嘘吐いた！　本当は執務官補なの！」って思いっきり頭を下げた。なんで謝られたのか意味が解らなくて、説明してほしくてユーノ君に振り向いてみる。

「執務官の補佐のことだね。未来の執務官の卵って言えばいいのかな。それでもやっぱりすごいことだと思うよ。８歳でそこまで行けるなんて」

「なんだ。シャルちゃんって、やっぱりすごいんだ！」

「あ、ありがとう。いっぱい勉強して、なれたんだ。褒めてもらえて、すごい嬉しい」

照れ笑いを浮かべるシャルちゃんは、やっぱり可愛い女の子だった。そして私たちは、このアースラで一番偉いリンディ艦長さんの居る部屋に着いた。私は失礼が無いように服（シャルちゃんに言われて変身は解いた）をチェック、髪にも触れて、乱れていないかを確認。

「大丈夫。可愛いよ、なのは」

「うぇ？　あ、え、ありがとう」

ハネてたらしい私の髪をシャルちゃんが撫でて直してくれた。ボッと顔が熱くなっちゃうのが判る。シャルちゃん、さっきと違ってなんか男前だ。

（それにしてもどうしてシャルちゃんはこんなにも私のことを親しんでくれるんだろう？）

まるで以前から私たちが知り合いだったかのよう。そういう私も、なんとなくシャルちゃんとは前から知り合いだったような気がする。

（不思議な感じ。こんな気持ち、初めてだ・・・）

そう思ってるところで、シャルちゃんが「リンディ艦長。来ていただきました」と一歩踏み出すと扉が横に開いた。まず目の前に飛び込んできたのが「野点・・？」お茶の席とかで見る、アノ野点だった。あと盆栽や鹿威し(ししおどし)があって、どこからともなく小鳥の鳴き声が聞こえてくる。

ハイテクな機械とそんな日本文化のミスマッチな部屋の中に、

「お疲れ様、イリス。そして、そちらのお2人にはようこそ♪　当艦船、アースラの艦長をしている、リンディ・ハラオウンです」

すごく優しそうな女の人、リンディさんが赤いフェルトの上で正座してた。

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「はい♪　ささ、立ち話もなんだから座って座って」

リンディさんに勧められて、私とユーノ君もフェルトの上に正座した。そしてシャルちゃんは「はい。お茶とお茶請けね」私たちにようかんとお茶を用意してくれた。みんなで美味しく頂きながら（リンディさんがお茶に砂糖を入れたのはビックリしたけど）私たちがここに呼ばれた理由、ジュエルシード探索についての事情を説明した。

ユーノ君と初めて出会った時のこと、魔法を貰ったこと、ユーノ君の助けになりたいからジュエルシード探索の手伝いをしていることなど。説明を終えると、リンディさんもシャルちゃんも黙っちゃって、その緊張感が息苦しい。

「ユーノ君。管理外世界の原住民に魔法の存在を教え、なおかつ授与することは、管理局法では違法となっています。それは解っていますね」

「はい・・・。ごめんなさい」

リンディさんに厳かに注意されたユーノ君は体を小さくして、謝った。私は前に決めた通り、ユーノ君だけの所為じゃないってことを言おうとしたんだけど、その前に私の隣に座るシャルちゃんに手で

制されたから黙ることに。

「ペリオ氏から連絡を頂いた時は本当に驚きました。ジュエルシードは第一級のロストロギアですから。発掘したのがあなたで、その責任を負って回収しようというのは立派なことだと思います。ですが、そんな危険物を1人で回収しようとしたのは無謀なことだと叱責しましょう」

「・・・はい」

「では次ね。ペリオ氏からの連絡には、セレネさんとエオスさんの2人も居るという話なんだけど、その2人はどうしたのかしら？」

その質問に、ドキッとなる。でも黙っておくことも出来ないから、私の様な経緯で魔導師になったアリサちゃんとすずかちゃんのことも話す。温泉での一件だ。私を守るために魔導師になってくれたアリサちゃんとすずかちゃん。そのことを話し終えると、リンディさんは「あらあら」さっき以上に困ったように手を頬に添えて、シャルちゃんは「アリサ・・すずか・・・？」2人の名前を何度も呟いてる。

「なのはさん。その子たちとは今、連絡が取れるかしら？」

「えっと、たぶんですけど・・・。ちょっと失礼します」

携帯電話の時刻を見れば、もうバイオリンのお稽古も終わってる時刻だ。私もお父さんに帰りが遅くなることを連絡しておかないとい

けない。でも今はとりあえずアリサちゃんに電話をかけてみる。数コールもせずに『はいもしもし。なのは、どうしたの？』アリサちゃんは出てくれた。

「あ、アリサちゃん。今、電話いいかな？　魔法の事でちょっと話があるんだけど」

『いいわよ。ちょうどすずかやセレネ達も揃ってるし。今ね――』

アリサちゃんは今、すずかちゃんと一緒に自宅で今日のお稽古の復習をしてるとのこと。スピーカーフォンモードの電話からわいわい騒いでるセレスちゃんとエオスちゃんの賑やかな声が聞こえてくる。そんなところに管理局の話をするのは悪い気もするけど、しょうがないよね。

「えっとね、アリサちゃん。実は――」

管理局って人たちが来て、ちょこっと大変なことになってることを伝えた。すると電話の奥で、『ぎゃああ！　ついに来たぁぁ！』ってセレスちゃんの悲鳴らしきものと、『終～わったぁ、終～わった～♪』エオスちゃんの現実逃避っぽい鼻歌が聞こえてきた。

『どうしよう、セレネちゃん達が壊れちゃったよ・・・』

『あー、放っておいて。で？　あたし達はどうすればいいの？』

「えっと・・・。今、管理局の艦長さんが側に居るから、代わるね」

「初めまして、アリサさん。時空管理局のリンディ・ハラオウンです。こうして連絡をしたのは――」

リンディさんは、アリサちゃん達の顔を見ながら話をしたいから、今から空間モニターとかいうのを使いたいってお願いした。

『『空間モニター、ですか・・・？』』

アリサちゃんとすずかちゃんはそれがどういうのか判らないみたいで困惑してるよう。そこに「テレビ電話のようなものだよ」ってシャルちゃんが教えた。それだけで察してくれたようで、『しばらく部屋に誰も来ないようにしますから、大丈夫です』アリサちゃんが承諾。

魔法を知らない人が、宙に浮かぶモニターを見ればビックリするし、魔法がバレちゃうもんね。少し間を置いた後、『もう大丈夫ですよ』ってアリサちゃんが知らせてくれた。それを合図としたように私とユーノ君とシャルちゃん、そしてリンディさんの間にモニターが浮かび上がった。

『おお、すごい！じゃなかった。えっと、初めまして、アリサ・バニングスです』

『月村すずかです』

『セレネ・スクライアです』

『エオス・スクライアです』

モニターに映るアリサちゃん達が小さくお辞儀した。リンディさんが改めて自己紹介してるのを聞きながら、私はシャルちゃんから目を離せなかった。シャルちゃんは私と初めて会った時のように涙ぐんでいて、袖口で涙をゴシゴシ拭ってる。なんかその姿が愛おしく思えて、「はい。シャルちゃん」持ってたハンカチで涙を拭いてあげる。

「ありがとう、なのは。もう大丈夫」

優しい笑顔を浮かべてくれたシャルちゃんに、「どういたしまして」私も笑顔で応える。

「――では。今連絡が取れるなのはさん達に、とても大事なお話があります」

リンディさんから私たちに教えられたロストロギア、ジュエルシードの詳しいお話。たった1つのジュエルシードの本格的な発動でも街1つくらい消滅させることが出来て、複数が同時に発動したらそれこそ幾つもの世界が消滅するかもしれないってことで。危ない物だっていうのは判っていたけど、世界が消えちゃうほどに危ないなんて思ってもみなかった。

「少し前に観測したんだけど、一度大きな発動があったでしょ？ソレが、世界を滅ぼす現象である次元震なの。ま、規模はうんと小さくて、1％にも満たない。けど、もしアレが同時に複数起こった

ら・・・」

シャルちゃんのその話で、ゲームセンターでの魔力の爆発を思い出す。あんなのでも小さいなんて。ブルッと体が震える。想像も出来ない、酷いことになる。以前にもそう言った次元震が起きて、いくつもの世界が消えちゃったってお話をしてくれたシャルちゃん。それを聴いて、私もモニターに映るアリサちゃん達も顔を青くした。

「なのはさん、ユーノ君。アリサさん、すずかさん、セレネさん、エオスさん。これまでのジュエルシード探索、ご苦労様でした。よく頑張ってくれましたね。でももう大丈夫。ジュエルシード探索は、現時刻を以って時空管理局が全権を持ちます。なのはさんとアリサさんとすずかさんはデバイスを返却して、日常に戻ってください」

「『『え・・・？』』」

「そしてユーノ君とセレネさんとエオスさんは、私たちがペリオ氏の所まで送ります。今回の一件に関しては厳重注意で済ますことにしますから、今後、こういった無茶も無理もしないように」

「『『あ・・・』』」

リンディさんから告げられた、私たちのジュエルシード探索の終わり。そのあまりの呆気なさに呆けてしまう。

（どうしよう。私、まだフェイトちゃんに友達になりたいって伝えてない。アルフさんやテスタメントちゃんにも。でもこのままじゃ、

魔法を失くしちゃったら・・・）

焦りが溢れ出てくる。魔法を使えるからこそぶつかれる、言葉を交わすことが出来るのに。今まで通り魔法を使って、ジュエルシード探索を続けたいって思いを言わないと、本当にこれで終わっちゃう。

「みなさん、それでいいわね？　もう危ない目に遭うこともなくなるし、日常を削ってジュエルシードを探さなくても済むのだから、断る理由はないと思うわ」

リンディさんの言葉が、ユーノ君たちと出逢う前の日々を私に思い出させる。平和だった。痛いことも危ないこともなくて、アリサちゃんやすずかちゃんと楽しく過ごせてた。でもその代わり私は空っぽだった。アリサちゃん達のようにハッキリした将来像なんてなくて、ぼんやりした中を漂ってた。だけど、ユーノ君たちと出逢って、魔法を知って、こんな私でも出来ることがあるってことが判った。

（ユーノ君・・・）

俯いたままのユーノ君を見る。と、ユーノ君も私の方を向いたから目が合った。目で語り合うなんて出来ないけど、今だけはなんとなく判る。私の意思次第だってことが。すでにいろいろと違法行為をしちゃってるユーノ君は大きく出れない。なら、私しかいない。

「あのっ！」

「どうしました？　なのはさん」

「私、このままジュエルシードの探索を続けたいです！」

意を決してリンディさんにお願いしてみる。返ってくるのは「それはどうしてかしら？」そんな問い。ここで間違えたら拒否される。でも私に上手なことは言えない。だから思ったことを全力で伝えるだけ。

「フェイトちゃんやテスタメントちゃんのことをもっとよく知って、友達になりたいからです！　確かに今はぶつかっちゃってるけど、でもきっと判り合えると思うんです。だって2人とも優しいから！

私、フェイトちゃんに助けてもらったことがあるんです。テスタメントちゃんはこの前の暴走で、私たちの代わりにジュエルシードを抑えてくれて。だからこのジュエルシードの一件が終わったら、時間は掛かるかもしれないけど、きっと・・・！」

それが私の本心。最初は、独り頑張っていたユーノ君の助けになりたいだけだった。魔法の力で誰かを助けることが、何かを守ることが出来るなら、私は戦うことも出来る。そしてテスタメントちゃんやフェイトちゃん、アルフさんと出会って、それぞれのジュエルシードを集める理由を、全部じゃないけど知った。大切な誰かを助ける為。それはきっと優しいからこその理由なんだ。

「そう言えば、あなた達へはちゃんとした自己紹介がまだだったよね。　わたしはイリス・ド・シャルロッテ・フライハイト執務官補よ。よろしく。わたしから質問があるの。アリサとすずかは、どうして魔導師になったの？」

言い切ると同時、シャルちゃんがモニターの向こう側に居るアリサちゃん達に訊いた。

『もちろん、なのはを守るためよ！』

『アリサちゃんと同じく。大切な友達を見放すような真似は出来ないから』

何度聞いても泣いちゃうほどに嬉しいことを即答してくれるアリサちゃんとすずかちゃん。けど、今回はその後に続きがあった。

『あと、あたし個人としてフェイトやテスタメントと友達になりたいってことかしら』

『私もそうかな。テスタメントちゃんって面白くて、フェイトちゃんも優しいから、きっと友達になれると思う』

「アリサちゃん、すずかちゃん・・・」

2人もそうだったんだね。

「じゃあ、セレネとエオス。あなた達はどうしてジュエルシードを探しに来たの？」

『『それは・・・！』』

セレネちゃんとエオスちゃんが黙っちゃった。そういえば聴いたことがないなぁ。私たちの視線を一手に引き受けて、『うぅ』たじろいじゃってる。シャルちゃんは小さく溜息を吐いて、「話したくない？　それとも聞かれたくない相手が居たりする？」って訊くと、2人はチラッとユーノ君を見た。

「え、僕？」

「ん。じゃあユーノ。ちょこっと失礼するよ」

シャルちゃんはそう言ってユーノ君自身に耳を両手で塞がせて、その上から自分の両手を重ねた。二重の耳塞ぎ。そして改めて、「はい、理由は何？」って尋ねた。

『ユーノにもっと尊敬してもらいたかった。私たちの方が年上なのに、ユーノの方が頭も良いし魔法の腕だって良い』

『ユーノに気付かれずにジュエルシードを集めて、詰まったところで姿を現して渡す。そうすれば、私たちのことをもっと尊敬してくれるって思ったの。結局、アリサとすずかを巻き込んじゃう形になって、申し訳ないって思ってる』

『そうだったんだぁ・・・へぇ～』

『それって、なんて言うか・・あれ、だよね・・・』

アリサちゃんとすずかちゃんはその理由に何か思うようなことがあ

るみたいなんだけど、私にはサッパリ。見ればリンディさんも「いいわねぇ、初々しいわぁ♪」なんか機嫌が大変よろしいです。シャルちゃんも「そうなんだぁ」って面白いことを聴いたって笑顔になっちゃってる。

解っていないのはどうやら私だけみたい。なんか疎外感を感じちゃう。そんなみんなの様子に、セレネちゃんとエオスちゃんは『もう！　だから話したくなかったのに！』ってジタバタ暴れる。

「とにかく一応、全員の理由を聴いた。そのことを踏まえて結論を出す。リンディ艦長、わたしからもお願いします。この子たちを、一時的な民間協力者として手伝わせてあげてほしいんです」

「イリス・・・？」

「なんと言うか、ここまで来たら最後まで見届けてほしいと思ったんです。ここまで関わっていおいて、今さら全てを忘れて日常に戻れって言っても無理があるかと」

ユーノ君から離れたシャルちゃんが私たちの味方になってくれた。それに『ちょっと言い方が癇に障るかもだけど、ちょっと我慢してね』ってわざわざ念話をくれた。

「ジュエルシードの暴走体との戦闘と封印、他魔導師――フェイトとその使い魔、アルフ。そしてテスタメントとの戦闘でも役に立つと思います。先ほどモニターした限りではなのはの魔力や射砲撃は目を瞠るものがあります。わたしとクロノの２人だけで十分かと思ってましたが、テスタメントには嫌な感じがするんです」

クロノ？　誰のことだろう？　でもきっとシャルちゃんみたいに強い人なんだろうなぁ。シャルちゃんは「それに」って前置きして、リンディさんに耳打ちし始めた。

「ジュエルシードの運搬船を襲撃した何者かが現れるかもしれません。ソイツと衝突するとき、わたしやクロノがジュエルシードの封印で疲れていてはダメです」

ん？　なんか物騒な話をしてる？　聞き取れないけど、リンディさんの雰囲気からそう感じる。リンディさんはシャルちゃんのヒソヒソ話に納得したみたいで、「そうね」って頷いた。

「なのはさん、アリサさん、すずかさん。ジュエルシードの探索には危険が付き物です。それでも続けますか？　ジュエルシードの探索を」

リンディさんの問いに、私とアリサちゃんとすずかちゃんは顔を見合わせて、

「『『はいっ！！』』」

強く頷いた。シャルちゃんは満足そうに微笑んで、リンディさんは少し考える仕草をした後、「判りました。あなた達にはこのままジュエルシード回収を手伝ってもらいます」って私たちのジュエルシード探索の続行を認めてくれた。

「ですが。条件があります。あなた達の身柄を一時、時空管理局の預かりにすること。そのことから私の管理下に入ってもらうことになりますから、こちらの指示には絶対遵守ということになります。よくって？」

「「『『『はいっ！』』』』」

こうして、私たちは管理局と一緒にジュエルシードを回収することになった。リンディさんの説得に協力してくれたシャルちゃんに「ありがとう、シャルちゃん！お礼を言う。するとシャルちゃんは「ううん。わたしとしてもあなた達と一緒に居たいと思っただけ♪」私にコソっと教えてくれた。

「アリサ、すずかもよく聴いておいて。今後について少し話すから。基本、わたしと、わたしの上司であるクロノ・ハラオウン執務官はアースラで待機。ジュエルシードの在処の探索・発見はこちらが担当するから、もう探し回らなくていいよ。で、戦闘及び封印はこれまで通りにあなた達の担当になる。それでいい？」

「私はそれでいいよ」

『あたしも。それでいいわ。というか、それで文句が言えるわけないじゃない』

『うん。探して見つけてもらえるだけでも十分助かるよ～♪』

「ん♪　あ、もしあなた達でも敵わない奴が出てきたら、わたしが

助けに行くから安心して。じゃあそういうわけで、魔法少女戦隊アースラ、頑張ってジュエルシードを集めるぞぉーー！」

チーム名はともかく、シャルちゃんが拳を突き上げたから私たちも「おおーー！」同じように拳を突き上げた。シャルちゃんが後ろに控えてくれているってことが判るだけでも安心して戦えそう。これからは上手くことが進むと思って笑い合ってるところに、リンディさんが「でも・・・」って困ったように首を傾げた。

「なのはさん達、この世界ではまだ教育機関に修学している最中じゃなかったかしら？　ジュエルシードの回収は一刻を争います。通学していては間に合いようがないわ」

「『『あ・・・』』」

学校があるのを忘れてた・・・。

Ｅｐｉｃ１４－Ａそれはもうジュエルシードの回収は大変で～Ｓｔｒａｎｇｅ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「で？　僕が寝込んでいる間に、民間人を協力者として迎え入れたわけなんだな？」

「そうだよ。現地協力の魔導師、なのは、アリサ、すずか。そしてスクライアのユーノ、セレネ、エオスね」

ジュエルシードの回収に専念するために、学校を休めるよう家族を説得しにリンディ艦長と一緒になのは達が帰宅した後、ようやく我が上司、クロノ執務官がお目覚め。そして今、これまでの事情をわたしともう１人の執務官補でアースラ通信主任でもあるエイミィを交えて、モニタールームでクロノに説明中。モニタールームの唯一の席に座っているエイミィは、操作キーをリズムよく押して映像をモニターに映し出させる。

「クロノ君が眠ってる間に起きたのがこの映像だよ」

正面のモニターに映ってるのは、さっきの樹の暴走体となのは達の戦闘。クロノは映し出される映像を無言で見てる。そしてわたしがフェイトって子を撃墜したのを見て「まあまあだな」なんて辛口評価。で、次に流れたテスタメントの登場と、その子に負けたわたしの映像を見て「イリスの斬撃を見切ったのか・・！？」そこは驚い

て見せた。

「フェイトちゃんって子には問題なく対処できたけど、次に姿を見せたテスタメントちゃんって子に、イリスちゃんは負けちゃったんだよね」

「わっはっは。綺麗に見切られちゃいました～♪」

てへ　と舌を出してコツンと頭に軽い拳骨。するとクロノは「変に誤魔化すな」ってわたしの額を人差し指で突いてきた。お見通しってわけか。クロノと同じ現場に立って時間はまだ1年にも満たないけど、知り合ってからは2年。だからこそバレちゃうみたいだなぁ、わたしの隠してる本心が。

（今でもあのショックから立ち直れ切ってないことが・・・）

でもそれが嬉しいって思える。だからわたしのことを気に掛けてくれる仲間の為にも。

「次は負けない！」

「ああ。そうだな」

「それでこそ最年少で、しかも一発で試験を合格して執務官補になった、古代ベルカ式の超天才騎士♪」

「今は茶化すなエイミィ。それにしてもイリスや艦長の判断は正し

いかも知れないな。このテスタメントって魔導師には妙な気配がある。名前からして偽名であるのは間違いない。もしかするとジュエルシードを運搬していた船を襲った奴の仲間かも知れない」

「船の護衛に就いてた第零技術部のシスターズの２人を撃墜したって魔導師だよね」

新しく出したモニターに第零技術部所属の専務戦闘員、トーレ・スカリエッティとチンク・スカリエッティの顔写真と能力値を表示。そして第零技術部のジェイル・スカリエッティ部長から提供された、その２人を墜とした際の女魔導師の戦闘映像を表示させた。トーレはオーバーＳで、チンクはＡＡ。戦闘能力にはなんにも問題ないのに、そんな２人をたった１人で圧倒した影を操る魔導師。チンクは本局で初めて出来た友達でもあるから、チンクが倒された時のシーンはかなり辛い。

「僕とイリス、それに武装隊の包囲網で押さえ込むことが出来るかも怪しいな。確かにジュエルシードの封印で魔力を消費した中で、こんな奴を相手にしたくない。高町なのはとユーノ・スクライア及びその友人たちには悪いが、僕たちの魔力消費を抑える役を担ってもらおう」

「うわぁ。しょうがないとは言え、クロノ君が外道発言を・・・」

「んなっ！　人聞きの悪いことを言うなよエイミィ！　元はイリスの発案だろう！？」

「ちょっ、なんてこと言うの！　それは建前で、わたしの本心はただ、なのは達ともっと一緒に居たいなぁ、なの！」

失礼しちゃう。そんなゲスいことを本心で考えるわけないじゃないの。プンプン頬を膨らませて怒っていると「それはそれで問題があるような・・・」なんてエイミィがぼやく。クロノも頭痛を起こしたかのように額に手を当てて「あのなぁ・・・」って呻くし。

「ま、いいじゃん。わたし、同年代の魔導師の友達って、そんなにいないし・・・」

聖王教会にならたくさん居るけど、管理局はやっぱり大人が多いから、局内で友達と言えるのはクロノやエイミィ、それにあの子たちくらい。だからこの一件が終わって別れることになるとしても、なのは達のような同年代の友達が出来るのは嬉しい。

「まぁ、まだ友達とも言える関係じゃないけど。必ず友達になって見せる！！」

フンッと気合いを入れる。と、「おお、やる気満々だねイリスちゃん♪」って笑ってくれたエイミィだけど、クロノからは「別の方向にそのやる気を見せてくれ」って嘆息。もちろんジュエルシードの一件にも全力で取り組むつもりだ。でも今は、何もすることがないんだも～ん。

「ジュエルシードの在る場所はいま全力で探してるから、発見次第動いてもらうよ」

「なのは達が、でしょ？」

「艦長や高町なのは達がご家族の説得に成功すれば、だ」

クロノの言うことはもっともだけど「たぶん大丈夫じゃないかな」って思う。

「どうしてそう思う？」「ん？　なんで？」

２人から同時に訊かれて、「勘♪」そう即答する。苦笑してる２人に背を向けて、わたしはモニタールームを出る。向かうはトランスポーター。ブリッジのじゃなくて複数人を同時に転送できるエントランスだ。

「早く逢いたいなぁ、なのは。それにアリサとすずかにも♪」

気付けばルンルンスキップなわたし。成功しても失敗してもリンディ艦長から連絡が来るのに、その前にエントランスで待つなんて。

「わたしってバカよね～♪　そうだよね～♪　そうなのよ～♪」

すれ違う仲間たちに微笑ましく見られているのも気にせず、わたしはただスキップなのだ。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒なのは†††

「まさか一切反対されずに外泊許可が出るなんて思わなかったわ・・・」

「うん。でも、それはそれで助かったよね」

「信じてもらってるってことだから嬉しいことだよ」

ジュエルシードの回収に集中したいと決めた私とアリサちゃんとすずかちゃんは、学校を無期で休みたいってことを私たちの家族に話すことにした。魔法のことだけをぼかしてユーノ君との出会いからこれまでのこと、ある探し物を巡ってフェイトちゃんやテスタメントちゃん（テスタちゃんって呼び方を変えて）とケンカしてるけど、仲良くなって友達になりたいこと、そのためには家を空けないといけないこと、ちょっと危ないことをするかもしれないこととかって。普通、そんなことで学校を休んだり、危ないことをするってなれば反対されると思ってた。そこを保護者役としてリンディさんと一緒にどう説得するか考えていたんだけど・・・。

――なのはに迷いがあったら反対したけど、もう決めちゃってるんでしょ。最後までやり通すって。だったら後悔しないために、いってらっしゃい――

お母さんは心配はしてくれたけど、でも送り出してくれた。

――確かに学校は大事だが、それよりもっと大事なものも在る。友達が困っているなら助けてあげなさい――

アリサちゃんのお父さんが言ってくれた言葉。

――なのはちゃんやアリサちゃんも一緒なんでしょ。だったらお姉ちゃんは反対しない。みんなで納得のいくようにすればいいと思うわ。父さん達は私が説得しておくから。気を付けてね――

すずかちゃんのお姉さん、忍さんもまた反対せずにすずかちゃんを送り出した。家族に快く送り出されてた私たちは今アースラへ戻るため、アリサちゃん家のリムジンに乗って海鳴臨海公園に向かってる。外はもう真っ暗で、道路の街灯が流れていくのを窓から眺めていると、「っ！」ドクンと跳ねる心臓。

『アリサちゃん、すずかちゃん！』

『ええ。ジュエルシードの気配ね』

『発動直前だよ。急いで封印しにいかないと！』

3人で顔を見合わせて頷き合う。アリサちゃんが「鮫島、ここで降ろして！」バニングス家のドライバーさんの鮫島さんに車を停めるように指示。車は緩やかに停まって、それと同時にアリサちゃんが「行くわよッ！」って飛び出して行っちゃった。私とすずかちゃん、そしてリンディさんは鮫島さんにここまで送ってもらったことへのお礼を言ってから、アリサちゃんの後を追った。

『艦長！　クロノです。艦長たちの付近からジュエルシードの反応があります』

リンディさんの側に浮かび上がった空間モニターに、シャルちゃんの話に出て来たクロノ君が映って、そう報告した。

「ええ。今、なのはさん達と現場に向かってるわ。周囲を警戒しておいて。フェイトさんとテスタメントさんが姿を見せるかもしれないわ。追跡の用意も怠らずに」

『了解しました。念のため、イリスをトランスポーター前に待機させておきます』

それを最後にモニターが消えた。リンディさんの横顔を見ていると、「あの子、私の息子なのよ♪」って微笑んだ。その話にビックリしちゃった。だってリンディさんってクロノ君みたいな大きな子供が居るとは思えないほどに若いんだもん。だからそう言ってみると、リンディさんは頬に手を添えて「まあ。嬉しい♪」ってすっごく嬉しそうに笑顔になった。

「お話し中、すいません。なのはちゃん。そろそろ戦いの準備をした方が・・・」

すずかちゃんに言われて、「あ、うん、そうだね。レイジングハート」シューティングモードで起動して、バリアジャケットに変身。すずかちゃんも変身。先を走るアリサちゃんはすでに変身し終えていて、「来るわよ！」"フレイムアイズ"を構えた。私たちそれぞれの肩に乗ってたユーノ君たちが一斉に降りて、

「セレネ、エオス！」

「「うんっ！」」

元の人の姿に戻った。私とすずかちゃんは初めて見た、セレネちゃんとエオスちゃんの本当の姿を。ミルクティのような色をした髪は、セレネちゃんは腰まであるロングで、エオスちゃんが肩までのセミロング、目の色は一緒でピンク色。バリアジャケットはユーノ君のと似ているけど、セレネちゃん達のはスカートで色違い。

「封時結界！」

ユーノ君が結界を張って、全員が臨戦態勢に入ったとほぼ同時、林の中から一頭の「ドラゴン！？」が飛び出してきた。

「違うわ！　コイツは・・・蛇（マムシ）よ！！」

そう。アリサちゃんの言う通りそれはドラゴンじゃなくて毒蛇のマムシ。ジュエルシードの影響で巨大化してて、それはもう大変恐ろしいモノになっちゃってる。大口を開けて突進してきた巨大マムシから逃げるために、「レイジングハート！」飛行魔法フライアーフィンで空に上がる。

ユーノ君は自力で、飛べないアリサちゃんはすずかちゃんに後ろから抱かれて空へ。セレネちゃんとエオスちゃんは「離れます」ってリンディさんの腕を両側から取って大きくジャンプ、距離を開けた。

「ディバインシューター・・・。シューット！」

地中に潜って行こうとしてるマムシにシューター6基を放つ。だけど着弾するより早くマムシは地中へ消えて行っちゃった。

「速いわね。・・・サポート班！」

「「「「うんっ！！」」」」

アリサちゃんの指示にすずかちゃん達が力強く応えて、それぞれ足元に魔法陣を展開。サポート班は、私とアリサちゃんが攻撃に専念出来るようにバインドや結界発動などの補助魔法を担当するチームで、すずかちゃんやユーノ君たちが決めて作ったもの。

「地鳴り近くなってきた。なのはちゃん、アリサちゃん！　私たちがマムシを捕縛したら・・・！」

「うんっ！」「ええっ！」

すずかちゃん達がマムシを捕まえて身動きを封じた瞬間、私とアリサちゃんで仕留める。そして一瞬地鳴りが止んだ直後、ドォン！と土煙を発生させて突き出て来たマムシに、

「スノーホワイト！」

≪ 参りますわ！≫

「「補助機能端末（アストライオス）が無くたって。・・・近距離機能端末（ベルセース）！」」

「はあっ！」

――チェーンサークル――

ユーノ君、すずかちゃん、セレネちゃんとエオスちゃんの前面に展開された魔法陣から3本ずつ、計9本のチェーンバインドが伸びてマムシを捕縛した。動きを止めた今こそチャンス。

「ディバイィィ・・・ン」

「フレイム・・・」

「バスタァァァーーーーッッ！」「ウィップ！！」

茜色の魔法陣の上に立つアリサちゃんと頷き合って、ディバインバスターとフレイムウィップの同時挟撃。チェーンバインドから逃れようともがいていたマムシに直撃して、大爆発を起こした。頭の方を覆い隠す煙。完全に直撃だったから、よほどの防御力がないと耐えられないはず。

でも体から力が抜ける気配がない。それどころか「何か来る・・・！」

アリサちゃんが魔法陣から飛び降りた。それと同時、煙の中からなんか液体っぽいのが飛んできて、アリサちゃんが立っていた所を通り過ぎて行った。

「っく・・・！」

≪Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ≫

そんな私の所にも飛んできた液体。"レイジングハート"が咄嗟にラウンドシールドを展開してくれたおかげで直撃はしなかった。けど、「うぇ？　バリアジャケットが溶けた！？」ジューージューいいながらスカートの裾に穴が開いていた。

『みんな！　この液体、バリアジャケットを溶かすから気を付けて！』

連射されて来る毒液。皮膚に触れた場合のことは考えたくない。みんなからの返事を確認し終えたその時、『例の魔導師２人と使い魔が来るぞ！』クロノ君から通信が入った。

「火は命の光にして死の影。十方世界を悉く照らしては焼き滅ぼす。生ける者よ、一天四海を燈す希望の光り火を見よ。死せる者よ、冥土幽界を焼く絶望の禍つ火を見よ」

その直後、テスタメントちゃんの声で、一発で何かの呪文だと判るフレーズが周りから反響して聞こえてきた。暴走気味だったマムシがまるでテスタメントちゃんに怯えたかのように地面に潜ろうとした。でもまだチェーンバインドで捕縛されたままだから、逃げることが出来ない。

「さぁ、ミディアムレアで丸焼きの時間だ！」

――煉獄之火宴――

それは一瞬の出来事だった。地面から炎の竜巻が噴き上がって、マムシを呑み込んだ。炎の竜巻が起こってた時間は3秒くらい。けどそれで十分だっていうのが、マムシの様子から見て判る。プスプス黒い煙が上がってる。意識がないみたいで、チェーンバインドに支えられてる状態。そしてマムシの額から浮かび上がってきたジュエルシード。

「今だよフェイト・テスタロッサ！」

「うん・・・！」

凄い速さで姿を現したフェイトちゃん。夕方の時とは全然違って、目に強い光がある。元に戻ってくれた嬉しさと、「どうして・・！？」テスタメントちゃんとだけ仲良くなってることへの悲しさが、私を襲った。

「ボサッとしてる暇はないわよ、なのは！」

――フレイムウィップ――

そうだ。ショックを受けてる場合じゃない。今は戦ってでもフェイトちゃん達を止める。だから「止まって！」ディバインシューター5基を、アリサちゃんの攻撃をかわしたフェイトちゃんへ向けて発射。フェイトちゃんの側面へ向かうシューターは、「悪いね！」空から落ちて来たアルフさんがシールドで防いだ。それでフェイトちゃんとジュエルシードを繋ぐ道が通った。

「ジュエルシード、シリアル５・・・封印！」

目の前で封印されたジュエルシード。ふぅって息を吐いてるフェイトちゃんにアルフさんとテスタメントちゃんがそっと寄り添った。

「ちょっとテスタメント！　なんであんたがフェイト達の仲間になってんのよ！」

「私独りで集めるか、高町なのは達と共に集めるか、フェイト・テスタロッサ達と共に集めるか、それらを天秤にかけた上で判断したんだ。ジュエルシードを再封印して、保管するだけの管理局側に付いたメリットは無いって。だけどこの子たち側なら、全部じゃなくてもある程度のジュエルシードを受け取ることが出来る」

アリサちゃんの問いに簡潔に答えたテスタメントちゃんは「だからさ、あなた達のジュエルシード、ちょうだい？」そう言って、右手に真っ黒で大きな十字架を出現させた。アノ十字架がきっとテスタメントちゃんのデバイスなんだ。神父さんの服着てるし。フェイトちゃんも"バルディッシュ"を構えて、アルフさんも構えを取った。

「なのは！　すずか達も！　この場で決着をつけるわよ！　フレイムアイズ！」

アリサちゃんが"フレイムアイズ"の弾丸を装填して、刀身に炎を燃え上がらせた。フェイトちゃんの"バルディッシュ"も変形して、金に輝く電撃の刃を生み出した。

「アリサちゃん！　フェイトちゃん！」

魔法陣の上に立って戦うアリサちゃんと、空を自由に翔け回るフェイトちゃんが何度もぶつかる。アルフさんはすずかちゃんやユーノ君たちと戦い始めて、「高町なのは。戦うんでしょ？　私たちと。あなた自身の目的の為に」テスタメントちゃんが私の所に来た。振り上げられた真っ黒な十字架を後退することで避けるけど、すぐに振り降ろされた十字架は避けれそうにない。

――ラウンドシールド――

「へぇ。やっぱり良いデバイスだよ、ソレ」

「ぅく・・・」

「でも・・・あなたはまだ使いこなせてない」

"レイジングハート"の張ってくれたシールドで何とか防御した・・・のに。すぐにピシピシひび割れて行って「きゃあああ！」砕かれちゃって、地面に向かって大きく弾かれ飛ばされちゃう。

「なのはちゃん！」

――ホールディングネット――

すずかちゃんが発動してくれた網のようなものが私を優しく受け止めてくれた。けどすぐにそこから飛び立つ。テスタメントちゃんが

十字架を振り上げながら高速で降りて来たから。宙でテスタメントちゃんとすれ違う。仮面の奥、見えないけど・・・テスタメントちゃんが笑ったように感じた、体が自然に動く。"レイジングハート"の先端をテスタメントちゃんに向け、「ごめんね！」一言謝ってから、

≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｕｔｅｒ≫

至近距離での本気の砲撃を当てる。直撃の爆発が起きて、テスタメントちゃんが煙の中に消える。でもすぐに「結構容赦ないね、高町なのは！」煙の中からそんな声が聞こえてきた。そしてそれと一緒にボワッとものすごい白煙が生まれて、私の周りが真っ白になる。咄嗟に口と鼻を手で塞ぐけど、"レイジングハート"にただの煙幕だってことを教えられた。とにかく周り全部が煙で何も見えないから出ないと。煙の中を飛んでいると、"レイジングハート"から≪上空から来ます！≫って警告が。

――ラウンドシールド――

何も見えない今、回避は難しい。だから防御を選択する。空に向かって手を伸ばして、シールドを展開。

その直後、煙を斬り裂いて現れたのはテスタメントちゃんじゃなくて「フェイトちゃん！？」だった。シールドを挟んでフェイトちゃんと対峙する。

「テスタメントに言われた。君と戦うのは私の方がいいって」

≪Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ≫

シールドから離れたフェイトちゃんの周囲に、放電する魔力スフィアが６基展開された。シールドを解除しながらフェイトちゃんから距離を開けて、私も魔力スフィアを５基と展開する。

「シューット！」「ファイア！」

同時に号令を下して一斉に射出。フェイトちゃんの攻撃はシールドで防ぎ切り、フェイトちゃんは高速で移動してかわした。高速移動のヒットアンドアウェイ。中でも背後へ回り込んでの急襲が、フェイトちゃんの基本的な戦術だっていうのはもう判ってる。後ろへ振り向きざまにシールドを展開。でもそこにフェイトちゃんはいなかった。

「後ろばかりを取るのが私じゃない・・・！」

「え？・・・移動してなかった・・・！？」

フェイトちゃんは移動したように見せて、またすぐに元の場所に戻ってたんだ。振るわれる"バルディッシュ"。シールドを張るには懐に入られ過ぎてるからダメ。咄嗟に"レイジングハート"を掲げて、フェイトちゃんの攻撃を受け止める。

「（アリサちゃんと練習しておいてよかった・・・！）うぐ・・・、でも・・・！」

アリサちゃんと練習で何度か打ち合った（レイジングハートは剣じゃなくて杖なのに・・・）けど、やっぱり本気で全力の一撃は重くて強い。何とか弾かれずに耐えているところに、フェイトちゃんがキックを繰り出してきたのが目に映った。でもどうすることも出来ずに「きゃあああ！」脇腹を蹴り飛ばされちゃった。視界がグルグル回って、どっちが上か下か、右か左かも判らなくなって、でも・・・。

「ファイア！！」

――フォトンランサー・マルチショット――

フェイトちゃんが攻撃を連射してくるのだけはしっかりと見ることが出来た。

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ≫

"レイジングハート"が張ってくれたバリアが防いでくれる。攻撃を防いでいてくれている間に体勢を整えて、フェイトちゃんの居るところを見た時、そこにはもうフェイトちゃんは居なかった。そして今度こそ「もらった」背後から聞こえてきた、フェイトちゃんの声。

「はああッ！」

――アークセイバー――

私に向かってもう一度振るわれる魔力の刃。どうしてかスローで見える最悪の光景。ダメ。防御も回避も全部が間に合わない。今の私に出来ることは目を瞑って、すぐに襲ってくる痛みに耐えるために歯を食いしばることだけ。

「「そう上手くいかないのが現実（リアル）！！」」

≪Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｕｓｈ・ｖｅｒ，ＳＥＬＥＮＥ≫

「「え・・・！？」」

地上から放たれて来た砲撃がフェイトちゃんを呑み込んだ。というか「寒っ！　凍ってる！？」私のスカートの裾が凍りついてるのが判る。そしてフェイトちゃんもまたマントが凍りついていて、ガシャァンと音を立てて崩れた。

「氷結効果の魔力砲撃・・・！」

フェイトちゃんは驚きでいっぱいの目で、地上に居るセレネちゃんとエオスちゃんを見た。私も２人を見る。２人は仲良く手を繋いでいて、握っている手をこっちに向かって伸ばしてた。繋がれてる２人の手の前にクリーム色の魔法陣が展開されて、

「「いっっけぇぇーーッ！」」

≪Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｕｓｈ・ｖｅｒ，ＥＯＳ≫

今度は炎の砲撃が放たれてきた。フェイトちゃんは「っく・・・」そう呻いて回避。卑怯だって言われてもいいから、今はフェイトちゃんに勝たせてもらうよ。私の周囲に5基の魔力スフィアを展開。そこに『負けちゃダメだよ！』セレネちゃんから応援の念話、それと『テスタメントが強いんだよ！』エオスちゃんからは弱音の念話が。

「『ごめんね、もうちょっとだけ待ってて！』・・・シューット！」

――ディバインシューター――

もうジッと見ていられないからよく判らないけど、テスタメントちゃんがアルフさんと合流して、アリサちゃんやユーノ君たちと戦い始めたのは判る。テスタメントちゃんの本気はきっと誰よりも強い。なんとなくだけど、それが判る。だからフェイトちゃんに勝って、アルフさん達に戦うことを止めてもらわないと。

「フェイトちゃん！」

放ったシューターを斬り裂きながら距離を詰めてこようとするフェイトちゃん。距離を取りつつ新しく魔力スフィア5基展開。

「シューット！」

すぐさま発射する。でもフェイトちゃんの飛ぶ速さは本当にすごくて、操作してもすぐに切り抜けられちゃうし斬り裂かれちゃう。だったら「レイジングハート！」動けないようにすればいいんだ。も

う一度シューターを5基放って、フェイトちゃんの動きを出来るだけ抑える。その間に、「レストリクト・・・ロック！」私と"レイジングハート"が決めた一定の空間内に居る人や物を拘束する魔法、レストリクトロックを発動。

「しまった・・・！」

フェイトちゃんの両腕両足を拘束することに成功した。バインドから逃れようってもがいてるフェイトちゃんに「お話がしたいんだ！」語りかける。でも「話なんて、私には無い」って聞いてくれそうにない。だからと言って私はここで諦めない。

「私、フェイトちゃんと友達になりたいんだ！」

「え・・・？」

私の言葉に、もがくのをやめて呆けるフェイトちゃん。戸惑いが見えるその綺麗な紅い瞳をジッと見詰めて、私は想いを言葉にして続ける。

「アリサちゃんもすずかちゃんも、フェイトちゃんと友達になりたいって」

地上を見ると、アリサちゃん達全員がテスタメントちゃんの魔力の色、銀色のバインドで拘束されてた。けどそれだけ。その光景には驚いたけど、テスタメントちゃんはそれ以上アリサちゃん達に危害を加えようとはしないで私たちを見上げていた。

アルフさんもまたフェイトちゃんを見上げてるだけで、みんなに何もしようとしてない。たぶんテスタメントちゃんがお膳立てしてくれたんだ。私がフェイトちゃんに想いをぶつけることが出来るように。

「すぐにお返事が欲しいところだけど、たぶん今の状況じゃ難しいとも思ってる。だからこのジュエルシードの争奪戦が終わった後、私はもう一度言うよ。フェイトちゃん、アルフさん。そしてテスタメントちゃん。私たちと友達になってください！」

シーンと静まり返る。その静寂を真っ先に破ったのは「あなたの想い、聴かせてもらったよ、高町なのは」パチパチ拍手するテスタメントちゃんだった。そんなテスタメントちゃんは十字架の先端をフェイトちゃんに向けて「ほい」そう一言。たったそれだけで私のバインドが粉々に砕け散っちゃった。

「「っ！？」」

私も自由になったフェイトちゃんもそのあまりの呆気なさに呆けてしまう。テスタメントちゃんのすることはそれだけじゃなかった。

「アリサ・バニングスのデバイス、フレイムアイズに告ぐ。マスターの身の安全を守るため、あなたが内に封印しているジュエルシードを私に渡して」

十字架を首を刎ねる鎌のようにしてアリサちゃんの首に添えた。

「お断わりよ！　あたしが初めて封印して手に入れたジュエルシードなのよ！　いくらなんでも渡せな――ぅぐ、げほっ・・」

「「アリサちゃん！」」「「アリサ！」」「アリサさん！」

アリサちゃんが断ろうとしたら、テスタメントちゃんは十字架の横棒でアリサちゃんの首をグイッと引き上げた。私はすぐにアリサちゃんを助けるために"レイジングハート"を「テスタメントちゃん！」に向ける。

「高町なのは。争奪戦の間は、私たちはやっぱり競争相手なんだよ。でもま、あなたの友達になろうって言葉、フェイト・テスタロッサやアルフは困惑してるけど、悪い気はしてないんじゃないかな？」

フェイトちゃんの方にチラッと視線を向ける。確かに目に見えて拒絶感はないっぽい。それに今のテスタメントちゃんの様子に困惑しているようにも見える・・・かな。改めてテスタメントちゃんの意識を向け直して、「じゃあテスタメントちゃんは？」訊いてみる。

「私はそうだなぁ、嬉しいよやっぱり。友達。良い響きだよね。楽しそうだと思う。それはそうと、アリサ・バニングス。ジュエルシードを私に差し出すよう、フレイムアイズに早く命令して。この状況は心が痛むよ」

「ぁぐ・・い、嫌よ・・・！」

アリサちゃんの首が十字架の横棒でさらに絞められる。

「テスタメントちゃん！　アリサちゃんを放して！」

「悪いけど出来ない。ジュエルシードは私たちが頂いていく。友達になる云々は、あなたの言う通り全部のジュエルシードを私たちが回収した後で、もう一度聞くよ。返事もその時で良いよね。ま、フェイト・テスタロッサ達はともかく、その時にはこんな私を友達にしたいなんて思うわけないと思うよ」

「テスタメントちゃん・・・！　そんな悲しいこと・・・」

「判ってるんだよ。私に友達なんて必要ない」

「うぐ！」

アリサちゃんの首がさらに絞まった。これ以上はダメだ。

「テスタメントちゃん！」

魔力スフィア5基を展開。

「シュート！」

――ディバインシューター――

一直線にテスタメントちゃんへ向かうシューター。だけど「ダメ！！」シューターを操作して停止させる。

「ひ、卑怯者・・・！」

アリサちゃんがそう呻く。私がシューターを止めた理由、それはテスタメントちゃんがアリサちゃんの襟首を掴んで軽々持ち上げて、シューターから身を守る盾にしたから。停止したシューターは操作すれば再発射できるけど、今度は止めることが出来ずにアリサちゃんに当てちゃうかもしれないって恐怖があってそれが出来ない。

≪しょうがねぇ。アリサを守るためだ。約束は守れよ！≫

「フレイムアイズ！？　ダメ！　やめなさいってば！」

アリサちゃんの制止も空しく"フレイムアイズ"から浮き出るジュエルシード。テスタメントちゃんはジュエルシードを掴み取って、「もちろん果たすよ」そう言ってアリサちゃんを解放して、次いでみんなのバインドを破棄した。その瞬間、

「あたしのジュエルシードを返せぇぇぇーーーーッ！」

――フレイムウィップ――

「「このぉぉーーーーッ！」」

――バスターラッシュ・バージョン・エオス――

「シュートバレット！」

アリサちゃん、セレネちゃんとエオスちゃん、そしてユーノ君がテスタメントちゃんから離れて一斉に攻撃。私も続いて「シュート！」待機させていたシューターを一斉に再発射。

「自己の願望成就。その道程は他者の蹴落とし也。落とされし者等が築くは無残無念の敗衄（はいじく）の山。其の頂きに立つは望みを成し得た勝利の王。王は叶えし願いの頂で大いに笑う・・・！」

――火天之王――

「ふふふ、ははは・・・あーっはっはっはっはっはっはっ！」

テスタメントちゃんが呪文を唱えて十字架を地面に突き立てると、大爆発を起きた。私たちの攻撃はその爆発で完全に消し飛ばされて、５ｍほど離れてたアリサちゃん達が大きく吹き飛ばされた。そしてその衝撃と爆炎は、空に居る私にも届いた。フェイトちゃんとアルフさんはもう離脱済み。

「きゃぁぁぁぁ！」

爆風に耐えることが出来ずに私はその場所から大きく吹き飛ばされちゃう。視界いっぱいに広がる黒煙。その黒煙の揺らめきの中で、不自然な揺らめきを見た。そしてすぐに「今度はあなたのジュエルシードをちょうだい？」テスタメントちゃんがその揺らめきの中から飛び出してきた。

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ≫

振り降ろされた十字架をバリアで防御した・・けど、「きゃあ！」また簡単に破壊された。私の"レイジングハート"に手を伸ばしてきたから、その手から逃れるために"レイジングハート"を持つ左腕を後ろに引いた。私の胸の前を横に素通りしていくテスタメントちゃんの左手。このまま距離を取ろうとした時、

――輝き流れる閃星（サピタル）――

「え・・・！？」

"レイジングハート"を持つ左手に衝撃。そして私の手から"レイジングハート"が離れる感覚。そのすぐにテスタメントちゃんが目の前から消える。フェイトちゃんの高速移動のように。何をされたのかさっぱりで混乱しちゃうけど、テスタメントちゃんが私の手から"レイジングハート"を弾き飛ばして、強制的に離させたってことだけは判る。

「待機モード！」

そう叫ぶ。振り返ると、数ｍほど離れた宙に舞ってた"レイジングハート"が赤い宝石に戻るのが見えて、そしてテスタメントちゃんが腕を空振りしているのも見えた。落ちて来た"レイジングハート"を掴もうと動いて腕を伸ばすけど、「残念だったね」テスタメントちゃんが十字架で打ってさらに弾き飛ばした。

「もらった！」

「ダメぇぇーーーッ！」

無意味だって思っててもテスタメントちゃんの背中に手を伸ばす。テスタメントちゃんの手があと十数ｃｍほどで"レイジングハート"に届くと言ったところで、

「もう我慢なんない！」

「シャルちゃ・・・！？」「チッ・・・！」

シャルちゃんがいきなり"レイジングハート"の前に現れて、刀のデバイスの峰でテスタメントちゃんの頭を殴ろうとした。テスタメントちゃんは「ハズレだよ・・・！」ギリギリ首を反らしたことで避けた。

「逃がさない！！」

シャルちゃんのもう片方の手にはいつの間にか鞘が握られていて、真紅に光り輝いたその鞘でテスタメントちゃんの頭を横から殴りつけた。ガキィンって金属音が響く。テスタメントちゃんの顔の部分から黒い破片が飛び散った。仮面が割れたんだってすぐに判った。顔を押さえて「ぐ・・ぉぉ・・・」呻くテスタメントちゃんに向かって、

「これ以上、なのは達を傷つけることは許さないから！」

――光牙双月刃――

「あが・・・っ！」

テスタメントちゃんの両肩を思いっきりデバイスと鞘の両方で縦一線に斬った・・・というより殴った。顔の痛みの所為か避けることも出来なかったテスタメントちゃんは真っ逆さまに落ちて行って、地面に叩き付けられた。それを見たシャルちゃんは「即確保！！」ってユーノ君たちに指示を出す。けどユーノ君たちが動くよりも早くフェイトちゃんとアルフさんが、テスタメントちゃんを庇うように立ち塞がった。

「痛たたた。残念だけど、今回はここで退こう」

倒れていたテスタメントちゃんがフラ付きながらも立ち上がった。そして私たちは、テスタメントちゃんの素顔を初めて見ることになった。仮面は割られて、マントのフードも破れているから空からでもよく見える。燃えるような真っ赤な長い髪はサラサラなポニーテールで、瞳は海のように綺麗な青色。

「フェイト・テスタロッサ、アルフ。撤退するよ」

「あ、うん・・・！」

「ま、いいんじゃないかい」

手に持つ十字架をバトンのようにくるくる回した後、ズンッと地面に突き刺した。するとテスタメントちゃんの足元に魔法陣が浮かび上がって、ボッと火が噴き上がった。またあの大爆発が起きるんじゃないかって身構える。

――光火之咆哮――

「「ぅぐ・・・！」」

起こったのは確かに爆発だったけど、それは炎じゃなくて音と光の爆発だった。プールの時にも似たようなモノを受けた。視界が真っ白になって、音が耳を壊しにかかってくる。時間にして１０秒くらい。やっと光も音も収まったから目を開けると、やっぱりもうどこにもフェイトちゃん達は居なかった。

「アースラ。追跡の方は？」

『クロノだ。さっきの魔法の影響かその一帯にジャミング効果が生まれている。つまり――』

「逃げられちゃったか」

シャルちゃんが悔しそうに呻いた後、「なのは。今度は取られないようにね」って"レイジングハート"が乗った左手を差し出してきてくれた。シャルちゃんの手から"レイジングハート"を取って、「ありがとうシャルちゃん！　ごめんね、レイジングハート」ギュッと胸に抱きしめた。

「とりあえずアースラに行こう。なのはやアリサ達の治療もしないといけないし」

「・・・うん」

ユーノ君やリンディさんに体を診てもらってるアリサちゃん達を見る。この場所とアリサちゃんのジュエルシードを取られた私たちは、フェイトちゃん達に完全に負けちゃったことになるんだよね・・・。

「テスタメントちゃん・・・」

とても綺麗で、そして強かった赤い髪の女の子。きっとテスタメントちゃんに勝つことが、このジュエルシードの争奪戦に勝つことなんだと、そう強く思えた。

Ｅｐｉｃ１４－Ｂそれはもうジュエルシードの回収は大変で～Ｓｔｒａｎｇ Ｅ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

既に時刻は２２時少し前。はやてが待っているだろうなぁ、と思いながらも、フェイト達の拠点であるマンションに一度寄ることにし、こうしてリビングで今回の収穫であるジュエルシード２個を眺める。フェイトとアルフの視線を私の髪に感じながら「私がアリサ・バニングスから頂いたジュエルシード。あなたが持ってて」と、シリアル２０の方をツンと人差し指で突く。

「え？　でも・・・」

「貰っておきなよフェイト。てかさ、あんた。あの戦闘特化で有名なベルカ騎士の一撃を受けてケロってしてるけど、本当に大丈夫なのかい？」

アルフがそう心配してくれる。フェイトもまた心配げな目を向けてくる。とりあえず「大丈夫。素顔を見られたのは最悪だけどさ」と笑みを浮かべて見せる。今の私は仮面を付けず、フードは外套ごと外しているから素顔をフェイト達に晒したままだ。素顔と言っても本来の私のものではなく、私の親友にして戦友であるアンスールの１人、白焔の花嫁ステアのものだが。

（ギリギリ変身魔法が間に合ってよかったな）

イリスの転移には直前で気付けたが、鞘を使っての二段攻撃にはまんまと引っかかってしまった。彼女の剣技にはまず鞘が含まれないため、鞘による攻撃をすっかり失念してしていた。仮面が砕かれ、その衝撃と激痛で追撃を避けることが出来ないと判断した瞬間に、何故かステアの顔へと部分変身、そして騎士甲冑の防御力を一気に引き上げた。そのおかげで、最後の一撃を受け地面に叩き付けられても軽い脳震盪だけで済んだ。

「そう言えばさっきから私の髪を見ているようだけど、そんなに変？」

艶やかなカーディナルレッドのポニーテールとなっている髪に触れる。ステアやセシリスの髪色は、燃える炎のように綺麗だと思っているんだが。

「変って言うか、髪もそうだけど瞳も綺麗だなぁって。まるで炎と水をみたい」

「そうそう。あ、だからあんた、炎の変換資質持ちだったり水を操れるんだね」

「アルフ。たぶんそれ関係ない」

２人のそんなやり取りについ「ふふ」と笑みを零してしまう。小首を傾げて私へと視線を向けてくるフェイトとアルフに「褒めてくれてありがとう。そろそろ帰るよ」と告げ、玄関へ向かう。

「あ、待って。今夜中にもう1つ封印に――」

「ダメ。今日は休むこと。アルフ。主をしっかり休ませるように」

「あいよ。フェイト。休める時に休まないと」

フェイトが無茶をしようとしたため、彼女が言い切る前にキッパリ拒否。次いで、フェイトが今夜のジュエルシード回収にもう出ないよう、アルフに監督を任せる。納得いかなさそうなフェイトに「休みなくして完遂できるような簡単なものじゃないよ。ジュエルシード回収は」と告げる。それくらいは理解しているようで、「判った」と渋々だがコクリと小さく頷いた。それを確認して部屋を出、マンションの屋上へ跳び、縁の段差の上に立つ。

（フェイト達の視線は無いな。周囲にサーチャーの反応も無し）

尾行されては困るため、それだけには細心の注意を払う。周囲警戒を終え、空へと飛び立つ。目指すは、はやての待つ八神家の在る海鳴市。海鳴市に入る直前で人気のない場所に降り立ち甲冑と変身を解除、魔力を管理局に探知されないように魔力炉（システム）の活動をギリギリにまで抑える。そしてギリギリ間に合った最終バスに乗って近所まで移動して、最後に徒歩。八神家を視界に入れると、「ふう」ようやく緊張が解けて一息。

（管理局の網に警戒しなければこんな面倒な真似をしなくてもいいのに）

合鍵で玄関扉を開け、はやてが休んでいてはいけないから小声で挨拶、と思ったんだが・・「おかえりルシル君♪」リビングの方から車椅子に乗ったはやてが突っ込んで来た。今日はもうほとんど家を空けていたからな。夕飯すら一緒じゃなかったし。申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

「ただいま、はやて。すまないな。夕飯、一緒に食べれなかった」

私のシャツの袖をキュッと掴んでいるはやての頭を撫でると、はやては「ううん」首を横に振った。

「ええよ。ルシル君かてやりたいことあるんやしな。とゆうか、そもそもそのためにルシル君は日本に来たんやし。ちょう寂しいけど、こうして帰って来てくれるから、わたしはそれだけで十分や♪」

（良い子過ぎる・・・（涙））

はやてが良い子だというのは十二分と承知していたが、こうして一緒に過ごしてみるとより強く判る。私の袖を掴んでいるはやての手を取り、「ふぇ？」少し驚きを見せる彼女のその手に空いている右手をそっと重ねる。

「あ、あの、えっと・・・ルシル君・・・？」

頬を僅かに赤らめながら私の顔と手を交互に見るはやて。以前から思っていたが、今でこそ強く思う。この子にもっと何かをしてあげたい、と。つい兄心を抱いてしまう。だからはやてに何かしてほし

いことがないか訊こうとした時、私の腹がきゅ～くぅ～と鳴ってしまった。

「「・・・・ぷふ」」

はやてと2人して吹き出し、「腹が空いた。夕ご飯、残ってるか？」と訊くと、はやては「もちろんやっ♪」と可愛らしい笑顔を向けてくれた。

（決着まであと数日。その間ははやてを寂しくさせるが・・・）

全てが終わったその後は、そんな寂しさを忘れてしまえるように思いっきり付き合おう。笑顔を浮かべるままのはやてに笑顔で応じ、彼女と手を繋ぎ、私たちはダイニングへと向かう。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

「ムキィィーーー！　テスタメント、絶対に許さないんだからね！！」

アースラに戻って来たわたし達は今、医務室で怪我を負ったなのは達に治療を施してる。なのは達に本来治療するべき医務室の主であるはずの本局医務官、そして古代ベルカ式の騎士でもある、ティファレト・ヴァルトブルクの姿は無い。

（ま～たどこかで居眠りしてるな・・・）

ベルカよりフライハイト家に連なる六家、グラシア家、ヴィルシュ

テッター家、カローラ家、アルファリオ家、トラバント家、そしてヴァルトブルク家・・・のティファ。長所は落ち着ける場所があればすぐに眠れて、回復が早いこと。短所は仕事を放棄してしまうほどに寝つきが良いこと。

そんな医務官が居ないという状況で、わたしや比較的軽症なユーノがなのは達の手当てをする。で、わたしが今手当てをしているアリサなんだけど・・・機嫌がすこぶる悪い。テスタメントにジュエルシードを取られちゃった所為なんだけど・・・。それもこれも「ごめん。わたしがもう少し早く介入してれば・・・」に原因があると思うから、そう謝る。

「い、いいわよ別に。アイツに負けたあたしにも責任があるんだし」

「私も。ちゃんとサポート出来ていれば・・・」

「僕も」「「私たちも」」

「・・・私も・・・」

フェイト達との戦いで負けたからジュエルシードを取られた、って感じなのは達。こう言っちゃなんだけど、確かになのは達はまだまだ弱く、数なんて意味がない程にフェイト達は強い。特にテスタメントが強いんだ。アリサと同じ炎の魔法を使う、あの子が。まずはあの子をどうにかしないと始まらない。管理局でも指折りな実力を備えていそうなあの子を。

「ほらほら。落ち込むのはあとあと！　そんなんじゃまた負けるよ！」

わたしはパンパン手を叩いて、ガックリ肩を落とすなのは達を叱る。そう。気持ちで負けていたら勝てるものも勝てなくなる。想いは大事だ。

「みんなの部屋は用意してもらったから、今日はもうゆっくりと休むこと。そして・・・アースラがジュエルシードを探す間、わたしがあなた達を鍛えてあげる」

そう提案すると、なのは達はお互いの顔を見合わせた後「お願いします！」頭を下げた。それにはビックリしたけど、負けてジュエルシードを奪われた悔しさ、そして強くなりたいって思いがハッキリとその目に宿ってるのが判る。

「ん。とは言ってもわたしに出来ることは、格上として戦って、あなた達に経験値を積んでもらうこと。推測だけど、あなた達って模擬戦形式の練習はするけど、相手が友達だからつい手を抜いちゃうって感じじゃない？」

すごく仲良さそうだし、ケンカくらいはするかもだけど、本気で戦うなんてことは出来ないと思う。魔法なんて無い、こんな平和な世界でならなおさら。だから必要だと思った。本気でぶつかってくる相手が。

「えっとぉ・・・」

「まぁ、その・・・うん」

「なのはもすずかも、セレネ達も優しいからさ、やっぱ。限界があるのよね」

格上の強者との戦闘は、どの鍛錬よりも成長することが出来る。実際にわたしがそうだった。管理局に入る前、というか今でもシャッハや父様のご友人である管理局の騎士、ゼスト様と模擬戦をしていたりする。対ベルカ式の騎士戦は教会の仲間に担当してもらって、対ミッド式の魔導師戦はクロノやリーゼ姉妹に手伝ってもらってる。

「それで十分よ。フェイトやテスタメントに一撃入れたあんたと戦えば、アイツらの動きに慣れることくらいは出来るはず」

「決まり。なのはとすずかもそれでいいよね？」

「「うん」」

なのは達の決意を確かめて、ユーノ達スクライアにも確認を取ると「うん、それでお願い」強く頷いた。今日はそれで解散することになって、アースラスタッフとの顔合わせは明日に。なのは達を居住区画へ案内しているところに、「イリス」前方の角から出て来たクロノに呼び止められた。

「こうして直接顔を合わせるのは初めてか。時空管理局・執務官、クロノ・ハラオウンだ。高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずか。そしてスクライアのユーノ、セレネ、エオス。此度のジュエルシード回収への協力、感謝する」

クロノに真っ直ぐ見詰められたアリサを除くなのは達がちょっと怯えた風に「はじめまして」ってそれぞれ自己紹介を始めた。最後にアリサが「アリサ・バニングスよ」堂々と名乗りを上げた。さすがアームドデバイスの持ち主、まるで騎士のようだ。

「クロノ。みんな疲れてるんだ。話は明日にしてほしいんだけど。それともそんな気遣いが出来ないような男の子だったっけ？」

クロノの様子から何か尋問のようなことを始めるんじゃないかって思えて先手で封殺。

「判っている。彼女たちにただ挨拶をしに来ただけだ。モニター越しで顔を合わせたんだ。それなのに明日まで挨拶無しで済ますなんて、なんか居心地が悪いじゃないか・・・？」

「律儀だよね～ホント」

「「エイミィ・・・」」

エイミィが笑顔を振りまいて「やっほ～♪」って角からヒョコッと出て来て、なのは達に駆け寄ったと思えばみんなの手を取って握手しながら自己紹介を始めた。

「はじめまして。イリスちゃんと同じくクロノ君の補佐をしてる、エイミィ・リミエッタです♪」

なのは達も応えるように今日で何度目かの自己紹介。あー、だから明日、スタッフ纏めて自己紹介させようと思ったのに。

（1日に何度も自己紹介って、なんか可哀想じゃん）

自己紹介を終えたクロノとエイミィがブリッジの方へ歩いて行くのを見送って、わたし達も居住区へ向かう。で、これから無期間、なのは達が過ごすことになる部屋の前に辿り着いたんだけど・・・

「えっと、ごめん。一人部屋の方が良いとは思ったんだけど、そんなに空きがなくてさ。二人部屋を三部屋ってことに。部屋割りに関してはみんなの意思を尊重するから、何でも言って」

わたしは目の前に在る3つの扉の前でそう説明する。なのはを除くアリサ達の目が一斉にユーノの方に向いた。唯一の男の子だからね。女の子からの視線を一手に受けたユーノは「ぼ、僕はえっと・・どうしよう」超戸惑ってる。

そうなんだよねぇ。ま、わたしとしては、なのは・アリサ・すずか、セレネとエオス、そしてユーノの一人部屋って割り方かなぁって感じ。そう提示しようとした時、そこに別の救世主現る。セレネとエオスが「はい。いいアイディアがあります」って挙手。

「アリサ、すずか、なのは。ユーノは私たちと同じ部屋でいいよ」

「そうそう。この世界に来るまでは一緒に寝た仲なんだし」

「へぇ、そうなんだぁ」「「おお！」」

それが2人にとってのグッドアイディアらしい。それを聴いたなのはは「仲が良いんだねやっぱり」と微笑ましそうに、アリサとすずかは色んな意味で楽しそうだ。そしてユーノは「ちょっ、セレネ、エオス！　なんてこと言うんだ！」って顔を赤くして、2人の口を塞ごうとしたけど、軽やかに避けられた。その上ユーノは2人に両腕を掴み取られて、

「「じゃあ今日はお休み～♪」」

「うわっ、ちょっ、ああ、えっと、お休みぃぃーーー！」

部屋へ連れ込まれた。それはまるで天敵に捕まって、巣の中に引っ張り込まれる獲物のよう。そんな光景を黙って見ていることしか出来なかったわたし達は互いに顔を見合わせた後、

「じゃああたし達3人は同じ部屋でいいわよね」

「うんっ。1人溢れちゃうし」

「3人なら寂しくないし、それに旅行みたいで楽しそう♪」

「そう。部屋割りはそれで決定ってことで」

ユーノ達の事は見なかったこと――というか即忘却の彼方へ吹っ飛ばした。なのは達に明日の大まかな予定と「おやすみ～」の挨拶を交わして、わたしも自室へ向かう。部屋に戻ってすぐにジャケット

にブラウス、スカートを脱いで下着だけになって、ベッドにダイブ。今日はもう休むことにする。明日からはハードそうだしね。

（シャワーは朝起きてからでいいや）

部屋に備え付けてあるシャワー室に向かおうにももう起きるだけの気力が無い。すごい眠い。まぶたが閉じていくのに抵抗できず、そのまま眠りにつくことにした。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒なのは†††

アースラで迎えた朝。食堂でシャルちゃんやリンディさん達と一緒に朝ごはんを食べた後、私たちはミーティングルームってところに集合した。そこでアースラで働くスタッフのみなさん（一部だけど）と顔合わせをして、自己紹介。それが終わると、ここに集められた理由の１つ、私たちの持つ情報を全部お話しすることに。そう、フェイトちゃんとアルフさん、そしてテスタメントちゃんから聞いた目的とか色々。

「――彼女たちの目的は、誰かの為、か。フェイトのは曖昧だが、テスタメントは誰かの命を救うためと」

「それが嘘偽りでなく事実としても、ジュエルシードを奪うなんてことは許されないわ。それに、ジュエルシードは願いを叶えると言われているけど、実際は歪んだ形でしか叶えないし」

リンディさんの言うようにジュエルシードって変なことばかり起こ

す。クロノ君もそれに賛同して、「アレははた迷惑な破壊兵器です」って大きく溜め息を吐いた。

「目的に関しては追々本人に問い質すとして。セレネとエオスの話にはちょっと警戒しなければなさそうだ」

私たちの目がセレネちゃんとエオスちゃんに向く。ゲームセンターでのアルフさんとテスタメントちゃんの話を聴いていたっていう2人が話した、テスタメントっていう部隊。０ｔｈから１０ｔｈまでの１１人のテスタメントが居て、テスタメントちゃんは４ｔｈ――４番目だってこと。

「というか、あのテスタメントの実力が下から3番目って。どんだけふざけた連中」

シャルちゃんが頭を抱える。私たちもそれを最初に聴いた時は同じ反応だった。もしテスタメントちゃんより強い人が来たらと思うと、どうなっちゃうんだろうって思う。クロノ君が「エイミィ。テスタメントの映像を出してくれ」って言うと、エイミィさんは「りょ～か～い」って半透明なキーボードを手元に出して操作。テーブルの中央に球体上のモニターが浮かび上がって、テスタメントちゃんの昨夜の戦闘が映し出された。

「術式はミッドだね。炎熱変換は割とメジャーだから珍しくないけど、火力は結構強い。デバイスは十字架・・・かな？　バリアジャケットだけど、かなり特殊なデザインだよね」

「ああ。テスタメントの共通デザインだとすれば、調査がし易いんだが・・・。とりあえずテスタメントという名前を、犯罪組織関連のデータベースで調べた方がいいな」

なんて言うか場違い感がすごいんだけど、私たち。私の隣に座るアリサちゃんとすずかちゃん横目で見る。そんなことを思ってると、『ちょっと退屈かもだけど、もう少し頑張って』上座に座るリンディさんの左隣に控えてるシャルちゃんから念話。

『えっと、ううん。大丈夫だよシャルちゃん』

『気にしないでいいわよ。まぁ、居たところで役に立つかどうか判んないけどさ』

『そうだよ。出来るだけ協力しないといけないって思うし。それに、協力することでフェイトちゃんやアルフさん、テスタメントちゃんを助けることが出来るって思う』

『『私たちはもう限界かも』』

『セレネ、エオス！　ちゃんとして！』

その念話は私たち協力組全員に送られていたようで、私たちはなんにも問題ないんだけど、セレネちゃんとエオスちゃんは退屈だからかあくびを噛み殺してて、ユーノ君に注意されちゃってる。そんなやり取りをしてるところで、「今さらでなんですが、なのはさん達に大事なお話があります」私たちに向けられたリンディさんの厳か

な声は、念話の中断と居住まいを正すには十分だった。

「ユーノさん達が発掘したジュエルシードを管理局の本局へと運搬していた船は、何者かに襲撃を受けてしまい、その結果、ジュエルシードがなのはさん達の世界に散ってしまったの」

「「「えっ！？」」」

それに驚くのはユーノ君たち。そういう私たちもそうなんだけど。その話を聴いて、どうしてか私は「あ、まさか・・・」その話が何を意味するのかすぐに解ってしまった。ジュエルシードを回収を目的としてるフェイトちゃん側かテスタメントちゃんの部隊のどちらかが・・・その船を襲ったのかもしれないって。

「襲撃を受けた船にはジュエルシードやその他の物品を護衛する局員が居た。魔導師ランクとしては僕やイリス、君たち以上の強者なんだが、ものの見事に敗北した」

「ねえ。魔導師ランクって何？」

「ん～と、一般的には保有資質や魔力量の多寡なんかで決まるランクのことなんだ。あと管理局内で言うランクは、既定の課題行動を達成できる能力を示すもの、かな。前者のランクで言えば、フェイトが1番、なのはが2番、クロノが3番で、わたしとテスタメントは同じくらい、そしてすずかとアリサって感じ。んで、後者でいうランクでは、わたしとクロノはＡＡＡ＋で、なのはとフェイト、そしてテスタメントは推定ＡＡＡ、アリサとすずかは推定ＡＡ＋」

アリサちゃんにそう答えたシャルちゃん。複雑な感じだけど、これだけは判るよ。ランクが同じでもフェイトちゃんには及ばなくて、どっちのランクでも私はテスタメントちゃんに勝ってるのに、負けるのはどうして。決まってる。戦うために身に付けた技術の差なんだ。

「その局員は、僕たちＡＡＡクラスのさらに上であるＳクラスの最上位のオーバーＳランク。だが相手はそんなもの関係ないとでも言うように・・・」

「みんな。もしこの魔導師と対峙した時は、戦おうとはしないですぐに連絡をちょうだい」

シャルちゃんがそう言って、エイミィさんが出した静止画に映る女の人を見て、私とアリサちゃんとすずかちゃんは「あ！！」思わず立ち上がる。だって、その顔も名前も知ってる人だったから。だから信じられなかった。

「ちょっと、ねえ、なのは、すずか・・・！」

「見間違い、じゃないよね・・？」

「う、うん・・・。間違いない・・・。レーゼフェアさんだ・・・」

ジュエルシードの運搬をしてた船を襲って、管理局の人を倒した魔導師。紫色の髪、深紅の瞳、猫のような目に口。それは間違いなく

以前、翠屋で会ったレーゼフェア・ブリュンヒルデさんだった。クロノ君に「知っているのか！？」って大声で訊かれてビクッとしちゃう。そんな私を見たリンディさんが「クロノ」って窘めると、クロノ君は渋々だけど「はい」って頷いて引いた。

「なのはさん達は、この魔導師とお知り合いなのかしら・・・？」

私たちは頷いて、お父さんとお母さんの経営する翠屋での出来事を話す。ケーキが大好きで、面白い旅話を聞かせてくれて、とても優しいお姉さんのような人。お勘定の時、お金がなくて困っていたこと。そして、知り合いのシュヴァリエルさんっていう男の人が迎えに来たこと。それに、何か探し物をするために日本に来たこと。今ならその探し物がジュエルシードなんだって判る。

「――えっと、また近くに来たら、また翠屋に寄ってくれるって言ってました・・・」

あ、なんて言うか・・・私、レーゼフェアさんを売った・・・？

そんな後ろ暗い感情が胸の奥に広がる。そこに『しょうがないわよ、なのは』アリサちゃんから念話が届いた。

『真実や事実がどうであれ、レーゼフェアが魔導師で、ジュエルシードを奪ったってんなら・・・その理由とかを聴くためにもさ、今はアイツを止めるしかないでしょ』

『そうだね。そうだよ、なのはちゃん。レーゼフェアさんを止めよう』

『・・うん』

レーゼフェアさんのした事は悪いことなんだと。

「お手柄だぞ君たち！　艦長！」

「ええ。クロノ執務官。レーゼフェア・ブリュンヒルデ、およびシュヴァリエルの広域指名手配の申請を」

「はい！」

「カイエン捜査官、ケイマン捜査官。喫茶翠屋の張り込みを。私たち管理局の介入を察知してすでに離れたかもしれないけど、レーゼフェアの仲間である可能性のあるテスタメントさんが来るかもしれないわ」

「「了解です」」

「エイミィ。テスタメントについての情報を集めて。あと、レーゼフェア・シュヴァリエルとテスタメントの関連の有無の調査を」

「はい。判りました」

リンディさんが次々と指示を出していって、そして会議はこれで解散となった。スタッフのみなさんが出て行くのを見送った後、リンディさんが私のところに来て、翠屋に迷惑をかけないことを誓って

くれた。だけど私は始めからそんな心配はしてなかったから、「大丈夫です」笑顔で応えた。リンディさんとクロノ君、エイミィさんが出て行って、最後にシャルちゃんが私たちの所へ来た。

「そんじゃ会議も終わったことだし、全員、トレーニングルームへ！」

私たちはもっと強くなるための特訓をするため、シャルちゃんに連れられてトレーニングルームとかいう場所に向かう。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒イリス†††

「ま、こんなもんかなぁ～。ていうか、大丈夫？」

トレーニングルームでまずはわたし対なのは・アリサ・すずかで模擬戦をやってみた。アリサが先頭を切って斬り合いを仕掛けてきて、なのはが射砲撃で援護や牽制、すずかがバインドやシールドでわたしの妨害をしてくる。

（チーム戦としては最高のメンバーなのは間違いないんだけど・・・）

一度崩してしまえば脆いのなんの。まぁ、魔導師歴1ヶ月も満たないんだから、高望みはしない。アリサの剣技は炎熱変換のおかげで威力は高く、一撃必倒を狙える。けど剣筋が粗すぎて簡単に切り崩せる。

なのはの砲撃能力は凄まじく、その上防御力は馬鹿みたいに高くて、今まで出会ってきた魔導師の中でも上位クラス。でも懐に入ってし

まえば終わりだ。障壁破壊に優れた騎士の一撃の前じゃ、その障壁も意味は無い。
すずかは珍しい氷結魔法の使い手で、補助特化の魔導師。けど前衛(アリサ)と中衛(なのは)を墜としてしまえばそれで終わり。

「はぁはぁはぁ・・・シャル・・・あんた・・つ、強すぎ・・・」

「これが・・・シャルちゃん、の・・・本気・・・」

「あぅ～～～・・・」

ちょっと本気出し過ぎちゃったかも。床に倒れ伏してるなのは達を診るユーノ達を眺めつつ「ごめんね～」と謝りながらも、みんなの課題を思い描いていく。3人の課題を確かなものとしたところで「そんじゃ3人に課題を与えま～す」と告げると、なのは達は上半身を起こして座る。さすがに立ち上ることは出来ないみたい。やっぱやり過ぎちゃったな～。

「まずは、なのはからね。なのはには2つの魔法を習得してもらう。1つは短距離の高速移動魔法。懐に入られた時、防御だけで乗り切れない場合がある。操作弾での迎撃もいいけど、そんな集中できるような状況がいつもあるとはありえない。だから緊急回避用の移動魔法が要る。
そしてもう1つ。近接用の直接打撃魔法。これもそう。射砲撃は避けられた後、術者はやっぱり無防備になるからね。そこを狙ってくるの奴もいる。フェイトがそう。あの子のように高速近接戦を得意とする相手には、少なくてもこの2つの魔法を習得しておかないと

キツい」

フェイトの動きを思い返しているのか俯いてしまったなのはに「頑張れる？　なのは」って声を掛けてみる。するとなのはは「もちろん！　頑張って覚えるよ！」そう強く頷いて応えてくれた。

「次はアリサ。アリサは・・・魔法っていうかまずは剣の扱い方からね。剣を使っているというか剣に使われてる状態。剣を持つにも振るうにも力が入り過ぎ。あんなんじゃすぐに疲れるよ。だから・・・わたしが、剣騎士イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトが直接剣の使い方を教えるから」

「うっ。・・・よ、よしっ。いいわよ、やってやるわっ！」

やる気を漲らせるアリサ。そして最後は「すずか」への課題を告げる。

「少なくとも射撃魔法の1つは習得して。攻撃魔法が何1つ無いなんてビックリだよ。あと、カウンター効果の障壁や結界なんていうのも好いかも。相手の攻撃を反射させるってヤツ」

同期にして友人でもある、結界魔法のエキスパートが管理局に居る。騎士であるわたしを完全封殺したミッドチルダ式の魔導師で、顔や性格に似合わず使う結界魔法のどれもがえげつない効果を持ってる。この場に居てくれればすずかの良い先生になるんだけどなぁ、歳も同じだし。

「カウンター系の補助魔法は組み立てるのにも結構な知識が要るから、今はとりあえず射撃ね。んで。偉そうなこと言っておいてなんだけど、わたしって射撃系に疎いから、ユーノ達に師事して」

「うん、判った。じゃあユーノ君、それにセレネちゃんとエオスちゃん。お願いします」

「うん。任せて」

「「それくらいの手伝いはするよ」」

ユーノ達にも了承を得たことで、ジュエルシード発見の知らせが来るまで特訓と行こうか。すずか達がトレーニングルームの端に向かうのを横目に、わたしの元に残ってるなのはとアリサを見る。

「とりあえずはっと。レイジングハート。あなたの機能で、どれくらいの時間でなら試験魔法を組み立てられる？」

≪高速移動系は以前より組み立てています。打撃系は、貴女のお話をお聞きした時に開発開始。試験的に1つ完成しています≫

「「すご・・・」」

持ち主であるなのはと一緒に驚く。"レイジングハート"の優秀さと高性能にはホント舌を巻く。

「よし。じゃあ、なのは。レイジングハートが組んだ魔法を実戦方

式で完璧な物へと昇華させていくから、これからは試験魔法のみ使うこと」

「う、うんっ！」

「アリサ。アームドデバイスを持つ以上、魔導師としてじゃなく騎士として育てるからそのつもりで」

「騎士・・・。ふふん、何度聞いてもあたしにピッタリな響きだわ」

アリサがアームドデバイスを手にするに至った経緯は本人から既に聞いてる。魔導師に可愛いじゃなくてカッコ良さを追求したアリサは、杖じゃなくて武器をイメージ。剣や槍に棍、それに銃とか。で、最後まで残ったのが剣と銃。でもどっちも捨てがたい。その結果、剣と銃身を合体させたアームドデバイスを、ベルカのデバイスと知らず登録した、と。あと、カートリッジは使用済みを拾って、再利用しているとのこと。

「じゃあ、そろそろ始めようか。キルシュブリューテ」

長刀型のアームドデバイス、"キルシュブリューテ"を起動させて、騎士甲冑へと変身。なのはとアリサにもバリアジャケットへと変身させ、わたし達は打倒フェイト＆テスタメントの特訓を始めた。

Ｅｐｉｃ１４－Ｃそれはもうジュエルシードの回収は大変で～Ｓｔｒａｎｇｅ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

はやてとの朝食や家事を終え、私は集合場所であるフェイトのマンションへ飛んだ。屋上にはすでにフェイトとアルフが待っていたため、「待たせたねフェイト、アルフ。ごめん、そしておはよう」と２人の元に降り立つ。

「ホントだよ！　なにやってたんだよ全く！」

「そんなことは良いから、早く行こう。管理局やあの子たちもきっともう動き出してるはず」

アルフには怒鳴られ、フェイトには急かされた。挨拶が欲しかったな、と少しへコむ。

「判った。じゃあ早速行こうか」

今回回収するジュエルシードの眠る現場、海鳴市の郊外に在る疎林区へ向かう。空から現場入りして結界を展開。確かこの場で覚醒するジュエルシードの暴走体は、鳥のような魔力体だったはず。かつての記憶を呼び覚ましていると、「しっかし、もう変装しないんだねあんた」アルフが私の髪に触れてきた。

「管理局に見られた以上はもう隠す必要ないでしょ。それにこの方が動き易いし」

騎士甲冑は"界律の守護神テスタメント"の聖衣型のままだが、外套と仮面は外している。外套と仮面を創り出すにも魔力が必要だ。しかも部分的な変身魔法より消費が激しいため、この機に捨てた。

「ま、あんたがそれで良いんなら良いんだけどさ」

「アルフ。テスタメント。・・・来るよ、気を付けて」

フェイトが"バルディッシュ"を構え、私たちに注意を呼びかけた。アルフはそれに応じるように私との会話を切り上げて身構え、私は「間に合わなかったかぁ」と嘆息。ま、それも「あんたが遅刻したから、覚醒前に封印出来なかったじゃないか！」アルフの言う通り私が遅刻した所為。それには「ごめん」としか出てこないが、今は「とにかく戦うしかない！」気を取り直して、ケルト十字架型の漆黒の錫杖――第四聖典を構える。

「アイツがジュエルシードの暴走体だね」

「うん。行くよ・・・！」

「あいよ！」

疎林の中から飛び上がって来たのは、ギャアギャアと鳴く巨大な魔力の鳥。フェイトとアルフが飛び出して行き、迎撃行動に入ったの

を見送る。

「はあああああ！」

――アークセイバーーーー

"バルディッシュ"の魔力刃を飛ばすフェイト。しかし魔力鳥は巨体さの割に素早く、魔力刃を回避。だが「セイバーブラスト！」とフェイトが告げると、魔力刃が爆発。煽られた魔力鳥がよろける。そこにアルフが魔力弾――フォトンランサーを撃ち込むが、魔力鳥は器用に翼で容易く叩き落とした。アルフはそれで諦めず、フォトンランサーの連射――フルオートファイアを撃ち込み続け、フェイトもまた避けては叩き落とす魔力鳥に向けてフォトンランサーで追撃。

「ってか、あんたも手伝えテスタメント！」

「アルフ。集中して」

怒鳴るアルフを窘めるフェイトに、「手伝った方が良い？」と訊いてみる。するとフェイトは「今はいい」と答え、そして魔力刃による斬撃――サイズスラッシュで魔力鳥の右翼を斬り払った。すかさずアルフが「おらぁぁぁぁ！」魔力を乗せた拳打を魔力鳥の脳天に打ち込んだ。大きく体勢を崩す魔力鳥。

その隙にアルフがチェーンバインドで拘束をし、距離を開けたフェイトがトドメの、

「サンダー・・・スマッシャァァーーーーッッ！」

雷撃砲を放った。砲撃は魔力鳥を呑み込み、そして完全に消し飛ばした。お見事、と称賛を送ろう。フェイトとアルフの間に浮かぶ、シリアル８のジュエルシードは、「封印！」フェイトの手によって封印された。私の元へ戻って来た２人に、「よし。少し休憩を挟んでから、次のジュエルシードを回収しに行くよ」と告げる。

「ううん。今すぐ行こう。私なら大丈夫だから」

やっぱりすぐには聴いてくれないか。一度体験させた方が良いな。休憩なしでの連続封印など無茶もいいところだと、どれほど大変なことなのか、と。１つ嘆息を洩らし、「後悔しないように」と忠告。フェイトは強く頷き、アルフはもう諦めているのか耳を垂れさせて無言。

ならば、と次の現場を選択するんだが・・・。「管理局が動き出したね」海鳴市に転送されてきた魔力反応は４つ。なのは、アリサ、すずか、そしてイリスの魔力反応。ユーノ達はアースラで待機か。

（というか、今さらすずかの家のジュエルシードを回収しに来たのか。おっそ～）

彼女たちの転送先は、月村邸だった。だったら感知されないように月村邸から一番離れたジュエルシードを回収しよう。

「どうするんだい？」

「決まってる。向こうとは正反対の場所に眠るジュエルシードを回収する。場所はゴミ処分場。覚悟はいい？」

「ゴミ・・・」

「処分場・・・」

嫌な響きだしな。私は大して思うことはないが、やはり女の子であるフェイトには辛いか？　いや、真に同情すべきはアルフだ。狼である彼女の嗅覚からして、まさに地獄となるだろう。フェイトは「問題ない」とキッパリ断言。そして問題のアルフは「うぅ、しょうがないねぇ」渋々だが了承。

そういうわけで場所を市外のゴミ処分場へと移し、眼下に広がるゴミの山に私たちは「はあ」溜め息を吐く。とりあえずは結界を展開。3人揃ってゴミの原へと降り立つ。

「ところでアルフ。あなた、大丈夫？」

「あ、ああ。大して臭わないから平気だよ。ほら、さっさと見つけて帰ろう」

「うん。でも・・・どこをどうやって探せばいいんだろう・・・？」

確かに。魔力反応は感じるが、微弱なものだから正確な場所は判らない。一応結界内なため、第三者の手によって移動するという心配はないんだが・・・。それを抜きにしてかなりの広さを有するここから探すと言うのは、実に骨が折れそうだ。何せいま私たちの居る

区画とは別に４つのゴミの原が存在している。

「だったら魔力流を撃ち込んで、強制発動させる？」

かつてのフェイト達が真っ先に提示していた方法を挙げてみる。

「う～ん。それも選択肢の１つだけど、この中で強制発動させるのはちょっと。下手に暴走体を生み出させて、ここのゴミを利用でもされたら面倒なことになりそうだし」

「はいはい。あんたの野蛮な提案は却下ってことだよ。これだから炎熱変換持ちは」

野蛮って。しかも偏見過ぎる。あと、もとはと言えば君らの発案だったんだぞコレ。私の案に否定的な２人に「じゃあどうする？　何か良い手がある？」と訊いてみた。すると２人は押し黙った。サーチャーの魔術、イシュリエルを使えればいいんだが、フェイト達が居るため使えない。仕方なく「足を使って探すよ」と告げ、私はゴミ山に入ってジュエルシードの探索を開始。そんな中でも魔力探査を怠らない。フェイトとアルフも散開して、探索を始めた。

（・・・・で、３０分も探して発見できないとか・・・・）

冷蔵庫やらテレビやら色々とゴミを漁ってみたが、なかなか出てこない。そしてついに「無理！　もう無理だよフェイト！」アルフがうがあああ、と吠えた。フェイトもまた「そうだね。魔力・体力が切れるより精神が擦り切れそう」リタイア宣言。私の魔力探査にも

引っかからないし。と、いうわけで「強制発動に賛成な人～」と手を挙げると、フェイト達もスッとすぐに手を挙げた。

「決まり。じゃあ早速・・・！」

フェイト達を連れて空へと上がり、足元にわざわざミッド魔法陣を展開させる。手にする第四聖典に魔力を乗せて「せいっ！」地上に向けて投擲した。

――ニーベルン・ヴァレスティ・ｖｅｒ　４ｔｈ　Ｔｅｓｔａｍｅｎｔ――

本来のこの技は邪を浄化するものだが、今回は魔力流を発生させるための起爆剤として使用。地面に突き刺さった第四聖典を中心として魔力爆発が起き、魔力の渦が処分場に吹き荒れる。その様子を見下ろしていると、「来た！」隣の区画のゴミの原から立ち上がる青い光の柱。どうりで見つからないわけだ。見当違いの場所を探していたんだからな。

「行くよアルフ。テスタメント」

「あいよ！」「ええ」

ジュエルシードの放つ光を目指す。と、ゴミの原から冷蔵庫がミサイルのように飛んできた。先頭を飛んでいたフェイトが「はっ！」"バルディッシュ"で斬り裂いて一刀両断。何事だと冷蔵庫が飛んできた場所を見れば、「ゴミの兵隊・・・？」処分される前のゴミ

に手足が生えて起立していた。
なんて言うんだろう。そう、まるで不思議の国のアリスに出て来るトランプの兵隊のよう。それらがゴミを抱え上げ、『もっと物を大事にしろぉーっ！』そんな思念を私たちに送りなが放り投げて来ていた。

「ちょっとちょっと。あたし達が何をしたって言うんだい！？」

ひょいひょい避けるアルフが牙を剥く。確かにこの世界の住人じゃないアルフやフェイトにとっては完全にとばっちりだ。ゴミミサイルを避け続けていると、埒が明かないと判断したらしいゴミの兵隊が集まり、巨大な前腕へと姿を変えた。ジュエルシードは腕の中だ。それが判っているからこそフェイトが真っ先に動きを見せる。

「バルディッシュ！」

私たちに向かって伸ばされ来るゴミの手に向け、フォトンランサーのフルオートファイアを放つフェイト。しかし「通用しないか」弾かれたランサー。だがフェイトは落胆の色を見せず、自らを叩き落とそうとする手から距離を取って回避。アルフもまたランサーで攻撃するが、全然通用していないように見える。まずは状況を確認だな。「全員、上昇！」と指示を出して全員で高度を上げて、ゴミの手の届かない地点へ。

「フェイト。コイツ、かなり堅いよ！」

「うん。ランサーはもう通用しないと見ていいかもね」

「パッと見、魔力障壁が腕を構築する力場になってるから、アレを崩すには障壁を突破できるだけの攻撃力が無いと」

五指の先端から粗大ゴミを発射してくる手を観察しつつ、第四聖典の先端を向け、魔法陣を展開。用意するのは単純な純粋魔力砲撃。

――煌き示せ、汝の閃輝（コード）（アダメル）――

魔法陣の放射面から「ブレイク！」と号令（ジャッジメントは封印だ）を下すと同時に砲撃を発射。ゴミの手は握り拳を作り、真正面から私の砲撃を殴り消し飛ばした。

「砲撃もダメか。（使用魔力が不足していたようだな）」

ソイツのターンはそれだけではなかった。あろうことか「ロケットパンチ！？」地面から切り離され射出された拳が、私たちへと突っ込んで来た。さすがにあの質量を防ぐことは出来ない。土石系の巨腕創造術式、イロウエルでなら容易いだろうが。

「とりあえず散開」

「うん」「ああ」

三方に散開して、私たちの居た場所を通過して行ったゴミの前腕。地上に目をやれば、新たな前腕――今度は左腕がゴミによって構築され始めていた。

「ん？　あれ・・・？」

「どうしたの？」

「ジュエルシードがいつの間にか移動している・・・」

「え？・・・本当だ」

空へと昇って行ったゴミの腕へと視線を戻し、確かにジュエルシードが下へ移動していることを確認。それと同時。地上に目を向けていたフェイトとアルフの腕を取って、「離れるよ！」その場から高速離脱。訳が解らないという顔をしている2人に「上！」を見るように言うと、「あ！」私の行動を理解してくれたようだ。

「ジュエルシードの魔力で支えられていたゴミの腕だ。その供給源が失われれば――」

「あのように崩壊して空から降って来るってわけかい・・・！」

そう。私たちのような子供の身長を超す粗大ゴミが雨のように降って来た。直撃する範囲の外へと離脱し終え、改めて地上の左前腕へ意識を向ける。その左前腕は落下してくる粗大ゴミを掴み取り、もう一度私たちの居る空へと放り投げて来た。

「大事にしろって言う割に、やってることは酷いもんだねぇ！」

フェイトを庇うようにアルフが飛来してきた電子レンジを蹴り潰した。アルフが壁となることでフェイトは落ち着いて、ある魔法の準備を行える。周囲に満ちる雷光。フェイトの無詠唱魔法の中では最高の威力を誇る、ロックオン系の範囲攻撃魔法。

「テスタメント。手伝って・・・」

「何をすればいい？」

「私の魔法でアレを押さえ込むから、トドメをお願い」

「判った。任せて」

第四聖典の先端に魔法陣を展開。封印効果の持つ魔力、そして周囲の魔力を集束させていく。フェイトからは驚きの視線、アルフからは「集束砲！？」驚愕の声を頂いた。ある程度集束させ終えたところで、「いつでもいいよ」と準備万端を告げる。フェイトは強く頷き、「いくよ、バルディッシュ」意識を眼下へと集中させた。

「サンダー・・・」

フェイトの足元に展開される黄金の魔法陣からバインド効果を有する雷光が落ち、飛来してくるゴミや、ソレらを放り投げる地上の左前腕をも拘束する。シーリングフォームの"バルディッシュ"の先端を魔法陣へ向け、

「レイジィィーーーーッッ！！」

振り落した。稲光によって視界が白に染まる。そして放射面から放たれる雷光。粗大ゴミを一瞬のうちに黒炭に変え、左前腕を直撃。外周のゴミが炭化して崩れ落ち、徐々に左前腕を削っていく。

「今！！」

「空より流れ落ちるは天焦がし地焼く、始まりと終わりを告げし陽光の閃き。・・・奔れ、紅蓮の流星！」

放射面の前方に浮かぶ魔力の球体に炎を燈す。

「いっっっけぇぇぇーーーーッ！！」

――サンライズブレイカー・カルテットバースト――

第四聖典で魔法陣を打ち、火炎の集束砲撃を発射。サンライズブレイカーは途中で４つに分かれ、１発２発と着弾、続けて３発４発と着弾し、４度の爆発を引き起こした。その光景に「ちょっとやり過ぎじゃないかい？」とアルフはここへ届く熱波に呻き、フェイトは「熱つつ」火の粉が体に触れたのか手で右脚を叩いている。

「テスタメント！　あんた、あたしのフェイトを傷物に・・・！」

「ごめんごめん。フィジカルヒール」

ミッド式の治癒魔法を、軽微の火傷を負ってしまったフェイトの右

脚にかける。火傷はすぐに癒え、傷は残らずに消え失せた。「ありがとう」と礼を言うフェイトに、「どういたしまして」と応じ、目線を彼女から地上付近で輝くジュエルシードへと向ける。私たちは地上へと降下し、フェイト1人がジュエルシードへと歩み寄り、"バルディッシュ"を掲げて見せた。

「ジュエルシード、シリアル2・・・封印！」

ジュエルシードが"バルディッシュ"のコアへと封印され、その姿を消した。短時間で2つも封印したフェイトは「ふぅ」と大きく息を吐き、フラッとその場に座り込んだ。

「フェイト！」

アルフがフェイトに駆け寄り、肩を腕を回して抱き寄せた。額に汗を張りつかせたフェイトはアルフに助けてもらいながら立ち上り、「だ、大丈夫。テスタメント。次の現場へ移動しよう」とか言い出した。さすがに「死ぬ気？」と呆れ果てる。アルフとて「無理だよフェイト！」力づくでフェイトを座らせた。

「もう午前中は休むように。でないと次のジュエルシードの場所へは案内しない」

「っ！・・・そんな・・・！」

アルフに渡したジュエルシードの在処を記したメモは既に無い。私がアルフの誘いに乗ってフェイト達と同盟を結ぶと決めた際に、フ

ェイトが目を覚ます前に破り捨てた。こういう風にフェイトが暴走した時の為の保険だ。私しか知りえない情報を盾に、彼女の暴走を抑えるために。

「フェイト。今は休もう。2つ連続でそんな状態なのに、休み無しでもう1つなんて無謀だよ」

「・・・判った。でもちょっと休んだら必ず・・・」

「念を押さなくても大丈夫。午後に1つ回収して、今日はそれで終わり。明日の午前と午後で2つ。残り3つは少し面倒な場所に在るから、明後日だ」

「そんな悠長なこと言ってたら、あの子たちや管理局に取られる・・・」

「あなたの心配はごもっとも。だから昨夜、私がすでに行動で示していたでしょ。高町なのは達とジュエルシードを賭けて戦い、勝てばいい。まぁ、負けたらこっちが失うことになるけど」

「大丈夫。絶対に勝つ」

「そうだね。フェイトとあたし、ついでにあんたが居りゃ、よほどのことが無い限り負けないさ」

この賭け勝負においてメリット・デメリットがあるのはなのは達とフェイト達だけ。しかし私にとって、勝とうが負けようがどちらに

してもデメリットは無い。

（すまないな。フェイト、アルフ）

アルフに膝枕してもらったフェイトはそのまま静かに寝息を立て始めた。姉妹のような2人を眺めながら、すずかの家のジュエルシードが封印されたのを確かめた。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒なのは†††

「灯台下暗しとはこのことよね・・・」

「えっと・・・ごめんねアリサちゃん、なのはちゃん。まさか自分家の庭に在ったなんて思わなくて・・・」

「ううん。でも、あの子猫には悪いことしちゃったね」

朝早くにシャルちゃんにしごかれ、その最中にエイミィさんからすずかちゃんの家にジュエルシードが在るって言われて驚いて、ティファさんっていうお医者さんに消費した体力と魔力を回復してもらって、すずかちゃんの家に訪れた。そこで私たちは、ジュエルシードを発動させちゃった子猫と遭遇。その願いと言うのが、大人に成長したい、ってことだったんだろうけど、ジュエルシードが叶えたのは単なる巨大化。

「まあ、元に戻すためとは言えなのはの砲撃を受けたしね。でもすずかの治癒魔法でちゃんと治したし」

ジュエルシードから解放するために、私は子猫に向けてディバインバスターを撃った。その後はすずかちゃんが子猫を回復して、私はシリアル14のジュエルシードを封印した。それから私たちは次のジュエルシードが見つかるまで待機して、そして今、その次のジュエルシードを封印するためにその現場に足を踏み入れた。

『みんな。その河川敷にジュエルシードの反応がある。発動臨界だから、もしかすると発動しちゃうかも。気を付けて』

「「「了解です！」」」

エイミィさんからの通信に応える。確かにさっきから周囲から魔力を感じる。すずかちゃんが詳細な場所を特定するために魔力探査を行い始めた時、

『悪い知らせが入った。フェイト組が2つのジュエルシードを封印したようだ。残りはそこの物と、どこども知れない5つだ』

クロノ君からそんなお知らせが入った。あまりにも早い発見と封印。アリサちゃんが「負けてられないわ」って"フレイムアイズ"を強く握り直した。私も「頑張ろうね、レイジングハート」柄を握り直した。と、その次の瞬間。

「ダメ！」『発動する！』

すずかちゃんとクロノ君が叫んだ。ビリビリ肌に感じるジュエルシ

ードの魔力。３００ｍほど先の草むらから青い光が立ち上った。そして青い光が私たちの所まで広がって来て、「ぅく」視界を潰してきた。眩しさに目を閉じて、光が治まるのを待つ。１０秒くらいかな。ようやく光が治まって、目を開ける。

「？？？？？」

目の前に広がる光景に首を傾げる。私の側に居たアリサちゃんが「何よこれぇぇぇ！」って絶叫。すずかちゃんやシャルちゃんも今自分たちが置かれてる状況に呆けてるって感じ。ぐるりと辺りを見回してみる。私たちはさっきまで草むらに居たはずなのに。だけど今、私たちが居るのはジャングル？のような場所。身長をグッと超える草、草、草。

『君たち、大丈夫か！？　いまどこに居る！？』

クロノ君から通信が入って、「どこも何も移動してないはずなんだけど」シャルちゃんが答えた。私たちは光に呑まれてから一歩も動いてない。転送されるときの浮遊感も無かった。でも見渡す限り別の場所に連れて来られたって思えてもしょうがない光景だし。

『魔力反応に変化なし。でもみんなの姿だけが消えちゃったんだよ！』

「位置変わらずで消えた、なんてそんな馬鹿な。でも強制転移じゃないとすると・・・って、ちょっとちょっと」

シャルちゃんが腕を組んで空を見上げると、いきなり様子が変わっ

た。私たちも上を見上げると、「っっ！！？？」信じられないものを見て言葉を失っちゃった。ある草のてっぺん。そこに、それはそれは大きなクモさんが居たのです。真っ先に頭に浮かんだのは「世界が巨大化しちゃった！？」というもの。

「違う！　わたし達が小さくなったんだ！」

シャルちゃんの右手に"キルシュブリューテ"が現れて、「ジュエルシードを封印するよ！」って急に走り出した。私たちもシャルちゃんを追うように走りだす。後ろとチラっと振り向いて見れば、「アリの大行進！？」さっきまで居た場所を横切る巨大なアリさん御一行。しかも蝶の死骸を運んでる最中。ボロボロになってる蝶を見て、「ぅぷ」ちょっと気持ち悪くなっちゃった。

「アースラ。ナビゲートよろしく！」

『了解だよ♪　そのまま北上で～す』

「チクショー！　わたし達はそんな陽気な状況じゃないって言うのに！」

エイミィさんに従って私たちはひたすら走る。そんな中でも・・・

「カマキリの幼虫、襲来ぃぃーーーーッ！！」

「「「ぎゃぁぁぁぁぁぁっ！！」」」

羽化したカマキリの赤ちゃんがわんさか目の前に登場。叫んだ、叫んだよすっごく。恐怖で涙がポロポロ溢れ出てくる。お化けもダメだけど、虫もダメ。巨大だと余計にアウト。

「ひょぉぉぉぉ！　カエルが跳んできたぁぁぁぁっ！」

「「「いやぁぁぁぁぁぁっ！！」」」

私たちを餌と見てるようなカエルがピョンピョン跳ねて来て、その長い舌を伸ばしてくる。必死にシールドやバリアを張って対処。攻撃？　無理！　どういう結果になるか判らないもん！

「ああもう！　猿にピエロに鬼にお化けに蛇に猫、そんで次は虫ってか！」

アリサちゃんが怒声を上げた。あと私はその前にモコモコお化け、暴走車（は違うかな）、変態水お化けと戦ってます。回想してると、すずかちゃんが「みんなストップ！　隠れて！」そう言って、草の陰に身を隠した。

私たちも倣って草の陰に隠れる。と、数羽のスズメが飛んできて、地面から顔を出していたミミズを啄んだ。見たくないからサッと視線を逸らす。スズメが飛び立って行ったのを確認した私たちは、再びジュエルシードを目指す。

「飛べないあたしが言うのもなんだけどさ。空飛んで行った方が早くない？」

「鳥に虫と勘違いされて喰われる覚悟があれば、ね」

「やっぱやめとくわ」

危険度はどっちも変わらないと思うけど、さすがに鳥を相手に空で勝てるとは思わないから、何とかなりそうな陸路を選ぶ。でも徒歩や走るんじゃ時間が掛かりすぎるのも確か。と、いうわけで・・・

「地面スレスレを飛べばいいじゃない」そういうことに。アリサちゃんは後ろからすずかちゃんに抱っこされて空を飛び、私がシャルちゃんを後ろから抱っこして飛ぶ。

「シャルちゃんってとても良い香りがするね～♪」

甘くて優しい、そしてどこか懐かしい香り。すごく落ち着く。入浴剤や石鹸、シャンプー・リンスとか、そういうのじゃなくて、シャルちゃん自身から香りがする。

「そう？　ありがとう、なのは。わたしね。なのはに抱きしめられてると、すっごく安心できるの。なのはは良いお母さんになれそうだよ♪」

「え？　そうかなぁ・・・？　未来のことはよく判らないけど、でも、そうだと嬉しいな♪」

「あはは」「にゃはは」

2人でニコニコ笑ってると、すぐ側を飛んでるアリサちゃんから「

イチャついてる暇はないわよそこ！」ってお叱りの言葉をもらった。シャルちゃんと2人して「ごめ～ん」と謝りながら、ジュエルシードの在る場所へと飛ぶ。

「前方、蜘蛛の巣ありです！」

「りょ～か～い！」

すずかちゃんの指示に従って僅かに上昇して蜘蛛の巣を素通り。と、その直後「バッタぁぁぁぁ！」目の前の草からこっちに向かってバッタが跳んできた。今の私たちと同じサイズだから恐ろしいのなんのって。回避行動に移ろうとした時、

「ふぉぉぉぉ！　さっきのカエルかぁぁぁぁ！」

横から跳んできたカエルの舌が空中でバッタを捕獲。そのまま私たちの目の前を通り過ぎて行って、草むらの中に消えて行った。今の内って言うことで私たちは少しスピードを上げる。ようやく草むらを抜けて、川沿いへと到着。

『近いよ！　気を付けて！』

「「「はいっ！」」」

「ありがとう、なのは。降ろして」

「あ、うん」

地上に降り立ってシャルちゃんと離れる。アリサちゃん達も降り立って分離。それと同時。私たちを囲う輪っかのような魔力の流れが生まれてくるのが判って、次第に目で見ることが出来るほどになった。

「とりあえずなのは達だけで封印してみて。危なくなったら、わたしも加勢するから」

「心配ないわよ。短い時間だったけど、あんたとの訓練であたし、結構強くなったと思うし」

アリサちゃんが"フレイムアイズ"のトリガーを引くと、銃身から薬莢――カートリッジが排出されて、アリサちゃんの魔力が跳ね上がる。それを合図にしたかのように周りの魔力の流れに変化が生まれた。輪っかだったようなものがいくつにも途切れて、私たちの身長を超すほどの魔力の球体が12と生まれた。

そしてその魔力の球体がグニャグニャ形を変えて、最終的に「ぬいぐるみ・・・？」になっちゃった。ウサギのぬいぐるみはピョンピョン跳ねて、犬のぬいぐるみは後ろ足で首を掻いてたり、デフォルメされた虎はガオーガオーって吠えてる。

「ねえ。あたし達の小人化と関係あると思う？　あのぬいぐるみ軍団」

「「「さあ？」」」

ジリジリとにじり寄ってくるぬいぐるみ軍団。私たちはそれぞれデバイスを向け、警戒。そしてぬいぐるみは一斉にピョンって跳ねて、私たちの頭上へ。それは正しくボディプレス。急いでその場から散開。遅れて地面に腹這いで落下したぬいぐるみは、そのままポヨンポヨンと跳ねる。あれなら受けてもそんなに酷いことにはならないかも。跳ね終えたぬいぐるみが起き上がって、

『ぼくたちおもちゃ♪』

『子供の相手♪』

『大人の相手♪』

『楽しんでもらえるように♪』

『いっしょにあそぼう♪』

『でもいつも遊ばれるのはわたしたち♪』

『小さい小さい僕たち♪』

『少し疲れたから、今度はぼくたちが人間で遊ぼう♪』

『でも大きい人間たちにはかなわない♪』

『だから小さくしちゃおう♪』

『私たちより小さくしちゃおう♪』

『これで遊べるねそれで遊べるねずっと遊べるね♪』

ぬいぐるみ達が歌い始めた。それは、私たちが小さくなった理由そのものの歌詞。歌が終わると、私に向かってイノシシと馬と虎のぬいぐるみが突進してきた。アリサちゃんには猿と牛とニワトリ、すずかちゃんにはネズミとウサギとヘビ。シャルちゃんには羊と犬と龍が向かって行った。

「みんな！　向かって来る敵は撃滅！」

"キルシュブリューテ"の刀身に真紅に光り輝く魔力が迸って、シャルちゃんは柄を両手で握りしめて横一線に振り払った。

――光牙烈閃刃――

刀身から放たれるのは、剣先の形をした斬撃――ううん、それはもう砲撃だった。その一撃で、シャルちゃんに向かっていた3体のぬいぐるみは消し飛んじゃった。

≪マスター。今は敵に意識を≫

「あ、うん！　レイジングハート！」

≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ≫

「シューット！」

魔力弾ディバインシューターを6発、ぬいぐるみ1体につき2つずつ撃ち込む。どれも額に直撃だった。だけど少しふら付くだけで、突進は止まらなかった。だったら・・・「フライアーフィン！」足首に魔力の翼を展開。体を浮かせる。

「新魔法第一弾！　フラッシュムーブ！」

≪Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ≫

高速移動魔法――フラッシュムーブを発動して、迫り来るぬいぐるみ3体へ向かって前進。今の私じゃまだ練習が足りないから複雑な軌道での移動は出来ないけど、前進・後退くらいなら問題ない。そして「新魔法第二弾！」フラッシュムーブからの連続技・・・

「せぇぇぇーーーいッッ！！」

≪Ｆｌａｓｈ　Ｉｍｐａｃｔ≫

圧縮魔力を"レイジングハート"に乗せた打撃魔法――フラッシュインパクトで、先頭だった馬のぬいぐるみの首を殴打。命中した時に魔力が光を伴って炸裂して、馬に追加ダメージを与える。そのまま"レイジングハート"を振り抜いて大きく殴り飛ばす。
大きさの割に軽いから、面白いほど飛ぶ。次の虎とイノシシの突進は空へ上がって回避。弧を描くように宙を舞う馬に照準を合わせる。落下を始めた馬の辿る軌道の先に向けて、

「ディバイィィン・・・バスタァァァーーーーーッッ！！」

砲撃を発射。予測したとおりのタイミングで砲撃の射線に落下した馬に直撃。消滅したのを視認して、次は飛び上がって来た虎のぬいぐるみの爪をバリア――プロテクションで防御。バリアに弾かれた虎は下に居たイノシシの上に落ちて、２体ともゴロゴロ転がった。動きが小さくなった今のうちに「シューート！」ディバインシューターを６発、虎とイノシシに向けて発射。

着弾している最中にもう一度砲撃の準備。ヨロヨロ起き上がろうとしてた２体に向けて、

≪Ｄｉｖｉｎｅ――≫

「バスタァァーーーーッ！」

砲撃を発射。直上からの直撃で、虎とイノシシのぬいぐるみも倒すことが出来た。それを確認してすぐ「アリサちゃん！　すずかちゃん！」２人の様子を見る。まず最初にアリサちゃんが視界に入った。シャルちゃんから剣の手ほどきを受けたことで、攻撃の魔法はフレイムウィップだけじゃなくなった。

「バーニングスラッシュ！」

シャルちゃんの魔法のように刀身に炎を纏わせての直接攻撃で、アリサちゃんは最後のぬいぐるみ、牛を一刀両断。一気に燃え上がった牛はそのまま消えて行った。最後にすずかちゃん。すずかちゃん

の相手はネズミとウサギとヘビ。すずかちゃんがユーノ君たちから教えてもらった攻撃の魔法は3つ。その内の1つ、着弾時に相手をバインドで拘束するバインドバレットで、3体のぬいぐるみを拘束。

「スノーホワイト！」

≪ 参りますわ！≫

すずかちゃんの足元と前方に藤紫色の魔法陣が展開されて、「バスターラッシュ！」セレネちゃんの砲撃を放った。セレネちゃんの砲撃と違うのは、砲撃と一緒に吹雪も発生させて進化していること。それもこれもセレネちゃんとエオスちゃんのデバイス、中遠距離のペルセースの機能を"スノーホワイト"に譲ったから。セレネちゃん達はもう戦えなくなったけど、2人は後悔してないって笑ってた。

「すごい・・・！」

バインドから逃れようともがいてた3体のぬいぐるみが砲撃を受けて凍りつくと、3つの氷像になった。そしてピキパキとヒビが入っていって、大きな音を立てて崩れて地面に落ちる前に消えていった。それをみんなで見届けた後、すずかちゃんが「やった♪」私たちにピースサインを向けた。私やアリサちゃん、シャルちゃんもピースサインで応えてると、すぅっとジュエルシードが音もなく現れた。そしてジュエルシードから発せられた光に視界が閉ざされて、治まったところで目を開ける。

「「「あれ・・・？」」」

「ふぅ。元に戻ったみたいだね」

気が付けば体の大きさが元に戻ってた。ホッと一息。これでもう虫に襲われても大丈夫。安堵しているところに「なのは。封印、お願いね」ってシャルちゃんに頼まれた私は「うん」って応えて、"レイジングハート"をシーリングモードへ。

「ジュエルシード、シリアル12・・・封印！」

本日2つ目のジュエルシードを封印。みんなとハイタッチしてそれを喜び合う。それから私たちは次のジュエルシードの在処が特定されるまで、アースラで待機することになった。

Ｅｐｉｃ１４－Ｄそれはもうジュエルシードの回収は大変で～Ｓｔｒａｎｇｅ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

なのは達との午前の模擬戦を終えての休憩途中、上司であるクロノに呼び出されたわたしはブリッジへ来ている。赴いたブリッジでわたしは、クロノから悪い報せを聴くことになった。
昨日、わたしとなのは達は２つのジュエルシードを回収した。アースラの仲間が寝ずに頑張って、ようやく在処を特定してくれたからこその収穫。なのにフェイト達は昨日の内に３つもジュエルシードを回収していた。そしてたった今。残り５つの内の１つを回収されたということを聴かされた。

「――フェイト組はどうやらジュエルシードの位置を既に特定しているようだ」

「テスタメントちゃんがわずか数日で１０個も集めてるって話を、なのはちゃん達から聞いた時からそんな気はしてたけど」

これはもうクロノやエイミィの言う通りフェイト組はジュエルシードの在処を特定してると見ていい。

「回収率では圧倒的に負けている。これはもう先を取るのではなく後を――彼女たちから直接回収した方が早そうだな」

「戦って奪えってことね」

「別に戦うことが全てじゃないさ。とは言え、なのは達の話じゃまともに説得も出来ないようだが」

フェイト達は話し合いに応じない。それはもう理解してる。だから力づくで押さえ込むしかない。別に無理な話じゃない。なのはとアリサとすずか。あの3人は呑み込みがすごく早くて、教えたことをすぐに吸収、実用段階にまで昇華する天賦の才を持ってる。あれなら今日明日をフルで特訓に使えばフェイトには勝てるはず。テスタメントに関してはまだ難しいかもだけど。

「で？　ジュエルシードの回収はフェイト達に任せて、最終的にわたし達があの子たちから奪うってことでいいの？」

「それではまるで僕たちの方が悪者のようだな」

「そだね～」

クロノやエイミィと3人で苦笑する。半ば強盗に近いことをしようとしてるわたし達。でも元はと言えばフェイト達が仕掛けてきたことだ。ちょっと可哀想な気もするけど、これも次元世界の安寧の為。フェイト達を打ち倒し、あの子たちが頑張って必死に回収したジュエルシードを奪う。

「テスタメントに危険が迫れば、他のテスタメントやレーゼフェア達が来るかもしれない、というのが今のところのネックだな」

「うん。数では勝てそうだけど、質では負けちゃいそうだよね」

４ｔｈ――４番目であるらしいあの紅髪の子は推定ＡＡＡランクでありながら１１人いる中での下から３番目。以前までならわたしとクロノで何とかなるって思ってたけど、ＡＡＡランク以上の魔導師を何人も有していると思われるテスタメント部隊、それにシュヴァリエルっていう戦力を知った今、武装隊を含めた現状のアースラ戦力で渡り合えるとは思えない。

たとえそれらがあの子の嘘だとしても、何かしらの後ろ盾は絶対に在る・・・はず。でないと単独でこんな辺境世界に訪れることが出来、なおかつジュエルシードの在処を短期間で把握できるなんて無理だもん。

「脅威対策室が動くだけの確証が無いから、現状は僕たちで何とかするしかない・・・」

脅威対策室。大規模テロや小規模戦乱の鎮圧などを担当する本局の部署の１つだ。その部署の名の下に編成された部隊は、事案の脅威度によってピンキリだけど、脅威度最大である場合はその戦力は正しく管理局最強。彼らが動けば何とかなるとは思うんだけど。テスタメント部隊、レーゼフェアやシュヴァリエルの実態も判らない以上は夢のまた夢。

「もしテスタメント部隊やレーゼフェア達が出て来た場合、なんとしても僕と君で迎え撃つぞ」

「うん。民間協力者のなのは達にそこまでは頼めないし、これ以上危険な目に遭わせたくもないもん」

絶対にあの子たちを守り切って見せる。意気込んでたその時、ブリッジに警報が鳴り響いた。

「エイミィ！」

「はい！　海鳴市にて魔力反応を探知！　メインモニターに表示します！」

リンディ艦長に応じたエイミィがキーボードを操作してメインモニターに海鳴市のマップを表示。フェイトとアルフ、テスタメントの魔力を表す光点がマップの片隅に表示された。それとは別にジュエルシードの魔力の光点が現れて、すぐに消滅した。それが示す意味は「また回収されちゃったみたいです」ジュエルシードがフェイト達に回収されたってこと。

「残り3つか・・・。一応、このままジュエルシードを探すが、見つけた頃にはもう連中に回収されるのがオチだろう」

悔しそうに唸っているクロノに「だね」って同意を示す。もう回収戦のスピードで勝てるとは思えない。

「・・・エイミィ。フェイトさん達を追える？」

「・・・・・・ダメです艦長。強力なジャミングが効いてる所為で

追跡できません」

「テスタメントの魔法だろうな。連中の追跡はもう諦めた方が良いと思う。エイミィ。ジュエルシードの探索範囲を広げてくれ。念のために海の方まで」

クロノがエイミィにそう指示を出したあと、「テスタロッサ、か」って呟いた。

「テスタロッサってあれだよね？　かつての大魔導師・・・プレシア女史と同じファミリーネーム」

テスタロッサってファミリーネームには心当たりがあったからちょこっと調べてみた。初めて聞いた時、すぐにプレシア・テスタロッサ女史の名前と当時の事故が脳裏に過ぎったから。やっぱり歴史の勉強はしておくべきだね。こういう時に意外な形で役に立つ。

「ああ。プレシア・テスタロッサ。２６年ほど前、ミッドの中央都市で次元航行エネルギーの駆動炉の実験で次元干渉事故を起こし、追放された女性だ」

「そうなんだ・・・。じゃあフェイトちゃんってその人の関係者なのかなぁ・・・」

「さあね。本名とも限らない」

わたしが調べた、プレシア女史の起こした次元干渉事故による犠牲

者はたった1人。その犠牲者の名前と顔写真を見て、わたしは胸が締め付けられるような痛みを憶えた。プレシア。事故の犠牲者。ジュエルシード。強大過ぎる魔力。何故かわたしはある1つの推測を労することなくパッと思いついた。
それはあまりにも馬鹿馬鹿しくて、現実味が無くて、否定したくて、それなのにそれが正解のように思えてしまう。時折生まれる強烈なデジャヴ。ここ最近、頻繁に起こるようになってきた。

（それもこれも良い意味でなのは、悪い意味でテスタメントと会った時から・・・）

「一応、その線で調査するけど・・・って、イリスちゃん？　大丈夫？　顔色悪いよ」

「え？　あー、うん、大丈夫」

「陸戦のエースが体調管理を怠って撃墜、なんてことになってくれるな？」

クロノがわたしの右肩に手をポンッと置いてそんな寝言を言ってきた。わたしは溜め息1つ吐いて「寝言を言うには早くない？」って笑みで返す。

「ああ、そうだな。じゃあエイミィ。何かあったら通信をくれ。僕は自室で事務処理をしてる」

「ん。頑張ってねクロノ君♪」

そうしてクロノはリンディ艦長に会釈してからブリッジを出て行った。そんじゃわたしもそろそろトレーニングルームに戻ろうかな。なのは達も待ってるだろうし。エイミィの肩をポンッと叩いて「頑張ってね」踵を返してブリッジの出口へ向かう。わたしもリンディ艦長に会釈してからブリッジを後にして、トレーニングルームへ歩みを進める中、わたしの目の前にいきなりモニターが展開。

「おわっと！」

立ち止まるのがもうちょっと遅かったら、クロノとモニター越しのキスをするところだった。危ねぇ・・・。

『っと、すまないイリス』

「ん。で、どうしたの？　事務処理、手伝う？」

『いや間に合ってる。・・・イリス。今後の方針を決めた。ジュエルシード探索を打ち切ってフェイト達の魔力探索にのみ労力を割く。発見次第・・・戦闘開始だ』

「・・・そ。じゃあそれまではなのは達の魔導師としての腕を鍛え上げるよ」

『ああ。基本は待機だ。状況が動き次第、招集をかける』

「了解」

通信が切れ、わたしは改めてトレーニングルームへと歩みを進めた。それから午後と夕食後になのは達を鍛えたけど、その日はもうフェイト達がジュエルシードを回収することはなかった。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒ルシリオン†††

「用意はいい？」

「うん」「ああ」

頭上に広がる薄い曇天、眼下に広がる薄暗い海。その間に、私とフェイトとアルフは居る。３１個とふざけた、そして嬉しい誤算である数のジュエルシード。その残りである最後の３つを回収しに来たのだ。海の底に眠る３つ。一度に３つを封印するため、昨日は２つだけの回収に留めておいた。フェイトからは少しばかり不満をプレゼントされたが、アルフの助力もあって説得に成功。そして今、行動に移すためにここに居る。

「それじゃあ手筈通り、私が魔力流を撃ち込んで強制発動させる」

「あたしはフェイトのサポート。で、テスタメント、あんたが封印だ」

「ええ、判ってる。管理局が来るのは間違いないはずだから、アルフは時間稼ぎにも頑張ってもらうよ」

「期待はしないでおくれよ。数じゃ負けてるんだからさ。あ、でもフェイトだけは守りきるから安心しておくれ♪」

アルフはそう言ってフェイトに背後から抱きつき、彼女の頭に頬ずりする。別に助けてもらおうとは思っていない。ただ、ちょっと寂しいかなぁ、って思うだけだ。コホンと咳払いを1つ吐き、「雨が降って来た。そろそろ」と本音を隠して急がせる。残り3つをなのは達と分けるわけにはいかない。だからこそ急ぐ必要がある。コクリと頷いたフェイトは大きく深呼吸し、足元に広大な魔法陣を展開させた。

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ。いま導きのもと降り来たれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス」

儀式魔法に分類される、局地的に雷を落とす天候操作魔法の詠唱に終えるフェイト。魔法陣直下から生まれる幾条もの落雷。周囲にもゴロゴロバリバリと轟音が鳴り響く。そして魔法陣上、つまり私たちの周囲に黄金に輝く雷光の目玉が9つ発生し、雷光がそれらを繋ぐ。

「サンダー・・・フォォォーーールッッ!!」

"バルディッシュ"のヘッドを魔法陣に打ち付けたと同時、9本の雷撃が海面へ放たれた。雷撃を受けた海面が大きく爆ぜ、数秒のあと・・・海面から3本の青い光の柱が立ち上った。ジュエルシードの数と一致。3つでありながらその覚醒率はかなり高い。渦潮や海

水の竜巻が発生し、竜巻に至っては空に居る私たちを吹き飛ばそうとする程の風圧を伴っている。

「テスタメント。本当に1人で大丈夫？」

「大丈夫。さぁ、始めようか。輝ける命を夜明けの竈にくべ燃やし、魔を成す贄とする。天へと昇るは封を解き放つ至高の浄煙。其は棺に眠りし炎王を呼び覚ます烽火（ほうか）――」

直径１０ｍほどの魔法陣を展開。さらにその魔法陣の周囲に１２の魔法陣を展開。久しぶりだなこの大魔術を使うのは。管理局に見られるだろうが、彼らの前で正体――ルシリオン・セインテストを晒してこの魔術を使うことはないから気にはしない。

「・・・っ。フェイト・テスタロッサ。アルフ。管理局が来た。迎撃をお願い」

「判った」

「出来るだけ早く頼むよ！」

転移反応を感知。なのはとアリサとすずか。そしてイリスとユーノ。スクライア姉妹は出てこない。ま、あの厄介なバインド弾と二属性の砲撃が無いのは救いだ。フェイトとアルフが、こちらへ向かって来るなのは達の迎撃へ向かった。それを横目に、私の固有魔術における炎熱系最強の魔術を発動させるための詠唱を続行。

「封じられし棺は鳴動し、その振えは夕暮より宵闇へと進めるが為の虚無の鐘を鎮かに鳴らす――」

計１３の魔法陣の直下に直径８ｍほどの炎球が発生する。フェイトとジュエルシードの魔力が大気に満ちているからこそ現状の私でも発動できるこの術式。本来の威力に比べて２割もあればいいとこだ。が、それで十分だ、今はな。

『テスタメント！　そっちに局員ともう１人行った！』

アルフから緊急の念話。続けて『すぐ援護に――』と送ってきたフェイトに『結構』と一言だけで却下した。フェイトにはなのは。アルフにはアリサとすずか。私の所へはイリスとユーノか。ユーノに背中から抱かえられるようにして飛んできたイリスが「すごい風」私の魔法陣へ降り立った。

「テスタメント！」

「この前は名乗れなかったよね。時空管理局、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト執務官補です。今すぐ武装を解除し、魔法を停止し、そして投降しなさい。もちろん拒否権は無し」

暴風によって波打つアクアブルーの長髪とスカートをそれぞれ押さえ、イリスはそう促してきた。

「かくして王の眠りし棺の蓋は開き、溢れ出す烈火は天を燃やし、地を焼き、世界を浄化する」

それを無視して詠唱を続行すると、イリスはデバイス、"キルシュブリューテ"の剣先を私に向け「再度告げます。投降しなさい」2度目の警告。ユーノは私とイリスを交互に見、いつでも魔法が発動できると言った風な構えを取っている。

「王よ醒めよ――」

「やめなさいって言ってるでしょ！」

「テスタメント！」

――チェーンバインド――

"キルシュブリューテ"が振り下ろされるより早く私を拘束する、ユーノが発動したチェーンバインド。私を袈裟切りしようとしていた刃がギリギリで止められる。イリスと至近距離で見詰め合う。

「今すぐ魔法を破棄してテスタメント」

「馬鹿を言わないでよ。ジュエルシード3つが同時に発動している今、すぐにでも停止させないとダメでしょ」

「シャル。テスタメントの言う通りかもしれない。なんか・・・まずいことになりそう」

何かしらの願望が叶う前に封印したかったのに邪魔をされてしまっ

た。海より天を衝くジュエルシードが放つ３本の光の柱が同時に集束し、大きく爆ぜた。私は「ユーノ・スクライア！　バインドを解いて！」と叫ぶ。バインドブレイクで無駄な魔力を消費したくない。

「あ、うん！」

チェーンバインドが砕ける。さすがのイリスも状況変化を察し、邪魔はしてこない。すぐさま魔法陣に片膝立ちし「今こそ主の神火を奮う時。世の滅びの果てに待つ、再誕を担うがために！」詠唱を完遂。

――大炎帝（コード・スルト）の劫火――

足元の魔法陣に左手の平を叩きつけ、１３の魔法陣に発射を告げる魔力を流す。と同時。１３の炎球は計１０４の砲撃となって海面に降り注いだ。連続で発生する水蒸気爆発。爆発によって立ち上る水煙が私たちの居る空にまで届く。邪魔が無ければ確実に終わっていた一撃だ。水煙で視界が潰される中、ピリッと肌で感じる最悪の結末。

「『全員、現高度から緊急上昇！！』」

口頭と念話の両方で叫ぶ。空を飛べないであろうイリスの腰に腕を回して抱き寄せ、「ひゃあ！？」悲鳴を上げるイリスと共に空へ飛び立つ。水煙の上にまで上がり、周りになのは達全員が揃っているのを確認。

「テスタメントちゃん！　あの・・・」

「話はあと！　来るよ！」

なのはの呼びかけを遮り眼下を見据える。濛々と立ち上る水煙の動きに変化。グルグルと渦を巻きだして竜巻と化し、それを突き破って現れたのは・・・

「「「タコぉぉぉぉぉッ！！？」」」

なのはとアリサとすずかが絶叫した。現れたのは巨大なタコ。イリスはポカーンとだらしなく口を開けて呆け、ユーノは「うわぁ」とちょっと及び腰だ。

「タコ焼き、タコ飯、タコのから揚げ、タコのバター焼き。何人分になるだろうね～♪」

はやてと一緒に食べるタコ料理を想像してつい頬が緩んでしまう。抱えたままのイリスが「アレ食べるの！？」と驚愕。

「タコ焼きは好きだけど、あのタコを使ったのは食べたくないなぁ」

「あたしも。ていうかテスタメント。あんた、ちゃんと仕留めなさいよ！」

「はぁ。あなた達が邪魔をしなければ、今の多弾集束砲で一気に封印出来たはずだったんだけど・・・」

アリサに怒鳴られ、その責任を押し付けられようとしたが、私はすぐさま反論。イリスをジト目で見ると、彼女は「う〝っ」と居心地悪そうに顔ごと目を逸らした。私から逃れるためか足元に真紅に光り輝くベルカ魔法陣を展開し、「離して」ともがいたため腕を放す。

「ま、こうなった以上は焼きダコにしてジュエルシードを引っ張り出す。フェイト・テスタロッサ、アルフ。手伝って。あなた達は邪魔にならないところに居て」

「うん」「あいよ」

フェイトとアルフを引き連れて降下。頭上から「私たちも手伝う！」なのはの声が掛けられた。そんな彼女たちに「お好きにどうぞ」とだけ言い、タコが吐いた墨を一斉に回避。まずアルフが「ファイア！」複数のフォトンランサーを発射するマルチショットでタコの8本の触腕を襲撃。

「バルディッシュ！」

――アークセイバーーーー

ランサーの着弾点にピンポイントで魔力刃を当てたフェイト。触腕を横一線に斬り裂いていく。間髪入れずに私は「第四聖典！」を具現させ、横棒の先端に炎を付加。そしてハンマーの如く「破ッ！」と、魔力刃が裂いた部分に第四聖典を打ち下ろした。着弾点より傷口に沿って炎が走り、タコの触腕を焼く。タコは炎を消すためにそ

の触腕を海の中へ沈めた。

「うっ。すごい美味しそうな匂いが・・・・！」

「くんくん。これはお腹が空くね」

アリサとすずかが周囲に漂う焼きダコの香りに鼻をひくつかせる。そういう私も「これは堪らないな～」今すぐにでもタコを食べたい衝動に駆られる。こんな腹の空くような香りの中で戦闘など、緊張感が薄らいでしまうな。そんな中、焼かれ、美味そうな香りを漂わせるタコは完全に私たちを敵と見なしたようで、私を叩き潰そうと2本の触腕を振るってきた。

「ディバイン・・・バスタァァーーーーッ！」

「バスター・・・ラァァーーッシュ！」

左右から迫って来ていた2本の触腕を撃ったのは、桜色と藤紫色の砲撃2本。攻撃を受けた触腕は大きくしなり、片方は着弾点より凍結され、共にチェックマークのような形のまま着水。空を見上げると、"レイジングハート"の先端をこちらへ向けたなのはと、前面にミッド魔法陣を展開したすずかの姿が在った。バスターラッシュ。スクライア姉妹の砲撃魔法。凍結効果と言うことはセレネバージョンの方だ。

「ありがとう、2人とも」

何故すずかが扱えるのかは判らないが、使えるようになったという事実には警戒しておいた方が良いな。とりあえず礼を言い、海面から槍のように突き出してきた別の触腕を避け、炎を纏わせた第四聖典で打ち払う。着弾地点が爆発し燃え、また良い香りが漂ってきた。

「ちょっとテスタメント！　あんたが攻撃すると、余計にお腹が空くじゃない！」

「だったら私とあなた――アリサ・バニングスは戦闘に参加せずに観戦する？」

アリサの元へと飛び、彼女が展開している魔法陣、フローターフィールドへと降り立つ。炎熱変換資質持ちのアリサ。彼女は"フレイムアイズ"と私を交互に見、「むぅ」と唸った。その最中にもなのは達が暴れ狂うタコの触腕を相手に魔法を撃ち放っている。

「べ、別に問題ないわよ。だって――」

「変換しなければいいんだから、でしょ」

「そ、そういうこと！」

アリサが魔法陣より飛び降り、私も続いて飛び降りた。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒なのは†††

３１個あるジュエルシードの最後の３つが、フェイトちゃんの魔法

によって同時に発動。それを見た私たちは、クロノ君の指示で先に封印するために現場に転移した。テスタメントちゃんがとんでもない魔法で同時封印しようとしていたところに私たちが介入。私はフェイトちゃんを、アリサちゃんとすずかちゃんはアルフさんを、そしてシャルちゃんとユーノ君がテスタメントちゃんを止めるため。けどそれがまずかった。魔法の発動が遅れて、ジュエルシードは封印される前に何かしらの願いを叶えちゃった。

「その結果が・・・あの大きなタコ・・・」

≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ≫

暴れ回るタコの足に砲撃を撃ち込む。大きく反り返って動きを止めたところに、「斬ッ！」シャルちゃんがベルカ魔法陣から飛び降りて"キルシュブリューテ"で切断。すぐさま足下に別の魔法陣を展開、「あーらよっと♪」足場として降り立った。

「シャルちゃん！」

そんなシャルちゃんに向かう別の足が2本。1本は槍のように、1本は鞭のように。シャルちゃんは慌てることなく「カートリッジロード」"キルシュブリューテ"のカートリッジをロード。刀身に燈る真紅の魔力。「光牙・・・！」目の前に迫り来ていた足に向かって"キルシュブリューテ"を薙ぎ払おうと振りかぶった瞬間。

「「あ」」

≪げっせんじ～～～ん♪≫

シャルちゃんの攻撃が届くより早く真上からテスタメントちゃんが落ちて来て、タコの足を十字架（第四聖典って名前みたい）で薙ぎ払った。そしてその直後、シャルちゃんの一撃がテスタメントちゃんを襲撃。運が悪かった、としか言いようがない。ちなみにもう片方の足は、アリサちゃんが"フレイムアイズ"で斬って、すぐにすずかちゃんの砲撃で凍結して処理された。

「あ痛ぁぁぁぁぁぁっ！？」

シャルちゃんの一撃を受けて弾き飛ばされたテスタメントちゃん。その先には別の足が在って、テスタメントちゃんをバチンと叩いた。テスタメントちゃんは錐揉みしながら空を舞い、タコの顔の前に。で、タコが吐いた墨の直撃を受けて海に落ちた。この時間。わずか2秒弱。あまりの惨劇に私たちは呆けることしか出来なかった・・・。

「みんな気を付けて！」

――バインドバレット――

すずかちゃんの大声にハッと我に返る。すずかちゃんの4発の魔力弾が、私に向かって伸ばされようとしてた足に着弾すると、魔力弾はバインドとなって足を拘束。すぐさま私と同じように動き出したシャルちゃんが"キルシュブリューテ"で一刀両断。

「ていうかテスタメントは無事なのかしら・・・・？」

「ねえ。あれってわたしの所為かな・・・・？」

「ただ、運が悪かったとしか言いようがない、かも・・・・？」

「助けた方が良いよねやっぱり・・・・？」

なかなか海から出てこないテスタメントちゃんをみんなで心配する。離れたところに居るフェイトちゃんとアルフさんをチラッと見ると、2人は意に介さず残りの足を魔法で倒していた。フェイトちゃん達はテスタメントちゃんのことを心配していないのかな・・・・？　それとも「心配する必要もないほど信じてる・・・・？」だったら、羨ましい反面悔しいかも。

『イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトぉぉ・・・・！』

海から頭だけを出したテスタメントちゃんが呻き声を念話で送って来た。

『あ、あなたがわたしの前に落ちて来るから悪いんじゃない？』

『文句は無い。あなたの言う通りだから。でもちょっと納得できない・・・・』

――瓦解せる喰飲（アルティフォドス）の龍咆――

タコの周りに魔法陣が７つ展開されて、そこから海水の龍が現れた。龍は一斉にタコの足や頭にかぶり付いて、引き千切ったりしているけど、私たちが今まで倒した足も含めて再生した。

「『まぁいいや』フェイト・テスタロッサ！　高町なのは！と言うより、砲撃を使える魔導師！」

念話を切り上げたテスタメントちゃんが私たちにそう呼びかけた。

「再生が追加された今、半端な魔法はもう通用しない。なら――」

「大火力魔法で一気に片を付ける、だね」

「つうことは、あたしゃ見学組だね」

私たちの近くに来たフェイトちゃんとアルフさんは、テスタメントちゃんの案にすぐ乗った。そしてテスタメントちゃんも私たちの所まで上がって来た。

「言わずともフェイト・テスタロッサは判ってるようで何より。バラけて四方八方から撃つより一点集中の方が力が通りやすい」

テスタメントちゃんは私たちを順繰りに見た後、砲撃魔法を扱える私たちの一斉砲撃で強制封印するっていうことを説明した。タコの方を横目で見てみる。海水の龍に食い千切られた足をすぐさま再生させて、別の足で龍を倒しちゃったりしてる。でもまた新しい龍が生まれて、その足を食い千切ったりする。終わりの見えない攻防戦。

「あの、テスタメントちゃん。顔色、悪くなってない・・？」

すずかちゃんが心配そうにテスタメントちゃんの顔を覗き込んだ。確かによく見ると少し苦しそう。けど「大丈夫。タコを倒せば治る」って言って、第四聖典の先端をタコに向けた。それに続いて「じゃあ今すぐやろう」フェイトちゃんもタコの方へ左手を翳して前面に魔法陣を展開。

「あたしは砲撃魔法を持ってないから――」

龍が討ち漏らした足が私たちに向かって伸ばされてきたのを、「コイツらをぶった斬ってやるわ！」アリサちゃんが魔法陣から飛び降りて迎撃。

「僕も手伝うよ！」

「あたしも手伝おうかね！　テスタメント。あの龍に回してる魔力を戻しな。ぶっ倒れるよ」

ユーノ君とアルフさんもタコの足にバインドを掛けたり魔力弾の弾幕を張って、私たちに向かわないようにしてくれた。テスタメントちゃんが「感謝」と一言お礼を言った後、龍が７つから３つへ減った。

「じゃ、じゃあ私とすずかちゃん、シャルちゃん、そしてフェイトちゃんとテスタメントちゃんの一斉砲撃で・・・」

「うん。ジュエルシードを一気に封印だね」

「ま、今回だけは共闘してあげる」

すずかちゃんもタコへ向けて両手を翳して、シャルちゃんは"キルシュブリューテ"の柄を両手で握りしめて頭上に掲げた。それぞれ砲撃の準備を始める。"レイジングハート"に纏わりつくように展開される環状魔法陣、そして先端には魔力。すずかちゃんの魔法陣の前方にも魔力の球が、シャルちゃんの"キルシュブリューテ"の刀身に真紅の魔力が生まれる。

「良い感じの魔力だね。フェイト・テスタロッサ。私たちも負けてられないよ」

「判ってる・・・！」

テスタメントちゃんの第四聖典の先端に燃える魔力球が生まれた。フェイトちゃんの魔法陣にも強い魔力が満ちていくのが判る。これで準備完了だ。

「アルフ！　それにアリサ・バニングス、ユーノ・スクライア！退避！」

テスタメントちゃんがそれを確認してアリサちゃん達をタコから遠ざけさせる。タコは離れ始めたアリサちゃん達を攻撃しようと足を伸ばすけど、海水の龍が壁のように並んで防御。

「撃てぇぇぇぇぇぇッッ！！」

――煌き示せ、汝の閃輝（コード）（アダメル）――

「ディバイン・・・バスタァァァァーーーーーッッ！」

「サンダー・・・スマッシャァァァァーーーーーッッ！」

「バスター・・・ラァァァーーッシュ！」

「光牙・・烈閃刃！！」

５つの砲撃が１つに束ねられたような巨大な砲撃になって、一直線にタコへ向かう。そして砲撃はタコを呑み込んで大爆発を起こした。爆ぜた海水が空にまで上がって、まるで雨のように私たちに降り注ぐ。水煙が晴れるまで待って、ようやく収まってきたところで「あ・・・！」うっすらと水煙の奥に輝くジュエルシードの光を見た。その瞬間、テスタメントちゃんとフェイトちゃんがジュエルシードに向かって飛んで行った。

「クロノ！」

シャルちゃんが叫ぶ。それと同時。テスタメントちゃんとフェイトちゃんにバインドを掛けられた。それを見たアルフさんが「フェイト！？　テスタメント！？」驚きながらも２人を助けようと向かうけど、３人の間にクロノ君が転送されてきた。

「時空名管理局、クロノ・ハラオウン執務官だ」

「邪魔すんなぁぁぁぁぁッ！」

アルフさんの繰り出した右のパンチを左腕で下から掬い上げるように上に弾いて、「すまないな」がら空きになったアルフさんの右脇腹をデバイスで薙いだ。

「うぐっ！？」

アルフさんの体がくの字に折れ曲がる。クロノ君がそのままデバイスを振り抜けば弾き飛ばせるけど、その前にアルフさんはクロノ君の後頭部を鷲掴んで頭突き。それより早くクロノ君は額に小さなバリアを張って防御。逆に「ぐぁ・・・！」アルフさんの方にダメージが。アルフさんがよろめいてクロノ君から離れたところを、クロノ君がデバイスの先端を向けて、

――リングバインド――

「っ！　この・・・！」

「君も大人しく捕縛されてくれ。イリス！　今のうちにジュエルシードを封印しろ！」

「了解！　みんな！」

――シュヴァーベン・マギークライス――

シャルちゃんは幾つもの魔法陣を階段状の道にしてジュエルシードを目指してダッシュ。ユーノ君はアリサちゃんを抱えて飛んで目指す。私もすずかちゃんと一緒に目指す。そんな時、「甘いよ。クロノ・ハラオウン執務官」テスタメントちゃんの声が静かに響いた。

――バインドブレイク――

「なに！？」

「３対象同時にバインドブレイク！？」

テスタメントちゃん、それだけじゃなくてフェイトちゃんとアルフさんのバインドまで砕けた。同時に３人のバインドを破壊したテスタメントちゃんに驚いたシャルちゃんとクロノ君の２人は動きを止めた。

「はい次は、バインド返し！」

――テリトリー・オブ・スフィアケージ――

「「っ・・・！」」

「「「「え・・・！？」」」」

私、ユーノ君、アリサちゃん、すずかちゃん、４人が一斉に魔力の

球体に閉じ込められた。シャルちゃんとクロノ君だけはギリギリ避けて無事だ。でも向こうは3人。数じゃ負けてる。私は加勢するために球体を壊そうとするけど、ポヨンポヨン柔らかくて打撃じゃ効かない。

"レイジングハート"の尖った部分で破ろうとしてもゴムのように伸びるだけ。見ればアリサちゃんも"フレイムアイズ"で斬り破ろうとしてるけど、やっぱり伸びるだけ。

「『どうしようみんな・・・・!』・・・あれ？　念話が通じない・・・？」

何度試しても念話が通じない。だったら「ユーノ君！　アリサちゃん！　すずかちゃん！」大声を張り上げる。けど届いているようには見えない。すずかちゃんが私の方に向いて何か喋ってるようだけど聞こえない。

≪このケージタイプのバインドの効果かと思われます≫

「そんな・・・・!」

テスタメントちゃんの魔法って大体そうだよね。通信封じっていうか。大きく溜め息を吐いて、諦めたくないけど今はシャルちゃん達の戦闘に目を向けることにする。シャルちゃんの攻撃を小さな動きだけで避け続けるテスタメントちゃんは、クロノ君の攻撃だけはしっかり迎撃・防御。

そんな2人へ向けて、フェイトちゃんとアルフさんが魔力弾の弾幕を張る。テスタメントちゃんがシャルちゃんとクロノ君の攻撃を一

手に引き受ける囮、フェイトちゃんとアルフさんが２人を撃墜するための攻撃手。

（どっちもすごい・・・！）

特にシャルちゃんが普通じゃない。空を飛べないのに、魔法陣の足場を幾つも連続で展開して足場にして、空を縦横無尽に駆け回ってる。それでフェイトちゃんの攻撃を避けたり"キルシュブリューテ"で斬り裂いたりするなんて、「凄すぎる・・・」もう驚くことしか出来ない。

「ベルカ騎士ってこんなふざけた真似が出来るもんなのかい！？」

「イリスだけが特別なんだよ。最年少で執務官補となり、最年少でＡＡＡ＋ランクとなり、最年少で陸戦のエースの称号を貰った、数ある最年少記録の保持者。僕の自慢の部下だ！」

テスタメントちゃんに集中砲火してるクロノ君が自慢げに言う。

「褒めても何も出ないよクロノ！」

――ブレイズキャノン――

――炎牙崩爆刃――

標的をテスタメントちゃんからアルフさんへ変えたシャルちゃんとクロノ君。クロノ君の砲撃を避けた先の場所にシャルちゃんの炎の

斬撃が飛んできて・・・

「しま・・・っ！」

いきなり標的が変わっちゃった所為でアルフさんは対処しきれず直撃を受けた。爆発が起きて黒煙に呑まれたアルフさん。それを見て「アルフ！」フェイトちゃんが叫ぶ。黒煙の真下から落下を始めるアルフさんは意識が無いみたいで動かない。アルフさんを助けるためにフェイトちゃんが攻撃を止めて向かおうとした。けどそれが隙になっちゃった。

「これで撃墜２人目！」

――光牙閃衝刃――

離れているにも拘らず突きを繰り出したシャルちゃん。でも"キルシュブリューテ"の刀身から光の槍が放たれて、それは高速でフェイトちゃんを襲った。ギリギリで避けることが出来たけど、クロノ君のバインドがフェイトちゃんを捕えた。

アルフさんもバインドで落下が止まったけど、捕まったことには変わりない。シャルちゃんがすぐさまテスタメントちゃんの確保に動くけど、「１０秒もあれば辿り着ける」テスタメントちゃんはすでにジュエルシードのすぐ側。

「最後の３つも私が・・・ううん。私たちが頂く」

ジュエルシードに伸ばされるテスタメントちゃんの手。負けた。そ

う思った時、「っ！？」背筋が凍るほどの嫌な感じが私を襲った。空から届くゴロゴロっていう雷の音。空を見上げてみると、そこには真っ黒な穴が開いてた。

「なんだこの強大な魔力は・・・・！？」

「この魔法・・・。母さん・・・・！」

小さいながらもフェイトちゃんの声がハッキリと聞こえた。どこか怯えたような・・・母さん、っていう言葉が。

――サンダーレイジO・D・J――

その直後、その黒い穴からとんでもない魔力を含んだ雷が落ちてきた。

Ｅｐｉｃ１５狂い出す歯車～Ｔｈｅ　ＤｅｖｉＬ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

最後の３つのジュエルシードにあと僅かで触れる、というところでプレシアの干渉が入った。次元跳躍のサンダーレイジ。プレシアの雷撃は私、なのは達、イリスとクロノ、そしてフェイトとアルフをも襲った。それぞれに猛威を奮う前、「させない！！」第四聖典をブーメランのように頭上に投擲することで人数分の雷撃を迎撃。第四聖典に妨害された複数の雷撃は威力をある程度殺され、周囲に拡散、海面に落ちた。

「フェイト・テスタロッサ、アルフ！　撤退！　ジュエルシードは手に入れた！」

プレシアによって転送されそうになっていたジュエルシード３つを掴み取り、"神々の宝庫ブレイザブリク"へ即取り込む。で、戻って来た第四聖典を掴み取ろうとしたところにクロノとイリスが「逃がさない！」と追撃を仕掛けてきたが、

「「フォトンランサー・マルチショット・・・ファイア！！」」

「しま・・・っ！」

「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

後方からのフェイトとアルフのランサーの弾幕の直撃を受け、２人は海に落ちた。私に必死過ぎたのが失敗だったな。なのは達は今もなお私のケージによって捕獲中。先の次元世界と同じようにアースラもプレシアの雷撃によって何かしらの被害を受けているはず。邪魔する者は居なくなった。逃げるなら今。フェイトとアルフを引き連れ、その場より撤退。念のためにジャミング結界を展開。

「・・・にしても、あのクソババア！　一体何を考えてんだい！　管理局の連中ならいざ知らず、実の娘のフェイトにまで攻撃するって馬鹿じゃないのかい！」

「・・・アルフ。母さんの悪口は――」

「いいや！　今回ばかりは譲れないよフェイト！　テスタメントが居なけりゃ、あたし達はどうなっていたことか・・・！」

アルフはプレシアの行為に怒り心頭のようで、フェイトの言葉を遮って怒鳴りまくる。アルフの剣幕にフェイトは「母さん・・・」そうポツリと漏らし、黙ってしまった。あまり良くない空気だな。とりあえず「一度アジトに戻ろう」と２人の肩をポンと叩く。そしてアジトであるマンションへと着いてからもアルフの怒りは収まらず室内をウロウロ、ソファに座るフェイトもやはり母親のプレシアからの攻撃にショックなようで項垂れている。

「フェイト・テスタロッサ、アルフ。今後のことについて話をしよう」

マナーが悪いだろうが私はテーブルに腰を下ろし、そう呼びかける。フェイトは「うん」と居住まいを正し、アルフは「あいよ」とフェイトの隣に座った。プレシアへの不満・不安を横道――今後のことへと逸らしてやれば、少しは気が晴れるだろう。

「じゃあ始めよう。まず私たちのジュエルシードの回収数について。私が１３。あなた達が１１。高町なのは達が７。計３１個。ジュエルシード全部で間違いない」

「そうだね。母さんから聴いてた通りの数だ。・・・ねえ、テスタメント。同盟の約束事なんだけど・・・」

「ええ。全部を集めたら、私とあなた達とで半々に分ける。私が１５個で、あなた達が１６個。それでいいんだよね？」

「うん。母さんは最低でも１４個って言っていたから、それでいいよ」

それが私たちの間で取り決めた分配数だ。最低数１４。かつての次元世界ではその最低数でアルハザードへの道を切り開けるという話だったらしい。そこにプラス２つの１６個。私たちはそれで納得しているが、この同盟の約束事にはある問題がある。

それは「あなたの母親にはまだ話を通していないけどね」ということだ。私とのジュエルシード同盟はフェイトとアルフの独断だ。プレシアが拒否すればすぐさま私たちの間で争奪戦勃発だろう。

「ちゃんと話せば判ってくれると思うんだけど・・・」

「だからさ。一度会って挨拶をしたいんだよね。あなたの母親、プレシアって人に」

という名目のもと、グランフェリアの情報をプレシア本人に問い質す。そのためにはまず顔を合わせないとな。まともに話し合いが出来るとは期待していないが、ジュエルシードを餌にすれば多少は話せるだろう。

「危なくないかい？　あんたもプレシアの魔法の標的にされてたじゃないか」

「そう、だよね・・・。でもどうして母さんがあんなことしたのか判らない・・・」

私は判っているんだよフェイト。プレシア・テスタロッサの狙いが何なのか。ま、もし襲われたとしても私が勝つけどな。私とプレシアについて悩んでいる2人に「で？　会わせてくれるの？」と改めて訊いてみると、フェイトが少し黙考したあと「判った」と頷いた。

「集めたジュエルシードを渡さないといけないし。そのついでにテスタメントを紹介するよ。あ、それと・・もし母さんがテスタメントを傷つけようとしたり、私に攻撃するように言ったら私は・・・」

そこまで言ってフェイトは口を噤んだ。信じ合う仲間という関係ではないが、それでも共に戦った仲としては見てくれているようだ。

「その時は母親の言葉に従えばいい。アルフも。その代わり私も全力で抵抗するから。だからあなた達も全力で掛かっておいで」

そう笑ってやると、フェイトとアルフはポカンと口を開け呆けた。が、すぐに「負けないよ」フェイトは凛とした表情になり、アルフもまた「後悔すんじゃないよ」と犬歯を見せる笑みを浮かべた。ああ、それでいい。私のことを信じないでくれ。好きにならないでくれ。その方が君たちの為だ。

「ありがとう。じゃあ早速行こう、すぐ行こう」

というわけで、私たちはプレシアの待つ時の庭園へと向かうことに。マンションの屋上でフェイトが転移の儀式を行い、私たちは世界を越えて時の庭園へ。転移の浮遊感をこの身に受け、気が付けばそこは懐かしき時の庭園だ。らしくない緊張に両拳を握りしめ、フェイトを先頭に城内の廊下を歩く。

「――あの扉の奥、玉座の間に、私の母さん――プレシア・テスタロッサが居る」

「テスタメント。あんま無茶しないでおくれよ。ケンカを売ったり買ったりとか、さ。正直アイツは娘のフェイトにも容赦しない鬼だから。あんたを敵と見なしたらどんな目に遭うか判ったもんじゃないよ」

「アルフ・・・もう」

アルフの暴言をフェイトが窘める。だが私はアルフの味方だ。プレシアは実の娘であるアリシアだけしか見ていないし考えていない。フェイトを人形と蔑み、果てには大っ嫌いとまで言い放った。私は今でもあれを許していない。あの時のことを回想していると「じゃあ開けるね」フェイトに言われ、「お願い」と頷く。扉を開け、私たちは玉座の間へと足を踏み入れる。と、「フェイト」プレシアの声が。

「か、母さん。ただいま帰りました」

「・・・フェイト。部外者を連れて来るなんて。何を考えているの？」

明らかに敵意を向けてくるプレシア。フェイトは「ごめんなさい」と頭を下げて謝ったあと、私のことをプレシアに紹介した。ジュエルシード同盟のこと。回収に協力したこと。グランフェリアの情報を欲しがっていることを。そして説明し終えたフェイトは切り出した。何故私たちに魔法を仕掛けたのか。

「あれは仕方のないことよ。管理局の魔導師に奪われるわけにはいかなかった。正確に範囲を絞り込めなかったことについては母さんに非があるかもしれないわ。でもねフェイト」

プレシアの目に怒りが宿り、フェイトがビクッと怯えた。

「あなたとアルフが管理局員のバインドに引っかからなければ、巻き込まれることはなかった。母さんの言っていること、間違っているかしら」

「それは・・・」

確かにそれもある。だが、お前の性格からして仕置きの意が大きかったんだろ。怯えるフェイトを庇うかのようにプレシアとの間に立ったアルフ。私はそのさらに前に立つ。

「その件に関してはもうどうでもいいです。あなたがそう言うのならそうなんでしょう」

敵味方関係なしに魔法を撃ったことは本当にどうでもいい。もう済んだことだ。

「今の私とフェイト、アルフに必要なのはジュエルシード同盟においての内容です。受け入れてくれるか否か、それだけを教えて下さい」

問題はこの全てだ。プレシアの視線がフェイト達から私へと移る。フェイトへ対する怒りや憎しみといった負の感情は薄らいでおり、その代わり見下し感が生まれていた。

「そう。同盟、ね。・・・テスタメント、だったかしら。我が娘フェイトと、その使い魔アルフへの協力、感謝するわ。それでなのだけど、同盟における分配数についてちょっと話がしたいわ。時間、いただけるかしら？」

やはり来たか。そうだよな、半々ではなく全てのジュエルシードが

欲しいよな、お前は。私は「判りました」と首肯すると、プレシアはフェイトとアルフにここで待つよう言い、私には「ではこっちへ」と玉座の間の中央へと招いた。
フェイト達と軽く視線を交わし、私は招かれるままプレシアの立つ広間の中央へ。プレシアと向き合うと足元に魔法陣が浮かび上がり、「落ち着いて話せる場所へ向かうわ」プレシアが言うと同時、転移が始まった。

「・・・ここは・・・・！」

転移した先。そこはかつての決戦の場――時の庭園の最下層に位置する広間。目の前に立つプレシアは踵を返し、私からある程度距離を開けた後、こちらへ振り返った。それと同時。プレシアの手に杖が出現し、「ヴォルテックチェーン！」前方の足元に展開した魔法陣より雷撃の鎖を１０本と発生させ、私へ襲い掛からせた。

「落ち着いて話せる場所、ねぇ。これが話し合いだと？」

左手に第四聖典を携え、ソニックムーブでその場から離脱する。３本がその場へ突き刺さり、残り７本が私を追尾してきた。

「あなたのジュエルシードを全て渡しなさい。そうすればグランフェリアの情報をあげるわ」

「そうはいかない。ジュエルシードはこちらにとっても重要な物だからね」

フェイト達や管理局の目はない。なら少しは本気を出せるな。

――舞（コード）い降るは、汝（パシエル）の雷光――

私の本来の魔力光、サファイアブルーに輝く雷撃の魔力槍を４０基と展開。指を鳴らし「蹂躙粛清（ジャッジメント）！」号令を下す。と、パシエルは一斉に降り注ぎ、プレシアの雷の鎖を撃ち落した。驚愕に目を見開いたプレシアへ向け第四聖典を投擲。プレシアはハッとして杖を前方に掲げた。

――エクスディフェンダー――

プレシアは六角形がいくつも組み合わさったバリアを展開。遅れて第四聖典が着弾。干渉能力は無くとも第四聖典単体で十分な破壊力を有している。着弾点よりバリア全体に広がるヒビ。ジュエルシードの魔力を利用していない今、プレシアなど私の敵じゃない。ついにバリアを粉砕し、プレシアへと襲い掛かる第四聖典。が、プレシアに当たる前に第四聖典を手元に戻す。

「え・・・？」

「私の目的はあくまでグランフェリア。そしてグランフェリアを打ち倒せるほどの魔力を得るためのジュエルシード、最低１０個。そういうわけで、全部は渡せない」

私の目的を聴き、プレシアは「グランフェリアを、倒す・・・？」と信じられないと言った風に呻いた。

「そう。だからさ・・・グランフェリアの居場所、知っていたら教えてよ」

「フフ。そうなの。グランフェリアを倒す・・・。フフフ」

プレシアは心底可笑しいと言う風に笑い声を上げ始めた。その様子に何かあると思い、この空間一帯に魔力探査を行うと、今まで感じ取れなかったある魔力が引っ掛かった。心臓を鷲掴みされたかのような息苦しさ。バッと背後へ振り向いた瞬間、目の前いっぱいに広がる琥珀色の魔力。その色は正しくグランフェリアの魔力光だった。この小さな体を押し潰すかのようなプレッシャーに襲われる中、

「やってみるといいわ。私のグランフェリアを倒せるものなら倒して見せない」

プレシアの優越感に満ちた声が耳に届いた。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒フェイト†††

母さんとテスタメントがどこかへ転移してからしばらく。玉座の間の中央に母さんの魔力光である紫色の魔法陣が展開されて、母さんが転移してきた。でもテスタメントの姿は無い。アルフが『アイツ。まさかやられちまったんじゃ・・・』なんて信じたくないことを念話で言ってきた。

「『そんなの嘘！』か、母さん。テスタメントは？」

私に背を向けてる母さんに尋ねてみる。けれど母さんは無言で佇んだまま。聞こえてないのかな？って思って「あの、母さん・・？」と呼びかけてみる。それでも反応してくれない。そんな中、アルフが「フェイト。ちょっと下がって」って私を庇うように立った

「ねえ。フェイト」

ようやく母さんは喋ってくれた。慌てて「はい！」応じる。母さんはゆっくり私の方に振り返ってくれた。けど「っ！？」母さんの表情は怒り一色だった。体が震える。私、母さんを怒らせるようなことをしちゃったんだ。お仕置きされないと。

「あなた。同盟なんて勝手なことをして。ジュエルシード回収を手伝わせたことはまだいいとして、それを半々に分ける？」

母さんの持つ杖が鞭になる。鞭で打たれる痛みを思い出して、全身が強張る。鞭を振るって床を叩く母さんは「仲良くなんてしないで奪いなさい。何の為の魔法なの？」って、今度は私に向かって鞭を振るってきた。でも私の前にアルフが立っているからその鞭は「させないよ！」アルフに受け止められた。

「もうあたしのご主人様――フェイトは傷つけさせないよ！」

「邪魔だわ」

――サンダーウィップ――

母さんの足元に魔法陣が展開されてすぐ。鞭に電撃が走って、鞭を掴んでいたアルフが「うあああああああああッ！！？」感電した。全身からバチバチ放電してるアルフが鞭から手を放して、ゆっくりと仰向けに倒れた。すぐに「アルフ！！」駆け寄る。アルフは白目を剥いていて、完全に意識が飛んでる。

「フェイト。母さんは悲しいわ。私の願いの為に全てのジュエルシードを集めてくれると思っていたのに」

「あ、あの！　でも・・・母さんは最低１４個って・・・」

「そうね。でもそれで満足するわけないでしょ。私の娘なら全てを取って来るのが当然でしょう！！」

母さんがまた鞭を振るう。今度は私を護ってくれるアルフが居ないから「ぅぐっ！」右腕に当たる。そこから何度も体中を鞭で打たれる。痛みで何度も叫びそうになるけど、私が母さんの期待を裏切った所為だからと耐える。床に伏せて叩かれ続けて、どれくらい経ったのか判らなくなったとき、「お前ぇぇぇぇぇッ！！」目を覚ましたアルフが私に届きそうだった鞭を背中で受けて、私を護ってくれた。

「アルフ・・？」

「フェイト！　酷い傷じゃないか！・・・こんの・・・プレシアぁぁぁぁぁぁぁッッ！」

アルフが母さんに殴りかかりに行った。止めようにも痛みで声も出ないし動くことも出来ない。アルフはかなり殺気立ってる。下手すれば母さんかアルフのどっちかが大怪我をするかもしれない。アルフと母さんの距離が狭まったその時、

――雷槍迅穿衝――

2人の間の床下から天井へと琥珀色の砲撃が通過して行った。グランフェリアの魔力光だ。砲撃が着弾した天井から「テスタメント・・・！？」が落ちて来て、「あんた、どうして・・！？」アルフがジャンプして宙で抱き止めた。遅れて床下から黄金の槍を携えたグランフェリアが飛び上がって来て、宙に居るアルフをテスタメントごと槍で薙ぎ払った。

「え・・っ！？」

「「うあああああ！！」」

「ア・・・ルフ・・・！」

痛む体を押して立ち上って、床に叩き付けられたアルフとテスタメントに元へ向かう。その途中、床に降り立ったグランフェリアと目が合う。最初に口から出て来たのは「なんで・・・！？」だ。グランフェリアはそれには答えてくれず、私より先にアルフ達の元へ歩いて行く。

そしてアルフが胸に抱えているテスタメントの前髪を引っ掴んで、

アルフから引き離した。前髪を引っ張られて、目線の高さまで持ち上げられたテスタメントは「ぅぐ」って苦悶の声を漏らして、グランフェリアに向かって「離せ・・・」って呻く。

「はぁ。無様を通り越して哀れね。あまりに哀れすぎて同情するわ・・・！」

――雷纏鎧（らいてんがい）――

「があ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ッ！！！」

グランフェリアは全身から放電して雷を身に纏う。当然テスタメントにも雷が流れて、感電して絶叫した。放電を止めたグランフェリアは「ジュエルシードを渡しなさい」って呻き声を上げてるテスタメントに言い放った。

「ふざ・・ける・・・な・・・」

息も絶え絶えに拒否したテスタメント。するとグランフェリアはあの子を床に叩き付けて、槍であの子の右肩を突き刺した。痛みで悲鳴を上げるテスタメントだったけど、すぐに歯を食いしばって、ニッと笑みを浮かべた。やせ我慢だって言うのが判る。グランフェリアは「そう」と言って、槍を抜いたと思ったら今度は左肩を突き刺した。

「ぅぐぅぅぅあああああッ！」

「やめ・・て・・グランフェリア・・・」

あまりの光景に思考が止まっていたけど、ようやく気を取り直すことが出来た。私の知るグランフェリアじゃない。あんな酷いことを顔色1つ変えないで出来るわけない。なのに私の声が聞こえていないとでも言うようにグランフェリアは、「ほら。穴だらけになってしまうわ」って、今度は左の太腿に槍を突き刺した。

「あっが・・・あああああッ！」

「母さん！　やめさ・・せて！　このままじゃ・・・死んで・・しまいます・・・！」

玉座に腰掛けた母さんにやめさせるようにお願いするけど、「グランフェリア。早くその子からジュエルシードを回収なさい」ってやめさせるどころか推奨するようなことを言った。グランフェリアは「判ったわ」って槍を抜いて、またテスタメントを突き刺そうとした。

あれ以上は出血で本当に死んでしまう。そう思ったら私は「うわあああああ！」グランフェリアに突進していた。槍を持つ右腕に飛びつく。「フェイト。離れなさい」グランフェリアがそう言うけど、私は首を横に振って拒否。

「これ以上は・・・本当に、死んじゃう・・・から」

「・・・ふぅ。かつては戦略級の戦力を有し、人類最強の一角とまで謳われたあなたが、こんな子供に庇ってもらうなんて・・・本当

に哀れだわ」

グランフェリアから耳を疑うような言葉が出て来た。グランフェリアからテスタメントへ目を移す。戦略級の戦力。人類最強の一角。テスタメントは歯軋りしながら「黙れ・・・！」ってグランフェリアを鋭い眼光で睨み付けた。それが事実だと言うかのように。当然だけど私ってテスタメントのこと、何にも知らない。

「では、こうしようかしら」

グランフェリアが私を見下ろす。そしてテスタメントの血に濡れた槍の穂先を私の首筋に向けた。穂先が首に当たる感触。本当なら冷たいんだろうけど、テスタメントの血の所為で温かい。あの子の血が首から胸へ伝うのが判って、吐き気を催す。歯がカチカチ鳴る。初めて触れた、人間の血。

「フェイトの命を守りたければ、ジュエルシードを渡しなさい」

「なに・・！？」「え・・？」

グランフェリアの眼差しが今まで見たことのないような冷たいものになっているのが判って、もしテスタメントが断ったら殺される、って解ってしまった。テスタメントを見る。ジュエルシードの方を選んで、私を見捨てることだって考えられる。あの子の選択によっては私はここまで。でも「母さん！」実の娘である私の危機なら、母さんだってさすがに助けてくれるはず。

「・・・・・」

「母さん・・・・？」

母さんは無言のまま、肘掛けに頬杖をついてこっちを見守っている。まさか・・・母さんにまで見捨てられる？　うそだ、そんなの。だって親子なんだし。ショックを受けていると「痛っ？」首筋に痛みが。刺されたんだってすぐに判った。全身がまた強張る。すると「判った！」テスタメントが大声を上げた。

「ジュエルシードを渡す。・・・だからその子を放して」

テスタメントがそう言った後、何かボソボソと呟いたかと思えば、あの子の胸から光が溢れて、その光の中からジュエルシード数個が現れた。すると母さんがようやく「フェイト。こちらへ持って来なさい」喋ってくれた。グランフェリアも離れてくれたし、今なら手に入れることが出来る。けど「どう・・して・・？」母さんに応じるよりも先にテスタメントに知らずそう訊いていた。

「・・・・グランフェリアの手によって殺される人を、もう見たくない」

それが、テスタメントが私を庇ってくれた理由だった。悲痛な表情なテスタメント。私に迷いが生まれる。母さんの為に私はジュエルシードを集めるって決めた。なのにこんな酷い形でジュエルシードを奪うことになるなんて。

両拳を力いっぱい握りしめる。本当にこれでいいの。グランフェリ

アを横目で見ると、テスタメントにばかり意識が向いてる。けど離れたとは言え穂先は今もなお私に向けられている。拒絶したら、たぶん、やっぱり・・・。

（グランフェリアはこれまでに人を殺したことがあるんだ・・・）

「フェイト・テスタロッサ・・・構わない。持って行って・・・でないと、殺される・・・」

テスタメントのその言葉に私は「ごめん」一言謝って、ジュエルシード12個を両手で掬うようにして取る。そのまま母さんの元へ。母さんの前で両手を開いて、ジュエルシードを掲げて見せる。すると「よくやったわねフェイト。母さん、嬉しいわ」って微笑んでくれた。

今までなら素直に喜べていたのに、どうしてか胸には妙な痛みが。どうしてか決まってる。きっと今度はあの子たちからこんな風にジュエルシードを奪わないといけないんだ、と思ったから。

（ともだち・・・）

あの子たちに言われたその言葉が何故か今脳裏に過ぎった。

「でもおかしいわね。テスタメントの回収したジュエルシードは確か13個。1つ、足りないわ」

「あ・・・！」

母さんの言葉を聴いたグランフェリアが「もう1つはどこ？」ってテスタメントに穂先を向けた。

「私は持ってない。・・・今もなお覚醒中で、封印できないから放置したままだ」

「あの時の懐中時計・・・！」

すぐに判った。時間を戻すことの出来るジュエルシード。一定範囲内で魔法を使えば、術者や魔法が強制的に時間干渉を受けてしまうっていう。まだ封印できていなかったんだ。母さんとグランフェリアが視線を交わした後、「どこに在る？」ってグランフェリアが訊いた。少しの間、テスタメントは黙って「・・・それは言えない」って断った。

「フェイトがどうなっても構わないと？」

2人の目が私に向く。グランフェリアは相変わらず冷たくて、テスタメントは迷いや悔しさの色を湛えてる。テスタメントと目がバッチリ合う。するとテスタメントが「ごめん」と目線を外した。

「ダメだ。これだけは・・・言えない！」

キッパリ断った。それと同時、テスタメントは勢いよく立ち上がって、グランフェリアのお腹にその勢いを乗せた頭突きを繰り出した。けどグランフェリアは咄嗟に槍を水平に構えて防御。テスタメントは頭突きの体勢のまま回し蹴りを放つ。

でも当たるより早くグランフェリアが槍を薙ぎ払ってテスタメントを大きく弾き飛ばす。危なげに着地したテスタメントは槍に貫かれて開いた傷口から血を撒き散らしながらも、「燃えろ！！」足元を力強く踏みつけた。

――煌天発破――

するとグランフェリアの足元が大爆発を起こした。爆炎に包まれるグランフェリア。テスタメントは気を失ったままのアルフを脇に抱えて、「あなたも来なさいフェイト・テスタロッサ！」って私に手を伸ばした。

「馬鹿を言わないで。フェイトがあなたについて行くわけがないじゃない。そうでしょ？　フェイト」

母さんの鋭い目が私を射抜く。テスタメントについて行くか、母さんの元に残るか。母さんの為に私は居るのに。即答できなかった。胸の内がもやもやして、素直に母さんに頷くことが出来なかった。その返事の遅れが、最悪の結末を引き寄せてしまった。

――雷槍迅穿衝――

爆炎の中から琥珀色の砲撃が放たれてきた。爆炎は一瞬で消えて、砲撃は一直線にテスタメントとアルフへ。

「チッ。フェイト・テスタロッサ！！　早く！」

――ソニックムーブ――

テスタメントの姿が掻き消える。高速移動の魔法だ。だけど「遅いわ」グランフェリアの方がもっと速い。グランフェリアがテスタメントの背後について、「死なない程度に痛めつけるわね」槍を振りかぶった。

「だ、ダメぇぇぇぇぇぇッ！！」

"バルディッシュ"をサイズフォームで起動して、「ブリッツアクション！」高速移動魔法でグランフェリアに突っ込む。

≪Ｓｃｙｔｈｅ　Ｓｌａｓｈ≫

魔力刃による直接斬撃サイズスラッシュで、グランフェリアの槍を狙う。だけど「何をしているのフェイト？」母さんはそんな冷たい声と一緒に、私の両手首と両足首をバインドを仕掛けてきた。いきなりだったから「痛っ！」その場で転ぶ。頭上の方から「ごめん」テスタメントの謝罪の声がしたと思えば、ピピッと顔に何か温かいモノが飛んできた。

「・・・血？・・・っ！　テスタメント！！」

それはグランフェリアの槍にお腹を貫かれたことで飛び散った血だった。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒アルフ†††

「いたた・・・」

最悪だ。気を失ってたみたいだ。ちくしょう、グランフェリアの奴。まさかあたしに構わずテスタメントを攻撃して来るなんて。痛む体を何とか起こす。と、同時に「テスタメントは！？　フェイト！？」抱えているはずのアイツが居ないことに気付いて辺りを見回す。

「な・・・っ！？」

目を疑った。まず視界に入ったのはフェイト。フェイトは床に倒れ伏していて、鞭で打たれたんだって1発で見て判る程に全身がミミズ腫れだ。プレシアのババアへの怒りが再燃。だけどとにかく今は這いながら「フェイト！」の元へ急ぐ。フェイトは完全に気を失っていて、グッタリしてる。それに顔に血が。あのクソババア、血が出るほど叩きやがった。

「酷い・・・今回のは今まで一番・・・！」

バリアジャケットの破けた場所の傷にも血が滲んでる。傷の数も過去最高の多さだ。怒りで頭がどうにかなりそうだ。怒りの叫びをあげるのをどうにか抑えて、フェイトを横抱きにする。まずはフェイトの部屋へ運ぼう。

「テスタメントは・・・居ないのかい・・・？」

アイツの姿はどこにも無い。その代わり今さら気付いたけど「血な

のかいコレ・・・？」至る所に血溜まりがある。そしてここ玉座の間の出入り口に向かって点々と血の跡が続いてる。下手すりゃ死んでもおかしくないくらいの血の量だ。
嫌な想像が脳裏に過ぎる。テスタメントの死。グランフェリアはアイツを目の仇にしているようだし。まさか互いに殺し合うような関係とは思ってもみなかったよ。

「血の跡は・・・地下に続いているのか・・・」

玉座の間へ続く廊下を出てのT字の突き当たり。フェイトの部屋へ続く廊下とは反対方向――地下に降りるための階段の方へと血の跡が続いてる。テスタメントが逃げた時に出来たものであるように願いながら、あたしはフェイトの部屋へ。部屋に着いてすぐフェイトの手当を開始。まず血の付いている個所を濡れタオルで拭き取る。

（顔に付いてる血。フェイトのじゃない・・・？）

顔には一切の傷が見当たらない。ということは、この血はテスタメントのものだって考えるのが妥当か・・・。

（頼むよテスタメント。死んでんじゃないよ・・・）

血を拭き取った後、傷口に薬を塗るたびにフェイトは小さく呻き声を上げる。そのたびにプレシアへの怒りが憎しみへ、最終的には殺意へ変わって行くのが判る。包帯を巻き終えたらフェイトに布団を被せて、頭を撫でながら「ごめんよフェイト。あたしゃ、もう我慢なんないよ・・・！」そう謝って、部屋を後にする。

「たとえフェイトに嫌われようが恨まれようが憎まれようが・・・！」

ホントは嫌だけど、フェイトを守るためだ。ズンズン廊下を歩き、血の跡を辿って行く。着いたのは使われていない洞窟。時の庭園の地下内部にはこんなんが結構ある。その内の1つがここだ。洞窟の奥の方にグランフェリアの存在を感じる。足音と気配を殺しながら洞窟を進んで行く。

「・・・っ！（テスタメント・・・！）」

一番奥。そこにはプレシアとグランフェリア、そして天井から伸びる魔力のロープで両手首を縛られて吊られているテスタメントが居た。フェイト以上に酷い有様だった。両肩に両太腿、腹からも出血。遠目でも判る。グランフェリアの槍で貫かれたんだ。綺麗な紅い髪も血で濡れてボサボサだ。

（アイツら・・・！）

あのままじゃ本当にテスタメントが死んじまうよ。グランフェリアがテスタメントに槍の穂先を向けた。穂先が向いてるのは心臓。完全に殺す気だ。奇襲しようかって思ってたけど、そんなこと言ってられないね。

「プレシア！　グランフェリア！」

――フォトンランサー・マルチショット――

あたしに意識を向けさせて、すぐにフォトンランサー6発を一斉発射。それと一緒に狼形態に戻ってダッシュ。

――エクスディフェンダーーーー

プレシアはバリアを張って、グランフェリアは素手で握りつぶして対処。そんなに期待しちゃいなかったけどさ。もうちょっと苦労して防いでもらいたかったね。テスタメントの側に辿り着き、人型に戻ると同時、グランフェリアに蹴りを入れる。

槍で防御されたけど、「おらぁぁぁぁぁぁぁッ！！」その防御ごとグランフェリアを蹴り飛ばす。次はプレシアだ。本音を言えばここで潰してやりたいけど、テスタメントを逃がすのが先だ。

「バリア・・・ブレイクぅぅーーーーッ！！」

防御魔法を破壊する魔法、バリアブレイクを乗せた連続パンチ。時間を掛けりゃ破れるけど、今はテスタメントを助けないとね。最後の1発を叩き込んですぐ反転。今度はバインドブレイクを両手に乗せて、テスタメントを拘束してるバインドに手を掛ける。

「ごぼっ・・・アル・・フ・・」

「ちょっと待ってな！　今すぐ助けてやるから！」

血を吐き出しながらあたしの名を呼ぶテスタメント。意識はあるようだね。ダメージの度合いから言って無い方が良い気もするけどさ。

とにかくバインドを引き千切る。倒れ込みそうになるテスタメントを「おっと」抱き止める。
さっきも思ったけどさ、コイツ、フェイトよりちょっと背が高いけど、やっぱ子供だね。軽いよ。いや、血を失いすぎて軽いのかもしんないね。急いで治療しないと失血死しちまうよ。

「アルフ。あなた・・・！」

「プレシア。言ってやりたいこととかメチャクチャ有るけど、今はテスタメントを――」

「アルフ！」

「へ・・・？」

どこにそんな元気があるのか判らないってくらいに力強くドンッと数mほど突き飛ばされた。せっかく助けたのにこの仕打ち。文句を言ってやろうかと思ったんだけど、「あんた・・・！」あたしを突き飛ばした理由を見た。テスタメントの左胸から突き出ている血に塗れた黄金の槍の穂先。もしあのままアイツを抱えたままで居たら、あたしも一緒に貫かれていた。

「このまま殺してあげるわ」

「・・・ごふっ」

「あたしを庇ったのかいアンタは・・！」

確実に致命傷。槍を抜かれたことで倒れ込みそうになってるテスタメントに駆け寄ろうとした。だけどそれより早く「私たちの勝ちよ」グランフェリアが穂先をテスタメントに向けて、

――雷槍迅穿衝――

雷の砲撃をほぼ零距離でぶっ放した。視界が琥珀色の雷光でいっぱいになる。目を両腕で庇って守る。光りが治まって目を開けるとそこには大きな穴が開いていて、テスタメントの姿は無かった。

「やり・・やがった・・・お前・・・！」

グランフェリアの奴、テスタメントを殺しやがった。

「おまえ――っ！？」

――フォトンバレット――

飛び掛かろうとした時、背中に大きな衝撃が。目線をグランフェリアから自分の腹へ向ける。

「う・・・あ・・・！」

あたしの腹に穴が開いてた。遅れてそこから血が噴き出て、あたしも「げほっ」吐血した。振り向いて見ると、やっぱりそこには「プ

レシア・・・！」が杖の先端をあたしに向けて佇んでた。

「フェイトもあなたもダメね。フェイトはまだ使えそうだけど、あなたはもう要らないわ。消えてしまいなさい」

「げほっごほっ。テスタメントと同じように・・・あたしを殺す気かい・・・！」

腹を押さえたところで背中にも穴が開いてんじゃ血は止まらないね。あたしゃ純粋な生命じゃない分、すぐには死なない。けどいつか限界は来る。その限界が来る前に決めないと。プレシアに殺意を向けたら、「グランフェリア。フェイトの所へ行きなさい」プレシアがそう言った。

「判ったわ」

「ちょっ、待ちな！　げほっ。フェイトに何をしようってんだ！？」

グランフェリアには前科があるからね。絶対に良からぬことに決まってる。

「フェイトを洗脳するわ。テスタメントは死に、あなたも直に死ぬ。補助戦力が無くなるのだから、洗脳して強化するわ」

「ふ、ふざけんなッ！　何が洗脳する、だ！　フェイトはあんたの実の娘だろ！　なのに、なんでそんな酷いことが出来るんだよッ！」

プレシアはもう母親としての責任とか何とかを果たしてない。グランフェリアがここから出て行こうとしていたから「行かせないよ！」立ちはだかろうとした。なのに血を流し過ぎた所為で上手く足を動かせない。あたしの横を通り過ぎていくグランフェリアが「さようならアルフ」なんて言ってきた。

「お前！・・・ごほっごほっ」

痛みや吐血を無視してグランフェリアに飛び掛かろうとしたけど、

「さっさと失せなさい」

プレシアの冷ややかな声が耳に届いた直後。

――スパークジャベリン――

防御なんて無意味だって思えるくらいの砲撃が放たれた。

（ごめんよフェイト。必ず迎えに来るから・・・！）

着弾するより早く転移魔法を発動。転移先を設定してないからどこに飛ぶか判らない。だけど必ず。絶対にフェイトを迎えに、そして助け出す。だから待っててておくれ。この場からの転移が終わる瞬間。プレシアの魔法の衝撃と失血の所為で、あたしの意識は途切れた。

Ｅｐｉｃ１６星光と雷光は天壌を照らす～Ｔｈｅ　ＳｔａＲ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「うあ～。暇や～退屈や～寂しい～わ～死にそうや～」

自室のベッドに寝転がって右にゴロゴロ、左にゴロゴロ。ここ最近ルシル君が一日中家を空けとるから、勉強も自習ばかりになって退屈や。お昼ご飯も独りやし。・・・独りきり。ちょっと前までこれが普通やったのにな。

（ルシル君との生活がホンマに楽しいから・・・）

ご飯食べて、買い物して、お喋りして、おはようもお休みの挨拶も、ルシル君と一緒やから楽しくて嬉しくて・・・ホンマに幸せや。けどこの寂しいのももうちょっとの辛抱や。アイテム集めももう終わりやってルシル君は言うてた。その後の予定ははぐらかされてしもうたけど、このまま一緒に居れたらええなぁ。わたしがお姉さんで、ルシル君が弟。ホンマの家族になれば絶対に毎日楽しいはずや。

「早く帰って来んかなぁ」

ゴロゴロすんのをやめて仰向けになって、「ルシル君と喋りたいなぁ」天井を見つめる。そろそろ夕飯を作らなアカンなって思うたところに、２階からドスンってすごい物音がした。上半身を起こして「え？　なに・・？　なんや今の・・！？」耳を澄ませる。

「ルシル君、か・・・？」

車椅子に移って階段下まで移動して、「ルシル君・・・？」呼びかけてみる。返ってくんのは無言。ルシル君やったらちゃんと玄関から帰って来るし、もしかして泥棒？　もしそうやったらさっき声出してしもうたし。襲われたりでもしたらわたしやと抵抗も出来ひん。

「け、警察・・・！」

スカートのポケットに入っとる携帯電話を取ろうとした時、「うぅ」2階から呻き声が聞こえた。小さい声やったけど、「ルシル君！」の声で間違いなかった。もう一度名前を呼んでみる。そやけどルシル君からの返事は無い。ルシル君に何かあったんや、って直感が働いた。

車椅子から降りて、階段を腕の力だけでよじ上る。その間にも「ルシル君！」の名前を呼ぶ。時間を掛けて2階に上がって、這うようにしてルシル君の部屋へ向かって、そこで見たんは・・・

「ルシル・・・君・・・？」

フローリングの床に横たわっとるルシル君。でも様子が普通やなかった。床に広がる真っ赤な水。それはルシル君から広がってるもんや。思考が止まる。それはつまりただの水やなくて「血・・・？」それもルシル君が流しとる・・・。

「ルシル君・・・？」

綺麗な銀髪も白い肌も、そして服も赤く染まっててて酷い見た目で、ルシル君は眠ってるように横たわってた。這ってルシル君の側へ。近くに来てハッキリと判る、鉄のような・・・血の臭い。頭の中が真っ白になる。震える手でルシル君の頬に触ると閉じてた目が開いて、「はや・・て・・？」焦点の合わん目でわたしを見た。

「っ！　ル、ルシル君！　きゅ、救急車呼ぶから！」

今度は救急車を呼ぶために携帯電話を取り出そうとするけど、ガクガク震えて上手くいかへん。急がなアカンのに。早く病院に連れて行かなルシル君が「や・・嫌や・・」死んでまう。やっと携帯電話を取り出して１１９をコールしようとしたら「呼ぶ・・な・・・」ルシル君は口から血を零しながらわたしに手を伸ばそうとした。ルシル君の肩から血が流れ出てるんが判る。そこだけやなくて両太ももやお腹、胸からも。吐き気よりも真っ先に涙がブワッと溢れて来た。

「呼んだらアカンて・・。呼ばな死んでまうやんか・・・。このままやとルシル君・・・わたしの前から・・居らんくなってしまうやんか・・・！」

声が震える。そのままわたしは泣き出してしまう。

――女神の祝福（コード・エイル）――

涙で滲む視界の中、「ふぇ？」ルシル君が蒼い光に包まれるんが判

った。寒々しい色やのにどこか温かな光。涙と嗚咽がピタッて止まる。ルシル君は息も絶え絶えに「大丈夫だよ、はや・・て・・・私は・・居なくならない」ってニッて笑った。
それからちょっとの間、ルシル君は蒼い光に包まれてた。わたしはずっとそれを見守る。光が治まるとルシル君はゆっくり体を起こして、「死なないさ」ふら付きながらも立ち上った。

「ちょっ、ルシル君！？　起き上がって大丈夫なん！？」

顔色は幾分かマシになっとるけど、あんだけ血を流した所為かまだ悪い方や。床の血溜まりを見る。普通の人やったらこんだけ血を流してもうたら死んでまう。わたしの視線に気付いたルシル君は「ごめん、すぐ片付ける」って言うて、深呼吸を1回。そして左手を翳して、「氷結」と一言。すると血溜まりやルシル君に付いてた血が全部一瞬で凍りついて、雪のように散った。

「ふぅ・・。心配をかけた。・・私は・・もう大丈夫。一晩休めば・・・元通りだよ」

「ホンマに・・・！？」

微妙にフラついとるからそう確認してみると「もちろんだとも」ルシル君は自分の頬を両手で張った後、「ひゃあ！？」わたしをお姫様抱っこした。いきなり過ぎて悲鳴が出てもうた。「ごめんごめん」ってルシル君は謝ってくれるんやけど、ちょお笑おてる。

「いきなり過ぎやルシル君」

「一言断るべきだったって思う」

「そうやよ。・・・でもま、お姫様抱っこ、憧れやったし・・・うん、許す」

「あはは。そうか」

ルシル君にお姫様抱っこしてもらって1階へ。それから2人で夕ご飯を食べて、そしてルシル君は次の日のお昼過ぎまで爆睡した。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒イリス†††

結局、ジュエルシードの大半をフェイト陣営に奪われてしまった。医務官のティファに、先の戦闘で負ったダメージを治してもらったわたし達は、ミーティングルームに集まった。集まったのには理由がある。それはミーティングテーブルの中央に浮かぶ球体上のモニターに表示されている1人の女性について。

映し出されているのは、「プレシア・テスタロッサ。ミッドチルダはアンクレス地方出身の、大魔導師」だ。次元航行エネルギーの開発を専攻していた、大層な肩書を持っていたエリート。

「テスタロッサって。まさかこの女の人・・・」

「フェイト・テスタロッサの親族――母親だ。彼女自身、母さん、と言っていたしな」

なのはにそう答えるクロノ。現場に居たわたし達は確かに聞いた。フェイトが、母さん、と呼んだことを。それに登録データと先のアースラへ行った攻撃の魔力パターンが局のデータベースと一致したため、プレシア女史本人と断定。そのプレシア女史に向かってそう呼んだんだから、フェイトとプレシア女史は親子関係になる。でも実際は違う。すでにわたしがカリム（コネ）を使って調べておいた情報からして親子関係にはならない。

『リンディ艦長、クロノ。フェイトとプレシア女史の関係のこと、なのは達に話した方が良いのかな・・？』

『今はまだ止した方がいいだろう。変に真実を知って、これからの戦いに迷ってほしくない』

『そうね。おそらくフェイトさん達はこちらのジュエルシードを奪いに来るはずだわ。その時の迎撃になのはさん達を起用することになるでしょう。迷いが有っては勝てないわ』

わたしと同じ意見で良かった。わたしですらショックだったんだもん。本当に優しいなのは達がフェイトの真実を知ったら、絶対にこれまで通りとはいかなくなる。知るにしてももっと後、せめてこの事件が終わってから。それまでは隠し通さないと。だから今はフェイトと母親は親子なんだってなのは達に伝えておくことにしたんだ。

「・・・今日はもうこれで解散としましょう。なのはさん達もご苦労様でした。フェイトさん達に動きがあるまでは待機となります。しっかりと休んでください」

先の雷撃魔法について不安がっていたなのは達に、その術者のことを知らせるためのミーティングでもあった。テスタメント部隊やレーゼフェア達じゃないことを知り、なのは達から緊張が消えた。その代わり別の問題が発生しちゃったけど。フェイトとアルフにすら攻撃を加えようとした母親、プレシア女史。アリサとセレネ、エオスはかなり不機嫌で、なのはとすずか、ユーノは悲しそう。いま伝えられることを全部伝えて、本日最後のミーティングはこれにて終了、解散となる。

「「「「「「はい」」」」」」

なのは達が退室した後、リンディ艦長やクロノと今後の方針を話し合って、フェイト達の捕縛を最優先ってことが決定。そして夕飯をなのは達と済ませて、「気持ち良かったぁ♪」入浴を済ませて髪を乾かしていると、『休んでる最中にすまないな。緊急だ』クロノから通信が入った。

その内容としては、この世界に転移してきた魔力反応をキャッチしたとのことだった。入浴途中のなのは達はすぐに出撃できず（当たり前だよね）、わたしにお鉢が回って来た。

「（せっかく綺麗にしたのに・・・むぅ）了解です。用意するから待ってて」

『すまないな。反応が1つなんだ。おそらく――』

「テスタメント、か。なのは達じゃキツイか。すぐに行くよ。魔力

反応、逃がさないでね」

『ああ。判っている』

デスクの上に置いてある細い鎖を通した指環の首飾り――待機モードの"キルシュブリューテ"を手に取って、「行くよ」わたしはパジャマから騎士甲冑へと変身。部屋を出てエントランスのトランスポーターへ。その間にも『魔力反応はその場から動かない』って報告してくるクロノ。

「動かない？　それって生物なの？」

『おそらく、としか言いようがない。とにかく急いでくれイリス』

「了解！」

そしてわたしはトランスポーターから魔力反応の在る現場へと直接転移する。海鳴市は陽が落ち始めていて、しかも現場は街灯の無い林の中だから急いで発見しないと。"キルシュブリューテ"を起動させ、いつでも戦闘行動に入れるように警戒。探し物は労することなく見つけることが出来た。狼の耳と尻尾を有した、スタイルの良い女の子――アルフが地面に横たわっていた。

「アルフ！？」

アルフに駆け寄ってみる。まず一番最初に目に入ったのはお腹に開いた穴。傷口からして魔法によるものだ。けど非殺傷設定の魔法じ

ゃ付けられない傷。物理破壊設定で食らってる。完全な違法行為。魔法生命体である使い魔なら簡単には死なないけど、これを魔導師や一般人が受ければ致命傷だ。

「ううん。考えるのは後だ。こちらイリス。重傷のアルフを発見。ティファに連絡を」

『っ！　判った。すぐにティファレト医務官を向かわせる』

クロノはすぐに応じてくれた。ティファのことだからすぐには来ないかもって思っていたけど、ティファはすぐに来てくれた。肩に掛かるくらいの青髪。眠たそうに垂れ下がった黄金の瞳。局の制服に白衣を纏う、本局医務局トップの実力者。医療道具を入れたカバンをドサッと置くとすぐにアルフを診て、「これくらいならすぐ治せる」簡潔にそう告げて両膝立ち、横たわってるアルフのお腹に両手を翳した。

――ベーテンハイル――

ティファの両手から溢れ出す黄緑色の魔力がアルフのお腹を中心に全身へ広がってく。見る見るうちに小さな傷は治っていって、お腹の穴も少しずつだけど小さくなってる。デバイス無しでこれだけの治癒魔法が使える。だから眠ってのサボり癖があってもクビにならない。ティファの魔力光が消える。アルフの顔色が良くなってるのが判る。ティファは小さく「ふぅ」息を吐いた。

「イリスお嬢。私が患者を運ぶ。だからカバンをお願い」

「勤務中はそう呼ばないでよティファ」

「お嬢はお嬢。それは昔から変わらない」

アルフを軽々と横抱きにしたティファ。わたしはカバンを手に、アースラに転送されるのを待つ。そしてアースラに転送されるとティファと一緒に医務室へ向かい、途中でクロノと合流。ティファの後について医務室に入ると、「彼女の容体は？」クロノがティファに尋ねる。

「容体安定です。実に素晴らしい使い魔。マスターの腕が良いんだと思いますよ。使い魔特有の再生力を少し強化しただけで、すぐに回復しました。そろそろ意識が――」

「・・ぅ・・ん？・・・ここは・・・・！？」

ティファがフェイトをベタ褒めしてると、アルフが目を覚ました。アルフと目が合う。と、「局の騎士！？」目を見開いて、臨戦のためかベッドから転げ落ちた。んで、ヨロヨロと立ち上った。わたしとクロノは戦う意思が無いことを示すために両手を上げる。

「ちょっと待つんだ」

「わたしとクロノに戦う意思はないから」

ティファはティファで「大人しくして」アルフの両脇に腕を通して

ひょいっと持ち上げてベッドに寝かせた。そのあまりの呆気なさにアルフは抵抗も出来ずにされるがまま。けどすぐに「フェイト！」って暴れ出した。

「暴れちゃダメ」

――鎮めの舞花――

力づくで横にしたアルフに馬乗りになったティファ。アルフの額に手を置いて魔法を発動。花弁のように舞う魔力が室内に満ちる。「どうなってんだい・・・？」アルフは困惑しながらも暴れるのをやめて静かになった。範囲内の生命すべてを鎮静させる。どれだけ相手が興奮していても、ティファのこの魔法の前じゃ一発で落ち着く。

「クロノ執務官。イリスお嬢。効果は5分ですので、事情聴取は短めで」

「すまない、ティファレト医務官」

ティファが席を外し、わたしとクロノはアルフと話すために残る。クロノに『ここは同性のわたしに任せて』と言って、『判った』任されたことでわたし1人がアルフの側へ。

「じゃあ、話を聴かせてもらってもいいかな？　そっちにも何か事情があるようだしさ」

「・・・・何でも話すよ。その代わり条件が在るんだ」

「法に触れない限りなんでも」

「フェイトを助けておくれ。ただ、それだけさ」

アルフから語られた、テスタロッサ陣営の現状。内容は最悪なものだった。特にショックだったのは「テスタメントが・・・殺された・・・」ことだった。テスタメントはジュエルシードを全部プレシアに奪われ、グランフェリアと名乗る情報屋の物理破壊の魔法を受けて死んだ。

『アルフの話、どう思う？　わたしは事実だと思う。フェイトがプレシア女史――プレシアを恐れた理由、アルフの話とその現状から見れば、ね』

『僕も同意見だ。仕置きとして鞭で叩かれ続ければ嫌でも怯える。アルフの怪我を見てもそうだろう』

クロノの声色には怒りが含まれている。そういうわたしもプレシアの所業にキレそう。いくらフェイトがプレシアにとってただの・・・ああもう、ムシャクシャする。

「グランフェリア・・・。エイミィ」

『はいは～い』

「グランフェリアという情報屋について情報を集めてくれ。大至急

だ」

クロノの切迫した雰囲気に『りょ、了解！』エイミィは焦るように応じた。わたしとクロノは無言になる。あまりに想定外な事態に陥ってる。先に沈黙を破ったのは「・・・このこと、なのは達には話せないよね・・・」わたしだ。フェイトの真実でも相当なのに。テスタメントの死。これは結構キツイわ。でももう済んでしまったこと。過去は変えることは出来ない。ならいま思うことは・・・。

「お2人とも。時間です」

洗脳されている可能性の高いフェイトの迎撃、そして救出について思考を巡らせているところにティファが戻って来た。アルフはもう落ち着きを取り戻していると思うけど、ティファの医務官としての決定権にはわたし達は逆らえないから、医務室を後にすることに。

「失礼した」

「アルフ。明日、なのは達と会わせるから。大丈夫。あの子たちならきっとフェイトを助けてくれる。もちろんわたし達管理局も協力するから」

「っ・・・感謝、するよ・・・」

ふいっと顔を逸らすアルフ。素直になれるわけないか。ほんの少し前までジュエルシードを巡って敵対していたんだし。とりあえず明日、テスタメントの死とフェイトの真実を隠して、なのは達に事情

を説明しないとね。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒なのは†††

「フェイトちゃん。必ず助けるから。だから来て。ジュエルシードが・・・欲しいんでしょ」

時刻は午後１時。私はただ１人、海鳴臨海公園に来ている。昨夜、私たちがお風呂に入っている頃、シャルちゃんがアルフさんを連れて来た。それを知ったのは今朝。食堂でみんなで朝ご飯を食べている時で、ご飯を食べた後、アルフさんの居る医務室へ向かった。そこでアルフさんとお話しした。フェイトちゃんが今どういった状況なのか。それはとても悲しくて、辛くて、聴いているこっちが泣きそうになっちゃうくらいのお話。

――フェイトはグランフェリアって奴に洗脳されて、強化された状態であんた達のジュエルシードを奪いに来る――

だからこうして迎え撃つためにここに来たんだ。

――管理局が介入してきたあの日、フェイトの様子がおかしかったろ。あれもソイツの所為なんだ――

あれはショックだった。フェイトちゃんがまるでジュエルシードを集める為だけの人形のように思えて。

――こんなこと言えた義理じゃないけどさ。ホントのフェイトはす

っごく優しくて良い子なんだよ。だから・・・お願い、フェイトを助けて――

助けるよ。だって私も、みんなもフェイトちゃんと仲良くなって、友達になりたいから。目を閉じて、シャルちゃんとの特訓で学び鍛えた魔法、そして技術を脳裏で反復していると、『転移反応を感知。魔力パターンは・・・フェイトだよ！』アースラで待機してるシャルちゃんから通信が来た。目を開けて空を仰ぐ。途切れ途切れに浮いてる白い雲を突き破って現れた黄金に輝く雷が、海面に落ちた。

『なのは。フェイトのこと頼むわよ』

『私たちはきっと足手まといになっちゃうから、なのはちゃんにお願いするしか出来なくてごめんね』

『ううん。ちゃんと一緒に戦うよ。みんなの想いと一緒に』

空を飛べないアリサちゃん、機動力の無いすずかちゃんとユーノ君、デバイスの無いセレネちゃんとエオスちゃんもアースラで待機。もちろんアルフさんも。フェイトちゃんと戦わせることなんて出来ないし。だから私独りで戦う。

決意を新たに"レイジングハート"の柄を握り直すと、水煙の中からフェイトちゃんが姿を現した。前髪で隠れて見えない表情。でも感じる。今のフェイトちゃんは絶対におかしいって。そんなフェイトちゃんが顔を上げてこっちを見た。

「フェイトちゃん・・・！？」

両頬と額に羽のような模様が浮かんでいて、紫色に光ってる。そして綺麗な赤い瞳も微かに光ってる。アルフさんの言う通りグランフェリアって言う人に操られているんだ。

「（酷いよ。洗脳するなんて・・・）フェイトちゃん。私のこと、判る？」

呼びかけてみると、「接敵（エンゲージ）確認。バルディッシュ」フェイトちゃんは応じてくれず、ただそう言って"バルディッシュ"を変形させた。槍のような形になって、柄頭から光の翼が生えた。"レイジングハート"で言うシーリングフォーム。今まで感じたこともない威圧感がフェイトちゃんから発せられて、全身から汗が噴き出る。

「ピアッシングランサー」

「っ・・・！」

そう一言呟いたかと思えば、フェイトちゃんがものすごい速さで突進してきた。迎撃は無理だと判断して、"バルディッシュ"の突き攻撃を横移動することで回避。私の側を通り過ぎて行ったフェイトちゃんの動きに合わせて振り返る。１５ｍほど先で急停止したフェイトちゃんの周囲にはすでに放電する魔力スフィアが１０基と展開されていた。

「フォトンランサー・マルチショット・・・ファイア」

一斉に放たれてきた高速の魔力弾。今度は上昇してそれらを回避する。私もまた魔力スフィアを6基展開して、「ディバインシューター・・・シューット！」私を見上げてるフェイトちゃんに向けて発射。

≪Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ≫

フェイトちゃんの姿が掻き消えて、その見失う。シューターを操作して急停止。フェイトちゃんを捜す間もなく頭上からデバイスが変形する機械音が聞こえた。急いで後退。その直後、振り下ろされた"バルディッシュ"の魔力刃が目の前を通り過ぎた。
勢いを付けすぎたフェイトちゃんは前転して、私の顔の前にフェイトちゃんの横顔が来た。目だけを動かして私を見るフェイトちゃん。微かに光る瞳だけど感情が無い。胸が締め付けられるような悲しみを覚える。

「レイジングハート！」

≪Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ≫

さらに高速移動魔法で後退しながら「シューット！」シューターを再発射。足元から迫るシューターに気付いたフェイトちゃんは私への追撃をしないで急上昇。目でフェイトちゃんを追いながら、私は"レイジングハート"をフェイトちゃんに向ける。
けどフェイトちゃんは本当に速い。シューターがギリギリ追いつける程だから砲撃の照準が合せられない。結局、シューターは"バルディッシュ"の魔力刃で全弾真っ二つにされた。でも動きが僅かに

鈍った。

≪Ｓｈｏｒｔ≫

「バスタァァァーーーーッッ！！」

チャンスだと思って威力や射程をある程度犠牲にしてチャージ時間を短縮した高速砲撃、ショートバスターを撃ったんだけど、やっぱり瞬発力が圧倒的なフェイトちゃんもは避けられた。でもマントの裾は撃ち抜けた。ショートバスターの速度なら、距離が近ければ直撃できると確信。

「フォトンランサー。ファイア」

――フォトンランサー・マルチショット――

お返しとばかりにフェイトちゃんが魔力弾を１０発と放って来た。私は逃げの一手。下手に防御して距離を詰められて、近接戦に持ち込まれたら危ないから。一応、シャルちゃんから鬼のような近接戦の特訓を受けてるから圧倒的不利になるとは思えないけど、念のために、ね。

（追いかけて来たね、フェイトちゃん）

１０数ｍ上空から私を追いかけて来るフェイトちゃん。高低差による不利な状況。案の定、「フォトンランサー・フルオートファイア」魔力弾を空から連射してきた。飛行の軌道を一直線じゃなくてジグ

ザグにすることで命中されないようにする。魔力弾が海面に着弾することで水柱が次々と立ち上って、海水が雨のように私に降りかかってくる。

「レイジングハート。ディバインシューター、いくよ」

≪現状では彼女の姿をハッキリと捕捉できないため、命中率が著しく下がりますが≫

「ううん。フェイトちゃんに向かって撃つんじゃなくて・・・」

確かに空を見上げないとダメだ。でも違う。目線を数十m先の海面へ向ける。"レイジングハート"はそれだけで察してくれたようで、≪了解です、マスター≫って応じてくれた。フェイトちゃんの攻撃を避け続けながら5基のスフィアを展開。

「シューット！」

全弾を数m先へ一斉に放つ。シューターが着弾して大きな水柱が立ち上る。そのまま直進。水柱の中に突っ込んで急停止して、すぐに後退して水柱から出る。きっとフェイトちゃんは直進してるはず。だから「この辺りかな・・・」フェイトちゃんの飛行速度を考えて予想した軌道の先へ"レイジングハート"を向ける。水柱が崩れる前に、フェイトちゃんが私の狙いに気付く前に・・・

「ディバイン・・・バスタァァァァーーーーッッ！！」

撃った。水柱を消し飛ばして、バスターは一直線に狙い通りの場所に居たフェイトちゃんへ突き進んでいく。考えた通りに上手くいってくれた。水柱と水煙を利用してフェイトちゃんの視界から失せて攻撃から逃げる、ついでに私の攻撃の出だしを隠す目晦ましにして、命中率を上げる。でも正直これで決まるとは思ってない。ついでの理由は元々あんまり期待してなかったし。

――ブリッツアクション――

だからバスターを高速移動魔法で避けられても何とも思わない。私がフェイトちゃんの攻撃から逃れることが出来ただけで十分な成果。私は高低差を埋めるために急上昇しながら「シューター！」シューター6発を降下して来るフェイトちゃんへ向けて発射。フェイトちゃんは"バルディッシュ"の魔力刃で斬り裂いたり回避したりと対処しながら、距離を詰めて来る。

「ショートバスターッ！」

高速砲で迎撃。フェイトちゃんは飛行速度を全く落とさないで紙一重で回避した。距離を詰めれば詰めるほど回避し難くなるのに、それでも突進して来る。でも距離が縮まる前に高低差で有利になった私はスフィア5基を展開して、足元から追いかけて来るフェイトちゃんに一斉発射。シューターに対処してる最中に、「ショートバスターッ！」もう一度高速砲を撃つ。

「っ・・・！」

――ラウンドシールド――

ついにフェイトちゃんが防御に入った。高速砲を防御したことで生まれたその隙を逃さない。さらに高速砲を撃って足止めして、「シューット！」すぐにシューターを６発発射。１発を正面、１発は右、１発は左、１発は上、１発は下、もう１発は背後からの包囲攻撃。全弾じゃなくても半分くらいは当てられる。そう思った矢先、≪Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ　Ｍｕｌｔｉｓｈｏｔ≫って"バルディッシュ"が言ったのが聞こえた。直後、"レイジングハート"に≪マスター！≫切羽詰まった感で呼ばれた。直感と"レイジングハート"の意思が同時に働いた。振り向きざまにシールドを展開した瞬間、５発の魔力弾が着弾。

「きゃぁぁぁぁぁッ！？」

咄嗟だったからその衝撃に耐えられずに弾かれる。と、シューターの操作を一瞬でも怠ったことにハッと気づく。私はほとんど無意識にフェイトちゃんが居た方へ向けて"レイジングハート"を翳してシールドを展開。遅れて体の向きを直している途中で「はっ！」フェイトちゃんの声と一緒に≪Ｓｃｙｔｈｅ　Ｓｌａｓｈ≫魔力刃がシールドに当たった。

「っつ・・・！」

シールド越しにフェイトちゃんと顔を合わせながら、さっき放ったシューターの確認をする。６発のうち１発（軌道が一番大回りだったやつだ）しか残っていないけど、それで十分。シューターをもう

一度フェイトちゃんの背後へ。あとはフェイトちゃんがどう動くか。もう少しで着弾というところで、フェイトちゃんがハッとして背後に振り返った。そして柄から左手を放してシューターへ翳して、「ラウンドシールド」シールドを張る。力が緩んだ今こそ離れるチャンス。シューター着弾に合わせて≪Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ≫で後退。

「ショート・・・バスタァァーーーッ！」

すかさず高速砲でフェイトちゃんを狙う。そんなに離れてない距離からの高速砲。この距離なら防御も回避もまず出来ない。フェイトちゃんも例に漏れないはずだと思った。だけど≪Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ≫フェイトちゃんは片手で"バルディッシュ"を振るって魔力刃を飛ばした。魔力刃は砲撃を縦に真っ二つ斬り裂きながら、そのまま私へ向かって来た。

「うええっ！？」

まさかシャルちゃんと同じようなやり方で対処して来るなんて思いもしなかった。ディバインバスターに比べれば威力が低くて魔力密度も薄いショートバスター。それでも本気の砲撃だった。それを簡単に斬り裂くんだから、防御しても押し切られる可能性がある。そう判断して、横移動して回避。

「セイバーブラスト」

「きゃぁぁぁぁぁっ！！」

魔力刃とすれ違った瞬間、魔力刃がドンッ！と爆発を起こした。至近距離での爆発で生まれた衝撃波に煽られて、踏ん張りきれずに体勢を崩しちゃう。

「サンダースマッシャー・・・！」

そこに放たれたフェイトちゃんの砲撃が、目の前にまで迫って来た。体勢を整えれていないけど、「フラッシュムーブ！」無理やり高速移動。急速上昇することでギリギリ回避できたけど、すでにフェイトちゃんは追撃の為に私の目の前に移動して来ていて、

「はっ・・・！」

――サイズスラッシュ――

"バルディッシュ"を勢いよく振り上げてきた。フェイトちゃんの背後に回り込むように横移動で回避しつつ、"レイジングハート"を向ける。だけど切り返された"バルディッシュ"の薙ぎ払いで、「きゃあ！」"レイジングハート"を上に弾き逸らされた。フェイトちゃんの左手の平が、両腕を掲げてしまってがら空きな私のお腹に翳される。

≪Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ　！≫

≪Ｐｈｏｔｏｎ　Ｂｕｌｌｅｔ≫

シールドが展開された瞬間、フェイトちゃんの左手の平から1発の

魔力弾が放たれた。たったの1発。そう思ってたけど、その1発でシールドが破壊されちゃった。ピシって音がした瞬間に体を逸らしたおかげで直撃は免れたけど、フェイトちゃんの攻撃は続く。振るわれる"バルディッシュ"の一撃を"レイジングハート"の柄で受け止める。

「ぅぐ・・・！（重い・・・・！）」

連続で振るわれてくる一撃一撃を、柄で防御して応戦。距離を開けようにもそれを許してくれない。シャルちゃんとの近接戦の特訓を受けてなかったら危なかった。何度目かの鍔迫り合いの最中・・・

「せぇぇぇいッ！」

「ぐっ・・・・！」

フェイトちゃんに頭突き。額に小さなシールドを張っていたおかげで私に痛みは無い。けどフェイトちゃんは頭突きが予想外だったのか直撃を受けて、少しふら付いた。今のうちに距離を開けよう。高低差を考えてもっと上に。そう思って上昇したら、「え・・・！？」足首をフェイトちゃんに掴まれた。そしてジャイアントスイング？みたいにブンブン回されて、ポイッと放り投げられた。

「ぅく・・・・！」

視界がグルグル回る。なんとか体勢を整えたんだけど、その時にはもう手遅れ。目の前に現れたフェイトちゃんに「ぐっ・・・・！」裏

拳で顎を殴られた。さっき以上に視界がグルグル、グニャグニャ。脳震盪を起こしたんだって揺らぐ思考の中で判った。

「これで終わりだ」

――サンダースマッシャーー――

目の前に現れる黄金の魔法陣。何をすることも出来ずに砲撃を受けちゃった。唯一の救いは、"レイジングハート"が直前でバリアジャケットの防御力を上げて私を護ってくれたこと。だから私は何百mと吹き飛ばされて、森林の中に突っ込んで樹に叩き付けられても気を失わず、「痛っ・・・でも、まだ戦える・・・！」軽い全身打撲だけで済んだ。体のあちこちが痛いけど、手も動くし足も動く。

『なのは！　大丈夫なの！？』

『なのはちゃん！』

アリサちゃんとすずかちゃんから私を心配してくれる念話が。２人からだけじゃなく、ユーノ君たちからも『大丈夫！？』そういった念話が送られてきた。私は『大丈夫だよ。ちょっと体が痛いけど、まだ戦えるっ！』元気いっぱいに応えた。そうしたらみんなはホッと安心してくれた。ありがとう、私は大丈夫だよ。

「フェイトちゃん。やっぱり強いね」

≪はい。魔導師としてのレベルではまだ負けています。ですが――≫

「それでも勝たないとね。フェイトちゃんが可哀そうだもん」

森林のずっと奥、海上に居るはずのフェイトちゃんへ目を向ける。よし。とにかくフェイトちゃんに勝つ。洗脳を解くためにも、まずはそれからだ。"レイジングハート"を杖代わりに立ち上った。その時、「高町なのは」背後から私を呼ぶ声。

この声は「テスタメントちゃん！？」のものだ。周囲を見回してその姿を捜すけど、見つけられない。アルフさんとシャルちゃんに聴いた限りじゃテスタメントちゃんはジュエルシードを持って逃げたって話だったけど。

「シッ。静かにして、ステルスの魔法で姿を隠してるから、あなたには見えないんだ。とにかく今は私の話を聴いて。フェイト・テスタロッサを元に戻す協力をしたいんだ。オーケーなら1回頷いて。拒否するなら首を横に振って」

願ってもない提案だった。私は口を噤んで、コクリと頷いて見せた。アリサちゃん達やシャルちゃん達にも報せた方が良いと思ったけど、テスタメントちゃんの切羽詰まった様子にそれが出来なかった。

「今からあなたのデバイスに、グランフェリアの施した術式を破壊するアンチ術式を施す」

テスタメントちゃんの話はこうだ。今のフェイトちゃんは特別な術式のバリアで護られてる。それがある限り、フェイトちゃんは墜ちない。だからまずはそのバリアを破壊するための術式が付加された

私の魔法で打ち破る。
そして洗脳術式も同じようなやり方で破る、って。話を聴いてる間、あちこちで爆発が起きた。きっとフェイトちゃんが私を捜してるんだ。見えない「テスタメントちゃん」に急かすようにお願いする。

「それじゃあレイジングハートを掲げて」

「うん」

言われる通りにする。

――破り開け（コード）、汝の破紋（メファシエル）――

――呪われし者（コード）に、汝の施し（ラファエル）を――

"レイジングハート"が薄らと銀色の光を帯びた。

「それで大丈夫。レイジングハートに付加した術式は2つ。だけどこれには問題がある。共に攻撃魔法にのみ、そして一度限りの効果しか発揮できない。1発目で障壁破壊。2発目で洗脳破壊になる。つまり――」

「チャンスは両方とも1回限り、ってことだよね」

「そういうこと。しかも両方、あなたの全力に近い攻撃じゃないと意味が無い」

それはかなり難しい。未だにフェイトちゃんに魔法を直撃させることが出来ていない。けど成功させないとフェイトちゃんを元に戻せない。だったらやるしかない。

「私に出来るのはここまで」

「ありがとうテスタメントちゃん。あ、でもあとで必ず会おうね。テスタメントちゃんのジュエルシードを回収しちゃいたいから」

去って行く気配がしたから、テスタメントちゃんに向けてそう言う。返事は無いかなって思っていたけど、「高町なのは」応じてくれた。

「・・・これからフェイト・テスタロッサは自分の真実を知って、心に大きな傷を受ける。あなた達もまたショックを受けると思う。けど、それでもフェイト・テスタロッサの友達になりたいって思い続けてほしい」

「え？　どういうことテスタメントちゃん・・・？」

「あの子の心を支えてあげてほしい。友達として、仲間として。これからずっと」

それだけを言ったテスタメントちゃんはこの場から去ったようで、その気配が消えた。フェイトちゃんの真実？　それで私たちもフェイトちゃんもショックを受ける。どう意味かはまだ解らないけど、今はとにかくフェイトちゃんを助けることに専念する。

爆発が近くなって来てる。飛行魔法――フライヤーフィンを発動し

直して、木々の上に出ないように地面スレスレを飛んで海上を目指す。下手に出て狙い撃ちされるのも嫌だし。森林から飛び出て、海上に到着するより早く高度を上げる。

≪マスター。後方５時、距離１２０ｍ、高度１９ｍに魔導師です。高速射撃魔法をスタンバイしています≫

"レイジングハート"の報告に「ん」って応えた時、「ファイア」その号令の下、魔力弾が６発と飛来してきた。大きく弧を描くようにさらに上昇。天地が逆さまになる中、フェイトちゃんの姿を確認。どうにかして動きを止めないと。一応、手は考えてある。あとはそれを実行できるようにすればいい。

（フェイトちゃん・・・？）

ふと、フェイトちゃんが一切の戦闘行動をやめていることに気付く。両腕を垂らして、俯き加減。どうしてか判らないけど、これはチャンスかもしれない。そう思って"レイジングハート"を向けたその時、フェイトちゃんの姿が掻き消えた。次に現れたのは私と同じ高度。距離は大体１１０ｍ前後。スッと顔を上げたフェイトちゃん。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル・・・」

そんな詠唱が聞こえた。フェイトちゃんの周囲に現れる３０基以上のスフィア。

――ライトニングバインド――

「え・・・！？」

その圧倒さに驚いてしまっていた所為でバインドに気付くのが遅れた。しかもかなり堅い。破壊するには時間が掛かる。だけどフェイトちゃんがそんな猶予を与えてくれるとは思えない。

「撃ち砕け、フォトンランサー・ファランクスシフト・・・・ファイア」

スフィア１基１基から幾つもの魔力弾が飛来してきた。並の防御じゃ確実に墜とされる。でも「レイジングハート！」やユーノ君と一緒に考えて組んだ、あの魔法でならきっと。

≪Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ≫

対雷撃系魔法に特化したバリアが私の前面に展開される。直後、ものすごい勢いで魔力弾が殺到してきた。次々と着弾していく。それをバリアを挟んで見ることになってる私。これ、かなり怖い。破られない自信はある。でも「ひゃぅ」着弾音や衝撃は感じるから、すごく恐ろしい。というか、一体どれだけの数が撃ち込まれて来るんだろう。確実に１０００発は超えてる。

（あ、フェイトちゃんのバインドが・・・）

攻撃が止むと、私を捕えていたバインドがすぅっと音も無く消えて

いった。ようやく自由になれた。よし。今度は私の番だよ、フェイトちゃん。手加減無用でやるからね、フェイトちゃんと同じように。煙幕の向こう側に居るフェイトちゃんへ"レイジングハート"を向け、チャージ開始。

フェイトちゃんの側にはまだかなりの魔力を感じる。きっと今ので決められなかった時のための保険。でもそれをも上回って見せる。

「あ、テスタメントちゃんの魔力が」私の魔力に交じるのが判る。

「（１発目で防御破壊、２発目で・・・洗脳を解く！）行くよ、レイジングハート！」

≪はい、マスター！≫

「ディバイン・・・」≪Ｄｉｖｉｎｅ≫

煙幕が晴れ始める前に、

「バスタァァァァーーーーーーッッ！」≪Ｂｕｓｕｔｅｒ　！！≫

砲撃を放つ。ディバインバスターをまるでコーティングするかのような銀色の魔力が薄ら見える。バスターは煙幕を完全に吹き飛ばして、私が無事だったことに目を見開いて驚いてるフェイトちゃんへ一直線。けど気を取り直したフェイトちゃんは周囲に浮かぶスフィア２０基ほどを集めて、とても長い雷撃の槍にした。

「スパーク・・・エンド・・・！」

投擲された槍はバスターと真正面から衝突。フェイトちゃんの槍もすごい魔力を有してた。けど、私のバスターの方が上だった。拮抗は僅か数秒。バスターは槍を呑み込んで、フェイトちゃんへ。今の槍によほど自信が有ったようで、槍がバスターに呑まれちゃってフェイトちゃんは呆然と佇んだまま。そしてバスターの直撃を・・・

「あっ・・・！」ギリギリでシールドで防いだのが見えた。

「（でも負けない。このまま押し切って見せる！）いっっっけぇぇぇぇぇぇぇッ！」

魔力を絞り出して、バスターの放射に回す。それでも槍以上に拮抗しちゃう。でもようやくガシャンとガラスが割れたかのような音が耳に届いて、バスターがフェイトちゃんを呑み込んで大爆発を起こした。今のできっとバリアが解けてるはず。なら次は、洗脳を解くための全力全開の魔法だ。最後の一撃の準備を始めるために高度をグッと上げて、眼下の煙幕を見詰める。煙幕の中からフラフラと飛び出してきたボロボロなフェイトちゃんを視界に収める。

≪Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ≫

そんなフェイトちゃんにバインドを掛ける。ここまで来て最後にこの一撃を外したくない。

「レイジングハート・・・アレ、行けるね・・・？」

≪もちろんです≫

「よし。じゃあ始めよう・・・！」

知恵と戦術、とっておきにして最後の切り札。"レイジングハート"と一緒に頑張って組んだ、砲撃魔法の最高位。大気に満ちる使え切れなかった私とフェイトちゃんの魔力を私の元に集めて、自身の魔力も一緒に合わせて放つ、集束砲撃。私の前方に生まれる桜色の巨大な魔力。それにまたテスタメントちゃんの銀色の魔力がコーティングされる。

「フェイトちゃん！　今、助けるから！！」

"レイジングハート"を掲げ、

「スターライトぉぉ・・・！」

前方の魔力へと振り下ろす。

「ブレイカァァァァァーーーーーーーーーッッ！！」

≪Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ　！！≫

魔力は一瞬収縮して、前面に展開されていた魔法陣を砲門として発射された。

「う、うわあああああああああああああああッッ！！」

――マルチディフェンサーーーー

絶叫したフェイトちゃんが五重のシールドを張ったのが僅かに見えた。けど、ブレイカーはなんの抵抗も受けずにフェイトちゃんを呑み込んで海面に着弾、大爆発を起こした。

「はぁはぁはぁはぁはぁ・・・！」

正真正銘、私の全力全開の魔法。もう戦えるだけの魔力も体力も残ってない。大きく肩で息をしながら眼下を見下ろす。と、煙幕の下からフェイトちゃんが力なく落下して、海に落ちた。

「フェイトちゃん！」

急いで救出に向かう。海面に飛び込んで、沈んで行くフェイトちゃんと"バルディッシュ"を抱えて海上へ。

「フェイトちゃん・・・」

両頬や額に浮かんでた羽の模様はもうどこにも無い。あとは気が付いたフェイトちゃんが正気かどうかを確かめるだけだ。横抱きにしたフェイトちゃんの顔を伺っていると「ぅ・・ん・・うう・・・あ・・・！？」少し唸った後、フェイトちゃんがゆっくり目を開けた。

「フェイトちゃん！」

「っ・・・君は・・・。私・・・そうか、負けたんだ・・・」

フェイトちゃんの瞳に宿る感情。妙な光も灯ってない。良かった、洗脳はちゃんと解けてくれたんだ。安堵でいっぱいになる。

「えっと、今までのこと、憶えて・・・？」

「うっすらとだけど・・・」

フェイトちゃんの瞳が悲しみ色に染まる。グランフェリアっていう人に操られてから今までのことを憶えてるんだ。アルフさんも言っていた。フェイトちゃんのお母さんの命令で、フェイトちゃんは洗脳されたんだって。それを思い出してるんだと思う。

『なのは。雲行きが怪しい。すぐにフェイトを連れて帰艦して』

「う、うん。判った」

シャルちゃんにそう応じたその時、真っ黒な雷雲が立ちこみ始めた。

Ｅｐｉｃ１７非情なる真実～５　ｏｆ　ＰｅｎｔａｃｌｅＳ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

なのはとフェイトの決闘は、なのはの勝利で終わった。少し危なげだったけど、ちゃんと勝ってくれた。しかも集束砲なんて、いつ覚えたかも知れない魔法によって。何か隠れて魔法を組んでいるなぁって思ってたけど、まさか集束砲とはね。

モニターで観戦してたわたし達アースラスタッフや協力者のアリサ達はホッと安堵の息を吐く。だけど、なのはの勝利を祝う時間すらわたし達には無かった。ブリッジ内に警報が鳴り響く。

「なのは。雲行きが怪しい。すぐにフェイトを連れて帰艦して」

『う、うん。判った』

モニターに映るなのは達の上空。ものすごい勢いで雷雲が生まれて、渦を巻いて広がって行く。

「来たっ！　高次魔力を確認。魔力パターンは・・・プレシア・テスタロッサのモノと一致！　戦闘区域に次元跳躍攻撃・・・！　急いでなのはちゃんとフェイトちゃんを収容しないと！」

エイミィの切羽詰まった報告がブリッジに木霊する。と、なのは達の転送が始める。だけどそれよりも早く紫電が降り注ぎ始めた。なのは達を包囲、徐々に距離を縮めていく。転送完了が先か着弾が先

か。モニターに映るなのは達を見ているしか出来ないことに歯噛み。あと数mでなのは達に直撃すると言うところで、なのはがフェイトに覆い被さるように身を屈めた。

――渦炎之煉圏――

直後、なのは達の頭上スレスレに炎の渦が発生した。そしてプレシアの雷撃が炎の渦に着弾。だけど撃ち抜けない。いくつもの雷撃が集中的に降り注いで、ようやく炎の渦を削った。

「なのはちゃんとフェイトちゃんの転送完了！」

でも遅かった。エイミィが嬉しそうにそう報告。ブリッジに改めて安堵の空気が満ちる。わたしも「よしっ！」2人の無事を喜んでアリサ達とハイタッチを交わす。そんな中、アルフはそわそわとわたし達の居るブリッジ高台のトランスポーターに目をやってる。フェイトを迎えに行きたいんだろうけど、局員の同行がないと自由に動けない。そして今は第一戦闘配置中。クロノかリンディ艦長の許可無しじゃわたしもブリッジから出られないため、我慢してもらおう。

「エイミィ！　魔力発射地点は確認できて！？」

「あ、はいっ。空間座標を・・・確認しました！」

「転移座標を固定！　いつでも出動できます！」

待っていた。プレシアの居る時の庭園の居場所を突き止める、この時を。次元空間に存在している時の庭園の正確な座標のことをアルフは知らなかった。だから必要だった。時の庭園の座標をわたし達に知らせるプレシアの次元跳躍魔法が。

「突入部隊はトランスポーターから出動！　任務は、プレシア・テスタロッサの身柄確保です！」

リンディ艦長が艦内放送で時の庭園に突入する武装隊にそう言い渡した。プレシア確保に動く武装隊が映し出されているモニターから目を逸らさないまま「エイミィ。今の炎の魔法、まさかとは思うが・・・」エイミィの側に居るクロノが確認した。そう。それはわたしも考えてた。プレシアの強力な雷撃を防ぎきれるだけの魔法を扱える炎熱変換持ちの魔導師は、わたしが知る中じゃただ1人。

「ちょっと待って・・・うんっ、テスタメントちゃんの魔力パターンで間違いないよ！」

テスタメントが死んだって思っていたわたしやクロノ、リンディ艦長にエイミィ、そしてアルフは驚愕した。アリサ達はさほど驚いてない。なのは達にショックを与えないように、テスタメントは逃げたって嘘を伝えていたんだし。
にしてもアルフの話じゃ両肩・両太もも、胸にお腹を槍で貫かれたってことだったよね。咄嗟に砲撃を避けようにもそれだけで死んでもおかしくないのに。一体どうやって・・？

「そうか。『どうやらテスタメントの動向にも注意しないといけな

いようだな』」

『だね。奪われたジュエルシードを取り返しに来るだろうし』

『ああ。だがこれはある意味チャンスだ。テスタメントも一緒に逮捕できるな』

勝つことが出来れば、って付くよクロノ。けどま、今度は絶対に負けてやらないけど。と、そこになのはとフェイト、その付き添いとしてティファがブリッジに到着した。フェイトは無地の囚人服に着替えさせられていて、手錠をかけられてる。

「フェイト！」

「「なのは！」」「なのはちゃん！」

アルフを先頭にアリサ達がなのは達のところへ。アルフは泣きながらフェイトに抱きつき、「よがっだよ～」嗚咽交じりにフェイトの無事を喜ぶ。アリサ達はなのはと笑みを交わすことで、決闘の勝利とフェイトの解放を喜び合ってる。

『お疲れ様、なのはさん。来て早々で申し訳ないのだけど、みんなにお願いがあります。フェイトさんを別室へ連れ出してあげて。母親が逮捕される瞬間を見せるのは酷だわ。・・・イリス。あなたが同行して』

リンディ艦長からの念話での指示に『了解です』と応える。真っ先

になのはが「フェイトちゃん。良かったら私たちの部屋に行こう？」って誘った。

「そうね。一度あんたとちゃんと話がしたいわ」

「うん。私もフェイトちゃんとお話ししたいな」

「「うんうん。好きな物とか好きな物とか好きな物とか♪」」

「好きな物ばっかりじゃないか2人とも」

「そうだね。ねえ、フェイト。この子たちの言う通り行こうよ」

アリサやすずか、セレネにエオス、アルフからもそう誘われたけど、フェイトはそれに応えず、ただじっとメインモニターに映るプレシアと武装隊を眺める。玉座に座るプレシアは包囲されようとも余裕を崩さず、うっとおしそうに隊員たちを見下ろしてる。

隊員たちがプレシアに罪状を告げ、そして武装解除して投降するように呼びかけた。そんな中、別小隊が玉座の間の奥に在る扉へと突入した。モニターが分割される。1つは玉座の間、もう1つは扉奥。扉奥に突入した隊員たちから送られてくる映像に、真実を知るわたし達は、しまった、と歯噛み。

「「「「「「え・・？」」」」」」

なのは達は大きく目を見開いて、モニターに映るあるモノに釘づけだ。そこは奥行きのある部屋で、両壁には生体ポッドが十数基、ズ

ラリと並んでいる。そして部屋の中央、ただ1基だけが屹立している。その中身こそ、なのは達が驚き、わたし達が悔いる理由。モニターを勝手に切れるだけの権限が無いわたしは、フェイトにこれ以上話を聴かせない方法として無理やり気絶させるかどうか迷った。玉座の間の映像に動きがあった。プレシアは自分を包囲する隊員たちを雷撃で一瞬にして戦闘不能にしたあと、

『私のアリシアに近寄らないでッ！』

悲鳴じみた大声を上げて、ポットの前に居る残りの隊員たちを雷撃で戦闘不能にした。さすが条件付きとは言えＳＳランク。あまりに圧倒的な攻撃力に、心底驚愕した。

「アリ・・シア・・・？」

フェイトが漏らす。そう。生体ポッドの中身は裸の少女――アリシア・テスタロッサ。プレシアの実の娘にして、フェイト・テスタロッサの・・・オリジナルだ。

『欲を言えば全てのジュエルシードが欲しかったのだけど、もういいわ。２３個もあれば、アルハザードへの道は開けるでしょう』

「「「アルハザード！？」」」

アリシアのポッドに寄り添ったプレシアの独白に出て来た単語に、わたしとクロノ、リンディ艦長は今日一番の驚愕。アルハザード。忘却の都、禁断の秘術が眠る地、だとかいろいろ謳われる、もはや

伝説とまで言われる世界の名前だ。リンディ艦長が「一体何を目的としてアルハザードを目指すのです！？」ってプレシアを問い質した。

『何を？　決まっているでしょう？　私の愛おしい娘、アリシアを蘇らせるのよ』

それがプレシアの目的だった。ジュエルシードの魔力で、次元の狭間のどこかに今もなお眠ってるっていう何の確証もない噂を信じてアルハザードへ行き、そこに眠る秘術でプレシアを蘇らせる。なんて馬鹿馬鹿しい大博打。ジュエルシード２３個を同時に発動させたりなんかしたら、一体どれほどのシャレにならない災いが起きるか、判るでしょうが。

『もうたくさんなのよ。アリシアの代わりとしてフェイトを――全く役に立たない真っ赤な偽者を娘扱いするのは』

「偽者・・・？」

『そこに居るのね。いい機会だわ。ええ、そうよ。あなたのことよ、フェイト。せっかくアリシアの記憶を与えたと言うのに、見た目だけしか似ていない、正にお人形」

フェイトの呟きを聴いてそう答えたプレシア。もうダメだ。ここまで来たら、フェイトに聴かせないって選択肢はもうない。だからわたしは告げる。プレシアがムチャクチャなことを言いだす前に、わたしの口から・・・教える。

「プレシアが放逐された原因の魔導炉暴走事故の時、難しい話は省くけど、それに巻き込まれたプレシアの実の娘、アリシアは亡くなったの。その後、プレシアはある技術の研究を行い始めた。使い魔を超えた人造生命の生成、そして死者蘇生の技術。記憶転写型特殊クローン技術・・・プロジェクトF・　A・　T・　Eっていう技術を。その研究の成果が・・・」

フェイト・テスタロッサ。彼女の真実。プロジェクトF・　A・T・　E。稀代の天才、プライソンが提唱・研究した技術。プライソンは性別・年齢・容姿・出身世界、現在の行方と言った個人情報を一切不明とする人物だ。わたしが説明を終えると、プレシアは『ええ。その通りよ』と認めた。

そしてプレシアはアリシアの思い出を語り出す。アリシアとフェイトを差別するために。フェイトと違ってアリシアは優しく笑う、フェイトと違って我が儘は言うけど、自分の言うことはちゃんとよく聴いてくれる、フェイトと違ってもっと優しい・・・。そのどれもがフェイトを拒絶して否定する、悪意に満ちた言葉。

「うるさい・・・！」

「もうやめてよ・・・！」

これ以上は本当にダメだ。プレシアの悪意でフェイトの心が壊れてしまう。それが判るから、わたしは、そしてなのはは止めに入る。それ以上、フェイトを苦しめるなって。

「けど所詮作り物の命は作り物よね。喪ったものの代わりになんてならなかった。いいフェイト？　あなたは私の娘じゃない。ただの失敗作。もう顔を見るのも声を聴くのも嫌だわ」

「やめなさいよ・・・！」

「お願いだからやめて・・・！」

「もうやめろ・・！」

「「やめろって言ってるでしょ・・！」」

「プレシア・・・！」

アリサもすずかも、ユーノもセレネもエオスも、アルフもだ。怒りでどうにかなりそうだった時、ふと、「哀れね」口からそんな台詞が勝手に出た。プレシアが『なんですって？』と訊き返してきた。わたしは口が動くそのまま続ける。

「ジュエルシードを使ってアルハザードへ行く？　馬鹿言わないでよ。実の娘を喪った悲しみは、まぁ、子供のわたしにはまだ理解できないけど、でも何か大切な人を喪った悲しみはわたしにも解る」

1年ほど前、わたしは姉のように慕っていたシスターを病気で喪った。今でも悲しいけど、「でもね、失った命はもう取り戻せないんだ・・・！」って理解してる。立ち止まって、亡くなった人のことで自分を縛るとロクなことにはならない。プレシアっていう事例を

見れば解る。忘れなくていい、悲しんだっていい。それが当たり前だ。でも死を認めずに、故人に執着するのはダメだ。亡くなった人の分まで歩いて、生きていかないと・・・ダメなんだ。

「それに。２０年以上って時間が経ち過ぎてる。どれだけの秘術や技術でアリシアを蘇らそうとしても上手くいくわけない！」

『断言するじゃない。管理局の騎士がどんな高説を垂れるか、聴かせてもらうわ』

「フェイトがアリシアに似ないのは当たり前。個人がその個人足らしめるのは記憶じゃない、魂だもん。人格は、記憶じゃなくて魂の色にして精神の形。その両方がすでに存在していない、体だけの人間のクローンを生み出したところで同一人物にはならない」

そこで一度区切ってフェイトをチラッと見、プレシアに言ってやる。

「生まれるのは、どうしたって記憶を共有しただけの歳の離れた双子の妹だ！」

『妹・・・！？』

プレシアはなんか驚いたように目を見開いて、何かを思い出そうとしてるのか眉を寄せた。でもすぐに首を横に振って、キッとわたしとフェイトを睨んできた。結構な敵意を籠めて。

「だからプレシア。あなたがこれから何をしようともアリシアは帰

らない！　それこそ神様の奇跡くらいしか蘇らせる方法はない。でもそんなものは存在しない！　もう自分を赦して、アリシアを解放してあげて！　そしてフェイトを認めてあげて！」

次から次へとわたしの知らない知識が溢れて来た。気味悪がる前にそれをそのまま伝えたんだけど。プレシアは黙ったままわたし達を睨み付けている。嵐の前の静けさか、それとも解ってくれたのか・・・さぁ、どっち？

『フフ、フフフ。ハハ、アハハハ・・・アハハハハハハッ！』

どうやら前者のようだったみたい。狂ったかのように大声で笑いだすプレシア。

『面白い、実に面白い話だったわ！　だったら私は神の奇跡を起こして見せるわっ！　いいえ！　私が神になって、アリシアの魂を呼び戻し、この綺麗な体に入れ直す！　そうよ！　アルハザードに眠る秘術の中になら、神へ至る儀式があるかもしれない！』

本格的におかしくなってしまった。神の奇跡、なんて言うんじゃなかった。

『だからフェイト。あなたはもう要らないわ。さっさと私の前から消え失せなさい！』

しまった。ここでフェイトの心への攻撃が再開されてしまった。食い止めようにもプレシアはそれを許さないとばかりに大声で攻撃を

続ける。

『最後に良いことを教えてあげるわフェイト。あなたを作り出してから今日、この瞬間までずっと・・・大嫌いだったのよ！』

完全にフェイトの心を砕く一言を、フェイトが母親だとずっと慕ってきたプレシア本人が告げた。フェイトは手から待機形態の"バルディッシュ"を落とし、力なくその場で崩れ落ちた。咄嗟になのはとアルフが支えたけど、俯くフェイトからはもはや気力なんてものが根こそぎ無くなっていた。

「ちょっ、うそ、なにこれ！　庭園内に魔力反応が次々と発生！」

「魔力反応、いずれもＡクラス！」

「その総数、６０！？　８０！　まだ増えます！」

エイミィ達からそんな報告が入ると、アースラが大きく振動し始める。ううん、アースラじゃなくて空間そのものが振動してる。その原因は「次元震です！」だ。ジュエルシードが発動したことで、空間が揺らぎ始めた。

「このままでは次元断層クラスにまで行ってしまいます！」

「イリス！　出るぞ！　プレシアの身柄を確保する！」

クロノが駆け出す。わたしも「了解！」応じてクロノを追って駆け

出し、途中で騎士甲冑へと変身した。トランスポーターを目指して通路を走る中、「さっきのはなんだったんだ？」ってクロノが訊いてきた。さっきの。わたしが言っていた魂云々のことだろう。

「ん～と、なんかね、フワッて脳裏に過ぎったの。知っていたわけじゃないのに。けどまぁ、ちょうどいい知識だったから。使ってみた」

「例の発作か」

「発作言うな。それじゃ病気を抱えたイタイ子みたいじゃん」

わたしが時折感じてるデジャヴのことを、クロノは発作って言う。改めるようにお願いするんだけど聴いてくれない。

「まぁ、結果的に説得できなかったが、良いことは言ったと思う」

「・・・ありがと」

とりあえず褒められたと思ってお礼を言う。と、後ろから「シャルちゃん、クロノ君！」なのはとアリサ、すずかが追いかけて来た。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒なのは†††

迷ったけど、フェイトちゃんをユーノ君とセレネちゃん、エオスちゃん、そしてアルフさんに任せて、私とアリサちゃんとすずかちゃんは、クロノ君とシャルちゃんと一緒に時の庭園へと赴いた。通路

に至る所に開いてる虚数空間っていう説明をシャルちゃんから受けながら走る。私はフェイトちゃんの力になりたい。

「テスタメントちゃんの言う通りだった・・・」

通路を走る中、私がそうポツリと漏らすと、「詳しく！」前を走るクロノ君がそう言ってきたから、フェイトちゃんとの戦いの最中にテスタメントちゃんが現れて、グランフェリアさんの洗脳を解く手助けとか、フェイトちゃんの真実で私たち全員がショックを受けることとか、それでもフェイトちゃんの友達でありたいと思い続けてほしいとか、を話した。

「あの子、どうやったそんな情報を仕入れたわけ？」

「判らないな。ただ、今言えることは・・・他のテスタメントが動き出しているかもしれないと言うことだ」

「どういうこと？」

「君たちには嘘を吐いた。テスタメントは逃げたんじゃなく、グランフェリアによって殺された、はずだった」

「「「え！？」」」

アリサちゃんの問いにそう答えたクロノ君。突飛すぎる話に驚く私たち。クロノ君は続けた。アルフさんがクロノ君たちに話して、私には隠していた事実を。テスタメントちゃんは、フェイトちゃんを

人質に取られたことでジュエルシードをプレシアさんに全部渡して、そしてグランフェリアさんの、人を傷つけることの出来る物理破壊設定の魔法によって殺されたっていうのが、私たちに隠していた話。けど生きていた。普通なら死んでもおかしくない怪我をしたのに、どうやって復活したのか。それにフェイトちゃんの真実を得た情報力。それらから他のテスタメントが動いているんじゃないかって、クロノ君は考えたみたい。

「どちらにしろテスタメントは動くはずだ。いま僕たちがこうしている間も何かを企んでいるかもしれない」

「うん。だからさっさとプレシアを捕まえる。あの子より早くジュエルシードを確保する！」

「「「うんっ！」」」

シャルちゃんの言葉に私たちは強く頷いて応える。走り続けて少し。通路とその先の空間を仕切る扉をシャルちゃんが「おらぁぁっ！」豪快なフルスイングで破砕した。

「お出ましだよ！」

扉の先、甲冑姿の巨人が部屋いっぱいにひしめき合っていた。部屋の奥、上階・下階に続く階段が見える。地下に行けば、プレシアさんの所へ着くはずだ。全部倒すのには骨が折れそうだけど、ここで足止めを受けてる場合じゃないのは判る。"レイジングハート"を握り直しているところに「うじゃうじゃと出て来ちゃってさ。ホン

ト面倒」シャルちゃんが一歩二歩と前に躍り出て行った。

「ちょっと暴れてやりましょうかね。わたしが道を拓く。別に全部倒す必要ないしさ。みんなはわたしの後をついて来て」

「アレをやる気か。ま、下手に魔力も消費しないし、それで行こう」

シャルちゃんとクロノ君の会話について行けず、私たちは黙って見守る。シャルちゃんは「よしっ！」と気合を入れて、"キルシュブリューテ"を正眼に構えた。ゾワッと体が震えた。どうしてか判らないけど、シャルちゃんの纏う空気が変わった。

「剣神モード・・！」

――閃駆――

そう呟いたかと思えば、シャルちゃんの姿が残像を残して掻き消えた。遅れてキン、キン、キン、って金属音が目の前から連続で聞こえてきた。何事かと思えば、甲冑の巨人が次々と縦に横に斜めに真っ二つに斬り裂かれて崩れていく。

「イリスにはある能力が生まれつきあるんだ。絶対切断アプゾルーテ・フェヒターー。魔力を使わずして彼女が手に持つ武装――刃物に限るが、その切断力を極限にまで上げる。魔法はもちろんアースラなどの次元航行船にも使われている特殊合金すらも紙のように切り裂くことが出来る」

「それってほとんど無敵じゃない！」

「うん。初めからその能力を使ってれば、テスタメントちゃんの強力な魔法にも対処できてたよね」

アリサちゃんとすずかちゃんの言う通りだ。魔法でも簡単に斬れちゃうんなら、まさしくシャルちゃんは最強かも。でもクロノ君は「そうとも言えないんだ」って言って、遠ざかって行くシャルちゃんの背中を追いかけるために駆け出して、私たちも続く。

「あの能力は加減が出来ないから、対人で使わないよう管理局から言い渡されている。当然と言えば当然だけど、一撃で致命傷を与えることが出来るからね」

「クロノ！　駆動炉はどうする！？　ジュエルシードの魔力に当てられて暴走、誘爆したらシャレにならないよ！」

シャルちゃんが階段前で立ち止まって、クロノ君にそう訊ねた。クロノ君は少し考えて、「二手に分かれよう。プレシア逮捕組と駆動炉封印組に」って答えを出した。シャルちゃんとクロノ君の目が私たちに向けられる。チーム分けを考える為に。そして口を開きかけたところに、

「じゃああたしとすずかが行くわ。すずか、いいわよね？」

「そうだね。うん、私のスノーホワイトなら封印作業もきっと簡単だよ」

「それまではあたしがすずかを護るわ」

アリサちゃんとすずかちゃんがそう決めて、上階へ続く階段へ歩き出した。そんな2人に「じゃあ私も！」って追いかけようとしたけど、アリサちゃんが「あんたはダメ」って止めてきた。

「なのはちゃんはシャルちゃん達と一緒に行って。きっとすごい戦いになる。それにもしテスタメントちゃんが来るとしたら、きっとジュエルシードの在る場所、玉座の間だから」

すずかちゃんの言うことはもっともだ。でもだからってアリサちゃんとすずかちゃんの2人だけで行かせるなんて。別に2人の実力に不安っていうのは無いんだけど、でもどうしてか胸騒ぎがするんだ。迷っていると、「ダメだ。なのはも一緒に魔導炉封印組だ」ってクロノ君が反論することを許さないような声色で告げた。

「危険度で言えばそっちも高い。庭園の心臓である駆動炉だからな。防衛力で言えば最高クラスだろう。なのはの大火力も必要になるはずだ」

「そうね。プレシアはわたしとクロノに任せて。大丈夫。わたし達、強いから♪　テスタメントが来たとしても、絶対勝つッ！」

笑顔を向けて来るシャルちゃん。安心できる笑顔だ。だから私は「行こう、アリサちゃん、すずかちゃん」3人一緒に上階へ続く階段へ駆けだす。後ろから「よしっ、行こうクロノ！」ってシャルちゃ

ん達が下階へ続く階段を駆け下りる音が聞こえた。階段を上がり切るとすごく大きな空間に出て、甲冑の巨人がズラリと並んでいるのが視界に入った。

「そんじゃいきますか！」

アリサちゃんが"フレイムアイズ"のカートリッジをロードして、刀身に炎を纏わせる。

「私たち3人だけで戦うのって、なんかすごく久しぶりに感じるね」

すずかちゃんは足元に藤紫色の魔法陣を展開、魔法発動の準備に入った。

「最後に3人だけで一緒に戦ったのって夜の学校で、だったっけ・・・？　あれからまだそんなに経ってないのにね」

ディバインシューターのスフィアを6基と展開して、臨戦態勢に入る。でもそっか。まだ最近のことなのに、うん、やっぱり久しぶりな感じがするよ。思い出話もここまでにして、私たちに気付いて剣とか斧とか、武器を一斉に構える巨人に意識を集中。

「すずか、サポートをお願い。あたしとなのはで潰すわ。なのはもそれでいい？」

「うん、いいよ。ティファさんの治癒魔法のおかげで全快、絶好調だし」

ティファさんは私だけじゃなくてフェイトちゃんの負ったダメージも一瞬で治した、すごい女医さんだった。

「私とスノーホワイトのアイスバインドで先制するから、すかさず追撃をお願い！」

「「了解！」」

「なのはちゃん、アリサちゃん・・・跳んで！」

すずかちゃんのいきなりの指示に応えて、その場で大きくジャンプ。

「アイスバインド・・・！」

――氷の歌――

冷気の波がすずかちゃんを中心にして周囲へ勢いよく広がって、冷気の波を受けた巨人たちが一斉に凍り付いていく。宙でアリサちゃんと頷き合って、「いっっっけぇぇぇぇぇッ！」アリサちゃんと一緒に攻撃開始。

――ディバインシューター――

――フレイムウィップ――

その初撃で一気に5体倒す。そのまま攻撃の手を緩めることなく、

次の部屋の扉へ続く道を開けるために、アリサちゃんは床に降り立って直接巨人たちに斬り伏せていく。私は宙に留まったままシューターでアリサちゃんを援護したり高速砲で巨人を叩く。すずかちゃんには攻撃に参加してもらわず、補助だけに専念してもらう。

「なのは、すずか！　全滅させる必要はないわ！　ある程度減らしたら、すぐに上に行きましょ！」

「「うんっ！」」

アリサちゃんが６体目の巨人を裂き、私が１０体目の巨人を撃ち抜いたところで道は開け、すぐさま扉へと突撃。扉を蹴破るように開けて、すぐさま閉める。すずかちゃんが「念のために」って扉に結界を張って、こっちへ巨人たちが追いかけて来ないようにロックした。でも、「あんまし意味ないみたい」私は今居る場所の状況を確認して、未だ扉に体を向けてるアリサちゃんとすずかちゃんに告げた。

「「うわぁ・・・」」

２人も振り返って、ここの状況を視認。今居る場所は、円柱形の大きな吹き抜け。その吹き抜けには飛行する甲冑の巨人が何体も居た。吹き抜け内を飛んだら一気に駆動炉に行けるなぁ。アリサちゃんも同じことを考えたようで「ブッ倒すわよ。近道近道♪」って手摺に足を掛けて跳び出した。

一番近くに居た巨人の頭の上に着地して、「タイラントフレア！」燃え盛る"フレイムアイズ"を頭に突き刺した。そしてまた跳んで、

魔法陣を足場とする魔法フローターフィールドを展開してそこに着地。

「私も負けてられない・・・！」

――フライヤーフィン――

飛行魔法を発動して飛び立つ。と、一斉に攻撃してきた。それらを回避しながら高速砲、ショートバスターで迎撃。今まで倒してきた巨人たちと違ってかなり防御力が高くて、一撃だけじゃ撃墜できない。３発目でようやく破壊。１体に対して時間と魔力を無駄に掛け過ぎちゃう。だったら「ディバインシューター・・・シューット！」砲撃より魔力消費の少ないシューターで防御を削っておいて、すかさず高速砲でトドメ。

「やるじゃない、なのは♪」

「アリサちゃんこそ♪」

アリサちゃんは廊下や壁や魔法陣、巨人の体と、次々といろんな場所を跳び移りながら巨人たちを翻弄。すずかちゃんのバインドバレットで拘束された巨人の隙を突いて炎の剣や鞭で倒していってる。本当に負けてられない。一応、魔法使いの先輩だし。シューターからの高速砲って連続技で、私も巨人たちを３体倒す。

「２人とも！　上からも来ちゃうよ！」

すずかちゃんの声に反応して上を見上げる。腕自体が剣になってる巨人や、腕が数本ある巨人も降下してきた。とにかく降下の勢いを乗せた突進攻撃だけは受けれないから、回避限界距離にまで引きつけておいて避ける。そしてアリサちゃんは、すずかちゃんの居る場所とは反対側の廊下へ跳んで回避。私たちとすれ違って下層にまで落ちて行った巨人たちに向けて、砲撃を放つ。

「ディバイン・・・バスタァァァーーーーッ！」

だけど私が狙った緑色の巨人は動きは素早くて、紙一重で回避された。今度は急上昇してくるその巨人に向かって高速砲をお見舞いするけど、今度は装甲に弾かれた。機動力と防御力が高い。剣と化してる両腕の薙ぎ払いや振り下ろしを避けていると、

――バインドバレット――

すずかちゃんから魔力弾が5発と放たれてきた。その巨人は私のシューターのように受けても問題ないって判断したのか抵抗せず受け入れた。でもそれが致命的なミス。着弾した両腕と両足、腰にバインドが掛けられた。

すずかちゃんの「今だよなのはちゃん！」に頷いて応えて、「ディバインバスターッ！」至近距離からのバスターを食らわせる。今度こそ巨人はバラバラに砕け散って、その破片が下の方で戦ってるアリサちゃんと緑色の巨人に降り注ぐ。

「アリサちゃん！」

「っとと。大丈夫よ、なのは！」

アリサちゃんは破片と巨人の攻撃をなんとか回避。その様子に私は安堵。だけどそれがいけなかった。今は戦闘中。何が起こるか判らないのに。右側すぐの手摺の奥、壁を破壊する大きな音と一緒に巨大な斧が回転しながら私に迫って来た。

「なのはっ！」「なのはちゃん！」

頭に浮かぶのは防御一点集中。でも間に合うかどうか。と、その時。

――サンダーレイジ――

雷撃が降り注いできて、私に迫っていた斧を粉砕。それだけじゃなくて他の巨人たちも破壊した。私は頭上を見上げる。黄金に輝く雷撃。それを放つことが出来るのはたった1人。

「フェイトちゃん！！」

遥か頭上。そこにはフェイトちゃんとアルフさんが居た。

Ｅｐｉｃ１８悲劇の幕引き、未来への幕開け～Ｊｕｄｇｅｍｅｎｔ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

随分と私の想定から逸脱してしまったが、やることは大して変わらない。グランフェリアとプレシアが手を組んでいたことには驚いたが、捜す手間が省けるというもの、かえって好都合。ま、フェイトを護るためにジュエルシードを奪われ、瀕死にまで追い込まれてしまったが。

（しかし記憶を失うのも久しぶりだな）

気が付けばはやての家だったことから、おそらくマリアが助けてくれたんだろう。血塗れの私を見て、はやては泣いた。死んでほしくない、自分の前から居なくならないで、と。その悲痛な想いと泣き顔に胸を痛めた私は、すぐに一気にダメージを治してはやてを安心させたいがためにコード・エイルを発動、グランフェリアに開けられた傷を治した。

そのエイルを発動したことで記憶を失ってしまった。どの契約先での記憶かは判らないが・・・。とにかくはやてをそれ以上泣かせたくない一心だった。それに、先の次元世界での記憶じゃないため、問題ない。

（フェイト・・・なのは・・・）

そしてなのはとフェイトの決闘。グランフェリアの洗脳を受け、感情を殺されたフェイト。２人の決闘に干渉するつもりは無かったが、洗脳術式だけは潰さなければならない。だから局に見つかる危険を冒してでもなのはと接触。なのはと"レイジングハート"に障壁破壊と精神操作解除の魔術を施した。結果、なのははフェイトに勝ち、洗脳を解除した。

（プレシア・・・！）

なのはに負けたフェイトを、もう用済みだとでも言うように始末しようとしたプレシア。彼女の雷撃が転送を終えるか否かのなのは達に迫り、私は、伏せろ、となのはに念話を送った。フェイトを護るかのように覆い被さったなのはを確認し、複製術式を発動して雷撃を防いだ。

そうしてなのは達は無事で転送を終え、その直後に雷撃は火炎の渦を突破した。決戦の舞台はこれより時の庭園。はやての家の方角へ体を向けて「ちょっと行ってくるよ」と告げる。

「待っていろプレシア。ジュエルシードは返してもらう。待っていろグランフェリア。今日、お前を救ってやる」

私は海鳴市より転移する。目指すは・・・・

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒フェイト†††

私は母さんにとってただの道具だった。アリシアを蘇らせる為に必要な物を集めさせるだけの。母さんが求めていたのは、アリシアだ

けだった。母さんは私に微笑んでくれなかった、私のことなんか一度も見てはくれなかった。当然だ。私は、失敗作なんだから。それなのに。もう要らないって拒絶されても、私の存在を否定されても、私は・・・。

（母さんのことが好きだ・・・）

グランフェリアに私を洗脳させてまでジュエルシードを求めた母さん。完全に道具として扱われて、ハッキリ捨てられた今でも、そう思う。私が横になってるベッドの側に居て、私の手を握ってくれてるアルフを見る。アルフは壁に展開されてるモニターを見ていた。映し出されているのは、ジュエルシードを巡って戦ってきたあの子たち。いつでも真っ直ぐに私に向き合って、向かって来てくれた子たち。時には助けてくれた。酷いことをしたのに、それでも私と友達になりたいって言ってくれた。何度も私の名前を呼んでくれて・・・良い名前だねって褒めてくれた。今でも胸が温かくなる。

「ちょっ、なんであなたがここに居るわけ！？」

「戦える人が居ない中でそれはないんじゃない！」

廊下の方が騒がしい。アルフが「なんだい・・？」って扉に向かったその時、扉が開いた。入って来たのは「テスタメント！？」アルフが叫んだ通り、紅い髪を揺らしたあの子だった。私を庇ってジュエルシードを母さんに渡して、グランフェリアに殺されかけた・・・。

遅れて男の子が慌てて入って来た。廊下に居る双子の子に誰かに連

絡して、とか言ってる。男の子はバインドでテスタメントを捕えようとするけど、仕掛けた瞬間にはもう破壊される。

「な・・っ！？」

「元気してる？　フェイト・テスタロッサ。ま、見る分には悪いって感じみたいだね。仕方ないかな。あなたは自分の真実を知った。アリシア・テスタロッサのクローンだって」

「テスタメント、あんた！！」

アルフがテスタメントに掴みかかって壁に押し付けた。

「ぅぐ。ねえ、フェイト・テスタロッサ。今、あなたは何を思って、何を考えてる？　母親だと思ってたプレシアに拒絶されて、生まれて来ちゃ、生きていちゃダメだって？　もう生きる意味が無いって？　プレシアのこと、もうどうでもよくなっ――」

「黙りな！　それ以上言うと、あたしがあんたを潰す！！」

「私は・・・」

私は「母さんに認めてほしかった」今思うことを声に出すと、アルフが私を見て、テスタメントの首に掛けてる手を放した。

「どんなに酷いことをされても、母さんに認めてほしくて、頑張ったねって褒めてほしくて、そして笑ってほしかった。そのために私

は生きてきた。そうでなきゃ私に生きる意味なんてないって思ってた」

「フェイト・・・」

「でも今はただ、たとえ母さんに拒絶されても、認めて、褒めて、笑ってくれることが無くても、私は生きたい。ここで諦めちゃ、心を捨てちゃ、私はそれでこそ何も無い人形になっちゃうと思うから。私は私だって、アリシアじゃないけど母さんの娘だって胸を張りたい。それが、今の私が生きる目的、だと思う」

上手く言えないけど、それが今の私。あの子たちとの時間がそういう気持ちにさせてくれたような気がする。そう思うと涙が溢れてきて、「フェイト！」アルフが私を抱きしめてくれた。

「アルフにも酷いことしちゃったね。私、アルフの言うこと全然聴かなくて、それでアルフを悲しませたり、苦しませたりしたよね・・・」

「ううん！　良いんだよそんなこと！　あたしはただ、フェイトが笑っててくれさえいれば、それだけで・・・！」

いつも一緒に居てくれた優しいアルフ。私の胸にしがみ付いて泣くアルフの頭を撫でる。ここでテスタメントが「そっか。だったらいつまでもここで眠ってるわけにはいかないね」って言って、踵を返してここから去ろうとした。

「思うままに生きると良いよ、フェイト・テスタロッサ。あなたは人形じゃない。たくさんの事を学び、思い、考え、悩んで、苦しんで、喜び、楽しんで生きていく。生まれ方は特別だったけど、１人の人間だよ。さぁ、母親にあなたの想いをぶつけておいで。そうして自分を始めるんだ。始まってもいない、あなたの本当の物語を」

「想いをぶつけに・・・自分を始めるために・・・」

一度立ち止まって私を見ることなくそう言うと、また歩き出した。扉へ向かうけどその前に「どこへ行くつもりだ！」って男の子が立ち塞がる。テスタメントは最後に私とアルフに振り向いて「さようなら」って今まで一度も使わなかった別れの挨拶をして、足元に魔法陣を展開。そしてこの場から転移して消えた。

「アイツ・・・」

「アルフ。バルディッシュも。一緒に始めよう、私たちを」

「うん！」≪Ｙｅｓ，　Ｓｉｒ≫

ベッド脇のナイトテーブルに置かれてある"バルディッシュ"を手に取って起動、バリアジャケットに変身する。母さんの元へ行こう。始まってすらいなかった私たちを始める為、そしてこれまでの私を終わらせる為に。転移するための魔法を発動。足元に魔法陣が展開。と、男の子と目が合った。

「あの、えっと、ごめん。私、行かないと」

「・・・うん。ここの人たちには僕が話しておくから」

「あ、ありがとう」

男の子にお礼を言うと同時に転移完了。場所はあの子たちが戦っていた塔の吹き抜け。私のことをずっと心配してくれていたあの子たちにも、今の私を伝えないといけない気がしたから。転移してすぐ。あの子たちが母さんの傀儡兵に包囲され始めているのが判った。

「バルディッシュ・・・！」

≪Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｒａｇｅ≫

てっとり早く殲滅するために広域魔法のサンダーレイジの発動準備。放射される直前、白い子が危機に陥ったのが見えた。壁を破壊しながら飛び出して来た巨大な斧。白い子に直撃するより早く、「サンダーレイジ！」雷撃を放射して、斧を迎撃、そして集まり出していた傀儡兵を破壊する。

「危なかったねぇ、あの子たち」

「うん」

アルフと一緒に降下し始めると、「フェイトちゃん！」あの白い子が私の名前を呼んでくれた。それに赤い子や紫色の子も「フェイト！」「フェイトちゃん！」私を呼んでくれる。私という存在を認めてく

れてる。あの子たちの居る高度にまで降りて、私の今を伝えようとしたけど声が出ない。

「っ・・・！」

そんな私の手にあの子たちがそれぞれ手に添えてきた。そして向けて来るのは笑顔で。戸惑いがあるけど、それ以上に温かさがある。今なら言える。「私は――」言いかけたところで、ドンッ！と大きな音と一緒に壁が破壊された。

「ああもう。せっかく良いところだったのにさ。空気読め！」

アルフが不機嫌そうに怒鳴る。崩落する瓦礫の中、壁に開いた穴から特大の巨人の上半身だけが姿を現した。うん、上半身だけで下半身――足は無い。下半身は円盤状で、上半身には両腕と背中から伸びる砲身がいくつも有る。

「うげっ！　今までの中で一番デカいわよ！」

「大型の傀儡兵。防御力がかなり高い」

「そっか。じゃあ私たちみんなでやれば問題ないよね」

「うん。私たちが力を合わせれば、どんなのが相手でもきっと・・・！」

私に集まる視線に「合わせよう、私たちの力を」って応じると、3

人は本当に嬉しそうに微笑んでくれた。アルフもまた「うんうん」ってちょっぴり涙を零しながら頷いて、「あたしゃ邪魔になるだろうから」って離れて行った。そんな私たちに向けられて砲撃が６本と放たれきた。一斉に散開して、断続的に放たれてくる砲撃をかわす。

「まずは厄介な砲身を潰す」

「「「うんっ！」」」

"バルディッシュ"をサイズフォームにして、「ハッ！」魔力刃――アークセイバーを一番大きな右腕の砲身へ放つ。それと同時、「フレイムウィップ！」赤い子が炎の鞭を払って、私とは逆の左腕の砲身に当てた。だけどなかなか断ち切れない。そこに、「シューット！」白い子と紫色の子の掛け声と一緒に、

――ディバインシューター――

――フローズンバレット――

計１２の魔力弾が両腕に着弾。私と赤い子の攻撃と合わせたことで両腕のバリアが砕け爆発、両腕は崩壊した。だけどそれで終わりじゃない。まだ４本の砲身が残ってる。それらがチャージを始めた。発射される前に潰さないと。私たちは横一列に並んで・・・

「ディバイィィン・・・」

「サンダー・・・」
「バスタァァ・・・」
「フレイム・・・」
砲撃が同時に４本と放たれた瞬間、
「バスタァァァーーーーッ！」
「スマッシャァァァーーーッ！」
「ラァァーーーッシュ！！」
「ウィーーーップ！！」
３本の砲撃と炎の鞭が真っ向から砲撃と衝突。これだけの魔力と威力なのに、拮抗せざるを得ないなんて。
「「「「せぇーーーっの！」」」」
でも負けない。さらに魔力を籠めて、攻撃の勢いを後押しする。砲撃を押し返すようにして私たちの攻撃は巨人へ到達してバリアに着弾。少しの拮抗の後、炎の鞭がバリアを裂いて、続けて３本の砲撃が巨人を呑み込んでそのまま突き進んで行った。砲線が途切れると同時、巨人が幾つもの破片となって落下。その光景を確認したあの子たちは「やった！」ってハイタッチを交わして、

「ほら、フェイトちゃん」

「喜びは分かち合うもんでしょうが」

「最初は私からだよ」

「え、あ、うん・・・」

最初に紫色の子と、次に赤い子、最後に白い子とパチン！とハイタッチを交わした。ハイタッチし終えた私は自分の左手を見詰める。なんて言うか・・・すごい嬉しい。そこに「いやぁ、感動したよあたしゃ」アルフが目元を指で擦りながら私たちの所へ飛んできた。

「あの・・・」

「「「ん？」」」

「私は、その・・・大丈夫。今、自分がやるべきことも解ったし、決めたから」

今はそれだけしか言えなかった。整理しないままで伝えてしまったし。でも3人は安心したように小さく頷いて、頑張って、って応援してくれた。うん、って頷こうとした時、

『こちらアースラ！　緊急です！　テスタメントちゃんが庭園内に侵入！　どうやったか判らないけど駆動炉の魔力を完全に消滅させ

て、階層をぶち抜きながら一直線に最下層を目指しちゃってる！
狙いはおそらくプレシア・テスタロッサの持ってるジュエルシード！
　みんな気を付けて！』
そんな通信が流れて来た。驚くことじゃなかった。元よりあの子の狙いはそうだったから。あの子が自分の分だけを取り返すために、きっと母さんとぶつかることになるって。
「フェイトちゃん！　行こう！」
「急ぐわよフェイト！」
「フェイトちゃん！」
「フェイト・・・」
「・・・うん！」
私たちは母さんが居て、テスタメントが目指している最下層へと向かうことになった。最下層へと続く廊下をみんなで進んでしばらく。ようやく最下層へ通じる縦穴へ辿り着く。スピードを落とすことなく突入。最下層の中を飛んでいると、すぐに母さんを見つけることが出来た。
母さんの側にはアリシアの収められた生体ポット、少し距離を開けたところに管理局の執務官と騎士の子がすでに居た。けど、テスタメントは居ない。母さんの近くへ降り立って「母さん！」呼ぶ。他の子も同様に降り立って、私の後ろに控えた。

「あなた。何をしに来たの？　私は言ったはずよ。もう顔も見たくないし声も聴きたくないって。今すぐ消えなさい」

改めて拒絶されると、胸が痛い。でもここで折れたりしたらいけないって奮い立たせる。後ろからアルフやあの子たちが私の両手を握ってくれた。私はそれに頷き応えて、母さんに伝える。

「母さん。私はあなたに伝えたいことがあって、ここまで来ました。私は、フェイト・テスタロッサです。アリシア・テスタロッサじゃありません。確かに私はあなたが造った人形で、偽者かもしれません。そう言われてもおかしくないです。

だけど私はそれでも私はあなたの娘でありたいって思っています。そして娘として、母であるあなたに笑ってほしいって願います、幸せを望みます。あなたが望んでくれるなら、世界中の誰からも、どんな出来事からも私はあなたを守ります。

でもやっぱり居なくなれって言うなら、あなたの側から居なくなります。だけどこれだけは忘れないでほしい、憶えていてほしいです。私は、母さんのことが大好きです！！」

伝えたいことを全部伝えた。母さんの返事を待つ。そしてようやく「私は、大嫌いよ」母さんから聞かされた返事は・・・変わらなかった。後ろから「どうして・・・？」ってあの子たちが悲しそうに漏らした。それが支えになるなんて。折れそうだった膝は折れることなく、私は真っ直ぐ母さんを見詰める。

――轟火之砲光――

それはあまりに突然、そして一瞬だった。天井が光ったと思ったら爆発、炎の砲撃が降って来て、母さんを呑み込んだ。遅れて大爆発。「母さん！　アリシア！」爆炎と爆風に煽られて吹き飛ばされながらも叫ぶ。勢いよく床に叩き付けられて「げほっげほっ」咽る。至近距離で爆発の衝撃を受けた所為で耳鳴りが酷い。

「母さん！　アリシア！」

すぐに立ち上がって、黒煙に包まれてる母さんの側に行こうとしたけど、腕を取られて邪魔された。振り返ってみればアルフやあの子たちが居て、何か言ってる。でも耳鳴りの所為で聞こえない。前へ向き直って振り解こうにもアルフの力が強くて逃れられない。

「『私が奪われたジュエルシード１２個と、フェイト・テスタロッサの１１個。計２３個。確かに返してもらった』」

頭の直接流れ込んできた声。その声の主が誰だかすぐに判った。黒煙が何かの力で以って急速に晴れていって、倒れてる母さんとポッド、そして「テスタ・・・メント・・！」が視界に入った。テスタメントの周囲には休眠状態のジュエルシードが浮いていて、それらが全部光となってテスタメントの胸の中に吸い込まれていった。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒イリス†††

ジュエルシードを体の中に取り込んだテスタメントがなのはを真っ直ぐ見、なのははビクッと肩が跳ねさせた。ていうか、どうやって

体に取り込んだの！？　あんなことをしたら、普通は拒絶反応で死ぬか２度と魔法は使えないはずなのに。

「さてと。あとは・・・。ねぇ、高町なのは。あなたの有してるジュエルシード７つ、私にちょうだい」

平然と、何事も無いと言うように告げたテスタメント。今、一際強く思う。あの子、普通じゃない。

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。
其は紅蓮の炎を纏いし少女テスタメント
。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

「母さん！　アリシア！」

フェイトがなのはとアルフの手を振り解いて、プレシアとアリシアの元へ走る。テスタメントが向かって来るフェイトを目で追っているのが判った。ダラリと下げてる遅れて右手をゆっくりと動かし始めると、「フェイトちゃん！」なのはが注意するように呼びかけるけど、まるで聞こえてないって風に無視。

――スティンガーレイ――

「動くな！」

クロノの制止の声と同時に放たれた牽制の魔力弾が、フェイトとテスタメントの間に着弾する。テスタメントは手を止めて、「別に傷

つけるつもりはないよ」って少し離れた、階段状に並んだ円柱に立つクロノの方へ顔を向けた。

――デュアルクリスタルケージ――

「え・・・！？」

確かにあの子の言う通り二重の四角錐型の捕縛結界でプレシアとアリシアを閉じ込めただけだった。それを見たフェイトが結界に駆け寄って「母さん！」結界を両拳でガンガン叩く。

「私の目的はあくまでジュエルシード。下手に傷つけるつもりはない。ただ、向かって来るのなら・・・容赦はしない」

――烈渦――

テスタメントの足元に展開された銀色の魔法陣から炎が噴き上がり、炎の中に佇む構図を作った。

「テスタメント！　母さんを放して！」

フェイトがテスタメントを睨み付けて怒鳴った。

「悪いけど却下。本音を言うとさ、ちょっとイラついてるんだよね。プレシアに。だってそうでしょ？　この私を殺そうとしたんだからさ！！」

――煉弾――

テスタメントを覆っていた炎が無数の火炎弾となって結界を襲撃、フェイトとは反対の面に着弾させて爆発を起こさせる。それはプレシアへ向けた怒りの一撃。フェイトがその衝撃で吹き飛ばされると、「フェイト！」アルフが駆け出して、床に滑ったフェイトを抱き起す。

「テスタメント！　あんた、何してんのよ！」

「フェイトちゃんと仲間だったんじゃないの！」

アリサとすずかが怒鳴る。なのははフェイトの様子に声が出ないようだ。さすがにこれ以上は黙っていられないか。わたしはなのはの側に寄って「どういうつもり？」って"キルシュブリューテ"をテスタメントに向けた。

「ジュエルシード同盟は回収し終えるまでのモノだよ、仲間になった憶えなんてない。それに元よりフェイト・テスタロッサからもジュエルシードを奪う予定だった。まぁ、グランフェリアに殺されかけ、プレシアに奪われたのだけは予定外だったけど。そう。少し狂ったけど、やることは変わらなかった。プレシアから奪い返し、高町なのはからも奪う」

（まぁ、そんなところだと思ってたけど。でもフェイトはその様子からしてちょっとは信じてたみたいだし。キツイなぁ、プレシアに拒絶された後にテスタメントの裏切りか）

テスタメントが無傷な結界、ショックに瞳を揺るがせてるフェイト、最後にまたなのはを見てそこまで言ったところで、「テスタメントぉぉぉぉッ！」アルフが殴りかかった。だけど直前に張られたバリアの前にアルフの拳打は防がれて、さらにバリアが爆発してアルフも吹き飛ばされた。

「向かって来るなら容赦はしないって言ったよアルフ。で、どうする？　高町なのは。渡す？　渡さない？」

改めて訪ねてきたテスタメントに「渡せないよ。どうしても欲しいなら、本当に目的を教えて」ってなのはが"レイジングハート"を向けながら答えた。

「前にも言ったでしょ。人ひとりの命を救う。そのためのジュエルシード。どんな医療技術でも、どんな医療魔法でも救えない・・・！」

テスタメントの目に確かな、強い感情が宿るのが解った。本当のことを言ってる。問題は、それがテスタメント部隊の総意か、あの子自身だけの意思か。普通に考えれば前者だろうけど。でもそれならどうして複数人で来ないのか。疑問は尽きないけど、それを知るのはとっ捕まえてからでも遅くないか。

「これ以上は何を言っても理解してくれない。だから・・・」

――サイズスラッシュ――

「テスタメント！！」

今度はフェイトが、何かを言いかけてたテスタメントに襲い掛かった。テスタメントは振り下ろされた魔力刃を半歩下がることで避けて、フェイトの結われた髪を一房掴み取った。そして「――あとは力づくしかない」って、フェイトのお腹に膝蹴りを入れた。

「ぐふっ・・・！？」

「「フェイトちゃん！」」「「フェイト！！」」

「イリス！　テスタメントを力づくで押さえる！」

「指示が遅いよクロノ！」

「交渉は決裂。いいよ、かかっておいで」

テスタメントが凶悪な笑みを浮かべて、フェイトをアルフに向けて放り投げた。なのはとアリサとすずかはお腹を蹴られたことで咽てるフェイトと、フェイトを抱き止めたアルフの元へ駆け寄る。そしてわたしとクロノは、テスタメントの身柄確保の為に遅めの戦闘行動を開始。

――スティンガーレイ――

――光牙閃衝刃――

クロノが高速の魔力弾を6発放ち、私は"キルシュブリューテ"の刺突から発生する魔力の槍を放って、テスタメントに仕掛ける。テスタメントは「第四聖典、起動」右手に十字架――第四聖典を携えて、

「足りないよ、それだけじゃね！！」

――魔王炎撃波――

炎を纏わせた第四聖典を振り上げたことで生まれた炎の斬撃によって2つの攻撃を防いだ。互いに速度を特化させた低威力な魔法だったけど、こうもアッサリと防がれるなんてさ。

――閃駆――

（ならちょっとギアを上げちゃうよ！）

高速歩法・閃駆を使って、一瞬にしてテスタメントの背後に回り込んだ。そしてクロノがテスタメントの正面から「ブレイズキャノン！」砲線の短い砲撃を撃った。前に掲げて盾とした第四聖典で防いだテスタメントの背後から「せいっ！」わたしは斬りかかる。

――烈渦――

だけど、わたし達の攻撃が当たる前に第四聖典が床に打ち付けられて、また噴き上がった炎がテスタメントを護る。火の粉が頬に触れたから「熱ちち！」慌てて払いつつ後退。もし火傷の痕が残ったら

訴えてやる。

「（大した火力だけど・・・）絶つッ！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

――光牙裂境刃――

カートリッジを２発ロード。刀身に障壁・結界破壊特化の魔力を纏わせて縦一線に振り降ろし、魔力の刃を放つ。その魔力刃がテスタメントを護る炎の渦を斬り裂いて、霧散させた。驚きに目を見開くテスタメント。

――閃駆――

この好機を逃さないためにまた閃駆で接近を試みる。クロノも負けじと、「スティンガースナイプ！」１発の魔力弾を発射。操作性能ランクＳの、１発で複数の標的を殲滅する魔法だ。ものすごい速さで螺旋を描きながらテスタメントを襲撃し続け、「うっとおしい！」翻弄する。

その間にもわたしは"キルシュブリューテ"の連撃で、テスタメントを押し続ける。ほぼ完璧に剣閃を見切られて第四聖典で捌かれちゃうけど、クロノの援護のおかげで反撃の隙を与えずに済んでる。

「（そうだ。この際だから・・・）テスタメント部隊のこと、ちょっと教えてよ」

「教えるわけないじゃない・・・！」

うっとおしそうにクロノの魔力弾を避けながらもわたしの斬撃に対処するテスタメント。

「じゃあ、レーゼフェアとシュヴァリエル、って知ってる・・・？」

「・・・知らない」

今の間は何を意味する？　思い出すために費やした間か、それとも動揺から生まれた間か。表情や動きからじゃ判り辛い。この子、結構表情が豊かなのにポーカーフェイスのレベルが高すぎ。

「スナイプショット！」

クロノが弾速上昇のキーワードを告げた。さらにテスタメントの周囲を高速で飛び回って、フッとあの子の目の前を横切った。ナイスだよ、クロノ。ホントに一瞬だけど、テスタメントの視界を奪った。これぞ最大の好機。

「刺（シ）ッ！」

刺突を繰り出す。テスタメントは左手に持ち替えた第四聖典でわたしから見て向かって右へ逸らして対処。間髪入れずにわたしは跳び上がって、テスタメントの頭部、その左側へ跳び蹴りを繰り出す。わたしの蹴りを右腕で受け止めたテスタメントだけど、これで両腕は塞がった。空いてるわたしの右足でテスタメントの顔面に向けて

踏み蹴り。

「っと・・・・！」

テスタメントは後ろに倒れ込むように反り返って避けた。全部見切られて避けられるってかなりショックだけど、ま、ここまでやったんだから・・・

「当ててよクロノ！」

「ああ！」

頭上から力強い返事が。クロノは宙に居て、ストレージデバイス"S2U"を反り返った体勢のままのテスタメントに向けてた。足元に足の裏サイズの魔法陣を展開して足場にして、それを蹴ってテスタメントから離れた直後、

「ブレイズキャノン！」

クロノの砲撃がテスタメントに着弾。宙で一回転して着地、煙幕の中のテスタメントを見据える。今のうちにカートリッジを装弾しておこう。腰のポシェットから5発のカートリッジを取出す。

「キルシュブリューテ。カートリッジを装弾する」

≪了解です≫

峰側の刀身の付け根にある供給口が刀身に沿って上にスライド。装弾数5発の回転式シリンダーが姿を現す。さっきの2発とここに来るまでに使った3発のカートリッジを全部排莢。すぐに装弾する。チラッとクリスタルケージの方を見る。なのは達が破壊しようと試みてるけど、よほど堅いのか上手くいってないみたい。

「次元震が止まったのは幸いだが、それ以上にテスタメントが厄介だな・・・！」

「っ！・・・だね」

テスタメントが煙幕の中から歩き出て来た。神父服型のバリアジャケットの所々が破れてるけど、本人にはダメージが無いみたい。歩く度に足元から炎が噴き上がって、歩いて付けた足跡には火が燻ってる。

「プレシアの願いとは違って私の願いは誰も困らないでしょ？　次元震は起きない、誰も死なない。だから・・・邪魔すんなッ！」

テスタメントが前傾姿勢で突進して来た。周囲には炎のスフィアが6基。接近戦は望むところ。テスタメントを真正面から迎撃するために駆けだす。

――煉弾――

――スティンガーレイ――

テスタメントの放った火炎弾と、わたしの背後からクロノの放った魔力弾6発が、わたしとテスタメントの間で衝突。遅れて互いの間合いに入ったことで、「光牙月閃刃！！」わたしの振り降ろした"キルシュブリューテ"と、振り上げたあの子の第四聖典が激しい火花を散らして衝突。

「うえ！？」

今まで以上に力強いその一撃に、強制的に"キルシュブリューテ"を持つ両腕を上に弾かれた。そのままテスタメントのショルダータックルを受けて「ぐっ・・・！」体が浮いてしまうほどの衝撃を受けた。僅かにテスタメントとの間に空きが生まれた。その空きに、魔法陣が展開された。

――轟火之砲光――

魔法陣の放射面から炎熱砲撃が発射された。咄嗟に弾かれていた"キルシュブリューテ"を振り下ろして斬り裂いてやろうかと思ったけど・・・・

（あ・・・ダメだ、コレ・・・）

その圧倒的な勢いに抗うのは無理だと思い知らされて、わたしはその砲撃を甘んじて受けることにした。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒なのは†††

プレシアさんとアリシアちゃんを捕えてる結界をみんなで攻撃して壊そうと頑張っていた。そんな時、ドォン！！って爆発音が聞こえ、遅れて振動が私たちを襲った。少し離れたところから黒煙が上がっていて、黒煙の中からクロノ君とテスタメントちゃんが飛び出して来た。そして「終わりだよ、クロノ執務官」って、宙に居るクロノ君を包囲する火炎弾。その数はざっと４０発くらい。

――火獄乃弾牢――

一斉にクロノ君を襲撃、着弾を証明する爆発が連続で起こった。さらにテスタメントちゃんは爆発を続ける方へ第四聖典を向けて、

「ブレイク！」

――轟火之砲光――

容赦なく、まるでトドメと言わんばかりの炎の砲撃を撃った。さっきまで以上の大爆発。その熱波は私たちの所まで届いて、「きゃぁぁぁっ！」私たちは悲鳴を上げてしまう。転ばないように身を屈めていると、『高町なのは。ジュエルシード、ちょうだい』ってテスタメントちゃんからの念話が届いた。クロノ君とテスタメントちゃんを覆う黒煙が渦を巻いたかと思えば一瞬で消えて・・・・

「テスタメント・・・ちゃん・・・・！」

「シャル！」

「クロノ君！」

シャルちゃんとクロノ君の襟首を掴んでズルズル引き摺って来たテスタメントちゃん。

「あんた・・・そこまでしてジュエルシードが欲しいわけ！？」

「もちろん。あなた達はこうなりたくないでしょ？　だから大人しく――」

"フレイムアイズ"を構えたアリサちゃんの問いに答えて、テスタメントちゃんが2人をそっと横たわらせた。その瞬間・・・

≪Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ≫

私たちの背後からテスタメントちゃんに向けて魔力弾、フォトンランサーが放たれて行った。テスタメントちゃんはシールドを張って防御。「フェイト・テスタロッサ・・・」攻撃主のフェイトちゃんの名前を呼んだ。

「母さんとアリシアを解放して」

「嫌だと言ったら？」

「・・・君を・・・倒す・・・！」

私たちの前に出たフェイトちゃんが"バルディッシュ"を構えて、

――ブリッツアクション――

テスタメントちゃんへ向かって行った。遅れてアルフさんも駆けて行った。私はアリサちゃんとすずかちゃんと顔を見合わせて、うん、と頷く。これ以上、テスタメントちゃんを放っておいたらダメだ。どんどん罪が重くなっちゃう。

「ディバインシューター・・・、シューット！」

フェイトちゃんとアルフさんの斬撃やパンチ攻撃を、背負っていた第四聖典を携え直して迎撃してるテスタメントちゃんへ向けて６発発射。フェイトちゃん達が離れたのを見計らって、拡散させていたシューターを一斉にテスタメントちゃんに直撃する軌道に操作。

――炎壁之穹窿（きゅうりゅう）――

テスタメントちゃんを覆う半球状の炎の膜が、シューターを全弾燃え散らせた。

「フレイムウィップ！！」

アリサちゃんの炎の鞭が振り下ろされて、鞭と膜が衝突。ものすごい量の炎が周囲に拡散する。ふと、フェイトちゃんと目が合う。どうしてか解らないけど、今からやろうとしてることが判っちゃった。私はフェイトちゃんの背後へ移動。そこはテスタメントちゃんを挟んでアリサちゃんとは反対側。

『アリサちゃん！　バスターー行くよ。気を付けて！』

『了解！』

「アークセイバァァーーーッ！」

フェイトちゃんが魔力刃を飛ばす。高速回転しながら魔力刃は膜に着弾、炎を撒き散らせながら突き進もうとしてる。"レイジングハート"を魔力刃へと向けて、「ディバイィィン・・・」魔力のチャージを開始。チャージを終えたところでフェイトちゃんが上に飛んだ。

「バスタァァァーーーーッッ！！」

アリサちゃんは攻撃を続けたまま「押し破ってやるわ！」頭上に展開した魔法陣へ上がった。バスターは魔力刃を後押しするように炎の膜に着弾。斬撃２つと砲撃の同時攻撃。

「スノーホワイト。バインドバレット、スタンバイ！」

≪承りましたわ、スズカ≫

すずかちゃんと"スノーホワイト"のやり取りが聞こえた。テスタメントちゃんの動きを封じて、その隙にさらに私たちの攻撃・・・かな？　ちょっとやり過ぎ感もあるけど、それくらいしないときっと勝つことが出来ないって解ってる。

そしてようやくドォン！という爆発と一緒に私たちの攻撃が炎の膜を突破、内に居るテスタメントちゃんに同時に直撃した、はず。テスタメントちゃんが爆炎の黒煙の真上から飛び出して来た瞬間、「シューット！」すずかちゃんから魔力弾が１０発とテスタメントちゃんへと放たれた。

「おっと・・・！」

脱出直後だったこともあって、テスタメントちゃんは最初の３発を両脚に受けて、そこから残り全てが全身に着弾、バインド塗れになった。

「なのはっ、フェイトっ、すずかっ・・・行くわよッ！」

アリサちゃんが"フレイムアイズ"のカートリッジをロードしながら、私たちに呼びかけた。それに頷いて応えて、私は"レイジングハート"を、フェイトちゃんは"バルディッシュ"を向けて、すずかちゃんが前面に魔法陣を展開。アルフさんだけは「念のためにね！」さらにテスタメントちゃんをチェーンバインド３本で拘束。

「ディバインバスタァァァーーーッ！」

「サンダースマッシャァァァーーーッ！」

「バスターラッシュ！」

「もういっちょフレイムウィップ！！」

――それでも余を束縛することは叶わない――

あと少しで着弾すると言うところでバインドが一斉に砕けて、テスタメントちゃんは私たちの攻撃から逃れた。

「くっ。やっぱりテスタメントにはもうバインドは通用しないんだ・・・！」

フェイトちゃんの呻きに、「どういうこと！？」私は訊いてみた。それに答えたのはフェイトちゃんじゃなく、「そのまんまの意味だよ、高町なのは」テスタメントちゃん。

――火獄乃弾牢――

テスタメントちゃんの周囲にまた、火炎弾が４０発ほど展開されて、「ブレイク！」頭上から降り注いできた。

――フライアーフィン――

――ブレイズロード――

私は飛行魔法を発動、火炎弾の雨を回避しながらテスタメントちゃんより上へ。アリサちゃんは両脚に炎を噴き上がらせての高速移動魔法で、着弾範囲外へ逃げた。すずかちゃんとフェイトちゃん、アルフさんは私と同じようにテスタメントちゃんより上に逃げた。

「今の私は、全身にバインドブレイクの魔法を持続発生させてる。掛けられたと同時にすぐに効果を発生、破壊する。だから――・・・」

第四聖典の四方の先端に魔法陣が展開。テスタメントちゃんはチアリーディングのバトンのようにクルクル回し始めて・・・

――轟火之砲光――

その四方から砲撃を発射した。しかも第四聖典はクルクルと回り続けてるからほぼ無差別。

「私にはバインド魔法は通用しない」

回避に全力を注いでいるからテスタメントちゃんの話に集中できない。それでも「シューット！」私はディバインシューターを、「ファイア！」フェイトちゃんやアルフさんはフォトンランサーを放ち続ける。

すずかちゃんは自分やアリサちゃんが避けきれない砲撃をシールドで防御。かなりの魔力弾を撃ち続けているのに「1発もシールドを抜けないなんて・・！」テスタメントちゃんの全方位をカバーする、断続的に展開される炎を纏う小型のシールドを突破できない。

「きゃぁぁぁぁッ！」

そしてついに私たちの中から、テスタメントちゃんの砲撃を受けた子が出た。

「すずかっ！？」

「え・・・すずかちゃん！？」

すずかちゃんだった。ドサッと倒れ込むすずかちゃん。アリサちゃんが「すずか！」駆け寄ろうとした時、そこに1条の砲撃が迫った。助けようにもフラッシュムーブじゃ間に合わない、砲撃での妨害も間に合わない。もうダメだ。アリサちゃんまでもが倒れる姿を見る事になる。そう思うと目を逸らしたくなった。

「おらぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

――ラウンドシールド――

だけどその前に、アルフさんがアリサちゃんの前に立ちはだかってシールドを展開、護ってくれた。アリサちゃんに「行きなッ！」って告げると、アリサちゃんは「ありがとうアルフ！」砲撃の射線から離れた。直後、砲撃はシールドを粉砕して、アルフさんを呑み込んだ。

「「アルフ！」」「アルフさん！」

爆発。そして黒煙が生まれた。ここでようやくテスタメントちゃんの無差別砲撃が止んだ。見ればテスタメントちゃんは大きく肩で息をしていて、かなりの魔力を消費したんだって判る。すずかちゃんやアルフさんのことが気になるけど、今ならきっとテスタメントち

ゃんを押さえることが出来る。

≪Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ≫

「せぇぇぇーーーーいッ！」

高速移動魔法のフラッシュムーブからの連携技、「フラッシュ・・・インパクトッ！」をテスタメントちゃんへ"レイジングハート"を振り下ろす。ギリギリで第四聖典を水平に構えたことで受け止めたテスタメントちゃん。

≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ≫

――煉弾――

私たちの周囲に計１０基のスフィアが発生。お互いに距離を取ったと同時、

「シューート！」「ブレイク！」

発射する。テスタメントちゃんの火炎弾は直射型のようで、私の操作するシューターを迎撃できずに真っ直ぐ私を通り過ぎて行った。そしてシューターは螺旋を描きつつテスタメントちゃんに次々と着弾。と、「きゃぁぁぁぁ！」背後から悲鳴が聞こえた。慌てて振り返ってみれば、アリサちゃんとフェイトちゃんが倒れていた。どうして？と思う前にハッとした。

「まさか・・・今の火炎弾・・・」

「正解だよ、高町なのは」

耳元で囁かれたように感じるほど響いてきた声。バッと振り返ったら、すぐそこにテスタメントちゃんが居て、第四聖典の先端を私に向けてた。

≪Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ≫

――轟火之砲光――

シールドが張られると同時、放たれる火炎砲撃。

「ぅ、ぐぅぅ・・・うぁぁぁ・・ああああああ！」

今まで受けてきた魔法の中で一番の攻撃力だ。シールド越しでもその熱量と衝撃のすごさが伝わる。少しずつバリアジャケットが焼け破けていく。特に両袖が激しい。半袖になるまで続けられた放射がやっと止まった。遅れてシールドがもう限界って言うように霧散。

「はぁはぁはぁはぁ・・・！」

――煉弾――

「あぐっ・・！？」

背中に連続して伝わる衝撃。魔力弾――ううん、熱量を持ってるからアノ火炎弾で撃たれたんだって、揺らぐ視界、そして意識の中、判った。私は宙に留まることが出来なくて、そのまま床に墜落。「ぅく・・！」高度が低かったのが幸い。叩き付けられた時の衝撃はそんなに強くなかった。

「さすがに・・はぁはぁはぁ・・キツイ・・な・・・はぁはぁ・・・」

テスタメントちゃんのブーツが目の間で止まる。体が重くて起こせないから、目だけを動かして見る。テスタメントちゃんの顔色は悪く、息遣いもすごく荒い。それでも「ジュエルシード・・ちょうだい」って告げる。私は最後まで抵抗しようと思って、"レイジングハート"を握る左手に力を込めた。けど、ガキィン！と柄に振り降ろされた第四聖典の所為で、持ち上げることが出来なかった。

≪Ｐｕｔ　Ｏｕｔ≫

「レイ・・ジング・・・ハート・・・！？」

何を思ったのか"レイジングハート"が最後のジュエルシード７つを取り出した。

「やっぱり・・良い相棒じゃない・・・あなたの事・・・護りたいんだ、よ・・」

テスタメントちゃんがジュエルシードに手を伸ばすのが見える。ダ

メ。掠れる声で言う。でも手は止まることなく・・・あと少しで。
というところで、「渡さないって言ってるでしょ！」シャルちゃんの声が届いた。続けて何かが飛んで来て、第四聖典を大きく弾き飛ばした。その何かが目の前に落ちて、ソレがなんなのかが判った。

「鞘・・・！」

シャルちゃんの鞘だった。それだけじゃない。「ブレイズキャノン！」クロノ君の砲撃がテスタメントちゃんを襲撃、「うわぁぁぁぁ！」そして着弾。大きく弾き飛ばされたテスタメントちゃんが見えた。

「なのは！」「なのはちゃん！」

私を抱き起してくれたのは「アリサちゃん、すずかちゃん・・・！」だった。２人もボロボロだけど、瞳にはまだやれるって言う、強い思いが見て取れる。側にはフェイトちゃんとアルフさんも居て、私を心配げに見てくれていた。私も負けてなんかいられない。自力で立ちって、"レイジングハート"を握り直す。

「レイジングハート。あとでお説教だからね」

≪申し訳ありません。私は自身とあなたを信じきることが出来ませんでした≫

「ん。今度こそは、最後まで一緒に足掻こうね。見っともなくても」

≪はい！≫

「形勢逆転だテスタメント！　大人しく武装を解除し、投降しろ！」

クロノ君が倒れ伏してるテスタメントちゃんに告げる。

「形勢逆転んん？　そんなボロボロのクセして・・・あなた達はぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ！！」

テスタメントちゃんはフラ付きながらも立ち上って、前方に魔法陣を展開。火炎を発生させる。少しだけど、周囲の魔力素を集束させてるのが判る。集束砲だ。私たちが行動に移る前に、

――サンライズブレイカー――

火炎を纏う集束砲が放たれた。

――ラウンドシールド――

――パンツァーシルト――

――ホイールプロテクション――

私たちの前方に展開される、アリサちゃん、すずかちゃん、クロノ君の3枚のシールド、シャルちゃんのベルカ式のシールド、アルフさんの渦を巻くバリア。

「なのは！」

「なのはちゃん！」

「なのは！」

「フェイト！」

「フェイト・テスタロッサ！」

みんなの視線が訴えかけてくる。私とフェイトちゃんで押し返せって。フェイトちゃんと頷き合う。私は"レイジングハート"を、フェイトちゃんは"バルディッシュ"を多重障壁に向けて、魔力のチャージを開始。テスタメントちゃんの集束砲がまずアリサちゃんのシールドに着弾、一瞬にしてヒビを入れて、粉砕。

続いてすずかちゃんのシールドに着弾、またすぐにヒビを入れる。けど、少し押し留める。そして粉砕続けてシャルちゃんのシールドに着弾。シャルちゃんは「連続ロード！」って叫んで、"キルシュブリューテ"のカートリッジを連続でロード。

「これで少しは保つでしょ！」

少しずつ集束砲の威力が減衰していくのがなんとなく判る。けど、抑え込みきる前にシャルちゃんのシールドが粉砕。最後にアルフさんのバリアに着弾。ここでようやくチャージが完了した。

「ディバィィン・・・！」

「サンダー・・・！」

「「「「「いっっっけぇぇぇぇぇぇーーーーーーッッ！！」」」」」

みんなの期待に応えるための砲撃を・・・

「バスタァァァーーーーッッ！！」「スマッシャァァァーーーーッッ！！」

発射した。アルフさんのバリアを挟んで衝突する私とフェイトちゃん、そしてテスタメントちゃんの砲撃。一瞬にしてバリアを粉砕、直接衝突する。集束砲はそんなに集束率もチャージ時間も無く、みんなの防御魔法で威力を減衰されていたのに、それでも私たちのチャージした2本の砲撃と拮抗してる。残り少ない魔力を限界まで絞り出して、砲撃に加える。すると少しずつ押して行っているのが見て取れた。

「「「届けぇぇぇぇーーーーーーーーッッ！！」」」

「こんのぉぉぉーーーーーーッッ！！」

そしてついに私たちの砲撃はテスタメントちゃんの集束砲をハッキリと押し返し始めて・・・テスタメントちゃんに着弾、大爆発を起こした。その衝撃に、私たちはその場に屈んで耐える。衝撃が過ぎ去って、ゆっくりと立ち上った。みんなと一度顔を合わせてから、濛々と上る煙幕を見る。

コツコツと足音が聞こえてきて、煙幕の中からテスタメントちゃん

が出て来た。もう戦えるだけの魔力・体力が無いけど、私たちは身構えた・・そんな時、すごい揺れが私たちを襲った。悲鳴を上げながらその場に座り込む。クロノ君が「アースラ！　何が起きてる！？」って叫んだ。

『こちらエイミィ！　駆動炉が停止したことで時の庭園が墜落し始めていってる！　このままじゃ虚数空間に呑み込まれちゃう！　急いで脱出を！』

エイミィさんから切羽詰まった通信が私たちに届いて、それを証明するように時の庭園が大きく傾き始めた。それに、地響きの所為でここ最下層の至る所に張り巡らされてる樹の根っこ状の岩が崩落し始めた。

「まずい！　テスタメント！　プレシア・テスタロッサを捕えている結界を解け！」

テスタメントちゃんが頷いて、結界を解除。フェイトちゃんが「母さん！」って駆け寄ってく。シャルちゃんはテスタメントちゃんの身柄を確保するために歩き出し、クロノ君はフェイトちゃんに続いてプレシアさんの元へ行こうとした。

――サンダーレイジ――

そんな中、最下層に降り注ぐ紫色の雷撃。ハッとプレシアさんの方を見る。プレシアさんは杖を支えに立ち上っていて、足元に魔法陣を展開していた。そして駆け寄ろうとしていたフェイトちゃんは雷

撃を受けて、倒れ込みそうになりながらも"バルディッシュ"を支えに立って、「母さん・・？」呻いた。

「フェイト！！」

「ジュエルシードを渡しなさいッ！」

「なのは、いや誰でもいい！　ジュエルシードを確保しろッ！」

私が一番近いこともあってジュエルシードを確保に動く。アリサちゃんとすずかちゃんも手伝ってくれるようでそれぞれデバイスを掲げた。テスタメントちゃんの妨害も無く、私が3つ、アリサさんとすずかちゃんが2つずつ回収。プレシアさんの方を向くと、視線で人を殺せそうなほどの怒りを顔に浮かべていた。

「もう諦めなさいプレシア」

シャルちゃんがそう言った時、今まで以上の振動が私たちを襲って、床の至る所が崩落。その崩落の中に、プレシアさんとアリシアちゃんのポッドが含まれていて、床と一緒に落ちた。

「母さん！　アリシア！」

「フェイトちゃん！？」「フェイト！」

信じられないことが目の前で起きた。崩落に巻き込まれたプレシアさん達を追うように、フェイトちゃんが虚数空間の待つ穴に飛び降

りた。虚数空間。シャルちゃんの話じゃどんな魔法でも発動しない、一度落ちたら2度と上がって来れない次元空間に空いた穴。その穴に、フェイトちゃんが落ちた。それはつまり2度とフェイトちゃんと会えないことを意味していて・・・。

「うそ・・だよね・・・」

アルフさんが「フェイトぉぉぉ！」泣き叫んで、後を追おうとするけど、クロノ君に押さえ込まれた。私は、アリサちゃんやすずかちゃんも茫然となって、その場にへたり込んだ。

「ふざけるなッ！！　こんな結末があって堪るか！！」

――タブリスの鎖――

テスタメントちゃんが黄金に輝く3本の鎖をどこからともなく具現させて、フェイトちゃん達の落ちた穴へ向かわせた。

「無理だテスタメント！　魔法は全てキャンセルされ――」

「うるさい！　フェイト達は必ず引き上げる！　転移でも退避ルートでも準備しておけ！」

ものすごい荒い口調になってるテスタメントちゃん。それでクロノ君も呆けていたけど、「エイミィ！　ルートの確保を！」ってすぐに指示を出した。

。―。―。―。―。―。

虚数空間を真っ逆さまに落下するプレシアと、彼女の娘、アリシアの収められた生体ポット。プレシアはこれから死ぬというのに、慌てることなく、焦ることなく、ただ静かにポッドに寄り添っていた。ふと、落下が落ち着いたことを感じたプレシアに疑問が生まれた。重力の底に到着する前に死ぬのに、意識があまりにもハッキリとしているからだ。閉じていた目を開ける。そこは虚数空間であるにも拘らず、確かに落下が止まっていることが判った。

「これは一体どういうこと・・・？」

ポツリと漏らし、辺りを見回す。魔導師として理解できない状況に困惑している。とそこに「待ってましたよ」という少女の声が、彼女の耳に届いた。プレシアの目の前に現れる1人の少女。スカートがフワリと大きく広がったプリンセスタイプの桃色のドレスを着た、美しい金髪を有している。

「あなたは・・・！？」

現実離れした光景にプレシアはふと、こう思った。気付かないうちに自分は死んだのではないか、と。彼女は不治の病を患っていた。日に日に増える吐血。医者に掛かっていないため病名は不明だが、プレシアは自分の死期が近いことを知っていた。だからこそアリシア復活を急いた。自分が死ぬ前にアリシアとの僅かな時間を過ごすために。

「私は神さまです」

少女の神さま発言に、プレシアは「はっ」と鼻で笑った。

「神様だったら奇跡を起こしなさい。私の娘、プレシアを蘇らせて」

「いいですよ」

自称神さまは即答し、両手をプレシアの前まで持って行き、何かを救い上げるような形にした。両手の平に現れる、リンカーコアのような光球。神さまは「アリシア・テスタロッサの魂です」と告げた。プレシアの脳裏に、イリスとのやり取りが鮮明に蘇った。

――個人がその個人足らしめるのは記憶じゃない、魂だもん――

――それこそ神様の奇跡くらいしか蘇らせる方法はない――

プレシアはハッとして、神さまと、彼女の言うアリシアの魂を見る。わなわなと震える口で「本当にアリシアは蘇るの・・・！？」と確認を取るプレシアに、「その代わり貴女が死にます」と返した神さま。

「え・・・？」

「貴女の運命はここで途切れる。それは絶対で、覆すことはこの私にも出来ない。でもアリシアは違う。彼女の有する可能性の中には、死なずに済んだ世界もある。だから私は彼女の魂を確保することが

出来、こうして貴女の死に際に会いに来れた。
そんな私に出来ることは、ここで尽きる貴女の命の力を使ってアリシアの魂を肉体へ帰し、そして繋げる橋とすること。どうします？
このまま一緒に亡くなりますか？　それとも貴女の命で、アリシアを蘇らせますか？」

「・・・私の命を使うということは、私の魂はこれからもアリシアと共に居られる、ということかしら？」

「そうですね。もちろん自我は残りませんし、記憶も引き継がれません。ですがアリシアの魂と寄り添って、彼女の生きる支えにはなります」

プレシアはポッドの中に漂うアリシアを見た。そして「判ったわ。私の命を、アリシアにあげる」そう決断した。本音を言えば、僅かとは言え一緒の時間を生きたかった。だがそれは叶わない幻想。それでもプレシアは、自分の自我が残らずともアリシアの魂と共に存在できることに満足した。

「私の命がアリシアの命となるなら、それで十分よ。元々私は直に死ぬのだし。最期の最期に有効活用が出来て満足だわ」

「後悔は、しませんね？」

「ええ」

プレシアはもう一度アリシアのポッドに寄り添い、そっと撫でなが

らアリシアとの思い出を振り返った。様々な思い出が蘇る中、プレシアの脳裏にあるシーンが浮かび上がった。それは数少ない休暇を利用して、アリシアとピクニックへ出かけた時のこと。

――アリシア。お誕生日のプレゼント、何が欲しい物、ある？――

――それじゃあ・・・あっ、わたし、妹が欲しい！　妹が居れば、お留守番も寂しくないし、ママのお手伝いもいーっぱい出来るもん♪――

（妹・・・）

――生まれるのは、どうしたって記憶を共有しただけの歳の離れた双子の妹だ！――

イリスの台詞を再び思い出したプレシアは「本当に私はダメね。私は、気づくのがいつも遅すぎる」と呟いた。今さらになってアリシアとの約束を思い出し、プレシアの中に後悔が生まれる。そんな時、「母さーーーーん！」聞こえるはずの無い声が届き、プレシアは閉じていた目を開けて頭上を見上げた。

「母さーーーーん！」

フェイトだ。神さまの姿がフッと消える。それに何かを言う前に、プレシアの元にフェイトが降り立った。

「母さん！　私は・・・」

悲しげな表情で自分を見上げるフェイトに、プレシアはスッと目を逸らした。今さら何と言えばいいのか判らないから。今まで散々痛めつけ、苦しめ、否定し、拒絶した。それなのに自分を母と呼び、大好きと慕う。そんなフェイトの顔をまともに見られない。

「母さん」

フェイトが恐る恐るプレシアの手に触れた。ビクッと肩を震わせるプレシア。だが振り払わない。拒絶をしなかった。フェイトはそれだけで嬉しく、小さく微笑んだ。

「母さん。私・・・私も一緒に・・・」

「帰りなさい。あなたまで死ぬことはないわ」

「え？　でも虚数空間に落ちた以上はもう・・・」

フェイトがそこまで言いかけたところで、プレシアがフェイトと目を合わせた。そしてそっと右手でフェイトの頬に触れ、「生きなさい。アリシアと一緒に」と告げた。意味が解らず、それに優しく触れてもらっていることについてもフェイトは困惑する。あまりにも態度が違うからだ。

「私はもう生きられない。それが運命だから。でも、アリシアはまだ蘇ることが出来て、これからも生きられる」

「母さん・・・？　何を言ってるの・・・？」

「フェイト。あなたはこれからアリシアと――お姉ちゃんと生きていくの。あなたは妹なのだから、ちゃんとお姉ちゃんの言うことを聴くのよ？　でも、アリシアが間違っているのなら、ちゃんと正すの」

「意味が解らないよ母さん。アリシアはもう・・・」

「行きなさい。そして生きなさい。フェイト。私の・・・２人目の娘・・・！」

「かあ・・・さん・・・！？」

プレシアがフェイトを抱きしめた。フェイトの瞳からどんどん溢れ出る大粒の涙。プレシアの瞳からも一筋の涙が流れた。

「さぁ、自称神よ！　アリシアを蘇らせて！」

フェイトを放したプレシアの胸から真っ白に輝く光球、彼女の魂が現れた。途端にプレシアは死を感じる。意識が揺らぎ、涙に滲む視界に映るフェイトを正しく認識できない。だが彼女に恐怖は無い。何せこれからも愛おしい娘たちと共に生きていくのだから。ただ、彼女は願う。アリシアとフェイトが仲良く生きていられる未来があるように、と。完全に自分と言う存在を失う前にプレシアは、「母さん！」必死に自分を呼ぶ声を聴いた。

†††Ｓｉｄｅなのは†††

崩壊が続く中、テスタメントちゃんが「捉えた！」って言って、３本の鎖を思いっきり引っ張り上げた。そして穴から飛び出すのはフェイトちゃんとプレシアさん、そして裸の女の子アリシアちゃん。穴の中で何があったのか判らないけど、アリシアちゃんはポッドの中じゃなく、外に出てる状態だ。

「受け止めて！」

崩壊が届いていない場所に居る私たちの頭上にまで引っ張り上げられたフェイトちゃん達。私とアリサちゃんとすずかちゃんで気を失ってるフェイトちゃんを、アルフさんがプレシアさんを、シャルちゃんがアリシアちゃんを抱き止めた。

あとは「テスタメントちゃんも早く！」虚数空間の穴の側に居るテスタメントちゃんに呼びかける。テスタメントちゃんがこちらに向かって駆け出したその時、一際強い揺れが最下層を襲った。そしてそれは起きてしまった。崩落した岩の柱が「テスタメントちゃん！」の上に倒れ込んだ。ものすごい砂煙が巻き起こって、テスタメントちゃんの姿を完全に隠した。

「テスタメントちゃん！」

助けに行こうとしたけど、私たちとテスタメントちゃんの居る場所の間が崩落したことで虚数空間が大きく口を開けたから「ダメ！」シャルちゃんに止められた。砂煙が晴れて、テスタメントちゃんの様子を視認できるようになった。岩の柱にテスタメントちゃんの下

半身が隠れてる。

「ふふ。悪党の最期、か。優しいあなた達を痛めつけた罰かな」

テスタメントちゃんが自嘲気味にそう言ったのが聞こえた。

「諦めちゃダメだよ！」

「そうよ！　あんた、勝ち逃げなんて絶対に許さないだから！」

「最後まで頑張ってテスタメントちゃん！」

「足掻いて！　諦めるなテスタメント！」

もう脱出を諦めてるテスタメントちゃんを叱咤する。

「無理を言わないでよ。足の感覚が無い。たぶん潰されてる。脱出したところで失血で死ぬ。結果は変わらない」

「そんなことない！　アースラにはティファレトさんっていう、すごいお医者さんが居るから！」

涙が溢れてくる。テスタメントちゃんとは本当にいろいろあったけど、でもフェイトちゃんと同じように絶対に良い子なんだ。だから諦めたくないし、諦めてほしくなかった。だけど無情にもテスタメントちゃんの居る場所が大きく傾いて、虚数空間へ滑り落ちようとしていた。

「「テスタメントちゃん！」」「「「テスタメント！」」」

「・・・高町なのは。アリサ・バニングス。月村すずか。そしてフェイト・テスタロッサにも伝えて。私の死を、背負わないでいい。こうなったのはあなた達の所為じゃないし、誰の所為でもない。だから、苦しまないで」

テスタメントちゃんが笑った。もう涙で滲んでよく見えない。

「・・・テスタメント。君が救おうとしていた者の名前と居場所を教えてほしい。君の代わりに、僕が、管理局が救って見せる」

クロノ君はもう完全にテスタメントちゃんの救出を諦めていた。だからそう訊いた。テスタメントちゃんは小さく笑った後、「私だよ。私を救いたかった」って答えた。え？と訊き返す私たちに、「ほら、これが私を悩ますタネだよ」ってテスタメントちゃんが袖を捲った右腕の素肌を掲げて見せた。所々がヒビ割れていて、砕けていて、霧散していて、薄らと消えかけてる腕。

「「「「「「っ！？」」」」」」

「ある罪を犯し、その罰によってこんな体になった。でも・・・死にたくなかった。生きる為に、魔力を確保する為に、ジュエルシードを知る前には色々な悪事を働いたよ。そして私はジュエルシードを知って、求めた。もう生きているのも許されないような罪を犯しておきながら、ね。

だからもう一度言うよ。大悪人な私の終焉に、あなた達が苦しむ必要も悲しむ必要もない。ふふ。言ったとおりでしょ？　高町なのは。私のことを友達にしたいなんてもう思わなくな――」

「そんなことない！　今でも私はテスタメントちゃんと友達になりたいって思ってる！」

「あたしもよ！」

「私も！」

「アリサ・バニングス。月村すずか・・・。あなた達は本当に・・・お人好しだなぁ」

それが、テスタメントちゃんの最期の言葉だった。テスタメントちゃんの居る場所に天井から崩れてきた瓦礫が落ちてきて、一緒に虚数空間に落ちて行った。

ＡＮＳＵＲⅣ其は鳴天より死地に墜つ雷の化身なる者～Ｇｒａｎｄｆａｉｒｙ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

石柱がすぐ側に倒れ込んだことで発生した砂煙に乗じて、私はテスタメントの幻を作り出した。そしてそのテスタメントの幻が虚数空間へと落ちて行ったのを、ステルス魔法――ミラージュハイドで姿を消した上で岩陰に隠れて見ていた。
私が騙った名前、「テスタメントちゃん！！」を泣きながら何度も呼ぶなのは達。管理局にジュエルシードの捜査をこれ以上させないためにはテスタメントの死は必要だった。それで彼女たちの心に傷を負わせることになると解っていた。だが私の都合を優先させてもらうと決めていた。

「（正しく悪党だな。子供を散々傷つけて・・・）っと、行ったか・・・」

クロノに「死にたいのか！」と叱られながらなのは達は最下層より脱出。１つ上の階層から転移したようで完全に気配が無くなったのを確認した。全ての魔法を解除。ステアの顔から私自身の顔へと戻し、"界律の守護神テスタメント"の聖衣型の騎士甲冑から、アースガルド軍の軍服型の戦闘甲冑へと変身し直す。

「グランフェリアとの決戦前に回復しておこうか。我が手に携えしは確かなる幻想」

複製した物品や取り込んだ物品が貯蔵されている創生結界、"神々の宝庫ブレイザブリク"にアクセスし、手の平サイズの宝石を取り出す。ソレは、ここ時の庭園の駆動炉の魔力の結晶体だ。フェイトとアースラで別れた後、私はすぐさま駆動炉へ向かい、魔力吸収の術式コード・イドゥンで駆動炉の魔力を回収、結晶体へ変化させていた。

――女神の救済（コード・イドゥン）――

改めてのその結晶体から魔力を吸収し、なのは達との決戦で消費した魔力を全回復。そしてもう1つ。ジュエルシードのシリアル31も取り出し、魔力炉（システム）と同化させる。

「ぅぐ・・・づっ・・・くぁ・・・！」

馬鹿みたいに弱っている魔力炉（システム）にジュエルシードのようなエネルギーの塊を放り込んだんだ、かなり辛い。だがこの程度で音を上げているようじゃこれからの堕天使戦争は生き抜けない。

「かはっ・・・はぁはぁはぁはぁ・・・！」

――我（コード）を運べ、汝の蒼翼（アンピエル）――

背より12枚の蒼き剣翼アンピエルを展開。最下層が完全崩壊する前に上層へ向かう。上層に出たはいいが、「グランフェリアと遭遇する前に崩れるな」庭園の崩壊速度があまりにも早い。

「場所を変えなければならないか・・・」

命懸けの決闘の最中、常に崩壊する瓦礫に注意を割かなければならないのは致命的だ。とにかく崩壊するのが最後になるであろう塔の最上階を目指す。私がぶち抜いてきた穴を通り、最上階へもう少しと言ったところで・・「っ！」直感と言っていいだろう。すぐに急停止して、その場に留まった。

――雷槍迅穿衝――

その直後、琥珀色に輝く雷光の砲撃が頭上を通り過ぎて行った。もし止まっていなければ直撃していた。すぐさま「エヴェストルム！」ベルカ時代に作成したアームドデバイス、"エヴェストルム"を携える。続けて２つある六連式シリンダーを同時に稼働させ、計４発のカートリッジをロード、穂に刻んであるルーンを発動し、デバイスを神器化させた。

「来たなグランフェリア・・・！」

グランフェリアが壁を突き破って現れた。背にはクジャクの尾羽のような魔力翼――エラトマ・エギエネス２０枚が放射状に展開されている。地響きが続く中、かつては"戦天使ヴァルキリー"の次女、そして現在は"堕天使エグリゴリ"の１機、グランフェリアと相対する。

「グランフェリア。先日は世話になったな」

「神器王ルシリオンを視認。第一級戦闘意識へ移行」

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。―。―。

其は善性より堕とされし雷獄の堕天使グランフェリア

。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

急速上昇しつつ、「第三級断罪執行権限、解凍・・・！」リミッターをもう１段階解除。ジュエルシードの力を借りて魔力ランクをＳＳＳまで高める。だが、まだグランフェリアの魔力、Ｘランクには届かない。

――力神（コード・マグニ）の化身――

その差を埋めるために身体能力や魔術効果を全て強化する上級補助術式、マグニを発動し・・・「行くぞッ！」急速上昇、グランフェリアの頭上を取る。

――無慈悲（コード）たれ、汝（プシエル）の聖火――

足元にアースガルド魔法陣――４つのひし形で形作られた十字架の四方より剣が伸び、剣を繋ぐように三重の円――を展開。魔法陣より炎熱の龍を発生させ、グランフェリアへ突進させる。着弾する前に、

――舞（コード）い振るは、汝（サラヒエル）の獄火――

炎熱の魔力槍サラヒエルを２００本と展開させ、「蹂躙粛清（ジャッジメント）ッ！」号令を下し、プシエルに呑み込まれたグランフェリアへ向け一斉掃射。これでもまだあの娘の魔力障壁にも元から体に備わってる装甲の硬度にも足りないだろう。

――巻（コード）き起こせ、汝の旋風（アムブリエル）――

――舞（コード）い振るは、汝の獄火（サラヒエル）――

――舞（コード）い降るは、汝の土爪（スカルティエル）――

――舞（コード）い降るは、汝の無矛（パディエル）――

――舞（コード）い降るは、汝の瀑流（ウァカビエル）――

――舞（コード）い降るは、汝の雷光（パシエル）――

――舞（コード）い降るは、汝の煌閃（マカティエル）――

――舞（コード）い降るは、汝の邪闇（サマエル）――

「全より愛されし希望、其は次なる天上の王。そして此の矢は彼の者を穿つ、葬世の始まりを告げる狼煙、天に背きたる一閃。受けよ、王殺の凶矢」

全属性の魔力槍をそれぞれ１本ずつ作り出し、１本の長矢へと集束させた。"エヴェストルム"を指環に戻して魔力で弓を創り出し、

長矢を番える。２００本のサラヒエルが炎龍プシエルに着弾、私が作った吹き抜けとグランフェリアを中心とした付近の階層全てに満ちるほどの爆炎が発生した。

「盲目神（コード・ヘズ）の哀矢・・・！」

上級攻性術式、ヘズを爆発の中心へと射る。ヘズの一閃は爆炎を一瞬にして消滅させ、全くの無傷だったグランフェリアへと一直線へと突き進む。さらに槍の如き魔力矢を創り出して弓に番え、「弓神（コード）の――・・・」射る体勢を取る。

「くだらない三文芝居を見せられ、さらにこの程度の児戯で私を斃そうなどと思われ・・・！」

――雷槍連穿衝・弐式――

グランフェリアが２８本の雷槍を創り出し、石突を"雷界幻矛"で打ち払うことで超高速で連続射出する。最初の雷槍がヘズと真正面から衝突。拮抗する間もなく粉砕され、２本目の雷槍と衝突、また も粉砕、そして３本、４本、５本・・・と、３秒の間にそれらが繰り返され、ヘズは最後の２０本目で潰された。

「狩猟（ウル）・・・！」

魔力矢ウルを射る。ウルは数ｍ進んだ後、６００の光線と分かれ、一斉にグランフェリアを襲撃する。

「随分と馬鹿にしてくれるじゃない、神器王ぉぉぉぉッッ！！」

――雷天走衣――

グランフェリアが琥珀色の雷そのものとなり、ウルの絨毯爆撃を真正面から無理やり突破してきた。それにしても「三文芝居、か」私となのは達とのやり取りを見ていたようだな。気付かなかった。さすがは"ヴァルキリー"　全１０００体中、トップ５に入る気配遮断能力の持ち主。今さらながらに面倒な機能をグランフェリアのシステムに乗せてしまったとちょっと後悔。

「お前はフェイトとアルフと仲良くしていたんじゃないのか・・・！？」

――曙光神（コード・デリング）の降臨――

閃光系魔力が私を中心として球体上に爆ぜる。それでもグランフェリアは止まることなく、デリングの中を突っ込んで来た。あの娘は"雷界幻矛（らいかいげんむ）"を持つ右腕を上半身を捻るようにして引き、「穿つッ！」軌跡を目で捉えることが出来ないほどの高速の刺突を繰り出してきた。起動し直した"エヴェストルム"で弾くが、ギリギリ過ぎた所為で頬を浅く裂かれてしまった。

「あの子たちには何も思うところは無いわ。ただ、お前の芝居にイラついているだけよ！」

「あー、本当にキツイな、今のお前は・・・。父（わたし）さんは泣きそうだ！」

洗脳される前は本当に可愛い娘だったんだがな。これが反抗期の娘を持つ父親の心情か。デリングが消失し、私とグランフェリアは斬撃と刺突の応酬を始めた。体が小さくなったことで戦い辛くなってしまうかと思ったが、案外問題にはならなかった。小さいゆえに体を常時覆う魔力障壁の消費魔力も少なくなり、何より小回りが利きやすくなった。体を軸に"エヴェストルム"をクルクル回し、片穂であの娘の刺突を捌き、片穂で斬撃によるダメージを狙う。

「っと、そうだ。これを聴きたかったんだ・・・！」

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

グランフェリアの側面より、サイズを2周りほど小さくした銀の岩石で組まれた巨腕イロウエルを1基だけ出現させ、あの娘を握るように捕まえようとした。正直イリュリア製の"エグリゴリ"・ミュールにすら潰されるようなイロウエルだ。期待はしていない。まぁ私が土石系を苦手としているというのが大きな要因だろうが。しかしあの娘は「ぅぐ」簡単にイロウエルに捕まった。人差し指と中指の間からあの娘の胸と頭だけが出る。

「なんか・・・拍子抜けだな。まぁいいか。答えろ、グランフェリア。何故イリスが、管理局がレーゼフェアとシュヴァリエルの名を知っている？」

イリスの口から2機の名を聴き、動揺を隠すのがどれだけ大変だったか。フェイトの元にグランフェリア。管理局にレーゼフェアとシュヴァリエル。悪い夢を観ているような、偶然では片付けられない

出遭いが起きてしまっている。

（なのはやユーノ達の元にも誰か姿を出していないだろうな・・・？）

マリアの索敵能力の穴に少々呆れや不満が生まれてしまうくらいは許してほしいものだ。足掻くこともせずにグランフェリアは真っ直ぐと私の目を見つけ返してきて・・・あることに気付き、「しまった！」何をする間もなく私は全力で急上昇する。あの娘の瞳。うっすらと光が燈っていた。それは、ある術式を発動する前兆だ。もう少し疑うべきだった。「くそっ、いきなりか・・・！」何故グランフェリアが大人しく捕まったのかを。

「真技・・・！」

――招請・百輝千光万雷――

カッと足元、グランフェリアから強烈な閃光が発せられた。あの娘の真技によるものだ。私のデリングと同じようなものだ。あの娘を中心に雷光が球体上に爆ぜる。熱量を持った爆ぜる雷光は触れる物を融解させつつ、私を呑み込もうと迫ってくる。

（最上階――駆動炉か・・・！）

庭園の最上層部へと辿り着いたところで雷光は収縮、ギリギリで効果範囲から逃れることが出来た。しかし時の庭園の塔、その大半が融解しまったことで崩壊速度云々と言ったレベルの話じゃなくなった。上層部と下層部との間にぽっかりと空いた穴。イリュリア戦争

での"エテメンアンキ"と同じだ。重力に引かれて上層部が落下を始めた。逃げることは出来るが、その時は次元空間にこの身を投げ出すことになる。

（とはいえ次元空間に生身1つで存在できるのか・・・？）

疑問が尽きない中、グランフェリアがエラトマ・エギエネスを翻しながら急上昇してきた。

――雷槍連穿衝・壱式――

迫って来るのはあの娘だけでなく17本の雷槍もだ。それらを横移動で回避しつつ、

――女神の陽光（コード・ソール）――

"エヴェストルム"の穂先を向け片穂のカートリッジを1発ロード、上級の火炎砲撃ソールを連射する。グランフェリアはバレルロールを繰り返して回避。

――雷槍迅穿衝・連牙――

"雷界幻矛"の連続刺突によって発生した雷撃砲をお返しとばかりに放ってくる。今度は火炎と雷光の砲撃の応酬だ。互いに回避を連続で行い、徐々に距離が近づく。頭上からは天井も近づいて来る。崩落する上層部とあの娘に挟み撃ちされた状況。今考えられる好転の術はただ1つ。戦死ではなく事故死なんて嫌だからな。アレを使

おう。魔力の供給減も有る。ついに彼我の距離が１０ｍ程になったところで、

「共に死のうかしら神器王？」

「娘と心中など嫌だね。エヴェストルム、ツヴィリンゲン・シュベーアトフォルム！」

"エヴェストルム"の３０ｃｍほどの柄の半ばが分離、二剣一対形態へと変形させる。そして両方のカートリッジを１発ずつロード。

――集い纏え（コード）、汝の閃光槍（ポースゼルエル）――

――集い纏え（コード）、汝の火炎槍（フロガゼルエル）――

片穂に閃光系魔力、もう片穂に火炎を纏わせる。薙ぎ払われた雷撃を纏う"雷界幻矛"を、右手に携える蒼光纏う"エヴェストルム"で受け、間髪入れずに左手に携える蒼炎纏う"エヴェストルム"をグランフェリアの右肩に振り降ろす。あの娘は後退することで回避。この短い攻防で時間は稼げた。１つ目のジュエルシードの魔力を全て使い切り発動する大魔術。

「開け、極壁の門、聖天へ続く道を示せ」

――聖天の極壁（ヒミンビョルグ）――

創生結界の１つ、"ヒミンビョルグ"へ続く穴を発生させ、「この

魔術は！」驚愕するグランフェリアを呑み込ませる。私も続いて穴に飛び込む。これで庭園の崩壊に巻き込まれる心配は無くなった。視界が一瞬光で潰され、すぐに治まる。目を開ければ、そこは果てなど判らないほどに広大な、完全なる異界。
薄暗く、天地両方にはそれぞれの中心へ向かって渦巻く雲が存在し、どちらが天か地など判別できない。明かりは、見渡す限り続く地平線にある曙光のみ。そしてこの広大な異界の至る所にはルーンが刻まれた大小様々な球体が点在、他にも光のルーン文字が雪のように舞っている。

「ここでなら派手に暴れられるだろう、グランフェリア！！」

２つ目のジュエルシードを発動。強烈な胸痛に襲われるが、記憶消失じゃないから恐ろしくはない。４００ｍほど先に浮遊しているあの娘が「創生結界を墓標に選ぶとはいい趣味だわ！」と応え、

――雷天走衣――

琥珀色の雷と化し、私へと一直線に向かって来た。魔力に満ち溢れている創生結界の中だ、あの娘にとっても戦いやすい環境になったことは言うまでもない。庭園内以上に飛行速度が上がっている。アンピエルの速度では到底対応できないだろう。

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

だからこちらも飛行速度を限界にまで引き上げる空戦形態、ヘルモーズへ移行しよう。背より剣翼１２枚が僅かに離れ、新たにひし形

の蒼翼１０枚を展開、計２２枚の魔力翼とする。身を屈め膝を折り、クラウチングスタートのような姿勢を取る。両手には一対の剣、"エヴェストルム"。見据えるは、こちらへ向かって真っ直ぐに突進して来る、死を従える雷光――グランフェリア。

「いざ！！」

何も無い空間を蹴って急速発進。真正面からの衝突だ。逆手に持ち替えた左の"エヴェストルム"による右脇狙いの薙ぎ払いが"雷界幻矛"によって受け止められ、間髪入れずに右の"エヴェストルム"を左肩目掛けて振り下ろし、グランフェリアは左前腕で受け止めた。もちろん神器化しているため、雷という自然現象と化していても魔力であり神秘を有しているから斬ることくらいは可能だ。あの娘の左前腕を斬り落とす。が、次の瞬間には再生している。

（確実なダメージは無いか）

再生された左手が伸ばされ、私の胸倉を掴もうとしてきたのを胸を反らすことで回避。そして"エヴェストルム"をいなした　"雷界幻矛"の刺突で私の側頭部を狙ってきた。

「私の両手をスルーしておいて決められると思うな」

両手に携える"エヴェストルム"を指の動きだけでクルリと回し、グランフェリアの両腕を斬り落とす。だがあの娘は退かず、そのまま私にタックル。全身を駆け回る高圧電流に「ぐぁぁぁぁぁぁぁッ！」堪らず声を上げてしまう。

「雷光(わたし)に抱かれて逝ってしまいなさい、神器王ルシリオン」

雷光形態のまま私を抱きしめるグランフェリア。娘の胸の中で死ぬのも一興だが、今は勘弁だ。悲鳴を上げるのを歯を食いしばって止め、私もあの娘の背中に両腕を回して抱きしめ返す。

「何を・・・？」

「同じ手を使うんだよ、お前と同じ、な」

――デアボリック・エミッション――

私を中心として発動した、純粋魔力による広域空間攻撃魔法――いや魔術と言おうか。魔導としての術式を魔道の術式へと変換させ、複製術式ではなく私の魔術として組み直した。もちろん効果はグッと高めてある。障壁発生阻害という。それでもグランフェリアに決定打を与えられない。闇が雷を呑み込もうと押し返し、私とあの娘を境に雷と闇が共に半球状となり、２つで１つの球体と化している。

「グランフェリアァァァァッ！」「神器王ぉぉぉぉぉッッ！」

しばらくの拮抗。結局、互いに押し切ることが出来ずに闇と雷は対消滅。グランフェリアの雷光形態も解け、「くっ、離れろ！」私を突き放して離れようとした。だがその前に「なぁ、グランフェリア」この娘の背後で"エヴェストルム"を連結してランツェフォルムに戻し、「あぐ・・・！？」私に届かない程度にグランフェリアの背

中を断ち斬る。

「やっぱり苦しまずに死にたいよな・・・」

「っ！？　こ、この程度で、雷光(わたし)の化身を討とうなどと・・！」

グランフェリアは私の胸を殴るかのようにドンッと私を突き放し、吐血。斬り裂かれて負った傷より溢れ出す流血を抑えるために、「雷天走衣・・・！」また雷光形態へ。雷光形態になれば、通常形態で負った傷の治りは早くなる。だが全快とはいかない。徐々にダメージを蓄積させていき、最後に大威力でトドメ。それがこの娘の撃破法の正しいルートだ。一撃で決めることなど、それでこそアンスールの真技レベルでなければ不可能だ。それに別に今ので決めようなどとは端から思っていない。あの娘を討つための魔術と神器は他に在る。

（ジーク・・・。あなたは望まないかもしれないが・・・）

アンスールの1人にして無圏世界ニダヴェリールの皇帝ジークヘルグ。そんなジークとグランフェリア。殺された者と殺した者。愛された者と愛した者。あの娘にとっても重要なファクターだ。たとえ洗脳されたことで忘れているのだとしても、自分が恋をし、そして殺してしまったジークの真技で討たれることがあの娘の為だ、と勝手に思ってる。

「そうだよな？　グランフェリア」

「一体何を言っているのか解らないわッ！」

――天威轟雷――

グランフェリアから放電されている雷撃が８発の雷弾となり、高速で射出されてきた。だが私に直撃する軌道ではなくどれもがズレて、私の側を過ぎ去っていこうとした。ああ、判ってる。「忘れているだろうが、この術式は私がお前に与えたものだ！」その場に留まらず高速上昇。それとほぼ同時、８発の雷弾が一斉に炸裂、放電する球体上の衝撃波となって私が居たところを押し潰した。

「さっきから何を言っているのか解らないわ・・・！」

――天威轟雷――

あの娘は苛立ちを顔にハッキリと表し構わず雷弾を再構築、「散れ！」周囲にばら撒くように放ち続ける。この時点でグランフェリアが何かを企んでると判る。私を狙うにしては軌道が雑すぎる。次々と炸裂する何十という雷弾。"ヒミンビョルグ"内を飛び回りながら回避を続け、私もまた攻勢に打って出るための仕掛けを施し始める。３つ目のジュエルシードを発動。不可視の魔法陣――砲門を設置。すぐさま移動し、あの娘の放ち続ける雷弾の衝撃波から逃げる。

（一体何を企んでいるんだ？　私に当たらなければなんの意味も・・・）

８枚目の砲門を設置。グランフェリアの動向を確認するために目だ

けを動かして空域一帯を見回す。雷弾が炸裂した地点を視線でなぞり、「ん？」妙な引っ掛かりを憶えた。が、ハッキリしない。そして１０枚目の砲門を設置し終えたところであの娘の強い視線を感じ、フッと目を向けた。その瞬間・・・

――雷天結界――

パリパリッと放電する音が耳に届いたかと思えば、雷弾が炸裂した地点を結ぶように琥珀色の雷撃が奔り、檻のような結界が創り出される。これが狙いだったか。完全に雷の結界に閉じ込められてしまったな。しかし閉じ込めるだけで私の空戦能力を封じたと思っているのか？

「あ・・・！（あー、さっきの引っ掛かりはコレか・・・！）」

奔る雷撃に触れないために飛行を停止し、私たちを閉じ込める結界を軽く見ると判った。三重の正八角形陣。内側と外側の八角形陣は時計回り、真ん中の陣は反時計回り。それぞれの陣の間には幾何学模様の文字のようなものが点滅している。そんな三重八角形陣の中心、上の棒が円になっている十字架――アンセイタが在り、両側に丸みの無い翼の紋様が在る。

「ニダヴェリール魔法陣・・・」

グランフェリアが作った結界は、ニダヴェリール魔術式の魔法陣を球状に丸めた形状の檻だった。対象が脱出できないように大きな空きには雷光の網が出来ているが、それでも判る者には判る。

「しまった、見失った・・・！」

ここであの娘の姿を完全に見失っていることに今さらに気付いた。あの娘から目を放した時間は1秒と無かった。気配遮断をしたとしても完全に姿を認識できなくなるわけじゃない。

「一体どこ――にぃっ！？」

右肩に走る強烈な痛み、そして熱さ。その個所を見ようとした時、視界の端が光り、咄嗟にその場から後退するが「づっ・・・！」間に合わずに左上腕を何かに貫かれた。ダメージと引き換えに知る。それは音や気配すらなく現れた光線。発射地点は今まさに私を捕えている結界を構成する雷光。

――雷天結界・閃雨――

「っ・・・！」

全方位に張り巡らされている雷光から光線が連続で発射されてきた。空戦形態ヘルモーズの瞬発力で結界内を飛び回って避け続けるが、「速い・・・！」光線の速度が速すぎて完全に避けきれない。光線は腕に足、胴体に頬と掠め皮膚を裂いていく。軌道が直線なのが救いだな。

この速度に誘導操作なんてものが付けば一溜りもない。とにかく結界破壊が最優先だ。"エヴェストルム"のカートリッジを残り全弾をロードし、治癒のエイルを発動、すぐに指環型の待機形態に戻し、

外に設置しておいた砲門１０枚を起動させる。

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

――女神の陽光（コード・ソール）――

閃光系と炎熱系の砲撃を計１０本の砲撃を一斉発射。着弾直前、

――雷天結界・分け神――

雷光形態のグランフェリアの分身体が１０体と生まれ、それぞれが壁となることで包囲砲撃を防いだ。そして今度は私に向かって５０体を優に超える数の分身体が襲い掛かって来た。それぞれの手には魔力槍が携えられている。"雷界幻矛"を持つ者――オリジナルのあの娘は居ない。

（結界を含めてこんな術式は知らないぞ・・・！）

"エヴェストルム"を鞭のパイツェフォルムで再起動。柄の長い槍型を持ち手とし、柄頭から伸びる魔力の鞭の先端に有るもう片方の剣型の"エヴェストルム"をブンブン振り回して、高速で飛来する数十体の分身体を迎撃。先端の剣で裂き、半ばの鞭で打ち、接近を許してしまった者には持ち手の槍で薙ぎ、貫き、殴る。

――雷天結界・閃雨――

「っぐ・・・！」

分身体の対応に意識を割きすぎた。背後からの光線の雨を避けきれず、何発か全身に受けてしまった。光線を受け、体を貫通し、反対側――胸や腹から跳び出すと言うのをしっかりと見た。しかもさっき受けた時には無かったスタン効果付き。電流で筋肉が強張ってしまって、体が言うことを聴かない。

（グランフェリアには貫かれてばかりだな・・・）

そんなことを他人事のように考えながら、雷光より出現したオリジナルのグランフェリアが私の胸に目掛けて"雷界幻矛"を突き出したのを見る。

――女神の護盾（コード・リン）――

「チッ・・・！」

体は動かずとも魔力炉（システム）は稼働し続け、私は意識を繋ぎ止めている。魔術を発動する分には何ら問題は無い。女神が祈る姿が描かれた障壁リンは"雷界幻矛"の刺突を完璧に防ぎきるが、グランフェリアの突進の勢いだけは殺せない。私はそのままあの娘に押されるように後方へ弾き飛ばされる。

――雷天結界・分け神――

結界を構成する雷光よりあの娘の分身体が１０体とまた出現し、両サイドから襲い掛かって来た。

「くそっ・・・！」

「全身を穴だらけにして、雷撃で体内を焼き滅ぼしてやるわッ！」

リンごと私を押し続けるグランフェリアが勝利を確信したかのように笑みを浮かべた。私としてはこのまま殺されるわけにはいかない。未だに体が動かないが、魔術は扱えると・・・たった今、見ただろう！

――崇め讃えよ、汝（ミカエル）の其（コード）の御名を――

背に有る２２枚の蒼翼を射出。散開した蒼翼は迫る分身体へ先端を向け、砲撃ミカエルを連続発射。ミカエルは中級最強の威力を誇る術式だ。蒼翼２２枚を空翔ける砲身として、汎用性砲撃を行わせる。もう１つの効果は、蒼翼の後端から魔力ロープを生み出し、最終的に敵を閉じ込める檻とすることだ。その代償として飛行能力が酷い有様になってしまうが。今の状態ならそれくらいどうってことない。次々と現れる分身体をミカエルで迎撃し続ける中、

――女神（コード・エイル）の祝福――

３つ目のジュエルシードをすべて使い切ってエイルを発動。受けたダメージを全回復。体の麻痺も治り、「反撃だ！」"エヴェストルム"を待機形態にし、

――邪神（コード・ロキ）の狂炎――

業火で構成された３ｍの腕と脚を創り出し四肢に武装する術式、ロキを発動。リンを回り込むように炎の両手を回し、両側面からグランフェリアを握り潰そうと襲う。

「面倒な・・・・！」

グランフェリアがリンより離脱し、炎の両手を避ける。背より生まれる炎の翼を使って追撃。あの娘を捉えようと炎の右腕を伸ばし、"雷界幻矛"で斬り飛ばされる。だが残念だったな。魔力が尽きるか解除しない限り再生し続ける。８枚の蒼翼で分身体を潰し、５枚の蒼翼で光線を防ぎ、残り９枚であの娘を包囲攻撃。

「ぐっ・・がっ・・・ぬぅっ・・・この・・・・！」

――雷天走衣――

避けきれずに３発ほど砲撃を受けたグランフェリアは雷光形態となり、結界を構成している雷と同化して姿を消した。つまり現状においてこの結界すべてがあの娘の体となる。炎の両腕を結界へ伸ばし、掴み取る。流れてくる雷撃が私の腕に届く前に、周囲に伸ばした炎の触手から放電することで感電を防ぐ。

「爆砕粛清（ジャッジメント）！」

炎の腕を爆破。掴んでいた雷を寸断するも、「ダメか・・・・！」すぐに元通りになった。

――雷天結界・分け神＆閃雨――

私へ襲い掛かってくる分身体と光線群。それらを再生した炎の腕や蒼翼で対処しつつ、結界破壊の方法を考える。ふと、この結界が創り出された際のことを思いだし・・・「なるほど」破壊方法を思いついた。光線はともなく分身が途切れたことで蒼翼１７枚を操作、雷弾が炸裂した箇所へ向ける。

――雷弾が炸裂した地点を結ぶように琥珀色の雷撃が奔り、檻のような結界が創り出される――

「天罰粛清（ジャッジメント）！」

砲撃――ミカエルを一斉発射。そう。結界を繋ぐ雷ではなく、結界を構成する基点を潰す。焦るかのように私に向けられていた光線の全弾が砲撃を迎撃しようとし、さらに分身体も立ちはだかる。だが、「甘いぞグランフェリア！」ミカエルを潰すんじゃなく、砲身である蒼翼を破壊するべきだ。

まぁ自由自在に動くからそう簡単には破壊できないだろうが。蒼翼を移動させ、様々な角度からミカエルを撃ち続ける。そしてようやく１つの基点を破壊。すると、そこと別の基点を繋いでいた６本の雷が消滅した。

『しまった・・・！』

頭に響くグランフェリアの焦りが多分に含まれた声。全ての蒼翼を

基点に向け、２２本の砲撃ミカエルを断続的に放ち続ける。次々と基点を潰し、結界はもう見るも無残に解れ・・・そして「もうダメ・・・！」あの娘が残る基点よりフラフラと飛び出して来た。蒼翼の先端を全て向け、「ジャッジメント！」砲撃を放ち続ける。あの娘は回避や"雷界幻矛"での迎撃などで対処していたが、次第に掠めることが多くなり、最終的には直撃を受け続けることに。

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想・・・！」

ジュエルシード１つを消費して、"神々の宝庫ブレイザブリク"の最奥に眠るアンスールの神器の中から、

「天槌・・・ミョルニル・・・！」

ジークの神器、"天槌ミョルニル"を取り出す。そして担い手ではない私が"ミョルニル"を使うための籠手型神器――"宝甲イルアン・グライベル"、筋力を上げる帯型神器――"メギンギョルズ"を武装。

ミカエルの集中砲火を受けてなお致命的なダメージを負っていないグランフェリアが憤怒の形相を浮かべ、「うおおおおおおおッ！」突進して来た。さらにジュエルシード２つを一気に消費し、「咆えろッ、ミョルニル！！」の能力を完全解放する。

"ミョルニル"のヘッドの装飾に刻まれた、敵の撃滅を意味するソーン、力を意味するイング、強化を意味するフェオ、勝利を意味するテュール、魔力を意味するエオー、超越を意味するダエグのルーンが輝きだす。

「おのれぇぇぇぇぇぇッ！！」

"雷界幻矛"の高速刺突を"ミョルニル"で弾き逸らす。繰り出され続ける"雷界幻矛"、それを捌き続ける私。ここまで疲労しきっている今なら、ジークの雷撃もグランフェリアに絶対に届くだろう。あの娘は対雷撃系の"ヴァルキリー"だ。Xランク以下の雷撃系魔術は全てキャンセルする能力を有している。今の私が扱うジークの真技や"ミョルニル"では、万全な状態のあの娘を討つのは無理だ。

「だからこそ今！　お前が弱っている今！　今日、お前を救う！！！」

わざと"雷界幻矛"の刺突を腹に受け、「ぅぐ・・・！」柄を掴むことでグランフェリアの攻撃を制限。左手に携える"ミョルニル"を振りかぶる。目掛けるはあの娘の頭頂部。一撃で、痛みも苦しみも無く消滅させる。しかしあの娘は「忌々しい！」"雷界幻矛"を私から勢いよく抜いて後退することで避けた。

「ごふっ。さようならだ・・・！　真技ッ、雷神放つ破滅の雷（ミョルニル）！！」

"ミョルニル"を全力で投擲。雷そのものと化した"ミョルニル"がグランフェリアへ向かう。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッ！！」

――集雷法――

グランフェリアは咆哮し、天高く掲げた"雷界幻矛"に雷光を集束

させた。

（ヒミンビョルグに満ちた自身の電雷撃系魔力を利用したのか・・・！）

「食らえぇぇぇぇぇぇぇ〜〜〜〜〜〜〜〜ッッッ！！！」

――神雷槍――

投擲された雷と化した槍。そして真っ向から向かって行くのは同じく雷と化している槌。そして衝突。視界を潰すだけの閃光爆発が生まれ、聴覚を狂わせる爆音が"ヒミンビョルグ"内に満ちた。目を細め、魔力で聴覚をシャットダウン。グランフェリアの魔力を探査しようにも魔力爆発が強すぎて捉えられない。

「・・・・っぐ！？」

それはあまりにも突然で、信じられない事態。ドスンと腹に衝撃。腹に手を伸ばし、衝撃の正体が何なのかを確認した。

「雷界・・幻矛・・・・！？」

腹に突き刺さっているのは間違いなく"雷界幻矛"だった。まさか「ミョルニルが・・・負けた・・・？」ということになる状況だ。先に受けたダメージと合わせて「ごほっぐふっ」かなりの出血量だ、急いで治療しなければ失血死だ。

（ジュエルシード・・・！）

"雷界幻矛"を抜いて（柄が半ばで折れていた）すぐに７つ目のジュエルシードを使ってエイルを発動。負ったダメージの回復に努める。閃光が晴れ、ようやく状況を確認できた。グランフェリアの姿もハッキリと視認できる。警戒レベルを一気に落とし、「グランフェリア。愛おしい私たちの娘」あの娘の元へと向かう。

。―。―。回想だ。―。―。

ニヴルヘイム侵攻阻止戦後の僅かな休息期間を利用して各々が実力を高める鍛錬を積んでいる。私とシェフィもそう。師として弟子のシェフィを、"ユグドラシル"の最下層――ノルンの泉にて鍛えている。その最中、「父上、母上！」私たちを呼ぶ声が。

「「グランフェリア・・・？」」

ブリュンヒルデ隊のシリアル０４、宝雷の矛グランフェリア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアがこちらに向かって来ていた。シェフィと顔を見合わせ、あの娘の元へ向かう。

「どうしたのグランフェリア？　なんか顔が赤いけど・・・」

「あ、あの、父上、母上！　私は一体どうしたのでしょうか？　鍛錬中よりずっと心臓（コア）が痛むのです！」

「なっ、コアがっ！？　グランフェリアのシステムに不備が生じたのか！？」

大切な娘が苦しんでいる。急いで"ヴァルキリー"の管制を担うノルニルシステムの1つ、アプリコットにアクセスしようとしたところ「落ち着いてルシル」とシェフィに頭を叩かれた。

「グランフェリア。あなたも落ち着いて。どうしてそういう症状が出たのか、憶えている限りで教えて」

「はい、母上。実は――」

グランフェリアから語られた話は、なんと言うか・・・うん、恋愛のそれだった。この娘が好意を抱いている相手は、無圏世界ニダヴェリールの皇帝、アンスールの雷皇、ジークヘルグ。私とシェフィにとっての戦友だ。

「この胸の痛みは何なのでしょう？　私、ジークヘルグ様のお顔を見、お声を聴くと、顔が発熱し、胸が苦しくなり、そして・・・ニヤけてしまうのです。以前から似たようなことあったのですが、ここまで酷いのは今日が初めてなのですぅ」

グランフェリアは真っ赤に染まった頬に両手を添え、いやんいやんと首を横に振る。そんな彼女に私は「グランフェリア。お前は私のことが好きかい？」と訊ねてみた。

「え？　父上のことですか？　もちろん大好きです。当り前ではないですか」

「じゃあシェフィのことは？」

「もちろん母上のことも大好きです。アンスールの皆様も、兄であるガーデンベルグ、姉のリアンシェルト。数多き弟や妹も。同盟世界に住まう人々、全てが大好きです、愛しています」

元の綺麗な色白の肌に戻っているグランフェリアが、可愛らしい笑顔でそう答えてくれた。ふむ。じゃあ「ジークヘルグもだよな」と追加質問をすると、ボンッと爆発したかのように首まで真っ赤にしたあの娘は、

「す、すすす、すすすす、すすす・・・！」

さっきまでと打って変わってつっかえる。そして小さく「好きれす・・・」答えた。

「ふにゃぁ～～？？」

「「グランフェリア！？」」

恥ずかしさで限界を超えたのか強制シャットダウンを起こしたグランフェリアがフラフラとへたり込み、ペタンと仰向けに倒れた。シェフィと顔を見合わせて「プッ」噴き出してしまった。"ヴァルキリー"とて恋をする。人の子を産むことは叶わないが、それでも誰かに恋をし、結ばれ、生きていくことは可能だ。システムに、老いる、と追加すれば人のように老いて機能停止――死ぬことも出来る。

「ねぇ、ルシル」

「ん？」

「グランフェリアの恋心、ジークに届いたら・・・親としては嬉しいよね」

「・・・そうだな。ジークになら任せられる」

シェフィと2人で仰向けで倒れグルグルと目を回すグランフェリアの両脇に座り、私は前髪をそっと撫で、シェフィは頬に手を添えた。

「・・・・お休み、私と――」

「私の――」

「「愛おしい娘・・・」」

。―。―。終わりだ。―。―。

私は頭部・胸部・左腕しか残っていないグランフェリアを抱きしめる。

「お休み。私とシェフィの・・・愛おしい娘」

耳元にそっと告げる。と、グランフェリアが琥珀色の魔力となって霧散し始める。完全に消滅するまで私は此の娘を抱きしめ、「グラ

ンフェリア」名前を呼びながら後頭部を何度も撫でる。
そうして、「お休み」グランフェリアは私の腕の中から完全に消滅した。

Ｅｐｉｃ１９そしてこれからを歩いて行こう～Ｔｈｅ　ＷｏｒｌＤ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

アースラへと帰艦したわたし達は待機室に一度集まって、そこでテスタメントにボコられて受けたダメージの手当てをしてる。と言っても酷いのは魔力消費だけで、軽傷だったから傷薬を塗って包帯を巻くだけで事足りる。
そんな中、モニターに映し出される時の庭園の崩壊状況。わたし達はそれを黙って見守る。途中で激しいノイズが生まれて最後までは見れなかったけど、時の庭園は確実の崩壊した。モニターがプツンと閉じる。

「テスタメントちゃん・・・」

なのはが沈んだ声で呟いた。ここに戻ってくるまで散々泣いていたから、目が真っ赤だ。

「ねぇ。ホントにテスタメントは死んじゃったわけ・・・？」

「それは間違いないだろう。瓦礫に潰された状態で虚数空間に落ちたんだ」

「で、でも・・・フェイトちゃん達を助けたようにアノ鎖で――」

「すずか。君も見ただろう。彼女が完全に虚数空間に落ちる様を。君たちを上層に向かわせた後もなお僕が最後まで見届けた。彼女は、テスタメントは死んだ・・・」

アリサとすずかの希望を完膚なきまでに潰したクロノも、かなりへコんでるのが判る。助けることが出来たのかもしれない。みんな魔力がすっからかんだったけど、何かしら方法があったかもしれない。それらを考える間もなく、試す間もなく、テスタメントは死んだ。見殺しに近いことをしてしまったわたし達。悲しむな、苦しむな。あの子はそう言っていたけど、どれだけ悪事を働こうが歳の近い子供が目の前で死んだ。それがわたし達を陰鬱とさせる。

「あの子には借りがあるのに・・・」

「死んじゃったら返すことも出来ないじゃん・・・」

「セレネ、エオス・・・」

この中で一番早くテスタメントと遭遇して戦ったセレネ・エオス姉妹。借り云々って話も前に聴いた。戦闘中にデバイスを落として、それを追って急降下、スピードが付き過ぎて地面に叩き付けられそうになっていたのを助けてもらったって言う。余計なことをして、って怒っていた2人も、さすがにテスタメントが死んでショックを受けてる。そして同じスクライアのユーノが慰めるように2人の肩に手を置く。

「クロノ執務官。イリスお嬢。みんなの治療は終わった？」

わたしのアースラ配属に合わせて出向した本局医務局所属の医務官、ティファレト・ヴァルトブルク――ティファがそう言って入って来た。みんなが手当てを終えているのを確認して「なんとかね」って答えると、ティファは「そう。では」って前置き。

「気を失っていたフェイトが先ほど無事に目を覚ましました。覚醒後は少々荒れてましたけど、リンディ提督と、彼女の使い魔のアルフのおかげで落ち着きを取り戻しました」

「「フェイトちゃん・・・」」「フェイト・・・」

唯一の救いは、フェイトが無事だったっていうことだ。本当にそれだけがわたし達を救ってくれる。クロノも安堵して「ティファレト医務官。アリシア・テスタロッサの容体は？」って訊いた。そう。わたし達は、神の奇跡を見た。２０年以上も前に亡くなったアリシアが蘇ったのだ。その代わりというようにプレシアが亡くなった。虚数空間で何があったのか、それを唯一知るフェイトの目醒めを待っていた。

「驚いたことに脈や脳波は正常。臓器、筋肉といった様々な器官を検査しましたが、問題なしです。ただ、かなり深い眠りなようで、目覚めるのは早くても明日以降かと」

ティファの診断を聴いたわたしは「無事ならそれで良いよ」奇跡の結果を噛みしめる。

「シャルちゃんの言う通りになったね。神さまの奇跡なんとかって・・・」

「うん。まさか本当に神さまが現れて、アリシアちゃんを蘇らせた、とか・・・？」

すずかがわたしにそう言い、なのはがポツリと漏らした言葉に「そんな馬鹿な事が」クロノが呆れた。でも実際それしか考えられないのも事実。仮死状態だったって言えばそれまでだけど、アリシアの死亡診断書も発見してる。

そこにはハッキリと亡くなっていることが記されていた。死因は、魔導炉に使われていた反応魔力素を大量に吸い込んだことによるショック性の心停止。その状態から仮死状態に持っているわけもなく。今回の一件は、本当に謎だらけだ。

「はぁ。とにかく本件は終わりを迎えた。プレシア・テスタロッサ、そしてテスタメントの両被疑者は死亡という形で書類送検。あとは・・・」

「フェイト、だね」

「あ、そのフェイトちゃんやアルフさんはいま医務室だよね。会ってもいいかな・・・？」

なのはの問いに、クロノが「アルフと一緒に護送室で隔離させるよう手配している」って答えた。隔離、って言葉に反応したなのは達は「えっ！？」って驚愕に目を大きく見開いた。納得できないって

表情だけど、こればかりはどうすることも出来ないってことを伝える。

「一応、フェイトは本件の重要参考人。無罪放免とはいかないの。だからなんの制限も無く自由に動き回らせるわけにはいかないんだ。あと、面会も無理なの、ごめんね」

「ああ。本件は一歩間違っていれば次元断層を引き起こしかねなかった程の大事件だった。管理局の義務・責任として、本件の関係者の処遇には慎重にならざるを得ないんだ」

「あ、でも言い方は悪いけど、フェイトはプレシアの道具として利用されて事件に関わった。しかも真実を知らされることなく。それに母親の願いを叶えたいという想いをも利用されて。そのことから情状酌量の余地はあるはずだよ。ていうか、それが認めてもらえなかった暴動だ！」

胸の前でグッと拳を握る。すると「やめてくれ。局と教会で戦争になる」ってクロノが頭を叩いてきた。むぅ、半分冗談なのに。叩かれた場所をさすさす撫でながら、フェイト達の今後について心配そうにしてるなのは達に微笑みかける。

「大丈夫。わたし達が全力でフェイトとアルフもサポートするよ。ね？　クロノ」

「そういうことだ。まぁ、フェイトのそんな事情を偉い人たちに理解させる必要があるけど、僕や艦長、イリスには伝手があるんだ。

心配しなくていいよ」

クロノと一緒に改めて微笑みかける。するとなのは達が一斉に立ち上って、「お願いします！」って頭を下げた。わたしは「うん、任されました」って返して、クロノは「ああ」力強く頷いて応えた。みんなの期待を背負った以上、何としてもフェイト達の処罰を軽いものに、出来れば無罪に近いものにしたい。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒フェイト†††

「母さんは・・・本当にもう居ないんですね・・・」

護送室って呼ばれる部屋に居る私とアルフはベッドに腰掛けて、食事を持って来てくれたリンディ艦長っていう偉い人から改めて話を聴いた。私が憶えているのは、虚数空間の中で母さんと話して、抱きしめられて、娘だって認めてもらえたこと。

そしてアリシアと一緒に生きていくようにって。妹なんだからお姉ちゃん、アリシアの言うことを聴くように。でもアリシアが間違っていたら、ちゃんと正すように・・・って。

（母さん・・・アリシア・・・）

母さんの顔から血の気が失せるのを目の当たりにして、それを思い出したことで暴れちゃって。認めたくなかった、母さんの死を。そんな暴れる私を抱きしめてくれたリンディ艦長。アルフも手を握ってくれて、何度も名前を呼んでくれた。それで私は落ち着くことが出来て、テスタメントとの戦いで負っていたダメージも治っていた

こともあって、ここに移された。

「その、アリシアは・・・？」

「今は深い眠りについていて、目を覚ますのは明日以降って言われたけど、診断結果は異状なしだそうよ」

「そう、ですか・・・」

母さんが願った、アリシアの復活。それは確かに叶った。叶ったけど、そこに母さんは居ない。でも母さんは嬉しそうだった。自分の命を使ってアリシアを生き返らせる。それで満足って。なんか複雑な気分だ。アリシアの復活を素直に喜べない私が居る。憎いわけじゃない、嫌いなわけじゃない。

（たぶん、これは・・・恐い・・・？）

目を覚ましたアリシアは、私のことをどう思うだろう。自分のクローンだから、気味悪がるかも。それに、母さんを見殺しにしたって恨まれるかもしれない。そう思うと恐いんだ。アリシアと仲良く生きるようにっていう母さんの最期の願いを聴いたのに、上手く果たせるか自信が無い。

（私はこれからどうなるんだろう・・・）

未来が不安になってくる。決めたのに。自分を始めるために、今までの私を終わらせようって。母さんの最期の願いを叶えたいって。

こんなんじゃダメだって解っているのに。だけどアリシアの心と母さんの死が重く圧し掛かる。

「フェイトさん。これからの事、少しだけお話しさせてもらうわね」

膝の上に置いた握り拳を俯いて見ていると、リンディ艦長が話を切り出した。今回の一件での私の立ち位置は結構難しいものらしく、裁判が長期に亘るかもしれないって。リンディ艦長はその理由を言わなかったけど、なんとなくだけど私は理解できていた。事の真相を知ることなく、母さんの道具として私は今回の一件に関わった。母さんの目的を知っていたか知っていなかったか。その線引きが、私に課せられる罰の重さを決めるんだ。

「――でねフェイトさん。その裁判の間、保護責任者の下で良い子でいれば、割と普通に過ごせるから安心してね♪」

その人の所でちゃんとしていれば、期間中は色んな制限を付けられることなく過ごせる、ということらしい。問題はその「保護責任者、ですか・・・？」と訊ねてみる。私って自分でも難しい子だと思ってるから、迷惑をかけてしまいそう。するとリンディ艦長は自分自身を指さして、「わ・た・し♪」って笑顔を浮かべて答えた。

「「え・・？」」

「時空管理局・提督、そしてアースラ艦長、リンディ・ハラオウンが、あなた達の保護責任者。これからよろしくね。フェイトさん、アルフ」

「えっと、はい、よろしくお願いします」

「お、お願いします」

体の向きをリンディ艦長へ向き直してからアルフと一緒にお辞儀する。リンディ艦長は「アリシアさんも一緒だから安心してちょうだいね」って続けた。私はただ頷くだけで応えた。そうだよね。私と一緒でアリシアもまた母さんを喪った。私たちと同じでこれからを生きる場所が無い。ふと、裁判が終わった後のことを考える。順当なのは、どこかの施設に入ることだ。大きくなるまではそこでお世話になるしかない。

（母さん。私は、頑張ります。アリシアと一緒に生きていくために）

抱いた恐れを乗り越えることから始めないと。そうだ、たとえアリシアに拒絶されても、私は逃げずにアリシアと一緒に生きるんだ。一度そう決めたら、すぐにでもアリシアと会いたくなった。でもそれは少しお預けだ。今の私の立場を忘れてない。それにアリシアはまだ目を覚ましていないって話だし。

「ささ。冷めちゃう前にいただきましょ♪」

トレイを膝の上に乗せて、食事を頂く。グランフェリアに洗脳されてからだから、昨日の夜から何も食べてない。ハッキリそれを思い出したら、きゅ～ってお腹が鳴った。うぅ、ちょっと音が大きかった。顔が熱くなるのが判る。

チラッとリンディ艦長を見ると、温かな微笑みを向けてくれていた。それはアリシアの記憶の中に在った、優しかった頃の母さんと同じ微笑み。だからか恥ずかしさは消えた。ぎこちなくだけど私も笑みを作って見せる。変な笑顔にならなかったかなって心配だったけど、さっき以上の笑顔になってくれたリンディ艦長を見れば、なってなかったんだって判る。

「ごちそうさまでした♪」

「「？？？」」

そうして食事を終えたところで、リンディ艦長がいきなり手を合わせてそんなこと言った。聞き慣れない言葉に首を傾げてみる。

「あぁ、これ？　なのはさん達の住んでる国での食事後の挨拶らしいの。さっきは忘れちてしまったのだけど、食前はいただきます、食後はごちそうさま、って。いただきますは食材となった命への感謝を、ごちそうさまは調達・調理してくれた人たちへの感謝を意味してるらしいの。良い文化だと思うわ」

「へぇ。変わった文化もあるもんだね」

「うん。あ、でもリンディ艦長の言う通り良い文化だと思います」

「でしょ♪っと、もうそろそろ戻らないといけないわね。けどその前に。フェイトさん、アルフ、何か質問とかあったら受け付けるわ」

リンディ艦長は時刻が表示された小型の空間モニターを展開、最後にそう確認してきた。

「グランフェリアやテスタメントはどうなったんでしょうか」

そう言えばあの2人がどうなったのか判らないから、そのことについて訊いてみることにした。心も落ち着き、お腹も満たされたことで、あの2人のことをようやく考えることが出来たから。

「「っ！」」

「え・・・？」

リンディ艦長とアルフがビクッと肩を震わせて、目を泳がせた。その様子に私は「何があったんですか？」改めて訊ねる。アルフは私から顔を逸らして「えっと・・・」って口ごもる。リンディ艦長は少し唸った後、「テスタメントさんは・・・――」私が虚数空間に飛び込んだ後、あの子がどうなったのかを教えてくれた。

「死んだ・・・？　テスタメントが・・？」

テスタメントが死んだ。虚数空間に落ちた私と母さん、そしてアリシアを助けるために伸ばした鎖で私たちを引っ張り出した後、逃げる途中で崩落に巻き込まれて虚数空間に落ちたって。それってつまり「私たちの身代わりになったってこと・・・？」になる。声に出すと全身が総毛立った。

「どうしよう私・・・あの子を殺したって言われてもおかしくない・・・！」

声が震え、体も震えだす。私たちの代わりあの子が死んだ。あの子と関係のある人たちに恨まれる。それにあの子が救いたいって人のこともある。もしあの子が帰れなかったことで、その人も死んでしまったら・・・。

「フェイト、落ち着いて！」

「落ち着けるわけないよ！　だってあの子を殺したようなものなんだよ！　あの子にも絶対恨まれてる！」

私は自分の体を抱いて喚く。と、「フェイト、聴いて！」アルフが私の両肩に手を置いて揺さぶってきた。

「アイツ、テスタメントは誰も恨んでない！　アイツ自身が言ってたんだ！　こうなったのは誰の所為でもないって！」

アルフが語る、テスタメントの最期の言葉。自分の死を背負わないでいい、死ぬのは誰の所為でもない、だから苦しまなくていい、悲しまなくていい、って。そしてあの子が救いたいと思っていた人の正体。それはあの子自身のことだって教えてくれた。

「アイツが言っていたこと、本心だって思うんだよ。自分が死ぬって状況なのに、アイツはあたし達のこれからを心配してたんだ。普

通だったら助けを求めるはずなのにさ」

「テスタメントさんの最期は口伝でしか知らないのだけど、私もアルフと同じ意見よ。あの子、根は優しい子だと思うの。庭園が崩壊を始めた時、1人だけ脱出することも出来た。でもあの子は逃げず、虚数空間に落ちたフェイトさん、プレシア女史、アリシアさんを危険を顧みず助けた。

それで崩壊に巻き込まれても恨み言を言わず、自分は助からないと悟り、自分の死を背負わせまいとした。しかも自分自身を悪人だって蔑んで、なのはさん達やフェイトさんやアルフの心の負担を減らそうとした・・・」

リンディ艦長が一息吐いて、膝に置いた私の手にそっと手を添えてきた。

「フェイトさん。自分を責めちゃダメよ。テスタメントさんの最期の願い。あの子の死を背負うのではなく、願いを受け止めるの。それが私たちに出来る、あの子の死を無残なものにしない唯一の方法だと思うの」

「受け止める・・・」

テスタメントと一緒に過ごした、短い時間が一気に脳裏に過ぎった。初めて会った時はジュエルシードを巡って戦って、ゲームセンターで少し助けてもらったり競ったり、そしてアルフの提案で同盟を結んで、それからは一緒にジュエルシードを集めた。そして私が母さんに拒絶されて気持ちが沈んでいた時、私の前に現れて、気持ちの

整理を手伝ってくれた。

――さようなら――

別れの時、あの子はそう言った。あれは同盟を破棄して敵対関係に戻ることを意味していたんだって今になって判った。次に会った時は、本当に敵として私たちの前に立ちはだかった。あの子たちと協力してなんとかテスタメントに勝って・・・。それが私があの子を見た最後の姿。「あ・・・」涙が零れてきた。

「私・・・助けてくれてありがとうって、お礼言いたかった・・・」

それだけが心残りになった。止まらない涙を袖で拭っていると、背中からアルフが抱き締めてくれて、リンディ艦長は頭を撫でてくれた。

「その想いはきっとテスタメントさんに届くわ・・・」

それから少しの間、私はテスタメントの笑顔を思い浮かべて何度もお礼を繰り返した。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒なのは†††

時の庭園での決戦から１０日後、私とアリサちゃんとすずかちゃんは海鳴市へと戻って来ていた。最初の３日は次元震の影響で帰って来ることが出来なくて、アースラでのんびりと過ごしてた。その間、シャルちゃんと模擬戦っていう形で戦って鍛えてもらったんだけど、

勝ったと思えばもう一段階と強さを上げてきて、ぬか喜びさせられてばかり。結局、3日の間に戦った5戦でシャルちゃんの全力全開には勝つことが出来なかった。

「なんていうか、日常が退屈って思うようになっちゃったわ」

アリサちゃんがポツリと漏らす。半日授業の今日、私とアリサちゃんとすずかちゃんはバスに乗らずに、歩いて帰宅中。帰って来てからずっとこうだ。3人で歩いて帰る。ちゃんとした理由は無いんだけど、そうしたいって思いが私たちにあった。

「アリサちゃんもすずかちゃんも、デバイス・・・返しちゃったもんね」

「元よりあたしとすずかが魔導師になったのって、なのはを助けるためだけを目的としてたんだし、もう終わっちゃったからね～」

「もう使うことが無い私たちに持っていられるより、使ってもらえるセレネちゃんとエオスちゃんに返した方がスノーホワイトもフレイムアイズも嬉しいと思ったんだ」

2人はアースラを離れる時に"フレイムアイズ"と"スノーホワイト"を、セレネちゃんとエオスちゃんに返却した。セレネちゃん達からは、これまで通り持っていていいよ、って言われてたけど、アリサちゃんとすずかちゃんはそれを丁重に断った。これからも魔導師として過ごしていくセレネちゃんとエオスちゃんの為に。ちなみに"レイジングハート"は未だに私が持ってる。所有権が完全に私

に移ってるからって。あと、"レイジングハート"の意思も。私以外をもうマスターとは認めないって。

「一緒に過ごした時間は短かったけど、居なくなったら寂しいって思うようになっちゃったわけ」

「私も。毎日のように待機モードの時のスノーホワイトを触ろうとしちゃう」

「でもま、これがあたし達にとって普通なんだから、慣れないとね」

アリサちゃんがそう言うと、すずかちゃんも「そうだね」って頷いた。そして話題はデバイスと一緒にお別れすることになった、今回の事件で出来た友達のことへ。

「ユーノ君たち、元気にしてるかな・・・？」

「本局ってところに着くまでビクビクしてるんじゃないの？」

「にゃはは。ちょっと可哀想だけど、こればかりはしょうがないかなぁ」

ユーノ君とセレネちゃんとエオスちゃんは、フェイトちゃんの裁判の手続きが済み次第本局へ向かうことになってるアースラに残ったまま。待ってる間、私たちの家で過せばいいって提案したんだけど、3人のお父さんといつ連絡がついても良いようにってことで留まることになった。そう決断した時の3人なんだけど、もし待ち合わせ

場所が本局だったらって話になって・・・。

――ヒィィッ！　公衆の面前でお尻ペンペンとかされたりしたらお嫁に行けない！――

――いやぁぁぁぁっ！　そんなの乙女として絶対にダメぇぇぇぇぇ！――

――諦めようセレネ、エオス。心配をかけた僕たちが悪いんだ・・・――

――ユーノは男の子だからそんな諦めが出来るんだよぉぉぉっ（大泣）――

そう言っていたユーノ君も顔が真っ青になってたよ。見てるこっちが辛い程に。とまぁ、ユーノ君たちにとっては地獄のような出来事も多々あったけど、ようやく次元震の影響も収まったと言うことで、私たちはこうして帰って来れた。

でも最後までフェイトちゃんとアルフさんと面会することは出来なかった。リンディさんのお話では元気なのは確かなようで。お母さんやテスタメントちゃんの死も、アリシアちゃん？（やっぱりさん付けの方がいいのかな？）のこともちゃんと受け入れてるって。

「最後くらいはちゃんと挨拶しておきたかったなぁ」

「そうねぇ」「そうだねぇ」

防波堤の上に立って、海から流れてくる潮風を受けながら3人で一緒に青空を見上げる。あの広い空のずっと向こう、私たちがまだ知らない世界が広がってる。そこにユーノ君たち、シャルちゃん達、そしてフェイトちゃん達が生きる世界もあるんだ。
しばらく空や海を眺めた後、「帰ろうっか」私はそう言って、「うん」って返事をくれた2人と一緒にまた歩き出す。と、そんな時「電話だ。誰からだろ」私の携帯電話の着信メロディが鳴ったから、携帯電話を取る。

「ふえええっ!?」

「ちょっ、何よ変な声出して」

「誰からなの？　なのはちゃん」

アリサちゃんとすずかちゃんに「管理局から！」発信者名を伝える。2人も「ええっ!?」ってすっごく驚いて、「早く出ないと切れる！」早く電話に出るようにアリサちゃんに急かされた。

「う、うん!・・・も、もしもし！」

『なのはさん？　ちょっとぶり、リンディです。今、お時間大丈夫かしら？』

「全然大丈夫です、問題ないです！」

携帯電話をスピーカーフォンモードにして、みんなに聴こえるよう

にする。あと、ちゃんと周囲に人が居ないことを確認することも忘れない。

「「こんにちはリンディさん！」」

『アリサさんとすずかさんもご一緒なのね。ちょうどよかったわ。お知らせが2つあるの。まず、フェイトさんの裁判の手続きが終わって、日程が来週から本局になったことが一点。そしてもう一点は、フェイトさんがなのはさん達と会いたいと言っているのね。こちらとしても、挨拶1つなく長くお別れさせるのはちょっとって思って。だから、これからそちらにフェイトさん、ユーノ君たちを転送するつもりなのだけど・・・大丈夫かしら？』

自然と私たちは笑顔になる。返事はもちろん「大丈夫です！」だ。それから場所を決めて電話を切る。

「行こうアリサちゃん、すずかちゃん！」

「ええ！」「うん！」

防波堤から降りて、フェイトちゃん達との待ち合わせ場所、海鳴臨海公園を目指して走る。嬉しかった。フェイトちゃんからそう言ってもらえて。あまりに嬉しすぎて、もっと早くって急いじゃう。走る速度よりもっと早く移動するには・・・「空を飛んで行こう！」簡単な答えだった。

「馬鹿！」「ダメだよ、なのはちゃん！」

けど即座に却下された。しょうがなく走って向かうことに。興奮してるおかげか全然疲れることなく到着。公園内の区画を繋ぐアーチ橋の中央にフェイトちゃん達がすでに待っていた。フェイトちゃんはもちろんアルフさん、付き添いのシャルちゃん、そしてユーノ君にセレネちゃんとエオスちゃん。クロノ君は居ないみたい。ちょっぴり残念です。クロノ君とも挨拶したかったのに。

「フェイトちゃん！　シャルちゃん、ユーノ君たちも、お待たせ！」

私たちの名前を呼びながら手を振り返してくれたシャルちゃん達の元まで駆け寄った。

「ううん。わたし達もいま来たところ。じゃあとりあえずフェイト。わたし達は挨拶あとでいいから、あなたの用事を先に済ませちゃいなさい」

「あ、うん。ありがとう」

シャルちゃんがフェイトちゃんにそう言った後、「なのは、アリサ、すずか、後でね」ってウィンク。フェイトちゃんのお礼に続いて、「うん、また後で」私たちはシャルちゃん達に笑顔で返す。そうしてシャルちゃんはユーノ君たちを連れて、近くの休憩所に向かった。改めてフェイトちゃんと顔を合わせて・・・。お話ししたいことがいっぱいあったのに、こうして面と向かってしまったら胸がいっぱいになっちゃって声が出ない。するとフェイトちゃんが微笑んでくれた。それは今までに見たことがない、温かくて、優しい微笑みで。

そんな微笑みを向けてくれたことも嬉しくて、泣いちゃいそうになったけどなんとか耐えて、私も微笑み返す。

「「・・・・」」

「あーもう、ほら。せっかくこうやって会えたんだか、何か言いなさいよ2人とも！」

「「わっ・・・？」」

アリサちゃんがいきなり私とフェイトちゃんの肩に腕を回してきて、「フェイト！」って名前を呼んだ。すずかちゃんはアリサちゃんの突然の行動をちょっと窘めた後、「フェイトちゃん」って微笑みながら名前を呼んだ。私も2人に倣って「フェイトちゃん♪」親愛を籠めて名前を呼ぶ。フェイトちゃんは目をパチクリさせた後、気まずそうに「あの、名前・・・」ポツリと呟いた。

「もしかして・・・憶えてない？　あたし達の名前。あんだけ名乗ったのに？」

「あぅ・・・」

アリサちゃんは自分の顔をフェイトちゃんの顔にグッと近づけながら問い質した。にゃはは。ちょっぴり悲しいけど、でもこれから憶えてもらえればそれで問題ないよ。アリサちゃんが私とフェイトちゃんの肩に回していた腕を戻して、一歩二歩と下がった。

「あたし、アリサ・バニングス！」

そして自分の胸をバシッと叩いて、声高らかに自己紹介した。私はすずかちゃんと顔を見合わせて、コクリと頷き合った。

「私、月村すずか！」

すずかちゃんはそっと胸に両手を添えて自己紹介。

「私、高町なのは！」

私も自分の胸に手を添えて自己紹介。自己紹介を終えて、フェイトちゃんの様子を窺う。するとフェイトちゃんは「うん。もう大丈夫。忘れない」って目を閉じて頷いた。

「今日、みんなに会いに来たのは、あの返事をするためなんだ。私と友達になりたいって」

「「「うん！」」」

フェイトちゃんの返事を待つ。でもフェイトちゃんはちょっぴり困っているようで。表情が少し翳ってる。でもそれは拒絶からじゃないって判る。だから続きを急かさずに待つ。フェイトちゃんを意を決したように深呼吸して、「私は嬉しかったんだ・・・」口を開いた。

「何を言われても拒絶ばかりの私だったのに、諦めずに真っ直ぐに

向き合ってくれたから。そしてみんなに言ってもらった、友達になりたい。その言葉に私は助けてもらったんだ。母さんに拒絶された時、本当に辛かった。
だけどその言葉が私を立ち直らせる支えになった。母さんやテスタメントの死や、アリシアへの思いに整理を付けた後、ずっと考えたんだ。私で良ければ、私に出来るなら、みんなと友達になりたいって。でも・・・」

フェイトちゃんはそこで一度区切った。

「ごめん。私は判らないんだ。友達になる方法が・・・。だから、教えてほしいんだ」

そう切実そうに言ったフェイトちゃん。私とアリサちゃんとすずかちゃんは一度顔を見合わせた。そしてフェイトちゃんに「友達になるのって、すっごく簡単なんだよ」私たちは微笑みかける。

「「「名前を呼んで」」」

「え・・・？」

「名前を呼んで、フェイトちゃん」

「名前を・・・？」

「そ♪　まずはそれからよ、フェイト。君とか、あなたとかじゃなくてさ」

「うん。ちゃんと相手に目を見て、ハッキリと相手の名前を呼ぶんだよ、フェイトちゃん」

フェイトちゃんは「うん」って頷いた。

「・・・なのは。・・・アリサ。・・・すずか」

「「「うん、そうだよ」」」

「なのは」

「うん！」

「アリサ」

「ん！」

「すずか」

「うんっ！」

フェイトちゃんに優しく名前を呼んでもらったら、涙が一気に溢れてきた。隣に居るアリサちゃんが「泣くんじゃないわよ、なのは」って言うけど、「アリサちゃんだって・・・」泣いてるよ。私たちに釣られてすずかちゃんも嗚咽を漏らし始めた。だって嬉しいんだもん。願いが叶ったから。フェイトちゃんがそんな私たちの手をい

っぺんに取った。フェイトちゃんもまた瞳が涙で揺らいでた。

「ありがとう、なのは、アリサ、すずか。・・・少し解ったことがあるんだ。友達が泣いてる姿を見ると、悲しくなってしまうんだね」

「そうだね。友達は、色んなことを分かち合うものだから。でも悲しいことばかりじゃないよ。嬉しいこと・楽しいことは何倍にでもなるし、悲しいこと・辛いことは半分、さらに半分にもなる」

「そっか・・・。友達ってすごいんだね・・・」

「そうよ。あたし達は友達なんだから、これからは分かち合ってくのよ」

「今は離れ離れになっちゃうけど・・・でも必ず、また会える・・・よね？」

「うん。少し長い旅になるけど。でも必ずまた会いに来るよ。なのは、アリサ、すずか。会いたくなったらみんなの名前を呼ぶ。だから、みんなも私の名前を呼んでほしいんだ」

「うん。待ってる。そしてちゃんと呼ぶよ、フェイトちゃん」

「もちろん呼ぶわ。だからちゃんと会いに来るのよ？」

「私も。会いたくなったらフェイトちゃんの名前を呼ぶよ」

そしてフェイトちゃんは「あの子とも、こうして友達になりたかった」って空を見上げた。誰のことを言っているのかすぐに判った。私たちも空を仰ぎ見る。

「テスタメントちゃん・・・」

綺麗な赤い髪と青い瞳の女の子。最期の最期まで私たちを苦しませないように笑顔だった。

「テスタメントちゃ～～～～～～んっ！」

「テスタメントぉぉ～～～～っ！」

「テスタメントちゃん！！」

「テスタメント・・・！」

私に続いてフェイトちゃん達も空に向かってテスタメントちゃんの名前を呼んだ。返事は来ないけど、テスタメントちゃんなら返してくれるって思えちゃう。だってとても優しい子だから。もう会えないのはやっぱりすごく辛いし、悲しいけど、私たちは俯かないよ。それがテスタメントちゃんが最期に願った、想いだから。

「なのは、アリサ、すずか。困ったことがあったら私を呼んで。今度は私が助けるから。テスタメントのように諦めずに。もう2度と友達を失いたくないから・・・」

「うん。フェイトちゃんも、だよ」

そう約束を交わす。と、「ごめんねぇ～」ってシャルちゃんが謝りながらユーノ君たちを引き連れて来た。

「ホントごめん。水を差したくないんだけど、そろそろわたし達の番にしないと時間的にダメって言うか・・・」

「ううん。こっちこそごめん、シャル。私たちはもう大丈夫・・・？」

フェイトちゃんが私たちに視線を送って来た。私は涙を袖で拭って、「大丈夫だよ」って答える。今度は全員でお別れの挨拶ってことになって。真っ先にシャルちゃんが「寂しい～～！」って私、アリサちゃん、すずかちゃんって次々と抱きついた。

そんなシャルちゃんにみんなは微笑む。そして話はアリシアちゃんのことになった。アリシアちゃんはまだ目を覚ましていないということ。身体には問題はないとのことなんけど、本局で詳しい検査をすることになったって。

「でもアリシア、時々軽い寝言は言ってるから、そんなに心配いらないかも・・・」

フェイトちゃんがその時を思い出したのか小さく「ふふ」って笑ったあと、今度はユーノ君たちとお話しするよう勧めて来てくれた。お言葉に甘えて私はユーノ君と、アリサちゃんとすずかちゃんは、セレネちゃんとエオスちゃんと次の再会までの挨拶。

「ユーノ君・・・」

「うん、なのは。色々と迷惑をかけてごめん、そしてありがとう。なのはと出逢えたから、僕はこうしてここに居られる」

「私の方こそありがとう、だよ。ユーノ君と出逢えたから、私はフェイトちゃん達とも出逢えた。すっごく感謝してる♪」

この奇跡のような出逢いには本当に感謝してる。2人いっぺんに「ありがとう」って握手。

「アリサ。あなたにフレイムアイズを託すよ」

「すずか。スノーホワイト、貰ってほしいんだ」

アリサちゃん達の会話が漏れ聞けてきた。ユーノ君と一緒にそっちに向く。セレネちゃんとエオスちゃんが "レイジングハート"の待機モードと同じ宝石を2人に手渡していた。

「え、でもどうしてよ。あんた達、これからも遺跡発掘とかで忙しいんでしょ？」

「デバイスが無かったら大した魔法使えないって言ってなかったっけ・・・？」

「「私たち、魔法学院に通うことになったの。で、一から始めるためにデバイス無しって決めたの」」

アリサちゃんとすずかちゃんの疑問に、そう同時に答えたセレネちゃんとエオスちゃん。魔法学院って、確かユーノ君も以前通ってたって話を前に聴いたような。ユーノ君に向くと、「僕とは違う学校だよ」って教えてくれた。

「先日、僕にとってもお父さんであるペリオさんと連絡がついてね。あの2人が今回のような無茶をしないようにってことで学院に入れるって話になっちゃって・・」

「そんでわたしが紹介したの。わたしが本籍を置いてる聖王教会、その系列のミッションスクールなんだけど」

「ミッションスクールに入れば多少はマシな性格になるだとか・・・」

「そして頭も良くなって魔法も学べて一石三鳥だとか言われちゃってさぁ～」

セレネちゃんとエオスちゃんは「失礼しちゃう」って怒ってるように見えるけど、とても待ち遠しそうにも見える。

「ま、そういうわけだから、2人にデバイスを託そうって話し合って決めたんだ」

「フレイムアイズもスノーホワイトもその方が楽しいらしいし」

アリサちゃんの手の平の上に乗る桃色の宝石――"フレイムアイズ"が≪これからもよろしくな≫って挨拶。同じようにすずかちゃんの手の平の上に乗る青い宝石――"スノーホワイト"も≪お世話になりますわ、スズカ≫って挨拶。

「ま、まぁそう言うんだったら託されてやってもいいわよ」

「あはは。アリサちゃんってば素直じゃな～い」

「う、うっさいわね！」

照れるアリサちゃん。良かったね2人とも。大事そうに両手で抱きしめた後、2人はデバイスの首に掛けた。こうしてみんなとの挨拶は済んでいって、とうとうお別れの時間になっちゃった。アースラに戻るフェイトちゃん達が一ヵ所に集まろうとして、私は「ちょっと待って！」って呼び止めちゃった。

「あ、あの、えっと・・・あ！」

髪を結ってたリボンを2本とも解いて「何か思い出になるもの、これしか思い浮かばなくて」ってフェイトちゃんに差し出す。すると「じゃあ私も」ってフェイトちゃんもリボンを解いて、私に差し出してくれた。お互いにリボンを手に取って微笑んだ。

「ちょっ、ちょっと待って。あたしも何か・・・！」

「リボンとかの方が良いのかな？　えっと、えっと・・・！」

アリサちゃんとすずかちゃんも何か渡せる物が無いかって焦り出した。それを見たフェイトちゃんが「私、もう返せる物が無いけど・・・」ってちょっぴり困ってる。

「「私たちにもちょうだい！」」

「「え・・・！？」」

そこにセレネちゃんとエオスちゃんが乱入。アリサちゃんとすずかちゃんの制服のリボンを解いた。そしてすぐに2人は自分の後ろ髪をそのリボンで結った。ポカーンとしてたアリサちゃん達だったけど、嬉しそうにしてる2人を見て小さく笑った。

「ま、それが順当か」

「だね」

アリサちゃん達は納得したようで何も言わなかった。これで問題は全部解決・・・にはならなかった。

「フェイトも、セレネも、エオスも・・・良い物貰っていいなぁ～」

シャルちゃんだ。シャルちゃんが物欲しそうに私たちを見詰めてる。あと渡せる物と言ったら、私の制服のリボンだけ。だから解こうかと思ったらシャルちゃんがいきなり「なのはをちょうだ～い！」ってさっき以上の勢いで抱きついてきた。しかも「にゃっ！？」色ん

なところをペタペタ触ってくるよ。くすぐったいやら恥ずかしいやらで悶えちゃう。

「ほら、シャル。お止め」

「あ～ん」

「はぁはぁはぁ・・・・」

アルフさんがシャルちゃんを引き剥がしてくれた。私は呼吸を整えながら「ありがとう、アルフさん」お礼を言う。

「いいってことさ。あたしの方こそ、フェイトを救ってくれてありがとね。なのは♪　それにアリサとすずかも♪」

アルフさんとも仲良くなれて本当に良かった。そんなアルフさんに羽交い絞めされてるシャルちゃんの為に胸のリボンを解いて、「これで我慢してくれると嬉しいな」って微笑みかける。アルフさんから解放されたシャルちゃんは「ありがとう」綺麗な笑みを浮かべてくれた。

「それじゃあお返し。そ・れ・は・・・わたしを貰ってぇぇ～～～～」

「えええええええっ！？」

ピョンと跳んでまた抱きつこうとしてきたシャルちゃんだったけど、

またアルフさんに妨害された。頭を両手で挟み込まれてプランプラン揺れてる。えっと、とりあえず「お返しは無い、かな？」シャルちゃんから目を逸らす。

「大丈夫。こんなこともあろうかと用意して来たんだ」

アルフさんに降ろしてもらったシャルちゃんは何事も無かったかのようにポシェットから（ずっと気になってたんだ）ある物を取り出した。

「なのはにはリボン。アリサにはヘアゴム。すずかにはカチューシャね」

そう言って私たちそれぞれに手渡してくれたシャルちゃん。私の魔力光と同じ桜色の生地で、うっすらと剣で象った十字架の模様が描かれてる。アリサちゃんも魔力光と同じ茜色をしていて、これまた剣の十字架のアクセサリー付き。そしてすずかちゃんのは白のカチューシャで、両側面にはやっぱり剣の十字架の赤いアクセサリー付き。

「ありがとう、シャルちゃん♪」

「私のだけは魔力光じゃないんだ。どうしてなんだろ？」

「だって藤紫色って髪色と被るじゃん。それといつもしてるヘアバンドを探したんだけど、手持ちに無くって。カチューシャで我慢してもらえると嬉しい」

「あ、い、嫌なわけじゃないんだよ。ちょっと気になっただけで」

「文句なく素直に嬉しいんだけどさ。この十字架、なに？」

シャルちゃんが目を逸らした。そして、「それじゃそろそろ行くね」って答えることなく行こうとしちゃってる。かなり気になるんだけど。でも教えてくれそうにないから訊けずじまいで。そんな中で、転送開始を告げる魔法陣がフェイトちゃん達の足元に展開された。気持ちを切り替えて、私たちはフェイトちゃん達を見送るために笑顔をつくって、手を振る。

「またね、フェイトちゃん！　ユーノ君！　シャルちゃん！　セレネちゃん！　エオスちゃん！　アルフさん！」

「ホントのホントにまた来るのよ！」

「待ってるからね！　またこうして逢える日を！」

フェイトちゃん達も手を振り返してくれる。ちょっとの間だけさようなら。もう私たちの間に涙は無い。みんな一緒に笑顔だ。そして転送が始まって光に包まれたフェイトちゃん達。見えなくなるまでずっと手を振り続けよう。一際強く光が溢れたと思えば、「やっぱ残るぅぅ～～♪」シャルちゃんが魔法陣から飛び出して来た。

「「「「「えっ・・・！？」」」」」

それがフェイトちゃん達が残した最後の言葉。転送されたことでもう姿はどこにも無い。けど私たちの目の前には「ふぅ」一仕事終えてひと段落って風に息を吐くシャルちゃんが。

「「「えええええええ！？」」」

今さら状況を理解した私たちは叫んだ。そんな私たちに向かってシャルちゃんは言う。

「ねえねえ！　ホームステイって感じで誰かの家に住まわせてくれない？　第一希望はなのはの家！　ダメかなぁ！？」

「シャルちゃん！？　管理局の仕事どうするの！？」

「有給取って休むよ」

「ホントにそれで良いわけ？」

「大丈～～夫♪」

シャルちゃんは自信満々に言ってのけるけど、そんなシャルちゃんの背後に転移の光が。転送されて来たのは「やると思った。ああ、やると思ったさ！　けどやってほしくなかったよ！」不機嫌そうなクロノ君だった。

「うげっ、クロノ！」

「うげ、じゃない！　仕事が溜まってるんだ、それをカタしていたから僕は挨拶に来れなかったんだぞ、まったく。それになんだ、有給を取る？　君は有給が取れるほど働いてないだろうが。はぁ。最後の最後まで迷惑をかけたね、なのは、アリサ、すずか。コイツの言ったことは忘れてくれ」

「や～だ～。なのは達ともっと一緒に居ぃ～るぅ～のぉ～！」

駄々をこね始めたシャルちゃん。最終的にクロノ君はシャルちゃんをバインドで拘束して地面に転がした。

「それじゃ僕たちも失礼するよ。じゃあ改めて。またいつか会おう」

「む～む～む～！『また会おうね、なのは、アリサ、すずか！』」

こうしてクロノ君とシャルちゃんもアースラに帰って行った。さっきまで騒がしかった私たちの周りも静かになって、波の音と一緒に潮風が私たちを撫でる。しばらく私たちはその場に留まって、思い出に浸る。

「なのは」

「なのはちゃん」

アリサちゃんとすずかちゃんの呼びかけに私は「うん、帰ろうか」頷いて歩き出す。いつかまたフェイトちゃん達と出逢える日に胸を躍らせながら、私たちは日常に戻る。

「あ、そうだ。翠屋に寄ってって♪　お母さんの新作スイーツが今日からなんだ♪」

「そうなんだ。それじゃあお邪魔します♪」

「あー、お土産として翠屋のスイーツを渡せればよかったわね～」

うぅ、それは確かに悔やまれる。今からでも届けられる方法があればいいんだけど、残念ながら無い。そうして私たちは一路、喫茶・翠屋に向けて出発。臨海公園の並木道を出た。

「きゃっ・・・！」「うわ・・・！」

その時、目の前を横切ろうとしてた人と衝突。私やぶつかっちゃった人も尻餅をついちゃった。

「ちょっと大丈夫！？」

「なのはちゃん、大丈夫！？」

「うん、私は大丈夫。あの、ごめんなさ・・・！」

ぶつかっちゃった人を見て、私はその人――ううん、その子の外見に目を奪われた。綺麗な銀色の長い髪、透き通るような白い肌、左右で色の違う瞳。外国の子だった。

（この子、どこかで見たような・・・？）

その子に見惚れてたら「こっちこそごめん。手、よかったら掴まって」先に立ち上ったその子が手を差し出してくれた。私は「ありがとう」その子の手を取って、「ごめんね」謝りながら引っ張り立たせてもらった。

「ううん。君は怪我とか無い？」

「うん、大丈夫。平気だよ」

「そっか。なら良かった。じゃあね！」

その銀髪の子はそれだけを言って走り去って行っちゃった。この時、私やアリサちゃん、すずかちゃんは知る由もなかった。あの銀髪の子と再会することが逃れられない運命だったなんて・・・・。

ＥｐｉｓｏｄｅＩ：　Ｔｅ　Ｒａｔｉｏ　Ｄｕｃａｔ，Ｎｏｎ　Ｆｏｒｔｕｎａ…．Ｆｉｎ

。―。―。―。次章予告。―。―。―。

１１年の時を経て、彼の魔導書は目を覚ます

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にてございます」
騎士らの新たな主は、それは幼い1人の少女。そしてもう1人
「うそ、だろ・・・オーディン・・・！？」
騎士らは長き戦乱より久しく解放され、主である少女と、かつての主と瓜二つの少年と穏やかな時を過ごす
「私は知った。これではニートではないか、と」
だが、その平穏も長くは続かなかった
「騎士の誇りと主の命。天秤に掛けるまでもない」
そうして次元世界に颯爽と現れたベルカ騎士たち
「おい、知ってるか。あの連中、また出たんだってよ」
「知ってる。以前、現場で会ったよ。剣騎士セイバー、槍騎士ランサー、鉄槌騎士バスター、治癒騎士ヒーラー、防護騎士ガーダー、あと1人いるって話だが見た事ないな」
6人の騎士の願い、主である少女の望み、そして幼き勇者たちの想い。
それらが交錯した時、一冊の悲しき魔導書との物語が幕を開ける。

Next Episode: Episode Ⅱ: Vixi et quem dederat cursum fortuna p ereregi

番外コーナー：えぴそ～ど・ワンのウラばな＆魔導紹介

ルシル
「まさか前作でシャルが立ち上げたコーナーを任されることになるとは。このコーナーでは、エピソードＩにおけるオリジナル設定や裏話、新たに登場した魔術・魔法を紹介するそうだ・・・って、全部私ひとりでするのか・・・？」

――セレネ・スクライア
遺跡発掘を生業としているスクライア一族内の一群を治めるペリオ・スクライアの実子。
年齢は１０歳。ミルクティブラウンのロングヘア、瞳は桃色。
双子の妹が居る。物心つく前より共に過ごしている義弟、ユーノに好意を抱いている。
最大のライバルは後述の実妹ではなく、高町なのはだとしている模様。
魔法の腕は下の中。とある遺跡で発掘したインテリジェントデバイス、クレイオスソウルを使うことで高ランク魔導師にも匹敵する砲撃を撃てるようになった。
氷結の魔力変換資質を持ち、彼女が発動する攻撃魔法には基本的に氷結効果が発現する。
元ネタ。セレネ。ギリシア神話に登場する、月の女神セレーネーから。

――エオス・スクライア

遺跡発掘を生業としているスクライア一族内の一群を治めるペリオ・スクライアの実子。
上記のセレネの双子の妹。髪や瞳の色は同じだが、髪の長さは肩に掛かるセミロング。
姉セレネと同様、ユーノに対し恋心を抱いているものの、気持ちを伝えることが出来ず、そのジレンマから彼への悪戯心へとなってしまっている。
魔法の腕は下の上。姉と同時にクレイオスソウルを使うことで、高位の魔導師へと変貌する。
炎熱の魔力変換資質を持ち、彼女が発動する攻撃魔法には基本的に炎熱効果が発現する。
元ネタ。エオス。ギリシア神話に登場する、暁の女神エーオースから。

――クレイオスソウル
セレネとエオスの２人によって遺跡より発掘された詳細不明なインテリジェントデバイス。
中遠距離の攻撃魔法に特化したペルセース、近距離の攻撃魔法に特化したパラース、補助魔法に特化したアストライオスの３機構を合わせて、クレイオスソウルとなる。
クレイオスソウル状態でなら３機構の能力を同時に５０％まで使用できるが、個別に発動させると、個々の能力を１００％まで使用できるようになる。
元ネタその１。クレイオス。ギリシア神話に登場する神。
元ネタその２。ペルセース。クレイオスの娘、エウリュビエーの息子。
元ネタその３。パラース。クレイオスの娘、エウリュビエーの息子。

元ネタその４。アストライオス。クレイオスの娘、エウリュビエーの息子。

――ペリオ・スクライア
スクライア一族の一群を治める長。セレネとエオスの実夫で、ユーノの義父。
元ネタ。ペリオ。ギリシア神話に登場する太陽神・光明神ヒュペリーオーン。曙エーオース、月セレーネーの父。

ルシル
「このセレネとエオスの登場には驚いたものだよ。何せ以前の次元世界ではお目に掛かれなかったからな。ユーノの為にわざわざ家出同然で海鳴市にまでやって来たその行動力はすごいと思う。やはり恋する乙女と言うのは強いのだろうか・・・？」

――木花結／きはな・ゆい
八神はやてが通院している大学病院の看護師。ルシリオンの女装を一発で見破る観察眼の持ち主。
小さい子供をこよなく愛し、はやても彼女のお気に入り。仕事は出来るが、看護師としての意識が少し欠けている。
元ネタその１。木花。日本神話に登場する女神、木花咲耶姫（コノハナサクヤビメ）。
元ネタその２。木花結。小説家になろう・にじファンにて連載していた『ハコにわ生徒会』に登場した、生徒会長シャルロッテの恋愛や権力的なライバル、風紀委員長・木花咲耶の姉。

――白井歌織／しらい・かおり
歌うことが大好きな中学１年の少女。大学病院の入院患者。声帯に疾患を持ち、声を出すことが出来なかった。
運よくジュエルシードを暴走させずに覚醒させ、力を宿したマイクを握っている間だけ声帯が万全になっていた。
ルシリオンの魔術によって病は完治し、必要なくなったジュエルシードをルシリオンに譲り渡した。
元ネタ。なし。

ルシル
「はやてが通院を続ける限り結さんとはこれからも度々会って、その都度揉みくちゃにされるんだろうが、白井歌織とはもう会えないかもしれない。出来ればもう１度、彼女の歌声を聴いてみたかった」

――イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト
ＡＮＳＵＲシリーズの番外編ならまだしも完全シリアス調だった本編をコミカルな物へと改変させた張本人、シャルロッテ・フライハイトの転生体。
外見はシャルロッテと全く同じで、アクアブルーのロングストレートヘア、アザレアピンクの瞳。
ＡＮＳＵＲシリーズ完結編『魔道戦記リリカルなのはＡＮＳＵＲ』のヒロインの１人。
再誕戦争時代以前より続くフライハイト家、その長女。聖王教会を設立したフライハイト家出身ゆえか、教会内での権力はかなり高い。
騎士としての誇りを重んじ、その力を平和を築くために奮おうとす

る。
知能レベルはともかくとして性格はただの馬鹿である。だがそれが愛嬌とも言える。
生前の記憶を僅かに有しているため、時折、頭痛と言う形で当時の記憶がフラッシュバックする。
所有デバイスは、古代ベルカ時代より受け継がれてきたアームドデバイス、"キルシュブリューテ"。
イリスが人工ＡＩを搭載させ、インテリジェントデバイス化させた。
ちなみに人格モデルはシャルロッテ。
元ネタ。イリス。アヤメ科アヤメ属の多年草のドイツ語読み。花言葉は、信じる者の幸福。

――ティファレト・ヴァルトブルク
時空管理局・本局の医療局に所属しているトップクラスの治癒術者。
フライハイト家に連なる六家の一角を担うヴァルトブルク家の次期当主。
当主となることを定められた者は例外なくティファレトの名を受け継ぐことになっている。
イリスのアースラ配属と合わせて出向、イリスの面倒を見る事も１つの任務として実家から受けている。
が、彼女のどこでも眠れると言う長所と短所を併せ持った特技の所為で、逆に面倒を見られている始末。
元ネタその１。ティファレト。生命の樹の中央に位置する、全ての生物に生命エネルギーを供給する中心。
元ネタその２。ティファレト・ヴァルトブルク。ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編に登場した医療騎士。大戦時、シャルロッテの命を何度も救った命の大恩人。

――六家／ろっけ
古代ベルカ、そしてレーベンヴェルト時代よりフライハイト家に連なる６つの一族。
グラシア家、ヴィルシュテッター家、カローラ家、アルファリオ家、トラバント家、ヴァルトブルク家の６つ。
聖王教会設立を担ったフライハイト家と共に、ミッドチルダ北部に位置するベルカ自治区の管理・統制を行う評議会としても機能している。

ルシル
「ここ最近で一番驚いたのがイリスの存在だ。まさかこんな形でシャルの魂と再会するとはね。
神意の玉座での別れ際にした、またどこかで会おうという約束は果たされたわけだが。なんて言うか・・・彼女と関わったらまた・・・変なことをされそうで少し不安だ」

――グランフェリア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編にて登場した、完全自律稼働人型魔道兵器、"戦天使ヴァルキリー"の１体。
第一世代・ブリュンヒルデのシリアルナンバー０４。『宝雷の矛』の二つ名を持つ。
戦場では常に冷静沈着。敵に対して慈悲を掛ける時もあるが、連合のトップであるヨツンヘイム・ヴァナヘイム・ウトガルド・スリュムヘイム出身の魔術師に対しては徹底的に冷酷を貫いた。

アンスールの1人、ジークヘルグに恋心を抱く。が、結局、想いを伝える前にヴァナヘイムの堕天使化計画の影響を受け堕天。
その上その手でジークヘルグを殺害してしまうと言う、悲しき結末を迎えた。

――バンヘルド・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編にて登場した、完全自律稼働人型魔道兵器、"戦天使ヴァルキリー"の1体。
第一世代・ブリュンヒルデのシリアルナンバー０３。『炎暁（えんぎょう）の槌』の二つ名を持つ。
ブリュンヒルデの隊長・副隊長を差し置いての部隊の司令塔。他ブリュンヒルデが感情に任せて暴走しないようにさせるための抑止力。ゆえに感情制御プラグラムは徹底され、外見も唯一の３０代の男性としてある。生みの親の1人、シェフィリス曰く、

――隊長・副隊長を差し置いての司令塔になるなら、威厳のある外見じゃないとダメだよね――

堕天使計画発動の折、最後の最後までウイルスに抵抗していたものの、抑えきることが出来ず、一番最後に洗脳され堕天した。

ルシル
「かつての敵世界ヴァナヘイムの洗脳と言う呪縛から解き放つため、私は愛しい子供をこの手で討った。
ああ、やっぱり辛いものがある。でも、そうでもしなければあの子たちは救われないんだ」

？？？？
「さぁ、次から各話の裏設定やボツネタを紹介するわよ♪」

ルシル
「ゼフィ姉様！？」

ゼフィランサス
「そうよルシル♪　お姉ちゃんが話し相手になってあげるから、もう寂しくないよ♪」

ルシル
「いえ、別に寂しいわけでは・・・」

ゼフィ
「はいはい。もっとお姉ちゃんに甘えていいんだよぉ～　」抱きっ☆

ルシル
「（胸に顔を押さえつけられて呼吸が・・・）ゼフィ姉様。離れて下さい、息が・・・ぷはっ。ふぅ、私はもう子供ではないのですから、こういうのは止してください」

ゼフィ
「歳なんて関係ないわよ♪（うぅ、抱きしめたい、ギュってしたい、いいよね？　いいわよね？）」そわそわ

ルシル
「・・・・はぁ。せめて私の顔を胸に押し付けないで下さい」

ゼフィ
「は～い　」腕に抱きっ☆

――ＥｐｉｃⅥ恐怖！？　プールに巣食うは水お化け～８　ｏｆ　ＰｅｎｔａｃｌｅＳ～

ゼフィ
「あはははは！　ルシルが女の子に間違われて大変だった回よね！」

ルシル
「笑い事じゃありませんよ。・・・なのはの兄、恭也さんには参りましたよ。なかなか信じてもらえなかったですから」

ゼフィ
「それで？　この回はなんなの？」

ルシル
「ボツネタですね。・・・どうやらイリス登場後に投稿する予定だったそうです。
イリスがプールではしゃぎまくったりカラオケで暴走したり、先の次元世界と同じように変態水妖怪に脱がされてブチギレたり、なのはのあられもない姿にオヤジ化したり、あと、私とむにゃむにゃ」

ゼフィ
「どうしたの？」

ルシル
「いえ。私との云々は今は伏せておきます。と、とにかくイリスも登場させるつもりだったそうですが、その時にはもうフェイト達と全開バトルに突入してしまっていると思ったそうで、呑気にプールに行かないだろうということになりボツに」

ゼフィ
「残念ねルシル」

ルシル
「何がです？」

ゼフィ
「フェイトの水着姿が拝めなくて♪」

ルシル
「ぶふっ！？　待ってくださいゼフィ姉様！　それではまるで私がロ〇コンのようではないですか！」

ゼフィ
「そんなこと言ってないでしょう。ただ、好きだった子の水着すが――」

ルシル
「いやいやいや！　私が愛したフェイトと今作のフェイトは別人と割り切ってます！　そもそも今の幼いフェイトの水着姿どうのこうのとなれば、私はかなり危ない奴になってしまいますよ！」

ゼフィ
「（想像中・・・）ルシル、イケナイ子！」

ルシル
「何を想像しやがりましたか！！」

――ＥｐｉｃＸゲームセンター☆なのは『魔法少女の挑戦』～ＴｈｅＥｍｐｅｒｏＲ～

ルシル
「コレも上記と同じでイリス登場後に投稿する予定だったそうです。むぅ。イリスもゲームに参加していたとなると、私はかなり不利的状況に陥って・・・ん？　私はフェイト達と組む予定だったのか。それはそれで・・・」

ゼフィ
「・・・・」ニヤニヤ

ルシル
「しつこいですよゼフィ姉様」

――ＥｐｉｃＸＶ狂い出す歯車～Ｔｈｅ　ＤｅｖｉＬ～

ルシル
「グランフェリアと再会した回ですね」

ゼフィ
「大変だったわね。プスプスと突っつかれて」

ルシル
「そんな軽い表現ではないのですけどね実際。まぁ、肉体を得てもテスタメントという概念である以上、致命傷でもそう簡単には死に難い体となっていたので、助かりました」

ゼフィ
「つまりテスタメントになる前に同じことをされていたら・・・」

ルシル
「危なかったですね。あと、偶然にも死に至る心臓やテスタメント・魔術師としての核である魔力炉（システム）を潰されなかったのが大きいです」

ゼフィ
「へぇ。運が良かったのね」

ルシル

「日頃の行いが良かったのでしょう（棒）。で、今回もボツネタですね。
どうやら私はフェイトとアルフと協力してグランフェリアと戦う予定だったそうです。
しかも創世結界の中で。・・・が、フェイト達の命が危険に晒され過ぎるということでボツ。
と言うか、馬鹿だろ作者。テスタメントとして創世結界を使ったら、ルシリオンとして使えなくなるだろうが」

ゼフィ
「それって今後、フェイト達の前で使う予定があるって事・・・？」

ゼシル
「・・・・・・」

ルシル
「さぁ、次に来ましょう」

――ＥｐｉｃⅩⅧ悲劇の幕引き、未来への幕開け～Ｊｕｄｇｅｍｅｎｔ～

ゼフィ
「ルシルフルボッコの回ｗｗｗ」

ルシル

「ちょっと待ってください。逆です、私がフルボッコにした回です」

ゼフィ
「その割には最後、なのは・フェイトコンビに撃ち負けてたよね」

ルシル
「あれは彼女たちに花を持たせたんですよ。あそこで倒してしまうと、庭園の崩壊に巻き込まれてしまいますからね」

ゼフィ
「ふ～ん。で？　今回のは何かしら？」

ルシル
「ボツネタが2つです。テスタメントの幻影が虚数空間に落ちるシーンですね。どうやら幻影ではなく本物である私が落ちる予定だったとか。しかも虚数空間から現れたグランフェリアに引き摺り困れるかのように」

ゼフィ
「こ、怖いわねぇ。一種のホラーだわ・・・」

ルシル
「ですね～。まぁ、魔術師は現代の常識には当てはまらないため、虚数空間でも活動できる、と言う設定を作ってあるからこその話だったんですが・・・」

ゼフィ

「それでどうしてボツになったの？」

ルシル
「なのは達にトラウマを植え付けてしまいそうだったから、だそうです。引き摺り込まれる際、私はもちろん抵抗します。それをなのは達が見ています。
助けたい、そう思うはずです。ですが私との戦いで魔力は空っぽ。結果、何も出来ずに見殺し。採用された案も見殺し状態でしたが、このボツ案の方が恐いですよ」

ゼフィ
「確かにあなたのフォロー無くだから、余計に苦しんでしまうわね～」

ルシル
「そういうわけでめでたくボツ、と」

ゼフィ
「あともう1つは？」

ルシル
「プレシア・テスタロッサを死なさず、クロノに逮捕させるというものでした。
アリシアの蘇生、プレシアの病の治療。謎の神さまが両方やってのける、と。
作者はどうやら漫画版ＩＮＮＯＣＥＮＴのプレシアみたくしたかったそうです。

しかし、プレシアがこれまでに犯した罪はあまりにも重く、最低でもエピソードⅣかⅤとなる予定のＳＴＲＩＫＥＲＳ編でも、まだ服役中だと判断。
最悪、ラストエピソードまで服役かもしれない、ということでボツになりました」

ゼフィ
「そうなの。それは残念だったね」

ルシル
「ええ。本当に残念です。・・・・っと、今回はこれだけですね」

ゼフィ
「じゃあ次は、魔道・魔導紹介ね」

――輝き流れる閃星／サピタル――

ゼフィ
「ルシルが４歳から１０歳までの間に創り出した下級術式の１つね」

ルシル
「はい。下級は幼少時に創ったと言う事で完成度は低く、未完成なものが多いです。
そしてこのサピタルは、そんな下級術式の第一号。つまり私が生まれて初めて組んだ術式。
閃光系魔力を弾丸状にして発射するというもので、誘導操作性能を有していますから魔力が尽きるまで相手を狙い撃ちできます。

術式名の由来は、ギリシア語でサファイアを意味するサピロス、ゲール語で飛ぶを意味するエタルを組み合わせた造語です」

ゼフィ
「思い出した。ルシルってばいきなり発現させたんだ、コレ。その場に居た私とイヴを本当に驚かせてね」

ルシル
「うっすらですが、ゼフィ姉様の魔力弾を見て創った術式かと・・・」

ゼフィ
「ん～と・・・あ、私のガンドね。確かにその時、イヴと魔獣狩りしてたっけ」

ルシル
「・・・本当に好きでしたよね、魔獣狩り」

――来たりて爆ぜよ天威轟雷／リクシスレール――

ゼフィ
「これも下級術式ね。最初は一発の雷撃系の魔力弾なのだけど、ルシルの合図によって複数の小型魔力弾へ分裂、対象を包囲した後に一斉に炸裂して、帯電した魔力衝撃波で押し潰すというもの」

ルシル
「この術式は後に中級の、天壌（コード）よ哭け、汝の剛雷（エネディエル）と言う術式の原型

となりました。術式名の由来は、フランス語で雷を意味するエクレール、ギリシア語で爆発を意味するエクリクシスの造語です」

――深淵へ誘いたる微睡の水霧／ラフェルニオン――

ゼフィ
「コレは世にも珍しい水流系の魔道ね。新属性を開発するなんて。お姉ちゃん、誇らしいわ♪」

ルシル
「ありがとうございます。催眠効果の魔力を含ませた霧を発生させ、呼吸した対象を眠らせるというものです。
即効性があり、微量でも吸い込めば2～3時間は確実に眠らせることが出来ます。
魔術ですから効果が切れる前に解除し、対象を起こすことも可能です。まぁ、普段はしないですが。
術式名の由来は、ヘブライ語で霧を意味するアラフェル、ギリシア語で夢を意味するエニュプニオンの造語」

――止め処なき水塵の流壁／デファンクテース――

ゼフィ
「コレも水流系ね。大気中の水素や近くの池や湖・海などと言った水を利用して滝のように降らせて相手の攻撃を防ぐというものね」

ルシル
「コレが未完成の術式ですね。ただ魔力を含ませただけの水を多量

に降らせる、術式とは名ばかりの欠陥品。この術式を完成させたのが、同じ下級術式の流麗（ウンディーネ）なる乙女。
術式名の由来は、ギリシア語で滝を意味するカタッラクテース、フランス語で防御を意味するデファンスの造語です」

――吹雪け、汝の凍波／コード・バルビエル――

ゼフィ
「氷雪系の補助術式ね。地面に魔法陣を数枚設置し、ソレより氷柱を発生させるの。その氷柱から冷気を発生させて周囲を凍結することが出来るわけね。
さらに氷柱を爆破することで氷柱を構成していた氷雪系魔力で竜巻を作り、さらに広範囲を凍結させる、のよね・・・？」

ルシル
「はい、その通りです。補助・捕縛系の術式です。攻性ではないですが、凍結された対象を砕いてしまえばそれだけで十分な威力です。物質はもちろんのこと魔力攻撃をも凍結させることが出来、防性としても使えます」

ゼフィ
「あなたの魔道、本当に汎用性が高いわね～♪」

ルシル
「そう言う風に調整されましたので」

ゼフィ

「あ・・・うん、そうよね・・・」

――捕らえよ、汝の茨氷／コード・ファキエル――

ゼフィ
「氷雪系の補助・捕縛系の術式ね。地面に描かれた円陣より氷の蔦を数本伸ばして、蔦の表面から無数の棘を突き出して、対象を貫き凍結させて捕縛するというものね。ふと思ったけど、あなたの氷雪系術式って補助が多いような気がする」

ルシル
「氷雪系は炎熱系に弱いと言う欠点がありますが、他の属性にはかなり強いですからね。相手を捕縛するには、闇黒系と並んでもってこいの術式ですよ」

ゼフィ
「あー、確かに。シェフィの防性術式、かなりの強度を誇ってたものね～♪」

――呪われし者に、汝の施しを／コード・ラファエル――

ゼフィ
「中級の治癒術式ラファエルのバリエーションね」

ルシル
「はい。治癒効果は一切有してませんが、その代わりに対象に掛けられたマイナス効果の付加術式を破壊する効果を有してます。

まぁ、当時はそんなマイナス効果の魔術を受けるようなことはあまりなく、使用頻度はかなり少なかったです」

――大炎帝の劫火／コード・スルト――

ゼフィ
「ルシルが数多く有する炎熱系攻性術式、その最強の威力を誇る多弾砲撃魔術。それがこのコード・スルト。
直径１０ｍくらいの魔法陣を一枚展開、その周りにさらに大きな魔法陣を１２枚と展開。計１３枚の魔法陣の直下に直径８ｍくらいの巨大な炎球を発生させるの。それらが１０４の火炎砲撃となって対象に降り注いで、完膚なきまでに焼き滅ぼす」

ルシル
「本来の魔術師としての私であったなら詠唱を必要とせずに済むんですけどね」

「輝ける命を夜明けの竈にくべ燃やし、魔を成す贄とする。
天へと昇るは封を解き放つ至高の浄煙。其は棺に眠りし炎王を呼び覚ます烽火（ほうか）。
封じられし棺は鳴動し、その振えは夕暮より宵闇へと進めるが為の虚無の鐘を鎮かに鳴らす。
かくして王の眠りし棺の蓋は開き、溢れ出す烈火は天を燃やし、地を焼き、世界を浄化する。
王よ醒めよ。今こそ主の神火を奮う時。世の滅びの果てに待つ、再誕を担うがために」

――舞い降るは、汝の土爪／コード・スカルティエル――

――舞い降るは、汝の無矛／コード・パディエル――

――舞い降るは、汝の瀑流／コード・ウァカビエル――

ゼフィ
「各属性の魔力槍を発生させる、舞い降るは系の術式ね。今回は新たに土石系・無属性・水流系の魔力槍が登場よ」

――盲目神の哀矢／コード・ヘズ――

ルシル
「全属性の魔力槍を1つに集束し、全属性を有する魔力矢ヘズを生成する魔術。
私が一番最初に創った上級術式。着弾時、相手の魔力炉（システム）に反応して炸裂、全属性のダメージを肉体、特に魔力炉（システム）に大ダメージに与える」

「全より愛されし希望、其は次なる天上の王。そして此の矢は彼の者を穿つ、葬世の始まりを告げる狼煙、天に背きたる一閃。受けよ、王殺の凶矢」

ゼフィ
「今回は不発で終わっちゃったわね」

ルシル
「ですね。魔力槍で迎撃されたので、効果を発揮するには至りませ

んでした」

――ワールド・オブ・ディバインスヴァスティカ――

ルシル

「私とシェフィの愛おしい子供、ヴァルキリー。その1体であるリオ・ランドグリーズ・ヴァルキュリアの有する閃光系魔術の1つ。元々は私の下級術式の1つで、それをリオにインストール。彼女は自らの力でこの術式へと昇華させて、この名前を付けた。スヴァスティカ、卍という意味の単語が入っている通り、閃光系魔力のオーロラを卍型に生み出すというもの」

――汝の首に走るは義の処刑刃／ボア・ドゥ・ジュスティス――

ルシル

「魔力をギロチン状にして対象の頭上から落とす、という複製術式。上記と同じで、これもヴァルキリーの1体、第六世代ヘルヴォル隊の副隊長である法界の司書レイル・ヘルヴォル・ヴァルキュリアの術式だ。

術式名の意味は、正義の柱。ギロチンの正式名称となっている」

――煉獄之火宴／れんごくのかえん――

ルシル

「対象の足元から炎の竜巻を噴出させて焼き殺す、という複製術式。これもまたヴァルキリーの1体、第三世代ラーズグリーズ隊の副隊長である幻界の司書アーフィ・ラーズグリーズ・ヴァルキュリアの

術式。
アーフィは同時に最大３００の竜巻を発生させることが可能。で、オリジナルの呪文があったんだが作者がど忘れし、今回新たに追加した・・・」

「火は命の光にして死の影。十方世界を悉く照らしては焼き滅ぼす。生ける者よ、一天四海を燈す希望の光り火を見よ。死せる者よ、冥土幽界を焼く絶望の禍つ火を見よ」

ゼフィ
「作者さんのお気に入りの漫画、夢喰いメリーの主人公・夢路や敵キャラ・灯台エルクレスの台詞を引用したのよね。十方世界、一天四海、希望、さぁ、〇〇時間だ。
第１０巻でのエルクレスとの戦闘でこの台詞を読んで、引用を決めたみたい」

――火天之王／かてんのおう――

ルシル
「これもアーフィの術式。任意空間を爆破させるというもの。同時に最大２００か所を爆破することが可能。
これにもオリジナルの呪文があった。まぁ、上記と同じでアーフィの、というより詠唱を使うヴァルキリー達の呪文一覧の設定資料がどうしても発掘できず、新規追加ということに」

「自己の願望成就。その道程は他者の蹴落とし也。落とされし者等が築くは無残無念の敗衄（はいじく）の山。其の頂きに立つは望みを成し得た勝

利の王。王は叶えし願いの頂で大いに笑う」

ゼフィ
「あれだけ広い蔵だもんね。あそこから紙一枚を探すなんてねぇ～。ま、作者も暇を見ては探してるし、処分してない限りはいつかきっと・・・。そもそも一か所に纏めてない方がおかしいよ」

――光火之咆哮／ひかりびのほうこう――

ルシル
「テスタメントとして騙った私が使った炎熱系の魔法は全てアーフィのものだ。
犯罪者テスタメントの使う魔法として管理局のデータベースに残すのは気が引けたが、使い勝手が良かったこともあって使うに至った。
この術式は、閃光と爆音による対象の視聴覚封じの、言うなればスタングレネードだ」

――渦炎之煉圏／かえんのれんけん――

ルシル
「炎の渦を盾として、攻撃を防ぐというもの。最大で直径１ｋｍまで広げる事が可能だ」

――轟火之砲光／ごうかのほうこう――

ルシル
「単純な火炎砲撃。単純ゆえにアーフィは１０００発まで一斉発射

できる」

――火獄之弾牢／かごくのだんろう――

ルシル
「何十発と言う火炎弾で対象を包囲し、一斉着弾、そして爆発によるダメージを与える。ほぼ逃げ場が無く、全方位による防御結界でなければ防ぐことも出来ない」

――炎壁之穹窿／えんへきのきゅうりゅう――

ルシル
「ドーム状の炎の膜で防御する、防性術式。アーフィは全属性を扱えるヴァルキリーだから、同じ効果を持つ属性違いの魔法もある。たとえば轟雷之砲光、氷獄之弾牢、風天之王などなど」

――烈渦／れっか――

ルシル
「その場で即席で組んだ、炎の渦を発生させるだけの演出的な魔法だ」

ゼフィ
「炎の中に佇む者って、どこか悪役っぽいものね。悪役に徹するための演出で魔法をその場で作って使うってねぇ～」

ルシル

「悪魔でいいよ。悪魔らし（ｒｙ」

――煉弾――

ルシル
「火炎弾を創り出し、相手に射出する魔法。コレもそう。即席で作ったもので、威力を度外視して軽いスタン効果を持たせた」

――タブリスの鎖――

ルシル
「コレは魔術でも魔法でもなく、神器の１つ。どんな苦境な状況でも一度命令を下したら使用者の意思が途切れようともその命を実行する、そして使用者の命が無くともその状況下で最善の行動を取る、という能力を持っている」

――サンライズブレイカー／サンライズブレイカー・カルテットバースト――

ルシル
「なのはの集束砲・スターライトブレイカーを基に構築した、炎熱系の集束砲。
カルテットバーストは、フェイトのトライデントスマッシャーの術式を組み込んであり、途中で枝分かれする。が、着弾時に結合せずにそのまま着弾すると言う違いがある」

――テリトリー・オブ・スフィアケージ――

ルシル
「捕獲魔法の1つ、クリスタルケージを球体状へと変化させただけのものだ。
特定範囲内に居る複数の対象を捕獲する。発動から捕獲完了まで僅かな間があるため、勘の良い者、瞬発力の有る者なら逃げられることも可能だ」

――デュアルクリスタルケージ――

ルシル
「クリスタルケージの重ね掛けだな。ただでさえ強固なクリスタルケージを二重にすることで内外からの破壊を防ぐ」

――雷槍迅穿衝――

ルシル
「グランフェリアの有する雷撃系魔術の1つ。あの娘の持つ神器・雷界幻矛（らいかいげんむ）の穂先から雷撃砲。刺突行為が穂に集束した雷撃系魔力の発射のトリガーになる」

――雷槍連穿衝・壱式・弐式――

ルシル
「魔力槍を創り出し、雷界幻矛で魔力槍の石突を打って発射させるというもの。
単純な魔力発射に打撃の勢いを乗せる事で超高速で発射することが

可能になっている。
壱式は１０本から１９本、弐式は２０本から２９本までというように、展開される本数を表している」

――雷天走衣／らいてんそういい――

ルシル
「雷光形態化することで、自己治癒能力や移動速度を上昇させる補助術式。
有している魔力や神秘がこの術式以下であれば、一切の攻撃を無効化することが可能」

――集雷法――

ルシル
「自然の雷や周囲に満ちた雷撃系魔力を雷界幻矛に集束させることで、雷界幻矛自体や魔術の威力を上昇させる。中でも――」

――神雷槍／じんらいそう――

ルシル
「↑の術式を発動するのに必要な術式だ。グランフェリアが有する攻性術式で２番目の威力を誇る。
雷界幻矛を雷光化させ、対象へ向けて投擲するというもの。着弾までの間にも周囲の魔力を集束させて効果を高めていくのは、カノンの真技・ヘルヴォルズ・カノンと同じだな」

――雷纏鎧／らいてんがい――

ルシル
「雷の魔力を全身に纏う、防性術式。雷撃系魔力攻撃をキャンセルすることが出来るが、あの娘自身の魔力と神秘を上回る攻撃である場合は半減するだけに留まる」

――天威轟雷／てんいごうらい――

ルシル
「先述の私の下級術式、リクシスレールでもある。複数の雷弾を対象付近で炸裂させ、帯電している衝撃波で対象を押し潰す、というもの」

――雷天結界――

ルシル
「グランフェリアと再会するまでの空白期、あの娘が独自で開発した魔術だな。
上記の術式で結界の基点を作り、基点間を雷光で繋げることでニヴルヘイム魔法陣を基にした球状結界を創り出す」

――雷天結界・閃雨――

ルシル
「結界内に捕えた対象（おそらく私限定だな）へ向けて、基点を繋ぐ雷光すべてから光線を発射するというもの。空戦形態ヘルモーズ

状態でも完璧に回避できない。
かなりショックだった。ヘルモーズ状態で避けれない攻撃なんて今までなかったからな～」

――雷天結界・分け神――

ルシル
「雷光を構成している雷撃系魔力で分身体を創り出すという術式らしい。
一度に何十体と創り出し、私へ向けて包囲攻撃を仕掛けてきた。しかも上記の閃雨を合わせてだ。厄介極まりないよ」

――招請・百輝千光万雷／しょうせい・ひゃっきせんこうばんらい――

ルシル
「グランフェリアの有する最強の魔術である真技がコレだ。
自分を中心に雷光を球体上に爆ぜさせるという。膨大な熱量を有し、触れたモノを融解させる。
最大効果範囲は直径３ｋｍだが、ほぼ魔力を使い切るため、今回の決闘では威力重視で効果範囲は狭かったな」

ゼフィ
「黙って聴いていたけど、やっぱりすごいのね。あなたとシェフィの子供たちは・・・」

ルシル

「もちろんです。自慢の子供たちですので」

――フローズンブレット・フレイムブレット――

ルシル
「セレネとエオスの射撃魔法ですね」

ゼフィ
「その２人とアリサ・すずかでは名前がちょっと違うのね」

ルシル
「あー、ブレットとバレットですか。名称を変えておくことで、どっちが使ったかを区別させるつもりだったそうです」

ゼフィ
「結局、４人が同じ魔法を使う時は無かったけど・・・」

ルシル
「言わぬが花ですよ、ゼフィ姉様」

――バインドブレット――

ゼフィ
「これも２人の魔法ね」

ルシル
「はい。着弾時にバインドと化す魔力弾のことです。私はまんまと

引っかかってしまいました」

ゼフィ
「大事にならずに済んで良かったね。もうそんな余裕で構えてちゃダメよ？」

ルシル
「了解です」

――バスターラッシュ／バージョンセレネ・バージョンエオス――

ゼフィ
「砲撃ね」

ルシル
「はい。セレネが発動させると氷結効果を有する砲撃となり、エオスが発動すると炎熱系の砲撃となります」

ゼフィ
「２人同時に発動したらどうなのかしらね～」

ルシル
「う～ん・・・炎と氷で相殺し合って不発、かもしれませんね」

――フォトンランサー・キャリバーシフト――

ゼフィ

「あら。フェイトとアルフの攻撃シフトね」

ルシル
「ですね。フォトンランサーには３つのバリエーションがあるのですが。
まず、複数のランサーを同時に射出するマルチショット。
デバイス先端からランサーを連射するフルオートファイア。
３０以上と展開したスフィアから毎秒７発の斉射を４秒間続け、計１０６４発ものランサーを対象に放つファランクス。
今回のはオリジナルのもので、ファランクスシフトをフェイトとアルフ、２人で行うというものですね。
まぁ、ファランクスに比べて発射時間・弾数も少なく、２人合わせて最大３０発でしょうか。
ちなみにキャリバーと言うのは、ブローニングＭ２重機関銃の別名ですね」

ゼフィ
「なるほど。ファランクスシフトの簡易版と言うわけね」

――ブリッツフィスト――

ゼフィ
「これは、アルフの魔法だったっけ？」

ルシル
「はい。両拳に雷撃を纏わせての打撃魔法。バリアブレイク効果もある打撃と雷撃のダブルパンチです」

――サンダーウィップ――

ゼフィ
「そしてこれがフェイトの母親、プレシアの魔法ね」

ルシル
「帯電した魔力で鞭を作る、というものですね。さすがＳ気質なあの女のする事だ。露出の激しい服も来ているし。目のやり場に困る」

ゼフィ
「・・・・ルシルが熟女に目醒めた・・・・！？」

ルシル
「馬鹿言わないでください！　過去のあの女ならまだしも現在のあの女とは絶対に付き合いたくないです！」

ゼフィ
「（か、過去なら問題ないとでも言うの！？　恐ろしい子！）・・・・コホン、というか随分と歳いってる割りには若い外見よね。声は少々いっちゃってる感があるけど」

ルシル
「ぶっちゃけどうでもいいです。次へ行きましょう、次」

――スパークジャベリン――

ゼフィ
「砲撃ね」

ルシル
「砲撃ですね」

ゼシル
「砲撃だぁ・・・」

――ベーテンハイル――

ルシル
「アースラの医務官、ティファレト・ヴァルトブルクという女医の治癒魔法らしい」

ゼフィ
「ティファレトって・・・」

ルシル
「はい。ＡＮＳＵＲ第一章で名を馳せた騎士と同姓同名ですね。この術式名や効果も当時と同じです。ベーテンはドイツ語で祈る、ハイルは救済。
対象の自己治癒力を強化し、治癒ではなく再生の域で回復させることが出来る」

ゼフィ
「あなたのエイルと同格というのがすごいわよね～」

ルシル
「いえ！　私の方がまだすごいです！！」

ゼフィ
「あらあら♪」

――鎮めの舞花――

ゼフィ
「鎮静効果を有する魔力を特定空間に舞い降らせ、興奮状態の対象を冷静にさせるというものね。」

ルシル
「医者としては必要な術式ですね。・・・それにしてもこの時代のティファレトに戦闘能力はあるのだろうか・・・？　もし当時のティファレトと同じ実力となれば、遭遇したくはないな・・・。っと、どうやら今のが最後のようですね」

ゼフィ
「あれ？　シャルの剣神モードは？」

ルシル
「あれは次章の番外コーナーにしておきます。騎士が活躍するエピソードですし」

ゼフィ

「そうなの。じゃあ、本当にこれで終わりなんだね」

ルシル
「はい。ありがとうございました、ゼフィ姉様」

ゼフィ
「はい、どういたしまして　」

Ｅｐｏｓｌ夜天の主の下に集いし雲・守護騎士～Ｗｏｌｋｅｎ　Ｒｉｔｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

グランフェリアを無事に救い、私は八神宅へと戻って来た。目前に佇む、この世界で1ヵ月と過ごした家を外から眺める。時刻は既に深夜1時。当然家の電気は消えているはずだが、リビングのカーテン越しから明かりが漏れている。はやてはまだ起きているか、もしくは以前のようにソファで眠りこけているか。
どちらにしろ、あまり良ろしくない。門構えを過ぎ、玄関扉のドアノブの鍵穴へ合鍵と刺し込もうとしたところで、そのまま動きを止める。ジュエルシードを回収し終えた今、ここに戻ってくる必要性はもうどこにも無いとも言えるんだが・・・。

（約束した・・んだよな。はやての誕生日を一緒に祝う、と。私の誕生日を祝ってもらう、とも・・・）

動物園ではやてと一緒に過ごした時間が走馬灯のように脳裏を駆け巡る。ほら見ろ、私。もう決意が揺らいでいるじゃないか。〝堕天使エグリゴリ〟の救済にだけ集中していれば、はやてと関わりを持たなければ、こんなにも孤独になりたくないと後ろ髪を引っ張られる思いをしなくて済んだ。
ドアノブの鍵穴に向けていた鍵を降ろす。そしてドアにコツンと頭を降ろす。
優しいはやて。あの子の心をズタズタに傷つける行為――姿を晦ま

すという最低を犯すことになってしまうターニングポイントがここだ。アンスールとしてのルシリオンを貫くなら、今すぐにでも立ち去るべきだ。きっとそれが正しい道だ。そう、幼いはやてを傷つけようとも、だ。だと言うのに、一向に足が動かない。揺らいでいるどころじゃない。完全に崩れ去ってしまっている。

「ルシル君か・・・？」

扉越しから聞こえてきたはやての声に、「っ・・！？」ビクッと肩を跳ねさせて一歩二歩と後退してしまう。ガチャガチャと鍵を開ける音がし、扉がゆっくりと開いて行く。そして「おかえり、ルシル君」はやてが迎え入れてくれる。

「お疲れ様や。ちょう遅かったから心配してたんよ」

スロープを上がっていくはやての背中を黙って見送る。彼女の口にはヨダレの跡が付いていた。無理に起きていようとして、しかし眠ってしまったという様子だ。そしてこうして私が帰って来たことにすぐに気付いたということは、それだけ気を張っていたに違いない。可哀想に・・・。私なんかの為に。

「どないしたん？・・・ルシル君？」

私が何も言わずにただ突っ立っていることに対して何か思うことがあったのかはやてはこちらに向き直り、少し何かを考えた後、小指1本だけを立てた右手を掲げて見せてきた。約束の指切り。事あるごとにはやてと交わしてきたものだ。

「・・・ルシル君・・・」

不安そうに私の名前を呼ぶはやて。ズキッと胸が痛む。世話になってから今までの中で一番のものだろう。彼女のそんな表情を見たその瞬間、一瞬にして創り出される言い訳。私は誓ったじゃないか。この事件が終わったら、寂しさなど感じない程に付き合おう、と。それに誕生日を一緒に祝おうとも約束した。

下がった分だけ前進し、はやての目の前まで歩を進める。私を見上げるはやての目から不安が消えた。はやての小指に自身の小指を絡ませて「ただいま、はやて」とそう挨拶すると、はやては目に見えて喜色満面といった笑顔を浮かべた。

「っ！　うん、おかえりやルシル君♪」

空いている左手ではやての頭を撫でつつ「無理して起きていなくても良かったのに」と靴を脱いで家に上がる。はやては「なんやヤな予感がしたんやもん」とまた表情に陰りを見せ、繋いだままの私の手を引っ張って、甲に頬を摺り寄せて来た。まるで猫の仕草。こういったところに安心感のようなものを抱け、妹のような存在に感じ、心が休まるというものだ。

「ルシル君・・・。目的を済ませばそのまま居らんくなるって・・・」

「・・・約束したからな。はやての誕生日を祝うと」

「っ・・・。憶えててくれたんやね。嬉しいわぁ～♪」

「忘れるわけがないじゃないか。これでも記憶力には自信があるんだぞ」

はやての誕生日。そして"夜天の書"の起動。それが6月4日。明後日だ。大切な約束という、はやての側に留まる言い訳に使っている私にはほとほとする。ああ、そうだ。こう思えばいい。はやて、そしてフェイト達や管理局・・・いいや、この次元世界のすべてを利用するのだと。そう思えば、ほら、罪悪感が消えていく。

「そうやったな♪・・・ふわぁ。安心したら一気に眠くなってきたわ」

大きくあくびするはやて。私が車椅子を押して、はやての部屋へと向かう。はやての部屋へと着き、車椅子をベッド脇へと停めて「今日はもう遅い。もう寝ような」と彼女の横に移動すると、すでに船を漕ぎだしていた。

「はやて。ベッドに着いたぞ」

「・・・・」

反応が無い。「おーい、はやて～」呼びかけに応じてくれない。俯いたままだ。

「ほら、もうちょっとだから。まだ寝るな。ベッドに移らないと」

「んん、だっこぉ～」

反応したかと思えば、急に甘えん坊になったな。半分以上眠ってしまっている所為かもしれないが。両腕を私へと伸ばしてくるはやてに思わず失笑。しかしはやては腕を戻さず「ん、ん」急かしてくる。

「しょうがないなぁ」

まず布団を捲り、はやてを横抱きして抱え上げて「やった　」と小さく両手を上げて喜ぶ彼女をベッドに移す。布団を被せて「おやすみ、はやて」と挨拶。布団を目の下まで上げたはやては、「ん。おやすみ、ルシル君」挨拶を返してすぐに寝息を立て始めた。私はそれを確認して踵を返し、はやての部屋を後にする。リビングのソファに一度腰を下ろし、一息つく。

「・・・、グランフェリア」

天井を仰ぎ見る。我が愛おしい娘、グランフェリアの消滅を直に肌で感じた所為か眠気が全く起きない。ちょうどいい。情報の整理をしよう。昨日今日と色々なことが起きすぎた。特に問題なのが「レーゼフェアとシュヴァリエル」だ。イリスからその名前が出た時、最悪な事態が脳裏に過ぎった。今でもそうだ。胸がざわつく。

（フェイトの側にグランフェリア。管理局側にレーゼフェアとシュヴァリエル。ならば、ガーデンベルグやリアンシェルト、フィヨルツェンもまた、なのは達と・・・）

これが偶然か必然か。偶然と言うにはあまりにも出来すぎている。ならば必然か？　だったらどうやって、かつての私と関わりを持っていたフェイト達と関係を繋げることが出来た？　先の次元世界での私とフェイト達の関係を知ることが出来る術が在るとは思えない。やはり偶然なんだろうか。いくら考えても解は出ることもなく。

（もしかすると・・・）

あの子たちと関わりを持っていれば、　"エグリゴリ"の情報が入ってくるかもしれない。そんな願望が生まれる。いや、たとえ"エグリゴリ"の情報が入らずとも、少し準備期間が欲しいと言うのがある。

（体格は別として、魔力の出力制限がやはり痛い・・・）

ジュエルシードを使えば、十分この体や魔力制限でも戦い合える。それはグランフェリアを相手に戦って判明した事実。が、残る"エグリゴリ"の戦闘能力からして、出来れば温存したいと言うのが本音だ。最強にして最高の性能を有するガーデンベルグ。あの子を相手にする時にジュエルシードを使い潰しているような事が無いように。だから・・・

「・・・・決めた。私は・・・・いや、俺は――・・・・」

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒はやて†††

カーテン越しから漏れる陽の光と温かさで目が覚めた。いつもより早く起きたんやなぁと思いながらもぞもぞと寝返りを打つ。いつもなら目覚まし時計の機能で起きるんやから。で、今の時刻を確認しようと時計を見ると、「うえっ！？」短針の位置を確認してビックリ。

「もう８時半やんか！！」

ガバッと跳ね起きる。もう一度時計を見てみれば、目覚まし機能を止めるボタンが押されてるのが判った。

「おはよう、はやて。朝早くから叫んでどうしたんだ？」

「ルシル君・・・！　朝早くって、もう８時半や！」

エプロン姿のルシル君が苦笑いしながらやって来た。完全に朝寝坊したことに対して「ごめんな、ルシル君」って謝る。

「はやてが朝寝坊した原因は、明らかに俺の帰りを待つための夜更かしだ。それはつまり俺の所為。だからはやては気にしないでいい。あと、目覚まし時計を止めたのは・・・俺だ♪」

キラン☆と歯を光らせるような笑顔を向けて、親指をグッと立てたルシル君。夜更かしはわたしの独断やから、ルシル君が悪いわけやない。目覚まし時計の件はちょうアカンと思うけど。むぅ、一緒に朝ご飯、作りたかったなぁ・・・。

「（ん？　なんや妙な違和感が・・）ルシル君・・・今、俺って・・・」

「ん？　ああ、変えることにしたんだ、一人称。少しの間、違和感を与えるかもしれないけど、我慢してくれな。・・・そうだ。朝食はもう出来ているから、用意が済んだら一緒に食べよう。はやてに話しておきたいこともあるんだ」

それだけを言うてルシル君は戻って行った。どんな心境の変化なんやろ。一人称を変えるなんて・・・。それにわたしに話したいことがあるってことやけど、なんやろ。とりあえず服を着替える。ちょうボサついとる髪に櫛を通して、髪留めを付ける。

ダイニングに行くと、ルシル君はご飯を茶碗によそてる最中。それを横目に洗面所へ。うがい手洗い、そんで顔を洗って、ダイニングに戻る。準備を終えてもう椅子に着いとるルシル君の向かいの椅子に座って、白いご飯、お味噌汁、出し巻き卵、野菜サラダが2人分並べられたテーブルを見回す。どれもこれも美味しそうや。

ルシル君と一緒に手を合わせて「いただきます」挨拶。いつものようにルシル君と2人きり、幸せな朝食時間をゆっくりと過ごす。

「そうや、ルシル君。さっきの話って、なんやったん？」

「ああ、うん。・・・俺がこの世界に来た理由はもう果たしたんだが。はやてさえ良ければ、君の誕生日を祝った後も、もうしばらくこの家で世話になりたいな・・・と」

遠慮がちにそう言うたルシル君。

「もちろんオーケーや！　どんくらいでも居ってええよ！　わたしとしても、ルシル君ともっと一緒に居りたいって思うてたんやもん！」

ほぼ毎日のように考えてた、ルシル君をどうやったらこの家に留めるか。ルシル君から次元世界の説明を聴かされた時はホンマどうしようかと思うた。人間が存在してる星が地球だけやなくていっぱい在るってゆうのはもちろんのこと、ルシル君がこの星の人やないってゆうのがショックで。

いつかお別れしても海外出身なら連絡くらいは取れる。そやけど異世界（フェティギアって世界らしいわ）の人ってなったら、一度お別れしたら連絡の取りようがない。けど、その大問題が解決した。しかもルシル君からの提案で。そやからわたしはルシル君に顔を近づけるようにして食い気味にそう言う。するとルシル君は「そっか」って微笑んだ。

「うん、ホンマにどれくらいでもええんよ？　わたしはこれからもずっと独り暮らしやと思うし、そやから2人でゆったり過ごせると思うんよ」

「独り暮らしになると判っていて男を招き入れるか？」

ルシル君が俯き加減になんやボソッと言うた気がしたから「ん？なんか言うた？」って訊き返してみるけど、「いや、なんでもない」って苦笑いするだけやった。

「あと、もう1つ。しばらく八神姓を使わせてもらいたいんだ。そ

う、八神ルシリオン、と名乗らせてほしい」

「八神、ルシリオン・・・。大歓迎や！　姉弟らしくなるな！」

「はやてが姉で、俺が弟だな。ま、悪くはないかな」

「そやろ♪」

なんや今日は。ルシル君はどれだけわたしを喜ばせたいんや。わたしはそれからずっとご機嫌なまま、今日の授業のことや夜ご飯は何にするか、いろんなお話をしながら朝ご飯を終えた。

「はやて。誕生日プレゼント、何が欲しい？」

食器の後片付けや掃除に洗濯と済ませて、ルシル君と一緒にソファに座ってお茶休みしとると、そんな質問をされた。そんなこと訊かれるん、石田先生くらいやったのに。それが新鮮で、すごく嬉しくて。じっくりと考えるために腕を組んでうんうん唸ってみる。服？　別段困ってへん。アクセサリー？　あんま興味あらへん。日用雑貨？　どんな嫌がらせや。本？　いま欲しいのは無いし。さんざん悩んだ末に出て来たわたしが欲しい物。それは・・・

「ルシル君が一緒に居ってくれればそれだけで十分や」

孤独を癒してくれる家族。それが欲しい。でも、それはもう手に入ってるもんや。そやから「プレゼントは家族、ルシル君ちゅうことでお願いや♪」ルシル君に体を向けて、両手を合わせてお願いのポ

ーズ。するとルシル君は、最初はポカンとして、そしてすぐに「良い子過ぎる」ってちょう涙声でわたしの頭を撫でてきた。

「じゃあ家族を増やそう、はやて」

「・・・・はい？」

ルシル君の言うことが理解できひん。家族を増やす。そんなことが出来るんは、ドラマとかでよく見る・・・「ちょっ、わたしとルシル君、まだ子供やから、子供なんて出来ひんよ！」子供を作るってことや。結婚もしてへんのに（とゆうかどうやって作るのかも知らん）。

そう言うと、ルシル君は「げほっ、ぶほっ、ごほっ」お茶が気管に入ったんか思いっきり咽た。わたしはルシル君の背中を擦って「大丈夫か！？」声を掛ける。

「えほっ、げほっ、はぁはぁはぁ・・・ああ、大丈夫だ。確かに俺の言い方が悪かったのは認める。だけど違う。俺が言いたかったのは、別のことだ。はやて。君の部屋に、分厚く、十字架の装飾があしらわれた本があるだろ？」

一瞬でどんな本か思い浮かべることが出来た。物心ついた時にはもう家に在った、鎖で縛られた綺麗な本。以前から興味は有ったけど、どうしてか鎖を解こうとは思えんかったから、もちろん中身は読んだことない。その本が一体どうしたんやろ。

「ルシル君、あの本の事、知っとるん？」

「・・・・アレも魔法に関係した物なんだ。名称は闇の書」

「へぇ、そんなんやぁ～」

「・・・驚かないんだな。知って――というよりは気付いていたのか？」

そう訊いてきたルシル君に「全然♪」ってお茶を啜りながら答える。とゆうより見えへんかも知れへんけど、これでも一応は驚いてる。

「初めて見て触れた時から妙に惹かれててな。不思議やなぁくらいは思うてたんよ。そやからかなぁ、妙に納得できてる自分がおるんよ」

そう微笑みかけると、ルシル君からは「君は本当にすごいな」って微笑み返し。それからわたしは"闇の書"（なんや嫌な響きの名前やなぁ）の説明を聴いた。ルシル君の言うてた家族ゆうんは守護騎士ってゆう人たちのこと。騎士。おとぎ話や伝奇とかでお姫様とかを守ったり、悪い怪物と戦ったりする英雄さまや。

「で、だ。闇の書ははやて、君を主として目醒め、そして守護騎士も君を主として守り、敬うだろう」

「ほぁ～・・・。じゃあわたし、お姫さま？」

そうなるとちゃうんかなぁ～って思うて、ルシル君に訊いてみれば

「ははは。そうだな」って笑った後、ソファから立ち上がってわたしの前に来て片膝立ちした。

「はやて姫。バースデーケーキは如何なさいますか♪」

「苦しゅうない。良きに計らえ～♪」

「・・・はは－－っ。恐悦至極にございます～♪」

時代劇で観たセリフを思い出して詳しい意味も知らずに言ってみると、ルシル君がノッてきてくれた。でも、このやり取りは「騎士やなくてお侍さんやなぁ～」洋風やなくて和風や。ルシル君も片膝立ちから慌てて時代劇のようにひれ伏す格好になったし。

「はやてはどっちの姫も似合うと思うぞ。ドレスも着物も」

「えっ！？　あ、ありがとう」

嘘でもええからそんな嬉しいことを言ってくれたルシル君にお礼を言う。熱くなった顔を手うちわで扇ぎながら「えっと、ケーキのことやけど・・・」本題に戻す。自分のバースデーケーキを自分で作るなんてなんや悲しいし、そもそも作れへん。ルシル君はどうか知らへんけど、もし作れへんのに頼むのもなんか悪いし。

「美味しいケーキを作ってくれる店に心当たりがあるんだ。味は保障するよ」

得意げに語るルシル君。あの料理好きなルシル君がそう言うなら、美味しいんやろうな。今から楽しみや。そうゆうわけでルシル君が「注文しに行ってくる！」バタバタと慌ただしく出掛けて行った。

「・・・～～～～～～っ、やっっっったぁぁぁぁーーーーーーっっ！！」

ひとりっきりになったところで、わたしは大きく万歳しながらルシル君が残ってくれること、そんで新しい家族が出来ることに大喜びする。ソファから車椅子に移って、わたしの部屋に向かう。机の本棚に収めてある1冊の本を手にする。分厚い本で、金（本物かは判らんけど）の十字架があしらってある。コレが"闇の書"。魔法の本で、守護騎士ヴォルケン・・・リットル？とかいう人たちが中に住んでるって。

「この鎖、ん～～っ。・・・取れへんなぁ～」

とりあえず引っ張って見るんやけど、さすがにわたしのような子供に壊せるわけもなく。今度はペンチでも使ってみようか。どうしても中身を見てみたい。ヴォルケンリットルが住んでるってことやから、どうゆう風に住んでるのかめっちゃ見たい。ページを切り抜いてシルバ○アファミリーみたいな小っちゃい部屋があったりして。想像してみる。小っちゃい騎士が生活してる本とか・・・・めっちゃ面白そうや。

「・・・アカン。なにをやっても切れん・・・」

ペンチで切ろうとしてもビクともせえへん。やっぱりわたしの誕生

日が来ぇへんとアカンみたいや。鎖を切るんを諦めて、勉強の自習を始める。今日は国語と理科の予定や。まず漢字の書き取りをし始める。次は音読。続けてその感想文。それで1時間目の自習を終えた。

「ルシル君、どこまで行ったんやろうな～・・・？」

国語はわたし1人でも十分できるけど、今ルシル君に教わっとる理科ってちょう難しいで、1人やと苦戦してまう。と、「ただいま」ルシル君が帰って来た。部屋の入り口からリビングに顔だけを出して「おかえり～♪」お出迎えの挨拶。ケーキ屋さんに行った時とは違くて、なんや気落ちしとる。出掛けてから帰って来るまでに何かあったんかな。

「ケーキの注文、してきたぞ。ショートケーキのホールを1台」

「・・・・ホール1台！？　そんなに食べれへんよ！　わたしとルシル君の2人やと！」

太る！　ホールケーキを半分こにして食べるとしたら、わたし、絶対に太ってまう。ただでさえ運動が出来ひんから太りやすいゆうのに。

「いやいや。いくら甘いモノ好きな俺でもホールを半分食べる自信は無い。増える家族分も入っているんだ。俺が知る守護騎士は全部で5人。石田先生も入るかもしれないから、その分を考えたんだ」

「あ、なるほど～。うん、それならちょうどええ大きさになるな♪」

「ああ。・・・」

ルシル君は微笑んどるけど、やっぱりどこか気落ちしてる感じがする。そやから「なんかあったん？」って訊いてみる。けどルシル君は「いいや。なんでもないよ。物理の授業を始めよう」わたしの頭を撫でた後、わたしの部屋に向かう。

一緒に暮らし始めてまだ1ヵ月ちょいやけど、それでもルシル君の感情の揺らぎは気付けるくらいは見てた。何かあった。そやけど隠す。魔法関連のことやと思う。また危ない事をするつもり・・・やったらどうしよう。

「ルシル君！」

「ん？　どうした」

「あ・・・えっと、な。その・・・。あ、明日の診察ん時に石田先生にヴォルケンリットルのみんなこととか話さなアカンな」

「だな。それにはやての誕生日パーティへのお誘いだ。あとリットルじゃなくてリッター、騎士を意味するリッターだな」

「ｏｈ」

そのまま授業、夕ご飯の買い物、いつも通りになったルシル君と夕ご飯を一緒に済ませて、昼間のことを訊けへんまま今日は終わった。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

はやての診察日の今日、大学病院を訪れている俺とはやて。石田先生と話をしているはやてを眺めながら、昨日の・・・翠屋での出来事を思い出す。

。―。―。回想だ。―。―。

はやてのバースデーケーキの注文をするために翠屋へとやって来た。俺も一応ケーキくらいは作れるが、プロのパティシエールであるなのはの母親、桃子さんに比べれば格段に味が落ちる。スィーツは俺じゃなく、姉のゼフィ姉様の方がずっと上手い。それ以外は俺の方が上だと確信を持てるが。

「いらっしゃ――お、君は。久しぶりだね。ランチかい？」

「いえ。バースデーケーキの予約・・・をお願いしたいのですが・・」

ショーウィンドウの奥に居るなのはの父であり、この喫茶・翠屋のマスターでもある士郎さんにそう返す。すると「ああ、もちろんだとも！」と嬉しそうに応えてくれた。急で申し訳なく思ったが、６月４日であることを告げても「全然かまわないさ」と快諾してくれた。本当に良い人だ。実に羨ましいよ、なのはが。こんなに素晴らしい父親を持てて。

「お父さんかお母さんにかい？」

「いいえ。いもう――じゃなかった。姉、ですかね」

「・・・お姉ちゃんにかぁ。ロウソクは何本にしておこうか？」

「９本でお願いします」

答えると目に見えて士郎さんが驚きを顔に浮かべた。察したのかもしれない。９歳という幼い姉の誕生日を祝うために、それ以下の歳の幼い子供――俺がケーキを買いに来た。頭の回転が速い人なら辿り着くだろう。ここで「両親は居ないので」と告げる。士郎さんは優しい。子供である俺に両親が居ないことを言わせたことに傷つくだろう。

「でも、両親が居なくても俺は毎日が楽しいです。今度祝う姉、さらに上に３人の姉、妹が１人。ペットが１匹。ええ、実に楽しい毎日です」

正確には予定。しかし、楽しい日々になるのは間違いないだろう。だからこそシグナム達は騎士の誇りを捨ててまで犯罪に走ったのだから。はやてを救うために。

「・・・・そうか。じゃあ喫茶翠屋が誇るパティシエール・桃子が腕によりをかけて美味しいケーキをご提供させて――」

「いただきます♪」

桃子さんがひょっこり顔を出してきた。そして士郎さんの隣に来て、「いらっしゃいませ～♪」と微笑んでくれた。士郎さんが桃子さんに注文内容を告げ、そして支払いとなる。レジを担当する士郎さんに代金を渡していると、「最近、外国のお客様が増えて、なんだか嬉しいわぁ♪」桃子さんが嬉しそうに微笑む。日本人の舌だけでなく外国人の舌まで満足させる事が出来ている。日本人パティシエールとして誇らしいんだろうなぁ。

「特にレーゼフェアさんなんて。一気に３０個以上も食べてくれるんだもの♪」

「ははは。そして支払いのシュヴァリエルさんにいつも怒られていてね」

「っ・・・！」

ここで反応してはいけない。２人の口からなのはに伝わるかもしれないからだ。銀髪に虹彩異色という特徴の塊である俺が、管理局に目を付けられたレーゼフェアとシュヴァリエルのこと「を知っている、と。それにしてもこんな不意打ち、待ち構えられるわけがない。変身魔法でも使っていれば、詳しく訊けたかもしれないが。だが、だからと言ってこのまま引き下がるわけにはいかない。

「そうなんですかぁ。すごいですね。その人はいつも来ているんですか？」

「え？　えっと、４月中旬に１回、５月に２回かな。つい先日に来たばかりだよ」

俺がこの街に居ることを知っての行動だとしたら、随分と挑発的なものだな。気付かなかった俺もどうかと思うが。とにかく。レーゼフェアとシュヴァリエルがなのはの両親が居るこの店に訪れている。また来るかは判らないが、念のために監視のための魔術イシュリエルを、ステルスレベル最大で翠屋に設置しておこう。

。―。―。回想終わりだ。―。―。

「――それじゃあ、はやてちゃん。お大事にね。ルシルちゃんも、気を付けてあげてね」

いつの間にか話が終わっていたようだ。俺は「もちろんです。帰ろう、はやて」と応じ、石田先生と別れの挨拶を終えたはやての乗る車椅子を押して退室する。病院の廊下を進む中、「石田先生、誕生日パーティ、来てくれるって♪」嬉しそうに言うはやてに「腕に縒りをかけて御馳走を作らないとな」と応じる。ヴィータは食いしん坊だし。シャマルは料理の腕、落ちていないだろうな。いや、落ちていても、今度ははやてが教授するだろう。

こうして昼は過ぎ、夜となる。夕飯をはやてと済ませ、今は一緒にソファに座ってテレビを観ている。時刻は２２時。"夜天の書"の目醒めまで、あと２時間。はやては"夜天の書"の起動まで起きていると聞かず（ま、眠っていようと起動時に起きてしまうから一緒だが）、こうして「ふわぁ」大きなあくびをしながらも未だに起き

ている。

「なぁ、ルシル君。守護騎士って、どんな人たちなん？」

「う～ん、よくは知らない。闇の書のこともデータで知っているだけだし。でも騎士って言うくらいだ。きっと良い人たちさ」

「そっかぁ。でもルシル君の言う通りやと思う♪　わたしもな、なんかこう・・・良い人たちやって思えるんや♪」

期待に胸を膨らませているはやては頬を上気させて、今か今かと時計を何度も見る。

「そうだ、はやて。１つ、教えておきたい事がある」

「ん？」

「闇の書が起動した時、かなり驚くことになるだろうが、心配する事なんてないから安心してほしい」

「ん。了解や♪」

先の次元世界でのはやては"夜天の書"の起動時に、驚き過ぎて後頭部を壁に強打、気絶したという話だ。最初から伝えておけば、そのようなことは起きないだろう。俺の肩にもたれ掛かってきたはやての軽い体の重みを感じながら、ただじっと待つ。そして時刻は２３時５８分。　コチコチと秒針の音と、ソファに横になっているは

やての「すぅすぅ・・・」寝息だけが耳に入ってくる。やっぱり起きていられなかったよ。

「さてと、少し席を外しておくか」

まずは主はやてと守護騎士だけで顔合わせだ。はやてが主であることを騎士たちに確認させる。かつての主、オーディンと同じ顔をした俺（というか本人）が居ては、こちらにばかり意識が向くからだ。リビングを出、玄関へ移動。そして間もなく、"夜天の書"が起動したことで魔力が発生したのを確認。リビングの入り口から顔を半分だけ出して室内を見る。ソファに眠るはやてが寝返りを打ち、そんな彼女の前に"夜天の書"が転移して現れ、脈動している。次いで縛っていた鎖が弾け飛び、勢いよくページが捲れていく。そしてここで「ふぇ・・・？」眠り姫（はやて）がお目覚めだ。

《起動（アンファング）》

はやては上半身を起こし、自分の胸から浮き出て来たリンカーコアに目を見開き、目の前に浮遊している"夜天の書"へ向かって行くのを見詰めている。

「ルシル君・・・！？」

俺を捜すように辺りをキョロキョロ。大丈夫だと言っておいたが、やっぱり不安になってしまったか。俺は壁をノック。その音で俺に気付いたはやてが「なんでそこに居るん！？　もしかして避難か！？」と問い質してくる。

「大丈夫だ！　まずは主である君と守護騎士の顔合わせだ。その後にちゃんと俺を紹介してくれればいい」

「・・・う、うん！　でも・・・そうゆうことは先に言ってほしかったわぁ・・・」

少し文句を垂れたはやてだったが気を取り直して強く頷き、光を発し始めた"夜天の書"を見詰め直す。はやてのリンカーコアが一際強く輝き、シュリエルリート――いや、"夜天の書"の管制人格の魔力光・深紫色の、六芒星型のベルカ式魔法陣が展開された。はやてが宙の"夜天の書"に釘づけになっている間に、床に展開されている魔法陣上に・・・彼女たちが創り出された。

（久しぶり・・・って感じでもないな）

フィヨルツェンに殺されかけてから数百年が経ったが、その間は眠りについていた。彼女たちと逢うのは感覚としては1ヵ月ぶりと言った感じだ。ここではやてもようやく「わっ！？」片膝立ちで居る守護騎士のみんなに気付いた。

「闇の書の起動を確認しました」

シグナムが口火を切った。

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にございます」

次いでシャマル。

「夜天の主の下に集いし雲」

そしてザフィーラ。

「我らヴォルケンリッターー。何なりとご命令を」

最後にヴィータがそう締めた。俺の時と同じ言葉、順番だ。さぁ、はやてはどう出る？

「ほわぁ～。・・・・あ、わたし、八神はやていいます♪　みんなのお名前、訊かせてもらってもええかな？」

超にこやかに自己紹介した。そして騎士たちに名を問う。騎士たちは顔を上げ、はやての顔をポカンと見上げていた。改めて「訊かせてな？　これから家族になるんやから♪」笑顔でそう訊かれたことで、

「守護騎士ヴォルケンリッターが将、シグナムです。我らが主、ヤガミハヤテ」

「シャマルでございます」

「ヴィータ、です」

「ザフィーラです、主」

若干困惑しながら自己紹介を終えたシグナムたち守護騎士。

「シグナムさんにシャマルさんに、ヴィータちゃんにザフィーラさんやな。・・・ん？　あと1人おるって話やったけど・・・。一緒やないの？」

「え？　何故それを・・・？」

はやての言葉にシグナムが守護騎士を代表して訊き返した。らしくない、動揺しているからだろうな。普段のシグナムなら真っ先に質問に答えるだろうに。

「えっとな。わたしにみんなのこと、闇の書のことについて教えてくれた人が居るんよ。みんなにその人、もう1人の家族を紹介するな」

はやてが俺に向かって手招きをしたことで、シグナム達の視界に入るように全身を現す。シグナム達がこちらへと顔を向け、そして俺の顔を見、「っ・・・！」全員が一斉に目を見開いた。

「うそ、だろ・・・オーディン・・・！？」

真っ先に声を出したのは、ヴィータだった。

「はじめまして。この家に居候している、八神ルシリオン。本名、ルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードです」

俺も自己紹介をする。そう。シグナム達とは初対面であるという事を強調するように。

Ｅｐｏｓ２魔術師と守護騎士は秘かに語り合う～Ｔｒｕｔｈ　ａｎｄ　Ｌｉｅ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

わたしの目の前に現れた守護騎士ヴォルケンリッターってゆう人たち。綺麗な女の人が２人、女の子が１人、犬耳と尻尾を生やした男の人が１人。とりあえず自己紹介をし合う。そんで判ったんが、髪の長い女の人がシグナムさん、短い人がシャマルさん、女の子がヴィータちゃん、男の人がザフィーラさん。

ルシル君の話やとあと１人居るらしいんやけど、その姿は見えへん。そやから訊いてみたんやけど、「え？　何故それを・・・？なんでか驚かれた。ルシル君からいろいろと聞いたんやし。まずはルシル君のことを紹介するべきかなぁ。リビング入口に隠れてるルシル君を手招きで呼ぶ。

「「「「っ・・・！」」」」

ルシル君が顔を出したら、目に見えてシグナムさん達が驚いた。ヴィータちゃんがフラッと立ち上って「うそ、だろ・・・オーディン・・・！？」ルシル君に向かって別の人の名前を言うた。そこまで驚くゆうことは、そのオーディンさんって人とルシル君はそんなに似てるってこやな。ということは血縁関係？　でもルシル君に家族は居らん・・・、ん？　親戚とかはどうなんやろ。それは聞いてへんな。

「はじめまして。この家に居候している、八神ルシリオン。本名、ルシリオン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードです」

「「「セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード・・・！」」」

「オーディン、じゃねぇのか・・・？　そりゃそうだよな・・・。だってオーディンは・・・」

え、なんやろ、この空気。ルシル君とシグナムさん達が見詰め合ってる。これはちょう訊いてみる必要があるかも。ルシル君はわたしの隣にまで来て、「これからよろしくお願いするよ、守護騎士のみんな」わたしの肩に手を置いて挨拶した。

「えっと、うんっ。これからよろしくな、みんな！」

質問はとりあえず後や。わたしも改めて挨拶。戸惑いを見せてたシグナムさん達やったけど、わたしらが笑顔のままで待っとると、シグナムさん達は顔を見合わせあった後に頷き合った。

「はい。我が主ハヤテ。そして・・・セインテスト」

「よろしくお願いします、主ハヤテ。えっと・・・セインテスト君」

「よろしくお願いします」

「よろしくお願いいたします、我が主、セインテスト」

ん～、カチコチな対応やなぁ。確かにみんなの態度は騎士って感じや。でもわたしより小さいヴィータちゃんにまでそうゆうことされると、なんや居心地が悪いわ。これはやっぱりわたしが望んでる関係やない。家族。これこそがわたしの望みや。そやから「あんな、お願いがあるんやけど、ええかな？」って言ってみる。

「我らは貴女の騎士です、主ハヤテ。いかなる命令でも従う所存です。直ちに戦場に出立しますか？　であれば、まずは――」

「ちゃうちゃう！　物騒な台詞は禁止や！」

シグナムさんが危ないこと言い出したから慌てて止める。"闇の書"を完成されるための戦力・・・。そんなん悲しすぎるし、寂しすぎる。

「確かにわたしはみんなの主になった。そやけどな、わたしはみんなを戦わせるつもりはないんよ。騎士から戦いを取るんは良うないことかも知れへん。でも、それ以上にわたしは・・・みんなと家族になりたい。主とか従者とかやなくて・・・家族に」

わたしの想いを言うていく。シグナムさん達は呆けたまま。でもどこか懐かしいものを見るような目をしてて。

「そうゆうわけで。わたしのことは、はやて、って呼んでほしい。なんかな、主ってつけられると、なんや寂しい。あと、敬語とかも要らへんよ」

「確かに主従の壁のような物を感じるな。家族なら、敬語・敬称・遠慮無用でいいと俺も思う。で、俺のこともファーストネームで呼んでほしい。出来ればルシルでお願いしたいな」

「やっぱそう思うよな～♪」

「な♪」

ルシル君からも同意を得たし、「どうかな？」ってシグナムさん達に確認してみる。なんやろ、やっぱりルシル君を見てる気がする。とりあえずわたしは「じゃあ呼んでみてくれへん」ってお願いする。

「ハヤテ・・・ううん、はやて、でいい？　あと、ルシル・・・」

まずはヴィータちゃんが呼んでくれて、「そうやよ、ヴィータちゃん」って微笑みかけると、ヴィータちゃんは「ん」って小さく頷いてくれた。妹が出来たみたいで嬉しいわ。

「えっと、はやてちゃんとルシル君、でいいのかしら？」

「うん！」

「ああ、それでいいよ」

シャマルさんも要望通りに呼んでくれた。次はシグナムさんとザフィーラさんやけど・・・。

「申し訳ありません。将として、やはり敬語を改めるのは少し・・・。敬称についても、申し訳ありませんが」

「我もシグナムと同様です。申し訳ありません」

シグナムさんとザフィーラさんはアカンかった。すぐには無理かもしれへんな。じゃあ追々ってことにしとこか。

「じゃあ俺の呼び方の件は？」

ルシル君がそう訊くと、「ファーストネームで呼べばいいのだな。判った」シグナムさんは了承、「承知した。我もルシリオンと呼ばせてもらう」ザフィーラさんも了承。そっちは簡単に済むんやなぁ～。

「えっとさぁ、じゃああたしからも。あたしのこと、ちゃん付けしないでいい。呼び捨てでいい。ちゃん付けってなんかムズムズする」

「あ、それなら私も、シャマル、って呼んでください。シグナムとザフィーラも呼び捨てで良いでしょ？」

「ああ。主はやて。私のことはシグナムとお呼び下さい」

「ん～。年上の人を呼び捨てにするんはちょう気が引けるけど・・・ん、判った。シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、やな」

そうゆうわけで、敬語・敬称・遠慮無用ってことになった。このま

まシグナム達とお話をしようと思って「お茶用意せなアカンな」キッチンに向かおうとしたんやけど。

「はやて。もう遅い。そろそろ寝ようか」

「ええー。もうちょっとシグナム達とお話ししてたい～」

ルシル君がそんなことを言うてきた。興奮でもう目がパッチリ覚めてもうてるから、今からでもお話し出来る。そやから反対の意思を示すと、ルシル君は「よし。それじゃあこうしよう」って言うた後、シグナム達に振り返った。

「第1回八神家会議～。八神家の家主、はやてが駄々をこねようとしています。もう夜更けな今、もう寝るべきだと思います。というわけで多数決！　シグナム、シャマル、ヴィーター、ザフィーラ。はやてが寝るべきだと思えば挙手！　まだ起きていても良いと言うなら・・・飯抜きだ！！」

「えええええええーーーーっ！！？　ルシル君、それ卑怯や！！」

挙手せなご飯抜きって、手を挙げるしかなくなるやんか。ほら、シグナム達、この空気について来れへんから茫然としてるやん！

「あのー、一応私は医者でもあるので、ルシル君に賛成します・・・。夜更かしはあまり体に良くないですよ。ご飯惜しさではなく」

「おお、シャマルはお医者さまやったんやな♪　ほら、ルシル君。

こういうことが知れるから、もっとお話ししたいんやって！」

「え？　健康の為に夜更かしはダメだって言ったんですよ・・・。ご飯惜しさは別として、ですけど」

シグナム達の名前以外の趣味とか特技とか、そんなんとかが気になって気になってしゃあない。それに5人目の騎士のこともあるし、オーディンさんのこともやな。あとシャマルがなんか言うてるけど、それどころやない程に気持ちが昂ってる。

「では私も挙手で。主はやて。騎士――いえ、家族であれば体の心配をするというもの。健康第一ですよ。私もご飯抜きなど別として」

シグナムがそう言うて手を挙げたら、ザフィーラも無言で手を挙げた。残るはヴィータだけや。わたしはヴィータに振り向いて「ヴィータはもっとお話したいと思わへんっ？」訊いてみる。

「えっと・・・」

「ヴィータ。今すぐ手を挙げたら、君の明日――正確には今日の朝食を豪華にしよう」

「はやて。夜更かしはダメだって」

「騎士（ヴィータ）がご飯に釣られた！　ヴィータって食いしん坊さんなんやな！　でもそこが子供っぽくて可愛ええ　」

「多数決の結果発表～。5対1。決まりだな、はやて」

「圧倒的大敗や・・・」

わたしはガックリ肩を落とす。

「この世はどうせ数が正義だ。恨むなら、多数決なんてシステムを生み出した先人を恨むといい」

「ルシル君メッチャ悪い笑顔！」

ニヤリと笑ったルシル君。うぅ、多数決って誰が作ったん？　こうゆう時はホンマに厄介なシステムや。

「さぁ、寝よう。なーに。話なら明日からいつでもどこでもいつまでも出来るじゃないか。何せ、これからずっと一緒に居るんだから」

ルシル君がシグナム達を見回した後、わたしに向かってそう微笑んだ。そこまで言われたら「ん。もう寝ます」諦めるしかないやん。興奮はまだ冷めへんけど、寝ることにした。よう考えればまた朝寝坊するのもどうかと思うし。すると「良い子、良い子」ってわたしの頭を撫でるルシル君。むぅ、わたしはお姉ちゃんなんよ。まぁ、撫でられるの好きやからええけど。

「あ、でもその前に。みんなの寝るトコ教えておかなアカン」

ルシル君に言われて2階の使ってない部屋を掃除（全部ルシル君や

けど）したんや。

「じゃあ、それを最後として寝ような」

「うんっ♪　えっと、じゃあみんなの寝室に案内するから、ついて来てな。ルシル君、お願い出来るか？」

「ああ」

ルシル君にお姫様抱っこしてもらって、まずはわたしの部屋を教えて、そしてリビングをあとにする。わたし達の後をシグナム達がついて来てるのをルシル君の肩越しで確認。階段を上がって２階へ。２階には３部屋ある。父さんと母さんの両親部屋。そして使ってない部屋が２部屋（うち１部屋が物置）。両親部屋はベッドが２台、クローゼットやお化粧台も揃えてるから、シグナムとシャマル用やな。もう１部屋は和室で、そこはザフィーラに使ってもらうとして。

「ヴィータは・・・どないしよか。シグナムかシャマルのどっちかのベッドで一緒に寝るか？」

「私はそれで構いませんけど。これまでにも似たようなことがありましたから」

「温かな寝台じゃなくて、地下の牢屋みたいなところだけどな」

ヴィータがボソボソっとなんや呟いた気がしたけど、聞き取れんかった。訊き返そうにも、それが許されへんような顔をしてたヴィー

タやったから、わたしは何も言えへんかった。

「いっそのこと、はやてと一緒でいいんじゃないか？」

「「え？」」

ルシル君からのそんな提案。想像してみる。・・・・「それでいこっ！」ルシル君、それ、最高のアイデアやっ！　ちょう困ってるようなヴィータに「嫌やなかったら、わたしと同じ部屋で・・・ええかな？」って訊いてみた。ヴィータは少し考えた後、「それでもいい」小さな声やけど、それでも頷いてくれた。

「決まりだな。シグナムとシャマルはそこの部屋。ザフィーラはその隣。ヴィータは、はやてと同じ部屋だな。じゃあ、我が手に携えしは確かなる幻想」

「「その詠唱・・・！」」「「っ！」」

ヴィータとシャマルが声に出して驚いた。今の呪文、ルシル君が魔法を使う時のモノや。

――変化せしめし乱音（ディゾルディネ・カンビャメント）――

ルシル君がパチンと指を鳴らす。と、みんなの体が足元から煙に包まれた。そして煙がスッと消えてみんなの姿が見えたんやけど。みんなの格好が変わってた。シグナムとザフィーラは浴衣、シャマルはロングワンピースのネグリジェ。ヴィータはウサギ耳付きフード

のあるパジャマ。

「俺のイメージで勝手だが、寝やすいように寝間着にみんなの着替えさせてもらった。今日はこれで解散！　おやすみなさいっ！」

「えっと、じゃあみんな、おやすみな。明日、もっとお話ししよな♪」

「あ、はい。おやすみなさい、主はやて。ルシリオン」

「おやすみなさい、はやてちゃん、ルシル君」

シグナムとシャマルからも挨拶を受けて、２人が部屋に入っていくのを確認。ザフィーラは頭を下げる挨拶で、わたしは「おやすみな」って返しながら部屋に入るんを確認。そんで「ルシル君。ヴィータ。行こか」わたしらの寝室がある１階に降りて、ベッドにまでルシル君に連れてってもらう。ヴィータはわたしとルシル君が何も言わんでも車椅子を持って来てくれた。気の利くええ子や。

「おやすみ、はやて、ヴィータ。２人とも、良い夢を」

「ん。おやすみ、ルシル君」

「おやすみ・・・ルシル」

ヴィータと一緒にベッドに入って、部屋をあとにするルシル君を見送った。

「おやすみ、ヴィータ」

「うん。おやすみ、はやて」

ヴィータと向かい合って挨拶。布団に入ったら急に眠気が襲ってきた。ルシル君の言う通り、明日になったらもっとたくさんお話ししよ。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒シグナム†††

「・・ん？　朝か・・・」

こうして温かな寝台で体を休めることが出来るなど、二度と無いと思っていた。熟睡できたのも実に久しぶりだ。此度"闇の書"の主となったヤガミはやて。今までの主とは違って成人ではなく幼い少女。しかしその笑顔や態度は、あの方を彷彿とさせる。かつての主と瓜二つ、姓も同じである少年、ルシリオンを思う。

「シグナム。ルシル君の言っていたこと・・・どう思う？」

既に起きていたらしい寝台で横になっているシャマルに声を掛けられ、「受け入れるしかないだろう」そう答える。主はやてが寝室に向かった後、ルシリオンから思念通話が送られてきた。

。―。―。回想だ。―。―。

『もう気付いていると思うけど、俺も魔導師だ。さっきから俺を見て驚いているようだから、あなた達の疑問に答えておこうと思ったんけど・・いま良いだろうか？』

ヤガミ・ルシリオンと名乗った少年。その顔立ち、美しい銀髪、紅と蒼の虹彩異色、そして決定的な姓。我々守護騎士ヴォルケンリッターに温かく優しいひと時を与えてくれたかつての主、オーディンを思い出させる。

彼から頂いたものは数知れず。シャマルやヴィータ、名の無かった管制人格――シュリエルをも笑顔にし、我らとは主従ではなく家族という関係を持ってくれた。

（そんな彼を、私もどれだけ慕ったか）

だが、我々は――私は、オーディンと最後まで共にすることが出来なかった。次の転生でシュリエルから、彼が別の"エグリゴリ"からの奇襲によって腕を失ったことを聴いた時、一体どれだけ己の不甲斐無さに苦悩したか。

オーディンのその後はどうなったかは判らない。奇襲した別の"エグリゴリ"と戦い、勝ったのか、それとも負けてしまわれたのか。

そんなオーディンと何かしらの関係を持っているはずのルシリオンからの願ってもない情報交換の提案だ。

『頼めるか？　こちらは私と・・・』

『私も聴きたいわ』

『あたしも』

『我も参加させてもらおう』

『判った。じゃあ何か質問があれば・・、答えられるものなら答えるから』

我らはルシリオンへと質問を投げかけることにした。

『まず、一番大切なことだ。お前と、お前と瓜二つである殿方で、かつての我らの主、オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。彼とお前の関係だ』

子孫であってくれと願わずにはいられない。オーディンはあの後も生きていたのだと、思いたいからだ。

『オーディン・・・か。あなた達はエグリゴリという存在は知っていたりするか？』

忘れもしない。あの男、バンヘルド。あの者にこの命を奪われた時のことは今でも克明に思い出せる。ゆえに質問した私が代表して『知っている』と返答する。そして我らがかつてオーディンを主としていたこと、共に協力してバンヘルドと戦ったこと、しかし我らは決着前に負け、死んだことも話しておく。

『バンヘルドと戦ったことが・・・。だったら、俺の正体を伝えておくよ。俺は対エグリゴリ用の生体戦闘兵器なんだ。生まれからし

て特別。生まれつき圧倒的な魔力を有し、様々な戦闘技術を持ち、幾多もの魔法を覚え、特殊な能力を与えられた、ね』

『『『『っ！！』』』』

ルシリオンから語られた、彼の正体というのがあまりにも想像の上を行き過ぎていた。彼は続けた。オーディンも自分と同じ対エグリゴリ用の兵器である、と。そう。我らが敬い慕ったオーディンもまた、"エグリゴリ"に救済という名の破壊を与えるために生み出された人工的な生命体。まるで我らのような存在だった。

『そんな・・・。でも、オーディンさんは話してくれたわ。家族のこととか出身世界でのこととか』

『たぶんそれは、俺やそのオーディンの基となったオリジナルの記憶――と言うより記録を語ったに過ぎないと思う。俺にもあるよ。俺が元は王様だったこととか、出身世界で戦争があったこととか、エグリゴリに家族や仲間を殺されたとか、いろいろ』

信じられない――いや、信じたくないと言った風に反論したシャマルに、ルシリオンはそう返した。オーディンもそう言った話をしていた。彼らセインテストの系譜とは、"エグリゴリ"と戦い、救うためだけに生み出され続けるクローン体の連なり。それが真実だった。

『でもこれで納得いった。そのオーディンと同じ外見で同じことが出来た俺に驚いていたんだな』

ひとり納得しているルシリオン。しかし我々は衝撃が強すぎて、そう容易く納得できるような心情ではなかった。

『な、なぁ。お前やオーディンが誰かのクローンってことは、お前はオーディンの子孫ってわけじゃ・・・』

『もちろんない。血液から遺伝子まで全てが同じの双子とも言えるけどね』

『あのっ。・・・オーディンさんも自分がクローンであること、知っていたのかしら？』

『起動したその瞬間にオリジナルの人格はもちろん、一般常識・魔導資質・魔法術式などといったものを刷り込まれるから、もちろん知っていたと思う』

この少年はどうして何とでもないと言うように自分がクローンであるとか兵器であるなどと気安く語れるのかと思っていたが、すでに彼自身の存在意義が決定されおり、それに準ずることを決めているからか。

ヴィータが『お前・・・歳いくつだよ・・・』気落ちした声色でそう問う。

『いくつって。俺の活動時間は約１３３２時間。日数にして５５日になるから、０歳？』

『『５５日・・！？』』『『っ！』』

外見では１０に届くくらいと言うような少年だと言うのに、その実たったそれだけしか生きていないのか。我らが黙ったことで『・・・えっと、あなた達の訊きたかったことはそれだけか？』ルシリオンはそう確認してきた。

『では我から。お前の正体は知れた。ならば次の疑問が生まれる。何故、お前はこの世界に居るのか、だ』

『そうだな』

ザフィーラの問いに私も同意する。ルシリオンの答えは簡潔、そして予想していた通り『エグリゴリがこの世界に現れるみたいなんだ』あの圧倒的火力を有していたバンヘルドのような奴が、この世界に居る。

『『『『・・・・』』』』

『安心してもらっていいよ。俺の代で堕天使戦争を終わらせるから。何せすでに1機救っているし、エグリゴリ攻略に必要な策や道具も持っている』

我らの緊張が伝わってしまったようだ。ルシリオンから気遣いを受けてしまった。が、聞き捨てならないものもあり。すでに"エグリゴリ"を1機撃破している。これには驚きを隠せない。

『なっ・・・！』『っ！』

『マジかよ！？』

『もしかして単独で倒したの！？』

『もちろんっ♪』

思わず寝台から体を起こしてしまった。それほどまでに驚くものだった。ヴィータから『ソイツ、バンヘルドより強かったりするのか！？』耳鳴りがしてしまうほどの大声が届いた。

『バンヘルド。堕天使エグリゴリ。属性は炎熱系。戦力序列は7機中6位。俺が救ったのはグランフェリア。戦力序列は7位。何度か殺されかけたけど、あの程度なら死なないから問題なし。それに、どれだけの無茶なら耐えられるかも理解したし、次は快勝してやるさ』

満足げな笑い声を含んでいるルシリオンの回答。そのようなものだからシャマルが『そんな笑い話じゃないわよ、ルシル君』引いている。私としては恐ろしいという感情が占めている。自分の身の安全を度外視にしている発言だ。外見が子供だろうな。余計に恐ろしく思う。

『あれで6位・・・、ふざけ過ぎてんだろ・・・』

そしてバンヘルドの戦力序列を聴いたヴィータが恐怖に満ちた声で

呻いた。確かにあれほどの実力で下位となると、奴に手も足も出なかったと我らは一体なんだと・・・。シュリエルの話では、オーディンと融合を果たしたことで勝てたと言う。
そんなバンヘルドより下とは言え、それでもなお強いであろうグランフェリアなる"エグリゴリ"を単独で撃破した。"エグリゴリ"攻略の策や道具が有るというし。オーディンに比べれば環境は恵まれているのかもしれないな、ルシリオンは。

『あ、そうだ。これだけは伝えておかないと。あなた達と話をしていて、オーディンは本当に慕われていたんだなって思った』

『ま、まぁ、オーディンはあたしらに楽しい時間とかくれたしさ。家族ってものを教えてくれた・・・、大切で大好きな奴だった。オーディンの為だったらなんだってやるって思ったし、命だって懸けれた』

『そうね。あの方と出会うまで私たちはずっと戦って戦って、いつの時代、どの主も私たちを道具扱いされていて。温かさなんて無かったわ。笑った事すらなくて。でもオーディンさんと出会えたことで、ヴィータちゃんと同じことを思えたわ。私も、オーディンさんが大好きだった　』

『ふむ。では私も。オーディンを主とする前、私は騎士として戦うことには不平はなかった。しかし将として、仲間が辛い思いをしていたことについては心を痛めていた』

シュリエルとヴィータの喧嘩は特に、だ。ヴィータは常に周りに苛

立ちをぶつけていたからな。

『そんなヴィータやシュリエルに笑顔を与えてくれたオーディンには心より感謝している。私としても、彼のことが好きだった。もちろん家族として、だ』

――必ず君たちの前には最高の主が現れる。この予言だけは必ず当たる。確実だ。絶対だ。それが運命だ。君たちは、幸せになる――

オーディンのことを想い、共に過ごした日々を思うだけで私は――我々は、あの後も強く生きて来られた。

『主オーディンの信念。守りたいものを守り、救いたいものを救う。その信念の下に戦えることが出来、道具とは別の生き方を与えていただいたことに、我も感謝している』

ザフィーラもオーディンを慕っていた。オーディンと出会う前、そしてその後の主に対して一切の評価をしなかったあのザフィーラが、オーディンにだけは最大の敬意を表していた。我ら守護騎士ヴォルケンリッター一同。オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードを、ひとりの人間として敬い、慕っていたのだ。たとえその正体が何であろうとも。その想いだけはこれからも決して覆ることはありはしない。

『うん。みんなのオーディンへの想いはよく判った。同じセインテストとして嬉しい。けど、だからこそ言っておかないとダメだと思う』

『なにかしら・・・？』『なんだよ』

『・・・・オーディンは過去の主だ。はやてこそが現在の主。そこだけは胸に刻んでおいてほしいんだ。オーディンと同じ人格と思考を持ってる俺だからこそ、言える。はやてはとても良い主になる。はやてと一緒なら、幸せになれるよ。確実に。絶対に』

『『『『っ！』』』』

声音の違う声だと言うのに、オーディンの笑顔が脳裏に浮かんだ。私の好きな、優しく温かな笑み。

『そ、それくらい解ってんよ。はやてが主だ。オーディンはもう居ない。けど、それもオーディンはあたしにとって・・・・！』

『何も忘れろ、なんて言わないよ。ただ、俺は――・・・』

『解っている。主はやてとお前の区別はする。お前の心配は、我らがお前をオーディンと重ねて主として見てしまい、主はやてを主として見ないかもしれない、ということだろう？』

『えっと・・・ルシル君の言いたいことってつまり、オーディンさん扱いしないでほしい、はやてちゃん以上に主として見ないでほしい、という事ね』

それがルシリオンの思念通話の本当の目的だったらしい。オーディ

ンとの違いは背格好だけ（になるのか？）のルシリオン。纏う雰囲気も彼に似通っている。確かにオーディンとして見てしまいそうだ。ルシリオンは最後に『やっぱり俺は俺だから。そして俺の所為ではやてが俺より下に見られるのも嫌だ』そう告げた。

『それがお前の頼みなら聴こう、家族として。お前たちもそれでいいな？』

『もちろんだ。つうか、お前はオーディンじゃない、それくらい解ってんよ』

『さすがに子供の姿のあなたを見てオーディンさんに重ねることはないと思うわ』

『・・・判った。お前の頼み、受け入れよう』

守護騎士一同、ルシリオンの頼みを受け入れることにした。まぁわざわざこのような形で頼まれずとも、我らはお前と主はやてに上下を付けるつもりなどなかったがな。

『ありがとう。他になかったら、もうこれで終わりに――』

『ちょい待ち。こっちはまだ訊きたいことがあんだけどさ』

締めようとしていたルシリオンに待ったをかけるヴィータ。ルシリオンは『満足いくまでどこまでも』と促した。ヴィータの訊きたいこととは、５番目の騎士シュリエルリートのこと（名前は出してい

ないが）を何故ルシリオンが知っているか、というものだ。

『ロストロギアという物品のデータがインストールされているからさ。闇の書の守護騎士４騎と、管制人格が実体化した騎士が１騎。計５騎。・・・違ったか？』

『いんや、合ってる。が、判ってねぇこともあるみてぇだな。管制人格は、闇の書の頁を４００頁埋めて、そのうえ主の承諾が出て始めてこっち側に出て来れんだよ』

『なるほど。ある程度ページを埋めないとダメなのか。はやてにはぬか喜びさせてしまったな・・・』

やはりシュリエルの起動条件のことも知ってはいなかったか。ルシリオンにはオーディンの記憶は無いというのは話を聴いていて判った。これは諦めなければならないようだ。

（アギト。アイリ。お前たちは今、どこで何をしているのだ・・・？）

私の相棒・アギト、ヴィータの相棒・アイリ。融合騎である２人の行方はこの数百年知れず。無事であるかも判らずじまい。ルシリオンに、オーディンやこれまでのセインテスト（居たとすればの話だが）の記憶があれば判り得たかも知れなかったが、無いのでは、な・・・。

『あたしはからはもうねぇ』

『じゃあシャマルやザフィーラからは何か無いか？』

『私からも無いわ。ヴィータちゃんの質問と、あなたの答えの中に知りたかった事が含まれてたし』

『我からも無い』

どうやらシャマルも私と同じ考えに至っていたようだ。おそらくザフィーラもだろう。アレも予てよりアギトとアイリの心配をしていた。

『じゃあ、これで終わりということで。明日ははやてとの時間を大切にしてほしい。・・・おやすみ。シグナム。ヴィータ。シャマル。ザフィーラ』

『ああ、おやすみ』

『ん。おやすみ』

『おやすみなさい、ルシル君』

『ああ』

ルシリオンとの思念通話が切れる。静かになった脳内。室内を照らすのは、雲の隙間から漏れる月明かり。そのおかげか一気に眠気が襲ってきた。

。―。―。回想終わりだ。―。―。

シャマルと共に寝台より降り、この部屋と廊下を隔てる扉へと向かう。扉を僅かに開け、階下の様子を伺う。トントン、と懐かしい音が聞こえてくる。包丁とまな板の音だ。シャマルが「懐かしいわねこの音」と昔を懐かしんで微笑む。私も「ああ」頷き返し、廊下に出て階段を下りていく。

我らが起動した部屋・居間を覗き込んで見回し、こちらに背を向け台所で作業をしている主はやてとルシリオンを視界に収める。なんと微笑ましい光景だろう。もうしばらく眺めていたいそのような状況の中、「ん？　あれは・・・」カウンターの陰からザフィーラの尻尾が床に伏せている状態で出ているのが見える。ということは、今のザフィーラは狼形態になっている。しかしいつの間に・・・。

「和食やけど、みんな喜んでくれるかなぁ？」

「はやての作る料理は絶品だから、和食だろうと洋食だろうときっと喜んでくれるさ。異世界人の俺でも美味しいって思うんだから」

「ありがとうな、ルシル君♪」

「我らは食に関しては選り好みしませぬゆえ。そう気を遣わずともよろしいかと」

「いやいや。ウチに来てから初めての食事やもん。家主として美味しいもん食べさせてあげたいんよ。もちろんこれからずっと美味しいもんを一緒に食べることになるけどな♪」

主はやての笑顔が偶然にもこちらへと向けられた。そして「あ、シグナム、シャマル♪」我らに気付かれたよう。この温かな雰囲気のおかげだろうか。久しく口にする事の無かった「おはようございます、主はやて」挨拶がスラスラと出て来た。私に続き「おはようございます、はやてちゃん」シャマルも笑顔で挨拶をする。

「おはよう♪　朝ごはん、ちょお待っとってな」

笑顔。たったそれだけ。それだけで私の心は決まった。いや、元より決まっていた。主はやて。新たに我らの主となられた彼女の笑顔を護るために私は、我らは、生きて往こう。

Ｅｐｏｓ３八神家の日常～Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｄｅａｒ…～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

目覚まし時計が鳴る前にスイッチを押して止める。文字盤を見て時刻を確認。目覚まし機能が動く６時３０分の１０秒前。うん、素晴らしいタイミングや。わたしの隣で「すぅ・・すぅ・・・」小さな寝息を立てて眠っとるヴィータを見る。夢やない。起こさへんように気を付けながら頭を撫でてみる。柔らかな髪の毛や。

「ん・・・」

「おっと。起こしたら可哀想やな」

もぞもぞ寝返りを打ったことで慌てて手を引っ込める。起こさせへんように気を付けてベッドから車椅子に移る。服を着替えて部屋から出て、リビングを通って洗面台へ。玄関まで来たところで「おはようございます、我が主」声を掛けられてちょうビックリ。声の方に振り向いて見れば、大きな青い「わんちゃん！」が階段から降りて来てた。その大きなわんちゃんからは「狼です、我が主」そんな聞き覚えのある声が。

「もしかして・・ザフィーラか・・・？」

「はい。この姿でお目に掛けるのは初めてです。我は盾の守護獣。

これが我の本来の姿です」

わたしのところまで降りて来て寄り添ってくれたザフィーラ。そっか、狼さんやから耳と尻尾があったんやな。疑問が1つ解けたわ。そんなザフィーラに「触ってもええか？」って訊いてみる。ザフィーラは「どうぞお好きなように」って快諾してくれた。お言葉に甘えてっと。フカフカな毛並みを撫でる。うわぁ、めっちゃ嬉しい。わんちゃんを飼うの夢やったから。まぁザフィーラは狼さんやけど。ザフィーラの毛並みを十分堪能して、「ありがとう、ザフィーラ」目的やった洗面所へ向かう。顔を洗って歯を磨いて、「よしっ」今日もバッチリや。と、鏡にルシル君の姿が映り込んだ。「おはよう、はやて。と・・・ザフィーラ」ってルシル君がわたしの後ろに控えてるザフィーラの顔を覗き込んだ。

「おはよう、ルシル君。そうや。この狼さん、ザフィーラなんよ」

「うむ」

ルシル君が顔を洗い終わるんをザフィーラを撫でながら待つ。そんでルシル君と一緒にキッチンへ。腕に縒りを掛けて朝ご飯を作らんとな。卵焼き、アスパラのベーコン巻き、焼き鮭、菜の花のおひたし、お味噌汁をルシル君と連携して作ってく。でも「和食やけど、みんな喜んでくれるかなぁ？」それが心配や。そやけどルシル君もザフィーラもそんなんは杞憂やって言ってくれた。

「いやいや。ウチに来てから初めての食事やもん。家主として美味しいもん食べさせてあげたいんよ。もちろんこれからずっと美味し

いもんを一緒に食べることになるけどな♪」

ふと、リビングの入り口からわたしらを見てる「あ、シグナム、シャマル♪」に気付いた。なんや起きてたんならもっと早く声かけてくれても良かったのに。シグナムやシャマルとも朝の挨拶を交わして、ルシル君も「おはよう2人とも。まだ寝ていても良かったのに」って挨拶。2人にはテーブルに着いて待ってもらうとして。ルシル君と声掛けをしながら朝食づくりのラストスパートに入る。

「これでよし、っと。ルシル君、そっちはどないや？」

「こっちも終わったよ」

お互いに作ったおかずを確認。そして時刻を確認。7時半。ちょうどええ頃合いやな。

「ちょお気が引けるけど、そろそろヴィータを起こさなアカンなぁ」

「では私が起こしに行ってきます。シャマル。お前は主はやてとルシリオンの手伝いを」

「判ったわ」

席から立ってわたしの部屋に向かうシグナムに「ありがとう、シグナム」お礼を言って、「何かお手伝いすることがあれば言って下さい」そう言ってくれたシャマルにはお味噌汁をよそうのをお願いする。シャマルは「はい。お味噌汁に卵焼き。懐かしい香りです♪」

お椀によそいながらそんなことを言うた。異世界にもお味噌汁があるんか訊いてみる。

「かつての主、オーディンさんに作ってもらったことがあるんです、お味噌汁。あと卵焼き、私の大好物なんですよ」

「オーディンさんって――」

「そのことなんだけどはやて。オーディンってどうやら俺のご先祖様だったようなんだ。俺とそのオーディンって顔立ちが瓜二つらしいんだ。な？　シャマル」

「え？・・・・・・あ、はい。えっと、ルシル君の言う通りです」

オーディンさんの疑問はこれで晴れた。でもそれって「まるで運命やなぁ」ルシル君のご先祖様と同じ、"闇の書"の主になったわたし。そしてルシル君と一緒に暮らしてる。不思議なご縁や。とゆうかちょう待って。「何でルシル君がそんなこと知っとるん？」わたしとルシル君が別れた後、こっそり会って話さな知り得へんことやろ。ジト目でルシル君を見詰めると、

「えっと・・・実は・・・『こういうわけなんだ』」

「ふわっ！？」

ビックリ。頭の中に直接ルシル君の声がした。

『思念通話っていう魔法の1つなんだ』

『闇の書が起動したことではやてちゃんも魔導師に目覚めちゃいましたから。思念通話くらいなら出来ますよ』

わたしがルシル君やみんなみたいに魔法使い――やなくて魔導師に・・・。ゾワッと全身に鳥肌が立った。ルシル君と同じ目線に立てる。それが嬉しすぎて。すぐに「どうやったら出来るん！？」みんなに尋ねる。ルシル君たちは顔を見合わせて、「じゃあ――」思念通話のやり方を教えてくれた。届けたい人のこと、心の中で伝えたいことを思い描く、と。目を閉じて、ルシル君とシャマルに目掛けて『こ、こうか？』届けっ。

『そうそう。その調子だ』

『上手ですよ、はやてちゃん』

『ホンマに？　やった♪』

テーレッテレー♪　八神はやては思念通話を覚えた♪　これでどんな時でもみんなとお話し出来るってわけやな。ルシル君たちとそんな話をしとると、「おはよ～」ヴィータがよたよたとシグナムに背中を押されるような形で歩いて来た。う～ん、無理やり起こされた感や。シグナムも「まったく」って呆れとるし。とりあえず「おはようさんや、ヴィータ。よう眠れた？」って挨拶、そんで質問。

「むぅ・・・よく眠れたぁ。久しぶりにフカフカの寝台だったし、

その、はやてと一緒でぬくぬくだったから」

ちょう照れてる「ヴィータっ　」の側に移動して、ぎゅうって抱きしめる。もうアカン。可愛すぎや、ヴィータ。そんなこんなで朝ご飯。みんなでテーブルに着く。「うわっ、コレ卵焼き！　それに味噌汁！　すげぇっ、めっちゃ久しぶりだ！」目を輝かせて興奮してるヴィータには笑みを零してまう。

「喜んでもらえて何よりや♪」

みんなの嬉しそうな笑顔を見ることが出来て、わたしの方が嬉しいわ。でも「ザフィーラ。あんな、ホンマにそれでええの？」狼さん形態のザフィーラはテーブルには着かんと床に伏せて、お皿に盛ったご飯とおかずを食べることに。正しくペットのわんちゃん。ヴィータが起きて来る前にザフィーラにお願いされた。狼さんが本当の姿やから、そうゆう扱いでも問題あらへんって。そやから「構いません」って変わらへん答えしか返って来ぇへん。

「いいんだよ、はやて。ザフィーラはあんまし人間形態で居ることないし」

「そうねぇ。ザフィーラがそれで良いと言うのだから、はやてちゃん、気にしないであげて」

ヴィータとシャマルもそう言うてるし。ザフィーラもそれで良いらしいし。まぁええか。

「それじゃみんな、手を合わせて」

ルシル君の声掛けに合わせてパンッと手を合わせる。みんなも手を合わせて「いただきます！」元気よく一緒に挨拶。まずはみんなの反応を確かめる為に、ルシル君と一緒に料理を口に運ぶのを遅らせる。

「美味っ！」

「美味しいっ♪」

「・・・うむ。主はやて、ルシリオン。とても美味しいです」

「ええ。実に美味です」

「ホンマに！？　嬉しいわ♪　な？　ルシル君♪」

「ああ。作り手冥利に尽きるというものだな」

みんなから料理の大絶賛を受けて、わたしとルシル君はニコニコや。わたしとルシル君も食べ始める。それにしても「みんな、お箸使うの上手やなぁ」お箸の持ち方も扱い方も上手や。みんなからの答えはオーディンさんに教わったってものやった。

そして話は昔の主のオーディンさんのことになった。オーディンさんは、わたしの考えとまったく同じ考えを持ってた人やった。みんなを従者やなくて家族として受け入れた。

みんなの顔を見とればよう判る。ルシル君のご先祖様のオーディン

さんは、すごくええ人やったってことが。うん。話を聴いたらもっと強く思えるようになった。オーディンさんの夢、わたしが引き継ぐ。守護騎士のみんなをわたしが、ルシル君と一緒に幸せにしてみせる。

「はぁ。美味かったぁ。もう食べられねぇ～」

「もう。ヴィータちゃん。後片付けもしっかりしないとダメでしょ」

食べ終えた食器の片付けをみんなでしてる中、ヴィータだけは椅子に座ったままげっぷを出してる。シグナムに「はしたないぞ、ヴィータ」って怒られるけど、「出るもんは出るんだ、しゃあねぇだろ」ってヴィータは反論。

「まぁ生理現象やしなぁ。ヴィータの言う通りしゃあないよ。それに手伝いはせんでええよ、シグナムもシャマルも。みんな、ゆっくりしとってな」

「いいえ。こうして家事のお手伝いが出来ることがとっても嬉しいんです♪」

「シャマルの言う通りです。私もこういったお手伝いが出来るのは嬉しいです」

2人がそう微笑んでくれたから、「ん。それじゃお願いや♪」一緒に後片付け。シグナムとシャマルが洗ってくれた食器を、わたしとルシル君で食器拭きタオルで拭いてく。食器の後片付けも終わって、

みんなをリビングのソファで休ませてからわたしとルシル君は洗濯物を済ます。で、わたしは洗濯済みの自分の衣服が入った籠を抱えながら、いま自分の服を洗っとる洗濯機を眺めるルシル君に話を切り出す。

「ルシル君。今日な、みんなの服を買いに行こうって思うんや。そやから今日の授業はその・・・」

今のみんなの格好はアノ黒い薄着。ルシル君が着せたパジャマは魔法で創られたモンやからずっとは着せてられへん。とゆうわけで、みんなの生活に必要なもんを買い揃えたいって思ったわけや。

「俺も賛成だよ。服だけじゃなくて日用品も揃えないとな」

ルシル君からも賛成を得た。この事をみんなに伝えやな。洗濯物をシグナムとシャマルとヴィータに手伝ってもらって庭に干す中、「今日はみんなでお出掛けやよ」今日の予定を伝える。

「判りました。戦場へ赴くのですね。護衛はお任せください」

「ちゃうよ。そもそもこの世界も国も街も、そんな危険なところやないから」

シグナムは物騒や。ヴィータにも「これだから戦闘直結思考は」って窘められてるし。そしてシグナムは「む？　それではまるで私が戦しか考えていないようではないか」不満そうやし。

「みんなの服を買いに行くんよ。言うたやろ？　みんなの衣食住を管理するのは家主であるわたしの務め。いつまでもそんな薄着にさせておくわけにはいかんからな。もちろん遠慮なしやよ♪」

「服を・・・。ありがとうございます、主はやて」

「ありがとうございますっ、とっても嬉しいですっ♪」

「はやて、ありがとうっ♪」

シグナム達は喜んでくれてるな、よしっ。じゃあ問題は「ザフィーラやけど・・・」服は着てくれるやろか。ヴィータは「要らないと思う」、シグナムは「要りませんね」、シャマルは「はい、要らないと思います」ってゆう返答やった。

「う～ん。一応本人に訊いてみようか」

とゆうわけで訊いてみたんやけど「お心遣い、感謝します。ですが我はこの姿で居ることが多いゆえ」ってやっぱり断られてしもた。じゃあ衣服は3人分やな。さてと。買い物に行く前にやっておかなアカンことが1つある。シグナムとシャマル、ヴィータをわたしの部屋に入れる。

「ルシル君、ザフィーラっ。わたしの部屋、ちょう出入り禁止なっ」

掃除を任せてるルシル君とザフィーラに伝えておく。これからシグナムとシャマルには裸になってもらわなアカンからな。お風呂場の

方から「判った！」「判りました」２人の了承の声。これで間違って部屋に入って来るってことは無くなったな。
机の棚から「まずはシグナムとシャマルのサイズを測らせてもらうな」メジャーを取り出す。で、シグナムとシャマルのスリーサイズを測ったんやけど・・・。やっぱ凄かったわ、見た目通りに。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

「いってきま～すっ！」

はやてのそんな挨拶に倣ってシグナム達も「いってきます」と挨拶。それだけなのに嬉しいのかヴィータとシャマルは笑顔。シグナムとザフィーラもハッキリと顔には出さないが嬉しそうだ。俺と別れてからこう言った当たり前をすることが無かったようだ。前回の起動は１１年前。現代だが、転生先や主との関係によってはそうなるか。

「それじゃ行こか♪」

創世結界・"神々の宝庫ブレイザブリク"から見繕った外出用の服（先の次元世界で彼女たちが着ていた衣類と同じデザイン）をシグナム達に着せ、俺たちはみんなの日用品を揃えるために買い物に出かけた。
バスに数十分と揺られて到着した都市部のデパート。しかしやはり注目を浴びるな。特にザフィーラが。耳と尾は隠してある。が、メンバーが悪い。そして俺の外見も悪い。女５人（内３人が１０歳以下の子供）の中で男１人という構図になってしまう。本当は俺を含めて男２人なのに、だ。

しかもザフィーラの体格や性格にも問題あり。筋骨隆々。寡黙。防衛の騎士らしくメンバーの最後尾を歩いている。見る人が見れば、女の子たちを静かに追っかけている変質者。現に・・・

「ちょっとお兄さん。お話を聴かせてもらってもいいかな？」

「む？　何用だ。我は――」

「わぁわぁ！　警備員さん、この人はウチの身内です！」

デパートに入ってから1分と経たずに警備員に声を掛けられた。俺たちは警備員をなんとか説き伏せ、解放されることに。で、ザフィーラの目立ちようをどうにかするための解決策として。

「うわぁ、マジでオーディンだな」

「オーディンさんもこんな姿やったんやね～」

トイレの中で大人へと変身して出て来た俺の周りをヴィータがくるくると動き回る。そしてシャマルは何を思ったのか俺の右手を取り、トンッと肩に額を当てて来た。僅かに震えるシャマルの手に空いている左手を重ねて「シャマル？」と声を掛ける。すると「きゃっ？　ごめんなさいっ」慌てて手を放し、頭を下げて謝ってきた。

「そこまで必死に謝られると俺が悪いことしたみたいなんだけど・・・」

他のお客さんから「やだ、痴話げんか？」「女の子に頭下げさせるとは感心せんなぁ」「別れろ」などなど冷たいお言葉と視線が。とりあえずそんな視線から逃れるために場所を変える。

「さて。警備員に目を付けられないために、歩く位置を決めようと思う」

俺の独断だが、俺たち八神家の家主であるはやてが中央。車椅子を押すのがヴィータ。ヴィータの後ろにシグナムとシャマルが横に並ぶ。そして問題の男であるザフィーラと俺だが。男が女性の後について歩くのが悪い。となれば。

「俺とザフィーラは2人のどちらかの隣を歩く。横を歩いていれば知人友人として見られるだろう」

隣を歩いていても声を掛けられた場合は自分たちの外見やその人の仕事熱心さを理由に諦めるほかない。位置としてはシグナムの右隣をザフィーラ。シャマルの強い要望で俺がシャマルの左隣、となった。ご機嫌なシャマルに「では行きましょ、はやてちゃん♪」と促されたはやては「そやな」と頷き、俺たちを率いて洋服店へと向かう。そうして洋服店に着き、はやては3人からのリクエストや自分の意見を交えて3人の衣服を見繕い始めた。

「シグナムもシャマルもスタイルすごく良えし、ヴィータも可愛ええから、選びがいがあるわ～♪」

そんな彼女たちを眺めている俺とザフィーラ。時折こちらに振り向

いて、服を胸の高さまで掲げて見せるはやて達に「似合ってるよ」と微笑み返し。やっぱり同性と買い物することが嬉しいようだ。姉のようなシグナムやシャマル、妹のようなヴィータが出来て、はやての笑顔は途切れることを知らない。

「シュリエルって子にも早く会いたいなぁ～。こうゆう風に一緒に買い物してみたいわ～」

「っ、そ、そうですね。あの娘ったらお寝坊さんですから」

「いずれ起きますよ、主はやて」

「そっかぁ。もう少しの辛抱やな」

しょんぼりしたはやてだったが、すぐに笑顔になった。そんなはやてを見て俺は後悔中。俺は失敗した。はやての優しさを思えば、シュリエルの事は黙っておくべきだった。シュリエルに会いたいという思いと、シュリエルを起動するのに必要な魔力を集めるために人に迷惑を掛けたくないという思い。

家族を選ぶか人への迷惑を選ぶかの二択。その葛藤を抱かせないために俺は、シグナム達にシュリエルの起動条件をはやてに隠すようお願いした。シグナム達もそれでなんとか納得してくれた。

「――じゃあ、服はこれくらいでええな♪」

「ありがとうございます、はやてちゃん。大事に着ますね♪」

「ありがと、はやてっ♪」

「ありがとうございます、主はやて」

3軒もはしごしてシグナム達の衣服を買い揃え、次は下着を買い揃えるためにランジェリーショップへ。そこは男子禁制が暗黙のルールだと俺は考えている。だから俺は「店の外で待ってる」と告げ立ち止まった。はやては「ごめんなぁ～」とみんなを連れて店内へ。ああ、みんなを連れて。ザフィーラすらも連れて行った。あまりに自然な移動だったため止めることを忘れていた。はやて達もスルーしているし。しかしやはり、だ。早速、店内に居た他の女性客がギョッと目を見開いて、手にしている物を急いで隠す仕草を取る。

「ん？・・・ちょっ、ザフィーラ！？」

俺が呼び戻す前にはやてが周囲の異変からザフィーラの存在にようやく気付いた。あの図体で天然のステルス性能とか。自然体、恐るべし。ザフィーラは「どうしました？」と今の状況が解っていないようだ。

「あんなザフィーラ。男の人がここに入るん、あんま良おないんよ。そやからルシル君と一緒に外で待っとってな」

「しかし――」

「いいからザフィーラっ。ここは女の子のお店なのよっ」

「男は早く出てけっ」

「ザフィーラ。早々に去れ」

はやてからは困惑の目を向けられ、シグナム達には睨み付けられたザフィーラはたじろぎ始めた。しょうがなし。俺も店の中に入り、「ほら、出るぞ」ザフィーラの腕を引っ張って店外へ出る。

「解らぬ。使用済みならまだしも、新品かつ商品である下着を見られたところで何を恥じる？」

「いや・・・あー・・・なんだ。そういうものなんだって思うしかないんじゃないか・・・？」

微妙に納得いっていないザフィーラと共に店外のベンチに座り、はやて達が満足して戻って来るのを待つ。

「う～ん・・・。あっ。ザフィーラ、少し荷物番を任せる」

そんな空き時間を無駄にしない方法を思いつき、ザフィーラにそう告げる。当然「む？　何か用があるのか？」そう訊かれた。はやて達に聞かれることのないように『はやての誕生日プレゼントを買いに行くんだ』念話で答えておく。

『贈り物か？　では我らも――』

『もうみんなからは貰ってるよ。家族。守護騎士みんなが、はやて

にとっては最高の贈り物なんだ』

『・・・そうか』

黙ったザフィーラを置いて、近くの服飾店へ向かう。その店ではやてへのプレゼントを購入。急いでザフィーラの元へ戻る。はやて達が居ないことからまだ下着を選んでいるようだった。

「お待たせや～♪　って、あれ？　ルシル君。その袋・・・」

はやては早速新たに増えている袋に気付いた。が、今は「秘密だ♪」言えないから答えない。「ええー」って文句を言うはやてだが、もう少し待ってほしい。そして下着類を揃えた後は日用品だ。歯ブラシやタオルやシャンプー等々。最初の警備員の呼び止め以降、大した問題もなく全ての買い物を済ませることが出来た。

「ちょうどええ時間やし、ここでお昼食べてこか」

「さんせー♪」

「ここは俺が奢るよ。好きなだけ食べていい、と普段なら言うけど、夕食はご馳走だから食べ過ぎないようにな」

というわけで、レストランで昼食タイム。商売と言うことでやはり美味いが、「はやてやルシルの方が美味いなぁ」と嬉しいことを言ってくれるヴィータ。そうは言うヴィータだったが、結局はアレも美味いコレも美味いと言いながらハンバーグセットを平らげていた。

こうして買い物も終わり、家に帰るためにバスに乗る。このバスの中で俺ははやて以外に念話を通し、あるお願いをした。シグナムとザフィーラは少々恥ずかしいようだが、ヴィータとシャマルは快く乗ってくれた。バスを降り、ザフィーラとふたり両腕に買い物袋を提げ、楽しそうにお喋りしているはやて達を眺めながら家路を歩く。

「（っと、帰る前に）はやて。ちょっと離れるな。すぐに戻るから」

「え？　あー、うん」

「みんな。はやての事、少しの間頼んだよっ」

近くに在る小さな児童公園のトイレに入る。公園には人っ子一人居ないことは確認済み。これなら問題ないだろう。

「我が世界（うち）より来たれ、貴き英雄よ。・・・フェンリル」

トイレの中で"異界英雄エインヘリヤル"のフェンリルを召喚する。耳と尾を隠し、白のタートルネック・カットソー、デニムのサロペットワンピースといった格好だから職質はされないだろう。閉じられている目をスッと開けたフェンリルは「ひゃっ？　ここ男性用のお手洗いじゃないですか馬鹿ッ！」そう怒鳴ってきた。今さらだろうに。大戦に参戦する前は風呂だろうがトイレだろうがベッドだろうが、所構わず侵入して来たくせに。とりあえず顔を両手で覆い隠して「早く出ましょう～よ～」と恥ずかしがっているフェンリルを連れてトイレから出る。そしてフェンリルを召喚した理由を伝える。

「これから翠屋という喫茶店に行き、そこではやてのバースデーケーキを受け取って来てほしいんだ」

「はやてのケーキ？　うん、いいよ。それでお礼は？」

即答してくれたが、その手伝いの報酬を求めてきた。報酬、ねぇ。じゃあ「パーティに参加してよし」と答えると、「いってきますッ！！」ビシッと敬礼した後、翠屋の場所を聴かずにダッシュで去って行った。ま、翠屋の場所は、翠屋を監視している俺の魔術、イシュリエルを辿ることで判るだろう。フェンリルを見送った後、俺ははやて達と合流。

「どこ行ってたん、ルシル君？」

「ちょっとフェンリルにお使いを頼んでいたんだ」

「フェンリルさんに？　そっか」

「フェンリルって誰だ？」

ヴィータにそう訊かれ、

「俺の使い魔だよ。ザフィーラと同じ、狼と人の２つの形態を持っているんだ。夕食を一緒に食べることになるから、よろしく頼むよ」

フェンリルが使い魔であることや、今日の夕食を一緒にすることを

伝えておく。シグナムが「使い魔。アンゲルスではないのか」と呟いたのが聞こえた。居るには居るが、アレらをこんなところでは召喚できない。

家に辿り着き、「ただいま～♪」元気よく挨拶して家に入っていくはやて達の後に続いて入り、ザフィーラと一緒にはやての部屋へ荷物を置きに行く。

「はーい。ルシル君もザフィーラもお疲れ様や。じゃあ、少しの間、立ち入り禁止な♪」

はやてに言われるままに部屋を出、ついでに夕食の準備をするためにキッチンへ移動。食材は昨日の内に買い込んだが、足りない物がある時の為に「我が手に携えしは確かなる幻想」"ブレイザブリク"の蔵にアクセスしておく。

「子供の誕生日にバーベキュー・・・は可愛げがないか」

昼食で肉を食ったしなぁ。そうだ。『はやて。夕食なんだけど、中華はどうだろう？』念話をはやてにだけ通す。

『ぅわっ？　あ、あぁ、思念通話やね。これ、慣れてへんとビックリするな～。えっと、中華やね。わたし好きやから良えよ♪　確か、石田先生も好きみたいなこと言うてたから問題ないはずや』

『そうか。良かった。じゃあ夕食は俺が作るから、はやては休むこと。もちろん拒否権はない。今日の主役だからな』

『ん～、そうか？・・・判った。楽しみにしてるな♪』

『ああ、任せてくれ』

念話を切る。よし。中華料理で決定だ。ベルカ時代でのシグナム達も喜んでくれていたし。そうと決まれば手間と時間の掛かる料理の仕込みを始めよう。

作る料理はチャーハン、中華おこわ、焼きそば、餃子、焼売、小龍包、エビチリ・エビマヨ、麻婆豆腐、スープ。あと、から揚げでも作るか。メニューを決め、手間がかかる料理の仕込みを始める。足りない食材を"ブレイザブリク"から取り出し、すぐに使わない物は冷蔵庫へ。

「たっだいま～♪」

家中に響き渡るハイテンションな挨拶。狼形態に戻って俺の側に伏せていたザフィーラが「誰だ？」と警戒して見せる。それに対し「俺の使い魔、フェンリルだ。気にしないでいい」と返し、下準備を続ける。ドタバタとリビングに入って来たフェンリルに「潰してないだろうな？」と問う。

「もちろんですともっ♪」

両手の間にある翠屋と書かれたケーキ箱。フェンリルはそっとテーブルに置き、箱を開けた。ショートケーキのホールが1台。形もケーキの表面に掛かれている英字のハッピーバースデーも崩れていない。俺が「良い仕事をしたなフェンリル」と満足げに頷くと、フェ

ンリルはしゃがみ込んでテーブルに指を掛け、顔の上半分だけをテーブルの上に出し期待に満ちている上目使いで俺を見、耳をピコピコ、尻尾をフリフリと動かし始めた。

「なんだ？」

「んっ」

頭頂部を向けてくるフェンリル。とそこに「フェンリルさん、久しぶりや♪」はやてや新しい服を着たシグナム達が出て来た。俺がそっちに意識を傾けると、「あとちょっとで撫でてもらえたのに」と不満そうに呟くフェンリルだったが。

「うん、久しぶり、はやてっ。そしてはじめまして。マスター・ルシリオンの使い魔、フェンリルですっ」

すぐに笑顔を振りまいてシグナム達に自己紹介した。シグナム達もそれぞれ名を名乗り、バースデーケーキを受け取って来たフェンリルを労った。しょうがなしにフェンリルをしゃがみ込ませ「よしよし」頭を撫でてやる。それだけでコイツのテンションはうなぎ上りだった。

さてあとは、俺が料理を完成させ、石田先生が来たら誕生日パーティを始めるだけだ。ケーキを冷蔵庫にしまい、料理の下準備の続きに入る。と、「あの、私に手伝えること、ないかしら？」シャマルが訊いてきた。

「やめとけシャマル。お前、オーディンの時代から今まで料理なん

てしてねぇだろ。ぜってぇ失敗するに決まってる」

「そうだな。お前もこちらで主はやてと共に洗濯物を取り入れる手伝いをするべきだ」

「うぅ。だって久々にお料理できると思ってぇ・・・」

しょんぼりするシャマルを見たはやてからの「ええよ。ルシル君。シャマルも手伝わせたって」直々の頼みに、「判った」と答える。今のシャマルの料理の腕を知るにもちょうどいい。シャマルには簡単かつ有名どころな和・洋・中の料理を教えた。それを憶えているかどうか。

「じゃあまずは、このエビの殻を剥いてくれ」

「はいっ♪」

エビチリ・エビマヨに使うエビの殻剥きを頼むと、シャマルは嬉しそうに返事をして一心不乱に向き始めた。俺は餃子や焼売、小龍包の餡作り。殻剥きの終わったシャマルに、餃子などの皮作りに入ってもらう。

これはシャマルには教えた事が無いため横から方法を教えながら、となる。俺の説明を一生懸命に聴き、皮作りに勤しむシャマル。そんなシャマルと一緒に作業を始めて小一時間。シャマルの料理はさほど落ちていなかったというのが判った。

「ルシル君。石田先生、急な宿直のお仕事が入ったって連絡が・・・

・」

別の料理の下準備も半ばに差し掛かった頃、はやてが残念そうにガックリと肩を落としながらそう伝えてくれた。みんなのことを紹介するって張り切っていたからな。ここで不参加は痛いな。

「寄ってもらう時間もないのか？」

「えっと・・・。５時からってことやけど」

１７時からか。今から作れば間に合うな。となれば「はやて。石田先生を招待してくれ。大急ぎで夕食を作る」これしかないだろう。みんなの紹介は後日にすればいい。という考えも過ぎったが、はやての笑顔を曇らせるのだけは避けたい。彼女が生まれたこの祝いの日にだけは。

はやては「うんっ」と頷き、メールの返信を打ち始めた。俺は動きの効率をよくするために大人バージョンへ変身する。そんな俺を見て頬を僅かに赤らめているシャマルに「シャマル。チャーハン、作れるか？」と問う。

「え？　あ、はいっ。大丈夫ですっ！」

チャーハン作りの準備を始めるシャマルを横目に、俺も残りの料理を並行して作り始めた。途中ではやての協力の申し出を受け、結局は主役のはやても調理に参加。そのおかげでサクサクッと終えることが出来た。完成した料理が冷めないように１皿１皿結界で包むと、ヴィータに「またオーディンみてぇなことやってんなぁ」と言われ

た。しょうがないだろ。何せ本人なんだからな。
俺――ルシリオンとオーディンを区別させるために、クローンだとか生体兵器だとかある種の真実を含めた嘘を吐いたんだが、外見を合わせると無意味になるようだ。とりあえず「料理は出来た。あとは石田先生が来るのを待つだけだ」と、一段落したところで変身を解いてふぅっと一息つく。

「なんや忘れとる気が・・・」

「忘れてるって何が？」

時刻が4時に差し掛かった時、はやてが唸りだした。ヴィータがそう訊くと、「ルシル君のことでな」と俺を見てきた。ヴィータとシャマルもそれに釣られ俺を見、洗い物と後片付けを終えてきたシグナムとフェンリルとザフィーラも俺に視線を向けてきた。俺も何があったかと考えてみる。ケーキ、料理、プレゼントも問題ない。クラッカーが無いのが問題か？

「あああああッッ！！」

はやての大声に俺たち全員がビクッと肩を跳ねさせた。はやては勢いよく俺へと振り返り、「着替えやなアカンよっ、ルシルちゃんっ！」焦りながらそう言ってきた。ハッとする。「ルシルちゃん？」と首を傾げているみんなを横目に、「我が手に携えしは確かなる幻想」詠唱し、"英知の書庫アルヴィト"にアクセス。

――変化せしめし乱音（ディゾルディネ・カンビャメント）――

ブラウスにリボンタイ、キュロットという衣服へと瞬時に変身。あと、髪を二房に分けて両耳下で結っておさげにする。この間、「何やってんだ？」「ルシル君？　急にどうしたの？」「何故女物に着替える？」などなど、当然の疑問を浴びせかけられた。フェンリルだけは「マスター可愛い　」と抱きついてきた。俺がはやての家に世話になった時のことなど、こうして女装する羽目になった事情を説明する。

「なるほど。でも私たちが一緒に住むことになったのだし、もうその必要はないんじゃないかしら・・・」

「今さら実は男でした、なんて言えるわけがないだろ・・・」

「そうか？　つうか、これからもずっと黙ってる方がまずいんじゃねぇのか？」

解ってる、解ってるともさ。実は男だったと告白するのは早い方が良いってことくらい。そうこうしている内にピンポーンとドアチャイムが。

「とりあえず俺の――いや、私のことは後、じゃなくて後よっ。全員、石田先生は魔法とは無関係な一般人！　あなた達の出身は！？」

「「「「ドイツ」」」」

「よしっ。何か困ったことがあれば思念通話！」

「「「「ヤヴォール！」」」」

テーブルに置かれている大皿全ての結界を解き、はやてに「それじゃあ呼んでくる」と告げ俺は玄関に向かう。そして「どうぞ」と応え、「お邪魔します」石田先生を招き入れる。

「お招きありがとう、ルシルちゃん」

「いいえ。忙しい中お越しいただき、ありがとうございます」

石田先生を連れリビングへ。そこではシグナム達（ザフィーラは狼形態のまま）＋フェンリルが横一列に並んで待ち構えていた。そして「はじめまして」と挨拶し、自己紹介をしていく。「はじめまして。石田幸恵です」石田先生も自己紹介。

「はい。はやてちゃん。誕生日プレゼント。喜んでもらえると嬉しいのだけど」

「ありがとうございます、石田先生♪　ささ。どうぞ～♪」

石田先生から受け取った小包を大事そうに抱え、ダイニングテーブルへと案内するはやて。石田先生は幾枚もの大皿に盛られた中華料理に「すごいっ」心底驚愕していた。そうして俺たちも席に着き、

「はやて」

「はやてちゃん」

「ある――コホン、はやて」

「はやて」

「はやてちゃん」

「はやて」

「「「「「お誕生日おめでとうっ！」」」」」

「おおきに、ありがとう！」

順にはやての名を呼び、祝いの言葉を告げる。はやては嬉しさからか若干涙目だが綺麗な笑顔を作った。さて。少し早目の夕食となるが、冷めないうちに頂こう。楽しい会話をしながらの誕生日パーティ。はやてもみんなもとても喜んでいる。そういう俺も心底楽しいと思えている。

「そう言えばゼフィランサスさんはいらっしゃらないのかしら？」

「「っ！」」

これにいち早く反応するのは俺とはやてだ。俺はすぐさま「姉は残念ながら仕事で、帰りは遅くなると」と答える。その間にはやてがみんなにゼフィランサスの正体を念話で伝える。すっかり失念して

いた。最近出番が無かったからな。

「そうなの。・・・あ、ごめんなさい。そろそろ行かないとダメみたい」

残念ながら石田先生はここで途中退席となる。俺たちは玄関まで石田先生を見送ることにした。靴に履き替えた石田先生は改めて最後まで付き合えないことを謝った。が、はやては「気にせんで下さい。十分祝ってもらいましたから」と返した。

「そう言ってもらえて助かるわ。・・・あの、みなさんはいつまで日本に滞在なさるのでしょうか？」

石田先生の問いに「みんな期限を決めてません。許される限り、はやてと一緒に居るつもりです」と俺が答え、シグナム達を見回す。

「ええ。これからも共に過ごすつもりです」

シグナムが代表してそう続けた。石田先生はそれで満足したのか「これからもはやてちゃんをお願いします」と一礼してから八神宅を後にした。そして俺たちはダイニングへと戻り食事を再開。話は石田先生の事。真っ先にシグナムが「良い方だった。どれだけ主はやてを思ってくれているか、話を聴いていて判った」と称賛。

「うん。わたしのこと良う考えてくれて、ずっとお世話になって来たんよ」

「はやてちゃんの病気、難しいものなんですか？」

「んんー、よう判らんらしいわ。原因不明の麻痺。治療法も今のところ無いみたいや」

「じゃあさ、シャマルに診てもらおうよ、はやて。コイツ、のんびりしてそうだけど医者としてはかなりの腕だと思うし」

「のんびりって・・・」

「そうですね。一度診てみましょう」

というわけで、シャマルがはやての脚を診るんだが。結局は「う～ん」悩むだけで終わった。そして今度は魔法による回復を試すってことになったが、「効いてないみたいね」徒労に終わった。当然だった。はやての麻痺は治らない。元凶である"夜天の書"からの侵食を止めなければ。みんながこの事実を知るのはもう少し後になる。みんなには悪いが、俺は口を噤ませてもらおう。

「ごめんなさい、はやてちゃん。お役に立てなくて」

「でもシャマルの魔法でも治せねぇなんて」

「ええよ。もう半分諦めとるし。それに、別にこのままでも問題あらへん。だってみんなが居てくれるからな」

「主はやて・・・」「はやてちゃん・・・」「はやて・・・」

笑顔のつもりだろうが、やはりそこには僅かな悲しみが混じり込んでいた。

「ささ。せっかくルシル君とシャマルが作ってくれたんや。冷めへんうちに食べよな」

はやては何度も何度も俺やシャマルが作った料理を「ホンマ美味しいわぁ♪」と褒めてくれた。そういうはやての作った麻婆豆腐（俺が教えた）も美味い。食事中にはどこかへ遊びに行く予定を立てたりし、楽しくお喋りをした。こうしてはやてを祝うパーティは終わり、そして・・・・

「さぁ、お待ちかね。フェンリル。バースデーケーキを」

「は～い♪」

フェンリルにバースデーケーキを持ってくるように指示。フェンリルは元気よく手を挙げて返事をし、トタトタと冷蔵庫へ。その間にはやてとヴィータ以外で空いた皿を流し台へ持って行く。それすら手伝おうとしたはやてには「主役はどっしりと」と言って制しておく。そしてケーキをテーブルに置いたフェンリルにろうそくを９本立て、火を灯すように伝える。

「了解♪」

――ＣＥＮ（ケン）――

ルーンを使ってろうそくに火を灯したのを確認。テーブルへの戻り際に「明かりを消すよ」と確認を取ってからパチンとスイッチをＯＦＦ。さすがにまだ太陽が落ち切っていないため、真っ暗とはならない。ここは俺の出番だ。

――闇（コード）よ誘え、汝（カムエル）の宵手――

窓を闇黒系魔力で創りだした触手で覆い隠し、夜と同じ状況へと変えた。これで室内を照らすのはろうそくの灯りだけとなった。

「ふわぁ、綺麗やな～♪」

「はい。幻想的です♪」

「ろうそくの火だけが灯りだと言うのに、とても温かいですね」

揺らめくろうそくの火に目を輝かせている少女組。ここで俺は『よし。じゃあ行くぞ』とはやて以外に念話を通す。みんなが頷くのを確認。「せーのっ」と俺が合図を出す。

「「「「「「ハッピーバースデー・トゥ・ユー♪　ハッピーバースデー・トゥ・ユー♪　ハッピーバースデー・ディア・はやて～♬　ハッピーバースデー・トゥ・ユー♪」」」」」」

みんなで歌い終える。目を丸くして驚いているはやてに、

「誕生日、おめでとうっ」

「主はやて。おめでとうございます」

「はやてっ。おめでとうっ！」

「はやてちゃん。お誕生日、おめでとうございますっ」

「おめでとうございます。主はやて」

「じゃあ私も。はやて、おめでとうねっ♪」

祝いの言葉を順に言っていく。はやては僅かに目の端に涙を浮かべて「ホンマにおおきに、ありがとうっ」満面の笑みを浮かべてくれた。

「じゃ、じゃあろうそくの火を消すな。ふぅーっ」

はやては1回ですべての火を消した。みんなが拍手する中、窓を覆っていたカムエルを解除し、俺は部屋の明かりを点けるために立ち上がってスイッチを押す。そして席に戻り、創り出した魔力剣でケーキを切り分ける。「お前やオーディン・・・、セインテストの魔法ってホント何でもアリだよな～」またもヴィータが呆れた。

「はいはい。なんとでも言ってくれ。では。本日最後のご馳走だ。いただきますっ」

翠屋のショートケーキの美味しさに頬を綻ばせているはやて、ヴィータ、シャマル、フェンリル。そんな彼女たちを微笑みながら見守る俺、シグナム、ザフィーラ。保護者的な立場だな。
そして楽しかった誕生日パーティは終わり夜も更けた。はやてとヴィータとシャマルを先に風呂に入れ、次にシグナム。最後に俺となる。そんなだから彼女が出て来るまでに「はやて」ドライヤーで髪を乾かし合っている3人の元へ。

「これ、プレゼント。気に入ってもらえると嬉しいんだけど」

買っておいたプレゼントの入ったビニール袋を手渡す。

「えっ？　あ、この袋・・・・！　そうやったんやね。あの時増えてた袋はわたしの・・・。開けてもええか？」

すごく期待に満ちた目で見られ、かなりのプレッシャーだ。「どうぞ」と返し、内心ドキドキしながらはやての反応を見守る。ガサガサと袋から取り出し「おおっ、エプロンや！」俺のプレゼント、はやて用のエプロンを広げて見せた。桜色を基調とし、機能性重視のため装飾は無い。

「今使ってるのがダメになってからでも使ってくれたら良いな～、っと」

「ううん。明日から早速使わせてもらうな♪・・・おおきに、ありがとうルシル君っ」

「ああ。どういたしまして」

八神はやての運命の日は、こうして終わりを告げた。

Ｅｐｏｓ４八神家の日常～ｋｎｉｇｈｔ＇ｓ　Ｔｒａｉｎｉｎｇ～

†††Ｓｉｄｅシャマル†††

私たち"闇の書"がはやてちゃんを主として１週間目の今日。この世界での一般常識をはやてちゃん、そしてはやてちゃんの弟分というルシリオン――ルシル君に教わった。だからもう１人でお買い物も出来るわ。

此度の主、八神はやて。かつて私たちを家族として迎え入れてくれたオーディンさんと同じ、私たちを家族として迎え入れてくれた女の子。

原因不明の麻痺で車椅子生活を余儀なくされている。しかもご両親とはすでに死別。それなのにそんな自分を不幸とは思わず、いつも温かな笑顔をしていて。とても心の優しい、幼さを感じさせない強い意思を持っている。

「うん。美味しいよ、シャマル。お味噌汁は完璧やな。な、ルシル君？」

「ああ、すごく美味しい」

「ありがとうございます♪」

シグナム達も文句なく、はやてちゃんと協力して作った朝ご飯を食べてくれているし。これも、オーディンさんが私に和食を教えてく

れたから。まるで私たちがこの世界に転生することを知っていたような。本当に不思議よね。
私の作った卵焼きを食べてるルシル君を眺める。オーディンさんと同じ、"エグリゴリ"の救済を存在意義とした、生きた戦闘兵器だと語った少年。オーディンさんもソレとだという話を聴いて、私はショックを受けた。でも、心のどこかでオーディンさんが私たちと同じ存在だということに嬉しく、今まで以上の親近感を抱いたのもまた事実だった。

「どうしたシャマル？　俺の顔に何か付いてるか・・・？」

口の周りを触れるルシル君に「ううん。何でもないの」誤魔化すように笑みを作ってそう答えて、私も食事に集中する。と、「むぅ」シグナムが呻いた。そのあまりにも深刻そうな表情に「何か料理に問題でもあった？」訊いてみる。シグナムがいま食べているのは焼き鮭。焼いたのは私だけど。一切れ口に含んでモグモグ。うん、問題なし。焼き加減はどれも悪くはないはず。

「いや。なんだ。少々体が鈍り始めたようでな」

「そういやここに来てから運動してねぇよなお前。ううかあたしら全員だけど」

「これまでとは違い、此度は戦が無いから当然と言えば当然かもしれんが」

ヴィータちゃんもシグナムに同意した。運動らしい運動と言えば家

事だけよね。今回の転生はオーディンさんの頃とは全然違う。この世界・地球には魔法文明がなく戦うことがない。オーディンさんとは家族であり戦友っていう関係を持てた。
でもはやてちゃんが主である限りその関係は無い。けどそれも悪くないって思う。それを聴いたはやてちゃんが「だからと言って戦わせたくないし、そもそも相手居らへんしなぁ」ちょっと困り気味。はやてちゃんが困らない、何か良い解決方法は無いかしら。

「そういやルシル、お前は普段はどうしてんだ？　腕が鈍っちゃエグ――ぅぶっ？」

ヴィータちゃんの口を塞ぐルシル君。そして思念通話で『エグリゴリのことははやてに話さないでくれ、今は・・・』私たちにそう告げた。それに私は『判ったわ』と、シグナム達もそれぞれ了承を示した。ルシル君のそんな態度にちょっと不満そうな顔をしているはやてちゃんは、小さく溜息を吐いて苦笑いで「いつか話してな、ルシル君」不問とした。ルシル君が「ごめ――」謝りきる前に、「いつまであたしの口、塞いでんだ」ヴィータちゃんが頭を振って、ルシル君の手を振り払った。

「まったく。思念通話で止めりゃあいいのに。で、さっきの話の続きだ」

「腕が鈍らない方法、かぁ。俺は特に何もしてないな。でも、うん。必要かもしれないな、そろそろ」

そう言ってルシル君は手の平にある物を出現させた。それは見覚え

のある指環。私たち守護騎士はその誕生をも知っている。

「シグナム達もデバイス持っているんだよな？」

「ああ」「おう」「持っているわ」

ルシル君の質問に答えていると、「デバイスって何なん？」はやてちゃんが小首を傾げてそんな質問を私たちに投げかけた。ルシル君が「実際に見てもらおうか、みんな」とデバイスの起動を行うことを言外に伝えてきたから、私とシグナムとヴィータちゃんは首に提げているアクセサリーを首から外す。

「レヴァンティン」

「グラーフアイゼン」

「クラールヴィント」

それぞれデバイスを起動させていく。私の両手の人差し指と中指に指環――"クラールヴィント"を。シグナムは右手に片刃剣――"レヴァンティン"を。ヴィータちゃんも右手に柄の長い鉄槌――"グラーフアイゼン"を。

「エヴェストルム」

そしてルシル君の左手には、何百年ぶりに見る大槍――"エヴェストルム"が。けどルシル君の身長に合わせてあるのか短くなってる。

はやてちゃんは「おおっ。デバイスって武器のことやったんやなぁ。けど、ちょう物騒やなぁ、ルシル君とシグナムの」驚きと、そして完全な武器である2人のデバイスにはちょっと腰が引けていた。

「武器の形状をしているものの、魔導師や、俺やシグナムたち騎士が使う魔法の発動を手助けしてくれる杖でもあるんだ。まぁ、確かにこれで直接攻撃とかもするけど。非殺傷って設定すれば、打撲傷で済んだりもするから」

今は失きベルカではそう言ったモノは無かったけど、現代では当たり前なモノ。それを聴いたはやてちゃんは「そうなんか。やっぱり不思議やなぁ」と感心。

「にしても。エヴェストルムを見んのも久しぶりだな。あたしら、ソイツが造られた日のこと知ってんぜ。・・・なあ、オーディンから受け継がれてきたのか、それ？」

「エヴェストルムの起源はオーディンからだったのか。・・・確かに歴代のセインテストに受け継がれてきたんだよ、コレ」

「ふ～ん。やっぱお前やオーディン以外にもセインテストは居たんだな。で？　デバイスを起動してどうすんだ？」

ヴィータちゃんが"グラーフアイゼン"を肩に担いでルシル君に問うと、「決まってる。模擬戦だ」"エヴェストルム"の穂先をシグナムに向けた。するとシグナムは「面白い。オーディンと同じだと言うのなら・・・、変身しろ、ルシリオン」興奮しているのが目に

見えて判る程に頬を紅潮させちゃってる。
そして自分に向けられてる"エヴェストルム"の穂先に"レヴァンティン"をカツンと当てる。決闘受諾の礼儀のようなものだ。すぐにでも始まってしまう空気の中、パンパンと手を叩く音が。はやてちゃんだった。ちょっとお怒り気味かも。

「はいはい。ちょう待ち。まだ朝ご飯残ってるよ。あと、家の中ではやっぱり危ないから起動せんといてな」

「「「「はい」」」」

今は大人しくデバイスを待機形態に戻して、朝ご飯の続き。一刻も早くルシル君と模擬戦をしたいのかそわそわしているシグナムには苦笑いが漏れちゃうわ。そうして朝ご飯も終わり、シグナムは早足で食器類を流し台に運んで「ルシリオンっ。早速――・・・」お茶を飲んで一服してるルシル君を引っ張っていこうとしたけど・・・。

「アカンよ、シグナム。ご飯食べてすぐに激しい運動するんは。とりあえず３０分はお休みや」

「え？　しかし・・・」

「アーカーン♪　最低３０分は休むようにな。ルシル君も。それでええな？」

「ああ、判ってるよ。そう言うわけだからシグナム。模擬戦は最低でも３０分後・・・、家事が片付いてからな」

「・・・はい・・・」

しょんぼり返事するシグナムを見て「ぷっ。あはは！　マジで落ち込んでんじゃんシグナム！」ヴィータちゃんが大笑い。すぐにでも剣を交えたかったようだし。しょうがないわよね。そしてシグナムは、「お洗濯して来ます」今日の当番がお洗濯だからはやてちゃんにそう告げて、トボトボと洗濯機のある洗面所の方へ向かって行った。食器洗いの当番であるヴィータちゃんとルシル君、そしてお掃除当番である私とはやてちゃん、ザフィーラがそんなシグナムを見送る。

「う～ん・・・。シグナムってそんなに戦うことが好きなんやろか？」

はやてちゃんが姿の見えなくなったシグナムの方を見てそんな疑問を漏らした。それに真っ先に答えたのが、ルシル君の隣で踏み台に乗って食器を洗ってる「あたしらん中じゃ一番じゃないかなぁ・・・」ヴィータちゃん。私も「それには賛成」と続く。守護騎士の中で一番戦闘好き、と言うよりかは「体を動かすのが好きなのよね、シグナム」かしらね。

「体を動かす・・・か。むぅ。スポーツとかどうやろなぁ・・・。」

「適当にレヴァンティンでも振らせておけば大丈夫だってはやて」

「んんー。そうは言うてもやなぁ～」

もう。シグナムったら。はやてちゃんに変な悩みことを与えちゃって。

「ま。家事が一段落したら相手をしてみるから。シグナムの運動不足についてはそれから考えよう、はやて」

「う～ん。そうやな」

そう言うわけでシグナムの為にも家事を早々に片付けることにした。そして家事を片付け終えた今、庭で対峙しているシグナムと、大人の姿に変身しているルシル君をリビングから眺める。そんな中、２人の模擬戦が終わらないとお洗濯ものを干せないわ。なんて私は別のことを考える。

「オーディンと同じ姿をしたお前とこうして対峙していると心が躍るぞ、ルシリオン」

「そこまで期待されるのも困るんだけど・・・」

静かにテンションを上げるシグナムと、そんなシグナムに気圧されてテンションが下がるルシル君。言い出しっぺはルシル君だから、頑張ってね。

「レヴァンティン・・・！」

「・・・エヴェストルム」

２人はデバイスを起動して、ルシル君だけが見慣れた衣服、オーディンさんが着ていた真っ黒な騎士甲冑姿に変身していた。ルシル君は私服姿のままであるシグナムに「シグナムも騎士甲冑に変身した方がよくないか」そう言うけど。

「残念ながら持っていない」

そう。私たちは騎士甲冑を持っていない。転生するたびに主に賜らなければならない。シグナムは「このままで構わん。お前の腕を信じる」って真っ直ぐルシル君を見詰めた。ルシル君を信じる、か。"エヴェストルム"を間違ってもシグナムに直撃させないって。

「・・・判った。せいぜい気を張らせてもらうよ」

そして２人は朝ご飯の時みたく穂先と剣先をカツンと打ち合わせた。私の隣に居るはやてちゃんは「怪我せぇへんやろか、２人とも・・・？」ハラハラしていて。私は「その時は私が治します♪」安心させる為に笑顔で応じた。

「シグナムも暴走しないと思うし、ルシルの奴もたぶん・・・。だから大丈夫だよ、はやて」

ヴィータちゃんも安心させる為に笑顔を作った。そんな私たちの思いを余所にテラスの２人はデバイスを構えてからピクリとも動かなくなった。はやてちゃんが「なんかあったんやろか？」って不安そうに漏らす。

「タイミングを計ってるんだよ、はやて。・・・『シャマル、ザフィーラ。ルシルの奴・・・』

ヴィータちゃんが思念通話を送ってきた。ザフィーラは『うむ』と一言。私は『ルシル君の言う通りね』と返す。

――生まれつき圧倒的な魔力を有し、様々な戦闘技術を持ち、幾多もの魔法を覚え、特殊な能力を与えられた――

オーディンさんと同じ構え。その隙の無さもまた同じ。だからシグナムは攻めあぐねているみたい。ジリジリと摺り足で2人は動き、間合いを測ってる。緊張感が私たちを覆い包む中、ごくり、とはやてちゃんが息を呑んだ。

庭の2人には絶対に聞こえないような小さな音。でも、「っ！」2人は短く息を吸って突進、息を吐くと同時それぞれデバイスを振るった。そして勢いよく衝突。ガキィィン！とものすごい金属音が響いて、「ひゃうっ」はやてちゃんがビクッと肩を跳ねさせた。2人はそのまま魔法を一切使わない純粋な技の応酬を始めたのだけど・・・。

「ちょ、待っ――アカンっ！　音、大きすぎや！　それに火花が！」

はやてちゃんは大慌て。確かにこの静かで平和な町中であんな派手な金属の衝突音がすれば、ちょっとご近所さん迷惑かも。

「おい、お前ら！　やめだっ、やめっ！」

「シグナムっ、ルシル君っ、止まって！」

「待て、シグナム。ルシリオンも、だ」

一度距離を開けたのを機会にヴィータちゃんとザフィーラが2人の間に割って入る。シグナムが「突然なんだ？」って不満そうに"レヴァンティン"を下ろした。ルシル君は、はやてちゃんの声が聞こえていたのか、「確かにデバイスの打ち合いはまずいな」って"エヴェストルム"を指環に戻して、大人形態の変身魔法を解除した。シグナムもそれに倣って"レヴァンティン"を待機形態に戻した。

「あんな、シグナム。ゴメンなんやけど模擬戦をやめてもらってもええかな？」

「あ、・・・はい。判りました・・・」

目に見えて落ち込んでいるシグナムを見たルシル君は「はやて。デバイス以外の打ち合いならダメか？」って別の手段を考えているみたいで、そう確認した。

「えっと。あんま派手な、そんでご近所さんに怪しまれへんようなやつやったらなんとか・・・」

「そっか。んー。・・・よしっ。シグナム。今日、俺の買い物に付き合ってくれ」

ルシル君からそう誘われたシグナムは「よろしいでしょうか、主は

やて？」とはやてちゃんに確認を取った。

「うん。ええよ。わたしらも一緒に行くから。シグナム。洗濯物を干したら出掛けるよ」

というわけで、今回はルシル君の提案で都市部へお出かけすることになった。もちろん家事を終えてから、ね。行き先は「ちょっと大型のスポーツショップまでね」ということ。そして先日お買い物したデパートとは違う、大きな建物へとやって来た。

自動扉を潜ってエントランスの壁に設けられた各階層の案内板を並んで見るルシル君（大人版）とシグナムを、私たちは新たに入って来るお客さんの邪魔にならない向かい側の壁際から眺める。そんな中、次々入って来るお客さんが2人をチラチラ見てヒソヒソ囁きながら店内へ入って行く。けど悪口じゃなくて・・・。綺麗、だとか、お似合い、だとか、2人の外見を褒めるものばかり。

「やっぱ2人とも美人さんやでなぁ～。わたしももし他人やったらあんな事言うてたと思うわ～」

はやてちゃんは2人を眺めながら誇らしげにそう言った。確かにあの後姿を見ればお似合いの恋人にも見えなくもないかしら。なんか面白くないけど。そして「待たせてごめん。行こうか」ルシル君がそう言って店内へ入って行くから私たちも後を追って店内へ入る。

「まずはスポーツウェアからだな」

ルシル君が衣類コーナーに向かって行く。そこは体を動かすことに

適した服が売っている場所で、「上と下、あとシューズもまとめて買っていこう。良ければみんなもどうぞ」ルシル君は私たちの分まで買ってくれると言ってくれた。
そこで気になるのは「あの、お代金は・・・？」私ははやてちゃんを見る。チラッと値札を見たけど、結構なお値段。バラつきはあるけど、ルシル君が見ているのは質が良いのか高い。はやてちゃんが何かを言う前にルシル君が「もちろん俺持ちだから♪」ズボンのポケットから長い革財布を取り出した。

「じゃあ遠慮なしで良いな」

「ちょっとヴィータちゃん！」

ヴィータちゃんもルシル君に続いて靴の方を見に行っちゃった。どうしようかとルシル君たちをキョロキョロ見ていると、はやてちゃんが「わたしは見ての通り運動できひんから、みんなだけでお言葉に甘えたらええよ」私とシグナムを見て笑顔を浮かべてくれた。

「ザフィーラ。少し荷物が増えるけどいいか・・・？」

「構わん。我にはそれしか出来ぬからな」

今までずっと黙っていたザフィーラがすまなさそうにしてるルシル君に簡潔に答えた。

「では。遠慮せずに私も選ばせてもらおうか。ふむ。やはりデザインより機能性だな」

「私は可愛い物がいいなぁ♪　模擬戦もしないし」

私たちもルシル君やヴィータちゃんに倣って自分好みの運動着を見繕っていく。可愛くて、でも動き易くて、あと出来るだけ安い物を、っと。シグナムと一緒に試着を何度も繰り返して、上は長袖・半袖、下は裾長と裾短（シグナムはピッチリ肌に張り付くスパッツという物も追加）をそれぞれ数着ずつ、それにシューズも購入。ヴィータちゃんは靴だけを購入。

「あの、ごめんなさい、ルシル君。お金たくさん使わせちゃって」

先日と同じ位置で歩く私たち。私の隣に居るルシル君に謝る。でも「俺も欲しかったし、現状じゃ使い道のない財産だ。みんなの為に使えるなら嬉しいことだよ」って微笑んで返してくれた。

「そう言やさ。あたしらの騎士甲冑ってどうすんだ？　もうこのまま無しで行くのか？」

次のお店に向かうためにエレベーターに乗っているとヴィータちゃんがシグナムと私にそう訊いてきた。まずは『降りてからね。他の人が居るし』って応じて、目的の３階に到着してエレベーターを降りてから「騎士甲冑が無いってどうゆうことなん・・・？」はやてちゃんから質問。

「えっと。私たち守護騎士はそれぞれ武装――デバイスを持っていますけど、騎士甲冑は起動した都度、その主から賜らないといけな

いのです」

「はい。騎士甲冑の生成に必要な魔力は我々持ちですので、主はやては我々の騎士甲冑のデザインをイメージしてくだされば、あとは我々が生成します」

私とシグナムがそう答えると「それは責任重大やなぁ。でもソレって戦うためのもんやろ？」ってはやてちゃんはルシル君を一度だけ見てから不安そうに返してきた。

「騎士甲冑を持ったからと言ってすぐに戦闘に直結しなくていいよ、はやて。戦闘はせずとも騎士甲冑は有った方が良いと俺は思う」

「う、うん。じゃあ・・・みんなに似合う騎士甲冑、考えてみるな」

「「「はい」」」「うんっ」

はやてちゃんの考える騎士甲冑はどのようなものなるのか、今からすっごく楽しみ。そうして私たちは目的のお店を目指して歩く。と、「あっ。おい、ルシル。アレなんだ？」ヴィータちゃんがとあるお店を指さした。

「アレってグラーフアイゼン・・・？」

開かれているお店だから内部がよく見える。展示されている物の中にヴィータちゃんの武装、"グラーフアイゼン"に似通った物が在った。

「あぁ、アレか。ゲートボール、またはリレーションのスティックだよ」

「「ゲートボール？」」

ヴィータちゃんと一緒に訊き返す。

「アレで打ち合っちゃいけねぇのか？　完全にあたしのアイゼンと形が似てんだけど」

「残念。アレはボールを打つためのスポーツ用品だ。武器じゃないからな。・・・やってみるか？」

ヴィータちゃんは興味を持っちゃったのか「面白いのかよ？」なんて訊き返す。

「おいで。やってみよう。はやて、少しヴィータを借りるよ」

ルシル君はヴィータちゃんを連れてゲートボールの用具店の側に設けられている練習場らしきコートに向かって行った。ルシル君はヴィータちゃんにルールを説明しながら貸し出されているスティックでボールを打った。

そしてボールは床に立てられてるゲートに通した。２つ目、３つ目、最後にコートの中心に立ってる杭、ゴールポストに当てて終わり。

続けてヴィータちゃんが。でも、力加減を失敗してボールがなんと私たちの方へ向かって高速で飛来してきた。

「主はやて・・・！」

はやてちゃんに直撃コースだったボールをシグナムが取った。ヴィータちゃんがスティックを放り投げて「はやて！　ごめん！」蒼い顔して駆け寄って来て、「おっとっと」ルシル君は慌ててスティックを掴み取った。

「大丈夫やよ、ヴィータ。シグナムがキャッチしてくれたからな」

「ヴィータ。手加減というものを知れ」

「うぅ。返す言葉がねぇ・・・」

落ち込むヴィータちゃんの頭を撫でるはやてちゃんは「まぁまぁ。こうして無事やったんやから」ひたすら笑顔を浮かべるだけ。

「まさか全力打撃とは恐れ入った。で、どうするヴィータ？　まだやってみるか？」

「いんや、もういいや。今はお前らの買い物を済ませちまおう」

こうしてヴィータちゃんのゲートボール初体験は終わった。でもお店から離れる時もチラッと横目で見ていたから、まだ興味は尽きていないみたい。

ゲートボール用具店から奥へ向かい、そしてルシル君の目的であるお店に着いた。そこは「剣道具店・・・？」シグナムが掛けられた

看板を読んだ。ルシル君に続いて私たちも入る。そこは妙な鎧のような物や、木で出来た刀や槍が壁に掛けられてるお店だった。

「デバイスのような金属での打ち合いは派手で大きな音がする。下手をすれば警察沙汰だ。けど竹刀や木刀を使えば、ご近所さんに見られても問題ない」

右手に竹刀、左手に木刀を持ってシグナムに見せて、「持ってみてくれ」って手渡した。まず竹刀を受け取ったシグナムは小さく振って「軽いな」と、今度は木刀を持って振るった。

「もう少し重いのでも構わん。ルシリオン。見繕ってくれ」

「判った。本気の打ち合いとなれば木刀に使われる材質も限られてくるんだ。本赤樫か白樫。で、もっと重いのでいいと言うのなら――」

木刀談義に入ったルシル君とシグナム。シグナムは次々と木刀をルシル君から受け取って、納得のいくまで振るって自分に合う物を探していった。

「・・・ふむ。これが最もしっくりとくる。ルシリオン。私はこれに決めた」

「そうか。俺も決めた。一応、同じ物を2本買っていこう」

「すまん、感謝する。あと・・・鞘も頼めるか？」

「鞘か。プラスチック製でいいかな？」

「打ち合いに耐えられるか？」

「無理だな。じゃあ木製の鞘も一緒に買っていこう」

「重ね重ね恩に着る」

ようやく決まったみたい。まさか２０分も木刀選びをするなんて。どれも一緒に思えるけど、あの２人にしか解らないものがあるのかも。ズキン。あぁ、またこの気持ち。シグナムが「羨ましい・・・」ポツリと漏らしてしまった。木刀を入れる袋や手入れするために必要な道具を買って「お待たせ」ルシル君とシグナムは戻って来た。

「お待たせして申し訳ありません、主はやて」

「んっ。納得のいく物があって良かったな」

「はい」

本日の予定はこれにて終了ね。それからお家に帰ってお昼ご飯、快晴だったからもう乾いていたお洗濯物を取り込んで。そして。

「心待ちにしていたぞ、ルシリオン・・・！」

運動着に着替えて木刀と鞘を持ったシグナムと、

「お手柔らかに頼むよ、シグナム・・・」

こちらも運動着に着替えて木刀を両手に持ってるルシル君。２人は庭で対峙する。リビングでお洗濯ものを畳みながら眺める。

「「いざ！」」

朝のように同時に突進して、同時に木刀を振るって、攻防を繰り返し始めた。ルシル君は二刀流でシグナムを翻弄。シグナムも負けじと鞘で防御、木刀の連撃でルシル君を押し始める。

「うん。これくらいの音やったら問題あらへんな。万が一見られても剣道の練習に見えるし。シグナムも嬉しそうやし。めでたしめでたし、やな♪」

嬉しそうにしているはやてちゃんに「そうですね」同意しながらルシル君のお洋服を畳む。お庭から聞こえてくる木と木がぶつかり合う音が続く。と、そんな時、ガシャァァン！と窓ガラスが割れた音が２階のお部屋からした。遅れてカランと木材が床に落ちた音。お庭の方を見ると、身動き１つしていないルシル君とシグナムが居た。シグナムは大きく木刀を横薙ぎに払った体勢のまま硬直。ルシル君は無理やり腕を振り上げられたって感じで、右手には木刀が無い。ということは・・・・

そんな２人が固い動きでこちらを見て、私たちと目を合わせた。はやてちゃんが「やってしもたな２人とも」って苦笑すると、目に見えて２人は青褪めちゃった。

「ごめん、はやてっ！」「申し訳ありません、主はやて！」

窓ガラスが割れたのは私とシグナムのお部屋だった。償いとして（むしろ当然）ガラス片をお掃除した2人は今、呼んだガラス屋さんが来るまでの間（ちなみに窓ガラスの修理代はルシル君持ち）、私たちの前で土下座して全力の謝罪をしてる。

「えっと――」

「お前ら、馬鹿っ、もっと気を付けろっ！」

「「面目ない」」

「あのな――」

「ったく。もし木刀が飛んできたのがリビングだったらどうするつもりだったんだ！？　はやてが怪我してたかもしれねぇんだぞっ！」

「「返す言葉も無い」」

『ヴィータちゃんも今日のお店で同じことしてたわよね』

『うむ。そうだな。己のことは棚に上げているな』

ザフィーラだけと思念通話でそうは話す。

「その――」
「守る側のあたしらが、傷つける側になっちまっていいのかよっ！」
だ・か・ら、ヴィータちゃんも同じようなことしちゃったのよ？
「「申し訳ない」」
「あの――」
「嬉しいのはあたしだって判るぞ、シグナム。オーディンみてぇに強いようだからな、ルシルの奴。だからって自分のことだけを考えて全力バトルってぇのはダメなんじゃねぇのか？」
「その通りだ」
「ちょっ――」
「ルシルも、だ。シグナムに乗せられてさ」
「すみませんでした」
「あとは――」
「ちょうストップ！　ヴィータ、ストップや！　さっきからわたしが話せてへん！」

「あ」

はやてちゃんがヴィータちゃんと2人の間に割って入った。もうちょっと早くヴィータちゃんを止めるべきだったかしら私？　はやてちゃんは尚も土下座をやめていない2人に体を向けて、土下座をやめるように言って2人が体を起こしたのを確認。

「ルシル君」

「はい」

「シグナム」

「はい」

「わたしは怒ってへんよ。怪我も無い。窓も直る。だからそこまで気にせぇへんでええ。ほら、立って」

全てを許すはやてちゃんの笑顔。それでようやく2人は立ち上って、改めて謝った。

「なあ、ルシル。今さらなんだけどさ。結界張った方が良かったんじゃね？」

ヴィータちゃんが今回のような事が起きないようにそう提案した。確かにそれなら多少の無茶は出来る。だけど「でもなぁ・・・」ルシル君はどこか渋っているようで。

『いま俺たちが居る世界は第９７管理外世界、地球。この意味、解る？』

ルシル君からそんな思念通話。管理外世界。時空管理局って言う組織が付けた識別名。魔法を知り、扱う人たちが住まう世界が、不干渉を貫かないといけないと取り決めたもの。ということは大きな魔法を使うことで管理局に私たちのことを知られると、不法滞在とか魔法使用とかで捕まっちゃうってことなのね。それに、"闇の書"の一部として、重罪人とされちゃったり。

「『でもま。庭限定で小規模結界くらいなら問題ないかな』はやて。２度と家に被害は出さないって約束するから、その、結界を張らせてもらいたいんだ。これからはその中でやるから・・・」

でもルシル君はそんなことを言ってはやてちゃんにシグナムとの模擬戦をこれからも行うことに対して承認してもらおうとした。もう。それなら初めからそうしてくれていれば窓を割らずに済んだのに。

「ん。ええよ。わたしもシグナムから楽しみを奪いたくないしな。とゆうか木刀とかいろいろ買って今さらアカンなんて言えへんし」

「主はやて。・・・ありがとうございます。・・・ルシリオン。では早速・・・！」

パッと表情を輝かせたシグナム。そんなシグナムに私たち守護騎士は、

「自重しなさい」「「自重しろ」」

溜め息交じりにそうツッコむのでした。

Ｅｐｏｓ５八神家の日常～Ｐｅｔ　Ｃａｐｒｉｃｃｉｏ～

†††Ｓｉｄｅヴィーター†††

最近始めたはやてとのお昼の散歩。あたしがはやての乗る車椅子を押して、あたしらの側には狼形態のザフィーラが歩いてる。今のザフィーラには首輪とリードっつう引き綱がある。リードを持ってるのははやてだ。これはもう完全に愛玩動物扱い。ザフィーラを狼形態で外に出す時は、必ず首輪を付けてリードを繋げること。それを決めたのはルシルだ。

――大丈夫やってルシル君。ザフィーラは大人しいし――

――ダメだ。俺たち家族がそう思っていても、周りはそう思わないはずだ――

――ずっとあたしと離れんと居れば・・・――

――ダ～メ～だ。よく見てくれ。いくら大人しくてもこの図体、それに牙と爪。リードで繋いでおかないと通報ものだ。これだけは譲れない――

――ルシル君は心配性や――

――これくらいでちょうどいいんだ。あともう1つ。ザフィーラを

伴って外出するときは、守護騎士の誰かを同行させること。車椅子のはやてと、はやてより大きなザフィーラの2人だけとなると、同じく通報ルートだ――

――そこまでせなアカンか？――

――うん♪――

という感じで決まっちまった。でもま、そのおかげかここ1週間くらいは妙な問題は起きなかった。あと、ザフィーラを連れてるのが車椅子に乗った子供（はやて）だって言うのが良かったのかも。はやての言うことをなんでもキッチリと聴くザフィーラ。その忠義っぷりが、公園とかで会う老人とか大人とか子供に結構人気になったりしてさ。そんで今日も近所の公園まで出かけてたんだけど、「急に曇りだしたなぁ」はやてが空を見上げて言う。

「雨が降る前に帰らなアカンな。ヴィータ、ザフィーラ、急ごか」

「うんっ」『かしこまりました』

車椅子を押す速さを上げて、土手を駆ける。けど「あ、降って来た！」頭や腕にポツポツと雨が当たってきた。しかもどんどん雨足が強くなってきた。さらに最悪なことに傘も無けりゃ、雨宿りする場所――鉄道が走る鉄橋が在るけど結構遠い。まだ気温が温かいって言っても雨に打たれっ放し、それに家に帰るまで濡れっ放しってことになっちまったら風邪を引くかもしんねぇ。

（それだけは絶対にさせねぇ・・・！）

辺りを見回して人が居ないのを確認する。あたしは「ザフィーラ！」はやてをザフィーラの背の上に乗せた。

「え、ちょっ、ヴィータ！？」

「しっかり掴まってて！　行けっ、ザフィーラ！」

「応！」

魔法を使ったりすればもっと速く連れて行けるけど、人の目が今は無いからって油断すると変なことになりかねねぇ。だから「おりゃぁぁぁぁ！」ザフィーラにはやてを乗せて先に避難させて、あたしが車椅子を押して全力で追う。そんではやて達に遅れて土手を下りて鉄橋の下に到着。ザフィーラは人の姿に変身していて、はやては土手の坂に座って鉄橋の柱に背を預けてた。

「ヴィータ！　ごめんな、びしょ濡れにさせて・・・」

「へへ♪　大丈夫だよ、はやて。あたしって体が丈夫だから。車椅子、ここに置いておくよ」

頭をブンブン振って髪に付いた滴を振り払う。

「天気予報じゃ今日の降水確率は２０％って言ってたのに。すげぇ降ってんなぁ」

今朝、ルシルと一緒に観てたテレビの天気予報コーナーを思い出す。晴れのち曇りだとは言ってたけど、「降るなら小雨だろ」降水確率２０％でこんなドシャ降りになるわけねぇ。あたしの呟きに「２０％やからって小雨とは限らへんよ」はやてがそう返してきて、２０％でもドシャ降りになったり、１００％でも小雨だったりするって教えてくれた。

「――あ、もしもし、シャマルか？　うん・・うん、そうなんや、急に降られてしもてな。・・・うん、雨宿り中や。・・・え、そうなん？・・・うん、うん。場所は――」

はやては携帯電話を使って家に居るシャマルに連絡を取った。場所を教えてるから、シグナム辺りに傘を持って来させるのかも。携帯電話を切ったはやては「ルシル君が傘を持ってもう出たって」って嬉しそうに笑った。なんつうか、昔を思い出す。オーディンとエリーゼのことを。

「それじゃあルシル君が来てくれるまで待とか」

あたしもはやての隣に座って、雨足が弱まらない空を見る。と、そんな時、どこからか「しゅんっ」って変な音が聞こえた。はやてや、耳が抜群に良いザフィーラも聞こえたみたいで辺りをキョロキョロ見回す。あたしは立ち上って川原の草むらへ向かうと、「あ」音の原因を見つけることが出来た。両手を伸ばして抱き上げる。

「はやて、コイツ・・・」

「ヨークシャー・テリアや！」

あたしの持ってる犬の種類らしいものを言ったはやてが満面の笑顔を浮かべた。けどすぐに「震えとる。寒いんやろか」顔を曇らせた。確かに、コイツ震えてる。犬を胸に抱きかかえて頭や体に付いた滴を袖で拭い去ってやる。するとワンとひと泣きして、あたしの顔に付いた滴を舐めとった。

「ヴィータ。わたしにも抱かせてんか？」

あたしははやてに駆け寄って犬――ヨッシャーテリア？を手渡す。受け取ったはやては「よしよし、良え子や」撫でた。

「はやて。ソイツ、どうすんの？」

「野良――ってゆうか捨て、やろか？　それとも・・・。とりあえずこのままにはしておけへん。連れて帰ろ」

ギュッと犬を抱きしめるはやて。犬はそれで安心したのか眠ったみてぇに大人しくなった。

「おーい！」

雨足が弱くなってきた頃、ルシルのヤツがようやくやって来た。真っ先に「はやて。その子は・・・？」犬に気付いて指差してそう訊いた。

「濡れて震えてたんよ。野良か捨てかは判らへんけど、放っておけへんから連れて帰ろうって思うたんやけど・・・」

「連れて帰るってそんな簡単に・・・」

渋るルシルに「ほっとけって言うのかよ」半眼を向ける。はやての言うことは絶対だ。あたしはもう、そう決めたんだ。

「ルシル君」

「ルシル」

「・・・ルシリオン。仕方あるまい」

「・・・・判った。連れて帰ろう」

あたしらに見詰められたルシルは嘆息。そしてあたしらに腕に提げてた3本の傘を差し出して「先に帰っていてくれ。その子用のペットフードを買ってくるよ」そう言って走り出した。はやてが「お金！」って呼び止めるけど「俺持ちでいいよ！」止まることはなかった。で、犬を家に連れて帰って来たわけだけど。

「きゃぁぁぁぁっ！」

シャマルの悲鳴が。

「んなっ！？」

シグナムの絶句する声が。

「むおっ！？」

ザフィーラの苦悶の声が。犬がこの家に来てたった１０分でこれだ。犬は、最初は大人しかったけど、風呂に入れて毛を乾かした途端に暴走しだした。シャマルのお気に入りの服の上で用を足して、シグナムの湯飲みをひっくり返して割って、ザフィーラの揺れる尻尾に噛み付いた。

「ひーん。私のお洋服がおしっこ塗れに～（泣）」

「湯呑みが・・・私の・・・湯呑み」

「ぅく・・・」

「あちゃあ・・・大暴れさんやなぁ～・・・」

なんでかソファに座ってるあたしの所へ駆け寄って来た犬は前脚をあたしの脚に掛けてきた。しかもウルウルしてる目だから、なんつうか、こう、胸がキュンとなる。犬を抱き上げて膝の上に乗せる。するとワンワンって尻尾を振りながら鳴いた。

「ヴィータちゃん！」「ヴィータ！」

「そう目くじらを立てんなよ2人とも。犬のしたことだろ。ザフィーラを見ろよ。耐えてんじゃねぇか。シャマルのは洗えばいいし、シグナムのは買い直せばいいじゃねぇかよ。なあ、犬？」

偶然かもしんねぇけど返事するかのようにワンって1回鳴いた。尻尾をフリフリしてあたしの顔をペロペロ舐めてきて、「あはは。くすぐってぇって」引き離そうとするけど離れない。

「むぅ。はやてちゃん・・・（涙）」「主はやて・・・」

「堪忍したってな、シャマル、シグナム。犬やから」

「「はい・・・」」

はやての言葉に大人しくなった2人を犬がへっへっへっへっ、って息遣いで眺める。けどそれが2人にとって自分たちを馬鹿にする笑い声のように聞こえたみてぇでこめかみに血管を浮かべた。

「ヴィータちゃん」「ヴィータ」

形だけの笑顔を向けてくるシャマルとシグナム。戦略的撤退と即判断。ソファの背もたれを跳び越える。

「その子を寄越しなさい！」「ソイツを寄越せ！」

2人が追ってくる気配。だけど「よさないか、大人気ないぞ」ザフィーラがあたしらの間に割って入った。

「ただの息遣いになにを怒る。今のを笑い声として感じたのであればお前たち、器が小さいぞ」

「「っ！！」」

「ホンマにごめんな。また新しいのを買ってくるで」

「ま。そういうわけだから大人を見せてくれよ、シグナム、シャマル」

2人の側に寄って犬を掲げて見せる。犬はパタパタ尻尾を振ってワンワン鳴きながら2人を見詰める。と、シャマルが「か、可愛い・・・」あんだけ目の仇にしてたのにウットリし始めた。シグナムは相変わらず表情を変えない。そんでシャマルが撫でるためか犬に向かって手を伸ばす。けど、ガブッ☆と犬がシャマルの手に噛み付いた。少しの間の沈黙。

「いっっっったぁぁぁ～～～～いっっ！！」

「うぶっ！？」

シャマルが悲鳴を上げて慌てて手を振り払うと、運が悪いことにシグナムの顔面を裏ビンタで叩いちまった。よろけるシグナム。悲鳴と一緒に「ごめんなさいっ！」謝るシャマル。シグナムを「大丈夫か！？」心配するはやて。あたしは「大げさだなぁ。甘噛みだったろ？」噛まれたところをフーフーしてるシャマルを笑う。

「甘噛みなんてレベルじゃないわよぉ！　見てよコレ！　歯形がくっきり付いちゃってるじゃないのぉ～っ！　ほら、ほらっ、ほら～～！」

「見えねぇ。グイグイ押さえつけられちゃ見えねぇっつうのっ！」

歯形が付いたっつう手の甲をあたしの頬に押し当てて来るシャマル。だから見えねぇよっ。

「シャマル。手当てするから傷口を洗ってきて。ザフィーラ。救急箱、持って来て」

「あぅぅ。お手数おかけします」

ザフィーラが持ってきた救急箱を使って、シャマルの手を手当てするはやて。確かに、シャマルの手の甲にはくっきりと歯形が付いてた。結構な力で噛まれた証拠だ。さすがにこれを見て笑っていられるほど、あたしは馬鹿じゃねぇ。犬を床に降ろして、ビシッと鼻っ面に人差し指を突き付けてやる。犬は不思議そうにあたしの人差し指を眺めて、ペロッとひと舐め。

「おいっ。いくら子犬だからって容赦はしねぇ。やって良いことと悪いことがあるって躾けてやる」

とりあえず「はやて、どうすりゃいい！？」躾け方が判らないから訊いてみる。

「ん～と。お手とかおかわりとか、チ――コホン。けどこれってご飯が無いとアカンかも・・・？」

「ご飯、か。そんじゃあルシル待ちかぁ・・・」

「きゃぁぁぁ！　スカート引っ張っちゃダメぇぇ～～～！・・あいたっ？　ひーん、足引っかけられた～（泣）」

「シャマルが襲われとる！？」

「何か懐かしいなこの光景。昔にも小さい子供のイタズラの標的になっていたな」

「うむ。よくスカートを捲られていたな」

「思い出に浸っていないで助け――ひゃんっ？　ちょっ、やだっ、そんなところを舐めないでぇぇーーー！」

犬の標的にされたシャマルと、犬を引き剥がそうとするシグナムを横目に、『ルシル。お前いまどこだ？』犬のご飯を買いに行ったルシルに思念通話を通すと、アイツは『玄関前だけど。何かあったか？』そう答えた。遅れてガチャっと玄関扉を開けた音と、「ただいまー」そんな挨拶が聞こえてきた。ルシルが手ぶらでリビングに入って来た。

「おかえりー」

「おい、手ぶらじゃねぇか」

「俺ひとりじゃ持ち切れなかったからな・・・。我が手に携えしは確かなる幻想」

ルシルがそう詠唱すると、あたしらの前に色んな物がドサッと置かれ始めた。犬のイラストが描かれた袋が2つ、皿も何枚か、犬用の寝台みたいなヤツ、シャンプーとかブラシとか。あと柵だ。

「早速暴れているな。結構やんちゃ犬らしいからなぁ、ヨーキーは。・・・ほら、それくらいにしておいてあげてくれ」

這って逃げ回るシャマルの足の裏を舐めてた犬がルシルによって引き離された。

「はぁはぁはぁ・・・、あ、ありが、とう・・ルシル、君・・・」

息遣いの荒いシャマルから礼を言われたルシルは「っ！・・・いや、うん。いいんだ」判り辛いけど顔を赤くしてシャマルから目を逸らした。まぁ、今のシャマルは色っぽいよな。

「こんなに買ってきてくれたん？　お金、払うわ。いくらやった？」

「いいよ。全部合わせても1万もしないし、いくつか俺の私物もあるし」

はやてとルシルのそんな会話を聞きながら、早速ご飯の袋からお菓子みてぇなコロコロしたヤツを皿の中に移す。犬ががっつくようにさらに顔を突っ込もうとした。

――ディフェンサー――

「はい、ストップだ」

ご飯の皿に半球状のバリアが張られて、犬がキャン！？って衝突してズリズリと床に伏した。あたしは「何すんだ！？」ルシルを問い質す。ルシルは自分に吠えまくる犬の前で片膝立ちして「躾けが必要だろう。食事の前には、待て、だ。食事前の基本的な躾けだ」そう言って、ルシルはあたしに犬の躾け方をいろいろ話した。なんであたしなんだろ、って思ってたけど・・・。

「待て、犬」

ルシルがやっても言うことを聴かなかった犬だったのにあたしがやったら大人しくなった。ルシルが言うには犬を助けたのがあたしだったから、らしい。その思いをルシルが犬から感じ取ったってことだ。

「――でも、はやてちゃん。このままその子、飼うわけじゃないですよね？」

昼ご飯を食ってる中、シャマルが犬を警戒しながらはやてにそんなことを訊いた。真っ先に「おい、外に放り出せってのか？」あたし

がシャマルに噛み付く。

「だってだってぇ。その子、私のことばっかり・・・うぅ」

「ごめんな、シャマル。飼うこと事態は構わへんのやけど・・・。ルシル君」

はやては犬を飼っても良いって言ってくれたけど、何か思うことがあるのかルシルに目を向けた。あたしもルシルへ目を移す。

「・・・たぶんだけど、その子は飼い犬だと思う。野良にしては毛並みが良い。捨て犬にしては人間に恐怖や恨みを持たず。躾けの方も初めて受けるという感じでもない。そのことから――・・・」

「どこかの家に飼われていたが何らかの理由で迷子になった、と思うわけか・・・」

「そういうこと。帰巣本能が有るものだけど、環境によっては弱まる場合もある。その子がそうかもしれない。・・・とにかく、だ。飼い犬の可能性が高い以上、俺は餌のサイズを一番小さい物にした。この意味解るよな？　ヴィータ」

ルシルが犬を一度見てからあたしを見た。はやて達もあたしを見てくる。あたしは「犬は飼えない、ってことだろ・・・」足元でご飯を食ってる犬を見下ろす。と、ワンって鳴いた。

「けど、もし飼い犬じゃなかったら・・・。はやて、その・・・」

「そん時は飼おか。ヴィータにすごい懐いとるし。今さら捨てるわけにもいかへんし。シャマルにはホンマにごめんやけど・・・」

「はやてちゃんが買うことに賛成なら、私からは何もない・・・です・・・」

「大丈夫やよ、シャマル。もし飼うことになったらヴィータ、もちろんわたしも一緒に躾けるからな♪」

シャマルは「あぅぅ。その時はお願いしますぅ～」はやてに撫でられながらもちょっと泣いた。シャマルってなんでか小さい奴にイタズラされるよなぁ。なんでだろ。とにかく。そんなこんなで犬の飼い主が見つかる（本当に居れば話だけどな）までの間、あたしが面倒を見ることになった。

「そう言えばお名前は、犬、のままなの？」

「・・・。なぁ、名前付けていいのか？」

「まだこの家で飼うことが確定していない以上、下手に名を付けるとあとで別れが辛くなるぞ」

つうことで犬は犬のままだ。犬でも十分反応してくれるからそのままでいいや。飼うことになったらそんな時にはやてと一緒に考えよう。そんで午後はずっと犬と一緒に庭で遊んだ。待てや伏せ、お手とかの芸もルシルに教わることでさせることが出来たしな。その間、

視界にシャマルが入ると犬は突進していって、「なんでぇぇぇぇ！？」何度もスカートに噛み付いてさんざん弄んだけど。

「ヴィータ。迷い犬のチラシを作るからな」

「・・・ああ」

ルシルはカメラで犬を撮って、パソコンやプリンターっていうデバイスを使って撮った写真をプリント。

「――迷い犬。飼い主を捜しています、と。はやて。連絡先はこの家の住所と電話番号を使わせてもらいたいんだけど」

「構わへんよ」

「イタズラ電話が来たら、魔法で即逆探知して相応の罰を与えるから安心してくれ」

「・・・・ほどほどにな、ルシル君」

そんな感じで出来上がったチラシを街中に張りに出かけたルシル。正直言えばあんましやってほしくなかったけど、それは我が儘だから言わなかった。

日も暮れて夕ご飯。あたしが用意したご飯を美味そうに食う犬は、何度もあたしを見て尻尾を振っては嬉しそうに鳴いた。夕ご飯の後は、風呂だ。あたしはいつもはやてと一緒に一番風呂で入るけど、今日は犬と一緒だ。風呂に入るのが最後のルシルが出るのを、犬を

ブラッシングしながら待つ。

「風呂、空いたぞ、ヴィータ」

パジャマを抱えて「おう。行くぞ、犬っ」って呼ぶと、犬はひと鳴きしてあたしの後をついて来た。と、「そうだ。シャンプーの仕方とかあるけど、教えた方が良いか？」ルシルがそんなことを言ってきた。あたしはリビングの入り口で立ち止まって・・・「頼む」ボソッと返す。帰ってきたばかりの時はお湯だけだったしな。ルシルも一緒に風呂場にまでついて来てもらって、「あたしらが浴室に入るまで脱衣所に入んなよ。覗いたら、許さねぇかんな！」忠告しながら洗面所と脱衣所を隔てるためのカーテンを閉めて服を脱ぐ。

「判ってるよ。別に君を覗くような真似はしないから、安心してくれ」

廊下に居るルシルが呆れかえるような声色でそう返してきた。なんでか「あたしは覗く価値が無ぇってわけか！？」イラッときちまった。そりゃまぁ、シグナムやシャマルに比べりゃガキだけどさ。

「は？　なんで怒鳴られるんだ？　いいから早く入れ。そうでないと、本当に覗くぞ？」

ガチャっと扉が開いた音が聞こえて「のわっ！？」あたしの服の匂いを嗅いでる犬を抱えて、慌てて浴室に入る。そんで「馬鹿っ！本気で覗く奴があるか！！」すりガラスの扉越しに居るはずのルシ

ルに怒鳴る。けどルシルの影が見えない。まさか、と思っていたらまたガチャっと扉が開く音がして、「やっと入ったか」って遅れて声が聞こえた。

「てめ・・・！」

廊下に居たまんまだったルシル。さっきの扉を開けた音はフェイクだった。

「準備が出来たら言ってくれ。その都度、仕方を教える」

「む・・・」

問い詰めんのはやめにして、「いつでもいい。教えてくれ」タオルを体に巻いてから風呂椅子に座って、犬用のシャンプーとかスタンバイ。まずは「シャワーの温度は温く、水圧は弱く」ルシルの言う通りにシャワーを調整する。犬がちょっと嫌がる仕草をして鳴いた。

「嫌がる素振りを見せたら、直に当てずに自分の手の甲に当てるなどしてワンクッションを置いてかけるんだ」

なるほど。言う通りにすると確かに嫌がる仕草をやめた。「次は？」って訊くと、「シャンプーをかけて、マッサージするように軽くもみ洗いしてくれ」ってことらしい。ふむふむ。痛がらせないように気を付けながら最大限の手加減をして体を洗ってやる。気持ち良いのか大人しくなってあたしに完全に身を委ねた。

「足は汚れやすいから少し多めで。指の隙間も洗うんだ。顔はすぐにシャンプーが落ちるように少なめで」

「あいよ」

「濯ぐときは念入りに。シャンプーが残っていると皮膚トラブルを起こすかもしれないから。顔を濯ぐときは、スポンジに湯を含ませて、ゆっくりしっかりと」

アワアワな犬をシャワーで洗い落として、スポンジを洗面器に溜めた湯に濡らして犬の顔に付いたシャンプーを拭い去る。んで、水気を手で拭って、リンスや保湿剤を馴染ませる、と。ルシルに教えられたことをこなしていく。

湯船の蓋の上に置いておいたタオル数枚でしっかり犬の濡れた体を拭く。そんで浴室でやれることは終わって、「どうすりゃいい、これからは？」あたしは湯船に浸かって、開けてないもう1枚の蓋の上に乗せた犬を撫でる。

「ドライヤーで乾かすんだけど・・・。いま受け取ろうか？」

「馬鹿か！　覗くなっつったろうが！」

「扉の隙間から出せばいいじゃないか。すぐに俺を覗き魔にするの、やめてくれ」

しょうがねぇ。今ルシルの居る洗面所と脱衣所を隔てるカーテンがシャッと開いたのを音と、浴室と脱衣所を隔てるガラス扉越しに見

た。湯船から出て体にタオルを巻く。犬を持ち上げて浴室の入り口へ向かって、ガラス扉をちょこっとだけ開ける。
そんで「ほら、行け」って犬をその隙間から出そうとすんだけど、タイル床で踏ん張って出て行こうとしない。なら直接扉の外に出して、ルシルに手渡す方法だ。まず「絶対見んなよ！」念を押して、犬を片手で持って扉の外へ持って行こうとした時。

「のわっ！？」

急に犬が暴れ出した所為で腕がガラス扉に当たって、最悪なことにガラッとスライドした。

「「あ・・・」」

ルシルと目が合う。いや、まだだ。あたしは今タオルを巻いてる。だから何とか耐えられる。けど、ワンって鳴き声と一緒に犬があたしのタオルに噛み付いた。するとどうなるか。ハラリとタオルが落ちた。今のあたしは、体を何も隠していない全裸、素っ裸、すっぽんぽん。そんなあたしの目の前にはルシル。犬は足元であたしの脚にすり寄っている。

「まぁなんだ。犬のしたことだ。俺はヴィータの裸を見たくらいじゃどうとも思わないから。気にす――」

「～～～～～～～～～～～～～～～～～っっっっ！！」

もう何を言う間もなくルシルの鳩尾に「げふっ！！？」ボディーブ

ローを打ち込んだ。ヨロヨロとしゃがみ込んだルシルを「変態っ、馬鹿、死ねっ！」踏みつける。ふと、気付く。そういやあたしが脱いだ服（あと下着）、慌ててたから洗濯籠に入れてなかったはずなのに床のどこにもねぇ。

「（まさか・・・）おい、ルシル。あたしの脱いだ服、どこにやった？」

「げふっ、げほっ。それなら洗濯機の中に入れ――」

「てんめぇぇぇぇーーーーーっっ！」

「がはぁぁぁぁっ！？」

フラフラ立ち上がったばかりのルシルの鳩尾に今度はストレートパンチを打ち込んだ。

「ヴィータ、何かあったんか！？」

「すごい声だったけど何か――」

「何でもない！　何でもないから！」

廊下からはやてとシャマルの声が聞こえてきたから慌ててそう返す。2人の気配が遠ざかって行くのを確認。完全に気を失ったルシルを放って、パジャマに着替える。最後にもう1発ルシルの頭を足蹴にしてから、ドライヤーで犬を乾かす。

少し嫌がるから「大人しくしていろ」あたしに最大限の恥をかかせてくれやがったことも含めてギラリと睨む。と、犬は大人しくなった。犬も乾かし終えて、リビングに戻った。そこにははやてとシャマルが居て、「ホンマにソファで寝るん？」はやてがもう一度確認してきてくれた。

「うん。犬と一緒に寝ようかなって」

「それじゃあ今日は私がはやてちゃんと一緒に寝ますね♪」

「そっか。うん、じゃあヴィータ。おやすみな」

「うん。おやすみ、はやて。あとシャマル」

2人がはやての部屋に入って行くのを見送って、あたしはソファに寝転がって用意しておいた布団を被った。床に伏せてた犬を「来い」って呼ぶと、犬は軽やかにソファの上に飛び乗って布団の中に入って来た。超ぬくぬくだ。寒い日ならちょうどいいかもな。

「ん、あ・・・？」

頬に何か当たってるってぇのが判って目を覚ました。目の前いっぱいに犬の顔。犬があたしの頬をペロペロ舐めてた。

「おはよう、犬。・・・はやてとルシルはまだ起きてねぇのか」

時計を見ると、あだ6時だった。はやてやルシルが起きるまであと

３０分。ふと思い出す。そういやルシル、あの後ちゃんと寝たのか？
ソファから起き上がって、脱衣所へ向かう。そこにはまだルシルがぶっ倒れてた。なんつうか「すまねぇ・・・」謝っとこ。

「せっかく早起きしたんだ。散歩行こうぜ、犬♪」

まずは着替えて、犬の散歩に行ってきますってメモを残してから犬を連れて家を出る。いつもはやてと通る散歩コースだ。同じように犬の散歩やジョギングしてる人と「おはよーございます！」って挨拶すると、「はい、おはよう」ちゃんと返してくれて。あたしはこの世界で生きてる、って思えて嬉しいんだ。
犬は首輪やリードが無くてもちゃんとあたしの後を追ってくる。走ってみると、犬も走って追いかけて来る。やっぱ飼いたいなぁコイツ。

「犬っ。このままあたしと一緒に暮らさないか？」

理解できるわけもねぇって思いながらもそんなことを訊くと、あたしの隣を走る犬がワンワンって鳴いた。それは応なのか否なのか判んねぇなぁ。

「・・・ここでお前を拾ったんだよな」

昨日、犬を拾った土手に来た。土手を歩いていると、土手下の川原にお爺さんとお婆さんが居て、何かを捜すかのように草むらを掻き分けてた。お爺さんは「チヨー！」、お婆さんは「チヨちゃーん！」って名前らしきものを呼びながら犬を見つけた鉄橋下の草むらへ向

かってく。犬を見れば耳を動かして辺りを見回してる。あぁ、あの人たちが犬の飼い主なんだ。ここで犬を連れて帰れば・・・。

（って馬鹿かあたしはっ。あの人たちの家族を奪っていいわけあるかよっ）

家族の大切ははよく判ってるつもりだ。だから「犬。ご主人様のところに帰る時間だ」犬を抱き上げて土手を下りる。お爺さん達に近づくにつれ犬が鳴き始める。するとお爺さん達がこっちに振り返って「チヨ！」表情を輝かせた。

「ほら、行け」

犬を地面に降ろすと犬は一直線にお爺さん達の方へ向かって走って行った。あたしは踵を返してこのまま帰ろうとした。だけど「お嬢ちゃん！」呼び止められたから立ち止まる。

「お嬢ちゃんがチヨを助けてくれたのかい？」

「えっと、うん、まぁ、そうです」

お婆さんに抱かれて嬉しそうにしてる犬。これで良かったんだよな。

「ありがとうね、お嬢ちゃん。チヨはどうもやんちゃ過ぎるようでね。よく迷子になってしまうんだよ」

「そうなんですか。・・・もう迷子になるんじゃねぇぞ」

迷い癖なんて厄介なもんを持ってたんだなお前。犬を拾ったことに対してのお礼を、とか言われたけどあたしは丁重に断った。ルシルに金を使わせたことはちょっと悪ぃかなって思うけど。

「それじゃああたしはこれで」

お爺さん達に小さくお辞儀してから「元気でな、チヨ」犬の本当の名前を呼んで別れを告げた。背中に何度もお礼を受けて、あたしはトボトボと土手を歩いてはやての家に目指す。ほんのちょっと前まで1人じゃなかったのに、今は1人だ。

「・・・なぁに。あたしは家族の元にチヨを戻してやれたんだ。胸を張ったって・・・いいんだ・・・」

あたしはルシルに思念通話を繋げて犬を飼い主のところへ戻したことを報告して、飼い主捜しのチラシの回収も頼んだ。するとルシルが『偉いぞ、ヴィータ。よく頑張ったな』なんて優しい声でそんなことを言ってきた。

なんでか鼻がツンとして胸がキュッと痛んだ。しかも「うえっ？あたし何で泣いてんだ・・・！？」涙が出て来るし、意味が解んねぇ。たった1日だけじゃねぇかよ、犬と過ごしたの。たったこんだけであたし、泣いちまってんのか？

『ゆっくりと帰ってくるといいよ。美味しい朝ご飯、はやてと一緒に作って待ってるから』

ルシルはそれだけ言って思念通話を切った。んだよ、礼くらい言わせろよな。あたしは泣いたことをルシルにはもちろん、はやて達にも知られたくないから・・・。

「もうちょっとだけ・・・寄り道してこ」

遠回りをして帰ることにした。

Ｅｐｏｓ６八神家の日常・裏～ＬＡＮＣＥＲ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

"夜天の書"が起動して早1ヵ月ちょっと。暦は夏である7月、その半ばへと突入していた。

「そんじゃあ、いってきますっ！」

シグナムとの朝練を終えて結界を解き、はやてから受け取ったタオルで汗を拭いているところにヴィーターの元気のいい挨拶が家中に響き渡った。応えるのは「気ぃ付けてなぁー！」はやてだ。ヴィーターは今日もヨークシャーテリア、チヨに会いに行くんだろう。飼い主の元にチヨを帰してから数日と経たずにヴィーターはチヨと再会を果たし、チヨの飼い主である老夫婦の誘いもあってゲートボールを始めた。今では老人会のマスコットキャラ・・・じゃなくて、アイドルのような扱いを受けている。まぁ、先の次元世界でもそういう風だったと聞いていたからよしとしている。

「先にシャワーを借りるけど・・・」

「ああ。私はもう少し素振りをしている」

「シグナム。お洗濯物には当てないでね」

木刀の素振りを始めたシグナムと、そんな彼女を注意するシャマル

を横目に俺は風呂場へ。そこで汗を洗い流したら、今度ははやての授業だ。はやてはすでに中学1年レベルの理数系を修得した。本当に頭の良い子だ。聖祥にいつ転入しても十分にやって行ける。

「――あー、今日はここまでやなぁ」

「そうだな。病院へ行く準備しないと」

時刻は11時。これからはやては大学病院へ向かわなければならない。授業を途中で切り上げてはやての部屋を出る。と、病院に付き添いとしてついて行くシグナムとシャマルはすでに準備万端という出で立ちで佇んでいた。

「はやてのこと頼んだよ2人とも」

「ああ」「ええ」

そうしてはやて達を見送って、家には俺とザフィーラだけとなる。リビングで伏せているザフィーラに「少しの間部屋に籠るから。何かあれば呼んでくれ」と告げ、首肯したのを確認して自室へ。

「さぁそろそろ始めようか」

海鳴市に来た際にマリアから渡された物品の中に在った端末を取り出す。アクセスするのは、次元世界の秩序を管理する組織――時空管理局のデータベース。目指すは指名手配犯の捜査資料が保管されたエリア。ま、当然のことながら「そう簡単には出来ないよな」I

Ｄパスワードなど、何重ものセキュリティが邪魔をしてくる。このままでは不正アクセスとなり、いずれは探知されて逮捕、ということになる。そうなる前に・・・。

「おいで。アメナディエル、ソレウイエル、マカリエル、メナディエル、ライシエル」

――秘密（ステガノグラフィア）を暴き伝える者達――

『はい』『ウィ』『ヤー』『シン』『イエス』

目の前に展開した空間モニター内に３頭身の天使が５体と出現する。大戦時、ヨツンヘイム連合から鹵獲した巨人兵器、Ａ・Ｍ・Ｔ・Ｉ・Ｓ・のシステムをクラックするために創り出した、対電子戦の疑似天使だ。いかなるセキュリティだろうがトラップだろうが自己判断で突破し、相手側にクラックの証拠などを一切の残すこともない。電子関連の契約にはとても役に立つ魔術だ。

「早速仕事だ。時空管理局の捜査資料のデータベースへのクラック。一切の手掛かり・足取りを残さず、相手に気付かれることなく情報収集だ」

『ステガノグラフィア一同。お仕事了解です♪』

『いってき～♪』

『いってら～♪』

『メナディエルも来るんだよ！』

『みんなでいってきま～♪』

ピョンと跳ねる仕草と同時にその姿を消し、電子の海へと潜って行った。あとは待つだけだ。とは言っても『お待たせでした♪』僅か１０分ほどだけだったが。天使たちは一抱えある情報（フォルダ）の塊をえっちらおっちらとモニターの端にまで持って来ては反対側の端へと消えていく。それを繰り返すことさらに５分。

『重要度１から３までを収拾しました』

『重要度４から５にはさらに時間が掛かります』

『回収を続けますか？』

『続行ならご命令を。中止なら術式解除を』

『さぁどっち？』

地べたに座り込んでそう確認してきたから、「情報収集はこれで終わりだ。ご苦労様」と労いつつ任務終了を告げる。

『お疲れ様です～♪』

『乙～♪』

『甲～♫』

『意味不～』

『また何かあれば、その時はお呼び下さ～い♪』

全員が停止したのを見届け、回収された事件資料に目を通す。標的は魔導犯罪者、そのリンカーコア。先の次元世界でのシグナム達は、魔力を持っているなら無実な一般市民すら襲っていた。まぁそれでも保護観察と管理局への従事だけで済んでいたが。

どうせなら犯罪者どもから魔力を奪い、身柄を拘束して管理局に突き出す。魔力を手に入れることが出来、犯罪者も捕まることから犯罪率も多少は減るだろう。なかなかにいいアイディアだと思う。

ふと、あるデータに目が留まった。「フェイト・・・」プレシア事件の重要参考人として裁判中。以前は俺もそっち側だったな。

「っと。今はあの子に気を取られている場合じゃないな」

プレシア事件に関してのデータを詳しく見ることなく、指名手配犯の名前や活動世界に、その期間などと言ったものにだけ目を通していく。

「レーゼフェア・ブリュンヒルデ。シュヴァリエル。テスタメント・・・」

ここでまた俺に関係している単語を発見した。犯罪組織テスタメン

ト（仮）を調査中。残念ながらテスタメントは俺独りだ。一応５ｔｈのマリアも次元世界のどこかには居るが、全くの音沙汰なし。訊きたいことが山ほどあるんだが・・・。とりあえず保留だ。

「単独転移で行ける近場で、雑魚い奴っと。・・・・コイツらでいいか」

ある指名手配犯のデータに目を留める。魔法犯罪を幾つも起こしている常習犯の３人１組のチームで、主な活動拠点は第２８管理世界フォスカム。目撃例が多いことから、はやて達が通院・買い物・風芽丘図書館と行って帰って来るまでには終われそうだ。

となれば「早速出向くとしようか」左中指に"エヴェストルム"の指環をはめる。部屋を出、リビングで伏せているままのザフィーラに「少し遠出して来る。昼には帰って来られないから、君の分の昼食を用意しておくから好きな時に食べてくれ」と告げる。

「どこへ行くのだ、今日はお前が出かける予定はなかったはずだが？」

「ちょっと善行（そして悪行も）をしに行ってくるよ。そう。ゴミ掃除のボランティアをね」

ザフィーラの昼食を用意しながらそう答えると、「そうか。それは善い行いだ。気を付けて行くのだぞ」と疑うこともなく信じてくれた。いや多少は疑問を抱いてるかもしれないが。とにかくザフィーラの分の昼食を作り終え、「いってきます」玄関を出る。

それと同時に空間に溶け込む迷彩を発生させ姿を消す魔法、ミラージュハイドを発動。そして屋根の上へと飛び乗り、次元転移魔法を

発動。フォスカムへは先の次元世界で訪れているため座標もすべて記録されている。

（それにしても。本当に嬉しい恩恵だな。ジュエルシードは）

時の庭園でのグランフェリア決戦時前まではＡＡＡ－までしか魔力が使えなかった。だが無理やりジュエルシードを魔力炉融合させたことが功を奏したのか、今ではＳランクの魔力出力まで回復した。一対一の戦闘ならまず負けない。相手にもよるが一対多数戦でも負けないはずだ。

扱える魔力量が増えた事に喜ぶのも束の間、

「まぁ一気に飛べるわけもなく。中継点を幾つかおかないといけないな」

ひとりぼやく。幾つかの世界を跨いでフォスカムへ向かうことになる。少々手間がかかるが、今までの苦労に比べればどうってことは「・・・ない！」よな。そうして俺は地球より飛び出し、フォスカムへと向かった。

「――到着、っと。地球からフォスカムまで４０分か。結構かかってしまったな」

第２８管理世界フォスカムの薄暗い曇天の下、俺はようやくフォスカムに到着することが出来た。跨いだ世界は２つ。上出来な数だろう。で、ここで早速悪行を１つ犯してしまった。不法入界。正規の手続きではないからな。見つかれば即刻逮捕になる。だからこそ・

・・・。

（この変装なんだよな）

身に纏っているのは、詰襟の長衣は前後で燕尾。襟に隠れて見えはしないが、首には小さな南京錠が付いたチョーカー。黒長衣と同じく燕尾の黒いインバネスコートを羽織っている。黒のズボン。黒の編み上げブーツ。魔術師としての戦闘甲冑だが、神秘を抜いているから騎士甲冑になるか。

そして最大の変装が頭だ。人のモノじゃない。淡黄色で、黒い斑点が点在している。正しくチーターの頭部だ。今の俺は素顔を晒さないようにデフォルメされた可愛らしいチーターの頭部で限定変身している。

（これなら子供に見られても怖がらせないな。まぁ見られることにはならないと思うけど）

自由落下なままあるビルの屋上へと高度を下げて行き、「よっと」最後はフローターを発動して落下に抗うかのようにゆっくりと速度を落としてトンッと軽やかに着地した。ビルの屋上から眼下に広がるフォスカムの首都、グラーバの街並みを眺める。ここに魔法犯罪者集団が居るはず。

――発見（コード）せよ、汝（イシュリエル）の聖眼――

闇雲に探していても疲れるだけ。ということで、サファイアブルーに光り輝く、手の平サイズの光球を創り出す。サーチャーとしての

役割を持つイシュリエルをステルスモードで街に解き放つ。発見するまでの制限時間は1時間。そこから瞬殺してリンカーコアを奪い、管理局に突き出してから撤退。また４０分と掛けて地球に戻る。曖昧だがこれくらいの予定組立で十分だろう。
地べたへと座り込み、屋上に誰か来ないか警戒しながらイシュリエルから送られてくる映像を見続ける。と、３０分ほど経った頃、「見つけた」よくドラマなどで見かけるマフィアが好んで取引しそうな倉庫街で、アタッシュケースを持ってウロウロしているターゲットを発見。

「さぁ、始めようか。犯罪者狩りを（オフェンダー・ハント）」

――我（コード）を運べ、汝（アンビエル）の蒼翼――

――ミラージュハイド――

背より１２枚の剣翼を展開し、姿を消すミラージュハイドを発動。屋上から空へと飛び出し、連中を発見したベローナ湾岸倉庫街へと翔ける。その間にフォスカムのこの地区を担当する陸士部隊の連絡回線を、メナディエルを使って傍受する。
取引云々といった単語が出ていないため、どうやら連中は巧い具合に事を薦めたようだ。なら、管理局に知られず、まんまと取引を成功させたと喜んでいるその時、その取引をチーターの顔というふざけた俺に邪魔されたとなると、いったいどれだけの絶望を抱かせられるだろう。

「（その時の連中の顔を想像するだけで・・・）あぁ、実に楽しみ

だ」

少々性格の悪さを自覚しながらも、それでも抑えきれない。一刻も早くぶっ潰したい。そんな思いを渦巻かせ、俺は廃倉庫街上へと到着した。イシュリエルから流れてくる映像をもとに、「あれだな」どの倉庫にて取引が行われているかを見つけ出す。

ミラージュハイドを発動したまま廃倉庫の崩れ落ちて無い屋根から倉庫内に音を立てることなく侵入する。が、「いま何か・・・？」音は立てずとも僅かな風の動きを察した男もいた。

「気の所為か・・・」

その男はしばらく周囲を警戒していたが、何も感じられかったらしく警戒を解いた。俺が狙っていたターゲット連中じゃないが、確かこの男も指名手配犯だったはず。名前は確か・・・、フィリー・ニサン。ああ、思い出した。この男はティーダ・ランスター一尉を殺した奴だ。俺が捕まえた時より若い外見（髪がフサフサ）だから思い出すのに時間が掛かった。

ふと思う。ここでフィリーを取り押さえるとなると将来、ティーダ一尉が死なないという結末になるかもしれない。だがそんな思いもすぐに消える。そう。今さら。そんな事を思うのは実に今さらだ。これから先の未来など、もう知ったことか。

はやてや守護騎士、なのは（アリサとすずかは判らないが）が管理局入りする。そのルートだけを気にしていればいい。それ以外は俺の好きにさせてもらう。

（そもそも先の次元世界でさえ正規の歴史だったのかも疑わしい）

だったら気にするのはもうやめだ。どうせ変わるならハッピーなものでいいじゃないか。意識を未来予想図から現実へと引き戻す。連中の会話から、今回の取引きされているブツは動物型の自立型戦闘デバイスの試験機体の設計データ。おまけに質量兵器――銃とか、銃とか、銃とか。

そしてフィリー。奴は魔導師としての腕を買われて用心棒としてこの場に居るそうだ。ティーダ一尉を墜とした以上は確かな腕を持っているのは間違いない。淡々と取引が行われていく。ターゲットの1人がデータの入ったアタッシュケースをスーツ姿の男たちに渡し、その代金としてジェラルミンケースをターゲットの1人が受け取った。双方が仲間内の所に戻った。

（今だ！）

――ゲフェングニス・デス・フェリエラー――

古代ベルカ式を使ったオリジナル結界魔法、ゲフェングニス・デス・フェリエラーを発動。俺の魔力光であるサファイアブルーに輝く正四角形の結界で魔力を持たないスーツ連中を閉じ込める。この魔法に閉じ込められると、気力・体力を気絶してしまう程度にまで吸収される。そしてそれらは俺の魔力へと変換される、魔術と魔法の合わせ技。閉じ込めた人数が多い程、俺は魔力を回復することが出来ると言うわけだ。

「なんだ、これは・・・！？」

「管理局の魔導師か！？」

「逃げろ、早く！」

一斉に出口へと向かうターゲットに向かって、「誰が逃がすか」と声を掛ける。俺は未だにミラージュハイドで姿を見せていないため、連中は「誰かいるのか！？」と慌てふためく。が、すぐに杖型・銃型・ロッド型のデバイスを起動させる辺り腐っても魔導師か。とりあえず一番近かった銃型デバイスを持つ男に接近し、転移魔法メタスターゼン・トーアを右手に発動させ男の胸に突き入れる。

「あ？　え？・・・あぁ・・・あああ・・・あああああ！？」

「ひぃっ！？」「なんだこれ！」

「これは・・・！」

いきなり仲間の背中からリンカーコアが飛び出し、その男が苦悶の悲鳴を上げたらショックだろう。案の定他２人は恐怖に表情が引きつっている。が、フィリー・ニサンだけは恐怖を見せず、ただ驚きだけを見せた。俺はここでミラージュハイドを解除。連中に俺の姿を見せつける。怯えきって俺の頭のことにツッコミを入れない連中に、「回収完了」と告げてリンカーコアを無理やり引き抜く。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

「うそだろ・・！？」

「コイツ、リンカーコアを引き抜きやがった！！」

――闇(コード)よ誘え、汝(カムエル)の宵手――

リンカーコアを引き抜かれた激痛で男は意識を手放し倒れ伏した。仲間2人は腰が抜けたのかその場にへたり込んだ。俺はその2人を影の触手、カムエルで拘束した。その直後、「面白い頭のクセして嫌な魔法を使う奴だ」フィリーが一足飛びで俺に襲い掛かって来た。手にするのは、管理局が制式装備としているヘッドが音叉型のストレージデバイスらしき杖だが、細部が結構違うため関連性は無いだろう。クリスタルが在るべきところには銃口らしきものが在り、石突部分には六角錐の突起が在る。フィリーのデバイスの一撃を、瞬時に起動した"エヴェストルム"のニュートラルモードであるランツェフォルムで受け止める。

「やっぱり侵入者が居たんだな！　あの時の風の動き、もう少し気を張っていれば。と、後悔しているぞっ。おかげで俺の信用がガタ落ちだ、雇い主を守りきれなかったからな！」

「それは残念だったな。まぁ私も含めて互いに犯罪者だ。気落ちすることはないさ」

一人称を私に戻した上でそう返しつつ、"エヴェストルム"を大きく払う。フィリーは弾き飛ばされながら「何だこの馬鹿力は！？」と驚きを見せた。それでも上手く着地するあたりはさすが、か。奴が再度襲い掛かって来る前に残り2人のリンカーコアを引き抜く。

そして魔力結界で覆い、"英知の書庫アルヴィト"に取り込む。3人分の魔力で2ページくらいだろう。フィリーを入れれば3ページ半は超えるはず。だから・・・

「お前の魔力も頂くぞ。ツヴィリンゲンシュベーアト・フォルム」

"エヴェストルム"の柄を半ばで分離させての二刀形態にし、今度はこちらから仕掛けるためにゆっくりと歩いて接近していく。対するフィリーは身構え、俺の一挙手一投足に注意を払いながらデバイスのヘッド部分を俺へと向けた。魔力反応。射撃魔法が来るのだと判る。そう判断してすぐ、銃口から魔力弾が連射されてきた。銃弾の壁へ真っ向から挑む。力の差を見せつけるために。

――知らしめよ(コード)、汝(ゼルエル)の力――

騎士甲冑の防御力を上げて突っ込む。全身に着弾していくフィリーの魔力弾幕。だがそれらは俺に一切のダメージを与えることなく弾かれていく。フィリーは「堅い・・・！」歯噛みし、弾幕を張るのをやめて砲撃を放ってきた。その砲撃を右手に持つ"エヴェストルム"で斬り裂いて対処する。

左右に分かれていく砲撃の合間を縫って目と鼻の先にまで最接近し、驚愕に目を見開いているフィリーに「運が悪かったと諦めてくれ」言い放つ。と、「ふざけ――」奴は顔を真っ赤にして怒鳴ろうとしたが、その前に左の"エヴェストルム"をフェリーのデバイスに叩き付け、ヘッド部分を真っ二つに破壊する。

「な・・・っ！？」

「陸戦は苦手だったか？」

「何故それ――を〝っ！？　が、ぁああ、ああああ、あああああ！」

返答を全て聴く前にフェリーの胸に手を突き入れ、「貰い受けるぞ」リンカーコアを抜き出す。フィリー・ニサン。一般的な魔導師ランクで言えばＡＡランクの空戦魔導師。同じく空戦魔導師で、しかも管理局で鍛えられたティーダ一尉を撃墜したとなると、やはり陸戦より空戦の方が強いのだろう。どちらにしろ、俺の敵じゃないが。意識を手放してドサッと倒れたフィリーを見下ろし、「見られているな・・・」周囲に気を巡らす。何かしらの――サーチャーの気配だ。ステルスで隠れているサーチャーの方に振り向くと、この場から撤退していった。

「誰だ？　管理局か、それともコイツらに関係している組織とか、か。まぁどうせ彼女たちだろうな」

ある程度予想は出来ているから放っておくことにした。スーツ連中も含め倒れ伏している全員にフープバインドを掛けてから一ヵ所に集め、「じゃあ行くか」転移魔法トランスポーターを発動。転移先はフォスカムの地上本部のロビー。

「突然ですがお邪魔します、っと」

「うわぁっ！？」「なんだ！？」「転移魔法！？」「顔がチーター！？」「けど可愛い！」

局員やら訪れていた一般人が俺の突然の出現にビックリ仰天。そしてすぐさま「何者だ！」ストレージデバイスを手にした武装隊員が数人奥から出て来た。俺は「コイツらの逮捕、任せるよ」後ろに転がしている全員を指さす。傍にはアタッシュケースとジェラルミンケース。それらも一緒に回収してもらえるように置いておいた。

「何を言っているんだ・・・？」

「いや待て。この連中の顔、見覚えが・・・」

「そうだ！　こいつら指名手配されている・・・！」

「なに？・・・確かにそうだ！　おい、手を貸してくれ！」

俺が連れてきたのが指名手配犯だと判って一気に騒然となる武装隊。すぐに確保に動き出したそんな彼らを確認してから踵を返す。と、「待ちなさい！」当然のごとく呼び止められてしまった。振り返ると、連中を連行していく隊員とは別の隊員たちがデバイスを俺に向けていた。

「君の身分を確認したい。それにその頭の被り物らしきモノも外して素顔を見せなさい」

「何故このようなことをしたのか、事情を伺いたい」

先程の隊員たちのような高圧的な態度は無い。本当にただ事情を聴

きたいだけというのが判る。が、ここで止まるわけにはいかない。
「私は槍騎士ランサー。ある目的の為に、魔法を使って罪を犯す連中を退治する。今回はたまたま先ほどの連中だっただけのこと」
前から決めていた名乗りを上げて、簡単に事情を話す。と、「目的とは？」そう訊き返された。
「いま連れて来た連中から事情を聴けばおのずと判るかもしれないですよ。それでは私はこれで失礼させていただきます」
――トランスポーター――――
足元にベルカ魔法陣をわざわざ展開して見せつける。慌てて俺の確保に動いて向かって来る隊員たちに手を振りながら、俺はフォスカムから中継世界へと長距離次元転移を行った。
そうして中継世界2つを跨いで地球へと俺は帰還した。時刻は午後4時前。悪くはない時間だが、「はやてからのメール・・・？」海鳴市上空に転移し終えた途端に通信端末にメールが届いた。チータ－頭の部分変身を解き、メール画面を開く。
――ザフィーラからボランティアに出かけたって聞いたけど、そんなんあった？　もしかしてまた魔法関係でなんかあったん？　もしそうなら話してくれへんでもええ。そやけど無茶なことだけはせんでな？　それだけがわたしからのお願いや――
メールには気遣いの言葉が記されていた。メールの返信をしようと

したところで、「さっきから私を覗き見してるのは誰だ？」正直に言えば訊くまでもなく見るまでもない。感じる魔力反応は2人。俺が知っているものだ。先の次元世界ではそれはもう世話になったものだ。
ああ、とことん俺の邪魔をしてくれたアノ・・・。俺の呼びかけにも応じずに姿を隠したまま。だったら、「無理にでも姿を現してもらう」魔力反応が在る空間へとソニックムーブで瞬間移動し、一切の行動に移れない速さで魔力を付加させた手刀を繰り出す。

「っぐ！？」

懐かしい声での苦悶の呻きが耳に届き、視界には空間が揺らいでいるのが映る。そしてその揺らぎの中から1人の女性が現れた。猫耳と猫尾を生やした、少々冷たい目つきをした。

「こ、こんなにも早く見破られるなんて・・・」

俺の手刀を受けて痛む腹に手を置いた彼女は俺を、正確には俺の背後に目をやっている。もう1人居るよな。魔導戦に優れた君とは違って格闘戦に長けた彼女が。振り向きざまに、跳び蹴りを繰り出して来ていたもう1人の女性の足裏を受け止める。

「「っ！？」」

「以前からちょくちょくと私を監視してたよな？　気付かないとでも思っていたのか」

俺がはやての家に世話になってから数日と経ったある日から、時折サーチャーや直に向けられた視線に気付いていた。敵意や戦意は感じず、ただ強烈な猜疑心だけは感じていた。そのことから誰が俺を見ているのかすぐに判別できた。

「この・・・・！」

空いているもう片方の蹴りを繰り出してきたため、俺は彼女を大きく振り回してもう1人の女性へと放り投げた。

「名乗らず、事情を話そうともせず、いきなり攻撃。しかも盗み見について謝らない。君たちは一体誰なんだ？　話を訊く権利くらい有ると思うけど？」

全てを知っていながら俺はそう問う。すると2人は互いに顔を見合わせて頷き、俺へと改めて向き直った。

「・・・確かに。私は時空管理局・提督、ギル・グレアムが使い魔、リーゼアリア。で、この子はリーゼロッテ」

そう、俺の前に現れたのはリーゼだった。いつか俺に会いに来るだろうと思っていた。はやてと関係を築いた時からずっと。ロッテは警戒心丸出しで俺を見、アリアは自分の前に小さなモニターを展開した後ある程度操作して、目的のページを開けたのか操作をやめた。そして小さく咳払いを1回。

「ルシリオン・セインテスト。第12管理世界フェティギアはサン

クト・アヴィリオス出身。年齢は8歳。2月5日で9歳になる。ご家族とはすでに死別。莫大な財産を受け継ぎ、現在は独り暮らし。君のプロフィールはそれでいいかしら？」

マリアが俺に用意してくれたプロフィールを告げたアリア。それに対し「そうだけど」と答え、変身魔法を解いて大人から子供の姿へと戻る。はやてに俺の事を告げるならこっちのプロフィールの方が良いだろう。シグナム達に告げた真実半分虚偽半分のものよりかは。

「じゃあ訊くわ。なぜ八神はやてに近づいたの？　君は知っていたのよね、闇の書のことを・・・？　君の目的は何？」

「闇の書については確かに知っていたけど、はやてが主だったことを知ったのは世話になるって決めた後。だから、闇の書をどうにかしたいとは思ってない」

「・・・・そう。じゃあ、あたし達から忠告をしてあげる。悪いことは言わない。今すぐあの家を出なさい。その方が君の為よ」

アリアはモニターを消し、心から気遣いをしているといった風な視線と声色で俺にそう告げた。これから仮面の男として暗躍するのだから俺のような奴が居たら邪魔だろうし、家族関係を築いていたはやてと守護騎士の永久凍結後は俺が悲しみに暮れる、などと思ったわけだ。

「嫌だと言ったら？」

「あんたのことを管理局の捜査部に報告する。プレシア・テスタロッサ事件で死亡扱いを受けてる被疑者、テスタメントの正体があんただってことや、今回のフォスカムでの一件でランサーって名乗って指名手配犯を捕まえたこととか」

フォスカムでサーチャーを使って俺を見ていたのはやっぱりリーゼだったか。脅しをかけてきたロッテに目をやる。

「それが嫌だったらあたし達の言うことを聴いて。それが君の――」

「為になる、か？　冗談じゃないですよ、リーゼアリアさん。俺はこれからもはやて達と過ごします。管理局のあなた達がはやてや闇の書をどうにかしようとするのなら・・・」

"エヴェストルム"を二刀形態ツヴィリンゲンシュベーアト・フォルムで起動。するとロッテは「やるってんなら子供でも手加減しないよ！」身構えた。が、アリアがロッテを手で制し、「セラ！」誰かの名前らしきものを叫んだ。急いで周囲の魔力探査を行う。セラという女性の名前らしき人物を探り当てるより早く、俺に対してある魔法が発動した。

「一方通行（サンダルフォン）の聖域、いきます」

そんな声と共に俺を閉じ込めるのは桃色の六角柱の結界。まんまと捕獲されたことより術式名があまりにも信じられないものだった。さらに「こ、これで良かったでしょうか？」リーゼの間に展開された桃色のミッド魔法陣上に転移してきた少女を見て俺は、「なっ・

・・・！」ベルカ時代からこの瞬間までの時間の中で一番驚愕した。その少女はターコイズブルーの長髪で桃色の瞳。ワンピースにジャケット、コルセットスカートというバリアジャケットに身を包んだ、俺の知っている外見の少女。

（・・・アリス・・・ロードスター・・・・！？）

この感じは間違いない。イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトにも感じた。外見ではなく存在レベルでの懐かしさ。目の前のセラと呼ばれた少女と、俺の知るアリスとは同じ魂だ。

セラはリーゼ達と話しているようだが俺の耳には入らなかった。それほどまでにショックだったからだ。まさかアンスールメンバーの転生者と会うことになろうなんて。

「時空管理局本局・特別技能捜査課所属、セラティナ・ロードスター三等空士であります。その結界からは逃れられませんから、そのつもりでお願いしま――するであります」

サンダルフォンの聖域という術式名からしてそうだろうな、とは思ったさ。けどな、セラティナ・ロードスター。コレが魔術なら俺もお手上げだった。でもこれは所詮「魔法に過ぎない・・・！」魔力（システム）炉の稼働レベルを上げ、魔力に神秘を乗せた。

――破り開け（コード）、汝の破紋（メファシエル）――

障壁・結界破壊効果を持つメファシエルを両手に持つ"エヴェストルム"に付加し、サンダルフォンの聖域に叩き付ける。1発でヒビ

を入れ、２発で粉砕する。

「え！？」「うそ！？」「なんで壊せんの！？」

三者三様の驚きを見せた３人に、"エヴェストルム"を待機形態の指環に戻した上で「取引をしましょう」俺はそう持ちかけた。

Ｅｐｏｓ７八神家の日常～Ｗｏｒｋｉｎｇ～

†††Ｓｉｄｅシグナム†††

暦は８月１日。夏という季節で、ますます暑くなってきた。そして今朝もまた私はルシリオンと木刀での模擬戦に勤しむ。ルシリオンは両手に持った木刀を、右は防御、左で攻撃といった風に使う。実に堅固。こちらも木刀と鞘を使って攻防。なんとか防御を貫こうとするのだが・・・。

（あと一歩・・・、もう一歩が届かん・・・！）

日に日に鋭さと重さを増していく一打一打。初日での模擬戦では木刀を弾き飛ばすだけの余裕が有ったが、今では防御を切り崩すのに精いっぱいとなってしまった。だがこのまま負けるわけにはいくまい。ルシリオンもまた、主はやてと同様に我ら守護騎士が守るべき大切な家族なのだから。

「（護衛対象より弱くては、な！）はああっ！」

ルシリオンを力づくで押し返すことで鍔迫り合いを中断させ、僅かにたたらを踏んでいるその隙に左手に持つ鞘の一打を振り下ろすが、「危な・・っ！」無理やり体を捻ることでかわされた。ルシリオンは私の後方へ跳ぼうとし、その交差する際に両手に持つ木刀で私の太腿、そして腹を打って来ようとした。それを右の木刀を自身の体とルシリオンの木刀の間に差し入れる。

「っぐ・・・！」

「おおおおおお！」

その重い一打に右手が痺れる。さらに力が込められた木刀によって私の体は弾き飛ばされてしまった。今度は私がたたらを踏んでいる隙にルシリオンが突進してきた。こちらも踏ん張って負けじと突進。再び交差するときに私の鞘とルシリオンの木刀が激しい音を立てて衝突し、その衝撃で互いの得物が手から弾け飛ぶ。

互いの利き手に有している木刀で打ち合いを始める。こうなってはいつものように時間切れまで打ち合いを続けるまで。私とルシリオンの一刀での戦いはまず決着がつかない。実力伯仲。ゆえに打倒するという意志が揺らいだ。そう。そのような僅かばかりの気の緩みが、生まれてしまった。

「せいっ・・！」

「しま・・・っ！」

鋭い、重みの無い速さだけの一閃。それが私の木刀を弾き飛ばすまではいかずとも、ルシリオンの迎撃に間に合わないほどに逸らされた。

「最後の最後で油断したんじゃないか、シグナム？」

「・・・すまなかった。少々気が緩んでしまったようだ」

私の心臓付近に突き付けられた木刀からルシリオンの顔を見る。ベルカ時代ではオーディンに一撃も入れることは叶わず、現代では気の緩みがあったとは言えとうとうルシリオンに負けてしまった。

「そろそろはやてとシャマルが朝食を作り終える時間だから、今朝はここまでいいかな？」

変身を解き子供の姿に戻ったルシリオンに「ああ」と応じると、彼は庭限定に展開されていた模擬戦用結界を解除した。

「ちょうど良いタイミングね、２人とも。朝ご飯できたわよ♪」

主はやてに買って頂いたエプロンを着て主はやてのお部屋から声を掛けてきたシャマル。そして「あとコレどうぞ」汗を拭くためのタオルを渡される。礼を言いながら受け取り、汗を拭う。それを確認したシャマルはスキップしながら戻って行った。

かつてオーディンやアンナに料理を教わった経験があるからだろう。最初は微妙な味付けばかりの料理だったが、日に日に上達していっている。今ではシャマルだけが作った料理も安心して食せるようになった。

我々に、特に主はやてとルシリオンに美味しいと言ってもらえるのが嬉しいのだろう。料理はもちろん家事を率先して手伝うようになった。私やヴィータ、ザフィーラの当番を奪ってしまうほど。

「それじゃあ朝食を頂こうか、シグナム」

短く返事をした後、ルシリオンに続いて玄関から家に入り、朝食が並べられた食卓のあるダイニングに入る。私とルシリオンが最後のようで、ヴィータも席に着き、ザフィーラも朝食が装われた皿の前で待っていた。

「お待たせしました、主はやて」

「ヴィータ達も。待たせてごめんな」

「おう。気にすんな」

私たちも席に着き、「ん。それじゃあみんな。いただきます！」主はやてに倣って食前の挨拶である「いただきます」と告げ、朝食をみなで頂く。

「――そろそろ海とか行ってみたいなぁ。海開きはもう済んどるし」

「海ですか？」

「そうや。みんながうちに来る前は、ルシル君やフェンリルさんとプールに言ったことがあってな」

主はやてがその時の思い出話を語り始めた。ルシリオンが男物の水着を着て大衆の前に姿を現した時、係員に上半身を露出している少女だと勘違いされたところは、「ぷはっ。そんな見た目じゃしゃあねぇよな！」ヴィータには大うけだった。対してルシリオンは「くっそ。どうせ俺の外見は女の子だよ」不貞腐れた。そこでフォロー

するのがシャマルだったのだが・・・。

「落ち込まないでルシル君。可愛い事は悪いことじゃないわ」

「っ・・・」

「シ、シャマル。あんな、ルシル君に可愛いは禁句なんよ」

だろうな。俯き加減で何かを耐えているようなルシリオンを見れば。

「ええー。そうなんですかぁ？・・・あー、そうみたいですね」

「そうなんだよ、シャマル。だから俺にはもう可愛いとは言わないでくれ」

「え、ええ。判ったわ」

「でな。海とか山とかに遊びに行こうって約束してたんよ。・・・うん。そうやなぁ、日帰りやなくて二泊くらいしてもええなぁ」

「みんなで旅行ですね♪」

「おお！　それすごい面白そう！」

朝食の話題は、以前からお立てになっていた予定の再確認のようなものとなった。そして「よしっ。海に行こう！」主はやては即決即断した。ヴィータとシャマルはそれをとても喜び、私も少なからず

楽しみにしている。
朝食後、主はやては早速どこかの旅館へと連絡を取り出す。電話を４度ほど繰り返した後、「え？　部屋空いてますか？　はい、はい。それでお願いします♪」我々が宿泊できる旅館を見つけになったのだろう。満面の笑みで礼を電話の相手に述べている。

「見つかったようね。旅行先の宿泊先♪」

「ああ。そのようだ」

シャマルと共に食器の後片付けをしながら電話を終えた主はやてを見守っていると、「はやて」ルシリオンが主はやてへと歩み寄って行く。そしてボソボソと話をし、ルシリオンはリビングを出て行った。だがすぐに戻って来た。手には２枚の封筒。それを「はやて。少し遅くなったけど、受け取ってくれ」と主はやてに差し出した。主はやての顔色が変わる。

「もう！　いっつもそんなことせんでもええって言うてるのに！」

「ダ～メ～だ。こっちが今月分の俺の生活費。こっちが旅費。受け取ってもらうぞ！」

「要～ら～ん！　みんなの生活にかかるお金はわたしが責任を持って用意するって言うたやろ！」

「世話になっている以上は自分にかかる金くらい用意する！　これだけは譲らない！」

初めて見る主はやてとルシリオンの喧嘩のような怒鳴り合いに、私たちは目を丸くして眺めることしか出来なかった。主はやての、いつも、ルシリオンの、今月分、という言葉から私たちの知らぬ間にもこういったやり取りがあったのかもしれない。

「受け取るまでこの封筒は収めない」

「むぅぅ・・・・もう！」

封筒を差し出したまま佇むルシリオンに、ついに主はやては折れ封筒を受け取った。と、少し難しいお顔をした。そして旅費が入っているという封筒の中身を確認した。バッとルシリオンを見やり、目で語り始め・・・いや、思念通話で話しているのだろう。少々剣呑な雰囲気になり始めているかのような・・・。また何かしらの口喧嘩をしているのかもしれん。

『なあ。あれ、止めた方が良いんじゃないか？』

『で、でもお金の問題だし。私たちが口を出せるようなものじゃ・・・』

金銭の問題となれば確かに我々は口を噤む他ない。我らは主はやてに養われている身だからな。主であり家主でもある彼女が選んだ決定に従うのみ。しかしこういった金銭の話題を実際に耳にしてしまうと心苦しさを感じてしまうな。だが主はやてのことだ。ルシリオンに言っているように気にはしないだろう。それが嬉しくもあるが、

ただ養われているだけというのにはやはり引け目を感じるのだ。

「・・・そこまで言われたら受け取るしかないやんかぁ」

「ああ。俺たちは家族だから。俺にもみんなを養わせてくれ」

２人は決着をつけたようだ。どうやら我々守護騎士にかかる生活費は、これからは主はやてとルシリオンの２人で賄うことになったらしい。剣呑な雰囲気も消え、２人は笑顔を交わし合った。

「はやてちゃん。お隣に回覧板を渡しにって行って来ますね～」

「はやてー！　じいちゃん家行ってくる～！」

それから洗濯物を干し終えたシャマルは回覧板を回しに隣家へと出掛け、ヴィータは週三度の老人会のゲートボールの試合へとザフィーラを連れて出掛けて行った。主はやてとルシリオンは毎日の習慣である勉強会を行っている。そして私はひとりリビングのソファに座ってテレビを観ているのだが・・・・。

（なんだ、この胸に湧き起こる嫌な気持ちは・・・）

判っている。シャマルは近所の婦人方と仲を良くしており、ヴィータは老人方と仲を良くしており、ザフィーラは子供たちの人気者。そう。私だけがこの世界の住民たちと輪を作っていないのだ。それだけではない。シャマルは家事能力で主はやてを助け、ヴィータとザフィーラは言ってはなんだが愛玩として役に立っている。しかし

私は・・・。

『――えー、このように就職も進学もせず職業訓練も受けない、ニートと呼ばれる若者が増えています』

キャスターが読み上げたニュースに反応してしまう。ニート。働かない若者。ニュースでは15歳から34歳と出ている。私は実年齢では約数百歳（詳しい年齢など記録に残っていない）だが、外見年齢は19歳で固定されている。

私や主はやて、家族がどうとは思わずとも周囲に居る人たちにとって私は・・・「ニート、なのではないか・・・？」口に出すと自身への嫌悪感に襲われた。ソファより立ち上り床にガックリと両膝をつき、四つん這いになってしまう。

「いかん。このままではいかんぞ。守護騎士ヴォルケンリッターが将、剣の騎士シグナム。守護騎士を貫き通す以前に駄目騎士となってしまう」

働きもせず、家事手伝いもシャマル任せ、勉学ではルシリオンが圧倒的に優れている。護衛と言いながらこの世界は危険なことは無いゆえにしていないと同義。ニート騎士。胸を抉られるような苦痛に満ちた響きだ。

「休憩休憩ぇ～っと♪・・・・おわっ！？　どうしたシグナム！」

「んー？　どないしたんルシル君？・・・・って、シグナム！？」

「ルシリオン。・・・主はやて。私は・・・・」

主はやての部屋より出て来た2人の声が私の背中に掛けられた。顔を上げると2人が心配げに私を見ていた。そして私たちはソファへと座り、「で？　一体どうしたんだ？」とルシリオンに訊かれ、改めて私が四つん這いで気落ちしていた事について話すこととなった。

「私は知った。これではニートではないか、と」

「「・・・・はい？」」

今しがたテレビで放映されていたニュースの事を話す。ニート。働きもせず学校へ通うこともなく、家でゴロゴロしている駄目人間。今の私はそれに近しい者であると。

「そんなん気にせんでええよ、シグナム。生活費に関しては父さんと母さんが遺してくれたお金のおかげで余裕があるし。ルシル君も出してくれる言うてくれたし。ホンマは要らんけど」

「それがいけないのです！　ご両親の財産は、主はやての将来の為にあるべきものなのです」

「そうは言うてもわたしは、シグナムやヴィータ、シャマルにザフィーラ、家族の為にお金を使えてる。わたしはそれで良えと思うてるよ」

「いえ。さすがに目が覚めました。子供のルシリオンですら生活費

を入れ・・・ん？」

待て。何故ルシリオンはそのような財産を有しているのだ？　起動してから活動期間が半年も経っていない今、彼の手元にそのようなものがあるのはおかしいのでは・・・？

チラリと私の右隣に座っている主はやての奥、ルシリオンへと目をやる。私が話を区切り、そしてその内容から私の考えを察したのだろう。ルシリオンが思念通話を送って来た。

『たぶん俺のお金のことで疑問を持ったと思うから話しておくよ。実は――』

ルシリオンの話では、マリアという名の協力者が居るそうだ。そのマリアという者が歴代セインテストの戸籍や財産などを用意すると言う。ルシリオンも例に漏れず、というわけだ。歴代の世話をしているということは、マリアという者も代替わりするのだろう。とにかくルシリオンにも財源がある。主はやての生活において一番役に立っていないのが私であることは自分自身がよく判る状況だ。心苦しくなるのは当然とも言えるものだった。

「主はやて。このままでは守護騎士の将としての沽券に関わります。ですので、私は働こうかと思います！」

此度の転生ではどれだけ主はやてのお傍に居られるかは判らない。だがこのままズルズルと養われているだけではいけない気がする。ゆえにそう決意表明したのだが・・・。

「あんなシグナム。働くには色々な物が要るんよ。身分証明書とか。そやけどシグナム、そんなん持ってへんやろ？　それに外国の人が働くにはもっと要る物が増えるんよ。在留カードってやつやったっけ？　さすがにそこまでは誤魔化しきれへんから・・・その、諦めてほしい」

主はやてからそう返答された。身分を証明する物。無い。何も無い、持っていない。せっかくの決意が冷めていく。私は「そうですか」と応じ、ソファより立ち上る。

「主はやて。少し外を歩いて来てもよろしいですか？」

「え？　あ、うん、いってらっしゃい」

「はい、いってきます。ルシリオン。主はやてのことを任せる」

「・・・・そこまでショック受けることないじゃないか」

「判っている。少し頭を冷やしてくるだけだ」

主はやてとルシリオンの視線を背に受けながら私はリビングを出、玄関で靴に履き替えているところに「ただいま帰りました～♪って、あら？　シグナム出掛けるの？」シャマルが帰ってきた。シャマルに「ああ」と短く答えて玄関扉を開ける。リビングからはシャマルが近所の婦人方と井戸端会議をして楽しかったことなどを主はやてに話しているのが漏れ聞こえてくる。

「私も近所の住人と輪を作るべきか・・・・？」

そう考えるものの私はシャマルほど話し上手ではない。ふと、シャマルと先程まで話していたであろう婦人方が私を見ていることに気付いた。私は出来るだけ笑顔になるよう努め、「こんにちは。いつもシャマルがお世話になっています」一礼する。すると婦人方は呆けてしまった。何か間違ってしまったか？　時間からして、こんにちはという挨拶でもいいと思ったのだが。

「お、おはようございます・・・・？」

改めて言葉を変えて挨拶をする。それでもご婦人方は呆けるため、「あの・・・・？」少なからず私は傷ついた。ご婦人方はハッとし呆け挨拶をすぐに返さなかったことに対し謝罪をして、何故呆けたのかを教えてくれた。

「女の子にこんなことを言うのはどうかと思うんだけど、シグナムさんってカッコいいから」

「そうよね～。挨拶されてドキッとしたもの」

「外国の方だから顔が整って凛々しいのよね」

そう私の外見を褒めていただいた。それに礼を言うと、婦人方は頬を赤らめて口々に「カッコいい」と呆けた。そんな婦人方と別れ、近所をぶらぶらと歩く。散歩と言えば聞こえは良いが、今の私の状態は徘徊と言えるだろう。当てもなく、役立たずの烙印を押される

間近であることにショックを受け、そんな私を見られたくないがために家を出たのだ。

「・・・・っと。住宅街を抜けてしまっていたか」

気が付けば小さな商店街に着いていた。もと来た道を戻ろうとしたところで、「すいません。ちょっといいですか？」スーツ姿の若い男、青年が私に声を掛けてきた。出来るだけ不愛想にならぬように心がけながら「何か？」と訊ね返す。我らの失敬で主はやての評判を貶める真似は出来んからな。

「僕はこういう者なんですが・・・」

そう言って名刺を差し出してきた。名刺を受け取り、目を通す前に青年は話を切り出した。曰く、私を写真のモデルに起用したい、とのこと。

「僕たちは綺麗であったり、可愛いであったりする女の子たちの写真を撮って雑誌に掲載するお仕事をしてるんですよ。もちろんタダでとは言いません。お給料も出ますよ」

（給料。これも仕事、なのか？　しかし・・・）

――それに外国の人が働くにはもっと要る物が増えるんよ。在留カードってやつやったっけ？――

「すまないが他を当たってくれ。私は在留カードを持っていない」

仕事に就くために必要な証明書を持っていないために断わる。所持していないまま働いたとなれば、警察に厄介になり主はやてに迷惑を掛けることになる。

「っ！　持っていない、ですか。ふふ。そうですか。・・・・ええ、それでも構いませんよ。写真のモデルは正式な仕事ではなく、軽いお手伝いですから。身分証とかも要りません」

が、青年はそれでも構わないと笑顔で告げた。仕事でなく手伝いだから、と。今の私には助かる提案だが・・・・。本当について行っても良いのだろうか？

「お嫌でしたらこれで引き下がります。次の女性を捜さないといけませんから」

「ま、待て。判った。よろしく頼む」

この機会を逃せばおそらく金銭を貰える仕事には就けないと判断し、私は青年の勧誘を受け入れることにした。青年は目に見えて喜び、「では参りましょう♪」私を都市部の雑居ビルへと案内した。案内される最中に主はやてとルシリオンに思念通話で連絡を入れておいた。私には珍しく2人を驚かせたいと思ってしまい、このモデルの手伝いのことは伏せた。

ただ、ボランティアをすることになったので帰りが少し遅くなるかも知れません、とだけ伝えた。嘘を吐くことに抵抗を覚えたが、それ以上に驚かせてみたかったのだ。案内されたビルには青年と同年

代らしき男が十数人と居て、うち数人は撮影するための道具を手にしていた。

「――ではまずはこちらに着替えてください」

そこで渡されたのがファミリーレストランで着るような女物の給仕の衣服。側にある更衣室で言われたとおりに着替えてみるのだが、「似合わんな」部屋に設けられている鏡で全身を映してみるが、どうも私には合わん。

しかしこれも仕事のためと割り切り、その姿で更衣室を出る。と、「おお」青年たちは私の給仕服姿を見て感嘆の声を漏らした。どうやら評価は良いようだ。そして私は2階へと案内された。そこはフェミリーレストラン・・・いや、正確にはそういう風に造られた、本物ではなくセットだった。

「それではシグナムさん。彼らがお客役としてテーブルに着きますから、あなたはウエイトレスとして・・・、おい。小道具！」

「あ、はい、すいません！　どうぞ！」

叱られた青年が料理の乗ったお盆を慌てて持ってきた。どうやら給仕の真似事をしなければならぬようだ。とりあえず言われたとおりにテーブルに着いた青年の前に「お待たせしました」と置く。と、「はい、そのまま動かないで。撮りま～す」パシャパシャと写真を撮られた。立ち位置やポーズを変え、数枚と撮られる。

「はい。オッケーです。次をお願いします」

「お疲れ様でしたシグナムさん。それでは、次の衣服に着替えてもらえますか？」

「む。判った。先と同じ部屋で良いのだな？」

「はい。1階の更衣室で着替えてください。衣装はあちらに」

別の青年の持っている白い衣服を受け取り、更衣室へと戻る。すると先程まではいなかった別の外国出身の少女や女性が居た。話を聞けば私と同じように勧誘を受けたそうだ。そんな彼女たちとは別の、渡された衣服を着る。それは「病院の・・・看護服」だった。主はやての通っている病院で何度も見ている。

更衣室を出、2階に戻ると「次は3階で撮影です」と案内された。3階は寝台が並べられた病室のセットが設けられていた。今度は看護師の真似事をするようだ。また小道具を渡された。注射、カルテなどなど。それを入院患者の着る服を着たある青年に注射をフリなどして、幾度か写真を撮られる。

（楽な仕事だな。モデルというのも）

妙な服を着せられることになってしまったが、写真を撮られるだけで金銭を貰えるとなれば嬉しい限りだ。そうして次は取調室で婦警、さらにオフィスで女物スーツ姿と続き、最後は「これは着物、か・・？」私が寝間着として使っている浴衣とは違い、華やかな色合いと柄が描かれた振袖が用意されていた。着付けは更衣室に居た別の女性に手伝ってもらった。カランコロンと歩く度になる底の厚い草

履を履いてエレベーターに乗り、最上階へ。最上階は全体的に和造りだった。

「・・・美しい・・・・」

「綺麗だなマジで」

「ああ。お前、いい娘見つけてきたな」

「だな。俺たち本当にラッキーだよなぁ」

「はいはい。撮影始めるぞ。シグナムさん。座敷に上がってください」

畳の敷かれた和室に通された。指示されたとおりに座布団の上に座り、肘掛けに片肘を乗せて体重を預け横座りする。すると、カメラを持つ青年が「色っぽいっス！　最高っス！」色々な角度から撮影を始めた。

「すまんがもう少し離れてくれないだろうか。顔が近い・・・」

「もう少し裾を肌蹴させてもらってもいいっスかね！？　出来ればふとももをもっと出して・・・！　あと胸元ももっと！　その大きな胸を強調するよう――に〝っ！？」

青年がカメラを畳の上に置いて私の胸元と振袖の裾に手を伸ばしてきたため横に跳び退いた。勢いが強かった彼は前のめりに倒れ、顔

面を強かに畳に打ち付けた。

「いきなり何をするのだ！　女性の衣服を強引に肌蹴させようとは失礼だろう！」

「なあ！　もういいよな！？　もう我慢なんねぇよ！」

その青年が立ち上り、欲情した下卑た顔を私に向けて来た。撮影を部屋の外で見ていた他の連中も「しゃあねぇな」「俺もそろそろ限界だった」「カメラ用意しとけ」口々に言いながら集まって来た。ここでようやく思い知る。連中の本当の目的は、「私の体目当て・・・？」だったというわけか。

「じゃあシグナムさん。服はそのままでいいですから、奥の部屋に行きましょうか」

別の青年が奥の襖を開けると、そこには布団が一式敷かれていた。

「ふざけるな。誰とも知れん貴様たちに肌を許すわけがなかろう！」

振袖で動きが著しく制限されるが、数だけの素人相手に後れを取るほど徒手空拳でも弱くはないと自負している。迎撃するために身構えようとしたところで、「いいですかぁ？　あなたのこと、警察に連絡しますよ？」と勧誘してきた青年がそう言ってきた。

「何を馬鹿な。このような始めから女の体目当てで連れ込んだ貴様たちの方が捕まるだろうに」

「言っていませんでしたっけシグナムさん？　あなた、在留カードを持っていないんですよね？　僕らのことはまだギリギリ誤魔化せますけど、外国人のあなたは誤魔化せない。調べられれば、不法滞在者として捕まるのはあなたの方だ」

このまま連中を打ち倒し逃げたとしても、今まで撮られた写真を警察に届けられれば私の面が割れる。なれば写真も一緒に処分するか？

この世界での機械の扱い方は今なお苦労するが、カメラとやらを全て破壊すればその問題も消えるだろうが・・・。この連中の記憶だけはどうしようもない。

「それと、コレ見えます？」

1人の青年がカメラのモニター部分を見せてきた。映っているのは「貴様・・・！」私が更衣室で着替えている場面だった。盗撮されていたということだ。

「大人しく俺たちの言うことを聴けば、警察には黙っていますし、この映像も俺たちだけで使うようにします。が、抵抗すればこの映像をインターネットに投稿し、全世界の変態どもにシグナムさんの着替え動画を見られることになります」

「くっ・・・（手詰まりなのか・・・？）」

自分の仕出かした失敗にはうんざりする。もう少し疑っていればこんな馬鹿な事態に陥ることはなかった。数人の青年が一斉に私の振

袖に手を伸ばしてきたのを抵抗しようとするも、主はやてへの迷惑と言う罪悪感が私の動きを制してくる。下種どもに辱められる嫌悪感と、迷惑を掛けると言う罪悪感が秤にかけられる。私は主がための騎士だ。自身より主を取るのが・・・務めだ。

「・・・・はぁ。良いだろう」

構えを解いて棒立ちになる。それを見た連中の顔がさらに厭らしくなった。不快感が凄まじい。動画を撮るためにカメラを持った数人、私の相手をする数人が歩み寄ってくる。

「これも未熟だった私への罰か・・・」

目を閉じ俯いたその時、『目を閉じろ、シグナム！』頭の中に響き渡った声。何を返す前に閉じたままの目をさらに強く瞑る。と、ガラッと窓が勢いよく開いた音の後、ボフッと妙な音が聞こえた。遅れて「なんだこれ！？」「火事か！？」「違ぇ！　煙幕だ！」「んなマンガみたいな！」驚きの声が聞こえ、そしてゲホゲホと激しく咽せている。

『まったく。八神家の次女は何をやらかしているんだか』

『・・・ルシリオン・・・』

『迎えに来たよ。ま、その前にこの連中をどうにかしないとな。待っていてくれ』

『ルシリオン！』

名を呼ぶが返事は無かった。晴れない煙幕の中、「我が手に携えしは確かなる幻想」という呪文詠唱が聞こえた。

――絶対遵守（ギアス）の力――

一体何が起きているのかは判らない。しかし私は助かった事だけは判る。ただ今はルシリオンに任せる。そう思い佇んだままでいると、「こっちだ」いきなり手を取られ僅かに驚いたが、その声はルシリオンの者だったゆえに安心して引かれるままについて行く。が、『走り難いな、やはり振袖は』カランコロンと鳴る草履、裾が長く足に張り付くような振袖ゆえ仕方がないが。

『じゃあこうしよう』

「『なに？』な・・・！？」

いきなり横に抱え上げられた。テレビで観たことがある。これは俗にお姫様抱っこと呼ばれる、少女の憧れる抱き方という。

「待てルシリオン！」

「大人しくしてくれよ、シグナム。恥ずかしいと思うなら、それはこんな馬鹿な真似をした君への罰だ」

「っ・・・むぅ・・・。仕方あるまい」

すぐにでも降ろさせようとしたが、痛いところを突かれたために大人しくルシリオンに体を預けることにした。

「それにしても。振袖かぁ。似合いすぎているな」

「変な気遣いは無用だ」

「本気で思っているんだけど。綺麗だって」

「っ！」

今のルシリオンは大人の姿へと変身しているため、オーディンと全く同じ姿形だ。だからからしくもなく・・・その、なんだ、恥ずかしながらときめいてしまったのだ。それを誤魔化すために咳払いをし、「1階の更衣室に寄ってくれ」と告げる。

ルシリオンは「判ってる。その姿で帰ったらはやてがビックリするからな」と笑う。そうして私は更衣室で着替え、ルシリオンと共に雑居ビルから出る。遅れて警察の乗る車、パトカーが雑居ビルの前で停まっていく。

「ルシリオン。お前の事ゆえ私の写真や動画はもう処分がされている・・・のだよな？」

チラッとルシリオンの顔を見上げる。

「もちろん。シグナムの記録は消したし、連中の記憶からもシグナ

ムの事を全て消した」

「やはり・・・。何から何まで申し訳ない。迷惑を掛けた。あと、迷惑ついでに、なのだが・・・」

「このことははやてに黙っているよ」

「すまない。助か――あ・・・」

私の頭の上に手が置かれる。実に懐かしい感触だった。頭を撫でられるなどオーディンに撫でられて以来ゆえ数百年ぶりか。こうして私は散々ルシリオンに迷惑を掛け、何も知らない主はやてやヴィータ達の居るあの家に帰った。

夕方。テレビのニュース速報であの連中のことが報じられた。女性たちを勧誘しては盗撮し、それを脅しに使って女性の体を弄んでいた、と。連中は自首し、警察にこれまでの反攻を洗いざらい話したそうだ。あの連中が自首をするなど思えなかった。ルシリオンに思念通話で詳細を聞いたところ。

――そういう能力があるんだよ。1度限りだけど対象にどんな命令でも下すことが出来る、ね――

実に恐ろしい能力を持っているものだ、と僅かに恐れを抱いたのは秘密だ。

そして翌日。今日はルシリオンが朝食担当だったために模擬戦は昼間に行うことになった。ルシリオンと共に準備運動をし、素振り100回、そして模擬戦へと入る。いつものように打ち合いをするこ

と１０分ほど。ルシリオンが「ちょっと待ってくれ」と仕切り直しを求めてきた。それに応じ木刀と鞘を降ろす。

「どちら様ですか？」

ルシリオンが門構えの方へと目をやり、そう問うた。そちらに目をやると、柱の陰から４０代くらいの男性が現れた。端正な顔立ちに刈り上げられた黒髪。佇まいからして何かしらの武芸を嗜んでいることが判る。

「すいません。私、この近所で剣道場を営んでいる武田と申します。失礼ながら幾度かお２人の試合を見学させてもらった事があるんです。それで、私から貴女にお願いがあるのです」

武田氏は私に向き直りそう告げた。

「私に、ですか？」

「とりあえずお話をお聞かせくださいますか」

ルシリオンと武田氏と共に玄関へ行き、そこで話をすることになった。武田氏の私へのお願いとは、「私を剣道場の講師に？」というものだった。

「はい。筋も大変良く、素晴らしいものをお持ちです。是非にお願いします」

しかし私は身分を示す在留カードを持っていない。そう思い断ろうとしたのだが、「シグナム、コレを」ルシリオンが私に一枚のカードを手渡してきた。在留カードと記され、いつ撮ったのかも判らない顔写真、名前の欄には八神シグナム、誕生日は主はやてと同じ6月4日、国籍は独国、在留資格は永住などなどが記されている。

『ルシリオン。コレは？』

『それがシグナムの身分を証明する物だ。それがあれば働ける。だからあとは、シグナムの意思次第だ』

在留カードを受け取り、私は主はやてが居るリビングへと目を向ける。と、「わたしは構わへんよ」話が聞こえていたのか主はやてが玄関へとやって来た。そして主はやては武田氏と挨拶を交わし、「シグナムはどうしたい？　わたしはシグナムの意思を尊重するよ」と私が剣道場の講師として働くことに賛成の意を示してくれた。

「どうでしょうか、シグナムさん？」

武田氏に最後の意思確認をされ、私は「お願いします」とお受けすることにした。

こうして私は剣道場の講師として、武田氏の世話になることになった。

Ｅｐｏｓ８選択の刻～Ｒｅｓｏｌｖｅ～

次元世界の秩序を管理する司法機関、時空管理局。次元空間内に浮かぶ、その時空管理局の本部である巨大な艦・本局のとある部屋。そこは光源の無い真っ暗な部屋だった。

『それではこれより権威の円卓による、時空管理局評議会を開会いたします』

しかしそんな厳かな声と共に真っ暗な部屋に空間モニターとホログラムと言う光源が生まれる。部屋の内装がうっすらだが露わになる。部屋の中心には円卓が置かれ、周りに１３の椅子が設けられている。人のホログラムは椅子に座っている様で投影されており、そのホログラムの人数は１３脚中８脚、つまり８人だ。そして別の３脚の椅子にはホログラムではなく３つのモニターが展開され、それには人の顔ではなく時空管理局のエンブレムと、ローマ数字のⅠ、Ⅱ、Ⅲが表示されていた。残り２脚には何も投影されていない。空席なのだろう。

時空管理局評議会。旧暦の時代に次元世界を平定し、時空管理局設立後にその一線から退いた３人が、その後も次元世界を見守るために作った組織・最高評議会と、彼らが掲げる理念の下に集った１０人の管理局員や民間協力者から成る、管理局の運営とはまた違った事柄を決めるための組織で、通称、権威の円卓。

ちなみに最初に開会を告げたのは、最高評議会の世話をしている女

性局員だがその姿はここにはなく、モニターにも表示されていない。だがその声をルシリオンが聴けば1発でその声の主の姿と名前を当てることが出来ただろう。

『サブナック一等空佐とガアプ特別技能捜査課長が本会議にて提示したい案件があるとのことだが』

僅か3人しかいない最高評議会、その評議員の立場にあるリョーガ評議員が、2人のホログラムを指名した。1人はロッキー・サブナック。時空管理局本局直属・航空武装隊の内、上層部のごく僅かしか知られていない暗部である第111航空隊、通称オンリーワンの隊長。任務が無い時は戦技教導隊に就き、または他の航空隊に出向する。

もう1人はクー・ガアプ。22歳という若い女性だが、階級は一等陸佐を頂いている。特殊な固有スキルを使って捜査を行う特別技能捜査課の全部隊を纏める課長だ。

『すでに耳に入っている方もいると思いますが、ここ3ヵ月ほど次元世界で暴れている魔導師がいまして』

『魔導師と言うよりは騎士ですね、ベルカ式を使っているので。名はランサー。明らかにコードネームですが、その実力は圧倒的とも言えるものです』

ロッキーとクーがそう告げ、円卓の中央に球体型の空間モニターを出した。そこに映し出されているのはランサーことルシリオンだ。アースガルド同盟軍の軍服型の騎士甲冑を纏い、柄の上下に長い穂

の有る槍・"エヴェストルム"を携え、デフォルメされたチーター
で素顔を隠し、管理局に指名手配されている魔導犯罪者を問答無用
で襲撃し、偶然遭遇した犯罪者もその場で潰し、その後は管理局施
設に連行し、そして立ち去って行く。

『３ヵ月余りでこのランサーに捕縛された指名手配犯や犯罪者は２
０２人。そのどれもが魔導犯罪者です。その者たちの魔導師ランク
は、最低はＣから最高はＡＡＡ－まで』

『武装隊隊長の平均ランクであるＡＡを超える相手すら軽く捻って
ます』

偶然撮影されたルシリオンと高ランクの魔導犯罪者との差しでの勝
負や対多数戦闘がモニターに映し出される。いやそれはもはや戦闘
と呼べるものじゃなかった。それは一方的な蹂躙だった。映像が終
わると、その戦力の高さにほぼ全員が、口が塞がらないと言った風
に放心していた。
メンバーの中には腕に覚えのある魔導師も居た。が、その者ですら
その圧倒的な戦力には呆れ返るしかなかった。しかしただ１人だけ
放心せずに『面白い奴じゃないか。俺の実験素体にしたいくらいだ
♪』と笑みを見せる者も居た。メンバーの中で唯一大人ではない１
２歳くらいの少年で、笑みを作ると八重歯が目立つ。

『古代ベルカ式の戦い方だが、使ってる魔法はベルカ式と言うより
ミッドチルダ式に近いな。ハハ、見てみろ。数の差なんて無いよう
なものだ。お前たちもそう思うだろ？』

拍手をしながらルシリオンと魔導犯罪者数人の戦闘を観戦する少年。
『・・・・俺たち１１１１航空隊は、このランサーを管理局にスカウトしたいと思っているわけで』
『おい、無視するなよ』
『スカウトだと！？　馬鹿を言うな！　犯罪者だぞ、これは！』
『お前も無視して話を進めるな、レジアス・ゲイズ少将・・・・ではなかった、最近中将になったんだったな？』
ぼやく少年にレジアスと呼ばれた厳つい顔の男性が、ロッキーが提案したルシリオンのスカウト推薦に対し猛烈な反対意見を示した。
『フンッ。犯罪者風情が私に話しかけるな』
『イエス・サー、ルテナント・ジェネラル・ゲイズ』
小さくお手上げしてそう返した少年にレジアスはまたも『フンッ』不快そうに鼻を鳴らした。
『確かに手放しで褒めることが出来るわけではないと思いますが、少なくとも彼のおかげで逮捕に苦労する魔導犯罪者が捕まっているわけですし』
『それに。これほどの実力者を管理局に迎え入れることが出来れば、

犯罪件数も減るかと思いますが？』

『どうせまた、お前たち海の連中が持っていくのだろう！？　いつもそうだ。優秀な魔導師や戦力はみんな、本局が持っていく！』

『それは・・・』

第1世界ミッドチルダの地上本部を預かってそう間もないレジアス。彼は地上事件における人員・戦力不足に悩んでいた。しかしそれも仕方の無いことだった。地上と次元の海では犯罪の規模が違うのだから。とは言え地上を蔑ろにしているわけではないのだが。ただ、戦力足り得る魔導師の数が少ないのだ。確かにレジアスもルシリオンの圧倒的な戦力に魅力を感じていたが、犯罪者とは言え襲撃しているルシリオンのやり方にはどうしても自らの正義感から反感を覚えてしまうのだった。

『ま、とりあえず。このランサーっていう奴と話さないとダメだな。この男の目的なども判ってないのだから』

『その目的ですが、ランサーに襲撃された魔導犯罪者は全員、リンカーコアに深刻なダメージを受けており、戦闘魔導師としては再起不能と診断されています』

クーのその話に、『どこかで聞いたことのある話だな』と反応する少年。

『実に面白い奴だ、ランサー。俺も賛成しよう。ランサーの管理局（スカウト）

に組み込むに。なぁに。ランサーに何らかの脅しをかけて強制的に俺たち、権威の円卓に引き込めばいいさ。ちょうど席が空いているしな』

少年はそれだけを告げて、本評議会が閉会する前に退場した。少年が映し出されていたモニターは消え、空席である2脚と同様に寂しいものとなった。しかし評議会は続行される。ロッキーとクーの案件に対する賛否の確認だ。過半数の賛成を得、なおかつ最高評議会の代表・デュランゴ議長の最終決定が下ると、猶予付き可決としてデュランゴ議長の終了宣言までその案件は続けられる。

『サブナック一等空佐、ガアプ特別技能捜査課長の案件、魔導犯罪者狩りの騎士、ランサーを管理局へスカウト。賛成の者は、賛成の意を述べよ』

リョーガ評議員がそう告げると、デュランゴ議長とレジアス以外のメンバーがそれぞれ『賛成』と述べていく。が、デュランゴ議長は無言で、レジアスだけが『私は反対だ』と反対意見。1人でも反対意見が出た場合、徹底的に話し合って反対者の意見を変えさせる。もしくはデュランゴ議長の鶴の一言で反対者の意見を切り捨てる、となる。

ここからはレジアスを納得させて賛成意見に変えさせるか、彼の意見を問答無用で切り捨てるか、だ。しかしメンバーはレジアスを納得させることにし、話し合った。結果、レジアスも『スカウトに賛成する』と意見を変えた。

『これほどの戦力を野放しにしておくのは勿体ない。この案件を、

可決する』

そして最後にデュランゴ議長の可決宣言。この瞬間、ルシリオンは時空管理局評議会・権威の円卓のターゲットとなった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「はぁ。疲れた」

さすがにこの３ヵ月間、毎夜次元転移を繰り返し馬鹿どもの相手をしていると疲れが溜まってしまう。それで動きや思考に支障が出てミスするといけないと思い、いつもは４時半に帰ってくるところを今日は犯罪者狩りを早々に切り上げて２時半に帰ってきた。

玄関のドアを開け、音を立てないように中に入り自室へ向かおうとしたとき、「ルシル君？」リビングの入り口からパジャマ姿のシャマルが姿を現した。

「どうしたの、こんな時間に？　それにその格好・・・、どこか出掛けていたの？」

「少し野暮用があってね。シャマルはどうした？」

「ちょっと星空を見ていたの。とても綺麗だったから。でもちょっぴり昔を思い出しちゃって」

シャマルは語った。オーディンと死に別れたその日もまた、今日のように星空が綺麗だったのだと。俺もそれを聴いて思い出す。エリ

ーゼを横抱きして夜天を空翔けたあの日のことを。

「そっか。でも体が冷えるかもしれないから、そろそろ休んだ方が良い」

「ええ。これから寝るところよ。おやすみなさい、ルシル君」

「おやすみ、シャマル」

心が休まる微笑みを見せてくれたシャマルは自室の在る2階へと上がって行った。彼女を見送って俺はダイニングへと入り、水を一杯飲んでから自室へ戻った。私服のTシャツとズボンを脱いでフリースのパジャマに着替えてベッドに腰掛ける。そして「ＡＡランクが3人、か。まずまずだな」今日の収穫であるリンカーコアの持ち主である魔導犯罪者との戦闘を思い返す。

ランサーの名とその行いが次元世界に亘り、俺のターゲットにされたと知った魔導犯罪者は降伏してきた。だが・・・俺は問答無用で潰してやった。もっと畏怖してもらわないと、な。犯罪者には徹底抗戦を行う騎士。罪のレベルが高ければ高い程、連中の被害者や一般人からの支持が高くなる。今のうちに民衆からの印象を少しでも良くしておかないといけない。

「――っと。今日もまたリーゼから情報が来たな」

通信端末に、リーゼアリアから暗号化されたレベル4以上の捜査資料データが届いた。俺はリーゼ、正確にはグレアム提督と協力関係を結んでいる。それは3ヵ月前。彼女たちが俺の前に現れ、そして

アリスの転生体であるセラティナと邂逅したあの日。俺は取引を持ちかけた。

。―。―。回想だ。―。―。

セラティナの発動させた結界魔法、一方通行（サンダルフォン）の聖域を破壊し、それに驚くリーゼ達に向けて取引を持ちかけた。真っ先に反応するのはやはり「取引？」アリアだった。ロッテはショックで放心しているセラティナを慰めるかのように肩をポンポンと叩いている。

「そう、取引。あなた達が狙っているのは闇の書。第一級捜索指定のロストロギア。無限転生を繰り返し、完成前では破壊も封印も困難で、完成後もまた完全破壊・封印不可とされている物」

「「っ！！」」

"夜天の書"の特性を知っていることに驚いているリーゼと、話について行けずに呆けているセラティナを尻目に「取引というのは、闇の書の終焉を約束する、というものだ。だから、これから俺たちが行うことを全力で見逃してほしい」そう言い放ってやる。

「んなっ！？　一体何を根拠にそんなことを――」

「あなた達は完成後、暴走直前の僅かな停滞期に氷結封印する、とか考えているんじゃないか？」

口をパクパクさせて何かを言おうとしているリーゼ。しかし驚き過

ぎて舌が回らないようだ。だが何を言いたいかは判る。どうして知っているのか、だ。

「でもそれは叶わない。何故ならその程度で封印されるほど弱くないからだ。それに、封印後に氷結世界に隠したとしても、誰かがいつか見つけるかもしれない。となれば、封印解除は難しくない。ただの強力な氷結封印だから」

さらに続ける。リーゼが狙っているタイミングでの氷結封印は、はやては封印されるだけの罪じゃなく、封印を決行すれば逆に違法となる。それはリーゼが守るべき管理局法で、それを破るわけにはいかないだろう、と。

「あんた本当に何者だい？　絶対に見た目通りの奴じゃないね？」

敵意と警戒心を剥き出しにして背中を丸めるようにしてロッテが身構えた。猫の姿だったら毛を逆立てているところだろう。

「まずは知ることから始めるものだよ、戦いは。その事からこうして取引を持ちかけた。闇の書の終焉を約束する。その代わり犯罪者狩りを見逃してほしい、って」

「だから何を根拠にそんな取引を持ちかけてきたわけ？　氷結封印以外に闇の書を停止することは出来ないわ。今までは艦載砲で蒸発させてきたけど、それもその場凌ぎにしかならない。もう・・・氷結封印しか手は無いのよ！」

苛立ちを見せていたアリアがついに怒鳴り声を上げた。ビクッと肩を跳ねさせるセラティナが可哀そうに思えるが、いつかこの経験が成長を促すだろう。恐い事も悲しい事もじかに感じて、一人前になるんだから。

「封印以外の手があると言うのなら言いなさい！　その方法を知る権利ぐらいあたし達にもあるはずよ！」

「簡単なことだよ。まずは闇の書を完成させる。だから俺は今こうして魔導犯罪者からリンカーコアを回収している」

今回の一件で奪ってきた９個のリンカーコアを"神々の宝庫ブレイザブリク"から取り出して見せつける。と、「ひどい・・・」セラティナが身震いした。これがかなりショックで、堪らず肩を落としてしまった。だってアリスの顔と声をしたセラティナから非難を受けたんだ。ショックを受けても仕方ないじゃないか。

「あ、ご、ごめんなさい。悪い人たちだったんですよね。きっとこれが報いを受けた、ってことですよね？　うん、罰を受けたんだ。自業自得なんだ」

さらりと恐いことを言うセラティナ。リーゼもそんな彼女の言葉に怒りを忘れて呆けた。

「こ、こほん。で？　さっきの続き。あなたはどうやって闇の書を停止させるつもり？」

「暴走している管制システムを掌握するんだよ。もちろん俺じゃなくて、最後の主であるはやてが」

「ハッ、馬鹿言うんじゃないよ。そんなことできるもんかっ。闇の書は、主であってもコントロール出来ない、ぶっ壊れた欠陥品なんだよっ！」

「そう。アレは主ですら害する毒よ。それをあんな子供が管理下に置けるわけがない。君の案は破綻するわ。そんな成功率が限りなくゼロに近い案を呑むわけにはいかないわ」

「あなた達ははやての何を見ていたのか。彼女は今までの力に溺れただけの連中とは違う。騎士たちを家族として見ている。闇の書に対してもそう。ただの道具とは見ていない。心構えが違う。はやては闇に呑まれない。それに俺が、俺たち騎士が、はやての心を支えるのだから」

「かっこいい・・・」

「そんな簡単なことで・・・呪われた闇の書を停止できるわけが――」

「出来る」

「そんな自信、どこか――」

「確信だよ、リーゼロッテ。闇の書は、はやてを最後の主として終

焉を迎える。絶対だ」

「「・・・・・」」

リーゼと真っ向から目を合わせ逸らさないようにする。こちらが本気であり、嫌でも取引に応じさせるために。リーゼも目を逸らそうとしない。そんな不毛な時間が少し続き、そして・・・アリアがようやく口を開いた。

「本当に出来るわけ？　管制システムを掌握することが？」

「アリア！？　ちょっ、アイツの取引に応じるつもり！？　あんな確率的にも上手く行かない話を信じて！？」

「あの目。父さまと同じ。何を犠牲にしても、他人にどう思われても、必ず目的を果たそうとする、あの強い意志が宿った目」

「・・・・っ」

リーゼがついに折れた。彼女たちの主であるギル・グレアム提督にこの件を話し、その結果如何によって協力関係を結んでくれると約束してくれた。

。―。―。回想終わりだ。―。―。

あれからグレアム提督と通信で話し、協力関係を結んだ。必ず"夜天の書"を、周囲に修復不可能な被害を出すことなく停止させるこ

とを条件として。

他に俺の手助けとして、"夜天の書"を完成させるために必要な魔力の持ち主である高ランク魔導犯罪者の資料も流す、とも。それはまだ回収していないレベル４以上の重要案件で、魔導犯罪者の強さもまた一線を画す。ま、端から潰しにかかると決めている以上は後れを取らない雑魚に過ぎないが。

「資料データの受け取りを確認、グレアム提督によろしく、っと」

そう返信して資料を読み漁る。中にはＳ－ランクの魔導犯罪者もいる。これは大助かりな情報だ。一気にページを稼げる。

（グレアム提督とリーゼ達の為にも頑張らないとな）

かつてのグレアム提督は、はやてを犠牲にすることに胸を痛めていた。だがそれでも"夜天の書"封印を成さないといけないとして、仮面の男――リーゼを使って暗躍を続けた。俺の取引に応じてくれた理由として、はやても犠牲にしない、ことが含まれていたこともあると思っている。誰だって嫌さ。如何なる大義があろうとも、罪のない心優しい子供を犠牲にするなんて。

（ま、失敗と判断されたら即氷結封印になってしまうが）

そこだけは承諾するしかなかった。失敗などしないが、それは未来を知っている俺だからこそ言える結末だ。未来のことを知らない者からすれば不安で仕方ないだろう。とにかく、だ。"夜天の書"の終焉を迎えるための基盤は固まった。リーゼの妨害が無くなった以

上、安心して魔力集めが出来る。
あとは・・・「フェイト達だな」彼女たちや、そしてはやてとシグナム達にも悪いが俺の手の平の上で踊ってもらおう。そう、全てが終わった後、俺は彼女たちにどう思われてもいい。しかし彼女たちが知り合うためだ。やってやる。今後の展開への決意を固め、俺は就寝することにした。まずは魔力集めを徹底して行うために必要な体を休めなければ。

そうして翌日。１０月２７日。先の次元世界と同じなら今日、はやての下半身麻痺の正体をシグナム達が知ることになるはずだ。それを証明するかのように今日は病院での診察日だ。

「また見ていたんだ、アルバム」

「あ、ルシル君。なんや止まらんくてな」

今日の授業を始めようとはやての部屋に行くと、はやてはアルバムを楽しそうに眺めていた。シグナム達が来てからというもの一気に写真が増えたからな。海水浴へ行ったり、山へキャンプに行って天体観測をしたり、海鳴温泉へ旅行したり、梨狩りに出かけたり、ヴィータのゲートボール大会の応援やシグナムの仕事の見学などをした。そう、色々と遊びに行ったよな。そのたびに写真を撮って、こうしてアルバムに収めていった。

「よしっ。家族パワーも貰ったし、今日も勉強頑張ろかっ♪」

やる気に満ちたはやてに今日も授業を行う。はやての学習能力には

本当に舌を巻く。そして正午までの2時間、数学と国語（6年生レベル）の授業をし、終われば家族みんなで昼食を頂く。その後は予定通りはやてとシグナムとシャマルは病院へ。洗濯物を取り込んで畳んだり掃除をしたり、残った家事を行うために俺とヴィータとザフィーラは留守番となる。家事が終わると、はやて達が帰ってくるまで思い思いに時間を過ごす。

「ただいま～♪」

5時を過ぎ、はやて達が帰ってきた。はやて、彼女の車椅子を押すシャマル、夕食に使う材料の入ったエコバッグを持つシグナム。俺やヴィータ、ザフィーラがそんな3人におかえり、と挨拶をして迎える。しかしやはりシグナムとシャマルには元気がない。気付き難いがシャマルの目は僅かに赤く腫れていて、泣いたことが判る。おそらくザフィーラも気付いているだろうが、そのことには触れそうにないため俺も触れないでおく。

「今日はみんな大好き、肉じゃがやよ♪」

「おお、やった♪　はやて、はやて、お肉いっぱい入れて！」

「ちゃんとお野菜も食べなアカンよ、ヴィータ」

シャマルははやてと一緒に夕食つくりに入り、シグナムはソファに座って新聞を読み始めた。ヴィータはダイニングテーブルに座ってはやてを眺め、ザフィーラはソファの側に伏せた。はやてとヴィータの楽しそうなお喋りをＢＧＭに夕食を終えて片付けをしていると、

シグナムとシャマルから大事な話がある、と告げられた。
そうしてはやてが眠った後、俺たちは自宅より少し離れた臨海公園へとやって来た。思念通話でも構わなかったが、この話を聴いてヴィータが暴走し、それからはやてに問い詰められるような状況に陥らないためにわざわざ自宅から離れた。

「で？　こんなところにまで移動して何の話があるってんだよ？
せっかく風呂に入ったのに湯冷めすんだろうが」

当初は不機嫌なヴィータだったが、「実は――」シグナムとシャマルから語られたはやての下半身麻痺の原因が自分たち"夜天の書"にあることが告げられたことで段々と顔を青褪めさせていった。はやての下半身麻痺の原因。それは病気なんかじゃない。生まれた頃より強大な魔力を有している"夜天の書"と繋がり過ごしてきたことによるものだ。
未成熟なリンカーコアで"夜天の書"の魔力に耐えられるわけもなく、必然はやての肉体機能に異常を起こし、さらに麻痺は上半身へと向かって生命活動にまでその侵食を伸ばそうとしていた。"夜天の書"の起動によって主となった第一覚醒、シグナムたち守護騎士の活動維持に魔力を使用していることもまた、麻痺進行の速度を上げた。

「・・なきゃ・・・」

俯いているヴィータがポツリと漏らす。ヴィータは「助けなきゃ！
はやてを助けなきゃ！」勢いよく顔を上げて涙を湛えて叫んだ。
そしてベンチに座っている俺、じゃなくて隣に居るシャマルに詰め

寄った。

「シャマル！　シャマルの魔法ではやてを助けろよ！　お前、治癒が得意だろ！」

「ヴィータちゃん。私じゃダメだったの、見ていたでしょう？　私の魔法じゃ・・・何も出来ないの・・・！　はやてちゃんを救えない・・・！」

シャマルもとうとう両手で顔を覆って泣き出してしまった。ヴィータは次に「そ、そうだ、ルシル！　お前だ！」俺へと振り向いて詰め寄って来た。

「お前あれだろっ、オーディンとおんなじ魔法が使えるんだろっ！？　だったらアレ、コード・エイルって魔法！　死人以外ならなんでも治せるっていう魔法で、はやてを治してよ！」

まぁこういう展開にはなるだろうなぁっとは思っていた。シグナム達も俺へと振り向いて期待の眼差しを向けて来た。しかしそれには「ごめん」と謝るしかない。

「確かにコード・エイルは死亡以外の異常を治すことが出来る。けどそれは根本を治すことで出来ることなんだ。はやての麻痺の原因は闇の書の存在。つまり闇の書が消えないことにははやては治せない。けどそれはみんなが消えることにもなる」

これは事実だ。いま治したところで"夜天の書"が存在し続ける限

りはやての侵食は再開される。そのたびにエイルを掛けてもいいが、それでは"闇の書"事件という話が始まらない。だから俺は、はやてに魔法はかけない。

「そんな・・・、そんなのってねぇよ・・・。あたしらが消えねぇとダメなのかよ・・・？」

久しぶりに見るヴィータの絶望に満ちた表情。そこにシグナムが「それは最後の手だな」と、自分たちの消滅を視野に入れていることを思わせる一言を漏らした。しかしシグナムは「あくまで、だ」と言い、胸元から首から提げていた待機形態である"レヴァンティン"の首飾りを取り出した。そして意を決したかのようにヴィータ、シャマル、ザフィーラと順繰りに見た。

「私はかつて、守護騎士の将として主はやてとある誓いを交わした。我々の務めは主はやてと共に家族として過ごすこと、戦闘などの危険行為は禁止、と。だが私は・・・」

「主はやてがため、誓いを破らざるを得んか？」

言葉を途中で区切ったシグナムにザフィーラが問う。

「主はやての体を蝕んでいるのは真の覚醒を果たしていないことで起きている、言うなれば闇の書の呪いだ」

「ふむ。侵食を消失させるには、いや少なくとも止めるには真の主として覚醒すればよいのか」

「ああ。おそらく望みはそれだけだ」

「闇の書を完成させればはやてを助けられるんだな！？　じゃあ今すぐ完成させに行こう！」

ヴィータも待機形態の"グラーフアイゼン"を手に取り、すぐにでも飛んで行きそうな勢いだ。シャマルも泣き止んで「完成させましょう、闇の書を」と凛とした面持ちで告げた。

「で、だ。ルシリオン。お前を呼んだのは他でもない。我々はこれより闇の書完成を遂行するため家を空けることが多くなるだろう。その間、主はやてのお傍から放れないようにしてもらいたいのだ」

シグナムにそう言われ「なんだ、俺は仲間はずれなのか？」と不満そうに言う。と、「お前、なんでそんなに冷静なんだよ・・・！」ヴィータが俺の様子に今さら疑問を持った。俺は言葉で答えるより先に"ブレイザブリク"より今まで回収してきたリンカーコア、約２００を見せる。シグナム達はそのリンカーコアの多さに目を大きく見開いて驚いた。

「お前は・・・知っていたのか？　主はやての麻痺の原因が、闇の書の呪いだということを・・・！？」

「・・・・知っていた」

シグナムにそう答えると、真っ先に「てめぇっ！」ヴィータが俺の

胸倉を掴み上げてきた。

「知ってたんなら、なんで言わなかった！」

「ヴィータちゃん！」「ヴィータ！」

シャマルとシグナムによって引き剥がされたヴィータは「なんでだ！」と怒鳴るのみ。

「言ったら信じたのか？　はやての麻痺は君たちが原因だと。いや、違う。俺は言えなかった。君たち、・・・闇の書が原因ではやては歩けないんだ、って。そんなこと言えるわけないじゃないか」

「「「「っ！」」」」

俺の作った悲痛な表情を見たことでヴィータは大人しくなってくれた。俺は続ける。いつかこの日が来るのを見越して、先にリンカーコアを回収していたことを。もちろん相手は選んだことも伝えた。標的は魔法を使って罪を犯している魔導犯罪者のみ、一般魔導師には手を出していない、そして当然だが殺しもしていない、と。俺の話を聴いたシグナム達は目に見えて安堵していた。

「そうか。ああ、いい判断だと私は思う」

「だな。悪くねぇ考えだ、ルシル。犯罪者からリンカーコアを奪うのか。それなら大して心も痛まねぇな」

「そうね。一般の人を襲ってはやてちゃんを助けられたとしても、ちょっと素直に喜べないもの」

「うむ。殺しも無いというのも評価できる。あの心優しき主の未来を血で汚したくはないからな」

リンカーコアを全て"ブレイザブリク"へと戻す。あとは「この事を事前報告するか、事後報告するか、だけど」と、シグナム達がおそらく考えていない事を言ってみた。

「待ってくれ。主はやてには伝えるのは――」

「黙ったまま始めるのか？　今まで黙っていた俺が言うのもなんだけどさ。騎士の誓いを破りたくないんだろ。だったら言うべきだ、と思う」

かつてのはやては、自分のことなのに蚊帳の外にいたことで少なからず傷ついていた。家族のしてきたことを何も知らずにいた、と。それにシュリエルリート、じゃなかった。今はまだ管制プログラムである名無しの彼女を起動させるためにもはやてには知っていてほしい。

管制プログラムである彼女の事も引き合いに出すと、「それはそうだが」とシグナムの心が揺らぎ始めた。ヴィータ達もそうで、はやてに話そう、という流れになった。

「で？　話すにしても事前か事後、どっちにするか、だ。事前であれば反対される可能性が大きい。はやては優しすぎるからな。自分

より他人を優先する。事後の場合は怒られるかもしれないけど、もう引けない道を進んでる」

「話すとなればやはり事前だろう。たとえ反対されようとも何としても説得する」

シグナムがグッと拳を握った時、『なんで、みんな居らへんの！？』はやてから焦りと不安でいっぱいな念話が送られてきた。

『ごめん、ごめん。すぐに帰るから』

『ホンマに！？　とゆうか、なんで誰も居らんの！　出掛けるんなら一言くらいほしいわ！』

『申し訳ありません、主はやて』

『ごめん、はやて』

『ごめんなさい、はやてちゃん』

『申し訳ありませんでした』

俺たちは無断で出掛けた事に対して謝る。けど、珍しいな。はやてが途中で起きるなんて。寝つきが良いはやては体内時計がしっかりしていることもあって朝6時半まではまず起きない。もしかすると、"夜天の書"を通して守護騎士とリンクしていることから、彼女たちの感情の揺らぎを感じ取ったのかもしれないな。理由はどうであ

れいい機会だ。俺は『はやて。帰ってから大切な話がある。待っていてくれないか？』とお願いする。

『大切な話？　うん。判った』

俺の真剣な声色から本当に大切な話なんだと察してくれたようだ。そして今から帰ることを告げてから念話を切り、「さぁ、帰ろう。はやてを説得しないとな」俺たちは家路に着くために歩き出した。

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

私の母さん、プレシア・テスタロッサが犯したＰＴ事件（母さんの名前から取られてる）の重要参考人として、私は今日もまた事情聴取を受けた。けど生活態度が良いとのことで、行動にはほとんど制限は付いてない。アースラ内なら自由に活動できるし、本局内でも局員の同行があればある程度は自由がきく。

だからこうして「ごめんね、シャル。いつも付き合ってもらって」

アースラスタッフの１人で、私と同い年ながら執務官補佐の資格を持ってるすごい子、名前をイリス・ド・シャルロッテ・フライハイトに付き添いを頼んでる。

そんな私とシャルは今、私の使い魔のアルフと一緒に本局の医務局に来ていて、診察室の前でいま診察を受けている人をひたすら待っている。

「良いよ、全然。大切なお姉ちゃんの診察だもんね♪」

「うん」

「でもホントに良かったねぇ。アリシア、ちゃんと目を覚ましてさ」

「うん。そうだね。本当に良かった」

私が生まれることになった要因、母さんの本当の娘であるアリシア・テスタロッサの死。母さんはアリシアを蘇らせる為にジュエルシードと、伝説の地アルハザードを目指した。けどそれは失敗に終わり、母さんは死んだ。その代わりなのかな。驚くことにアリシアが蘇った。２０年以上も前に事故死したのに。その原因は今も一切不明のままで、念のためにという事で週に一度診察を受けている。

「あ、終わったみたいね」

プシュッと扉が開いて、「あ、フェイト、アルフ、シャル！　迎えに来てくれたの？」私と同じ顔だけど、私より小さく、ずっと明るい女の子、アリシアが出て来た。アリシアは私と違って明るい色の服を好んで、今は水色のキャミソールワンピースにしろのかぼちゃパンツっていう格好だ。パァッと太陽のように輝いてる笑顔と相まって本当に可愛い。

アリシアは一直線に私の所に駆けて来て、「今日も異常なしだって♪」そう教えてくれた。そしてアリシアの後ろから出て来たティファレトさんも、「異常なし」ってピースサインを出した。

「そ♪　じゃあ、そろそろいい時間だし、お昼にしよっか」

「さんせー♪」

「うん」

アリシアは大きく笑顔で万歳、私はコクリと頷く。ここでも差があ

る。でもいいんだ、これで。ティファレト医務官とはここで別れて、私たちはお昼ご飯にするためにアースラへと戻るために歩き出す。そんな中、私はアリシアが目を覚ました時のことを思い返す。

。―。―。回想です。―。―。

なのは達とお別れをして数日。護送室での生活も慣れ始めていた頃、バタバタと大慌てってことが判る程の大きな足音が聞こえてきた。何事かと思ってベッドの上で横になっていた体を起こす。そして扉が開いて、「フェイトっ、アルフっ！」シャルが勢いよく室内に入って来た。

その剣幕に「ど、どうしたの？」って若干身を引きながら訊いてみた。シャルは答えるよりも早く私の手を取って、私を護送室から連れ出した。後ろから「いったい何事だい！？」アルフも混乱しながら追いかけて来た。

「ティファから連絡！　アリシアが目を覚ましそうだって！」

「「え・・・！？」」

アリシアが目覚める。待ち望んでいたのに、逃げないって決めていたのに、あまりに突然すぎて「あの、ちょっと待って！」足に力を入れてシャルに抵抗する。シャルは「なに、どうしたの！？」って私に急に抵抗されて驚きながらも立ち止まってくれた。

そしてシャルは私の足の震えに気付いて「やっぱり怖い？」って優しい声色で心配してきてくれた。私は小さく頷いて、「少し時間が欲しい」ってお願いした。するとシャルは「ん」って頷いて私の手

を放してくれた。アルフも「フェイト・・・」私の肩を抱いてくれた。
私は2度ほど深呼吸をして、「大丈夫。行こう」アリシアの待つ医務室へ歩き出す。本当はもっと時間が欲しいところだけど、きっとさらに悪い方へ考えが行っちゃいそうだったから粘るのは止めた。

「さて。それじゃあ開けるよ、フェイト」

「・・・・うん」

医務室前に辿り着き、私は扉の前で改めて深呼吸を数回したあと頷く。シャルは「よし」と医務室の扉を開けた。私はアルフに手を握ってもらい、一緒に中へと入った。医務室に居たのはティファレト・ヴァルトブルク医務官と、ベッドに寝かされたアリシアの2人だけだった。ティファレト医務官は「もうそろそろ」と私を手招きしてきた。

「やっぱり目覚めてから初めて見るなら妹さんの方が良いと思うから」

言われるままに横たわるアリシアの顔を覗き込む。血色も相変わらず良いし、呼吸も安定していることが素人の私でも判る。度々お見舞いに来た時、寝言を聞くようにもなった。本当にいつでも起きそうな気配は有った。

「・・・・ん・・・・ぁ・・・・」

「っ！」

アリシアが吐息を漏らして薄らと目を開いた。最初は焦点の合わない目で何度も瞬きしながら私の顔を見ていた。そして焦点が合ってハッキリと私を視認した。

（何か言わなくちゃ。でも何を？　おはよう？　はじめまして？　それとも、ごめんなさい？）

ジッと私を見るアリシアに向けて何かを言おうとするけど、唇が渇いて上手く声が出せない。ようやく「アリシア・・・」名前を呼ぶことが出来た。

「あの、ごめんなさい！　わ、私、フェイトって言います！　はじめまして！　ごめんなさい！　ごめんなさい！」

一言でも喋ったからかスラスラと言葉が出て来た、混乱してメチャクチャだけど。私は頭を深く下げて何度も謝る。ゴソゴソと頭上から衣擦れと、ギシギシっとベッドが軋む音がした。アリシアが体を起こしたんだって判った。私は頭を上げることなく、どんな心無い言葉を掛けられてもいいようにギュッと唇を引き結んで、両手を握り拳にして心構えをする。

「フェイト・・・」

「え・・・？」

ポンと頭に手を置かれて、しかも優しい声色で名前を呼ばれた。予想としては、誰？って訊き返されると思ってた。アリシアは私のことを知っているわけがないから。それなのにまさかそんな優しく呼ばれるなんて思いもしなくて。緊張からドクン、ドクンと心臓が強く動いて苦しい。

「ごめんね、辛かったよね」

「アリ、シア・・・？」

アリシアの両手に顔を挟まれて、顔を上げさせられる。ベッドの上に座るアリシアは泣き笑いしていた。言葉が詰まる。アリシアはまた「ごめんね」って謝って私の頭をその胸に抱き寄せた。どうしてアリシアが謝るのか全然解らない。でもトクン、トクンってアリシアの心臓が動いてる音が聞こえて、それが心地よくて少し落ち着けたかも。

「わたし、ずっと見てたの。記憶があるの。わたしが死んじゃった時からのこと。ママがフェイトを生み出すところも、これまでフェイトがママから受けた虐待のことも、そして・・・ママが死んじゃったことも・・・。みんな知ってるの」

「「「「っ！？」」」」

アリシアが告げた信じられない話。ただでさえ蘇った事だけでも信じられないのに、自分が死んでから蘇るまでの記憶があるなんて。一体どうすればそんなことが出来るのか判らない。でも今はそれよ

りも・・・。

「アリシア、私は・・・！」

母さんを守ることが出来なかった。それだけが今でも晴れない後悔。それだけは謝らないといけない、私の罪。

「いいよ。ママのことは仕方なかったんだよ。フェイト。わたしね、ママの最期のお願いを聴いたの。たぶんフェイトも聴いてると思う」

――あなたはこれからアリシアと――お姉ちゃんと生きていくの。あなたは妹なのだからちゃんとお姉ちゃんの言うことを聴くのよ？

でも、アリシアが間違っているのなら、ちゃんと正すの。行きなさい。そして生きなさい――

「わたし見たまんまで小さいけど、それでもフェイトのお姉ちゃんだって胸を張って言えるように頑張るから。だから・・・！」

アリシアの胸から顔を離して真正面からアリシアの顔を見、そしてギュッと抱きしめる。

「アリシア。私たちはもう生まれた時から姉妹なんだよ。だから、その・・・これからよろしく、アリシアお姉ちゃん」

否定もされず、拒否もされず、それどころか私を妹として見て受け入れてくれた。だからもう何も恐れる事はない。そして私もアリシアに私の想いを告げる。色々と順番がおかしいけど、家族になろう

って。するとアリシアも「うん、うんっ。よろしく、フェイト」抱きしめ返してくれた。それからお互いに嬉し涙をボロボロ流しちゃって、それにアルフやシャル、ティファレト医務官ももらい泣きしちゃった。

。―。―。回想終わりです。―。―。

「今日はなにを食べようっかなぁ～　」

笑顔で私の左腕に抱きつくアリシア。こうして笑顔でやり取りが出来るのも、アリシアが全ての事情を知ってくれていたからこそ、だ。ちなみにどういう風に見ていたのかと言うと、夢を観ているかのように曖昧な感じで、母さんや私の側を行ったり来たりしていたとのこと。

「どうせいつものように別々の頼んで半分こするんだろ？」

「うんっ。アルフは判ってる～♪」

私の右隣に居るアルフもアリシアとはすごく仲が良いし、良いこと尽くめだ。幸せな気分で本局の廊下をお喋りしながら歩く。

「おい、知ってるか。あの連中、また出たんだってよ」

「知ってる。以前、現場で会ったよ。剣騎士セイバー、槍騎士ランサー、鉄槌騎士バスター、治癒騎士ヒーラー、防護騎士ガーダー、あと1人いるって話だが見たことないな」

「マジかよ。俺、ゴツいガーダーって奴しか見たことねぇ」

「俺はセイバーとヒーラーなら見たことある」

「その2人ってスタイル良いよなっ。ま、変身魔法かなんかで顔が動物だからそそられないけどさ」

ふと、局員が数人集まってそんな話をしているのが聞こえてきた。どうしてかは判らないけど、そのコードネームらしき名前で呼ばれる人たちのことが気になって仕方がなくなった。

アリシア達の会話から、横を通り過ぎて行った局員の会話に耳を澄ませようとしたところで、「またかぁ」前を歩いてたシャルが溜息交じりにそう漏らす。その人たちのことを知ってる素振りを見せた。シャルに「またかって？」そう訊いてみる。

「ん？　あー、さっきの人たちが話してたランサーとかセイバーとかって連中のことでちょっとね」

「なになに？　何の話？　わたしにも聞かせて！」

アリシアも興味を持ったみたい。シャルは「それじゃあ」って前置きをして、語り始めた。事の始まりは数ヵ月前。古代ベルカ式の魔法を使う騎士、ランサーっていう覆面騎士が現れて、魔導犯罪者を片っ端から狩り始めたみたい。抵抗した犯罪者には戦闘行動を取って、撃破したら捕縛して管理局施設に置いていく。降伏したらしたで、なんと目的らしいリンカーコアを抜き取ってから管理局施設に

移送。
私はリンカーコアを抜き取るって話に総毛立った。抜き取れるような物じゃないし、抜き取った後の使い道が何なのかが判らないから余計に怖い。
「魔導犯罪者ばかり狙われてんのかい？」
「それって良いことなんじゃないの？　管理局は人手不足でいつも忙しいって、エイミィが愚痴ってたよ。それに悪い奴を捕まえてるんだもん。そんなに悪いことじゃないと思うけど？」
「エイミィ・・・。子供（アリシア）になに言ってんだか」
「あ、ひょっとしてまたわたしを子ども扱いした？　もうっ、わたしの方がずっと年上なんだぞっ」
アリシアの実年齢３１歳。驚くべき事実だった。
「はいはい。というかアリシア。確かに悪い奴らだけど、それでも一応は人権を持ってるからね。自業自得とは言え襲われた以上は被害者になるわけ」
「でもま、いい薬にはなったんじゃないかい？　罪を犯した分、それが自分に戻ってきたんだから」
「まぁね。わたしとしても本音を言えば、ザマァ、なんだけどさ。やっぱり傷害罪なんだよ」

「そうなんだぁ。難しいね」

「でね。そんなランサーの仲間と思しき連中がほんの1週間前に現れてね。コイツらもまた強いらしくて。ランサーと同じように魔導犯罪者を狩り始めたわけ」

シャルは最後に「同じ古代ベルカ式の担い手として嬉しいやら悲しいやら」ってぼやいて、アリシアは「わたしはアリだと思うけどなぁ～」ランサー達を擁護、アルフは「こっちに被害がなきゃどうでもいい」って興味の外へ追いやった。

「でも実際。アリシアと同じ考えを持つ人が出て来ちゃってるのも確かなんだよね。連中、パラディース・ヴェヒターって名乗ってるんだけど、コイツらって被害者たちから英雄視されてるのよ」

「「「英雄視？」」」

「そ♪　ほら、管理局って万年人手不足って話でしょ。だから規模・被害が小さいのはどうしても後回しになっちゃうわけ。でも連中はそんなのお構いなしに手当たり次第に解決しちゃうから、後回しにされてた被害者たちからすればそうなるのは必然だった」

シャルは続けた。パラディース・ヴェヒターはそれだけじゃなくて各管理世界の政治家やお金持ちの人たちのことも助けてるから、その人たちが味方しちゃうかもって。中には管理局運営に必要なお金や資材を出資している人たちも居るらしくて、もしその人たちに保

護でもされたらお手上げとも。

「連中のリーダーか、それともメンバーの誰か、か。どっちにしろ、頭の良い奴が向こうに居る。自分たちが犯してる罪を、次元世界に知れ渡ってる犯罪者を狩ることで覆い隠してる。しかもちゃっかり大物に恩を売ってる辺りセコイと言うかなんと言うか」

シャルは呆れとも感心とも取れる溜息を大きく吐いた。アリシアはパラディース・ヴェヒターのやり方に「ほわぁ、すごいねぇ～」感心してる。そして私はと言うと。

「リンカーコアって何に使うんだろう・・・？」

その疑問が消えない。魔導犯罪者ばかりを狙う以上は根っからの悪い人たちじゃないのかもしれない。だけどリンカーコアっていう魔導師にとって一番大切な器官を奪うということは何かしら大きな企みがあるって思うのが自然だ。

「さぁ？　再犯させないための罰かもって噂されてるけど。真実を知りたいなら当人たちに訊くしかないよ」

シャルの言う通りか。でも「なんにしてもわたし達には関係ないよ。担当じゃないんだし、地上に降りることなんてそうそうないから遭遇する確率もほぼゼロだし」シャルの言う通り私がランサー達と出会うきっかけはほとんどない。

でもどうしてこんなに気になるんだろう。それが本当に解らない。

まるで何かにそう思わされているかのような、妙な感じがする。変

な気持の悪さを抱いていると、きゅ～、って可愛い音が耳に届いた。音の出所は「あぅぅ」アリシアのお腹で、アリシアは大きく鳴ったことに顔を赤くしてた。

「ほら、アリシアもお腹鳴らしてるし。早くご飯にしよ♪」

「う、うん」

そうして私たちはお昼ご飯を食べるためにアースラへ早く戻ることにした。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒はやて†††

『こちらセイバー。対象を撃破。リンカーコアの回収を完了』

『バスターだ。こっちも標的撃破。リンカーコアをゲットだ』

『ガーダー。リンカーコア回収完了』

「お疲れ様。じゃあセイバーは即時帰還。午後から仕事が入ってるからな。バスターも帰還、俺――ランサーと交代だ。ガーダーは引き続きよろしく頼む」

『『了解』』『おう、了解だ』

ソファに座って空間モニターってゆう画面越しに居るシグナム、ヴィータ、ザフィーラに指示を出すルシル君。わたしはシャマルと一

緒にルシル君が使った食器を洗いながら眺める。通信を切ったルシル君はソファから立ち上がって大人の姿、そして真っ黒な服――騎士甲冑に変身した。ついでに頭をキグルミのようなチーターに変えた。デザインはリアルやなくてデフォルメされた可愛いやつや。

「さて。じゃあ俺も出るよ。シャマル。はやてのこと、よろしく頼むよ。はやて、いってきます」

「ええ、任せて♪　あとコレ、ザフィーラのお昼よ」

「う、うん。いってらっしゃい。気ぃ付けてな」

ザフィーラ用のお弁当箱をシャマルから受け取って手を振るルシル君に手を振り返すと、ルシル君はその場から一瞬で消えた。転移ってゆう魔法や。わたしは振ってた手を膝の上に降ろして「ホンマにこれで良かったんやろか？」ポツリと漏らす。ルシル君たちは日夜戦ってくれてる。それもわたしを助けるために。

シグナム達からわたしの下半身麻痺の原因を聴いて早1週間ちょっと経った。

いきなりわたしの前で土下座するんやもんなぁ、あれにはホンマ驚いたわ。何度も頭を上げてって言うても上げてくれへんし。結局土下座したままのみんなから事情を聴いた。わたしの麻痺の原因は〝闇の書〟の呪いやって。でも別にそれで悲しんだわけでも恨んだわけでもなし。だってそれ以上に貰ったものがあるから。

「私は、私たちはこれからもはやてちゃんに生きていてほしいです。原因である私たちが言うのもなんですけど」

シャマルが後ろから抱きしめてくれた。シャマルの温かさと柔らかさが背中から伝わって来る。わたしは胸に回されたシャマルの両腕にそっと両手を添えて応える。思い出すのは事情説明を聴いた後のこと。ようやく頭を上げてくれたかと思えば、お願いがあります、なんてまた土下座するんやもん。

――我々は、主はやてを喪いたくありません。ですから、主はやてとの誓いを、申し訳ありませんが破棄させていただきたく思います！――

――はやてを助けるには闇の書を完成させて、はやてを本当の主にするしかないって！――

――ですから私たちに戦闘の許可をお願いします！――

それがお願いやった。わたしの麻痺を治す、最低でも進行を止めるためには"闇の書"を完成させる必要がある。そやけど完成には魔力、リンカーコアが必要やってことや。そのリンカーコア集めのために戦うことの許可が欲しいってことやった。

――それってリンカーコアを持ってる人に迷惑が掛かるってことやろ？　わたし、他人様に迷惑は掛けたくない――

そう言うたらルシル君にメッチャ怒られた。他人の迷惑より自分の命を優先しろ、って。それを皮切りにシグナム達からも懇願された。わたしの命を優先して考えてほしい、って。そやけどわたしは今の

生活がホンマに気に入ってた。みんながいつも一緒に居って、楽しくお喋りして、どこかに出かけて遊んで。それが崩れるくらいなら、たとえ短くても充実した生活を選びたかった。そやけど・・・。

――はぁ。はやての人格からしてこうなることは判っていた。だから俺は・・・――

そう、全ては手遅れやった。ルシル君は3ヵ月も前からリンカーコア集めをしとった。リビングに溢れるいろんな色に輝くリンカーコアが幾つも出て来た。聞けば総数２００以上。眩暈がした。ルシル君がいつの間にか大悪人になってたことに。しかもわたしの所為で。

――ちなみにコレらは全て魔法を悪用する犯罪者から頂戴した物だ。だから気に病むことはない。連中は自業自得だったんだ――

そう言ったルシル君は凶悪な笑みを浮かべた。わたしなんかの為にルシル君は罪を犯してしもうた。それが申し訳なくて。わたしは謝った。

――俺ははやてに生きていてほしい。それが俺の、俺たちの願いだ。だから俺たちは何だってする。せめてもの筋として罪なき人には手を出さない。出すのは、どうしようもない悪人ばかりだ。正直、悪人の魔力で闇の書を完成させ、はやての未来を繋げるのも嫌な話だけど、それでも・・・助けたいんだ――

ルシル君が困り果ててたわたしの手を取って、初めて辛く悲しそうな表情をわたしに見せた。そこまで想われたらもうアカンとは言え

へん。

――・・・判った。わたしも出来るならホンマはこれからもずっと、おばあちゃんになるまでみんなと生きてたい。そやから・・・よろしくお願いします――

（わたしはそうしてこの道を選んだんや・・・）

もちろんすべてが終わったら時空管理局ってゆう、次元世界での警察に自首するつもりや。たとえ悪人でも襲われた以上は被害者やし。それをみんなと約束したうえでこうして戦うみんなを見守ってる。ルシル君はランサーと名乗ってチーターの顔に変身して。シグナムはセイバーと名乗ってライオンの顔に変身して。ヴィータはバスターと名乗ってウサギの顔に変身して。ザフィーラはガーダーと名乗って狼の顔に変身して。ちなみにシャマルはヒーラーで、ヒツジの顔に変身して素顔を隠してる。

そんなみんなは公衆にはこう名乗ってる。楽園の番人、パラディース・ヴェヒター。言い換えると八神家の騎士、ってことらしい。

「優しいはやてちゃんですから辛いかも知れませんが。今は耐えてください。私たちの未来のために」

「そうやね。うん、みんなの覚悟の為にもわたしは生きやなアカンね」

わたしは改めて覚悟を決めた。生きよう、精一杯。みんなの為に。

ルシル君が出かけてから数十分後、「ただいま～！」ヴィータが帰

って来た。遅れて数分、「ただいま帰りました」シグナムも無事に帰って来てくれた。
リビングに入って来た2人にシャマルと一緒に「おかえり」って出迎える。そして4人でテーブルに着いてお昼ご飯。ヴィータは2回もお代わりした。ご飯の後、シグナムは1時間の仮眠をしてから非常勤講師として働いてる剣道場へ出勤。そんでヴィータはまだお休み中。夜からまたリンカーコア集めにいかなアカンから。

「はぁ。みんな体壊さへんかが心配や」

「一応みんな丈夫な体ですし、そう病気になることはないとは思いますけど。万が一病気になった場合はちゃんと休ませます。私とルシル君で治せるようなら治しますし」

「そんなスパルタせんでもええよ。ゆっくり横になって休ませやなな」

戦場のことは判らへん。そやけど家やったらわたしにも出来ることがたくさんある。みんなの帰る家を守ること。わたしにはそれくらいしか出来ひんけど、でもそれがわたしの役目や。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

俺はまずザフィーラの居る第４世界カルナログに赴いた。用としてはザフィーラに昼食を届けるためだ。カルナログの辺境の廃棄都市区画でザフィーラと合流場所を念話で決め、合流後は念入りにサーチャーや人の目が無いのを確認した後、合流したザフィーラに弁当

を渡す。

「待たせてすまない、お腹空いたろ？　マスターとヒーラーの合作弁当だ」

「すまぬ、助かる」

ザフィーラは人型から狼形態へと変身し、弁当をがつがつ食べ始める。それを横目に水筒のコップにお茶を注いでいると、合流する直前でばら撒いておいたサーチャーの魔術、イシュリエルに招かれざる客の姿が映り込んだ。

（こんな場所に一体何の用だ？）

とりあえずモニターを展開し、カルナログでの事件・事故を報じるニュースが無いかを確認する。と、「ビンゴ！」イシュリエルに映る男の顔の特徴と、放送されているニュースに出ている顔写真が一致。

「その男を討つのか？　この世界での担当は我だ。我が行こう」

「いいよ。ゆっくり昼食を摂っていてくれ。俺が行ってくるよ」

ザフィーラにそう告げ、頭部をチーターに変身させてビルを出る。目指すは隠れる場所を探しているらしい犯罪者の元。気配・足音を消し、背後から近づいて行く。そしてポンポンと肩を叩く。

「うひっ！？」

男はビクッと肩を跳ね上げ、前に飛び退いた。そして「管理局か！？」と俺へと体を向けた。その途端、奴は顔を真っ青にした。

「チ、チーターの被り物に２ｍの大槍・・・！　まさか、お前、近頃有名な・・・ランサー！？」

「ご名答。今ニュース観たけど、お前は魔法を使って一般人を襲い金品を奪ったそうだな。いかんな、そんなことをするのは」

ジャリっと一歩足を踏み出すと、奴は「ヒッ」と怯えを見せて後退。そして「頼む！　自首する、許してくれ！」と懇願してきたが、俺は首を横に振った。

「どんなに小さくても魔法を悪用した時点で標的だ。今のお前に委ねられる選択肢は、抵抗して撃破されてリンカーコアを出されるか、抵抗せずに痛みなくリンカーコアを出されるか、だ」

"エヴェストルム"をクルクルと回し、片方の穂先を犯罪者に向ける。奴は「なんでこんなことに・・・！」ガクガクと膝を震わせ、ついにはその場にへたり込んだ。抵抗の意思なしと判断した俺は警戒を怠ることなく歩み寄る。そして手を伸ばせば触れられるところまで来た時、「ふざけんな！」奴は手の平を向けて来た。グローブ型のストレージデバイスだと判断。

――舞い降るは、汝の煌閃（マカティエル）――

「いぎっ・・・！？」

奴が魔法放つより早く閃光系の魔力槍マカティエルを発動。奴の両手の平に打ち込み、そのままの勢いで背後の廃墟の壁に縫い付けてやった。さらに両太ももにもマカティエルを打ち込む。

「い、い〝い〝い〝ぁぁああ〝あ〝あ〝あ〝・・・！」

「無駄な抵抗をしなければ痛い思いをせずに済んだものを。お前は彼我の力量差を測れないほどのド素人か？」

魔力ダメージであっても痛みは存在する。しかも貫かれているというシチュエーションで精神的にもダメージが高い。だから奴は苦痛に満ちた表情で呼吸を荒く乱している。少々やり過ぎ感も否めないが、やってしまったものは仕方がない。

早々にリンカーコアを取り出して気絶させる方が双方にとって好ましいだろう。転移魔法を発動し、俺は奴の胸元へと腕を突き入れ、リンカーコアを掴み取ったまま一気に引き抜くと「あがぁ！？」奴は苦痛によって一瞬で気を失った。

「これでまた1つ回収だな」

赤く輝くリンカーコアを創世結界の1つ、"神々の宝庫ブレイザブリク"へと取り入れる。活動を開始した"夜天の書"は意思を持ち、はやてに寄り添うように浮遊し始め、呼べば転移して来てくれるようになった。だから今も呼べば来てくれるんだが・・・「私に何か

用か？」今はまだ"夜天の書"が起動していることを知られるわけにはいかない。

「カルナログ地上本部所属、陸士第１３３部隊です」

「パラディース・ヴェヒターのランサーとお見受けします」

「聴取を開始する前に貴様に言っておきたいことがある！」

３人の陸士隊員が俺を包囲していた。女性１人に男性２人。最後の男は一目見れば判ると言えるほどに正義感が強そうな顔立ちだ。ビシッと俺に指差して宣言してきたし。

「そうだが。何か？」

「貴様はあれか？　自分が法の番人になったつもりか？　正義の使者になったつもりか？　貴様や仲間がしているのは、そこの犯罪者と同じ犯罪行為だ！　犯罪で犯罪を取り締まろうなど俺は許さない！　人が人を裁いていい道理はなし！　取り締まる資格を持たない貴様らは悪！」

面倒なタイプが来てしまったものだ。法こそ絶対。法の下に犯罪者を取り締まる自分こそが絶対の正義。ああいう手前の奴はいつか正義にとり憑かれ暴走する。レジアス中将がいい例だ。

「自分が法の番人になったつもりか、正義の使者になったつもりか、人が人を裁いていい道理はない、か。何か勘違いをしているようだ

な、君は」

俺に突っかかって来た青年にそう言い返す。

「なに？」

「私たちが行っているのは正義ではない。法の番人にもなった憶えもない。いくら相手が犯罪者であろうとこうして襲っている以上は管理局法に則れば罪とされる。それくらい私たちは理解している」

「そ、そうだろう！」

「だが、人が人を裁いていい道理はない。これには反論させてもらう」

「何故だ！　罪を犯した者を裁けるのは唯一法だけだ！」

「捉え方の相違だな。なら訊こう。お前の言う法。それは誰が、いや何が創ったものだ？」

俺はそう問い質す。青年は「え？」と呆け、事の成り行きを見守っていた他２人は「あ」と漏らした。

「人、という答えは無いぞ。いま言っただろう？　罪を犯した者を裁けるのは法だけだ、と」

「あ・・・！」

「理解できたか？　人が人を裁いていい道理はない。違う。人だから人を裁けるんだ。法律然り判決然り執行然り。法律は人の手により創られ、判決は法に照らし合わせて人の手によって下り、執行は人の手によって行われる」

「それは・・・そうだが・・・！」

「いかなる世界でも、いかなる時代でも、人を裁くのは常に人だ」

法ではなく人が裁く。法の下に働き執行するのならその責任をしっかりと自覚していないといけない。

「私たちパラディース・ヴェヒターは悪を成しながらでも進まなければならない。そう、いかなる妨害があろうとも、だ」

――我（コード）を運べ、汝（アンピエル）の蒼翼――

背より12枚の剣翼アンピエルを出現させフワリと宙に浮く。「待て！」と制止して来る陸士隊員に手を振る。

『ガーダー。悪いが私は先に標的の場所に向かう。弁当箱は君が責任を持って帰ってくれ』

『承知した。武運を、ランサー』

ザフィーラに『ありがとう』とだけ告げ、俺は一気に高度を上げて

俺の標的が居る第１５管理世界アネアへ向かうために転移した。

Ｅｐｏｓｌ０犯罪者たちの秘密な宴～Ｔｈｅ　Ｄｅｓｐｅｒａｄｏ　Ｐａｒｔｙ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「さて。それじゃあ今回の仕事を発表する。心して聴いてくれ」

リビングに勢ぞろいしてソファに座っている家族みんなを見る。俺の脇には空間モニター。そこに表示されているのはこれから向かう世界の名、そして標的たちの名。

「って！　おいおい、今回の標的の人数が半端じゃねぇ！」

「えっと、えっと・・・軽く１００人は超えてますよ！」

「いっぺんに相手するつもりなんか、ルシル君！？」

ヴィータ、シャマル、はやてが非難の目を向けて来た。シグナムとザフィーラは無言。だが目でこう言っている。俺にすべて任せる、と。俺は頷いて応じ、「まずは話を聴いてくれ」と始める。これから俺たちが向かう世界は第３３無人世界。標的人数は総勢２００人。人数を見れば尻込みしてもおかしくはないだろう。

「名うての魔導犯罪者や悪名欲しがるフリーランスの魔導師どもが、裏社会のＶＩＰの招集の下にこの無人世界に集められ、空戦レースを開く。無法者たちによる戦闘行為ありの競宴、デスペラードパー

ティ。開催期間は3日。俺たちはそれにチームとして参加する」

「戦闘ありのレース、ね。これって全員からリンカーコアを奪えないんじゃないのか？」

「何故そう思う？」

「チームレースって組分けとかあんだろ？　当たる連中、当たらない連中も居んだろうが。そもそもあたしらパラディース・ヴェヒターの参加が許されてること自体がおかしい」

「私たちって一般の人たちには英雄視されてるけど、犯罪者たちにはとても恨まれてるもの」

ヴィータとシャマルがそんなことを言ってきたが、少し考えてみてほしい。

「いやだから俺たちも招待されたんじゃないか。今回のレースで俺たちの正体を暴き、なおかつ数にものを言わせてボコボコにしようって」

「「あ」」

ま、このレースに参加するために裏社会の魔導師を含めた魔導犯罪者にも手を出してきたんだ。招待状が来なければ乗り込む羽目になっていたが。よかったよ、正式な参加者として呼ばれて。ヴィータとシャマルからは軽い非難の目を向けられ、はやてにも「危ないこ

と禁止！」猛反対を受けてしまった。だが「もう少しなんだ、はやて」俺ははやての膝上に乗っている"夜天の書"を指さす。

「現在のページ数は３８１。管制人格が実体化できる４００ページまであと少しだ。今回の一件を完遂すれば確実に越す」

「それはそうやけど。今までのようにコツコツやるのはアカンの？」

はやては"夜天の書"の表紙を撫でながら本当に心配そうな面持ちで、弱弱しい声で訊いてきた。

「ここで一気に稼いでおいた方が良いと思うんだ。稼げるときに稼ぐ。俺たちパラディース・ヴェヒターの名は表と裏の社会に知れ渡ってるから。いつかは俺たちを恐れて犯罪が減る、かもしれない。それは良いことだ。だけど標的が少なくなればそれだけ完成が遅くなる」

「どうせ減るなら稼いだ後で、か」

「そういうこと。このレースで一気に稼ぎ、後々の標的減少でも困らないように」

本当は減ったところで問題はさほどない。こうして名を売っていけば、必ずと言っていいほど俺たちの首を獲って名を上げようという腕に自信のある馬鹿どもが現れるはずだ。そいつらが魔導犯罪者なら返り討ち、違えば拘束でもして撤退すればいい。

「なぁ、ルシル。レースってんだから入賞したら何か貰えたりするのかよ」

「一応賞金が1千万クレジット。あと優勝チームには願いを1つだけ叶える、というのもある。魔導犯罪者は裏社会の情報やコネクションと言ったものを。フリーランスの魔導師は働き口だな。己の魔法の腕を買ってくれる雇い主探しだ。

で、だ。その、願いを叶える、というのが俺たちの目的だ。俺たちの願いはこうだ。参加チーム全員のリンカーコアを差し出せ。開催側や参加チームは優勝チームの願いを果たさなければならない、という掟があると言う。その掟があるからこそ今もこんなふざけたレースが続けられている」

勝ちさえすれば一生遊んで暮らせるような願いを叶えることも出来るのだ。参加資格を得た者は必ず出場し、得られなかった者は飛び入り参加しようと躍起になるも追い返されるそうだ。

「わはっ。お前、すげぇこと考えんだな」

「でもそんな簡単に聴いてくれるとは思えないわ・・・。思いっきり反抗されそう」

「だろうな。だが願いを宣言した以上は果たしてもらうさ。あと優勝するまでの数レースの最中にもリンカーコアは回収する。何せ戦闘行為ありだ。文句は言われない」

「ルシル。お前、考えることがいちいち恐すぎ」

ヴィータにそう呆れられた。そんなヴィータたち守護騎士を見回し
「俺からは以上だ」と話を締めた。
「ま、そういうことならしょうがねぇよな。あたしはやるぜ」
「我も問題ない。ルシリオンの指示に従おう」
「私もそれでいいで～す」
「守護騎士一同、お前のプランに賛成だ、ルシリオン」
「ありがとう、みんな」
実行部隊である守護騎士の賛成は得た。が、一番重要な問題がまだ残っている。俺は「はやてのことなんだけど・・・」心配でしょうがないと言った風な面持ちでみんなを眺めていたはやてへと目をやると、シグナム達も彼女へ顔を向けた。
「5人1組のチーム戦だから、メンバー総出なんだ。俺たちが家を空けている間、はやてが1人になる」
「はやて1人にさせるなんてダメ！」
真っ先にヴィータがソファから立ち上がって両腕をバッテンにした。シャマルも「私も反対！　私が残ります！」って挙手。黙ってはいるがシグナムとザフィーラも、はやてが1人で留守番することに対

して反対とでも言うように苦い顔をしている。

「えっと、ええよ、それくらい。みんなが来る前、ルシル君と出会う前はずっと独りぼっちやったもん」

若干泣き笑いが入ってるはやてにそう言われ、ヴィータとシャマルははやての名前を呼び抱きついた。

「ルシル！　どうにかなんねぇのかよ！」

「ルシル君っ！　はやてちゃんを独りぼっちにするなんてあんまりよ！」

止まることを知らない俺への非難。俺は小さく溜息を吐いて「最後まで聴いてくれ」と2人を黙らせる。

「そうならないためのプランは用意してある。はやてを留守番させると1人になる。そうならないために、俺は異界英雄（エインヘリヤル）を召喚しようと考えてる」

「エインヘリヤル・・・、セインテストの使い魔さんね」

「ああ。みんなの信頼を得ているフェンリルを召喚するつもりだ」

「で、でもフェンリルさんを召喚したらルシル君、魔法使えんくなるんやなかった？」

「いや、その問題はもう解決してあるから心配しなくていいよ。で、どうだろう？　フェンリルがはやての側に居てくれれば問題かと思うんだけど？」

ジュエルシードの影響で魔力制限が緩んだ今なら、戦闘行為も可能なままで"異界英雄エインヘリヤル"を召喚できる。まぁ、少なからず使用魔力が減るが、雑魚相手（判っている今回の参加者の最高ランクはＡＡＡだ）　なら問題はないだろう。

みんなを順繰りに見る。シグナムとザフィーラはフェンリルの人（狼か？）の良さを知っているからか纏っている空気を和らげた。が、心配性のヴィータとシャマルは未だ完全に納得していないようだ。

「それとも・・・どっちかが残るか？」

「「え？」」

「フェンリルを戦力として連れて行ってもいい。招待状にはパラディース・ヴェヒターの皆様とあった。個人を指名していない。フェンリルを新しい騎士として名乗らせれば問題ないだろう」

フェンリルのコードネームはそうだなぁ。狩猟騎士ハンター、かな。などとそんなことを考えていると、「わたしは大丈夫や。フェンリルさんとお留守番してる」はやてが笑顔でそう言った。

「フェンリルさんとは付き合い長いしな。フェンリルさんと一緒に応援するから。みんな、頑張ってな。そして無事で帰って来てな」

そういうわけで、はやてはフェンリルと一緒に留守番となり、俺たちパラディース・ヴェヒターは３日間のデスレース、デスペラードパーティに参加するために第３３無人世界へ向かうことになった。その日の夕食は、「験を担いで、今日はカツや♪」豚カツ・牛カツ・チキンカツ・ハムカツ・エビカツという、カツのオンパレードだった。勝つとカツ。よく聴く験担ぎだ。そして深夜１時。俺たちはそっとはやての寝室を覗き、フェンリルと一緒に眠りについているはやてに「いってきます」と小声で挨拶してから、地球を後にした。

俺たちパラディース・ヴェヒターは次元転移を行って世界４つを跨いで、今回の戦場となる第３３無人世界へと辿り着くことが出来た。見渡す限り峡谷で、見た目は地球のグランド・キャニオンに酷似している。

唯一の違いと言えば峡谷内の切り立つ壁の内側には尖塔が幾つも突き出していることか。あれは空を飛ぶにも陸を走るにも苦労しそうだ。そんな移動に苦労しそうな峡谷こそがデスペラードパーティ、空戦レースにおけるコース。空からコース全体を眺めていると、

「来たな、魔導犯罪者（デスペラード）どもが」

「すげぇ。船があんなに来やがった。戦場みたいだな」

「まさしくこれより戦場になるだろうな」

空を見れば小型・中型の次元航行船が次々と降下して来ていた。降下し終えた中型の船より降りて来るのは裏社会で名を馳せるＶＩＰ

ども。中には世間に良い顔を晒している政治家なども居る。十数隻の小型の船からは魔導犯罪者が降りて来て、他の連中と再会を祝ったり喧嘩腰で睨み合ったりしている。

「それじゃあ行こうか」

「え？」

「ああ」

「おう！」

「うむ」

俺たちは地上でたむろしている犯罪者どもを挑発するかのごとく降り立つ。

「おい、コイツら・・・！」

「ふざけた動物の被り物・・・！」

「パラディース・ヴェヒター！！」

『うわぁ、アウェー感がすさまじぃ～』

『ちょっ、ルシル君。わざわざど真ん中に降りなくても・・・』

一気に騒然となる犯罪者ども。ウサギの頭をしたヴィータが殺気だっている連中をジロリと見回す。が、くるっとした真っ赤な瞳、ふわっとしたウサギ顔の所為で迫力も何もない。そしてヒツジの顔をしたシャマルが若干怯えを見せている。血に飢えた狼（犯罪者）の群れの中に放り込まれてしまったか弱い羊――シャマルの如く。それを想像するとちょっとばかり可笑しくなってしまう。

『コソコソするより堂々としていた方が騎士らしいだろ？　それに。襲われるようなら俺がちゃんと守るから』

『えっ、あ、うん・・・。その時はお願い、します』

俺の騎士甲冑の袖をキュッと掴んでくるシャマルを微笑ましく眺めていると、「よくも俺の仲間を！」と憤りデバイスを起動した連中が出て来た。どうやら以前俺たちに捕縛され管理局に引き渡された犯罪者の身内も居るようだ。

『相手にしなくていい。無視して先へ行こう』

みんなには相手にしないよう言って、招待状と一緒に送られてきたマップに記されていた宿泊施設へと歩を進める。ちなみに宿泊施設とは峡谷の最下流にある岩山を掘ったり削ったりして造った洞窟住居だ。地球におけるトルコはカットバキアの洞窟ホテルと同じようなものだ。

連中を無視して行こうとしたが当然の如く「シカトしてんじゃねぇよ！」問答無用で射撃・砲撃魔法で襲い掛かってきた。見逃してやろうと言うのに。彼我の力量差くらい測れ、っていうんだ。

「吹き荒べ、汝の轟嵐（コード　ラシエル）」

防性と補助の中級術式、竜巻を発生させるラシエルを発動する。ラシエルは射砲撃を全て粉砕、そして俺たちに攻撃を加えて来た馬鹿、無関係だった犯罪者どもも併せて「うわぁぁぁぁぁぁ！？」吹き飛ばした。

「私たちにケンカを売るならレース中でもいいだろう？　その方が私たちも買い易いし、な」

俺は地面に叩き付けられ苦痛に呻いて倒れ伏している犯罪者どもにそう言い放ち、宿泊施設に向かうために改めて歩きだす。俺たちが進む行く手に群がっていた犯罪者どもが道を開けていく。

「見たかよ、今の」

「デバイス無しで魔法陣も発動せずにあんなえげつない魔法を使ったぞ」

「あれがランサーだろ。恐ぇぇ」

「フンっ。俺の敵じゃねぇよ。レースで当たれば真っ先に潰してやる」

「いいや。僕がランサーを討つ。そして次元世界にこの僕、轟拳のパサートの名を轟かせ知らしめる！」

「ダサ。轟拳のパサート（笑）だってさ」
「なんだと貴様！　（笑）を付けるな！」
「やろうってか、おおう！？」
「おうおう、やっちまえ！」
「なんだ、レース前の余興か！？」
背後では馬鹿同士が戦いを始めた。俺たちは馬鹿騒ぎを無視して、俺たちに用意された宿泊施設の部屋に入る。キッチンが備え付けられ冷蔵庫もあり、トイレにシャワールームも完備。そしてベッドが6台。それでも十分床でゴロゴロ出来るほどの広さだ。と、まずは『全員そのまま』とくつろぎ始めようとしたヴィータを含めて全員に念話でそう告げる。
「なんだよル――」
「しっ」
俺の名前を呼ぼうとしたヴィータの唇に人差し指を当て黙らせてから部屋中を調べる。やっぱりと言うか何と言うか「盗聴器に盗撮カメラだ。ほら、こんなに」魔法で作られた物じゃなくて魔力探査に引っかからない機械だ。手の平に乗せたそれらに高圧電流を流して内部を焼き切ってやる。

あとついでこの部屋と隣部屋・廊下・外との壁の間、窓と扉にも結界を張った。これで外からの干渉は出来なくなり、盗聴・覗き見・不正侵入も不可。一応俺たち以外も部屋に入ることが出来るが、それにはある条件が要る。それはとても当たり前な事だが、今この世界に居る連中がその条件を果たせるかどうかは限りなく低い確率だろうなぁ～。

「よし、これでもう大丈夫だ。変装を解いても本名で呼び合ってもいい」

「あっぶねぇ」

安堵の息を吐いたヴィータは変身を解いてベッドへダイブ。シャマルもベッドに腰掛けて「ふぅ」と変身を解いて一息吐いた。シグナムとザフィーラもそれぞれ変身を解いてベッドに腰掛けていく。

「あらルシル君？　変身を解かないの？」

「一応パラディース・ヴェヒターの将を任されているから。いつ部屋を出る事になってもいいようにさ」

守護騎士ヴォルケンリッターの将はシグナムだが、楽園の番人パラディース・ヴェヒターの将は俺となっている。理由としては計画の発案者が俺であり、情報収拾・作戦立案も担当しているからだ。みんなの命を預かっている者としてどんな小さなミスも許されない。だから気を張ってる方がいい塩梅だ。ほら、早速この部屋に向かって駆けて来る足音が複数。こういう状況があるから変身したままで

いないといけない。

「ルシリオン」

立ち上ろうとしたザフィーラを手で制し「大丈夫だ」と言い、黙って入口の扉を見る。足音は次第に大きくなり、「この部屋だ！」と怒声も聞こえてきた。客ではないな。そしてガチャっとドアノブに手を掛ける音がし、シグナム達は焦ったように頭部をデフォルメアニマルへと変身させた。が、扉は開くことはなく。代わりに「うわぁぁぁ！？」外から複数の叫び声が聞こえてきた。

「馬鹿だなぁ。ほら、みんなも見てみるといい」

「一体何したんだよ、お前・・・？」

ヴィータに訊かれ、地面に倒れ伏している連中を窓から眺めながら答える。扉にトラップを仕掛けておいた、と。入室の際のマナーであるノック。それを無視して扉を開けようとすると発動し、扉に手を掛けた者やその連れを外へ強制転移させるというものだ。連中はノックせずに扉を開けようとしたためトラップの餌食となり、外へ転移、なかなかの高さから地面へ墜落した、というわけだ。

「ちなみにマナー通りにノックしトラップを免れたとしても、結界の効果で室内は見えないようになってる。だから変身を解いていても問題ないから、安心してくつろいでいてくれ」

そう言うとみんなの張りつめていた空気は緩み、変身を解いて改め

てくつろぎ始めた。俺も残りのベッドの1台に腰掛け休んでいると、また足音が聞こえ、それは部屋の前で止まった。
そしてコンコンコン、とマナー通りのノックのあと「パラディース・ヴェヒター様。組分け選考を行いますので、大ホールへお越しくださいませ」老人の声でそう言われた。部屋に置かれていた施設案内図を見、俺たち大ホールへと向かうことにした。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒ヴィータ†††

大ホールっつう場所でＡからＨブロックの組分け選考をやった。各ブロックに5チームに分けられて、トーナメント方式で1チームになるまでレースを続ける。で、各ブロックで優勝した8チームで決勝レースをして、それで勝ったら優勝っていう、まぁ何の捻りもない感じで進んでく。
あたしらはＢチームになって、同じＢチームになった他のチームの奴らは一喜一憂。やっぱルシルのことが相当恐いらしい。まぁ、それもしょうがねぇ話だけどさ。なんたってあたしらより先に次元世界に名を轟かせた無敗の騎士だからな。

「相手にとって不足はない。パラディース・ヴェヒターは、俺たちホーカーがぶっ潰す。首を洗って待っていろ！」

ホーカーって名乗った男4人女1人のチームがあたしらに戦意を叩きつけてきやがった。けどルシルとシグナム、ザフィーラはスルー。シャマルはルシルの隣に居ることで気が大きくなってるのか堂々と「どうぞお手柔らかに」と小さくお辞儀して通り過ぎてった。けどあたしだけは足を止めた。

「いいぜ。テメェらもそれはもう名のある魔導犯罪者なんだろ？かかって来いよ。あたしの相手になる奴はもれなくぺちゃんこに・・・潰してやるよ」

「「「「「っ！！」」」」」

本気の殺気を叩きつけてやる。こちとら数百年の年季があんだ。テメェらとは経験値が違うんだよ。あたしの殺気を直に受けたソイツらはちょっと後ろによろけた。そんで「何もんだよ、あんたら・・・」真っ先に挑戦状を叩き付けてきやがったリーダー格の奴が訊いてきた。

「知ってんだろ？　パラディース・ヴェヒター。テメェら魔導犯罪者を狩って、狩って、狩りまくるハンターだよ」

「バスター。置いて行くぞ」

「おう、すぐ行く！・・・テメェらに正々堂々は求めてねぇ。その代わりこっちも卑怯って言われようが構わねぇ手段で撃墜すっから覚悟しとけよ」

ルシルに応えて駆ける。背後からはあたしの殺気に巻き込まれた連中がザワザワ騒ぎ始めていた。

そんなこんなで選考会も終わって、あたしらに用意された部屋でルシルとシャマルが自前の食材（ルシルの創世結界から調達）で作った昼ご飯を食べた後、午後から早速第1レース開始となった。

全ブロックが別々のコースで一斉にレースをする。レース方式は基本的にリレーで、翔者の順はローテーション制。ちなみに第1レースでのあたしらの順番は、ザフィーラ、あたし、ルシル、シグナム、シャマルって順だ。

――シャマルは戦闘能力が低い。開始早々に乱戦に巻き込まれたら結構危ない。だから俺たちがシャマルより先に出て、他の連中に追いつかれない程のリードを広げた上でシャマルにバトンを回す――

――アンカーに回る前に敵を全滅させてもいいんだろ？――

――非殺傷設定での攻撃は全て許される。勝利条件はゴールのみ。他の翔者を無視してもよし、全滅させてのんびりゴールするもよし。殺しさえしなければなんでも許されるから、やりたいようにやればいいさ――

――殺しはしねぇ。はやての未来を血で汚したくないからさ――

それぞれの待機場所、峡谷の崖の縁に別れる前にした会話を思い出す。そうさ、あたしらははやての未来の為に戦ってるんだ。そこに穢れは必要ねぇ。

『さぁ、やって参りました、3年の一度の魔導の祭典、デスペラードパーティ！　最後の一組になるまで戦闘行為ありのデスレースを繰り返す！』

実況者らしき奴のハイテンションなその言葉に、参加する連中が「

うぉぉぉぉ！」って雄叫びを上げ始めた。ちょっと想像してたのと違う、この犯罪者の集会。もっと暗くて陰鬱として、殺気だった中でやるもんだと思ってた。

『わたくし、Ｂブロックの実況を担当します、ザック・キザシです。どうぞよろしくお願いします！　えー、それではスタートの前に各ブロック、全参加チームを紹介していきましょう！　Ａブロックのジャックさん』

『はい。Ａブロックの実況を担当する、ジャック・キザシです。このブロックには――・・・』

Ａブロック担当の実況者がＡブロックで競い合う参加チームのチーム名やメンバーの名前、それぞれ犯してきた罪状を紹介してく。どれもこれもクズみたいな連中ばかりだった。

こうやって全参加チームの名前や犯罪歴を知らせるのもパフォーマンスの一環ってわけだ。ふつふつと湧き上がってくる怒り。中には子供を拉致して労働力として売り捌くっていう、生かしておく理由が見つかんねぇほどのクズも居た。

（テメェらの面、ぜってぇ忘れねぇかんな）

次いでＢブロック。あたしらが居るブロックの紹介だ。真っ先に紹介されたのが、あたしらに突っかかってきたホーカーっつうチームだ。ソイツらもコードネームで、ハリアー、ハリケーン、タイフーン、テンペスト、ホットスパー、だ。奴らホーカーは名のある空戦特化の犯罪請負の傭兵らしい。あたしらにケンカを売った自信はそ

こから来てるみたいだ。

『さぁ！　この祭典に異色のチームが初参加！　楽園の番人パラディース・ヴェヒター！　3ヵ月ほど前に流星のごとく現れ、我々アウトロー、デスペラードを狩りに狩っている、戦闘特化のベルカ騎士！』

あたしらが紹介されて初めて周囲に居る、あたしと同じ第二翔者の連中が殺気立った。あたしの殺気に腰が引けてた連中も殺気立って睨んでくる。ああ、これだよ。緊迫してる中での狩り。腰が引けてる連中を潰してもしょうがねぇ。やる気を漲らせている中でそれを実力でぶっ潰して絶望させる。そして自業自得だってことを思い知らせてやるんだ。

『者ども！　仲間・身内がパラディース・ヴェヒターに捕まったのなら、ここで逆襲を成し遂げるもよし！　無関係な者もここで討ち取って名を上げるもよし！　コネを築いて協力関係を結ぶもよし！』

最初の2つは雄叫びで応えて、最後の協力関係云々には大ブーイングの嵐だった。こっちだって死んでも嫌だっつうの。テメェらのような奴らと協力なんてな。

こうして全ブロックの参加チームのメンバー紹介が終わった。どいつもこいつも狩り甲斐のあるクズばかりだったけど、中にはなんの犯罪歴も無い腕自慢・腕試しをしにきた奴も居たし、自立型の戦闘デバイスの開発者っていう会社員も居た。

『各ブロックの第一翔者よ、スタートの準備は万端か？・・・よー

しよし。各ブロック、各翔者も準備は万端！　法を恐れず、罪を恐れず、ただひたすら己が欲望に従ってきた無法者（デスペラード）たちよ！　叶えたい願いの為、いざ、最強・最速を目指せ！』

あたしら第二翔者の待機場所の頭上に大きなモニターが展開されて、スタート地点と、スタートを知らせるカウントシグナルも表示された。１０からカウントが始まって、０になったと同時にザフィーラたち第一翔者が一斉にスタートした・・・んだけど。

『おおっと！　Ｂブロックは早速戦闘開始だ！　パラディース・ヴェヒターのガーダーに、ホーカーのテンペストが襲い掛かったぁぁ！』

ザフィーラみたく筋肉質な男テンペストがザフィーラに殴りかかった。ザフィーラはそれを左の裏拳でいなしてカウンターの右ストレートをテンペストの顔面に叩き込んだ。その間に他３人の翔者が少しでも先に進もうって感じですっ飛んで行った。ザフィーラもまた無敗の拳闘士って名高い騎士だ。下手に手を出して返り討ちに遭うのが恐いと見た。

『なあ、ランサー。・・・ラン――・・・っと、思念通話はジャミングで使えないんだっけか』

モニターから得られる情報を思念通話で翔者に伝えてズルが出来ないようにするためって話だ。こんなところで律儀なんだもんなぁ。

（ま、ザフィーラが１位通過しなくてもルシルが追い上げるから心配しなくてもいいか）

アイツに狙われたら最後。もうどこにも逃げられねぇ。だからザフィーラ。そんな奴、徹底的にブッ倒しちまえ。モニターに映るザフィーラはテンペストの攻撃を余裕で全ていなして、次々とカウンターを食らわせていく。空戦特化って話だったけど、なんてことはない。ザフィーラの方がずっと強ぇ。

「くそっ、もうソイツに構うなテンペスト！　早くここに来いっ！」

ホーカーの第二翔者、タイフーンが怒鳴り散らす。あたしはその様子を鼻で笑ってやる。ザフィーラの勝ちを確信して、先行してる他3人が映ってる別モニターを観る。トップ3は峡谷内に張り巡らされている岩の尖塔に苦労しながらここに向かって飛んでいる。そんなトップを飛んでた3人に変化が訪れた。先行してた1人が岩陰に隠れて、ソイツは自分に気付かずに通り過ぎた2人に向かって砲撃をぶっ放した。

『おおっと！　チーム・死を呼ぶ銃士隊（ガン・コールズ・デス）のウッズマンが奇襲！』

ウッズマンって奴は拳銃型のデバイス2挺から魔力弾を撃ち続けて、攻撃を加えた2人にトドメと言わんばかりに攻撃を加え続けた。そんであらかた撃ち終えた後、飛行を再開した。けど黒煙の中から墜とされたと思った2人が無傷で飛び出してきて、ウッズマンと戦闘を開始。ウッズマンの仲間と、墜とされかけた2人の仲間があたしのすぐ側で汚い言葉で罵り合い始めた。

『やや！　ここでガーダーがウッズマンとの戦闘行為を中断し、よ

うやく飛行開始だ！』

ザフィーラは上手くテンペストを撒いてようやくスタート。テンペストも鼻血を拭きながらもスタート。かと思えば、ザフィーラは急反転して背後から迫って来ていたテンペストに回し蹴り。それを両腕ガードで防いだテンペスト。だけど奴の身動きが一瞬止まったその隙に、ザフィーラは鋼の軛を発動。テンペストを貫いて捕縛した。

『おおっと！　ガーダーの魔法が直撃！　テンペストは大丈夫か！？』

「テンペスト！！」

タイフーンが目を見開いてモニターに映る奴の名前を叫んだ。あたしは「先に仕掛けてきたテメェらの自業自得だ」って言い放ってやる。ザフィーラはいつものようにリンカーコアを回収するためにテンペストの胸に腕を突き入れて、そんで勢いよく引き抜いた。と同時に鋼の軛を解除、テンペストを足元に在る尖塔の上に墜とした。

『なんと！　ガーダーがテンペストのリンカーコアを引き抜いた！・・・そして、ガーダーは飛行を再開！　それに対しテンペスト、身動き1つありません！　これは大丈夫か！？』

あたしと同じ第二翔者全員がぐったりとして動かないテンペストの様子に唖然としてる。あたしはぐんぐん飛行速度を上げてくザフィーラを見守る。にしてもザフィーラも大変だよな。狼形態になりゃもっと身軽に動けるのに。けど狼形態は見せられねぇ。あたしらのホーム、はやての家の在る世界は管理外世界だけど、万が一にもパ

ラディース・ヴェヒターの事を知る管理世界の奴らが来た時、ザフィーラの狼形態からあたしらの事がバレちゃ笑い話にもなんねぇ。

『医療班がテンペストの元へ向かいます。・・・・えー、医療班から報告が入りました。テンペスト、意識喪失により飛行続行不能！　この場合、脱落宣言し失格となるか、第二翔者が最下位スタートするか、選べます』

「最下位スタート！」

タイフーンがあたしらを見張ってる主催者側の人間らしき黒服に向かって大声で宣言すると、その黒服はモニターに向かって何か喋り始めた。そして黒服は「続行を承認しました」って言って、タイフーンの最下位スタートを認めた。これでコイツはあたしがスタートしてから３０秒後にスタート出来るようになったわけだ。

『おおっと！？　リードしていた３チームによる戦闘に決着がついたようです！　戦闘を仕掛けたチーム・ガン・コールズ・デスのウッズマンが尖塔の１本に墜落！　チーム・ハンド・オブ・グローリーのリトル、チーム・ロストエンパイアのバロン・ジョゼフもまたダメージを負っているようだが、それでも飛行を再開！　上位２組はこの両チームで決まりか！？』

１レースにおける勝者は１位から３位までで、４位と５位は脱落。脱落チームはこのデスペラードパーティが終わるまでどこかに幽閉されるって話だ。そして次のレースで１位を決めて、２位と３位は脱落。このままウッズマンが飛行再開しないでザフィーラに追い抜

かれたら、３位であたしと交代だ。そしたらあたしは上位２位のアイツらをぶっ潰して終わりだ。

『チーム・ハンド・オブ・グローリーのリトル、チーム・ロストエンパイアのバロン・ジョゼフが第二翔者の待つ、シフトゾーンへ到着！　リトルからリングへ、バロン・ジョゼフからカウント・ヘンリーへ！』

先に到着した２チームの第一と第二の翔者がタッチを交わした。これが交代の合図だ。

「先に行かせてもらうぜ、ローマン」

「あばよ」

「くっ・・・！」

戦闘を仕掛けておいて返り討ちになったウッズマンの仲間に中指を立てた２人は崖の縁から飛び降りてコースの指定されてる高度９０ｍ以内に進入、第三翔者の待つシフトゾーンを目指して飛んで行った。それを見送るしかなかったローマンって奴は聞こえるくらいに歯軋りして「クソがッ！」叫んだ。モニターに映るローマンの仲間、ウッズマンはまだ動かない。と、「おお来た、来た」ザフィーラがウッズマンの所に来た。

『ここでチーム・パラディース・ヴェヒターのガーダーが元・先頭組のウッズマンの元へ！　これはもしや先程と同じように・・・？』

ザフィーラはウッズマンの存在に気付いて急降下。ローマンの顔が一気に青褪める。そうさ。それこそあたしらの目的なんだから。

『おお！？　ガーダーがウッズマンの胸部に腕を突き入れ・・・リンカーコアを引き抜いたぁぁぁ！！』

飛行を再開したザフィーラの映るモニターを横目に峡谷内を見下ろす。ローマンもまたタイフーンと同じように最下位スタートを宣言してるのを聞きながらザフィーラが姿を現すのを今か今かと待つ。っと、折り重なるように崖から生えてる尖塔の隙間からザフィーラの姿が見えた。

『ここでついにガーダーがシフトゾーンに到着し、第二翔者、見た目は幼いながらもその攻撃力は圧倒的と名高い鉄槌騎士、バスターと交代！』

「すまぬ、バスター。少し遅れてしまった」

「気にすんな。つかよくやったよ。リンカーコアを2つも手に入れたんだからさ。あとは安心して待ってろ。あたしが追いついて、そんでもってリンカーコアを奪ってやっからよ」

ザフィーラとタッチを交わして、あたしは崖の縁から飛び降りる。

「そぉら、行くぜッ！！」

ルシルの待つ第三シフトゾーン、そして先を行く2人を目指して、
あたしは全力で空を翔ける。

Ｅｐｏｓｌ再臨・遥かなる夜天を支える翼～Ａｄｖｅｎｔ：　Ｓｃｈｏｎｅｒ　Ｒｉｔｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

ルシル君たちが危ないレースに参加するために出かけての翌日、その夜。フェンリルさんと夜ご飯の後片付けをしてる時、"闇の書"がふわふわ飛んで来た。わたしが"闇の書"の主やって確かな自覚をして、そしてシグナム達が"闇の書"の完成させるために戦闘することを許可したら、こうやって意思を持ったかのように自分で飛ぶようになった。なんてゆうかペットみたいや。

「ん？　どないしたんや？」

そんな"闇の書"がわたしの右腕にすりすりってすり寄って来た。甘えてるような"闇の書"を、フェンリルさんと一緒に微笑ましく眺めながら後片付けを続ける。それから明日のご飯はどうするか話しながら後片付けを全部終えて、フェンリルさんとリビングのソファに座ってゆっくりしようとした時。

「うにゃ？」

今まで隠れてたフェンリルさんの狼耳がピョンと勢いよく立った。その間でも"闇の書"は何かを伝えたいんかわたしの周りを飛び回る。わたしは「早く話が出来るとええなぁ～」って、抱き止めた"闇の書"の表紙を撫でる。

「はやて。マスターから連絡。闇の書を転移させたいんだけど、いいかな？って」

フェンリルさんにそう言われてある考えが浮かんだ。それを確認するために「もしかしてこのことを伝えたかったん？」って返事がないのを判ってるけど"闇の書"に訊いてみる。と、返事の代わりやと思うけど"闇の書"はフワって浮いて、頷くようにコクリと傾いた。

「ん、そうか。・・・フェンリルさん、今から闇の書を送る、ってルシル君に伝えて」

「りょ～か～い♪」

フェンリルさんはルシル君と思念通話やけど話が出来るのがホンマに嬉しいようで、耳と一緒に出た尻尾をフリフリ。フェンリルさんはホンマにルシル君のことが好きなんやなぁ。フェンリルさんを眺めてると、わたしの前に浮いてた"闇の書"が、いってきます、って言うようにわたしの頬に一度すり寄った後、パッと消えた。ルシル君たちの所へ行ったんやな。

「はやて。マスター達ね、今日のレース、圧倒的大差で1位になって、リンカーコアをたくさん手に入れたって。しかも全員無傷で無事。良かったね♪」

フェンリルさんからそう報告された。無事で良かった、うん、良か

った。けど、それでもやっぱり心の底から素直に喜べへん。確かに相手は悪い人たちやけど・・・でも傷つけてるとなるとどうしても、な。

「はやては本当に優しいんだね」

「わぷっ？　フェンリルさん・・・？」

俯いとると、いきなりフェンリルさんに前からハグされて、頭を優しく撫でてくれた。

「マスター達にもすでに言われてると思うけど、優しさは確かに美徳だよ。でもね、自分を蔑ろにしてまで貫く優しさ。それは時に偽善と取られちゃう。何かを企んでるのかも、なんてね」

「そ、そんな・・・」

わたしはそんなつもりなんてない。ただわたしは、優しさでみんなが笑顔になるって信じてるだけ。誰かに優しさをあげれば、その誰かもきっと誰かに優しさをあげて、それは輪のように繋がってくれるって。

「はやてってさ。我が儘を言って周囲の人に嫌われたくないって思ってる節、あるよね？」

「え・・・？」

何を言われたんか判らへん。

「はやてはマスターや騎士たちと出逢う前は天涯孤独だった。しかも下半身麻痺ってデメリットを背負って。たぶん、それが大きな原因だと思ってるんだけど。孤独だから誰かと関係を持って、我が儘を言って嫌われたりでもしてその関係が壊れることがないように」

「あ・・う・・・」

違う。ってすぐに反論が出来ひん。フェンリルさんの言葉がグサグサ刺さってくる。

「でも、もういいんだよ。我が儘をいくらだって言ったって。はやてのことが大好きなマスター、騎士たち、私だって。はやてがどんな我が儘を言ったって嫌いにならないよ。まぁ、行き過ぎた我が儘だった時はしっかり怒るけど。それでも嫌いにならない。それ以上にはやてのことが大好きだから。だからいいんだよ、我が儘を言っても。だってはやてはまだまだ甘えていてもいい子供なんだから」

「っ！・・・あ・・・え・・・？」

温かなフェンリルさんの大きな胸に抱かれてる所為かな。涙が溢れて来た。母さんに抱かれてるような、シグナムやシャマルにも感じたことが無い、安心できる居心地の良さ。それから少しの間、わたしはフェンリルさんの胸に甘えた。フェンリルさんもずっとわたしを抱きしめてくれたし、頭も撫で続けてくれた。

「フェンリルさんってまるで母さんみたいや」

「ええ？・・・あー、そんな歳じゃない、って言いたいところだけど母親って言われてもおかしくないだけ生きてるしなぁ。それに・・・はやてのように可愛い子のお母さんなら大歓迎♪」

「おわわっ」

フェンリルさんがわたしの脇に両手を差し込んで持ち上げた。よく赤ちゃんにする、たかいたかい、や。それがちょう恥ずかしくて、でもなんか懐かしさが込み上げてきて嬉しいような楽しいような気持ちになった。

「はやてはまだ子供なんだから。自分の心に自由を求めていいんだよ」

「・・・・うん。ありがとう、フェンリルさん♪」

ソファに降ろされたわたしはフェンリルさんの両手を取って改めてお礼を言う。フェンリルさんは笑顔で「うんっ♪」って頷いてくれた。

「それじゃあお風呂に入って、今日は休もうか」

「あ、もうそんな時間か。腹減りヴィータが居らへんからつい夜ご飯の時間が遅くなるなぁ」

車椅子に乗せてくれたフェンリルさんと一緒にお風呂場に向かう。そんでフェンリルさんに脱衣を手伝ってもらって、お姫様抱っこされて浴室へ。

「じゃあ髪と背中を洗うね、はやて」

「お願いや」

髪をフェンリルさんに洗ってもらってると、ふと「そう言えばフェンリルさんと2人きりになるのって初めてやなぁ」そんなことを思うたから、目の前に在る鏡に映るフェンリルさんに向かってそう漏らした。

「そう言えばそうだ。いつもマスターが必ず一緒に居たもんね。それが当たり前なんだけど。・・・でもそれがどうしたの？」

「こんな時やからフェンリルさんに訊きたい事を訊いておこうかな、って」

「訊きたいこと？　うん、いいよ。っと、その前に、シャンプー流すから目を閉じてね～。・・・んで、今度はトリートメント～♪　コンディショナ～♪　ついでにマッサージ～♬　女の子だから髪の手入れはしっかりと～♫　お客さん、痒いところはありませんか～？」

「ないで～す♪」

フェンリルさんって髪を洗うのがホンマに上手。気持ち良すぎて眠

くなりそうなのを耐えて、「フェンリルさんって、ルシル君の使い魔になって長いん？」って本題を切り出す。

「うん、長いよ。マスターが赤ん坊だった頃、私は彼と出会った。その頃の私は、誰も主として認めず、従おうともせず、ただ己が思うままに生きていた。かつては主と敬い慕った人も居た。でもその人が死んでからは・・・」

鏡越しに初めて見る、フェンリルさんの浮かべた寂しそうな表情に、わたしは悲しくなった。

「今でも鮮明に思い出せる。マスターとその両親が私に会いに来た時のこと。その頃の私は狼の姿ばかりで居てね。自分の精神をコントロール出来る大人でも普通にビビるし、泣く子も気を失うって感じで畏怖と敬意の化身だった。

それでもそんな私を使い魔にしようとする人はたくさん居た。マスター達もそう。でも当時の私は誰かに付き従うつもりも無くて、いつものように牙を剥いて追い返してやろうとした。彼の両親はやっぱり腰を抜かして一瞬で諦めた。赤ん坊だったマスターも、他の子供の様に泣き喚くかと思えば・・・・」

「フェンリルさん・・・？」

フェンリルさんの表情が寂しげなものから嬉しそうなものに変わった。目をうるうるさせて、頬をお風呂の温かさとは別でさらに赤くさせた。

「マスター・・・、ルシリオンは私を見て笑ったの。どれだけ咆えても、牙や爪を見せつけても怯えることなく。それどころか突き付けた爪に触れてきたの、笑顔を容易くことなく、ね。かつてのマスターもそうだったのね。その所為かな。毒気が一気に抜かれちゃってね。でもだからってすぐに主認定はしなかった」

「なんでなん？」

「なんか悔しいじゃない。数千年と生きた畏怖と敬意の化身たるフェンリルちゃんが赤ん坊に恐れられず、触れられただけでコロッと参っちゃう、なんて」

「あはは。なんやそれ。意地っ張りやなぁ、昔のフェンリルさんは――・・・とゆうか数千年！？　フェンリルさんってそんなにお婆――っ、コホン、コホン。長生きさんなんやなぁ」

２０代前半くらいの外見をしてるフェンリルさんに、おばあちゃんって言うたら失礼すぎやって思い立って咳で誤魔化すことにした。

「？？・・・長生きだからこそ意地っ張りになるものなんだよ。でも、うん、今の私でも馬鹿みたいって思う。・・・はーい、洗い流すよ～」

「は～い」

髪を洗い終わったら保湿の為にタオルを巻かれて、次は背中を洗ってもらうことに。背中をゴシゴシ洗ってもらいながらも話の続きを

する。

「それからはマスターの事が気になってばかりでね。魔道で姿を消して見守ったり、時にはこの人間形態に変身して会ったり。気付かれないかハラハラしたけどバレなかったなぁ。楽しかったなぁ～」

体も洗い終わって、フェンリルさんにお姫さま抱っこしてもらって浴槽に入る。ちなみフェンリルさんは髪も体も洗わない。魔法で常に体を綺麗に保ってるってことらしい。

「それでマスターが5歳になった時、透明になってた私に気付いたの。マスターは生まれつき膨大な魔力と魔道における天賦の才を持ち合わせた、すでに最高クラスの魔術師だったからね。ま、その所為で両親からは酷い扱いされてたけど・・・」

「え？　なんて・・・？」

最高クラスの魔術師、って言葉の後の声が聞こえへんかったから訊き返してみた。そやけどフェンリルさんは「ううん、なんでも」って首を横に振るだけ。

「でね。その時、マスターは何て言ったと思う？　久しぶり、って言ったの。赤ん坊だったから憶えているはずがないのに、出会った時の姿は本来の姿の狼形態だったのに、それでも・・・彼は私を憶えていた。すぐに狼形態に変身してもやっぱり怯えなくて、私を綺麗だって、カッコいいって褒めてくれた。それが決定打だった。その瞬間、私はルシリオンをマスターとして認可した。ううん、それ

は恋だった。恋をして、私は彼と一緒に居たいって思うようになった。」

フェンリルさんはもうデレデレ。わたしの聴きたいことの前置きにしては長かったなぁ。まぁルシル君とフェンリルさんの出会い話もまた知れてよかったと思う。

「あのな、フェンリルさん。ルシル君ってどんな子やったん？　その、わたしと出逢う前の・・・」

それが聴きたかったこと。ルシル君からは家族がもう居らんこと、今まで旅してたことしか聴いてへん。本人に訊くべきなんやろうけど、なんや訊き辛くて。

「良い子だったよ。あとすっごくお姉ちゃん子でね。ゼフィランサスっていう名前なんだけど。もしかしてお姉ちゃんが初恋なのかもって思えるくらいに。と言うよりはシスコン？　お姉ちゃん大好き、妹ちゃん――シエルも大好きでね～。ちょっと行き過ぎじゃない？　って思うようなこともたくさんあったよ」

「うわぁ、想像できひんなぁ。ルシル君がシスコンなんて。でもそれくらい良いお姉さんと妹さんやったんや――・・・っ！」

わたしは口を噤んだ。もうその家族が居らんことを聞いてるから。それからルシル君の友達のこととか聴いた。イヴさん、シェフィさん、フノスさん、カノンさん、レンさん、フォルテさん、ジークさん、カーネルさん、セシリーさん、ステアさん、アリスさん。すご

く仲が良かったって。その子たちは今どうしてるんか訊いたんやけど、訊かんければ良かったって後悔した。ルシル君は家族どころか友達すらもすでに喪ってた。

「・・・周囲に優しくて、自分に厳しくて、気高くて、でもどこか抜けてて、友達・姉弟妹思いで、全てに一生懸命で、しっかりと目標持ってて・・・。そんなマスターだから私は彼に恋をして、そして自分の何を犠牲にしても彼を守るって決めた。はやて。マスターの事は信じていいよ。使い魔目線でもハッキリ言える。彼は・・・良い子だよ」

「うん。それはもう知ってるよ。ルシル君は良い子やって」

「そっか。それは嬉しいことだよ♪」

機嫌が最高にまで良くなったフェンリルさん。楽しいお風呂の時間も終わって、フェンリルさんに髪を乾かしてもらっとると「おお？　おかえり」"闇の書"がわたしの目の前に転移してきた。膝の上にそっと降りた"闇の書"の表紙に触れたら「んん？　なんや変わったか・・・？」行きと帰りで違う感じやったから、そうポツリと独りごちた。

「お、さすが闇の書の主。闇の書の魔力量に変化しているの、気付いたんだ」

フェンリルさんにそう言われて、「そうやったなな」その変化に納得した。"闇の書"はルシル君たちが得たリンカーコアを蒐集しに

行ったんや。その分の魔力が増えてて当たり前や。とりあえずどれだけのページが増えたんやろ、って思うてページを開こうとしたその時、

≪４００頁まで蒐集されました。管制人格の起動、および具現化を行えます。共に主の承認が必要となります。承認しますか？≫

"闇の書"から外国語（英語やないやつ）が発せられた。聞き覚えのない外国語やのにその意味がハッキリと理解できた。これも魔法とか主の恩恵みたいや。

（管制人格の起動と具現化。シグナム達に聞いてた通りやな）

"闇の書"本体でもあって守護騎士の最後の騎士でもある、管制人格。４００ページ以上集めれば起動させることが出来るって。わたしが待ち望んでた最後の家族。わたしは考えるまでもなく、「承認します」って告げた。

≪闇の書の主の承認を確認。闇の書の管制人格の起動を開始≫

"闇の書"から強烈な光が発せられた。あまりの眩しさに手でひさしを作って細めにする。まばゆい光の中、女の人の輪郭が足の方から現れていくんが判った。そして光も収まってきて、ひさしを作ってた右手を降ろす。

「お初にお目にかかります。我が主。私は闇の書の管制人格にてございます。主の承認の下、無事に起動することと成りました」

そこには初めてわたしの前に現れたシグナム達と同じように片膝立ちして頭を下げてる女の人が1人居った。顔は俯いてて見えへんけど、髪はルシル君と同じ銀色で、長さも同じくらい。

「うん、初めまして。わたしは八神はやてって言います。とりあえず顔を上げて見せてくれへんかな」

「はい。我が主はやて」

その女の人が顔を上げる。ドキッとするくらいにとても綺麗な顔立ち、目は深紅って言うんかな？　銀色の髪と合わせてホンマに綺麗で・・・。みんなに聴いてた通りの外見やったけど、想像以上に綺麗で。見惚れてたら、「はやて」わたしの隣に座るフェンリルさんに名前を呼ばれてハッとする。

「えっと、シュリエルリートさん・・・？」

「・・・その名はかつての主から頂いた物で、今でも名乗っていいのかと迷っています」

「え？　迷って・・・？」

「・・・すでにご存じでしょうが、この名前を授けてくれたのはオーディンと言う方でした。私にとって、いえ、守護騎士全員にとってとても大切な方で、心より慕うに相応しい方でした」

「うん。みんなから聞いてる思い出話から強く感じてたよ」

「ですが我々は、そんな彼を最後までお守りすることが出来ませんでした。最後まで生き残ることの出来たのは私だけであったのに、最後の最後で私が下手を打ってしまい、彼を死なせてしまいました。それ以降、私の胸の奥に晴れることのない後悔ばかりが渦巻いています。騎士たちは私を責めませんでした。オーディンを死なせてしまった罪は全員に有るのだ、と。ですが・・・！」

その時のことを思い出したんかシュリエルリートさんが泣きそうな顔になった。見てるこっちも泣いてしまいそうになるほどの辛そうな顔で・・・。

「で、でもシュリエルリートって名前は大切なものなんやろ？　そうやったらその名前を名乗ってあげやな。たぶんそれは名前を付けてくれたオーディンさんの為でもある、ってわたしは思うよ」

わたしの勝手な想像やけど、オーディンさんとルシル君は全く同じ性格で人格やってことをみんなに聞いてそう思うんや。そう言うとフェンリルさんも「私もそう思う～」って同意してくれた。

「私もオーディンに仕えていたからよく判る。はやての言う通りオーディンもきっとそう思うよ」

「フェンリルさんもオーディンさんに仕えてたんやなぁ。・・・あ、フェンリルさんが昔好きやったってマスターってオーディンさんの事やったんや」

「え？　あ、うん、まあね」

わたしにしては冴えてるわぁ。ルシル君ってもしかしてオーディンさんの生まれ変わりなのかもしれへんな。

「ねえ、シュリエルリートさん。シュリエルリートさんかて名乗りたいんやないの？　それやったらそれでええと思う。綺麗な名前やよ。シュリエルリート。オーディンさんがあなたのことをどれだけ大事に思うてたかよう判る」

名乗りたくないんならそもそも迷うなんてことはないはずや。きっぱり拒絶すればええんやもん。ううん、きっとその名前がホンマに大切やからこそ迷うんやな。シュリエルリートさんは俯いて「・・・オーディン・・・。私は・・・」片膝立ちから両膝立ちになって両手を胸に添えた。わたしとフェンリルさんは、シュリエルリートさんが自分のことに納得がいくまで見守ることにした。とは言うても１０秒もせんうちにシュリエルリートさんは顔を上げたけど。

「・・・主はやて。ありがとうございました。では改めて自己紹介を。支天の翼、シュリエルリート。主オーディンより賜れたこの名と二つ名の下、彼と同じ意思を持たれる貴女を支え、護り、共に歩むことを誓います」

もう一度片膝になったシュリエルリートさんが真剣で、凛々しい表情でわたしにそう告げた。そんなシュリエルリートさんにわたしが出来る事。それは・・・。

「うん。よろしくお願いします、シュリエルリートさん♪」

笑顔で右手を差し出す。すると「本当に彼と同じ・・・」そんなことをボソッと呟いた後、シュリエルリートさんも「はい。よろしくお願いします。主はやて」笑顔でわたしの右手、握手に応じてくれた。その笑顔にまたドキッとした。凛々しい顔は綺麗で、笑顔はホンマに可愛ええ。シグナムに似てると思うてたけど、シグナムの笑顔は綺麗やからなぁ。まぁわたしは凛々しい笑顔なシグナムも好きやけど。

「じゃあ一応、私も自己紹介ね。マスター、ルシリオンの使い魔で、名をフェンリル。マスターが帰ってくるまでの間、よろしく」

「あ、ああ。よろしく頼む」

フェンリルさんとシュリエルリートさんも握手を交わした。フェンリルさんに立たされたシュリエルリートさんもソファに座ることに。わたしを真ん中にして、右にシュリエルリートさん、左にフェンリルさん。

「シュリエルリートさん。わたしのことは、はやて、って呼び捨てでええよ。あと敬語も無用や。みんなにもそう伝えてあるし」

「あ、申し訳ありません。基本私は主に対しては敬語ですので。主はやてと呼ばせて頂きたいのですが・・・」

「あぅぅ、なんでぇ〜？　オーディンさんには主って付けてへんやん」

シュリエルリートさんはさっきから、オーディン、って呼び捨てやんか。

「あ、それは、その・・・仕方なくと言いますか。初めて会うタイプの方でしたので驚きまして。それに、初めて人らしい扱いを受けて嬉しかったものですから、つい・・・」

照れ笑いを見せたシュリエルリートさん。フェンリルさんがそれを見て「くっ。ここにもか、ライバル・・・！」悔しげに呻いた。一体なんのライバルやろ？

「まぁここで無理強いしてもええことあらへんな。出来ればいつかはシャマルやヴィータみたく、畏まらんへんようになってもらいたいな」

「その辺りは・・はい、努力します」

「ん。そんで明日、シュリエルリートさんに街やお店を案内やっ♪」

「おお！」「はいっ」

明日の予定も立てたところで今日はもうおやすみや。フェンリルさんはルシル君のベッドで寝ることになって、シュリエルリートさんはわたしと同じベッドで。シャマルのパジャマに着替えたシュリエ

ルリートさんと向かい合うように横になって一緒に布団に入る。

「そうでした。言っておかなければならないことが。主はやて」

「ん？」

「騎士たちと同じく、私に敬称は必要ありませんよ。それと、シュリエル、とお呼び下さい。オーディンもまたそう呼んで下さってました」

「シュリエルやね。うん、判った。シュリエル♪」

シュリエル（まるで天使みたいや）に抱きつくような体勢になって、「お休み、シュリエル」わたしは安らぎを得ながら眠ることが出来た。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒？？？？†††

『うん。ちゃんと具現化したよ。夜天の書の管制人格、シュリエルリート。はやてと自己紹介も交わしたし。で、今は仲良く同じベッドで眠ってる、と。報告は以上ですっ♪』

八神はやての護衛兼お世話係として〝英雄の居館ヴァルハラ〟より召喚された私、フェンリルは、私の愛おしき男性にしてマスターであるルシリオンへとそう報告した。リビングからはやての部屋を覗き込んで、静かに寝息を立てているはやてとシュリエルの様子を伺う。２人は向かい合うように眠ってて、シュリエルがはやてを抱き

しめるような形だ。

（まさかこんな他愛も無いことを報告する日が来るなんてね）

でもこうして再びマスターの役に立てることが出来るなんて、私はとっても運が良い。たとえ私が本物でなくても、だ。私はマスターの創世結界の1つ、"ヴァルハラ"に登録された使い魔――"異界英雄エインヘリヤル"だ。

オリジナルと全てが同じであっても、所詮はフェイク。こうして得た嬉しい記憶も全てオリジナルに引き継がれることはない。でもまぁ嬉しいことには変わりない。それほどまでにオリジナルの私は魔術師殺しでしか、マスターの役に立てなかったんだから。

『そうか。それは良かった。これでシュリエルにも楽しい生活を送らせる事が出来るな。先の次元世界ではありえなかった時間を彼女にも』

マスターが本当に嬉しそうに言う。マスターが嬉しいと私も嬉しくなって、小躍りしちゃいたくなる。

『とりあえずフェンリル。シュリエルが目覚めた以上、お前の戦闘能力を一部返還させてもらう』

『了解です、マスター。というか、そもそもこんなに必要なかったよ、魔力。魔術・魔法の無いこの世界の住人相手、ううん、魔導師でも負けるほど私は弱くないんだから』

『判ってるよ、それくらい。何事にも念の為、だ』

シュリエルっていう戦力が活動できるようになった今、私ひとりが頑張る必要はなくなった。だから私がこの世界に存在するのに必要な魔力を還すのは当たり前。一応私を含めた"エインヘリヤル"はマスターから魔力を供給しなくても、大気中に在る魔力から供給して存在固定が出来る。けどどうしても全ては外からは賄えず、マスターに依存することになる。

特にこの世界、地球ではより深刻。だってこの世界、魔力が薄い。私のように魔力を食う高位に"エインヘリヤル"にとっては辛いから、マスターからの魔力供給量も多くなる。それなのにそんな私を、自分の使用魔力が減衰するにも拘らず召喚した。それだけ私を信頼してくれているという事だって解る。だからこそマスターの期待に応えたい。

「んあっ・・・!?」

いきなりこの身を構成する魔力が減らされてビクッと感じてしまった。はやて達を起こさないように慌てて口を両手で塞ぐ。でも足が震えて立つことが出来ずその場にへたり込んでしまう。ドキドキと早鐘を打つ偽りの心臓の鼓動を強く感じる胸に手を置く。

『それじゃあもうしばらくの間、はやての事を頼んだぞフェンリル』

『りょ、了解です・・・』

マスターとの念話が切れる。少しの間そこで座り込んで、ようやく

鼓動が治まってきたことで立ち上がる。目指すはマスターが居ない間、私が体を休める場所であるマスターの部屋。リビングを出て廊下を歩いてマスターの部屋へ。ガチャっと扉を開けて部屋の中に入って「すぅ～～はぁぁ～～」深呼吸。うん、マスターの香りだ。私にとってはどれだけ微かだろうが、狼としての鼻の良さでマスターの香りを嗅ぎ分けることが出来る。

（ん？　いま誰かが私のことを変態とか言ったような気が・・・）

気の所為だと思い、私は裸になって昨日も寝たマスターの部屋にダイブ。ボフッと柔らかいマットが私を受け止めてくれた。そして私は目を閉じ、「おやすみなさ～い」遠き地で頑張っているマスターに向かって挨拶。そのまま眠りについた。

渦巻く曇。降るのは雪。アースガルドへ繋がる唯一の道を有する世界であるビフレストはイーヴェンティノン平原。広大な平原はいま雪が降り積もっている。

「戦って・・・フェンリル・・・。もう死んじゃうあたしに代わって・・・」

「アトリ様！　嫌です！　死んでは嫌です！　わたくしを置いて逝かないでください！　わたくしは・・・フェンリル狼は、これまでもこれからも・・・貴女さまだけの使い魔です！　貴女さまが居なければ私に戦う理由は・・・！」

「そんなこと言わないでフェンリル。・・・本音を言えばマスターの為にじゃなく、この世界の為に戦ってほしいんだけど・・・」

「嫌です！　わたくしの力を恐れ、討伐しようとした者共の血統の力になるなど。わたくしは、アトリ様――貴女さまだからこそ、この力を使っているのです！」

わたくしが抱えているのは1人の女性、アトリーズ・セインテスト・アースガルド。両前腕・両足を凍結粉砕されたという惨たらしい姿。短くも艶やかで美しかった銀の髪もまた所々が凍り、紅と蒼の瞳は虚ろで、わたくしを視界に捉えているかも怪しい。

砕かれた部分から徐々に全身へ回って行く凍結。このままでは胴体、頭部にまで凍結が侵食していく。わたくしのルーンで解除しようとしても、この凍結魔術の前に無効化されてしまう。憎くて仕方ないけど、さすがは現在において最強の魔術師と謳われているシルヴィア・プレリュード・ヨツンヘイムの魔術。ＥＸランクの氷雪系魔術は伊達ではないということだ。

「そう言うと思ったから今まで言わなかったのよ。でもこうしてあなたを残して死んでしまうことになった今だからこそ・・・お願い。あたしの生まれ育ったあの世界、アースガルドを護って、フェンリル」

「貴女さまが居なくなったアースガルドなどに興味はありません！」

わたくしの全てはアトリ様の為に。アトリ様こそ至上。アトリ様が

居ないのであれば、アースガルドが滅ぼうが、このままわたくしが死のうが一向に構わない。

「・・・・ねえ、フェンリル。いつか、あたしのようにあなたに笑いかけてくれる人が現れて、そしてあなたの力を求めたら、その時はその人と一緒に戦って。お願い、フェンリル。あなたの初代マスターとしての最期のお願い・・・、ね」

「アトリ様ぁぁぁーーーーーーっっっ！！！」

そして凍結が全身に回り、アトリ様は粉々に砕け散った。

「――っ、アトリ様・・・！　・・・・・・エインヘリヤルが夢を観るなんて・・・」

ガバッと体を起こして周囲を見回して、ここが戦場じゃなくてマスターの部屋であることを確認。汗で顔に張り付いた前髪を払って自嘲気味に苦笑する。夢に観たのは私のかつての主、アトリーズ・セインテスト・アースガルドの死に際。大戦が始まってから４００年後、セインテスト王家から輩出された魔術師。私が初めてマスターとして認め従い、心より敬い、慕い、愛した女性。

（はやてに、かつての主とかそんなことを話した所為か・・・）

私が話したかつての主と言うのがルシリオン（オーディン）のことだってはやては

勘違いしてたけど、実際はアトリ様のことだ。アトリ様が亡くなってからは戦場や人目のある場所を離れ、住処としていた洞穴に閉じ籠った。そしてマスターと出逢うまでずっとそこから出ることはなかった。

（私はオリジナルのフェンリルじゃないけど、それでもマスターを助けることが出来る力を持っている以上は・・・何をしても守って見せる）

アトリ様のように無念のままでマスターを死なせない。必ず"堕天使エグリゴリ"との戦争を終結させ、マスターを"界律の守護神テスタメント"より解放し、オリジナルの私の元――アースガルドはグラズヘイム城へと還らせる。

「・・・・すんすん。あ、良い香り」

両手を胸に添えて決意を新たにした時、部屋の外から良い香りが漂ってきて、強張っていた体が弛緩した。人の耳じゃなくて私本来の狼の耳を立てる。聞こえて来るのはトントントン、という包丁の音。はやてが朝ご飯を作ってる音だ。

ベッドから降りて膝丈のニットワンピースにレギンスへと変身(きがえ)て、はやての居るリビング・ダイニングへ向かう。台所に立つのは、「おはよう、はやて。シュリエル」の2人で、はやては味噌汁を作っていて、シュリエルはサラダを作っているよう。

「おはよう、フェンリルさん」

「おはよう」

手伝えることがあれば手伝いたいけど、残念ながら私に家事能力は無い。元が狼なだけに何を学んでも上手く行かない。だからもう家事を覚えるのは諦めた。大人しくダイニングテーブルに付いてはやてとシュリエルの後ろ姿を眺める。時折チラッと見えるシュリエルの横顔は幸せに満ちていて、普通の生活が出来ることが本当に嬉しいって言った風。

「よし、出来た。フェンリルさん。料理運ぶの、手伝ってくれるか」

「うんっ」

白いご飯にお味噌汁、目玉焼き、焼き魚、お漬物。で、私にだけ「ウインナーと厚切りベーコン・・・」こってりした物が1皿追加されてた。はやてを見ると、「ん？」なんの疑問も持ってない笑顔を向けて来た。

「ああ、うん、ありがと。こってり大好き。狼だから」

「どういたしまして♪」

本当はそれほどでもないけど、はやての優しさにケチは付けたくないから黙っておく。3人でテーブルを囲んで朝ご飯を頂いた。

†††Ｓｉｄｅフェンリル⇒はやて†††

シュリエル用の服を買うためにわたしの部屋でシュリエルのスリーサイズを測る。やっぱり見た目通りにすごい数字やった。出るところはちゃんと出て、へこむところはちゃんとへこんでる。モデル体型って奴やな。シグナムもそうや。シャマルは・・ちょう違うかな、うん、大きいけど。

「サイズは測ったっと。次は騎士甲冑のデザインやったな」

「はい。お願いします」

シグナム達の騎士甲冑のデザインもわたしがそう。

「そう言えば、わたしの考えたデザインって、オーディンさんと丸被りやったって話やけど・・・」

「あ、そうですね。私も騎士たちが初めて騎士甲冑へと変身した様子を見ていましたが・・・。私も驚きました。デザインや色合いまで全てが同じでしたから」

そう。オーディンさんが昔みんなに考えてあげた騎士甲冑と、その事を知らんわたしが考えた騎士甲冑のデザインが丸っきり同じやった。

。―。―。回想です。―。―。

「うん、出来た！」

スケッチブックにみんなの騎士甲冑のデザインを描いた。わたしはみんなを戦わせるつもりなんかあらへんから、鎧やなくて甲冑らしい服にした。みんなもそれでええって言ってくれたしな。シグナムとザフィーラはカッコよく、ヴィータとシャマルは可愛くそして女の子らしく、を心がけた。我ながら会心の出来やと思う。

「なあ、みんな！　騎士甲冑のデザイン、これでええかな？」

リビングに揃てるはずのみんなの所へ向かう。ヴィータは扇風機の前で「わ～れわ～れは異世界人だ～」とか言うてて、シャマルは「ヴィータちゃん、邪魔ぁ～」うちわで自分を扇いでて、シグナムはダイニングで麦茶を飲んでて、ザフィーラはいつものようにソファの側に狼の姿で座ってる。

「騎士甲冑できたの、はやて？」

真っ先にわたしの所に来たんはヴィータで、「見せて見せて♪」目を輝かせてる。そんなヴィータと一緒にリビングのソファに行って、集まったみんなにスケッチブックを見せる。まずは「シグナムから や」シグナムの騎士甲冑のデザインを描いたページを、ソファに座るシグナムに見せた。さぁ、どんな感想でもええよ。気に入ってくれたら嬉しい。気に入らんとこがあれば要望に応えよう。

「「「「「っ・・・！」」」」」

「・・・・ん？　どないしたん？」

わたしの描いたシグナムの騎士甲冑デザインを見てるみんなは目を丸くしてて。わたしは「気に入らんかった？」って不安げにそう尋ねた。

「あ、いえ。私はそのデザイン好きですよ、はい」

「ホンマに？」

「ええ、本当です」

どこかぎこちない微笑みを浮かべるシグナム。なんや気になるところがあるんなら言ってほしい。そう思うて、もう一度訊こうとした時、「ねえ、はやて。あたしのは？」ヴィータに先を促されたから、一応全員のデザインを見せてから訊くことにした。

「ヴィータのは・・・コレや」

赤を基調としたドレス風の騎士甲冑。ヴィータがおもちゃ屋さんで一目惚れしたうさぎのマスコット、のろいうさぎを帽子の両側に付けてみた。これもまたかなりの自信作なんやけど・・・。

「マジかよ・・・」

「あ、アカンかった？」

「ち、違う！　そうじゃないんだよ、はやて！　あたしもソレすげぇ良いと思う！　つうか、はやてが考えてくれた騎士甲冑なんだ、

嬉しいに決まってるじゃん！」

慌てたようにそう言うたヴィータ。それが本音か建前かくらいは判る。ヴィータはホンマにこの騎士甲冑のことを喜んでくれてる。そやけど、何かが引っ掛かってるっぽい。

「あの、はやてちゃん。私とザフィーラの騎士甲冑はどのようなデザインなのでしょう・・・？」

「え、あ、うん。２人のはコレや」

シャマルは前線で戦うんやなくて後ろでみんなの補助をするって話を聴いたから、みんなの物とは違って動き易さやない、女性らしさを追求したデザインにしてみた。ザフィーラはガッツリ戦う騎士やってことで動き易さと男性らしさを考えて作ってみた。シャマルとザフィーラもまた、わたしの考えたデザインに何か思うことがあるみたいで、ザフィーラは「ふむ」とひと頷き。シャマルはハッキリと驚きを見せた。

「なぁ、みんな。さっきから気になってたんやけど。このデザインに何か思うことあるよな。なんかあるんなら何でも言うて。わたしは怒らへんし、へコまへんから」

そう言うと、みんなは顔を見合わせてから、ヴィータが代表してわたしに訊いてきた。

「はやて。あたしらの騎士甲冑のデザイン、はやてだけで考えた？」

「う、うん。そうやけど。なんで？」

ヴィータにそう訊き返すと、「実は――」シャマルが話してくれた。わたしが悩みに悩んで考えたみんなの騎士甲冑のデザインが、みんなの昔の主オーディンさんと丸っきり一緒やったってことを。

「オーディンさんも、わたしと同じデザインを考えてたんやなぁ～。すごい偶然やな♪」

「偶然で済ませれるのか、これ・・・？」

「確率で言えば天文学的だろうな」

「唯一の違いと言えば、ヴィータちゃんの帽子のうさぎちゃんよね。オーディンさんの時は無かったもの」

「無くて当然だろう。ヴィータのアレはこの世界、この時代での代物だ。主オーディンの時代では存在しえないのだからな」

みんなは奇跡とも言えるこの偶然にいつまでも首を傾げた。

。―。―。回想終わりです。―。―。

ホンマに不思議な縁やと思うわ、わたしとオーディンさん。もしかしてわたしって、ルシル君を差し置いてのオーディンさんの生まれ変わりかもしれへんなぁ。

「実に不思議な方でした。別れの日、オーディンは言っていました。必ず君たちの前に最高の主が現れる。この予言だけは必ず当たる。確実だ。絶対だ。それが運命だ。君たちは、幸せになる、と」

シュリエルは懐かしみながら、オーディンさんが言うたと思う言葉を言うた。

「その予言は確かに当たりました。主はやて。我々は最高の主であるあなたと出逢えたのですから」

「っ！・・・あぅ、そんな持ち上げんといて。は、恥ずかしいわ」

シュリエルの見せてくれた綺麗な笑顔に、わたしの顔は耳まであっつあつ。いま鏡で自分の顔を見たらきっと真っ赤なはずや。でもみんなに最高の主やって思ってもらえて、いつまでもそう思ってもらえるようになりたいって気持ちが強くなったのも確か。

「わたしってまだまだ子供やから至らへんこともあると思うけど、みんなと幸せを分かち合っていけるように頑張るからな♪」

「主はやて。そう気負わなくても良いのですよ。あなたが自然のままで振る舞って下さることこそが、我々にとっての幸せなのですから」

わたしは改めて家主として、そして"闇の書"の主として、みんなやルシル君と一緒に幸せになるって決意をする。そのためには「生

きやなアカンな。全力で」こんなところで死んでおられへん。

「はい。共に生きましょう。全力で」

シュリエルと真剣な顔で頷き合って、すぐに笑顔を交わした。

Ｅｐｏｓｌ２終宴～Ｃｕｒｔａｉｎ　ｆａｌｌ　ｏｆ　Ｔｈｅ　Ｄｅｓｐｅｒａｄｏ　Ｐａｒｔｙ～

†††Ｓｉｄｅシャマル†††

『さぁ、いよいよデスペラードパーティも大詰め！　３日間のデスレースは今日、めでたく決勝最終戦を迎えた！』

実況者が今日もそんなハイテンションで騒ぐ。けど私はそんなテンションじゃいられない。いま私が居る第一翔者のスタート地点は殺気渦巻いている最悪な場所なんだもの。明らかに私に向けられてる。ううん、正確には私と、ある人以外の２人が互いに殺気をぶつけ合っていて、私もそれに巻き込まれている感じかしら。早くこんな殺伐とした世界から離れて、はやてちゃん、そしてようやく目覚めさせることが出来たシュリエルと逢いたいわ。

『では、ここまで勝ち残って来た最強の４チームを紹介しましょう！　チーム・パラディース・ヴェヒター！　ランサー、セイバー、バスター、ヒーラー、ガーダーの５人で構成されたベルカ騎士。同じレースに参加したチームの全メンバーからリンカーコアを抜き取った、正にデスペラード狩りに相応しい所業を行ってきた！　それはこの最終戦でも見られるのか！？』

「悪魔のように言わないでほしいわ」

私たちは犯罪者たちのリンカーコアを有効活用にしているのよ。せ

っかくの魔法の才を犯罪なんかで使われるより、はやてちゃんの未来の為に使う方がよっぽど良いに決まってるもの、うん。

『続いて、こちらもパラディース・ヴェヒターと同じく異色の参加チーム！　魔導端末の研究・開発を営むデバイスメーカー、バルケッタ・インダストリー！　今回参加しているのは自律型デバイスの試作機とのこと！　メンバーは、オリハルコン、ミスリル、アダマンタイト、アミントゥス、オイルーン！　そして開発主任のウィリアム・バルケッタ氏！』

自律型戦闘用デバイス。偽"エグリゴリ"のゼフォンやミュールを思い出すけど、やっぱり違う。私と同じ第一翔者となるオイルーンを見る。姿形は確かに人型だけど、なんて言うか全身が青一色の金属質だから純粋な人には見えない。

バイクのフルフェイスヘルメットのような顔で、バイザーの奥には目と思しき光点が２つだけ。裸の男性のような肢体（でも金属だから恥ずかしくはないわ）。両手には一対の片刃の剣を携えてる。

『続いて、フリーランスの魔導師集団、チーム・ロウダウナー。年若いにも拘らず、その実力は確か。メンバーは、レインジャー、サーベイヤー、マゼラン、メイヴン、ドーン！』

１０代後半から２０代前半と言った風貌ばかりの少年少女ばかりのチーム。聴けば犯罪歴は無し。なのに、その才を犯罪に使おうとするなんて。日常へ帰すタイミングは今しかないわ。ルシル君も言っていたし。悪道に進ませるには勿体ない子たちだって。

『そして3年前、前回のデスペラードパーティで優勝を勝ち取った、チーム・レガリア！　悪道を悪心のままに駆け、悪名を欲しいがままに手にした無法者！　メンバーは、モノケロス、ペガス、ペリュトン、ガンコナー、サントール！』

ヴィータちゃんが、ううん、私たち全員が憤怒した連中だわ。はやてちゃんのような幼い子供を誘拐したり、管理外世界でも悪事を働いたりしてる。当たるような事があれば何としても撃破しよう、って決めていた。私の相手になるのは女性、サントール。私と同タイプの補助に優れた魔導師。真っ先にあなたのリンカーコアを奪って見せるわ。2度と悪事が働けないように、ね。

『さぁ、第一翔者はいざ覚悟を！』

私たちは崖の縁に立っていつでもスタート出来るように身構える。そして始まるカウントダウン。頭上に展開されたモニターを見詰める。

「（5・・4・・3・・2・・1・・）0！！」

――旅の鏡――

まずチーム・レガリアのサントールに標的を絞る。私は飛び降りず、先に飛び降りた連中の内の1人、サントールの飛行軌道・速度を予測演算。転移魔法・旅の鏡の転移先座標をサントールのリンカーコアのある胸部に固定・・・しようとしたところで、「っ！？」旅の鏡が不発に終わっちゃった。

「え？」「あれ？」

『おおっと！？　これはいったいどうしたことか！？　チーム・レガリアのサントール、チーム・ロウダウナーのドーンが落下し始めたぞ！　だがチーム・バルケッタ・インダストリーのオイルーンは問題ないようだ！』

実況者の言う通りその２人が崖の壁から突き出ている尖塔の１つに墜落した。オイルーンはそれを見届けて、今度は私を見上げて来た。あの２人が墜落した原因は間違いなくアレだわ。オイルーンの全身を覆うかのように青い光が湧き上がってる。でもあれは魔力じゃない。もっと別のエネルギー。きっとアレが、２人を墜落させた原因。

『えー、ここで開発主任さんから情報を頂きました。対魔導師戦用自律型デバイス試作機α・オイルーン。なんと魔力とは別種の、企業秘密なエネルギーを運用可能としていることで、ＡＭＦを搭載しているそうだ！』

ＡＭＦ――アンチ・マギリンク・フィールド。魔力結合・魔力効果発生を無効にするＡＡＡランク魔法防御だと言う情報を持ってる。つまりあの２人は飛行魔法をキャンセルされて墜落したのね。旅の鏡も不発したのもきっと・・・。

ううん、問題はそれだけじゃない・・・。下手をすれば私の素顔を隠してる変装も破られるかもしれない。それだけは何としても避けないと、みんなに迷惑を掛けちゃう。オイルーンは私を標的にしたようで、高速で上昇してきた。このままじゃＡＭＦの効果範囲に入

ってしまう。それを避ける方法はただひとつ。

――旅の鏡――

本来は取り寄せの魔法だけど、空間を繋ぐことには変わらないから簡易の転移移動を可能とする。オイルーンのＡＭＦの効果範囲に入る前に転移を行って、峡谷内――コースに進入する。

『おお！　ヒーラーが転移魔法によってＡＭＦの危機から脱出！　オイルーンを無視しての飛行を開始！』

魔力とは違うエネルギーを運用しているって事からオイルーンにリンカーコアがあるとは考えられない。だから正体が暴かれる危険を冒すより逃げに徹して、第二翔者のヴィータちゃんの元へ急いだ方が良いわ。

後ろから迫るオイルーン、そしてアレが持ってる一対の片刃剣から飛ばしてくる斬撃からひたすら逃げる。あとアレだけじゃなくて、墜落から復帰した他２人にも注意しないと。まぁ、今さら追いつけないと思うけど念のため。

『逃げる逃げる、ひたすら逃げるヒーラー！　それを追うのは人間ですらない人型デバイス、オイルーン！』

（このまま逃げ切って見せる！）

尖塔の隙間という隙間を出来るだけ速度を落とすことなく潜り抜け、ようやく『ヒーラーが第二翔者の待つシフトゾーンへ到達！　バス

ターと交代を果たす！』ヴィータちゃんの元に辿り着いた。

「お願い！」

「おう、任せとけ！」

ヴィータちゃんとタッチを交わす。ヴィータちゃんは私と入れ替わるように崖から飛び降りてコースに進入、第三翔者のシグナムが待つシフトコーナーへ向かって飛び去って行った。

遅れて到着したオイルーンは、外見が全く同じで、違いと言えば体の色が紫で武装が一対のナイフである人型デバイス、ミスリルと金属音を響かせながらタッチ。ミスリルもまた魔力とは違う紫色のエネルギーを全身から溢れ出させて飛び去って行った。

それから少し。大きく遅れてやって来たチーム・レガリアのサントール、チーム・ロウダウナーのドーンが到着。サントールはペリュトン、ドーンはメイヴンとタッチを交わして、それぞれ飛び去って行った。

「はぁ」

相性の悪さとは言え、私は誰ひとりとしてリンカーコアを回収できなかった。その役立たずっぷりに、思わず溜息が出ちゃう。でも、どちらにしても最後は全員のリンカーコアを回収する事になるから焦ることもないのだけど。でも・・・

（サントールくらいはこの手で・・・！）

最低最悪な犯罪者の彼女だけは、って強く思った。

†††Ｓｉｄｅシャマル⇒ヴィータ†††

あたしの後ろから迫って来る人の形をした自律型のデバイス、ミスリル。紫色の金属ボディに、デバイスですらないただの一対のナイフ、そして全身を覆う魔力とは違う紫色のエネルギー。機械だからか殺気はもちろん戦意も敵意も無い。だから「何考えてんのか判んねぇな」攻撃の兆しが読めない。しかも魔力じゃねぇから余計に、だ。

「さっきのデバイスはＡＭＦを持ってたけど・・・。テメェはどうなんだ！？」

――シュワルベフリーゲン――

まずはそれを確認しねぇとな。鉄球に魔力を付加したフリーゲンを４発作り出して、「おらぁっ！」"アイゼン"で打ち出す。フリーゲンは真っ直ぐミスリルんところへ向かって行く。けどミスリルは動きを見せることなく突っ込んでく。やっぱりＡＭＦを搭載してるのか、と思えばそんな気配も無い。

あと数秒で直撃ってところで「んな！？」目を疑う光景が視界に映り込んだ。なんでか攻撃を受けてもないのにミスリルがバラバラになっちまった。その光景につい呆けちまったあたし。

『これはどういうことだ！？　チーム・バルケッタ・インダストリーのミスリルが、チーム・パラディース・ヴェヒターのバスターの

放った攻撃を受けるより早くバラバラになったぞ！・・・やや！？』

「なんだ！？」

バラバラになったミスリルの体の破片が、ものすごい勢いであたしに向かって来た。呆けてた所為もあって初動に遅れが出来ちまった。最初のパーツ（高速すぎて見えなかった）があたしの左肩に直撃したけど、痛みは小さい。大丈夫だ。

――パンツァーシルト――

２つ目からのパーツはギリギリ障壁で防ぐことが出来た。次々と障壁にぶつかってくるミスリルを構成する体のパーツ。ものすげぇ音と衝撃が全身に伝わって来るけど破れない、当たり前だけどな。で、障壁越しだからよく観察できるようになった。

ミスリルはどういう仕組みかは判んねぇけど、奴は体を分割することが出来るみたいだ。判ったことはもう１つ。コイツはＡＭＦを搭載してない。してたら障壁をキャンセル出来るはずだからだ。

（攻撃が止んだらまた元に戻るってか）

障壁に弾かれていたパーツが唯一攻撃に来なかったミスリルの頭部の下に戻って行って合体。バイザーの奥で目らしい光が細まって、あたしに向かって飛んで来た。

後ろからも他２チームの第二翔者も迫って来ているし、あんま時間は掛けたくねぇけど、その２チームの内の１人はどうしてもブッ叩いておきたい犯罪者だ。ソイツが来るまでの時間潰しっつうことで

相手にしてもいいかもな。
バイザーにミッドチルダの言語で、目標捕捉。戦闘開始。って表示されたかと思えば、両手に持つナイフを拘束で振るってきた。
「テートリヒ・シュラーク！！」
あたしは障壁の連続展開して防御つつカウンターで"アイゼン"の一撃をお見舞いしようとしたけど、「めんどくせぇ、コイツ！」当たる前に部分部分で分割されるから空振りする羽目に。
『えー、ここで開発主任さんから情報です。悪環境下作業用自律型デバイス試作機α・ミスリル。電磁石搭載のボディであり、電磁力によって分割・合体が行えるそうだ！　負けなしの鉄槌騎士バスターも、この異質なボディを有するミスリルに苦戦は必至か！？』
「随分と面白ぇ体を持ってんな、お前！」
つうか、悪環境下作業デバイスのクセして何で戦闘してんだよ。ミスリルの分割回避、分割攻撃（腕を伸ばしての刺突や、足を延ばしての蹴り）とか、完全に戦闘用じゃねぇか。
『おおっと！　リードしていたバスター、ミスリルの元にペリュトン、メイヴンが迫る！』
来やがったな、ペリュトン。あたしらパラディース・ヴェヒターが討たないといけねぇ外道の中の外道。奴に集中するためにはまずミスリルをどうにかしねぇとな。ミスリルが振るってきたナイフを"

アイゼン"の柄で受け止めてすぐにカウンター。ミスリルは即座に体を分割したけど、「もう見切った！」"アイゼン"の軌道を僅かに上に逸らして振り切る。

「ホームラン！！」

――テートリヒ・シュラーク――

"アイゼン"の一撃をミスリルの頭部に直撃させることに成功。ガキィンと良い音を響かせてミスリルの頭はどっかに飛んでった。ミスリルの核らしい頭が無くなったことで体を合体させてた電磁力も消えたのか、バラバラになって峡谷の底へ落下してった。

『なんとぉぉ！　ミスリルはバッラバラになって落下ぁぁーーーー！　頭はどこに飛んで行ったかぁぁーーーー！　そして叫ぶ開発主任ーーーーーー！！』

「はんっ！　舐めて掛かってきた罰だぜっ！」

さぁ、次はペリュトンだ。犯罪歴の無ぇメイヴンはこの際無視だ。犯罪歴の無い奴を相手にするのはパラディース・ヴェヒターの掟に背くからな。徐々に近づいて来るペリュトンとメイヴン。標的はおっさん、ペリュトン。若い男、メイヴンは無視。あたしは「アイゼン！」のカートリッジを1発ロードして、強襲形態ラケーテンフォルムに変形させる。

一片の情けも、一切の容赦もなく、ただ確実にぶっ潰す。先にやって来たメイヴンはあたしの様子に少し怯みを見せたけど、顎で先に

行くように促すと、スピードを上げて先に進んだ。が、「テメェだけはここから先は一方通行だ、止まれ」ペリュトンに停止を呼びかける。

「小娘が粋がっておるわ。どれだけの場数を踏んだかは知れないが、調子に――」

――ラケーテンハンマー――

「戦場で敵を前にしてベラベラと語ってんじゃねぇよ、おっさん」

「むぉ・・・！？」

――ラウンドシールド――

"アイゼン"のヘッドの片側に在るブースターを点火、その勢いで急速突進する。これまでラケーテンフォルムもラケーテンハンマーも使ってこなかったからな。おっさんはあたしに急襲に驚いた。けど素人じゃなかったことが幸いしてギリギリシールドを張った。でもな・・・「脆いんだよ！！」ブースターとは反対側に在る突起が奴のシールドを削っていく。このあたし、ヴィータと、鉄の伯爵"グラーフアイゼン"の前に破壊できないものはねぇんだよ。

「おらぁぁぁぁぁぁ！！」

ペリュトンのシールドを粉砕。振り払った勢いのまま一回転して、今度はペリュトン本人に打ち付ける。けど奴は杖状のデバイスでま

たも防御した。解んねぇかなぁ、ホント。「無駄だってことが！！」奴のデバイスをも粉砕して、今度こそ奴にラケーテンハンマーを叩き込んでやった。

――シュワルベフリーゲン――

"アイゼン"を通常のハンマーフォルムに戻してすぐ、魔力弾を付加させた鉄球４発を、尖塔に墜落したペリュトンに向けて打ち放つ。ラケーテンハンマーがよほど効いたのか身動き１つしないで全弾食らった。

「これは今までテメェらが食い物にしてきた被害者たちの分だ！！」

ボロボロになってるペリュトンに向かって急速降下。「テートリヒ――」"アイゼン"を振りかぶる。と、奴は恐怖で顔を引き攣らせながら「助けてく――」ん？・・・なんか聞こえたけど、そんなの当然の如く無視だ。

「シュラァァァーーークッ！！」

「げぼぁあああっ！？」

トドメの一撃をペリュトンの腹に打ち込んでやる。唾液やら胃液やらを盛大にぶちまけたペリュトンに、「命拾いしたな。昔のあたしらが相手だったら死んでたぜ」そう吐き捨てた後、守護騎士の機能であるリンカーコア奪取を起動、奴の胸に左手を翳して念じる。と、奴の胸からリンカーコアが浮かび出てきた。リンカーコアを捕獲。

これでもうコイツに用はねぇ。すぐさま先に行かせたメイヴンを追いかける。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒シグナム†††

シャマルもヴィータもそれぞれの仕事を全うした。ならば、私も全うしなければならんな。鞘に納めたままの"レヴァンティン"に目をやる。

『第三翔者のシフトゾーンに先に到着したのは、チーム・ロウダウナーのメイヴン！　第三翔者のマゼランと交代！』

マゼランと言う名の少年が崖より飛び降り、かなりの速度で峡谷内――コースを進んで行く。あれに追いつくのは少々骨が折れそうだな。このままリードを広げられてしまうと次のザフィーラでも難しいだろう。だが最終翔者のルシリオンなら逆転できる。間違いなく、な。

「悪ぃ、セイバー！」

『ここでチーム・パラディース・ヴェヒターのバスターが到着！第三翔者のセイバーと交代！』

「気にするな。最終的にはランサーが1位でゴールするのだ。多少の遅れは気にせずともいいだろう」

私と同じ第三翔者にして撃破対象であるチーム・レガリアのガンコ

ナーにも聞こえるようにヴィータにそう返した。そしてガンコナーへハッキリと視線（可愛らしい目だが）を向けると同時に殺気をお見舞いしてやる。と、奴は目に見えて肩を震わせた。殺気の年季が違うのだ、当然と言えば当然だが。

『これは一体どうしたことか！　セイバーはスタートしようとしないぞ！』

「チーム・レガリアのガンコナーと共にスタートする許可を貰いたい」

各シフトゾーンで不正が起きないように見張る開催者側の人間へそう告げる。彼はどこかへ連絡を取った仕草をした後、実況者から私の提案が通ったという事が告げられた。

「来い、ガンコナー。我らパラディース・ヴェヒターは、貴様らレガリアの撃破を決定した。さっさとデバイスを構えるといい。こちらとしては貴様に掛かりっきりになるわけにはいかんのだ」

「っ！・・・上等だっ！　俺たちにだって譲れない悪党としての誇りがあるんだよっ！」

銃剣型のデバイスを手に私へと魔力弾を数発撃ってきたガンコナー。並の魔導師相手ならば確かに必中必倒の威力と魔力量だ。が、「ふん。この程度か」"レヴァンティン"で全弾斬り裂いて対処する。ガンコナーは私が魔力弾に対処している間に最接近して来ており、銃剣の刃による刺突を繰り出してきた。なかなかに良い戦法だ。し

かしまだまだ届かんな。左手に持つ鞘で銃身を打って外側へと逸らし、間髪入れずに"レヴァンティン"を奴に向かって振り降ろす。

「く・・っ！」

「よく躱した。だがこれで幕だ！」

紙一重の差でかわされた。しかし後退に全力を使ったのか僅かに動きに乱れが生まれている。その隙を突き、瞬時に奴の背後へと回り込み、"レヴァンティン"のカートリッジを1発ロード。刀身に炎を噴き上がらせる。

「紫電・・・一閃！！」

振り向かれる前に"レヴァンティン"を振り下ろす。だがガンコナ～もまた腕のある魔導師ということなのだろう。またも半身分横移動という方法で紙一重でかわされた。振り抜かれた"レヴァンティン"を戻すより早く奴は私より距離を開けるだろう。しかしそうはさせん。剣の騎士だからと言って、何も攻撃全てに剣を使うわけではない。振り抜いた勢いを無理に抑止させずにそのままその場で前宙返りをし、「あぐっ・・！？」奴の頭頂部に踵落としを打ち込んだ。

「アンコールは無いぞ」

再度カートリッジを1発ロードし、刀身に炎を噴き上がらせる。

「紫電一閃！」

脳を揺さぶられ何一つとして対処できなかったガンコナーの背中を斬る。かつての我々なら非殺傷設定などせず必殺だが、此度は無暗に血を流さないと決めているため骨折程度で済ます。私の一撃を受けて高速で墜落して行くガンコナーを追翔し、尖塔に激突して停止した奴へと左手を伸ばす。そしてリンカーコアを抜き取り、すぐさまレースに復帰。私とガンコナーの戦闘の最中にスタートしたアミアントゥスを追いかける。

（捉えた・・・！）

アミアントゥスの姿を視界に収めた。赤い金属質のボディ。今までのデバイス2機とは違い、ミッドチルダ式の魔法陣が頭部・胴体・四肢に描かれている。魔法を使える、と言うことなのだろうか。いや先入観は捨てた方が良いな。"レヴァンティン"を握る右手に力を込めたところで、

――チーム・レガリアは問答無用で潰せ。そしてチーム・ロウダウナーはとりあえず俺のターンになるまで放置してくれ。あとチーム・バルケッタ・インダストリーは、向こうから仕掛けてきた場合は破壊して良い。あ、あー、ロウダウナーもそうか。仕掛けてきた場合は撃墜していい。だけどリンカーコアは回収しなくていい。本物の戦闘と言うのをその身に感じさせてやるだけで十分だ――

ルシリオンからの指示を思い出す。前を行く1人と1機にはこちらからは手が出せないのだと。ならば追い抜くしかあるまい。尖塔の

隙間を縫うように翔け、徐々に接近していく。と、そんな時、「む・・・！」アミントゥスに動きがあった。奴は背部にミッド魔法陣を展開。全身から魔力を放出した。やはり魔導師の特性を持ったデバイスのようだ。

「来るか・・・！」

アミントゥスが減速、そして私へと体を向けて来た。転移か起動かは判らないが、両前腕にはガトリング砲と呼ばれる重火器を装備。そして砲身が回転し始め、幾つもの銃口から秒速何百発という魔力弾が放たれてきた。

防御では押し切られるな。回避一択しかないということだ。すぐさま行動に移す。射程範囲が広く、避けきるには少々苦労しそうだ。が、それは弾幕の厚い近距離での話。アミントゥスから距離を取れば自然と弾幕の間隔が広まるため避けやすい。

それに、尖塔がちょうどいい具合の壁となって防いでくれる。尖塔を盾に接近を試みるか。尖塔に身を隠しながらアミントゥスに接近を試みるが・・・。

（大した威力だな。鋼のように硬い尖塔を撃ち砕き折るとは・・・！）

今しがた隠れていた尖塔が魔力弾の掃射を受けてへし折れ、下方の尖塔へ落下、別の尖塔にぶつかりさらに砕けた。やはり防御はしない方が良いな。

「だがもうこれで・・・終いだ！」

――紫電一閃――

下からアミントゥスの背後に回り込み、火炎の斬撃、紫電一閃をお見舞いしてやる。両手に大型のガトリング砲という機動力を度外視した武装だ。圧倒的な防御力を有していない以上はこれで終わりだ。"レヴァンティン"を振り下ろす。炎の斬撃は確実にアミントゥスを捉え、斬り・・・「むっ？」避けなかった。アミントゥスに刃が触れた途端、炎が掻き消え、刃が弾かれた。

（炎熱付加のキャンセル能力か・・・！？）

奴は両手のガトリング砲を放り捨て、振り向きざまに両手の十指に付いた刃による連続貫手を繰り出してきた。それを"レヴァンティン"で弾き逸らしつつ、試しにもう一度カートロッジを1発ロードし、刀身に火炎を噴き上がらせる。

「はあああああ！！」

――紫電一閃――

アミントゥスは防御を取らずにそのまま一撃を受けた。が、「やはりか」火炎が掻き消え、刃が弾かれた。

『はい、恒例の開発主任からの自慢話もといデバイス情報！　対魔導師戦用自律型デバイス試作機Γ・アミントゥス。炎熱変換された魔法を全てキャンセルする機能を搭載しているとのこと。セイバーの斬撃を防ぐことが出来たのは炎と魔力の付加をキャンセルさせて、

ただの物理攻撃にすることで、アミントゥスの有している装甲と魔力障壁の防御力より下回る威力にしたから、だそうだ！』

（私の斬撃が、アミントゥスの装甲に負けている、だと？）

炎をキャンセルされたぐらいで鈍るほど、私の一撃は甘くはない。聞き捨てならないその話には少々苛立ちを覚えた。では見せてやろう。剣の騎士の、本当の斬撃を。"レヴァンティン"を具現させた鞘へと納め、最後のカートリッジをロードする。ただの物理攻撃で、その鋼のボディを寸断してくれる。

尖塔の上に降り立ち、居合の構えでアミントゥスを待ち構える。奴は当然とも言えるが向かっては来ず、滞空したままだ。ならば・・・「こちらから向かうまでだ」両脚に魔力を籠める。

「参る！」

頭上にパンツァーシルトという名の障壁を展開してから跳び上がる。瞬間的にアミントゥスへ最接近できる自信はあるが、万が一にも迎撃されては堪ったものではない。しかしそれは杞憂だった。迎撃されるより早く奴の目の前へと移動し終えることが出来た。

「閃ッ！」

――紫電清霜――

柄を握り、上半身を捻りながら"レヴァンティン"を抜き放つ。鞘内部に溜めた魔力の爆発力を利用した超高速の居合による一閃。ア

ミントゥスは避ける事も防ぐことも出来ずにこの一閃を受けた。手応えは十分。ゆえに結末を見届けることなくレースに戻る。

『これはすごい！　セイバーの目にも映らぬ鋭い剣閃に、アミントゥスは成すすべなく真っ二つだぁぁぁーーーっ！　さらに泣き叫ぶ開発主任ーーーーーーー！！』

それが結末だった。さて。レースに復帰したはいいが、最早チーム・ロウダウナーのマゼランの姿はもう見えず。あとはザフィーラとルシリオンに託すほかない。

「ガーダー、あとは任せた！」

「ああ！」

『チーム・ロウダウナーに遅れること2分！　セイバーとガーダーが交代！』

私と入れ替わるように峡谷内へと降り、飛び去って行った。ザフィーラがスタートしてから1分後、チーム・レガリアのペガス、チーム・バルケッタ・インダストリーの自律型デバイス、黒いボディをしたアダマンタイトがスタートした。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒ザフィーラ†††

第1位で翔けるロウダウナーのサーベイヤーに大きく離されてしまったが故、我らの撃破目標、チーム・レガリアとの戦闘は後回しに

し、まずはロウダウナーに追いつくことにした。先のアンカーに比べればあまりにも遅い飛行速度ということもあり、僅かに背中を視界に捉えることが出来た。が、「む？」後方より魔力反応が高速で接近しているのを察知。魔力反応ということは、間違いなくレガリアのペガス。

（悪くはない状況だな）

追いつかれた際には存分に我の拳を奮わせてもらおう。だが今は可能な限りサーベイヤーとの距離を詰める事に専念せねば。ルシリオンにばかり頼るというのは年長者として格好の良いものではない。

『おおっと！　これは凄まじい！　チーム・バルケッタ・インダストリーのアダマンタイトが尖塔をなんとパワーだけでへし折り・・・ブン投げたぁぁぁーーーーー！！』

実況者のその話を聴き、後方へと目をやる。半ばで折られた１０ｍ級の尖塔が我、そしてサーベイヤーへと向かって飛来しているのを視界に捉えた。直撃は間違いなく圧死だ。回避に全力を注ぎ、迫り来ていた尖塔を避け、別の尖塔に墜落したのを見送った。

しかしそれだけでは終わらなかった。尖塔が大きく跳ね、無軌道で再び迫って来たのだ。別の尖塔群を盾とするために我は急降下。遅れて強烈な地鳴り、鼓膜を破れてしまうかのような轟音が我を襲った。

（ちょうどいい。このまま進もう）

頭上に折り重ねっている尖塔の隙間と言う隙間から漏れる明かりを頼りに、薄暗い峡谷内を翔ける。

『えー、ここで恒例の開発者さんの自慢話です！　汎用作業用自律型デバイス試作機α・アダマンタイト。作業用は力、力こそすべて！　という事で、完全パワータイプの機体だ！――っと、アダマンタイト、連続して尖塔をへし折り、前を行くサーベイヤーとペガスへ放り投げまくる！　こんな地獄絵図の中、ガーダーはどこへ行った！？』

あの者たちには申し訳ない気持ちも僅かばかりにあるが、ここは先を行かせてもらおう。鳴り止まぬ轟音、途切れぬ振動。アダマンタイトは必殺の尖塔投げを繰り返す。我は尖塔の隙間を縫うように翔け、リードを広げることに専念する。

そんな中、轟音の合間からサーペイヤーとペガスの悲鳴が聞こえるようになった。死にたくない、ふざけるな、デバイスのくせに、潰されるなんて嫌だ、などなどだ。特に未だ少年と呼べる歳であろうサーペイヤーは半ば狂乱状態。死の恐怖を感じ、ようやく己らが出向いた場所がどれほどの危険を孕んでいるのか理解したようだ。

『これはまずいぞ！　いくら犯罪者であろうと、デスペラードパーディ内での故意の殺害はご法度！　チーム・バルケッタ・インダストリーの開発主任さん！　アダマンタイトを止めてくれぇぇーーーっ！』

「ひ、ひぃぃーーーー！」

聞くに堪えぬ悲鳴。こうなってはもはや仕方あるまい。頭上を翔け

る2人の魔力反応を感知し、2人が通り過ぎた時を見計らい尖塔群上へと飛び出す。

『ここでようやくガーダーが姿を現した！！』

――鋼の軛――

アダマンタイトを視界に収めると同時に鋼の楔を発動し襲撃。黒い鋼の体を貫く。ついでに、「貴様もここで墜ちてもらおう！」ペガスにも軛を打ち込み、身動きを制限する。間髪入れずにペガスへと右手を翳し、「ぐ、ぉぉおおお！？」奴のリンカーコアを抜き出す。

『鋭い、速い、精確！　ガーダーの魔法がアダマンタイトとペガスを貫いたぁぁ！――と思えば、即座にリンカーコアを抜いた！』

手に入れるべきモノは入手した。アダマンタイトは自ら潰しに行く必要性は無く、命拾いしたことで呆けているサーペイヤーもまた放置で良いだろう。

『ここでガーダーが先頭に立った！　このまま1位通過で最終翔者であるランサーと交代すれば、優勝は確実ぅぅ！』

我はルシリオンの待つ最終シフトゾーンへと翔ける。が、『なんと！　アダマンタイトが復活！　サーペイヤーもビビりながらも飛行を再開！』そう上手く事が進むわけもなく。しかも最悪なことにアダマンタイトはサーペイヤーではなく我に標的を絞ったようだ。高速

で我へと一直線に翔けて来る。飛行速度の序列ではアダマンタイト、我、サーペイヤーの順だ。

「仕方あるまい。貴様は先に行くといい。そして願うなら、もうこのような場所に来ず、悪道に堕ちようとは考えないでくれ。貴様らの未来に、悪業は要らぬだろう」

「ガーダー・・・。っ・・・・！」

サーペイヤーを先に行かせ、我はアダマンタイトと決着をつけるべく飛行速度を遅らせる。速度で勝っているアダマンタイトが一気に詰め寄って来た。振るわれる鉄拳は我の顔面を正確に射抜く軌道。ならばこちらは首を横に反らし避け、カウンターの一撃を振るう。奴の腕を上から押さえるように繰り出した我の一撃は精確に顔面を打ち抜いた。が、「ぅぐ・・・！」右拳に伝わる衝撃。思わず距離を取る。

「硬い・・・！」

今まで相手にしてきた何者よりも硬い体。痛む右拳を一度見、アダマンタイトの繰り出されてきた腕の振り払いを屈むことで避け、立ち上がりの勢いを利用した掌底を下顎に打ち込む。だが奴は通用しないとでも言うように反り返ることもなく、我の腕を取ったかと思えば大きく振り回し、「ぐお・・・！」足元にある尖塔の1本へと叩き付けた。

仰向けに倒れる我へと向かって急降下してくるアダマンタイト。あの怪力での踏みつけは即死に繋がる。鈍い体を押してすぐさまその

場より離れる。直後、奴は我の居たところへ落下、尖塔をへし折ってそのまま峡谷の底へと消えていった。しかしすぐさま足元の尖塔を破壊しながら戻って来たが、我に背中を向けた状態だったため、鋼の軛で再度貫く。

（魔法は通用するのだな。ならば！）

腕力のみで自身を貫く軛を破壊し、突進して来たアダマンタイトを横に半身ズラしてかわし、突き立つ尖塔を足場に反転して来た奴へ向けて再度「鋼の軛！」を発動、今度は非殺傷設定という制限を払った状態で、だ。物理破壊設定された鋼の軛は攻撃としても利用できる。奴の四肢を寸断し、最後に頭部と胴体を切り離す。

『アダマンタイト撃破！　ガーダーの圧倒的勝利！　主任さーん？　泡吹いてませんかー？』

では行こうか。我らパラディース・ヴェヒターが将、ルシリオンの待つ最後のシフトゾーンへ。

†††Ｓｉｄｅザフィーラ⇒ルシリオン†††

最終翔者としての俺たちが待つシフトゾーンにザフィーラがやって来た。ザフィーラは「すまぬ」と謝罪。俺は頷くことで、気にするな、と伝える。

『さぁ、いよいよパラディース・ヴェヒター最強の騎士、ランサーの登場だぁぁぁぁ！　先を行くチーム・ロウダウナーのレインジャ

ーを追いかけ・・・ないぞ！　どうしたランサー！？』

「決まっているだろう。レガリアのボス、モノケロスを撃破するためだ」

「ま、待ってくれ！　棄権する！　リンカーコアを奪われて魔導師として再起不能にされるなどご免だ！！」

などと弱音を吐くモノケロスだったが、今まで逃げずに戦ってきた他のチームの居る場所と通信が繋がり大ブーイングを受けた。モノケロスは「黙れ！！」と叫び、監視員に棄権する旨を伝えまくる。俺たちが優勝したらどの道リンカーコアを奪われ再起不能になるんだが、今は黙っていよう。助かったと希望を持っているといい。あとで絶望のどん底へ叩き落としてくれる。

『なんということだ。主催者側からチーム・レガリアの棄権を認める旨が届いた。これで残るはチーム・バルケッタ・インダストリーのオリハルコンだが。・・・こちらはそのままレースに参加するとのこと！』

オリハルコン。白い金属で太陽の光を屈みのように反射して輝いている。目つぶしにはちょうどいいボディかも知れない。このまま共にスタートして、襲い掛かって来たら撃破してもいいが、リンカーコアの無いデバイスを潰しても徒労だ。レガリアは棄権、ロウダウナーは回収非対象。じゃああとは・・・「ゴールするだけだな」"エヴェストルム"を起動し、崖より飛び降りる。そして穂先をゴールのある方位へと向ける。

『どうしたことか。ランサーはスタートせずにただ、デバイスを構えるのみ！』

術式選択。ランクは上級、効果は攻性・長距離射程砲撃、属性は雷撃。穂先の先端に砲門としてのベルカ魔法陣を展開。

「戦滅神（コード・ヴィズル）の破槍・・・、フォイア」

雷撃系の上級砲撃ヴィズルを発射。コースのうねりを計算したうえでここからゴールまでの最短距離に穴を開けてやる。これで終わりだ。ここで今まで使わなかった術式、剣翼アンピエルを発動。

「ランサー、参る」

急発進して、ヴィズルで開けた空の道を通る。

『これは凄まじい！　電気変換の砲撃で一直線の道を作り、これまで見せなかった飛行魔法で先頭を行くチーム・ロウダウナー、レインジャーとの距離を詰め・・・そして抜いたぁぁぁ！！』

とのことだ。1位となった俺はさらに加速していき、

『チーム・パラディース・ヴェヒター、優勝ぉぉぉーーーーっっ！』

2位と圧倒的大差を付けてのゴール。こうして犯罪者たちによる秘密の競宴、デスペラードパーティは終わった。そして今まで隔離さ

れていた敗北者たちを交えて（俺たちが相手にしたチームの姿は見えず）大ホールでの表彰式となったのだが、主催者である裏社会のＶＩＰ共の姿は無い。どうやら艦からモニター参加するつもりのようだ。

「それでは優勝チーム、パラディース・ヴェヒターのリーダー、ランサーにお聞きします。あなた方の願いとは！？」

簡易の表彰台には1位の俺、２位のレインジャー、３位のオリハルコン・・・の開発者が立ち、実況をしていた男から俺たちの目的を問われた。今まで騒然とした会場が静まり返る。俺は表彰台から降り、大ホールに集まっている未回収のリンカーコア持ちの魔導犯罪者どもを見回す。そして左手を前方に翳し、その問いに答えてやった。

「お前たち全員のリンカーコアをいただく」

――闇（コード）を誘え、汝（カムエル）の宵手――

対象全員の足元に在る自身の影を利用し、何百という影の手カムエルを具現させる。カムエルで全員を拘束し、喚き散らさないように口をも塞ぐ。そして「リンカーコア、回収する」次々とリンカーコアを抜き出していく。

（ん？・・・あれは、まさか・・・！）

ふと、ある人物に目が留まる。初日では見かけなかったはずの人物。

俺は『こちらランサー。各騎、周囲を最大警戒。ネズミが紛れ込んでる』と思念通話で指示を出す。

『ネズミ？・・・あ、部外者か！』

『ああ。管理局員が居る！』

『『『『っ！』』』』

俺が目を付けた人物、それはかつての次元世界でも関わりを持ったことのある男だった。

（メルセデス・シュトゥットガルト・・・！）

セレス・カローラ率いる"テスタメント"の構成員だった、元管理局員の亡霊。この時代で生きているということは、彼は局上層部に謀殺されずに済んだ、ということだな。彼との思い出などほぼ皆無と言っても過言じゃないが、喜ばしい限りだ。

『みんな、施設内に多数の転移反応！　たぶん管理局だわ！』

『どうすんだ、ランサー！』

『・・・百何十というリンカーコアを目の前にして言うのはなんだが、退却だ・・・！』

――轟き響け、汝の雷光（バラキエル）――

天井に向けて雷撃砲バラキエルを放ち、脱出するための道を作る。その直後、「止まれ！」「動くな！」「武装を解除しろ！」と大ホールに雪崩れ込んできた何十人と言う武装局員・・・なのかどうか怪しい。
なにせ全員がライダースーツ・フルフェイルヘルメットらしきバリアジャケット、デバイスは十人十色。武装隊どころか局員かどうかさえ判らない格好だ。

「先に行け！」

ヴィータ達を先に脱出させたところで、「ちょっと待った。ランサー！」俺を名指しで呼び止める男の声。そちらに目をやれば1人の男が両手を上げて歩み寄って来ていた。手を上げているのは武器を持っていないことを示すためだろうが、魔導師であるなら意味を成さない行為だ。トリガー（詠唱や特定動作）を用いて発動する魔法を持っているかもしれないからだ。

「何者だ？」

「はじめまして、だ。パラディース・ヴェヒターのランサー。俺たちは時空管理局本局所属・第１１１１航空隊。で、俺は隊長のオヴェロン。ちなみにコードネームだ。階級は一等空佐」

かなりのエリートが出て来たな。しかしそれにしても「１１１１航空隊・・・？」そんな部隊なんて在っただろうか。いや、アノ怪しげな格好からして正規の部隊とは思えない。

「とりあえず話をしよう。まずは、あ、うちの隊員を解放してくれないか？」

オヴェロンはそう言って立てた親指をメルセデスへと向けた。俺は指を鳴らし、メルセデスを捕縛しているカムエルを解除する。すると彼に礼を言われ、俺は「敵ではないからな」と素っ気なく返す。

「我らは管理局とは争わない。全てが終わった時、我らは自らの足で出頭しよう。しかしそれまでは――」

「待ってくれ！　実はここだけの話。管理局の一部の上層部はお前たちを局にスカウトしたいと言う意思を持ってるんだよ。俺もそうだ」

「っ、ほう。お前を含め、物好きな幹部が居るのだな」

「ああ、だから話を――」

何もかも計画通り。嬉しくて話に付き合いそうになったが、残念ながら今は話し込んでいるわけにはいかない。留まれば連中との戦闘に発展しかねないからだ。今はまだ局とことを構えたくない。そう、今はまだ・・・。

「すまないな。今はそんな暇はない」

――ドゥンケルハイト・フォーアハング――

ヴィータやシャマルが使う、閃光・爆音による視聴覚阻害・ジャミング効果の魔法を俺流にアレンジしたもので、閃光ではなく暗闇、爆音ではなく無音を一定範囲内に展開する。最後に俺も開けた穴より施設より脱出。

（待ち伏せがあると思ったが・・・居ないな）

すでにシグナム達も転移を終えたようでその姿は無い。それじゃあ俺もっと。「さらばだ」と別れを告げ、俺も転移した。

Ｅｐｏｓｌ３さぁ踊れ踊れ、舞台はかの者の手の平の上～Ｂｅｇｅｇｎｕｎｇ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

日曜日の今日、私はある目的の為にすずかちゃんのお家へとやって来た。ファリンさんの案内ですずかちゃんのお部屋に通されると、そこにはすでにアリサちゃんが居た。

「すずかちゃん、アリサちゃん、おはよー♪」

「なのはちゃん、おはよう♪」

「おはよう、なのは♪」

挨拶を交わしてすぐ、アリサちゃんが「ちゃんと忘れずに持ってきた、なのは？」って確認してきた。

「忘れないよ～。ほら～」

私、そこまで忘れっぽくないよ。背負ってたカバンを降ろして、その中からデータディスクを１枚取り出す。ケースにはフェイトちゃんの名前がフルで書かれてて、ディスク表面にはフェイトちゃん、シャルちゃん、アルフさん、そしてアリシアちゃんの顔写真が映ってるシールが張られてる。そのディスクをアリサちゃんに見せると、「よしっ。えらいぞ、なのは」なんて思いっきり子ども扱い（まぁ

子供だけど）してきた。私たち同い年だよ！

「フェイトちゃん達とのビデオレターも、もう半年くらいになるよね」

「そうね」

「うん」

お互いの近況をビデオに撮ってディスクに焼いて、それを管理局の助力で送り合う。そのおかげでフェイトちゃん達と逢えない時間を寂しく過ごさずに済んだ。日に日にフェイトちゃんが明るくなっていくのを、私たちは嬉しく見守れた。

思い出話に花を咲かせていると、ファリンさんがティーポットとティーカップ3セット、クッキーの乗ったトレイを持って来てくれた。それにお礼を言って、美味しくお茶とクッキーを頂く。すずかちゃんはファリンさんを下がらせてから（魔法関係の話が入るから）、フェイトちゃん達からのビデオレターを早速再生。黒い画面が最初に入って・・・。

『・・・ねぇ、ちゃんと映ってる～？』

「「「ぶふぅーっ？」」」

いきなり映り込んだ大きくて真ん丸な紅い瞳に私たちは驚いて、飲んでいたお茶を霧吹きみたいに噴いちゃった。

『ちゃんと映ってるから、離れてアリシア。なのは達がビックリしちゃう』

フェイトちゃんの声が聞こえたと思ったら『は～い！』画面いっぱいに映り込んでた綺麗な瞳が離れてく。でもねフェイトちゃん、もう手遅れだよ、お茶噴いちゃったよ私たち。そして私たちにお茶を噴かせた原因、アリシアちゃんの全身が映った。奥にはフェイトちゃんとアルフさんが居て、アリシアちゃんの今の行動にちょっと困惑気味。

「アリシアも無事に目を覚まして良かったわよね」

「うん。はじめてフェイトちゃんからアリシアちゃんを紹介された時は驚いたけど」

「にゃはは。テンションがすごく高かったもんね～」

3人で零れたお茶を拭きながら当時を思い返す。離れ離れになってるフェイトちゃん達とのコミュニケーション方法としてリンディさんが考えてくれたビデオレターのやり取り、その最初のビデオレターで私たちはアリシアちゃんと会った。

。―。―。回想だよ♪。―。―。

半日授業だった学校から帰ってすぐ、ポストに大きな包みが入っているのを見つけた。ポストから出して包みを眺める。と、差出人の名前を見つけたから声に出して読んだ。

「わ、英語？だ。えっと・・・Ｆａｔｅ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａ・・フェ・・イト・・テスタ・・ロッサ・・・？　フェイトちゃん！？」

なんとビックリ、フェイトちゃんの名前が記されてた。急いで玄関の鍵を開けて自分の部屋に戻る。鞄をベッドに放って包みの封を切って中身を確認する。出て来たのはＤＶＤケースが１枚。それと折り畳まれてる手紙が１通。

拙い漢字とひらがなで、高町なのは様へ、って書かれてた。手紙を開ける。出だしは、全略。たぶん前略って書きたかったんだと思う。フェイトちゃんは頑張って日本語を勉強してくれたんだろうなぁって、微笑ましくなっちゃった。

――なのは、元気？　アリサもすずかも元気にしてるかな。私、フェイトは、管理局のみんなのおかげで元気です。こうして手紙を差し上げたのは、同封しておいたデータディスクの事について伝えておきたかったから――

同封されたＤＶＤはビデオレターとのことだった。自分たちの近況を私やアリサちゃん、すずかちゃんに知らせる為に作ってくれたって。それはすごく嬉しいことで。あと、魔法関連のお話も入っちゃうから、観る時は気を付けてって注意書きも。

――でね。なのは達もお返事をくれたら嬉しいなって。宛先は要らなくて、シャルの知人が取りに行ってくれるって言うから、時間や置き場所を指定してくれたらいいよ。それじゃあ、続きはビデオレターで。早々――

「フェイトちゃん・・・。うん、必ずお返事のビデオレター、送るよ！」

そうと決まれば早速アリサちゃんとすずかちゃんに教えないと。うわぁ、なんかテンションが上がり過ぎて手が震えちゃう。

「フェイトちゃんからビデオレターが届いたから、一緒に観ようね・・・っと」

携帯電話からメールを一斉送信。するとすぐに２人から返信が来た。内容はフェイトちゃんからビデオレターが届いたことへの驚き、そして今すぐ私の家に来てくれるとのこと。それからしばらく。早く観たい気持ちに駆られてソワソワしてる時、呼び鈴が鳴った。

「いらっしゃい、アリサちゃん、すずかちゃん！」

「お邪魔します、なのはちゃん」

「で、どれよ、フェイトからのビデオレターって。早く観ましょ！」

う～ん、すずかちゃんは挨拶を返してくれたのに、アリサちゃんはスタスタと家の中に入って行っちゃう。同じお嬢様なのに、どうしてこう違うんだろう。とりあえず私の家に来てくれたアリサちゃんとすずかちゃんをテレビのあるリビングに招く。そして私は「コレだよ、フェイトちゃんから送られてきたＤＶＤと手紙」２人にＤＶＤと手紙を見せる。

２人に手紙を渡して、私はＤＶＤをプレーヤーにセット。今日は夕方まで１人でお留守番ということで、気兼ねなく下のテレビで観ることが出来る。お茶とお菓子を用意して、「それじゃあ、スタート♪」リモコンの再生ボタンをポチっと押す。最初は黒い画面一色。でもすぐに変化が。

『ア～スラ～～通～信っ！！　遠く離れた友達を想って始まる乙女たちの近況報告、アースラ通信！　その第１回！　提供は時空管理局・本局所属、アースラ！』

「「シャルちゃん・・・」」「シャル・・・」

シャルちゃんによるナレーションが始まったかと思えば黒い画面に流れ星がキラキラ流れて、時空管理局のエンブレムが奥からフェードイン、そしてデフォルメされたフェイトちゃん、アルフさん、シャルちゃんの似顔絵が現れた。

「無駄に凝ってるわね」

「そ、そうだね」

「シャルちゃんも元気そうで何よりだよ」

シャルちゃんの破天荒さは相変わらず、ということみたい。画面がパっと変わる。どこかの白いお部屋。そして・・・

「「フェイトちゃん！」」「フェイト！」

ベッドに腰掛けているフェイトちゃんが映った。フェイトちゃん、私があげたリボンをしてくれてる。それだけでもう涙が出そうだったけど、なんとか耐えた。遅れて『うん、カメラの位置はこんなもんだね』アルフさんの声が画面外から聞こえたら、アルフさんも画面端から姿を見せて、フェイトちゃんの座るベッドに向かって行った。

『えっと・・・久しぶり、こんにちは、なのは、アリサ、すずか。フェイトです』

『アルフだよ。久しぶりだね』

フェイトちゃんとアルフさんがこれまでのことを話してくれた。アースラのみんなには優しくしてもらってること、シャルちゃんやクロノ君と模擬戦をしてまだ1度も勝ててないこと、本局と言うのはどんな場所か、裁判で有利になる資格を取るために勉強を始めたこと、空き時間があると暇で手持無沙汰になること。全てが新鮮で、楽しいって笑うフェイトちゃん。

本当だったらユーノ君、シャルちゃんやクロノ君たちも今回のビデオレターに登場する予定だったけど、ユーノ君はミッドチルダに降りていて、シャルちゃんとクロノ君は仕事で居ないということで断念したそう。ちょっと残念。

『――あと、本局に来るまでに、大事件って言っていいのかな？があったんだけど・・・』

『大事件と言えば大事件だね』

フェイトちゃんとアルフさんが画面の端、どこかに視線を送った。そしてフェイトちゃんがそっちに向かって手招きしたら、『やっと～？　遅～い』女の子の声が聞こえてきた。聞き覚えの無い声だ。

『フェイト、アルフ。早くわたしを紹介してよ』

『あ、うん。なのは、アリサ、すずか。紹介するね。私のお姉ちゃんの・・・』

『どうも～、アリシア・テスタロッサで～す♪　妹のフェイトがお世話になりました！』

「「「っ！！？」」」

画面端から出て来たのはフェイトちゃん・・・じゃなくてアリシアさん？（それともアリシアちゃん？）だった。フェイトちゃんを幼くした見た目だけど、表情や纏ってる雰囲気はとびっきり明るいものだ。ぴょこんとフェイトちゃんの隣に座って、私たちに満面の笑みを向けてくれている。

アリシアさんに腕に抱きつかれながらフェイトちゃんは、アリシアさんの目覚めの時のことも話してくれた。驚くべきことに、アリシアさんは亡くなってから蘇るまでの２０数年の記憶があるとのこと。でもそのおかげで、フェイトちゃんと不仲にならず、ああして仲良し姉妹になったよう。うん、これはきっと喜ぶべきことだ。

。―。―。回想終わりです♪。―。―。

終始アリシアちゃんのターンだったっけ、あの後は。でもフェイトちゃんの笑顔をたくさん見ることが出来て良かったって思う。

『アリサ、すずか。２人が送ってくれた映画ディスクと本、ありがとう♪　アリサの送ってくれたホラームービー。フェイトやアルフ、シャル達と一緒に観たよ。ゾンビとか、初めて見たからドキドキハラハラしちゃった♪』

『うん。・・・すずか。すずかが貸してくれた冒険小説、すごく面白くて一気に読破しちゃった』

フェイトちゃんとアリシアちゃんは、アリサちゃんとすずかちゃんがビデオレターの返事と一緒に送ったＤＶＤと小説に満足してるみたい。２人の感想を聞いたアリサちゃん達はとても嬉しそう。私が送ったものと言えば返事のビデオレター、写真や遊びに出かけた時の動画くらい。それの感想は貰えるのかなぁ？

『なのはの写真や動画、どれも素敵だった。ハロウィンだっけ？そっちの世界は楽しいイベントがあるんだね』

『トリック・オア・トリート～♪　お菓子を貰いに変装して友達でお出かけって良いなぁ。わたしも、いつかやってみたい♪』

フェイトちゃんとアリシアちゃんにも大好評だったようで、私とし

ても嬉しい。２人から私たちの送った物への感想を聞き終えた頃、フェイトちゃんが何かそわそわしだした。

『・・・なのは、アリサ、すずか。・・・私、リンディ艦長たちのおかげで無罪になったんだ』

「「「え・・・」」」

フェイトちゃんから聞かされた、たった２文字の言葉、無罪。私たちはあまりにあっさり聞かされてボーっとしちゃったけど、すぐに頭の中に浸透して「やったぁぁぁ！！」私たちは抱き合ってフェイトちゃんの無罪を喜び合った。

シャルちゃんとクロノ君たちはちゃんと約束を果たしてくれたんだ。そんな２人に心からお礼を言いたい。と言うか今すぐ逢いたい。お礼をたくさんしたい。

そしてフェイトちゃんはこれから嘱託魔導師っていう形で働くことで、管理局――リンディさん達に恩返しをしたいってことも話してくれた。

『だからビデオレターはこれで終わりになると思う。それとね、もう１つお知らせがあるんだ。私とアリシアとアルフは、リンディ艦長たちより一足先にそっちに遊びに行けることになったよ。実は――』

フェイトちゃんの口から立て続けに嬉しいお知らせを聴くがことが出来た。リンディさん達が海鳴市は藤見町、つまり私の家の在る町に引っ越してくるんだって。引っ越し先の住所を聴けば、私の家か

ら歩いて15分くらいのところにあるマンション。
ここでもう私たちのテンションは最高潮。一時停止してからお引っ越し祝いのパーティをアリサちゃん家かすずかちゃん家で盛大に開こうとか、翠屋を貸し切っての普通のパーティにしようとか、話し合う。

「――ま、今回はなのはの案で行きましょ。いきなし盛大なパーティを開いて逆に引かせるのもなんか嫌だし」

「確かにそうかも・・・」

「うん、うん。何事もやり過ぎはダメってことだよ」

そういう感じでお引っ越し祝いのパーティは、翠屋でやることに決定・・・って確約できないけど。あとでお父さんとお母さんに相談してみなきゃ。

「じゃ、続きを観ましょ。いつ来るか、まだ聞いてないし」

アリサちゃんに先を促されて、再生ボタンを押す。

『えっと、そっちに行く予定日なんだけど、12月の2日になると思う』

「「「明日!!?」」」

あまりにも急な来訪にビックリ。あー、翠屋の貸し切りはたぶん無

理っぽい。最低でも1週間前じゃないと。

『それでね。良かったらなんだけど、私たちがお別れした場所――あの公園の、あの場所で待ち合わせしたい、って思ってるんだけど・・・』

『わたしも魂状態でフェイトとなのはの決闘や、送ってもらった写真で観たけど、綺麗な場所だよね。シャルが教えてくれたけど、そっちの12月2日は休日だって話だし、迎えに来てほしいかも♪ううん、来てね！』

『アリシア。なのは達も予定があるかもしれないから無理強いはダメだよ。でも・・・うん、来てくれると嬉しいな』

『友達、ううん、親友なら遠慮してちゃダメだよ、フェイト』

『でも・・・うぅ・・・』

悩むフェイトちゃんが、ちょっと可愛いって思っちゃう。

「アリサちゃん、すずかちゃん」

「当然っ」

「迎えに行くよ」

「だね♪」

そう頷き合う。アリシアちゃんの言う通りだ。親友に遠慮は無用。もし予定があったとしても、フェイトちゃん達の為なら時間をずらすとか、キャンセルだってする。それくらい大切な友達なんだもん。それから到着予定時刻、午前８時から９時までの間だっていうことも確認して、ビデオレターは終わった。プレーヤーからＤＶＤを取り出してケースにしまう。あとで私の部屋、宝物容れにしまっておかないと。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒イリス†††

「フェイト、アリシア、アルフ。もう準備できた？」

これから海鳴市へ旅立つ先発隊、フェイト達の部屋に訪れた。３人は準備万端とでも言うようにトロリーバッグの取っ手を手に部屋の中央に立ってた。

「うん」「はーい！」

「忘れ物も無しっと」

フェイトは小さく頷いて、アリシアは元気よく手を挙げて返事。やっぱり子供だよ、３１歳でも。アルフは部屋中を見渡して確認。つうかさ、「なんでわたしは置いてけぼりなのぉぉぉ！？」だよホント。

「ごめんね、シャル」

「シャルの分までなのは達と楽しくお喋りして来るよ♪」

「くっ、おのれ・・・アリシア」

わたしが行けないからってそんな挑発めいたことを言うなんて。ギリギリ歯軋りしたいのを耐えて、「うん、なのは達によろしくぅぅ」笑みを浮かべる。

「じ、じゃあ、シャル。・・・お世話になりました」

「なりました～♪」

「っ・・・うん。楽しかったよ、この半年。いってらっしゃい」

「「いってきます！」」「行ってくるよ」

半年と少し、居住地としていたアースラで寝食を共にしたフェイト達が今日、アースラを出て行く。とは言ってもフェイトは嘱託としてこれからも管理局に勤務するから、配属希望によってはまたアルフと一緒に乗艦するだろうけど。でもアリシアは管理局に入るかどうか判らないから、これで最後かもね。

本局のトランスポーターを利用するために下艦するフェイト達を見送る。これから自分の部屋で仕事が無ければ最後までついて行って見送るんだけどな～。それはエイミィに任せよう。

「まったく。ロストロギアを管理局施設から盗むなんて面倒を起こ

してくれちゃってさ」

自室に戻って、執務部に籍を置く全執務官・補佐官に回されてきた情報に目を通す。読めば読むほど憂鬱になる。第一級秘匿指定ロストロギア、運命を捻じ曲げ征服する者。出自不明の最恐最悪のロストロギアって認定される両刃剣だ。

名前の通り運命の征服者っていう言う意味を持つ、通称征服剣。何十何百って言う人の命――運命を吸収し、持ち主の運命を好き勝手操ることが出来る。特に高魔力持ちの人の命を奪うといいらしい。その征服剣をようやく機動一課が発見、回収。施設へ移送し終えた直後を狙われて強奪された。

「この強奪犯たちも、パラディース・ヴェヒターが潰してくれないかなぁ～」

先日、何百人っていう犯罪者が一斉検挙された。デスペラードパーティなんていう魔導犯罪者の祭典に参加していた連中だ。それにパラディース・ヴェヒターが参加し、犯罪者たちを狩りに狩ったっていう。それに乗じて成功した今回の検挙。けど突入前に内乱の如く犯罪者たちが争っていて、死亡者も多数出ている。

死亡者リストの中には管理世界の政治家や軍部関係者も居たそう。その政治家や軍人とかっていう連中は、お金や権力で自分の罪をもみ消していた常習犯。殺されたって言うのも自業自得、罰が当たったんだ。トントンと机を指で叩きながら強奪犯、そしてデスペラードパーティの参加者だった連中の簡略リストを眺める。

「ロウダウナー・・・。レインジャー、サーベイヤー、マゼラン、

メイヴン、ドーン。以上５名からなるフリーランス魔導師。犯罪歴無しってことで厳重注意の後に解放。その結果がこれって・・・」

やるせないものよね～。もしコイツらに犯罪歴があれば、きっとパラディース・ヴェヒターに潰されていたでしょうに。そんなＩＦを考えながら、連中の足取りの調査資料に目を通す。と、そんなところにＰｉＰｉＰｉ♪と呼び出しコールが鳴った。「はい」って出ると、少し焦ったような顔をしたクロノがモニターに映った。

『イリス、まずいことが判明した！　例の征服剣の強奪犯たち、ロウダウナーの向かっているであろう世界が判明した！』

「どこ！？」

『・・・第９７管理外世界・・・！　なのは達が居る、そして今、フェイト達が向かっている世界だ！』

「っ！・・・よりによって管理外世界で殺人を行おうって言うのロウダウナー！！」

怒りに駆られてデスクに拳を振り下ろす。偶然連中が海鳴市に転移して、最悪なのは達の魔力反応を察知、そして遭遇でもしたら・・・絶対に戦闘になる。慌てて椅子から立ち上って部屋を出る。クロノの映るモニターが追ってくるから、「行かせて、クロノ！」アースラの通路を走りながら懇願する。

『僕もすでに申請中だ！　とにかく今はトランスポーターで合流だ！

出撃許可が下りていつでも転移できるように！』

「了解！」

クロノとの通信が切れる。そしてわたしはひたすら走る。アースラを出、艦船ドックの通路を駆け、本局の廊下をダッシュ。トランスポーターまであと少しと言うところで、クロノから通信が入った。

『イリス！　僕と君に出撃の許可が降りた！　トランスポーターに付き次第、すぐに第９７管理外世界に発つ！』

「了解！」

わたしのデバイスである"キルシュブリューテ"の待機形態、首から提げてる指環の首飾りを手に取る。

（お願いだから下手に首を突っ込まないでよ、みんな！）

ロウダウナー５人の魔導師としてのレベルは高い。だけどＰＴ事件を、そしてあのテスタメントとの戦いを切り抜けたなのは達なら何とかなりそう。でもだからと言って危ない目に自ら遭いに行ってほしくない。だから本気で願うよ。なのは、アリサ、すずか、そしてフェイトにアルフ、アリシア。変な気だけは起こさないで。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒フェイト†††

管理局施設のトランスポーターを乗り継ぐ中、「みんな・・・」色

んな感情で心臓がドキドキ。なのは、アリサ、すずかと再会できることでドキドキ。そして待ち合わせのあの場所に来てくれているかでドキドキ。
こちらからの一方的なお願いだし、なのは達の世界が休日だと言っても何か予定があるかもだし。このハッキリしない感じの所為でちょっと不安。次の転送で海鳴市に着くってことみたいだから、ドキドキは最高潮。転送するときに生まれる光が私たちを包み込む。次に視界が開けた時、そこはなのは達の住む世界だ。

（・・・っ、潮の香り、優しい海風・・・・！）

足から伝わる地面の感触、肌を撫でるちょっと冷たい海風、頭上から降り注ぐ陽の光。着いた、私が始まりを見つけることの出来た大切な場所に。

「「フェイトちゃん！」」「フェイト！」

「っ！」

耳に届く、私の大切な友達の声。キョロキョロと見回す。

「なのは、アリサ、すずか・・・・！」

3人が私たちの所に駆けて来る。待っていてくれた。嬉しすぎて鼻の奥がツンとする。と、背中をトンと押された。振り向けばアルフとアリシアが笑みを浮かべていて。私は「ありがとう2人とも」お礼を言ってなのは達に向かって駆ける。そして4人で抱き合って再

会を喜び合う。

「ありがとう、なのは、アリサ、すずか。来てくれて嬉しい！」

「当たり前だよ、大切な友達が来るって言うんだもん！」

「うんっ。ビデオレターが届いた日から待ち遠しくかったよ！・・・・昨日だったけど」

「まったく。そんななのはとすずかのおかげで、あたしはちょっと寝不足よ。でもま、あたしも待ち望んでたわ、フェイトと逢える今日を」

体を離して今度は４人で両手を取り合う。

「「おかえり、フェイトちゃん」」「おかえり、フェイト」

「ただいま。・・・なのは、アリサ、すずか・・・ただいま！」

私は帰って来たんだ。みんなと触れ合えて、声を聴いて、言葉を交わして、改めて実感する。

「アルフさんも久しぶり！」

「ああ、久しぶりだね。元気そうで何よりだよ。ま、あたしよりは、こっちに気を掛けてやってくれ」

なのはに挨拶を返したアルフがアリシアの背中を押して前に出した。
「コホン。こうして直接会うのは初めてだから・・・はじめまして、アリシア・テスタロッサです♪」

アリシアが浮かべたとびっきりの笑顔に、「か、可愛い♪」なのはとすずかは惚けて、アリサも「これは・・・」なんて言って何か考え込み始めた。アリシアの笑顔って、なんていうか人を魅了する力を持っているんだ。
シャルもリンディ提督もエイミィ、あのクロノだって魅了されちゃったし。同じ女の子でも魅了されちゃうんだからしょうがないと思う。クロノの場合はシャルにロリコンや変態呼ばわりされたけど。
なのは達がアリシアと挨拶を交わしているのを眺めながら、シャルに変態呼ばわりされてショックを受けていたクロノを思い返す。と、そんな時。

≪スズカ、付近に転移反応ですわ！≫

すずかのデバイス、"スノーホワイト"がそう告げた直後、私たちの居る場所より10数mと離れた宙に男の人が2人、女の人が1人と転移してきた。私たちはその人たちを警戒して距離を取るべく後退、近くの茂みに身を隠す。

『なんなのよ、あの人たち。フェイト達の知り合い？』

『ううん、違う。見たことない』

『うん。たぶん管理局員でもない。局の制服じゃないし、武装隊のバリアジャケットでもない』

その人オリジナルのバリアジャケット（クロノやシャルの騎士甲冑みたいな）の可能性もあるけど、私たちの他にこの世界に転移する局員が居るって聞いてない。

「クソっ！　よりによってこんな辺境のど田舎世界に逃げる羽目になっちまうなんて！」

「それよりサーベイヤーとドーンはどうした！？　まさかはぐれたのか！？」

「ちょっとうるさい！　あの2人なら追手からちゃんと逃げられるでしょ！　それより私たちのこれからの心配をしなさいよ！」

「ふざけんなっ、征服剣はドーンが持っているんだぞ！」

何かあったのか騒いでいる。会話からして関わり合ったらいけない人たちだってすぐに理解できた。でも、嘱託とは言え私は管理局員。アルフに『事情聴取するよ』って念話を送ると、アルフは『あいよ』って頷いてくれた。

『なのは達は離れてて。私とアルフで声を掛けてみる』

『フェイトちゃん！？　じゃ、じゃあ私たちも！』

『ううん。これは私の、管理局員としての仕事だか――』

そこまで言いかけたところで"スノーホワイト"が≪ 新たに3つの転移反応ですわ！≫って知らせてくれた。と、ゾワッと背筋を走る悪寒。なのは達もそうみたいで体を震わせていた。何か、何かまずいのが来る。

≪ 来ますわ！≫

その一言の直後、さっき現れた3人とは別の3人が転移してきた。その3人には見覚えがあった。以前シャルに見せてもらったデータで見たことがある。

「「パラディース・ヴェヒターー・・・！」」

私とアリシアの声が重なる。なのは達にそれが何かを訊かれ、私は答えた。魔法を使って悪事を働く犯罪者を倒すベルカ式の騎士で、その行為から被害者たちには英雄視されて、犯罪者たちからは恐れられているって。

いま姿を見せているのは確か、チーターの頭はランサー、ライオンの頭はセイバー、ウサギの頭はバスターー。パラディース・ヴェヒターの中でも戦闘に特化した騎士って聞いてる。

「管理局施設からロストロギアを強奪」

「そん時に局員、研究者、民間人へ魔法攻撃を仕掛けた」

「死者は出なかったが重傷者は出た」

「「「ヒッ・・・！」」」

強奪犯だって言う3人に向けられたのは、離れた私たちですらビリビリと感じるほどの敵意。直接向けられているあの3人がどんなふうに感じているのか想像もしたくない。

「デスペラードパーティん時。あたしらはあえてテメェらを潰さなかった。何でだか解るか？　テメェらのその魔法の才を潰したくなかったからだ。なのに！！」

――テートリヒ・シュラーク――

私たちよりもさらに小さい、赤い服に身を包んだ女の子バスターが、携えていた鉄槌で1人の男の人を殴打。その人はものすごい勢いで地面に叩き付けられて動かなくなった。他の2人はそれを見て「ごめんなさい！」って泣きながら謝ったけど、でも・・・。

「残念だよ、ロウダウナー。お前たちの未来を潰すことになって」

――集い纏え（コード）、汝の雷撃槍（フルグルゼルエル）――

「一時の過ちだと見過ごすわけにはいかんのだ、お前たちの行った所業は・・・！」

――紫電一閃――

ランサーとセイバーのデバイスがシャルやアリサのデバイスと同じようにカートリッジをロード。ランサーの槍には雷が、セイバーの剣には炎が付加された。そしてランサーとセイバーは問答無用で強奪犯の残り2人を斬り伏せた。

「は、犯罪者だからって容赦が無さすぎない・・・？」

「あの人たち、ちゃんと謝っていたのに・・・」

「確かに悪いことをしたかもしれないけど。・・・お話しで終われなかったのかな・・・」

アリサとすずか、なのはがランサー達の行いにちょっとばかり非難した。でもここからがあの騎士たちの本当の狙いなんだ。騎士たちは地面に倒れ伏して苦痛に呻いている3人の胸に手を突き入れた。

「「「「えっ・・・！？」」」」

その光景に目を見開くなのは達。実際にその行為を見る私とアリシア、アルフも驚かざるを得なかった。騎士たちは勢いよく手を抜く。

「「「「ぎゃぁぁぁあああああああ！！」」」」

そして私たちは見た。騎士たちの手に収まっているリンカーコアを。

「ちょっ、あんた達なにやってんのよ！！」

「アリサ！？」「「アリサちゃん！？」」

ここであまり良くない事態が。騎士たちがリンカーコアを抜き取ったその行いを見たアリサが怒りを爆発させて、騎士たちに向かって怒鳴った。しかもズンズン向かおうとしているし。私たちはそんなアリサを止めるために姿を現す。

私たちに騎士たちが目を（つぶらな目だから怖くはないけど）向けて来た。すると「あ？　なんだテメェら。つうか、一般人に見られた！？」バスターが慌て始めた。

「あんた達が英雄かは知らないけど、こっちにはフェイトっていう管――」

「フェイト？・・・フェイト・テスタロッサ？」

「え？」

ランサーに私の名前を呼ばれた。顔見知りでもないのに。改めて「相違ないな？」って訊かれたから、「はい、そうです」って答えた。

――あなたに沈黙（ゲシューク・シュヴァイゲン）の贈り物を――

するとこの付近一帯に結界が張られたのが判った。一体どういうつもりなのかを問い質そうとして口を開いた・・・のはいいけど「っ・・・！？」どれだけ声を出そうとしても出せない。なのは達を見れば、なのは達も同じように口をパクパクさせているだけ。じゃあ

念話なら。そう思って念話を通そうとしても繋がらない。

「フェイト・テスタロッサ。この世界で起きた事件の首謀者、プレシア・テスタロッサの娘」

「事件？　この平和な世界で魔法関連の事件が起きていたのか？」

「ああ。ジュエルシードと言うロストロギアを巡っての、次元断層を起こしかねない争い。フェイト・テスタロッサ、そして隣の使い魔らしき女はその先兵らしい」

「次元断層！？　そんなヤバいことを起こそうとしてんのか、アイツの母親は！」

バスターから敵意が向けられてくる。心臓が早鐘を打つ。もしかして完全に私は狩りの対象者になってしまった・・・？　すぐにでも誤解を解きたい。事件はもう終わって、母さんは亡くなって、私は裁判を経て無罪になったってことを。だけど出来ない。声や念話が封じられている今は。

「ガキのクセしてなんて危ねぇことしやがる！」

ガキって。どう見てもそっちの方が子供だと思う。

「ランサー。どうする？」

「次元断層発生未遂、次元震発生。許し難し。プレシア・テスタロ

ッサの所在を問う前に、罰を与えよう」

まずい、完全に敵対するつもりだ。騎士たちはそれぞれデバイスを構えて、私たちに向かって走って来た。誤解なんかで戦いたくない。でも戦わないと、あの人たちのようにリンカーコアを奪われる。だったら。私はバリアジャケットに変身。迎撃の用意をする。と、なのは達も変身してくれた。

「すまんな。罪には相応の罰を、なのだ」

――紫電一閃――

≪来なっ、同じ炎熱変換持ちの勘違い女！≫

――ラウンドシールド――

「デカい魔力持ちっていうのがあたしらにとっちゃ嬉しいよな！ガキだからって犯罪者、その仲間にゃ手加減はしねぇぞ！」

――テートリヒ・シュラーク――

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！≫

――プロテクション――

「ついでにジュエルシードの在処も教えてもらおうか」

――集い纏え、汝の閃光槍（コード／ポースゼルエル）――

≪スズカに触れないでくださいまし！≫

――アイスミラー――

私とアルフが動く前になのは達が騎士たちの攻撃を防いだ。守ってくれたんだ。でもダメだった。セイバーの炎の斬撃はアリサのシールドを斬り裂いて、ランサーの光の刺突はすずかのシールドを砕いた。その衝撃でアリサとすずかが大きく弾き飛ばされた。そしてなのはのシールドはバスターの一撃でも破壊されることはなかったけど、受けた衝撃には耐えきれずに遠くに弾き飛ばされた。

（なのは、アリサ、すずか！！）

――フォトンランサー・マルチショット――

セイバーはアリサとすずか、バスターはなのは、ランサーは私とアルフを標的にした。シャルの話じゃランサーのランクは推定Ｓ＋。

（でも、誤解されたまま倒されるなんて嫌だ！！）

私のマントを掴む不安そうな表情を浮かべるアリシアを下がらせて、私はフォトンランサー５発を一斉発射。ランサーは槍を振るって全て弾き飛ばした。間髪入れずにアルフがランサーに向かって突進。格闘戦を仕掛ける。アルフの猛攻をランサーは槍を持っていない片手だけで捌いている。強い。

――サイズスラッシュ――

でもアルフに集中していることは間違いない。私は高速移動魔法、ブリッツアクションでランサーの背後へ瞬間的に回り込む。サイズフォームの"バルディッシュ"に展開されている魔力刃にバリア貫通・魔力強化に付加した一撃。

（捉えた！）

ランサーは私に気付いているようだけど、アルフの激しくなった猛攻に掛かりっきりで反応しきれていない。確実に決まる、そう思った。ううん、確かに決まった私の一撃。

（うそ・・・！？）

サイズスラッシュの刃はランサーに直撃してる。それなのに効果が届いてない。どれだけ力を籠めて押してもピクリともしない。

「お前の攻撃魔法と、私の防御魔法の性能差だ。障壁貫通効果。悪くはないが、私の防御力を突破するには少々足りなかったな」

――吹雪け、汝の凍波（コード バルビエル）――

「っ・・・！？」

ランサーの足元にベルカ魔法陣が展開されたと思えば、ランサーと

アルフを覆い包む強烈な吹雪が生まれた。その勢いに目を閉じる。吹雪はすぐに治まった。目を開けると、アルフが氷の柱に捕らわれている光景が・・・。

（アルフ！）

駆け寄って氷の柱を叩く。何度もアルフの名前を呼ぼうとしても、やっぱり声が出ず、念話も使えない。ジャリっと地面を踏みしめる音が背後からして、私は慌てて振り返る。ランサーがすでに槍を振り下ろしている体勢だった。完全に懐に入られているから防御魔法はダメ。出来ることと言えばブリッツアクションでの急速離脱。考える間もなく実行して、ランサーの振り降ろしを回避する。

「移動後のことも考えなければ無駄なことになるぞ」

ハッとして顔を上げればランサーが目の前に佇んでいた。しかもさっきのように槍を振り降ろしている最中。ブリッツアクションも使用直後で、すぐには使えない。なら最後は「っ！！」"バルディッシュ"を盾にするしかない。

「咄嗟の判断力と行動力、見事。その歳で素晴らしい。だが・・・」

「っ！？」

水平に掲げた"バルディッシュ"から、キンッ、と一音。たったそれだけで柄が切断された。あまりにあっさりとした破壊。シャルの鋭い剣撃でもこうはならなかったのに。思い知る。目の前に居る騎

士は、誰よりも強い騎士なんだって。呆けること一瞬。頭上や背後から爆発音・破壊音・金属音、いろんな音が聞こえてきた。

（アリサ・・すず、か・・・・！　なの、は・・・なのはぁぁぁぁぁ！！）

セイバーとバスターに撃墜された私の大切な友達が地面に倒れ伏していた。"フレイムアイズ"の刀身は折れて、"スノーホワイト"の爪は折れて、"レイジングハート"の柄やヘッドは酷く損傷していて・・・。

「この娘、粗削りだが良い筋をしている。真っ直ぐで、純粋な。それにこの剣筋、懐かしい。こちらの娘も良い補助魔法の使い手だ。・・・ランサー。この娘たちは本当に悪か？　私にはどうもそうは思えん」

「それは間違いないだろう。プレシア・テスタロッサの先兵、フェイト・テスタロッサと共に行動していたのだから」

「こっちの白い方はゆるさねぇ。は――オーナーから貰ったあたしの帽子を砲撃で壊しやがった・・・！」

（私の所為？・・・私と一緒に居たから、なのは達はこんな酷い目に遭ったの？）

私の心の中に何か嫌なモヤモヤが生まれる。知らず流れる涙で滲んだ視界の中、「とりあえずリンカーコアの蒐集だな」ランサーがなのは達に右手を翳した。

（ダメ・・・！）

なのは達の胸からリンカーコアが浮かび上がって来た。シャルの話が脳裏を過ぎった。リンカーコアを奪われた犯罪者は、魔導師として再起不能にされた、って。リンカーコアは、どこからともなく現れた分厚い本へ吸い込まれるかのようにその光を伸ばしていく。直感で解った。今まで奪われたリンカーコアはああやってアノ本に吸収されたんだって。

「っっっっ！！！！」

折れた"バルディッシュ"の柄をランサーに勢いよく投げつける。当然槍で弾かれた。すぐさまブリッツアクションを発動、ランサーに突撃を仕掛ける。途中、セイバーが立ち塞がった。

（どけぇぇぇぇぇぇっ！！！）

――サイズスラッシュ――

短い柄になった"バルディッシュ"を振り回してセイバーに攻撃。でもセイバーもまた強かった。剣で"バルディッシュ"を弾き返して、左手に持っていた鞘で私を殴打。私は軽々と弾き飛ばされた。

（まだまだぁぁぁぁぁぁ！！！）

地面に足をつけた瞬間にすぐブリッツアクション。セイバーを回り

込んで、ランサーの側面に移動。すぐに全力で攻撃を繰りだす。それなのに・・・・！

（私は・・・・！）

ランサーは片手で振るう槍で私の連続攻撃を、私を見ることなく防いでいた。

（私は、こんなに・・・・！）

少しずつ光が弱くなるなのは達のリンカーコアに、私は焦る。

（弱かったの・・・・！？）

シャルやクロノとの模擬戦で鍛えられて少しは強くなったって思っていた。なのはを、アリサを、すずかを、大切なみんなを守れるだけの力を付けたって。

（それなのに・・・・！）

私の全力で必死な攻撃はランサーに見向きもされないで簡単に防がれ続ける。

（私は・・・こんな簡単に防がれるような強さしか・・・得られなかったの！？）

どんどん溢れて来る涙で視界がぼやけて、ランサーすら認識できな

くなってきた。

（こんな、こんな、こんな、こんな・・・！）

悲しさと悔しさと、そして怒りで今まで以上に大振りになった一撃。しまった、って思ってももう手遅れ。ランサーの槍は私の手から"バルディッシュ"を弾き飛ばした。

「しつこいぞ」

――煌き示せ、汝の閃輝（コード）（アダメル）――

「っ！？」

「おい、ランサー！」「待て、ランサー！」

目の前が綺麗な蒼い光でいっぱいになる。砲撃だって気づくのに、直撃を受けて吹き飛ばされ、地面に叩き付けられるまで掛かった。全身を襲う痛み、揺れる視界、薄れていく意識。その中で見たのは、両腕を広げて私を庇っているアリシアの後ろ姿だった。

Ｅｐｏｓｌ４幼き勇者たちの決意～Ｕｎｂｅｕｇｓａｍ　Ｗｉｌｌｅ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

俺は今日までどうやって無理なくなのは達に襲撃を仕掛けられるかと数通りのパターンを思案していたが、それは思わぬところからキッカケを得ることが出来た。追っていたロウダウナーが海鳴市に降り立ったのだ。
ロウダウナーには色々と思うところはあったが、デスペラードパーティで連中を潰さないで良かったとは思った。まぁ悪道から離れて正道を進んでほしかったと言うのも本心だったが。

（ああ、ツイている、ツイているぞ俺は！）

ロウダウナーに遅れて海鳴市に戻ったその時、偶然なのは達がフェイトとアルフ、そして信じがたいことにアリシアと再会を喜び合っていた場面だった。アリシアが生きていることについては目が飛び出しかねない程に驚いたが、それを表面に出ないように努めた。プレシアが死に、アリシアが蘇った。理解できない事態だが、すでに済んだことだ、気にはすまい。・・・本当はすごく気になるが。

（この機会、逃すわけにはいかない。すまないな、みんな）

フェイトが管理局員で、なのは達が一般人であることをシグナムとヴィータに知られないようにするためにシャルの無音結界を展開。

おかげで真実を知らないままシグナムはアリサとすずかを撃墜し、ヴィータはなのはを撃墜、俺はアルフを凍結捕縛した。と、親友を墜とされた怒りや悔しさで半ば暴走しているフェイトが俺に仕掛けてきた。

（イリスやクロノに相当鍛えられたようだな。暴走気味でも鋭い斬撃だ）

柄が半分になっている"バルディッシュ"であるにも拘らずフェイトの斬撃の鋭さを残している。が、それでは俺に届かない。なのは達のリンカーコアを呼び出した"夜天の書"に蒐集させつつ、片手間で済む防衛に意識を割く。フェイトの流す涙の量が次第に増えていく。

止めたいところだがそうはいかない。フェイトの攻撃のクセは憶えている。だからこそ見ずとも相殺することが出来る。蒐集があと僅かで終わると言う時、フェイトは焦りからか大振りの一撃を繰り出してきた。

（レイジングハートはいい具合に破損しているな。なら、あとは俺がバルディッシュを・・・）

大きく破損させる。その破損が後にベルカ式カートリッジを取り込むことになる修復に繋がる。アリサとすずかのデバイスはどうなるか予測不能だが、多少の強化は施されるだろう。俺は"エヴェストルム"を振るい、"バルディッシュ"を大きく破損（だがコアが完全破壊しないよう）させ、フェイトの手から弾き飛ばす。涙を溢れさせている目を大きく見開くフェイトに穂先を向ける。

「しつこいぞ」

――煌(コード)き示せ、汝(アダメル)の閃輝――

「おい、ランサー！」「待て、ランサー！」

シグナムとヴィータに制止を受けるが、問答無用でフェイトに閃光系砲撃アダメルを放つ。フェイトは成す術なく直撃を受け、大きく吹き飛んだ。それと同時になのは達のリンカーコアの蒐集を終え、いよいよフェイトの蒐集を始めようとしたところでアリシアが俺の前に立ち塞がった。デバイスを持たず、変身もしないところからアリシアは魔導師としては二流もいいとこ三流なんだろう。生前での彼女はEランクだったはずだ。

「・・・！」

アリシアの脚は震えていて目には涙を湛えている。明らかに俺を恐れている。それでも妹を守ろうと必死に俺の前に立ち塞がった。仲が良いようで何よりだよ。でも、すまないな。今の俺ははやての騎士なんだ。

「ランサー。まさかその娘のリンカーコアをも蒐集するのか？　防護服にすら変身していないのだぞ」

「さすがにそりゃ騎士として間違ってるだろ。犯罪者とは言え、武器も持ってねぇ奴から蒐集すんのはどうだよ」

シグナムには右肩を掴まれ、ヴィータには"エヴェストルム"を持つ左手首を掴まれた。まぁ、アリシアの魔力を蒐集してもすずめの涙程度だろう。俺は"エヴェストルム"を待機形態の指環に戻してからアリシアへと歩み寄って行く。アリシアは涙を拭うことなく俺を睨み付け、一歩も引こうとせずにフェイトを庇い続ける。

「そういうわけだ。しかしこのまま見逃すわけにもいかないんだ」

「っ！！」

右手の平をアリシアの顔へと持っていき「我が手に携えしは確かなる幻想」と詠唱。と、「い〝っ！？」アリシアが手に噛み付いてきた。必死の反撃。アリシアは俺が振り解かないと判るやさらに力を籠め始めた。子供の顎で人の手に噛み付くなんて、それだけで尋常じゃない力が要ると言うのに。

（そこまで俺が憎いんだな）

さらにアリシアは両拳をポカポカと俺の腹に何度も振り下ろしてくる。魔力付加もされていない単なる物理攻撃。痛くも痒くもない。逆にアリシアの拳の方が痛いだろうに。それでも彼女はやめようとしない。徐々に赤くなってくるその手を見、「待て」と空いている左手で止める。が、アリシアは掴まれていない左拳でなおも殴ってくる。

「それ以上は君の手が使い物にならなくなる。もうやめるんだ」

つい演技ではなく素面でそう言ってしまうと、アリシアは僅かに困惑の色は瞳に宿し攻撃をやめた。今がチャンスだ。アリシアの右手首を掴んでいる左手の平を改めて彼女の顔に翳す。

「おやすみ、アリシア・テスタロッサ」

――ヒュプノスの誘い――

「っ！？・・・・ｚｚｚ」

相手を強制的に眠らせる複製術式を発動。アリシアは即座に夢の世界へと旅立った。倒れていく彼女を抱き止める。

「みんな」

「「「管制騎士（マスター）」」」

管制騎士マスターと名乗らせているシュリエルが"夜天の書"の側に転移してきた。ちなみに頭の方はデフォルメされたホッキョクグマ。

「もう蒐集を終え――ん？　待て、何だ、この状況は。夜天（オーナー）の主はやてと同じくらいの子供たちではないか・・・！」

シュリエルが俺たちの周りに倒れ伏しているなのは達を見、俺たちに非難の目を向けて来た。ここで俺はシュリエルにもジュエルシー

ドやＰＴ事件のことを伝えた。

「・・・ランサーの情報と言え信じ難い話だな。改めて情報の正否を確認するべきだ」

「私もマスターの意見に賛成だ。最悪我らは大きな失敗を犯したのやもしれんぞ」

「おいおいおい。場合によっちゃあたしらは勘違いでコイツらを潰したってことになるのかよ」

非難の視線が一斉に俺へ。さて、それじゃあ予定通りに怒声や罵声を浴びることにしようか。ＰＴ事件の情報を空間モニター２つに表示。ＰＴ事件は既に終わり、プレシアは死亡、フェイトは裁判にて無実判決を受けた、という最新の情報をみんなで見る。

「ランサー・・・・こんの・・・馬鹿ッッ！！！！」

「何故最新の情報を確認しなかった！？」

「ランサー・・・、お前はなんてことを・・・」

それを知るや否やヴィータの飛び蹴りが俺の腹を捉えた。シグナムには怒鳴られ、シュリエルからは冷たい視線をプレゼントされた。その後、俺はなのは達を上級治癒術式のエイルで回復させて休憩所のベンチに座らせ、はやての待つ家へと帰った。必要なことだったとは言え、はやてにも怒られ、いや悲しませてしまうと思うと胃に

穴が開いてしまいそうだ。が、「俺はもう、立ち止まるわけにはいかない」最後まで描いたシナリオ通りに事を進めなければ。それが俺の選んだ道の責任だ。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

ロウダウナーを追ってわたしとクロノはフェイト達が降りる予定地点の海鳴市は臨海公園へとやって来た。そこはかつてなのは達と別れの挨拶、再会の約束を交わした場所。懐かしい海鳴市の潮の香り、そして「さむっ！」冷たい海風がわたし達を歓迎してくれた。もう少し懐かしみたいところだけど、今はとにかくなのは達の安否確認、そしてロウダウナーの居場所だ。まずはわたしにとって一番重要なのは達の安否。でもわたし達は労することなくみんなを見つけることが出来た。近くの休憩所のベンチに寄り添うように仲良く並んで座ってるじゃない。

「ほっ。良かった。・・・なのはー、アリサー、すずかー、久しぶりぃ～～」

やっほーい、なのは達と逢うことが出来る。なのは達に向かって駆ける。クロノはわたしの背に向かって「しょうがないな。ロウダウナーの行方は僕の方で調べる」そう言ってくれたから、「ダンケ」振り向きざまに投げキッスをプレゼント。するとクロノは目に見えて顔を赤らめて、「さっさと再会を喜び合って来い馬鹿！」なんて怒鳴ってきた。照れちゃって可愛い♪

「シャルだよ～！　ねえねえ、なのは、アリサ、すずか！」

背を向けてるなのは達にもう一度声を掛ける。でも誰もリアクションしてくれない。聞こえてない、ってことはありえない。もしかしてわたしを驚かそうとしてる？　だったらどんな風に驚かせてくれるんだろう。ちょっと期待。

「な～の～は～、ア～リ～サ～、す～ず～か～♪」

手を伸ばせばもう届く距離だって言うのに、やっぱりなんのリアクションを起こさない。ここでようやくわたしはおかしいって思い始めた。

「ねえ、みんな・・・？」

真ん中に座って子供たちの体重を一手に引き受けてるアルフの肩に手を置く。だけど返事はない。眠っている・・・と言うよりこれは「ちょっと待ってよ、ねえ、どういうこと？」慌ててみんなの前に回り込んで意識を失ってるのを確認した。

「っ！　うそ・・・。なんでよ！　なんでこんなことになってるの！　クロノ！　なのは達みんな、意識を失ってる！　リンディ艦長、ティファに連絡を！」

身体ダメージの有無を確認しながら、局に連絡を取ってるクロノに向かって叫ぶ。ハッとしてわたしに向いたクロノは「なんだと！？・・・っ、判った！」って強く頷いてすぐ本局の医務局への搬送申請をし始めた。

「一体何が、ううん、一体誰が・・・みんなをこんな目に遭わせた・・・？」

頭痛がする程に歯を噛みしめる。怒りでどうにかなりそう。ええ、許さない、絶対に。ああ、もしかしてロウダウナーの仕業？　だとしたら・・・「ぶちのめす。局員とか教会騎士とか、どうでもいい」わたしの大切な友達を傷つけたその罪、償わせてやる。

「イリス！　近くにフェリスが航行中だそうだ。まずはそこにフェイト達を搬送する！」

フェリス。アースラと同じ巡航L級の1番艦。艦船には必ず医務官が乗艦することが義務付けられてる。時間を掛けて本局に搬送するより、まずは医務官に診てもらった方が良い。クロノに頷き返す。すぐになのは達の転送が始まった。順々に転送が続いて、最後にアリシアが転送された。

「イリス。僕たちも回収してくれるそうだ、いくぞ」

「・・・うん」

目の前のクロノが転送されて消えた。最後にわたしが転送される。こんな形で海鳴市に戻って来て、そして戻ることになるなんて。「はぁ」溜息を吐いて、海鳴市に小さく手を振った。

視界が白に染まって、次に晴れた時にはフェリスのエントランス。近くにはクロノ、そしてフェリスに乗艦しているわたしの幼馴染、

「ルミナ・・・」が佇んでいた。
ルミナ――アルテルミナス・マルスヴァローグ。わたしと同じ聖王教会と管理局の両方に籍を置いてる、ある一芸に特化した騎士。ローズピンクの長い髪に、綺麗な翡翠の瞳。歳は13。階級は空曹長。ルミナと初めて会った時、感情の揺らぎがあった。まぁリンディ艦長たちやなのは達と違って泣いたんじゃなくて、僅かな恐れと大きな悲しみを抱いた。けど今では超仲良し。メールの着信音、メールで～す♪　メールだよ～♪　メールだっつってんだろ～♪の最後を担当してる。

「あの子たちは医務室に搬送したよ、イリス。とりあえず落ち着いているって事だけど・・・」

「そう、ありがと。世話になるよ」

「クスクス。いいよ、気にしないで」

ルミナは特徴的な笑い声を漏らして笑顔を浮かべた。わたしも笑顔で応えようとするけど、なのは達があんなことになってるから笑みを作れない。すると、「ほら、私の部屋に案内するから休んで」ルミナに優しく肩を叩かれた。
そしてわたしはルミナの部屋に、クロノはフェリスの艦長、メサイア・エルシオン提督に挨拶するために、ルミナと一緒にブリッジに向かった。それから少し。ルミナの部屋で、フェイト達と一緒に海鳴市に向かわなかった自分に対してイラついていると、『イリス。あの子たちが目を覚ましたの。医務室に場所、判るよね？』ルミナからそう通信が入った。

「いま行く！」

部屋を飛び出して医務室へ向かう。途中、「クロノ！」と合流して、医務室へ向かって走る。そんな中、「悪い知らせがある」ってクロノが話しかけてきた。

「それ、今聴かないとダメ？」

「・・・これからなのは達から真実を聞かされるか、今すぐ僕から推測を聞かされるか、まぁ聞かずともいい話かもな」

クロノはかなり困惑しているよう。そんな表情を見せられたら「・・・聴かせて」と言うしかない。

「先ほど、マルスヴァローグ空曹長に聴いたんだが、ロウダウナーが捕まったそうだ。・・・捕まえたのはパラディース・ヴェヒター。捕縛場所は第９７管理外世界・極東地区、現地惑星名称・地球は陸上国家・日本、関東地区海鳴市、海鳴臨海公園。予測時刻は、日本における時刻で午前８時３０分から９時００分までの間」

「・・・・は？　なのは達が再会を喜び合っていた時刻に、あの公園でパラディース・ヴェヒターとロウダウナーが衝突していた、っていうこと？」

「おそらくだが。ここからが僕の推測だ。もしパラディース・ヴェヒターとロウダウナーが衝突しているのを、なのは達が目撃してし

まったら・・・」

「たぶんフェイトが管理局員として戦闘停止を呼びかける・・・」

そこまでは容易に想像が出来た。正義感に目覚めたフェイトなら確実にそうする。でも「どうして全滅しちゃってるわけ？」パラディース・ヴェヒターが居たなら、なのは達があんな目に遭うわけがないはず。仮にも悪――犯罪者狩りをし、弱き者を助ける騎士集団だ。となればなのは達をロウダウナーとの戦闘に巻き込まないようにするはず。それなのになのは達が意識を失うような事態になるなんて・・・。

「パラディース・ヴェヒターは魔導犯罪者を許さない。もしなのは達が戦闘に介入し、ロウダウナーを少しでも庇うような真似をしたら・・・」

「間違ってなのは達を撃墜した・・・！？　・・・待って、ちょっと待って。ありえないよ、クロノ。フェイトならまず名乗るはずだよ」

局員なら当たり前の行動だ。わたしだって介入時にはわざわざ告げる、名前を、管理局員であることを、どこの所属でなんの役職・階級に就いているかを。もしフェイトが名乗ったうえで、ロウダウナーとの戦闘に巻き込まれたんだとしたら。パラディース・ヴェヒターは管理局に敵対行動を取ったっていうことになる。であれば、騎士たちが逮捕の標的になっちゃう。

「その推測が正しいものか、これから聞けるだろう」

「・・・・うん」

医務室に辿り着いて、スライドした扉を潜って室内に入る。と、「あ、シャルちゃん、クロノ君！」ベッドの上に座ってるなのはが満面の笑顔で大手を振っていた。

「何よ、シャル。ひっどい顔してるじゃないの」

「大丈夫シャルちゃん？」

「・・・馬鹿。わたしのことなんかより自分たちのことを考えてよ・・・！」

なのはとは違ってソファに座ってるアリサとすずかも笑顔を浮かべてる。でも「フェイト・・・？」だけは俯いていて、傍に居るアルフとアリシアがフェイトの手にそっと手を添えている。翳りのあるフェイトの表情は見ていて辛い。なのは達とは違ってフェイトにだけは何かあったのかもしれない。

『ハラオウン執務官。イリス。彼女たちの診察結果なんだけど、悪い知らせがある』

ルミナが思念通話でそう言ってきた。無言で先を促すわたしとクロノ。

『彼女たち、リンカーコアに僅かばかりのダメージを負ってた。今までに似たような症例があるって、エコさんが言ってた。その患者と言うのが――』

『『魔導犯罪者・・・！』』

医務室のデスクでカルテを見てるフェリス付の医務官、エコさんに目をやる。エコ医務官は頷きで応えてくれた。

『うん。高町なのは、アリサ・バニングス・月村すずか、フェイト・テスタロッサ、アルフ。どうしてかアリシア・テスタロッサを除く彼女たちは、パラディース・ヴェヒターにリンカーコアを吸収された』

「うそ・・・」

「「シャルちゃん！？」」「シャル！？」

その場にへたり込む。リンカーコアを引き抜かれた対象は魔導師として再起不能にされる。なのは達はもう、魔導師じゃないの？　その絶望がわたしの全身から力を奪い去って行く。ベッド・ソファから降りてわたしに駆け寄って来たなのは達に、両肩を支えられた。

「最後まで聴いてイリス。不思議なことにこの子たちの体やリンカーコアには治癒系魔法で回復された形跡があったって。ロウダウナーのように局施設に連行もされてないし。イレギュラーが起きている」

ルミナにそう言われ、なのは達に目をやると、「にゃはは。ちょっと辛いけど、魔力を使えるよ」なのははそう微笑んだ。アリサやすずかも「うん」って頷いて見せてくれた。

「みんな。申し訳ないが、何があったのか話してくれ」

クロノがなのは達を順繰りに見てそう言った。なのは達は一度フェイトに目をやった後、海鳴臨海公園で何が起きてのかを教えてくれた。まず3人のロウダウナーが現れて、次にパラディース・ヴェヒターのランサー、セイバー、バスターが現れた。直後に一方的な形でロウダウナーを撃墜、そしてリンカーコアの奪取。

それを見たアリサが真っ先に怒りだして騎士たちの前へ。アリサがフェイトの名前を出して、ランサーが反応。ＰＴ事件のことを挙げてフェイトを魔導犯罪者として認定、それに連なるなのは達もまた仲間として認定されて・・・撃墜された。ランサー、フェイトの名乗りを聴かずに名前だけで犯罪者認定したんだ。最後まで聴け、まったく。

「なんでだい・・・！　あの事件も、フェイトの裁判も、全部終わってるのに・・・！　どうして犯罪者呼ばわりされなきゃダメなんだよぉぉーーーーー！！」

アルフが牙を剥いて怒りを露わにした。それを聴いたなのは達がフェイトの側に寄って行く。フェイトが落ち込んでいる理由はソレだ。自分の所為でなのは達が巻き込まれた、きっとそう思ってるんだ。

「それで何故アリシアだけは見逃されたんだ？」

どうしてアリシアだけが無事だったのかって話になる。アリシアはポツポツ話し始めた。ランサーにリンカーコアを回収されそうになったところで、セイバーとバスターに助けられたって。そのおかげでアリシアは助かって、魔法によって強制的に眠らされた、と。

「あの、シャル、クロノ。パラディース・ヴェヒターが持ってた本なんだけど・・・」

「「本？」」

「うん。フェイト達のリンカーコア、と言うよりは魔力を吸収してるみたいだったから」

「魔力を吸収する本・・・、まさか！」

アリシアから聞かされた話にクロノは大きく目を見開いて顔を青褪めさせた。そして「特徴は憶えていたりするかアリシア？」って訊いた。

「特徴・・・、表紙に変わった十字架があった、と思う」

「っ！・・・イリス。これから忙しくなるぞ。確信じゃないが、パラディース・ヴェヒターの正体が割れた」

クロノから告げられた騎士たち、そしてアリシアの見た本、その正

体。わたしもようやく思い出すことが出来た。リンカーコアを喰べてページを埋めていく魔導書のことを。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒なのは†††

「ごめん。私と一緒に居たから、私の所為で、なのは達が傷ついた・・・。本当にごめんなさい」

本局に着いてすぐ。私たちは待っていてくれたリンディさんとエイミィさんと挨拶を交わして（リンディさんにはこうなったことに対して思いっきり謝られちゃった）、一緒に居たティファさんに医療区画に案内されることに。

無傷なアリシアちゃんと完治してたアルフさんはリンディさんやクロノ君、シャルちゃん達と一緒に何かの確認をしに行くってことでアースラへ。エイミィさんは、私たちが預けたデバイスを持ってメンテナンスルームっていうデバイスを直すための施設へ向かった。そしてティファさんの指揮の下に始まった私たちの検査の最中、フェイトちゃんがいきなり涙を零しながらそう謝ってきた。

「そんな！　待って、違う、フェイトちゃんの所為じゃないよ！」

「そうだよ、あれは向こうの勘違いの所為なんだし」

「そうよ、フェイト。気にすることじゃないわ」

「でも・・・でも！　あの人たちが私を狙ったから――っ！」

私たち3人でフェイトちゃんを抱きしめた。そう、フェイトちゃんは何も悪くない。そしてパラディース・ヴェヒターの人たちもきっと悪くない。本当に悪い人たちなら、犯罪者の人たちだけじゃなく、初めから私たちのような高魔力持ちの一般の人たちにも手を出すと思うし。そうはしなかったのは、単純にリンカーコアを集めるのを良しとしていないから、と思う。

「違うよ、フェイトちゃんの所為じゃない」

「でも・・・」

「でも、じゃないわよ。あたし達がこうなったのは、フェイトの所為じゃない」

「でもみんなも傷ついて、デバイスも壊されて・・・」

「それは私たち自身の問題だって思うんだ。私たちの力不足。たぶんそれだけ」

私たちが襲われたのはあの人たちの勘違い。体やデバイスが傷ついて、負けたのは私たちが弱かったから。ほら、フェイトちゃんの責任なんてどこにも見当たらない。運が悪かったんだ、きっと・・・。

「もう泣かないでフェイトちゃん」

「そうよ。せっかく再会したんだもの。笑わなきゃ損よ」

「フェイトちゃん。ほら、ニッ♪」

「「ニッ♪」」

「なのは、アリサ、すずか・・・。ごめ――ううん、ありがとう。えっと・・・ニッ♪」

みんなで笑顔を作る。そうして検査も終わって４人でお喋りしながら結果を待っていると、「検査結果が出たよ」ティファさんがやって来た。

「エコから受け取った検査結果と大して変わらなかった。身体ダメージは完治、リンカーコアは僅かなダメージを負ってた」

検査結果は、体には異常なし、でもリンカーコアがちょっと傷ついてる所為で少しの間魔法が使いづらいかもしれない、ということ。

「しばらくの間は大きな魔力を使わないようにね」

「「「「はい。ありがとうございました」」」」

検査結果を聴き終えてすぐ、「ティファ、終わった？」シャルちゃんがやって来た。ティファさんは「オールクリア。いつでも連れて行っていいよ」って私たちを送り出す。そして私たちはシャルちゃんに案内されてメンテナンスルームに来た。と、「いらっしゃい」白衣を着た女の人が私たちを出迎えてくれた。

「みんな。彼女はマリエル・アテンザ。デバイスマイスターっていう魔導師用デバイスの製作・管理を行う資格を持ってる技術官よ」

「マリエルです。よろしくね」

「「「よろしくお願いします」」」

「デバイス・・マイスター・・・かぁ。あ、よ、よろしくお願いします！」

私とアリサちゃん、フェイトちゃんはすぐに挨拶を返したけど、すずかちゃんだけが何かを呟いた後、遅れて挨拶を返した。何か気になるものでもあるのかなこの部屋、ってちょっと見回してみる。

「マリエル。なのは達のデバイス、どんな感じ？」

「えっと、レイジングハートとバルディッシュっていう子の破損はコアの方にまで及んでいてすぐには直せないかな。フレイムアイズとスノーホワイトっていう子は上手くコアを避けられて壊されているから、すぐに直るよ」

「あの、近寄ってもいいですか？」

「もちろん」

私たちはそれぞれ自分のデバイスの前に立って、「ごめんね」謝る。バスターちゃんの攻撃の苛烈さを思い出す。あと、謝りたいことが

ある。帽子を壊しちゃってごめんね、って。牽制のために撃ったディバインバスター。それがバスターちゃんの帽子を壊しちゃった。だからバスターちゃんはあんなに怒って。身を守るためでも、やっぱり大切なものを壊しちゃったのは悪い事だから。

「・・・ねえ、シャル。クロノやあんたの話だと、パラディース・ヴェヒターってヤバいロストロギアに関係してるんでしょ？」

「・・・アリシアに確認してもらったから間違いないと思う。楽園の番人パラディース・ヴェヒター。その正体は、第一級捜索指定ロストロギア闇の書、その守護騎士ヴォルケンリッター」

"闇の書"。ジュエルシードと同じロストロギアって呼ばれるもので、リンカーコアから魔力を蒐集して６６６ページを埋めていくっていう魔導書。守護騎士っていうのは、"闇の書"の主を護って、そしてページを埋めていく実行者、とのこと。

「でもおかしいんだよね。守護騎士は４人のはず。１人多い」

「その余分な人が、闇の書の主ということなのかなぁ・・・？」

「闇の書の主の可能性として一番高いのはランサーなの。剣の騎士、鉄槌の騎士、湖の騎士、盾の守護獣。それが守護騎士たちの通り名。外見や名前は不明だけど、この通り名だけは以前から記録されてるから」

シャルちゃんが私たちの前に空間モニターを５つと出した。表示さ

れているのは女の人2人、男の人2人、女の子が1人。

「ランサー、セイバー、バスター。今回は別行動だったヒーラーとガーダー。この5人でパラディース・ヴェヒター。ランサーを主として見ると、剣騎士セイバーが剣の騎士、鉄槌騎士バスターが鉄槌の騎士、防護騎士ガーダーが名の通り盾の守護獣――見た目人だけど。そして治癒騎士ヒーラーが湖の騎士、と見ていいかな」

そう言ったシャルちゃんは少し沈黙した後、「みんなに伝えておくことがあるの」そう言って私たちを順繰りに見ていく。

「さっき上層部から正式にアースラに対してある任務が言い渡された。パラディース・ヴェヒター改め、闇の書の守護騎士ヴォルケンリッター、そして主の捜索・逮捕を。パラディース・ヴェヒターは確かに多くの魔導犯罪者を狩り、次元世界に僅かとは言え平和をもたらした。

その成果は上層部も認めてる。だけど、それ帳消しするだけの危険性を孕んでいるのが闇の書。何としても魔力蒐集を止めさせ闇の書の完成を阻止せよ、それがアースラに与えられた仕事なんだけど・・・」

シャルちゃんが私たち、というよりはフェイトちゃんを見て言い淀む。フェイトちゃんも自分に向けられた視線に気付いて、「どうしたのシャル？」って訊いた。

「・・・フェイト。リンディ艦長たちは、あなたやアリシア、アルフと一緒に海鳴市に引っ越すことなる」

「う、うん」

「そして今、アースラはフルメンテナンスの為にドック入りしてる。その中での闇の書捜索の担当となった」

「え、うん、知ってる・・・」

「回りくどいわよシャル。早く本題に入ったら？」

「判ってる。本局の観測部の情報によると、守護騎士たちの転移ルートや行動範囲から見て、連中の本拠地は地球で間違いないって事なの」

「「「えっ？」」」「んなっ？」

シャルちゃんのその話に私たちは驚いた。次元世界の有名人が、私たちの住む世界・地球を本拠地にしているなんて。

「複雑な多重転移、広範囲での活動で目晦ましされてるけど、観測部のエースがそう断言したから十中八九間違いない。で、ここからが本題。捜査本部を一時、海鳴市のマンションに移すことになったの。わたしもついて行けることになって超ハッピー♪」

「「「「・・・・・え？」」」」

それが本題なの？　確かにシャルちゃんも一緒に海鳴市に引っ越し

てきてくれるならすごく嬉しいことだけど、ここまで引っ張るに値するかどうかはちょっと別かもだよ。

「ちなみに本題はまだ続いてるからね。んで、フェイトはなのは達と同じ学校に通う生徒になる」

「それも知ってる。なのは達にもビデオレターで教えてあるし」

「「「うん」」」

「あーもうっ、ホント羨ましい！・・・コホン。フェイト。あなたは嘱託とは言っても外部協力者の域を出ない魔導師なの。だからね・・・今回の闇の書捜索に、手を貸さなくてもいいんだよ」

「・・・え？」

「フェイトもアルフもアリシアも、せっかく人並みの人生を歩めるようになったんだ。今回だけに限らず他の事件捜査時にアースラが動く時だって、フェイトはなのは達と日常を楽しんでいいと、わたしは思う」

「シャル・・・」

「ちなみにこれはリンディ艦長やクロノの考えも含まれているから。フェイト。素直に、自分の思うままにしていい。わたし達は、あなたの自由意思を尊重する」

シャルちゃんが言いたかったのはそれだった。"闇の書"捜索も、これから起きであろう事件捜査も、たとえアースラが動いていてもフェイトちゃんは自由にしていいって。シャルちゃんの提案にフェイトちゃんは何て答えるんだろう。フェイトちゃんの性格からしてきっと・・・。

「ごめん、ありがとう、シャル。気遣ってくれているんだよね、リンディ提督も、クロノも」

フェイトちゃんは自分への気遣いが嬉しいみたいで微笑んだ。でもすぐに真剣な、凛とした表情に代えて「でもそれは逃げの道だと思う」って言った。

「嫌なこととか危ない事をせずなのは達と一緒に過ごす、それはすごく楽しいだろうし幸せだと思う。でも、だからと言って魔導師としての道から背くのだけはしたくない。私は管理局の魔導師としてこれからも魔法を使いたい。何かを助けたり救えたりする力を持っているなら、それを困っている人たちの為に使う。それが私の選んだ道だから」

「フェイトちゃん・・・」

「フェイト、あんた・・・」

すずかちゃんとアリサちゃんがフェイトちゃんの言葉に感嘆してる。私もそう。同い年なのに、もうしっかりと自分の進みたい路を見通してる。すごい、そんな言葉しか出せないのがなんか悔しい。

「シャル。闇の書捜索、私にも手伝わせて。このまま、負けたままで終わるわけにはいかないんだ。あの騎士たちを止める手伝いを。・・・お願い」

「・・・言ったでしょ。わたし達はフェイトの自由意思を尊重する。手伝ってもらうよ、フェイト」

「うん！」

シャルちゃんとフェイトちゃんが握手を交わした。だったら・・・。

「シャルちゃん、私も！」

「あ、わたしも手伝う！」

「あたしもよ！　負けたまんまじゃ悔しすぎるわ！」

思いはそれぞれだけど、このままじゃ終われないっていう思いは一緒。シャルちゃんは少し困ったような表情を浮かべた後、「オーケー。一緒にリンディ艦長を説得しよう」笑顔を浮かべた。

「マリエル。なのは達のデバイス、修理が終わるのはいつ頃？」

「基礎構造の修復の後に再起動、そこから部品交換をしないといけないから・・・。人手にもよるけど1週間くらい、かな」

マリエルさんがシャルちゃんにそう答えて、「部品の発注しないと」って言ってどこかに連絡を取り始めたのを見ていると、シャルちゃんが「ほら、行くよ」メンテナンスルームから出て行こうとしたから追いかける。

「これからリンディ艦長に、なのは達の捜査参加の許可を取らないとダメでしょ」

「「「うん」」」

私とアリサちゃんとすずかちゃんも"闇の書"捜索を手伝わせてもらう許可を得るためにリンディさんの所へ向かう事にした。

Ｅｐｏｓ１５日常の新たな友・非日常の討つべき敵～Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「ルシル君たち、間違って蒐集してもうた人たちと会えたかなぁ」

ルシル君たちから聞かされた最悪な大失敗に、今日もまたわたしはお悩み中。昨日の朝早く、ルシル君は情報確認を怠って犯罪者やない人を襲って魔力を奪ったって話や。

。―。―。回想や。―。―。

「もうっ、どうすんだよ！　あんなヘマやっちまって！」

「まったくだ、ルシリオン。今までの苦労が水の泡だ」

「ルシル。今後の我らの活動に関してもう一度再考するべきだろう」

リンカーコア回収から戻って来たらしいルシル君たち。"闇の書"だけを転移されたことで後から向かったシュリエルも一緒や。そやけど、なんや騒がしい。ってゆうか「ケンカ？」しとるん？

「聴いてくれよ、はやて！　ルシルの奴、犯罪者じゃねぇ奴から蒐集しちまった！」

「・・・・えええええ！！」

気まずそうにわたしから目を逸らしてるルシル君に、「一体何があったん？」って訊いてみるとルシル君は話し始めてくれた。ルシル君が得ていた情報が古すぎて、その事件はもう終わってて、その犯人がすでに亡くなってて、その関係者の裁判は終わって無実になってた事を知らずに、その関係者――管理局に入った人を襲った。しかもそれだけやなくて「民間の人まで・・・？」話をするにつれて土下座の姿勢になったルシル君を見下ろす。

「申し訳ない」

「う～ん、わたしに謝られてもなぁ～」

「で、どうすんだよこの先。局員や民間人に手を出しちまった以上、今までのように出来ねぇぞ」

「ああ。これまで以上に管理局から干渉、捕縛行為を受けるだろう。どうする？」

管理局。次元世界の秩序を守る人たちのことや。全てが終わったらわたし達は自分の足で出頭する予定やったけど、完成する前に捕まったらわたし、どうなるんやろう。せっかくみんなに悪いことさせたのにそれが全部無駄になるんやとしたら、わたしはみんなに何も残せへんどころか罪だけを残して逝ってしまう。それだけは嫌や。

「ルシル君・・・」

「・・・これまで通りリンカーコアは蒐集する。やり方も同じだ。魔導犯罪者を徹底して狩り、管理局員から如何なる干渉を受けても戦闘せず、逃げろ。場合によっては必要な戦いもあるだろう。だが傷つけるな。俺が言えることじゃないが」

「まったくだよ！」

ヴィータの怒りは収まるところを知らず、やな。これはわたしの出番や。わたしは「ヴィータ。ルシル君の言う通りにしよ」ってヴィータの袖を引っ張る。

「はやて、でも・・・・！」

「わたしらは元よりアカンことをやってる。確かに今回のルシル君はそれ以上にアカンことをやった。でも、もうわたしらは引き返せへん所にまで来た。そやから進むしかないんや。シグナム、シュリエル。２人にもお願いするわ」

「「主はやて・・・。その命、確かに承りました」

シグナムとシュリエルがわたしの前で片膝をついたから「んもう、そうゆうんはやめてって言うたやんかぁ」溜め息をついてしまう。そんな時にルシル君たちとは別行動やった２人、「ただいま帰りました～」ってシャマルと、「戻りました、主はやて」ザフィーラが帰って来た。

「あの・・・どうしました？」

土下座するルシル君、片膝ついて礼の姿勢なシグナムとシュリエルを見たシャマルが小首を傾げた。わたし達はさっきまでしてた話を2人にもする。当然2人は困惑したけど、わたしがこのまま蒐集をやり続けることをお願いしたら、

「はい、判りました。全力で生きる、それが私たち全員の決意ですもんね」

「我が拳と魔導が、主はやての未来への路を切り拓きましょう」

シャマルとザフィーラも受けてくれた。でもまずは「間違って蒐集してもうた人たちには謝らなアカンなぁ」

みんなのリーダーとしてその人たちに謝りたいからそう言うたんやけど「はやての口調は特徴的すぎるから、最悪、素の時にすぐに感づかれる可能性がある」ってルシル君にあっさり断られてしもうた。一応わたしにも、楽園の主オーナー、ってゆうコードネームと、デフォルメされたタヌキの被り物も用意されてあるんやけど・・・。う～ん、そんなに特徴的かなぁ、関西弁。ルシル君ら異世界人には馴染みが無いかも知れへんからそう思われとるんかもな。

「俺が責任を持って謝罪するよ。ミスした張本人だしな」

「そうだな。お前が謝れ、頭を深々と垂れて」

「いや、ルシリオンだけにはさせん。私も謝ろう。お前が情報確認を怠ったのが原因だが、撃墜したのは私だ。それは私が責を負わなければならないものだ」

「・・・じゃああたしもだな。あの白い奴にはあたしが謝らねぇとな」

シグナムとヴィータが撃墜してもうた人たちのことを思い出したんか苦い表情を浮かべた。結局はパラディース・ヴェヒターの将で、失敗を犯した張本人のルシル君、そしてシグナムとヴィータが代表として謝りに行くってゆうことに。
でもどこに行けば会えるか判らへんから、あちらから接触してくれるのを待つってルシル君は言うてた。その間は現場であるこの世界からあまり離れず、近くの世界で蒐集をするとのことや。

。―。―。回想終わりです。―。―。

「どうしましたかはやてちゃん？」

「え、あー、ううん、なんでもないよシャマル」

わたしの乗る車椅子を押してくれてるシャマルに笑顔を返す。わたしとシャマルは今、風芽丘図書館に来てる。最近はルシル君の授業もなく与えられた課題を熟すだけの自習ばかり。それが終わると当然暇を持て余すことになる。
ルシル君と一緒に料理、ルシル君と一緒に食事、ルシル君と一緒に買い物、ルシル君と一緒にお出かけ、ルシル君と一緒に勉強。日に

ちが経つにつれてそれらが減ってく。家族が増えたんは純粋に嬉しい。それは確か。そやけど2人だけの時間が無くなって少し寂しいのも本音や。

「シャマル。わたしが場所取りしとるから、まずはシャマルから読みたい本を持って来て。シャマルが戻って来たらわたしも探しに行くで」

「あ、はい、それじゃあすぐに戻ってきますね♪」

シャマルは読みたい本を取りに行くんを見送る。シャマルのお気に入りはレシピ本、そんで恋愛小説。恋愛小説に感情移入しすぎて時々泣いたり怒ったり、いろいろと大変そうや。まぁわたしはそんな純粋なシャマルが好きや。

少し待っとると「お待たせしました〜♪」シャマルが1冊の本を大事そうに胸に抱えて持ってきて「これ前から読みたかったんですぅ」わたしに表紙を見せてきた。やっぱり恋愛小説やった。

「じゃあわたしも見繕ってくるな」

「大丈夫やよ。行ってくるな」

シャマルに見送られながら本を探しに行く。「どれにしようかな〜」と目移りしとる中、「そや」と思いつく。最近は英語の本も読めるようなったし、一度挑戦してみようかな。そうとなればすぐに行動

開始や。洋書コーナーに向かう。
辿り着いた洋書コーナーにはファンタジーものばかりが揃えられてた。ふと、ある1冊のタイトルに目が留まる。魔法使いたちの冒険、てゆうタイトル。フィクションやなくて実際に魔法使いなわたしにとって気になるタイトルや。
そやけど問題が。「んんーっ」その本が収められとる棚はちょお高い場所。車椅子なわたしには難関や。頑張って手を伸ばしとると、横から手が伸びて来てその本を取った。

「あの、これでいいですか？」

「あ、はい、ありがとうございます」

取られたんやなくて取ってくれた。その人――ううん、その子はわたしと同い年くらいの女の子やった。以前からここで何度か見かけた事のある子や。声を掛けてみよかなぁって何度か思うたことあったんやけど、なんかな、掛けられずにズルズルと過ごしてしまったわけで・・・。

「えっと、わたし、八神はやて、いいます」

これもええ機会やなって思うて自己紹介。あまりに突然すぎたかなって思うたけど、その子は「私は月村すずか。よろしくね、はやてちゃん」笑顔で名乗り返してくれた。すずかちゃん。わたしと同じように名前が平仮名。そやけどわたしのより可愛らしい響きや。

「そうだ、はやてちゃん。良かったら私の友達を紹介したいんだけ

ど、いま時間良いかな？」

「えっ、ええの？」

「もちろんだよ！」

同い年くらいで女の子の友達っておらんからすっごく嬉しい。そやから「ぜひお願いします」この機会を逃したくないからお言葉に甘えることにした。まずはシャマルのとこに寄ろうと思うたけど、読書の邪魔するのも悪いし、『シャマル。ちょお友達が出来たから、その子とお話ししてくるな』思念通話で断りを入れておく。

『あ、はい、判りました。何かあればすぐに呼んでくださいね。すぐに飛んで行きますから』

『大丈夫やよ。同い年くらいの子やし、優しそうな子やもん』

『そうですか。判りました。では私はあの場所で読書を続けてますから、お帰りの際は呼んでください』

『了解や♪』

シャマルに報告して、わたしはすずかちゃんに車椅子を押してもらって友達が居るってゆう場所、図書館の奥にある個室の自習室エリアに向かう。

「ここだよ、はやてちゃん。みんな優しいから、すぐに仲良くなれ

るよ」

「う、うん」

「みんなお待たせー」

すずかちゃんが扉を開けて、わたしを先頭に（車椅子（わたし）を押してもらっとるから当たり前やけど）入り口を潜った。室内には5人の女の子が居った。みんなの視線がわたしに向けられた。困惑されるんかなって思うたけど、その子たちはパアッと顔を輝かせた。

「なによ、すずか。どこでそんな可愛い子を引っ掛けてきたのよ。やるじゃない」

「アリサちゃん、なんかおじさん臭い・・・」

「えへへ。紹介するね。八神はやてちゃん」

「は、はじめまして。八神はやて言います」

自己紹介すると、活発そうな雰囲気を纏ってる金髪の女の子がニッと笑みを浮かべた。栗色の髪の女の子に、アリサちゃん、って呼ばれた子や。

「あたしはアリサ・バニングスよ。よろしく、はやて」

「私、高町なのは。よろしくね、はやてちゃん」

「私はフェイト・テスタロッサ。そして・・・」

「アリシア・テスタロッサだよ♪」

栗色の髪の子がなのはちゃんで、アリサちゃんと同じ金髪やけど綺麗な紅い瞳の子がフェイトちゃん、そして妹のアリシアちゃん。あともう1人。綺麗な水色の髪にピンク色した瞳の女の子が居る。そやけどその子はジッとわたしを見たまま。わたしの顔に何か付いてるんかなって思うたからすずかちゃんに訊いてみようとした時、「えっ？」その子の両目から涙が溢れてきた。

いきなり泣いたその子にはビックリや。わたし何かしたんかな？ってちょう不安になる。でも他の子たちはそれほど驚いてへんみたいで、優しくその子の側に寄って、その子の手や肩に手を添えたり体を寄せたりした。ホンマに仲がええんやってことが判る。

「ご、ごめん。急に泣いたりして。驚いたよね。なのは達もありがとう。えっと、コホン。わたしはイリス・ド・シャルロッテ・フライハイト。みんなにはシャルって呼んでもらってるから、はやてもシャルって呼んでね」

おお、ルシル君みたいに長い名前や。シャルちゃんは涙を袖で拭ってニコッて可愛ええ笑顔をわたしに見せてくれた。

「アリサちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、そしてシャルちゃんやね」

すずかちゃんの言う通りみんなええ子やった。初めて会うわたしをなんの摩擦も無く受け入れてくれた。そしてお互いのことを良く知るためにみんなでお話しすることになった。車椅子に座っとるわたしも机を囲めるように移動してくれみんなに「おおきに、ありがとう」お礼を言って就く。わたしの右隣にすずかちゃん、左隣になのはちゃんが座る。

「ねえねえ、はやてちゃん。はやてちゃんって歳いくつ？」

「9歳や。半年前の6月で誕生日で」

「じゃあ、アリシアちゃん以外の私たちと同い年なんだね」

「そう言えばはやてはどこの学校に通ってんの？　あたしとなのはとすずかは聖祥小学校なんだけど、はやてを見たことないし」

「あー、うん。海鳴市立風芽丘小学校や。でも、下半身麻痺を患ってからは休学中なんよ」

太腿を撫でながらアリサちゃんにそう答えると、「そう、なんだ」気まずそうに頷いたからわたしは「気にせんで」って笑顔を作る。最初の頃は確かに、なんで？とか思うたけど、今では良かったて思う。この麻痺はシグナム達と出逢うために必要やったことで、そしてルシル君と知り合うきっかけでもあったからな。

「ん？　フェイトちゃんやシャルちゃん、アリシアちゃんは違う学校なん？」

「私とアリシアは来週から転入なんだ。シャルは違うんだけど・・・」

ふと気になったから訊いてみた。フェイトちゃんがシャルちゃんに遠慮がちな視線を向けながら答えてくれた。そしたら突然シャルちゃんが「何故、何故（ホワイ）、何故（ヴァルム）！！」って叫んで机に突っ伏した。

「わたしだってなのは達と一緒に通いたい～～～ッ！」

シャルちゃんが愚図り始めた。どうゆうわけかシャルちゃんだけが通えへんようや。事情を聴いてみるとシャルちゃんは、フェイトちゃんら家族が海鳴市に引っ越して来たのについて来たって形らしくて、ここでの暮らしは一時的なものってゆうこと。そやから用事が終われば実家に帰らんとあかんゆうわけで学校には通えへん、と。

「シャルが立ち直るまで話を続けましょ」

「そ、そうだね。シャルちゃん、元気出してね」

「おーう。なのはの優しさが、わたしの荒んでく心に癒しの風を吹かせ、生き返らせていくよ」

「今日のシャルはどこか詩人っぽい」

「えっとぉ、あ、はやて、はやて。じゃあ学校の勉強とかどうしてるの？」

フェイトちゃんの妹、アリシアちゃんがわたしの隣に来て、しゃがみ込んでからそう訊いてきた。わたしの顔を見る上目遣いのアリシアちゃん。ヴィータとはまた違う可愛らしさがある子や。ギュってしたい、今すぐギュってしたい。

「（我慢、我慢やわたし）・・・家族にすごく頭のええ子が居ってな。その子に教わってるんよ」

アリシアちゃんにそう答えてすぐ「その子って男の子？　それとも女の子？」フェイトちゃんがそう訊いてきたから、「男の子や。弟やよ♪」笑顔で返す。グレアムおじさんに、ルシル君を八神家の正式な家族にしてもらえるよう頼もうとしたけど、ルシル君に断わられたからなぁ。ホンマに形、役割みたいな感じな弟や。まぁ一緒に過ごせるだけでも十分嬉しいからええけど。

「へ～。でも学校に通ってないって、その子も何か病気とか？」

これはどう答えよう。ルシル君は異世界人なんで、って答え・・・られるわけがない。そやから「まぁ、そんなところや、あはは」曖昧に答えるしかないわ～。わたしの様子に小首を傾げてるけど「そうなんだぁ」深く追求せずにスルーしてくれた。

「はやてちゃんってどこに住んでるの？　私とフェイトちゃんの家は藤見町なんだけど」

「じゃあご近所さんや。わたしの家は中岡町やから」

藤見町と中岡町はお隣さんやから、もしかしたらどこかでなのはちゃんと会うてたかも知れへんなぁ。

「じゃ、じゃあ今度翠屋ってお店に一緒に行かない？」

「翠屋・・・あ、知っとるよ。わたしの誕生日の時にもバースデーケーキを作ってもろたし、スイーツを食べたくなった時は翠屋に買いに行っとるんよ」

ルシル君だけやなくてヴィータやシャマル、甘いものが若干苦手なシグナムにも好評や。そうゆうわたしも翠屋のバースデーケーキを食べてからというもの大ファンや。

「え、ホント？　嬉しいなぁ♪」

なのはちゃんがホンマに嬉しそうに満面の笑顔を浮かべた。どうしてそこまで喜んでるのかが判らへんから「どないしたん？」って小首を傾げたら、「翠屋は、なのはちゃんのお父さんとお母さんが経営してるお店なんだよ」ってすずかちゃんに教えられた。

「うんっ♪　はやてちゃんってもしかしてお店に来てくれたことあったりする？」

「あー、ごめんな、なのはちゃん。基本的にさっき話した弟くんが買いに行くんよ。それに大体買いに行くんは平日の昼間とかやから、たぶん会うてないと思うわ」

「そうなんだぁ、残念。あ、はやてちゃん。もしよかったらその弟くんやご家族の人たちと一緒に遊びに来て。翠屋ってスイーツだけじゃなくて洋食も出す喫茶店だから」

「その時はお願いな、なのはちゃん」

なのはちゃんとの約束の証である指切りをし終えた時、「そういやその弟の名前ってなんて言うの？」アリサちゃんに訊かれたから、「ルシリオン君。わたしは、ルシル君、って呼んでるんよ」って答えたその瞬間。

「ルシリオン、ルシル・・・」

シャルちゃんがわたしと顔を合わせた時みたくボーっとしだして・・・そやけど今度は泣かんくって、その代り「はやて。その子の写真とか無い？」って訊かれた。なんでかな、ここでシャルちゃんにルシル君の写真を見せたら、ひどくヤなことになるかも知れへんって思えて「ごめん。写真とかは家やわ」って嘘を吐いてしもうた。ホンマは携帯電話の待ち受けやフォルダにいっぱい入っとる。

「う～。そっかぁ」

シャルちゃんはホンマに残念がったけど、「ま、いつか会えるんだからいいか」って期待に胸を膨らせて、引いてくれた。そうやな。どの道会うんなら、もう今のうちに見せた方がええかもしれへん。そやけど持ってへんって嘘吐いたし、今さらどう言えばええんやろ。

「あ、そうだ。はやてちゃん、携帯電話持ってる？」

そう悩んどると、すずかちゃんが携帯電話をポケットから取り出した。わたしは「持ってるよ」と返してスカートのポケットから携帯電話を取り出す。うん、ルシル君とは直接会ってもらおうっと。

「電話番号とメールアドレス交換♪」

「あ、私も！」

「あたしも！」

なのはちゃんとアリサちゃんも携帯電話を取り出して、赤外線通信ですずかちゃん達と交換する。アドレス帳に新しく加わった、同い年で、しかも女の子の友達の電話番号とメールアドレス。

「そう言えばフェイトちゃんやアリシアちゃん、シャルちゃんは携帯電話持ってへんの？」

「あー、うん。ここの世界へ来たのって昨日だから・・・ごめん」

「あ、でもリンディ提督が買ってくれるって約束してくれたから、買った時に交換しようね♪」

フェイトちゃんは残念そうに、アリシアちゃんは買ってもらった後で交換しようって言ってくれたんやけど、その前に「提督？」って

なんやろ。確か海軍とかで艦隊を率いる一番偉い人のことやなかったっけ。

「わぁわぁわぁ！」

「えっと、えっと、提督っていうのはね、あれなんだよ！」

「そ、そう！　フェイトとアリシアの保護者のリンディさんって外国の軍人で、軍艦の艦長を務めてるのよ！　艦長より提督の方が格好いいって事で、そう呼ぶのよね！」

「うんうん！」

フェイトちゃんがアリシアちゃんの口を防いで、なのはちゃんが慌てて言い繕おうとして、アリサちゃんが教えてくれて、すずかちゃんが最後に何度も頷いて締めた。勘やけど、たぶんこれは事実や。そやけど何かを隠そうとしてるって感じやな。

気にはなるけど、ルシル君に倣ってこちらからは訊かへん。話してくれるのを待つだけや。そやから「すごい家族を持ってるんやな、フェイトちゃんとアリシアちゃんは」って素直に尊敬する言葉を告げた。無事に誤魔化せた、って風に乾いた笑顔を浮かべるすずかちゃん達。そんな中・・・

「いいなぁ、フェイトとアリシア。わたしには誰も買ってくれない・・・」

「「シャルちゃん・・・」」「「「シャル・・・」」」

またどよーんとした重い空気を背負い始めたシャルちゃんが「わたしだけいっつも仲間外れ～！　わたしは寂しいと死んじゃうんだよ～！」ウサギ（迷信やけど）みたいなことを言いだしてしもうた。みんなでシャルちゃんを慰めて数分。最終的に「自腹で買うからその時は交換してね♪」シャルちゃんは自分のお金で買うことにしたみたい。お金持ちさんなんやろか。

それからわたしは、みんながどんなふうに出会ったかとか、そんな思い出話を聴かせてもらった。おかしなことにみんなの出会いはまずはケンカが発端やった。昨日の敵は今日の友って感じや。現実でそんな風に仲良くなれることが出来るなんて驚きや。

「あ、そろそろ夕飯の食材を買いに行かんとアカンわ」

話題は尽きることなくいつまででも話せそうやったけど、携帯電話から午後3時を知らせるメロディが流れて来た。話に夢中になり過ぎて時間を忘れてた。

「あ、そうなんだ。それじゃあいい頃だし、あたし達も帰るとしますか」

「そうだね。フェイトの要望も終わったし♪」

すずかちゃん達は、引っ越して来たばかりのフェイトちゃんとアリシアちゃんとシャルちゃんの為に、すずかちゃん達が普段赴いとる場所にフェイトちゃん達を案内しとるってことや。そんでフェイトちゃんは読書好きで、それはすずかちゃんの影響らしい。さっきま

での話題でわたしも読書好きってことで花を咲かせてた。

「ねえねえ、はやて。わたしが車椅子押してもいい？」

「ん、ええよ。お願いなアリシアちゃん。『シャマル。今から出口に向かうで、そこで合流しよか』」

『あ、はい。判りました。待ってますね』

シャマルに連絡しておく。アリサちゃんはそしてアリシアちゃんに車椅子を押してもらって自習室を出て、図書室のエントランスへ向かう。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒イリス†††

この海鳴市で新しく出来た友達、八神はやて。初めて会ったはずのこの子にもなのは達と同様に懐かしさを憶えて泣いちゃった。そしてもう１つ。ルシリオン。はやての弟だっていう男の子。その名前を聴いた瞬間、懐かしさとは別の感情がわたしの中に生まれた気がする。そう、恋慕。名前だけしか聞いてないのにわたし、ときめいちゃってる。会いたい、話したい、頭の中でぐるぐると駆け回る想い。

（どうしたんだろ、わたし。こんな気持ちになったの初めてだよぉ・・・）

戸惑いもあるけど、でもこれが正しいって思えてるわたしもいるわ

けで。このドキドキを心地よく感じてる。早く会いたい、その思いが強くなる。そんな見も知らずなわたしの想い人、ルシリオンの家族であるはやてが帰るってことで、それならって事でわたし達も図書館を後にすることになって、今はみんなでエントランスに向かってる途中。

「すずかちゃん、なのはちゃん、アリサちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、シャルちゃん。今日はホンマにおおきに。みんなと出逢えて、友達になれて・・・わたし、嬉しかった♪」

はやてが満面の笑顔でそんな嬉しいことを言ってくれた。その笑顔には魔力があるのかも。なのはとは別の安心感を得られる笑顔で、こっちも笑顔になっちゃう。

「私も友達になれてよかったよ、はやてちゃん」

「またメールするから、はやてちゃんも遠慮しないでメールでも電話してね」

「また遊びましょ、はやて」

「忘れないでね、はやて。携帯電話買ったらぁ・・・」

「番号とアドレス交換な。忘れへんよアリシアちゃん」

「はやて。また面白い本お話をしよう」

最後にわたしが締めを言おうとした時、「はやてちゃーん！」って、はやての名前を呼ぶ女の人がエントランスの扉付近に佇んでいて、わたし達――というよりははやてに向かって手を振っていた。その女の人を視界に捉えたと同時。またも来た、懐かしさで泣きたくなる感じ。

「シャマル。みんなが新しく出来たわたしの友達や♪」

「初めまして、みなさん。八神シャマルです。今後ともはやてちゃんと仲良くしてあげてくださいね♪」

はやてが「それじゃあ、右から――」シャマルにわたし達の事を紹介していって、なのはを紹介すると「高町なのはです」ってなのはも名乗る。そして最後にはやてが「――そんで、シャルちゃんや」ってわたしを紹介。

「イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトです。よろしく、シャマル」

「っ・・・！　よろしくお願いね、えっと・・・イリスちゃん」

「？？・・・あ、シャルでいいですよ」

「じゃ、じゃあシャルちゃん」

なんかシャマルの様子が変？　気の所為かもしれないけど、わたしの名前に動揺した？　でもこの世界の住人みたいだし、わたしや親

族に会うことはないはずなんだけど。

「みんな。今日はホンマにありがとうな♪　バイバイ」

小さなモヤモヤ感ははやての別れの挨拶で薄れていった。アリシアからシャマルに渡る車椅子のグリップ。シャマルはわたし達に「さようなら」お辞儀して、はやてと一緒に図書館を後にした。

「良い出会いだったね～」

「ね～」

「にしてもまた泣いたわね、あんた」

「う～、それは・・・制御できない感情だししょうがないでしょ」

アリサがわたしに振り向いてそんなこと言ってきたからそう返す。わたしのこの妙な感情の出現は、幼馴染のカローラ姉妹の姉フィレスによれば、

――それってもしかして前世の記憶とかじゃない？　本などで読んだことあるけど、前世の記憶を持ってる人は時折前世に関係する人や物、場所に会ったり見たり、赴いたりした時にフラッシュバックするって話。もしかするとイリスは前世の記憶を受け継いでいるかもよ？――

とのこと。もちろんこの話はすでになのは達にしてある。わたしの

前世がどうしてなのは達と関係してるのかは判らないけど、でももし前世でもなのは達と友達だったんならそれはすごく嬉しくて、とても幸せだよ。なのは達もそう言ってくれたし。

「でもはやてちゃんも、私たちの前世と関係してるんだとしたらすっごく素敵だよね」

「シャルの反応からして、ルシリオンって子と会った時も泣くんじゃない？」

アリシアがニヤニヤと何かを勘繰ってそんなことを言ってきて、なのは達はうんうんって頷いてアリシアに同意を示した。けどそれは外れると思う。たぶんわたしは泣かない。それだけに留まらないって思うから。

――ゲフェングニス・デア・マギーーー

「「「「「「っ！！」」」」」」

突如、この周囲一帯に結界が張られたのが判った。わたしはすぐさま愛刀の「キルシュブリューテ！」を起動して騎士甲冑に変身する。

≪術式体系は古代ベルカ式。マイスターー、気を付けて。相手は騎士ですよ≫

「なのは達はわたしの後ろに下がってて！『クロノ！・・・やっぱジャミングされてるか』」

魔力は使えてもデバイスが無い以上、変身は当然のことながら戦闘なんて出来るわけがない。そんな中で対人戦闘に優れた騎士、ランサーはＳ＋、セイバーはＳ－、バスターはＡＡＡ＋。３人中２人がわたし以上。普通なら勝てない戦いだ。
でもわたしが守るしかない。勝てずとも負けない戦いをすればいい。クロノ達が結界に気付いて駆けつけてくれるまで。視線の先、ランサー、セイバー、バスターの三騎士が空から舞い降りてきていた。地上に降り立って、何を思ったのか両手を上げるお手上げポーズで近付いてきた。

「止まりなさい！　それ以上の接近は許さない・・・！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

――雷牙月閃刃――

"キルシュブリューテ"のカートリッジを１発ロードして刀身に電気変換した魔力を付加。いつでも戦闘に移れるように両脚に力を込めたところで。

「申し訳なかった！！」

「「「「「「へ・・・？」」」」」」

ランサーがいきなり土下座して、続けて「申し訳なかった」「すまんかった」セイバーとバスターが深々と頭を下げた。完全に戦意や

敵意が無いから警戒は怠らずに"キルシュブリューテ"を下ろす。

「こちらの勘違いで、君たち全員に迷惑を掛けた。謝って許してもらおうなどとは思っていないが、せめてもの誠意だ。本当に申し訳ない」

ランサーもセイバーもバスターも頭を上げようとしない。本気で謝ってる。それが判ったからこそ「あの・・・！」なのは達が3人に近寄ろうとした。けどそれを「待って」わたしは止める。

「シャルちゃん・・・？」

「第一級捜索指定ロストロギア、闇の書。その守護騎士ヴォルケンリッター。あなた達に逮捕状が出ました。大人しく武装を解除し、主と共に出頭しなさい」

「っ・・・」

「やっぱ気付かれてんじゃねぇか、おい！」

わたしがそう告げてランサーが僅かに頭を上げたところで、バスターがランサーの頭を叩いた。すると、ランサーの頭部――デフォルメされたチーターの頭部がくるくると回った。

「「「「「「ぷふっ」」」」」」

緊張感に満ちたこの空気の中、その異様な光景にわたしやなのは達

は吹き出してしまった。ランサーは回る頭部を両手でハシッと止めて、「やめろ」ってバスターを注意。

「・・・ちょ、ちょっと！　真面目な話をしている時に遊ばないで！」

なんとか笑うのを耐えることが出来たわたしはランサーに向かって怒鳴ると、「違う、待ってくれ、我々は本気で謝りに来たんだ！」って焦り出した。

「私が撃墜した騎士、そして補助系魔導師の少女よ、誠に申し訳なかった」

「あのさ、そこの白い奴。撃墜して悪かったよ」

セイバーとバスターも改めてなのは達に謝る。それが決め手になっちゃったって感じ。まずは「私もごめんね、バスター、ちゃん？　帽子壊しちゃって」バスターに謝り返した。

「ま、あんたとそこの小っこいのはランサーの勘違いに巻き込まれちゃった感じなんでしょ？　謝ってもらえるんならあたしはそれで手打ちにするわ」

「私も許します。心の底から謝ってもらっているんだって判るから」

アリサとすずかもセイバーに撃墜されたことを水に流すようで。問題はフェイトとアリシア。特にアリシアはランサーに妹やその使い魔のアルフを撃墜された恨みがある。案の定、アリシアが「ランサ

ー」って低い声を出してランサーに近寄って行く。わたしがそれを止めようとしたら、「待ってシャル」フェイトに制されて、フェイトもアリシアを追うようにランサーに近寄って行く。

「ちゃんと謝ってくれた事は良いと思う。だけど、それだけでフェイトやアルフを墜とされた怒りは収まらない」

「アリシア・・・」

「殴るなり蹴るなり、罵声を浴びせるなり好きにしてくれ」

ランサーが騎士甲冑を解除した。でも頭部は未だにチーター。今なら確実にランサーに決定打を与えることが出来る。デバイスの槍も無し、魔法を防御する甲冑も無い。

（甘い考えだって解ってるけど、まずはアリシアの気の済むようにさせたい）

それにセイバーとバスターがランサーを庇うかもしれないし。慎重にならないと取り返しのつかないことになりそう。無抵抗を決めたランサーに向かってアリシアは微笑みながら「じゃあ、お言葉に甘えて」利き腕の右腕を大きく振り上げた。

そして「えいっ！」ランサーの頭を思いっきり引っ叩いた。するとさっきバスターに叩かれた以上にランサーの頭部が高速回転。アリシアはそれを見て「あはははははは♪」大笑いした。

「ランサー。あなたが本当に私たちに対して申し訳ないって思って

くれているなら、教えてください。あなたたち騎士や主の正体を。そして何を企てているのかを」

フェイトは管理局員として仕事を全うするべくそんな取引を持ちかけた。普通なら応じるわけがない。ここまで周到にことを運んできた騎士たちだもん。なのは達の襲撃ってミスが無ければ全てが上手く行ってたほどの。やっぱりと言うか「それだけは出来ない」ランサーが首を横に振った。

「じゃあ許しません」

「・・・・セイバー、バスター。パラディース・ヴェヒターの将として、最後の指示を出す。これからは口出しするな」

「「・・・・ヤヴォール」」

2人を黙らせたランサーが、フェイトの問いに答え始めた。騎士たちの主が病に臥せっていること、それが"闇の書"が未完成ゆえの呪いの所為であること、それを治すために完成を目指していること、それはどんな治癒魔法でも治せないことを。

だから蒐集を始めた。犯罪者ばかりを狩る理由は、主の未来を民間人の怨嗟や血で穢さないため。主は犯罪者だからと言って蒐集対象にすることに対しても、その犯罪者に申し訳ないって考えるほどに心優しい人だという事も。

「――故に我々は、ここで捕まるわけにはいかない。フェイト・テスタロッサ。君に許してもらえなかったのはやはり残念だが、仕方

がない」

ランサーはそう言って立ち上がって、「行くぞ、セイバー、バスター」って2人に声を掛けて去ろうとした。ここで「待ちなさい！」わたしだけが呼び止める。なのは達は黙ってまま。たぶん騎士たちの目的に、テスタメントを思い出したのかもしれない。誰かの為に罪を犯す、って。

（だからってここで見逃すわけにはいかない！）

――閃駆――

一足飛びでランサーに斬り込む。ランサーはまだ騎士甲冑に変身も武装もし直してない。セイバーとバスターはランサーの前を行ってるから、ランサーの背後を守ることは出来ない。あと警戒すべきはランサーの防御魔法だけ。

「（迷うよりやる！）雷牙・・・月閃刃！！」

付加したままだった雷撃の斬撃を打ち込んだ。どうせ防がれる、って思っていたけどわたしの一撃は見事に「うぐぅ・・・！」ランサーに直撃して、ランサーを大きく吹っ飛ばした。セイバーとバスターはそれを見ても何も文句を言わない。ていうか「お前が手を出すなって言ったんだからな、ランサー」ってバスターが呆れ口調でそう言って飛び去って行った。

「無茶をする男だ。全ての魔力を防御から外していたら危なかった

ぞ」

セイバーも呆れ口調で言いながら、木に叩き付けられて座り込むランサーの元へ。ランサーはセイバーに支えられながら「あ痛たた」立ち上った。

（わざと受けたって言うの・・・！）

騎士甲冑も無しで受けようとする異常さに戦慄して、わたしの一撃を受けても気絶もしないと思われたことに怒りを覚えた。

「ランサぁぁぁぁーーーーーー！！」

――舞い振るは、汝の獄火（サラヒエル）――

本気で討つために駆け寄ろうとした時、蒼い炎で出来た３ｍ近い槍３０本がまるでわたし達とランサー達を隔てる柵のように降って来た。そして横列している蒼炎の槍が融合して巨大な蒼炎の壁になった。

「ランサー！　聞こえていたら答えて！　ロウダウナーが奪ったロストロギア、征服剣！　それはあなた達が横取りしたの！？」

返事は期待しなかった。でも、「ロウダウナー全員を潰したが、誰１人として持っていなかったのを確認している。隠したか、別の仲間がいて渡したか、それを調べるのは君たち管理局だ」って律儀に答えてくれた。そしてランサーとセイバーも去って行った。蒼炎の

壁が消え、付近を切り取っていた結界も消えたから、わたしは変身を解除して私服姿に戻った。

Ｅｐｏｓｌ６彼らもまた主が為に決意する～Ａｕｓｗａｈｌ　ｄｅｒ　Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ～

円卓と、その周囲に設けられている椅子が１３脚と在る本局のある一室。１３脚のうち８脚には人のホログラムが投影されており、別の３脚上には時空管理局のエンブレム、そしてローマ数字のⅠ、Ⅱ、Ⅲが表示されたモニターが浮いている。残り２脚は空席のようだ。彼らは時空管理局評議会。管理局運営とはまた違った事柄を決めるための組織で通称、権威の円卓。今回もまた誰にも知られる事なく秘密の議会が行われていた。

『聞いたかパラディース・ヴェヒターの正体！　かの有名な闇の書、その守護騎士ヴォルケンリッターだったそうだ！』

ホログラムの１つ、年端もいかない少年が愉快痛快とでも言うように大笑いしている。その笑い声を聴いている他１０人は沈黙を保っている。

『フンッ、やはり犯罪者は犯罪者と言うわけだ。これでスカウトは出来んな』

ホログラムの１つ、ミッドチルダ地上本部の実質的なリーダー、レジアス・ゲイズ中将が鼻で笑う。スカウトを提案した管理局の暗部、１１１１ｓｔ航空隊隊長ロッキー・サブナック一等空佐、固有スキルで以って捜査を行う特別技能捜査課、その課長クー・ガアプ一等

陸佐が苦い表情を浮かべた。

『しかも、何を間違ったか新人の嘱託魔導師とその使い魔、そして管理外世界の民間人を襲ったそうじゃないか。当然、指名手配されたぞ。それだけじゃあない。ロウダウナーとかいうガキどもが局施設を襲撃し強奪したロストロギア、征服剣フェイツ・コンクエスター。連行されてきたガキども5人、誰も持っていなかったそうじゃないか』

『守護騎士が征服剣をロウダウナーから横取りしたと？』

『取り調べではそう言っているようです』

ここで新たな参加者。最高評議会の世話係である女性局員だ。いつも通りモニターにも表示されず、声の身が権威の円卓のメンバー全員に届く。

『ですが取り調べでは供述内容に若干の乱れあり、との報告を受けています。事実、守護騎士に征服剣を奪われたのかどうかは不明です』

『だそうだが？　しかし局員と民間人に手を出したのは事実。そしてロストロギア、闇の書の守護騎士であることもまた事実。最高評議会の御三方、スカウトの件はどうする？』

管理局創設より存命している最高評議会、議長デュランゴ、書記トレイル、評議員リョーガの返答を、他のメンバーは無言で待つ。

『闇の書は御しえる代物ではない。完成前もその後も、だ』

『ではスカウトの件は』

『現時刻を以ってパラディース・ヴェヒターのスカウト案を破棄する』

議長デュランゴのその有無を言わさぬ一言を以ってパラディース・ヴェヒター、守護騎士ヴォルケンリッターのスカウト案が白紙に戻された。少年は『ま、俺の目的はランサーだけだ。問題はない』と誰にも聞こえぬほどの声量で呟きニヤリと口端を上げた。彼はすでに気付いていた。ランサーが消えるべき守護騎士ではないことを。"闇の書"事件の終結後も消えることなく存在することを。ゆえに少年は笑う。必ずランサーを手に入れてみせる、と。

『闇の書の捜索、どこの部隊が担当することになっているんだ？』

『確か、アースラスタッフだったのでは・・・？』

『アースラ？・・・・あぁ、先の闇の書事件にて殉職したクライド・ハラオウン提督の婦人と息子の居るチームか』

『おいおい、どこのどいつだ、アースラに捜査担当を指示した奴は？　運用部には随分と面白いことを考える奴がいるじゃないか、夫の復讐でもさせるつもりか？』

少年は終始楽しそうだ。運用部、人員や艦船の配置の決定権を持つ部署だ。彼は運用部の何者かに拍手を贈る。ハプニングやサプライズといった予想外の出来事がよほど嬉しく面白いらしい。

『偶然だろう。後にアースラに配属されるであろう新人と、その友人が標的にされた。流れ的にそうなってもおかしくない』

『とにかく闇の書は破壊すべき毒だ。アースラから助力を求められた場合は可能な限り受けるように』

デュランゴがそう告げ、今回の議会は閉幕した。

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「いってきます」「いってきまーす♪」「いってくるよ」

「それじゃあクロノ、エイミィ、イリス。少しの間、よろしくお願いね」

「はい、いってらっしゃい、母さん。それにフェイトとアリシア、アルフも」

「いってらっしゃい、フェイトちゃん、アリシアちゃん、アルフ♪」

「いってらっしゃい」

これからフェイトとアリシアは、保護者のリンディ艦長と付き添い

のアルフを伴ってこれから通う聖祥小学校へ向かう。今日は転入初日で、フェイトは静かに興奮していて、アリシアは「早く早くっ♪」ってフェイトとリンディ艦長の手を取って急ごうとする。
ちなみにフェイトはなのは達と同じクラスになるって話。で、アリシアもフェイトと一緒になのは達のクラスに転入することになっている。し・か・も。アリシアはフェイトの双子の姉ってことになってるんだよ。ありえねぇ～。ちくしょう、３１歳め。

「ねえ、イリスちゃん。恐いよ？」

エイミィがわたしを見てそんなことを言ってきた。今のわたしはギリギリ歯軋り中。だって「わたしだけ居残りってあんまりじゃない」わたしだってなのは達と学校に通いたいんだよぉ～。わたしは学校に通わず、聖王教会の中でも指折りの学士たちを家庭教師として勉学に勤しんだ。
騎士としての魔法の腕や戦術は、偉大なご先祖様であるシャルロッテ様の刀、"キルシュブリューテ"・オリジナルのおかげで労することなく手に出来て、知能は父様のスパルタでそれなりだ。でもそこには楽しさは無かった。だから学校に通うということがすごく羨ましい。

「しょうがないだろ。君はフェイトとは違って正式な局員だ。学校に通っている暇なんてない」

「じゃあ局員辞める」

「馬鹿を言ってないでほら、仕事を始めるぞ」

クロノにはバッサリと切り捨てられ、「イリスちゃん。頑張ろ？」エイミィにも応援されなかった（当たり前な事だけど）わたしは本気じゃなかったとは言えちょっぴりへコんで「りょ～か～い」渋々仕事を始めることにした。リビングに戻って来たわたし達はソファに座って、展開した空間モニターを眺める。表示されているのは守護騎士ヴォルケンリッターの面々だ。

「全員、聞こえているか？」

『うん、聞こえてるよクロノ君』

『あたしも問題ないわ』

『うん、私の方も大丈夫だよ』

通学前のなのは、アリサ、すずかにこちらからの通信を念話って形で繋げる。そして『私も問題なし』今しがた出て行ったフェイト、『うん、聞こえる聞こえる』とアリシア、『ええ、問題ないわ』とリンディ艦長、最後に『あたしも聞こえるよ』ってアルフが応じた。

「まずは、だ。先日、君らがランサー達から聞き出した情報だ」

「闇の書の主は闇の書の呪いによる何らかの病を発症していて、それを治すために彼ら守護騎士はリンカーコアを蒐集して完成させようとしている、と」

先日、図書館から帰る時に向こうから接触してきた守護騎士たち。"闇の書"の完成を目指す理由を聴いた、主の未来を民間人の憎しみや血で穢さないために犯罪者だけを狙っていることも聴いた。優しい主を助ける為に、罪を償う事になろうともことを起こした、とも。ランサーから語られた話が嘘じゃなければそういうことになるわけだけど。でもランサーの声からは真剣みを感じて、どうしても嘘とは思えないのよね。

「それにしてもやっぱりテスタメントちゃんのことを思い出しちゃうよね、その動機は」

彼らの目的はテスタメントに似ている。まぁテスタメントの場合は救いたい相手は自身で、相手が民間人だろうがなんだろうが関係なくなのは達と対立したけど。あとそれと、死に間際の独白に出てた、色々と罪を犯した、ってやつ。結局あれは立証できなかった。

『・・・うん。あの時のランサーさんの話を聴いて、私、変身できないとか関係なく呼び止められなかった』

エイミィがポツリと漏らすと、なのはがそれに同意を示した。アリサも『あたしもよ。しかも応援しそうになったわ』なんて言い出す始末。なのはとアリサと来れば、『本当に蒐集をやめさせないとダメなのかなぁ』すずかまでそんな事を言いだした。

「ダメに決まってるしょうが」

『『『やっぱり』』』

まったく、情に流されちゃったら局員は務まらな――って、なのは達3人は局員じゃなかったんだ。3人とも管理局に就職しないかなぁ。そうしたらいつでも連絡を取り合ったり休日に遊んだり出来るのに。

『あのさ、テスタメントってさ。わたしとフェイト、ママを助けるためにその・・・死んじゃった子だよね・・・？』

アリシアが沈んだ声で確認するかのように訊いてきた。それに『うん。色々あったけど、良い子だったよ』フェイトが悲しげに答えた。

『そっか。ありがとう、だね』

『うん』

フェイトとアリシアが体を寄せ合ってる光景が目に浮かぶ。

「コホン。話を戻すぞ。君らの話を聴いて、僕は少々疑問を持ったんだが・・・」

『何に？』

「これまでの守護騎士のデータを取り寄せて閲覧したんだが、どうも今回の騎士たちは人間臭い。今までの連中は機械的な受け答えしかしなかったはずだ」

なのはに訊かれたクロノが苦い表情で答えた。"闇の書"。初めてこの名前を聴いた時、わたしは例の懐かしさ、そして僅かな切なさを覚えた。ジュエルシードの時と同じ。きっと悲しい結末が待っているのかもしれないなんて思ってしまっている。まぁそれは置いといて。

『人間臭いも何も人だよ、クロノ君』

「・・・僕たち管理局組はすでに知っていると話だが、闇の書の守護騎士は厳密に言えば人間じゃない」

「え？　私知らないよ」

エイミィだけがそう言うけど、クロノはスルーするようでエイミィをチラッと見ただけ。わたしは「資料、ちゃんと見た？」って小声を掛ける。と、「全部はまだ見てない」ってエイミィはしょんぼり。うん、見ようねちゃんと。

『え、人間じゃないって・・・？』

『どこをどう見ても――あー、確かに顔は動物だけども、アレは魔法での変身なんでしょ？　それなのに人間じゃないってどういうわけ・・・？』

「そうだな。じゃあまずは闇の書についてまだ話していない事を話そう」

なのは達に伝えているのは、"闇の書"はリンカーコア――魔力を食らって６６６ページを埋めていく物で、守護騎士ヴォルケンリッターはその実行部隊だって簡単なもの。そこにまた"闇の書"の情報を追加していく。

「まず闇の書の呪いというものが何なのか判らないが、病を治すなどという機能は有していないはずだ」

『待ってクロノ。それじゃあランサーの話が嘘だって言うの？　私、判るよ？　ランサー、きっと嘘を言ってない』

『うん、真剣だったよ、あの人たち』

フェイトとすずかもわたしと同じ思いみたい。遅れてなのはとアリサ、アリシアもそれに同意を示していく。もしこれで全部が嘘っだらランサー、大した演技者だよ。あと捕まったらなのは達から大顰蹙を買うこと請け合いだ。

「僕は直接聞いていないからそれについてはノーコメントだ。が、僕の言ったことは事実だ。闇の書に何かを治すという機能はない。アレは破壊だけを撒き散らす。だから何が何でも連中の蒐集行為を止める必要がある。もし万が一にも完成した場合、ジュエルシード暴走クラスの次元災害が引き起こされるだろう」

『『『『『っ！！』』』』』

なのは達が息を呑んだのが判った。わたしも資料を見たけど、１１

年前、２２年前、２９年前、３７年前、管理局の捜査資料で一番古い４２年前も、それは酷いことになった。特に１１年前。クロノやリンディ艦長にとってとても辛い結末になってしまっていて。コレをなのは達に伝えるかどうかをクロノに訊いてみたんだけど。

――下手に気を揉ませるような言動はしない方が良い。彼女たちはまだ、僕（こちら）らの日常・彼女らの非日常側じゃないんだ。いつでも離れられるよう、退路を残しておかないといけない――

わたし達にとって荒事は日常だけど、なのは達にとってはまだ非日常の域だ。"闇の書"の主たちへの同情やクロノ達の抱く悲しい因縁の板挟みになって苦しまないように。クロノのなりの気遣いだ。

「闇の書はね、完成前・完成後、そのどちらでも破壊特化なの。破壊以外に闇の書が使われたって話は残ってないわけ」

「それ以前に闇の書は制御が不可能とされている。さらに、だ。完成したらしたで自滅の一途を辿る。しかも周囲に散々破壊をもたらしながらだ。どれだけ危険な代物か、判るというものだろ？」

クロノが厳粛に告げる。なのは達は無言。管理局に残された情報とランサーの語った動機、そして自分たちが抱いたランサーの話が事実だという直感、その３つの感情で言葉が無いみたい。

「フェイト、なのは、アリサ、すずか。君たちは闇の書捜索を手伝いたいと僕たちに申し出た。正直、君たちの戦力を当てにした。だが迷いがあるのならここで引いてくれ」

少しの沈黙。なのは達がどんな答えを出したとしてもわたしはいい。一緒に戦えたら、って思うけどやっぱりなのは達の身の安全が第一だ。

『私はこのまま手伝う。負けたままで終われないって前は言ったけど、それは変わらないし。クロノの話を聴いて、あの騎士たちが本当は何を目指しているのかも知りたくなった』

『私も手伝う気持ちは変わってないよ。フェイトちゃんも言ったけど、ランサーさん達とちゃんとお話しして、あの人たちの事を知りたい』

『あたしもよ』

『私も』

なのは達の決意は変わらなかった。それどころかさらに強くなってる。なのは達もそうなんだよね、誰かの為に、って。自分たちが持ってる力に溺れることなく、それを役立てようとするその思い。だからわたしはみんなのことが大好きだっ。

『本当にいいの、なのはさん、アリサさん、すずかさん。あなた達はやっぱり民間の子たちだから・・・。フェイトさんも。嘱託とは言えまだ子供だし』

これまで静かに話を聴いていたリンディ艦長がなのは達に確認した。

それは管理局員としてじゃなく、まるでお母さんのような優しい声色で。

『『『はい、手伝います！』』』

『私も問題ありません、リンディ提督』

リンディ艦長からの確認でも変わらないなのは達の意志。これでもうわたし達はなのは達を止めることは出来なくなった。

『ねえ、クロノ。さっきの続き。守護騎士は人間じゃないってやつ！』

「ああ、そうだった。闇の書には大まかに分けて3つのプログラムがあると判っている。1つは闇の書全体を統括する管制プログラム、1つは闇の書防衛を担う防衛プログラム、そして君たちが遭遇し、次元世界を席巻した騎士であるヴォルケンリッターを生み出す守護騎士プログラム、だな」

「うん。守護騎士は魔法技術で創られた疑似人格を実体化させたものなんだよ。意思疎通の会話くらいなら以前から見せていたらしいけど、感情を見せることはなかったって話。ただ主の命令に従って蒐集行為をする人形――プログラムだった、はずなんだけど・・・」

実際に会ったことでそれは間違いだという事は判った。

『何度も言うけど、それでもちゃんと意思のある人たちだったよ』

なのはがそう言ったところでわたしはクラっと眩暈がした。脳裏にピカッと強烈な光が生まれて、「なに・・・？」妙な既視感を憶えた。プレシアと言い争った時にも感じたものだ。以前にも似たようなやり取りをしたようなした事ないような、って感じ。

『たぶんなんだけど、今回の主って人の力じゃないかな。優しい主だ、って言っていたし』

『あ、それはあるかもしれないね。これまでの主って問答無用で蒐集させていたそうだし。だから感情なんて要らなかった。でも今回、良い主と出会うことが出来た。優しくされたら優しくし返すと思う。それを繰り返して、きっと人らしくなったんだよ』

『おお、なのはもすずかも良いこと言う！　きっとそうよ！』

『私も2人に賛成。・・・私もそうだったから。なのは達と逢えて、私は変わることが出来た。きっとあの騎士たちも変わったんだと思う、その主と会ったことで』

「そうね。たとえ感情が無かったとしても、人と深く関わり合えば人格・意思を持つ者なら必ず感化されると思う。プログラムであってもきっと心は育つ」

わたし達から話を聴いたクロノは腕を組んで唸って、そして「その辺りは接敵して行けば判るだろう」って後回しにすることを決定させた。

「いや、調べればいいのか。ユーノ辺りに頼んでみよう」

『『ユーノ君に？』』『『『ユーノに？』』』

ユーノは今、セレネやエオスの通うザンクド・ヒルデ魔法学院で結界魔法の外部講師として２人と一緒に通ってる。確かにユーノは遺跡発掘を生業としてるスクライアの魔導師。調査系の仕事に優れてる、はず。

「それに、僕の知人に声を掛けてみよう。以前に闇の書事件に関わったことがあるし」

『グレアム提督とリーゼ達ね』

「はい。母さん」

『って、誰？』

「ギル・グレアム提督、その使い魔のリーゼアリアとリーゼロッテ。グレアム提督は、かつては艦隊指揮官、執務官長を歴任していたんだけど、現在は現場からは退いて顧問官として勤めてるのね。リーゼアリアとリーゼロッテは、クロノ君のお師匠でもあるんだよ。アリアには魔法を、ロッテには格闘を。だよね、クロノ君？」

アリシアの疑問に答えたエイミィ。グレアム提督は"時空管理局歴戦の勇士"って通り名を与えられるほどの人だ。リーゼ（２人を同時に呼ぶときはコレ）も見た目は若い女性だけど、実はかなりのお

ばあちゃん（って言ったら、笑顔で、お・ね・え・ちゃ・ん♪って脅迫された）で、グレアム提督の若い頃から生きている歴戦の実力者。

「ああ、まぁ、そうだ」

『なんか歯切れが悪いわね』

『お師匠さまだから、辛い修業時代を思い出したとか？』

『なるほど～』

違う。そうじゃないよ、フェイト、みんな。クロノはリーゼが――というかロッテが若干苦手なんだよ。いっつもロッテに玩ばれるもんね、クロノってば。それを知ってるわたしとエイミィが「ふふふ」小さく笑い声を漏らす。と、「何か？」ってクロノに睨まれた。

「「ううん、なんでも♪」」

「ふぅ。とにかく、だ。こちらはまず情報を集めることに専念するつもりだ。君たちのデバイスはまだ直りきっていないしな。それまでは日常を楽しんでくれ」

『『『はーい！』』』『ええ』『うん』

なのは達との通信はこれで終わり。あとは「あ、マリエル？　わたし、イリス」なのは達のデバイスの修復状況だ。本局・技術部の技

官マリエルに通信を入れる。

『あ、イリスちゃん？　あっ、それにエイミィ先輩にクロノ先輩も、こんばんは』

「ああ」

「こっちはおはようだよ、マリー」

マリエルがモニターに映る。どうしてクロノとエイミィを先輩って呼ぶかって話だけど、マリエルは聴いたところ元々執務官志望だったみたい。でも執務官になるのが難しいって判断して、技術士官コースに進路変更して、士官学校を出た。これが2人を先輩呼ばわりする理由。ちなみに今は装備部に所属。

そんなマリエルは今どうやらメンテナンスルームに居るようで、早速修理に取り掛かってくれているんだって嬉しく思えたから、「もう修理始めた？」って訊いてみた。

『それなんだけど・・・。第零技術部のスカリエッティ技術部長たちの助けもあって全機の修復はほぼ完了したんだけど・・・』

「ドクターの？」

第零技術部。管理局のみならず次元世界屈指の技術が生み出される奇跡の箱庭（ガーデン・オブ・スカリエッティ）。ドクターって言うのはその技術部の部長であるジェイル・スカリエッティのニックネームだ。

ドクターに抱いた第一印象は最悪だった。例の感情の出現で、ドク

ターは敵☆、ていうか死ね♪、つうか殺す　、みたいな物騒な思いが脳裏に過ぎったしさ。あれは危なかったね、うん、マジで。あとクアットロにも似たようなものが。
でもま、トーレやチンク、クアットロ達シスターズに向ける父性愛からの親馬鹿っぷりにとうとうわたしは警戒を解いた。実はと言うと、"キルシュブリューテ"にＡＩを搭載してくれたのは他ならぬドクターだ。

（元の強度を殺すどころかさらに強くして搭載したその技術力と腕は信頼できるんだよね）

そのおかげでこれまでの使用で"キルシュブリューテ"は壊れるどころか刃こぼれ１つとしてない。それからのメンテナンスはマリエルに頼むことにしたけどさ、なんとなく。

『フレイムアイズとスノーホワイトは強度強化や処理速度の改善などなど、問題なく終わったんだけど、レイジングハートとバルディッシュからちょっと私じゃ判断できないリクエストがあって・・・』

「リクエスト？」

『はい、どうしてもあるエラーが消えないんです、エイミィ先輩。レイジングハートからはベルカ式カートリッジシステムＣＶＫ７９２－Ａを、バルディッシュからは同システムＣＶＫ７９２－Ｒを組み込んでくださいって』

「「カートリッジシステムを！？」」

クロノとエイミィは驚いて見せたけど、「そっか。そうだろうね」わたしはなんとなくこうなることを予想してたから大して驚きはなかった。守護騎士は単純に強い。何せ対人戦特化の戦闘者だもん、騎士は。その中でもきっとトップクラス。そしてデバイスにも性能差があったと思う。

アームドデバイスの隠れた特徴はその強度だ。ミッドの魔導師が使うデバイスはあくまで杖。殴り合ったりするような物じゃない。だけどアームドデバイスはそれを行う武器としての魔導端末。そこにカートリッジシステムなんてドーピングを行えばミッドのデバイスが負けるのは必然のこと。

『フレームやコアの強度補正に加えて、カートリッジシステムを搭載。相手はベルカ騎士で武装はアームドデバイスだから、確かに搭載すれば正面から渡り合えるかもしれないけど・・・』

「ストレージデバイスならともかく、インテリジェントデバイスのような繊細なデバイスに後付けで組み込むような代物じゃないよね、カートリッジシステムって」

そう。エイミィが言ったそれこそがマリエルを困惑させてる理由。インテリジェントデバイスは魔法の発動の手助けになる高度な処理装置、状況判断を行える人工知能も有してる。どれもが繊細で、殴り合いなんてしたら一番エラーを起こしやすいデバイスになる。わたしの"キルシュブリューテ"は元々アームドデバイスで優れた強度が有ったから、ＡＩを搭載させてインテリジェントデバイス化することが出来た。打ち合いしてもいいように始めから造られてる

"バルディッシュ"ならまだしも、完全な魔導の杖である"レイジングハート"に搭載するなんて、限界線を1歩も2歩も踏み越えちゃってる。

『そうなんですよ。それなのにあの2機は、組み込むように、っていうメッセージだけを送って来て。ドクターに相談してみたんですけど、それはマスターとデバイスの決めることだ、って言って。どうします？』

「ドクターの言う通りかも。最終的に決めるのはその子たちのマスターであるなのはとフェイト。お互いに力を求めるんだったら叶えさせるべきじゃない？」

「そんな無茶な・・・」

『イリスちゃん、なんか乱暴な考え』

わたしはそう断言する。それを聴いて困惑するエイミィとマリエル。でもクロノは「そうかもしれないな」ってわたしの意見に賛成してくれた。

「とにかく訊いてみよう。クロノ。なのはとフェイトに通信を繋げて」

早速訊いてみよう。なるべく早く答えを出した方が、より守護騎士たちと出会えるから。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒なのは†††

『――というわけで。レイジングハートとバルディッシュから、ベルカ式カートリッジシステムの追加搭載をリクエストされたんだけど』

通学バスでアリサちゃんとすずかちゃんと合流したところで、シャルちゃんから聴かされた話は、私とフェイトちゃんの相棒である"レイジングハート"と"バルディッシュ"からの以外な申し出についてだった。

『カートリッジシステムって、アリサちゃんやシャルちゃん、守護騎士の人たちも使ってる物だよね』

『ええ。レイジングハートからはＣＶＫ７９２－Ａ。アリサのフレイムアイズと同じ、オートマティックタイプのカートリッジシステムね。そしてバルディッシュからはＣＶＫ７９２－Ｒ。コレは、ランサーの槍と同じリボルバータイプになる』

『ランサーの物と同じ・・・』

先に学校に着いて校長先生や担任の先生に挨拶をしているはずのフェイトちゃんから、少し迷ってる風の声色な返事が届いた。

『どうする２人とも。ＯＫを貰えればすぐにでも搭載するための作業を始めるけど・・・。正直言うとね、カートリッジシステムを搭載しないと守護騎士に勝てないかもしれないって思ってる。向こう

は本当に戦闘のプロ。経験や戦闘力の差を埋めるには、やっぱりデバイス強化しかないと思うんだ。それが判るからこそ、レイジングハートもバルディッシュも、この道を選んだ』

本当は"レイジングハート"や"バルディッシュ"のような繊細なインテリジェントデバイスにカートリッジシステムを組み込むのはとても危険なことなんだって。本体の破損とか扱いの難しさとか。それが判っていながら2機とも、どうしても、って聴かないって。シャルちゃんは言った。悔しかったんだろうって。私たちを守りきれなかったこと、私たちの信頼に応えられなかったことが。

『シャルちゃん。私はお願いするよ、カートリッジシステムの搭載を。バスターちゃんとお話しするためにはまず、並ばないといけないから』

お話しするためにもし戦うことが必要になっちゃったりしたら、今のままじゃ絶対に何も出来ないで逃げられちゃうし。

『判った。フェイトはどうする？』

『・・・私も、お願いする』

『ん、判った。じゃあ早速連絡を取るから、手元に帰ってくるまでもう少し待っててね』

シャルちゃんとの通信が切れる。ずっと黙って通信が終わるのを待っていてくれたアリサちゃんに「シャルはなんて？」そう訊かれた

から、"レイジングハート"と"バルディッシュ"に、アリサちゃんの"フレイムアイズ"や守護騎士の人たちが持ってるデバイスのようなカートリッジシステムを組み込むことを伝えた。

「シャルちゃんは、カートリッジシステムって扱いが難しい、って言ってたけど。そうなのアリサちゃん？」

「え？・・・えーと、あたしは始めからカートリッジシステムを使ってたから気にはなんないわ。まぁでも、カートリッジをロードした直後は魔力がドカンと膨れ上がるから、意識しておかないと振り回されるかも知んないわね」

アリサちゃんから役立つアドバイスをもらうことが出来た。なるほど。カートリッジの使用直後は意識しておかないと振り回されちゃうんだね。覚えておかないと。

「なのはちゃん、アリサちゃん。私のスノーホワイトにはカートリッジシステムが搭載できないからなのはちゃん達のように前で戦えないけど、その分パワーアップしたスノーホワイトと私で精いっぱい補助するからね♪」

「うんっ」「ええ」

私たちは手を重ね合って「頑張ろう、オー！」気合いを入れた。

そうして私たちは通学を終えて、教室に。教室に入るとざわざわと少しざわついているのが気になったからみんなの会話に耳を澄ませてみると、このクラスに転入生が来る、っていう話題でざわついて

いるみたいだった。

「フェイトちゃん達のことだね」

「みんな、どんな反応するだろうね、アリシアちゃんを見て」

「飛び級！？とか、え、そっちが姉！？とか、あとやっぱり、可愛い！とか、じゃない？」

見た目は小学1年生くらいだけど、仮死状態だった時間を合わせるとその年齢は31歳。でも精神年齢は外見相応な不思議ちゃん（シャルちゃん談）。そんなざわつく教室の中で真実を知ってる私たちは、何も知らないクラスメイトが転入生に期待を膨らませているのを微笑ましく見守る。

「はーい、みんな席に着いてね～」

担任の道俣（みちまた）先生が入って来て、教室の所々でお話ししていたクラスメイトが席に着いていく。みんなそわそわしながら教室の前の入り口をチラチラしているのが判る。

「えー、あはは。転入生の事はすでに知られているようだから早速、みんなの新しいお友達を紹介しよう！　入って来て～」

先生が呼ぶと、ガラッと引き戸がスライドして行って、フェイトちゃんとアリシアちゃんが姿を見せた、んだけど・・・。アリシアちゃんはニコニコ笑顔でフェイトちゃんの左腕に自分の腕を絡ませて

体を寄せていて、フェイトちゃんは人前でそんな状況だからか顔が赤い。

「はい、2人とも。仲が良いのは判りますから、分かれて入って来てください」

先生にそう言われたことでアリシアちゃんはフェイトちゃんから離れて教卓の隣に。フェイトちゃんも遅れて教卓の、アリシアちゃんの隣に並んだ。

「さ、自己紹介をお願いね」

「あ、はい！　は、はじめまして、フェイト・テスタロッサ、です」

「はじめまして～♪　フェイトのお姉ちゃんの、アリシア・テスタロッサで～す♪」

元気よく挙手したアリシアちゃん。すると「そっちが姉ぇぇぇ～～～っ！！？？」みんなが盛大に驚愕して見せた。とそこで『ほらね』ってアリサちゃんから念話が。ついさっき言ってたもんね。

「ブイっ☆・・・っと、ほら、フェイトも一緒に！」

「え？　あ、えっと、ブ、ブイ」

ハイテンションなアリシアちゃんと恥ずかしさやら戸惑いやらでドギマギしてるフェイトちゃんがみんなに向かってピースサイン。こ

のあと、転入生・転校生の洗礼である質問の嵐を、アリシアちゃんとフェイトちゃんは受けた。

Ｅｐｏｓｌ７リンドヴルム～Ｃｏｌｌｅｃｔｏｒ　ｏｆ　Ｔｈｅ
Ｌｏｓｔ　Ｌｏｇｉａ～

†††Ｓｉｄｅシュリエルリート†††

『――で、ロウダウナーがようやくゲロッたのだけど、征服剣はどうやらリンドヴルムの手に渡ったらしいのよ』

「リンドヴルム？・・・・ああ、あのリンドヴルムか」

主はやてや皆が眠りに着いている今は０時。私は喉の渇きを覚えたことで台所に水を飲みに行こうとしたところ、本当に小さな話し声が漏れ聞こえて来るのに気付き、声の出所であるルシルの部屋へ寄った。そして聞こえてきたのが、今の会話だ。いったい誰と連絡を取っているのかと思い聞き耳を立ててみる。

「よく聞き出せたな。結構頑なに拒んできたんじゃないか、連中」

『まあね。でも、管理局にも聴取のプロが居るのよ』

「プロ？」

『それは秘密。こっちとしても管理局の捜査情報をあなた達に流す危険行為を犯しているんだから』

ルシルは管理局員と連絡を取っていたのか。犯罪者の情報にやけに

詳しいな、とシグナム達と話していたのだが、ルシルのことだから何でもアリ、という結論に至っていた。まさか管理局員に協力者がいたとは驚きだ。となると、先日の蒐集ミスの一件。情報未確認というのはおかしな話になってくる。管理局員から情報を得ているのであれば間違えるはずがないのだ。では何故ルシルはあんなミスを犯した？

「そうだった。グレアム提督にはいつも世話になっています、と伝えてほしい」

（グレアム！？　主はやてのご両親の友人、ギル・グレアムの事を言っているのか・・・！？）

驚くべき事実は再び、だ。もしそうだとしたらとんでもない事態だ。協力者とは言え管理局に主はやての正体を知られている。もし彼らが我々を売ったりでもすれば、一気に不利になってしまう。コレは私ひとりで抱えるには重い事実だ。が、ルシルを信じたい、という思いもあるのだ。シグナム達に知らせるのは少し待とう。

『・・・父様は少し懸念しているわ。あなたが犯したミスは管理局に波紋を呼び、そしてパラディース・ヴェヒターが闇の書の守護騎士だっていうことも知られて。でも父様はあなた達を切り捨てるつもりはないらしいわ。まだあなたに賭けているからよ、ルシリオン。あなたは言った。闇の書ははやてに掌握される。闇の書の旅路ははやての代で終わるのだ、って』

（何の話をしている・・？　ルシルは何を根拠にそんな事を・・・？）

"闇の書"に終焉が訪れることを知っているとでも言うのだろうか、ルシルは。いや管制プログラムである私だからこそそれはない、と言える。私は――"闇の書"はもう壊れている。此度の主、八神はやて。あの優しく温かい幼き少女の未来は守りたい。しかしそれは難しいのだ。シグナム達は記憶が曖昧で憶えていないようだが、今の"闇の書"は災厄をもたらすだけの破壊兵器と化している。しかも主を取り込んで成る兵器だ。
ゆえに完成させたとしても主はやての病は治せない。止めたい気持ちもある。が、蒐集しなければ主はやての死期を早めてしまう。どちらを選んでも手詰まり。私はもちろん、おそらくルシルも知っているはずだ。それを承知で蒐集させているということはやはり知っているのだろうか、"闇の書"の旅路を終わらせる方法を。

『父様だって本当は八神はやてを犠牲にしたくないって思っているもの。あたし達もそうよ』

「・・・判っている。だから俺たちは協力することにしたんだ。はやてを犠牲にせずに闇の書の旅路を終わらせる為に。だから今はただ、信じてくれ、と言う他ない」

『・・・以前、協力関係を結んだ際にも言ったように具体的な策を教えてもらいたいんだけど』

私も知りたいぞ、ルシル。しかしルシルは「それは結果で示そう」と口にすることはなかった。相手も『まぁそんな気はしてたから深くは訊かないわ』と流した。

『だけど、以前伝えた通りあなたの策が失敗するような状況になった場合、こちらの策が優先されるから』

管理局の策とはなんだ。これまでのように艦載砲で蒸発でもするのだろうか。いや、それは策とは言えんな。また別の手を取って来るのかもしれない。警戒しておかなければ。

「判ってる。グレアム提督や君たちの為にも失敗はさせない。それでリーゼアリア。今回の連絡の本題はなんだ？」

『あーそうそう。リンドヴルムが動き出したって話なのよ。リンドヴルム。古代遺失物ロストロギアの収集家。その素性、外見も不明。高ランクの私兵魔導師を抱え、次元世界に解き放ってロストロギアを収拾する、胸糞悪いコレクターー』

「それが？　征服剣の捜索は管理局の仕事じゃないか」

『はぁ。判らないの？　あなた達を狙っているのはロストロギアの収集家リンドヴルムをリーダーとした魔導師集団なのよ、ロストロギア・闇の書の裏の参謀さん？』

「「っ！」」

息を呑む私とルシル。リーゼアリアという女性は『連中の情報網は計り知れない。おそらくキャッチしているはずだわ』と気になる話をした。

「あーあ。管理局の相手をしなければならない時にまた面倒な相手が来たものだ」

『それもあなたの情報確認ミスが招いた結果よ。まったく。しかも蒐集したのは１１年前、闇の書の暴走時に殉職したクライド君――ハラオウン提督の妻子の乗艦する艦船アースラの関係者・・・あっ！』

「何か？」

『・・・何か、じゃないわよ。あなたは知っていたはず。ＰＴ事件が終わっていたのも、プレシア女史が死んでいる事も全部！・・・何せＰＴ事件を引っ掻き回した、死亡扱いされている被疑者テスタメントなのだから・・・！　そうよ。フェイト・テスタロッサが無実であることも、高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスが民間人であったことも・・・。どうして、知っておきながら蒐集したの！？』

待て待て待て。彼女の話が事実だとすれば、ルシルはわざと民間人から、しかも管理局と関わりのある者から蒐集したことになる。そんなことをすれば否応なく管理局に目を付けられるだろうに。判らない。かつての主、オーディン以上に読めない。ルシルの心の内が。彼は一体何を考え、目指し、事を成そうとしているのだろうか。主はやての未来を守りたいのではないのか？　どんな返答をするのかと胸が苦しくなるような思いでいれば、「決まっている。はやての為だ」とルシルは簡潔に、それが当然であるとでも言うように即座に答えた。

『八神はやての・・・？』

「そう。俺が描いているシナリオは全てはやての未来の為だ。まぁ少々強引、それに悲しませるような思いをさせているけど、それは最高の結果の為。過程である今は少し辛いだろうけど耐えてもらうしかない」

（ルシル。お前は本当に一体何を見ているのだ？）

「ありがとう、リーゼアリア。心配してくれているんだな」

『んなっ？　べ、別に心配しているわけじゃないわよ！　ただ、そっちが捕まったことで父様に迷惑を掛けないでほしいっていうだけよ！　伝えたからね！　父様の為にも負けたら承知しないから！』

怒り、もしくはテレ隠しか、その大声を最後に彼女の声は途絶えた。通信が切れたのだろう。と思えば、『おっと、あともう1つ報告があったんだった』と続けた。

『あなた達の捜索・逮捕を担当するアースラからリーゼ(あたし)達に、闇の書の情報を集めるよう協力要請が来たんだけど。どうする？』

「どうするって・・・、受けるしかないじゃないか。断ったら変に思われるだろうし」

『そうじゃなくて。どこまで集めさせていいのかって話よ。あなた

達にとって知られたくない情報だってあるんじゃ――』

「無い。そんなものは無いよ、リーゼアリア。隠す必要も無い、嘘を吐く必要も無い、包み隠さず、納得のいくまで情報を集めさせてオーケーだ。遅かれ早かれいずれは辿り着く真実の扉。そうだな、12月25日。その日までには辿り着いて、ノックをし、扉を開け、知っていてもらわないと。闇の書の抱える真実を」

『・・・そう。じゃあ、怪しまれない程度に手伝うわ。それじゃあね』

今度こそ通信が切れたのか静まり返るルシルの部屋。私は「ルシル。いま良いだろうか」扉をノックしながら呼びかける。

「シュリエル？　どうぞ」

「失礼する」

入室を促されたことで私は部屋へ入り、ベッドに腰掛けて自身の周囲にいくつも展開されているモニターと睨めっこしていたルシルを視界に収める。

「もしかして、聞いていたりしたか今の」

「あ、ああ。・・・ルシル。お前の心の内はどうなっている？　先の子供たちのことを知っていたそうだな」

私はルシルを責めるつもりはない。ないのだが、その口調は責めているかのようになってしまった。ルシルは僅かに自嘲するかのような乾いた笑い声を漏らした。

「知っていた。彼女たちの名前も、魔導師であることも、民間人であることも全部。半年以上前、俺はテスタメントという偽名を名乗り、変装したうえでジュエルシードを巡って彼女たちと戦った」

ルシルは話してくれた。強大な魔力を秘めた宝石ジュエルシードを巡る戦いを。参加した理由はやはり、"エグリゴリ"を打破するため、だった。そして、どうしてあの子供たちを狙ったのかも。確かにそれは、主はやての為、とも言える理由だった。だから信じようと思う。彼が描く、未来予想図（シナリオ）、というものを。

†††Ｓｉｄｅシュリエルリート⇒シャマル†††

私たちは今、本拠地である日本を離れて他国（ルシル君の話じゃ中国という大きな国）に赴いている。場所は複雑な地形の上に存在しているゴーストタウン。私としてはこの世界を離れて別の世界を戦場にしたかったんだけど、それはルシル君が反対。同じ世界、だけど別の国を戦場として選んだ。

――向こうも情報網がすごいようなんだ。おそらく俺たちの本拠地が第９７管理外世界・地球であることも知っているはず。もし、連中が俺たちに会いに来たとして、そこに俺たちが居なかったら？連中は目的のためなら手段は選ばないそうだから、下手をすれば――

「原住民に攻撃しかねない。私たちを挑発して呼び込むために、か・・・」

そんなことをさせるわけにはいかない。万が一にはやてちゃんや私たちの住む街が標的になったとしたら。想像するだけで恐怖と怒りで頭がどうにかなりそう。だから私たちは連中を、リンドヴルムをこうして待ち構えている。私たち"闇の書"を収集するために、私たちを撃破するための戦力を。

『私はランサーの指示通り各騎の戦闘状況を知らせる後衛に回るわ』

『『『『ヤヴォール！』』』』』

ランサーことルシル君、セイバーことシグナム、バスターことヴィータちゃん、マスターことシュリエルから強い返事が。私は側に控えているザフィーラに視線をやって、「護衛をお願いね、ガーダー」私を護ってくれるザフィーラに小さく頭を下げる。

「任せておけ。ランサーは本気を出すと言っていた。我が抜けたとしても問題はあるまい」

そう。ルシル君は今回の戦いの相手によっては今の今まで出したことのなかった本気を出すって言っていたわ。オーディンさんに比べて魔力量は少ないけど、それでも強力な魔導騎士。そんな彼が本気を出した時、連中はきっと思い知るわ。私たち――八神はやての騎士にケンカを売ったことがどれだけ無謀なものなのかを。

（はやてちゃん。今日一日、一緒に居られなくてごめんない）

はやてちゃんには申し訳ないけど、今晩だけは一緒に居られない。だけどその代わりに、ルシル君とシグナムとヴィータちゃんが間違って蒐集しちゃったあの子たち、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、そして・・・。

（イリス――ううん、シャルちゃん）

イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト。かつて共に戦った騎士リサと同じミドルとファミリーネームを持つあの子たちとお泊り会。フェンリルを召喚して2人きりにするよりも、新しく出来たお友達と親睦を今のうちに深めた方が良いっていうのがルシル君の意見。どうやらルシル君は全てを片付けた後、はやてちゃんとなのはちゃん達に魔導師付き合いをさせたいみたい。

（私としてもその考えは良いと思うし、大賛成。だけど・・・）

シャルちゃんとフェイトちゃんは管理局員。そんな2人が居る中にはやてちゃんを置いておくのは少し恐い。一応、はやてちゃんの魔導資質――リンカーコアはシュリエルが手にしている"闇の書"の中。管理局に連れて行かれて精密な検査を受けない限りはバレないはずとは言え。

さらにもう1つの不安。なのはちゃん達が魔導師であること、間違って蒐集してしまった被害者であることを、はやてちゃんにはまだ伝えていないことだわ。もし万が一にでも魔法の話が予期せぬ形で

はやてちゃんに伝わったりでもしたら、私たちの正体が管理局に知られることに。

（・・・っ！　来た！）

不安を無理やり払拭しないといけない状況になった。はやてちゃんとなのはちゃん達への不安を頭の片隅に追いやる。

『各騎に通達。ランサーの情報通り、リンドヴルムの構成員と思われる敵性魔導師が結界内に侵入した模様。注意して、みんな』

『『『ああ！』』』『おう！』

私の張った結界に侵入者が入り込んできた。数は４人。私の前面にルシル君たちを表示させたモニターを展開。続けて結界上空、侵入者４名を表示したモニターを展開。全員が紫一色のローブを纏っていて、フードで素顔を隠してる。裾の方には飛竜のエンブレムが描かれてる。

「これがリンドヴルムのロストロギア収集の実行部隊・・・。あ、『こちらヒーラー。敵数は４名！　ランサー、セイバー、バスター、マスターの元へ――』」

私とザフィーラを結界の中心点として、北方１ｋｍ先のビルの屋上にヴィータちゃん、東方１・５ｋｍ先の運動場にシグナム、南方２・５ｋｍ先の公園にルシル君、西方２ｋｍ先のショッピングモールにシュリエルが居る。連中はそんなみんなの元へ降り立った。

『違う、ヒーラー。結界外にもう1人いる。遠距離系の魔導師か、もしくは連絡係か、おそらく前者だ。各騎――特にヒーラーは要注意。ガーダー、最大警戒を』

『ヤヴォール、ランサー』

気付かなかった。私の魔力探査能力じゃせいぜい結界内だけだから。もしルシル君でも気付かなかったら私、やられていたかもしれない。そう思うと、『ごめんなさい、ありがとう』ルシル君に謝罪とお礼を言う。

『いいよ。みんなで守り合おう』

優しい声色で返してくれたルシル君。ほうっと胸の奥が温かくなってく。うん、心地いい。それなのに、『闇の書の守護騎士ヴォルケンリッター諸君』この心地よさを台無しにするデバイスのような機械音声が私の耳朶を穢した。私とザフィーラの前、ルシル君たちそれぞれの前にモニターが展開された。新しく展開されたソレら全てに飛竜のエンブレムが表示されている。

『素顔を、肉声を、お届け出来ないのが実に残念だ。初めまして。龍の王、蛇王子、宝物庫の長、空の城主、コレクター、クレイジー・ドラゴン、キュリオシティ、ファナティック、プランドラーｅｔｃ…。個人的にはミスター・リンドヴルムが好みな、リンドヴルムの首領だ』

なんとなくだけど自分という人間に酔い痴れているのが解る。ルシル君が『自己紹介は結構。敵、その一文字だけで十分お前を表せる』って言い放った。

『ミスター。ロストロギア収集家のお前が、闇の書を収集するために私兵を寄越した。敵対抗戦行動は確実。潰すぞ？　お前の戦力を。構わないな？』

『いいともランサー。彼らは金銭が好きで、戦いが好きで、魔法が好きで、殺しが好きで、敗北すらも良しとする戦闘狂どもだ。喜んで戦いに死んでくれるさ。もちろん、簡単には死なない。私の目的の為、自らの欲の為、その契約が果てるまで全力で戦い、生き、勝ち続ける。そちらも殺す気で来ないと、本当に死ぬぞ』

『・・・残念。主の守護を司る我ら騎士は、主が為に殺しはしない、と決めている。が、殺された方が、死んだ方がマシだと思えるような敗北もあると知った方が良い。ああ、そうだ。殺す気が無くても勝てるんだよ』

『面白いな、ランサー。実に面白い返答だ』

ミスターのモニターから愉快と笑う声と拍手が聞こえてきた。それを遮るように『ミスター。私からも質問がある。答えてもらおう』シグナムが冷ややかな声で問う。

『何かな？　騎士セイバー。手短に頼むよ。管理局がその世界近くで張っているものでね。あまり時間は掛けたくない』

『貴様はロストロギアにおいては博識な収集家と聞く。闇の書についてもある程度の情報を得ているのだろう。ならば、だ。闇の書は完成前も完成後も主以外を持ち主とは認めないことも知っているはず。そんな物を収集して意味はあるのか？』

『あるともさ！　聴いていなかったのかい、騎士セイバー？　私は収集家だ、飾るに決まっているだろう！　私はロストロギアが好きだ！　書物型、武器型、宝石型、様々なロストロギアが大好きだ！　眺めるのが好きだ、触れるのが好きだ、調べるのが好きだ、創造過程を想像するのが好きだ、使うのが好きだ！　歴史の遺物、文明のなれの果て、過去を知る導、現在を狂わす毒、嗚呼、素晴らしき哉、古代遺失物ロストロギーーーーア！！』

ミスターの声高らかな演説を聴いたヴィータちゃんが『なぁ、みんな。コイツ、さっさとぶっ潰した方が世界の為じゃね？』ミスターのモニターに向かって"グラーフアイゼン"を突き付けた。ルシル君もシグナムもシュリエルも『ああ』って頷いてそれぞれ対峙している私兵にデバイスや拳を突き付けた。

『では始めよう、諸君。リンドヴルム第６小隊ドラゴン・スケイル。私の為、己が為、死線に狂い、勝利に狂い、敗北に狂え。さぁ、戦闘開始だ！』

『『『『サー・イエッサー！』』』』

ミスターの通信モニターが消える。と同時に４人の私兵が纏ってい

たローブを脱ぎ捨てた。３人が男性で、１人が女性。そして手ぶらだったのが、今ではそれぞれ武器のような物を携えていて。ルシル君と対峙していたのは女性。その女性が持っているのは、裸体を晒した綺麗な女性の石像というか棍棒？で、石像が立つ台座には柄があってそこを持ち手にしてる。それと首から提げた小瓶。形状からして香水のような物。

シグナムと対峙している男性が持っているのは、黒い鞘に収められた一振りの剣、それだけ。ヴィータちゃんと対峙している男性が持っているのは、一振りの無骨な、だけど綺麗なバラ色の剣。シュリエルが対峙している男性が持っている、というよりは装備しているのは周囲に浮いている４枚の楕円形の盾。武器は持っていない。

『各騎、注意しろ。予想通り全員、ロストロギアで武装しているぞ！』

ルシル君から思念通話。ロストロギアを使ってくるかもしれない。ルシル君からリンドヴルムという連中が何なのかを聴いた時、それも一緒に私たちに伝えられていた。まさかとは思っていたけど、収集したロストロギアを私兵に渡すなんて。懐の広い収集家だわ。

『ランサー。連中のロストロギアの効果、判るか？』

『すまない、どれも判らない。ただ、まずい気はする。ヒーラー。万が一の時は旅の鏡で配置換えを頼むよ』

『ヤヴォール、ランサー』

こうして私たち守護騎士ヴォルケンリッターは、私たち"闇の書"

を狙うロストロギア収集家、ミスター・リンドヴルムの私兵と戦う事になった。

†††Ｓｉｄｅシャマル⇒ヴィータ†††

あたしらを狙ってやって来たリンドヴルムの魔導師、それか騎士。はやてやあたしらの未来への路を妨害する壁。だったら「打ち壊すっきゃねぇよな。なぁ？」あたしと戦うことになる男を睨む。ソイツはニタァッと気味の悪ぃ笑みを浮かべて手に持ってる剣を振り上げながら「はじめまして、守護騎士。そして、さようならだ」そう言った。ゾワッと嫌な感じがしたから慌てて奴から距離を取る。

「蹂躙を開始しよう」

――来たれ暁（オロール）、参れ黎明（ヘオース）、訪れよ夜明け（ドーン）、共に闇を払おうぞ――

奴が剣を振り下ろした瞬間、奴の側の空間が縦に裂かれた。裂けた空間はどす黒く、そこから馬に跨った騎士――騎兵がわんさか飛び出して来た。騎兵全騎が持ってる武装は全部、円錐状の槍ランス。騎兵の標準装備だな。問題はどう見ても人間じゃねぇってことか。騎兵も馬も全身真っ黒で、まるで闇や影を粘土みてぇにして人と馬の形に造ったようなモンだ。

「だからと言って退かねぇけどな！　アイゼン！」

――シュワルベフリーゲン――

創り出した物質弾に魔力を纏わせたフリーゲン４発を"アイゼン"で打ち放つ。先頭を駆けて来る４騎に着弾して、その４騎の頭を吹っ飛ばすことが出来た。そのまま崩れちまえば良かったんだけど、すぐ後ろの騎兵４騎に融合されて、また分裂して復活。
これでダメだっつうならカートリッジ２発を連続ロード。"アイゼン"のヘッドを一段階大きくしたギガントフォルムへ変形させる。
続けて残りの１発をロード、シュワルベフリーゲンよりさらに大きい物質弾、「コメートフリーゲン！！」を打ち放つ。
フリーゲンの直撃を受けた先頭８騎どころかさらに後ろ、１０騎くらいを粉砕して行った。あたしが持ってる遠距離攻撃で最高の威力を誇ってるんだ、それくらいは当然だ。でも・・・。

（あ、これはダメかもしんねぇ）

焼け石に水。どんだけ潰しても別の奴らに融合されてはまた分裂して復活してきやがる。ものすごい勢いで進軍して来る騎兵隊からさらに距離を取るために後退、そんで急上昇。騎兵隊をどうにか出来ねぇなら本体を、騎兵隊を召喚した奴をブッ倒す。給弾したカートリッジをすぐに１発ロード。今度は強襲形態ラケーテンフォルムへ変形させる。

「高みの見物してんじゃ――・・・」

≪Ｒａｋｅｔｅｎ――≫

ヘッドのブースターを点火、高速回転しながらリンドヴルムの私兵に向かって急速降下。その途中、あたしに向かって来ていた騎兵隊

を回転の勢いで薙ぎ払ってく。取り囲まれる前に奴の元へ。そんでようやく騎兵隊の壁を突破して、奴を視界に収める。

「ねぇよ！！」

≪Ｈａｍｍｅｒ≫

手加減なしの一撃ラケーテン・ハンマーを奴に打ち込もうとしたけど騎兵とは別、長い盾を構えた防衛の騎士が立ち塞がってあたしの一撃を防いだ。伝わるべき衝撃は来なくて、代わりになんか泥濘を打ったような、ズブッと呑み込まれるような感触が伝わって来た。

「無駄だ、対人戦の騎士。ボスより賜りし我が魔剣、ロストロギア・夜明けの剣。コレは夜明けの軍団を召喚することが出来る、蹂躙の王の剣なのだ！」

「ハッ！　おまえ馬鹿じゃねぇの？　自分の武器の秘密を目の前の敵にベラベラと喋ってさ！　何が嬉しいのかしんねぇけど、それでよく戦闘者をやってられんな！」

――フェアーテ――

"アイゼン"を盾の騎士から引き抜いてすぐ高速移動魔法で距離を取る。追撃して来る騎兵隊にハンマーフォルムに戻した"アイゼン"で打ち放つシュワルベフリーゲンを連続して着弾させている時、『バスター、大丈夫！？』シャマルから思念通話が来た。

『大丈夫は大丈夫、か？　なんつうか負けはしねぇけど勝てもしねぇな。相性が悪い』

『じゃあランサーと変わって。彼も相性が悪いみたいなの』

『は？　アイツに相性なんて可愛げあったかよ』

ルシルは近距離・中距離・遠距離・広域の攻撃・防御・補助、その全てを容易に熟すことが出来る、正しく弱点・欠点無しの騎士だ。それなのに相性が悪いってなんだよ。ルシルが劣勢に陥るような場面が想像つかない。そんな時。

『私の相手、対男性用ロストロギアを持って・・・うく、参ったな、コレ・・・キツ・・』

ルシルから苦悶に満ちた思念通話が来た。ホントにらしくねぇ。だからあたしはすぐに『シャマル、相手を変更だ！』配置換えするように言う。と、あたしの背後にシャマルの転移魔法・旅の鏡が展開されて、中に引っ張り込まれた。

視界が一瞬だけ暗転。開けた時にはそこはシャマルとザフィーラの待機してる結界の中心点。あたしはすでに転移されていたルシルに「そっちは任せな。こっちは頼む」って開いている左拳をアイツに向かって突き出す。

「・・・ああ、任された。そちらを頼んだぞ」

ルシルも空いてる右拳を突き出して、コツンと拳を突き合わせた。

すぐにルシルが相手をしていた奴の元へ旅の鏡を通って向かう。転移は一瞬。すぐに目の前にルシルを苦戦させた相手、若い女と対峙する。

「最っっ悪！　よりによって女で子供！」

あたしを視認した瞬間、その女は焦り出した。そういやルシルが言ってたっけ。対男性用のロストロギアだとか何とか。それにあの焦り様。どうやらロストロギアに頼った、対ルシル戦のみの戦法しかないと見た。

あたしはカートリッジを1発ロードして「アイゼン！」をラケーテンフォルムへまた変形させる。と、女は「あたしは他の奴らと違って自分の命第一だからね！」って言って逃げ出そうとした。背を向けて逃げる奴には攻撃しない。それは騎士のポリシー。

だけどお前さ・・・「人殺し、なんだろ」あたしが言える立場じゃないのは百も承知さ。コイツに比べりゃあたしの方が大悪党だ。でも今のあたしは、あたしら守護騎士は、八神家の騎士は・・・「悪党を狩るのが仕事なんだよ！」"アイゼン"のブースターを点火、高速飛行で逃げようとする女へ向かって突進する。

「っ！」

女はあたしに気付いて、首から提げてた小瓶を投げ捨てて来た。ソイツを左手の甲で払い捨てる。妙な魔力を感じたし、アレもロストロギアなんだろうな。何がルシルを苦しめたのかは知んねぇけど、あたしには効かねぇみたいだ。女は女の石像を振りかぶって叫んだ。

「あたしは男しか殺さないのよ！　しかも女を食い物にするような！　外道な男を、下種な男を、屑な男を、鬼畜な男を！」

発狂したように目を見開いて石像を勢いよく振るってきた。コイツの独白からして、コイツが前に男に乱暴されたことは判った。そりゃ男を嫌うことになってもしゃあねぇよな。同情はするぜ。だが「殺っちまった以上はもう、引き返せねぇよ」"アイゼン"のブースターを点火。石像を武器にするってんだからコレもロストロギアなのは間違いない。ルシルからは出来るだけ壊すなって言われてっけど・・・。

「コイツを止めるためだ。許せ」

――ラケーテン・ハンマー――

石像をぶっ壊すための一撃を繰り出す。あたしと女の一撃が衝突。やっぱロストロギアなんかな、そこいらの魔導師の障壁より硬ぇ。けど、「あたしとグラーフアイゼンに壊せねぇモンはねぇ！」"アイゼン"が衝突している点から全体にヒビが入ってく。そんでついに石像を粉砕。狂気じゃなくて驚愕に目を見開いた女。あたしは振り切って本体の女に一撃をかますことも出来た"アイゼン"を止めて、ハンマーフォルムに戻した。

（らしくねぇな、ホント）

悪・即・打。それが今のあたしだ。でもこの女を潰すのは少し気が引けた。だから「テートリヒ・・・シュラァァァクッ！」ちょっと

手加減した一撃をお見舞いしてやった。メキッて音が女の右腕から聞こえた。骨折くらいは勘弁しろよ、それだけのことはして来たんだ。女が眼下の池に突っ込んだのを見送って、完全に沈黙したのを確認した。それじゃあリンカーコアの回収といこうか。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒ルシリオン†††

ヴィータとの相性が悪いという男の武器は、影で構築された騎兵や防護兵を召喚する魔剣だった。確かに多数を同時に相手にする魔法の無いヴィータには辛いだろうな。

「私の相手ではないな」

――舞い降るは、汝の煌閃（コード／マカティエル）――

闇には光。閃光系魔力で創りだした魔力槍マカティエル５０基を一斉発射。迫り来る騎兵隊を蹂躙していく。蹂躙担当だと言った男が「これだからランサーの相手は・・・！」悔しげに呻いた。当然というか俺たちの戦い方くらいは調べがついているようだ。対人戦特化のヴィータに数で攻めたり、男である俺に対して呪い的な武装を持ってくるあたり。

（異性を魅了する魔女の香水キルケー・プロフーモ、男の攻撃と防御を全てキャンセルして女性を一方的な有利にする女神の石像ディアナズ・アミュレッティア・・・）

ベラベラと話してくれた神器と言っても過言じゃないほどの２つの

ロストロギアの効果。ロストロギア程度の効果なら魔術師としての神秘で跳ね除けることが出来るが、神器クラスとなるとやはり影響を受けてしまうのが今の俺だ。
一方的な不利の中でも俺はなんとか拮抗を保たせていたが、香水の効果はじわじわと俺の意思を侵食していった。好きでもない私兵の彼女に好意を持ち始めたのだ。ヴィータと配置換えしていなければ今頃俺は、好きだ、みたいな告白をしていたはずだ。
「彼女に比べればお前など雑魚も雑魚、眼中にすら入らない塵芥だ」
「くっそ、くそくそくそくそ！　大人しく殺されてればいいんだよ、狩られる側の獲物はぁぁーーーーー！！」
「ぎゃあぎゃあうるさいんだよ。喚くなら牢に入ってからにしろ」
――煌き示せ、汝の閃輝（コード アダメル）――
あまりに耳触りな男の声。早々に潰すために閃光系の砲撃バラキエルを発射。"夜明けの剣"を振るって新しい騎兵隊を召喚するが、そんなものなどアダメルの前には盾にすらならないと知れ。
ダメルは騎兵隊を薙ぎ払いながら直進を続け、男に直撃した。すぐさま俺は前進して爆煙に包まれた男へ向かう。
そして「リンカーコア、頂くぞ」視界の悪い中でも俺は男の正確な居場所を探し当て、砲撃の直撃で意識が落ちる寸前かふら付いている男の胸へと右手を突き入れ、リンカーコアを無理やり引き抜いて千切り取る。後は適当にバインドで拘束してどこかに放置しておけばいい。全てに片が付いたら管理局に引き渡すだけだ。

†††ルシリオン⇒シュリエルリート†††

「無駄だ、無駄だ！」

私の相手をしている男が楽しそうに笑みを作った。対して私は少々手古摺っていることに僅かな焦りを生んでいた。男が装備している４つの盾。それらが私の攻撃を悉く防いでしまうのだ。

「刃を以って血に染めよ」

――ブルーティガードルヒ――

――アリーの第一盾――

あの男の周囲に浮遊している楕円形の盾の１つの縁から赤い魔力の障壁が瞬時に生まれ、球体状障壁となって男を覆い包んだ。そして私の高速射撃の短剣はその障壁の前になんの効果を発揮することなく破壊された。

「響け！」

――ナイトメア――

間髪入れずに砲撃を放つ。

――アリーの第一の盾――

砲撃は再度展開された球体状障壁に弾かれ軌道を変化、明後日の方へと飛んで行ってしまった。これで射撃と砲撃の両方が防がれたことになる。次は最接近を試み、直接この手での打撃、シュヴァルツェ・ヴィルクングによる一撃だ。この魔法は打撃力強化と様々な効果破壊を付加するものなのだが・・・。

――アリーの第二の盾――

別の盾が動き、盾の縁より生まれた青い魔力が四角柱状の障壁となって男を覆い包む。効果破壊に障壁破壊を選択した一撃であるにも拘らず、私の拳打はその四角形状障壁を破壊することは叶わなかった。距離を取り、彼を守っている障壁が解除されたのを見計らい、「封縛！　咆えよ！」バインドを発動する。

――アリーの第三の盾――

3つ目の盾が動きを見せた。盾の縁より黄色い魔力が生まれ三角錐状の障壁と化す。封縛はその障壁に一度は掛かるがすぐに粉砕された。そう。このやり取りを3度繰り返したのだ、私は。

「往生際が悪いぞ、マスター！　管制者（マスター）と言うからには殺せないが、腕や足の1本や2本、折れようが引き千切ろうが死ななければいいんだぞ！」

殺せないからこその封殺。私にとっては脅威となるロストロギアだ、あの4つの盾は。射砲撃、魔力打撃・物理打撃、捕縛、それらを完

壁に防がれる。どれだけ高速発生であっても、その速度を上回る速さで対処される。４つ目の盾の効果は未だ知らないが、どちらにしても何かを封じるものなのだろう。

「大人しく捕まれ！　なぁに、闇の書の管制プログラムなんだ。悪いようにはされないさ。大事に、それは大事に飾ってもらえるとも！」

「ふっ。魔導書は飾って置かれる物ではない。使われてこその魔導書だ。見世物になり果てるつもりは毛頭ない・・・！」

――ハウリングスフィア――

「無駄なことを・・・！」

「それはどうか、試してみるといい！」

――ナイトメアハウル――

周囲に魔力スフィアを４基と展開し、多弾砲撃ナイトメアハウルを発射する。男の盾が動く。射砲撃を防ぐ赤い球体状障壁に多弾砲撃が着弾していく。私は再度ハウリングスフィアを３基と展開しつつ接近を試みる。その中で「封縛！」バインドを二重で発動する。当然動く黄色の三角錐状障壁。私はそのまま直進を続け、右拳にシュヴァルツェ・ヴィルクングを発動させる。続けてナイトメアハウルを発射準備に入る。

（射砲撃、打撃、捕縛。３つを同時に受ける時、その盾はどうなる

のだろうな・・・！）

盾は三重で発動した。男を守る最初の盾は捕縛封じ、その上から射砲撃封じ、さらにその上に打撃封じ。彼の三重障壁の最初に到達したのは二重封縛だ。１つ目で相手を拘束し、２つ目が対象を捉えた瞬間、２つの封縛は反応を起こして爆破する。それは攻撃に転用できるだけの威力を持つ。

だから打撃封じの障壁が二重封縛の爆破で破壊され、次の射砲撃封じの障壁は私の拳打で破壊され、間髪入れずに放ったナイトメアハウルが最後の捕縛封じの障壁を破る、という結末に至った。

「っ！」

「これで・・・！」

≪Ｓａｍｍｌｕｎｇ≫

「終わりだ！」

別の場所に待機させておいた"闇の書"を瞬時に召喚し、「ぐぅぅぅ！」男のリンカーコアを抜き出した。魔力を蒐集している間、彼は盾による攻撃を仕掛けようとしてきたが、蒐集速度を上げることで生まれたさらなる強烈な苦痛に彼は意識を手放し、同時に盾も活動を止めた。

「蒐集、完了」

"闇の書"を閉じ、私は男に封縛を仕掛け捕縛、地面に横たえさせた。

†††Ｓｉｄｅシュリエルリート⇒シグナム†††

私が相手をすることになった男と何度目かの鍔迫り合い。この男の剣の腕は確かだ。確かなのだが、唯一気に入らない点がある。それは「いつまで鞘に収めておく気だ？」奴は鞘に収まったままの剣で戦っていることだ。手を抜かれている、と思っても仕方ないだろうこれは。

「この剣は、それはすごい価値のある剣でね。勿体ねぇよ、鞘から抜いて刃が穢れるのは」

「それを敗北の言い訳にしてほしくないものだな」

「するかよ。勝つのは俺だからな」

互いに同時に距離を置くことで鍔迫り合いを中断。腕はいいのに剣士としての心構えは二流。剣を大事にするのは結構だが、価値があるからと言ってその真価を発揮させないというのは愚かな話だ。今まで知り合ってきた剣士の中では下位も下位、最下位だ。最上位は騎士リサ。彼女との戦いは実に面白かった。戦い方も心構えも、全てが心地よい剣士だった。

（もう一度戦ってみたかったものだな・・・）

騎士リサと言えば、少し前に間違って蒐集してしまった、アリサ・バニングスという少女のことが思い返される。あの娘の剣技は騎士リサのものと酷似していたため、その懐かしさに心が躍ったものだ。出会いが違えば良かったのだがな。
そして、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト。騎士リサと同じミドルとファミリーネーム。バニングスと同じように主はやてのご友人として現れた。構えも、武装も、騎士リサと同じだった。受け継がれてきたのだな、彼女の戦い方と武装が。
だがまだ幼い所為か騎士リサに比べれば拙いところはある。が、それも成長して行けば解決するものだろう。成長したあの娘と剣を交えてみたいものだ。

「それに比べ、お前という男は・・・！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

"レヴァンティン"のカートリッジを1発ロードし、刀身に火炎を纏わせる。それでも奴は鞘から剣を抜こうとはせず、構えを取るのみだ。そのやり方を貫くなら貫くといい。

「紫電・・・一閃！！」

奴の目の前へと移動し、火炎纏う"レヴァンティン"を振り下ろす。奴は黒い鞘に収められた剣を振るって迎撃。衝突する炎の斬撃と奴の鞘。鍔座り合いをすることなく、私は一度刃を引いて瞬時に連撃を繰り出す。男は私の連撃に危なげなくついて来ている。

（流石はロストロギア、か。硬いな）

デバイスすらも破壊できる一撃を欠けることなく防ぎきる鞘。攻撃力で攻めるのは止した方が良いかもしれんな。なら何で攻めるのか、だな・・・。ルシリオンなら物量だろう。防御など無駄と言えるほどの圧倒的物量による蹂躙・殲滅。

だが生憎と私はそのような魔法は持ち合わせていない。ならばどうするか。決まっている。速度で勝負する。機動力の速さではなく、防御も回避も間に合わぬような瞬撃だ。

男から距離を開け、"レヴァンティン"を具現した鞘へと納める。そしてカートリッジを1発ロード。居合の体勢を取る。すると男は「珍しい構えだな」と居合の構えを取っている私に奇異の目を向けて来た。

「良いものを見せてやろう」

――ヒルンダプス・カウダクトゥス――

ルシリオンとの模擬戦で編み出した短距離限定の高速移動魔法（命名はルシリオン）を発動、一瞬で男との距離を詰める。

「紫電・・・清霜！」

カートリッジのロードによって鞘内部に溜められた魔力の爆発力を利用した超高速の居合による一閃、紫電清霜を繰り出す。高速移動からの高速居合。この連続技で私はルシリオンに打ち勝つことが出来た。

男もそう。私の攻撃に完全に対応することが出来ず、「ぐお・・・・!?」

"レヴァンティン"の一閃の直撃を受けて吹き飛び数十mと何度もバウンドし、トラックを囲う壁に衝突してようやく止まった。

手応えは十分。これで立ち上がれば称賛を贈ろう。倒れ伏す男を眺めること数秒。奴は剣を杖代わりにして立ち上がった。

「〜〜〜〜〜〜!」

何かを叫んでいるようだが声に出ないようで口パクだ。男との距離もあることで読唇も出来ん。まぁ元より私に読唇術の心得はないのだが。"レヴァンティン"に給弾していると、奴はこちらに向かって駆け始めた。

「げほっ、ごふっ、はぁはぁはぁ・・怒らせたぜ、キレさせたぜ、プッツンさせたぜ！　死んだ、お前死んだぜ！　俺とこの聖剣・ディルンウィンで、お前は魂すら残さない程に燃え散るぜ！」

男はベラベラとロストロギアの正体を叫び始めた。鞘に収められた剣の銘は"ディルンウィン"。特性は強大な炎を生み出す、だろう。奴は鞘へと手を掛け、「プログラム風情が！　この聖剣で散ることを光栄に思え！」と少々頭にくる台詞を吠え、黒い鞘から"ディルンウィン"を抜いた。

"ディルンウィン"は鞘だけでなく刃も黒かった。が、すぐさま心を魅了されるかのような美しい純白の閃光が発せられ、続いて爆発的な炎が生まれた。確かに魂まで燃やし尽くされそうだが・・・、それは起こった。

「ぎゃぁぁぁぁーーーーーっ！！？」

「なに・・・！？」

その炎が持ち主である男を燃やし始めたのだ。消火を手伝うより早く奴は塵ひとつとして残さずに燃やされて消え去ってしまった。トラックに突き刺さる"ディルンウィン"からは炎が消え、その黒い刀身を鈍く光らせる。

私は"レヴァンティン"を下ろし、"ディルンウィン"へと近づいて行きその柄を手にしようとしたところで「触るなセイバー！」ルシリオンの制止が頭上より振って来た。見れば方々からみなが集まって来ていた。

「セイバー、ソレに触るな。ディルンウィン。その銘の剣を知っている。ソレは選ばれた者以外が鞘から抜けばそうなる物なんだ」

ルシリオンが"ディルンウィン"の側に降り立ち、一度深呼吸をしてから柄を握った。だが燃やされることはなく、安堵の息を吐いているルシリオンは"ディルンウィン"を側に落ちている鞘へと納めた。

「ディルンウィン。持ち主が高貴な血統の人間なら問題はないが、それ以外ではああして燃やされてしまう、というわけだ」

「お前は大丈夫なんだな」

「私のオリジナルは王家の血筋であり一国を治めた王だったからな。

私でも問題ないかは賭けだったが、ちゃんと認識してくれたようだ」

「賭けって。そんな危険なこと・・・！」

「一歩間違っていれば、お前も燃やされていたのかもしれんという事か！？」

「誰かが手に取って鞘に収めなければならなかった。なら、一番可能性のある私がやるべきだろ？」

我らの心配にそう返したルシリオンは、「あとは結界外の奴だな」話を切り上げ、明後日の方へと目をやった。私兵は全部で５人。うち４人は打ち倒すことが出来た。

「今はどのような状況なのだ？」

「集束砲に４ケタの魔力弾幕展開。結界内の私兵を潰して安心しきったところでシャマルが結界を解除した瞬間、一斉に放ってくる。ってところか」

「解決策は？」

「迎撃の準備が出来たら別の結界を展開し、ソイツも結界内に引き入れる。シャマルが結界を解除、と同時にソイツと集束砲、魔力弾幕に対処しつつ術者を潰す」

私の問いにルシリオンは即答。そしてそれはすぐさま行われた。ル

シリオンは結界外の私兵も範囲に収まるように結界を展開。

――屈服（コード）させよ、汝の恐怖（イロウエル）――

腕周り１００ｍを超す程の銀の巨腕が一対、我らの側の空間から生えた。右腕は我らの盾に、そして左腕は私兵への攻撃用に使われる。

「それじゃあヒーラー。結界の解除を」

「ヤヴォール！」

ルシリオンの合図でシャマルは結界を解き、間髪入れずに放たれてきた集束砲と１０００発以上の魔力弾雨がイロウエルへと着弾していく。しかしイロウエルが砕かれることはなく、我らを守りきった。私兵もまたイロウエルの剛拳の前に敗れ去った。私が相手にした私兵以外を集めてバインドで拘束。ロストロギアには封印処置を施した。あとは連中を管理局へと引き渡すだけ、となった時。

『素晴らしい！　やはり強いな、守護騎士ヴォルケンリッター！』

リンドヴルムの首領、ミスター・リンドヴルムから通信が入った。私は「貴様、何故あの男にディルンウィンを与えた！」と怒声を上げるが、『惜しい気もするがそちらに渡ったロストロギアは好きにするといい』まるで聞こえていないとでも言うように奴は話を続けた。

「聞いてい――」

『守護騎士諸君。私はこれで諦めるつもりはない。今回の第一次収集戦には負けはしたが、さらなる強力なロストロギアを装備した、さらなる強者で以って君たち闇の書を収集するつもりだ。第二次収集戦でまた会おうではないか』

「セイバー。向こうからの一方通信だ、こちらの音声は届いていない」

ルシリオンが私の左肩に手を置いて制止してきた。どこまで勝手名ことをするつもりだ、ミスター。ふつふつと湧き上がる怒りに、私は強く拳を握りしめる。

『ボス。そろそろ時間だ』

モニターからミスターとは違う、若い男の声が漏れ聞けてきた。ミスターは『今は大事な通信中だ、下がっていなさい』とやんわり注意する。そんな中、「いっ・・・!?」私の肩に置かれていたルシリオンの手に力が込められた。

「ランサー？　痛いのだが・・・」

目をルシリオンへとやる。顔は被り物の所為で見ることは叶わないが、それでもハッキリと感じ取れるルシリオンの異常。発せられるこの空気。私は知っている。オーディンの時にも感じた。そう、"エグリゴリ"と相対した時のものと同じ・・・。

「この声・・・、シュヴァリエル・・・！」

ルシリオンがポツリと漏らした。シュヴァリエル。それは"エグリゴリ"三強の内の1機の名だった。

Ｅｐｏｓｌ８恋乙女狂想曲～Ｉ　ｌｉｋｅ　ｙｏｕ？　Ｎｏ，Ｉ
ｌｏｖｅ　ｙｏｕ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

みんながリンドヴルムって人たちを迎撃するために居らんその間、わたしはすずかちゃんの家に泊まりに来ることになった。すずかちゃんのお家はホンマに大きくて、お嬢様やってことがよう判る。すずかちゃんの家に泊まりに来たんはわたしだけやない。なのはちゃん、アリサちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、シャルちゃん、みんなも一緒や。同い年の女の子だけのお泊り会なんて初めてやから、ホンマに嬉しい。
夕ご飯はみんなで一緒に作ってドキドキ。みんな一緒にお風呂に入って洗いっこをしてドキドキ。すずかちゃん達から学校での出来事を聴いてドキドキ。新鮮なドキドキばかり。

『はやてちゃん。シャマルです。リンドヴルムの迎撃が完了しました。みんな、無事ですから安心してください』

泊り用の客室でみんなとお喋りしとる中、シャマルから思念通話が来た。わたしは『うん。良かった』って心底安堵する。みんなは余裕で勝つから安心して、って言うてたけどやっぱりどこか不安やった。でもそれも晴れた。
シャマルの思念通話に遅れて『はやて、おやすみ！』ってヴィータからの元気な挨拶も来たし。わたしはみんなに『おやすみ、また明日な♪』思念通話を送った。みんなから『おやすみさない』って返

って来た挨拶に心がほんわか。やっぱり家族と話せるんは嬉しいものやな。みんなに挨拶をして思念通話を切る。

「でさ、あたしはこう思ったわけよ。はやて。あんた、うちの聖祥に転入して来なさい」

「命令形って・・・、アリサちゃん」

アリサちゃんがいきなりそんなことを言いだした。すずかちゃんがやんわり注意。わたしが反応する前に「それいい♪」アリシアちゃんが諸手を挙げて賛成の意を示す。そんなアリシアちゃんを窘めるんはフェイトちゃんで「さすがにそんな、ねぇ。無理だよ、きっと」ってアリシアちゃんの頭を撫でた。

アリシアちゃんは「もう、妹扱いしないで」って頭を振るった。驚いたことにフェイトちゃんはお姉さんやなくて妹さんで、アリシアちゃんの方がお姉さんやった。双子さんらしいけど、どう見てもアリシアちゃんの方が妹さんで、小学1年生くらいにしか見えへん。うん、ちっちゃくて可愛くてギュって抱きしめたい。

「はやて？　なんか失礼なこと考えなかった？」

「うぇ？　ううん、なんも考えてへんよ。ちみっこくて可愛ええなぁ、とか、ギュってしたい、とか、小学1年生にしか見えへん、とか思うてへんよ？」

「思いっきり思ってるじゃん！」

「つい本音が・・・」

「本音とか言った！」

アリシアちゃんがベッドの上でジタバタ暴れ出した。あちゃあ、アカンのやな、やっぱり子ども扱いするんは。謝ろうとしたところで、「やっぱり誰でもそう思うよね～」シャルちゃんがベッドに上がってアリシアちゃんを抱きしめて頭を撫でまわす。

「シャルぅ～！」

みんなの中で体が一回り小さいアリシアちゃんはシャルちゃんにされるがまま。

「にゃはは。アリシアちゃんって、言ったらまずいけどマスコットキャラみたいだから」

「実際にクラスでマスコット扱いだよね・・・」

「そうそう。それどころか上級生の女子にも人気だし。アリシアの何が惹きつけるのかしらね？」

シャルちゃんだけやなくて、床のカーペットに座ってたすずかちゃん達もベッドに上がって、アリシアちゃんの頭を撫で始めた。

「なのはもすずかもアリサもイジワル！　フェイト、お姉ちゃんを助けなさい！」

揉みくちゃにされてたアリシアちゃんはついに妹のフェイトちゃんに助けを求めた。フェイトちゃんは「え、あ、うん・・・」アリシアちゃんに群がっとるすずかちゃん達の側へ歩み寄って行って「・・・よしよし」フェイトちゃんもなでなでに参加した。

「ちょーーーーーっ！？」

まさかの裏切りにアリシアちゃんは絶叫。わたしも参加したいなぁって思うたから車椅子移ろうとしたところで、「フライハイトタクシーです♪」なんとシャルちゃんがベッドからカーペットに座るわたしの側まで跳躍してきた。運動神経・身体能力がすごい。そんなシャルちゃんは「わわっ？」わたしをお姫様抱っこ。

「シャルって本当に力持ちよね」

「ゴリラ？」

「失礼な！」

「お返しだよ～♪」

アリシアちゃんとシャルちゃんのやり取りにみんなが笑う。シャルちゃんは「お返しのお返しだ！」って言って、「そぉい！」わたしをベッドに放り投げた。一瞬の浮遊感に「ひゃっ？」短い悲鳴を上げてしもうた。ボフッとわたしはフワッフワな柔らかベッドに背中から落下。

「さぁ、皆の衆。生意気な年長者に思い知らせてやれ。くすぐれぇぇぇぇーーーー！」

「「「「「へ？」」」」」

「にゃんと？」

シャルちゃんもピョンとベッドの上に飛び乗ってアリシアちゃんを撫でる・・・ことなく脇に手を差し込んでくすぐり始めた。真っ先に乗るのが「よしっ、やったろうじゃない」アリサちゃんで、アリシアちゃんのパジャマの裾を捲ってお腹をくすぐり始めた。

「きゃはははは！　ダメ、お腹、ダメぇぇーーー！」

顔を真っ赤にして涙を浮かべながら悶えるアリシアちゃん。さすがにそれは可哀想やってことで、くすぐりに参加してへんわたしらが2人の蛮行を止める。

「――で、えーっと、なんでこんなことになっちゃったんだっけ？」

「はやてちゃんの転入の話から、だったかな？」

「うん、確かにそうやった」

「でも本当に出来るの？　もし出来るのなら、みんなで協力してはやてがちゃんと学校生活を送れるようにするから」

「そうね。悠々自適なスクールライフを約束するわ」

「わたしも手伝(わひゃひてひゅだ)う」

アリシアちゃんに頬をこねられたり引っ張られたりしとるシャルちゃんもそう言ってくれた。

「どうせなら同じクラスに転入できるようにしたいよね。というかシャルのほっぺ柔らかーい」

みんなと話しながら、聖祥に転入できるかどうかを考えてみた。グレアムおじさんに頼んでみよかな。みんなと一緒ならきっと楽しい学校生活になるはずや。それに、ルシル君も出来たら一緒に。ルシル君の知能やったら小学校の勉強なんて面白くなくて、つまらへんものかも知れへんけど。でも一緒に通えたらええなぁって思う。それからわたしらは寝落ち限界まで喋って・・・。

「ふわぁ。アリシアちゃん、寝ちゃったね・・・」

「なのはも落ちそうね・・・。ふわぁ、あたしももう限界かも」

「明日も学校だし、もう寝る事にしよう・・・」

「さんせ～」

「異議なし、や」

わたしも、いつもベッドに入る時間を超えて起きとるからいつ寝落ちしてもおかしくない。とゆうわけで、寝落ちする前に「おやすみ～」挨拶を交わして、みんな仲良く雑魚寝で眠ることにした。

ガサガサってゆう衣擦れの音に「ん・・・？」目を覚ました。と、「あ、起こしちゃった？　ごめんね」なのはちゃんがそう謝ってきた。よく見ればアリシアちゃん以外のみんなが起きとって、動き易いジャージで身を包んでる。

「ううん、ええよ。みんなどうしたん？」

「これからちょっと特訓をね」

シャルちゃんの返答に「特訓？」って訊き返す。シャルちゃんは「そ♪　見学してみる？」って答えてくれたから、わたしは頷き返して一緒について行くことにした。わたしらは顔を洗ってから庭に移動。すずかちゃん達はそれぞれ準備運動をして、起きたばっかで鈍った体に熱を持たせ始める。準備運動が終わると、みんなが木刀を手に取って素振りを始めた。それはまるでルシル君やシグナムのようや。

「でもなんでこんなことを・・・？」

「勝ちたい人たちがいるんだ」

誰とも言わずにわたしがそう訊くとフェイトちゃんがそう教えてくれた。

「とっても強い人たちで、でもきっと優しい人たち。だから止めたい。お話をしたいの」

続いてなのはちゃん。見た感じ、なのはちゃんの素振りの型は素人のもんやないことが判る。ルシル君とシグナム、2人の騎士の素振りと同じでブレが少ない。

「話変わるんやけど。なのはちゃんって、武術の心得とか・・・？」

「あ、うん。うちのお父さんが御神流っていう剣の使い手で。お兄ちゃんもお姉ちゃんも御神流の剣士なんだ。私は残念ながら運動神経がダメダメで習うことは無かったけど。でも見ていたから。それに、今ではシャルちゃん達と何度も試合ってるから」

シャルちゃんの素振りは完全に剣士としてのもんや。アリサちゃんやフェイトちゃんも良い腕やって事が判る。みんなが素振りを終えたら、なのはちゃんとフェイトちゃん、アリサちゃんとすずかちゃんってゆう風に2人1組に分かれて木刀を打ち合い始めた。

すずかちゃんもまたすごい運動神経で、アリサちゃんの木刀をちゃんと目で追って対応してる。すずかちゃんはみんなの中でも運動神経が飛び抜けてるって話で、見た目のおっとりさんからは判らへんな、ってアリシアちゃんと話してた。

「シャルちゃんは参加せぇへんの？」

「わたしは先生のようなものだから。最後の最後で1対1でわたしがみんなの相手をするの」

そう言ってシャルちゃんはみんなの動きを注視し始めた。そしてシャルちゃんの言うように、シャルちゃんとの模擬戦へ移るんやけど、

「あれ、すずかちゃん？」だけがわたしの側に来て、「私もけ・ん・が・く♪」って用意されてたタオルで汗を拭く。

「寒かったら先に中に入ってる？」

「ううん、最後まで見させて。うちの家族もな、ああいう風に模擬戦をするんよ」

「ルシリオン君とシグナムさんだね」

家族の名前はもうみんなに伝えてある。もちろん魔法関係のことは話してへん。すずかちゃん達は一般の子らやでな、話すわけにもいかへん。っと、「ホンマにすごいなぁ、みんな」なんてゆうか小学生で出来るような動きやあらへん。

（まるで魔導師みたいな・・・。なんて、そんなわけあらへんな）

そうしてシャルちゃんはアリサちゃんを、なのはちゃんを、フェイトちゃんを順々に打ち倒した。そんなシャルちゃんを見て、シグナムとどっちが強いやろ？って考える。家族贔屓で見れば、シグナム

の方が強いって思う。うん、そんですごく仲良うなりそうや。朝の模擬戦が終わった後、ようやく起きたアリシアちゃんを含めたみんなで朝風呂に入ってから朝食も済ませて、そして・・・。

「「「「「お世話になりました」」」」」

すずかちゃんのお姉さんの忍さん、そしてすずかちゃん付のメイドのファリンさんに、みんなでご挨拶。

「ううん。また来てね、みんな。はやてちゃんも♪」

「お待ちしてますぅ～♪」

忍さんとファリンさんに微笑みかけられたわたしは「あ、はい！その時はまたお願いします」強く頷く。すずかちゃん達はこれから学校って事でもう制服姿に着替えてる。シャルちゃんは私服で、純白のワンピースにケープ、そして毛皮の帽子パパーハってゆう格好や。

「それでは、私がこれから皆さんをお送りしますので、どうぞお乗りください」

車を回してくれたノエルさんの案内に、わたしらは車に乗り込む。まずはすずかちゃん達を学校に送って、次にシャルちゃんがお世話になっとるフェイトちゃんの家、最後にわたしの家ってゆうルートとのこと。

「あ、ねえ、みんな。今朝の広告で見つけたんだけど。海鳴市内に最近、スーパー銭湯が出来たみたいなんだけど・・・」

すずかちゃんがポケットの中から1枚のチラシを取り出してわたしらに見えるように翳した。

「海鳴スパラクーア、新装オープン・・・？」

「露天風呂、サウナは6タイプも？　あと、炭酸泉・・・」

「座湯、滝湯、水風呂、岩盤浴、寝湯も」

「泡風呂、紅茶風呂・・・、え、紅茶？」

「バイブラバス、ジェットバス・・・？　いろんなお風呂があるんだね」

「ふ～ん・・・え？　電気風呂？　何コレ、拷問の一種？」

「あはっ。そんな電気風呂なんか・・・マジ？　」

フェイトちゃんとアリシアちゃん、それにシャルちゃんは外国の子なこともある所為か、日本のお風呂の種類の多さに驚いてて、アリシアちゃんとシャルちゃんは電気風呂に若干引いてる。そうゆうわたしも驚きや。紅茶のお風呂ってどんなんやろ。とゆうか、いくらくらいするんやろ、紅茶の茶葉・・・。

「にゃはは。違うよ、2人とも。電気風呂というのはね・・・えっと、ピリピリして気持ちいんだよ・・・たぶん。あ、でも体には良いみたい、低周波マッサージ・・みたいな？」

なのはちゃんが電気風呂の効能について自信なさげな説明。最後の、たぶん、はホンマに小さな声やった。あと電気風呂ってメーカーさんが公式に効能は不明って出しとるよなぁ、確か。

「でね。今日みんなで一緒に行かない？ってお誘いなんだけど」

わたしらは一度顔を見合わせたから「ぜひ！」すずかちゃんのお誘いを受ける答えを告げた。それから「うちの家族も一緒でええかな？」って訊いてみた。

「うん、もちろんだよ♪」

「ていうか、都合がつかないってこともあるけど、未だはやての家族の1人としか会えてないわね、あたし達」

「そう言えば確かにそうだよね。はやてちゃんをすずかちゃんのお家まで送って来てくれたのもシャマルさんだったし」

昨日は、いつも留守番の回数が多いシュリエルもリンドヴルムってゆう人たちの迎撃戦に参加するってゆうことでルシル君らの作戦会議なようなものに一生懸命参加してたからなぁ。

「うん。そやからこの機会にみんなにわたしの家族を紹介したいな

ぁ、なんて」

「私たちもちゃんとご挨拶したいもんね。私も誘ってみる」

「じゃあわたしはエイミィを誘ってみる」

「リンディ・・さんはたぶん仕事で忙しいと思うから無理、かなぁ・・・。一応訊いてみよう」

なのはちゃんはお姉さんの美由希さんを、アリシアちゃんとフェイトちゃんはそれぞれ一緒に暮らしてる家族の人を誘うようや。と、そんな時、「はやて、はやて」シャルちゃんがわたしに顔を近づけて来た。

「ルシリオンももちろん連れて来てくれるんだよね♪」

シャルちゃんのお目当てはルシル君。シャルちゃんはなんでかルシル君にご執心。それも名前を聴いただけで、や。シャルちゃんはその人と初めて会った時、それかその人の名前や声を聴いた時に感情に大きな乱れが出た時、それは前世のシャルちゃんと関わりのあった人との再会をした事で起こる現象、って話を聴いた。まぁそれも確定情報やないらしいけど。

「でもさ、ルシリオン君って男の子でしょ。1人寂しく男風呂って大変じゃない？」

すずかちゃんの言う通りや。ザフィーラも一緒に連れてけば良いん

やろうけど、ザフィーラってお風呂苦手やし。無理に誘うのもなんや悪いしな。そんなことを思うとると、「そこはほら、クロノを連れて行けばいいんじゃない？」アリシアちゃんがそう言うた。

「でもクロノってお風呂に入ってる時間すごく短いよ。私やアリシア、リンディさんにエイミィは３０分とかだけど、クロノってサッと入ってササッと出て来るし」

「あ、うちのお兄ちゃんもそんな感じだよ。男の子ってみんなお風呂の時間早いのかなぁ？」

なのはちゃんがわたしの方を見ると、それに倣うようにみんなはわたしを見てきた。ルシル君の入浴時間のことを思い返して、「３０分くらい、やなぁ。綺麗好きやから」って答える。ルシル君は髪も長いしその手入れに時間を掛けてそうや。そんでわたしらは今晩、スーパー銭湯にみんなで遊びに行って、その後はみんなで外食しようって約束をして一旦お別れした。

「――お待たせしました、はやてお嬢様」

「ありがとうございます♪」

一晩ぶりの我が家に到着。門前にはすでにシグナム、ヴィータ、シャマル、シュリエルが待ってくれとった。そんで改めてノエルさんに送ってもらった事のお礼を言うて、笑顔でノエルさんとお別れした。

「おはよう、シグナム、ヴィータ、シャマル、シュリエル。朝ご飯はもう済んだか？」

「おはようございます、はやてちゃん。朝ご飯は私とシュリエルで用意してみんなで食べました」

「おかえりなさい」

「おはよう、おかえり、はやて♪」

「おかえりなさい、主はやて」

「ただいま、みんな」

ルシル君とザフィーラは家の中で待ってくれとるんやな。ヴィータに車椅子を押してもらいながら家の中へ。リビングに入るとそこに居ったんは「ただいま、ザフィーラ」だけやった。

「おかえりなさいませ、我が主」

「うん。・・・ルシル君は・・・？」

みんなに訊ねる。するとみんなは俯いて口を閉ざした。

「ルシル君はどないしたん？　家に居るんやろ？」

「はい。居ることは居るんですけど・・・」

シャマルがルシル君の部屋の方に目をやってから、そう言い難そうに答えてくれた。

「何があったん？」

「我々の口からはお伝え出来ません。ルシリオン個人の事情ですので」

「ルシル君の事情・・・」

昨夜ルシル君とリンドヴルムの人たちとの間に何かしらの複雑な事情があったんかもしれへん。わたしがルシル君の部屋に向かおうとしたらヴィータが「アイツ、しばらくそっとしておいてくれ、って言ってた」って止めてきた。

「うん。でも・・・」

それでも心配なんや。ルシル君が引き籠るような事態なんて異常事態や。ルシル君の側に居りたい、そんな思いが強くなる。そやからヴィータの制止を振り切ってリビングを出ようとした時。

「どっっっせぇぇぇ～～～～～い！！！！」

ルシル君の部屋からそんな大声と一緒にバッチーーンって肌を叩くような音が聞こえてきた。わたしらがそれに驚いて硬直しとると、

「ん？　おお、はやて。おかえり」ルシル君がリビングにやって来

た。頬が手の形に真っ赤に腫れとる。さっきのバッチーンってゆう音はアレが原因やな。

「ルシル、くん・・・」

「？？・・・どうした？」

「え、あ、ううん。ただいま、ルシル君」

ルシル君は微笑みを浮かべてくれた。いつも通りのルシル君で安心した。さてと。安心したところで、「みんなに今晩の予定を伝えるよ」って、すずかちゃん達とした約束を伝えた。そしたらみんなは無言になってもうて。

「えっと・・・まずかったか？」

「い、いいえ。そうですね。一度、主はやてのご友人の方々にご挨拶をするべきですね」

「そうだな。いっちょ行くとするか」

「ですね。はやてちゃん、夕ご飯はどうします？」

「みんなで外食しようか、って決めてあるんよ」

割り勘って提案したんやけど、お勘定はすずかちゃんとアリサちゃんが持ってくれるって聞かん坊やったから、わたしやなのはちゃん、

フェイトちゃん、シャルちゃんも折れることに。アリシアちゃんだけはレストランでタダ飯だぁ～、とか言うて喜んでたけどな。

「それでなザフィーラ。夕ご飯は外食やからザフィーラもついて来てほしいんやけど。ザフィーラがお風呂苦手ってことは知っとるよ。お風呂入らんでもサウナとかマッサージチェアとか在るで、それで時間でも潰してもらえると・・・」

「お気遣い感謝します、主はやて」

「そう言ってもらえて嬉しいよ・・・。あ、そうや。ルシル君にどうしても会いたいって子が居るんやけど。イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト――シャルちゃんいう子なんやけど」

「・・・そっか。じゃあはやての家族として恥ずかしくないよう、気を付けないとな」

笑顔を浮かべるルシル君に頭を撫でられて、「ルシル君もみんなも、最高の家族やよ♪」わたしも笑顔で胸を張って言う。わたしの家族は日本一、世界一、次元世界一や。みんなもそれぞれ頷いて同意してくれた。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒イリス†††

今朝の約束通り、わたし達は新装開店したっていうスーパー銭湯、海鳴スパラクーアへとやって来た。エントランス前ではやてたち八神家を迎えに行っているノエルさんの車がやって来るのを待つ。通

学組のなのは達はアリサの家の車で、わたしとエイミィ、そしてなのはのお姉さんの美由希さん、お兄さんの恭也さんは、すずかのお姉さんである忍さんの運転する車でやって来た。

「みんなごめんな、お待たせや」

「はやてちゃん！・・・わぁ♪」

車椅子に座るはやて、そしてこれまでずっと話でしか聞いたことのなかった八神家が勢揃いしていた。と、「っ！」ほら、来た。鼻の奥がツンとして急に泣き出しちゃいたくなる。

「えっと、もう1人家族が居るんやけど、その子は今ノエルさんに付いとるから、合流する前にまずこの娘たちの紹介をさせてもらうな。右から順に・・・」

「八神シグナムです。本日はお誘いいただきありがとうございます」

凛々しい顔立ち、長い髪をポニーテールにしたのがシグナム。

「なのはちゃん達のお兄さん、お姉さんとははじめまして、ですよね。八神シャマルです」

「私は八神シュリエルリートと申します」

銀髪。わたしが本能的に好んでる髪色、そして深く、でもとても綺麗な紅色の瞳をしたのがシュリエルリート。

「あたしはヴィータ、八神ヴィータだ」

一番小さく生意気そうなのがヴィータ。

「我――いや、私は八神ザフィーラ。よろしく頼む」

筋骨隆々とした厳ついのがザフィーラ。最初に聞こえた一人称については深く追求しないでおこうっと。なのは達も自己紹介を返していって最後に、「はじめ、まして・・・」流れる涙を指で拭ったわたしが自己紹介をする番。

「イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト、です」

シグナム達と握手を交わす。と、また涙が溢れて来た。先日はやてから、わたしの突発的な感情の揺らぎについてはもうシグナム達に伝えてあるってメールは受けたけど、「ごめんなさい」って一応謝る。すると「我慢しなくてもいい」ってシグナムがわたしの頭を撫でた。

「あのっ、ありが――」

「おーい！」

「お待たせしました、みなさん！」

お礼を言おうとしたとことで、ノエルさんと男の子の声が届いた。

そっちの方を見て、「・・・・っ！」わたしの意識は軽く飛びそうになった。

「「「「あっ！！」」」」

なのはとアリサとすずか、あと恭也さんも大きな声を上げた。

「シグナム達はもう自己紹介を終えたのかな？」

「うん。あとはルシル君だけやよ」

「そっか。では。はじめまして、そしてそこの子たちとお兄さんには久しぶりです、八神ルシリオンといいます。どうぞルシル、と呼んでください。はやて、シグナムたち共々よろしくお願いします」

ルシリオン――ルシルはなのはとアリサとすずか、恭也さんとはすでに顔見知りみたい。どうしてなのかが激しく気になる。なるけどそれ以上に・・・。

――さようなら。またどこかでね、私（ルシル）の初恋――

脳裏に過ぎるわたしの知らない想い。解らない。だけどそんなことどうでもいい。その想い以上にわたしは・・・好き、その蒼と紅の虹彩異色の瞳が。好き、その長く綺麗な銀の髪が。好き、その微笑みが。好き、あなたが――ルシルの事が・・・大好き。

「うわぁ。イリスちゃんの異性の好み、どストレートの子キタァ。

実在したよ、本当に・・・」

「ルシ、ル・・・」

エイミィがなんか言ってる。わたしはフラフラとルシルに歩み寄って行く。そんなわたしに「君が、イリス、だよな。俺に会いたかったってことらし――っ！？」声を掛けてきたルシル。わたしは彼が言い切る前に抱きついた。そんなわたしの突然の行為にみんなが絶句したのが空気で判った。

「好き、大好き。一目惚れ？　ううん、違う、そんなものじゃない。好き、ううん、それ以上。愛してる。あなたを愛してる、愛してます。わたしの全てをあげたい、捧げたい、受け取ってほしい、貰ってほしい。わたしは運命を信じてる。その運命が告げてる。ルシル。あなたはわたしと結ばれるべきなのよ！・・・チュー　」

「むぐ・・っ！？」

呆けてるルシルの唇にわたしの唇を重ねる――うん、早い話がキスをした。耳や頬、顔どころか、全身が熱くなる。だって初めてだもん。でも後悔なんてない、満足大満足なのだ。

「へ？・・・え・・あ・・、あ、アカ――――ン！！！」

はやてが自分で車椅子を進ませてわたしとルシルの間に割って入って来た。ここでみんなが再起動。

「シャ、シャルちゃん！？　い、いいいいき、いき、いきなり何してるの！？」

「キキ、キキキ、キスして・・・こ、ここここ、こんな公衆の面前で！！」

「「はわわわわ！」」

顔を真っ赤にしたなのはとアリサにはそう怒鳴られて、すずかとフェイトもまた顔を真っ赤にさせて両手で自分の顔を覆ってる・・んだけど、指を僅かに開けてその隙間からこっちを覗き見。アリシアや大人組は、わたしの行為に対して驚きの中にも面白そうって感じで見守ってくれてる。そして八神家。シグナム達はどこか懐かしそうな風にわたしを見てる。以前に似たような事でもあったのかも・・・。

「シャルちゃん！　ルシル君は、あの、えっと・・わたしの家族やし、そのな、そやから・・・！」

「うん、判ってる。ルシルははやての家族で弟。なら、わたしがルシルの恋人――ひいては将来、夫婦になっても問題ないと思うんだけど」

「っ！・・・あ、う・・・それは・・・！」

はやては気付いてない、自分の想いに。ルシルに向けているのは家族愛だって勘違いしてる。本当は異性としてルシルのことが好きなんだって考えてない、思い至ってない。だからああして言い淀むこ

とになった。ごめん。はやてには悪いと思う。こんな形で自分の想いを自覚させたくなかったよ。でもわたしは誤魔化したくない、引きたくない、譲りたくない、負けたくない、勝ちたい、だから・・・攻めるよ。

「わたしはルシルが好き、ううん、愛してる。顔合わせは今日、この瞬間だった。でもそれだけで十分って言えるほどにこの想いは確かなもの。もしかしたらこの想いは前世のわたしの影響かも知れない。でもその想いはもうわたしのもの。だから、負けないよ」

はやてに指を差して宣言。口をパクパクさせてたはやてが「わたしかて――・・・っ！」そこまで言ったと思えばハッとして口を噤んだ。今ので完全に気付いたのかも。ルシルへの想いに。

「はーい、ストップ！　あまりに急すぎて思考停止していた」

ようやく動き出したルシル。そんな彼ははやてを庇うようにわたしの前に立ちはだかった。ズキッと痛む胸。今はそれでしょうがない。ここは「すぐにとは言わないから、返事はちょうだい」引こう。

「すいませんでした。わたしの用は終わりましたから」

わたしは引率の忍さん、恭也さん、美由希さん、ノエルさんに頭を下げる。エイミィはどっちかと言えばこちら側だからノーカウント。

「あ、うん。じゃあみんな。行こうか」

忍さんと恭也さんとノエルさんが先頭を歩き出して、わたし達も続いて歩き出す。最後にエイミィと美由希さんが「いやぁ、お姉さん達ビックリしちゃったよ～」ってルシルに絡みながらついて来る。エントランスを潜って料金をわたしたち全員分の料金を払いに行くノエルさんを見送る中、「ちょっとちょっと。あんた、一体何考えてんのよ」アリサが睨みを効かせて訊いてきた。なのは達もそれぞれうんうんって頷いて、アリサと同じ事を思っているって示す。

「そういうなのは達も、いつルシルと知り合ったのよ。恭也さんもルシルの事を知ってるみたいだし」

「えっと。私たちは、シャルちゃんやフェイトちゃん達と公園でお別れした後、帰り道で私がぶつかっちゃったって話なんだけど・・・」

ＰＴ事件後のことね。じゃあ「恭也さんは？」って訊き直すと、なのはは首を横に振った。と、そんな時に「あのな」はやてが話に参加してきた。ちょっと意外だった。しばらくはわたしと話をしたくもないって距離を取られるかもって思ってたけど・・・。

「今年の夏、レジャープールに行った時に恭也さんが監視員として、ルシル君を止めたんよ・・・」

けどやっぱりわたしを意識しているようでチラチラとわたしを見ながらも話してくれた。ルシルが男物の水泳着で出て来た。それはそうよ、ルシルは男だから。

「でも、ルシル君のその外見から女の子に間違われてな。上半身露出した、ちょっと危ない女の子やって思われたんや」

ヴィータに車椅子を押されてるはやてが後方――エイミィに「肌スベスベ～♪」、美由希さんには「髪もサラサラだよ～♪」って触られまくって困惑してるルシルに目をやって、わたし達も倣ってルシルの方へと振り向く。

「・・・ぷふっ！　くく・・・あーっはっはっはっはっ！　確かに間違われても仕方ないわ！」

「ちょっとアリサ。失礼だよ。確かに・・・可愛い女の子みたいだけど」

「フェイトちゃんも何気に失礼だよ・・・。ほわぁ、でも可愛い・・」

「えっと、ごめんね、ルシル君。私も、可愛いなぁ、って思っちゃうよ」

アリサはルシルの外見に大笑い、フェイトとなのはとすずかは男に許されざる褒め言葉を言っちゃった。当然ルシルが「やめてくれ。割と本気で」大きく溜息を吐いた。

「ルシルって家事とかも出来るの？」

「なんでも出来るよ。料理に洗濯に掃除、ホンマになんでも」

「生まれてくる性別間違ってるんじゃないの？」

フェイトの質問にはやてが答えて、続いてアリシアがそう言うものだから、「それだけは言われたくなかった！」ってルシルはその場に崩れ落ちた。

「みんなー！　支払いは済んだから、これから自由時間にするわね。集合は今から1時間後の１９時、ここエントランスで」

忍さんからそう伝えられたわたしたち子ども組は「はーい！」と元気よく返事。ここでルシルとは一旦お別れ。恭也さんとザフィーラの3人で男性用脱衣場へ。わたし達は女性用脱衣場へ。脱衣場はすごく広くて、段差もスロープだから「さすが新装開店、ナイス・バリアフリーや♪」はやてはご機嫌。ここで空いているロッカーを探すために分かれる。そういうわたしも「綺麗で使いやすい」ロッカーに脱いだ服を畳んで置いていく。

「ヴィータ。ここは家とは違うんだ、脱ぎ散らかすな」

「判ってんよ、うっせぇなぁ。ちゃんと片付けるからいいじゃんよ」

「初めからきちんとするべきだ。公共の場でのマナーだぞ」

「・・・うるせぇなぁ～。これくらい大目に見ろよ」

「いいや。お前は人としての心構えが足りん。それにヴィータ。お

前は日頃からだらしないところが多々ある。気を付けろ」

「ああもう、チクチクとうっせぇな」

「うるさく言われるようなことをしているお前が悪い。言われたくなければしなければいいだけのことだ」

なんかシグナムとヴィータのケンカっぽいやり取りが聞こえて来るんだけど。側に居るアリサとすずかを見ると、「ヴィータちゃん、まだ小さいのにすごい躾けられているんだね」すずかが驚きを見せた。

「ヴィータっていくつかしら。6歳くらい？」

ロッカーから顔だけを出してシグナムとヴィータの様子を伺う。通路を隔てた向こう側のロッカーのなのはとフェイトとアリシアも同じように様子を伺うために顔を出してる。

「ちょっとおっぱいが大きいからって良い気になんなよ！　胸ばっかしに栄養をやってっから、そうやって心のゆとりが無くなってるつってんだよ、このおっぱい魔神！」

「んなっ！　貴様・・・！　そこに直れ！　レヴ――」

「止さないか、お前たち！」

下着姿のシグナムと半裸のヴィータの間に割って入ったのは、全裸

なシュリエルリート。その堂々とした仁王立ちに――というよりは、
「大きい」シグナムより大きなその胸に釘づけなわたし。
「うわぁ、綺麗・・・」
「うん。女神さまみたい・・・」
「見てるこっちが恥ずかしくなっちゃうかも・・・」
「ていうか、他のお客さんからの視線が集中しちゃってるんだけど・・・」
「おお！・・・はぁ」
なのはとすずかはうっとり、フェイトは顔を真っ赤にしてチラチラとシュリエルリートを見る。アリサはキョロキョロと辺りを見回して若干引いてる。アリシアは凝視しつつ自分の胸のまな板っぷりに肩を落とす。
「ちょい待ち。シュリエルも色々とアウトや」
ここで体にタオルを巻いたシャマルと、彼女にお姫様抱っこされたはやてが止めに入って、シュリエルリートにタオルを手渡した。ここでようやく「失礼しました！」自分が素っ裸ってことを思い出した彼女は慌ててタオルを体に巻いた。
「シグナムとヴィータも何してんの。アカンやろ、ケンカなんてし

たら」

「すみません」「ごめん、はやて」

しょんぼりするシグナムとヴィータ。ホントにはやてが一番偉いみたい。まぁ、そんな騒動があったけど無事に浴場へ入る。わたし達はその広さと様々なお風呂に「おお！」歓声を上げる。わたしは早速「アリシア！」に声を掛ける。と、「オーケー！　電気風呂だね！」アリシアは強く頷いてわたし達の目的のお風呂、電気風呂を目指す。

「みんな、また後で♪」

「フェイト。お姉ちゃんが居ないからって羽目を外しちゃダメだよ～♪」

「外してるのはアリシアだよ・・・」

「シャルちゃんもあんまりはしゃいじゃダメだよ～」

フェイトとなのはの呆れた声がわたしとアリシアの背中に向けられた。みんなと別れて捜索。電気風呂はすぐ見つかった。人気が無いのか誰も入っていなくて、周りを気にせずにリアクションが取れる。さて。アリシアと一度顔を見合わせる。

「シャルからどうぞ」

「いやいや。年長者のアリシアからどうぞ」

「「どうぞどうぞ」」

お互いに譲り合う。と、そんな時「どーん♪」そんな陽気な声と一緒にわたしの背中が押された。

「「のっ！？」」

押されたのはわたしだけじゃなくてアリシアもで、一緒にドッパーンと電気風呂の中へ。うん、覚悟も無く急に、突然に、他人の手で。

「「ぷはっ！　いったい誰――と、おおう、ビリビリくるぅ～～　」」

想像より優しい電気が全身を流れる。これ筋肉痛とかに効きそう。落ち着いたところでわたし達を押した犯人に目が行く。落としたのは「ヴィータ！」だった。ニッシッシって満足そうに歯を見せて笑っての仁王立ち。

「どんな感じなんだ、電気風呂って」

「知りたかったら・・・」

「ヴィータも入れ！」

アリシアと一緒にヴィータの両手を取って、「うおっ？」ヴィータを引き摺り込んでやった。

「ぷはっ。危ないだ――お？　おお？　おおう！」

怒鳴る寸前だったヴィータが電気風呂に反応、口を閉ざした。３人一緒に電気風呂に使って「ほぉ～」大きく息を吐く。これは癖になりそう。聖王教会の大浴場にも取り入れてみたいなぁ。そんなことを考えていると、「そういやさ、イリス」ヴィータが声を掛けてきた。

「んー？　あ、わたしのことはシャルって呼んで」

「おう。じゃあシャル。なんでルシルにあんなことをしたんだ？」

「・・・なんでって。恋したから、好きだから、愛してるから。キスは愛を伝える一番の方法だよ　」

ヴィータの小さくも可愛くピンク色な唇に人差し指を当てると、「っ！」ヴィータは頬を赤らめて顔を背けた。

「でもあまりに急すぎだよ、シャル。しかもはやてにあんな挑発というか宣戦布告と言うか、さ」

「はやて、結構気にしてるんだよな。戸惑ってるって感じ」

「でしょうね。八神家をちょっと引っ掻き回しちゃうかもだけど。でもはやてにも自覚してほしかった。同じスタートラインに立ちたかった。わたしがルシルを手に入れた後で気付いて後悔してほしくないから」

「そっか」

「ちゃんと考えてたんだな〜。あたしらもはやてにどうやって想いを自覚させるか、自覚させていいのか、迷ってた。でもこうなっちまった以上はもう引き返せねぇ」

ヴィータが湯船から立ち上がって、頭の上に乗せてたタオルを体に巻くと「それだけが訊きたかったんだ。あんがと」片手をヒラヒラ振って去って行った。

Ｅｐｏｓｌ９奇跡の箱庭・第零技術部～Ｇａｒｄｅｎ　ｏｆ　Ｓｃａｇｌｉｅｔｔｉ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

体と髪を洗った後、湯船に浸かりながら俺は「最悪だ・・・」先ほどのイリスの突然の行為に頭を悩ます。はやてからは聴いていた。イリスには特定の人物に会うと、急に泣き出してしまうという突発的な感情の揺らぎがある、と。

前世（シャル）の記憶のフラッシュバック。俺がイリスと逢うことで、シャルの記憶や想いが大きく表面に出てしまうかもしれないと危惧はしていた。していたんだが、まさかハグに告白にキスの３連コンボとは予想外だった。

（あれでは現世（イリス）が可哀そうだぞ、前世（シャル）・・・）

シャルの記憶に押し潰されてイリスの精神が壊れないか心配だ。それに心配事はまだある。イリスのあの行為ではやてと俺の関係に要らぬ壁が立つかもしれない、ということだ。はやては俺を家族として好きでいてくれた。俺とてそうだ。はやてを家族として慕い、守ってきた。

多感な時期である中学へ上がる頃までは一緒に暮らせると思っていた。しかし、はやての俺に対する態度に大きな変化がある場合は「すぐにでも家を出るべきだろうな・・・」いつかは出るべき家。遅いか早いかの違いでしかない。

『シャマル。はやての様子はどうだ？』

『あ、ルシル君。えっと・・・今のところは大丈夫。シャルちゃんともちゃんと話せているし。そんなに大きな異常は見られないわ。・・・それにしても。なのはちゃん達って本当に良い子ね。可愛くて優しくて、そして面白い。はやてちゃんのお友達になってくれて、すごく感謝してる』

『ルシル。お前の言う通りあの子たちならはやての友人として問題ないだろう。我々としても安心できる程に心優しい子供たちだ』

『その分、蒐集した罪悪感が凄まじいが・・・。いや、それを受け止めねば、な』

シュリエルとシグナムも念話に参加してきた。俺は、俺の描いた"闇の書"事件のシナリオを、そしてシュリエルは"闇の書"の真実を、はやて以外のみんなに伝えた。俺の話については多少の文句（もっと早く言え等々）はあったがシュリエルと同様、シグナム達は俺のシナリオに従うことを決めてくれた。全てははやての輝かしい未来の為だ、と。

問題は、シュリエルが語った"闇の書"の真実。すでに機能の大半が破壊特化へと変貌し、完成させたところで主であるはやてを取り込んで暴走、自滅するという結末の話。話を聴き終えたヴィータとシャマルが荒れたが、冷静なシグナムとザフィーラのおかげで説得することが出来た。もしあの２人まで荒れてしまっていたら、と思うと恐ろしい。

『それで？　どうするのだ、ルシリオン。フライハイトからの告白の返事は』

『ルシル君。こういうことに干渉しちゃいけないのだろうけど、はやてちゃんのことも考えてあげてね』

『私としてはルシル。お前ははやてと共にあるべきだ、と思う』

シグナムの問いに応じる前にシャマルとシュリエルがそう口を挟んできた。みんなは知っている、"堕天使エグリゴリ"と決着をつければ俺は消えることを。オーディンと名乗っていた頃に話しているからな。それでもなお、はやてを選べと言う。

『とりあえず断るよ。イリスも言っていたけど、顔合わせは今日だったし、俺は彼女のことを何も知らないからな』

イリスのことは確かに何も知らない。彼女の魂――前世であるシャルのことは嫌というほど知ってはいるが。どちらにしても報われない恋をズルズルと続けさせるつもりはない。魂がシャルのものであろうがイリスはこの次元世界での存在だ。シャルとは別人だと見なくては。

『そうか。お前にとって最良な選択をするといい。我らが口を挟むべき話ではないからな』

『ありがとう、シグナム』

『気にするな。それにしても、だ。フライハイトの告白(あれ)は、エリーゼ卿を思い出すな』

『そうなの？』

『私とシャマル、ザフィーラはその場に居らず、ヴィータやアギト、アイリに聴いた口だから・・・』

『ああ、そうだったな。突然のハグ、告白、口づけ。エリーゼ卿もそうだった』

シグナムが感慨深そうに漏らした。そう言えばエリーゼもあんな感じでハグし、告白し、キスをしてきたな。何百年も前の話だが、つい最近のような気もするよ。シャマルとシュリエルはその場に居なかったためか曖昧そうだ。

『とにかく、だ。闇の書の完成まで１００ページを切った。なのは達を始めとした管理局の捜査、リンドヴルムの収集戦が今の俺たちの壁だ。リンドヴルムには徹底抗戦。管理局には臨機応変に。ヴィータにも伝えておいてくれ』

『『『ヤヴォール』』』

思念通話を切り、「はぁ～～」肩まで湯に浸かって大きく息を吐いた。完遂してみせるさ。先の次元世界とは別の方法で"闇の書"事件を終わらせる。そして俺個人の意思だけでこの次元世界の歴史を

変えることが、変え続けることが出来るか。それを確かめる。

（・・・シュヴァリエル・・・）

ロストロギア収集家リンドヴルムの一員であるらしいシュヴァリエル。今すぐにでも救済したいが、まず今の俺では勝てない、返り討ちに遭うのが関の山だ。だから俺はリンドブルムの私兵から本拠地がどこかを問い質さなかった。知れば俺は彼我の戦力差を理解しておきながらも急いて突撃しかねないからだ。

それで敗北して殺され、"神意の玉座"の本体ごと消滅・・なんて冗談じゃ済まされない結末を迎えることになっては、本体（ルシリオン）の創世結界に封じられているシェフィ、シエル、カノンの魂を解放出来なくなる。それだけは絶対に回避しないといけない。ゆえに俺は時間を掛けて成長し、勝てる、という確信を得てから三強を救済することを決めた。

（待っていてくれ、シュヴァリエル、リアンシェルト・・・ガーデンベルグ）

両手で掬った湯で顔を擦り、溢れてきた悔し涙を洗い流した。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒フェイト†††

スーパー銭湯、そしてレストランでみんなと楽しい時間を過ごした私とアリシアとシャル、そしてエイミィはハラオウン家に帰って来た。スーパー銭湯でははやての家族、シグナム達と仲良くなれた、と思う。

はやてとシャマルとシュリエル（リートは付けなくてもいいって言われた）とはシュワシュワしていて気持ち良かった炭酸泉に浸かってたくさん話をしたし、ヴィータとは泡風呂で遊んだし。シグナムとは滝湯で、シグナムが剣の先生をしているっていうことで模擬戦の相手を頼んでみたり。

（シグナムのような大人の背丈に慣れれば、きっとランサーとも打ち合えるはず・・・）

魔導師戦で背丈の差なんてあんまり意味は無いけど、近接戦になる対騎士戦ではそうはいかない。リーチが重要になってくる。まずはそれに慣れないと。さすがに一般人のシグナムにランサーと同じように動いて、なんて言えないけど。

うん、とにかくはやてから聴いてた通り、シグナム達はすごく良い人たちだった。はやてのことを本当に大事にしていて、大好きで、強い絆で結ばれた家族だった。問題は、レストランでのシャルだ。

「ふんふ～ん♪」

鼻歌交じりにリンディさん（この敬称を普段から使わないと、はやて達の前で提督って言っちゃう）に買ってもらった携帯電話をいじるシャルを見る。きっとアドレス帳を見ているんだ。

「ねえねえ、何してるの、シャル？」

「ルシルにラブメール　」

「・・・レストランで断られたじゃん」

アリシアが言い難そうに返した。そう。シャルはルシルにフラれた。それでもなおシャルは幸せそうだ。

。―。―。回想です。―。―。

スーパー銭湯で十分楽しんだ後、私たちは夕ご飯を済ますためにレストランにやって来た。ファミリーレストランっていう場所でテーブル席がいくつもある。私たちは団体客ということで一番奥、壁続きでベンチになってる団体席に案内された。通路を挟んで右のテーブル2卓に大人組が座って、左のテーブル2卓に私たち子供組が座る。

ベンチに座っているのは通路から順にシュリエル、ヴィータ、はやて、ルシル、そしてシャルは速攻で場所を取ってしかもルシルの手を引っ張って隣に据えた。向かい合うように座っているのが通路から順にアリサ、すずか、私、アリシア。

「ねえ、ルシルって携帯電話って持ってる？」

「一応持ってるけど・・・」

「じゃあ番号とかアドレスを交換しようよ♪　ほら、なのは達もどう？」

シャルが積極的にルシルと携帯電話を向い合せてアドレス交換を行いつつ、「シグナム達は持っていないの？」って訊ねる。だけどシ

グナム達からは、持っていない、との返答が。常にはやてと誰かが一緒に居て、携帯電話を持つルシルとも常に誰かが居るから持ってなくても問題ないってことみたい。そして私たちもルシルと番号やアドレスを交換、注文した料理が来るまで楽しく歓談した居た時、「イリス」ルシルが真剣な面持ちでシャルの名前を呼んだ。

「シャルって呼んで。その方がわたし嬉しいから」

「・・・シャル」

「はにゃあ～」

シャルは頬を赤く染めてデレデレと照れていて、そんなシャルを見ているはやては少し面白くなさそうに「むぅ・・・」ルシルとシャルを交互に見る。うぅ、壊れないでね、私たちの友情・・・。ルシルはさらに「・・・シャル、シャル・・・」って2度名前を口にして、「どうしてもシャルじゃないとダメか？」なんて訊いた。それは不思議な問いで、私たちは小首を傾げる事に。

「出来れば、なんだけど。確かにわたしの名前はイリスで、シャルロッテはフライハイト家の当主、次期当主としての証明・称号のようなもの。名乗るならイリスだって思う。でも、わたしはシャルロッテという名前が好きなの。名乗ることが許されるなら名乗りたいし、呼ばれたい」

シャルもまた真剣な面持ちでルシルに答えた。ルシルは少し考える仕草をした後、シャルに視線を戻した。

「判った。それじゃあこれからは、シャル、って呼ばせてもらうよ」

「っ！　う、うん・・・ありがと」

手に取ったコップの縁に唇を付けてブクブクと水に息を吹き込んで泡立てるシャルは、本当に嬉しそうに頬を緩めてる。

「じゃあシャル。本題だ。さっきの告白、悪いけど断るよ」

ルシルから告げられたシャルの告白への返事はノーだった。楽しい雰囲気だった私たちは全員絶句、エイミィ達の座る大人席の方にも聞こえていたみたいで話し声がピタッと止まった。シャルの顔が恐すぎて見えないから俯く。

さっきまで本当に楽しそうで、嬉しそうで、幸せそうな顔だったのに。でもキッパリと断られた今、どんな顔をしているのか。反動は途轍もなく大きいはず。チラッと上目使いで周りを見ると、なのは達も俯いているのが見えた。でもはやてとヴィータ、断った本人のルシルだけは真っ直ぐシャルを見ているようで、俯いていない。

「そっか。まぁ想定内だよ、断られるの」

耳に届いたのは軽い口調でそう言ったシャルの声。ここで私たちはハッと顔をあげてシャルを見る。シャルの顔は全くと言っていいほどに堪えてなくて、いま言ったように想定内だからそんなに傷ついてないって風。

「確かに急だったもんね。わたしの一方的な想い、ルシルが戸惑うのも仕方ないって思う。だから大丈夫。まぁだからと言ってこれで諦めるつもりはないけどね♪　わたしを好きになってくれるまで、アプローチは止めない。ルシルに本当に好きな女の子が出来て、もうルシルの心を手に入れることが出来ないって思い知った時こそが、わたしの初恋が終わる時だって思う」

それでもシャルは諦めないと言って笑った。そんな堂々としたシャルに、私たち子供組や大人組は思わず拍手。はやてはシャルを眩しそうに眺めて、ルシルはボソボソと何かを呟いた後に大きく溜息を吐いた。

。―。―。回想終わりです。―。―。

「そうだね。でも聞いていたでしょ？　わたしは諦めない、って。だから完璧に、完全に、徹底的に負けないことにはわたしはルシルにアプローチを続ける」

シャルの決意には一切の揺らぎが無い。それが私にはまだサッパリな恋愛であっても、格好いいって思えてしまう。その決意に当てられたアリシアが「じゃあ、わたしはシャルを応援する！」シャルの恋路の味方をするって言い出した。

「ありがと♪」

シャルが私とエイミィを期待の眼差しで見てきた。エイミィは「ま、友達としては応援するのが良いんだろうけど・・・」ちょっと迷っ

ている感じだけど応援するみたい。でも私は・・・。俯いて顔を逸らして見せると、「いいよ、フェイト」シャルは微笑んでくれた。

「ごめん・・・。やっぱりはやての事が・・・」

「うん。だからいいんだよ」

シャルの恋路を応援できないって伝えてもシャルは笑顔を浮かべたまま。そんなシャルと向かい合っているところで、通信コールがリビングに鳴り響いた。エイミィが「はいは～い」とコールに応えて通信を繋げた。

『エイミィか。クロノだ。そこにフェイトは居るか？』

スーパー銭湯に誘う前に本局へ向かっていたクロノからだった。隣にはアルフが居る。私は「居るよ、クロノ」モニターに映り込むように移動して、アルフに手を振る。と、アルフは笑顔で手を振り返してくれた。

『フェイト。そしてなのは達のデバイスの修復が完了したことを連絡しておく。いつでも取りに――』

「いま行く！」

クロノの話を遮って答える。"闇の書"の守護騎士ヴォルケンリッターがいつ動くか判らない今、いつでも対応できるように一刻も早く"バルディッシュ"を手にしておきたい。ハラオウン家に設置さ

れているトランスポーターに向かおうとした時、「じゃあ、なのは達にも伝えた方がいいよね」アリシアにそう言われて私は足を止めた。

『そうだな。それぞれの機体の詳細な説明などを伝えたいと、マリエル技官も言っている。来るなら明日、学校終わりで良いんじゃないか、フェイト？』

「その方がいいよ、フェイトちゃん。今日はもう遅いし、明日も学校だし」

「わたしもその方がいいと思う」

「そうね。いきなり実戦で新しいデバイスを使うことにならないよう、ちゃんと余裕をもった方がいい」

クロノにエイミィ、アリシア、シャルにもそう言われた私は「うん、そうだね」と頷いて応える。そういうわけで、デバイスの受け取りは明日、学校から帰ってから、という事になった。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒アリサ†††

昨日の夜、フェイトとシャルからデバイスの修理が終わったって連絡を貰ったあたし達は学校帰りに本局へとやって来た。シャルとアリシアを先頭に、あたし、すずか、後ろになのはとフェイトと続いて行く。

そして向かうのはメンテナンスルームとかが集まっている技術研究

区画の奥も奥。通路の壁にはＺｅｒｏｔｈ　Ｅｎｇｉｎｅｅｒｉｎｇ　Ｄｅｐａｒｔｍｅｎｔ――第零技術部って彫られた翼を広げた鳥型のプレートが案内板として設置されている。

「この前行ったメンテナスルーム過ぎたけど・・・」

「あそこの設備でも修理は出来るけど、どうせなら次元世界最高の技術が集う、最高の設備のある場所で修理した方がいいでしょ」

「そんなにすごいところなの？」

アリシアの疑問に「まあね♪」とウィンクしつつ返すシャルが"キルシュブリューテ"がインテリジェントデバイス化した時のことを話した。元々ＡＩを積んでいないアームドデバイスだった"キルシュブリューテ"をインテリジェントデバイス化させたのが第零技術部で、そこの部長であるジェイル・スカリエッティという人だって。ドクターっていう愛称でその人の技術力は次元世界では指折りで、あたし達のデバイスの改良にはその人も加わったって話。

「見えてきた。きっとすごい改良が施されてるはず」

ＺＥＲＯと大きく描かれた左右に開くスライドドアがあたし達の前に現れた。シャルがドア横の操作キーのような物に手を振れて、「どうも～、イリス執務官補です」って言うと、『待っていたよ、入って来たまえ』って男の人の声が返ってきた。

「それじゃあ、行こうか」

開かれたドアをあたし達は潜った。ドアの奥に在ったのは応接室のような場所で、中央には２ｍほどの長テーブルが一卓、テーブルを挟むように同じくらいの長さの黒い革張りソファがあった。そのソファに座っているのは「ようこそ。第零技術部へ」さっきあたし達を招いた声をした男の人だった。紫色の髪に金色の瞳をした、なんていうか言ったら失礼だけどマッドサイエンティストみたいな顔をしている。

「私はここ第零技術部を統括しているジェイル・スカリエッティ。同僚や友人からはドクターと呼ばれている。君たちもぜひそう呼んでくれたまえ。っと、客人を立たせたままだ、すまないね。まずは掛けてくれたまえ」

「ではお言葉に甘えて。みんな、座って」

シャルに促されたあたし達は「失礼します」と一言断ってからソファに座っていく。

「今マリエル君が君たちのデバイスを、そしてうちの娘がお茶を用意している。もう少し待っていてくれたまえ」

ドクターがそこまで言ったところで、「失礼します」って奥のスライドドアから１人のスーツ姿の女性が入って来た。デキる女キャリアウーマン、って感じがする。ドクターに「ウーノ。この可愛らしい少女たちにお茶を」って言われた女の人――ウーノさんは押して来ていたワゴンに載せていたティーカップを「どうぞ、皆さん」あ

たし達の前に置いて行く。

「それとドクター。気持ち悪いです。ロリコンは好感度を下げますのでご用心を」

「酷いな、私は素直に思った事を言っただけじゃないか」

「皆さん、ドクターに変な目で見られた際は我々シスターズにご報告を。必ずお助けします」

ウーノさんの周囲に展開されたモニターに映る女の人3人＋女の子1人。ウーノさんから、ちょっと暗めな金髪がドゥーエさん、ドクターと同じ紫色の髪がトーレさん、茶色い髪がクアットロさん、唯一の女の子で銀髪がチンクさん、と紹介された。トーレさんとチンクさんは知っているわ。レーゼフェアに負けた映像をＰＴ事件の時に観たし。ということは、ウーノさん達シスターズは純粋な人間じゃないのかもね。

「ドクターってロリコンだったんだ。これからは2人っきりで会わないようにしないと。管理局に入ったフェイトはもちろん、なのは達も気を付けてね」

「騎士イリス、君までそんなことを・・・」

項垂れるドクター。こんな人が次元世界屈指の天才科学者、ねぇ。まぁ天才と変人は紙一重なんて言われているし。そこまで深く考えるようなものじゃないわね。そんなやり取りの後にあたし達の自己

紹介が終わった頃、ようやく「待たせてごめんね、みんな」奥のスライドドアからオルゴールのような箱を手に持ったマリエルさんが出て来た。

「これがみんなの新しいデバイスだよ♪」

「第零技術部(われわれ)と装備部(マリエル)の技官君との合作！　実に素晴らしいデキだよ、少女たち！」

ドクターはソファから立ち上がって長テーブルの上座に移動、白衣をバサッと翻して大きく笑う。それを見たアリシアが「悪の科学者みたい」ってボソッと呟いた。ドクターには聞こえなかったみたいだけど、ウーノさんには聞こえたようで「フフ」小さく笑い声を上げた。

「じゃあ、まずはフェイトちゃんからね」

マリエルさんが箱から"バルディッシュ"を手に取るとフェイトがソファから立ち上がってマリエルさんの前に移動、"バルディッシュ"を受け取った。次がなのは、そしてすずか、最後にあたしが"フレイムアイズ"を受け取った。

「ではそれぞれのデバイスの新機能を説明しよう。まずはフェイト君のバルディッシュからだ。ベルカ式カートリッジシステムを搭載し、その名称をバルディッシュ・アサルトと改めた」

ドクターが説明に入った。"バルディッシュ・アサルト"。フェイ

トの新しいデバイス。形態は待機を除いて３つ。通常の戦斧形態アサルトフォーム。魔力刃を展開した大鎌形態ハーケンフォーム。ここまでは以前までと同じね。まぁ、性能はグッと高められているわけだけど。

「――そして最後に、ザンバーフォーム。新たに追加した形態で、フルドライブフォームと呼称している。巨大な魔力刃を展開した大剣形態だ。魔力刃は伸縮自在で、威力・範囲・距離の応用性能は高いため、集団戦でもその能力を発揮できるはずだ。が、性能の大半を攻撃や効果破壊に注いでいるため、君が得意とする高速機動が大きく殺がれる。その分、無詠唱の結界破壊効果、大威力斬撃・砲撃を可能とする」

「扱いに慣れるまで苦労しちゃうかもしれないけど、フェイトちゃんならきっとすぐに扱えるようになると思うよ」

「あ、はい、ありがとうございます！」

「次はなのは君のレイジングハートの説明だ。レイジングハート・エクセリオン。それが新しい名前さ」

"レイジングハート・エクセリオン"。中距離射撃と誘導管制、強靭な防御力を含めた中距離高速戦専用のアクセルモード。ディバインバスターとかの砲撃を撃つための形態バスターモード。以前より射程と威力の強化に特化しているとのこと。

「――そして最後に、フルドライブのエクセリオンモード。多量の

魔力消費と引き換えに持ち主のなのは君の全能力を底上げし、そして爆発的な出力を生み出す。この形態の最大の特徴はＡｃｃｅｌｅｒａｔｅ　Ｃｈａｒｇｅ　Ｓｙｓｔｅｍ――瞬間突撃システムだ。使いこなせれば君が得意とする砲撃戦の戦術幅が大きく広げてくれるだろう」

「エクセリオンは強力だけど、本当に窮地に陥った時にしか使わない方がいいかも。強大な力を使えるけど、その分魔力消費が激しいから。なのはちゃんなら他のモードだけで十分騎士たちと渡り合えると思うよ」

「ありがとうございます！」

「次に、アリサ君のフレイムアイズの説明だ。フレイムアイズ・イグニカーンス。君のデバイスはなのは君やフェイト君のデバイスとは違って一形態のみだった。騎士イリスに聴けば君のデバイスの誕生の経緯は特異だ。イメージのみによって形作られたことで剣の刃とライフルの機関部を兼ねたデバイスになった、そうだね」

「えっと、はい。最後まで剣にするか銃にするかで迷って、気付けば一緒くたになったんですけど・・・」

刃はあるけど銃身も銃口もない。カートリッジシステムっていう形で機関部が存在しているのは幸いだって思っているわ。それすらも無かったら今頃どうなっていた事か。

「あのね、アリサちゃんってフレイムアイズの別形態が欲しい、み

たいな事を言ったんだよね・・・？」

「え？」

マリエルさんにそう言われたあたしは早速自分の記憶を漁ってみる。

――なのはやフェイトのデバイスのように、あたしのフレイムアイズも変形とかさせてみたいわねぇ。せっかく銃の機関部があるんだからやっぱり銃・・・ライフルとか――

いつだったか確かにポロッと漏らしたことがある。でもそれはあくまで独り言、誰にも言った覚えも聞かした覚えもないんだけど。その時あの場所に居たのって「シャル・・・？」があたしに一番近いところに居た気がする。という事はマリエルさんに話したのはシャルね。

「それで私たちは、君のリクエストである銃形態を今回の改良にてイグニカーンスに追加してみたんだ。まずはこれまでの剣形態をファルシオンフォームと呼称することにした。使い勝手は今まで通り。しかし魔力・炎熱伝達率、刃やフレームの強度などは今までとは比較にならない程に強化したよ」

あたしは手の平に乗る桃色の宝石――待機形態の"フレイムアイズ"を眺める。今すぐにでも起動してみたいって思いに駆られる。まさかあたしの独り言が叶っていたなんて思いもしなかったんだもの。なのはやフェイトも新機能をすぐにでも試したいようでソワソワしてる。

「で、次は銃というより銃剣形態であるバヨネットフォーム。銃口より炎熱射撃・砲撃を可能とする形態だ。しかし君の魔法資質に遠距離は無いために射程はなのは君のように広くはない。その分、銃身下にファルシオンフォームの刃が付いているので近接戦も続行できるため、刃での近接戦・射砲撃による中距離戦の切り替えが早く、その戦術の幅を広げられるはずだよ」

「そしてフルドライブ、クレイモアフォーム。これはフェイトちゃんのフルドライブ、ザンバーフォームと同じで大剣形態ね。アリサちゃんの炎熱変換と攻撃力を最大限に引き出させることが出来るよ」

形態が増えるってすごい感動。あとはそれらを上手く使いこなせるように頑張るのみだわ。説明してくれたドクターとマリエルさんに「ありがとうございますっ！」大きく頭を下げて礼を言う。２人は微笑みながら頷き応えてくれた。

「では最後に。すずか君のスノーホワイト、新名称スノーホワイト・メルクリウスを説明しよう。すずか君には申し訳がないが、ブーストデバイスである以上は今まで通り一形態のままとなる。その分、他のデバイスのように変形機構に回すべきリソースを全て性能強化に回すことが出来た」

「それと、すずかちゃんは回復や強化などの補助魔導師ということで魔力の運用が大変だと思ったから、魔力変換効率をスムーズにして魔力消費を３分の２にまで減少させることが出来る機能を追加したの。それと大気中の魔力素の収集率を高める機能も追加済み。安

心して魔力行使が出来るからね♪」

「ありがとうございます、マリエルさん、ドクター！」

２人からのデバイス新機能の説明はこうして終わった。なら次はどうするか。決まっているわ。ドクターが「ウーノ」って指をパチンと鳴らすと、ウーノさんは「はい、ドクター」って頷いてシャルに向いた。

「デバイスの新機能を試す場所が必要だと思いまして、第２８トレーニングルームの使用申請をしておきました。使用できる時間は１時間ですのでご注意を。騎士イリス」

「ありがとう、ウーノ。あとロリコンドクター」

「まだ引っ張るのかい、そのネタ！？」

ガーンとショックを受けるドクターや可笑しそうに笑うウーノさんにお礼を言って、あたし達はトレーニングルームへとダッシュで向かった。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒ヴィータ†††

『こちらバスター。リンドヴルムの私兵をきっちり片付けたぜ』

"アイゼン"を肩に担ぎながらシグナムとルシルに思念通話を通す。あたしらは異世界で再度襲撃してきたリンドヴルムの第３小隊・ド

ラゴン・ウィングと戦闘して、そんでたった今撃墜してやったところだ。
確かに前回の第6小隊・ドラゴン・スケイルに比べりゃ強かったさ。だけどな、こっちにははやてを守りたい・救いたい・助けたい、って強い想いがあるんだ。ただ殺したい・暴れたい・奪いたい、ってくだらねぇ思いしか抱かないクズどもに負ける道理がねぇってんだ。

『こちらセイバー。私の方も片付いた。損傷は軽微だ』

『ランサーだ。こちらは余裕勝ちだ。3人がかりで来た時はどうしようかと思ったが、雑魚過ぎた。前回の女の方が手強かったよ』

『そうかよ。そんじゃ、掃除も終わったことだし帰るとするか』

『そうだな』

『バスターとセイバーは先に帰還してくれ。私が私兵とロストロギアを回収して局施設に連行する』

『おう、頼んだ』

『手伝うか？』

『いや、1人で十分だ』

ルシルの言葉に甘えてあたしらは先にはやての待つ家のある海鳴の街に帰る事にした。思念通話を切って、さぁ帰ろうかってところで

「なんだ・・・？」転移反応が目の前で発生したのに気付いた。誰かが転移して来る。"アイゼン"を構え直して、警戒態勢に入る。たぶん、リンドヴルムの新手だ。連戦させて疲弊しきったところで一気に潰すってこったろうな。その手には乗るかよ。魔力配分を徹底すりゃ乗り切れるはずだ。

「カートリッジは残り8発。十分だぜ！　来なッ！！」

転移があと少しで終わる。そしてソイツはあたしの前に現れた。ソイツを見たあたしの第一声は「は？」だ。あまりに予想外な奴だったからだ。いや、頭の片隅にはあったんだ。だけど、ここで来るとは思っちゃいなかった。

「バスターちゃん・・・」

はやての友達、「高町・・・な、の、は・・」よし、言えた。スーパー銭湯であたしはアイツの名前を上手く言えなかった。どうしても、なにょは、って言っちまう。どうしてこう言い難い名前なんだろうな。今のようにちょっと区切らないと言えねぇよ。

「あ、あれ？　どうして私の名前を・・・？」

「へ？　あっ・・・あの後、ランサーが調べたんだよ、あんた達のこと」

「そう、か・・・」

とりあえずは、『セイバー、ランサー。あたしんとこに高町な、の、はが来たんだけど』シグナムとルシルに思念通話を通すことにした。

Ｅｐｏｓ２０－Ａ騎士と魔導師の戦舞踏～３ｒｄ　Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

今日もあたしとシグナムとルシルとで犯罪者狩りをして、適当にリンカーコアを蒐集し終えたところであたしら"闇の書"を収集したいって奴、ミスター・リンドヴルムが抱えてるロストロギア収集実行部隊が現れた。ま、そう労することなくぶっ潰すことが出来て、そいつのリンカーコアも蒐集できたから悪い話じゃなかったわけだが。

問題はその後だったんだ。このなんでもない世界が夕日に照らされ始めた頃に現れた高町な、の、は。すぐさまシグナムとルシルに、アイツが現れたことを思念通話で連絡した。

『こちらセイバー。私の方にはバニングスと月村、そして私を逃さないためか結界を展開、維持するための局員十数人が来た』

シグナムの話に、あたしは周囲の気配・魔力反応を探ってみる。シャマルやルシルほどの精確さは無いけどな。そんで判ったのが、ここにも局員が十何人と居るってことだ。たぶんシグナムんとこと同じ、結界担当だろうな。

『私の所にはフェイトとシャル。それだけじゃないな、まだ居る。私を墜とす為か、それとも足止めか。おそらく後者だが、前者も狙っていると見ていい。セイバーやバスターの援護には向かえないと

思う』

『私の方に援護は無用だ』

『あたしの方も、だ』

ルシルの援護なんか必要ねぇ。あたしとシグナムからそう返されたルシルは『ヤヴォールだ。あー、あと注意1つ。戦闘前の確認は怠るな。以上だ』それだけを言って思念通話を切った。

「で？　何の用だよ、ご丁寧にバリアジャケットを着こみ、しかも・・・カートリッジシステムを搭載した新しいデバイスを持ってさ。完璧に戦いに来たって感じじゃん。なぁ、ベルカのことわざでこういうのがあるんだけどよ。和平の使者なら槍は持たない、ってな」

ん？　ことわざだったっけか。まぁいいや。そんな話があったのは確かだしな。アイツは意味が解らねぇのか小首を傾げた。

「解んねぇか？　話し合いをするってぇのに、武器を持ってくる奴が居るか、って意味さ」

「・・・あっ、でもレイジングハートはなんていうか、その・・・」

な、の、はの持つデバイスには前には無かったカートリッジシステムが付いてる。デバイスを強化までしてあたし、あたしら守護騎士の前に姿を現すってぇことはそういうことだろ？

「デバイスは確かに強化したし、こうして起動した状態で持っちゃってるけど、私はお話をしに来たの」

「話、ねぇ。そこいらに局員を隠れさせておいてよく言うぜ。あれだろ、油断させておいて捕縛、ってところなんだろ？」

「確かにバスターちゃんを逃がさないための結界を張ってもらう局員さん達が周囲に居るよ。でも話をしに来たっていうのは本当だよ、信じて」

アイツはデバイスを待機形態に戻して両腕を大きく広げた。ある意味、戦闘はしないって意思表示のポーズだとは思う。でもな、前にルシルが言ったようにこっちは話し合いで事を治められるような状況じゃねぇんだよ。

「つうかお前さ、局員じゃなかっただろ？　それとも局員になったのか？」

「今でも局員じゃないよ、民間協力者。だからバスターちゃんを逮捕する、なんて権利も資格もない。でもだからこそお話しが出来る」

民間協力者、か。ま、局員でも同じさ。犯罪者じゃない以上はこちらからの一方的な戦闘行為は出来ねぇ。それはルシルやあたしらが決めた禁止事項だ。でももし、どうしても戦闘行為が必要だっていう状況に陥った時、あたしらはある確認を取り、相手がそれに応じた場合にのみ戦闘行為が可能になるよう決めてある。

「前に言っただろ。全てが終わったらちゃんと出頭するって。それまでは放っておいてくれよ。こちとらオーナーの命が懸かってんだ」

「待って！　闇の書が完成しちゃっ――」

「・・・構えろよ。話し合いで済まないって判ったんなら力づくで、なんだろ・・・？」

「バスターちゃん！！」

――広域多重結界――

"アイゼン"をな、の、はに向かって突き付けるとほぼ同時に結界が展開された。するとアイツは念話でもしてんのか空いている右手を耳に添えて苦い表情を浮かべた。この作戦の指揮を執ってる奴から、戦え、とか言われたんだろうな。

「ほら、局の方も戦え、っつってんじゃんかよ」

「違っ――バスターちゃん、お願いだからやめて！！」

「・・・お前に決闘を申し込む。あたしとお前の一対一の決闘だ。たとえ負けたとしてもそれは決闘を応じた自分の責任となる。あたしが負けた場合、大人しく捕まってやるさ。でもお前が負けた場合、被害届を出すな、慰謝料・治療費を請求するな、負けたのは自身が弱かったからだ」

決闘を受けるか否かの確認。それがルシルと決めた取り決めってやつだ。全ては自己責任っていうリスクがあるけど、自分の"力"に自信を持っている奴なら受けるはず。たった1人であたしんとこに来たんだ、少なくともあたしとまともにやり合えるって自信は持ってんだろ。

な、の、ははまた念話をしてんのか少しの間黙った後に大きく溜め息を吐いて「判った。その決闘、受けるよ」って言い、

≪Ｂｕｓｔｅｒ　Ｍｏｄｅ≫

バスターモードっていう形態でデバイスを再起動させた。

「受けたな。ならここからはお互い、自己責任だ。じゃ、お前に指示を出してる奴に伝えろ。お前が負けた時、あたしを閉じ込める結界を解除して、あたしの離脱を見逃せ、ってな」

ルシルの方に戦力が集中している今、たとえ局員が襲ってきても所詮は並の局員、逃げられるだけの隙があるはずだ。でも抵抗するのには当然力が要る。無駄な力は使いたくねぇしな、だからそう言い放った。

「・・・・その話を受ける、って」

「懐の広い上司様で何よりだ。・・・楽園の番人パラディース・ヴェヒター、そして守護騎士ヴォルケンリッターの騎士、バスター。そして鉄の伯爵グラーフアイゼン。名乗れ、決闘の礼儀だ」

「・・・高町なのは、レイジングハート・エクセリオン。負けないよ、バスターちゃん！」

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

鉄槌騎士バスターＶＳ砲撃魔導師なのは

――ショートバスター――

いきなりの砲撃。しかも発射・砲速ともに速い高速砲。幸いだったのはアイツとの距離があったこと。高速移動魔法のフェアーテを瞬時に発動させて射線から離脱。

「お返しだ・・・！」

――シュワルベフリーゲン――

発射姿勢のままでいるアイツに向かって魔力を付加させた物質弾フリーゲン８発を"アイゼン"で打ち放つ。と同時に接近開始。ルシルの話じゃアイツは射砲撃に特化した魔導師だって話だ。なら距離を開けてやってアイツに有利な戦い方をさせる義理はねぇよな。

アイツはフリーゲンの回避に移った。飛行速度は前回の衝突ん時と大差はねぇ。迫り行くフリーゲンをどう対処すんのかって接近しつつ眺めていると、アイツは急降下。フリーゲンをアイツについて行かせてからあたしも降下。そこから少しの間追いかけっこ。

（飛行速度は互角だから追いつけねぇな・・・）

――シュワルベフリーゲン――

さらに４発追加、計１２発のフリーゲンとあたしがアイツを追う。

「いくよ。ディバイィィン・・・バスタァァァーーーーッッ！」

と、アイツが急に止まって足元に魔法陣を展開、こちらに振り向いて砲撃をぶっ放した。今さらになって気付いた。アイツとフリーゲンとあたし。一直線に並んでいるって事に。始めから狙ってやがったんだ、あたしとフリーゲンをまとめて落とすのを。

「くっ・・・そ！」

目の前でフリーゲン全部が消し飛ばされたのを見た。回避に全力を注ぐ。あたしのすぐ側を通り過ぎて行く砲撃。バサバサとスカートがはためく。"アイゼン"を持つ右手でスカートを押さえ、左手で帽子を押さえる。

「あっぶねぇ・・・！」

ギリギリ回避に間に合った。あと少し回避が遅けりゃ直撃していたことに肝を冷やす。そんですぐにアイツへと目をやる。けど、「居ねぇ・・・？」さっきまで居たところにアイツは居なかった。

――アクセルシューターーーー

「シューット！」

頭上から聞こえてきたアイツの声。あたしは見上げる前にフェアーテを発動、その場からすぐに離れる。距離を開けつつ振り向いて頭上を振り仰ぐ。アイツの姿を確認。で、あたしに向かって来ているすげぇ速い魔力弾が１２発。一斉発射したアイツに「馬鹿か！　そんなに制御できるわけねぇだろ！」言い放つ。

「アイゼン！」

――シュワルベフリーゲン――

振り向きざまにフリーゲンを４基と打ち放つ。相殺し合ってまずは４発の魔力弾を潰すために。だけど、「うおい！？」あたしのフリーゲンとアイツの魔力弾が衝突し合ったら、あたしのフリーゲンだけが粉砕された。魔力弾はそのままあたしに向かって飛んで来た。

（マジかよ。あんなちゃちな魔力弾にどんだけの魔力が込められて・・・！）

速度で僅かに負けている以上、下手に逃げに回っても意味はねぇ。だったら向かってってやるよ。直線的に向かって来る魔力弾６発を"アイゼン"で打ち弾きながら接近開始。他６発は曲線を描きながら向かって来る。威力も速さも申し分ねぇ。でもやっぱ足りねぇな。

「射撃の制御中、砲撃は撃てねぇみたいだな・・・！」

――テートリヒ・シュラーク――

それだけじゃなくて移動も出来ないらしい。そりゃ１２発も操作するってんだから当然だな。固定砲台ってわけだ。一対一の戦いには不向きだぜ。魔力弾が追いついて来る前にアイツに最接近、"アイゼン"を振るう。完璧なコースとタイミングだ。だというのにアイツの表情からは緊迫さを感じない。

「レイジングハート！」

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ≫

直撃する前にあたしとアイツの間にバリアが張られた。射撃制御はコイツが、障壁展開はデバイスが担当してるみたいだな。役割を分けりゃ出来るらしい。

（このまま押し切ろうとすんのは悪手だな。しゃあねぇ・・・！）

一瞬でバリアの強度を計ったあたしは攻撃を中断して急上昇、迫って来ていた魔力弾１２発の射線から離脱。下をチラッと見れば魔力弾が追撃して来てんのが見える。防御力に自信が有るあたしだけど、ありゃ防御に回ると圧倒されるな。だったら、防御を捨てての特攻だ。

「（避けて、避けて、避けまくってやる）おらぁぁぁぁ――――ッッ！！」

今度は急速降下。魔力弾の間を縫うように降下し続け、「アイゼン！
カートリッジロード！」を強襲形態のラケーテンフォルムへと変形させる。ブースターを点火、一気に距離を詰める。

「ラケーテン・・・ハンマァァァーーーーッッ！！」

――プロテクション・パワード――

さっきと同じバリアが張られた。通常のハンマーフォルムじゃ突破できなかったけど、ラケーテンならきっと・・・。"アイゼン"がバリアと衝突、激しい火花を散らす。ふと、横目で周囲を見ると、コイツの放った魔力弾が周囲で停止してるのが判った。あたしの後方から迫って来る魔力弾を利用してやろうと思ってたんだけどな。ギリギリで回避して、魔力弾をコイツにぶつけてやろうってさ。っうか、「硬ぇ・・・！」んだけど、コイツのバリア。

「バスターちゃん、話を聴いて！」

「今さら話すことなんてねぇ！　今は黙って見てろってんだ！」

「そんなこと出来ないよ！　だって、だって完成しちゃったら・・・闇の書は暴走しちゃうんでしょ！」

「チッ！」

ラケーテンでも突破できないとなると厄介だな。フェアーテをまた発動してから攻撃中断、距離を開ける。と同時にアイツはバリアを

解除してデバイスを向けて来た。それに魔力弾がまた向かって来たのも判った。でもな、「甘ぇ！」すぐさま最接近して"アイゼン"を振るう。

「あ・・・！」

――ラウンドシールド――

咄嗟だがシールドを張ったなにょは。だがそいつは魔力攻撃に優れた障壁だ。さっきまでのバリアよりは「砕き易いぜ！」シールドに打ち付けたまま最後のカートリッジをロード、ブースターを点火。

「あたしの脚に注意しなかったのがまずかったな。こいつが高速移動系の魔法だって気づいてただろ？　こいつを発動してから距離を取った。この時点で考えられるあたしの行動は2つ。1つは一気に距離を取ってお前の魔力弾から逃れる。もう1つは今のように再攻撃に来る。お前はどちらにしろ、距離を取るべきだった」

「っ・・・！」

悔しそうに顔を歪めるな、の、は。"アイゼン"のヘッドの片側に付いてる突起の先端部分の衝突点を中心にシールド全体にヒビが入っていく。目を見開くな、の、は。そしてついにシールドを粉砕、「きゃぁぁぁぁ！！」その衝撃でアイツは真っ逆さまに落ちて行った。

消費しきったカートリッジを給弾して、アイツの反撃に備える。そういや「魔力弾は全部消えちまったな」誘導操作に意識を割けなく

なったんだろうな、どこにも見えねぇ。目を凝らして眼下に広がる森林を見ていると、チカッと桜色に輝く光が見えた。

――ディバインバスターー――

また砲撃。距離が十分すぎるから余裕で回避できる。と、「来たな」なにょはが飛んで来た。それにしてもアイツも大した防御力を持ってんな。ピンピンしてやがる。

「アクセルシューター・・・シューット！」

また魔力弾を、今度は８発と撃ってきた。数を減らしたからかさっきより弾速が速い。

「アイゼン！」

――シュワルベフリーゲン――

こっちも同じ数のフリーゲンを打ち放つ。今度は相殺なんて考えずにアイツを直に狙う。あたしとアイツの間で交差する１６発の赤と桜色の魔力弾。

（あの弾速じゃぜってー回避しきれねぇ。なら・・・！）

一か八かの「パンツァーヒンダネス！！」を一点集中させた障壁を前面に展開しながら突っ込む。パンツァーヒンダネスは本来、全方位防御の魔法だ。でも今のように一点集中させることでさらに防御

力を高めることが出来る。次々と着弾していくアイツの魔力弾。あたしのフリーゲンもアイツの展開したシールドで全弾防がれたのが見えた。

「アイゼン！」

――ラケーテンハンマーーーー

障壁を解除。カートリッジを1発ロードしてブースター点火、突っ込んで来るアイツへと高速回転しながら突撃。

「レイジングハート！」

≪Ａｃｃｅｌ　Ｆｉｎ≫

アイツの両足、くるぶし辺りから2対の翼が生えた。と思ったらこれまで以上の速度で突っ込んで来た。騎士であるあたしに対して砲撃魔導師が近接戦とか。馬鹿にすんじゃねぇぞ。

「ラケーテン・・・」

「フラッシュ・・・」

この一撃で墜としてやんよ、高町なにょは。

「ハンマァァァーーーーッ！」「インパクトッッ！！」

互いに得物を大きく振るって、そして衝突。耳をつんざくガキィィンっていう金属音と、両手に伝わる衝撃。さらに「まぶし・・・！」視界を潰す閃光、それと同時に「のわっ！？」強烈な衝撃があたしを襲った。目も見えねぇし、あたしはそのまま弾き飛ばされちまうことに。

（あのまま押し切りゃぜってー勝ってたのに・・・！）

フラッシュインパクト・・・閃光の衝撃、くそ、そのまんまじゃねぇか。もう少し注意してりゃこんな間抜けなことにならなかった。

「レイジングハート、レストリクトロック！」

（この魔法は・・・！）

ルシルから聴いていた捕縛魔法だと察したあたしはすぐさま急上昇。捕まってもいいように対処方法は持ってる。だが逃げられるなら逃げた方がいいに決まってる。ようやく視界が戻り始めた時、「もう逃げられないよ、バスターちゃん！」アイツのそんな声が足元から聞こえてきた。

「こいつは・・・！」

あたしの周囲を高速で動き回る魔力弾、その数１２。下手に動きゃ一斉に襲ってくんだろうな。乗り切るにはパンツァーヒンダネスを本来の効果で発動させるしかねぇ、かな。

「バスターちゃん。お願いだから話をして」

あたしの目の前にまで上昇してきたアイツがそう言ってきた。

「・・・なんの話がしたいんだ？」

とりあえず話に乗ってみる。その前に「この弾幕結界、どうにかしてくんねぇか？」と言ってみる。するとアイツは「えっと、うん」弾幕結界を解いた。魔力弾が消失していく。素直で優しいのは長所だが、戦場じゃ短所だぜ、な、の、は。

――レストリクトロック――

その代わり捕縛魔法であたしを拘束した。すぐさまコレの構築術式（プログラム）の解析を開始、術式破壊（ブレイク）を割り込ませてやる。

――なのはの魔法で厄介なのは射砲撃だけじゃない、捕縛魔法の強度だ。だからヴィータ。あの子と戦う確率が一番高い君に与えよう。捕縛魔法破壊の術式を――

ルシルから貰った術式がコイツの術式を侵し始めた。

「最初の続き。闇の書が完成すると暴走して、主さんを取り込んで自滅するって聞いたよ？・・・バスターちゃん達の大好きな主さん、オーナーさんが死んじゃうんだよ・・・！？」

「そうだな。知ってんよ、それくらい」

というよりはつい最近知った。"闇の書"の管制プログラム、シュリエルから聴いたからな。

。―。―。回想だぜ。―。―。

「ふっざけんな！」

近くの街灯を殴りつける。あたしらは今、海鳴臨海公園へと来ていた。ルシルとシュリエルから、はやてに聞かれたくない話がある、ってことでこうして夜中に家を抜け出してきたわけだ。そんで聞かされたのが、"闇の書"のこれまで結末。

完成させたら主を取り込んで散々暴走した挙げ句に自滅するっていう、最悪なんてレベルをはるかに超越した絶望のエンディング・・・。あたしら守護騎士は完成前に消えることが大半だ。あたしらのリンカーコアを使って最後のページを埋めて完成させるのが常って感じだったからな。だから知んなかった。"闇の書"がとっくの昔に壊れていたことなんて。

「そんなの嘘、嘘よ！　じゃあ私たちは一体これまでなんの為に戦って来たっていうの！！」

ベンチに座るシャマルが泣き崩れた。そんな中でも冷静なシグナムとザフィーラ。あたしはそんな3人から「ルシル・・・！」この真実を以前から知っていたって風なルシルを睨み付ける。コイツはいつもそうだ。いつも大事は話を黙っていやがる。お前がオーディンと同じ？　違う、テメェはオーディンと同じなんて言えるような奴

じゃねぇよ。

「それでどうするのだ？　我々の唯一の希望が潰えた今、今後の我々はどうすればいい？」

シグナムが両拳を強く握り締めながらルシルに訊いたから、あたしの怒りが発せられることはなかった。

「闇の書が暴走するのは確実だ。だけどな。それがはやてにも適応されるかな？」

「ど、どういうこと・・・？」

「それはなシャマル。これまでの主は力に溺れただけの暴君に過ぎない。そしてはやてはそんな連中とは違う、ということだ。話そう。俺のシナリオを」

ルシルから聞かされた話は、正直言うと賭けのようなもんだった。曖昧だけど、信じ難いけどさ。でも、何故かそれが上手く行くような気がしたんだ。あたしらの大好きなはやてなら。そう思えるようなシナリオだったんだ。

「――俺ははやてを信じる。家族を大切に、大事にしているはやてがみんなに向けているその愛を」

「私もだ。これまで多くの主が私たち闇の書を使ってきた。そこに愛は無かった。ただ私たちを道具として扱う無感情。しかし主はや

ては違う。私たちのことを愛してくださっている。だからきっと、主はやては闇の書の永遠の旅路に終焉をもたらしてくださる・・・！」

シュリエルが断言した。あたしとシグナムとシャマルとザフィーラは顔を見合わせる。そして頷き合った。

「いいだろう、その話に乗った」

「それが我らの新しい希望、か」

「だったら続けましょう、リンカーコアの蒐集を」

「だな。闇の書を完成させて真の主と覚醒したはやての家族愛で、闇の書の暴走してるプログラムを掌握させる・・・！」

感情論で"闇の書"が元に戻る、なんて馬鹿げた話だとは思う。だけどぜってー上手く行く。

「けどさ、ルシル。お前って何か大事な話を隠してばっかだな」

「・・・ふむ。ルシリオン。出来ればこういう話は早い段階で話してほしい」

「気を付けるよ」

ルシルは本当に申し訳なさそうに謝ったから、あたしらはそれ以上ルシルに何かを言う事はなかった。

。―。―。回想終わりだぜ。―。―。

「だからもう蒐集はやめて。オーナーさんの呪い、魔法や医療技術じゃ治せないって話だけど、きっと何か方法があるはずだよ！　みんなが、誰もが犠牲にならずに済む方法がきっと・・・！」

なにょはが必至にそう呼びかけて来る。本当に良い奴だよ、お前。ルシルがお前たちをはやての友人にしようって決めた理由がよく解る。"闇の書"の真実の他に、あたしらはルシルからコイツらからリンカーコアを蒐集した本当の理由を聴いた。いんや、パラディース・ヴェヒターが犯罪者狩りを徹底させた本当の理由も、だ。あたしら守護騎士が消えることなく無事に残った時、実刑じゃなくて保護観察・管理局従事っていう軽い処分にするよう仕向ける為に、犯罪者狩りを徹底して、局に好印象を与えた。あたしらは強い。万年人手不足の局にとっては喉から手が出るほど欲しい人材のはずだ。そんなあたしらが犯罪者狩りをしてりゃ、局も気兼ねなくあたしらを局に取り込めるだろう、って。

「ありがとな。そこまで必死に思ってくれて。でもな・・・」

「バスターちゃん・・・？」

はやてもまた"闇の書"の主としての魔法を扱う騎士になる。だけどはやてはまだ子供だ、だから管理局従事にはならないっていうのがルシルの見解だ。あたしらは局の仕事に従事することが多くなって、はやては独りあの家で過ごすことが多くなる。離れ離れの時間

が多くなる。

――捕縛断ち――

「え・・・！？」

なにょはの捕縛魔法を破壊する。並の術式なら瞬時に破壊するってルシルは言ってたけど、コイツのはそれほど強力だったのか少し時間を食っちまった。目の前で呆けるなにょはに向かって"アイゼン"を振る。障壁が張られることなく、アイツ自身がデバイスを掲げて防御した。けどそれだけじゃ無意味だ。

「おらぁぁぁぁ！！」

「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

全力で振り抜いて大きく弾き飛ばしてやった。アイツは地面に叩き付けられる前に体勢を立て直した。ブースターを利用しなくても強力な一撃だけど、デバイスにはどうやら傷一つとして付いてないみてぇだな。やっぱデバイス全体の強度も強化されてるってわけだ。

「どうして！？」

「言ったろ！　オーナーを治す方法はもう・・・闇の書を完成させるしかないって！」

カートリッジをロードしてブースター点火。一気に距離を詰める。

「もう止まれねぇんだよ！」

そこで出て来るのがコイツらだ。魔法を知り、局と関わりを持つなにょは達。はやても魔法を持つことになるって未来が判っている以上、同じ世界の出身で魔導師な友達っつうのは優良物件だ。どの道はやてが局に入れば、遠からずコイツらと出会って友達になっただろう。でも普通に会っただけじゃ同僚に近いだけの友達で終わる。望むべくは広くも深い友達関係。

そこでルシルがはやてとコイツらを繋ぐ方法として選んだのが強烈な形での出会い。今のように全力で互いの思いをぶつけ、その果てに、断ち切れにくい絆を生み出そうとした。聴かされたときは結構無茶な手だとは思ったけどな。

「バスターちゃん！」

――アクセルシューター――

アイツが放った魔力弾４発を紙一重で避けていく。もちろん誘導操作弾だから通り過ぎて行ってもまたあたしに向かって飛んで来る。それすらも避けて、避けて、避けてやった。

――プロテクション・パワード――

――フェアーテ――

ブースターを停止、高速移動魔法でなにょはの背後に回り込む。た

だ突っ込むだけがあたしの攻撃じゃねぇんだよ。最後の1発をすぐさまロード。あたしへ振り向こうとしているコイツの対処より早く「ラケーテンハンマーッ！」"アイゼン"を振るう。

――アクセルフィン――

アイツは急上昇することで直撃を避けた。でもまだだ。ブースターを維持、あたしも追って上昇する。いろんな軌道で迫り来る魔力弾。避けきれねぇヤツは"アイゼン"で破壊する

「ディバイン・・・――」

「撃てよッ、こいつは決闘だぜ！」

「っ・・・、バスタァァァーーーーッ！！」

ごめん、はやて。帽子が弾け飛ぶのを、歯を噛みしめて耐えて砲撃を紙一重で回避。砲撃発射の体制のまま硬直してるアイツに「終わりだ！」もう一度ラケーテンハンマーを打ち込む。今度は直撃だった。身近な悲鳴を上げたアイツはまた地面へと真っ逆さまに落ちていって、態勢を整える前に地面に叩き付けられた。ラケーテンハンマーの直撃だ、そう簡単に復活できるわけがねぇ。だからあたしの勝ち、だ。

「はぁはぁはぁ・・・」

残りのカートリッジ2発を給弾。結界が解除されるのを待つ。

（良い奴だからこそ、お前たちはまた向かって来るんだろうな・・・）

なぁ、ルシル。本当にこんなやり方で確固な友情が生まれんのか？　やり過ぎるとかえってはやてとアイツらの友情が壊れちまいそうだぞ。とは言ってもここまで進めちまった以上、あたしじゃどうする事も出来ねぇけどな。

「おい、決闘はあたしの勝ちだ！　結界を解除しやがれ！」

空に向かって叫ぶ。でも結界が解除される様子はない。となれば考えられるのは・・・「まだ動けるってか」足元の森林に目をやる。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒なのは†††

バスターちゃんはやっぱり強かった。"闇の書"の守護騎士ヴォルケンリッターー。何百年っていう長い時間、活動してきた歴戦の騎士。デバイスを強化したくらいじゃすぐに手の届く相手じゃなかったってことを思い知らされた。

でも、「まだ負けたわけじゃない・・・！」少し痛む体に力を入れて立ち上る。デバイスだけじゃなくてバリアジャケットまで強化されているからこそ、この程度のダメージで済んだ。ドクターやマリエルさんに感謝しないと。

『なのはさん。大丈夫？』

『リンディさん・・・。はい、大丈夫です。まだやれます！』

本作戦の総指揮を執るリンディさんから通信。まだ戦えることを伝える。消費しきったマガジンを新品に交換。モードはバスターへ。アクセルシューターでの弾幕でも越えて来ちゃうし。なら砲撃の必倒を狙った方がいい。

「レイジングハート。精密射撃（シャープシュート）、行くよ」

≪はい、マスター≫

"レイジングハート"を長距離狙撃モードにする。さっきも避けられちゃったけど、私に出来るのはやっぱり砲撃だ。マガジンを握ってブレをなくし、ひたすらバスターちゃんをロックオン。

≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ≫

カートリッジを2発ロードして、最大射程のディバインバスター・エクステンションを「シューット！！」発射した。砲撃は一直線にバスターちゃんの元へ。"レイジングハート"から砲線が途切れたと同時に空に上がる。

――シュワルベフリーゲン――

バスターちゃんの射撃魔法が４発と飛来してきた。ディバインバスターのバリエーションの1つ、高速砲撃の「ショートバスター！」を発射。射程と威力をある程度犠牲にしてチャージ時間を短縮した

ことで可能な高速砲撃だ。
基本、私の砲撃はその場で留まっての発射になる。そうでないと撃てないから。でもこのショートバスターは移動しながらでも撃つことが出来る。この砲撃を反撃の基点にしようと思う。バスターちゃんの魔力弾を砲撃で潰し、さらに接近を続ける。バスターちゃんもまた私に向かって突進して来た。

――ショートバスター――

移動しながら砲撃を撃ち続ける。バスターちゃんは避けては魔力弾を打ち放ってくる。完全な拮抗状態。止まれば集中砲火を食らう。でも高速砲でもバスターちゃんを捉えることが出来ない今、どうすればいいか。

「レイジングハート。アレ、やってみよう」

≪アレ、ですか？・・・彼女の今のデバイスの形態であればおそらく上手くいくと思います≫

バスターちゃんの形態の1つ、突起とブースターのあるアノ形態じゃ破壊されるのが目に見えているけど、でも今の通常の鉄槌形態ならきっと・・・。そうとなればわざと砲撃の隙を作らないと。接近しやすいように。でも気取られないように。

「疲れちまったのか？　なら降参するって手もあるんだぜ・・・？」

――テートリヒ・シュラーク――

「（来た！）降参はしないよ。バスターちゃんに勝って、全てを聞かせてもらうんだから！」

砲撃が途切れたその僅かな隙を突いて突進して来たバスターちゃん。ここで発動するのが、以前からシャルちゃんの指示で構築していた対近接戦術者専用魔法。

「捕縛盾（バインディングシールド）！」

≪Ｂｉｎｄｉｎｇ　Ｓｈｉｅｌｄ≫

私のシールドに衝突するバスターちゃんのデバイス。その瞬間、「あんだ！？」バスターちゃんが驚きの声をあげた。シールド表面から伸び出すチェーンバインド。それがバスターちゃんとデバイスを絡め取っていく。

バインディングシールド。近接攻撃をしてきた相手に対して反応する、カウンタータイプのシールドだ。シールドに攻撃を加えるとチェーンバインドが発動して相手が離脱するより早く捕縛することが出来る。

「レイジングハート！」

「マジか！　くっそ、こんな手をまだ隠して持ってたなんて・・・！」

――捕縛断ち――

３本のうち１本の鎖が粉砕された。急げ、急がないともうチャンスは回ってこない。

「ディバイン・・・！」

「チクショーー！！」

２本目が粉砕された。残り１本も徐々に解きかけてる。

「バスタァァーーーーッッ！！」

だけどその前に、砲撃ディバインバスターを放つことが出来た。ほぼ零距離。チャージ時間は短かったけど、確実に捉えることも出来たし、撃墜とまではいかなくても大ダメージは与えることが出来たはず。なのに・・・「アレ？」妙な光景が私の目に映った。

≪マスター。回避されました！≫

「っ、・・・やっぱり・・・」

着弾すれば何かしらの反応――爆発を起こすのに、それが起きずに砲撃はそのまま通過して行った。それが意味するのは着弾しなかった、ということ。でもおかしい。たとえバインドを砕き終えたとしても避けきることなんてまず不可能な距離・・・なはず。それに回避した姿を見ることもなかったし。

「バスターちゃんは・・・！？」

どこにも姿が見えない。きょろきょろ周囲を見渡していると、『なのはさん』リンディさんから通信が入った。内容は、バスターちゃんが転移魔法で結界内から撤退したということだった。

『たぶん、ヒーラーの転移魔法でしょうね。背後に現れた円盤から伸びて来た手によって引っ張り込まれていたから』

『そう、ですか・・・』

こうして私とバスターちゃんの決闘は、バスターちゃんの味方が行った転移による、バスターちゃんの離脱という形で幕を閉じた。

Ｅｐｏｓ２０－Ｂ騎士と魔導師の戦舞踏～３ｒｄ　Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅシグナム†††

「何用だ？と、訊ねるのは野暮というものか」

蒐集活動を行った後に襲撃してきたリンドヴルムの私兵を返り討ちし終え、主はやての待つ大切な我らの居場所、海鳴の街へと帰ろうとした時、あの娘らが私の前に姿を現した。

蒼天に輝く太陽の下、地平線の彼方まで広がる砂漠にて主はやてのご友人、アリサ・バニングスと月村すずかの２人が私と対峙する。

２人が防護服姿で居るのは、戦いに来たのではなく、魔法の守り無くしてこの環境下で居られないためであってほしい。しかし起動済みのデバイスを持っている以上、そんな甘いことは思ってはいられんのだろうな。

「セイバー。あんたを止めに来たわ。この、フレイムアイズ・イグニカーンスでね！」

「ア、アリサちゃん！　戦いに来たんじゃなくて話をしに来たんだよ！？」

バニングスの手には"フレイムアイズ"という銘の片刃剣が握られており、そして私に見せつけるように掲げた。そんなバニングスを

窘めるのは月村。共にデバイスに僅かな変化が見られる。おそらく私に惨敗したことで強化して来たのだろう。が、それだけで私を超えられるなどと思われていると思うと呆れるばかりだ。

「セイバーさん。私たちは守護騎士のリンカーコア蒐集を止めに来たんです」

「そうか。しかし我々は止まれんよ。以前にランサーが言ったろう？
蒐集しなければ我々の主、オーナーは絶命してしまうのだ。治癒魔法も現代の医療技術も通用しない以上、完成させることこそがオーナーの救いとなる」

シュリエルの話では"闇の書"はもう壊れており、ただ完成させただけではかえって主はやてを絶命させてしまうという。しかしルシリオンの提示したシナリオではその可能性は少ないとのことだ。主はやてが我ら守護騎士ヴォルケンリッターに注ぐ愛情。その愛情が大きければ大きい程、"闇の書"の呪いに打ち勝てる。それがルシリオンの提示した最後の希望だった。
私は――我々は、主はやてのその想いの強さに賭けることにした。想いの強さで"闇の書"の呪いを跳ね返す。昔の我々ならそのような曖昧な感情論で"闇の書"のプログラムをどうにか出来るとは思えなかっただろうが、今は違う。主はやてならばきっと。そう思えてしまう。

「ゆえに今は我らの蒐集行動を見逃してもらいたい。・・・我々は管理局とは敵対したくはない。全てを終えた時、これまでの罪を償うために出頭する、という誓いは必ず果たす。それに・・・管理局

と関係があり、尚且つ民間人であるお前たちを蒐集したことについては申し訳ないと思っているのも変わらずだ。出来ることならもう2度とお前たちを傷つけるような真似はしたくない。だから退け」

「はいそうですか、って退けないわよ。どうしても蒐集行為をやめてもらうわ。たとえそれが無理やりでも。あんた達の主の命も大事だけど、世界の平和も大事なのよ」

「あ、でもオーナーさんのことを蔑ろにするつもりじゃないです！　私たちだってオーナーさんの事を救いたいです！　でも――」

「お前たちの葛藤は理解できる。それはお前たちが優しいからだというのも解っている。だからこそ再度言おう。退け。傷つけたくはない」

鞘に収めた"レヴァンティン"を脇に構え、居合の体勢へと移る。と、バニングスと月村は顔を見合わせ、そして僅かの間口を閉ざした。おそらくあの娘らをこの場へ寄越した管理局の人間と連絡を取っているのだろう。

今のうちに退こうか、と思案していたところでこの一帯を覆う結界がさらに強化されたのが魔力の変動で察知できた。先程までなら労せず破壊できただろうが、今の多重結界を貫こうとするならファルケンでないと難しいだろうな。

「・・・セイバー。悪いけど、やっぱり見逃すわけにはいかないみたい」

「ごめんなさい、セイバーさん」

本当にすまなさそうに謝るバニングスと月村。何を言われたかは知らんが戦う意志を見せた以上は「仕方がない、か」こちらも黙ってはおられん。

「お前たちに決闘を申し込む。この決闘は私闘となる。つまりは戦闘による怪我も、デバイス損傷も、そして敗北も自己責任ということになる。つまり――」

「負けても文句は言うな、というわけね。いいわよ。あたし達は管理局員じゃなくて、ただ好きで手伝っているだけだもの。勝手に首を突っ込ってんだから確かに文句は言えないわ」

「私もそれで良いです」

2人からの了承を得た。ならば後は・・・。

「楽園の番人パラディース・ヴェヒターが剣騎士、そして守護騎士ヴォルケンリッターが将セイバーと・・・炎の魔剣レヴァンティン！

さぁ、決闘前の儀式だ、名乗りを上げろ」

「アリサ・バニングスとフレイムアイズ・イグニカーンス！」

「月村すずかとスノーホワイト・メルクリウス・・・！」

VS。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。

剣騎士セイバーＶＳ太陽の騎士アリサ＆氷月の魔導師すずか
。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ
互いに名乗りを上げた。これで決闘は成立した。あとは可能な限り傷つけずにバニングスと月村を打破するのみだ。

「レヴァンティン！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

「フレイムアイズ！」

≪カートリッジロード！≫

――バーニングスラッシュ――

私とバニングスは同時にカートリッジをロード。カートリッジの残弾数では始めから圧倒的に負けている以上、持久戦に持ち込まれては少々厄介だ。それに、月村の存在もある。補助を担当しているあの娘のことだ、下手に長引かせては確実に不利となってしまうだろう。

（ゆえに短期決戦だ・・・！）

足を取られやすい砂地である砂漠での陸戦だが文句は言っていられん。ルシリオンからバニングスは空戦が出来ないと聞いている。空から急襲すれば楽に勝てるだろうが、それは騎士の戦いではない。

相手が陸戦ならこちらも陸戦で迎え、そして真っ向から撃破する。それが騎士だ。

居合の体制のまま一足飛びでバニングスの元へ。バニングスは私の接近に対し慌てることもなく、刀身に炎を纏わせている"フレイムアイズ"を正眼に構えるのみ。デバイスを強化したところでお前が変わらなければ終いだぞ、バニングス。柄を手に取り、「紫電・・・！」右脚をズンッと踏み込む。舞い上がる砂塵が少々鬱陶しいが、支障はない。

「スノーホワイト！」

≪お任せ下さいまし！≫

――ブレイドプロテクション――

私とバニングスの間に展開された渦巻く障壁。なるほど。バニングスが慌てずにいるのはやはり月村の存在があるためか。しかし「清霜！！」それだけで私の一撃は防げんぞ。先のカートリッジ使用によって鞘内部に溜めた魔力を爆発させ、その力を利用しての高速の居合抜きを行う紫電清霜を繰り出す。

「速――っ！」

激しい音を轟かせて障壁に衝突する"レヴァンティン"の刃。ふと、妙な手応えが刃から伝わって来たことに眉をひそめる。衝撃が吸収されたような、これまでのように障壁に刃を当てた時に比べ鈍い。おそらくただの障壁ではない。

「だが、まだ足りん！」

鞘より抜き放った勢いを殺すことなく"レヴァンティン"を降り抜くと、月村の張った障壁はパキッと音を立てて真二つに裂かれた。

「え・・！？」２人して驚愕に目を見開いている様子からして、私の斬撃を防ぎきる自信が今の障壁に有ったようだ。

「ぼさっとしている暇はないぞ！」

"レヴァンティン"を降り抜いた勢いで上半身を捻り、左手に持っていた鞘を振り上げて追撃。ハッとしたバニングスが燃え盛る"フレイムアイズ"ですかさず防御した。しかし咄嗟だったこともあってか「きゃあ！」踏ん張りきれずにバニングスは大きく弾き飛ばされた。やはり子供の身、軽いものだ。追撃の為に再度砂を蹴って、宙で態勢を整え着地し終えた直後のバニングスへ突進する。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

――紫電一閃――

「させない！」

――フローズンバレット・アサルトシフト――

月村の周囲に発生した冷気の魔力球４基を横目で見る。魔力球１基より３発の魔力弾、計１２発が発射され、追尾性能があるのか私に

向かって飛来してくる。そんな中でバニングスは私を待ち構えるかのように"フレイムアイズ"を天高く掲げて、じっと佇んでいる。

――パンツァーシルト――

側面から迫って来る月村の魔力弾への対抗策として、対魔力攻撃に優れた障壁を展開。遅れて1発が着弾、炸裂して冷気を撒き散らした。間髪入れずに次々と着弾していく。6発目までは防ぎきれたが、「む・・・！」7発目と8発目で障壁が凍結され、9発目で破壊されてしまった。

あと数歩進むだけでバニングスが攻撃範囲に入るというところで月村の魔力弾に対処しなければならなくなった。刀身に炎を纏わせての斬撃・紫電一閃の対象をバニングスから魔力弾へ変更。

「はっ・・・！」

――シュトゥルムヴィンデ――

本来は魔力の衝撃波を打ち出す攻撃だが、紫電一閃の炎をそのまま使うことで威力を上乗せし、そのうえ冷気の魔力弾への絶対的な優属性へと変化させたことで、相殺不可の一撃となった。月村の魔力弾が一瞬のうちに蒸発する。この一撃の射程圏に月村が居れば良かったのだがな。とにかく月村が次の手を打ってくる前にバニングスを撃破しなければ。

「フレイムアイズ！」

≪おっしゃ！　カートリッジロード！≫

――タイラントフレア――

カートリッジを3発とロードしたことで先程以上の火炎を発生させた"フレイムアイズ"を「せりゃぁぁぁぁ！！」バニングスは掛け声とともに振り降ろし、「なに・・・？」私に当てるつもりが無かったのか勢いよく砂漠へと叩き付けた。

勢いよく爆発する火炎。そして「これが狙いか・・・！」火炎と共に巻き上がる砂塵。一瞬にして視界が砂塵によって潰されてしまった。それに加え、「気配が消えた・・・？」先ほどまでビリビリと感じていた戦意が急に消え失せたためにそう感じてしまう。

（ここまで来て撤退するなどありえん。必ずこの結界内のどこかに居るはずだ）

視界を頼るのを諦め、目を閉じる。頼りになるのは聴覚とバニングスと月村の魔力反応。そして攻撃時になれば必ず生まれる戦意を確実に捉えるための戦闘感覚。感覚を研ぎ澄ませて周囲の警戒を始めてすぐ。私を包囲するかのように魔力弾が発生したのを察知。距離はおよそ6mと離れ、円形状に設置されているようだ。

「スノーホワイト！」

――バインドバレット・サークルシフト――

尚も巻き上がっている砂塵の向こう側から魔力弾が飛来してきたの

が判った。それにしても厄介なのは同時ではなく刹那の間を置いて飛来してくることだ。しかも前後左右、無差別で向かって来るため回避行動を続けなければならない。
空へと上がればやり過ごせるだろうが、「一度決めたことは覆せんな」ステップを踏んで向かって来る魔力弾を"レヴァンティン"で斬り、または回避。可能な限り防御魔法の使用を控えなければ、すぐに魔力切れを起こしてしまう。カートリッジも無駄には出来んからな。

（誘導操作弾ではないのも救いだな）

回避した魔力弾は戻って来ることはないようだ。受けなかったため判らないが特別な効果でも有していたのだろうか？　避けきった事で薄らと目を開け、徐々に晴れてきている砂塵を見たその時。

「「ディザスタークロス！！」」

そんな掛け声とともにグンッと魔力反応が強くなったのを感じた。考える間もなく大きく跳び、空へと上がった。その直後、先程まで立っていた場所を２条の砲撃が十字状に通り過ぎて行った。片方は冷気、もう片方は火炎だ。
空に上がったことでバニングスと月村の姿を視認することが出来た。砲撃が交差した地点から５０ｍと離れていなかった。その距離で２人の気配を感じ取れなかったなど、信じたくはない事実だった。

（それよりバニングスのデバイスのあの形態は・・・！）

"フレイムアイズ"が銃剣と化していた。先程までの剣の峰側に狙撃銃の銃身がある。ルシリオンの話では"フレイムアイズ"は一形態のみだと聞いていたのだが。これは警戒の必要があるな。

「行っくわよ～・・・・！」

――ブレイズロード――

バニングスの足元から炎が噴き上がったのを視認。何をするのかと思った直後、「おりゃぁぁぁぁ！」その炎を爆発させ、爆炎を利用して私の居る空にまで跳び上がって来た。

「スピンニングコロナ！！」

「ほう・・・！」

面白い戦い方をする娘だ。燃え盛る"フレイムアイズ"を掲げた上で体を丸め、高速前転しながら迫って来た。それはさながら炎の車輪。回避する事こそが最良の一手だろうが、私を空へ上がらせたことへの褒美として「受けて立つ！」3発目のカートリッジをロード。刀身に炎を噴き上がらせる。

迫り来るバニングスに向かって「はっ！」"レヴァンティン"を横薙ぎに振るう。そして衝突。高速回転するバニングスの"フレイムアイズ"と私の"レヴァンティン"の間で激しい火花――いや互いの炎が撒き散らされていく。

「ぐっ・・・！」

予想以上に強烈な攻撃に思わず苦悶の声を漏らしてしまった。だが「はぁぁぁぁ！！」"レヴァンティン"を振り抜きつつ、左手に持つ鞘に魔力を付加した状態で同時に振るった。

「くぁ・・・！」

それでバニングスを弾き返すことが出来た。落下中にカートリッジを給弾しようと考えていたのだが、「まだよ！」バニングスが体勢を整え、銃剣形態と化している"フレイムアイズ"の銃口をこちらへ向けてきた。しかもカートリッジを４発も使うのを見た。銃身に環状魔法陣が４つと展開される。明らかに大威力の砲撃魔法だ。

「フレイムアイズ！」

≪イジェクティブ・ファイア！≫

「いっっけぇぇーーーッ！！」

そして発射された火炎砲撃。炎熱に耐性の有る私でもまともには受けたくない魔力量だ。横移動することで回避。そして飛行魔法を扱えないというバニングスの追撃へ向かおうとしたのだが。

――フローティングアイス――

「ほう」

ミッドの魔法陣上に具現された氷塊を足場としたバニングスは落下することはなかった。下を見ると、月村が上手く行ったという風に満足そうに笑みを浮かべたのを見た。限定的な空戦をすることが出来るのだな。騎士リサと似通った戦いをする。これもフライハイトから戦い方を教わったからか？

「ファルシオンフォーム！」

銃剣形態から剣形態へと戻したバニングスはカートリッジを1発とロードし、刀身に炎を噴き上がらせた。

（どちらにしろ、楽しくなってきたな）

私にはフライハイト、そしてテスタロッサと剣を交えたかったという思いがあった。フライハイトは言わずもがな、テスタロッサは初邂逅の際、ルシリオンへの攻撃を見て剣を交えたいと思ったのだ。あの時は怒りで荒い筋だったが、冷静になった時の事を想像して心が躍った。そして今、バニングスと月村のコンビもまた面白いと思うようになった。将来が実に楽しみだ。

「うりゃぁぁぁ！！」

――フレイムウィップ――

炎の鞭を横薙ぎに振るってきたバニングス。空戦は陸戦以上に行動範囲が広い。ゆえによほどの鈍間でない限り、「容易く避けられる・・・！」僅かに降下。頭上を通り過ぎて行く炎の鞭を背に、一気

にバニングスへと向かう。

――バスターラッシュ――

下方から放たれてきたのは冷気の砲撃。それすらも避けつつカートリッジ３発を給弾する。これで手元にあるのはいま給弾した３発を合わせて残り６発。この６発で決着を付けなければならない。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．　Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ≫

カートリッジを１発ロードし、"レヴァンティン"を通常の剣形態から連結刃形態へと変形させる。

≪Ｓｃｈｌａｎｇｅ　Ｂｅｉｂｅｎ　Ａｎｇｒｉｆｆ≫

狙うはバニングスではなく、あの娘が足場とする氷塊、その数８。シュランゲフォルムでの攻撃時は移動が出来ず防御も困難にはなるが、それより前に「断ち切る！」長く伸び往く"レヴァンティン"を操り、氷塊へ突撃させる。

（まず１つ！）

バニングスの居ない足場を貫いて砕く。シュランゲバイセン・アングリフは刃全体に魔力付加がされ、強力な障壁破壊効果を有している攻撃法だ。おそらくあの氷塊も何かしらの防御魔法（もしくはただ足場を作るだけの補助かも知れんが）だろう。相性的にはこちらの方が有利だ。

（２つ、３つ、４つ・・・！）

――フローティングアイス――

順調に破壊していき、バニングスの氷塊を砕くその瞬間にまた新しい氷塊が作り出された。バニングスは「助かったわ、すずか！」と礼を言いながら新たな氷塊へと跳躍して移動。それを見た私はすぐさまバニングスの立つ氷塊へと剣先を突撃させる。

（氷塊を作り出している間は他の魔法が扱えんようだな、月村）

高速で氷塊を壊しまわる"レヴァンティン"に注意しなければならない状況下、それも仕方のないことだと思う。それと氷塊の維持もあるだろう。バニングスは「ちょっと！　さっきから足場ばっかり狙うなんて卑怯よ！」などと怒鳴り声をあげている。

「短所を攻めるのは戦術の１つだ、バニングス。やはり陸戦に戻るか？　私としてはそれでも構わんが」

空に上がってしまったのは私の失態。だがそれをバニングスに漏らすのは少々気が引けたため、そう言って陸戦へ戻ろうと試みてみたのだが「むぅ・・・！」表情を悔しげに歪ませたところを見ると失敗してしまったようだ。挑発と取られてしまったに違いない。

≪カートリッジをロード！　バヨネットフォーム！≫

「ちょっ、フレイムアイズ！？」

≪短所を攻める。正しい、そいつは正しい！　だからこっちも攻めさせてもらう！≫

"フレイムアイズ"のＡＩの人格は熱血漢と言ったところか。熱いバニングスにはお似合いだな。カートリッジを１発ロードした"フレイムアイズ"は剣形態ファルシオンフォームから銃剣形態バヨネットフォームへと再変形。おそらく気付いたのだろう。私が動けないことに。

シュランゲバイセン・アングリフがバニングスを追いかけ回すその中で私が接近して別の手段で攻撃を行えばすぐに決着だ。しかしそうしなかった。この好機を見逃すような相手でないのに何故、と"フレイムアイズ"が思考したとすれば・・・。気付くのも時間の問題だったと言うわけだ。

「ふんふん・・・なるほどね。じゃあ遠慮なく！　フレイムバレット！」

"フレイムアイズ"から私が動かない事を聞いたのかバニングスが晴れやかな表情を浮かべ、銃口から火炎弾を連射。愚直なまでに真っ直ぐな軌道で飛来する火炎弾。一瞬で誘導操作弾ではないと判った。

――シュランゲバイセン・フェアタイディグング――

シュランゲバイセンの軌道を、私を中心とした球体状へと変え、私

を護る結界と成す。高速で私の周囲を走る刃によってバニングスの魔力弾は全弾斬り裂かれた。弾幕が途切れた一瞬を見計らい、

≪Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍ≫

"レヴァンティン"を通常の剣形態シュベルトフォルムへと戻し、僅かに遅れて放たれてきた弾幕の中を真っ向から突っ切る。回避できない火炎弾は"レヴァンティン"で斬り裂いて対処。

――ヒルンダプス・カウダクトゥス――

短距離高速移動魔法を発動、一瞬にしてバニングスの背後へと回り込む。バニングスは未だに私が背後に回り込んだことには気付いていない。おそらく下で我々のことを見ている月村は気付いているだろうが、もう遅い。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

"レヴァンティン"の刀身に炎を噴き上がらせる。それとほぼ同時、バニングスがこちらへ振り返ろうとした。が、「終わりだ、バニングス・・・！」よほどのことがない限り回避も防御も出来まい。

「紫電・・・一閃！！」

――ブレイドプロテクション――

≪させるか！　フレイムプロテクション！≫

私とバニングスの間に2つの障壁が展開された。1つは"フレイムアイズ"から発せられた音声で耐炎熱障壁だと判った。もう1つは先ほども使われた渦巻く障壁で、おそらく耐衝撃だろうが・・・「無駄だ！」二重障壁に"レヴァンティン"を降り落とし、直撃させる。

また鈍い手応えが伝わって来たが、「斬ッ！」それもすぐに失せる。先の攻防で私が繰り出したのは紫電清霜。切断力は申し分なく、障壁破壊効果を有していなくとも十分な攻撃だった。しかし今繰り出しているのは紫電一閃。切断力ではなく破壊力に優れ、そして障壁破壊効果も有している。ゆえに月村の障壁を容易く破壊する事が出来た。次に私の一撃を拒むのは対炎熱障壁。

「ヌルい！！」

「うそ・・・っ！？」≪どれだけ強力なんだよ！≫

月村の障壁よりは時間を食ったが、バニングスの対炎熱障壁も破壊した。"フレイムアイズ"を水平に掲げ盾にしたバニングスへとそのまま"レヴァンティン"を振り降ろし、「きゃぁぁぁぁぁ！！」その防御ごと足元に広がる砂漠へと叩き落とした。

（対炎熱障壁に救われたな、バニングス）

バニングスへ届く頃には紫電一閃の炎の大半が散らされていた。その分威力も半減していた。それに足元は砂漠、落下の衝撃も砂地に吸収され弱くなるだろう。そう思って見守っていたのだが、衝突寸

前でバニングスがフワリと浮いたのを見た。

「浮遊魔法か。やるな、月村」

バニングスを追うように私も降下し、ザッと砂漠に降り立つ。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒アリサ†††

「大丈夫、アリサちゃん！」

セイバーの攻撃をまともに受けたあたしだったけど、砂漠に墜落する前にすずかが魔法で助けてくれた。フワリと浮く体。ゆっくりと砂地の上に降り立つ。そしてあたしに駆け寄って来たすずかに「いたた・・・。ありがと、すずか」お礼を言う。

「うん、どういたしまして。無事で良かったよ」

「あたしとすずかのバリアである程度、あの炎の斬撃の威力を殺いだからね。でもま、想定以上に強力過ぎてこうなってる状況だけど・・・」

対斬撃と対炎熱の二重バリアでもセイバーの斬撃を防ぎきることは叶わなかったわ。正直、この二重バリアを反撃の起点としてセイバーをコテンパンにする予定だったんだけど。やっぱ強いわぁ。"闇の書"の守護騎士は何百年も前から活動しているって話だったし。歴戦の戦士って感じよね。甘く見過ぎてたわ。

「フレイムアイズは大丈夫？」

≪この程度で参るほど軟な造りじゃないぜ≫

"フレイムアイズ"はまるで胸を張るかのように力強く答えてくれた。そりゃそうよね。次元世界屈指の技術力で生まれ変わったんだし。空になったマガジンを取り外して、新しいマガジンに交換しながら「無事ならまだやれるわね。すずかはどう？」訊いてみる。

「私はまだ大丈夫」

すずかが答えた矢先、「もう降参しないか？」セイバーが１０ｍ程離れた場所に降り立ってそんな事を言ってきた。もちろん「いやよ」ってあたしはキッパリと断った。

「こちらとしてはこれで切り上げたいのだがな。これ以上は本気でお前たちを傷つけなければならなくなる」

完全に自分の勝利を確信してるセイバー。確かにここまで一方的に押されてる形だけど。念話で『すずか。今の時間は？』すずかにそう訊く。と、『あと１３秒で、この世界での午前９時だよ』待ちに待った答えが返ってきた。"フレイムアイズ"の柄を握る右手にさらに力を籠める。

「自己責任ってことなんだから、それについては気にしないで良いわ、セイバー」

「・・・後悔しても知らんぞ」

「そっくりそのまま返しちゃおうかしら、その台詞」

≪カートリッジロード！≫

"フレイムアイズ"が自分の意思でカートリッジを2連ロード。銃剣形態の銃身部分に環状魔法陣が3つと展開される。この魔法陣の役目は、魔力の放出・加速のコントロール。なのはと同じものね。ま、なのはの場合は魔力の増大・集束コントロールもさらに追加になるけど。

「ならば全力で墜としに行くぞ？」

「どうぞ！」

――フリンジングボム――

"フレイムアイズ"の銃口からバスケットボール大の火炎砲弾1発を発射。セイバーは受けに回ることなく少し横に移動する事で回避。そんなセイバーに火炎弾フレイムバレットを連射しているところで『アリサちゃん！　午前9時！』すずかから報告が来た。直後、セイバーの背後へ通り過ぎて行ったフリンジングボムが大爆発。セイバーがその衝撃に少しよろけたのを見て、「太陽の騎士アリサ・・・行くわよ！！」銃剣バヨネットフォーム、大剣クレイモアフォームといった形態変形と一緒に追加された、新システムを起動させる。

――スリーズ・サンズレガリア――

≪カートリッジロード！　バーニングスラッシュ、そしてフォックスバット・ラン！≫

"フレイムアイズ・イグニカーンス"を受け取ってからの3日間。授業や習い事、寝る間も惜しんで作り上げてきた新魔法の数々。そのうちの1つを新たに解放。フォックスバット・ラン。フェイトの高速移動魔法を基にして組み上げた、短距離高速移動魔法。とは言っても陸戦限定で、そのうえ直線軌道しか出来ないっていうものだけど。でもま、直線軌道っていう限られた動きしか出来ない分、その速度はなかなかのものよ。

「せぇぇぇーーーーいッ！！」

――バーニングスラッシュ――

制動を掛けることなくセイバーへ突っ込んで、炎を纏う"フレイムアイズ"の斬撃を横薙ぎに振るう。あたしの突然の高速接近にもセイバーは対応してきて、あたしと同じように"レヴァンティン"を横薙ぎに振るって迎撃してきた。

「むっ・・・！？」

「うりゃぁぁぁーーーーッ！！」

さっきまでのあたしなら力で負けて弾き返されていたか、それか受け流されて自滅していたかもしれないわ。でも、今のあたしの一撃を防いだり受け流したり出来るかどうかはこれからのお楽しみよ。高速突進からの全力斬撃。突進力も追加されたこの一撃に「ぐっ・・・！」セイバーが二度目の呻き声を上げた。そしてセイバーはあたしの一撃によって思いっきり弾き飛ばされた。１０数ｍと弾き飛ばされたセイバーが砂塵を巻き上げながら着地したのを見た。ダメージを受けたようには見えない。やっぱすごいわ、あの人。

（でも・・・やれる。うん、やれるわ。スリーズ・サンズレガリア・・・！）

午前9時から正午、午後3時から午後6時までの計6時間、あたしの魔力量や身体能力の限界値を底上げすることが出来るシステム、スリーズ・サンズレガリア。システム起動・解除は"フレイムアイズ"の持ち主であるあたしに委ねられてる。
時間が来たら自動起動でもいいじゃない、って思うところだけど、こんなチートみたいなシステム、なんのデメリットもなく使えるわけもなく。強力な分、反動も凄まじいのがこのシステム。なのはのエクセリオンモードと同じ。でも後天的に魔導師になっちゃった分、リンカーコアや肉体に掛かる負荷の重さはあたしの方が上みたい。

「フレイムアイズ！」

≪おう！　大盤振る舞いだ、感謝しろ、剣騎士セイバー！！！　カートリッジロード！≫

「すずか！！」

「うんっ！　スノーホワイト！」

≪かしこまりましたわ、スズカ≫

「パワーブースト・ガンファイアフォース！」

すずかの補助魔法、射砲撃魔法の威力強化をするパワーブースト・ガンファイアフォースが"フレイムアイズ"に付加された。そう。こっからがあたしとすずかの本当の全力よ、セイバー。

「イジェクティブ・ファイア！」

トリガーを引いて火炎砲撃を発射。スリーズ・サンズレガリアにカートリッジの3連ロード、さらにすずかの補助魔法で強化された砲撃。直撃は必倒確実。防御なんて無意味。砂漠を大きく抉りながら直進していく砲撃はセイバーの身長を超すほどに大きい。

「フレイムアイズ、次弾発射用意！」

セイバーも高速移動魔法を持っていることから十分回避できると思う。だけど、「ぶっ放し続けてやれば必ず隙は出来る！」はず。カートリッジをまた3連ロードして魔力チャージを開始。セイバーが"レヴァンティン"を鞘に収めてカートリッジをロードしたのが見えた。きっとまたアノ居合抜きをするつもりね。この距離からして高速移動魔法での砲撃回避、そして接近しての居合抜きっていう風

に繋げる気かしら。

――ヒルンダプス・カウダクトゥス――

セイバーの姿が掻き消えた。その姿を確認できたのはすぐ。砲撃の射線から横に数ｍと離れた場所。やっぱり回避してきた。さぁ、次は接近かしらね。

『（とにかく・・・！）すずか、後は頼むわよ！』

『うんっ、任せて、アリサちゃん！』

すずかと頷き合って、あたしは「イジェクティブ・ファイア！」さっきすずかに付加された射砲撃強化の魔法の効果が続いてる火炎砲撃をもう1発ぶっ放す。セイバーの姿が炎の向こう側になって見えなくなったその時。

――飛竜一閃――

セイバーから強烈な魔力が発せられたと思えば、「え・・・！？」何かにぶつかったのか砲撃の先端部がものすごい勢いで周囲に散らされていくのが見えた。そして「えええええ！！？」完全に炎が散らされちゃった。あたしとすずかはその信じがたい光景に驚くしかなくて。

「一体何が・・・？」「何をされたの・・・？」

≪ 呆けるな、アリサ！≫≪ スズカ、気を取り直してくださいませ！≫

――シュランゲバイセン・アングリフ――

あたしとすずかを取り囲むように高速で動き回る"レヴァンティン"の刃に、身動きが取れなくなった。

『妙な真似はするな。少しでも動いた瞬間、障壁破壊効果を持つこのシュランゲバイセンでお前たちを叩き潰す』

頭の中に直接聞こえてきたセイバーからの警告。手を伸ばせば届くほどの距離を動き回る刃だから、"フレイムアイズ"を持ち上げて構えることも出来ない。あたしの身動きは完全に封じられちゃったわ。現状で反撃が可能なのはすずかだけ。でも何か行動を起こせば、セイバーの言う通りすぐさま刃があたし達を襲う事になる。

（防御？　ダメ、あたし達の防御じゃセイバーの攻撃を防ぎきれない。あとは出来る事は・・・）

回避だけなんだけど。でも螺旋状にあたし達を囲う刃の隙間は人ひとりも通り抜けられない程に狭い。これは詰んだかも・・・。

『すずか。なにか良い案あったりする？』

『ちょっと難しいかも。魔法を発動しようとした瞬間に襲い掛かられたら防ぎきれないよ』

後の先を取れるほどあたし達の魔法発動時間は速くない。そのうえセイバーの攻撃力に対してあたし達の防御力はあまりに頼りないときてる。これなら出し惜しみせずにクレイモアフォームを使っていればよかった、って後悔する。

『アリサちゃん。私が全力で護るから、アリサちゃんだけでも脱出して』

『はぁ！？　馬鹿言わないでよ、すずか！』

あたしが中距離射砲撃でセイバーの気を引いて、すずかがバインドでセイバーを捕縛する、っていうシナリオだった。本音を言えば剣でのガチンコ勝負をしてみたかったけど、剣の腕じゃ、あたしの剣の師匠のシャルより強いかもってことで断念。でもチャンスがあれば挑んでみたい、とも思ってた。

（だからと言ってすずかを犠牲にしてあたし単独でセイバーに挑むわけにはいかないわよ！）

必死にこの状況を打破する方法を考える。でも「ダメ・・・・、浮かばない・・・！」ここで戦闘経験の少なさが出た。何をやろうとしても"レヴァンティン"の刃に裂かれる結果しか脳裏に浮かんでこない。降参することを視野に入れ始めた時、セイバーの様子がおかしいことに気付いた。さっきの1回だけで、あれから降参も促してこないし。

『こちらアースラ！　アリサちゃん、すずかちゃん！　結界外上空

に新たな守護騎士が現れた！　ガーダーだ！　くそっ、戦力の大半はランサーに向かっている今、ガーダーを止めることが出来ない！』

『アリサさん、すずかさん！　セイバーの捕獲は諦めましょう！
今は何よりあなた達２人の身の安全が最優先よ！』

アレックスさんとリンディさんから通信が入った。それはあたし達にとって最悪な知らせだった。さらに、『ガーダーが魔法を発動！
気を付けて！』って教えてくれたけど、この状況で気を付けろ、って言われてもどうすることも出来ないんだけど・・・。

――破城の戦杭――

ズドンって大気が震えるほどの轟音があたし達の耳を襲った。音の出所は頭上、結界のてっぺん。見上げてみれば「なにあれ・・・！」巨大な杭が結界にぶつけられてた。杭が打たれてるところからバキバキ、メキメキ、バリバリ、結界が割れていく音がし始めた。
そんな光景を呆けながら眺めていると、"レヴァンティン"の刃があたし達から離れて行って、元の剣形態に戻った。いつ斬られるか判らない事態から解放されたあたしとすずかは堪らずホッと安心した。

「こちらの事情が変わった。すまないが戦闘を切り上げさせてもらう」

セイバーはなにか焦ってるのか早口でそう言ってあたし達に背を向けて、空へ飛び上がった。あたしは「待ちなさいよ！」セイバーを

呼び止める。それでもセイバーは止まることなく、ガーダーの魔法によって破壊された結界の穴を通って、青空に消えていった。

Ｅｐｏｓ２０－Ｃ騎士と魔導師の戦舞踏～３ｒｄ　Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

日曜日を利用して本局に泊まり込みで特訓していた時、守護騎士の中でも特に戦闘能力が高い３人、槍騎士ランサー、剣騎士セイバー、鉄槌騎士バスターが現れたという知らせが入ったことで私たちは緊急出動。
三騎士が現れた世界はバラバラで、私たちは３組に分かれて捕獲に向かうことになった。バスターの居る第２５管理世界レクタへはなのはが。セイバーの居る第３３無人世界へはアリサとすずかが。そして・・・

「イリス・フライハイト、フェイト・テスタロッサ。・・・それに姿が見えないが周囲に十何人か居るな」

私とシャル、そしてランサーの察知している通り今は姿を隠しているけど、ランサーを逃さないための結界を張る局員が１８人、私の使い魔のアルフ、それにクロノ、あと本局の別部署から助っ人としてシャルの友達がランサーを捕獲するために、ここ第２８管理世界フォスカムの廃棄都市区画に赴いている。

「そうね。バレているなら隠す必要も無いよね。周りに居るのは結界魔法を得意とする局員たち。ランサー、あなたとの話し合いが失敗した時に、あなたを逃がさないための」

いま私とシャル、そしてランサーが立っているのは崩れかけのハイウェイ、その真ん中で私たちは対峙している。周囲にはいくつものビルが立ち並んでいる。ランサーの戦闘記録を見る限り、周囲にビルと言った遮蔽物があるのは嬉しい。

私たちの中で一番の射砲撃資質を有しているなのは以上の射砲撃魔法を使えて、近接戦で一番のシャル以上の腕前で、空戦機動力で一番の私、陸戦機動力で一番のシャル以上のスピードで、基本的に魔力変換資質は1つなのにシャルのように複数扱えて、さらに広域攻撃魔法も扱えるっていう、普通の魔導師や騎士とは一線を画す異常性の塊。そんなランサーと遮蔽物の無い場所での戦闘なんて考えられない。

「ランサー。これ以上の蒐集行為はやめて。あなた達の主、オーナーの命が懸かっているのは重々承知している。でも闇の書の完成は、世界の滅亡にも直結しちゃうの」

「管理局のデータベース、無限書庫で調べてみて判った。今の闇の書は、過去の主の所為で壊れているって。完成させると暴走してしまって主の魔力や、これまで溜めた魔力を使って無差別破壊を行うって」

ユーノやクロノの師匠であるリーゼ姉妹が調べくれた"闇の書"の現状を知って、私たちはすごく悲しくなった。ランサー達が"闇の書"を完成させればオーナーを救うことが出来るって信じて疑っていない、って考えると。完成させても救えず、それどころか死んじゃうことになるなんて。

それだけじゃない。完成を遅らせるために蒐集を行わないと、強制的に主の魔力を使ってページを埋めるって話もある。完成させてもさせなくてもどの道、主の命が無くなってしまう。こんな悲しい結末、どうすればいいのか私たちにも答えは出てない状況だ。

「だから管理局から提案があるわけ。あなた達の主、オーナーの身柄を管理局に預けてみない？　というかあなた達も来てよ。少々拘束することになるけど、悪いようにはしないから」

シャルがランサーを迎え入れるように両手を伸ばした。オーナーを救うためには"闇の書"を破壊するのが一番。でもそれじゃ守護騎士たちは救われない。八方塞がりだけど、私たちはオーナーも守護騎士たちも救いたいって強く思っている。

「オーナーは私たち騎士にとって大切で、大事な、とても愛おしい家族だ。それはオーナーも抱いてくれている想いだ。では訊こう、管理局にオーナーを救う術が有るのか？　守護騎士を犠牲にしない――闇の書を破壊しない方法で、だ」

可愛いチーターの頭部だけど、全身から放たれる威圧感は強い。返答によっては確実に戦闘に入ることになると思う。ランサーに訊ねられた私とシャルは顔を見合わせた後、「ごめん。まだ見つかってない」ってシャルは素直にそう答えて、「でも何としても見つけるから！」私はそう返した。

「話にならないな」

ランサーがバッサリと私たちの言葉を断ち切ってきた。すると当然、「だったら、あなた達は有るって言うの！？」ってシャルが怒鳴り声を上げた。私も同意を示すために頷いて見せた。方法が有るなら教えてほしい。もしそれが協力できるようなものなら協力したい。でもそんな方法は無い。それがユーノ達の答えだった。

「もちろん。だから私はリンカーコアの蒐集を始め、そして守護騎士たちに蒐集を手伝わせた。そう、此度の騒動は、全て私が始まりだ」

「「っ！」」

ランサーから告げられた話は、管理局側にとってはかなり重要な内容だった。蒐集を真っ先に始めたのはランサー。ランサーは（以前から考えられていたけど）守護騎士じゃない。何より「闇の書を破壊することなく救える、ですって？」シャルが驚くその内容だ。無限書庫の資料を漁っても出て来なかった最高の解決策。ランサーはそれを知っている？

「ランサー。本当に有るの？　世界を危険に晒すことなく、誰も犠牲にならない方法が・・・？」

「ああ。有る。だからこそ蒐集行為をやめる必要性は感じられない。邪魔をしないでもらおうか」

私の問いに答えてくれたランサーが踵を返して私たちに背を向けた。私は『どうするの、シャル、クロノ？』隣に居るシャルと、離れた

ところでモニターしている対ランサー作戦の指揮を任されているクロノに念話を通す。

『その方法が確かなのかも判らない今、野放しにしておくのは危険だ。やはり捕獲しよう！』

クロノから戦闘に入るように指示された。本当に悪い人たちじゃなく、ただ家族を救いたいってだけの優しい人たちなのに。"闇の書"のことを知れば知る程、ランサー達のことを止めたい、助けたい、救いたい、って強く思えたんだ。

「ランサー。悪いけど、任意同行って形でわたし達に付いて来てもらう」

「任意、ね。もちろん断ることも出来るのだろう？」

「わたしは優しさからそう言ってるんだけど？　本当なら今すぐにでも力づくで捕まえてもいいんだよ？　あなた達はすでにいくつか罪を犯してる。それを理由にしてさ」

シャルの指環が"キルシュブリューテ"へと変化した。シャルから、『ほら、フェイトも』そんな念話が来たから私も"バルディッシュ"を戦斧のアサルトフォームで起動させて、「ちなみに後者の状況になった場合、反撃も逃走も公務執行妨害になるから」とランサーに警告。お願いだからそれで踏み止まってほしい。

「そうか。この場合、罪になるのは私ひとりだけになるのか？」

「それは・・・そうね」

「ならいい。公務執行妨害でもなんでもどうぞ。私は帰らせてもらう」

――風牙真空刃――

シャルが"キルシュブリューテ"を鋭く振り降ろしたことで発生した真空の刃をランサーの足元に打ち込んだ。砕けた道路の欠片がランサーを襲う。それでランサーは足を止めて、「君たちに決闘を申し込む」そう言って振り返った。

「決闘・・・？」

「そう。この決闘は私闘となる。つまりは戦闘による怪我も、デバイス損傷も、そして敗北も自己責任ということになる。勝てたならば私を捕まえるといい。悪あがきはしない。しかし君らが負けたなら何一つとして文句は言わず、私の離脱を大人しく見逃せ」

「管理局員相手にそんな勝手が通るとでも？」

ランサーから出された決闘の提案に対してシャルがバッサリと断ると、「それもそうか。じゃあどうする、戦るか？」ランサーがそう言ってとても綺麗な蒼色の魔力を足元から放出した。その強烈な魔力量と衝撃波に、「きゃ・・・！」腰を落として踏ん張らないと吹き飛ばされそうになった。

「コホン。・・・公務執行妨害になってしまうがしょうがない。私としてもいま捕まるわけにはいかないからな。というわけで、私は逃げる」

――我を運べ、汝の蒼翼（コード）（アンビエル）――

魔力放出をやめたランサーの背中から蒼い魔力で形作られた剣が12本、翼のように展開された。

――多層封獄結界（パーガトリー・アークケイジ）――

――広域強装結界――

桃色の半球状結界が張られた後、その上から水色の半球状結界が張られた。桃色の結界は、シャルの友達で、私たちと同い年でありながらすでに最高位の結界魔導師と謳われているセラティナ・ロードスターのもの。水色の結界は局員たちのものだ。

ランサーは頭上をぐるりと仰ぎ見た後、剣の翼を解除して「エヴェストルム」デバイスの名前を告げる。そして左手に2本の剣の柄頭を連結させたような槍を携えた。この前は"バルディッシュ"の柄を一刀のもとに両断されてしまったけど、強化された今ならきっと・・・。

「結界、か。あくまで逃がさないと。・・・ならば来るといい。そして見事私に勝って見せろ。イリス・フライハイト、フェイト・テスタロッサ」

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。
其は全てを知り歴史を思い描く者・槍騎士ランサー
。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

「フェイト！」

――閃駆――

「え、あ・・・うんっ！」

≪Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ≫

こうなってしまったらもはや戦うしか道は無い。迷いは捨てろ、フェイト。私も覚悟を決めて、高速移動歩法（魔法じゃなくて技術だから驚きだ）で接近するシャルに続いてブリッツアクションの強化型魔法ソニックムーブでランサーへと突進する。私はランサーの左側、シャルは右側で急停止して、「はっ！」同時に"バルディッシュ"と"キルシュブリューテ"を横薙ぎに振るう。奇襲としては申し分ない速さだと思ったけど。

――暴力防ぎし（コード）、汝の鉄壁（ピュルキエル）――

ランサーの両側に展開された蒼い魔力で創られた円いシールドが私たちの一撃を防いだ。やっぱりただの打撃と斬撃じゃ貫けない、か。シャルと無言で頷き合って、ランサーから一度距離を取る。ランサーは余裕を気取るつもりなのか「速度は申し分ない」ってシールド

を解除、数ｍと離れて横に並び立つ私たちを見る。

『フェイト。コンビネーションで押し切るよ！』

『うんっ！』

個人魔法だけでなく、コンビネーション魔法も創り出した私たち。ランサーのような強力なオールラウンダーに単独で挑んでも勝てる、なんて甘い考えを持っているような管理局員はいない。

「それだけで私を墜とせると思っているのなら、ふざけるな、と言わせてもらうぞ？」

僅かな呆れを見せるランサーに向かって、「じゃあこれならどう？」シャルが駆け出しながら"キルシュブリューテ"のカートリッジを１発とロードした。長い刀身に付加されるのは雷撃だ。

――雷牙月閃刃――

シャルの突進と雷撃付加。それは私とシャルのコンビネーション魔法の１つの基点だ。

≪Ｐｌａｓｍａ　Ｂａｒｒｅｔ≫

「ファイア！！」

周囲に８基と展開した帯電（プラズマスフィア）した魔力球をランサーに向けて一斉発射。

雷撃弾プラズマバレットはシャルのすぐ側を通り過ぎて行ってランサーに殺到。ランサーはやっぱり防御力に自信が有るようで回避行動に移ることなく・・・

――護り給え、汝の万盾(ケムエル)――

新たに防御魔法を展開した。小さな円い盾を無数に重ね合せることで出来た大きな円い盾。私のバレットはランサーのその盾に防がれた。プラズマバレットは着弾時に放電しながら炸裂することでダメージ効果範囲が広くなる誘導射撃魔法だ。

まぁ今回はランサーの防御魔法の強度の所為で発揮されないけど、でもそれでいい。いま必要なのは周囲に散った帯電している魔力素だから。バレットだった魔力がシャルの帯電している"キルシュブリューテ"の刀身に集束される。

「せぇぇーーいッ！」

ランサーの前面に展開されている障壁を跳び越えるようにシャルは跳んで、ランサーの頭上へ。そしてシャルは、シャル自身と私の雷撃の魔力が集束されたことで強化された"キルシュブリューテ"を振り降ろした。

「コンビネーションか。同じ戦場に味方が居るからこそ可能な魔法だ。大事にするといい」

――暴力防ぎし(コード)、汝の鉄壁(ピュルキエル)――

最初に展開したシールドを再度展開。おそらくいま展開している単一の円いシールドが対物で、いま解除された小さなシールドを重ね合せたのが対魔力のシールドなんだ。ちゃんと使い分けがある。良い情報を得ることが出来た。
シャルの一撃がランサーのシールドに妨げられて、「キルシュブリューテ！」シャルはさらにカートリッジをロード。その間にも私は準備を進める。ランサーへと左手を翳して前面に魔法陣を展開。"バルディッシュ"のカートリッジを2発とロード。

――拘束の連鎖――

「捕らえたよ、ランサー！！」

シャルが零距離で発動させた鎖型のバインド魔法によってランサーの両足が地面に拘束される。それを確認した私は間髪入れずに・・・

――トライデントスマッシャーー――

「「雷覇・砲剣衝！！」」

魔法陣の放射面から砲撃トライデントスマッシャーを放った。魔法陣の中心から1本、その1本を中心として上下に枝分かれするように2本の砲撃を発射させて、着弾時にその3本を結合させて反応を起こすことで、単発着弾よりさらに威力を増加させる砲撃だ。

「砕けぇぇぇーーーーッ！！」

「うぐっ・・・！」

着弾寸前、シャルの一撃がランサーのシールドを砕いて、その一撃をランサーに浴びせた。そのすぐ後にトライデントスマッシャーがランサーに到着、着弾寸前に3本の砲撃は結合して反応。シールドを張ったようには見えなかったランサーへの着弾と同時に雷撃を爆発的に発生させた。

これこそが私とシャルのコンビネーション魔法の1つ、雷覇・砲剣衝（命名は大体シャル）。プラズマバレットで相手の足止め＋シャルが利用する帯電魔力素散布。シャルの強化された雷牙月閃刃とバインド魔法でさらに足止め。トドメに私のトライデントスマッシャー。シャルは着弾寸前で離脱。容赦なく相手を撃つことが出来る。

「よっとと。実戦でこうも上手く当てられるなんて、ツイてるかもねわたし達♪」

「シャル・・・！」

私の隣に降り立ったシャルと一緒にランサーの様子を伺う。正直、これで決まっていればいい、と思う。でも「やっぱそうよね～」シャルの言う通りランサーはまだ墜ちていなかった。全身からバチバチと放電しながらも佇んでいるランサーが煙の中から姿を現した。それに、ランサーをよく見れば全身を覆うように蒼い魔力が薄ら。

「けほっ、けほっ。・・・やるじゃないか。私に一撃を与えたのは君らが初めてだ」

「わたしの月閃刃にフェイトのトライデントを受けて、たったそれだけのダメージしか与えられていないなんて・・・一体・・・・！？」

「（・・・あっ！　もしかして・・・・）治癒魔法・・・・？」

破けた右袖から覗くランサーの素肌に付いていた傷が治っていくのを見逃さなかった。すると「良い目をしているな、テスタロッサ。ダメージを負った側から治癒魔法で回復させ続けたんだ」ってランサーは答えた。

開いた口が塞がらない。それが本当なら、一撃でランサーの意識を刈り取らないといけないことになる。それか治癒魔法の効果が追いつかないほどのダメージを与えるか。どちらにしても普通の攻撃魔法じゃランサーは墜とせないということだ。

「だったら・・・回復が間に合わないだけのダメージを与えるまで！！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

シャルはカートリッジを1発ロード。刀身に炎を噴き上がらせて、"キルシュブリューテ"を頭上に掲げた。そして「炎牙崩爆刃！」振り下ろしたことで放たれる火炎の斬撃。対するランサーは"エヴェストルム"をバトンのように片手でクルクル回して、迫って来ていたシャルの崩爆刃を迎撃。"エヴェストルム"と崩爆刃がぶつかり合った瞬間、私たちまで巻き込みかねない程の爆発が起きた。

『フェイト！　双月、いくよ！』

「『あ、うんっ！』バルディッシュ！」

≪Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ≫

爆炎から逃れるために一足飛びで後退した私とシャルは念話で打ち合わせ。"バルディッシュ"を戦斧のアサルトフォームから大鎌のハーケンフォームへと変形させる。

「ハーケン・・・セイバァァーーーッ！」

"バルディッシュ"を振るって放つのは魔力刃。以前のアークセイバーより速度はさほど変わってはいないけど、その威力は格段に上がっている。切断力はもちろん、魔力刃自体の硬度も上がっているため、早々に破壊されることはない。

「雷牙飛月刃！」

シャルも"キルシュブリューテ"を振るって、刀身に纏わせていた雷撃を私のハーケンと同じように三日月状にして飛ばした。２つの雷撃の刃は黒煙を裂いてランサーの元へ。と同時に、私とシャルもランサーへ駆けだして接近。

「何度でも試せばいい、付き合おう。そのうち思い知る。私を倒すことなど、君ら２人だけでは無理だということが」

黒煙を"エヴェストルム"で裂いて晴らすことでその姿を完全に表

したランサーは、"エヴェストルム"を振るってハーケンと飛月刃を余裕で弾き飛ばした。その一瞬を狙って、

――ハーケンスラッシュ――

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

――光牙裂境刃――

「「双月・破盾一閃！」」

バリア貫通効果と魔力刃の威力強化のハーケンスラッシュと、障壁・結界破壊効果を持つ光牙裂境刃による挟撃を行う。最初は高速移動の魔法と歩法で接近。左右から打ち込んで、間髪入れずに切り返して前後から打ち込む、一瞬のうちに４連撃を叩き込むコンビネーション魔法。戦闘開始直後の奇襲とはわけが違う。本気の全力での攻撃だ。特にシャルは完全にランサーを討つ気でいる。

――どんな事情があっても、秩序を乱す奴には目覚まし代わりの鉄剣制裁よっ！　ま、わたしだって連中を救いたいよ。だけど、私情に振り回されて結局すべてがアウト、なんていうのも嫌だから。だからこそ、わたしは敵対する奴は倒すよ。管理下に置いてからじっくり助けようってね――

シャルだってランサー達のことを助けたいって思っている。でもそれを私情としている。救うのは、助けるのはあくまで管理局下に入れてから。それが局員としての立場だってシャルは考えている。だ

から本気で、容赦なくランサー達を倒すことが出来る。

――護り給え、汝の万盾――

ランサーを覆うように展開された球体上のバリア――ううん、あの小さな円い盾で創られているからシールドだ。こんな風にバリアにもなるんだ、汎用性が高いな。でも、それすらも私たちの斬撃で絶ち斬って見せる。

最初の一閃でランサーのバリアを寸断。少し抵抗を感じたけど、なんとか斬り裂くことが出来た。小さく「これほどとは」ランサーが驚きの声を上げたのが薄らと耳に届いた。もうランサーの護りは無い。シールド再発動より早く最後の一閃を打ち込める自身がある。

≪Ｚｗｉｌｌｉｎｇｅｎ　Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍ≫

「「え・・・！？」」

とその時。私とシャルの一閃が防がれた。防御魔法じゃなく、ランサーのアームドデバイス、"エヴェストルム"に。"エヴェストルム"の柄の半ばが分裂して二剣一対となっていた。ランサーは最初の体勢から体を横に向けて、右手に持つ"エヴェストルム"で"バルディッシュ"の刃を止めて、左手に持つ"エヴェストルム"で"キルシュブリューテ"の刃を止めた。

「魔法は裂けてもデバイスは斬れなかったようだな。ま、斬られてデバイスが無くなったところで私にはなんら問題ない・・・が！」

「「きゃっ・・・・！」」

ランサーが腕の力を急に緩めたことで、力を籠め続けていた私は勢い余ってよろめいてしまう。しかもランサーはそのすぐに"エヴェストルム"を振るって斬撃を繰り出して来たから、回避することも防御魔法を発動することも出来なかった。

（それなら・・・・！）

咄嗟に構えた"バルディッシュ"を盾にすることは出来たけど、ランサーの一撃はとても重く、私は大きく弾き飛ばされてしまう。そんな中で「遊びは終わりだ」ランサーの厳かな声が聞こえてきた。宙で体勢を整えて道路に着地する。

『シャルは大丈夫！？』

『問題なし！　それよりも・・・・。やっぱりランサーのデバイスにも変形機構があったわけね～』

『うん・・・・』

シャルも私のように弾き飛ばされていて、ランサーから大きく離れてしまっていた。お互いの無事を確認して、一対の剣となった"エヴェストルム"を携えて道路に佇むランサーを見詰める。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

――集い纏え、汝の雷撃槍（フルグルゼルエル）――

２本の"エヴェストルム"が同時にカートリッジを1発ずつロードして、両方の刃に雷撃を纏わせた。そして「プラズマバレット」って周囲に蒼いプラズマスフィアを１８基と展開した。私の魔法をそのまま発動するランサーに、「え？」としか言えない。

「ファイア！」

――プラズマバレット――

私に９発、シャルに９発と放たれたバレット。その速度は私のものとは比べられない程のものだったけど、なんとかラウンドシールドを発動、着弾前に防御することが出来た。だけどそれで終わりなんかじゃなかった。

――知らしめよ（コード）、汝の忠誠（アブディエル）・バージョンドンナー――

"エヴェストルム"を覆っている帯電した魔力が大きく伸びた。それは私のフルドライブ、ザンバーフォームの"バルディッシュ"のよう。ランサーはその大きく伸びた魔力の刃を私とシャルに向かって振り降ろしてきた。

回避しようにも、さっき放たれたバレットが私たちを逃がさないように周囲を超高速で回っているから出来ない。私たちの中で一番誘導制御に優れたなのは以上の制御能力に、改めてランサーの異常さを思い知らされる。

「バルディッシュ！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　Ｄｅｆｅｎｓｅｒ　Ｐｌｕｓ≫

カートリッジ２発をロードして発動するのはディフェンサー・プラス。ディフェンサーの性能を強化したバリア魔法で、受け止めるより逸らすためのものだけど、いま私が有している防御魔法で一番強度のあるのがコレだ。さらにラウンドシールドをディフェンサー＋の上から展開。防御に集中することにした。

「っ・・・！」

ランサーの魔力刃がラウンドシールドに衝突。その衝撃が私の元まで届いた。見ればシャルの方にも同じように魔力刃を加えている。シャルもまたカートリッジをロード、防御魔法のパンツァーシルト３つを三角形状に重ねて組んだ、対魔力完全防御のシュヴェーラー・パンツァーを発動して魔力刃を防御していた。

――拘束の連鎖――

両脚に違和感が生まれから足元に目をやると、蒼いチェーンバインドが足首に絡みついていて、その先端は道路に繋がっていた。これってまさか・・「わたしの拘束の連鎖！？　うそでしょ！？」シャルが、さっきの私と同じ驚きを見せていた。それと同時。私とシャルを護っていたバリアとシールドがランサーの魔力刃によって破壊されてしまった。

（この構図・・・！）

バッとランサーを見ると、魔力刃が消失している"エヴェストルム"の穂先が私に向いていて、その前方にベルカ魔法陣が展開されていた。やっぱりそうだ。ランサーのこの一連の動作は全部、私とシャルの・・・。

「先ほどの礼だ、受け取ってくれ。・・・雷覇・砲剣衝！」

――轟き響け（コード）、汝の雷光（バラキエル）――

蒼い雷撃砲がその魔法陣から放たれた。バインドはまだ破壊できてなく、バレットの包囲もまた止んでいない。あの砲撃を防げるだけの魔力をひねり出すためのカートリッジをロードしている余裕も・・・！

「イリス！」「フェイト！」

――ラウンドシールド――

――サークルプロテクション――

そんな時、私とシャルの前に姿を現したのはクロノとアルフ。クロノはシャルを庇うようにラウンドシールドを発動、アルフは自身と私を包む半球状のバリアを発動した。そしてランサーの砲撃は「え・・・？」私たちの脇ギリギリを通り過ぎて行った。気が付けばバレットの包囲も消えていて。

「外れた・・・？」

私とシャルを拘束していたバインドも解除された。アルフが「どういうことだい？」首を傾げながらバリアを解除。クロノもシールドを解除して、シャル共々ランサーを警戒している。

「伏兵はたった2人、か。随分と甘く見られたものだな」

「くっ。僕とアルフを誘き出すために・・・！」

「そうとも。下手にフライハイトやテスタロッサの懐に踏み込んで君ら伏兵の捕縛や攻撃魔法を受けたくないからな。上手く行って良かったよ。えっと・・・」

「・・・時空管理局、執務官、クロノ・ハラオウンだ」

「フェイト・テスタロッサが使い魔、アルフ」

「ハラオウンにアルフ、だな。さぁ。今度は4人がかりで来るといい。それでも負けた場合は、大人しく私を見逃してもらおう」

――我を運べ、汝の蒼翼（アンピエル）――

――屈服させよ、汝の恐怖（イロウエル）――

「「「「な・・・っ！！？」」」」

また１２枚の剣の翼を背中に展開したランサーの頭上数ｍほど上、直径１０数ｍほどの円環の中から白銀に輝く巨大な右腕が出て来て、私たちの立つ道路をチョップで砕いた。私たちは慌てて空へと飛んだ。ハイウェイを粉砕した巨腕は一瞬にして消失した。

――殲滅（コード）せよ、汝（カマエル）の軍勢――

ランサーの戦闘記録で観た、色々な変換資質で創られた魔力の槍が空いっぱいに展開される魔法だ。ランサーは「私の側に来られるのなら来るといい。ジャッジメント！」指を鳴らして、その槍群を一斉に撃ち放ってきた。私とアルフは散開してそれぞれの飛行で回避。クロノも飛行で回避。でもシャルだけはベルカ魔法陣の上に佇んだまま、"キルシュブリューテ"を振り続けて迎撃。そして槍の雨が止んだところでシャルが「どうして・・こんなに胸が、心が苦しいのよぉぉーーーーッ！」泣き叫びながらランサーの元へ跳んだ。

（前世の記憶のフラッシュバック！？　ランサーを相手に！？）

『フェイト、アルフ！　イリスが暴走気味だ！　ランサーは僕が引き受け――』

――第二波装填（セカンドバレル・セット）――

さっき以上の槍が展開されて、「ジャッジメント！」ランサーがまた指を鳴らして号令を下した。再発射される槍群。跳び続けていたシャルはシールドや"キルシュブリューテ"で弾き飛ばしているけ

ど、その物量はあまりにも圧倒的すぎて・・・。

「きゃぁぁぁぁぁ！！」

「シャル！」「イリス！」

ついに墜とされてしまった。私とクロノは降り注ぐ槍群の中を飛んで、墜落して行くシャルの元へ。私は「クロノ、シャルをお願い！バルディッシュ！」のカートリッジをロード。

――マルチディフェンサー――

シャルに槍群が当たらないようにするために私が防御を担当。ラウンドシールドを多層展開。以前、なのはとの決闘の時、スターライトブレイカーで粉砕されたこともあるけど、あの時は疲弊しきっていたから。でも今は違う。ほぼ万全の状態である今、突破されることはない。って、そう思っていた。だけど・・・「そんな！」1枚、2枚、3枚目のシールドが突破された。

『フェイト！　もう大丈夫だ、君も避難しろ！』

背後へ振り向いて、クロノがシャルを抱き止めて槍群の効果範囲から離脱していくのを視認。私も続いて離脱を開始しようとした時、槍群が一斉に消失した。その代わりに・・・。

「ディバインシューター。フローズンバレット。プラズマバレット。ジャッジメント・・・！」

なのはとすずか、そしてまた私の魔力弾がそれぞれ５発、計１５発と一斉発射された。私へはシューターが、アルフにはプラズマバレットが、クロノとシャルにはフローズンバレットがそれぞれ迫って来た。

――ラウンドシールド――

私は振り返りつつシールドを発動。シューターが続々と着弾しては弾かれていく。そして弾かれたシューターは消えることなく、「っ！」シールドを回り込むように私へと向かって来た。防御はダメ。それなら迎撃するしかない。

飛行を再開して、５０階建くらいのビルを回り込んで急停止。振り返りつつ「ハーケンセイバー！！」"バルディッシュ"を振るって魔力刃を飛ばす。私を追って来ていたシューターがビルの角を曲がって来て、そしてハーケンと正面衝突。全弾斬り裂かれて消失した。

『フェイト！　今すぐそこから逃げて！！』

――轟き響け（コード）、汝の雷光（バラキエル）――

「『アルフ・・・？』えっ・・・・！？」

分厚いビルを貫通して来たのは一筋の蒼い雷の砲撃だった。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒シャル†††

ランサーとの戦闘の最中、起こりえないはずの記憶のフラッシュバックが連続で起きた。発端はランサーが"エヴェストルム"を携えた時。

――お前が、×××××・・・――

今のランサーのように漆黒の衣服を纏った誰か。名前もかすれて聞こえず、顔も陰で隠れていて見えない。この時胸に渦巻いたのは嫌悪。そして今度は剣の翼を展開した時と障壁を張った時。

――大丈夫だ。私と君が組めば、どんな災厄にだって負けることはない――

それはとても優しく、そして頼りになる勇ましい声。この時に胸に渦巻いたのは確かなる恋慕。次はフェイトの魔法をコピーした時。

――あなたって卑怯者ね。自分の魔道を使わず、他人の物を使うなんて――

誰かに向かって糾弾しているわたし？　相手の顔は――というより全身も見えない。胸に渦巻くのは嫌忌。トドメは何百と魔力の槍を展開した時。

――いくぞっ！　私たちで奴を討ち斃す！！――

もう一度回ってくる狂おしい程の恋慕――ううん、それ以上の愛慕。嫌悪→恋慕→嫌忌→愛慕とぐるぐる回ったからもうグチャグチャ。

記録で観ていた時にも変な胸騒ぎは起こっていた。でもこうして直に見て、頭の中がグチャグチャになっちゃうような懐かしさが溢れて、壊れちゃうんじゃないかって思えるほどに心が震えた。でもどうしてかそれと同じように憎く思えて・・・。

「しっかりしろ、イリス！　もしダメなら君は先に退け！」

わたしを抱えて飛ぶクロノからそう強く言われてしまった。すぐ「問題ない。やれる！」って答えて、「離して。ランサーの魔力弾を迎撃する」お腹に回されているクロノの腕をペシペシ叩く。

「判った。いくぞ」

クロノは一切反論せずにわたしを離してくれた。落下中に"キルシュブリューテ"のカートリッジを1発ロード、刀身に炎を纏わせる。そしてランサーの放ったフローズンバレットに向かって「炎牙崩爆刃！」炎の斬撃を飛ばして、全弾を蒸発させてやった。

「フェイト！　今すぐそこから逃げて！！」

と、そんな時。アルフの叫び声が聞こえた。ベルカ魔法陣を足場とする魔法、シュヴェーベン・マギークライスを発動して、そこに降り立つ。ランサーは二剣の柄頭を連結した元の"エヴェストルム"の穂先をあるビルへと向けていて、穂先から蒼く輝く雷撃砲をぶっ放した。

「やっぱりランサーって騎士じゃなくて魔導師じゃないの！？」

ディバインバスタークラスの砲撃をチャージ無しで発射したランサー。そうツッコみたくもなるほどの理不尽さには呆れ果てる。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

５発目のカートリッジをロード。刀身の峰側の付け根にあるコッキングカバーを上にスライドさせて、５連式リボルバーを露わにさせる。消費しきった空のカートリッジを排出して新しいカートリッジを装弾。魔法陣を空中回廊のように連続展開。空に浮くランサーの元へと接近しつつ、『フェイト！　無事！？』姿の見えないフェイトに念話を通すと、『ギリギリ避けれた！　今ランサーの開けた穴を通って接近中！』って応じてくれた。

『クロノ、アルフ！　予定通り２人は捕縛に集中して！』

『ああ！』『おう！』

『フェイト、莫逆之友（ばくぎゃくのとも）・・・行くよ』

『・・・うんっ！』

"キルシュブリューテ"のカートリッジを１発ロード。わたしとフェイトの接近に気付いているらしいランサーはまた"エヴェストルム"を二剣形態にして、それぞれ穂先を私たちに向けて来た。

――燃え焼け、汝の火拳（コード セラティエル）――

――轟(コード)き響け、汝の雷光(バラキエル)――

そして発射される炎熱と雷撃の砲撃。私には雷撃、フェイトには炎熱だ。わたしは跳躍して回避。ま、魔法陣の空中回廊が粉砕されちゃったけど。砲撃を発射した体勢のままのランサーへ、

――チェーンバインド――

クロノとアルフが発動した捕縛魔法が迫る。それに合わせてわたしと、ビルの穴から飛び出して来たフェイトが挟撃を行う。ランサーの両腕・両足が拘束されたのを視認してから・・・・

「光牙・・・」

「プラズマ・・・」

「烈閃刃！」「スマッシャァァァーーーーッッ！」

刀身に付加した純粋魔力を砲撃として発射。フェイトの雷撃砲との挟撃。ランサーは尚もチェーンバインドに拘束されたまま。防御魔法を発動する前に、「はい、直撃」２つの砲撃がランサーに着弾、大爆発を起こした。

『全員、油断はするな。ランサーの防御力は正しく――』

――舞(コード)い降るは、汝の無矛(パディエル)――

濛々と立ち込める塵煙から飛び出して来たのは、蒼い閃光で形作られた魔力の槍。わたしとフェイトに3本、クロノとアルフには4本。高速だけど直線的。僅かに体を傾けるだけで回避できた。フェイトもバレルロールで回避。クロノとアルフも回避したのを視認。

「キルシュブリューテ！」

≪ヤヴォール！　カートリッジをロード。法陣結界を展開！≫

わたしとフェイト、そしてランサーを閉じ込めるようにして32枚のベルカ魔法陣を展開。するとランサーが「ほう、これは・・・！」自分が置かれた状況を察したようだ。

「全方位からの高速にして連続の襲撃、耐えられる！？」

――閃駆――

――ソニックムーブ――

わたしは閃駆で、フェイトはソニックムーブで魔法陣を蹴って、法陣結界内を縦横無尽に駆け回る。そんな中で、結界の中央に居るランサーへと斬撃を繰り出していく。前から、後ろから、右から、左から、上から、下から、ありとあらゆる方向からフェイトと一緒に攻撃を加えているのに・・・

（ランサーの防御を崩せない・・・！）

移動速度やデバイスを振る速度に緩急を付けるなどのフェイント交えでの襲撃なのに、ランサーは二剣状態の"エヴェストルム"で的確に防御してくる。背中にも足裏にも目が有るみたい。

（というか、初見でここまで完璧に防御するなんてありえないんですけど！？）

わたしの真下からの斬撃を左の"エヴェストルム"で弾き返し、フェイトの右からの刺突を右の"エヴェストルム"で弾き逸らす。それでもランサーからは攻撃を仕掛けて来ない。さっきまでは射砲撃をバンバン撃って来ていたのに。もしかして、わたしの魔力切れを狙ってる？って思った瞬間、

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

――集い纏え（コード）、汝の火炎槍（フロガゼルエル）――

火炎を纏わせた"エヴェストルム"で反撃してきた。咄嗟に"キルシュブリューテ"を構えて防御したけど、その一撃はあまりに重くて弾き飛ばされてしまう。でも「まだまだ！」弾き飛ばされた先の魔法陣を蹴って、すぐさま攻撃に参加。何度でも、何度でも、何度でも、攻撃を繰り返す。

――ハーケンスラッシュ――

――炎牙月閃刃――

「「せぇぇぇーーーいッッ！！」」

フェイトと同時に左右から攻める。それを余裕で"エヴェストルム"で受け止めるランサー。表情が判らないから苦戦させているのかどうかさえも判らない。だけどさっきまでのように弾き返されたり、受け流されたりしないってところを見ると、もしかしたらって思える。今まで以上の火花が散る中、

「獲ったりぃぃーーーッ！」

「やった・・・！」

「っ・・・！」

ついにランサーの両手から"エヴェストルム"を弾き飛ばしてやった。この好機を逃すわけにはいかない。フェイトとなんの合図も交わすことなくその場でくるっと1回転して再襲撃。

（獲った！）

――舞い振るは、汝の獄火（コード サラヒエル）――

「「っ！！」」

ランサーの両手に現れたのは蒼炎の槍で、わたしとフェイトの勝利を確信した一撃が簡単に防がれた。そしてランサーは「はい、残念。

言ったろう？　デバイスが無くとも私には関係ない、と」そう言って、両手に握っていた蒼炎の槍を爆破した。
目の前が蒼一色に染まる。次いでこの身に襲い掛かって来るのは強烈な熱波と衝撃。悲鳴を上げているのに、自分の声が耳に届かない。感覚が告げて来る。今のわたしは大きく吹き飛ばされて錐もみ状態だって事が。

≪マイスター、気をしっかり！≫

"キルシュブリューテ"のＡＩの声が耳に届く。閉じているのか開けているのか自分でも判らない目に力を入れる。くるくると回る景色。曇り空に、廃棄された建物、灰色の地面。手は？　動く。足は？　動く。魔力は？　まだ十分残ってる。戦う意志は？　もちろん消えてない。

――シュヴェーベン・マギークライス――

魔法陣を展開して足場とする。というか「フェイトは！？」わたしと同じように吹き飛ばされたはずのフェイトの姿を探す・・・必要も無かった。フェイトはランサーと戦っていた。ビルとビルの狭間に移動していたランサー。フェイト、そしてアルフがビルの側面を足場にしてランサーへと突進を繰り返していた。

「ったく。局員の先輩のクセしてわたしは一体なにをやってんの、って話よね！！」

自分の不甲斐無さに呆れていたら「イリス！」頭上からクロノの声

が。

「大丈夫か！？」

「大丈夫じゃない」

「っ！　どこかダメージを――」

「ええ、心に大ダメージを負ったよ。情けなくて、悔しくて、どうにかなりそう・・・！」

意識が薄らいでいる最中でも"キルシュブリューテ"を離さなかったことについては褒めてあげたい。けど、フェイトを独りで、捕縛担当だったアルフを参戦させたそのミスには大声で説教をかましてやりたい。

「イリス。・・・保険として待機させておいた彼女を呼んだ」

「っ！・・・どうしてクロノ！？」

わたしの展開している魔法陣に降り立ったクロノに掴みかかる。わたしは、わたし達はまだ戦えるのに。クロノは「ランサーはまだ遊んでいる状態だ。半端に追い詰めて全力を出されるのは控えたい」ってわたしから視線を逸らしてそう答えた。解ってる。ランサーは未だに本気も全力も出してないってことくらい。

「だからと言って、このまま大人しく引き下がるわけにはいかない

って話よ！」

「イリス！？」

魔法陣の空中回廊を作り出して、フェイト達の元へと駆け出す。背後から「待つんだ、イリス！」クロノが制止してくるけど聞こえな〜い。そのまま直進しているところで、雷のようなものがフェイト達の側に建つビルの屋上に落ちた。

†††Ｓｉｄｅシャル⇒ルシリオン†††

「なんだ・・・？」

フェイトとアルフの挟撃を適当にあしらっていると、すぐ側のビルの屋上に落雷のような稲光が降って来た。それを合図にしたかのように激烈だったフェイトとアルフの攻撃が急に緩み、２人が俺から距離を開けていく。一体何が来たんだ？と思い、頭上を見上げる。

「聖王教会・銀薔薇騎士隊（ズィルバーン・ローゼ）所属・フォアストパラディン及び時空管理局本局・第１９９１航空た――じゃない、異動したんだった。本局・特別技能捜査課所属、アルテルミナス・マルスヴァローグ空曹長、推参！」

「！！！！！！！！！！！！！！！」

ビルの屋上より飛び降りて来た１人の少女。ローズピンクの長髪にエメラルドグリーンの瞳。そして「クスクス。これよりランサーの

撃墜を執行します！」特徴的な笑い声。それにアル"テルミナス"。アイツと同じ称号を名前に含んでいるあの娘は間違いなく・・・。

（先代テルミナスの転生体だと！！？）

――懲罰（コード）せよ、汝（マキエル）の憤怒――

彼女の存在に緊張と恐怖を感じ、俺は結構本気な光・雷・炎の三龍マキエルを発動。一斉に向かわせる。

――ツェアレーゲンシュラーク――

彼女の両拳がマキエルの鼻っ面に1発ずつ拳打を打ち込んだ。たったそれだけで「なに！？」マキエルが粉砕された。

――燃（コード）え焼け、汝（セラティエル）の火拳――

火炎砲撃3発を三方向から同時発射。彼女の両拳はなお青緑色の魔力を纏い、セラティエルに拳打を打ち込むとやはり粉砕された。

――暴力（コード）防ぎし、汝（ピュルキエル）の鉄壁――

対物理障壁を発動。彼女は「痛かったらごめんなさい！」そう謝り、ピュルキエルに掌底1発。一瞬で粉砕された。背に展開している飛行魔術、剣翼アンピエルの効果によってその場から急速離脱。彼女はシャルとは違って飛行魔法を修得済みのようで、「逃がしません！」俺を追って飛んで来た。

（神秘の無い魔法ではダメか・・・？）

魔術を使えば勝てそうな気もするが、ここで魔法から魔術へ切り替えるのもなんか癪だ。

――君は魔導師じゃない。魔術師だ。３ｒｄ・テスタメント・シャルロッテ・フライハイト。使えるものは使わなければ意味がない。デバイスと魔法で勝てないと判明したならば、即座に神器と魔術を使用するべきだった。君は何処まで行こうとも魔術師だ。魔導師じゃないんだ。その一線は忘れない方が良い――

かつて、シャルにそのようなことを言っていたクセに、な。迫り来る彼女をどう対処して追い返すか考え始めたところで、『ランサー！　ヒーラーです！』シャマルから遠距離念話が届いた。その切羽詰まった様子は、ベルカ時代を思い出させる。

『どうした？』

『オーナーとマスターが倒れたの！　いま私とガーダーでセイバーとバスターを迎えに行っているわ！　ランサー、急いで帰って来て！』

『っ！　了解した、すぐに帰還する！』

はやてとシュリエルが倒れた。先の"闇の書"事件を思い返す。かつてのはやても倒れ、そのまま入院。今回もそうなってしまうのか？

クリスマス――２５日まであと２日である今日２３日までなんの

異常も無かった。だから先の事件とは違うんだと思っていた。ああ、リーゼ姉妹が介入していないのだから先の事件のような悲劇は起きえないはずなんだ。

「（とにかく今は・・・）事情が変わった、時空管理局員諸君。私はこれにて失礼させてもらおう」

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

念話が切れると同時に俺は剣翼１２枚を背より離し細長いひし形の翼１０枚を展開、空戦形態ヘルモーズへ移行。飛行速度を一気に上げる。

「「「「速い！？」」」」

フェイト、アルフ、アルテルミナス、そして接近していたシャルから驚愕の声が届いた。彼女らに目をやる事なく、ひたすら頭上を見上げる。このまま結界を突破してくれる。

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース――

「がはっ・・・！（な、に・・が・・・！？）」

「逃がしません♪」

右脇腹に突き刺さるアルテルミナスの右拳。信じられなかった。ヘルモーズの速度について来られる魔導師や騎士が現代に居るなど。

飛行は中断され、俺は激しく咽る。振り被られる左拳。狙いは完全に俺の顔面。もし彼女の使っている魔法の効果が想像通りだとすれば、受けるのは非常にまずい。

「拳打強化（フェアシュテルケン）！・・・うおおお！　ファルコンメン・ツェアシュティーレン！！」

障壁ですら容易く拳打。そこに青緑色の魔力が付加された。威力はおそらく先ほどの拳打以上。ならばデバイスでの防御だ。"エヴェストルム"を構え、彼女の一撃に備えた。そして衝突。少女が繰り出せるような拳打とは思えないほどに重いその一撃に、「おい。冗談キツイぞ？」"エヴェストルム"からビシビシ、バキバキ、とひび割れる音が発せられた。

そして「馬鹿な・・・！」ついに"エヴェストルム"の片穂がへし折られた。その衝撃で俺は墜落。地面に激突する寸前で体勢を整えることに成功。"エヴェストルム"を待機形態の指環に戻し頭上を見上げ、彼女の追撃を最大警戒した直後・・・

「クロスバインド！」

「チェーンバインド！」

俺の四肢を環状魔法陣が拘束して磔の姿勢にし、続けて鎖が全身を取り巻くように締め付けて来た。クロノとアルフのバインドだ。

「すぐに砕いて――」

遅れて、「せぇぇーーーい！！」閃駆で突進して来たシャルが握る"キルシュブリューテ"の柄頭が「うぐっ！」俺の鳩尾に打ち込まれた。

「がはっ、容赦・・ぐふっ、げほっ、げほっ、ないじゃないか・・・！」

「ごめんなさい、ランサー・・・！　サンダーブレイド・・・！」

頭上から聞こえてきたフェイトの謝罪と術式名。俺の側に突き立って行くのは雷光の魔力剣６本。そして「ブレイク！」フェイトの号令の下に雷光剣は爆破、放電する。俺の全身に浴びせられる雷撃。本当に容赦ないな、アルテルミナスが現れてから。

「捕獲完了、ね」

アルテルミナスの声が背後から聞こえてきた。そうしてフェイトたち全員が俺の目の前へとやって来た。まさかここまでやってくれるとは。実力差を思い知らせて撤退させるつもりだったのだが。こんな隠し玉が居たとは。長引かせたのが失敗だったな。

「さぁ、ランサー。そのチーターの下に隠れているあなたの素顔、見せてもらうから。ルミナ。お願い」

「うん、イリス。さーてさて。どんな顔が拝めるのかな～？　次元世界を席巻したランサーのす・が・お♪」

俺の頭部に伸ばされてくるアルテルミナスの両手。約束の２５日――クリスマスまでは正体を暴かれるのは避けたい。ならば。

「すまないな。少々手加減が利かないかもしれない」

魔力炉稼働率（システム）アップ。魔力に神秘を付加。魔導式を魔道式へ昇華。

「何かする気だ！　意識を飛ば――いや、逃げ――」

――浄化（コード）せよ、汝の聖炎（メタトロン）――

足元から蒼炎を四方八方へと這わせ、即座に「浄炎粛清（ジャッジメント）！」号令を下し爆破させる。目の前のフェイト達が蒼炎に呑み込まれてその姿を消した。ギリギリで離脱していたのを見たから、直撃は受けていないはずだ。

「（バインドは解けたな）いま帰るよ、オーナー！」

結界の頂上へ向けて急上昇。

――破（コード）り開け、汝の破紋（メファシエル）――

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

上級閃光系砲撃ゲルセミに障壁・結界破壊効果のメファシエルを付加したうえで発射。ゲルセミは天を衝き、結界を粉砕して大穴を開けた。俺は穴を通り結界より脱出。そして追手がかかる前に転移を

行った。

Ｅｐｏｓ２１そうして彼女たちは真実の扉に手を掛けた～Ｋｎｏｃｋｉｎ'　ｏｎ　Ｔｒｕｔｈ's　Ｄｏｏｒ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

いつものようにルシル君とシグナムとヴィータがリンカーコアを回収しに出かけて、わたしとシャマル、ザフィーラ、シュリエルはお留守番。"闇の書"の空白ページも残り６０ページほど。今日明日で完成させることが出来るから３人だけで十分や、って。わたし１人で留守番した方がもっと早く完成できると思うんやけど、

――はやてを１人にはさせておけない。最低でもシャマルと、あと１人は常にはやてと一緒に留守番だ。だからはやてと過ごした時間が短いシュリエル。あぁ、それと男避けのザフィーラが適任だ――

ルシル君はそこだけはどうしても譲らへんかった。まぁ、それもわたしのことを想ってくれとるから思えば嬉しいことやけど。ルシル君の心遣いを嬉しく思っとると、キュッと胸が苦しくなった。そして「はぁ」溜息を吐いてしまう。原因は判っとる。ルシル君のことを考えるからや。

シャルちゃんの言葉で気付かされてしもうた。わたしは、ルシル君のことを家族やのうて１人の男の子として好きなんやってことを。気付かされてからとゆうもの毎日が大変やった。出来るだけ意識せえへんようにルシル君と顔を合わすのが特に。

（ルシル君はわたしを女の子やなくて家族として好きでいてくれと

る。わたしも家族として好きやった。そやからこれまで楽しく暮らせて来たんや。それを壊したない・・・）

もし告白してフラれたりでもしたらわたし、絶対に立ち直れへん。でも手を拱いてシャルちゃんにルシル君を取られんのも嫌や。唯一の救いは、ルシル君はシャルちゃんの告白を断ったこと。そやけど、それがいつまでも続くって思うのも早計や。
シャルちゃんのアプローチの強さはもう知っとる。その、キ、キ、キキ、キキキ、アレや、うん、アレ。人目も憚らずにあんな堂々と告白してアレするシャルちゃんのアプローチに押されてルシル君が落ちたらと思うと・・・。

――みんなに紹介するね。わたしの彼氏、ルシルで～す　――

――今までありがとう、はやて。俺、これからシャルと一緒に暮らすよ♪――

「そんなん嫌やーーーっ！」

「「っ！！？」」

思わず叫んでしもうた。それに、あまりに力み過ぎて買ったばかりのレシピ本を引き裂きそうになった。わたしと同じようにソファに座って恋愛小説を読んでたシャマルは「どうしました、はやてちゃん！？」、レシピ本を読んでたシュリエルは「主はやて、何かありましたか！？」ってゆう風に驚かしてしもうた。あと庭で体を動かしとるザフィーラも遅れて「主はやて、何かありましたか・・！？」

慌ててリビングに戻って来てくれた。

「コホン。なんでもないよ。ちょおイヤ～な夢を見た・・・かな？」

咳払い1つして誤魔化し。3人は、そうですか、って渋々っぽいけどそれで納得してくれた。それから今日の夕ご飯は何にしようかってザフィーラを除く女子3人で相談しとる時に、「ぐっ・・！？」シュリエルが手にしとるレシピ本をバサッと落として、左腕を押さえ苦しみ始めた。

「「シュリエル！？」」

「っく・・・あ・・うっ・・・・！」

ソファから転がり落ちたシュリエルの苦しみようは尋常やなくて。そやから「病院！」救急車を呼ぼうとしたけどすぐに思い留まる。厳密に言うと人やないシュリエルを病院に運んで良いかどうかとなれば、たぶんアカン。それやったら・・・。

「シャマル！」

「はい！　クラールヴィント！」

≪Ｊａ≫

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで！」

――静かなる癒し――

シャマルの足元にベルカの魔法陣が現れて、ここリビング一帯を包むかのように綺麗で温かな光が生まれた。治癒の魔法・静かなる癒し。わたしは"闇の書"の主として、みんなが使える魔法のことを全て聴いておいた。シャマルは癒しと補助の魔法を得意とする騎士。シャマルの魔法ならきっと・・・。

「ダメ！　効果が無い・・・・！」

「そんな・・・・！」

シャマルが悲鳴じみた声を上げた。シュリエルは「っ！　もう大丈夫だ」肩で大きく息をしながらそう言ってくるけど、どう見ても大丈夫なんかやない。左腕を押さえて、大粒の汗を額や顔に張り付かせたまま。

庭に戻ってたザフィーラにシュリエルの汗を拭うための濡れタオルを持って来てもらえるように思念通話で呼び戻して、「シュリエル・・・・」ザフィーラから受け取った濡れタオルでシュリエルの顔を拭う。

（そう言えば最近、シュリエルの左腕に妙な痣が有ったけど・・・・）

シュリエルとお風呂に入った時に見た黒い痣の事を思い出す。わたしは「シャマル！　シュリエルの左腕！」って指を差す。と、目に見えてシュリエルが動揺したのが判った。シャマルはわたしらから顔を逸らしたシュリエルが着とるセーターの左袖を捲り上げた。

「「っ！！？」」

シュリエルの白くて綺麗な左腕が見る影もなく黒く染まっとった。それによく見れば「蛇・・・？」が腕に絡みついて締め付けとるような痣やった。その痣を見たシャマルが「ナハトヴァール・・・！？」って驚きを見せた。

「シャマルはこの痣の事を知ってるん！？」

「え、あ・・・えっと・・・」

口ごもるシャマルの代わりに、「ナハトヴァール。私――闇の書の自動防衛運用システム。言うなればコレが、あなたを蝕んでいる呪いの正体です」シュリエルがそう教えてくれた。ナハトヴァール。聴けばオーディンさんの後の主が勝手に組み込んだシステムらしい。でも無理やり組み込んだ所為で管制プログラムのシュリエルの制御ですら受け付けず、暴走しとるんやって。

「でもどうして急にこんな・・・！？」

シュリエルは少し黙った後、首を横に小さく振った。なんとなくやけど、何かを隠しとるって思えた。わたしは「何か隠しとる事があるんなら話してほしい。それがわたしに関係あるんならなおさら」って言うて、シュリエルの左腕に触れた瞬間。

「っぐ！？」

バチッと静電気のようなものが指先から伝わって全身を回った。暗転する視界、フワリと浮かぶような感覚が襲ってきた。
そして気が付けば、そこは勝手知ったる我が家のリビングやなくて荒廃しとる戦場跡やった。瓦礫が並ぶ廃墟。燃える木々、どす黒い曇り空。これが夢か幻かってゆうのはすぐに判った。まず感覚が無いから。地面を踏みしとるわたしの両足裏から立っとるってゆう感覚が伝わってけぇへん。

（なんでわたしはこんなところに・・・？）

原因はきっとシュリエルの痣――ナハトヴァールに触れた所為や。わたしも"闇の書"の主として繋がってるからな。なんかの本で読んだ意識の共有みたいなやつやって納得してみる。とにかくや。こうなってしまった以上は何かしらの行動を起こさんと戻ることは出来ひんやろうし。ちょう歩いてみようかな、って思うたところで。

（シュリエル・・・！）

瓦礫の陰からシュリエルがフラフラ歩き出て来た。シュリエルの左腕に蛇が何匹と絡み付いて蠢いとる。きっとアレがナハトヴァールの本当の姿やと思う。瓦礫の影から出て来たんはシュリエルだけやなかった。甲冑を着込んで背中に大きな剣を背負った若い女の人。馬に乗っとるその人がシュリエルに向かって「早く歩きなさい。ノロノロしている暇はないのだから」って乗馬用の鞭みたいな物で叩いた。あんなんで叩かれたら痛いはずやのに、シュリエルは悲鳴を口に出さんかった。とゆうよりは出さんように食いしばっとる。

「ぅく、ですが・・・主アウグ・・・あぅ、スタ。・・・焦りは・・・仲間の死に・・・・」

シュリエルは本当に苦しそうで。シュリエルにアウグスタって呼ばれた主さんは「少しでも減らすためにお前にナハトヴァールを組み込んだのよ？」って聞き捨てならへんことを言った。あの女の人が、あんな気味の悪いものをシュリエルに・・・。

「噂に名高い闇の書の守護騎士が、ああもすぐに全滅するなんてね」

「っ！！」

（全滅・・？　シグナム達のこと・・！？）

それってつまり、シグナム達はもう・・・。脳裏に過ぎる赤い水溜まりの上で倒れとるシグナム達の姿。

「～～～～～～～～～ッッッ！！！！」

わたしは両手で頭を抱えて蹲って声にならへん叫び声をあげた。最悪すぎる想像をしてもうた。そんな時、わたしのすぐ側まで足音が近づいて来てるんが判った。顔を上げると、「っ！？」アウグスタって人が目の前に立っとった。

「闇の書は、私の物よっ！　渡さない、渡さない、渡してなるものですか！」

そう言ってわたしの顔を両手で挟んできた。ギラつくアウグストさんの黄金の瞳に、わたしの怯えた顔が反射しとる。ギリギリで締め付けられてくわたしの顔。恐くなって「離して！」ドンッと強く両手で押す。アウグスタさんはフラフラと後ろに下がっていって、背中に背負ってた剣を手に取って「闇の書の主は、過去も現在も未来も、全てにおいて私だけ！！」そう言って剣をわたしに振り降ろしてきた。

「シュリエルぅぅーーーーッ！！」

キュッと目を強く瞑って、大切な家族の名前を呼ぶ。目を閉じて真っ暗な視界の中、頭上から聞こえてきたんはガキィーンとゆう金属音。恐る恐る目を開けて見上げてみる。アウグスタさんの剣は「シュリエル・・・！」の左腕に装着されとる籠手？のような物で防がれてた。

「アウグスタ。過去の主よ。今の私の――いいや、私たちの主はお前ではない。この幼く、しかし心の大きな少女、八神はやてだ！」

「渡さない、お前は私のものよ。私の覇道がための道具な――」

「ちゃう！　シュリエルは道具やない！　シュリエルは・・・わたしの家族や！」

シュリエルがアウグスタさんの剣を弾いて後ろに退かせた。その隙にシュリエルはわたしを抱え上げて、「戻りましょう、主はやて。

皆が待っています！」って言うて空高く飛んだ。その最中でも、「お前はぁぁぁ・・・私の物だぁぁぁぁーーーーー！！！」アウグスタさんの絶叫は止まらへんかった。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒シュリエル†††

「さぁ、闇の書のページも残り４０ページを切った。はやてと一緒にクリスマスを祝うため、今日２４日クリスマスイブも１日使ってリンカーコアの蒐集に勤しもう」

私と主はやてが倒れた２３日の夕方。あれから半日と経ち、今は２４日の午前９時過ぎ。主はやてとシャマルとヴィータは、これから病院へと出掛ける主はやての支度を手伝い、そして私とシグナムとザフィーラはリビングにてルシルの話を聴いている。

そんな中、主はやて達の賑やかな声が漏れ聞こえてきた。昨日、ナハトヴァールが本格的に目醒めだしたことで生まれた苦痛によって私は倒れ、その後に私の左腕に触れて倒れてしまった主はやてだったが、今はああして元気でいてくれている。しかし・・・。

（それもあと僅かの時間・・・。早く完成させなければ・・・！）

意識を失い倒れてしまった主はやての介抱を意識のある私が受け持ち、シャマルとザフィーラにはシグナムとヴィータ、そしてルシルを迎えに行かせた。

そうして無事に帰って来た皆に事情を話した。そこでルシルがナハトヴァールのことを知らないと言ってきたのだ。ルシルは様々な事情を知り、今回の一件の主導権を握ってきていた。それに管理局と

の繋がりもある。ゆえに知っているものだとばかり。

。―。―。回想だ。―。―。

「――そういうわけなのだ、ルシル。ナハトヴァール。お前が何も言わなかったから知っていたものだと思っていた・・・」

「ナハトヴァール、か。それが闇の書を暴走させている最大の原因なんだな？」

「ああ。自動防衛運用システム、ナハトヴァール。かつての主、アウグスタが組み込んだ代物だ。だがナハトヴァールを受け入れることの出来なかった私――管制プログラムや自動修復プログラム、そして元より有った防衛プログラムを侵し、書き換え、連鎖的にさらに暴走させた」

「なるほど。・・・先とは違う夜天の書の闇、か」

ルシルが何やら考え込むように俯き、ボソボソと何か呟いた。また何かしらの企てを考えているのだろう。そして「はやての侵食率、というかあとどれくらい保つ？」とあくまで冷静さを崩さないルシルにそう訊ねられた。

私を侵すナハトヴァールの痣は左腕に留まらず左胸まで達している。しかも主はやてが触れた事で、主はやてへの侵食も急激に進んでしまった。主はやての左腕と左胸部にも浮かび上がったナハトヴァールの痣。その侵食率からしてあと・・・「２日だろう」と答える。

「2日かぁ。まぁ、問題ないだろう。シナリオは変更しない。闇の書の完成も間近。やることは変わらない」

主はやてのお部屋へと目をやるルシル。ベッドの側にはシグナムとヴィータ、シャマルが居り、ベッドで眠る主はやてを心配そうに見守っている。皆のその姿を見、「ルシル。本当に我々は救われるのだろうか・・・？」私は不安からルシルにそう訊ねた。

「俺はあくまで手伝いだ。君たちを救うのははやての強い想い。でもきっと上手く行くさ。はやてなら必ず」

「そう、だな。主を信じきれずに何が騎士か、というものか」

ルシルの心強い言葉には本当に救われる。ルシルは「先に休ませてもらうよ。少々疲れた」と言ってリビングを後にしようとした。私は「ああ、お休み」と挨拶を言う。ルシルも挨拶を返してくれたのだが、その後に「ごめん、シュリエル」また何かしら呟いた。訊き返そうにもすでにルシルの背は見えず。

「悪い癖だよ、お前の呟きは」

そうして私も一度主はやてのお顔を見るべく、主はやてのお部屋へと歩を進めた。

。―。―。終わりだ。―。―。

「ホンマにすごいなぁ、ルシル君。痣とかなんも判らへん」

主はやてがヴィータの押す車椅子に乗ってリビングへ入って来た。これから病院で肌を晒すことになる主はやて。しかし左腕と左胸部のナハトヴァールの痣をどうするか、と私たちは悩んだ。病院の診察予定日であるゆえ、すっぽかすわけにもいかず。

そんな時にルシルが魔法で痣を隠すという話を持ちかけてくれた。ミッドでもベルカでもない、全く別の魔法を使って主はやての痣を消した――というよりは見えなくした。これで魔法関係者ではない病院の石田医師に肌を晒しても問題は無い。

「気に入ってもらえたようで何よりだよ。それじゃ、シャマルとヴィータははやての通院の付き添い、シュリエルとザフィーラは留守番。俺とシグナムで蒐集だ」

「ルシル。私は1人でも問題ない。ザフィーラも蒐集班に回して――」

そこまで言いかけた時に「アカン！」主はやてが大声が私の言葉を遮った。

「シュリエルが1人の時にまた倒れたりでもしたら、誰も助けてくれへんやんか！」

昨日のように私が倒れたとしても誰かが居てくれれば連絡を寄越せる、ということでザフィーラが私と一緒に留守番する事になってしまった。私としては1人でも構わないと思うのだが、それは主はやてがお許しにならないようだ。

「主はやての仰る通りだ、シュリエル。お前もまた我らの家族だ。心配するのは当然だろう」

「そういうこった。お前は大人しく待ってろ。シグナムとルシルが今日1日で集めて帰って来るからさ。な？　シグナム、ルシル」

ヴィータからの期待の眼差しを受けたシグナムとルシルは「ああ！」強く頷き返した。そうして主はやてはヴィータとシャマルを連れて病院へ、シグナムとルシルはリンカーコアの蒐集の為に転移を行い、私とザフィーラは留守番で家事を担当することになる。洗濯に掃除などなど。皆を見送った後、早速洗い終わった洗濯物を庭で干し、ザフィーラは何気に体力の要る風呂・トイレ掃除を始めた。

「これまで祈る神など持ち合わせていなかったが、でもどうか。どうか、もうしばらく私たちの平穏をお守り下さい」

美しい青い空の下、私はそう願わずにはいられなかった。

†††Ｓｉｄｅシュリエル⇒シャル†††

対ランサー班のわたし達、対セイバー班のアリサとすずか、対バスターのなのはは守護騎士との戦闘後、一度アースラに戻って仮眠。そこから海鳴市のハラオウン家に戻って、リビングで朝食を終えた。対ランサーの助っ人として呼んでおいたルミナとセラはすでに本局に帰ってもらった。本当はもっと力を借りていたいけど、いつまでもレンタル出来るような軽い局員じゃないしね２人とも。

「それじゃあ改めてみんな、ご苦労様。結果として守護騎士の捕獲には至らなかったけれど、いくつか判明したこともあります。まずはそれを喜びましょう」

リンディ艦長がわたし達をそう労ってくれた。

「艦長の言う通りだ。捕獲は出来なかったが、ランサーから興味深い話を聴くことが出来た。闇の書を破壊せずともいい方法がある、と。詳細は聴けなかったが、守護騎士やその主と深い関わりを持っている彼だ。僕たちが未だに知らない情報を持っているに違いない」

クロノが深刻そうにみんなに伝えた。ランサーのその話を直に聴いていたわたしとフェイトも小さく頷く。そこでなのはが「でもユーノ君やリーゼさん達が調べた情報だと・・・」って小さく手を挙げた。時空管理局が誇る巨大データベース・無限書庫。そこで調べた限りでは、"闇の書"の主を犠牲無くして救う方法は無い、ということだったけど・・・。

「それについてはユーノやリーゼ達にすでに報告してある。驚いてはいたが、その方法を自分たちでも見つけ出してみせる、と意気込んでいたよ」

「やはりランサーから詳しい事情を伺う必要があります。彼が闇の書の主と守護騎士を救える手段を見つけたからこそ、今回の一件が始まったようなものですから。みんな、もう少しだけ頑張って」

リンディ艦長の話にわたし達は「はい！」と強く返事した。

「それでだ。これからの僕たちの行動について話す。まずはフェイト、なのは、アリサ、すずかの４人は学校へ。今日は終業式だ、ちゃんと出席しないと。艦長とエイミィとアルフは自宅で待機となり、僕とイリスは一度本局に帰る」

なのは達は聖祥小の制服姿。今日は平日だからね。なのは達は学校だ。この場に居ないアリシアは学校でたくさんの友達を作っていて、わたし達の誰とも行動することなく遊びに行く場合もある。今はフェイトとアリシアとアルフの３人部屋で、携帯電話で友達と話をしている。ちなみにわたしは本局へ戻るために久々に局の青制服を着てる。

「今度はシャルちゃんも本局に行くの？」

「まあね。ランサーが最後に放った魔法の直撃を受けて、"キルシュブリューテ"の刀身が歪んじゃってね。マリエルに修理を頼もうと思って」

すずかにそう答える。今の今まで絶対に不備が起きることが無かった"キルシュブリューテ"を修理に出す。ランサーの魔法、やっぱり普通じゃない。特に最後の炎の魔法は。わたしの"キルシュブリューテ"には残念なことにリカバリー機能は無い。そんな機能が必要無いくらいに頑丈に作ってもらったから。でもランサーの魔法で刀身が歪んだ。憎たらしいやら称賛したいやら、もうホントメチャクチャだよ。

「僕はリーゼ、というより2人のマスターであるグレアム提督に呼ばれたんだ。何か渡しておきたい物があるって話だったが・・・。それは置いておいて。ほら、そろそろ出ないと遅れるんじゃないのか？」

クロノが時計を指さすとなのは達は目に見えて焦り出して、「いってきます！」って慌てて玄関を出て行って、フェイトは「っとと。アリシア、急がないと遅れちゃうよ！」って部屋に突撃。部屋の中から「いま行く～♪」なんとも呑気なアリシアの声が聞こえてきた。

「リンディさん、シャル、クロノ、エイミィ。いってきま～す♪」

「いってきます！」

ドタバタと出かけて行くフェイトとアリシアを「いってらっしゃい」とみんなで見送った後は、わたしとクロノのお出かけだ。リンディ艦長たちに「いってきます」と挨拶してから別室のトランスポーターに向かって、そして中継ポートを乗り継いで本局へ。

「しかしグレアム提督は僕に一体何を渡すつもりなんだろう？」

「う～ん、なんだろうね～。何をプレゼントしてもらえるのか判んないけど、出来れば良いモノを貰ってきてよね」

「それは僕に言うセリフじゃないだろ？　そういう君も、きっちりキルシュブリューテを直してもらって来い。いつランサーが動くか

判らないからな。おそらく闇の書の完成まで残り数日と言ったところだろう」

「判ってる。最後の最後で間に合わずに見学組なんて死んでも嫌だもん」

お互いの目的地に着くまでの廊下でクロノと話す。そんな空しい形で"闇の書"事件の最後に立ち会うなってごめんだわ。

「そうそう。クロノってクリスマスってどうするの？」

「地球での祝日だったか？　この事件も片付いていないと言うのに局員が遊んでなどいられるか」

グサッと来るクロノの返事。そんなわたしを見たクロノが「君は遊んでくるといい。僕は気にしない」なんて言ってきた。嫌味か、こんちくしょー。まぁ、クロノのことだからそんな意味で言ってないと思うけど。クロノが、純粋に楽しんでこい、って言ってくれているんだから「お言葉に甘えま～す♪」クロノの前に移動して、見上げるようにしてウィンク。

「っ！　そういうことをイチイチするな。君の悪い癖だぞ。変な男にそんなことをやって勘違いされても知らないぞ」

「だいじょ～ぶ。わたしの想いはルシル一途。それに、こんなことをするのはクロノだけだよ♪　からがいがいのある、ね♪」

「コラ！」

「きゃーー♪」

振り被られた拳から逃れるように頭を抱えて逃走。っと、「ここで一旦お別れね、クロノ」目の前に広がるエレベーターホール。上に行けば執務部、下に行けばわたしの目的地の技術部区画。

「ああ。お互いに良い実りを受け取れるといいな」

クロノと拳を突き合わせてから別れて、別々のエレベーターに乗った。技術部区画のフロアで降りて廊下を歩いていると「あれ？　ルミナ」が前から歩いて来た。アルテルミナスもわたしに気付いて「やっほ、ちょっとぶり♪」手を振ってくれた。

「ルミナも技術部に用が？」

「まあね。パーシヴァル君の槍を受け取りに来たの」

ルミナの手の平に乗る白い懐中時計、「ロンゴミアントを？」を指さす。パーシヴァル君。聖王教会の最高戦力、銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼに所属している騎士で、フルネームはパーシヴァル・フォン・シュテルンベルク。

わたしたち聖王教会が崇める聖王家の御一人、聖王女のオリヴィエ様。それに覇王クラウス・G・S・イングヴァルト、冥王イクスヴェリア、雷帝バルトロメーウス・ダールグリュンなどと言ったベルカ史の中でも超有名な騎士たちと交友があったとされる、ベルカ史

上最強の一角と謳われてる騎士、魔神オーディンの子孫だ。

「痛っ！？」

「どうしたの？」

胸に痛みが奔った。けど理由が解らないから、「ううん、なんでもない・・・」そう訊いてきたルミナにそう答えておく。

「ならいいけど。・・・ねぇ、イリス」

「ん？　どうしたの、そんな深刻そうな顔して」

なかなか見ることの出来ないルミナの真剣な顔に言い知れない不安が胸の内に生まれた。ルミナは何か迷うような仕草をした後「マリアンネ枢機卿から止められているんだけど・・・」いきなりわたしの母様の名前を出してきた。

「実はちょっと聖王教会で事件が起きてね。全パラディンが招集されたの」

「パラディン全員が！？　一体どんな大事件が聖王教会内で起きたって言うの！？」

パラディン。聖王教会騎士内で各種戦闘技能において最強とされる騎士たちに与えられる称号だ。ルミナは拳闘において教会騎士最強だからファオストパラディン。パーシヴァル君は槍術で最強の騎士

だからシュペーアパラディン。残念ながらわたしはまだパラディンの域に達してない。でもいつかシュペーアトパラディンになって見せる。

「教会からある物品が盗まれたのよ」

まさかの「コソ泥騒ぎ！？」だった。ていうか教会内に泥棒が入って、盗んで、逃げるなんて出来るわけがないんだけど。あそこのセキュリティって結構なものだし。

「そう。盗まれたのは聖王教会の中でも最高クラスの聖遺物。聖王女オリヴィエ様の聖骸布と魔神オーディンの髪輪よ」

「んなっ！！？」

とんでもないことを言ったルミナ。聖王教会を代表する聖遺物じゃない、両方とも。そんな物を盗み出せるような奴が居るとは思えない。というか「パーシヴァル君ってもしかして今・・・」脳裏に過ぎるのはブチギレてる彼の姿。

魔神オーディンの髪で作られたとされる腕輪は、パーシヴァル君らシュテルンベルク家の家宝だ。それが盗まれたとなれば・・・。ルミナは苦笑しながら「それはもう酷い有様。盗んだ奴をブッ殺す！って息巻いてて。近寄り辛いわ～」そう話してくれた。

「・・・でも、どうしてわたしに教えなかったんだろう、母様。オリヴィエ様のことを尊敬しているわたしに伝えるのは当たり前じゃない？　いくらわたしがパラディンじゃないとしてもさ。なんか悔

しい」

わたしが尊敬しているオリヴィエ・ゼーゲブレヒト聖王女殿下。その聖骸布を盗んだド畜生の捜索にはわたしも参加したいし、犯人をぶちのめしたい。母様もわたしがオリヴィエ様のことが大好きなのを知ってるのに。

「あなたにはあなたの仕事があるでしょ今。闇の書事件。マリアンネ枢機卿はご存じよ。あなたが地球で出来た友達と一緒に頑張ってるってことを。イリス。盗人探しは私たちパラディンに任せて、あなたは自分の仕事を全うして。・・・じゃあ私はこれで。またね」

「あ、うん。またね、ルミナ」

去って行くルミナの後ろ姿を見送った。ルミナの言う通りだよね。今は"闇の書"の方を解決させないと。わたしも改めて技術部区画へと歩き出す。

「あ、そうだ。パーシヴァル君を少しでも冷静になれるように・・・」

携帯電話で撮影したある写真を通信端末へ送信、そこからパーシヴァルの通信端末へと送信。わたし、フェイト、アリシア、アルフ、それになのはやアリサにすずか、そして八神家の全員で撮った集合写真。大人で美人なシグナムやシャマル、シュリエルに、彼もドッキドキ。

お姉さん好きなパーシヴァル君のことだし、怒りも薄れて少しは冷

静になるはず。どんな返事が来るか楽しみにしながら歩みを再開すること僅か１０数秒。通信端末にコールが入った。きっとパーシヴァル君だ。「はいは～い。イリスです～♪」コールに応じる。

『イリス、お前な！　シグナム様たちの画を勝手に使ってんなよ！　というかいつ手に入れたんだよ！　いやそれよりもすごい合成技術だな、あとで教えてくれ！』

なんでかメッチャ怒られちゃった。ううん、そんな事よりも「どうしてシグナムの名前を知ってるの、パーシヴァル君」って訊き返す中、ドッと嫌な汗が全身から噴き出してきた。なんか気付いちゃいけない、でも知らないといけない真実がいま目の前にまで来ているような・・・。

『知っているも何も。かつてベルカがまだ存在していた頃にシュテルンベルク家が誇ったグラオベン・オルデンという騎士様たちの御一人だぞ！　俺がもっとも尊敬しているシュテルンベルク家の先祖である魔神オーディン様とその仲間、シグナム様、ヴィータ様、シャマル様、シュリエルリート様、ザフィーラ様、それに現代では生死不明だけど、融合騎のアギト様とアイリ様』

パーシヴァル君の口から発せられた、地球で出来たわたしの友人たちと同じ名前に、「・・・うそ・・・」わたしは全身から力が抜けてへたり込みそうになった。グラオベン・オルデン。シュトゥラの最強戦力とされた少数精鋭の騎士隊。知っていた。知っていたけどメンバーの名前とか顔とかの詳細などは知らなかった。

『嘘なものか！　ちょっと待っていろ。シュテルンベルク家の家宝の1つ、グラオベン・オルデンの集合絵画を見せてやる！　ベルカ崩壊時の混乱の中で残された貴重な1枚だ！』

パーシヴァル君から送られてきた1枚の絵画写真。頭の中が真っ白になる。椅子に座る銀髪の青年。この青年が魔神オーディン。ルシルをそのまま大人にした外見。側に立つのはシグナム達と瓜二つ・・・というより本人たちだ。オーディンの両太ももに座る幼い子供が、融合騎のアギトとアイリ。生死・行方ともに不明。

『ほら、教えてくれよ、イリス。どうやってグラオベン・オルデンの画を手に入れ、こんな完璧な合成写真を作ったのかを』

「・・・ごめん。その話はまた後で・・・」

『あ、おい！　イリ――』

通信を切って電源を落とす。わたしはフラフラと壁に寄りかかってとうとうしゃがみ込んでしまう。漏れる溜め息と、そして「どうしてこんなことになっちゃったわけ・・・」深い悲しみがわたしを襲う。でも・・・。

――オーナーは私たち騎士にとって大切で、大事な、とても愛おしい家族だ。それはオーナーも抱いてくれている想いだ――

「あぁ、そうか。そうよね。家族を助けるためにはあんな無茶な手段を取るしかなかったんだよね」

はやてとシグナムたち守護騎士と絆の強さは十分理解してる。これまでの八神家と関わりを持っていれば嫌でも思い知る。本物以上の家族に思える、笑顔が絶えなくてとっても温かな八神家。ここでわたしは通信端末の電源を入れ直してパーシヴァル君にコール。

『なんだよ、イリス。教えてくれる気にな――』

「ごめん、パーシヴァル君。オーディンのデバイスの名前って判る？」

『オーディン様のデバイスの名前？　よーく聞け。オーディン様の御夫人、エリーゼ卿の日記に記されていたのを読んだことがあるから知っている。その名も・・・剣槍エヴェストルム！』

「っ！　ありがと、パーシヴァル君！」

『あ、おい！　ちょっ――』

通信を切ってまた電源を落とす。そしてわたしは急いで技術部区画を目指すために駆けだす。その最中に『クロノ！　守護騎士と主の正体が判った！』ってクロノに通信を入れる。

『なにっ！？　それは確かな情報なのか！？』

「ほぼ確実よ！　オーナーの正体は・・・はやて。八神はやて！守護騎士はシグナム、ヴィータ、シャマル、シュリエルリート、ザフィーラ！　ランサーの正体はルシリオンよっ！」

『・・・なにぃぃぃ！！？』

パーシヴァル君とした話、そして得た情報をクロノにも伝えると、

『何てことだ。彼らが守護騎士とその主・・・！』クロノもかなりショックを受けてる。クロノはわたし達より八神家と関わっている時間は短いけど、それでも顔合わせくらいは済んでるし、話もした事があるからね。

「クロノ。リンディ艦長たちに連絡を！　あと家宅捜査の令状を！」

『あ、ああ！　君は！？』

「まだキルシュブリューテの修復を終えてない！　先に帰ってて！」

『・・・判った！　待っているぞ！』

通信を切る。そしてわたしは、"キルシュブリューテ"の修理のために第零技術部へと向かって全力ダッシュ。

「ドクター！」

第零技術部と廊下を隔てるドアがスライドして開いて行くんだけど、あまりに遅く感じたから回し蹴りで無理やり早く開かせる。

「ぶふっ！？　騎士イリス！？・・・急になんだい、女の子がやることではないよ。なぁ、チンク？」

「あー、はい、そうですね。・・・イリス。はしたないぞ」

「ごめん、今はそれどころじゃないの！　ドクター、キルシュブリューテの修復をお願い、大至急で！」

"キルシュブリューテ"の待機形態である指環をドクターの目の前に突き付ける。ドクターは自分が完成させた作品の不変を信じて疑わないけど、わたしの真剣さに「少し待ちたまえ」事情を聴かずに指環を受け取ってくれて、作業室の方へ入って行った。

「ドクターが改良したキルシュブリューテに損傷を与えることが出来る者が居るとは。どういった者なのだ？」

「古代ベルカ史に名を残す、魔法においてはベルカ最強とされた魔導騎士・・・オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァローードの末裔だよ・・・！」

チンクにそう答えた瞬間、

――今日から私は、×××××・セインテスト・フォン・シュゼルヴァローードと名乗ることにしたよ、シャルロッテ――

「ぅぐ・・・！？」

今までにない強烈な痛みがわたしの胸を、そして頭を襲った。フラッと体が傾く感覚。わたしはどうすることも出来ず、ゆっくりと閉

ざされていく視界の中で「イリス！？」わたしの名前を叫ぶチンクの姿を見た。

Ｅｐｏｓ２２－Ａなお深き闇に染まれ、聖夜の天（ソラ）～Ｎａｃｈｔ　Ｗａｈｒ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

終業式が終わった後、私とフェイトちゃん、アリサちゃんにすずかちゃん、そしてアリアシアちゃんは、友達のはやてちゃんの家の前にまでやって来ていた。でも私たちの心の中は晴れない、友達の家なのに。それもこれもここへ訪れた理由の所為だ。
終業式が終わるのを待っていたというようにクロノ君から通信が入った。その内容というのは、"闇の書"――正式名称を"夜天の魔導書"の主と守護騎士の正体が判ったというものだった。そしてクロノ君から伝えられたその正体を聴いたとき、私たちは信じることが出来なかった。

。―。―。回想です。―。―。

『――以上がイリスからもたらされた情報だ。八神はやて、八神シグナム、八神ヴィーダ、八神シャマル、八神ザフィーラこそが、闇の書の主とその守護騎士。八神シュリエルリートはおそらく闇の書の管制プログラム。
そして八神ルシリオンが、事件の発端を開いたランサーだと判明した。そういうわけで、君たちは今から八神邸へと向かってくれ。僕が行くよりは友人である君たちが赴いた方が警戒されにくいからな』
小学校の校門から出てすぐ、クロノ君から通信が来た。内容はすぐ

には信じられない、信じたくないもので。私たちを一度は襲ってきたパラディース・ヴェヒター、そして昨日戦った守護騎士たちを従えているのが『はやてちゃんが、闇の書の主・・・！？』だなんて。

『シグナムさん達が守護騎士・・・、そんなまさか・・・』

『私たちを襲ったランサーが・・・ルシル・・・？』

『いやいやいや。それ嘘でしょ？　はやてたち八神家がそんな・・・』

『信じたくないって気持ちも解らないわけじゃない。しかし、この画像を見てくれ』

そうして私たちの携帯電話すべてに転送されてきた写メール。写っているのは1枚の絵画。描かれているのは見間違いようのないヴィータちゃん達と、知らない小さな女の子が2人、そして「ルシル君・・？」をそのまま大人にしたような男の人。

『それは今から数百年も昔、今は滅びし世界ベルカで描かれた絵画だ。かつてグラオベン・オルデンという騎士隊が存在していた。いま君たちが見ている絵画に描かれている者たちのことだ。オーディン、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、シュリエルリート、アギト、アイリ。この8人だ』

外見だけじゃなくて名前までもが一緒。それを聴いたフェイトちゃんが『歳を取らない守護騎士ならあり得る・・・』ってポツリと漏

らした。

『この絵画に写る彼女たちが闇の書の守護騎士だという記録は残っていないようだが、十中八九間違いない』

『ねぇ、クロノ。じゃあこのオーディンとルシルの関係ってやっぱり・・・』

『事実関係はまだ判明していないが、オーディンの血筋で間違いないだろう』

『ルシルの先祖であるオーディンもかつては闇の書の主として守護騎士を従えて、時代を越えて今度は将として守護騎士を従えていたってこと・・・？』

『そうなるな。主であるはやては足が不自由で、そのうえ魔導師でも騎士でもなかったからそうなったとも言えるが』

アリシアちゃんとクロノ君のやり取りを携帯電話のモニターに表示されっぱなしの画像を眺めながら聞いて、そして『はやてちゃんも逮捕しちゃうの？』クロノ君にそう訊ねた。せっかく友達になれたのに。こんな形でお別れなんてしたくない。

チラッとフェイトちゃんを見る。と、フェイトちゃんと目が合った。フェイトちゃんもかつてはお母さんの為に罪を犯したけど、無罪となって今はこうして一緒に過ごすことが出来てる。でもはやてちゃんやルシル君、ヴィータちゃん達は・・・。

『もし本当に闇の書を破壊せずに済み、主や守護騎士たちが無事に残れた場合、これまでの彼女たちの功績を鑑みれば、明確な罪に問われずに保護観察処分になるだろう。しかし。管理局員であるフェイトやその使い魔のアルフ、民間人であるなのは達への傷害の件があるからな』

『じゃ、じゃあ被害届を出さなかったらはやてちゃん達は・・・』

『確実とは言えないが、これまで通りの生活が出来るだろう』

それを聴いた私は『アリサちゃん、すずかちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん。私・・・』そう言って立ち止まる。遅れてフェイトちゃん達も立ち止まって私へ振り返った。

『あたしは出すつもりはないわよ』

『私もー。はやてちゃん達の事を責めたくないし』

『私も、被害届は出さないよ。私だってはやてやシグナム達、ルシルの今の生活を壊したくないから』

『・・・みんながそうならわたしも出っさな～いっと』

みんなもはやてちゃん達の今を壊したくないって思ってくれている。これならはやてちゃん達の説得も難しくないかもしれない。

『にしても。ルシルって結構謎よね。魔法を扱える騎士っていうこ

とは異世界人でしょ？　なんのために地球に来て、どうやってはやてと会って、今のように一緒に暮らすことになったわけ？』

アリサちゃんのそんな疑問に私たちは一斉に黙り込んだ。確かにそうだ。地球に訪れた理由が解らない。クロノ君は『やはりルシリオンからは話を聴く必要があるな。とにかく。第一目標は八神はやて。そして八神ルシリオンだ』って言った。

『もちろん戦闘しないことに越したことはない。だから君たちだけで向かってもらい、話し合いが出来るようセッティングしてほしい』

。―。―。回想終わりです。―。―。

そういうわけで、私たちははやてちゃんのお家へとやって来た。クロノ君とアルフさん、リンディさんはハラオウン家でモニターしていて、シャルちゃんは未だに管理局から戻って来ていない。シャルちゃんが居ないのはちょっと不安だけど、やるしかない。

一度みんなで顔を見合わせてから、「じゃあ私が」フェイトちゃんが代表してインターホンを鳴らした。玄関扉の奥から「はい、いま出ます！」女の人の――シュリエルさんの声で応答があった。居る。留守じゃない。心臓がバクバクと早鐘を打ち始める。そして・・・。

「はい、どちら様でしょ――っ、お前たちは・・・」

出迎えてくれたシュリエルさんに「こんにちは」ってみんなで挨拶して、「あ、ああ、こんにちは」挨拶を返してくれたシュリエルさんに「はやてちゃん、居ますか？」って私は訊ねた。

「・・・はやては定期検診の為、今は病院だ。ヴィータとシャマルはその付き添い。私とザフィーラは留守番、シグナムとルシルはその・・・買い物だ」

「じゃあ、はやて達が帰ってくるまで待たせてもらってもいいかしら？」

アリサちゃんがそう切り出すと、「え・・・？　いや、しかし・・・」シュリエルさんが少し困ったように言い淀んだ。そこに追い打ちをかけるのが「友達だからいいよね？」アリシアちゃんだ。それでもシュリエルさんは「それは・・・」って言い淀むばかりで。もしかしたら気付かれているのかもしれない。私たちがはやてちゃんのお家へやって来たその理由に。ここで、「上がってもらえ」奥から声が。シュリエルさんの後ろ、玄関から出て来たのはザフィーラさんだった。

「・・・そう、だな。はやてやルシルの居ない中での訪問だったゆえ、居候の身である私がお前たちを招き入れていいのか迷ったのだ。許してほしい」

シュリエルさんが笑顔になってくれたからホッと安心した。そして私たちはリビングに通されて、ソファに座っていく。そこでシュリエルさんが淹れてくれたお茶をみんなで飲みながらはやてちゃん達の帰りを待っていたその時、ガシャンと陶器が割れたような音がして、「シュリエル！？」遅れてザフィーラさんの声が聞こえてきた。

「「「「シュリエルさん！？」」」」

「え、どうしたんですか！？」

振り向いてソファの背もたれ越しにダイニングの方を見ると、シュリエルさんが両手で胸を押さえて倒れていて、ザフィーラさんが抱え起こすところだった。私たちも慌ててシュリエルさんの元へ。

「あっ、そうだ、私、はやてに電話してみます！」

フェイトちゃんがそう言って携帯電話を鞄の中から取り出して、はやてちゃんの携帯電話にコールしようとしたんだけど、「ダメ、フェイト！」アリサちゃんがそれを止めた。

「はやてはいま病院でしょ。だったらたぶん出れないわ。ルシルに連絡しましょ。買い物に行っているんならすぐに帰って来られるでしょ」

「あ、そっか。うん、じゃあルシルに・・・」

フェイトちゃんが改めて携帯電話を操作してルシル君の持つ携帯電話にコールをし始めた。その間に私たちは、「すごい汗・・！」シュリエルさんの看病？だ。まずはシュリエルさんを横に寝かせるためにソファへザフィーラさんに運んでもらって、それからお湯で濡らしたタオルをお願いする。

「あ、もしもし、ルシル？　フェイトです！　今――」

フェイトちゃんの方もルシル君と連絡が取れたみたいだ。シュリエルさんは"闇の書"の管制プログラムさんだから、病院に運ぶのはきっとダメ。だから今はルシル君に頼るしかない。
ザフィーラさんが持って来てくれたお湯の張った洗面器とタオルを受け取った私は、「ちょっと失礼します」シュリエルさんのおでこの汗を拭うために濡れタオルを持って行こうとした時、「あぐっ！？
く、来るな・・・！」シュリエルさんから強力な魔力が放出されたことで視界が真っ黒に染まって、遅れて襲ってきた衝撃波で「きゃぁぁぁ！？」私たちは大きく弾き飛ばされちゃった。

「いたた・・・。っ、みんな、大丈夫！？」

体を起こしてみんなに声を掛ける。今の衝撃波で室内がメチャクチャで、壁にもたれるように座るアリサちゃんからは「なんとかー」、横倒しになってるソファに干されてるようなすずかちゃんからは「大丈夫だよ」、床に仰向けで倒れてるアリシアちゃんからは「いったぁ～い、お尻打った～。というか、フェイト、おも～い！」、アリシアちゃんの上にうつ伏せで倒れてるフェイトちゃんからは「えっ？　私そんなに重くないよね！？」ショックを隠し切れない悲鳴が。

「あれ？　シュリエルさんとザフィーラさんが居ない・・・？」

リビングのどこにも姿の見えない2人。つまりこれって「シュリエルとザフィーラが逃げた・・・！」と言うことに。

「ルシルとの電話も切れちゃってる！・・・しかも電源まで！」

「ああもう！　少しは人の話を聴けってぇのよ、アイツら！」

アリサちゃんがついにプッツンした。それを「まあまあ」すずかちゃんが落ち着かせようと頑張る。とにかく今は「クロノ君に連絡を！」ということで。早速クロノ君に通信を入れる。モニターが展開されて、そこにクロノ君が映し出される。

「ごめん、クロノ！　逃げられた！」

『ああ、こちらでも確認した』

「私たちはこれからどうすればいいの、クロノ」

『決まっている。追ってくれ。僕とアルフもそちらに向かう。後ほど現場にて合流しよう！』

クロノ君の指示に頷いて応えた後、「あの、シャルちゃんは・・・？」そう訊いてみる。するとクロノ君は『彼女はまだ帰らない。僕たちで何とかするしかないだろう』って答えた。シャルちゃん、何かあったのかな。"キルシュブリューテ"の修理に苦労しているのかも。

「了解。それじゃあなのは、アリサ、すずか。私たちも行こう。アリシアは帰った方が良いと思う。たぶんここからはきっと・・・」

「危ないかも、だよね。・・うん、判った。ここからはわたしひと

りで帰れるから。フェイト達ははやて達をお願い」

「「「うんっ」」」「ええ！」

アリシアちゃんに見送られながら私たちははやてちゃんの家を出て、どこへ向かえばいいのか訊いてみる。

『シュリエルリートとザフィーラは現在、はやての通院している大学病院の在る方角へと向かって飛んでいる。エイミィが現場までナビゲートしてくれる。おそらくこれが最後の戦いになるだろう。各自、覚悟を決めてくれ』

やっぱり話し合いは出来ないのかな。ちょっと落ち込んじゃう。でも私たちがやらないといけないんだよね？　クロノ君からの通信が切れたと同時に私たちは駆けだした。はやてちゃん達を止めるために、助けるために、救うために。エイミィさんのナビに従って途中バスに乗って現場に向かう。そんな中・・・

――王の御座す銀に輝きし聖宮（ヴァーラスキャールヴ）――

ゾワッと総毛立った。何かすごい気配を感じた気がした。みんなもそのようで辺りをキョロキョロと見回してみて・・・「あ、アレ！」見つけた。

「ちょっ、なによアレ・・・！」

「アレってもしかして・・・結界・・・！？」

「あんな結界、見たことない・・・」

「まるでお城・・・」

バスの窓から見えたのは蒼く輝くお城の形をした結界。パッと見は、1階部分は六角形で、各角には円柱の塔がそびえ立ってる。2階部分は1階部分をちょっと小さくしたような建物、3階部分はさらに小さくしたような建物、その上に六角柱の塔が1つそびえ立ってる。魔導師である私たちにしか見えない結界だ。

「あの中にはやてちゃん達が居るんだね・・・」

「次で降りるわよ。みんな、準備して」

アリサちゃんに頷き返した私たちは次のバス停で降りて、徒歩でお城型の結界へと進む。バス停から近かったこともあってすぐに到着。とそこで「結界・・・」お城の結界をも閉じ込めるほどの大きな半球結界が展開された。

「フェイトー!」

頭上からフェイトちゃんを呼ぶ声が聞こえてきた。見上げればこちらに向かって飛んで来るクロノ君たちが見えた。結界があるなら「みんな、変身しよう!」首から提げてる待機モードの"レイジングハート"を手に取ると、みんなも「うんっ」頷き応えてくれた。

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「フレイムアイズ！」

「スノーホワイト！」

「「「「セーットアップ！！」」」」

変身を終えて、クロノ君とアルフさんと合流。クロノ君がお城の結界を「この中だな、八神家は」仰ぎ見てデバイスの"Ｓ２Ｕ"をギュッと握りしめた。その間にアルフさんが結界を調べるようにジッと眺めたりギリギリまで手を近づけたりしてる。

「こりゃ厄介かもね。本局に居る時にユーノからある程度結界の知識を貰ったからよく判るよ。コイツはミッドでも古代・近代ベルカ式でもない術式だ。破るにはたぶん力づくで・・・」

アルフさんがフェイトちゃんとアリサちゃんのデバイスを見た。２人も自分の持ってるデバイスに目をやって、「やるっきゃないわよね、フェイト」アリサちゃんが"フレイムアイズ"を正眼に構えてそう言うと、「うん、やろう、アリサ」フェイトちゃんがそう返して、アリサちゃんの隣に立って同じように"バルディッシュ"を正眼に構えた。

「バルディッシュ！」「フレイムアイズ！」

「「フルドライブ！！」」

２人のデバイスが同時にカートリッジを２発ロードして変形した。どちらとも大きな魔力の刃を持った大剣。フェイトちゃんのものは黄金でバチバチと帯電、アリサちゃんのものは茜色で炎が燻ってる。"バルディッシュ・アサルト・ザンバー"と"フレイムアイズ・イグニカーンス・クレイモア"。どちらも攻撃・破壊力特化で、無詠唱・魔法発動無しで結界も破壊できるっていう、すごい力を持ってるモードだ。

「アリサ！」「フェイト！」

≪≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ≫≫

さらにカートリッジをロードした"バルディッシュ"の刀身に強烈な雷光が生まれて、"フレイムアイズ"の刀身には強大な火炎が生まれた。

「「デュプルブレイズ・シオンズクリーバー！！」」

正眼から水平へとデバイスを構え直して、フェイトちゃんは右から横薙ぎ、アリサちゃんは左から横薙ぎ。雷と炎の２つの刃が鋏のように結界を切り裂こうとする。そしてガキィンと甲高い音を立てて２つの刃は結界に当たった。

「この・・・！」

「硬い・・・！」

アリサちゃんとフェイトちゃんが苦悶の声を漏らした。クロノ君が「結界破壊効果を有する斬撃を耐えるのか・・・！？」驚きを見せた。でもどうしてだろう。私、こうなる弧とをどこかで判ってた気がする。

「ぅぐ・・・弾かれそうだわ！」

「耐えよう、アリサ！　まだいける！」

「判ってるわ！」

「「斬り・・・裂けぇぇぇーーーーッッ！！」」

気合を入れ直したアリサちゃんとフェイトちゃんがデバイスを振り抜こうとさらに力を入れる。そのおかげもあってか、ルシル君が展開したらしいお城の結界にヒビが入りだした。

「「なのは！！」」

「えっ？　あ、うんっ！　レイジングハート！」

≪Ｂｕｓｔｅｒ　ｍｏｄｅ≫

"レイジングハート"をアクセルモードからバスターモードへ変形

させて、先端をヒビの中心に向けて「ディバイィィン・・・」魔力をチャージ。そして「バスタァァァーーーーッッ！」トリガーを引いて砲撃を発射。
それと同時。"バルディッシュ"と"フレイムアイズ"の魔力刃が弾かれた。２つの刃によってひび割れていた結界の壁が修復され始めたけど、それよりも早く私の砲撃がヒビの中心点を撃ち抜いて大穴を開けた。

「「「「「やった！！」」」」」

「っ、・・・修復される！？　急いで中に入るんだ！」

大穴が少しずつ、でも確実に塞がり始めたから私たちは急いでお城結界の中に入った。そのすぐ後に私たちが開けた大穴は塞がった。逃げ道は無し。元より逃げるつもりもないから問題は無いと思うけど。

「エイミィ。聞こえるか？」

『はいはーい、聞こえるよ～。通信妨害はされてないみたい。でも侵入も脱出も難しいようだよ、気を付けて』

「問題ないんじゃない？　もう中に入っちゃってるんだし」

「出る時も、だよね。その時ははやてちゃん達も一緒だから」

「アリサとすずかの言う通りだ。ではエイミィ。八神家は今どこに

居る？」

『うん。はやてちゃん達は今――』

†††Ｓｉｄｅなのは⇒ルシリオン†††

俺たちは今、はやての掛かり付けである海鳴大学病院より離れたビル街、そのうちの一棟の屋上に居る。はやての付き添いだったヴィータとシャマル、倒れたシュリエルと彼女を運んできたザフィーラ、そしてザフィーラから連絡を貰って急いで帰って来た私とシグナム。八神家が勢揃いだ。

「どういうことだよ、もうこんなに侵食が進んでんじゃねぇか！」

気を失い横に寝かされているはやてとシュリエルを見るヴィータは涙を浮かべながら叫んだ。はやての服の袖口や襟からはナハトヴァール――蛇の痣が飛び出している。俺の魔法でも隠し切れない程に、だ。シュリエルもそう。ナハトヴァールの痣は首筋から両頬に掛けて伸びている。この娘の白く綺麗な肌が台無しだ。

「ルシリオン、お前はどれだけのリンカーコアを回収できた？」

シグナムの問いに「・・・１つだ」と答えた。俺やグレアム提督たちの情報を以ってしても捉えることの出来ない犯罪者が増えてきた。隠れるのが上手いんじゃない、標的に出来る犯罪者が生まれていないんだ。こうなる前に完成させたかったんだが、名を上げるのが早過ぎてしまったようだ。

「皆には申し訳ないが私は1つとして回収できなかった」

「おまっ、何やってんだよ、シグナム！」

「すまない」

シグナムに詰め寄ろうとしたヴィータに「落ち着け」と制止するが、「これが落ち着けられっか！」ヴィータはさらに激情するばかり。俺とて今すぐにでも"夜天の書"を完成させたいが、魔力が足りない。残り３７ページ。それを埋めるにはＡＡＡランクの魔力持ちが２人必要だ。だが今、俺が手に入れたリンカーコア程度ではせいぜい４ページほどだろう。

「っ！」

いま俺が展開している防性術式（結界のように見えるが歴とした防御の魔術――今は魔法だな）、ヴァーラスキャールヴが傷つけられたことが判った。ザフィーラに「どうした？」と訊かれたため、「管理局が侵入してきた」と答えた。空間モニターを展開。映し出されているのはなのは、フェイト、アリサ、すずか、クロノ、アルフ。シャルは居ないようだ。もしかして前回の戦いで負傷させてしまったか？

「管理局・・・なのはちゃん達・・・！」

「くそっ、こんな一大事の時に限って――いや、待て。コイツ、ま

だ蒐集してねぇよな」

ヴィータが指を差すのはクロノだった。シャマルが「いくら何でもそれだけはダメよ、ヴィータちゃん！」と窘める。シグナムも「犯罪者ではない者からの蒐集はやめておくべきだ」と反対意見を出す。

「じゃあ！　じゃあどうするってんだよ！　見ろよ、なあ！　はやてもシュリエルもあそこまで侵食されて！　もう限界なんだよ！　このままじゃ闇の書ははやての残り少ない魔力まで蒐集して・・・はやてを、はやてをーーー！　う、うう、うぅぅ・・・！」

ついに本格的に泣き出したヴィータ。シャマルも釣られて「うぅ、うう、うわぁぁぁん！」泣き崩れてしまった。

「最終手段は、我々のリンカーコアを蒐集させることだ」

とここで今まで黙っていたザフィーラがポツリと漏らす。それを聴いたヴィータとシャマルの泣き声が止まった。確かに最終手段だな。しかし「却下だ」俺がそう下す。はやては"夜天の書"の全システムを掌握した後に守護騎士プログラムも再起動させる。それで彼女たちは戻って来る。しかしだからと言ってここで犠牲にしていいわけがない。

「ならばどうする。これ以上は本当に危険だ。今すぐにでも――っ！」

「「「っ！」」」

シグナム達が空を見上げ、俺も遅れて見上げる。俺たちの視線の先、そこには「来たな」なのは達がこちらに向かって飛んで来ている姿。そして俺たちの立つ屋上へと降り立った。

「っ！？・・・はやてちゃん、シュリエルさん！？」

「ちょっ、なによその痣・・・！」

「まるで蛇に絡み付かれてるみたい・・・！」

「それ、どう見ても危険な状態だよね・・・！」

なのは達の視線ははやてとシュリエルに注がれているが、「闇の書の主とその守護騎士、それとランサー」クロノだけは俺たちから目を逸らさない。袖で涙を拭ったヴィータとシャマルははやてとシュリエルを庇うように移動し、俺とシグナムとザフィーラはヴィータ達を護るように陣取る。

「いいや。今は八神家、と言った方が良いか？　八神シグナム、八神ザフィーラ、八神ルシリオン、それに八神ヴィータ、八神シャマル・・・！」

素顔を晒している今、最早隠す必要も無い。左中指にはめている"エヴェストルム"を起動しようとしたところで、

――チェーンバインド――

――レストリクトロック――

――リングバインド――

――フープバインド――

――アイシクルアイヴィ――

私にはなのはのレストリクトロック、シグナムにはクロノのチェーンバインド、ヴィータにはアルフのフープバインド、シャマルにはすずかの氷製の茨、ザフィーラにはクロノのチェーンバインドにフェイトのリングバインドが掛けられた。

「全員動かないでもらおう。・・・見たところ、はやてとシュリエルリートは危険域に達しているようだ。身柄を預からせてもらう」

「ふっざけんな！　判ってんなら邪魔すんなよ！　闇の書がいつはやてのリンカーコアを喰うか判んねぇんだぞ！　はやてを、あたしらを救う手段もねぇくせに、邪魔すんじゃねぇよ！　なぁ、なにょは！　フェイト、アリサ、すずか！　お前ら、はやてのなんなんだよ！　友達じゃねぇのかよ！　頼むよ！　もうちょっと、あとちょっとで、はやてを救えそうなんだよ！」

「「ヴィータちゃん・・」」「「ヴィータ・・」」

ヴィータの悲痛な叫びになのは達が本当に辛そうに顔を歪ませた。クロノもまた僅かに顔を曇らせたが「なら話してくれ。君たちはど

うやって闇の書を救うんだ？　本当に世界を犠牲にしないのか？」それでも気丈に管理局員として問うてきた。なのは達が何も言わないことで、ヴィータの表情は睨みだけで人を殺せそうなほどの憎悪一色へと変わった。そして「悪魔め・・・！」そう一言。

「「「「「っ！！」」」」」

剥き出しの敵意を受けたなのは達がヨロヨロと後退した。クロノが「それでも僕たちは、次元世界を守らなければならないんだ」と呻くように返した。様子見はここまでだな。

――捕縛断ち（バインドブレイク）――

「「「「「「っ！」」」」」」

俺を含めヴィータ達を拘束している全てのバインドを破壊した。驚きに目を見開いているなのは達に向け間髪入れずに「マカティエル、ジャッジメント！」閃光系魔力で創られた魔力槍５０基を頭上から一斉射出。

――舞い降るは、汝の煌閃（マカティエル）――

あらゆる角度から打ち込んで、なのは達の体を柵状にしたマカティエルで拘束する。自由になったヴィータが真っ先に変身して「もう邪魔すんじゃねぇよ！」"グラーフアイゼン"をなのは達に突き付けた。

「あの、私たちは必ず被害を出さずに闇の書を、はやてちゃんを救います！　ですからあと少しだけ、少しだけでいいの！　猶予をちょうだい！」

シャマルも騎士甲冑姿へと変身。

「頼む。もうしばらくでいいのだ。我らに時間を与えてほしい」

シグナムもまた騎士甲冑姿へと変身し、"レヴァンティン"を鞘に収めた状態で起動。

「それでもなお邪魔をするというのであれば・・・！」

――狼王の鋼鎧――

ザフィーラも騎士甲冑姿へと変身し、全身に魔力付加して攻撃力と防御力を上げる強化魔法を発動。

「そういうわけだ。悪いけど今は大人しく見ていてくれ」

――チェーンバインド――

俺も騎士甲冑姿へと変身（魔力消費削減の為に大人形態にはもうならない）して"エヴェストルム"を起動。チェーンバインドでなのは達を拘束した後でマカティエルを解除、さらに「レストリクトロック」なのはの捕縛魔法でさらに拘束してやる。

「「ルシル君！」」「「ルシル！」」

「ルシリオン！　今すぐ僕たちの拘束を解け！」

簀巻き状態で屋上に転がるなのは達が喚く。特にクロノがうるさい。とりあえず全てが終わるまでは「静かにしてもらうよ」と指を鳴らす。

――あなたに沈黙（ゲシューク・シュヴァイゲン）の贈り物を――

対象から声や念話などの通信手段の一切を奪う無音結界を発動。なのはたち個人個人に掛ける。パクパクと口を開閉し、声が出ないと判るや否や諦めたかのように口を閉ざした。

「却下。君たちは闇の書を救う方法を見つけてくることが出来なかった。だから話し合いの余地なんてものは始めからない。言葉で俺たちを止めたいのなら、まずはその救う方法を見つけて来るべきだったんだ」

なのは達に背を向け、「シグナムとザフィーラはその子たちの監視を頼む」と言い、２人が首肯したのを確認した俺は、ヴィータとシャマルを連れてはやてとシュリエルの側へと向かう。

シュリエルの側に落ちている〝夜天の書〟を手に取り、ペラペラとページを開く。と、「ん？」何か違和感を覚えた。最後から順にページを捲って行き、「どういうことだ・・・！？」ある事実に気付いた。シャマルに「どうしたの？」と訊かれ、俺は答えた。

「空白ページが増えてる。今朝確認した時は確かに残り３７ページだった。しかし今は・・・７０ページも・・・！」

「はあ！？　数え間違いでもしてんじゃねぇのか！？」

「・・・っ！　ううん、本当に空白ページが増えてる！　どういうこと！？」

俺とヴィータとシャマルで一度顔を見合わせ、首を横に振る。背後に居るシグナムとザフィーラへと振り向く。振り向きの意味を察してくれたシグナムとザフィーラは首を横に振った。何故増えたのか。この場に居る俺たち騎士の誰もが知らないという。

「シュリエルが何かした・・・？」

「いいや、それはありえん。今朝からシュリエルと共に居たから判る。シュリエルは闇の書を使用していない」

留守番組であるザフィーラがそう言うんだから間違いないだろう。ではどうして増えている。目を閉じあらゆる可能性を思案しているところで聞こえてきた「あ、おい、シュリエル！？」ヴィータのその声に思考を一時中断して目を開けた。

「シュリエル、良かった、目を覚ましたのね！」

シャマルが俯きつつもちゃんと両脚で立っているシュリエルへと近寄ろうとした時、「っ！？」ゾワッと悪寒が走った。俺は急いでシ

ュリエルに近寄ろうとしたシャマルの腕を取ったその時、シュリエルのセーターの左袖が弾け飛び、左前腕部に絡みつく十何匹という蛇――ナハトヴァールの実体化した姿が現れた。
そのうちの3匹が口を大きく開けた状態で俺とシャマルへと高速で伸びて来た。左手に携える"エヴェストルム"を振るいナハトヴァールを迎撃しようとしたが、「チッ！」うねる事で俺の斬撃をかわし、その牙を俺とシャマルに突き立てようとしてきた。

（このままじゃシャマルが真っ先に噛まれる・・・！）

ナハトヴァール。先の次元世界とは違う"闇の書"の闇。守護騎士であるシャマルが噛まれることで起きる障害が予想できない。ならば。シャマルの腕を強く引き、俺との立ち位置を変えた。それでシャマルは救えた。その代わり「ぐっ、あっぐぅぅぅ！」1匹が俺の左手首に絡みつき、ボキッとへし折ってきた。力を失った左手から離れた"エヴェストルム"が音を立てて屋上に転がった。
もう1匹は俺の魔力炉（システム）を狙っているのか胸部に噛み付いてきて、もう1匹は俺の右目に牙を突き立てようとしたために首を逸らすことで直撃は回避した。が、右目のすぐ側を通過して行き、「がああああ！！」皮膚や肉を削られてしまった。

「ルシル！！」「「ルシリオン！！」」「ルシル君！！」

「「「「「「っ！！！！」」」」」」

堪らず両膝をついて右目を右手で押さえる。手と頬、指の隙間からボタボタと血が流れ落ちて屋上に血溜まりを作っていく。左手首を

折られ、右目を潰され、今もなお俺の胸部にナハトヴァールが噛み付いている。だが、エイルを使えばまだ治せるダメージだ。

『恐ろしく強い魔力を持っているのね、お前』

「っ！？」

頭の中に聞こえてきたのは女性の声。声の出所は信じがたいことにナハトヴァールからだった。

『守護騎士どもから最後の魔力を頂戴しようとしたけれど、お前から頂くことにするわ』

『誰だ！？』

『私は、アウグスタ・マリー・カタリーナ・ルイーゼ。闇の書を手に覇道を歩み、世界を手に入れる者よ！』

ナハトヴァールに人格があるとは聞いていないぞ、シュリエル。念話が切れると同時に、「ぐぅぅ・・・！」俺の胸から魔力炉（システム）が浮かび上がり、シュリエルの左腕に絡みつく残りのナハトヴァールが一斉に魔力炉（システム）に群がった。突き立てられる牙。それと同時に魔力を蒐集されるのが判った。

「あ・・が、あああ、ぐあああああああ！！」

蒐集時の苦痛が先の時とは違って桁違いに強い。

「テメェ、離れやがれ！」

――テートリヒ・シュラーク――

「「離れろ！」」

揺れる視界の中でヴィータとシグナム、ザフィーラがナハトヴァールに攻撃を加えているのが見えたが、全て弾き返されている。シュリエルの側に浮く"夜天の書"を見れば次々とページが埋まっている。

――天使ルシリオン。僕はやっぱり・・・悪魔を選ぶ！！――

――貴方様は他の天使とは違う。貴方様のような高位天使にも人間を好きでいてくれる御方がいらしたことが、わたしたち人類の希望です――

（神無、花湖・・・）

2人の少年少女が脳裏に過ぎって、すぐに消えた。あぁ、この喪失感。また、何かしらの記憶を失ったんだな・・・。

（シグナム達がはやての目の前で消滅されるよりかはマシなシナリオか・・・）

横目ではやての方を見て、「っ！」気づいた。はやては上半身を起

こし、目を大きく見開いて俺やシグナム達をショックからか揺れる瞳で見ていた。いつの間にか目を覚ましてしまっていたようだ。

「あ、あああ、ああ、ああああ、ああああああ、ルシ、ルく、ん・・・ルシル、くん・・右目が・・・左手も折れ・・・いや、いやや、いやぁぁぁーーーーー!!!」

はやてを侵食していたナハトヴァールの痣が、はやての絶叫を合図としたように顔全体にまで広がった。

「はやて!?」「はやてちゃん!?」

≪ 蒐集完了≫

"夜天の書"から発せられた言葉。それと同時に俺の魔力炉(システム)に群がっていたナハトヴァールが離れて行き、シュリエルの左前腕部に戻った。

≪ 闇の書の全頁の蒐集を完了しました。これより全システムの使用が可能となります。闇の書の完全稼働を承認しますか?≫

「・・・する」

"夜天の書"の問いに、はやては簡潔に一言そう答えた。

「っ! はや――(目に光が無い・・・、操られているのか!)・・・くそ・・・!」

虚ろな目をしているはやての足元にベルカ魔法陣が展開され、魔法陣より溢れ出る深紫色の魔力の柱がはやてを覆い包んだ。

「はやてぇぇぇーーーーー！！」

「はやてちゃん！！」

「「主はやて！」」

ヴィータ達が魔力の柱に向かってはやての名を呼び、「はやて・・はやてぇぇーーー！」俺も彼女の名を呼んだ。それからすぐ。魔力の柱は消え失せ、「シュリエル・・・！？」ひとりだけがその姿を現した。左前腕には蛇のナハトヴァールではない、籠手のような物が装着されている。おそらくアレが本来の姿。

「ふふ、あはは、ふはははは！　私は戻って来たわ！！」

シュリエルから発せられた声は彼女のものではなく、「アウグスタ・・・！」のものだった。

「さぁ、再びここより始めましょう。我が覇道を！」

Ｅｐｏｓ２２－Ｂなお深き闇に染まれ、聖夜の天（ソラ）～Ａｌｂｔｒａｕｍ　ｄｅｒ　Ｖｅｒｚｗｅｉｆｌｕｎｇ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

私たちの目の前で起きた惨状。シュリエルさんの左腕に絡みついてる蛇――ナハトヴァールがルシル君を襲った。左手首を折って、右目のすぐ側を抉って、リンカーコア（私たちとはなんか違うけど）から魔力を蒐集した。それは直視できない程に酷いもので、私は最初の腕折りのところで目を逸らさずにはいられなかった。

"闇の書"はルシル君の魔力を蒐集したことで完成してしまって、その惨状をはやてちゃんが見てしまっていて・・・。その所為かはやてちゃんは"闇の書"を起動、"闇の書"の融合騎だったシュリエルさんと融合した。でも・・・。

「ふふ、あはは、ふはははは！　私は戻って来たわ！！　さぁ、再びここより始めましょう。我が覇道を！」

シュリエルさんからの口から発せられた声は、どう聞いてもシュリエルさんとは違う女の人の声だった。跪くようにして居るルシル君を庇うようにヴィータちゃんとシグナムさんとザフィーラさんが、シュリエルさん？と対峙した。

「テメェ・・・はやてでもシュリエルでもねえな！　誰だ！　ナハトヴァールに人格なんてないはずだぞ！」

「シャマル、ルシリオンの治癒を！」

「ええ、判ってるわ！」

シャマルさんがルシル君を膝枕して「クラールヴィント、お願い！」って治癒魔法を発動したその時、「っ！？」私たちを拘束していたチェーンバインドとレストリクトロックが消滅して、「あ・・・声、声を出せる・・・！」ようになって最後に、「ルシル君の結界が・・・！」すずかちゃんの言うようにお城結界が崩れていった。残るのは武装隊の人たちが張ってくれている結界だけ。

「くそっ、これもルシリオンの計画の1つなのか・・・！？」

「そんなわけないでしょ、あんなボロボロにされて！」

「クロノ、指示を！」

「む・・・少し待つんだ。状況が解らない以上、下手に動けない」

クロノ君たちが次々とデバイスを起動していって、睨み合いを続けてるヴィータちゃん達を見詰める。私も"レイジングハート"を起動して、ぐったりしてるルシル君を一度見た後、ヴィータちゃん達の方へと目をやる。

「もしかしてお忘れかしら？　かつて、お前たち守護騎士を率いた主、アウグスタ・マリー・カタリーナ・ルイーゼよ」

シュリエル？さんから語られた名前、アウグスタさん。昔の"闇の書"の主みたいだけど、ヴィータちゃんが「憶えてねぇな、テメェのことなんざ！」って言い放った。

「我らにとっての主は、オーディン、そして主はやてのみ。それ以外の者は主ではなく持ち主だ！」

「それは寂しい答えね。せっかくの再会なのに。でもまぁ、これからのお前たちには過去の記憶も思い出も必要ないわ」

コツコツと靴音を鳴らして屋上を目的も無くウロウロと歩き出すアウグスタさん。その動きに合わせてヴィータちゃん達も体の向きを変えていく。それを黙ったまま私たちは見守る私たち。

「いいから大人しく、はやてとシュリエルを返せよ！」

「そのお体は亡霊であるお前には過ぎたものだ、早々に消え失せろ！」

「うむ。ナハトヴァール――いや、アウグスタよ。主はやての未来のため、ナハトヴァールごと消えてもらおう」

「あらあら。そうはいかないわ。私の覇道がため、いま消えるわけにもいかないのよ」

――封縛――

「「「「っ！？」」」」

ヴィータちゃん、シグナムさん、ザフィーラさん、そしてルシル君を治療していたシャマルさんがバインドで拘束されてしまった。どうしよう、これって手を出していいのかな。クロノ君には、待て、って言われてるけど。でもこのまま黙って見ているっていうのもなんか嫌だし。

「レイジングハート！」

≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ≫

アクセルシューター6発、「シュート！」アウグスタさんに向けて発射する。アウグスタさんは左手をシューターの方へと翳して「大事なお話し中よ、感心しないわ」そう言ってベルカ魔法陣のシールドを展開、全弾防いじゃった。

――ソニックムーブ――

――フォックスバット・ラン――

それとほぼ同時。フェイトちゃんとアリサちゃんが高速移動魔法で突進して、ハーケンフォームの"バルディッシュ"でヴィータちゃんとシグナムさんのバインドを斬り裂いて、アリサちゃんはファルシオンフォームの"フレイムアイズ"でシャマルさんとザフィーラさんのバインドを斬り裂いた。

「っ・・・、守護騎士！　状況を話せ！」

――チェーンバインド――

「アルフもお願い！」

「あいよ、フェイト！」

――チェーンバインド――

クロノ君とアルフさんの七重のチェーンバインドで拘束されたアウグスタさん。さらにすずかちゃんの氷結魔法・氷の柱で相手を閉じ込める「アイシクルスタチュー！」でアウグスタさんは完全に動きを止めた。

少しの間アウグスタさんを警戒していたけど復活する兆しがなかったから、私たちはヴィータちゃん達とお話しすることになった。体の向きは、アウグスタさんがいつ復活してもいいようにアウグスタさんの方へ。

「それじゃあ話してもらおう。この状況、すでに君たちのシナリオから逸脱しているんだろ？　もう隠しておく必要も無いはずだ」

「事情は俺が話そう・・・」

シャマルさんにもう一度治癒魔法を掛けられていたルシル君が、シャマルさんに両肩を支えられながら上半身を起こして、自分の怪我を押してでも話してくれた。ルシル君たちが一体何を目指していたのか、その全てを。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒フェイト†††

「――それが、君が描いていた闇の書終焉のシナリオだったんだな・・・」

はやての意思とシュリエルの体を乗っ取った、かつての"闇の書"の主アウグスタ。今はアルフとクロノとすずかの多重バインドで封印状態だけど、いつ復活するか判らないから最大警戒のままで私たちはルシルから話を聴いた。

「そうだ。はやては闇の書そのものとも言える管制プログラム・シュリエルと強く繋がれている。お互いに大切な家族として思い合っている。これまでの自己の欲望にしか興味の無い、彼女たちを道具としか見ていなかった連中とは違う。

俺はそこに懸けた。闇の書が完成したとしても暴走するまでの僅かな間に、正式な主となったはやてとシュリエルが協力して、暴走している防衛プログラムを切り離すくらいは出来るだろう、と。切り離されたその防衛プログラムを俺たち騎士で討てばいい、と・・・」

ルシルがそこまで言うと口を閉ざして、今は包帯（ルシルがどこからともなく出現させた物だ）で隠れている右目とは逆――左目だけで、氷漬けになっているアウグスタの左腕に装着されているナハトヴァールを見た。私たちもルシルの目線を追った後、「でもダメだった・・・」ルシルがポツリと漏らした。

「ねぇ、ルシル。あんた、ナハトヴァールのこと知らなかったわけ？」

「知っていた、知ってはいたんだ。でも・・・アウグスタという人格が有ったとは聞かされていなかった・・・！」

アリサにそう答えたルシルは本当に悔しげに顔を歪めた。本局の無限書庫にもそんな記述は無かったし、守護騎士のヴィーター達も知らなかったようだし。仕方がないとも思えるけど。

「・・・ルシリオン、君のシナリオが潰えた今、君たち守護騎士はどうするんだ？」

「決まってんじゃねぇか。はやてとシュリエルを、アウグスタから助けるんだ」

「どうやって？」

クロノの問いに答えたヴィーターへさらに訊き返すクロノ。ヴィーターは「それは、えっと・・・」口を噤んじゃった。でもすぐに「ルシル！」って、ルシルに助けを求めた。ルシルは顔を伏せて少しの間黙りこんだ。それはとても深い思案のようで。

「何か方法はあるのか、ルシリオン」

「私たち、なんでもするわ！」

「はやてを助けられるなら、あたしらはどんな苦痛にだって耐える！」

シグナム、シャマル、ヴィータがそう言っていく。ザフィーラも強く頷いた。本当にはやてのことが好きなんだ。だから「私も出来る限りのことは手伝うよ。なんでも言って」私もルシルにそう言う。

「ご主人様（フェイト）がそう言うなら――っていつもなら言うところだけど、あたしとしてもはやてやあんた達のことが好きだからね。何でも言いな」

「私も！　私も手伝うよ！」

「うん、私も！　みんなの補助なら任せて！」

「そうね。あたし達の友達――はやてとシュリエルの、ううん、八神家全員の希望を踏み躙った罪は、しっかり償ってもらわなきゃね！」

そうだ、アウグスタははやて達の願いを、希望をメチャクチャにした。それは絶対に許せるものじゃない。私たちは必ずはやて達の希望を繋ぐ、繋いでみせる。最後にクロノが「助けられる命があるなら助けないとな。局員ではなく人として」八神家との協力を認めてくれた。

「あ、ありがとうな。なにょは、フェイト、アリサ、すずか。アルフとクロノも」

「あの、ヴィータちゃん。な、の、は。私の名前は、なのは、だよ？　どうしてちゃんと呼んでくれないのかな？」

「し、しょうがねぇだろ。お前の名前、言い難いんだよ。いっそのこと、なにょはって改名しろ！」

「逆ギレーっ！？」

なのはとヴィータのそんなやり取りの中、シグナムが「感謝する」、シャマルは「ありがとう、みんな」、ザフィーラも「すまぬ」って私たちにお礼を言った。私たちはそれに頷くことで受け取った。そして最後に「ありがとう、恩に着る」ルシルが微笑みながらお礼を言った。

「・・・今、はやてとシュリエルの意思は、アウグスタの強すぎる執念・妄執によって闇の書の内側に追いやられているはずだ」

「えっと、じゃあはやてちゃんとシュリエルさんの意思を表面にまで戻すことが出来れば・・・」

「アウグスタを止めることが出来る・・・？」

すずかとアリサに「ああ」と頷き返したルシル。なら後はその方法になる。

「アウグスタ、というよりはナハトヴァールはどこまで行こうと所詮は魔法プログラム。はやてとシュリエルの意思を封じておけなくなるまで魔力ダメージを与え、自己維持に力を割かなければならないところまで追いつめる！」

それがルシルの提示した、たった1つの冴えたやり方。それを聴いたヴィータがなのはとのじゃれ合いを中断して「それしかねぇのか？」って訊いた。ルシルは「話し合いで止まるとでも？　アレを相手に」って右人差し指でナハトヴァールを指さした。

「どうする？　魔力ダメージとは言えシュリエルの姿をしてい――」

ルシルがそこまで言いかけた時、アウグスタを閉じ込めていた氷の柱が大きな音を立てて崩れた。アウグスタは首をコキコキと鳴らした後、「相談は終わったようね」まるで私たちの会話をずっと聞いていたようにそう言って、「ならもういいわよね」って右手をシグナム達に翳した。

「さぁ、いらっしゃいな。我が騎士たちよ」

「「「「っ！？」」」」

そしてそう呟いたかと思えば、シグナム達が一斉に胸を押さえて苦しみだした。しかも素肌が黒く――蛇のような痣が一瞬にして這うように浮かび上がってきた。それが素肌を全て覆った時、シグナムは"レヴァンティン"を、ヴィータは"グラーフアイゼン"を下ろして、ザフィーラも構えを解いた。

「ヴィータちゃん・・・？」

「シグナム？」「シグナムさん・・・？」

「シャマル、ザフィーラ・・・？」

「「「「・・・・」」」」

４人は無言のまま私たちに背を向けている。とここで「下がるんだ」ルシルが私たちを庇うかのように前に躍り出て、"エヴェストルム"を構えた。それはまるでシグナム達と対峙するかのようで・・・まさか。

「まずは覇道の妨害となる管理局から潰して回ろうかしら。これまで散々私の覇道を邪魔してきた、ねぇ？　我が守護騎士たちよ、その者らを蹂躙なさい」

「「「「ヤー、マイン・マイスター」」」」

振り返ったシグナム達の顔は闇のように真っ黒で、目だけが炎のように真っ赤だった。その４人の背後に佇むアウグスタが嫌な笑みを浮かべた後、"闇の書"を開いた。

――旅の鏡――

「「「「「へ？」」」」」

一瞬の浮遊感と視界の暗転。気が付けば私たちはバラバラにされていた。いま居るのは別のビルの屋上。私の隣にはアリサが居て、目の前にはシグナムただ1人。そのことを念話で伝えると、なのはとすずかのところにはヴィータ、アルフとクロノのところにはザフィ

ーラ、そして最悪なことにルシルのところにはシャマルとアウグスタが居るってことみたいで。

『ちょっとルシル、あんた！　そんなボロボロなのに戦闘なんて・・・！』

『そうだよ、ルシル君！　骨折は魔法で治ってるけど、右目がまだ・・・！』

『俺のことはいい、問題は君たちだ。アウグスタに操られている以上、シグナム達に手加減は期待でき――っと、すまない、これ以上は念話に答えられ――』

念話が途切れた瞬間、離れたビルの屋上が爆発した。濛々と立ち上る粉塵の中から蒼、深紫、緑の閃光が空に向かって飛び上がって行く。アレはきっとルシル達だ。戦い始めちゃったんだ。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

「「っ！」」

アリサと一緒に空からシグナムへと目を向け直した。シグナムは"レヴァンティン"を鞘に収めた状態でカートリッジをロードしていた。あの状態から繰り出される攻撃パターンは２つ。高速居合か、連結刃での砲撃級斬撃。

私たちはグッと腰を落としていつでも回避に移れるようにする。頭部限定変身の時もそうだったけど、表情が判らないから先が読めな

い。シグナムは居合抜きの体勢のまま固まって・・・「紫電・・・」技名をポツリと漏らした。瞬時に高速居合だと判断して、アリサの手を握る。

「清霜・・・！」

一足飛びで突っ込んで来たシグナム。繰り出されたのは目にも留まらぬ居合抜きの斬撃。私とアリサは空に上がることでそれを回避。それと同時に"バルディッシュ"と"フレイムアイズ"にカートリッジをロードさせる。アリサと頷き合って、私はアリサの手を離した。

「バーニング・・・」「ハーケン・・・」

「「スラッシュ！！」」

雷撃と火炎の斬撃を、シグナムの頭上から×十字で繰り出す。一撃目はアリサで、シグナムは炎の斬撃を左手に持つ鞘で受け止めて腕力だけで「っと！」アリサを弾き飛ばした。二撃目を担当する私の振り降ろした斬撃を"レヴァンティン"で受け止めて、でも弾き飛ばすことなく空いたばかりの鞘で殴りつけて来た。

――ディフェンサー・プラス――

手の平に一点集中することで防御力を高めたバリアを展開して、その一撃を受ける。これでシグナムの両手は塞がった。そこを狙のうがアリサだ。屋上を囲う柵に着地して、「フレイム・・・ウィップ！」

長く伸びた炎の鞭を、シグナムを薙ぎ払うように振るった。

「ふん！」

"バルディッシュ"の魔力刃に引っかけている"レヴァンティン"を、迫り来る炎の鞭に向けて振り下ろしたシグナム。すると「あ・・・！」私もそれに釣られて落下することになってしまった。

目の前にまで迫って来ていたアリサのフレイムウィップ。避けれない、防げない、そう思った時、「キャンセル！」アリサの命令の下、炎の鞭が消失した。私も一度"バルディッシュ"の魔力刃を解除。屋上に叩き付けられる前にシグナムから離脱、アリサと一緒に柵を背に立つ。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

シグナムがもう一度カートリッジをロード。そのまま魔法を発動しないで私たちへ向かって歩いて来る。アリサもカートリッジをロード、「バヨネットフォーム」"フレイムアイズ"を銃剣モードへ変形させた。私は「プラズマランサー、ファイア！」雷撃の槍８発を同時発射。プラズマランサーはフォトンランサーを強化した魔法で、フォトン時に比べて発射されたランサー自体に強度が有って・・・

「紫電・・・一閃！」

シグナムが燃え上がる"レヴァンティン"で迎撃しようとしてきた。ランサーの軌道を僅かに変更、シグナムを空振りさせる。私は「タ―ン！」ランサー全基を反転、空振ったばかりのシグナムへと向け

て「ファイア！」再発射させる。
そう、ランサーの強度のおかげで、命中しなかった場合は、ターン、の遠隔操作（キーワード）で今のようにもう再発射することが出来る。なのはのシューターやすずかのバレットのように自由度はないけど。

「フレイムバレット！」

"フレイムアイズ"の銃口から発射される炎の弾丸１２発。足元以外の方向から迫るランサー８発、背後から迫るバレット１２発が、シグナムへと殺到する。シグナムは跳躍することでランサー・バレットの包囲網から逃れた。

「ターン！・・・ファイア！」

もう一度ランサーを反転させて上空に逃げたシグナムへ再発射。アリサも銃口をシグナムへと向けてカートリッジをロードして待機。シグナムが「陣風・・・！」"レヴァンティン"を振るった。

≪Ｓｔｕｒｍｗｉｎｄｅ≫

刀身より放たれたのは衝撃波。それが私のランサーを全弾迎撃した。でも、それがあなたを墜とす最大の隙。アリサが「イジェクティブファイア！」火炎砲撃を発射した。シグナムは"レヴァンティン"を振るった体勢のまま避けることも防ぐことも出来ずに直撃を受けた。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒アルフ†††

気が付けばあたし達はアウグスタっていう、"闇の書"の防衛プログラム・ナハトヴァールに潜んでいた昔の主が発動した転移魔法によって分散されてしまった。傍に居るのはクロノ、そして「・・・ザフィーラ」守護騎士ヴォルケンリッターの中で最高の防御力を誇るっていう盾の守護獣が立っていた。素肌が全部真っ黒に染まっていて、目は真っ赤。そんで「ＧＲＲＲＲＲＲ」歯を剥き出しにして唸り声を上げている。戦う気満々だっていうのがよく判る。念話であたし達の現状を知らせ合って、フェイトとアリサとシグナム、なのはとすずかとヴィータ、あたしとクロノとザフィーラ、そしてルシルとシャマルとアウグスタっていう風に。

「アルフ。止めるぞ、すでにルシリオンの方で戦闘が始まってしまっている」

遠く離れた場所から爆発音がしてる。見ればビルの屋上から粉塵が上がってる。遅れて別のところでフェイト達、なのは達の魔力光が放たれ始めた。戦闘はやっぱり免れない。あたしらもアイツらも好きで戦いたいわけじゃないのにさ。

「・・・あんたも辛いんだよな、ザフィーラ？　いいよ、来なよ、共に主に仕える使い魔のよしみだ、無理やり戦わせられないようになるまでボコってやる」

希望を願ってこれまで頑張ってきたのに、最後にこんな酷い結末を与えられてさ。操られて嫌々戦わせられるってんなら、それが出来なくなるまでしてやるのがあたしの役目だろ？

「オオオオオオオオオッッ！！」

――狼王の鋼鎧――

「行くよ！」

――ブリッツフィスト――

全身を魔力で覆ったザフィーラと、両拳に電撃を纏わせたあたしが同時に踏み込んだ。攻撃範囲内に入った瞬間に互いに右拳を振り被った。体格差では圧倒的に負けちゃいるけど、でもそれがあたしにとっての強みだよ。

繰り出されたザフィーラの右拳を、柔軟な動きの出来るこのスマートな体格を活かして避けて懐に飛び込む。そして「おらぁぁぁぁ！！」スタン効果のある電撃のパンチをザフィーラの腹へと打ち込む。けど、「痛っ・・・！」まるで鋼を殴ったような衝撃が伝わって来た。

「（本当に堅いね・・！）うおおおおおおお！！」

ザフィーラの腹や胸を連続で殴りつける。その間ザフィーラは棒立ちで、まるでわざと受けているみたいだ。そいつはつまり「あたしの攻撃は問題ないってかい！？」最後に電撃じゃなくてバリアブレイクを乗せた拳を叩きつけてやる。それでも「堅い・・！」突破できなかった。

「アルフ！」

「っ！」

クロノの呼びかけにあたしは攻撃を中断して跳び上がった。その直後、「ブレイズキャノン！」砲撃が足元を通過、ザフィーラに向かって行ったんだけど・・・、「ふんっ！」ザフィーラは片手で砲撃受け止めて、「嘘だろ！？」上空に居るあたしに向かって軌道を逸らしてきた。

「ラウンドシールド！！」

慌ててシールドを展開。受けるより逸らす（シャルやクロノから口酸っぱく言われたからね）を考えて、だ。砲撃の軌道を逸らして防御。その短い間にクロノとザフィーラが接近戦を繰り広げ始めていた。ジャブを連続で出してクロノに迫って行くザフィーラに、あたしは「チェーンバインド！」アイツの四肢を拘束してやる。動きが止まったザフィーラに向けて、

「スティンガーレイ！」「フォトンランサー！」

クロノは正面、あたしは頭上から射撃魔法を同時に放つ。

「ウオオオオオオオオッ！！」

――狼王の鋼鎧・剛――

ザフィーラが大きな咆哮を上げたら、全身をうっすらと覆っていた

魔力の厚さが跳ね上がった。あたしとクロノの魔力弾が全弾弾き消されてしまった。それだけじゃなくてバインドを消し飛んでしまった。

――鋼の軛――

次にザフィーラは杭を屋上いっぱいから突き出させてきたから、あたしやクロノは高度を上げつつ隙間に避難。周囲には視界を邪魔する杭の山。管理局から貰った情報じゃ、こいつは攻撃じゃなくて高速の魔法らしいけど・・・。

「大丈夫か、アルフ！？」

「問題ないよ、これくら――っ、クロノ！」

――鉄破震砕打――

クロノの背後、杭の陰からザフィーラが気配も無く現れて、すでに攻撃態勢に入っていた。クロノは「ホイールプロテクション！」渦巻くバリアを直撃寸前に展開できた。けど、「うあああああっ！」そんなもの障害にならないとでも言うように簡単に砕いて、クロノを屋上の外まで殴り飛ばした。

あたしに真っ赤な目を向けて来たザフィーラは、今なお突き立ってるいくつもの杭を足場として蹴って接近してきた。振り被られる左拳。防御はきっとダメだ。あのクロノのバリアすら簡単に破壊した。

「終わりだ・・・！」

――鋼の軛――

「っく・・・・!?　しまっ・・・・!」

足元から新しく突き出してきた3本の杭に右脚を挟み込まれて動けなくされてしまった。目の前に迫るザフィーラの右拳に耐えるために「この・・・・!」両腕ガードで顔面を守り、さらに気休め程度のバリアを展開。次の瞬間に襲ってくる衝撃に備えた。

†††Ｓｉｄｅアルフ⇒すずか†††

念話で私たちは４組に分けられて、それぞれに守護騎士さん達が付いているというのが判った。最悪なことに怪我が治りきっていないルシル君のところにははやてちゃんとシュリエルさんを乗っ取ったアウグスタさんが居るということが判って。

『ちょっとルシル、あんた！　そんなボロボロなのに戦闘なんて・・・・!』

『そうだよ、ルシル君！　骨折は魔法で治ってるけど、右目がまだ・・・・!』

『俺のことはいい、問題は君たちだ。アウグスタに操られている以上、シグナム達に手加減は期待でき――っと、すまない、これ以上は念話に答えられ――』

アリサちゃんとなのはちゃんの心配にそう返したルシル君。離れたビルの屋上で起きた爆発と一緒に念話が切れた。ルシル君、あんなに酷い状態なのに本当に戦い始めちゃった。
そして私となのはちゃんの前に立っているのはヴィータちゃん。でも今のヴィータちゃんは私たちの知るヴィータちゃんじゃない。素肌は闇のように真っ黒で、目は血のように真っ赤。私たちは「ヴィータちゃん！」って呼びかけるけど、返って来るのは無言の敵意で。

「アイゼン」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ・　Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ≫

ヴィータちゃんのデバイス、"グラーフアイゼン"が変形してみせた。「ラケーテン・・・」ヴィータちゃんがポツリと漏らすとヘッド部分のブースターが点火、勢いよく私となのはちゃんへと突進して来た。アノ攻撃は出来るだけ受けないようにしないとダメ・・。と言いたいところだけど・・・。

「なのはちゃん！」

「うんっ！」

出来るだけ傷つけずにヴィータちゃんの動きを止める。１対１じゃ難しいけど、なのはちゃんと一緒ならきっと上手く行くと思う。まずは私が前に出て、「プロテクション！」バリアを"グラーフアイゼン"の突起部分の軌道を読んで、その場所に一点集中展開。

「ハンマー・・・！」

"グラーフアイゼン"がバリアに衝突。激しい火花が散る中、「レストリクトロック！」なのはちゃんのバインドが発動してヴィータちゃんを拘束、それを確認した私は瞬時にバリアを解除して、「アイシクルスタチュー！」氷の柱に閉じ込める。

「「ごめんね、ヴィータちゃん・・・」」

氷の柱の中に佇むヴィータちゃんに謝る。アウグスタさんには破られちゃった多重拘束だけど、ヴィータちゃんになら通用するはず。でも、「そんな・・・！」さっきと同じようにピシピシと氷柱にひびが入り始めて、ついには砕けてしまった。残るはなのはちゃんのバインドだけど、それすらもブチブチと千切れていく。

「ヴィータちゃんをいま放つわけにはいかないよ、なのはちゃん！」

「うん、判ってる！　壊されたすぐからもう一度・・・！」

――レストリクトロック――

「離せぇぇぇーーーッ！　邪魔すんなぁぁぁーーーッ！　殺すぞぉぉーーーッ！」

バインドが全部千切れちゃう前になのはちゃんがもう一度バインドを掛けると、ヴィータちゃんが叫ぶ。そんなヴィータちゃんに私はもう一度氷柱で相手を閉じ込める魔法「スノーホワイト、アイシク

ルスタチュー！」を発動、氷漬けにする。
なんとかなるまで私となのはちゃんでヴィータちゃんを抑え込む。
ルシル君にはごめんなさいだけど、でも「お願い、ルシル君・・・！」
いま私たちが頼ることが出来るのはきっとルシル君だけだから。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒ルシリオン†††

魔力炉（システム）から無理やり蒐集されてしまったがために、魔力が足りずに中級の治癒術式ラファエルを発動しか出来なかったが、シャマルのおかげもあってなんとか右目のダメージも癒すことが出来た。先の次元世界での強制蒐集された時は数日と魔術が使えなかったが、魔力回復さえできれば上級術式でも発動できる。これには心底感謝だ。これなら「アウグスタ・・・！」とやり合え、「シャマル」を助けることが出来るはずだ。もちろんシャマルだけじゃなく「はやて、みんな・・・」も助ける、助けて見せる。なのは達がシグナム達を押さえてくれているその隙に。

「アウグスタよ。お前の目的は次元世界の支配、だったか？」

「そうね。まずは強く誇り高いベルカを復活させるわ。それから次元世界に散っている騎士たちを手駒に迎え、そしてミッドチルダを獲るわ」

――ブルーティガードルヒ――

――我（コード）を運べ、汝（アンビエル）の蒼翼――

シュリエルの高速射撃魔法を放ってきたアウグスタ。今の奴はシュリエルの魔法どころか"夜天の書"に蒐集され蓄積された魔法をも扱えると見ていい。剣翼アンピエルを発動して空へ上がることでドルヒを回避。粉塵が上がる中、アウグスタと、奴の側に控えるようにシャマルが追翔してきた。

「面白い魔法ばかりが蒐集されているわね。試しにコレを使ってみようかしら」

≪Ｃｏｄｅ　Ｕｌｌｒ≫

アウグスタの側に浮遊する"夜天の書"がパラパラとページが捲れ、一言そう発した。アレの手に現れたのは俺の有する上級にして広範囲の対象をロックオンして同時殲滅する術式の１つ、弓神（コード・ウル）の狩猟。やはり俺の術式も蒐集されてしまっていたか。先の強制蒐集時とは違って八神家の事情を知っているため、つい危機感が足りずに確認を怠ってしまっていた。

「コード・ウル、シュート」

番えられていた槍の如き長さを持つ魔力矢ウルが弓より射られた。神秘は当然の如く有していないため、大した恐怖にはならない。それに「本来の持ち主に対して使うとは馬鹿か？」ウルの欠点くらい知っているに決まっているだろう。

俺は急いで反転し、ウルが無数の光線と化すそれより前に「女神（コード・イドゥン）の救済」ウルの先端に右手の平を当て、その魔力を全て吸収して失った魔力を回復させる。魔力炉（システム）は正常に稼働している。ああ、問題は

無い。

「魔力吸収の魔法！？　お前、本当に面白いわ！」

驚きより歓喜と言った風な表情を浮かべるアウグスタ。そんな奴の背後に居るシャマルから「クラールヴィント。戒めの糸」"クラールヴィント"より伸びるペンデュラムの魔力ワイヤーが迫って来た。ペンデュラムを"エヴェストルム"で弾き飛ばす。

「闇（コード）を誘え、汝（カムエル）の宵手！」

間髪入れずに平たい影の触手カムエルを２０と創り出し、アウグスタとシャマルを捕縛しようと伸ばす。シャマルは７つのカムエルで簡単に捕まえることが出来たんだが、「コード・カムエル！」奴もまたカムエルを発動。

俺の１３のカムエルと奴の１０のカムエルが真っ向から衝突、相殺された。そして奴は「ハウリングスフィア！」３基の魔力球を設置。残り３つのカムエルが衝突した瞬間に爆破して対処した。

「はやてとシュリエル、シグナム達を返してもらうぞ、アウグスタ！！」

――無慈悲（コード）たれ、汝（プシエル）の聖火――

蒼炎の龍プシエルを放つ。アウグスタは"夜天の書"を開き、「コレね。コード・イドゥン！」自信満々にプシエルの鼻っ面へと左手を翳した。だが残念。イドゥンには未だある欠点が備わっている。それを知ってか知らずか奴はイドゥンを発動した。

「え、吸収できな――・・・っ！？」

アウグスタがプシエルに呑み込まれてしまった。イドゥンの欠陥。それは属性変換された魔法を吸収できないというものだ。その欠陥を直すのをこれまでずっと後回しにしていたが、今回に限っては幸いしたな。

魔力ダメージでナハトヴァール・アウグスタを引っ込ませる。先の"闇の書"事件と同じ、防衛プログラムを叩き潰すのみ。"エヴェストルム"の先端をプシエルの頭部へ向け、「エヴェストルム」カートリッジを計2発ロード。

「戦滅神（コード・ヴィズル）の破槍・・・・！」

上級雷撃系砲撃ヴィズルを発射。ヴィズルは今なおプシエルの口の中に居るアウグスタへと向かい・・・「っ！？　シャマル！！」カムエルに拘束されながらも動き、奴を庇うようにヴィズルの前へと躍り出た。

「くそ・・・！」

慌ててヴィズルを霧散させ、さらにカムエルを操ってシャマルを無理やりその場から遠ざけた。その瞬間。プシエルの顎が上下に裂かれたと思えば、「っ！」背後に気配を感じたため振り向きざまに"エヴェストルム"を振るう。

背後に居たのはやはりアウグスタ。奴は左前腕部に装着されているナハトヴァールの籠手で俺の斬撃を受け止め、「シュヴァルツェ・

ヴィルクング！」黒い魔力を纏わせた拳打を繰り出してきた。

≪Ｐｅｉｔｓｃｈｅ　ｆｏｒｍ≫

"エヴェストルム"の柄の半ばを分離させ柄頭を魔力ワイヤーで繋げる形態、パイツェフォルムへ変形させ、アウグスタの拳打を半歩分横に移動して回避。魔力ワイヤーで奴を簀巻き状態にして「おらぁぁぁ！！」近くのビルの屋上に叩き付けた。

「デアボリック・・・エミッション！」「曙光神（コード）・・・降臨（デリング）」

俺を中心に閃光系魔力が球体上に爆ぜ、アウグスタを中心にバリア発生阻害効果有りの魔力が球体上に爆ぜた。

Ｅｐｏｓ２２－Ｃなお深き闇に染まれ、聖夜の天（ソラ）～Ｓｉｇｎａｌｆｅｕｅｒ　ｅｉｎｅｓ　Ｇｅｇｅｎａｎｇｒｉｆｆｅｓ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

ルシル君の酷い有様にショックを受けたわたし。しかもそれをやったんがシュリエルってこともあって余計にショックやった。わけも解らんくなって、わたしは目も耳も塞いでそれが夢であるように願った。

そんで気が付けば、「ここは・・・どこや？」わたしは全く別の場所に居った。足元はまるで血溜まりみたいで、空は赤黒くて気味の悪さがあって、どちらも地平線の彼方まで拡がっとる。明かりらしい明かりは無いけど、でも真っ暗やない妙な空間や。

それに今のわたしは、「動けへん・・・！」何十本もの茨で体を縛られてて、まるで十字架に磔にされとるかのように宙に居る。

「（前みたく夢か幻・・・？　ううん、ちゃう、感覚がある）痛っ・・・」

全身に絡みついとる茨の棘が刺さったみたいや。今のわたしの格好はセーターにタイトスカート、タイツやけど、それでも素肌にまで届いてくる。

「やはりあの程度の絶望では完全に堕ちなかったようね。あと、下手に動くとズタズタになるわよ」

動くのをやめた時、聞き覚えのある声が前の方から聞こえてきた。そっちの方に目を向けると、「アウグスタさん・・・！」が何もないところからすぅーっと音も無く歩いて出て来た。肩に掛かるくらいの薄緑色の髪を靡かせて、薄ら光を灯しとる金色の瞳をわたしに向けて来た。

「御機嫌よう、此度の闇の書の主・八神はやて。申し訳ないけど貴女の体を奪わせてもらっているわ」

「体を、って。それやったら今のわたしは・・・？」

「ここは言うなれば闇の書の管制人格、貴女たちがシュリエルリートと呼んでいるアレと融合した貴女の体の内側、貴女と管制人格の精神が混じり合った世界と言ったところね」

「わたしとシュリエルの精神の世界？　こんなのが・・・？」

改めて周囲を見渡して、そう漏らした。こんな気味の悪い空間がわたしとシュリエルの繋がりを示す世界やなんて信じたくない。わたしが眉を顰めたのを見たのか「正確には私に汚染されている、ね」アウグスタさんが付け足した。

「酷い・・・」

「酷い、ね。そう言われてもしょうがないわ。でも、そんな感情もあと僅かで消え去るわ」

ルシル君みたく指をパチンと鳴らしたアウグスタさん。それを合図としたようにアウグスタさんの背後に5つのベルカの魔法陣が横一列に並ぶように展開された。そんな魔法陣から出て来たんは、「シュリエル、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！！」わたしのように茨に捕まって磔状態にされとる5人やった。わたしの呼びかけに誰も答えてくれへんかった。気を失ってるみたいで、全員が俯いてる。

「みんなに何したんや！　みんなを放して、今すぐ！」

怒りが込み上げてきて、アウグスタさんに向かって怒鳴った。そん時に勢い余って顔近くに有った茨の棘で頬を切ってしもうた。そやけどこんな痛み、家族のことを想えばどうってことない。

「それは出来ないわ。前に会った時に言ったかと思うけれど。闇の書の力を以って私は王となるのよ。生前には叶うことはなかった。でもこうしてナハトヴァールとして存在できている以上、夢を果たさなければならないでしょう？」

「そんなつまらんことでわたしらを――シュリエル達を巻き込まんといて！」

「判っていないようね。闇(どうぐ)の書は使われてこそ真価を発揮するのよ」

アウグスタさんがまたわたしの家族を道具扱いしてきたから「取り消して・・・！」って睨み付ける。すると「いいえ、取り消さない

わ。よく御覧なさい。これが、ソレらの本来の姿よ」って言うて、また指をパチンと鳴らした。
わたしとシュリエルとアウグスタさんの心が交わった世界やってゆうこの空間に、３つの空間モニターが創り出された。映し出されてるのは「シグナム、ヴィータ、ザフィーラ・・・？」の３人なんやけど、素肌も顔も真っ黒くて、目は真っ赤。影の中に浮かぶ火の玉みたいやった。

「アレらは抜け殻よ。精神は私の背後に居るでしょう？　私の言うことを聴かないでしょうから中身をこちらに引っ張り込み、抜け殻を操りやすいようにしているのよ。騎士はあくまで戦いの駒。それを果たさなければ無用な長物となり果てるのよ」

アウグスタさんの話に怒りも憎しみも生まれて頭がどうにかなりそうやったけど、シグナム達がいま戦っとる相手の姿を見て、「え・・・？」それどころやないってレベルで混乱した。

「すずかちゃん、なのはちゃん、アリサちゃん、フェイトちゃん・・・！？　それにアルフさんとクロノ君も・・・！？」

わたしの友達が、アウグスタさんに操られてるシグナム達と戦ってた。フェイトちゃんとアリサちゃんはシグナムと、すずかちゃんとなのはちゃんはヴィータと、アルフさんとクロノ君はザフィーラと戦ってる。

「シグナム、・・・フェイトちゃん、アリサちゃん・・・」

雷を扱うフェイトちゃんが黒い大鎌を持ってて、シグナムと同じ炎を扱うアリサちゃんはライフルの銃身下に刃を付けたバヨネットを持ってる。フェイトちゃんがシグナムと接近戦をして、アリサちゃんが炎の弾丸や砲撃ってゆう魔法でフェイトちゃんを援護してる。

「ヴィーター、・・・すずかちゃん、なのはちゃん・・・」

ヴィーター達は戦闘ってゆうよりかは、すずかちゃん達がヴィーターを戦わずに止めようとしてくれてる。なのはちゃんがバインドってゆう魔法でヴィーターを捕まえて、すずかちゃんの氷の魔法で氷漬けにすることで完全に動きを封じて、ヴィーターがそれを外すと同じように繰り返す。あれなら互いに傷つかへん。

「ザフィーラ、・・・アルフさん、クロノ君・・・」

ザフィーラみたく犬（それとも狼？）の耳や尻尾を生やしたアルフさんと、魔力を全身に纏わせたザフィーラが激しい殴り合いをして、杖を持ってるクロノ君が魔力弾や砲撃、バインドでアルフさんを援護してる。

「酷い、こんな・・・！」

そやけどザフィーラの防御力の所為でアルフさんとクロノ君の攻撃はどれも弾かれてて、でもザフィーラの攻撃は容赦なく2人を襲ってる。もう見てられへん程に一方的な戦いやった。拮抗してる戦い、戦いやない戦い、一方的な戦い。それが外の世界で起きとる現実やった。

「知らなかったのね。あの子たちも魔導師よ。しかもとびっきりの魔力持ち。貴女の大好きな家族は、あの子たちからも魔力を蒐集したのよ」

「っ！・・・・シグナム達が、すずかちゃん達を襲ったって言うんか・・・・！？」

「ええ。その際の記録が闇の書に残っているはずだわ。御覧なさい」

「ぅ・・・・あ・・・・！？」

頭の中に流れ込んでくるんは臨海公園の光景で、頭をデフォルメアニマルに変身させとるルシル君とシグナムとヴィータが、すずかちゃん達を襲って魔力を蒐集する場面やった。指示を出してるんはルシル君のようで、シグナムがすずかちゃんとアリサちゃんを、ヴィータがなのちゃんを、ルシル君がフェイトちゃんとアルフさんを倒してしもうた。

「はぁ、はぁ、はぁ、・・・・！　ルシル君たちが言うてた、間違って民間人を蒐集したって話。あれってすずかちゃん達のことやったってことか？　」

今のが本当のことやとしたら、ルシル君たちはわたしやすずかちゃん達に隠してたってことや。わたしにも話してくれへんかった。わたしがすずかちゃんを紹介した時も、ずっと隠してたんやな・・・・。隠しことをされてたのがちょう辛い。と、「少し不安を抱いたわね」

いつの間にか目の前にアウグスタさんが居って、わたしの左頬にそっと手を添えてきた。ひんやりとしてて、まるで氷みたいやった。

「どうして貴女に黙っていたのかしらね？　主であり、家族である貴女に。どうして？」

「っ・・・！」

覗かれるわたしの目。心の中に妙な、黒い感情が渦巻くのが判った。

（アカン、信じやな、みんなを。でも何を？　ちゃう、そんなん関係ない。無条件で信じることが家族や！）

渦巻く嫌な感情を、家族を信じようとする思いで抑え込む。キッとアウグスタさんを見返すと、「あら、残念。この程度では貴女を掌握することが出来ないのね」わたしから離れて行って、そしてシグナム達の側に向かった。

「さらなる絶望が必要なようね。貴女の想い人を・・・墜とすわ」

「ルシル君を・・・！？　待っ――眩しい・・・！」

目の前が強く発光したから慌てて目を閉じる。まぶたの裏からでも判る強い発光。けどそれもすぐに治まったのが判ったから、恐る恐る目を開けると、「っ！？」目の前に広がるのは外の世界で、そして「っ、ルシル君！」が"エヴェストルム"を手に持って、わたしに向かって飛んで来とるのが見えた。

『はやて、シュリエル！　いま助けるからな！』

『無駄よ。今代の主と管制人格、そして守護騎士は私が掌握するわ。・・・直に沈むわ、私の深い闇の底へと』

外のわたしの口から発せられたんはわたしの声やなくてアウグスタさんのもので、「ルシル君、聞こえるか！？」もう一度声を出しても、わたしの声は自分の耳にだけ届いとるような感覚がある。

――轟（コード）き響け、汝（バラキエル）の雷光――

ルシル君の"エヴェストルム"の先端から蒼く輝く雷の砲撃が発射されて、それは一直線にわたしに向かって来た。目を閉じようとしても閉じれへん。それでようやく判った。わたしがいま見とるんはシュリエルの視界やってことが。

「わわっ！？」

わたしらの体を乗っ取っとるアウグスタさんがルシル君の砲撃を避けたことで目の前の光景が目まぐるしく流れる。耳には"闇の書"が開くペラペラってゆう音が届いて、≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ≫そんな声が聞こえた。

『撃ち貫きなさい』

右の手の平から綺麗な桜色の砲撃が発射された。ルシル君は避けよ

うとせぇへんから「危ない、ルシル君！」呼びかける。すると、まるでわたしの声が届いたかのようにルシル君は小さく微笑んで、砲撃に右手の平を翳した。

――女神（コード・イドゥン）の救済――

砲撃がルシル君の手の平に触れた瞬間、砲撃が一瞬で消滅した・・・とゆうよりは吸収されたっぽかった。ルシル君から聞いとった魔力吸収の魔法や。ルシル君は『はやて達を返せぇぇぇーーーッ！！』ってジグザグに飛び回りながらわたしらの方に飛んで向かって来た。そんでルシル君とアウグスタさんは射撃や砲撃の魔法を撃ち合いながら空を飛び回り始めた。

「ルシル君・・・」

蒼い剣１２枚を翼にして空を翔けるルシル君と、黒い翼を翻して飛ぶアウグスタさん。ルシル君はアウグスタさんの魔法を吸収したり避けたり防いだりして慌ただしいけど、アウグスタさんはときどき防ぐことも避けることもせんでルシル君の攻撃を受けた。でも効いてへんようやった。

『さすがは闇の書の防衛プログラム。やはり並の防御力じゃないな』

――集い纏え（コード）、汝の火炎槍（フロガゼルエル）――

『お前の魔導のおかげもあるわ。これまでの蒐集対象史上、最高だわ！』

蒼く燃え盛る"エヴェストルム"を連続で振るうルシル君の斬撃を、左腕の籠手で防いでは右拳で反撃するアウグスタさん。でもお互いに決定打を与えられへん。

「チッ。本当に面倒な子供だわ。まだ何か隠し玉を持っているようだし。速攻で撃墜するのは諦めるわ」

耳元で囁かれたかのような「アウグスタさん・・・！？」の声に、視界が外界から元の精神世界に戻った。わたしは変わらず茨に捕まって磔状態。目の前にはモニター４つとアウグスタさん、そしてわたしと同じように茨に捕まっとるシグナム達。

「ルシル君はきっとわたしらを助けてくれる！　すずかちゃんも、なのはちゃんも、アリサちゃんも、フェイトちゃんも、アルフさんにクロノ君も、みんなが居るから！」

「友情、良い響きね。信じるものや大切なもの、何においても守りたいものがある者は強い、確かに強いわ。それらを守るために必死になって、限界以上の力を引き出せたりするもの。人の意思、それは魔力より魔導より才能よりをも凌駕する」

アウグスタさんのことはよう判らへんけど、でもそんな友情とか絆とかゆうモンを馬鹿にするような人やと思ってたから、ちょう驚きや。機嫌良さそうなアウグスタさんがみんなの側に歩み寄って行った。

「場合によっては最強にして無敵だったりする。でもね、八神はやて。逆を言えば、それを奪ってしまえばその無敵性も消え去るのよ」

「っ！　みんなに何をするつもりや！」

不穏な言葉を吐いたアウグスタさんがわたしに振り向いて「貴女にとっての守るものを奪い、絶望を贈るわ」ニヤって嫌な笑みを浮かべて、右腕を頭上高く掲げてパチンと指を鳴らした。するとわたしのすぐ目の前にまでモニターが移動して来た。

「っ！？　やめて・・・いやや、やめて、やめて、やめてぇぇぇぇぇーーーーッ！！」

シグナム達の全身にヒビが入ってく様がモニターに映し出された。それに「うぅぅ・・・」前の方から呻き声が聞こえてきたからそっちにも目を向けると、「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！？」の体が薄らと消えていき始めた。

「何しとるんや！！　やめて！　今すぐやめて！！」

「無理よ。もう止まらないわ。精神を抜いても肉体は私の命令に逆らおうとしているまま。アレらが本気で戦えば、あの子たちの首は今頃、胴体から斬り離されているわ。蒼き狼とて相手の使い魔と管理局員を押しているけれど、未だに戦いを繰り広げている。肉体が逆らっている証拠。紅の鉄騎と風の癒し手に至っては無様が過ぎるわ」

アルフさんとクロノ君は協力してザフィーラと戦い続けてて、少しずつやけどザフィーラを押し始めた。ヴィータは今もすずかちゃんとなのはちゃんのバインドで捕まったまま。シャマルもルシル君の魔法らしい影の手に簀巻き状態にされた格好でビルの屋上に寝かされとる。シグナムも速さのあるフェイトちゃんと、フェイトちゃんをサポートするアリサちゃんの前に押され気味や。

「あ、当たり前や！　シグナム達はもう、人を殺すような騎士やない！　た、確かに今はわたしのために人を傷つけとるけど・・・！」

「ええ、知っているわ。本当に面倒な真似をしてくれたわ、貴女。でもそれももう終わり。使えない駒はこれにて退場。私の力の糧としてくれるわ」

モニターに映るシグナム達が一斉に転移されて、1つのモニターに集められた。そのモニターに映っとるんはルシル君とアウグスタさん。そんですずかちゃん達がルシル君の元に集まって来ようとしてるのが見える。

『シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ・・・！？　彼女たちに一体何をした、アウグスタ！！』

『私の内に居る八神はやてがなかなかの強情で、体を支配下に置いている今でも意識まではまだまだで。ここでさらなる絶望を与え、その心を砕い――』

『これ以上、あの子を傷つけることは許さない！！』

ルシル君がシグナム達の側に飛んだその時、『「無駄よ」』外と内のアウグスタさんの声がダブって聞こえた。それを合図としたようにナハトヴァールが籠手から蛇の塊へと変化して、その蛇らを一斉にシグナム達の胸を貫いた。
口に挟まれてるんはシグナム達のリンカーコア。そんでナハトヴァールの蛇がアウグスタさんの左腕に戻って行く途中、開かれた"闇の書"にリンカーコアを押さえつけて蒐集してもうて、「みんな！！」の体が砂のように崩れ去ってしもうた。

「あ・・あ・・・ああ・・・・・」

それだけやない。この空間に引っ張り込まれたってゆうシグナム達の精神の方も「うぅぅ」呻き声を上げて苦しみだして、「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！」も外のみんなと同じように消えてしもうた。

「はい、終わり。貴女の家族は御覧の通り、消えてしまいました。永遠に・・・さようなら」

「ああああ・・・ああ・・・・・ああああああああああああああああああああああああ！！！！」

†††Ｓｉｄｅはやて⇒なのは†††

すずかちゃんと一緒にヴィータちゃんを止めていたんだけど、いきなり氷の柱の中から消えたヴィータちゃん。念話でアリサちゃん達

と連絡を取ると、そっちの方でもシグナムさん達が消えたってことだった。

「じゃあ、どこに・・・？」

「・・・あっ、なのはちゃん！　きっとはやてちゃん――ううん、アウグスタさんとルシル君のところだよ！」

「あ、そうか！」

私とすずかちゃん、みんなもルシル君たちの元へ急いで飛んで向かうことになった。ルシル君たちは戦いを中断している所為かどこに居るのか判らなかったけど、「なに・・・！？」数百ｍほど離れたビルの屋上から立ち上った深紫色の魔力の柱。

「なのは！」

「すずか！」

そのあまりにも強大な魔力に呆けてしまっているところで名前を呼ばれた。フェイトちゃんと、フェイトちゃんに背中から抱えられてるアリサちゃんだ。遅れて「フェイト！」「みんな！」アルフさんとクロノ君も合流して、すぐにあの魔力の柱を目指して飛ぶ。

――ディバインバスターー――

――轟き響け、汝の雷光（バラキエル）――

――バスターラッシュ――

――呑み食せ（コード）、汝の夜影（ライラエル）――

魔力の柱が消えたと思えば４つの砲撃が四方八方に放たれた。２つは蒼、２つは私とすずかちゃんの魔力光を示す桜色と藤紫色。ルシル君の魔法と、アウグスタさんの魔法だ。そして「こっちに向かって来るぞ！　警戒！」クロノ君が声を上げた。こっちに向かって蒼と深紫色の魔力が向かって来ていた。

――ブルーティガードルヒ――

――舞い振るは、汝の獄火（サラヒエル）――

２色の光の間で激しく交差する血色の短剣と蒼炎の槍。とここで、『すまない、手伝ってくれ！』ルシル君から協力をお願いする念話が来た。お願いされるまでもないよ、ルシル君。ルシル君の念話に私たちは了承を返した。

「レイジングハート！」

≪Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ≫

「バルディッシュ！」

≪Ｐｌａｓｍａ　Ｂａｒｒｅｔ≫

「フレイムアイズ！」

≪Ｆｌａｍｅ　Ｂａｒｒｅｔ≫

「スノーホワイト！」

≪Ｆｒｏｚｅｎ　Ｂａｒｒｅｔ≫

「スティンガーレイ・・・！」

「フォトンバレット！」

迫り来るアウグスタさんとルシル君に向けて私たちはそれぞれ魔力弾を複数展開。ルシル君がアウグスタさんの高度・軌道を制限するように飛びつつ炎や雷、氷の槍や砲撃を放ち続けて・・・徐々に高度を下げていく。

――聖剣集う絢爛の城（ソード・キャメロット）――

アウグスタさんとルシル君の行く手を遮るように真っ赤に燃える炎の壁が円周状に発生した。『撃ってくれ！』急速上昇したルシル君からの合図だ。

「「「「「「クリアランスボミング！！」」」」」」

――殲滅（コード）せよ、汝（カマエル）の軍勢――

「蹂躙粛清（ジャッジメント）！！」

私たちの数十発の魔力弾とルシル君の１００本以上の魔力槍による絨毯爆撃が、炎の壁を突破しようと魔法を撃ち続けていたアウグスタさんを襲う。いろいろな色の魔力爆発が連続で起き続ける。ここでルシル君と合流。

そしてヴィータちゃん達までもがアウグスタさんによってリンカーコアを蒐集されて、消されちゃったことを聴いた。話してくれたルシル君は終始悔しげに顔を歪ませていて。私たちはそんなルシル君に声を掛けることも出来なくて。

「しっかりしなさいよ、あんた！　あんたの知識とあたし達の力が合わされば、はやて達を助けることも出来るんでしょ！？」

そんな時にアリサちゃんがルシル君を掴み上げて怒鳴った。すると「しっかりしているさ。自分の不甲斐無さに怒り心頭だが、決して諦めたわけじゃない」ルシル君はそう言って足元、炎の壁の中で今もなお渦巻く粉塵を見ながら、"エヴェストルム"を二剣一対の形態に変形させた。

「やることは変わらないんだ。魔力ダメージでナハトヴァールの機能を低下させる。改めてみんなにお願いしたい。はやてを、八神家を助けるのを手伝ってくれ」

「あったりまえでしょうが！」

「さっきも言った通りだよ、ルシル君」

「うん。私たちもはやて達を救いたいんだ」

「だって友達だもん。頼まれなくたって手伝うし、引いてって言われても引かないよ」

私たちは頭を下げてお願いしてきたルシル君に笑顔で返すと、「君たちと出会えて、本当に良かった」って笑顔を返してきてくれた。いつ見ても思う。ルシル君の笑顔って、「反則だよ・・・」可愛いんだもん、男の子なのに。

「あ・・・！」

笑顔から一転。ルシル君が胸を押さえて焦りのようなものを見せたから「どうしたの、ルシル君？」って訊いてみると、「先に謝っておくよ」って言った。私たちが「？？？」を浮かべる中、ルシル君が「上昇しつつ散開、今すぐ！」大声を上げたから、一斉に高度を上げてバラバラに分かれた。

「我が内より来たれ、貴き英雄よ。天上よりの使者。其は七元徳が一を司りし者、名を信仰。来たれ、フィデス」

アウグスタさんの声が粉塵の中から聞こえてきたかと思えば、「っ！！？」その粉塵を何かが突き破って出て来た。それはどう見ても「龍！？」だった。しかもただの龍じゃなくて、荘厳と言うか豪華と言うか絢爛と言うか。

銀を基調とした胴体には黄金に縁取られた赤や青と言った装甲、それに小さな翼が何十と並んでいて、頭はちょっとおかしな形をしてる。下あごにだけに黄金の装甲を付けて、目は無くて代わりに額に人の顔のような石像がある。そして魔法陣のような紋様が額や背に浮いてる。

「素晴らしいわ、お前の力！！」

そんな龍の額の上に腕の組んだアウグスタさんが立っていて、そしてそのまま勢いよく私たちの間を通り過ぎて行った。すごい風圧で靡くスカートと髪を押さえながら、全長２００ｍ程もある龍の軌道に注意する。アウグスタさんの乗る龍は雲の上でとぐろを巻きながら「オオオオオ！」って咆えた。

「ちょっと、ルシル！　もしかしてあの龍って、あんたとなんか関わりあるの！？」

「ああ！　名はフィデス！　俺の使い魔の１体だ！」

「使い魔！？　アレが！？　しかも１体って・・・、あんなのがまだ居るわけ！？」

「すまないがまだ居る！　魔力や魔法と一緒に、使い魔召喚の呪文と鍵を盗られた！」

離れているからかアリサちゃんとルシル君が大声で話し合う。そんな中、「来るよ！」アルフさんが声を上げた。龍――フィデスがと

ぐろを巻くのをやめて高速で降下して来た。

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

どうやってアウグスタさんを止めようかと考えていた時、ルシル君の両脇に展開された円陣２つから巨大な銀色の腕が伸びて来た。フェイトちゃんとシャルちゃんと戦った時に見せた魔法だ。

『俺がフィデスを止める！　君たちはアウグスタを頼む！』

ルシル君の念話が合図となったように２本の腕がフィデスの胴体をガシッと捕まえて、『今だ、撃て！』って号令を出した。

「ディバィィン・・・バスタァァァァーーーーーッッ！！」

「プラズマ・・・スマッシャァァァァーーーーーッ！」

「イジェクティブ・ファイアァァァァーーーーーッ！」

まずは私とフェイトちゃんとアリサちゃんの三方向からの同時砲撃。アウグスタさんは「パンツァーシルト」と一言。フェイトちゃんとアリサちゃんの砲撃はベルカ魔法陣のシールドで防いで、私の砲撃は直撃。

着弾時の爆発によって生まれた煙幕の中から「刃を以って血に染めよ」そんな呪文と一緒に血色の短剣が３０近く、一斉に放たれてきた。それを私たちに代わってシールドで防いでくれるのがすずかちゃん達だ。

『防御は私たちに任せて！』

『君たちは攻撃に専念してくれ！』

『フェイト、なのはにアリサも気を付けておくれ！』

すずかちゃん達に『ありがとう！』お礼を言いながら、私たちは射撃に砲撃とアウグスタさんに当て続ける。ルシル君もまたフィデスを倒そうと「マキエル！」って炎と雷と光の龍をいっぺんに創り出して、胴体に絡みつかせた上で噛み付かせてる。それなのに・・・。

『うそでしょ、あたし達の攻撃が全然効いてないっぽいわよ！』

『防御力が尋常じゃない！』

アウグスタさんの防御力はあまりに常軌を逸していて、私たちの魔法が一切通用していないように見えちゃう。そんな中、『まずい、いったん離れろ！』ルシル君から焦りの含まれた念話が来た。激しくうねり出したフィデスがルシル君の創り出した巨腕を破壊して、とうとう逃げられちゃった。

フィデスはビルの間を高速で飛び回りながら私たちから離れて行って、そしてまた向かって来た。とここで、「我が内より来たれ、貴き英雄よ」ルシル君が呪文を詠唱した。さっきアウグスタさんがものと同じものだ。

「フィデスだけは何としても本来のマスターとして俺が潰す。苦労

しているようだが、今は君たちに頼る他ない。アウグスタのことは頼んだ」

そう言ってこっちに向かって来るフィデスを迎え撃つようにルシル君も「天上よりの使者。其は七美徳が一を司りし者、名を純潔。来たれ、カスティタス！」そう詠唱した。すると私たちの足元に蒼く巨大な十字架の魔法陣が現れた。

どうしてかゾワッと総毛立つ。そこからチェスとかで見る馬の駒の形をした胴体が飛び出して来た。全高５０ｍ位の巨大さで、全部が黒くて、よく見れば額に角があるからユニコーンで、頭の上には魔法陣。遅れて黒い石板が無数に飛び出して来て、両腕を形作った。

「七美徳（アンゲルス）の天使と七元徳（アポストルス）の使徒の衝突、か。耐えてくれよ、局員の結界」

ルシル君がカスティタスの頭の上に乗って、こっちに向かって突っ込んで来るフィデスと対峙。

「天上よりの使者。其は七元徳が一を司りし者、名を希望。来たれ、スペス！」

そんな時にアウグスタさんがまた呪文を詠唱。胸を押さえるルシル君が「人の使い魔をポンポンと勝手に召喚するな！」って怒鳴る。そして私たちの前に姿を現したのは大きな鳥。全身が豪華絢爛な装甲に覆われていて、首が２つ、尻尾は２頭の龍の首に頭が鳥。胸や翼に人の顔が付いてる。そしてフィデスやカスティタスのように２つの頭の上に魔法陣が浮いてる。

そしてカスティタスとフィデスとスペスが衝突して、口や角から砲撃とか、体当たりとかパンチとか撃ち合い始めたのを見て、「ねぇ、いつからあたし達は特撮映画に出演してるの？」ってアリサちゃんが漏らした。私は開いた口が閉じないって感じだ。

「アレらが使い魔って時点でもう、ルシリオンの異常性は最高レベルにまで達したぞ」

あのクロノ君ですら完全に目の前で繰り広げられてる怪獣大決戦に呆けちゃってる。攻撃を撃ち合いすること数十秒。カスティタスのパンチでスペスがビルに突っ込んで、追い打ちのように角から雷撃を放った。そして胴体に巻きついてるフィデスごと地面に自ら墜落して押し潰した。

『クロノ君！　ルシル君に建物をあまり壊さないように伝えてよ！　あとで修復するこっちの苦労が・・・！』

エイミィさんの映るモニターが私たちの間に展開された。そんなエイミィさんは半泣き状態で、頭を抱えてた。クロノ君は「無理だ。アレは止められない。判るだろ」苦々しくそう返して、ルシル君の使い魔たちの戦いを見た。

無傷なスペスはビルを崩しながら空に飛び上がって、地面に横たわったままのカスティタスとフィデスに突進して、ぶつかった。すると結界内を満たす程の閃光が生まれた。目を閉じて治まるのを待っているところで『アウグスタをそっちへ飛ばすぞ！』ルシル君から念話。光が治まったと同時、チェーンバインドで簀巻き状態にされたアウグスタさんが飛ばされてきた。

「とにかく行くぞ、みんな！」

クロノ君の号令の下、私たちは「無駄だというのが解らないの！？」チェーンバインドを粉砕して翼を大きく広げて怒声を上げるアウグスタさんと対峙。そして・・・。

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「フレイムアイズ！」

私とフェイトちゃんとアリサちゃんはデバイスを構えて、「フルドライブ！！」を起動した。カートリッジを1発ロードした"レイジングハート"は槍のようなエクセリオンモードに変形、フェイトちゃんの"バルディッシュ"は2発、アリサちゃんの"フレイムアイズ"は3発とロードして大剣、ザンバーフォームとクレイモアフォームに変形した。

アクセルやバスター、アサルトやハーケン、ファルシオンやバヨネットじゃ傷1つとして付けられてない今、攻撃力過多かもしれないけど、きっとこれくらいじゃないと通用しない。

「・・・デバイスを変形させた程度で私に勝てると思って？」

私たちは言葉で返すことなくただジッとアウグスタさんを見据えるのみだ。すると余裕そうだったアウグスタさんの表情が冷たいもの

に変わっていって、「愚かな」そう一言呟いた。

「我が闇の書とナハトヴァールの力の前に、己が無力を噛みしめるといい・・・！」

≪Ｂｌｕｔｉｇｅｒ　Ｄｏｌｃｈ≫

アウグスタさんの周囲に５０基は超えてる短剣が展開されて、「往きなさい」そう号令を下して発射させた。でも大丈夫。だって「スノーホワイト！」すずかちゃんが居てくれるから。

≪Ｉｃｅ　Ｍｉｒｒｏｒ≫

縁が氷で覆われてるミッド魔法陣のシールドが張られて、短剣全弾を防いだ。間髪入れずに「ストラグルバインド！」クロノ君と、「チェーンバインド！」アルフさんのバインドがアウグスタさんを捕らえた。

「レイジングハート！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　Ｅｘｃｅｌｌｉｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ≫

エクセリオンモードでの主砲、エクセリオンバスター。射程はディバインバスターより短いけどその分、バリア貫通・着弾時炸裂反応・誘導制御っていう副次効果を持たせることが出来た。

「シューット！」

――パンツァーシルト――

アウグスタさんが展開したシールドに砲撃が防がれちゃった。バリアより防御力のあるシールド、しかもただでさえ魔力量の多いアウグスタさんの使うシールドだ。そう簡単には突破できないことは判ってる。でも・・・。

（私ひとりだけじゃない・・・！）

「「デュプルブレイズ・シオンズクリーバー！！」」

≪≪Ｄｏｕｂｌｅ　ｂｌａｄｅｓ　Ｚｉｏｎ'ｓ　ｃｌｅａｖｅｒ≫≫

アウグスタさんの背後に回り込んだフェイトちゃんとアリサちゃんの結界やシールド・バリア破壊効果を有した雷と炎の魔力刃が鋏のように薙ぎ払われる。その２つの刃を「コード・ケムエル」蒼い小さく円い盾を重ね合せたシールドで防いだアウグスタさん。でも徐々にヒビが入って、ついには砕かれた。

「おのれ・・・！」

それでもまだダメ。アリサちゃんの刃をナハトヴァールの籠手で、フェイトちゃんの刃を驚いたことに素手で鷲掴んで止めた。でも表情は硬くて、明らかに無理してるような感じだ。

「何度砕こうとも・・・！」

――クロスバインド――

「何度でも捕らえてやる！」

――チェーンバインド――

そんな時にクロノ君のバインドで磔の体勢みたく拘束されて、アルフさんのバインドで全身を雁字搦めにされた。そうなると当然、アリサちゃんとフェイトちゃんの挟撃をその体に受けることに。なのに、「まだダメなわけ！？」アリサちゃんが声を上げる。２人の刃はまだ直撃してない。見えない盾に防がれてるように両腰から数ミリ程度の開きがあった。だったら・・・。

「すずかちゃん！」「なのはちゃん！」

２人で頷き合って、コンビネーション魔法の１つを使うことを確認。"レイジングハート"をアウグスタさんへ向けてカートリッジを２発ロード。

「エクセリオンバスターのバリエーションその１！　ディバイド・・・シューット！」

エクセリオンバスターの幾つかあるバリエーションのうちの１つを発射。極限にまで魔力を圧縮して砲線を細くすることで、威力集中、砲速上昇したうえでさらに３発同時発射（フェイトちゃんのトライ

デントを基にした）するディバイドシュート。

「リフレクティブミラー！」

着弾するより早く、すずかちゃんがいくつものアイスミラーを球体状に展開してアウグスタさんを囲う。そして私の砲撃はアウグスタさんを外れてアイスミラーの結界内に着弾。その瞬間、３本の砲撃は無数に分裂してアイスミラーの結界内を縦横無尽に反射。

「「エクセリオンバスター・リバウンディングシフト！」」

それらが一斉にアウグスタさんに着弾して、アイスミラーの結界ごと大爆発。巻き込まれないように私たちはその場から大きく離れた。

Ｅｐｏｓ２２－Ｄなお深き闇に染まれ、聖夜の天（ソラ）～Ｎｕｒｅｉｎｅ　Ｈｏｆｆｎｕｎｇ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

アウグスタによって召喚された俺の使い魔――"異界英雄エインヘリヤル"である七元徳の使徒アポストルス。そのうちの２体である希望スペスと信仰フィデスと戦いを繰り広げることになってしまったが、「これはこれでアリだな」はやてら八神家を助ける為、なのは達が協力して戦っている。

これは俺が望んでいるシナリオでもある。友達として精一杯、全力で立ち向うその姿。より一層、あの子たちの絆が強まる。先にも抱いた感情を、今の段階で抱いた。そう「本当に綺麗だな、君たちは」その姿に改めて魅了される。っと、見惚れている場合じゃなかったな。

「カスティタス！」

『承知』

――Ｄｏｍｉｎｅ　ｑｕａｎｄｏ　ｖｅｎｅｒｉｓ／主よ、御身が世界を裁きに――

チェスで言うナイトの駒である馬（角付き）の形をした胴体、数億個のモノリスで両腕を構築した異形の姿をしている、七美徳の純潔を司る大天使カスティタスに指示を出す。腕を構築しているモノリ

スが一斉に分解され、２００ｍ級の龍であるフィデスと５０ｍ級の大鳥のスペスを包囲するように並ぶ。
モノリス結界を突破しようと突進や砲撃を繰り出す２体の使徒だが、柔軟に動くモノリスは突進・砲撃を避け、それでもなお包囲を崩さない。俺は"エヴェストルム"のカートリッジを２発とロードし、頭上に放り投げる。そして・・・

「魔力炉稼働率上昇（システム）。魔力に神秘を付加。魔導式を魔道式へと昇華。・・・弓神の狩猟（コード・ウル）・・・！」

魔法ではなく魔術とした弓神の狩猟（コード・ウル）を発動。空いた右手に弓を、左手に槍の如き矢ウルを番え、「往け！」射る。そして魔力弓を消し、落ちて来た"エヴェストルム"をキャッチ。即座にカートリッジをロード。

「そら、もう１発！」

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

"エヴェストルム"先端より閃光系上級砲撃を発射。分裂することなく直進を続けるウルがモノリス結界に入った瞬間に炸裂し、モノリスを反射板として利用して全方位からフィデスとスペスを襲撃。遅れてゲルセミが結界内でモノリスに着弾、幾つかに枝分かれた上で２体を襲撃した。魔力と神秘に爆発・奔流に呑まれた２体を警戒しつつ、アウグスタと戦っているなのは達をチラッと見る。

「初めて見た魔法だったなぁ～」

先ほど見えたなのはの細い多弾砲撃と、すずかの反射板――氷のシールド結界によるコンビネーション魔法を真似てみた。大戦時やこれまでの契約時でも似たような攻撃を何十回と見てきたが、あの子たちが使うと余計に綺麗に見える不思議。

「本当に俺はあの子たちのことが好きなんだな・・・。ふふ」

もちろん、異性ではなく人間として。そんなあの子たちの為にも頑張らないとな。この地球の界律に合わせてランクが落ちていてもやはり強力なエインヘリヤル。先の事件のように召喚時間切れを狙えるだけの余裕がない。あの子たちの邪魔をさせないように、「このまま押し切ってくれる！」"エヴェストルム"を指環に戻し、神器・"神槍グングニル"を具現する。

「記憶の1つくらい、持って行け！」

――運命（コード）の三女神・其（ウルド）は編む者――

"グングニル"に何かしらの魔術を付加する場合に必要な術式ウルドを発動。付加するのは「我が手に携えしは確かなる幻想」複製術式。術式名は「エンジェルスレイヤー」という、対神属用術式。

「いっつ・・・！」

頭と胸に痛みが奔る。去来するのは記憶を失ったことで生まれた喪失感。それでもなお俺は「グングニル！！」を投擲した。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒フェイト†††

なのはとすずかのコンビネーション魔法の直撃を受けたアウグスタ。爆発に呑まれないように離れたビルの屋上へと退避して崩れていくビルから立ち上る粉塵を見ている中、「直撃だったけど、どうかな・・・」なのはが不安げに私たちを見た。すずかも「上手く行ったとは思うんだけど・・・」って不安そう。確かにアウグスタの防御力はルシル以上かもしれないけど、でも・・・。

「フェイトとアリサのシオンズクリーバーで防御の大半を削って、さらになのはの大砲撃を全方位から受けたんだ。墜とせなかったにしても無傷で済むような・・・」

≪Ｓｃｈｗａｌｂｅ　Ｆｌｉｅｇｅｎ≫

クロノの言葉が中断される。その理由は「ヴィータちゃんの魔法だ！」なのはの言う通り粉塵の中からヴィータが使っていた魔力を纏った物質弾が１２発と飛来してきたから。でも「速い・・・！」オリジナルのものとは比べられない程に速い。

「どっせぇぇーーーい！！」

アリサが屋上の落下防止の柵の上に跳び乗って、魔力刃を１０ｍほどにまで伸長させた"フレイムアイズ"を横薙ぎ一閃。物質弾を全弾蒸発させた。そして「信じらんない。ピンピンしてんだけど・・・！」ジッと攻撃発射地点を見据えてそう言った。

私たちもそっちに目をやると、「あれは・・・！」アウグスタの姿は確認できたんだけど、さっきまでは無かったものがその背中には有った。蒼く輝く１２枚の剣と薄く長いひし形１０枚、計２２枚の翼が。

「ルシル君が、フェイトちゃん達との戦いから離脱するときに使ってた魔法・・・？」

「つまり高速戦を仕掛けて来るってこと・・・？」

私たちが抱くのは状況が悪化した、という思い。あの速度について行ける飛行速度を私たち全員が持っていない。私のソニックムーブやなのはのアクセルフィン、アリサのフォックスバット・ランはあくまで短距離の高速移動魔法。軌道を読んで先回りすることくらいは出来る・・・ううん、それすらも出来ないかもしれない。アルテルミナス曹長が居てくれれば良かったんだけど・・・。

「跪け！　我が覇道の行く手を拒みし愚者ども！　私はアウグスタ。世界の王となる、威厳と尊厳の化身！」

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

其は絶え無き妄執・果て無き執念の化身アウグスタ

蒼い光の尾を引きながらこっちに飛んで向かって来たアウグスタ。まずはなのはが「エクセリオン・・・バスター！」砲撃で迎撃を行うけど、アウグスタの飛行速度や機動力が凄まじくて、なのはの砲

撃はアウグスタの残像しか捉えることが出来なかった。
アウグスタはそのまま向かって来たんだけど、私たちの居る屋上より下の階へと突っ込んだ。激しく揺れるビル。腰を落として転ばないように気を付ける。わざとなのかそれとも制御できなくて事故を起こしたのか、ちょっと判別がつかない。

「え、どうなったんだい・・・？」

「何も起きないな・・・」

アウグスタが何も反応を起こしてこない状況に私たちは戸惑う。でもそれはすぐに消える感情。足元からすごく嫌な気配がして、私たちは何も言わずに直感に従って屋上から退避。

――コード・ミカエル――

さっきまで立っていた場所が２０以上の蒼い砲撃で消し飛んだ。ルシルの魔法だ。立ち上る粉塵の中から飛び出して来たアウグスタの周囲に浮いているのはあの２２枚の翼。それらの先端が一斉にこっちに向いて「ミカエル。シュート」アウグスタがそう号令を下すと、たったいま屋上を階下から撃ち抜いた砲撃が放たれてきた。
慌てて散開しながら私はアウグスタへ向かって突進。その最中になのはのシューターやすずかのバレット、クロノのスティンガーブレイド・エクスキューションシフトが私の側を通り過ぎて行く。

――狼王の鋼鎧――

白い魔力を纏ったアウグスタは避けることなく着弾を受け入れて、また「ミカエル！」２２本の砲撃を発射してきた。それを紙一重で避けつつ、「はあああああッ！！」ザンバーフォームの"バルディッシュ"を振るう。だけど、「無駄よ」ナハトヴァールの籠手で防がれる。

「プラズマランサー・・・、ファイア！！」

アウグスタの至近距離で発生させたランサー８発を一斉着弾させる。起きた爆発で一度距離を取らざるを得なくなったけど、下手に距離を詰めておくのも危険だと思うから問題ないはず。と、煙幕の中から「紫電一閃！」燃え上がる剣が振るわれてきた。それを"バルディッシュ"の刀身で受け止める。

「シグナムのレヴァンティン・・・！？」

アウグスタの右手に握られていたのは"レヴァンティン"だった。でも色は黒に染まっていて禍々しく見える。下手するとシグナムの時以上の威力かも知れない紫電一閃。それでも魔力刃を砕かれることはなかったけど、押し切ることが出来ずに拮抗状態に入ってしまった。

「何もおかしくはないでしょう？　烈火の将、紅の鉄騎、風の癒し手、蒼き狼ら守護騎士は闇の書の一部。魔法だけでなくデバイスも扱えて当ぜ――・・・！」

――スティンガースナイプ――

「あら？」

超高速で飛来したクロノの単発魔力弾がアウグスタの右手、"レヴァンティン"を持っている手に着弾して、"レヴァンティン"を弾き飛ばした。急いで"バルディッシュ"を切り返して右脇に薙ぎ払いの一撃を入れようとしたけど「うそ・・・！？」アウグスタは右肘と右膝を使って刀身を挟み込むようにして止めてきた。

「受けなさい」

私のお腹に向けられるナハトヴァール。柄から右手を放して「ディフェンサー！」一点集中タイプのディフェンサー・プラスを展開。どんな魔法でも来い、って身構えた瞬間。籠手の中に内蔵されていた赤い杭のような物が打ち出されてきて、バリアを少し掛けて破砕、そのまま私のお腹に打った。

「っが・・・ぅ・・・ぐ・・・！」

ものすごい衝撃がお腹から全身へと襲ってきて「うあああああ！」その場に留まることが出来ずに墜落することに。そんな私の視界に蒼い光が２２枚の翼が映り込む。あの多弾砲撃で追撃されるってすぐに察した。

――ヴォルカニックスカッシャーーー――

急いで墜落から逃れないとって思った時、横から薙ぎ払われてて き

た巨大な火炎斬撃が翼を呑み込んだ。アリサの魔法だ。それに「フェイト！」アルフが私を抱き止めてくれた。心配してくれるアルフに「ありがとう、私は大丈夫だよ」ってお礼を言う。バリアを張っていなかったら危なかったけど、バリアのおかげで威力や勢いを殺ぐことが出来た。

――コード・ミカエル――

アリサの大威力の火炎斬撃の直撃を受けて１３枚にまで数を減らした翼からまた砲撃が発射されて来て、私はアルフに抱えられたまま全方位に向けて発射された砲撃の雨を掻い潜る。そんな中でアウグスタが降下して来た。標的は明らかに私だ。
だから「アルフ。放して」そう言って、私を放してくれたアルフとは別の軌道で空を翔ける。１３本の砲撃のうち４本が私を、残りは別れたアルフや、こっちに向かって来ているなのは達に向けられて発射された。

「・・・バルディッシュ。ハーケンフォーム。そして・・・ソニックフォーム！」

砲撃を避けたすぐに機動力を復活させる為に大剣ザンバーから大鎌ハーケンに戻して、さらにバリアジャケットをライトニングからソニックへと変更させる。ソニックフォームは装甲を薄くする代わりに私の持ち味である高機動戦をさらに鋭くさせる形態だ。その分、防御力は無いに等しくなったけど。

――ソニックムーブ――

でも、それなら当たらなければいいって話だ。私を追って来ているアウグスタへと反転。驚きからか目を見開いたアウグスタと相対。そして魔力刃を瞬間的に強化しての一撃「ハーケンスラッシュ！」を振るう。
それを「ヴィータのデバイス・・・！」真っ黒に染まった"グラーフアイゼン"を右手に具現させて、受け止めた。とアウグスタがまたナハトヴァールを向けて来た。さっきの杭を警戒したけど・・・

――ナイトメア――

放たれてきたのは砲撃だった。けど大丈夫、避けられる。ソニックフォームの恩恵は、高速移動魔法のソニックムーブを、発動プロセスを踏むことなく常に発動できることだ。瞬時にアウグスタの背後に回り込んで、もう一度ハーケンスラッシュを振るう。

「小賢しい・・・！」

≪Ｐａｎｚｅｒ　Ｓｃｈｉｌｄ≫

展開されたベルカ魔法陣のシールドが私の一撃を防いできた。そして振り向きざまに「テートリヒ・シュラーク」"グラーフアイゼン"を振るってきたからすぐに離脱。空振って大きく懐を開けたアウグスタに向かって「ハーケンセイバー！」魔力刃を飛ばした。
慌てることなくナハトヴァールで受け止めたのを視認して、さらに私はソニックムーブでもう一度背後に回り込んで再展開した魔力刃による一閃、「ハーケンスラッシュ！」を振るう。

≪Ｃｏｄｅ　Ｋｅｍｕｅｌ≫

アウグスタの背後を護るように現れたのは小さく円い盾の集合盾。ルシルの対魔法防御魔法だ。それだけじゃない。「しま・・・っ！」私の両腕と両足に深紫色のリングバインドが掛けられて、さらに剣の翼４枚が私の上下左右に配置された。今の状態で多弾砲撃の直撃は撃墜確実。慌ててバインドブレイクを割り込ませようとするけど、それよりも早く・・・

「コード・・・ミカ――」

――ディザスタークロス――

――エクセリオンバスター――

アウグスタの号令が下る前にアリサの炎とすずかの冷気の砲撃が十字状に放たれ来て、頭上からなのはの砲撃が降って来た。３つの砲撃はアウグスタに直撃して大爆発を起こした。それと同時に私を拘束していたバインドが砕けて、そして翼も消滅して自由になれた。

「プラズマ・・・スマッシャァァァァ――――ッッ！」

私も追撃の砲撃を発射。着弾を知らせるかのように放電爆発が起きた。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒なのは†††

これでもかってくらいにみんなで砲撃を撃ち込んだんだけど、「いくらでも撃ちなさい。無駄だと思い知るまで、何度でも」アウグスタさんは無傷なまま姿を現した。蒼い翼は全部壊したけど、アウグスタさん本人の問題は何も片付いてない。

『本当に堅いわね、アウグスタ』

近くのビルの屋上に立つアリサちゃんからのそんな念話に『でも諦めるわけにはいかないよ』私がそう返す。すずかちゃんも『うん。はやてちゃん達を助けるためにも』、フェイトちゃんも『まだまだやれる・・・！』折れてない。と言うよりは、折れるわけがない。みんなで頷き合って、「子供だからと言って容赦はしないわよ」溜息を吐きながら"闇の書"をペラペラ捲っているアウグスタさんにデバイスを向ける。

≪Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ　Ｇｅｎｏｃｉｄｅ　Ｓｈｉｆｔ≫

アウグスタさんが発動したのはフェイトちゃんの魔法だった。黄金に輝く魔力スフィアが私たちを包囲するように、えっと、１００基以上が展開された。フェイトちゃんの時は３０基ほどで、弾数は１０００発ちょっと。でもアウグスタさんのはその３倍はあるはず。あれは防御しちゃダメだ。

「フォイア！」

「アリサちゃん！！」

「こういう時に改めて思うわ。あたしも空を飛べればって・・・ね！」

すずかちゃんがアリサちゃんの手を取って屋上から飛び立って、私たちもすぐに空に上がって、放たれてきた魔力弾の回避に移る。全方位からの襲撃をさせないために広い大通りを地面スレスレに飛んで、避けきれないものはシールドで弾き逸らすことで対処・・・していたところで、「アウグスタさん・・・！？」が私の目の前に突然現れた。慌てて"レイジングハート"を向けたけど、ヘッド部分をナハトヴァールに弾かれて大きく逸らされちゃった。

――シュヴァルツェ・ヴィルクング――

――ラウンドシールド――

黒い魔力を纏った右の拳が繰り出されてきたのを"レイジングハート"が発動してくれたシールドで防御したんだけど、でもすぐに砕かれちゃった。それでも十分な猶予だった。"レイジングハート"の先端をアウグスタさんに向け直して「バスター！」高速砲のショートバスターを連射する。

アウグスタさんは防御より回避を選んで、私から距離を取りつつも「ナイトメア」砲撃を撃ち返してきた。とここで「鋼の軛」ザフィーラさんの魔法、高さが４０ｍくらいもある白い杭が、私を中心に直径１００ｍほどの円周状に幾つも突き出してきて、逃げ道を塞いできた。

「（さっきのルシル君の炎の壁みたい・・・）周りに逃げ場無し。

唯一の逃げ場は・・・上！」

アウグスタさんが待ち構える頭上。そこには「またルシル君の・・・！」魔法、蒼く燃える炎の槍が数えるのも億劫になる程に展開されてた。逃げ場が全部潰されちゃったかも。ううん、かなり危険だけど、降り注いで来る槍を回避しながら上昇すればたぶん・・・。覚悟を決めようとしたところで『なのは！　いま助ける！』フェイトちゃんからの念話が。それと同時に「コード・サラヒエル。フォイア」アウグスタさんの号令が下った。降り注いで来る槍の雨。ビルとかお店と言った遮蔽物を問答無用で貫通して来る。

――プラズマスマッシャーー――

杭の壁のある一か所が爆発。フェイトちゃんの砲撃が杭を破壊して、逃げ道を開けてくれた。あとは降り注いで来る槍や壊された建物の瓦礫を回避しながらそこに辿り着くだけ。急いで飛行を再開して、フェイトちゃんが開けてくれた脱出口に向かう。その間にも次々と地面に着弾していく槍が爆発を起こして、「ぅく・・・！」爆炎と爆風に煽られちゃう。

≪もう少しです、マスターー！≫

「う、うん・・・！」

「もう少しよ、なのは！」「頑張って、なのはちゃん！」

「なのは！」

フェイトちゃん達が私を呼んでくれている。５０ｍなんてすぐだと思ったけど、アウグスタさんの攻撃が苛烈すぎて上手く飛べない。それでもなんとかあと数ｍと来たところで「なのは！！」「なのはちゃん！」フェイトちゃん達が顔を青褪めさせた。

≪マスターー、頭上です！≫

――ギガントハンマーーーー

"レイジングハート"からの警告に私は直感的に９０度直角に曲がった。その直後、私が通りそうだった地点にアウグスタさんが降下して来て、手にしていたヴィータちゃんの"グラーフアイゼン"（ヘッド部分が大きくなってる）で地面を大きく穿った。瓦礫を防御するためとは言え、ここで飛行を止めたことを私はすぐに後悔した。

「なの――っ！」

――ソニックムーブ――

どんっと強く押し出される感覚。フェイトちゃんだった。そんなフェイトちゃんに向かって落ちて来ていたのは１本の槍。私は何もすることが出来ずに、「うわぁぁぁぁぁ！！」至近に着弾して発生した爆発によって吹き飛ばされたフェイトちゃんを見た。

「「「フェイト！」」」「フェイトちゃん！」

「フェイト・・ちゃん・・・・」

力なく道路に横たわるフェイトちゃんの元に駆け寄るアリサちゃん達。私もフラフラと近寄る。アルフさんがフェイトちゃんを抱き起して何度も「フェイト！」名前を呼ぶ中、すずかちゃんが「スノーホワイト！」治癒の魔法を発動。

「まずは1人、ね。子供のくせに・・・随分と手古摺らされてしまったわ」

――グラウンドマリオネット――

そんな時にアウグスタさんがこっちに歩いて向かって来た。それと同時に道路が隆起して、なんて言うんだっけ・・・ゴーレムのようなものが4体と出来た。

「なのは、ボサッとしてんじゃないわよ！　治療が終わるまであたし達で、すずかとフェイトを守るのよ！」

アリサちゃんに怒鳴られた私は"レイジングハート"を脇に挟んで両手で頬をパチンと叩いて、「うんっ！」改めて構え直す。

「なのはとアリサはアウグスタを、僕とアルフでゴーレムを叩く！
すずか、君はフェイトの治療に専念してくれ！」

「あ、うんっ」

クロノ君の指示に従って私とアリサちゃんはアウグスタさんを、クロノ君とアルフさんはゴーレムと戦う事に。

≪≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ≫≫

アリサちゃんの"フレイムアイズ"と同時にカートリッジをロード。先手はアリサちゃん。まず発動したのは「ブレイズロード！」で、本来は両脚に炎が噴き上がらせてのダッシュ力強化の魔法だけど、今のアリサちゃんは全身に炎を纏わせてる。そして腰を落とした上で"フレイムアイズ"を握る両手を顔の横に持ってきて、突進の構えを取った。

「なのは、援護お願い！」

「うんっ、任せて！」

「何をしようと、私の防御を崩すことは出来ないわ」

――狼王の鋼鎧・剛――

白い魔力を全身に纏わせたアウグスタさんへ向けてシャルちゃん考案の、周囲に展開したアクセルシューター6発とエクセリオンバスターによる射撃と砲撃の同時攻撃「ストライク・・・スタァァーズッ！」を発射。アウグスタさんは防御力を見せつけるように直立不動で右手を砲撃に翳して受けに回った。そして着弾、爆発を起こす中でシューターが遅れて次々と着弾していく。

「行くわよ、フレイムアイズ！」

≪応よ！≫

カートリッジを４発とロードした"フレイムアイズ"が応え、そしてアリサちゃんが「デストラクト・・・ディターレントッ！！」燃える"フレイムアイズ"を先端とした炎の砲弾のようになって突進した。

「多層防御」

≪Ｍｕｌｔｉ　Ｄｅｆｅｎｓｏｒ≫

アウグスタさんが発動したのはフェイトちゃんの魔法で、ミッド魔法陣を幾つも重ねたシールドだ。まず１枚目にアリサちゃんが到達。アウグスタさんによって強化されたフェイトちゃんのシールドだったけど、「うりゃぁぁぁぁぁッ！！」アリサちゃんの突進には通用しなかった。

「このままブチ貫いてやるわ！！」

"フレイムアイズ"の剣先がついにシールド全部を突破してアウグスタさんに到達。アウグスタさんは剣先に右手を翳して受け止めた。防がれちゃったけど、アリサちゃんの突進力には敵わないようで、「くぅぅぅ・・・！」押され始めた。

そしてそのまま未だにそびえ立つ杭のところにまで飛んで行って・・・衝突した。ここからでもよく見えるほどにアリサちゃんの炎が

杭の壁に沿うように燃え上がってる。でもそれは、アウグスタさんの防御をまだ貫けていないってことで・・・。

「次は私だね。レイジングハート。行こう」

≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ａ．　Ｃ．　Ｓ．　ｓｔａｎｄｂｙ≫

エクセリオンモードの"レイジングハート"のヘッド部分から８枚の魔力の翼が生える。今までとは違うとんでもない魔力消費が私を襲う。それでも「アクセルチャージャー起動、ストライクフレーム！」私はこのモードを使う。ヘッド先端部分からは魔力刃が１基、あとヘッド部分の付け根のフレームに沿うように羽が１対展開。

『アリサちゃん！』

『いつでもいいわよ！』

アリサちゃんからも準備万端という返事が来た。ならあとは「エクセリオンバスターＡ．Ｃ．Ｓ．．．ドライブ！！」突撃を敢行するだけ。

Ａ．Ｃ．Ｓ――Ａｃｃｅｌｅｒａｔｅ　Ｃｈａｒｇｅ　Ｓｙｓｔｅｍの名前の通り、このエクセリオンバスターのバリエーションは高速突撃して、ヘッド部分の魔力刃ストライクフレームで相手のバリアを突破、ほぼ零距離での砲撃を当てるというものだ。

――いいかい、なのは君。この魔法は零距離で炸裂するため、当然だがなのは君自身もダメージを受けることになる。もちろん、直撃

後の威力余波処理などは備えてあるが、何せ君の魔力は膨大だ。それでは足りないかもしれない。これからもバージョンアップを施していくつもりだ。だからそれまでは・・・十分考えた上での発動を――

スカリエッティさん――ドクターの忠告が脳裏を過ぎる。ごめんなさい、でも今どうしても必要な一手なんです。それにちゃんと考えました。使うなら今だ、って。だから使っちゃいます。すぐにアリサちゃんとアウグスタさんの元に到着。とここでアリサちゃんが『悪いわね。あとは任せるわ』そんな念話を送って来たから『どんと任せて！』そう応じた。

「バーストアップ！」

それと同時に"フレイムアイズ"の魔力刃が半実体化を解いて純粋な炎になった。そして大爆発。炎が周囲に広がる。私はその炎の中を突っ切って、あれだけの爆発を受けてもなお全くの無傷だったアウグスタさんと対峙。

「おのれ・・また・・・！」

でも今までの余裕そうな表情とは違って怒りが出て来てるかも。これはもしかすると、ルシル君が提示した解決方法に近づいてる？とにかく私は突撃を続行。そして気付いた。炎で隠れて見えなかったけどアウグスタさん、クロノ君のバインドで両手足拘束されてた。

「それでも私の防御は貫けないわ！！」

バインドが砕かれる。ストライクフレームがアウグスタさんの胸元に当たるまであと1mくらいってところでガキィンと何かに拒まれた。見えない防御フィールド。これさえ突破できればきっとダメージを与えることが出来るはずなんだ。

「いっっっけぇぇぇーーーーーッッ！」

「っく・・・！」

アウグスタさんの背が触れている杭の壁が音を立ててひび割れて、大きく崩れ去った。アウグスタさんを抑え込むものが無くなって、私たちは杭の壁の中から改めて街中に戻った。でも、景色はがらりと変わってた。所々から燃え上がる炎の柱、そびえ立つ龍のような岩、禍々しい色の植物が海鳴の街を壊していた。

（これもアウグスタさんの仕業・・・！？）

私とアウグスタさんはそんな街中から海上にまで飛んで来た。海にも在る龍のような岩の柱。私たちがこうしている間にも新しい岩の柱が海面から突き出し続けてる。

「御覧なさい。これが闇の書の力よ。素晴らしいでしょ？」

「闇の書の力は本来、こんな酷いものじゃなかったって聴きました！　元は健全な資料本だったって・・・！　名前だって本当は、夜天の魔導書って、とても綺麗な！」

「そうね、そうらしいわね。でもその怒りを私にぶつけるのはお門違いよ。私が主になった時にはすでに呪われた書だったもの」

「でも！　ナハトヴァールっていう異物を加えた所為で余計に酷いものになったって・・・！」

「それについても謝るつもりはないわ。自分の所有物をどう扱おうが・・・勝手というものでしょ！！」

アウグスタさんの背中が海上にそびえ立つ岩の柱の１つにぶつかったことで、私たちの飛行は終わった。でもこれでＡ・Ｃ・Ｓの威力を余すことなく伝えることが出来る。「届いて！」マガジンに残ってるカートリッジを全弾ロードして、さらに突撃力を強化。

「返して・・・。はやてちゃんの、ヴィータちゃんの、シグナムさんの、シャマルさんの、シュリエルさんの、ザフィーラさんの、そしてルシル君の・・・笑顔を、希望を、日常を、あなたが奪ったものを全部・・・！」

私の顔に向かって伸ばされてきたアウグスタさんの左腕に装着されたナハトヴァール。赤い杭の先端が額に向けられた。それでも私は目をアウグスタさんの顔にのみ向ける。

「返して！！！」

「なに・・・！？」

とうとうストライクフレームがアウグスタさんの防御を貫いた。

「ブレイク・・・シューーーーット！！！！」

すぐさま砲撃を発射。目の前が私の魔力光、桜色の魔力爆発でいっぱいに染まる。続けて襲ってくるのは魔力余波と衝撃波。これで余波処理が働いていると思うと、もし無かった場合の時はどうなる事か、想像もしたくない。

「はぁはぁはぁ・・・ふぅ・・よし」

岩の柱の上に降り立って息を整えながら、A・C・Sを解除した"レイジングハート"から空になったマガジンを外して、新しいマガジンを装着。魔力爆発と崩れていく岩山から濛々と立ち上る煙を見据えていると、「やってくれるわね・・・」ようやくダメージが通ったようで、少し煤汚れたアウグスタさんが姿を現した。

「まだまだやれるよね？　レイジングハート」

≪もちろんです。ご友人方の為にも、もうひと踏ん張りですね≫

"レイジングハート"の言葉に頷きを返して、苛立ちを見せ始めたアウグスタさんを見据える。そして・・・

――ショートバスターーー

――ナイトメア――

すぐさま砲撃の撃ち合いに入った。海上に突き出す幾つもの岩の柱の中を高速飛行で翔け回りながら砲撃を撃って、避けて、シールドや柱を壁にして防いで、を繰り返す。でもやっぱり「全然効いてない・・・！」当てることは出来てるけど、Ａ・Ｃ・Ｓの零距離でも軽いダメージしか与えられなかった以上、その他の攻撃はビクともしないんだ。

（ならもう・・・スターライトブレイカーしか・・・ない）

今の私ひとりに出来るのはそれだけだ。あとは集束完了までの時間稼ぎをするだけなんだけど。私ひとりじゃ無理・・・だよ。

（フェイトちゃん・・・）

私を庇って倒れてしまったフェイトちゃん。ううん、ここに来て頼るわけにはいかないよね。私ひとりでもなんとかして時間を・・・。

「少しばかり注意散漫ではなくて？」

――チェーンバインド・シーリングフォース――

「っ！？・・・ぅく・・・これ、ルシル君のバイン――え・・・！？」

蒼いチェーンバインドが私を拘束した。両手に３本ずつ、腰から下が５本で簀巻き状態。すぐに習ったバインドブレイクを発動しよう

としたんだけど、魔力が上手に使えない、だから魔法が発動できない。

「磔の体勢にされる気持ち、少しは理解できたかしら？」

「っ！！」

アウグスタさんが私の目の前にまで近づいて来てそっと頬に触れて、「次はあなたよ」耳元にそう囁いてきた。ゾワッと総毛立つ。そんなアウグスタさんが離れて行って、「来たれ。冥府の螺旋槍」一言呟いた。

≪Ｗｕｒｆ　Ｓｐｅｅｒ　ｄｅｒ　Ｕｎｔｅｒｗｅｌｔ≫

私の頭上、何か・・・とてつもなく大きな何かが突き出て来た。

「あの槍はね、古代ベルカにおいて戦船に対する攻撃として構築された対艦魔法なのよ。対人で使うような物ではないけど・・・。私をここまで追い込んだその罪には相応しい罰だと思うの」

アウグスタさんが高度を上げてその槍の上へと消えていった。どう見ても良いことにはならない。それは正しい感だった。対艦の槍がドリルのように高速回転しながらゆっくりと降下してきた。あんなのを受けたら、強化された私の防御力でも・・・死んじゃう！　何度も魔法を使おうとしてもやっぱり魔力が上手く扱うことが出来ない。

「さようなら。あなたの死は、無駄にはしないわ」

「いや・・・」

すぐそこまでにまで迫って来ている脅威に、今までに感じたことがない程の恐怖を感じた。目を逸らしたいほどなのに逸らせない。もうダメ、って諦めそうになった時。

「なのは！！」

≪Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ≫

黄金の光が一閃。迫って来ていたドリル状の槍が縦一線に斬り裂かれた。私に当たる前に真っ二つに分かれて、そのまま海に落下、崩れ去っていった。そして「なのは！」私の元にフェイトちゃんが飛んで来た。羽織ってるのは黒じゃなくて白いマント。ライトニングフォームに防御力を追加したブレイズフォームだ。

「フェイトちゃん・・・！」

「ごめん、なのは、大丈夫！？　いま助けるから！」

ザンバーフォームの"バルディッシュ"を一閃して、私を拘束してるバインドを破壊。ようやく自由になれた。フェイトちゃんに「ありがとう」お礼を言い、そして「私のことなんかよりフェイトちゃんの方が・・・」心配の言葉を掛ける。

「私は大丈夫。すずかに治してもらったから」

「ごめんね、フェイトちゃん」

「んー、私はごめんなさいじゃなくて・・・」

「・・・あ、ありがとう、フェイトちゃん」

「うん♪」

フェイトちゃんと2人して笑みを浮かべる。そんな中、「もういい加減に眠りなさい。無理に起きていても、もうこの流れが変わることは無いのだから」アウグスタさんの声が頭上からしてきた。

「それはこっちのセリフよ！」

「アリサちゃん！」

「眠るのはあなたです！」

「すずかちゃん！」

龍のような岩の柱の先端に立つすずかちゃんとアリサちゃん。そこに「そうだな」クロノ君と、「というわけだから、あんたがさっさと消えちまいな」アルフさんも合流。

「そう。残念だわ」

アウグスタさんが凶悪な笑みを浮かべたその瞬間、足元の海面が大きく爆ぜた。そこから飛び出して来たのは、私たち全員を丸呑みできる程に大きな口、その数３つ。それはあまりに突然で、回避するには全てが遅すぎた。フェイトちゃんくらいの速度があればみんな逃げられるのに・・・。

――飛刃・翔舞三閃――

そして、ソレもまた一瞬だった。私たちの頭上から真紅に光り輝く斬撃が３つ降って来て、私たちを呑み込もうとしてた３つの口を斬り裂いた。

「まったく。七美徳（パティエンティア）の慈悲を奪われているなんて。ルシルのドジっぷりも相変わらずここに極まれりね」

頭上、そこには真紅に光り輝く一対の翼を羽ばたかせたシャルちゃんが居た。

Ｅｐｏｓ２３聖夜に生まれし遥かなる夜天の王～Ｍｅｉｓｔｅｒｄｅｓ　Ｎａｃｈｔｈｉｍｍｅｌｓ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

なのはに当たりそうだった炎の槍の爆炎をまともに受けた私は気を失っていたみたいで、気が付いてみれば私は「アルフ・・・？」に背負われていて空を飛んでいた。アルフの肩越しからクロノと、アリサを抱っこしたすずかが前を飛んでいるのが見える。

「なに、これ・・・？」

大好きな海鳴の街が見るも無残な姿に変わり果てていた。龍のような岩の柱や火柱が色んなところから突き出していて、ビルなどの建物には植物の蔦が絡みついていた。

「フェイト、目を覚ましたのかい！？」

「フェイトちゃん！　よかったぁ、治すことは出来たけど目を覚まさなかったから・・・」

「心配したわよ、ホント」

「フェイト。まだ戦えるか？」

そう確認してきたクロノに「もちろんだよ」そう答えて、アルフの背から離れる。と、ここでようやく「なのは・・・？」が居ないことに気付いた。誰かが答えて知るよりも早く、遠く離れた海上でなのはの魔力光である桜色と、アウグスタ――というよりシュリエルの魔力光である深紫色の魔力爆発が連続で起きているのを視界に捉えた。

「まさか・・・！」

「ああ、だから僕たちは急いで向かっている。なのは1人で叶うような相手じゃない。はや――」

――冥府の螺旋槍（ヴルフシュペーア・デア・ウンターヴェルト）――

空にドリルのような杭、もしくは槍のようなものが創り出された。目を凝らして見ると、その先端の先に在るもの――ううん、居る「なのは！！」を視界に捉えた。しかも蒼いワイヤーのような物で拘束されていて動けずにいる。

「ちょっ、あんなものを人間相手に使うって、アイツ馬鹿じゃないの！」

「なのはちゃん！　どうしよう、どうしよう・・・！」

「フェイト！　先に行け！」

クロノの大声に真っ白になりそうだった頭の中がスッと晴れて、「

うんっ！」ソニックフォームのままだった私はすぐさま連続ソニックムーブで先行。そして「バルディッシュ、ザンバーフォーム、そしてブレイズフォーム！」を起動させる。
カートリッジをロードしてザンバーへ。空になったカートリッジをシリンダーから排莢させて、スピードローダーで一気に装弾。バリアジャケットはソニックからブレイズへ。防御の大半を捨て機動力を確保するソニックとは違って、ブレイズはニュートラルのライトニングに防御力を追加したフォームだ。

「なのは！」

≪Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ≫

特大斬撃魔法、ジェットザンバーを発動。伸長した魔力刃を槍に向かって縦一閃。なのはに届く前に真っ二つに切断することで、私はなのはを助けることが出来た。遅れてアルフ達も私たちに合流。そんな時、私たちの足元に広がる海面が大きく爆ぜた。その原因は、大きく開かれた３つの口が飛び出して来たことによるもの。

（避け――無理！　私ひとりならギリギリだけど、他のみんな・・・特にアリサが逃げられない！）

それほどまでに巨大で、そして近かった。終わった、って本気で思った。でも空から真紅の魔力斬撃が３つ降って来て、私たちを呑み込もうとしていた３つの口が裂かれて無数の羽根となって消滅した。

「まったく。七美徳（パティエンティア）の慈悲を奪われているなんて。ルシルのドジっ

ぷりも相変わらずここに極まれりね」

攻撃を行った主、シャルが遥か頭上に居た。しかも魔力で出来ている真紅の翼を背負って。確かシャルは飛行魔法の一切を使えないはず。そんなシャルから『ほら、ボサっとしてないで、さっさとはやて達を助けるよ』念話が来た。私たちが行動を起こすより早く「ブルーティガードルヒ」アウグスタが動いた。血色の短剣を２０基、シャルに向かって一斉発射した。

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

シャルは翼を羽ばたかせて高速落下。短剣を"キルシュブリューテ"で斬り裂きながらアウグスタへ向かって、

「炎牙月閃刃（フランメ・モーントズィッヒェル）・・・！」

火炎を纏う"キルシュブリューテ"の一撃を振るった。アウグスタは私たちの時みたく防御に回ろうとしないで回避を選んだ。でもシャルは回避先を予想していたみたいで、剣閃の軌道を変えて「そこぉぉぉーーーッ！！」アウグスタの脇腹に直撃させた。

アウグスタの防御力を知る私たちからすれば、また通用しないんだろうな、ってある種の諦観めいた思いがあったけど、「ぅぐ！？」アウグスタはその一撃を防ぐことが出来ずに薙ぎ払われるままに海面へと墜落、沈んで行った。そのあまりの呆気なさに私は開いた口が閉じない。

「・・・って、いっったぁぁ～～い！　なにあれ、堅い・・・！

ま、それはともかくとして・・・〜〜〜〜〜っ、なのはぁぁぁぁぁ！！」

「ふえ！？　なに、どうし――にゃぁぁぁ！？」

シャルは何を思ったのかいきなりなのはに抱きついて、頬にキスし始めた。顔を真っ赤にしてるなのはの次に、「フェイト！！」私に抱きついてきて、なのはのように頬にキスをしてきた。そしてアリサにすずかと同じように抱きついて頬にキス。私たちがボーっとしちゃっている中、「なにを考えているんだ、イリス！」クロノが止めに入った。

「クロノも！　チューー　」

「うひっ！！？？」

「アルフにも〜　」

「っ！　シャル、あんた、どうしたんだい！？　キャラが変わってるような・・うんや、変わってないような？」

うん、なんて言うんだろう。今のシャルはシャルだけど、何かが変。特に「シャルちゃん、その翼・・・」なのはの指摘通りシャルの背には一対の翼。シャルは飛べないはずだ。それに「あんたの魔法ってベルカ語だったっけ？」アリサの言う通りでもある。

「あ、あー・・っと、ううん、なんでもないよ、うん。ささ、そん

なことよりも闇の書の闇――ナハトヴァールのことだよ」

シャルは無理やり話題を変えるようにアウグスタの沈んでいった海面へと"キルシュブリューテ"の剣先を向けた。そっちに目を向けた瞬間、私たちを中心にして時計の文字盤の数字と同じ個所から20mほどもある岩の柱が突き出してきた。そのうちの1本にアウグスタが立っていた。

「あなた、一体何者・・・？」

「私は・・・時空管理局および聖王教会所属、シャ――イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト！　そして相棒のトロイメ――コホン、キルシュブリューテ！」

なんだろう、シャルがさっきから言葉を詰まらせているんだけど。そんな私のちょっとした疑問を余所に、「聖王家の番犬、フライハイトの騎士・・・！」アウグスタとシャルの会話は続く。

「ヤー。悪いけど、さっさと片を付けさせてもらうよ。私たちの友達を・・・返せ！　みんな、行くよ！」

シャルの号令一下、私たちは一斉に攻勢に転じた。なのはは砲撃、私とアリサ、そしてシャルは斬撃、アウグスタへの足止めとして、アルフやすずかにクロノが射撃魔法の弾幕を張る。

アウグスタはそんな私たちの攻撃を紙一重で回避しつつ、「闇に沈め。デアボリック・エミッション！」魔法を発動。球体状に爆ぜる空間攻撃。回避に間に合わない距離もあって、私はすぐにシールド

を張ろうとした。

「飛刃・翔舞四閃！」

それよりも早くシャルが放った真紅に輝く魔力斬撃がアウグスタの魔法を斬り裂いて、私たちが効果圏内に入る前に無効化してくれた。驚愕に目を見開いて隙だらけなアウグスタへ向けて「ジェットザンバァァァァッ！！」すぐに"バルディッシュ"を振るった。

それなのにアウグスタは余裕とでも言うようにナハトヴァールで受け止めた。そんなアウグスタの背後から「せぇぇぇいッ！」アリサの"フレイムアイズ"のクレイモアフォームによる斬撃ヴォルカニックスカッシャーが襲った。

「挟撃ばかりしか能が無いの、あなた達？」

"バルディッシュ"を捌かれてしまって、"フレイムアイズ"の刃と衝突させられてしまった。強大な雷と炎が反応して大爆発を起こした。視界を覆い隠す煙幕。この中で奇襲されるのはまずい。そう判断して煙幕外に出ようとした時、視界の端の煙が僅かに動いたのを見た。

"バルディッシュ"を振るって、「っ！」すぐさま止めた。そこに居たのは、「フェイトちゃん！」なのはだったからだ。なのはもほぼ槍と化してる"レイジングハート"の先端を私の胸元に突き付けようとして止めた。

≪Ｃｏｄｅ　Ｐｕｃｉｅｌ≫

そんな時に私となのはに襲い掛かってきたのは、煙幕を消し飛ばすほどに蒼く燃える蛇。なのはと左右に分かれて噛み付き攻撃を回避して、間髪入れずに"バルディッシュ"を振るって首を落とす。そしてなのはが「エクセリオンバスターッ！！」アウグスタに向けて砲撃を発射。

「せい！」

そんななのはの砲撃を裏拳で弾き逸らして、放射体勢のままで居るなのはへ向かって突進。私が助けるよりも早く「どっっせぇぇーーーい！」アルフが急降下して来て、「あぐっ！？」アウグスタの頭を両足で思いっきり踏みつけた。

アウグスタは空に留まることが出来ずに海に落下、派手に水飛沫を上げた。でもすぐに「獣風情がぁぁぁぁッ！　王の頭を足蹴にするとは何事かぁぁぁぁーーーーッッ！！」海から水柱を上げながら飛び出して来たアウグスタ。

「そっくりそのまま返すわ。妄執・執念の塊風情が・・・はやて達から笑顔を奪うな！！」

――光牙裂境刃（ツェアライセン）――

真紅の魔力を纏う"キルシュブリューテ"をアウグスタへ向けて横薙ぎに一閃したシャル。その一撃もまたアウグスタの防御を貫いて、「うぐふっ！？」お腹に直撃させた。体を折るアウグスタにさらに打ち上げの一撃を当てた後、私たちに向かって「トドメ！　もちろん、全力全開で！！」って叫んだ。

「フェイトちゃん！」

「なのは！」

私となのはのコンビネーション魔法をスタンバイ。横に並んで、私たち２人の魔法陣が重なり合った大きな魔法陣を足元に展開。私たちの魔法に巻き込まれないように、そしてシャルの邪魔にならないようにアルフ達が避難するのを確認。

「Ｎ＆Ｆ中距離殲滅魔法！」

「ブラストカラミティ！！」

なのはの魔力スフィアと私のプラズマスフィアを周囲に計２０基展開。その間にもシャルが単独でアウグスタを"キルシュブリューテ"でタコ殴りにしていた。シャルの攻撃は面白いほどにアウグスタの絶対って思われていた防御を突破していて、「なんなのよ、あなたは！！」アウグスタをとうとう本気で焦り始めさせていた。

「「ファイアァァァァーーーーーーーッッッ！！！」」

私はザンバーフォームでの砲撃魔法プラズマザンバー、あとプラズマバレットを、なのははストライクスターズを同時発射。交わり合う私たちの砲撃が、シャルにボコボコにされていたアウグスタを捉え着弾、間髪入れずに魔力弾が殺到していく。ギリギリで避けたシャルが私となのはの元に飛んで来た。

「うわお♪　すっごぉ～いっ♪」

そう言って私たちの間に入って肩に腕を回した。そこにアルフ達も合流。さっきまでアウグスタの居た空を見上げる。今の魔法の直撃を受けたアウグスタの姿は見えない。心配なのは、アウグスタの体ははやてのものだということだ。もしかしてやり過ぎてはやてごと？って思ってしまう。みんなもそのようで不安げに空や海と視線を移す。

「ルシル君の話だと、魔力ダメージを与えてアウグスタさん――ナハトヴァールがはやてちゃんとシュリエルさんを抑え込む力を弱めることが、２人を助ける方法だって」

「でも問題のアウグスタがどこに行ったのか判らないじゃない」

「ひょっとしてなのはちゃんとフェイトちゃんの魔法で・・・？」

すずかから向けられた視線に「ふえ！？」なのははビクッと肩を竦ませて、私は頭を横に振った。どれだけ威力があっても非殺傷設定だから、消し飛ばすなんてことは絶対にない。

「そもそもルシリオンは何をやっている？　まだ自分の使い魔と戦っているのか？　エイミィ」

『こちらアースラのエイミィ！　ルシル君ならたった今、怪獣大決戦を終わらせて、ちょっと休憩中みたい』

私たちの前にモニターが展開されて、道路の真ん中で大の字になって横になっているルシルが映し出された。それを見たシャルが「お疲れ様、ルシル」見ていてドキッとするくらいに可愛い笑顔を浮かべてそう労った。でもその表情はすぐに険しくなって、「こっちももうちょっと頑張ろうっか」そう言って海面を見下ろした。

「まさか・・・・！」

私も海面を見る。と、派手に水柱を上げて飛び出して来たのはやっぱりアウグスタだった。でもこれまでと違ってバリアジャケット――騎士甲冑は見るも無残にボロボロで、息を絶え絶えと言った様子。当然とも言える。さっきまでと違ってシャルに防御を全部抜かれた状態で、私となのはのコンビネーション魔法を受けたんだから。それでもなお存在しているアウグスタの執念や妄執にはもう、脱帽するしかない。

「すぅぅぅ・・・・はやてぇぇぇぇーーーーーッ！」

突然シャルがはやての名前を叫んだ。呆気にとられる私たちを余所に「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、シュリエル！しっかりしろ！　いつまで寝てる！？　とっとと起きろ！」叱咤した。

シャルの目が、私たちも、って言っているようだったから、「はやて！」私も、「ヴィータちゃん！」なのはも、「シグナム！」アリサも、「シャマルさん！」すずかも、「ザフィーラ！」アルフも、「シュリエルリート！」クロノも、みんなが八神家の名前を何度も

叫ぶ。

「？？・・・一体なにをし、て・・・え？・・・な・・・」

アウグスタの動きが急にぎこちなくなった。いま自分の身に起きていることが信じられないといった風に目を見開いて、「馬鹿な・・・！」左腕のナハトヴァールを押さえて苦しみだした。

「なのはとフェイトの魔法は確かに届いていたんだよ。はやて達が目覚めるきっかけとしては十分だって言うほどに」

≪カートリッジを全弾ロード≫

"キルシュブリューテ"のカートリッジをロードして刀身に魔力を付加したシャルが「遅刻した償いとして、私がアウグスタをブッ倒す！」そう言って"キルシュブリューテ"を頭上に掲げた。

「キツイの一発！　光牙（リッター）・・・烈閃刃（ネーメズィス）！！」

振り下ろされた"キルシュブリューテ"から放たれた砲撃は、苦しみからか何も行動を起こせなかったアウグスタを呑み込んだ。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒はやて†††

『・・て・・』

なにか聞こえる・・・？

『・・やて・・・・』

誰や？

『・・はや・・・・』

わたしの名前を呼んでるんは・・・・？

『・・・・は・・・て・・・・』

なんで呼ぶん？　誰が呼ぶん？

『はやて！』

真っ暗闇の中、わたしの名前が何度も呼ばれる。閉じてるのか開けてるのかも判らん目に力をなんとか入れると、闇の奥、とても綺麗な蒼い光が見えた。声はそこからしてて、その声の主は・・・ルシル君やった。その声に応じようにもこちらからは返答できひんかった。考えることは出来ても声にも出せへんし思念通話も送れへん。

『なのは達が頑張ってくれているから、きっと俺の声も届いてくれていると信じている。目を覚ませ、はやて』

目を覚ませ。そう言われてもわたしは・・・シグナム達の居らん世界になんて戻りたない。ルシル君が居る、すずかちゃん達が居る世界、そこは良い世界やってことくらいは解る。解るんよ。そやけど

好きな人や友達が居っても、そこに家族が居らんのは嫌や。

『はやて。頼むよ、帰って来てくれ。シグナム達を喪った現実を見た君が抱いている絶望、言葉にし難いモノだってことは、認めたくないモノだってことは理解できる。俺だって、かつて・・・』

ルシル君・・・？

『・・・でもな、はやて。君はまだ間に合うんだ。シグナム達はまだ生きている。彼女たちは闇の書の一部。だから、君が主として守護騎士の復活を願えば――』

「・・・・・・っ、シグナム達が戻って来る・・・！」

蒼い光が出口やと言うようにパァッと晴れ広がっていって、真っ暗闇がひび割れて崩れてく。そんでわたしは、わたしとシュリエル、アウグスタさんの心が混じり合った真っ赤な世界へと戻って来ることが出来た。

「っ！？　八神はやて！？　馬鹿な、あれだけ精神に損傷を負って、どうして戻って来られた！？」

戻って来てすぐに聞こえたんはそんな驚愕の声。見ればアウグスタさんは蹲るようにして座ってて、目の前に展開されとるモニターを睨み付けてた。モニターにはシャルちゃんがドアップで映って、真紅に輝く刀を一閃。アウグスタさんに呻き声を出させるほどに殴ってた。

「おのれ、私と闇の書の防衛機構を悉く破って来る・・・！」

アウグスタさんが苦しんでる理由はどうやらシャルちゃんのおかげみたいや。それだけやない。わたしを捕まえてる茨が少しずつ絶ち切れ始めてる。それに「シュリエル・・・！」唯一残ってくれてるたしの家族、シュリエルを捕まえてる茨もまた切れ始めてた。

「まずい、まずい、まずい、このままでは・・・！」

本格的に焦り出したアウグスタさんを一度見た後、わたしは「シュリエル、目を覚まして！！」必死に名前を呼ぶ。すると、「止しなさい！」アウグスタさんが目に見えて焦り出したんが判った。やっぱりルシル君の言う通り、まだ間に合うんや。

「シュリエル！　シュリエル！　シュリエル！」

「やめろ、というのが・・・聞こえな――」

『Ｎ＆Ｆ中距離殲滅魔法！』

『ブラストカラミティ！！』

モニターから聞こえてきたなのはちゃんとフェイトちゃんの掛け声。アウグスタさんが「この状況であの砲撃は・・・！」わたしからモニターに勢いよく振り返った。激しく揺れる動く視界を表すモニター画像の端に映るんはシャルちゃんで、シャルちゃんの身長ほどあ

る桜色の刀を振り回して外のアウグスタさんを滅多打ち。

『『ファイアァァァァーーーーーーーッッッ！！！』』

そんな中で撃たれたんがなのはちゃんとフェイトちゃんの同時砲撃やった。モニターから溢れ出る桜色と黄金の魔力の光が、この赤い心の世界を満たした。するとわたしを捕まえてる茨が一気に絶ち切れ始めて、あと3本にまでなった。見ればシュリエルの茨もほとんどが解けてて、「ん・・う・・ん・・」呻き声を上げ始めた。

『はやてぇぇぇぇーーーーッ！　シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、シュリエル！　しっかりしろ！　いつまで寝てる！？　とっとと起きろ！』

そんな中でシャルちゃんの叱咤の声が響いてきた。

『シグナム！』

『シャマルさん！』

『ヴィータちゃん！』

『ザフィーラ！』

『シュリエルリート！』

シャルちゃんだけやない、すずかちゃん達みんなも家族の名前も一

緒に呼んでくれた。うん、何度でも呼んでくれてる。

「おのれ、おのれ、おのれ・・！」

辛そうにフラフラと立ち上るアウグスタさんがシュリエルのところへよろけながらも歩き始めた。脳裏に過ぎるシグナム達が消えてしもうたアノ瞬間。やめさせようと「やめて！」声を出す。

「シュリ、エル・・シュリエル・・・、お願いや、目を・・・覚まして！」

「このままでは、私の夢が、あの御方への御恩が・・・果たせない・・・！」

シュリエルから今度はわたしへと向かって突進してきたアウグスタさん。右手を真っ直ぐわたしに伸ばしてきて、「力づくで・・・堕とす！」頭を絞めつけようとしてきた。

「・・・お願い・・・シュリエルぅぅぅ～～～～～～ッッ！」

「二度と立ち直れない程に直接精神に絶望を叩き込んでくれる！」

目の前にまで迫って来たアウグスタさんの右手から一切目を逸らさんと見据える。あと少しってところで、「ぐふっ！？」アウグスタさんが大きく横に吹っ飛ばされた。

「っ・・・おはようや、シュリエル・・・！」

「はい。主はやて。遅ればせながらおはようございます。寝坊してしまい、申し訳ありませんでした」

「ええよ。わたしも今日はお寝坊さんやったからな」

アウグスタさんを吹っ飛ばしたんはシュリエルやった。お互いの寝坊っぷりに苦笑しとると、「おわっ？」全部の茨が絶ち切れたことでわたしは落下したけど、そっと優しくシュリエルに抱き止められた。

「おおきにな、シュリエル」

「はい。・・・さて、アウグスタ。お前の無様な旅路もこれにて終焉だ。主はやては目醒め、私を抑え込むだけの力をついに失った。そろそろ私たちの心から退場を願おうか、アウグスタ。いいや、ナハトヴァール！」

シュリエルの言葉にわたしは強く頷いて同意を示した。すると「道具風情が・・・、道具風情がぁぁぁぁぁぁーーーーッ！」アウグスタさんが怒号を上げて、右手にシグナムの"レヴァンティン"を、左手にヴィータの"グラーフアイゼン"を携えた。

「主はやて。今しばらくお待ちを」

わたしをそっと地面に降ろしたシュリエルが「私たちの家族の武装だ。返してもらおう」そう言うと、アウグスタの手からシュリエル

の手へと2人のデバイスが転移してきた。悔しそうに顔を歪めるアウグスタさんへと「終わりだ！」シュリエルが突進。

「おのれぇぇぇーーーーッ！」

「まずは・・・ザフィーラの分！」

――守護の拳――

両手のデバイスを頭上に放り投げたシュリエルは右拳にザフィーラの魔力を纏わせたうえで「ごふっ！」アウグスタさんのお腹にパンチ。

「そしてシャマルの分！」

――風の足枷――

シャマルの魔力光に輝く竜巻がアウグスタさんを空高く吹き飛ばす。シュリエルが遅れてジャンプ。空中で"レヴァンティン"と"グラーフアイゼン"をキャッチした。

「これはヴィータの分！」

――テートリヒ・シュラーク――

「っぐ！？」

思いっきりアウグスタさんの頭を殴りつけたシュリエルは"グラーファイゼン"を降り抜いて、アウグスタさんを地面へと墜落させた。シュリエルはそれよりも早く降下して、「そして・・・シグナムの分だ！」"レヴァンティン"に炎を纏わせた。

「紫電・・・！」『光牙（リッター）・・・』

モニターに映るシャルちゃんの刀に真紅の光が噴き上がった。対するアウグスタさんは「コード・アブディエル！」ルシル君の魔法の特徴である、コード、ってゆうワードの入った魔力の剣を両手に携えて急上昇。

「一閃！」『烈閃刃（ネーメズィス）！！』

シュリエルの一撃はアウグスタさんの2本の剣を、そんで右肩から左腰にかけて一瞬で斬り裂いた。モニターはシャルちゃんの一撃をまともに受けたことで真紅の光でいっぱい。

「っ、このような・・・」

これで内と外のアウグスタさんが同時に攻撃を受けたことになる。斬られた個所に炎を燻らせながら地面に叩き付けられたアウグスタさん。それと同時に血みたく真っ赤やった地獄のようなこの世界全体が一斉にひび割れて砕け散った。新しい世界は一言で言えばとても綺麗な「夜空・・・！」やった。まるで星の海を漂ってるようや。

「主はやて。防衛プログラム・ナハトヴァールの支配が弱まりまし

た」

「うん！・・・シュリエル。こっちに来てくれるか？」

「え？・・・はい」

アウグスタさんがフッと吹けば砂のお城のように脆く崩れ去ってしまいそうなほどに弱ってる今なら。そやからここで、そしてこれからわたしがすべきことを想う。そのためにアウグスタさんを警戒してるシュリエルにこっちに来てくれるようお願いした。

「まだよ・・・まだ、まだ終わりじゃ――」

自分の体が崩れてもなお立ち上ったアウグスタさん。

「止まって！」

「っ！？・・ぁ、ぐ、あ・・・か、体が・・・？」

思うた通りや。アウグスタさんはもう、主のわたしより下の存在になってしもうてた。両脚が崩れて倒れ伏したアウグスタさんはただ、

「うぅ・・ぅ・・」呻き声を上げるだけになった。

「主はやて・・・？」

「あんな、ずっと考えてたことがあるんよ」

わたしはシュリエルの顔へと両手を伸ばす。と、シュリエルはスッと片膝立ちしてわたしの手が届くまでにしてくれた。わたしはそっとシュリエルの両頬に手を添えて、とっても綺麗な深紅の瞳を覗き込む。

。―。―。回想や。―。―。

「なぁなぁ、ルシル君。クリスマスの日な。すずかちゃんが、みんなをお家に招待してクリスマスパーティをやるんやって♪　わたしらみんなもお呼ばれすることになったんよ」

シグナム達と暮らし始めてから随分と久しぶりにルシル君と2人きりになれた。シグナムとヴィータとザフィーラは蒐集活動で、シャマルとシュリエルは買い物や。以前と同じように2人してソファに腰掛けてのんびり過ごす。

「へぇ。じゃあ、イブは俺たち家族だけでパーティでもしようか？」

「うんっ、そうやな、それがええな！」

イブは家族だけで、本番は友達みんなで。今年は最高のクリスマスになりそうや。去年は石田先生と2人きりやった。別につまらんかったとか、そんな後ろ向きな気持ちやなかった。けど、どこか寂しかった。でも今年はちゃう。みんなが居る。期待に胸膨らませてると「・・・はやて」ルシル君がわたしを呼んだ。

「ん？・・・っと！」

左隣に座るルシル君に振り向く。と、ルシル君がジッとわたしの顔を見てたから心臓がドキッと跳ねた。なんとか顔を逸らすようなあからさま反応をせんように出来たけど、ちょう怪しいよなぁ～今のは。

「えっと、どないしたん？」

「・・・闇の書の主は今、君だ」

「へ？・・・まぁ、そうやなぁ」

「で、だ。闇の書の管制人格であるシュリエルリート。その名を与えたのはかつての主であるオーディンだ」

「う、うん。それで・・・？」

「もし、君が彼女に名を与えるとしたら・・・どうする？」

「・・・・はい？」

突拍子もないことを言われた。わたしがシュリエルに名前を与えるとしたらどうする？って。正直「そんな今さらな」や。すでにシュリエルリートで定着しとるし、シュリエルもオーディンさんから貰った名前を大切にしとるし。それを変えるなんて。わたしなんかに出来るわけが・・・。

「シュリエルリートはあくまで管制人格である彼女に付けられた名称なんだ。闇の書。この忌まわしい名前はあれから変わっていないんだ」

「あ・・・！」

言われて初めて気が付いた。確かにそうや。わたしらはシュリエルリートと"闇の書"を別個として考えてる。うん、シュリエルリート自体は"闇の書"の名前やない。ルシル君は「闇の書。呪われた名前。かつては別の名前が有ったらしいが」って続ける。

「シュリエル達がアレを闇の書と呼んでいる時点で、かつての名前は失われているんだろう。だから・・・今の主である君が、闇の書に新しい名前を与えてやってくれ。きっとそれが救いになる。なに。はやての考えた名前なら、きっと彼女たちも喜んで受け取ってくれるはずだ」

「わたしが・・・新しい名前を・・・」

「そう。君が」

ルシル君と向かい合ってるんが恥ずかしい・照れる、なんてことを考えられへん程にわたしの頭の中はそれいっぱいになった。

。―。―。回想終わりや。―。―。

「なぁ、シュリエル。もし、もしやけどな。わたしが新しい名前を

あげる、って言うたら・・・どうする？」

おずおずと訊いてみる。目を点にしてるシュリエルを見てわたしは「あ、あんな、もう闇の書とか呪われた魔導書とか呼ばれさせたくないんよ！」焦る、焦る。ずっと前から思うてたことを今、伝える。

「シュリエルリート。うん、めっちゃ綺麗な名前や。・・・綺麗すぎて、わたしなんかが考えた名前なんかよりずっとええ。そやから断ってもええんよ？」

「・・・主はやて」

「う、うん」

見惚れてしまうほどに綺麗な微笑みを見せてくれたシュリエルがわたしの両手に手を添えてきた。

「シュリエルリート。この名を頂いたとき、私はとても嬉しく、幸せでした。この名を主であったオーディンやシグナムら騎士たち、当時共に過ごしていた友たちに呼ばれることが、どれほど嬉しかったか」

「うん・・・」

あぁ、これはアカンな。当時を思い返してるシュリエルは優しい表情を浮かべてる。

「ですが、その名を返上する時が来たようです。災厄撥ねし魂・導き果てぬ絆・希望の守り手、シュリエルリート。実は、この名は時限付きの名前なのです。オーディンと同じ意思を持って私たち闇の書を家族として導いてくれる主が現れるまでの。そう。主はやて。あなたと出逢えるまでの・・・」

シュリエルは笑みを浮かべて、「私に新たな名を頂けますか。主はやて」そう言ってくれた。そやから「うん！」強く頷き返した。

「災厄撥ねし魂・導き果てぬ絆・希望の守り手、シュリエルリート。これまで多くの災厄を撥ね退けてきてくれたその気高い魂にありがとう。わたしらとの出逢いまで果てること無く導いてくれたこの絆にありがとう。わたしらの未来に光を灯してくれる希望を守ってきてくれたその手にありがとう。
かつての主、オーディンさんから与えられたその名を今ここに空へと返上する。そして、新たな夜天の主の名において、汝と魔導書に新たな名を贈る」

オーディンさんはきっと、わたしの父さんや母さんのようにお空からシュリエル達のことを見守ってくれとるはずや。そやからオーディンさんの居るところへ還すんがええやろ。

「強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール・・・、リインフォース」

「っ！」

シュリエル――ううん、リインフォースの目から涙が零れた。それに名付けたと同時、わたしらから発せられた光によってこの世界からアウグスタさんが完全に消滅した。それを見たリインフォースは涙を拭うことなく、「これが、私たちの救いだったのですね・・・オーディン」この心の世界での夜空を見上げた。

「我が主はやて。新名称リインフォースを認識いたしました。オーディンによって名を付けられた時とは違い、魔導書の完成後かつ管制プログラムであり融合騎である私との融合状態、そして暴走状態が緩和である今、管理者権限の全てが使用可能となりました」

「それってつまり・・・！」

「はい。帰ってきますよ、あなたの騎士、そして家族が・・・！」

「そうか・・・！」

堪らずリインフォースに抱きつくと、リインフォースもわたしの背中に手を回して抱きしめ返してくれた。シグナム達が帰って来てくれる。それに、全ての権限が使えるゆうことは、リインフォースを暴走させんように出来るとゆうことや。やっと、終わらせられるんやな、リインフォース達の辛い旅路を。

「リインフォース。さっそくみんなを戻そか」

「はい。どうぞ願ってください、主はやて」

"夜天の書リインフォース"を手元に呼び出してページを開いて、
「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。みんな・・・戻っておいで！　一緒に帰ろう、わたしらの家へ！」そっとページを指でなぞる。

「リンカーコアを回帰、守護騎士システムの破損を修復・・・完了。再起動します」

トクンと心臓が跳ねる。シグナム達との繋がりを取り戻した感じや。うん、４人の鼓動を感じることが出来る。

「主はやて。あとは・・・」

「アウグスタさん・・とゆうよりはナハトヴァール、やね」

「ナハトヴァールを切り離すことは出来ました。ですが、そのあまりにも膨大な力をそのまま外に出してしまった状態です。今ここで確実に討たなければいけません」

「それは大丈夫やろ。わたしとリインフォース、ルシル君、シグナム達。それにすずかちゃん達も居ってくれるからな。・・・さぁ、行こか、リインフォース」

「はい、我が主はやて。あなたや家族たちと共に、どこまでも」

そうや、もう恐れることはなんも無い。そやから現実に帰ろう。みんなが待ってくれてる、あの世界に。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

「ブラストカラミティ、か。またとんでもないコンビネーション魔法をぶっ放したなぁ」

モニターに映し出されていたなのは達とアウグスタの戦闘を見終えた。なのは達が束になっても決定打を与えることが出来なかったアウグスタだったが、それもようやく終わりを迎えた。「シャル」の参戦と共に。

対する俺はなのは達の邪魔にならないように注意しながら、アウグスタの召喚した希望スペスと信仰フィデスを撃破することに成功。いくつか記憶を失ったようだが、今はこうして五体満足で存在できている。それに十分すぎるほどに休憩を得ることも出来た。アウグスタがゴキ〇リのごときしぶとさを見せてくれたおかげだ。

『ルシリオン君。もう動いても大丈夫なのかしら？　だとしたら申し訳ないのだけど・・・』

「ええ、判っています、ハラオウン提督。あの子たちと合流します。と言っても、今さら俺ひとり加わっても問題ないように見えますが」

アースラとの通信が繋がり、今まで俺の為に展開してくれていたモニターが消え、新たにリンディさんの映るモニターが現れた。

『今は少しでも手札が欲しいのです。あなたの常識に縛られない魔法はきっと、あの子たちの役に立つはずです』

シャルが加わってからというもの、ワンサイドゲームと成り果てていた対アウグスタ戦の戦況がガラリと変わった。シャルが居れば問題ないと言えるような。しかし気になるのは、シャルが絶対切断能力を使い、そして紅翼ルビーン・フリューゲルを使っていることだ。絶対切断能力についてはまぁ、疑問は抱くことはない。オリジナルの"キルシュブリューテ"は前世のシャルの魂と共に転生した。その能力を現世のシャルが引き継いでいたとしてもなんら不思議じゃない。

「・・・まぁ、このまま観戦するつもりはないですけど」

だが、紅翼は少し疑問だ。俺との戦いでは律儀に魔法陣を足場として戦っていた。その時はまだ飛べなかった。それから3日と経たずにあれほど完璧な飛行能力を得ることが出来るのか、とな。なのはやすずかのような天才なら出来るだろうが、シャルとなると・・・。あともう1つ。術式名の変化。レーベンヴェルト語を使うのは前世のシャルだ。ここまでかつての彼女との共通点が表に出ているとなると、もしかすると今の彼女は・・・。

（とにかく。今ははやて達の元へ行こうか）

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

剣翼12枚・蒼翼10枚を背に展開し、空へと上がる。目指すは白い魔力の柱がある海上。あれは先の"闇の書"事件でも見た、はやて達の復活の証明だ。飛行速度を上げて一直線に海上を目指し、肉

眼で魔力の柱とその周りにたむろしているなのは達を捉えるところまで来た。
真っ先に俺に気付いたのは「ルシル！」シャルだった。ドキッとした。完全に俺の知っているシャルの笑顔だったからだ。いきなり抱きついて来ようとしたためヒラリと躱し、「んもう！」それでもなお諦めないため、顔面を右手でガシッと掴む。

「なのは、フェイト、アリサ、すずか、アルフ、クロノ、あとシャル。本当にありがとう。心より礼を言うよ」

深々と頭を下げて感謝する。するとなのは達は笑顔で強く頷き返してくれた。だと言うのに「ルシル～　」この馬鹿は。掴んでいる右手を放してすかさずシャルの広い額にチョップを繰り出す。

「みゃ〝っ！？」

『いい加減にしろ。君は、前世のシャルだな・・・？』

念話でシャルに確認を取ってみる。するとシャルは攻めを中断して『久しぶり、私（ルシル）の初恋』そう返事をした。確定だ。今のシャルはイリスではなく、正真正銘のシャルなんだ。見詰め合う俺とシャルを訝しみながら見ているなのは達の視線は心地がちょっと悪いため、「まぁ、なんだ・・・」コホンと咳払いをひとつ。

「ま、戯れもここまでにしないとね」

シャルが俺から離れて行き、魔力の柱へと視線を移したことで俺た

ちもそっちへ振り向く。柱の途中にははやての居る球体状の魔力塊、その周りにはシグナム達の居る４つの魔力塊がある。それらが一際強く光を発した。さぁ、目覚めの時だ。

「我ら、夜天の主のもとに集いし騎士」

「主在る限り、我らの魂尽きることなし」

「この身に命ある限り、我らは御身のもとに在り」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名のもとに」

最初に姿を見せたのはシグナムたち守護騎士だ。足場としてそれぞれの魔力光に輝くベルカ魔法陣の上に立っている。なのは達がそれぞれ名前を呼びつつ喜び合っている姿を見ていると、「頑張ったね、ルシルもさ」そっと俺に耳打ちしてきたシャル。俺はそれに「そうでもないさ」と微苦笑を返すだけ。

アウグスタという邪魔者の存在さえなければ、と思ってもいたが・・・この結末でも十分あの子たちとの絆を確かなものに出来た。そう、これは先と同じだ。下手に歴史を改変させようとせずともこういう流れになるのだとしたら・・・。俺は空回りしていただけなのかもな。

「「はやてちゃん！」」「「はやて！」」

っと。我ら八神家の主、はやての目覚めだ。騎士甲冑のインナー姿で、右手には剣十字の杖・"シュベルトクロイツ"が握られている。

そして"シュベルトクロイツ"を掲げたはやてが「夜天の光に祝福を！　リインフォース、ユニゾン・イン！」と告げた。はやての側に寄り添うように飛んでいたリインフォースのリンカーコアが彼女の胸へと入り込んだ。

「リインフォース、か。やはりその名前になるんだな」

「何か言ったか、ルシリオン？」

「いいや。なんでも」

クロノにそう答えた俺は、岩の柱の上に降り立ったリインフォースとのユニゾンを終えたはやてや、それを見守っていたシグナム達、なのは達を離れたところから見守る。

Ｅｐｏｓ２４聖夜に舞え、幸運の追い風・夜天に謳え、祝福の詩～
Ｅｎｄｅ　Ｖｏｎ　Ｅｉｎｅｒ　Ｒｅｉｓｅ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

融合騎としてのリインフォースとユニゾンとしたわたしは、「おかえり、そんでただいまや、みんな」側に居るシグナム達に笑顔を向ける。するとヴィータが「う、ぅぅ、うう・・・はやて、はやてぇぇーーー！」大声で泣き出してしもうた。抱きついてきたヴィータを受け止める。

「あの、はやてちゃん・・・・」

「シャマル、おかえり」

「っ！・・ただ、いま・・・ただいま、そしておかえりです、はやてちゃん・・・・！」

涙もろいシャマルもまたぼろ泣きや。シグナムも「ただいま、おかえりなさい、主はやて」挨拶を返してくれて、ザフィーラは頷きを見せてくれた。泣き止まんヴィータとシャマルをあやしながら、「ホンマにおおきにな。わたしらの為に」ずっとわたしらの再会を見守ってくれてたすずかちゃん達に振り向く。

「それにごめんなさい。みんなにも大きな迷惑を掛けてしもうた」

すずかちゃん達の魔力は"夜天の書"完成の為に蒐集された。いくらシグナム達がわざとやないにしても、許されることやあらへん。そやから深々と頭を下げて、「ほら、みんなも改めて。ほら」シグナム達を促す。次に会った時にはちゃんと謝るって言うてたし、謝ることも出来たって教えてくれた。それでも、もう一度や。

「申し訳なかった」

「すまなかった」

「ごめんなさい」

「ずびっ・・・悪かった」

シグナムとザフィーラはわたしと同じように深く頭を下げて、人差し指で涙を拭ったシャマルはしょんぼりと小さく頭を下げて、鼻を啜るヴィータは泣いてるところを見られてるのが恥ずかしいみたいで、ばつの悪そうに顔を逸らしながら謝った。

「うん。もう許してるよ。ね、みんな？」

「うん。ちゃんと襲われた後に謝ってもらっているし」

「はやてを助ける為だったって判っているから」

「そうね。今日この日、あんた達の笑顔を見る為だったって思えば、

本当にちっぽけな問題よ」

笑顔を浮かべたなのはちゃんがみんなに確認すると、みんなも笑顔になって嬉しいことを言ってくれた。改めて思う。「みんなと出逢えて、友達になれて良かった」って。するとすずかちゃん達も「私たちも」って同意してくれて。うぅ、嬉しすぎて泣きそうや。

「元気そうで良かったよ、はやて。シグナム達も」

「シャルちゃん・・・・！　シャルちゃんにもお礼を言わなアカンな。もちろん、すずかちゃん達にも。外のアウグスタさんを倒してくれたからこそ、わたしとリインフォースは戻って来れたんや」

わたしとリインフォースは解放されたきっかけの1つは、シャルちゃん達が外側のアウグスタさんを倒してくれたからこそや。「どういたしまして♪」って笑顔で返してくれたすずかちゃん達と、「友達の為だもん。なんの苦もないよ」ってシャルちゃんは言ってくれた。ホンマに嬉し涙が出そうやったそんな時、シャルちゃんが「ほら」って、わたしらから離れてたルシル君の背を押した。

「ルシル君・・・」

「・・・はやて。その、なんだ・・・。すまなかった。俺がドジを踏んだばか――っ？」

「ルシル君のそんな顔、見たない。それにな、ルシル君が全部悪いわけやない。わたしが心の隙間を晒してしもうたことも原因や。ち

ゃんと強く在れば、みんながここまで苦労することなかった」

悲しそうな表情を浮かべて俯きかけたルシル君を正面から抱きしめる。みんなが見てる中やけど恥ずかしないよ。そんな感情よりもっと強い思いがあるから。そう、「ありがとう、ルシル君」感謝や。ルシル君の声もわたしが目覚めるきっかけやった。シグナム達を喪った絶望の闇の中、ルシル君の声が希望の光になった。

「はやて・・・」

「そやからそんな悲しそうな顔をせんで。わたしは、ルシル君の笑顔が・・・好きや」

言ってからちょう後悔。耳や顔どころか全身が熱くなって、ドバっと汗が吹き出しそうになる程に恥ずかしなってしもうた。こんなわたしらを見守ってくれてたシグナム達はなんや微笑ましそうで、すずかちゃん達はちょう頬を染めてて、クロノ君は「コホン」と咳払いひとつしながら目を逸らしてて、そんで・・・。

「ま、今だけは譲ってあげるよ」

シャルちゃんは刀を肩に担ぎながら笑顔でそう言った。あくまで余裕って態度を崩さへんようや。ええよ、わたしももう、「これからは一歩も引かへんからな」宣戦布告返しや。ヒュ～♪と口笛を吹くシャルちゃんは「上等♪」って、声色とは違って凛とした表情を浮かべた。

「あー、すまないが、そろそろ本題に入りたいんだが・・・。まだ、なにも終わっていないからな」

そんなわたしらの間に割って入って来たんがクロノ君で、わたしらをぐるりと見回した後で足元、海面へ視線を移した。時計の文字盤の数字の位置と同じような場所から突き立ってる岩の柱の中心に、「ナハトヴァール・・・！」らしい真っ黒い闇が穴を開けてた。その闇の穴の中からアウグスタさんの呻き声が漏れ聞こえ始めた。

『ナハトヴァールの本体ですね。何かしらの形で実体化するのでしょう。お気を付けください、主はやて』

「おおう？　小っこいリインフォースや！」

半実体化してる妖精のように小さなリインフォースが現れた。あ、そうや「みんな。今日からこの子はリインフォースな。あと、もう闇の書、って呼ばんようにお願いするわ」このことを伝えとかな。

『シュリエルリート改め、夜天の書リインフォース。皆、よろしく頼む。では、話を戻そう。主はやてに管制権限が戻り、私はナハトヴァールを切り離すことが出来た。しかし、これまで溜めこんできた膨大な魔力や狂ったままのプログラムは依然として残ったまま。それに闇の書としての特性を引き継いでいる』

「やはり、アレには世界侵食の特性が・・・？」

『ああ。触れたモノを際限なく侵食して自らの一部としていき、臨

界点が訪れない場合、この世界を全てまるごと取り込むだろう』

世界まるごと。その言葉にすずかちゃん達が息を呑むんが判った。それほどまでに強力な闇。それを打ち払うために、わたしらが今ここに居る。すぐさますずかちゃん達が凛とした表情になって、わたしら八神家も戦闘準備オーケーを示すためにそれぞれ持ってるデバイスを握りしめる。

「ナハトヴァールの停止プランについてはこちらで用意してあるんだが・・・。ユーノの奴、遅いな。彼もプランに必要な要員なんだが」

ユーノ、ユーノ・スクライア君。確か考古学に詳しい男の子やったっけ。クロノ君が僅かに焦りを見せていると、『ユーノ君の到着だよ！』わたしらの前に展開されたモニターに映るエイミィさんからお知らせが来て、「ごめん、遅れた！」1人の男の子、ユーノ君が姿を見せた。

ゆっくり自己紹介と行きたいところやけど、そんな余裕がないことは承知や。そやから目が合った時、わたしは小さく会釈することにした。ユーノ君もまた会釈返し。全てが終わったらちゃんと自己紹介せやなアカンな。

すずかちゃん達とユーノ君が頷き合って挨拶してるのを眺めてる中、

――多層封獄結界（パーガトリー・アークケイジ）――

今まで海鳴の街を囲ってた結界よりさらに大きな、海上一帯を封じ込めるように桃色の結界が展開された。それを見たルシル君が「こ

れなら外界にまで戦闘の影響は出ないな」って安堵した。どうやらルシル君も認めるすごい結界みたいや。

「よし。準備は整った。あとは任せてくれ、と言いたいところなんだが。協力者は多い方が良いんだ。八神家の騎士たちにも協力を要請したいんだが」

「とゆうより、わたしら八神家がやらなアカンことや。闇の書としてのアレの幕引きは、夜天の書として生きてくリインフォース達と、その主のわたしのお役目や。な、みんな？」

「「「はい！」」」「うんっ！」『ええ！』

シグナム達の力強い返事を聴いた後、わたしは黙ったままなルシル君に目を向ける。目が合ったルシル君は「もちろん。八神家の一員として、力を貸すよ」って微笑んでくれたから、わたしも微笑み返し。うん、わたしはやっぱりルシル君のことがホンマに・・・。そんでわたしらはクロノ君からナハトヴァール攻略案を聴いた。最後まで話したクロノ君は「防御力の異常さには焦ったが、イリスが居れば問題ないだろう」ってシャルちゃんへと目をやった。それに「そうよね。あんたの攻撃、アイツの防壁を無視してたし」アリサちゃんが呆れ口調で同意。

「そりゃね。どんな攻撃も防御もサクッと裂いちゃうから♪」

「頼もしい限りだ。・・・それではみんな。配置についてくれ」

クロノ君が懐から1枚のカードを取り出して「デュランダル」って一言。するとそのカードが1本の杖と4本の剣へと変わった。クロノ君の話やと氷結の杖で、侵食型の危険物や爆発物を凍結させて無力化させる目的で、凍結魔法強化の機能に特化されてるとのこと。今のナハトヴァールにはうってつけや。

「あ、ちょう待って。その前に。シャマル」

「あ、はい。なのはちゃん達の治癒ですね。クラールヴィント。出番よ」

≪Ｊａ≫

「風よ、癒しの恵みを運んで」

――癒しの風――

シャマルの治癒魔法・癒しの風がボロボロやったすずかちゃん達の魔力とバリアジャケットを完全にまで回復させた。その回復量にみんなはホンマに驚いてて、「私なんかじゃこうはいかないよ」すずかちゃんが特に驚いてた。

「守護騎士ヴォルケンリッター、湖の騎士シャマルと風のリング・クラールヴィント。癒しと補助が本領です♪」

みんなの回復も終わって、クロノ君の指示の下にわたしらは散開。1つの岩の柱に1人ずつ降り立ってく。わたしが12時、1時にヴ

ィータ、２時になのはちゃん、３時にシグナム、４時にアリサちゃん、５時にすずかちゃん、６時にザフィーラ、７時にアルフさん、８時にフェイトちゃん、９時にシャマル、１０時にユーノ君、１１時にクロノ君。そんでルシル君とシャルちゃんはと言うと頭上。言うなれば文字盤のど真ん中に居る。

『こちらアースラ！　アルカンシェルのスタンバイオーケー！　いつでもいいよ！』

『判った。こちらでもナハトヴァールの起動を・・・確認した！各自、戦闘準備！』

振動が結界内を揺るがしたと思えば闇の中から１２頭の龍の胴体が飛び出して来た。真っ先に『七美徳（テンパランチア）の節制！？』ヴィータが悲鳴のようなものを上げた。続けて出て来たんは西洋騎士の鎧姿の、５０ｍはある巨人の上半身やった。右の前腕の先はチェスの馬の駒で、左の前腕の先は狼の頭が３つ。それぞれ頭の上には大きな黄金の魔法陣がある。

「ん？・・・あれってまさか、アウグスタさん！？」

巨人の鎖骨の中央部分からアウグスタさんの上半身が生えてた。でもそのサイズは心の世界で見た時より２周りほど大きくなってる。そんでいよいよ巨人の下半身も露わになった。そやけど人として有るべき足は無くてその代わりに「亀さん・・・？」が居った。巨人の腰から下には装甲に覆われた巨大な亀さんの甲羅。闇の穴から這い上がって来ようとしてる亀さんの尻尾、そこから１２頭の龍

・テンパランチアが生えとった。さらに。巨人の背中からバサッと光の翼が生えた。大きく羽ばたいて飛んで、その体の全てをとうとう穴の中から現した。

『綺麗なのに歪すぎて、すこし気持ち悪い・・・！』

『なんか、ああいうのゲームで見たことあるよ。キメラ、とかいうの』

『あー、確かにあんなの居るわよね。実験失敗で造られたとかなんとかで』

すずかちゃん、なのはちゃん、アリサちゃんがそう言う。わたしも洋画とかで観たことあるなぁ。でもソレらなんかよりずっと神々しい姿や。金銀の装甲に装飾、黄金の魔法陣。至る所に有る威厳に満ちた人の顔の石像。天使や神さまってゆうんがしっくりくる。

『ルシル。あの、やっぱりアレもルシルの使い魔だったり・・・？』

『する。ああ、全部おれの使い魔が使われている。騎士は七美徳の謙譲フミリタス。背中の翼は七元徳の愛カリタス。右手は七美徳の純潔カスティタス。左手は七美徳の慈悲パティエンティア。腰から下の亀は七美徳の忍耐フマニタス。尻尾は七美徳の節制テンパランチア。好き勝手持って行かれたよ』

ルシル君が心底呆れ果ててるって風にフェイトちゃんに答えて、『だからと言って遠慮はいらない。アレらはもう、俺の元へは戻って

こない、敵なのだから』そう寂しそうに締めくくった。それと同時、「素晴らしい！　これほどの力があれば・・・！」自分の姿に歓喜しているアウグスタさんの声が聞こえてきた。

――我は顕現せり・聖なるかな・　聖なるかな・聖なるかな――

ナハトヴァール全体に白い光の膜が張られると、『まずい、ひょっとすると今のナハトヴァールは、プラン通りに攻略できないかもしれない・・・！』ルシル君から不吉な思念通話が送られてきて、『どういうことだ！？』クロノ君が訊き返す。ルシル君がそれに答えるより早く。

「これにて閉幕よ。早々に撃ち墜してくれるわ！」

――ディバインバスター――

――ナイトメア――

――コード・バラキエル――

――バスターラッシュ――

３頭の狼の口からなのはちゃん、リインフォース、ルシル君の砲撃が放たれて、馬の額にある角からすずかちゃんの砲撃が放たれた。でもサイズが桁違い。太さが直径５ｍほどもある。直撃は撃墜確定や。標的にされたんはシグナムとザフィーラ、なのはちゃんとすずかちゃんで、急いで岩の柱から跳び上がって回避。

『今のナハトヴァールを構築している俺の使い魔にはある特殊な力が働いているんだ。なのは達の攻撃がアウグスタになかなか通用しなかったことにも関係している。だからクロノのプランはおそらく通用しない。おそらく魔法が効かないからだ』

『なにっ！？　ではどうする？　このまま手を拱いているわけにはいかないぞ！』

わたしらも狙い撃ちされへんように一斉に空へと上がる。そんで今度は１２頭の龍の口に光が灯って、一斉に砲撃を放ってきた。それらを散開して回避するわたしらに向かって、「何を企もうとすでに手遅れ。天上の力の前に、人間・プログラム風情の魔導が通用するとでも思うか！！」アウグスタさんの言葉と一緒に、左手の狼の口３つから砲撃が一斉発射。

『ああもう、通用するかしないか、試せばいいじゃない！』

『バニングスの言う通りだ。ナハトヴァールという異物のおかげで、ルシリオンの言う特殊な力を失っているやもしれんぞ！』

『すずか、ユーノ、アルフ、それにザフィーラさん！　拘束をお願い！』

回避しきったアリサちゃんとシグナムが先行し始めた。アリサちゃんに名前を呼ばれた拘束担当のすずかちゃん達も思いは同じなようで、ナハトヴァールの包囲するかのような位置についた。

「ケイジングサークル！」

「アイシクルアイヴィ！」

「チェーンバインド！」

ユーノ君の輪っかのような檻に囲まれたナハトヴァール。続けてすずかちゃんの冷気のロープ、アルフさんの鎖が騎士の両腕と亀さんの四肢を拘束。そんで、「捕らえよ、鋼の軛！」ザフィーラの杭が１２頭の龍を空から打ち抜いて拘束した。そやけど、「無駄よ、無駄！」一瞬にして砕かれた。

「如何なる者も私を害することは出来ない。そう。たとえフライハイトの騎士であろうと！」

シャルちゃんが証明するかのように「飛刃！」"キルシュブリューテ"を振るって真紅の斬撃を放った。アウグスタさんを一方的に傷つけてた攻撃やったはずやけど、今のナハトヴァールには通用せぇへんかった。当たる直前で消滅してもうた。それでチェックメイト。この中で唯一の希望やったシャルちゃんの攻撃は完全無力化。アリサちゃんが「じゃあ、どうしろって言うのよ！」って大きな声で叫んだ。

「さあ！　無様に踊り、そして死ねぇい！」

――Ｏ　ｓａｌｕｔａｒｉｓ　Ｈｏｓｔｉａ　Ｑｕａｅ　ｃｏｅｌ

ｉ　ｐａｎｄｉｓ　ｏｓｔｉｕｍ．　Ｂｅｌｌａ　ｐｒｅｍｕｎｔ　ｈｏｓｔｉｌｉａ；　Ｄａ　ｒｏｂｕｒ，　ｆｅｒ　ａｕｘｉｌｉｕｍ／ああ救霊の生贄、天つ御国の門を開き給う御者よ、我らの敵は戦いを挑むが故に、我らに力と助けを与え給え――

龍や狼、馬の角から何十とゆう砲撃が全方位に向かって放たれた。避けることは出来るけど、こちらの攻撃が一切通用せぇへんとなるとジリ貧や。

『緊急！　武装隊の結界が破損！　残るはロードスター空士の結界だけ！　今すぐにナハトヴァールに魔法を使わせないようにして！』

エイミィさんから最悪な報告。ここで全部の結界が壊されてしもうたら、この状況が全部外の世界に見られることになる。そうなれば大混乱や。それだけは阻止したいけど、それを許してくれへんのが狙いをわたしらから外して、結界へと向け始めた。

「踊れ、そして潰されろ！」アウグスタさんとナハトヴァールや。

「手始めにこの世界から支配――いいえ、呑み込んでくれるわ！」

ナハトヴァールから放たれる砲撃を必死に「やめろ！」ルシル君とシャルちゃんが魔法で相殺、または弾き逸らして海面に向けさせる。これをいつまででも続けられるわけない。どうすればええんや。わたしに出来ることを必死に考える。攻撃も拘束も今は通用せぇへんナハトヴァール。それの動きを止めるには・・・。

「汝（イロウエル）の恐怖！　さらに、汝（カムエル）の宵手！」

「ルシル君・・・！」

ルシル君が銀の巨腕を創り出してナハトヴァールを上から押さえ込んで、続けて影の触手を何十本と創って拘束した。暴れ出すナハトヴァールにまた巨腕は壊されたけど、影の触手だけは絶ち切れることなく拘束を続ける。

「破れない、何故だ！　下位存在であるお前たちの魔法を、上位存在である私が破れない！？」

「っ！・・・俺の使っている魔法が今、シャルよりちっとばかり深めにお前と同じ領域にあるからだ、アウグスタ！」

ルシル君が顔を歪めながら頭を押さえてそう言い放った。明らかにルシル君は無茶しとる。心配になったわたしは堪らずルシル君の元へ飛んで、「無茶はアカン！」そっと寄り添う。ルシル君は「無茶を通さないといけない状況なんだ」って聴いてくれへんかった。

「そうね、元はお前の力だったのだから、お前が使えるのは道理！
ならば、我が庭（ヴェーニ・ホルトゥム・メウム）に来たれ。これでどう！」

ナハトヴァールを拘束してた影の触手がアウグスタさんの発した白い光を浴びて溶けるようにして消滅した。

――天使舞いたる穢れ無き白の聖域――

ナハトヴァールから発せられた白い光。あまりの眩しさに堪らず目を閉じた。まぶたの裏からでも判る白い光が治まったのが判って、薄らと目を開けると「なんやこれ・・・？」目の前の光景に驚愕。一切の色が消えた世界。海も空も月も、全部が真っ白になってしもうた。色を持ってるんはわたしら人と、ナハトヴァールだけや。

「聖域を展開したわけね・・・！」

「よりによって魔道との関係に乏しいこの星で・・・、馬鹿が！」

なんやろ。ルシル君は兎も角としてシャルちゃんまでこのモノクロ世界を知ってるようや。わたしと同じように様変わりしたこの世界に呆けてるみんなも、ルシル君とシャルちゃんを交互に見詰める。わたしは怒り心頭と言った風なルシル君の右手をそっと握る。するとルシル君の表情から怒りが消えて、その代わり「ありがとう、はやて」フッと消え入りそうな穏やかな笑みを浮かべた。いつもならドキッとするようなものやのに、その笑みには寂しさのようなものがあって、逆に心配が増してしもうた。

「ああもう、こうなったらアレをやるしかない！　これから見せる魔法、一切の他言無用でお願い！　クロノも報告書とかに記載しないでね！」

シャルちゃんが何かしらの決意をした。そんでシャルちゃんはわたしとルシル君の側へとやって来て「ルシル。サポートお願い！」そう言って、しょうがないって風なルシル君にキ、キキ、キ、キスした！

「あ、アカン、やめ、やめて・・・っ！」

慌ててルシル君（むぅ、なんで受け入れてるん！？）とシャルちゃんを引き離しにかかる。唇を離したシャルちゃんが「ごめん、はやて。でもこれは、そんなんじゃないから」そう言いながら浮かべた真剣な表情に息を呑んだ。可愛いやったシャルちゃんが今は綺麗、そんでカッコええ。

「剣戟の極致に至りし者モード・・・オン！」

「長くないか・・・？」

シャルちゃんがそう告げると同時、ものすごい魔力を全身から放出して「んなことより、ちゃんと発動してよ！」デバイスを頭上に掲げた。ルシル君が「ま、俺の失態だからな。尻拭いはするさ」シャルちゃんにそう言った後、わたしの頭をそっと撫でてくれた。

「ナハトヴァール！　天使を超える力を見せてやる！」

「覚悟しなさい！」

ルシル君の足元に十字架の魔法陣が展開されて、そこに降り立ったルシル君とシャルちゃんが顔を合わせて強く頷き合った。

「「其処は剣戟の極致に至りし者の君臨する世。風が鳴き、桜は舞い、陽の明かり、地を満たす。月が輝き、星は流れ、夜の蒼闇、空

を満たす。いざ開かれよ、剣神の座する天城と俗世を隔てる聖門。流転する運命・織紡がれる絆に祝福された王の名の下に彼我を招き、その偉容を示せ」」

――剣神の星天城（ヘルシャー・シュロス）――

シャルちゃんが"キルシュブリューテ"を縦一線に振り降ろすと、刃が通った空間が真っ二つに裂かれて、その中からものすごい桜吹雪が噴き出してきた。「わぷっ！？」近くに居った所為でまともに桜吹雪に呑まれてしもうた。そんな中で聞こえて来るんは「俺たちの勝ちだ、ナハトヴァール」ルシル君の自信に満ちた声。恐る恐る目を開ける。

「・・・っ！？」

『これは・・・一体どういうことだ・・・！？』

わたしの中に居るリインフォースも驚いてる。モノクロ世界が消え去ってて、その代わりまったくの別世界へと変わってた。雲ひとつない夜空いっぱいに星の海、真ん丸な蒼い月、舞ってるんは夜桜の花吹雪。足元は変わらず海・・・とゆうか湖かな、畔が見える。四方八方には西洋のお城や塔が建ってて、この湖を囲ってた。そんで、その湖の真ん中にはナハトヴァールが居る。わたしらと同じように混乱してるんか動きを見せへん。

「なのは、フェイト、アリサ、すずか、ユーノ、クロノ、アルフ！」

「はやて、リインフォース、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！」

シャルちゃんとルシル君がみんなの名前を大きな声で呼んで、「行こう！」号令を下した。わたしを含めたみんながハッとする中、シャルちゃんが「そりゃ！」斬撃を放った。さっきは掻き消されたけど、「ぐぅぅぅ！」通用した。尻尾から生える1頭の龍の胴体が絶ち切れて湖に落下、ファサッと無数の羽根になって霧散した。

「みんな聴いてくれ！　まずは防御を削る！　出来るだけ奴の体を削るんだ！　そうすれば奴を最後まで護る神秘（加護）は弱くなるはずだ！」

――女神の陽光（コード・ソール）――

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

そんでルシル君が2つに分けた"エヴェストルム"の先端から蒼い炎と光の砲撃を発射して、亀さんの前脚を撃ち抜いた。それで大きく前のめりに傾き始めたナハトヴァール。

「ザフィーラ、すずかちゃん、アルフちゃん、ユーノ君！」

シャマルが拘束班の名前を呼んだ。ザフィーラ達は頷き合って、さっきと同じ拘束の魔法でナハトヴァールを捕らえてく。さっきは簡単に壊されたけど、「破壊できない！？」アウグスタさんの驚愕が示すように今度は壊れへん。

「よしっ、これなら行けるな！　つうわけで、合わせろよ、なのは！」

「あっ・・・！　私の名前、ちゃんと呼んでくれたね、ヴィータちゃんっ♪」

「ええい、今はそんなことどうでもいいだろ！　出来んのか、出来ねぇのか、どっちだ！？」

「にゃはは。もちろん出来るよっ♪」

ヴィータとなのはちゃんが仲良く空を翔ける。家族として、友達として嬉しい光景や。それを壊すんは「鬱陶しい！」アウグスタさん。亀さんの頭が甲羅の中に引っ込んで行って、別の「また変なのが！」出て来た。赤ちゃんの頭部のような石像が先端に付いてる植物の蔦のような胴体が８本。それらがヴィータとなのはちゃんへ向かってく。

「七元徳（ユスティジア）の正義！？　なのは、ヴィータ！」

「大丈夫だよ、シャルちゃん！・・・えっと、ごめんね。アクセルシューター・バニシングシフト！」

なのはちゃんが放った８発の魔力弾が赤ちゃんの顔に直撃。なのはちゃんの攻撃でもちゃんと通用してよろめかせた。

「墜ちなさい！」

――ブルーティガードルヒ――

「っ！　レイジングハート！」

――アクセルシューター――

短剣型の高速射撃魔法を４０発ほど一斉発射したアウグスタさん。なのはちゃんの弾幕で数を１０発くらいは相殺できたけど、残り３０発はそのまま２人に向かって行く。アカン、当たる、って思うたとき。

――舞い降るは、汝の煌閃（コード　マカティエル）――

わたしの頭上から降り注いで行った蒼い光の何十本ってゆう槍が、ヴィータとなのはちゃんに迫ってた攻撃を全弾撃ち壊した。隣に居るルシル君が「行け、ヴィータ、なのは！」って青い顔して叫んだ。見ればシャルちゃんも青い顔してる。２人して無茶――とゆうより無理してる。

「ルシル君、シャルちゃん！？」

『お前たち・・・！』

「問題ない！　はやて、リインフォース。各々がいま成すべきことの為に心血を注いでいる。俺とシャルはこれさ。ナハトヴァールの力を相殺し、みんなに天上の力を超える力を与える。その為の、創世結界。大丈夫だ。しっかり最後まで成す。そうだろ、シャル？」

「もち♪　一生懸命頑張る乙女には勝利フラグが立つんだよ」

「しかし時には死亡フラグでもある」

「ルシル、シャラップ！」

息がピッタリ合うルシル君とシャルちゃんの様子に胸がチクッと痛む。そんな中でも「頼んだぜ、ルシル！」ヴィータ達は動く。ヴィータの"グラーフアイゼン"のヘッド部分が巨大化。

「この好機は逃がさねぇ！・・・轟天爆砕！・・・ギガントシュラァァァーーーークッ！」

さらに巨大化した"グラーフアイゼン"を振り降ろしたヴィータ。その一撃は騎士の頭を捉えたけど、当たるより早くアルフさんの鎖から逃れた右腕が頭を庇って防御。それでも「あたしとアイゼンの前に壊せねぇもんは・・・ねぇぇーーーー！！」ヴィータの一撃には敵わんくて、右肩からごっそり砕け散った。

「なのは！」

「うんっ、ヴィータちゃん！　あっ・・・！」

なのはちゃんが"レイジングハート"をナハトヴァールに向けた時、海の中を潜って来たんかなのはちゃんの足元から赤ちゃんの顔の付いた1本の蔦が飛び出して来た。赤ちゃんの口が大きく開いてなの

はちゃんを呑み込もうとしたけど、「テートリヒ・シュラーク！」なのはちゃんが呑み込まれるよりも早くヴィータの一撃が顔に入って、力なく海に沈んだ。

「今だッ！」

「うん！　エクセリオンバスターー・・・フォースバーストッ！」

なのはちゃんが放った４本の砲撃がナハトヴァールに向かってく。対するナハトヴァールはすずかちゃんの拘束を打ち破った左手――狼の３つの頭を砲撃に向けて翳して、負けじと砲撃を３本発射。なのはちゃんとナハトヴァールの砲撃が真っ向から衝突して拮抗、そんで僅かになのはちゃんの砲撃が押され始めた。

「シューット！」

そやけどなのはちゃんの攻撃は続いてた。４本の砲撃の中心、そこにさらに強大な砲撃が発射された。その砲撃は４本の砲撃を呑み込みながら衝突点へ向かって行って、ナハトヴァールの砲撃を押し返した。そんで直撃して大爆発。ナハトヴァールの左腕を肩までごっそり消し飛ばした。

両腕を失くしたアウグスタさんが「クソガキがぁぁぁぁぁ！！！」憤怒の叫びを上げて、ザフィーラの拘束をも粉砕した。自由になった１１頭の龍が一斉にわたしらに向けて砲撃を発射しようとしてきたけど。

「砲撃はもう撃たせん！」

――鋼の軛・顎――

海面から突き出した杭と空から降り注がせた杭がまるで噛み付くようにして龍１０頭の頭と喉を貫いた。すると口の中に溜まってたエネルギーが暴発して大爆発。龍１０頭の頭を吹っ飛ばした。残り１頭は上手く避けて無事や。その龍の口が向くんはすずかちゃんとアルフさん。

「ちゃんと狙わないかい、ザフィーラ！」

――フォトンランサー・マルチショット――

「む、すまぬ・・・！」

アルフさんが放った魔力弾８発が龍の顎の下、海面を強く穿った。派手に上がった水飛沫が龍の頭を濡らすと、「すずか、頼むよ！」アルフさんが背後に居るすずかちゃんに声を掛けた。

「あ、はい！　スノーホワイト！」

≪ 吹雪け、氷結の冷風≫

≪「リフリジレイト・エア！」≫

すずかちゃんと"スノーホワイト"の魔法、冷気に竜巻が水飛沫ごと龍の鼻っ面を凍結。口を開けることが出来ひん所為でその龍も暴

発、頭が吹き飛んだ。

「そんじゃ次は、あたしとあんたよね、シグナム！」

「ふむ。同じ炎熱の騎士として、家族の為、友の為に、いざ・・・！」

アリサちゃんとシグナムがそれぞれ自分の展開した魔法陣の足場に立って、真っ直ぐナハトヴァールを見据える。そんで「先に行かせてもらうぞ、バニングス！」シグナムが"レヴァンティン"とその鞘を連結させて弓にして、矢を番う。アリサちゃんは赤く燃え上がる"フレイムアイズ"を頭上高く掲げた。そんな2人の元へ向かって行くんは赤ちゃんの顔のある蔦7本。

「もう遅い。翔けよ、隼！」

≪Ｓｔｕｒｍ　Ｆａｌｋｅｎ≫

シグナムが射った矢は炎を噴き上げて火の鳥になって迫って来てた蔦を焼き払って行って、蔦の根元――亀さんの頭が出る穴の中にまで入り込むと甲羅の中で大爆発。頭や四肢、尻尾の穴から炎が噴き上がった。

「もしかしてあたしでトドメだったりしてね！　フレイムアイズ！」

≪おう！　最大火力で・・・！≫

≪「ヴォルカニック・・・スカッシャァァァァ―――ッッ！！」≫

燃え上がる"フレイムアイズ"を伸長させて縦一閃したアリサちゃん。その刃は騎士の頭の上に浮いてる魔法陣を寸断して額に直撃。でもこれまでとは違ってやっぱ本体の頭やからかすぐには壊せへんかった。

「しっかりしろ、バニングス！」

――飛竜一閃――

シグナムが後頭部へ回り込んで"レヴァンティン"で攻撃した途端、アリサちゃんの攻撃は通った。フルフェイスの頭部が爆発炎上して消滅。神々しさと歪さを兼ね備えてたナハトヴァールは首・両腕を失って、見るも無残な姿へと変わり果てた。

「ルシリオン、今ならいけるか！？」

「・・・まだだ！　くそ、また抜かれた！」

ルシル君がクロノ君にそう返した瞬間、騎士の両肩から龍の胴体が突き出て来て、何も無い首からは大きな紅い薔薇が生えて来た。

「頭だけだがあれは・・・七元徳（フォルティトゥード）の勇気！」

「うわぁ。あの薔薇って七美徳（リベラリタス）の救恤じゃん、懐かしい・・・！」

ルシル君とシャルちゃんが別方向の感情で名前を呼んだ。そんで「

リベラリタスは私が殺る！　因縁あるしね」シャルちゃんがそう言って薔薇に向かって飛んで行って、「じゃあ、フォルティトゥードは俺だな。フェイト、頼む！」ルシル君はフェイトちゃんに協力要請。

「あ、うんっ！　じゃあ、私が左腕を！」

「任せた。俺が右腕を落とす！」

――知らしめよ（コード）、汝（アブディエル）の忠誠――

フェイトちゃんは放電してる"バルディッシュ"を携えて左肩から生える龍へ向かって飛んで、ルシル君は両剣形態の"エヴェストルム"に５ｍほどの魔力の刃を付加。フェイトちゃんの向かう龍の口からは直径４ｍほどの炎球が連続で６発と放たれて、ルシル君の向かう龍の口からは火炎砲撃が放たれた。

「撃ち貫け、雷神！　ジェット・・・！」

「終わりだッ！」

フェイトちゃんの"バルディッシュ"は火炎弾を斬り裂いた。そして真っ直ぐに左肩口に向かってくけど、龍が真っ向から刃に噛み付いて防いでしもうた。そやけど「ザンバァァァァ――――ッ！」フェイトちゃんの一撃は止まることを知らへん。左の龍を横に真っ二つにして肩から斬り落とした。ルシル君の"エヴェストルム"は、右の龍を肩から斬り落とした上で縦に真っ二つに斬り裂いた。

「リベラリタス！　召喚早々、消えてもらうから！」

首から生えてる薔薇が開いて、その中から緑色した女性の上半身が出て来た。シャルちゃんは"キルシュブリューテ"の刀身に炎を噴き上がらせて、「また貴様か！」ってシャルちゃんに向かって敵意を剥きだしにしてるリベラリタスに向かって「ごめんね～♪」謝った。

「大炎牙（ケーニギン）・・・！」

曲線を描く炎の砲撃が刀身から8本と放たれて、薔薇に引火。リベラリタスは「またこの魔道・・・！」って慌てて両手や燃えてない花弁で扇いで消火しようとするけど、シャルちゃんは間髪入れずに"キルシュブリューテ"を十字に振って、炎の斬撃を十字型に放った。さらに×十字型に振るって炎の斬撃を放つ。

消えかけてた炎が再燃して、さらに斬られたことでリベラリタスは弱々しく萎れ始めた。ちょう可哀想に思えてしまうほどに一方的にして圧倒的。それが今のシャルちゃんやった。

「焼覇煉謳刃（ニーダーブレンネン）！！」

シャルちゃんは最後に突きをして、刀身の炎が槍のようになって放たれてリベラリタスを貫いた。それで終わりや。首から生えてた薔薇が一瞬にして炭化、ボロボロに崩れ去ってしもうた。

「こんな、こんな無様が、天上の力・・は、これほどまでに弱い、

もの、なの・・・？」

アウグスタさんがぐったり項垂れながらブツブツ呟く。次の攻撃順で言えばわたしになる。そやから「ルシル君！」にこのまま魔法を発動してもええか確認した時、「いいえ、こんなものではないはず！」バッと顔を上げたアウグスタさんがそう叫ぶ。

すると背中に生えてる光の翼が大きく羽ばたいてナハトヴァールを浮かせた。それだけやない。騎士の腰から下に有った亀さんが無数の羽根となって霧散、その代わりに騎士本来の下半身、両足が出て来た。正座の体勢から片膝立ち、立ち上ろうとしてるのは明白。

「やれ、はやて！　今なら君の魔法も通用するはずだ！」

「うんっ！　リインフォース！」

『はい、我が主はやて！』

"夜天の書"を開いて、これから使う魔法のページを開く。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝」

『銀月の槍となりて、撃ち貫け』

リインフォースと一緒に詠唱。"シュベルトクロイツ"を掲げて、「『石化の槍・ミストルティン！』」振り下ろすと一緒に術式名を告げる。ミストルティンは遠隔発生型の石化砲撃魔法や。わたしの頭上に展開された魔法陣の周囲に８本と発生した槍を一斉発射。

ミストルティン８本に貫かれたナハトヴァールが貫通点から石化を始めて、「馬鹿な・・！」アウグスタさんの体をも完全に石化させた。騎士の背中から溢れ出る光の翼が消えて、両足も体を支えることが出来ひんようになったんか崩れて、騎士の体は海に沈んだ。

「クロノ！　今だ！」

ルシル君に「ああ！」って応えたクロノ君が"デュランダル"を掲げると、側に浮いてた４本の剣――凍結魔法を反射して効果を高めるためのリフレクターが、石化を少しずつ解除してるナハトヴァールの四方に配置された。

「・・・悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ。凍てつけ！」

≪Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ≫

掲げてた"デュランダル"が振り下ろされると、その先端から強力な冷気が放たれて海を、そんでリフレクターの力もあってナハトヴァールを凍結した。その間にわたし、なのはちゃんとアリサちゃんとフェイトちゃんが、ナハトヴァールよりさらに上、四方の位置に付いた。そんで、「ルシル君、ホンマに大丈夫なん？」わたしらの中心、ナハトヴァールの真上にルシル君が付いた。

「問題ないよ、はやて。ほら、始めるぞ。嫌な予感がする。残りの使い魔が召喚される前に、一気に叩く！　なのは！」

「うん！　レイジングハート、全力全開で行くよ！・・・・スターライト・・・！」

「フェイト！」

「うん。バルディッシュ！　雷光一閃！・・・・プラズマザンバー・・・！」

「アリサ！」

「いつでもオーケーよ！　行くわよ、フレイムアイズ！」

≪不浄の闇を断ち払うのは太陽の現身。輝ける炎の聖剣！≫

「ガラティーン・・・！」

なのはちゃんは下方に巨大な魔力球を創って、フェイトちゃんは空から降り注いできた雷を吸収して激しく放電する"バルディッシュ"を掲げて、アリサちゃんは足元の魔法陣から噴き上がる炎を全て吸収して完全に炎と化してる"フレイムアイズ"を脇に構えた。

「はやて！　リインフォース！」

「うんっ！」『ああ！』

ルシル君に呼ばれて返事したわたしとリインフォースも、"闇の書"としての闇――ナハトヴァール、そんでアウグスタさんを見る。何

百年とリインフォース達を傷つけてきた。許せへんかった、憎らしかった。それでも今、ああして氷漬けにされてる姿を見ると、ちょう哀れで。

『主はやて。参りましょう。ここで幕を引くことが、アウグスタやナハトヴァールにとっても救いとなりましょう』

「リインフォース・・・。うん。・・・響け、終焉の笛！　ラグナロク！」

前面に展開した魔法陣三方に魔力球を発生させる。

「「ルシル君！」」「「ルシル！」」

「ああ！　崇め讃(コード)えよ・・・汝(ミカエル)の其の御名を！」

ルシル君は背から22枚の翼を離して、それらの先端をナハトヴァールへと向けた。これで準備は万端。わたしらは顔を見合わせて頷き合って、そして・・・。

「「「「「ブレイカァァァァァーーーーーーッッ！！！」」」」」

一斉に発射。五方向からの大火力砲撃。それらを一斉に受けたナハトヴァールが砕かれて消滅してく。あとは、シャマルやアルフさん、ユーノ君の出番や。衛星軌道上で待機してるアースラの前へと3人の長距離転送魔法でナハトヴァールのコアを転送。そんでアルカンシェルってゆう艦載砲撃で消滅させる、ってゆう。

『・・・そんな！　ダメ、ナハトヴァールのコアが見当たらない！
どうして！？』

未だにわたしらの魔法の影響で爆発に呑み込まれてるナハトヴァールからコアを取り出す役のシャマルから、そんな悲痛な思念通話が送られてきた。それに返事しようと思うた時。

――セヴァー・ディメンション――

なにか、細い光線・・・ううん、剣のようなものが閃いた。と思えば、シャルちゃんとルシル君が協力して創ったらしい、この別世界が音を立てて崩れ去っていった。一瞬の視界の暗転。気が付けばそこは海鳴の海、その沖合やった。

「ルシル！？」「シャルちゃん！？」

耳に届くアリサちゃんとなのはちゃんの悲鳴。見れば2人が力なく海へ向かって落下してく最中やった。わたしは慌てて2人を追おうとしたけど、それよりも早くフェイトちゃんがシャルちゃんを、なのはちゃんとアリサちゃんがルシル君を抱き止めた。

「いったい・・・どうなっているんだ・・・！？」

クロノ君の発した疑問には誰も答えることが出来ひん。上手く行ってた。うん、それは間違いないんや。それやのに、最後の最後で何かされた。

――アルティフォドス――

状況を上手く理解できひん状況でそれは起きた。海面からいくつもの海水で出来た龍がわたしら人数分突き出して来た。この混乱の所為で避けることが出来ず、わたしら全員は呑み込まれしてもうた。言うなれば海水の檻に閉じ込められた感じ。

「寄越せ・・・寄越せ、寄越せ・・・闇の書を・・・寄越せ・・・！」

（アウグスタさん！？）

まるでゾンビみたいなアウグスタさんが海面から這い出して来た。所々が砕けてたり半透明になってたり。酷い有様やった。あと、心臓付近にシャマルが見つけられへんかったコアが弱々しく点滅してた。

「・・・貴様たち・・・魔力を・・体もろとも・・吸収・・て・・・復活・・して・・る・・・・」

ギラリと妖しく光るアウグスタさんの瞳。ゾワッと悪寒が奔った。このまま捕まってると確実に最悪な結末を辿ることになる。急いで脱出をしようと頑張っても水中ってこともあって体が上手く動かへんし、魔法も使えんくなってる。それに、なんや眠くなって・・・。

『主はやて！　いけません、目を瞑っては！　気をしっかり保ってください！』

リインフォースの必死の呼びかけに応えたいけど、これはアカン。どんなに目を開けようとしても・・・どんどん閉じて・・・。

『主はやて！』

ああ、そんな悲しい顔をさせたないのに。でも、アカンのや。眠気に抗えへん。

――吹雪（コード）け、汝（バルビエル）の凍波――

「『っ！？』」

そんな時、それは起こった。わたしを捕らえてた海水の龍が一瞬にして凍結されて粉砕。わたしはなんとか外に出ることが出来た。見れば、「はやて！」「はやてちゃん！」「主はやて！」「我が主！」ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラも脱出できてた。

「みん・・な！・・・っ、ルシル・・君・・・！」

ふと、視界に入った捕らえられたままのルシル君と目が合うた。その目には、君たちが幕を引け、って強い感情が表れてた。そやけどすぐにルシル君は力なく目を閉じて、そのままプカッと全身から力が抜けてグッタリした。見ればみんなもそんな感じや。

「いま助ける！」

慌てて助けに行こうとした時、「はやて！」ヴィータに腕を力強く引っ張られた。直後、わたしが居った場所を海水の龍が突き上がって来た。それだけやなくて、ルシル君たちみんなを呑み込もうとさらに龍が突き上がって来てた。

「はやてちゃん！　ルシル君たちを助けるなら・・・！」

「アウグスタを、ナハトヴァールを停止させる方が・・・」

「早い！　だから！」

「我が主！」

シャマル達に見詰められる。わたしは強く"シュベルトクロイツ"を握り直して、「うん！」頷き返した。今わたしらが出来ることはナハトヴァールを完全停止させること。ルシル君たちを救うにはそれが一番早く、効率的や。

「行くよ、夜天の主とその守護騎士の名の下に！」

「「「『はい！』」」「うん！」

わたしらは、海草のようにユラユラ揺れてるアウグスタさんの元へと一気に翔ける。アウグスタさんはわたしらに気付いたようで「寄越せぇぇぇーーー！」狂声を上げて、周囲に展開したミッドの魔法陣４枚から砲撃を放ってきた。

わたしらがそれらを避けた後、「眠れ、ナハトヴァール！　鋼の軛！」

ザフィーラが発動した杭がアウグスタさんを背中から貫いた。そんなアウグスタさんへ「お前はもう、居ちゃいけないんだ！」ヴィータの「テートリヒ・シュラークッ！」が振るわれた。

「あなたの旅路も、今日これまでよ！」

ヴィータの一撃でさらに体を崩したアウグスタんさんが弾き飛ばされる中、「戒めの糸！」シャマルの"クラールヴィント"のワイヤーがアウグスタさんを拘束。

「終わらせてもらう、この歪みきった呪いの運命を、ここで！　紫電・・・一閃！」

シグナムの炎の斬撃を受けたアウグスタさんは力なく海面へ落下。そやけど落ちる前に「オオオオオオオオオオ！！」吼えて、わたしに向かって飛んで来た。

「アウグスタさん・・・。もう、お休みな」

『夜天に爆ぜし極光。受けよ、ナハトヴァール』

わたしの頭に向かって来てたアウグスタさんが懐にまで届く前に"シュベルトクロイツ"の先端を向ける。

「『ポラールリヒト・・・ノーヴァ！』」

わたしを中心にして広がる夜天空間。わたしとアウグスタさんの間

に純白に光り輝く閃光が発生。それが爆ぜた。視界いっぱいに広がる白の魔力爆発。それがわたしに届く前に夜天空間が収縮して、アウグスタさんと魔力爆発だけを閉じ込めた。

「・・・さようならや。アウグスタさん。ナハトヴァール」

目の前の空間が爆発。そこから現れたんはアウグスタさんやなくて、ナハトヴァールのコアだけ。そのコアを、無事に解放されたアルフさんやユーノ君、そんでシャマルの3人による「長距離転送！」で、軌道上で待ってくれてるアースラの元へと転移させた。

『こちらアースラのエイミィ！　みんな・・・お疲れ様！　無事にナハトヴァールのコアを、アルカンシェルにて蒸発させることに成功したよ！！』

エイミィさんから届いた連絡は、あまりにも長かった呪われた旅路の終焉を伝える報告やった。

Ｅｐｏｓ２５終宵は明けて、しかし黄昏は訪れる～Ｈｅｉｌ　ｕｎｄ　Ｕｎｈｅｉｌ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

ナハトヴァールの弱りに弱ったコアを、シャマル達が衛星軌道上にて待機しているアースラ前へと長距離転移させた。先の事件では、コアの結末はシャルの真技での消滅だったが、今のシャルは真技が使えるほど余裕はないため、見送った。
僅かな待機時間の後、アルカンシェルにてコアを蒸発させることが出来たとエイミィから連絡が来た。ああ、終わった。あとは、リインフォースを天へと還す、というあのイベントをこなすのみ。

（嫌だな。はやての泣き顔を見るのは。今の俺にはキツイな。とは言え、ツヴァイが生まれる為に、どうしても消えてもらわなければ・・・）

ナハトヴァールの完全消滅を喜び合っているはやて達を見守りながら、この後に訪れる悪夢に頭を痛める。先の別離の時、はやてとリインフォースのやり取りの時には少々もらい泣きしそうだったことを思い出す。
しかし今回は、はやて達と深い関わりを持っている。しかも涙もろくなってしまっている今の俺に耐えられるかどうか不安を抱いていたところで「いやぁ、魔力がスッカラカンだよ」シャルが腹をくぅくぅ鳴らしながら側へとやって来た。あぁ、そうだ、コイツもどうにかしないと。

（ヘルシャー・シュロスを展開するためとは言え、前世シャルの人格を一時的にさらに強く表側に引っ張り出してしまった・・・）

シャルとのキスは、俺の神秘を使用してシャルの魂に眠っている神秘の塊を完全覚醒させる為のものだった。そうすることでシャルを魔術師へと昇華、俺の創世結界・"神々の宝庫ブレイザブリク"に眠る彼女の創世結界・"剣神の星天城ヘルシャー・シュロス"を展開させ易くした。結果は大成功だった。だが、喜んでばかりはいられない。イリスの本来の人格がシャルの人格に押し潰される前に、この手でシャルの人格を・・・。

「そうだな。俺も失いすぎてフラフラだ」

グッと握り拳を作って震えを無理やり止め、声を掛けてきたシャルへとそう返す。七美徳の天使アンゲルスと七元徳の使徒アポストルスの大半を奪われ失った。記憶も一緒に失わずにいるのは、未だに天使・謙譲インダストリアや使徒・知識サピエンチア、使徒側の節制テンパランチアの3体が残っているからだろう。その3体が記憶を補完してくれている。

「シャル。君はこれからどう――」

「主はやて！」「はやて！？」「はやてちゃん！？」

俺の言葉を遮ったのはリインフォースとヴィータ、シャマルの悲鳴だった。脳裏に過ぎったのは、はやてが気を失って倒れるシーン。

キルシュブリューテ

いきなりの融合に強大な魔法の連続行使、これまでのナハトヴァール侵食による体力・精神の弱体化、当然すぎる結末だ。融合解除されたリインフォースに抱えられているはやては完全に意識を手放していた。

「クロノ！　今すぐにはやてをアースラに収容して！」

「あ、ああ！　エイミィ！」

シャルがクロノに指示を出す。こうして俺たち全員は懐かしきアースラへと向かうこととなった。

アースラ到着後に俺たちを出迎えたのは、時の庭園崩壊時になのはの口から聴いた、「ティファ、お願い！」ティファレト・ヴァルトブルクその人。大戦時、治癒の騎士として名を馳せていた女騎士、その末裔だ。

シャルに対し「任せて、お嬢」と返したティファレトははやてを抱えたリインフォースに「まずはこちらへ」とはやてをストレッチャーへ乗せるよう促した。リインフォースは彼女に従い、はやてをストレッチャーに乗せた。

俺もついて行こうとした時、「ルシリオン。すまないが・・・」クロノに呼び止められた。そうだな。誰か1人は残っていないとダメか。蒐集行為の全権を握っていたランサーとして、最後まで責任を果たさないといけないよな。

「リインフォース達はそのままはやての側に居てやってくれ。俺は話があるから残るよ」

「あ、でも・・・」

言い淀むシャマルに、「私も将だ、残ろう。主はやてのこと、よろしく頼みます」シグナムがティファレトに頭を下げた後リインフォース達から離れ、「我も残ろう」ザフィーラも遅れて俺たちの元へと戻って来た。

それで決まり、「判りました。それではご案内します」ティファレト、そしてヴィータとシャマル、リインフォースが医務室へと去って行った。彼女たちを見送った後、俺たちはリンディさんの待つという、ミーティングルームへと向かうことになった。

「そう言えばシャルちゃんとルシル君、すごく顔色が悪かったけど、もう大丈夫なの・・・？」

フェイト、アリサ、すずかと横一列に並んで前を歩くなのはがそう振り返って訊いてきた。俺は、俺の右隣を歩くシャルと一度顔を見合わせ、「大丈夫」と答えた。シャルは持前らしい回復力で、俺は海水の龍アルティフォドスから解放されたと同時に、大気中に満ちていた魔力素を吸収して回復させた。

「つうか、シャル。あんた、絶対おかしいわよ。明らかに魔法なんてレベルじゃない、あの別世界みたいなヤツを創るアレ！」

「それにルシル君も。なんかシャルちゃんを昔から知ってるかのように息の合った詠唱とかしていたし・・・。ルシル君ってもしかして・・・」

アリサがシャルに詰め寄って問い質し、すずかが疑念の視線を俺に向けて来て、「シャルちゃんと知り合いだったりする？」なんて核心をついて来た。鋭い、というよりは当たり前の着眼点か。あまりに馴れ馴れしかったからな、知己であると思われも仕方がない。どう誤魔化そうかと思案していると。

「ふっふっふ。何を隠そう今の私は――むぐっ？」

シャルが絶対に言ってはいけないことを言いそうだったため、口を手で塞いで、引き摺って来た道を戻る。通路の角を曲がり、「何を言おうとした？」と問い質すと、「馬鹿ね～。こんなことしちゃ余計怪しまれるでしょうが」そう真っ当なことを言われた。シャルのくせに。

チラッとシャルが角に目をやるから俺もそっちに目を向けると、シグナムとザフィーラ、クロノを除くなのは達がちょこっと頭半分だけを角から出して覗き見していた。目が合うとビクッとして頭を引っ込めた。バレているぞ、おーい。

「頑張って誤魔化すか、大人しく真実を語るか、あなたの魔術で記憶を改ざんするか、三択ね」

そっと小声で耳打ちされた。こういう場合は念話でいいだろうに。見ろ、なのは達が顔を真っ赤にしているじゃないか。絶対に変な誤解をされた。「ああもう！」と頭をガシガシ掻き、仕方ないと諦める。シャルを連れてなのは達の元へと戻る。

「あのな。・・・俺は先祖代々、今は失われた古代の魔法を受け継

いできている。だからこんな子供でも、この前のようにフェイトやシャル、クロノにアルフを圧倒することも可能だったわけだ」

俺との戦闘を思い返したらしいフェイトとアルフ、戦闘記録を見たらしいなのは達も「あー」と納得を示した。

「あの、でもそれとシャルちゃんのあの魔法？に何の関係があるのかな・・・？」

「俺がなのは達の魔法を使った、と言えば関係が見えてくるだろ？」

ハッとしたなのは達。そして「あんたもナハトヴァールみたく他の魔導師の魔法が使える・・・？」と言ったアリサに俺は首肯した。そして説明する。俺の固有能力・複製を。一度見た魔法を覚え、いつでも好きな時に発動できる、と。

「じゃあなに？　さっきあたし達が見せた魔法も全部使えるってこと？」

「ああ。使える。で、だ。ここでさっき話した先祖代々の云々。俺は先祖の魔法だけでなく、先祖たちが複製した魔法も受け継いでいるんだ。先ほどシャルが使ったのは、正確には俺の先祖がシャルの先祖から複製した魔法だ。名を、創世結界、という」

なのは達の興味が完全に俺の魔法の特異性に向いている。俺とシャルの仲の良さへの興味が薄らいでいる今、徹底的に逸らしてやろうと思ったところで「そうね。で、すずかの疑問。私とルシルのこと

なんだけど」シャルが蒸し返してきやがった。こんちくしょう。

「ほら。私って前世の記憶がフラッシュバックしてるとかって言うじゃない。あれとは別かどうかは判らないけど、ご先祖様の記憶も引き継いじゃってるみたいなの。ランサーの正体がルシルだって判った時、私倒れちゃってさ。その時にこう、頭の中の噛み合わなかった歯車が正常になったって言うか。そん時に思い出したわけ。ルシルの先祖と会ったことがあるって。だからかな。このルシルにこれまで以上の親愛が生まれた」

シャルが虚偽と真実を織り交ぜた話を始めたため、『やるな』と念話を送ると、『あなたこそ』とそう返してきた。嘘を吐くのも、嘘の中に真実を隠すことも、息をするかのように当たり前になってしまっていた"界律の守護神テスタメント"時代。それは互いに今でも変わらず。子供を欺く程度、造作も無い。そして生まれる罪悪感もまた変わらずだ。

「ちなみに私たちの仲が良さそうに見えたのは、私からの一方的な感情だよ。だよね、ていうか、ごめんね？」

「あ、いや・・・シャルのノリはそんなに嫌じゃないからな、俺もノッたんだ。楽しかったよ、うん」

この説明で頼むから納得してくれよ、みんな。今回の俺には"界律"の加護が無い。つまり怪しまれたらとことん怪しまれる。その分、上級術式や創世結界などと言った反則級の術式を扱えるわけだが。なのは達は顔を見合わせた後、「そうだったんだね」と納得してく

れたようで笑顔になった。良し、と思う反面、ほーら、やっぱり生まれるどうしようもないこの罪悪感。シャルが『うわぁ、やっぱキッツイわ～』と溜息交じりでそう念話で言ってきた。俺は小さく首肯だけに留めた。

「おーい。話はもういいか。艦長を待たせているんだが」

そう言うクロノに俺たちは謝罪し、改めてリンディさんの居るミーティングルームへと歩き出した。
そしてミーティングルームに到着し中に入る。上座にはリンディさんが座っていて、「時空管理局・アースラ艦長として直接会うのは初めてね、ルシリオン君、シグナムさん、ザフィーラさん」と俺たちに微笑みを向けて挨拶した。

「このたびはご迷惑をおかけしたことを、蒐集行為全権を任されていたパラディース・ヴェヒターのランサーとして、そして八神家の1人として、お詫びします」

深々と頭を下げる。続けて右隣のシグナムと左隣のザフィーラも頭を下げた。対するリンディさんは「はい」と微笑みを返してくれた。そうして俺たちはそれぞれ席へと着き、簡単な事情聴取を受けることとなった。
内容はこれまでの蒐集行為に関して。蒐集活動の正確な始まりは何時、何処で。始めたのは誰。蒐集対象の選択は誰が、どうして犯罪者ばかりを狙ったのか。これまでなのは達と出会った時に話したことの再確認のようなものばかり。

「――では次に。ルシリオン君。あなたはどうやって魔導犯罪者の居場所を特定していたのですか？」

「中には公表にされていない連中もいた。それを知るなんてこと、局員くらいだ。だから僕たちは、局内に君たちへ捜査情報を流した者が居ると思っている」

クロノの言葉に息を呑むなのは達。ギル・グレアム提督、そしてリーゼアリアとリーゼロッテ。だが、「・・・俺に協力者はいない。俺が管理局のデータバンクをクラックして手に入れたんだ」と最初に取った手段だけを答えた。グレアム提督はきっとこれからも八神家の助けになってくれるはずだ。その為には先と同じように辞職させない。

「えっ！？」「なにっ！？」

リンディさんとクロノが椅子から立ち上がる程に驚いて見せた。遅れて「わ、わぁ、ビックリ～！」シャルも驚きを見せた。が、あまりにも棒読み。絶対にバレるだろ、と思ったが、リンディさん達はそれに気付かない程に驚いていた。

「そんなことが出来るなんて考えられないわ・・・！」

「・・・おいで、秘密（ステガノグラフィア）を暴き伝える者達」

術式名を詠唱。テーブルの中央に1枚のモニターを展開。そこに三頭身の疑似天使、アメナディエル、ソレウイエル、マカリエル、メ

ナディエル、ライシエルがそれぞれの返事で姿を現した。なのは達は三頭身な天使たちに「可愛い　」と歓声を上げた。

「ねえねえ、ルシル君！　この子たち、なに？」

「ソイツらが電子戦用の魔法、ステガノグラフィア。いかなるセキュリティ・トラップを自己判断で突破・解除し、相手側にクラックの痕跡を一切の残すこともなくデータバンクの中身を思いのままにする。試しに、アースラのシステム、乗っ取って見せましょうか・・・？」

事実であることを伝えるためにリンディさんとクロノと真っ向から見つめ合う。先に目を逸らしたのはリンディさんで、残念そうに僅かに俯いた。クロノがそれを見た後、改めて俺を見た。

「・・・ルシリオン。それが事実なら、君の罪状はさらに重くなる。本局のデータベースへの不正アクセスなど、第一級の犯罪だぞ。・・・だと言うのに、君は本当に優しい」

「優しい？　なにを言って・・・？」

「ルシリオン、君は・・・協力者を庇っているんじゃないか、と僕は思っている。正直、同じ局員を疑うのは気持ちが良いものじゃない。だが、もし居るのなら・・・答えてほしい」

クロノめ。大人しく俺の言うことを素直に聴いていればいいものを。俺はそれでも「協力者はいない。あと、全て俺の独断だ。はやては

もちろん、シグナム達も知らなかった」とあくまで俺ひとりの罪だと証言する。俺の両隣に座るシグナムとザフィーラがピクッと反応した。

『すでに将としての権限はないけど、頼む。俺の話に合わせてくれ』

『しかし・・・・！　それではお前の罪状が我々以上に――』

『シグナム！・・・・頼む。最後まで、君たちを守らせてくれ』

『っ！・・・お前は何故そこまで・・・・』

『決まっているだろ。家族じゃないか、俺たちは』

シグナムと念話で話をしていると、「ギル・グレアム提督」クロノが俺の心を読んだかのようにその名前を口にした。当てずっぽうかと思えばクロノの目が、確信を以ってその名を告げた、と言っているのが解った。それはつまり「知っていたのか・・・・！」だ。知りながらも俺へと問うた、ということは俺を試した・・・・！

「ごめんなさいね、ルシリオン君」

「すまないな。リーゼ達が君と接触し、グレアム提督が君へ捜査情報を流すなどの協力関係を結んでいたこと、提督本人から伺っている。この、氷結の杖・デュランダルを受け取った時に」

クロノが"デュランダル"を手にしていたのを見た時、グレアム提

督と会ったのだろうとは思っていたが、まさか自首していたとは。クロノは続ける。グレアム提督"側"から俺へ協力を持ちかけたこと。グレアム提督がその罪を償うために管理局を辞職すること。"デュランダル"で俺やはやて達の力になってほしいとクロノに頼んだこと。

「待ってくれクロノ！　グレアム提督からじゃないんだ、協力を持ちかけたのは俺か――」

「ルシリオン君。グレアム提督は、あなたに感謝していたわ。はやてさん達を犠牲にすることなく闇の書の旅路を終わらせてくれたことに。そして提督は、あなたのことも助けたい、とも言っていたわ。あなたがその小さな体に背負い込もうとするものを少しでも軽くしたいって」

先の次元世界で直接会った時に見せてくれたグレアム提督の優しい顔が脳裏を過ぎった。お見通しだったと言うわけか。俺がこの一件での全ての罪を背負おうとしていたことを。敵わないな。

「そういうわけだ。これまで君ら守護騎士が行ってきた蒐集行為は、魔導犯罪者ばかりを標的にし、結果魔法による犯罪率を減らした功績がある。民間人であるなのは達を襲った件に関しては本人たちが被害届を出さないこともあり、罪には問われない。データベースへの不正アクセスの件は、グレアム提督が背負ってくれた為、それも罪には問われないだろう」

「はやてさん、人ひとりの命が懸かっていた状況でもありますし。

特に犯罪者逮捕率・犯罪率の減少という功績が大きいから、余程のことがない限りは罪に問われないはずです。まぁ、確実に保護観察処分は受けてもらいますけど」

それがリンディさんとクロノの見解だった。概ね俺の計画通りだ。シグナム、ザフィーラと共に「ありがとうございます」と礼を言う。そして話は俺個人のこととなった。まず、俺のプロフィールの確認。クロノが言うには、俺の個人情報をグレアム提督は明かさなかったそうだ。協力者としての守秘義務。知りたければ本人から聴いてほしい、そう言っていたそうだ。

「ルシリオン・セインテスト。出身世界は第12管理世界フェティギア、サンクト・アヴィリオス」

マリアに用意されたプロフィールを言うと、リンディさんが「エイミィ」と呼ぶ。すると彼女の側にエイミィの映るモニターが展開され、『ちょっとお待ちくださ～い』エイミィが陽気な声で応じた。10秒と経たずに『お待たせしました～。ルシリオン・セインテスト君。確かにフェティギアに戸籍があります』と、さすがの腕前で俺の戸籍を調べ上げた。エイミィから俺のプロフィールが改めてここミーティングルームに居るみんなに伝えられる。

『ルシリオン・セインテスト君。性別はやっぱり男の子。誕生日は2月5日。年齢は8歳。ご家族とはすでに・・その・・・』

言い淀んだエイミィに「続けてくれ」と促す。とは言っても、家族のことで言い淀んだという時点でなのは達は感づいているようで表

情に暗い影を落としている。エイミィは渋々『死別しています』と続けた。
そしてセインテスト家の財産を受け継ぎ、今は行方を晦ませている、と。エイミィが『以上です』と締め、リンディさんに「間違いありませんか？」と訊かれた俺は「間違いありません」と返した。

「では本題だな。君はどうしてこの世界に居る？　あと、どうやって来た？　いかなる理由であっても、君に科される罪状がコレだ。不法入界と不法滞在。こればかりは庇えないぞ」

「判っている、それは償うつもりだった、初めから。俺がこの世界を訪れた理由、それは・・・セインテスト家の悲願。エグリゴリという兵器の破壊の為に、個人転移魔法で訪れた」

"堕天使エグリゴリ"の救済。それが、俺がこの世界に居る理由、そして俺の存在意義だと語った。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒はやて†††

「・・ん・・・ん、ん・・・ここは・・？」

とゆうより、いつの間に眠ってたんやろ。ちょう頭の中がボヤ～ってしてる。それに知らへん天井や、自宅やない。今の状況を整理しようとしたところで、「はやて！？」ヴィータがわたしを覗き込んできた。

「ヴィータ・・・？」

「はやてちゃん！　良かったぁ。あの、体は何ともないですか・・・！？」

「シャマル・・・。・・・あっ！　思い出した！」

ガバッと上半身を跳ね起こす。わたしの眠ってたベッドの周りにはヴィータとシャマル、それに「リインフォース」が居って、他に白衣を着た女の人がわたしを見てた。一気に蘇るナハトヴァールとの決戦。なんとか作戦通りにナハトヴァールのコアを倒すことが出来て、その後、安心したからか急に眠くなって、それで・・・わたしは倒れてしまったんやな。

「主はやて。お疲れ様でした。ご加減のほどはどうでしょうか？」

「あ、うん。えっと、痛いところも無いし、大丈夫や。ヴィータとシャマルも心配かけてしもうたな」

わたしの腰に抱きつくヴィータの頭を撫でる。そこに「ちょっと失礼するね」わたしに近付いてきた白衣の人がそっとわたしの頭に手を置くと、温かくて優しい黄緑色の魔力がその手から発せられた。

「はじめまして。私はティファレト・ヴァルトブルク。本艦アースラに配属されている医師。少し容態を見るから、ジッとしていて」

言われたとおりにヴィータの頭を撫でつつジッと待ちながら、「アースラ？」って訊いてみる。ティファレトさんが言うには、今わた

しらが居るこの艦の名前がアースラで、時空管理局の艦やとゆうこと。艦長がリンディ提督って聴いたとき、すずかちゃん達と初めて図書館で会った時のことを思い出した。

――リンディ提督が買ってくれるって約束してくれたから――

あの後、みんなが必至に誤魔化してたけど、こうゆうことやったんやなぁ。確かにリンディさんは提督で艦長さんやった。軍やなくて管理局のやったけど。それからクロノ君とシャルちゃんは正式な局員で、フェイトちゃんとアルフさんは非常勤の魔導師。すずかちゃんとなのはちゃんとアリサちゃんが民間協力者、とのことや。

「・・・うん。もう大丈夫そう。私は席を外すので今はご家族とゆっくり休んでて」

「ありがとうございます」

「お大事に」

ティファさんが部屋を出て行くんを、頭を下げて見送る。それじゃあ早速「シグナムとザフィーラ、ルシル君は？」って訊く。さっきから気になってた。３人が居らんことに。答えてくれたんはリインフォースやった。

「ルシル、シグナム、ザフィーラの３人は今、管理局員から事情聴取を受けているはずです」

「事情聴取って。わたしも行かなアカン・・・！」

八神家として、"夜天の書"の主として、事情聴取を受けるべきはわたしや。急いでベッドから降りようとしたけどわたしの移動の手段、車椅子が無い。そやから「リインフォース、抱っこ！」リインフォースに両腕を伸ばす。リインフォースにお姫様抱っこしてもらって、いざ、ルシル君たちのところへ。そう意気込んで部屋を出ようとした時、「ルシル君、シグナム、ザフィーラ・・・！」会いに行こうとしてた3人が来てくれた。

「主はやて。もう起き上がってよろしいのですか？」

シグナムにそう訊かれたわたしは「もう大丈夫やよ」って笑顔で答える。ベッドに降ろしてもらいながら、ルシル君たちにリンディさん達とどんな話をしてんかを訊いてみた。ルシル君が一度みんなを見回した後、話してくれた。

「――う～ん。とゆうことは、わたしらはそんな重い罪にはならへん・・・？」

ルシル君の話やと、魔法を使って悪いことする人たちを徹底的に狙ったおかげで次元世界の犯罪率が一時的とはいえ下がったことが高評価やったみたい。それはルシル君の狙い通りでもあって、ルシル君のすごさに改めて舌を巻く。

「ああ。リンディさんとクロノの計らいでね。ま、保護観察は確定だ。俺や守護騎士は管理局従事、早い話が管理局に入って仕事すれ

ば許される、みたいな」

「じゃ、じゃあわたしは？　わたしも一緒にやるよ？　ルシル君やシグナム達ばかりに迷惑を掛け・・・、どないしたん・・・？」

ルシル君を含めたリインフォースら全員が一様に沈んだ顔を見せてるのに気付いた。もう一度「何かあったん？」って誰とも言わずに訊いてみたところで、「あっ」ある考えに至った。

「た、確かにわたしはルシル君に比べて半人前、むしろド新人やけど。そこは頑張って、みんなのお荷物にならへんようにするから。あ、そうや。みんな、わたしに魔法を教えて。飛び方とか色々」

リインフォースとユニゾンせなんも出来ひんようなわたしが、みんなと一緒に管理局のお仕事なんて夢のまた夢や。そやけど、そこは努力でなんとか・・・。でもみんなに教えてもらいながら成長するとゆうのも悪ないな、うん。

「いいえ、そういうわけではないのです、主はやて」

リインフォースがポツリと漏らしたから、「じゃあなんや？」訊き返す。

「ナハトヴァールを切り離す際、管制（わたし）プログラムの根幹部分と防衛システムを切り離しました」

「え・・・？」

なんや今すごいこと言わへんかったか？　根幹部分を切り離したって、それって切り離したらアカンやつやないの？　シグナム達が悔しげな、そんで悲しそうに顔を歪めたのが判った。

「ナハトヴァールを切り離すにはどうしても必要な処置でした。根幹部分を失ってしまった私は、保ってあと半年の命かと思います」

「半・・年・・・？　え、何を言って・・・？」

頭の中が真っ白になる。「なんかの冗談やんな？　なぁ、みんな？」リインフォースに、シグナムに、ヴィータに、シャマルに、ザフィーラに問う。ルシル君も信じられへんって顔でリインフォースを見てる。わたしの問いには誰も答えてくれへん。そやから「嘘やんな！」声を荒げてしまう。

「・・・嘘でも冗談でもないのです。夜天の書リインフォースに残されている時間は半年なのです」

ハッキリそう言うたリインフォースを「なんで・・・なんでや！」問い質す。勢い余ってベッドから転げ落ちそうになるんをそのリインフォースに助けてもらった。温かく、柔らかく、優しい感触。それらが消える、あとたった半年で・・・。わたしの右肩と左腕を掴むリインフォースの両手が震えだす。さらにポタポタッとわたしの頬に落ちてくるリインフォースの涙。

「夜天の書の闇からあなたを救う為には、管制プログラムである私

と深く繋がっている防衛システムも切り離さなければならなかった。ですから――」

「自分を犠牲にしたってゆうんか！　そんなん嬉しない！　やっと、やっと・・・みんなをなんの心配も無く、幸せに出来るって・・・！」

ここまで言ったところで、「シグナム達はどうなるん・・・？」それに気付いた。リインフォース・・・"夜天の書"の死。それってつまりその一部のシグナムら守護騎士も一緒に・・・。ハッとしてみんなを見る。さっきからみんなが浮かべてる表情の意味がようやく解った。

「はやて。大丈夫だよ。はやてにはルシルもいるし、なのは達もいる」

「そう、ですよ。もう寂しくありませんよ、はやてちゃん」

無理して笑ってる感がありありのヴィータとシャマル。

「な、な、何を言うてんのや！　大丈夫なわけないやんか！　寂しくないわけないやんか！　リインフォースが居らんくなって、シグナムもヴィータもシャマルもザフィーラも・・みんなが居らんくなったら、それのどこが幸せや！　認めへん、そんなん認めへん！」

わたしも涙が溢れてきた。すると「あたしだって、あたしだって嫌だよ！　離れたくない、ずっと一緒に居たいよ、はやて！」ヴィータも大泣きし始めた。シャマルも「う、う、うぅぅ、わ、私だって

～～～！」両手で顔を覆ってへたり込んでしもうた。見ればシグナムも少し涙を浮かべてて、ザフィーラもホンマに辛そうな表情や。それが余計にわたしに涙を流させる。

「すまない、言い忘れていた。守護騎士プログラムも同様に私から切り離した。だからお前たちはこれまで通り、主はやてやルシルと共に生きていくんだ」

リインフォースが涙を零しながらも優しく微笑んだ。シグナム達はもちろん、わたしも息を呑んだ。

「それだけではない。主はやて。防衛システムを失ったことで私からの侵食も止まり、あなたの下半身麻痺も時を置けば快方に向かいます。ですから以前のように自らの足で立ち、歩けることが出来ますよ」

「そんなん・・・そんなん、リインフォースが居らんくなるくらいなら、ずっと歩けんでもええ・・・！」

「主はやて。そんな悲しいことを仰らないでください。あなたは夢見ていたはずです。己の足で立ち、歩き、ルシルやシグナムら家族と遊びに行くことを。それが叶うのですよ？」

「そやからって、素直に喜べるはずないやんか！　リインフォース、なんとかして戻せへんの！？　わたし、なんでもするから！　管制権限が使える今なら、新しく機能を作って追加できたりするんやないの！？」

「・・・もう、戻りません。半年間と掛けて緩やかに崩壊します。それは覆すことの出来ない、運命です」

ギュッと抱きしめてくれるリインフォースに「なんで、そこまで・・・」ホンマは解ってることを訊く。

「私はあなたの魔導書です。新たに祝福の風リインフォースという美しい名を頂き、止めてほしかった呪いの旅路を終わらせて頂いた、とても幸福な魔導書。ですからその力を以ってあなたを、そして騎士たち家族を守らせてください」

リインフォースの決意は固かった。それやったら、「残り半年間、うんと幸せにするからな・・・！」リインフォースが居なくなるまでの短い時間、わたしは、わたしらはリインフォースの為になんだってする。リインフォースの人差し指で涙を拭ってもらった目でみんなを見回す。シグナムとザフィーラは真っ直ぐリインフォースを見詰めて、ヴィータもシャマルも涙を袖で拭って、強く頷いた。ルシル君も頷いてくれた。

「リインフォース。シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、そしてルシル君。この半年間。精一杯みんなで生きて、幸せになろうな」

「ああ！」「うんっ」「「「「はいっ！」」」」

八神家の再出発や。リインフォースが笑顔で旅立ってくれるように、

うんと幸せな時間へ向かって、な。

Ｅｐｏｓ２６魔法少女たちの未来設計～Ｄｒｅａｍ　ａｎｄ　ａ
Ｗｉｓｈ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

事情聴取を終えてはやてちゃん達のところへ向かったルシル君たちと別れた後、私たちは食堂に来た。学校の終業式が終わってからというもの飲まず食わずだったから、もうお腹がぺこぺこ。みんなで遅めの夕ご飯を頂いてる。
はやてちゃん達を誘って一緒にご飯にしようと思ったんだけど、残念ながらクロノ君が、はやてちゃんを交えてこれからのことを話す、ということでおあずけになっちゃった。すぐにでもはやてちゃんたち解放されるといいんだけど。クリスマスパーティをやりたいから。

「そう言えばさ。なのは達はこの後どうするの？」

私たちの顔より大きな特大パフェをものすごい笑顔で食べてるシャルちゃんがそんなことを訊いてきた。真っ先に「この後、って・・・。お家に帰って――」私が答えようとしたところで、「違う、違う　」シャルちゃんがイチゴを乗せたスプーンを私の口に向かって突き出してきた。
ニコニコ笑顔のままで引っ込めないシャルちゃんだったから、私は「あ、あ～ん」オムライスを掬ったスプーンを一度置いてからパクッと一口。う～ん、合わないよ、シャルちゃん。オムライスにイチゴはダメだよ・・・。口の中が軽い地獄と化しちゃったよ（涙）

「なのはちゃん、大丈夫・・・？」

すずかちゃんがコップに注いでくれた水をひと呑みして「ありがとう」お礼を言っていると、「どういうわけよ」アリサちゃんがシャルちゃんのパフェからチョコスティック1本をひょいっと獲りながら先を促した。

「あっ。むぅ・・・取っておいたのに。・・・はぁ。あれだよ、将来のことだよ。なのは達はこれからどうするのかな、って思ったんだ。わたしは言わずもがな、フェイトは・・・」

「うん。私は正式に管理局に入局するつもりだよ。前にも言ったけど、何かを助けたり救えたりする力を持っているなら、それを困っている人たちの為に使いたいから。私がなのは達に救ってもらえたように。はやて達を助けてあげられたように」

フェイトちゃんがそう言って微笑んだ。シャルちゃんは同い年ながら管理局の中でもすごいって言われてる役職に就いていて、フェイトちゃんも私たちより早くに管理局員になるっていう、しっかりとした決意を持ってるからすごく輝いてる。

でも、私だってずっと考えていたんだ。ユーノ君から貰った、この魔法っていう力の使い道を。どうすれば腐らせずに役立てるのかを。それを思うと、ジュエルシードを集める為に決意した時のことを思い返すことが出来たんだ。

――ジュエルシードを放っておくと、もっと酷いことが起きるかもしれない。それを止めることが出来る力を私が持っているなら、な

おさら手伝いたい――

そう。私はもう、その時にはすでに見つけていたんだ。それをフェイトちゃんのおかげで確実なものへと変えることが出来た。漠然とした夢すらも無かった私が辿り着いた答え、それが・・・。

「私もね。この魔法の力で、困っている人たちを助けてあげることが、救ってあげることが出来たらいいなって、そう思うんだ。だから私も、管理局に入ってこの魔法をみんなの為に役立てたい」

シャルちゃんは「そっか。うん、大事な思いだよ。忘れないでね」って嬉しそうに笑顔を浮かべた。と、「ぼ、僕も実は・・管理局に入ろうと思うんだ」ユーノ君がどこかそわそわしながら話に入って来た。

「え、そうなの？」

「うん。闇の書のことを調べていた時、無限書庫の司書長からスカウトされて。僕も自分の知識や魔法を役立てないなぁって思って」

「そうなんだぁ。それじゃあユーノ君も一緒に働けることになんだね♪」

「う、うん」

ユーノ君と笑顔を交し合ってるところで、「アリサとすずかはどうする？」シャルちゃんが黙ったままの２人に声を掛けた。２人には

もう将来の夢がある。すずかちゃんはエンジニア、アリサちゃんは両親が経営してる会社を継ぐっていう。
私は、そんな2人と一緒に管理局に入ることが出来たら嬉しいなぁって思うけど、それが無理なことも理解してる。特にアリサちゃんは一人っ子だから、私たちの中で一番管理局入りが不可能だ。

「あ、あの。私も出来たら管理局に入りたいなぁって思う」

「すずかちゃん・・・！？」「すずか！？」

まさかの展開だった。すずかちゃんが小さく挙手しながら管理局に入りたいって。私たちの視線は一斉にすずかちゃんへ向く。すずかちゃんはちょっと照れくさそうに頬を染めながら「管理局の仕事にもエンジニアのようなものあるみたいだから」って言った。

「もしかしてデバイスマイスターのこと？」

「うん。シャルちゃん、マリエルさんを私たちに紹介した時に言ってたよね。魔導師の使うデバイスの製作・管理するデバイスマイスターっていう技術職があるって」

「職っていうか資格ね。技術職は他にもあるよ。艦船整備とか」

「う～ん、私はやっぱりデバイスマイスターの資格を取りたいかな。そしていつか、スノーホワイトやなのはちゃん達のデバイスを看てあげることが出来れば、って」

それがすずかちゃんが新しく思い描いた夢だった。でも、うん。「その時はよろしくお願いします♪」ふかぶか～と頭を下げると、シャルちゃんやフェイトちゃんも「お願いしま～す♪」ってふかぶか～と頭を下げた。すずかちゃんに"レイジングハート"や"バルディッシュ"、"キルシュブリューテ"が看てもらえる日が来るのが待ち遠しい。

「あ、あ、あたしだって！　あたしだって管理局に入りたいわよ！　あんた達と一緒に、魔法で困ってる人たちを助けたいわよ！　そ、そうよ！　あたしが一人っ子だからダメなのよ！　今からでも遅くないわ、弟を作ってもらえば！」

わぁーん！って大泣きしそうな顔をしたアリサちゃんはバンッとテーブルを叩きながら立ち上った。というか「落ち着いて、アリサちゃん！」すごいことを言っちゃってるよ。思考が暴走しちゃいそうな勢いだったアリサちゃんを、みんなでなんとか宥めることに成功。

「ねぇ。真面目な話、ホントどうしたらいいと思う？　あたし、本当に魔導師として、騎士として、管理局に入ろうって思うんだけど。でも、バニングスの跡取りとしての責任も大事だって思うわけ」

アリサちゃんからの人生相談。人ひとりの今後の人生に関わる重大すぎる相談に、私たちはちょっぴり困る。でも、アリサちゃんは真剣だし、本当に困っているから、親友としては役に立ちたいわけで。

「二足の草鞋でいいんじゃない？」

「「「「二足の草鞋？」」」」

真っ先にシャルちゃんが提示した案。それは管理局員と継いだ会社の運営、その両方をこなすというものだった。それを聴いたアリサちゃんの第一声は「過労死するわ！！」だった。局の魔導師として頑張って、休憩中や休暇で会社運営を行う。確かに疲労で体を壊すこと請け合いだ。

「だったら・・・婿に任せれば？　女の子のひとりっ子っていうことはいずれにしても婿を迎えるんでしょ？　信頼できる人と結婚して、会社運営を任せれば・・・ほら、問題解決――」

「してないわよ！　け、け、け、結婚！？　この歳で結婚とか考えられないわよ！」

「「まだまだ先だね～」」

９歳の子供な私たちにはまだ早い話だった。シャルちゃんは次に「じゃあ、アリサが言ったように兄弟を作ってもらうか、養子を取るか」そう提案した。アリサちゃんは「やっぱり弟よね～」なんていう始末。そんな簡単に出来るものじゃないんじゃないかなぁ、兄弟って。どうすれば作れるのかは判んないけど。

「ま、どの方法を選択するにしても、みんな共通の問題を抱えているのは確かだよね～」

シャルちゃんが私とすずかちゃんをチラッと横目で見てそう言った。

判ってる、私たちが抱えてる問題。そう、「家族に話さないと、だよね」これまでの、魔法とかの事情を全て話した上で、管理局に入る許可を貰わないといけないことくらい。

「もしなのは達が反対されたら、管理局に入るのはルシル達だけになるのかな・・・？」

フェイトちゃんと同じように保護観察処分が決定されたルシル君たちは、他にも管理局従事っていう形で嘱託魔導師になることが決定したって。元よりパラディース・ヴェヒターの実力は管理局の偉い人たちにお眼鏡に適っていたってことらしくて。はやてちゃんについては今頃、クロノ君と話し合いがされてるはず。

「あ、はやて・・・！」

シャルちゃんが出入り口の方を見てはやてちゃんの名前を呼んだ。そこには車椅子に乗ったはやてちゃんと、車椅子を押すヴィータちゃん、そしてルシル君たち八神家が勢ぞろいしていた。

「みんな！　改めてホンマにありがとう♪　みんなのおかげで、ナハトヴァールをどうにかすることが出来たわ♪」

はやてちゃんの満面の笑顔を見ることが出来た。それだけで頑張った甲斐があるというものだよ。私たちははやてちゃん、そしてルシル君たちの感謝に笑顔で応えた。はやてちゃん達も席に着いて遅めの夕ご飯を摂る。そしてはやてちゃん達を交えての将来設計を話題にしてお話しすることに。

「ねぇ、はやて。あんたはこれからどうすんの？　やっぱルシル達のように管理局に・・・？」

「うん。そのつもりや。八神家の主として、みんなにばかり押し付けるような真似はしたないし。それにルシル君には特に申し訳ないからな。ルシル君の目的を思いっきり邪魔してもうた」

ルシル君は"エグリゴリ"を倒すために生まれ故郷の世界、フェティギアを離れてひとり次元世界を旅してるそう。そんな中、私たちの住む世界・地球は日本、海鳴市から強力な魔力を感じたから、海鳴市を訪れた。

その魔力というのは時期的に見て、フェイトちゃんやアルフさん、テスタメントちゃん達と海上で最後のジュエルシードを巡る戦いをしたときで間違いなかった。ルシル君はその強い魔力の出所、そして発した主を見つけるために海鳴市に残ることした。そこで出会ったのがはやてちゃん。ルシル君がサバイバル生活しようとしていたのを止めるために家に招いた、とのこと。

「俺のことはまぁ、どうでも・・とは言わないけど、しばらくエグリゴリ捜索は中断するから問題ないよ。だから付き合うよ、これからも君たちにさ」

「ルシル君・・・、おおきにありがとう　」

「気にするな。俺とはやての仲だろう？」

仲が良いなぁ、はやてちゃんとルシル君。シャルちゃんはちょっとつまらなさそうだけど。でも邪魔をしないところを見ると、少しは空気を読んでくれているみたい。とにかくはやてちゃんも管理局入りがほぼ決まりみたい。
アリサちゃんが「あたしが一番ヤバいわけね～」テーブルに突っ伏した。はやてちゃんが「どうゆうこと？」って訊いたから、私やアリサちゃん、すずかちゃんも管理局に入ろうかって話をしていたことを伝えた。
そして入局への壁、家族へ全事情を話さないといけないっていうのがあって、断れたりでもしたらどうしようって迷いや不安があること。特にアリサちゃんのプライベート的に入局できる確率が私たち3人の中で一番低いってことも。

「あー、アリサちゃんもお嬢様やもんなぁ～」

「でもアリサってお嬢様って感じしないよな。すずかにお嬢様はピッタリなんだけどさ。なんでだろ、熱血でうるさいから？」

「言ってくれるじゃないヴィーター？」

「あっ！　あたしのから揚げ！」

「から揚げゲットだぜ！」

「はやて～、アリサがあたしのから揚げ盗った～」

「お～、よしよし。わたしのピーマンのベーコン巻をあげるな♪

ヴィータ、あ～ん♪」

「ピ、ピーマン・・・、あ～ん・・・むぐむぐ・・うぅ、ぅ・・・」

はやてちゃんから差し出されたベーコン巻を丸々1本頬張ったヴィータちゃんは若干涙ぐみながら咀嚼を続ける。あー、ヴィータちゃん、ピーマンがダメなんだね。それを見たアリサちゃんは「ごめん、ホントごめん」自分のトレイに有るコロッケをヴィータちゃんにあげた。

「話を戻させてもらうけど。君たちは、管理局に入るっていう願いを何においても貫く覚悟があるのか？」

ルシル君が真剣な表情で私とアリサちゃんとすずかちゃんを順繰りに見詰めていった。訊ねられた私たちは「うんっ！」強く頷いた。迷いがあるままで決めるようなものじゃない、ルシル君はそう言いたいんだよね。

「大丈夫。1回や2回くらい許可が出されなくても辛抱強く説得するから」

「私も。お父さんやお母さん、お姉ちゃんを説得してみせるよ」

「・・・・あたしも！　どうにかして説得してみせるわ！」

「そうか。頑張ってくれ、なのは、すずか、アリサ。ま、とにかく伝えることだ。自分が抱いた思いを。父であれば母であれば、きっ

と判ってくれる。信じろ、家族を」

打って変わって笑顔になるルシル君。どうしてだろ、ルシル君のその力強い言葉は私の心の中に有る不安を拭ってくれた。そして私たちは覚悟を示すために携帯電話のメール機能を使って連絡した。大事な話があるから時間を作っておいて、って。この話題はこれで終わって、次は明日２５日の夜、すずかちゃんのお家で行う予定のクリスマスパーティについて。

「わたしらはちょう難しいかも知れへん。一応リンディさんやクロノ君のおかげでハッキリとした罪にはならへんようやけど、今後の管理局従事に必要な書類記載やわたしの健康診断とかで時間取られるかもや」

はやてちゃんがしょぼーんと肩を落とすけどすぐに「ま、しゃあないよな」って苦笑い。シャマルさんが「余裕が出来た時にやりましょ」はやてちゃんを抱きしめた。ヴィータちゃんは「うん、やろう！」ってはやてちゃんの右手を握って、リインフォースさんは「料理は私たちにお任せを」そう左手を握った。

「うん。そうやな。クリスマスパーティ、やろな♪」

笑顔になるはやてちゃん達だけど、それでもどこか寂しそう。そんなはやてちゃんを見て黙っているわけにはいかないのが親友だよ。

「ねぇ、シャル。はやて達を今日帰すこと出来ないの？」

「私たちずっと前からクリスマスパーティの約束していたんだけど」フェイトちゃんとすずかちゃんに続いて「うんっ！　大事なことだと思うけど、書類記載とか遅らせられない？」私もシャルちゃんにお願いしてみる。せめて今日一日だけ、はやてちゃん達を解放してあげてほしい。

「う～ん、わたしに決定権は無いからなぁ～。でも、うん、クロノやリンディ艦長にわたしからもお願いしてみるよ。このシャルちゃんにまっかせなさいっ♪」

自信満々に胸をトンッと叩くシャルちゃん。私たちみんなで「おお！」そんなシャルちゃんにパチパチ拍手を贈っていると、「みんな揃っているな」クロノ君、そしてリンディさんが食堂にやって来た。シャルちゃんが早速、「はやてたち八神家を今日帰したいんだ。お願い！」ってクロノ君に食べかけのバナナを差し出した。私たちも「お願いします！」ってリンディさんにお願いする。

「食べかけなど要らん！　・・・で、八神家を帰すことについてだが、僕は構わない。艦長はどうです？」

「そうですね。今日は帰ってもらってゆっくり休んでもらいましょう」

リンディさんとクロノ君からも許しが出たことで私たちは「やった♪」テーブル越しにハイタッチを交わす。でも、「申し訳ないがルシリオン、君は残ってくれ」喜びも束の間、ルシル君の居残りが決

定したことで、私たちはシーンとハイタッチしたままの体勢で停止。

「俺ひとりでいいのか？」

「ごめんなさいね、ルシリオン君。あなたを、本局へ移送することになりました」

リンディさんがそう言うと「移送！？　どうしてですか！？」シャルちゃんが勢いよく立ち上がった。はやてちゃんも「なんでルシル君だけなんですか！？」ってリンディさんを問い質した。ヴィータちゃん達も目がそう言ってる。ルシル君だけを連れて行く理由はなんだ？って。

「本局の運用部総部長、キオン・ヴァスィリーサ准将と、特別技能捜査課課長、ガアプ一佐が、会って話がしたいと言っているの」

「運用部？」

「特別技能捜査課、ですか？」

「運用部は人事や艦船などの配置を決定する部署で、キオン・ヴァスィリーサ准将はそのトップ。特別技能捜査課は固有スキルやある一芸に特化した魔導師や騎士が所属している部署で、ガアプ一佐はそのトップだ」

私とすずかちゃんの問いにクロノ君が答えてくれた。それを聴いたシャルちゃんが「どうしてこんなに早くルシルのことが知られて・

・・、っ！　セラ・・・・、あの子！」怒りの表情を浮かべて拳をテーブルに叩き付けた。

「セラティナがどうしたって言うのよ、シャル」

「あの子の所属している部署が特別技能捜査課！　あの子が報告したんだ、ルシルのこと、上司のガアプ一佐に！」

「待て、イリス！　彼女は彼女の仕事を全うしたんだ！」

クロノ君に制止されたシャルちゃんは駆けだそうとするのもやめて悔しそうに「でも・・・！」表情を歪めたけど、クロノ君の真っ直ぐな視線に折れたみたいで座り直した。ルシル君がそんなシャルちゃんの頭を優しく撫でた。

「いいよ。ランサーという名を上げ過ぎたからな。その正体が局の上層部に知られた時、こうなる事は覚悟していた。もしかして上層部で始まっているのかもな。俺の争奪戦がさ。最初のお誘いが特別技能捜査課ということなんだろ？　俺の能力を活かすにはちょうど良くないか？　結構万能だしな。そう思うと悪い気はしない。せいぜい媚を売って来るさ」

ルシル君の自画自賛に私たちは苦笑を漏らす。でも、そうなら安心してルシル君を送り出せるよね。だけどはやてちゃんの表情からはまだ不安が消えてないのが判った。ルシル君はそんなはやてちゃんに「大丈夫。順番が最初に俺に回って来ただけさ」って笑顔を浮かべて安心させようとした。

「とにかくだ。俺は管理局に行く。はやて達は家に戻り休憩。なのは達も家に帰る。そして明日のクリスマスパーティの準備だ。俺も参加するからしっかりとしてくれよ？　あ、そうだリンディ提督。なのは達は管理局に入る為に魔法のことをご家族に話すようですから、協力してあげてください」

「えっ？・・・なのはさん達、本当に管理局へ・・・？」

「あ、はい。この魔法の力を少しでも役立てるために」

「デバイスマイスターになって、なのはちゃん達や頑張っている局員さん達の力になるために」

「あたしも。なのはやフェイトと同じ思い」

リンディさんに私たちの思いを伝える。リンディさんは「それは嬉しいし、協力でもなんでもしたいけれど・・・」クロノ君とルシル君を見た。

「ルシリオンの移送は僕とイリスで行いますから、艦長はなのは達と一緒にご家族の元へ。本件解決と共に休暇に入る予定でしたから問題ないでしょう」

「ごめんなさいね。・・・それではクロノ、イリス。ルシリオン君の移送をお願い。私はなのはさん達と一緒にご家族へお願いをしに行くわ」

こうして私とアリサちゃん、すずかちゃんは、家族に全てを話して管理局へ入局するための許可を貰いに、そしてはやてちゃん達は休を休めるために、アースラから降りることになった。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒ルシリオン†††

「ルシル君・・・」

「そんな心配そうな顔をするな、はやて。大丈夫だよ、悪いようにはされないさ」

泣きそうな顔で居るはやてと目を合わせてそう告げる。そして「待っていてくれ。パーティまでには帰るから」八神家が全員揃う（半年後、リインフォースは居ないからな）のが最後となるクリスマスパーティだ、必ず帰って参加すると誓う。

「リインフォース、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。はやてを頼む」

「「ああ」」「おう」「ええ」「うむ」

「ルシル君！」

「いってくるよ、はやて」

はやて達もなのは達に遅れて転送され、その姿を消した。さてと。

踵を返してシャルとクロノと向き合い、「案内してくれるか、本局に」そう言い放つ。はやて達にはああ言ったが、少々きな臭いんだよな。俺の能力のことはセラティナは知らないはずだ。つまり俺を求めているのは運用部のキオン・ヴァスィリーサ准将という将校なんだろう。
それに俺一人を呼びつけたと言うのもおかしな話だ。何を言われるか判ったものじゃない。が、俺の目的にまた一歩と近づける可能性があるため、蛇の道だろうが虎穴だろうが進んでやるだけだ。
クロノがトランスポーターの転移先を本局への中継点へと設定し直しているのを眺めていると、「ちょっと待って。少し時間ちょうだい。ルシル、こっち！」シャルがいきなり俺の左手を掴んで走り出した。

「ちょっ・・・！？」「イリス！？」

面を食らう俺たちを余所に「ちょっとだけ～　」クロノに振り向いてウィンクするシャル。クロノは目に見えて顔を赤くし言い淀んだ。シャルめ。こんな妙なスキルを手に入れるとは。クロノの純情を玩んでやるなよ、可哀想に。
そうして俺はシャルに連行され、到着したのは「いっらしゃ～い、私のプライベートルームへ　」シャルの部屋。シャルに引っ張られた俺は、「そぉ～れい♪」シャルの掛け声とともに突き飛ばされてしまい、仰向けでボフッとベッドにダイブする羽目に。
「急になにをす――・・・なんのつもりだ？・・・というより、今の君はどっちだ？」

俺に覆い被さるように居るシャルに問う。シャルは「さあ、今の私はどっちでしょう♪」と質問返ししてきた。面倒と思いつつも「前世のシャルだな」そう即答してやる。

「ファイナルアンサー？」

「いいから退け。君の前髪がさっきから頬に当たってくすぐったい」

「柔らかくて良い香りでしょ　　もっと堪能してもいいんだよ？」

「蹴っ飛ばすぞ」

両腕をガッチリ押さえ付けられ覆い被さられてはいるが、足を曲げることは可能。両膝でコイツの尻を蹴り上げてやれば退かすことは出来る。あと１０秒数えるうちにどかない場合は実行、と決めたところで、シャルが俺の左頬にそっと手を添えてきた。

「ねえ、どうして判ったの？　私だってことが」

「・・・はぁ。君は、私↑と上がり口調だが、イリスは、わたし↓と下がり口調。当たっているだろ」

そう言ってやると「やっぱり運命だよ　」シャルが勢いよく抱きついてきた。幸せそうに喜んでいるところ悪いが、「俺を連れて来た理由はなんだ？」本題に入らせてもらおう。

「なんでって・・・、決まってるでしょ。あなたとゆっくり話がし

たかったから」

顔をグッと近づけて俺の目を覗き込むシャルに「話をしてやるからそこを退け」そう言い放つ。だが、「ヤ　」と一言拒否してきたため、「アウト」と両足を勢いよく曲げる。と、「キャン！？」シャルが頭上へと飛んだ。

「いったぁ～い！　ちょっと！　女の子のお尻を両膝蹴りってあんまり過ぎじゃない！？」

「はいはい。君もパーティに出たいんだろ？　だったらサクサクと本局での用事を済ませようじゃないか。こんな時間を取ってないで」

「あー、大丈夫。クロノに任せて、私は地上に降りるから」

「君という奴は・・・！」

ようやく俺の上から退いてくれたシャルには呆れしかない。もうさっさと終わらせるために俺が折れることにした。２人してベッドの上に座り、背中を合せる。シャルの体温が背中越しで伝わって来る。

「そんじゃ改めて。久しぶり、ルシル。えっと、ルシルの時間で何年ぶりくらいになるの？　千年以内かな？」

「大体・・・９千年くらいか」

「きゅ、９千年・・・！？　え、ちょっ、うそ、そんな・・・」

互いに体重を背中越しの相手に掛けていたため、シャルが居なくなったことで「おわっ？」俺はごろんと仰向けに倒れ込むことに。そんな俺に「私が居なくなってから９千年も戦い続けたって言うの！？」顔を真っ蒼にしたシャルが頭上から覗き込んできた。

「泣いてくれるのか・・・？」

「当たり前でしょうが！　本気で好きになった人があれからまた９千年も地獄を見て来ていたなんて・・・！」

シャルは女座りでポロポロと涙を零していた。体を起こしてシャルと向き合う。自然と伸びた右手で彼女の頭を撫でた後、頬へと手を持って行って涙を親指で拭い取ってやる。シャルは嗚咽を洩らしながらも「でも、やっと戻って来ることが出来たんだね。正史の次元世界に」とそれでも笑顔を俺に向けた。

「ありがとう」

「うん・・・。ねえ、どれだけ倒す弧とが出来たの？」

「バンヘルドとグランフェリアの２機だ。なぁ、シャル。レーゼフェアとシュヴァリエルが局に指名手配されているようなんだが、何か知らないか？　シュヴァリエルに関しては手掛かりがあるが、レーゼフェアに至ってはサッパリなんだ」

「は！？　指名手配！？・・・ごめん。私、イリス個人の記憶しか

持ってないからよく判んない。でも、それホント？　エグリゴリが本局に目を付けられてるって」

「しかも最悪なことになのは達の元にレーゼフェアとシュヴァリエルが姿を見せたようなんだ。フェイトの側にはグランフェリアが居たし」

「ちょっ！　それってまずくない！？」

「ああ、まずい。今のところはあれから翠屋に姿を見せていないようだが・・・」

シャルと一緒にズーンと項垂れてしまう。グランフェリアはフェイト達テスタロッサ家と大きく関わりを持っていた。しかし、レーゼフェアとシュヴァリエルは翠屋に数回姿を見せただけ。何がしたいのか解らない。シュヴァリエルは一応リンドブルムに所属しているようだが、レーゼフェアの手掛かりはそれ以外にない。

「とにかく。エグリゴリは俺の先を行っている。今後の管理局従事の中で衝突する可能性が高い」

「なのは達が巻き込まれる可能性は？」

「ある。が、そんな不足な事態には陥らせないつもりだ。彼女たちの知らぬ間、気付かぬ間に救済する。必ずだ」

泣き止んだことでシャルの頭から手を退けつつ、俺はグッと握り拳

を作る。そんな俺を見たシャルが「手伝えることはない？」と訊いてきた。シャルの魔術師化は正直なところ魅力的な戦力だが、そうは言っていられない。

「シャル。イリスの人格はどうしている？」

俺の問いに「どうして・・・？」シャルは表情の一切を消してそう訊き返してきた。言わなければ。前世の人格である君の影響が、現世の人格であるイリスを押し潰して消滅させかねない、と。だから、俺のこの手で、魔術で、君の人格を・・・消す、と。

「解っているだろ。君は前世の記憶だ。イリスの人格、これからの未来にとって君の存在は――」

「邪魔だって言いたいんでしょ？　解ってるよ、それくらい。私が消えるべき存在だってことは。ルシルは私を消すつもりだったんでしょ？」

笑顔なんて言えない程の悲痛に満ちた笑みを浮かべるシャル。くそ、見ていられない、そんな顔。思わず顔を逸らしそうになったが「最後にお願いがあるの」シャルが伸ばしてきた両手に掴まれて拒まれた。

「お願い・・・？」

「そ。・・・キス、して」

「は？　待て、待て。その体はあくまでイリスのものだぞ。君がどうこうする権利なんてない！」

突き放そうとしたが、思った以上の握力に逃げることが出来ず、キリキリと締め付けられて痛みを覚える。

「いいじゃない、別に。それともはやての為に取っておくとか？
エッチ　」

「どういう思考回路を持てばそうなる。生憎と俺に恋愛をする予定は永遠に無い。はやて然りその他然り。もちろん、イリスともくっつくことはない。解るだろ？」

「？？・・・あれじゃん。対人契約をすれば、残れ――」

「ダメだ。俺はもう・・・限界なんだ」

シャルに話す。神意の玉座に座する俺の本体――ルシリオンの精神が限界を迎えたこと、行き過ぎた魔力行使によって削られるこの体や精神を保つために、創世結界に貯蔵されている術式や武装を消費して補完していること、その補完の代償が記憶の消失であること、今回の契約で"堕天使エグリゴリ"を全機救えなければ、本体の消滅は確実だと。

「つまり、これが最後のチャンスなんだよ。失敗すれば消滅。成功すればアースガルドに封印されている俺の肉体に戻れる。どちらにしろ、永遠にさようならなんだよ。だから誰とも恋愛するつもりは、

ない」

「あなた、それほどまでに追いつめられて・・・！」

泣き顔に歪むシャル。俺のことを憶えているからこそそんなに悲しみ、苦しむんだ。だから解放しよう。俺のことを・・・忘れることでな。シャルの頭に左手を伸ばしつつ「一瞬で済むからな、シャル」優しく語りかける。

「ルシル。その前にさっきの続き。最後の思い出として、キス、お願い」

「どうしてもか？」

「界律（テスタメント）の守護神時代、あなたと一緒になった契約ん時、何時も私からだったじゃん。最後くらいはあなたからしてよ　」

シャルが目を閉じて待ちの構えになった。最後、か。そういうことなら、と俺も覚悟を決めて、シャルの綺麗な桜色の唇にそっと自分の唇を重ねる。そして唇を離し、「さようならだ、シャル」改めて左手を伸ばそうとしたところで、「あはっ　」シャルが満面の笑顔を浮かべて「やっほ～～い♪」万歳しながらベッドに倒れ込んだ。

「シャル・・・？」

「やったぁ～～～！　わたしにルシルがキスしてくれたぁぁ－－－－！」

「わたし？・・・君はイリスか！？」

シャルとは違う下がり口調の一人称。彼女は跳ね起き（ネックスプリング）をし、俺と向かい合った。

「ヤー　というかルシル。イリスじゃなくて、シャルって呼んでってば♪」

どういうことだ？　イリスの人格がハッキリとしている。シャルの人格はどうしたんだ？

――最後の思い出として、キス、お願い――

そうか、自分で去って行ったんだな。イリスの将来の為に。そんな思考していると、彼女が「シャルロッテ様は居るよ、ちゃんとわたしの中に」まるで心を読んだかのようにそう言ってきた。

「まさか・・・共存しているのか？」

「う～ん。シャルロッテ様の記憶は少ししか流れて来ないけどね。わたしの前世がシャルロッテ様だったこと。そしてなんと・・・なのは達とは別の世界で親友だったっていうこと。あとルシル、あなたとは敵であって戦友でもあったこと。ふふふ。やっぱり運命だったのね～。記憶のフラッシュバックは確かなもの。感情の揺らぎは確かなもの。前世で実際に逢っていたんだから♪」

おいおい、それってまずいじゃないか。今のイリスは未来の事象を知ってしまっているということだ。今度はイリスの記憶の消去をするべきか。グッと左手に力を籠めたところで「きゃいん！？」イリスが変な悲鳴を上げて、俺に倒れ込んできた。イリスを抱き止め「おい！」と声を何度も掛ける。

「・・・あー、ダイジョブだよ、ルシル。イリスの記憶から、私とあなたの前世やテスタメント時代、そして今後に起こるであろう事象の記憶を消しただけ。だからあなたの心配するような事態にはならないわ」

「今度はシャルか」

「ちょっとシャルロッテ様！　今なにしてくれやがりましたか！？　思いっきし頭痛いんですけど！？」

「またイリス・・・」

「ごめん、ごめん。余計な記憶を押し付けて、あなたの記憶や人格を潰さないためには必要だったわけ」

「もう少し優しくしてくださいよ！」

シャルとイリスの人格が交互に入れ替わっていく。それにしても側で見ている限りでは今の彼女は独り芝居をしている怪しい少女だ。というか、「おい、シャル」彼女の頭をガシッと鷲掴む。

「な～に、ルシル？」

「どうして君はそんな軽々と表に出て来ているんだ？　イリスの人格は何故耐えられる？　そもそもさっきの最後の思い出云々のくだりはどうした？」

「ごっめ～ん♪　別に私の人格が消えなくてもイリスの人格は問題ないんだよ～☆　私が覚醒している状態だからこそ、これまでのフラッシュバックが抑えられて、イリスの精神が安定するわけ。それだけじゃなくて精神干渉系の魔法やスキル、技術をキャンセル出来る恩恵もある！　まぁ、今のようにそうそう表には出ないようにするけどね～♪　なんていうか、隠居生活、みたいな？」

「ちなみにキ・ス・は～・・・ただ単にわたしとシャルロッテ様の願望だよ～☆」

今、俺のこめかみが引きつくのが判った。

「でも嬉しかったなぁ～♪　ルシルからの、キ・ス・・・きゃっ　」

プッツンという音が頭の中から聞こえた気がした。

「貴様はぁぁぁぁぁ－－－－－－－－ッッ！！！！」

「ちょっ、まっ、これ、パイルドライバー・・・！？　うぎゃん！？・・げふっ」

プロレス技の1つ、相手の頭を自分の膝の間に挟み込んだ状態で持ち上げ、真っ逆さまに落とすという技、パイルドライバーをシャルに掛けてやった。白目を剥いて気を失っているシャルに「反省してろ、馬鹿女」そう吐き捨て、部屋を後にする。

「すまない、クロノ。待たせた」

「ルシル！・・・ん？　イリスはどうした・・・？」

「ちょっと失礼なことをされてしまってな。少し眠ってもらった」

「・・・そうか。なんて言うか、悪い子じゃないんだ。頭も良い。しかし人格的に馬鹿なんだ」

「判ってる。苦労しているんだな、クロノ」

お互いに肩をポンポンと叩く。今回の次元世界でも良い友になれそうだよ、クロノ。こうして俺とクロノはシャルを放置して本局へと向かった。中継ポイントを跨いで本局へと着き、トランスポーターホールを出たところで、「くそったれ・・・」俺は自分の不運さを呪った。

「あ！　キオン・ヴァスィリーサ准将、ガアプ一佐。お疲れ様です。でもどうしてこんなところに？　応接室で話を、と・・・」

通行の邪魔にならないように廊下の隅に佇んでいた女性2人に敬礼したクロノに、「待ち切れずに来てしまいました」とその2人も敬

礼を返した。そして俺へと視線を向けて来た。

「はじめまして、パラディース・ヴェヒターのランサーもといルシリオン・セインテスト君。特別技能捜査課・課長、クー・ガアプ一等陸佐です」

「本局運用部・総部長、リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ准将です」

２人の女性のうち１人は"エグリゴリ"の１機、実力的にはナンバー２のリアンシェルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアだった。

Ｅｐｏｓ２７虚無の自由という名の鎖～Ｔｈｅ　Ｒｏｕｎｄ　ｔａｂｌｅ　ｏｆ　Ａｕｔｈｏｒｉｔｙ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「はじめまして、パラディース・ヴェヒターのランサーもといルシリオン・セインテスト君。特別技能捜査課・課長、クー・ガアプ一等陸佐です」

「本局運用部・総部長、リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ准将です」

八神家で唯一俺だけが本局へと呼ばれ、クロノと共に本局へと赴いた俺は、そこで捜索している"堕天使エグリゴリ"の１機、氷浪の鏡リアンシェルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアと再会してしまった。

（ある種の予感はしていたんだ。キオン・ヴァスィリーサ。発音が少々違うが、ニヴルヘイム語で雪の女王という意味だ・・・）

ガアプ一佐に続いてリアンシェルトが１歩寄ってきたことで、「っ！」俺は思わず後ずさってしまう。クロノが「どうした？」と怪訝そうに訊ねて来たため、「いいや、なんでもない」と深呼吸１つ。クロノと同じような目を向けて来ているガアプ一佐に「はじめまして」とまずは挨拶して、頭を下げる。

「ルシリオン・セインテストです。俺に何か用があるとのことですが、なんでしょうか？」

「とりあえずは場所を変えましょう。セインテスト君。あぁそれとハラオウン執務官。あなたは近くの休憩所にでも残ってちょうだい」

勧められるままに廊下を歩こうとした途端、ガアプ一佐がクロノに居残りを命じた。上官命令だからと言って「出来ません。彼の身柄はまだアースラ預かりです」クロノは引き下がることは無かったが。クロノとガアプ一佐の視線がぶつかり合う中、「下がりなさい」とリアンシェルトが告げた。

「っ・・・。納得のいく理由を教えて頂けないでしょうか、キオン・ヴァスィリーサ准将」

リアンシェルトの桃色の瞳に見詰められたクロノは一瞬たじろいだが、それでもなお懸命に立ち向かう姿勢を崩さない。リアンシェルトは「伝えるのが遅くなりましたが」とクロノの面前に1枚のモニターを展開。表示されている何かを読んだらしいクロノの目が見開かれた。

「なぜ八神家の身柄が運用部預かりに変更されているのですか・・・！？」

「判りましたか？　すでにパラディース・ヴェヒター・・・八神家の身柄は運用部預かりとなっています。今はまだ解決直後ということもあってアースラスタッフであるあなた達に八神家を預けていま

すが、セインテスト君だけは少々特別な立ち位置ですので、先に来てもらいました」

「そんな勝手が通るとでも――」

「通るでしょう。手続きは済み、承認も済んでいるのですから。では改めて命じましょう。ハラオウン執務官、あなたは残りなさい」

「くっ・・・！　了解しました。ルシリオン、すまないが僕はここまでのようだ」

悔しげに両手を強く握り拳にしたクロノ。確かに連中のやった事は横暴だな。しかし「ま、上官命令なら仕方ないだろ。ちょっと待っていてくれ、すぐに戻る」すでに承認されている以上はもう拒否権はない。

こうしてクロノと別れた俺は、ガアプ一佐とリアンシェルトの案内である一室へと招かれた。明かりの無い室内。今は廊下からの明かりが入っているおかげでなんとか室内設備が判る。部屋の中央に円卓が置かれ、その周りに椅子が１３脚設けられている。ただそれだけの部屋。

「ようこそ、時空管理局本局・権威の円卓へ」

ガアプ一佐が俺の両肩に手を置き、ここで待て、と言外に告げてからある椅子へと腰掛けた。それと同時、廊下とこの部屋を隔てるスライドドアが閉じた。完全な暗闇に包まれていた室内だったが、「これより権威の円卓による、時空管理局評議会を開会いたします」

リアンシェルトのその厳かな挨拶で闇が払われた。
椅子3脚に管理局のエンブレムが浮かび上がり、他8脚には人間のホログラムが投影された。見覚えのあるツラが居るのに気付いた。はレジアス・ゲイズ中将（制服の階級章を見ればこの時点で中将のようだ）だ。

「権威の円卓とは？」

『権威の円卓と言うのは、局の真っ当な運営とは別のアプローチで局を取り仕切る組織だ。最高評議会、本局の将校、俺やそこの男のような民間人からなっていてな』

円卓に座する1人、10代半ばと思われる少年が俺の問いに答えくれたんだが、さっきから俺に向かって不躾な、まるで実験動物を見ているような視線を送ってくる。殺気を叩きつけてやめさせようにも相手はホログラム、無駄な行為だからと諦める。
最高評議会とやらは確か・・・ジェイル・スカリエッティを生み出した、ＪＳ事件のある種の元凶だったな。コイツらがこの権威の円卓を率いているという時点で、この組織の終わりは見えた。
他のメンバーだが、制服の階級章を見る限り全員が一佐以上の階級持ちだ。ガアプ一佐の他に一佐がもう1人、大将が1人、レジアス・ゲイズと同じ中将がもう1人、少将が2人。あとは少年と同じ民間人と言う２０代前半ほどの青年を見る。

「それで・・・俺をここに招いた理由はなんでしょうか？　ま、ある程度の予想は付きましたが」

1脚の空席。管理局の裏とも言えるようなこの組織へ連れて来たこと。導き出される答えはただ1つ。円卓中央のエンブレムが球状モニターへと変化し、ランサーとして活動している俺の映像が流れ始めた。

『・・・ルシリオン・セインテスト。君のプロフィールを見て愕然とした。わずか8歳でこれほどの魔法を扱え、さらに頭も良い。普通の人間の成長度合いでは考えられない程のものだ』

「回りくどいのは好みません。申し訳ないのですが、早く本題に入っていただけませんか？」

『・・・我々は君をこの権威の円卓に迎え入れたいと考えている。とは言え、君はまだ幼い。まずは円卓メンバーとして相応しい役職と階級になってもらわなければならない』

予想通りの展開過ぎてつまらないな。とりあえず「拒否権はありますか？」と返す。

『拒否権？　君や闇の書の犯してきた犯罪歴を鑑みれば、数十年の有期懲役、守護騎士に至っては無期禁固という判決が下ってもおかしくはない』

エンブレムの1つにそう言われ、だったら俺を招き入れようとするな、そうツッコみを入れたいのを耐える。ま、そうまでして俺を支配下に置きたいんだろうが。

「艦船アースラのリンディ・ハラオウン提督、そしてクロノ・ハラオウン執務官の話では、犯罪者狩りの件については大目に見てもらえるという話でしたが？」

『彼女らの判断は我々も受け入れるつもりだ。君らの蒐集行為で次元世界の犯罪件数が減ったことに対しては最大限の礼を言いたい。しかし、これとそれは別だ』

俺の映像が切れ、"闇の書"の守護騎士として活動するフルアーマー姿のシグナム達が映し出された。素顔の見えない彼女たちは問答無用で魔力持ちの局員や魔導師を襲撃していた。彼女たちの過去の所業か。

『管理局設立以前であるなら罪に問えないが、法が整備され、管理局が機能しているこの６５年の間に行われた蒐集および殺害・傷害の一件については立件することも可能なのだぞ』

代わる代わる俺の逃げ道を封じていく壁（ことば）を言っていくメンバー。あー、今の発言は良い。確かに過去の守護騎士が行ってきた罪は許されざるものが多い。償うべきものだろう、それは理解しているが・・・。それを命じた主たちはさっさと死んで罪から逃れていると言うのにな。理不尽さを感じるよ。

『そして君の・・・プレシア・テスタロッサ事件での罪。死亡届が提出されている被疑者テスタメントが君であること、管理外世界への不法入界、不法滞在、戦闘行為、管理局員と民間人への傷害、ロストロギア・ジュエルシードの不法所持などなど。数え出したらキ

リがない』

セラティナ・ロードスター、か。そう言えばリーゼ姉妹との初邂逅時に色々と話してしまったからな。モニター越しで聴いていたとしてもおかしくはない。彼女からガアプ一佐、そして円卓メンバーに伝わったんだろう。

「いい歳をした大人たちが１０歳にも満たない子供を相手に脅迫ですか」

『あはは！　面白いことを言う！　確かに第三者的に見れば、大人が寄って集って子供を脅しているようにも見える！』

少年が手を打ちながら大笑いする。他のメンバーが口を閉ざす中、レジアス中将だけが『やかましい。その鼻につく笑い声を止めろ』心底少年の事が嫌いだと言っている目を向けていた。少年は笑うのをやめ、『だが、お前は本当に純粋な人間か？』とそう問い質してきた。

「どういう意味だ？　プロフィールを見てもらえれば判るはずだ」

『リョーガ評議員がお前のプロフィール云々と言っていただろう？　お前のその口調、魔法、魔力、知能。どれをとっても８歳で出せるものじゃない』

「（当然の疑問か・・・）そういう８歳が居てもおかしくないと思うが？　生活環境や遺伝、才能でいくらでも変わってくる。違うか？」

『魔法に至っては才能や遺伝で片付けられるものじゃないだろ』

「それはお互い様だ。あなたこそ外見通りの少年か？」

少年と睨み合っていると、「はい、ストップ。セインテスト君の出生はこの際、置いておいて」ガアプ一佐が手を叩いて制止してきた。少年は『そこが一番大事だろうが』と不満そうに言いつつも先に目を逸らしたことで、俺も溜息一つ吐いて少年から目を逸らした。

『ルシリオン・セインテスト君。脅迫めいたことを言った件については申し訳ない。だが、悪くはない取引ではないか？』

『正直に言うと、喉から手が出るほどに君の才が欲しいのだ。数多くの魔導犯罪者を手玉に取る魔法の腕、計画立案能力。是非とも嘱託ではなく正式な局員として入局してもらい、将来は重要なポストに就いて我々の手助けとなり、共に管理局を導いてもらいたい』

「君が執拗に魔導犯罪者を狙ったのは、魔法を使って罪を犯す連中を許せなかったのですよね？　なら、その考えをこれまで通り胸に刻み、次元世界の為にその魔法を使いませんか？」

大将と男少将、ガアプ一佐からの熱烈なスカウト。俺は一度リアンシェルトへと目をやり、小さくお手上げポーズをして、「俺が何をすれば、俺や騎士たちの罪を軽くしてもらえるんですか？」と訊ねる。

『ただ、次元世界の平和の為、秩序の為、管理局の正義・正道・正善の為、その力を奮ってもらいたいだけだ』

こうして脅しをかけて来ておいてどの口が言う。雰囲気からしてガアプ一佐ともう1人の、おそらく会ったことのある男の一佐は純粋に俺をスカウトしたいと思っている。下に就くならあの2人のどちらか――出来ればガアプ一佐だな。

少年は俺を実験動物扱い、レジアス中将は反対っぽいな、視線が物語っている。さすが正義の塊。犯罪者は受け付けないか。そしてこの世界でも行き過ぎた正義感で自滅か？

最高評議会の3人は顔の見えないエンブレムであるため感情は目に見えないが、声色から伝わって来る。俺を支配下に置いて便利屋としてこき使いたい。大将や男少将は最高評議会寄り、女少将と女中将はガアプ一佐寄り。どうやらリアンシェルトを除く女性陣は味方として見ていいようだ。

「まぁいいでしょう。どうぞ俺の力を管理局と次元世界の為に役立てて下さい。その代わり条件があります」

『条件だと？　犯罪者であるお前にそんな権利があるわけがないだろう・・・！』

『待て、レジアス。・・・聴こうではないか。君の望む条件とはなんだ？』

「1つ。夜天の主・八神はやてと守護騎士ら八神家を罪に問わない事。

２つ。八神家が闇の書の関係者であったという事実を時空管理局・次元世界全てに公表しない事。
３つ。管理局に入った彼女たちを犯罪者扱いせずに、管理局に務める同士として接する事。
４つ。今回の一件で協力してくれた少女たちをあなた方の都合がいいように操らない事。
５つ。俺がテスタメントだという事実を時空管理局・次元世界・俺の関係者全てに漏らさない事。
６つ。テスタメントとして手に入れたロストロギア・ジュエルシードの所持を認める事。
以上です。これらを確約していただければあなた方の駒とも・・・犬ともなりましょう。武装隊や捜査部・執務部・古代遺失物管理部での荒事はもちろん、習得できる可能性は低いですが局員への魔法提供、なんでも受けましょう。あー、あと暗殺などでもいいですよ？
　相手が法で裁けず、金や権力で逃れるクズどもなら喜んで」

男の一佐の正体がなんだったのか思い至ったことで、その一佐に視線を向けつつ最後にそう付け加える。するとその一佐が『俺がどうかしたかい？』俺の視線に気付いてそう訊いてきた。

「時空管理局本局・第１１１１航空隊の隊長、コードネームはオヴェロン、階級は一等空佐。デスペラードパーティの閉会式にて蒐集行為を邪魔されたことは憶えています。もちろん・・・あなたの声も」

あのフルフェイスヘルメットにライダースーツのようなバリアジャケットで統一された怪しすぎる部隊。その隊長の声と、あの男の一

佐の声が同一であることに気付いた。

『・・・正解だ。久しぶりだな。ロッキー・サブナック一等空佐だ。しかし、俺と暗殺がどう結び付くんだ？』

「管理局がデスペラードパーティに参加した犯罪者を検挙。しかしその直前に参加者の大半が争って死亡者が多数出た、と。死亡者の大半は殺されても自業自得で済むような後ろ暗い連中ばかり。アレ、あなたとその部隊が暗殺したんでしょう？」

パーティからの帰宅後に犯罪者たちのその後が気になって調べて判明した事実。そんなことが出来るのは怪しげな共通バリアジャケットを着込んでいた第１１１１部隊だけだ。サブナック一佐がお手上げと言うように肩を竦める。

そして最高評議会の１人から『その通りだ。法では裁けない悪を、サブナック一佐の率いる第１１１１航空隊が裁いたのだ』という言質を取ることが出来た。暗殺を行う部隊というくらいだ。非公式な部隊だろう。それを先ほど提示した条件を呑ませるカードの１つとしよう。

「正義の管理局が暗殺部隊を有している。結構なスキャンダルですよね？　お互いに知られて欲しくない話を持っています」

『本当にこのような犯罪者を招き入れるのか？　すでに反逆の意思を有している。危険だ。やはり懲役刑に処した方がいいのでは？』

「それは、こちらが約束を違えた場合じゃないですかゲイズ中将。

そうよね？　セインテスト君」

「もちろんですよ、ガアプ一佐。約束は大切なものです。そちらが約束を守り続けてくれる限り、従いましょう。尻尾の代わりにこの後ろ髪を振りましょうか？」

俺のこの言葉で決着したということが空気で判った。リアンシェルトが「では、ルシリオン・セインテストを権威の円卓付の管理局員として入局させるということでよろしいですか？」と告げると、最高評議会の1人を除く全員が、異議なし、と一斉に応じた。

「デュランゴ議長」

唯一黙っていた1人、デュランゴ議長がリアンシェルトに名を呼ばれ、『ふむ。・・・各々、未来の同志に敬礼を』と命じると、エンブレムである最高評議会を除く全員が俺へと向かって敬礼をした。

『本局・戦技教導隊長官、ヴァーカー・ホドリゲス大将だ』

『本局・情報部長官、イレアナ・コスンツァーナ少将です』

『本局・捜査部長官、ビディ・アーリー中将よ』

『本局・武装隊長官、リチャード・フォーカス少将だ』

『改めて、本局・第1111航空隊隊長、ロッキー・サブナック一等空佐だ』

「私も改めて。本局・捜査部：特別技能捜査課課長、クー・ガアプ一等陸佐です」

『・・・ミッドチルダ地上本部司令、レジアス・ゲイズ中将だ』

「正確には円卓の一員ではないですが一応。本局・運用部総部長、リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ准将」

階級もそうだがその役職もまたとんでもない。戦技教導隊・情報部・捜査部・武装隊・運用部・暗部・固有スキルや一芸魔法を扱う集団、それらのトップ、そして最高評議会か。で、一般人らしい少年と青年は、いったいどちら様なんだ？

『俺は・・・そうだな、トリックスターと呼べ。俺の名前は有名だからな。知って腰を抜かしてもらっても迷惑だ』

どうでもいいわ、お前のことなんぞ。直感が告げて来る。自称トリックスターとは永遠に気が合うことはない、と。次に青年が『エーアストです』と静かに名乗った。ベルカ語で最初（エーアスト）、か。真名ならいいんだが。コードネームだとすれば・・・、少し引っ掛かりを覚える。

『では、ルシリオン・セインテストと八神家の今後についてはリアンシェルト、運用部総部長のお前に任せる』

「了解です、デュランゴ議長。そういうわけでしばらくお付き合い

することになります。よろしく、ルシリオン・セインテスト君」

「っ、・・・あ、ああ、よろしく頼む」

こうして俺や八神家の命運は、"堕天使エグリゴリ"のリアンシェルトに委ねられることになった。権威の円卓が閉会され、俺はガアプ一佐やリアンシェルトと共に部屋を出る。

「・・・ごめんなさいね、セインテスト君。こんな形で・・・」

正直、今さらなガアプ一佐からの謝罪だが、「構いません。はやて達を守れるのなら」と気にしないように言っておく。ガアプ一佐は優しいな。目を見れば判る。本当に俺を案じている。が、権威の円卓の一部のメンバーを除いた数人は俺を利用するつもりだ。

だが、一方的に利用されてやるつもりはない。そう、俺が管理局を利用してやる。先の条件提示において八神家やなのはたち協力者云々を真っ先に出したのは、俺の目的が自分を守ることではなく、あくまで八神家やなのは達――他者を守ることである、と印象付けの為。そうすることで、俺への脅しは効力を発揮し、俺からの条件を守ることで俺をいつまででも支配できると連中に思わせる。

（しかし残念。手の平で踊るのはお前たちだ、円卓の一部のメンバーども）

俺の掲げる目的は2つ。1つははやて達を守ること。俺が従うフリをしている限りははやて達の安全は保障されるはずだ。本来はここまでするつもりはなかったが、本局の将校で管理局の運営の大半を

司る運用部のトップがリアンシェルトということが判明した以上は手は抜けない。
２つ目は管理局に入って、労せず"エグリゴリ"の情報を手に入れること。対電子戦用術式ステガノグラフィアで一々クラックして情報を得るなどという罪を重ね続けて逃亡生活をするより、局に勤めた方が何かと便利だ。

（今回の一件で管理局従事処分になるのは判っていたしな。それを利用すればそう怪しまれずに入局できるというわけだ）

８歳で入局志望などしたら怪しまれるだろうからな。権威の円卓からの強引なスカウトは少々予定外だったが、幸運なことだと思う。複数の部署のトップ達とのコネが出来たと思えばな。さらに暗部にも通じている連中だ。表側だけでなく次元世界の裏の情報も手に入れやすくなるはず。
まぁ、多少は無茶な指示を出されて不自由するかもしれないが、とにかく"エグリゴリ"の情報を得るには我慢するしかない。それに円卓はどうせＪＳ事件によって崩壊するだろう。それまではやて達を守りきれれば俺の独り勝ちだ。

（その頃にははやて達も観察処分を終えていて、自由の身だ。俺が局から消えても大丈夫だろう）

ＪＳ事件解決後までに"エグリゴリ"の所在を掴みさえすれば局に用はない。はやて達もその頃はもう大人だ。俺が見守ることもないだろう。そうこれからの俺の未来設計を想像していると、「ふふふ♪」ガアプ一佐は何が可笑しいのか笑みを浮かべた。

「さすが男の子ね♪　大切な女の子、家族の為に頑張って・・・」

そして頭を撫でられた。完全に子ども扱い・・・、見た目が子供だから仕方がないが。そんなガアプ一佐も「私はこれで失礼するわね。ではまた。リアンシェルト総部長」そう言って俺たちと別れた。

「・・・さて。リアンシェルト。ようやく2人きりになれたな」

「・・・そうですね、神器王」

階下へ降りるためにエレベーターホールを目指す中、俺は意を決し声を掛けた。前を歩くリアンシェルトは振り返ることなく俺を二つ名で呼んだ。プツリと途切れる会話。俺は続けて「何が目的だ？」と問う。しかし返って来るのは無言。さらに「なぜ管理局に、しかも准将になるまで居るんだ？」と問いかけるものの、返って来るのはやはり無言。

「フェヨルツェンとレーゼフェアはどこに居る？」

次に救う目標としている2機の名前を言う。まずはこの2機を救い、そしてシュヴァリエル、次に目の前のリアンシェルト、最後にガーデンベルグ。これがセオリーだろう。リアンシェルトは「さぁ。どこでしょう？」返事はくれたが答えではなかった。

「お前たちエグリゴリは何を企んでいる。俺を、現代（アンスール）に必要なき異物である俺を殺したいのだろ？　なら今すぐにでも殺せるじゃない

か。何故そうしない？」

「・・・・・」

「っ・・・。聴いているのか、リアンシェ――」

「怖いのですか？」

「なに・・・？」

「私がそんなに怖いのですか？　私の記録では、神器王、あなたはそのように敵対者に対して息巻くような人間ではないようでしたが」

「俺・・・この私が、お前を怖れているだと？・・・そんな馬鹿なことが・・・！」

早鐘を打つ心臓。脂汗で背中に引っ付くシャツが気持ち悪い。そんな中で「図星ですか」心臓が止まるかと思ってしまうほどに冷めた声が俺の耳朶に響いた。違う。そう反論しようにも、実際に図星だったために声を出すことが出来なかった。今の俺では天地がひっくり返っても勝てない。その事実が俺を委縮させる。

「実に哀れで、惨めで、呆れ果てるザマです。・・・先程の質問に答えましょう。なぜ私が今あなたを討たないか。単純明快です。私には、弱い者いじめをする趣味はない、というだけです」

「あ？」

今、聞き捨てならないことを言われた気がした。

「バンヘルド、グランフェリア程度の機体に辛勝するような実力である現在のあなたなど、手を振るうだけで勝てます。全盛期の半分にすら至っていない最弱状態のあなたと戦うとなれば、それは正しく弱い者いじめ。ですから私は戦いません。私と戦いたければ、レーゼフェア、フィヨルツェン、シュヴァリエルを討ってください。ガーデンベルグの居場所は、万が一にも私に敗北を認めさせた際に教えましょう」

ここまでコケにされて黙っていられるほど・・・俺は・・・・！

「リアンシェルトぉぉぉーーーーッッ！！」

一足飛びでリアンシェルトへと突進。魔力炉（システム）の稼働率を上げて魔力に神秘を付加、魔術師化する。勝てないのは百も承知だ。だが、こんな生き恥を晒している俺にもちっぽけながらプライドというものがあるんだ。リアンシェルトがゆっくりと俺へと振り返った・・・・。

「？？？・・・なんなんだ、お前のその――・・・・顔は！？・・・・ん？」

伸ばした手が空を切る。目の前に居るはずのリアンシェルトは居らず、そもそも今の俺はベッドの横になっている状態。体を起こし辺りを見回す。判ったのは造りからして本局の寮の一室で、誰かのプライベートルームであるということ。

体を起こしどうしてこんな状態になってしまったのかを考えるも、「ダメだ、判らない・・・」リアンシェルトに飛び掛かった時点からいきなりこの状態に変わったということしか判らない。とにかく現状を知らなければ。ベッドから降りようとしたその時。

「目を覚ましましたか、神器王」

「リアンシェルト・・・！？」

制服の上着を脱いでブラウス姿のリアンシェルトが姿を現した。ということは、ここはお前の部屋か。慌ててベッドから降りて、「っ！？」足に力が入らずへたり込んでしまう。

「俺に何をした・・・！？」

「解らないのですか？　それならやはりあなたはそれまでの強さということですね。さ、目を覚ましたのなら帰ってください」

「はあ！？　お前が連れて来たのだろうが！　というか、俺に何をした！？」

何とか両足に力を入れて立ち上る。リアンシェルトは溜息を吐いた後、俺の身に起きたことを語った。俺がリアンシェルトに飛び掛かったその時、コイツは俺を凍結封印したのだ。そして氷像となった俺を自分の部屋に運んで解凍作業、それもたった今終わったらしい。俺の心のうちに渦巻いていた怒りが全て吹っ飛び、それ以上の絶望が生まれた。解ってはいたんだ。今の俺では勝てないと。だからと

言ってここまでの差があるのか？　魔力放出・術式発動を察知できず、凍結封印されたことにも言われるまで気が付かなかった。

「（氷像だった時に砕けば俺を殺せた。何故そうしなかったのか。答えはすでに聴いていた）・・・弱い者イジメはしない主義だったか・・・」

「・・・ええ、そういうことです。もし凍結封印を防いだり躱したり出来、封印を自力で解けた場合は、と思っていましたが・・・失格です。私の手に掛かって死ぬ価値があなたにありません。私以下の三機の手に掛かって死んでください」

リアンシェルトが、どうぞお帰り下さい、というポーズをしたため、俺はフラフラと出入り口へと向かう。そんな中、「八神家の今後の処遇は部下の、円卓の息に掛かっていないレティ・ロウランに任せますのでご安心を」そう聞かされた。

「嬉しい配慮、ああ、心の底から感謝します、リアンシェルト准将・・・！」

俺はそう言い放ち、「ハラオウン執務官に連絡を入れておきました。トランスポーターホールで合流してください」と言うリアンシェルトの言葉を背に聴きながら彼女の私室を後にした。
寮区画の階からトランスポーターホールのある階へと向かうためにエレベーターへと乗ったところで「というか、いま何時だ？」ふとそう思った。本局は２４時間稼働している。区画によっては時間を区別するために、地上と同じように夜を疑似再現する場所もあるが、

いま居る場所では朝か夜か判別がつかない。だから携帯電話の時計を見て・・・愕然とした。

「２５日の午後１時！？」

えっと、事件は終結したのは２４日の午後８時。本局に着いたのは確か午後１１時半。１２時間以上滞在していたことになる。先程までの鬱が消し飛び、冷や汗が流れ始める。フラフラなのは変わりないが、それでも足に力を籠めて走る。

そしてトランスポーターホールに辿り着き、ホールと廊下を隔てるスライドドアの脇に佇む「クロノ！」の名を呼ぶ。クロノが「大丈夫だったか、ルシリオン！」駆け寄って来てくれた。

「心配したぞ。昨晩いきなりキオン・ヴァスィリーサ准将から君を預かる、と言われてな。牢に入れられたんじゃないかって」

「ある意味、牢だったよ」

リアンシェルトの私室然り凍結封印然り。ま、とにかく「問題ないよ。さぁ、帰ろう、クロノ。疲れたよ」クロノの背中をポンと叩いて先に促す。早くはやて達の顔を見、声を聴き、癒されたい。

「そうだな。僕はアースラに戻るが」

「あー、そうか。じゃあ途中までよろしく頼むよ」

クロノと２人して疲弊しきった顔でトランスポーターに入り、中継

点を跨いで一度アースラへと戻り、そこで無事に戻ったことをリンディさんに報告をし、そこから海鳴の街へと1人で帰った。ちなみにシャルは地上に降りたままとのことだった。

「・・・リンディさんの話じゃ、なのは達の局入りはご家族に受け入れてもらえたようだし・・・」

海鳴臨海公園へと降り立ち、なのは達の局入りをひとり祝う。先の次元世界とは違ってアリサとすずかも居る。先以上に慌ただしい未来になるだろう。と、今さらになって緊張が解けたのかガクッと全身から力が抜けて倒れ込みそうになった。が、なんとか柵にもたれ掛ることで回避。

――ルシル君♪――

はやて・・・。

――ルシリオン――

シグナム・・・。

――ルシル――

ヴィータ・・・。

――ルシリオン――

ザフィーラ・・・。

――ルシル君――

シャマル・・・。

――ルシル――

リインフォース・・・。

「逢いたいなぁ、すぐにでも」

一刻も早くはやて達に逢いたいと強く思う。柵から体を離して歩き出す。最初はトボトボだった歩調も、テクテク、スタスタ、最後にはダッシュへと変わった。あの家に帰れる。そう思うだけで気力が湧いてくる。

「っと、そうだ。まずは帰って来たことを連絡しておかないと」

あと少しで家に着くというところで連絡し忘れていたことに気付き、はやての携帯電話に電話を掛ける。2コールで繋がり、『ルシル君！』耳鳴りを起こしそうな大声ではやてに名を呼ばれた。

「おおう・・・、はやて、ただいま。いま帰ってきたよ」

『うん、うん！　おかえり、ルシル君！　今どこに居るん？　クロノ君からルシル君が帰れへんくなったって連絡貰った時、わたし・

・・ホンマに心配で、不安で・・・・！』

涙声と嗚咽が混じり始めたことで、「大丈夫だよ。俺は大丈夫だ。今は家路の途中だから。あと少しで帰るから。待っていてくれ」とはやてを安心させたくてそう返す。少しの間、鼻を啜る音や嗚咽が漏れ聞こえていた。それが治まった頃、『あ、今な、石田先生が家に来――』というところでプツッと電話が切れた。

「はやて？・・・・バッテリー切れか」

雷撃系魔力の電圧を調整して充電も出来るが、家はもうすぐだ。それに、「石田先生がいらしているんだな」着くまでに知っておかなければならない情報は手に入れたからやめておく。

人気のない路地に入り、石田先生用の俺――少女ルシルへと変身。なんと言うかもう恥とか麻痺してきたな。シャツにパンツ、ダッフルコートという格好から、黒のロングワンピース、ファーを襟や袖口にあしらった白のケープコート、甲にリボンをあしらった赤いローファー。髪型は適当にサイドアップでいいか。

「準備万端っと。危なかったな。男のままで帰ったら何を言われるか・・・・」

声も魔術で少女のものへと変更。あとは口調だが、その辺りは素のままでもあまり問題ないため意識しなくてもいい。さて。八神宅へとようやく帰って来られた俺は、玄関扉のノブに手を掛け、「ただいまー！」元気よく挨拶しながら扉を開けた。

「「「「「「「・・・・・・・ん？」」」」」」

「・・・・Ｏｈ，ｍｙ Ｇｏｄ」

なんと玄関には、なのは、アリサ、すずか、シャル、フェイト、アリシアが居ましたとさ。

Ｅｐｏｓ２８夜天に願いを・祝福の風を継ぐ者へ～Ｆｒｏｍ　Ｍｅ　ｔｏ　Ｙｏｕ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「――メリークリスマ～～ス！」

すずかちゃんのお姉さん、忍さんがワイングラスを掲げて挨拶したのに続いてわたしらも「メリークリスマ～ス♪」ジュースが注がれたコップを掲げた。

わたしら八神家は今、すずかちゃんの家で開催されてるクリスマスパーティに出席中や。忍さんの挨拶が終わると同時に「はやて、はやて。なんか料理持ってこようか？」八神家の末っ子ってゆう位置づけのヴィータが、わたしの分の取り皿を手にそう訊いてきた。わたしはこのホールって言うてもおかしない広い部屋に点在してる丸テーブルの幾つかを見回す。

（う～ん、どれも高級なホテルや旅館レベルの料理ばかりや。全部食べたいしレシピも知りたい。食べればある程度は判るけど、全部を食べれるほどわたしは大食いやないし、女の子としてお腹パンパンにしたないし・・・）

うんうん悩みながらキョロキョロしてると、「どうしました、主はやて？」って訊いてきたんはわたしの車椅子を押す係を買って出たリインフォース。リインフォースもまた料理が出来るし、たぶんわたしと同じ思いを抱いてるはず。

そしてもう1人、シャマルやけど・・・「うわぁ、うわぁ、どれも美味しそうですね　」わたし以上にキョロキョロしてて。すでに自分が食べたいものをロックオンしてそうや。でも、そうやんな、やっぱり自分が食べたいものを優先したいもんなぁ。

（最後は・・・）

チラッと見るんは、ここに来るまでにちょう悲しい目に遭ってしもうたルシル君。遡ること数時間前。すずかちゃん達が管理局に務めることへの許可を家族の人たちから貰うために、これまでの魔法関係で起きたことを話すって聴いたとき、わたしも石田先生に話すことを決意した。そやからルシル君が帰ってくるまで待とうとしたんやけど、クロノ君から、ルシル君が帰れへんって連絡を貰った。

（そん時のわたしの狼狽えっぷりは思い返すと恥ずかしくなるレベルやったなぁ・・・）

ちょう話が逸れるけど・・・。わたしは石田先生を自宅に招いて、魔法やルシル君、リインフォース達のこと、わたしの下半身麻痺の原因が魔法の所為であったこと（リインフォースら闇の書が原因とは伝えへんかった）、その麻痺の原因も家族や友達のおかげで取り除けて、時間が経てば全快すること、そんで・・・魔法使いとして目覚めたわたしは、わたしの命を脅かし、でも救ってくれた魔法で、同じように困ってる人を助けたいってことを伝えた。

（最初はやっぱり反対されてしもうたなぁ）

――はやてちゃんの意志は尊重したいと思います。でも、やっぱり危険なことをしてほしくないって思うの。私たちは主治医と患者っていう関係だけど、それでも・・・それ以上にはやてちゃんのことを大切に思っているから――

そこまで想ってくれてたことはホンマに嬉しかった。そやけどわたしは、リインフォースらも一緒に石田先生を説得した、この魔法の力を無駄にしたないから。結構な時間平行線やったけど、わたしが全っ然折れへんかったからか石田先生が先に折れた。わたしらがちょう悪いことしてもうた償いで働くことになった、って言えばすぐに済みそうやったけど。

（やっぱルシル君やリインフォース達のことを石田先生に悪く思われるんも嫌やし）

石田先生をなんとか説得することに成功したその直後、ルシル君から連絡があった。

。―。―。回想や♪。―。―。

『はやて、ただいま。いま帰ってきたよ』

昨夜、クロノ君やリンディさんに訊いてもちゃんとした理由が返ってきいひんかったルシル君の拘束。もしかして今晩のクリスマスパーティだけやなくて、もうこの家に帰って来れへんかも、って思うてた。

そやけど、ルシル君が約束通りちゃんと帰って来てくれた、それだ

けで胸いっぱいに広がる安堵感。堪らず泣いてしもうたけど、ルシル君が優しく声を掛け続けてくれたおかげで泣き止むことが出来た。

『大丈夫だよ。俺は大丈夫だ。今は家路の途中だから。あと少しで帰るから。待っていてくれ』

ハッとする。石田先生はルシル君のことを女の子って思ってるから、男の子状態のルシル君を見て驚くかもしれへん。とゆうか、さっきわたし、ルシル君、って思いっきり君付けしてもうた。連絡が来るまではちゃん付けしてたんやけど。怪しまれてへんかな・・・？

（大丈夫そうやな・・・、ほっ）

でも・・・魔法のことは伝えたし、ザフィーラの狼形態から人形態への変身ですでに悲鳴を上げるほど驚いてたから大丈夫かもしれへん、なんて思いも過ぎる。それにもう、男の子のルシル君と女の子のわたしの二人暮らしは、リインフォースらが一緒に生活し始めたことで終わったから、ホンマは男の子や、ってことを今なら伝えてもええとも思う。

「（それについてはルシル君と要相談やな）あ、今な、石田先生が家に来てるんよ・・・、ん？　ルシルく――ちゃん・・・ルシルちゃん？」

いきなりプツンと切れた電話。掛け直すと、お客さまがお掛けになった――、ってゆうのが流れた。わたしやなくてルシル君側になんかの問題が起きてしまったようや。そやけど石田先生が来てるって

ゆうことは伝わったはず。
それから石田先生と今後の生活について相談し合ってると、ピンポーンって呼び鈴が鳴らされた。ルシル君は鳴らさへんからお客さまやな。わたしが応対するために動こうとした時、「あ、私が出ますから」シャマルがそう言うて、「はーい、どちら様ですかー？」って玄関に向かった。

「あら、すずかちゃん達、いらっしゃい♪」

「「「「「おじゃましまーす！」」」」」

お客さまはどうやらすずかちゃん達のようや。シャマルが「さ、どうぞ、上がって」ってすずかちゃん達を招き入れようとしたところで「ただいまー！」いま聞こえたらアカン声が玄関から聞こえてしもうた。
廊下とここリビングダイニングの敷居に居るシャマルと、ソファに座ってるわたしら八神家はカチーンと硬直。石田先生だけは状況が読み込めんくて小首を傾げてる。ルシル君、女装することがあんまり好きやないのに、それをすずかちゃん達に見られたとなると、とんでもない精神ダメージなはず。

「ルシル君・・・？」

「え、うそ、ルシルなの？」

「だって、銀髪にオッドアイだし」

「でも声が完全に――え、念話・・・！？」

聞き耳を立ててるとルシル君がすずかちゃん達に念話を通したらしいことが判った。そんで、そのすぐあとに「可愛いーーーー！」黄色い歓声が聞こえた。シャマルの微妙な表情から今のルシル君の状況が目に浮かぶ。

「た、ただいま・・・、みんな・・・。い、いらっしゃい、石田先生・・・」

わたしらの前に現れたゲッソリしてるルシル君。アリサちゃんとシャルちゃんに頭を撫でられ、すずかちゃんとなのはちゃんに「髪きれー♪」って触れられてて、アリシアちゃんに至っては「中はどうなってんの？」ってスカートを捲ろうとしたから、「ダメだよ、アリシア！」フェイトちゃんに窘められてた。酷いカオス状態やった。それからすずかちゃん達を交えて石田先生と話をして、結局わたしとルシル君は石田先生に、ルシル君が男の子、ってゆうのを隠しておくことになった。ちなみにわたしらの保護者役ゼフィさんのことは全部話した。子供の2人暮らしを認めてもらうためにルシル君が変身した姿やって。ちょう怒られたけど、なんとか許してもらえた。

。―。―。終わりや。―。―。

石田先生が夜勤とゆうことで病院に帰までの間ずっとルシル君は女の子してた。そう、すずかちゃん達の目の前でずっと。そやから今も・・・。

「ルシルちゃーん」

「ねえねえ、ルシルちゃん」

「ルーちゃんってホント～～～に女の子っぽいよね？　というか実は女の子？」

「・・・・くっ」

「も、もうやめなよ、アリサちゃん」

「シャルちゃんもだよ。確かに可愛いけど、ルシル君は男の子なんだよ」

「アリシアも、メッ、だよ。たとえ本当のことでも言っちゃいけないって時もあるんだから。ごめんね、ルシル」

「なぁ、フェイト。それフォローじゃ・・・」

アリサちゃんやシャルちゃん、アリシアちゃんからは未だに女の子扱い・・・とゆうかいじられてる始末。それを窘めるのがすずかちゃんとなのはちゃんとフェイトちゃん。それとなフェイトちゃん。アルフさん（途中で合流したんよ）の言う通り今のはフォローとしては不十分やよ？

「イジメか、こんちくしょぉぉぉーーーー！　見ろ、今の俺の格好を！　パーティらしくスラックスにシャツ、あとネクタイ！　君た

ちと同じように月村家に用意された礼服だ！」

うがーっと吼えたルシル君の言う通り今のわたしら全員礼服姿や。すずかちゃん家に着いてすぐ、メイドのノエルさんとファリンがわたしら女の子にはドレスを見繕ってくれた。リインフォースもシグナムもシャマルも綺麗やし、ヴィータは可愛ええし、ザフィーラは窮屈そうやけどルシル君と同じで格好ええ。

「ヴィータと同じやつでええよ。その代わり、ちゃんと野菜も取って来てほしいな。みんなも自分が食べたいものを食べておいで。リインフォースもわたしのことはええから行ってきて。少しの間散開や」

「あ、うん。善処する。ザフィーラ、ちょっと手を貸せ」

「はい。では、いってきます」

「いってきま～す♪」

「それでは行ってまいります」

それぞれ自分が食べたいもののあるテーブルへと向かうみんなを見送った後、「シャルちゃん、ちょーっとええか？」不機嫌指数がちょう危ないレベルに達しそう（もう超えた？）なルシル君たちの元へ。

ルシル君やなくてシャルちゃんの名前を呼んだのは、この中で真っ先にルシル君をイジるんがシャルちゃんで、そんで個人的にお願い

したいことがあるからや。アリサちゃんとアリシアちゃんがルシル君の後ろ髪を解いて遊び始めた中、「どったの？」って答えてくれたシャルちゃん。

「ちょう暗くなりそうな話やから、出来ればシャルちゃんにだけ話したいんやけど」

「ちょい待ち。わたしならこの幸せいっぱい空間から暗い空気に落とされてもいいってこと？」

「ん？　そうなるな～」

「良い度胸じゃない、はやて？」

「そうでもあらへんよ♪」

シャルちゃんは初めて会った時からルシル君に色々としてるからな。ちょっとした仕返(イジワル)しを込めてるんよ。わたしの笑顔からしてそれに気付いたらしいシャルちゃんは「へーい。その暗さを晴らしてあげるよ、わたしがね♪」ってジト目から笑顔になった。

「待って。はやてちゃん、私たちもご一緒して良いかな？」

「本当に聴かれたくない話だったら離れるけど・・・」

なのはちゃんとすずかちゃんが遠慮がちにそう言うてきた。いつかは必ず知られることやけど、それを今、この楽しい時に話していい

んかどうかとなると悩む。そやから「ホンマに落ち込むかもしれへんよ？」って確認。

「はやて。友達はね、色んなことを分かち合うんだよ。嬉しいことや楽しいことを分かち合うことで何倍にもして、悲しいことや辛いことは半分に、さらに半分になるんだよ」

「フェイトちゃん・・・、ええこと言うなぁ」

「えへへ。なのは達の受け売りなんだよ。この言葉は私に友達の素晴らしさを教えてくれたんだ」

フェイトちゃんがすずかちゃん達に笑顔を向けると、すずかちゃん達も照れくさそうに笑顔を浮かべた。

「だからね。暗い話、落ち込む話っていうことは、それははやてにとってもそうだと思うんだ。なら、それを私たちにも分けて」

わたしの手を取ったフェイトちゃん。するとすずかちゃん、なのはちゃん、アリサちゃん、アリシアちゃん、「わたしも友達～」最後にシャルちゃんがわたしらの手の甲に手を乗せた。みんながわたしに笑顔を向けてくれる。

「ちょっと、ルシルも手を乗せないよ」

「え、俺もか？」

「もちろんだよ。ほら、ルシル君も」

アリサちゃんとなのはちゃんにそう言われたルシル君もわたしらの手の甲の上に手を添えた。

「（友達なら、か）・・・じ、じゃあ話すな・・。あんな――」

そこまで想ってくれたことに報いるために話すことにした。リインフォースの寿命があと半年しかないことを。わたしやシグナム達を守るために自分の命を削ったこと、直すことも出来ひんからもう死を覆すことも出来ひんことも。すずかちゃん達が驚きで絶句してる中、「そうなのだ。だからお前に頼みがある」黒いドレスを纏ったリインフォースが戻って来た。みんなが悲しそうな、辛そうな表情を浮かべる。

「そのような顔をしないでくれ。これで良かったのだ。愛する主と騎士たちの未来を救える。私は居なくてなってしまうが、後悔はない。それでだ、シャルロッテ。先ほどの頼みという話になってくる」

リインフォースから引き継ぐように「リインフォースの後継を生みたいって思うんよ」わたしがシャルちゃんにそう言うと、「・・・あ、あー、うん、なるほど」わたしの言いたいことを察してくれたみたい。

「夜天の書の起源はベルカ。そして融合騎もベルカの技術が使われてる。だからベルカ人のわたしを頼ったってことよね？」

「ああ。主はやてのデバイスである私が居なくなれば、主はやての魔導師としての力は半減するだろう。それまでに私の後継騎が必要なのだ」

うんうんって頷く。リインフォースらの生まれ故郷ベルカ。シャルちゃんがわたしの家で教えてくれた話によると、シャルちゃんの実家はベルカの数ある王家の中でも特にすごいゼーゲブレヒトに仕えてた家柄とのこと。そのゼーゲブレヒトの王さま――聖王を祀る聖王教会設立に携わった一族の1つで、その権力は絶大。そんで、ベルカ人の大半を管理下に置いてるって話や。

「融合騎に詳しい技術者かぁ。う～ん、さすがにタダとはいかないかもよ？」

心当たりはあるみたいやけど、そう簡単にはいかなさそうや。それでもわたしは「お金は無いけど、必ず払うから・・・出世払いで！」このチャンスを逃したくないから、その人を紹介してもらえるようシャルちゃんに懇願する。

「ううん。友達（はやて）の頼みだもん。紹介料は格安にするよ♪」

「「「「ん？」」」」

「紹介料？」

「技術者への依頼料じゃなくて・・・？」

シャルちゃんの口から聴き間違いであってほしい単語で出て来た気がする。シャルちゃんはピョンっと小さくジャンプしてルシル君の側に寄った。そんで「ルシルを一週間レンタルさせてくれたら紹介してあげるよ♪」ルシル君の右腕に抱きついた。わたしとリインフォースは顔を見合わせてから「はぁぁぁ・・・」溜息を吐く。

「主はやて。仕様がありません」

「そうやな。別の人に頼もか。ルシル君、行こ」

リインフォースが持ってる取り皿をわたしが受け取ると、リインフォースが「シャルロッテ。今の話は無かったことにしてもらう。ゆえにルシルを離してもらおう」って言うて髪型が三つ編みになったルシル君とシャルちゃんを引き放した。

「うえっ！？」

「シャル、あんたの今のは冗談だとしても・・・」

「最低発言だよ、シャル」

断られるとは思ってへんかったらしいシャルちゃんが驚きを見せてると、さらに追い打ちを掛けるようにアリサちゃんとフェイトちゃんから非難の声が。そんな2人に同意するようにすずかちゃん達も頷いてる。この瞬間、「調子に乗ってごめんなさーーい！」シャルちゃんの心がへし折れてしもうた。

「――じゃあ、僕が紹介してあげようか？」

本気で泣いてしもうてるシャルちゃんをどうあやそうかとあたふたしてる時に聞こえてきた声。声の出所へと振り向くと、ルシル君とザフィーラみたく礼服姿の「ユーノ君！」が居った。その隣にはノエルさんが居って、「恭也様とユーノ・スクライア様がご到着しました」って知らせた。

恭也さんは一度こちらに向かって笑顔で会釈してくれた後、恋人やってゆう忍さんの元へ。そんでユーノ君は「ごめん、遅くなった」ノエルさんから取り皿を受け取ったユーノ君がわたしらの元へやって来た。

「ユーノ君。その、大丈夫だった？　お仕事のこと」

「あ、うん。セレネとエオスがちょっとごねてたけどね」

ユーノ君はミッドチルダにある学校で非常勤講師をしてるらしくて、そやけど管理局に本格的に務めるために辞めることをお願いしに行ったんや。もしかしたらこのパーティに出られへんかもってアースラで言うてたけど、よかった、間に合って。

「はやて、リインフォース。僕が臨時で務めてた学校って聖王教会系列のミッションスクールなんだ。そこで、シャル、君と懇意にしているシスターと知り合いになったんだけど？」

ユーノ君がそこまで言うたらシャルちゃんがピタッて泣き止んで、「ど、どちら様かなぁ～、そのシスターさん？」冷や汗をダラダラ

流し始めた。どうやらシャルちゃんにも苦手な人がおるみたいやな。

「シスターシャッハ――」

「なんだ、シャッハか・・・。ホッ」

「それと、シスターブラダマンテ」

「っ！！　はやて、リインフォース！　わたしが責任を以って紹介するから安心してね！　さ、さ、早速連絡を・・・！」

焦りと恐怖で顔を歪ませたシャルちゃんがバタバタと慌ただしくテラスへと向かって行った。あまりの態度変化にわたしらは全員呆けてしまってた。そんな中で「シスターブラダマンテって恐い女性なのか？」ってルシル君が近くのテーブルに有ったジュースを注いだ未使用のコップをユーノ君に手渡しながらそう訊いた。

「ありがとう、ルシル。厳しくはあるけどそれは優しさからだと思うよ。あ、でも、実力は聖王教会の中でも指折りだって聞いてる。なんだっけ、なんとかパラディン・・・、シュベーアトパラディンって言ってたような・・・」

「パラディン・・・？」

「うん。聖王教会の戦力、教会騎士の中で、各分野で最強の騎士に与えられる称号らしい。剣で最強がシュベーアトパラディン、槍で最強がシュペーアパラディンだとか」

「あー、そう言えばシャルやフェイト達との戦いのときに横槍を入れてきたな。アルテルミナス・マルスヴァローグ。確か――」

「ファオストパラディンだよ」

ルシル君の話を遮るように言うたんは戻って来たシャルちゃん。リインフォースが「連絡はついたのか？」って訊いた。

「もちろん♪　融合騎の知識に関しては一番じゃないかな。元イリュリア国の家系だし」

「イリュリアだと！？」

リインフォースが突然大声を上げたかと思えば、「一体何の話をしてた？」自分とわたしの取り皿を持ったヴィータがちょう怒りを灯した瞳をわたしら、正確にはシャルちゃんに向けてた。

見ればシグナムとシャマル、ヴィータの後ろに控えてるザフィーラも若干やけど心地の悪さを感じてる。イリュリア。その国の名前が出た途端に。リインフォース達にとってイリュリアって一体なんなんやろう。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒リインフォース†††

シャルロッテの口から出た、イリュリア、という私たちと因縁のある名前。それに反応したのは私だけではなくシグナム達もそれぞれ反応した。私たちに向けられる怪訝そうな視線。主はやても例に漏

れず。

「魔神オーディンとグラオベン・オルデン」

「「「「「っ！！」」」」」

シャルロッテがポツリと漏らしたまた別の名前に反応してしまう。どうして知っている、と思う前に納得もしてしまう。フライハイト家の騎士リサとは懇意にしていたからな。それを証明するようにシャルロッテが私たちの前に1枚のモニターを展開した。

「それ・・・・！」

「うそ・・・・、その絵画・・・・！」

「なんと・・懐かしいものを」

「オーディン、アギト、アイリ・・・」

モニターに表示されていたのは絵画。描かれているのは信念の騎士団グラオベン・オルデンと名乗っていた頃の私たち守護騎士と当時の主オーディン、そして融合騎のアギトとアイリだ。あまりの懐かしさに思わず涙が零れてしまう。

「知ってるよ、あなた達とイリュリアとの因縁のこと。ベルカ史であなた達のことが記されているから。ストラトス王家が治めていたシュトゥラに属していたグラオベン・オルデン。イリュリア戦争を

終結に導いた英雄オーディンの騎士たち」

「な、なあ、シャル！　おまえ、ひょっとしてアギトやアイリの居場所とか知ってたりしないか！？」

シャルロッテに詰め寄ったヴィータのその問いは、私たち守護騎士にとって最も重要なものだった。シャルロッテの返答は「ご、ごめん。その融合騎については現在行方不明みたいで、わたしもシュテルンベルク家も判らないんだ」さらに驚きを私たちに与えるものだった。

アギトとアイリの居場所は不明。それについては残念なものだったが、「シュテルンベルク家が今もあるの！？」シャマルが私の考えを代弁してくれた。フライハイト家が残っているのだ、シュテルンベルク家も残っていると思ってもいい。

「エリーゼ卿が誰かと結婚して子を成した、ということになるのか・・・？」

「少し信じられないが・・・。オーディンが亡くなったとは言え、彼女なら一途にオーディンを想い続けると思ったが・・・」

シグナムに同意するものの、「シュテルンベルク家を存続させるためには、必要だったのだろう」すぐにそう思い至る。どれだけ愛していても想っていても、領主として時には捨てなければならないこともある。オーディンが亡くなったのであればなおさら。

「ん？　今のシュテルンベルク家って、当時のエリーゼ卿とそのオ

ーディンの間に出来た子供の子孫なんだよ。エリーゼ卿の日記では、男の子と女の子の双子だったみたい」

「ぶはっ！？」

「きゃぁぁぁぁぁぁ！！？」

「ルシル君！？」「アリシア！？」

ルシルが突然飲んでいたジュースを吹き出し、ちょうど目の前に居たアリシアの頭上に掛かってしまった。気管に入ったのか咽続けるルシルの背中を「大丈夫、ルシル君？」擦るシャマル。

「ひどいよ、ルシルぅ！　ジュースをわたしの頭に吹き掛けるなんて！」

髪に滴るジュース頭を振ることで払おうとするのを「飛んじゃうからダメだよ！」フェイトが止める。すずかが「ファリン、タオル！」女中の1人、ファリン嬢を呼んだ。彼女は慌てながらもタオルを持って来た。

「だ、大丈夫ですか！？　わわっ！？」

ファリン嬢が盛大に転んだ、しかも料理の乗ったテーブルを巻き込んで・・・。テーブルを突き飛ばすように転んだことで乗っていた皿やボトル、コップなどの食器類が私たちに向かって宙を舞った。

（主はやて！）

食器類が主はやてに到達するまでの刹那、私は主はやてを護るべく動く。が、それよりも早く主はやての壁となったヴィータが「ほい、ほい、ほいっと」周囲に居た私たちに空のコップやボトルを弾き飛ばし、それらを私とシグナムでキャッチする。料理の乗った皿に関しては弾き飛ばすことが出来なかったヴィータは、両手で2枚の皿を手の平に乗せるようにキャッチに挑む。

「わたしはコレ！」「僕はこっちを！」

シャルロッテとユーノもそれぞれキャッチしている中、ヴィータが一度は手の平に乗せた2枚の皿を、「あ、やっぱ無理」とまた周囲に流した。幅がありそして重い皿は深さがあったのが幸いし中身は零れず、1枚はアルフが、もう1枚がシャマルへと飛び、アルフは難なくキャッチしたのだが、シャマルはキャッチすることなく「きゃっ？」と避けた。そしてその皿は「のわぁぁぁ！？」呼吸が整い始めたルシルの頭の上にベチャっと乗った。

「ルシル君がパスタ塗れに！」

「うおい、服の中に入って来た！」

「ちょっ、ルシル！？　女の子（あたしたち）の前で服、脱がないでよ！」

「うわわわ、ルシル、動かないで！　わたしにもパスタが落ちてくるよ！？」

大混乱。パスタ塗れとなったルシルが大慌てでシャツを脱いで上半身裸となり、その勢いでパスタがアリシアへと掛かり、アリサやなのは、すずか、フェイトがルシルの姿に頬を赤らめて両手で顔を隠す。シャルロッテは目を爛々と輝かせて見つめている。
自分が避けた所為でこのような事態に陥ったことに対してシャマルが「ごめんね、ルシル君！」と謝っていると、「あわわわ、大丈夫ですかー！？」ファリン嬢がルシルの元へ駆け寄って来て、「あ」パスタを踏んで滑り、また盛大に転んだ。

「きゃっ・・・！？」

「ちょっ、まっ、げふっ！？」

ファリン嬢はシャマルを巻き込んでルシルへと倒れ込んでしまい、ルシルはその2人の下敷きになってしまった。

「お、重い～」

「おもっ！？　ルシル君、私はそんなに重くはないはずよ！」

「ファリンさんも一緒だからだよ・・・！　というか、早く退いてくれ・・・！」

「ご、ごめんね、ルシル君！」

「あぅぅ、ごめんなさーい、ルシル君・・・！」

3分と掛からずに起きた大惨事。クリームソース塗れになったルシル、ソースに加えてルシルに吹き掛けられたジュースに濡れたアリシアは、同じように汚れたシャマルやファリン嬢と一緒に着替えに向かった。

「コホン。えっと、なんだっけ？・・・あ、融合騎の話だっけ？・・・？」

彼らを見送り、もう1人の女中、ノエル嬢が掃除を済ませた後（手伝いを買って出たが客人だからと断られた）、シャルロッテが咳払いひとつ吐いて話を戻した。正確にはオーディンとエリーゼの子供云々だったのだが、それは後にでも聞こうと思えば出来るため、「ああ。その技術者とはどこで会える？」とシャルロッテに訊ねる。

「すぐにでも。明日、はやてたち八神家を本局に連れて行くことになったから、本局での用事を終えてから行こう。わたしの実家、第一世界ミッドチルダはベルカ自治区サンクト＝オルフェンの聖王教会へ」

「うんっ、よろしくお願いします！」

はやてに続いて私たち騎士も「よろしく頼む」と頭を下げた。こうして私たちは明日、ミッドチルダへと向かうことになった。それから食事を再開して、なのは達と管理局に入るのならどの部署か、という話をしていると「いやだぁぁぁーーーー！」そんな悲鳴が聞こえてきた。

「今の・・・ルシル君の声・・・？」

主はやての言う通り間違いなくルシルのものだった。悲鳴はそれだけでなく、「俺は帰る！」だとか「男だぞ！」だとか「アリシア、許すまじ！」だとか「こんな償いとかありえん！」という悲鳴は連続で聞こえた。

「なんか・・・今のルシルがどうなってんのか想像つくんだけど・・・」

アリサがそう言うとなのは達も「私も」とそう同意した。私もそうだ。主はやてが「ルシル君、可哀想やけどしゃあないよなぁ」って苦笑を漏らした。

「レディース・エ～ンド・ジェントルメ～～ン♪」

勢いよく開かれた扉から新しい水色のドレスに着替えたアリシアが現れ、扉の奥――廊下からは「鬼ぃ－！　ロリぃ－！」ルシルの罵倒らしき声が響いてくる。アリシアはニコッと私たちに笑顔向けた後、廊下へと戻る。少しの沈黙の後、「わぁ☆」主はやてを含めた子供たちが小さく歓声を上げた。

「ちくしょう・・・、強制的に女装させられる事だけはもうないと思っていたのに・・・」

アリシアに手を引かれて姿を見せたのは、黒を基調としたドレスを

身に纏ったルシルだった。長い銀の後ろ髪もリボンで結われている。どこからどう見ても少女にしか見えない。見惚れていたなのは達が「可愛い！」や「綺麗！」や「本当は女の子でしょ？」などと言いながらルシルへと詰め寄る中、私はルシルのドレス姿に見惚れている主はやてへと歩み寄る。

「主はやて。少し席を外してもよろしいでしょうか？」

「あ、うん、ええよ。今日は自由行動や、好きにして構わへんよ」

「ありがとうございます」

主はやてに許可を取り、私はわいわいと騒いでる少女たちより離れ、私の身長を超すほどのガラス扉を開けてテラスへと出る。空気が澄んでいて雲の隙間から見える月や星の海を見上げながら思うのは、私の後継となる者のこと。

「私の名（リインフォース）を継ぐ、新たな祝福の風に託したい。私は・・・とても幸福な魔導書だ。最後の最後で素晴らしい主に巡り合え、主や騎士たち、多くの友と共に呪われた旅路に幕を降ろすことが出来たのだから」

主はやては仰った。リイン（わたし）フォースが消えても祝福（リインフォース）の風は無くさない、と。それはつまり祝福の風リインフォースという名を新たな魔導の器に受け継がせるということだ。

そこまで想ってくれてことがとても嬉しかった。手の平に具現するのは、"夜天（わたし）の魔導書"から切り離した剣十字。コレが主はやての

新たな魔導の器となるだろう。剣十字を両手で持って胸に抱き、改めて夜空を見上げる。

「主はやてとルシル、騎士たちと、これからの時間を共に過ごせないことに対して悲しみが、寂しさがないとは言えば嘘になる。だから半年という残りの命、私は精いっぱい生きるよ。私だけでなくみんなが笑っていられる穏やかな中で逝けるように」

空から白い・・・雪がチラホラと降って来た。

「ただ、その先からは、私は主はやてを守って差し上げることが出来ない。ゆえに祝福の風を受け継ぐお前に願う。主はやてを守り、騎士たちと共に戦い、あの優しく温かな家庭から誰一人として欠けさせることなく、幸せに生きていってほしい」

剣十字を持つ両手を空へと掲げ、最後に伝えたい事を夜天に向かって話す。

「私の名を受け継いだとしても、お前は私の代わりなどではなくお前というただひとり存在だ。だからどうか変に気負うことなく胸を張って、強く生きていってほしい」

それが伝えたいこと。新たなリインフォースが生まれるのが私の消滅より後であれば、今の想いをこの欠片に留めて、いつか新たなリインフォースに届けたい、と思う。

「冷えてきたな。戻ろう」

剣十字の具現を解いて頭に付いた雪をサッと払った時、「なんでこんなことに・・・！」息を切らしたルシルがやって来た。散々玩ばれたのか髪が乱れ、疲労に満ちた顔をしていた。そんなルシルは扉に結界を張り、そして「こうなったら」と指を鳴らす。一瞬の発光の後、ルシルは大人の姿へと変身していた。服装はもちろんドレスではなくシャツにジャケット、スラックス、ネクタイという礼服だ。

「リインフォース？　どうしたんだ、こんなところで」

「いや、なんでも」

やはりどう見てもオーディンだな、と思っていると「冷えるぞ」とルシルは言って、着ていたジャケットを私の肩に掛けた。冷えた体が温もりに包まれてポカポカとしてくる。オーディンの側に居た時に感じたものと同じ良い心地だ。先ほどシャルロッテに絵画の写真を見せてもらったことも相まってかオーディンと過ごした日々が脳裏を一気に過ぎる。

「リインフォース！？　なんで泣いて・・・！？」

「？？・・・私は、泣いているのか・・・？」

頬に触れると判る涙。後悔なんてしていない。それは確かだ。それなのに、まだ生きていたいと思ってしまう。オーディン達と過ごして手に入れた最初の幸せ、主はやて達と過ごして手に入れた最後の幸せ。数多くの思い出が胸のうちを温かくさせる。

「ルシル・・・・！」

「っと？」

ルシルの胸へともたれ掛る。驚きつつも受け止めたルシルに「少しの間だけ、このままで」と頼み、トクントクンと静かに鳴る彼の心臓の音を聴く。ルシルは「俺ので良ければいつでも」と言って右手を私の背に回し、左手は私の頭をそっと撫でてくれた。

Ｅｐｏｓ２９ザンクト・オルフェン～Ｈｅｉｌｉｇｔｕｍ　ｅｉｎｅｓ　Ｂｅｌｋａｎ　Ｒｉｔｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「ほぁ～、ここが本局かぁ～・・・」

今日２６日、わたしら八神家は、「にゃはは。やっぱり驚くよね」なのはちゃん達と一緒に時空管理局、その本局にまでやって来た。わたしら八神家は健康診断と嘱託に必要な手続きをするため、なのはちゃん達は嘱託の手続きをするために。フェイトちゃんは付き添いってゆう立場や。

「それじゃあ、なのは達は僕とエイミィについて来てくれ」

トランスポーターホールを出たところでクロノ君がそう言われたなのはちゃん達は「はーい！」って元気よく返事。そんで「はやて達はわたしについて来てね♪」そう言うたシャルちゃんにわたしとシャマルは「はーい！」って返事、ヴィータは「おう！」で、ルシル君たちは「ああ」や。

「あ、そうだ。クロノ。今日はみんな、わたしの家に泊まってもらうから、わたし達の帰りを待たなくてもいいからね」

本局に向かうための転移に必要なトランスポーターの有るフェイトちゃんの家（正確にはリンディさんらハラオウンさんのやな）に集

合した時、

――そうそう。はやて達さ。たぶんだけど今日はなのは達以上に局に拘束されちゃうかもだから、今日中に融合騎の技術者のところにまで行けないと思うの。でね。良かったら今日はわたしの家に泊まっていって。それで、朝一で技術者のところに連れて行くから――

シャルちゃんから自分の家に泊まった方が良いって言われた。わたしらはもちろん即オーケーやった。本局での手続きを終えた後、時間がないからってゆうて自宅に帰って、次の日にまた本局に行ってミッドチルダに行くなんて慌ただしすぎるしな。

「そうなのか？　というと・・フェイト達も泊まりか？」

「そうだよ。だから今日はみんな地球には帰らないからね。ふっふっふ。招待者として腕の見せ所だね～♪」

「楽しみだなぁ、シャルちゃんのお家にお泊り会♪」

「うんっ。ミッドチルダのお家ってこともあるから余計にドキドキしちゃう♪」

なのはちゃんとすずかちゃん、みんなが笑顔で頷いた。わたしらがシャルちゃんの家に泊まるってことを決めた時、すずかちゃん達も泊まりたいって言うたんや。シャルちゃんはもちろんオーケーって即答。そうゆうわけで、今日はみんなでシャルちゃんの家に一泊する、初めての異世界でのお泊り会や。

「アリシアちゃんはやっぱり居ないんだね」

「あ、うん。アリシアは管理局に入るつもりはないみたいだから」

エイミィさんがそう言うと、フェイトちゃんが心底落ち込んだ表情を浮かべた。アリシアちゃんは昨夜のパーティの時、自分から管理局入りをせえへんことを決めた。

――前々からフェイトには言ってるけど、わたしの魔力量、ランクで言えばEだよ？　足手まといになるのは判り切っているし。それにね。わたし、普通の女の子として過ごしてみたいんだ。魔法の使えない、知らない友達もたくさん出来たし――

フェイトちゃん達はそれでもアリシアちゃんに局入りするように説得してたけど、アリシアちゃんは最後まで折れることなかった。そやから今ここにアリシアちゃんは居らん。

「残念だが、それがアリシアの望んだ意思だ。・・・っと、そろそろ向かわないと待たせてしまうな。少し急ごう。ついて来てくれ」

わたしらはまたこことトランスポーターホールで待ち合わせることを決めてから一旦お別れや。クロノ君やエイミィさん、すずかちゃん達と別れて、わたしらはシャルちゃんを先頭にわたしらの今後を決める局員さんの居る応接室へ向かう。

「そういやさ、シャルロッテ。あたし達の処遇を決める局員ってど

んな奴なんだ？」

「んー？　レティ・ロウラン、レティ提督だよ。リンディ艦長の同郷の友人でね。すごく良い人だから、なんの心配もないよ」

シャルちゃんの笑顔に安堵する。シャルちゃんがそう言うんならなんの心配もあらへんって。それからわたしらは、シャルちゃんから今後のシグナム達の置かれる立場の予想を聞いた。それがホンマのことになるかどうかは・・・「着いたよ、ここだ」レティ提督次第やな。

「イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトです」

シャルちゃんがそう名乗りながらスライドドアの横にあるタッチパネルに触れると、『どうぞ』女性の声でそう返答があって、プシュッと音を立ててスライドドアが開いた。まずはシャルちゃんが入って、続いてわたし、車椅子を押してくれるリインフォース、そんでヴィータにシグナム、シャマルと続いて、最後にルシル君とザフィーラ。

「はじめまして。時空管理局本局・運用部次長兼次元航行部提督、レティ・ロウランです」

長テーブルを挟んで在る2脚のソファ、わたしらから見て右側に座ってた女性が立ち上りながら自己紹介。眼鏡を掛けててキャリアウーマンって感じや。そんなレティ提督にわたしらも自己紹介して、勧められるままに左側のソファに座って、シャルちゃんはレティ提

督の隣に座った。

「リアンシェルト総部長やリンディから話を聴いているわ。これからよろしくね。八神家の八神はやてさん、騎士リインフォース、騎士シグナム、騎士ヴィータ、騎士シャマル、騎士ザフィーラ・・・、そして、騎士ルシリオン・セインテスト君。・・・そして――」

わたしらとレティ提督の間にあるテーブル上にモニターが6枚と展開された。表示されてるんは「パラディース・ヴェヒターの騎士たち」やった。レティ提督は眼鏡のつるの付け根をクイッと上げて順繰りにルシル君たちを見てった。

「もう1つの呼び名もあったわね。夜天の守護騎士とその主」

わたしらは黙る。これから何を言われてもしゃあないことやって。

「その呼び名についてだけど、上層部の決定で箝口令が敷かれたから、あなた達も自分たちが夜天の書の関係者ということは他言無用、言い回らないこと。いいわね？」

そやけどレティ提督から伝えられたのは予想外のことやった。レティ提督が言うにはわたしらが他の局員さん達から虐げられへんようにするための処置やって話で。ちょう引っかかるけど、ちゃんと働くためにはしゃあないよな。

「これまでのあなた達の活躍（データ）を見たところ、古代ベルカ式の使い手と言うだけでもすごいのに、あなたたち全員、魔力ランクがＡＡ以

上。どこの部署に行っても重宝されるわね。とは言え、リンディからはもちろん、あのリアンシェルト総部長からも、あなた達の希望を優先して配属させてほしいって言われているし。というわけで、どの部署に行きたいかしら？」

フッとクールに、でも優しい笑顔を浮かべたレティ提督。パラディース・ヴェヒターとしてのルシル君らが表示されてるモニターが消えて、時空管理局を構成してる部署の名前、その一覧が表示されたモニターが展開された。

「うーんと・・・。あの、出来ればみんな一緒に、同じ部署に務めたいんですけど・・・」

甘いことを言うてるってことは解ってるけど、でもやっぱり家族みんな一緒に居りたいなぁって思う。リンディさん、そんでレティ提督の上司さんらしいリアンシェルト総部長さんもわたしらの希望を聴いてほしいって言うてくれてるようやし。

レティ提督とシャルちゃんが「うーん」って唸りながらモニターと睨めっこ。とここで「とりあえず部署の説明をしていただいてもよろしいでしょうか？」ってシグナムがそう言うと、レティ提督がそれぞれの部署と仕組みと役割を教えてくれた。

「みんな、どうや？　みんなの意見をまず聞かせて」

「私は戦いしか能のない騎士です。この航空武装隊という部署ならばこの力を発揮できるかと」

「あたしもどっちかっつうと武装隊寄りだよな」

「私は医務局です。癒しと補助が本領ですし」

「我は何処へでも。主はやての意思のままに」

「私は・・・その、融合騎としての機能を失っていますが主はやてのデバイスですから、主はやての御側に」

そうや、リインフォースはもうユニゾン出来ひん体や。防衛システム切り離しの際に"夜天の書"の根幹部分も一緒に切り離したリインフォース。そこにはユニゾン機能も含まれてたんや。

「俺はどこでもいいかな。レティ提督にお任せします」

ルシル君がそう言う。本心は、わたしと一緒に居たい、って言ってほしかったのは胸の奥にしまい込む。ルシル君が「はやてはどうだ？なにか、あるか？」わたしにそう訊いてきた。みんなの希望を聴く限りわたしに向いてないものか、わたしの答え次第。もう一度、部署の一覧を眺める。

「捜査部（コレ）でいいんじゃない？」

と、シャルちゃんがモニターの向かい側から捜査部ってゆう文字を指さした。するとレティ提督も「そうね～」って納得気味。捜査部。わたしらの世界でゆう警察みたいな部署や。シャルちゃんがチラッとわたしとルシル君を見ながら「はやてやルシルが就くとなると、

特別捜査官かな？」って言うた。

「特別捜査官・・・？」

「ええ。特別捜査官。捜査や事件解決に役立つタイプのレアスキルの保有者が就くもので、要請に応じて他の部署に出向する、特別技能の専門家ね。最近できた、捜査部の分枝課・特別技能捜査課への所属になるかしら。でも・・・この子たち、レアスキル保有者なの？」

「俺は複製というものを」

ルシル君は複製ってゆう、その目で見た魔法・武器・能力・知識をそっくりそのまま複製して自在に扱うことが出来る。それどころかアレンジを加えてオリジナル以上の効果を持たせることも出来る。それを聴いたレティ提督はホンマに驚いてた。そやけど「わたしも・・・？」心当たりがないから小首を傾げる。

「リインフォース」

「っ。・・・確かに主はやてにもレアスキルは有る。夜天（わたし）の魔導書の有していた蒐集行為。それは主はやてに受け継がれている」

初耳やった。それはシグナム達も同じで、「何故お前が知っている？」シャルちゃんにシグナムがそう訊いた。シャルちゃんは「ほら、はやてって物心つく前からリインフォースと一緒でしょ？　ひょっとしたらって思ったんだけど」って知ってるんやなくて勘やった。

「どうする？　特別技能捜査課への所属。運用部次長の私ならみんな纏めて、八神家っていう一チームとして配属させること出来るけれど・・・」

レティ提督に訊かれて、わたしらは顔を見合わせた。みんな一緒にチームとして働ける。それはわたしらの希望通り。魔法やスキルで困ってる人たちを助けることも、守ることも出来る。

そやけど、それだとシャマルの希望には添えれへん。そう思うてると、「私はいいですよ。はやてちゃん達と一緒なら」シャマルが笑顔でそう言うてくれた。特別捜査官になったわたしの側でも医療に携えられるかもしれへんからって。

「そのことだけど、はやてさん、あなたの世界では義務教育課程というものがあるそうね」

忘れそうになってた・・・とゆうか完全に自分が小学生やってことを忘れてた。わたし、足が治ったら復学せなアカンのや。

「それを考えればあなたの勤務時間は、騎士たちに比べて短くなるのよね。だから・・・」

わたしが日常でのんびりしてる間にもシグナム達だけが仕事をせなアカンのか。そう思うと後ろめたさを感じてしまう。と、『お気になさらないでください、主はやて』って思念通話をシグナムが送って来た。気付けばみんながわたしを見て笑顔を向けてくれてた。そんなみんなに『おおきにな』ってお礼を言う。わたしはホンマにええ家族を持った。

「・・・兼任、ですね。はやてが学校に行っている間とかシグナム達はフリーだから・・・」

「ええ。はやてさんが居ない間、騎士シャマルは医務局へ、騎士シグナムと騎士ヴィータは武装隊へ務めるというのはどうかしら？はやてさんの仕事の時に、はやてさんの補佐官となる。それならあなた達の希望に添えると思うわ」

レティ提督からの提案を聴いて改めて顔を見合わせて頷き合った後、「それでお願いします」わたしがレティ提督にお辞儀すると、ルシル君やリインフォース達も「お願いします」ってお辞儀した。

「あ、そうそう。ルシリオン君。あなたも学校に通うようにね。リンディが転入手続きもしておくからって」

「・・・・はい？　え、あの、ん？　俺も学校へ通え、っていうことですか？」

「え？　私、今そう言わなかったかしら？」

ルシル君がホンマに混乱してる。レティ提督の話やと、ルシル君の転入先はすずかちゃん達と同じ私立聖祥大学付属小学校。そんで、なんとわたしも来年の４月から聖祥小に通うことになるみたい。とは言うても、最終的に決めるのは本人であるわたしとルシル君や。わたしとしては感謝で胸いっぱいや。すずかちゃん達と一緒の学校に通えるんやもん。そやけどルシル君はどうなんやろ。

「正直ね、ルシリオン君、あなたほどの実力者は管理局だけでなく次元世界でもそうはいないわ。ランサーとしてのあなたは恐ろしく強かったもの。だからすぐにでも局の仕事に就いてもらいたいって思うの。でも、あなたはまだ１０歳にも満たない子供。保護観察と管理局従事だからと言って強要は出来ないわ。まずはあなたも学校に通って、教養を深めるといいわ。きっと亡くなられているあなたのご両親も望んでいるはずだから」

「俺が、学校？・・・小学生？・・・あ、あー、ご、ご厚意、感謝します、レティ提督」

ルシル君がなんやブツブツ呟いた後、レティ提督にお礼を言うた。こうしてわたしらの今後の処遇は決まった。

わたしら八神家は全員、本籍を捜査部・特別技能捜査課に置くことになった。チームリーダーのわたしが学校へ行ってる間や休暇がズレて仕事をしてへん時は、シグナムとヴィータは武装隊へ、シャマルは医務局に務めることになった。リインフォースはデバイスとして常にわたしと一緒。ザフィーラは入局やなくてわたしやシャマルの護衛ってゆうお手伝いさん的な立場や。

「――とりあえず、決めておきたかったことは決まったわね。捜査部や武装隊、医務局にはこちらから手続きをしておきます。お疲れ様でした」

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

レティ提督との対話も終わり、その後ははやての健康診断、俺たち全員の魔力量測定などの検査も無事に終了。今日一日で全ての問題が片付いたことは嬉しい。あとは、シャルの実家があると言うミッドチルダは北部ベルカ自治領サンクト＝オルフェン（かつての聖王家領の名前の1つを持って来たんだな）へ向かうだけ。
その最後の目的を果たす為になのは達と合流した俺たち八神家とシャルは今、本局⇔ミッド北部間を繋ぐ次元船の定期便に乗るために次元港を目指して「ダッシュ、ダッシュ、ダッシュぅぅーーー！」本局内の廊下を猛然とダッシュ中。

「これに乗り遅れたら今日は本局泊まりだよ！」

「トランスポーターを使えばいいんじゃないの！？」

「ダメなんだよ、アリサ。アレって本当は緊急時じゃないと使えないんだ・・・！」

先頭を走るシャルが俺たちに速度を上げるよう言外に言い、アリサがトランスポーター使用を提案するがフェイトがそれを却下。だから俺たちは走り続ける。車椅子のはやては今リインフォースに横抱きにされ、車椅子は折り畳まれてザフィーラが持っている。

「アレ、あそこ！　乗りまぁ～～す！」

ようやく辿り着いた本局次元港。俺たちは飛び乗るようにして乗船。それからすぐに次元船は出港、一路ミッドチルダへと向かう。そして俺たちはようやく一息吐け、なのは達と話が出来るようになった。

「なのはちゃん達はこれからどうするん？　わたしらはみんな捜査部・特別技能捜査課ってゆう部署に配属や」

一般的な飛行機のような3席3列という並びの席順である次元船内部。俺たちは船の先頭で、一番右からなのは、アリサ、すずか。通路を挟んでシャル、フェイト、はやて。もう1つの通路を挟んでヴィータ、リインフォース、シャマル。そしてシャマルの後席――左から俺、シグナム、ザフィーラという座席順だ。

「私とアリサちゃんとフェイトちゃんはこれから3ヵ月間、武装隊の陸士訓練校の速成コースに入って、卒業後は、私は武装隊士官候補生として・・・」

「私は執務官候補生で・・・」

「あたしは陸戦魔導師としてミッドのどこかの陸士部隊に入隊して、捜査官として頑張る。はやて達と同じ捜査部ね。ま、唯一の違いは、はやて達は本局内の捜査部の中のいち課で、あたしは地上本部の捜査部の、ね」

「私はデバイスマイスターになるために士官学校の技術士コースに通いながらマリエルさんやドクターに弟子入り♪」

なのはとフェイトは先の次元世界と同じ配属先だな。アリサは空を飛べないため航空武装隊ではなく陸士部隊、すずかはエンジニアという夢を純粋科学ではなく魔導科学で叶えるか。

「へぇー。それぞれちゃんと行き先が決まって何よりだよ。・・・わたしはどうしようっかなぁ～」

シャルが両手を後頭部に回して座席にもたれ掛りながらそう漏らす。その意味を察した俺は、シャルの今後の部署の候補を提案しようとした時、それより早くなのはが「どうしようかな、って・・・シャルちゃんはこのままクロノ君の補佐でしょ、エイミィさんと一緒に・・・？」と訊いた。

「んんー？　あぁ、艦船1隻が専有できる戦力って決まりがあるんだよ。いくら執務官補佐とは言え、ＡＡＡ以上のわたしとクロノ、フェイトが一緒になるのは規定上許可が下りないの。だから必然的にわたしがアースラを降りないと」

「あ、ご、ごめん、シャル。私・・・そんなつもりじゃ・・・！」

見ていて可哀想になるほどフェイトがオロオロと狼狽え始める。シャルは「気にしないで良いよ。今後のフェイトとハラオウン家の関係を想えば、ね♪」とウィンク。なのは達はシャルの今の発言の意味を知っているのか「あぁ」っと納得。

俺もどういうことが判っているから納得しそうになる。が、「どうゆうこと？」はやてを始めとした八神家は事情を知らないため、俺も「何かあるのか？」と知らないフリをする。

「私とアリシアって他に家族は居なくて・・・。だからリンディ提督から養子縁組の話が来ていて、その・・・」

「そういうこと。少しでもフェイトとハラオウン家を一緒にした方が良いかなぁって思ったわけ。それにね・・・悔しいんだよぉぉぉぉーーーーッ！」

シャルが叫ぶ。すると当然「コホン。お客さま。他のお客さまのご迷惑になりますので」とキャビンクルーの女性に注意される羽目になる。俺たち全員でごめんなさいと謝罪して、その場を収める。シャルからの「あぅぅ、ごめんね、みんな」謝罪を改めて受け取ったところで、「んで？　なにが悔しいわけ？」アリサが訊ねる。

「はやてとルシル、来年の４月から・・・なのは達と同じ学校に通うんだよ」

「「「「えええええーーーーッッ！？」」」」

なのは達が叫ぶと、「コホン！」先ほどと同じキャビンクルーがすかさず参上して強めの咳払い。なのは達が頭を下げつつ「ごめんなさい」と謝る。次も何かしらの不意の情報で驚きの声を上げ、また叱られるのも勘弁、そして他の乗客に迷惑だということで念話での会話へと切り替えることに。

『――で、さっきの続きだけど。なのは達だけじゃなくてはやてやルシルまでもが聖祥小学校へ通うことになった。な、の、に！　わたしは学校に通えずにひたすら仕事！　理不尽じゃない！？』

おそらく全員がこう思うはずだ。理不尽じゃないだろ、と。シャル

は俺たち嘱託とは違って正式な局員で、エリート候補の執務官補佐・・・は関係ないか。とにかく理不尽なんかじゃない。学校に通えないのは君の雇用形態の所為だ。

『でね。これを機に嘱託に契約変更して、ルシルやはやて達と同じ特別技能捜査課へ異動願いでも出そうかなぁ、なんて♪　そしたらわたしも聖祥小学校に通えて、そして仕事じゃはやて達ヴォルケンズと、わたしとルシルのペアで競い合ったりしてさ♪』

『待ってくれ』『ちょう待ち』

はやてと2人してシャルの今の発言に異を唱えると、『ん？　わたし、何か変なこと言った？』と素で解っていない風なシャルが訊き返してきた。

『なぁ、シャルちゃん。ルシル君もわたしら八神家チームなんやけど』

『えー。だってはやてにリインフォース、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。もう十分すぎるじゃん。ルシルくらい貸してよ～』

『ア～カ～ン♪　ルシル君も一緒や。これからもずっと、な♪』

はやてとシャルの座る真ん中の列から異様な空気が漂ってくる。少し腰を浮かしてはやて達の方を見る。はやてもシャルも笑顔なんだが、2人の間には目には見ない火花が散っているかのように感じる。

というか、２人の間の席に座るフェイトが少し・・・いいや、かなり可哀想だ。

『シャル、君にも仲間が居るだろ？　アルテルミナスとセラティナ。その２人と組めばいいじゃないか』

フェイトの助け舟になれば、と思ってそう言ってみたら『ひっどぉ～い！　恋する乙女の気持ちくらい理解してよ！』確かにフェイトは助けられたが、矛先が俺に向いてしまった。それから次元港に着くまでの間ずっと、シャルは如何に俺が好きなのかを全員に語った。小っ恥ずかしい話を延々と聞かされたなのは達には本気で謝ろうと思う。

（土下座で足りるかどうか判らないけどな・・・、はぁ・・・）

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒なのは†††

ミッドチルダ北部の次元港に到着した後は、そこからシャルちゃんの実家のあるザンクト・オルフェンへのバスに乗って３０分。見えてきたのは地球で言うヨーロッパのような西洋建築の街並み。大自然に囲まれた街は夕日に染まっているおかげでとっても穏やかに見えて幻想的。

「今日はもう遅いから、予定通りこのままわたしの家に向かうね」

「うん、それでええよ」

はやてちゃん達の目的はリインフォースさんに代わる融合騎の誕生で、その融合騎に詳しいっていう技術者さんに会いに行くことだったけど、シャルちゃんの言うように日がそろそろ暮れ始めるから明日に回された。
バスから降りて街路を歩いていると、「騎士イリス、おかえりなさい」ってシャルちゃんに向かって挨拶する人がたくさん居ることにちょっとビックリ。シャルちゃんは「ただいまー♪」笑顔を振りまいて挨拶を返してく。

「シャルちゃんって有名人・・・？」

「わたしっていうよりはフライハイト家がね。ここベルカ自治領を管理する領主だから。フライハイト家の下に6つの家柄――六家があって、フライハイト家とその六家でここを統治・管理しているの」

はやてちゃんにそう答えたシャルちゃん。改めて知ると本当にすごいんだよね、シャルちゃんって。シャルちゃんの新たな一面を見ることが出来たのは嬉しいな♪　それから目的地に着くまでの間、挨拶はもちろん、パン屋さんからは胡桃パンを、果物屋さんからはフルーツの試食を、他にもクレープとかケーキとかを貰っちゃった。そんなこんなで「あれがわたしの家♪」辿り着いたのが目的地だったシャルちゃんの家なんだけど・・・。

「ほわぁ～・・・」

私はシャルちゃんのお家を見て言葉を失った。アリサちゃんも「家っていうか・・・」呆けちゃって、すずかちゃんが「宮殿・・・だ

よね」ポツリと漏らす。目の前にそびえ立っているのはどう見ても宮殿で、「すごいなぁ、シャルちゃん。お姫さまみたいや」はやてちゃんの言うように宮殿に住んでるってなるとお姫さまみたい。シャルちゃんが門の側に有るインターホンらしきモノに触れると、門の奥――宮殿の方からリンゴォーンっていう鐘の音が聞こえてきた。と、門扉にモニターが展開。メイドさんが映し出された。

『お帰りなさいませ、イリスお嬢様。そして、よくお出で下さいました、ご友人方。どうぞ中へお入りくださいませ』

メイドさんが綺麗にお辞儀するとモニターが消えて、門扉が左右にスライドして開いて行った。シャルちゃんが「ささ、どうぞ、どうぞ、遠慮なくぅ～♪」門を潜ってものすごく広いにお庭に入って行く。招かれるままに私たちも宮殿の玄関に続く一本道（１００ｍはあるよ）を歩く。

（道の両側に噴水、お花畑・・・それに植木の迷路のようなものまである・・・）

アリサちゃんやすずかちゃんのお家で十分耐性が付いたって思ってたけど、シャルちゃんのお家には驚かざるを得ないよ。みんなも双みたいで無言で歩く中、「家に帰って来るのも久しぶりだなぁ」懐かしそうに呟いたのが聞こえたから、「そうなの？」って聞いてみる。

「家に居たら、いっつも女の子らしくしなさい、って父様がうるさくてさ～。確かにわたしは女の子だよ？　でも、騎士でもあるわけ。

わたしとしては格好よくて綺麗な騎士っていうのに憧れがあって・・・。だから姫扱いされる家を出て管理局に入ったの」

初めて聞いたシャルちゃんの入局の動機。予想外なその動機を聞いてちょこっと残念な気持ちになった。シャルちゃんもあのすごい魔法やレアスキルを活かすために、とかだと勝手に思い込んでた私にも問題があるんだけど。

「なんつうか、不純な動機つうかさ」

「判ってる。今思うとわたし自身もそう思うから」

ヴィータちゃんにそう言われてガックリ肩を落とすシャルちゃんが、

「ま、今となってはわたしもフェイト達と同じ動機で局務めだよ。この力を役立てたいってね♪」振り向きざまに笑顔を浮かべた。

「っと、そんなこと言ってる間に玄関にとうちゃ～く♪」

シャルちゃんに続いて私たちも大きな両開きの玄関扉の前に到着した後、シャルちゃんは「たっだいまぁ～！」バアン！と勢いよくドアノブを手前に引いて扉を開けた。そして私たちを一流ホテルのような豪華さのあるエントランスホールで出迎えてくれたのは、「お帰りなさいませ、イリスお嬢様。いらっしゃいませ、ご友人方」メイドさん１０人。横一列に並んで私たちにお辞儀した。

「ただいま、プリアムス、みんな。父様と母様・・・は、まだ仕事中か」

「はい。旦那様は司祭、奥様は枢機卿でいらっしゃいますから」

さっき門のモニターに映ったメイドさん――プリアムスさんがそう応じた。と、その時、「イリス！」シャルちゃんの名前を呼ぶ声がした。エントランスホールの奥にあるＹ字階段の右側にある扉から１人の男の人（お兄ちゃんと同い年くらい）が居て、シャルちゃんに手を振っていた。その男の人の奥から「コラ、ロッサ」女の人の声でそう窘めるのが聞こえた。

「おお！　ヴェロッサ、それにこの声は・・・カリム！」

シャルちゃんが満面の笑みを浮かべる。男の人――ヴェロッサさんと、扉の奥から現れた綺麗な女の人――カリムさん（忍さんと同い年くらい？）が「お邪魔しています」ってシャルちゃんにお辞儀した。

「うん、いらっしゃい。あ、みんなに紹介するよ。ヴェロッサ・アコースとカリム・グラシア。カリムはわたしと同じように聖王教会と管理局を兼任していて、階級は一等陸佐。ヴェロッサは本局・査察課に入ったばかりの査察官。んで、２人とも古代ベルカ式の使い手だよ。みんなの先輩ってことだね♪」

私たちの側までやって来たヴェロッサさんとカリムさんを紹介してくれたシャルちゃん。

「よろしくぅ～。ヴェロッサ・アコースだよ」

「カリム・グラシアです。よろしくお願いしますね」

「ファミリーネームが違うけど、２人は姉弟でね。カリムがお姉ちゃんで、ヴェロッサが弟ね」

私たちに笑顔を振りまいて、そして可愛がるようにシャルちゃんの頭を撫でるヴェロッサさんと、優雅に一礼するカリムさん。シャルちゃんは続けて「で、２人にも、そしてみんなにも紹介するよ。わたしの友達♪」２人やメイドさん達に私たちを紹介してくれた。私たちも自己紹介していく中、ルシル君とシグナムさん達が名乗ったところで「え？」カリムさんが信じられないことを聞いたって風に驚いた。

「初めてお目にかかった時からもしやと思いましたが・・・ルシリオン君、あなたは魔神オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードの関係者では？　それにリインフォースさん達は・・・グラオベン・オルデンの・・・」

「ああ。元グラオベン・オルデンで、今は八神の騎士パラディース・ヴェヒターだ」

シグナムさんがそう答えたら、カリムさんが「やはり、そうでしたか」って目を爛々と輝かせ始めた。そしてヴェロッサさんは「あなた達があの有名な・・・！」って驚きを見せた。

「古代ベルカ史にあるイリュリア戦争時、グラシア家はフライハイ

ト家と共に戦っていました」

「ええ、憶えているわ。ズィルバーン・ローゼのセリカ・グラシア。あなたのファミリーネームを聞いた時、私もね、もしかしてって思ったの」

シャマルさんがそう返すとカリムさんはさらに目を、表情を輝かせた。そんなカリムさんを見たヴェロッサさんが未だにシャルちゃんの頭を撫でつつ「カリムは歴史マニアだから」って苦笑。

「それで、ルシリオン君は・・・？」

「ふっふっふ～♪　ルシルはね・・・聴いて驚け、カリム、ヴェロッサ！　ルシルはわたしの未来の旦那様なのだ！」

シャルちゃんのこの突拍子もない発言には誰もが「へ？」と呆ける中、「いやだなぁ、イリス」ヴェロッサさんが笑い声を上げた。シャルちゃんがヴェロッサさんの手から逃れてルシル君の右腕に抱きついた。

「「あああああああ！！」」

声を上げるのはライバル関係にあるはやてちゃんと・・・どうしてかヴェロッサさんも。カリムさんが「この子ったら」って苦笑しているとヴェロッサさんは咳払いして「イリス。はしたないよ」ってやんわり注意しながらシャルちゃんとルシル君を引き放そうとした。はやてちゃんも「は～な～れ～て～」参加する。

「イリスお嬢様、カリム様、ヴェロッサ様、ご友人方も。いつまでもお立ちになっていてはお疲れになるでしょう。応接室へどうぞ」

プリアムスさんが咳払い1つするとシャルちゃんが「あ、ごめんね！」ルシル君の腕をパッと離して「こっち、こっち！」って先を行っちゃった。それを見送っていると「それでは皆様も」プリアムスさんが私たちを招いてくれた。

「遅ればせながら、わたくし、フライハイト家女中長のプリアムスと申します。今宵は最高のおもてなしをご用意させていただきますね」

他のメイドさんに仕事に戻るよう指示を出して、そう笑顔を向けてくれたプリアムスさんに「お世話になります！」って私たちも笑顔を返した。

Ｅｐｏｓ３０銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼ～ＰＡＬＡＤＩＮ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

シャルの実家へとやって来た俺たちはそこで騎士カリムとヴェロッサ査察官と出会った。そんな２人を交えてのお茶会としゃれ込むことになった俺たち。

四方５ｍのアンティーク調の正四角形テーブル、それを四方から囲う高価そうなコーナーソファが４脚。時計回りにカリム、ヴェロッサ、シャル、なのは、アリサ、すずか、フェイト、はやて、ヴィータ、リインフォース、シャマル、シグナム、ザフィーラ、そして俺。

ここに来るまでに街の商人から食べ物――甘いスイーツやフルーツを頂きまくったが、「美味しいぃ～　」満面の笑みを浮かべるはやて達と同じ、俺も別腹感覚で出されたケーキを平らげる。

「プリアムス。また腕を上げたんじゃない？　すごく美味しいよ♪」

「お褒め頂きありがとうございます、イリスお嬢様」

俺たちも「本当に美味しいです」とそう同意し、なのはが「お母さんが作ったのと同じくらい美味しい・・・」と僅かにショックを受けつつもその美味さを称えた。プリアムスの自作ケーキに舌鼓を打つ中、「ルシリオン君。先程の話の続きをお聞かせ貰ってもよろしいですか？」と騎士カリムに促された。

「俺が、オーディンの関係者か、でしたね」

最初にそう前置きした後、「まずお聞きしたいのですが、俺たちのこと、管理局から何か言われていますか？」騎士カリムとヴェロッサ査察官に尋ねてみる。騎士カリムは「ええ」と頷き、ヴェロッサは「あはは」と苦笑して頷いた。シャルが俺たちの空気を察して「プリアムス」と名を呼ぶと、プリアムスは「はい。失礼します」と断ってから退室した。

「・・・私はレティ提督やリンディ提督とも懇意にしていますし、敷かれた箝口令は二佐以下に適用されますので、一佐である私もみなさんの真実を知っています。が・・・ロッサ？」

「あー、僕は偶然・・・知っちゃったわけなんだ。大丈夫。絶対に誰にも話さないから」

騎士カリムとヴェロッサ査察官も俺たちの事情を知っている。事情を知らないのは達が小首を傾げているため、俺たち八神家が"闇の書"事件の関係者であり、その主と守護騎士だということに箝口令が敷かれ、当人である俺たちも他言無用とすること、それが二佐以下に適用されることを伝えた。するとなのは達は「うん、判った」と納得してくれた。ある程度踏み込んだところまで話をしても良いな。

「では、俺のことを話す前にもう1つ、お尋ねします。オーディンと当時のシュテルンベルク領主・エリーゼ卿との間に子供が出来、今も存続しているというシュテルンベルク家の先祖だと聞いたので

すが・・・」

昨夜のパーティでその話を聴いた俺は無様にもジュースをアリシアに吹き掛けてしまった。しかもその所為でアリシアに強制女装させられてしまったし。

「はい。間違いありません。エリーゼ卿の手記にも記されていますから」

「（嘘だろ。俺とエリーゼの間に子供が出来た？　確かにそういう行為には至ったが・・・）そうですか・・・」

シャルだけでなく騎士カリムからもそう言われては確定情報だ。チラッとシャルを横目で見る。とある契約でシャルと結婚したこともあったが、その際に子を成すことはなかった。肉体も得ていたし、成そうと思えば出来たが、お互いにその一線を超えようとは思わなかったからな。それを思えば"界律の守護神テスタメント"となってからの2万年近くで初めてになるよな・・・、自分の子孫が存在している事実があるなんて。

「写真データか何かあれば見せて頂いても・・・？」

「えっと・・・」

「あ、わたしが持ってるから見せてあげるよ」

持っていないのかカリムが言い淀むと、シャルがそう言ってテーブ

ル上にモニターを展開した。映し出されたのは１０代後半から２０代前半ほどの青年。茶色い髪に青い瞳は、エリーゼの身体的特徴と同じだ。髪型はインテークのショート、俺が後ろ髪を切った状態だ。

「パーシヴァル・フォン・シュテルンベルク。歳は２０。聖王教会の最高戦力・銀薔薇騎士隊（ズィルバーン・ローゼ）に所属する騎士で、教会騎士の中で槍術最強ということもあって、シュペーアパラディンの称号を持ってるの」

「現在のシュテルンベルク家は、魔神オーディンとエリーゼ卿の間に生まれた男女の双子、姉ルル、弟ベディヴィアの、それぞれの子孫から成り立っています」

騎士カリムは続けた。俺とエリーゼの子――ルルとベディヴィアは聖王戦争よりずっと後、シュトゥラ付の騎士として活躍し、ルルは魔導に優れた騎士・聖女、ベディヴィアは槍術に優れた騎士・聖槍と謳われたのだ、と。

「オーディンさんとエリーゼちゃんの子供の子孫かぁ。一度会ってみたいわね」

「そうだな。どこかエリーゼ卿の雰囲気に似ているから、話しやすそうだ」

「ふむ。槍使いとしての腕も確かなようだしな。オーディンと直に刃を交えた経験がある者として、パーシヴァルとも一度刃を交えたいものだ」

「これだよ。どんだけバトルマニアなんだよ、シグナム」

シャマルとリインフォースは当時のことを懐かしんでいるようで、シグナムは相も変わらずに最強（パーシヴァル）の槍騎士の戦力に興味を示し、ヴィータはそんなシグナムに呆れる。そんな彼女たちの会話を聞いていた騎士カリムが「シグナムさんは魔神オーディンと戦ったことがあるのですか・・・！？」と驚いた。

「ええ。オーディンが製作したばかりのエヴェストルムの試運転時を始めとして、それから幾度か試合という名目で刃を交えたことがあります。結局、一度も勝つことは出来ませんでしたが・・・」

当時の俺（オーディン）は今より魔力も体力にも恵まれていたからな。それにシグナムのクセや強さも、先の次元世界で十分理解していたから、それらがアドバンテージとなってシグナムを余裕でいなすことが出来たんだ。

「エヴェストルム。魔神オーディンらグラオベン・オルデンと共に行方知れずとなった伝説級の武装なんですが・・・、その、当時から姿の変わらないシグナムさん達や魔神オーディンと瓜二つのルシリオン君がいらっしゃるとなれば・・・」

騎士カリムが俺を見る。俺は小さく頷いた後、左手をそっとテーブル上に持っていき、中指にはめてある指環「エヴェストルム」をニュートラルで起動させる。３０ｃｍほどの柄の上下に１ｍほどの穂のある大槍――"剣槍エヴェストルム"が俺たちの目の前に現れた。

「エヴェストルムはオーディンやシグナム達のある戦闘によって全滅した後、セインテスト家の協力者によってベルカより回収されました。その後、歴代のセインテスト家の長男に受け継がれてきました。俺も長男ですから、こうして俺も扱えます」

「やはり魔神オーディンは戦死を・・・？」

俺の話を聴き終えた騎士カリムが確認するかのようにそう聞いてきたため、「やはり、とは？」と聞き返す。騎士カリムは話してくれた、古代ベルカ史において魔神オーディンとグラオベン・オルデンの晩年がどうであったのか、歴史学者の間で議論になっているそうだ。

「――病死・事故死・戦死・暗殺などなど。ですが、セインテスト家という魔神オーディンの血族、その本流の末裔らしいあなたが言うのであれば、戦死、が正しい魔神オーディンの結末だったのでしょう」

騎士カリムは「不謹慎ですがよいお話を聴けました」と満足そうだった。エリーゼの日記というものがいつから書かれ、どういった内容なのかは判らないが、オーディンの頃に彼女に語った天涯孤独という情報は現代にまで残されていないようだ。だからオーディンが死んでもセインテスト家が存続していると公言もしても問題ないわけだ。

（ま、すでに俺一人だけとなっているから今さら気にすることもな

いが）

それから俺たちは騎士カリムやヴェロッサ査察官から本局の話を聴いた。どこの料理店が美味しい、どの上司が厳しい、休憩するならどのカフェテリアがいい、などなど。俺たちからはどういう風に出会ったのか、これからどの部署で働くのか、ここミッドへ来た目的などを話す。そして最後にシャルが執務官補佐を辞めて嘱託魔導師へ異動したいと話した時・・・

「イリス、それってまずくないかい？　イリスの御父上――リヒャルト司祭の反対を押し切って入局したのに、それをさらに我が儘で変更するとなると・・・雷が落ちるんじゃないかな？」

「お友達と一緒に同じ学校に通いたいという気持ちは判るけど・・・」

騎士カリムとヴェロッサ査察官が悩んだ。シャルの父親は色々と厳しい人らしい。シャルも「判ってるけど、でもみんなと一緒に通いたいんだよ～」父親の厳しさを思い返してか若干震えているが、それでも決意を通すようだ。

「大丈夫だよ、シャルちゃん。私たちも出来るだけ力になるから」

「うん。私もシャルと一緒に学校に通ってみたいし」

「絶対に面白くなりそうじゃない、あんたも一緒だと？」

「確かに♪　私もシャルちゃんと一緒に学校に通ってみたいな～♪」

なのは達が味方になることを決めた。するとはやても「わたしもシャルちゃんと一緒やとええな♪」とシャルの通学賛成派に回った。シャルは「わたしもいいの？」とはやてに確認した。その確認には俺の存在が関係しているんだろうな。あぁ、来年の俺・・・胃潰瘍とか患っていないだろうな・・・。

「もちろんや。同じ舞台でも負けへんからな♪」

「うぅ、わたしも負けないよ！・・・でも、ありがとう♪」

そうして時間は流れて行き、騎士カリムとヴェロッサ査察官は帰り、俺たちはプリアムスを筆頭としたメイド達お手製の料理が出来るまでシャルの部屋に行こうかという話になったいたところで、「イリスお嬢様。旦那様がお帰りになられ、アルテルミナス様とミミル様がいらっしゃいました」と、プリアムスとは別のメイドが報せに来た。

「ルミナだけじゃなくてミミルさんまで・・・？」

シャルが本当に驚きを見せている。アルテルミナス。俺の魔法や"エヴェストルム"を粉砕した騎士で、教会騎士の中で最強の拳闘騎士、そしてこれからは俺たち八神家の同僚。だが「ミミルさんというのは？」その名は聞き覚えがないため、シャルに聞いてみた。

「ミミル・テオフラストゥス・アグリッパ。はやて達に紹介したか

った、融合騎にも詳しい古代ベルカ式の技術者だよ」

「なら、今からでも話すが出来たりしないか？」

明日に回すより出来るだけ早く話を通して、リインフォースⅡの誕生を早くしたい、と思ったからそう提案してみた。先の次元世界では聖王教会とのコネを手に入れるまで2年も掛かったからな。今回はそれよりもっと早く。リインフォースが消えるまでに、2人を会わせてやりたい。

「わたしからもお願いや、シャルちゃん」

はやても、そしてリインフォース達もシャルに頼み込んだ。シャルは「もちろんっ♪」と笑顔で請け負った後、応接室を飛び出して行った。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

父様が帰って来た。それだけじゃなくてはやて達の目的、ミミルさんがやって来た。はやて達に今からでも話が出来ないかってお願いされたわたしは、友達として叶えたいために応接室を飛び出して、エントランスホールを目指してダッシュ。

着いたエントランスホールにはプリアムスと双子メイド――ルーツィアとルーツィエ、そして父様、ルミナとミミルさんが居た。わたしは「お帰りなさい、父様。いらっしゃい、ルミナ、ミミルさん」そう挨拶しながら父様たちの元へ急ぐ。

「イリスか。ああ、ただいま。・・・ん？　彼女たちはどちら様かな？」

父様がわたしの後ろを見てそう言うから振り返ってみると、わたしを追いかけて来てくれたなのは達が居たから、「わたしの大切な友達です！」と紹介する。なのは達がわたしの元まで来てくれて父様に自己紹介してく。

「イリスの父、リヒャルトだ。娘がいつも世話になっている」

父様と、「こちらこそお世話になっています」なのは達がそう挨拶を返してる中、『ミミルさん。良ければ今からでも・・・』チラッとはやて達に視線を移す。するとミミルは肩に掛かる程度の白髪をサッと払って、『そのために来たんですもの～。部屋を借りるわね～』特徴的な間延びした口調でそう言った後、ウィンク。

「はやて達はさっきの応接室でミミルさんから融合騎について話をしてもらって。はやて達とミミルさんを応接室へ」

ルーツィアとルーツィエに指示を出すと2人は「ヤヴォールです、お嬢様」と敬礼して、はやて達とミミルさんを応接室へと案内しに行った。さてと。あとは「父様。お話があります」本日のラスボス、父様に視線を移す。

「お前が真剣な顔をして話があるとなると、どうも嫌な予感しかしないな」

ジッと見詰めてくる父様。側になのは達が居るっていうのが支えだけど、出来れば母様が居てくれれば、と強く思う。でも切り出した以上はもう後には引けない。

「い、今のわたしの管理局での雇用形態の変更をお願いしたいと思って・・・」

そこまで言っても父様は無言。続きを話せ、ってことだろうからお願いしたいことを全て伝える。執務官補佐から特別技能捜査課への異動、雇用形態を正式から嘱託への変更、そして第９７管理外世界・地球は日本、なのはたち友達と同じ学校へ通いたい、と。父様はしばらく無言を貫いて、そして・・・。

「馬鹿を言うな。管理局にはお前の我が儘で入ったのだぞ？　それをまた我が儘で異動など・・・。お前は栄えあるフライハイト家の長女だ。本来ならば聖王教会の司祭、果てには教皇になるための教養に務めるのがお前の人生だ」

頭ごなしにわたしの願いを却下してきた。父様は続けて、学校ならミッドの学校で十分だとか言ってきた。そこにはなのは達は居ないって話なのに、父様はそれを解ろうともしない。

「一度決めたことなら最低３年は正式雇用・執務官補佐を続けなさい。もちろん、管理外世界の学校へ通うのは諦めなさい。いいな、イリス？」

わたしにそう強めに言った後、「騎士アルテルミナス。ここまでの

護衛、感謝する」父様がルミナに小さく頭を下げる。ルミナほどの騎士を護衛に就けるなんて何考えてるの？ってツッコみそうだったけど耐える。そしてこの場から去ろうとしたから「待ってください！」呼び止める。ここで引くわけにはいかない。なんとしても許可を取ってやる。

「わたしは聖王教会を蔑ろにしてるつもりはありません！　でも、わたしだってまだ子供です！　友達と一緒に居たいって思って何が悪いんですか！」

「そうは言っていない。友人は大切だ、その関係は大事になさい。しかし、それとは話が別だ。我が儘を通して入った管理局。世界を見て回りたいからと執務官補佐となり、ハラオウンさんに無理を言って艦船アースラに乗せてもらったこと、忘れたのか？」

そこを突かれるのはやっぱり痛い。わたしが言い淀んだところで、「私たちからもお願いします！」なのは達が頭を下げて父様に願い出た。それでも父様は「申し訳ないが、承諾できない。イリス。これからもしっかりと執務官補佐として頑張りなさい」なのは達が一緒にお願いしても頑なに拒否ってくる。

「本当は父様にもちゃんと認めてほしかったけど、もういいです。母様に――」

「イリス！」

フライハイト家は男性より女性の方が偉い。母様なら私のお願いを

聴いてくれる。そうしたら父様も聴かざるを得なくなる。本当はこんな形で叶えたくないけど、わたしはどうしてもなのは達と一緒に学んで、成長して行きたいんだ。

「・・・騎士アルテルミナス。お時間はまだよろしいか？」

「え、はい・・・、本日はもう終業していますし、明日はお休みですから」

父様がルミナにそんなことを訊いた。一体何をするつもりなのかと思えば、「騎士アルテルミナスに勝てば、お前の願いを受けよう。負ければ、諦めなさい」なんて馬鹿馬鹿しいにも程がある提案をしてきた。

「か、勝てるわけがないじゃないですか！　ルミナはパラディンですよ！」

「父である私が聴かないからと言ってすぐに母親（マリアンネ）に頼ろうとする、その根性を叩き直す。騎士アルテルミナス。一切の手加減無用で願いたい」

「・・・了解しました。ごめんね、イリス。そういうわけだからさ」

「ルミナ・・・！」

友達ならわたしの味方になるのが人情ってものじゃないの！？　そう叫びたいのを耐えて（本心が言えないの辛すぎ）、「せ、せめて

誰か手伝いを、二対一なら、たぶん・・・！」パートナーを付けさせてほしいと父様に頼み込む。さすがにルミナを相手に一対一なんて無謀が過ぎる。でも、ルシルと一緒ならきっと・・・。

「騎士アルテルミナス」

「私はそれで構いませんけど。『その方がイリスを勝たせ易くなるかもだしね♪』」

思念通話で八百長してくれるらしいことを伝えてきてくれたルミナはやっぱり、『ありがとう、ルミナ』わたしの味方だった。

「シャルちゃん。私たち、いつでも戦えるよ・・・？」

なのはが待機形態の"レイジングハート"を取り出してそう言うと、アリサ達もそれぞれ相棒（デバイス）を手に取ってわたしのパートナーになるって願い出てくれた。そんななのは達にわたしは「ありがとう、嬉しいよ。でも、ごめん」って感謝と謝罪を言いつつ、はやて達の居る応接室へと振り向いた。なのは達はそれだけで察してくれた。

「ルシル君、か。うん、そうだね」

「私たちの誰よりも強いし」

「わたしの為に戦うって言ってくれて、ホント嬉しかった♪」

改めてなのは達にお礼を言った後、『ルシル、今いい？』ってミミ

ルさんと話し合ってるはずのルシルに思念通話を通す。ルシルは『どうした？』すぐに応じてくれて、今まで経緯を話す。

『――だから、ルミナとの戦いを手伝ってほしい。一応ルミナはわたしを勝たせてくれるそうだけど、でも簡単に勝つと父様に怪しまれる・・・』

『なるほど。あくまで全力で戦ったと思わせなければならない、か。判った、手伝おう。すぐに向かう』

『ありがとう、ルシル』

思念通話が切れてからちょっとすると、ルシルがはやて達とミミルさんを連れてやって来た。父様にはやて達のことを紹介した後、「父様、ルミナ。わたしのパートナーが、彼です」改めてルシルを紹介。

「ルシリオン、だっけ？　どこかで会ったことない？」

ルミナがルシルにこれでもかって顔を近付けてそう聞く。それに対してルシルは「いいえ。ただ、この姿では会ったことがありますが」って大人形態に変身、しかも頭部はあのデフォルメチーターの被り物にしている。

「パラディース・ヴェヒターのランサー！？　え、じゃあ・・・八神家のみんなって・・・！」

ルミナがビックリしながらはやて達を見るから、はやて達もそれぞれパラディース・ヴェヒターとしてのコードネームを言っていった。ルミナは少しの間呆けた後、『ごめん、イリス。私、八百長できそうにない』青緑色の魔力光を全身から放出させた。

「これまで闘ってきた魔導師や騎士とは絶対に勝敗を決めてきた。唯一、ランサーだけは有耶無耶になっちゃって。だからね・・・キッチリ決めたいんだよ。どっちが強いのかさ！」

終わった。ルミナが本気モードになっちゃった。エントランスホールに満ちる圧倒的な威圧感と戦意に、なのは達が1歩2歩と後ずさる。わたしだってこの場から逃げ出したくなったけど、「それでもわたしが、わたし達が勝つもん！」ルシルの手を握ってそう言い放つ。

「面白い。リヒャルト司祭。場所をお借りします。どこがよろしいですか？」

「こっちだよ、ルミナ。プリアムス、みんなを連れて来て」

ルシルとルミナを連れて先行するわたしはプリアムスにそう指示。プリアムスがなのは達を連れて来るのを確認。目指すはフライハイト城の裏庭に設けられている訓練施設――闘技場だ。

『シャル。アルテルミナスと戦う前に1つ、確認したい。彼女も何かしらのレアスキル保有者、なんだろ？』

『そうだよ。終極（エクスィステンツ・ツェアレーゲン）の支配者。受けたことがあるから判るでしょ？・・・この世に存在しているもの――触れさえ出来れば全てを思いのままに分解できるんだ』

『馬鹿な！・・・それはあまりにも――』

『反則、でしょ？　対魔導師戦じゃ間違いなく最強だよ。半端な魔法は直撃する前に分解される。近接戦が苦手とされる魔導師じゃ何も出来ずに・・って感じ。騎士が相手でも同じ。格闘センスが並じゃないから、下手に攻めればデバイスどころか防護服、最悪、人体破壊までいっちゃう』

闘技場に着くまでの間、ルミナの能力について話す。ルミナに限らずレアスキルというのは基本、魔力に依存しないからどんな環境下でも使える。そんなルミナの能力に対する唯一の相殺手段は、わたしの能力・絶対切断アプゾルーテ・フェヒターー。ルミナが破壊するならこちらは切断する、だ。

（とは言っても、ルミナほど制御できないから対人戦じゃ使いたくないんだけど・・、というか許可が下りないし）

そうとなれば、最後はルシル頼みだ。ルシルの圧倒的物量魔法によるカウンターー潰し。隙を突いてわたしがルミナに一撃を与えればなんとかなる、はず。

「――着いたよ。この扉の先が、闘技場だよ」

城から伸びる渡り廊下を５０ｍと抜けて辿り着いた決戦の場――闘技場。四方１００ｍの正四角形状のエリアで、全面石畳。四方には階段状の観客席。その観客席の四角には直径２ｍの燭台があって、そこから炎が噴き上がってるから夜でも明るい。
闘技場の舞台にはわたしとルシル、そしてルミナだけが残って、父様やなのは達はみんな観客席に上がった。次いで闘技場と舞台を囲うようにして展開された二重結界。これで闘技場の外にも、観客席に居るなのは達にも迷惑は掛からない。

「さーて、それじゃあ始めようか？　ルシリオン、イリス」

ルミナがキャミソールにカーディガン、キュロットパンツっていう私服から、ビスチェワンピースにショートパンツ、ボレロ、ブーツっていう騎士甲冑へと変身。デバイスである２つの腕輪、"ツァラトゥストラ"は起動しないまま。
わたしも騎士甲冑へと変身して、相棒の"キルシュブリューテ"を起動させる。ルシルはもう変身を終えているから、"エヴェストルム"を起動させるだけ。闘技場の中央にまで移動、そして騎士としての礼を行う。

「聖王教会騎士団・銀薔薇騎士隊（ズィルバーン・ローゼ）所属・ファオストパラディン、アルテルミナス・マルスヴァローグ」

「聖王教会騎士団・朱朝顔騎士隊（ロート・ヴィンデ）所属、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト」

「八神家・パラディース・ヴェヒター、八神ルシリオン・セインテ

スト」

わたし達は名乗りを上げて、「いざ参る！」同時に発する。

――舞い降るは、汝の無矛（コード）（パディエル）――

わたしとルシルは同時に一足飛びで１０ｍほど後退。と同時に蒼く輝く魔力で出来た槍がわたし達の頭上から１００本以上と降り注いできた。わたし達に当たる軌道は１本もなく、だけどルミナには惜しげもなく降り注いでいく。

「すごい、すごい、すごいっ♪」

ルミナは嬉しそうに槍の雨の中をジグザグに駆けて来て、「邪魔！」当たる槍はペシッと払い除けて粉砕する。ルミナには接近戦を挑んじゃダメ。それを大前提として、騎士にあるまじき「中遠距離で攻めまくる！」でルミナを撃破する。

「キルシュブリューテ！」

≪ヤっヴォ～～ル♪　カートリッジをロード♪≫

「光牙・・・！」

≪針縫刃（しんぶじん）！！≫

"キルシュブリューテ"を石畳に突き刺すと同時、わたしの魔力光

・真紅に光り輝く魔力の剣山が波のようにルミナに向かって突き上がっていく。空からは槍の雨、足元からは剣山の波。ルミナの足を少しでも止める為の魔法だったけど、「無・駄　」ショルダータックルで剣山と槍の雨を強引に突破してきた。

「本当に途轍もないな、アルテルミナス・・・！」

――我を運べ、汝の蒼翼（アンピエル）――

「本当に、ね！」

ルシルの右手に掴まって一緒に空へと上がる。ルミナはわたし達の足元で急停止した後、ジャンプ体勢に入った。ルミナがジャンプする前に「よっと！」ルシルに引っ張り上げられて、そのまま空高く投げ飛ばされる。空のわたし、宙のルシル、地のルミナが縦一列に並んだ状態になった時、「手を抜いていると、すぐに終わるよ！」ルミナがジャンプした。

「屈服（コード）させよ、汝の恐怖（イロウエル）！」

ルシルの足元とルミナの後方に展開された2つの円陣から銀の巨腕イロウエルが出現。真正面と真後ろからルミナに殴りにかかった。

「拳打強化（フェアシュテルケン）・・・、ファルコンメン・ツェアシュティーレン！」

イロウエルの陰からルミナが能力だけじゃなくて魔法を同時に使う際の掛け声、拳打強化、が聞こえた。その直後、2つのイロウエル

がバラバラに粉砕された。イロウエルを構成していた岩石っぽい瓦礫が宙に舞う。

『ルシル！』

『ああ！』

思念通話で合図して、魔力として霧散することなく宙に留まる（どうやってるんだろ？）瓦礫を足場として降り立つ。瓦礫からちょこっと顔を出してルミナの姿を捜す。ルミナも瓦礫を足場として立っていて、キョロキョロとわたしとルシルを捜してた。

そんなルミナの背後に浮かぶ瓦礫の後ろにルシルが気配も音も無く現れて、目の前の瓦礫を"エヴェストルム"で砕くと、さらに細かくなった瓦礫がルミナを急襲。

だけどルミナは焦ることなく両拳を目にも留まらぬ速さで打ち込んでいって全て粉砕・・・している中で、「せい！」わたしも"キルシュブリューテ"で瓦礫を粉砕して、ルミナの斜め上から襲わせる。

「何を企んでいるのか知らないけど・・・！」

ルシルの飛ばした瓦礫を素早く片手で粉砕しつつ、わたしの飛ばした瓦礫も片手で粉砕するルミナ。わたし達の居所を探そうとして周りを見回しているけど、わたしとルシルで交互に粉砕して小さくした瓦礫をルミナに向かわせ続けているから、「ちょっと、邪魔！面倒くさい！」上手く行かずにイライラ。

――チェーンバインド――

その中でルシルが宙に浮いてる瓦礫すべてをチェーンバインドで繋ぎ合わせて、

――殲滅(コード)せよ、汝(カマエル)の軍勢――

さ、ら、に、魔力槍数百本がルミナの全方位に展開された。これからの攻撃に巻き込まれないためにわたしは魔法陣の足場――シュヴァーベン・マギークライスを展開して、瓦礫からそっちへ跳び移る。

「これでどうだ！」

ルシルがチェーンバインドに手を掛けて思いっきり引っ張った。すると全ての瓦礫がルミナに向かって殺到。続けて「ジャッジメント！」待機してた魔力槍群も一斉発射。瓦礫の対処だけじゃなくて魔力槍もどうにかしないといけないんだけど・・・。

いくらなんでも能力発動の要な両手足だけじゃ対処しきれない。となれば、回避に徹するしかない。離れた場所に居るルシルと頷き合って迎撃準備に入ろうとした時、ルミナは「すぅぅーーー」とこれでもかってくらいに息を吸い始めた。

「だぁぁぁあああああああああああああッッ！！」

――シュライエンパンツァーーーー

力足を踏んだ後、大声で咆えた。それと同時にルミナを中心に全方位へ空間の歪みが広がっていって、迫って来ていた瓦礫を押し返し

た。そして魔力槍群は全て消滅させた。わたしは慌てて瓦礫の回避に力を注ぐ。魔法陣から飛び降りて、迫り来る瓦礫を足場として徐々に降下。その中で、「ごめん。ルシリオンとの戦いを邪魔されたくないんだ」耳元に届く、ルミナの悲しげな声。

「どこ・・・！？」

「シュトゥースヴェレ・・・！」

避けきれなくて仕方なく斬り裂いた瓦礫の裏側から飛び出して来たルミナが、振りかぶっていた右拳を突き出してきた。無駄だって解っていても物理障壁、ハルトリーゲル・シルトを展開して、刀身をさらに盾にする。そして・・・ガンッとルミナの拳が障壁に衝突。

「うぐふっ・・・！？」

障壁は壊されず、"キルシュブリューテ"も無事だったけど、そんなもの始めからないって感じでわたしのお腹を途轍もない衝撃が貫通して行った。弾け飛ぶわたしの騎士甲冑の腹部部分。背中に受ける空気の感じから言って、背中の方も弾け飛んでそう。

「「「シャル！」」」「「「シャルちゃん！」」」」

ルシルやなのは達の声が、今にも途切れそうなわたしの意識を繋ぎ止めてくれる。だけど・・・ごめん、もうダメ。やっぱり無理。今の一撃が余程よかったのか全身から力が抜けて、意識もまた朦朧としてくるんだ。

（・・・行きたかったなぁ、聖祥小学校・・・）

諦めそうになった時、『まったくさぁ。私の転生体ならもうちょっと足掻きなさいよ』って脳内に響く『シャルロッテ様・・・』のお声。フライハイト家の初代当主の妹君で、ベルカ以前レーベンヴェルトを御救いになった神話級の騎士、そして最近知ったけど前世のわたしでもある御方だ。

『お助け下さい、シャルロッテ様・・・』

『・・・しゃあなし、か。大サービスだからね、もう1人のシャルロッテ♪』

――真紅の両翼（ルビーン・フリューゲル）――

体の支配権がわたしからシャルロッテ様に移ったのが判った。魔力が引き出されて、背中からバサッと魔力で出来た翼が生まれた。翼を羽ばたかせて体勢を立て直して、ルミナから距離を取る。さらに「醒めよ、ゼーゲン」わたしの口から何かしらの名前が発せられたら、胸のうちが熱くなって、意識や痛みが回復した。

「ルシル！　サポートお願い！　勝つよ、絶対！」

「君は・・・！　ああ、いいだろう！」

――弓神の狩猟（コード・ウル）――

ルシルが弓矢を魔力で創りだして、「往けッ！」槍のように長い矢を発射。向かうのは宙に佇むルミナ。矢は途中で無数の光線となってルミナを全方位から襲うけど、「ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース」超高速移動魔法によって瞬時に包囲から離脱して、ルシルの元へとそのまま突進・・・「させるかっつうの！」の前にシャルロッテ様が立ちはだかる。

「『イリス。よく見て、感じて、習得しなさい。絶対切断能力（キルシュブリューテ）の使い方！』せい！」

――光牙月閃刃（シャイン・モーントズィッヒェル）――

「なんで空を飛べているのか、気にはなるけど今は・・・！」

――ファルコンメン・ツェアシュティーレン――

真紅の魔力を纏う"キルシュブリューテ"と、ルミナの素手が真っ向から衝突。普通ならデバイスの方が砕かれるけど、今回は砕かれることなくそれどころか「痛っ・・！？」ルミナにダメージを与えた。

「今の・・・絶対切断（アブゾルーテ・フェヒター）・・・！？」

――燃え焼け、汝の火拳（コード セラティエル）――

驚きのまま後退したルミナの頭上から降って来たのはルシルの火炎

砲撃。隙だらけだったにも関わらずルミナは拳を振り上げて、砲撃を真っ向から殴って粉砕。

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

グンッと目の前の景色が一瞬にして後方に流れる。一気にルミナとの距離を詰めたシャルロッテ様はすぐさま攻勢に移った。"キルシュブリューテ"を連続で、わたしじゃ出来ないような軌道と速度で振るい続ける。でも、ルミナも負けてない。シャルロッテ様の斬撃を同じ速度で殴って迎撃し続ける。

「あ、あれ、あれ？・・・イリスってこんなに強かったっけ・・・！？」

『さすがテルミナス、か。強いのは相変わらずってわけね・・・！』

驚愕するルミナと驚嘆するシャルロッテ様。互いの間で激しく飛び散る火花。なかなか決定打を与えることが出来なかったからか、2人は同時に後退して距離を取った。

「シグナム、あなたの技、借りるね」

シャルロッテ様は具現した鞘へ"キルシュブリューテ"を納めて居合の構えを取って、カートリッジを3発ロード。対するルミナは魔法陣の足場を創って降り立ち、「そこまで強かったなんて、驚きだよ」満足そうに笑って、クラウチングスタートの体勢に入った。

（それでもまだ・・・デバイスは使わないんだね、ルミナ・・・）

「紫電・・・！」

「拳撃必壊・・・！」

時間が止まったかのような錯覚に陥る。張り詰める空気に、観客となってるわたしも息が詰まって息苦しさを感じる。それがいつまで続くのか、ちょっと不安になっていた時、パチンと指を鳴らす音がした。

「清霜！」「オクスタン・・・！」

互いに一足飛びで最接近して間合いに進入。シャルロッテ様が鞘内で魔力を爆発させる事で抜刀速度を上げた居合抜き・紫電清霜を繰り出す。ルミナは真っ向から左拳を繰り出した。衝突する刃と拳。さっきみたいに拮抗するのかと思えば、シャルロッテ様は左に持っていた鞘に魔力を纏わせて、「飛天御剣流・双龍閃！」その鞘で刀身を打って威力増加を狙った。けど、それはルミナも同じだった。

「ズィーガァァァーーーーッッ！」

ルミナも右拳を繰り出して"キルシュブリューテ"の刀身を殴った。一瞬の拮抗の後、終わりを迎えた。

「「っ・・・！？」」

シャルロッテ様の両手から"キルシュブリューテ"と鞘が弾け飛び、

ルミナは大きく両腕を左右に弾かれて無防備な体を晒した。この瞬間、シャルロッテ様の敗北が決まった。ルミナは徒手空拳の騎士で、シャルロッテ様は剣士だ。ルミナは弾かれた両腕を構え直すことなく、シャルロッテ様の頭部を左右から殴りつけようと振るった。終わりだ。諦めそうになった時、

――集い纏え（コード）、汝の雷撃槍（フルグルゼルエル）――

蒼い雷光を纏う二剣一対形態の"エヴェストルム"の柄がシャルロッテ様の両手にスポッと収まった。

「んな・・・・！？」

「雷牙双月刃！」

「ぅぐ・・・・！」

ルミナの一撃が入るより早く、シャルロッテ様の雷光纏う斬撃がルミナを捉えた。それで決着。ルミナは足元に魔法陣の足場を創って「負けました」ってそこにへたり込んだ。

「シャル。お疲れさまだ」

ルシルが飛んで来て、「うん、お疲れさま～、ナイスタイミングだったよ♪」って満足そうに言うシャルロッテ様から"エヴェストルム"を受け取った。

こうしてわたしはシャルロッテ様のおかげで、来年からなのは達と

同じ聖祥小学校へ通うことが決まった。

Ｅｐｏｓ３１－Ａ砕け得ぬ闇の使徒～Ｆｒａｇｍｅｎｔ　ｅｉｎｅｓ　Ｄｕｎｋｅｌｈｅｉｔ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

シャルちゃんの家にお呼ばれしたあの日から数日と経った今日。わたしら八神家は今、本局へ赴いてる。ホンマは日本で今年最後の３１日をみんなで過ごす予定やったけど、それより優先するべき用事が出来たからや。

。―。―。回想や。―。―。

シャルちゃんの家に来たその日のうちにわたしの目的を果たすことが出来た。融合騎に詳しいってゆう技術者、ミミルさん。技術者ってゆうからもっとこう・・・体の弱くて気難しそうな男の人を想像してたけど、シャルちゃんに紹介された人は女性やった。ブラウスにタイトスカート、そして白衣って格好は医者っぽいし。しかも「はじめましてぇ～。私がミミルよ～」リインフォースやシグナム以上におっぱいが大きくて背も高い。妖艶って言葉がよく似合う人やった。そんなミミルさんと一緒に双子のメイド、ルーツィアさんとルーツィエさんに連れられて元の応接室に戻った後、わたしらも自己紹介を終えた。

「イリスちゃんから話は聴いているわ～。融合騎を生み出したいってことだったわね～」

「はい。出来れば早い内に・・・」

ミミルさんは長い脚を組んで、「そうね～。早くても3ヵ月はかかるわね～」って言うた。リインフォースの寿命は半年。その内の半分。リインフォースと新しいわたしのパートナーが一緒に居れる時間がある。それは願ってもないことや。

「はやてちゃん、だったかしら～。あなたがロード、マイスターになるのよね～。どういった風な融合騎にしたいの～？」

「どういった風、ですか・・・？」

「そう～。男の子、女の子、男性、女性。人型に限らずに～、猫や犬とか～。いろいろとね～」

わたしの両側に座る家族みんなに一度視線をやる。まず動物型か人型かで言うたら、絶対に人型。これは相談するまでもなく決まってる。ヴィータが「はやて！　あたしより小さい、妹みたいにして！」そうリクエスト。ヴィータより小さい子かぁ。

「古代ベルカ、その中期以前は成人サイズが普通だったけど～、それ以降は手の平サイズの融合騎が主流だったらしいわ～。コストも少なく済むしね～」

ミミルさんが両手でこのくらいって風に大きさを示した。手の間の幅から言って３０ｃｍちょい。リインフォースが「アギトやアイリくらいの身長だな」って納得した。オーディンさんを主としてた当

時、みんなの家族やった融合騎、アギトとアイリ。絵でしか見たことないけど、描かれてた笑顔を見ればええ子やってことは判る。

「みんなはどうや？　わたしはみんなの希望を聴いときたい。みんなで一緒に生みたいからな、新しい家族を♪」

そうゆうわけで、みんなの意見を取り入れながら八神家の末娘のイメージを作り上げてく。まずわたしの意見は、リインフォースの外見と名前の引き継ぎ。ヴィータは、自分より身長の低い子。シャマルは、ヴィータくらいの身長への変身機能（アギトとアイリも持ってたらしい）。リインフォースは、自分の身を守ることが出来て、なおかつわたしの役に立てるだけの魔法を扱える。シグナムやザフィーラは意見無し。

「ごめん、はやて。少し席を外すよ。途中で退席する事お許しを、ミミルさん」

そう話し合うてると、ルシル君がソファから立ち上がった。事情を聴けば、シャルちゃんが来年、わたしらと同じ聖祥小学校へ通えるかどうかの試練真っ只中ってことで、許可を貰うにはアルテルミナスさん勝たなアカンってことみたいで。そこでなんでルシル君が絡んでくるんかって話やけど、２対１の条件を取り付けたってことで、シャルちゃんはルシル君をパートナーに選んだ。

「ま、シャルだけ仲間外れにするのも可哀想だし。それに、アルテルミナスには苦汁を呑まされたからな。その借りを返そうと思う」

ルシル君は個人的な目的もあってシャルちゃんに付き合うことにした。わたしもシャルちゃんとは一緒に通いたいって思うから、「わたしも応援するよ」ルシル君について行くことにした。とその前に、「ごめんなさい、ミミルさん」に謝る。

「いいわよ～。イリスちゃん達の戦いが気になってこっちの話に集中できなかったら困るもの～」

そうゆうわけでルシル君と一緒にシャルちゃんのところへ向かって、そうしてルシル君&シャルちゃんVSアルテルミナスさんを観戦。結果的にシャルちゃんの一撃がアルテルミナスさんを捉えて、降参させた。

「約束です、イリス(私)を・・・・、わたしの、管理外世界の学校への転入を――」

「判っている。・・・見事だったよ、イリス。少し見ない間にここまで強くなっていたとは・・・。転入続きをハラオウンさんにお願いしよう」

シャルちゃんのお父さんが寂しげにシャルちゃんを見て、シャルちゃんの転入を認めた。それからわたしらはシャルちゃんのお父さんやアルテルミナスさん、ミミルさんを交えての食事会。その後はみんなでお風呂タイムや。ルシル君とザフィーラを除く女の子全員が入ってもまだ余裕のある大浴場。

「――それで～、さっきの続きなんだけど～。いいかしら～？」

湯船に浸かって両脚をリインフォースにマッサージされてると、歩く度に揺れる胸を強調するように腕を組んだミミルさんがとろ～んとした目を向けて来た。わたしは「はい、お願いします」ってマッサージを中断、ビシッと居住まいを正す。

「あなたの魔導スタイルなんだけど～。あなたって～、変身時はどういった魔導スタイルなのかしら～？」

わたしの魔導スタイル。そこんところはまだよう判らへんからリインフォースをチラッと見ると、「では、私から話しましょう」って引き継いでくれた。

「主はやてのスタイルは遠距離・遠隔発生、そして私の広域攻撃が合わさった後方支援タイプです。融合騎としての機能を失った私が以前主はやてとの融合時には、魔力の管制・補助を徹底しました」

リインフォースがそこまで言うたところで、「実際はこんな感じだよ」ってシャルちゃんがモニターを展開。表示されてるのはリインフォースとユニゾンしてるわたしや。それを見たミミルさんがいろいろと質問してきたから、リインフォースで答える。わたしの持ってる本は何か、杖は何のためか、とか。答えられへん本の名前とかは、「特秘事項なので。ごめんなさい」ってシャルちゃんが代わりに謝ってくれた。

「――ふんふん。本は蒐集した魔法を貯蔵しておくストレージ型のデバイスで～、杖は単なる魔法発動媒体というのね～。はやてちゃ

ん、君～、面白いわね～。遠距離・遠隔発生・広域攻撃・・・。後ろからのトンデモ魔法での前線援護というわけね～。それじゃあ新しい融合騎の魔導スタイルは～・・・、近接戦タイプにする～？」

「あ、出来ればリインフォースと同じでお願いします。わたしや他のみんなともユニゾンして補助が出来るように」

わたしだけやなくてルシル君やシグナム、ヴィーター――前線で戦うみんなともユニゾン出来たらええなぁ、って前々から思うてた。

「マイスターがあなたで～、ロードはあなたを含めた八神家ということでいいのね～」

「それでお願いします」

ミミルさんが手元に展開したモニターとキーボードに何かしら打ち込み始めた。その間、「融合騎については私が責任を以って生み出すわ～」ってそう言うてくれた。わたしとリインフォース、近くで話を聴いてたシグナム達も「ありがとうございます！」ミミルさんにお礼を言う。

「ええ～、任せてね～。それじゃあ～私への依頼は～、融合騎1騎だけでいいのね～？」

「あ、いえ。出来れば、魔導書と杖・シュベルトクロイツの開発もお願いしたい」

「リインフォース・・・？」

「主はやて。今はまだ私が居ることで魔導書もシュベルトクロイツも扱えます。ですが私はいずれ消え逝く身。そうなれば魔導書もシュベルトクロイツも消失します。そうなってからでは遅いので、早い内に造って頂いた方が良いかと」

そうやったな。今のわたしが魔法を使えるのはリインフォースが居ってくれるからや。リインフォースが居らんくなれば、〝夜天の書〟もシュベルトクロイツも失くなってしまうんや。

「申し訳ないんだけど～、魔導書と杖に関しては他を当たってくれないかしら～。融合騎ってほら～、繊細だから～、そっちに掛かりっきりになっちゃうのよね～。ストレージデバイスはミッド式の方が良いだろうし～。杖はまぁ～、こっちの技術部でも開発できるけど～、でもどうせなら魔導書と同じ技術者に造ってもらった方が良いと思うのよね～。管理局本局、その技術部に知り合いが居るから～、彼に紹介状を出しておくわね～」

。―。―。終わりや。―。―。

とまぁそうゆうわけで、ミミルさんの知り合いの技術者――ジェイル・スカリエッティさんの居る場所、本局の第零技術部へとわたしらは向かってる。それにしても、「ルシル君、なんでそんなソワソワしてるん？」ルシル君の様子がおかしいのが気になる。それもこれもジェイルさんの名前を聴いたときからや。

「いや、なんでも・・・」

「何でもってことはねぇだろうがよ。お前、ジェイル・スカリエッティの名前を聴いたとき、茶ぁ吹いたじゃねぇかよ。つうか、オーディンとおんなじツラであんな間抜けを晒すなよマジで」

ヴィータが御立腹。シャルちゃん家で泊まったあの日、お風呂から上がった後でルシル君にミミルさんとの話を伝えた時、ルシル君がぶはっとお茶を吹いた。ルシル君・・・最近そんなんばっかやなぁ。ちょう格好悪いかも・・・。

「お前はジェイル・スカリエッティという男を警戒しているようだが・・・、知己なのか？」

「そういうわけじゃないんだが・・・」

「すずかちゃん達のデバイスを改良した人らしいし、そこまで警戒することはないんじゃないかしら？　彼女たちも良い人だって言っていたもの」

シャマルにそう言われたルシル君は「判っているんだが、スカリエッティという名前にはどうも苦手意識が生まれる」って言うた後、「ま、なのは達が良い人って言うのなら、そうなんだろう」って警戒心を解いた。

「お待ちしていました、八神はやて様、騎士シグナム、騎士ヴィータ、騎士シャマル、騎士ザフィーラ、騎士リインフォース、ルシリ

オン・セインテスト様。第零技術部部長、ドクター・ジェイル・スカリエッティの秘書、ウーノ・スカリエッティです。これよりは私がご案内いたします」

ジェイルさんの秘書ってゆうウーノさんと合流。ウーノさんに自己紹介を返した後、わたしはウーノさんを先頭に改めて第零技術部へと向かうことになった。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

ジェイル・スカリエッティ。先の次元世界ではプロジェクトＦの基礎を作り、ヴィヴィオや最高評議会、レジアス・ゲイズを利用してミッドチルダ首都や本局を震撼させ、最期はメサイア・エルシオンに殺害された、究極の変態にして天才科学者。

そんなアイツが、ヴィヴィオを泣かせ、苦しませたあのクズ野郎が・・・犯罪者でなく、管理局に属し、技術部の１つを受け持ち、なのは達のデバイスを強化し、これから先はやての魔導書を造ると言う。なんの冗談だ、これは。

（調べてみればプロジェクトＦの基礎を組んだのはスカリエッティではなく、プライソンとかいう科学者らしい。だからと言って、そのプライソンの正体がスカリエッティかもしれないという可能性は捨てきれないが・・・）

プライソンの詳細は一切不明。名前も年齢も性別も姿形も、その全てが、だ。個人名かも知れない、団体名かも知れない。その正体を明らかにするまではジェイル・スカリエッティは警戒すべき・・・

敵だ。
途中で合流したウーノに案内されて辿り着いた第零技術部。ＺＥＲＯと描かれた左右に開くタイプのスライドドア。ウーノがドア横の操作キーに触れて「ウーノです。お連れしました」と告げるとドアが開く。
ドアの奥に在ったのは応接室らしき部屋。２ｍほどの長テーブルが一卓、両側に黒い革張りのソファが置いてある。俺から見て右側のソファに奴――「ようこそ。私がジェイル・スカリエッティだ」が居た。あの爬虫類っぽい黄金の目が思い返させる。ＪＳ事件のことを。
スカリエッティにソファへ座るよう促された俺たちはソファへと座り、ウーノが持ってきたコーヒーを頂く。

「ミミル君から話は聴いているよ。それに、君たちは騎士イリスやなのは君たちとも友人だそうじゃないか。だから技術提供料はタダで構わないよ」

第零技術部の技術力は本局だけでなく次元世界の中でも屈指だそうだ。その技術を金で買うとなると数千万以上だと言う。それをタダで譲ってもらえるというのは正直助かる。"夜天の書"と"シュベルトクロイツ"のコピー。杖に関しては安くなるだろうが、魔導書についてはその機能から言ってとんでもない額になりそうだしな。

「お持ちしました、ドクター」

「ああ、ありがとうドゥーエ」

応接室の奥のスライドドアから出て来たのは本局の青制服を着ているドゥーエ。先の次元世界では最後まで見える事がなかったナンバーズの2番で、暗殺や潜入を得意としている機体だったと聞く。そんな彼女が手にしているのは「シュベルトクロイツ・・・！」はやての言う通り依頼していた品だった。

「古代ベルカ式の剣十字杖（アームドデバイス）・シュベルトクロイツ。なのは君たちのデバイスの強化・改良とは違って、魔法発動媒体としての機能を持たせるだけだからね。すぐに開発に着手、そう労することなく開発できたよ」

「どうぞ、はやて様」

「おおきにありがとうございます！」

ドゥーエから"シュベルトクロイツ"を受け取ったはやて。オリジナルと全く同じ、違うところを探すのが難しいと言えるほどの完璧なレプリカ。はやてが「おお、手が馴染む感じや～♪　ホンマすごい～！」と感心している。確かに犯罪者でなければ歴史に名を残す天才と言われたスカリエッティ。腕はこの世界でも健在だ。

「魔導書型ストレージデバイスについてはもう少し待ってくれ。夜天の魔導書のレプリカとなると数日では無理なようでね」

スカリエッティの口から出た"夜天の魔導書"という単語。ドゥーエに"シュベルトクロイツ"を返したはやてがビクッと肩を跳ねさせたのを見たスカリエッティが「あー、言い忘れていたね。私の役

職は技術部長で、階級は少将だ。君たちのことは知っているよ」と頷いた。

「ちなみに私の娘たちシスターズも知っている。階級は二尉から准尉と箝口令の対象内だが、第零技術部は独立部署でもあるため問題はないだろう」

スカリエッティ少将だってさ。吹き出しそうになったがギリギリ耐える。

「で、だ。はやて君。すまないが夜天の魔導書のオリジナルを見せて・・・いや、解析させてほしいのだが・・・。そう時間は取らせない。今日一日で解析し、明日より開発に着手すると約束しよう」

「夜天の書を、ですか・・・？」

はやてがリインフォースを見る。"夜天の書"は言わばリインフォースの本体だ。夜天の主とは言えはやては自分の独断で決めていいのかどうか不安なんだろう。リインフォースは「ええ、構いませんよ。それで新たな魔導書が出来るのであれば」と微笑んだ。

「うん。・・・それじゃあ、ジェイルさんに夜天の書を預け――」

はやてがそこまで言ったところで通信が入ったことを報せるアラームが鳴る。スカリエッティが「ウーノ」と、彼の背後に控えている彼女に応じるよう指示を出す。

「はい。こちら、第零技術部・・・、あ、騎士イリス。こんにちは」

通信を入れてきたのはシャルだった。ウーノに『ウーノ、どうも～♪』挨拶を返したシャルは『そっちにはやて達いる～？』と俺たちに用があることを告げた。

「やぁ、騎士イリス。はやて君たちなら居るよ」

『ドクター、どうも～♪　あ、はやて、みんな。ごめんね、ドクターと大事な話をしていたんだよね、きっと。でも・・・ごめん、今すぐ海鳴市に帰って来られないかな～？　こっちも少々厄介な事件が起きててさ』

ヴィータが「事件って？」そう訊き返すと、シャルは『ドッペルゲンガーが出たんだよ』って海鳴市海上の映像へと切り替えた。映っているのはフェイトと「これは・・・私か・・・！？」そう驚きの声を上げたシグナムだった。フェイトとシグナムが海上で空戦を繰り広げていた。

『それだけじゃないの』

フェイト対シグナムの映像から、なのは対なのはの砲撃戦、さらに共に補助を本領とするすずか対シャマルといった戦闘映像へと切り替わっていく。

『こうなった原因が判らないのが現状。もしかしたらはやて達なら何か知っているんじゃないかって思って、こうして連絡をしたんだ

けど・・・。というか、少しでも戦力が欲しいの。だから出来れば早く帰って来て。お願い！』

シャルの切羽詰まった表情でのお願いに、「うん、今すぐ戻るから待ってて！」はやてがそう応えた。シャルは『ありがとう、はやて、待ってる！』そう礼を言ってから通信を切った。

「あ、あの、ジェイルさん！」

「構わないよ。また来てくれると約束してくれるのならね。ウーノ、ドゥーエ。はやて君たちを奥のトランスポーターへ」

「「はい」」

俺たちはウーノとドゥーエの案内で応接室の奥へと入る。それなりの広さのある部屋で、俺たち八神家全員が入れるほどのトランスポーターが一基設置されていた。スカリエッティの技術が眠っているのは、どうやらこの部屋よりもっと奥の「あのドアの先、か」だろう。一目で見て判るほどに頑丈なスライドドアが奥に在る。

「それではみなさま。こちらへどうぞ」

「このトランスポーターは本局に有るものとは違って移動距離に制限は有りません。第９７管理外世界・地球、その軌道上に停泊しているアースラへ直通転移させます」

中継点を跨がないのは助かる。急ぎである今、下手に時間は掛けら

れないからな。これもスカリエッティの技術力の恩恵か。

（にしても、先の次元世界では闇の書事件後にこのような事態は起きなかった。これは覚悟が必要そうだ）

前々から考えていたが、これ以降の歴史は俺の知る歴史とは異なる可能性が高い。役に立たない記録も知識も今後出て来るだろうな。上等だ。たとえそうであっても全ては俺の旅路の終焉の為。その見知らぬ未来すらこの手にしてやる。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒アリサ†††

「よっし！　終わり！」

≪オリジナルより弱いのが救いだな。本物の騎士（ヴィータ）だったらこうも簡単には倒せないからな≫

「ええ。ヴィータはもっと強いわ」

あたしの目の前で消えていくヴィータの偽者。そう、あたしがその偽者のヴィータを斬った。事の始まりは昼間。クロノからの連絡だ。魔法と出会ったり、将来を決めたりとか、いろいろとあった今年、その最後の３１日。のんびりしようと思っていたところでクロノからエマージェンシーコール。海鳴市の所々で不安定で不定形な魔力反応がいくつも発生したって。

『こちらエイミィ。アリサちゃん、ごめんなんだけど・・・』

「問題ないわ、エイミィ。どんどん相手を用意して」

『ありがとう、アリサちゃん！　じゃあ――』

んで、なのは達と一緒に調査に出てみれば、姿を現したのは今朝早くから本局に向かったはずのシグナム。でも、そのシグナムは様子がおかしかった。あたし達のことは知らないわ、殺気丸出しだわ、はやてのことすら知らないって言うんだからもう大混乱。
空戦を仕掛けてきたことでフェイトが相手を引き受けた。さらにはなのは、シャマルまで出て来て、なのはの相手がなのはで、シャマルの相手はすずかってことになった。いよいよ訳が解らなくなったとき、本局に居るはやて達に連絡を取ったんだけど・・・。

――いま海鳴市に出現しているのは、砕け散った闇の書の闇――ナハトヴァールの残滓だ。その残滓が、今まさに最後の僅かな力を発揮しようとしているのだろう。ナハトヴァールとして活動を再開するために、海鳴市に散った欠片を集め、呼び起こして、な――

リインフォースから聴かされた話はとんでもない事態の前兆だった。あのふざけた機能の塊だったナハトヴァールが復活する、って。あんだけ苦労してようやく倒せたナハトヴァール、その復活。見過ごすわけにはいかないってわけで、あたし達は散開して闇の残滓の討伐を始めたわけ。

「了解。すぐに向かうわ。にしても、次から次へとよくもなぁ」

『あー、うん。みんなが頑張ってくれているけど、倒したら倒したですぐに新しい残滓が出て来ちゃうから』

討伐を始めて数時間。あたしはさっきのヴィータの他に、あたしとはやての偽者を討伐した。自分を斬って倒すなんて正直いい思いはしなかったけど、その思いを友達にさせるよりはまだ随分とマシだ。友達に偽者とは言え友達を倒させるなんて。ナハトヴァールの奴、消えてからも迷惑だけはキッチリ残して逝くんだから、堪ったもんじゃないわよ。

『リインフォースの話じゃ、発生源がどこかに在るってことらしいけど・・・？』

「その捜索を踏まえてみんなで残滓討伐ってわけよね。ま、とことんやってやるわよ」

『お願いね。あ、カートリッジが足りなくなったら一旦ハラオウン邸に戻って。新しいのを渡すから』

「了解！」

エイミィとの通信を切って次の戦場へと向かう。残滓の発生場所は常に結界が展開されてる。それは不幸中の幸いってやつね。無関係者には被害は出ないし、こっちの結界展開の魔力消費は無いし。

「あそこね・・・！」

解除していたバリアジャケットを再度着装して、市街地内に展開された結界に侵入・・・した途端、「っ！？」ヤバい場所に踏み込んだっていう一種の危機察知が働いた。これまでの結界じゃ感じなかったのに、今回はハッキリと感じた。この結界を展開した偽者は、本物と同等に強い奴だって。

「フレイムアイズ。気を付けて。今までの偽者とは違う奴が、居る・・・！」

≪お、おう≫

"フレイムアイズ"をバヨネットフォームへと変形させる。ライフルと剣を一緒にした形態で、中遠距離の射砲撃も出来て、銃身下の刃で近接戦も出来るっていう優れもの。

≪近いな。気を付けろよ、アリサ。ターゲットはすぐそこだ≫

「オーケー・・・！」

警戒しつつ片側三車線の公道のド真ん中を歩く。"フレイムアイズ"からの警告通りビリビリと肌で感じるほどの魔力が少しずつ接近して来ているのが判る。そして十数mと歩いた頃・・・。

――イガリマ――

「っ、来たわね・・・！」

空から降って来た魔力弾６発を後退することで回避。問題は「道路が凍った・・・！」ってことで、それはつまりあたしの相手は必然的に「すずか・・・！」ということになる。たとえそうでも偽者である以上、手加減はしないわよ。

「あーら、外してしまいましたのですね。上手いこと避けるではありませんか」

「？？・・・すずかの、偽者・・・？？」

あたしの目の前にフワリと降り立ったすずかの偽者。でもこれまでの本物と区別が付きぬくい偽者とは違って、目の前にいる偽者は誰がどう見ても偽者だって見て判るような奴だった。
髪や瞳、バリアジャケットのコートの色が違う。髪は雪のように白くて、目は炎のように赤い。コートは本物のすずかのなら青なのに、アイツのは白だ。全身が白。そもそも目つきが全然違う。相手を見下しているような視線。すずかはあんな目をしない。たとえそれが偽者でも。

「すずか？　誰のことかしら」

右手を頬に添えて、左手で右肘を支える腕の構えをして、くねくねと腰をくねらせながら歩いてくるすずかと同じ体格で声な偽者に、「なんか判んないけどムカつくわ」苛立ちを覚える。似ていないのに似ているっていう半端な姿をしたアイツは「それはお互い様ですわね」って笑った。

「どうしてか理解は出来ないけれど、あなたのことを見ていると腹立たしくなってしまうもの。だから・・・消えなさい」

――ネルガル――

偽者の前面に展開された魔法陣からフローズンバレットが１２発と発射されてきた。だけどさっきの時より狙いが甘い。軌道を予測してみれば全弾あたしに当たらない場所に向かってる。案の定、一歩も動くことなく直撃は免れた。だけど、「え・・・！？」着弾した個所から氷の柱が突き上がってあたしを包囲してきた。

「（だからと言って慌てることなんてないけどね）フレイムアイズ！」

"フレイムアイズ"を氷の柱、そして偽者の居る前方へと向けたその時、あたしを包囲していた氷の柱が一斉に砕け散って、その破片があたしに襲い掛かって来た。

「ブレイズロード！」

本来は両脚にだけ噴き上がらせるんだけど、全身に炎を纏わせることで襲い掛かって来た破片を蒸発させる。相性的には炎熱変換資質のあるあたしの方が有利。でも、すずかの空戦能力が向こうにあるとなると、それがチャラになるかも知んない。

――シュルシャガナ――

放たれてきた冷気の砲撃バスターラッシュを横っ飛びして回避。お

返しに「イジェクティブ・ファイア！」火炎砲撃を撃ち返す。偽者もまた横っ飛びで回避。仕切り直しになった。数ｍって距離を開けて対峙する。

「あたしはアリサ・バニングス。そして炎の聖剣フレイムアイズ・イグニカーンス。名乗りなさい、偽者！」

「偽者、偽者と先程からやかましいですわね。・・・・訊いたのであれば、来世でも忘れないようにその魂に焼き付けなさいな。私は、いずれ必ず砕けぬ王となる者、律のマテリアル。そしてこの美しい御手を飾るはエレシュキガルよ」

そう名乗った（つうか、それ名前じゃないじゃん）偽者に改めて銃口を向けて、「そんじゃ再開と行きましょうか？　偽者」そう挑発。すると偽者は「二度とその減らず口が叩けないようにしてさしあげますわ」ってこめかみに青筋を浮かべながら笑った。

Ｅｐｏｓ３１－Ｂ砕け得ぬ闇の使徒～ＭＡＴＥＲＩＡＬ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

「フレイムアイズ！」

≪イジェクティブ・ファイア！≫

"フレイムアイズ"の銃口から発射するのは火炎砲撃。狙うのは"律"のマテリアルって名乗ったすずかの偽者。髪もバリアジャケットも全て白色に統一した、雪のように真っ白な子。偽者はフワリと空へとジャンプして回避した。

「エレシュキガル。行きますわよ」

≪ムンムを発動≫

偽者が手に付けているグローブ型ブーストデバイス――"エレシュキガル"が淡々と返すと、あたしの周辺に氷の鏡アイスミラーが半球状に展開された。偽者の魔法ムンムって、すずかの魔法で言うリフレクティブミラーなわけか。

「避けて御覧なさいな！」

≪イガリマを発動≫

そう言って放れて来たのはフローズンバレット6発。やっぱり術式名も本物と偽者とじゃ違うのね。とにかく「あたしを包囲しようっていうのは諦めなさい」そう言い放ちつつ、フレイムバレットを同数発射して相殺する。アイスミラーの包囲はそう恐いものじゃない。もしこのアイスミラーが魔法陣だったなら別だけど。

（魔法陣っていう魔法発射体だったら、足元以外の方位から攻撃を受けることになるし）

アイスミラーの半球包囲から走って抜けたあたしは「これ、決着つくのかしら」と今後の展開を嘆く。炎と氷。空と陸。この違いがお互いの決定打を潰してくる。偽者の攻撃や防御なら突破できそうだけど、空に上がられるとちょっと厄介。空は逃げ場が多いから、あたしの射砲撃能力での撃墜は難しい。

「同じ舞台に立つっきゃないわよね。となれば・・・あたしが上るか、アイツを引き摺り下ろすか、どっちか・・・！」

「フフ。虫は虫らしく地べたを這いずり回っているのがお似合いですわね！」

≪シュルシャガナを発動≫

空から降り注いで来る冷気の砲撃バスターラッシュ――じゃなくて、シュルシャガナ。ジグザグに走って砲撃を回避しながら、"フレイムアイズ"のカートリッジをロード。

「すずかの顔で・・・」

≪ブレイズロード！≫

脚に噴き上がらせていた炎を爆破、その爆発力で一気に十数mの高さまで跳ぶ。偽者は「あらあら。虫が跳ねましたわ～。気持ち悪っ、ですわね～。うふふ」って驚きと見下しの感情を乗せた視線を向けてきた。ていうか、虫って言うな。

「そんな下卑た笑みを浮かべてんじゃないわよ！！」

――スピニングコロナ――

刀身に炎を纏わせた"フレイムアイズ"の柄を両手で持ち体を丸めて高速前転。急速に流れる視界の中で見えた偽者がスッと横移動したのが見えた。スピニングコロナの弱点とも言えるのがこれ、避けやすいってこと。この魔法っていうか技は、連撃の中に組み込むべき近接攻撃だもん。単発、しかも離れたところからの接近じゃ回避されるのは目に見えてる。

（でも今はそれで良いわ。偽者はあたしの狙い通りに僅かに横にずれるってだけの回避を取ったんだもの）

炎を纏った刃が高速回転してる正面からの迎撃や防御より、側面に回って無防備を晒してる体を狙った方が少ない魔力で撃墜できる、ってね。案の定、偽者はあたしの右側面を陣取って、魔法の発射体勢に入った。偽者がすでに発射体勢に入っていることでの移動制限

を受けている今。

「これで高低差のハンデは消えたわ！」

攻撃魔法を発動していることで回避することは出来ず、防御魔法も使えない。これならあたしの攻撃も当たる、はず。

「っ！・・・これを狙って――シュルシャガナ！！」

「イジェクティブ・ファイア！」

スピニングコロナからイジェクティブ・ファイアへと瞬時に切り替えて、冷気の砲撃を発射したばかりの偽者へと火炎の砲撃を発射。先手を取られていたけど、やっぱり属性的な相性もあって後手のあたしの火炎砲撃が冷気の砲撃を蒸発させながら突き進む。

「っ、調子に乗らないでほしいですわ・・・！」

偽者が魔法を破棄して回避に入った。逃がさないっつうの。撃ち終えたことで落下が始まる前に魔法陣の足場フローターフィールドを展開して降り立つ。そしてもう一度ブレイズロードを発動して両脚に炎を噴き上がらせる。

「（次！　シャルの法陣結界を・・・！）フレイムアイズ！」

≪フィールドサークル！≫

術者にとっては足場、敵対者にとっては檻となる魔法陣３２枚を球体状に展開するアレ。今のあたしの魔法スキルじゃそこまでの数・堅牢さを持った結界は発動・維持は出来ない。だけど、４枚までなら同時発動できるよう、特訓したんだもの。カートリッジを２発ロードして、偽者を囲うようにフローターフィールドを４枚展開。

「もうヒラヒラと逃げ回らせないわよ、羽虫！」

いま立ってる魔法陣から飛び立って、偽者の右前方に展開した着地。すぐさま"フレイムアイズ"を振るって直接斬撃をお見舞いする。偽者は「っく」って呻き声を上げて後退。間一髪で避けられちゃった。めっちゃ惜しい。

「空も飛べない虫は大人しく地べたに這いずり回っていればいいのですわ！」

前髪パッツンになったことに気付かない偽者が怒声を上げて、あたしから距離を取ろうと高度を上げようとした。いま立ってる魔法陣以外の３枚を解除。遅れてその３枚を偽者が向かった上空で再展開、偽者の直上に展開した魔法陣へ飛び立つ。そして偽者の脇を通り過ぎる際に空になったマガジンを機関部から抜いて、ソレを放り投げる。

「っ！？」

魔法じゃないから油断したわね、アイツ。いきなり目の前に飛び出して来たマガジンに驚いて、両腕で顔を庇った。視界を完全に潰す

その行為、後悔するわよ。新しいマガジンを装弾して魔法陣に着地。

「イジェクティブ・ファイア！」

それと同時に下方に居る偽者へ向けて火炎砲撃をぶっ放す。偽者はアイスミラーを展開して防御、爆炎と黒煙があたし達の間に発生して視界を潰す。咄嗟にしては完璧に防いでくれるじゃん、偽者め。魔法陣をさらに上に展開して跳び移る。まずは視界確保を最優先。ボフッと黒煙の中から何かが飛び出す音がした。偽者が黒煙を突っ切った音で間違いない。上から見る限りじゃ見えない。・・・・ってことは、「地上に向かって直滑降・・・！」になるわね。今度はあたしが上を支配させてもらうわよ。

「フレイムアイズ！」

≪おっしゃあ！　フレイムバレットの雨あられ！≫

下方に向かってフレイムバレットを連射。火炎弾が黒煙を突き抜けて晴らしていく。偽者をすぐに発見。回り込むようにしてあたしの上を取ろうとしているのがバレバレな軌道。でもそうはせないわよ。弾幕をばら撒いてそれを妨害。この高低差を埋めさせないわ。二度とね。

「この私の、砕け得ぬ王となる私の頭より上に立ち、そのうえ撃ち落そうとするなんて・・・、許せない、許せないことですわね・・・！」

憎悪と憤怒で歪む偽者の顔。それに対してあたしは「すずかの顔をして存在してるあんたの方が許せないわ！」そう怒鳴り返して、火炎砲撃イジェクティブ・ファイアを発射。そしてまたフレイムバレットの弾幕。その後にまた砲撃。

「やっぱ敵が空を飛べるっていうのは厄介よね。３６０度が逃げ道だしさ・・・！」

≪少しずつだが高度を上げて来ているな≫

偽者は飛行速度の加減速を利用してあたしの爆撃をヒラヒラと避けながら徐々にあたしの居る高さにまで昇って来てた。なら、ちょこっとパターンを変えようかしらね。カートリッジをロード。

「フリンジングボム！」

バスケットボール大の火炎砲弾を１発撃つ。偽者はソレに手を出す事なく警戒しつつ回り込んで上昇を続行。良い判断。迎撃や防御をしたら確実に撃墜よ。それだけの火力を持ってるんだもん。でも残念。そんな数ｍ離れた程度じゃ「呑み込まれるわよ？」偽者に向けてウィンクして、魔法陣から飛び降りる。"フレイムアイズ"をニュートラルのファルシオンフォームに変形させたところで砲弾が大爆発。

「きゃぁぁぁあああああ！！？」

爆炎と爆風に煽られて体勢を崩した偽物に向かって、「これで終わ

りよ・・・！」カートリッジ３発を連続ロードして刀身に炎を纏わせる魔力付加斬撃「タイラント・・・フレア！！」をお見舞いする。手応えあり。そのまま落下しないためにフローターフィールドを展開して降り立って、偽者の方へと視線を向ける。"律"のマテリアルは今までの偽者と同じように全身にノイズが走って、輪郭が少しずつ霧散して崩れていく。

「・・・嘘ですわよ・・・、このような・・・無様を、晒すなんて・・・・」

右肩から左脇腹にかけてあたしに斬られた傷を両手で押さえながらも「許さない・・・、あなた・・・！」まだ敵意を向けてくる。しかも「エレシュキガル・・・！」両腕をあたしの方へと翳して魔法を放とうとしてきた。けど、両手を傷口から話した所為か霧散のスピードが上がった。

「っ！・・・ふ、ふふ、ふふふ。・・・王への道行、ここまで・・・ということですのね・・・。最悪、最低、ですわ・・・」

魔法発動を中断した偽者はついに諦めたようで力なく笑い声を上げ始めた。

「他のマテリアルが・・・王になるのを黙って見過ごす、なんて・・・。でもまぁ、闇の書の復活が叶えば、私もいずれ再生されますわ・・・。ふふ。今はそれで良しとしましょう。ですが、その時こそ、・・・あなたをこの手で・・・」

「他のマテリアル！？　あんたのようにただの偽者じゃなくて特別な残滓が居るっていうわけ！？」

「うふふ・・・。さぁどうでしょうね・・・。ふふ、うふふ、あはは、あはははははは！！」

高笑いを上げながらすずかの偽者――"律"のマテリアルは崩れ消えていった。完全に消滅したのを確認してから近くのビルの屋上へと降り立つ。とにかく「報告しとかなきゃ」独自の人格を持ってる特別な残滓、マテリアルが存在しているって。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒ヴィータ†††

シャルからの連絡を貰って本局から海鳴市に戻って来たあたし達は、リインフォースから海鳴市で起きてる異変の説明を受けた。簡潔に言えばナハトヴァールが復活しようとしてる。
あたし達が粉々に砕いた"闇の書"の闇――ナハトヴァールの残滓が蒐集した魔導師たちの記憶を基にして復活しようとしているんじゃねぇか、って。それを阻止するために、あたしたち八神家も散開して海鳴の街を、はやての生まれ育った街のあちこちを飛び回ってる。

「――なぁ。ホントに、お前の言う通り・・あたしらは・・・救われたのか・・・？」

「ああ。救われたよ。闇の書は夜天の魔導書っつう名前を取り戻して、あたしら書を護る騎士は、すっげぇ優しい主を、その生涯をか

けて守る騎士になるっていう最後の役目を見つけたんだ」

「そう、か・・・うん、未来のあたしがそう言うんだから、そうなんだよな・・・、良かった・・・」

"アイゼン"を肩に担いで、たった今ブチのめしたばかりのあたしの偽者の消滅を見送る。おんなじデバイスに魔法、思考。あたしとの違いは、オーディンと出会う前、ものすげぇ荒れてる頃のあたしだったってことだ。何もかもが気に食わず、仲間たちに噛み付いてばかりだった、精神的にクソ生意気なガキだった頃の・・・。

「チッ。嫌なことを思い出しちまったな」

胸の奥に渦巻く昏い感情に嫌気を感じていたところに『ヴィータ。そっちは大丈夫か？』はやてからの通信が入った。はやての声を聴くだけで、「うん、大丈夫だ」晴れていく。あたしはあの頃とは違う。心は満たされてる。温かな居場所、何をしても果たしたい使命を得た。

「はやて！　うん。大した損害もなく終わったよ！　はやての方は大丈夫？っていうか、ホントはリインフォースと一緒に家で待ってて欲しいんだけど」

はやてはお世辞にもこんなガチンコバトルが出来るだけの魔導スキルはない、なんつうか言っちゃ悪ぃけど素人だ。リインフォースも自分の維持で精いっぱいで、ユニゾンも出来ぇし、以前までのような第一級の単独戦力としての面影もねぇ。

『そうは言うても今回の騒動はわたしら八神家の問題でもある。それやのに主であるわたしがのんびり家で留守番なんてカッコつかへん』

『私も、その機能を失ったとはいえ管制融合騎としての責務がある』

はやてもそうだけどリインフォースも聴かん坊だからな～。まぁ端から説得できるなんて思ってねぇ。

「・・・はやて。危なくなったら誰かを呼んでくれな。逃げたっていい。残滓は本物に比べりゃお粗末な戦闘力だけど、それでも今のはやてよりはたぶん・・・。リインフォース。テメェもだ。無理せずに助けを呼べ。いいな、絶対だぞ！」

『うん。了解や。突っ走らんって約束する』

『私も約束しよう。無茶も無理もしない』

「よし。そんじゃ、次の結界に向かうから」

『うん。ヴィータも気を付けてな』

はやて、リインフォースとの通信を切って、あたしは次の結界へと移動を開始。場所は海鳴臨海公園。上空から結界内に侵入する。そんで街灯の上に降り立って、残滓の気配を探る。居るっちゃ居るが・・・これまでの相手とは違って妙な気配がしやがる。カートリッ

ジの残弾数を確認する。

「１２発もありゃどうにかなんだろ」

装弾済みを入れりゃ１５発。十分だ。石畳の上に降り立って歩き出した途端、ゾワッと悪寒が奔ったから"アイゼン"を構える。近い、居る。警戒しながら歩を進めていると、ガサガサって茂みの中からなんか這い出てきた。

「ぺっぺっ。うぅ、口の中に草が、なのでありますよぉ・・・」

「アリサ・・・、じゃねぇな」

声も外見も、バリアジャケットもアリサと同じだ。けど、色が違う。綺麗な金髪は薄い紫色、目は獰猛な獣のように金に輝いてて、バリアジャケットは赤と黒・紫を基調としてる。それに何より「う、ぅ、私はダメなマテリアルなのでありますよぉ・・・」精神的に弱っちそう。

「（マテリアル・・・構築体、か。特別な残滓っぽいな）おい、お前！」

「ひぅ！？・・・大きな声であります！？・・・あ、守護騎士の１騎を発見・・・なのであります・・・！」

アリサの偽者があたしに気付いて、勢いよく立ち上がって向かって来ようとした・・・んだけど「うきゃん！？」足元の煉瓦に躓いて

盛大に顔面ダイブ。どうすりゃいいのか判んねぇから困るわ～、こういう手前は。

「イタタ、痛いのであります・・・。う、うぅぅ」

「あー、なんつうかさ、その、大丈夫か？　鼻血、出てんぞ」

顔を上げた偽者の鼻から一筋の赤い液体、血がつぅーっと流れ落ちてた。偽者はハッとして袖口で鼻血を拭って「く、紅の鉄騎！　勝負なのでありますよ！」って立ち上った。

「あ〝あ〝！？」

「ひゃあ、ごめんなさいなのでありますぅ！」

威嚇してやると、偽者は両手で頭を抱えて蹲った。ビビり過ぎだよ、お前。"アイゼン"を肩に担いで「お前さ、一体何がしたいわけ？」って目的が何かを問い質す。これまでの残滓と違ってコイツは独自の人格を持ってる。だから今回の一件について詳しい情報を持ってるはずだ。

「う、裏切り者なんかに話すことなんて何もないのであります！私たちと同じ、闇の書の一部でありながら、闇――ナハトヴァールと防衛プログラムを勝手に切り捨てて砕いた！　許せないのであります・・・！」

「アホか。あんなもん、もう必要ねぇんだよ。主を殺すようなシス

テムなんざ百害あって一利なしだ。だからナハトヴァールや防衛プログラムを復活させようってんなら・・・ぜってぇ阻止する」

「う、うるさいのであります！　そ、それに、もう遅いのであります。すでにあちこちで私たちの欠片が生まれているのであります。く、砕かれた闇を再構築するために、であります。闇の欠片がこの街に溢れ、私たちマテリアルが裏切り者の守護騎士と管制システムを取り込めば、闇の書の闇は完全に復活するのであります！　ゆえに、に、逃がさないのでありますよ、紅の鉄騎！」

「（私たち、か）・・・まぁ、色々ベラベラ喋ってくれてあんがとな。すげぇ助かったぜ」

「はっ！　ゆ、誘導尋問とはき、汚いのであります！　う、裏切りに次いで卑怯を働いて、それでも騎士なのでありますか！？」

「ええー。あたし、いつ誘導尋問なんかしたよ。テメェが勝手に喋ったんだろうがよ」

どうしよう、コイツ、アホだ。目的は厄介だが、どうも嫌いになれねぇ奴だ。でもな、悪ぃけど「この街と、はやてと家族、友達のために、テメェを消す」"アイゼン"を突きつける。

「わ、私だって、闇の書の闇の復活の為に、お、お前を食らうのであります！」

バリアジャケットと同じ赤と黒・紫を基調とした"フレイムアイズ"

を具現した偽者。

「八神の騎士パラディース・ヴェヒター、ヴィータ。そして鉄の伯爵グラーフアイゼン。名乗れ」

「義のマテリアルなのであります。そして火竜の爪タラスクスであります」

「デバイスの名前は立派なんだが、テメェ自身の名前は酷いもんだな」

「うるさいでありますよ。私たちマテリアルはあくまで闇の書の闇を構築する部品、個性(なまえ)など・・・要らないのであります！」

"義"のマテリアルと名乗ったアリサの偽者の目つきが変わった。"フレイムアイズ"のコピー、"タラスクス"の柄を握った瞬間に、だ。どうやら戦闘モードに意識が切り替わったみてぇだな。

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ≫

同時にカートリッジをロードする。特別なマテリアルって事は少しでも早く倒した方が良いはず。だから「ラケーテンフォルム！」強襲形態へと"アイゼン"を変形させる。対するアイツは"タラスクス"の刃に「アトロポンカ！」炎を纏わせた。ありゃあアリサの魔法で言うバーニングスラッシュじゃねぇか・・・？

「裏切り者には・・・義(リヴェンジ)による報復なのであります！」

一足飛びで突進して来た残滓が繰り出してきた薙ぎ払いをしゃがみ込んで避けた後、すぐに「おらぁぁぁッ！」しゃがんだまま反転、遠心力いっぱいの一撃をお見舞いしてやる。"アイゼン"のスパイクは確実に残滓の脇腹を打った。

「あぐ・・・っ！」

そのまま吹っ飛ばしてやろうかとした時、残滓はなお"タラスクス"を振るってあたしの首を刎ね飛ばそうと狙ってきたから、すぐさま「っらぁぁぁーーーーッ！」吹っ飛ばす。精神的な弱さを上回るヤバさがあの残滓にはある。下手に時間を掛けるとまずいかもしんねぇ。

「（だから・・・）アイゼン！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ・　Ｒａｋｅｔｅｎ　Ｈａｍｍｅｒ≫

３発目のカートリッジをロードしてブースターを点火。地面に叩き付けられることなく宙で体勢を整えて着地していた残滓へと「ラケーテン・・・！」突撃する。

「こんなの、痛くないのであります・・・！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ≫

"タラスクス"の刀身に炎を噴き上がらせた残滓は、炎の噴射力で

高速回転を始めた。そして「ラケーテン・・・・！」聞き捨てならねぇ言葉を発しやがった。

「ハンマァァァァァーーーーーーッッ！」

「ゼーベルッッ！！」

あたしの一撃が届くより先に残滓も突撃してきた。ガキィィンと甲高い音を立てて衝突。あたしと残滓の間で激しく飛び散る火の粉。マジか、拮抗を崩せねぇ。"タラスクス"の炎は消え始めてるってぇのに、「ま、負けないのでありますぅ・・・！」残滓は粘りやがる。

「（くそっ。カートリッジがありゃブースターの持続時間を延ばせんのに・・・！）だからって引けねぇけどな！！」

「っ！？・・・あぅ・・・！」

力だけで押し切ってやる。滑空するように後方に弾き飛ばされた残滓は、"タラスクス"を地面に突き刺すことで勢いを止めて着地した。その間にカートリッジを装弾しておく。

――ピッーラ――

体勢を立て直した残滓がフレイムウィップで薙ぎ払おうとしてきたから空へと回避。空を飛べねぇはずの偽者相手としちゃ汚ぇ真似だろうが、そんな甘っちょろいことは言ってられねぇ。"アイゼン"

をハンマーフォルムへと戻して、「シュワルベフリーゲン！」実体弾に魔力を付加したフリーゲンを８発と発射。

「フェルニゲシュ！」

全身に炎を纏わせた（ブレイズロードの全身版だな、アリサも使ってる）残滓がミサイルみたいに飛んで来て、真っ向からフリーゲンと衝突。で、フリーゲンなんて関係ねぇって風に破砕しながら、あたしの元まで飛んで来た。

「無駄なのでありますよ、紅の鉄騎！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ≫

――アトロポンカ――

残滓が振るってきた炎の斬撃を大きく後退して回避。そんですぐさま前進して、振り上げた"アイゼン"を「ハンマーシュラーク！」振り下ろす。残滓は掲げた左前腕にミッド魔法陣のシールドを展開して防御。そんで右手に持ってる"タラスクス"で、最速・最短攻撃の刺突を繰り出してきた。

「チッ」

あたしも"アイゼン"の柄から左手を離して、手の甲にパンツァーシルトを展開。"タラスクス"の刃を裏拳で弾く。そして互いに空いた腕でデバイスを弾き飛ばす。互いに無手で、デバイスもそれぞ

れ自分たちの後方へ吹っ飛んで行った。先にデバイスを取り戻した方が・・・この勝負に勝つ。
あたしと残滓、同時に距離を取ってデバイスを取りに向かう。宙を舞ってる"アイゼン"へと手を伸ばして・・・あとちょっとで手が届くってところで、「あん！？」飛んで来た煉瓦を受けて"アイゼン"がまた離れる。

「義(わたし)の勝利、なのであります！」

（嘘だろ！　なんで空飛べねぇアイツがこんなにも早く・・・！？）

背後から聞こえてきた勝利宣言に振り返ってみれば、すでに"タラスクス"を手に持っていた残滓が両脚に炎を纏わせた状態で突進して来てた。残滓の奥、そこには1枚の魔法陣が見える。

（あー、くそ。飛ぶより速いってわけか。あの移動魔法・・・！）

――アトロポンカ――

残滓が薙ぎ払ってきた炎の斬撃を下降する事で回避。茂みの中に落っこちた"アイゼン"を追う。

「空を飛べなくとも、跳ぶことは出来るのでありますよ。紅の鉄騎！」

殺意を含んだそんな声と一緒に残滓が空から突進して来た。その突進を横移動して回避してやり過ごす。と、奴は横目であたしを見て「鉄の伯爵、破壊させてもらうのであります」そう言って、茂みへ

とそのまま落下していく。

「ふざけんな！　テメェ！」

ただの落下速度と飛行速度じゃ違うってところを見せてやるよ。徐々に残滓との距離を詰めて、もうちょいってところで残滓が急に反転して「やっぱヤメであります！」炎を纏わせた"タラスクス"を薙いできた。

――パンツァーシルト――

すぐさま前面にシールドを展開して防御。デバイス（アイゼン）無しでの魔法発動なんざ久しぶり過ぎて上手くいくかどうかは判んなかったけど、上手くいって良かった。シールドを回り込むように移動して、「おらぁぁぁ！」素手で残滓の顔面を殴る。

「ぶはっ！？」

「悪ぃな」

「おぐっ！？」

よろけたところで腹に膝蹴りを入れる。徒手格闘なんて、オーディンから格闘戦、関節技とかを学んだ時以来だ。でもやっぱ慣れねぇな、素手で殴るってさ。顔と腹を押さえながら地面へと落下した残滓を見送って、あたしは茂みの中へと降り立つ。"アイゼン"はすぐに見つけることが出来た。

「ぐふっ、げほっ、ごほっ、く、紅の・・・鉄騎・・・・！」

「義のマテリアル。終いだ」

「ま、だ・・・まだ、まだ・・・なのでありますよ・・・・！」

残滓は"タラスクス"を正眼で構え直して、引き金を引いてカートリッジをロードする。鼻血を流し、口端からも血を流してる残滓。アリサの外見と同じだから胸が痛んでしゃあねぇよ。でも、お前は違う、アリサとは違うんだ。だから・・・。

「アイゼン」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ・　Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ≫

ハンマーヘッドを巨大化させるギガントフォルムへと変形させる。

「タラスクス！　アラム、発動・・・でありますぅぅ～～～～ッッ！！」

ものすげぇ火炎を"タラスクス"の刃に噴き上がらせる残滓。タイラントフレア、か。この状況だ。あの魔法が今のアイツにとっての最強の一撃なんだろうな。

「ギガント・・・！」

「うぁぁぁぁあああああああああああッッ！」

一足飛びで突進して来た残滓の一撃に合わせて「ハンマァァァァーーーーッ！」"アイゼン"を振り降ろす。衝突。馬鹿でかい轟音が響き渡る。柄から伝わって来る衝撃、残滓から放たれて来る一生懸命な戦意。こんな形でなきゃ、友達になれたかもしんねぇのにな。ホント「残念でしゃあねぇよ、義のマテリアル」お前を斃すのが、さ・・・。

「うっっっらぁぁぁぁあああああああああッ！！」

「っ！？」

拮抗は崩れた。ガシャァァァンと金属が砕ける音と一緒にあたしの一撃が残滓を叩き潰した。"アイゼン"の一撃は残滓を打ち、地面を大きく穿った。周囲に飛び散るのは地面の破片と、タラスクス"の破片。

「・・・・あ、う、ぅぅ・・・・わた、し、の・・・・負け、でありますな・・・・うっ、ぅぅ・・・・」

ヘッドの下で潰れてる残滓がそう漏らしたから"アイゼン"を元のハンマーフォルムへと戻す。力なく横たわる残滓があたしに弱々しいながらも真っ直ぐな目を向けてきた。

「全、りょ・・・くで・・・・戦い・・・・負けた、ので・・・・あります、から・・・・後悔は、ないの、で・・・・あります・・・・。ただ、私・・・・のちか・・・らで・・・・闇の書・・・・復活・・・・出来なかったの

が・・・無念、なので、あります・・・」

残滓が空に向かって両手を伸ばした。何かを手に掴もうとするかのように。

「あとは、任せるので・・・ありますよ。・・・義の、マテリアルは・・・先に・・・逝っている、ので・・・ありますよ・・・」

そこまで言ったところで残滓の全身にノイズが奔って、指先から崩壊・・・完全に消滅した。そいつを見送った後、結界が消失し始めたから"アイゼン"と騎士服を解除。とその時、通信が入った。モニターに映るのはエイミィだ。

『こちら捜査本部のエイミィ。各魔導師、騎士に連絡。海鳴市各地に出没している闇の書の闇、その残滓の中に、特別な残滓が居るみたい。アリサちゃんが相対したのは、律のマテリアルと名乗ったようなの。外見はすずかちゃんなんだけど、性格や魔法術式名、デバイス名など本物と色々と違う、特別な残滓みたい。で、その残滓マテリアルが消えたら残滓出没数が激減するところを見ると、本件の解決方法はきっと・・・』

すぐに「あのさ、ヴィータだけど」たった今繰り広げた戦闘について報告する。アリサのそっくりさんで、名前を"義"のマテリアル。他の残滓とは違って、いま聴いた"律"のマテリアルと同様、独自の人格を持ってて、本物とは違う術式名、デバイス名を有していた、って。

『――クロノだ。特別な残滓、マテリアルという存在が居るのは明らかだ。未だに街のあちこちで結界が発生しているところを見る限り、他にもまだマテリアルが居るのは確かだろう。各自、マテリアルと遭遇した際は注意、撃破するように』

こうしてあたしらは残滓の中でも特別な存在、マテリアルの捜索・退治へと乗り出すことになった。

Ｅｐｏｓ３１－Ｃ砕け得ぬ闇の使徒～Ｓｔａｒ　Ａｎｄ　Ｔｈｕｎｄｅｒ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

「――迷惑を掛けたな、フェイト」

偽者のクロノがすまなさそうに謝ってきた。私は「ううん、気にしないで」って首を横に振る。私が相手にしたクロノの偽者は、自分が"闇の書"の闇であるナハトヴァールや防衛システムを復活に必要な欠片だっていう自覚を持っていた。そして管理局執務管としての自覚が薄れていくってことで私に撃破するように頼んできた。

「しかし嫌なものだな。記憶が曖昧になっていくんだ。現在の僕じゃなく、過去の僕――フェイトやなのは達と出会う前、闇の書に少なからず嫌悪を、憎悪を抱いていた頃の・・・」

なのは達やはやて達には知らされていないけど、クロノのお父さんでありリンディさんの夫であるクラウド・ハラオウン提督は、１１年前の"闇の書"事件の犠牲者だ。

「もし君に出会う前に守護騎士のみんなと遭遇していたらと思うと・・・。よかったよ、彼女たちに心無い暴言を吐かずに済んだ」

クロノが心底安心したって風に微笑んだ。そして最後に「残滓である僕に言われることじゃないだろうが、闇の書の復活の阻止、頼む」

そう言って消えていった。消えていったクロノに私は「うん。必ず」強く頷いて誓った。とその時、『フェイト。クロノだ』本物のクロノから通信が入った。

「うん、どうしたの？」

『まず、僕の偽者が迷惑を掛けたようだ、すまない』

「ううん。偽者でもクロノはクロノだったよ。・・・えっと、それで、何かあった？」

『ああ。今から言うポイントに、マテリアルと思われる妙な反応が探知されたんだ』

クロノの話に「え？」って訊き返した。いま私たちは散開して"闇の書"の復活を企んでいる特別な残滓――マテリアルを必死に探している。マテリアルの存在が、残滓の発生に繋がっているそうだから。でも遭遇するのは残滓ばかり。持久戦になると負けはほぼ確実だ。だからそれも踏まえて探しているんだけど・・・。どうやって探り当てたんだろう。

『やっほー、フェイト♪』

「アリシア！？　なんで・・・？」

新しく展開されたモニターにアリシアが映し出されて、私に向かって手を振った。そんなアリシアが『わたしが発見したんだよ、残滓

とマテリアルの違い♪』って驚くべきことを言ってきた。というかアリシアは今日、クラスメイトの子たちと遊びに行く予定だったはず。それなのにどうして家に居るの？

『いやぁ、すごいよ、アリシアちゃん。私たちアースラオペレーターの誰よりも早く、マテリアルと残滓の魔力反応の違いを見つけたんだから。アリシアちゃん、才能あるよ。その観察眼は目を瞠るものがあるね、うん。是非、管理局に欲しい人材だよ～♪』

『いやぁ～、それほどでもぉ～・・・あるよ♪』

アリシアが嬉しそうに照れていて、エイミィは『さっすが～♪　ほら、フェイトちゃんも、ほら』私にもアリシアを褒めるように言ってくるから、「す、すごいよ、アリシア！」私も参加する・・・んだけど、出来れば早く本題――マテリアルの居場所を教えてほしいかも。クロノも私と同じだったみたいで『エイミィ、アリシア』とちょっと語気を強めて2人の名前を呼んだ。

『あぅ、ごめんなさい。えっとね、マテリアルらしい反応は今のところ2つ。1つはフェイト、もう1つはなのはの付近にて発生中。その周囲に残滓の発生も確認できるから、一番近いフェイトとなのはが真っ先にマテリアルを相手にして、その間に後続班で周囲の残滓を相手にしたらいいかも。どうかな・・・？』

アリシアがそんな意見を述べた。黙った私たちにアリシアが不安げにそう訊くと、『いや。良い判断だ。アリシア』クロノが褒めた。私も『うん、本当に何から何まですごいよ！』純粋にアリシアを褒

める。これならもしかするとアリシアも後衛スタッフとして管理局に務めるって考えを持ってくれるかも。
そうして私はアリシアからポイントの座標を聴いて、「――じゃあ私はこのポイントへ向かえばいいんだね？」最終確認。アリシアは『間違いなし。フェイト、お願いね』そう言って手を振って送り出してくれたから、「了解！」手を振り返して応える。

「よし、行こう・・・！」

通信を切って、早速指定されたポイントへ向かう。今から私が向かうポイントには他の残滓より強いマテリアルが居る。これまで姿を現したマテリアルは2人で、1人は"律"のマテリアルと名乗ったすずかのソックリさん。もう1人は"義"のマテリアルと名乗ったアリサのソックリさん。

（すずかにアリサと来て、次は誰になるんだろう・・・？）

可能性は誰にでもある。私かも知れない、なのはかも知れない、最悪ルシルかもしれない。出来ればルシルのマテリアルとは遭遇したくないなぁ。いくらオリジナルより弱いって言われてもルシルのあの反則魔法の数々は侮れない。
僅かな不安を胸に抱きながら空を飛んで、ポイントへ到着して結界内へ侵入する。侵入した途端に肌に感じる妙な魔力に「あー、確かに他の残滓とは違う雰囲気だ」警戒レベルを引き上げる。"バルディッシュ"の柄を両手で握り直して、市街地をぐるりと見回す。

「・・・・居た・・・・！」

５０ｍと離れた空にポツンと浮いている人影を発見。先手必勝を狙うために"バルディッシュ"を大鎌のハーケンフォームへと変形させる。そして最高速で接近を試みる。と、マテリアルの姿形を視認することが出来た。それはどう見ても「私・・・！」だった。

「バルディッシュ・・・！」

≪Ｈａｋｅｎ　Ｓｌａｓｈ≫

魔力刃を瞬間的に強化して切断力や威力を増加させる魔法ハーケンスラッシュを発動して、シャルと同じ水色の髪をしたマテリアルへと背後から斬りかかる。私の姿をしたマテリアルは、その手に持っていた"バルディッシュ"のコピーを振り向きざまに振り上げたことで私の一撃を防いだ。

「君は・・・確か、闇の書の闇を斬り裂いた、黒の魔導師・・・。そして僕の、オリジナル」

マテリアルはそう言って、私の一撃を片手で弾き返してその場で反転、そして威力を遠心力で高めた「光雷斬！」私のハーケンスラッシュと同じ攻撃（光翼斬っていう別の名前に変えてる。報告通りだ）を繰り出してきた。

私はさらに後退することで回避した後、すぐさま前進して「せい！」通常の魔力刃の振り降ろしで再攻撃。マテリアルは半歩分横移動して避けた後、"バルディッシュ"コピーの石突を突き出してきた。顔面狙いだったそれを、首を傾げるだけで回避した途端、「ぐっ・

・・？」頭突きされた。

「いつつ・・・」

「いたた・・・」

私とマテリアル、お互いに額を押さえながら一度間合いを取る。マテリアルが額を擦り終えると「僕と同じ外見、オリジナルだからこそ余計に、君を見ていると苛立ちが募る。不快だよ」私に向けて敵意を放ってきた。

「この不快さを、苛立ちを消すには、どうすればいいか。・・・その答えを、僕の魂がこう叫んで教えてくれる！　君を殺して我が糧とすれば、全部が消える、と！　そして還るんだ。温かで艶やかな、血と災い、そして怨嗟の闇が渦巻く、あの永遠の夜に・・・！」

"バルディッシュ"コピーの先端を私に向けて、そんな物騒な台詞を語った。うーん、私が出会えたのはラッキーだったかも。色違いとは言え私と瓜二つの外見をしたマテリアルが、殺すだのなんだのって言葉をなのは達に浴びさせることはなかったから。

「そうはさせない。闇の書の闇――ナハトヴァールと防衛プログラムはもう、必要のないものなんだ。アレは、私の友達を苦しませる。だから、復活なんてさせない！」

≪Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ≫

周囲に展開した帯電する魔力球８基をプラズマランサーとして発射。マテリアルは私と同じように高速戦を得意とするみたいで、速度にものを言わせてランサー８発を回避した。ランサーに追撃させても追いつけないと判断して、ランサーを解除。

マテリアルは回避したその先で「光翼斬！」ハーケンセイバーを飛ばして来た。ならこちらも、と速度にものを言わせてセイバーを回避した時、マテリアルが「雷刃衝！」プラズマランサーを６発と発射してきた。

（私と同性能の機動力と魔法、か）

自分のことは自分が良く知っている。長所も短所も。でもそれは向こうもたぶん同じ。油断は出来ない。マテリアルの放ったランサー６発の中を掻い潜りながら、マテリアルへと突撃を仕掛ける。そのままアサルトフォームに戻した"バルディッシュ"による打撃を連続で振るう。マテリアルもまた私に合わせてアサルトフォームの"バルディッシュ"コピーを振るって迎撃してきた。

「こうして君と刃を交えれば交えるほど、苛立ちで気が狂いそうになる・・・！」

「私は・・・悲しくなるよ。自分と同じ顔と声、魔法を扱う君と争うなんて。でも、友達やこの街を守るために、私はあなたを討つ！」

一際強く振るった"バルディッシュ"の一撃に、「っく・・・！」マテリアルが溜まらずと言った感じで後退した。

「この僕が、力のマテリアルであるこの僕が、押し負けるなんてありえない！　そんなのありえない！　僕は・・・僕とバルニフィカスは強いんだ、速いんだ、君なんかに後れを取るはずがないんだ！」

"力"のマテリアル、か。それに"バルディッシュ"コピーじゃなくて"バルニフィカス"。これも報告通りだ。デバイスもまた独自の名前を有している。

「そうとも。我が名は雷光、力のマテリアル。閃光の太刀バルニフィカスにて、君を、君たちを斬り斃す。そして各地に生まれている欠片たちを取り込んで、この身のうちに闇の書の闇を蘇らせ、僕は決して砕けぬ、真の王となる！　さぁ、仕切り直しだぞぉ！　我が太刀に、一片の迷いなぁーーーーーしッ！！」

――雷光破走――

"力"のマテリアルの姿が掻き消えた。ソニックムーブだ。背後に回り込まれたんだと直感が働いて前進しつつ反転、"バルディッシュ"を薙ぎ払った。直感通り私の背後にマテリアルが居て、私の攻撃を縦に構えていた"バルニフィカス"の柄で受け止めていた。ギチギチと金属が擦れ合う音が私たちの間で鳴り続ける。

「せぇーい！」

「はぁぁぁぁ！」

同時に鍔迫り合いを中断してさっきと同じようにデバイスの連撃を

開始。私たちの間で激しい火花と金属の衝突音が生まれる。

「僕は勝つ！　そして飛ぶ！」

「ううん。私が勝つ、そして阻止させてもらう！」

自分と同じレベルの強さを持っているこの子――マテリアルと全力で戦うと余計に思い知る。ルシルとシャル、それにシグナムの強さを。特にルシルのランサー形態時の強さが際立つ。シャルと共闘してルシルを追い詰めようとしたあの戦い。あの時のルシルの斬撃速度に比べれば、私やマテリアルの攻撃はまだ遅い。

（でも今の私じゃ意識はついて行っても体が追いつかない・・・！）

意識に体が追いついた時、私はきっとルシルとも真っ向から戦える時だと思う。その前にシャルとシグナムっていう壁があるけど。でも今は目の前の壁――自分を乗り越えないと始まるものも始まらない。

マテリアルの振り上げの一撃に応じることなく後退して距離を取って、「バルディッシュ、ソニックフォーム！」防御を度外視して機動力を引き上げるバリアジャケット、ソニックフォームへと換装。マテリアルの背後へと瞬時に回り込む。

「ふえ！？」

「ごめん。自分（きみ）を相手に立ち止っているわけにはいかないんだ。また私の友達とこの街を危機に陥れようとするあなた達は・・・居て

はいけないんだ！」

ソニックフォームでのヒットアンドアウェイ戦法。あらゆる方位からマテリアルへと斬りかかる。マテリアルは慌ただしく私の攻撃を防御するけど、徐々に「なんでー！？」掠ったり直撃を受けたりするようになってきた。どうやらマテリアルはソニックフォームへの換装が出来ないみたいだ。

「ひ、ヒキョーだぞ！　正々堂々たたかえー！」

ガオー、と咆えるマテリアル。まさか卑怯って言われるなんて思わなかった。そしてマテリアルは「くっそー！」って悔しげに叫んで私から逃げようとした。空から地上に向かって降下、ビルとビルの間を縫うように飛んで行く。

私もすぐさま降下してマテリアルを追翔。マテリアルはビルの陰を利用して飛んで行くから視界に収め続けにくい。しかも時折、「電翔弾！」プラズマバレットを何発と発射して妨害してくる。

（これは逃げているんじゃなくて、戦場を移し替えようとしている・・・？）

機動・速力の優位性を崩す方法。それが広い場所じゃなくて狭い場所への変更。狭ければ狭いほど、機動力や速度が殺がれていく。となれば、袋小路に迷い込まされるより早くマテリアルを捉えないと、また勝敗の着かない相殺戦になっちゃう。

「っ、しま――っ！」

マテリアルを追ってビルの角を曲がると、そこには砲撃の発射体勢で待ち構えていたマテリアルが居た。

「くぅらえぇぇーーーッ、雷刃爆光破！！」

マテリアルの前面に展開されていた魔法陣の放射面から雷刃爆光破――プラズマスマッシャーが放たれた。ソニックフォームでの直撃は撃墜確実。「くっ！」移動先を確認しないまま全力で宙を蹴って飛んで回避。直後に足元を砲撃が通過して行った。

「・・・っと！」

ビルの側面に着地。すかさず砲撃発射後のため膠着しているマテリアルへと突進。ハーケンフォームへと変形させた"バルディッシュ"による一撃――ハーケンスラッシュを「はぁぁぁぁ！」与える。マテリアルは「そんなー！」って悔しげに声を上げながらコンクリートの地面へと落下、叩き付けられた。でも今の様子からしてまだ倒れてはいないはず。だから・・・！

「バルディッシュ！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ≫

カートリッジを2発ロードして、空いている左手の前――魔法陣を地面にめり込んで倒れたままのマテリアルへと向ける。

「トライデント・・・スマッシャァァァァーーーーーッッ！！」

魔法陣の中央から1本、続けて上下に1本ずつ、枝分かれするように3本の砲撃がマテリアルへと向かって行って、着弾点であるマテリアルに着弾する直前で結合して反応を起こし、雷撃を伴う大威力の爆発が起きた。私は周囲にプラズマスフィアを6基待機させて降下、マテリアルの様子を伺う。

「そんな、どうして・・・！？　僕の一閃が、後れを取るなんて・・・！」

「・・・・私の勝ちだよ、力のマテリアル・・・」

体の所々に消滅の前兆であるノイズが奔り始めたことで、待機させておいたプラズマスフィアを解除。マテリアルは悔しげに"バルフィニカス"を杖代わりに立ち上った。

「こ、今回は僕の負けを認めてやる！　で、でも！　や、闇は何度でも蘇るんだぞ！　僕も王への道を諦めたわけじゃないんだからな！　いずれ必ず、君を斃す！　だから、えーと、えーと、なんだ、憶えてろぉぉーーーーーー！！」

そんな捨て台詞を言い放ったマテリアルもようやく消滅した。それを見届けた私は「はぁ」なんて言うか疲れからくる溜息を吐くだけだった。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒なのは†††

アリシアちゃんから連絡を受けた私は、海上沖合にて反応を示したっていう"闇の書"の闇――ナハトヴァールと防衛システムの復活を企んでいる特別な残滓、マテリアルの討伐にやって来た。目の前に張られている結界へと侵入する前に、『なのは』シャルちゃんから通信が入った。

『さっきはごめんね、わたしの偽者が迷惑を掛けたっぽくてさ』

「あー、気にしないで、シャルちゃん。まぁ、本物のシャルちゃんと同じで超絶に明るくてちょっとやりにくい・・困った感はあったけど・・・」

ついさっきまで海鳴臨海公園でシャルちゃんの偽者と戦っていた私。偽者のシャルちゃんの時間は私と出会った直後のものだったから、敵対戦闘じゃなくて友好試合みたいな感じで戦った。
他にも救いだったのは、本物のシャルちゃんより弱かったこと、そして空を飛べなかったこと。時折、シャルちゃんは魔力の翼で空を飛んだりするけど、それが無かったから一方的な試合に出来た。あと、経験値の差もある。偽者のシャルちゃんは私の手札を知らず、私は知っていた。それが勝利に繋がったんだ。

『その割には偽者のわたしをボコボコにしてたよね、なのは？　わたしの攻撃範囲の外から射砲撃に雨あられ。改めてなのはの容赦なさを確認できたよ』

「あう、ごめんね・・・？」

『いいよ、いいよ。砲撃魔導師対剣闘騎士の参考になったから』

私と偽者のシャルシャルちゃんの戦闘映像で何かを感じたみたいなシャルちゃんは最後に、『ついさっき、フェイトのマテリアルが現れたの。名を、力のマテリアル』そう教えてくれた。すずかちゃんにアリサちゃん、そしてフェイトちゃんか。私はモニターから結界へと視線を向ける。たぶんあの結界の中には「私のマテリアルが居る・・・？」ということに。

『だから一応、気を付けてって思って』

「うん。ありがとう、シャルちゃん。私なら大丈夫。フェイトちゃんだって自分のマテリアルに打ち勝ったんだ。私だって負けていられないもん！」

『・・・そっか。そうだね。頑張って、なのは！』

「ありがとう、シャルちゃん！」

お互いに手を振り合い、そして通信を切る。改めて目指すはマテリアルの居る結界。"レイジングハート"を握り直して、いざ侵入して「あ、今までとなんか違う・・・」ピリピリと肌が焼けるような感じ。これまで遭遇してきた残滓の居る結界とは確かに違う。警戒しながらマテリアルの姿を捜して・・・「見つけた・・・！」夕日をバックにして宙に佇むマテリアルを視界に収める。

「・・・・！」

近付くにつれてハッキリとマテリアルの姿形が視認できる。全体的に深紫色のバリアジャケット。手にしているのは色違いの"レイジングハート"。普通に声を出して相手に届くくらいの距離にまで近づく。と、「待っていました・・・貴方を」俯かせていた顔を上げて、そっと右手を胸に添えた。やっぱり、私だった。髪は私とは違ってショートヘア。澄んだ空色の目をしてる。

「私を待っていた・・・？」

「ええ。この身と魔導は、闇の書に蒐集データから再現したもの。そう、貴方のデータです」

マテリアルはスカートの裾を左手と"レイジングハート"を持ってる右手で摘まみ上げて一礼して、「ですが、私は・・・他の誰でもない私として存在しています」そう言ったところで、私は妙な威圧感を感じた。

「まずは自己紹介を。私は理のマテリアル、そして私の魔導の杖、ルシフェリオン」

色違いの"レイジングハート"――"ルシフェリオン"を構えた"理"のマテリアル（敬称は・・・いいよね？）。

「私たちマテリアルの役目はただ1つ。貴方たちが砕いた闇の書の復活」

「闇の書は砕いてないよ。夜天の書っていう、綺麗な、元の姿に戻っただけ。・・・闇は砕いたけど（ぼそっ）」

「戻った、ですか・・・。ナハトヴァールや防衛システムがあってこその闇の書。今の魔導書は、魔導書と呼ぶのもおこがましい欠陥品です」

"夜天の書"――リインフォースさんの事をあろうことか欠陥品だなんて。私と同じ顔、そして声を持ってるけど、やっぱりあまり褒められた人格じゃない。私は悪びれる様子の無いマテリアルに向かって「取り消して」って語気を強めて言う。

「はやてちゃん達が苦しんで、悲しんで、その果てにやっと取り戻せた本当の名前と幸せを否定なんてさせない・・・！」

「取り消す必要などありません。元闇の書、その一部でした私が言うのですから。闇の書は、闇を抱いてこその魔導書。ですから、私たちのようなモノが生まれるのです」

マテリアルが"ルシフェリオン"の先端を私へと向けてきたから、私も"レイジングハート"を向ける。どっちにしても話し合いで終わる状況じゃないんだ。覚悟を決めて戦闘に入ろう。

「闇の書の復活を願い、そして果たすその前に。私個人としての目的――まずは貴方を、闇を撃ち砕いた魔導師である貴方を・・・撃ち斃します。その為に私は・・・貴方を待っていた！」

「っ・・・！」

≪マスター、お気を付けてください。強敵です≫

"理"のマテリアルから放たれて来るとんでもない戦意に"レイジングハート"が警告してきた。そうだね、すごい戦意だけど。でも

「ヴィータちゃんに比べたらまだまだ・・・！」どうってことない。

「理のマテリアル、ルシフェリオン・・・。参ります」

「高町なのは、レイジングハート。行きます！」

≪Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ≫≪Ｐｙｒｏ　Ｓｈｏｏｔｅｒ≫

「「シューット！」」

同時に放つのは射撃魔法。マテリアルはパイロシューターっていう名前のアクセルシューターを８発。私も８発。それらが私とマテリアルとの間で交差して向かうべき相手に殺到する。私は迫って来るマテリアルのシューターを上昇する事で回避。それは向こうも同じ。上昇して回避した。

すかさずマテリアルの背後から襲撃しようと回避されたシューターを操作。私の魔法を再現してるっていうからには、きっとマテリアルも私と同じように射撃魔法の操作技術に長けてるって思ってた。

だから私のように、って。でも・・・。

「ラピッドフェザー・・・！」

私のアクセルフィンと同じ短距離の高速移動魔法――ラピッドフェザーで突進して来たマテリアルは"ルシフェリオン"を振り上げて、「アサルトマルクス！」デバイスに圧縮魔力を乗せての打撃魔法フラッシュインパクト――アサルトマルクスを繰り出してきた。

≪Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ≫

シューターの操作を中断して回避ないし防御を取ろうとした時、"レイジングハート"がシールドを張ってくれて、マテリアルの打撃を防いでくれた。名前は違くても効果はやっぱり一緒みたいで、シールドを打った"ルシフェリオン"の圧縮魔力が強烈な閃光を伴って炸裂。シールド越しから途轍もない衝撃が伝わって来た。

（だけど今はチャンス・・・！）

シューターの操作を続行して、シールド越しに居るマテリアルの背後から再襲撃。と、マテリアルと目が合った。冷ややかなのに、けど強い意志に満ちた、不思議な目をしてる。その目がスッと後方を見るかのように動いた。

≪Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ≫

マテリアルの背後にシールドが展開されて、私のシューターが全弾防がれる。すぐさま「パイロシューター」私の周囲に８発のシューターが配置された。すぐさま後退。直後にさっきまで私が居た場所

のシューターが殺到して交差、次に停止。最後にわたしに向かって再襲撃。
マテリアルから距離を取りつつ、「シューット！」アクセルシューター８発を発射。マテリアルのパイロシューターの迎撃を行う。シューターの速度と威力は拮抗しているのが幸いだった。相殺が出来る。

「ブラストファイアァァァーーーッ！！」

シューターを相殺してる最中に発射されてきたのは、ブラストファイアーっていう名前に変更されたディバインバスター。

≪Ａｘｅｌ　Ｆｉｎ≫

アクセルフィンを発動してくれた"レイジングハート"のおかげで直撃は免れた。でも私の意思じゃなかったこともあって体勢を僅かに崩してしまった。立て直すための数瞬。その隙を突いて周囲にスフィアを６基展開させてるマテリアルが接近してきた。

（この子、自ら進んで近接戦を・・・！）

私とは正反対の魔法スタイルだ。私は距離を開けての射砲撃に対してマテリアルは接近しての射砲撃と近接戦のミックス。どちらかと言えばフェイトちゃんタイプだ。

「シューット！」

――パイロシューターーーー

私と距離を詰めたマテリアルは、シューター6発を同時発射じゃなくて間を置いての連射。まずは回避に意識を注ぐ。だけど逃げ道を塞ぐようにマテリアルが立ち塞がって来て、"ルシフェリオン"を振り降ろしてきた。

「ぅく・・・！」

体を横に向けて上体を逸らすことで"ルシフェリオン"の打撃を紙一重で回避。直後に到達したシューターをまた"レイジングハート"の張ってくれたシールドで防御。これもまたギリギリで間に合った。けど、「っ！」ビリっと首筋に痛みが奔った。直感的に"レイジングハート"を背中に回した。その直後・・・

「っ、きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

思いっきり背中を殴られたけど、"レイジングハート"を盾にしたおかげでこの一発で撃墜されることはなかった。でもその衝撃は強くて殴り飛ばされちゃった。海面に叩き付けられる前に体勢を整える。

「ファイアァァァーーーッ！」

――ブラストファイアーーー

頭上から降ってくる砲撃。海面スレスレを飛んで回避。砲撃の次は

射撃魔法パイロシューターが降り注いできた。いつまでも下の位置取りじゃ勝てない。"レイジングハート"をバスターモードへ変形させる。そして"レイジングハート"を構えた上で仰向けになる。

≪Ｓｈｏｒｔ　Ｂｕｓｔｅｒ≫

「シューット！」

射程や威力を度外視する代わりに発射速度や砲速を上げて連射できるショートバスターを、空を翔けるマテリアルへと向かって発射。マテリアルは砲撃の発射体勢を中断して回避に移った。今がチャンスだ。一気に高度を上げて、マテリアルと同高度にまで戻る。

「さすがは闇を撃ち砕いた勇士の一角と言ったところですね。やはりそう簡単には墜ちてはくれませんか」

「墜ちるわけにはいかないからね。友達の為に、この街の為にも」

お互い同時にデバイスの先端を相手に向けた。

≪Ｄｉｖｉｎｅ≫≪Ｂｌａｓｔ≫

「バスタァァーーーッ！」「ファイアァァーーーッ！」

そして発射する砲撃魔法。私たちの間で真っ向から衝突して、拮抗する。

「いっっっけぇぇぇーーーーッッ！」

「なんと・・・！？」

でも砲撃魔法じゃ負けないよ。拮抗を打ち崩したのは私のディバインバスター。少しずつブラストファイアーを押して行く。マテリアルは放射を中断してバスターの射線上から離脱。私もすぐさま放射を切り上げて"レイジングハート"のカートリッジをロード、エクセリオンモードへと変形させて、「アクセルシューター！」を7発と発射。

「パイロシューター！」

マテリアルのシューター8発と相殺し合って、最後の1発は後退しつつ新しく撃ったシューター1発で迎撃。そしてもう1つ、仕掛けを用意していく。そのまま距離を開ける。さらに仕掛けを1つ。

「エクセリオン・・・バスタァァァーーーーッ！」

マガジンを交換してさらにカートリッジをロード。そして誘導制御・反応炸裂型の中距離砲撃魔法エクセリオンバスターを発射。マテリアルはハッとして回避して、私に負けじと「ブラストファイアー！」砲撃を撃って、パイロシューターのスフィアを周囲に展開しながら私に向かって飛んで来た。

――レストリクトロック――

「っ！？・・・これは・・・・！」

範囲対象の捕獲魔法、レストリクトロック。発動から完成までの間に指定範囲内から出なかった対象すべてをその場に固定して、捕獲輪で拘束することが出来る。マテリアルは直感的にバインドの存在に気付いたみたいで、ラピッドフェザーっていう魔法で回避に移った。結果、拘束できたのは両脚と腰、そして左腕。"ルシフェリオン"を持ってる右腕だけは失敗。

「このような拘束、すぐにでも・・・！」

「レイジングハート！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ≫

補助効果付きの複合高速砲撃、バレルショットを発射。本命の砲撃の照準や弾道安定、発射直後の暴発や拡散を防ぎ、そして対象を逃がさないための不可視型バインドっていう効果を持った、物理的な衝撃波を伴う砲撃だ。バレルショットの直撃を受けたマテリアルの空いていた右腕も目に見えないバインドで拘束されたのが判った。さぁ、これで決着だよ。カートリッジを全弾ロードして、最後の砲撃の発射体勢に入る。

「エクセリオン・・・」

「っ！　このままでは・・・！」

バインドブレイクをしようともがき始めたマテリアル。でも、その拘束からは逃れられないよ。

「バスタァァァァーーーーーーッッ！！」

エクセリオンバスターをマテリアルへと向けて発射。マテリアルは「・・・ここまで、ですか」ってもがくのをやめた。そして私の砲撃の直撃を受け入れた。魔力爆発に呑み込まれたマテリアルがもし、まだ反撃をしてこないと限らないから周囲に魔力スフィアを6発と待機。晴れていく煙の中から、ボロボロになったマテリアルが姿を見せた。完全に戦意喪失していることが判ったからスフィア全基を破棄する。

「敗れてしまいました・・・。やはりあなたは強かった・・・」

「ううん。あなたも・・・すごく、強かった」

「光栄ですね。貴方ほどの強い戦士から賛辞を贈って頂けると」

儚げに微笑むマテリアルの体にノイズが走り出す。消滅の前兆だ。

「私は、消えるのですね」

「あ・・・、ごめんね」

さっきまでと打って変わって弱々しく見えるマテリアル。でも私の謝罪を聴いたマテリアルはもう一度微笑みを浮かべて首を横に振っ

た。

「闇の書の復活をこの身で成し得えることは叶わなかったですが、敗れはしましたが貴方と戦う事が出来たのです。生まれた甲斐はありましたとも」

私と戦えたことが本当に満足だって、マテリアルの綺麗な目が告げていた。だからかな、「ありがとう」私はそうお礼を言っていた。

「もし、いつかまた、貴方と見えることがあれば、その時はきっと、決して砕け得ぬ力をこの手にして、再び貴方と魔導を交えたいと思います」

「えっと、うん。待ってる、って言うことは立場上できないけど・・・」

「ですね。・・・高町なのは。次に私と見え、魔導を交えるまで・・・、貴方の信ずる道が、勝利に彩られますように。・・・それでは、その時まで・・・さらばです」

"理"のマテリアルはそう言い残して、その体を消した。目的を度外視すれば良い子だったんだけど。う～ん、別の形で出会えれば、きっと友達になれたんだろうけどな。それが残念だった。

（テスタメントちゃん・・・）

あの赤い髪の女の子をどうしても思い出しちゃう。少し思い出に浸

っていると、エイミィさんから通信が入った。

『お疲れ様、なのはちゃん！　なのはちゃんの周囲の残滓が一斉に消滅したのを確認したよ』

『残るマテリアルは1つ。今、はやてとリインフォースが向かってる。たぶん、そのマテリアルで最後だと思う』

アリシアちゃんの報告にちょっと嫌な予感がした。はやてちゃん、まだ上手く魔法を使えないはずだし、リインフォースさんも弱ってる。そこに他の残滓より強いマテリアルと戦うってことになると・・・。

『あれ？　あれ、あれれ？』

『どうしたの、アリシアちゃん？』

モニター越しから伝わって来るアリシアちゃんの困惑。少しの間、2人がキーを操作している音が漏れ聞こえて来て、そして・・・。

『っ！！・・・テスタメントちゃん・・・！？』

エイミィさんから発せられた、たった今、私が思い返していた女の子の名前。アリシアちゃんの操作なのか別のモニターが展開されて、そこに映し出されていたのは・・・

「テスタメントちゃん・・・・！」

燃えるように赤い髪に青い瞳。手に持つのは漆黒の十字架、"第四聖典"。服装は、私の知ってる神父さんの服とは違って、赤いブラウスに黒いネクタイ、黒のスカートっていうもの。それでもその子は確かにテスタメントちゃんだった。

Ｅｐｏｓ３１－Ｄ砕け得ぬ闇の使徒～Ｌｏｒｄ　ｏｆ　Ｄａｒｋｎｅｓｓ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

リインフォースやシグナム達を何百年も苦しめてきた"闇の書"の闇――ナハトヴァールと防衛プログラム。わたしらは今、数日前に家族と友達みんなで頑張って倒したソレを復活させようとしてるマテリアルの討伐中や。

『お疲れ様、はやてちゃん、リインフォース。残滓の消滅を確認したよ』

つい今し方、リインフォースと一緒に"闇の書"の闇、その復活の要になるってゆう再生された記憶――残滓を打ち倒した。残滓は"闇の書"に蒐集された人やその記憶から再現される思念体ってことらしくて、そやから残滓はわたしら八神家やったりすずかちゃんたち友達やったりする。

さっき戦ったんはフェイトちゃんやった。本物のフェイトちゃんやったらきっと負けてたけど、残滓のフェイトちゃんは本物よりは遅かった。そやから格下のわたしでも勝つことが出来たんや。

『それでね。申し訳ないんだけど、最後のマテリアルの反応がはやてちゃんとリインフォースの近くで探知されたんだ。２人に頼めないかな？　いま手が空いてる子が居なくて』

「了解です。リインフォースと一緒に向かいます」

「エイミィ執務官補。座標をお願いします」

リインフォースと頷き合って、エイミィさんから座標を受けとる。みんなが今も頑張ってるんや。それならわたしらも頑張らんとアカンよな。

「リインフォース。最後のお勤めや。終わらせに行くよ、闇の書の旅路を、今度こそ」

「はい。我が主はやて」

リインフォースと手を取り合って空を翔ける。わたしひとりでも飛べるようにシャルちゃん家に泊まった時から練習を始めてから数日。ルシル君との勉強会からすずかちゃん達との魔法練習会へと切り替えて練習してきた。そやからこうしてちゃんと魔法戦が出来る。まぁ、今のリインフォースとの2人がかりでやっと一人前って感じやけど。

「あれが最後のマテリアルが居ると言う結界のようですね」

空を飛ぶこと少し。最後のマテリアルが居るってゆう海上にある結界に辿り着いた。この中にマテリアルの最後の1基が居る。その子を倒せば、それでホンマに"闇の書"の旅路に幕を降ろせる。うん。最後の夜天の主として、この手できっと必ず・・・。

「よしっ。行こう、リインフォース！」

決意を改めて、いざ侵入、ってゆうところで、「え・・・？」目の前の結界がグンッと膨張するかのように広がって来て、わたしとリインフォースを呑み込んだ。視界が一瞬、暗転する。

次に視界が開けた時、そこは別世界やった。ついさっきまでは夕日が沈む黄昏時やったのに、ここは完全に夜。足元は底が見えへん程の暗闇。周囲と頭上は青暗い夜空で、数多くの星が瞬いてる。それはまるでシャルちゃんがナハトヴァール決戦で見せた、創世結界ってゆう魔法みたいや。

「ふふ・・・はは、ははははははッ！！」

リインフォースと背中合わせで周囲を警戒してる中、そんな笑い声が聞こえてきた。声のした方を見る。そこには「ビックリや。わたしが居る・・・」わたしと瓜二つの女の子が大笑いしてた。

「力が漲る、魔導が滾る！！　我が元にいざ集え、闇の欠片よ！我が身に捧げる贄となれッ！」

そやけどちょうぶっ飛んだ性格の持ち主のようや。う～ん、他のマテリアルもまた変な性格をしてたんやろうか。そう思うと、ちょう見てみたい気もする。他の子はどんなふうにアレンジされてたんやろ。

「主はやて。お気を付けください！　あの凶悪な魔力は只事ではありません！・・・っく。相手が悪い・・・が。主はやて・・・」

リインフォースに見詰められたわたしは「判ってる。２人でならきっと・・・！」って強く頷き返す。魔導師＆騎士歴が数日のわたしでも判る。アレは今まで相手にしてきた残滓とはちゃう。特別な基体マテリアルってゆうんは伊達やないってことや。そやけどわたしとリインフォースの２人なら・・・。

「主はやては離れていてください。私ひとりで相手をします」

「・・・・・え？」

「私のこの壊れかけの拳でアレを止めることが叶うかどうかは判りませんが・・・。いえ、止めます、必ず。主や騎士たち家族を守るため、そして雛鳥たちの空を開くために。私がこの身に、命に代えてでも・・・！」

何を言うかと思うたらリインフォースは自分を犠牲にしてでもわたしを逃がして、最後のマテリアルと戦うって。もちろんそんなん「アカン！」に決まってるやろ。家族を見捨ててわたしひとりで逃げるなんて出来ひん。

「とゆうかな、自分のことを壊れかけとか言うたらアカン・・・！」

自分を蔑ろにする発言をしたリインフォースのことを叱ってたら・・・

「先ほどからコソコソと喚いているのは誰かと思えば・・・。面白

い獲物がかかったわ。我が映し身ではないか」

横顔を向けてたマテリアルがきちんとわたしらに向き直った。とゆうか、「わたしの方が偽者みたいな物言いやね、それ」そっちの方が偽者やのにな。

「それに・・・壊れて使い物にならぬ融合騎、と呼ぶのもおこがましい残骸ではないか。無様に生き恥を晒しおって。見るに堪えぬわ」

「っ！！」

聞き捨てならんことを言うたマテリアルをキッと睨み付ける。

「ほう。闇の書の主であることを、闇を統べる王の玉座を棄てた、羽根も揃わぬ子鴉が一丁前に敵意を放ちおる」

「わたしは王様になんて別になりたなかった。それに、人を殺して自分も死ぬだけの玉座なんて、意味がないやろ」

「あまつさえ、王位と玉座を棄てるだけに留まらず、そのような残骸を行かす為に貴重な機能の大半までも打ち棄ておった愚か者めが」

わたしの話を聴いてへんって風に話を続けたマテリアルはまた言うた。リインフォースのことを残骸って。"シュベルトクロイツ"をギュッと握り直す。と、色違いの"シュベルトクロイツ"と"夜天の書"を持ったマテリアルも臨戦態勢に入った。

「また言うたな。リインフォースのことを、残骸って・・・！」

「アレの言うことに耳を貸してはいけません、主はやて！　ただの挑発です、乗ってはいけません！」

リインフォースがわたしを止めにくる。そやけど夜天の主として止めなアカンし、なにより家族を馬鹿にされて黙ってなんかおれへん。マテリアルが「はっ。何度でも言うてやろう。そこに居るのは、主と共に戦う融合騎とは呼べぬ、一欠けらの価値の無い、下らぬ残骸よ」そう鼻で笑ってきた。

「っ！　黙れ。うちの大事な子を、夜天を渡る祝福の風、リインフォースを穢すんは、絶対に許されへん！　リインフォースはな、本の姿やった頃からずっと、いつもわたしを見守ってくれてた子なんよ」

何百年と悲しい運命に流されて苦しんできたのに、それでも優しく笑ってくれるリインフォースを想う。

「あんたら闇の書の闇との戦いを、大ケガをしながらも戦い抜いて、生き延びてくれた、大事な家族なんや、大切な宝物なんや！　たとえ融合騎としての力を失くしても、わたしとリインフォースは一心同体の騎士と融合騎！　そんなリインフォースを、祝福の風を傷つける者は、誰であろうとこの最後の夜天の主、八神はやてが許さへん！」

若干怒鳴ってた所為もあって「はぁはぁはぁ・・・」肩で息をする。

「ふふ、ははは！　許さない、とはこれまた子鴉ごときが大口を叩きおるわ。どう許さないかを見せてもらいたいものだ！」

わたしの話を聴いたマテリアルは大笑い。完全に馬鹿にされてるってゆうんが判る。その余裕はいま纏ってる気味の悪い魔力からくるようや。それでも今すぐにでも殴りに行きたい（あー、思考がちょう暴力的になってしもとる）思いに駆られる中、「主はやて・・・！」リインフォースがわたしの名前を呼んだ。また止められるんかな、て思うたから「リインフォース。わたしの役目はキッチリ務めなアカンのや」先手を打つ。

「ですが・・・！」

――ドゥームブリンガー――

「っ、危ない！」

――パンツァーシルト――

マテリアルが撃ってきた魔法からわたしを庇うようにリインフォースは前に立ちはだかって、ベルカ魔法陣のシールドを張って防いでくれた。そやけど威力が高かったんかリインフォースが「っく」呻き声を上げた。

「大丈夫かリインフォース！？」

「はい。問題ありません。ですが今のは・・・」

「うん。今の・・・わたしが練習してる射撃魔法、バルムンクや・・・！」

ここに来るまでに報告を受けた通りや。マテリアルは独自の人格、魔法術式名、デバイス名を持ってるって。このわたしの姿をしたマテリアルも、今のわたしが扱える魔法を全て使えるはずや。しかも威力がわたしのと比べると段違いや。

「何を驚いておる。我は闇の書の力の中枢、その頂点に立つ王のマテリアルぞ。理、力、義、律。王下４つのマテリアルとは一線を画しておってもなんらおかしくなかろう。それに、すでにいくつかの欠片を取り込んでおるのだしな」

"王"のマテリアル。名前からして確かに特別や。満足そうに笑みを浮かべるマテリアルにわたしとリインフォースは身構える。リインフォースはまだ何か言いたそうな顔やけど、わたしが折れることはないってわたしの目から察してくれたんか「ご無理はなさらないでください」ってようやくわたしの戦闘参加を認めてくれた。

「光栄に思うがよいわ。闇の書復活の宴の前奏として、王自らがうぬらと踊ってやろう。王と我が王杖、エルシニアクロイツの前にひれ伏すがいい！　アロンダイトッ！」

"エルシニアクロイツ"ってゆう名前に変更された剣十字杖の先端から発射されるんは砲撃魔法、アロンダイト。わたしの魔法で言

うクラウ・ソラスや。その砲撃をリインフォースに抱き寄せられるような形で回避。

『威力が尋常ではありません！　防御に回れば墜とされかねません！』

『うんっ。出来るだけ回避やな！』

「威勢が良いのは口だけか？・・・アンスラシスドルヒ！」

避けたばかりのわたしらに向かって放たれたのは、アンスラシスドルヒってゆう名前に変更されてる短剣型の高速射撃魔法、ブルーティガードルヒ（わたしの場合はブラッディダガーや）。その数８発。リインフォースが同数のドルヒを発射して全弾迎撃。

「主はやて！　支援射撃をお願いします！」

そう言うてマテリアルへ向かって行ったリインフォース。マテリアルがわたしと同じなら近接戦闘が出来ひんはずや。そんなリインフォースを助けるべくわたしは「バルムンク！」剣状の射撃魔法１２発を放射状に発射。バルムンクは曲線を描いてマテリアルを包囲するように襲撃。

「子鴉に出来ることは我にも出来るぞ。ドゥームブリンガー・・・！」

同じ数と軌道で発射された剣状射撃ドゥームブリンガーが、わたしのバルムンクを全弾迎撃した。でもそれでもええ。ただ「はぁぁぁぁぁ！」リインフォースの援護が出来ればな。すでに懐にまで入ら

れてるマテリアルはまずリインフォースの一撃を防げへんはずや。しかもいま発動してるんはシュヴァルツェ・ヴィルクングってゆう、効果破壊の魔法を纏わせたパンチや。そやからたとえシールドが間に合っても砕けてしまう。

「壊れかけの残骸の拳など、注意するにも値せんわ・・・！」

マテリアルはひらりとリインフォースの真っ直ぐなパンチを半歩分横に移動して避けて、「アンサラーシュラークッ！」剣十字杖に魔力付加させての直接打撃魔法を反転することで遠心力を乗せた状態で繰り出した。アレもわたしが練習してる、クロイツシュラークと同じ効果や。

「うぐっ・・・！」

「リインフォース！」

咄嗟に腕を交差させて防御したおかげでマテリアルの打撃魔法の直撃は免れたリインフォースやけど、それは防御魔法無しでの受けや。そやからリインフォースは耐えきれずと言った風に大きく後退した。

「はっはっはっ！　どうした子鴉、残骸！　よもやこれで終わりとは言わぬだろうな！」

――アンスラシスドルヒ――

――アロンダイト――

体勢を整えたばかりのリインフォースに向かって射出されたアンスラシスドルヒ。そんでわたしには砲撃。リインフォースは体勢を崩したままの中、パンツァーシルトってゆうシールドを張って防御。

（アカン、避けきれへん！）

マテリアルの強力な砲撃は、今のわたしやと防ぎきれへんことは判ってる。そやけど回避能力が低いわたしやと避けきれへん。そやから魔力の大半をパンツァーシルトに回して防御したんやけど、「ひゃあ！？」やっぱりアカンかった。シールドがひび割れて、その衝撃で墜落する。

「主はやて！」

リインフォースがわたしに向かって降下しようとしたところで、リインフォースの背後にマテリアルがスッと姿を見せる。気付いてへんのかリインフォースはそのまま降下して来るから、「アカン、後ろや、リインフォース！」大声を上げて教える。

「塵芥が。管制プログラムである貴様を取り込み、我はさらなる高みへと昇る。いま喰ろうてやるぞ！」

――ドゥームブリンガー――

リインフォースが反転してマテリアルと相対した直後、マテリアルがドゥームブリンガーを放射状に発射した。リインフォースは避け

ずにさらに高度を下げた上でシールドを張った。どうして逃げへんのや？って脳裏に過ぎった瞬間、わたしが居るからや、って思い至った。
今のわたしらの位置は、一番下がわたし、一番上がマテリアル、中間にリインフォース。体勢を整え終えてへんわたしを庇うために、リインフォースはマテリアルの攻撃に晒されることを選んだんや。

――パンツァーシルト――

着弾寸前に発動したシールドでブリンガーを防いだリインフォースやったけど、「甘いわッ！」ってマテリアルはさらに砲撃のアロンダイトを発射してきて、リインフォースをさらに攻撃した。シールドに着弾する砲撃が爆発を起こすと、「うぁぁあああ！」リインフォースが衝撃に耐えかねて墜落してきた。体勢をようやく整え終えたわたしがリインフォースを抱き止める。

「っと・・・！」

飛行魔法もまだまだ上手く扱え切れてへんくて、さらに子供なわたしにリインフォースを抱き止め切ることなんか出来るわけもなく。ズンッと重いリインフォースと一緒にさらに墜落。

「かの管制融合騎はあまりに繊弱にして羸弱、脆弱と成り果て！王位と玉座を棄てた子鴉はあまりに幼弱にして柔弱、さらに惰弱ときておる！　うぬらを喰ろうて高みに上ろうとした我自身に嫌気が差すわ！」

なんや勝手なことを大声で言い放ってくるマテリアル。そんな中、「申し訳ありません、主はやて」ってリインフォースが謝ってきたから「わたしの方こそ足引っ張ってごめんな」って返す。やっぱりわたしはダメな子や。意志だけが先行してしもうてて強さが追いついて来てへん。そやからこんなにも・・・。

「私は嬉しかったです。主はやてが先程マテリアルに対して仰ってくれた言葉。だからこそ情けない。あなたの想いに応えることが出来ないのが・・・！」

弱音を吐くリインフォース。どうにかしたい。わたしとリインフォースの2人で、あの強大なマテリアルをどうにかして止めたい。その方法はホンマに無いんやろか。必死に知恵を絞る。と、数日前にシャルちゃんの家でミミルさんから貰った融合騎について、って資料を思い出す。

（確か、融合騎と主に融合についての注意事項に・・・）

もし、資料通りならわたしの考えがこの窮地をどうにか出来るかもしれへん。リインフォースの肩越しから「ユニゾンしよ、リインフォース」にそう耳打ちする。

「っ！？　いえ、ですが、私にはもう融合機能が・・・」

「ううん。リインフォースも読んだはずや。ミミルさんの資料」

「っっ！！　い、いけません！　あなたに負担がかかり過ぎます！」

リインフォースも察したようや。リインフォースがわたしにユニゾンするんやなくて、わたしがリインフォースにユニゾンする。資料にあった融合事故って項目を思い返す。主の身体や意識を融合騎に全て乗っ取られるってゆうあれを。

「問題あらへん。魔法に目覚めてから今日までずっと魔力制御の練習をしてきた」

「そうですが・・・・！」

「わたしら2人、一心同体って言うたやろ？　すぐに片付ければ大丈夫や。わたしとリインフォースを甘く見てるあの王様に一泡吹かせたろ？」

律儀にもわたしらが反撃して来るんを待ってくれてるマテリアル。自分が優位やってことを信じて疑ってへんあの邪悪な笑み。今は素直に受けるわ。そやけどその余裕、すぐにバッキバキにへし折ったる。

「リインフォース。行こう・・・・！」

「はいッ！　我が主はやて！」

体勢を立て直したわたしらは向かい合って手を取り合う。そんで「ユニゾン・イン！」を行った。わたしの意識がリインフォースの内側へと入り込む。リインフォースとリンカーコアが繋がってるから

こそ出来る裏技や。

「っ！？　ほ、ほう。随分と面白い芸当を見せるではないか、子鴉、そして残骸」

わたしらのユニゾンを見てもまだ余裕を崩してへんみたいやけど、さっきとは明らかに身構えが違う。どう見ても警戒してる。

『融合率９６％・・・！　これならいけます！』

『そうやろ！　わたしらの絆の力があれば、どんな奇跡だって起こせる！　さぁ、リインフォース。今度こそ終わらせるよ！』

『はいッ！』

リインフォースの内側から、リインフォースの見てる景色を見詰める。目の前には打倒すべき敵、マテリアル。その子が「面白い！　喰らう価値がようやく生まれたというもの！　さぁ、我が糧となれ！」自分を鼓舞するように叫んで、砲撃アロンダイトを発射してきた。対するリインフォースは避けようともせずに右手を砲撃に向けて翳してパンツァーシルトを発動。そして着弾して爆発を起こす。視界いっぱいが煙に包まれる中、リインフォースが動いた。

――ハウリングスフィア――

後退しながら魔力球を左右に設置。そんで「ブルーティガードルヒ！」短剣型の射撃魔法１８発も一斉発射して、目の前の煙を穿ちながら

マテリアルへ殺到させた。マテリアルは「これでこそ狩り。狩り甲斐があるわ！」そう言うて舞うようにしてドルヒを回避。

「ナイトメアハウル！」

そこでリインフォースが砲撃を撃つと、さっき設置された2基の魔力球ハウリングスフィアも砲撃となって、計3本の砲撃が回避し終えて止まってたマテリアルを襲撃。マテリアルはそれでも砲撃を避けきって、「アロンダイト！」負けじと砲撃を撃ち返してきた。リインフォースは砲撃を今度は避けて、そのままマテリアルに向かって突っ込んでく。

「エルシニアダガー！」

光の尾を引くダガー状の魔力弾を連射して弾幕を張った。それでもリインフォースは最小限の動きで弾幕の中を突っ切ってく。そんな中でリインフォースはドルヒ20発を一斉発射。マテリアルは弾幕を張るのを中断してシールドで全弾防御。着弾時の爆発と生まれた煙に包まれた。その隙を突いたリインフォースが一気に接近した。

――封縛――

リインフォースが発動したバインド魔法が煙の中で消えてすぐ、「おのれ！」煙の中からマテリアルの焦りの声が聞こえてきた。晴れてく煙の中からバインドに拘束されてもがいてるマテリアルが姿を見せた。

『この一撃で決めます！』

『おう！　わたしなら大丈夫や、派手にやって！』

リインフォースの右手に発生する魔力をマテリアルに押し付ける。と、魔力球が大きく膨張してわたしらとマテリアルを内側へと取り込んだ。魔力球の中は雷雲と言ってもええくらいに雷が満ちてて、そんな雷を1つに纏めて相手に向かって放つ魔法。それが・・・

「おのれぇぇぇぇーーーー、塵芥がぁぁぁぁぁーーーーーッッ！！！」

『『夜天の雷！』』

莫大な魔力を持った雷の直撃を受けたマテリアルごと魔力球が爆発粉砕。視界が光に満ちて閉ざされる。そんで次に開けた時、目の前には体の至るところにノイズを奔らせて崩壊寸前って風なマテリアルがわたしらを睨んでた。

「馬鹿な・・・、ありえぬ、我が、闇統べる王たるこの我が、かような不様を晒すとは・・・！」

『どうや見たか！　これがわたしとリインフォースの・・・！』

「我らの絆の力！　もう終わりだ、大人しく眠るがいい！」

「うぬぅ・・・！　認めぬ！」

触れれば崩れるってゆうところまでボロボロやのにマテリアルはまだ戦う気でおった。そやからこちらも最後まで付き合おうってなった時、「ふわぁっ！？」強制的にユニゾンが解除されてしもうた。浮遊感からすぐに落下感がわたしを襲った。けど、「大丈夫ですか！？」リインフォースがお姫様抱っこで受け止めてくれた。

「わ、わたしは大丈夫や・・・。そやけど・・・！」

「ふふ、ふはははは！　我の勝ちだぁぁぁぁーーーーッ！」

足元に魔法陣を展開して降り立ったマテリアルが、崩れかけの右手に持ってる"エルシニアクロイツ"の先端を向けてきた。リインフォースがマテリアルに背を向けた。わたしを庇って自分が攻撃を受ける気やってすぐに察した。

「アカン！　やめて、リインフォ――」

「アロンダイ――」

――轟火之砲光――

リインフォースの肩越しからわたしは見た。マテリアルの直上から凄まじい炎の砲撃が降って来て、マテリアルを呑み込んだのを。その砲撃は海上に着弾して爆発、海面を大きく穿った。そんで二度と、あの"王"のマテリアル――闇を統べる王さまは姿を見せへんかった。

「一体何が・・・！？」

「上や、リインフォース！」

夕暮れから夜へと変わってた外の世界の空に、1人の女の子が居った。燃えてる火のように赤く長い髪をポニーテールにした女の子が。その子は右手に身長と同じくらいの黒い十字架を持ってて、その十字架を肩に担いだと思うたら街の方へ飛んで行った。

「あの子が、わたしらを助けてくれたんかな・・・？」

「おそらくは」

赤い髪の女の子を見送った直後、『こちら捜査本部のエイミィ！』から通信が入った。

『ごめん、はやてちゃん、リインフォース！　マテリアル戦後で疲れてはいると思うけど、さっきの女の子を追ってもらってほしいんだ！　どうやらあの子――テスタメントちゃんもマテリアルに近い特別な残滓みたいなの！』

『はやてがマテリアルを倒したら他の残滓が一斉に消えたんだけど、さっきのテスタメントだけは消えなかった。何かあるはずだよ！』

エイミィさんとアリシアちゃんの必死さが伝わって来た。そやから「リインフォース！」体が重くて、もう何も出来ひんようなわたしやけど、テスタメントってゆう子を追うようにお願いする。そやけ

どリインフォースはわたしの声が聞こえてへんようで「テスタメント・・・あれが・・・ルシルの言っていた」ボソボソとなんや呟いてた。

「リインフォース・・・？　何かあったんか？」

「え？　あ、いえ、何でもありません。それでその・・・なんでしたでしょう・・・？」

「テスタメントちゃんってゆうあの女の子を追おうって・・・」

さっきまで様子がおかしかったリインフォースは首を小さく振って、「判りました。ですが、戦闘はいけませんよ、主はやて」ってわたしを注意。その表情にはさっきまでの様子はなかった。

「了解や。もう自分で飛ぶだけの魔力も残ってへんから、戦うなんて夢のまた夢や」

そうしてわたしとリインフォースは、テスタメントちゃんを追って街を目指して空を翔ける。

Ｅｐｏｓ３１－Ｅ砕け得ぬ闇の使徒～Ｆｒｉｅｎｄｓ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

あのテスタメントが"闇の書"の残滓として蘇った。その報告を受けたＰＴ事件に関わったわたしやなのは達はすぐに彼女の捜索に入った。他の残滓は、はやてとリインフォースの活躍――最後のマテリアル（王のマテリアルっていう名前で、はやてのそっくりさん）を撃破してくれたおかげで全基消滅したから度外視できる。あとは、何故か消えないテスタメントを・・・

（うわぁ、なんか嫌だなぁ、あの子を消すっていうの・・・）

捜索の最中、ずっと胸の内に渦巻く思い。テスタメントの最期を見て知っているからこそのやり辛さ。たぶんなのは達も同じ思いをしてるはず。戦いたくない、倒したくない、だけど戦って倒さないといけないっていうジレンマ。

「・・・っ、見つけた・・・！」

そんな中、わたしはついに見つけてしまった、テスタメントを。河川敷で、草むらを漆黒の十字架――"第四聖典"で薙ぎながら「無いなぁ～」途方に暮れてるあの子を。わたしはゴクリと息を呑む。まずはエイミィに「テスタメントを発見。ポイントは――」今わたし達の居る場所を報告する。あとは、なのは達が来るのを待つだけ。堤防の上からテスタメントの姿を見守ること数分。

「あー、やっぱりない。ねぇ、・・・もしかして、あなたたち管理局が先に手に入れたの？　ジュエルシード」

「っ！！」

テスタメントがスッとわたしに振り返ってそう訊いてきた。テスタメントの意識年代はジュエルシードを回収してる最中みたいで、ああしてジュエルシードを探してるんだ。事件が終わった今も、そして・・・死んでしまった今も。そう思うと鼻の奥がツンっとなる。

「うん、ジュエルシードは回収し終えたよ」

「この私が察知できないほどの早さで回収するなんて。どんな裏ワザを使った？」

テスタメントが"第四聖典"を指だけを使ってクルクル回しながら歩み寄って来たから、「もう全部が終わったんだよ、テスタメント」って遠回しにジュエルシード争奪戦に決着がついたことを伝える。

「そう。じゃあ力づくで、ジュエルシードを奪わせてもらおうか。騎士イリス・・・！」

戦意を漲らせるテスタメントに、「まぁとりあえずちょっとだけ待って」って落ち着くように言う。するとテスタメントは「仲間を呼ぶつもり？　それまでに奪う・・・！」自身の周囲に火球を6基と展開した。

「ちょっ、マジで待って。戦う気なんて一切ないから！　ただ、あなたと話がしたいだけ！」

「話？・・・・なんの？」

「えっと、ほ、ほら。あなたって、なのは達に友達になろうって誘われてたじゃない？」

なのは達が来るまでの時間稼ぎとしての会話、そのネタを必死に探って思いついたのがソレ。友達っていうキーワード。なのはもアリサもすずかも、テスタメントと友達になりたいっていう話をしていたのを思い出した。

「なんで疑問系？　ま、まぁ・・・フェイト・テスタロッサと一緒になろうって誘われたけど、私は断ったはず。だから話をするつもりは端からない。というわけで、さぁジュエルシードを賭けていざ勝負」

「ちょ、ちょちょちょ！　待って、待って、待って！」

あれ、テスタメントってこんなにバトル好きだったっけ？

「「シャルちゃん！」」「「シャル！」」

どうやってやり過ごそうかと思案していたところで、待ちに待った声が聞こえてきた。空を見上げると、なのはとフェイト、アリサを

抱っこしたすずか、そしてアルフがこっちに向かって降下して来ていた。

「高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずか・・・、それにフェイト・テスタロッサとアルフ！？　どこにも居ないと思ったら、どうして管理局組に・・・！？」

テスタメントが驚きの声を上げる。どうやらフェイトやアルフと同盟を組み終えた時点の意識みたいだ。テスタメントが「まさかこんなに早く裏切りに遭うなんて予想外だよ」って警戒心を露わにして身構えた。

「「テスタメントちゃん・・・！」」

「「テスタメント・・・！」」

なのは達が河川敷に降り立って、涙声でテスタメントの名前を呼びながら彼女の側に群がった。なのは達の泣き顔に歪む表情に「え、なに、なに？」って困惑するテスタメント。さらに「おーい！」クロノに背負ってもらってるアリシアも合流。

「アリシア・テスタロッサ！？　何故あなたが生きて・・・！？」

いよいよ混乱の極みに達したって風なテスタメント。そんなテスタメントの手を握るなのはが「テスタメントちゃんに、大事なお話があるの」って話を切り出した。わたし達はテスタメントに、今がどういう状況なのかを伝える。まずは　"闇の書"っていうロストロ

ギアを巡る"闇の書"事件についてから話した。

「闇の書事件、ね～。ジュエルシード争奪戦の最中にそんなことが・・・。だからってフェイト・テスタロッサとアルフがそっちに協力するのはおかしくない？」

テスタメントがフェイトとアルフをジロっと横目で睨み付けた。そんな視線から顔を逸らす2人の代わりにわたしが「さっき言ったでしょ。ジュエルシード争奪戦はもう終わったって」ってそう伝える。

「あー、そうだったっけ。で？　この私の魔力探査能力を以ってしても気付かないようにジュエルシードを回収した術、後学の為に教えてもらってもいい？」

「テスタメントちゃん。テスタメントちゃんも実際に経験したんだよ。事件の顛末を」

「ええ。ジュエルシードの回収を、あんたは最後まで果たした」

「テスタメントちゃんが回収したのは全部で２４個。私たちが７個。計３１個、だよ」

なのは、アリサ、すずか、とテスタメントに伝えてく。そこまで聴いたテスタメントは思うところがあるのか少し沈黙して、そして「・・・確か、ジュエルシードを巡って来た季節は、春、だったよね・・・」ここ河川敷に吹いた冷たい風に靡く後ろ髪を押さえながらそう言った後、何かに納得したのか頷いた。

「今、何月？」

「・・・・１２月３１日。あと数時間で年が明ける」

クロノがそう答えたら、「半年も経過している、か・・・」テスタメントはふむふむとまた思案を始めた後、「私が何者か、あなた達は知ってるよね・・・？」問いというより確認をしてきた。自力で自分の正体に違和感を覚えたテスタメント。やっぱりこの子はすごい。魔導師としての腕もそうだけど、頭の回転も速い。

「・・・それは、いま起きている事件に関係しているの・・・」

なのはがそう話を切り出すけど、そこまで言ったまま黙る。アリサもすずかもフェイトもアルフも、わたしやクロノも言い難そうにしている中、「ごめん。わたしの所為で、テスタメントは死んだんだよ」アリシアはいきなり核心を話した。

「私が、死んでいる・・・？」

目を点にして訊き返したテスタメントに、「うん。実は――」アリシアが語り出す。ジュエルシード争奪戦の結末を。３１個のジュエルシードを回収し終えた事で舞台は海鳴の街からフェイト達を操っていた黒幕、プレシアの居城――時の庭園へ変わったこと。そして、そこでお互いのジュエルシードを賭けてフェイトとアルフを裏切ったテスタメントと、わたしたち管理局組＋フェイトとアルフの決戦が起こったこと。

「――私がフェイトとアルフを敵に回した・・・」

「テスタメント、君は言った。ジュエルシード同盟は、回収し終えるまでのもので、仲間になった憶えはない、って」

「それに、元よりフェイトからもジュエルシードを奪う予定だったってね。ま、あたし達の協力プレーであんたを倒すことは出来たわけだけどさ」

フェイトとアルフがそう話すと、「どうやら事実らしいね。私の計画通りに事が進んだようだし」テスタメントは大きく溜息を吐いた後、「というか、私、負けたのかぁ・・・」自分の敗北にショックを受けてた。というか自分が死んだことよりも戦いで敗北したことの方にショックを受けるって。

「あー、まぁ、いいや。話の続き、お願い」

「・・・私たちとテスタメントの戦いの後、時の庭園が虚数空間に墜落し始めたことで起こった庭園崩壊。その際に、母さんとアリシアの入った生体ポッドが崩落に巻き込まれて虚数空間に落ちたの。私は母さんとアリシアを助け出すためにそれを追った・・・」

「その時に、わたしはママから命を貰った・・・と思う。ママの死んじゃった時とわたしの体が蘇生した時が一緒だったから」

プレシアの死とアリシアの蘇生。その因果関係は未だに不明だけど、

確かにプレシアの命がアリシアに移ったと考えてもおかしくない。テスタメントは「プレシアの起こした奇跡、か」そう言いつつプレシアの頭をポンポンッと優しく叩いた。

「そしてテスタメントちゃんは、金の鎖を使ってフェイトちゃん達を助けたの」

「でも・・・私たちを助けたことで、テスタメントは逃げ遅れて崩落に巻き込まれたの」

「ごめんなさい。テスタメントが死んだ原因は、テスタロッサ家にあるんだ」

「ごめんなさい・・・」

フェイトとアリシアが頭を下げて涙声で謝った。テスタメントはその謝罪を無言で受け止めて、少しの沈黙。その間ずっとフェイトとアリシアは頭を下げっ放しだった。そんな中、「頼むよ。2人を許してあげてくれ・・・！」アルフが土下座する。

「・・・私が崩落に巻き込まれた時、私、なにか言ってた？」

「うん。・・・テスタメントちゃんの死を背負わなくてもいい」

「こうなったのはあたし達の所為じゃないし、誰の所為でもない、って」

「だから苦しまないでいい、って・・・言ってたよ」

なのは、アリサ、すずかが涙を袖で拭いながら答える。するとテスタメントは「そっか。私は、私の死を受け入れて死んだんだ。じゃあ、大丈夫。頭を上げて、２人とも」フェイトとアリシアの肩に手を置いて頭を上げさせる。ボロボロと涙を流す２人の頬に流れる涙を、テスタメントが人差し指で拭い取った。

「その時に君から、君がジュエルシードを集めていた理由を聴いた。君は何らかの罪を犯したことで体に異変が起き、それをどうにかするために膨大な魔力が必要になり、そして・・・ジュエルシードを求めた」

「そこまで喋ったのか、オリジナルの私は。・・・ええ、その通り。でもま、本物(わたし)はもう死んだんだから、気にすることはないっか」

「テスタメント。こんな時に申し訳ないが、聞かせてほしい。テスタメントという組織は実在するのかどうかを」

「・・・・テスタメント。０ｔｈから１０ｔｈまでの１１人が居て、それぞれ個別の色を持ち、十字架を武装している。私は４ｔｈ、色は黒、十字架はケルト。依頼を受け、それを遂行する集団。メンバーは代替わりがあるから、私の４ｔｈの席は今頃別の誰かが座ってるかもね」

「メンバーの居場所は？　これまでどんな依頼を、罪を犯してきた・・・？」

「さあ？　管理・管理外世界関係なく渡っているから、メンバーの居所は知らない。依頼は色々だよ。奪ったり壊したり殺したり、授けたり作ったり助けたり、なんでも・・・。ちなみにこれまでの、そしてこれからのメンバー全員に戸籍などは無いから、家族も何も無いから、私たちの正体を知る術はない。それはメンバー内でも同じ」

クロノが「11人か、君のような実力者が他にも」そう言って考え込んだその時、「みんなー！」はやての声が空から聞こえてきた。リインフォースにお姫様抱っこされたはやて、ルシル、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、八神家勢揃いがようやく合流。はやて達と目で労い合っていると、「彼女たちが、件の闇の書の・・・？」テスタメントにそう訊かれた私たちは頷き返した。

「あの、さっきは助けてくれたありがとう。夜天の魔導書の最後の主、八神はやてです」

はやての自己紹介を皮切りにルシル達も名乗ってく。最後に「テスタメントよ。よろしく」テスタメントが微笑んだ。

「テスタメント。ジュエルシード争奪戦が終わって半年後の現在。闇の書事件は八神家。そして、なのはたち民間協力者やわたしたち管理局の協力で終わりを迎えた」

「ジュエルシード争奪戦も闇の書事件も終わった。じゃあ、私は一体なに？　アリシア・テスタロッサは、いま起きている事件に関係

しているって言っていたけど」

テスタメントの問いに答えるのは、リインフォースから降ろしてもらって地面に座るはやて。はやては「ごめんやけど、わたしは足が良うなくてな。座らせてもらうな」一言断りを入れると、テスタメントは「どうぞ」って頷いて、視線を合せて話しやすくためかはやての前に座った。

「おおきに。・・・いま起きてる事件。それはわたしが説明するな。数日前、夜天の書を狂わせてた闇の書の闇――ナハトヴァールと防衛プログラムを、わたしらは協力して砕いた。それで終わりになるはずやった。そやけど、まだ終わってへんかった。闇が復活しようとしてるんよ」

「復活、か。それが今、この街で起きている事件に絡んでくる・・・？」

「そうや。闇の書が蒐集したリンカーコアの持ち主やその人の記憶を思念体としてこの海鳴の街に再現して解き放った。わたしらはそれを討伐して、復活を阻止してた。そんでついさっき、テスタメントちゃんがトドメを刺してくれたわたしのそっくりさんが消えたことで、闇の復活に必要な思念体――残滓が全部消えた。・・・テスタメントちゃん以外が、や」

「なるほど。つまり私は、闇の書に蒐集されたあなた達の誰かの思い出から再現された残滓――偽者と言うわけか。ようやく合点がいったよ」

目を伏せたテスタメントは「じゃあ、私も消えないとね」そう言って立ち上がって、私たちに背を向けた。みんなが、わたしもあの子の名前「テスタメント！」「テスタメントちゃん！」呼ぶ。

「さっきから頭の中で語りかけてくる。闇の書を復活させろ、と。あー、最悪だぁ。自分の意思が塗り潰されていく。確かにこんなゲスな闇を復活させるのはまずい・・・！」

"第四聖典"を首にあてがったテスタメント。自害する気だってすぐに判ったけど、わたし達の手で倒すような真似は正直避けたい。だから・・・止めない。クロノも同じなようで、黙ってテスタメントの後ろ姿を見守っている。そんな中、「ダメ！」なのは達がテスタメントを押さえに掛かった。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒ルシリオン†††

エイミィからテスタメントと名乗っていた頃の俺が残滓として出現したと聞いて、俺は焦った。テスタメント時の俺の防護服は"界律の守護神テスタメント"の聖衣のレプリカだからだ。問題は、その格好の俺をはやてに見られているということだ。

ジュエルシードの２つ目を回収する際、はやてが同行を願い出てきたあの日。セレネ・スクライアとエオス・スクライアと初邂逅して戦ったあの日だ。もし聖衣を纏ったテスタメントがはやてと出会えば、その時点で俺がテスタメントだとバレる。だがそれは杞憂だった。やはり俺、と言うべきか。それとも偶然か。テスタメントは聖衣ではなくブラウスにスカートというラフな格好だった。

『最初、私が死んだと聞いたとき僅かに焦ったが・・・本物のルシ(おまえ)ルを見て安堵したぞ』

『当たり前だ。エグリゴリ全機を救うまで、俺が死ぬわけがないだろう』

なのは達から事情を聴いているテスタメントと念話で話し合う。

『ふっ。違いない。・・・驚いたと言えば、アリシアやリインフォースが生きていることだ。彼女たちから話を聴けば、どれもこれも奇跡と言ってもおかしくない事象。未来の、本物の私よ。何か知っているか？』

『いいや。俺も先の次元世界とは違う歴史に驚いているところだ。ただ、悪くはない変化だろ？』

『そうだな。あ、そうだ。グランフェリアはどうした？』

『もちろん・・・救ったよ』

『それが聴けただけで十分だ』

安心したと声色で判る。そうして俺の過去、テスタメントは"闇の書"の闇からの侵食という理由で自害の道を選んだ。シャルやクロノ、シグナムたち騎士はテスタメントの自害を尊重するようだ。テスタメントと知己であるシャルとクロノは、その手で倒したくない

という願望から。シグナム達は、そう深い関係ではないから手を出せないと思っているのだろう。

「ダメだよ、こんなの・・・！」

「あんた、自害とか何を考えてるわけ！？」

「やめて、テスタメントちゃん！」

そこで止めるのが、テスタメントと友達になりたいと言っていたなのは達だ。３人は"第四聖典"を持つ右手にがっしりしがみ付いて、テスタメントの自害を阻止しようと躍起になっている。

「私が闇に呑まれて自我を失くした時、あなた達・・・私を殺せる？」

「「「っ！！」」」

「本物の私の事故死にすらそこまで悲しんでくれている、優しいあなた達。そんなあなた達が、友人を守るために、この街を守るために、この私、４ｔｈ・テスタメントを倒せるわけ！？」

倒せるわけがない。今のなのは達はまだ幼く、優しすぎる。テスタメントの話を聴いて無意識か力を緩めたその一瞬の隙に、「だから、これが一番の方法なんだ！」テスタメントはなのは達の腕を力づく手振り解き、尚且つ３人を大きく弾き飛ばした。

「テスタメントちゃん・・・！」

「そんな悲しい顔をしないで、八神はやて。あなたもまた気にすることはないよ。私があなた達を脅かす害悪にはなりたくな――っ！？」

テスタメントの様子が変わる。背中から発せられるのは禍々しい魔力。左手で頭を押さえ、"第四聖典"を杖にふら付く体を支えている。そんなテスタメントの様子になのは達が「テスタメントちゃん・・・？」「テスタメント・・・？」奴の名前を呼ぶ。その呼びかけに応じるように振り返ったテスタメントの目は、殺意とそれを抑え込もうという意思に揺らいでいた。

「・・・っ、あーもう・・・！　早くしないから、私の・・意識が・・・薄らいで・・・」

――煉弾――

テスタメントの周囲に展開される火炎球２０基。真っ先に動くのはリインフォースを始めとした騎士たちで、はやてを庇うように陣取る。そんな中で狼狽えるのはなのは達。テスタメントは必死に自意識を保とうとしているが、「お願い・・・、あなた達を傷つける前に、私を・・・討って」とうとう自害できないところまで追いつめられたのか、自分を倒すよう願い出た。

「テスタメントちゃん！」

「早く！　高町なのは！」

叫んだなのは、そしてフェイト達の元へと発射される火炎弾。偽者とは言えテスタメントは俺だ。その俺の攻撃をなのはたち友人に届かすわけにはいかない。

――護り給え、汝の万盾――

小さい円盾を複数重ね合せて創り出す対魔力に優れた障壁を展開して、火炎弾全発を防ぎきる。俺は「みんなは下がっていろ。俺が、倒す」そう言ってなのは達とテスタメントの間に立つ。

「ルシル君・・・！？」

「ルシル、あんた・・・！？」

"エヴェストルム"を起動して穂先を本格的に苦しみだしたテスタメントへと向ける。そしていざ戦闘開始というところで「待って」シャルが俺の肩に手を置いて止めてきた。振り返って「なんだ？」と訊く。

「わたしがテスタメントを倒す。ホントは自害で済めば傷つくことはないって思ったけど、戦う必要が生まれた以上、被疑者テスタメントを打ち倒すのはＰＴ事件を担当した管理局員としての務め」

シャルが"キルシュブリューテ"のカートリッジをロード。俺を押しのけてテスタメントと対峙する。

「なのは、アリサ、すずか、フェイト、アリシア、アルフ。みんな

は見ないでいいよ。テスタメントの死を、もう一度見るのは嫌でしょ？」

「シャルちゃん・・・でも・・・・！」

「あんただって嫌なんでしょ！？」

すずかとアリサが反論する。なのはは声には出さずにふるふると首を横に振るだけ。フェイトとアリシアは顔を青褪めさせて沈黙。テスタメントの死にトラウマを抱いているなのは達だ。"闇の書"復活を阻止するためとは言え、もう二度とテスタメントの死を見たくはあるまい。それを踏まえて俺が、本人である俺が相手をしようとしていたのに。

「イリス。僕が相手にしても良いんだぞ？」

「ううん。わたしに戦わせてほしい。テスタメントが願った。止めてほしいって。なら、止めようじゃない。残滓とは言え、闇に呑み込まれそうとは言え、テスタメントは・・・友達だもん。向こうはそう思ってないだろうけど。だから、倒してほしいって願ったなら叶える。背負うよ。あの子の・・・死を！」

――閃駆――

シャルが先制。脂汗を流すテスタメントは「ありがとう・・・」シャルに礼を言い、横薙ぎに振るわれる"キルシュブリューテ"の一閃を受け入れようとした。が、ガクッと膝を折ってしゃがむ事でそ

の一閃を躱した。いや、あれは躱したというよりは力が抜けて膝が折れた感じだな。それでも奴は懸命に足に力を入れて即座に立ち上り、"第四聖典"による打突を繰り出した。

――アクセルシューター――

「シャルちゃんだけには背負わせないよ・・・！」

シャルの顎に向かっていく"第四聖典"を撃ち落すのはなのはの射撃魔法。大きく右腕を弾かれたテスタメントはその勢いのまま反転して、炎を纏わせた"第四聖典"による薙ぎ払いを繰り出した。シャルは一足飛びで後退して回避。

テスタメントは追撃としてシャルに向かって跳躍。振り上げていた"第四聖典"を振り降ろそうとした時、「バーニングスラッシュッ！」アリサが燃え上がる"フレイムアイズ"で迎撃した。

「っく・・・、悪いわね、テスタメント・・・！」

「ふふ、それで、いいんだよ・・・！」

アリサとテスタメントが宙で勢いよく衝突、互いに後方へと同時に弾き飛ばされた。地面へ降り立つのはほぼ同時。すずかが「アイシクルアイヴィ！」氷の茨でテスタメントの全身を拘束した。そして、「バルディッシュ・・・！」フェイトがハーケンフォームにした"バルディッシュ"をテスタメントに向かって突き出した。

「はぁはぁはぁ・・・、早く、して・・・フェイト・テスタ・・・

ロッサ・・・。もう、意識が・・・」

すずかのバインドが融解していく。テスタメントとしての俺は炎熱系を主とした魔導師として振る舞っていた。相性的にはテスタメントの方が有利だ。フェイトは震える"バルディッシュ"を振りかぶり・・・そのまま硬直する。やはりダメか。

「もう・・・ダメ・・・・！」

ついにすずかのバインドを粉砕したテスタメントが、"第四聖典"に炎を纏わせフェイトに向かって振り降ろした。普段のフェイトなら"バルディッシュ"で受けるなり回避なり出来た。しかし感情の揺らぎが強過ぎた所為か行動に移るのが遅すぎた。避けきれない。なのは達が、そして俺もフェイトを助けるべく動く。そんな俺たちの誰よりも早く動き、「っ！？」フェイトを助けたのは・・・「アリシア・・・！？」だった。アリシアは振り下ろされた"第四聖典"の軌道上に居るフェイトを突き飛ばした。その代わり自分が直撃を受ける軌道上に残ることになってしまった。

「ラウンドシールド！」「パンツァーシルト！」

アリシアと"第四聖典"との間になのはとシャルのシールドが張られ、テスタメントの一撃を完璧に防いだ。フェイトは突き飛ばされたことで体勢を崩していたが立て直し、すぐさまアリシアを抱きしめその場から離脱した。

「無理しないで、アリシア！」

「だ、だって・・・フェイトが危なかったから・・・」

フェイトとアリシアは一時離脱。その間にも暴走寸前のテスタメントとなのは達が戦いを繰り広げる。なのはのシューターを火炎弾で迎撃し、アリサの火炎斬撃を火炎打撃で相殺し、すずかのバインドを体に纏った炎で焼滅し、シャルの"キルシュブリューテ"と打ち合う。

しかしテスタメントが徐々に押され始めていく。"闇の書"の闇に意識を乗っ取られまいと踏ん張り、その中でＰＴ事件よりさらに強くなったなのは達を複数相手しているんだ。押されるのは当然だろう。そしてついに・・・

「テスタメント・・・！」

――ハーケンセイバーーーー

復帰したフェイトの放った魔力刃がテスタメントの"第四聖典"を弾き飛ばし、次いでシャルの繰り出した右切り上げによる「光牙月閃刃！」魔力付加斬撃がテスタメントに直撃。テスタメントは吹っ飛ばされ川に突っ込んで沈んだ。

（姿がステアで、中身が俺だと思うと・・・、なんかボコボコにされていて物悲しくなってきた・・・）

川に沈んだテスタメントを見詰めている中、川が大爆発を起こし、川水が一瞬に蒸発した。水煙の奥、テスタメントから放たれて来る

のは今まで以上にどす黒い、禍々しい狂気に満ちた魔力。これは「ナハトヴァール・アウグスタの・・・！」俺たちは一斉に身構える。

「自己の願望成就。その道程は他者の蹴落とし也。落とされし者等が築くは無残無念の敗衄（はいじく）の山。其の頂きに立つは望みを成し得た勝利の王。王は叶えし願いの頂で大いに笑う」

水煙の奥よりテスタメントの声――詠唱が聞こえてきた。これは任意の空間を爆破させる魔術、「火天之王・・・！」だ。俺はすぐさまこの場に居る全員の体をピッチリと包むように対魔法においては絶対の防御力を有する（その反面、魔力消費が大きいが）「パンツァーガイスト・ｖｅｒ・テレズマ」を発動して、至近の空間を爆破されても問題ないようにする。

まずい。このままではいつか俺の魔術すら使いかねない。それでは俺とテスタメントが同一人物だと気付かれてしまう。それだけは防がなければ。ならどうする。決まっている。この俺が直接、奴を倒せばいい。たったそれだけだ。

「火天之王！！」

人数分の爆発が起きる。真っ赤な炎と黒煙が視界を潰す。今なら誰の目にも留まらずテスタメントを討つことが出来るはずだ。黒煙が晴れる前に、魔力炉（システム）の稼働率を上げ、魔力に神秘を付加。威力が一段、二段と下がる魔法ではなく魔術を発動する。これなら魔法の存在であるテスタメントを一撃で倒せる。

両拳に魔力を付加し、テスタメントの魔力を感じ取った居場所へと突進。黒煙の中を突っ切り、テスタメントと対峙したんだが・・・

「お前は・・・」奴の様を見て、両拳に纏わせていた魔力を霧散させる。

「・・・私が・・・偽者・・・とは言え、誰・・かの・・・意思に、乗っ取られるなど・・・ごめんだ・・・」

テスタメントは"第四聖典"で自分の腹を貫いて自傷していた。あそこまでダメージを負えば、これまで相手してきた残滓と同様に消滅するだろう。蹲っていたテスタメントが顔を上げ、「あとは・・任せる・・・。未来の・・・本物の私・・・」そう言って微笑んだ。

「「テスタメントちゃん・・・！？」」

「ちょっ、あんた、何やってんのよ！？」

黒煙が晴れ、テスタメントの様子を視認したことでなのはとすずかが顔を青くし、アリサは叱責。

「「テスタメント・・・！？」」

フェイトとアリシアもまた顔を青くして呆けていた。体から力が抜けたのかへたり込みそうになったのをアルフが抱き止めた。はやてはリインフォースの手で目を隠されていて見えていない。シグナム達は真っ直ぐテスタメントと側に居る俺を見詰めていた。シャルは悲しげにテスタメントを見、クロノはちょっと判らないな。

「はは・・・、やっぱり、自分で・・・決着を、つけるよ・・・」

テスタメントが薄ら笑う。"第四聖典"の消滅と同時、消滅の前兆であるノイズが全身に奔り出した。それを見たなのは達が「テスタメントちゃん！」「テスタメント！」奴の側へ駆け寄って行く。フェイトとアリシアもなのは達に続いて駆け寄る。

「テスタメントちゃん、ど、どうしよう・・・！」

「すずか、治癒魔法よ！」

「え、あ、うん！」

なのは達は少々混乱しているようだ。テスタメントは残滓だ。人間じゃない、ただの思念体。だがテスタメントへの思いが強すぎて頭からすっ飛んでいる。そのことを伝えるべく「なぁ」と歩み寄ろうとしたら、「馬鹿ね・・・」テスタメントが泣き崩れているなのは達に微笑んだ。

「・・・これで・・・いい・・・」

「・・・っ、テスタメント！　お礼をずっと言いたかったんだ！
私を、アリシアを、母さんを、虚数空間から助け出してくれてありがとう！」

「わ、わたしも、ありがとう！　テスタメントが助けてくれたから、わたしは妹――フェイトと一緒に過ごすことが出来たんだよ・・・！」

フェイトが突然テスタメントに礼を言った。遅れてアリシア、そして「あたしからも礼を言わせてくれよ、テスタメント」アルフも、テスタメントに感謝をした。奴は「・・どういたし・・・まして。それじゃあ・・・約束してもらおっか。・・・私の分まで生きて・・・」そう言って両手の小指を立てる。フェイトとアリシアは「うんっ！」涙を拭うことなく指切りに応じた。

「テスタメント。あたし達、あんたと友達になりたいって最後まで思ってた」

「うん。今でもそう思ってる」

「私たちね、テスタメントちゃんと友達になりたいんだ」

アリサ、すずか、なのはがそう続けた後、彼女たちはシャルを見た。シャルは「わたしも友達になりたい。テスタメントとは色々あったけど、根は良い子だって思うから」とテスタメントに向かって歩み寄って行く。

「はぁはぁはぁ・・・ふぅ・・・。はは。なんで、だろうね。生への執着を失った途端に、素直に友達になりたいって思えるようになった。・・・こんな私にでも・・友達になってくれる子が居るって、嬉しい・・ね」

これまでに見せなかったテスタメントの満面の笑顔。あやすようになのは達の頭を撫でるテスタメントを見守っていると、「八神はやて、そしてその家族に、謝罪を」奴は俺たち八神家に頭を下げた。

はやてや涙もろいシャマルは、出会って間もないというのにテスタメントの消滅を悲しんでくれている。

「このような形で出会い、別れることを・・・」

「ううん。・・・わたしも、テスタメントちゃんと友達になりたいんやけど、ええかな・・・？」

「もちろんだとも・・・。・・・過去の記憶の再現な私だけど・・・、それでも友達に看取られて逝く・・・。うん・・・悪くない・・・。じゃあね、フェイト、アルフ、アリシア、なのは、アリサ、すずか、騎士イリス、クロノ・・・。あ、そうそう。・・・セレネとエオス、ユーノに、よろしく言っておいて。私――テスタメント・ステアは、心置きなく、満足して逝ったって」

ステア、と名乗りやがった偽者の俺。ギラッとテスタメントを睨むが、奴は悪びれる様子もなくウィンク。ちくしょう、男がそんな真似をするんじゃない。名前の通りステアらしい仕草をしやがって。

「「「ステア、ちゃん・・・？」」」「「ステア・・・？」」

「それがあんたの本当の名前なの・・・？」

テスタメントがニコッと笑うと、なのは達が「うん。必ず」と誓った。テスタメントは俺たちに向かって手を振り、そして笑顔で消滅していった。なのは達はそれぞれ涙を拭い、鼻を啜り、先ほどまでテスタメントが立っていた場所をいつまででも見詰めていた。

その後、ハラオウン邸・捜査本部に居るエイミィから、事件終結の宣言がなされた。

Ｅｐｏｓ３２神さまにお願いしよう～Ｉｎｔｅｒｖａｌ　１～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

"闇の書"の復活を企んでいたマテリアルを全基打ち倒した私たち。そしてその最後に私たちは、半年前にジュエルシードを巡って争った魔導師、テスタメントちゃん――本当の名前をステアちゃんの残滓と相対した。
私たちはステアちゃんと改めてお話をして、友達になることが出来た。たとえ残滓であってもステアちゃんは最後まで優しかった。私たちを苦しませないように最期の最期まで配慮してくれて。笑顔を見せてくれた。

「「「「明けましておめでとう！」」」」

だからお別れからまだ数時間しか経ってないけどみんなで明るく笑っていられる。そんな私たちは今、アリサちゃんのお家に居る。"闇の書の欠片事件"と名付けられた今回の事件の終わり――ステアちゃんが消滅した後、私たちはみんなで泊まることの出来る広さのある家、アリサちゃんのお家へとやって来た。
すでにアリサちゃんのお父さんやお母さん、そして私たちを深夜にも拘らず臨海公園にまで迎えに来てくれたバニングス家の運転手さん――鮫島さんには魔法関係のことはお話ししてあるから、詳細な説明をすることなくアリサちゃん家にまで迎え入れてもらえることが出来た。
そして私たちは夜も遅くて疲れ果てていたこともあって、客室に案

内されるとすぐにバタンキュー。そうして1月1日の朝・・・えっと、8時半、今こうしてみんなでお正月の挨拶をしてる。

「「明けまして、・・・おめでとう・・・？」」

フェイトちゃんと子犬フォームなアルフさんを抱っこしてるアリシアちゃんが小首を傾げるから、私とアリサちゃんとすずかちゃん、そしてはやてちゃんはハッとした。すずかちゃんが「もしかして、この挨拶って・・異世界には無い、のかな・・・？」ってシャルちゃんにフェイトちゃん達、そしてヴィータちゃん達といった異世界出身組にそう訊くと、フェイトちゃん達はコクリと頷いた。

「新年明けはお祝いの日っていう概念はミッドにもあるけど、特別な挨拶は無いって思う・・・」

「んー・・・ベルカでもそうかな。ルシルはフェティギア出身らしいけど、どうなわけ？」

「フェティギアも年明けは祝いの日だが、特別な挨拶は無いよ」

フェイトちゃん、シャルちゃん、ルシル君の順にそう教えてくれた。フェイトちゃん達の生まれた環境のお話を聴けて嬉しいな。とここで「新年が明けたことのお祝いの挨拶なんよ」はやてちゃんがそう話す。そして「そんじゃ改めて。明けましておめでと！」アリサちゃんが挨拶。私たちは一度顔を見合わせてから「おめでとう！」みんなで挨拶を返した。

「あ、そうだ。ねえ、はやてちゃん。はやてちゃん達って今日の予定・・・なんか決まってる？」

日本人として1月1日にやることは決まってる。初詣だ。私とアリサちゃんとすずかちゃんはずっと以前から一緒に初詣に行く予定を立ててた。シャルちゃんは誘うまでもなくついて来る（ちゃんと誘うけど、うん）と思うけど、はやてちゃん達はちょっと判らない。だから訊いてみた。

「えーっと、予定ってゆうほどでもないんやけど、本局のスカリエッティさんのトコに行こうかなって・・・」

はやてちゃんが自分の乗る車椅子を押してるリインフォースさんに振り向いてそう答えたら、「ドクターのところに？　なんでまた」シャルちゃんが首を傾げる。はやてちゃんは「えっとな――」大まかに話してくれた。ドクターさんに、リインフォースさんに代わる"夜天の魔導書"と剣十字杖"シュベルトクロイツ"の開発を依頼しているって。そのことについてのお話をしに行くつもりだって。

「そっか。良かったら一緒に初詣に行こうって思ってたけど・・・」

「あー、うん。そうやなぁ～・・・」

私とすずかちゃんが、一緒に行きたいなぁ、って視線をチラッチラッとはやてちゃんに向けていると、「明日に回そうじゃないか、はやて」ルシル君がはやてちゃんにそう提案した。

「今は少しでもリインフォースと思い出を作るのが良いと思うんだ。だから、今日くらいはゆっくりと休もう」

「そ、そうだよ、はやて！　祝いの日なら、やっぱ目一杯楽しまなきゃダメだと思う！」

「そうですよ。初詣というのも気になりますし。はやてちゃん。私たちも行きましょう♪」

ルシル君とヴィータちゃん、シャマルさんにそう言われたはやてちゃんは少し考えた後、「そうやな。うん。その通りや。今日一日、のんびりしよか♪」そう言って八神家のみんなに満面の笑みを向けた。こうしてはやてちゃんたち八神家も初詣に参加することになった。

今日の予定を大まかに決めた後は、昨晩はすぐに寝入っちゃったから入ることが出来なかったお風呂を、ルシル君とザフィーラさんを除くみんなで入って（男の子なルシル君は私たちの後で入ったよ、もちろん）、お正月の定番、おせち料理をご馳走になった。そして・・・

「――そんじゃ、初詣に向けて衣装選びしないとね！　幸い、私たち人数分の着物が揃ってるから、早速着替えましょ♪」

アリサちゃんがそう胸を張った。着物で初詣。ますますお正月っぽくなった。こうして私たちはアリサちゃんのご厚意で着物姿に着替えることに。クローゼットルームっていう特別な部屋に集まって色とりどりの着物に着替えた私たちは、応接室で待ってるルシル君と

ザフィーラさんの元に向かう。

「ふんふーん♪　えへへ♪」

私たちの先頭をスキップで進むシャルちゃんに「シャルちゃん、すっごく機嫌が良いね」そう言うと、シャルちゃんはくるっと振り返って「異世界の服ってドキドキするんだもん　」ってドキってなっちゃうほどに可愛い笑顔を浮かべた。

「あー、判る、判る。着物ってわたしが知ってる中じゃ、この世界、この国だけっぽいんだよね。だからこういう風にその異世界特有の何かを経験できると嬉しいんだよ♪」

アリシアちゃんもルンルンスキップでシャルちゃんの隣に並んでくるっと振り返る。そして2人でビシッとポーズ。フェイトちゃんがすかさず「アリシア可愛い・・・！」携帯電話のカメラでピロリン♪と撮影。

人形態になって着物に着替えたアルフさんが「ほら、フェイト。アリシアと並んで」フェイトちゃんから携帯電話を受け取って、2人のツーショットをピロリン♪と撮影。という私も「シャルちゃんも可愛いよ♪」自分の携帯電話でピロリン♪と撮影。

「あとでデータちょうだい、なのは」

「うんっ」

そこからちょっとした撮影会に発展。みんな携帯電話を片手に写真

を撮り合いっこ。シャマルさんがはやてちゃんから携帯電話を借りて「家族写真ですね♪」上機嫌ではやてちゃんやヴィータちゃん達を撮影。

「えっと、この角度かなぁ・・・？」

とそんな中、シャルちゃんが自画撮りを始めた。携帯電話を頭上に掲げて、いろんな角度から納得のいく写真を撮り続ける。そして「よしっ。これがベストかな」って納得できる写真が撮れたようで、「どんなの？」って私とアリサちゃんで覗き込んで見て・・・ギョッとした。

「ちょっ、あんた、これはダメ！」

「見、見、見えちゃいそうだよ、その・・・アレが！」

そう言えばシャルちゃん、着物をちょこっと着崩してる。だからか頭上っていう角度から撮ったものは胸が見えちゃいそうなギリギリな写真で、それが携帯電話のディスプレイに映し出されてた。しかもそれだけじゃなく、写メールとしてあるアドレスへと送信する寸前。送信先のあて名は「ルシル君に送るつもりだったの！？」だった。

「あんた、痴女になるつもり！？　というか、こんなあからさまなアプローチは逆に引くわよ！？」

「ちじょ？・・・えっと、アリサちゃんの言う通りだよ、シャルち

ゃん！　ルシル君ってそういうのは嫌いだと思うし！」

「えー？　ルシルだって男の子のなんだから、積極的なアプローチに弱いんじゃない？」

告白を断られてもなお前向きなシャルちゃんには感動を覚えるけど、少しは自重しようね。私とアリサちゃんの様子に、「ルシル君は、オーディンさんと似た価値観を持ってるから、私なら判定できるわよ～」シャマルさんがそう言って、私とアリサちゃんの間からディスプレイを覗き込んだ。一瞬の硬直。すすいーっと流れるように離れたシャマルさんはニコッと笑顔を私たちに向けた後・・・「うん、ダメ♪」両腕をバッテンにした。

「ダメよ、シャルちゃん。これはさすがにダメ」

シャマルさんがひどく真剣な面持ちだから「どれ」シグナムさんやリインフォースさんも覗き込んで「ダメだな」うんと頷いた。はやてちゃんが「わたしにもー」って言うけど、シャマルさん達が「ダメです」って即却下。

「そんなにアカンやつなんか・・・」

「ほら、シャルちゃんもそのデータ消して」

シャルちゃんの携帯電話に手を伸ばしながらそう言うと、「やっぱり・・・ダメ？」シャルちゃんが可愛らしく小首を傾げてそう訊き返してきた。いいよ、って頷きそうになったけど、「ダメ」写真を

見た私たちは改めて却下を下す。

「シャルちゃんは素で可愛いんだから、そんなことをしなくても問題ないよ？」

シャルちゃんは確かに可愛い。だから普通のアプローチでも十分通用すると思う反面、チラリとはやてちゃんを横目で見る。はやてちゃんもルシル君のことをひとりの男の子として好きみたいだし。初めて会った時は、弟、って言ってたけど。

（シャルちゃんがルシル君に告白しちゃうから・・・）

それで自覚しちゃったんだね、はやてちゃん。そんなはやてちゃんはヴィータちゃんに携帯電話を渡して写真を撮ってもらってた。シャルちゃんとは違って清楚な感じで。ルシル君はどちらかと言えば、今のはやてちゃんの方が好きだと思う。

「ほら、着崩してる着物もちゃんと整えて」

流石というかすずかちゃんは手慣れた様子でシャルちゃんの着崩れた着物を直して、私はシャルちゃんから受け取った携帯電話からダメなデータを消す。データの中にはシャルちゃんらしい元気いっぱいの写真があった。これだよ、シャルちゃんって言えば。

そんなこんなで撮影会も終わって、改めてルシル君とザフィーラさんの待つ応接室へ。

「「「「「「お待たせー！」」」」」」

「ごめんなぁ、ルシル君、ザフィーラ」

「・・・おお、みんな似合っているな！　な、ザフィーラ？」

「ああ。我が主、お綺麗ですよ。皆も綺麗だ」

ルシル君と狼形態のザフィーラさんが私たちみんなの着物姿を褒めてくれたから、大人なリインフォースさんとシグナムさん、あと背伸びしてるヴィータちゃん以外のみんなで「ありがとう！」お礼を返す。

「ねえねえ、ルシル。どう、私、可愛い？」

そんな中でシャルちゃんはルシル君にピトッと体を寄せて、自分だけ改めて褒めてもらおうとした。ルシル君は若干引き気味に「普段着ない服だからな。新鮮で、いいな」ってシャルちゃんの頭を撫でた。シャルちゃんは「はにゃぁ～ん　」両頬に手を添えて、嬉しさで小躍り。でも・・・「可愛い、とは言わなかったわね」アリサちゃんがボソッと呟いたから、「うん、だね」って頷き返した。調子に乗らせる、とでも思ったのかな、ルシル君。

「ルシル君、ルシル君。あんな、わたしは・・・どうやろ？」

「ああ、すごく似合っているぞ。日本人だからかな、とても綺麗だよ」

「っ！」

ボンッと爆発したかのように一気に顔を赤くしたはやてちゃん。「えへへ」って照れ笑いを浮かべるはやてちゃんを微笑ましく見守っていたルシル君が「みんなの用意も出来たし、それじゃ、そろそろ行くか？」って応接室の扉を指さした。

「ちょっと待ちなさいよ♪」

「ふっふっふ　」

アリサちゃんとアリシアちゃんがニタニタっていやぁ～な笑みを浮かべてルシル君ににじり寄ってく。ルシル君は若干引き気味に「なんの用だ？」って問うと、アリサちゃんは「あたし達、着物なのよ？」ってルシル君の服装、Tシャツにパーカー、ジーンズを指さす。

「こーんな綺麗どころの中にあんたみたいな私服が居たら・・・浮くわよ？」

「だからぁ～、ルシルも着替えよう！」

2人のそんな話に「ナイスアイディアや！」再起動したはやてちゃんが真っ先に食い付いた。確かに私たち全員が着物姿なのにルシル君だけ洋服ってなると、周囲から見たらルシル君がとんでもなく浮きそう。それをどうにかするための着物だね。

「うん、いいかも。ルシル君の着物姿、私も見てみたいし」

「ルシル君はかわ――ううん、綺麗だから、きっと似合うよ」

「わ、わたしも見てみたい！」

すずかちゃんと私、はやてちゃんも賛成。私たちの視線を一手に受けたルシル君は「着物か。確かに俺ひとりだけが洋服というのも浮くか。・・・頼めるか、アリサ」って着物に着替えることを決めた。渋々そうに見えるけどたぶん本音は、着てみたいって思ってるんじゃないかな。表情が晴れやかだし。

「それじゃあ、早速・・・」

「着替えよっか」

「ルシル～」

アリサちゃん、アリシアちゃん、そしてシャルちゃんがルシル君の背中を押して扉へ通していく。そして廊下に出たアリサちゃん達とルシル君。アリサちゃんがメイドさんを呼び出して何かを耳打ちした後、「それじゃよろしくね」ルシル君をさっきのクローゼットルームに案内するように伝えた。

「それじゃあ行ってくるよ。待っていてくれ」

ルシル君に私たちは手を振って、ルシル君が着替えて戻って来るのを待ちながら初詣の参拝方法についてフェイトちゃん達に口だけじ

ゃなくて身振りで教えておく。私たちの居る応接室は広いから、みんなで横に並んで実際にその場に境内があるかのように練習。最初は鳥居に一礼。リインフォースさんとシグナムさんは凛としてる出で立ちだから、とっても綺麗。次に手水舎で手を清める。詳しい作法はすずかちゃんが教えてくれたけど、「メンドーだな」ヴィータちゃんが面倒ぐさかった。

「ヴィータ。郷に入れば郷に従え、という言葉がこの国にはある。その土地や環境に入ったならば、そこでの習慣ややり方に従うのが良い、とい意味だ」

「誰もやらねぇって言ってねぇだろうがよ。ちゃんとやるよ。この国が今のあたしの故郷だかんな！」

「ええ子やな、ヴィータ♪」

はやてちゃんに頭を撫でられたヴィータちゃんは「えへへ♪」外見相応の笑顔を浮かべた。次はいよいよ参拝についての作法に移ろうとした時、「アリサぁぁぁぁぁぁーーーーー！！」ルシル君の怒声がフェードインしてきた。そしてバァン！と勢いよく扉が開け放たれた。

「アリサ、どういうことだこれは！！？」

なんとそこには男物じゃなくて女物の着物姿なルシル君が息を荒くして立ってた。私も含めたみんながその姿に呆ける。いつもはうなじ付近で結ってる長い銀髪を後頭部でシニヨンにしてる。どこから

どう見ても女の子だった。

「どういうことも何も、着替えたじゃない着物に」

「いやいやいや。お・と・こ・も・の！　これ、女物だろう！　俺は、男、だ！」

「誰も男物に着替えさせるって言ってないじゃない。そもそもルシルサイズの男物の着物なんて家に無いし」

「だったら！　だったら、俺を着替えさせようとするな！」

「じゃ、じゃあ、抵抗すればよかったんじゃ・・・？」

ルシル君の怒気に当てられたアリシアちゃんもさすがに狼狽え始めてそう言うと、「複数人に一斉に着替えさせられたら、抵抗する暇もなかった・・・。俺が男と知ったら逆にやる気になってたし！」ルシル君は頭を抱えた。

「まぁまぁ、落ち着いて、ルシル君。ダメよ？　女の子を怒鳴ったりなんかしちゃ」

叱りの言葉の中に優しさを含めてそう言ったシャマルさんがルシル君を後ろから抱きしめた。それでピタッと治まるルシル君の怒気。シャマルさんはそのまましゃがみ込んで、はやてちゃんの携帯電話で自分とルシル君のツーショット写真を撮った。

「えっと、何して・・・？」

「こんな機会ってもう無いだろうから記念に♪　はーい、はやてちゃんとルシル君のツーショット～　」

シャマルさんは怒気を抜いたルシル君の両肩に手を置いて、車椅子に座るはやてちゃんの隣に移動させた後、「はい、チーズ♪」はやてちゃんとルシル君のツーショット写真を撮った。ルシル君はもう全部を諦めたのか、「もう好きにしてくれ」って大人しくなった。

「というか、ルシルってホントに女顔だよね～。ユーノもそうだけどさ」

「せ、成長すれば俺だって立派な男顔だ。見たろ？」

ヴィータちゃんやシグナムさん、リインフォースさん、ザフィーラさんと代わる代わるツーショット写真を撮られるルシル君がキリッとした表情に変えたけど、格好からしてやっぱり女の子だった。男の子であろうとするルシル君（男の子だけど）がちょっぴり・・・可哀想に見えてきちゃう不思議。

「今の格好でも十分似合うてるけど、やっぱりルシル君は男の子やからなぁ。・・・あ、そうや。ルシル君って一瞬で着替えることが出来る魔法有ったんやなかった？　それで男物の着物に着替えれば・・・」

「変化せしめし乱音（ディゾルディネ・カンビャメント）か・・・。あれは複製品を引っ張り出してきて

いるだけだから、入手していないと着替えられないんだ。・・・というか、シャル。さっきからちょっと邪魔」

はやてちゃんとルシル君が話している間、シャルちゃんがちょろちょろとルシル君の周りを回って携帯電話で写真を撮り続けてる。そしてカシカシと携帯電話を操作していると、「メール？」ルシル君が袖から携帯電話を取り出して・・・「どうしろと？」シャルちゃんにディスプレイを向けた。表示されているのは、シャルちゃんらしい元気いっぱい、満面の笑顔。

「ふふん♪　わたしの、き・も・の・す・が・た　　どうぞどうぞ待ち受け画面にしてね　」

「・・・・無理」

「無理て！？」

ショックを受けてるシャルちゃんに「どうせ待ち受けにするなら・・・」そう言ったルシル君は私たちを一か所に集めて「はい、チーズ」パシャッと写真を撮った。

「俺は、こういった個人じゃなくて集合写真を待ち受けにしたい」

「ルシルだけ仲間外れだよ。私が代わるから、貸して」

ルシル君ひとりだけが撮影係だったからフェイトちゃんが携帯電話を受け取ろうと手を差し出すと、「いや、俺は良いよ。こんな格好

の写真なんて残したくない」ってそうルシル君は断った。

「そのような髪型だからそう見えるのではないか？・・・こうすれば・・・、どうだ？」

リインフォースさんがルシル君のシニヨンを解いて、いつも通りのうなじ付近での一纏めにした。でも「やっぱり女の子だよね」アリシアちゃんが私たちの心の声を代弁してくれた。着物が女物、しかもピンク色だからどうしても女の子。少しの間沈黙が続いた後、ルシル君は「・・・いいよ、もう、うん。これが子供の俺の・・・生き様だ！」って、ちょぴり涙目で、堂々と両腰に手を置いて宣言した。

「そう言やさ、ザフィーラはどうすんだ？　狼形態のままなんか？」

「我か？　我はこのままでいい」

「でも、境内や神殿前はたぶんペット禁止だから、ザフィーラさん、参拝できないよ？」

「む？・・・むぅ。いや、我は参拝せずとも――」

「アカンよ、ザフィーラ。家族みんなで一緒に参拝せな・・。嫌、かな・・・？」

はやてちゃんが少し悲しげな表情を浮かべたら、「い、いいえ、そのようなことは。直ちに着替えて参りますゆえ」ザフィーラさんは

慌てて人形態に変身。アリサちゃんが「そんじゃザフィーラにも着物に着替えてもらおうかしら」って言ったところで、「おい！」ルシル君がアリサちゃんに詰め寄った。

「有るんじゃないか、男物の着物！」

「え？　あ、あー、有るわよ。大人サイズなら」

「それを早く言ってくれ！　俺が大人姿に変身できるのを知っているだろ・・・！」

「「「・・・・・」」」

ルシル君がそう言うとアリサちゃん、アリシアちゃん、シャルちゃんは目をそっと逸らした。するとルシル君が「はめたな、俺を・・・」頭を抱えた。つまりそういうことだった。ルシル君に女物の着物を着せる。それはアリサちゃん達のイタズラだったのだ。

「はいはい、判ったわよ。そんじゃルシルもまた着替えればいいじゃない」

「似合ってるのにね」

「ね♪」

「憶えてろ、アリサ、シャル、アリシア」

こうしてルシル君はザフィーラさんと一緒に改めて着替えに行った。次に戻って来た時、ルシル君は大人の姿で男物の着物を身に纏っていた。なんだけど、ザフィーラさんはなんていうか極道さんみたいで、ルシル君はホストさんみたいだった。その後、改めてみんなで集合写真を撮って、それをお揃いの待ち受け画面にした。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒はやて†††

わたしらはアリサちゃんの家の車で海鳴市にいくつかある神社の１つ、愛染神社へとやって来た。まずは、アリサちゃんの家で練習した通りに鳥居に一礼。神さまの通り道である参道の真ん中を通らへんように歩いて、手水舎で手と口を清める。これで境内に入る準備は全部完了や。

「そや。みんなにお賽銭渡しておくな」

着物と一緒に借りた箱付き巾着から財布を取り出して、リインフォース、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラに５円玉を手渡す。最後にルシル君に、と思うたら「自分の分は自分で出すよ」ルシル君は微苦笑して袖口から財布を取り出した。

「はやてちゃん、これは・・・？」

「お参りするとき、賽銭箱に入れるんよ。そんでお願いごとを念じるんや」

「へぇ。そんじゃあこのお金は、神様へのお願い料ってわけか」

ヴィータが5円玉に開いてる穴を覗き込みながらそう言うと、「ふふ。ヴィータちゃん。お賽銭はお願い料じゃなくて、神様への感謝の気持ちなんだよ」箱付き巾着から自分の財布を取り取り出したすずかちゃんが微笑んだ。

「神様から貰った幸せや導き――私たちのように奇跡みたいな巡り合せへの感謝の為の。見て。お賽銭箱の上に綱が垂れた鈴があるでしょ？　最初にお賽銭をあの箱の中に入れて、あの縄を揺らして鈴を鳴らすの」

「ねえねえ、すずか。どうして5円玉なの？　感謝するならもっと大きな金額の方がいいんじゃない？」

「んー。お賽銭の金額は自由だよ。もっと高くても良いし。でも5円玉にはちゃんと意味もあるんだよ。5円の語呂合わせで、ご縁にありますように、って風に。これから私たちは広い世界で頑張るから、ご縁があった方が良いと思うんだ」

「えっと、それじゃあ鈴を鳴らす意味は・・・？」

「はい。晴々しい音を納めて邪気を払って、神様を呼ぶためのものなんですよ」

アリシアちゃんやシャマルの疑問にすぐに答えたすずかちゃんに「おお！」みんなで拍手を贈ると、「えへへ」すずかちゃんは嬉しそうに照れ笑いを浮かべた。それからすずかちゃんから続きの作法の

仕方を教わる。わたしやなのはちゃん、アリサちゃんは再確認やけど、異世界組のルシル君たちにとっては「ありがとう、いい勉強になった」ってことや。

「あ、順番が来たよ。誰が先にする？」

「まずは大人のシグナム達から済ませた方がええと思う。わたしらが終わった後、合流するときの目印になるやろし」

そうゆうわけで、まずはシグナムとザフィーラから。2人並んでお賽銭を賽銭箱に入れた後は鈴を鳴らして、さっき教わったように二拝二拍手一拝。終えた後、「お先に失礼します」わたしに一礼した後、少し離れた木の下に歩いて行った。

次にヴィータ、シャマル。フェイトちゃん、アリシアちゃん、アルフさん。すずかちゃん、アリサちゃん。そして残るはわたし、ルシル君、リインフォース、なのはちゃん、シャルちゃん。

「それじゃ次は、わたしとなのはね」

「うんっ。お先するね」

シャルちゃんとなのはちゃんが参拝するんやけど、シャルちゃんのお願いが結構長かった。1つや2つやないな、きっと。なのはちゃんが終えてもまだ願いごとをしてるシャルちゃん。そんでようやく終えて、「お願いします！」シャルちゃんは最後にそう言って、なのはちゃんと一緒にみんなの元へ。

「どれだけ必死なんだ、シャルは」

「そうやな。でも・・・ちょお解るよ、わたしも」

シャルちゃんはお願いごとが多そうやもん。そして最後はわたし、ルシル君、リインフォース。ルシル君が「まずは俺が行くよ。はやてとリインフォースは少し待っていてくれ」って言うて、1人で参拝を済ませた。

「お待たせ。それじゃ・・・はやて、ちょっと失礼するよ」

「え？　え？　ひゃあ・・・！？」

ルシル君がわたしをお姫様抱っこした。家族だけの前ならそんな恥ずかしないけど、こんな公衆の面前でお姫様抱っこされるんはひどく恥ずかしい。って思う反面、嬉しいって感情もあって・・・。頭の中ごちゃごちゃや。

「これならリインフォースも落ち着いて参拝できるだろうからな。少しの間、我慢してくれ、はやて」

「あ、うん。ええよ、わたしは問題あらへん。行こ、リインフォース」

「はい」

ルシル君とリインフォースが賽銭箱前に並んで、わたしとリインフ

ォースが一緒に参拝する。お賽銭を入れて、リインフォースと一緒に鈴を鳴らして、二拝二拍手一拝。そんで、自分の名前、住所、神様へありがとうございますを念じる。

（これからも家族みんな、仲良く元気で過ごせますように。友達ともいつまででも仲良くいられますように。あと・・・）

真っ直ぐ前を見てるルシル君をチラッと見上げる。

（ルシル君ともっともっと、仲良くなれますように。ずっとずっと一緒に、過ごせますように）

これからもみんなで仲良く過ごして行けるように、ルシル君ともっと親密になれるように。そう強く願う。こうして参拝を終えたわたしらは、次の予定として組んだ、おみくじ引きに突撃や。

Ｅｐｏｓ３３神さまに教えてもらおう～Ｉｎｔｅｒｖａｌ　２～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

初詣っていう、この世界・この国での行事へとやって来た私たち。初めての着物、初めての参拝。そのどれもが新鮮で、改めて私は今の幸福をくれたなのは達みんな、そしてテスタメント――ステアに感謝する。

神様へのお願いをする参拝を終えた私とアリシアとアルフは、先に終えていたシグナムとザフィーラ、ヴィータとシャマルの元へ。少し待って「お待たせー」アリサとすずかが合流。そして次に合流するなのはとシャルを見守っているんだけど・・・。

「シャル、どんだけ必至に願い事してんのよ。あたし達の倍はしてんじゃない？」

「どんなお願いか、ちょっと判っちゃうかもね。この神社、縁結びの神様を祀ってるし」

アリサが呆れ口調でそう言って、すずかが微苦笑。なのはの願い事が終わっていてもなおシャルは必至に何かをお願いしている風で、最後になるはやて、ルシル、リインフォースの後ろに並んでる人たちがクスクスって笑い始めた。可愛い、とか聞こえることから嘲笑じゃないのは確か。だから気にするほどのものじゃないんだろうけど、身内としてはちょっと恥ずかしいかも。

「あ、終わったみたい。・・・すんごい晴れやかな顔してるね、シャル」

アリシアの言う通りこちらに向かって来ているシャルは、何か手応えでも感じたのか晴れやか、そして満足げな表情だった。そんなシャルに「シャルちゃん。随分と熱心だったけど。何をお願いしたの？」シャマルが訊いた。

「えっへっへ～♪　もちろんっ、なのは達やはやて達とこれからもずっと、ずっと、ずぅ～～～～っと仲良く、親友でいられますようにっ♪」

満面の笑みを浮かべるシャルに「私もだよ！」って賛同すると、「あ、私も同じことをお願いしたよっ♪」なのはも、「わたしも、わたしも♪」アリシアも、「私もー♪」すずかも、「あら、私もよ♪」シャマルも、そして「まぁ、あたしも、そうね」照れくさそうにアリサも賛同した。シグナムやヴィータも頷いて賛同を示す。すずかが言っていた、この奇跡のような出逢い、を私も大切にしたい。みんなが同じ想いを抱いてる。

「そ・れ・と～・・・ルシルと結ばれますように、って・・・きゃっ　」

頬に両手を添えて恥ずかしがっているシャルに私たちは全員口を閉ざす。なんとなく判っていたからだ。シャルの長すぎる願い事。きっとルシル関係なんだろうなぁ～って。そんな中、「お前よかはやてとの方がお似合いじゃね？」ヴィータが賽銭箱を指さしてそう言

ったから、私たちもそちらに視線を移す。
そこにはリインフォースと大人姿に変身したルシル。そのルシルに横抱き――俗にいうお姫様抱っこされているはやての姿が。シグナムとザフィーラは「ふむ。確かに」って言って、「あら～♪」シャマルは嬉しそうに微笑んで、ヴィータは「ほらな？」硬直してるシャルに肘でツンツン突いていた。

「なんていうかさ。はやてとルシルじゃなくて、ルシルとリインフォースがお似合いかも」

「ルシル君がお父さんで、リインフォースさんがお母さん、はやてちゃんがその子供・・・？」

「あー、なんかそう・・・見える？」

アリサ、すずか、アリシアがそう好き勝手言っている中、「わたしのライバルは、はやてだけじゃなかったのね・・・！」ってシャルが悔しげに握り拳を作って、「でも負けないもん！！」そんな間違った方向に決意しちゃった。

「お待たせや、みんな。・・・って、なんかあったんか？」

車椅子に戻ったはやてと、車椅子を押すリインフォース、その側に寄りそうルシルが合流。

「シャル。リインフォースに何か言いたげだな」

「そうなのか？・・・なんだ？」

「負けないからね！・・・・絶対に負けないからね！」

ビシッとシャルに指を差されてそんな宣言をされたリインフォースや、さっきまでの私たちのやり取りを知らないはやてとルシルは当然「？？？」小首を傾げることに。そんな3人にさっきまでのやり取りを話そうかとした時、「ま、それはとにかく。今は急いでおみくじを引きに行きましょ。混んでくると面倒だわ」アリサがある小屋を指さす。

「そうだね。じゃあ歩きながらでも・・・」

おみくじ（良運不運を占うためのもの、らしい）を引ける小屋へと向かうその最中、はやて達にさっきのやり取りについて話す。この出逢いを大切にして、いつまででも続きますように。それについては「わたしもやよ」はやてや、「俺もそうだな～」ルシルも賛同。そして最後に、シャルがルシルと結婚できますように、って願った事を伝えた。

「確かに縁結びの神を祀っているってすずかが教えてくれたから、誰かと良縁を結びたいっていう願いをするのは間違ってはいないけど・・・。ん？」

ルシルがシャルを見ながら困ったって風に苦笑。シャルはそんなルシルに「でしょ～？」って笑みを向けた。そして両手をキュッと組んで「縁結びの神様って言うんだもん。恋愛のお願いをしないと損

だよ　　ねえ？」どういうつもりか私たちに振り返って話を振ってきた。

「私はまだ、そういうのはちょっと・・・」

「あんま興味ないわ」

なのはとアリサの意見に私たちも「うん」って賛同していく。今は恋愛なんかよりもなのはたち友達との時間の方がずっとずっと大切だ。シャルは「ちょっと特別なんだよね、私と・・・――」今度ははやてに振り向いて、「はやてはさ。はやても同じ事を願ったよね♪」そう笑ったら、はやてが「ぶふっ！？」噴き出した。

「え、や、わ、ちが、あ、ええ！？　ちゃう、そんなん願ってないから！　変なこと言わんといて！」

「落ち着いて、はやて！　落ちる、車椅子から落ちるから！」

パニックを起こしてわたわた暴れるはやて。だからか車椅子からズレ落ちそうになるのをヴィータが止めた。そんな様子を眺めてたアリシアが肘でシャルを小突いて「ダメだよ、ルシル本人の目の前でそんな・・・！」って小声で責めた。

「ええー。だって、ルシルって気付いてると思うよ、はやての気持ちに」

「だからっていきなりは理不尽な爆撃と変わらないじゃん」

「はやてもさっさと告白すればいいのにぃ～」

「あ、あの、あのな、ルシル君、ちゃう、ちゃうんよ！？　べ、別に、ルシル君と結婚したないってことやなくて、あああああ！　わたしは一体何を言ってるんや！？」

「主はやて、冷静になりましょう！」

「はやてちゃん、落ち着いて！」

収拾がつくのかどうか怪しくなってきたところで、「はーい、ストップ！」ルシルが手をパンパン叩いた。ピタッと治まる話し声。ルシルは呆れ口調で「少し離れて戻ってみれば、何だ、この騒ぎは？」そんな事を言うから、私たちは「え？」って訊き返す。

「ん？　いや、さっき外国の人に道を教えていたから。え？　何か大事な話だったのか・・・？」

確かに私たちの視線ははやてに向いていたけど。でもそんな・・・全くと言っていいほど気付かなかった。

「ううん！　なんでもあらへんよ！　な、みんな！？」

はやての必死過ぎる形相に、さすがに話を蒸し返す気になれなかったようで、「うん、そだね」シャルは真っ先に頷いた。願い事の話はこれで終わりだと、みんなの考えが念話を使わなくても通じ合っ

て、うん、賛同するために力強く頷いた。とこんな大変な事もあったけど、ようやく私たちはおみくじを引ける小屋へと辿り着いた。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒すずか†††

おみくじを１回１００円で引いた私たちは、他のお客さんの邪魔にならないように境内の隅っこへとやって来た。おみくじの内容は他の人に見せても良いし、しなくても良いんだけど、「ねえねえ、すずか！」シャルちゃんはおみくじを私の顔の前にまで持って来て、「どういう意味？」って訊ねてきた。

「えっと、シャルちゃんの運勢は、中吉だね」

シャルちゃんのおみくじには大きな字で、中吉、って書かれていた。異世界出身の子が多い私たちのグループの為に事前に調べたことだと、「上から二番目に良いものだよ」って教える。

「ほうほう。２番目に良いかぁ♪」

「うん。大吉・中吉・小吉・吉・末吉・凶・大凶の７段階だね。神社によっては５段階、１２段階もあるけど」

「それじゃあ、わたしは一番縁起が良い大吉だね♪」

アリシアちゃんが、フェイトちゃんやシャルちゃんにおみくじの字面を見せびらかせて笑顔を振りまいてる。一応、アリシアちゃんはお姉ちゃんの立場なんだけど、「良かったね、アリシア♪」妹のフ

ェイトちゃんに頭を撫でてもらって気持ち良さそうに、そして嬉しそうに頬を緩めてた。

「アリシアが大吉、シャルは中吉か。あたしは小吉だったのよね」

「私はアリシアちゃんと同じ大吉ぃ～♪」

アリサちゃん、なのはちゃんに続いて「私は、吉だったよ」引いたおみくじをみんなに翳して見せる。それからみんなもそれぞれおみくじの字面を見せていく。大吉は、なのはちゃん、アリシアちゃん、はやてちゃん。中吉は、シャルちゃん、ヴィータちゃん、シャマルさん。小吉は、シグナムさん、ザフィーラさん。吉は、私とフェイトちゃん、アルフさん、リインフォースさん。そして・・・

「ちょっ、ルシルだけ大凶じゃない。キッツぅ～・・・」

私たちみんなが吉以上だったのに、ルシル君だけが一番縁起の悪い大凶だったことに引いた「アリサちゃん・・・！」を私はちょっと語気を強めて窘める。するとルシル君は「すずか。大凶とはそれほど悪いのか？」って訊いてきた。

「えっと・・・、凶や大凶は、これから悪い事が起こります、っていう意味じゃないんだ。気を引き締めましょうっていうのが本当の意味。だから、大凶は特に気を付けましょう、かな？　大丈夫だよ。ルシル君は歳の割にすごくしっかりしてるし」

「そうだよ、ルシル君！」

「そうや、気にしたらアカン。気にすればするほど、良うないことが起こると思う」

「ありがとう、なのは、はやて」

「悪かったわよ。べ、別に他意も悪気も無かったのよ・・・」

「判っているよ、それくらい。アリサは優しい女の子だからな」

「んなっ？　ちょっ、やめなさいよ、そんな真顔で言うの！　こらっ、頭を撫でるな！」

「いいなぁアリサ！　そこ代われ！」

「今すぐにでも代わってやるわよ、シャル！」

良かった、ちゃんと調べておいて。ちょっと大騒ぎになっちゃったけど、フォローは出来たみたい。そう安堵していると、「さすがすずかだね」フェイトちゃんがボソッと褒めてくれたから、「ありがとう♪」私もボソッとお礼を言う。

（それじゃあ自分のも読もうっと。・・・えっと、運勢は吉。・・・それと・・・）

私自身の引いたおみくじの内容を読んでく。願望は、他人に妨げられることがある。待人は、来るが倖せは少ない。学業は、安心して

勉強する事。恋愛・縁談は、思わぬ人に邪魔をされるかもしれない。争事は、勝つが控えて吉。商売・就職は、努力が報われる。健康・体調は、心穏やかにすれば治る。失物は、ほどなく出てくる。

（なんか、願望や恋愛がちょっと気になるかも・・・）

どちらも誰かに妨害されちゃう、って書かれてる。なのはちゃん達もそれぞれ一喜一憂してる中、「ひゃっほぉ～～い！」シャルちゃんは跳び抜けてハイテンションで、はやてちゃんは頬を赤く染めて、チラチラとルシル君を横目で見てる。恋愛の項目で何かしら良い事が書かれていたのかも。

そんなことに思ってると、「お？」ヴィータちゃんが自分のおみくじやはやてちゃん、シグナムさん、シャマルさん、ザフィーラさん、リインフォースさんのおみくじを見て何かに気付いたって風に声を上げた。

「すげぇ。八神（あたしら）家の、待人、失物がおんなじだ！」

「あ、ホンマや」「あら、本当だわ」

驚くはやてちゃんやシャマルさん。私たちも改めてはやてちゃん達のおみくじを並べて比べ見る。あ、はやてちゃんの恋愛・縁談のところ、今の人が最上迷うな、って書かれてる。今の人っていうことは・・・ルシル君のこと、だよね。だからあんな嬉しそうに微笑んでたんだね。

「待人は、便りなく来たる。早し・・・」

「失物は、そう遅くなく出る。遠くから・・・」

フェイトちゃんとアリシアちゃんが読み上げた。はやてちゃん達がその意味を考え込み始めた中、「えっと、ルシル君はどうだったのかな？」なのはちゃんがさっきから静かにおみくじを眺めてるルシル君に声を掛けた。

「あ、いや、特に気になるところは無いよ」

自然な振る舞いのように見えたけど、どこかおみくじを隠そうとしたのがなんとなく判った。だから「どれどれ～？」アリシアちゃんが背の低さを活かしてルシル君の降ろされた左手にそっと近づいて「見せて！」って奪い取っちゃった。

「あ、アリシア！」

「みんなも見せたんだから、ルシルも見せようよ♪　ひとりで背負いこまないでさ♪」

「いやだから、大して気になる部分は無いと・・・」

ルシル君は取り返そうとはしないで、私たちにおみくじを見せてきたアリシアちゃんを溜め息ひとつ吐いて傍観。そんな中で私たちは、ルシル君の大凶のおみくじを読む。

「願望は、苦難の中で失う物あり、得る物あり」

「待人は、来たる。覚悟せよ」

「失物は・・・あ、これははやて達と同じだね。そう遅くなく出る。遠くから」

「恋愛・縁談は・・・、叶わぬ。切り捨てよ。・・・ひどい」

「商売・就職は、思うがままに事を成せる」

「健康・体調は、衰退は果てまで変わらぬ。気を引き締め続けよ」

「争事は、退けば後に不利となる。躊躇わず勝負せよ」

「学業は、憂う事なし。さらに精進せよ」

私たちみんなで読み上げていく。内容は、なんていうか大凶に相応しいって言ったらダメなんだろうけどネガティブなものが多い。だからちょっと私たちの空気が重くなった。すると「こんな空気にしたくなかったんだけどな」ルシル君がひょいっとアリシアちゃんの手からおみくじを取った。

「でもま、さっきすずかも言っていたけど、おみくじはあくまで忠告であって、これから起こる予言じゃない。そうだよな？　すずか」

「あ、うん。凶や大凶を引いたからって悪い事が起きるわけじゃない。結局は引いた人――ルシル君次第でいくらでも変わっていける。

だから大丈夫。うん、問題ないよ」

「というわけだ。確かにネガティブなものばかり書いてあったが、これからの俺の行動次第・心の持ちよう次第で変われる。だから俺は、なにも心配なんかしていない」

ルシル君がキッパリそう告げる。それでもうこの話題は終わりになった。おみくじに書かれていた内容はあくまで忠告。それは最終的には引いた人の心の持ちようによって変わってくる、ということだと思う。みんなもそれで納得したみたい。

「それじゃあ、結びどころに行こうか」

「結びどころ、ってなに？」

「引いたおみくじを結ぶ場所だよ。引いたおみくじを神社やお寺の木の間に張られた縄に結んで、運勢に関わらないで、そこに居る神様と縁を結ぶんだ。えっと・・・あ、あそこ」

アリシアちゃんにそう答えながら周囲を見回して、結びどころを指さす。結びどころに向かいながら、「そうだ、ルシル君。凶・大凶のおみくじを結ぶのも良いけど、持ち帰っても良いんだよ」一番後ろを歩くルシル君に振り向く。

「そうなのか？」

「うん。凶・大凶だからこそ、持って帰って時々見返すことで、自

分を戒める、っていう考え方や使い方もあるの。まぁ、ほとんどの人は結んで行くそうだけど」

私ひとりなのはちゃん達の中間グループから「ちょっとごめんね」離れて、最後尾グループのルシル君、シャマルさん、シグナムさんの元へ移動。

「じゃあ俺は持って帰ろう。すずか、何か気を付けないといけない作法とかあるか？」

「うん、あるよ。おみくじは神聖なものだから、絶対に粗末に扱わないこと。そしていつか必ず、寺社に結びに来ること。ここじゃなくても他のお寺とかでもいいから。だから絶対にごみ箱とかに捨てちゃダメなの」

「君の知識は本当に勉強になるよ。ありがとう、すずか」

ルシル君が私の頭を優しく撫でてくれた。これは癖になっちゃいそうなほどに気持ち良い。シャルちゃんが代わってほしいって言う気持ちを解るかも。そうして私たちは結びどころにおみくじを結んでいって、ルシル君だけがおみくじをお財布の中に丁寧に仕舞い込んだ。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒イリス†††

わたし、本当に幸せ。リンディ艦長たちと出逢えることが出来たからこそ、狭い世界しか知らなかったわたしの世界はグッと広がった。

そしてなのは達に出逢えて友達になれたから、こうして異世界文化に深く触れることが出来た。
そしてはやて達と出逢えたから、こうして好きな人と一緒に初めての経験を重ねていけるんだから。だからわたしはこの国の神様に感謝した。この素敵な、奇跡みたいな出逢いをわたしにくれてありがとうって。念入りに、しっかりと、確実に、神様にちゃんと感謝が届きますように。

（・・・わたしのお願いも届くといいな♪）

すずかに教えてもらった限りじゃこの神社っていう神様を祀る祭祀施設は、縁結びの神様を祀っているってことだ。だからわたしは、ルシルとの縁を結んでもらえるようにお願いした。神様頼みなんて柄じゃないけど、今は少しでも勝率を上げておきたい。最大のライバル、はやてに勝つためにも。
それからみんなでおみくじ（吉凶っていう運勢・縁起の占い）を引いた。わたしは2番目に良いっていう中吉。恋愛・縁談は、未来に幸福あり。今はダメなんだろうけど、未来にはわたしの望む幸福がある、っていう事なんだ、きっと。

（この占いを叶えさせるためにも、これからもアプローチを続けないとね♪）

他は・・・願望は、努力は報われる。待人は、訪れなし。失物は、出る。近い処。商売・就職は、苦なく事は進む。健康・体調は、健やかなるまま。争事は、勝てども哀しみあり。っていう事だけど、問題は・・・学業だったりする。

（足りぬ。努力を重ね苦手克服して吉、かぁ～）

今のわたしの学力じゃちょっと足りないってことかも。なのは達の学校に通っても恥ずかしくないように勉強しておかないとね。

「――これで、良しっと」

結びどころっていう縄に、引いたおみくじをルシル以外のみんなで結び終える。そして次はお待ちかねの「屋台巡り！！」だ。縁日などに食べ物や遊技を提供する屋台へいざ出陣じゃーーー。ああもう、さっきからもう良い香りが漂って来てお腹がぐぅぐぅ鳴っちゃうよ。

「お好み焼き、タコ焼き、焼きそば、串カツ、おでん、肉巻おにぎり♪」

「クレープ、たい焼き、ベビーカステラ、じゃがバター、フランクフルト♪」

わたしとアリシアで、屋台に掲げられた出店されている食べ物の名前を言っていく。他にもある。それを1人で回るのはまず不可能。ということで、一度バラけて、全ての店の食べ物を一度に買って合流。それをみんなで分ければ時間も手間も掛けずに全屋台を制覇できる、という作戦を取ることにした。

「神殿前から鳥居へと下る方向で、全店制覇。車内で決めた通り1人1つじゃなくて、7つまで。2人で1つを分け合えば、きっとち

ょうどいい量だから」

「シャル、あんた、本気過ぎ」

「シャルちゃん、ホンマに楽しんでくれてるなぁ」

わたしが考え抜いた屋台制覇作戦を改めて告げると、アリサは苦笑、はやては嬉しそうに微笑んでくれた。縁日は今日だけじゃないっていうのは判ってるけど、正月っていう縁日は年に一度。しかも生まれて初めて異世界での行事だ。参加するなら徹底的に。

「それじゃ車内で決めた通りの２チームに分かれて」

ちょうど１４人いるわたし達は１チーム７人に分かれる。わたし、アリサ、フェイト、アルフ、ルシル、シグナム、シャマル。そしてなのは、すずか、アリシア、はやて、リインフォース、ヴィータ、ザフィーラ、だ。ジャンケンで決めたから多少偏りがあるけど、わたしとしてはルシルが来てくれて超嬉しい。

「ザフィーラ。ナンパしてきた男は、俺とザフィーラで追い払うってことで」

「うむ。我が主とリインフォースは我に任せろ。お前はシグナムとシャマル、アルフを守れ」

大人の姿になってるルシルと、ザフィーラがコツンと拳を打ち合う。そう、２人はそれぞれのチームに居る女性、シグナム、シャマル、

リインフォース、アルフ？に声を掛けてくる男の人たちを追い払う役目を担うために、それぞれに分かれた。とは言え、ザフィーラは問題ないだろうけど、ルシルは逆に呼び寄せそう。女の人をさ・・・。

「よしっ。準備も整ったってことで・・・とぉ～つげぇ～～～きっ！」

鳥居から見て右側に出店してる屋台をわたし達が担当して、向かい側をなのは達が担当。片側１０店、計２０店の屋台へ突撃する。まずは、「焼きそば！」の屋台から。ちょっと混んでいたから、ルシルとシャマルが先に屋台の前へ。

すると屋台前にたむろしていた人たちが小さな歓声を上げながらルシルとシャマルに道を作った。わたし達も遅れて２人の側へ向かっていると、「な、ないすとぅーみーとぅー」屋台のおじさんが拙いミッド語（こっちじゃ英語か）で挨拶したから、「俺たちは日本語でも大丈夫ですよ。７パック、頂けますか？」ルシルは日本語でそう返した。

「あ、そ、そうですかい！　よかった、よかった。英語できんので焦りました！　お兄さん、可愛らしい奥さんと一緒に観光ですかい？　羨ましいですね！」

「奥さん・・・！？」

ルシルとシャマルが仲良さそうに連れ添ってるからそう見えちゃうのも仕方ないけど、「いやですよ、おじさん　」シャマルが嬉しそうに両手を頬に添えてテレてるのを見て、ちょこっとイラッときた。

「いやほら。可愛らしいお子さんが・・・」

「わたし？」「私？」「あたし？」

わたし、フェイト、アリサが自分を指さして小首を傾げる。次にシャマルが固まった。小さく「私が子持ち・・・に見えるの？」そう呟いた。あー、ショックだよね、そりゃ。シャマルの外見年齢は確か、２２歳。それでわたし達のような大きな子供の母親と言われれば・・・。

そしておじさんはわたし達の話を聴くことなく「可愛い奥さん、お子さん達にサービスだ！」７つのパックにちょっと多めの焼きそばを盛ってくれた。そんなおじさんにとりあえず「ありがとう」お礼を言って、わたし達は隣のお好み焼きの屋台へ向かう。

「ねぇ、シグナム、ルシル君、みんな。私、老けてるかしら？」

小さく溜息を吐くシャマルがわたし達にそんな質問を投げかけてきた。シグナムが「気にするな」って言うと、「否定も肯定もないって一番辛いんだけど・・・？」シャマルはさらにしょぼーんとなった。

「そ、そんなことないって思うよ、シャマル」

「う、うん、あたしもそう思うわ」

フェイトとアリサがフォローに入ったから、「子持ちには見えない

よ」ってわたしも続く。本音を言えば、アリサの母親にも見える。さらにルシルの妻にも見える、でも言ってやらない。さっき嬉しそうにしていたし、これ以上ライバルを作りたくもないもん。

「ああ。シャマルは可愛い女の子だよ」

「うぅ、ありがとう。・・・あ、そうだ！　次はシグナムとルシル君の2人に行ってもらいましょ！」

「「なに・・？」」

ルシルとシグナムが同時にシャマルに振り向いた。シャマルは「ほらほら♪」って2人の背中を押して、お好み焼きの屋台に向かわせる。シャマルに言われるままに屋台に入った2人を、ちょっと離れた後ろで観察。念のため、「なんであたしが・・・」アリサを2人の側に待機させておく。

「これで私と同じよ。さぁ、屋台のおじさん。ルシル君とシグナム、アリサちゃんを見てどう思うかしら？」

シグナムもまた子持ちに見られることを望んでウキウキしてるシャマルだったけど、「いらっしゃい！　彼氏さん、彼女さん共々綺麗だね！」おじさんは2人を夫婦じゃなくて恋人と捉えていた。シグナムの外見年齢は19歳、だったっけ？　無理もないか。側に居るアリサは無関係だと思われてるようだし。

「私の時は奥さんで、シグナムは彼女・・・？　そ、そんな・・・」

「あー、なんて言うかさ。あんたって母性が滲み出てんだよな。もしあんたのことを知らないままで、あんたが子供と一緒に居たら、絶対に親子って思っちまうよ」

アルフにそう言われたシャマルがガクッと肩を落とすと、「しぃーっ！　ダメだよ、アルフ、嘘でもそんなことないって言わないと」って、フェイトはさっきの自分のフォローを台無しにした。さらに影を落とすシャマルにフェイトはハッとしたけど、もう手遅れ。そんな中で「戻ったぞ」シグナムとルシル、若干不機嫌なアリサが戻って来た。

「どうした？　シャマル」

「ううん、なんでもないわ。・・・こ、今度はアルフとルシル君を一緒に――」

「シャマル。俺とシグナムじゃ恋人関係に見られた。アルフと一緒に行ってもおそらくそういう関係に見られるだろう。アリサやシャル、フェイトを連れていたとしても、だ」

「うー。なんか納得いかないわ・・・」

そう言って膨れてるシャマルに「じゃあ、もう1回だ」って言ったルシルは、シャマルの手を取って3店目のたこ焼き屋へ歩き出した。

「え、え、ちょ、待って、ルシル君！」

「大丈夫。ほら、シャマル。みんなも」

ルシルが先頭を行って、たこ焼き屋の前に立って7パックを注文する。と、「おおっと、綺麗どころの団体さんだな」店主のおじさんがわたし達を見て口笛を吹いた。そして「羨ましいね、お兄さん。両手に花どころか花束じゃないか」って笑った。

「あ、あの！　私、彼の何に見えますか！？」

「えっ？・・・彼女さんでしょ？　違ったかい？　後ろのポニーテールのお嬢さんは彼女というより、子供たちの付き添いかな。それにもう1人のお嬢さんもそんな風だ。何十年も屋台主をやっているからね。見ただけである程度分かるよ。雰囲気から言って、あんたが色男の隣に似合っているよ！」

「っ！・・・ありがとうございます！　そうなんです、妻でも母親でもなくて、彼女なんです！」

そんなに子持ちに見られなかったのが嬉しいのかシャマルはルシルの右腕に抱きついてそんなことを言った。ルシルはされるがまま、シャマルの気が済むまで付き合うようで、振り払うことも、訂正することもしない。それはシグナムも同じ。ちょっと納得いかないけど、さっきまでのシャマルの元気の無さを見てるから、わたしも話に乗ることにした。

「はっはっは！　気に入ったよ、お嬢さん。おまけを付けてやろう」

１パック８個入りだったけど、わたし達のは１０個入りになった。そんなこんなで３店目も攻略。笑顔を振り撒きまくってるシャマルが４店目の屋台、「次は串カツ屋さんね♪」へとルシルと腕を組んだまま向かって行く。なんかさっきはシャマルの機嫌の良さを維持させてあげようと思ったけど、調子に乗らせるのもなんか嫌だ。だから「ちょっと失礼！」ルシルとシャマルの間に割り込んで、２人と手を繋ぐ。

「（ふっふっふ。このポジション、どう見ても親子でしょ？）よーし、次だ！」

「おっと、すみません」

「あ、いえいえ、こちらこそ」

わたしがグッとルシルの手を引っ張ったからルシルと参拝客がぶつかっかった。お互いが謝った事で騒ぎにはならなかったけど、「ルシル、あんた、髪紐が切れちゃったわよ」ルシルの後ろ髪を結っていた紐が何かの拍子で切れちゃった。

「ごめん、ルシル」

「いいさ。どうせ安物だし、帰ったら新品のものを出すよ」

そう言って微笑むルシル。とわたし達の後ろに居るアリサが「一気に女の人に見えるようになったわ」そう言って、「身長が高い、モ

デルさんみたいだよね」フェイトもそれに賛同。

「後ろ姿だけ見れば、だろう？　目の前から見れば、ほら、立派な男だろう？」

そう言ってわたしの手から逃れたルシルが振り返った。その際に流れる水のように後ろ髪がフワッと靡いて、シャンプーの良い香りが周囲に広がった。たとえ高身長でもジッと見ないと男だと確信できない、わたしは本気でそう思った。

「その答えは、これから話す屋台の店主のリアクションね」

アリサの言葉にみんなが串カツの屋台に目をやった。そして、「行こう」ルシルがちょっと緊張した声色でそう言って、わたし達は屋台の前へ。問：今のルシルをパッと見で男と見分けられるか？

「ん？・・・おお、嬉しいね！　綺麗で可愛いお嬢さん達に寄ってもらえるなんて！」

「「「「「「「・・・・・・」」」」」」」

答：否。やっぱり女に見られた。結局、残り６店中４店の店主が、ルシルを女と見なした。その後はわたし達はなのは組と合流して、屋台で買ったお昼ご飯をみんなで美味しく頂いた。

Ｅｐｏｓ３４日本語って難しいと思うｂｙ異世界組～Ｉｎｔｅｒｖａｌ　３～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

フェイトたち異世界組を含めたみんなで初詣の参拝を終えた後、あたしん家に帰って私服に着替えた。そして今は、みんなであたしの部屋に居る。あたし含めて１７人（うち２人――アルフとザフィーラは、着替えた後に子犬と狼形態に変身した）の大所帯だけど、あたしの部屋はそれなりの広さを誇っているから、ぎゅうぎゅう詰めにはならないわ。ま、その分座る椅子やソファが足りないから、カーペットに直座りになっちゃうけど。

「――さてと。そんじゃ昼からはどうする？　正月らしいって言えば他にもいくつかあるけど・・・」

カーペットに直座りさせるのもどうかと思って用意したクッションに座ってお喋りしてたなのは達みんなに声を掛ける。すると真っ先に「お正月らしいって言えば・・・・羽根つき？　あとすごろくとか」なのはがそう言って、「えっと、凧あげもあるよね。他にも福笑い、とか」次にすずかが人差し指をあごに当てながら言って、最後に「カルタに百人一首、けん玉にだるま落としやな」はやてがそう締めた。

「へぇ～。色々あんだな。・・・て、シャル、お前なにしてんだ？」

ヴィータの視線を追ってみると、シャルがあたしの勉強机――アンティークデスクの側で何かやっていた。デスクの上には確か「それ、学校の宿題よ。あんたも来年からやるんだからね」冬休みの宿題ノートで、シャルはそれを眺めていた。

「そう言えば、なのは達はどうなの、宿題」

「あー、私はある程度終わったよ」

「私も残りは算数ドリルだけ～♪」

なのはとすずかも大半を終えたようだけど、フェイトは「うぅー。国語が終わらないよ・・・」ガクッと肩を落として、アリシアは「わたし、まだ何1つとして終わってなーい♪」って陽気な声でそんなことを言ってのけた。

「アリシア・・・」「「アリシアちゃん・・・」」

「あんたね・・・。始業式まで1週間よ？　それまでに終わるの？」

「んー、どうだろ。貰った宿題って、漢字・算数ドリルをそれぞれ5ページ、英語プリント2枚、国語プリント2枚、だったよね。1週間もあれば問題ないと思うけど？」

あたし達はまるで危機感のないアリシアに嘆息していると、「英語の授業があるのか？」ってルシルからそう訊かれて、「今年から必修科目になったんだよ」ってなのはが答えた。今年の3年生から英

語の科目が追加された。

「英語はミッド語に似てるからラクショー、とはいかないけど・・・ま、簡単♪」

フェイトとアリシアにとっては多少の文法違いがあるものの、英語は、算数と並ぶ得意科目としてるわ。クラスメイトの中でいっつも頼りにされてるもの。このあたしを差し置いて。あたしだって、アリサ・バニングス、って横文字の名前なのに・・・。

そんなあたし達のやり取りの中、来年４月から聖祥小に通う事になってるはやてが「アリサちゃん。どうゆうもんか見せてもらってもええかな？」ってデスクに置かれた宿題を指さした。もちろん「いいわよ」って頷いたあたしは、すでに終えてた算数ドリルをはやてに手渡した。はやて「おおきに」そう受け取って、ペラペラと捲ってく。

（そう言えばはやてって、ルシルに勉強を教わってたんだっけ。だったらこれくらい簡単なはずよね）

魔導師になって判ったことだけど、魔法の構築や制御はまんま理数系の習得・理解・応用力に懸かってくる。だから今のあたし達は理数系で言えば小学生レベルをとっくに超越してる。だから「なるほど。うん。これくらいなら解るわ」はやても嬉しそうに頷いた。

「ルシル。はやての今の学力ってどんくらいなの？」

「理数系で言えば高校卒業レベルで、算数というよりは数学を学ん

でもらった。文系は中学二年レベルかな。夜天の書をはやての家で見つけた時、はやても魔法の使い手になると踏んで、理数系に力を入れて教えた」

「おおきにな、ルシル君。ルシル君のおかげや♪」

「どういたしまして、はやて。はやてが弱音も吐かず、俺の授業についてきてくれたおかげだよ」

笑顔で見つめ合う2人に「はい、ごちそうさま」あたしは手を合わせた。ここで、「ねえ、ルシル。わたしにも勉強を教えてよ」シャルがそう言って挙手（若干膨れっ面だったのは言うまでもないわね）。すると「あ、わたしも！」アリシアまで手を挙げてそんなことを言いだし始めた。異世界組にとって一番の苦手科目は国語みたいで、フェイトもアリシアも、そしてドリルを見たシャルも「ムズっ！」国語がダメみたいだわ。

「まぁ、構わないが。とは言え、君たちが苦手なのは国語だけだろ？あれは復習を繰り返して覚えるしかないぞ。反復学習だ」

とは言いつつ、ルシルはちゃんとあたし達の教科書を使って、フェイトとアリシア、シャルに国語・社会の授業を行った。正直、学校で習うより解り易かったわ。ルシルって先生になると大成しそう。みんなでルシルの授業を受けて、その後は「さぁ。簡単な小テストだ」そう言ってルシルは、「我が手に携えしは確かなる幻想」そう詠唱。その手に現れたのはあたし、なのは、すずか、フェイト、アリシア、はやて、6人分のプリント。

「国語と英語と社会の小テストプリントだ」

自慢げに言うルシルに「それ、ルシル君が作ったの？」なのはがそう訊くと、「とある高校入試問題のレベルを下げたモノだ」なんて言い出した。どっからそんなモンを持ってきたのかって気になったから、「どうしたの、それ？」って訊いてみた。そしたら「企業秘密だ」なんて誤魔化してきた。

「さて。これからはやて、なのは、アリサ、すずか、フェイト、アリシアに、俺が用意した小テストを受けてもらう。ただ受けてもらっただけじゃ受ける君たちには面白くはないだろうから、総合得点で1位だった優勝者には褒美をあげよう」

ルシルがそう言った途端、「なんでもいいの！？」シャルが真っ先に食い付いた。興奮気味なシャルに「俺に出来ることであれば」なんて、調子に乗らせそうなほどの太っ腹な返答を言ってのけたルシル。

「よっしゃぁぁーーーー！　言質、言質取ったからね！」

ヒャッホーって具合に小躍りしてるシャルを見て、「あの、ルシル君。本当に良いの？」すずかがボソッと訊ねると、「シャルちゃん、本気になったらまずいかもだよ？」なのはもそう確認した。フェイトも頷く事で賛同。はやては不安げにルシルを見詰めたまま。

「問題ないよ。・・・さてテスト中でのルールを設ける。1つ。念

話などの魔法の使用を禁止。２つ。私語厳禁。３つ。カンニングしたら即アウトで、罰ゲームを受けてもらう。１つ目と２つ目のルールを破ったら、総合得点――１教科５０点満点だから１５０点だな。そこから１０点ずつ引いていく。総合得点が５０点を切ったら・・・もれなく罰ゲームだ。全員が５０点を切ってもアウト」

「結構大きいわね、マイナス１０点って。でもま、仮にもテストなんだから私語をするつもりはないわ」

「カンニングはダメだよね。うん、判ってる！」

というわけであたし達は、あたしの部屋から応接室へ移動。あたしの部屋に留まる他のみんなにはテレビゲームや読書なんかで時間を潰すようにお願い。ヴィータなんかはテレビゲームに食いついていたわね。今度、ハードとソフトを貸してあげよう。

応接室に着くと、あたし達はカンニングをしないように部屋の四方八方に分かれて、雑誌を積んで作った簡易机の前にスタンバイ。そしてルシルがまず1枚目のプリントをあたし達に配って、「制限時間は３０分。用意・・・始め！」時間制限を設けてから開始の合図をした。ペラッと捲ると、英文が視界に入った。最初は英語ってわけね。

（上等じゃない。全テスト満点を取って、取って・・・。ルシルに何をさせようかしら・・・？）

優勝者特権のルシルへのお願いを考える。なんていうか、どうもあたしはルシルを女装させて遊びたい気持ちがあるのよね。これから

もちょくちょくルシルで遊ばせてもらおうかしら。そんなイタズラ心に若干の戸惑い、そして高揚を抱きながら問題を解いていく。

（お？　今度は英文を訳すのね）

英単語や英文作成をサクサク済ませた後、そんな問題があたしを待ち構えていた。でも楽勝よね、きっと。

問：以下の英文を訳せ

Ｍａｒｙ：Ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ　？

Ｎａｎｃｙ：Ｉ　ａｍ　ｙｏｕｒ　ｍｏｔｈｅｒ．

Ｍａｒｙ：Ｏｈ，　ｒｅａｌｌｙ　？

メアリー：あなたは誰ですか？

ナンシー：私はあなたの母です。

メアリー：えぇ～、本当に？

（ちょっと待ちなさい。記憶が飛んでんの？メアリー。それとも生き別れの果ての再会？）

Ｍｉｃｈａｅｌ：Ｍｙ　ｆｉｎｇｅｒ　ｗａｓ　ｃｕｔ　ｂｙ　ｋｎｉｆｅ．　Ｐｌｅａｓｅ　ｐａｓｓ　ｍｅ　ｔｈｅ　ｍｅｄｉｃｉｎｅ　ｃａｓｅ．

Ｍａｒｙ：Ｉ'ｍ　ｓｏｒｒｙ，　Ｉ　ｃａｎ'ｔ．　Ｎｏｗ　Ｉ　ａｍ　ｒｅａｄｉｎｇ　ａ　ｂｏｏｋ．

マイケル：指をナイフで切ってしまいました。薬箱を持ってきてくれませんか。

メアリー：すいません、出来ません。今、私は本を読んでいます。

（何してんのよ！？　メアリー！　友達が指を切ってるって言ってんのに、何スルーしてんの！？　馬鹿なの！？）

「ぷふ・・・うふふ・・・」

「はい、アリシア。マイナス１０点」

「ええーー！？　なんで！？」

「私語厳禁のルール違反。テスト中は静粛に」

「そんなぁ～～～」

そんなやり取りを背中で聴く。笑ってもアウト（まぁ、実際に学校でテスト中に笑うなんてダメだろうけど）なルシルのテスト。なんか嫌な予感がするわね。

Ｍａｒｙ：Ｉｓ　ｍｙ　ｎａｍｅ　Ｈａｊｉｍｅ　Ｓａｉｔｏ　？

Ｓａｙａｋａ：Ｎｏ．　Ｙｏｕｒ　ｎａｍｅ　ｉｓ　Ｍａｒｙ．

メアリー：私の名前は斎藤一でしょうか？

さやか：いいえ。あなたの名前はメアリーです。

（メアリー！やっぱりあんたは馬鹿だったのね。自分の名前はおろか性別に国籍すら訊ねなきゃ判らないってどういうわけ！？　というか斎藤一！？　新撰組を良く知ってるわね、メアリー！）

Sam：Hello？

Mary：Hello, this is Mary speaking. Are you Jack？

Sam：No. I'm Sam.

Mary：Oh Jack, why are you absent from school today？ Can you come to school tomorrow, can't you？

サム：もしもし？

メアリー：もしもし、メアリーです。ジャックですか？

サム：いいえ、私はサムです。

メアリー：おお、ジャック、何で今日は学校を休んだの？　明日は来られるよね？

「っ！（サム、ちゃんと名乗ってるじゃない！　話を聞きなさいよ、メアリー！　さっきもそうだけど馬鹿なの！？　ていうか馬鹿でしかないわよ！！）」

「ふふ・・・」「はふ・・・！」

「すずか、フェイト。マイナス１０点」

こんな感じの英文を訳せって問題に問題があるわよ、いやホントに。部屋の中央に居るルシルに振り向いてキッと睨み付けると、「アリサ、カンニング。マイナス１０点」ルシルが理不尽なことを言い放ってきた。

「はあ！？　カンニングなんかしてないでしょ！」

思わず立ち上がって反論する。

「さらにマイナス１０点」

「ちょっ！　あたし、なのは達のプリントなんて覗き見てないでしょうが！」

「テスト中に他の子へと振り向いた、立ち上った。あと私語厳禁。ほら、ルール違反。これ以上立っていると、強制アウトだぞ？」

「っく。あんた、初めから優勝者を出す気なんか・・・！」

ニタリと笑うルシルに、してやられた、って思った。コイツ、何かを企んでる。ちょっと待って。罰ゲーム、って言ってたっけ。それを狙って、あたし達の自爆を誘うためにこんなふざけた問題を作ったのね。

Ｊａｃｋ　：Ｉ　ｄｏｎ'ｔ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｌｅｎｄ　ｔｈｅ　ｃａｒ　ｔｏ　Ｍａｒｙ.

Ｒｉｓａ　：Ｗｈｙ　？

Jack：Because Mary hasn't returned the car ever.

Risa：I see.

ジャック：私はメアリーに車を貸したくない。

リサ：なぜですか？

ジャック：なぜなら、彼女は車を返した事がないんだ。

リサ：判ります。

（ホントに何してるのよ！？ メアリー！ リサも、判ります、じゃなくて何かメアリーに言ってやりなさいよ！ ジャックもジャックで全然危機感持ってないし！ これがアメリカなの！？）

Mary：My car was broken by someone.

メアリー：私の車は誰かに壊された。

（それジャックの車じゃないの！？ 絶対そうでしょ！ なに勝手に自分の車にしてんの！ 犯罪ギリギリ一歩・・・アウト！ でもだから車をジャックに返せなかった事なのかしら・・・？ あーもう！ なんなのメアリー！ こんな面倒な子知らない！）

Mary：I tried to smile, but I couldn't.

メアリー：私は笑おうとしましたが、出来ませんでした。

（もう笑うしかないって事なの！？　笑えなくて当然だっつうの！
つうかまず先にジャックに謝りなさいよメアリー）

Ｓａｙａｋａ：Ｉｓ　ｔｈｉｓ　ａ　ｃａｒ？

Ｍａｒｙ：Ｎｏ．　Ｉｔ'ｓ　ａ　ｎｅｅｄｌｅｓｓ　ｊｕｎｋ．

さやか：これは車ですか？

メアリー：いいえ。これは必要ないガラクタです。

（ジャックの車をついにガラクタ呼ばわり！　しかもメアリー、若干開き直ってる感じがするし！　そこまで言うほどに破壊されたって、犯人は随分と恨みを持ってるわよね！？）

「「「ぶふっ・・・！」」」

「なのは、フェイト、シャル。１０点マイナス」

Ｍａｒｙ：Ｉ'ｍ　ｓｏｒｒｙ　Ｊａｃｋ．

メアリー：ごめんなさいジャック。

（お、ようやく謝ったみたいねメアリー）

Ｍａｒｙ：Ｐｌｅａｓｅ　ｒｅｃｅｉｖｅ　ｉｔ　ｉｎ　ｉｎｄｅｍｎｉｆｉｃａｔｉｏｎ　ｆｏｒ　ｍｅ．

メアリー：私の償いとして受け取ってください。

（え？　何だろう・・・。やっぱり新車かしらね・・・？）

Jack　：What　is　it　？

Mary：It　is　a　helicopter.

Jack　：Oh　！　You　are　foolish！

Mary：No.　I　am　Mary.

ジャック：何かな？

メアリー：ヘリコプターです。

ジャック：おう！　あなたは馬鹿ですね！

メアリー：いいえ。私はメアリーです。

「ぶふっ！（ありえないんですけどぉぉぉぉぉーーーーっ！　何なのこの馬鹿すぎる会話は！！？　ヘリ買うお金があるなら車を買いなさいよメアリーッ！！　ジャックもついにメアリーを馬鹿呼ばわりだしさ！　もうダメだわ。声に出してツッコみたい！）」

「「「「「ぶはっ！」」」」」

「アリサ、はやて、なのは、すずか、フェイト、アリシア、シャル。10点マイナス」

Mary：I　had　a　lot　of　money,　but　I　spent　all　my　money.　I'm　in　deep　trouble.

メアリー：私はたくさんのお金を持っていましたが、全部使い切りました。とても困りました。

（メアリーはやっぱり馬鹿だわぁぁぁーーーー！）

「ぷっ！　ふふ、くふふ・・・！」「ふはっ・・・！」

「アリシア、シャル。マイナス１０点」

Ｓａｙａｋａ：Ｍａｒｙ　ｉｓ　ｃｌｅａｎｉｎｇ　ｔｈｅ　ｔｏｉｌｅｔ．Ｓｈｏｕｌｄ　Ｉ　ｈｅｌｐ　ｈｅｒ？

Ｊａｃｋ：Ｎｏ，　ｙｏｕ　ｓｈｏｕｌｄ　ｎｏｔ．

Ｓａｙａｋａ：ＯＫ．　Ｌｅｔ'ｓ　ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｄａｔｅ．

Ｊａｃｋ：Ｙｅｓ．　Ｌｅｔ'ｓ　ｇｏ！

さやか：メアリーがトイレを掃除しています。私は手伝うべきでしょうか？

ジャック：いいえ。あなたはやらなくていいです。

さやか：判りました。デートへ行きましょう。

ジャック：はい。行きましょう！

（メアリーがぼっちにされちゃってるぅぅーーーー！　あー、でもなんかジャックの気持ちを解っちゃうし！　イライラする・・・！）

Ｍａｒｙ：Ｉ　ｗｏｎ'ｔ　ｇｏ　ｔｏ　ｔｏｄａｙ'ｓ　ｌｅｓ

son, because I have to go home early to watch TV.

Teacher:Really? If you don't go, I won't go, either.

メアリー:私は今日の授業に出ません。何故なら早く家に帰ってテレビを観なければならないから。

先生:本当ですか？　あなたが行かないなら、私も行きません。

（教師！　あんた、教師でしょうが！　なに生徒(メアリー)のサボりに乗って、あんたもサボろうとしてんのよ！・・・・て、ようやく終わったわね・・・・）

変なところで終わった英文を訳す問題。なんかもう「はぁぁぁ・・・」溜息しか出て来ないわ。あたしが真っ先に溜息を漏らすと、なのは達も一斉に溜息を漏らした。そして30分が経って、「はい、そこまで。もう喋っても良いぞ」ってルシルが英語の小テストの終わりを告げた瞬間。

「「「メアリィィィ～～～～～～～～～～～～ッッ！！」」」

あたしとシャルとアリシアは叫んだ。それからあたし達は国語に社会の小テストを受けた。英語に比べればまともだったけど、ルシルがあたし達のプリントを回収し終えた時に浮かべた妙な笑みが気になった。

†††Sideアリサ⇒ルシリオン†††

俺を女装させた恨みを晴らすべく始めた小テスト。まずは英語で笑いを誘ってやった。国語と社会だが、まぁ、日本に住んでるはやて、なのはとアリサとすずかにとってはそう難しくなかっただろうな。問題は、異世界出身組であるフェイトとアリシアとシャル。ちょっと授業をしたくらいですぐに頭が良くなるわけでもなく。

（標的にするべきアリサ、アリシア、シャルの巻き込んでしまったフェイトには申し訳なかったな・・・）

心の内でフェイトに、そしてはやて、なのは、すずかに謝りつつ「採点が終わったぞ」応接室のソファでくつろいでいる彼女たちへ歩み寄る。そして「さて。これより、君たちの回答を解説していこうと思う」空間モニターを展開して、そこに先ほど受けさせた小テストのプリントを表示させるつもりだ。

「ちなみに、この解説中に笑ったらマイナス１０点だ」

そう言うと、「やっぱあんた、優勝者を出すつもりがないのね！？」とアリサが噛み付いてきた。が、「人に解答に笑われるなんて嫌だろ？　というか、君は笑うつもりなのか？」と返す。するとアリサは「いいわよ、笑わないし」そう言って若干膨れた。俺は採点中、いくつかの解答に吹き出しそうになったり、ツッコみを入れたくなったりした。俺でもそうだったんだから、きっと笑いに緩そうなアリサやシャル、アリシアは引っかかるだろう。

「まずは社会から。アリシア。まずは君の解答を見てもらおう」

「うえ！？・・・あー、うん」

「問：１５４９年、日本にキリスト教を布教しに来た人物を答えよ、という問題だが。アリシア、君はこの問いに対して何て答えた？」

「え？・・・えっと・・・、ちゃんと答えたよ？」

小首を傾げるアリシアに「では、見てみようか」と言って、モニターに彼女の解答プリントを表示させる。

「フランソワ・ザミエル。・・・って、誰？」

「「ぷふ・・・」」

「アリシア、アリサ。１０点マイナス！」

書いた本人であるアリシア、そして笑わないと豪語していたアリサが小さくだが吹いた。容赦なくアウト宣言を伝えると、「あぅー」と目を╳にするアリシアと、「しまった」と悔しげに唸るアリサ。そんな中でシャルが若干笑みを零していたため、「同じ問題で、シャル」と名指し。

「ええ！？　わたし！？」

「そう、君だ。さぁ、君はこの問題に対してどう答えたか・・・」

今度はシャルのプリントを表示させて、「サンフランシスコ・サミエル」とシャルの解答を口に出す。なのは達が「惜しい」と残念がる。シャルのこの解答に笑いは起きなかったからすぐさま「じゃあ答えは？　なのは」と正解していたなのはの名を呼ぶ。

「え？　あ、うん。答えは、フランシスコ・ザビエル、です」

「正解。では次だ。問：目安箱を設置するなど、享保の改革を行った徳川八代将軍の名前は何というか、という問題だが。・・・シャル」

「なぬっ、またわたし！？・・・えっと・・・」

うんうん唸るシャル。そんな彼女に思い出させる為にその解答欄を表示させて、「徳〇新之助」と声に出す。すると、「そうそう、徳田新〇助！　ラ～ララ～ララ～ララ～ラ～ラ～ラ～ラ～♪のやつ！」シャルがソファから立ち上って、とある時代劇ドラマのテーマ曲を歌いだした。

「えっ、違うの！？　わたしもそうなんだけど！」

シャルもアリシアと同じ間違いをしていた。なのは達が苦笑している中、「フェイト。君はどう答えた？」と訊ねると、「えっと、徳川吉宗・・・？」と自身なさげに答えてくれた。そんな彼女に「正解だ」と微笑みを向ける。ホッとしているフェイトに「やったね」とハイタッチを交わすなのは達。

「次だ。問：イスラム教の開祖であり、アラビア半島に国家を立ち上げた人物を答えよ」

「これは簡単！　バフォメットでしょ♪」

「違う。悪魔の名前だ、それ。そんな名前、どこで覚えた？　まぁ、確かにバフォメットの名の由来は正解であるマホメットだが・・・」

「うっそぉ ーーん！」

「「「「「ぷふ・・・！」」」」」

自信満々に答えたシャルにそうツッコみを入れ、それにショックを受けたシャルを見たはやて、なのは、すずか、フェイト、アリシアが吹き出したのを確認。アリサだけは耐えたな。即座に彼女たちに「マイナス１０点」と宣告。順調に点数を引けている事に満足しながら、「次だ」と先へ進む。

「問：世界の三大人種を答えよ。・・・アリシア・・・」

「はーい！・・・コホン。白・黒・抹茶♪」

「上がり・コーヒー・ゆず・さくら♪」

シャルとアリシアが、かの有名なういろう店のＣＭを唄ったら、「ぷふっ」はやて、なのは、アリサ、すずか、フェイトが吹き出したため「１０点マイナス」と彼女たちに宣告。「いぇーい♪」とシャ

ルとアリシアがハイタッチを交わしているが、問題に間違えている時点で点数を引かれている事を忘れるなよ。

「えー、正解だが・・・、はやて」

「うん。白色人種（コーカソイド）、黒色人種（ネグロイド）、黄色人種（モンゴロイド）です」

「そう。正解だ。ういろう色の人種が居たらビックリだぞ」

「「えええーーー」」

不変不満を漏らすシャルとアリシアだが、真面目に答えない君たちが悪い。

「ほら、次だ。問：ソ連では１９８５年に〔　　〕が共産党書記長に就任しました。〔　　〕に入る人名を答えよ。なお、ファミリーネームだけでも可。これは・・・フェイト」

「ええ！？　わ、私！？・・・えっと・・・ストロガノフ・・・？」

「「美味しく頂きましたぁ～♪　☆３つ♪」」

フェイトの誤答を聴いた瞬間、またもシャルとアリシアが練習したかのようにそんなことを言った。すると「っく・・・！」アリサが吹き出すのを見逃さなかった俺は「アリサ。１０点マイナス！」と宣告。

「ちょっ、待ちなさいよ！　今のはフェイトの解答に笑ったんじゃなくて、シャルとアリシアの――」

「諦めなよ、アリサ」

「そうだよ、アリサ」

「あんた達の所為でしょうが！！」

ポンとアリサの肩に手を置くシャルとアリシアに、アリサがうがぁーと吼えた。確かに今のは可哀想か。だが訂正はしない。解答に、ではなく解説中に笑ったら、だ。どの道アウトだからな。

「それじゃあ正解を・・・、すずか」

「あ、はい。ゴルバチョフ、です」

「うん、正解だ。フェイト。ストロガノフは料理名だな。まぁ、空欄にせずに埋めようという心意気は買おう」

「うぅ、ありがとう、ルシル」

「ああ。・・・では次。問：日本三大名園を挙げなさい。・・・シャル」

「ヤー。市川○、永谷○、伊藤○！　ふっふん♪」

「「「「ぷふっ！」」」」

「はやて、なのは、アリサ、すずか。１０点マイナス」

シャルの解答に笑ってしまった彼女たちの点数を引く。採点時、実は俺も笑ってしまった。小首を傾げている異世界出身組のフェイトとアリシアには伝わらなかったようだな。

「えー、正解は・・・、なのは」

「あ、うん。兼六園、後楽園、偕楽園、です」

「正解だ。シャル、君のは全部社名だ。それでは次。問：太平洋戦争終結後、独占的な経済力を分散させるためにＧＨＱによって解体された四大財閥を答えなさい。アリシア」

「三千院、西澤、中川、道明寺！！」

「ぷはっ・・・！」

「アリサ。１０点マイナス」

「ルシル！　あんた、さっきからあたしを、ううん、シャルとアリシアを含めた３人をターゲットにしてない！？」

さすがに勘付かれるか。だが「気の所為だろ？」とすっ呆ける。じーっと半眼で睨んでくるアリサの視線を受けながら、「アリシアち

ゃん、今の答えってもしかして・・・」となのはとアリシアの会話を聞く。

「うん。ぜーんぶクラスメイトに貸してもらった本に出て来るやつ♪　えっと、ハヤテ○ごとく、ケ○ロ軍曹、こ○亀、花より○子ってやつ。ルシルがさっき言ってたでしょ？　空欄にするより埋める努力をするのは良いって。だから埋めたんだよ♪」

というわけらしい。アリシアは順調に他の子供たちと友情を築いているようだ。俺は「フェイト。偉いな。君は正解だった。正解はなんだった？」とフェイトに微笑みかける。

「良かった・・・。三井、三菱、住友、安田、だよ」

はやて達に拍手されたフェイトは「あぅ、ありがとう」テレながらも優しい微笑みを浮かべた。フェイトの笑顔を見る度、かつて俺を――ルシリオンを好きだと言ってくれた彼女を思い出す。あれから1万年以上も経過しているが、残った分身体は幸せにその生涯を終えただろうか。

（いやきっと・・・幸せに満ち溢れていたに違いない。そうだろう・・・？）

かつての俺に思いを馳せる。さて。感傷に浸るのは後だ。サクッと続きへ行こう。

「では次。問：ユーラシア大陸を走る、世界で一番長い鉄道の名称

は何か」

そう言った瞬間、「ゲームで知ってる！　黄道特急！」アリシアが挙手して答えた。ゲームで知った、という時点ですでに間違っていると思えば、やはり答えは間違っていた。解答プリントには堂々と、黄道特急、と書いてある。

「ぷはっ！　それバイオハザード０だから！」

「アリサ。マイナス１０点」

「うがぁぁぁーーーーッ！　アリシアが裏切ってくるぅぅーーーーッ！」

「馬鹿だなぁ、アリシア～。答えは銀河鉄道だよ♪」

「ぷふっ！　馬鹿はあんたよ、シャル！　銀河！　すなわち宇宙！　地球を飛び出しちゃってるじゃないの！」

「アリサ。マイナス１０点」

「のわぁぁぁーーーーッ！　シャルもシャルでボケてくるし！」

アリサがボケにボケを重ねて来るアリシア・シャルコンビの前に発狂寸前。頭をガシガシと両手で掻き乱す。なのは達が「落ち着いて！」と宥めようとするが、アリサは「あたしの点数がぁぁーーーー！」と咆えるばかり。そんなアリサを宥めること少し。

「はぁはぁはぁ・・・。ルシル。次、次よ・・・！」

幽鬼のように佇むアリサに「お、おう」俺は応える。社会のテストはこれで切り上げ、次は国語。

「何の手応えも効き目もないことのたとえのことわざ、〔　〕の釘。〔　〕に入る語句を答えよ。ア、アリサ」

まずはアリサの精神ダメージを回復させる為にアリサに答えさせる。すると「へ？　あ、あー、糠に釘、よ」アリサは後ろ髪をサッと払いながら堂々と答えてくれた。そんな彼女に「正解だ、アリサ」と微笑んでやると、「と、当然よ！」とテレてそっぽを向いた。

「えー、そんな中で、ふざけた答えを書いた人が居ます。シャル」

「馬鹿な！　わたしは確かに、ぬかに釘、って書いたよ！」

納得いかないと言った風に怒鳴るシャルに「ほう。じゃあ見てみようか」と言い、彼女のプリントをモニターに表示。

「ぬこに釘」

「か、と、こ、を間違えちゃったんだね、シャルちゃん」

「うぅー。日本語、むずかすぃ～～」

へコんでいるシャルに「あはは。ぬこってなに？」アリシアがにこやかに問う。アリサがその問いに対して「ただの誤字でしょ？」と言いつつ、携帯電話のインターネットを利用して調べ始めた。そして「・・・・」スッとディスプレイから目を逸らした。

「どうしたの？　アリサ。・・・あぅ」

「フェイトちゃん？・・・うぅ」

「なのはちゃんまでどうしたの？・・・あ」

「すずかちゃん？・・・なにを見てるん？・・・おおう」

「んー？　みんなして何を見て・・・、っ！　シャル、ひどいよ・・・」

フェイト、なのは、すずか、アリシアという順でアリサの携帯電話のディスプレイを覗き込み、口を閉ざした。そして最後にシャルが覗きこみ、「ごめーーん、猫さぁぁーーん！」泣いた。そう、ぬこ、とは猫の別称らしい。俺もディスプレイを覗き込む。そこに映っていたのは土鍋に入った仔猫２匹。めっちゃ可愛いんですけど！！！！

俺は本気で思う。猫。その生物こそ神が作りたもうた生命の中で一番愛らしく、可愛い、と。

「えー、この空気をどうにかするために次の問題だ。人は土壇場になって初めて〔　〕をくくる。空欄を埋めてくれ。フェイト」

「うっ！　えっと・・・髪・・・？」

「残念。アリシア」

「首！」

「死んでどうする。諦めるなよ、頑張れよ。違う。シャル」

「腕か脚！」

「マジックでもするのか？　土壇場で。違う。・・・はやて」

「うん。腹。腹をくくる、や」

「正解だ。間違っても首をくくると書かないように。先生から呼び出し食らうぞ。それじゃあ次な。走れメロスからの出題。メロスは、どうして自分の命を懸けてまで走ったのだろうか？」

俺が問題を言った途端に「タイトルに、走れ、が付いてるから」とシャルとアリシアの声がダブった。すると「はふっ」誰かが吹き出す。見れば「はやて。１０点マイナス」はやてだった。彼女は「あちゃあ、やってしもた・・・」と手を額に乗せてがっかりポーズ。

「うそうそ♪　ホントの答えは、人質になった大切な友人の命を救うため、でしょ？」

シャルが、どうだ参ったか、みたいにウィンクしながら答え直した。

俺は「正解だ。やるじゃないか」と拍手しながら次の問題を読み上げる。

「とても出来るはずのないことをしようとする愚かさのたとえのことわざ、竿竹で〔　〕を打つ。〔　〕に入る語句を答えてくれ。なのは」

「うん。竿竹で星を打つ、です」

「正解だ。で、この問題に対して間違った答えを書いた子が居る。・・・フェイト。アリシア」

名を呼ぶと、「えっ？」フェイトはビクッと肩を跳ねさせた。フェイト、君の解答を見てビックリしたよ。アリシアは「またかぁ～」と若干慣れ始めている所為か残念がってはいない。とりあえずフェイトのプリントをモニターに表示。

「竿竹で頭を打つ。通り魔はいかんな」

「「ぷふっ・・・！」」

「シャル、アリシア。１０点マイナス」

フェイトの答えに吹き出した２人から容赦なく点数を引く。続けて「アリシアは、竹竿で尻を打つ。お仕置きとしてもキツイな」と言うと、「ぷふっ」シャルとアリサが吹き出したため「シャル、アリサ。マイナス１０点」の点数を引く。

「次な。相手の顔の表情から、その心中を推し量ることのたとえのことわざ、眉を〔　〕。さぁ、空欄に入る言葉はなんだ？・・・シャル」

「・・・眉を削ぐ」

「鬼か。相手の表情と心中は決まって絶望だ」

「「「「ぷっ」」」」

「はやて、なのは、アリサ、すずか。１０点マイナス」

フェイトとアリシアは耐えたか。俺は「それじゃあ答えは、なのは」と指定する。すると「あ、はい。眉をひそめる、です」なのははきはきと答えを返してくれた。

「正解だ。それじゃあ次。暗がりで急に肩を叩かれて〔　〕を潰した。空欄に入る言葉を答えよ。・・・アリシア」

「はい！　暗がりで急に肩を叩かれて、叩いてきた人がエッチそうだったからその人の〔目〕を潰しました！」

アリシアがそう答えると、妹であるフェイトを除くはやて達が「ぷふっ」吹き出したため、彼女たち全員の点数を引く。ホント酷いな。

「はぁ。フェイト。君はどう答えた？」

「あ、うん。胆を潰す、かな・・・？」

「大丈夫。それで合っているよ。じゃあ、これで最後だ。今日は「　」を割って話し合おう。意味は本心を包み隠さず打ち明けることだが。例に漏れずシャルとアリシアの２人が間違っていた。しかも同じ答えだ。言ってみるか？」

「「頭をかち割って話し合おう」」

シャルとアリシアが先程と同じように声を重ねて答えたためか「ぷふ・・・！」アリサが吹いた。

「アリサ。マイナス１０点。にしても猟奇的だな、オイ。確かに包み隠せないよな、考える部位である脳を曝け出せば。・・・というか死ぬ。打ち明ける云々の問題じゃない。即死だ、即死。そもそも、かち割って、って。・・・はやて。答えは？」

「うん。腹を割って、や」

「正解だ」

「腹を割ったら色々出て来るよね。それこそデッドエンドじゃん。ねえ？」

「ねえ？」

小首を傾げ合うシャルとアリシアに「そう深く考えると負けだ。そう言うモノだと納得するしかないんだよ」と言う。俺からしても日本語は色々と難しい。２万年近く存在してきて、理解した言語の中で一番難しいと思う。

さぁ、全ての解説が終わっていざ、点数発表となる。この中で一番の才女であるアリサが盛大に減点稼ぎをしてくれたおかげで、「君たち全員、５０点以下。俺のひとり勝ちだ」と宣告することが出来た。

（無関係なはやて達には悪いが、これもルールを設けた上での勝負だ。許せ）

よーし。一体どんな罰ゲームにしてやろうかな。やっぱりアリサ、シャル、アリシアだけは別の罰ゲームだよな。そう俺は彼女たちに与える罰ゲームの内容を考える。

Ｅｐｏｓ３５特別技能捜査課～Ｉｎｔｅｒｖａｌ　４～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

三が日も無事に終えての今日は１月５日。わたしら八神家は今、時空管理局の本局にお邪魔してる。そんで別行動中でもある。わたしとリインフォース、ザフィーラは第零技術部に。ガーデン・オブ・スカリエッティとも呼ばれてるらしいここは、次元世界の中でも特に頭がええってゆうジェイル・スカリエッティさんが管理してる部署で、とってもすごい技術が日々生み出されてるってゆう話や。

「――騎士イリスやなのはさん達は旅行中という話だけれど、はやてさん達は行かなくても良かったの？」

「そうらしいね。はやて君、良かったのかい？」

話を振って来たドゥーエさん（様付けからさん付けに変えてもろた）、そしてドクター（ジェイルさんからそう呼ぶようにお願いされた）にそう訊かれたわたしは「はい。ええんです。ケジメはしっかりとしときたいんで」って答える。

次元世界やすずかちゃん達にいっぱい迷惑を掛けたからなぁ、わたしら。そやから旅行は遠慮させてもろたんや。ホンマは三が日も遊ばんと、今後管理局で働くための手続きをしようって思うてたんやけど、リインフォースとの最初で最後のお正月って思うたらどうしてもな・・・。

「まぁ、君が良いと言うのであれば私たちも遠慮せずに、君たち八神家を本局(ここ)に留まらせることが出来る。夜天の魔導書の解析・試験品作成・早期試験運用。君たちがここに留まられる間に済ませよう」

床と天井を支えるように設けられたいくつかの円柱状のカプセル、そのうちの1つの中に漂う"夜天の書"から目を逸らすことなくドクターはそう言うた。ドクターの右隣で空間キーボードを叩くウーノさんが「はやて様はまだ子供です」そう言うて、ドクターの左隣でキーボードを叩くドゥーエさんが「無茶はさせないでくださいね」って、わたしを心配してくれた。

「騎士リインフォースも、何か不調を覚えることがあれば仰って下さい」

「はい。お気遣い、ありがとうございます」

わたしの乗る車椅子のグリップに手を置いたまま居ってくれるリインフォースがウーノさんの心配にお礼を返した。ちなみにザフィーラは狼形態でわたしの隣にお座り中。わたしとリインフォースの護衛役や。ドクターもウーノさんも、そしてドゥーエさんも優しい。そやから安心して居られるから、ザフィーラは暇になるやろな。

「それでドクター。夜天の魔導書は作成できそうですか？」

「そうだねぇ・・・。少し話が逸れるが、ロストロギアの定義とはなんだろう」

リインフォースの問いに対してドクターは問いを返してきた。ロストロギア。わたしが初めてルシル君から"夜天の書"の説明を受けた時にチラッと聞いた話やと、大昔に滅んだすごい文明から流出した技術や魔法の中でも特に発達したモノの総称・・・やったっけ。そう答えると、「そうだね」ドクターは満足そうに頷いてくれた。

「ロストロギアとは過去に栄えた超高度文明から流出した遺物で、現代の科学力では同じ物を再現できないとされる物だ。が、それはつまり・・・現代で再現できさえすれば、ロストロギアという枠組みから外れることになる」

嬉しそうに笑みを浮かべるドクター。う～ん、以前アリサちゃんが言うてたけど、確かにドクターはどこかマッドサイエンティストみたいや。

「オリジナルの魔導書をこうして解析でき、なおかつ生ける夜天の主であるはやて君、管制融合騎である騎士リインフォースが居るんだ。この私、ドクター・ジェイル・スカリエッティが、夜天の魔導書を必ずや再現してみせようじゃないか！！」

バサッと白衣をはためかせて笑い声を上げるドクター。ますますマッドサイエンティスト――悪の親玉みたいや。それをポカーンと眺めるわたしとリインフォース。そんなドクターを「仕事してください」窘めるウーノさんとドゥーエさん。

「ははは。いや、しかし。技術者冥利に尽きるね。かの有名な魔導書をこうして実際にお目に掛けることが出来、この手で再現すると

いう栄誉を頂いたんだ。それに・・・可愛いお嬢さん達のお願いだ。果たさなければ漢ではない」

「「ロリコンは犯罪です、ドクター」」

「そのネタ、まだ引っ張るのかい！？」

そんなドクター達のやり取りを眺めてたわたしは後ろに振り向いて、グリップを握るリインフォースの手に自分の手を添える。ドクターはおかしな人やけど、その腕は確かや。きっと"夜天の書"も作ってくれるはずや。それからドクター達の解析作業を眺めて・・・「解析完了です」ウーノさんがそう報告。

「終わったようだね。それでは夜天の魔導書をお返ししよう」

カプセルから"夜天の書"を取り出したドクターから「おおきに」両手を伸ばして受け取る。そしてドクターは「では早速作成に入ろうか。ウーノ、ドゥーエ。手伝ってくれたまえ」そう言うて、わたしらが居る五角形状な解析室の奥、スライドドアに目をやった。あのドアの奥が開発室。ドクターとその娘さんたちしか入れへん部屋・・・らしい。

「ルシリオン君たちはまだ捜査課のところでしょうか？」

「ドクター、通信を入れてみますか？」

「ああ、そうしてくれ」

ルシル君、シグナム、ヴィータ、シャマルは、今年の春からわたしら八神家が本籍を置くことになる本局捜査部・特別技能捜査課のオフィスへ先に行ってもろてる。ホンマはわたしも一緒に行くつもりやったけど、リインフォースを独り（ザフィーラの護衛付でも）でドクターのところに残して行くんはアカンってルシル君が言うたから。ルシル君、ホンマにドクターを警戒してる。なんでやろう。

「こちら第零技術部・部長秘書、ウーノ・スカリエッティ二尉。そちらに八神家の方々はまだ居るかしら？　ガアプ課長」

『久しぶり、ウーノ二尉。ええ、もちろん居るわよ。春からは同僚となるから、今は仲間たちと・・・その・・・、楽しいお喋りを？』

モニターに映し出されたんはわたしらの上司さんになるクー・ガアプ一等陸佐。サラサラそうな黒のショートヘア、綺麗な空色の目をした女の人や。そんなガアプ一佐（何等とか陸とか空を省略して呼ぶんが一般的そうや）とウーノさん、それにドゥーエさんが小さく手を振り合った後、ガアプ一佐がモニターの外をチラッと見た。

（なんや女の人の声ばっかりが聞こえてくる気が・・・）

モニターからははしゃいでるような女の人たちの声が漏れ聞こえてくる。ドゥーエさんが「何をしているの？　楽しそうな声がするけど」って訊くと、カメラが動いたかのようにモニターの映りが横移動。するとガアプ一佐と同年代くらいの女の人、エイミィさんと同年代くらいの女の子数人に、もみくちゃにされてるルシル君が映っ

た。後ろ髪の右側を女の子の手によって三つ編みにされてて、左側を女の人の手によってサイドポニーにされてた。

「おやおや。随分と羨まし――コホン、ではなかった、可愛いことになっているじゃないか」

ウーノさんとドゥーエさんに睨まれて言い直したドクターがそんなルシル君を見て微笑む。そやけど実際にもみくちゃにされてるルシル君からして見れば笑いことやないってことは、モニターに映ってるルシル君の困り果てた表情からして判る。

「そ、そう。今からそちらにはやてさん、騎士リインフォース、騎士ザフィーラを向かわせるわ」

ウーノさんがわたしらを手招きしたから、リインフォースに車椅子を押してもろてウーノさんの側に移動すると、ルシル君を救出し終えたガアプ一佐が『ええ。はやてさん、リインフォースさん、ザフィーラさん。待っていますね』ニコリと微笑んで、ルシル君の髪で遊んでた人たちが「待ってま～す♪」手を振ってくれた。

「あ、あの、よろしくお願いします・・・！」

『はい。こちらこそお願いします』

通信が切れると、「優しい娘たちばかりだから、安心できますよ」ってウーノさんがそう言ってくれた。ドゥーエさんの話やと、特別技能捜査課の人員は１３人。その全員が女の人。となると、ルシル

君にとってはちょう環境の悪い仕事場になるかもしれへんな。今の状況を見ると・・・。

「でははやて君たちの案内を・・・、そうだな。チンクにお願いしよう。ドゥーエ、あの子に連絡を」

「あ、はい、判りました」

チンクさん。シスターズってゆうドクターの娘の五女さんで、ルシル君やリインフォースみたいに綺麗な銀髪の持ち主さん。直接会ったことはないんやけど、礼儀正しい子やってシャルちゃんは言うてた。

そんなチンクさんと連絡（思念通話やろか？）を取ってくれてるドゥーエさんが、「チンクとの連絡が取れました。すぐに戻るようです」ってドクターに報告すると、「それでははやて君たちは応接室へ」って言うて、ウーノさんにわたしたちを応接室へ案内するように言うた。

「あ、わたしらだけでええですよ。あの、夜天の書のこと、よろしくお願いします」

「お願いいたします」

わたしとリインフォースでドクター、ウーノさん、ドゥーエさんに頭を下げてお願いする。するとドクターは「任せてくれたまえ」ってキリッとした表情で頷いてくれた。とゆうわけでわたしらは解析室で別れて、わたしらはトランスポーター1つだけが置かれた転送

室を通って、応接室へ。ドクター達は奥の開発室へ。

「良かったです、夜天の書の開発の目途が立って。シャルには大きな恩が出来ました」

「うん。そうやな。シャルちゃんにはホンマに感謝してもしきれへんな」

融合騎の作成に必要な知識と腕を持ってる技術者、ミミル・テオフラストゥス・アグリッパさん、剣十字杖"シュベルトクロイツ"と"夜天の書"を作れる技術者、ドクター・ジェイル・スカリエッティさんとの繋がりを持たせてくれたシャルちゃん。シャルちゃんには一生頭が上がらんかも。それでもルシル君だけは渡せへんけど。ソファに座ってそんな会話をしてること数分。廊下と第零技術部を隔てるスライドドアが開いた。真っ先に目が行ったんはやっぱり銀髪。ルシル君と背格好が似てる所為もあって一瞬やけど、「ルシー―」呼びそうになった。アカンなぁ、わたし。ルシル君はタイトスカートなんて穿かんよ、たぶん・・・。

「遅れてすまなかった、ドゥーエ。・・・む？　あなた達が八神はやて様に騎士リインフォース、騎士ザフィーラですか？　私は第零技術部・専務戦闘員、チンク・スカリエッティ准尉です」

ビシッと佇まいを直したチンクさんに、わたしらも自己紹介を返しつつ敬称を付けんでもええこと、敬語やなくてもええことをお願いする。するとチンクさんは「では私のこともチンクと呼び捨てで構わない」って柔らかな微笑みを見せてくれた。

「では行こうか」

「「よろしくお願いします」」

前をテクテク歩くチンク・・・さん（呼び捨てはやっぱ無理や）に続いて技術開発部フロアからエレベーターに乗って上階へ。そんで廊下を歩いてる中、すれ違う他の局員さんがわたしらをチラッと見てくのに気付いた。ザフィーラが「敵意ではないようですが」って言う。うん、それはそうやな。

「珍しいのだろう。ここは民間人が入れるフロアではないからな、ここは。そこに私服姿の女子２人に狼１頭。興味が湧くのは仕方がない。すまないがオフィスに着くまで耐えてくれ」

「あー、確かに制服姿の局員さんばかりやもんなぁ～」

「直に主はやてやルシル、騎士たちもあの制服を着て職務を果たすのですね」

リインフォースがポツリと漏らした。自分の名前を含めんと。それが悲しかった。否応なくリインフォースが居らんくなる現実を思い出させる。会話はそれでパタリと止んで、無言のまま案内される。廊下に局員さんの姿が徐々に増え始めた。チンクさんが「そうだ。１つ、頼みたいことがあるんだ、君に」そう言ってわたしに振り向いた。

「私が頼むのは筋違いだとは思うが。イリスのことをよろしく頼む。最近はあの子と歳の近い局員も増えたことで友人は出来ているようだが。それでも聖王教会内での友人関係に比べればひどく少ない。はやて。お前のように同い年で騎士の友人を局内で得るのは実に稀だ」

「大丈夫ですよ、チンクさん。シャルちゃんはこれからもずっと仲のええ友達ですから。ま、まぁ、ひとりの男の子を巡る戦いに関しては敵ですけど♪」

自分でそう言うて・・・ちょう後悔。恥ずかしさで顔が熱くなる。チンクさんは「そうか。それはまた」微笑ましいってゆう風に頷いた後、「あ。もしかしてその男の子というのは、お前の家族であるルシリオンという・・・？」そう訊いてきたから、「え、そうですけど・・・」頷き返す。でもなんで判ったんやろ。

「ふふ。イリスはどうも銀髪に思い入れがあるようでな。私との初めての邂逅の時でも、いきなり背後から抱きつかれてな」

チンクさんは懐かしそうに思い出を振り返ってるようで、とても楽しそうな表情を浮かべると、「どういった出会いだったのですか？」ってリインフォースが訊いた。わたしも「知りたい！」手を挙げて同意。

「ん？・・・あれは2年ほど前か。執務官補佐の試験をパスした後、本局へとやって来たイリスは、本局のあまりの広大さ故か迷子になっていたそうでな。その時に偶然見かけた私の後ろ姿を見、思わず

抱きついたのだそうだ。あとで聞けば、あの子は本能レベルで銀髪の持ち主に好意を抱くという」

それを聴いたリインフォースが「銀髪に反応するとは、彼女も厄介なものを抱えているな」って呟いた。確かに銀髪を持ってる人の会う度に反応するなんて、最悪変な人に当たるかもしれへん。まぁ、シャルちゃんは強いからそう問題に巻き込まれへんとは思うけど。

「いや、さほど問題ではない。あらゆる世界を内包している次元世界とは言え、銀色とはかなり珍しい髪色らしくてな。銀髪を有した者を見るのは、リインフォース、そして写真だけでしか見たことのないルシリオンだけだ。どこかで聞いた噂だが、銀色とは古き王族の髪色らしい。そう思うと、ふふ、私の髪も捨てたモノではない」

そう微笑んだチンクさんは自分の長い銀髪に触れて、フワリと軽く払った。シャンプーの良い香りがする。サラサラやし、ルシル君並に手入れされてるな、きっと。

「話が逸れたな。まぁ、大体それからだな、私とイリスの関係は。本局で会える時間があると、よく話をしているよ」

そんなチンクさんの話を聴きながらわたしらは無事に目的地、捜査部フロアに設けられてる特別技能捜査課のオフィスに到着することが出来た。扉の前には1人の女の子が立ってる。直接会うんは初めてやな。セラティナ・ロードスターちゃん。

チンクさんとの別れ際、「あとはセラティナに任せよう。では私はこれで失礼するよ。頑張ってくれ」握手を求めて来てくれたから、

「おおきにありがとうございました、チンク准尉」わたしは一度敬礼してから握手に応じた。

「っ。ふふ。ああ、はやて捜査官。騎士リインフォース、騎士ザフィーラ。またいずれ」

そうしてわたしらはチンクさんと別れて、「お待たせしました」の側へと向かう。

「ようこそ、特別技能捜査課へ。八神はやてさん、騎士リインフォースさん、騎士ザフィーラさん。同課所属のセラティナ・ロードスター三と――コホン、二等空士であります」

わたしとリインフォース、セラティナ二等空士で敬礼し合った。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

三が日を無事に終え、俺たち八神家は春から勤め先になる本局捜査部・特別技能捜査課への配属するための最後の手続きを行うため、本局へとやって来た。で、捜査課へのオフィスへ向かう前に、はやて、リインフォース、ザフィーラと別れた。

俺とシグナム、ヴィータ、シャマルの４人は捜査課のオフィスへ、はやて達は"夜天の書"の開発を頼んだスカリエッティの第零技術部へ。大晦日、"闇の書の欠片事件"で中断していた"夜天の書"の解析を行うために。

「あら、あの子・・・、アルテルミナスちゃん、だったかしら・・

・？」

オフィスと廊下を隔てるスライドドアの前、終極テルミナスの転生体――アルテルミナス・マルスヴァローグがポツンと佇んでいた。そして「お、来た来た。こっちだよ」俺たちに気付くと大手を振ってアピール。

「ようこそ、特別技能捜査課へ。ルシリオン、騎士シグナム、騎士ヴィータ、騎士シャマル。・・・で、え～と、八神はやて、騎士リインフォース、騎士ザフィーラは、ドクターのところに行っているんだっけ？　さっきウーノ二尉から連絡来てたよ」

俺だけ騎士という敬称が付いていないことに少々疑問を抱きながらも「はやて達が居ないことに対する説明をせずに済んで助かるよ、マルスヴァローグ空曹長」はやて達と別行動を取っている説明をしないで済んだことにホッとした。

「あーそうそう。これからは同僚になるから、ルミナって呼んで。階級も省いて結構だよ。・・・ウーノ二尉とうちの課長――ガアプ一佐って10年来の友人らしくてね。だからお礼を言うのは私じゃなくてガアプ一佐にお願い。じゃ、入ろうか。課長や他のメンバーが首を長くして待ってるよ」

そう言って踵を返しスライドドアを開けて入室したルミナに続いて俺たちも入室。特別技能捜査課のオフィスは、ごく一般的な造りをしていた。メンバー分のデスクが並んでいる。唯一の違いと言えば、内装が・・・女の子の部屋っぽい。花が飾ってあったり、ぬいぐる

みが置かれたりしているデスクもある。課長用のデスクにもぬいぐるみが４つ。

「「「「「ようこそ、特別技能捜査課へ！」」」」」

オフィスに居たガアプ一佐、そして他に４人の女性に歓迎された。年齢の幅は大きい。２０代前半、１０代前後半。彼女たちの歓迎に対してまずは俺が「春よりお世話になります！」そう一礼する。と、シグナム達も「お世話になります！」と続いた。

「はい。こちらこそお世話になります、ルシリオン君、騎士シグナム、騎士ヴィータ、騎士シャマル」

ガアプ一佐も俺たちに一礼した後、そう微笑んだ。そんな彼女の側に控えている後に同僚になる女性局員たちは何故かそわそわと落ち着きがない。なんだろう、俺とヴィータに視線が集中している気がするんだが・・・。

変なことをされる、直感的にそう思い至った俺はそんな視線から逃れようと顔を背けたとき、「はやてさん達が来るまではお話ししていましょう」ガアプ一佐がパンと手を叩いた。すると「やったー！」と諸手を挙げて賛成して、わっと俺たちの元へと駆け寄って来た。

「はじめましてー！　あたし、テレサ・テレメトリー！　１２歳！　階級は一等空士！」

まず自己紹介したのはテレサ一士。ミルキーホワイトの長い髪をお下げにした少女。青い瞳で真っ直ぐ俺を見詰めてくる。

「これからよろしく頼むよ。特別技能捜査課・課長補佐のナジェージダ・セイジ一等空尉だ。同僚や友人みんなにはナージャと呼ばせている。お前たちもそう呼んでくれ」

赤いボブカット、翠色の瞳を有するナージャ一尉から差し出された握手に俺たちも応じていく。凛とした佇まいはシグナムと似通っているな。可愛い・綺麗より凛々しい・格好いいと言った感じだ

「それじゃ次は私！　クララ・リークエイジ准陸尉。１５歳。えっとぉ－・・・あとは、どうぞよろしく！」

１５歳と自称したクララ准陸尉が勢いよく一礼した。しかしこう言ってはなんだが１５歳には到底見えない。身長も１２歳であるテレサ一士と同じ（大体１４０ｃｍほどか）かそれより小さい。とにかくそんな彼女にも「よろしくお願いします」と返す。

「最後は私ね。トゥーリア・サクロス一等陸尉よ。歳はクーやナージャと同じ２０代前半。何か困ったことがあったら何でも相談してね♪」

フワリとした青いセミロングヘア、フェイトのように赤い瞳をした女性、トゥーリア一尉。今オフィスに居るメンバー全員から自己紹介を受け、俺たちも改めて自己紹介。その後はオフィスの端っこにある革張りのソファ２脚が脚の短い長テーブルを挟んでと置かれた応接区画へ。

「ねえねえ、みんな古代ベルカ式魔法の騎士ってホント！？」

「うわぁ、すっごい髪の毛サッラサラ！　色も銀色って超レアだし！」

「ヴィータちゃん、魔力ランクがＡＡＡ＋もあるんだって？　すごいね！」

「さらに紅と蒼の虹彩異色と来た！　写真で見るよりすっごい綺麗！！」

「はやてちゃんやルシリオン君に至ってはＳランク超えなんだよね！？　すっごー！！　しかもレアスキルだけじゃなくて固有スキルまで！」

テレサ一士が俺の髪を解いたり結んだり目を覗き込んだりし、クララ准尉が俺やはやて、ヴィータのスペックに驚き続ける。そんな中で、「あの、課員さんはこれで全員なのですか・・・？」シャマルがそう訊いた。

「いいえ。特別技能捜査課の課員は全部で１３人。八神家のみなさんが加入することで１９人ですね」

テレサ一士と同じように俺の髪を「羨ましい・・・」と漏らしながらいじり始めたトゥーリア一尉がシャマルに答えると、「思ったより少ねぇんだな」ヴィータがそう言った。

「仕方がないと思うわ。固有スキルはもちろん、レアスキルの持ち主も少ないから」

「他の部署にはまぁ他にレアスキル保有者が居るけど、私のように転属する局員ってかなり珍しいしね」

ナージャ一尉に続いてそう言ったルミナも元は航空武装隊所属の空戦魔導師。なんと武装隊に着任してからの任務執行回数３回にて、破壊神、の通り名を持ったのだそうだ。そんな奴が何を思って武装隊から捜査部に転属したのかは判らないが、その道を選んだことで俺は奴とこうして顔を合わせ続けなければならなくなった。どうか変なことが起きませんように。

「それじゃあ他の課員さんは仕事中ということで・・・？」

「ええ。各自のスキルが必要とされる事件が発生した場合、各次元世界の地上に降りて捜査を行うの。基本はバラバラだけど、中には組んで捜査を行うこともあるわ。八神家のみなさんにはチーム捜査が基本的な活動ね」

そう、俺たちパラディース・ヴェヒターははやての側に控える騎士だ。はやてが特別捜査官としての任務中、俺たち騎士は彼女の補佐を行う。そしてはやてが休暇などの際は、シグナムとヴィータは航空武装隊へ、シャマルは医務局へ、ザフィーラはシャマルの護衛、俺は・・・権威の円卓の指示に従って色々な場所へ飛ばされるだろうな。ま、先の次元世界でも研修という名目の下、クロノの指示に従って飛ばされていたから問題はない。

（あー、また無限書庫で働きたいなぁ～）

あそこは良かった。紙の本の手触り、匂い、どれも俺の心を満たしてくれた。ま、大整理処理は地獄だったが。それでも俺に一番合った職場だと思っていた。

「でもさ。レアスキル保有者っつっても危険な事件ん時とかでの単独捜査は危なくねーーじゃなくて、危なくないですか？」

敬語に直したヴィータにガアプ一佐たちが苦笑する。ヴィータのタメ口については何も思ってい無いようだが、仮にも今後は俺たちの上司になる女性たちだ。ヴィータには今後も敬語を使うように言っておかないとな。はやてに頼んでおけば解決するだろう。

「一応、特別捜査官である私たちの魔導師・魔力ランクはＡ以上よ」

そう答えた課長ガアプ一佐は魔導師ランクＡＡＡ、課長補佐ナージャ一尉・トゥーリア一尉はＡＡＡ－、クララ准尉・テレサ一士はＡとの事だ。武装隊の隊長クラス同等、それ以上の魔導師ランクを持っているのなら、そうそう危ない目には合わないだろうな。

「でも単独捜査限定ってわけでもないよ。陸士部隊との共同って時もあるし、協力要請も出来るし。年少組のセラティナはよく協力者を得て捜査をしてるし」

結界術師、セラティナ・ロードスター三等空士。かつての俺の戦友であった結界王アリス・ロードスターの転生体だ。前世と同様、彼女は単体戦力としては弱いようだ。

「つまりは執務官みたいな感じなんですね」

ガアプ一佐やクララ准尉の説明を聞き終えたヴィータがと納得した風に頷くと、「執務官ほどのオールマイティな権力はないけど」ナージャ一尉が執務官と捜査官の違いを説明する。捜査官はあくまで事件・事故の捜査、そして被疑者の逮捕までの流れ。だが、執務官はそれだけではなく法の執行の権利を持ち、現場局員への指揮権も有する。法務関連の仕事も職務に含まれることが大きな違いだ。

そんな話をしながらはやて達が来るのを待つ。途中、第零技術部のウーノから、はやてとリインフォース、ザフィーラを向かわせるという通信が入り、彼女たちが来るまで今度は俺たちに話せる内容を吟味して話してまた時間を潰していると、「ガアプ課長。セラティナ、戻りました。それと、御来客であります」セラティナを先頭にはやて達が入室。

「お待たせしました、ガアプ一佐。八神はやて、八神リインフォース、八神ザフィーラ、到着です」

「お帰りなさい、セラティナ。そしてようこそ、八神はやてさん、騎士リインフォース、騎士ザフィーラ」

こうして八神家も勢ぞろいしたことで、春からここ特別技能捜査課へ配属するための手続きを行いつつ、はやて達にも自己紹介を行うガアプ一佐たち。それを眺めていると、『あの・・・』念話が入った。声の主はセラティナだ。

『仕事とはいえ、あなたのことをハラオウン提督の許可なくガアプ

課長に伝えたのは・・・その・・・』

かつてのアリスの在りし日を思い起こすような弱々しい態度を取るセラティナは、両手の指を組んでもじもじしている。

『まぁ、いいさ。そのおかげでこの部署に配属することが出来た。ざっとガアプ一佐たちと話したが、良い女性ばかりだ。唯一の気がかりは、俺が死んだとされるテスタメントだということを、君が誰かに口外しないかどうか、だ』

権威の円卓以外のメンバーで俺の弱みを握っているセラティナは正に目の上のたんこぶ。口封じをする必要がある場合は手は抜かない。

「『・・・それだけは必ずお守りします。ガアプ課長からも厳命されてますし。安心してください。だから、あの・・・』よろしくお願いします、ルシリオンさん」

右手を差し出してきたセラティナに「ルシルで結構だ、セラティナ三等空士」と彼女の握手に応じると、セラティナは「ごめんなさい。私、二等空士になりました」と言い難そうに訂正してきた。

「では改めて。八神ルシリオン・セインテストだ、セラティナ二等空士」

「はい、よろしくお願いします、です♪」

ああ、やはりアリスだな。懐かしさで涙が出そうだ。セラティナと

微笑み合っていると、オフィスに通信が入った事を報せるコールが鳴り響いた。ガアプ一佐が「はい、特別技能捜査課」と応じる。

『運用部総部長、リアンシェルトです。春よりそちらに配属になる八神家の他にもう1人、配属になるからよろしくお願いします』

モニターに映るリアンシェルトの顔、そして声に体が強張る。リアンシェルトとガアプ一佐の会話に聞き耳を立てていると、「あら。彼女もうちにくれるんですか？」ガアプ一佐の声が弾んだのが判った。

『彼女自身と次元航行部のアースラスタッフ・リーダー、ハラオウン提督からも推薦でもありますから』

ガアプ一佐の前にリアンシェルトの映るモニターとは別のモニターが展開。そこに映し出されたのは「シャルちゃんや！」はやての言う通りピースサインと満面の笑顔を振り撒いたシャルの顔、そのアップ写真だった。

Ｅｐｏｓ３６とある少年のハッピーバースデー～Ｉｎｔｅｒｖａｌ５～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

慌ただしかった１２月、それぞれの将来を考えその道を選択した１月も過ぎ、今日は２月の４日。俺は今、本局は捜査部・特別技能捜査課のオフィスに居る。八神家は配属手続きを終えたその翌日から研修生として特別技能捜査課のメンバーに付いて事件現場へと赴いて勉強だ。そしてなのは達は、それぞれ士官学校に通いながらも日常である聖祥小に通うという荒行寸前の生活をしている。

彼女たちと近況報告をし合っていて、なのはとアリサは色々学べて嬉しい、フェイトはそんななのは達と一緒に居られることが嬉しいと言っていた。そしてすずかは、なのは達とは別の技術者の士官学校に通いながら、マリエル技術官やスカリエッティを師事して頑張っている。俺たちの中で一番忙しいかも知れないな。ミッドの技術士官学校、本局の技術部、聖祥小＆自宅と移動しなければならない。だから・・・

「あぅ～、気持ち良いぃ～～～♪」

「本当にお疲れ様だ、すずか。これからドクター・スカリエッティの第零技術部へ行くんだろ。倒れないか心配だぞ？」

オフィスの応接区画のソファを借りて、そこにうつ伏せに寝かせたすずかの全身に手を翳して治癒魔法コード・ラファエルを掛ける。

ラファエルは傷の治療、状態異常を引き起こす付加術式の解呪などの効果を持つ。そのどれにも該当しない状態でのラファエルは、身体・精神の疲労回復となる。これなら無茶をしているすずかを守れるだろう。

「ごめんね、ルシル君。お仕事中に」

「すずかが倒れるよりはマシだよ」

すまなさそうに目を伏せるすずかの横顔を見下ろしながら微笑んでみせる。すずかに限らず彼女たちの誰かひとりでも倒れでもしたら大事になる。それを防ぐことが出来るのなら何も問題はない。むしろ「見捨てるのもどうかと思うし」俺の考えを代弁したセリフが俺の背後から掛けられた。

「「マーヴ二尉」」

俺の勉強（元一佐まで上り詰めた俺にとっては復習程度だが）を手伝ってくれていたエレフテリア・マーヴ二等陸尉が、ヒラヒラと片手を振りながら俺たちの元へとやって来た。なのはと同じ栗色をしたセミロングの髪を俺のようにうなじで結った女性で、特別技能捜査課のナンバー4。そんな彼女は優しさを湛えた青い瞳で俺とすずかを見ている。

「ルシル君は本当に頭が良くて捜査のノウハウを瞬時に呑み込んでくれるから、逆に時間が余りそうだったから何も問題ないよ。ふふ。この課に配属してくれて助かるよ。戦力的にも色々と」

エレフテリア二尉や他のメンバーの捜査に付いていくと、時には戦闘になる場合もある。というより幾度もあった。その際は俺やシグナム、ヴィータで魔導犯罪者たちを何人も潰したため、すでに重宝され始めている。

「ルシル君。すずかちゃんの回復が終わったら昼食にしましょう。お姉さんが2人に奢るよ」

そう言って離れて行くエレフテリア二尉に俺とすずかは「ごちそうになります！」そう応え、すずかの回復を続ける。そんな中「みんなも頑張ってるんだね。私も負けてられないな♪」すずかが新たに意を決した。

「だからと言って無理はダメだぞ。先週、風呂で水死しかけたって大騒ぎだったじゃないか」

俺たちの中で一番忙しいすずかは当然の如く寝不足となり、聖祥小が休みの日には下宿するシャルの家（俺たち八神家は4月まで下宿することになっている）の大浴場で溺れかけた。同じように休日はシャルの家に下宿するなのは達も一緒に入っていたから最悪なことは起きなかったが、もし自宅だった場合は・・・想像したくもない。

「うぅ、倒れないように頑張ります・・・！」

「十分頑張っているじゃないか、すずか。すでに自分やなのは達のデバイスを看られるレベルまでのスキルを得たって話じゃないか」

「う～ん、看ることが出来るだけで直すことは出来ないから、まだ何も出来ないと同じだよ。それに比べてはやてちゃんは、ミミルさんと一緒に融合騎――リインフォースⅡちゃんを開発してる・・・。なんていうか負けた気分で・・・」

そう。はやては研修が休みの日にはミッドはベルカ自治区サンクト＝オルフェンへと出向き、融合騎技術者のミミルの元を訪れ、リインフォースⅡの開発を手伝っている、というよりはミミルが教授しながら手伝いをしているといった感じか。はやてが主任となったことで開発速度がガクッと落ちただろうが、それでもはやてとリインフォースの意思だ。何も言うまい。

「焦らなくても良いさ、すずか。時間はたくさんある。それに、はやての場合はあくまでリインフォースⅡの開発だけ。デバイスマイスターを目指すすずかとはまた別だ。自分の道をしっかりと見据え、一歩一歩確実に進んで行けば、今の努力は報われるよ」

頑張りを労うためにすずかの頭を撫でると、「うん。ありがとう。・・・ふふ」彼女が小さく笑ったから、「どうかしたか？」と訊く。血行が良くなったことで頬に赤みが増しているすずかの横顔が魅力的な笑みに変わる。

「ルシル君ってなんだかお兄ちゃんみたいだな、って。誕生日で言えば私の方が早いのに。それでも・・・もしお兄ちゃんが居たら、ルシル君のように励ましてくれたり助言してくれたりするのかな、って。ふふふ♪」

「お兄ちゃんかぁ～。・・・呼んでみるか？」

「ええっ？　えっと、その・・・」

からかうつもりでそう言ったらすずかはさらに顔を赤くして言い淀み・・・「あ」そう漏らした。すずかの視線を追ってみると、「何してんの？」両手を腰に置いての仁王立ちをして、半眼で俺やすずかを見下ろしているシャルと視線が合った。そのシャルの背後にはブロンドのセミロングの髪を靡かせている女性が居た。

「あ、お疲れ様です、フィオーレ三尉」

「お疲れ様です、ルシル君。いらっしゃい、すずかさん」

シャルの研修教官を務めるフィオーレ・マクス・ミッシール三等陸尉だ。俺たち八神家も一度フィオーレ三尉に付いて捜査現場を訪れ、そして犯人を捕まえたこともある。その時にフィオーレ三尉のレアスキルを見たが・・・。見た瞬間、大戦時に名を馳せた魔術師を思い出した。プリムス・バラクーダ・ウトガルド。あの子のあの魔術を・・・。ま、偶然だろうがな。

「お邪魔しています！」

レアスキルや固有スキル保有者は、上級キャリアなどの昇級試験において特別措置が受けられる。早い話が未保有者より試験に受かりやすくなっている。ゆえにエリート思考の持ち主も多く、スキル未

保有者を見下す奴も居る。
とある契約にて管理局のような組織、能力者・未能力者を抱えた軍部に就いた時は酷い差別があったものだ。まぁ、そう言った連中は、粛清の権限を持っていた俺が張り倒ししてやったが。
話が逸れたが、そう言ったエリート集団である特別技能捜査課のメンバーにはそう言った感情はない。誰もが等しく管理局に務める仲間として見ている。だからこの1ヵ月で出会った部外者とも言うべきなのは達みんなに対して本当に優しく接してくれている。

「お疲れ、エレフ」

「お疲れ、フィオ。これからお昼だけど、一緒にどう？」

「ごめん。お弁当持参だから」

「さっすが将来の夢がお嫁さ――」

「わあわあわあわあ！！」

エレフテリア二尉とフィオーレ三尉の喧騒（じゃれ合い）をＢＧＭにすずかの回復を続けながら、「ルシルぅ～、わたしも疲れたぁ～」と俺の右肩に頬ずりしてくるシャルに「ちょっと邪魔」と軽く注意。

「ひどい！　わたしだって執務官補と捜査官の二足のなんとかなのに！」

「二足の草鞋だよ、シャルちゃん」

「そう、それ！」

シャルはクロノの執務官補佐を続けながら捜査官の研修生をしている。４月になれば正式に次元航行部から特別技能捜査課へと転属となる。それまでは二足の草鞋が続く。確かに疲労度から言えばすずかと同程度か。

一応、執務官補の試験をパスしているため捜査官としては俺やはやて達よりは先輩だが、それでも捜査の経験――ノウハウが足りていないため、先輩特別捜査官であるフィオーレ三尉に付いて現場で捜査を学んでいる。

「よし、完了だ、すずか」

「ありがとう、ルシル君。心も体もスッキリだよ♪」

体を起こしたすずかはソファから立ち上がり、ソファに掛けられていた局の制服に袖を通す。ちなみに俺も制服を着ている。色は茶。これが基本的な管理局員の制服の色。研修生は配属が次元航行隊であろうと先ずはこの茶の制服を着ることになっている。だからシャルも今は青ではなく茶の制服だ。執務官補と研修生、その時どちらに就いているかで着替えている。

「ず～る～い～、ず～る～い～、わ～た～し～も～～～」

「ああもう、判った、判った。ほら、上着を脱いで座れ」

「やった♪」

上着を脱がせてブラウスを露わにさせたシャルをソファに座らせる。そして「ほら、これでいいだろ？」両肩を揉みながらラファエルを発動すると、「ふわっ！？」　シャルが変な声を上げた。というかプニプニだなぁ、思った以上に。やはり騎士でも女の子、か。女の子特有の柔らかさが手に伝わって来る。

「おおう・・・これは効くぅ～～～。すずかぁ～、これ良いねぇ～～」

「あ、うん。疲労が全部飛ぶから、ちょっとの無茶も出来るんだよね」

「だからと言って無茶はしないように」

「「はーい♪」」

シャルの背後に居るから彼女の表情は判らないが、シャルと向かい合っているすずかが笑顔である以上、彼女もまた笑顔なんだろうな。

「あ、そうそう、ルシル。明日のあなたのバースデーパーティ、リンディ艦長たちも参加するからね～」

はやてやシャルがこれ見よがしに俺の誕生日当日の予定を何度も確認して来るから、サプライズも何もない。ま、そのおかげで俺は本当の誕生日を忘れることもないだろう。

「ねえ、ルシル。会場をなんで本局のレクリエーション区画の多目的野外ステージにしたの？　確かにあそこは広いし許可を取れば局員の誰もが使用可能。一般人も入れるし、よく局員同士の結婚式場としても使える。でもさ、どうせならわたしの家でやろうよ。今日明日となのは達も下宿するし、ルシル達も帰って来るんだし」

確かにシャルの家ならその広さも十分あるし、私有地であり持家であるし、大騒ぎをしても問題ないだろう。が、「それじゃつまらないだろ？」そう言いつつ肘を使ってぐりぐりと肩をマッサージ。

「おわわわわ。き、効くぅ～～～」

「つまらない、ってどういう・・・？」

すずかの疑問に「それは明日の秘密だ」とウィンク。俺が、俺を祝ってくれるはやて達にサプライズだ。いい機会だ。先月の罰ゲームも執行させてもらおう。なぁに、ただ恥ずかしい思いをするだけじゃない。上手く行けば面白い結果になるぞ。

「ルシル君、何か企んでるよね・・・？」

「判るか？」

「なんとなく。ルシル君との顔合わせの回数、はやてちゃん、シャルちゃんに続いて多いから。こうして直接会ってお話しすることも多いし。だからかな、ルシル君の考えてること、ちょっとだけ判る

よ」

そう言って微笑むすずか。どうも最近の俺は考えがよく顔に出るようになってしまっているようだ。よくない傾向だ。隠し事や嘘が下手になるにつれて俺の立場が悪くなる。気を引き締めて今後も過ごさないとな。あぁ、気が重い。

「・・・よし。もう大丈夫だろ？　シャル」

「ふわぁ、気持ち良かったぁ～。これ、ホントに体も心もスッキリするね！」

満足そうに腕を、首を回すシャル。すずかとシャルの回復も終え、俺とすずか、そしてシャルは、エレフテリア二尉に昼食を奢ってもらう。それにしても本当に俺は運が良い。権威の円卓メンバーのガアプ一佐を始めとした特別技能捜査課のメンバー全員が人格的にも素晴らしい局員だ。この1ヵ月、直に話をして判った。彼女やこの課になら八神家を預けられる。

（安心できる仮宿の他に、メンバーのレア・固有スキルを全て複製し、手に入れることが出来た。これは大きな収穫だ）

メンバー全員が魔導師ランクA以上であり何らかのスキルを有する。そこに総合Sランクのはやて、固有スキル・蒐集行使。空戦S＋ランクの俺、固有スキル・複製、そして八神家全員が有しているレアスキル・古代ベルカ式魔法が加わるわけだ。脅威対策室で編成される特務部隊並に強力だな、改めて考えてみると。

そうして俺たちは昼食を終え、オフィスへ戻るエレフテリア二尉、第零技術部へ向かうすずかと別れ、シャルと2人きりになる。

「そう言えば、オフィスに戻る時に廊下でシグナムとヴィータと会ったよ。ヴィータがマスコット扱いされてた」

契約通りにはやて不在の際はシグナムとヴィータは航空武装隊へ、シャマルは医務局へ出向するため、俺たちは今日それぞれ別行動だ。それでも研修生ということで下手な残業もなしであるため、家族そろってシャルの家に帰ることが出来る。

「まぁ、あの小ささだからな、ヴィータは。はやても抱き心地が最高だっていうくらいだ。現在局に就いている局員の中で最年少じゃないか？　外見上は8歳だし」

「それを言ったらルシルもでしょ？　身長は別として」

「・・・・あ」

いま気付いた。確かに戸籍上は8歳だ。あのヴィータの外見設定と同じ年齢だ。誕生日は忘れなくなったとしても自分の年齢を忘れてしまう。ヴィータと一緒。なんか変な汗をかいてきた。そんな時、「シャル、ルシル！」俺たちの名前を呼ばれた。

振り向いて見ると、そこにはトレイに昼食を乗せた「ユーノ」がこちらに向かって歩いて来ていた。ユーノは無限書庫司書という本局勤めとしては先輩で、本局勤めになってからのこの1ヵ月でよく話すようになった。あぁ、素晴らしき哉、男友達。

「明日のルシルのバースデーパーティだけど、正午から13時までの1時間だったよね？」

「そうだよ。明日も仕事入ってるし。その1時間だけが勢揃い出来るんだよ」

「僕もその時間だけ無限書庫を空けていいって司書長が言ってくれたから、僕も参加できるよ、ルシル」

「ああ。ありがとう、ユーノ」

俺たち全員の時間を合わせ、そして会場を手配したのもリンディ提督だ。そんなリンディ提督と俺、エイミィの3人である結託をしている。俺にとってアリサ達に罰ゲームを下す場であり、リンディ提督やエイミィとってなのは達への歓迎の場である、俺のバースデーパーティ。さぁ、明日は頑張ってくれ、みんな。

そして日は明けて2月5日。俺の誕生日となった。俺の誕生日を祝うために用意されたのは、本局員がオフを過ごすことの出来るレクリエーションエリアの中に有る多目的野外ステージ。公園のような憩いの場所で、ほぼ全域に芝生が敷かれている。

俺たち八神家が来たころにはほとんどの準備が終わっていた。並べられた長テーブル、その上に乗るのは半球状の蓋に閉ざされた大皿の数々。唯一土が出ているところにはバーベキューコンロとその周

囲には食材。

「お、来た、来た。待ってたよ～、主役～♪」

エイミィが大手を振って俺たちを迎えてくれた。側には制服姿のフェイトと私服姿のアリシア、アルフ、そしてクロノ、ユーノの姿がある。フェイト達と合流すると「誕生日おめでとう！」祝いの言葉を贈ってくれたから「ありがとう」と笑顔で受け取る。

「しかし母さんもどうしてここでルシルのバースデーパーティを決行しようとしたんだろうな。何か知っているか？　エイミィ」

「い、いやぁ、知らない、かなぁ・・・あはは」

誤魔化し方が酷いぞ、エイミィ。念話で注意しようにもエイミィは魔力保有者――魔導師じゃないため出来ない。そんなエイミィの様子に「そうか」と頷きながらも訝しんでいるクロノ。どうフォローしようかと考えていたところに「お待たせー！」なのは、アリサ、すずか、シャルの４人が駆け寄って来た。

「「お誕生日おめでとう、ルシル君！」」

「おめでとう、ルシル」

「ありがとう、なのは、すずか、アリサ」

「ルシルぅー！　プレゼント・フォー・ユー　」

なのはやすずか、アリサからの祝いの言葉、そしてシャルの突撃からのキス攻撃をスッと半歩分だけ横移動して回避。ズザザと芝生を滑る音が背後から聞こえ、「ホワイ！？」とか言って詰め寄って来た。

「ホワイも何も、そんな重いプレゼントなんて要らない。普通に祝いの言葉で十分だ」

それに、今でも若干不機嫌そうなはやてだ、もし受け取っていたら本日のテンションは終日最低を維持するだろう。それだけは阻止しなければ。で、はやてのテンションに影響を及ぼそうとしていたシャルは「チッ」とみんなには聞こえない程に小さく舌打ち。頼むからマセた身体接触行為はやめてほしい。

「はーい、みんなー。ちょっと早いけど、ルシル君のバースデーパーティ、は～じめ～るよ～～♪」

エイミィの開会の合図で、俺のバースデーパーティは幕を切った。すでに並べられていた料理を、それぞれ受け皿によそっての立食パーティ。まずリンディ提督とエイミィの狙い通りに、「なに、立食パーティ？」「みんな小さーい」「制服ってことはなに、局員？」「新入り？」などなど、おそらく俺も含めた子供たちを見て様々な反応を示している。

「なんや目立っとるなぁ、わたしら」

「そうですね。僅かに聞こえる話し声からして、主はやてやルシル、なのは達の小ささ、そして管理局の制服を着ていることに対する驚きのようです」

「あたしだってこんなナリの所為か、研修先の航空隊の中じゃマスコット扱いでさ。嫌ってわけじゃねぇんだけど、ベッタリされ続けんのはちょっと疲れる・・・。シグナムはシグナムでこの1ヵ月、男女関係なく色々誘われてっし」

「女性隊員からは昼食を、男性隊員からは・・・逢引を。まったく。食事くらいなら受けるが、逢引など何度断っても誘ってくる輩も居る。困ったものだ」

「シグナムは美人だから。誘われて当然かもしれないなぁ～。なぁ？はやて」

「うん。ルシル君の言う通りや。シグナムはただの美人さんだけやなくて騎士ってカッコええから。わたしかてそんなシグナムに惚れてるんやもん。男の人はなおさらや」

「っ！　あ、う、その、あ、ありがとうございます、主はやて・・・」

はやてにべた褒めされたシグナムは珍しく顔を赤くし、下宿先のシャルの家では聞いたことのない話を聞けたとはやては満足気だ。そしてヴィータのフリに流されるまま隠していたことを自ら話したことに気付いたシグナムは「忘れてください」と俯くのみ。別に隠さ

ずともいいだろうに。逆に胸を張れる話じゃないか、人気を得たと。

「シャマルはなんか隠し事とかしてへんか？」

「私ですか？・・・これまでにお話ししたことが全て、でしょうか・・・。私も男性から食事に誘われることはありましたけど、1対1での食事の誘いは断ってます」

シャマルも医務局での仕事の際、男の患者から誘われているそうだが、2人きりの場合は断り、数人での食事会なら受けている。とは言え、あくまで昼食のみ。朝と夜はシャルの家で、家族みんなで摂るからだ。

「シグナムやヴィータだけやなくてシャマルも人気者で、家族としてホンマ鼻が高いわぁ～♪」

はやてやリインフォースもまたベルカ自治区サンクト＝オルフェンの技術開発室では人気者だという。それだけではなくはやては――というより俺たち八神家は、騎士カリムを始めとした聖王教会の一部とも懇意にしている。確実にコネクションを築いていっている。

「それにしても見学客が増えてきたな」

リインフォースが周囲をチラリと確認しながら呟いた。クロノとエイミィが焼いている食材の香りに釣られる者、パーティ参加者の見た目に釣られる者、理由は様々だが人だかりが出来始めていた。うん、順調だ。チラッとエイミィに視線を送ると、彼女と目が合って

・・・。

（そろそろだ、エイミィ）

（うん、そろそろだね、ルシル君！）

アイコンタクトして頷き合う。まぁ、↑の思考は俺の想像で、実際のエイミィはどう考えているかは判らないが。だがキラキラ目を輝かせている以上は明らかにノっている。あとは、「お待たせ～！」お待ちかねのリンディ提督が合流だ。リンディ提督はキャスター付きのワゴンを押し、料理の追加を運んで来てくれた。彼女の側にはアースラの女性（年齢的にはまだまだ少女だけど）スタッフが４人居て、その娘たちもまたワゴンを押して来ていた。

『ルシル君。人目も十分集まって来たことですし、そろそろ・・・始めましょうか♪』

『了解です！』

リンディ提督と念話を繋げる。コクリと頷き合った後、俺は「ちょっと席を外すよ」とはやて達に一言断ってからステージ裏へダッシュ。ステージの上手袖より舞台裏へと上がる。このステージは多目的利用施設であるため、「スピーカーにマイク、それにミキサーもクリア」ミキサーは空間モニタータイプ。操作方法を表示するモニターを展開しようとしていたら、「ハーイ」背後から声を掛けられた。

「ニコレッタ三尉。どうして・・・？」

特別技能捜査課のニコレッタ・クロス三等空尉。紫色のロングストレートヘア、チョコレートブランの瞳を有す、対空戦魔導師戦では敵味方関係なく脅威となるレアスキルの持ち主。そんな彼女が「ハラオウン提督にお願いされてね」と、手慣れた様子で操作していく。

「ハラオウン提督から貰った楽曲データ、どの順で流せばいい？」

「えっと・・・、こういう風に・・・でお願いします」

「ん。じゃあ・・・悪巧みしておいで・・・？」

ポイッと放り投げられたマイクをパシッと受け取り「してきます！」と応じてステージに立つ。マイクをＯＮにして、「えー、本日は俺の為にこんな素敵なバースデーパーティを開いてくれてありがとう！」一礼する。

「何やってんのよ、そんなところで？」

「なになに？　ルシル、マイクパフォーマンスでもするの？」

アリサやアリシアは真っ先に反応。はやてやなのは達は「おーい！」と大手を振ってくれている。でも、ごめんな。その笑顔、もしかしたら途絶えるかもしれない。だからと言ってもう中止には出来ないけどさ。

見学者の視線が確実に俺たちに向いたのを確認して、「はやて、な

のは、アリサ、すずか、フェイト、アリシア、シャル。ステージへどうぞ」と彼女たちをステージに招待する。「なになに？」と取り皿をテーブルに置いてステージに上がって来る彼女たち。

「これからみんなにはこのステージで歌ってもらいます」

「「「「「「「・・・・ええええええ！！？」」」」」」」

「いきなり何を言い出すんや、ルシル君！」

「ちょっ、待ちなさいよ！」

「考え直せないかな、ルシル君！」

「む、無理、私は無理だよ！」

「私たちだけならいいけど、他の局員さんたちが見ている中で歌うなんて・・・！」

「ただでさえ目立っていたのに、今そんなことしたら・・・！」

「まるで罰ゲーム！」

はやて、アリサ、すずか、なのは、フェイト、シャル、そして最後にアリシアがそう言った後、「ハッ！」彼女たちは理解したようだ。

「そう。これが先月、正月に行った小テストにおける罰ゲーム、だ！

１人１曲順番に歌ってもらう！　楽曲はみんな三が日に一度は歌ったもの。だから練習なしでもいいだろう。それに歌詞もモニターに表示される！　だから安心して歌うといい！　もちろん、拒否権は・・・無し！！」

俺はそう宣告した。もうどうしようもないと俺の様子を見て悟ったのか、みんなは罰ゲームを受けることを承諾。

「じゃあ順番を発表する。はやて、なのは、すずか、フェイト、アリシア、アリサ、シャル、だ」

「「「えっ！？」」」

後ろの方になるシャル達が一斉に俺に振り向いた。最初の方より最後の方が目立つからな。こんな騒ぎが起きていれば今居る見学者たちから他の局員へと連絡が入り、さらに見学者が増えるだろう。そんな中で歌っていれば否応なく有名人入り。

彼女たちにとっては罰ゲームになる。が、リンディ提督とエイミィは、この手で彼女たちを局の有名人にするつもりだ。つまりお披露目会というわけだ。９歳という幼さであるにも拘らず一線級の戦力を持った魔導師であるなのは達。ここで有名になり、なおかつコネを作ることが出来れば、後々に有利な局員生活・・という算段。しかし変態はお断り。

「はやてには〈☆に祈りを〉、なのはには〈フライング・ハイ！〉、すずかには〈きっとスタンバイ・ユー〉、フェイトには〈ツバサ〉、アリシアには〈ハートフル・ソング〉、アリサには〈Ｐｒｅｃｉｏ

ｕｓ☆ｔｉｍｅ〉、シャルには〈Ｇｉｖｅ　Ｍｅ　Ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ〉。はーい、早速はやてからぁ・・・どうぞ！」

「あぅ～・・・了解や」

車椅子を押してステージの真ん中へ向かうはやてに俺も続く。

「えー、これより時空管理局の研修生たちによる歌唱会を始めます！
よろしければご拝聴ください！」

「ちょっ、そんなハードルを上げ――・・・むぅ、もう！」

はやてにマイクを手渡した俺は舞台裏へと戻り、音響機器を一手に操作するニコレッタ三尉にアイコンタクトで合図。曲が流れ始め、はやてが歌いだす。

「ルシル、あんた・・・最悪な罰ゲームを思いついたものね。まさか公衆の面前で歌わされるなんて思いもしなかったわ」

「うぅ、とんだバースデーパーティだよ・・・」

「腹を括れ～、アリサ、シャル。というか、君たち全員の歌唱力は確かだ。堂々と歌えばいい」

「それは友達の家で、友達だけの場で歌ったからだよ。緊張で音程とか外したら・・・」

「は、恥ずかしい・・・」

「そう思うと、余計に緊張して・・・」

なのはとフェイトとすずかも緊張で身を震わせている。が、「こうなったら全力で歌うしかない！」アリシアだけは気持ちを切り替え、自分の歌う楽曲の歌詞を確認しだす。だから「何事も楽しめばいいさ」とちょっと他人事張りに励ます。そうこうしている内にはやてが「ふわぁ、緊張したー！」と歌い終えて戻って来た。

「お疲れ、はやて。どうだった？」

「最初は緊張で一杯一杯やったけど、聴いてくれてるみんなが歓声を送ってくれたから、最後の方はわたし自身も楽しめたわ♪」

歌い切って楽しかった、と満面の笑顔が物語っている。はやてのそんな笑顔に触発されたのか、なのは達も「楽しむ、うん！」やる気を見せた。そしてなのは、すずか、フェイトと順に歌い終わった。見学者たちははやて達の可愛らしさと歌声にテンションはうなぎ上ぼり。

「よしよし。良い感じだ。次は、アリシアだな」

「う、うん！・・・行って来ます！」

アリシアと一緒にステージに立つ。ここでさらに見学者を増やし留まらせるための策、「えー、見学をなさっている局員の皆様の中で

昼食がお済みでない方は、どうぞご飲食なさってください」を発動。まぁ、すでにリンディ提督やエイミィ、俺の為に時間を割いてくれたガアプ一佐ら同課メンバーが同僚や友人を招き入れ、そこからさらに輪が広がっていき、とんでもなく大所帯になっているが。

「なんかすごいことになってる・・・」

「だな。企てた俺もビックリだが、リンディ提督やエイミィは満足そうだな。ま、とにかくアリシアの番だ」

「・・・・うし！！」

アリシアと彼女の歌う楽曲を紹介し、俺は舞台裏へひとり戻る。そこでアリシアの歌唱を見学。歌い終えて戻って来たアリシアが次に歌うアリサとハイタッチを交わし、マイクを俺に預ける。そしてアリサと共にステージへ。

「うわぁ、やっぱドキドキだわぁ～」

「アリサはこういう場の雰囲気には慣れていると思っていたが？」

「なんでよ？」

「社交界だよ。見知らぬ大人たちとパーティの時にいくらか話すだろ？」

「ま、まぁ、そうだけど。でもそれとこれとは別よ。デビット・バ

ニングスの娘っていう立場での社交界だとそう顔合わせする機会もないわ。でも局員アリサ・バニングスっていう立場じゃ、これからの顔合わせ回数に関係なく何かしらの繋がりが出来る。あたし個人の責任としてね。だからここで下手打つわけにはいかないでしょうが」

緊張すると言いながらも凛とした表情は変えないアリサに「そうか」とだけ返す。そんな格好いいアリサと楽曲を紹介し、再び俺は舞台裏へ。そこでみんなと堂々としたアリサの歌唱を見守る。

「ねえ、ルシル。みんなで話し合って決めたんだけどさ」

もう少しで終わるというところでシャルがはやて達を率いて俺の前に並んだ。

「ルシルの誕生日なのに、ルシル、ずっと司会みたいなことばかりだよね」

「主役がそれだけじゃ可哀想だなって思うんだ」

フェイトとアリシアがそう言う。続けて「ルシル君にも楽しんでもらわなな」はやてが微笑み、「だからルシル君もさ、歌おう？」なのは小首を傾げながらそう言い、「ルシル君も紹介してあげるよ♪」すずかが笑う。

「いいよ、主役は、どっしりと構えて楽しませてくれるみんなのことを眺める役だから」

とは言うものの、彼女たちの視線は逃さないと言っている。だから仕方なく「判った。シャルが歌い終わったら、俺も歌うよ」変にごねらずに素直に従うことにした。そしてアリサも歌い終わり、シャルの番となる。

一緒にステージに上がると、「イリスー！」と声援が上がる。見ればシャルとの付き合いのある局員――アコース査察官やティファレト医務官、それに「セレス・カローラ・・・」先の次元世界で俺の主だったセレス・カローラが大手を振っていた。

それに彼女の側にはセレスに似た１０代後半ほどの少女――おそらく姉のフィレス・カローラも居る。ベルカでカローラ一族の騎士に会っていたからな。もしかしたらと思っていたが・・・やはり。

「時空管理局本局、最年少で執務官補佐となった騎士、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトで、"Ｇｉｖｅ　Ｍｅ　Ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ"！」

シャルと楽曲の紹介を終え、俺はそそくさと舞台裏へと引っ込む。シャルの歌唱力は前世と比べるまでもなく上手く、手振りを交えて会場に自分の歌声を届けている。文句を垂れていた割にはノリノリだ。そんなシャルも歌い終わり、歓声に対して両腕を大きく振って応えながら戻って来た。

「そんじゃラストはルシル！」

「「「「「「いってらっしゃいっ♪」」」」」」

シャルからマイクを受け取り、はやて達から送り出される中、「ルシル君。君の楽曲、入ってないけど・・・？」とニコレッタ三尉に確認された俺は、「アカペラで行きますから問題なしです」と答える。俺のその言葉に絶句するはやて達の視線が、大丈夫？と語っているが、アカペラくらいどうってことない。何度も経験しているしな。

「僕、八神ルシリオン・セインテストの９歳のバースデーパーティを開いてくれた友人のみんなに感謝します。・・・・そして様々な理由で会場に足を運び、これまでの歌い手に声援を送って下さった局員の皆様へお礼を。・・・よろしければ最後まで聴いて下さい」

そうして俺は、ゼフィランサス姉様が俺やシエルの為に作ってくれた、出逢えた奇跡をその人に伝える為の歌を歌う。どうかこの歌が少しでも人の心に残りますように、と祈りながら。歌い終わった後に巻き起こった大声援の中で俺ははやて達を呼び出し、改めて局員たちに一礼。

「それでは最後にもう一曲、よろしければ皆さんもどうぞ♪」

はやてがマイクを両手で握りそう言った。よく見ればなのは達はそれぞれマイクを持っている。これは想定外。なんの歌を歌うのかと疑問。

「「「「「「「「・・・ハッピーバースデー・トゥ・ユー♫　ハッピーバースデー・トゥ・ユー♬　ハッピーバースデー・ディア・ルシルく～ん♩　ハッピーバースデー・トゥ・ユ～～～♪」」」」」」」」」

誕生日を祝う歌を合唱してくれた。局員たちも手拍子を入れながら歌ってくれた。歌い終わったはやて達も「おめでとう！！」と拍手し、俺を祝ってくれる。やばい、涙もろくなった俺にこれはキツイ。涙を流さないように努めながら「ありがとう！！」笑顔を作る。その後ははやてたち全員の合作ケーキをみんなで頂き（はやてとシャルの、あ～ん合戦、には困ったものだが。甘いものが好きで良かったな、俺・・・）、俺のバースデーパーティは幕を閉じた。

「――そうそう。みんな漏れなくファンクラブが出来たから、公式にしてもいいよ、って子はファンクラブの会長さんに話を通すから、まずはこの私に言ってね♪」

数日後、エイミィからその話を聞いた俺は、やりすぎた、とひとり反省した。

Ｅｐｏｓ３７運命の守護者／時の操手～ＴＨＥ　ＧＥＡＲＳ　ＯＦ　ＤＥＳＴＩＮＹ～

新暦６６年３月。とある次元世界の空にて、２つの人影が相対していた。どちらも１０代後半の少女だ。１人は深桃色の長髪をお下げにし、カチューシャを付けている。半袖の青いショートジャケットにミニプリーツスカート、白のシャツにサイハイソックス、グローブ、ブーツと言った出で立ち。そして右手には片刃の剣を携えている。

もう１人は、桃色の長髪を結うことなく流し、２つに割ったような花飾り付のカチューシャを頭の左右に付けている。服装はもう１人の少女と同じデザインだが全体的に桃色。手に携えている武装が僅かに違う。片刃の剣は同じだが左手持ち。そして右手には短銃を携え、銃身と同サイズの分厚い刃が銃身下に付いている。

「ああもう、やっと追いついた！」

青色の少女が怒気を交えた桃色の少女に言い放つ。それに対して桃色の少女は「追って来ないで、ってあれだけ言ったのに。・・・なんで追って来てんの、アミタ。もしかして、割と本気でお馬鹿さんなの？　私のお姉ちゃんってｗｗ」と返す。桃色の少女の姉らしい青色の少女――アミタは呆れた風に「馬鹿はどっち？　キリエ」溜め息交じりに言い返す。桃色の少女の名はキリエというようだ。

「まさにこれからとんでもない馬鹿なことを犯そうとしている妹を止めない姉なんていません！　ほら、戻りますよ！」

アミタはそう言って空いている左手を、妹のキリエへと差し出した。キリエはまじまじとアミタの差し出された手を見た後、「ふーんだ。ちょこぉ～っとわたしより生まれが早いだけで、妹のやる事なす事――生き方を曲げる権利なんてないって思うんだけぉ～？」プイッと顔を逸らした。

「だ～か～ら～。もうわたしのことは放っておいて！　わたしはね、この時代、この世界で、やらないといけないことがあるの！　ちゃんとこっちの世界の人には迷惑を掛けないように・・・なるべく（ボソッ）頑張るから、邪魔しないでよ！」

「いいえ、させません！　あなたのやろうとしていることは、誰にも迷惑が掛からないような事態で済まないレベル！　縄で縛って、お尻を抓り上げてでも、止めます！」

「ふっふ～ん、力尽くはわたしとしても望むところ♪　教えてあげる、お姉ちゃん。お姉ちゃんは妹には勝てないってことを　」

アミタとキリエ、共に武器を構え・・・戦闘に入った。共に同時に最接近し、アミタは片刃剣を振るって斬撃を繰り出し、キリエはその斬撃を姉アミタと同じデザインの片刃剣で受け止め、すかさず右手に持つ短銃で反撃。至近距離の銃撃だったにも拘らずアミタは掻き消えるような瞬間移動で回避。

「いま本気で顔を狙ってきましたね、キリエ！？」

「邪魔をしてくるお姉ちゃんが悪いのよぉ～？　ラピッドトリガー、ファイアァーッ！」

――ラピッドトリガーーーー

キリエの片刃剣が短銃へと変形し、２挺の銃より１２発の光弾が連射される。するとアミタは「バルカンレイド！」空いていた左手に短銃を携え、その銃口より光弾を６発と発射させ、キリエのラピッドトリガーを真っ向から迎撃。２人の間で衝突する計１８発の光弾が爆発を起こし、激しい光が２人を照らしだす。

そんな中でアミタが動く。閃光の中に突っ込み、アミタとは違って閃光に僅かばかり目を眩ませていたキリエは直感からか攻撃にも防御にも回らず、アミタの追撃を警戒してひたすらに後退。閃光から飛び出して来たアミタは背を向けているキリエに光弾を発射。

「んもう、しつこい！」

――ラピッドトリガーーーー

「キリエ！　大人しく戻りなさい！　今ならお尻の抓り上げを免除してあげますから！」

――バルカンレイド――

「いやあよ！　どうして解んないの！？　わたしがやろうとしているのは引いてはエルトリア、博士の為にもなるのよ！？」

「たとえそうでも、他人様に迷惑が掛かったら博士は喜ばない、悲しむだけ！　あなたなら解るでしょ！」

どうやらキリエはエルトリアと博士、その２つの為に何かしらの事を起こそうとし、アミタはその行いが別の世界に危機を齎すことになると危惧しているため、キリエを引き止めに来た・・・ということらしい。そして２人はそれぞれの意志の元に何度もぶつかり・・・

「うぅ～、や～ら～れ～た～・・・」

「はぁはぁはぁ・・・！　どう？　少しは反省して戻る気になった？　キリエ」

勝敗は決した。妹であるキリエが負けを宣言するが、勝ったはずのアミタの方が肩で息をし、被ったダメージが高そうだ。アミタは「ほら、はぁはぁ・・・帰りますよ」と勝者として再度キリエに言うが、敗者のはずのキリエは突如として「な～んてね♪　アミタ、わたしの勝ちよ♪」と笑い、敗北宣言を撤回して勝鬨を上げた。

「もしかして気付いてないの？　だとしたらアミタってばお馬鹿さんの他にお間抜けさんも追加よ？　体、重いでしょ？」

アミタは図星を突かれ「っ！」目を見開く。キリエとの繰り広げた空中戦の半ばから感じていた肉体の鈍化。その所為で今もアミタは息が整わない。それどころか徐々に、しかし確実に体が重くなっていくことでへたり込みそうになっている。

「なかなか弱まらないなぁ、もしかして効いてないのかなぁ、なんて思ってたけど、ちゃ～んと効いてたみたいでよかったわ♪」

「キリエ・・・、あなた一体・・・私に何を・・・！？」

「わたし特製のウィルスバレットを、戦闘中にこっそりと撃ち込んだのよ～♪　まぁ、ウィルスとは言っても死ぬわけじゃないから安心して、アミタ」

「っく・・・、キリエ・・・！」

「わたしを追って来ないで、ってわたし自身が飽きるほどに言ったのにそれを無視して追って来たそのお馬鹿なことをした、その報いよ。いっそのこと、もう追って来られないようにこの場で・・・ブッ壊しちゃってもいいんだけど・・・」

キリエが最後通告する。しかし、殺す、ではなく、壊す。人に対して言う表現ではなかった。アミタは悔しげに「やれるものなら・・・」とキリエを睨みつける。姉のアミタから受ける睨みにキリエは動じることなく「や・ら・な・い♪　だって、そんなことをしたら博士はきっと悲しむもの。というわけで。バイバイ、アミタ。たぶん、きっともう・・・会わないから」そう別れを告げて、どこかへと飛び去って行った。

「待ちなさい、キリエ・・・！　キリエ！！・・・追わ、ないと・・・」

アミタは重い体を引き摺ってでもキリエを追おうとするものの、キリエに撃ち込まれたウィルスバレットの影響で思うようにはいかなかった。キリエ特製ウィルスバレット。効果は身体機能の阻害。抗ウィルス剤か治癒術があれば治せるものだと判断したアミタは、「待っていなさい、キリエ・・・！」と、この世界の者に迷惑を掛けてはならないと硬く決めていたが、それでもキリエを止めるために・・・。

†††Ｓｉｄｅすずか†††

第零技術部で技術官としてのスキルを勉強している私は今、ドクター が手掛けているデバイス開発に必要な素材――モルダバイトを、ドクターの娘のチンクさんと一緒に採取するためにある無人世界に来ていた。でもモルダバイトって貴重は鉱石みたいで、チンクさんと手分けして探しているんだけどなかなか見つからない。

「採取場所はここで間違いないんだけど・・・」

もう１度マップを表示。わたしとチンクさんが今居るのは、標高９０００ｍ級の大山脈の中で、その山脈を穿つトンネル状の洞窟内。上に下にと切り立つ色々な鉱物の山。その中からただ１つの鉱物モルダバイトを探してほしいって言うのもよく考えてみると・・・すごく大変。

≪ スズカ。少し休憩を挟んではいかがですか？≫

グローブ型のブーストデバイス、"スノーホワイト・メルクリウス"が労わってくれた。でも「大丈夫だよ。これもお仕事だから」そう返して、改めて探索に入る。デバイスマイスターになったら、こういう素材探しもまた1つのお仕事になるだろうから。

≪っ！　スズカ、エマージェンシーですわ！　洞窟内に侵入者！・・・これは、魔導師・・・ではありませんわ！≫

いきなりの大声にビクッと驚いちゃう。それに内容についても。"スノーホワイト"に「魔導師じゃないとしたら、騎士・・・？」って返す。すると≪いいえ。どの記録にも該当しない、未知も魔力運用ですわ≫さらに気になることを報告してきた。魔導師でも騎士でもない、第零技術部に入れてもらったデータにも該当しない何か。

≪速いですわ！・・・エンカウント！≫

周囲を見回すと、「あの人・・・？」こちらに向かって飛んで来る・・・エイミィさんくらいの女の人を視界に収めることが出来た。女の人も私に気付いて急停止。私から声を掛けようとしたら、「あの！」その人から切羽詰まったような声色で私に声をかけた。

「すみません、地元の方ですか！？」

その人のあまりの勢いにたじろいだ私は「え、あの・・・」警戒心を強める。と、「ああ、そんな警戒しないでください、私、怪しい者ではないですから！」ってその人は言うけど、すでに銃を装備して、しかも銃口を私に向けてる時点でアウトだよ・・・。

「見ず知らずの方に突然こんな事を言うのもなんですが、助けてくださいませんか！？　治癒術を使える方、もしくはＡＣ９３系の抗ウィルス剤が必要なんです！」

そんなことを言う以前にまずは銃口を外してほしいです。とにかくウィルス剤については全然解らないけど、治癒術なら得意だ。だから「お困りであることはなんとなく判っています！　あの、ですから――」まずは落ち着かせて話をしようと試みてみた。

「本当にすみません！　非礼は重々承知ですが、当方非常に急いでおりますので、素早い回答をお願いします！　治癒術はお持ちですか、お持ちでないですか！？　抗ウィルス剤はお持ちですか、お持ちでないですか！？　早く、早く妹を止めないと・・・この世界が大変なことになるんです！」

その人はあろうことかさらに冷静さを欠いて、「お持ちでないのでしたら、私はこれにて失礼させていただきます！」ってこの場から去ろうとした。急いでいるのなら引き止めるのも申し訳ないかな・・・という事にはならない。治癒魔法を使えるからたぶん治せるかも。あと、世界が大変なことになる、というのも人として、管理局員として聞き捨てならない。だから「待ってください！」呼び止める。

「え？　あの、すみません、急いでいますので！」

「お話を聴かせてください！　私は――」

「本当にすみませ～～～ん！！」

「・・・こちらもごめんなさい！　スノーホワイト！！」

≪チェーンバインド！≫

"スノーホワイト"に発動してもらった捕縛魔法チェーンバインドで、女の人の武器を持っている右手だけを拘束。すると「えっ？これは・・！？」あの人は驚きを見せて・・・でも何も持っていなかった左手に新たに別の銃を携えて、チェーンバインドを狙撃、破壊した。

「きゅ、急に何をするんですか！？」

それは私の台詞です、って思いながらも「まずはお話をしましょう！　私、月村すずかといいます！」まずは自己紹介。もし応じられなかったら今度は四肢を拘束くらいしないとダメ、かな・・・。

「あ、はい、私はエルトリアの、アミティエ・フローリアンといいます！」

（良かった。ちゃんと応じてくれた）

≪エルトリア。管理・管理外を含め、現在の管理局が認知している世界の名簿にその名前は有りません≫

正しく異世界の人ということか、アミティエさんは。未知の魔力運用技術というのも頷けるかも。管理局でさえも認知していない世界の住人、アミティエさんは「あの、本当に急いでいるのでこれ以上お話にお付き合いは出来ません、ごめんなさい！」踵を返してすごい速さで飛び去ってしまったから、アミティエさんを追って私も飛ぶ。

「あの、アミティエさん！」

「うわっ！？　すずかさん、私の飛行速度に付いて来られるんですか！？」

「えっと、なんとかギリギリです！　あの、お話を聴かせてください！　妹さんのこととか、世界の危機の事とか！　私、管理きょ――」

「ああ・・・ここに来てさらに体が重く・・・、無理に動いたせいで余計にウィルスの巡り具合がひどく・・・あぁ・・・」

「って、えええええっ！！？」

アミティエさんが目の前でいきなり落ちたから、「急にどうして！？」って慌てて追い縋る。その途中でアミティエさんは細い水晶の柱にドカンと墜落。ここで想定外のことが起きちゃった。アミティエさんが落ちた水晶の柱がポッキリと折れて、すぐ側に突き立っている柱を巻き込んで大惨事。急いで助けに向かおうにも連鎖的に崩れ出した柱は行く手を拒んでくる。

≪スズカ、無駄ですわ。アミティエ・フローリアンの反応が離れて行きます。それに、魔力を持った水晶の破片がジャマーの役割を果たして彼女の反応探知を阻害、・・・ロストしましたわ≫

"スノーホワイト"からの報告に「そっか・・・」と私は残念がった。とそんな時、『すずか、一体何が起きた！？　大丈夫なのか！？』チンクさんから通信が入った。地上担当のチンクさんは、いきなり倒れた柱の近くに私が居たことを見ていたから、心配して安否を確認してくれた。

「私は大丈夫ですけど・・・。あの、チンクさん。そちらに１０代後半ほどの女の人現れませんでした？」

『いや。そちらで何かあったのか？』

チンクさんに伝える。管理局が認知していない世界からの渡航者――アミティエ・フローリアンさんと会ったこと、そのアミティエさんが言っていた、世界の危機のことなど。するとチンクさんは『ドクターが好みそうな話だな』って呟いた後、『調査班に連絡しておいた方が良いな』って言った。私たちだけでどうにか出来るような案件じゃない、って。

『すずか。一度本局に――』

チンクさんの通信に割り込むように通信が入ったことを報せるコールが鳴った。チンクさんは『受けてくれ、すずか』って通信を受け

ることを許可してくれた。お礼を言った後、私は通信を繋げる。

『やっほー、すずかー♪』

私に通信を繋げたのは「アリシアちゃん！」だった。モニター越しでアリシアちゃんは今エイミィさんのお部屋に居ることが判る。それはとにかく「どうしたの？　アリシアちゃん」通信を繋げた理由を訊いてみる。

『その事なんだけどね。暇つぶしにエイミィの部屋で、ネットゲームで遊んでたらそこでちょっとおかしい何かを捉えちゃって。すずかの居る世界でみょ～な反応があったの』

「妙な反応・・・？」

『すずか、先ほどお前が言っていた話に関係しているのではないか？』

『あ、チンク！　いつも妹たちがお世話になってます♪』

『いや。第零技術部も賑やかになって、ドクターも喜んでいるよ』

私たちみんな、第零技術部の中継点なしで転移が出来る超長距離トランスポーターを利用させてもらっている。中継点を挟まないから、地球から本局までの転移時間がわずか5分。中継点を挟むと1時間は余裕で掛かるから、本当に助かってる。

『そうだ、アリシアちゃん。妙な反応に心当たり有るんだけど』

『ホント！？　すずか、その心当たりのこと教えて。本局のシャルにそのまま伝えるから』

アリシアちゃんにチンクさんに伝えたことと同じ話を伝えると、すぐに『すずか、アリシアから報告を受け取ったよ』新しく展開されたモニターにシャルちゃんが映った。

『アリシアから受け取ったデータで見た反応だけど、どうやら管理局で認知できていない魔力運用技術っぽいんだよね。今からそっちにわたしとアリサ、調査班が向かうから、手伝ってほしいんだけど』

「あ、うん、それはいいんだけど。・・・私、いま第零技術部のお手伝いで、チンクさんと一緒に居るんだけど」

『うん、らしいね。チンク。すずかを借りるけど、問題ない？』

『ああ、問題ない。ドクターには伝えておこう。ただ、我々シスターズは、第零技術部部長ジェイル・スカリエッティ少将の許可なく他部署の仕事に関われない事になっている。一度本局に帰らねばならないが・・・』

『大丈夫。戦力はきっと十分だから、チンクは心配せずに自分の仕事を終わらせて』

というわけで、私はアリサちゃんとシャルちゃん、調査班の人たちを手伝うために残って、チンクさんは一度本局へと戻っていった。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒はやて†††

今日は大学病院への通院日ってゆうことで海鳴市に戻って来てるわたしとリインフォース。午前中に診察を終え、夕方に診察結果が伝えられるそれまでの間、時間潰しに海鳴の海上で、リインフォースと2人で魔法戦の特訓をすることした。

「ふぅ。リインフォース、今日のわたしの魔法、どないやった？」

「ええ。攻撃・防御・飛行、とても安定していますよ。もう、私からあなたに教える事がないほどに」

余裕を以って特訓が出来る理由。それは、製作中やったわたしの新たな融合騎が、融合騎技術者のミミルさんの天才的な助力もあって、その完成が目前にまで迫って来たからや。祝福の風、リインフォース。その名前を受け継ぐ二代目融合騎、リインフォースⅡ。命名はリインフォースや。ミミルさんに丁寧に教えてもらいながらリインフォースⅡの細かい設定プログラムを作成してる最中、ふと思うたことがあって・・・

――リインフォースが2人になってしもたら呼び分けに困るなぁ――

――では、私のことは、アインス、と。そして新たな祝福の風には、ツヴァイ、と――

そうポツリと漏らしたら、リインフォースが少し考えた後、そう提案してきた。聞いたすぐはシンプル過ぎてそれでええんかなぁ、って思うたけど、響きが可愛らしかったからリインフォースの命名をそのまま採用した。

「ホンマか！　うん、これでみんなの足手まといから脱却やな」

「誰もそんなことを思ってはいませんよ」

「そうやろうけど、自己評価で判断するとわたしはまだまだひよっ子や。もっと頼られるそんざいになりたい。いつまででも守られてるだけやなくて、守ってあげたいんや」

そやけど、その完成と同時、リインフォースの戦闘能力の全てが消失することになるんを知った。リインフォースⅡの本体になる"夜天の書"の1ピース――剣十字。リインフォースは自分が持てるすべての魔法やその運用機能を、ドクターに作ってもろた新・"夜天の書"とその剣十字に託す。

そうなると、"夜天の書"に残るんは人格形成と実体化のプログラムだけや。一緒に過ごせることは変わらずで嬉しいんやけど、こうやってリインフォースから魔法の手解きを受けることが出来ひんくなるのは寂しい。

「そうですか・・・。ええ、そうですね。あなたは強い方ですから」

そう微笑んでくれるリインフォースやから、「おおきにな」わたしも寂しさを押し隠して微笑み返す。さてと。午後の診察時間にはま

だ間があるからもうちょい練習してこか、って決めた時に「なんだ・・・？」リインフォースがキョロキョロ見回すから、「どないしたん？」って訊いた瞬間・・・

「見ぃ～つけたぁ～～♪」

どこからともなく聞こえてきた女の人の弾んだ声。リインフォースがわたしを庇うように前に躍り出た。リインフォースの後ろから見る。エイミィさんくらいの歳やろか、全体的にピンク色の女の人がひとり宙に佇んでた。右手には銃、左手には片刃の剣。

「んー、なぁ～んか色彩が違うような気もするけど、適合率的にはバッチリだからどうでもいいっか♪」

その人がまずわたしを見てそう言った後、「しかももう1つの目標が同時に揃っててラッキー♪」リインフォースを見て歓声を上げた。とリインフォースが『お気を付けください。魔力の気配も私の知るモノではありません。それに、私たちに用がある者などそうはいません』って思念通話を送って来た。

「あなたはどうやら私たちの事を知っているようだが、私たちはあなたとは初対面だと思うのだが・・・？」

「エルトリアのギアーズ、キリエ・フローリアン。あなた達にちょーっとだけお願いがあるの～♪」

「「お願い・・・？」」

リインフォースと顔を見合わせあって小首を傾げる。キリエさんはスッとわたしに剣先を向けて、「そうよ♪あなた達が手にしている闇の書の中に眠る、無限の力――システムＵ－Ｄを渡し――貸してほしいなぁ、って♪」って聞き捨てならへんことを言うてきた。リインフォースと同時に警戒レベルをＭＡＸに引き上げる。"闇の書"はまぁ知る人は知ってるやろうけど、わたしらがその関係者ってことは本当に一部の人にしか伝わってへん。一体どこでそのことを知ったんか、聞き出す必要があるな。

「素直に渡してくれたら痛い目には遭わないわよ？」

「あの、そうゆうのは世間一般では恐喝ってゆうと思うんですが・・・（出来るだけ情報を引き出す。捜査課の研修生として頑張らな）」

「きょーかつ？　そんなのヘッチャラよ♪　世間なんて得体のしれないような概念にどう思われようともね♪　ほら、そーんな事はどうでもいいから、システムＵ－Ｄを早く渡してねん　」

そう言うたキリエさんは、今度は銃口をわたしらに向けてきた。完全に実力行使に入る気や。そやけど、その前に「待ってくれ」リインフォースが制止させた。わたしも「そうやな、まずは話しをしましょう」って続く。

「どこで私たちのことを調べたのかは判らないが、彼の魔導書は闇の書などという名ではないし、管制プログラムだった私自身もすでに機能の大半を失ってしまい、システムを自由に操作する力はもう

ないんだ」

「あの、そもそもシステムＵ－Ｄってなんですか？」

「それは私も気になっていた。彼の魔導書にそのようなシステムがあるとは思えないのだが。管制プログラムである私ですら認知していない単語だ」

最後の夜天の主であるわたしや、管制融合騎のリインフォースすら知らん"システムＵ－Ｄ"。ひょっとしたらキリエさんの妙な誤解かもしれへん。

「そーんな見え透いた嘘なんて聞きたくありませ～ん♪　だってあなた、この世界で唯一システムＵ－Ｄを制御しうる人物じゃない♪　お姉さんは騙されませんよぉ～　だからほら、とっととその闇の書を渡しやがれ～、です♪　あとはこっちでシステムＵ－Ｄを引っこ抜くんで　」

「「っ！」」

アカン。完全に話し合いで終わるレベルやないほどにキリエさんは暴走特急や。こうなったら力づくでも押さえていかへんとわたしとリインフォース、ダブルで危険や。しゃあなしに「リインフォース！」"シュベルトクロイツ"を構える。

「・・・・我らが愛おしき主と夜天の書に害をなす意思があるのであれば・・・！」

「実力行使、上等！　華麗に返り討ちにしてあげる　」

――ラピッドトリガー――

キリエさんの持ってる剣が銃に変形。そんで２挺になった銃から６発の魔力？弾を発射してきた。左右に分かれるようにわたしらは回避して、「すまないが手加減は出来ない・・・！」リインフォースが接近戦を仕掛ける。これがわたしとリインフォース、２人の時の戦闘スタイル。前衛のリインフォース、後衛のわたし、や。

（ホンマはこの前の欠片事件の時にユニゾン出来るようになったけど、あれはどちらにも負担が掛かるから多用せんようにって、ミミルさんに言われてるしなぁ・・・）

そやからこのスタイルで・・・押し切る。"シュベルトクロイツ"をキリエさんへと向けて、「バルムンク！」剣状射撃魔法を発射。１２本の剣が膨らむような軌道で反りながらキリエさんへ殺到。キリエさんは「無駄、無駄よ～♪」陽気な声を上げながら紙一重で前進することで躱した。上手い見切りや。そやけど、「はぁぁぁぁッ！」リインフォースがキリエさんの真下からアッパーを繰り出して追撃。

「よいしょっ♪」

キリエさんはその場でバック宙をしてリインフォースの攻撃を避けた後、バック宙を続けながら両手の銃から光弾（やっぱり魔力とは別の何かやな、妙な感じがする）を連射してリインフォースを攻撃

した。

――パンツァーシルト――

至近距離やったにも拘らずリインフォースはその光弾をシールドで完璧に防御。すかさずキリエさんの片足をガシッと鷲掴んで放り投げた後、「捕らえよ、封縛！」キリエさんをバインドで拘束した。

「ブラッディダガー・・・！」「ブルーティガードルヒ」

わたしとリインフォース、同じ短剣型高速射撃魔法をスタンバイ。計４０基の短剣がキリエさんを全方位から包囲する。ほぼ逃げ場無し。防御力が高くてもそうそう無傷では済まんはずや。

「あらら、捕まっちゃった♪・・・それにしても捕まえたくらいで優位に立ったなんて思っちゃうなんて、黒天に座す闇統べる王――ロード・ディアーチェちゃんと、闇の書のコントロールシステムにしては、ちょーっと甘いんじゃない？」

「「っ！！」」

リインフォースと顔を見合わせた後、「えっと、もう一度言うてくれます？」って確認を取る。さっきのは聞き違いやなかったか？って。キリエさんは「ちょっと甘いんじゃない？」って違うところを繰り返したから、「もうちょい前です」ってこちらも返す。

「えっと・・・。黒天に座す闇統べる王――ロード・ディアーチェ

ちゃん・・・？」

「そう、それです！」

聞き間違いやなかった。そう言えば初対面で、色彩が違う、なんて言うてたなぁ。もう少し早く気付くべきやった。リインフォースと一緒に射撃魔法の包囲陣を解除して、さらにキリエさんを拘束してるバインドも破棄。自由になったキリエさんは「どゆこと？」って小首を傾げる。

「あのですね・・・わたし、八神はやて、いいます。キリエさんの言う闇統べる王とはちゃいますよ。つまり、人違いです」

「・・・ヒトチガイ？」

「そういうわけなんだ。我が主である八神はやてと、君の言う闇統べる王は確かに似てはいるが、まったくの別人だ」

わたしらがそう言うと、「えっ？　じゃあ、本物のディアーチェちゃんは今どこに居るの！？　知っているなら、教えてほしいんだけど！　さっきの失礼は謝るから！」キリエさんがそんなに必死になってまで捜してる闇統べる王はもう・・・居らへん。

「3ヵ月ほど前になる。闇統べる王を含めたマテリアルと呼ばれる闇の書の闇の欠片たちが闇の書の復活を企んで出現した。しかしアレの復活は再びこの世界に災いを起こすことになるため、復活の阻止に乗り出した私たちは、マテリアル達を討伐した」

「だからもう、この世には居らへんのです」

「・・・・・」

「「・・・・・・・」」

しばらく固まってたキリエさんはようやく「うそん」そう一言発した。リインフォースが「すまないが、事実だ」と返す。キリエさんはもう一度「マジんこで？」って確認して来たから「マジんこです」わたしはそう返した。それにしても、ロード・ディアーチェ、なんてカッコええ名前持ってたんやなぁ、あのちょうイタい子。

「うっっっそぉぉぉーーーーん！　なんてこと！　なぁ～んてこと！？　それってつまり、わたしの偉大にして壮大、完全無欠の計画は、始まる前からすでにメチャクチャの駄案だったの！？」

どんな計画かは知らんけど、あの王さまを利用しようってゆうんやからあまり良うないと思う。ショックに打ちひしがれてるキリエさんをどうしようかと考えてるところで、『はやて、リインフォース！　こちらアリシア！』アリシアちゃんから通信が入った。

「こちら、はやてとリインフォース。ちょうどええところに。今な――」

アリシアちゃんに、キリエさんと邂逅から今までのことを伝える。と、『やっぱり、こっちで観測できた妙な反応の発信源はそのキリ

エとかいう人みたい』支部みたくなってるハラオウン家の方でもキリエさんが妙な存在やってゆうことを捉えてるみたいやった。

『とにかく任意同行でもいいからこっちに連れて来られないかな？
今、クロノやフェイト達、誰も居ないから頼めるのははやてしか居ないんだ・・・』

「任意同行って言われても・・・、わたし、まだ研修生の身やし、そんな権限とか・・・」

『そんなもの適当に誤魔化しちゃえばいいんだよ。緊急事態だし』

結構な無茶を言うてくれるアリシアちゃん。そやけど、緊急事態なのは確かで。あとで反省文（こうゆう場合は、始末書になるんやろか？）を書くことになる覚悟でキリエさんに声を掛けようとした時、

「っ！？」ゾワッと悪寒が奔った。

「この感じ・・・！」

「まさか、そのようなことがあるはずが・・・！」

空が震える。そんでこの気配。わたしらは知ってる。この邪悪な感じは「闇の書の欠片――マテリアル・・・！」のもので間違いない。確かにみんなで協力してマテリアルは全員打ち倒したはず。それから復活の兆しもなかったのに、どうして今になって・・・。

「ど～すればいいのよぉ～～～・・・！」

（キリエさんが現れたから、か？）

さらに振動が強まって、キリエさんも「え、なに？　何が起きてるの？」気付いたようや。

「キリエさん。お姉さんが捜してた王さまが来るよ」

「ホント！？　ね、ねえ、わたしのこと、紹介してほしいんだけど！」

「う～ん・・・、あの王さまに話が通じるかどうか判りませんので」

リインフォースのことを残骸とか酷いこと言うてた王さまに、話が通じるとは思えへん。まぁ、とにかく「リインフォース、要警戒や」って気を引き締め合う。そんでついに空にあの禍々しい魔力の奔流が発生したと思うたら・・・

「ふふふ、ふはははは、はぁーっはっはっはっはっはッ！！　怨嗟あれ、災禍あれ！　我は黒点に座す闇統べる王、ロード・ディアーチェ！　ここに復っ活！！」

あちゃあ、ホンマに出て来てもうた、王さま。お馬鹿さんみたく高笑いを上げる王さまに、わたしは溜息ひとつ吐いた。

Ｅｐｏｓ３８再臨／砕け得ぬ闇の使徒～ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＭＡＴＥＲＩＡＬＳ～

†††Ｓｉｄｅリインフォース†††

妙な事態になってしまったものだ。突如として現れた未知の魔力運用技術を有したキリエ・フローリアンという少女から"闇の書"に眠る"システムＵ－Ｄ"などという知らない物を寄越せと脅迫を受け、さらには３ヵ月前に全滅させたはずのマテリアルの１基、闇統べる王が復活してしまうとは。

「ふはははは、漲るこの力ぁぁッ！　溢れる魔力ぅぅッ！　震えるほど闇黒ぅぅッ！！」

「なんや、この前とは違ってはっちゃけてるなぁ～」

「あ、あれが闇統べる王、ロード・ディアーチェ・・・？　なんていうかお馬鹿さんぽ～い・・・」

「む？　なんだ、子鴉ではないか。それにその・・・融合騎。あとはなんだ、その頭の悪そうな頭の色をしたのは？」

闇統べる王ロード・ディアーチェが私たちに気付き、そしてその視線をキリエへ向けて失礼なことを言い放った。いきなり貶されたことで「そ、それって、わたしのこと！？　ていうか頭の悪そうな色って！」ショックを受けるキリエ。

「口の悪さはやっぱ相変わらずやったなぁ。アカンよ、そんな悪口なんか言うたら。メッ、やよ」

「王に説教とは、子鴉は相変わらず礼儀を弁えぬ。ふん、まあいい。・・・貴様らに問答無用で燃やされるなどという屈辱、ようやく晴らす時が来たようだな」

今度は私たちに視線を移し、漲る魔力と共に敵意を放ってきた。が、「あー、王さまにトドメ刺したんはわたしらやないんやけど」主はやてが受け流すかのように小さく挙手。ディアーチェは「トドメとかいうではない！　っく。では誰だ？　この我を焼き殺した不埒な輩は！？」よほど溜飲が下がらないのか、自身を撃破したテスタメント・ステア――その正体であるルシルの居所を探ろうとした。

「あー、それも無理やわ。ステアちゃんもまた王さま達みたく特別な欠片――マテリアルやったから」

「なに？　では何か、我は同胞に焼き殺されたとでも言うのか？」

「まぁ、そうゆうことになるなぁ」

「・・・・ええい！　すでに居らんのならばもうよい！　ならば貴様らだけにでも味わわせてやろうぞ！　生まれ変わることで手に入れた、闇統べる王の名に相応しき無敵・無敗の力をなッ！！」

ショックを受けていたディアーチェは気を取り直し、発し続けてい

た邪悪な魔力をさらに増加させた。まずい、明らかに以前より強大な力を手に入れている。すぐさま主はやてをお護りするために動こうとした時・・・

「跪けぇぇいッ！」

――王の威光――

「えっ？」「なっ？」

主はやてと私を同時に拘束した捕縛魔法。発生から拘束までの時間があまりに早く、対応に遅れてしまった。しかもかなり強度があり、破壊するには時間がかかりそうだ。満足そうに頷いているディアーチェに「これが、先ほど言っていたお前の新たな力か・・・？」と話しかける。

「その通り！　以前までの我と思わぬことだ。いま貴様らを捕らえている王の威光などまだ序の口よ！」

（ということは、他にも以前までには無かった魔法を会得していると考えるべきか。厄介な）

機嫌が良くなったそんなディアーチェに、「あのー、ちょっといいです？　王様、はじめまして。わたしは――」この状況で私たちの話に割り込んでくるキリエだったのだが、それがディアーチェにとって不愉快だったのか、「頭が高いわっ、ピンク頭！」と彼女にも捕縛魔法――王の威光を掛けた。

「遠近自在の高速バインド！」

ディアーチェの言葉が事実であるとすれば、序の口という王の威光ですらこれほどまでに厄介なのだ、他に得たという魔法は一体どれだけの脅威になるのか計り知れない。

「ふっはっはっはっ！　そのステアとかいう輩に我が闇の力での報復が出来ぬのは残念だが、それまでに我に与えた屈辱と苦痛を、今ここで百倍・・・いや、億倍、いやいや、千兆倍にして丸ごと返してくれるわぁぁぁーーーーッッ！」

――グラディウスレイン――

1人につき4本の剣がそれぞれの上空に展開された。拘束をされてはいるが魔力運用阻害の効果はないため、多少の無茶をすれば迎撃することが可能だろう。そしていざ迎撃を、と思ったところで「ちょぉーっと待ったぁぁーーッ！」どこからともなく少女の声が聞こえてきた。

「この声・・・！」

真っ先に反応したのはキリエ。そうして私たちの目の前に現れるのは声の持ち主である少女。服装や武装は色違いとは言え同じデザインである以上、キリエと何かしらの関係があると見ていい。

「なんだ、貴様は？　服装からしてそこのピンク頭の同類か何かか？」

「黒羽のお嬢さんと、銀髪の方！　不肖の妹が大変ご迷惑をおかけいたしました！　必ずや謝罪させますので、今はどうか私にこの場を任せて、下がっていてください！」

「うっそ！　やっぱりアミタ！　手を出さないで――っていうか、なんでそんなピンピンしてるの！？　ウィルスの効果は！？」

「ウィルス？　そんなもの、この胸に宿る情熱に燃えるエンジンの誇る気合いパワーでどうとでもなります！！」

「どんだけぇーーっ！　そんな馬鹿は風邪をひかないレベルの話じゃないんだけど！？」

姉妹ケンカとでも言うのか、アミタという少女とキリエが言い合いをしていると、「無視をするな！　妹も妹ながら姉もまた王に対して不敬だな！」ついにディアーチェが怒鳴り声を上げた。

「ああ、すいません！・・・貴方に恨みはありませんが、この世界の運命を護るため、エルトリアのギアーズ、アミティエ・フローリアン！　参ります！」

「話はサッパリと見えんが、良いんだろう、返り討ちにしてくれるわ！！」

――バルカンレイド――

――エルシニアダガーーー

アミティエの２挺の銃より発射される光弾と、ディアーチェの前面に展開されたミッド魔法陣より放たれる魔力弾が衝突し、互いの攻撃を相殺していく。しかし今のディアーチェはかなり強力だ。アミティエ単独で戦いきるのは難しいだろう。一刻も早くこの王の威光を破壊して、彼女と共闘しなければ。

「ほう、やるではないか！」

――アンスラシスドルヒ――

血色の短剣型の高速射撃を２０基と発射するが、アミタはその鋭い機動力を以って回避しながら「ロックオン！」捕縛魔法？を発動、ディアーチェを捕らえようとする。だがディアーチェも「王を捕縛しようとは、無礼者め！」ヒラヒラと舞って躱す。そういったお互いに決定打を与えられないジリ貧な戦いへと突入。

しかしそれも・・・終わる。ようやくディアーチェの王の威光を破壊することに成功。まずは「主はやて、もうしばらくのご辛抱を！」主はやてをお助けする前にディアーチェへと向けて、「ナイトメア！」砲撃を発射する。それでアミティエに接近を試みていたディアーチェの動きを潰す。

「チッ。ポンコツ融合騎め、水を差す出ない！」

「ポンコ――、こらぁっ、王さま！　またリインフォースのことをそんな風に悪く言うて！　許さへんよ！」

「知ったことか！　事実であろうが！」

主はやてがまた私のことを貶すディアーチェに怒りをぶつけ、それを真っ向から受ける王。とそんな時、「チャンス・・・！　ロックオン！」アミティエの捕縛魔法？がディアーチェを捕らえた。

「おのれ子鴉！　貴様が余計な口を挟んだ所為で！」

「ええええ、わたしの所為ちゃうやろ？　明らかに王さまの油断やんか」

「ええい、口答えするでない！」

私は主はやてに掛けられた王の威光の破壊を、ディアーチェは自らアミティエの捕縛魔法を破壊しようとしたが、それよりも早く「アクセラレイターー！」アミティエが瞬間移動というほどの速さで王の元へ最接近した。

「む！？」

「ヘヴィエッジ！」

アミティエの振るう片刃剣が降り上げられる。が、それより早くディアーチェは捕縛魔法を破壊、"エルシニアクロイツ"で斬撃を受け止め、間髪入れずに「インフェルノ！」と、私のハウリングスフィア並の大きさを誇る魔力弾複数をアミティエへ向かって降らせた。

「っく・・・！」

「ほう、今の一撃を耐え凌ぐか、やるではないか熱血女！」

やはり私の知る魔法ではない別の技術を扱うアミティエ。彼女の展開したシールドがディアーチェの攻撃を防ぎきった。しかし「はぁはぁはぁ・・・！」ダメージは入っていないはずにも拘らず、アミティエは肩で息を始めた。

「なによ、やっぱりウィルスの影響が思いっきり出て今にもぶっ倒れそうじゃない！」

「こ、こんなもの・・・どうってこと・・・ありません！」

――アクセラレイターーーー

「「「「っ！？」」」」

アミティエの姿が掻き消える。速い。オーディンの空戦形態コード・ヘルモーズ程ではないが、フェイトのソニックムーブ以上の速度は出ている。その最中での銃撃。さすがのディアーチェも半ば奇襲のような立ち回りに「うぐぅっ！」直撃を受けてしまう。

「E・O・D・・・行きます！！」

「ぬお！？」

さらに連続で斬撃を受けたディアーチェが苦悶の声を上げる。第三者として見るから判る、アミティエの速度と彼女が行おうとしている技。ディアーチェの周囲に光弾が無数に展開されていく。正に目にも留まらぬ速さでディアーチェを包囲していく。

「シュート・・・エンドォォッ！！」

――エクス・オービット・ディバージョン――

ディアーチェを包囲していた光弾十数発が一斉に射出され、王を全方位から襲撃。先に受けた銃撃や斬撃が堪えたのかディアーチェはまともに防御することもなく全弾をその身に受け、爆発に呑み込まれた。

「アミティエさん、すご・・・。王さまを独りで倒してもうた・・・」

「ええ。具合が優れない中でのあの技の冴え、驚嘆に値します」

とここでようやく主はやてを捕らえていたディアーチェの王の威光を破壊することが出来た。すると主はやては「油断はせえへんようにしよ。いつでもユニゾンできるようにな」と小声で仰った。私は「はい」と首肯し、晴れ始めた黒煙を真っ直ぐに見つめる。そしてアミティエとディアーチェの姿を視界に収めた。

「おのれ・・・！　やはり目覚めたばかりでは、魔力が足りんのか

・・・！？　以前なればこの程度の攻撃、難なく受け切れたであろうに・・・！　しかもなんだ、先程から力が急激に何かに奪われていくかのような、この喪失感は・・・？」

まったくの無傷とはいかなかったようだがそれでも五体満足であるディアーチェ。対するアミティエはウィルス云々の影響か今にも墜落しそうな弱々しさだ。しかしディアーチェの様子があれならば、今の私たちでも確実に打ち倒せるはず。

「リインフォース、ユニゾンいけるな」

「もちろんです」

「んなっ！？　待て、貴様ら！　苦境に陥っている我を相手に、貴様らは融合し、容赦なく攻撃を仕掛けるというのかッ！？」

ディアーチェが怒鳴り声を上げて非難をしてくる。主はやては「えっと、ごめんな？」と両手を合わせ、小首を傾げながら謝る。そして私も「すまないね。まずは無力化をさせてもらうよ。話を聞くのはその後にしよう」とそう続ける。

「鬼か！　貴様らは鬼か！？　我よりよっぽど黒いではないか！」

若干涙目になっているようにも見えるディアーチェ。キリエが「ちょっと待って、倒されちゃ困るの！」そう言って制止を掛けてくるが、彼女の姉アミティエが「あなたは少し大人しくしてなさい！」とキリエに銃口を向けた。だが、ここで新たな問題が発生すること

となった。それは・・・

「待ぁてぇぇぇーーーーいっ！」

「「「「ぅく・・・！？」」」」

強烈な魔力の衝撃波が私たちを襲った。崩された体勢を整えてすぐ、複数の人影が視界に収まる。ディアーチェの援軍――他のマテリアルが複数基、同時に再起動したのだ。ディアーチェの側に現れた４基のマテリアル達。なのは、フェイト、アリサ、すずかの姿と似通ったあの子たちが今この状況で現れたのは戦力的に見て最悪だ。

「わぁーっはっはっはっはっ！　王様だけが復活して、僕らが復活しないなんて道理はないッ！」

フェイトと似通った構築体――"力"のマテリアルが言い放つ。

「こうしてこの姿でお目に掛かるのは初めてですね、ロード・ディアーチェ」

なのはと似通った構築体――"理"のマテリアルがディアーチェへと挨拶をする。

「というよりは、私たちそれぞれがこのように邂逅するのも初めてですわね」

すずかと似通った構築体――"律"のマテリアルがそう言いつつ、他のマテリアルを見回す。

「陛下、お初であります！」

アリサに似通った構築体――"義"のマテリアルが、なんとディアーチェの足首に手を掛けてぶら下がりながら敬礼をした。ディアーチェはそんな"義"のマテリアルに向かって「貴様、何処を掴んでぶら下がっておるか！　離せ、無礼者！」怒鳴る。

「申し訳ないであります！　自分、空を飛べないので、手を離すと真っ逆さまに墜落するのであります！」

「知ったことか、たわけ！　重いわ！」

「うぅ、仕方がないのでありますな」

"義"のマテリアルは渋々と言った風に自らの足元に魔法陣の足場を創りだし、そこに着地した。初めからそうしていれば、ディアーチェに怒鳴られずに済んでいたのかもしれないのにね。

「ふん。・・・しかし壮観だな。よく我が下に集ってくれた！理（シュテル）、力（レヴィ）、律（アイル）、義（フラム）！！」

「・・・ああ、シュテルとは、そう言えば私の名でしたね。忘却していました」

「レヴィ！　よく覚えてないけど、その名前すっごくカッコいいからいいや！」

「アイル・・・、我が名前ながら惚れ惚れするほどに美しい名前ですわね」

「フラム！　燃える私には相応しい名前でありますな！」

ディアーチェのみならず他のマテリアルにも個体名があったようだ。主はやてが「なんや一気に個性が出始めたな」と呟いた。するとディアーチェが「どうだ、見たか、子鴉、ポンコツ融合騎！　貴様らの鬼畜の所業など、もう恐るるに足りぬ！」と安堵したように大声で言い放ってきた。

「闇統べる王ロード・ディアーチェ！　星光の殲滅者シュテル・ザ・デストラクター！　雷刃の襲撃者レヴィ・ザ・スラッシャー！　氷災の征服者アイル・ザ・フィアブリンガー！　炎壊の報復者フラム・ザ・リヴェンジャー！　王と王下四騎士！　ここに一堂に集結した事で、我の力も満ちて・・・満ちて・・・いや、待て」

先程までの興奮が急に冷めたディアーチェが少し考える仕草を取ったかと思えば、ジロリと他マテリアルを睨め付けた。

「どしたの、王様？」

「陛下、何か私たちに至らぬところがあったでありますか？」

「いま気付いたのだが・・・おい、貴様ら・・・実体化するにあたって、ここらの魔力やシステムの共有リソースを、ただ食うだけならまだしも意地汚く適当に食い荒しおったな・・・？」

「うんっ！」

「美味しく頂きました」

「ごちそうさまですわ」

「みんなで仲良く分けて頂いたであります」

順々に答えていくマテリアルの話を聞いたディアーチェは俯き加減で肩を震わせ「至らぬところがあったか？だと・・・、たわけ！それが先程、我が窮地に陥った理由であろう！？」くわっと険しい表情で怒鳴った。

「へ？　そうなの？　シュテル、アイル、フラム」

「そうなりますか」

「そうなりますわね」

「そういうことでありますな」

「阿呆か、貴様らぁぁぁぁーーーーッッ！！　復活するにしても時

と場所と場合、ＴＰＯを弁えんかッ！！　貴様らの所為で危うく我は下種の極みの犠牲になるところだったのだぞ！！」

怒鳴りっぱなしのディアーチェに同情を抱いた事は胸の奥にしまい、

「鬼畜の所業とか下種の極みとか、酷い言われようやなぁ・・・」

主はやての呟きに「そうですね」と首肯しておく。先程まで抱いていた緊張感が失われていきつつある現状に僅かばかりの隙が生まれてしまった。

「そ、そんなことを言われても僕、知らないよー！」

「わざとではありませんわよ、王」

「そうであります。何かに呼ばれた気がしたのでありますよ」

「ええ。まるで無理矢理に、我々の時を早送りにされたかのように」

その気の緩みを生んでしまったことを後悔することになろうとは。まず「きゃあああっ！？」側にいる主はやての悲鳴が聞こえた。ハッとそちらへ顔を向け、主はやてが右腕を押さえていたのを見た瞬間、「っく・・・！」背中に走る痛み。さらに続けて私と主はやてを一纏めにするように、やはり魔法とは違う力で創られた捕縛輪が掛けられた。

「キリエ、あなた・・・なんてことを・・・！」

もうまともに動けないのか魔法陣のような足場の上にへたり込んで

いるうえ、私たちと同じように拘束されたアミティエの非難の声に「ごめんなさいね、黒羽のお嬢ちゃんと管制プログラムのお姉さん。ちょこーっと斬らせてもらっちゃった」

私と主はやてに攻撃を加えたのはキリエだった。ペロッと舌を小さく出して軽い口調で謝るキリエに「ちょっとって、なんで斬るんですか！？」主はやても非難の声を上げ、私も視線を送った。しかしキリエの視界の中に私たちは映り込んでいない。彼女の意識はディアーチェを筆頭としたマテリアルへ向けられていた。

「ねえ、王様？　ほんのちょっとだけでいいんだけどぉ、わたしのお話を聞いてみない？　耳よりの情報なんだけど」

「聞く耳など持たぬ。早々に我らが前より失せるがよい。下郎と言葉を交わす口は持ち合わせておらんからな」

「んふふ♪　じゃあそれがシステムU－D――王様たちが目指す砕け得ぬ闇の事だとしてもですか？」

「砕け得ぬ闇・・・」

「それって僕らがずっと探してた・・・」

「大いなる力のことでありますな・・・」

「何故あなたのような部外者が知っているのかしら？」

「ねえねえ！　ひょっとしてキミ、砕け得ぬ闇の目覚めさせた方とか知ってたりするの！？」

「それは素晴らしいでありますな！　陛下、この者の話を聴きましょう！」

「よさぬかレヴィ、フラム！　こんな得体の知れぬ下郎から聞く話など何もないわ！」

「お待ちを、ディアーチェ。話だけは聞きましょう」

「そうですわね。得体の知れないのは同感ですわ。ですが、聞くだけであれば無料ですわ」

「ほーら、他のみんなは聴きたそうにしてますけど？　どうします？」

「・・・よかろう。臣下の声を聴くのも王の務めだ。許す、話すといい。しかし手短にな」

キリエとマテリアル達の会話の間に捕獲輪の破壊を試みるのだが、魔法とは別の運用技術ということもあってなかなか破壊プログラムを割り込ませることが出来ない。いや、それより「お怪我の方はどうですか？　主はやて」私が守るべきだった主の身に傷を付けられた。不覚を取るにも限度がある。

「わたしは平気やよ。確かにほんのちょっとしか斬られへんかったから。そやけど、まずいことになってしもたな」

「はい。異世界からの渡航者に加え、以前より強大な力を手に入れているディアーチェ。おそらく他のマテリアルも何かしらの進化をしているでしょう」

「これはもうわたしらだけや解決できひんなぁ・・・」

溜息を吐く主はやて。私が気に病まないようにフォローをしようとしたところで、「――では、場所を変えましょう。我々の本拠地とする場所の目星はつけてありますので」シュテルがこの場から去ろうという発言をした。

「おお！　さっすがシュテるん！」

「やるでありますな、シュテるん！」

「やりますわね、さすが理を司るマテリアル・シュテるんですわ」

「えっへん。・・・・待ってください。ん、を付けるのは決定なのですか？」

「ふむ。褒めて遣わすぞ、シュテル。・・・さて場所を変える前に・・・。はぁーはっはっはっは！　我らがこうして復活したからには、子鴉、ポンコツ、貴様らはもう終わりよ！　我らの力が整い次第、忌々しい守護騎士や、チビ魔導師共もひとり残らず食らい尽くしてやるから、首を洗って待っておれ！！」

「待ってろー！」

「というわけで、近いうちに改めて、皆様にご挨拶にお伺いしますので。今日はこれにて失礼します」

「アリサという炎熱の魔導師に、前回の屈辱を必ず晴らす、と伝えてくださいな」

「守護騎士は、この炎壊の報復者――フラム・ザ・リヴェンジャーが討つであります！　特に紅の鉄騎を確実に、でありますから、言伝のほどよろしくであります！」

「あ、僕はね、オリジナルに伝言を頼もうっと！　次は絶対に僕が勝つ、って言っておいて！」

「そんじゃ、アミタもバイバーイ♪　もう追って来ないでね～　」

そうしてマテリアル達とキリエはどこかへと飛び去って行ってしまった。残された私たちはそれをただ見送るしかなく。

「キリエ・・・！　あの子は本当にもう！　うちの妹が大変ご迷惑をおかけしました！」

キリエの捕獲輪をいち早く破壊したアミティエが私たちに深々と頭を下げた。そして「お２人を捕らえているソレはすぐに解けますから、今しばらくお待ちください」そう言ってマテリアル達を追おうとするアミティエに、「ちょう待ってください！」主はやてが呼び

止める。

「必ずお2人に謝らせますので！　では、私はこれで！」

「ちょっ、あー、アミティエさんも行ってしもた。あんなに辛そうやったのに、めっちゃ速い・・・」

しかし話を聞く暇すらなくアミティエもまた飛び去って行ってしまった。それとほぼ同時に捕獲輪が消滅し、私たちは拘束から解放された。

「はぁ。・・・アミティエさんとキリエさんのこともやけど、マテリアル達が復活したとなると、また対処せなアカンな」

「はい。ですが・・・」

「うん。クロノ君やシグナム達は結構遠い世界に出張中や。たぶん、この一件の助けになってくれるんはすずかちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃん、シャルちゃん・・・かな」

主はやてが挙げたメンバーの中に「ルシルはどうでしょう？」私たちという戦力の中で最強の二文字を有するに相応しい少年の名前を加える。ルシルはルシルで主はやての研修が休みの際、様々な研修を受けているようだが、これほどの緊急事態ならば戻って来てくれるはず。

「それは・・・」

『可能だよ、はやて！』

私たちの目の前に展開されたモニターに、フェイトの姉であるアリシアが映し出された。

『さっきまでのマテリアル達とのやり取りはこっちでもモニターしてたよ。緊急事態ってことで、出張中なクロノ達に連絡を取って戻って来てもらうことになったから。マテリアル達の反応を捉え次第、現場に向かってもらえるようにしたからもう大丈夫！』

「おお、仕事が早いなぁ、アリシアちゃん！」

『えっへん！　わたしだってやれることがあるんだったらなんだってやるよ！　とりあえずはやて達はハラオウン家に来て。怪我の程度とか見ておきたいし、今すずかを呼び寄せるから。待ってるからね』

「了解や。・・・さてと。治療の後は、リインフォースにはおうちでゆっくりしててもらいたいんやけど・・・」

まさかの留守番要員にされるとは。だが「いいえ、どうか、私も共に」と側に居られるようにお願いする。すると「・・・ん、判った。その代わり、わたしの側を離れんといてな」と思いの外簡単に許可をくれた。

「感謝します」

こうして私たちは復活したマテリアル達、そして異世界からの渡航者であるアミティエとキリエ、フローリアン姉妹の捜索へと乗り出すこととなった。

Ｅｐｏｓ３９奇跡の邂逅／古き王の血族～Ｌｙｒｉｃａｌ　Ｖｉｖｉｄ～

マテリアル達が復活して数時間後、日も暮れたことで海鳴の街は夜天に包まれている。暗き夜天に煌く星々と月の明かり、そして地上に乱立している建造物群が放つ人工的な明かりが交差する中空に、突如として人影が２つと現れた。と思えば２人はひゅ～んと落下を始めた。

「ふぇ？・・・へ？　え？　え、えええええ～～～～っ！！？？」

ひとりは１０歳ほどの少女。金色のロングヘアで、頭部両サイドに小さなテールを作ったツーサイドアップ。瞳は紅と翠の虹彩異色。服装はどこかの学校の制服らしきものだ。そんな彼女の側にはウサギのぬいぐるみが寄り添っている。

「こ、ここは・・・上空ですか・・・！？」

もうひとりは金髪の少女より僅かに年上のような少女。碧銀の長髪をツインテールにしていて、左側のみ大きなリボンを付けている。瞳は紺と蒼の虹彩異色。そして彼女もまたどこかの学校の制服らしきもの着用しており、そんな彼女の側には仔虎とも捉えることが出来る、仔猫のぬいぐるみが、必死に彼女の肩に捕まっていた。

「うっそぉ～！？　なにこれ！？　夢！？　空から落っこちる夢の意味は、えっと・・・」

「ヴィヴィオさん！　おそらくこれは夢ではなく現実です・・・！」

「アインハルトさん！？　わわ、クリス！　浮遊制御！　わたしとアインハルトさんに落下防止ぃぃ～～～っ！」

「ティオ、クリスさんの手伝いを！」

金髪の少女の名はヴィヴィオ、碧銀の髪の少女の名はアインハルトというらしい。そしてヴィヴィオに、クリス、と呼ばれたウサギのぬいぐるみはビシッと敬礼をし、アインハルトに、ティオ、と呼ばれた仔猫が「にゃっ！」と力強く一鳴きすると、彼女たちの落下が止まった。

「は、はぁぁぁ～～～、止まったぁ・・・」

「これは一体、どういうことなのでしょう・・・？　ヴィヴィオさん、何か心当たりありますか？」

安堵の息を深く吐き出していたヴィヴィオ。そんな彼女にそう訊ねたアインハルトに対し、「いえ、全く持って判らないです」と首をフルフルと横に小さく振って答えたヴィヴィオ。アインハルトは「とにかく状況の整理ですね」と、混乱しているヴィヴィオに優しく語りかけた。

「は、はい。えっと、わたしとアインハルトさんはついさっき学校が終わって・・・」

「はい。リオさんとコロナさんと一度お別れし、そしていつもの練習場へと向かおうとした時・・・」

「いきなり空がピカッて光ったと思ったら・・・」

「突然このような場所に転移されてしまって・・・」

「アインハルトさんと一緒にふわふわと空に浮いてる・・・と」

そこまで話し合ったあと、「整理してもやっぱり意味が解らないですぅぅーーーっ！」ヴィヴィオは文字通り頭を抱えて叫んだ。おそらく誰とてそうだろう。学校終わりに次の目的地へ向かう中、気が付けばどことも知らぬ空の上に飛ばされたのだから。混乱するのもおかしくはない。

「ま、まずは落ち着いて、冷静になりましょう。まずは、ここがどの辺りなのかを知りましょう。状況整理です。ここに飛ばされる前の時間帯は昼間でした」

「あぅぅ、アインハルトさんが一緒に居てくれて助かりましたぁぁ・・・。確かに午前で授業が終わったので、お昼過ぎでした。でもここは・・・夜、ですよね」

「街並みからしてミッド中央区――クラナガンではありませんね。

郊外には似たような街並みが有ったような気もしますが、ですが少し違うような・・・。別世界なのでしょうか・・・？」

「別世界・・・。あれ？　ちょっと待って。この風景、うそ、まさかそんな・・・」

アインハルトの別世界という発言を聞いたヴィヴィオがハッとする。そんな彼女を見て「何か心当たりがありましたか？　ヴィヴィオさん」アインハルトは希望が見えたと僅かに安堵する。ヴィヴィオの側に浮遊するクリスがわたわたと両手を振る。クリスにもここがどこか判ったようだ。

「うん、間違いないです。ここ、なのはママやアリサさん、すずかさん、はやてさんの生まれ故郷、海鳴市！！」

ここがどこなのかを理解したヴィヴィオが驚愕に叫ぶ。そんな彼女のフルネームは、高町ヴィヴィオ。将来、高町なのはの義理の娘となる少女だった。

「確か、管理外世界の９７番、地球の島国に有る地名でしたね。ですが何故、こんな遠くにまで飛ばされたのでしょう？　対象に気付かれずに一瞬でミッドから地球まで転送できるような魔法や技術などあるとは思えませんが・・・」

「そうですね。でも、もう大丈夫ですよ、アインハルトさん！　海鳴市なら知り合いも居ますし、何よりママのお友達のお家には、ミッド直通のゲートがありますからすぐに帰れます！」

「そうですか。それは良かったです。それではまずは、人目の付かないところで地上へ降りないといけませんね」

帰宅方法の目途が立ったヴィヴィオとアインハルトはようやく完全に気を緩めることが出来、僅かなりに笑みを零した。しかしその気の緩みもすぐに止まることとなる。クリスが急にわたわたと何かを報せるように腕を振り、ティオもまた「にゃあ、にゃあ！」と緊急を報せるかのように鳴き始めた。

「大きな魔力反応の接近警告・・・！」

「え、そんなはずは・・・！　今の海鳴市に、魔導師は常駐していないはずですよ。一体誰が・・・！？」

クリスとティオが報せたのは、強大な魔力を有した魔導師の接近を捉えたというものだった。その正体は不明。ゆえにアインハルトは「ヴィヴィオさん。念のために」と何かを行うような発言し、ヴィヴィオはそれに「はいっ！」と強く頷き返した。

「セイクリッド・ハート！」

「アスティオン！」

クリス――セイクリッド・ハートという正式名称を呼んだヴィヴィオと、ティオ――アスティオンと呼んだアインハルトの２人が「セットアップ！」変身のキーワードを告げた。光に包まれてその

姿を一瞬消した２人が次にその姿を見せた時、外見がガラリと変わっていた。
共に１０代後半ほどにまで背が高くなり、服装も動き易さを重点に置いたような防護服姿へと変わっていた。クリスとティオは自律型のデバイスであり、ヴィヴィオとアインハルトそれぞれの大切なパートナーだった。

「準備完了ですっ♪」

「それではヴィヴィオさん。気を付けて参りましょう」

「はいっ！　アインハルトさんもお気を付けて！」

正体不明の魔導師と下手をすれば戦闘になると判断したヴィヴィオとアインハルトは変身をし、そして二手に分かれて離脱することを選択した。

†††Ｓｉｄｅなのは†††

フェイトちゃんやアルフさんと一緒に、アリサちゃんやシャルちゃん、ユーノ君を誘って本局のレストラン街でお昼ご飯を一緒に食べようとしていた時、海鳴市のアリシアちゃんから緊急通信が入った。一体何事かと思えば、なんと"闇の書"の闇の欠片――マテリアルが復活したっていうとんでもないお話だった。
はやてちゃんとリインフォースさん、アミティエ・フローリアンさんとキリエ・フローリアンさんっていう異世界からの渡航者さんと、そしてマテリアル達のやり取りを映像で見せてもらった。キリエさ

んやマテリアル達が追い求める"砕け得ぬ闇・システムＵ－Ｄ"というのがなんなのか判らないけど、放っておけるようなレベルじゃないから、私たちは分担して捜索することにした。

「――ここに、アミティエさんの反応があるって話だったけど・・・」

「うん。でもまさか未だに海鳴市に居るなんてね」

「アミティエさん、今度はちゃんとお話を聞かせてもらわないと」

私とシャルちゃんとすずかちゃんは、アミティエ・フローリアンさんの捜索チームとして、鋭意捜索中。ちなみにキリエさん捜索チームはアリサちゃん、フェイトちゃん、アルフさんで、マテリアル捜索チームははやてちゃんとリインフォースさん、あとでルシル君が合流予定。

「シャルちゃん、大丈夫？」

「もっとゆっくり飛ぼうか・・・？」

「なんとか大丈夫だから。ルビーン・フリューゲルの扱いも慣れてきたし、気にしないで」

シャルちゃんの背中からはルビーン・フリューゲルっていう魔力で出来た真紅の翼が展開されている。これまでに見た物とは違ってサイズが一回りほど小さい。最近教えてもらった弧とだと、ナハトヴ

ァールやルミナさんとの戦いの時にルビーン・フリューゲルを発動させたのは、シャルちゃんのご先祖であり、なんと前世だっていうシャルロッテさん本人とのこと。つまり、シャルちゃんの心の中に、シャルロッテさんの人格がある。最初は驚いたけど、でもなんか納得も出来た。直感的に、シャルちゃんとシャルロッテさんの雰囲気が違うことに気付いていたからかも知れない。

「ん？・・・転移反応・・・？」

「でもこれ、普通の反応じゃない・・・！」

「海鳴の街のど真ん中で一体何をしようっていうの！？」

突如捉えることが出来た妙な転移反応。私たちはその反応が発生した地点へ向かって進路を変更。とその途中で、「新たな反応！　これもまた妙な・・・！」シャルちゃんの言う通りまた別の地点から転移反応が生まれた。う～ん、２か所同時はちょっと無理かも。

「どうしようか・・・？」

「わたしが行くよ。なのはとすずかはそのまま進んで。２人ともわたしより速いから、わたしが居るとやっぱどうしても飛行速度が緩くなるでしょ？」

「そんなことないよ、シャルちゃん」

「ううん、すずか。いいんだよ。・・・行って、なのは、すずか。

こっちはわたしに任せなさい♪」

シャルちゃんがニコッて笑みを浮かべた。私とすずかちゃんを顔を見合わせて頷いた。私は「シャルちゃん、お願い！」ってシャルちゃんと拳を突き合わせて、すずかちゃんも「気を付けてね」シャルちゃんと拳を突き合わせた。

「ん、了解！　なのはとすずかも気を付けて。前回以上に厄介事になるだろうから」

そう言ってシャルちゃんは、私とすずかちゃんの飛行ルートから外れて別の転移反応の発信点へと飛び去って行った。大丈夫、シャルちゃんは強い。だから安心して先へ進める。すずかちゃんと一緒に速度を上げて、海鳴の街の上空をひたすらに翔ける。

「あ、二手に分かれた・・・！」

転移反応のあった地点には魔力反応が2つ残っていたんだけど、それらが二手に分かれて別々の方へ進んで行くのを察知できた。これはまた「こっちも分かれないとダメ・・・？」かな。

「うん、みたい。・・・それじゃあ、なのはちゃんはそっちをお願い。私はこっちの反応を追うから」

「すずかちゃん。気を付けてね」

「ありがとう。なのはちゃんも気を付けてね。シャルちゃんも言っ

ていたけど、この前の闇の書の欠片事件以上に複雑な状況みたいだから」

すずかちゃんとも拳をコツンと突き合わせてから一度分かれる。すずかちゃんは大きく分ければ補助型の魔導師。相手が戦闘魔導師や騎士だった場合はちょっと不安だったりもする。でも「今の時間は・・・２０時５７分」時間がすずかちゃんの味方をしてくれているのが判って、その不安も消えた。

「よし。私たちも急いで向かおう、レイジングハート！」

≪はい、マスター≫

私も離れて行く反応を追って飛行速度を上げる。そしてようやく「あの、止まってください！」反応を示していた人を視界に収めた。後ろ姿で見て判っていたけど、その人は女性だった。歳は１０代後半くらいかな。とても綺麗な髪と、ルシル君と同じで左右で色の違う瞳をしていた。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒？？？？†††

どういう理由かなどは一切判りませんが、ミッドからヴィヴィオさんのお母様やそのご友人方の生まれ故郷である第９７管理外世界・地球は日本、海鳴市へと気付く間もなく転移していました。
ここがどこか、というのを知り得ていたヴィヴィオさんと一緒に転移されたことがせめてもの幸運で救いでした。ヴィヴィオさんが居らず、私ひとりだけがこの事故？に見舞われていたと思うと、途方

に暮れるのはまず間違いなかったでしょうから。

（しかし、その安心も束の間でした）

ヴィヴィオさんのお話しでは現在、海鳴市には魔導師は常駐していないとのこと。それなのに私とヴィヴィオさんの元へと強大な魔力反応が接近しつつある。警戒するために私たちは変身をし、分散して接近を試みている魔導師から退くことにしましたが・・・。

（速い！・・・私の速度では逃げ切れない・・・！）

よほどの空戦魔導師なのか、飛行魔法においては素人とも言える私の速度では逃げ切るのは不可能。ゆえに「「あの、止まってください！」追いつかれてしまった。ですがあまりに予想外な幼い女の子の声に、私は僅かばかり気を緩めてしまったのですが・・・

「っ！！？　ヴィヴィオさんのお母様・・・！？」

振り向いて、私を追翔してきたのがなんとヴィヴィオさんのお母様――高町なのはさんだったこともあって、その緩みはすぐさま緊張へと変化。あと、どういう理由なのかは解りません、子供の姿をお取りになっていらっしゃるヴィヴィオさんのお母様は、「？？？」きょろきょろと辺りを見回すばかり。

（あの反応、他に誰かいるのかな？というような・・・。ご自分のことだとは微塵とも思っていらっしゃらない・・・！）

ヴィヴィオさんのお母様のお体をよく見れば、あの子供の姿は変身魔法によるものではない、正真正銘外見通りの子供のお体であることがなんとなく感じることが出来る。では、他人の空似・・・にしては防護服や手にしていらっしゃるデバイス――"レイジングハート"は正にヴィヴィオさんのお母様のもの。

「こちら時空管理局、高町なのはです。少しお時間を頂いてもよろしいですか？」

「は、はい、構いません・・・（やはりご本人！　これは一体どういう・・・！？）」

いよいよ混乱極まって来ました。いえ、これはもしかしてサプライズ、ドッキリというものなのでしょうか。私とヴィヴィオさんを驚かせようという。でも何故。その理由がサッパリ判らない。

「あの、地元の方ではありませんよね？　管理世界の方でしょうか・・・？」

「その、はい、ミッドチルダから、です」

「そうですか。ここは管理外世界となっています。渡航許可証はお持ちですか？」

管理外世界に入るためには管理局から入界の許可証が必要になってくる。これが無くては違法渡航として重い罪に課せられてしまう。ですが残念なことに「持っていません。どうしてこの世界に来て、

どうやって来たのかも判らない状態なのです」そもそも普段から持ち歩くような代物ではない許可証ですから、仕方のないことなのですが。

「それは、お困りですよね。では、あちらで詳しいお話をお聞かせください。なんらかのトラブルでの転移なら、事情さえ分かれば罪には問われないですから、安心してください」

ヴィヴィオさんのお母様の笑顔は私の知っている、あの優しく温かなもの。ドッキリではないようです。本当にこちらの身を案じてくれているのがその笑顔で判るのですから。

『あの、アインハルトさん！　大変です、すっごいトラブルに巻き込まれちゃってます、わたし達！』

ヴィヴィオさんのお母様の誘導に素直に従うべきか時間を稼ぐべきかと悩んでいた所に、ヴィヴィオさんから思念通話が。私も『実は私もです。今、ヴィヴィオさんのお母様とお会いして！　でも様子が変でして！』ありのままを伝えようとはしますが、少し混乱もしているようで・・・。

『えええ！？　なのはママとですか！？　あの、こっちはすずかさんとなんですが、おかしな事に子供なんです！』

『わ、私もそうです！　ヴィヴィオさんのお母様は、ヴィヴィオさんより年下と思えるような背格好で！』

サプライズでもなくドッキリでもない、それなのに子供の姿でいらっしゃるヴィヴィオさんのお母様とすずか技術主任。これはもしや、とある推測が生まれた。そしてその推測は正しい物だとすぐに判ることに。

『どうやら今わたし達が居るのは、新暦６６年の３月！　１３年前の海鳴市らしいんです！』

（やはり時間移動！　それこそ破格の技術！　数ある技術者が挑んでは敗れ去った・・・！）

ヴィヴィオさん達とお付き合いすることで、それまで何の興味もなかった知識を得る機会が増えた。その中で得た時間移動という技術。ですがそれはやはり夢物語という結論が出たモノ。それなのにまさか実際に起こり得るなんて思いもしなかった。しかも体験者が私やヴィヴィオさんなんて。

『あの、ですから未来から来たわたし達が、過去に何かしらの影響を起こしちゃうと未来が変わるとかなんとかって危険がありますから、ここは出来るだけ過去に関わらないようにしないといけないので・・・だから逃げましょう・・・！』

『はい、判りました！　まずは逃げることを最優先。あとで合流しましょう！』

『はい！　あのアインハルトさん、お気を付けて！　この時代のなのはママ、すでにエース級だったらしいですから！』

『ヴィヴィオさんもお気を付けて！』

思念通話が切れる。相手は最高位の砲撃魔導師、高町なのはさん。子供だからという甘い考えは捨てましょう。ヴィヴィオさんのお母様の「あのー、よろしいですか・・・？」少し困っているようなお声。困らせたくはないのですが、それはお互いに良いお話し。ですから・・・

「申し訳ありません。事情がありまして、その、失礼させていただきます！」

「あの、ダメですよ！　お話ししてくれないと、本当に罪になっちゃいますよ！」

全力で逃げる。背後からはそんな恐ろしいことを仰るヴィヴィオさんのお母様のお声が。この時代で犯した罪は未来ではどうなるのか、それが不安で堪らない。と、目の前を通り過ぎる美しい色をした魔力弾。思わず急停止。

「すみません、威嚇射撃をさせていただきました」

あまりに正確無比。私の飛行軌道と速度を考え、尚且つ当たらないように目前で交差させる技術。その才能が恐ろしいです、ヴィヴィオさんのお母様。

「あの、本当に申し訳ないのですが、こちらの事情をお話しするわ

けには参りません！」

「えっと、このままだと公務執行妨害になっちゃいますよ？」

「っ！　そ、それでも無理なんですぅーー！」

公務執行妨害というハッキリとした罪状を叩きつけられて心が折れそうになる。それでも耐えて再び撤退を・・と思ってもすでに「お願いですから逃げないでくださーい」魔力弾数基が私を包囲して逃げ道を封鎖していた。

（こうなれば仕方がありません、ね）

撤退の意志を見せるように動いて見せると、私を包囲していた魔力弾が放たれてきた。それを「旋衝破！」射撃魔法を反射・吸収放射もせず、弾殻を壊さずに受け止めて投げ返す、覇王流の技を繰り出す。

「ふええ！？」

――ラウンドシールド――

可愛らしいお声で驚愕なさるヴィヴィオさんのお母様はそれでも障壁を張ってしっかりと防御。続けて「空破断！」手の平から押し出すように衝撃波を放つ。すかさず接近を試みる。この時代のヴィヴィオさんのお母様なら、体格差で私の覇王流も通用するはず。

空破断を躱したヴィヴィオさんのお母様の「もう、ちゃんと言うこ

とを聞いてください！」砲撃を横移動することで紙一重で回避。そのまま接近し、「申し訳ありません！」と謝罪。足元から練り上げた力を検束に乗せて打ち出す、覇王流の断空と呼ばれる技術を利用した一撃・・・・

「覇王・・・断っ、空っ、拳ッ！！」

を繰り出す。威力は抑えてありますからヴィヴィオさんのお母様も墜落するようなことにはならないはず。ヴィヴィオさんのお母様が「プロテクション！」新たに展開した障壁に私の拳が拒まれ・・・ることはありません。障壁を破壊・突破。あと僅かで当たる、というところで「っ！？」横から４基の魔力弾が連続で私の腕に直撃。その衝撃に腕が逸らされた。

「ですが、まだ・・・！」

逸らされた勢いを乗せた左の拳打をすかさず繰り出す。ヴィヴィオさんのお母様が「レイジングハート！」と呼び、新たに障壁を展開。その障壁に拳打が当たると同時。

――捕縛盾（バインディングシールド）――

「これは・・・！」

左腕に絡みついてくる鎖状の捕縛魔法。初めてヴィヴィオさんのお母様と試合った時に受けた近接封じのトラップ。ですが、「はぁぁぁっ！」すでに破る術を心得ています。繋がれぬ拳、アンチェイン

ナックル。静止状態から加速と炸裂点を調整する打ち方。

「わわっ！？　こんなアッサリ！？」

――アクセルフィン――

高速移動の魔法で私から距離を取るヴィヴィオのお母様。トラップは確かに厄介ですが、距離を離されて砲撃の雨に晒されるのはさらに厄介ですから、距離を開けないように詰め寄る。

「でも、ごめんなさい」

「え？・・・ぅぐっ！？」

後頭部、そして背中に連続で襲ってくる衝撃。チラッと見えたのは魔力弾。いつの間に発射していたのかが判らない。その思いが顔に出てしまっていたのか、「最初の威嚇射撃の時にはすでに待機させてました」と、本当に恐ろしい発言をなさったヴィヴィオさんのお母様。

「ちょっと痛いですけど、罪が重くなるよりはマシですよね・・・？」

――ディバインバスターー――

強力な砲撃。直撃は撃墜確実。あれから成長した私でも容易く耐えられるような魔力量じゃない。必死に体を動かして躱す。その直後、「ショートバスターー！」先ほどの砲撃よりかは幾分威力の低い砲撃

が「きゃあああ！」私に直撃した。

「っ、はぁはぁはぁ・・・！　（慣れない空中の所為もありますが、先読みの鋭さに置いて行かれてしまいます・・・！）」

幸運なことに何とか耐えきれた。ヴィヴィオさんのお母様が「ごめんなさい。でも、すごい格闘技ですよね。流派とお名前、聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」過去に影響を与える真似はいけない。判ってはいましたが・・・

「ベルカ古流・覇王流（カイザーアーツ）。ハイディ・E・S・イングヴァルトと申し・・・はっ！」

ついうっかり名前も流派も話してしまいました。慌てて口を噤みますがすでに手遅れ。ヴィヴィオさんのお母様は「やっぱりベルカの！　本当にすごいですよね、ベルカの人たちは♪」と弾んだ声でそう仰り、「ではでは、改めまして、時空管理局・嘱託の高町なのです」と頭を下げて、私から目を逸らしたその一瞬こそが好機。

「ティオ、離脱します！」

全速力でその場から離脱した。

†††アインハルト⇒？？？？†††

気が付けば、なのはママの生まれ故郷・海鳴市に飛ばされていたわたしとアインハルトさんは、常駐しているはずのない魔導師の接近

に警戒して分散して逃げに回った・・・んだけど、「すいません、少しお時間を頂けますか？」すぐに追いつかれちゃった。

（小さな女の子の声・・・？　それにどっかで聞いたような・・・）

背中に掛けられた声はどこか聞き覚えのある女の子のものだった。ゆっくりと振り返って、その声の持ち主を見たわたしは「えええええっ！？」本当にびっくりしちゃった。だって「え？　ええ？　ちょっ、すずかさん！？　ちっさ！　なんで！？」なのはママの親友で同僚のすずかさんだったから。

「あ、変身魔法ですか？　でもどうしてこんな場所で、しかもそんな姿？　童心に帰ってみたかったとか・・・？」

「え？　あの、どこかでお会いしましたか？　ごめんなさい、記憶にないんですけど・・・。私、記憶には自信あるんだけどな・・・」

「ふえ？（どうゆうこと？　すずかさん、だよね、どう見ても）」

わたしの知ってるバリアジャケットにデバイス――"スノーホワイト"。声も幼いけど確かに本人のものだし、雰囲気もそうだし。もしかしてドッキリだったりするのかな。キョロキョロ辺りを見回すけど、よく判らない。

「あの、月村すずかさん、ですよね？」

「え？　あ、はい、確かに、月村すずかですけど・・・」

「時空管理局・本局の、第零技術部主任の・・・？」

「へ？　い、いいえ。まだ研修生の身ですけど・・・？」

「「んん？？」」

すずかさん？と小首を傾げ合う。すずかさん？が本気で驚いてる。ドッキリじゃないとしたら・・・。もし変身なんかじゃなくて、本当に小っちゃい頃のすずかさんだとすれば。ふと今のこの状況に、ある推測が生まれた。もしかして・・・

「すみません、今日は新暦何年の、何月でしょうかっ？」

「え、えっと・・・えっと、あ、新暦６６年の３月ですよ」

大当たりだった。だってわたしの知る今日は、新暦７９年の６月。推測通りの時間移動（タイムワープ）だった。よくフィクションで目にすることがあるけど、まさかわたし自身が実体験するなんて思いもしなかった。とここでハッとする。未来人が過去に遡った場合、しちゃいけない事がたくさんあるってことを思い出した。

（未来の情報を教えたり、過去の物を壊したりするのはダメだとか・・・！）

急いでアインハルトさんに念話を通すと、なんとアインハルトさんはこの時代のなのはママと遭遇しちゃってるとか。タイムパラドッ

クスを起こさないようするために、ここは逃げの一手を、と提案。アインハルトさんも承諾してくれて、わたし達は過去のなのはママとすずかさんから逃げることに。

「あの、とりあえず詳しいお話を聞きたいので、・・・そのバリアジャケットを解除しましょうか。近くに局施設――あ、管理局のお友達が住んでるお家がありますから、そこでお話ししましょう」

この時代で言うと、フェイトママやリンディさんのハラオウン家かな。だからと言って素直に応じてついて行ったら、それこそタイムパラドックスが起きる可能性もあるわけで。だから「すみません！　それは出来ません！」反転して全力逃走。

「え！？　まっ、待ってぇーーーー！」

わたしの知ってるすずかさんは確か、総合ＡＡＡ＋ランクの補助タイプの魔導師。１３年前だと幾つって言っていたかな。憶えてないけど、飛行慣れしていないわたしでもきっとこの時代のすずかさんになら後れを取らないはず。なんてとっても甘々な考えはすぐに粉砕されちゃうわけで。

――アイシクルアイヴィ――

氷の茨が８本、わたしを捕まえようと背後から伸びて来た。アイシクルアイヴィだ。捕まえた箇所を凍らせるっていう。空戦なんてほとんど素人なわたしだけど、わたしが捕まったら未来が変わっちゃうかもしれないから必至に避ける。

「えっと、あなたのしている事は公務執行妨害に抵触するかもしれないから、出来れば逃げないでください！」

「あうう、それでも捕まるのだけはダメなんですぅぅーーーっ！！」

――ソニックシューター・アサルトシフト――

誘導操作の魔力弾で迎撃する。未来のすずかさんのモノは簡単にはいかないだろうけど、過去のすずかさんのモノならきっと「やった・・・！」破壊することに成功。安心したのも束の間、「あう！」目の前に展開されている弾幕。氷結変換じゃないただの魔力弾・・・と油断すると痛い目に遭うのは未来も過去もきっと同じ。

「（すずかさんには本当ぉ～にごめんなさいだけど、こっちも大変ですから・・・）ちょこっと気絶をしていただきます！」

――バインドバレット――

――ソニックシューター・アサルトシフト――

同数の魔力弾で迎撃してすぐすずかさんの元へ突進する。わたしが急に逃げから攻めに転じた所為か「わわ！」すずかさんが少し慌てた。もしこれが演技だったら受賞ものだと思う。

「せぇぇーーいっ！」

――リボルバー・スパイク――

打ち下ろしの蹴りを繰り出す。すずかさんは防御を取るかなって思ったけど、「うん、まだ大丈夫」落ち着いた声で、紙一重で躱した。わたし続けざまに「アクセルスマッシュ！」魔力を乗せた拳を繰り出す。それすらもすずかさんは半歩分、体を横移動させるだけで躱した。完璧に見切られてる。

「あ・・・！（忘れてた・・・・！）」

普段のすずかさんの技術者然とした様子からすっかり忘れてた。すずかさんの運動神経・身体能力は、この時代じゃなのはママ達の誰よりも上だったって頃を。

――バスターラッシュ――

「あぅ・・・・！」

半ばとっ組み合いになるかどうかって距離で、至近砲撃の直撃を受けちゃった。大きく吹き飛ばされる中、ゾワッと背筋に悪寒が奔った。すぐさま体勢を立て直してその場から急速離脱。その直後、猛烈な冷気が球状に吹雪いた。リフリジレイト・エアだ。

「バインドバレット・サークルシフト！」

わたしの全方位に魔力弾１３発が展開された。まず避けきれない。だったら「レストリクトロック！」こっちもバインドで対抗する。

直後、わたしに着弾した魔力弾がリングバインドとなってわたしを拘束。そして「この魔法、なのはちゃんの・・・・!?」すずかさんもわたしのバインドを受けて拘束された。

「（あとは、どっちが早くバインドブレイク出来るか）クリス！」

わたしの内に居るセイクリッド・ハーート――"クリス"に呼びかける。すずかさん。未来のあなたからの贈り物です。すずかさんのバインドはその数もあってか構築式が若干弱いから、「よしっ！」それほど時間を掛けずに破壊することが出来た。

「こっちもだよ！」

ガシャァン！と音を立てて壊されるわたしのレストリクトロック。直後、すずかさんの前面に魔法陣が展開された。砲撃が来る。

「バスターラッシュ！」

「ディバイン・・・バスタァァーーーッ！」

同時に砲撃を発射。すずかさんの顔が今度こそ驚愕に染まって、わたしの砲撃への対処が僅かに遅れた。わたしのディバインバスターは拳の打ち込みで起動して、高速砲でもあるからすずかさんのように撃ったらすぐに動ける。

でもすずかさんのは魔法陣の展開に発射、放射が切れるまで動けないっていうラグがある。さらになのはママと同じ砲撃の名前を使ってビックリさせることで隙を作ってみた。それらが合わさって対処

が遅れたすずかさん。シールドは"スノーホワイト"が張ってくれたようだけど、ほぼギリギリだったからその衝撃は強いと思う。

（逃げるなら今、だよね・・・！）

反転して離脱再開と思ったその時。

「スノーホワイト。ナイツ・ルナレガリア、上昇値１０％限定で起動」

≪ナイツ・ルナレガリア。起動いたしますわ≫

嫌な単語が耳に届いた。ナイツ・ルナレガリア。それって"スノーホワイト"の持つ機能の１つで、午後９時から午前３時までの間、魔力量やデバイスの機能、身体能力を底上げするっていう・・・。

「ひゃあ！？」

ドンッと強烈な魔力波がわたしを襲った。すずかさんを覆っていた黒煙が晴れて、その姿を見せた。わたしが思うことがただひとつ、もうダメだ、だ。下手に動いてトンデモ魔法を使われて撃墜されるのだけは嫌だから大人しくする。

「やっと大人しくしてくれた。スノーホワイト、レガリア停止。・・・コホン。えっと、あなたも異世界からの渡航者ですよね？」

「あぅ、はい。ミッドチルダ出身です」

「そうですか。今夜は異世界からの渡航者さんが多いみたいなんですけど、何かありましたか？」

「い、いえ。むしろわたしが知りたいんです」

「？？・・・自分の意志で来たわけじゃないんですか？」

「はい。気が付いたらここに飛ばされてました」

「転送事故？・・・やっぱり私ひとりじゃダメかな。あの、先ほど言ったように局施設で――」

すずかさんがそこまで言いかけた時、『すずかちゃん』通信が入った。モニターに映ったのは「なのはママ！」だった。すずかさんとモニターに映るなのはママが「え？」ってわたしを見たからハッとして口を両手で押さえた。

「『なのはママ・・・って？』」

そしてすずかさんの目がわたしからモニターに移った。たぶんこれが最後のチャンス。そう思い立ったら何を考える間もなく「クリス、ジェットステップ！　ＧＯ！」一足飛びでその場から離脱した。

Ｅｐｏｓ４０理のマテリアルＳ／星光の殲滅者～Ｓｔｅｒｎ　Ｔｈｅ　Ｄｅｓｔｒｕｃｔｏｒ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

未知の魔力運用技術を扱う異世界からの渡航者の片割れ、アミティエ・フローリアンの捜索を担当することになったわたしとなのはとすずか。そんなわたし達は、わたしが居候してるハラオウン家はエイミィの部屋でひとり頑張ってくれるアリシアの指示の元、海鳴市の上空を飛んでいた。

とここで、管理世界で扱うような転移反応とは別の反応が発生。それこそアミティエの反応かも、ってことで発生現場へ進路変更。さらに、全く別の方角にも転移反応。さぁ、どうしようかって考えた時、飛行速度が遅いわたしが、一番近い第三反応点へ向かうことに。

（これ以上、なのはとすずかの足枷にはなりたくないしね）

わたしの背より展開されている魔力翼、術式名を真紅の両翼ルビーン・フリューゲル。元はシャルロッテ様の魔術の１つ。この１ヵ月、わたしの前世でいらっしゃったシャルロッテ様に言われた通り練習した魔法だ。

――あのさぁ、イリス。空戦をしろ、って言わないけど、空くらいは飛べた方が良いよ。なのは達とこれからも付き合うとなると、どうしても必須だよ――

――でもわたし、どうも空が苦手で。ご先祖の騎士リサも、魔神オーディンとシャマル先生と空を飛んで気絶した、って手記に書いてあったし――

イリュリア戦争勃発直前、シュトゥラとイリュリアの小競り合いのことが記されていた手記で、魔神オーディンに抱えられて状態で高速で空を飛んだ、すごく恐かった、って一文が。それから先祖代々、空を飛ぶのはやめようね、っていう風潮がね。でもシャルロッテ様の言う通り、なのは達は揃って空を飛べる。

それにアリサもそんなに上手くは飛べないけど、それでもフラフラながらも空を飛ぶことは出来ているから、練習次第でいつか空戦も出来そう。そうなったらわたし1人だけ取り残されるから、必死に練習中なのだ。

「だから死にもの狂いで修得したこのルビーン・フリューゲルで、なのは達と一緒に空を飛んで、一緒に戦って・・・みたい！」

けど今はまだ慣れない所為で雛鳥。でもいつかきっと。そう決意を新たにして、第三発生点に到着、っと。そして「見つけた！」モニターで見た、深桃色のおさげ髪に青いジャケット。間違いなく「アミティエ・フリーリアン、さん！」だ。

「うわ、すごい、綺麗な羽、キラキラ光り輝いてる・・・」

ルビーン・フリューゲルを見てウットリ見惚れているアミティエ。褒めてくれたのが嬉しくて「どうもぉ・・・」照れ笑いを浮かべてしまう。でもすぐにハッとして「コホン」と咳払いを1回。

「えー、エルトリアという世界出身の、アミティエ・フローリアンさんですよね。わたしは時空管理局所属の騎士、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト・・・」

そこまで言ったところで口を少し噤む。役職の執務官補佐と続けるか、それとも階級である三等陸士と続けるかで一瞬だけ迷った。けど今は「――三等陸士です」って続けた。すると「管理局？　名前からして司法機関？　こんな小さな子でもお仕事を？」とアミティエが本当に小さな声で呟いたのがギリギリ聞こえた。

（管理局を知らない、か。フローリアン姉妹の出身世界エルトリア。次元渡航が出来るにも関わらず、管理局に認知されてないっていうのも変な話だけど・・・）

管理・管理外問わずに世界の発見から調査って結構な費用が掛かるから、エルトリアがどこにあるのかも調べがつくまで結構かかる。一応、こっちに来る前に無限書庫司書のユーノや観測部の知り合いにエルトリアの調査を頼んできたけど、今回の一件が終わるまでには難しそうっていうのがわたしや知り合いの意見。

「月村すずか、それと黒羽のお嬢さんこと八神はやてと、銀髪の方ことリインフォース。その友達であり同僚です」

「あっ！　そう、ですか。あの、はやてさんとリインフォースさんは無事でしたでしょうか・・・？」

「ええ。キリエさんから受けた傷も、すずかの治癒術で完治しましたし、元より軽傷だったようで。あ、すずかから伝言。未だにウィルスに冒されているのであれば、すぐに治すのでお越しください。だそうです。ちなみに近くに居ますから案内しますよ？」

はやて達とのやり取りの映像を観た限り体の不調は確かなものだったけど、今のアミティエはそれなりに元気そう。まぁ、外からじゃ判らないようなやせ我慢って可能性もあるけど。アミティエは「何から何までご迷惑をおかけします」って深々と頭を下げた。

「では、一緒に来てくれますね？　正規の異世界渡航の方には、こちらで案内することになっております。あと安全のため、渡航した経緯と方法をお伺いしたいのですが・・・」

これまでのアミティエの行動から見て、「申し訳ありません！　いま立て込んでいまして、お役所仕事にお付き合いするわけには！　全て済ませたら出頭しますから！」って言うことを聞いてはくれなかった。左手に握る"キルシュブリューテ"が納められた鞘を僅かに揺らす。

「あぅ。あの、本当に出頭しますから！　妹も連れて必ず！」

「そういうわけにはいきません。事情をお伺いしたいですし、内容によっては管理局も協力します。というより、闇の書のマテリアルが関わっている以上、協力をお願いします。アミティエさん、あなたの妹のキリエさんは、一体何を企んでいるんですか？」

夜天の主であるはやてや管制融合騎のリインフォースすら知らない、"システムＵ－Ｄ"とやらを狙っているキリエ。その姉であるアミティエなら、何かしらの情報を持っているはず。だから協力を申し出た。これなら話を聞いてくれると思ったから。な、の、に！

「申し訳ありません！　こちらにも退っ引きならない事情がありまして、お話しすることは出来ないのです！　ですから、ここは見逃してくださぁーーーいっ！！」

「（やっぱダメかぁ。仕方ない）キルシュブリューテ。風牙・・・！」

≪烈風刃！≫

反転して離脱を図ったアミティエの行く手を遮るために急上昇。そして"キルシュブリューテ"を振るって、風圧の壁――風牙烈風刃を彼女の目の前に放つ。と、「あわわ！？」アミティエは急停止。危なかったぁ、逃げられるところだった。

「違法渡航者としてあなたを抑え込むことも出来ます。が、出来ればそうしたくありません。ですから逃げないでください」

「・・・・現地の方やお役所の方々にも、なるべくご迷惑をおかけしないよう立ち回りますので、どうか！」

「そう言うわけにもいきません。こちらも世界の安寧・秩序の為ですから」

≪カートリッジロード！≫

"キルシュブリューテ"の刀身の付け根、その峰側にあるコッキングカバーが刀身に沿って上にスライド。装弾数５発の回転式シリンダーが回転してカバーが元に位置に戻る。これでカートリッジに充填されている魔力が使用できる。

「お役所仕事なのは重々承知しております。イリスさんに迷惑を掛けることもいくら頭を下げても足りないです。が、それでも私は・・・！」

「では力づくで、押さえさせていただきます！」

――雷牙翔裂刃――

"キルシュブリューテ"を振るって、熊手のような形の真紅の魔力雷の斬撃を放つ。アミティエは「仕方ありません。抵抗させていただきます！」そう言って躱してすぐ、「バルカンレイド！」２挺の銃から光弾を連射してきた。

こちらが不利な状況、それが相手に気付いてほしくない場合、圧倒的な力でこちらが有利だと錯覚させる必要がある。そう、わたしの方が強いんだって思わせるために、ほぼ全力の牽制攻撃を行う。これで降伏を促す。けど、アミティエはそれでも抵抗してきた。

「（あーもう！）だったらこれでどう！？」

放たれてきた光弾をルビーン・フリューゲルの片方でペシッと弾き

返すと、「うっそーーっ！？」アミティエは驚きの声を上げて、跳ね返って来た光弾を回避。そして「だったら！　ファイネストカノン！」2挺の銃口から放たれる光弾が1つになったことで砲弾と化した。あれはフリューゲルじゃ防ぎきれないかな。

≪光牙烈閃刃！≫

真っ向から剣状砲撃をぶつけて相殺。首筋にチリッとした痛みが奔って、わたしはすかさず振り向きざまに"キルシュブリューテ"を振るうと、ガキィンと金属音が耳に届く。やっぱり背後に回り込まれてた。高速移動系の技術を持つ子はほぼ同じ。でもこっちは騎士なんだよ。

「せぇぇぇいッ！」

力任せに"キルシュブリューテ"を払ってアミティエを弾き飛ばし、即座に「光牙閃衝刃！」最速の魔力槍を発射。体勢が未だに整えられなかったアミティエは「うっく！」上半身を大きく反り返すことで紙一重で回避。チャンスだ。フリューゲルを羽ばたかせてアミティエに接近。

「雷牙・・・！」

≪月閃刃！≫

「わわっ！」

刀身にスタン効果を付与した"キルシュブリューテ"の一閃を、2挺の銃から2本の片刃剣に変えて防いだ。バチバチとわたし達の間で飛び散る火花。押し切ろうとしたところで、アミティエは片方だけ銃に戻して銃口を"キルシュブリューテ"に向けて、「ファイア！」光弾を発射。

「きゃん！？」

"キルシュブリューテ"を弾かれた事で強制後退。自分の意思じゃないから僅かに体勢を崩しちゃった。それが最大の隙。アミティエは「ごめんなさい！」光弾を容赦なく撃ち込んできた。急いでフリューゲルで体を包んで防御態勢に入る。

「うわっ、ちょっ、アミティエさん！　公務執行妨害だけじゃ済まされないよ、コレ！！」

「あぅぅ、すみませーーん！　とっても心苦しいんですが、私たちには、時間がないんです！」

「いやだから！　それも含めて話を聞かせて下さ――ああもう、アミティエぇぇーーっ！　聞かせろっつってんの！　本気で怒るよ！？」

「うええ！？」

防御を右翼に任せて、左翼を大きく羽ばたかせる。攻防一体の突進技でアミティエに突っ込む。その間にガンガンと右翼が光弾で削れていく音が響いて来て恐い。ここで強制解除されたら市街地へ真っ

逆さまだ。
ある程度近付けたら右翼をバサッと勢いよく開く。そして聞こえる「ひゃあ！？」アミティエの悲鳴。フリューゲルで叩き払ってやった。間髪入れずに「光牙十紋刃！」十字斬撃を放って・・・「きゃあああ！」直撃させた。

「いい加減にしてください、アミティエさん！」

――拘束の連鎖――

逃亡できないようにバインドで拘束して、薄くなった右翼に魔力を流し込んで元の厚さに戻しながら怒鳴る。直撃させたにも拘らず堪えていないように見えるアミティエにちょっとショックを受ける。ところで、『シャルちゃん、そっちはどう？』なのはから通信。遅れて『シャルちゃん、こっちはアミティエさんじゃなかった』すずかからも入った。

「こっちは当たり。そっちは？」

『ベルカ式の女の子だった』

『あ、私の方も。なんだかおかしかった。なのはちゃんを、なのはママ、って呼んだり、ディバインバスターを使ったり』

『驚いたよね。私が相手した人も、ヴィヴィオさんのお母様、なんて言ってたし。たぶん人違いだと思うんだけど』

「へぇ、どんな子だったの？」

なのはママて。それはまたとんでもない人違いじゃん。一体どんな子がそんな馬鹿げたことを言ったのか見てみたい。って思ったのが失態。なのはとすずかが気を利かせて見せてくれた。

「っ！！！？？？」

黄金の髪に紅と翠の虹彩異色、魔力光が虹色。碧銀の髪に紺と蒼の虹彩異色。信じられなかった。そのどちらもわたしの知ってるある人物の特徴だったから。その衝撃が計り知れず、ついアミティエさんから完全に意識が逸れた。

「ごめんなさい、イリスさん！」

「え？・・・え、あ、ま、ちょっ、ちょーーーーー！！？」

アミティエがいつの間にかバインドブレイクを果たして、一瞬のうちに逃亡してしまっていた。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒なのは†††

アミティエさんも逃亡しちゃったことでふりだしに戻った私たちは、すずかちゃんが相手にした人――たぶんヴィヴィオさんと、私が相手にしたハイディさん、シャルちゃんが相手にしたアミティエさんの捜索を続行。合流時間は午後１１時。それまでは分散して捜索だ。

「ベルカ時代の王様かぁ・・・」

シャルちゃんから聴いた、ハイディさんの名前やヴィヴィオさん？の身体的特徴が、古代ベルカの王様と一致してるって話。ハイディさんは"覇王イングヴァルト"さんと一致、ヴィヴィオさんは、シャルちゃんたち聖王教会が崇め奉る"聖王"の特徴と一致してるって、本当に驚いてた。

≪Ｍａｓｔｅｒ　！≫

「え、なに？　レイジングハート」

空を翔けていると、"レイジングハート"から知った魔力反応を捉えたって報せを受けた。その魔力反応っていうのが「理のマテリアル・・・！」のことだった。アミティエさん達の捜索も大事だけど、マテリアルの捜索も大事だ。一応はやてちゃん達の担当だけど、近くに居るんだから仕方ないよね。

「いくよ、レイジングハート！」

≪Ｙｅｓ，　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ　！≫

"レイジングハート"が報せてくれた地点へと向かって、そして「居た・・・！」見覚えのある姿を視界に収める事が出来た。向こうも私に気付いて「ご無沙汰しています、高町なのは」って挨拶してくれたから、「うん、久しぶり。元気だった？　って聞くのも、変だよね？」って応える。

「おかげさまで、撃破されて以降はぐっすりと休むことが出来、こうして無事に再起動することが出来ました。まぁ、ＴＰＯを弁えずに再起動したことでディアーチェには怒られてしまいましたが」

「あ、名前、あったんだね。えっと、シュテル・・・？」

「はい。星光（シュテル）です。シュテル・ザ・デストラクター」

「格好いい名前だね」

「光栄です。名を褒めて頂くと、こうも嬉しいのですね」

なんか以前と違ってシュテルの纏ってる空気が少し緩く感じるから、なんていうか友達とお話をしているみたいでこっちも嬉しくなっちゃう。と、「それではなのは」シュテルが"ルシフェリオン"を構えた。

「憶えていますか？　私が消えゆく際、貴方と再び魔導を交えたいと言ったことを」

「うん、憶えてるよ。やっぱり戦わないとダメ、なのかな・・・？」

「お願いします。新たに手にした魔導と・・・」

"ルシフェリオン"から炎が上がった。炎熱変換。以前は無かったものだ。はやてちゃん達のやり取りで見て知っていたけど、シュテ

ルが新しく手に入れたのは魔法だけじゃなくて炎熱変換もなんだ。

「この炎熱変換で、今度こそ貴方に一矢報いて見せます」

「判った。でも、今度も私が勝つよ。シュテル！」

「いざ、どちらが強いのか競い合いましょう・・・！」

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

星光の殲滅者シュテル・ザ・デストラクター

「アクセルシューター！」「パイロシューター！」

「シューット！」「ファイアーッ！」

お互いの魔力弾（シュテルのは炎熱変換で火炎弾だけど）計１４発が、私たちの間で交差、または衝突し合って相殺してく。そして私はアクセルフィンで一気に後退してシュテルから距離を稼ぐ。そしてシュテルはやっぱり「ラピッドフェザー」距離を詰めてこようとしてきた。

「レイジングハート！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　Ｅｘｅｌｉｏｎ　Ｍｏｄｅ≫

カートリッジ１発をロードしてエクセリオンモードへ。この３ヵ月

でドクターやシスターズのみんなのおかげで安定した魔力を出せるようになって、フレームもちゃんと強化されたし、体への負担も大きく減った。

「エクセリオン・・・バスタァァァーーーーッ！！」

中距離向けで誘導制御・反応炸裂の効果を持った砲撃を発射。出し惜しみして下手に戦いを長引かせると、シュテルにまた新しい魔法か何かで手痛い反撃をされても困る。シュテルはラピッドフェザーっていう高速移動魔法で躱した後、「ブラスターヘッド」って、"レイジングハート"でいうバスターモードへと"ルシフェリオン"を変形させた。

「ブラストファイアァァーーーッ！」

砲撃にも炎熱が付加されていて、火炎砲撃になってた。私もアクセルフィンの効果で横移動で躱して、「ショートバスター！」高速砲で反撃。絶対に近寄らせちゃダメだ。接近を許しての近距離砲撃を受けるのは危険だし。

「ああ、やはり貴方との戦いは心が躍る・・・！」

「シュテル！　マテリアル達は何をしようとしてるの？　そっくりさんのよしみで教えてくださぁーい！」

――アクセルシューターーーー

後退しながらシューター８発を発射して、バレルロールで回避してくシュテルへ「バスターッ！」高速砲の連射を行う。

「砕け得ぬ闇、その入手ですよ。以前と変わらずに。我々マテリアルが存在する最大の要素です」

――ディザスターヒート――

高速砲を躱したシュテルも負けじと火炎砲を発射して来たから、受けに回らず横移動で回避したんだけど・・・「え・・・っ！？」避けた先に間髪入れずに火炎砲が迫って来た。それすらも避けたんだけど、「もう１発！？」が存在してた。

≪Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ≫

私の高速砲ショートバスターとは違う、威力を保ったままの砲撃三連射。直撃間近、"レイジングハート"が張ってくれたシールドが私を守ってくれた。そしてすかさずその場から離脱を試みようとした時、「パイロシューター！」その掛け声が聞こえた。

「レイジングハート、オーヴァルプロテクション！」

球体状のプロテクションを発動して、私の周囲に渦巻くように高速回転してた火炎弾、その全弾を防御。着弾時に爆発した火炎弾の黒煙が視界を潰してくる。それでも防ぎきることは出来た。それを確認してすぐに解除、急いで黒煙の中から脱出。

「アサルトマルクス！」

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ≫

頭上から高速落下してきたシュテルの振るう火炎を纏う"ルシフェリオン"の打撃を、バリアで護ってくれた。"レイジングハート"に「ありがとう！」お礼を言いながらバリアバースト――相手の攻撃を受けてる最中にバリアを爆破させてダメージを与えて、なおかつ爆風と衝撃で距離を取る派生魔法を発動。

その爆風に煽られて距離を開けたシュテルに"レイジングハート"を向けて、「エクセリオンバスターッ！」即座に砲撃を発射。シュテルは「今のを防ぎますか。流石です」って満足そうに頷くと同時に「ブラスターヒート！」さっきの三連砲撃で相殺してきた。目の前は爆発によって生まれた煙でいっぱいになる。

（炎熱変換が厄介かな。爆煙が余計に立ち込める）

追撃を警戒しながら後退。シュテルも警戒してるのか突っ込んで来ない。煙が徐々に晴れていく中、その奥に一瞬だけ炎の輝きが見えた。と思えば「ファイアァァァーーーッ！」単発の火炎砲撃が向かって来た。距離もあるから余裕で回避。こちらも「バスタァァァーーーッ！」エクセリオンバスターで反撃。そこから砲撃の撃ち合いになる。

「シュテル！　周りに迷惑が掛からないことだったら、私も、私たちみんな、手伝うよ・・・！　だから何をしようとしてるのか教えて！」

――ショートバスターーーー

「それについては私の一存では決めかねますので。詳細は王、ディアーチェに伺って頂ければ・・・！」

――フレアブラスターーーー

お互いに高速砲で牽制したり、

「私はかつて、姿形や能力も全てが貴方のコピーでした。ですが今、私は私個人として、王とその仲間のための殲滅者――デストラクターとしての力を得ています」

――パイロシューターーーー

「うん、すごいよ、シュテルの魔法も、その炎熱の力も・・・！」

――アクセルシューターーーー

魔力弾幕で包囲攻撃をし合ったりしてるけど、なかなか決定打を与えることが出来ない。そして気が付けば私たちは戦いの最中なのに微笑み合ってる。やっぱりシュテルはただ倒すべき敵じゃなくて、意志をぶつけ合うライバルみたいな？感じ。だからか親近感が湧いちゃう。

「なのは、笑みが零れてます。楽しいですか？」

「うんっ。なんていうかね、・・・とにかく楽しい！　シュテルはどう？　シュテルも笑ってるよ」

「ええ。楽しいですよ。我が焼滅の力をこうも存分に揮っているのに、貴方に悉く防がれてしまう。一方的な勝ち戦より、勝敗・魔導の優劣が紙一重で決まるかのような綱渡りの戦の方が、実に興奮し、白熱するというものです」

――エクセリオンバスターーーー

――ブラストファイアーーーー

砲撃が衝突して僅かな拮抗の後に消滅。そして高速で接近してきたシュテルに高速砲を連射しつつ後退。シュテルはバレルロールを繰り返しながら接近を続ける。しかも時折ラピッドフェザーっていう魔法を使うからか距離が開くどころか縮まる一方。

そしてついに追いつかれちゃった。振り上げられる火炎を纏う"ルシフェリオン"。アサルトマルクスっていう打撃魔法。懐に入られ過ぎて砲撃は無理。なら防御を、って"ルシフェリオン"に注意した。

「滅砕！」

「ごほっ！？」

意識が全部"ルシフェリオン"に向いていた時に私のお腹に突き刺

さる、炎を噴き上がらせたシュテルの掌底攻撃。意識が飛ぶまでもないけどその衝撃と炎の熱さにビックリ。そんな中で「炎熱変換だけではありませんよ、私の新たな力は」ってシュテルの語りかけるような声が耳に届いた。まさか格闘技を使うなんて。

「爆砕！」

悪寒が奔った。今度は炎を纏ったアッパーだ。"レイジングハート"を盾にすることで防御する事に成功したけど、両腕を大きく逸らし上げられた。そのすぐに「アサルトマルクス！」"ルシフェリオン"での打撃魔法が襲い掛かって来た。狙いはガラ空きなお腹。

「えーい！」

打撃がお腹に届く前に"レイジングハート"を振り降ろして、石突部分で"ルシフェリオン"を打ち落とす。次にシュテルが取ったのは予想外の「きゃん！？」頭突き攻撃。ゴチン！と鈍い音が。私はくらっと後退。見ればシュテルもおでこを赤くしながら後退して、「ディザスターヒート！！」三連砲撃を発射。でも距離が開きさえすれば！

――アクセルフィン――

3本目の砲撃を撃ち終わるまで避けた後すぐに「ショートバスター！」高速砲を発射。シュテルはシールドで防御した後「パイロシューター！」火炎弾6発を発射してきた。それらを距離を取りながら「シュート！」魔力弾で迎撃する。

「ルシフェリオン、ディザスターヘッド！」

「え・・・！？」

"ルシフェリオン"が、"レイジングハート"でいうエクセリオンモードと同じ形態に変形した。そして炎の翼を3枚と展開。そして「ルシフェリオンバスター！」私のストライクスターズのような魔法を放った。火炎砲と一緒に飛来する火炎弾。下方から撃たれた砲撃を上昇することで回避。反撃をしようとして「あれ・・・？」シュテルの姿を見失った。

≪上です、マスター！≫

――ブラストファイアー――

"レイジングハート"からの警告。慌ててその場から後退すると、頭上から火炎砲が降って来た。さらに続けて、「ファイア！」火炎弾が8発と降って来た。それらを舞うように避けて、「シューット！」魔力弾6発を、誘導を度外視した高速発射。

直線的にシュテルへ向かっていくシューターが避けられる。シュテルはそのまま高速降下してくるけど、避けられて通り過ぎて行ったシューターを誘導してシュテルへ再殺到。シュテルは速度を殺すことなく紙一重で避けては「ファイア！」火炎弾で迎撃。

「ルシフェリオンバスター！」

――アクセルフィン――

今度は頭上から放たれてきた射砲撃を大きく横移動する事で回避。そしてまた「見失った・・・！？」シュテルの姿を見失う。"レイジングハート"の≪後ろです！≫警告がまた入る。振り向きざまにシールドを展開。

――フレアブラスター――

「優秀なデバイスですね、レイジングハートとは・・・！」

シールドに高速砲が４発と着弾して爆発した。シュテルはどうやって姿を晦ましているのか判らない。

≪おそらくマスターが砲撃を避けてすぐ、彼女はマスターに合わせて砲撃の裏に隠れているのでしょう。砲線が彼女の隠れ蓑になっているのです≫

"レイジングハート"がそう教えてくれた。なるほどって思いながら、黒煙に視界を封じられるのを嫌って急上昇したところで「ディザスターヒート！」あの三連砲撃で追撃されちゃう。１発目は回避、２発目はギリギリ回避、３発目は避けれそうになかったからシールドで防御。また黒煙に視界が封じられる。

（あう、これってちょっぴりまずいかも・・・）

完全にリードされちゃってる。それでも諦めずに黒煙から脱出。次

もやっぱり砲撃、それとも射撃、ううん打撃。そのどれが来てもおかしくない現状だったけど、そのどれもが来なかった。判るのは、私を中心に５ｍほど離れたところで魔力スフィアが円周状に８基と待機してるだけ。そしてそのスフィアが同時に自爆して爆炎と黒煙を上げた。

「どういうこと・・・？」

シュテルのミス・・・じゃないのは確かだと思うけど。

――ルシフェリオンバスターＡ・Ｃ・Ｓ――

「え・・・！？」

どこからともなく突進して来たシュテル。まるで私のエクセリオンバスターＡ・Ｃ・Ｓのような突撃。ここで理解した。さっきのスフィアは目晦まし。シュテルの姿を隠して居場所を特定させないための。とにかくその速度から言って回避は無理と判断して、私と"レイジングハート"は全力で防御に徹することを決めた。

――ラウンドシールド――

――プロテクションパワード――

――ファイアプロテクション――

対魔力に対炎熱の三重防御陣。

「疾れ明星！　全てを焼き消す炎と変われッ！！」

（これ・・・炎熱の集束砲・・・！！？）

"ルシフェリオン"から強力な火炎砲が発射された。ラウンドシールドがまず破壊。次にプロテクションパワードにひびが入って破壊。最後のファイアプロテクションは、なんとか破壊はされなかったけど、その威力でものすごく後退させられた。あまりの衝撃と熱さに意識が眩みそうになるのを必死に耐えて、なんとか防ぎきったって安堵したのも束の間・・・

「真・ルシフェリオン・・・ブレイカァァァァァーーーーーーーッッ！！！！！」

本命の1発が残ってた。それこそ本当の集束砲だった。全身のダルさで避けることは難しく、それ以上に避ける余裕もないほどに大きい砲撃だった。私はマガジン内のカートリッジを全弾ロードして防御に回ることを決意。大丈夫。ファイアプロテクション・パワード。アリサちゃんのガラティーンブレイカーやルシル君の炎熱砲撃、シグナムさんの炎熱付与攻撃にも耐えたんだ。

（それに、絶対に負けられないもん・・・！）

友達と一緒に生み出した魔法と、負けたくないって思いを支えに、シュテルの集束砲を耐える姿勢を取る。そして「っ、ぅぅく・・ぐっ・・・くぅぅーーー！」着弾。耐える。砲撃の効果が途切れるまで。グッと唇を噛み締めて、ギュッと"レイジングハート"を握り

しめて、ひたすら耐える。

「はぁはぁはぁ・・・けほっけほっ、はぁはぁ、ふぅふぅ・・・！」

そうして私は耐えきって見せた。揺らぐ意識の中でも私はマガジンを交換して「エクセリオン・・バスター・・・Ａ・Ｃ・Ｓ・・・、ドライブ！！」私も高速突撃。シュテルも息も絶え絶えって風で、私が無事だったのを見て「っ！　高町なのは、あなたはやはり・・・！」目を大きく見開いて驚きを見せた。

――ラウンドシールド――

シュテルの展開したシールドに"レイジングハート"の先端に展開されてる魔力刃――ストライクフレームが衝突して、そう拮抗することもなく破砕。そしてストライクフレームがシュテルに直撃。

「っぐ・・・！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　！！≫

「エクセリオンバスター、零距離発射！！」

そして零距離でエクセリオンバスターを撃った。目の前が私の魔力光である桜色の光と煙でいっぱいになって、その衝撃で後退。煙も晴れて、シュテルの姿を視認する。

「フフ、お互いにボロボロですね、高町なのは」

「だね。まだやる？　シュテル」

正直、戦闘を続けられるほどの魔力も気力も体力もない。もしまだ続けるって言われたら素直に負けを認めるしかないかも。でも「いいえ。私はもう限界を超えています。活動限界です」って力なく、でも満足そうに微笑んだ。

「実は私も。もう飛んでるだけで精いっぱい」

「そうですか。・・・引き分け、ですね」

「引き分け、だね」

それから少し微笑み合った後、「貴方とこうしてずっと闘っていたいですが、それは許されません」そう言ってシュテルが踵を返した。

「シュテル・・・！」

「貴方たちが心配しているのは、我々が無辜の民に、被害や迷惑などを出さないか、なのですよね？　そのことに関しては、我々は遵守します。アイルは興味がなく、フラムは自称騎士として私と同意見なはずですし、ディアーチェと暴れん坊のレヴィには私から念を押しておきます」

「ありがとう、シュテル。だけどやっぱり一緒に来てほしいかなぁって思ってるんだけど」

「それについてはすみませんが、お断りさせていただきます。我々が目的を果たし終えた時、改めてご挨拶にお伺いいたします。今はそれだけで許してください。では、なのは。またいずれ魔導を交えましょう」

そう言ってシュテルは、ボロボロな姿でもしっかりとして速さで飛び去って行った。

Ｅｐｏｓ４１義のマテリアルＦ／炎壊の報復者～Ｆｌａｍｍｅ　Ｔｈｅ　Ｒｅｖｅｎｇｅｒ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

変なお姉さんと遭遇して、世界の危機云々って話を聞いたすずかの居るとある無人世界へ、調査班の護衛としてあたしとシャルは赴いた。そこでそのお姉さんの発した妙な反応ってものを調査していたところで、海鳴市のアリシアから通信が入った。
そして聞かされた話、見せられた映像の内容は、３ヵ月ほど前に"闇の書"の闇に復活を企んだあのマテリアル達が現れたものだった。しかも、以前あたしが倒した"律"のマテリアルが挑戦状を叩き付けて来た。

（まったく。前回の屈辱を晴らす、だなんて・・・無茶なことを）

ま、そんな挑戦を受けちゃったし、なにより"闇の書"事件の関係者ってことであたしとすずかとシャルは、護衛の交代班とバトンタッチして一旦海鳴市へ。そこですずかが出会ったアミティエさんの捜索をなのはチーム、マテリアルの捜索をはやてチーム、んでマテリアルと一緒に何かを企んでいそうなキリエさんの捜索を、あたしとフェイトとアルフの３人で行うことなった。

「つっても全然捉まんないわね～、範囲広過ぎよ・・・！」

キリエさんの反応を追って無人世界へとやって来たあたし達は今、

その範囲の広さからして散開して捜索中。

「フレイムアイズ、飛行制御しっかりね！」

≪それを言うの何回目だよ、アリサ。俺はお前のデバイスだ。そんなヘマなんかしない≫

あたしは今、空を飛んでる。とは言っても飛べるだけで空戦なんて出来ないけど。この数ヵ月、シャルと一緒に飛行魔法を練習し続けてきた。そうしたらさ、シャルだけまともに飛べるようになって、しかも限定的な空戦も出来るようになって。あたしは未だ羽虫クラスの飛行しか出来ないわよ。あっちにフラフラ、こっちにフラフラって具合にね。

「しょうがないでしょ。こんな場所で墜落なんかしたら、絶対に死ぬわよ・・・！」

眼下に広がるナイアガラの滝の超進化版のような複数の大滝。そんなところに落ちたら一溜りもないわ。だから5分に1回、飛行制御を怠らないように"フレイムアイズ"に言っておかないと。

≪まったく。初めて俺を起動した時から飛行魔法を諦めずに練習していれば、こんな哀れにならなかったのにな≫

「哀れとはなによ、哀れとは！　飛行魔法ってかなり難しいモノだってこと、知ってるんだからね！」

なのは達は当たり前のように飛んでいたから、飛行魔法は魔導師になら誰でも使えるものなんだ、って始めの方はしょげてたけどその実、陸戦魔導師の方が多いってことを知った。そう、飛べない人の方が圧倒的に多いのだ。

≪それは違うぜ。難しいのは空戦スキルであって、飛ぶこと事態は簡単――初級の最後の方なんだよ。それなのに魔力量にも恵まれていて、さらに師事できる友達が居るっていうのに――≫

「う、うるさいわね！　ええ、怠慢よ、すべてはあたしが招いた怠慢の所為よ！　解ってるわよ！」

練習を怠ったあたしが全面的に悪いってことくらいは理解しているわよ。でも、やっぱ難しいのよ、飛行魔法。どうもあたしは空間認識能力がちょっと残念なんだそう。というわけでこの数ヵ月、士官学校の放課後、なのはやフェイト、シャルん家で下宿する時はすずかやルシルにも飛行の特訓に付き合ってもらった。

なのはとすずかとフェイトは優しく教えてくれたけど、ルシルの教え方はマジスパルタだったわ。いきなりスカイダイビング方式で高高度から突き落とされたんだもの。あん時は本気で汚い言葉で恨んでやったわ。

「はぁ。・・・ま、空戦なんてなのは達に任せるわ。あたしは陸戦魔導師として頑張ってくってもう決めたんだもん。だから飛べるだけで十分よ」

≪そうかい。ま、アリサがそうで良いってんなら俺も――・・・ん？

アリサ、上空に転移反応！　気を付けろ、魔力反応、デカい！≫

"フレイムアイズ"からの報せに「オーケー！」応え、足元に魔法陣を足場とする魔法フローターフィールドを展開して着地。"フレイムアイズ"の柄を両手で握りしめて警戒態勢に入る。

「ふ、ふわ、ふわぁぁぁぁーーーーっ！！？」

あたしの視線の先、転移反応を示した空間から飛び出して、そして墜落して来たのは「フラム！？」だった。フラム・ザ・リヴェンジャー。映像ではやてのそっくりさんでマテリアル達の王様――ロード・ディアーチェとかいうのがそう呼んでいたのを憶えてる。

「お！？　私のオリジナルでありま・・・あああぁぁぁぁぁぁ・・・！」

あたしに気付いたフラムは・・・そのまま落ちて行った。助ける義理なんてないでしょうけど、「ああもう！」敵で、色違いで、性格も違うのに、それでもやっぱあたしと同じ姿ってことで見捨てるわけにもいかなくて。急降下を開始。そんで「掴まって！」フラムに向かって手を伸ばす。

「て、敵の施しなど受けないのであります！」

「馬鹿！　墜落して地面に激突したら、いくらマテリアルでも危ないんじゃないの！？」

川の中にポツンとある小島――中州までの距離はある。でもそろそろ制動を掛けないとまずいかも。それでもフラムはあたしの顔と差し出してる左手を交互に見ながら悩んでる。だから「早くしなさい！　地面に衝突しちゃったら痛いわよ！　苦しいわよ！　助けもなく唸り続けて、最後はアンタひとり寂しく消め――」ってところまで言いかけたら・・・

「いやぁぁぁぁぁぁっ！　そんな惨めな最期なんて、嫌であります
ぅぅーーーーっ！！」

ブワッと大粒の涙を流したフラムがあたしの手に掴まって、「ちょっ、どこ触って――きゃんっ、こら！」色んなところを触りながら抱きついてきた。その所為でちょっと力が抜けちゃったりして制動を掛けるのが遅れた。

「っと、フローター！」

対象を浮遊させる魔法であたしとフラムを包み込む。けど落下速度があまりに速すぎたのか完璧に止まる前に地面に激突しちゃうわ。ここで「借りは今すぐ返すであります、オリジナル」涙目のままだけど気丈に振る舞うフラムが、「タラスクス！　スプリングフィールドであります！」って言って、ある魔法を発動した。
眼前にまで迫って来た地面との間にミッドの魔法陣が1枚。フローターフィールドなんて硬い足場、地面と変わらずに痛いじゃないの、ってツッコみを入れようとする前に激突・・・したんだけど、襲ってきたのは痛みじゃなかった。

「のわぁっ！？」

まるでトランポリンの様に優しい弾力が返って来て、ボヨンと跳ね上げられた。弧を描きながら緩い速度で落下するあたしは見た。魔法陣４枚が縦に連なっているのを。あれがバネのような緩衝剤の役目を果たしたんだ。ここでフラムがあたしから離れと思えば「ちょっ、んな・・！？」あたしをお姫様抱っこして、そんで着地。

「あ、危なかったでありますなぁ・・・オリジナル」

「お、そ、そんなことはいいから早く降ろしなさいよ！　Ｈａｒｒｙ，Ｈａｒｒｙ，Ｈａｒｒｙ！」

「あんまり大きな声を出さないでほしいであります、オリジナル。大声は嫌いであります」

急かすと、フラムは泣き顔に歪みながらもあたしを下ろした。ああ、地面、しっかりと大地に足を降ろしてるわ。すごい安心感。やっぱあたしに空は向いてないわ。うん、空戦はやっぱり無理。

「あの、オリジナル・・・？」

「なによ？」

「ひうっ。・・・う、うぅ、その、助けてくれて、ありがとう・・・であります」

「っ！・・・ふ、ふんっ。あのまま見殺しにするのも気が引けるし、気まぐれよ、気まぐれ！　ま、あたしもありがと。助かったわ」

不覚。自分の顔なのに、その健気っぽくてか弱いって感じの態度や仕草が可愛いって思ってしまったわ。あたしなのに、あたしの顔に体なのに。そう自己嫌悪してると、「オリジナル、どうかしたでありますか？」なんて心配をしてきたフラム。ていうか・・・。

「アリサ・バニングスよ」

「へ？」

「名前！　アリサ・バニングス！　オリジナルって呼ばないで！」

「は、はいっ、でありますアリサ！」

ビシッと敬礼するフラム。なんか憎めないわぁ、自分の姿云々を除いても。ま、とにかく「アンタを連行するわ」マテリアルの捜索担当ははやて達だけど、こうして遭遇しちゃったんだから、あたしが捕まえても良いわよね。

「嫌であります！　我らマテリアル、悲願を果たすまでは捕まるわけにはいかないであります故！」

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。―。
炎壊の報復者フラム・ザ・リヴェンジャー
。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

「タラスクス！」

――アトロポンカ――

フラムの持つデバイス、"タラスクス"の刀身が炎に包まれた。前回、ヴィータとの決闘映像で観た、あたしの魔法であるバーニングスラッシュだわ。振るわれた一閃を大きく後退して、「まずは人の話を聞く努力をしなさいよ！」って怒鳴りながらフレイムウィップを発動して、"フレイムアイズ"を振るう。

「話すことも聞くことも今は必要ないであります！　紅の鉄騎を討つ前哨戦、敗けないでありますよ！」

フレイムウィップを寸断したフラムがそのまま突進して来た。ならこっちも近接戦に持ち込んでやるわよ。正真正銘の騎士であるシグナムやシャルと猛特訓したんだもの。ここで負けちゃあの２人に顔向け出来ないわ。

――フレアブレード――

――サラマンデル――

お互いに炎じゃなくて、超高熱にした刀身による直接斬撃魔法を発動。ガキィンと甲高い金属の衝突音が耳をつんざくと同時に激しい火花が散る。んで、そこから剣戟の応酬が始まる。縦に横に斜めにと振って、そこに突きやフェイントを織り交ぜながら、"フレイム

アイズ"を振り続ける。フラムもまたあたしの斬撃に合わせて"タラスクス"を振るってくる。

「結構強いじゃない、フラム！」

――バーニングスラッシュ――

「お褒めに預かり感謝であります、アリサ！」

――アトロポンカ――

今度は刀身に炎を纏わせての斬撃魔法を発動して、お互いに決定打を与えようと振って、振って、振りまくる。けどフラムも本当の騎士のようにあたしの一閃一閃にちゃんとついて来て、しかもフェイントまで仕掛けてくる。

「ねえ！」

あたしが振り下ろした"フレイムアイズ"を、フラムは"タラスクス"を寝かせた状態で受け止めると同時に柄を持つ右手を振り上げることで刀身を斜めに傾けた。すると"フレイムアイズ"は"タラスクス"の刀身に沿ってギャリギャリと嫌な金属音を発しながら逸らし落とされた。

「なんでありますか！？」

ザクッと地面に突き刺さる"フレイムアイズ"の剣先。そして頭上

から差す"タラスクス"の影。首筋にチリッと僅かな痛み。狙いは首なんだってなんとなく理解できた。シグナムに教えられた、戦闘の最中に武器を手放すなど騎士として以ての外、っていう教訓を破る。

"フレイムアイズ"の柄から手を離して、ギロチンのごとく振り下ろされた"タラスクス"の斬撃を躱す。今度は"タラスクス"が地面に刺さることに。即座に上半身の捻りを加えた「うりゃあああ！」掌底をフラムのお腹に打ち込む。

「こふっ！？」

ルシルとの組手で、ある程度は武器なしでも戦えるようになったのよ、あたし達みんなね。フラムがよろけたところで"フレイムアイズ"を抜いて、「せいや！」その勢いで横降りに薙ぎ払う。フラムは「っく・・・！」大きく反り返り――ブリッジすることで躱して、地面を蹴ってそのままバック転を繰り返してあたしから距離を取った。

「けほっ、けほっ。紅の鉄騎も徒手空拳の技を持っておりましたが、アリサもでありましたか・・・！」

――ガルビーラ――

燃える"タラスクス"を横に払って、はやてのバルムンクみたく扇状に魔力剣（こっちは燃えてる剣だけど）を6本と放ってきたフラム。あたしは剣と剣の間に突っ込んで回避して、「そっち方面に詳しい友達が居てね。ルシルっていうんだけど・・・！」すぐさまフ

レイムウィップで反撃。

「ルシル・・・、ああ、かつての闇の書の主であった魔神オーディンと瓜二つのあの少年でありますね」

「知ってるのね、ルシルにもオーディンにも会ったことないはずなのに・・・！」

「その時代ではすでに我らマテリアルは存在していたでありますし、ルシリオンについても闇の書の中から見ていたでありますからな！」

鞭を深くしゃがみ込んで避けたフラムがそう言いつつ、全身に炎を纏った。あたしのブレイズロード全身版で、魔法の名前は確か、フェルニゲシュっていう。そのフェルニゲシュを発動したフラムが突進して来た。

≪カートリッジロード。バヨネットフォーム！≫

"フレイムアイズ"を銃剣形態のバヨネットフォームへと変形させ、炎の砲撃イジェクティブ・ファイアを突っ込んでくるフラムに向かってぶっ放す。フラムは勢いに乗り過ぎていたみたいで避けることも出来ずに直撃を受けて、大爆発に呑まれた。

「ま、まぁ、ブレイズロードは直線限定の高速移動魔法だしね・・・」

≪気を抜くなよ、アリサ。まだ終わっちゃいない。魔力反応が途切

れてないからな≫

「判って――っ！？」

――アゲマント――

悪寒に襲われて、直感的にその場から横っ飛びして離れた。その直後、火炎砲撃が黒煙を突き破って放たれてきた。穿たれた黒煙の穴から見えたフラムの姿。手にしているのは、「バヨネットフォーム のタラスクス・・・！？」だった。また黒煙が戻ってフラムの姿を隠す。

――ウィル・オ・ウィスプ――

次に放たれてきたのは炎の弾丸、フレイムバレットだった。あたしも同じ魔法で全弾迎撃したら、「タラスクス・スナイピングフォーム、参るであります！」フラムが火炎弾を連射しながら突進して来た。上等じゃない。あたしも火炎弾で迎撃しながら突っ込む。徐々に縮まる距離。その間で衝突して爆散していく火炎弾。その中を突っ切って・・・

「フレアブレードッ！」「サラマンデルッ！」

銃身下に付いてる片刃剣に超高熱を付加しての振り下ろしの一撃を同時に繰り出す。そして衝突。さっき以上の火花があたし達の間で咲き乱れる。

「さっきの、ねえ、の続き！　あんた達の目的は何っ！」

「話すことも聴くことも必要ない、と言ったでありますよ！」

「話してくれなきゃどうやっても、こうして力尽くになっちゃうでしょうが！」

「私はそれで構わないのであります！　我らマテリアルの悲願を邪魔する者は、容赦なく切り払うまで、であります！」

フラムが鍔迫り合いをやめて一足飛びで後退。すぐに銃口を向けてきて「ウィル・オ・ウィスプ！」火炎弾を１０数発と連射して来た。あたしは平行に走って避けながら「内容によっちゃ手伝えるかも、って言ってんのよ、馬鹿！」フレイムバレットを連射。

――ラウンドシールド――

――スケイル・オブ・ルナナ――

「助けなど不要であります！　強引な押し付けは偽善でありますよ！」

あたしは普通のシールドで避けきれない火炎弾を防御。フラムは炎版ホイールプロテクションで防御した。そして互いに爆発に呑まれる。視界を遮る黒煙からすぐさま脱出。と同時に「そこでありますな！」フラムのそんな声と一緒に炎のランスのようなモノが足元に着弾した。

――アウラール――

――ファイアプロテクション――

カッと視界が明るくなる。直感的にまずいと思ったあたしは、対シグナム用に修得した対炎熱魔法バリアを展開してランスの爆発を防いだ。なるほど。やっぱりフラムも進化してんのね。ディアーチェが言ってたし。新たな"力"云々って。

「でもね、ちょっと進化したくらいであたしを倒そうなんざ１０年早いのよ！　フレイムアイズ！」

≪カートリッジロード！　フルドライブ、クレイモアフォーム！≫

バヨネットフォームから大剣形態のクレイモアフォームへと変形させて、マガジンを新しい物へ交換。前進することで黒煙を突っ切った。そしてフラムと再エンカウント。アイツは「アウラール！」銃口の前に展開されてる魔法陣から、さっきの炎のランスを３本と発射して来た。

「とぉぉぉりゃぁぁぁぁーーーーッ！」

それを半実体化した炎の大剣で薙ぎ払って粉砕しつつ、驚愕に目を見開くフラムへとさらに駆け寄る。フラムは「ウィル・オ・ウィスプ！　アゲマント！」火炎弾や火炎砲撃を交互に撃って弾幕を張ったけど、「このクレイモアに、そんなちゃちなモノは通用しないわよ！」燃える大火力斬撃ヴォルカニックスカッシャーで薙ぎ払う。

「ぅく・・・・！」

伸縮自在の刀身でそのままフラムに薙ぎ払い攻撃を仕掛ける。アイツは"タラスクス"であたしの一撃を受け止め・・・「ひゃあああ！？」切れずに吹っ飛んで川へと派手に落っこちて、沈んだ。

「うわっ、やり過ぎたわよね今の！？」

≪それでいいんだろ？　アイツは敵で、打破するべき相手。やり過ぎってことはないだろ≫

"フレイムアイズ"が冷静にそう返してきた。そう、よね。僅かながらに親近感のようなものを抱いたけど、それでもアイツは敵なのよね。いよいよ以って自分と同じ顔と体を持ったフラムを撃破しようと揺らぐ意思を、何とか立て直して固めた。その時、フラムが沈んだところの川水が大飛沫を派手にあげた。

「今度は何！？」

≪上だ、アリサ！≫

"フレイムアイズ"に言われるままに視線を空へと上げていくと、「フラム・・・・！」あたしは見た。なんだっけ、アレ、そう、フェニックスのような鳥の形をしてる炎を全身に纏ったフラムが空に浮いてるのを。そんなフラムがあたしに向かって急速降下して来た。炎の砲弾・・・ううん、そんな生易しい物じゃないわね。アレは正

しく・・・隕石。

「エレンスゲッ！！」

「ヴォルカニック・・・スカッシャァァァーーーーッッ！」

真っ向から迎撃するために炎を噴き上がらせた斬撃を振り下ろす。ズドンッと重い衝撃が柄から両手、胴体と頭、両足へと奔り過ぎてく。受けに回ったのはミスだったわ、ってすぐに思い知る。隕石と化したフラムの突進攻撃にあたしは踏ん張りきれずに、「きゃああああああっ！！」大きく吹き飛ばされた。フラムが中州に墜落。馬鹿みたいな大爆発を起こした。

「っく、うぁ、いっつ・・・わぁぁぁぁ！！」

体勢を立て直して着地してすぐにまた、衝撃波と爆風でさらに吹っ飛ばされて、「あぐっ・・・！？」背中から別の中洲へ墜落。一瞬息が止まって、そこから激しく咽続ける。涙が止まらない、だらしなく涎が垂れる。それほどまでの衝撃だった。なんとか呼吸を整えて、"フレイムアイズ"を支えに立ち上る。

「直撃でなくとも戦闘不能に出来ると踏んでいたでありますが、良く堪えたでありますな、アリサ」

「っ！・・・今度はクレイモアフォームのタラスクスなのね・・・！」

「タラスクス・ツヴァイヘンダーフォームであります。切り札は紅

の鉄騎に取って置くつもりでありましたが、そのような甘いことを言っていられる戦況でもない故に発動したであります」

フラムの両手に握られてる"タラスクス"は正しく、クレイモアーツヴァイヘンダーフォームだった。まさかそこまで真似て来るなんて、覚悟・・ううん、予想はしてたけどさ。

「アリサ。私とあなたとの決闘も幕でありますよ」

「そう、ね。これ以上、アンタと付き合ってたらキリエさん捜索に支障が出るわ・・・！」

お互いにカートリッジをロード。"フレイムアイズ"と"タラスクス"の刀身から強大な炎が噴き上がる。

「タイラントフレアッ！」

「アラムッ！」

同じ魔法を発動したあたしとフラムは同時に一足飛びで最接近して、お互いの相棒を振り下ろす。炎の斬撃が衝突する。視界が白や赤に染まった。あたし達の炎が反応を起こしてとんでもない爆発を引き起こしたのね。視界の暗転、体を襲う浮遊感。まるで夢心地。意識を失ったのか保っているのかも判らない。

≪しっかりしろ、アリサ！≫

"フレイムアイズ"の叱咤であたしはまだ意識を繋ぎ止めているってことを自覚。宙で体勢を立て直して中洲に着地。目の前に広がる黒煙の奥から、さっきにも感じた悪寒がまた。

「フレイムアイズ！　デストラクト・ディターレントッ！」

≪応っ！≫

"フレイムアイズ"の柄を握る両手を左脇に持ってきた上で全身に炎を纏う。そして「突っっ貫ぁぁぁぁんッ！！」地面を蹴って突撃。黒煙を突き破って行く中、「エレンスゲッ！！」フェニックスと化してたフラムと正面衝突。炎の槍と炎の鳥の衝突は、さっき以上の大爆発を引き起こした、と思う。第三者視点じゃないと判らないわ、きっと。

（でも、こうなるって前もって覚悟してたから耐えられるわ！！）

爆発の衝撃波と爆風で大きく後方に吹き飛ばされる。

――アルジンツァン――

直感が働いた。足元にフローターフィールドを展開してそこに着地、即座に蹴って上に向かってジャンプ。直後、あたしのヴォルカニックスカッシャーと同じ大火力斬撃がそこを薙ぎ払っていった。刃の軌道からして、「そこね！」こっちも同じ魔法、ヴォルカニックスカッシャーでフラムが居ると踏んだ予想地点を薙ぎ払う。

「うぐぁぁぁぁっ！？」

「ビンゴっ♪」

手応えと一緒にフラムの悲鳴が聞こえた。上空からフラムの位置を確認するために、頭上に足場を作って駆け上がって行くそんな中、「スクリピチョアーサ！！」八方に炎の竜巻が発生して、黒煙を消し飛ばした。

「見つけたでありますよ、アリサッ！！」

バリアジャケットの所々が破けて素肌を晒してるフラムがあたしを見上げていた。フラムが地面に展開してる魔法陣に突き刺してる"タラスクス"を引き抜くと、炎の竜巻が無数の火の粉を散らしながら消滅。というか、「痛っ！？」火の粉にすらダメージ判定があるなんて卑怯じゃない！？　ビシバシと体に触れる火の粉が徐々に、でも確実にあたしにダメージを与えて、バリアジャケットを破壊してく。

（もうダメ、耐えらんない・・・！）

多方向の防御に優れるバリアですらも小さく無数な火の粉を防ぐのは無理だと判断して、火の粉の薄い場所へと目掛けて飛び降りる。

「隙ありであります！　アルジンツァン！！」

「こんの・・・！」

振るわれる大火力斬撃。足場を蹴っての回避は動作が多すぎて無理。フローターじゃ恰好の的になる。ならどうする。アレしかないと思ったあたしは「飛行！」の魔法に懸けた。こんな実戦の最中で、しかも空中に居る時での発動成功の回数は１０回中１回あればいい。あたしはその１回を、ここで引き当てた。目前にまで迫っていた斬撃をギリギリ上空に向かって飛ぶことで回避。

≪アリサ！　本世界での時刻が午前９時になったぜっ！≫

日本は海鳴市の時間は午後９時半くらいかしら。もし戦いの場が海鳴市だったらあたし、フラムに負けてたかも。ここで接敵することが出来たのは本当にラッキーね。

「スリーズ・サンズレガリア、起動！」

≪起動するぜ！≫

午前９時から正午までの３時間、午後３時から午後６時までの３時間、計６時間の間だけ、あたしの魔力量や身体能力、さらに"フレイムアイズ"の性能の限界値を大幅に底上げすることが出来る、スリーズ・サンズレガリアを起動。起動中のあたしに名前を付けるとしたら、太陽の騎士モード、と言ったところかしら。

ザッと地面に降り立って、真っ向からフラムを見据えると「っ！！？？」あたしに怯えるかのようにジリジリと後退を始めた。あたしは演技だろうと考えて「アンタも使えるんじゃないの？　レガリア」と声を掛けてみる。するとフラムは「残念ながら持ち合わせていないの

であります」と首を横に振った。

「いくらコピーでも、進化したと言っても、オリジナルの全てを手に入れるのは不可能でありますよ」

そう力なく笑った。ここだ、今しかない。そう思ったあたしは「投降して、フラム」あの子に手を差し伸べた。この戦況、もうフラムでも覆る事はないって思ったから。いくら目的のためとは言え、ここで死を選ぶような子じゃないはず。そう思ったのに・・・

「私は義のマテリアル、炎壊の報復者フラム・ザ・リヴェンジャー！
マテリアルの先駆ける騎士として、自らの意思で、敵を前に後退するわけにはいかないであります！！」

――スクリピチョアーサ――

"タラスクス"を地面に展開した魔法陣に突き刺したことでまた、炎の竜巻が八方に出現。フラムはカートリッジをロードした後にマガジンを交換、さらにカートリッジを何発もロード。また交換してロードを繰り返した。そんなあの子に「やめなさい！　ロードのし過ぎよ！！」止めるように叫ぶ。何事にも限度ってものがある。それを超えて待つのは、破滅だけだわ。

「今のあなたの魔力に追いつくにはこれしか術が無いであります！・・・我が一撃、受けて見るがいいであります、アリサ・バニングスッ！！」

「っ！・・・この・・・大馬鹿ぁぁぁぁぁーーーーッ！！」

≪不浄の闇を断ち払うのは太陽の現身。輝ける炎の聖剣ッ！！≫

足元に展開した魔法陣から噴き上がる炎を刀身に吸収させ、元から噴き上がってた炎の火力がさらに増していく。フラムは八方に巻き起こってる炎の竜巻を地面に突き刺したままの"タラスクス"の刀身に吸収させていく。あたしとフラム、似たような魔法なのね。

「やめるなら今よ、フラム！」

「その台詞、そっくりそのまま返すでありますよ、アリサ！」

もう止まらない。なら本当にしょうがないけど、本当は嫌だけど、あたしはアンタを倒すわ。

「ガラティーン・・・」

「黙示録（ドラッヘン）の・・・！」

"フレイムアイズ"を脇に抱えるあたしと、突き刺さったままの"タラスクス"を背負うような体勢を取ったフラムの視線がぶつかる。

「ブレイカァァァァァーーーーーーーーーッッ！！！！」

「赤き竜（アポカリプス）の伝説ッッ！！！！」

薙ぎ払いで発動した砲撃ガラティーンブレイカーと、振り下ろしで発動した7つの頭を持った竜の形をした砲撃ドラッヘン・アポカリプスが、あたし達の間で衝突。直後、全ての感覚をあたしから奪い去った。

≪・・・サ・・・リ・・・アリ・・・サ・・・アリサ・・・アリサ！≫

「ん？・・・ん・・・う・・・・んぅ・・・・フレイ・・ム・・アイズ・・・？」

耳に届く、あたしの名前を必死に呼んでる"フレイムアイズ"の声。

≪さっきフェイト嬢ちゃん達を呼んだからもう大丈夫だぜ！≫

揺らぐ視界から生まれる不快感に耐えながら、力の入らない体を起こそうとするけど、やっぱ無理。頭がちょっと上がっただけですぐにガンっと降ろす。ていうか、今の痛いわぁ・・・。

≪よせ。あんな大火力砲撃の余波をまともに受けたんだ。もうちょっと休んでろ≫

「・・・・アイツは、フラムはどうしたの・・・？」

≪逃げたよ。自分の砲撃が押され始めた時にアイツ、絶対に逃げないであります、とか叫んでたが何か心変わりしたのか、陛下、いま戻るであります、とか言ってな≫

仕える王であるディアーチェに念話で呼び戻されでもしたのかしらね。まぁいいわ。深呼吸は数回した後、「フレイムアイズ。あたし、勝った？」と訊く。

≪当たり前だろ。お前の勝ちだよ、アリサ。だから今は休め。休んだ後、また仕事だぜ≫

「・・・ん、了解。そんじゃ、ちょっとの間だけ、おやすみ・・・」

こうしてあたしはさっきから誘われっぱなしだった眠気の中に意識を預けることにした。

Ｅｐｏｓ４２力のマテリアルＬ／雷刃の襲撃者～Ｌｅｖｉ　Ｔｈｅ　Ｓｌａｓｈｅｒ～

†††Ｓｉｄｅアルフ†††

たく。せっかくゆっくりと過ごせると思ってたら、マテリアルっていう"闇の書"の闇の復活を企む連中がまた発生した。３ヵ月ほど前、みんなで阻止したんだけどな。何が理由で蘇ったのかねぇ。ま、そういうわけであたし達は、マテリアルと一緒に要注意人物として認定された異世界からの渡航者、アミティエとキリエっつうフローリアン姉妹の捜索を始めた。アミティエはなのは達が。フェイトとアリサ、あたしはキリエを。マテリアル達ははやて達が担当することになった。

「見つかんないねぇ、それにしても」

キリエの反応を捉えたっていうアリシアからの報せで無人世界へとやって来た。そんであたしは平原の上を飛んでキリエの捜索中。フェイトは砂漠地帯、アリサは瀑布地帯を担当。分散して捜索範囲を広げる方が何かと楽だからねぇ。見逃しとかないし。

「・・・ん？」

あたしの耳（本来の狼としてのだよ）が意識せずにピクッと跳ねた。そんで遅れて魔力反応を捉えた。デバイスの無いあたしは、全部あたし自身の感覚に掛かって来るからね。反応のあった地点へと進路

変更。そして・・・「え？」あたしは接敵した。

「・・・？　アルフ・・・？」

「リニス・・・！？」

あたしの目の前に居るのは、フェイトとアリシアの母親プレシアの使い魔だった、リニスだった。リニスはフェイトの家庭教師であり、フェイトとあたしの魔法の師匠であり、"バルディッシュ"の製作者でもあり、すごく優秀な魔導師でもある。だけどリニスは、"バルディッシュ"を作り終えた後、主だったプレシアから契約を断たれて・・・もう居ないはず。

（幻術か？・・・いんや、違う。この感覚、憶えがある。・・・闇の書の残滓だ）

前回で拳を交えた残滓と同じ感じがする。懐かしさに気を緩めそうになるのを、本物じゃなくて敵――消すべき残滓だって強く思って耐える。

「アルフ。ここは一体どこです？　そもそも私はどうして・・・？　解らない。頭も痛んで・・・。アルフ。少し休みたいんで、ここがどこか教えてください・・・」

リニスの声だ。フェイトにも会わせてやりたいけど、ダメだ。あたしは拳を強く握り締めて、唇を噛んで叫びたい衝動を必死に抑えた。そんで「ごめんよ、リニス」腕で溢れてきた涙を拭って、「大丈夫。

すぐに・・・休ませてあげるから」リニスに向かって突進。

「アルフ！？　急に何を・・・！？」

「リニス。これは夢なんだよ。リニスは、夢を観ているんだ・・・！」

――ブリッツフィスト――

両拳に雷撃を纏わせての打撃魔法を、コンビーネーションでリニスへと繰り出す。リニスは「これが夢・・・！？　明晰夢というものでしょうか・・・？」なんて余裕で手に持ってるステッキで防御して来るから、「せいっ！」上段蹴りで意識断絶を狙う。

「あう・・・っ！」

頭が痛い。調子が悪いってことらしいから今の一撃でリニスの体勢を崩すことが出来た。ステッキで防御したその上からの衝撃に耐えきれずによろけたリニスに向かって「バインドシュート！」バインドリングを発射して、リニスを拘束する。

「こんな魔法、いつの間に覚え――・・・うぐっ！？」

――ブリッツフィスト――

リニスの腹に一撃を打ち込んだ。バインドが解けて、リニスがあたしにもたれ掛って来た。あたしは「リニス・・・、ごめんよ、ごめん、ごめん」何度も謝りながら抱き止めて、ギュッと抱きしめた。

「アルフ・・・・？」

「リニス・・・・！」

「・・・ふふ。夢の中でとは言え、まさかあなたに負ける日が来るなんて・・・・」

リニスがあたしの方に流れる涙を指で拭って、そして笑顔を浮かべた。やっぱ無理だ。偽者だからって、やっぱりリニスはリニスだ。

「・・・ありがとう、アルフ・・・・」

「リニスっ！」

そうしてリニスは、あたしの腕の中から崩れて消えていった。

†††Ｓｉｄｅアルフ⇒フェイト†††

復活したマテリアルと、そのマテリアルと一緒に何かを企てている異世界からの渡航者、キリエ・フローリアンさんを捜索するために、私とアルフとアリサの３人でとある無人世界へとやって来た。

私のお姉ちゃんであるアリシアが、私たちが居候をしてるハラオウン家の中で一番設備の整ったエイミィの部屋で観測した限りだと、この無人世界にキリエさんが居るらしいんだけど。

夜空と岩山が幾つも切り立つ砂漠に挟まれた空を飛びながら、「なかなか捉えられないなぁ～・・・」ポツリと呟く。キリエさんの反

応が捉まらない。分かれて捜索してるアルフとアリサからの発見の報告もないし、もしかしてもう居ないんじゃ、って思いもあったんだけど・・・

≪前方2時の方角に、力のマテリアルの反応を探知。距離１０００ヤード≫

"バルディッシュ"から、私をオリジナルとしていた"力"のマテリアルの魔力反応を捉えたって報せが入った。どうしよう。マテリアル達の捜索は、私たちじゃなくてはやて達なんだけど。でもでも、ここで黙って見過ごすわけにもいかないよね。うん、そうだよね。

「よし。行こう、バルディッシュ。あの子からも話を聞かないと」

≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ≫

"バルディッシュ"の案内に従って飛行進路を変更。約９００ｍ先に居るっていう"力"のマテリアルへと向かって飛ぶ。そして「あの後姿、間違いない」色は違うけど私と同じ姿形。３ヵ月前に私が撃破して、そして数時間前に復活を果たした、あの子がゆっくりと空を翔けていた。

「待って！」

「??・・・あ、あああああ！　えっと、えっと、わぁーっはっはっは！　電光散らして、ボク、颯爽ふっかぁぁ～～～つッ！」

私に呼び止められたことで止まって反転したあの子がビシッと"バルフィニカス"を私に付き出して大きく笑い声をあげた。なんか雰囲気が違う。だから「なんだか前に会った時よりすごく元気？・・・・だね。よかった？」とちょっと困惑しながら訊いてみた。

「え？　あー、あれだよ、うん、ぶっちゃけるとさ、あの時は寝惚けてたわけ！　なんて言うかなぁ、そう、夢の中で、ボクの憧れてるクールでカッコよくて頼りになって、でも正義のヒーローじゃなくて悪いボスのようなダーク的な姿を演じてた・・・かな？」

「そ、そうなんだ・・・。う、うん、確かに、カッコ良かった、かな・・・？」

「ホント！？　じゃあ、今からでも戻して――」

「それはいいかな。やっぱり素の方が好きだから。君もその方が良いでしょ？」

すごく物騒な発言を繰り返していたし、アレが演技だったんならもうやめておいた方が良いと思う。だからそう言ってみたら、あの子は「う～ん・・・、うんっ！　そうだね！」元気いっぱい、満面の笑顔で頷いた。自分と同じ姿形なあの子が元気いっぱいな姿でいると、なんていうかアリシアと重なるかなぁ。アリシアが私くらいの身長にまで成長するとああなる・・・？

「あ、そだ、ねえねえ、オリジナル！　ほらほら、見てよ、見てよ！　ボクのカッコきれーな魔力光！　アクアブルー！　すごいでしょ、

きれいでしょ、かっくいぃー煌めきでしょ！」

「うん、綺麗だね、本当に」

以前は私と同じ金色だったけど、あの子の足元に展開された魔法陣は綺麗な水色で、「アリシアの色に似てる」ってポツリと呟いた。アリシアの魔力光は空色。うん、似てる。すると「アリシア？　だれだれ？」ってあの子は興味心に突き動かされるままに私に接近してきた。身構えそうになったけど、あの子に悪意が無いのが判るから、構えを取ることなく接近を許した。

「私のお姉ちゃん。えっと写真データは・・・この子だよ」

「どれどれ・・・って、小っちゃ！　姉ってうっそだぁ～。妹じゃないのぉ～？」

「ううん。正真正銘、私のお姉ちゃんだよ。君の魔力光、アリシアの色と似てるんだ」

モニターに映し出したアリシアとアルフの3人で撮った写真を見せる。私たちみんな笑顔を、写真を撮ってくれたエイミィに向けてる。と、「ねえ、もしかしておねーちゃんとボク、似てたりするの？」って訊いてきた。

「う、う～ん・・・微妙に似てる、かも？　どうだろう、元気いっぱいなところはそっくりかな」

アリシアの元気いっぱいの姿を思い返す。そしてアリサやシャルと一緒に、ルシルにイタズラをするあの困った悪さをするその姿も。やっぱり似てるかも。

「元気だけなら他のマテリアル達にも負けないよ！　元気は良いよぉー！　元気があれば、どんな好きなことも出来る！　ブッた斬って、撃ち抜いて、楽しい楽しい襲撃――スラッシュも出来る！　すっごい面白いこと、とっても楽しいこと、ちょーカッコいいこと、なんだって！」

うーん、元の性格でもやっぱり物騒なことは言っちゃうんだね。両手で握っている"バルディッシュ"の柄を握り直す。そして、元々そのつもりだったけど、「君のオリジナルである私は管理局員さんだからね、君たちのやんちゃな遊びを放っておくわけにはいかないんだ」改めてこの子たちの悪巧みを止める決意をする。

「ふっふっふ。その言葉、ボクへの挑戦と受け取った！」

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。
雷刃の襲撃者レヴィ・ザ・スラッシャー
。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

「見せてやるっ、生まれ変わって手に入れたこの力ッ！！」

――光翼斬――

私のハーケンセイバーをコピーした、斬撃を放つっていう光翼斬だ。

でも以前とはちょっと違って、縦回転で、しかも私のものより速かった。しかも誘導性も高いようで、回避しようと横移動したらほぼ直角に曲がって来た。

「バルディッシュ！」

――ハーケンスラッシュ――

大鎌形態ハーケンフォーム時に展開される魔力刃の強度や攻撃力を増加した上での斬撃で、追尾して来た光翼斬を迎撃、弾き飛ばす。そのすぐ後、「電刃衝！」プラズマランサーを6発と発射して来たから、上昇して避けて「プラズマランサー、ファイア！」同じ魔法を8発と発射する。

「無駄、無駄っ♪」

――光雷斬――

あの子は魔力刃で全弾を弾き返した。けど、この魔法は「ターン！」のキーワードで、方向転換が出来るんだよ。四方八方に散ったランサーがあの子に向かって方向転換、「ファイア！」そして再発射。

「へっへーん！　前までのボクと違うんだぞぉ～！」

――雷光破走――

あの子はソニックムーブで急速後退して、左手を私に向けてきた。

魔法陣が展開される。すぐに砲撃だと察してランサーの誘導操作を解除、その場から離脱する。直後「雷刃爆光破ぁぁぁぁッ♪」砲撃が発射された。足元を通り過ぎて行く砲撃をチラッと見て、あの子へと視線を戻した時、「あ・・・！」見失ったことに気付いた。後ろ・・じゃない。

「上・・・！」

見上げると、あの子はそこに居た。水色に輝く雷光の塊を頭上に複数基と展開していた。新技だってすぐに判った私は、迎撃でも防御でもなく、回避を選択した。明らかに私の防御力の上を行ってる。

（距離もある上での発動だ。おそらく範囲攻撃。私のようなタイプにはキツイかな・・・！）

急速降下してあの子から距離を取る。目指すは壁になってくれそうな分厚い岩山。頭上からはバチバチと放電している音が降ってくる。そして「パワー極限！　轟雷爆滅ッ！」そんな掛け声が聞こえてきたから横目で頭上を見る。あの子の頭上に有る複数の雷塊から雷光に繋がれた剣が飛んで来ていた。

（あんなの喰らったら本当に墜とされる・・・！）

すごい魔力を感じる。唯一の救いは、推測してた広域攻撃じゃなくて対人攻撃だったこと。避けきってしまえば大丈夫。避けれなかった場合は、最悪な撃墜。迫る雷剣を、岩山の中を翔けながら避け続ける。あと少しで追いつかれるというところで、目前にまで迫って

来た岩壁を回り込むように急速旋回。

「受けよ、エターナルサンダーソード！　その効果は、えっと、えっと・・・相手は絶対に死ぬッ！」

――雷刃封殺爆滅剣――

「勝手に殺しちゃダメだよっ！？」

岩壁を挟んだ向こう側に突き刺さったらしい雷剣が一斉に爆ぜたのが判った。非殺傷設定だとは思うけど、それでも私が背にしている岩壁を破壊していく様からして、そんなの関係が無いって思えるほどに本当に死んじゃいそうな威力。とんでもない放電に巻き込まれないために岩壁から距離を取る。

「バルディッシュ！」

上空に留まっているあの子の魔力反応を"バルディッシュ"に探知させ、エターナルサンダーソードっていう魔法の爆発で巻き起こった砂塵の所為で姿の見えないあの子の場所を探る。そして"バルディッシュ"の探知した通りに距離、方角、角度へ向けて左手を空へと翳して、「プラズマスマッシャァァァーーーッ！」砲撃を放つ。砲撃は砂塵を吹き飛ばして、あの子へと真っ直ぐ飛んで行く。私は砲撃を撃ち終えてすぐに上昇開始。砲撃を避けたあの子へさらに「プラズマバレット、ファイア！」ランサーより威力や速度もないけど、誘導制御に優れた魔力弾を１０発と発射。

「むぅ、何で死んでないんだよぉ、オリジナル！　ボクの必殺技だぞぉ！　必殺技は必殺なんだぞぉッ！」

――雷光破走――

様々な方位からのバレットによる包囲攻撃を、ソニックムーブで回避して行くあの子にバレットで追撃させながら飛行ルートを制限、誘導させていく。

「そんな物騒なことを言っちゃダメだしやっちゃダメだよ！？」

――ハーケンセイバーー――

"バルディッシュ"を振るってあの子の行く手へと魔力刃を飛ばす。バレットとセイバーの挟撃に「あわわわっ！」あの子は急停止して、バレットにはラウンドシールドで対処して、セイバーには「光雷斬！」斬撃魔法で迎撃をした。

両手が塞がった事を確認。カートリッジをロード。前面に魔法陣を展開した魔法陣をあの子へと向けてもう1つの砲撃魔法、「トライデントスマッシャァァァーーーーッ！！」を発射。三叉槍の名を冠してる通り、3つに分かれた砲撃が真っ直ぐ向かっていく。もう少しで直撃というところで、ドンッと強力な魔力を放ってその姿を光の中に隠した。そして見た。

「わーっはっはっはっ！　憶えているか、オリジナル！　前回、ボクがどうやってオリジナルに負けたのか！」

スマッシャーから逃れるように急降下した水色の閃光。あの子だ。魔力開放でバレットとセイバーを消滅させ、そして砲撃を降下することで回避した。その姿は間違いなく「ソニックフォーム・・・！」だった。

「そう！　ちょー速く移動できるこの魔法をボクは持っていなかったから、追い詰められちゃったんだ！　でも、今度はそうはいかないぞ！　このスプライトフォームで、コテンパンにしてやるから覚悟しろっ！　スプライト・・・ム～～ブ！」

あの子の姿が掻き消える。いいよ、じゃあ私だって「ソニックフォーム！」高速機動戦形態のソニックフォームへ換装して迎撃してあげる。

「せぇぇぇーーーいっ！」

――光雷斬――

「はぁぁぁぁぁーーーーッ！」

――ハーケンスラッシュ――

私とあの子、お互いに高速移動魔法を連続で行いながらデバイスを振るい続ける。ヒットアンドアウェイ。私と同じ戦い方がこうして返って来て苦戦しちゃうと、自賛になっちゃうかもだけど厄介だなって思えてしまう。

そして何度目かの鍔迫り合いの最中、「むぅ、やっぱりオリジナル

は強いな！」あの子が私のことを褒めてきたから、「君も強くなってね。前回だったらもう終わってそうなんだけど」って褒め返す。ん？　褒め返せたのかな、これ・・・。

「えへへ♪」

「そう言えば、名前、有ったんだよね・・・？」

「うんっ、有ったんだよそれが！　ボクの名前は、レヴィ！　元気いっぱい勇気全開の、レヴィ・ザ・スラッシャー！」

そう、レヴィ。満面の笑顔で自己紹介したレヴィが鍔迫り合いを自ら中断して後退して、「電翔弾！」プラズマバレットを１０発と撃ち放ってきた。それらを回避して、「プラズマランサー！」を６発と発射。レヴィが紙一重で避けながら前進して来たから、私も前進。そしてまた、互いにデバイスを振るって斬り結ぶ。

「そして、カッコよくて頭が良くてメラメラなのがシュテル！　綺麗で、クールで、怒ると一番恐いのがアイル！」

火花が周囲に激しく散る。レヴィ、本当に強くなった。でも、私だってこの３ヵ月、なのは達と特訓を繰り返して、士官学校でも魔力運用技術を学んだんだ。負けるわけにはいかない。"バルディッシュ"を振るって、突いて、盾にして、レヴィに一撃を与えようと振るい続ける。

「アホだけど礼儀正しくて、シュテルみたいにメラメラなのがフラ

ム！　なぁんか偉そうですぐ怒るけどホントは優しい、実際にえらい王様なのがディアーチェ！　ほら、みんなカッコいい名前だろー！」

「うん、みんな格好いい名前ばかりだね。それじゃあ、私の名前、知ってるかな・・・？」

「うんっ！　ヘイトだろー！　えっへっへー。ボク、ちゃんと憶えてるだろー？」

「えっと、フェイト、なんだけど。フェイト・テスタロッサ・・・」

「へいと・・・？」

「フェ・イ・ト」

「へ、い、と・・・。んもう、めんどくさいからオリジナルで良いじゃん！」

「あぅー、ひどい・・・」

フェイトよりオリジナルって呼び方の方が面倒だと思うのに。なのはとヴィータのやり取りを思い出しちゃった。ヴィータは始めの頃。なのはのことを、なにょは、って上手く発音できずにいた。今ではちゃんと呼べているんだけどね。でも、レヴィは今後もちゃんと呼んでくれなさそう。

僅かなショックで気が抜けそうだったのを耐えて、レヴィの猛攻を凌ぎきる。そして「せいっ！」今一番の全力振りでレヴィの"バル

フィニカス"の一撃に応え、「なんでー！？」あの子を弾き飛ばした。

「プラズマランサー、ファイア！」

体勢を立て直す前にレヴィにランサーを４発と発射。レヴィはシールドで防御したけど着弾時の爆発で「うわぁー！」また吹き飛んだ。でもソニック――じゃなくて、スプライトムーブを発動してその姿を掻き消した。

「どっせぇぇーーーい！」

――光雷斬――

私の右横に現れたレヴィ。そして振るわれる"バルフィニカス"。まず縦に構えた"バルディッシュ"の柄で"バルフィニカス"の柄を受け止める。そして右手を上げ、左手を下げることで"バルディッシュ"を水平にしていく。と、押し切ろうとしている"バルフィニカス"はその力の所為で柄を滑って行き、スカッと空振ることになった。

「サンダーアーム！」

雷撃に変換した魔力を体の一部に集中的に発生させて、その部分に触れた相手の体や武器に雷撃を流す、攻防一体の防御魔法を発動。今回は柄から離した左手に付加。そのまま空振った勢いで脇腹ががら空きなレヴィへと「えーい！」パンチ。

「あばばばばばっ！？　バチバチするぅーーーー！？」

そして感電するレヴィ。殴り飛ばすとレヴィは力なく落下を始めたけど、なんとか体勢を立て直して宙に留まった。だけど「けほっ。・・・なんか目の前に星がいっぱいあるぞぉー？」口の中から黒い煙を吐いて、静電気でボッサボサになった髪をそのままに両手を空に掲げて、わーい、とクルクル回り始めちゃった。

「どうしよう、自分の姿っていうこともあって、なんか恥ずかしい・・・」

激しい感電をしちゃったからなのかレヴィがおかしくなった。どうしようかと困惑してると、「隙ありぃぃーーーッ！」レヴィがくるっと一回転して光翼斬を放ってきた。高速回転しながら飛来してくる魔力刃を「今の嘘だったの！？」なんとか"バルディッシュ"の一撃、ハーケンスラッシュで迎撃、弾き飛ばすことができた。

「言ったろー！　ボクは、悪役が大好きだ！　けほっ、どうだ、騙されたかーっ？」

「えっと、うん、騙されたのは騙されたんだけど・・・大丈夫？」

本音を言うと演技に見えない。バチバチ言ってるし、咳をするたびに黒い煙が口から出る。電力は抑えたつもりなんだけど。失敗したのかなぁ。とりあえず「いろいろと話を聞きたいから、拘束させてもらうね」バインドを発動しようとしたら、「いぃーっだ！　絶対

に捕まらないぞ！」レヴィがそう言って、"バルフィニカス"をサッと横に払った。

「ザ、ザンバーフォームまで・・・・！」

"バルフィニカス"がザンバーフォームへと変形した。レヴィは「んんー、カッコいいーっ　ブレイバー！」って"バルフィニカス"をうっとりと眺めた後、「いっくぞぉー！」突進して来た。ザンバー、じゃなくてブレイバーは確かに強力な形態だ。性能の大半は攻撃に振り分けられてる。無詠唱の結界破壊や砲撃・斬撃を可能とする。威力・範囲・距離の応用性能も高くて、さらに集団戦でも能力を発揮できるように設計されている。でもその反面、機動力を大きく殺がれるデメリットもある。

「雷刃・・滅殺・・・極光斬ッ！」

っていう名前のジェットザンバーだ。伸長した魔力刃による斬撃魔法。派手なことが好きみたいなレヴィには申し訳ないけど、元は私の魔法。メリット・デメリットくらいは把握しているよ。ソニックムーブで一気にレヴィへと接近。

「せぇーい、うりゃー、とりゃー、くらえー！」

ザンバーフォームの"バルフィニカス"をブンブン振り回してくるけど、雑。すごい雑。当たれ、っていう方が難しいかもだよ。とにかく斬撃を躱し続けながら、「ファイア！」プラズマランサーを6発と発射。レヴィは「あわわわ！」普通の飛行で回避した後、斬撃

で薙ぎ払ってきた。

「バルディッシュ！」

≪Ｔｒｉｄｅｎｔ　Ｓｍａｓｈｅｒ≫

ソニックムーブでレヴィの頭上へと回り込んで、前回の戦闘と同じ構図で砲撃を発射。レヴィは「またこの魔法なの！？」って慌てふためきながらも雷刃滅殺なんとかって斬撃で迎撃。効果を発揮する前に斬り裂かれた。けど、その際に起こった爆発がレヴィを襲って、あの子の視界を潰した。

「ザンバーフォーム！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　Ｚａｍｂｅｒ　ｆｏｒｍ≫

"バルディッシュ"をザンバーフォームにして、煙の中から飛び出して来たレヴィへと向けた「ジェットザンバァァァーーーッ！」伸長した斬撃を振り下ろした。捉えたって思ったけど、「こんのぉぉーーー！」レヴィもまた雷刃なんとかで迎撃して来た。

「はぁぁぁぁーーーーーッッ！」

「うおおおおおーーーーーッ！」

バチバチと衝突点から激しい火花と放電が起きる。僅かな鍔迫り合いの果て、「のわっ！？」レヴィの方のザンバーがへし折れた。そ

の衝撃で吹き飛ぶレヴィへと、「プラズマ・・・スマッシャァァァーーーッ！」砲撃を発射して・・・「うそだぁぁぁーーー！？」直撃させた。
墜落して行くレヴィが体勢を整えて宙に留まったことを確認。周囲にランサー発射体のプラズマスフィアを5基と待機させながらレヴィの元へ降下して行く。

「そんなぁー、あーりーえーなーいー！　ボクのブレイバーがポキられたー！」

刀身を失った"バルフィニカス"を涙目でまじまじと見つめるレヴィ。そんなレヴィに「今回も私の勝ちだね」って声を掛ける。

「むぅ、なんでボクの攻撃は全然当たらなくて、オリジナルのは当たるんだよぉー！　ヒキョーだぞ、なんかズルしてるな！　正義の味方のくせに！」

「えっと、ズルじゃないよ？　なんていうか、レヴィはまだ、使えこなせてないんだよ。ザンバーの攻撃力に任せて振るうだけじゃ当たらない。それに機動力も落ちちゃうから、使う場面も考えないと」

「ガーン！　で、でも、ボクは慣れてないんだぞ！　慣れてる分、オリジナルはヒキョーだ！」

「えええーーー」

なんて理不尽。そもそも「慣れてないんなら使うべきじゃなかった

よね・・？」と思うんだけど。するとレヴィは「ふんだ！」ってそっぽを向いちゃった。ま、まぁ、とりあえず大人しくなってくれたから良しとしよう。

「フェイトー！」

「あ、アルフ！」

アルフがこっちに向かって来ていて、そしてレヴィを見た瞬間「なんでコイツとのんびり構えてんの？」一気に不機嫌になって、ものすごい殺気を放った。牙をむき出しにして、グルル、って唸り声を上げる。

「な、なんだよ、やるか？　オリジナルのペット！　殺すぞ、このアホ犬」

「上等だよ、フェイトと同じ姿だからって容赦しないよ！　その首に牙を突き立ててやるよ！」

一触即発の雰囲気。私は「どうしたの、アルフ！？」ってアルフとレヴィの間に割って入る。アルフはそれでも殺気を放ち続けて、「あんたらなんだろ。闇の欠片をバラまいて、他人様に嫌な思いをさせてんのは！」って叫んだ。

「い、いや違うよ？　断片の発生は別にボクらの意思じゃな――」

「間接的にはそうなんだろうが！　こっちはな、倒したくない恩人

を、この手で倒すことになってイライラしてんだよ！　アンタも、他の連中もとっ捕まえてやて、もう二度と、永遠に復活できないようにしてやる！」

「あ、あぅ、わわ、こ、怖いぃ～～～！　なんなのさ、この犬！」

怯え始めたレヴィを「おら、相手になってやんよ。戦いが好きなんだろ！　かかって来な！」ってさらに追い詰めるアルフ。私が「落ち着いて、アルフ！」って制止しても、「こればっかりは止められないよ、フェイト！」アルフは言うことを聞こうとしない。

「シャマル先生に教わった封印術式、アンタを実験台にして試してやる！」

「っ！・・・ぅ、うぅ、あう、・・・ぐす、ひっく・・・ひっく・・・」

「「え・・・？」」

レヴィが嗚咽を漏らし始めた。それでも泣かないように唇を噛みしめてる。だけどとうとう「うわぁぁぁ～～～～ん！」泣き始めちゃった。これにはアルフも困惑して、殺気を抑えた。

「なんだよぉー、ボクが何をしたっていうんだよぉー！　悪いことなんて、まだ何にもしてないじゃないかぁー！　なのに、ぐす、えぐ、なんでイジめるんだよぉー！？　断片の発生は、ひっく、ボクらの、ぐす、所為じゃないぞ！　単なる副次効果なのに！　ボクら

がやってるわけじゃないのに！　ひぐ、ひぐ、それにさ、会うのが嫌だっていうんなら、会わなければ良かったじゃんかよぉー！」

レヴィは駄々っ子のように四肢をブンブン振り回して、さらに「わわっ？」"バルフィニカス"や籠手に具足、手袋、髪を結ってるリボンもクシャクシャに丸めてポンポン放り投げて来た。それらをアルフとキャッチしながら、「もう、アルフ、泣かしちゃダメでしょ」って窘める。

「えー、えっとー、でもさぁー・・・」

「お前なんか嫌いだっ、犬なんか嫌いだ、獣なんて嫌いだ、きぃーらぁーいぃーだぁ～～～～！！」

「お、落ち着いてレヴィ！　大丈夫、大丈夫だから！」

レヴィの装備品を一旦アルフに預けて、私はあの子を抱きしめた。最初は「はーなーせー！」って暴れていたレヴィだけど、「ごめんね、恐かったね」って頭を撫で始めると、「うぅ・・・」ようやく大人しくなってくれた。

「ぐす、えぐ、ひぐ、ひっく・・・。聴いてたろ、オリジナル？お前のペット、ボクを永久封印して、さらに地獄の責め苦を無限に味わわせてやるって言った」

「言ってない」

「まあまあ、アルフ」

「フェイトぉ～～」

アルフまで情けない声を出してきちゃった。どうしてこうなったんだろ。とりあえず高度を落として、落ち着ける場所――岩山に移動。そこに座って「ほら、自分の装備品、大事にしないと。ね？」装備品を返して、涙を腕で拭いながらも装備品を装着してくれたレヴィの髪を結う。

「あ、そうだ。ねえ、アルフ。商店街で買い物をしたときに貰ったアレ、持ってたよね？」

「アレ？・・・ああ、うん。持ってるけど、どうすんの？」

「レヴィにあげようと思って」

アルフの持ち物の中から出て来たのは、ソーダ味の棒付きキャンディ。装備品を装着し終わったレヴィに「はい、良かったら食べて」って差し出す。レヴィはこういう食べ物とか知らないのか「くんくん。なにソレ？　あ、なんだか甘い匂い・・・」って鼻をすんすんさせて匂いを嗅いで、そして興味を持ってくれた。

「キャンディだよ。ソーダ味。美味しいんだよ」

「・・・いいよ、貰ってあげる。・・・あーん。はむ。はむはむ。・・・む？　むむ、むぅー！」

気に入ってくれたようでレヴィは目を輝かせてキャンディを咥えた。でも噛み始めたから「噛んじゃダメ。舐める食べ物だよ」って優しく注意。レヴィは「む」と一言。教えた通りに「はむはむ」舐め始めて、「不味くはない。・・・うん、おいしい！　なにコレ、あまーい！」ってさらに笑顔を輝かせた。アルフと一緒にホッと一安心。

「あのね、食べながらでいいんだ。少しだけ、レヴィ達のことを教えてほしんだけど」

「はむはむ。なに？　はむはむ、ぺろぺろ」

「ありがとう。君たちが探してる、システムＵ－Ｄ――砕け得ぬ闇、って何かな？」

「何？って、ボクらが生きてる理由、その全部だよ。ボクらマテリアルは元々、闇の書の構築プログラムの１つだ。んで、砕け得ぬ闇っていうのは、システムＵ－Ｄ・・・正式名称、アンブレイカブル・ダークのことで、闇の書が闇の書たりえるシステムのことだぞ」

「アンブレイカブル・ダーク・・・？」

「で？　そのなんとかダークを手に入れると、アンタら、どうなんのさ」

「決まってるじゃん！　ボクらが今以上に、ちょー強くなるんだ！　特定魔導力の無限連関機構。真正古代――エンシェントベルカの

戦乱と狂気が生み出した、破滅の遺産！　その力さえ手に入れることが出来れば、ボクらは誰にも邪魔されず、どこにも閉じ込められることがなくなる。そうさ、自由になれるんだ！」

「自由・・・」

そこまで教えてくれたところでレヴィはキャンディに意識を戻した。システムＵ－Ｄ。ナハトヴァールよりさらに危険な感じがする。そのことについてもうちょっと話を聞こうとしたら・・・

――イシュタル――

「「っ！？」」

足元の砂漠から氷の尖塔が幾つも突き出して来て、私とアルフはその場から急速後退。とここで「レヴィ！　あなた、何をベラベラとお話ししていますの！」頭上から、レヴィを叱咤する怒鳴り声が降って来た。

「アイルだ。どしたの？」

「どうしたもこうしたもありませんわ！　砕け得ぬ闇の情報を敵に話すなんて、どういうつもりですの！？」

「むぅ、アイルうるさい。話したところで何もならないさ。ボクらのやることは変わらない」

氷の壁の向こう側から聞こえるレヴィと、すずかの姿をしたマテリアル――アイルの会話。２人の元へ向かおうにも、次々と氷の尖塔が突き出して来て向かえない。

「オリジナル！　あとアホ犬！　さっきの水色の丸っこい奴。なかなかに美味しかったぞ！　ごちそうさま！　そんじゃボク、行くからねー！」

「ほら、早く王の元へ戻りますわよ！」

そうしてレヴィは、アイルと一緒にどこかへと飛び去って行ってしまった。崩れていく尖塔に巻き込まれないように空へと上がる。うぅ、やっぱり居ないか。

「自由・・。閉じ込められずに、か。夜天の書が闇の書って呼ばれてた間、あの子たちはずっと外に出たかったのかな・・・？」

「だからってやり方もあると思うけどね、あたしは」

「うん。・・・大丈夫、その辺りを揺らすつもりはないよ。あの子たちとも向き合って、ちゃんと話をしようと思う。真っ直ぐに。なのは達がそうしてくれたみたいに」

「だね」

その直後、アリサのデバイスである"フレイムアイズ"から通信が入った。アリサが、アリサの姿をしたマテリアル――フラムと戦っ

て動けなくなったって。私とアルフは完全に反応を失ったレヴィ達の追跡を中断して、アリサの元へ向かうことにした。

Ｅｐｏｓ４３王のマテリアルＤ／闇統べる王～Ｌｏｒｄ　Ｄｅａｒｃｈｅ～

第９７管理外世界。世界名を地球。そのうちの一国・日本。都市名を海鳴市。その街にある海に面した公園に、とある転移反応が発生した。しかもその転移反応は通常のものではなく、管理局で認知されていない技術による特別な反応だった。空間が揺らぎ、その揺らぎの中から２つの人影がポイッと放り投げ出されるかのように出現した。

「？？　へ？　なっ、ちょっ、あいてーっ！？」

１人は少年。面立ちは幼く、背格好からして１０代半ば辺りだろう。茶髪のショートヘアに、頭部上からピョンッと跳ねた１束の髪――俗に言うアホ毛が生えている。格好はラフな私服といったところだ。その少年は急に放り出されてしまった所為なのか受け身を取る暇もなく、雨が降っていることで濡れている石畳の地面へドサッと墜落した。

「いっててて・・・。腰、腰が・・・。急になんなんだよ、もう・・・！　ていうか冷たっ？」

尻餅をついている彼が悪態を吐いていると、もう１人の転移者が「ト、トーマ、危ない！」と悲鳴を上げながら落下して来た。もう１人は少女だった。彼女もまた１０代半ば辺りだろう。クリーム色を

したロングストレートヘア、白のブラウスに紺青色のコルセットスカートといった、どこかのお嬢様のような服装だ。

「ぐげぇっ！」

「きゃあー、トーマ！　ごめんなさい！」

遅れて落下した少女が、トーマという名前の少年の腹へと尻から落ちた。見た目が細身である少女であっても人ひとりの体重を腹に、しかも落下速度を加えた状態で乗られれば当然、苦痛だ。
激しく咽返るトーマの上から慌てて降りた少女は「ごめんね、重かったよね！？」と涙目で謝りながら、咳き込む彼の背中を何度も擦る。しかしトーマは怒ることもなく「リリィに怪我が無くて良かったよ」と少女――リリィの安否を第一に考えた返しをした。

「トーマ・・・、ありがとう」

リリィがトーマのその気遣いに嬉しく思って微笑みを浮かべていると、「それにしても、ここはどこだ？」トーマが立ち上り、座ったままのリリィに手を差し伸べた。リリィは「判らないの。気が付いたら、わたしもここに」とトーマの手を取って、立ち上がらせてもらった。２人は周囲を見回してここがどこなのかを確認するが、見覚えのない土地ということもあって判らないようだ。

「とにかく今は雨宿りだ。・・・あ、あそこへ行こう！」

トーマはリリィの手を引っ張って公園内に点在している屋根つきの

休憩所へと走った。そして2人は屋根の下で濡れた髪や服を手で払いながら一息。

「えっと、確か、俺はアイシスを連れて、バニングス一尉たちが待つ訓練場に向かってる最中だったんだけど・・・」

トーマは腕組をしてうんうんと唸りながら思い返していく。トーマの脳裏に過ぎるのは、女性名らしいアイシスという者と一緒に、バニングス一尉――アリサ・バニングスと同じファミリーネームを持つ者の待つ訓練場へ向かっている自分の姿。

「わたしは技術部で、シャマル先生やすずかさんとお話ししながらメディカルチェックをしてもらってた」

リリィも右手の人差し指を顎に添えて考えに耽った。リリィの脳裏に過ぎるのは、シャマル先生――守護騎士のシャマルと同名の者と、すずかさん――月村すずかと同じ名前を持つ者と話をしている自分の姿。だが、それだけだ。

「あー、ダメだ、全然判らない。いきなり雨だし夜だし、見覚えのない場所だし」

トーマが頭をガシガシと掻いて、何故このような場所に居るのか理解できないことに困惑していると、彼の側に1冊の書物が突如として現れた。黒色の無地のハードカバー。表紙と背には銀で出来ている十字架の装飾があしらわれている。

「なんだよ、もしかしてコレ、お前の仕業だったりするのか？　銀十字」

トーマが"銀十字"と呼ぶ書物が発光すると、リリィは小さく頷いた後に「トーマが誰かに呼ばれた、って言ってるけど・・・」と、"銀十字"の思考を代弁したかのように告げた。するトーマが若干膨れっ面になり、「何の目的で俺を呼んだのかは知らないけど、知らせもなしにいきなり呼びつけるとは失礼だなぁ、その誰か。しかもリリィを巻き添えにして」と苛立ちを表した。

「トーマ、どうする？　ここがどこかも判らないし、人を探そうにも・・・」

リリィがそこまで言いかけたところでまた"銀十字"が発光すると、「付近に生命反応なし」と彼女が僅かに肩を落とした。夜中であり、雨も降っている所為か、彼らの周辺に人が居ないとされた。人が居なければここがどこかも判らず、彼らが元いた場所に戻ることも叶わない。

「ど、どうすればいんだ・・・？　あ、通信か！」

判らないなら迎えに来てもらえればいいと判断したトーマがどこかへと通信を繋げるが、「あれ？　なんで？」一向に繋がらない。続けて別の知人に通信を繋げようと試みるも、「ダメだ、誰にも繋がらない・・・」ガックリと肩を落とした。

いよいよ以って窮地に立たされていると理解したトーマとリリィの表情には焦りの色が見え始めた。だが、ここでさらに2人に迫る窮

地。"銀十字"が発光して、「生命反応が接近してくる・・・・！」とリリィがトーマに伝える。

「しかも魔力反応付きだ・・・！　もしかして俺たちを呼んだ当事者か・・・？」

トーマはリリィを庇うように一歩前に躍り出た。

「ま、そうであってもなくても、最悪、急に襲われるっていうのも嫌だしなぁ。ホントは荒事なんて避けたいけど・・・。リリィ」

「うんっ・・・！」

トーマとリリィが顔を見合わせて、「リアクト・オン！」強く頷き合った。一瞬の発光、次に姿を見せた時、トーマはガラリと様変わりをしていて、リリィの姿はどこにもなかった。トーマが「モード黒騎士！」と自らの変わった姿の名称を告げた。

私服とはまるで正反対のその異様。髪や瞳の色も変わり、素肌を大きく露出した上半身には赤い刺青のような紋様が描かれている。左手には歯車のようにギザギザとした刃が左右に付いた籠手。右手には禍々しい凶器とも言えるほどの銃と一体化したかのような大剣が握られている。色合いや服装、武装からしてダークヒーローのようだった。

『ディバイダー、セット！』

ここで姿の無いリリィの声。聞こえてくるのはトーマの内側から。

リアクト・オン。それはまるで騎士と融合騎によるユニゾン・インだった。モード黒騎士という戦闘形態に変身したトーマが「行こう、リリィ！」と自身の内に居るリリィに語りかけると、『うん、トーマ！』彼女も強く応えた。
そしてトーマは公園内で戦うわけにもいかないということで空へと上がり、海上へ向かって飛行。そんな彼らを追って飛んで来ていたのは・・・・

†††Ｓｉｄｅはやて†††

マテリアルが復活、さらに異世界からの渡航者――アミティエさんとキリエさん、フローリアン姉妹まで加わって大混乱状態。とにかくマテリアル達とキリエさんの企みを阻止して、詳しく話を聞くために、わたしらは今、３チームに分かれて捜索を始めた。
わたしとリインフォース、あとで合流してくれる予定のルシル君を含めた八神班は、マテリアル達の捜索を担当。すずかちゃん、なのはちゃん、シャルちゃんはアミティエさんを。フェイトちゃん、アリサちゃん、アルフさんはキリエさんを。元は八神家の問題やったけど、あまりに大きくなり過ぎたから手伝ってもらうことにした。

「そやけどリインフォース、大丈夫やろか・・・？」

アリシアちゃんの観測に従ってマテリアルの反応のあった無人世界で捜索したんやけど空振り。そこから何度か世界を渡ってる内にリインフォースが疲労からか体調を崩してもうた。そやから後で集まるハラオウンのお家へ先に帰って休ませることに。それからわたし単独で捜索した結果、全部ハズレやった。そうこうしてるうちに時

間切れ。一度集合するためにわたしは海鳴市に戻って来た。

「・・・ん？　なんやろ、この感じ・・・？」

なのはちゃん達との合流場所である海鳴臨海公園に向かう途中、妙な感じを肌で感じた。アミティエさんやキリエさんとはまた違う気配。まだ他にも渡航者が現れたんかな。とりあえず確認やな。そうゆうわけで進路変更。反応は海へ向かって飛んで行く

「あの人たちやな・・・。って、なんや、あの悪者全開って格好は・・・。黒は黒でもルシル君やリインフォースとは違くて、禍々しい感じ・・・」

視界に入ったんは１０代半ばと思う男の子。首と脇を護るための部分甲冑を付けた、ちょう露出の高い上半身。籠手や具足、持ってる剣はどれもゴツゴツしてて、デバイスって呼べるかも怪しい武器。古代ベルカ戦乱期に登場する騎士みたいな格好。それに側に浮いてるアレは、魔導書やろか。そもそも「魔力反応やない。また未知の何か、か・・・？」その辺も要警戒やな。

「あのー、すいません。お時間、少しだけよろしいですか？」

「？？・・・？？？・・・っ！　えええええっ！？」

その男の子がわたしを見て素っ頓狂な声を上げた。続いて、『や、八神司令！？』若い女の人の声が耳に――というか頭の中に届いた。目の前の男の子から２人分の声。女の人の声の持ち主はひょっとし

て融合騎やろか。とゆうことは、目の前に居る男の子は、ベルカ式の騎士・・・。それに、八神司令、って誰のことやろ。

「八神司令、小っさ！　えっ、どうしたんですか、そんな子供の格好をして！」

『八神司令、とっても可愛いです！　あ、じゃなくて！　あの、もしかして八神司令がわたし達を呼んだんですか？　なにか非常事態でも起きたんでしょうか？』

「えーと、どちら様でしょうか？　以前、お会いしたこととかありますか？」

そう訊き返すと、男の子は「何かのテスト？　それに俺に敬語って、すごい違和感が」って呟いて、『それだと、なんの？ってなっちゃうよ』って女の人の声が漏れ聞こえてきた。んー、なかなか要領を得んなぁ。わたしのことを八神司令って呼ぶ男の子をよう見てみるけど、やっぱり知らん子や。女の人の声も聞いた憶えはなし。

「あのー、八神司令ですよね？　八神はやて海上警備部捜査司令・・・」

「へ？　確かに、わたしは八神はやてですけど、海上警備部捜査司令についてはなんのことかサッパリなんですが・・・」

そんなすごい肩書――役職になった憶えはあらへん。まだしがない研修生や。まぁとにかく、「今ちょっと非常事態中なので、詳しい

お話を聞かせてもらいますね。お名前は？」まずは名前の確認。

「あの、トーマです。トーマ・アヴェニール。あの、ご存知ですよね・・・？」

『リリィ・シュトロゼック、です。これも何かのテストなのかなぁ・・・？』

「トーマさんにリリィさんですね。（んー、知らん名前や）。やっぱり聞いた覚えが・・・。とにかく、あのですね、ここは管理外世界ですので、渡航には許可が必要なんです。許可証、お持ちですか？」

名前は判った。男の子はトーマ君。融合騎らしい女の人がリリィさん。あとでアリシアちゃんに照合してもらおう。次に、渡航証明を持ってるかを訊ねてみる。無許可渡航は違法や。

「いっ！　あー、あー・・・、すいません、持ってないです」

「あちゃあ、困りましたねぇ。じゃあ、ちょっと落ち着ける場所でお話をお伺いしますので、ついて来てくれますか」

返事はない。なんやホンマに困ってるって風に焦りの色が見える表情。見た目とは違くて、悪い人には見えへんなぁ。もう一度声を掛けようとしたら、「ごめんなさぁーい！」謝りながら反転、ものすごい速さで逃げてった。

「逃げたらアカンですよー！」

トーマ君を追い翔ける。魔法使い歴半年も経ってへんけど、それでも特訓の成果で徐々にトーマ君との距離を詰めてく。するとわたしの接近に気付いたトーマ君が「うわっ、八神司令、速い！？　恐い、恐い、すげぇ恐い！」怯え始めた。そこまで怯えられるとなんやショックや。

「あのー、止まってくださーい！　危ないですよー！」

停止するように呼びかけながら追跡してたそんな中、ゾワッと悪寒が奔った。3ヵ月前も、そんでつい数時間前にも感じた、あの子が放つ魔力反応。わたしは「止まって！！」トーマ君に向かって叫んだ。その直後、トーマ君の前の空間から膨大な魔力が溢れ出して、「王さま・・・！」が現れた。

「うわっと！　な、なんだぁ！？　八神司令のそっくりさん！？　双子！？　にしては顔つき悪っ！」

『下がって、トーマ！　すごい嫌な感じがする！』

「いきなり我に突っ込んで来たかと思えば、言うに事欠いて我が不細工だと！？　無礼者めっ！」

――インフェルノ――

「言ってねぇぇーーー！」

王さまが"エルシニアクロイツ"を頭上に掲げると同時、魔力塊が複数と降って来た。トーマ君を「急いでこっちへ！」呼び戻す。そやけどトーマ君は「銀十字！」って本の名前らしい言葉を叫ぶ。と、「おお！？」本から勢いよくばら撒かれたページが、王さまの攻撃を防ぎきった。

「む！？　なんだ今のは・・・！？」

「あっぶなぁ！　いきなり攻撃とか・・・！　八神司令の妹さん？　お姉さん？　どっちか判らないけど危ないじゃないか！　しかも不細工なんて言ってないし！」

「はあ！？　この我と、そこの子鴉が姉妹だと抜かすか、下郎！」

『え、違うの？　あんなにそっくりなのに』

「違うわ！・・・ん？　女の声？・・・ほう貴様、融合騎を従える騎士か？　ふむふむ、見た目も存外に悪くない。ふむ。先程の無礼を許すゆえ、我が軍門に下れ」

何を考えてるのか王さまがトーマ君をスカウト。いきなりそんなことを言われたトーマ君は「え？　これもテスト？　全っ然、事情が呑み込めねぇーー！」さらに混乱してしもうた。

「アカンよ、王さま。一般の人を悪の道に引っ張り込もうとするなんて、嘱託とは言え管理局員として見過ごせへんよ」

「よかろう。では、ならばその小僧を賭けて、我と子鴉で死合ってみるか？」

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。
闇統べる王ロード・ディアーチェ
。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

「なんか知らないけど、八神司令と王様？が俺を巡ってケンカ勃発！？
修羅場！？　ひょっとしてモテ期なのか！？」

『落ち着いて、トーマ！　どれも違うから！』

「トーマさん達は急いで離脱を！」

――バルムンク――

トーマ君に当てへんように剣状射撃を放射状に発射。王さまへ向かって弧を描くように曲がって殺到してく。王さまは軽やかに舞うように避けて、「そら、お返しだ」って同じ魔法――ドゥームブリンガーを、わたしと同じ軌道で発射してきた。トーマ君を挟んでの魔法の撃ち合いは危険や。

（まずはトーマ君たちから離れやな）

王さまの攻撃をシールドで防いですぐ後退。弧を描きながらトーマ君たちを回り込むように飛ぶ。そやけど、「ちょっ、王さま！？」も同じように飛んで、トーマ君たちがわたしらの間に絶対に入るよ

うな構図を崩そうとせえへん。

「どうした子鴉！　避けているだけでは我を討てんぞ！」

――エルシニアダガーーーー

「うわっ、うわっ、危ない！」

王さまの放つ魔力弾十数発がトーマさん達を掠りながらわたしに向かってくる。ならこっちも「ブリューナク！」同じ魔力弾で迎撃。すると「あの！　俺、どうすればいいですか！？」ってトーマ君が訊いてきた。

「逃げてください！」

「我の盾になれ！」

王さまのまさかの盾になれ発言に、「『えええええーーーーーっ！？』」トーマ君とリリィさんが驚愕。そんで「もしかして、俺、邪魔ですか！？」ちょう今さら的なことを言うてきたから、「出来れば避難してもらえると助かります！」って応じた。

「小僧は離れて観ておれば良い！　我がこの生意気な子鴉を討ち滅ぼした後、我が直々に調教して、我好みの兵にしてくれよう」

「そんなことさせへんよ、王さま！」

――ブラッディダガーーーー

トーマ君が急上昇したことで王さまままでの射線を確保できた。すぐに短剣型の高速射撃魔法を２０発と一斉発射。王さまは「そうそう貴様の思うままにいくとは思うな、子鴉！」急速後退した後、砲撃アロンダイトを発射して、目前にまで迫ってたダガーを一網打尽にした。それで一度仕切り直し。わたしと王さまは相対して、少し離れたところにトーマ君。

「八神司令。姉妹ケンカとかじゃなくて、これってマジな戦闘だったりします・・・？」

「ぷはっ。司令？　司令だと？　羽も生え揃わぬ子鴉が、司令などという大それた肩書を持てるような奴に見えるのか、小僧！　あと、我は人間などという軟な存在ではない！　それに我と子鴉は、ケンカなどとヌルイ関係ではなく、正真正銘の殺し合いをする敵対者よ！」

「わたしは別に殺し合いをしたいわけやないんやけどな、王さま。何を考えて、企んで、成そうとしてるんかをちゃんと話し合って、他人様に迷惑を掛けへんようなことなら手伝うし、迷惑になるんやったら止める」

わたしと王さまを交互に見てるトーマ君が「お手伝いします。八神司令」ってわたしの隣に来たから、「その司令ってゆうの、たぶん人違いと思いますよ。世の中、そっくりさんは3人は居るって話ですし」って、遠回しに避難するように言う。

『王さまの危険な発言を聞いた後で逃げるわけにはいきません！』

リリィさんの強い意志の籠った声に、わたしはもう言うことを聞いてくれへんなって観念して、「危なくなったら、何を置いても逃げてください」って言うてトーマ君とリリィさんの参戦を許可した。えらそうなことを言うてるな、わたし。まだまだひよっこ局員やのに。

「ふん。よかろう。２人掛かりで来るがよい。我は闇を統べる王、ロード・ディアーチェ。子鴉とチンピラの２人くらい、片手間で滅してくれるわ！」

――アンスラシスドルヒ――

わたしのブラッディダガーと同じ魔法を発動した王さまの周囲に４０発と展開されて、「さぁ、踊れ！」射出してきた。トーマ君がわたしの前に躍り出て、「銀十字！　広域防御！」そう叫んだ。するとさっきみたく"銀十字"ってゆう本から無数のページが飛び出して来て、王さまの攻撃を防ぎきった。

「しかし不思議な使い方をするな、チンピラ。魔導書のページで防御など・・・！」

ページに防がれて爆発したダガーによって生まれた煙幕を突っ切って来た王さま。わたしは"シュベルトクロイツ"を王さまへ向け「クラウ・ソラス！」砲撃を放った。王さまはクルッと横に一回転して回避。"エルシニアクロイツ"に魔力を付加させての一撃、「ア

ンサラーシュラークッ！」を繰り出してきた。

「おっと！　八神司令の家族じゃないって言うなら、こっちも手加減はしない！」

『今です、八神司令！』

王さまの一撃を大剣で受け止めてくれたトーマ君。

「そろそろ、その司令ってゆう呼び方やめてほしいかも・・・なっ！」

――クラウ・ソラス――

トーマ君と鍔迫り合いしてた王さまへもう一度、今度は至近距離で砲撃を放った。と、「猛れ、デアボリカよ！」って声を発した王さまがブワッと全身から魔力を放出した。それはまるでパンツァーガイストのような防御魔法で、真っ向から砲撃を防ぎきった。

「ポンコツ融合騎と融合しておらぬ子鴉の攻撃などでは、我が暗黒（デアボリカ）甲冑に傷1つとして付かぬわ！」

――インフェルノ――

トーマ君と一緒に左右に散開して降って来た6基の魔力塊を回避。王さまを包む魔力が消えたのを確認して「ブラッディダガー！」高速射撃魔法を発射。防御する前に着弾させればええ。王さまは"エルシニアクロイツ"に魔力を付加。そんでくるくるとバトンのよう

に回して、「うそやろ・・・」全弾弾き飛ばした。

『銀十字！』

「シルバースターズ！」

王さまの全方位に並べられた１０数枚のページの表面に魔力とは違うなんらかのエネルギーの球体が発生して、一斉に発射された。また王さまを包み込む魔力の鎧。そやけど弾数が多すぎたんか「むお！？」２、３発ほど直撃を受けた。

「小僧、貴様のソレは魔法ではないな！」

「そこんところは企業秘密ってことで！　司令！　俺が近接を担当します！　生意気言ってすみませんが、援護をよろしくお願いします！」

『お願いします！』

わたしがどうこう言う前にトーマ君たちが王さまと近接戦を始めた。トーマ君の振るう大剣の一撃を避けては逸らして捌いて、「墜ちよ！」砲撃アロンダイトを発射する王さま。明らかにわたしより遠近両方で強い。トーマ君が左腕に装着してるゴツイ籠手で防御した。

「いってぇーー！　ディバイドがうまく働いてない！？」

『なんで！？』

「そらそら、どうした小僧！　そんな情けないザマでは、戦闘特化の騎士と言った格好が泣くぞ！」

打撃アンサラーシュラークや高速射撃アンスラシスドルヒなどのコンビネーションでトーマ君を徐々に押してく王さま。援護しようにも2人が接近しすぎてて出来ひん。とにかくブラッディダガーをスタンバイ。2人の距離が少しでも開いたら撃ち込むようにしておく。そんでついに「うわぁっ？」トーマ君が鍔迫り合い中に王さまの魔力弾エルシニアダガーを受けて後退。

「アロン――」

「発射！」

砲撃の発射体勢に入ったその一瞬にダガーを一斉射出。発射寸前やから回避も防御も出来ずに「のわぁっ！？」直撃を与えられた。トーマ君がすかさず、「クリムゾンスラッシュ！」大剣を横に振って、エネルギーの斬撃を飛ばした。煙幕を切り裂いて王さまに到達する斬撃。

「まだまだヌルイわっ！」

"エルシニアクロイツ"で受け止めてそのまま逸らし流して対処――したところで、「うおりゃぁぁぁっ！」トーマ君の突進。直感的にわたしは王さまの背後へと回り込むように飛ぶ。そんで王さまは「む！？」突進からの直接斬撃を繰り出したトーマ君の一撃を"エ

ルシニアクロイツ"で受け止めた。

「クラウ・ソラス！」

すかさず砲撃を発射。トーマ君は砲撃が到達するギリギリまで王さまを抑え込んでくれたおかげで「ぐわぁっ！」また直撃を与えられた。それでも決定打にはならへんようで、王さまは「猪口才な！」体勢を立て直して、「グラディウスレイン！」半物質化してる剣８本をわたしに向かって落としてきた。

「シルバーハンマーッ！」

降り注ぐ剣が白い砲撃によって迎撃された。王さまの表情がどんどん苛立たしげなものへ変わってくんを見逃さへんかった。そっからはわたしの射砲撃とトーマ君の中距離斬撃で弾幕を張っては、王さまに隙が出来たら「ディバイドエッジ！」トーマ君の直接斬撃でさらに隙を大きくした後、「クラウ・ソラス！」わたしの砲撃でダメージを蓄積させてく。

「おのれ、貴様ら・・・！」

「この王様、防御力がすごい高い！」

『ディバイドが上手く発動してくれたらきっとすぐに済むのに・・・！』

トーマ君とリリィさんに疲労が見え始めた。そうゆうわたしも疲労

が出て来た。これ以上長引かせると、他のマテリアルに遭遇した時が辛い。それに、民間人と思われるトーマ君とリリィさんをこれ以上危険に晒せたないし。

「司令、俺が飽和攻撃をします。司令は攻撃力の高い魔法で追撃してください」

トーマ君からの提案を少し考えた末に「・・・判りました、お願いします」承諾。するとトーマ君は「丁寧語、やっぱ慣れないな」ってポツリと漏らした。

「作戦会議は終わったか？　まったく、諦めの悪い奴らよ。我もこの遊戯には飽いてきたところだ。そろそろ幕とゆこう」

わたしひとりで発動できて、しかも高威力。さらに発動までそう時間も掛からへん魔法をスタンバイする。トーマ君に頷いて見せると、「行きます！　リリィ、銀十字！」って頷き返しながら、リリィさんと本の名前を叫んだ。

『うんっ！』

リリィさんからの返答の後、"銀十字"の本から今まで以上のページが飛び出して来て、球体状に配置されて王さまを包囲。王さまは「くだらん」の一言を発して、魔導書のページをペラペラと捲った。

「我が敵を射抜く剣の兵よ。紫天の光の元、軍勢となりこの空を埋め尽くさん」

王さまの周囲、何十本もの物質化した黒い大剣が円形状に展開された。

「うおっ！？　なんだアレ！　まるで・・・！」

『ルシルさんのコード・チュールみたい・・・！』

「え？　リリィさん、今・・・」

ルシル。ルシリオン君の愛称を言うたリリィさん。詳しく話を聞きたいけど、「受けよ」王さまがそれを許してくれんかった。

「レギオン・オブ・ドゥームブリンガーッ！」

それらが一斉に発射されて、王さまを包囲してたページを全て貫いて粉砕した。それでも「遠き地にて、闇に沈め！　デアボリック・エミッション！！」魔法の発動直後で硬直してた王さまに、空間攻撃魔法を発動。バリア発生阻害効果を持った純粋魔力攻撃や。かなり堪えるはず。

「すげぇ・・・！」

『司令、こんなすごい魔法も持ってるんだぁ・・・』

しばらくエミッションの効果が終わるまで警戒しつつ待機。そんでようやく効果が切れて、「王さま・・・？」の姿を視認できた。俯

き加減でその表情は見えへんけど、「やった・・・んですかね・・・？」トーマ君の言うようにやったようにも見える。

「くくく、あーはっはっはっはっはっ！」

そやけど王さまはまったく堪えてへんって風に大笑い。そんで「素晴らしいぞ、我が力！　これだけ受けてもまだ動ける！」そう言った。そんで"エルシニアクロイツ"をわたしらに向け、さらに魔導書を捲った。

「お返しだ。受け取れい！　紫天に吼えよ、我が鼓動！　出でよ、巨重！！」

王さまの前面に展開されたミッド式魔法陣が5枚。中央に大きなものが1枚、四方に4枚っていう風に。わたしが最近学んだ超長距離砲撃のフレースヴェルグみたいな配置や。シャレにならへん魔力がわたしらに襲い掛かってくる。

「これ絶対にまずい！　ディバイド！　リリィ、ディバイド！」

『えっと、えっと、やってみる！』

「ジャガーノートッ！」

離脱する前に5枚の魔法陣から砲撃が発射されたんやけど、砲撃はわたしらやなくて空に向かって発射された。失敗？って思った直後、直角に曲がって降り注いできた。何を考える間もなくシールドを張

った。でもここでもまた予想外なことが。砲撃はわたしらに当たることなく海面に着弾。大きくドーム状に爆ぜた。アカン、強大な魔力に呑まれる。

「リリィ！」

『八神司令、もしかしたら、ごめんなさいかもです！』

トーマ君とリリィさんには何か秘策があるようで、足元から迫って来てる魔力に大剣を向けて「『ディバイド・・・ゼロッ！！』」剣先から環状魔法陣のようなモノを伴った砲撃を放った。と、「なんや・・・？」くらりと来た。なんや力を抜き取られるような感じ。それもすぐに治まったけど。とにかくトーマ君の放った砲撃が、５つの魔力爆発を相殺してくんが目に見えて判った。

「え・・・？」「なんだと・・・・！？」

わたしだけやなくて王さままでもが驚愕。トーマ君が「た、助かったぁ・・・」って安堵。リリィさんも『上手くいったねぇ、トーマ』安堵。

「一体何をして・・・？」

「小僧！　貴様、一体何をした！今のはただの相殺ではないな！まるで魔力結合を強制的に解いたかのような・・・！」

王さまがトーマ君に詰め寄って来ようとしたんを「止まって」って

前に躍り出て阻止する。わたしの目の前でにまで顔を近づけて来た王さまは苛立たしげに歯を噛みしめた後に反転して「まぁよい！」怒鳴るようにそう言うて離れて行った。

「はぁぁ・・・・。ふふ、ふはははは。貴様らとの戯れもここまでだ・・・！」

チラッと振り返った王さまの表情はさっきまでの苛立ちが完全に消えてて、その代りに喜色満面の笑顔やった。

Ｅｐｏｓ４４降臨／砕け得ぬ闇～Ｓｙｓｔｅｍ：Ｕｎｂｒｅａｋａｂｌｅ　Ｄａｒｋ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

魔法とは違うなんらからの技術で戦うトーマ君と、その融合騎？のリリィさんと一緒に、マテリアルの王さまであるディアーチェと戦ったんやけど、２人掛かりで戦っても決定打を与えることは最後まで出来ひんかった。
それほどまでに進化した王さまやったけど、自分の魔法を相殺やなくて消滅させたトーマ君の不思議な力に苛立って、何をしたって詰め寄っていこうとしたんをわたしが止めた。目の前にある王さまの顔が一段と険しくなって、ギリッと歯を噛みしめた後、「まぁよい！」そう怒鳴って離れて行った。そんで溜息ひとつ吐いた後で大笑いを始めた。

「貴様らとの戯れもここまでだ・・・！」

チラッと振り返る王さま。小首を傾げてると、「っ？」海面から空に向かって光の柱が何本と円形状に現れた。その光の柱に閉じ込められてるような形で丸い魔力の塊が空に浮いてる。その球体は見覚えのある色をしてた。そう、"闇の書"としての闇やったナハトヴァールと同じ。

「王さま・・・！」

「子鴉、貴様は言うたな。何を考え、何を企み、何を成そうとしているのか、話し合いをし、協力できるようであれば手伝う、と」

「・・・・うん。確かに、言うたよ。そやからまずは教えてほしいって話や」

「残念ながら、すでに時遅し。単なる部品に過ぎなんだ我らに課せられた苦渋の日々を断つ。その我らマテリアルの宿願が今、ここに叶う！」

両腕をバッと大きく広げて高笑いする王さまの奥、そこにはいつの間にか「キリエさん！？」が居った。空間モニターを幾つも展開して、キーボードを叩いてた。

「アレがもしかして・・・砕け得ぬ闇、なんか・・・？　ホンマに実在してたんか・・・？　リインフォースでも知らへんかったのに・・・」

「当然であろう。・・・ま、貴様は兎も角、ポンコツ融合騎が知らぬも無理はなかろう。奴は夜天の魔導書の始まりより書と共にあるシステムだ。我らマテリアルと砕け得ぬ闇は、魔導書に組み込まれる時にこう設定されたのだ。管制システムの管制下に入ってしまわぬように、とな。ゆえに奴が知らぬは道理」

「（リインフォースの管制下に入らんようにした・・・？）っ！とゆうことは・・・！」

「察しの通りよ、子鴉。何故そのような風にして組み込んだか。それは、夜天の書を乗っ取る為よ。そしていつか、新たに組み込まれるかもしれぬ別のシステムをも乗っ取って支配下に置き、さらに強大化する為！　が、何の手違いか、砕け得ぬ闇は我らの後に加えられたナハトヴァールなんぞにシステムの奥に押し込められてしまったがな」

「乗っ取りって――ううん、そもそも王さま達マテリアルは、ナハトヴァールと無関係なんか？」

リインフォースは言うてた。残滓は、"闇の書"の闇――ナハトヴァールを構築していた欠片やって。わたしの疑問に「そうだ。奴は勘違いしたのだろうな。何せ、砕け得ぬ闇を知らなかったのだからな」って口端を上げて王さまは答えた。

「砕け得ぬ闇を既知できずにいた以上、それまで自らを脅かしていたナハトヴァールを闇と認め、そう決めつけることしか出来なかった。ゆえに我らをナハトヴァールの復活を企む者だとした。ここからは我らの恥部だが、先の起動時、我らは永き眠りから目覚めたばかりで混乱しておったからな。砕け得ぬ闇とナハトヴァールのこと、成すべき目的を少々誤解しておった。笑い話にもならぬ。まったく、我らを永年封じ込めていたナハトヴァールには怒りしか覚えぬわ」

そう吐き捨てた王さまがフッと砕け得ぬ闇に視線を向けて、今までに見せたことのないような表情・・・ホンマに待ち望んでて、やっと願いが叶う、って風な横顔をわたしに見せた。

「永く、それは永く、我らは不遇の時を過ごした。シュテル、レヴィ、アイル、フラム、そして我ディアーチェ。我らは待ち望んでいたのだ。この瞬間を、何者にも縛られず、自由になれるこの日を！　ゆえに邪魔をしてくれるなよ、子鴉。我はあの者たちを統べる王として、なんとしてもこの宿願を叶えねばならぬ」

「待って、王さま！　管理局には、システム解析のエキスパートの人たちがたくさん居る！　王さまやみんなを自由にするやり方も、きっと見つかるから！」

砕け得ぬ闇。アレはどう見ても目覚めさせたらアカンやつや。王さまは管理下に置ける自信が有るようやけど、こうゆう場合のソレはフィクションでよく読んだり観たりした、フラグ、ってやつや。

「戯け。貴様の言うそれはいわば虚構の夢物語。闇の書の暴走をこれまで壊すことでしか解決できなんだ公僕風情に、いったい何が出来ると、期待しろというのだ？　そもそも、情けに縋って恵んでもらった、他人から与えられた自由など、所詮は仮初のモノ――鳥を閉じ込める籠に過ぎん。真の自由とは、願う者たちが戦い、そして勝ち取ったモノだけよ！」

「王さま！」

「くどい！！　それ以上喚いてみろ、子鴉。貴様の生まれ育った街を焼き払ってやるぞ」

あまりに強烈な殺意に「っ！」ビクッと体が震えた。そんで今まで黙っていてくれてたトーマ君がバッとわたしを庇うように前に躍り出た。わたしはそんなトーマ君に「今すぐ避難を」って声を掛ける。

「トーマ・アヴェニールさん、リリィ・シュトロゼックさん。管理局員、八神はやてとして指示します。今すぐこの空域から離脱してください。出来れば、あとで出頭してもらえると嬉しいです」

「『え・・・？』」

振り返ったトーマ君の目をジッと見詰める。先に視線を逸らしてまた王さまに向き直ったトーマ君は「すいません。聴けません」って断ってきた。

『ごめんなさい。八神司令と王様さんの話のほとんどが理解できないですけど、でも放っておくのはダメだって判ります！』

「ですけど、ここからはホンマに危険なんです。一緒に戦って助けてくれたことはホンマに感謝してます。ですが、これ以上は巻き込めませんので」

そう話をしてる間にも王さまは期待全開って風に「おい、ピンク頭。準備は整ったであろうな！」ってキリエさんに確認を取って、「はーい♪　強制起動システムは完全・完璧状態で正常起動、リンクユニットもフル稼働でーす　」キリエさんも陽気な声で返してる。

「括目せよ！　無限の力・砕け得ぬ闇――システム：アンブレイカ

ブル・ダークの目覚めの時をッ！」

王さまが高らかにそう言い放つと、砕け得ぬ闇を囲ってた光の柱が砕けた。そんでドクンと砕け得ぬ闇が1回、脈を打つように動いた。王さま以上の、ううん、ナハトヴァールよりもずっとすごい魔力が発せられた。

「ふっふっふ。我が記憶が確かであれば、砕け得ぬ闇のその偉容は、大いなる翼！　名前からしておそらく戦船。かの有名な聖王のゆりかごを超える物であればなお良し！　いや、もしくは体外強化装備か？

何はともあれ、こうして絶大にして偉大なる力を手にするのだ。もう我らの行く手を邪魔する者など現れはしまい。残念だったな、子鴉。我らの勝ちだッ！　さぁ、永き眠りより目覚めよ、牢を破りて蘇れ、砕け得ぬ闇！　そして我、闇統べる王ロード・ディアーチェの手に収まるがいい！！」

一際強く発せられた魔力の光がわたしらの目を焼いた。堪らず両腕で目を、顔を庇う。光が治まったんを確認して両腕を退け始めたその時、「おおお！・・・おおお？・・・・おお！？」王さまと、「はいぃぃっ！？」キリエさんの素っ頓狂――困惑の声が聞こえてきた。そんでわたしも「アレが、砕け得ぬ闇なんか・・・？」困惑する。

「ユニット起動・・・、無限連関機構・・・動作開始。システム：アンブレイカブル・ダーク、正常作動を確認」

薄くなった魔力の球体の中に佇んでたのは小さな女の子やった。キ

リエさんが「もしもーし。システムＵ－Ｄが人型だなんて聞いてないんですけど・・・！」って王さまに言うと、「むぅ？　我の記憶でも、人型であったとはないはずなんだが」と唸るだけ。

「いや、それを言うなら、我らマテリアルとて元々は人型ではなかったわけだが。我らに倣って人型を取ったか？　では、その理由はなんだ？　解らぬ・・・」

『八神司令、トーマ。あの子から害意は感じられないよ』

リリィさんの言う通り、魔力がすごいだけでその小さな体からは嫌な感じはせえへん。砕け得ぬ闇。その名前から誤解してるんかも。"闇の書"かて"夜天の魔導書"って綺麗な名前やったし。とりあえず「砕け得ぬ闇やから・・・ヤミちゃん？」呼ぶためにあの子の名前を考えてみた。リリィさんには『可愛いですね♪』好評や。と、「あ、ヤミちゃんと目が合うた」ことに気付いた。

「視界内に夜天の書を確認。防衛プログラム及びナハトヴァールの破損を確認。再起動及び修復・・・不可能。魔導書の現保有者を認証・・・困難・・・」

機械的にそう言うてくるヤミちゃんに、「こんにちは！　時間的にこんばんわ、やろか？　あ現在の夜天の主、八神はやて言います！」自己紹介。現保有者を認証できひん言うてるしな。すると、「・・・・はっ。待たんか、子鴉！」王さまが怒鳴ってきた。

「なんたる横入りか！あまりの自然さに我ですらも呆けたわ！　シ

ステムＵ－Ｄを起動させたのは我ぞ！」

「はいはい、はーい！　起動方法を伝授したのはこのわたし――キリエ、キリエ・フローリアンです！　ヤミちゃん、よろしく！」

「だからなんだ、ピンク頭！　起動方法の伝授と実際に起動したのでは天と地の差があるわ！　コレは我のものだ、誰にも渡さんぞ！」

「ひっどーい！　話が違いますよ、王様ぁ～～～！！」

王さまとキリエさんがぎゃあぎゃあと言い争いをしてると、「状況不安定・・・。駆体の安全確保を最優先。危険因子を選定・・・完了。これより排除します。空中打撃戦システムロード。出力上限、６％」ヤミちゃんからそんな言葉が発せられた。

「魄翼を展開」

ヤミちゃんの背中から赤いような、赤黒いような、深紫のような、様々な色が交わった魔力の霧みたいなもので出来た翼――魄翼が一対展開された。それと同時に発せられる、今まで以上の強大な魔力。わたしとトーマ君はそのとんでもない魔力とプレッシャーに当てられてビクッと硬直。王さまもキリエさんも「っ！」言い争いを止めて、ヤミちゃんを見た。

「「「『っ！！？』」」」

魄翼の中から物質化した怪物のような腕が伸びて来て、「ぐわぁ！？」

「きゃあ！？」王さまとキリエさんをその鋭い爪で薙ぎ払った。そんで爪が消えたと思うたら、「ジャベリンバッシュ」今度は巨大な槍がわたしとトーマさんに向かって飛んで来た。

「司令！」

トーマ君にドンッと肩を突き飛ばされて難を逃れた。トーマ君もまた反対側に横移動して回避。体勢を整える前にヤミちゃんが「バレットダムネーション」大きく広げた魄翼の表面から何十発ってゆう魔力弾を放ってきた。

「銀十字！」

トーマ君とわたしを護るように展開された何十ページもの紙片が列を作って並べられて、ヤミちゃんの放ってきた弾幕を防御・・・しきれへんかった。押し切られる。そう思ってすぐに「パンツァーシルト！」を展開。トーマ君は「ミッド式のバリア・・・！？」で防いでた。ミッド式の魔法も扱えるんやなって、この緊急事態の中でそう思った。

「待って、止まって、ヤミちゃん！　話を――」

「エターナルセイバー」

左右の魄翼が炎の剣になって、まるで鋏のように挟み込む形でわたしとトーマ君に振るわれた。わたしは降下、トーマ君は上昇することで回避。トーマ君が「話を聞けぇぇぇッ！」砲撃シルバーハンマ

ーを剣先から発射。

「サイズディカピテイション」

魄翼が大鎌のようになって、トーマ君の砲撃を十字斬撃で粉砕した。トーマ君は遠距離戦やと分が悪いって判断したみたいでヤミちゃんに向かって突進してもうた。アカン、って制止する前にヤミちゃんは「ドゥームプレッシャー」怪物のような両腕で、「ぅぐ、ぐ、ぐあ、ぐあああああ！」トーマ君を鷲掴んだ。

「トーマさん、リリィさん！　やめて、ヤミちゃん！」

――クラウ・ソラス――

言葉だけで止めてもらいたかったけど、トーマ君の締め付けを止めるどころか「うぐぁぁぁあああ！」さらにギリギリと力を加えたから、砲撃で両腕を攻撃したんやけど、ビクともせえへんかった。アカン。魔力量の桁が違いすぎて通じへん。

≪ドライバー保護の為、緊急転移モードを起動≫

「待て、銀十字・・・！　ダメだ、銀じゅ――」

トーマ君の姿が消えた。転移したようや。うん、逃げてくれて良かった。あのままやったら間違いなく、トーマ君は握り潰されてた。さぁ問題はこっからや。ヤミちゃんがわたしに振り向いて、魄翼を大きく広げた。あの弾幕攻撃が来ると思うて射程範囲外に出るため

に飛行開始。

――バレットダムネーション――

そんで発射される弾幕。回避行動に移ったんが早かったおかげで全弾躱しきった。けど、「バイパー」避けた先の足元から槍が連続で生えて来て「きゃあ！？」わたしの右側の翼を貫いた。ガクッと傾く体。わたしに向かって来るヤミちゃん。

「排除します。エターナルセイバー」

２本の炎の剣がわたしを挟み込むように振るわれる。背中の翼は、飛行には直接的に関係あらへんけど、姿勢制御には一役買ってくれてた。それでも急に失ったことで崩れた体勢。それを整えてからの回避は不可能。わたしの防御も、あの強大な魔力で創られた剣の前じゃきっと無意味。リインフォースとのユニゾン状態ならきっと・・・。

（リインフォース・・・ルシル君・・・シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ・・・！）

――護り給え（コード）、汝の万盾（ケムエル）――

「「え・・・？」」

ヤミちゃんの繰り出した炎の剣があと少しでわたしに到達するとゆうところで、蒼い魔力光で創られた小さくて円い盾が重なって大き

な盾となったシールドが、わたしを護ってくれた。この魔力光、この魔法。それはわたしの大事な家族の1人、「ルシル君っ！！」のものや。

「はやてぇぇぇーーーーッ！」

蒼い魔力で形作られた剣の翼１２枚を背負ったルシル君が急降下して来て、「ルシル君っ！」わたしをお姫様抱っこ。そのままヤミちゃんから距離を取る。

「新手を確認。脅威戦力と認定。魔力出力上限を１０％に上方修正」

ヤミちゃんがそう言うと、さっきより強い魔力を発した。さらに重くなるプレッシャーわたしは思わずルシル君にしがみ付いた。ルシル君はそんなわたしを支えてくれてる両腕に力を入れて、「無事で良かった、はやて」わたしをギュッと強く抱きしめてくれた。ルシル君のトクントクンってゆう鼓動が、わたしを襲ってくる怯えを晴らしてくれる。

――ヴェスパーリング――

燃えるリング状の魔力弾を発射して来たヤミちゃん。ルシル君はスッと紙一重を狙って横移動で回避した後、「マカティエル」蒼く光り輝く魔力の槍が３０本とヤミちゃんの周囲に現れて、「ジャッジメント！」容赦なく発射した。

「インペリアルガード」

蜃気楼のように揺れてた魄翼が分厚くなってヤミちゃんを覆った。そんでルシル君のマカティエルを全弾防ぎきった。お返しとばかりに「バレットダムネーション」何十発ってゆう魔力弾幕を魄翼表面から放ってきた。そやけどルシル君の飛行速度には追いつけへん。

「はやて。あの子は？　あの子もまたマテリアルなのか？」

「ううん。あの子が、マテリアル達が探してた砕け得ぬ闇、システムＵ－Ｄ――アンブレイカブル・ダークなんや」

「アンブレイカブル・ダーク・・・砕け得ぬ闇、か」

そうポツリと呟いたルシル君は「上限１０％であの魔力量・・・これは逃げての一手かな」って苦笑した。それでも「カマエル」色んな変換資質で創り出された１００本以上の槍。それらが「ジャッジメント！」ルシル君の号令で一斉発射。ヤミちゃんは「防御・・危険」呟いて回避行動に移った。

「バイパー」

ついさっき受けた魔法の名前を聞いたから「ルシル君、足元！」声を上げる。ルシル君はノータイムで急上昇する。と、遅れて槍が幾つも突き出してきた。ヤミちゃんはさらに「ジェベリンバッシュ」回避先に大きな槍を魄翼から発射。

ルシル君は「ゼルエル」って一言。右脚に魔力を付加して、目前にまで迫って来てた槍を蹴り飛ばして軌道修正した。すぐさま「ドゥ

ームプレッシャー」接近してきたヤミちゃんは、トーマさんを倒そうとした魔法、怪物の両腕を伸ばしてきた。

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

ヤミちゃんを真横から殴り飛ばしたのは、腕周りが５０ｍ以上もある超巨大な銀の左腕。ものすごい轟音。目の前を通り過ぎてく巨腕が放つ風圧に思わず目を閉じる。耳に届くのは「効かないか」ってルシル君の困惑交じりの残念そうな声。効果が切れて魔力へと霧散してくイロウエルの奥、そこには無傷そうなヤミちゃんが佇んでた。

「バレットダムネーション」

「殲滅（コード）せよ、汝（カマエル）の軍勢。ジャッジメント！」

ヤミちゃんの魔力弾幕とルシル君の魔力槍群が、２人の間で真っ向から激突。連続で爆発が起きてく。ルシル君はさらに「サラティエル！」火炎砲撃を、ヤミちゃんの全方位から発射。同時やなくて時間差があるから、ヤミちゃんの回避先を読んで直撃させたり、牽制として放つことで誘導して、「コード・ゲルセミ！」蒼い閃光の砲撃を、ヤミちゃんに直撃させた。

「っ！　はやて・・・！」

「ひゃあっ！？」

――コンストレイント――

いきなり空に向かって放り投げられてもうた。わたしを襲う浮遊感。と、自分だけの力だけで飛べるのを思い出した。アカンな、ルシル君に抱っこされてて安心しきってた。修復した翼を使って姿勢制御。ルシル君を見下ろすと、「硬い・・・！」ルシル君はバインドで拘束されてた。

「ルシ――」

「ナパームブレス」

ヤミちゃんの呟きの直後、ルシル君が赤黒い魔力の球体に呑まれた。そんで球体は爆発して、「うぐぅぅ・・・」ルシル君を墜落させた。ヤミちゃんがルシル君を追って降下。わたしは急いで「バルムンク！」ヤミちゃんを止めるために剣状射撃を発射するんやけど、直撃を与えてもよろけさせることさえ出来んかった。

「エターナルセイバー」

振るわれる2本の炎の剣。ルシル君は左中指にはめてる指環――"エヴェストルム"を起動して、二剣一対形態のツヴィリンゲンシュベーアトで防いだ。間髪入れずに「コード・ノート！」魔法を発動。夜の闇を物質化させてヤミちゃんを取り込んだ。それを見たルシル君がフラッと後ろ向きに倒れ始めて、また墜落し始めた。

「ルシル君！」

闇の球体に呑まれたままのヤミちゃんを通り過ぎ、わたしはルシル君の背中に右手を回して抱きしめて、空いてる左手で"エヴェストルム"をキャッチ。制動を掛ける前にバッシャーンと海に落下した。真っ暗な海の中、わたしの背中に回されるルシル君の腕。今度はルシル君がわたしを抱きしめて海上へ脱出。

「ありがとう、はやて」

「大丈夫なん、ルシル君・・・！」

「ああ、なんとか。・・・しかし強いな、あの子。単独で勝てる気がしない。というより、勝てるのか？」

「ルシル君・・・」

珍しく弱音を吐いたルシル君は頭上、ヤミちゃんへと視線を向けたからわたしも倣って見上げる。ヤミちゃんは魄翼を大きく広げて、魔力弾幕を放った。ルシル君に抱きしめられたまま海面ギリギリを飛んで、降り注いで来る弾幕を右に左にと避け続ける。そんなルシル君の周囲に放電する魔力スフィアが12基と発生。

――天壌（コード）よ哭け、汝の剛雷（エネディエル）――

それらがヤミちゃんに向かって発射されて、包囲したと同時に大爆発。すごい雷撃が球状に炸裂して、ヤミちゃんを呑み込んだ。弾幕が切れたと同時、「はやて。離すぞ」って言われたから頷いて応えた。"エヴェストルム"をルシル君に手渡した後で離れて、ルシル

君はひとりヤミちゃんへと向かってく。

「エヴェストルム、カートリッジロード。戦滅神(コード)の・・・！」

――バレットダムネーション――

降り注ぐ弾幕を避けて、

――ジャベリンバッシュ――

大きな槍をバレルロールで避けて、

――サイズディカピテイション――

大鎌となった魄翼の斬撃を"エヴェストルム"で捌き逸らして、

――エターナルセイバー――

鋏のように振るわれた炎の剣を避けて、

――ドゥームプレッシャー――

怪物の両腕となった魄翼による握りつぶし攻撃も避けて、ヤミちゃんの懐に潜り込んだルシル君。

「破槍(ヴィズル)ッ！！」

「っ・・・！」

"エヴェストルム"の先端をヤミちゃんのお腹に当てて、そこから強烈な雷撃砲を零距離で発射、雷光爆発がルシル君とヤミちゃんを呑み込んだ。閃光が晴れたことで、２人の姿を視認することが出来た。ヤミちゃんは背を少し丸めた状態で佇んでて、少し離れた距離で対峙してるルシル君は、騎士甲冑の袖を失って素肌を晒してる左腕を右手で押さえてた。

「動作不良・・・、システム負荷増大・・・、駆体動作・・困難・・・」

ヤミちゃんがようやく止まった。わたしは肩で大きく息をしてるルシル君の側まで上昇して、「ルシル君！？」倒れ掛かってきたルシル君を抱き止める。

「馬ぁ鹿なぁぁぁぁぁっ！！　ゆ、Ｕ－Ｄぃぃ－－－－－！？」

「うそ・・・。なによ、あの子・・・！　あの怪物を本当に倒しちゃったの・・・！」

絶叫する王さまと、信じられへんって風に零すキリエさんの声が聞こえてきた。２人とも無事やったんやな。

「なんということだ！　最強無敵にして究極絶対なる砕け得ぬ闇が、男か女かも判らぬような塵芥に負けたというのか！？　しっかりせい、Ｕ－Ｄ！　傷は浅い！　倒れるな、倒れてはならぬぞ！」

王さまが慌ててヤミちゃんの元へ飛んでそう励ますと、「え？・・・これは、マテリアル－Ｄの駆体の反応・・・？　ディアーチェ？」って、ようやく人らしい感情の籠った声がヤミちゃんから発せられた。

「そうとも！　我こそがロード・ディアーチェ！　お主と同じように、駆体起動中だ！」

「本当にディアーチェなのですか？」

「無論！　周りを見るがよい、Ｕ－Ｄ」

ディアーチェが両腕をバッと大きく広げると、ヤミちゃんの周囲にミッド魔法陣が４つ展開されて、遅れて転移反応が現れた。転移して来たのは、残りのマテリアル達やった。

「ようやく出会えましたね」

「シュテル・・・」

「おお、ひっさしぶりー！」

「レヴィ・・・」

「再び出会えて嬉しいですわ」

「アイル・・・」

「感涙でありますよ！」

「フラムまで・・・」

「王と王下四騎士。お主と再び巡り合うがため、ずっと捜しておったのだ」

王さまの声に嬉しさが満ちてるのが判った。他のマテリアル達の子も微笑みや満面の笑顔を浮かべてる。そやけど、ヤミちゃんだけは違った。嬉しさの中に悲しみが混じってるのが判る。リインフォースもよく浮かべてた表情や。

「本当は、また会えて嬉しい・・・って、心から喜べれば良かったのに・・・」

「「「「「？？？」」」」」

「ダメなんです。私を起動させちゃ、ダメなんです。歴代の主みんなが、私を制御することが出来なかったんです。破滅を齎すだけの自分が嫌で、だから必死に奥へ奥へと沈めました。私に繋がるシステムを全て破断して、さらにデコイプログラムで上書きを繰り返して。魔導書に関わる全ての情報から私のデータを徹底的に消したんです」

ヤミちゃんの独白を聞いてた王さま達マテリアルの顔色が青くなっ

てくのが判った。

「夜天の主たち、管制を司る融合騎でさえも知り得ることなき、闇の書が抱える本当の闇・・・、それがこの私――」

「え・・・！？」「へ・・・・！？」

ヤミちゃんの魄翼が触手のようになってマテリアルの子たちを貫いた。呆けるわたしとキリエさん。苦痛に悲鳴を上げるマテリアル達。ヤミちゃんは今にも泣きだしそうな顔になって、「沈むことなき黒い太陽、影落とす月・・・それゆえの、決して砕けることのない闇――アンブレイカブル・ダーク」涙声で語った。

「私が目覚めた時、その後に待ってるのはひたすらに破滅・・・。全てに等しく滅びと絶望を撒き散らして、破壊の爪痕しか残さない。こうなるのが嫌だから、見たくないから、したくないから・・・私は・・・ずっと・・・」

ヤミちゃんが口を噤んだ瞬間、魄翼に貫かれてたマテリアル達が消えてしもうた。自分の無力感に苦しんでるヤミちゃんと目が合う。そんなヤミちゃんが反転して魄翼を広げた。ここから飛び去る気や。そやから「待って、ヤミちゃん！」制止するけど、「ごめんなさい。目覚めてしまって」そんな悲しいことを言うて、そのまま飛び去ってしもうた。

「Ｕ－Ｄ！　あなたに用があるのよ、わたしは！　絶対に逃がさない！　全力追跡、アクセラレイター！」

キリエさんもこの場から去って行った。残されたんはわたしと、わたしにもたれ掛ったままのルシル君だけ。

「王さま達・・・もしかして、ホンマに消滅したんか・・・！？」

「彼女たちはそう簡単に死にはしないだろう。おそらく、駆体維持を一旦放棄して、どこかで再起動を計っているはずだ」

いつの間にか意識を取り戻して薄らと目を開けてたルシル君にわたしは「みんな、無事なんかな・・・？」って確認する。

「ああいう手前、無事だろうな。今回みたく、力を取り戻すまでは休眠状態で居続け、時が来れば再び・・・」

お礼を言うてわたしから離れたルシル君と一緒に、マテリアル達が居った虚空を見詰めてると、『はやてちゃん！』クロノ君たちと一緒に出張してたシャマルから通信が入った。

『挨拶はごめんなさいですけど省かせてもらいます！　各地でとんでもない数の思念体――残滓が出現中だと、アースラの観測で捉えました！』

「了解や！　わたしも出――」

『いいえ！　はやてちゃん、すずかちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃん、アルフには一度アースラへ乗艦してもら

って、休憩に入ってもらうことになりました！　思念体討伐は、私たちパラディース・ヴェヒターで行います！』

「そういうわけだ。はやて、君はアースラへ」

「ちょっ、ルシル君かてもう・・・！」

「我が手に携えしは確かなる幻想」

――静かなる癒し――

複製したモノを発動する時の呪文を詠唱したルシル君。するとルシル君の体が蒼い魔力に包まれて、傷が見る見るうちに治った。そんで騎士甲冑の損傷も修復された。シャマルの静かなる癒しや。

「これまで頑張って来たはやて達は一旦お休み。これからは俺たちの番だ」

ルシル君が微笑みながらわたしの頭を撫でてそう言うてくれた。これは何を言うてもアカンなって思うたから「バトンタッチや」わたしはルシル君と拳を突き合わせた。

Ｅｐｏｓ４５－Ａ空翔ける騎士／蘇る闇の欠片～Ｆｒａｇｍｅｎｔｓ～

†††Ｓｉｄｅルシル†††

はやてが病院の定期通院日だということで、海鳴市へとリインフォースを連れて戻った。となれば、彼女の特別捜査官としての研修が休みとなる。それはつまりはやての補佐を務める俺たちも手が空くことになる。
その場合、シグナムとヴィータは武装航空隊の研修に従事し、シャマルは本局・医務局に従事、ザフィーラは局員ではないため、はやてかシャマルの護衛としてそのどちらに付く。俺は単独で特別捜査官としての研修を受けるか、または別の部署の研修を受ける。

「――さて。闇の欠片、そしてマテリアル達、さらには彼女たちが求めていた砕け得ぬ闇が現れたわけだが」

「ああ。それに異世界からの来訪者も居るという」

「そのうちの１人がアレだろ。イングヴァルトの名前を語ったって話。ハイディ・Ｅ・Ｓ・イングヴァルトって。名前や外見からしてシュトゥラのクラウス王子の子孫かもな」

「懐かしいわね。もう１人の来訪者も、オリヴィエ殿下と同じ身体的特徴を持っていたわ」

「アミティエ、キリエのフローリアン姉妹。そしてトーマ・アヴェニールとリリィ・シュトロゼックという騎士と融合騎は要注意だな。共に魔法とは違う技術で戦闘を行っている」

それぞれの研修先にマテリアルが復活したという連絡が入り、その報せを受けた俺たちは"闇の書"事件の当事者ということもあって、こうして海鳴の街へと戻って来た。正直、俺たちの事情で研修を切り上げることが出来るとは思えなかったが、権威の円卓メンバーからの指示があったのか、そう時間も掛けずに切り上げられた。

「では改めて確認だ。手配の掛かった異世界からの渡航者についての対応は・・・・」

「なるべく傷つけずに確保ね」

「闇の欠片は・・・・」

「接敵撃破。早ぇー話が、厄介事を起こしやがる欠片は全員ブチのめす」

「欠片たちはこの世界だけでなく近隣の無人世界にも現れているようだ。分散して潰そう」

「ああ。・・・・では行くぞ。夜天の守護騎士の名に懸けて」

夜天の守護騎士の名に懸けて。本件は"闇の書"事件の延長だ。ゆえに楽園の番人パラディース・ヴェヒターとしてではなく、守護騎

士ヴォルケンリッターとして戦いに行く。そうして俺たちはアースラのエイミィ達や、アースラに移ったアリシアからの報告を頼りに各地へ飛んだ。砕け得ぬ闇の復活と共に一気に具現化を始めた闇の欠片たち。前回みたくオリジナルより弱いのであれば助かるんだがな。

（しかし強かったな、砕け得ぬ闇。今の俺でもまず単独では勝てない・・・・）

純粋な魔力量だけであれば、大戦時でも十分に活躍できるほどの戦力となるだろう。まさか"エグリゴリ"並に厄介な相手がいるとはな。問題はあの子だけじゃない。ヴィヴィオとアインハルトが居る。俺を蒐集した時に彼女らの情報を取り込んだかと思ったんだが・・・

――あの、月村すずかさん、ですよね？　時空管理局・本局の、第零技術部主任の・・・・――

ヴィヴィオがすずかを相手にそう言った時点で、俺から取り込んだ記憶の再現ではないことが判った。先の次元世界では第零技術部など無かったからな。そしてもう1つ気掛かりがある。

――今日は新暦何年の、何月でしょうかっ？――

ヴィヴィオのこの台詞。どう考えても「タイムトラベラーの代名詞だよな、やっぱり」フィクションの映像作品などで、時間移動した者が現地人に訊ねる際によく聞いた台詞だ。にわかには信じられな

いことだが、海鳴市に現れたヴィヴィオとアインハルトは、未来からやって来たようだ。どうして、どうやって。彼女たちからの様子からして、自らの意思でやって来たわけではないようだが。

（となれば、アミティエとキリエ、フローリアン姉妹が原因か・・・？　エルトリア。現代にて管理局が認知していない。先の次元世界でさえも認知していない世界名だ。それに未知のエネルギー運用技術・・・）

遥か未来の技術であれば、現代の管理局で確認できないのも無理はない。しかしアレは・・・似ている。戦闘機人。彼女たちもまた魔法とは違うエネルギーで戦闘を行っていた。ギアーズと言っていたっけ。歯車。彼女たちも人工的な存在なんだろうか。

「トーマ・アヴェニールとリリィ・シュトロゼックも、そう考えるべきだな」

それはともかく、ヴィヴィオとアインハルトが未来人ならば、禍々しい格好をしているが、おそらく心優しいと思う少年もまた、未来人とみるべきか。２人ははやてのことを、八神司令、と呼んでいた。確認時には海上警備部捜査司令、とも。はやてがそう呼ばれるその年代は俺も知っている。今から１６年後、はやて達が２５歳の時だ。となると、トーマとリリィは１６年後の前後からこの時代に飛ばされた未来人となる。

「ま、とにかくあの子たちを確保すればいい。話はその時に聞こう。今は欠片たちの討伐に専念しよう」

俺が担当することになった海鳴市近隣の空を翔ける。俺は単独転移が出来るから、シグナム達のように無人世界まで出向こうと思ったんだが、

――回復したとしてもルシル君はヤミちゃんとの戦いで疲れてる。あんま無茶せんで――

はやてから懇願されてしまい、俺はこの世界に留まることになった。まぁ、砕け得ぬ闇もおそらくこの世界のどこかに居るはず。あの子と遭遇した際、魔術師化さえすれば仲間が集まるまで足止めくらいは出来るだろう。単独での勝利が無理ならば束で掛かって勝つ。外見が幼い少女であろうと、あの強さに絆されて手を抜けば殺されるだけだ。

「だから・・・」

目の前に現れた闇の欠片を睨みつける。俺の前に佇むのは「あれれ？　ルシル君？」なのはの姿を模した偽者。見た目が可愛かろうがか弱かろうが、敵である以上は撃破するのみ。

「えっと・・あの、ルシル君？・・・ちょっと怖いかなぁって・・・」

おどおどする偽者が"レイジングハート"を抱きしめながら「私、なにか怒られるようなことしたかなぁ・・・？」と自己問答を始めた。俺はそんな偽者に「すぐに済むから」そう告げて、右手でバイ

バイと振る。偽者も「？？？」小首を傾げながら右手を振り返した。

――無慈悲たれ、汝の聖火（コード）（プシエル）――

そんな偽者の背後から現れるのは蒼い炎で構成された龍プシエル。大きく開けた口で「へ・・・？」偽者をパクッと一飲み。それで終わりだ。なのはの偽者を焼滅させた。プシエルを解除すると、そこにはもう偽者の姿はない。空に舞う火の粉と魔力粒子を手で払い、「次だ」欠片たちの放つ魔力反応を頼りに空を翔ける。

それから俺は、フェイトやすずか、シャマルの偽者を片っ端から燃やし尽くした。痛みも苦しみもなく、気付くことすらもなく一瞬でその存在をこの世から抹消させてやった。そして次の反応地点へと目指して空を翔け・・・「馬鹿な・・・！」俺は遭遇してしまった。

「なんでお前まで、再現されているんだ・・・！？」

宙に佇む１６歳ほどの少女。フェイトやアリシアと同じ長いブロンドヘアを、赤く大きなリボンでサイドアップにし、角度を変えれば色の変わる瞳を有し、そして俺がいま着用しているアースガルド同盟軍の軍服――前後の裾が燕尾になっている黒い詰襟の長衣とロングコートを羽織り、彼女独自のハーフパンツに編み上げブーツと言った出で立ち。

「ディアーチェ、シュテル、レヴィ、フラム、アイル・・・」

彼女は、撃破されたことで崩壊しかけているマテリアル達の姿を模した欠片たちの髪を掴み上げていた。ダラリと提げられた右手は王、

理、力の髪を掴み、左手は律と義の髪を掴んでいる。

「お父様・・・？」

「プリム・・・、その子たちは・・・」

プリム。プリメーラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア。完全自律稼働人型魔道兵器・戦天使――ヴァルキリー。その一部隊である第七世代ランドグリーズの隊長。雷滅の殲姫のコードネームを持つ、雷撃系最強のヴァルキリー。

「この娘たちですか？　いきなり襲い掛かって来たので迎撃を。大して強くもなかったので、そう労することもありませんでした。良かったですよね・・・？」

「あ、ああ・・・まあ」

「良かった。お父様に叱られてしまっては私、自害ものですから」

――天震雷墜轟――

視覚・聴覚が麻痺しそうなほどの強烈な雷撃がプリムの両手から発せられ、マテリアル達を一瞬にして消滅させた。

†††Ｓｉｄｅルシル⇒シグナム†††

我らは再びその活動を始めた"闇の書"の欠片を撃破するべく、分

散して各世界へと跳んだ。アースラからの指示に従い、無人世界の空をひとり翔ける。そして、「あれか・・・」視界内に人影を収めた。
かつての我らの主であったオーディンと交友関係にあった、シュトゥラの王子――クラウス殿下と同じ碧銀の髪。高町と相対していた映像を見せてもらったが、なかなかの格闘技術だった。

「（しかし映像で観た時のあの者とは、髪型や雰囲気が違うが・・・）確か・・・覇王流、と言っていたな」

覇王イングヴァルトとして後世に伝えられたクラウス殿下が生み出した流派、カイザーアーツ。
時を超えてクラウス殿下の血族と戦う日が来るとはな。人生とは実に判らぬものだ。私は「そこの者。ハイディ・E・S・イングヴァルトだな・・・？」と声を掛ける。その娘がゆっくりとこちらへと振り返り、「貴方は確か、守護騎士・烈火の将・・・」私のことをそう呼んだ。

「っ。その二つ名で私を呼ぶとは。やはりクラウス殿下の血筋か」

オーディンはバンヘルドとの決戦を前に、クラウス殿下らに我らの正体を告げたと言っていた。それがあの娘の代にまで語り継がれていたのであれば、まぁ知っていてもおかしくはない。シュテルンベルク家に我らの絵画やエリーゼ卿の日記が残っていたくらいだ。あり得る話だろう。

「守護騎士ヴォルケンリッター・烈火の将、そしてグラオベン・オ

ルデンの剣の騎士としての貴方とは一度、お手合わせをお願いしたいと思っていました。ですので、今ここで一槍つけて頂きたいのですが」

構えを取るイングヴァルト。私は"レヴァンティン"を鞘より抜き放ち、「ああ。望むところだ」と応じる。

「守護騎士ヴォルケンリッターが将、シグナム。そして、炎の魔剣レヴァンティン」

「真正古代ベルカ・覇王流カイザーアーツ、ハイディ・E・S・イングヴァルト」

「参る」「参ります」

互いに一足飛びで最接近。イングヴァルトが間合いに入った事で"レヴァンティン"を横薙ぎに振るう。あの娘は"レヴァンティン"の刀身を真下から殴り上げることで、「ほう」私の一撃を妨害した。刀身の腹が下に向いているからこそ出来る迎撃法だな。

逸らし上げられた"レヴァンティン"を持つ右手を戻すより早く、「はぁっ！」左手に持つ鞘で、「断空拳！」イングヴァルトの繰り出して来ていた右拳を防御。鞘に拳が打ち付けられたと同時に鞘を左へ払う。振るわれる鞘に沿ってあの娘の右腕も外に向かって流された。

「っ！」

「せいッ！」

ここで"レヴァンティン"を降りおろし、「ぅぐっ！」イングヴァルトの左肩を斬る、ではなく打つ。よろけたこの娘の意識を刈り取るために頭部に向かって鞘を振るうと、「まだ、です・・・！」魔力を集中させた右腕を構えることで鞘の打撃を防ぎ、「覇王・・・！」左拳を強く握り締めた。

「させん！」

先ほどの初撃――断空拳もそうだったがイングヴァルトの拳打は、足元から練り上げた力を拳に乗せて打つようだ。ならば「ぅあ！？」その拳打の要で足をどうにかすればいい。足払いを掛けてあの娘の体勢を崩してやる。

「せやぁっ！」

「ぐっ・・・！」

遠心力を乗せた回し蹴りを、体勢を崩したままのイングヴァルトへ繰り出すと、この娘は私の蹴りを両腕で防御はしたが、踏ん張りきれずにさらに後ろによろけた。ここで「レヴァンティン！」のカートリッジをロードし、刀身に炎を噴き上げさせる。

「紫電・・・一閃！！」

イングヴァルトを袈裟斬りする。欠片か本物かはどうかまだ判別が

出来ぬため、可能な限り手を抜いたことで、「何のつもりですか・・・？」肩から脇腹へと走る防護服の損傷を撫でていた娘から非難の視線を受けることとなった。手応えからしておそらく欠片なのだろうが、今一つ確信が持てないな。

「真剣な決闘で手を抜くなんて・・・！」

「すまんな。お前の正体が判らぬのだ。イングヴァルト。お前の目的はなんだ？」

欠片であれば僅かばかりの記憶の混濁があるはずだ。イングヴァルトは「強さを知るためです」とハッキリとした口調で答え、宙を蹴って向かって来た。"レヴァンティン"を振るい「陣風！」衝撃波を放つ。宙を蹴って跳躍することで躱し、弧を描きながら落下してくるあの娘は「せぇぇい！」落下速度を乗せた拳打を打って来たが・・・

（高町と戦った時より随分と弱くなったな・・・）

"レヴァンティン"の腹で受け止めてそのまま拳を外側へと払い退け、上段蹴りで蹴り飛ばす。イングヴァルトはまた両腕で防御し、焦りを見せながらも姿勢制御を行い、宙に留まった。飛行すらも危うい状態だな。明らかに高町と戦っていたイングヴァルトより格が落ちている。となれば、あの娘は欠片となるだろう。

「列強の王たちを全て打ち倒し、本当の強さを手に入れ、ベルカの天地に覇を成す。それが私の目的・・・です。古きベルカの名のあ

る王すべてよりも、覇王が最強であると証明できれば・・！」

「・・・お前がいつの時代の者かは判らんが、ベルカはすでに終わりを迎えた。王たちもすでに存命していないだろう。・・・っ。まさか、末裔を狙っているのか？　だとすれば止せ。そのようなことをしても、お前の目指す強さは見つからん」

「っ！・・・判っています。それでも・・・弱いままじゃ、誰も守ることが出来ないから・・・！」

悔しげに、そして悲しげな瞳を見せる娘だ。どういった理由でその道を選んだのかは知らんが、私に出来るのはこの悪夢を終わらせてやることだけ。ならば。

「王ではなく騎士な私だが、それでも今のお前以上には強いと自負している。付いて来い。陸に降り立とう」

眼下に広がる荒野へと降下していくと、イングヴァルトもまた高度を落とし付いて来た。そしてザッと地面へと降り立ち、「仕切り直しだ、覇王イングヴァルトの末裔よ」と言い放つ。

「しっかりと両足で地面を踏みしめることが出来れば、お前のカイザーアーツもその真価を発揮できるだろう。その上で沈めてやる」

「・・・感謝します」

ふむ。空中の時は違い、なかなかの構えだ。外見年齢は１０代後半

ほどか。その構えからして余程の鍛錬を積んできたのだろう。その真価を発揮できずに敗北を与えるのは忍びない。私としても本当に覇王流を見てみたい思いもある。

「では改めて・・・参ります」

空戦とはまるで違って勢いのある踏込み、「ほう」そして一足飛びの速度。"レヴァンティン"ではなく鞘を振り下ろす。イングヴァルトは体の向きを横に変えることで避け、勢いを殺すことなく、上半身の捻りを加えた正拳突きを繰り出した。
私は、右足を伸ばした状態で左足だけを曲げて腰を限界まで落とすことでやり過ごす。頭上を通り過ぎたのを確認。蹴りを打たれる前に立ち上り、イングヴァルトを左肩に担ぎ上げて「おおおお！」後ろに向かって放り投げる。息を呑むイングヴァルトの気配を背中で感じながら、振り向きざまに"レヴァンティン"を振るう。

「っぐ・・・！」

また防がれた手応えが右手から伝わって来たが、「おおおおッ！」そのまま"レヴァンティン"を振り払う。ここでようやく振り返り終え、大きく薙ぎ払われたイングヴァルトを視界に収めることが出来た。あの娘は両手を地面に付いて滑空を止め、後方倒立回転跳び――俗に言うとなんだったか、バック転か。それで勢いを殺した。

「結構本気で打ち込んだんだが、さほどダメージが入ってはいないようだな」

鞘へと"レヴァンティン"を納め、カートリッジをロード。その場から動こうとしないイングヴァルトへと歩み寄って行くと、あの娘が構えを見せる。最初に見た初撃より、私が中断させた二撃目より、魔力の練り込みのレベルがさらに高い。

「用意は出来たか？　イングヴァルト」

「はい。ご配慮、感謝いたします。今の私に打てる最高の一撃を、お見せいたします」

「そうか。では私も、それに見合うだけの一撃を見せよう」

徐々に距離を詰め、そして一足飛びで"レヴァンティン"の間合いにイングヴァルトを入れる事が出来る距離になったところで止まる。ここに来てもう語る事はない。次の接近で、互いに必倒の一撃を揮う、それだけだ。

「覇王・・・」

「紫電・・・」

待ち構えるイングヴァルトへ一足飛びで最接近。

「断空拳ッ！！」

先手はイングヴァルト。極度に練り上げられた力が込められた右拳打が真っ直ぐ打ち出されてきた。本当に面白い技だ。速度も申し分

ない。だが、私を相手にそれはあまりにも直線的。先ほどイングヴァルトが私の振り下ろしを躱したように、こちらも体の向きを横に向けて紙一重で回避。反撃を受ける前に、

「清霜ッ！」

上半身の捻りを加え、鞘内に溜めた魔力を爆発させて居合速度を加速させた一閃、紫電清霜を放つ。"レヴァンティン"はイングヴァルトの体を確実に捉え、「かは・・・っ」空高く舞い上がらせた。そしてドサッと背後に墜落。ゆっくりと振り返り、力なく横たわるイングヴァルトを見下ろす。

「かふっ、けほっ・・・」

「意識があるか。大した防御力だな。しかしもう立てまい」

欠片であることを証明するように崩壊し始めたイングヴァルトが僅かに動かせているのは手の指だけ。

「わた、しは・・・強くなり・・たい・・今より・・・もっと、ずっと・・・誰にも、負けな・・・ように・・・」

そう言い残して消滅したイングヴァルトの偽者。それを見送り終えた後、私は次の反応地点へ向かうために空へと上がった。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒シャマル†††

砕け得ぬ闇・マテリアル・異世界渡航者・闇の欠片。いろんな問題が一気に発生しちゃってる今回の事件。アースラで一度集まった後、はやてちゃん達が遭遇した問題の子たちを映像で観たけど、ビックリしちゃった。オリヴィエ殿下やクラウス殿下の身体的特徴を受け継いでいた子が居るんだもの。

でも、それ以上に驚いたのが砕け得ぬ闇のその強さ。単体戦力としては間違いなく私たちの中で最強だって思えるルシル君の魔法を受けてもダメージが軽微。その魔力量は今まで出会ってきた人たちの中で最高レベルかも知れない。

ともかく。不思議な渡航者さん達の捜索も視野に入れた、闇の欠片たちの討伐を行うために、私たちは世界を渡り歩くことになった。そして最初に出会ったのが・・・

「フリーズ、で～す！　キッチリ検問ちゅーな、キリエちゃん。K・K・K♪　そんなわたしのね・ら・い・は、あなた！　緑のおねーさん　というわけで、止まってくださーい！」

「えと・・・キリエ・フローリアン、ちゃん・・・」

桃色の髪をした女の子が、両手に銃を携え、そしてその銃口を私に向けた佇まいで現れた。私はそんなあの子に「あなたには今、手配が掛かっているから、出来れば投降してくれると助かるんだけど」って声を掛ける。

「知ってまーす♪　でも、投降なんてしません。わたしには、わたしでやることがあるんで」

「そのやることに、私がどう関係してくるのかしら？」

検問中なんて名目で私を待ち構えて、しかも狙いが私なんて言うんだから。キリエちゃんは「ええ。あなたの治癒の力で、マテリアルちゃん達を――王様たちを治してほしいんですよ」って話してくれた。

「本当に参りましたよ～。頼りの王様たちがみ～んなダウンしちゃうし、ヤミちゃんもどっかに飛んで行っちゃって見失っちゃうしで。もうどうしたらいいのかって困り果ててたんですけど・・・。だったら治せばいいやって思い至ったんですよ」

「あー、なるほど。だけど、マテリアル達の子を治すかどうかは私の一存じゃ決められないの。私たちの主であるはやてちゃん、それに司令部に話を通してからじゃないと・・・。あと、治し方が正直わからないってこともあるし・・・」

普通の人なら治せることも出来るだろうけど、相手はマテリアル――人ではない、実体化したプログラム。それを治せるような技術も魔法も持ち合わせてないわ。だからそう言ったら、「そうですかー。判りました～♪」肩透かしを食らっちゃうほどにアッサリと諦めてくれた。

「ほっ。それじゃあ――」

「それは、そっちの都合♪　だから知ったこっちゃないの♪　許可とか貰わなくていいから、つべこべ言わずについて来てもらいます

♪　もしかしたら、上手く治せるかもしれないですし、どうやっても治してもらいます。何せヤミちゃんを管理下に置く為には、王様の力が必要なんで。・・・どうしても必要なんです。ヤミちゃんが、あの子が持つエグザミアを持って帰らないと・・・。お父さんが・・・！」

「エグザミア・・・？　お父さん・・・？」

後半からお気楽な声色の中に真剣さが混じり始めた。キリエちゃんは「必要なんです。エグザミアが。わたしとお姉ちゃん――アミタ、わたし達のお父さんの夢を叶えるために」って目の端に涙を浮かべさせた。

「それは、その、なんて言うか、個人的にはお手伝いをしてあげたいんだけど、でも公務員な立場的に出来ないと言いますか・・・」

「チャ～ンス」

「え・・・？」

――ラピッドトリガー――

「きゃあ！？」

キリエちゃんの2挺の銃から光弾が連射されてきたから、「クラールヴィント！」パンツァーシルトで防御する。これってまさかの「泣き落とし・・・！？」攻撃だった。危うく引っ掛かるところだっ

たわ。

「どの道、こちらの時代、こちらの世界での治癒術師の協力は必要なんで、強制的に連れて行きます！」

そう言ってキリエちゃんは左手に持つ銃を片刃剣に変形させて、「大人しくしてくれれば、痛い目に遭わずに済みますよ♪」って剣を振り下ろしてきた。それを後退することで避けたすぐ、「っく・・・」右手の銃から光弾を発射。それもまた障壁で防御。

「拉致されるなんてお断りです！　もう手加減なんてしてあげません。謝るなら今ですよ！」

「それはこっちのセリフですぅー。泣いて降参したって、みっともなく謝らない限りは止めませんからね～！」

――アクセラレイターーーー

キリエちゃんの姿が掻き消える。テスタロッサちゃんの高速移動魔法みたい。前情報が無かったら危なかったかもしれないけど、高速移動が出来ると判っている以上は「待ち構えればいい」その場から動かず、周囲に小型の竜巻――風の足枷を6基と発生させる。

「わわっ、きゃぁあああ！」

背後から悲鳴が聞こえた。足枷に突っ込んで弾き飛ばされた証の悲鳴が。速さに任せて背後からの奇襲なんてセオリー過ぎるわ。とに

かく、一度でも向こうの出鼻を挫いてあげれば「私のターンの始まりよ！」"クラールヴィント"のペンデュラムを伸ばして、相手にぶつける打撃魔法、ペンダルシュラークを放って、「きゃん！？」キリエさんにダメージを追加。

「さらに！」

「ちょっ、待っ・・・！」

――逆巻く嵐――

竜巻状の砲撃を発射。キリエちゃんは「おっかしいな！？　治癒術師って、戦闘はダメダメっていうのが常識じゃなかったっけ！？」なんて、納得できないって風に大声を上げながらも光弾を発射して来た。

「無駄よ、キリエちゃん！」

障壁で防ぎ切り、「お願い！」風の足枷をキリエちゃんに向かって飛ばす。キリエちゃんは速度にものを言わせて避けきって、「フェイザー・エッジ！」両手に剣を携えての二刀斬撃。それを「風の護盾！」渦巻く障壁で防いで、「なんなのよぉー！？」弾き返されたキリエちゃんに、「戒めの糸！」ペンデュラムと指環を繋ぐ魔力の糸を絡ませる。

「うっそぉー！　こんな簡単に負けちゃうなんて信じられなぁーい！！」

「はーい、シャマル先生の大勝利ぃ～～～♪」

キリエちゃんに勝利のピースサインを向ける。私の高速から必死に抜け出そうとしているキリエちゃんに「そう簡単には抜け出せませんよ♪」笑顔を向ける。

「さてと。色々とお話を伺いましょうか。エルトリア、ギアーズ、あなた達の正体について。マテリアル達、砕け得ぬ闇について、知っていることを全て」

「むぐぐ・・・。も、黙秘権を行使します！」

「あらあら。じゃあしょうがないわね。弁護官が来てくださるまで、このまま拘束を続けさせてもらいますね」

キュッと戒めの糸の拘束力を強めちゃう。すると「あんっ。あいたたた！　ちょっ、痛っ、痛い、締まる、食い込んじゃうぅぅーーー！」ちょっとアレな声を出しながら文句を言ってくるけど、聴かないもーん。

「あのね、キリエちゃん。無茶なことをしないで、ちゃんとお話をしてくれれば、無駄な争いも起きないのよ。砕け得ぬ闇のエグザミアがないと、お父さんが大変なことになるのよね？　そういう理由なら、手伝うのにやぶさかじゃないから」

「つーん」

「はあ。それに、アミティエさん、あなたのお姉さんともケンカをしているらしいけど、それもあなたがお姉さんときちんとお話ししていないからじゃない？　ちゃんと説明を、コミュニケーションを取れば、解決できると思うんだけど？」

「ふーんだ。あなたにわたし達のことなんて関係ないじゃないですかー。勝手に、土足で他人様の家庭の問題に踏み込んで来ないでくださいぃー」

駄々っ子。見た目ははやてちゃん達以上のお姉さんなのに、中身が本当に幼い。溜息ひとつ吐いて、アースラに連絡を入れようとした時、「っ！？」とんでもない魔力反応が付近で発生した。その魔力波で「ああ！　戒めの糸が・・・！」弛んじゃった。

「チャ～ンス！　キリエ、緊急ダァーーッシュッ！　C・K・K　」

「待っ・・・！」

拘束力をもう一度強め、そして制止する間もなくキリエさんがとんでもない速さで飛び去って行っちゃった。あぅ、逃がしちゃったわ。しょんぼり肩を落とす。

「ううん。こんなことで落ち込んでいられないわ。さっきの魔力の発生点に向かわないと・・・！」

キリエちゃんの反応をアースラが捉えてくれるまで、私はもう1つ

の問題へ取り掛かる。魔力反応が発生した場所へ飛んで、「え・・・？」発生原因を視界に収めた。

「ルシル君・・・？　あれ？　ルシル君は海鳴市の担当じゃ・・・？　それに、どうして大人の姿に変身して・・・？」

ふくらはぎまで伸びる、綺麗で長い銀の髪。背に展開するのは蒼い魔力で形作られた剣の翼１２枚。見間違うはずのない家族の姿がそこにあった。

「シャマル・・・？」

「？？・・・！？・・・・！！・・・・うそ・・・・！」

両手を口元へ持って行く。ルシル君じゃない。あの人は、あの人は・・・「オーディン、さん・・・！」だわ。ルシル君の大人形態と瓜二つでありながら、その身に纏う雰囲気が変身時より大人っぽい。

「オーディンさん、ですよね・・・？」

「どうした？　シャマル。私が他の誰かに見えるのか？」

そう言ってペタペタと自分の顔を触るオーディンさん。視界が涙で滲みだす。また、こうして逢える日が来るだなんて、予想だにしていなかった。私は思わずオーディンさんの胸へと飛び込んだ。

「おっとと。どうしたんだ？」

「いえ、・・・いいえ、なんでもないです！」

「？？？・・・ふふ。おかしなシャマルだな」

オーディンさんに頭を撫でられる。何百年ぶりなんだろう。大きくて温かな、そして優しいその手で撫でられるのは。でも、このオーディンさんは・・・欠片。打破しないといけない障害・・・なのよね。私はオーディンさんの胸に頬を摺り寄せながら、今のオーディンさんの状況を伝えた。

「――つまりは、今の私は闇の書の闇が再現したことで実体化された記憶、だということなんだな」

「はい」

「なるほど。通りでアムルの街並みが周囲に無いわけだ。しかもいきなりここに放り出されたような感じもして、何故ここに居るのかさえも判らなかった。そうか、そうか。偽者なら、当然か」

「オーディンさん・・・！」

納得したと言った風に深く息を吐いたオーディンさんは、「なあ、シャマル」私の頭を撫でながら私の名前を呼んでくれた。それに「はい」俯くような首肯で応える。

「君たちは今、幸せか？」

「っ！！・・・はい・・・はい・・・はい！　幸せ、です！」

涙が溢れ出てくる。声だって嗚咽が少し紛れてしまって。

「オーディンさん・・・！　あなたがかつて読んでくれた予言は、こうして叶いました・・・！　必ず私たちの前に最高の主が現れる。・・・魔法も知らなかった、小さくて、優しい女の子。私たち守護騎士と融合管制騎リインフォース！　とても幸せな日々を送っています！」

感情を抑えきれなくて、オーディンさんにしがみ付きながら叫ぶ。幸せです、と。オーディンさんの人差し指が私の頬に伝う涙を拭う。顔を上げてオーディンさんと目を合わせると、「良かった。本当に・・・良かった」オーディンさんは満面の笑みを受かべてそう言ってくれた。

「幸せにな、シャマル。シグナム、ヴィータ、ザフィーラ。そしてリインフォースにも伝えてくれ。いつか再び、アギトとアイリと再会する日が来たら、彼女たちのこともうんと幸せにしてあげてくれ」

「オーディンさん・・・！」

「さあ、私も夢から覚める時だ。元気でな」

「オーディンさん！！」

そうしてオーディンさんは自らその存在を瓦解させて、光となって消滅していった。

Ｅｐｏｓ４５－Ｂ空翔ける騎士／蘇る闇の欠片～Ｆｒａｇｍｅｎｔｓ～

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

いろいろ面倒なことになっちまってる今回の"闇の書"の欠片事件。異世界からの渡航者なフローリアン姉妹、古代ベルカのオリヴィエやクラウスの子孫と思われる女２人組、トーマとリリィっつう騎士と融合騎組の出現、新しい魔法と本当の名前を手に入れたマテリアルの復活、さらには砕け得ぬ闇っつう、リインフォースですら知らなかったやべぇシステムの出現。どんな寄せ鍋だっつうのな。

「ま、あたしらはあたしらの仕事をこなすだけだな」

守護騎士ヴォルケンリッターとして、"闇の書"の闇が起こしてる問題を解決しないとな。あたしらに任された仕事は、砕け得ぬ闇の復活をキッカケとしたように次々と現れた残滓たちの討伐だ。

「えっと、エイミィ執務官補からの通信だとこの近くって話なんだけどな」

あたしとザフィーラが担当することになった無人世界に複数の魔力反応があるってわけで、あたしはザフィーラと分かれて捜索開始。そんで反応地点へとやって来たわけだが。

「・・・お？　魔力反応２つを確認、っと。そんなにデケェ魔力じ

ゃねぇな」

基本的に残滓は本物よりか魔力量が少ないうえに実力も低い。だからそう苦労すること倒せるだろ。そんな風に気楽な感じで飛び続けてそう間もなく、あたしが倒すべき2人の残滓が視界に入り込んで・・・そいつらの姿にあたしは目を疑った。

「お前ら・・・」

「ん？　あれ、ヴィータだ」

「ヴィータだ、ヴィータだ！　やったね♪」

2人とも30cmくらいの小さな体を持った女で、かつて家族として、戦友として、オーディンやシグナム達と一緒に過ごした、現代じゃ行方不明ってされてる奴らだったからだ。

「アギト・・・」

紅の長髪を頭の左右で結び、鋭い紫色の瞳に上に向いて尖った耳、オーディンと同じデザインだが色違いの長衣、それに膝丈くらいの黒いズボンを穿いて、背中から蝙蝠のような羽を一対生やしてる。

「アイリ・・・」

腰まである雪のように真っ白な長髪を結うことなく流して、水色の大きな瞳は爛々と輝いている。そんで髪や肌と同じように真っ白な

ロングワンピースを着て、背中から白鳥のような白い翼を一対生やしてる。
あたしの前に現れたのは火炎の融合騎アギトと、氷結の融合騎アイリ。その2人だった。

「いいところに来てくれたよ、ヴィータ。ここがどこか判る？」

「アイリとアギト、気付いたらこんなところに居て、困ってたんだよね」

「まったくさぁ。マイスターとお昼ご飯を食べようと思ってアイリと一緒に意気揚々と帰ろうとしてたら、こんなことに」

「アイリ、早くマイスターに頭撫でられた～い」

気付けば知らない場所に移動していたことに不貞腐れてるアギトと、頑張ったご褒美にオーディンに撫でられたいからと言って自分で自分の頭を撫でるアイリ・・・の偽者。そんな2人が羽と翼を羽ばたかせてあたしのところへ飛んで来て、あたしの周りをクルクル回り始めた。

「あのさ・・・アギト、アイリ」

「「ん、なーに？」」

あたしの前で止まる2人が同時に小首を傾げる。あたしは「オーディンはもう、居ないだ」って伝える。最初は呆けた2人。まずは「

あ、どこかへお出かけした？」アギトがそう訊いてきて、あたしは首を横に振る。次に「じゃあ、どこに居るの？」アイリの質問に、「だから居ないんだ」って答える。

「オーディンはもう居ないんだ。死んだんだよ」

あたしら守護騎士は、オーディンと一緒に戦い抜くことが、バンヘルドから護ることが出来なかったんだ。あたしのその一言にアギトとアイリに表情が固まった。

「ヴィータ。冗談だとしても、許せないんだけど」

「アイリね、そういうの大っ嫌い」

さっきまでの笑顔が怒りに変わって、あたしを睨みつけて来た。くそっ。ふざけんな。なんでオーディン大好きなアギトとアイリにこんなことを言わなきゃダメなんだよ。もう問答無用で２人を倒すしかねぇのか・・・。

「ヴィータ。マイスターはどこ？」

「アイリ、判ったよ。こいつ、きっと偽者だね。ヴィータの姿に変身した、イリュリアの残党だ」

イリュリアの残党。つうことはコイツらの意識はイリュリア戦争終結後のもんか。確かに、終結後はイリュリア騎士団の残党が何回か戦闘を起こしてた。そのたびに同盟騎士団で対処してはいた。それ

でほとんどの残党を討伐したけど、見つかってねぇイリュリア騎士も十数人と居た。騎士団長のグレゴールやその融合騎であるアインス。その他のテウタ派の騎士や政治家連中は、結局最後まで発見することが出来なかったが。

「ちょっ、待て、アイリ！　違う、あたしは・・・！」

「マイスターを、ヴィータを返せ、偽者！」

――アイス・ランツェ――

アイリがあたしに向けて両手を翳し、その周囲に氷の礫を１０発と展開して一斉発射してきたから、受けに回らずに躱す。敵意も戦意もないことを伝えるために"グラーフアイゼン"を首飾りに戻して「頼む、聴いてくれ！」両手を上げる。

「マイスターとヴィータをどこに隠した！？」

――フランメ・ドルヒ――

炎の短剣が１２発と高速発射されてきた。避けきれねぇとすぐに判ったからパンツァーシルトで防いだすぐ後、頭の上がヒヤッとしたから見上げてみると「アイリ！」が居て、その周囲にアギトの炎とは違って氷の短剣を２０発ほど展開させて、「早く返した方が、身の為だよね！」発射した。

――パンツァーヒンダネス――

直線的じゃなくて多方向からの包囲攻撃だったからあたしは、全身を覆い隠す完全防御の多面体バリアを発動して、偽アイリの攻撃を防御。さらにアギトが「ブレネン・クリューガー！」火炎弾をばら撒いて着弾させてきた。

「聴けって話を！　オーディンも、あたしらも、死んじまったんだよ！」

「死っ――、信じない！　マイスターとヴィータが、みんなが死ぬなんてありえない！」

――フランメ・ドルヒ――

「もし、本当にマイスターとヴィータ、みんなを殺したんだっていうなら・・・絶対に・・・許さない・・・！　殺してやる・・・殺してやるぅぅーーーーッッ！！！！」

――フリーレン・ドルヒ――

アギトの怒気とアイリの殺気に満ちた炎と氷の短剣による何十発っていう弾幕爆撃があたしの衝撃を砕こうと降り注いで来る。いくら本物より弱いとは言ってもこの数には耐えきれねぇ。ピシピシとヒビが入り始める。

（くそ・・・！　やるっきゃねぇ・・・のか・・・？）

弾幕が一瞬だけとは言え途切れたその瞬間、障壁を解除してその場から離脱。そのうえで「アイゼン・・・」を起動させる。　"グラーフアイゼン"の柄をギュッと握りしめる。

「ヴィータの武装を使うなぁぁぁぁーーーーッ！！」

――轟炎――

アギトの頭上に発生する小型の太陽。それがあたしに向かって落ちて来た。そいつを横に向かって飛んで避ける。

――氷牙――

避けた先の頭上からとんでもなくデカい氷塊が落ちて来た。高速移動魔法のフェアーテを使っても完全には避けきれないと判断したあたしは"アイゼン"のカートリッジをロード、強襲形態のラケーテンフォルムへと変形させる。

「ラケーテン・・・」

歯噛みしながら"アイゼン"のブースターを点火させ、「ハンマー・・・！」落下して来た氷塊に突撃して打撃を打ち込む。バキバキと砕いてる中、「ブレネン・クリューガー！」破砕した氷の破片を蒸発させて足元から迫って来るのはアギトの火炎弾。

「キツイ・・・！」

左手を柄から離して、迫って来る火炎弾に翳してパンツァーシルトを展開、その8発を防ぐことは出来た。けど、その代わり「ぅぐ、ぐぅ・・・！」アイリの落とした氷塊を砕き切る前に押し切られちまった。あたしは氷塊と一緒に落下。

「悪かねぇ場所で助かったぜ・・・」

眼下に広がるのは深い森で、背の高い木々に落下したのが救いになった。氷塊が木々に落ちたその瞬間だけ、落下速度が落ちた。その隙にあたしは氷塊の隙間から脱出・・・したところで、「グラーフアイゼンを返せ！」10歳前後の人間大の姿に変身したアギトとアイリが目の前に現れて、あたしから"アイゼン"を奪い取ろうとしてきた。

「やめろ、もうやめてくれ・・・！」

「「きゃあ！？」」

体格差じゃ負けてんけど、力勝負ならあたしの方が上だ。力の限り2人を振り払う。そんで2人は体勢を立て直して「なんで・・・なんで・・・！」ポロポロと大粒の涙を零し始めた。あたしはすぐさま近寄って「悪ぃ、大丈夫か！？」どこか怪我をさせたのかって心配する。

「なんであたしとアイリだけ置いてっちゃったんだよ・・・！」

「マイスター、マイスター！　うわぁぁぁん！」

ついにはわんわん泣き始めたアギトとアイリ。あたしはゆっくりと語り始める。まずは2人が本物じゃないことを、包み隠さずに。最初はやっぱり訝しんでたが、あたしの真剣さが伝わったのか話だけは聞いてくれるようになった。

「つまりあたしとアイリは、闇の書の悪い部分が再現してる記録ってこと・・・？」

「ああ。お前ら、いきなりここに来て、しかもどうやって来たかも判んねぇんだろ。実体化したその時からの記憶しかねぇからだ」

「アイリ達が偽者・・・？　そんな実感ないんだけどね」

「そういうもんらしいぜ、残滓ってのは」

次に語るのは、イリュリア終結後の日常。話を聴いた限りじゃ、2人の意識は、バンヘルドとの戦いの数日前のものだってことが判った。その数日後、オーディンは、オーディンの目的だった"エグリゴリ"の1機、バンヘルドとの戦いに臨んだ。もちろん、あたしら守護騎士やアギトとアイリも参戦した。けど、バンヘルドが怪物過ぎたんだ。

「今でもハッキリと脳裏に浮かぶんだ、あのバンヘルドの圧倒的な火炎攻撃が」

体がブルッと震える。ザフィーラを、シャマルを、シグナムを、そ

んであたしを、その火炎で殺した。そこまで言うと、アギトとアイリの顔が青褪めた。そんで「本当に、負けたの？」って同時に訊かれたから、「ああ」簡潔に一言で答えた。

「その後、オーディンは、お前たちを逃がしたんだ。バンヘルドとの戦いに巻き込まないために、って・・・。あたしら守護騎士には次がある。転生して、新しい主に仕えて・・・。でもお前らはそうじゃない。死んだらそれで終わり。オーディンも言ってたろ」

「「・・・・うん」」

次の転生先で聞いた話だ。シュリエルは、死んだあたしらのリンカーコアで"夜天の書"を完成させて、その後にオーディンはアギトとアイリを避難させた。そしてオーディンと融合を果たしたことでバンヘルドを斃せたって。

「そこまでは良かった。オーディンとシュリエルはバンヘルドを斃せた。だが、悲劇は起きた。居たんだ、近くに。別のエグリゴリが。オーディンとシュリエルは、その別のエグリゴリの奇襲によって・・・殺された」

「「っ！！」」

少し治まってた涙をまた流し始めるアギトとアイリ。あたしは「その後のお前らについては判んねぇんだ、悪い」ってその2人に謝る。行方不明。現代にまだ続いててくれたシュテルンベルク家ですら、2人の居所が掴んでいないって話だ。

「今の話が全部本当なら・・・あたしとアイリ、もうヴィータ達とは会えないのかなぁ・・・」

「うぅ、ぐす、やだ、ひっく、そんなの、ひぅ、アイリ、やだ・・・！」

もう再会できないのかと泣くアギトとアイリに「逢える！！」あたしは叫んだ。ビクッと体を震わした2人の肩に手を回して抱き寄せる。つってもあたしの方が小さいから、あたしが2人に抱きついたみたいになってっけど。

「絶対にまた逢える！　これ見ろ！」

「「マイスター！？」」

アギトとアイリに八神家の家族写真データを見せて、「名前はルシリオン！　その、なんだ、オーディンの子孫だ！」って伝える。ルシルの話じゃ、オーディンもこのルシルも、元々は対"エグリゴリ"用生体兵器で、ルシリオンっつう超古代の王様のクローンらしいんだが。今はそんなこと関係ねぇ。

「オーディンと丸っきり同じなんだぜ、コイツ。性格も仕草もほとんど。確かに、あたしらの主だったオーディンはもう居ない。けど、オーディンの遺志はこうして生き続けてる。だからきっと、あたしらはまた逢える。つうか探し出す！　アギトとアイリ、お前たちを絶対に探し見つけるから！　だから・・・もう少しだけ、待っててて

くれ」

「「ヴィータ・・・」」

あたしの頭の上に置かれるアギトとアイリの小さな手。知らず泣いてたあたしは、涙で滲むその目で2人を見た。

「まぁ、ヴィータはそこまで言うんだもん。きっとまた逢えるよ」

「アイリ、待ってるからね。みんなでアイリとアギトを見つけてくれるの」

「ああ。待っててくれ」

「それじゃあアイリ。そろそろ起きようか」

「ん。目を醒ましたら、そこにマイスターの意思を受け継いだルシルと、ヴィータ達が居ますように」

最後は笑顔を浮かべて、アギトとアイリは消えて行った。あたしは袖で涙を拭って、手に残ってるアイツらの温かみを逃がさないようにギュッと握り拳を作る。

「アギト、アイリ。約束だ。絶対に、また逢おうな！」

拳を突き上げて、あたしは地平線にまで広がる空に向かって改めて誓った。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒ザフィーラ†††

我ら元"闇の書"の一部でさえも知らぬ、ナハトヴァールすらも超越するシステム、砕け得ぬ闇――システム：アンブレイカブル・ダーク。外見は幼き娘だが、その魔力量は絶大。それを攻撃や防御に回されたとなれば、最早戦闘で勝利するという方法は取れぬだろう。

（だがそうも言ってはおれん。あの者に対抗する術が見つけねば・・・）

我らが主やその友人、あの街を守るためにも。しかし今はその術もなく、今はただ砕け得ぬ闇の復活を切っ掛けとしたように出現した闇の残滓を狩る、それのみだ。闇の残滓は海鳴の街だけではなく、地球の近隣に存在している無人世界にも出没している。それらに対処するべく、我ら守護騎士は散開した。

「エイミィ執務官補の話では、この辺りというが・・・」

空を翔けて魔力反応を探る。そしてその反応を捉えることが出来た。眼下に広がる草原。高度をギリギリにまで落とし、反応へと向かって飛ぶ。徐々に残滓の輪郭が確かとなって行き、「お前は・・・」その姿を確りと捉えることが出来た。

「どこ？・・・どこなの？・・・私の闇の書・・・！」

肩に掛かるほどの薄緑の髪を揺らし、獣のような黄金の瞳をぎらつ

かせ、その身に纏う白銀の甲冑を鳴らす女、我ら守護騎士のかつての主であり、ナハトヴァールという凶器の産物を"闇の書"に組み込んだ者――アウグスタ・マリー・カタリーナ・ルイーゼが、そこに居た。

「死してなお、闇の書より解放されてもなお、こうして悪夢に彷徨わねばならぬとは、お前も哀れだな」

「っ、盾の守護獣！・・・どこに、どこに行っていたの！？　今すぐ戦装備に着替えなさい！　敵はすぐそこまで迫っているのよ！」

ヒステリックに叫ぶアウグスタ。かつては怒りとも憎しみとも抱いた者だが、こうなっては哀れむだけだ。かつての主であるあの者に我が出来ることはただ1つ。あの者の悪夢を今度こそ終わらせるのみ。

「アウグスタよ。もう眠るがいい」

草原に降り立つと同時に地を蹴ってアウグスタへと向かう。両拳を強く握り締め、「ふんっ！」振り被った拳をアウグスタへ目掛けて繰り出す。アウグスタは目を見開き驚愕の色を表情に浮かべるが、背負っていた大剣を目にも留まらぬ速さで引き抜き、その腹で我の拳を防いだ。

「主に向かって殴りかかるとは何事か！」

薙ぎ払われる大剣を一足飛びで後退して躱し、振り戻されるより早

くに最接近し左の拳打を繰り出す。首を傾けることで躱したアウグスタへ右の拳打を放つ。それも首を傾けて躱し、「今すぐやめよ！」と命令を下した。

「その命は聴けぬ。すでにお前は我らの主ではないのだから」

連続で繰り出す我の左右の拳打を、紙一重を狙って躱し続けるアウグスタへそう告げる。あの者は「世迷言を！」と聞く耳持たずという風に我の繰り出した左拳打をまた紙一重で躱し、空いている右手で我の手首を鷲掴み反転。そのまま我を背負い投げした。宙に放り出される感覚を得る。背中から地面に叩き付けられるのを防ぐために、しっかりと両足で地面を踏み付け、腹筋の力で体を起こす。直後、「むっ・・！」我の背中に叩き付けられる痛み。アウグスタの大剣の腹が打ち付けられたのだ。すぐさま反転し、あの者と向かい合う。

「烈火の将、紅の鉄騎、風の癒し手、そして管制融合騎は今どこに居るの！？　私が主ではないなどと世迷言を言っている暇があるのであれば、急いで連れてきなさい！」

振り上げられた大剣が勢いよく地面を打った。穿たれて大穴を開ける地面。そして我に向かって飛来してくる岩の礫。それらを障壁で防ぎ、「縛れ、鋼の軛！」拘束条をアウグスタの足元から突き出させるものの、「ふんっ！」大剣を横薙ぎに振るい、軛を全て寸断した。

「牙獣走破！」

アウグスタへと飛び蹴りで接近。振り戻された大剣の刃と打ち合う。僅かな拮抗、我とアウグスタは共に後方へと弾き飛ばされた。地面へと着地し、すぐさま一足飛びでアウグスタへと突進する。対するアウグスタは「それ以上の狼藉、地下牢では済むとは思わぬことね！」と大剣を振り被りながら、我へと駆けて来た。
振り下ろされる大剣を、体を横向きにすることで躱し、間髪入れずに前へ向かって跳ぶ。アウグスタの顔面へと膝蹴りを打ち込もうとしたところで、大剣を振り下ろした勢いで飛び跳ねたあの者は弧を描くように宙を舞い、我の背後に着地。

「せいッ！」

振り上げの際に発生した石礫が反転途中の我を襲った。魔力の無い、単純な物理攻撃。守護騎士一の防御力を持つ我の肉体ならば構う必要無し。礫の中を駆け抜け、「ふんっ！」上段蹴りを打つ。爪先がアウグスタの側頭部を捉え、「うぐっ・・・！」蹴り飛ばした。しかし距離は開かぬ。大剣が重しとなり、アウグスタを留めた。着地した後、「ぺっ」と折れた歯を吐き捨てた。

「アウグスタよ。お前は戦に敗れたのだ。ナハトヴァールを組み込み"闇の書"の力を強化しようとした。確かに、融合管制騎は強化された。しかしそれに頼り、我らを強行軍として扱い、全滅させた」

「っ！？・・・一体何を言って・・・！」

「烈火の将シグナム。紅の鉄騎ヴィータ。風の癒し手シャマル。我、

盾の守護獣ザフィーラは、何の策もなしに大国の騎士団との戦闘に駆り出され、討たれた」

「馬鹿なことを。では、そうして私の前に立ちはだかるお前は一体なんだというの？　守護騎士が主である私から逃れるための嘘だと思うのが普通でしょう」

「我らが討たれた後、唯一生き残った融合騎は我らを復活させようと魔力の蒐集を始めた。しかし、書の完成に焦ったお前はまたも無理に強い魔力持ちの騎士に挑み、返り討ちに遭ったのだ。しかしお前は生き延びた。だが撤退途中、これまでの無謀な戦を仕掛けたことで付き合わされてきた臣下の抱く不平不満をついに限界を迎え、お前は――」

「黙れっ！　我が優秀なる騎士たちが、この私を裏切りなどするものか！」

大剣を担いでの高速突進。刃渡り２ｍ近い大剣を担いだあの体勢から繰り出されるのは最早振り下ろしのみ。次の一手が見えていれば恐れることはない。迫りくる大剣の重圧を腹に力を入れる事で耐え、「さっさと騎士を呼び戻せッ！」怒声を上げながら振り下ろされた大剣を半身分横に移動して躱し、即座に上空へと跳び上がる。大剣は地面を穿ち、先程以上の大穴を開けた。

「牙獣・・・！」

上空からの飛び蹴りでアウグスタを強襲。アウグスタは大剣を引き

上げるようにして我と自分との間に大剣を入れて盾とした。構わずに大剣の腹に一撃目を打ち込むと、「ぅぐ・・・！」アウグスタが苦悶の声を漏らした。

「走破ッ！！」

「きゃぁぁぁぁぁ！！」

二撃目で大剣をへし折る。半ばで折れた大剣の先端側の刃が宙を舞う。我の重さに耐えかねたアウグスタは大剣の柄を離しており徒手空拳となっていた。呆けていたアウグスタの腹へと「うおおおおおおおおッ！！」拳打を打ちこんだ。

「ごふっ・・・！」

女性らしく華奢な体格であるアウグスタは我の一撃で十数mと飛び、地面を何度か跳ね転がった後で止まった。歩み寄る中、アウグスタは四肢をついて立ち上がろうと試みているが、結局それは叶うことはなかった。

「っ？　体が、私の体が、崩れて、消えて、無くなってしまう・・・！？」

「醒めるのだ、永き悪夢から。恐れることはない。それはお前にとって救いでもある」

「救い！？　ベルカの天地に覇を成してこそ私は救われるのよ！」

アウグスタは蹲り、両拳を何度も地面に叩き付けた。消滅するその瞬間までずっと。我は踵を返し、泣き喚くアウグスタに背を向けた。そして「・・・申し訳ありません・・・グレゴール様・・・」微かな声で何かを呟いた後、もう背後からは何も聞こえなくなった。

†††Ｓｉｄｅザフィーラ⇒ルシル†††

どうも、ルシルです。残滓を狩り続けること数時間。気が付けば地平線に朝日が昇り始め、朝焼けに目を細めています。ふっ、太陽が眩しいぜ♪とか、市街地上空を飛びながら思っている。

「お父様ぁ～　小さくて抱き心地が最高です♪　あ～ん、離れられないです　」

「・・・・あのさ、プリム。そろそろお前も・・・」

「いーえ、ダメです！　お父様が戦に出るというのであれば、娘である私も共に戦うのが当然！　この戦が終わったら・・・ちゃんと消えますから、それまではお父様のお側に居させてください」

俺を後ろから抱きしめているプリムが寂しげに言った。マテリアルの姿を模した残滓たちを束で相手にしたにも拘らず無傷で撃破し、自慢の雷撃で消滅させた。その後すぐ、俺が置かれている状況を伝えた。

プリムの意識年代は堕天使戦争勃発後で、"戦天使ヴァルキリー"や"ノルニルシステム"の凍結直前のものだった。当然、イヴ義姉

様、カーネル、フォルテシアの戦死も知っていた。その後のアンスールの結末や俺の"界律の守護神テスタメント"化について話すかどうか迷ったが、俺の様子から察してくれたのかそう深くは訊いてくることはなかった。

「はぁ。プリム。もしこの時代での俺の友人から通信が入った時、俺のことは名前で呼んでくれ」

「はい、判りました。では、ルシリオン様とお呼びしますね♪」

「あー、まぁ、それでいいや。セインテスト家の使用人だったっていう設定で頼むぞ」

「はいっ！」

とまぁそんなやり取りをしながら、俺とプリムは海鳴市の上空を翔けていた。と、「お父さ――コホン、念のために、ルシリオン様。魔力反応です」プリムからそう報告を受けた。遅れて「ああ、俺も確認した」と、近場に魔力反応が発生したのに気付いた。

「プリム、向かってくれ」

「はいっ！」

プリムが飛翔術式を担ってくれているため、この娘に進路変更を指示する。そう間もなくして「ヴィヴィオ・・・！」の残滓を発見。防護服のカラーリングからして、聖王のゆりかご時の聖王ヴィヴィ

オで違いないだろう。ということは、この次元世界でも起きるということか、ＪＳ事件。ほら見ろ、やはりスカリエッティは敵だ。

「ママ・・・、どこ？　どこに行っちゃったの、ママ・・・？」

「迷子でしょうか？」

「・・・ああ。放してくれ、プリム」

「あ、はい。では」

――我を運べ、汝の蒼翼（コード）（アンビエル）――

プリムに放してもらって墜落するより早く背より１２枚の剣の翼を展開して浮遊する。そして「こんにちは、お姉さん。どうしたの？」と優しく声を掛ける。

「居ないの、ママ、どこにも・・・ずっと、ずっと捜してるのに・・・」

「おと――ルシリオン様。これほど大きな娘が迷子というのも、少々おかしいような・・・」

「成人ほどにまで変身した姿だからな。元の姿は６歳ほどの少女だ」

小声で訊いてきたプリムに俺がそう答えると「そうなのですか。あの、お姉さん達も一緒に捜そうか？」プリムはヴィヴィオの残滓へ

と近寄り、目線を合わせた上でそう提案した。プリムの製造・起動時期はかなり遅かったが、それよりも起動の遅かった弟・妹の面倒をよく見てくれていたのがプリムだ。姉属性、というものか。

「で、でも・・・知らない人について行っちゃダメだって、お城のみんなが言ってたから・・・」

「あ、それもそうね。あぅ、ルシリオン様、どうしましょう」

おいおい早いな、諦めるの。もう少し頑張ってくれ、プリムお姉さん。しかしそれにしても、お城のみんなが、か。ヴィヴィオとオリヴィエの記憶が僅かばかり混同しているのかもしれないな。俺の知るヴィヴィオにオリヴィエの記憶はなかったような気がしたが、こっちの次元世界では受け継いでいるのか。

「えと、えと、あ、とりあえずお話をしましょう。お姉さんのお名前は、プリメーラ。プリムです♪　あなたは？」

「・・・ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオちゃん、か。素敵なお名前ね♪」

泣き止み始めたヴィヴィオが「・・・ありがと、プリムお姉ちゃん・・・」そう礼を言うと、プリムは、強い日差しに当てられてクラっと倒れそう、みたいな体勢になった。

「お父様。この娘、貰っていいですか？」

「ダメです」

お前たちは共に残滓だろうに。悪いが残らんよ、一欠片も。プリムは「仕方ありませんね。それじゃあヴィヴィオちゃん。ゆっくりお喋りしたいから、降りようか」と提案するものの「やだ」ってヴィヴィオは首を横に振るだけ。

「やぁだぁ――――！」

「待って、待って、ヴィヴィオちゃん・・・っく！」

急に暴れ出したヴィヴィオが振り上げた拳、正確には裏拳がプリムの顎を正確に捉えた。普通の人間なら軽い脳震盪くらいは起こすだろうが、「痛・・・！」そう痛がったのはヴィヴィオの方だった。プリムの常時展開型の不可視障壁の前に物理攻撃は通用しない。

「ご、ごめんね！　大丈夫だった！？」

「う、うぅ、ぐす・・・うわぁぁぁぁん！」

駄々っ子のように暴れるヴィヴィオの繰り出してくる正確な拳打を、「お父様、どうすればいいですか！？」片手で受け流しているプリム。俺は「悪い夢から醒まさせてやってくれ」と答える。その意味は「・・・了解です、お父様。苦痛のないよう、眠りへ誘いましょう。おやすみなさい、ヴィヴィオちゃん」残滓の撃破。

「アースガルド同盟軍・戦天使（ヴァルキリー）・ランドグリーズ隊シリアル０１、雷滅の殲姫プリメーラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア。戦闘執行」

「へ・・・？」

プリムの姿が消え、次の瞬間にはヴィヴィオの背後に居た。ヴィヴィオの首筋にプリムは右手の人差し指と中指をスッと這わせた。そしてパリっと放電した音が聞こえた。ヴィヴィオの目がすぅっと閉じて行き、トサッとプリムの胸にもたれ掛った。それ以降、ヴィヴィオの残滓が目を醒ますことはない。

プリムは電流を相手に流し込み、自律神経系を乱して筋肉の活動を停止させることも可能。プリムはヴィヴィオに電流を流し込み、一瞬にして心臓を止めた。うーん、説明不足だったな。気絶させるくらいでちょうどいいと言うべきだった。

（すまないな、ヴィヴィオ）

消滅したヴィヴィオの残滓を見送っていると、「おと――ルシリオン様」小声で俺の名を呼んだプリムに、「ああ」と首肯する。見られている。魔力探知をされないためか、防護服の着用すらしていないようだ。視線を探っていくと、とあるビルの屋上から「本物のヴィヴィオと、アインハルトか・・・」２人の気配を探知。

「魔力反応増大。戦闘甲冑の装着時かと」

「ああ。・・・ん？　こっちに向かって来る・・・？」

なのはやすずかから逃走し、これまでもずっと逃げ回っていたヴィヴィオとアインハルトが変身し、さらに俺たちの元へと向かって来る。観念して投降する気になったのだろうか。それならそれで助かる。

「あの子たちですね。ヴィヴィオちゃんのオリジナル」

「ああ。手を出さないようにな」

「はい、もちろんです」

2人とゆっくり話すために眼下にあるビルの屋上へと降り立つ。そしてヴィヴィオとアインハルトが肉眼でハッキリと確認できたところで、ヴィヴィオが勢いよく俺の方へと突進して来るのが判った。プリムが警戒に構えたから、「待て」と制止。そしてヴィヴィオは満面の笑顔で俺のすぐ目の前に降り立って・・・

「フォルセティ～～～～～♪」

俺の両手を取ってブンブンと上下に振った。

Ｅｐｏｓ４６戦天使／雷滅の殲姫～Ｐｒｉｍｅｒａ　Ｒａｎｄｇｒｉｔｈ　Ｖａｌｋｙｒｊａ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「フォルセティ～～～～～♪」

俺の両手を取ってブンブンと上下に振る、大人モードに変身しているヴィヴィオ。ヴィヴィオの後ろに降り立ったアインハルトが「フォルセティさんも飛ばされていたのですね！」と声を掛けてきた。待て、ちょっと待ってくれ。嫌な汗が流れ始める。

「良かったぁ、って言っていいのか判らないけど、知ってる人が同じように時間移動してて嬉しい♪　ね、アインハルトさん！」

「はい。私とヴィヴィオさんは、学校帰りにこの・・・13年前の海鳴市に飛ばされていました。フォルセティさんもまた学校帰りで・・・？」

変身を解除し、年相応の少女の姿へと戻ったヴィヴィオとアインハルト。おいおい、冗談だろ。未来には俺と瓜二つ――フォルセティとかいうのが居るのか。今すぐ話を聞きたいが、ここで真実を伝えるより「あ、うん。家に帰る途中に、突然・・・」フォルセティとしての演技を続けて、さらに情報を引き出そう。

「あれ？　今日ははやてさん達の帰りが遅いから、わたしのお家に

夕ご飯を食べに来るんじゃなかったっけ？」

「え？　あ、そう、だったっけ？」

今から１３年後となれば、ミッドは首都クラナガンの郊外へとはやて達は住まいを移し終えている。俺が家って答えたらヴィヴィオは、俺の家ははやての家だと暗に伝えてきた。ということは、フォルセティとかいう俺のソックリさんはミッドの八神家に世話になっているということに。

「フォルセティは、ルシルさんみたく家事が出来ないんだから」

ヴィヴィオの口から、ルシルさん、と発せられたその時、僅かばかりショックを受けたのは秘密だ。この次元世界での俺は、ヴィヴィオにとっての父親代わりにならないんだな。いや、それが当然だし、父親代わりになってもかえって辛いだけだから構わない。というか、フォルセティは俺の変身でもないということが判明。俺とフォルセティは別人となる。

「あのさ、転移のショックなんだろうけど、記憶がちょっと曖昧で・・・」

「ええ！？　大丈夫なの、それ！」

「あの、私とヴィヴィオさんのことは判ります、よね・・・？」

「ヴィヴィオとアインハルト、さん」

フォルセティの年齢がアインハルトより上か下かは判らないため、とりあえず敬称を付けてみた。すると「いつもはアインハルト先輩なのに」とヴィヴィオが漏らした。俺は少し考えるフリをした後、「あ、そうそう、アインハルト先輩だ！」と思い出したという演技をする。

「えっと、学校・・学校、Ｓｔ・ヒルデ魔法学院の・・・？」

「わたしやリオ、コロナと一緒の初等科４年生の１０歳。ねえ、フォルセティ、本当に大丈夫？」

「お医者さまに診て頂いた方がよろしいのでは？」

「うーん、出来れば過去のなのはママ達とは会わない方が。タイムパラドックスっていう問題もありますし」

なるほど。それでヴィヴィオ達は逃げていたんだな。トーマやリリィという子らもそれを危惧しての逃亡か。この程度、すぐに気付くべきだった。ヴィヴィオにそう言われたアインハルトは「あ、そうでしたね」と自分の浅慮に呆れた。とここで、ヴィヴィオの側に浮いているウサギと、アインハルトの足元に寄り添う猫から視線を感じた。なんというか、俺のことを疑っているような、怪しんでいるような。

「にゃあにゃあ！」

「ティオ、どうしたんですか？」

ティオと呼ばれた猫が俺に向かって鳴き始めると、ウサギもヴィヴィオに何かを伝えたいのか小さく短い前脚をわたわたと振るう。２人が俺を怪しむ前に「・・・俺、俺の名前って、俺の家って、家族って・・・」情報を聞き出すために急ぐ。

「あぅー、アインハルトさんに偉そうに言っておきながらタイムパラドックスとか心配してる余裕があるのか不安になってきた。やっぱりなのはママに話を・・・。うぅ。しっかりして、フォルセティ。わたし達は新暦７９年からここ６６年の過去に飛ばされてきたの。あなたの名前は八神フォルセティ。わたし、高町ヴィヴィオの幼馴染。暮らしてるお家ははやてさん達と一緒でクラナガン郊外、海辺の家。はやてさんがママで、ルシルさんがパパ、だよ！」

ヴィヴィオがそこまで教えてくれたところで俺とヴィヴィオの間にモニターが展開されたと思えば・・・

『なんですとぉぉぉーーーーッッ！！』

どアップで映ったシャルが絶叫した。突然の通信にビクゥッと飛び跳ねたヴィヴィオとアインハルト。

『ちょっと、オリヴィエ様のそっくりさん！　今、今、はやてとルシルに子供が居るみたいなこと言ったよね！？　フォルセティ！？　八神フォルセティ！？　どういうこと！？　もしかして、２人は未来――新暦７９年だっけ！？　１３年後だから２２か２３歳！？

その頃には2人は結婚して、子供も居るって弧と！？　ぎゃああああ、信じらんない！　わたし負けたってこと！？　フラれたってこと！？　もしかして祝福もしちゃったりしたの！？　うそだっ、そんなのうそだぁぁぁーーーーっ！！』

頭を抱えてぶんぶん頭を振り回して叫ぶシャル。ここでさらに新しく複数のモニターが展開。映り込んだのは仮眠から覚めたばかりと思われるなのは達と、顔を真っ赤にしたはやてだった。

「え、あの、え、え？」

「ど、どういうこと、なのでしょうか・・・？」

困惑するヴィヴィオとアインハルトが少し可哀想になってきてしまった。

『どういうこと、ねえねえ！』

シャルはきゃんきゃんと吠え、

『未来の子なの！？　あ、だから私のことを、第零技術部の主任だって呼んでくれたんだね』

すずかは笑顔を浮かべ、

『なのはママってことは、あんたはなのはの娘で、そしてなのは、あんたも結婚して子供産んだってことになるのよね！？』

アリサは問い詰めるように確認しようとし、

『結婚、子供、私に！？』

なのははアリサから話を聞いて混乱しだし、

『なのはとはやてが未来じゃ結婚していて子供もいるという事だよね。お、おめでとう！？』

『おお、おめでとう、なのは、はやて！？』

その混乱が伝わったフェイトとアリシアは首を傾げながらもはやてとなのはを祝福。

『ルシル君・・・あぅ・・・』

俺と目が合ったはやてはボンッと爆発したかのように顔をさらに真っ赤にして俯いた。えー、１０歳のフォルセティ。両親となる俺とはやての年齢が今より＋１３の２２か２３歳の頃には居る血の繋がった実の子供だとする。その歳で１０歳の子供を産み、育てている親になるには、何歳頃に体を重ねればいいか。単純に考えて１３歳。

（そんなのねぇよッ、絶対に有り得ねぇッ！　１３歳ではやてに子供を作らすなんて、どんな鬼畜外道だ！！）

口調が昔、アンスールの同性メンバーやステアにだけ使うものに戻

ってしまうほどに、ありえない話だとツッコむ。ここで嫌な推測というものが立つ。ヴィヴィオの幼馴染。もしかしたらフォルセティは、ヴィヴィオと同じように人工的に生み出された存在なのかもしれない。クローンなんて血と細胞があれば作れるしな。スカリエッティから提出を求められたら断固拒否・・・も出来ないか。すでに、存在している、という現実を過去の俺が知ってしまった以上は、フォルセティの誕生は絶対だ。どうしてこうなったんだよ、もう・・・。

「コホン。俺の名前、八神フォルセティじゃないんだ。騙してすまないね、高町ヴィヴィオさん、アインハルトさん」

「「？？？・・・・はっ」」

ヴィヴィオとアインハルトがハッとした。そして「ルシルさん、この時代の・・・！？」ヴィヴィオが確認してきたから、「どうも。八神ルシリオン・セインテストです」って微笑みかける。

「ルシルさん、ずるーい！　この時代じゃわたしより年下だとしても、女の子を騙すのはどうかと思います！」

「ティオやクリスさんは、そのことを私たちに教えるために騒いでいたのですね」

「そうだったの！？　あぁあぁ、タイムパラドックスがぁぁーーーー！」

「ど、どうしましょう・・・！」

頭を抱えたヴィヴィオと支えるアインハルト。そんな2人に『タイムパラドックスとかどうでもいいから、話っ、未来の話を聞かせてぇぇぇーーー！』そう言って騒ぎ続けるシャル。本格的に収拾がつかなくなってしまう、と思ったその時、とんでもない魔力反応が海上の方から発せられ、その魔力波が遠く離れたこの場所まで届いた。俺は思わずグッと腰を下ろし、その魔力波に吹き飛ばされないようにと踏ん張った。次にヴィヴィオとアインハルトの心配をしようと思えば、「ごめんなさい！」2人が魔力波に紛れてこの場から離脱を計った。俺は「追跡を！」とアースラに頼もうとしたが、シャル達との通信も遮断されていた。

「すでにタイムトラベラーだって知られたのになぜ逃げる？・・・ああもう！・・・とにかく、砕け得ぬ闇の方が重要か・・・！」

冗談抜きでまずい存在だな、砕け得ぬ闇。魔術師化をしたとしても、創世結界くらい発動しないと単独での時間稼ぎというのは難しいな。とりあえず、「別の反応探知・・・フリーリアン姉妹のどっちかか」を捉えたため、「プリム！」と共に海上へと向けて飛び立つ。

。―。―。―。―。

朝焼けに輝く果てしなく広がる空と海。その狭間にて、2人の少女が対峙していた。1人はアミティエ・フローリアン。もう1人は、纏っている衣装の色が全体的に赤色となり、素肌には刺青のような模様が入っている様と変わっている砕け得ぬ闇だった。

「色彩が少し違うようですが、あなたはシステムU－D、そうで違いありませんね・・・？」

「そうだ」

「人違いだとしたらどうしようかと思いました。あなたのような子が2基もいると冗談では済まされないので」

砕け得ぬ闇であると確認したことでアミティエは「私に協力してほしいんですが」と話を切り出した。アミティエは、砕け得ぬ闇の持つ"エグザミア"なる物を、妹であるキリエに渡してほしくないということだ。話を聞き終えた砕け得ぬ闇はアミティエへと向き直る。

「アレは私にとって何よりも大事なものだ。永遠結晶エグザミア。アレを失うと、私はこの体を保てなくなってしまう。だから元より誰かに渡すつもりもないし、何があっても渡さない」

「そ、それは好都合です！　それでは私が護りますから、あなたはキリエに見つからないよう安全な場所に避難してください！」

"エグザミア"がキリエの手に渡ることがないと判ったアミティエは安堵し、砕け得ぬ闇を護ると約束しようとしたが、「君は、そうか・・・エルトリアのギアーズか」対する砕け得ぬ闇は約束を交わすような発言をせず、突然アミティエの正体について話し始めた。

「この時代に在るべき人間じゃない・・・むしろ、人ですらもない、

時の旅人・・・・」

人間ではない、という砕け得ぬ闇の発言に「っ！　そ、そうですよ・・・私は・・・・」アミティエの表情に陰りが生まれる。そんな彼女へ砕け得ぬ闇が近寄ろうとした時、「そこまでよ！」第三者の声が響いた。

「きゃあ・・・・！」

それとほぼ同時、アミティエが声の主――キリエによって撃たれてしまった。撃たれた個所、脇腹をもう手で押さえているアミティエの前にキリエが姿を現し、俯き加減で砕け得ぬ闇と真正面から対峙した。

「ホント、始めっから思い通りにならないと後々ずっと思い通りにならないのね。頼ってた王様たちもてんで使えないし、治癒術師も言うことを聞いてくれないし」

恨み言のような声色でブツブツと呟くキリエが「それでも・・・・！」バッと顔を上げると、何かを覚悟したような強い光を宿す瞳で砕け得ぬ闇を見据え、左手に携える片刃剣の剣先を砕け得ぬ闇へと向けた。

「まだなんとかなる！　渡してもらうわよ、ヤミちゃん！　たとえ力づくでも！　アレさえ、エグザミアさえあれば、博士に、見せてあげることが出来るんだ、博士の願った夢を、希望を！」

「やめなさい、キリエ！　私たちギアーズの定めを忘れたわけじゃないでしょう！　あなたは、博士との約束を破る気なの！？　時を、運命を操ろうなんて思ってはいけない！　厳然たる守護者であれ！　私たちは、自分勝手に運命を捻じ曲げてはいけないの、守らないといけないの！　解るでしょ！」

「解んないわよ！　なんでそこまでして守らないといけないのよ！　お姉ちゃんは、博士が夢見た希望を見ることなく死んじゃってもいいって言うの！？」

「それは・・・！」

「わたしはお姉ちゃんと違って、出来の悪いギアーズだもん！　だから守らない！」

「キリエッ！　やめなさい！」

アミティエとキリエが大声で怒鳴り合う。そしてキリエは肩で大きく息をし、「わたしはわたしの好きにさせてもらうわ」とアミティエとの言い合いに見切りをつけ、砕け得ぬ闇へと光弾――ラピッドファイアを連射。攻撃を確認した砕け得ぬ闇は、背後に発生させている赤い霧――魄翼をバサッと広げて自分を覆うことで防いだ。

「わたしは、博士から、お姉ちゃんから教わった！　一度決めたら、諦めずにやり通す！　だから・・・！」

――ファイネストカノン――

「諦めない、やめない、絶対にやり通す！！」

２挺の銃から光弾を同時に発射させる事で砲弾と化させた強大な一撃を、砕け得ぬ闇へと撃ち込むがそれすらも魄翼の前には無力なものだった。

「白兵戦システムを起動。出力上限３５％まで稼働」

砕け得ぬ闇の魔力量がさらに増加。その魔力波は海を渡り、海鳴の街にまで届いていた。砕け得ぬ闇が動く。自分に向かって光弾を撃ち続けているキリエへ真っ直ぐに。右の魄翼が怪物のような腕となり、それでキリエを薙ぎ払おうとするが、キリエの速度には追いつけなかった。

「っ！　全然通じない・・・！」

キリエは高速移動からの光弾連射で砕け得ぬ闇を全方位から攻めに攻め続けるが、彼女が纏う魄翼や魔力の膜が悉くキリエの攻撃を無力化していた。対する砕け得ぬ闇もまた、キリエにダメージを与えられずにいた。

いつまで続くか判らない死闘と思われたが、「はぁはぁはぁ・・・！」キリエに極度の疲労が見え始めてきた。全力も本気も出していない砕け得ぬ闇は、その圧倒的な魔力量で際限ない攻防を果たせるため、疲労など現れない。

しかしキリエにはエネルギーの限界がある。さらに、一撃でも貰えば即撃墜されるだけの攻撃に常に気を割かねばならず、その精神的

負担は計り知れないだろう。それでもキリエは攻撃を止めない。彼女と姉のアミティエが慕う博士――父親の為に。

「負けられない、負けたくない、絶対に・・・勝つ！」

――アクセラレイターーーー

「フェニックスフェザー」

何度もその機動力で以って砕け得ぬ闇の攻撃を躱し続けていた時、砕け得ぬ闇の魄翼がバサバサと羽ばたき、その羽ばたきと同時に周囲に散った炎の羽根がキリエの動きを制限して行く。

「っく！　まだ、まだ・・・！」

――ジャベリンバッシュ――

空域一帯に舞っている炎の羽根の1枚の直撃を受けたキリエがよろけるところで、砕け得ぬ闇は巨大な槍を魄翼から発射。直撃寸前だったキリエだったがそれすらも避け、「絶対に、諦めないんだからぁぁぁーーーー！！」と2挺の銃を両手持ちの大剣へと変形させた。

――アクセラレイターーーー

そしてキリエは高速移動で砕け得ぬ闇へと突進。両手で握る大剣を全力で振り上げ、砕け得ぬ闇が防御に回るより早く直撃させた。

「S！」

上空に向かって斬り飛ばされた砕け得ぬ闇を高速移動で以って追い、そして全方位から大剣で斬り続けるキリエ。それでも砕け得ぬ闇の表情に焦りもなければ苦しみもない。全くと言っていいほどに通用していなかった。

「R！」

大剣から2挺の銃へと戻したキリエは銃口を頭上へと向ける。すると銃口からアミティエのメインカラーである青色と、キリエのメインカラーである桃色のエネルギーの光線が伸び、その先端に巨大な光球が発せした。

「I！！」

――スラッシュ・レイヴ・インパクト――

キリエが両腕を振り下ろしたことで銃口から伸びる光線の先に発生している光球も落下。それが砕け得ぬ闇に直撃、光球は大爆発を起こして砕け得ぬ闇を呑み込んだ。全てを出しきったキリエは、閃光爆発に呑まれたまま一切の動きを見せない砕け得ぬ闇に「勝った・・・？」と漏らした。

「いえ、まだです、キリエ！」

――クリムゾンダイブ――

アミティエから警告が発せられた瞬間、いやそれよりも早く閃光爆発の中から火の鳥――炎を纏い、魄翼を広げた砕け得ぬ闇が高速で突進して来た。自分のすべてを出し切った一撃を放った直後だったゆえ、キリエは回避や防御に移るのが遅れた。

「ごふっ・・・！？」

「君は、時の操手たりえない」

メキメキ、バキバキ、ゴキゴキ、と砕け得ぬ闇の突進攻撃の直撃を受けたキリエの体から何かが砕ける音、ひん曲がる音、潰れる音が激しく漏れ聞こえてきた。ドゴンと轟音と共にキリエは大きく吹き飛ばされた。そんな彼女を助けたのが「キリエぇぇぇーーー！」彼女の姉、アミティエ。キリエからこれまでに受け続けていたダメージやウィルスで満足に動けないにも拘らず、アミティエは身を挺して妹を守った。

「この魄翼の前にした以上、鉄屑となって砕けて消えるのが悲しくも動かざる、君たちに定められてしまった運命。もう痛みも苦しみも抱くのは辛いだろう。だからもう、ここで消えてしまう方が、君たちにとっての救いだ」

左の魄翼が触手となってアミティエとキリエに襲い掛かる。迫る魄翼の触手からキリエを護るためにアミティエはクルっと反転。砕け得ぬ闇に背中を向ける体勢になった。

「っぐぅぅ・・・！」

「お姉・・・！！」

アミティエの左腕に打ち込まれた魄翼の触手によって、彼女の左腕は無残に折れていた。ただ、様子がおかしかった。穿たれた個所から激しく飛び散るのは血液ではなく火花。それに焼かれて爛れていく皮膚の下からは銀色の金属部品が覗いていた。

「た、たとえ・・・痛くても、苦しくても・・・前を向いて、しっかりと歩んで生きて行けるように・・・心は、人の心は出来ているんです・・・！　確かに、私もキリエも、人じゃない、鋼の体を持っている人工物です！　それでも優しい心は育ててもらった！！家族の命と心を守って生きる、戦う、それが・・・一家の長女としての・・・務めッ！」

そしてついにアミティエの左腕が機械部品を散らしながら吹き飛んだ。伸ばされるキリエの弱々しい手が、その腕をキャッチ。それと同時、砕け得ぬ闇のもう片方の魄翼が触手となって、アミティエとキリエを同時に仕留めようと奔ったその時。

――天墜翔雷拳――

「「「っ！！？」」」

遥か頭上から墜ちてきたのは黄金に輝く雷撃で形作られた右拳。それが魄翼を粉砕した。その直後、「返してもらうぞ」背から薄く長

いひし形上の蒼翼を１０枚、剣翼１２枚を展開している黒衣の少年――ではなく大人の姿へと変身しているルシリオンが急降下して来て、アミティエとキリエを左右の腕で抱き止めそのまま降下して、この場から離脱して行く。

「君は・・・？」

「残滓――偽者である私が名乗るのもどうかとは思いますが、プリメーラ、と」

砕け得ぬ闇と真正面から対峙するのは、完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の第七世代であるランドグリーズ隊の隊長、雷滅の殲姫プリメーラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア。雷撃系の機体最強であり、すでに消滅している"堕天使エグリゴリ"・グランフェリアの、約5倍の戦闘力を有している。オリジナルであれば、と後に付くことだが。

「警戒レベルを最大。魔力上限、５０％に上方・・しゅう・・せい・・・！　うぅ、くぅ、うぁ・・・うあああ！」

急に苦しみだした砕け得ぬ闇から発せられるさらに強大になった魔力。プリメーラはその衝撃で靡く長髪を片手で押さえながら「これはまた、随分な魔力持ちで・・・」砕け得ぬ闇を見詰めた。

――バレットダムネーション――

――雷覇双天槌――

大きく広げられた魄翼の表面から無数に発射される魔力弾幕。プリメーラは両手に発生させた直径２ｍほどの雷球を投げ放ち、砕け得ぬ闇の攻撃を迎撃した。２機の間で大爆発を起こす。

「どうして邪魔をする。君は、先ほど姉妹を助けて逃げて行った銀髪の青年――オーディンとなんの関係がある？」

「オーディン？・・・あ。・・・あぁ、彼は、私にとってとても大切な、心から愛すべき人ですから！」

オーディンはアースガルド初代の王であり、人間に扱える魔術ルーンを創り出した、ルシリオンらセインテスト王家の遠い先祖。プリメーラは、ルシリオンがいつかにオーディンと名乗ったのだろうとすぐに察した。

――ジャベリンバッシュ――

晴れ始めていた閃光爆発の中より飛び出して来た巨大な槍が４本。プリムは右に左にと体の向きを横に変えながら前進して回避。そして避けきったところで「天墜翔雷拳！」パリっと放電した両拳をストレートに連続で打った。プリメーラの両拳から放たれるのは拳の形をした雷撃。稲妻と同じ速度で飛来する雷拳が、砕け得ぬ闇の防御より早く着弾して行く。

「っ・・・！」

砕け得ぬ闇の表情に僅かな変化が現れる。最後の一発が彼女の右頬に当たると、「ぅあ」大きくよろけた。しかし、それでもまだ「コンストレイント・・・！」と活動を停止しない。プリメーラを拘束しようと魔力リングが一瞬にして狭まる中、プリメーラは拘束されるより早く迫るリングに手を掛けて握り潰した。

「遅いですよ・・・！」

プリメーラの姿が文字通り消え、砕け得ぬ闇の目の前――直近に出現。砕け得ぬ闇が迎撃しようと魄翼に働きかけるが、「砕ッ！」雷撃を纏ったプリメーラの右拳が砕け得ぬ闇の腹を打った。と同時。砕け得ぬ闇の背中から激しい雷撃が放たれる。プリメーラの雷撃が砕け得ぬ闇の体を貫通したのだ。

「っ。ドゥームプレッシャー・・・！」

その小さな手でプリメーラの右腕をガッチリと掴んだ砕け得ぬ闇は、魄翼を怪物の両腕へと変えてプリメーラを握り潰そうとした。プリメーラは空いている左腕を振り被り、「天震雷墜轟ッ！」迫る怪物の両腕に向かって拳を打ち、そこから激しい雷撃が放った。その雷撃は右腕の動きを止める事は出来たが、「ぅぐっ！」左腕は止まらずに握り拳となってプリメーラを殴り飛ばした。砕け得ぬ闇は間髪入れずに「エターナルセイバー！」魄翼を炎の剣へと変え、体勢を立て直すか否かのプリメーラを左右から挟んで寸断する軌道で振るった。

「単純な軌道な攻撃ほど対処しやすくて助かる」

プリメーラは腕を大きく広げ、雷撃を纏わせた両手で砕け得ぬ闇の炎の剣を掴み取って止めていた。砕け得ぬ闇は「その防御は自殺行為だ」と、両手を塞いだプリメーラのミスを指摘した。が、「それはどうでしょう」とプリメーラがフッと笑う。砕け得ぬ闇の攻撃には基本的に魄翼を使う。そう、今は炎の剣となり、プリメーラに掴まれている状態の魄翼を。つまりは砕け得ぬ闇も攻勢に出られないということだ。

「私は雷滅の殲姫プリメーラ。お父様とお母様から、雷撃系最強の力を授かったヴァルキリー！！・・・墜ちろッッ！！」

――通天晃雷落――

プリメーラと砕け得ぬ闇の頭上、一瞬にして雷雲が発生し、複数の雷撃が一纏めになって降って来た。炎の剣を解除した魄翼で防御姿勢になった砕け得ぬ闇に落雷。雷雲出現から落雷まではほとんど一瞬の出来事だったが、砕け得ぬ闇は確実に防御した。

「ここに来るまでの間にお父様から聴いたわ。あなたと私――私たちヴァルキリーはどこか似ている」

魄翼による防御姿勢を解いた直後に砕け得ぬ闇へ最接近したプリメーラが、ギリギリにまで顔を近づけた上でそう告げた。そして両拳に雷撃を纏わせて砕け得ぬ闇の腹に拳打を数発と打ち込んだ。

「むぐぅ・・・！」

「私たちヴァルキリーもまた、戦に勝つために製造された戦力だった」

――障破雷靠打――

プリメーラが繰り出したのは、背面からの体当たり。中国武術・八極拳の1つ、鉄山靠。正式名称を貼山靠。連続拳打で砕け得ぬ闇の体を浮かせた直後に使用した。体当たりの直撃と同時、2機の間から強烈な雷撃が発生して、両者を大きく後退させた。

「それでも良かった。生まれた理由がそれだから。戦い、勝つ。それだけの役割でも・・・」

――バレットダムネーション――

――蹴破斬雷舞――

砕け得ぬ闇の放つ魔力弾幕に対し、プリメーラは雷撃を纏わせた右脚で前方を薙ぎ払うような蹴りを放った。蹴りの軌道に合わせて弧を描く雷撃が発生、弾幕を真っ向から迎撃した。

「だけどお父様やお母様、その家族に友人である皆さんは、私たちを兵器ではなく、道具ではなく、友として、家族として見てくれた！」

――天墜翔雷拳――

「何が言いたい・・・・！」

――ナパームブレス――

雷の速度で迫る雷撃の拳を、炎と重力によって創られた球体で迎撃した砕け得ぬ闇が僅かな苛立ちを見せた。

「あなたにも、そう言った仲間が居るんじゃないかって話をしているの・・・！」

――雷覇双天槌――

「そんな者は居ない。私は砕け得ぬ闇、アンブレイカブル・ダーク。その目醒めは滅びの兆し、その歩みは絶望の足音。こんな私に仲間なんて居ない」

――バイパーー――

プリメーラの両手に発生して放たれた巨大な雷球を、自らに着弾する前に足元から発生させた魄翼の槍で迎撃した砕け得ぬ闇は、すかさず「サイズディカピテイション」魄翼を大鎌へと変え、プリメーラの首と腰を狙って振るった。

「本当に！？」

その軌道を確りと捉えたプリメーラは僅かな動きのみで躱し、宙を蹴って再び砕け得ぬ闇へと突進。両手に雷撃を纏わせて。警戒する

砕け得ぬ闇は片方の魄翼を分厚くして防御用に変化させ、もう片方を怪物の腕へと変化させた。

「本当、です・・・！　皆が私を恐れる・・・！　私の手が、この翼が触れた物、その全てが壊れるから・・・！」

「マテリアルという子たちが居る、そうですね・・・！（私が消滅させてしまったあの子たちのオリジナルが・・・）あの子たちこそが、そうなんでしょう！」

「それは・・・違・・・！」

――双打雷重拳――

左拳を打って雷撃の拳を放ち、間髪入れずに右拳を打ったことで放たれる雷撃の拳が、その途中で合流。すると2つの雷拳は砕け得ぬ闇以上の大きさとなり、彼女を覆う魄翼の盾へと着弾。周囲に雷撃を撒き散らせながら爆発を起こした。

――ジャベリンバッシュ――

爆発の中から魄翼によって創られた槍が3本と放たれてきた。プリメーラはそれらの先端を真下から殴っては蹴って反転させ、そのまま砕け得ぬ闇へと返した。驚きに目を見開く砕け得ぬ闇は回避行動を取った。

すかさずプリメーラが動く。一瞬で砕け得ぬ闇の回避先へ移動し、

「仲間を頼るのは悪いことじゃない・・・！」雷撃纏う拳打を繰り

出した。右の魄翼が怪物の腕となり、その手の甲でプリメーラの一撃を受け止めた。

「頼れない・・・！　私を起動させたディアーチェ達は、私がこの手で・・・打ち砕いた・・・！　だからもう、私は誰とも関わり合いたく・・・ない・・・！」

もう片方の魄翼も怪物の腕となり、プリメーラへと拳打を繰り出した。プリメーラはそれに対して真っ向から「逃げるなッ！」空いている拳打で迎撃。再び砕け得ぬ闇の攻撃手段である魄翼を潰した。

「独りで出来ることなんて高が知れている！　あなたのことを想ってくれる仲間が居るのなら、頼りなさい！　傷つけるから、苦しめるからと言って逃げてばかりじゃ、いつまで経っても現状は変わらない！」

プリメーラの全身から発せられる雷撃が、魄翼を弾き返した。そしてプリメーラは「ちょっと痛いけど、我慢しなさい」砕け得ぬ闇の幼く小さな体に容赦なく雷撃纏う拳を、蹴りを打ち込んでいく。直撃するたびに放電されている雷撃のダメージに、砕け得ぬ闇も表情を歪める。

「ぅ、うぅ、ぅぅ・・・！」

「真技ッ！」

プリメーラの強烈な蹴り上げが砕け得ぬ闇の腹に入り、彼女を勢い

よく空に舞い上がらせた。即座に彼女を追って跳び上がるプリメーラ。その途中、プリメーラが過ぎた高度にアースガルド魔法陣が展開された。
中心には十字架、その四方から剣が伸び、それら剣を繋ぐようにルーン文字を散りばめられた三重の円環というデザインだ。
プリメーラは砕け得ぬ闇を追い越した後クルっと前転して、雷撃纏う右脚による踵落としを彼女へ打ち降ろした。砕け得ぬ闇が今度は急降下して、真下にあるアースガルド魔法陣へと墜落。

「天環襲雷華ッ！！」

魔法陣に叩き付けられた砕け得ぬ闇へと急降下して来たプリメーラが、今まで以上に強大な雷撃を纏った拳打を打ち込んだ。同時、世界を揺るがすほどの落雷音が発せられた。砕け得ぬ闇に直撃した拳打から周囲に拡散する雷撃は、言うなれば花弁の如く。そして魔法陣を突き抜けて海上へと落ちた雷撃は正に茎や根。夜明け直後の空に、黄金の雷の華が咲いた。

「はぁはぁはぁ・・・！」

「システム負荷・・・増大・・・！？」

それでもなお健在だった砕け得ぬ闇だったが、残滓であることで弱体化しているとは言え、強大な力を持つプリメーラの真技にはさすがに堪えたようでふらついている。プリメーラは「ここまで、ですね」と霧散し始めていた自分の体を見て、ふっと小さく微笑んだ。

（お父様と少女２人の完全離脱を確認。時間稼ぎの任、無事に完了）

それがプリメーラの役目だった。ルシリオンやアミティエ・キリエを逃がすという任を無事に果たしたことで、プリメーラはいつ消滅しても良いと悟った。だが、「砕け得ぬ闇。これで最後です。独りは寂しいものです。仲間を、頼りなさい」と、砕けえぬ闇に少しでも勇気を与えようとして、そう優しく告げた。

「う、ううぅ・・・うあああああああああ！！」

砕け得ぬ闇が頭を抱えて絶叫。そして・・・

「エンシェント・・・！」

プリメーラへと突進し、彼女の胸に右手を突き入れて、血色に染まる巨大な剣を胸から抜き出した。ブラッドフレイムソードと砕け得ぬ闇が名付けているその剣は、対象の魔力と自身の魔力で形作られている、特殊な魔法だ。

「マトリクス・・・！！」

砕け得ぬ闇がその剣をプリメーラへと投げ放つ。戦う意義を果たしたプリメーラだったが、壊すことに、傷つけることに、殺すことに苦しんでいる砕け得ぬ闇の苦悩の思い、このまま消されることを良しとせず、「雷護装纏盾・・・！」雷光の盾を発動。そして剣が盾と衝突。僅かな拮抗の後、

「ごめんなさい、これで終わりです」

砕け得ぬ闇が剣の柄頭に乗り、トンッと蹴った。その僅かな加力によって剣は盾を貫き、プリメーラすらも貫いた。それは必然。ブラッドフレイムソードは、攻撃対象の魔力で創られている剣でもある。砕け得ぬ闇の魔力と混じり合っているとは言え、元は対象の魔力だ。当然、対象の魔力や魔法への干渉がし易い。それゆえにどれだけ強大な盾であろうと、容易く突破できる。

「ああ・・・お父様・・・またいつか、お会いしたいです・・・」

それが残滓プリメーラの最期の言葉となった。彼女を貫いていた剣が大爆発を起こし、プリメーラを一瞬にして消滅させた。

Ｅｐｏｓ４７律のマテリアルＯ／氷災の征服者～Ｏｉｇｈｅａｒ
Ｔｈｅ　Ｆｅａｒｂｒｉｎｇｅｒ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

残滓であったプリメーラをひとり残し、俺は両脇にアミティエとキリエを抱えて空を翔ける。プリムと砕け得ぬ闇が戦闘を開始したのか、とんでもない魔力波が後方から何度も襲ってくる。

「こちらルシリオン。アミティエとキリエ、フローリアン姉妹の確保に成功した。共に深刻なダメージを受けている模様。アースラへの転送を願いたい」

『判った！　そのまま臨海公園へ向かって！』

アースラに繋げた通信に応えてくれたアリシアから指示を受ける。俺は「了解だ」と応じて通信を切る。ここでキリエが「ごほっ、ごほっ、放して・・・！」俺から離れようと身動ぎを始めた。それを止めるのが「もう、やめなさい、キリエ」彼女の姉であるアミティエ。

「悪いようにはしない。きちんと負った傷も治そう。だからもう、無茶はするな」

「Ｕ－Ｄの突進を受けて、あなたの体内は酷いことになっているはず・・・」

俺に続いてアミティエもそう諭すと、キリエもそれが解っているからか身動ぎを止め、大人しく俺の腕に身を任せた後、２人の意識が途切れた。張り詰めていた緊張の糸が切れたんだろう。
そうして臨海公園へ到着した俺たちは、そこから転送されてアースラへと乗艦することに。大人数を一度に転送させるためのアースラのトランスポーターへと着くと、「お疲れ様だ、ルシル」労いの言葉をかけてくれたクロノと、ストレッチャー２台を用意していたティファレトの他、女性看護師２人、計４人が待機していた。

「状況は？」

フローリアン姉妹をそれぞれのストレッチャーに横たえさせながらクロノに訊ねる。クロノの側にはモニターが１枚展開されている。おそらくさっきまでのことを観ていたんだろうと判断しての問いだ。

「君と一緒に居た残滓と思われる女性だが、つい先ほど砕け得ぬ闇――システムＵ－Ｄの攻撃を受けて消滅した。彼女は、君の知人か・・・？」

「・・・ああ、とても大事な女性だよ」

俺はそう詳しく答えなかったがクロノはただ、「そうか」と一言だけで話を切ってくれた。その気遣いに「ありがとう」と礼を言う。
そんな中、「クロノ執務官。少しお話が」とティファレトがクロノへと歩み寄った。

「私の治癒はあくまで人間――ひいては肉体を持つ生物にのみ作用する力です。ですが、彼女たちはどちらかと言うと・・・」

言い淀んだティファレト。アミティエの折れた腕の断面から覗く機械部品を見て考える仕草を取るクロノ。俺はそれを黙って見ている。とここで「ドクターに協力要請する？」と声を掛けて来たのは、アクアブルーの長髪を揺らしながらこちらに歩いて来ているシャルだった。

「モニターで観てたけど、アミティエさん――というよりはフローリアン姉妹ってどちらかと言えばドクターの分野だと思うんだけど」

ドクター・ジェイル・スカリエッティ。人と機械を融合した存在である戦闘機人を、５番のチンクまで製造を終えて活動させている。確かに、フローリアン姉妹の体を見る限り人間ではなく戦闘機人寄りだ。治すと言うよりは直す、の方が正しいだろう。しかし、本当にあの男に任せていいのかどうか不安だ。

「そうだな。第零技術部とのコネがあるなら使わない手はない。イリス、スカリエッティ少将に連絡を頼めるか」

「了解！　あ、ルシル。あとで話があるから、ちょっと付き合って」

シャルは最後に俺をジロリと睨めつけた後そう言い放って、本局は第零技術部へと通信を繋げた。彼女の背中を深い溜息を吐きながら見ていると、「頑張ってくれ」とクロノが俺の肩をポンポンと優しく叩いた。ダメだ、クロノ。絶対に俺、ストレス性胃炎、そこから

胃潰瘍になる。だってもう痛むんだ、胃が。

「ああ、うん、じゃあよろしく。うん、それじゃ。・・・ふぅ。フローリアン姉妹のことを伝えたら、ドクター、２人を第零技術部へ連れて来てくれって」

不安だが、実際に戦闘機人のようなフローリアン姉妹を完全に治せるのはおそらくスカリエッティだけだ。ここは預けるしかないだろう。クロノはシャルに「判った。ありがとう」と礼を言った。

「それじゃ僕はフローリアン姉妹とティファレト医務官を連れて本局へ向かう。ブリーフィングはモニター越しにしよう」

そう提案したクロノに「俺も本局へ連れて行ってくれ」と申し出る。スカリエッティの監視をしたい、とは言えないが、「頼む」とクロノに願う。するとクロノは「判った。ルシルも一緒に来てくれ」と承諾してくれた。

「ちょっと待って。あのさ、ルシル」

今すぐにでもこの場から離れたいと思っていたら、やっぱりシャルに声を掛けられた。ピリピリとした空気だ。フォルセティ関連のことなんだろうと思う。だから「普通に考えれば変だろ。２３歳の頃に子供が居るなんて」と先手を打つ。

「その歳で１０歳の子供を持つには、１３歳の頃には出産をしていないといけない。ないわぁ。考えられない。それに、そのフォルセ

ティという子、俺と瓜二つらしいじゃないか。もし万が一、億が一、兆が一、俺とはやてがそういう行為に至って、子供が出来たとする」

なんて馬鹿な会話なんだろう、と泣きたくなってきた。９歳の子供になに言ってんだ、と。シャルは「？？？」と若干理解していないような表情だ。子供を作る行為についてはまだ無知なんだろう。前世のシャルが出てきて、イリスに教えませんように。だが、クロノは「コホン」と咳払い。耳が赤いところを見ると、知っているな。

「だったら俺とはやての見た目を受け継いでいるはずだろ？　なのに、俺と瓜二つということは、普通の生まれじゃないと考えられる。となると・・・」

「？？・・・あっ、プロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅ・・・！？」

「っ！？」

シャルどころかクロノまでが驚愕に染まる顔を俺に向けてきた。俺は「あくまで可能性として、だけどな」と最後に付け加えた。フェイト、エリオ、ヴィヴィオ。スカリエッティの技術で生まれた子たち。富豪とは言え一般家庭のモンディアル家ですらもプロジェクトＦと繋がりを持てる。高確率でプロジェクトＦによって生まれた１人だろう。

「というわけで、俺とはやては絶対にそういう関係にはならない。高町ヴィヴィオという子もまた、クローンと思う。これでいいだろ、シャル」

「それは、うん・・・。でも、プロジェクトFがまだ続いているなんて・・・」

「ルシルの推測が事実であるなら、このことはフェイトには黙っている方が良いな」

「ああ」「うん」

こうして、俺とシャルとクロノだけの秘密が生まれた。その約束も10年後には自然に破棄されてしまうが。そして俺とクロノ、ティファレト、フローリアン姉妹は、本局は第零技術部のトランスポーターへと直通転移した。

†††Sideルシリオンル⇒イリス†††

クロノやルシル達と別れてひとりブリーフィングルームに戻ると、わたしが出てく前と同じままはやて達が椅子に座って待っててくれた。わたしは元の席に座って、それからシグナム達も戻ってきたところで、『みんな、集まっているか？』ってクロノから通信。ブリーフィングが始まる。

『よし、では始めよう。まず未来からの来訪者、高町ヴィヴィオ、ハイディ・E・S・イングヴァルト、おそらくと付くが、トーマ・アヴェニールとリリィ・シュトロゼック。そして、アミティエ・フローリアンとキリエ・フローリアンもまた、未来からの渡航者である、と結論付ける』

クロノがそう話を切り出すと、「アミティエさん達も？」となのはが訊き返した。そんな予感はしていたから、わたしはもう驚くこともない。クロノは頷いて、『騎士カリムの預言にあった』とそう答えた。これにはわたしも驚いた。

「カリムの預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）で出たの？　今回の事件のこと・・・！」

「ああ。本局で、ヴェロッサ経由で騎士カリムからの預言を聞いた」

「あの、シャルちゃん、クロノ君。カリムさんの固有スキルって？」

「あ、うん。カリムはね――」

すずかの疑問に答えるべく、わたしはカリムの固有スキルについて話す。預言者の著書プロフェーティン・シュリフテン。最短で半年、最長で数年先の未来を、詩文形式で書きだした預言書を作成するという能力。だけど、発動条件も厳しく、的中率もさほど高くないってことになってる。でも実際は、的中率の低さは解読ミスによるところが大きい。古代ベルカ語の中でも特に古い言語だからね。

『預言書にあった、未来からの来訪者、運命を変革する者たち。つい先ほどのＵ－Ｄとフローリアン姉妹の会話を、強いノイズ混じりだったがいくつか聞き取ることが出来た。時と運命を操ってはいけない、厳然たる守護者であれ。おそらく彼女たち姉妹の出現が、他の来訪者の子たちの時間移動に関係していると見ている』

その映像はわたし達もここで観ていたから頷き返す。これでフローリアン姉妹。聖王教会が崇め奉る聖王、そのうちの御一人であり聖王女オリヴィエ様とそっくりで、なのはの子供らしいけど、血の繋がりはきっとない高町ヴィヴィオ。覇王イングヴァルトの子孫と思われるアインハルト。あと外見が極悪なトーマと、その融合騎リリィ。彼女たちは未来からの渡航者だと確定。

（ヴィヴィオって子と、フォルセティって子が、プロジェクトFによるクローンだとすれば、たぶんアレらを使ったんだ）

クローンを生み出すには元になる人物の遺伝子が必要だ。思い当たる節はある。聖王教会から盗まれた聖遺物、聖王女の聖骸布、魔神の髪輪。未だに犯人も聖遺物も発見されてない。これは聖王教会史上、最悪な失態だ。

『僕とルシルは今、フローリアン姉妹からの事情聴取もあるため、第零技術部へと来ている』

モニターに映り込むのは、応接室のソファに腰掛けたルシルと、その後ろをテクテク歩くチンクとクアットロ。クアットロだけがわたし達に向かって手をヒラヒラと振った。

『闇の欠片たちは、八神家の活躍もあって鳴りを潜めているとのことだ。新たな欠片の発生もない。問題は他の渡航者と――』

長テーブル上に複数のモニターが展開される。そのうち2枚に表示されているのが砕け得ぬ闇だ。片方は白、もう片方は赤へと防護服

が変化している姿。その他はヴィヴィオ達だ。

『砕け得ぬ闇、識別名はＵ－Ｄ――アンブレイカブル・ダーク。彼女らの捜索を、君たちに任せたい。だが発見したと言っても戦闘をしかけないように注意してくれ。あれほどまでに凶悪な戦闘能力だ、対策もなしに挑んでも返り討ちに遭うのが関の山だ』

映像で観ただけだけど、その魔力や強さはよく理解できる。重い空気に包まれる中「その対策ってそう簡単に立てられるもんなの？」アリサが挙手。

『それをフローリアン姉妹から聴取する。あとは、マテリアル達から聴く必要もあるし、是非とも協力を求めたい。ルシルが言うには、というか僕もそう思うが、マテリアル達もこの切迫した事態だ、そう間を置かずに復活するはず。そこを狙う。エイミィやアリシア、観測スタッフが常時マテリアルの反応を探ってくれて――』

クロノがそこまで言いかけたところで、ブリーフィングルームに通信コールが鳴った後、『こちらアースラブリッジ』アリシアからの通信が入った。わたしが代表して「どうしたの？」って訊ねる。

『闇の欠片たちの反応が急激に増えたの。発生点は海鳴市近隣限定。フェイトとアルフ、レヴィの会話記録から見て・・・』

「マテリアルが出現した・・・？」

アリシアの話の続きを引き継ぐようにフェイトが言った。闇の欠片

の発生は、マテリアル出現の際に起きる副次効果、ってレヴィは言ってた。ということは、フェイトの言う通りマテリアルが出現したってことになる。わたしはモニターに映るクロノに向かって「クロノ、わたし達出るけど、いいよね！？」そう訊く。

『階級的にも今は君が上官だ。指揮は任せる』

「・・・了解！」

『イリス、そしてみんなの健闘を祈る』

通信が切れる。そしてわたしは椅子に座ってるみんなを見渡した後、「八神騎士は休憩を。交代して今度はわたし達が出る。いいよね、なのは、アリサ、すずか、フェイト、はやて」と確認する。

「「「「「もちろん！」」」」」

みんなの承諾を得た。それじゃ「アリシア。出現ポイントを教えて。出るよ」と待っててくれたアリシアに、闇の欠片とマテリアルの出現ポイントを訊ねる。嬉しいのはどいつもこいつも海鳴市近隣に発生していること。やったね。

「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。アースラで休んでてな。リインフォースも」

「「「「はい」」」」「判りました」

「本当に申し訳ありません」

真っ先に体調を崩してリタイアしたリインフォースは、それでもはやてやシグナム達と一緒に居ようと医務室からここへと来た。はやては「ええよ。たぶん、あとで力を貸してもらうと思うから、それまで休んでて」ってリインフォースの頭を撫でた。そうしてわたし達は、闇の欠片とマテリアルの反応を追って、出撃した。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒すずか†††

アリシアちゃんやエイミィさんの通信に従って、私たちはアースラから出撃。海鳴市やその近隣の空を翔ける。アリシアちゃんの話だと、マテリアルと残滓の反応が混濁してて判別できないってことみたいで、いつマテリアルと遭遇するか判らないっていう緊張感がある。

なのはちゃん達から、残滓とエンゲージ（交戦開始っていう意味って教えてもらった）したっていう通信が入る。私も残滓の何人か戦って、その都度みんなにエンゲージって連絡をする。だけどマテリアルとはまだ誰もエンゲージしてない。

≪スズカ！　強大な魔力反応、来ますわッ！≫

"スノーホワイト"からの警告が出たすぐ、「きゃっ・・！」ものすごい吹雪が私を襲った。髪とスカートを押さえながら治まるのを待つ。その吹雪もすぐに治まって、髪やバリアジャケットに降り積もった髪を払う。

「あら？　誰かと思えば、私のオリジナルですわね」

「あっ。えっと・・・アイル、ちゃん」

私の目の前に現れたのは、私と瓜二つの外見を持った女の子。でも色違い。髪やバリアジャケットは真っ白で、瞳は真っ赤。あと、目付きがちょっと鋭いかも。アイルちゃんはふぁさっと自分の髪を後ろに振り払った後、「アリサは、居ないのですね」辺りを見回して小さく溜息。

「あ、あの・・・アイルちゃん？」

「何かしら？　あなたに構っている暇がないのですけど」

どこかへと飛び去ろうとするアイルちゃんに「待って」って呼びかける。無視されちゃうんじゃないかって思ったけど、「今度は何かしら？」ってちゃんと止まってくれた。

「アイルちゃん、体、大丈夫・・・？　ヤミちゃんにその・・・」

「ご心配に及びませんわ。アリサと真っ向から再戦しても勝てるだけの復旧はしましたわ」

「そっか、良かった。じゃ、じゃあ、他の子たちも・・・もう起きたのかな？」

「いいえ。私とレヴィの2基だけですわ。王やシュテル、フラムが、

私たちにリソースを回してくださいましたからね。もうよろしいですわね？　では、これで失礼しますわね」

「あぅ、あの、もうちょっと話を――」

――イガリマ――

「っ！」

≪アイスミラー！≫

もう一度呼び止めようとしたら、アイルちゃんがフローズンバレットを１０発と発射してきた。だけど"スノーホワイト"がシールドを張ってくれたから直撃は免れる。ホッとしていると、アイルちゃんが「構っている暇がない、と言いましたわよ？」って鋭い目を向けてきた。

「ちょっと話をしたいだけで・・・！」

「管理局の融通が利かないのは、いつの時代も同じですわね・・・！

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。―。

氷災の征服者アイル・ザ・フィアブリンガー

。―。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

「シュルシャガナ！」

冷気の砲撃バスターラッシュ――シュルシャガナを撃ったアイルちゃん。横移動で躱して「待って！」両手を上げて戦意がないことを示しすんだけど、「用があるのなら、勝って止めて見せなさい！」アイルちゃんは問答無用でフローズンバレット――イガリマを１０発以上連射してきた。

「スノーホワイト！」

≪お任せ下さいまし！≫

――アイスミラー――

シールドを傾けた状態で展開。真っ向から防ぐんじゃなくて、逸らして受け流す。アイルちゃんが「頭の良い防御ですわね」って褒めてくれたから、「ありがとう！」お礼を返す。でもすぐ後に「では、これでいかがです？」って冷気の砲撃と魔力弾の構成弾幕を張ってきた。

「あわわわ！」

逸らす防御方法でも受けきることが出来ないって判断して回避行動に移る。

『こちらアースラのエイミィ！　すずかちゃん、今、律のマテリアルと交戦中だよね・・・！』

「えっと、はい、戦うつもりはないんですけど・・・」

『その、言い難いんだけど、魔力量ですずかちゃん、マテリアルの子に負けているの。いや、すずかちゃんが負けるとは思えないし、魔力量が全てじゃないと思うし、でも・・・』

そんな気はしてた。アイルちゃんと真正面から対峙した時、魔力量の違いが大きいって。エイミィさんは続けた。援軍を寄越そうか、って。でも断る。勝ち負けじゃないから。

『――判った。でも一応、欠片討伐を終えた子を向かわせるね。それまでに勝敗がついていればいいし、ついていなかったら・・・』

「あ、はい。その時は、それでいいです」

エイミィさんとの通信が切れる。通信の最中でも続いてたアイルちゃんの射砲撃弾幕。うー、どれだけ撃てば気が済むんだろう。

「逃げているだけでは私は止められませんわよ、オリジナル・・・！」

「私、月村すずか、って名前です！　出来れば、そう呼んでくれると嬉しいなぁって！」

「私に勝つことが出来れば考えて差し上げますわよ、オリジナル！」

――ラマシュテュ――

アイルちゃんの前面に展開された翡翠色のミッド魔法陣から８本の

氷で出来た茨――アイシクルアイヴィが伸びて来た。アレは防御魔法を避けてまで対象を捕まえようとしてくるから、「しょうがないよね・・・」茨の数の分だけフローズンバレットを発射して迎撃する。

「誘導操作もなかなかですわね。さすがは私のオリジナルですわ♪ ですが、私はあなた以上の力を得ましたのよ。たとえば・・・ティアマト!!」

「わわっ!?」

足元から、氷で出来た先端が六角錐の柱が１０何本と突き出して来た。慌てて回避飛行。避けた先にもまた突き出して来たり、避けようとした先に突き出して来て妨害して来たり、少しずつ包囲されていっちゃう。

≪スズカ、上ですわ!≫

「う、うんっ!」

上昇を始めたと同時、私を閉じ込めるように氷の柱が頭上で折り重なるように突き出して来た。私は「バスターラッシュ!」砲撃を発射して、柱の1本の先端を撃ち抜いた。その隙間から脱出した時。

「上手く誘われてくれて感謝ですわ、オリジナル!」

――エチムミ――

私の頭上で待ち構えていたアイルちゃんの足元の魔法陣から、冷気の竜巻が落ちて来た。私の魔法、レフリジレイト・エアの別の使い方だ。避けようにも直径が広すぎて無理。だったら「アイスミラー・ロングサーペント！」シールドを七重に重ねて完全防御。

竜巻の先端と1枚目のシールドがぶつかる。1枚目がすぐに砕けて2枚目に衝突。2枚目もすぐに砕ける。次に3枚目・・・も砕けて、4枚目、5枚目、6枚目と砕けちゃった。最後の7枚目に衝突。これまでのシールドのおかげで勢いが弱くなってくれているから、すぐには砕けない。

「やりますわね！　アリサとの決闘前のストレッチとしては十分ですわよ！」

「私としては、話が出来るだけでいいんだけど・・・！」

ヒビが入り始めたシールド。砕かれる、って諦めそうになったんだけど。完全に砕ける前に、アイルちゃんの竜巻が消えた。と同時、アイルちゃんが急降下して来て、「ニヌルタ！」私の"スノーホワイト"と同じデザインのグローブの爪から生えた、刀の様な氷の爪での斬撃を振るってきた。

「わわ、危ない！」

――アイスミラーーーー

シールドで防御。アイルちゃんの斬撃によって縁にある氷が砕けち

ゃう。アイルちゃんは高笑いを発しながら「補助魔導師であるあなたとは違い、私は前線でも戦える戦闘魔導師へと生まれ変わったのですわ！」右に左に爪を振るい続けてくる。

「スノーホワイト！」

≪バインドバレット・サークルシフト！≫

アイルちゃんの周囲に展開する魔力弾１２発。すぐさま発射する。アイルちゃんは「小賢しいですわよ」って微笑むと、アイルちゃんを護るように吹雪が円環状に発生して私の魔力弾を全弾、凍結破壊しちゃった。それと一緒にシールドが切り裂かれて砕けた、

「きゃぁぁぁぁぁ！！」

その衝撃に踏ん張りきれなかった私は真っ逆さまに墜落。体勢を立て直すことに集中・・・したいんだけど、「私のオリジナルは、その程度ですの！？」容赦なく冷気弾イガリマを降り注がせてくる。

「本当に容赦ないよ・・・！」

≪ですわね。私と同じ口調でスズカに暴言など、許せるものではないですわ≫

急に墜落停止をして的になるんじゃなくて、緩やかな軌道で水平飛行に移る。その間にも降り注いで来る冷気弾を避けながら、緩やかな軌道で上昇を始める。

「スノーホワイト！」

≪フローズンバレット！≫

本当は戦いたくないけど話じゃ止まってくれないみたいだし、アイルちゃんの言う通り勝って、それから話を聞いてもらおう。冷気弾を連射しながらアイルちゃんより高度を上げようと試みる。

「私の上を、そう容易く取れるとは思わないでほしいですわ！」

――ムンム――

――イガリマ――

頭上に展開される魔法陣。そしてそこに向かって放たれてきた冷気弾が反射して、「きゃあああ！」私の頭上へと降り注いできた。9発中3発の直撃。2発が掠って、残り4発は外れた。着弾した左右の袖とコートの裾が凍って砕け散った。

≪スズカ！？≫

「大丈夫だよ、スノーホワイト。ちゃんと非殺傷効果を付けてくれてるみたいだから」

物理破壊設定だったら、バリアジャケットどころか生身まで凍らされていたかもしれない。でも、アイルちゃんは非殺傷設定で戦って

くれてる。

「アイルちゃん、優しいね！」

「優しっ――ば、馬鹿を言っているんじゃないですわ！　再起動したばかりでちゃんと設定が出来ていなかったからですわ、運が良かったですわね、オリジナル！」

「照れなくても良いのに」

「照れてなどいないですわよ！　どーこを見てそう思ったのですの！？」

――シュルシャガナ――

顔を赤くして喚きながら冷気の砲撃を発射してきたアイルちゃん。やっぱりそんなに悪い子じゃないみたい。だって、マテリアルの目的ってどうやら自由になることみたいだから。何百年もの間、"闇の書"だった"夜天の書"のずっと奥に押し込められていて、不自由してたって話だから。

「まったく、まったく、まったく！」

なんかブツブツ言いながら砲撃を撃ち続けてくるアイルちゃんに「あの、良い雰囲気だからこのまま戦闘を止めて話を――」って話しかけるけど、「だぁかぁら！　どこが良い雰囲気かっつうの、ですわ！」怒鳴られちゃった。

「あぅー」

「いいから、掛かって来るがいいですわ！　その生意気な口を凍らせて閉じさせてあげますから！」

――イシュタル――

アイルちゃんが両腕を空へと向けて魔法陣を展開。その魔法陣から猛吹雪を発射。その吹雪が空で渦を巻いたかと思えば、「雪・・・？」が降って来た。ううん、違う、雪じゃない。雪の結晶だ。直径１ｍ近い雪の結晶が無数に降って来た。

≪お気を付けて、スズカ！　魔力で出来た結晶ですわ、触れるとダメージを被りますわ！≫

「あ、うん！」

ユラユラと降って来るから軌道が読みづらい。しかも「イガリマ！」冷気弾も十数発と紛れ込ませてくるから厄介。結晶に触れないように、冷気弾に当たらないように気を付けながら空を翔ける。

「レフリジレイト・エア！」

私を中心として冷気の竜巻を発生させて、頭上から降ってくる結晶の雨や冷気弾を防御。冷気弾を全弾防御したのを魔力の気配で確認。竜巻を頭上へと放って、結晶を生み続けてる空に渦巻く吹雪を破壊する。

「ラマシュテュ！」

「きゃあ！？」

私の両手首と両足首を捕らえる氷の茨。バインドブレイクを割り込ませるより早く「私の勝ちですわね」アイルちゃんが私の目の前に来た。アイルちゃんがスッと私の頬に触れて「いかがです？　私の氷結魔法は」って胸を張った。

「・・・私の負けです」

≪申し訳ありませんわ、スズカ。私の力不足でしたわ≫

「ふふ。シュテルもレヴィもフラムも、オリジナルを相手に引き分けることしか出来なかったようですが。ディアーチェと同様にオリジナルに勝利した私こそ、マテリアルのナンバー2ですわ」

アイルちゃんが笑っていると、頭上から「そんじゃ、こっからは第二戦ってことね！」そんな声が。見上げてみると、ずっと高い空には紅い翼を羽ばたかせた「シャルちゃん！」と、こっちに向かって急降下して来てる「アリサちゃん！」の姿が。

アリサちゃんが手にしてる"フレイムアイズ"の刀身には全てを焼き払うような炎が渦巻いていた。バーニングスラッシュだ。その炎の斬撃で私を捕らえてる氷の茨を焼き斬って、すぐさま足元にフローターフィールドを展開して降り立ったアリサちゃん。

「すずか、大丈夫！？」

「うん。ありがとう、アリサちゃん」

ちょっと縛られてた箇所は凍っちゃってるけど、どうってことない。"フレイムアイズ"の炎の熱で溶けていくから。

「来ましたわね、アリサ！　待っていましたわよ！」

「もう観念しなさい、アイル・ザ・フィアブリンガー！」

「観念ですって？　その大口、これを見ても叩けます！？　アリサ・バニングス。あなたを打ち倒すために手に入れた、この魔法・・・受けて見なさい！　参りますわよ、エレシュキガル！　テンペスト・オブ・エンリル！！」

アイルちゃんの魔力がグッと高まったかと思うと、今まで以上に強力で巨大な吹雪の竜巻がアイルちゃんを呑み込むようにして発生した。そんな吹雪の竜巻からは、氷で出来た剣や槍、それに弾丸が全方位に無差別に発射されてきた。

「アリサ！」

「頼むわよ、シャル！」

ここで降下して来たシャルちゃんが、アリサちゃんの隣に降り立った。

「すずか、防御お願い出来る？」

「あたしとシャルで、アイツを懲らしめてやるわ」

シャルちゃんとアリサちゃんの希望に沿いたくて、私は「出来るよ！」って強く頷いた。すぐに「スノーホワイト、行くよ！」って呼びかけて、今扱える魔力を全解放。

「アイスミラー！！」

私たちをカバーできる程に広くしたアイスミラーを発動。すると「フレイムアイズ、クレイモアフォーム！」アリサちゃんは大剣形態のクレイモアフォームへと"フレイムアイズ"を変形させて、そしてカートリッジをロード。半実体化した剣を、炎へと変化させた。

「負けてられないってね！　キルシュブリューテ！」

シャルちゃんの"キルシュブリューテ"が3発とカートリッジをロードして、その桜色の刀身に真紅の炎を纏わせた。シャルちゃんとアリサちゃんがデバイスを頭上に掲げて、そして「解除！」って同時に私に向かって叫んだ。その意味を察した私は、シールドを即座に解除。そして・・・

「「双炎牙・獄火刃！！」」

アリサちゃんとシャルちゃんが同時にデバイスを振り下ろして、炎

の斬撃をアイルちゃんの竜巻へと放った。勝負は一瞬。２人のすごい斬撃を受けた竜巻は吹き飛んで、「ありえないですわぁぁぁーーーー！！」アイルちゃんを吹っ飛ばした。

「こ、こ、こ、こんなことが・・・！」

宙で体勢を立て直したばかりのアイルちゃんへ私たちが向かうと、「２人掛かり、しかも共に炎熱系とは卑怯ですわよ！」って睨まれちゃった。

「なんとでも言いなさい。ほら、観念しなさい、アイル。レヴィが、フェイトに全部話したわよ！」

アリサちゃんがそう言って、私たちの前にモニターを1枚展開する。そこに映しだされてるのは、なのはちゃんとフェイトちゃん、はやてちゃん、アルフさん。そして、青い棒付きキャンディをペロペロ舐めて満面の笑みを浮かべてるレヴィちゃんだった。

「あ、ああ、ああ、あああ、あああああ・・・！　あのお喋りお馬鹿水色ぉぉぉぉーーーーーーーッッ！！　」

海鳴市の空に、アイルちゃんの絶叫がこだました。

Ｅｐｏｓ４８父の夢／娘たちの願い～Ｆｌｏｒｉａｎ　ｆａｍｉｌｙ's　Ｄｒｅａｍ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

高町ヴィヴィオちゃん。未来の私の子供だっていうことらしいけど。うーん、私のお相手って誰なんだろう。それに、フォルセティ君、っていうはやてちゃんとルシル君の子供が居るみたい。もっと詳しくお話ししてみたいな。だけど今は、闇の残滓を倒さないと。そういうわけで私は、アリシアちゃんの指示に従って次々と残滓を撃ち倒していった。

「――本物のマテリアルやみんなとは違って、残滓はみんな弱体設定があるから助かるよ」

ユーノ君やアルフさんの残滓と出遭って、そして倒した。ちょっと戦い辛かったけど、ちゃんと倒したよ。次の残滓の発生地点へと向かう中、「あ、この感じ・・・シュテルみたいな・・・」妙な魔力を感じた。

≪マスター。マテリアルの反応を探知しました≫

「うん、行こう！」

"レイジングハート"の指示に従って進路を変更。そして少し進んだ先に、あの子が居た。シャルちゃんと同じ水色の髪をした、フェ

イトちゃんと瓜二つのマテリアル「レヴィちゃん・・・・！」が。

「ん？　あ、ボクのオリジナルの仲間・・・えっと、なにょは！」

「なのは！　な・の・は！！　どうしてこう、私の名前ばかり間違えられるの！？」

ヴィータちゃんもレヴィちゃんも、なにょは、って。そんなに呼びにくい名前なのかなぁ。ちょっとショックだよ。気に入ってるのに、なのは、って名前。うぅー。

「その・・お前が、ボクになんの用だよ！」

「あ、そうそう。私、というか私たちね、レヴィちゃんとちょっとお話をしたいなぁって思って」

身構えを解いて、右手をレヴィちゃんへと差し出す。するとレヴィちゃんは「話すことなんてないぞ、ボクには。ボクは忙しいんだ」レヴィちゃんはプイッと顔を逸らして、またどこかへと飛び去ろうとする。

「待って、待って！　えっと、えっと・・・、あ、コレ！！」

もし万が一、復活したマテリアルなのがレヴィちゃんだった場合、そのレヴィちゃんと出会った時のための贈り物を、フェイトちゃんから私たちみんなに渡されたんだ。慌ててソレを取り出すと、「おお！　ソレ、甘い水色のやつ！」レヴィちゃんがものすごい反応を

示した。

「（本当に好きなんだなぁ、ソーダ味のキャンディ。可愛い♪）フェイトちゃんが、もしレヴィちゃんと出会ったら渡してって」

「ホントか！？　じゃあ貰ってやる♪」

フェイトちゃんから私たちに渡されたのは棒付きキャンディ。誰もが親しみを覚えちゃうようなニコニコ笑顔を浮かべたレヴィちゃんがすぃーっと向かって来て、右手に持つキャンディに手を伸ばしてきた。とここで、「ちょっと待って」ってひょいっと手を上げて、レヴィちゃんの手からキャンディを遠ざける。

「あ！　な、なんだよ、ボクにくれるんじゃなかったのかよー！　期待させておいてお預けとか、お前なかなかに悪いやつだな！」

「ごめんね。ちゃんとあげるから、その前にお話を聞きたいなぁって思って。お話をしてくれたら、このキャンディはレヴィちゃんの物。どうかな？」

腕を組んでうんうん唸り出すレヴィちゃん。ちょっとの間唸った後、「これが、しほー取引ってやつだな！」ってビシッと指を差してきた。ちょっと違うんだけど。でも、微妙に合ってるのかも。とにかく、「どうかな？」って確認してみる。

「むぅ、こうなったら力づくで・・・！」

「わわ！　待って、待って、レヴィちゃん！　それだと余計にあげられないよ！」

「むむ！・・・むぅ・・・、何が訊きたいのさ？」

「（やった♪）えっとね、レヴィちゃん、体の方は大丈夫なの・・・？」

砕け得ぬ闇――ヤミちゃん（はやてちゃんの命名だけど可愛いからみんな使ってる）の霧のような魔力――魄翼に貫かれて消滅させられちゃったから、それが心配で訊いてみたら「へ？　あー、見たら判るだろ！」レヴィちゃんは"バルフィニカス"をブンブン振り回して元気を示してくれた。

「じゃあ、他の子たちは大丈夫なのかな？　シュテルも・・・」

「ボクと一緒にアイルが起動してるだけ。王様たちがリソースを回してくれたんだ。ボクは力のマテリアルだからね。システム全体の復旧をするなら、一番力持ちなボクが外からやった方が、効率が良いんだ。アイルは、ボクやシュテるん、フラムの力が暴走しないようにするための律するプログラムだから、ボクが暴走しないよう念のために一緒に再起動したんだよ」

レヴィちゃんの目の前でキャンディを左右に振ると、レヴィちゃんはまるで猫のようにキャンディの動きに合わせて目を動かす。どうしよう、真面目な場面なのにレヴィちゃんを思いっきり抱きしめたい衝動に駆られちゃった。だって猫じゃらしに反応する猫みたいな

んだもん。

「そうなんだ。じゃあシュテル達の復旧はどう？　あとどれくらいで元に戻れそう？」

「判んない。ただ撃破されただけならそんなに掛かんないと思うけど、普通の壊され方と違うから。ボクとアイルで全力修復はしてるけど、あとどれくらいで、ってことになると全然・・・」

爛々と目を輝かせたレヴィちゃんは急に暗い表情になって、俯いて自分のお腹、ヤミちゃんの魄翼に貫かれた個所を優しく擦った。私は「ありがとう、はい、どうぞ」ってキャンディをレヴィちゃんに差し出す。今は少しでも元気になってもらいたいから。

「あ、ありがと、ナノハ」

「うん！！」

名前を呼んでくれた（カタコトだったけど）レヴィちゃんに微笑み返す。はむはむ♪、とキャンディを頬張るレヴィちゃんの表情に明るさが少しだけど戻った。少しレヴィちゃんを眺めていると、「話はもう終わりか？」って訊いてきたから、「ううん。これからが本題」って答える。

「・・・お前、良いやつ！　ボクにもなんとなく解った。あんまり喋っちゃアイルにメチャクチャ文句言われると思うけどさ。ボクは寛大だからな、話してやる。別にキャンディに釣られたわけじゃな

いからな！」

「ありがとう、レヴィちゃん！　私たちね、レヴィちゃん達に助けてもらいたいの」

「助ける？」

「うん。私たちはヤミちゃんを止めてあげたいんだ」

「ヤミちゃん？　誰そいつ」

「あ、砕け得ぬ闇、レヴィちゃん達が言うシステムＵ－Ｄのあの子を」

「あー、だからヤミちゃん。・・・Ｕ－Ｄを止めた後はどうする気だ・・・？　はっ。そうか！　ボクらの復活や自由を邪魔する気なんだな！　やっぱり悪いやつか！」

さっきまでの上機嫌が急降下して一気に不機嫌に。しかも"バルフィニカス"まで構えちゃうし。私は慌てて「違う、違うから！」首を横にブンブン振る。レヴィちゃんは「じゃあ、何をする気？」って構えは解いたけど警戒は続行。

「ただ止めたいだけなんだよ。だってあの子、苦しんでるでしょ、悲しんでるでしょ、傷つけたくないって。管理局員としても、ひとりの人間としても、ヤミちゃんを止めてあげたい、その苦痛から解放してあげたいんだ」

「っ・・・。本当に？」

「うん、本当だよ。だからこうしてレヴィちゃんに会いに来たんだ。ヤミちゃんを止めるためにはどうすればいいか、それを教えてもらうために」

"レイジングハート"を待機モードの首飾りに戻して戦闘意思がないことを改めて示した上で、両手をレヴィちゃんに向かって差し出す。私はさらに、「みんなの分も預かってるんだ。レヴィちゃんはそのソーダ味だったでしょ。他の子にはね――」ってマテリアル人数分のキャンディを見せる。

「シュテルはストロベリー、アイルちゃんはメロン、フラムちゃんはパイナップル、ディアーチェちゃんはグレープ。みんなで仲良く分けて食べられるように、って」

「赤色、翠色、黄色、紫色・・・。そしてボクの水色。やっと取り戻せることが出来た、ボクらの魔導色だ・・・」

レヴィちゃんがそろそろと手を差し出して来たから「どうぞ♪」私は残りのキャンディもレヴィちゃんに手渡す。受け取ってくれたレヴィちゃんは愛おしそうにキャンディを見詰めた。とここで、「なのは！」フェイトちゃんとはやてちゃんとアルフさんが合流。

「あ、オリジナル！　それに子鴉！　あとアホ犬」

「ああん！？　また泣かすぞ、コラ。この前みたいにまたピーピー泣かしてやんよ！」

「なんだよー！？　やるかぁ、ああん！？　今度はボクが、お前を泣かしてやるぞ、おおう！？」

フェイトちゃんをオリジナル、はやてちゃんを子鴉、アルフさんをアホ犬呼ばわりするレヴィちゃん。そんなレヴィちゃんとアルフさんが、「ああん！？」おでこをごっつんこさせて睨み合い。それを止めるのがフェイトちゃんで「もう、ケンカしないで！」って２人の間に割って入った。

「ふんだ！　もう話せることは話したぞ！」

「あ、レヴィちゃん！　返答は！？」

「ボクひとりに決められるわけないだろ。王様が最終決定権を持ってるんだ。勝手に決めたらボクが怒られちゃうだろ。あくまでボクがするのは話して聴くことだけ」

ディアーチェちゃんの魔力光――紫色をしたグレープ味のキャンディだけを振ってそう答えてくれた。するとはやてちゃんが「それじゃあ王さま達が目覚めるまで、一緒に居ってくれるか？」って手を差し伸べた。私やフェイトちゃんも「お願い」ってレヴィちゃんに頼み込む。

「むぅ・・・。もう1個コレをくれたら考えないこともない」

舐めきって無くなっちゃったソーダ味キャンディのお代わりを御所望なレヴィちゃん。フェイトちゃんとはやてちゃんが「はい、どうぞ♪」それぞれキャンディを取り出すと、「いいだろう、居てやろう！」って胸を張ったレヴィちゃんの目は爛々と輝いてキャンディに釘づけ。早速キャンディを頬張るレヴィちゃんを温かく見守っていたら・・・

「レヴィいいいいーーーーーーーッ！！」

怒りの沸点越えを示すかのような怒声が遠くから聞こえてきた。声のした方へとみんなで顔を向けると、そこには全身真っ白なすずかちゃん――じゃなくて、アイル・ザ・フィアブリンガーちゃんが居た。そのアイルちゃんの後方にはすずかちゃんとシャルちゃん、そしてすずかちゃんに抱っこされたアリサちゃんの姿が。

「あ、アイルだ！　おーい！」

「おーい、じゃありませんわよ！　一体何を喋りましたの！？　いえ、そもそもどうして喋ってしまいましたの！？」

アイルちゃんが私たちを突き飛ばすようにしてレヴィちゃんの真ん前で急停止、レヴィちゃんに詰め寄った。

「別に知られて困るようなことは話してないぞ。ボクとアイルだけが再起動して、外からシステム全体の復旧をしてるってこと、王様たちの目覚めがいつになるか判らない、ってことくらい」

「十分喋ってますわよ、このアホ、バカ！」

「アホとかバカとはなんだ！　アイルだって、自分のオリジナルのお嬢様やフラムのオリジナルの熱血、それに赫羽と一緒じゃんか！　どうせ負けたんだろー、やーい！」

すずかちゃんをお嬢様、アリサちゃんを熱血、シャルちゃんを赫羽と呼ぶレヴィちゃんは、怒りのボルテージ限界突破なアイルちゃんに向かって舌をべーッと出した。

「カッチーン、ですわ！　力だけのマテリアルに、頭の良さを期待する方がそもそもの間違いでしたわね！　ああ、申し訳ありませんでしたわ、頭空っぽの力持ちさん！？」

「プッチーン！　なんだと、この似非お嬢様！　ボクの電撃でバッチバチのコッゲコゲにした後、バルフィニカスでバッラバラに斬り裂いてやるぞ！？」

「上等ですわよ！　ヒエッヒエのコッチコチに凍らせた後、コッナゴナに砕いて差し上げますわ！」

一触即発。レヴィちゃんはアイルちゃんの頬を両手で左右に引っ張って、アイルちゃんはレヴィちゃんのツインテールを引っ掴んだ。まさかマテリアル同士の本気バトルに発展しちゃうなんて誰が思うんだろう。私たちは慌てて2人を引き剥がしにかかる。

「「はぁはぁはぁはぁ・・・！」」

頬を強く引っ張られたことで真っ赤に腫らしたアイルちゃんと、髪を引き千切られるちゃうかもっていう程に引っ張られて涙目なレヴィちゃん。マテリアルの子たちって仲がいいって思ってたんだけど、何か鬱憤でも溜まってたのかなぁ。

「とりあえず、アースラへ行こう？」

「そうだね。落ち着ける場所でゆっくりと話をしようよ」

フェイトちゃんと私でレヴィちゃんとアイルちゃんにそう提案するんだけど、「冗談ではありませんわよ」アイルちゃんが自分の腫れた頬を自慢の氷結で冷やしながら却下を下してきた。

「でもさ、あんた達もどうせ自力でヤミちゃんを止められないんでしょ？」

「だったらみんなで協力した方が良いと思うんだ」

アリサちゃんとすずかちゃんがそう諭しても、「何度も言いませんわよ。冗談ではない、と、私は」って聞いてくれない。

「じゃあ、そっちには何かあるの？　ヤミちゃん――砕け得ぬ闇の停止方法が」

「もしあるんやったら、わたしらがそれの手伝いをするってゆうの

はどうやろ？」

シャルちゃんとはやてちゃんも続くけど、「くどいですわよ」アイルちゃんはやっぱり聞いてくれなかった。そして「レヴィ。行きますわよ」ってレヴィちゃんの手を取ってどこかへ去ろうとしたら、「アイル。待って」レヴィちゃんが留まった。

「もしかして絆されましたの、レヴィ？　管理局は私たちの敵ですわよ。きっと上手いことを言って、私たちをまた封印する気ですわ。私には、あなたも含め、他のマテリアルを護る義務もありますの」

「シュテるんは言ってた。ナノハが良い魔導師だって。ボクはナノハと話したんだ。Ｕ－Ｄを助けたいんだって。たぶん、嘘じゃない」

まさかシュテルがそんな風に思われてたなんて考えもしなかったから驚いた。アイルちゃんの眉がピクッと引きつく。レヴィちゃんは「ボクらは自由になりたい。だけど、Ｕ－Ｄも一緒の方が良い」って続けた。

「いい加減にしてくれませんか、レヴィ。それが真実、本音であると思うんですの？」

「なんとなくだけど」

レヴィちゃんとアイルちゃんの間にまた不穏な空気が。いつでも止められるようにスタンバイしようとした時、「え・・・！？」２人が急に黙りこんじゃった。私たちはどうかしたのかなって、２人を

見守っていると。

「王様とシュテるん、フラムが何か話してる・・・？」

「復旧が進んで言語機能が復活したようですわね」

すぅっと目を閉じたレヴィちゃんとアイルちゃん。意識を内側に向けたみたいで、２人から不穏な空気が綺麗サッパリ消えた。

「ぷふ。レヴィ、あなた、シュテルやフラムからシステム構造が単純だと言われてますわよ」

「うるさいなぁ。そのおかげで、システム復旧が早く進んでるって褒めてくれてるじゃんか。ていうか、アイルだって王様に、融通が利かんアイルを表に出して不安、とか言われてるぞー」

「む。融通が利かないのではなく真面目なだけですわ」

ふんって鼻を鳴らしたアイルちゃんはそれっきり黙った。レヴィちゃんもまた黙る。でもすぐに「え？　ボクらがＵ－Ｄを求めてた理由、大いなる力を手に入れるんじゃなかったの・・・？」レヴィちゃんが気になるセリフを発した。

「え？　間違いでもないって？　どういうこと？」

それは私たちのセリフだよ、レヴィちゃん。思いっきり独り言を漏らすレヴィちゃんには感謝するけど、もうちょっとハッキリとした

話が聞きたいかも。

「ヤミちゃんを手に入れて大いなる力を得る。そして自由になる。それが、今までの会話から出来てた推測やったけど・・・」

はやてちゃんの話に頷くことで応える。確かに、ヤミちゃんほどの力があれば自由になることや、それ以上のことだって何でも出来そうだもん。

「U－Dと私たちは、元々1つだったのですわね。アイル、シュテル、レヴィ、フラム、ディアーチェ。そしてU－Dの6基が揃うことで、はじめて・・・紫天の書が・・・完成・・・？」

「なんだ、紫天の書って・・・。あ、王様の本のことか！」

「紫天の書が完成すれば、私たちは闇の書から独立することが出来ますのね！」

「ボクらが求めた自由は、U－Dで迎え入れることで手に入れることが出来るんだ！」

「私もですわ、王。U－Dと出会った時、私の胸に生まれたのは望郷の念にも似た想い・・・」

アイルちゃんの閉じられた瞳から1粒の涙が零れ落ちた。そして「本当にそれでいいのですわね？」ってアイルちゃんが誰かに確認するような言葉を発した。レヴィちゃんも「が、頑張る！　交渉とか

苦手だけど、アイルと一緒ならなんとか」ってまたも気になる単語を発した。レヴィちゃんとアイルちゃんがすぅっと目を開けて、私たちへと目を向けてきた。

「お前たちに話がある！」

「シュテルからの提案により、私とレヴィは、あなた達と交渉をさせていただきますわ」

「Ｕ－Ｄを止める方法を教えるからって」

ヤミちゃんを止めるための方法を手に入れたみたいなシュテル達。詳しく話を聞くために私たちは一度アースラへ戻ることにした。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒ルシル†††

本局は第零技術部。ジェイル・スカリエッティを主とした、次元世界屈指の技術が埋もれる部署。そこに今、俺とクロノは居る。目的は、保護した未来からの来訪者であるアミティエ、キリエのフローリアン姉妹の治療。そして事情聴取だ。

「――なかなかに面白い少女たちだったよ。私の娘たちとはまた違った構造で、出力も段違いであり、出力炉もまた画期的な技術が使われていた。私はそれなりの天才だと自負はしていたが、改める必要があるようだ」

「ドクター、私たちは席を外しましょう」

「では、クロノ執務官、ルシリオン。ごゆっくり」

フローリアン姉妹の製作者を予想外にも褒めちぎったスカリエッティは、ウーノとチンクに引っ張られるように半ば強制退室させられた。それを見送った後、俺とクロノの目の前に2台のベッドがあり、そこに横たわっている病院服を着たフローリアン姉妹へと向き直った。

スカリエッティとシスターズ、ティファレト医務官の協力でそのダメージを回復させた彼女たち。スカリエッティから何かしら変なことをされなかったかと警戒したが、治療に携わったウーノとドゥーエ、クアットロとチンクが思った以上にしっかり者だったこともあって、奴は早々変なことが出来なかったようだ。

「それでは、目覚めたばかりで申し訳ないですが、事情聴取を行わせてもらいます。管理外である未来からの来訪者であってもあなた達には黙秘権が発生します。ですが、出来れば、包み隠さず話してもらえると助かります」

「話します、全部。この世界の人たちに迷惑をお掛けしないように、と決めていたのですが、もうこれ以上、私だけでは抑えきれませんし」

「っ！」

観念したアミティエの言葉に、キリエがギュッと布団を鷲掴んだ。ここまで独りで頑張って来たのが、報われないままとうとう終わり

を迎えたんだ。悔しいだろうな。

「それでは改めて確認を。あなた達2人は、未来からの渡航者、である。そうですね」

「はい。何年後から来たという詳しいことは話せませんが・・・」

「それで結構です。キリエ・フローリアンさん。あなたは、何らかの運命を変えるために過去であるこの時代、そしてこの世界へとやって来て、システムU－Dを手に入れようとした・・・」

事実確認するかのようなクロノの問いを聞き、アミティエがキリエへと顔を向けた。キリエは小さく溜息を吐き、「ええ、そうよ」と彼女もまた観念したようで話し始めた。時間移動という現代ではもちろん、現代以上にそういったオカルト的な技術に優れていた俺たちの時代でも、完全には成し得なかった技術を以ってこの時代へ来た動機を。

「わたしやお姉ちゃんの故郷、エルトリア。その世界がゆっくりと、でも確実に死へと向かって行ってるの」

「どれくらいになるでしょうか。もう何百年と前から、エルトリアという星そのものが死んでいっているんです。死に蝕ばれると書いて死蝕という現象によって。その死蝕によって、水や大地の腐敗が起きているんです」

「厄介なのは、飛び石みたいに自然発生すること。発生地点も予測

できなくて。生物や自然が生きられないような場所になっていく」

ここでクロノが「君たちのような人が生まれる時代だ。他の世界――星に移住などは出来ないのか？」と訊いた。すると「もちろん、他の惑星に移住を始めている人は居ます」とアミティエが答える。それでもなお、砕け得ぬ闇を求めて過去へやってくる理由とはなんだ。

「８０年くらいほど前から、それまで死蝕から逃れながら生きてきた人たちも、安全な星に移住を始めた。みんなエルトリアを離れて行ってる」

「試算的に見れば、あと2世代以内でエルトリアから人が居なくなります。いまエルトリアに残っている人たちは、エルトリアで生まれて、その大地が本当に好きな・・・。私とキリエの父――フローリアン博士は、死蝕に侵されたエルトリアを直して、以前のように綺麗な世界に戻す、そのための研究や対策を続けていました」

「わたし達は、その研究・対策の実験過程で生まれた死蝕地帯の復旧機材で、自動作業機械ギアーズと言うの」

元は復旧用の機体だったのか。その戦闘能力からしてガッツリ戦闘用機体と思っていたんだが。いや、俺とシェフィの子供である〝戦天使ヴァルキリー〟もまた、戦後は復旧作業機体として働いていたから変でもないか。

「でも博士って、どこか抜けているというか、失敗が多い人だった」

「ええ。普及型ギアーズの試作機として生み出された私とキリエの、人格形成システムを作り込み過ぎてしまったそうで。そのこともあって私たちを単なる機械として扱うべきではない、と」

「だからわたし達は、普通の人と同じように、温かく、優しく、大事に育ててもらったの」

本当にフローリアン博士のことを慕っているんだと、彼女たちの声色や表情で痛いほど伝わってくる。フローリアン博士か。一度でいいからお会いしたいものだな、シェフィと一緒に。そしてフローリアン姉妹や、うちの"ヴァルキリー"を交えて語らい合いたいものだ。だから思わず「素敵な父親なんだな」と漏らしてしまった。

「もちろんよ。博士以上に素敵なお父さんなんて居ないわ」

「ありがとう、ルシリオン君。・・・私たちの弟や妹たち――私やキリエの後に博士が生み出したギアーズは、私たちみたいな体も心も持ってはいないけど、それでもエルトリアを侵し続ける死蝕を食い止めるという任務のために、今も一生懸命頑張ってくれているんです」

「わたし達の計算からして、あと数年で成果が出始めるって出たのよ。博士が人生を懸けた夢の成果が、わたし達が生まれた理由が、そして博士と一緒に抱いた希望が、あと数年で実を結ぶかもってことが判った。だから喜んだ。わたしも、お姉ちゃんも、博士も、みんな・・・！　なのに！！」

キリエが感情を爆発させた。怒りじゃない。悲しみが大半の苦しみ。アミティエが「博士は、その成果を見る事が出来ないんです」とキリエの話を継ぐように続けた。

「原因不明な不治の病気に罹ってしまって、博士はその数年の時間を生きられなくなってしまいました」

「あとちょっとなのに！　けど、博士にとってそのちょっとが、長すぎたのよ」

フローリアン姉妹は続ける。この時代への時間遡航および異世界間渡航のシステムは、フローリアン博士が偶然発見したオーパーツ――この世界で言うロストロギアを、博士が解析し、使用できるようになる直前までこぎつけた代物だったらしい。しかし博士は余程の人格者だったようで、そのシステムを封印したんだと言う。

「フローリアン博士は素晴らしい人というのは良く解った。だが、そのシステムを使えば、数年先の未来へ連れて行けるし、未来で病気の治療法を探すことも出来たんじゃないのか？　前者に関してはおそらく博士は拒んだかもしれないが、後者くらいなら許してくれると思うんだが」

「・・・博士はそれも拒みました。過去に戻って運命を変えることも、今を生きる事を放棄して未来へ逃げることも、それは人がしていいことじゃないと。問題はそれだけではないんです。時間移動できるのは1人か2人が限度。

しかも体に途轍もない負担が掛かってしまうので、人間である博士には、たとえ健康体であったとしても耐えられないんです。人より何十倍も頑丈な私たちですら負担が大きく、こちらに来てすぐはまともに動けませんでした」

クロノの問いに悲痛な声色で答えてくれたアミティエ。俺もクロノも、彼女たちが抱く悲痛な思いに俯きかけてしまう。

「でもわたしは諦めなかった。お姉ちゃんは、時間移動に頼らない別の角度から博士を救う手段を探していたけど、わたしは時間移動しかないって思ってずっとシミュレーションを繰り返した。だけど、博士の病気のきっかけになりそうな出来事、死蝕の大拡散とか、わたしが求める過去を変えようとすると、必ずと言うようにエラーが出たの。何度も何度も繰り返したけど、クリアになることはなかった。正直、諦めそうになった」

「今思えば、私もどこかで時間移動に懸けていたのかもしれません。だって世界を殺す死蝕なんて言う大規模な現象や、博士を蝕む不治の病も、どうすれば防げるのか、どうすれば治せるのか、何をしたって判らなかったから・・・。
でも、エラーを見る度に諦める思いが強くなりました。何が起こるか判らない状態で、とりあえず過去に戻って何かしてみる。それはあまりにもリスキーですから。生まれ育った世界の未来と、世界で一番大切な博士の夢と命。不確定なリスクだらけの天秤に載せられるわけがない」

「そんな時、わたしは見つけたの」

「それが、砕け得ぬ闇――システム：アンブレイカブル・ダーク・・・、あの基体が持つ、永遠結晶エグザミア・・・？」

俺がそう確認を取ると、キリエが「そうよ」と小さく頷いた。

「無限連環システムの核、エグザミア。死蝕で死に向かってるエルトリアを唯一救える希望。過去のどの時代でもなく、この時代限定で、わたしが持ち帰ることが出来る可能性があるって、シミュレーションの結果が出た。もうこれしかない、って思ったわ。闇統べる王ロード・ディアーチェが完全稼働していて、そのうえでＵ－Ｄをその制御下に置くタイミングが、昨夜訪れるはずだった・・・」

そこで区切ったキリエの言葉を代弁するように「失敗した、か」クロノが言うと、「違う。まだ失敗したわけじゃない。まだ、わたしはまだ活動できるから」と彼女はクロノを睨みつけた。すぐに俺は「負ったダメージを治してもらったから？」と訊く。

「ううん。それとは別よ。わたしやお姉ちゃんは、この過去の世界での活動制限があるの。わたし達の体を動かすエネルギーは無限じゃない。補給する必要がある。でも・・・」

「持てるだけのエネルギーを使い果たせば、私たちは活動停止します。この時代での補給はまず不可能かと」

俺とクロノは顔を見合わせる。スカリエッティなら、フローリアン姉妹のエネルギーを分析し、尚且つ生成できるんじゃないか、と。

これ以上、あの変態ドクターに借りなど作りたくはないが、今ここで彼女たちが活動停止すると、ヴィヴィオ達が未来に帰れない可能性が高い。

「問題はエネルギーだけじゃないんです。転移機があとどれだけ保つのかも判らないのが現状で。私とキリエがそれぞれ1回使っていますから。あとは、その、帰るだけの1回分だけなんです。それも近いうちに行わないと・・・」

「「行き当たりばったり過ぎる・・・」」

クロノと一緒に大きく溜息を吐く。こんな二度とエルトリアに帰れないかもしれないような計画を、確かなスケジュールも経てずに・・・って、それが難しいのか。そうまでしてフローリアン博士の夢を繋ぎたいんだな。

「・・・アミティエさん、キリエさん。話が少し変わりますが・・・」

2人の目の前にモニターを3枚と展開。表示するのは、未来から強制転移させられて迷子状態なヴィヴィオとアインハルト、そしてトーマ。トーマの中には融合騎のリリィという少女が居るらしいが、その姿は未だ捉えられていない。

「彼女たちも未来から来たようなんです。おそらくあなた達の時間移動の余波に巻き込まれたものと思われます。少女2人の方は13年後から、少年の方は16年前後の未来から」

「たぶん君の言う通りだと思う。時間移動時に生まれる膨大なエネルギーが、時間や空間を越えて何かを巻き込むことも考えられたから」

「・・・戻す方法は・・・？」

そう訊くと、アミティエとキリエが口を閉ざした。おいおい、待て。これぱっかりは本当にまずい。俺の視線が鋭くなったのが判ったのか「この方たちもちゃんと元の時代に戻れるように努力します」アミティエがそう言った。確かな方法が欲しかったんだがな・・・。

「・・・そうだ。肝心の話をまだ聞いていなかった。エグザミアを手に入れて、元の世界に戻った後、そのエグザミアをどうする気なんですか？　未来であり、管理局の影響力もない世界であっても、この時代からの代物で何かしらの悪影響があったとしては、管理局としては大きな失態です」

「答えはたった1つよ。エグザミアの膨大なエネルギーでなら、エルトリアを救うことが出来る。エルトリアが元の綺麗な姿に戻るにはきっと何十年、ううん何百年はかかる。博士の命には全然間に合わないだろうけど・・・。

それでも、博士の夢――エルトリアを救うことは出来る。その最初の一歩を、ほんの小さな一歩でもいい、前に進んだことを、博士に見せてあげたい・・・。博士の人生を懸けて成した研究や対策は、無駄じゃなかったんだって」

ポロポロと涙を零すキリエ。アミティエがキリエのベッドへと移り、そんな彼女を優しく抱き止めた。俺とクロノは顔を見合わせて小さく頷き合う。早い話、キリエは親孝行をしたかった。その手段は少し困ったものだが、その優しさを叩き潰すほど俺たちは鬼じゃない。こうして俺たちは、本件の最重要人物であるフローリアン姉妹から、その目的を聞き出すことが出来た。

Ｅｐｏｓ４９悪夢を終わらせる力／解放の弾丸～Ｚａｕｂｅｒｋｕｇｅｌ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

アミティエとキリエ、フローリアン姉妹からの事情を聴いた俺とクロノ。クロノはもうしばらく彼女たちの監視と言う名目の元に管理局に残る事にした。そして俺ひとりアースラへと帰艦。
何せ事情聴取後、アースラからマテリアルの内フェイトとすずかの姿を借りた、レヴィ・ザ・スラッシャーとアイル・ザ・フィアブリンガーの２基を確保したという、事態が大きく動いた連絡が入ったからな。
そういうわけでレヴィ達から話を聴くためにアースラへ戻ろうと言う時、俺がフローリアン姉妹を監視するために残って、クロノをアースラへ向かわせようか、と思ったんだが・・・

――認めるのは少々癪だが、戦力的に見て僕より強い君が現場へ向かった方が何かと便利だ。とりあえず君を動かす立場になってみたい。

貶しているのか褒めているのか判らない理由で俺がアースラへ戻ることになった。そしてアースラのトランスポーターへと戻る。まず俺を出迎えてくれたのが『ルシル、おかえり。ブリーフィングルームでみんなが待ってるよ』という、ブリッジに居るアリシアからの通信だ。

「ただいま、アリシア。状況はどうなってる？」

『ついさっき、シュテル・ザ・デストラクターが再起動したみたい。今はルシル待ちかな』

「研修生の身なんだけどな、俺。途中参加でも問題と思うんだが」

『管理局内の階級で言えばそうだろうけど、でも実際ルシルって普通に色々とハイスペックだし。戦力とか思考とかさ。今アースラに居るフェイト達の誰よりも上官に適していると思うよ』

「褒めても何も出ないぞ」

『ケチ♪』

アリシアとそんな他愛ない会話をしながら通路を歩き、ブリーフィングルームへ辿り着いた。室内にははやて達が勢揃いしていて、その側にはなのはの姿を借りたシュテルを含めたマテリアル３基が居た。

「遅くなってすまなかった。・・・君たちがマテリアルか。確か、はじめまして、になるのかな。八神ルシリオン・セインテストだ。よろしく頼む」

こうして直接顔を合わせ、言葉を交わすのはそう言えば初めてだったと思いだして自己紹介。

「そうですね。では改めてご挨拶を。理のマテリアル、星光の殲滅者シュテル・ザ・デストラクターです」

「律のマテリアル、氷災の征服者アイル・ザ・フィアブリンガーですわ」

「ボクはレヴィ・ザ・スラッシャー！雷刃の襲撃者で、力のマテリアルだぞ！」

シュテルとアイルはご丁寧にスカートの裾を僅かに摘まみ上げての一礼を見せ、レヴィは元気よく挙手しての自己紹介だった。本当にレヴィは子供っぽいと言うか、フェイトとは正反対な性格をしている。どちらかと言えばアリシア寄りだな。まぁ元気なのは良いことだ。

「かつての闇の書の主、オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードの血筋である貴方と出会えたこと、光栄に思います」

「むしろ本人かと思ってしまいます程にそっくりですわよね。見た目も、魔力反応も」

ボソッと呟いたアイリ。元は"闇の書"の一部だったんだ。俺の正体に感づいても仕方ないとは思うが、こんなところで喋られるのだけは勘弁願いたい。俺が人違いだと返そうとしたら、「それじゃあみんなも揃ったことだし、話を聞かせてもらおうっか。シュテル。お願い出来る？」シャルが良いタイミングで話を元に戻してくれた。

（ありがとう、シャル）

「そうですね。では、コホン。まずシステムＵ－Ｄについて軽く説明します。あの子のスペックですが、その耐久力はナハトヴァールを軽く凌駕し、そのうえ人間サイズでの高速戦も行えます。攻撃力については、直撃は即撃墜となると思ってください」

実際にナハトヴァール・アウグスタと戦闘を繰り広げたなのは達の表情に陰りが生まれる。俺としても後でその戦闘データを観させてもらったが、アレはなかなかに凶悪な防御力だった。とは言え、アレくらいならまだ俺単独でも倒せるレベルだ。

「そんなあの子をどうにかするには、白兵戦で勝つ必要があります。が、正直に申しますと我々マテリアルや皆さんが束になったところで、完全稼働したあの子に勝つのはまず不可能です」

「でもあなた達は見つけることが出来た。砕け得ぬ闇を止める方法を」

「正確には戦闘動作の停止方法ですが」

「それでも十分や。わたしらはヤミちゃんを倒したいんやなくて、助けたいやから」

はやての言葉にみんなが頷いていく。そもそも今では撃破するのではなく解放したいと言うのが、はやて達の思いだ。はやて達の思いを知って僅かに表情を柔らかくしたシュテルと、未だに理由は解ら

ないが不機嫌っぽいアイルが「ヤミちゃん？」と小首を傾げる。

「Ｕ－Ｄのことだよ。砕け得ぬ闇の闇から取ったって」

レヴィがいち早く答えると、シュテルとアイルは「なるほど」と納得。特段反対するような事柄でもなかったのかシュテルは「対システムＵ－Ｄプログラムは大別して、ミッド術式とベルカ術式の２種類があります」とさっさと本題へと入った。

「いずれもカートリッジユニットに装填することで効果を発揮します。カートリッジの効果が効いている間だけ、Ｕ－Ｄに決定打を与えることが出来るのです」

シュテルがそこまで言ったところで俺たちは理解した。砕け得ぬ闇と戦うことが出来るのは「カートリッジシステムを搭載したデバイス持ちしか戦えないということね」シャルの言うように、限られた人員だけだということを。

「ベルカ式の場合は、わたしとルシルとシグナムとヴィータね」

「ミッド式の場合は、私とアリサちゃんとフェイトちゃんだよね」

なのはとシャルが、カートリッジシステムを搭載したデバイスを持つ俺たちの顔を順繰りに見回す。はやての表情に陰りが生まれたのを見逃さなかったが、砕け得ぬ闇への対抗策には条件があるということで俺からは何も言えない。

「そう言えばシュテル。君の言うカートリッジとやらは、俺たち人数分に用意されるのか？」

シュテルに訊ねると、彼女はアイルと顔を見合わせた後、「一応は全員にお渡しします」と気になる言い方をした。

「私とシュテルだけでの充填時間・調整の関係上、全員に完全な形でカートリッジを渡すのは難しいのですわ。確実性を持たせられるのは４発までかと思いますわ」

「あれ、レヴィは？」

「力だけなら私たちの誰よりも強いですが・・・」

「その分、細かなコントロールが苦手なのですわ。要するに戦闘しか能の無い馬鹿なのですわ」

「あー、またバカって言った！　マテリアルの存在意義のことを考えれば、戦いで強い方が偉いんだぞー！」

「そこに知能が備わっていなければただの獣ですわ。　はぁ、フラムが居てくだされば出来ることが増えたのですが」

「フラムだって、どっちかと言えばボク寄りじゃんかよー！」

レヴィとアイルが口喧嘩を始めたことで、「またかぁ」とフェイトとすずか、なのはやアリサが止めに入る。どうやらあの２人には何

かしらの確執があるようだな。とここで「レヴィ、アイル。今すぐお静かに」とシュテルが若干冷ややかな声で2人を止めた。レヴィとアイルは「はいっ」「はいですわ！」と即停戦。

「我々はそれぞれの長所があり、それと同じように短所があります。それを補ってこそのマテリアル四騎士。アイル。律のマテリアルであれば、それくらいは理解しているはず」

「申し訳ありませんわ」

「レヴィ。確かに、マテリアルは戦力あってこそのプログラムですが、それだけに留まらないのも事実。力に任せて逆に振り回されるようではいけません」

「解ってるよー」

「コホン。話が逸れました。フラムが再起動していただければまだ余裕を以ってみなさんにカートリッジをお渡しする事が出来ますが、今はない物ねだりをしている余裕も暇もありません。ですので、主戦力のミッド式・ベルカ式それぞれ2人ずつ、4人の使い手を選択していただければと思います」

そういうわけで、ミッドからはなのはとフェイトとアリサの内2人、ベルカから俺とシグナムとヴィータ、そしてシャルの内2人を選出することに。さぁどうやって決めようかとなったところで、「ルシル、お前さ、ミッド式も扱えるよな」ヴィータがそんなことを言ってきた。真っ先に反応するのが「ちょ、待って、待って、ヴィータ

ちゃん！　私たちが居るって言ったよ！？」なのはだった。

「これまで手伝ってくれたことに関しちゃ感謝してっけど、元々はうちの身内の問題なんだから、お前らはすっこんでろよ。それに、お前らよかルシルの方が強ぇしな」

「ええー、そんなこと言わずにー。私たちだってヤミちゃんを止めてあげたいもん」

「そうよ。ここでお払い箱だなんて納得いかないわ」

「ルシル・・・。ルシルも、私たちはもう用済みで、私たちの代わりに自分がやった方が良いと思うの？」

フェイトの悲しげな瞳にジッと見られるのは耐えられない、これだけは耐えられない。しかもうるうるとしているし。思いっきり抱きしめたい衝動に駆られた。しかしそれだけは今・・・、そしてこれからもやってはいけないことだと、理性で抑え込む。スッと目を逸らしつつ、「ヴィータ。なのは達にも手伝ってもらおう」と俺は彼女たち側へ付いた。

「「「やった！」」」

俺が味方に付いたことで喜び合うなのは達。その反面、「んだよ」と膨れっ面になるヴィータ。

「俺はあくまでベルカ式の騎士だ。ミッド式の使い手が必要と言う

のなら、なのは達の方が良い。それに、彼女たちは強い。決して俺より下だなんて思えない」

これも未来への大事な経験値になるだろう。先の次元世界と同じ考えでいい。俺が出過ぎることなく、彼女たちを育てる方向で付き合っていけばいい。

「それでは、あとは皆さんが話し合って決めてください。私とアイルは早速作業に入りますので、決定したら連絡を。アイル、手伝ってください。レヴィ、あなたも一応」

「判りましたわわ」「はーい」

シュテル達がブリーフィングルームを後にする。と、「ごめん、ちょっと席外すな」はやてと、あの子に手を引かれるようにしてリインフォースがシュテル達の後を追って行った。きっと自分たちもどうにかして参戦できないか、と確認しに行ったんだろうな。

最後の夜天の主が、そして管制融合騎であるリインフォースが、今回の一件の最終決戦を不参加で終わるような結末は、俺たち八神家も納得していない。俺たち八神家メンバーはそれが解っているからこそ「いってらっしゃい」と見送る。

「そんじゃ、どうやって決めようか、ベルカ組は」

「あ？　シャルロッテはハズレ決定だろうがよ。さっきもなのはに言ったように、これはうちらの問題だ」

「こればかりは譲れんな」
「確かにこれは八神家の問題でもあるだろうけど、管理局員として不参加ってわけには――」
「あたしやシグナム、ルシルだって今や管理局員だっつうの」
「1人はルシリオンだな。あとは、私かヴィータだが」
「だな。シグナム。あたしとお前のどっちかだ」
「ちょっと！　わたしを勝手に脱落させないでよ！」
「それと、俺を勝手に加えるな。シグナムとヴィータでいいんじゃないのか？」
「ほら、ルシルが入らないなら、わたしが入る！　そしてシグナムとヴィータのどっちかで決めればいいじゃん！」
「アホかお前。空戦Ｓ＋のルシルと、空戦に関しちゃ素人レベルなら陸戦ＡＡＡ＋なお前を比べるってルシルに失礼過ぎんだろうがよ。砕け得ぬ闇は空戦できるし、速ぇし、硬ぇし、高ぇし。それに付いて行けんのって、空戦がしっかり出来るあたしとシグナムとルシルくらいだ。つうわけで、お前クビ」
「うぐぐ・・・！　言い返せないのが超絶悔しい・・・！」

シャル脱落決定。そして俺の参戦が勝手に確定。ガクッと四つん這いになって本気でヘコむシャルから視線を逸らしたヴィータが「もしはやてとリインフォースが参戦することになったら退くことになるだろうけど」と言ってシグナムと向き合う。
シュテルとアイルの2人掛かりでカートリッジ作成は余裕ギリギリだという。そこに、カートリッジとは違う手法を新たに作り出すとなると、自然的にカートリッジの作成が遅れることになるだろうからな。はやてへのプログラム付与とベルカ式カートリッジ1発分になるわけだ。

「ああ。しかしそれが叶わなかった時の為にも、私とお前、どちらが参戦するかを決めよう」

「応とも！　下手にバトって疲れちゃ本末転倒だから、ここは平和的にジャンケンだ！」

「いいだろう。望むところだ」

シグナムとヴィータが、はやてとリインフォースの代役になるかもしれないという覚悟の上で、「ジャンケン、ポイ！」ジャンケンを始めた。と言うか、シグナムがジャンケンってちょっとシュール。真剣な表情でグー・チョキ・パーと勢いよく手を出すシグナムが、ちょっと可愛いと思ってしまった。

「ふむ。私の勝ちだな」

「誰も1回勝負なんて言ってねぇだろ！　3回勝負だ！」

シグナムとヴィータを遠巻きに眺めていたなのは達に俺は気付き、「ん？　なのは達は決まったのか？」そう訊くと、「アリサが辞退してくれたんだ」とフェイトが答えてくれた。

「まぁあたしは空戦できないし、魔力量もなのはやフェイトより下だしさ。レガリアを使えたらまた違うだろうけど、どっちにしろまともに空戦が出来ないんじゃ無理な話なのよね～」

「そういうわけで、ミッドは私とフェイトちゃんの２人になりました」

「アリサやすずか達の分まで頑張るからね！」

「ありがとう、フェイトちゃん。なのはちゃんも頑張ってね♪」

「頑張んなさいよ、ミッド式代表！」

「「うんっ！」」

ほんわか空気に包まれているミッド式チーム。それに比べてうちのベルカ式チームときたらもう。シャルは、「なのは達と一緒に戦うことも出来ないわたしは愚図なの？」としくしく泣き始めるし、「ご、５回！　いんや１０回勝負だぞ！」ヴィータはなかなか負けを認めないし、「しつこいぞ、ヴィータ。私の勝ちでもういいだろう？」とシグナムも呆れ果てている。

「あらあら。なのはちゃん達とは違って、うちの家族はダメねぇ」

そう言ってシャマルが苦笑する。ザフィーラもどことなく呆れているようだ。そうして俺たちはシグナムとヴィータのジャンケン勝負を見学。あいこが何度か続いて通算３０回以上の激闘の末、「よっしゃあああ！！」ヴィータが勝った。

「どうだ見たか、あたしの実力！」

「さんざん駄々を捏ね、勝利回数を引き延ばした上での運だろうが」

「なんとでも言え！　勝ちは勝ちだかんな！」

ハイテンションで勝鬨を上げるヴィータと正反対にローテンションなシグナム。とここで、「ルシル。お前とも勝負だ！」なんてヴィータが仕掛けてきた。意味が解らずに小首を傾げて見せる。

「お前は本当に強ぇよ。それはあたしだって認めてる。だけどやっぱ、はやてとリインフォースが参加する事になった場合、あたしが弾かれんのはなんか・・嫌だ。だからお前を倒して、あたしがはやて達を支える！」

そう力説したヴィータに「そうか。じゃあどうぞ、どうぞ」と俺の参加権利をすぐに譲る。すると「ああ！？　もうちょっと粘れよ！　なんかあたし恥ずいじゃんかよ！」って怒鳴ってきた。どうしよう、面倒くさい。

「俺はそれでもいいと思うぞ。かつての主であるオーディンの関係者、くらいの権利はあるが、だからと言ってその権利を主張して無理やりにでも参戦権利を奪おうとは思わない」

「なんだよ、それ。オーディンなら絶対にそんなこと言わねぇ。オーディンならきっと・・・」

「俺はオーディンじゃない、ということだよ。でも、俺の素直さに納得いかないと言うのなら、本気でジャンケンして決めるか？」

何も知らなければ、先の次元世界の事を知らなければ、俺はこの権利を主張して参戦していただろうな。俺の話に「乗った。それでいい。１０勝で決まりな」とヴィータが応じて、「ジャンケン・・・ポン！」勝負することに。

そして「俺の勝ちだな・・・」という結果に落ち着く。動体視力と反射神経はそれなりに戻ってきたからヴィータが手を出す瞬間の形、グーかチョキかパーくらいは見分けられ、途中で変更することも出来る。そんな一種のズルをしないためにヴィータの手を見ずにジャンケンを受けたんだが、結局勝ってしまった。

「決まりだな。ベルカ式からはルシリオンとヴィータ。ミッド式からは高町とテスタロッサだ」

シグナムが主戦力となる俺たち４人を見回すと、「うぅ。もっと空戦練習しておけばよかった」泣く泣く不参戦を認めたシャルがモニターを展開して、「シュテル。こっちは決まったよ・・・」シュテルに通信を繋げた。

『・・・どういった方法で決め、あなたが落ちたのかは判りませんが、メンバーの選出が終わったのは判りました。もうしばらく時間が掛かるため、そのまま待機をお願いします』

「シュテル。はやては・・・？」

モニターに映るシュテルの側に、はやてやリインフォースの姿はない。それが気になって訊いてみたら『今はアイルと一緒です。私はカートリッジ作成を行い、アイルには夜天の主への対U－Dプログラム付与を担当してもらっています』と答えてくれた。

「本当に出来たのか？　はやてにはカートリッジシステム搭載デバイスが無いのに・・・」

『安全性は保障できませんが、出来ないことはありません。夜天の主には魔導書がありますし、魔導書に対U－Dプログラムを付与すればいける、と踏みました。守護騎士の皆さんには仰りたいことがあるでしょうが、これは夜天の主の強い意志での決定。私を睨まれても困ります』

「別に睨んじゃいねぇよ。はやてとリインフォースがそれでいいってんなら、あたしらはそれに従うだけだ」

普段よりも目付きが悪くなっていたヴィータが真っ先にそう返す。シグナムも「ああ。しかし出来るだけ安全性を高めてもらいたい」と小さく頭を下げた。シュテルは『もちろんです』と首肯して応え

てくれた。

『主戦力メンバーから弾かれた方は、補助要員として主力メンバーのサポートをしていただくことになります。これはいま選出された方々が、我々が作ったカートリッジの制御率に何かしらの問題があった場合の補欠と考えてください』

補欠となったシグナムが頷き返す。が、アリサは若干困惑気味。空戦が出来ないからこそ退いたのに、なのはとフェイトに何かしら、まぁカートリッジの制御に問題があった場合、自分が繰り上げ主戦力になるという不安からだろう。

『では、そちらの主力メンバーを教えてください。その方々の魔法や戦闘スタイルに合わせて調整しますので』

「えっと、ミッド式は私、高町なのはと・・・」

「フェイト・テスタロッサと・・・」

なのはとフェイトの視線がアリサに向かう。２人だけでなく俺たちからも視線を受けたアリサは「えっと・・・」と言い淀んだのを見て、「俺、八神ルシリオン・セインテストだ」と名乗りを上げる。それを聞いて絶句するみんな。シュテルももちろん『ルシリオン。あなたはベルカ式では？』と訊いてきた。

「ミッドとベルカ、それぞれ１発ずつ俺が担当する。俺のエヴェストルムにはカートリッジシステムが２基搭載されている。片方にミ

ッド式、もう片方にベルカ式という風に使わせてもらいたい。可能か否か、教えてほしい」

『・・・可能です。その分、制御するのが格段に難しくなります。下手をすれば振り回されてしまい、最悪デバイスの破損という可能性もあります。その覚悟はおありですか？』

「エヴェストルムの設計図は受け継がれている。万が一、今のエヴェストルムを失う事になっても、一から作り直せる。というか、これしきの事を制御できなければ俺は、俺の魔法にすでに振り回されていることだろうし。だから・・・問題ない」

どういった魔法プログラムを搭載されたカートリッジから判らないが、魔術式に比べればどうってことはないはず。使いこなして見せるさ。シグナム達は俺の独断に文句はないのか黙っていてくれるし、『ではミッド式は、なのはとフェイトを主力、ルシリオンを補欠ということでよろしいですね』無事に決定した。

「ベルカ式は、あたしとルシルが主力で、シグナムが補欠なんだけど。はやてが入ったら、あたしかルシル、抜けなきゃなんねぇのか？」

『いいえ。カートリッジは私が、夜天の書にはアイルがそれぞれ役割分担していますから、誰かが抜けなければならないということにはなりません。が、カートリッジの制御が出来なければ抜けてもらいますが』

「ならいいんだ」

『ではベルカ式は、ルシリオンと紅の鉄騎が主力で、烈火の将が補欠ということでよろしいですね』

「「「ああ」」」

3人で首肯する。シュテルが『判りました。それぞれの魔導に合った調整を行いますので、もうしばら――』そこまで言いかけたところで、『わわ！？』彼女の頭上にアリサの姿を借りたマテリアルであるフラム・ザ・リヴェンジャーが突如として出現し、『きゃん！？』シュテルへと落ちた。

『フ、フラム！？　どういった再起動ですか！？　早く退きなさい！　重い！』

『も、申し訳ないのであります、シュテるん！　陛下に強制的に再起動されたのでありますよ。お主もそろそろ働いて来んか、と蹴り出されたのであります・・・』

モニター画面下からドタバタと慌ただしい効果音が漏れ聞こえてくる。乱れた髪とバリアジャケットのままシュテルとフラムが画面下からにゅっと現れる。そして髪を手櫛で治しながら『コホン、失礼しました』シュテルが話を切りだす。

『フラムの再起動によって状況がまた変わりましたので、主力や補欠と言った括りを無くします。これよりフラムと共に急ぎカートリッジの作成を行いますので、補欠や脱落した方々を含めてもうしば

らくお待ちを。完成後、実戦形式で稼働確認をしていただきますので、そのおつもりで』

プツンと切れる通信。さっきまでのジャンケンはなんだったのかと若干へコみながらも、ベルカ式の戦力が確実にアップしたことには純粋に喜ばしい。シグナムも自分が主力へと繰り上がったことで安堵しているのを見ていると、「あのさ、ルシル。さっきはその・・・」アリサが声を掛けてきた。

「出過ぎた真似だったか？」

「そうじゃないわよ。ちょっと自分に自信が無かったから・・・。助けてくれてありがとうって」

「どういたしまして。それでどうする？　アリサ。シュテルの言い方だと、脱落したシャルやアリサの分のカートリッジも作成されると思うが」

空戦が出来ないからという理由で脱落したと知らないシュテルは、カートリッジシステム搭載デバイスを持つシャルやアリサの分まで作るはずだ。だからそうなった時、アリサはどうするのかと訊ねると、「そっか！　わたしの分のカートリッジも出来るんだ！」と真っ先にシャルが食いついた。

「ベルカ式のメンバーばかりが増えていくんだ。ここでミッド式のアリサも改めて参戦の決意を、と思うんだが？」

「でも、あたしって空戦できないし、足手まといになるんじゃ・・・」

空戦が出来ないという大きな欠点がアリサの表情を曇らせる。同じようなシャルは「やっほーい！」と小躍りしているのにな。そんな悩んでいるアリサに「そんなことないよ、アリサちゃん！」なのはがそう声を掛ける。

「空戦が出来なくても、アリサの火力は頼りになるし」

「いつもみたいに魔法陣を足場にして戦えばいいよ」

フェイトとすずかもそう続き、最後に俺が「剣士であるアリサに言うようなことじゃないが、固定砲台としても十分な戦力だ」そう告げた。アリサのクレイモアフォームからの特大斬撃や砲撃は普段でも十分な火力だが、時刻制限付きブーストであるレガリア起動中ではさらに強大なものになる。

「それに、戦うのはアリサひとりだけじゃないしな。みんながついている」

「うん、ルシル君の言う通りだよ。前線で戦えない私もちゃんとサポートするから。防御とか足場とか、任せてね」

個人での戦闘では不可能なことも、団体での戦闘なら何でも出来る。俺だって空戦が不慣れというアリサやシャルの盾になるくらいは出来る。大戦時の俺は、はやてやすずかのような後方支援型だったく

らいだし。みんなでアリサやシャルのサポートをすれば、砕け得ぬ闇を助けることが出来ると、そう信じている。

「・・・ありがとう。なのは、すずか、フェイト、ルシル。あたし、やるわ」

こうしてアリサも対砕け得ぬ闇の解放作戦の参加を決めた。それから俺たちはシュテル達からのカートリッジ作成が終わったという知らせが来るまで、ブリーフィングルームで待機していたんだが・・・

『フェイト、アルフ！　どうしよう、ママとリニスが！！』

ブリッジのアリシアからそんな通信が急に入った。

Ｅｐｏｓ５０－Ａ束の間の奇跡／家族は巡り合う～Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａ　Ｆａｍｉｌｙ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

砕け得ぬ闇、システムＵ－Ｄ。マテリアルの子たちが追い求めていた、"闇の書"の真の闇としての基体。ヴィータの歳くらいの女の子であるＵ－Ｄ（私たちの間では、ヤミちゃん）の実力は、以前私たちが苦労して倒したナハトヴァールを軽く凌駕していて、普通に戦うことすらも難しい。

だけど、ヤミちゃんの背負う悲しみや苦しみを私たちは知った。傷つけたくないから誰とも関わり合いたくない。そんなことを聞いちゃったら、もっと放っておけないって思うのが私たちで。でもまともに戦えない以上は、助けるどころか逆に倒されてしまう。

でもその問題もクリア。最初は敵だったマテリアル達が協力してくれた。今、シュテルを筆頭に、ヤミちゃんの驚異的な戦闘能力を停止させるための切り札――対システムＵ－Ｄカートリッジを作ってくれている。完成したっていう連絡を待っていた時・・・

『フェイト、アルフ！　どうしよう、ママとリニスが！』

ブリッジのアリシアから突然そんな通信が入った。すごく取り乱しているアリシアに「母さんとリニスの残滓が現れたの！？」って訊き返す。アルフが少し前レヴィに怒っていた理由が、リニスの残滓と会って戦ったからだって聞いた。だからもしかして、って思ったからそう訊いたらアリシアは強く頷き返してくれた。

『こちらエイミィ。闇の欠片が他にも複数再出現！　出撃できる子いる！？』

「私とザフィーラは出れます！」

真っ先にシャマル先生（本局で会った時、他の局員からそう呼ばれていたから、私たちもそう呼ぶようになった）が名乗りを上げて、ザフィーラも「うむ」って首肯した。続けて「私も出られます！」すずかが挙手。

「私も出ます！」

「あたしも出るよ！」

母さんとリニスの残滓が発生したなら、娘であり家族である私が、アルフが出ないと。とここで「シュテル。カートリッジの完成までどれくらいある？」ルシルが、シュテルへと通信を繋げる。

『そう間もなく、ベルカ式組のカートリッジが完成しますが・・・。それが何か？』

「いや、ありがとう」

カートリッジの作成状況を聴いたルシルはシュテルとの通信を切り、「ヴィータ、シグナム。それとシャル。俺たちは残ろう」って言った。対U－D用カートリッジの作成が終われば、そのカートリッジ

を制御できるかどうかの試験実戦をしないといけない。そういうわけもあって、ルシルとシグナムとヴィータ、シャルは待機することになった。

『フェイト、アルフ！　わたしも連れてって！』

「・・・うん、行こう、アリシア！」

アリシアは、２０年以上前の事故で魂だけの存在（アリシア談）になってからも母さんや私たちの生活を、夢のような感覚で見ていたってことだから、リニスが使い魔化した姿も当然知っている。それに母さんが本当に優しかった頃のことも、私よりずっと深く知っている。

「よし。それじゃあわたし、ルシル、シグナム、ヴィータは居残り。なのは達は残滓討伐を。フェイト、アルフ、アリシアは・・・こちらでプレシアとリニスの居場所へ誘導するから向かって」

シャルの指示に私たちは「はいっ！」そう応じて、ブリーフィングルームを後にする。

「母さん、リニス・・・。たとえ残滓であっても・・・ちゃんと・・・！」

話が出来るといいな。トランスポーターからみんなが順次出撃して行くのを見守って、私とアルフは「お待たせ！」アリシアの到着を待った。アルフが「あたしが抱えて飛ぶよ。しっかり掴まってな、

アリシア」アリシアを背後から抱きかかえた。

「アリシアにはバリアジャケットが無いから、高速飛行は出来ないから気を付けてね、アルフ」

「ああ」

「お世話になります！」

そしてみんなに遅れること少し、私たちも出撃した。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒？？？？†††

気が付けば見知らぬ世界に飛ばされて、小っこい八神司令や司令の目付きの悪いそっくりさんと出会って、さらにはなんとかの闇に負けちゃうし。もう全然意味が解らない。闇とかいう小さな女の子の攻撃から強制転移で逃れた俺とリリィは、森の中にあった洞窟の中でひっそり野宿。見知らぬ世界で一夜を過ごした。

「――ねえ、トーマ。もしかして、なんだけど・・・」

たき火の後始末をしている俺の隣に居るリリィが立てた推測を思い返す。それは「信じたくないけどね。未来から過去に飛ばされたなんて」俺とリリィがどういった理由かは判らないけど、時間移動をしてしまったってことで。でも八神司令はどう見ても八神司令で。変身でも演技でもないってことも、実際に話したことでなんとなく解っている俺も居るわけで。

「はぁ。とにかく、だ。もし本当に時間移動をしたのなら、この時代の八神司令たちとはあんまり関わらない方が良いね」

「どうして？」

「フィクション作品だと、過去の人たちに未来のことを話したり、何か物を壊したりとか、未来へ繋がる出来事に干渉すると、未来が変わるって話があるんだ」

「え、そうなの？　未来って変わっちゃうものなの？」

「そりゃあね。何が原因で変わるかは判らないけど、場合によっちゃ俺とリリィが会えなくなっちゃったりとかするかな。特に、八神司令たちと関わったりしたら、きっとその可能性も高くなるんじゃないかって」

「あうー、それは嫌だよぉ」

俺だってそんな未来は嫌だ。いま知り合ってる人、仲良くなれた人、出会えた人、たとえ嫌いな人でも、その積み重ねが俺たちの知っている今なんだ。だからその未来を変えたくない。

とまぁそういうわけで、それを踏まえた上で「どうすれば帰ることが出来るか調べなきゃいけない」んだけど、俺とリリィだけで調べて、上手く帰る方法が判ったとしても、「俺、転送魔法使えないんだよな・・・」俺たちだけで成し得るのか不安でしょうがない。

「でも、ちゃんと帰らないとダメだよね」

「もちろん！　楽しいばかりじゃない、大変なこともあるけど、あの今が俺は気に入ってる。だから――」

≪警告。脅威判定を検知。戦闘中と思われ、徐々にこちらへ接近して来ます≫

側に浮いていた"銀十字の書"から警告。戦闘中ということは、きっと八神司令たちだ。下手に戦闘に巻き込まれないために「リリィ！」とリアクトする。リリィ、リリィ・シュトロゼック。リアクターっていう、俺がディバイダー（俺の持つ銃のことだ）で暴走しないように助けてくれる大切なパートナーだ。

「一応、誰が戦っているのか確認してみよう」

もしかしたら、俺たちをこの時代へ飛ばした張本人かも知れない。それを確認するためにも。木の上に跳び上がって、こっちに向かって来る誰かを視認する。1人は女の人だ。帽子を被った、スタイルの良いお姉さん。その人はステッキのようなデバイスで、『トーマのそっくりさん！？』俺？と戦っていた。

『トーマ！』

「ああ、判ってる！　行こう、助けないと！」

空戦へと移行する。俺に気付いたその女の人が「同じ格好！　新手

ですか！？」って俺へとステッキの先端を向けてきた。俺は慌てて「違います、違います！　どっちかって言うと――」こっちに襲い掛かって来ようとしていたもう1人の俺へ斬撃――クリムゾンスラッシュを放って迎撃。

「『味方です！！』」

「味方・・・？　それに声が2人分・・・！」

その人の疑問に答えたいけど「とりあえずここは俺たちに任せて下がっていてください！」もう1人の俺をどうにかしないと。俺の偽者は「脅威判定検知。殲滅する」なんていうか「根暗！？」だった。

「なぁリリィ、俺ってモノマネされるとあんな暗い感じなのかな・・・？」

『そ、そんなことないよ！　トーマは明るくて面白いし！・・・たぶん、未来の別の可能性・・・』

大剣――ディバイダーを振るってきた偽者の斬撃をひょいっと躱しながら「別の可能性って・・・？」負けじとディバイダーを振るう。俺の疑問に『たとえば、銀十字の闇に呑み込まれたうえで生き残っちゃったら、みたいな』リリィはそう答えた。スゥちゃん達に救われることがなかったかもしれない未来の俺。それがこんな根暗になるのか。俺は運が良かったんだな。改めて俺とリリィを救ってくれたスゥちゃん達に感謝する。

「銀十字」

偽者は"銀十字"のページで、俺の繰り出した斬撃を防いだ。すかさず二撃目の斬撃を叩き込む。ページに防がれる斬撃。だけどこれで終わりじゃない。こっちも「銀十字！」を使わせてもらう。

側にある"銀十字"から数枚のページが飛び出して、偽者の俺を包囲。そしてページ表面から発射したエネルギー弾で攻撃。偽者はその直撃をまともに受けてよろめいて、前面に展開させていたページを解除した。そのチャンスを見逃す事なく「シルバーハンマー！！」ディバイダー先端から砲撃を零距離発射。

「どうだ！！」

『・・・偽者の撃破を確認！』

「よしっ。俺たちドライバーとリアクター、誇張抜きの一心同体！偽者なんかに負けない！」

『うんっ！』

偽者の俺はスゥちゃん達と行動を一緒にしない所為か成長できていないみたいで、戦闘パターンが直線的で見切り易かった。とにかく「あの、大丈夫ですか？　なんかすいみません、俺の偽者がご迷惑を」って、襲われていた女の人に深々と頭を下げる。

「あ、いえ。助けてくださってありがとうございました。いきなり襲われてしまって困っていたんです。魔法効果も効きづらくて。ど

ういう原理なんでしょう？　ＡＭＦでしょうか？」

俺たちディバイダー使いは、魔導殺しなんていう力を持っている。相手の魔法攻撃を無効化したり出来るから、俺たちの時代じゃ恐れられてる。それを悪用してるフッケバインとかも居るし。たぶんこの時代で、魔導殺しに対してＡＥＣ武装無しで真っ向から戦えるのは、魔術っていう特別な魔法を使うルシルさんくらいだろうな。生まれつき使えるって教えてくれたし。

「あ、あー、その企業秘密ということでその・・・」

『ごめんなさい』

ディバイダーとかフッケバインとかティー・シーとか、未来に関わることは喋れないからそう誤魔化すしかない。すると「あ、いえいえ。あ、初対面なあなた達に訊ねるのもどうかと思いますが、１つお聞きしたい事があるのですが」代わりに別のことを訊かれた。俺とリリィのことを知らないみたいだから、たぶん管理局とは関係ない。もしかして俺たちみたいにこの時代に飛ばされてきたのかも。だったら来る限り力になってあげないと。スゥちゃんに顔向け出来ない。

「はいっ。俺で答えられることなら！」

「ありがとうございます。あ、私、リニスとお申します」

綺麗な一礼をしたリニスさん。うん、知らない名前だ。すでに過去

の八神司令に名乗ってしまっていることもあって「俺、トーマっていいます」『私はリリィです』ファーストネームだけだけど自己紹介。

「トーマさんとリリィさん。あの、迷子の女の子を捜しているんです。これくらいの背で、金色の長い髪を、こう・・・頭の両サイドで結っていて・・・」

リニスさんが手振りでその女の子の身体的特徴を教えてくれた。身長は6、7歳くらい。続けてリニスさんは「その子の側にはいつも、このくらいの女の子で、額に赤い宝石があって、オレンジ色の毛並みをした狼の耳と尻尾を持った使い魔が一緒で・・・」もう1人の特徴も教えてくれた。

『ねえ、トーマ。私、ちょっと心当たりがあったりする、かも・・・』

「あー、うん。でも人違いだと思う。万が一、この時代のフェイトさんとアルフの事だとしても、身長が低過ぎる」

金髪というのはあんまり珍しくないけど、額に赤い宝石を有した狼の使い魔となると、フェイトさんの使い魔であるアルフの特徴と一致する。リリィが『その子たちのお名前って・・・？』って訊くと、「金髪の子はフェイト、使い魔はアルフ、と」リニスさんがハッキリとそう答えてくれた。

『この時代のフェイトさんとアルフって、そんなに身長が低いのか

な・・・？』

「実際に会ったことが無いから判らないけどね。とにかく、これば
っかりは申し訳ないけど・・・」

リリィと相談して、知りません、と答えようとした時、「何か心当
たりがあるみたいですね」って図星を指してきた。黙ってしまうと、
「教えてください。あの子たちはどこに？」って少し語調を強めて
訊いてきた。

「俺たちの知っているフェイトさんと、リニスさんの言うフェイト
ちゃんはきっと人違いですよ。俺の知っているフェイトさんは２５
歳ですから」

『そ、そうです！　私たちの知ってるフェイトさんは未来のフェイ
トさんですから！』

俺の知っているフェイトさん２５歳が、リニスさんの捜しているフ
ェイトさんと同一人物だって思われないだろうと思ったから年齢の
ことを言ってみたんだけど、「リリィ！？」のうっかりが発動、一
瞬にして無駄な作戦に。

『え、あっ、わわっ、ごめんね、トーマ！』

「未来のフェイト？　えっと、どういう・・・？」

うわ、思いっきり訝しげな目を向けられちゃってる。俺は「えっと、

言い間違いですよ、やだなぁ、リリィ！」必死に誤魔化す。リリィも『は、はい、そうです、言い間違いです！』と参加。リニスさんは「なにと言い間違えたんでしょうか？」と深くツッコみを入れてきた。何か、何か、未来と言い間違えられるような単語。必死に考えるけど、「ダメだ、ない！」諦めた。

「あのぉ、リニスさんって、フェイトさん達とはどういったお知り合いで？」

「・・・家庭教師です。フェイトとアルフのお世話をしていました」

「（あれ？　この話、聞いたことがあるような・・・）あの、ました、って過去形・・・」

家庭教師、お世話役。アリシアさんからそんな話をチラッと聞いたような気がする。というか、フェイトさんとアルフだけじゃなくね？

フェイトさんのお姉さんであるアリシアさんの名前も出すべきじゃ・・・。

「あの、こんなことを言ったら頭がおかしいと思われるかもしれませんが、私・・・使い魔なんです」

被っていた帽子を取るとリニスさんの頭には『猫ちゃんの耳♪』リリィが弾んだ声で言うように猫耳があった。しかもお尻の方からも猫の尻尾が生えた。でもそれがおかしな事にはならないと思うんだけど。けど次の言葉で、何がおかしなことなのかと理解した。リニスさんが「私、一度死んでいるはずなんです」なんて言ったから。

「私は使い魔としての契約を解かれ、その命を終わらせたはずなんです。ですから、どうしてこうやって存在しているのか、そもそもここがどこかなのかも判らない状態で」

「俺たちと同じなのかな、それ。俺とリリィ、どうやら未来からこの時代に飛ばされて来たみたいで」

『もしかしてリニスさん、過去から飛ばされてきたのかもって』

俺とリリィも大概おかしなことを言ってるよな、これ。時間移動とかありえなさすぎて。だけどリニスさんは「ああ、だからさっき未来のフェイトがどうとか」って乗ってきてくれた。俺が「信じてくれるんですか？」って訊くと、リニスさんは「現状把握はまず色々な可能性を取り入れることから始まりますから」って微笑んだ。

「あの、トーマさん達は、２５歳のフェイトを知っている風ですけど、それは本当ですか？」

こう言っちゃなんだけど、リニスさんはこの時代じゃ亡くなってる人だ。だから未来のことを教えてもたぶん問題ないはず。それに未来のフェイトさんのことを教えるのはきっと良いことのはず。

『本当ですよ。フェイトさん。管理局の執務官さんなんです♪』

「・・・・執務官！？　あの執務官ですか！？　フェイトが！？」

「えっと、はい。アルフは使い魔としてはもう引退していますけど、時々職場に来ますよ」

「ということは、トーマさんとリリィさんは・・・」

「まぁそんなところです」

正式な局員じゃないけど、お世話にはなっているから首肯する。リニスさんは「フェイトが管理局の執務官・・・すごいです、フェイト」誇らしげだっていう風に微笑んだ。と、「あら、あらあら？」リニスさんが困惑の声を上げると同時、「『リニスさん！？』」の体が消えていくのが判った。

どうにかして止める前に、俺たちの目の前からリニスさんが消えた。訳が解らず呆然としていると、"銀十字"から魔力反応の接近を知らせる警告が入った。今度こそ管理局の誰かだって直感が働いた俺は急降下。森の中へ隠れてリアクトを解く。変身してると確実に反応を捉えられる。

「ここにリニスの反応があったって！」

やって来たのはフェイトさんだった。少し遅れて「どこだい！？」俺の知ってる子供サイズじゃなくて、モデルのように背が高くて露出の高い服装を着たアルフ。そのアルフに抱っこされたアリシアさんがやって来た。

「と、トーマ！　フェイトさんもアリシアさんもちっちゃ可愛いよぉー　なにあれー♪　ギュッってしたい、ナデナデしたーい　」

すげぇちっちゃいフェイトさんとアリシアさんの可愛い姿にハート乱舞させてるリリィ。今にも飛び出して行きそうなリリィの腕を掴んで逃さない。頼むからやめてくれ。未来のフェイトさんとアリシアさんを知っている所為もあって、アリシアさんは兎も角フェイトさんはなんか恐ろしい。

「フェイト、アルフ、次！」

「あ、うん！」「おう！」

フェイトさん達がまたどこへ飛び去って行った。リニスさんを捜しているみたいだ。手伝ってあげたいけど、こればかりは無理だ。俺は「ごめんなさい！」と謝りながらフェイトさん達とは別の方角へと去った。

†††Ｓｉｄｅトーマ⇒ヴィヴィオ†††

「くしゅっ」

「大丈夫ですか？　ヴィヴィオさん」

「はい、なんとか」

初めての野宿、しかも季節は冬だということもあって、防護服着用でもその寒さには堪えちゃってクシャミが出ちゃった。小さい頃になのはママ達に連れられてきたこともある海鳴臨海公園の中を歩く。

もちろん変身を解いた後で。変身してるとどうしても魔力反応が出ちゃうし。魔力反応を軽減させるステルスもあるけど、それをずっと使って魔力消費しすぎても後々苦労するだろうってことで、睡眠時以外ステルス魔法は使わない。

「お腹、空きましたね・・・」

「ですね・・・」

きゅーきゅー、わたしとアインハルトさんのお腹の虫が鳴る。この時代に来てから何も口にしてない。だって過去に干渉しちゃうと、きっと未来で色々と厄介なことになっちゃうかもしれないし。とは言え、「このまま何も食べないと倒れちゃいますぅ」空腹を紛らわすために水を飲んでるけど、水分だけじゃ膨れない。というかお腹がぷよぷよするよ（泣き）。

「とにかく、我慢です。空腹で倒れるより早く帰れる方法を探しましょう。ですがもし・・・限界を超えた場合は・・・」

「なのはママ達に保護を求めましょう。倒れてしまっては元も子もない、ですよね？」

「ええ。倒れて気を失っている間に帰れる手段を失ってしまっては・・・」

「はい。もしそうなったら・・・一生、誰とも関わらずひっそりとわたしとアインハルトさんの２人きりで生きていく事に・・・。ア

インハルトさんと一緒なら寂しくないですけど、でもやっぱり・・・」

「私もヴィヴィオさんと一緒なら寂しくないですけど、帰りたい、ですよね・・・」

アインハルトさんとずぅーんと肩を落とす。とそんな時「きゃっ？」目の前が急に発光。アインハルトさんと一緒に身構える。光はどうやら転移魔法だったみたいで、わたし達の目の前には1人の女の人が現れていた。

「あら？　ここは・・・どこでしょう・・・？」

その人はきょろきょろと辺りを見回して、「あ、ごめんなさい。驚かせちゃいましたよね？　今のはその、イリュージョンです」わたしとアインハルトに気付いて謝ってきた。アインハルトさんはすぐに「いえ。大丈夫ですよ」と返したけど、わたしはその人をジッと眺めるのに夢中だった。

「あの、私の顔に何か付いていたりしますか？」

「ヴィヴィオさん・・・？」

「あ、いえ！　なんでもないです、ごめんなさい！」

この女の人、どこかで見たことがある・・・かも。どこでだったかなぁ。その人はわたしの肩に乗ってるクリス、アインハルトさんの

肩に乗ってるティオを見て「あ、お２人も魔導師ですか？」そう訊かれたことで、「あああ！！」その人が誰なのか思い出しちゃった。

「リニス、さん・・・！？」

フェイトママとアルフの魔法の師匠で、お世話役で、でももう亡くなっている、フェイトママの本当のママ――プレシアさんの使い魔・・・。うんと小さい頃に写真で見たんだ、リニスさんを。

「私のことを御存じで？　えっと、ヴィヴィオさん、でしたか？」

「あ、はい、高町ヴィヴィオです！・・・はっ（名乗っちゃった・・・！）あの、すいません、ちょっと！　アインハルトさん！」

「え？　あの・・・！」

アインハルトさんの手を引いてリニスさんからちょっと離れる。そしてリニスさんのことを思い出したのをアインハルトさんに伝える。話を聴いたアインハルトさんに「すでに亡くなった方が居るということは、あの方は過去から飛ばされてきた・・・？」そう言われて、「たぶんですが」と答える。

「あのー、ヴィヴィオさん？　私のことはどこで・・・？」

「どうします？　未来のことをお伝えしますか？」

「ど、どうすればいいんでしょう、アインハルトさん・・・」

「もしもーし」

「過去の方に未来のことをお話しするのはいけないというのは解っていますが、リニスさんにならまだセーフなのでは・・・？」

アインハルトさんの話も一理あると思う。リニスさんはすごく頭の良い人だったってアリシアさんは言ってた・・・と思う。だからもし過去に戻っても、フェイトママ達にはこの時代でのことは喋らないと思う。

「えっと、もしかしてうちのフェイト達とお知り合いですか？」

「その、なんといいますか。信じてもらえないかもしれませんが、わたしとこちら――アインハルトさんは、未来からこの新暦６６年にタイムスリップして来たんです」

「６６年・・・。私があの子たちの側から居なくなってから大体２年後が、この世界なんですね」

あっさり受け入れてもらえたことに戸惑っていると、「つい先ほど、トーマさんとリリィさんという未来から来たって子たちと会いました」なんてリニスさんが言ってきた。って、思いっきり聞き覚えのある名前が出て来たような気が・・・。

「あの、リニスさん。トーマってもしかして、トーマ・アヴェニー

ル・・・？」

「はい、そうです。ヴィヴィオさんのお知り合いでしたか」

「えええええええええええええええッッ！！？？」

もうこれ以上驚くことなんてないって思っていたけど、そんなことなかった。わたしの大声にビックリしちゃってるアインハルトさんとリニスさん。まずアインハルトさんが「ヴィヴィオさんのお知り合いですか？」って訊いてきたから「はいっ、そうです！」すぐにそう答える。トーマ・アヴェニール。スバルさんの弟のような男の子で、直接の面識はないけど、スバルさんと一緒に居た時に何度か通信でお話しした事がある。

「――トーマまで飛ばされて来ちゃってたなんて。捜してあげないと。トーマ、大した魔法も使えないから困ってる・・・」

「え？　トーマさん、結構な実力のお持ちかと思いますよ。見知らぬ技術でしたが、融合騎のリリィさんという御嬢さんも居ましたし」

「へ？」

「え？」

リニスさんと小首を傾げ合う。待って。トーマに融合騎？　それにリリィさんって人も知らない。しかもフェイトママ達の魔法の師匠でもあるリニスさんに、結構な実力を持ってる、なんて高評価を受

ける？　わたしの知ってるトーマとは随分と違うような気が・・・。うんうん唸っていると、「あの、そのトーマさんは、どの時代からやって来たか、などお話ししませんでしたか？」ってアインハルトさんがリニスさんに訊いた。

「詳しい時代は聞きませんでしたけど、フェイトが２５歳の頃の時代のようでした」

「２５歳？　わたしの知ってるフェイトママは、２３歳です」

ということは、わたしとアインハルトさんの時代から最低２年後の未来からトーマが飛ばされて来ちゃったってことになる。リニスさんのように過去からも来ちゃうんだから別段おかしくはないだろうけど・・・。なんかすごい状況になっちゃってる。

「ヴィヴィオさん。聞き違いかと思いますが、今、フェイトママ、と仰いましたか？」

「え？　あ、はい。フェイトママです」

そう素直に隠すこともなく答えたら、リニスさんが百面相して「フェイトに娘ぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーーーッ！！」耳がキーンとするほどの大声で叫んだ。くらくらする頭を横に振っていたら、「ヴィヴィオさん、フェイトはそちらの時代では結婚しているのですか！？」って思いっきり詰め寄られた。

「えっと・・・」

「２３歳の頃にはすでにヴィヴィオさんほどに大きな娘さんが居るということは・・・！」

「あの・・・」

「ヴィヴィオさん、今おいくつですか！？」

「じゅ、１０歳です・・・」

「１０歳！！？　１０歳の娘を持つ２３歳のフェイト！？　ということは１３歳の頃に生んだとなりますから・・・きゃあああああ！　あのフェイトがそんな幼い歳で誰かと結ばれたと！？　いえいえいえいえいえ！！　そんな、あの子に限って、そんな不良みたいな！　信じられません、信じたくありません！　が！　実際にこうしてフェイトをママと呼んでいらっしゃるヴィヴィオさんが実在しているのも事実ですから！！」

どうしよう、リニスさんがちょっと壊れちゃったかも。頭を抱えて唸り続けるリニスさんが「ヴィヴィオさん！　フェイトの夫、あなたのお父様は、一体どこのどちら様でいらっしゃいますか！！？？」わたしの両肩をガシッと掴まえてそう訊いてきた。ちょっとした恐怖で泣きそう。でもそれを耐えて・・・

「あの！　フェイトママは本当のママじゃないんです！！」

「うちの可愛いフェイトを１３歳という幼い内から身籠らせた馬の

骨はいった――・・・え？」

「その、わたし、生まれがちょっと特別で、本当のパパとママは居ないんです」

リニスさんに伝える。なのはママのこと、フェイトママのことなど。わたしとママ達の出会い、どういった経緯で親子になったとか。血の繋がりはないけど、それでも家族として一緒に暮らしてるって。すると「ごめんなさい！」涙を零したリニスさんがわたしを抱きしめた。

「あまりに無責任でした。ごめんなさい、ヴィヴィオさん！」

「いいんです。わたし、今とっても幸せですから。なのはママにフェイトママ、ママ達のお友達、わたしの学校でのお友達、みんな良い人たちばかりだから！」

「あなたはすごく強いのですね」

「わたしひとりじゃ全然ですけど、この強さはママ達から貰いましたから！」

リニスさんの涙を指で拭い取ってあげると、リニスさんが「ありがとうございます」ってすごく綺麗な、フェイトママみたいな笑顔を浮かべた。

「でも、ヴィヴィオさんから未来のフェイトがとても頑張って、そ

して強く生きてるってことを聞けて嬉しかったです。フェイトもアルフも元気でいてくれているようで」

今の言葉が気になったから「あの、リニスさん。アリシアさんも一緒ですよ」そう話す。どうしてアリシアさんの名前を出さないんだろうって。するとリニスさんは目を大きく見開いて「アリシアが、なんと・・・？」って震えた声で訊いてきた。

「アリシアさんですよ。フェイトママのお姉さん。昔は、と言うよりは今もよく遊んでくれたり――」

「アリシアは生きているんですか！？」

「「？？？」」

リニスさんの険しい表情にわたしとアインハルトさんはビクッと肩を跳ねさせる。わたしは「どういう意味か解らないんですが」と返すのが精いっぱい。それほどまでにリニスさんの様子がおかしかったから。

「そんな・・・だってアリシアは、使い魔になる前の私と一緒にあの時・・・。だからプレシアは、フェイトは・・・」

頭を抱えてふら付いたリニスさん。それをアインハルトさんが支えた。どういうことかは全然理解できないけど、アリシアさんは生きてる。それを証明するために「クリス。写真データ」その証拠として、「リニスさん。わたし達の時代で撮った写真です」をリニスさ

んに見せる。
久しぶりに揃った休暇にママ達が一堂に集まって開いたバーベキューパーティの写真。なのはママ、フェイトママ、アリシアさん、アルフ。それにはやてさんやルシルさんたち八神家のみんなの集合写真。

「っ！！・・・本当に・・・アリシア・・・生きて・・・！」

「「っ！！？」」

さっきとは違う涙を溢れさせたリニスさんの体が消えていくのが判った。わたしとアインハルトさんが何かをする前に、リニスさんの姿が完全に消滅した。一体何が起きたのか判らずに茫然と佇んでいると、「にゃあにゃあ！」ティオが鳴き始めて、クリスもわたわた短い前脚を必死に振った。

「ヴィヴィオさん、魔力反応の接近です。隠れましょう！」

「あ、はい・・・」

アインハルトさんに手を引かれて林の中に隠れる。遅れてフェイトママ、アルフ、アルフに抱っこされたアリシアさんがやって来た。きょろきょろ辺りを見回しているから、何かを探して・・・ううん、誰かを――リニスさんを捜しているんだってすぐに察した。

「入れ違いか！」

「フェイト、シャルからまた通信！　リニスもママも、転移を繰り返してるって！」

「そんな・・・！　母さん、リニス・・・！」

そしてまたどこかに飛び去って行っちゃった。消え行くフェイトママ達の姿に「ごめんなさい」わたしは謝った。たとえフェイトママ達と顔を合わせる事になっても、リニスさんを引き止めておけばよかったって。

Ｅｐｏｓ５０－Ｂ束の間の奇跡／家族は巡り合う～Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａ　Ｆａｍｉｌｙ～

†††Ｓｉｄｅすずか†††

フェイトちゃんとアリシアさんのお母さんであるプレシアさん、それにフェイトちゃんとアルフさんのお世話役で魔法の先生でもあるリニスさんの闇の残滓が出現。さらに治まってた他の残滓たちも出現。

そういうわけで、私となのはちゃんとアリサちゃん、シャマル先生とザフィーラさんは残滓の討伐を。リニスさんとプレシアさんの残滓と会うためにフェイトちゃんとアルフさん、アリシアちゃんは別行動で出撃。

マテリアルの子たちが協力してくれたことでヤミちゃんを止めるための手段、対Ｕ－Ｄカートリッジの完成が間近なシャルちゃん、ルシル君、シグナムさん、ヴィータちゃんのベルカ式組はお留守番。はやてちゃんとリインフォースさんも、対Ｕ－Ｄプログラムを受け取るためにお留守番。

「――残滓討伐２体目！」

≪さすがですわ、スズカ。実戦を繰り返すたびに確実に強くなっていますわよ≫

「ありがとう、スノーホワイト」

順調に闇の残滓を討伐していると、"スノーホワイト"からすぐ近くに転移反応が発生したって報せを受けた。それは目視で確認できる程に近い場所で、知らせを受けてからすぐに誰かが転移して来た。その誰かと言うのが「リニスさん・・・！」フェイトちゃん達の目的の1人だった。

『こちらすずか。リニスさんと遭遇しました』

『了解。こっちでも反応を捉えたよ。リニスだけじゃなくてプレシアも転移するようで、フェイトちゃん達が到着するまで留めておいて！』

エイミィさんからの指示に『了解！』って応じて、ボーっとしてるリニスさんの元へと向かう。そして「あの、リニスさん・・・？」と声を掛ける。リニスさんは、最初は聞こえていないかもって風に呆けていたけど、「・・・・え？　あ、はい」ハッとして私に振り向いてくれた。

「はじめまして。私、月村すずかと言います。時空管理局嘱託魔導師です。リニスさん、ですよね。フェイトちゃんとアルフさんのお世話役で、魔法の先生だったという・・・。今のご自分の状況、ご理解していますか？」

「ええ、まあ。ここが新暦６６年で、私の知る時代にとっては未来・・・と言うくらいには。あなたはフェイト達とお知り合いなのでしょうか？」

意識はハッキリしてる。フェイトちゃん達が来てくれるまでお話しで時間を稼ごう。まずは「はい。私、フェイトちゃん、アリシアちゃん、アルフさんの友達です」フェイトちゃん達の友達だっていうことを伝えよう。

「っ！！　フェイト達のお友達！　それはそれはありがとうございます！　それであの！　アリシアのことなんですが、その・・・本当に生きているんでしょうか！？」

リニスさんが使い魔になったのは、フェイトちゃんが生まれた後。アリシアちゃんが今に生きていることは知らないはずなんだけど。どこでその話を聴いたんだろう。えっと、とにかく「はい。フェイトちゃんとアリシアちゃん、私や他のお友達と一緒に学校に通っているんです」って微笑み返す。

「学校にですか！？　アリシアも一緒に！？」

「はいっ。同じ学年、クラスですよ。フェイトちゃんとアリシアちゃん、双子っていう設定と言いますか何と言いますか・・・それで一緒に、です」

「双子・・・。２人は仲が良いんでしょうか？　その、フェイトとアリシアは・・・」

「フェイトちゃんが、アリシアちゃんのクローンだということもみんな知っています。それでもアリシアちゃんはフェイトちゃんと仲が良いですよ。元気いっぱいのアリシアちゃんはクラスで人気者で

すし、フェイトちゃんも負けず人気者です」

「そう、ですか。本当に生きてくれているんですね・・・。それに仲が良いって。あの、すずかさん。プレシアは、あの子たちの母親は・・・？」

「えっと、それは・・・（これ、私が話しちゃっていいのかなぁ・・・？　でも、フェイトちゃん達に言わせるのもどうかと思うし・・・。お母さんの死のことなんて・・）あの・・・」

そう悩んでいると、「そうですか。プレシアはもういないんですね」私が言い淀んじゃったことから察したみたいで、リニスさんは寂しげに「お気遣いありがとうございます」微笑んでくれた。

「プレシアは体を病んでいましたし、魔法でも医学でも治せないほどの末期。２年と経過していれば亡くなっていてもおかしくはありません・・・」

私たちの間に重い沈黙が。えっと、何か、時間稼ぎが出来る話題を。そう必死に考えを巡らせていると、「あの、私という存在について教えて頂いてもいいでしょうか？」リニスさんにそう訊かれた。

「・・・今、この街――海鳴市で、あるロストロギアによるトラブルが起こってまして、リニスさんはそのトラブルに巻き込まれてしまったと・・・」

「トラブル・・・。時間移動とか、ですか？　先ほど未来から来た

という子供たちと会いましたから。あ、でも私の場合は時間移動とはまた別だと思うのですが。私、もう消滅しているはずですから。その記憶を持っている上で未来へ時間移動したというのも不自然ですし」

自称なのはちゃんの娘――ヴィヴィオさん達のことだ。ここが新暦66年だという事もあの子たちから聴いたんだね。それにしてもリニスさん鋭い。私は「そのトラブルというのが、過去の記憶を蘇らせたりする・・・ような」ってかみ砕いた表現で伝えた。詳しい説明だと上手く伝えられないかも知れなくて。

「なるほど。それで納得がいきます。消滅の記憶がありながらこうして存在している理由。記憶の実体化と考えれば辻褄が合います。そういったことが不可能ではないと、文献で見たことがありますし」

すごい。さすがフェイトちゃん達の魔法の先生で、大魔導師って謳われてたっていうプレシアさんの使い魔。博識だし頭の回転も速い。リニスさんは「わたしは一種の亡霊のようなモノなんですね」そう寂しげに呟いた後、「それでも良かった」って微笑んだ。

「フェイトに友達が出来たらいいな、って。そのお友達と笑い合って、時には喧嘩したりもして、それでも最後には仲直りして・・・。そうしてずっと支え合えって生きていってくれたら・・・そう願っていました。すずかさんの他にもまだお友達が居るようで。そして楽しく過ごせているようで、すごく安心しました」

あ、この感じ、すごく嫌な。よく感動ものの幽霊（ホラー）映画でいう終盤、

幽霊の成仏フラグみたいな。それをどうにかするために、「他にもですね！！」思わず大声を上げてリニスさんの消滅を妨害（出来るといいなぁ）。

「っ？　えっと、はい？　あ、あら？　また、体が・・・」

「リニスさん！！」

出来なかった。リニスさんの体がゆっくりと半透明になっていって、消えちゃった。そして少し遅れて「すずか！」フェイトちゃん達がやって来た。私は「ごめんね。引き止めておくことが出来なくて」謝る。

「ううん。私たちももっと早く来ていれば良かったから」

「そうだよね。ごめんね、フェイト、アルフも。わたしにバリアジャケットが無いから、どうしても遅れちゃうよね」

「あ、そう意味で言ったんじゃ――」

「解ってるよ、フェイト。でもやっぱりこれから一緒に行動しようと思うと、バリアジャケットって有った方が良いかなぁって。とにかく。シャル、エイミィ。リニスとママの反応は！？」

アリシアちゃんが、しゅんとしてるフェイトちゃんとアルフさんに微笑みかけた後、アースラに通信を繋げた。先に応じたのは『えっと、リニスの反応は捉えきれてない、ごめん！』エイミィさん。遅

れて『その代わりだけど、なのはがプレシアと遭遇！』シャルちゃんが、なのはちゃんとプレシアさんの居るポイントを教えてくれた。

「アルフ、もうちょっとスピード上げていいから！」

「アリシア、でも・・・」

「お願い、アルフ！！」

必死に願い出るアリシアちゃんに困惑してるアルフさん。ここで「待って、アリシアちゃん。私が、魔力コーティングするから」魔導師の全力飛行に耐えられるように、魔力の膜でアリシアちゃんを護る。急いで「スノーホワイト！」魔法を発動。もっと早くこうしておけば良かったって後悔。

「あ、なんか温かい・・・」

アリシアちゃんを覆う、私の魔力光である藤紫色の魔力の膜。これできっと大丈夫。という事で、プレシアさんとなのはちゃんの居るポイントへ私も同行して全力飛行開始。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒なのは†††

プレシアさんとリニスさんの残滓が出て、さらに他の残滓も出て来たことで、私たちはそれぞれ分担してアースラから出撃。フェイトちゃん、アリシアちゃん、アルフさん（呼び捨てで良いって言うけど、すぐには切り替えられない）は、リニスさん達の元へ。私たち

は残滓の討伐へ。
私の残滓を倒してすぐ、"レイジングハート"から魔力反応の転移反応を探知したって報告が。そのポイントへ移動してすぐ"レイジングハート"を構え直す。と、「来た・・・」到着直後に転移して来たのは「プレシアさん・・・！」だった。服装は時の庭園の物。

「こちらなのは。プレシアさんを発見。フェイトちゃん達は・・・？」

『すぐに向かわせる！　まずは引き止めておいて、なのは！』

先ずはアースラに連絡を入れるとシャルちゃんが応じてくれた。私は「なんとかやってみる」って返して、通信を切る。よし。行こう。

「ここは・・・？　私は一体・・・？」

「あの、プレシアさん・・・」

「？？・・・あなた、確か・・・私の庭園に乗り込んできた子供たちの1人・・・」

「はい。高町なのはです。プレシアさん。今あなたが置かれている状況とかって解りますか？」

私たちが時の庭園に乗り込んだ後の記憶を持ってる。虚数空間に落ちる前か後か、そのどっちかで色々と変わってくる。フェイトちゃんをアリシアちゃんの妹として認めた後か、その前か。出来れば認めた後のプレシアさんでありますように。それだったら安心してフ

ェイトちゃんと会わせられる。それを確認するための問い。

「・・・時の庭園が崩落し、私は虚数空間へと落ちたわ。そこで・・・そこで・・・。っ！　アリシア！　アリシアはどうなったの！？　憶えているわ！　私は神と取引をした！　私の命で、アリシアを蘇らせると！　アリシア！　あれは夢だったの！？　いいえ、今のこの状況はそもそもどういうことなの！？」

錯乱状態になってしまったプレシアさん。私は一発でその錯乱を収める言葉、「アリシアちゃんは元気です！」と告げる。するとプレシアさんは「え？」って私へと目を向けてきた。私はもう一度、「アリシアちゃんは、元気ですよ」そう言って微笑みかける。

「本当なの？　証拠を、あの子がちゃんと生きている証拠を！！」

「えっと、写真とか持っていればよかったんですけど。でも、確かにアリシアちゃんは今を生きています。プレシアさん、あなたのその命で。今は私たちと同じ学校に通っているんですよ。同じ学年で同じクラス。フェイトちゃんとアリシアちゃんは双子だってことにして。それほどまでに仲が良いんです」

「アリシアとフェイトが・・・双子・・・」

「えっと、詳しいお話はフェイトちゃんやアリシアちゃん本人から聴いた方が良いと思います」

「っ！　近くに居るの！？」

「・・・今、リニスさんも居るんです」

「リニス・・・・!?　どういうこと?・・・・あなた、今の私の置かれている状況を知っているようね。話しなさい」

私はプレシアさんに話す。プレシアさんやリニスさんは、あるロストロギアによるトラブルに巻き込まれている状態で、再現されて過去の記憶が実体化した人だってことを。するとプレシアさんは「そういうこと。死んだ記憶がありながら存在するなんておかしいと思ったのよ」って、すぐに納得してくれた。

「つまり今は、私の知る時間から未来なわけね。あなたの成長具合からしてそう経ってはいないようね。おそらく1年以内・・・・」

私は「その通りです」って頷き返す。プレシアさんは「それでも構わないわ。もう一度あの子たちと会えるのなら、私はそれだけで・・・・」そう言って静かに表情を柔らかくした。時の庭園でフェイトちゃんに酷い事を言っていたあの険しい表情が嘘のよう。やっぱり人は変われる、ってことが判った。

「ねえ、あなた。フェイトはやっぱり、私を恨んでいるかしら・・・・?」

「プレシアさんはどう思いますか?」

「私が訊いているのだけど?」

ジトッとした目を向けてきたプレシアさんに「私の答えを聴かなくても、解ってるんじゃないですか」と返す。フェイトちゃんは最後までプレシアさんをお母さんって慕っていた。虚数空間に落ちるのを、自分が落ちるのも構わずに助けようとしたんだもん。恨んでるわけがないよ。プレシアさんだってそれが解ってるからこそ「・・・そうね」とフッと寂しげに笑った。

「なのはぁ―!!」

「っ!」「フェイトちゃん!」

私の名前を呼ぶのはフェイトちゃん。声のした方を見ると、フェイトちゃんとアルフさんとアリシアちゃん、そしてすずかちゃんも一緒にこっちに向かって来ていた。プレシアさんが「アリシア・・・!」震える声でその名前を呼んだ。フェイトちゃんが展開したフローターフィールドに、アルフさんがアリシアちゃんを下ろした。プレシアさんがアリシアちゃんの元へと急ぐ。

「ママ・・・!」

「アリシア・・・!」

アリシアちゃんとプレシアさんが抱擁を交わした。２０年以上、ずっと再会したいって思ってた２人だから、嬉し涙を流しながら何度も「ママ」「アリシア」って名前を呼び合ってる。だけどフェイトちゃんのことも・・・って思って、フェイトちゃんに目を向けた。

『いいんだ、なのは、すずか。私にとっても、母さんとアリシアの再会の方が大事だから。母さんはこの瞬間の為に、自分の人生を費やした。だから、今だけは母さんとアリシアの邪魔はしたくない』

念話で伝えてきたフェイトちゃんが微笑んだ。とここで、「フェイトもおいで！」アリシアちゃんがフェイトちゃんを呼んだ。フェイトちゃんが「でも・・・」って少し言いよどむと、「いらっしゃい、フェイト」プレシアさんからも呼ばれたことで、フェイトちゃんは涙ぐんで「母さん・・・！」プレシアさんに抱きついた。

『なのはちゃん。私たち、ちょっとお邪魔かも知れないね』

『うん。リニスさんを捜しに行こう、すずかちゃん』

未だにリニスさんが行方不明。だから捜しに行こう。すずかちゃんと頷き合って、アルフさんに一瞥した後、私たちはその場から去った。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒フェイト†††

別れの時にしか得られなかった、母さんの温もりに包まれてる。涙が止まらない。私の背中に回された母さんの手がそっと背中を撫でてくれる。母さんが「私はいつも、気付くのが遅い。ごめんなさい」そう謝った。私は首を横に振る。

≪ 至近に転移反応≫

"バルディッシュ"から簡潔な知らせが入った。母さんがアリシアの背中に回してた手を離して、転移反応のする方へと向けた。携えるのは起動した杖型デバイス。そして「わわっ？」その驚きの声と一緒に転移して来たのは「リニス！！」だった。

「フェイト、アルフ！・・・プレシア、アリシア！！」

満面の笑顔で私たちに抱きついてきたリニス。こんな奇跡が起こるなんて想像もしていなかった。母さんが居て、リニスが居て、アリシアが居て、アルフが居て、私が居る、こんな時間が本当にあるなんて。私たちはゆっくり話そうということで近くの陸地――人気のない公園に降りる。

「フェイト、アルフ、久しぶりです！　見間違えましたよ！」

「リニス、リニス、リニス！」

アルフが尻尾を勢いよく振ってリニスに抱きつくと、「前言撤回です。甘えん坊は変わらずです」って訂正。アルフは「えへへ」って涙を湛えながらも笑顔を浮かべる。私は「また逢えて嬉しい、リニス・・・！」さっきから流れっ放しの涙を拭ってリニスに歩み寄る。

「はい。私もすごく嬉しいです。・・・バルディッシュ、ちゃんと使ってくれているんですね」

「うんっ。これまで何度も助けてくれてるんだ。リニスのおかげで、

バルディッシュのおかげで、私は強くなれてる」

「それは嬉しいことです」

リニスに頭を撫でられる。昔はよく魔法が上手くいくとこうして褒められていた。それを思い返すとまた涙が溢れてきた。リニスは私とアルフの頭を撫でつつ「プレシア、アリシア」私たちの再会を見守っていてくれた母さんとアリシアの名前を呼んだ。

「お久しぶりです、プレシア。そしてこの姿では初めましてですね、アリシア」

「ええ、久しぶりね、リニス」

「リニスは初めてかもだけど、わたしはリニスのこと知ってたよ」

アリシアのその言葉に「え？」母さんとリニスがそう漏らした。そのこともちゃんと話さないとダメだよね。私とアリシアは顔を見合わせて、コクリと頷き合った。そして母さんとリニスに、リニスが居なくなって後のことから、時の庭園崩落までの出来事を話す。ジュエルシードを発端としたＰＴ事件の顛末、そしてアリシアが事故で亡くなってから蘇生するまでの間、魂だけの存在として私たちを見ていてくれたこと、母さんがアリシアを蘇らせたこと、話せることをすべて。そして最後にアルフが、私が母さんから受けてたお仕置きのことをリニスに告げ口した。

「ちょっ、プレシア！？　あ、あなた！　フェイトを鞭打ちしたっ

て本当ですか！？」

母さんの死の理由、アリシア復活の理由を知って泣いていたリニスの表情がガラリと変わった。ものすごい怒りの形相で母さんに詰め寄るリニス。その後ろで「やれー、やれー、リニス♪」アルフが母さんへの仕返しをしてやったりと言った風に笑顔。母さんは若干身を引きながら「やったわ」と認めた。さぁ大変。リニスが「あなたは馬鹿ですか！」すごい声量で怒鳴った。

「あのね、リニス。私、それは自分が母さんの期待に応えられなくて、不甲斐無い所為だって――」

「フェイトは黙っていてください。・・・プレシア！　さっき、アリシアは魂の状態であなたやフェイト達の生活を見ていた、と言っていました！　つまり、あなたの虐待まがい――いいえ、最早虐待はアリシアにも見られていたということ！　そうですよね、アリシア！」

「え、あ、う、うん・・・。フェイト、可哀想だった」

アリシアにまで非難の目を向けられてしまった母さんは「本当に申し訳なかったって反省しているわ。ごめんなさい、フェイト。私は、酷い母親だったわね」って謝って、私の頬にそっと触れた。

「いくら謝っても普通なら許してもらえないような、酷いことばかりあなたにはしたわ」

「ううん。母さんだって色々と抱えてたことを知ったから、恨みなんてないよ。母さんには笑っていてほしかった。その為だったら、って。だからもう、いいんだよ母さん」

さっきはアリシアと一緒だったけど、今度は私ひとりを抱きしめてくれた。心から謝ってくれていると、そして私を本当の娘だって認めてくれたって、それだけで解る。私も母さんの背中に手を回す。母さんって、こんなに細かったんだって思った。もっと大きな人だって思ってたのに。

「・・・はぁぁぁ。フェイトが許すのであればもう何も言いません。アルフはどうです？」

「・・・本気で反省してるっぽいし、これ以上責めたらフェイトからあたしに注意来そうだから、あたしも許すよ」

リニスとアルフがそう締めたことで、この話は終わり。そう、過去より現在の話をしたい。そういうわけで、私たちは事件後からこれまでの話をすることにした。どこから話そうかと思案していると、「アリシア、フェイト。あなた達、学校に通っているそうだけど」って話題を母さんが出してくれた。

「うんっ！　えっと、なのはから聴いたの？」

「ええ。力強い瞳を持っていたわ。庭園では敵として見ていたから気付かなかったけれど、本当に真っ直ぐな・・・」

「私はすずかさんから聴きました。聡明そうな女の子でしたよ。礼儀正しくて。さすがフェイトのお友達。良い縁を持っているようで嬉しいです」

家族に友達を褒めてもらえるとこんなに嬉しいんだ。私とアリシアは顔を見合わせて、お互いに嬉しさでにやけてるのを見てまたにやける。リニスとアルフ、母さんもそんな私たちの様子に微笑んでる。

「双子だっていう関係で同学年に籍を置いているとの事ですけど・・・」

「うん。私たちの友達みんな同い年だったから、アリシアひとり年齢を高くしたり低くしたりしちゃうと、学校のイベントで一緒になれないから」

「本当は学年上なのに、仕方なく低くしたんだよ」

「よく言うよ、アリシア。独りにしないでぇ～って泣きついて、同学年にしてもらったんじゃないか」

「ちょっ、言わないでよアルフ！　わたしのお姉ちゃんとしての威厳とか考えて！」

そうだった。始めからアリシアを同学年にするって決めていたけど、アリシアにその話をする前にアリサとシャルが悪戯心で、

――アリシア。あんた、フェイトのお姉ちゃんよね――

――そうだよ。見た目はみんなより小っちゃいけど、中身は大人だよ♪　だから子ども扱いしないでよね、えっへん――

――そっか。じゃあ、アリシアは学年1つ上ってことでオーケー？――

――え？――

――しょうがないか。お姉ちゃんだもんね。じゃあアリシアは4年生から、それとも5年生？　その辺りの学年に転入ってことで。残念ね、アリシア。学校イベント、フェイト達とは一緒になれないけど、お姉ちゃんだもんね、大丈夫だよね――

――あ、ああ、・・・あう、ご、ごめんなさぁーーい！　大人ぶってごめんなさーい！　わたしもフェイト達と一緒がいーいぃ～～～～～～！！！――

そうからかったから、アリシアが泣いちゃったんだよね。アリシアが顔を真っ赤にしてアルフをポカポカ叩く。母さんとリニスが微笑ましくそんなアリシアを眺めてる。もっとハッキリと私たちのことを知ってもらうために写真とかあればいいんだけど、残念ながら無い。

そう思っていたら、『こちらシャルで～す♪　今からそちらにお届け物をお届けしまーす♪』シャルからそんな一方的な念話が。そのすぐ後、何かがこちらに向かって来るのが魔力反応で判った。

「どなたかこちらに来ます。魔力反応・・・大きい・・・・！」

「あなた達は下がってなさい。それでも私よりは下だわ」

母さんが私たちを護るように躍り出た。今の念話、アリシアやアルフにも届いていたようで、「待ってくれリニス！」「わたし達の友達だから！」って臨戦態勢に入った母さんとリニスを制止した。その魔力反応――ルシルが、私たちが視認できるようになったところでスピードを落として、そして降下して来た。

「おーい、ルシルー！　おーい！」

アリシアが両手を振ってぴょんぴょん飛び跳ねて、ルシルにここだと合図。そんなルシルは「見えているよ」と苦笑しながらトンッと地面に降り立った。私が「どうしたの？　ルシル」って声を掛けた中で、ここに来た理由を察した。ルシルの左手には1冊のハードカバーの本が。

「初めまして、フェイト、アリシア、アルフの友人であり同僚の、八神ルシリオン・セインテストです。ご歓談の中、お邪魔して申し訳ありません」

「いえいえ。私はリニスと申します。で、こちらがプレシア・テスタロッサです。まあまあ、これはまた可愛らしいお嬢さんが。あなたも、フェイト達のお友達ですか？」

「「ぷっ」」

リニスが挨拶したルシルに向かってそう言うと、アリシアとアルフが吹き出した。リニスがその2人の様子に小首を傾げている中、「リニス。この子、男の子よ」って母さんが一発でルシルを男の子だって見破った。

「え？　男の子・・・？　そうなんですか？」

「・・・はい。生物学上では俺は男です」

ルシルが言いづらそうに自分の性別を答えると「ご、ごめんなさい！　てっきり女の子だと・・・」リニスが慌てて頭を下げて謝った。そこにアルフと一緒に笑い声をあげていたアリシアが「しょうがないよ、リニス。誰が見たって女の子だもん」ってルシルにトドメを刺した。ずーんと肩を落としたルシルは「やっぱり髪か、髪の長さがダメなのか？」って後ろ髪に触れた。

「んー・・・顔立ちじゃない？」

「ア、　アリシア！　こら！」

容赦なくルシルの精神にダメージを与えるアリシアを注意するリニス。私はすぐに話題を変えようと「ルシル、ソレ、手に持ってる物」って指さす。するとルシルは「シャルの提案だ。アルバム、あった方が良いだろ？」持っていたアルバムを私に手渡した。

「うん、ありがとう。持って来てくれて。でも大丈夫なの？　カー

トリッジの稼働確認とか・・・」

「ああ、ベルカ式組の確認は終わった。あとは君たちミッド式組だ。ま、ゆっくりと話すといいよ、ご家族と。それくらいは許される」

そう言って微笑むルシル。私はふと、ルシルにごめんなさい、って思った。ルシルだって家族を亡くしているのに、私たちにだけこんな幸せな奇跡が起きて。そんな思いが顔に出ちゃったみたいで、「気にしないでいいさ。俺は踏ん切りがついてる」って微笑みを絶やさなかった。

「では俺はこれで失礼します」

そうお辞儀したルシルはまたすごい速さで帰って行った。私とアリシアとアルフは、アルバムを届けてくれたルシルに「ありがとう！」お礼を言って、そしてまた母さん達と話をする。今度はアルバムをみんなで眺めながら。

なのは達の写真を見せて友達だって紹介したり、学校の通学途中で見つけた犬や猫の写真や、管理局に研修生で入った時の写真を見せたり、他にも学校で起きた面白いこと、楽しいこと、友達がたくさん出来たこと、話したいことが尽きない。それなのに・・・

「母さん、リニス・・・！？」「ママ！？」「リニス！」

2人の体が透けていっているのに気付いた。だけど母さんもリニスも全然慌てることなく、「ねえ、プレシア」リニスが母さんを呼んで、「ええ。悪くないわ」って母さんは静かに目を閉じて応えた。

「フェイト、アルフ、アリシア。このひと時、とても楽しかったです。私やプレシアの居ない未来、あなた達が幸せに包まれているようでホッとしました」

「「「リニス！」」」

「私の選択は間違いじゃなかった。そう思えたわ。アリシアもフェイトも・・・そしてアルフ、あなたも。多くの友人を得て、自ら選んだ将来への道を進んでいることが知れて、安心したわ」

「母さん！」「ママ！」「プレシア・・・！」

どんどん薄くなっていく母さんとリニスの体。どうすれば食い止めることが出来るのかも判らないまま、「まだ、まだたくさん話したいことがあるのに、教えてもらいたいこともあるのに！」声を掛け続ける。アルフも「あたしもそうだよ！　リニスにもっと魔法を教えてほしいよ！」そう言って泣き出す。

「一目見ればあなた達がどれだけ強くなったのか判ります。きっともう私が教えることはない。素晴らしいお友達を、切磋琢磨し合える仲間を得て、管理局に入って誰かを助けられるように、守れるようにという立派な意志を持ってくれて、師としてこれだけ素晴らしい教え子を持てたこと、とても誇らしいです」

「「「リニス！」」」

「アリシア。あなたはまだ明確な未来像を得ていないようだけど、まだ焦ることはないわ。あなたにはたくさんの時間あるのだから。後悔のないように、納得のいくように、ゆっくりでいいわ、自分の将来を考えなさい」

「ママ！！」

私とアルフはリニスに抱かれて、アリシアが母さんに抱かれた。そして入れ替わるように母さんが私たちの前に来て、リニスがアリシアの前に立った。

「フェイト、アルフ。これまで辛い目に遭わせた私が言うのもどうかと思うけど、幸せになりなさい。私は・・・母さんは、それだけを願うわ」

「母さん！」「っ！・・・プレシア」

「アリシア。私が言いたいこと、ほとんどプレシアに言われてしまいましたけど。でも、私からも言葉を贈らせてください。本当は、何をやりたいか決めているのですよね・・・？」

「っ！・・・うん。ずっと悩んでいたけど、今回の一件で決めたよ」

「じゃあ、その道を突き進みなさい。きっとそれがアリシアの進むべき道だと思うから」

「・・・うんっ、ありがとう、リニス！」

今度は母さんに抱かれて、アリシアはリニスに抱かれた。さっきのリニス以上に希薄な存在感で、抱かれているのにそんな感じが全然しない。本当にこれでお別れなんだって痛感する。

「今と未来を生きるあなた達と、たとえこの身が過去の記憶の再生であったとしても、こうして触れ合えたこと、本当に、本当に・・・幸せでした」

「アリシア、フェイト、アルフ。束の間だったけれど、家族として話し合えたこと、幸せだったわ」

最後の最後、私とアリシアとアルフ3人、母さんとリニスに左右から抱かれた。本当に最後、私たちは感じる事が出来た。母さんとリニスの温かさ、柔らかさ、そして愛を。

「母さん、リニス！」

「ママ、リニス！」

「リニス、プレシア！」

「空からプレシアと一緒に、あなた達を見守っています」

「私たちの娘たち――家族の未来が幸せに彩られているように・・・」

「「ありがとう・・・幸せに・・・」」

それが母さんとリニスの最期の言葉だった。私たちを抱きしめてくれていた2人が光となって、空へと昇って行った。

Ｅｐｏｓ５１悲劇の少女／因果の悪戯～Ｂｅｌｋａｎ　Ｇｒｏｂｔｅ　Ｓｔａｒｋｅ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

フェイトママやアルフのお世話役だったリニスさんと別れた後、わたしとアインハルトさんは、臨海公園にジョギングやわんちゃんの散歩に来てた人たちからおにぎりやパンを恵んでもらった。未来のことを思えば断るのが一番なんだろうけど、そんな余裕もないほどに美味しそうな見た目と香りで即ノックアウト。いただきます、と素直に頂いた。

「――餓死だけはなんとか免れましたね」

「そうですね。詳しい事情も訊かずに助けてくださった海鳴市の人たちには感謝しきれません」

空腹が満たされたことで寄り添うようにベンチに座るわたしとアインハルトさん。空腹問題はなんとかなった。そう言ったアインハルトさんに頷いて同意して「あとは、未来に帰る方法を探すだけですね」と言う。

１３年くらいの未来からここかこの時代へと飛ばされて来ちゃった。今度は過去から未来へ帰るための手段を見つけないと。だから今、「クリス。状況はどう？　なにか判った？」ってわたしのデバイス――パートナーのクリスに声を掛ける。とクリスはわたわたと前脚を振って、わたしがお願いした調べものをまだ検索中だって教えて

くれた。

「そっか。ありがとう、もう少し頑張って、クリス」

クリスがビシッと敬礼して、わたしのお願い事であるわたしとアインハルトさんと同じように未来から転移して来た人の反応の探査を続行。

「ですが一体何が原因でこのような事態になってしまったんでしょう・・・？」

「考えられるのは、やっぱりロストロギア、それか未知の技術ですよね。わたし達だけが飛ばされたっていうのはおかしいですから、この時代に飛ぼうとした犯人が居ると思うんです。その人を見つければ・・・」

あとトーマも捜さないと。リニスさんの話だと、わたしの知るトーマじゃなくて3年後くらい未来のトーマらしいけど。

「なるほど。私たちだけを過去に飛ばす理由がないからですね。時間移動を行った本人を見つけて、帰る方法を教えてもらえれば・・・。あ、ですから今、クリスさんにその調査をしてくださっているのですね」

「はい。と言ってもあくまでわたしの推測ですけど。もしその犯人もただ巻き込まれちゃっただけー、とかなるともうお手上げかも知れません」

「そうではないように祈りましょう。私もヴィヴィオさんも試合が近いですし、それにヴィヴィオさんのお母様や、コロナさん、リオさん達も心配しますでしょうし」

「はい。ですからなんとしても帰らないと！！」

ＤＳＡＡ――ディメンジョン・スポーツ・アクティビティ・アソシエイションっていうスポーツ競技の運営団体が開催する公式魔法戦競技会インターミドル・チャンピシオンシップに参加予定のわたしやアインハルトさん、そしてここには居ないけどコロナとリオ。みんな、来月に開かれる地区予選試合に出場するために日々精進中。このまま帰れないと参加できない。

「はいっ。力を合わせて頑張りましょう！」

アインハルトさんと意気込んでいると、アインハルトさんのパートナーのティオが鳴き声を上げた。しかもなにか深刻そうな声色。アインハルトさんが「ティオ、どうしました？」って訊いたところで、「っ！？」わたしやアインハルトさんは無意識に身構えた。とんでもないプレッシャーがこの一帯を覆ったから。遅れて「結界が・・・！？」張られた。

「何かとんでもない、すごい力を感じます・・・！」

「はい。ティオ、武装形態・・・！」

「クリス、セットアップ！」

なのはママ達だった場合、即座に逃げるためにも変身。そのすぐ後、２００ｍもないところから虹色に魔力の柱が地上から空へと向かって突き立った。その光景にわたしもアインハルトさんも茫然とする。虹色の魔力。それはわたしの魔力光の色だからってこともあるけど、その力強さから言って・・・。アインハルトさんがフラリとあの魔力柱に引き寄せられるように近付いてく。

「アインハルトさん・・・？」

「居ます、あそこに。彼女が・・・」

あの魔力の柱の元、わたしのオリジナルとなった人が――オリヴィエ・ゼーゲブレヒトさん？が居る・・・はず。古代ベルカで、アインハルトさんのご先祖様の覇王イングヴァルト――クラウス、ルシルさんやフォルセティの先祖の魔神オーディン、シャルさんの先祖の剣姫リサと親しい友人であって、アインハルトさんが強さを求める要因になった、あの聖王女オリヴィエさんが。

「・・・わたしも一緒に行きます！」

だからわたしも一緒に会いに行こうって思う。そういうわけでアインハルトさんとわたしは光の柱へと向かってダッシュ。柱に近づくにつれて「重い・・・！」体に掛かる負荷のようなものが重くなっていって、走り辛くなる。

「ヴィヴィオさん、大丈夫ですか・・・？」

「なんとか。アインハルトさんは・・・？」

「私もなんとか。ですが、これ以上近付くとまずいかもしれません・・・！　彼女が、オリヴィエはすぐそこに居るというのに・・・！」

隣を走るアインハルトさんが悔しそうに唇を噛んだ。でもその途轍もないプレッシャーも「え？」綺麗サッパリ、突然に消失した。見れば魔力の柱も消えてる。わたしは歩みを止めて呆けてるアインハルトさんに「急ぎましょう！」って声を掛けて、手を引いて走り出す。

「あ・・はいっ！」

アインハルトさんもまた走り出したことでわたしは手を離す。そしてわたし達は、さっきまでそびえ立ってた光の柱があったと思われる地点に到着して、「っ！」視界のその人を収めた。わたしと同じ金色の髪、紅と翠の虹彩異色。以前、覇王イングヴァルト自身が手掛けた回顧録の複写本を読ませてもらった時、その挿絵に描かれた通りの姿をしたオリヴィエさんが居た。そう、戦装備の姿で。

「っ！！」

「本当にいた・・・！」

鼓動が激しくなる。アインハルトさんもどちらかと言えばトラウマ

に近いオリヴィエさんを前に、胸を押さえていて息遣いが激しい。そんなわたし達に気付いたようで、オリヴィエさんが虹彩異色の瞳を向けてきたんだけど・・・。どこか様子が変。虚ろと言うか、わたし達を捉えてないっていうか・・・。

「私が、守らないと・・・」

――電光石火――

そうポツリと呟いたと思えば、その姿が掻き消えた。と同時、「わっ？」アインハルトさんに突き飛ばされちゃった。理由もなくそんなことする人じゃないから、わたしは突き飛ばされた体勢を立て直すことに意識を集中させる。そんな中でチラッと目に映りこんだのは、さっきまで居た場所にオリヴィエさんが拳を突き立てていた様だった。

「守るんです、私が・・・みんなを・・・」

――驚浪雷奔――

オリヴィエさんが虹色の魔力を纏わせた拳で正拳突きすると同時、魔力がアインハルトさんの身長ほどに大きな衝撃波になった。アインハルトさんは「オリヴィエ・・・！」今にも泣いてしまいそうなほどに悲しげな表情を浮かべつつ横移動で回避した後、かぶりを振って「空破断！」突き出した手の平から衝撃波を打った。

「私の大切な人たちを・・・」

――砲煙弾雨――

両手に次々と魔力弾を創り出してアインハルトさん、そしてわたしに構想で放り投げて来たオリヴィエさん。アインハルトさんは、魔力弾の弾殻を壊さずに受け止めて投げ返す「旋衝破・・・！」で対処。そんなわたしは走って回避。戻って来た魔力弾を、体を横に向けることで避けたオリヴィエさんが一足飛びでアインハルトさんに向かって突進。

――狂瀾怒濤――

そして、迎撃姿勢に入った直後のアインハルトさんの至近で大きく振り上げた片足を地面へ勢いよく踏みつけた。踏みつけられた箇所を中心に地割れが起きて、地面を隆起させた。巻き起こる砂煙に呑まれた「アインハルトさん！」に声を掛ける。と、「ヴィヴィオさんは下がっていてください！」砂煙の中からアインハルトさんの声が。

「でも・・・！」

砂煙の中から「うあああああ！」アインハルトさんが飛び出して来た。すぐさまオリヴィエさんも飛び出して来た。オリヴィエさんの振るわれる拳を、首を傾けて躱したアインハルトさんは即座にカウンターの拳打を繰り出した。それを頭突きで受け止めるオリヴィエさん。

「うぐぁ・・・！」

「旭日・・・」

よろけたアインハルトさんの懐に姿勢を低くしたうえで入り込んだオリヴィエさんの右手の平には魔力スフィアが1基。そして「昇天」起き上がりざまにその魔力球をアインハルトさんのお腹に打ち込んだ。

「ぅう、ごふっ・・・！」

「アインハルトさん！！」

空高く吹き飛ばされるアインハルトさん。オリヴィエさんが追撃するために跳ぼうと足を曲げたのを見て、「ごめんなさい、アインハルトさん！」わたしはすかさず近接砲撃にして高速砲のディバインバスター（スバルさんと同じ、魔力スフィアを殴って発射するタイプ）を発射。

「っ・・・！」

わたしの砲撃に、アインハルトさんの追撃を中断したオリヴィエさんを確認、アインハルトさんが宙で体勢を整えて着地姿勢に入ったのを確認してすぐに「ソニックシューター、ファイア！」魔力弾４発を発射。

「あなたもまた、私の大切な人たちを傷つけるんですか・・・？」

全弾を裏拳で弾いて対処したオリヴィエさんの標的にわたしも追加されたっぽいけど、それでいい。アインハルトさんだけじゃ勝てない。というか2人掛かりでも勝てない。それでもどうにかして退けないと。着地し終えたアインハルトさんに「わたしも戦います！」って宣言。

「ですが・・・！」

「ごめんさない！　あ、来ます！」

わたしの側に駆け寄って来たアインハルトさんと話し込んでる余裕が無い。突進して来たオリヴィエさんの姿がまた掻き消える。今度は直感的だけどオリヴィエさんの動きが判った。大きく横に跳び退く。その直後、わたしの居た場所を上段蹴りしたオリヴィエさんが現れた。

「空破断！」

手の平を突き出して生む衝撃波を放ったアインハルトさんだったけど、それをなんてことのない拳打で真っ向から迎撃。そしてお互いに前進して拳打と蹴打の応酬を始めたけど、すぐさま「うぐ・・・！」アインハルトさんが打ち負けた。追撃に入ろうとしたオリヴィエさんに「ジェットステップ！」で高速接近。そこから「アクセルスマッシュ！」魔力を纏わせた拳打を繰り出す。

「うえ！？」

全力で打ったのに、わたしの一撃をパシッと片手で受け止めて、そのままぐいっと引っ張られたから強制的に姿勢を前屈みにさせられた。その上でラリアットを繰り出してきた。掴まれてる右手とは逆、左腕で首をカード。さらに、相手の打撃を受けるその一瞬にその個所に防御魔力を回すセイクリッドディフェンダーを発動。

「うっぐっ・・・！」

「守るんです。私が。オーディンさんが命を賭して守ったモノを、クラウスが生涯を懸けて目指す夢を。私たちが描いた希望を・・・！」

ガード越しから伝わってくるその威力と衝撃。わたしより小さいのにすごい力。踏ん張りきれずに後方一回転、「かはっ」受け身が取れずに地面へ背中から落下して一瞬呼吸が止まる。それでもお構いなしにオリヴィエさんがわたしの首を踏みつけようと足を上げた。思っていた以上に容赦なくてビックリ。

「覇王・・・断空・・・拳ッ！！」

「っぐ・・・！」

それよりも早くアインハルトさんの一撃がオリヴィエさんの脇腹に直撃して、そのまま殴り飛ばした。アインハルトさんに「大丈夫ですかヴィヴィオさん！？」差し出された手を取って「なんとか・・・。あ、ありがとうございます」立ち上がらせてもらう。そして脇腹を押さえながら立ち上ろうとしてるオリヴィエさんへと視線を移す。

「聖王の鎧が無いのが幸いでした」

「アインハルトさん。オリヴィエさんってあんな風だったんですか？」

「・・・いいえ。私の記憶ではあんな様子のオリヴィエは・・・」

アインハルトさんは初代覇王のクラウスの記憶を引き継いでる。だからこそ色々と背負っちゃっているんだけど。でもその記憶の中にも無いってことになると・・・。アインハルトさんが苦い表情を浮かべて「聖王のゆりかごに乗艦した後・・・」ってポツリと漏らした。

「でもそんなことがありえるのでしょうか・・・？」

「乗艦後の過去から時間移動・・・、いくらなんでもそんなことが起きるとは私も思えませんが・・・」

リニスさんのこともあるし、オリヴィエさんも過去、しかもゆりかご乗艦後の時代から来たとなると、過去のゆりかごはどうなっているんだろう。いよいよ混乱してきた。でも考える余裕も時間もない。何せオリヴィエさんが構えを取ったから。

「今はとにかく、オリヴィエを止めましょう。私とヴィヴィオさんの2人で」

「っ。はいっ」

嬉しさが込み上げてくる。それを力に変えてオリヴィエさんを止める。わたしとアインハルトさんは同時にオリヴィエさんに仕掛ける。左右からのアインハルトさんとの連撃。フェイントを交えながらも高速で打ち込み続けているのに、「当たらない・・・・！」うまい具合に捌かれて、「わわっ！」「しまっ・・・・！」アインハルトさんの蹴りがわたしに、わたしの拳打がアインハルトさんに当たるように受け流された。慌てて止めた時にはもう手遅れ。

「破邪顕正・・・・！」

「「うっぐぅぅ・・・・！」」

今までに受けたことが無いほどに強烈な衝撃がお腹から全身を巡った。でもようやく「掴まえました！」わたし達はオリヴィエさんの両腕をガシッと掴み取った。

「アクセル！」

「覇王！」

アインハルトさんと一緒に今打てる最高の一撃をスタンバイ。わたし達を振り払おうとするオリヴィエさんだけど、必死に逃がさないように抵抗。

「スマァァァ――――ッシュ！！」

「断空拳！！」

２人同時にオリヴィエさんのお腹と胸に拳打を繰り出す。当たる、そう思った瞬間、オリヴィエさんが逆立ちした。空振りするわたし達の攻撃。勢い余ってたたらを踏んで、思わずオリヴィエさんの手を離しちゃった。

でもアインハルトさんは手を離すことなく、「せぇぇい！」オリヴィエさんの腕を引いて地面に叩き付けようとした。それでもオリヴィエさんはしっかりと着地した。そう。魔力を纏わせたその両足で力強く。

――狂瀾怒濤――

わたし達の足元にまた地割れが発生。アインハルトさんもさすがにオリヴィエさんの手を離して、わたしと一緒に急速後退。その直後、「天衣無縫・・・！」わたしとアインハルトさんは気が付けば宙に舞ってた。体勢を立て直そうにも体が動かない。そうしてわたし達は地面に墜落した。

「あ・・ぅ・・・」

「ヴィヴィ・・オ・・さん・・、大丈・・夫・・ですか・・・？」

仰向けに倒れてるわたしの頭上からアインハルトさんの掠れた声が。わたしは「大丈夫・・・です・・・」それだけを返すだけで精一杯。一体何が起きたのか思い返す。オリヴィエさんが地面を踏みしめた後に地割れが起きて、瓦礫と砂煙がわたし達とオリヴィエさんを隔

てた。そして、「突進・・・技・・・」を食らったんだ。僅かに動かせる頭を動かして、オリヴィエさんの突進技によって大きく抉れた地面を見る。

「守れた・・・守ることが出来ました・・・」

そんな声が足元から聞こえてきた。必死に頑張って上半身を少しだけ起こすと、オリヴィエさんがこっちに向かって歩いて来てるのを視認。ここで追撃されちゃったら確実に負ける。でもこれ以上は無理。ドサッとまた倒れ込む。

「ヴィヴィオさんは・・もう少し休んでいてください・・・」

「アインハルトさん・・・！？」

さっきまで立つことも出来なかったはずなのに、アインハルトさんはしっかりと歩いていてわたしを抱え上げた。そしてオリヴィエさんから離れた場所――休憩所のベンチのところまでわたしを運んでくれた。

「ティオはダメージ緩和と回復補助能力に特化していますから。ですからあとは、私に任せてください・・・！」

そう言ってまたオリヴィエさんの元へ走って向かって行く。手を伸ばして止めようにもそれすら出来ない程のダメージを受けちゃってて。そしてまた始まるアインハルトさんとオリヴィエさんの激しい攻防。だけどやっぱりダメージの蓄積はあるようで、アインハルト

さんの動きが鈍い。

「紫電・・・」

オリヴィエさんの右上段蹴りがアインハルトさんの左側頭部を直撃。アインハルトさんが倒れ込むより早く右上段回し蹴りが、今度は右側頭部を直撃。間髪入れずに顔面、鳩尾、両脇に1発ずつ、計4発打ち込んだ。

「一閃」

「アインハルトさん！！」

電気変換された魔力を纏った右踵落としがアインハルトさんの頭頂部・・・からズレて、右肩に振り下ろされた。踵落としの直撃で地面に叩き付けられるアインハルトさん。とんでもない威力なのに、それでもなおアインハルトさんが立ち上がろうとする。それを見て、オリヴィエさんが拳を振り被った。その時。

『アインハルト！』

「銀十字！」

直上から白い魔力？弾が4発と降って来て、オリヴィエさんの攻撃を中断させた。遅れて空から急降下して来たのは「トーマ・・・！？」のそっくりさんと思える子だった。顔立ちはトーマなのに、髪や瞳の色、それに身長も違うし、そもそも格好が悪役みたい。上半身に

はタトゥーのような模様があるし、防護服はゴツイ金属の籠手や具足だし、凶悪そうな大剣を持ってるし。

（あれが2、3年後のトーマ、ってこと？　どうしたらあんな悪い子のような格好になっちゃうの・・・？）

トーマ？が「ヴィヴィオ、アインハルト、大丈夫か！？」ってオリヴィエさんと対峙。アインハルトさんが視線で、この方がトーマさんですか？って、訊いてきてる風だったからコクリと首肯する。

「まさかヴィヴィオとアインハルトまで過去に飛ばされてるなんて思いもしなかったよ！」

『でももう大丈夫！　トーマと私も手伝うよ！』

声がもう1人分。リニスさんが言ってた未来のトーマの融合騎の人、かな。とにかく、トーマなのは間違いない。そのトーマが「リリィ！　ディバイド、スタンバイ！」そう言ってオリヴィエさんへ大剣を振るった。

横薙ぎに振るわれた大剣を一足飛びで後退して躱したオリヴィエさんは、着地と同時に「砲煙弾雨」複数の魔力弾をトーマに向けて放り投げた。それも構わずトーマは大剣をオリヴィエさんに向けて佇んでるだけ。

「トーマ！」

魔力弾がトーマに当たる直前、見たこともない魔法陣？のような小

さな紋様がトーマの周囲に発生して魔力弾を防いだ。っていうよりは掻き消した。そしてトーマは「シルバーハンマー！」大剣から砲撃を発射した。
オリヴィエさんは砲撃を横っ飛びで回避。と、『銀十字！』さっきの女の人の声が聞こえたかと思えば、さっきからトーマの側に浮いてた十字架の装飾が表紙にある黒い本から数枚のページが飛び出して来て、その表面から魔力？弾を発射。
オリヴィエさんの周囲を旋回してから一斉に襲い掛かった。それを防ぐために「金城鉄壁」オリヴィエさんが魔力を全身に纏った。防がれる、って思ったけどトーマの攻撃はオリヴィエさんのバリアを無視するかのように掻き消して、「ぐぅぅ・・！」着弾させた。

「今のは・・・！？」

「魔法を掻き消す魔法・・・？」

ううん、トーマのアレは魔法じゃない。魔力を使ってるようには見えなかった。また別のエネルギー。そう、スバルさんやノーヴェ達のようなエネルギーみたいな感じがする。

「クリムゾンスラッシュ！」

振るわれた大剣から放たれる斬撃。オリヴィエさんは真っ向から「驚浪雷奔」拳を拘束で突き出すことで放つ魔力衝撃波で迎撃しようとしたけど、トーマの斬撃はオリヴィエさんの衝撃波を真っ二つに切り裂いた上で直撃させた。

「ヴィヴィオ！　なんかヴィヴィオのソックリさんだけど倒しても良いんだよな！？」

トーマからそう訊かれて「えっと・・・」わたしは言い淀んでアインハルトさんを見る。と、「はい。手を貸していただけますか？」アインハルトさんがそう答えて身構えた。トーマも「よしっ」って構えを取ったから、少し休んでことで動けるまでに回復できたわたしもベンチから立ち上がってアインハルトさんとトーマの側に駆け寄る。

（トーマにさっきの魔法を無効化したっぽい攻防がなんなのか聞きたいけど、未来のことだし、やっぱり聞けないよね）

「邪魔をしないで・・ください・・・！」

――意気軒昂――

オリヴィエさんの魔力量が跳ね上がった。そして「電光石火」その一言と一緒に姿が消えた。アインハルトさんが「移動魔法です、気を付けて！」トーマに教えた。頷いて応えたトーマは「全方防御！」そう言うと、"銀十字"って名前らしい本からまたページが、今度は何十枚と飛び出して来て、わたし達を護るようにドーム状に組まれた。その直後、オリヴィエさんの拳打が1枚のページに防がれた。

「銀十字！」

トーマの声に反応して数十枚のページが一斉に動き出した。そして

今度はオリヴィエさんを閉じ込めるようにドーム状になった。ページ表面に光弾が発生。それらが同時にオリヴィエさんを襲った。その光景に「すご・・・！」思わずそう漏らしたわたし。わたしの知ってるトーマとは全然違うからビックリしちゃった。

『トーマ、ヴィヴィオ、アインハルト、気を付けて！』

ページは使い捨てみたいで崩れていっている中、トーマの内に居る融合騎のリリィさんから警告が入ったと同時、「天衣無縫」その一言が聞こえてきて、砂煙の中から魔力を纏って砲弾と化したオリヴィエさんが突進して来た。技名の最初の一文字、て、を聞いた瞬間にわたしはトーマの手を掴んで横っ飛び。アインハルトさんは反対側へ跳んで、オリヴィエさんの突進を回避。

「空破断！」

「ディバインバスターー！」

「シルバーハンマーー！」

突進を終えたばかりのオリヴィエさんの背中に向けて攻撃。

――狂瀾怒濤――

魔力を付加した脚を地面に踏みしめて起こす、地面隆起の技でわたし達の攻撃が全部防がれた。また砂煙の中に消えるオリヴィエさん。

――砲煙弾雨――

「「「っ！」」」

砂煙の中から飛び出して来た虹色の魔力弾。トーマは「クリムゾンスラッシュ！」大剣を振るって斬撃を飛ばした。オリヴィエさんの魔力弾とトーマの斬撃が真っ向から衝突して、さっきみたいに掻き消すようにして斬り裂いた。遅れてトドメのような魔力砲弾1発が飛来してきた。

「ディバイド！」

わたし達に当たるより早く現れた紋様によってまた掻き消された。やっぱりトーマ、魔力結合の分断をしてるんだ。

「来ます！」

砲弾に遅れてこっちに向かって走って来てたオリヴィエさんと再接敵。純粋魔力攻撃は、トーマが居るから通用しないって判断したみたいで、オリヴィエさんは距離を一切置かないインファイト戦法に切り替えてきた。

そして始まるわたし達3人対オリヴィエさんの格闘戦。でもやっぱりベルカ史上最強って謳われたオリヴィエさんで、「うぐっ！」「きゃあ！」「うわあ！」わたし達の攻撃は当たらないうえ、オリヴィエさんの打撃は面白いほど受けちゃう。それぞれ別方向に殴り飛ばされ、蹴り飛ばされ・・・。

「強ぇ・・・！」

倒れ伏してるトーマの呻き声が聞こえた。遅れて『魔法じゃないからディバイダーの意味ないし・・・』リリィさんの弱音も。オリヴィエさんは、トーマには純粋な打撃攻撃を、わたしとアインハルトさんには魔力を用いた打撃と切り替えて仕掛けてくる。流石のトーマも、純粋格闘じゃオリヴィエさんに傷1つ付けられない。

「それでも止めないといけません・・・。オリヴィエは泣いています。私はその涙を止める・・・！」

アインハルトさんが仕掛ける。拳打・蹴打を織り交ぜた連撃を、オリヴィエさんは片手だけで受けては逸らす。わたしも急いで立ち上がって「せぇぇーーーい！」参戦。アインハルトさんとの挟撃を仕掛ける。と、「女の子にやらせて、俺だけが眠ってるわけにはいかないよな！」トーマも参戦。3人で代わる代わる連撃を打ってくけど、正確に捌かれちゃう。

「ダメだ、埒が明かない。ヴィヴィオ、アインハルト、離れてくれ！巻き込んじまう！」

トーマからの指示にわたし達は素直に頷いた。何か大技を出すんだって理解したから。魔力結合の分断をするトーマの技。たぶん近くに居るとその効果がわたし達にも届いちゃうんだ。オリヴィエさんへの連携を切り上げて一足飛びで後退。した瞬間、オリヴィエさんの上段蹴りがトーマの側頭部を打った。

「トーマ！」

「ぅぐ・・・・！　これで、どうだ・・・・！」

『ディバイド・ゼロ！！』

吹っ飛びながらもトーマは大剣の先端から砲撃を発射した。と、「あれ・・？」一瞬体から力が抜けた。これも今の砲撃の効果、なのかな。見ればアインハルトさんも小さく頭を横に振ってる。

「今だ、ヴィヴィオ、アインハルト！」

トーマの声にハッとして、オリヴィエさんへ視線を戻すと「え・・・？」そこには体が霧散し始めてるオリヴィエさんが佇んでた。倒れ込んでるトーマから「再生してる、早く！」急かされて、わたし達は慌ててオリヴィエさんへダッシュ。わたし達の接近に気付いたオリヴィエさんは崩れては再生してる体で身構えた。

「ヴィヴィオさん。最後の一撃、私に任せてもらっても良いですか？」

「・・・お願いします！」

「ありがとうございます」

――驚浪雷奔――

突き出された拳から放たれる衝撃波をわたし達は左右に分かれて躱

して、そのまま接近を続ける。ここで「ソニックシューター！」わたしは魔力弾5発を発射して牽制。オリヴィエさんは魔力を纏わせた両手の裏拳で弾いて対処。
オリヴィエさんが動きを止めた事を確認して、「レストリクトロック！」なのはママ直伝のバインド魔法を発動する。シューター迎撃の為に両腕を使ったことで懐を開けたうえで捕らえた。計算通り♪

「アインハルトさん！」

「はいっ。・・・覇王！　断っ、空っ、拳っ！！」

アインハルトさんの渾身の一撃がオリヴィエさんのお腹にヒットして、そのまま貫いた。その光景にビクッとなるわたしとトーマ。でもアインハルトさんはゆっくりとオリヴィエさんを自分の元に抱き寄せて、「あなたは守ってくれました。ですからもう、休んでいいんですよ」って背中をポンポンと優しく叩いた。

「まも・・れた・・・？」

「はい。守れました」

「よかった・・・です・・・」

オリヴィエさんの表情が和らいで、安心したようにアインハルトさんにもたれ掛った。そしてそのまま「ありがとう、クラウス・・・」天へと消えていった。

Ｅｐｏｓ５２合流／和解～Ｂｅｆｏｒｅ　ａ　Ｄｅｃｉｓｉｖｅ　Ｂａｔｔｌｅ～

†††Ｓｉｄｅトーマ†††

お腹をくぅくぅ鳴らしながら朝の散歩としゃれ込んでいると、魔法による結界に閉じ込められたのに気が付いた。さらに遠くの方で虹色の魔力の柱が突き立ったのが見えた。リリィが『トーマ、あの魔力光！　ヴィヴィオと同じ色！』そう言った。そう、何度かヴィヴィオの試合を観たことがある。その時にヴィヴィオの魔力光を見たんだ、あの綺麗な虹色の魔力を。

「ああ！　もしかすると、過去に飛ばされたのは俺たちだけじゃないのかもしれない！」

というわけで、消失したけど魔力の柱があった場所に辿り着くと、そこではやっぱり大人モードになってるヴィヴィオとアインハルト、そしてヴィヴィオと同じ身体的特徴を持った女の子が戦っていた。しかも何気にヴィヴィオ達ピンチだし。だから俺も参戦したんだけど、もう強いのなんのって。でもなんとかディバイドの力で退けることが出来たんだ。

「――リアクト・アウト」

リリィとのリアクトを解いて改めて、「無事か？　ヴィヴィオ、アインハルト」２人に声を掛ける。リリィも「大丈夫だった？」って

声を掛けるんだけど、２人の様子がどうもおかしい。なんて言うかリリィの姿に戸惑ってるって風で。

「クリス」「ティオ」

ヴィヴィオとアインハルトが変身を解いて元の子供の姿に戻ったんだけど、「え？」俺とリリィはその姿を見てそんな抜けた声を漏らした。なんか違和感がある。とここで「ヴィヴィオ、アインハルト、縮んだ？」ってリリィが小首を傾げつつ２人の身長を計る仕草をした。

「そう言えば小さいような・・・」

「うん。お胸とかも色々・・・」

「あー、確かに言われてみれば――って、違う！　リリィ！　変なこと言わない！」

リリィがそんなことを言うもんだからヴィヴィオもアインハルトも「っ！」顔を真っ赤にして両腕で胸を隠して俺を弱々しく睨んだ。理不尽だ。いやまぁ、リリィの天然に乗ってしまった俺にも非があるのは確かだ。だから「ごめんなさい！」９０度頭を下げて謝罪。それで２人は腕を下ろしてくれた。

「・・・えっと、トーマって新暦何年からここへ？」

「何年って。決まってるじゃないか、新暦８２年だよ。なぁ？　リ

リィ」

「え、うん。でもヴィヴィオ。どうしてそんなことを訊くの？」

リリィの疑問ももっともだって頷きかけた時、なんか嫌な予感がした。そしてその予感は見事に的中。ヴィヴィオが「わたしとアインハルトさんは、新暦７９年からここ６６年前にタイムスリップしたんだけど・・・」そう話してくれた。

「俺たちより3年前から・・・！」

「え、じゃあひょっとして私のことも・・・」

「えっと、ごめんなさい。トーマのことなら以前スバルさんと一緒に居る時に通信で話したことが何回かあるけど・・・」

「ああ、そうなるのか。じゃあアインハルトは俺のことも知らないよな、3年前だとすると」

「あ、はい。はじめまして、になります」

アインハルトが小さくお辞儀した。すると「あぅ、ショックぅー。ヴィヴィオもアインハルトも、私のこと知らないって・・・」リリィが目に見えて落ち込んだ。仲が良かったからなぁ、俺たちの時代だと。

「まぁとにかく。一度状況を整理しよう。っと、その前にまずは場

所を変えよう。結構派手に暴れたから、八神司令たちに感づかれてるかもしれない」

「うん」「はい」

ヴィヴィオ達も未来への影響については知っているようで素直に応じてくれた。そしてここから少し離れた別の休憩所で休みを取りながら状況整理することにした。下手に距離を取るより近場で隠れてた方が捜索を免れる場合もある。灯台下暗し、ってやつだ。

「さてと。それじゃ、俺とリリィ、そしてヴィヴィオとアインハルトは、別々の時代からタイムスリップして来たわけだ」

「うん。わたしとアインハルトさんは７９年から」

「俺とリリィは、８２年から。３年の差があるわけだ」

「そしてここが新暦６６年で、私やトーマからすると１６年も前の過去なんだね」

「私とヴィヴィオさんにとっては１３年前ですね」

こう改めて確認するととんでもない事態に巻き込まれてるよな、俺たちって。んで、俺やリリィにとっては顔なじみのヴィヴィオとアインハルトは、今目の前に居るヴィヴィオにとってはモニター越しに数回話した程度で、アインハルトに至っては会ったこと、話したことすらない初対面になるわけだ。

「あの、リリィさん・・・？」

「なに？　ヴィヴィオ」

「リリィさんって、融合騎なんですか・・・？」

ヴィヴィオにそう訊ねられて、「あ、ううん。私はね・・・っと」そこまで言いかけたところでリリィは口を閉ざした。俺とヴィヴィオとアインハルトで「？？？」リリィのその様子に小首を傾げる。と、「ねえねえ、トーマ」俺の服の袖を摘まんで何度か引っ張った。

「ちょっとゴメンね。・・・えっとね、トーマ。私とトーマが出会うのも、私のことについても、全部未来で起きることだから、話しちゃったらダメだよね？」

リリィに引っ張られるままにヴィヴィオ達から距離を取って、小声で話す。リリィの話を聴いた俺は「そうだった。危ね。ヴィヴィオ達だからって油断した。ナイスだ、リリィ」って親指を立てる。とは言っても「もう若干手遅れ感があるけど」こうして出会って話してる時点でさ。

「じゃあどうしよう・・・？」

「掻い摘んで話そう。詳しく説明するんじゃなくてさ」

「う、うん」

ヴィヴィオ達の元へ「ごめん、お待たせ」謝りながら戻る。そして早速「あのね」リリィが話を切りだした。リリィはちょっと天然なところもあるけど、一応しっかりはしてるから安心して任せていたんだけど・・・。

「私とトーマはね、その、ちょっと切っても切れない繋がりがあってね、それでいつも一緒に居る間柄で、・・・大切な人なんだ♪」

「「へ・・・？」」

「ぶっ！？　リリィ！　その言い方だと誤解を招く可能性が・・・！」

ほら、見ろ。ヴィヴィオとアインハルトが顔を赤らめて、しかも「トーマさんの彼女さんですか・・・？」ってアインハルトがテレながらそんなことを言ってきたじゃないか。ヴィヴィオも「リリィさん。トーマを末永くお願いします」なんて言ってくる始末。２人がそんなことを言ってくるからこっちまで恥ずかしくなる。

「ちょっ、違うから！　リリィとは、その、なんだ。大事な友達で、コンビのパートナーなんだ！　ヴィヴィオとアインハルトが考えてるような間柄じゃないから。オーケー？」

「イエス・オーライ♪　パートナー、そう、大事な相棒なの！」

「そっかぁ。じゃあわたしとアインハルトさんにとってのクリスやティオなんだね、リリィさんって」

「大切なコンビのパートナー・・・なるほどです」

俺の話にリリィもうんうん何度も頷いて同意してくれたし、ヴィヴィオとアインハルトの誤解も解けることが出来たし、リリィの正体についても深くは追及してくる様子もないし、これで何とか一件落着だな。それじゃあ本題に戻そうか。

「で、だ。俺たちは別々の未来から何の前触れもなく急に飛ばされて来た。そしてどうにかして元の時代に帰りたい。その方法なんだけど・・・」

一応"銀十字"に探らせてはいるけど、そうそう見つかるわけもなく、どうしたものかと唸っていると「あ、それなら今、ヴィヴィオさんが手掛かりを見つけてくれました」ってアインハルトからビックリ発言が。俺とリリィが「えっ？」ってヴィヴィオに視線を向けると、「あくまで推測だけど！」って前置きしてから話してくれた。

「――つまり、誰かの時間移動に巻き込まれて、俺たちも過去に飛ばされたってことか」

「たぶん。わたし達だけを過去に飛ばす理由なんてきっとないし。となると、誰かの転移に巻き込まれたって考える方が自然だと思うんだよね」

言われてみればその通りだ。わざわざ過去に飛ばす理由が無い。だったら過去に飛ぶ理由のある奴の転移に巻き込まれたって考えられ

る」

「さすがヴィヴィオ。無限書庫の司書資格を持ってるだけあって知識が豊富だね♪」

「あ、ありがとう♪　そういうわけで、同じように未来から人たちを見つけることが出来ればきっと、未来への帰還方法を判るはず」

「さすがに一方通行で過去に来たわけじゃないもんな。ちゃんと帰る方法を持ってるはずだ」

やっと希望が見えてきた。あとは八神司令たちと出来るだけ関わる事無くそのトラブルメイカーを見つけて、帰る方法を教えてもらう。それで解決だ。安心したら「あ・・・」きゅ～って俺とリリィの腹が鳴った。

「お腹空いたね、トーマ」

「ああ。こっちに来てから何も食べてないもんな、こっちの世界のお金持ってないし。ヴィヴィオとアインハルトはどうしてた？　やっぱ何も食べてないのか？」

「ついさっきジョギングとか犬の散歩をしてた人たちから、おにぎりとかパンとか貰ったんだけど、それまでは水道の水を飲んで空腹を紛らわせてた」

それは何とも羨ましい。そう思っていたら「食べきれなかったおに

ぎりがまだいくつか残ってるから、取りに行こう」ヴィヴィオから救いの光が差しのべられた。俺とリリィは「うんっ！」元気よく頷いた。そして俺たちは、ヴィヴィオ達の案内で別の休憩所へと向かうことに。

「にゃんにゃん♪」

≪猫型端末によって、ブック本体に軽度の損傷が発生。能動排除の許可を申請します≫

"銀十字"の上に器用に乗っかってるティオ（アスティオンって名前の雪豹モデルだったよな）がカバーを甘噛みしていた。そんな"銀十字"の申請に「ダメだよ、銀十字。それくらいいいでしょ」ってリリィが却下を下した。"銀十字"の再生能力からして甘噛みくらいどうって事ないし。そんな中、うさぎのぬいぐるみの外装を持ったクリス――セイクリッド・ハートが短い前脚で、ティオを窘めるようにポンポン叩く。

「ティオ、めっ、ですよ。クリスさんの言う通り銀十字さんを噛んではいけません」

「にゃあ」

マスターであるアインハルトに注意されても退くことはなかったティオだけど、甘噛みはやめた。その代わりスリスリと頬ずりを始めた。仲良しは良いことだ。

≪猫型端末の起毛がページ間に侵入。自動除去します≫

「ほら、ティオ。銀十字さんが困っています。こっちに来なさい」

「にゃあにゃあ」

「嫌がってる・・・？」

アインハルトの言うことを聴かないほどに"銀十字"を気に入ってるようなティオ。ティオはさらにペロペロ舐め始めた。

≪猫型端末の舐め回しによってページに歪みが発生。再度、能動排除の許可をお願いします≫

「噛んだり舐めたり、ティオにゃんにとったら銀十字って美味しいものなのかなぁ？」

「いや、どうだろ・・・？」

"銀十字"のことを気に入ってもらえてるのは判るけど、美味しいからかどうかはちょっと判らないな。とここでついに「ティオ、いい加減にしなさい！」アインハルトから強めのお叱りが入った。ティオが「にゃ・・・」しゅんとして一鳴き。

「あー、ティオ、おこられたー」

「にゃ～ん・・・」

「えっと、アインハルト？　別にいいぞ、これくらい。デバイス同士、仲良くするのは悪い話じゃないし」

≪ドライバーに異議を申し立てます≫

"銀十字"から不服そうな声が。アインハルトも「銀十字さんが嫌がってますから」そう言って、"銀十字"から彼女の胸へと跳び移ったティオを抱き止めてそう言った。クリスが落ち込んでいるティオを慰めるように頭を撫でて、"銀十字"はティオを避けるようにリリィの側に寄り添った。俺の側じゃないんだな。ひょっとして怒ってるのか？

「あっ、あそこの休憩所！」

「あのビニール袋の中に、余りのおにぎりがあります」

十数時間ぶりの食事にありつける。その嬉しさに早足になって、小走りになって、休憩所へ向かおうとしたその時、「にゃあにゃあ！」さっきまでと打って変わって、何かを報せるように大声で鳴き始めた。クリスをわたわた両脚を振り回して、"銀十字"からも≪転移反応を確認。脅威判定４体、接近中≫って報せが入った。

「接近中ってことは・・・！」

「私たちに対する追手、でしょうか」

「たぶんね。・・・銀十字。魔力反応から誰が来ているのか判るか？」

どうか八神司令が居ませんように、居ませんように、居ませんように。必死に願う。

≪・・・・識別完了。ルシリオン、シャルロッテ、シグナム、ヴィータ、上官の魔力反応と一致≫

未来で得たデータから特定できた。ルシルさんとシャルさん、シグナム姐さんにヴィータ師匠。八神司令は居なかったけど、それ以上にある種最悪の組み合わせだった。とりあえず「念のために林の中に隠れよう。まだ正確には見つかっていないはずだ」そう考えて、俺たちは姿を隠せる林の中に逃げ込む。変身は解除しているから魔力反応で見つかることはないはず。

「にしても、ルシルさんが居るのは正直まずい・・・」

思い出されるルシルさんの反則級魔法の数々。索敵・探査能力はもちろんのこと単独火力ですらも他の追随を許さない、八神司令と同じ魔導騎士の称号を有する、次元犯罪者の誰もが恐れる騎士。そして八神司令に二つ名――歩くロストロギアがあるように、ルシルさんにも二つ名がある。それが軍神。単独で武装隊の大隊以上の戦力だからそう名付けられたってスゥちゃんから聞いた。

「というかベルカ式組はみんなまずいよ！」

ヴィヴィオが焦りを見せる。シグナム姐さんもヴィータ師匠もとん

でもなく強いし、シャルさんも管理局で一部隊を統括する部隊長で、聖王教会でも最強の剣騎士と謳われるお人だ。それに管理局に所属する騎士たちの中で陸戦・空戦・総合問わずにＳＳＳランクを誇る、神層騎士って謳われてる１人、剣神でもある。実際に戦ってる姿は見たことないけど、八神司令たちが口を揃えて強いっていうんだから、その実力は確か。

「ヴィヴィオ達は、シャルさんの戦いを見たことあるか・・・？」

「うん、あるよ」「はい、あります」

「どうだった？　私とトーマ、シャルさんとお話ししたことは何度もあるけど、戦う姿は見たことなくて」

「強いよ。近接戦じゃたぶん負けなし」

「剣技・魔法・固有スキルを複合しての戦法を取りますから」

ヴィヴィオとアインハルトが僅かに顔色を悪くしてそう教えてくれた。顔色が変わるほどにその強さを目の当たりにしたってことか。でもそれはあくまで１３年後の未来での話。俺とリリィのディバイドを使えば、たぶんルシルさん以外になら勝てる・・・はず。

≪追跡者が四方に分散しました。脅威反応１、ルシリオンが接近中≫

俺たちを補足できていないみたいで分散して捜索に入ったみたいだ。けど選りによってルシルさんとか。運が悪いにも程がある。空から

はまず俺たちのことは見えないはずだけど、それでも屈んで体を小さくして身を隠す。
心臓がバックンバックン。見つからないか緊張が凄まじい。六課の主力が女性ばっかりの中、ルシルさんは同性として俺やエリオ君をよく気遣ってくれるけど、ルシルさんがそれまでに残してる戦歴から、戦闘中はあんまり近寄りたくない。

≪上空通過まで５００・・・３００・・・１００・・・≫

ハッキリと肌に感じるルシルさんの魔力。そして≪通過。離れて行きます。１００・・・３００・・・≫"銀十字"の報告通り、頭上の空を蒼い光が通り過ぎて行った。俺たちみんなが「はぁぁぁ・・・」同時に安堵の息を吐く。

「なんとか見つからずに済んだな」

「そうだね～」

≪足元より攻撃魔力反応≫

リリィと一緒に微笑み合ってると、"銀十字"から警告が発せられた。ヴィヴィオとアインハルトはさすがと言うべきか即座にその場から一足飛びで離脱。変身してなくてもその俊敏さには驚いた。俺もリリィの手を引いてその場からダッシュ。

「トーマ、アレ！」

リリィの声に従って後ろを振り向くと、木々の影から黒くて薄っぺらな人の手が幾つも伸び出て来ていた。そう、アレは「カムエル・・・！」だった。ルシルさんの魔法の1つで、攻撃と言うよりは拘束魔法に近い。ということは「俺たちに気付いていたってことか！？」になるわけで。

≪ルシリオンの魔力反応が急速接近≫

やっぱり気付かれてる。林の中を走り回る中、行く先々からカムエルが影の中から伸びて来て俺たちを捕らえようとする。ソレから逃げるために違う方向へ走ると、またその先でカムエルは発生。それが何度か繰り返されたことで、「ヴィヴィオさん、トーマさん、リリィさん、誘導されてます！」アインハルトがそう言った。俺も薄々は勘付き始めていた。

「トーマ！　ルシルさんから逃げるなんてホント無理だから、保護してもらお！」

前を走るヴィヴィオからそんな提案が。続けて「話すのが遅れましたが、私とヴィヴィオさんが未来人だということは知られています！」なんて、まさかの発言をするアインハルト。リリィが「喋っちゃったの？」って訊ねる。

「えっと、フォルセティと間違っちゃって！」

「それほどまでにそっくりだったんです、フォルセティさんとルシルさんが・・・！」

「「あー、確かに・・・」」

俺やリリィもフォルセティと会ったことはある。初見の時は、ルシルさんが縮んだ、って素で驚いた覚えが。ここが１６年前だから、９歳か１０歳。この頃のルシルさんと、１３年後のフォルセティの背格好って同じなのかもしれないな。

「しかもルシルさん、フォルセティと間違ったわたし達から情報を得るために、フォルセティの演技をしたんですよ！　時間転移の影響で記憶が混乱してるとか理由を付けて！」

「まぁ事情聴取の域ですから仕方がないとは思いますけど・・・」

若干お冠なヴィヴィオ。だけどそれを聞いて「ルシルさんの知識量は半端じゃない。もしかすると、俺たちの事情を察してくれるかも」そんな希望が湧く。俺たちの危惧している事態――タイムパラドックスによる歴史改変とか。その辺りを気にかけてくれるかも。

≪他の追跡者もこちらに向かって集まって来ています≫

シャルさん達も呼び戻されたみたいだ。これはもう逃げられない。そしてついに林の外へと誘導されて、俺たちは真っ青な空の下へと戻って来た。遅れて「出来れば抵抗してほしくないな」子供の声が頭上から聞こえてきた。見上げると、そこには１２枚の蒼い剣翼アンピエルを背負った小さな子供が居た。

「ルシ――」

「きゃぁぁぁぁ♪　ルシルさんもちっちゃ可愛い～い　　八神司令もそうだったけど、ルシルさんも可愛いみたい♪　どうしよう、すごくナデナデしたい　」

「やめて、やめてくれ、リリィ！」

確かに女の子っぽいけど、ルシルさんは立派な男の子だから。ほら、可愛いって言われて若干ショックを受けてる。

「コホン。時空管理局、嘱託魔導師の八神ルシリオン・セインテストです。高町ヴィヴィオさん、ハイディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルトさん、トーマ・アヴェニールさん、リリィ・シュトロゼックさん――」

アンピエルを解除して地面に降り立ったルシルさんが俺たちの名前を呼びながら順繰りに見てきた。そして「あなた達を保護しに来ました」そう言った。

「あなた達が別々の未来から来たこと、タイムパラドックスの危惧を考えて逃げ回ったことは判っています。深くは事情を聴きませんので、ここは抵抗せずに同行してもらえませんか？」

「本当ですか？　もうフォルセティの演技とか・・・？」

「あはは。しないから、しないから」

訝しんでるヴィヴィオに苦笑交じりで答えたルシルさん。とここで、「おーい、ルシルー！」女の子の声が。ルシルさんの側に降り立ったのは、真紅に光り輝く魔力の翼を展開したシャルさん、そしてヴィータ師匠にシグナム姐さんだった。

「シャルさんもちっちゃ可愛い　」

「つか、シグナム姐さんもヴィータ師匠も全然変わってねぇ！　なんで！？」

ルシルさんとシャルさんはちゃんと子供姿。だけど16年前なのに、シグナム姐さんは変わらず大人で、ヴィータ師匠は変わらず子供のまま。ヴィータ師匠が「師匠だぁ？　弟子なんかとった憶え――てか、未来の話かソレ」最初は訝しんで、俺たちが未来人ってことで納得した。そして、タイムパラドックスに気を付ける、って言っていたのにモロに話す俺に自己嫌悪。

「ま、それはあなた達の時代のシグナム達から聴けばいいよ。さて。本題に戻すけど、一緒に来てくれないかぁ？　悪いようにはしないし、これ以上事情を聴こうとも思わない。それにあなた達をこの時代に飛ばした原因を、すでに保護してるから悪い話じゃないと思うけど？」

「「「「えええ！？」」」」

ここに来て逃げようとは思わないし、俺たちを過去に飛ばしてくれ

やがった犯人がすでに八神司令たちのところに居るっていうのなら断る必要も無し。というわけで、「同行します」俺たちは口を揃えてその意思を示した。

「よし、良い子たちだね♪　未来組御一行様、アースラへご案な～い♪」

シャルさんがそう言って指をパチンと鳴らすと、俺たちを転送する光が足元から生まれた。

。―。―。―。―。

アースラの通路を1人歩くのは、桃花色の髪や衣服を纏った少女キリエ。本局は第零技術部での修復・治療を終えた彼女や、その姉アミティエ、フローリアン姉妹の監視役だったクロノはアースラへと戻って来ていた。そしてキリエは1人で考え事をしたいという理由を付けて、アースラ内をぶらぶら散歩していた。

（1人にして、って言ったのにしてくれてないじゃないの、あの執務官って子）

キリエは後方から視線を受けているのを察知していた。彼女を監視しているのはクロノだ。いくらフローリアン姉妹――特にキリエが観念して事情を話したとしても、彼女の単独行動を許すほど甘くも優しくもない。しかしクロノは気付かれないように細心の注意を払って尾行していた。それでもなお彼に気付いたキリエのセンサーはかなりの優秀さと言える。

「あら？」

どうやって監視から逃れようかと考えながら歩き続けていると、クロノの視線と気配が消えたのが判った。しかしその代わり「キリエ」彼女の名前を呼びながらアミティエがその姿を現した。深桃色の長髪をお下げにし、青色を基調とした衣服を身に纏っている。

「お姉ちゃん・・・」

「どこへ行こうとしているのですか？　大人しくしていなさい」

「なんの用よ。散歩くらい許してよ」

アミティエの問いにぶっきらぼうに答えたキリエは踵を返し歩き去ろうとした。が、「いいえ、ダメです」アミティエがそれを止める。キリエはギリッと歯軋りした後に背後に居るアミティエに振り返った。

「そんな思い詰めたような、悲壮感と責任感に押し潰されそうな目と表情をしたあなたを1人にさせるわけにはいきません。一体、何をやろうというんですか？」

「そんな目なんか、顔なんかしてない！」

「なら、そこのお手洗いに入って鏡で自分の顔を見てみなさい。酷い顔だって判りますから」

「っ！　わたしはどうしてもエグザミアが欲しいの。さっき聞いたのよ。マテリアル達の話し声。システムＵ－Ｄの再起動が近いって。この意味、お姉ちゃんになら解るでしょ？」

「・・・ええ。再起動したら、今まで以上の魔力出力を得、世界の２つや３つ、滅ぼしかねません」

「そうゆうことよ。再起動したらホントに手に負えない怪物になる。その前にわたしが・・・！」

あくまで"エグザミア"を手に入れる為と、キリエは両手を強く握り拳にした。アミティエは深く息を吐いて「たった１人で何が出来るというんですか？」そう言い放つとキリエは、「オーバーブラストがあるわ」と返した。アミティエの表情が驚愕に染まる。

「何を馬鹿なことを言っているの！　アレは一種の自爆行為！　下手をすれば未来に戻ることも出来ない体になります！」

「でも倒せるわ！　それにね、お姉ちゃん。機械は年下の方が性能は上なのよ。お姉ちゃんじゃ壊れるかもしれないけど、わたしはきっと大丈夫よ」

「やめなさい！　それでも勝てないのは解っているでしょう！？出力３５％であなたの全力を受けても傷１つ付かず、ルシリオンさんと一緒に来た女性も、出力５０％のＵ－Ｄに対して健闘しましたが、それでも勝てなかった。映像を観た限り、あの女性の最期の一

撃は、私やあなたのオーバーブラスト以上の威力を持っていた。それでも倒せなかった」

第零技術部での治療を終えた後、アミティエとキリエは、自分たちを助けてくれたプリメーラがどうなったかと知るため、彼女と砕け得ぬ闇の戦闘映像をクロノに頼んで観ていた。その強さに驚き、その上をいく砕け得ぬ闇の強さに絶望を抱いた。キリエも解ってはいた。が、それでもまだ諦めきれないのだ。

「ですから！」

「もう放っておいてよ！・・・お姉ちゃんには教えてないけど・・・ホントは、エグザミアを持って帰ったところで確実に救われる保証はなくて、あくまで可能性の1つなのよ。それでも無駄足で、徒労だとしても、誰に叱られても、その可能性に賭けてみようって・・・。

それにわたしもね、今さらだって言われるかもしれないけど・・・、もしかしたらエルトリアを救えるかも、なんて曖昧な賭けの代償で、この関係のない世界や人たちが傷つくのは本当は嫌、困るって思っていたのよ。だから今、再起動する前になら、わたしの全てを犠牲にすればきっと・・・！」

キリエの独白を静かに聴いていたアミティエは、「ギアーズってさ、元々は人の為、命の為に生み出された機械だもん。壊れたら捨てればいい。生まれた目的の為に、壊れるまで働いてこその機械。だから行く。もしわたしが動けなくなってもお姉ちゃんが居るわ。わたし、間違ってないでしょ」と続けているキリエへと歩み寄って行き、

パンッ、と頬を叩いた。そして目を丸くしてフラ付いたキリエを抱きしめた。

「馬鹿！　あなたは私の大切な妹なんです！　そんなあなたの自己犠牲で得た、エルトリアを救う術なんて絶対に持って帰りません！　あなたが居なくなったら私も、博士も、泣き死んじゃいます！」

「っ！・・・叩いたり、抱きしめたり、意味解んない・・・。そんなところが嫌い、大っ嫌い・・・」

「叩いたのは、あなたが馬鹿なことを言ったことへの罰。抱きしめたのは、たとえあなたが私を嫌っていても、私があなたのことが大好きだから。さっき本音を言ってくれましたよね。迷惑を掛けたくないって。本当はその優しさを持っている、すごく良い子だって知ってますから。それに何よりキリエ、あなたは世界中で一番可愛い、私の大切な妹だから。だから大好きなんです」

「ふ、ふんっ。そんなことを言って、わたしが泣いて抱きつくとでも思う？　そんなのあり得ないんだから・・・」

アミティエに抱かれているキリエの目から一筋の涙が零れ落ち、震えた声で強がりを見せた。アミティエはキリエの頭を撫でながら「別に思ってませんよ」と苦笑交じりで返した。

「私はただ、私の思ってることを伝えて、私がしたいことをしてるだけですから。傷ついて泣いてる妹を助けるのは、姉にとっては息をするのと同じくらい、ごく自然のことなんですから」

「なによ・・・なによ・・・」

とうとう大粒の涙を溢れさせたキリエ。アミティエは彼女の頭を撫で続け、あやすように背中をポンポンと優しく叩いた。

「今、皆さんが頑張ってU－Dを止めるために協力をしています。具体的な策も出来たようですし。私たちに出来ることは、その策が上手くいくように協力すること。これしかありません。だからあなた独りが頑張らなくていいんです。一緒に戦いましょう、キリエ」

「しょうがないわね・・・ぐす。キリエちゃんの本領、みんなに見せちゃうわ」

こうしてアミティエとキリエ、フローリアン姉妹は共に戦うことを誓い合った。

Ｅｐｏｓ５３決戦直前／たった一つの冴えたやり方～ＶＥＲＳＵＳ～

先ほどまでは晴れやかな青空だったが次第に曇り始め、ポツポツと小雨が降って来ていた。そんな小雨に当たることも厭わず、海鳴海上沖の上空には少女が４人と宙に佇んでいた。その少女たちはマテリアルと呼ばれ、今回の一件に深く関わってくる存在だ。

「ルシフェリオン、機能回復。戦闘用モード、使用可能」

１人は、"理"のマテリアルという識別名で、固有名を星光の殲滅者シュテル・ザ・デストラクター。高町なのはの姿を借りた少女。栗色のショートヘア、瞳は青。バリアジャケットは深紫色を基調としている。赤い魔力光に光り輝く魔法陣に佇んでいる。

「エレシュキガル、システムオールグリーンですわ」

１人は、"律"のマテリアルという識別名で、固有名を氷災の征服者アイル・ザ・フィアブリンガー。月村すずかの姿を借りた少女。白。一言で言えばそれだけで片が付くような外見だ。ヘアバンドを付けていないロングヘアも白、バリアジャケットも白。唯一、瞳が炎のように赤く輝いている。翡翠色に輝く魔法陣に佇んでいる。

「タラスクス、通常機能、戦闘機能、全箇所以上無しであります！」

1人は、"義"のマテリアルという識別名で、固有名を炎壊の報復者フラム・ザ・リヴェンジャー。アリサ・バニングスの姿を借りた少女。薄紫色のロングヘアはツーサイドアップで、ハネた髪――アホ毛が3本。瞳は黄金。バリアジャケットは赤と黒を基調としている。黄色に輝く魔法陣に佇んでいる。

「え？　えっと、バ、バルフィニカス！　全部問題なしのまるまるオーケー！」

最後の1人、"力"のマテリアルという識別名で、固有名を雷刃の襲撃者レヴィ・ザ・スラッシャーは、別段デバイスの機能確認をする必要も無いのだが他3人に倣うようにそう続けた。水色に輝く魔法陣に佇んでいる彼女の髪は水色のロングヘアをツインテールにしていて、ツリ目がかった瞳はワインレッド。全体的に青を基調としたバリアジャケットだ。

「マテリアル各自、全機能の修復を完了」

基体の再起動は済んでいたが、デバイスや戦闘機能の修復はまだ済んでいなかったマテリアル達も、ようやく完全に修復を果たしたようだ。そして最後に・・・

「マテリアル－D、駆体復帰。出力限界81％。エルシニアクロイツ、完全稼働」

彼女たちの上に立つマテリアルが再起動を果たした。"王"のマテリアルという識別名で、固有名は闇統べる王ロード・ディアーチェ。

紫色に輝くベルカ魔法陣に佇んでいる。八神はやての姿を借りた彼女の髪は銀色で、毛先には黒いメッシュが入っている。瞳は翠。オリジナルであるはやての騎士甲冑とは色違いではあるが、さほど違いはない。そんな彼女の側には"紫天の書"という名の本が浮遊している。

「おお！　お帰り王様！」

「お帰りなさいであります、陛下！」

「お帰りなさいですわ、王」

「お帰りなさい、ディアーチェ。お加減はいかがですか？」

ディアーチェの元へと集まる４基のマテリアル達がそれぞれ嬉しそうに彼女へと挨拶を掛けていく。ディアーチェも「うむ」と威厳に満ちた声色でそう応え、「力が溢れるとまではいかんが、戦うには分には問題ない」シュテルからの気遣いに満足そうに答えた。

「貴様らはどうだ？　存分に動けるだけ回復したのであろうな」

「うんっ」「はいでありますっ」「もちろんですわ」「ええ」

マテリアル全基の完全復活が叶い、ディアーチェも「よい」と満足そうに頷いた。そして「では今度こそＵ－Ｄを――砕け得ぬ闇を我が手に、この紫天の書に収めて見せようぞ！」そう力強く宣言した。

「その前に、陛下のその覇道を邪魔する屑物らの討伐でありますな」フラムがスッと明後日の方角へと目を向けた。遅れて「いやですわね、不要物の反応ですわ」とアイル、「ディアーチェに再起動に釣られて、塵芥も発生したようですね」とシュテル、最後に「断片データの団体さんだー！」レヴィが陽気な声で締める。

「U－Dに仕掛ける前の準備運動にはちょうどよいわ。シュテル、レヴィ、フラム、アイル。薙ぎ払ってやれ」

「了解です」

「はーい！」

「了承であります！」

「参りますわ」

ディアーチェの前より散開して行くマテリアル達。ディアーチェもまた残滓の討伐に動こうとした時、『王さま！　よかった、起きれたんやね！』はやてから通信が入った。

「フン。当たり前だ。それで何用だ、子鴉」

『あ、うん。残滓たちがまた発生したから、わたしら対処しようと思うて。王さま達はどうする？　いま外やろ？』

アースラでも闇の残滓発生を捉えたことで、砕け得ぬ闇――システムＵ－Ｄとの決戦に備えて英気を養えていたはやて達も対処に出るとのことだった。ディアーチェは「そちらはそちらで勝手するがよい。こちらはこちらで勝手に潰し回る」と不機嫌さを隠すこともなく、自分たちも残滓の対処に動くことを告げた。

『王さま達も動いてくれるん？　さっすが協力中、嬉しいよ♪』

「たわけめが。協力などではないわ。利害の一致からくる利用のし合い。我らの関係はそれだけよ。馴れ合いなど不要。よく憶えておけ」

ディアーチェはそう言い捨てて、残滓の反応がある地点へと向けて飛行を開始。それに続くようにはやてが映るモニターも追随。はやては『それは残念や。今はお互いの力が必要で、情報も共有した方が、何かと便利やろ？』と小動物のような目でディアーチェを見る。

「うぐぐ・・・、ええい、やめい、そんな目を見せても無駄だ！」

たじろぎながらモニターから目を逸らすディアーチェ。そんな彼女の前に姿を見せる残滓。ディアーチェが目をスッと細める。瞳に宿るのは憤怒一色。映るのは「フラムの断片か。忌々しい」と吐き捨てるほどに不愉快だったフラムの残滓。魔法陣の足場に佇んで虚ろな目をした残滓フラムが「敵基補足であります」と臨戦態勢に入った。

「子鴉、話が終わったのなら切るぞ！」

『もう1個大事な話があるんやけど、それはまた後で伝えるな』

はやてとの通信が切れ、ディアーチェは改めて残滓フラムに向き合い、「早々に潰してくれるわ。覚悟せい、塵芥めが」戦闘に入った。

。―。―。―。―。―。

「ブラストファイアァァーーーッ！」

「アウラール！」

残滓シュテルの"ルシフェリオン"より発射される火炎の砲撃。フラムの"タラスクス"・スナイピングフォームの銃口より炎のランスが放たれ、真っ向から砲撃と衝突。2基の間で起こる爆発と黒煙。フラムは足元に展開している魔法陣を蹴り、足裏より炎を噴き出させてミサイルのように爆炎に突っ込み、砲撃発射体勢のままでいた残滓シュテルへと最接近して、「ウィル・オ・ウィスプ！」火炎弾を連射。

「っく・・・！」

「前々から思っていたことを、偽者である貴様にぶつけるでありまま す！」

火炎弾の直撃を受けてよろけた残滓シュテルへとそう言い放ちながらフラムは、銃剣形態スナイピングフォームの"タラスクス"の刃

を残滓シュテルへと突き刺し、「アゲマントッ！」零距離の火炎砲撃を撃ち込んだ。残滓シュテルはその一撃で消滅した。

「火炎はフラムの専売特許だったでありますのに、どうしてシュテルまで炎熱変換を得たのか納得できないであります。私の魅力、半減でありますよぉ・・・」

落下する前に魔法陣の足場を展開して降り立ったフラムが溜息を吐きながらそう漏らした。そんなフラムに『フラム。そっちは片付いた？』アリサから通信が入った。すでにアースラ組の残滓討伐が始まったことを戦闘開始前に聞いていたフラムは「当たり前であります」と胸を張って答えた。

『さっすがフラムね。でさ、さっきの話の続きなんだけど』

「手短にお願いするであります。屑物はまだ他に居ますから」

『あたし達みんなで相談して決めたんだけど、あんた達の今後の話について。あんた達、U－Dを止めた後、どうすんの？』

「私たちの今後でありますか？・・・判らないであります。私は王下四騎士が一、フラム・ザ・リヴェンジャー。陛下の命がままに動くでありますゆえ」

フラムには自分の考えは必要ないと考えている。騎士は従い護る者。その一念で王であるディアーチェに従い、王と仲間を護る騎士として生きている。それゆえに今後のことなど王の考えのままとしてい

た。

『あー、やっぱ王様に許可が居るかぁ。はやての説得に掛けるしかないわね』

アリサが腕を組んで唸っている様を見て「一体何を企んでいるでありますか？」と訝しむフラム。すると『企みって程じゃないわよ』とアリサは苦笑し、『あんた達の落ち着き先をこっちで用意しようか、って話よ』と続けた。

。―。―。―。―。

「――圧倒的な暴力に勝るものは無い、と仰いますけど・・・そのようなことはありませんわよ！」

――ニヌルタ――

アイルのグローブ型ブーストデバイス――"エレシュキガル"の親指・人差し指・中指の外付けの爪より刀のような氷の爪が計６本と展開され、残滓レヴィへと斬りかかる。対する残滓レヴィは小野形態の"バルフィニカス"・クラッシャーで右の斬撃を受け、デバイスを横に払うことでアイルの右腕を外へと流す。

即座に振るわれる左手の爪による斬撃。残滓レヴィは空いている右手を伸ばし、ガシッとアイルの左手を真っ向から握り止めた。アイルの左手の平が開けていたことで可能な防御方法。指を曲げれば残滓レヴィの右腕を斬れるだろうが、残滓レヴィの怪力の前にそれは叶わず。

「力こそ死の象徴。力こそが全て・・・！」

メキメキと骨が軋む音がアイルの左手から漏れ聞こえてきた。それでも「頭が空っぽでは宝の持ち腐れですわ」アイルはニヤリと笑みを崩さず、弾かれた右手で"バルフィニカス"の柄を掴み取る。と、"バルフィニカス"は大鎌形態のスライサーフォームへと変形させた。

「無駄ですわよ！」

――ウトゥック――

柄を握っている右手を基点に"バルフィニカス"が凍りついていく。そしてアイルが少し力を加えたことで、バキン、と音を立てて真っ二つにへし折れた。残滓レヴィの攻撃手段の大半が失われた瞬間だった。呆ける残滓レヴィの右手から力が抜けたその瞬間、「力が聞いて呆れますわ」アイルが右手を握り拳にし、残滓レヴィの顔面にパンチ一発。

「ふぐっ・・・！？」

「これにて終幕ですわよ」

何てことはない魔力弾を海面へと向けて発射させ、着弾時に吹き上がった水飛沫を残滓レヴィに浴びせたのを確認したアイルは「エチムミ」一言。残滓レヴィの足元から吹雪の竜巻が発生し、彼女を呑

み込んだ。そして竜巻が晴れると、そこには凍りついた残滓レヴィが、氷の茨での拘束魔法――ラマシュテュで宙に繋がれている状態で在った。

「ま、こんなものですわよ。猪突猛進の力など、搦め手で終わりですわ」

凍ったレヴィをコツンとノックするように叩くとそれだけでガシャァンと砕け散った。空に舞う氷の破片をウットリ眺めながら、アイルは風に靡いて顔に当たる後ろ髪をサッと払った。

『あ、アイル。いま大丈夫？』

「大丈夫ではありませんわ、すずか。後にしてくださる？」

そんな時にすずかから通信が入り、アイルは露骨に面倒くさいと言った表情を浮かべた。それでもすずかが『一応、他のマテリアル達にも伝えているんだけど』そう言うと、アイルは「手短にお願いしますわね」と次の残滓発生点へと向かう。

『アイルちゃん。アイルちゃん達の今後についてのことなんだけど。アイルちゃん達って、U－Dを手に入れるっていう目的を果たした後の目標とか無いんだよね・・・？』

「それがなんですの？　我らの目標など、管理局には関係ありませんわ。自由の身となった以上、何者にも干渉されずに済むのですから。好き勝手にさせていただきますわ」

『それが他の人たちに迷惑が掛からないことなら歓迎なんだけど。でも、その為にも住むところとか必要になってくるよね？』

「その先は言わずとも結構ですわ。つまりこう仰りたいのでしょう？　私たちが悪さをしないように目の届く範囲に置いておきたい、と」

ジトッとした流し目でモニターに映るすずかを見るアイル。すずかはわたわたと両手を振って『違う、違う、誤解だよ！』と慌てて訂正する。アイルは深く溜息を吐いて「そうかしら？　そもそも私がオーケーを出しても、王は絶対に聞きませんわよ？」と、自分たちマテリアルの行動決定権を持つリーダーであるディアーチェの名を出し、すずか達からの提案を受け入れないと強調した。

。―。―。―。―。―。

「――へっへ～ん♪　アイルの氷結魔法なんて、ボクには全っ然通用しないよ～だ！」

「ありえませんわ、この私の攻撃が通らないなんて・・・」

消えかけている残滓アイルに向かって勝利のVサインを向けて満面の笑顔を浮かべるレヴィ。とは言っているもののレヴィも余裕で勝ったわけではない。残滓アイルはオリジナルのアイルよりかは魔力出力も低く、実力としてもレヴィよりは弱い。

（あぅ～、ホントは痛かったし危なかった。むぅ、偽者のクセに頭

が良いからタチが悪い魔法ばっか使ってくるし）

「このまま消えるなど、律のマテリアルとしてのプライドが許しませんわ。せめて相討ちを・・・！」

残滓アイルが"エレシュキガル"を装着している両手をレヴィへと向け、「ムンム！」とレヴィを囲うように球体状に氷の鏡が１０枚と展開。レヴィは「もうこの手は食わないぞ！」と防御力を犠牲にして機動力に優れたスプライトフォームへと換装。

――イガリマ――

残滓アイルより放たれた６発の冷気の魔力弾が、レヴィを囲う氷の鏡の中を高速反射しながら飛び回るが、それよりも早くレヴィは高速移動魔法スプライトムーブで脱出し、「スライサーフォーム！」"バルニフィカス"を大鎌形態へと変形させ、「光雷斬！！」発生している魔力刃での直接斬撃を振るって、残滓アイルを袈裟切りに裂いた。

「こんな・・・！」

今際の言葉は最後まで発せられることなく途切れた。残滓アイルはようやく消滅し、「はぁぁ。アイルみたいにちょっとしつこかった」と首をコキコキ鳴らした。そこに『レヴィ』フェイトから通信が入る。

「おお、オリジナル！　なんの用だ？」

『いま戦っていたよね。再起動してから初めて戦いだったから、ちょっと心配で』

「む。ボクがそんな軟なわけがないじゃないか。ヨユーヨユー♪」

フェイトに向かって元気を示すように"バルフィニカス"をぶんぶん振り回す。すると『そっか。うん、それは良かった』とフェイトは安心したという風に微笑んだ。レヴィはそんなフェイトを見て「ボクを心配するなんておかしな奴だな、オリジナルは。敵同士だろ？」と訝しんだ。

『それはもう終わったでしょ。今は協力してる仲間だって私は思ってるよ』

「仲間・・・？　まぁ、協力はしてることはしてるし、そう言えなくもない？」

腕を組んで唸るレヴィ。そこに『ねえねえ、レヴィ！』アリシアからも通信が入ると、「お？　姉っ子！」レヴィは独自のニックネームでアリシアを呼んだ。当然『アリシアだってば！』とアリシアは何度目かになる訂正をするが、「いいじゃん、姉っ子。それで？姉っ子もなんの用？」レヴィは聞きやしない。

『もう。・・・えっとさ、レヴィ達って、U－Dを手に入れた後はどうするつもりなの？』

「この後？　そんなの知らないよ。ボクは王様たちの考えに付いてくだけ。ていうか何でそんなことを訊くのさ」

『うん。そのね、何だかんだあったけど、今の私たちは協力中でしょ。だから事件後もずっと仲良くやって行きたいな、って思ってるんだ』

「なんだ、オリジナルはボクらと仲良くなりたいのか？　ヘンなことを言うんだな」

『そう？　おかしなことはないと思うけど。ちょっと過激だけど、根っこは優しいと思ってるよ、レヴィも、他のマテリアルの子たちも』

『というわけで、もっと仲良くなって、これからも一緒に遊べたらなって思ってるの。だからさ、この事件が終わったらもっとお話ししよう！』

フェイトとアリシアからそう言われたレヴィは「やっぱヘンなの」と呟くだけだった。

。―。―。―。―。

「たかが断片風情が。我らが王――ディアーチェの姿を借りて私の前に現れるなど、不愉快極まりないです。王を騙る無礼者。一片の灰すら残さず、早々と焼滅なさい」

シュテルの表情は変わらず無だが、その声色には明らかに怒りが満ちている。その怒りがそのまま彼女の強さとなり、現れたばかりの残滓ディアーチェを拘束魔法ルベライトで即座に拘束。脱出を試みようともがくディアーチェへと接近したシュテルは、"ルシフェリオン"を砲撃戦モードのブラスターヘッドへと変形させた。

「目障りです。・・・ブラストファイアァァァーーーッ！」

ほぼ零距離での手加減なしの火炎砲撃を残滓ディアーチェに浴びせた。残滓ディアーチェは断末魔も上げる事すら叶わずシュテルの言うままに焼滅した。シュテルは「王を見上げることすら許されない塵芥ぶりでした」と吐き捨てた。と、『シュテル、大丈夫だった？』なのからの通信が入った。

「ええ、問題はありません。戦闘と呼べるほどではない、単なる焼却処理でしたから」

『良かった。シュテルって強いけど、それでも復帰してそんなに間もないから心配だったんだけど』

「心配・・・、私がですか？」

心配されたことが不思議だと言うようにシュテルがそう訊き返すと、『もちろんだよ。だって今は一緒に戦う仲間でしょ？』とさも当然だと返すなのは。シュテルは小さく「仲間、ですか。そんな物が得られるとは思いませんでした」と呟いた。

『何か言った？　シュテル』

「いいえ。ですがそれにしても、身内の偽者というのがこれほどまでに不愉快、不快感を催すものだとは思いませんでした。なのは、それに他の者たちは、よく我々のような存在を受け入れてくれたものです」

『私は、不愉快だとか不快感なんて無かったよ。まぁはじめて会った時はビックリしたけど。でも違うから』

「違う？」

『うん。シュテルは私の偽者なんかじゃない。確かに見た目はそっくりだけど、ただそれだけ。シュテルはシュテルだよ。この世界でたった1人の、シュテル・ザ・デストラクターっていう名前の女の子♪　他のみんなもきっとそう思ってるよ』

一点の曇りもなく、なのははそう主張した。するとシュテルは小さく微笑みを浮かべて「ありがとうございます」と礼を述べた。

「やはり貴方たちは面白い方々です。・・・なのは」

『ん？』

「この一件が片付いたら、もう一度私と魔導を交えて頂けますか？　貴方のことをもっと知ることが出来たら、私はきっとさらなる高みへと登れる、そう思うのです」

『うん、もちろん♪　前回は引き分けだったけど、今度は勝つからね♪』

「ふふ。それはこちらのセリフです。２戦１敗１引き分け。この戦歴を必ず勝ち星で彩って差し上げます」

なのはとシュテル、片や満面の笑み、片や静かなる闘志を燃やす微笑みを浮かべ、次なる残滓の討伐へと向かうために通信を切る。

「では次に参りましょうか。王の覇道、我らの悲願。如何なる者にも、邪魔はさせません。この道程にどんな事象が待ち構えていようとも」

シュテルは決意を新たに、次の残滓発生点へと向かった。

。―。―。―。―。―。

管理局組、マテリアル達の活躍もあって残滓の発生が集束に向かい始めた頃、それは起きた。砕け得ぬ闇――システムＵ－Ｄの再起動が目前となったことで海上一帯の空間が大きく揺らいだ。それを一早く感じ取ったマテリアル達は、震動発生点へとそれぞれ向かい合流を果たした。

「見つけたよ、王様、シュテるん、フラム、アイル！」

その速度を以って一番乗りしていたレヴィが遅れてやって来たディ

アーチェ達に、宙に浮かぶ赤黒い魔力の球体に指を差してそう教えた。アイルが「あの闇の中で力を蓄えているのですわね」と、僅かに焦りを含んだ声色で発した。

「まずいですね。充填状況はすでに８割超と言ったところでしょうか。作戦を立てた時に考えていた最悪が起きてしまっています。これでは私が用意した第一プランが通用しません」

砕け得ぬ闇の戦闘機能を停止させる制御プログラムが搭載されたカートリッジによる一撃を打ち込み、戦闘機能を強制停止させるという作戦。その第一プランは、マテリアル達だけで行うというもの。しかしその第一プランも、砕け得ぬ闇の充填率の早さが台無しにしようとしていた。それを聞いたディアーチェが「我ら全基掛かりでもか？」と不服そうに訊くと、「無理ですね。通常戦闘であれば、接近する事すら困難かと」とシュテルは素直に答えた。

「で、ではどうすればいいでありますか？」

「やっぱりオリジナル達が来るのを待つの？」

フラムとレヴィの問い。シュテルはこの最悪のことを想定したうえでの作戦を立てていた。それが第二プラン。管理局組との共闘。ディアーチェは渋々ながらもオーケーを出したが、やはりこれまでのこともあって出来れば共闘などしたくないと考えていた。

共闘反対派はマテリアルのリーダーであるディアーチェを筆頭に、アイルとフラムの３基。レヴィはどっちつかず。シュテルは心が広いため、自分たちの悲願の為には共闘も協力も必要と考えている。

ゆえに管理局と協力しての共闘は第二プランだ。もちろん、管理局組にはそのことは伝えてはいないが。

「そうですね。我らが束になろうと、そしていくら策と弄しても、あの子に私の一手が届かないことくらいは予想できていました。その為に私は、なのは達に協力を依頼したのです。王、アイル、フラム。構いませんね？」

「仕方がありませんわ」

「しょうがないであります」

アイルとフラムが折れる中、「・・・我の極大魔法で停止は出来ぬのか？」ディアーチェだけはあくまで自分たちの手だけで幕を引こうとする。ゆえにシュテルは「王、言うことを聴いて下さい」と進言する際のディアーチェの呼び名、王、を使ってそう返した。

「それに王には、来たるべき戦いの為に力を温存して頂かねばなりません」

「来たるべき戦いだと？　シュテル、貴様は一体何を考えておる・・・？」

シュテルはディアーチェにハッキリと答えることなく、砕け得ぬ闇の居る魔力球へと視線を移した。そして「今できるのは、後の勝利へと繋がる布石を打つこと」と言って、"ルシフェリオン"の柄をギュッと握りしめた。それに気付いたフラムがほっと小さく息を吐

いて、「これ以上の充填を阻止することでありますな」と微笑んだ。その微笑みはどこか寂しげだった。

「っ。・・・ええ。少しでもあの子との力を削ること。それが、私たちに打てる布石」

――ルベライト――

「・・・ま、王の為、今後の私たちの為、ここで布石となるのも良いですわね」

――チェーンバインド――

「「っ！！？」」

シュテルとアイルの拘束魔法が、ディアーチェとレヴィを雁字搦めにした。ディアーチェが「何をする、シュテル、アイル！」そう怒鳴り声を上げる。

「こうでもしなければ行かせてくれませんから」

「何をするつもりなんだよ、シュテるん、フラム、アイル！」

「私たち3基、この身と引き換えにすれば、U－Dの多層防壁の何層かくらいは砕けますわ」

「それに、充填率を下げて弱体化も出来るであります。一石三鳥で

ありますな」

管理局組を待っている間にさらに充填が進み、本当に手を負えなくなる。そうなる前に、シュテルとフラムとアイルの３基は、砕け得ぬ闇の充填を止め、その身に纏う多層防壁を砕き、自身たちとの戦闘で魔力消費をさせてさらに弱体化をさせようと企んでいるのだ。そう、その身を犠牲にしてまで。当然そんな話を聴いてディアーチェもレヴィも納得いくわけがなかった。

「ふざけるな！　そのような自ら捨て石になるような勝手、我が許すとでも思ってか！！」

「そんなのダメだよ！　ボクだってそんなの許さないからな！　Ｕ－Ｄから受けた破壊と、オリジナル達から受けた破壊とじゃ全然違うんだよ！　もしシステム構造自体を壊されちゃったら・・・！」

「そうやって反対されると思いましたので、そのように拘束させていただきました」

「王。そもそも私たちは単なる捨て石になるつもりはありませんわよ。これは意義のある布石。ここで倒れようと、私たちの一手は次に活かされますもの」

「陛下。Ｕ－Ｄを手に入れる事が出来るのは陛下だけでありますゆえ。私たちが行くのであります。レヴィ。運が良かったら完全に消滅はしないでありますから、時を置けばまた逢えるでありますよ」

「あとのことはお願いします。ディアーチェ、レヴィ。行きましょう、フラム、アイル」

シュテル達がディアーチェ達に微笑みかけ、「待たんか！」と言うディアーチェと、「待って！」と叫ぶレヴィを置いて、砕け得ぬ闇へと向かって飛び去って行った。自ら死に行くような真似を黙って見ていることしか出来なかったディアーチェとレヴィは「ああああああ！！」叫び、バインドを砕こうと全身に力を籠める。

「こんなの嫌だ！　ボクだけ置いて・・・、置いて行くなぁぁぁぁーーーーーッ！！」

レヴィを拘束していたシュテルとアイルのバインドが砕け散る。バインド破壊プログラムを打ち込んだわけではない。ただ単純に怪力のみで破壊したのだ。肩で息をするレヴィに「レヴィ！　我のバインドも砕け、今すぐ！　共にあの三馬鹿を叱りつけるぞ！」とディアーチェが懇願するかのように怒声を上げる。だが・・・

「・・・ごめん、王様。王様はここに残って」

「なに・・・！？」

「王様はまだ完全じゃない。そんな時にあのＵ－Ｄと戦うのは本当に危ないって、ボクにでも解るから」

「っ！！　馬鹿を言うでない！　もう一度言うぞ、レヴィ！　今っ、すぐっ、このっ、バインドを破壊しろッ！！」

王であるディアーチェからの命令。レヴィはディアーチェの命令には従うと決めていた。が、「ごめんなさい！」最後の最後でレヴィは王の命に従うことなく、シュテル達の元へと飛び去って行った。

。―。―。―。―。―。

「あの者――Ｕ－Ｄの力はあまりにも強大過ぎるでありますな」

「ですわね。彼女には自律制御機能がほとんどと言うほどに備わっていませんわ。まるで災厄の闇ですわよ」

「ええ。ですが、だからこそ誰かが守り、導いてあげなければなりません。それを出来る唯一の存在こそが・・・」

「「「我らが王、ロード・ディアーチェ」」」

今後の憂いなく全てを託せるに値する自らの王の名を呼ぶシュテル、フラム、アイル。そしてここで消えることになったとしても、後悔はない、と寂しげに微笑み合った。砕け得ぬ闇との距離が縮まる中、フラムが「サラマンダー、カートリッジスタンバイであります」"タラスクス"に対Ｕ－Ｄカートリッジを装填。

「ケーニヒスベルク、ロードスタンバイ」

「ツェッペリンプログラム、スタンバイ」

シュテルもカートリッジを単発装填し、アイルも"エレシュキガル"に載せたプログラムをスタンバイ。そんな時、「置いて行くなんて酷いじゃないか！」とレヴィが追いついた。レヴィを見たシュテルとアイルが特に驚く。絶対に抜けられないように多重拘束をしたからこそ、抜けられないと思っていたのだ。さらには追いついて来た。驚くなと言う方が無理だった。

「私とアイルのバインドを破壊したのですか・・・！？」

「はぁ。さすがは力を司るマテリアルですわね。もう何も言えませんわ」

「へっへ～んだ♪・・・こうなっちゃったらボクも一緒に戦っても良いんだよね！」

「好きにするでありますよ。ほら、レヴィもカートリッジをスタンバイしておくであります」

「よしっ！　シャルンホルスト、スタンバイ！」

王の為、王下四騎士が今、砕け得ぬ闇へと戦闘を仕掛ける。四騎士の接近に気が付いたことで魔力球の中に居た砕け得ぬ闇が「何故来たのですか？」と言い、充填プロセスを中断して彼女たちと相対した。

「何故？　決まっているでしょう。救いに来たのですよ」

「救い？　私はそんなの求めてません。私は砕け得ぬ闇。救われる事なんてこれまでも、これからなく、ずっとこのままです」

「ううん、変われる、絶対に変われる。ボクらが、王様が居るから！」

「無理ですよ。もうすぐこの身は完成しますから、変わるにはもう遅すぎます。この身は破壊を齎す為。それこそが、私の生まれた意味です。知っているでしょう？　そして誰も私を扱いきれず、私たちを闇の書の底へと沈めたことを」

「もちろん知っていますわ。何せ私たちはこれまであの牢獄のような虚無の中にて共に在ったのですから」

「それを知っていながら、どうして私の前に立とうとするんですか？　私は・・・貴方たちすら破壊してしまうと言うのに。忘れたのですか？　先日、私があなた達の体を貫いたのを」

「そう簡単には壊されないでありますよ。初見とは違い、U－D、あなたの攻撃手段を知っているでありますからな。ですから大丈夫であります。ちゃんと救うであります、我らが、そして我らの王が！」

王下四騎士からの強い意志の籠った言葉にたじろぐ砕け得ぬ闇が、「そんなの戯言、夢物語ですよ。私を救うことなんて、誰にも出来ません。誰にも、私を救うなんて・・・」と、暗に救われたいのだと漏らした。それを確かに聞いた四騎士は顔を見合わせあって頷き合った。

「救えるかどうか・・・」
「試してあげる！」
「そして知りなさいな」
「何事にも終わりがあるということを、であります！」
四騎士がそれぞれデバイスを構えて臨戦態勢に入り、
「サラマンダー！」
「ケーニヒスベルク！」
「シャルンホルスト！」
「ツェッペリン！」
「「「「ロード！！」」」」
対U－Dプログラムを搭載したカートリッジやプログラムを起動させた。そして瞬時に散開し、砕け得ぬ闇の四方を陣取る。先手必勝の一撃必倒。まずアイルが「テスペスト・オブ・エンリル！！」特大魔法を発動。
本来はアイルを護るように発生する吹雪の竜巻が、砕け得ぬ闇を覆い隠すようにして発生。竜巻内に閉じ込められた砕け得ぬ闇へと竜巻裏面から氷の砲弾、剣、槍、と様々な攻撃が次々と撃ち込められ

る。

「次、フラム！」

「応であります！　タラスクス、吹雪の消失と同時に最大魔法であります！」

"タラスクス"が大剣形態のツヴァイヘンダーフォームへと変形させ、背負うような体勢で構えマガジン内のカートリッジを全弾ロードし魔力を上乗せ。さらに周囲に発生褪せた４つの炎の竜巻を刀身に集束させたところで、竜巻の中央付近から炎の翼がバサッと羽ばたき、燃え散らせた。

「ドラッヘン・・・アポカリプスッ！」

フラムが炎の大剣と化していた"タラスクス"・ツヴァイヘンダーを大きく振り下ろすと、大剣を構築していた炎が７つの頭を持った竜型砲撃と化し、砕け得ぬ闇へと向かって行き、直撃した。空一面に咲く劫火の花。

「アイル、フラム！　サポートをお願いします！　ルシフェリオン、ディザスターヘッド！」

シュテルの"ルシフェリオン"が最大出力を引き出す形態へと変形。爆炎に呑まれたままの砕け得ぬ闇へと「ルシフェリオンバスターＡ・Ｃ・Ｓ！」炎の翼を生やした"ルシフェリオン"を突き出して突進。魄翼で黒煙を払うことでその健在な姿を露わにした砕け得ぬ闇は、

自分に突進して来ているシュテルに気付いて攻撃を仕掛けようとした。その時、「させぬであります！　アルジンツァン！」半実体化した"タラスクス"の炎の刀身による直接斬撃が、砕け得ぬ闇の怪物の腕と化していた魄翼を裂いて霧散させた。

「させませんわよ！　ラマシュテュ！」

さらにアイルの発動した氷の茨１３本が砕け得ぬ闇を四肢や胴体、首を雁字搦めに捕えた。その僅かな隙が、シュテルに最大の好機を齎した。"ルシフェリオン"・ディザスターの先端から伸びる半実体化した炎の魔力刃が砕け得ぬ闇の多層防壁の３枚目に衝突。

「無駄です。こんなことをしても・・・私は・・・！」

「今はただ信じていなさいＵ－Ｄ！」

マガジン内のカートリッジを全弾ロードするシュテル。"ルシフェリオン"の炎の翼がさらに大きく、激しく燃え盛る。そしてついにピシッと砕け得ぬ闇の防壁にヒビが入り、甲高い音を立てさせながら砕いた。

「ブラスト・・・ファイアァァァァァ－－－－－－ッッ！！」

間髪入れずに火炎砲撃を発射したシュテル。至近距離で発射したために爆炎がシュテルをも襲うが、砕け得ぬ闇に比べれば耐火能力は高いため、「レヴィ！」炎の中から高速離脱したシュテルは無事だった。

「・・・・邪魔だ」

抑揚のない声が砕け得ぬ闇から発せられる。それと同時に圧倒的な殺気がこの一帯を覆った。砕け得ぬ闇の心優しい人格が底に沈み、全てを破壊し尽くすがための戦闘人格が発露。

――ヴェスパーレッドモード――

砕け得ぬ闇の色彩が白から赤へと変色する。それと同時、これまでのマテリアルの攻撃で消費していた魔力が徐々に回復し始めていく。唯一の救いは、これまでに砕けた多層防壁は再生されなかったことだ。

――アルゴス・ハンドレッドレイ――

砕け得ぬ闇が魄翼を大きく広げ、そして表面・裏面から途轍もない数の砲撃が全方位に発射された。四騎士の中で最高の攻撃力を有する"力"のマテリアルとしてのレヴィが、トドメの魔法に使う攻撃魔力が臨界点に達するまで待機していた。レヴィの頭上に6基とある雷球が派手に放電を始めた中、彼女に襲い掛かる砲撃。

「わわっ！」

砕け得ぬ闇の砲撃がレヴィに直撃しようかという時、「うおおおおおおおッッ！」レヴィの前に躍り出たフラムが迫り来ていた砲撃へと"タラスクス"・ツヴァイヘンダーを振り下ろした。衝突する魔

力剣と砲撃。始めは砲撃を斬り裂いていたがとうとう粉砕され、砲撃がフラムに直撃した。

「「「フラム！！」」」

"タラスクス"を粉砕されたフラムが足場としていた魔法陣より落下。アイルが救出に向かう中、「レヴィ、急いで！」シュテルが大声で指示を出す。そんなシュテルもフラムやアイルに追撃しようとしていた砕け得ぬ闇へ射砲撃を撃ち続ける。が、全く以って通用していない。

――クリムゾンダイブ――

砕け得ぬ闇が不死鳥の如く燃える鳥となり、砲撃を弾きながらシュテルへと突進。砲撃発射体勢だったこともあり「うぐっ・・・ぐぁ・・・！」シュテルはまともに突進を受け、さらに怪物の腕となった魄翼で薙ぎ払らわれた。

「シュテル！」

薙ぎ飛ばされた先には、墜落を続けるフラム、彼女を助けようと降下しているアイルが居た。砕け得ぬ闇はさらに「ジャベリンバッシュ！」魄翼で創った大槍を、フラムの右手を掴み取った直後のアイルへと発射。

「っ・・・あ・・・！？」

大槍は容赦なくアイルの背中に直撃。それでもアイルはフラムの手を離すことなく足元に魔法陣を展開し、そこに2人で倒れ伏した。と、そこにシュテルが墜落。僅か数秒でマテリアル3基が戦闘不能にされた。

「シュテル！　フラム！　アイル！・・・・くっ！」

大切な仲間を討たれても、それでも砕け得ぬ闇へ憎しみの目を向けることはないレヴィ。これが砕け得ぬ闇の意思ではないことも、彼女がこうならないように独りになろうとして居ることも、それが悲しくて辛くて、苦しんでいることも、本当はこんな事をしなくても良いように望んでいることも、知っている、からだ。

「轟雷爆裂！・・・じっとして。今、ボクらが助けるから・・・！」

――雷神封殺爆滅剣――

6基の雷球から雷撃に繋がれた雷剣が6本と発射され、「バレットダムネーション！」砕け得ぬ闇は魄翼表面から魔力弾幕を張る事で迎撃を試みるが、雷剣は器用に弾幕の中を突き進み、砕け得ぬ闇の胴体を貫いた。そして雷剣6本が炸裂。雷撃の爆発が発生し、砕け得ぬ闇を呑み込んだ。

「これで、終わり！」

レヴィはさらにカートリッジをロードし、"バルフィニカス"を大剣形態ブレイバーフォームへと変形させた上で上段の構えを取った

その直後、「ヘカトンケイルフィスト！」未だに続く雷光爆発の中から、握り拳を作った怪物の前腕部が高速で飛来。レヴィは「っく・・・！」ギリギリ横移動することで躱せた。が、それだけでは終わらなかった。

――バイパーー――

「っ！　うわあああああ！！」

避けた先の足元から魄翼で創られた槍が幾つも突き出しレヴィを襲撃。まともに受けたレヴィが吹き飛ばされ墜落を始める。その下には、シュテル達が今もなお倒れ伏しているアイルの展開した魔法陣が1枚。

「・・・・まだ、まだ・・・！　せめて・・・・！」

弱々しいながらも目を開けたレヴィは、懸命に腕を振るって伸長した魔力剣での直接斬撃魔法・雷刃滅殺極光斬を発動。戦闘不能間近であるにも拘らず反撃してくるとは思いもしなかった砕け得ぬ闇はその一撃をまともに受け、再度雷光爆発に呑み込まれた。そしてレヴィもまた魔法陣へと墜落。シュテル達と同じように戦闘不能となった。

「うぐ・・うぅ、う・・・うわぁぁぁぁぁぁああああああああああ！！」

雷光爆発が晴れ、砕け得ぬ闇がその姿を現した。両手で頭を抱え込み苦しそうに呻き声や叫び声を上げている。そして何を思ったのか

魄翼を無数の針へと変え、それらを倒れ伏している四騎士の全身を貫いた。

「・・・っ？　あ、ああ・・・・あああああ・・・！」

砕け得ぬ闇の色彩が白へと変わり、人格もまた元に戻る。そして彼女は、自分が仕出かした破壊の痕跡――四騎士の撃破を目の当たりにしてショックに目を見開いた。小さく「もう、嫌だ・・・こんなの・・・」今にも泣きじゃくりそうな表情を浮かべ、逃げるかのようにその場から飛び去って行った。

「シュテル！　レヴィ！　フラム！　アイル！」

とここで、シュテルとアイルが撃破されたことでようやくバインドから抜けられたディアーチェが魔法陣へと高速で向かい降り立った。今にも消滅しそうな４基に「しっかりせい、しっかりせぬか・・・！」弱々しく、信じられないことに泣き出しそうな声色と表情でそう叱咤した。

「ディアーチェ・・・、Ｕ－Ｄは・・・？」

「貴様らの策が上手く決まり、致命打を受けて逃げ去ったわ！」

本当は違う。致命打とは程遠いダメージしか、与えられなかった。

「へ、へへ・・・やった・・・やっぱしボクはさい・・きょーだ・・・」

「やりました・・わね・・・レヴィ・・」

「さすが・・でありま・・す・・・」

「うむ！　よくやったぞ、レヴィ！　フラムもアイルも、シュテルもだ！　褒めて遣わす！　胸を張れ」

それを知らないレヴィやフラム、アイルに、ディアーチェは涙声にならないよう努めて、声を張って四騎士を褒めた。そして「すぐに見つけだし、我の支配下に置いてくれるわ！」とディアーチェがそう言うと、「ならば、早く・・・行ってください」とシュテルが先を急かす。レヴィも「うん・・・ボクら・・・いいから・・・」自分たちを置いて行くよう告げた。

「良くはなかろう！　今なら、魔力を補給すれば貴様らもまだ助かる！　待っておれ、今すぐに我が魔力を分け――」

「ダメ、であります・・・それでは・・・陛下が、困るで・・・すから」

ディアーチェが魔力を分け与えようとするのをフラムが止める。続けて「です・・わ・・・。それでは・・・U－Dを止め・・・られ・・せんわ・・・」とアイルも拒絶した。そして「ええ・・・、むしろ、逆です」とシュテルが咳き込みながら言う。四騎士が弱々しく手を伸ばし、ディアーチェの手に触れた。

「っ！？　おい、貴様ら！　何を、何をしておるか！　やめい！　魔力を、貴様らの魔力を我に流し込むな！」

四騎士が取った行動。それは自分たちを構成している魔力の全てを王であるディアーチェに渡すこと。ディアーチェは手を振り払おうとするも、やはり決死の行動を取っている四騎士を邪険には出来ないようで振り払えない。ただ、「頼む・・・やめてくれ・・・」懇願めいた言葉を発することしか出来ない。

「我々はもう・・・この体で・・・戦うことが出来ません・・・」

「だから、陛下に・・・託すのでありますよ・・・」

「私たち・・・の・・悲願・・・そして・・・」

「王様の夢・・・、砕け得ぬ闇を手に入れて・・・ホントの・・王様に・・なる・・こと・・・」

「たわけめが！　王ひとりになんの意味がある！　貴様ら――臣下が居ってこそ、我は王足り得るのだ！　許さぬ、絶対に許さぬぞ、こんな夢半ばで消えることなど！　魔力の供給をやめよ、今すぐ！　これは、王命ぞ！」

「申し訳ありませんが・・・王命であろう・・と・・・聴けません・・・」

「王・・・。あなたが王でなければ・・・私たちもまた・・・臣下

足り得・・ないの・・ですわよ・・・・」

「・・・私たちの力と・・・・」

「ボクらの夢・・・王様に・・・全部預ける・・から・・・・」

薄らと消えていく四騎士から託された夢・願い・思い、そして彼女らの力と魔力。ディアーチェの「もうやめよ・・・・！」という制止も空しく・・・

「一緒に行きましょう・・・、U－Dを・・止めるため・・・・に・・・」

「・・・私たちは、共に在る、でありますよ・・・・」

「どうかご武運を・・・・」

「負けないでね・・・王様・・・・」

シュテル、レヴィ、フラム、アイルは消滅した。いや、ディアーチェの内へと流れ、彼女と1つとなったのだ。しかしディアーチェにとってそれは「う、うぅ・・うあああああああああああああ！！！」ひとりとなったことと変わりはなかった。

Ｅｐｏｓ５４－Ａ決戦／永き旅路の終わりへ～Ｆｉｒｓｔ　Ｂａｔｔｌｅ～

†††Ｓｉｄｅルシル†††

ヴィヴィオ達をアースラへと連れて戻り、俺はあの子たちが探していると思われるアミティエとキリエ、フローリアン姉妹と引き合わせた。場所はトレーニングルーム。クロノとフローリアン姉妹は、シュテルとアイルから対システムＵ－Ｄ用のプログラムを預かり、その稼働試験を行っていた。

「クロノ提督もちっちゃ・・・」

ヴィヴィオがそう言って驚く。１３年後のクロノは高身長だからな、今のクロノの低身長が信じられない程に。アインハルトが「ルシルさん。あの方たちが、時間移動の原因の・・・？」とフローリアン姉妹を差して確認してきたため、「そう。彼女たちの時間移動に巻き込まれて、君たちも飛ばされて来たんだ」と答えた。

「クロノ、アミティエ、キリエ。少しいいか・・・？」

プログラムの稼働試験を終えたのを見計らい、３人に声を掛ける。そしてフローリアン姉妹にヴィヴィオ達のことを紹介すると、あの子たちへの「ごめんなさい」第一声は謝罪だった。

「あの、元の時代に帰る方法を教えてください」

「俺たちを待っていてくれる人たちが居るんです」

ヴィヴィオとトーマがそう言うと、アインハルトとリリィがうんうんと頷いて同意を示した。アミティエとキリエが顔を見合わせて、「ごめんなさい。時間移動に関してはちょっと難しいところがありまして・・・」まずアミティエが不穏なことを言い、ヴィヴィオ達の表情が不安一色になったのを見、「待って！　ちゃんとみんな帰られるようにするから！」とキリエが弁明した。

「はい。必ずみなさんを元の時代に帰ることが出来るよう、妹と一緒に考え実行できるように努めますから、もうしばらく待っていてください」

「うん。この一件が片付いたら、になっちゃうけど・・・それでもちゃんと考えるから。ごめんね」

誤魔化す事無く正直に帰す方法についての見当がないことを伝えたアミティエとキリエが、ヴィヴィオ達に深く頭を下げた。その姉妹の真摯な態度にヴィヴィオ達も強くは出ることが出来ず、「あ、はい・・・」と引き下がった。

「執務官、ルシリオン君。この子たちをこのままこの艦に保護してほしいんだけど？」

「ああ。もちろんだ」

「それともう1つ。彼女たちとはあまり話も接触もしない方が良いかと」

「タイムパラドックスの件だな。それについてはこの子たちも了承している・・・よな？」

ヴィヴィオ達に振り向いて確認すると、「はい」とあの子たちは首肯してくれた。タイムパラドックスを気にして逃げ回っていたくらいだ、あの子たちも納得してくれた。話はこれで終わり。ヴィヴィオ達を個室に移そうとしたところ、「あの・・・」ヴィヴィオが小さく挙手し、「みなさんが抱えてる問題ってなんなんですか？」と訊いてきた。

「聴いてどうする？」

「あ、あの、もし手伝えたら、もっと早く解決できるかな、って・・・」

クロノに訊き返されてビクッとするヴィヴィオがそう答えた。すると「せめて事情を知りたいです。どうしてアミティエさんとキリエさんがこの時代へ来たのか、など・・・」アインハルトもそう続けた。

「俺も、事情を伺いたいです。そしてもし、俺たちでも手伝えるようであったら手伝いたいです」

そしてトーマと、「うん。私たちの力、少しでも役立てば」リリィ

も事情を聴いたうえで協力が出来ればしたい、と買って出た。俺はクロノに「どうする？」と訊ねる。正直、反対の思いもあるが、映像を観る限りだがトーマの特別な力――魔力結合の強制分断は、魔導戦では強大な対抗力と成り得る。そのことについてはクロノも承知している。

「事情だけでも話したらどうだ、クロノ。知る権利くらいはあると思うが」

「・・・ああ。じゃあ、簡単に話そう。アミティエ、キリエ。あなた達からもお願いする」

「はい」「ええ」

そして俺たちは、今起こっている事件のあらましを話せる分だけヴィヴィオ達に話す。フローリアン姉妹が未来からこの時代に訪れた理由、マテリアルと砕け得ぬ闇のことについて。話を聴き終えたヴィヴィオ達の瞳には強い意志の光が生まれていた。

「わたしの勝手で、あなた達に迷惑を掛けたこと、本当に申し訳ないって持ってる。でも、わたしは助けたいの、故郷を・・・」

キリエの願いを改めて聞いたヴィヴィオ達は顔を見合わせて頷き合い、クロノを前からしっかりと見つめ、「手伝わせてください！」と頭を下げた。腕を組んで沈黙を保つクロノ。俺は「トーマとリリィの能力は使えると思うが」と、クロノ自身も考えているであろう意見を出す。

「アミティエ、キリエ。彼女たちのデバイスに、対Ｕ－Ｄプログラムは載せられるか？」

「八神ちゃんのデバイスにも載ったんでしょ？　出来ないことはないと思うわ。まぁ、デバイスちゃん達の頑張り次第かな」

キリエはそう言ってヴィヴィオの側に浮遊するウサギのぬいぐるみ――"クリス"と、アインハルトが胸に抱える仔猫？――"ティオ"をチラッと見てウィンクすると、"クリス"はビシッと敬礼し、"ティオ"は「にゃん！」と力強く一鳴きした。

「戦力は多いに越したことはない。が、危険だと判断したら即座に後ろに下がらせる。それで構わないね？」

「「「「はいっ！」」」」

こうしてヴィヴィオ達の参戦も決定。急いでヴィヴィオとアインハルトのパートナーに対Ｕ－Ｄプログラムを載せるための作業を始めるアミティエとキリエ。そんな中で、アリシアから最後のマテリアル、ロード・ディアーチェの再起動、そして闇の残滓の多数発生の報せが入った。

「僕やルシルも出た方が良いか？」

クロノが"デュランダル"の柄をグッと握りしめる。"Ｓ２Ｕ"で使える射砲撃や補助魔法を、"デュランダル"でも使えるようにし

てあるため、すでにソレがクロノの新たなパートナーと言った風だ。
『えっと・・・ううん、大丈夫。マテリアル達も出てくれるみたい。フェイト達と協力すれば・・・』
「そうか。じゃあ僕とルシルは居残りで、あの子たちの稼働試験を行おう」
クロノと一緒にトレーニングルームの隅っこで作業をしているヴィヴィオ達へ視線を向けると、目に見えてヴィヴィオ達はぶるっと体を震わせた。フローリアン姉妹の作業が終わるまで待っていると、『緊急連絡！　システムU－D出現！　クロノ君、ルシル君、出れる！？』緊迫した声でエイミィから通信が入った。
「プログラム搭載作業の方は！？」
「完了よ！　でもちゃんと稼働するか確認がまだ・・・！」
キリエがヴィヴィオとアインハルトに振り向くと、「ぶっつけ本番で大丈夫です！」ヴィヴィオが、「はい。それで問題ありません・・・！」そしてアインハルトも続けて大人モードへと変身した。そんな2人に「本当に大丈夫なのか・・・？」とクロノが不安げに訊く。
「「大丈夫です！」」
「もしもの時は俺とリリィでサポートしますから！」

『心配・問題、ありません！』

モード黒騎士という姿に変身したトーマと、彼とユニゾン？したリリィの意思もまた強かった。そこまで言われたらクロノも「判った」と頷くしかなく。そうして「では行こう！」俺たちはトランスポーターへと駆け出した。

その間、戦闘を始めたマテリアルと砕け得ぬ闇の状況をモニターで観る。マテリアル達、1基1基の決死の攻撃をその圧倒的な魔力で防ぎきっている砕け得ぬ闇の異常性には改めて驚かされる。

「引くなら今だぞ、2人とも」

息を呑んでいたヴィヴィオとアインハルトに最後通告するクロノ。しかし2人は「やらせてください！」その意思を揺るがせなかった。そして俺は「トーマ、リリィ、あの砕け得ぬ闇の纏う魔力、分断しきれるか？」と異質な力を持つ2人にそう訊く。

「あんな高魔力を持った相手とは会ったことがなくて・・・ちょっと判らないです」

『でも足手まといにはなりません！』

そう返してきたリリィに「別に足手まといとか考えていないよ。逆に頼りにしているくらいだ」と後ろをついてくるトーマに振り向いて微笑む。砕け得ぬ闇への直接ダメージが期待できなくても、あの子の放つ攻撃への対処力は俺たち以上かもしれないからだ。

（にしても、１６年後には砕け得ぬ闇並の魔力を持った敵対者は居ないんだな。というか１６年経っても俺は存在しているのか・・・。何をのんびりしているんだか）

２５歳ほどになっても"堕天使エグリゴリ"全機の救出を終えていない自分に今さらだが失望。溜息を漏らしながらも辿り着いたトランスポーター。それとほぼ同時、ディアーチェを除くマテリアル達が全滅したのを観た。

「っ！・・・急ぐぞ！」

クロノに急かされ、俺たちはアースラより出撃。小雨の降る空へと転送され、はやて達と合流するために空を翔けた。そしてはやて達とディアーチェの姿を視認したんだが、「――殺すぞ！」ディアーチェがリインフォースにそんな悪態を吐いているシーンを目の当たり。彼女たちは何やら口喧嘩のような言い合いをしているようだ。

「はやて、みんな！」

「ルシル君、クロノ君！」

「それにアミティエさんにキリエさん！」

「っていうかヴィヴィオ達も一緒なの！？」

俺がそう声を掛けると、三者三様に俺たちに反応するはやて達。そ

んなあの子たちに、フローリアン姉妹は自分たちが招いたことへの責任として、未来組は事情を知ったうえで砕け得ぬ闇を救い、自分たちが未来へ早く戻れるようにという、それぞれの理由から、この子たちの参戦を許したと俺とクロノは伝えた。

「――で？　ディアーチェは先ほどから何を怒鳴っている？」

一体何を言い合いしているのかと訊けば、ディアーチェは他４基のマテリアルの力を一身に預かったのだが、その強大さは彼女の駆体の強度では耐え切れず、このままでは壊れてしまうかもしれない。はやてとリインフォースはそれを心配してディアーチェの身を案じたんだが、彼女は仲間を失ったことで興奮状態であったからか、殺すぞ、発言で黙らせようとしたのだった。

「・・・それでどうするんだ、ディアーチェ。君も戦うんだろ？」

「無論だ！　奴らが打ってくれた布石を、奴らが我に託してくれた力を、無駄になど出来るものか！　我がＵ－Ｄと対峙するのだ、誰にも邪魔はさせん！」

そう訊いた俺にも怒鳴るディアーチェ。俺も、怒鳴ることはしないが誰かに何かを託される、という経験は嫌と言うほどあるから理解できる。

――哀れな堕天使（あのこたち）を見捨てないであげて――

"エグリゴリ"を救ってあげてほしい。シェフィリスや"アンス－

ル"のみんなから託された想い。その想いを果たす為なら俺は自分の身が危なかろうが何だってする。ディアーチェの言い分を理解できるからこそ、俺は「決まりだな。ディアーチェも参戦させる。それで構わないな・・・？」はやてとリインフォース、ディアーチェの参戦を快く思っていない2人に告げる。

「でも・・・」「しかし・・・」

「はやてちゃん、リインフォース。私もルシル君に賛成」

「きっとこれ以上何を言っても止まらないわよ、ディアーチェは」

「うん。レヴィもシュテルも、フラムやアイルだって、ディアーチェの為に頑張ったんだから」

「だから一緒に戦ってもらおう？」

渋るはやてとリインフォースに、なのは、アリサ、フェイト、すずか、そして「最終的にヤミちゃんを制御できるのってディアーチェだけだし」とシャルがそう説得した。俺も「ああ。制御できるのがディアーチェだけである以上、俺たちは破壊することしか出来ない。それはさすがに勘弁だ」と続く。

「はやて、リインフォース。制御する方が破壊するより確率が高いはずだ」

トドメのクロノ。それでようやくはやてとリインフォースも折れ、

「うん。一緒に頑張ろう」とはやてがディアーチェに告げると、彼女は鼻を鳴らし「Ｕ－Ｄは我が必ず制御する。破壊などさせぬからな」と念を押してきた。これでディアーチェの参戦も決定。
そんな彼女が「一度の戦闘ではおそらく済まぬ」と言ってきた。段階を分けて砕け得ぬ闇を弱体化させなければならない、と。となればチーム分けだ。砕け得ぬ闇の反応をまだ捉えられていない今、チーム分けの相談が出来る。そして・・・

「第一チームは、僕、イリス、ルシル、シグナム、ヴィータ、キリエ、トーマだ」

「第二チームは、わたしとリインフォース、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃん、ヴィヴィオちゃんとアインハルトちゃん、アミティエさんや」

弱り切った砕け得ぬ闇に制御プログラムを打ち込むディアーチェ。シャマル、ザフィーラ、すずか、アルフは、防衛線と結界維持を担当するサポート班に回る。チーム分けを終えてすぐ、『みんな！ヤミちゃん――じゃなかった、システムＵ－Ｄを発見！』アリシアから通信が入った。

「よし。第一チームは先行するぞ！　第二チームとディアーチェはあとで来てくれ！　行くぞ！」

クロノの指示に俺たちはそれぞれ応じ、第一チームである入れ達はアリシアの言うポイントへと飛んだ。

†††Ｓｉｄｅルシル⇒イリス†††

アリシアの案内に従って向かった先、そこに砕け得ぬ闇――ヤミちゃんが居た。サポート班のすずかやシャマル先生たちが結界を展開。さらに局から応援に来てくれた結界魔導師たちも結界を展開。

「とんでもないな。周辺の魔力を途轍もない勢いで集めていっている・・・！」

「うん。次の段階へ覚醒しようとしてるんだろうね・・・」

「ここで仕留めねーとまずいな」

クロノが固唾を呑む。わたしやヴィータもそんな感じ。これまで以上に圧倒的な存在になりつつあるヤミちゃん。それでも止めてあげないと。

「おーい、ヤミちゃ～ん！　ちょっと話しようかぁ～～～～！！」

会話が出来る状態ならまずは話し合い。そう決めていたからこそ、とりあえず大手を振って話しかけたけど、ヤミちゃんは沈黙を貫いた。クロノが「応答はなし、か。仕方ない。第一チーム。これよりＵ－Ｄの確保行動に移る！」そう告げて戦意を放つと、「魔力の増大！　来るぞ！」ルシルが声を張り上げた。

ＶＳ。――。――。――。――。――。

其は悲劇からの解放を望む者・砕け得ぬ闇

。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

ボケーっとしてたヤミちゃんが急に目を覚ましたかのように魄翼っていう魔力の靄のものを大きく翼状に広げて、

――アルゴス・ハンドレッドレイ――

魄翼の両面から全方位へと真っ赤な砲撃を１００発と発射して来た。わたし達はその場から散開して、「各自、対Ｕ－Ｄプログラムを起動しろ！」クロノからの指示通り、わたし達はシュテルから預かったカートリッジやプログラムを起動していく。

「キルシュブリューテ、ヴァッサーファル、カートリッジロード！」

「レヴァンティン、ヴィルベルヴィント、カートリッジロード！」

「アイゼン！　ブルムベア、カートリッジロード！」

「デュランダル。オストヴィント、起動」

「エヴェストルム・ツヴィリンゲンシュベーアト。ラントクロイツァー、フェルディナント、カートリッジロード」

対Ｕ－Ｄプログラムを起動。そしてわたし達はヤミちゃんへと攻撃を仕掛ける。先攻は「コード・プシエル！」ルシルの発動した蒼い炎の龍プシエルの呑み込みによる牽制攻撃。ヤミちゃんは「この魔導は・・・、魔神オーディン・・・！？」と驚愕の声を発しながら、

怪物の両腕へと変えた魄翼で上顎と下顎を掴み取って、親指以外の４本の指の爪を伸ばしてプシエルを貫き消滅させた。

「よかった、会話できるじゃないか。ちょうどいい。話を聴いてもらおうか・・・！」

この中で一番機動力があることで囮として矢面に立つルシルが、ヤミちゃんにそう語りかける。だけどヤミちゃんは「話？　話すことなんて何もないです」そう切り捨てて、怪物の両腕でルシルを握り潰そうとした。ルシルは高速後退して回避。

「俺たちは君を救いたいんだ。嘆き苦しんでいる君を」

「無用です。同情なんて要りません、放っておいでください。今の私に近づくと、私はあなたを害してしまいます」

――バレットダムネーション――

魄翼表面から放たれる何十発っていう魔力弾幕を、ルシルは両手に握ってる"エヴェストルム"を振るって自分に当たる分だけを斬り裂いて迎撃した。僅かに驚きを見せるヤミちゃんに「いいや、無理だな。俺は救うぞ？」って不敵に笑みを見せるルシル。

「たとえオーディン――の血族であろう君でも無理だ。救えないモノもある。オーディンも結局は、守護騎士と管制融合騎を救えなかった。優しいだけでは救えないのです」

ヤミちゃんの魔力や魄翼に変化あり。攻撃の前兆。それが判ったからこそ、

「そいつは違ぇな！」

――ラケーテンハンマーーーー

「ああ、我々は救われたさ！」

――紫電一閃――

ヤミちゃんの背後を取ったヴィータとシグナムが魄翼潰しの一撃を繰り出した。何かに変わろうとしていた魄翼は斬り裂けたけど、ヤミちゃんに到達した2人の攻撃は、目に見えない魔力の多層防壁によって防がれた。そしてオートなのか元に戻った魄翼が怪物の腕となって2人を鷲掴もうとしたのを、「ラピッドトリガー！」キリエと、「シルバーバレット！」トーマ、2人のエネルギー弾が妨害。

「あなた達は・・・烈火の将、それに紅の鉄騎・・・」

――バイパーーーー

振り向きざまにわたし達全員の足元から魄翼で創られた槍を突き出させたヤミちゃん。みんなそれぞれ躱す中、「あたしらは救われた！お前も見てたんだろ！？」ヴィータが怒鳴る。

「救われなかったじゃないですか。だからこうしてこの時代にあな

た達が存在している」

――アルゴス・ハンドレッドレイ――

また魄翼両面から１００発の砲撃が発射された。膨大な魔力があってこそのチャージ無しでの速射砲弾幕。それぞれ回避しながら「光牙閃衝刃！」"キルシュブリューテ"の刀身に魔力を付加して、刺突行為をトリガーに発射する中距離攻撃用の魔力槍の一撃を繰り出す。

わたしの閃衝刃に向かってヤミちゃんが自身の右手を翳そうとした時、「リングバインド！」クロノのバインドがその右手を拘束。そして着弾・・・したように見えたけど、やっぱり多層防壁に防がれて、バインドもすぐに砕かれた。

「いいや、救われたよ、我々は。それまで我々は家族というものを知らなかった。戦いの為の道具として扱われてきたからな。しかしオーディンは、我ら夜天の守護騎士を戦友として、家族として、扱ってくれた」

――シュトゥルムヴィンデ――

シグナムの言葉と一緒に放たれた衝撃波がヤミちゃんを捉えたけど、魄翼がバサッとはためいてその一撃を払い退けた。ルシルが「ヴィータ！」の"グラーフアイゼン"・ハンマーフォルムのヘッド部分に氷結付加、氷製モーニングスターになった。

「そうさ！　オーディンは、地獄ばかりだったあたしらに光を見せ

てくれた、温かな家庭をくれた！」

――クリスタレス・ハンマーーーー

ヴィータの一撃を実体化した魄翼で防御したヤミちゃんに、「確かに過酷な運命からは解放されなかった。だが・・・！」シグナムが魔力斬撃・空牙を放って追撃。ヤミちゃんはその一撃をパンツァーシルトで防いだ。

「けどそのおかげで、あたしらは最後の夜天の主・八神はやてに出会えた！　オーディンは知っていたんだ、きっと！　予言とか言ってたし！　あたしらは、オーディンの家族になれた、はやてと巡り合えるような奇跡も起こしてくれた！　これを救いじゃないって言うならなんだって言うんだよ！！」

ヴィータはもう1度氷塊のハンマーによる一撃を繰り出す。ヤミちゃんは「っ！」防御することなく高速後退することで回避。

「光牙烈閃刃！」「ブレイズカノン！」

回避先を予見していたわたしとクロノによるダブル砲撃。ヤミちゃんは怪物の腕へと変えた魄翼で砲撃を握り潰して対処。その隙に「はーい、ヤミちゃん♪」キリエが懐深く入り込んで、武装"ヴァリアント・ザッパー"を二剣の片刃剣へと変えての直接斬撃を繰り出した。

「憶えてくれてるかしら？　あなた曰く、時の操手になり損ねちゃ

った、お馬鹿な桃色ギアーズよ」

「憶えてますよ。まだ私のエグザミアを欲しているんですか？　諦めて早々に鉄屑となってください」

――ヴェスパーリング――

キリエの斬撃を障壁で受け止めて、すかさず魔力リングを発射して反撃。キリエは「エグザミアはもう要らない、諦めたわ。奪うことが出来ないって判ったし」くるっと1回転しながら横移動して躱して、"ザッパー"を二挺拳銃に変形、エネルギー弾ラピッドトリガーを連射。それすらも障壁で防ぐヤミちゃん。

――舞い降るは、汝の煌閃（コード　マカティエル）――

そんなヤミちゃんの全方位から蒼い魔力で創られた槍が13本、一直線にヤミちゃんへ殺到。ルシルの槍を実体化させた魄翼で大きく払い退けた。

「炎牙崩爆刃！」

「スティンガーレイ！」

「シュワルベフリーゲン！」

「銀十字！」

ルシルに続いて、わたしは炎の斬撃を、クロノは魔力弾６発を、ヴィータは物質弾に魔力を付加した物理・魔力の射撃を、トーマは前面に展開した"銀十字の書"から切り離されたページからのエネルギー弾を放った。

「諦めてもらえて何よりです。誰も、私に触れることなんて出来ませんから」

ヤミちゃんの単純な魔力放出。それだけでトーマ以外の攻撃が掻き消された。トーマのエネルギー弾は僅かに威力を落とされたようだけど、それでもヤミちゃんに届いた。だけど威力を減衰された所為か、ヤミちゃんを常時護る多層防壁は突破できなかった。

「ううん、違う。あなたに触れられないからじゃない。始めっから過去も未来も変えるなんてしちゃいけなかったのよ」

――ファイネストカノン――

「過去に遡ったり、誰か傷つけたり、お姉ちゃんに辛い思いをさせたり。そんなことをしてまで我が儘を通すのって、やっぱり良くないかなって思ったのよ。そんな簡単なことだったのに、気付くのがあまりにも遅かった」

砲弾としたエネルギー弾２発を、間を開けて撃ったキリエ。ヤミちゃんは高速で左に右にと移動して躱したところで、「紫電・・・清霜！」回避先に待ち構えていたシグナムの居合斬りが繰り出された。

「っ！」

「「「「「「入った・・・！？」」」」」」

"レヴァンティン"の刃がヤミちゃんに打ち込まれた・・・かのように見えたけど残念。また多層防壁に防がれた。

――サイズディカピテイション――

ヤミちゃんは2つの魄翼を大鎌へと変え、健在を示すかのように即座にシグナムに反撃した。初撃が微かに回避に移ったシグナムの頬を浅く切って、二撃目が当たるかどうかの一瞬、「させない！」ルシルから放たれた魔力槍1本が魄翼を打って、シグナムの離脱を援護。

――バレットダムネーション――

わたし達の接近を拒むように何十発っていう魔力弾幕を張ったヤミちゃんだけど、回避や防御に必死なわたしとは違ってキリエがまた「アクセラレイターー！」高速移動で接近を試みた。

「だからわたしは、博士がくれたこの体と心、この2つだけで、わたしに出来ることをするっ」

銃から片刃剣一対へと戻したキリエは、腕を大きく広げるような形で"ザッパー"を振るって斬撃を繰り出す。ヤミちゃんは真っ向から怪物の腕へと変えた右の魄翼で殴りつけるように迎撃。刃と拳が

火花を散らして拮抗。

「お姉ちゃんと一緒に未来に帰って、わたしはずっと博士の側に居るっ。博士に残された最後の時間を一緒に・・・過ごすのっ！」

「だったら、私の前に現れることなく帰ればよかったじゃないですか。わざわざ壊されに来るような真似をして。それだと本当にお馬鹿になっちゃいますよ」

「ケジメよ♪　未来に――お家へ帰る前に、散々迷惑を掛けたことへの。そして、あなたを、我が儘で駄々っ子な迷子ちゃんを、保護者のところへ連れていってあげないとね！」

「本当にいい迷惑です」

左の魄翼も腕となって、キリエを横から殴りつけようとする。

「風牙真空刃！」「空牙！」

ここでわたしの真空刃がキリエの"ザッパー"と拮抗してる右の魄翼を潰し、シグナムの斬撃で左の魄翼を迎撃。すかさず「クリムゾンスラッシュ！」トーマがヤミちゃん本体に赤い斬撃を放って直撃させる。パキン、と何かがひび割れた音が聞こえた。

「ようやく1枚目にダメージを与えられたか・・・！」

クロノが言う。わたし達の攻撃は塞がれてはいるけど、でも確かに

多層防壁やヤミちゃんの魔力を削り取ってる。このまま削って、第二チームのなのは達が好条件で戦えるようにしないと。

「先ほどから私の魔力を分断する君も・・・いや君たちは、ギアーズと同じ異世界出身者か・・・？」

ヤミちゃんの目がトーマと、彼の内に居るリリィに向いた。トーマは「そう見えるかな、やっぱり？　一応、管理世界出身だよ」って答えて、『わたしも！』リリィも続いた。ヤミちゃんは「そう。それで？　無関係な君たちは、何しにここに来た？」戦闘行動を止めて、真っ直ぐトーマを見詰めた。

『各自、攻撃中止』

クロノからの思念通話の指示に『了解』ってわたし達はそれぞれ応える。トーマとの会話中に下手に攻撃を加えて、トーマに危険が及んじゃ意味がない。

「君の帰りを待ってくれている人が居る」

『ヤミちゃんも知ってるでしょ？　ちょっとおっかないけど、でもなんだか可愛い王様のこと』

「王が、ディアーチェが、私を・・・待ってる？　あり得ない、そんなこと、もうあり得ない。私は、壊してしまった。ディアーチェの大切なシュテルも、レヴィも、フラムも、アイルも。ディアーチェがそれを許すわけがない・・・！」

――ヘカトンケイルフィスト――

「U－D！」『ヤミちゃん！』

魄翼2つから怪物の腕の前腕部がトーマに向かって射出された。右を"ディバイダー"っていう大剣で弾き逸らして、左を"銀十字の書"のページで防御したけど、その魔力の強大さと衝撃にはトーマの魔力結合分断（ルシルとクロノ談）効果は通り難かったようで、「うわぁぁぁ！」トーマを大きく弾き飛ばした。

「ディアーチェが待っているのは、私じゃなくてエグザミア。砕け得ぬ闇の力を求めているだけ・・・！」

――ジャベリンバッシュ――

巨大な槍を飛ばして追撃に入ろうとしたヤミちゃんに向かってわたしは「外見相応に駄々っ子っていうか、逆にそぐわない諦めの良さというか！」ヤミちゃんへと急降下して、「剣神モード、2セコンド、オン！」わたしの魂に眠ってるっていう、シャルロッテ様の武装・"断刀キルシュブリューテ"の能力、絶対切断、を2秒限定で発動する。

「せいっ！」

トーマに当たる寸前の槍を真っ二つに寸断して、「話を聴きなさい！」ヤミちゃんを怒鳴る。ヤミちゃんは「何をです？　ディアーチェか

らの恨み言でも聞けばいいんですか？」なんて後ろ暗い思考しちゃうし。

「違う！　Ｕ－Ｄ。君とあの子たちは、元は一緒だったんだって聞いた」

『同じように生み出されて、ずっと永い間一緒だった同朋なんだって』

わたしの背後からヤミちゃんに話しかけるトーマとリリィ。わたしだって「ディアーチェは、エグザミアじゃなくてあなたを待ってるんだってば、Ｕ－Ｄ！」そう言って続く。

「たとえそうであったとしても、全ては遅い。私は壊れてしまっていて、その壊れたままの状態で完成しようとしている。待っているのは、破壊する力に呑み込まれた私の姿をした闇のみ。だから・・・」

――アルゴス・ハンドレッドレイ――

また砲撃弾幕を発射して来たヤミちゃん。トーマがわたしを庇うように前に躍り出て、「ディバイド！！」魔力結合分断効果を前面に集中させたみたいで、ヤミちゃんの砲撃数発を掻き消すことに成功。

「俺もね、Ｕ－Ｄ。昔・・・と言ってもそんな昔じゃないか。ほんの少し前、俺にもあったんだよ。詳しいことは言えないけどいろいろあって、それで近付くものを何でも攻撃する殺戮マシーンみたい

になってしまった事が」

トーマの独白にわたしはちょっと驚きと、怖さを感じた。トーマのような力を持った子がヤミちゃんみたく暴走なんてしたら、魔法を使う魔導師や騎士はどうすればいんだろうって。でもこうして元に戻っているんだから、未来の誰かがトーマを救ってくれたに違いない。

「どうしようもなかった。近付くだけで俺はその人たちを害する。そんなの耐えられなかった。だから、独りで死のうとした。誰にも迷惑を掛けたくなかったから。だけど、助けてもらったんだ俺。たくさんの人たちに」

『うん。私もトーマも、私たちを助けてくれた人たちと一緒に居て、ちゃんとお仕事も出来てるの』

リリィの話に、やっぱりか、って思いが生まれた。トーマとリリィ、私たちのことを親しそうに知っているくらいだもん。トーマ達を助けてあげられたんだな、未来の私たち、って。

『だからね、ヤミちゃんも諦めないで！　諦めなかったその先できっと待ってる！　ラッキー・ハッピーな明日が！』

「ああ！　もうダメだって思っても、それでも結構なんとかなるもんだって思う！　実際におれ経験してるから、かなりの説得力だろ！？」

「同じに見えても全然違いますよ。だってあなたは後からそうなっ

た。でも私は始めからそうなんです。始めから壊すための機能しかない私に、救いがあるなんて思えません」

――エターナルセイバーーーー

トーマとリリィの説得も僅かに効いたようだけど、それでもヤミちゃんが留まるまでには至らなかった。それでも「君自身の力で止まれないなら、俺とリリィ、いいやみんなで止めるから！」トーマも、『うんっ。みんなで助けるから！』リリィも説得を続ける。そして左右から迫る炎の剣を、"銀十字の書"の切り離されたページを円形に組んで盾としたソレで防御。

「光牙・・・！」

わたしは背に展開してる魔力翼――ルビーン・フリューゲルをバサッと羽ばたかせて上昇。そして斜め上から「烈閃刃！」"キルシュブリューテ"を振るって、刀身に付加していた魔力を剣状砲撃として発射。魄翼は今、炎の剣として使用中。あとはヤミちゃん自身の多層防壁と防御魔法による妨害。

（防げばいいよ。それはそれで魔力も防壁も削がれるんだから）

回避されなければそれでいい。その思いで放った烈閃刃はヤミちゃんの多層防壁に着弾。魔力爆発を起こす寸前にわたしとトーマは離脱。その直後、熱量を伴って烈閃刃が炸裂して、ヤミちゃんが魔力爆発に呑み込まれた。

「デュランダル！　アイシクルブレイド・エクスキューションシフト！」

魔力爆発から無傷で飛び出して来たヤミちゃんに、クロノが発動した氷の剣の雨が降り注いでく。防御じゃなくて回避行動に移るヤミちゃんに「せめて待つんだ！　本当に救われないのか、それを見届けるという選択肢もあるはずだ！」クロノが語りかける。

「どちらにしても救われないのが判っているから、待つだけ無駄です」

――バレットダムネーション――

魄翼から魔力弾幕が張られる。回避にそれぞれ動いていると、「君個人の意思の自由を束縛すべきではないのは解るが、それでも何度でも言おう。信じろ。君を大切に思う王や他のマテリアル達のことを！」今度はクロノが説得に入る。でもやっぱり「いい加減にしてください。私はもう、言葉だけでは止まれません」ヤミちゃんは言うことを聞いてくれない。

『こちらルシル。準備は整った。あとは誘導するだけだ』

ルシルからわたし達みんなに思念通話が入った。ここに来るまでに立てた作戦っていうほどのモノじゃないけど、それの準備が整ったことを報せる思念通話が。あとはヤミちゃんをルシルとクロノが用意してくれていたポイントに誘導するだけ。

「ヤミちゃん！　ちょーっと痛いかもしれないけど、それはあなたの為でもあるから我慢してね♪」

――ラピッドトリガーーーー

「なに悪いようにはしねぇから！」

――シュワルベフリーゲン――

キリエとヴィータの弾幕がヤミちゃんを襲う。わたし達の放つ空気から、「一体何を企んでいるのか知りませんが無駄なあがきです」わたし達が勝算を企んでいることを察したよう。だからか防御に回らず、「エターナルセイバー！」炎の剣で薙ぎ払って迎撃。

「無駄なことかどうか、そのうち判る！」

――紫電一閃――

「ホントはここで止まってくれたら嬉しいんだけどね！」

――光牙月閃刃――

ヤミちゃんに急速接近したシグナムが、炎を噴き上げる"レヴァンティン"を横薙ぎに振るう。警戒して後退することで躱したヤミちゃんへと今度はわたしが接近して、攻撃魔力を刀身に付加した"キルシュブリューテ"を勢いよく振り下ろす。

すると2つの魄翼が怪物の腕に変化して、あろうことか右腕がわた

しの"キルシュブリューテ"を白刃取りしようとしてきた。ていうかされた。人差し指と中指がガッチリと"キルシュブリューテ"を白刃取りで止めた。すかさず左腕による拳打が繰り出された。

「銀十字！」

わたしと怪物の腕の間に展開される１０数枚のページが、魄翼による拳打を防御してくれた。さらにはページ表面からページ分のエネルギー弾が発射されて「うぐっ・・・！」ヤミちゃんを離脱行動へと至らせた。

「ごめんね！」

――光牙烈閃刃――

そのまま"キルシュブリューテ"を横薙ぎに振るって、後退途中でありトーマのエネルギー弾の防御をし終えてたヤミちゃんへと剣状砲撃を発射。わたしの砲撃がヤミちゃんを捉えて、しっかりと着弾。するとついにガシャァン！と多層防壁が砕ける音がした。煙幕の中からヤミちゃんが飛び出して来た。

――殲滅（コード）せよ、汝（カマエル）の軍勢――

とここでルシルが展開した色んな変換資質を持った魔力槍が、「ジャッジメント！」パチンと指を鳴らすっていう号令の下、何十本とヤミちゃんへと殺到してく。魔力槍は良く考えて撃ち放たれていて、ヤミちゃんの回避先を誘導して行ってるのが判る。

――アロンダイト――

――雷刃爆光破――

――ブラストファイアー――

――アゲマント――

――シュルシャガナ――

「っ！！？？」

さらにルシルは、マテリアル達が使ってた砲撃魔法を発射。ヤミちゃんの目が驚愕に開かれる。すると「オーディンは相手から複製した魔法を使える。知っていただろ？　俺も使えるぞ」ルシルはそう言って、ヤミちゃんから余裕をなくさせた。自分が討ったマテリアル達の魔法が、自分に向かって発射される。それがヤミちゃんの精神を揺れさせた。そしてついに・・・

――ストラグルバインド――

――レストリクトロック・シーリングフォース――

――チェーンバインド・シーリングフォース――

――フープバインド・シーリングフォース――

――リングバインド・シーリングフォース――

「えっ・・・・！？」

ルシルとクロノによる多重捕縛結界がヤミちゃんを捉えると、「魔力が・・・！」ヤミちゃんから焦りの含まれた声が発せられた。ルシルのバインド全てには魔力生成阻害効果があるって話。
クロノのストラグルバインドも、相手も拘束しつつ、相手が自分に掛けてる強化魔法を強制解除できたりするし、それに魔力で体を構成した魔力生命にとっては武器にもなる優れもの。

「っく・・・・！　こんなものが切り札だっていうんですか・・・？
　この程度、私のエグザミアにとってはなんら障害にはなりません・・・・！」

減衰してた魔力がまた上がってく。悪いけどこれが終わりじゃない。始まりなんだよ、ヤミちゃん。捕縛結界の効果――魔力生成阻害と、ヤミちゃんの命とも言うべきらしいエグザミアの生み出し続ける魔力のせめぎ合い。
そんな中、わたし達はヤミちゃんと真正面から相対するように集合して、円形になるように6方向へと分かれる。一番上がルシル、右から順にヴィータ、シグナム、一番下がクロノ、そしてわたし、キリエって順。トーマだけが真ん中で待機。

「・・・？？」

「俺たちの役目は、出来るだけ君の力を殺ぐこと。説得できれば一番良いんだが、それは叶わないようだから。・・・すまないな。少々手荒いぞ」

ルシルの前面に、ルシル独自の魔法陣が展開される。十字架の四方から剣が４本伸びて、その周囲を３つの円環が繋いでるって風なやつ。それと同時、わたし達はそれぞれ射砲撃の準備に入る。

「女神（コード）の・・・・！」

ルシルが"エヴェストルム"を連結させた形態に戻して、片穂に強大な魔力を集束させてく。

「ブレイズ・・・！」

クロノが"デュランダル"を前方に向けて砲撃の発射体勢入る。

「ファイネスト・・・！」

キリエが"ザッパー"２挺を横並びに重ねるようにして前方に向けた。

「アイゼン。ギガントフォルム。コメート・・・！」

"グラーフアイゼン"を巨大化させるギガントフォルムにしたヴィータの前方に、ボーリング玉大の物質弾が１基創り出された。

「紫電・・・！」

シグナムが"レヴァンティン"の刀身に強大な炎を噴き上げさせる。

「ディバイド・・・！」

トーマが前方に大剣――"ディバイダー"を向けた。

「光牙・・・！」

そして最後にわたしが、"キルシュブリューテ"の刀身に魔力を噴き上がらせる。ヤミちゃんを拘束してたクロノのストラグルバインドが砕け散る。それを合図としたように・・・

「宝閃（ゲルセミ）！！」

ルシルは前面にある魔法陣へと突き出した"エヴェストルム"から蒼光の砲撃を発射。するとその砲撃が魔法陣を通過すると同時、さらに強大な砲撃と化してヤミちゃんを襲撃。魔法陣は次にヴィータの前面へ移動。

「フリーゲン！」

ギガントフォルムの"グラーフアイゼン"によって打ち出された物質弾コメートフリーゲンが魔法陣を通ると、砲撃を纏うようにしてフリーゲンは発射されて、ヤミちゃんへと着弾。次に魔法陣が向かうのはヴィータの次順のシグナムの前。

「一閃！」

魔法陣を切り裂くように"レヴァンティン"を振るったシグナム。刀身に噴き上がっていた炎が魔法陣を通ると、その炎は火炎砲撃となってヤミちゃんへと発射されて・・・着弾。次はクロノの前へ移動する魔法陣。

「キャノン！」

"デュランダル"から放たれた砲撃が魔法陣を通過。するとさっきのルシルの時みたく砲撃はさらに強大になって発射されて、ヤミちゃんに着弾。魔法陣がわたしの前に移動して来た。

「烈閃刃！」

外見がホントに幼い女の子だからちょっと気が引けるけど、キリエに、見た目から油断しちゃうんと墜とされちゃうわよ、って厳重注意を受けたこともあって、わたしは容赦なく"キルシュブリューテ"を降り下ろして刀身から剣状砲撃を放つ。わたしの烈閃刃が魔法陣を通過、するとやっぱりわたしが全力でも放てないような馬鹿みたいな威力になった砲撃が発射されて・・・ヤミちゃんに着弾。

「カノン！」

キリエの真ん前に移動した魔法陣。キリエもちょっと撃ち辛そうにしてたけど、それでもエネルギー砲弾を発射した。砲弾は魔法陣を

通過することで特大の砲撃となって発射されて、着弾。そして魔法陣はトーマを中心に直径４ｍほどにまで大きく広がった。

「ゼロッッ！」

トーマが放つ砲撃が巨大魔法陣を通過すると、砲撃は魔法陣と同じほどの太さとなって発射されて・・・

――アーティラリーズリボルバーーーー

「ぅ、うう、うぅぅ・・うぁ、うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

恐れからか判んないけど悲鳴を上げたヤミちゃんへと着弾した。わたし達が濛々と立ち込める煙幕を見詰めてる中、「やったのか・・・？」クロノの誰とも言わずに発した言葉に、「弱体化させたうえでの対Ｕ－Ｄプログラム搭載のＳＳランク並の砲撃６連発に、トーマのディバイド効果砲撃だ。少しは堪えていてもらわないと困る」ルシルがそう返した。

「・・・ねえ、ルシリオン君？　やっぱりダメだったみたいよ」

キリエがそう言って苦笑する。晴れ始めた煙幕の中からいまだ健在なヤミちゃんが姿を現した。だけど「動作困難・・・、身体機能の回復不良・・・！？」やっぱりちゃんとダメージは通っていたみたい。ここでわたし達の対Ｕ－Ｄプログラムの効果が途切れた。それはつまり第二チームと交代ってことで。

「今ので物理防壁は何枚か貫いた・・・！」

「ああ、それに魔力防壁も確実に貫いた」

「うん。ＫＫＧ――気合いと、根性で、頑張った甲斐があったわね・・・。なし。今のなし。やっぱ恥ずかしい・・・」

照れて耳を少し赤くしたキリエの様子にわたし達が小さく笑い合ってると、「戦線・・・離脱・・・！」回復を図ろうとヤミちゃんがどこかへ飛び去って行こうとした。だけど「それも想定済みだ」ルシルが指を鳴らす。

――聖剣集う絢爛の城（ソード・キャメロット）――

ヤミちゃんの行く手を遮るように発生するのは炎の壁。ヤミちゃんが逃げに転じた場合の足止めとして、戦闘中にルシルが用意したものだ。さぁ、ヤミちゃん。ディアーチェ達が来るまで待っていてもらおうか。

Ｅｐｏｓ５４－Ｂ決戦／永き旅路の終わりへ～Ｓｅｃｏｎｄ　Ｂａｔｔｌｅ～

†††Ｓｉｄｅルシル†††

俺たちの連携攻撃で、砕け得ぬ闇を撤退に追い込めるだけのダメージを当たることが出来た。"堕天使エグリゴリ"以外を相手に魔術師化したくなかったが、砕け得ぬ闇は"エグリゴリ"並に厄介な相手だった。

それゆえに作戦内に魔術師化し、複製術式ティーロ・スフォルツァンドを基にして創った魔術・アーティラリーズリボルバーを発動することを組み込んだ。アーティラリーズリボルバーは、魔法陣に魔法を打ち込む事で、神秘を有した魔術の砲撃へと化すことが出来る。

（問題は、トーマの魔力結合分断能力――ディバイドで魔術が消されないかだったが、消されることなく効果を発揮できた。まぁ魔術化はしなかったが、ディバイド効果を僅かに高められたのは確かだった）

そのおかげで砕け得ぬ闇を護る多層防壁も、馬鹿みたいな膨大な魔力をある程度削り取ることが出来た。だからここで逃がすわけにはいかない。俺たち第一チームは、これからあの子と戦う第二チームの勝率を高くするための先陣だ。ここで逃がして回復をさせてしまえば、今の戦闘が水の泡になる。

「その炎の壁は突破できないぞ、砕け得ぬ闇。聖剣集う絢爛の城ソ

ード・キャメロットは、聖剣と分類される特別な力を持った武装でしか破れない。いくら膨大な魔力を持っていようと、その悉くを弾き返す」

砕け得ぬ闇の背中に向けてそう言い放つとあの子は「うわぁぁぁぁぁぁ！！」大声を絶叫。防護服の色彩が白から赤へと変わり、素肌にはトーマのような刺青のような赤い模様が生まれた。

「色彩が変わった・・・！」

「チッ。せっかく削った魔力が元に戻り始めてやがる・・・！」

シグナムとヴィータが様変わりした砕け得ぬ闇の復活の早さにそう呻く。しかも「今までの魔力とは何かが違うな」妙な魔力を生み出しての復活だ。そう言った俺に「あれこそが、無限連環機構エグザミアの力よ・・・！」キリエが教えてくれた。ということは、今までの砕け得ぬ闇の魔力は、単純なリンカーコアで生成させた魔力になるわけだ。本当に規格外だな。

「なんか・・・悲しい悲鳴・・・」

シャルがそう言って、彼女自身も悲しげな表情を浮かべると「苦しいんだろう。あれだけの力を持っているとなれば、彼女単体で動くのも難しいはずだ」ってクロノもまた辛そうに語った。

「だからこそ誰かが、王様が支えてあげないとダメなんですね」

『うん。そうしないとヤミちゃん、壊れちゃうよ』

トーマとリリィも、自らの暴走間際の力で砕け得ぬ闇を案じている。そう。後は、あの子を唯一救うことの出来るディアーチェ達が来るのを待つばかり。俺たちの戦闘に巻き込まれて攻撃対象に入ってしまってはいけないからだ。

チーム分け時、端から束で掛かればいいという力押しの意見もあったが、対U－Dプログラムの効果持続時間という制限がある以上その一度の戦闘で決着がつかなかった場合、手詰まりになってしまうという可能性から、２班は分けたんだ。

「第二チーム、現着や！」

とここで、はやて達が到着。第二チームは、はやてとリインフォース、なのは、フェイト、アリサ、ヴィヴィオとアインハルト、アミティエ。そして俺たち全員の切り札であるディアーチェ。まずはディアーチェを除くはやて達で、純戦闘モードになった砕け得ぬ闇の力を可能な限り削り、そしてディアーチェのU－D制御機能の一撃を打ち込む。それで終幕だ。

†††Ｓｉｄｅルシル⇒はやて†††

ルシル君たちの決死の攻撃でヤミちゃんの力を大きく削いだのをモニターで確認。そんでわたしらもルシル君たちとヤミちゃんの元へ急いだ。現場に近づくにつれてビリビリと肌に感じるとんでもない魔力の衝撃。

そんな中を突き進んで、「第二チーム、現着や！」ルシル君たちと

合流。ゆっくりとルシル君たちを労いたいところやけど、ルシル君が発動してる炎の壁を突破しようって暴れてるヤミちゃんが気掛かりや。

「気を付けてけよ」

「大丈夫だよ。ヴィータちゃん達が頑張ってくれたから」

そやから止まることなく、なのはちゃんがヴィータとハイタッチを交わしてヤミちゃんの元へ。次に「バニングス。気を付けていけ」シグナムと、「ええ。ありがとう！」飛行魔法で姿勢制御して、両足の裏に展開した2つの魔法陣から炎を噴射してミサイルとかロケットみたいに飛ぶアリサちゃんがハイタッチ。

「フェイト。後は頼んだぞ」

「うん。任せて、クロノ！」

今度はフェイトちゃんとクロノ君がハイタッチを交わす。次は「ヴィヴィオ、アインハルト」、『あとはお願い！』トーマさんやリリィさんと、「任された♪」ヴィヴィオちゃん、「はい。託されました」アインハルトちゃんがトーマさんと継ぐ次とハイタッチ。

「キリエ・・・。頑張りましたね」

「当然よ。わたしが大元だし。ここで頑張らきゃ。・・・その、あとはお願い」

「はいっ！　キリエで言う、ＯＳＧ――お姉ちゃん、精一杯、頑張ります、です！」

アミティエさんとキリエさんもハイタッチを交わして、アミティエさんもなのはちゃん達に続く。そんで最後にわたしとリインフォースがルシル君の元へ。

「気を付けろ、はやて、リインフォース。さっきまで俺たちが相手にしていた砕け得ぬ闇とはまた違うぞ」

「うん。大丈夫や。わたしは独りやない。リインフォースが一緒に戦ってくれるし、なのはちゃん達も居ってくれる」

「はい。私が精いっぱいサポートしますのでご安心を」

すぐ側に居ってくれるリインフォースが心強い。そやからわたしは何も恐れることなんてない。ルシル君もそれが判ってくれてるからこそ「あとは任せる。頼んだぞ」って右手を上げた。

「うん、頼まれた♪」

「ああ、任せてくれ」

わたしに続いてリインフォースもパチン！とルシル君とハイタッチを交わして、そのまま通り過ぎて行く。王さまはルシル君たちと、さっきまでのわたしらと同じように離れたところで待機や。今の王

さまはわたしらの誰よりも強いけど、マテリアル全員分の魔力と力は王さまの体に大きな負担を掛けてる。その事もあって長時間の戦闘は出来ひん。

「リインフォース。わたしとリインフォース、これが最後の戦いになるかもしれへん」

「はい。そう・・ですね。ツヴァイ――リインの起動も近いですから、余程の大きな事件が無ければ、私と主はやてがユニゾンして戦うのはこれで最後となるでしょう。ですが憂いはありません。共に戦うことが出来なくなりますが、共に在ることは出来ます。それにリインが私の代わりにあなたを守ってくれる。ですから・・・、最後になりますが、私と共に戦ってくれますか」

リインフォースから差し出された右手。わたしも右手を出して、「もちろんや！」リインフォースの指とわたしの指を絡め合うようにして手を繋ぐ。

「「夜天の祝福を今ここに！　ユニゾン・イン！」」

そしてユニゾンする。わたしの内に生まれるリインフォースの鼓動と温かさ。この感じをわたしは絶対に忘れへん。大人になっても、お婆ちゃんになっても、ずっとずっと・・・。

「行こか、リインフォース！」

『はいっ！　いつまででも、どこまでででも！　あなたと共に！』

ＶＳ。―。―。―。―。―。―。―。
其は暴走からの解放を望む者・砕け得ぬ闇
。―。―。―。―。―。―。―。ＶＳ

すでに一触即発な雰囲気になってた前線に合流。ヤミちゃんは今すぐにでも襲い掛かって来そうな雰囲気なんやけど、それを必死に抑え込もうとしてるようにも見える。赤い色彩に変わったら戦闘人格ってゆう凶暴性が備わるって話やったんやけど・・・。とにかく。

「レイジングハート、ネーベルベルファー、カートリッジロード！」

「バルディッシュ、ホルニッセ、カートリッジロード・・・！」

「フレイムアイズ、シュメッターリンク、カートリッジロード！」

「クリス、ドーラを起動して！」

「ティオ！　グスタフ起動です！」

なのはちゃん達がそれぞれ対Ｕ－Ｄプログラムが搭載されたカートリッジをロード。続けて「インストールプログラム、ヴァッフェントレーガー、ドライブ！」わたしも"夜天の書"に搭載してもらったプログラムを起動。アミティエさんも一対の片刃剣になってる"ヴァリアントザッパー"のグリップをギュッと握り直した。

――フェニックスフェザー――

するとヤミちゃんが問答無用で攻撃をわたしらに仕掛けてきた。魄翼を翼状にしてバサッと羽ばたかせると、無数の炎の羽根が周囲に舞い散った。その1枚1枚がとんでもない魔力で、防御なしでの直撃は危険すぎる。その羽根を避ける中、「ヤミちゃん！」わたしはそう呼びかける。

「今度は君たちか。夜天の主、そして融合管制騎」

――ナパームブレス――

『お下がりください！』

リインフォースに従ってその場からすぐさま離脱すると、さっきまで居ったところにわたしの身長以上の赤黒い魔力球が発生。以前、ルシル君を撃墜寸前にまで追い込んだあの魔法や。

「ごめんな、ヤミちゃん！　わたし、夜天の主やのに・・・、あなたのことに気付いてあげることが出来ひんかった。わたしがヤミちゃんのことにちゃんと気付くことが出来てれば、こんなに寂しい思いも、悲しい思いも、苦しませることもなかった・・・」

『夜天の書の管制プログラムである私からも謝らせてくれ。奥底に眠っていたとはいえ、私はお前たちに気付いてあげるべきだった』

「知ったところで、気付いたところで、君たちにはどうしようも出来なかった。だから謝罪は無用だ。用が済んだら去れ」

――バレットダムネーション――

そう言い放ったヤミちゃんは、魄翼からわたしに向かって魔力弾幕を張ってきた。急いで射程圏内から離脱してると、『追撃が来ます！』リインフォースから警告が入った。

――ジャベリンバッシュ――

魄翼で創られた巨大な槍や。避けることは今からやと無理っぽいからパンツァーシルトで受け逸らそうとした時、「バスタァァーーーッ！」上空から桜色の砲撃が降って来てその槍を撃ち落してくれた。

「おおきに、なのはちゃん！」

「君は、シュテルのオリジナル・・・」

「うんっ。・・・あの、私、高町なのは、っていいます！　はじまして、ヤミちゃん！　少しお話しませんか！」

「話すことなど何もない。私が君たちを壊す、その前に・・・去れ」

――エターナルセイバーーー

ヤミちゃんに向かって来るなのはちゃんと、背後に回ろうとしてたアリサちゃんに向かって炎の剣がそれぞれに1本ずつ薙ぎ払うように振るわれた。なのはちゃんは「ごめんだけどそれは出来ないかな。

だって私は、私たちは、あなたを迎えに来たんだもん！」バレルロールで回避して、アリサちゃんは足場としてた魔法陣に深く屈むことで躱した。

「迷子？　私が？　おかしなことを。私は、迷子などではない」

「いいえ、あんたは迷子の最中よ！　今もだし、これまでもずっと迷い続けてる！」

――アルゴス・ハンドレッドレイ――

なのはちゃんに続いてアリサちゃんもヤミちゃんに語りかけた。ヤミちゃんは「くだらない妄言だ」そう言い捨てて、大きく広げた魄翼の両面から無数の砲撃弾幕を放った。わたしは急いで空戦が出来ないアリサちゃんの元へ向かう。けどそれより早く、「掴まってアリサ！」フェイトちゃんが急降下してアリサちゃんの腕をキャッチ、砲撃弾幕の中を翔ける。

「迷子だよ。心の迷子。私も同じ経験があるから解るんだ。独りぼっちが寂しくて、何も出来ない自分が嫌だった」

わたしと一緒に砲撃の合間を翔け回るなのはちゃんが語り続ける。その間にもヤミちゃんは、近接戦タイプのヴィヴィオちゃんやアインハルトちゃんの接近を拒むかのように魔力弾幕も張る。ホンマに無尽蔵の魔力を持ってるんやな、ヤミちゃん。少しでも気を抜けば即撃墜や。

「だけど変われたんだ。私に明確な夢・未来をくれた魔法、多くのことを学べる経験をさせてくれた友達、今の私を育んでくれた大切な人たち、そんな色んなことと出会えたから！」

「さっき戦った少年にも言った。私と私以外の他人は違う」

「・・・でもね。私たちは今こうして同じ空に居て、同じ時間に在って、お話が出来てる。言葉で、体で触れ合えたら、世界はきっと広がる。だからあなたもきっと変われるって、私はそう思ってる」

「変われる可能性を持つ君たち、持たない私。それが絶対の事実だ」

――アルゴス・ハンドレッドレイ――

「そんな絶対、あたし達が覆してやるわ！　たとえ力づくでも！」

――イジェクティブ・ファイア――

フェイトちゃんに抱えられて砲撃弾幕の中を翔け回るアリサちゃんから火炎砲撃が発射された。ホンマは開戦直後から攻撃を仕掛けるべきやった。すでにルシル君たちとの話し合いは決裂してて、戦闘行為に入ったんやから。そやけど、やっぱりどこか話が出来るって思うてて。

「面白い。私が話だけで止まらないこと、すでに承知のはず。私を止めたいのなら、力づくで来てください。そして思い知ってください。私に、救いなんてものが無いことを」

アリサちゃんの火炎砲撃を素手で受け止めて握り潰したヤミちゃん。アリサちゃんが「うっそーん」って驚きを見せる。多層防壁でも防御魔法でも魄翼の防壁化でもなくて、単純に魔力付加した素手で握り潰しなんて予想外やった。

「私に救いなんて言葉は通じないし、君たちの魔法もまた、私のエグザミアの前には無意味だ」

――アルゴス・ハンドレッドファイアー――

砲撃弾幕の火炎版が発射されてきた。普通の魔力砲撃から火炎砲撃となったことで、回避中に衝撃波だけやなくて熱波まで襲い掛かって来ることに。

「そんなことない！」

――エクセリオンバスターー――

「リインフォース。あの駄々っ子を止めるよ！」

『はいっ！』

――ナイトメアー――

なのはちゃんとわたしとでヤミちゃんを挟撃すると、「無駄です」ポツリと呟いたヤミちゃんは魄翼に包まれるように防御姿勢を取っ

た。と思えばバサッと大きく広げて、「えっ・・・！？」魄翼で砲撃を弾いてわたしらの元に反射してきたから、慌てて回避に移る。

「ヤミ、あんたね！　本当は救われたいくせにそんな・・・要らぬ諦観なんて捨てちゃいなさいよ！」

――フレアブレード――

銃剣形態バヨネットフォームの"フレイムアイズ"の刃を超高熱にしたうえでの振り下ろしの斬撃を繰り出したアリサちゃん。ヤミちゃんは右側面からの攻撃を半歩分後ろに後退することで躱した。

「動かぬ事実に希望を持ったところで意味なんてない。希望を持つから絶望する。そうして私は過ごしてきた。永く、永く、永く・・・！」

――ドゥームプレッシャー――

攻撃を避けられたことでアリサちゃんは無防備な体勢のままヤミちゃんの目の前に。そんなアリサちゃんへの攻撃として、ヤミちゃんは魄翼を怪物の腕へと変えて、アリサちゃんを握り潰そうとした。

「その感情の揺れ動きが、あんたが救われたいって思いの強さよ」

「っ！」

――ハーケンスラッシュ――

ヤミちゃんの意識が完全にアリサちゃんに向いたその時、ヤミちゃんの背後からフェイトちゃんが「諦めることなんてないんだよ！帰ろう、ディアーチェの、あなたを待つ王さまの元に！」大鎌形態ハーケンフォームの"バルディッシュ"の魔力刃で斬撃。

「アクセルシューター！」

「ブリューナク！」

わたしとなのはちゃんで魄翼に向けて集中攻撃。アリサちゃんを握り潰す前に着弾させて妨害。それと同時にフェイトちゃんの斬撃がヤミちゃんを捉えて、アリサちゃんは一足飛びでヤミちゃんから離脱。

その先に「フローターフィールド！」すずかちゃんの展開した魔法陣の足場に着地したアリサちゃん。すずかちゃんも遅れて第二チームとして参戦。すずかちゃんの代わりにルシル君が結界維持チームに回ることになってた。無茶してほしくないけど、ルシル君聞いてくれへんし。もう。

「タイミングバッチリ、すずか！　フレイムアイズ、行くわよ！」

「うん、お待たせ！」

≪おう！　イジェクティブ・ファイア！≫

すずかちゃんと頷き合って間髪入れずにヤミちゃんへ火炎砲撃を放

つアリサちゃん。フェイトちゃんのバリア破壊効果の斬撃と一緒に撃ち込まれたアリサちゃんの砲撃。フェイトちゃんが離れたと同時にヤミちゃんが爆炎に覆われる。濛々と立ち上る黒煙。その中から、「私はずっと孤独でいい。その方が誰も哀しまない、苦しまない、痛い思いをしないで済む」そんな悲観に満ちた声が聞こえてきた。

「そう。私に近付きさえしなければ・・・！」

――ヴェスパーリング――

魔力リング型の射撃魔法や。魄翼を羽ばたかせるたびに十数発と連射してきた。回避の最中、「優しいんだね、ヤミ」フェイトちゃんが魔力刃を飛ばす魔法、ハーケンセイバーでリングを迎撃したんやけど、魔法を切り裂くことが出来るセイバーをも消滅させたリング。

「無駄だ。込められた魔力が違いすぎる」

魔法での迎撃は不可能ってことは判った。うん、やっぱりどうしても基本的には回避しかないんやって改めて再確認。けど撃ってる最中は結構な無防備やと思うよ、ヤミちゃん。わたしは「クラウ・ソラス！」"シュベルトクロイツ"の先端から砲撃を、「ストライクスターズ！」なのはちゃんはディバインバスターとアクセルシューターの同時発射砲撃を、リングを撃ち続けてるヤミちゃんへ発射。

「アキレウスシールド」

ミッドチルダ魔法陣とベルカ魔法陣を1枚に重ね合せた障壁を2つ

展開して、わたしとなのはちゃんの砲撃を防御。魔力爆発の余波で起こった煙幕がヤミちゃんを覆い隠すと、リングの乱れ撃ちも止んだ。

「「デュプルブレイズ・シオンズクリーバー！」」

そこで追撃をするんがフェイトちゃんとアリサちゃん。２人ともデバイスをフルドライブモード、"バルディッシュ"・ザンバーと"フレイムアイズ"・クレイモアにしてる。振るわれた魔力刃はまるで鋏のようにヤミちゃんを左右から襲撃。

煙幕を切り裂いてヤミちゃんへと到達した２つの刃は、「なんで判ってくれないんですか？　無駄だということが」さっきのアキレウスシールドってゆう障壁に拒まれてた。あの鋏のような魔法は、防御魔法や結界魔法を切断するブレイク効果があるけど・・・。

「だって、それだと君が悲しいじゃない・・・！」

「強がるのも結構、意地を張るのも結構！　でもＴＰＯだけは考えなさいっつうのよ！」

――サイズディカピテイション――

このまま攻撃を続ければシールドを壊せそうやけど、その前に空いてる魄翼が動きを見せた。魄翼が大鎌へと変化した。

「バルムンク！」「アクセルシューター！」

フェイトちゃんとアリサちゃんにその刃が届く前にわたしとなのはちゃんの射撃魔法で迎撃しようとしたけど、ヤミちゃんが新しく張ったパンツァーシルトが防いだ。アカン。そう思うた時・・・

「ディバインバスターー！」「ファイネストカノン！」

虹色の砲撃と、魔力とはちゃうエネルギー砲弾が、魄翼を迎撃してくれた。ヴィヴィオちゃんとアミティエさんの一撃や。直後、フェイトちゃんとアリサちゃんの魔力刃がアキレウスシールドを切断して、ヤミちゃん自身の多層防壁に当たる。拮抗も短く、ガシャァンと防壁を破壊。

「っ！？　・・っ、バレットダムネーション！」

わたしらに向けて魔力弾幕を張るヤミちゃんやったけど、アインハルトちゃんは「旋衝破！」自身とヴィヴィオちゃんに当たりそうやった魔力弾5発を次々と受け止めて、そのままヤミちゃんへと投げ返した。

これには回避中のわたしらやヤミちゃんも「っ！」ビックリ。しかもヤミちゃん自身の魔力で攻撃力とゆうこともあって、「んくっ・・・！」5発の着弾と同時にガシャァンとまた多層防壁が砕けたから、ヤミちゃんは二重にビックリや。

「すみません！　出番はもう少し後の予定でしたけど、出て来てしまいました！」

「で、でもフェイトマ――フェイトさんとアリサさんが危なかった

のでつい！」

「お許しを！」

アミティエさん達が頭を下げて謝る。アミティエさんは、ドクターやティファレト先生に体を治してもろたけど、ヤミちゃんを相手に戦えるほどにはまだ全快やないって、キリエさん共々そう診断された。そやからわたしらの対Ｕ－Ｄプログラムの効果が切れる寸前で参戦することになってた。

ヴィヴィオちゃんとアインハルトちゃんも似たような感じや。ヤミちゃんを相手に近接格闘なんて危なすぎる。空戦レベルもそんなに高うない。ホンマは前線に出すべきやない、シグナムやヴィータ、ザフィーラの意見がそれ。でも今にして出して良かったって思える。

「ううん。おかげで助かったよ。ありがとう」

「ええ。アミティエ、ヴィヴィオ、ありがとう」

フェイトちゃんとアリサちゃんにお礼を言われて照れるヴィヴィオちゃんと、ホッとしてるアミティエさん。

「アインハルトちゃん、今の魔力弾を投げ返す技、すごいね！」

「それも覇王流っていう格闘の技なのかな？　すごかったよ！」

なのはちゃんとすずかちゃんに褒められて照れるアインハルトちゃん。そんな中で、「ゆりかごの聖王・・・？　覇王イングヴァルト

・・・？　いや、違う。君たちは一体・・・？」ヤミちゃんが、ヴィヴィオちゃんとアインハルトちゃんを不思議そうに見た。

「オリヴィエと」

「覇王イングヴァルトは」

「「私たちのご先祖様なんです」」

ベルカの歴史はよう判らんけど、２人がヤミちゃんへとそう答えると、「クラウスが子を残したのは知っていますが、オリヴィエに子は居なかったはず」ヤミちゃんはさらに困惑したようで。

「えっとまぁ、わたしの出生には色々あるんだけど、今はそんな過去は横に置いておこうよ！」

「はい。今、大事なのは過去ではなく現在。私たちも、泣いてるあなたを助けたいんです」

「・・・またそれですか。私は一体何度、その行為が無駄なのかと言えばいいのか」

ヤミちゃんの小さな両手がギュッと握り拳になるんが見えた。アインハルトちゃんが「何度でも言います。独りでは出来ないことも、誰かが支えてくれれば出来ることは増えます」語りかける。続いて「独りが楽しいんならそれでいいよ。けど違うんでしょ？　ホントは誰かと繋がりたいんだよね」ヴィヴィオちゃんも語りかける。

「くどいです。君たちの言うことは全て幻想、夢物語だ」

――ジャベリンバッシュ――

魄翼で創られた槍８本が扇状に発射された。みんなそれぞれ回避する中、「その幻想を、夢物語を、今こそ現実にしましょう！」アインハルトちゃんがそう言って、掌底を突き出して衝撃波を放った。それを裏拳で弾き逸らすヤミちゃん。動きを止めたその隙――とも言えへん一瞬に「ジェットステップからの、アクセルスマッシュ！」ヴィヴィオちゃんの魔力付加された拳がヤミちゃんのお腹を捉えた。ガキンと防壁に防がれた音が響いた。

「さらに、リボルバー・スパイク！」

「覇王・・・断空拳ッ！」

ヴィヴィオちゃんの打ち降ろしの回し蹴りがヤミちゃんの小さな右肩へ打ち込まれて、それと同時にアインハルトちゃんの拳が、ヴィヴィオちゃんが打ったところと同じ場所を打った。バキンと音が漏れ聞こえてきた。

「憧れた夢があるなら、それを叶えよう、ヤミちゃん！」

「はい。あなたにはきっとその力があります！」

――ファイネストカノン――

ヴィヴィオちゃんとアインハルトちゃんが一足飛びで離脱したと同時、アミティエさんの砲弾が着弾して、また防壁を打ち砕いた。ヤミちゃんの表情が本当に小さくだけど焦り、それに期待のようなネガティブやない方の感情が見えた気がした。

――ソニックシューターーーー

「わたしだってまだ全然弱いし、いつも挫けそうになる。だけど諦めずに前を向いて頑張れば、前に進んで行ける！　そう大切な人に教えてもらった！」

――空破断――

「私たちもお手伝いします！」

ヤミちゃんが回避行動を取った。横移動することでヴィヴィオちゃんとアインハルトちゃんの攻撃を躱した。

――アクセラレイターーーー

わたしの側に居ったアミティエさんの姿が消える。アミティエさんが姿を現したんはヤミちゃんの回避先で、「止まっていただきます！」一対の片刃剣形態になってる"ヴァリアント・ザッパー"の斬撃を連続で振るった。

――パンツァーシルト――

「さっきも妹が性懲りもなく来ていた。君もまた来たんだね」
「はい。その節は、不肖な妹がご迷惑をお掛けしました。ですが、わたしも妹もこの間とは違って――」
「私を助けに来た、ですか。本当にいい加減にしてください。私の無力も、孤独も、この暴力を成すだけの旅路も、終わりはしない！」
――アルゴス・ハンドレットファイア――
魄翼の両面から放たれる火炎砲撃の弾幕。アミティエさんは至近距離にも拘らずホンマに僅かな横移動だけで避けきった。
「あなたの事情、伺いました。永く孤独の中で、自分の望まない動作を強いられてきた」
――バルカンレイド――
左の片刃剣でヤミちゃんを斬って、右の銃で斬った箇所にエネルギー弾を連射しながら「私も、人の手によって生み出された人工物――ギアーズですから、それがどれだけ辛く悲しい、絶望なのかよく解ります」そう続けて、振るわれた大鎌状態の魄翼を紙一重で躱したと思えば、さっきと同じように斬撃、そんでエネルギー弾の連射を撃ち込んだ。
「っ！・・・同情は要らないと、何度言えば・・・！　早々に私の

前から、君たち全員が消えてくれれば、それだけで私は・・・・！！」

――アルゴス・ハンドレッドレイ――

「クラウ・ソラス！」

「エクセリオン・・・バスタァァァーーーーッ！」

「プラズマ・・・スマッシャァァァーーーーッ！」

「イジェクティブ・ファイアッ！」

「ディバインバスタァァァーーーーッ！」

わたしらの集中砲火を受けた魄翼が今まで以上に霧散したし、ガシャァンと防壁が皿砕けた音が響いた。さらにアミティエさんの「ファイネストカノン！」による追撃を、ヤミちゃんは「っくぅぅ・・・！」障壁で防御。

「個の思考とは、誰かと触れ合って初めて、心、となる。父が教えてくれました。どれだけ独りで思考を続けたとしても、心は決して育たない。今度は私からあなたに贈らせてもらいます」

「うるさい・・・うるさい・・・うるさい・・・！」

ヤミちゃんがまるで逃げるように明後日の方へと向かって飛んで行く。この空域一帯には結界が張られてるし、ルシル君たちが逃がさ

へんように張ってもろてるけど、逃げてる最中に回復されるのは厄介すぎるし、対Ｕ－Ｄプログラムの効果が切れるのも痛い。

「あ、待ってください！　話はまだ終わっていませんよ！」

アミティエさんに続いてわたしらもヤミちゃんを追う。ヤミちゃんを追う中、アミティエさんは「あなたには、共に居られる、触れ合える、支え合える、大切な仲間が居るでしょう！」そう話を続ける。

「独りで思い悩むからダメなんです！　あなたはどこか妹に似ています。悪ぶっているけれど、本当は真面目で一生懸命！　それでいて責任感が強い。それなのに他人を頼るのが苦手！　まさに不器用！　ですけど！」

――鋼の軛――

――吹雪（コード）け、汝の凍波（バルビエル）――

ヤミちゃんの行く手の先、海面から突き出して来たのはシャマルとザフィーラの拘束条１０本以上と、ルシル君の氷の柱２０基以上。ヤミちゃんがそれらを壊そうとする前に「そんな不器用だけど優しい子が悲しまないよう、笑顔にしてあげるのが、お姉ちゃんの役目なんです！」アミティエさんの姿がまた掻き消える。

「無限の運命なんて、私が、私たちが終わらせてあげます！」

ヤミちゃんの周囲を高速移動で翔け回るアミティエさんが、ヤミち

ゃんに斬撃を打ち込みながら周囲にエネルギー弾を配置――とゆうか、あまりに速すぎて発射から着弾前のホンマに短い間に撃ち続けてるだけなんやね。

「エンド・オブ・デスティニー――！！」

とにかくアミティエさんの全方位からのエネルギー弾がヤミちゃんに着弾。その間にわたしらは、最後の役目を果たすために魔力チャージ。ルシル君みたくみんなの砲撃を強化できるような魔法なんてないし、連携でもない。ただ、ヤミちゃんや王さま達への想いを籠めた一撃を撃ち込むだけ。

「ヤミ！　あんたの目を覚まさせてあげるわ！」

「しっかりと目を開いて、君の目の前にある希望を見て！」

アリサちゃんとフェイトちゃんが、ヤミちゃんを中心として2時と10時の位置についた。そして、アミティエさんの強烈な攻撃の直撃を受けたことでふら付いてるヤミちゃんへと・・・

――ヴォルカニックスカッシャー――

――ジェットザンバー――

「「サザンクロス！！」」

――アキレウスシールド――

"バルディッシュ"と"フレイムアイズ"の魔力刃が伸長して、ヤミちゃんを襲撃。

「っうぐぅぅぅ・・・・・！」

ヤミちゃんは咄嗟に張ったシールドで防御したんやけど、これまでと違って必至って感じで。そんでとうとう魔力刃がヤミちゃんのシールドを貫いて、「くぁぁぁあああああ・・・！」爆発させた。

「この・・・！」

――クリムゾンダイブ――

ヤミちゃんが火の鳥と化してヴィヴィオちゃんとアインハルトちゃんへと突進。とその前に、「すずかさん、お願いします！」アインハルトちゃんが海面へと衝撃波を2連発と打って、激しい水柱を上げさせた。ヤミちゃんがそのまま水柱の中に突っ込んだ。

「オッケー♪　リフリジレイト・エア！」

すずかちゃんの発動した吹雪の竜巻が水柱を一瞬にして氷結。水柱から飛び出して来る直前のヤミちゃんが「体が・・・！？」凍りついて、ヴィヴィオちゃんの目と鼻の先で止まった。

「目を閉じちゃうなら、わたしが開かせてあげる！・・・一閃必中！」

ヴィヴィオちゃんとヤミちゃんの間に、虹色に光り輝く魔力球が発生。

「セイクリッドブレイザァァァァーーーーーーッッ！！」

ヴィヴィオちゃんがその魔力球を殴ると、それが特大砲撃となって発射されてヤミちゃんを「うぁあああああ！」呑み込んだ。砕け散る氷塊、吹き飛ぶヤミちゃん。

「なのはちゃん！」「はやてちゃん！」

わたしとなのはちゃんで頷き合って、かぶりを振ってるヤミちゃんへと・・・

「エクセリオンバスターA・C・S！・・・ドライブ！」

なのはちゃんがヤミちゃんへと突進。ハッとしたヤミちゃんが障壁を展開。"レイジングハート"の先端に展開されてる魔力刃が、その障壁を突破。間髪入れずに「エクセリオンバスターッ！」なのはちゃんが砲撃を発射。それと同時、「マニューバA・C・S！」なのはちゃんから教わった突撃魔法を発動して、大きく吹き飛んだヤミちゃんを突撃。

「もうちょっとや！　ヤミちゃん！　これまでの悪夢は今日、ここで醒めるから！」

『この後にお前を待っているのは、光に満ち溢れた希望の明日！』

わたしの突撃技を魄翼で受け止めたヤミちゃんやったけど、反論も出来ひん程に消耗してるようで。突撃が防御されたと同時に周囲に展開させた魔力球６基と一緒に「『ナイトメアハウル！！』」多弾砲撃を発射。４発で２つの魄翼を粉砕して、魔力球からの残り２発と、わたし自身――"シュベルトクロイツ"からの１発、計３発が、ヤミちゃんに直撃した。

「あ・・ああ・・・あぅ・・・ぅく・・・くぅわぁぁぁあああああああ――――――ッッ！！」

わたしの砲撃をまともに受けたヤミちゃんの動きが完全に止まった。多層防壁も全部砕いた。エグザミアの魔力生成も途切れたようや。となれば・・・

「「「王様！」」」「「『ディアーチェ！』」」「ディアーチェさん！」

あとは王さまでの出番やよ。

Ｅｐｏｓ５５真なる目醒めの刻は今／紫天の盟主～Ｙｕｒｉ　Ｅｂｅｒｗｅｉｎ～

一体どれだけの永い年月が掛かったのだろう。何十では足りない、何百年という永きその年数の旅路。彼女は歩んだ。たとえ、彼女の目覚めが破滅の兆しであろうとも、行く手にあるモノを破壊することになろうとも、その足音が周囲に絶望を撒き散らすものあろうとも、化け物だと後ろ指を差されようとも、永い年月を歩み続けた。

――砕け得ぬ闇・システム：アンブレイカブル・ダーク――

彼女はそう呼ばれていた。"闇の書"と呼ばれる、魔導書の主と共に旅をして、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集し、そして研究するために作られた蒐集蓄積型の巨大ストレージ。その魔導書の奥深くに彼女は眠っていた。それは何故か。

――"闇の書"。その本来の名は、"夜天の魔導書"。元は健全な資料本だった――

"夜天の魔導書"は旅をする。そして壊れた蒐集データを復元する機能も備わっている。そして蒐集した魔法は、完成後かつ魔導書の管制プログラムである融合騎と融合しなければならない、という条件付き、さらには元々の術者との魔法資質の違いによっては別の効果となったり、術式を組み直す必要があったりするが、それでも魔導書の持ち主にも扱うことが出来るという機能まである。

そんな機能を持ち得た歴代の持ち主の中には、当然その強大な力を持った魔導書を悪用しようという考えを持つ者も居た。持ち主だからこそ魔導書に干渉し、プログラムを書き換えることが出来る。そう、自分の思うが儘に。

――そのような悪意あるプログラム改変が幾度と行われ、そして"夜天の魔導書"は・・・・狂った――

元は研究用の資料本が邪な改悪によって暴走した。壊れたデータを修復するためだったプログラムは、どれだけ破壊されようとも必ず無限再生する機能に。持ち主と共に旅をする転移機能は、魔導書を扱える資質ある魔導師の元へと転生する機能へと変貌。さらには、一定期間魔力の蒐集を怠れば、"闇の書"の持ち主の魔力から強制蒐集を行い、果てには持ち主を殺してしまう。

――そして夜天の魔導書は、闇の書となり、呪われた魔導書とも呼ばれるようになった――

"闇の書"として活動を始めてまた永い年月が経つ。その中でまたも別の持ち主が、魔導書へとあるプログラムを加えた。それこそが、"紫天の書"。狂い壊れた"闇の書"を乗っ取り、"闇の書"の全プログラムを支配しようというプログラムだ。しかも大元となる"闇の書"からの干渉を受けないように施されていた。だが、その"紫天の書"プログラムには問題があった。

――システムU－D。永遠結晶エグザミアを核とする、特定魔導力を生み出し続ける無限連環機構。それが彼女の正体――

砕け得ぬ闇――彼女には、自分の制御統制プログラムが備わっていないのだ。彼女はあくまで未知の魔力素を無限に生み出し続ける動力炉。その無限の力に惹かれて、彼女を起動したとしても、彼女自身に制御プログラムが無いのであればその膨大な力は暴走するだけ。彼女の制御には、"マテリアル"というプログラムが必要なのだ。システムＵ－Ｄ１基とマテリアル５基、計６基が同時に起動されることで、その真価を発揮できる。それを知らなかったその後の持ち主たちは、ただでさえ凶悪な機能を持っていた"闇の書"の狂気だけに留まらず、彼女の暴走に巻き込まれて息絶えることとなった。

――そしてシステムＵ－Ｄ――彼女は、自らの復活が及ぼす悪影響を憂い、"闇の書"の奥深くへと自らを封じた。デコイプログラムで自らの存在を知られるようなことにならないよう、奥、ずっと奥へ。二度と自分が復活できないように、自身に繋がるプログラムを切り離してまで――

彼女とて、破壊を望んでやっているわけではない。本当の彼女は優しかった。彼女の起こす破壊行為は、彼女の核であるエグザミアの生み出す特定魔導力による自壊を防ぐための自己防衛だ。破壊に魔力を消費することで、駆体の自壊を防いでいたのだ。
そして、彼女を構成するプログラムの複雑さがいけなかった。システムＵ－Ｄの起動と同時に連動して起動することのない、彼女の制御プログラム群であるマテリアル。だがそれを知ろうとせず、力に魅了されるだけの持ち主たち。悲劇・惨劇が繰り返されるのは必然だった。

――だから彼女は、自分の救いを諦めた。夢を持つことも、希望を持つことも、前向きになる感情も、その全てを諦めた――

しかし、その悪夢の終わりの兆しが見えた。数ヵ月前、"紫天の書"の後に組み込まれたプログラム・"ナハトヴァール"の撃破。それが彼女やマテリアルにとってのあまりに永き絶望の旅路の終焉を齎す要因となった。

"闇の書"に組み込まれたばかりのナハトヴァールの肥大化していく膨大なデータ量によって、システムU－Dとマテリアルはその頃より強制的な休眠期へと入らされた。意識はあっても何も干渉できず、他のプログラムとのコミュニケーションが取れない、ただナハトヴァールに抑え込まれて好きなように動けない。それがマテリアルにとっての悪夢。しかし・・・

――行くよ、夜天の主とその守護騎士の名の下に――

――眠れ、ナハトヴァール――

――お前はもう、居ちゃいけないんだ――

――あなたの旅路も、今日これまでよ！――

――終わらせてもらう、この歪みきった呪いの運命を、ここで！――

――さようならや。アウグスタさん。ナハトヴァール――

最後の夜天の主・八神はやてと、彼女の下に集いし夜天の守護騎士ヴォルケンリッターー、そしてその仲間たちによって、ナハトヴァールは消滅した。それが切っ掛けとなり、抑え込まれていたマテリアルが半端ながらに不覚醒、起動した。
それゆえに問題もあった。マテリアルは、不完全な形で目覚めたことにより自ら達の存在意義を忘却していたのだ。半覚醒状態だったこともあって、自分たちがナハトヴァールの一部と誤認し、"闇の書"の復活を望んでいた。最終的に、その間違った目的を果たす事無く敗れ消えた。

――エルトリアのギアーズ、キリエ・フローリアン。あなた達にちょーっとだけお願いがあるのー――

――この世界の運命を護るため、エルトリアのギアーズ、アミティエ・フローリアン！　参ります！――

現在（いま）より遡ること約３３時間前、未来からこの時代へとやって来た姉妹によって、さらに事態は加速する。砕け得ぬ闇・システムＵ－Ｄの核である永遠結晶エグザミアを求めるのは、妹のキリエ。その妹の行為を止めようとする姉のアミティエ。
フローリアン姉妹の出現によって、まるで引っ張られるように復活を果たしたマテリアル。今回の復活では、強制的ではあるが以前のように半覚醒ではなく、ほぼ完全な形での起動。しかし、それでも本来の存在意義については半分ほどしか思い出せなかったが。

――漲るこの力ぁぁッ！　溢れる魔力ぅぅッ！　震えるほど闇黒ぅぅッ！――

マテリアルのリーダー的存在、"王"のマテリアル。名を、闇統べる王ロード・ディアーチェ。方舟の王という意。彼女こそが、システムU－Dの制御を行える唯一の存在。彼女が手にする、色違いだが"夜天の書"と同じデザインである紫色の魔導書の名は、"紫天の書"。

"紫天の書"とは、システムU－Dの制御を始め、記されている数多くの魔法、データ検索、行使・管理・制御など行うための制御プログラムという位置づけとなっており、その魔導書を扱えるディアーチェは、正に"紫天の書"の王であり、管制人格とも言える。

さらには、ディアーチェがオリジナルである八神はやてを参考にした際、"夜天の魔導書"に記されている魔法データや機能を丸ごとダウンロードしていて、マテリアルのデータやシステムU－Dの制御プログラムも合わせて膨大なデータ量を誇っている。

――シュテルとは、そう言えば私の名でしたね――

マテリアルの参謀的存在、"理"のマテリアル。名を、星光の殲滅者シュテル・ザ・デストラクター。ロード・ディアーチェを支える補助プログラム――王下四騎士の1基。"理"を冠するに相応しい頭脳明晰で、自分らマテリアルのデータ復旧時の演算・機械設計・細工物、さらには拠点の手配、管理局組への交渉・協調策を考えるなど、効率・合理性を第一に考える。

――レヴィ！　よく覚えてないけど、その名前すっごくカッコいいからいいや！――

マテリアルの末っ子的存在、"力"のマテリアル。名を、雷刃の襲撃者レヴィ・ザ・スラッシャー。ロード・ディアーチェを支える補助プログラム――王下四騎士の1基。"力"のマテリアルということもあって、身体能力における力・魔法における力、共にマテリアル最高レベル。しかし力にリソースが回り過ぎている所為か、少し頭が弱いアホな子。

――フラム！　燃えるわたしには相応しい名前でありますな！――

マテリアルの使えない良心的存在、"義"のマテリアル。名を、炎壊の報復者フラム・ザ・リヴェンジャー。ロード・ディアーチェを支える補助プログラム――王下四騎士の1基。マテリアルそれぞれが違った目的を持ってしまったことによる行動理念の破綻・暴走を食い止めるためのプログラム。末っ子レヴィよりか頭は良いが、それでも自分の"義"しさを信じて猪突猛進する場合もあるため、やはりアホの子。

――アイル・・・、我が名前ながら惚れ惚れするほどに美しい名前ですわね――

マテリアルのブレーキ的存在、"律"のマテリアル。名を、氷災の征服者アイル・ザ・フィアブリンガー。ロード・ディアーチェを支える補助プログラム――王下四騎士の1基。マテリアル全基の、魔力暴走を食い止めるためのプログラムで、特に"力"の強いレヴィの暴走ブレーキに一役買っている。同じ頭脳派とされるシュテルにライバル意識を持ち、アホなレヴィの好き勝手には少々苛立っているが、仲は良い。

――本当はまた会えて嬉しい・・・って、心から喜べれば良かったのに・・・――

キリエ・フローリアンの協力もあって、マテリアルはようやくシステムU－Dの復活に成功した。しかし待っていたのは、彼女によるマテリアルの撃破・破壊。システムU－Dはこうなることを嫌って眠りについていたのに、それを知らずに、思い出せずに彼女を復活させたマテリアル。悲劇はまた繰り返された。しかし・・・

――少し思い違いをしていたようです。私たちがシステムU－D――あの子を求めていたのは、大いなる力、を手にするためだけではないのです。あの子と私たちは、元々は1つなんです。ディアーチェ、シュテル、レヴィ、フラム、アイル、そしてあの子の6基が揃うことで初めて、紫天の書、は完成するのです――

そのおかげでシュテルは、マテリアルは、自分らの真の存在意義を、目的を思い出すことが出来た。"紫天の書"の完成。それが彼女たちの目指すべき目的。それが叶えば"夜天の書"へと戻った"闇の書"から真の意味で独立が出来、自由に生きることが出来る。こうなれば後の行動は1つに絞られる。暴走している彼女を食い止め、"紫天の書"に迎え入れる。

――なのは達にこう伝えてください。砕け得ぬ闇を倒す方法を教えますから、その代りに、私たちと交渉の機会をください――

シュテルは、自分らマテリアルのシステムを早期復旧させる為に、

先に再起動させたレヴィとアイルにそう告げた。シュテルの頭の中に生まれる、彼女を食い止めるための作戦。その為にシュテルは、管理局と協調してことに当たることを考えた。その結果生まれたのが、対システムＵ－Ｄプログラム。彼女の戦闘機能の一時不全を陥らせる干渉制御ワクチンだ。

――まずいですね。充填状況はすでに８割超と言ったところでしょうか――

だがそのワクチンを以ってしても、全てを諦め、暴走と破壊の限りを尽くすことになる完成を待っていた彼女の魔力には敵わないと判断したシュテル、フラム、アイルは、彼女を食い止める為に・・・

――今できるのは、後の勝利へと繋がる布石を打つこと――

――これ以上の充填を阻止することでありますな――

――王の為、今後の私たちの為、ここで布石となるのも良いですわね――

――ごめん、王様。王様はここに残って――

自らを犠牲にしてまで、彼女の魔力充填を阻止し、戦闘によってその魔力を消費させ、備えている多層防壁を削って弱体化させようというのだ。正に特攻。もちろん王であるディアーチェはそれを許すわけもないが、バインドで拘束されたことで止める術を封じられた。

――救えるかどうか・・・――

――試してあげる！――

――そして知りなさいな――

――何事にも終わりがあるということを、であります！――

ディアーチェに未来を託し、王下四騎士は決死の思いで彼女の為にも、彼女へと戦闘を仕掛けた。一撃一撃で彼女の多層防壁を砕き、魔力充填を止め、蓄えた魔力を出来るだけ削ることに成功。今後に活かす布石は確かに打てた。

だが、やはり彼女の停止には至らなかった。圧倒的な力による反撃を受け、王下四騎士４基、撃破。消滅寸前にまで追い込められてしまった。その破壊の爪痕を目の当たりにした彼女は逃避。この一件がさらなる決定打となり、彼女は頑なに自分が救われる選択を消した。

――シュテル！　レヴィ！　フラム！　アイル！――

――我々はもう、この体で戦うことは出来ません――

――だから陛下に託すのでありますよ――

――私たちの悲願。そして・・・――

――王様の夢。砕け得ぬ闇を手に入れて、本当の王様になること―

―

――一緒に行きましょう。Ｕ－Ｄを止めるために――

――私たちは共に在る、でありますよ――

――どうかご武運を――

――負けないでね、王様――

ディアーチェを拘束していたバインドが解け、王は王下四騎士の元へ。そこで想い、力を、魔力を託される。ディアーチェへと残り少ない魔力を、自分たちの力を流し、王下四騎士は消滅した。ディアーチェと自らの為という行動理念の下に王下四騎士をむざむざと死地に赴かせてしまった己の無力感、１つとなったとしても４基を失ってしまったことに変わらない孤独感に、ディアーチェは悲鳴を上げた。

だが悲嘆に暮れている暇もない。ディアーチェは立つ。王下四騎士に託された想い・魔力・力を無駄にしないためにも。そしてシュテルの立てた第二プラン・管理局と共闘することになった。先陣は、さらなる魔力と多層防壁を削る第一チーム。

――俺たちは君を救いたいんだ。嘆き苦しんでいる君を――

――あなたを、我が儘で駄々っ子な迷子ちゃんを、保護者のところへ連れて行ってあげないとね！――

――ヤミちゃんも諦めないで！　諦めなかったその先できっと待ってる！　ラッキー・ハッピーな明日が！――

――もうダメだって思っても、それでも結構なんとかなるもんだって思う！――

――信じろ。君を大切に思う王や他のマテリアル達のことを！――

――ディアーチェは、エグザミアじゃなくてあなたを待ってるんだってば、U－D――

彼らの健闘もあって、彼女を護る防壁や魔力は大きく削がれた。次は、そこからさらに彼女の力を削るために第二チームによる戦闘。

――言葉で、体で触れ合えたら、世界はきっと広がる。だからあなたもきっと変われる――

――その幻想を、夢を、今こそ現実にしましょう！――

――無限の運命なんて、私が、私たちが終わらせてあげます！――

――ヤミ！　あんたの目を覚まさせてあげるわ！――

――しっかりと目を開いて、君の目の前にある希望を見て！――

――目を閉じちゃうなら、わたしが開かせてあげる！――

――もうちょっとや！　ヤミちゃん！　これまでの悪夢は今日、ここで醒めるから！――

――この後にお前を待っているのは、光に満ち溢れた希望の明日！――

第一チームに続き、第二チームもまた彼女から力を削ぎ取ることが出来た。そしてついに、彼女は被ダメージによってその戦闘行動が止まった。

――王様！――

――ディアーチェ！――

――ディアーチェさん！――

。―。―。―。―。

管理局組・未来組の活躍によって、砕け得ぬ闇、またをシステムＵ－Ｄの戦闘行動が停止した。それを確認した第二チームのメンバー全員が、彼女を唯一制御できるロード・ディアーチェの名を呼んだ。結界維持組となっていた第一チームの元をすでに離れて現場に向かっていたディアーチェは、頭を抱えて叫び続けるＵ－Ｄの元へ到着。

「もう泣くでない、Ｕ－Ｄ！　貴様の抱く諦観、絶望、その全てを・・・我が闇で打ち砕いてくれるわ！」

「う・・ぅく、あぅ・・・くぅ・・・う、うぁぁぁぁぁぁーーーーーーーッ！！？」

ＶＳ。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ＶＳ

其は孤独より救われるのを求め望む者・砕け得ぬ闇

第一チームと第二チームの必死の戦闘によってようやく止まった、Ｕ－Ｄを暴走させる要因だった永遠結晶エグザミアが、ここに来て再稼働。消えかけていた魄翼が元に戻り、

――ヘカトンケイルフィスト――

彼女を制御するためのプログラムを打ち込もうとしていたディアーチェへ向けて怪物の前腕部を射出。ディアーチェは「おのれ、まだ止まらぬのか・・・！」歯噛みし、飛来した２本の腕を右に左にと移動して避けたが、微かに掠ったことで防護服・暗黒甲冑デアボリカの左袖が裂けた。

「王さま！」

「貴様らは下がっておれ！　」

対Ｕ－Ｄプログラムの効果が切れたことで、彼女への決定打を与えることが出来なくなってしまった第二チームはディアーチェに言われるがままに遠のいて行く。戦場に残るのは闇統べる王ロード・ディアーチェと砕け得ぬ闇システム：アンブレイカブル・ダークの２

基のみ。

「王・・・！」

――バレットダムネーション――

広げられた魄翼から発射される魔力弾幕。ディアーチェはその弾幕の合間を縫うように翔け、躱していく。

「もうしばし待て、Ｕ－Ｄ！　必ず貴様を我が手に収めてくれよう！　さすれば我らは、自由となるぞ！」

彼女の纏う防護服・紫天装束インペリアルローブの色彩が、白と赤、せめぎ合うように変色を続ける。そして彼女は「ダメ、です・・・こんなわ、わけの、解らない・・・状態・・私に・・・近付いちゃ・・・！」自分の暴れる力を抑え込むように体を抱いて、ディアーチェに逃げるよう伝える。通常人格が戦闘人格を抑え込もうとしている。これ以上の破壊を行わせないために。

「馬鹿を言うでないわ！　ここで我が逃げるとでも思うてか！」

――アンスラシスドルヒ――

ディアーチェが放つのは血色の短剣型高速射撃魔法。２０発を超える短剣が一斉に発射され、Ｕ－Ｄへと殺到する。短剣を防ぐのは怪物の腕と変わった魄翼の右。大きく横に振るって、迫って来ていた短剣全弾を薙ぎ払った。

「でも・・・私には・・・敵わない・・・・！」

――ジャベリンバッシュ――

空いていた左の魄翼から射出される大槍。ディアーチェは「貴様の今の状態に敗れるほど、落ちぶれてなどおらぬわ！」と怒鳴り返しつつ、魔力付加した"エルシニアクロイツ"による打撃・アンサラーシュラークで大槍の横っ腹を打って真っ二つに叩き折った。

「ぅく・・・。私は・・・シュテルも・・・レヴィも・・・！」

――バイパーー――

間髪入れずにディアーチェの足元より数基の槍が突き出して来た。スッと後退することで躱し、"エルシニアクロイツ"を横に振るって数基の槍を纏めて打ち砕いた。

「あぐ・・・。フラムも・・・アイルも、私が・・・壊した・・んですよ・・・。束になった・・・彼女・・たちを・・・！」

――ヴェスパーリング――

リング型の射撃魔法が１０発と連射される。その弾幕を速度で以って躱しつつ「笑止。あやつらは壊れてなどおらぬ」そう返し、砲撃アロンダイトを"エルシニアクロイツ"の先端より発射。対するＵ－Ｄ、というよりは魄翼は翼状になり、彼女を覆うような防御態勢

を取った。そして砲撃が着弾する寸前、勢いよく魄翼を開いて砲撃を反射したが、すでに射線上にディアーチェは居ない。

「Ｕ－Ｄ！　貴様、目を逸らし過ぎた年月が永すぎた所為で節穴となったか？　見よ、我が翼を！」

ディアーチェの翼は本来深紫一色だが、今は５色という異質な色合いとなっている。根元がディアーチェ本来の深紫、フラムの黄、シュテルの赤、アイルの翠、レヴィの水色というように折り重なっている。

「あやつらは、わが身に力を託し、今は休んでおるだけよ！　そうとも、我が内に居るのだ！」

――雷刃衝――

"エルシニアクロイツ"の先端に生まれる水色の雷撃。ディアーチェが杖を振るって発射するのは雷撃の槍。高速で迫る雷撃の槍を横移動して躱すＵ－Ｄ。彼女は「でも、やっぱり無理・・です・・・！」と言い、大きく広げられた魄翼の両面より１００発の砲撃・アルゴス・ハンドレッドレイを発射。

「それに、こんな・・・暴れるだけ・・私を・・・手に入れて、どうしようと・・・言うんですか・・・！？」

「無論、貴様の力を我が物として、制御しきってくれるわ。それこそ我らの悲願！　我に託された、あやつらの夢！」

――ディザスターヒート――

砲撃の雨の中を翔け避けきったディアーチェは、"エルシニアクロイツ"の先端から火炎砲撃を3連発。1発目を躱すU－D。2発目が掠る。3発目が、彼女の張ったパンツァーシルトに着弾して爆発を起こし、彼女が炎と黒煙に覆われた。

「うっく・・・。先ほどの子たちが・・言ってました・・・けど、・・・私を、仮に制御できたと・・して・・・、王・・・あなたは、何を成そうというの・・・ですか・・・？」

――エターナルセイバー――

黒煙を切り裂いたのは2本の炎の剣。右の炎剣がディアーチェに振り下ろされた。

「ふむ。貴様を手に入れ自由になった後か。そうさのう・・・。やはり、この世界の蹂躙よな」

腕を組んで考える仕草をしたディアーチェがそう答えながら、1撃目をスッと横移動して躱した。U－Dの表情が悲しげなものへと変わり、「そう・・ですか・・・。また、繰り返す・・んですね・・・」間髪入れずに2撃目の左の炎剣が横に振るわれた。

「待て。冗談だ。我は、我らは・・・」

身を屈めることで2撃目を躱したディアーチェは「塵芥のような人間どもが1人も居らぬ地に赴こう」と言い直す。と同時に魄翼から発射される魔力弾幕バレットダムネーション。

「そして――」

――ムンム――

前置きしたディアーチェは前面に氷の鏡を1枚展開。着弾した魔力弾幕をそっくりそのままU－Dへと反射させて行く。回避行動へと移る彼女へと「ゼロから我が王土を築こうぞ！」と新たな答えを告げ、火炎の槍アウラール6発を、前面に展開した黄色いミッド魔法陣より連射。反射してきた弾幕を避けきった彼女は、「本当に・・・出来ると、でも・・・？」そう返しながら、炎の両剣エターナルセイバーでアウラールを薙ぎ払った。

「なんと下らぬ問いか。出来るか出来ぬかなど知らぬわ。そんなことを考えても答えなど出ぬ。何せ始めてもいないのだからな。いま考えるべきことは、やるかやらぬか、だ。無論、我はやるぞ」

――ドゥームブリンガー――

ディアーチェは剣状射撃魔法を8発と放射状に発射。それらが弧を描きながらU－Dへと襲い掛かる。前進することで躱した彼女へと、「貴様の思考は、出来るか出来ぬかで止まっておるのだ！」と言い放った。

「え・・・？」

「我には、貴様を制御できる術が有る、と言うておろうが！　しかし貴様は、出来ない、と諦めてばかり！　考えよ！　出来るか出来ぬか、ではない、やるかやらぬか、だ！　さぁ今一度考えよ！　そして答えるがよい！」

――スパークヴェスパー――

放電する"エルシニアクロイツ"を横に振るって発射するのは、水色の雷光リング型の射撃魔法。U－Dは歳相応とも言えるような、泣き出しそうな表情を浮かべた。そんな彼女から撃ち出されるのは、同じリング型射撃のヴェスパーリング。２つのリングが、２基の間で衝突して相殺し合った。

「ですけど・・・私は・・・！」

――ジェベリンバッシュ――

「っ！　ええい！　うじうじするでない！」

――ファイネストフレア――

魄翼から創られた大槍６本と、先端が燃える"エルシニアクロイツ"から発射されたボーリング玉大の火炎弾が真っ向から衝突し、互いの魔力が干渉し合って大爆発を起こした。魔力爆発の中より突き出て来るのは、魔力弾幕バレットダムネーション。

「よいか、Ｕ－Ｄ！　我はもう、このような問答を続けるのにも飽いた！」

――ヨルムンガンド――

高められた魔力を、蛇の如くうねる砲撃として発射したディアーチェ。砲撃は、ディアーチェへと向かって来る弾幕を食い散らしながらＵ－Ｄへと向かう。彼女は回避行動を取るものの追撃してくるその砲撃へと、対象を魔力と炎で創られた魔力球に閉じ込め、尚且つ重力で押し潰すナパームブレスを発動、迎撃した。

「貴様はどうしたいのだ！　救われたいのか、救われたくないのか！　それが出来ないからと言って諦めるのか、我を信じるのか！　答えよ、Ｕ－Ｄ！」

「っ！・・・救われたいに・・・決まって・・るじゃ・・ないです・・か・・・！　だけど、でも――」

――ヘカトンケイルフィスト――

２つの魄翼から射出されるのは、怪物の両前腕部。右に左にと計４つの腕が射出された。

「阿呆が！　要らぬ心配などするな！　この身には、星と雷、氷と炎の魔力が託されておるのだ！」

――クインタプルミーティア――

それに対しディアーチェは、"エルシニアクロイツ"の柄を両手で持ち、杖の先端に展開したミッド魔法陣より氷、炎、雷、光、闇、５種類の砲撃を高速５連射。砲撃１発で、怪物の腕１基を迎撃していき、最後の闇の砲撃で「ぅくぅあ・・・！」Ｕ－Ｄの展開したパンツァーシルトを破壊した。

「貴様を我らの元へ導いてやれ！　そう支えてくれておるのだ！　ゆえに、我が身は決して砕け得ぬ！　この力を以ってＵ－Ｄ、貴様を今、永き絶望の牢獄から連れ出してくれようぞッ！！」

ディアーチェの足元にベルカ魔法陣が展開されると同時、彼女の前方と足元にベルカ魔法陣２枚、その四方にミッド魔法陣４枚が展開される。色はそれぞれ別。足元と前方にあるベルカ魔法陣は、ディアーチェの魔力光である紫、ミッド魔法陣はそれぞれ、赤、黄、翠、水色、王下四騎士の魔力光だ。

「今こそ我が闇に集え、星氷炎雷！　これぞ我が砕け得ぬ闇！　王たる力ッ！」

――アルゴス・ハンドレッドレイ＆バレットダムネーション――

Ｕ－Ｄの意思に反して迎撃行動を行う魄翼。全方位に砲撃を放つアルゴス・ハンドレッドレイも、今回ばかりはディアーチェの居る方向の面のみから１００発と発射され、さらには魔力弾が何十発と砲撃に交じって発射された。

「これで幕だッ！　エクスカリバー・カタストロフィィィーーーーッッ！！」

四方のミッド魔法陣から４つの特大砲撃が発射され、ディアーチェに向かって来ていた射砲撃弾幕を蹴散らし、遅れて中央のベルカ魔法陣から発射された闇の砲撃が、先に発射された４つの砲撃と共に「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッ！！」Ｕ－Ｄに着弾した。

。－。－。－。－。－。

ディアーチェの放った、システムＵ－Ｄ制御プログラムを含んだ多弾砲撃エクスカリバー・カタストロフィ。その魔力爆発によって空が白に包まれる。そこは"紫天の書"が創り出した一種の精神世界。その白の世界の中、彼女はゆっくりと墜落していた。周囲には、最後の最後で砲撃を防御しようと怪物の腕へと変化していた魄翼の残骸。

「・・・機能・・・破損・・・。永遠結晶（エグザミア）に・・・ダメージ・・・。私は、壊れた・・・のでしょうか・・・？　見えない、聞こえない・・・何も・・・。こんなに静かなのは・・・いつ以来・・・」

薄らと開かれていたＵ－Ｄのまぶたがすぅっと閉じていく。このまま再び眠りに付こうかとしていた彼女は「え・・・？」落下が急に終わり、何かに受け止められたような感覚を得て、閉じていた目を開けた。

「しっかりせぬか、Ｕ－Ｄ！　よもやあれしきで潰れたと言うではないぞ！」

「王・・・？」

Ｕ－Ｄを横抱きに抱き止めたのはディアーチェだった。その表情はＵ－Ｄの無事を気遣う色に満ちていた。彼女から反応が返ってきたことでディアーチェはホッと安堵の息を吐き、「我らの戦術が上手く嵌ったようだ」と呟いた。ディアーチェの取った戦術は、シュテルが提示したＵ－Ｄ停止作戦だ。

飽和攻撃によって暴走していた彼女の核・エグザミアの活動を強制的に止めさせ、その隙にシステムＵ－Ｄの制御プログラムであるディアーチェが、彼女へと制御プログラムを打ち込んでシステムを上書きする。その作戦は「エグザミア・・・本当に、止まって・・・る・・・」彼女のその一言で成功したことが窺える。

「必然の結果よな。何せ、我らが成すことなのだ、失敗などありはせん。それに、こう言うのも癪に障るが、他の連中の助けも・・・それなりに使えたからな。ほ、ほんの少し、無いよりはマシな程度だがな」

ディアーチェには珍しく、共にＵ－Ｄを止めるために動いてくれた管理局組・未来組に感謝をしていた。そして小さく咳払いを１回し、「まぁ何はともあれ、Ｕ－Ｄ。貴様はもう、無闇な破壊を繰り返すこともない。しばらくは不安定な状態もあろうが、この我が監督するのだ。安心せい」と伝えた。

「何故、そんなことを・・・？」

「貴様は憶えておらぬか？　永遠結晶（エグザミア）と、それを支える無限連環（エターナルリング）の構築体（マテリアル）。つまり我ら6基が揃って初めて1つの存在なのだ」

U－Dが少し口を閉ざす。思い出そうとしているようだが、思い出せないようだ。すると「よい。無理に思い出さずとも」とディアーチェが制した。

「・・・闇から暁へと変わりゆく紫色の天を織りなすもの、紫天の盟主とその守護者。我、ディアーチェが王であり、シュテルとレヴィとフラムとアイリが臣下であり騎士。そしてお前は、我らの主であり、我らの盟主なのだ」

「私が・・・主・・・？」

「うむ。我らは永く、お前を捜していた。我らが我らであるがため、お前が独りで泣いたりせぬよう、ずっとだ。とは言え、惰眠を貪り、さらには捜すのにも随分と手間取ってしまった。本当に、待たせてしまったな。

しかし。たった今より、お前のことをもう二度と独りはさせぬし、望まぬ破壊の力を振るわせるようなこともさせぬ。お前の憂い、シュテル達もすぐに戻ってくる。ゆえに安心して、我が元に来い」

優しい声色でそう言うディアーチェに、「・・・王。私は・・・」U－Dの瞳が潤み始める。そんな彼女にディアーチェは「待て。我ら以上にチビだが、曲がりなりにもお前は我らが盟主なのだぞ。王

などと呼ぶでない。名で呼べ」と苦笑交じりに叱責した。

「・・・はい。ディアーチェ」

「うむ。それでよい。っと。お前にもう1つ、伝えねばならぬことがあった。それは、お前の真の名だ。砕け得ぬ闇、システムU－D。そんな無粋な名などではなく、お前が生まれ時に付けられた名だ」

「私の・・・本当の、名前・・・？　そんなものが在るんですか・・・？」

U－Dは、自分の本当の名前があるなど思ってもいなかったようで驚きに目を見張った。「うむ」と頷いたディアーチェは彼女の名前を口にするために、今一度口を開いた。

「お前の真の名は、ユーリ。ユーリ・エーベルヴァイン。それが人として生まれた時のお前の名だ」

人として生まれた時の名前。ひょっとすると、ユーリにもまたオリジナルの人間が居たのかもしれないが、それはまた別の話であり、ここで詮索するのは無粋なことだ。

「私は・・・、ユーリ・エーベルヴァイン・・・」

「そうとも。・・・これよりお前をユーリと呼ぶ。無論、他の連中にもそう呼ばせよう。それで良いな？」

「・・・うん・・・・！」

とうとうＵ－Ｄ――ユーリの瞳から涙が零れ落ちた。ディアーチェはユーリの肩に回している手に僅かばかり力を入れ、彼女を自身へと引き寄せた。ユーリはようやく永遠にして絶望に満ちていた、孤独の旅路を終点へと辿り着いた。その安堵感からか、彼女はその優しげな瞳を閉じ、眠りについた。

「・・・さて。戻るぞ、ユーリ。外に居る阿呆と塵芥どもは、ここでの状況が判らん。我とお前のことで馬鹿面を下げて気を揉んでおるだろうからな。・・・それについて我が気を揉むのもおかしな話だが・・・」

寝顔を浮かべるユーリにそう独り話すディアーチェ。そしてディアーチェとユーリは、外の世界へと戻る。外はすっかり日も暮れ、夜となっていた。雨も止み、遥かなる夜天には美しい月と星々が煌めいていた。

「ディアーチェ、ヤミ！」

真っ先にディアーチェとユーリに気が付いたイリスが、２基の元へと翔ける。遅れて「大丈夫、２人とも！」なのは、「ヤミ、もしかして気を失ってる？」フェイト、「ちょっと大丈夫なの？」アリサ、「すぐにシャマル先生をっ。はやてちゃん！」すずか、「うんっ。シャマル、ヤミちゃんを診たって！」はやて、「ディアーチェ。お前は無事か？」リインフォースが、２基の元へと翔けた。

「やかましいぞ、貴様ら！　ユーリはいま眠っておるだけよ、起こすような真似をするな、阿呆ども！　まったく。この王たる我の成すことに、そんな不備や不手際が起こるはずがなかろう！」

ユーリを気遣っての発言だろうが、一番声が大きいのはディアーチェだった。シャマルや他のメンバーと共に遅れてやって来たルシリオンが「ディアーチェ。君が一番うるさいぞ」ポツリと漏らすと、「何か言ったか？　女男」と睨み返すディアーチェ。と、ルシリオンの眉やこめかみがピクッと動いた。が、「ユーリとは、その子のことか？」と怒鳴り返すような無粋な真似はせず、気になっていたことを訊き返した。

「ああ。こやつの名だ。ユーリ・エーベルヴァイン。貴様らも、ユーリ、と呼べ。そして二度と、砕け得ぬ闇、システムＵ－Ｄ、ヤミ、などと呼ばぬように。良いな？」

ディアーチェから聞かされた問答無用の話に、みんなが「判った」と頷き返した。

「その名前は、あなたが付けたのですか？」

「だとしたら、良いセンスじゃない。綺麗な名前よ♪」

アミティエとキリエにそう言われたことでディアーチェは「違う。元々こやつの名前・・・って、説明するのも面倒だ。こやつの名前がユーリであり、これからそう呼ぶように。それだけで良い」とだけ返した。詳しい話を聴きたいはやてら少女たちからは「えー？

聞きたい～」軽いブーイング。

「ええい、黙れ、子鴉、塵芥ども。それより、我もユーリもだいぶ消耗しておるのだ。休める場所くらい早々に提供、そして案内するくらいの奉仕をせんか」

「はーい。みんなー、手伝ってくれるかー！」

「声量を下げんか、馬鹿者！」

「いやだから、君がうるさいんだって」

わいわい騒がしい中、ユーリは起きることなく「ありがとう・・・」小さな寝言を言いながらもとても安らかな表情で眠っていた。

Ｅｐｏｓ５６輝ける希望を手に／明日への旅立ち～Ｅｎｄ　ｏｆ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

王さまやみんなと協力して、システムＵ－ＤことユーリをＵ止めることに成功した。力を消耗して眠りついたユーリと、ユーリに付いて休みに入った王さまは今、個室で休憩中。そんでわたしらもアースラに戻った直後は、一撃貰うだけで撃墜確定な魔法を扱うユーリとの戦闘で心身ともに疲労困憊。そのこともあって、しばらくは動けへんかった。

「――よし。ようやく疲れも取れてきたな」

「本当にもうよろしいのですか？　主はやて。もうしばらく休んでいては・・・？」

そうは言いながらもわたしをベッドから車椅子に乗せてくれたリインフォースに「大丈夫やよ」って笑顔で答える。特別捜査官の研修生になってから生の現場を、その日のうちにいくつも回るようなことを繰り返したおかげかタフになったんかも。研修前やったら確実に今も寝込んでるはずや。

それからわたしはリインフォースにお願いして、部屋に連れ出してもらう。別々の個室で休んでるみんなのことが気になるし。もしかしたら、わたしのようにもう回復して動き回ってる子も居るかもしれへんし。

「あ、はやて。もう動いていいの？」

「リインフォース。お前も」

部屋を出てすぐ、廊下でばったりと会ったヴィータとシグナム、狼形態のザフィーラ。わたしとリインフォースは3人に「うん。問題あらへんよ」「ああ。もう大丈夫だ」って答える。今度は「そうゆうみんなはもう平気なん？」わたしの番や。

「はい。我々も問題はありません」

「はやてに出会うまで、あたしら結構ヤベェ奴らと戦ってきたかんな。ユーリに比べりゃまだマシな奴らだったけど。まぁそのおかげもあってこれくらいじゃ全然堪えないよ」

ザフィーラは無言やったけど、我も問題ありません、って目からその思いを読み取ることが出来たから、「それは何よりや♪」みんなに笑顔を向ける。わたしとリインフォース。そんでヴィータ達と廊下を進む。

「お？　すずかちゃん達や。おーい！」

通路の先、わたしらと同じ方向に向かって歩いてたすずかちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃんの4人に手を振る。すると、わたしらに振り向いてくれたすずかちゃん達も「おーい！」手を振り返してくれた。聴けばみんなもわたしと同じで、他のみん

ながどうしてるのかが気になって起きてきたとのこと。

「あの子、ヴィヴィオちゃんのことが特に気になっちゃって」

なのはちゃんがポツリと漏らす。未来組の1人、高町ヴィヴィオちゃん。未来への影響を考えて出来るだけ話さん方がええって、アミティエさんとキリエさんに言われてるからそんなに話してへん。

「未来でのなのはちゃんの娘、なんだよね・・・？」

「はじめてそれ聞いたときは混乱したわ」

すずかちゃんが右人差し指を顎に当て呟いて、アリサちゃんがそう言って肩をすくめた。わたしだって驚いた。フェイトちゃんが「私もー。混乱のあまり、アリシアと一緒にお祝いしちゃったし」恥ずかしながら、って風にそう苦笑い。

「つか、はやてとルシルにも子供が居るっつうのにも驚いたんだけどな」

わたしの右隣を歩くヴィータがそう言うてわたしを見ると、「八神フォルセティ、だったか」左隣を歩くシグナムが、わたしとルシル君の未来の子供ってゆう子の名前を言うた。それを思いだして、わたしはまた顔が熱くなるのを自覚する。

「ということは、ルシルははやてを選んで、・・・シャルはフラれたんだね」

通路の先のＴ字路の陰から「アリシア」「アリシアちゃん」がそう言いながら出て来た。うん。つまりはそうゆうことになる。未来のルシル君は、シャルちゃんやなくてわたしを選んでくれた。嬉しい反面、やっぱりシャルちゃんに申し訳ない気持ちも少なからずあるわけで。

「ふわぁ。てゆうか、みんなどうしたの？　まだ休んでた方が良くない？」

大きなあくびをしてそう訊いてきたアリシアちゃんに、「私は、私たちはもう大丈夫。アリシアこそどうしたの？」フェイトちゃんがそう訊き返した。アリシアちゃんが言うには、たった今まで事件の後片付けをしてた、とのことやった。

「てっきり、みんなもまだ寝てるかなぁ、って思ってたけど。起きちゃったんならしょうがない」

もう一度大きなあくびをしたアリシアちゃんがフラフラとフェイトちゃんに寄り添うと、「わたしも起きてよ～っと。ふわぁぁ～～～」右腕に抱きついて、頭を肩に寄り添わせた。するとフェイトちゃんが「いやいや。眠いなら寝ないとダメだよ、アリシア」って注意。

「だぁ～い～じょぉ～ぶ～～」

そうは言うもののアリシアちゃんはホンマに眠そう。そんなアリシアちゃんに「なあよ。なんでお前、そこまでして手伝ってんだ？」

ってヴィータがそう訊いた。続けて「ただの手伝いで体壊しちゃ元も子もないわよ？」アリサちゃん。

「・・・わたしね、決めたんだ。わたし、管理局に入る！」

さっきまでフラフラやったアリシアちゃんが元気よくステップしながらわたしらの先頭に立つと、そう言うてクルっとわたしらに振り返った。嘘や冗談やなくて、本気でそう言うてるって解る。

「で、でも、普通の生活をしたいって、アリシア言ってたよね・・・？」

「むむ？　ひょっとしてうちの妹は、お姉ちゃんの管理局入りに反対なのかな？」

「あぅ。ち、違うよ。どちらかと言えば、すごく嬉しいよ！　でもそうじゃなくて・・・！」

覗き込まれるように顔を近付いてきたアリシアちゃんに、わたわた手を振って否定するフェイトちゃん。すると「ごめん、冗談、冗談♪」アリシアちゃんはからかったことを謝りつつフェイトちゃんからぴょんぴょん跳ねて遠ざかった。

「普通の暮らしがしたい。それも半分本音。もう半分は、せっかく一緒になれたフェイトの側にもっと居たい。だけど、わたしの魔力ランクは恥ずかしながらEランク。お姉ちゃんなのに、フェイトと一緒に飛べない・戦えない・守れない。そう思ったら、なんだか情

けなくなっちゃって、普通の暮らし、とか言い出しちゃった」

後ろ向きで歩くアリシアちゃんが寂しげに微笑んでペロッと小さく舌を出した。フェイトちゃんが「アリシア・・・！」アリシアちゃんに駆け寄って抱きしめた。わたしらは2人の邪魔をせんようにその場で止まる。

「逃げてたんだね、わたし。でも、もう逃げないよ。自分のやりたいこと、見つけたから。一緒に戦えないけど、フェイトを支えることが出来る仕事を見つけた・・・。スタッフ。わたし、スタッフになって、フェイトを、みんなを支える！」

満面の笑顔とピースサインをわたしらに向けてくれたアリシアちゃん。わたしらもアリシアちゃんの決めた夢を応援するために笑顔とピースサインを返す。これで晴れて全員が管理局入りが決定した。そんで話題が戻る。ヴィヴィオちゃんとフォルセティ君？のことについて。リインフォースが「ヴィヴィオは、聖王女オリヴィエの身体特徴を色濃く受け継いでいましたが、なのはの夫となる者は、聖王家の縁者なのでしょうか？」むぅって唸った。

「そ、そうだよね！　子供が居るなら、やっぱりお父さんが居るわけで、私の旦那さまが居るってことに・・・！」

「しかし聖王家は途絶えたのではなかったか？」

「そこん所は、シャルやルミナに聞きゃあいいんじゃね？　オーディンとエリーゼの子孫や、クラウスの子孫のアインハルトだって居

るくらいだし、ひょっとしたらってことも」

当時のベルカを知るリインフォース達だけで話を弾ませてる。こうゆう時はちょう疎外感のようなものが・・・。結局、未来のことはその時になってみないと判らない、って結論が出た。それやのに、

「もう1個、気になるんだけど。トーマがあたしを師匠って呼んだんだよな」ヴィータが話を続ける。

「ふむ。私のことは、姐さん、だったな」

シグナムもノったから、「わたしは、八神司令、やったな。とゆうか、なんでトーマ君とリリィさんにあんなに恐れられてるんかが解らへんのやけど・・・」わたしも話に交じった。トーマ君とリリィさんの態度からして、よっぽど恐いんやって思う、未来のわたし。でもなんでか解らへん。と、「私は、すずか主任、ってヴィヴィオちゃんに呼ばれたよ」すずかちゃんも入った。

「はやてちゃんは、海上警備部捜査司令で・・・」

「すずかは、第零技術部主任、だったわよね」

「結構な出世だよね、2人とも」

なのはちゃん、アリサちゃん、フェイトちゃんの目がわたしらに向けられる。トーマ君とリリィさんは16年後、ヴィヴィオちゃんとアインハルトちゃんは13年後の未来からって話やし、わたしやすずかちゃんだけやなくて、なのはちゃん達もきっと大出世してるや

ろなぁ。その頃はやっぱりみんな別々の道を歩んでるんやろうか。そう思うと寂しいな。

「こうなると、あたしも将来の自分の階級とか役職とか知りたくなってくるわね。訊いてみようかしら」

「ダ～メ～よ　」

背後から聞こえてきた陽気な声。振り返ってみるとそこには「アミタさん、キリエさん！」の２人が居った。

――どうぞ、アミタ、と呼んでください。親しい人にはそう呼ばれるんです。皆さんとは共に危機を乗り越えた友人ですから、ぜひともそう呼んでほしいんです！――

数時間前の戦闘後、アミティエさん、ってわたしらが呼ぶと、アミタさん直々にそう呼んでほしいってことで、わたしらは親愛を籠めて、アミタさん、って呼ぶことにした。

「ダメよ～、アリサちゃん♪　あんまり未来のことを聴かない方が良いわよん♪」

「はい。小さなキッカケが後に大きな問題になるかもしれませんから」

「はーい」

アリサちゃんが残念がって返事をすると「よしよし、良い子良い子♪」キリエさんがアリサちゃんの頭をなでなで。アリサちゃんは「うぅ～」抵抗もせずに受け入れた。大所帯になったわたしらは通路を進んで、レクリエーションルームに向かうことにした。そこが一応の集合場所やからな。

その道中で、「――あぁ、やっぱ納得いかな～い」シャルちゃんの不満そうな声が、次の角の奥から聞こえてきた。遅れて「君なぁ。いい加減諦めたらどうだ？」ルシル君の軽い叱責が含まれた声が聞こえてきた。２人ももう起きてたんやな。

「だってさぁ～。もしかすると、あなたとはやてじゃなくて、わたしとあなた、ってこともありえるんでしょ？」

（わたしに関係あること？）

わたしの名前が出されたことで、リインフォースに車椅子の速度を落としてもらう。と、みんなもわたしに続いて遅足。唯一「どうしたの～ん？」キリエさんがそのままの速さで行こうとしたら、「待ちなさい、キリエ」ってアミタさんがキリエさんの襟首を掴んで止めた。

「だがそうはならなかった。それで終わりだ」

「だから、それが納得いかないっていうか悔しいの。八神フォルセティ。ルシルの推測通りなら、その子もヴィヴィオも、プロジェクトＦの遺児。・・・で、ルシル、あなたは別として、はやてとフォルセティには血の繋がりが無い」

アミタさんとキリエさんを除くわたしらは一斉に息を呑んだ。特にフェイトちゃんとアリシアちゃんの顔色があんまり良うないし、なのはちゃんも俯いた。そうゆうわたしも、ルシル君と結ばれたんやないってことを知ってちょうショックを受けた。

「やはり、か。２３歳の頃に居る１０歳の子供。となれば、主はやてとなのはは、１３歳の頃に２人を生んでいる計算になる。普通に考えれば、それはあまりにも早すぎる。まだ成熟しきっていない体だ。それで出産を行えるとは思えなかった・・・」

リインフォースがポツリと漏らす。シグナムとヴィータもザフィーラも、ホンマはそのことにはついて気が付いてたみたいで浅く俯いた。

「フォルセティを引き取ったのがはやてたち八神家だった。だから八神フォルセティ。もし、わたし――フライハイト家が引き取っていれば、フォルセティ・フライハイトになってたかもしれない」

「シュテルンベルク家に引き取られる可能性もあっただろうけどな。どっちかと言うと、その方が自然だ。フォルセティ・フォン・シュテルンベルク・・・」

「そう。つまりわたしはまだ負けてないってこと！」

「・・・フォルセティ・フライハイト、か。・・・言い難いな。まだ八神フォルセティの方が言い易い」

「そこで決めないでよっ！」

あくまで静かに受け応えるルシル君と、感情のままに声を張り上げるシャルちゃん。と、「はい、この話はここまで。くれぐれもはやて達に話さないようにな。ヴィヴィオとアインハルトを見る限り、高町家も八神家も家庭円満らしい。この話は邪魔になる。プロジェクトFについてはフェイトとアリシアに不安を与える」話を切り上げようとするルシル君。

「判ってる・・・ふふ」

「・・・絶対に解ってないな、君は。未来を書き換えるような真似だけはするな」

2人の声が遠ざかってくのが判って、「はぁ」無意識に止めてた息を吐いた。盗み聞きしてもうたってゆう罪悪感と、わたしらのことを気遣ってくれたルシル君への感謝、いろいろな感情が胸の内に渦巻いてる。

「そっか・・・。ヴィヴィオちゃんとフォルセティ君は、私とはやてちゃんの本当の子供じゃないんだね・・・」

「で、でもさ！　ルシルも言ってたけど、ヴィヴィオの様子からして仲が良いって感じだったじゃない！」

「フォルセティ君は、どうなんやろ・・・？」

「き、きっとヴィヴィオちゃんのように明るくて元気な子だよ！
幼馴染で、同じ学校に通ってるみたいだし！」

落ち込むわたしとなのはちゃんを慰めてくれるのはアリサちゃんとすずかちゃん。と、「家族とは、なんでしょう？」アミタさんが人差し指1本立てて、そう問題を出した。いきなりのことにわたしらはみんなして小首を傾げる。

「家族に必要なのは血の繋がりだけですか？　私とキリエは、人間の博士に造ってもらったギアーズですけど、私たちは博士と家族ですよ？」

「そうね。博士とお姉ちゃんとわたしで、フローリアン家。そのことについてだけは絶対に誰にも否定させないわ」

わたしはリインフォース達を見た。血の繋がりやないけど、わたしらは家族や。そうや、血の繋がりなんかなくても、絆が繋がってればそれが家族や。さっきまで在った不安は綺麗に消えた。見ればなのはちゃんの顔からも不安が消えてた。この件に関しては、また後でルシル君たちに聞いてみよう。
改めてわたしらもレクリエーションルームへ向かう。そんでレクリエーションルームに入ると、出入り口から一番遠い一画にはすでに未来組の高町ヴィヴィオちゃん、ハイディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルトちゃん、トーマ・アヴェニール君、リリィ・シュトロゼックさん。
そんでヴィヴィオちゃんとアインハルトちゃんのデバイス、"クリ

ス"と"ティオ"、トーマ君とリリィさんの間に浮かぶ"銀十字の書"が居った。そやけど、ルシル君とシャルちゃんの姿がなかった。どこ行ったんやろ。

「くはぁ・・・、ちゃんと休んだのにまだ体のあちこちが悲鳴を上げてる・・・」

「あぅぅ、張り切って、頑張った分、その反動がキツイぃ～～」

「ですね・・・。ティオ、クリスさん、大丈夫ですか・・・？」

トーマ君はソファの背もたれに体重を預けて、ヴィヴィオちゃんはテーブルに突っ伏して、アインハルトちゃんは、両手の平に乗せたぐったりとしてる"ティオ"や、テーブルの上に寝そべってる"クリス"を気遣ってる。

「はぅぅ・・・。しっかり、トーマ・・・って、そういう私もすでにくらくらで限界だったり・・・。銀十字、周辺魔力吸収モード。回復促進」

≪ 回復促進開始≫

リリィさんがそう指示を出すと、"銀十字の書"はそう答えた。そんなことも出来るんやな。そんな未来組の子らを見たヴィータが「なんだ、割と未熟者が多いな、未来組は。特にトーマは、あたしの弟子なんだろ？　しっかりしろよ、未来のあたし」って、トーマ君や未来の自分に注意。

「まあでも、あの子たちのおかげで助かったところもあるし」

「うん。ヴィヴィオとアインハルトは魔法を扱えても一般人らしいしさ」

「そこのところは大目に見てやったら？」

「そうやなぁ。ユーリと最後まで戦いきったところはホンマにすごいよ」

なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃん、そんでわたしと未来組の子らの健闘を称える。と、「あー！　ちっちゃいママだー♪」ヴィヴィオちゃんがわたしらに、とゆうかなのはちゃんに気付いて満面の笑顔で大手を振った。すると「はぁーい♪」なのはちゃんも満面笑顔で手を振り返した。

「あまり接触してはいけなかったのではないか？」

リインフォースがそう言うてアミタさんとキリエさんを見たら、「ええ、まぁ」アミタさんが困惑して、「そうなんだけどね～」キリエさんは肩をすくめた。で、「あぅ、ごめんなさい。で、でも、やっぱり無視とか出来ないんですよぉ～」なのはちゃんは、申し訳なさそうにそう言うた。逆はどうやろ。試しにわたしはトーマ君とリリィさんに手を振ってみる。

「「おはようございます、八神司令！」」

すると2人は慌ててソファから立ち上がってビシッと敬礼。うん、すまんことをしたって罪悪感。疲れで休んでるところを邪魔してもうた。合掌して「休んでるとこごめんなー！」謝る。ソファに座り直した2人にもう一度謝っとこ。

「あ、みんな、揃ってるね」

「俺たちが最後だったか」

「おはようございます、はやてちゃん、みんな」

わたしらも席に着いてすぐ。ルシル君、シャマル、シャルちゃん、クロノ君がやって来た。ルシル君とシャルちゃん、シャマルとクロノ君を迎えに行ってたんやな。4人もわたしらの近い席に着いたところで、「皆さんに大事なお話があります」アミタさんが1人立ち上って、話を切り出した。

「博士から私たちに厳命されていることがあります。現地の人が未来の情報を知ってしまった場合、出来る限り未来に関わってくる記憶を封鎖するように、と」

なんとなく感づいてたわたしらからは反対意見は出えへんかった。

「ま、寂しいかも知れないけど、知ってしまったことで未来が変わる――タイムパラドックスが起きるのはみんなも嫌でしょ？　なのはちゃんで言うと、未来を知っている所為で、ヴィヴィオちゃんと

親子にならない可能性も生まれちゃうし」

キリエさんがそう言うと、「そんなの嫌ですぅー！」なのはちゃんとヴィヴィオちゃんの声がハモった。

「はやてさんも、フォルセティ君と親子にならない可能性も生まれるかもしれません」

「う～ん、なのはちゃん達みたくフォルセティ君とは会うてないから実感は湧かへんけど、やっぱり嫌やな～」

未来の家族が居らんくなるのは寂しい。シャルちゃんをチラッと見ると、ただ無言で紅茶を飲んでた。余裕・・・とゆうよりはフォルセティ君は諦めたけど、ルシル君は諦めてへんって感じやな、って感じ取れる。

「トーマ君やリリィちゃんもそうね。かなりの奇跡的確率で生き残れたってことみたいだし、ちょっとしたことがきっかけで、２人ともバッドエンド～、みたいな？」

「軽っ！？　なんて軽い言い方！　言い方の反面それ、本気で困りますから！」

「私もそんなの絶対に嫌ですー！」

キリエさんの発言にトーマ君とリリィさんが叫んだ。わたしらと違って生死に関わってくることみたいやから、それはもう必死や。

「はい。ですから皆さんから、時間移動という出来事が存在した、という箇所だけど、封鎖させて頂きます」

「わたし達や王様たちと出会って、戦いがあったこと、その辺りについて消しちゃうといろいろ問題が起きちゃうかもしれないから、時間移動に関しての事だけね」

とゆうことは、「事件そのもののことについては忘れないってことでええんですか？」って確認すると、「はい。そこまで封鎖してしまうと、逆に思い出しやすくなるかもしれませんので」ってアミタさんが答えてくれた。記憶の封鎖後、アミタさんとキリエさんは、未来からやのうて管理外世界から来た、ってことになるそうや。

「そういうわけで、同じく未来組の皆さん、過去の記憶封鎖を行った方が良いかと。この先の未来に影響を与えてしまうかもしれないので」

「うぅ。残念だけど、歴史が変わらないために・・・」

「はい。記憶の封鎖、お受けします」

「俺も。死にたくないし」

「私も受けます。トーマに会えないなんて辛いもん」

ヴィヴィオちゃん達も納得した。と、「それならドクターやティフ

ァレト先生の治療データも残してはダメなんじゃないか？」ってルシル君が言うた。そんでクロノ君が「そうなるか。まぁ、どうせ持っていてもロストロギア扱いになるだろうから、書類作業の手間が増えるんだ。破棄しよう」ってルシル君に同意した。

「そんじゃわたしから連絡を入れるよ。でもなー、ティファは素直に応じてくれそうだけど、ドクターはどうだろう・・・？」

シャルちゃんが苦笑しながら、まずは医務室に居るティファ先生に連絡。事情を説明すると、『判りました。記憶封鎖とデータ破棄に了承します』って頷いてくれた。次にドクターや。第零技術部に通信を入れると・・・

『はい、こちら第零技術部。まあ騎士イリス。少し振りです』

ドクターの秘書のウーノさんが出てくれた。そんでウーノさんにも事情を話してると、『嫌だ』そんな声がモニター画面外から聞こえた。ウーノさんの隣に姿を見せるドクター、ジェイル・スカリエッティさん。すると視界の端のヴィヴィオちゃんが「っ！」息を呑んだんが判った。そんでなんでかドクターに頭を下げた。なんか未来であったんやろか。

『アミティエ・フリーリアン、キリエ・フローリアン両嬢のデータと、彼女たちに関する記憶の封鎖？　すまないがお断りする。彼女たちのデータは必ず今後に役立てられる！　それを破棄？　一科学者としてそんな冒涜など――』

『アミティエちゃんとキリエちゃんのデータ、消したわよん♪』

『なぬっ！？』

『ナイス働きです、クアットロ』

画面外から聞こえてきたクアットロさんとドゥーエさんの声。ドクターが画面外に出てって『クアットロ！？　ドゥーエ！？　いつの間に！　いや、それより本当にデータを・・・ああ！　本当に消えているじゃないか！』そんな悲鳴を上げた。

『記憶封鎖の件もお受けします。これよりアースラにお伺いしますので、リンディ提督に乗艦許可を』

「ああ、僕が伝えておく」

クロノ君が席を立って、離れたところでブリッジに居るリンディさんに通信を繋げて、「オーケーだ。いつでも来てほしい」ウーノさんにＯＫサインを出した。そやけど『私は嫌だ、受けないぞ』ドクターはあくまで反対のようや。ウーノさんが指をパチンと鳴らすと、ドクターが『くぺっ？』そんな奇妙な声を画面外で漏らした。

『一瞬で意識を落とせたな。流石トーレだ』

『・・・気は引けたが、歴史改変などあってはならないからな。ドクターには申し訳ないが、記憶封鎖が終わるまで眠っていてもらおう』

チンクとトーレさんのやり取りが聞こえてきた。どうやらトーレさんが何かしらの方法でドクターを眠らせたようや。なんや申し訳ない気持ちが。元々はこちらの事情で巻き込んだようなものやのに。まぁとにかく、ドクター達も記憶封鎖を受けてくれるってことで安心や。

「ところでみんなは、元に時代にちゃんと帰ることが出来るの？」

シャルちゃんがそう確認すると、「はい。間違いなくですよ。私たちが帰る際、必ずお連れします」アミタさんが安心できる答えを言うてくれた。続けて「王様とユーリが、手伝ってくれることになったから。ちゃんと戻れるわよ、きっと」キリエさんがそう言うたその時。

「オイッスー！　戻ってきたぞ、オリジナルー！」

「レヴィ！」

「ご無沙汰です、なのは、みなさん」

「シュテル！」

「戻ってきたであります！」

「フラム！」

「室内とは言え、やはり外の解放感は素晴らしいですわね」

「アイルちゃん！」

「ふん。子鴉共の顔を見た途端、気分は急降下だがな」

「んで、王さまは相変わらず毒舌と・・・」

レクリエーションルームにやって来たのはマテリアル達と、「どうも・・・」小さくお辞儀して挨拶したユーリやった。わたしらはそんなユーリ達のところへ集合する。と、「ええい、集まるでない、暑苦しい！」王さまが怒鳴ってきたから、「まあまあ」わたしは落ち着くよう宥める。

「良かった、みんな戻って来られたんだね」

「ちょーヨユーＯＫ！」

「ユーリが力を貸してくれましたから」

「盟主のおかげで、予想以上に速く再起動を果たせましたわ」

「流石、我らの紫天の盟主でありますな！」

シャルちゃんにそう返すシュテル達。そんで最後に、「あの、改めて、ユーリ・エーベルヴァイン、です」ユーリがちょうおどおどした感じで自己紹介。なんやろ、人見知りなんかな。今までのユーリ

とは正反対な感じや。

「本当にありがとうございました、皆さん。私を止めていただいて、本当に・・・」

深々と頭を下げるユーリに、わたしらは気にせんように、って返す。泣いてる子を助けるのも管理局員として、人として当然やからな。ほのぼの空気の中「さて」王さまがコホンと咳払いを1つ。

「状況もひと段落したところで、ぼちぼちうぬらを皆殺し、この世界の塵芥どもに我が、我らが恐怖を撒き散らして恐れ戦かせようと思っておったが・・・」

またそんな物騒なことを言い始める王さま。でも雰囲気からそんなことをしようなんてこれっぽちも思ってへんことくらいは判る。そやから変に言い返さんと「うん」みんな揃って頷く。

「うぬらの居るこの世界は、我らにとって暴れ甲斐の無い、あまりに窮屈な箱庭だ。よって我らは、赤毛と桃色の世界へと侵攻することにした」

王さまの発言に少し呆けたわたしら。つまりそれって「なんだ、エルトリアに引っ越すのか？」ルシル君の言う通りこの時代から未来の世界へ旅立つってことになるわけで・・・。

「違う！　侵攻だ、侵攻！　引っ越しなど気の抜ける言い方をするな、うつけ者！」

「ルシリオンの言葉はあながち間違いではないかと」

「確かに引っ越しですわね」

シュテルとアイルがルシル君に同意を示すように頷いた。ここで「そういうことなんです。私たちの世界に、王様たちも一緒に来てくれることになりました」アミタさんがそう言うた。

「エルトリアって、エキサイティングな世界なんだって！」

「危険なモンスターや、ダンジョンなどもあるとのこと！　モンスター狩りにダンジョン制覇！」

「ボク好みの環境だよ！」「腕が鳴りますな！」

「エルトリアってかなり古い遺跡がたくさんあるし、死蝕地帯には危険生物もうじゃうじゃ居るのよ。わたしもお姉ちゃんもね、実戦訓練はそこで積んだのよ。本当に強いモンスターばかりだから、退屈はしないと思うわ」

「「おお！」」

レヴィとフラムが目をキラキラさせて、そんなトンデモ世界やったらしいエルトリアへ思いを馳せてる。ダンジョンとかモンスターとか、テレビゲームや小説の世界みたいや。わたしも行ってみたいなぁ。

「私たちの暮らす場所としても良物件なのですわ、エルトリアは。もちろんそれだけではなく・・・」

「ユーリと私たち――無限連環（エターナルリング）の力が、エルトリアの復旧に役立つかもしれない。ユーリはその話を聴いて・・・」

「はい。壊すばかりだった私のこの力を、壊すんじゃなくて――世界の復興という役立たせることが出来るかもしれない・・・。それを聴いたら私は、エルトリアへ行こうって思って。ディアーチェ達に我が儘を・・・」

「我が儘の内には入らんわ。我ら全員、２つ返事で了承したからな」

「ええ。ユーリにやりたいことが見つかったのは良いことですから」

「応援するのが臣下の務めですわ」

シュテルとアイルが、ユーリのフワフワな頭を優しく撫でた。気持ち良さそうに、そんで照れくさそうに目を細めるユーリ。そやけど、「もう会えんくなるんやな」わたしはそうポツリと漏らした。最初は敵で、今は友達やって思えるマテリアル達。せっかくこうして話が出来るほどに仲良うなれたのにな・・・。

「私、もっとシュテルとお話ししたかった。それに、また闘うって約束もあったし・・・」

「私もですよ、なのは。約束は、そうですね・・・。またいつかきっと。そういうことで取って置きましょう。永遠に会えない、というわけでもないでしょうから」

「レヴィ、寂しくなるね」

「ちょっとはな。でもま、こっちに居る間も、それなりに楽しかったから、ボクはそれでオーケーにしとこうって思う。こっちに残っても、窮屈か退屈かの二択になりそうだし。それだとつまらないから！」

「・・・うん。そうだね。レヴィは、元気に翔け回ってる方がらしいもんね」

「アリサ。私との引き分けた決闘、いずれ決着を付けてやるでありますよ！　それまでさらに強くなっているでありますよ！　それに、そこでふんぞり返ってる紅の鉄騎！　次に会ったら、今度こそ私が勝つであります！」

「上等よ。あんたも腕を磨いておきなさいよ。今度は逃がさないんだから」

「おう！　待っていてやるよ。そんでまたボコにしてやるからな！」

「アイルちゃん・・・」

「私はディアーチェと同じで、オリジナルと仲良し小好しするつも

りはありませんわよ。・・・でも、これが最後であると言うのであれば、握手に応じるのもやぶさかではありませんわ」

「我としてはもう貴様と会うことがないと思うだけで清々するがな」

「王さま、ひどいぃ～。もうちょっと優しくしてくれてもバチは当たらへんと思うよ？」

「当たる当たらんではない。我から話すことなど何もないぞ。貴様のその阿呆面と、気の抜けた喋り方が気に食わん。ゆえに、話したくない」

「やっぱひどいなぁ。ええやん、そんなツンケンせんで。姉妹みたいなもんなんやし」

「ぶはっ！？　だ、だだ、誰が姉妹か！　不良小僧にも言われて腹が立ったが、貴様から言われると余計に不愉快だ！」

「なんか俺にも怒りの矛先が向いてね？」

「シッ。トーマ。首を突っ込むと危ないよ」

「ほらほら、お姉ちゃんって呼んで～♪」

「よーし、いいだろう。表に出ろ。貴様の緩み切った脳みそに、ジャガーノートかエクスカリバーの直撃を食らわしてやるわッ！！」

「おやめください、王」
「無暗に王が暴れると、他の皆さんに多大な迷惑をお掛けしますので」
「そーだよ、王様」
「ここは懐の広さを見せるでありますよ、陛下」
「うぬぬぅぅ・・・ふん！　命拾いしたな！」
他のマテリアル達に止められた王さまは、鼻を鳴らしてわたしに背を向けた。もうこんな漫才みたいなやり取りも出来んくなるんやね。
「あの、改めましてお礼を。皆さん。本当にありがとうございました」
こうして、ほんの少しの間、レクリエーションルームでわたしらは一緒に過ごした後、別れの準備は・・・なんの問題なく進んでった。日を跨いで早朝。わたしらはアースラを降りて海鳴臨海公園へとやって来た。
そこで、現代組と未来組に分かれて記憶封鎖を受ける。記憶封鎖の効果は、アミタさん達が時間移動を終えた直後からって話で。そうそう。ドクター達もちゃんと記憶封鎖を受けたんや。
――放すんだ、ドゥーエ、トーレ、クワットロ、チンク！　お父さんの言うことが聴けないのかい！？――

記憶封鎖を受ける直前で目を覚ましたドクターは、最後まで抵抗してたんやけど、娘のドゥーエさん達に体を押さえつけられて強制的に記憶封鎖を受けた。思い出した後が怖いってことで、ウーノさん達からの進言でアミタさん達のことも忘れることになった。
そうしてわたしらも記憶封鎖を受けた。この時代からアミタさん達が居なくなった瞬間、わたしらは時間移動に関しての記憶をすべて忘れることになるんやな。記憶封鎖に続いて、時間移動のセッティングも終えて・・・。帰還組が集まってるところに、「ユーリ」ルシル君が、ユーリの側へ歩み寄った。

「あ、あの、なにか・・・？」

緊張の面持ちで身構えるユーリにに、「新たな旅路だ。それなのにゴミを髪に引っ付けていたら格好がつかないぞ」ルシル君はそう言うてユーリの髪に触れて・・・そんで手を引っ込めた。手にはゴミ――小さな紙片が握られてた。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。元気でな」

「あ、はいっ」

ルシル君がユーリの頭をそっと撫でてから戻って来た。ルシル君の背後には不機嫌そうに睨に目の王さまと、ルシル君に撫でられた箇所に両手を置いて嬉しそうにしてるユーリの姿。

「じゃあ、そろそろ行きましょうか。・・・それでは皆さん！　本当にありがとうございました！　この御恩、決して忘れません！」

「お邪魔しました～　」

「「「「お世話になりました！」」」」

「さようなら、またいつか・・・！」

「バイバーイ♪　ほら、ユーリも手を振って！　バイバーイ！」

「バ、バイバーイ・・・！・・・あぅ、恥ずかしいですぅ・・・」

「さらばっ！であります！」

「御機嫌よう」

「ふん。・・・さらばだ」

ホンマにあっさりと、拍子抜けするくらい簡単に・・・、そやけどまたいつでも逢えるって雰囲気でお別れした。そのおかげもあって、わたしらにはお別れの悲しみなんてなくて、また逢おうって前向きなお別れが出来た。そう思う。

こうして、砕け得ぬ闇事件、って名づけられた事件は・・・終わりを迎えることが出来ました。

Ｅｐｏｓ５７その後のエルトリア／フローリアン家の日々～Ｈｏｐｅｆｕｌ　Ｄａｙｓ～

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

目まぐるしい時間を駆け足のように過ごして来た所為もあってか、過去へと遡ったあの日のことが、まだ数年しか経っていないと言うのに何だが随分と昔のことのように感じます。
エルトリアの命を脅かす死蝕現象は、未だに完全な解決を見てはいません。だけどそれでも、父が――博士がその人生を懸けて続けた研究の成果は、ちゃんと花実をつけることが出来たのです。紫天の盟主ユーリ、王様、そしてシュテルとレヴィ、フラムとアイル。あの子たちの頑張りのおかげで、エルトリアは今日も徐々にですが緑を取り戻していっています。

「何度見ても思うけど・・・結構戻ってきたよね、エルトリア」

「そうですね。みんなの頑張りのおかげです。それから６人を連れて来てくれたあなたのおかげ」

エルトリア復興の為にこの世界へと来てくれたユーリは、復興の為にその力を尽くしてくれました。シュテルとアイルを除く、王様とレヴィとフラムも、当初はいろいろ好き勝手してくれましたが、それでも最後はちゃんと協力もしてくれて。
レヴィとフラムは、腕試しや修行とかいう動機の下に凶暴な危険生物を狩ってくれるおかげで、村を救ってくれたことが何度もあって。

シュテルが設計してくれた浄水法。そのおかげで、死んでしまっていた水場が幾つも蘇らせることが出来て。
アイルは氷結能力で砂漠化していた地域に水源を生み出してくれたことで自然を育て易くしてくれましたし。王様も、"紫天の書"の中に保有していたたくさんの魔法で、エルトリアと、僅かに残っている人々を救うのに役立ってくれました。

「それってもしかして皮肉ってる？　わたし独りだったら、結局はなんにも出来ないままだったし」

「まさか。素直な気持ちですよ、キリエ」

「そ。でも忘れてない？」

「忘れてません。私たちを助けてくれた、優しい魔導師たちにも感謝しています」

「そうよね・・・。みんな、元気でやっているかしら・・・？」

「ええ、きっと元気ですよ」

それぞれの時代の中、ほんの少しだけ触れ合えることの出来た人たちに、心からの感謝を。皆さんのおかげで、私たちの世界エルトリアは今、とっても綺麗です。それを証明するように私は目の前に広がる大草原を見回して深呼吸。

「おーい！　アミターー、キリエーー！」

そんな時、私たちの名前を呼ぶ声が背後から聞こえてきました。私たちを呼んでいるのは「あら、レヴィ。どうしたの？」エルトリアの救世主の1人、レヴィ。彼女が私たちの元へと駆け寄って来て、「あのね、ユーリが戦闘訓練したいってー！」そう言ってきました。

「そうですか。じゃあ私も参加しましょう！」

エルトリアは徐々に再生していっているとは言え、強力な危険生物は未だに現れてしまいます。そういうわけで、戦闘の勘が鈍らないように、そしてそれぞれの愛機がさび付いてしまわないように、私たちは時折仲間内で、戦闘の訓練をしたりします。一番やる気を見せるのはレヴィ、もしくはフラム。次いでアイルでしょうか。彼女たちにも譲れないプライドがあるようです。

「それにしてもユーリから戦闘訓練したいって珍しいじゃない」

「そうですね。以前は戦うこと自体に恐れを抱いて忌避していましたけど。徐々に力の扱いが上手くなっていっている所為でしょうか」

上手くなったとはいえ、時々加減を間違えてクレーターを造ってくれたりもしちゃって。その当時を振り返ってちょっと「ふふ」思い出し笑い。相手をしていた王様の呆然とした顔が未だに忘れられません。レヴィに続いて歩くこと少し。すでに空ではユーリとシュテルが訓練を始めていました。

「あー！　シュテるん、ずるい！　一番手はボクって言ったのに！」

「無駄な戦いが楽しいなど、付き合いきれぬな」

「一番手を豪語していたあなたが居なくなる方がダメなのですわよ」

レヴィがプンプン怒って、王様が鼻を鳴らし、居なくなった――というより私たちを呼びに来たレヴィが悪いと肩をすくめるアイル。そしてフラムは「おお、熱く燃えているでありますなぁ、シュテるん」楽しそうに戦うシュテルを見て微笑んでいます。そしてユーリとシュテルの戦闘訓練は、ユーリの勝利で終わりました。

「シュテル、ありがとうございました！　シュテルとの戦闘訓練は、やっぱりためになります！」

「そう言って頂けると嬉しいですよ、ユーリ。ですが、次は負けません」

シュテルが負けを認めて降下してきたところで「次はボク！　ユーリ、ボクだからね！」レヴィが真っ先にユーリの元に。降りてきたシュテルに「お疲れ様でした」「お疲れ、シュテル」私とキリエで労いの言葉を掛けます。

「はい。しかしこうも簡単に負けてしまうとは。もう少し、真剣な修行が必要なようです」

負けず嫌いはマテリアルみんなの共通な性格みたいで。でもそれがさらに強くなる秘訣ですから、良いことだと思います。と、「始ま

りましたね」ユーリとレヴィの戦闘訓練が開始。速さでユーリを翻弄するレヴィ。対するユーリは、その圧倒的な攻撃力による範囲攻撃でレヴィに確実にダメージを与えて行きます。

「「きゃっ！？」」「おっと」「のわっ！」「あらあら」「わわっ！」

レヴィがきちんとユーリを狙わずに攻撃を放ち、その流れ弾が地上に居る私たちのところへ着弾。真っ先に「馬鹿者！　どこに撃っておるか、レヴィ！」王様の叱責一発。次に「まったく。これだからウチの末っ子は」アイルが砂埃の付いたスカートを払うのですが・・・。

「「「「ぷっ・・・！」」」」

私とキリエ、それに王様とフラムがつい噴き出していましました。シュテルもアイルから顔を背けてふるふる体を震えさせていて。明らかに笑うのを我慢しています。そしてとうとう「わはははは！」王様とフラムが笑い声を上げたことで、私たちも笑ってしまう。

「なんですの急に？　何が可笑しいんですの？」

「髪です！　アイル、あなた、髪の毛が面白いことになっています！」

私にそう言われて、アイルは自分の髪を触り、「なんですのコレぇぇぇーーーー！」絶叫。レヴィの雷撃の影響を受けてしまったのか、アイルのストレートヘアがハリネズミのようにボッサボサに。お腹を抱えて大笑いのキリエと王様とフラム。口を押えて笑い声を上げ

るのを我慢するシュテル。そんな中で、ユーリとレヴィの訓練も終了したようで。

「本気を出し過ぎです、レヴィ！　すっごいビリビリします！」

「だって、負けたくないんだもん！　それなのに負けたぁ～～！　悔しい～～！　もーいっかい！　もーいっかい！　もういーー」

「レヴィぃぃぃーーーー！　あなたの次の相手は・・・この私ですわよぉぉぉーーーーーッ！！」

アイルが急上昇してレヴィに突っ込んで行きました。髪も直さず、ボサボサのままで。するとユーリとレヴィも「あはははは！」大きな笑い声を上げる。アイルは「笑いことじゃありませんわよ、馬鹿！　絶対に許しませんわよ！」そう怒鳴って、レヴィと追いかけっこを始めてしまいました。

「盟主！　次は私と一槍、お願いするであります！」

「あ、はいっ！　フラムとは近接戦でお願いします！」

この数年で会得した飛行魔法アンピプテラを発動したフラムの背中からは3対の炎の羽が展開されました。そしてフラムは、大空へと飛び上がりました。そして始まるユーリとフラムの近接戦闘訓練。近接戦だけを見れば、おそらくマテリアル最強でしょう。一番の勉強家で努力家ですから。それでも魔力量の差が、フラムを苦しめます。マテリアルで一番魔力量が少ないのがフラムですから。

「ぅく・・・！　ま、参ったであります、ユーリ」

「フラム。ありがとうございました！　シュテルとは別方向で勉強になります。また、訓練に付き合って頂けますか？」

「もちろんでありますよ！」

降下してくるフラムを見守っていると、「よし。今度はわたしと一本どう？　ユーリぃー！」右に左にと肩を回すキリエがそう挑戦宣告。ユーリは「お願いします」快く承諾。そうしてキリエはユーリの居る高度へと飛んで行きました。

「次は王様、行きます？」

「無駄な戦いなどで消耗したくないわ。次は貴様が行け、赤毛」

「そうですか」

そうは言ってもうずうずしているのはお見通しですよ、王様。さてさて。レヴィとアイルの鬼ごっこはどうなっているでしょうか。

「ヴァリアントザッパー、エネルギー満タン！　消耗部品の交換も完了のオールオーケー！　今のわたしには死角なんてなくってよ、ユーリ」

「そ、それなら私は、真っ正面から全力全開でぶつかるだけです！」

いま不穏な台詞がユーリから聞こえて気がしました。いえ、きっと気のせいですね。レヴィとアイルの魔法の撃ち合いに意識をちょっと取られていたことによる幻聴に違いありません。というか、本気で撃墜しようとしてますね、あの2人。

「なーんかユーリって、お姉ちゃんとかシュテるんの影響が強めな感じよね。キリエお姉ちゃんは、それがちょっぴり寂しいのです」

「えっ？　私、アミタとシュテルの影響受けてますか？　そんなことないと思うんですけど・・・」

「受けまくりよ。1・丁寧語喋り。2・無闇に熱血でド真っ直ぐ。3・割と天然。ほら、共通点多いでしょ？」

「当たっておるな」「当たっているであります」

キリエに同意した王様とフラムに、「そうですか？」私とシュテルは小首を傾げます。ユーリも「1は元々ですし、3も生まれつきの人格ですし、2も・・・影響受けてます？」微妙に認めちゃいましたね。

「盟主とアミタは一緒に居ることが多いでありますから、少なからず影響を受けていてもおかしくないであります」

「確かに、基礎学習の教授担当、それに地域復活の計画立案、そして実行も私が担当していますから・・・」

「いきおい、アミタと一緒の行動が多いのは確か、ですね」
「そうしてディアーチェは、ユーリがなかなか帰って来ぬな・・と、時々寂しい思いを抱いているのですね」
「誰がッ！　いつッ！　そんなことを言ったか！」
「まあまあ、落ち着くでありますよ、陛下。別に恥ずかしがることではないかと――」
「貴様の耳は節穴か、フラム！　我の話をちゃんと聞いておったのか！？　ん！？」
「落ち着きましょう、ディアーチェ」
「元は貴様の所為であろうが、シュテル！」

王様が喚いている間に、キリエとユーリの訓練が始まってしまいました。キリエは（私もそうなんですけど）、ユーリやマテリアルの子たちとは違って魔力運用で発現する現象――魔法を使う魔導師ではないですから、マテリアルに比べれば勝てる確率が高いです。とは言っても、そんなの関係ないっていうほどにユーリの魔法は強力ですから、「きゃーん！」キリエもまた敗北です。

「やりましたー、私の勝ちですー♪」

「あーん。今日こそはなんとなーく勝てるような気がしてたのに～。やっぱりもう、戦闘じゃ敵わないのね～」

軽い口調で落ち込んでるキリエに、王様は「案ずることはないぞ。貴様は卑劣な手段を使ってこそ、誰にも負けぬ戦いが出来るのだ。ゆえに、今回負けて当然なのだ」なんて褒めているのか貶しているのか判らない称賛を贈りました。

「そうだよ、キリエ！　よっ、ずるっこの天才！」

「はぁはぁはぁはぁ・・・、レ、レヴィ・・・逃がす、ものです・・か・・・」

何時の間にやら戻って来ていたレヴィと、フラフラなアイル。どうやらレヴィの逃げ勝ちみたいです。王様とレヴィにそんなことを言われて「何でかしら？　少しも褒められてる気がしない！」ガックリ肩を落とすキリエ。合っています、褒められていませんよ、キリエ。

「卑怯と言うよりは、頭を使って策を巡らせる、でしょうか」

「策士でありますな。少々汚い寄りの」

とまぁ、そういうわけで、キリエも敗退。さて次は「アイル。あなたが行きますか？」未だに息を整えていないアイルに訊きますと、「辞めておきますわ。今の状態で戦うなんて、ユーリに対し失礼ですもの」戦闘訓練を辞退。では「王様。本当にやりませんか？」私

か王様のどちらかになりますね。

「先ほど言うたであろう。無駄なことはせぬ主義だ。それに、訓練など我には不要」

「せっかくですから、一本やりましょう、ディアーチェ！　ディアーチェには、遠距離戦の指導をしてほしいです！」

アイルに続いて辞退しようとする王様に、ユーリ直々の指名が入りました。これはもう決まりましたね。何せ王様は・・・。

「一本だけだぞ」

ユーリには本当に甘いですから。これまでユーリの我が儘――もといお願いには必ず応えていましたからね、王様は。本当にユーリのことが好きなんですから。そういうわけで、次はユーリと王様の戦闘訓練。キリエと代わるように空へと上がった王様が位置に付きました。

「改めて、ディアーチェ、あなたに・・・ありがとうと言わせてください」

「き、急になんだ・・・、なんの礼だ・・・！」

「決まっているじゃないですか。私を助けてくれたこと、こんな青空の下に連れ出してくれたことを、です」

「ふ、ふん。我はただ、我が成すべきことを、成そうと思うたことを成しただけよ。感謝されるいわれなどないわ」

「それでも、ありがとう、です。私はディアーチェが、私たちの優しい王様のことが、大好きですっ　」

何とユーリから大胆な告白。２人を地上から見守る私たちみんなが固唾を呑んで王様の反応がどんなものか期待を抱きます。ま、ほぼ予想が出来ているのですけど。

「ぶはっ！？　やめよ、やめよ、今すぐその口を閉じよ！　怖気が走るわ！」

ほら、やっぱり「素直じゃないですね」王様は声を張り上げて、ユーリの話を拒もうとしました。

「我々の王はそういう人ですから」

「素直になったディアーチェはちょっと見たくないわね～」

「私も、であります」

「私も、ですわ。そもそも私たちの王は――」

「あれでこその王様、だよね♪」

みんなに慕われている王様、ディアーチェ。私たちみんなも王様の

ことが大好きですよ。言葉にはしないだけで、その想いは変わりません。

「き、きき、貴様、我が闇統べる王として生まれたこと、忘れておるのでないだろうな！？」

「忘れてませんよ？　私の大切なディアーチェで、みんなの大事な王様です♪　だからこの、大好き、は・・・これから何度だって伝えますから　」

「のわぁぁぁぁぁぁ！！　黙れッ、黙れッ！　いいや、黙らんで良いわ！　我が闇統べる王の力で、二度と貴様が軽口を叩けぬようにしてくれるッ！」

「負けませんよ！　この想いを伝えるためにディアーチェに勝つ必要があるならッ！」

「だからやめよ、と言うにッ！」

そんなこんなで始まった王様とユーリの戦闘訓練？　王様が割と本気でユーリを墜とそうとしているようですが、ユーリの魔力出力のおかげもあって次第に押され始めてしまう王様。

「ディアーチェのハート、撃ち抜いちゃいます　」

「ええい！　恥ずかしいことを、臆面なくベラベラと並べおって！」

「ホント仲が良いわよねぇ、あの２人」

キリエに「親子というか、姉妹というか」私もそう同意する。あの２人の中の良さは特にすごいですから。

「闇統べる王と、紫天の盟主。あの２人が強く結びついてくれているのは、我々にとっても大変喜ばしいことです」

「ボクもー♪　２人が仲良しだとうれしー！」

「ですわね。ですがあまりに仲が良すぎて、嫉妬してしまいそうですわ」

「アイルの嫉妬は面倒でありますよー。陛下は大変でありま――いひゃい！？　いひゃいでありまひゅ、アイルぅ～！」

そうして王様とユーリの戦闘訓練は、「馬鹿なぁぁぁぁ！」ユーリに軍配が上がることに。これからも王様は、ユーリから愛の告白を受け続けることになりました。ごちそうさまです。

「さてと。ユーリ、順番的に私が最後となります！　これが終わったらご飯にしましょう！」

「はいっ！」

負けたことに納得がいかないみたいの王様と代わるように、私はユーリの前に立つ。と、「アミタにも、改めてお礼を言わせてくださ

い」まさか私にもお礼が言いたいなんて思いもしませんでした。けど、「はい」聴く姿勢を取る。

「アミタとキリエがあの時代――最後の夜天の主の居る時代へ訪れてくれたこと・・・えっと、なんと表現をすれば良いのでしょうか・・・？」

「あなたの思うままに、話してください」

「あ、はい。・・・アミタとキリエ、２人があの時代に来なければ、私はハヤテ達みなさんと戦って朽ち果てていたかもしれません。もしくは、力の限り暴走と破壊を続けていたかもしれません。もちろん、ディアーチェ達もなんとかしてくれようとしてくれたとは思いますけど・・・」

「・・・それで間違いないですよ、ユーリ。私たちは別に、何も出来たわけではありませんから。時の旅人となり、ほんの少し時間の流れに手を出したところで、人も時間も、そう大きくは変わらないものです」

そう、湖に小石を投げ入れて波紋が起こしたとしても、湖は何ら変わる事無く湖のまま。そこに生きる生命たちにもなんら変化は訪れない。

「生きとし生けるものは皆、自身のあるべき姿、向かうべき未来へ向かって進み往くものです。たとえどんな試練があったとしても、それだけはきっと変わらない運命です。ですから、強く真っ直ぐに

生きようとする人たちは素敵だと、私は思っています。なのはさん達と触れ合い、王様たちやユーリと巡り合ったことで、私は人間のことが、もっと、もぉーっと大好きになりました！」

「私も、ですね。エルトリアに来て、エルトリアに生きる人たちのことが好きになりました。博士の願いの為、この地で生きようとしている人たちの願いの為、私はこの星を蘇らせたいって、そう強く思います」

胸の奥が温かくなる。本当に、あなた達と出会えて良かった。そう思います。

「フローリアン一家と紫天の翼たち。手を取り合い、頑張って行きましょう！」

「はいっ！　今日も明日も、明後日も、これからずっと！」

「願いは1つ！　緑の大地をもう一度！」

「その願いを叶えるためにも――」

「「今日も鍛えて参りましょう！！」」

こうして始まる私とユーリの最終戦・・・なんですけど。

「情熱・熱血・熱い思い！　アミタに教わった全部を胸に、私はもっと・・・頑張ります！」

なんて嬉しいことを、戦闘中に言われたりしちゃったら隙なんていくらでも出来ちゃいますよ。そういうわけで、「あ痛たた・・・負けちゃいましたぁ」私の惨敗という結果なり、晴れて全滅ということになってしまいました。
連戦であったにも拘らず息1つ乱していないユーリと、結構ボロボロな私たち。もう笑いしか起きません。そんな中で、くぅ～～、とお腹の鳴る音が二重にも三重にも聞こえて。お腹を鳴らしたのは・・・

「あぅ～、お腹空いたぁ～～」

「はい。たくさん頑張りましたから」

「わ、我ではないぞ！　腹を鳴らしたのは我ではないからな！」

素直に認めるレヴィとユーリ、あくまで違うと言い張る王様の3人。ともかく「お腹も空いたことですし、そろそろ帰りましょう」良い時間ですし、お昼ご飯にしましょう。私たちもそうですけど、あの人もお腹を空かせて待っているでしょうし。

「やったー！　ご飯だー！　ボクとフラムとでね、夕べの内に果物採ってきたんだよー！　川で冷やしてあるの！」

「食べ頃でありますから、期待しても良いでありますよ！」

「ほう。良い働きだ、レヴィ、フラム。褒めてやろう」

「「えっへーん！」」

胸を張るレヴィとフラム。私たちの家へ続く家路を歩いているとユーリが、「エフェル！」私たちと一緒に過ごしている家族の名前を呼んで、その子の元へと駆け出しました。続いて「迎えに来てくれたの！」レヴィも、「それはご苦労なのであります！」フラムもその子に駆け寄って行きました。

「エフェル。様子はどうですか？」

「何の問題もなし！　紙に滑って転ぶこと1回、机の下に転がったペンを取ろうとして、机下に後頭部をぶつけること2回、思案中に室内をウロウロして足の小指を家具にぶつけること4回、水と実験水を飲み間違い未遂2回」

シュテルに訊ねられたことでそう答えてくれたのはエフェル――自称正式名を、スライムを基にした汎用人工精霊プロトタイプ・エフェルヘリンズ。私たちの中で一番小さな体躯のユーリが胸に抱えられるほどに小さな体（身長は大体９０ｃｍくらいでしょうか）を持ち、薄い桃色の肌で素っ裸。驚きの二頭身さんです。

５０ｃｍほどの大きな頭部に４０ｃｍほどの小さな体。手足は本当に短くて、長方形のような体の四方から突き出している三角の手足です。もちろん指なんて有りません。顔のつくりは、性別の判別が出来ないのっぺりとした童顔で、紫色のショートヘア、瞳はパッチリした青色、お鼻は無く、口の大きさは変幻自在。そして抱き心地は・・・スライムという材質特有なのかプニプニでフニフニの柔ら

かさで、枕にすると安眠できます。そして・・・

「わーい♪」

レヴィがエフェルの頭部を胴体から外して、ボールのように跳ねる頭部をバウンドさせる遊び（バスケットボール、というらしいです）をフラムと行い始めた。そう。エフェルは頭部の着脱が出来るんです。これもスライム特有なのか、頭部は硬軟自在で、液体状になったりゴムのような硬さ、果ては鋼鉄のような硬さにもなったり出来ます。で、その特性を活かして自身の頭部をボールに見立てて遊ばせるなんて、とんでもないことも平気で出来ます。

（そう、あれはいつだったでしょうか・・・）

エフェルの頭部吹っ飛び事件。エルトリアに帰ってから1年と半年ほど経過した後でしょうか。復興の合間の休憩途中、近くの木に実っていた果物を採ったレヴィに、自分にも寄越せと座って休憩している王様が言い、それに従ってレヴィが果物を剛速球の如く投げたのでしたね。

――馬鹿者！　なんでそんな本気で投げるか！――

王様の前を横切ろうとしていたエフェル。そして果物はエフェルの側頭部に勢いよく衝突。そしてそれは起きました。エフェルの頭部が吹っ飛び、王様の受け止める形になっていた手の中へ。頭部の代わりに果物が首の上にちょこんと乗って・・・。

――うぉぉぉぉーーーーーいっ！！？？――

――きゃぁぁぁぁぁーーーーーー！！――

王様とユーリのあんなに大きな悲鳴、エルトリアに来てから後にも先にもあの時のものが最高でしたね。驚いた王様は立ち上って、エフェルの頭部をものすごい速さで投げ捨てて、頭部はキリエの後頭部にヒット。そこからバインと跳ねて、近くに居たアイルの側頭部にヒット。またもバインと跳ねて、地面を何度かバウンド。コロコロと私の足元に転がって来たんでした。

（あの時は本当に驚きました。着脱可能だったなんて）

その光景が楽しかったようで、それからはよくエフェルの頭部を使ってレヴィとフラムが遊ぶようになりました。王様は言わずもがな参加しません。あの時の驚きざまを思い出して恥ずかしがるからです。私は一度、そのようなことをされて嫌ではないですか？とエフェルに訊いたことがあります。

――自分の頭で遊ばれるなんて、嫌じゃないんですか？――

――いいえ。むしろ恐れずに接してくれるだけで十分なんです――

エフェルはそう言って小さく微笑みました。それから聞いたのですが、どうやらこれまでにも同じように遊ばれたことがあるようです。ですから平気――というよりは、自分も楽しいということでした。

「あっちゃあ。もう。一度没頭したら自分の身のことなんか度外視しちゃうんだから！」

「仕方ありませんよ、キリエ。そういう人だって、私たちは知っているでしょう？」

エフェルからの報告を聞いて頭を抱えるキリエに、私はそう言って宥めます。あの人にとって、エルトリアの再生は人生そのもの。だからこそキリエはあの人の願いの、夢の為に過去に遡った。私だってあの人の為に、必死に調べた。

「ふむ。これはまた我が闇の力で灸を据えねばならぬようだな」

「それかもしくは凍らせてみます？　私はまだお仕置きをしたことがないので効くかもしれませんわ」

「ボクのバチバチで痺れさせても良いんじゃない？　あ、でも肩こり腰痛が治るって言ってたっけ」

「ディアーチェもアイルもレヴィも、無茶しちゃダメですよ！」

「判っておるわ、ユーリ。なーに。研究も大事だが、自分の身もちゃんと案じよ、と忠告するだけよ」

そうしてみんな揃って家に到着。そして・・・

「「「「「「「ただいま！　博士！」」」」」」」

私たちの大事なお父さん――グランツ・フローリアン博士に、元気いっぱいで帰宅の挨拶をした。

私たちからは、時間も距離もきっととても離れている海鳴の皆さんへ。私、アミティエ・フローリアンと、キリエ・フローリアン。そして紫天の翼たち、王様――ロード・ディアーチェ、ユーリ・エーベルヴァイン、シュテル・ザ・デストラクター、レヴィ・ザ・スラッシャー、フラム・ザ・リヴェンジャー、アイル・ザ・フィアブリンガー。

私たちみんな、今日も仲良く元気に過ごしています。そんなみんなと、いつかまた、皆さんと会えたらいいね、っていつも話をしています。博士も、娘たちがお世話になった皆さんにご挨拶がしたい、って言っています。

（ルシリオンさん。あなたが送って下さったエフェルには、博士を助けてもらいました、本当に感謝しています）

なのはさん達との別れ際、ルシリオンさんはユーリの髪にゴミが付いていると言い、あの子の髪に触れました。まさかその時にコンパクトに縮めたエフェルを引っ付けていたなんて思いもしませんでした。ですが、そのエフェルのおかげで、博士の患っていた不治の病を治すことが出来ました。

――私は、汎用人工精霊プロトタイプ・エフェルヘリンズ。創造主（マスター）・ルシリオン様のご指示により、フローリアン博士の治療をさせて

頂きます――

エフェルは、ルシリオンさんの持つ治癒術式・エイルのみを扱えるように調整された半永久自律型使い魔さんらしく、エフェルはそのエイルという魔法を使って博士の病を治してくれました。
そのおかげで、博士にこの緑を取り戻し始めたエルトリアを見せることが出来、今もなお再生の為の研究を続けさせてあげられています。今すぐにでもあなたに直接お礼を言いたいです、博士に未来をくれてありがとうございます、と。でもそれはまたいずれ。

今は、話すことも触れ合うことも出来ないけれど・・・でも、皆さんと出逢えたこと、助けてもらったこと、私たちは決して忘れません。そしていつか、エルトリアの大地に今以上の緑が戻ったら、皆さんにも見に来てほしいです。
それまでは私たちも毎日、一生懸命に頑張って生きていこうと思います。きっといつだって・・・笑顔を忘れずに。それではまたお会いしましょう。海鳴の強く優しい皆さん。

アミティエ・フローリアン

ＥｐｉｓｏｄｅⅡ：Ｖｉｘｉ　ｅｔ　ｑｕｅｍ　ｄｅｄｅｒａｔ
ｃｕｒｓｕｍ　ｆｏｒｔｕｎａ　ｐｅｒｅｇｉ…Ｆｉｎ

。―。―。―。次章予告。―。―。―。

闇の書事件・砕け得ぬ闇事件も終わり、八神家やその仲間たちに平穏が戻った。

「はやてちゃん、ルシル君。制服姿がとっても似合うわ♪」

「なんかこの学校の制服、初めて着る気がしないんだけど・・・？」

約束されていた聖祥小学校への転入が果たされるはやてとルシリオン、そしてイリス。苦難を共にした友達と、はやてとルシリオンとイリスの新たな活動の場――学校生活が始まる

「はじめまして、そんでおはようや。リインフォースⅡ」

「・・・リイン・・・フォース・・ツヴァイ・・・？」

八神家に新たな家族が迎え入れられる。そしてそれは、リインフォース・アインスとの別れが近づいていることも意味していた

「ルシル。あんた、あたしに変身しなさい！」

「アカン。ルシル君、やり過ぎや！」

「よーし。とりあえずあんたを1発殴るわ。歯を食いしばりなさい」

日常にて巻き起こるトラブルの数々

「シュテルンベルク家、当主のパーシヴァルです」

ついに果たされるシュテルンベルク家との再会

「あの、助けてください！　僕、追われているんです！」

平穏だけが全てではない。世界を揺るがす事件が勃発

「チーム海鳴！　事件解決に尽力するよ！」

幼くも強い魔導師と騎士たちが事件解決に乗り出す

「あなた、管理局を、わたし達を裏切る気・・・！？」

「ごめんなさい・・・それでも、私は・・・あの子の事が・・・！」

海鳴チームの厚く堅い友情に入る亀裂

「お待たせ、迎えに来るのが遅くなった。怒ってもいいぞ？」

「ううん・・・！　また逢えて・・・嬉しい、です・・・！」

それは、離れ離れだった家族が再会を果たす物語

Next Episode: Episode Ⅲ: Usus, magnus vitae magister, multa doc et.

番外コーナー：えぴそ～ど・ツゥーのう・ら・ば・な。その1っ♪

シャル
「はい、丸1年ぶりの番外コーナ～～～♪　今回も、エピソードⅡの裏の話――うらばなを紹介していていくよ～！　メインMCのシャルロッテ・フライハイトで～す　いえい☆」

ルシル
「そうして前回に続き参加する、ルシリオン・セインテストだ」

シャル
「ほいほい、自己紹介も終わったところで、サクサクッと本題は入ろうか♪」

――楽園の番人パラディース・ヴェヒター
次元世界に蔓延る悪を懲らしめ弱き人々を助く、正義のベルカ騎士集団！・・・という名目の元に、違法魔導師からリンカーコアを奪取し、"闇の書"を完成させようとする八神家騎士の仮の姿。全ては今後、八神家を完全な犯罪者として管理局に入局させないようにするためのルシリオンの気遣い。犯罪者のみを狩る事で、管理局や次元世界への印象を良くしようとし、悪を倒すという正義の味方を演じさせて、はやて達に罪悪感を齎さないために考えられた計画。

シャル
「全てはこの計画から始まったんだよね、エピソードⅡ」

ルシル
「先の次元世界での記憶があるからこそ生まれた計画だった。ま、たとえ無くても似たような真似をしていたと思う」

――槍騎士ランサー
ルシリオン・セインテストのヴェヒターモード時の姿。騎士甲冑やデバイスはそのままだが、顔や髪を隠すためにデフォルメされたチーターの頭部へと部分変身している。何故チーターか。それは単独プレーで狩りを行う、俊足のハンターから。

――剣騎士セイバー
八神シグナムのヴェヒターモード時の姿。素顔を見られないようにでデフォルメされたライオンの頭部へと部分変身。何故ライオンか。自尊心があり名誉を重んじ、また、情が深く、時には自分を捨てて
まで誰かのために何か行動するするライオンの性格から。

――鉄槌騎士バスター
八神ヴィータのヴェヒターモード時の姿。素顔を見られないようにでデフォルメされたウサギの頭部へと部分変身。何故ウサギか。それは、のろいうさぎ、に惹かれていたから。以上！

――治癒騎士ヒーラー
八神シャマルのヴェヒターモード時の姿。素顔を見られないようにでデフォルメされたヒツジの頭部へと部分変身。何故ヒツジか。寂しがり屋で人懐っこい。和を大切にするため、脈つくり・情報収集が得意。なんかシャマルっぽい。

――防護騎士ガーダー
八神シャマルザフィーラのヴェヒターモード時の姿。素顔を見られないようにでデフォルメされたオオカミの頭部へと部分変身。何故オオカミか。ザフィーラが狼だから。それだけです！

――管制騎士マスター
八神シュリエルリートのヴェヒターモード時の姿。素顔を見られないようにでデフォルメされたホッキョクグマの頭部へと部分変身。何故ホッキョクグマか。顔立ちが整っていて、接する人に喜びと慰めを与え、勇気づける。自分の功績を自慢せず控えめ。優雅な物腰と心根はみんなをとりこにしてしまう。ほら！

――主人オーナー
八神はやてのコードネーム。表舞台に出る事はないため変身も何もないが、仮にあるとすれば、デフォルメされたタヌキへと部分変身する事になるだろう。何故か？　判るでしょう？

――アトリーズ・セインテスト・アースガルド。
アースガルド四王族が一、セインテスト王家の第三王女。フェンリル狼の初代マスター。大戦中期に活躍した魔術師。フェンリル狼と共に戦場を駆け、ヨツンヘイム連合の魔術師を数多く葬った。
しかしその当時のヨツンヘイム最強にして女帝、銀雪王シルヴィアとの戦闘により敗北。四肢を凍結粉砕され、その場に放置された。死に際、別の戦地で戦っていたフェンリル狼と再会。アースガルドの未来をフェンリル狼に託し、さらには後に現れるであろう次代マスターを見つけるよう願った後、全身が完全凍結され、粉々に砕け

散った。享年１８歳。
名の由来：アトリーズ／北欧神話に登場するアースガルド神は最高神オーディンの別名で、その意味は馬に乗って突進する者。

――シルヴィア・プレリュード・ヨツンヘイム
大戦中期、極凍世界ヨツンヘイムを治めていた女帝。二つ名は銀雪王。魔術師ランクはＥＸ。大戦末期において最強とされていたフノスと同等の魔力を有する。最下層魔界より召喚されたばかりの喰滅狼ウリベルトに気に入られ、友人関係となる。
負けなしだったシルヴィアも所詮は人の子。戦争孤児の、なんて事はないただのナイフの一突きで致命傷を負う。死に際、シルヴィアはウリベルトとの約束――自分が死ぬ時は遠慮なく食べてその身の糧としてほしい――によって、ウリベルトの贄となる。享年２８歳。

――セラティナ・ロードスター
時空管理局は本局・特別技能捜査課に所属する、結界魔導師。階級は三等空士。後に二等空士へと昇格する。ターコイズブルーの長髪、桃色の柔和な瞳。バリアジャケットは、ワンピースにジャケット、コルセットスカート。魔力光は桃色。
ＡＮＳＵＲシリーズ第一章の中盤にて登場し、当時は敵組織"ヨツンヘイム連合"の敵としてアンスールに脅威を齎し、終盤では味方となり、共に大戦を戦い抜いた。第二章にて記憶を消されたうえで強制脱退、安全な世界へと送り出された、元アンスールが結界王アリス・ロードスターの転生体。
転生体であるセラティナは、物心がつく頃にはすでに現存するミッド・ベルカ両術式の結界魔法を修得。現９歳時には、オリジナルの結界魔法を幾つも発明し、結界魔導師としての名誉を欲しいがまま

にした。

シャル
「これはビックリよね？」

ルシル
「ああ。この次元世界に来てから一番の驚愕だったよ。おそらく、アリスを預けた世界がミッドガルド本星だったからだろうな。だからアリスの死後、ミッドチルダの界律に彼女の魂が巡っていたのだろう。だからセラティナという少女へと転生できた」

――時空管理局評議会
通称、権威の円卓。旧暦時代にて次元世界を平定し、時空管理局設立後にその一線から退いた3人が、その後の次元世界を見守るために組織した最高評議会と、彼らの掲げる理念の下に集った１０人の局員・民間人から成る組織。管理局運営とはまた別の事柄を決定する。

――デュランゴ
最高評議会・議長を務める。
名の由来：自動車メーカー・クライスラーの、ダッジ・デュランゴ。

――リョーガ
最高評議会・評議員を務める。
名の由来：自動車メーカー・光岡自動車の、凌駕。

――トレイル

最高評議会・書記を務める。
名の由来：自動車メーカー・日産の、エクストレイル。

――クー・ガアプ
時空管理局評議会メンバー。本局捜査部の分枝課・特別技能捜査課の課長。階級は一等陸佐。２２歳と若いながらも一佐の階級に頂き、課長を務める。黒のショートヘア、澄んだ空色の瞳をしている。
名の由来：クー／自動車メーカー・ダイハツの、クー。ガアプ／ソロモン７２柱の悪魔の１柱である、対象の感情制御に優れた悪魔のガープ。

――ロッキー・サブナック
時空管理局評議会メンバー。本局直属の航空武装隊、第１１１１航空隊の隊長を務める、一等空佐。飄々とした態度を取る、自分の信念と正義を貫くだけの力を有する、空戦騎士。
名の由来：ロッキー／自動車メーカー・ダイハツの、ロッキー。サブナック／ソロモン７２柱の１柱である、攻守に優れた戦闘悪魔のサブナック。

――ヴァーカー・ホドリゲス
時空管理局評議会メンバー。本局、戦技教導隊の全権限を有する長官職に就く。階級は大将。
名の由来：ヴァーカー・ホドリゲス・・・バーカー・ホドリゲス・・・バーカ・ーホ・ドリゲス・・・バーカ・アホ・ドリゲス・・・バカ・アホ・ドリ・ゲス・・・馬鹿・阿呆・鳥（頭）・下種。何故か浮かんだ名前。別に恨みがあるわけでもない。

――ビディ・アーリー
時空管理局評議会メンバー。本局・支局・各地上本部、全ての捜査部の最高長官を務める、高齢の女性中将。管理局が伝説の三提督の１人、ミゼット・クローベルと同期。元本局医務局・局長で、凄腕の治癒魔導師。
名の由来：ビディ・アーリー／１９世紀末、アイルランドにて告発された凄腕の薬草師、民衆に慕われた善の魔女。

――イレアナ・コスンツァーナ
時空管理局評議会メンバー。本局・情報部の長官を務める、５０代の女長官。階級は少将。
名の由来：イレアナ・コスンツァーナ／ルーマニア民話の妖精魔女。数多くの民話に登場し、作品によっては能力や住処は違うが、徹底して同じ共通点を持つ。美貌と知識。

――リチャード・フォーカス
時空管理局評議会メンバー。本局・武装隊長官を務める、戦闘魔導師にして少将。前線に出ていた若い頃は、鬼人、と謳われ、管理局内外問わずに恐れられていた。管理局こそ正義にして平和の象徴と謳い、悪には徹底抗戦。悪・即・討を掲げる。
名の由来：フォーカス／自動車メーカー・フォード・モーターの、フォーカス。

――レジアス・ゲイズ
時空管理局評議会メンバー。ミッドチルダ地上本部の長。

――トリックスター

時空管理局評議会メンバー。管理局員ではなく民間人。本名は不明。本名を知ると、腰を抜かすらしい。１０代前半ほどの少年で、人を食ったような態度を取るものの、注意をされれば大人しくなる・・・フリをする。興味を持ったモノにはとことん知り尽くしたい底なしの探究心を持つ。
名の由来：トリックスター／神話・物語などで、神や自然界の秩序を破り、物語を引っ掻き回すイタズラ好きな者の事。善と悪、破壊と生産、賢者と愚者など、正反対の二面性を併せ持つ。

――エーアスト
時空管理局評議会メンバー。管理局員ではなく民間人。２０代前半ほどの青年。エーアスト――ベルカ語で、最初、という意味を持つ名前を持つ。家庭での長男か、もしくは・・・

――リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ
時空管理局評議会の正式なメンバーではないが、最高評議会３人の世話役である事から、議会の進行役という立ち位置に居る。階級は准将。役職は本局・運用部の総部長。
その正体は、ルシリオンが永年追い求めていた"堕天使エグリゴリ"の１機で、氷浪の鏡の二つ名を持つ、リアンシェルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。何を目的として管理局に務めているのかは不明。
名の由来：キオン・ヴァスィリーサ／ギリシャ語の、雪――キオーン、王妃――ヴァスィリサ。

シャル
「エグリゴリが局員で、しかも運用部を管理する総部長、さらには

准将。シャレにならないじゃん」

ルシル
「まったくだ。目の前に救いたい愛娘が居るというのに、実力差もあり、上司となってしまった事で、今の俺にはまず勝ち目がない。しかし一体何を考えて管理局に務めているのか。俺を殺す気なら、こんな意味不明な真似をせずともいいだろうに」

シャル
「やっぱり永年の洗脳で、頭の中が狂っちゃってんのかもね～・・・・」

ルシル
「・・・・・・」

シャル
「・・・ごめん」

――特別技能捜査課
レアスキル・固有スキルを有した局員のみで編成されている捜査部の分枝課。全員が何かしらのスキルを持ち、魔導師ランクはＡランク以上という、破格の小組織。課長は、クー・ガアプ一等陸佐。

――クー・ガアプ
特別技能捜査課の課長にして設立者。レアスキル・固有スキルを持つ者は大概特別視される。それが良い意味でも悪い意味でも。スキルの能力によっては忌避されたりもするのを、どうにかしようとい

う考えを以って、彼女は同課の設立をリアンシェルトに持ちかけ、晴れて設立となった。魔導師ランクＡＡＡ。
固有スキル：強制聴取。対象と目を合わせた状態を３秒持続させると発動するスキル。３秒後より対象に質問すると、対象は真実を嘘偽りなく話す。

――ナジェージダ・セイジ
特別技能捜査課の課長補佐。階級は一等空尉。愛称はナージャ。２３歳。男口調で話す、クールビューティ。赤いボブカット、翠色の瞳。課長のクーとは幼少の頃からの幼馴染。魔導師ランクＡＡＡ－レアスキル：思考読み取りオブジェクトリーディング。触れた物から思念を読み取る。元ネタ・サイコメトラーＥＩＪＩ／明日真映児。名の由来：ナジェージダ／ギリシャの殉教三姉妹の１人で、希望を意味する、聖ナジェージダ。
セイジ／ミサイル用語の１つで、防空システムで地対空ミサイルや迎撃機に警報を与えてコントロールするシステムで半自動（地上）航空警戒・管制システム――セイジ（ＳＡＧＥ（Ｓｅｍｉ－Ａｕｔｏｍａｔｉｃ　Ｇｒｏｕｎｄ　Ｅｎｖｉｒｏｎｍｅｎｔ）。

――トゥーリア・サクロス
特別技能捜査課のメンバー。階級は一等陸尉。２２歳。フワリとした青いセミロングヘア、赤い瞳。クーやナジェージダとは同郷の幼馴染。趣味は、歳の割に人形作り。本格的なドール製作や、ぬいぐるみ編み、粘土弄りなどなど、何かしら可愛い物を創る事が大好きな自称乙女。魔導師ランクＡＡＡ－。
固有スキル：人形師。自分で作った人形を使い魔として使役できる。トゥーリアがどこに居ようとも自宅から召喚できる。人形は半自律

型の為、同世界に居る限り離れていても命令を忠実に熟す。元ネタ・ローゼンメイデン／ローゼン
名の由来：トゥーリア／フィンランド女性名。
サクロス／ミサイル用語の１つ、半自動指令照準線一致誘導方式――ＳＡＣＬＯＳ（Ｓｅｍｉ－Ａｕｔｏｍａｔｉｃ　Ｃｏｍｍａｎｄ　ｔｏ　Ｌｉｎｅ　Ｏｆ　Ｓｉｇｈｔ）。

――エレフテリア・マーヴ
特別技能捜査課のメンバー。階級は二等空尉。２０歳。栗色のセミロングの髪を、うなじ付近で１本に結っている。青い瞳。研修生として特別技能捜査課に入った八神家の一番の世話役。魔導師ランクＡＡ。
固有スキル：運動停止。自分を中心に半径１５ｍ内の、世の中に存在しているあらゆる運動を停止させる事が出来る。元ネタ・コードギアス反逆のルルーシュＲ２／ロロ・ランペルージ。
名の由来：エレフテリア／ギリシャ女性名。
マーヴ／ミサイル用語の１つ、再突入段階で予め計画された進路変更を実行する能力を持った再突入体で進路修正可能再突入体――ＭａＲＶ（Ｍａｎｅｕｖｅｒｉｎｇ　Ｒｅｅｎｔｒｙ　Ｖｅｈｉｃｌｅ）。

――フィオーレ・マクス・ミッシール
特別技能捜査課のメンバー。階級は三等陸尉。１９歳。ブロンドのセミロングヘア、オレンジ色の瞳。特別技能捜査課へと異動する事になったイリスの担当研修教官。上記のエレフテリアとは幼馴染。夢はお嫁さん。現在、料理の勉強中。魔導師ランクＡＡ＋。
固有スキル：幻影送信。対象の脳内に幻術を直接掛ける。視覚では

なく脳内に直接干渉される幻術のため、解除されない限りはいつまででも幻影の中に閉じ込められる事になり、抵抗策も無い。
名の由来：フィオーレ／イタリア人女性名。
マクス・ミッシール／ミサイル用語の１つ、ＬＧＭ－１１８　Ｐｅａｃｅｋｅｅｐｅｒ　ＩＣＢＭの実験段階での名称――ＭＸミサイル（ＭＸ　ｍｉｓｓｉｌｅ）。

――ニコレッタ・クロス
特別技能捜査課のメンバー。階級は三等空尉。１８歳。紫のロングストレートヘア、チョコレートブラウンの瞳。リンディの夫であり、クロノの父である故クライド提督と同輩だった彼女の父の関係で、ハラオウン家と親しく、エイミィとも親交がある。魔導師ランクＡＡ。
レアスキル：魔力集束。自身を中心に最大半径４００ｍ圏内に在る魔力を、他者以上に高率で集束する事が出来る。その為、敵の魔力集束を妨害でき、さらに魔法を使う者にとっては致命となる魔力素皆無環境も作れる。
名の由来：ニコレッタ／イタリア女性名。
クロス／ミサイル用語の１つ、目視指令有線誘導方式――ＣＬＯＳ（Ｃｏｍｍａｎｄ　ｔｏ　Ｌｉｎｅ　Ｏｆ　Ｓｉｇｈｔ）。

――テレジア・エイルプス
特別技能捜査課のメンバー。階級は准空尉。１５歳。緋色のセミロングヘアをオールバックにし、ヘアバンドで止めている。桃色の瞳。両親・兄姉・親戚すべてが優秀な管理局員というサラブレット的存在。後述の３人と合わせたカルテットの中ではリーダー格。魔導師ランクＡＡ－。

固有スキル：広域捜索。半径５ｋｍ圏内に居る悪を行おうとする者・悪を行った者の思考を一手に読み取る事が出来る。しかし事細かな思考ではなく、何時、何処で、何業をするか、したか、という断片的なものしか読み取れない。
名の由来：テレジア／ドイツ女性名。
エイルプス／ミサイル用語の１つで、事故や誤って発射された少数の弾道ミサイルに対応するように設計された限定的ＡＢＭシステムで、ＬＰＳ（限定的プロテクションシステム）――ＡＬＰＳ（Ａｃｃｉｄｅｎｔａｌ　Ｌａｕｎｃｈ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｓｙｓｔｅｍ）。

――クララ・リークエイジ
特別技能捜査課のメンバー。階級は准陸尉。１５歳。蜂蜜色のロングヘアで、左側の髪を耳かけにしている。翠色の瞳。１５歳の割には低身長で、１４０ｃｍに届くかどうかも怪しい。天然で、生真面目なテレジアにはいつも呆れられている。魔導師ランクＡ。
レアスキル：強制転送。スキル発動中に対象に触れる事で、対象を任意の場所へと強制的に転送させる。転送先が同世界や近隣世界であり、転送先の座標を把握し、スキルの効果を付加できるの両手で触れたモノだけという事もあって一度に最大２人、という条件付。対象を転送先へ物理的に割り込ませる事も可能で、地中・海中・岩の中、などなど転送先によっては死に至らしめる事も可能。元ネタ・とあるシリーズ／白井黒子。
名の由来：クララ／フランス女性名。
リークエイジ／ミサイル用語の１つで、目標に向かって敵の防衛システムを突破できる再突入体のパーセンテージ――リーケージ（ｌｅａｋａｇｅ）。

――テレサ・テレメトリー
特別技能捜査課のメンバー。階級は一等空士。１２歳。ミルキーホワイトの長髪をおさげにしている。青い瞳。年若い事もあってか元気いっぱい常に全力全開、疲れを知らないハイテンション。同課のそれまでの最年少で、マスコットキャラ的存在。新たに同課入りした年下である八神家のはやてとルシリオン、イリスと仲良くなりたいため、少々お姉さん振る。魔導師ランクＡ＋。
固有スキル：物質変換。あらゆる物質を分解、再構築するスキル。岩・木・鉄などの物質を分解し、何かしら別の物へと再構築できる。自身の体も分解・再構築は可能だが、他の生物は不可能。武器や防具などを作って、分解した自分の体と融合して驚異的な戦士へと変身したり、廃品同然の物を掛け合わせて別の新品へと再構築したり、自分の意識を分け与えた自立稼働型ロボットを作ったりと、汎用性が高い。が、自身の体を除いて、一度分解した物は元に戻らないため、スキル発動後はそこら中に穴が開いている。元ネタ・スクライド／アルター能力。
名の由来：テレサ／イギリス女性名。
テレメトリー／ミサイル用語の１つで、ミサイルや兵器のテストの性能についての情報を得るために飛行テスト中にミサイルやセンサから伝送される電子信号――テレメトリ（ｔｅｌｅｍｅｔｒｙ）。

――ベッキー・ペイロード
特別技能捜査課のメンバー。階級は陸曹長。１４歳。緑青色のセミロングヘア。牡丹色の瞳。本局内部に設けられている、希少能力や特別な魔力を持っていた事で事件に巻き込まれた子供たちを保護する施設・特別保護施設にて、６歳～１０歳まで過ごす。ある管理外

世界・人知れぬ僻地の村落においてただ1人の生き残り。巫女という、職業になる予定だった。上記のメンバーのおかげで、元気を取り戻している。魔導師ランクＡ＋。
固有スキル：五行契約。木・火・土・金・水。５種類の元素を司る精霊を使役する。木は雷と風、火は炎と光、土は大地と闇、金は鋼、水は水と氷、といった属性を支配する。現代では滅びている魔術に近いため、魔法戦においては間違いなく最強にして無敵（一応例外は有り）。五大精霊とベッキーの出身世界ではさらに力を高める事が出来、その世界での戦闘となれば、アンスールの最強クラスと互角に渡り合える。元ネタ・テイルズオブエクシリアシリーズ／ミラ・マクスウェル。
名の由来：ベッキー／イギリス女性名。
ペイロード／ミサイル用語の1つで、弾道ミサイルにより運搬される弾頭や、ペネイドおよびＰＢＶの合計重量――ペイロード（ｐａｙｌｏａｄ）。

――エリザヴェータ・テルアウンチェア
特別技能捜査課のメンバー。階級は一等陸尉。１４歳。愛称はリーリャ。翡翠色のロングストレートヘア。灰色の瞳。時空管理局運営に必要な資金の４割を提供している、ミュンスター・コンツェルンの子会社の1つ、テルアウンチェアカンパニーの令嬢。と言っても普段の態度は令嬢とは程遠く、同年代の上記メンバーとは特に仲良し。魔導師ランクＡＡ。
固有スキル：物質操作。視界内の物質を手に触れずとも操作する事が出来る。何かしらに頑丈に固定されている物は操作できないが、最大で、飛行中の小型次元航行艦ほどまでなら操れる。
名の由来：エリザヴェータ／ロシア女性名。

テルアウンチェア／ミサイル用語の１つで、道路移動型弾道ミサイルを運搬・移動し、ミサイルを発射位置に直立させ、ミサイルの発射用のプラットフォーム（発射機）として用いるように設計された車輌――ＴＥＬ（Ｔｒａｎｓｐｏｒｔｅｒ－Ｅｌｅｃｔｏｒ－Ｌａｕｎｃｈｅｒ）。ＴとＥでテ、Ｌでル、ａｕｎｃｈｅｒでアウンチェア。

――セラティナ・ロードスター
特別技能捜査課のメンバー。階級は二等空士。９歳。ルシリオンがＰＴ事件の被疑者、テスタメントであると知っている数少ない証人。魔導師ランクＡＡＡ＋。
レアスキル：特異結界魔法。あらゆる結界の術式を見ただけで複製、自分の物にする。複数の結界術式を掛け合わせてハイブリットな術式へと進化させる事も可能。

――アルテルミナス・マルスヴァローグ
特別技能捜査課のメンバー。階級は空曹長。１３歳。愛称はルミナ。ローズピンクのロングヘア、翡翠色の瞳。魔力光は青緑。元々は第１９９１航空武装隊所属の空戦魔導師だったが、クー課長に引き抜かれる。航空隊としての出撃回数が僅か３回と少ないにも拘らず、破壊神、という異名を持つに至るほどに強大な騎士。魔導師ランクＳ＋。
前世は、"絶対殲滅対象アポリュオン"もしくは"霊長の審判者ユースティティア"のナンバーⅩⅥ終極テルミナス。前作においてはルシリオンや前世シャルロッテを苦しめた最強クラスの怪物。今世のアルテルミナスには前世の記憶はないが、ルシリオンやイリスには僅かばかり懐かしさを覚えている模様。

固有スキル：終極の支配者エクスィステンツ・ツェアレーゲン。その手で触れる事の出来るあらゆる存在を、思いのままに分解できる。エクスィステンツは存在、ツェアレーゲンは分解・解体する、の意。名の由来：アルテルミナス／ギリシア神話の狩猟・貞潔の女神アルテミスと、終極を意味するテルミナスを掛け合わせたもの。マルスヴァローグ／ローマ神話の軍神マルス、スラヴ神話の太陽神スヴァローグを掛け合わせたもの。

シャルシル
「ビックリ！！！！」

シャル
「まさか、あのテルミナスまで転生するなんて思いもしなかったんだけど！」

ルシル
「シャル、アリス、と続いてテルミナスの転生体であるアルテルミナスまで現れるとはな！　さすが完結編！　俺を驚かせてばかりだ！」

――八神はやて
特別技能捜査課のメンバー。階級は嘱託魔導騎士・研修生。９歳。魔導師ランクＳ。
固有スキル：蒐集行使。リインフォース・アインスから受け継いだ、魔力運用と魔導書が現在保有している情報や魔法の使い方をマニュアル化したものを参照する事で、それらをはやて個人で使えるというもの。とは言え、あくまでマニュアルなため応用はさほど利かず、新しい事をしようとすれば一から習得し直す必要がある。

レアスキル：古代ベルカ式。

――八神ルシリオン・セインテスト

特別技能捜査課のメンバー。階級は嘱託魔導騎士・研修生。９歳。実年齢、約２万歳。魔導師ランクＳ＋。

固有スキル：複製。ほぼ無制限に、目で見た魔法・能力・武装・知識などなどを複製し、自らの力とする能力で、複製したモノの詳細を解らずとも自在に扱え、アレンジする事も可能。

複製品の詳細を理解できなくても発動できるのは何故か。純粋に複製しただけでは扱えきれないが、異界英雄エインヘリヤル、の存在が彼の助けとなっている。複製品の担い手の全ての知識も同時取り込んでいるため、理解できないものでも担い手の知識を利用して複製したものを使う事が可能となっている。

ゆえに端から端まで完全に理解できなくても問題なく、理解できたとき、複製したものという括りではなくなり、自分自身の魔術や能力として扱える。早い話が、オリジナルのエインヘリヤルに発動の肩代わりしてもらっている。

レアスキル：古代ベルカ式。

――八神シグナム

特別技能捜査課のメンバー。階級は嘱託騎士・研修生。外見年齢は１９歳。航空武装隊と兼任。魔導師ランクＳ－。

レアスキル：古代ベルカ式。

――八神ヴィータ

特別技能捜査課のメンバー。階級は嘱託騎士・研修生。外見年齢は６歳。航空武装隊と兼任。魔導師ランクＡＡＡ＋。

レアスキル：古代ベルカ式。

――八神シャマル

特別技能捜査課のメンバー。階級は嘱託騎士・研修生。外見年齢は２２歳。医務局と兼任。魔導師ランクＡＡ＋。

レアスキル：古代ベルカ式。

――八神ザフィーラ。

入局をせず、はやてかシャマルの護衛として側に控える遊撃騎士としての道を選択。

――八神リインフォース・アインス

はやてのデバイス扱いなため、入局していない。外見年齢は１９歳。

――イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト

特別技能捜査課のメンバー。階級は三等陸士。９歳。クロノ・ハラオウン執務官の補佐としてアースラに乗艦していたが、このたび特別技能捜査課へと異動。晴れてはやて達と同課メンバーとなる。魔導師ランクＡＡＡ＋。

固有スキル：絶対切断アプゾルーテ・フェヒター。イリスの前世、シャルロッテ・フライハイトの魂の転生によりイリスの魂に眠る魔造兵装・"断刀キルシュブリューテ"の能力絶対切断を利用して発現するスキル。刃限定にだが、あらゆる存在を斬り裂く事の出来る力を付加できる。アプゾルーテは絶対的、フェヒターは剣士、という意。

レアスキル：古代ベルカ式。

シャル
「頑張りなさいよ、もう1人の私！　はやてに負けちゃダメなんだからね！　押して、押して、押しまくれ！」

ルシル
「いやだから、俺はもう誰とも恋仲になるつもりはないと言っているだろうが」

――第１１１１航空武装隊／オンリーワン
時空管理局の暗部。罪を犯しながらも金や権力で以って自らや親しい者たちの罪をもみ消してばかりいる、正真正銘のクズを暗殺するための違法組織。時空管理局評議会での議決の下に、暗殺する対象を選定。そして殺害。同隊のメンバーがその手で殺す直接殺害もあれば、事故に見せかけたり、殺害対象を恨んでいる人間をけしかけて殺させるという、間接殺害といった搦め手も使う。
全員が共通のバリアジャケット仕様。全てが漆黒のフルフェイスヘルメットとライダースーツのようなデザイン。現場では個人情報が漏れないようにするため、コードネームを用い、さらには念話のみでコミュニケーションを取る。メンバー全員、空戦が出来、魔導師ランクＡＡ＋以上。
メンバーは平時、それぞれが所属している本来の部署にて仕事をし、任務が発生した時に限って招集される。

――ロッキー・サブナック
第１１１１航空武装隊の隊長を務める、一等空佐。第６代隊長。平時は、戦技教導隊・第１班の班長を務めている。魔導師ランクＳ－のミッドチルダ式魔導師。

――メルセデス・シュトゥットガルト
第１１１航空武装隊のメンバーの１人。階級は二等空尉。平時は、本籍の第１２管理世界フェティギアの首都航空隊に所属する、魔導師ランクＡＡＡ－の近代ベルカ式騎士。
前作には、管理局上層部の１人の将校によって謀殺された、悲劇の管理局員の亡霊として登場。エリオ・モンディアルを、自分を殺させる事の出来る男だとして認め、最終決戦に臨んで、最期は満足して昇天した。
名の由来：メルセデス／ドイツの自動車会社ダイムラーの、メルセデス・ベンツ。そしてスペイン語で神の恵み・慈悲を意味する。
シュトゥットガルト／ドイツはシュヴァーベン地方―バーデン・ヴュルテムベルク州の中心都市であり州都。メルセデス・ベンツやポルシェの本社がある。

――メサイア・エルシオン
時空管理局本局・次元航行部隊、Ｌ級艦船の第一番艦フェリスの艦長。アルテルミナスを始めとした武装隊を乗艦させての任務からの帰投途中に、パラディース・ヴェヒターに襲撃された高町なのは達を乗艦させた。
前作において、反時空管理局組織テスタメントの実働部隊リーダー、コードネーム・ディアマンテとして登場。管理局の同僚に謀殺され、亡霊として復活。最期は、シャルロッテによって斬殺された。
名の由来：メサイア／ヘブライ語で、塗られた者、を意味するメシアの英語発音。
エルシオン／ギリシャ神話に登場する死後の楽園エーリュシオン。
本当は、エリシオン、と記す予定が、何故かエルシオンとなってい

ましたｏｒｚ

ルシル
「メルセデスとメサイアについてはほとんど憶えていないといないんだが、こうして生きていると思うと安心するよ。それはつまりテスタメント事件は起きないという事だからな」

シャル
「私たちの時代の遺物・ディオサの魔道書による事件だったしね。魔術関係で次元世界があれるのは耐えらんないよ」

――聖王教会
時空管理局と同じように、危険なロストロギアの調査・保守を使命としている宗教団体で、次元世界で最大規模のため、各方面への影響力も大きい。信徒が多いのは他宗教に比べ禁忌や制約が少なく、緩い事が影響している。
古代ベルカの王・聖王を崇めている。現在では数々の偉業を成し遂げた聖王本人や近しい血族、側にあった騎士たちが信仰対象となっている。彼らの遺物は聖遺物として畏敬の対象となっている。また、その聖遺物管理も行っている。代表はフライハイト家で、イリスの祖母が教皇、母は枢機卿、父は司祭。

――教会騎士団
聖王教会が抱える独自の戦力。数ある騎士隊の名前には、色と花が組み合わされたものが付けられている。

――銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼ

教会騎士団における最強の騎士隊。色は銀、花は薔薇。パラディンと謳われる最強の騎士たちのみで構成されている。

――パラディン。

教会騎士団に所属している数いる騎士たちの中で各技能において最強・最高の騎士を、パラディン、と謳う。あくまで教会内での最強であるため、管理局や次元世界内にはもっと優れた実力者が居る場合もあるが、管理局と教会内で言えば最強はほぼ不動。

――アルテルミナス・マルスヴァローグ

聖王教会・教会騎士団・銀薔薇騎士隊に所属するパラディン。教会騎士団・管理局両方に籍を置いている二足の草鞋騎士。近接格闘技において最強の騎士であるため、拳を意味するフォアストパラディンの称号を得ている。デバイスは腕輪型の"ツァラトゥストラ"。名の由来：ツァラトゥストラ／思想家ニーチェの後期思想の根幹を成す思想――永劫回帰を語った「ツァラトゥストラはこう語った」。

――パーシヴァル・フォン・シュテルンベルク

聖王教会・教会騎士団・銀薔薇騎士隊に所属するパラディン。槍術において最強の騎士であるため、槍を意味するシュペーアパラディンの称号を得ている。今より数百年前、オーディンと騙っていたルシリオンと、シュトゥラはアムル領領主のエリーゼとの間に生まれた子供の子孫。現シュテルンベルク家当主。髪型はルシリオンと同じインテークで、髪や瞳の色はエリーゼの遺伝で茶色と青色。歳の離れた妹が居る。姉属性の女性が好み。

デバイスは、槍型のロンゴミアント。ルシリオンとエリーゼの息子ベディヴィアから代々受け継がれている槍術を扱う。

名の由来：パーシヴァル／アーサー王伝説に登場する円卓の騎士の1人で、投槍が得意とされる騎士。
ロンゴミアント／アーサー王伝説に登場する、聖槍ロンゴミアント。

――ブラダマンテ・トラバント
聖王教会・教会騎士団・銀薔薇騎士隊に所属するパラディン。剣術において最強の騎士であるため、剣を意味するシュベーアトパラディンの称号を得ているシスター。
ベルカ自治区・サンクト＝オルフェンを取り仕切るフライハイト家と、それに連なる六家の一角・トラバント家の人間で、イリスの剣の師匠でもある。その所為かイリスからは恐れられているようだ。
ザンクト・ヒルデ魔法学院の講師も務め、同じ講師や生徒たちからはパラディンである事も含め、とても敬われ、そして慕われている。
名の由来：ブラダマンテ／シャルルマーニュ伝説に登場する、とんでもなく強く、そして美しい女将軍ブラダマンテ。
トラバント／東ドイツのＶＥＢザクセンリンク社が生産していた小型乗用車。

――朱朝顔騎士隊ロート・ヴィンテ
聖王教会・教会騎士団の騎士隊の1つ。基本的な騎士隊。色は朱、花は朝顔。

――イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト
聖王教会・教会騎士団・朱朝顔騎士隊に所属する騎士。管理局両方に籍を置いている二足の草鞋騎士。聖王教会設立者の一族であるため、幼いながらも教会内では高位権力者だが、それを笠に着て好き勝手する事はない。ベルカ自治区ではマスコットキャラ的に愛され

ている。

ルシル
「カローラ姉妹が出て来なかったか、確か」

シャル
「まあね。でもここで出すのもなんでしょ？　次のエピソードくらいに出そうって思ってる」

――マリアンネ・ド・シャルロッテ・フライハイト
聖王教会・枢機卿の地位に就く女性で、イリスの実母。現フライハイト家の当主で、正式にシャルロッテを名乗る事が許されている。娘には激甘で、イリスの我が儘をなんでも聞くため、夫には少々呆れられているようだ。
名の由来：マリアンネ／オランダの王族で、ヴィレム一世の次女、ヴィルヘルミナ・フレデリカ・ルイーゼ・シャルロッテ・マリアンネ。

――リヒャルト・フライハイト
聖王教会・司祭の地位に就く男性で、イリスの実夫。フライハイト家へは婿養子として嫁いだ。旧姓ヴィルシュテッター。娘イリスに対して無条件にその我が儘を聞くマリアンネとは違い、厳格であろうとする。しかし本当は子煩悩。マリアンネのようにイリスを甘えさせたいと思っている。
イリスを目の届くところに置いておきたいため、管理局への入局や、管理外世界の学校への編入を認めたがらなかった。管理外世界に居を構えるハラオウン家へ数年間とホームステイする事が決まったそ

の夜、ひとり泣いていた。
名の由来：リヒャルト・ヴィルシュテッター／ノーベル化学賞を受賞したドイツの化学者、リヒャルト・マルティン・ヴィルシュテッター。

――プリアムス・ゲーティア
フライハイト家の女中長。いわゆる一番偉いメイドさん。フライハイト家に務めるメイド総勢２０人の管理を行う、２２歳の乙女。黒のロングストレートヘア、深紅の瞳。お菓子作り、特にケーキに関しては店を出せるほどに巧い。メイド仕事に限らず、フライハイト家を護るために魔導戦にも長けている騎士としての顔もある。
名の由来：プリアムス／ホメーロスの叙事詩「イーリアス」に登場する、トロイア最後の王プリアモスのラテン語読み。
ゲーティア／作者不明の魔導書グリモワール「レメゲトン」五部作の第一部の表題であるゴエティアのカナ表記の１つ。

――ルーツィア、ルーツィエ・フライハイト
フライハイト家に務める双子のメイドで、姉はルーツィア、妹はルーツィエ。１９歳。赤いセミロングヘア、青い瞳。赤子の頃から孤児院育ちでファミリーネームが無い。リヒャルト・マリアンネ両名に引き取られた後、その恩返しで生まれたばかりのイリスを生涯を懸けて守ると誓い、フライハイト家の名を貰った。歳の割には子供っぽく、イリスとは歳の離れた姉妹のようだった。
名の由来：共にドイツ女性名。

――ミミル・テオフラストゥス・アグリッパ
ミッドチルダ北部・ベルカ自治区サンクト＝オルフェンに居を構え

る女技術者。年齢不詳。白色の長髪。橙色の瞳。胸囲は驚愕の１００ｃｍ越えのお化けバストの持ち主。間延びした口調が特徴。妖艶という言葉をそのまま擬人化したような女性。
古代ベルカで最高の技術力を有していたイリュリア技術者の末裔で、当時の技術をそのまま引き継いでいる。現在、はやてやリインフォースと共に、リインフォースⅡを製作中。
名の由来：ミミル／北欧神話に登場する賢者の神ミーミル。
テオフラトゥス／錬金術師パラケルススの本名テオフラトゥス・フィリップス・アウレオールス・ボンバトゥス・フォン・ホーエンハイム。
アグリッパ。／６世紀、神学者・法律家・軍人・医師といった様々な肩書を持った魔術師ハインリヒ・コルネリウス・アグリッパ。

――アウグスタ・マリー・カタリーナ・ルイーゼ
古代ベルカにて、"闇の書"の持ち主だった女領主。ナハトヴァールという、"闇の書"の戦闘能力を強化するプログラムを付け加えた張本人。しかし結局は、その力を発揮させるより前に、自らの臣下らによって討たれた。その後、不完全だったナハトヴァールは暴走。"闇の書"をさらに呪われた魔導書へと凶化させた。
名の由来：アウグスタ・マリー・カタリーナ・ルイーゼ／ドイツ中部にかつて存在していた国家ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ大公国の王族で、同国の大公カール・フリードリヒの次女、マリー・ルイーゼ・カタリーナ・アウグスタ。

シャル

「後編に続くよ～♪」

番外コーナー：えぴそ～ど・ツゥーのう・ら・ば・な。その２っ♪

――七元徳の使徒／アポストルス
七つの徳を司る七柱の天使で構成されている、七美徳の天使アンゲルスと同格の七大天使。４ｔｈ・テスタメント・ルシリオンと３ｒｄ・テスタメント・シャルロッテがとある契約によって訪れる事となった世界にて、２人に戦いを挑んだ。しかし２人の魔術師としての力には敵わずに敗北した。
勇気フォルティトゥード。節制テンパランチア。正義ユスティジア。知恵サピエンチア。信仰フィデス。希望スペス。愛カリタス。
初登場作：「ハコにわ生徒会」における中ボス的存在の一角で、土地神・柴犬のアマテラスが雇った戦闘代行者。しかし登場させる前ににじファン閉鎖。あぁ、残念。
名前の由来：七元徳／古代ギリシャの四元徳＝勇気・節制・知恵・正義＋キリスト教の三徳＝信仰・希望・愛から。

シャル
「ハコにわ生徒会とか本当に懐かしい♪　私のスカートをめくりやがったエロウサギとエロモグラとか、私たちを自分の神社に住まわせてくれて、最後の最後でラスボスになる予定だったミカちゃんとか、生徒会のみんな、友達、みんながちょー懐かしい♪」

ルシル
「色々あったなぁ～。そう言えば、君と結婚した契約も、このハコにわ生徒会だったな」

シャル
「っ！！　あぅ、うん・・・そだね」
ルシル
「今さら照れるとか（笑）」

――紫天の書
"闇の書"に追加されたプログラム。"闇の書"を内側から乗っ取り、支配するためのプログラム群。

――システム：アンブレイカル・ダーク／ユーリ・エーベルヴァイン
えっと、"永遠結晶エグザミア"を核とする、特定魔導力を無限に生み出し続ける無限連関機構の事です。人間の姿を取った時は、ウェーブ掛かったふわふわのブロンドのロングヘアで、瞳は金色です。胸は・・・ありません。小さいではなく、『無い』んです・・・。
"紫天の書"における動力炉的な存在ですね。その魔力量は、他の魔導師たちとは天地の差があると思います。その事もあって、私の攻撃は相手を即撃墜、防御力は全ての魔法攻撃を防ぎ、機動力はかなり早いですよ。
あ、魄翼っていう・・・えっと、この、私の背後に浮いてる霧のような物を使って戦います。魄翼は変幻自在で、炎の剣や翼、腕になったり槍になったりと、すごく便利です。

――マテリアルD／闇統べる王ロード・ディアーチェ
"紫天の書"のシステム構築体マテリアルの1基で、"王"を司っ

ておる。ディアーチェとは古代ベルカ語で、方舟、という意味よ。
憶えておくがよい。
ユーリことシステムＵ－Ｄの制御統制を唯一行える者こそが我ぞ。
ポンコツ融合騎――リインフォースとか言うたか？――と似たような存在だ。ほら、あれよ、管制人格というやつだな。
見た目？　そうさの。・・・口にするのも苛立たしいが、八神はやてを模しておるゆえ、あの子鴉と似ておるな。しかし色は違うぞ！
　我の方が格好いい！　正に王に相応しき色よ。なに？　何故王に相応しい色か、だと？　たわけ、それくらいうぬが調べよ。
まったく。我の色は、紫を基調としておる。紫とは、古来よりどの国でも王位を表す色なのだ。見よ、我が美しき姿を、魔力光を。紫が多かろう？

――マテリアルＳ／星光の殲滅者シュテル・ザ・デストラクター
"紫天の書"のシステム構築体マテリアルの１基で、"理"を司っております。シュテルとは、ベルカ語で、星、という意味ですね。
ポジション的には、他のマテリアルの保護者、といったところでしょうか。あまり騒がしいのは好ましくありませんので、その事もあって無感情や無表情と言われたりしますが、別段そうでもありませんので。
外見ですか？　私のオリジナル・高町なのはと似ています。が、全てが同じというわけではなく、私の髪はショートで、こう・・・なのはのようにツインテールですか？　ではありませんし、色も違います。

――マテリアルＬ／雷刃の襲撃者レヴィ・ザ・スラッシャー
ボク？　ボクは"紫天の書"のシステム構築体マテリアルの１基で、

"力"を司ってんの！　強くて凄くてカッコいいんだぞ！　レヴィの意味？　なんだっけ？・・・あ、稲妻を意味するＬｅｖｉｎ（レビン）から取ったって事らしいよ。
なんかアホ呼ばわれされてばっかりだけど、ボクはアホじゃないぞ！
自分に正直なだけだ！　明るく元気！　だかもうアホって言うな！
え？　他の人の名前をちゃんと呼ばない？　憶えられないから？
違うぞ、ただメンドーなだけさ。オリジナル。ナノハ。子鴉ちん。クロハネ。赫羽。蒼羽。・・・判りやすいだろ！？
好きなモノ？　水色のまんまる！・・・キャンディ？　うん。水色に悪いものはない！　見た目？　オリジナルとそっくりだよ。同じ髪型だしバリアジャケットだし。けど色は違うぞ。

――マテリアルＦ／炎壊の報復者フラム・ザ・リヴェンジャー
"紫天の書"のシステム構築体マテリアルの1基で、"義"を司っているであります。名の由来、でありますか？　とある国（フランス）における炎が、フラム、というようであります。
役目でありますか？　他のマテリアルそれぞれが別の行動目的を得てしまった事による行動理念の乖離による暴走を食い止める事であります。要は、マテリアル全基が同じ目標に向かって突き進むように束ねる事であります。目的がバラバラになって独自に勝手に動くと、面倒な事になってしまうこと間違いなしでありますからな、我々は。
外見でありますか？　オリジナルのアリサ・バニングスと似通っているであります。まぁ多少の違いはあるでありますよ。頭から生えるハネた髪――アホ毛でありましたか？――が3本と生え、髪や瞳、防護服の色も違うであります。あと、アリサは元気溌剌、大声を出すでありますが、私は大声はあまり好かないであります。

――マテリアルＯ／氷災の征服者アイル・ザ・フィアブリンガー

"紫天の書"のシステム構築体マテリアルの1基で、"律"を司っていますわ。アイルの由来ですか？　ゲール語という言語で、氷、を意味するようですわ。美しい響きですわね。この私に相応しい名ですわ。

私の役目？　それは他のマテリアル達が、魔力出力の加減を間違えて暴走、自壊しないように制御するブレーキ役ですわ。王、シュテル、フラムはまぁ自己制御が上手ですけど・・・レヴィ、あの子はもう・・・！　"力"を司っていますから、ちょっと本気を出すと出力限界値ギリギリまで魔力を引き上げて・・・。私は基本、あの子のお守り役ですわよ。

外見ですか？　私のオリジナルである月村すずかを色違いにした、といった方が早いですわ。とは言え、色は全く違いますけど。私は雪のように純白で、穢れを知らない体ですわ。見ます？　心を奪いますわよ？　ふふふ。唯一のアクセントとして、瞳だけは炎のように赤いですわよ。綺麗でしょう？

――エフェルヘリンズ

スライムを基にした汎用人工精霊プロトタイプ。ルシリオンがかつて作成した使い魔で、硬軟自在（液状からゴム、果ては鋼鉄並にまで）のスライムを素体にしている。全体的に薄い桃色で、体長は約９０ｃｍ。４０ｃｍほどの長方形状の体の四角からちょこんと三角形の手足が突き出していて、指は無いが物は掴める。頭部は５０ｃｍほどで。のっぺりとした顔があり、鼻の穴は無い。目はパッチリと開き、口の大きさは自由自在。頭部は胴体と切り離す事が可能で、それぞれ別個に動く事も出来る。

創造主のルシリオンと同じ魔術を使え、"異界英雄エインヘリヤル"を召喚できる"聖門開書ヴォルグリンド"と同じ効果を持つ権限を有する。が、本作では治癒術式コード・エイルのみを授けられた模様。

名の由来：特に意味はない。モデルは、コンノトヒロ先生の４コマ漫画「ぷぎゅる」に登場するチェコ。

初登場作：「魔法先生ネギま！～Ｎｅｍｏ　ｆｏｒｔｕｎａｍ　ｊｕｒｅ　ａｃｃｕｓａｔ～」。ナギ・スプリングフィールドの使い魔だったテスタメント・ルシリオンが、悪ガキだった幼少ナギへの仕置き用として創った人工精霊。後にナギの息子、ネギ・スプリングフィールドと、その使い魔テスタメント・シャルロッテが遺跡内に封印されていたエフェルを発掘、シャルや麻帆良学園女子生徒――特に真祖エヴァンジェリンのストレス原因となる。

――プリメーラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア

ＡＮＳＵＲシリーズの第一章：大戦編、第二章：堕天使戦争編で活躍した、完全自律稼働人型魔道兵器・戦天使ヴァルキリーの１体で、第七世代ランドグリーズのシリアル０１にして隊長、雷滅の殲姫のコードネームを持つ雷撃系最強ヴァルキリー。愛称はプリム。

黄金色の長髪は赤く大きなリボンでツーサイドアップ、見る角度から色の変わる瞳。自分たちを生んでくれたルシリオンとシェフィリスを父・母と呼び慕っており、父ルシリオンには親子以上の愛を抱いている。

堕天使戦争中盤で、堕天使エグリゴリからのウィルス感染を危険視され、他の"ヴァルキリー"や、管制プログラム群"三女神ノルニルシステム"ともども封印された。

名前の由来：プリメーラ／ＰＳゲーム「ゼノギアス」の登場キャラ

から。スペイン語の、第一級の・最高級の、のプリメーラから。

シャル
「スペイン語って、ヨツンヘイム語でしょ？　よくこの名前を付けられたね」

ルシル
「皮肉だよ。貴様らの言語でいう、最高級、の名を冠した私とシェフィリスの娘が、貴様らを討ち滅ぼす、って。プリムは見事、ヨツンヘイム連合の連中にその力を見せつけてくれたよ。流石は私たちの愛娘だ」

シャル
「ふーん、そういうものなんだぁ～」

――魔導犯罪者・違法魔導師
魔法を悪用する魔導師や騎士で、その強さはピンキリ。雑魚も居れば、武装隊隊長クラスやそれ以上の実力を兼ね備えた魔導師も居る。が、新暦６５年に、パラディース・ヴェヒターによる違法魔導師狩りが行われ、しばし鳴りを潜めた。

――フィリー・ニサン
凄腕の違法魔導師。その腕を買われて違法取引現場の用心棒や、自ら犯罪に手を染める事も厭わない、空戦が出来る魔導師。先の次元世界にて、ティアナ・ランスターの実兄であるティーダ・ランスターを殉職せしめた。
しかしこの次元世界では、楽園の番人パラディース・ヴェヒターの

槍騎士ランサーと名乗っていたルシリオンによって撃破。リンカーコアを強引に引き抜かれ、魔導師として再起不能にされた。
名の由来：フィリー／自動車メーカーＩＳＵＺＵ・フィリー。ニサン／自動車メーカーＮＩＳＳＡＮ

――リンドヴルム。
古代遺失物ロストロギアの収集家。ミスター・リンドヴルム、龍の王、蛇王子、宝物庫の長、空の城主、コレクター、クレイジー・ドラゴン、キュリオシティ、ファナティック、プランドラーなどの異名を持つ。
本人と、その者が抱える高ランクの私兵魔導師たちを合わせてリンドヴルムとも呼ぶ。次元世界の管理・管理外・未開世界へと私兵を送り、ロストロギアを回収させる。時には魔法の力を使って無理やり、金で買える物は買い、発掘できる物は発掘する。
リンドヴルムは、武器型のロストロギアを飽きるまで鑑賞した後は私兵に渡す事もあり、ロストロギアを武装させて新たなロストロギアの回収の任へ就かせる事もある。
名の由来：リンドヴルム／おもにドイツに伝わる伝説上のドラゴンで、蝙蝠のような翼を持ち、２本の前足を持つ飛竜。
第０小隊・ドラゴンハート
第１小隊・ドラゴンヘッド
第２小隊・ドラゴンアイズ
第３小隊・ドラゴンウィング／全滅
第４小隊・ドラゴンネイル
第５小隊・ドラゴンローア
第６小隊・ドラゴンスケイル／全滅
第７小隊・ドラゴンブレス

第８小隊・ドラゴンブラッド
第９小隊・ドラゴンファング

――デスペラードパーティ
名うての魔導犯罪者や悪名欲しがるフリーランスの魔導師たちが、裏社会のＶＩＰの招集の下に無人世界で開かれるレースで、空戦レースや陸戦レースと言った種類がある。招待された者以外は強制的に世界外へ排除される。３年に一度開催際される、３日間の祭典。優勝賞金は１千万クレジット。そして願いをなんでも叶えてもらえる権利が得られる。
レース中はもちろん魔導戦もアリで、毎回死傷者多数。そして第１６回デスペラードパーティに、パラディース・ヴェヒターを招いた事が全ての間違い。参加した魔導犯罪者の３分の１が餌食となり、閉会時に第１１１１航空隊によってさらに３分の１と開催者側の政治家や軍人が多数殺害された。第１７回が開催されるかどうかは不明。

――チーム・ホーカー
ハリアー、ハリケーン、タイフーン、テンペスト、ホットスパーの５人組で、空戦特化の犯罪請負の傭兵。
名の由来：ホーカー／英国の航空機メーカー・ホーカー・エアクラフト
ハリアー／ホーカー・シドレー社が開発した、世界初の実用垂直着陸可の戦闘機
ハリケーン／ホーカー・エアクラフト社製のレシプロ単発・単座戦闘機。
タイフーン／イギリス・ドイツ・イタリア・スペイン、４ヵ国が共

同開発した戦闘機。
テンペスト／ホーカー・アビエーション社で量産開発された、イギリス空軍（ＲＡＦ）の戦闘機。
ホットスパー／スコッツ社はグリーノック造船所で造られたイギリス海軍のＨ急駆逐艦。

――死を呼ぶ銃士隊ガン・コールズ・デス
拳銃やライフル型のデバイスのみを武装とした射砲撃魔導師集団。暗殺業を生業としている。ウッズマン。ローマン。バイソン。ネイビー。シェリフズ。
名の由来：メンバー全員が、アメリカの銃器メーカー：コルト・ファイヤーアームズ作の拳銃名。

――チーム・ハンドオブグローリー
指の名前をコードネームとした違法魔導師集団。基本的な犯罪は盗み。リーダーは、親指を意味するサム。次いで人差し指のインデックス、中指のミドル、薬指のリング、小指のリトル。

――チーム・ロストエンパイア
爵位をコードネームの持つ、とある管理世界の没落貴族の末裔たち。管理外世界での詐欺・盗み・傷害などなど、かつての貴族としての面影は一欠けらも無い。バロン・ジョゼフ。ヴァイカウント・ジョン。カウント・ヘンリー。マーカス・サド。デューク・ヴィリアーズからなる。
名の由来：バロン・ジョゼフ／フランスの数学者・物理学者のジャン・ばてぃスト・ジョゼフ・フーリエ男爵。
ヴァイカウント・ジョン／イギリスの政治家・貴族のヘンリー・ジ

ョン・テンプル子爵。
カウント・ヘンリー／イギリスの政治家・貴族・枢密顧問官、ヘンリー・バサースト伯爵。
マーカス・サド／フランス革命期の貴族・小説家、ドナスィヤン・アルフォンス・フランソワ・ド・サド。
デューク・ヴィリアーズ／イングランドの政治家・貴族・初代バッキンガム侯爵、ジョージ・ヴィリアーズ。

――チーム・バルケッタ
ミュンスター・コンツェルンの子会社の１つ、魔導端末の研究・開発を営むデバイスメーカ、バルケッタ・インダストリー社から参戦したチーム。参加者は、同社が開発した自律型の人型デバイスである、オリハルコン、ミスリル、アダマンタイト、アミントゥス、オイルーンの５機。
オイルーンは、対魔導師戦用自律型デバイス試作機α。魔力とは違うエネルギー運用で動き、魔力結合・魔力効果発生を無効にするＡＭＦ機能を搭載。
ミスリルは、悪環境下作業用自律型デバイス試作機α。電磁石搭載ボディを持ち、電磁力による分割・合体を行える。モデルは、ＭＧＲのモンスーン。
アミアントゥスは、対魔導師戦用自律型デバイス試作機Γ。炎熱変換された魔法全てをキャンセルする機能を搭載。
アダマンタイトは、汎用作業自律型デバイス試作機α。怪力と装甲に機能の大半をつぎ込んでおり、瓦礫撤去などを主作業とする。モデルは、ＭＧＲのアームストロング。
オリハルコンは、魔力素生成用自律型プラントデバイス試作機β。機体内にある装置を使って魔力素を生成、機体外へ排出。魔力素の

薄い環境下では魔導師や騎士の助けとなる。
名の由来：オイルーン／別名、死を呼ぶ銀と呼ばれる鉱石。その特徴は、精霊に嫌われ、魔力を殺す事。人体に流れる魔力も殺す為、携帯しているだけで寿命を縮める。
ミスリル／魔力を持った金属。
アミアントゥス／別名サラマンダーと呼ばれる、火山口などに稀に見られる鉱石。その意味は、火の中でも燃えない石。
アダマンタイト／地上で最高の硬度を誇る架空の鉱石。
オリハルコン／古代の超金属、別に山の鋼と呼ばれる伝説上の金属。

――チーム・ロウダウナー
フリーランスの魔導師集団。１０代後半から２０代前半といった風貌の少年少女のチーム。犯罪歴は無い。レインジャー、サーベイヤー、マゼラン、メイヴン、ドーンの５人から成る。レース中は、若く更生も出来るだろうと見逃されるが、後に罪を犯し、ルシリオン、シグナム、ヴィータの手によってリンカーコアを奪取され、魔導師として再起不能となる。
名の由来：メンバーは、アメリカ航空宇宙局――ＮＡＳＡに縁がある。
レインジャー／月探査計画。
サーベイヤー／無人月探査計画。
マゼラン／金星探査計画に用いられた探査機。
メイヴン／火星探査計画。
ドーン／準惑星ケレス及び小惑星ベスタを目標とする無人探査機。
ロウダウナー／ロウは法、ダウナーは俗に気分を落ち込ませたり、落ち着かせたりする物事のこと。

――チーム・レガリア
前回のデスペラードパーティの優勝チーム。悪道を悪心のままに駆け、悪名を欲しいがままに手にした無法者。管理・管理外世界を問わずに誘拐・強盗・殺人などなどの罪を犯し続ける組織から選出されたメンバーによるチーム。モノケロス、ペガス、ガンコナー、ペリュトン、サントールから成る。
名の由来：モノケロス／聖獣ユニコーンのギリシア語読み。
ペガス／聖獣ペガサスのフランス語読み。
サントール／ケンタウロスのフランス語読み。
ガンコナー／アイルランドに伝わる妖精の一種。
ペリュトン／アトランティス大陸に棲んでいたとされる怪鳥。

――ロストロギア
過去に滅んだ超高度文明から流出する、特に発達した技術や魔法の総称。

――運命を捻じ曲げ征服する者／フェイツ・コンクエスター
第一級秘匿指定を受けているロストロギア。出自不明の最恐最悪のロストロギアと呼ばれている両刃剣。何十何百という人の命――運命を吸収し、持ち主の運命を自由自在に操る事が出来る。単なる人より、リンカーコアを有する人を殺した方が運命を捻じ曲げるエネルギーが溜まりやすい。

――夜明けの剣
暁の剣とも呼ばれるロストロギア。剣身は夜明けの空のように薔薇色掛かっている。能力は、幽鬼めいた兵団――夜明けの軍団を無制限に召喚できるというもの。

名の由来：夜明けの剣／マイクル・ムアコックの小説「ルーンの杖秘録」に登場する魔剣。

――キルケー・プロフーモ

異性を魅了する魔女の香水。使用できるのは女性限定という条件付き。香りを嗅いだ男性を魅了し、意のままに操る事が出来る。

名の由来：キルケー／ギリシア神話に登場する魔女。プロフーモ／イタリア語で、香水。

――ディアナズ・アミュレッティア

女神像型の棍棒。使用できるのは女性限定という条件付き。男性のあらゆる守りを砕き、男性からのあらゆる攻撃を防ぐ加護を有する。

名の由来：ディアナズ／ローマ神話に登場する、狩りの女神ディアーナ。アミュレッティア／お守りを意味するアミュレット。

――アリーの盾。

４枚一組の盾型のロストロギア。射砲撃を防ぐ第一の盾。魔力斬撃・打撃封じの第二の盾。捕縛封じの第三の盾。レアスキル・固有スキル封じの第四の盾。

名の由来：アリーの盾／イスラム教の偉人アリーが用いていた盾。

――ディルンウィン

ホワイト・ヒルト、白柄の剣とも呼ばれる、漆黒の鞘に収められた剣。剣身もまた漆黒だが、すぐさま心を魅了されるがごとき白の光を発する。剣に選ばれていない者が鞘から抜けば即座に剣より生まれる劫火によって燃やし尽くされる。しかし選ばれた者が鞘から剣を抜けば、絶大な力を手にする事が出来る。

名の由来：ディルンウィン／ロイド・アリグサンダー著のファンタジー小説「プリテイン物語」に登場する宝剣。

――対システムＵ－Ｄカートリッジ
砕け得ぬ闇編にて、シュテル・ザ・デストラクターとアイル・ザ・フィアブリンガーの２基が作った、砕け得ぬ闇を一時機能不全に陥らせるプログラムを内包したカートリッジ。

――サラマンダー
フラム・ザ・リヴェンジャーの有するカートリッジ。
名前の由来：：サラマンダー／ドイツ空軍戦闘機・Ｈｅ　１６２Ａ　国民戦闘機――通称サラマンダー。正式名シュパッツ。

――ケーニヒスベルク
シュテル・ザ・デストラクターの有するカートリッジ。
名前の由来：ケーニヒスベルク／ドイツ海軍巡洋艦・ケーニヒスベルク級軽巡洋艦。

――ツェッペリン
アイル・ザ・フィアブリンガーの有するプログラム。
名前の由来：ツェッペリン／ドイツ海軍空母・グラーフ・ツェッペリン。

――シャルンホルスト
レヴィ・ザ・スラッシャーの有するカートリッジ。
名前の由来：シャルンホルスト／ドイツ海軍戦艦・シャルンホルスト級。

――ヴァッサーファル
イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトの有するカートリッジ。
名前の由来：ヴァッサーファル／ナチス・ドイツ軍の報復兵器Ｖシリーズの２号――Ｖ２ロケットを小型化した対地空ミサイル・ヴァッサーファル。

――ヴィルベルヴィント
八神シグナムの有するカートリッジ。
名前の由来：ヴィルベルヴィント／ドイツ国防軍の対空戦車――ＩＶ号対空戦車ヴィルベルヴィント。

――ブルムベア
八神ヴィータの有するカートリッジ。
名前の由来：ブルムベア／ドイツ軍自走砲・ＩＶ号突撃戦車――ニックネーム・ブルムベア。

――オストヴィント
クロノ・ハラオウンの有するプログラム。
名前の由来：オストヴィント／ドイツ陸軍の対空戦車・ＩＶ号対空戦車オストヴィント。

――ラントクロイツァー
八神ルシリオン・セインテストの有するミッドチルダ式カートリッジ。
名前の由来：ラントクロイツァー／ナチス・ドイツ軍の超ド級巨大戦車・ラントクロイツァーＰ・１５００モンスター。

――フェルディナント
八神ルシリオン・セインテストの有するベルカ式カートリッジ。
名前の由来：フェルディナント／ナチス・ドイツ軍の戦車、ポルシェ・タイプ１０１＝ポルシェ・ティーガーの自走砲換装タイプ――フェルディナント。

――ネーベルベルファー
高町なのはの有するカートリッジ。
名前の由来：ネーベルベルファー／ドイツ軍兵器の多連装ロケットランチャー・ネーベルベルファー。

――ホルニッセ
フェイト・テスタロッサの有するカートリッジ。
名前の由来：ホルニッセ／ドイツ軍の、強力な主砲と反比例する脆弱な装甲である対戦車自走砲ホルニッセ。

――ヴァッフェントレーガー
八神はやての有するプログラム。
名前の由来：ヴァッフェントレーガー／ドイツ軍の対戦車自走砲ヴァッフェントレーガー。

――シュメッターリンク
アリサ・バニングスの有するカートリッジ。
名前の由来：シュメッターリンク／ナチス・ドイツ軍の空対地の誘導弾――グライダー爆弾ヘンシェルＨｓ２９３の発展型地対空ミサイル・ヘンシェルＨｓ１１７シュメッターリンク。

――ドーラ
未来からの来訪者・高町ヴィヴィオの有するプログラム。
名前の由来：ドーラ／ナチス・ドイツ軍の超巨大列車砲２号機ドーラに搭載された、史上最大の火砲ドーラ砲。

――グスタフ
未来からの来訪者・ハイディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルトの有するプログラム。
名前の由来：グスタフ／ナチス・ドイツ軍の超巨大列車砲１号機グスタフに搭載された、史上最大の火砲グスタフ砲。

シャル
「ここからが恒例の裏話です！　作者がようやく思い出したから追加するよ～♪」

――八神家の日常編

シャル
「日常編って色々あるけど、どんな風なの？」

ルシル
「正確には、日常・裏、だな。投降したのはＬＡＮＣＥＲ編だが、他の騎士たちの専用話もあったんだ。セイバー・シグナムＶＳ騎士ゼスト、バスター・ヴィータＶＳクイント・ナカジマ、ヒーラー・シャマルＶＳメガーヌ・アルピーノ、ガーダー・ザフィーラＶＳ特別技能捜査課ベッキー・ペイロードなどな」

シャル
「シグナムとヴィータとシャマルはＳＴＲＩＫＥＲＳ組と戦って、ザフィーラは後の同僚になるテレサちゃんと戦う予定だったんだね～。で？」

ルシル
「で？」

シャル
「ほら、勝敗。戦ったんでしょ？」

ルシル
「相手は管理局員だからな。打ち倒す事はせずに撤退したんだが、撤退するまでの戦況から・・・ザフィーラとベッキーは、ザフィーラの惜敗。シグナム達は引き分けだ」

シャル
「ザフィーラ負けたの！？」

ルシル
「ベッキーはほぼ魔術師だからな。俺も魔術師化しないとおそらく勝てない」

シャル
「すごいよねぇ～。現代でもそういう子が居るってさ」

――犯罪者たちの秘密な宴編

シャル
「魔導犯罪者たちのレースだよね。ていうか、編、ってなにさ？」

ルシル
「実は、このレースに６話くらい使おうとしていたのだ！」

シャル
「馬鹿じゃない！！」

ルシル
「色んなチームと本格的なレースの描写を描こうと思ったらしんだが・・・諦めたらしい」

シャル
「なんで？」

ルシル
「面倒くさかったからだ！」

シャル
「救いようがなさ過ぎる！！」

――なお深き闇に染まれ、聖夜の天（ソラ）

シャル

「闇の書編の決戦だね。これの裏話ってなに？」

ルシル
「今作も、前作や原作の通りに守護騎士が蒐集されたが、もう1つのストーリーとしては、騎士たちが蒐集されずになのは達と始めから決戦に臨む、というな」

はやて
「まぁ無理・・・じゃないっか。はやての絶望のトリガーは、ルシルのダメージと蒐集だったし。あ、でも騎士たちって操られたでしょ？　そんで蒐集されちゃったし」

ルシル
「それも無し。そこで登場するのが俺のエインヘリヤル・七元徳の使徒アポストルスだ。実際は俺単独でやり合ったが、没案でははやて・リインフォースを除く全員で迎撃した」

シャル
「アポストルスって神秘の塊じゃん。地球の界律によって3分の1ほどまでに能力が落とされてると言ってもさ」

ルシル
「そこはあれだ。君が前作で使った策、神秘魔力搭載カートリッジだよ。俺も作っているからな。そのカートリッジをみんなに渡して決戦」

シャル

「ん？　その間、はやて達はどうすんの？」

ルシル
「いやだから、アウグスタに乗っ取られたはやて達がアポストルスを率いての大決戦だよ」

シャル
「リインフォースの姿をしたアウグスタが、七大天使を率いている光景・・・、聖画か何か？」

ルシル
「そう見えなくもない、か・・・？」

シャル
「それじゃあさ、はやてとリインフォースの救出ってどうなんの？」

ルシル
「俺が闇の書に潜るんだ。原作や前作だとフェイトが取り込まれたろ？　それを俺からアプローチするんだ。俺の精神を直接、はやての精神世界に送り込むっていうな。で、アウグスタと繋がるために・・その・・・なんだ・・・、キスをするという・・・」

シャル
「はぁぁぁぁぁ！！？　それってつまりリインフォース――ううん、はやてにキスをするって――この浮気者！　馬鹿！」

ルシル

「何故君が怒るし！？」

シャル
「知らない！」

ルシル
「え～～。まぁ続けるぞ。外の世界ではみんながナハトヴァールとアポストルスを相手にし、精神世界では俺とアウグスタが一騎打ち。その中ではやてを目覚めさせ、リインフォースと俺ＶＳアウグスタとなる。
それで、アウグスタを散々痛めつけた後、外で頑張ってくれていたみんなのおかげもあってナハトヴァール・アウグスタの切り離しに成功。改めて外での決戦となる。これは実際に投稿した話だな」

シャル
「ふ、ふ～ん、そうなんだー」

ルシル
「何もそこまで不機嫌にならなくてもいいんじゃないか・・・？」

――砕け得ぬ闇の使徒編

シャル
「コホン。これが最後ね。砕け得ぬ闇編の序盤、マテリアル達が初登場した回。これの裏話って？」

ルシル

「（頭を撫でただけで機嫌が直るとか・・・）あ、ああ、俺の変装のステアが居たろ？　あれも正式にマテリアルの採用しようか、という没案だ」

シャル
「なんでそれを没にしたの？」

ルシル
「シュテル、フラムが居るだろ」

シャル
「あ、察した。炎熱系3基も要らないよね」

ルシル
「そう言う事だ。水流系のステアとする案もあったが・・・」

シャル
「そこはアイルの氷雪系と若干被るよね」

ルシル
「他の属性を使うと、同じように複数の属性を扱える俺へと辿り着かれるかもしれないと思って、残念ながらステアのマテリアル化は断念した」

シャル
「ちょっと見たかったよね。ほら、ディアーチェってステアに斃されたでしょ？　再登場の時とかにどんなやり取りになるのか、って

♪」

ルシル
「ディアーチェのブチギレてる様しか想像できないな」

シャル
「確かに♪　それでそれで？　マテリアルとしての名前を付けるとしたら、どういう名前を付けた？」

ルシル
「Ｄ、Ｓ、Ｌ、Ｆ、Ｏが頭文字にならないようにしないといけないから・・・。う～ん・・・、水流系を基本属性にすると考えて・・・、水のアクア、海のマール・・・、マテリアルＡ――アクア、かな。司るのは、王・理・力・義・律、と来て・・・、王の反対である臣を付けようか。臣のマテリアル。もしくは支のマテリアル。名前は・・・」

シャル
「名前は・・・・」ドキドキ♪

ルシル
「・・・臣のマテリアルＡ、水澪の死告者アクア・ザ・グリムリーパー！」

シャル
「アクアはラテン語で水、グリムリーパーは死神ね」

ルシル
「ま、大体はこんなところだろう。砕け得ぬ闇編では没案は無かったからな」

シャル
「それじゃエピソードⅡのウラばなはこれまで♪　次回からは魔導紹介です♪」

番外コーナー：シャルシル先生の魔導紹介教室～～♪その1っ♪

シャル
「ハーイ、前回に引き続きメインＭＣを務めるシャルでーす　」

ルシル
「同じくルシリオンだ」

シャル
「これから紹介するのは、エピソードⅡにて登場した魔法！　今回は以前までと違ってゲストが多数登場する予定だよ」

ルシル
「それでは早速始めよう。下手に話しこんで文字数を増やすのもなんだしな」

――変化せしめし乱音／ディゾルディネ・カンビャメント

ルシル
「ん？　これは前作に登場させたやつじゃないか？」

シャル
「まあね。でも、前作じゃ紹介しなかったでしょ？　この際だから紹介しようってわけ。ささ、どうぞ！」

ルシル

「ディゾルディネはイタリア語で混乱、カンビャメントは変化という意味だ。この術式は、対象を強制的に別の衣服へと変身できるんだ。まぁ俺の精神世界に展開されている創生結界内に在る衣服限定となるが」

シャル
「エインヘリヤルの衣装にも変身でしょ？　コスプレし放題だよね♪」

ルシル
「前作では、君が暴走させてそうなったよな」

シャルシル
「懐かしい～」

――秘伝を暴き伝える者達／ステガノグラフィア

ルシル
「大戦末期、ヨツンヘイム連合が戦場に新投入してきた兵器、Ａｕｔｏｍａｔｉｃ　ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｍａｇｉｃ　ｕｓｅ　Ｔａｃｔｉｃｓ　ａｔｔａｃｋ　Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｔ　ｂａｔｔｌｅ　Ｓｙｓｔｅｍ――Ａ・Ｍ・Ｔ・Ｉ・Ｓ・（アムティス）のシステムをクラック、掌握の為に創った電子戦用術式だ。アメナディエル、ソレウイエル、マカリエル、メナディエル、ライシエルの５基１組の電子妖精だ」

シャル

「機械、なんて当時にとって未知のテクノロジー・オーパーツだったよね？」

ルシル
「だな。鋼などの金属は存在していたが、それを使ってロボットを造るなんて発想は無かったな」

シャル
「その代わり、現代にとって当時の魔道技術の方がオーパーツ扱いだろうけどね」

ルシル
「だな～。ちなみに名の由来だが、中世紀末・ルネサンス期、ドイツの修道院長・隠避学者ヨハンネス・トリミテウス著の、魔術や、精霊を使っての遠方と通信する補法を論じたものが記された元禁書目録だった「秘密書法ステガノグラフィア」。
アメナディエル、ソレウイエル、マカリエル、メナディエル、ライシエルは、ステガノグラフィアに記されている魔神の名で、すべて秘密を安全に伝えてくれるという」

――ゲフェングニス・デス・フェリエラー

ルシル
「古代ベルカ式の結界魔法ゲフェングニス・デア・マギーのアレンジバージョンだな。ゲフェングニスは監獄、フェリエラーは敗者という意味だな」

シャル
「えっと、効果は・・・閉じ込めた対象の気力体力を気絶するまで吸収、その2つを魔力に変換する事によって、ルシルの消費した魔力を回復させる、と。なにこれ。魔法じゃなくて魔術じゃん」

ルシル
「完結編の俺にもってこいの術式だろ？　吸収するのは気力体力であるため、相手が魔導師じゃなくても意味がある。まぁ魔導師の場合はさらに魔力も吸収してやるがな」

シャル
「うわぁ、鬼畜」

――メタスターゼン・トーア

ルシル
「シャマルの転移魔法・旅の鏡を俺なりに再現した魔法だな。魔導犯罪者からリンカーコアを引き抜くための術式だ。メタスターゼンは、英語でいうメタスタシス、意味は転移という英単語のドイツ語、トーアは扉という意味だな」

――戦滅神の破槍／コード・ヴィズル

シャル
「ルシルの持つ砲撃系術式における雷撃系最強が、このヴィズル・・・だったっけ？」

ルシル
「ああ。速力・貫通力・射程は上級砲撃中最高で、魔術としてのヴィズルは、直撃の場合は焼けて塵灰となり、掠っただけでも体内の水分が沸騰して死ぬ。魔法としてのヴィズルは、物理破壊設定なら魔術版と同じで、非殺傷設定なら感電するくらいで済む。名の由来は、北欧神話の最高神オーディンの呼称の1つ、滅ぼす者ヴィズル」

シャル
「魔術版ヴィズルだけは受けたくないよね、これ聞くと」

ルシル
「そう言う君は大戦時、真っ向からキルシュブリューテで斬り裂いてくれたよな。ヴィズルに限らず、俺の魔術の大半を」

シャル
「あれ、本気で私を殺しにかかって来てたよね・・・？」

ルシル
「お互い様だろ？」

――ドゥンケルハイト・フォーアハング

ルシル
「ヴィータやシャマルが使う、閃光・爆音による視聴覚阻害、ジャミング効果を持つ補助魔法のアレンジ版がこれだな。閃光ではなく暗闇、爆音ではなく無音で一帯を覆い隠すんだ」

シャル
「なるほど。だから闇――ドゥンケルハイト、カーテン――フォーアハング、暗幕なんていう意味を持った術式なんだね。確かに何も見えず、何も聞こえない環境って怖いもんね」

――あなたに沈黙の贈り物を／ゲシューク・シュヴァイゲン

シャル
「おお！　私の魔術じゃん、コレ！　すぅごい懐かしい！」

ルシル
「だろ？　一定空間内、もしくは対象から一切の音声伝達を封じる魔術だ。会話・念話が行えなくなる。ゲシュークはドイツ語でプレゼント、シュヴァイゲンは沈黙、という意味だな」

シャル
「界律の守護神時代に創った魔術で、にじファン時代に連載していた《魔法先生ネギま！》で初お披露目。あの世界の魔法使いって、魔法を使うのに始動キーや詠唱を必要とするから、声を封じちゃえばその脅威が半分以下になるんだよね」

ルシル
「あの頃の君は本当に無双していたな」

――ヒュプノスの誘い

シャル
「コレはあれだね、対象を強制的に眠らせるやつ」

ルシル
「ああ。魔力で脳波に干渉する事で、相手を眠らせるんだ。名の由来は、ギリシア神話の眠りの神ヒュプノスだな」

――王の御座す銀に輝きし聖宮／ヴァーラスキャールヴ

ルシル
「俺の姉、ゼフィランサス・セインテスト・アースガルドの魔術だな。ゼフィ姉様は防御に優れていた魔術師だから、こんな形に凝った魔術を幾つも持っているんだ」

シャル
「そういうルシルもデザインに凝った防性術式――女神の護盾コード・リンを持ってるよね」

ルシル
「セインテスト家はそういう家系なのかもしれないな。で、話を戻すが、ヴァーラスキャールヴは防性術式だ。結界に間違われるかもしれないが。外からの侵入を拒み、万が一に中に入り込んできた場合は閉じ込める事が出来る」

シャル
「侵入を許さないための術式なのに閉じ込めちゃったら意味なくない？」

ルシル
「いいや。侵入してから術者の居るところまでに来るまでの間、術者や護りたかった人や物が外に移動すれば・・・ほら、戦わずしてやり過ごす事が出来る」

シャル
「外にさらに敵が居たら・・・？」

ルシル
「・・・・。名の由来だが、北欧神話に登場するアース神族の最高神オーディンの居城の事だ」

シャル
（スルーした！？）

――アーティラリーズリボルバー

ルシル
「テイルズオブエクシリア2の秘奥義の1つ、ティーロ・スフォルツァンドを基にして創った砲撃術式だな。この術式に参加する者を、回転式拳銃リボルバーのシリンダーに開いている穴と同じ位置に配置させて準備完了。砲撃発射のための砲門であるアースガルド魔法陣が一番上から時計回りに移動。順番に参加者がその魔法陣に攻撃を与える事で、神秘付加された強大な砲撃へと変換できる」

シャル

「人数が多ければ多いほど、敵に多大な被害を与えられるって事だよね」

ルシル
「ああ。しかしデメリットもある。途中参加も途中離脱も出来ず、外からの攻撃に対処できないという・・・」

シャル
「乱戦時は、側にガードを付けておかないとダメなわけね」

――光牙双月刃

シャル
「よしっ！　私の生まれ変わり、イリスの魔法紹介に突入！　前回の魔導紹介には出さなかったからね♪」

ルシル
「ほとんど君の魔術と変わらないじゃないか。変化と言えば、ドイツ語のルビが無くなったくらいだ」

シャル
「チッチッチ。どこを読んでんの、ルシル？　完結編で新しく加えられた魔法があるのだよ♪　ちなみ↑もその1つ！　私の断刀キルシュブリューテを模したデバイス・キルシュブリューテと鞘に魔力付加させての斬撃・打撃の二連撃！」

ルシル

「そう言えば有りそうだったけど無かったな、双月刃。大戦編では鞘なんてほぼ使わず、絶対切断ばかり使っていたし、前作でもトロイメライの双刀形態もあったし」

シャル
「そゆこと　　似たような攻撃はこれまでもあったけど、技名が付いたのは今回が初めてなのだ♪」

――光牙針縫刃／こうがしんぶじん

シャル
「これもそうだね。前作での闇の書編で、私が相手にしたエインヘリヤル・ワラキアの夜戦で使った魔術を、今作で名前ありの魔法に採用したんだよ」

ルシル
「地面にキルシュブリューテを突き刺し、その周囲から魔力刃を複数突き出させて攻撃するというアレだな」

シャル
「そう！　これまでも似たような攻撃を使っていたけどね。で、今作でのこの魔法は攻撃じゃなくて拘束、捕縛魔法なの。ザフィーラの鋼の軛と同じね」

――剣神モード

シャル

「わぁーっはっはっは♪　私の二つ名を使ってくれて嬉しい～♪」

ルシル
「剣神モード。固有スキル、絶対切断アプゾルーテ・フェヒターを発動した状態のイリスのこと、か。前話の人物紹介で色々と説明されたあれだな」

シャル
「断刀キルシュブリューテを取り込んでいた私の魂。それが巡り巡ってイリスの魂となり、キルシュブリューテの能力・絶対切断が固有スキルとして受け継がれたわけ。これってかなり反則じゃない？　私の時なんてわざわざトンデモな魔力量を消費して発動させていたんだから」

ルシル
「とは言っても好き勝手に発動できるわけじゃないらしいぞ。発動には管理局の許可が必要で、発動したら発動したで振り回されている感があるし。上手く制御できないって言っているじゃないか」

シャル
「そこはほら、これからの経験次第だよ」

――光牙裂境刃／ツェアライセン

ルシル
「確か↑は、にじファン時代に連載していた「魔法先生ネギま！」が初出だったよな・・・？」

シャル
「そうだよ。対障壁・結界切断効果を持った魔力を武器に付加して斬る、ってやつ。意味は引き裂く、ね。私のマスター・ネギの抹殺の為に、あなたが七美徳の救恤リベラリタスをウェールズに送り込んで来たあの時、あの薔薇天使が張った聖域を破るために使ったのが初めて」

ルシル
「あの頃の俺は、俺を召喚したマスターの命令で仕方なくネギを狙ったわけで・・・」

シャル
「言い訳なんて聞きたくなーい。私、1回殺されて召喚解かれたんだよ？　まぁすぐに再召喚されたけどさ。修学旅行ん時、七美徳の謙譲を斃した瞬間、麻帆良を監視するエインヘリヤル組の1発の砲弾で胸にデカい風穴開けられてさ！　まさか守護神殺しの砲弾なんてね！
ネギや生徒たちがわんわん泣いて大変だったんだから。しかも次！　殺害2回目！　魔法世界で殺されてそのまんま、さようなら、って予定だって言うし。まぁそれもネギや生徒たちのおかげで再々召喚、最後の最後まで居られる予定みたいだったようだし」

ルシル
「その節はどうも申し訳ありませんでした！」

シャル

「何故に逆ギレ！？」

――拘束の連鎖

シャル
「イリスの鎖型バインド魔法ね。ベルカ騎士はあんまり補助魔法とか持ち合わせていないようだけど、イリスは違うみたい」

ルシル
「元は君だからな。ベルカ式だけに留まらない何かがあったんだろう」

――雷牙飛月刃

シャル
「はい、↑もこの完結編で新たに追加されたやつです！」

ルシル
「フェイトのハーケンセイバーと同じタイプの魔法らしいな。三日月型の雷撃刃を飛ばすっていう」

シャル
「フェイトから教わったミッド式魔法を、イリスがベルカ式魔法に変換したらしいよ」

ルシル
「そう言うところの器用さは、君譲りかも知れないな」

シャル
「えっへん！」

――シュヴェーベン・マギークライス

ルシル
「これもまた完結編で追加された新魔法だな。とは言っても、ミッド式で言う魔法陣を足場とする魔法――フローターフィールドの事だが」

シャル
「悪い？」

ルシル
「いや、悪いとは言っていないぞ、うん。シュヴェーベンは浮遊する、マギークライスは魔法円という意味だな」

シャル
「まあね。魔法陣を連続展開して空中回廊を創ったりも出来るし、簡易な戦場を用意する事も出来る。ま、魔力消費は冗談じゃ済まされない程に多いけど」

――剣戟の極致に至りし者モード

ルシル
「出たな、無駄に長い名前」

シャル
「いいじゃんかぁ。えっとね、これは前世の私がイリスの体の支配権を借りて、さらに魔術師化する際の形態ね。ルシルとのキスで行える最終形態　いやーん　」

ルシル
「・・・・さ、次へ行こうか」

シャル
「無視されるのが一番辛いんだよぉぉぉーーーーーー!!?」

――大炎牙焼覇煉謳刃／だいえんが・しょうはれんおうじん／ケーニギン・ニーダーブレンネン

ルシル
「これも「魔法先生ネギま！」で初登場した魔術だな」

シャル
「イエス！　七美徳の天使の内、救恤と忍耐を打ち倒した魔術だよ。ケーニギンは王妃。ニーダーブレンネンは焼き払うっていう意味。刀身から8本の火炎砲撃を発射。次いで十字に火炎斬撃を放って、さらに×十字に火炎斬撃を放つ。んで、最後に刺突行為と同時に火炎槍を発射してトドメ、って感じ」

ルシル
「徹底的に焼き尽くすからなぁ、この魔術。魔術師と守護神の力で

以って七美徳の天使を全部潰されたからなぁ」

シャル
「その為に創ったんだし。対魔術式じゃなくて、対神属術式ね」

――シュヴェーラーパンツァー

ルシル
「重装甲って言う意味のシールド魔法なんだな」

シャル
「そうだよ。パンツァーシルト3枚を三角形状に組み合わせた対魔力完全防御陣ね。なのはのスターライトブレイカーも防ぎきるけど、今回はちょっと相手が悪かったというかなんというか・・・」

ルシル
「まぁ俺だしな。しかも物理攻撃を受けたんだ。破壊されても仕方ないよな」

シャル
「なーんか気に入らないなぁ～」

――紫電清霜

シャル
「はーい、ここで早速ひとり目のゲスト登場♪　この技の使い手、シグナムで～す！」

ルシル
「俺は少し離れているよ」そそくさ

シグナム
「ここは一体・・・？・・・お前はフライハイトなのか？　にしては私の外見年齢より年上っぽいが・・・」

シャル
「へいへい、お嬢さん。そこにツッコミを入れちゃダメだぜ♪」

シグナム
「そ、そうか・・・。（見た目と反し中身は子供のようだな）」

シャル
「さて。エピソードⅡで新たに追加されたシグナムの技だね」

シグナム
「うむ。レヴァンティンを鞘に収めた状態でカートリッジをロードし、鞘内に魔力を溜める。その魔力を爆発させる事によって、高速でレヴァンティンを引き抜く事が出来るのだ」

シャル
「ほうほう。それでその速度を加力することで、強力な斬撃が打てると」

シグナム

「そういう事だな。元々の斬撃の威力に、上乗せされる速度。どんな合金でも斬り捨てて見せよう」

――ヒルンダプス・カウダクトゥス

シャル
「これって高速移動魔法だよね・・・？　要る？」

シグナム
「ああ、要るぞ。短距離限定で直線的な移動しか出来ないが、高速戦時では相手との距離を詰めるには必要な魔法だ。私は近接型の騎士だからな。距離を開けられてしまうとどうしても手数が限られ、まともに戦えなくなる可能性が大きい」

シャル
「あー、そっかぁ。で、この魔法の名前、ルシルが付けたって事らしいけど」

シグナム
「随分と長い名で、私はヒルンダプスと呼ぶ事にしているのだが・・・。これは一体何語なのだろうな。鳥の名前らしいのだが・・・」

シャル
「ヒルンダプス・カウダクトゥスは、ハリオアマツバメっていう鳥の学名で、ラテン語。ヒルンダプスは足の無いツバメ、カウダクトゥスは先の尖った尾っていう意味だね」

シグナム
「博識なのだな。しかし何故その鳥の名を付けたのだ？　ルシリオンは」

シャル
「あぁ、それはね。ハリオアマツバメって、水平飛行で言えば最速の鳥類なんだよ。大体１７０ｋｍだね。ちなみに降下時で最速なのは隼ね。３００ｋｍ以上だって」

――空牙

シャル
「衝撃波を放つシュトゥルムヴィンデとは違って、魔力斬撃を放つ魔法がコレ、空牙」

シグナム
「数少ない中遠距離魔法だな。派生技には突進からの空牙、穿空牙がある」

――破城の戦杭／はじょうのせんくい

シャル
「はーい、次のゲストぉ～～、いらっしゃ～い♪」

ザフィーラ
「我か」

シャル
「ザフィーラとこうして2人きりで話す事ってなかったよね・・・？」

ザフィーラ
「む？・・・ああ、そうだな。（我の知るフライハイトは、我が主と同年代のはずだが・・・。この娘からも我の知るフライハイトの匂いがする・・・）」

シャル
「そんじゃ早速紹介してもらおうっか」

ザフィーラ
「あ、ああ。この魔導は、魔力によって創られた杭を上空から落下させ、結界を破壊する、というものだ」

シャル
「これってかなり強力だよね・・・？」

ザフィーラ
「管理局・武装隊員たちによる強装結界をも破壊できる。シグナムのファルケン、ヴィータのギガントハンマーと同等と思ってくれても構わん」

――狼王の鋼鎧／ろうおうのこうがい／狼王の鋼鎧・剛

シャル
「はい、次いってみよ～　この魔法、古代ベルカ式のパンツァー

ガイストと似たような奴だけど、その違いは？」

ザフィーラ
「パンツァーガイストと我の鋼鎧の違いは、常時展開しているか否かだ。パンツァーガイストの効果時間は短いが、鋼鎧は我が解除するまで持続する事が出来る。加え、防御力だけではなく攻撃力を上昇する」

シャル
「他に、剛、って付くバージョンもあるようだけど？」

ザフィーラ
「これは狼王の鋼鎧の魔力出力を上げた状態だ。身に纏う魔力をさらに増加させる事で、攻撃力・防御力を飛躍的に上昇させる事が可能だ。しかしその反面、魔力消費が大きいため、通常よりか長続きは出来ん」

シャル
「短期決戦用の攻防強化魔法ってわけね」

――鋼の軛・顎／はがねのくさび・あぎと

シャル
「鋼の軛のバリエーションね」

ザフィーラ
「うむ。対人ではなく対物、しかも巨大な物であればあるほど効果

がある魔導だ。足元と頭上から拘束条を複数突き出させる事で、完全に身動きを封じさせる事が出来る」

シャル
「前作だと地面や壁からしか発動できなかったのに、今作だと何も無い宙からでも鋼の軛を発動できるようになったんだね。劇場版二作目を観終わった作者も、空中からの発動も出来る、っていう設定を取り込んだんだね」

ザフィーラ
「劇場二作目？　設定？　一体何の・・・？」

シャル
「あ、あー、こっちの話！　気にしないで！」

――ブリューナク

シャル
「はーい、次のゲストは、ＡＮＳＵＲシリーズの完結編・堕天使戦争終結編のメインヒロイン、八神はやてー！　アーンド・・・リインフォース！！」

はやて
「おわっ？　なんやここ！？　シャルちゃん！？　にしては大きい！
　大人シャルちゃんや！」

リインフォース

「主はやて！？　ここは一体・・・！？」

シャル
「はいはーい、落ち着いてくださーい！　ここはヘルシャー・シュロスの玉座の間です♪　どうぞどうぞ、椅子に座ってね～♪」

はやて
「えっと、わたしらに何をさせるつもりなんでしょう・・・？」

シャル
「魔法の紹介をしてもらうんだよ。で、今はブリューナクって魔法を、使い手のはやて達に紹介してもらおうって段階なわけ。ちなみに私の事は気にしないでね～。あと敬語も必要なしね」

リインフォース
「な、なるほど・・・」

はやて
「はぁ。ま、まぁ判った。じゃあ、ブリューナクやけど、射撃魔法やんな」

リインフォース
「はい。ダガー状の誘導射撃魔法です。移動しながら連射が出来ます」

シャル
「移動しながらの連射って言うのが厄介だよね。弾幕張り放題だし」

はやて
「そうやなぁ。あ、でもブリューナク以上の魔力や威力を持った砲撃や広域攻撃やと打ち消されるな」

――バルムンク

シャル
「これもまた射撃魔法よね」

はやて
「そうやよ。扇状に放ったり、放射状に放ったりと出来るんや」

リインフォース
「複数の対象にロックオンが出来ればもう少し先述の幅が広がるのだが・・・」

――クラウ・ソラス

シャル
「これは砲撃ね」

リインフォース
「ああ。単純な直射型だが、バリエーションの1つとして着弾時に球体上の魔力流を発生させて追加ダメージを当たる事が可能だ」

はやて

「そやけど発同時に魔力チャージが必要なんよ。まぁ移動中にもチャージが出来るからそんな問題はあらへんけど」

――マニューバA・C・S

はやて
「なのはちゃん直伝の突撃魔法やな！」

シャル
「いいなぁ！　私も以前、ディバインシューターを教わって、矢尻型の射撃魔法ロイヒテン・プファイルを創ったの」

リインフォース
「私としては反対なのだが」

シャやて
「？？？」

リインフォース
「主はやては、近接戦が苦手ですから、わざわざ相手と距離を詰めるような魔法は・・・」

シャル
「あー、確かにね。なのはは近接戦もある程度修得しているから良いけど、はやてはなんか鈍臭いような・・・」

はやて

「あぅ～、反論できひん・・・」

リインフォース
「主はやて！　お気になさらず！　適材適所、というものがありますから！」

シャル
「それって鈍臭い事を認めてるよね」

リインフォース
「はっ！」

――ポラールリヒト・ノーヴァ

シャル
「ポラールリヒト・ノーヴァ・・・、新星の極光って意味かぁ」

はやて
「わたしとリインフォース、ユニゾン状態で扱える魔法で、威力はラグナロクとおんなじくらいかなぁ」

リインフォース
「そうですね。まず夜天空間を展開、対象だけを閉じ込める。空間内では夜天の雷に満ちていて、際限なく閉じ込めた対象に攻撃を続ける。そして最後に空間ごと対象を爆破し、ダメージを当てる、というものだ」

シャル
「ルシルの闇黒系上級術式コード・ノートみたいだね。アレも空間に閉じ込めて、空間内を連続爆破させた後、空間ごと爆発させるし」

はやて
「ルシル君に似た魔法かぁ。なんや嬉しいな♪」

――バーニングスラッシュ／Ｂｕｒｎｉｎｇ　Ｓｌａｓｈ

シャル
「はい、次のゲストは、アリサ・バニングス！」

アリサ
「な、何、急に！？　どっかの城の中！？　つうかシャル！？　なんか色々と大きくなってるじゃん！」

シャル
「かくかくしかじか」

アリサ
「魔法の紹介、ねぇ？　まぁいいわ。あんたが大人の姿になっている事もツッコまないであげるわ。えーっと、バーニングスラッシュね。これはあたしのデバイス・フレイムアイズの刀身に・・・って、その前に、あたしのデバイスを紹介させてよ」

シャル
「おっと、そうだね。じゃあどうぞ♪」

アリサ
「コホン。あたしのデバイス、炎の聖剣フレイムアイズ・イグニカーンスっていうのよ。イグニカーンスの意味は、えっと・・・」

シャル
「ラテン語で、炎色、って意味よ」

アリサ
「そ、そういう事よ。えっと、通常のファルシオンフォーム、銃剣形態のバヨネットフォーム、大剣形態のクレイモアフォームがあるわけ。じゃあ本題に戻りましょっか。バーニングスラッシュは、炎を纏わせての斬撃魔法よ」

シャル
「私の炎牙月閃刃、シグナムの紫電一閃、ルシルのコード・フロガゼルエルみたいなやつね」

アリサ
「まぁあんたらのに比べたら火力は弱いけどね」

――タイラントフレア／Ｔｙｒａｎｔ　Ｆｌａｒｅ

アリサ
「バーニングスラッシュを強化したのが、この魔法よ。カートリッジを３発連続ロードしないといけないのがネックよね。あたしの魔力ランクがもう少し上なら、カートリッジの消費を抑えられるんだ

けど」

シャル
「それはまぁ、これからの成長次第だよ。まだ９歳なんだし、これからこれから♪」

――フレアブレード／Ｆｌａｒｅ　Ｂｌａｄｅ

アリサ
「これは炎じゃなくて、フレイムアイズの刀身を熱する事で切断力を上げるって魔法ね」

シャル
「見覚えのある魔法ね。アンスールのセシリスが使ってた魔術の。熱波震断刃ね。あれも刀身を熱して切断力を上げてたっけ。切断した瞬間に生物は燃滅して、鋼鉄は溶け、木々は灰塵へ」

アリサ
「流石に鋼鉄までは斬れないわね、あたしは。でもいつか、鋼鉄くらい斬ってやりたいわね」

――フレイムウィップ／Ｆｌａｍｅ　Ｗｈｉｐ

アリサ
「一番最初から使えた魔法なのにこんな半ばで紹介するっておかしくない？」

シャル
「そう？　使える順番なんて関係ないっしょ」

アリサ
「・・・・、まぁいいわ。炎を噴き上がらせたフレイムアイズを振るって、広範囲に炎の鞭――斬撃をかますって魔法よ。あたしがジュエルシードの願いを叶える力で魔導師化した時から使える魔法ね」

シャル
「鞭なのに斬撃とかこれ如何に」

――スピニングコロナ／Ｓｐｉｎｉｎｇ　Ｃｏｒｏｎａ

アリサ
「フレイムアイズの刀身に炎を噴き上がらせて、それを推進剤として超高速前転しながら突撃する技ね。さながら炎の車輪、っていうのがシグナム談」

シャル
「良く目が回らないよね。あんだけ回って、しかも高速だって言うのに」

アリサ
「んー、三半規管は結構強いと思うのよね、あたし」

シャル
「その割に、空は飛べないよね」

アリサ
「飛行に三半規管は関係ないでしょ」

――ブレイズロード／Ｂｌａｚｅ　Ｒｏａｄ

シャル
「これってかなり面白い魔法だよね♪」

アリサ
「まぁ両脚から炎を噴き上がらせての移動魔法なんて、あたしも他にないと思ってるわ」

シャル
「炎の噴射力でのダッシュ、超高度ジャンプ、覚え立ての飛行魔法で浮遊と姿勢制御、足裏に展開した魔法陣２枚からの炎噴射で飛行。面白いなぁ～」

アリサ
「けど最後のやつ、扱いがムズいのよね～。両足を揃えないと真っ直ぐ飛ばないし。ちょっと別の方を向くと錐もみしちゃうし。下手すりゃ空中でゲッダンよ」

シャル
「ホント面白い♪」

――イジェクティブ・ファイア／Ｅｊｅｃｔｉｖｅ　Ｆｉｒｅ

アリサ
「フレイムアイズの銃剣形態バヨネットフォーム時で発動できる、中距離火炎砲撃がコレ、イジェクティブ・ファイアよ。フレイムアイズの刃――ファルシオンの峰の方に細長い銃身が作られるんだけど、その銃口から砲撃を発射するのよ♪」

シャル
「嬉しそうね、アリサ。ま、気持ちは解るよ。前エピソードじゃ無かったもんね。フレイムアイズを改良され、新しい魔法も手に入れる事が出来た。喜ぶな、って方が難しいよね」

アリサ
「ええ、その通り！　これから紹介するのも、エピソードⅡで得た魔法の数々よ！」

――フリンジングボム／Ｆｌｉｎｇｉｎｇ　Ｂｏｍｂ

シャル
「えっと、直訳で、爆弾を投げる、か。確かにそうだね」

アリサ
「でしょ？　銃口からバスケットボールだの火炎弾を発射して、発射前に設定した任意の地点で大爆発をさせるものよ。直撃させればダメージを期待できるし、付近で爆発させて爆風でよろつかせたり、爆炎と爆煙で視界封じな副次効果もあるわ」

――フレイムバレット／Ｆｌａｍｅ　Ｂｕｌｌｅｔ

シャル
「ユーノの姉的存在って言っておきながらユーノに恋する女の子、セレネとエオスの２人から受け継いだ射撃魔法の１つ、火炎弾を放つ魔法がコレね」

アリサ
「炎熱変換を持ってんのは妹のエオスよ。姉のセレネよりはまともだけど、温泉となると暴走するわ」

シャル
「あははは！」

――フレイムプロテクション／Ｆｌａｍｅ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ

アリサ
「ま、これは名前の通り、対炎熱用のバリア魔法ね。対シグナム戦を想定して創ったやつよ。と言ってもシグナムの紫電一閃の前に負けちゃったけど」

シャル
「向こうは歴戦の騎士だしね。付け焼刃の魔法は通用しないってことかな・・・？」

――フォックスバット・ラン／Ｆｏｘｂａｔ　Ｒｕｎ

シャル
「アリサも持ってたんだ、短距離高速移動の魔法。意味は、えっと、フォックスバットは、戦闘機ＭｉＧ－２５のＮＡＴＯコードネームからね。ランはそのまま走るって意味か」

アリサ
「フェイトのブリッツアクション・ソニックムーブを基にしたわ。発動直後はいいんだけど、効果後でのブレーキには苦労したわ」

――スリーズ・サンズレガリア／Ｔｈｒｅｅｓ　Ｓｕｎ'ｓ　Ｒｅｇａｌｉａ

シャル
「これはアリサ自身とフレイムアイズのブーストだっけ？」

アリサ
「そうよ。午前９時から正午の３時間、午後３時から午後６時の３時間、計６時間の間、あたしの身体能力や魔力量の限界値を引き上げるの。もちろん、デメリットはあるわよ。使用後は過労で動けなくなっちゃうの。このモード起動時の事をあたしは、太陽の騎士、って呼んでるわ」

――ヴォルカニックスカッシャー／Ｖｏｌｃａｎｉｃ　Ｓｑｕａｓｈｅｒ／火山の鎮圧者

シャル
「フェイトのジェットザンバーと同系の魔法ね」

アリサ
「フレイムアイズのフルドライブ、大剣形態クレイモアフォーム状態で使える大斬撃魔法よ。フェイトのバルディッシュ・ザンバーと同じように半実体化してる魔力刃を伸長させて切断するっていうね。ま、こっちは半実体化を解いて炎そのものだけど」

――デストラクト・ディターレント／Ｄｅｓｔｒｕｃｔ　Ｄｅｔｅｒｒｅｎｔ／抑制破壊

シャル
「これはアリサの突撃技ね」

アリサ
「そうよ。まずブレイズロードで、両脚じゃなくて全身を炎で覆うの。で、フレイムアイズ・クレイモアの柄を持った両手を脇に持って来て突進体勢。そして炎の推進力を以って相手に突撃するわけ。クレイモアの剣先を先端とした炎の砲弾って感じね。シールド・バリア破壊効果を持ってるから、並の防御力じゃ防ぎきれないわよ」

シャル
「バーストアップっていうトリガーで、クレイモアを爆発も出来るんでしょ・・・？」

アリサ
「ええ。クレイモアを構築してる魔力を解いて純粋な炎に戻すの。まぁ至近距離での爆発だから、あたしにも僅かなダメージがあるわ。

多用は禁物ってわけ」

――ガラティーンブレイカー／Ｇａｌｌａｔｉｎ　Ｂｒｅａｋｅｒ

シャル
「アリサが誇る最強の砲撃魔法が、聖剣の名前を冠してるコレね」

アリサ
「太陽の騎士モードならマガジンの消費をせずに発動できるけど、それ以外ならマガジン１個分を消費しないといけないのよね。ま、その分トンデモな火力を引き出せるわけだけど」

シャル
「珍しく魔法を発動させる引き金行為――トリガーの１つ、呪文詠唱が必要なんだね、この魔法」

アリサ
「そうよ。その方が雰囲気でるでしょ？　不浄の闇を断ち払うのは太陽の現身。輝ける炎の聖剣。どう？　格好いいでしょ♪」

――ブレイドプロテクション／Ｂｌａｄｅ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ

シャル
「はーい、次のゲストは・・・月村すずか、です！」

すずか
「え、ええ！？　なんか急にお城のすごー――」

かくかくしかじか

すずか
「なるほど。かくかくしかじかなんだね」

シャル
「そういうこと♪　そういうわけで、紹介をどうぞ！」

すずか
「うん。えっと、ブレイドプロテクションは、単純な斬撃・魔力付加斬撃に効果を持つ防御魔法です。対シグナムさん用に創りました。でも結局は力押しで負けちゃったけど」

シャル
「シグナムって本当に強いからね・・・って、そうだった。まずはスノーホワイトの紹介もしてくれる？」

すずか
「あ、うん、判った。私のデバイスは、スノーホワイト・メルクリウスです。ブーストデバイスって呼ばれるタイプで、その特性は魔力射出・射出魔力制御の補助、らしいです」

シャル
「メルクリウスはラテン語で水星、ローマ神話の最高１２神の一柱・メルクリウスからも取ってるみたいね」

――フローズンバレット／Ｆｒｏｚｅｎ　Ｂｕｌｌｅｔ

すずか
「セレネ・スクライアちゃんから受け継いだ、冷気の魔力弾型射撃魔法」

シャル
「バリエーションがあるんだよね？」

すずか
「私の射撃魔法には、アサルトシフト、サークルシフトっていうのがあって、アサルトシフトは私の周囲に展開した魔力スフィアから複数の射撃弾発射による弾幕を張る事で、サークルシフトは相手の周りに魔力スフィアを展開しての包囲攻撃なんだ」

シャル
「いきなし自分の周りに魔力スフィアが十数基と発生したらビビるわぁ～」

――バインドバレット／Ｂｉｎｄ　Ｂｕｌｌｅｔ

すずか
「これもセレネちゃんやエオスちゃんから受け継いだ魔法だよ。射撃魔法なんだけど、着弾と同時に相手にリングバインドを仕掛けるの。迎撃しようって直接斬撃・打撃を取られても発動するから、誘導操作が追いつけないほどに逃げるか、この魔法以上の魔力を持った中遠距離魔法じゃないと防げないかな」

シャル
「ベルカ騎士や近距離戦魔導師にとっては辛い魔法だよね」
――フィジカルヒーリング／Ｐｈｙｓｉｃａｌ　Ｈｅａｌｉｎｇ
すずか
「私がジュエルシードのお願いを叶えてくれるっていう力で魔導師化して初めて使ったのが、このフィジカルヒールなんだ」
シャル
「治癒術式はミッド式の補助魔導師にとっては基本的な魔法だからね。フィジカルは肉敵的な治癒魔法で、簡単な傷くらいならすぐに治せるよね」
――ディバイドエナジー／Ｄｉｖｉｄｅ　Ｅｎｅｒｇｙ
すずか
「これもフィジカルヒーリングと同じで、最初から使えた魔法だよ。なのはちゃんの魔力を回復させる為に、スノーホワイトからレイジングハートを通して私の魔力を分け与えたの」
――ホールディングネット／Ｈｏｌｄｉｎｇ　Ｎｅｔ
すずか
「これはジュエルシード事件に使った魔法だね。魔力で網状の物を作って、落下防止に使ってたかな。あ、そうそう、アリサちゃんが

ブレイズロードの暴発で空に飛んで、それから落下しちゃうから、それを助けるために覚えたんだ」

シャル
「想像できるわぁ～」

――フローティングアイス／Ｆｌｏａｔｉｎｇ　Ｉｃｅ

シャル
「魔法陣上に大きな氷塊を創り出す魔法だけど、これって実際なに・・・？」

すずか
「一応は防御魔法に括られてるかな。でもほとんどはアリサちゃんの足場扱いかも」

――パワーブースト・ガンファイアフォース／Ｐｏｗｅｒ　Ｂｏｏｓｔ－　Ｇｕｎｆｉｒｅ　Ｆｏｒｃｅ

すずか
「私の真骨頂の魔法がこれ。仲間の魔法効果を増強させるブースト魔法。そのうちの１つが、この射砲撃魔法の強化なんだよ」

シャル
「１つという事は他にもあるんだ」

すずか

「うんっ。斬撃・打撃強化、治癒強化とかいろいろあるんだ」

――アイシクルアイヴィ／Ｉｃｉｃｌｅ　Ｉｖｙ

すずか
「捕縛魔法で、氷と冷気で出来た茨数本を相手に絡ませて、その個所を氷結させる魔法だよ」

シャル
「やっぱり炎熱変換には弱かったり・・・？」

すずか
「・・・うん」

ルシル
「アイヴィって茨じゃなくて、蔦という意味、だよな。何故に茨と名付けた・・・？」

シャル
「うちの作者のミスよ」

――アイシクルスタチュー／Ｉｃｉｃｌｅ　Ｓｔａｔｕｅ

すずか
「これも捕縛魔法だよ。相手を氷の柱に閉じ込めちゃう魔法。相手の周りの水分を瞬時に凍結させて、相手をその中に閉じ込めるんだ。大気中の水分を利用するから、水分が多い場所だと発生から拘束、

その強度も増すの」

シャル
「魔力そのものじゃなくて水分の凍結っていう発生効果の捕縛だから、ＡＭＦは通用しないっぽいね」

――アイスミラー／Ｉｃｅ　Ｍｉｒｒｏｒ

シャル
「変わったシールドよね」

すずか
「うん、なのはちゃん達の使うラウンドシールドの縁が氷に覆われているんだ。と言っても見た目だけで、その効果はあまり変わらないかな」

――リフレクティブミラー／Ｒｅｆｌｅｃｔｉｖｅ　Ｍｉｒｒｏｒ

すずか
「アイスミラーと同じだけどその効果が違うのがこの防御魔法で、射砲撃を反射する事が出来るんだ」

シャル
「その効果で以って対象を囲うように包囲展開、その内部に仲間が射砲撃を撃って結界内で魔法を乱反射させて対象をボコる事も可能。さらには効果を知らずに包囲された対象が結界破壊の為に射砲撃を

撃ったりなんかしちゃったら・・・」

すずか
「全部自分に反射して返って来ます♪」

――リフリジレイト・エア／Ｒｅｆｒｉｇｅｒａｔｅ　Ａｉｒ

すずか
「冷気の竜巻を発生させての防御魔法だよ」

シャル
「ルシルのラシエルみたいなものかぁ。でもこれって副次効果が色々とあるよね」

すずか
「うん。相手が濡れていればその水ごと凍結封印が出来るよ」

シャル
「すずかを相手にする時は、水辺じゃない方が良いってわけね。気を付けよう」

――ナイツ・ルナレガリア／Ｎｉｇｈｔ'ｓ　Ｌｕｎａ　Ｒｅｇａｌｉａ

シャル
「これがすずかのブーストね」

すずか
「うん。午後９時から午前時３時までの６時間の間、私の魔力量やスノーホワイトの性能を限界値以上にまで強化できるんだ」

シャル
「まさに夜の月（ナイツ・ルナ）の女神の力ってわけか」

――ディザスタークロス／Ｄｉｓａｓｔｅｒ　Ｃｒｏｓｓ

シャル
「こっからは協力魔法の紹介ね。それじゃ、アリサとすずか、よろしく♪」

アリサ
「了解よ。この協力魔法は、あたしと――」

すずか
「私の２人で行うんだよ。時計盤に耐えると１２時と３時の位置に立って、ハリの付け根に居る相手に向かって砲撃魔法を放つっていうもの」

アリサ
「上から見たら十字でしょ？　だからこの名前にしたのよ」

――エクセリオンバスター・リバウディングシフト／Ｅｘｃｅｌｌｉｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ－　Ｒｅｂｏｕｎｄｉｎｇ　Ｓｈｉｆｔ

シャル
「ここで新しいゲスト！　高町なのは！」

なのは
「ふわっ！？」

シャすずリサ
「かくかくしかじか」

なのは
「えと、よく解らないけど、魔法の説明をすればいいんだね♪」

すずか
「じゃあなのはちゃん。お願い」

なのは
「うんっ！　エクセリオンバスター・リバウンディングシフトは、すずかちゃんの反射魔法と私の砲撃で行う協力魔法だよ。すずかちゃんがリフレクティブミラーで相手の人を閉じ込めて、その鏡に私がバスターを撃つの。すると――」

すずか
「なのはちゃんの砲撃が鏡に着弾すると、幾つもの砲撃に拡散して鏡の結界の中を飛び回って最後は相手に着弾」

なのは
「拡散時に魔力と威力も一緒に解れちゃうから1発分の威力は低い

けど、最後は全弾が当たるからおんなじだよね」

――デュプルブレイズ・シオンズクリーバー／Ｄｏｕｂｌｅ　ｂｌａｄｅｓ　Ｚｉｏｎ'ｓ　ｃｌｅａｖｅｒ／楽園の切断者が持つ２つの刃

シャル
「はい、続いてのゲスト！フェイト・テスタロッサ！」

フェイト
「え、な、なに！？　いきなり変なところに！？　なのは！？　それにアリサにすずか、あと・・・シャル！？」

かくかくしかじか

フェイト
「そんな事になってたんだね、なのは達。でも、うん、いいよ。この魔法は私とアリサで行う協力魔法で、それぞれがデバイスのフルドライブモード、ザンバーとクレイモア時でしか発動できないんだ」

アリサ
「フレイムアイズとバルディッシュのフルドライブは、常時発動してる結界破壊効果の魔力刃が展開されているからね。それを左右から振るって、敵が張った結界を切り裂くの。ちなみに防御魔法も切り裂けるように効果を加えてるわ」

フェイト

「傍から見れば邪魔物を切り裂くハサミのようかな」

――サザンクロス

フェイト
「これも私とアリサの協力魔法だよね」

アリサ
「そうよ。あたしのヴォルカニックスカッシャーと、フェイトのジェットザンバーによる十字刺突攻撃」

フェイト
「魔力刃を伸長させて、対象を貫くんだ。もちろん防御・結界魔法を破壊できる効果が付加されているから、よほどの防御力じゃなければ破壊できるよ」

――雷覇・砲剣衝／らいは・ほうけんしょう

フェイト
「これは私とシャル・・・、イリスとの協力魔法なんだけど・・・」

シャル
「それは私が担当するよ。フェイトのプラズマバレットで対象を足止め＋帯電魔力素の散布、そこで帯電魔力素を急襲して強化されたイリスの雷牙月閃刃と、拘束の連鎖でさらに足止め。トドメに・・・」

フェイト
「プラズマスマッシャー、だよ。対象の周囲には、雷月刃でまた帯電した魔力素が充満しているから、私のスマッシャーもいつも以上に強力になっているんだよ」

――双月・破盾一閃／そうげつ・はじゅんいっせん

シャル
「これもイリスとフェイトの協力魔法だよね」

なのは
「シャルちゃん、アリサちゃん、フェイトちゃんは近接戦魔法を使う、魔導師で騎士だから、魔法開発もよく3人で協力してたし」

すずか
「仲が良すぎてちょっと疎外感が合ったよね」

なのは
「うん」

フェイト
「あぅ、ごめんね。えっと、この協力魔法は、バリア貫通効果と魔力刃の威力強化を持つハーケンスラッシュと、シールド・バリア・結界破壊効果を持つイリスの光牙裂境刃による挟撃だね」

アリサ
「最初にソニックムーブと閃駆で相手に高速接近して、左右から同

時斬撃。すぐさま切り返して前後から同時斬撃。一瞬にして４連撃を叩き込むって技よね」

フェイト
「練習したよ、すごく。ランサー状態のルシルの強さは知っていたから」

すずか
「私とアリサちゃんもシグナムさんに勝てるようにイメージトレーニングや実際の模擬戦もしたし」

アリサ
「結局負けたけどね」

すずリサ
「・・・・」

――双炎牙・獄火刃／そうえんが・ごっかじん

フェイト
「これはシャルとアリサの協力魔法だね」

アリサ
「シャルの炎牙崩爆刃と、あたしのフレイムウィップによる×十字斬撃を放つってやつよ」

なのは

「単なるフレイムアイズじゃなくてカートリッジで魔力や火力を３倍以上に強化されてるから、結構強いよね」

アリサ
「それじゃまるであたしのフレイムウィップは普段、弱いって言ってない？」

なのは
「ち、違うから！　そ、そんなこと思っても、考えてもないから！」

――クリアランスボミング／Ｃｌｅａｒａｎｃｅ　Ｂｏｍｂｉｎｇ

シャル
「どんだけ鬼畜な技を生み出すんだろうね、今エピソードは」

なのフェイすずアリ
「？？？？」

シャル
「ま、いいや。はい。この協力技の紹介をお願いね」

なのは
「これって協力技、なのかなぁ・・・？」

フェイト
「一応、技名があるし」

すずか
「協力魔法って括りでいいと思うよ」

アリサ
「そうは言っても、ただ単純にあたし達全員が空から地面に向かって3ケタっていう射撃魔法を降り注がせるだけの絨毯爆撃なんだけどね」

シャル
「それが鬼畜って話なわけよ。直訳で、一掃爆撃、とか。恐いわぁ～」

――一方通行の聖域／サンダルフォンのせいいき

シャル
「はい、次なるゲストの登場です！」

セラティナ
「な、なんですか！？　私、どうしてこんな覚えのな――」

かくかくしかじか

セラティナ
「全く以って意味が解らないですけど、魔法を説明すればいいんですね。コホン。サンダルフォンの聖域は、物心ついた頃には修得していた結界魔法です。結界内の魔力素を無にして、魔法が使えないようにするんです。魔法を使う魔導師にとっては致命です。騎士に

関しては武器がありますから、力づくで壊す・・・ことも出来ないです。それを想定したうえで対物理攻撃無効化の効果がありますから」

シャル
「ひょっとして外からの魔法攻撃は使えたりする・・・？」

セラティナ
「よく御存じですね。出来ますよ。内側からの魔法干渉は受け付けず、外からの魔法干渉はし放題。だから一方通行の聖域なんですよ」

――多層封獄結界／パーガトリー・アークケイジ／Ｐｕｒｇａｔｏｒｙ　Ａｒｋ　Ｃａｇｅ

セラティナ
「武装隊の方々が張る強装結界と同じ硬度の結界を五重展開する魔法です」

シャル
「とんでもない結界よね。強装結界って、闇の書の夜天の雷クラスの攻撃魔法でないと砕けないのに、それを五重とか」

セラティナ
「ですから私は管理局の最高結界魔導師って謳われているんですよ♪」えっへん

――ツェアレーゲンシュラーク

シャル
「はいはーい、新たなゲストの登場です！　前作・界律の守護神編において最強の敵だったテルミナス！　その転生者のアルテルミナス・マルスヴァローグ！」

アルテルミナス
「いや、ちょっと待って。前作とかテルミナスとか、全然理解が出来ないんだけど。それに、あなたは・・・イリス？　にしては大人だし」

かくかくしかじか

ルシル
「↑のやり取りでちゃんと伝わって、納得してもらえるのが不思議でならないな」

シャル
「お？　戻って来たんだ」

ルシル
「ああ、まあな」

ルミナ
「とにかく、私の魔法を紹介すればいいんだね。じゃあ、コホン。ツェアラーゲン・シュラークは、私の固有スキル、エクスィステンツ・ツェアレーゲンを利用した拳打だよ」

ルシル
「改めて聞くと本当に反則だよな。触れたモノを好きなように分解できるなんて」

ルミナ
「でもそのおかげで、私・・・」

シャルシル
「？？」

ルミナ
「ううん、なんでもない。ツェアレーゲンは分解、シュラークは一撃って意味ね」

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース

ルミナ
「私の有する高速移動魔法がコレ。離れた相手と一気に距離を詰めるための魔法だよ。ちなみに直線限定。意味は、ゲシュヴィントは速い、フォーアシュトゥースは突進ね」

ルシル
「これかぁ、俺のコード・ヘルモーズの飛行速度に追いついた魔法は」

シャル

「アレはビックリだったね。大戦時、空戦最速と言わしめる由縁だったヘルモーズに追いつける人が居るなんて想像すらしなかったんだけど」

ルミナ
「え？　私ってそんなにすごい事をやってる・・・？」

シャルシル
「やってる」

ルミナ
「私オリジナルの魔法を褒めてもらえるって本当に嬉しい♪」

シャル
（可愛い　まさかテルミナスに萌える日が来るなんて思いもしなかったよ）

――拳打強化／フェアシュテルケン

ルミナ
「これは防御魔力の出力を上げて拳を護るための魔法だね。フェアシュテルケンは強化・補強っていう意味」

ルシル
「待ってくれ、ルミナ。なぜ攻撃なのに防御魔力で拳を覆うんだ？
それだと上記のツェアレーゲンシュラークも、魔力で拳を護っているという事になるが・・・？」

ルミナ
「スキルで拳が潰れないようにするためだよ。まさかノーリスクで存在分解なんてトンデモスキルを使えると思ってる？　違うよ、魔力で拳や足を保護したうえでスキルによる攻撃を行う。これが私の戦闘スタイルなわけ。つまりフェアシュテルケンは、スキル効果を上げて、さらに防御魔力出力を上げる事で、さらに分解力を増させる魔法ってこと」

シャル
「そうだったんだ～」

ルシル
「そんな欠点も有ったんだな」

――ファルコンメン・ツェアシュティーレン

ルミナ
「で、↑の続き。拳打強化する事で発動可能な攻撃がコレ。完全破壊の意味の通り、スキル効果を半分ほど発現させての拳打で、デバイスくらいなら破壊できるよ」

シャル
「エヴェストルム、壊されちゃったよね」

ルシル
「その衝撃で墜落寸前に陥ったしな。もう二度と食らいたくないな」

――シュライエンパンツァー

ルミナ
「魔力で声量アップした大声で衝撃波を発して空間に歪みを作るのね。それで――」

ルシル
「ちょっと待ってくれ。声で衝撃波を作って空間歪曲？　それもスキルの影響か・・・？」

シャミナ
「それはないよ～」

ルミナ
「さっき説明したでしょ。そういう魔法なんだって」

ルシル
（声量を魔力で上げて大声を発して衝撃波作って空間歪曲・・・魔術？）

ルミナ
「シュライエンは叫び、パンツァーは装甲ね」

――シュトゥースヴェレ

ルミナ

「防護服や防御魔法を貫通する衝撃波を打ち込む攻撃ね。意味はそのまま衝撃波」

ルシル
「完全に風嵐系魔術だよな」ボソ

シャル
「そだね」ボソ

ルミナ
「なに？」

シャルシル
「いやいや」

シャル
「防御系を無視して体内にダメージ与えるんでしょ？　すごいよね、これ」

ルシル
「これもスキルなのか？」

ルミナ
「そうだよ。と言ってもそのスキル効果は最弱だから、何も壊さないけどね」

シャル

「でも体内にダメージは入るから、この一撃で少しの間動けなくなるよね。最弱効果でこれって、すごいよね～」

――オクスタンズィーガー

ルミナ
「クラウチングスタートからの突撃力を利用した拳打二連撃。オクスタンはベルカ語で突撃槍、ズィーガーは勝者。一撃目で相手のデバイスを破壊して、二撃目で相手本体にダメージを与えるってやつ。相手が私の攻撃について来られるような強敵限定で使う技だよ」

シャル
（という事は、イリスの体の支配権を借り戦った私は、ルミナにとったら強敵の括りなんだね）

ルシル
「俺の時は使わなかったよな」

ルミナ
「ランサー時ね。そこまで深く戦わなかったから。あのまま戦い続けてたら、この魔法だって、もしかしたらデバイス・ツァラトゥストラまで使っていたかも」

――グラウンドマリオネット

ルシル
「ナハトヴァール・アウグスタが使っていた魔法だな」

シャル
「これ、蒐集したページからの発動らしいから、パラディース・ヴェヒターん時の蒐集行為で手に入れた魔法だね」

ルシル
「大地を応用したゴーレム製作。カーネルを思い出すな」

シャル
「私は直接戦った事ないから同課は判んないけど、たぶん私が勝つね」

――冥府の螺旋槍／ヴルフシュペーア・デア・ウンターヴェルト

シャル
「劇場版なのはでナハトヴァールが使った魔法に、作者が勝手に名前を付けたのがコレ。ヴルフシュペーアは投槍で、ウンターヴェルトは冥界・地底・黄泉の国ね」

ルシル
「あれだろ？　なのはに落とされた螺旋状の巨大な岩。とんでもない魔法なのに名前が無いなんて勿体ないっていうのがうちに作者の言だな」

シャル
「次回へ続きま～す♪」

番外コーナー：シャルシル先生の魔導紹介教室～～♪その２っ♪

――アンスラシスドルヒ

シャル
「次なるゲストの登場、ですっ☆」

ディアーチェ
「むお！？　いきなりなんだ！？」

ルシル
「かくかくしかじか」

ディアーチェ
「かくかくしかじかとか、意味が解らんわ！」

バキッ

ルシル
「痛っ！？」

シャル
「かくかくしかじか」

ディアーチェ
「なに？　我が闇の魔導を紹介しろ、だと？」

ルシル
「なんでだ・・・？」

シャル
「ここは私の創世結界内だし、私が支配者だから、かな？」

ディアーチェ
「まぁよい。王として懐を深いところを見せてやろう。アンスラシスドルヒとは、元は管制人格の魔導だったものを、我の起動時にコピーした際に名称を変化したものよ」

シャル
「つまりは名前が違うだけではやてのブラッディダガー、リインフォースのブルーティガードルヒと同じモノって事ね」

ルシル
「ちなみにアンスラシスとは、炭疽菌の学名バシラス・アンスラシスから取ったそうだ」

――エルシニアダガー

ディアーチェ
「我が王杖エルシニアクロイツと同じ名を冠する射撃魔法だな」

シャル
「はやてのブリューナクと同じで、移動しながらの魔力弾連射可・

・・。結構面倒な攻撃よね。近接系の魔導師や騎士にはちょっと辛いかも」

ディアーチェ
「フン。移動しながら弾幕が張れるのは良い事だが、我はその逃げのような好意は好かん。真正面から堂々と砲撃を撃ち込んで墜としてこそ我よ！」

ルシル
「エルシニアは、グラム陰性通性嫌気性桿菌であるエルシニア・エンテロコリチカ菌の事だな」

――ドゥームブリンガー

シャル
「これもはやてと同じ射撃魔法よね。剣状の射撃魔法を扇状に放ったり、放射状に放った後で相手に集束させての包囲攻撃とか」

ディアーチェ
「おい。子鴉と同じ魔法を紹介せずとも良いであろう？　我オリジナルの魔導があるのだ。そちらを紹介させろ」

ルシル
「・・・アロンダイトという砲撃は、はやてのクラウ・ソラスと同じで、エクスカリバーという多弾砲撃はラグナロクと同じ。はい、終わった～」

バキッ

ルシル
「何故だ！？」

ディアーチェ
「何故か貴様には苛立ちを覚える。まぁなんだ、許せ」

ルシル
「納得できない！」

シャル
（残滓ステアの正体がルシルだって事に感づいてんのかなぁ～・・・？）

――アンサラーシュラーク

ディアーチェ
「ふむ。我が王杖エルシニアクロイツに魔力を付加させての直接打撃がこの魔導よ。エルシニアクロイツの本来の用途は魔導発動媒体である故、殴り叩くのにはさほど適してはおらん。のだが、そこは我が魔力の強さにより、武器型デバイスによる攻撃と同等の威力を引き出せるのだ」

シャル
「これもはやてのクロイツシュラークと同じだよね」ぼそ

ルシル
「アンサラーとは、ケルト神話に登場する剣、フラガラッハの事だな」

――インフェルノ

ディアーチェ
「ふむ。これぞ我がオリジナル魔導。我が頭上より前方へ向けて闇の球体を複数と降らせる魔導よ。射程は広く、弾速も速く、バリア破壊の効果も有しておる。が、飛来箇所が常にランダムなため、一対一では下手をすれば当たらん場合もある」

シャル
「使いどころが難しいわけね。長距離戦でのアクセントって感じで攻撃に交ぜれば戦術の幅が広がるかもね」

ルシル
「インフェルノとは、一般的に地獄を意味するな」

――剣兵射撃グラディウスレイン

ディアーチェ
「次はこれよ。剣状射撃ドゥームブリンガーと同じ剣状射撃だが、飛来の仕方が違う。頭上から雨のように降らせるのだ」

シャル
「これっていきなり振って来るから、下手に距離を詰めるとまとも

に受けるよね」

ディアーチェ
「そうとも。我に接近戦を挑んできた愚者への罰よ」

ルシル
「直訳で剣の雨、だな」

――広域剣兵召喚レギオン・オブ・ドゥームブリンガー

ディアーチェ
「我が広域型魔導だな。グラディウスレインを数十基と展開し、ロックオンした標的へ向けて一斉発射するというものだ。単独標的も可能ゆえ、集中砲火も可能だ」

シャル
「ルシルの槍群系、コート・ウルみたいだね」

ルシル
「フッ。展開する弾体の数が違うな、俺は3ケタ4ケタクラスだぞ」

ディアーチェ
「むむ。ほ、ほう。ならば勝負するか？」

ルシル
「君とは一度も魔導を交えなかったからな。いいだろう」

ディアーチェ
「面白い！　掛かって来るがよい！」

シャル
「えっと、レギオンはローマ軍団の事だね。リリカルなのはＩＮＮＯＣＥＮＴのコミック版で観られるよ♪」

――王の威光

ディアーチェ
「我の捕縛魔導だな。直接バインドで封じるか、バインドリングを発射して着弾させて封じるか、二種類とあるぞ」

ルシル
「俺に負けたにも拘らず堂々としているなぁ」ぼそ

シャル
「でも若干こめかみに怒りマークがあるよ。髪も乱れたまんまだし」ぼそ

――ジャガーノート

ディアーチェ
「我単独発動で行える魔導で最強がこれよ。我が前面に展開した５つのミッド魔法陣より闇の砲撃を上空へと向け発射。それが相手に僅かな隙を与え、回避や防御のタイミングをズレさせるのだ。後にほぼ直角に砲撃を曲げて相手の足元へと向かわせ、そこで魔力爆破

を発生させて相手を呑み込ませるのだ」

ルシル
「足元からの魔力爆発というのが厄介だな。足元にシールドを張るのは難しいし、バリアはシールドに比べて硬度が低いとされているから防ぎきれないかもしれない」

シャル
「だよね～。さっすが王様♪」

ディアーチェ
「もっと称えるがよい♪」

――ヨルムンガンド

ディアーチェ
「直射型ではなく蛇のうねりが如き複雑な軌道で以って相手を食らう砲撃だ。射撃は問答無用で食らい、砲撃は躱し、必ず相手を食らうのだ」

シャル
「遠距離系の魔導師にはちょっと辛いかもだけど、近距離系の魔導師・騎士には割かし安全牌だよね。避けてディアーチェに近接を挑めば済みそうだし」

ディアーチェ
「ならば即座にエルシニアダガー、グラディウスレイン、王の威光

などによる高速攻撃とカウンターで迎撃するだけよ」

――クインタプルミーティア

ディアーチェ
「我が臣下にして騎士、王下四騎士と融合する事で発動可能となる複合魔導だ。おそらく二度と発動は出来んだろうがな。王杖エルシニアクロイツの先端に展開したミッド魔法陣より氷、炎、雷、光、闇、５属性の高速砲撃を５連射するのだ。王と四騎士の魔力が込められておるゆえ、その魔力量はＳＳランクを優に超えるだろうな。何者にも妨害されず、砕かれず、だ」

シャル
「まさに砕け得ぬ闇状態だよね。ディアーチェも言っていたし」

ルシル
「クインタプルは５倍・五重奏など、ミーティアはメテオとも呼び、流星という意味だな」

――エクスカリバー・カタストロフィー

ディアーチェ
「前面に展開したミッド魔法陣と、その四方に展開した４つのミッド魔法陣から５属性の特大砲撃を発射するというものだ。これも四騎士と融合している状態で発動できる複合魔法だ。まずは四方魔法陣から４発、最後に中央魔法陣から我が闇の砲撃を発射する」

シャル
「ラグナロク――エクスカリバーのバリエーションね。綺麗だったよね、色彩が♪　シュテル達に支えられてるって感じがしてすごかった」

ディアーチェ
「そうだろう、そうだろう。あやつらには助けられた。口に出しては言えんが、感謝でいっぱいだ」

シャルシル
（デレた）

――光雷斬

シャル
「はーい、続けて新しいゲスト♪」

レヴィ
「！？　わわ、なになに！？　なんかすごいところに来ちゃった！？」

ルシル
「・・・かくかくしかじか」

レヴィ
「ぷふっ！　なにそれー！　蒼羽、意味解んなぁーい！」

シャル

「かくかくしかじか」

レヴィ
「ほう。ボクのカッコきれーな魔法を紹介すればいいんだな！　よしっ、いいぞ！」

ルシル
「ま、こうなる事は理解していたが」

レヴィ
「光雷斬は、ボクのバルフィニカスを大鎌形態スライサーフォーム状態での斬撃だぞ！」

ルシル
「フェイトで言うハーケンスラッシュだな」

シャル
「効果もおんなじね。あ、ちなみにバルフィニカスの由来は、傷を負わせる・振動する菌って意味の、ビブリオ・バルフィニカスからね」

レヴィ
「ボクのバルフィニカスは、破砕斧クラッシャー、大鎌スライサー、超刀ブレイバーの3変形だぞ♪」

――電翔弾

――電刃衝

――光翼斬／光翼連斬

――天破・雷神槌

――雷神滅殺極光斬

レヴィ
「電刃衝は、雷撃の槍を高速連射できるんだぞ！　オリジナルのように一斉発射も出来る優れもの！
電翔弾は、電刃衝よりかは威力・弾速が弱いし遅いけど、誘導制御が出来るんだけど、制御とか面倒だからあんま使わない。
光翼斬は、スライサーフォームで展開してる魔力刃を、縦回転、横回転で飛ばして、連斬は連続発射だ！
天破・雷神槌は、敵に雷撃を降らせる魔法だぞ。
雷神滅殺極光斬は、バルフィニカスをブレイバーフォームにする事で使えるやつで、大剣形態で展開してる魔力刃を伸ばして敵を斬る魔法だ！　カッコいいだろ♪」

シャル
「早い、早い、私とルシルが口を挟む前に一気に紹介しないで」

ルシル
「とは言え、上記はフェイトと同じだから別に構わないぞ」

レヴィ

「お？」

――雷光破走／スプライトムーブ

レヴィ
「高速移動魔法だな！　ちょー速く動けるんだぞ！　スプライトムーブは、高速機動形態スプライトフォームになる事でずっと使える移動魔法なんだ♪」

シャル
「これもフェイトのやつと同じよね」

ルシル
「だな」

――雷神爆光破

レヴィ
「元々は雷撃砲だったけど、再起動時に変わったんだよね。手から大きな雷球を出して敵にぶつけんの！　遠距離から中距離に変わっちゃんたけど、ボクのオリジナルだから良いと思う！」

ルシル
「レヴィの魔法は、近づかなければどうって事はないな」

レヴィ
「むむ。なんか聞き捨てならないセリフが聞こえたぞ？　勝負する

か？　ボクの速さと蒼羽の遠距離攻撃で！」

ルシル
「このままマテリアル相手に連戦して勝って見ようか・・・！」

――雷神封殺爆滅剣

シャル
「えっと、レヴィの周囲に発生させた強大な複数の雷球から雷に繋がれた雷剣を発射して、相手をブッ刺した上で爆発させるって魔法ね。初見だとうっかり範囲攻撃だと思っちゃうけど、その実は対単体用の魔法ね。ま、そのおかげもあって馬鹿みたいな攻撃力だけどさ。・・・って、おーい、いつまで遊んでんのー？」

レヴィ
「むぅー！　全然当たらなーい！　ていうか避けるなよー！」

ルシル
「こっちだぞー」

――スパークヴェスパー

レヴィ
「はぁはぁはぁ・・・、けほっ、けほっ。・・・雷撃のリングを飛ばす射撃魔法だぞ。・・・う、うぅ、結局掠りもしなかった・・・」

ルシル

「俺にはヘルモーズもあるしな。近接戦だって約２万年の中で鍛えたし、広域攻撃だって多種多様だ。負けるわけにはいかんよ」

――パイロシューター

シャル
「次のマテリアルの登場です☆」

シュテル
「・・・？　ここは一体・・・？」

シャル
「ほら、ルシル」

ルシル
「・・・コホン。シュテル」

シュテル
「ルシリオン・・・？　それに騎士イリス・・・？」

ルシル
「かくかくしかじか」

シュテル
「あの、それで話が通じるとは思えないのですけど・・・」

シャル

「かくかくしかじか」

シュテル
「私の魔導を紹介するのですか？　それは構いませんが」

ルシル
「・・・・」

シャル
「いじけないでよ、ルシル」

シュテル
「あの・・・」

シャル
「あぁ、気にしないで、気にしないで。じゃあよろしくね」

シュテル
「では。パイロシューターは、なのはのアクセルシューターを基にした魔導で、後に炎熱変換を得ましたので、魔力弾から火炎弾へと昇華しました」

ルシル
「シュテルは炎熱変換能力を得てから輝き出したよな」

シュテル
「おかげさまで。なのはとハッキリとした区別が付き、私も満足し

ております」

シャル
「パイロの由来は、パイロテクニクスっていう燃焼を制御する技術ね」

――ブラストファイアー

シュテル
「基はなのはのディバインバスターですね。後に火炎砲撃となりましたので、その威力はとても上がりました」

――アサルトマルクス

シャル
「これもそうね。なのはで言うフラッシュインパクトね」

ルシル
「これも火炎打撃に変換されたようだな」

シュテル
「はい。火炎纏うルシフェリオンによる直接打撃ですね。打撃と火炎による二重攻撃ですので、なのはのフラッシュインパクトより威力は有ります」

ルシル
「アサルトは襲撃、マルクスはラテン語で槌だな。ちなみにシュテ

ルのデバイス、ルシフェリオンは、綴りはＬｕｃｉｆｅｒｉｏｎで、明けの明星。ラテン語で「光を帯びたもの」を意味するＬｕｃｉｆｅｒに由来している」

シュテル
「遅ればせながら私のルシフェリオンは、通常のヒートヘッド、砲撃モードのブラスターヘッド、フルドライブのディザスターヘッドの３変形です」

――ラピッドフェザー

シュテル
「なのはのアクセルフィンを基にした魔導ですね。唯一変換がなされなかった高速移動魔法ですね。両脚のくるぶしから炎の計４枚の羽を展開するものですね」

シャル
「これも魔力翼から炎翼に変わったよね。熱くない？」

シュテル
「いえ、特には。炎熱変換能力を得た事で、炎にも熱にも強くなりましたから」

――ルベライト

ルシル
「これはバインドだな。レストリクトロック、か・・・？」

シュテル
「ええ。彼女の最硬のバインドですね。私の魔力光・赤から、ラテン語の、赤みを帯びた、という意味のルベライトから取りました」

――ディザスターヒート

シュテル
「ブラストファイアーを三連射する多弾砲撃ですね。射程が撃つたびに射程が短くなるのが欠点ですが、避ける相手に向かって方向修正が行えるのが強みですね」

シャル
「実際、なのはも避けた直後に貰ってるからね～。初見じゃ回避しきれないかも」

ルシル
「しかも3発が連続着弾する事で並のシールドでも防ぎきれないよな」

シュテル
「はい。自慢の砲撃です」

――フレアブラスター

シュテル
「発射シークエンスから砲速までが通常の砲撃より速い高速砲です

ね。その分、威力が足りないですが」

シャル
「こういうのも必要よね。射砲撃魔導師だったら。戦術の幅を利かせるための低威力とか高速とかね」

ルシル
「俺の弟子、カノンもそうだったな。バリエーションを多く持つ事で戦術幅を利かせるのは戦闘者として当然だな」

――ルシフェリオンバスター

シュテル
「ブラストファイアーとパイロシューターの同時発動による攻撃です。砲撃からの射撃による追撃ですね」

シャル
「なのはのストライクスターズね」

ルシル
「とは言っても、現代（オリジナル）のなのはより威力は高いな」

――ルシフェリオンバスターA・C・S

シュテル
「ディザスターヘッド時での突撃技です。ヘッドの先端より炎の魔力刃を展開しての突撃で、敵のシールド・バリアを貫いての零距離

砲撃へと続けます」

ルシル
「なのはのエクセリオンバスターA・C・Sだな」

シュテル
「はい。なのはは実に戦術豊かな魔導師で、彼女が私のオリジナルで本当に良かったです」

――ファイネストフレア

シュテル
「大型火炎弾による迎撃ですね。私ではなく、ディアーチェが使ったものですが」

シャル
「でも効果は同じなんでしょ？」

シュテル
「ええ」

――真・ルシフェリオンブレイカー

シュテル
「元ルシフェリオンブレイカーは、なのはのスターライトブレイカーと同型の魔導でしたが、真となって生まれ変わりました」

ルシル
「始めにブラスターヘッドへ火炎砲撃を相手の至近距離で発射し、吹き飛んだところですかさずディザスターヘッドへ変形させて集束開始。相手が初弾の影響で体勢が整っていないところに本命のさらに大きな火炎砲撃で追撃、と」

シャル
「最初の１発で終わりそうな気もするけどね、あの火力と魔力量だし」

シュテル
「そうすると不完全燃焼で私のフラストネーションが溜まりますね」

――サラマンデル

シャル
「マテリアル４基目の登場です！」

フラム
「な、何でありますか！？　レヴィと一緒に食材調達に出かけていたのに、レヴィが急に居なくなって捜し――」

ルシル
「かくかくしかじか！」

フラム
「私の魔法の紹介でありますか？　陛下やレヴィ、シュテルもすで

に済んだ？　わ、判ったであります。私の魔法の紹介、引き受けるであります♪」

ルシル
「通じた？　なんか知らないが嬉しい！」

シャル
「良かったね～♪」

フラム
「ではまず、タラスクスの紹介をさせて頂くでありますよ。ノーマルのサーベル、銃剣のスナイプ、大剣のツヴァイヘンダーの３変形機能を持っているであります」

ルシル
「タラスクスは、ユダヤ・キリスト教の聖典、旧約聖書に登場するレヴィアタンの子、もしくはそのものと呼ばれている、炎の竜の事だな」

フラム
「では本題を。サラマンデルでありますな。我が愛剣タラスクスの刀身に高熱を持たせ、切断力を引き上げる魔法であります」

ルシル
「アリサのフレアブレードだな」

フラム

「まぁ元はアリサのコピーでありますから」

シャル
「サラマンデルは、四大精霊の内で火を司る、サラマンダーの別名ね」

――アラム

ルシル
「タイラントフレアだな。刀身に炎を纏わせての斬撃」

フラム
「これもアリサのコピーでありますから」

シャル
「アラムは、ルーマニアの民間伝承：サルコテア大王と四竜王に登場する銅竜ね」

――アトロポンカ

フラム
「アラムの一段階下の火炎斬撃であります。私が使う頻度の最もある魔法であります」

シャル
「これはバーニングスラッシュね。本当にアリサと同じなんだね～」

ルシル
「アトロポンカも、サルコテア大王と四王竜に登場する竜で、銅竜アラムの娘だったな」

――ピツーラ

フラム
「私のオリジナルであるアリサの十八番魔法のフレイムウィップでありますな」

シャル
「そう言えばフラムは、ピツーラってあんまり使わないよね」

フラム
「そうでありますよ。剣騎士はやっぱり斬撃でしょう！」

ルシル
「ピツーラも、サルコテア大王と四王竜に登場する竜で、後述の銀竜アルジンツァンの娘だな」

――フェルニゲシュ

フラム
「私の高速移動魔法でありますよ。両脚や全身に炎を纏わせて、炎の推進力で奪取するであります！」

シャル

「フラムは始めから全身バージョンよね？」

フラム
「攻防・速度上昇と、全身バージョンは恩恵がすごいでありますから」

ルシル
「フェルニゲシュの由来は、ハンガリーの民間伝承に登場する、馬に乗るドラゴンからだな」

――エレンスゲ

フラム
「炎を纏っての飛翔・突進する、フェルニゲシュを応用した魔法であります。これは私のオリジナルでありますよ！」

シャル
「火の鳥化してたよね。アリサ以上にド派手な魔法を使って、フラムって結構すごいよね！」

フラム
「お褒めに頂きありがとうでございます！　私オリジナルの魔法を褒めてもらえると嬉しいでありますな！」

ルシル
「スペイン・バスク地方の民間伝承に登場する、炎の塊と化して空を飛ぶというドラゴンの名前が由来だな」

――スケイル・オブ・ルルナ

フラム
「これも私オリジナルであります！　炎の渦による障壁でありますな。炎熱系魔法と氷結系魔法は問答無用で防御するのでありますよ」

シャル
「これはミッド式のバリア魔法・ホイールプロテクションの炎版ね」

フラム
「そのホイールプロテクションには無い機能もあるのでありますよ。純粋魔力攻撃であれば、着弾と同時に周囲に散る火の粉に乗って威力や魔力が分散されるのでありますから、防御しきるでありますよ」

ルシル
「名前の由来は、小国ブータンに伝わる民間伝承に登場する引き籠りの龍、ルナナの龍、からだな」

――ガルビーラ

シャル
「あれれ？　コレははやてやディアーチェの剣状射撃魔法と同じ・・・？」

フラム
「そうでありますな。複数の剣状射撃魔法を、前方へと向けて扇状

に放つのであります」

ルシル
「フラムはシュテルと同様に炎熱変換持ちだから、この射撃魔法ももちろん火炎の剣なんだよな？」

フラム
「もちろんでありますよ。私は炎の剣騎士でありますからな。目下のライバルは烈火の将、打倒・紅の鉄騎であります！」

ルシル
「名前の由来は、サルコテア大王と四王竜に登場する竜で、後述の金竜アウラールの娘ガルビーラだ」

――ウィル・オ・ウィスプ

フラム
「タラスクスを銃剣形態のスナイピングフォームにする事で発動できる魔法で、銃口より火炎弾を連射するでありますよ」

シャル
「アリサでいうフレイムバレットね」

ルシル
「名前の由来は、世界中に存在している、鬼火伝承、の事だな」

――アゲマント

フラム
「火炎砲撃でありますな。それ以外の説明が無いのであります」

シャル
「あはっ。いいよ、いいよ、こういう魔法をフラムが使ったよ、っていう説明だから」

ルシル
「アゲマントの由来は、サルコテア大王と四王竜に登場するダイアモンド竜アゲマントだ」

――アウラール

フラム
「銃口前面に展開したミッド魔法陣から、火炎弾ではなく火炎のランスを発射する魔法であります。バリア貫通のランス、バリア破壊の着弾後の爆炎と、バリア破壊特化の魔法なのであります」

ルシル
「その割には、アリサのファイアプロテクションに防御されていたな」

フラム
「グサッ、でありますぅ・・・。対炎熱バリアには通用しないのがデメリットでありますぅ・・・」

シャル
「よしよし♪」

ルシル
「コ、コホン。名前の由来は、サルコテア大王と四王竜に登場する金竜アウラールだ」

――アルジンツァン

フラム
「タラスクスを大剣形態ツヴァイヘンダーへと変形する事で発動できる、伸長した魔力刃による斬撃魔法であります」

シャル
「アリサのヴォルカニックスカッシャー、フェイトのジェットザンバーね」

フラム
「バリアや結界破壊効果ももちろん備えているでありますよ♪」

ルシル
「名前の由来は、サルコテア大王と四王竜に登場する竜で、銀竜アルジンツァンだ」

――スクリピチョアーサ

フラム

「私が有する唯一の広域攻撃魔法であります。足元に展開した魔法陣にタラスクスを突き刺すというトリガーにて発動する、私の八方に火炎の竜巻８つを発生させる魔法でありますな。竜巻発生中、竜巻より攻撃判定ありの火の粉を無数に散らすのでありますよ。火の粉には攻撃判定がありますから、火の粉が届く範囲は対空地広域攻撃となるのであります」

シャル
「今のアリサじゃ到底扱えない魔法よね。強大な竜巻を８つも発生・制御できるほど器用じゃないし。・・・８つが最大・・・？」

フラム
「そうであります。１つから８つまでを発動できるのであります。ふふ。それが私とアリサの、差、というものでありますよ♪」

ルシル
「名前の由来は、サルコテア大王と四王竜に登場する、ダイアモンド竜アゲマントの娘からだ」

――黙示録の赤き竜の伝説／ドラッヘン・アポカリプス

フラム
「我が最強の魔法であります。足元に展開している魔法陣から噴き上がる炎と、炎の竜巻スクリピチョアーサを、背負ったタラスクスの大剣に集束させて超強大な火炎剣へと変化。火炎剣と化したタラスクスを思いっきり振り下ろす事で、７つの竜の頭を持った特大集束砲撃を放つのであります」

シャル
「頭７つと言っても砲撃の数は１つ。とは言ってもその巨大さから言ってもう範囲攻撃と言っても良いよね、コレ」

フラム
「全長・全幅８ｍであります♪」

ルシル
「名前の由来は、ドラゴン伝説が好きな者なら誰もが知っているであろう、ヨハネの黙示録に記されている、７つの頭を持った赤い竜からだな」

――アンピプテラ

フラム
「ユーリの一件から数年の間に手に入れた飛行魔法であります。背中から３対――６枚の炎の羽を展開するのであります」

シャル
「３対６枚かぁ～。熾天使と同じよね。アレらも３対６枚の翼を持ってて、２つで頭を、２つで体を隠して、残り２つの翼で羽ばたくっていう・・・」

フラム
「頭と体を隠しているでありますか？　飛び難そうでありますなぁ・・・」

ルシル
「名前の由来は、イギリス南東部はエセックス州・ヘナムで目撃された飛竜からだな」

――イガリマ

シャル
「はーい、マテリアル最後の1基の登場で～す！」

アイル
「な、なんでありますの！？　博士の実験失敗による強制転移ですの！？」

シャル
「ルシル、ほら、どうぞどうぞ♪」

ルシル
「なんか嫌な予感がするが・・・。アイル。実はかくかくしかじか」

アイル
「意味が解りませんわよ！」

ルシル
「シャル、貴っ様ぁぁぁーーーーー！！」

シャル

「あはははは！　あのね、アイル。かくかくしかじか」

アイル
「はぁ？　私の美しく凛々しい魔法を紹介するのですか？　まぁそこまでお願いされてしまったのですから、お引き受けしますわ。コホン。まずは私のデバイスを紹介させていただきますわね。名をエレシュキガル。自己強化に優れた機能を持っていますの。すずかはあくまで他者への強化でしょうけど、私は自分の強化ですわ。他のマテリアルは強化するまでもなく強大な実力者ですから、強化など無用かと」

シャル
「確かに結構強いんだよね、あなた達って。まぁオリジナルに負けちゃったり、引き分けたりしてるけど」

アイル
「私は勝ちましたわよ」

ルシル
「俺は大人しく名前の由来を説明するよ。エレシュキガルは、シュメール神話に登場する冥界の女王の名前だ」

アイル
「では本題へ入りますわね。イガリマは、冷気の射撃魔法を多弾発射するものですわ」

シャル

「これはフローズンバレットのコピーね」

ルシル
「イガリマの由来は、メソポタミア神話に登場する戦の女神ザババの持つ武器・翠刃イガリマからだ」

――ネルガル

アイル
「イガリマのバリエーションですわね。着弾時に氷の剣山を発生させて相手を追撃するというものですわ。ただの冷気弾と侮っていたら、串刺しにされてしまいますわよ♪」

シャル
「結構エグイ魔法を使うよね、アイルって。すずかとは本当に正反対」

アイル
「当たり前ですわ。私とすずかは別存在なのですもの。そっくりなのは外見だけで結構ですわ」

ルシル
「ネルガルの由来は、シュメール・バビロニア神話の冥界の神ネルガルから」

――シュルシャガナ

アイル
「冷気の砲撃ですわね。直撃させた相手を氷結捕縛できる効果を持っていますわ。とは言え、対魔力防御が高いと捕縛できなかったりしますが」

シャル
「これはすずかのバスターラッシュと同じね」

ルシル
「シュルシャガナの由来は、メソポタミア神話に登場する戦の女神ザババの持つ武器・紅刃シュルシャガナからだな」

――ラフム

アイル
「本編未使用ですわね。ミッドチルダ魔法陣型のシールドの縁が凍りついている防御魔法ですわ」

シャル
「そう言えばそうね。すずかの攻撃は軽々避けていたし。使うまでもなかったって事かな・・・？」

アイル
「オリジナルとの戦闘では絶対に負けませんわよ」

ルシル
「ラフムの由来は、バビロニア神話に登場する神ラフムからだな。

意味は泥なんだが・・・何故この名前を付けたのか作者自身が忘却しているざまだ」

――エチムミ

アイル
「防御・捕縛・バリア貫通攻撃といった効果を持った吹雪の竜巻を発生させる魔法ですわ」

シャル
「すずかのリフリジレイト・エアなんだけど、すずかは防御だけよね」

アイル
「そこが私とオリジナルの違いなんですわ 」

ルシル
「エチムミの由来は、シュメール・バビロニア神話伝承の幽霊・魔物エチムミからだな。病気に関係しているようで、幽霊の手クァート・エチムミという病気・病名らしい言葉もある」

――ラマシュテュ

アイル
「氷の茨で相手を拘束して、捕らえた箇所を凍結する捕縛魔法ですわよ」

シャル
「誘導制御があるからし、遠距離発生も出来るから結構厄介よね」

ルシル
「ラマシュテュの由来は、シュメール・バビロニア神話伝承の悪魔・魔物・吸血鬼からだな。男性系がラマシュテュで、女性系がラマシュトゥとなる」

――ムンム

アイル
「純粋魔法攻撃を反射する氷の鏡型の防御魔法ですわね」

シャル
「これはすずかのリフレクティブミラーのコピーね」

ルシル
「ムンムの由来は、シュメール・バビロニア神話伝承に登場する工芸の神・ムンムからだ。古代シュメール語では、ムンムという語は、目覚めたもの、と解釈されていて、古代の神々の支配者とされている」

――ティアマト

アイル
「私オリジナルの魔法ですわよ。地面・壁から氷の剣山を突き出させる攻撃魔法ですわ。宙での発動が出来ないのが欠点ですわね」

シャル
「地面だけじゃなくて壁から突き出させるっていうのはこれまた厄介だよね。壁に背を向けてる中でいきなり、ってなると避けようがないもん。まぁ魔力反応で少しは察知できるかもだけど、回避や防御が遅れたらアウトだもん」

アイル
「その為に創ったんですもの♪」

ルシル
「ティアマトの由来は、バビロニア神話の全ての神々を生んだ母ティアマトからだ」

――ウトゥック

アイル
「冷気を付加した、私の美しきグローブ型デバイス・エレシュキガルで直接触れたモノを凍結させる攻撃魔法ですわ」

シャル
「これってフィールドタイプの防御魔法・バリアジャケットも凍結させる事も出来るんだよね・・・？」

アイル
「もちろんですわ。シールド・バリア・フィールドの防御魔法３種を問答無用で凍結しますわ♪」

ルシル
「ウトゥックの由来は、古代バビロニアに伝わる精霊の総称だな」

――ニヌルタ

アイル
「エレシュキガルの親指、人差し指、中指に外付けの爪計６本から氷の爪を展開しての斬撃魔法ですわ」

シャル
「本当に違うよね、すずかと。アイルって近接戦でも出来るような魔法も修得しているし」

アイル
「２Ｐカラーなんて屈辱の極みですもの。新しい魔法を覚えてオリジナルとの区別がハッキリつきますよう頑張りましたわ♪」

ルシル
「ニヌルタの由来は、メソポタミア神話に登場する、元は大地・農業・狩猟といった豊穣神だったが、後に戦の神となったニヌルタから」

――イシュタル

アイル
「攻撃判定有りの巨大な雪の結晶を広域に無数に降らせる広域攻撃

魔法ですわ。直線効果ではなく、本物の雪のようにヒラヒラと舞い落ちてきますから、回避は難しいですわよ」

シャル
「同じように広域攻撃で迎撃できるよね・・・？」

アイル
「それは言ってはいけませんわ」

ルシル
「イシュタルの由来は、古代メソポタミア神話・バビロニア聖典に登場する、性愛・戦・金星の女神、万軍を率いる者、イシュタルから」

――テンペスト・オブ・エンリル

アイル
「我が最強の広域攻撃魔法ですわ。巨大にして強大な吹雪の竜巻を発生させ、竜巻より氷の剣・槍・弾丸を全方位へと無数に高速射出させますの。視認してからの防御や回避は難しいですわよ♪」

シャル
「上記のイシュタルとのコンボは特に厄介だね。上から横から下からと遅速自在の攻撃が来るから」

ルシル
「エンリルの由来は、メソポタミア神話に登場する、風と嵐の神エ

ンリルからだ」

――バレットダムネーション／破滅・永遠の断罪・天罰の弾丸

シャル
「はいはーい！　最後のゲストは、砕け得ぬ闇編でのラスボス、完結編においての最強クラスの一角、ユーリ・エーベルヴァインちゃんです　」

ユーリ
「あわわっ？　きゅ、急になんですか！？　ディアーチェのご飯作りを手伝っていたのに・・・？」

シャル
「あ～ん、可愛い～い　超抱きしめたい　」

ユーリ
「な、なんですか！？　イリス！？　い、いえ、誰ですか！？」

ルシル
「あのな、ユーリ。かくかくしかじか」

ユーリ
「ルシル？　あの、意味がちょっと・・・」

ルシル
「最後くらい通じるようにしろよ！」

シャル
「ごめ～ん♪　あのね、ユーリ。かくかくしかじか」

ユーリ
「わ、私の魔法を紹介するんですか・・・？　ディアーチェ達もやったって言うなら、はい、お受けします」

シャル
「ルシル！　ユーリが可愛すぎて生きるのが辛い！」

ルシル
「じゃあ死ね」

シャル
「ひどぉ～い！」

ルシル
「それじゃあユーリ。お願いするよ」

ユーリ
「あ、はいっ。それでは。コホン。私の攻防の基点は、背中近くに浮いている魄翼というものです。バレットダムネーションは、魄翼を大きく広げて、その表面から無数の魔力弾を広域に亘って放って弾幕を張る、という魔法なんです」

ルシル

「1発1発がとんでもない魔力を持ち、威力も高いから、防御に回ると基本はアウトだな」

ユーリ
「そうですね。あ、でも最近は出力も安定したのでギリアウトで済みます♪」

シャルシル
（ギリでもアウトはアウトなんだ・・・）

――エターナルセイバー

ユーリ
「これは魄翼を炎の剣へと変えての斬撃魔法です。射撃・砲撃・反射技とかも斬り裂けますぅー」

シャル
「掛け声は？」

ユーリ
「え？　掛け声・・・？」

シャル
「そ♪　ほら、発動時の掛け声、あったでしょ？」

ユーリ
「・・・バー・・・」

シャル
「ほら、もっと大っきな声で♪」

ユーリ
「セ、セイバー!!」

シャル
「可愛い　なんでこうも可愛いのぉ～～～～!!」

――ヴェスパーリング／挽課（正教会の晩の奉神礼）の環

ユーリ
「あぅぅ、恥ずかしいですぅ～・・・。コホン。えっと、この魔法は魔力リングを発射する射撃魔法です。遠距離系の魔法を掻き消す効果を持っていますし、シールド・バリア貫通効果も持ってます」

シャル
「ユーリの魔力は尋常じゃないから、その威力にも反映されちゃうんだよね」

ルシル
「基本、向かって来る魔法を迎撃できる効果ばかりの魔法を有しているよな」

――ジャベリンバッシュ／槍による乱打・強打

ユーリ
「魄翼で大きな槍を造って、相手に発射する魔法です。バリア貫通効果を持ってますぅー。あ、それと同時に８発まで連続・一斉発射も出来ますよ～」

ルシル
「ほぼ物質化しているから、軌道を変えて打ち返す事も可能だな」

ユーリ
「あぅ、確かに何度か反射されてしまいましたぁ」

シャル
「落ち込むユーリも可愛すぎて辛い　」

――ナパームブレス／ナパームの息吹

ユーリ
「えっと、魔力と炎で創った渦巻く球体に相手を閉じ込めて、さらに重力で押し潰しながら爆発させるっていう魔法です」

ルシル
「俺はこの１発で撃墜寸前までに追い込まれたんだよな。この威力は確かだ」

シャル
「可愛くて小っこくて、そのうえ強いって。もうどんだけ私を魅了するわけ！？」

ユーリ
「ご、ごめんなさい？」

――アキレウスシールド／ギリシア神話の英雄・アキレウスの持つ盾

ユーリ
「私の持つ防御魔法です。ミッドチルダ式とベルカ式の魔法陣を二重にしたシールドタイプです。対魔法と対物理効果を持っています」

シャル
「この防御力すごいよね～」

ルシル
「多層防壁に通常の防御魔法、そしてアキレウスシールド。とんでもないよな」

――バイパー／毒蛇

ユーリ
「これは相手の前方から足元へと向けて、魄翼で創った槍を連続で突き出させるという魔法です」

シャル
「槍が突き出て来る前に、突き出て来る箇所に魄翼の渦が出るから察知できるのが欠点かな？」

ユーリ
「えっと、そうですね。よく避けられちゃいます」

――コンストレイント／拘束

ユーリ
「単純なバインドですね。発生から拘束までちょっと時間が掛かりますから、よほど相手に隙が無いと上手くいきません」

シャル
「実際、プリメーラが拘束する前にバインドを鷲掴んで潰したもんね」

ユーリ
「あれにはちょっとビックリしました」

ルシル
「さすが我が娘♪」

――ドゥームプレッシャー／運命の重圧

ユーリ
「魄翼で大きな腕・・・みなさんは怪物の腕と言いますけど、を使って・・・こう、くしゃっと相手を握り潰す攻撃魔法ですぅー」

シャル

「ああんもう、仕草が可愛い　」

ルシル
（普通に恐ろしい）

ユーリ
「？？？」

――サイズディカピテイション／斬首鎌

ユーリ
「魄翼２つを大きな鎌にしての斬撃魔法ですよ。軌道は自在で、連撃も可能です」

シャル
「技名が結構怖いよね」

ルシル
「物理破壊設定だったら名前の通りになっているかもな」

ユーリ
「そ、そんなことしませんからね！」

――ヘカトンケイルフィスト／巨人（ギリシア神話の３巨人の名で、百の手の意）の拳

ユーリ

「ドゥームプレッシャーで使う腕を、砲弾として連続発射する中距離攻撃で、砲撃に位置づけられる魔法です。シールドやバリアの破壊が出来ますぅー」

シャル
「でもジャベリンバッシュと同じで弾き返す事も出来るよね？」

ユーリ
「あ、試してみますかー？」

シャル
「おお、やったらー♪」

ユーリ
「やるですぅー♪」

――アルゴス・ハンドレッドレイ／巨人（ギリシア神話の、全身に百の目を持つ巨人）の百光

ユーリ
「私の勝ちですぅー♪」

シャル
「負けちゃったですぅー♪」

ユーリ
「ま、真似しないでくださーい！」

シャル
「可愛いぃぃーーーー！！　アカン、興奮しすぎて鼻血が出た！」

ルシル
「引くわぁ～」

ユーリ
「だ、大丈夫ですか、シャル！？　わ、私の攻撃の所為ですか！？」

ルシル
「そのアホ自身の所為だから、気にしないでいいよ。さ、紹介を」

ユーリ
「あ、はぁ、では。・・・大きく広げた魄翼の表面・裏面から、１００本の砲撃を全方位へと向けて発射して弾幕を張るという広域攻撃魔法です。炎熱砲撃バージョンのアルゴス・ハンドレットファイアもありますよ」

ルシル
「ユーリに近ければ近いほど当たりやすく、離れていればまず当たらないんだよな」

ユーリ
「はい。離れれば離れるほど、どうしても砲撃間に間隔が空いてしまうので」

シャル
「あー、止まった、止まった」

――ヴェスパーレッドモード

ユーリ
「私が身に纏う戦闘衣装・紫天装束インペリアルローブの色彩が赤へと変わり、素肌に模様、さらには戦闘人格への切り替わり、そして炎熱変換能力を得た状態への換装がこれです。私の核・永遠結晶エグザミアの出力が上がったらこうなります。出来ればもう二度とこの状態では戦いたくありません」

シャル
「それに付いてはもう大丈夫なんでしょ？　ディアーチェ達が居るんだし」

ユーリ
「はいっ♪」

シャル
「あ、ダメだ、また鼻血が出て来た」

――クリムゾンダイブ／紅の潜行

ユーリ
「レッドモード時で発動できる突撃魔法です。魄翼を広げた状態で全身に炎を纏っての突撃。フェニックスのようなものです」

ルシル
「フラムも似たような魔法を使っていたな」

ユーリ
「そうですね。私からフラムに流れたのかもしれません。フラムは知らないようですが」

シャル
「それ、たぶん話さない方が良いかも。フラム、自慢げにしてたし」

ユーリ
「わ、判りました。フラムには内緒にしておきます！」

――フェニックスアロー／不死鳥の矢

ユーリ
「レッドモード時で発動できる射撃魔法です。魄翼から炎の矢を放つ、バリア貫通効果付きの」

ルシル
「ユーリの場合、そう言った効果がなくとも余裕で相手の障壁を貫けそうだよな」

ユーリ
「それはどうでしょうか。魔力による力押しでは通じないものもあると思います」

シャル
「だよね～♪」

ユーリ
「はい♪」

――フェニックスフェザー

ユーリ
「レッドモード時で発動できる広域攻撃魔法です。燃える魄翼を大きく羽ばたかせて、炎の羽根を広域に亘って舞い散らせるんです」

ルシル
「似たような魔法をどこかで見たな。あ、フラムか・・・」

シャル
「でもアレは違うんじゃない？　羽根じゃなくて火の粉だし」

ユーリ
「やっぱり炎熱系の広域系って、似たような魔法が生まれちゃうかもしれませんね～」

シャル
「いやぁ、楽しかったぁ～♪」

ルシル

「楽しんだ分、文字数は前後編合わせて３万４千文字突破だがな」

シャル
「闇の書編と砕け得ぬ闇編を一緒にしたのがまずかったよね」

ルシル
「作者が眼球疲労で目を真っ赤にしながらも書いていたぞ」

シャルシル
「馬鹿だね～」

ユーリ
「そんな気軽でいいんですか・・・！？」

シャル
「いいの、いいの♪」

ルシル
「それではエピソードⅡの魔導紹介はこれにて終了だ。長々と付き合わせてすまなかったな」

シャル
「それじゃあ読者のみなさーん！　エピソードⅢでまたお会いしましょうーーー！　ユーリもほら、手を振って♪」

ユーリ
「うええ！？　またですか！？　あぅ、バ、バイバイです・・・！」

シャル
「バイバーイ♪」

Ｅｐｉｃｏｌイリシアの耳に説教

†††Ｓｉｄｅはやて†††

"闇の書"事件・"砕け得ぬ闇"事件も無事に終わって、今日は４月４日。わたしら八神家は今、本局・特別技能捜査課のオフィスに居る。ついさっきまで特別捜査官として、第３１管理世界デラルーシってゆう世界で魔導犯罪者８人を逮捕、連行、そんで事情聴取を終えたばかり。そんで今は、上司のガアプ一佐への報告書や調書の作成をやってて、「終わったぁ・・・」ようやく終えた。

「お疲れ様です、主はやて」

「うん、おおきにな。リインフォース。いつも手伝ってくれて感謝や♪」

「いいえ。私はあなたのサポートがお仕事ですし。そういう私も慣れてはいないですから、失敗もありますけど・・・」

わたしに与えられた専用デスクには、わたしのデバイスやって登録されてるリインフォースの椅子も備え付けられてる。そんで、リインフォース（正式な局員やないけど制服着用中）が横から助言をしてくれるから、「そんなことあらへんよ。わたし１人やと余計に酷なるし」提出できるレベルの書類が作れる。わたしひとりやと提出できひん。そやからリインフォースの助けはホンマに助かってる。

「お疲れ様、はやて、リインフォース」

わたしと同じように管理局の制服を着たルシル君から労いの言葉を掛けられたから、「ん。ルシル君もお疲れ様や」わたしも、「お疲れ様」リインフォースもそう返す。わたしだけやなくてルシル君たちも書類作成をする。

空間モニターみたいなキーボードの操作はこの3ヵ月の研修で慣れてきたんやけど、書類作成なんて、研修を始めてから3ヵ月経ってもまだまだや。主であるわたしがしっかりせなアカンのに、仕事は遅い、ミスは多い、独りやと何も出来ひん。ひどい三連コンボや。

「ルシル君はもう終わったん・・・？」

「ああ。これから提出だ」

ルシル君は、わたしらの誰よりも書類作成の時間が早くて、シグナムやヴィータ、シャマルの書類作成も手伝う。もちろんわたしのことも手伝ってくれる。その仕事の早さは、先輩方にも引けを取らへん。同じ時期に研修を始めたはずやのに、一歩も二歩も、ううん、十歩くらい引き離されてる。やっぱりわたしが休みん時にも色々と研修を受けてたからやろうなぁ～。

「はやて、リインフォース！　書類できた？」

「共に提出しに行きませんか？」

ヴィータとシャマルに「うんっ」頷き返す。椅子からデスク側に折

り畳んで置いてる車椅子に移って、「私が押しますね」リインフォースに車椅子を押してもらって特別技能捜査課の課長、クー・ガアプ一佐のデスクへ八神家勢揃いで向かう。

「「「「「ガアプ課長。報告書の確認をお願いします！」」」」」

わたしとルシル君、シグナムとヴィータとシャマルは、報告書のデータが入ったディスクを差し出す。ガアプ課長はサラサラな黒のショートヘアを揺らしながら作業中のモニターから顔を上げてくれて、「はい。ご苦労様です」綺麗な空色の瞳をわたしらの差し出したディスクに向けた。

「・・・少しずつだけど作業時間も早くなっているし、凡ミスも少なってきた・・・、良い成長よ」

「「「「「はいっ！」」」」」

ディスクを受け取ってくれたガアプ課長に強く頷いて応える。ガアプ課長がわたしらの報告書に目を通して確認してる中、わたしらはじっと佇んで（わたしだけ車椅子で座ってるけど）待つ。ガアプ課長はただ無言でわたしらの報告書が映るモニターを眺める。

ガアプ課長は優しいけど、仕事となるとやっぱり厳しくて、ミスにはホンマに容赦ない。いくら9歳であっても本気で怒られる。そやけど、「うん。みんなバッチリね。ミスも無し。ご苦労様！」直し無しの一発ＯＫが出てくれた。わたしらみんな、笑顔を向け合って労い合う。

「それじゃあ今日は終業ということで。ご苦労様でした」

「「「「「「お疲れ様でした！　お先に失礼します！」」」」」」

椅子から立ち上って敬礼してくれたガアプ課長にわたしらも敬礼返し。踵を返して、ガアプ課長のデスクから廊下へと続くスライドドアへと向かう。今オフィスに居るんはわたしらとガアプ課長だけ。他の先輩方はお仕事中や。

「おつでーす！」

「「お疲れ様です」」

目の前のドアが開いて、３人の先輩方が入って来た。１人は、テレサ・テレメトリー一等空士。ミルキーホワイトの長い髪をお下げにした、わたしとルシル君と一番歳が近い１２歳。

１人は、エリザヴェータ・テルアウンチェア一等陸尉。翡翠色のロングストレートの髪が目立つ、テルアウンチェアカンパニーってゆう会社のご令嬢さん。そやけど、高圧的な態度やない。まるですずかちゃんやアリサちゃんのような感じやな。わたしらを含めた同課員からは、リーリャ、って呼ばれてる。

そんで最後に、テレジア・エイルプス准空尉。緋色のセミロングの髪をオールバックにしてカチューシャで固定。ご家族や親戚の人たちみんなが管理局員ってすごい家系の生まれ。

「お？　はやて達は上がり？」

「はい、そうです」

八神家の代表としてわたしがテレサ先輩（階級やなくて先輩って付けるように言われたから）に答えた。すると「そっか。お疲れ様～♪　また明日ね～♪」テレサ先輩は、ルシル君がようやる頭なでなでを、わたしとルシル君、ヴィータにしてくれた。テレサ先輩は、どうやらお姉さん振りたいってことらしいって、テレジア准尉が以前そう教えてくれた。

「気を付けて帰りなさい、お疲れ様でした」

テレジア准尉の敬礼に、「お先に失礼します！」わたしらも敬礼返し。そんで最後に「そう言えば、近々ちょっと寂しくなるのよね」リーリャ一尉が陰りのある寂しそうな微笑みを見せてくれた。自分のデスクに向かおうとしてたテレサ先輩が「なんだっけ？」って振り向いて訊いてきた。

「はやてとルシル、それにイリスは、今月から出身世界――第９７管理外世界のプライマリースクールに通うのよ」

テレジア准尉がそう答えると、「イリスもなんだ。そう言えば最近ウキウキしてたけど、・・・そういうこと♪」テレサ先輩がルシル君とわたし、そんでシャルちゃん用のデスクを順繰りに見てニンマリ笑う。同課メンバーのみんなには気付かれてるしなぁ、わたしとルシル君とシャルちゃんの三角関係が。

「あー、そうだったね。毎日顔を合わせていたのにね」

先輩方が残念がってくれるほどにわたしらはこの課に受け入れてもらえて、可愛がってもらろてる。と、「先輩たちは、学校には・・・？」ヴィータが小首を傾げて訊いた。ミッドチルダはもちろん、他の管理世界にも教育機関――学校はある。しかもほぼ小学校から高校までの一貫校。

「あたしは、出身世界（ヴァイゼン）のアタナシオス魔法学院を今年の６月に卒業」

「私は、家庭教師で済ませていたから学生生活は送ってないかな。だから学校に通うのって、少し羨ましい」

「私は、本局のウルスラ魔法教室を１３歳の時に卒業よ」

テレサ先輩は魔法学院出で、リーリャ一尉は家庭教師の英才教育、そんでテレジア准尉は、本局内に設けられてる学校の出身やってことやった。才能とやる気があれば子供の頃から管理局員として働けるけど、学業を疎かにするのもアカンってことで本局内には８つの学習塾のような施設がある。本局から遠ければ遠い世界の出身の子供が、魔法教室に編入することが多いらしい。

「はやて達もそっちで勉強すれば良いのに～」

「すいません、テレサ先輩。友達が待っていてくれますので」

ぶぅーって頬を膨らませるテレサ先輩に微苦笑を浮かべて返すルシル君。すると「なのは達もこっちに編入すればいいのに～」テレサ

先輩がこれまた無茶なことを言うてきた。そやから「馬鹿言ってんじゃないの、テレサ」リーリャ一尉が呆れた。

「まぁそういうわけで、八神チームはこれから休みが増えるから、その分みんなで頑張りましょう」

ガアプ課長がテレサ先輩たちのそう告げると、「はいっ！」先輩たちはビシッと敬礼した。そんでわたしらは改めて挨拶をした後にオフィスを出て、海鳴市へ直通転送が出来るトランスポーターの有る第零技術部へと向かう。

「そうゆうわけやから、これからは一段とシグナム達には苦労かけるけど・・・ごめんな」

廊下を進む中、わたしはシグナム達に謝った。わたしとルシル君が学校で楽しんでる中、シグナム達は変わらずに仕事や。

「いいえ、お気になさらず。航空武装隊としての仕事は、私にとってはいい経験であり鍛練となりますし、新しい発見もありますし」

「あたしも！　良くしてもらってるし、退屈でもないしさ。だから気にしないでよ」

「もちろん私もですよ、はやてちゃん。この癒しの力と知識を役立たせることが出来る。これがどれだけ嬉しいことか♪」

遠慮やなくてホンマに心からそう言うてくれてる。それが解るから

「おおきにな、みんな」わたしは笑顔でお礼を言えた。それからちょう今後のこと――わたしとルシル君が学校に通ってる間のみんなについてに話す。シグナムとヴィータとシャマルは、兼任部署での仕事を。そんでザフィーラは、シャマルと一緒に居ること。

「我が主の指示であれば従いますが、主の護衛は・・・？」

「大丈夫やよ、ザフィーラ。リインフォースも、ルシル君も居るし、な」

わたしの乗る車椅子を押してくれてるリインフォースと、背後に続いて来るルシル君へと目をやる。リインフォースは「この身命を賭してお守りします」って言うてくれて、ルシル君は「はやてはもちろん、リインフォースも俺が守るよ」って微笑んでくれた。

「ま、ルシルが側に居てくれりゃそんなに心配することもないっか」

「ルシル君。はやてちゃんとリインフォースのこと、しっかり守って頂戴ね」

「ああ、任された。だからシャマルもシグナムもヴィータもザフィーラも、安心してくれ」

ルシル君の力強い言葉に、わたしは顔が、胸の奥が熱くなるのを自覚する。シグナム達も安心したって表情やし。わたしら八神家がほのぼのしながら廊下を進んでると、「ちょっとー！　置いてくなんてひど～い！」背後から声を掛けられた。振り向いてみれば、「シ

ャルちゃん！」と「わたし達もー！」アリシアちゃんが居った。
「一緒に帰ろうって思ってオフィスに行ってみれば、すでに帰ったって聞いてさ！」
「まぁ連絡入れておかなかったわたし達も悪いとは思うけど」
「あー、ごめんなぁ、シャルちゃん、アリシアちゃん」
息を切らして駆け寄って来たシャルちゃんの着てる制服は青色。次元航行部の制服やな。砕け得ぬ闇事件解決後からこっち、シャルちゃんはクロノ君の補佐として別の世界へと出張してた。
そんで遅れて早足で来たアリシアちゃんも青制服を着てる。砕け得ぬ闇事件のすぐあとに管理局に入局して、アースラのブリッジスタッフ見習いとして乗艦。そして、フェイトちゃんが将来執務官になるって信じて、執務官補佐の資格を取ろうと勉強中。
そんな2人を乗せたアースラが今日帰って来るとは一応聞いてたけど、オフィスに来るとは思ってもへんかったから・・・って、そこまで思うた時、ルシル君、の存在が脳裏に浮かんで納得。ルシル君に逢いに来たんやなぁ。そやけど負けへんよ。
「とりあえず、おかえり、シャル。アリシアも」
「ただいまー」
「うんっ♪　ただいま、ルシル～　」

満面の笑顔になってルシル君に抱きつこうとしたシャルちゃんやったけど、「これでお前もアースラスタッフではなくなったんだな」ってシグナムがそう言うと、「・・・あ、うん。今日でアースラから卒・業♪」シャルちゃんはちょう寂しげな表情を浮かべた後、それを払うかのようにもう1度笑顔を浮かべ直した。

「この青制服とも今日でお別れ・・・」

「やっぱり寂しい・・・？」

「そりゃね。1年ちょっとだけしか着てなかったけど、なのは達やはやて達と出会った時に着ていた思い出深い制服だから」

アリシアちゃんにそう答えたシャルちゃん。しんみりする中、「その寂しさも、すぐに変わるんじゃないか？」ってルシル君が微笑んだ。わたしも「そうやな。これからは寂しいって思っておられへんほどに忙しなるよ」って続く。学校生活に加えて特別技能捜査課員としての仕事もあるからな。寂しいなんて言っておれへんはずや。

「・・・うんっ、そうだね！　あと数日でわたし達は、なのは達と同じ学校に通うことが出来る！　絶対に楽しいに決まってる！！」

グッと握り拳を作って力説したシャルちゃんが、「は～やっく来～ないっかな～♪　編入日～♪」口ずさみながらスキップしてわたしらの先頭に躍り出ると、「ほら、早く帰ろう！」そのまま第零技術部に着くまでスキップを続けた。

そんなシャルちゃんに続いて廊下を進んで、第零技術部へと到着し

たわたしら。ＺＥＲＯって描かれたスライドドア横の壁に設けられた操作キーに触れたシャルちゃんが「イリスとアリシア、八神家で～す♪」そう名乗る。すると、『いま開けますね～』間延びした口調での返答が。

「今日はクアットロ居るんだ、珍しい」

「そうやなぁ。クアットロさんってまず居らへんもんなぁ」

第零技術部の主、ドクター・ジェイル・スカリエッティさんの娘シスターズは、一応は第零技術部専属の局員やけど、出向・協力要請に応じることもある。特に多いのがクアットロさんや。

「いらっしゃ～い。トランスポーターのご利用かしら～♪　使わせてもらえるように連絡しますねぇ～♪」

管理局の白制服の上にケープマントを羽織ったクアットロさんが応接室のソファに座って、のんびりお茶を嗜んでた。アリシアちゃんが「クアットロ、今日は珍しいね」って、ドクターと連絡を取ってくれてるクアットロさんにそう声を掛けた。

「たまにはドクターの側でゆっくりしたいもの。教官としての仕事も、それなりに楽しんではいますけどぉ」

クアットロさんは、情報操作や作戦指揮に電子戦といった方向では優秀な局員さんで、よう教育隊の方へと出向して未来の指揮官候補生を教育してる。

「あ、ウーノ姉様？　イリスちゃん達がトランスポーターを使わせてほしいとのことですけどぉ・・・」

『判ったわ。ドクターも私も手が離せないから、あなたがご案内してあげて』

サウンドオンリーって表示されてるモニターから聞こえてきたウーノさんの返答。続いて『騎士イリス、そして八神家の諸君とアリシア君。顔を出せなくてすまないね。気を付けて帰ってくれたまえ』ドクターからの気遣いの言葉が届いた。お礼を言う前に通信が切れる。余程忙しいんやろうな。

「と、いうわけで、このクアットロが責任を以ってご案内、座標設定をしますぅ～」

クアットロさんが眼鏡（度の入ってへん伊達らしい）をキラッ☆と光らせながらソファから立ち上がって、応接室の奥のスライドドアへと歩き出したからわたしらも続く。そんで大型トランスポーターが置かれてある部屋へ。

「じゃあ、はやて。明日は、すずかの家に集合ね♪」

「うん、了解や。制服用意で♪」

シャルちゃんと笑顔で親指を立て合って確認する。明日、わたしらチーム海鳴はすずかちゃんの家にお呼ばれして、わたしとルシル君

とシャルちゃんの制服姿お披露目会ってゆう名目の元に集合する予定や。訓練校卒業すると、なのはちゃん達は４月から結構忙しなるからなぁ。一応は嘱託として融通が効くらしいけど。

「ルシル。あなたもちゃんと制服を持って来てね」

「どうせ明後日から登校なんだ。その時でいいじゃないか、写真撮りなんて」

「ダーメ。始業式の後、なのは達はミッドにすぐ行っちゃうし。ゆっくり集まれるのは明日だけになるかもだもん！」

「・・・ああ、判った」

ルシル君が渋々と言った感じで応じると、「んっ♪　じゃあ、はやて、みんな。また明日ね♪」まずはシャルちゃんと、「バイバーイ♪」アリシアちゃんがトランスポーターに入って、「それじゃ転送するわねぇ～」クアットロさんが操作。手を振るシャルちゃんに手を振り返して、転送されたんを見送った。

「はやてちゃんとルシル君、それにイリスちゃんは、明後日から学校なのねぇ～」

「はい、みんな同じ学校です」

「そう。それじゃああなた達やなのはちゃん達ともしばらく会えない日が続くのかしらねぇん。っと、設定完了、ポチッとな♪　はい、

どーぞ」

「そうなりますね。シグナムとヴィータ、シャマルとザフィーラはこれまで通りですけど」

八神宅直通転送の準備が終わったところでわたしらもトランスポーターの中へ移動しつつ、シグナム達の利用がこれからも同じように続くことを伝えると、「お世話になります」シグナム達がクアットロさんに敬礼した。

「まぁ私も空けることが多いからぁ、そんなに会うこともないけど。運良く会えたらお茶休みに付き合ってもらいますねぇ♪」

小さく手を振ってくれるクアットロさんにわたしらも手を振り返した。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒イリス†††

４月５日の日曜日。待ちに待った学校生活を明日に控えた今日、わたし達はすずかの家に来ていて、テラスでのんびり紅茶とクッキーに舌鼓を打ってる。そんな中、「おー、よしよし」ルシルと、「わはっ、くすぐってぇって！」ヴィータ、それに「舌ざらざらしてるぅー　」アリシアが、猫じゃらしのおもちゃを持って、すずかの家で飼われてる１０匹以上の猫と戯れてる。

「ルシル君って猫が好きだったんだね♪」

「ルシルと出会ってから今日まで、アイツがすずかん家には来たことなかったから気付かなかったわね」

「そう言えば、ルシル君、私の家に来るのって初めてだっけ・・・？」

幸せそうに猫たちと戯れるルシルは、基本的にはやての家か本局かスーパーの三択にしか居ないし、行こうとしない。それもこれも本局での研修の忙しさから。ルシルはわたし達の知らないところで色々とやってるみたい。

以前、本局の廊下を歩いてる時、ルシルが内務調査部の調査官（エリート）と歩いてるのを見かけた。あとに調査部・査察課に所属してるロッサに、ルシルが調査部のどっかへ研修してるのかどうかを訊いてみたら・・・

――イリスの頼みでも、それだけは話せないよ。知っているだろ？調査部の査察課・監察課・監査課に所属する局員は口の堅さが重要になってくるんだ――

そうは言ったけど、ロッサはやっぱ優しい。遠回しにルシルが調査部に出入りしてるってことを伝えてくれた。しかも、査察課だけじゃなくて他の分課にも研修に出向いてるってことも伝えてくれた。査察官・監察官・監査官、３つの資格を持つことで得られる調査官っていう肩書は、執務官以上の超難関試験をパスしないと得られない。そんな調査官になるための研修に行ってるなんて、ルシルの体が壊れないかホントに心配だよ。

「あー、堪能したぁ♪」

「ルシル君、ホンマに猫が好きなんやなぁ」

「猫こそ至高の動物だと俺は思っている。気分屋だが、それに勝る可愛らしさがある！」

わたしの心配をよそにグッと握り拳を作って力説するルシルに、わたしもなのは達も呆けちゃった。椅子に腰かけてティーカップに口を付けたルシルに「じゃあ、あんたは犬とかダメなわけ？」って、犬を数頭飼ってるアリサからの問い。

「犬は犬で良い。だが、どちらと言えば猫派だな。犬には少し嫌な思い出が・・・」

「フェンリルさんのこともあるんかな・・・？」

仔猫と戯れるヴィータを携帯電話のカメラでピロリン♪と撮影しながらはやてがそんなことを言うと、「アイツも含めて、かな」ルシルがそう返した。フェンリル。どこか懐かしい響きのある名前だけど、そこまで感情の揺らぎは生まれなかった。

「フェンリルさんって・・・？」

「ルシル君の使い魔やよ、なのはちゃん。ザフィーラやアルフと同じで狼の」

「アルフと同じように主ベッタリの娘でさ。実力は申し分ないんだ

けど、ベッタリし過ぎで戦闘中のちょっと危ない時でも関わらず抱きついてきたりとかしてな～」

懐かしむように語るルシル。引き合いに出されたアルフが「さすがのあたしも戦闘中に抱きつく真似はしないねぇ」って苦笑。猫と頬ずりし合ってるアリシアを、携帯電話の動画撮影モードで撮影しながら「今はどこに居るの？」ってフェイトが訊いた。

「創世結界の説明は以前したよな？　俺の精神世界に展開されている４つの世界のことを。そのうちの１つに、英雄の居館ヴァルハラというのがある。そこには何百という使い魔が居て、フェンリルやアンゲルス・アポストルスはその内の１体なんだが・・・。フェンリルだけは俺の正式な使い魔だ」

そう。ルシルはまず間違いなく次元世界で一番の使い魔持ち。魔力消費量によってはルシル以上の実力を有した使い魔――"エインヘリヤル"っていうのを召喚できるって話。どんだけ反則なんだって話だよね。

「それじゃそろそろ、着替えようか」

今日すずかの家に集まった目的、制服姿での写真撮影を実行することに。まずはわたしたち女子組からで、すずかの私室で「うっふっふ～♪」制服に着替える。いま室内に居るのはわたし、部屋の主のすずか、そしてなのは、アリサ、フェイト、アリシア、そしてはやて。それぞれが着替え始める。

まずは、着ているパーカーとシャツとプリーツスカートを脱いで、

キャミソールとショーツ姿になる。そ・し・て「おお！　待ちに待った制服〜♪」制服が収められた専用のケースの蓋を開けて、目の前に制服を掲げて見せる。

「待ちに待った、って。シャルさぁ、制服が届いたらすぐに試着とか済ませたじゃん」

同じようにキャミソールとショーツっていう下着姿になってるアリシアからそんなツッコみが入るけど、「嬉しいことには何度喜んでも良いんだよぉ〜♪」下手に反論することなくワンピースを着て、次に上着に袖を通す。上着の内に入った後ろ髪を両手でファサッと外に出す。そして最後にリボンを結ぶ。スタンドミラーの前に移動して、その前でくるっ☆と一回転。フワリと広がるスカートとわたしの長い髪。

「〜〜〜〜〜〜〜っ　」

「シャル。あんた、鏡見てニタニタ笑うの、学校じゃしない方が良いわよ？」

気分が最高潮なわたしに向かって水を差してくるアリサ。判ってるよ、学校じゃきちんとするもん。制服姿のわたし自身に見惚れるのは今日で最後にするもん。ていうか、「嬉しいんだからしょうがないじゃん」だってば。何度も言わすな〜。

「うん。シャルちゃん。良く似合ってるよ。まるで以前から着てるみたい」

「でしょ♪　まぁわたしもそんな風に感じてるんだよね。なんかこの学校の制服、初めて着る気がしないっていうかさ」

両腕を広げた上で全身を見る。すると着替え終えてた「そりゃ初めてじゃないし」アリサと、「２週間前にも家で着てたし」アリシアがポツリと漏らした。仏の顔をも三度、って知ってるかな、かな。わたしとアリサとアリシアの３人で含み笑いをし合っていると、「よいしょ、っと。ふぅ」はやてが一息吐いたのが聞こえたから、はやてに目を移す。

「はやてちゃん。本当に着替え、手伝わなくていいの・・・？」

「着替えだけじゃなくて手伝えることがあればなんでも言ってね」

「うん。遠慮とかそんなの気にしないでいいから」

「おおきにな、すずかちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん♪」

なんだろうね。あっちとこっちじゃ空気が全っ然違うよ。あのほのぼのさ。そんななのは達を見てると、「でも、ええんよ」はやてが首を横に振った。

「確かにこれからは、みんなと一緒に同じ学校に通えるけど、どこまでも一緒とはいかへんやろ？　そん時にひとりでも着替えとか色々出来るようになっとらなアカン」

それははやてなりの覚悟だった。自分で出来ることは自分で成す。それがはやての意思ならわたし達は尊重すべきだって話になったんだけど。

「でも、もし人の手を借りやなアカンような事態になったら・・・手伝ってもらえるか？」

「「「「「もちろんっ！」」」」」

助けが必要ならわたし達ははやての側に集まろう。乙女の友情を新たに厚く固めたところで、「お？　これってルシルの制服・・・？」わたしの目はルシルの制服が入ってるケースへ一直線。

「そうやよ。・・・って、何しとんの？　シャルちゃん」

「え、何って・・・えへへへ　　ルシルの制服に、わたしの香りを残そうと思って　」

そそくさと自分の制服を脱いで、ルシル――男の子用の制服に着替える。そんな中でわたしに突き刺さる冷めた視線が3つ。内2つはアリサとアリシアだ。わたし達3人はどこか似ているけど、恋愛が関わってくるとわたしだけアウェーになっちゃったりする。ま、気にしないけどね。最後にはやて。わたしの最大のライバル。冷ややかっていうより嫉妬っぽいかな。

「よいしょっと。どれ、わたしも男の子に見えたりする？」

わたしの制服のリボンを使って後ろ髪をうなじで一纏めにしたうえで制服の内側に入れる。真正面から見ればショートヘアに見えるはず。まずは「とりあえず脱ごな、シャルちゃん♪」笑顔だけど笑顔じゃない表情を浮かべるはやての第一声からスタート。

「ルシル君、鋭いたからバレちゃうよ・・・？」

「あと男の子には見えないかも」

「怒られちゃう前に脱いだ方が良いよ」

なのは、フェイト、すずかと続いた。反応はイマイチかぁ。とここで、「逆はどうだろう・・・？」と考えてみる。ここでさっきまでわたしにアウェー感を叩き付けてたアリシアがニヤリと笑う。でも残念なのがアリサの反応。以前までならノッて来てくれたのに、「マジで怒られるわよ」って呆れた。

「ま、とにかく。『あ、ルシルー？　わたし達の着替え、終わったから。今度はルシルの番ね～♪』」

『じゃあ、そのまま俺の制服も持って来てくれ。こっちの木陰で着替えるから』

おおっと、早速躓きそうな予感。わたしとルシルの思念通話がみんなにも繋げてるからさらに、ハイ終わったぁ～、って空気濃度が上昇。わたしは『木陰に隠れるって言っても一応、女の子のすぐ近くなんだからさ』あくまでこっちで着替えるように伝える。

『何を企んでる？』

疑われ出したらもう危険域に突入。だから『了解。持って行きまーす』そう答えるしかなく。渋々ケースにわたしの制服を畳んでしまい込む。すると当然「それでも実行するアンタには頭が下がるわ」アリサが肩を竦めてそう言った。

「一度決めたらやるっ！　たとえ怒られようとも！　そうだよね、アリシア！」

「うんっ！」

「付き合ってらんないわ。あたし達は先に行くわよ」

「シャルちゃん、庇いきれへんと思うからそこんところは覚悟してな」

「たぶんここが引き際だと思うよ、シャルちゃん、アリシアちゃん」

「アリシア、シャル・・・、また生きて会おうね？」

「・・・想像するだけにしておいた方が身のためだと思う」

呆れて出てくアリサ達に続いてわたし達も部屋を出て、そこで一旦お別れ。アリサ達がテラスへ続く廊下へと歩き去ってく中、わたしとアリシアはルシルが来る廊下とは反対側へと歩いて、近くの角を

曲がって待機。

「「来た」」

待つこと少し。ルシルがやって来たと思えば、ファリンも一緒だった。すずかもさすがにルシルひとりを自分の部屋に向かわせないよね。わたしなら常時開放なんだけど。

「それではルシル君の制服を取って来ますから、少し待っていてくださいね」

「はい、お願いします」

ファリンだけがすずかの部屋の中に入って行った。その間、ルシルは廊下で待機。そしてファリンが「お待たせしましたー♪」そう言って部屋の中からケースを持って出て来た。アレ、わたしの制服を入れたやつだ。

「ルシル君はこっちの部屋での着替えをお願いしますー♪」

ファリンがルシルを連れてこっちに来た。慌ててどこか別の場所に隠れようとして、「シャル、こっち。この部屋、開くよ」アリシアに手を引っ張られて入った部屋。そこは明らかに「すずかの家族の誰かの部屋だよね・・・？」だった。

応接室というには家具が揃いすぎてて、鏡台があるってことは忍さんかすずかのお母さんの部屋かも。と、「ここが私の部屋です」ドアの向こうからそんなことを言うファリンの声が。アリシアとほぼ

同時にベッド下へとヘッドスライディング。直後、ガチャっと扉が開いた音がした。

「どうぞー♪」

「お邪魔します」

「はい♪・・・お着替え、お手伝いしましょうか？」

「い、いいえ。ただ着替えるだけですから」

「そうですかー。・・・・・」

「・・・・」

「・・・・」

「・・・あの」

「？？？」

「見られていると着替えられないんですが・・・」

「女の子同士だから気にしないでください♪」

「俺、男ですからっ（涙）！　ていうか、知ってますよね！？」

「「ぷふっ」」

ルシルとファリンの会話に思わず吹き出しちゃった。慌てて口を両手で覆って、気付かれちゃったか聞き耳を立てるけど、「あはは♪」ファリンの笑い声に救われたみたいで、「別に見ても面白いものなんてないですよ？」ルシルにも気付かれなかったみたい。

ベッド下から気付かれない程度に顔を出してルシルとファリンを見る。ルシルは、ファリンからケースを受け取ると床に置いて蓋を開けた。そして沈黙。ファリンが「どうかしましたー？」って訊きながら、床に置いてあるケースの入った制服を手に取って「あれ？」そう漏らした。

「女の子の制服・・・？」

「ファリンさん。間違えました？」

「い、いいえ！　中身のあったケースはそれだけで・・・」

「そう、ですか・・・。シャルかアリシアのどっちかだな。あの２人だけ姿を見せてなかったし。・・・俺の制服が無くて、女子物の制服が一着残っている。そのことから導き出される犯人は・・・シャル。共犯がアリシアだな」

即バレだった。ファリンが「どうしてですか？」って訊くと、「俺の制服を着ようと考えるのはシャルしか考えられないから」なんて迷いなく言い切った。

「そうですかー。・・・じゃあ、その制服お召しになります？」

「はい？」

「遠慮しないでくださーい。さぁ、お着替えしましょう♪」

「ファ、ファリンさん・・・？　もしもーし。目が、目が、シャルやアリシアと同色に・・・！」

「なんででしょう。以前、クリスマスパーティでルシル君をお着替えさせてからというもの、ルシル君を着せ替えしたくて、したくてしょうがないんです」

ファリンが手をわきわき動かしながらルシルににじり寄って行って、ルシルはそれに合わせて後退。ルシルが「やめよう、ファリンさん。お互いに良いことにはならないかと」やんわり非難。するとファリンが「やっぱりダメですか～？」若干涙声で訊き返すものだから、「ぅく、そんな目で見られても・・・」ルシルの強かったはずの意思が揺らぎ始めた。

『ルシルって、泣きそうな女の人には弱いよね』

『わたしが泣きそうでも平気みたいだけど？』

『シャルはほら、女の子って見られて――いひゃいっ！？』

アリシアのお尻を軽く抓ると、アリシアもわたしのお尻を抓ってき

た。アリシアとお尻や頬を抓り合ってると、「ああもう！　判りました！　着ればいいんでしょう！」ルシルが折れたことが判って抓り合戦を中断。

「ありがとうございますー♪」

「ここだけですからね。はぁ。女装の呪いはいつになったら解けるんだろうなぁ～・・・」

ぶつくさ言いながら着替えを始めた。とは言っても今着てる服を脱ぐことなくわたしの制服を上から重ね着するだけなんだけど。だけどそれで十分。ファリンが、上着の内に挟まってるルシルの長髪を出したかと思えば、ヘアゴムを外して「櫛、櫛♪」鏡台の上に置いてある櫛を手に取って、サラサラ流れる髪のブラッシングを始めた。

『やっぱりルシルって女の子だよね～』

『ユーノやクロノにもやってみたくなったんだけど』

ふと、そう思い至ったわたし。ユーノもなかなかに可愛い顔してるし、クロノも14歳の割にまだ童顔だから女装してもおかしくないと思う。アリシアも『それいいね！　クロノにはやってみたい！』話にノッてきてくれた。クロノが寝てる間にもやってしまおうか。ユーノも、なのはを刺客として送り込めば・・・ふふふ。

「ファリン。すずかお嬢様たちを放ってあなたは一体なにをし――っ！？」

ここにノエルさん降臨。そして女子の制服を着てるルシルと、そんなルシルの髪をブラッシングしながら三つ編みやツインテール、サイドアップ、サイドポニーって色々な髪型にセットしてる妹のファリンを見て絶句するノエルさん。この間、わたしは携帯電話で写真撮りまくり。

「ふぁ、ファリン！！」

「あぅー、ごめんなさーい、おねーさまーーーーー！！」

「申し訳ありません、ルシリオン様！　妹がとんだご無礼を！」

「いいんです、本当に。ファリンさんは悪くありません。悪いのは・・・・」

――闇よ誘え、汝の宵手（カムエル）――

「「へ・・・？　きゃあ！？」」

いきなり両足首を何かに掴まれたかと思えば思いっきり引っ張られて、気が付けば室内で逆さまの宙吊り状態に。わたし達をベッド下から引っ張り出したのは、影で出来た複数の触手――カムエルだってことがここで判った。わたしは男子の制服だから良いけど、「スカートが捲れるぅ！」アリシアはスカートが捲れることで、ルシルにショーツが見えないように必死に押さえてる。

「シャル様、アリシア様！？」

「えっ、いつから居たんですか！？」

驚くノエルさんとファリン。そして「よう。俺の制服を着て、さらにはファリンさんの部屋で何をしている？　ん？」青筋を浮かべて仁王立ちしてるルシルから猛烈な怒りの視線が突き刺さってくる。

「ルシル。ストレートにカチューシャ、超似合ってる　」

「制服もすごく似合ってて可愛いよ？」

女子の制服に、すずかのようなヘアスタイルになってるルシルに率直な感想を送ると、ルシルは「ほっとけ（涙）！！」ガクッと四つん這いに崩れ落ちた。それに倣うかのように「きゃんっ？」わたし達も床に落下。ルシルのせめてもの優しさか、頭からじゃなくてお尻からだった。でも「お尻痛ぁぁぁ～～～！」いんだけど。

「俺の、男としての尊厳を軽んじる君らの、その耳にどれだけ説教をかましても意味がないことを今さらに理解したよ。・・・我が手に携えしは確かなる幻想」

幽鬼のようにふらりと立ち上ったルシルが詠唱。それは複製した魔法の発動・武器の具現を行う際の呪文。ルシルがフィンガースナップ――指パッチンをする仕草を取った。

「目には目を、歯には歯を。変身には変身を。ディゾルディネ・カ

ンビャメント」

ルシルが指をパチンと鳴らすと、「わっ？」わたしの体を覆う煙。この魔法は、対象の衣服を強制的に別物へ変えるっていうアノ・・・。煙はすぐに消えて、どんな服に変身させられたのかと思って自分の格好を見てみれば・・・

「「？？？」」

「シャルちゃん、アリシアちゃん、とても可愛いです♪」

ファリンからの感想は上々。ノエルさんはなんか微妙そう。その微妙さの正体を、アリシアの格好を見ることで理解した。

「「なにこれぇぇーーーーー！！」」

豚だった。デフォルメされた豚の全体着ぐるみ。楕円形の胴体にちょことんと出た手足と耳と、くるっと曲がった尻尾。顔だけを豚の鼻の下に開いた穴から出す形。さらに歩く度に、ブヒブヒ、って足音と、どういう仕組なのか、豚、って文字が実体化しては消えてく。

「なんたる・・・なんたる屈辱！」

「わたし太ってないよ！？　シャルはどうか知んないけど！」

「うおーい！　わたしだって太ってねぇよ！？」

見よ、このスラリとした綺麗な・・・豚の格好を・・・。今度はわたしとアリシアの2人でガクッと四つん這いに崩れ落ちた。しかも気が付けばルシルはわたしが着てたはずの男子用制服に着替えてるし。

「今日1日、その格好な」

「「いやぁぁぁぁーーーーーー!!」」

本当にその日1日、こんな女の子にとって最大級の屈辱な格好で過ごすことになった。だって脱げないようになってるんだもん。ひどいよ・・・。この悲しみをなのは達に向けたんだけど・・・

「まぁしょうがないよね・・・。引き際を間違えちゃったんだから・・・」

「だから想像だけにしておけば良いって言ったのに・・・」

「庇いきれへん言うたよ？　わたし」

「生きて逢えただけで儲けものだと思う」

「ま、自業自得よね」

「「うわぁぁぁぁーーーーーん!!（泣）」」

わはーい、見捨てられた～ｏｒｚ

Ｅｐｉｃｏ２シャルシルを以って集まる

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

４月６日。とうとうこの日がやってきてしまった。聖祥小学校への編入。先の次元世界では、大学卒業済みという嬉しいステータスがあったから学校に通うことはなかったが、今回は残念ながらそんな都合の良いステータスを得られることはなかった。

（別段、学校に通うことが嫌なわけじゃないが・・・正直、めんどい）

この約２万年の中、小・中・高と学校に通った回数は３ケタ近い。いい加減飽きた。小さく溜息を吐きながら私室で制服の上着の袖に腕を通した後、上着の内側に入った後ろ髪を両手で掻き上げて出す。そして櫛で梳く。今日も枝毛なし、っと。うなじ付近で髪をヘアゴムで束ねつつ、「そろそろ切り頃かなぁ・・・」一束となった後ろ髪を手に取って眺める。

「ルシルくーん。はやてちゃんの準備、終わったわよ～！」

「ああ、判った！　いま行くー！」

シャマルに応え、新品の聖祥小指定の鞄を手に取って自室を後にする。リビングには、俺と同じように聖祥小の制服を着たはやてと、シャマル達みんなが勢揃い。シグナムとヴィータとシャマルはすで

に管理局員の制服を着用していて、ザフィーラはアルフから教わった仔犬フォームでシャマルの側に居る。

「やっぱり何度見ても、はやてちゃん、ルシル君。制服姿がとっても似合うわ♪」

「おおきに♪」「ありがとう」

シャマルの褒め言葉に礼を返していると、ピンポーン♪と呼び鈴が鳴った。はやてが「お？　すずかちゃん達やな」そう言うと、「私が出ます」シグナムが玄関へと向かう。そして「おはよう。よく来てくれた、お前たち」シグナムの出迎えの声が聞こえ、「おはよう！」「おはようございます！」三者三様の挨拶返しが聞こえた。

「みんなー、どうぞ上がってー！」

「「「「「お邪魔しまーす！」」」」」

そう言ってなのは達がリビングへとやって来た。彼女たちはもちろん制服姿。そんな彼女たちと朝の挨拶を交わす中、「わぁ、リインフォースさん、綺麗～♪」なのはと、「お化粧したんですね♪」すずかが、化粧が施されたリインフォースの顔を見て感嘆の声を上げた。

今のリインフォースは、黒のAラインの膝丈ワンピースに白のジャケット、首には真珠のネックレスという服装だ。そして彼女の唇には綺麗な薄い桃色。口紅によるものだ。頬も、チークを使って染めてある。リインフォースは色白だから薄い化粧で十分だった。

「ありがとう。ルシルがしてくれたんだ。似合っているのなら良かったよ」

「「「「え！？」」」」

「え、なに、ルシル、あんたがリインフォースにメイクしたの！？」

「女の子のわたし達より女子力高ぁー！」

なのは達、そしてアリサとアリシアからは特に強い驚きの目を向けられた。俺は、以前みんなに伝えた先祖から魔法等々を代々受け継いで来ているという大嘘に、「技術の継承だよ。その中には女性特有の技術もある」と付け足しておく。

「それがメイクってわけね」

「なるほど。この技術があれば、ルシルも立派な女の子に女装できるね♪」

「せんわ」

アリシアにツッコみを入れる。さて。何故、俺がこんなメイク技術なんて持っているのかというと、"界律の守護神テスタメント"としての契約の時、何度か性転換などという不名誉を受けたことがある。召喚と同時に女性、または女子として肉体改造を受けて・・・。ダメだ、思い出したら泣きそうになってきた。

「私が主はやてとルシルの保護者として学校へ行かなくてはならないから。ノーメイクにラフな格好とはいかないだろう」

リインフォースが両手を握り拳にして、うむ、と強く頷いた。その表情には僅かばかりの緊張がある。登校初日の今日、まずは保護者同伴となる。俺とはやての保護者は、リインフォース。石田先生に頼もうかとしたが、リインフォースが自ら買って出た。

――仕事でお役に立てない今、家庭でお役に立ちたいのです。ならば、保護者同伴につきましては是非、この私を！――

そう言うわけで、リインフォースが俺とはやての保護者役となった。一応、石田先生にも連絡してみた。仮にもこれまではやてを面倒見てきた彼女だ。すると石田先生は、こう言った。

――お受けしたい気持ちでいっぱいですが、リインフォースさんにお願いするのが筋なのでしょう――

とのこと。家族が居るのなら家族に任せるのが良い、という話だ。とまぁそんな話を終えた後、「それじゃそろそろ行こうか」俺がそう告げると、「そうね。ちょっと早いかもだけど、これ以上リンディさんを待たせるのもどうかと思うし」アリサが呟いた。リンディさん（公私混同しないように敬称は変える）が、シャルの保護者代理だ。

「それじゃ、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、行って

くるな」

これから本局へ向かうシグナム達に挨拶するはやて。俺も「行ってくるよ」と挨拶する。

「気を付けてね、はやて。それとルシル」

「いってらっしゃいませ、我が主、ルシリオン」

「ルシリオン。主はやてをしっかりとお守りしろ」

「はやてちゃん、ルシル君。気を付けてね。いじめっ子とか居たら教えてね。私・・・頑張っちゃいますから♪」

シャマルが右手を頬に添えてニコリと微笑みながらそんなことを言うものだから俺たち全員が「なにを？」と若干声を震わせながら訊き返したんだが、「ふふ、色々とです♪」シャマルは濁した。とりあえず聖祥小にいじめっ子が居ないことを祈ろう。その子のためにも。というか、そうならないように俺が居るわけだが。

「えと、大丈夫よ。うちの学校に、いじめなんてする陰湿な生徒っていないし」

「「そうだよね～♪」」

アリサが胸を張ってそう言うと、なのはとすずかがニヤニヤしながらアリサを両側からサンド。すると「ぅぐ！」アリサがたじろいだ。

意味が解らず小首を傾げるはやてとフェイトとアリシア、そしてシャル。ヴィータとシャマルも似た感じだな。

（確か、アリサのイジメ紛いの悪戯がキッカケだったか？　なのは達の出会いは）

「そのことについてはもう、学校の怪談ん時に謝って完全・完璧に済んだ話でしょうが！」

「「あはは、ごめーん♪」」

うがー、と両腕を振り上げたアリサに、笑いながら謝るなのはとすずか。事情を知らないはやて達がなんの話なのかと根掘り葉掘り訊こうとしたところで、「ほら、行くわよ！」アリサがズンズンと大股で玄関へと向かったため、「いってきまーす！」はやてとリインフォース、それになのは達がシグナム達に挨拶して玄関へ。

「じゃあ行ってくるよ。シグナム達も気を付けてな」

シグナム達の「いってらっしゃい」を背に俺も玄関から外へ。外にはアリサが1人待っていてくれて、「この狭い道じゃうちの車、入って来られないからさ。悪いわね、ちょっと歩いてもらうけど」そう言って、先に行かせたのか前を行くはやて達に追いつくために駆けだした。

「車で送ってもらうってこと自体に感謝しているよ。さすがにリインフォースとリンディさんを、聖祥小の通学バスに乗せるわけには

いかないからな」

タクシー・バス代も馬鹿にならんし。そういうわけで昨日、すずかの家でチーム海鳴・聖祥小制服バージョンの集合写真を撮り終えた後で、アリサからバニングス家のリムジンを出そうと提案が。登校初日がリムジンで、というのはどうかと思ったが、他の生徒が集まる前に登校すれば目立たないだろうという話になり、こうして早い時間で登校することに。

「おはようございます、みなさま」

リムジン側に控えていた初老の男性――バニングス家の執事兼ドライバーの鮫島さんがドアを開け、恭しくはやて達に挨拶をした。はやて達が「おはようございます！」と挨拶を返し、まずリインフォースがはやてを横抱きに抱え上げ車内へ。

そして車外へ戻って来て、車椅子を押して鮫島さんと一緒にトランクへ移動し、畳んだ車椅子を鮫島さんと一緒に持ち上げてトランクにしまうと、リインフォースはなのは達に続いて車内へと戻って行った。そして俺も鮫島さんと「おはようございます」と挨拶を交わす。

「鮫島。すぐに出るわ」

「かしこまりました」

アリサに続いて最後に俺が乗り込むと、「おはよう、ルシリオン君」フォーマルスーツを着込んだリンディさんから挨拶を貰った。

「おはようございます、リンディさん」

挨拶を返しながら、四方の内壁に沿うように設けられたソファに座ろうとしたら、「ルシル君」はやてと、「ルシル」シャルが、自分の隣が空いているとその空席をポンポンと叩いて示した。選択によっては学校に着くまでの間、車内の空気が悪くなるのは必至。

「（ま、普通は・・・）はやての隣だよな」

「そうやんな♪」「チェッ」

嬉しそうに笑みを浮かべるはやてと、不満そうに頬を膨らませるシャル。と、「シャルちゃん。私と代わろう」なのはが俺の左隣から退き、シャルに席を譲ろうとした。すると当然「ありがとー　」シャルは勢いよく立ち上がってなのはに抱きついた。

とその時、信号なのか車が停車するためにブレーキ。静かな制動だったが、シャルに勢いよく抱きつかれていたこともあり、なのはは彼女を支えきれずに「わっ！？」２人揃って仲良く転倒。そして「あいたーっ！？」なのははフェイトと、シャルはアリシアと頭をごっつんこ。４人とも「～～～～～っ！」額を押さえて蹲った。

「まったく。何をしているんだか」

「みんな大丈夫・・・？」

「もう。イリス、余所様の車内なのだからはしゃいではダメよ？」

「すごい光景を見た気がするわ」

「ゴチッってホンマにすごい音したけど・・・、大丈夫か？」

俺が真っ先に呆れて、すずか、リンディさん、アリサ、はやてと、目の端に涙を浮かべているシャル達に気遣いの声を掛ける。シャル達は「大丈夫・・・」と応え、シャルは俺の左隣へと座り、なのははリンディさんの隣に座り、フェイトとアリシアは姉妹仲良く「痛かったね」とお互いの赤くなった額を撫で合った。

「――そうそう。はやてさん、ルシリオン君。話すのが遅れたけど、イリスを含めたあなた達のクラスは、４年２組になりました」

リンディさんからそう伝えられると、「別のクラスになっちゃったね、シャルちゃん達・・・」なのはがガックリと肩を落とした。フェイト達も「一緒のクラスが良かったね」と、俺たち３人と別々のクラスになったことに落ち込んでくれていた。

「ごめんなさいね。私も出来るだけ、３人をなのはさん達と同じクラスにしてあげたかったのだけれど・・・」

「いいえ。ルシル君とシャルちゃんが居ってくれるだけで、わたしは十分です♪」

「俺も。はやてを独りにしないでいただけただけで十分です」

なのは達と同じクラスに編入させてあげられなかった、と頭を下げて謝るリンディさんに、はやてと俺は非難ではなく感謝を返した。リンディさんの働きが無かったら、俺とはやてがバラバラになってしまうようなことがあったかもしれない。さすがにそれは冗談じゃ済まされない。

「わたしは、ルシルと一緒になれたことだけでも満足ですぅ～　」

そう言って俺の左腕に抱きつくシャル。負けじと「シャルちゃんは居らんでも良かったかも」なんてはやてが挑発しながら俺の右腕に抱きついた。もう胃が痛くなってきた。俺にとっての救いは、アリシアが居ないこと。あの子まで同じクラスだったら、卒業するまでに絶対に胃関連の病で入院する。

「ありがとう、はやてさん、ルシリオン君。あ、でもなのはさん達のクラス、４年１組とはお隣で、合同授業もたくさんあるみたいだから。そうよね・・・？」

「あ、はいっ。２クラス合同で体育とか色々な授業をすることもあるから、その時は一緒にお勉強しようね、シャルちゃん、はやてちゃん、ルシル君♪」

「「うんっ♪」」

「ああ。その時はよろしく頼むよ」

それから学校に着くまでの間、休み時間は俺たちのクラスに逢いに

行くとか、昼食は屋上に集合とか、学校での俺たちの生活基盤を決める話し合いをした。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

時刻は７時５０分。これから３年間と通う聖祥小学校に到着。校門脇に停車したリムジンから降りて、正面玄関へと向かってみんなで歩いていると、「あーら、アリサさん。今日はリムジンで御登校とは。良い御身分ですわね」正しくお嬢様然とした口調な女の子の声が背後から聞こえてきた。なんかアイルを思い出す。

「朝からヤな奴に絡まれちゃったわね。なんの用よ？　木花咲耶・・・！」

アリサが溜息ひとつ吐いて、やれやれ、って言った風に振り返った。わたし達もアリサとほぼ同時に後ろに振り返る。そこに立っていたのは、チョココロネ（わたしは生クリーム派）みたく螺旋状に巻いてある茶色のロングヘアをポニーテールにした女の子が居た。アリサに、さくや、って呼ばれた子が「あ、あら？　はやてさん。それに・・ルシルさんも」はやてとルシルの存在に気付いて、２人の名前を呼んだ。

（この子、どっかで会ったかな・・・？　なのは達じゃないにしろどこか懐かしい・・・？）

以前までなら記憶のフラッシュバックで感情をコントロール出来なくかったけど、今はわたしの前世――シャルロッテ様の覚醒によっ

てフラッシュバックは起きなくなってる。だから確かめようがないけど、でも・・・会ったことがある気がする。

「咲耶ちゃんや。久しぶり～♪」

「久しぶり、咲耶。木花さ・・・結さんからもう聞いているかもしれないけど、今日から同学年だ。よろしく頼むよ」

「いえ。こちらこそよろしくお願いしますわ　」

ん？　なに、あの笑顔。アレは完全に恋する乙女の顔。ただでさえ、はやて、っていうライバルが居る中で、さらなるライバルの参戦など認めてなるものか。はやては一体どんな顔をしてるのかな、なんて思って見てみると、「こちらこそよろしくな、咲耶ちゃん♪」笑顔返しをしてた。

「はい。それではわたくし、新たな教室のお花を変えなくてはなりませんので、これで失礼いたしますわ」

そう言ってドリルポニー（わたしがたった今、命名した）を揺らしながら颯爽と去って行った。とここで、「なによ、はやて、ルシル。アイツと知り合いなわけ？」アリサが不機嫌そうに訊いた。ここまでアリサが不愉快そうにするのも珍しい。

「わたしが通てる病院で働いてる看護師の、結さんって人の妹さんなんよ、咲耶ちゃんは」

「ちなみに俺が男だってこともすでに話している。病院で女装している時に咲耶と何度か出会っているからな。流石に騙しきれないと判断した。そのついでに石川先生にも、俺が実は男だったってことも伝えた」

ルシルがはやてを診てくれてる医者の石川先生に、実は男でした、ってことを伝えたって話は聞いてた。ちょっとばかり怒られたらしいね。でもま、ルシルの境遇――家族が居ない中での一人旅の果て云々ってことを聞いて、納得はしてくれたそうだけど。

「あ、そう。アイツ、シャル達と同じ2組だし、仲が良いのは結構かもね。でも、もしあたし達かアイツを選ばなくちゃいけなくなった時は・・・解っているわよね？」

「まぁ、付き合いの深さで言えばアリサ達だから、もしの時はみんなの方を選ぶだろうけど・・・。しかしアリサはどうして咲耶を目の仇に・・・？」

ルシルに続いてわたしも「うん。なんかあったの？」そう言って頷く。するとアリサは「あっちから一方的にケンカ売って来てんのよ」って鼻を鳴らして、話してくれた。バニングス家と木花家はお互いに複数の会社を経営する家柄だそう。それだけならそこまでいがみ合う理由も無いんだろうけど・・・

「なんか知らないけどうちの会社が、アイツん家の会社に決まりそうだった案件を横から奪ったとかなんとか。もうそっからは会う度に嫌味をぐちぐちと。最初は無視してたけど、あまりにしつこかっ

たからこっちも徹底抗戦に入ったってわけ」

「私となのはちゃんは、木花さんとも仲良くしたいって思ってるんだけど・・・」

「仲良く出来るような空気じゃないんだよね・・・。とほほ」

そんなアリサのライバルが居るクラスに編入することが決まったわたしとはやてとルシル。なのは達とは別のクラスになっちゃったけど、退屈はしなさそう。問題は、さくやって子もルシルに僅かばかりの恋心を抱いてる模様ってこと。病院で顔合わせをしたようだけど、ルシルは一体あの子に何をしたのか。

『ねえ、はやて。あの子、絶対にルシルに気があるよ？』

『うん。そうやな』

『そうやな、って・・・』

『そうは言うてもなぁ。わたし、咲耶ちゃんには危機感抱いてへんし』

『というと？』

『咲耶ちゃんは脅威にならへんってゆうことや。わたしにとって一番のライバルは、シャルちゃんだけや』

『・・・光栄っ♪』

わたしははやての座る車椅子の隣に移動して、はやてとコツンと拳を軽く打ち合った。突然のわたしとはやての行為に「主はやて・・・？」車椅子を押すリインフォースや、「シャルちゃん・・・？」なのは達が小首を傾げたけど、「なんでもな～い♪」わたし達は笑顔でそう返すだけ。

そしていよいよ昇降口に辿り着いて校内へ入ったところで、「シャルちゃん達は、反対側の靴箱ね」なのは達が４年１組と表記された札が側面に張られたシューズラックのところで止まった。そしてわたしとはやてとルシルは、なのは達の使うシューズラックの向かい側に設けられた２組のラックへ。そしてリンディ提督とリインフォースは、お客様用のラックへ。

「俺とシャルはここだな。はやてはそこだ」

「ん、ありがと♪」「おおきにな♪」

靴をしまっておくスペースの扉にはわたし達の名前が記された名札があった。靴を脱いで、すのこっていう素足で上がるための木製足場に上がって、新品のルームシューズ（上履きって呼ぶみたい）に履き替える。

上履きに履き替え終えたわたしとルシル、そしてなのは達は、「んしょ、んしょ」車椅子に乗ったまま靴と上履きを替えてるはやてを眺める。はやてからは、自分で出来ることは自分でやる、っていう決意を聞いてるから、手伝って、って協力要請が無い限りは見守る。

「よしっ。お待たせや、みんな」

「主はやて。車椅子をお持ちいたしました」

客人用スリッパに履き替えたリインフォースが、校内専用のために学校が用意してくれたっていう車椅子を持ってきた。ここで、「ルシル君、頼めるか♪」はやてがルシルに向かって両腕を伸ばした。

「さすがに車椅子から車椅子に移るには人手が要るよな。・・・ほら、掴まれ」

「うん、おおきにな♪」

ルシルがはやてを真正面からハグして立ち上らせた。落ち着け、わたし。あの抱っこには邪な感情は無しっ。無しなのだっ。と、「っ？」はやてがルシルの肩越しからわたしに向かってニッコリ笑みを向けてきた。イラッ☆　な～に、今のは？　その笑顔には何の意味があるのかな？

「いい度胸じゃない、はやて～？」

「ん～、なんのこと～？」

「「あはははは」」

はやてと一緒に笑い合う。なるほど。宣戦布告ってわけ。上等じゃない、はやて。学校生活においても手加減なんてしてあげないんだ

から。はやてと真正面から含み笑いの応酬を開始。

「・・・って、あれ？　なのは達は？」

「え？　あ、あれ、みんな居らへん・・・？」

ふと気が付けば、周りに居たはずのなのは達の姿が見えなくなってた。わたし達の周りに居るのは、リンディ提督とルシルとリインフォースだけ。はやてと一緒に小首を傾げると、「もういいかしら？　イリス、はやてさん？」リンディ提督が怒り雑じりの笑顔を浮かべた。

「君たちが馬鹿をやってる間に先に教室に向かったぞ」

ルシルも呆れ口調で大きな溜息。あのリインフォースですら「主はやて・・・」その綺麗な深紅の瞳に僅かばかりの非難の色を湛えた。これには「ごめんなさい」はやてと一緒に頭を下げた。

「はい。それじゃ、職員室に向かいましょうか」

リンディ提督の後ろについて廊下を進む。時間が早いからか廊下に他の生徒の姿は見えないけど、先生とは何人かすれ違ったから、これからお世話になるわたしとはやてとルシルは、「おはようございますっ！」すれ違う先生に元気よく挨拶。すると「はい。おはようございます」笑顔で挨拶を返してくれる。くぅ～っ、改めて実感するよ、学校に来たって。

「失礼いたします。矢川先生はいらっしゃいますか？」

「ああ、ハラオウンさん、八神さん。お待ちしておりました。・・・はじめまして、八神はやてさん、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトさん、ルシリオン・セインテスト君」

リンディさんの呼びかけに応じたのは、矢川先生って名前の若い女性。でも見た目と実年齢が合った人ってあんまり見かけないんだよね。リンディ提督然りなのはのお母さん然り。とにかく「はじめまして！」わたし達はお辞儀を返す。

「はい、はじめまして。あなた達が編入するクラスの担任の、矢川枝姫（えひめ）といいます。これからクラス替えがされるまでの1年間、クラスのみんなと一緒に楽しく過ごしましょう♪」

「「「はいっ！」」」

「それでは矢川先生。よろしくお願いいたします」

「お願いいたします」

「はい。大事なお子さん方を、確かにお預かりいたしました」

リンディ提督とリインフォース、そして矢川先生がお辞儀し合った。ここでわたし達を職員室にまで連れて矢川先生に引き合わせるっていう用事を済ませた「イリス。しっかりね」リンディ提督と、「ある――コホン、はやて、ルシル。良い学校生活を」リインフォース

は帰宅した。

「それでは、まずは、これから君たちの教室へ案内するから、ついて来てね」

矢川先生について職員室を出ると、「八神さんにはこちらのエレベーターを使ってもらいますね」

聖祥小学校のパンフレットに載ってた通り。聖祥小は海鳴市内でいち早くバリアフリー化を行ってるって書いてあった。ちなみにエレベーターは付近には監視カメラがあって、他の生徒が遊ばないように職員室で監視できるようになってるってこと。

「基本的に付き添いの子と一緒に乗ってもらうようにしてね」

「はい。じゃあ、ルシル君。ええかな？」

「ああ、もちろんだとも。矢川先生、何階でしょうか？」

「３階よ。エレベーターを降りたら、私とフライハイトさんが向かうまでそこで待っていてね」

「「はい！」」

ここでさらにはやてとルシルと一旦お別れ。矢川先生と２人で階段階段を上がって２階へ。２階に上がるとすぐさまエレベーターのところへ向かう中、なのは達が廊下でお喋りしてる姿を視認。向こう

もわたしに気付いて手を振ってくれたから、こっちも手を振り返す。すると『はやてとルシルは？』フェイトが思念通話を送って来た。

『はやてはほら、車椅子でしょ。エレベーターを使ってる。んで、ルシルはその付き添い』

『あ、そっかぁ。あのエレベーターって、階段を自力で上れない子や、その子の付き添いをする子しか使えないんだよね。ということは、はやての付き添いとしてならわたしも乗れるのかな♪』

アリシアがエレベーターを使いたそうに言うと、『ルシル君が居るから無理じゃないのかな？』すずかが、はやての付き添い＝ルシルの式を組み立てた。う～ん、それってつまり、階層移動する時は常に2人は狭い個室の中に2人っきりってことに。

（なんか嫌だなぁ。・・・うん、わたしも同じクラスだし、わたしも付き添いになればいっか）

『ま、とにかくさ。始業式が終わったら一度集まって、それから一緒に帰りましょ。初日だからスクールバスに乗ってさ』

『ん。はやてとルシルにも伝えておくね。それじゃ、また後で』

アリサにそう返して思念通話を切る。エレベーター前に着くと、すでにはやてとルシルが居て、わたし達が来るのを待ってた。

「待たせてごめんね、八神さん、セインテスト君。それじゃあ行こ

うか」

今度ははやてとルシルと一緒に、なのは達が居た教室前の廊下に向かって、４年２組っていう表札が掲げられた教室に到着。最初に矢川先生が教室に入ると、「・・・あれ、おはよう、みんな。早いのね」誰かに挨拶した。そういえば確か、さくやって子が居るんだっけ。はやては仲の良い友達ってカテゴリだけど、わたしは恋敵ってカテゴリに入れてある。

「八神さん、フライハイトさん、セインテスト君。入って来て。・・・コホン。ちょっとフライング気味だけど、今年度からの新しいお友達を紹介します！」

矢川先生に呼ばれるままに教室に入る。教室にはすでに何人かのクラスメートが居た。その子たちの顔を見たわたしは、「・・・っ！？」起こることがないってされてた感情の揺らぎが生まれたのに少し戸惑った。

「わたくしは先ほどお会いしました。ですが改めて。４年２組の委員長、木花　咲耶ですわ」

「・・・私？　私もこのクラスの委員長で、五十鈴　依姫（よりひめ）。困ったことがあったら遠慮なく言って」

「次はわたしよね？　比佐津（ひさつ）　天音（あまね）。よろしく♪」

「ぼくは、比佐津　天守（あまもり）。見た目と名前で判ると思うけど、天音（コレ）の

双子の弟」

「コレとか言うな。殴るぞ？　依姫が」

「天音と天守は黙ってろ。・・・おれは、武塔　亮介。一気に３人増えるなんて、１組の双子みたいじゃん。同じ外国人っぽいしさ」

「えっと、僕は・・・真神（まがみ）　護（まもる）っていいます。よろしくです」

三者三様の自己紹介をしてくれたこの子たちのこと、わたし・・・たぶん知ってる。泣くまでは行かなかったけど胸の奥が熱くなったことで、わたしはそう強く思った。

Ｅｐｉｃｏ３歴史は繰り返さなくてもいいのにな

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

ただでさえシャルやアリス、テルミナスの転生体が現れて驚いているというのに、さらには以前の契約で共に過ごした親友たちの転生体と出逢うことになるとは。驚きを通り越して感動すら覚える。まぁ、彼らの魂は地球の〝界律〟を巡っているのだから、次元を越えて出会うこともあるだろうが。

「――ですが改めて。４年２組の委員長、木花　咲耶ですわ」

茶色のロングヘアを螺旋状の巻き髪にして、さらにポニーテールにした少女、木花咲耶。かつての契約では、彼女は同学年の風紀委員長で、生徒会長のシャルとは犬猿の仲だった。今回はどうやらアリサと犬猿の仲のようだが。

「・・・私？　私もこのクラスの委員長で、五十鈴　依姫（よりひめ）。困ったことがあったら遠慮なく言って」

五十鈴依姫。艶やかな黒髪を腰まで伸ばした少女。かつての契約では、俺と同じ生徒会副会長で、１つ年上の先輩だったが。今回は同い年なんだな。この依姫先輩（じゃなかった。先輩って付けそうになるな、気を付けよう）も身体最強系なんだろうか・・・？　かつての彼女は強かったもんな～。結局、高校生活の中で、一度も格闘戦じゃ勝てなかった。

「次はわたしよね？　比佐津（ひさつ）　天音（あまね）。よろしく♪」

比佐津天音。フェイトやアリシア、アリサと同じように綺麗な金色の髪で、ボブカットヘア。コーヒーブラウンの若干釣り目。生徒会会計の片割れで、高校２年になっても身長が１５０ｃｍ届かなかったことから、ロリアンヌ、なんていうニックネームを付けられていたな。今は歳相応の身長だが、将来はやはり低身長なんだろうか。

「ぼくは、比佐津天守（あまもり）。見た目と名前で解ると思うけど、天音（コレ）の双子の弟」

比佐津天守。天音と同じ、会計の任に就いていた。天音の双子の弟で、髪色に瞳の色はもちろん同じで、髪型は男らしさを示す為か少し逆立たせている。

「これとか言うな。殴るぞ？　依姫が」

そして、かつてと同じような台詞を吐く天音に、俺は吹き出しそうになった。あの子は、アイツと口喧嘩するたびに他力本願・・・依姫の腕力に頼ってばっかりだったからなぁ。

「おれは、武塔亮介」

武藤亮介。赤い髪は肩に掛かるセミロングで、うなじ付近でヘアゴムを使って縛っている。かつては俺の悪友であり、親友でもあり、生徒会の仲間――書記だった。亮介が生徒会に入る以前、俺はアイ

ツから、とある問題で一方的に喧嘩を売られていた。紆余曲折を経て仲が良くなり、一緒に生徒会役員として最後まで友として過ごした。

「えっと、僕は・・・真神（まがみ）　護（まもる）っていいます。よろしくです」

真神護。生徒会最後の役員――書記として、シャルロッテ生徒会へ最後に任命された男子生徒。栗色のサラサラショートヘアを有し、顔立ちは少女のものだから、初見は性別を間違えそうだ。そこのところは俺と同じ辛さを持っているかと思う。うん、ここでも仲良くなろう。

（そう言えば、シャル・・・というよりはイリスの様子は・・・？）

前世（シャル）の人格が覚醒したことで、シャルの記憶がフラッシュバックしなくなったということだったが。咲耶たちの自己紹介を聞きながらシャルを横目で見ると、泣くことも泣き顔を浮かべることもなかったが、懐かしげな表情は浮かべていた。

「は、はじめまして。わたし、八神はやて、いいます！」

「俺は、ルシリオン・セインテストだ。よろしく頼むよ」

はやてに続いて俺も自己紹介返し。そしてシャルが胸に右手を添えて深呼吸を1回し、「イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトです。はやて、ルシル共々よろしくお願いします♪」そう満面の笑顔を浮かべて自己紹介。

「それじゃあ、八神さん、フライハイトさん、セインテスト君はもう一度、職員室にまでお願い出来る？」

矢川先生の話によれば、なんとこの後に行われる体育館での始業式で、編入生をステージ上から初等部生徒のみんなへ紹介するとのこと。ま、俺は経験上そういうのには慣れているから問題ないが。はやてとシャルは・・・うん、２人も問題ないか。俺のバースデーパーティの時にカラオケをやらせたし。

とまぁ、そういうわけで俺たちは再び職員室へ向かうことに。正直、教室案内は始業式の後、矢川先生と一緒で良かったんじゃないか、って思うんだが・・・。まあいい。咲耶たちと別れ、再び廊下を進む。

「ねえねえ、はやて。次は、わたしが付き添いとして一緒にエレベーターに乗っていいかな？」

「え、うん、ええよ。じゃあ、ルシル君は、矢川先生と一緒な」

俺の押す車椅子に座るはやてがそう言って俺へと振り返る。俺としては断る理由もないため「判った。シャル、はやてのこと、任せるぞ」と、俺の右隣を歩くシャルに車椅子のグリップを預ける。シャルはグリップを握ると、「よぉーし、エレベーターにゴー♪」駆けだした。

「フライハイトさーん、廊下を走ったらダメよ～！」

速度調整ミスを犯して高速ダッシュをかますシャル。矢川先生の注意も空しく、シャルは速度を落とすより早くエレベーター前に到着して、エレベーターに乗った。矢川先生が「はぁ。陸上部に誘ってみようかなぁ・・・」と、シャルのダッシュ力に感嘆しながら「行こうっか、セインテスト君」歩き出した。

「（矢川枝姫（えひめ）。かつての契約だと、書道部部長の3年生だったんだが。ここでは教員なんだなぁ。・・どれ）先生って、書道とかやっていました？」

「え？　ええ、小・中・高と書道部だったけど、どうしてそれを・・・、って、ああ、そっか。職員室前の壁に貼られた私の作品を見たのかな？」

「（そんなのあったっけ・・・？　まぁとりあえず・・・）はい。すごい達筆でした（と言っておこう）」

「ありがとう♪　他の先生たちからも褒められたの♪」

後で確認しておこう。そう決めて、矢川先生に続いて接続塔へと向かう。ふと、廊下に張られているこの聖祥小の校舎のマップが目に入った。

（改めて見ると、本当に大きな学校だな・・・）

聖祥小学校の校舎の構造は、４階建てのドーナツ型の塔――接続塔の四方から校舎が４棟と伸びた十字型となっている。ケルト十字を

思い浮かべると判り易くていいと思う。で、円の内に有る十字を省けばオーケーだ。
接続塔には、内壁に沿った曲線フォルムの中央階段があり、基本的に生徒や教員はこの階段を使って階層移動を行う。そして各階層の中央階段の構造の邪魔にならないようエレベーターが1基だな。
接続塔の1階のドアから吹き抜け内に出入り出来る。上履きのままで入れる人工芝が敷かれた休憩スペースがあり、そこで休み時間や昼休み、放課後を過ごす生徒が多いと、なのは達に教えてもらった。流石に、真冬には寒くて誰も利用していないようだが。

（俺たちもこれから何度も世話になるんだろうな。でも確か、基本的には屋上と言っていたな）

今後のことは置いておいて、と。まず、下棒部分になる第4校舎なんだが。この校舎だけが2階建てとなっている。1階は昇降口と体育館が並列している。昇降口の直上階は倉庫となっていて、学校イベント（体育祭など）に使う物品や、使っていない椅子や机などが保管されている。

（ここには荷物用のエレベーターが有るんだな。ま、それもそうか。人力で2階から重い物なんて降ろしたくないだろうし）

横棒部分の左――4階建ての第1校舎の1階は、職員玄関・教材室・放送室・職員室・校長室・保健室。2階は第1学年の4クラス。3階は第3学年の4クラス。4階が第5学年の4クラス。
横棒部分の右――4階建ての第2校舎の1階は、理科実験室・家庭科室・家庭調理室。2階は第2学年の4クラス。3階は第4学年の

４クラス。４階は第６学年の４クラス。

（第２校舎の３階が、俺たちの過ごす教室のある場所だな）

上棒部分――第３校舎は３階建てだな。１階は購買室（筆記用具などが売られている）・美術室・技術室。２階が音楽室・コンピューター室・視聴覚室。３階が丸ごと図書室になっている。

（第４学年の教室と同じ階に図書室が有るのは嬉しいんだが・・・。俺が満足できる書物は有るのだろうか・・・？）

そして、いずれの校舎端には階段室が設けられているため、わざわざ接続塔の中央階段まで赴く必要はないのも助かる。聖祥小校舎の見取り図を改めて頭の中に入れ、接続塔の曲線階段を矢川先生と降りていく。

１階ではすでにはやてとシャルが待っていて、登校し始めていた生徒たちから奇異の視線を向けられていた。と、そんな中で「ルシル！」シャルが大声で俺を呼ぶものだから、周囲に居た他の生徒から一斉に視線を受けることに。

「うわぁ、あの子もキレー♪」

「可愛い　」

「男子の制服着てる・・・？」

「えっ、男子！？」

「女子だろ？」

「だって男子の制服着てるし・・・」

俺が学校に通う度に言われたワードがぞろぞろと出て来るじゃないか。とにかく「大声で呼ぶな、馬鹿」シャルの頭をコツンと軽く小突く。合流したはやてとシャルと一緒に職員室へ。その最中、矢川先生の作品、廊下は走らない、と半紙に掛かれた注意書きを発見。相変わらず美しい字だった。

そうして俺たちは職員室で始業式が始まるまで、他の教員と自己紹介などしながら待機。それと、編入生はどうやら俺たちだけじゃないようだ。第４学年では俺たちだけだが、他の学年に５人ほどが新たに編入するようだ。

「――時間ね。八神さん、フライハイトさん、セインテスト君。行こうか」

「「「はい！」」」

８時４０分過ぎ。俺たちは矢川先生に、他の編入生はまた別の教員に案内されて体育館へ向かうことに。職員室を出、まずは接続塔へ。そこから昇降口を通過して、体育館と昇降口を隔てるスチール製の左右に開くスライドドアの前へ。スライドドアを開けて体育館へと入る。体育館はかなり広く、一番奥にはステージがある。屋根はアーチ状だ。一般的な学校の体育館と同じだな。

「あそこのステージに上がって、紹介されるんやなぁ。なんや緊張する」

「でも本局での強制カラオケよりはマシでしょ」

「あはは、そうやなぁ」

体育館の端を通ってステージ両側にある舞台裏への扉に入る。曲線スロープを上がってステージ脇へ。そこには俺たち編入生が座って待つ椅子が7脚とあった。それぞれ椅子に座って、出番が回って来るまで待つ。はやては車椅子のままだな。

そして徐々に体育館に生徒が入って来て騒々しくなってきた。緊張からか（いや、おそらく興奮して）そわそわしだすシャルが、何を思ったのか椅子から立ち上って「おい、どこへ行く」舞台裏からステージへ向かおうとしたから声を掛ける。

「え？　なのは達も来てるかなぁ～、って思ってさ」

「来ていて当たり前だろ。ほら、やめろ。小さい子たちが真似したらどうする」

編入生の中でおそらく2番目の上級生となる俺たち（身長から言って、第4学年以上の少女が1人いる）の行動を、下級生の子たちが真似したらどうする。だというのに「まあまあ」と含み笑いしながら床に伏せ、閉ざされたカーテンの真下から向こう側を覗き込んだ。

「あ、なのは達をはっけ～ん♪」

『ちょっとルシル！　シャルを止めなさいよ！　結構目立ってるわよ、シャルのやつ！　シャル、手を振んな！　くすくす笑われてるわよ！』

アリサからお叱りの念話が。すると『ルシル君。まぁなんや。よろしくな』はやてからもお願いされては『了解だ』断るわけにはいかないと思い短く応え、シャルの元へと向かう。そして「シャル、戻れ。先生たちが来る前に」そう言って立ち上がらせようとするんだが・・・。

「もうちょっとだけ～。見知らぬ生徒たちからも手を振り返してもらってるの～♪　1年生なんか、もう可愛すぎて堪らない　」

「馬鹿。これ以上、目立つ真似はするな。落ち着きがないと叱られてもしょうがないぞ？」

「これがわたしの生き様なのだ♪」

そう言って、カーテン下から覗き込むだけでなく頭を出そうと（絶対、生首～、とかのノリだろうな）しだしたから、「やめんか」とシャルの両足首を掴み取って、そのまま引っ張る。

「きゃっ？　スカートが捲れちゃうじゃん！」

まぁ、当然だろうが顔を真っ赤にしたシャルが両足をバタバタ動かして俺の両手を払い退けてきた。ちゃんとした恥じらいを持ってく

れるようになって俺は嬉しい。感動していたら、「え～い♪」あろうことかシャルが足ばさみを掛けてきた。

「ちょっ、なんで・・・・！？」

あまりに突然の襲撃。踏み止まろうにも両脚がシャルの両足にしっかりと挟まれてしまっている所為で不可能。倒れないようにするには、全身の筋肉を使って姿勢制御をするほかない。が、「この体じゃ無理かぁ～」元の姿なら出来たであろうことが、この筋肉量の少ない幼い体じゃ出来なかった。

「ヘイ、カマ～ン　」

「このっ、アホがぁぁぁ～～～～っ！」

俺を抱き止めようと両腕を伸ばしてきたシャル。このままコイツの思い通りになどさせるものか。両手を突き出してステージに手を着くことで、シャルに抱き止められるのを阻止しようと決意。だからシャルの顔の両側に手を着こうと思ったんだが・・・

「あ・・・！」「っ！！？」

最初に左手がシャルの右脇下を着き、贈れて右手が最悪なことにシャルの胸に着いた。手の平から伝わってくる仄かな柔らかさ。でもやっぱりまだまだまな板だな。

「きゃぁぁぁぁ～～～～！！」

「何しとんのぉぉーーーーー！！」

一瞬の沈黙の後、シャルは悲鳴を、はやては怒声を上げた。車輪のリムの外側に付いているハンドリムという輪を掴んで回すことで車椅子を進ませたはやて。そしてシャルは「ルシルのエッチぃぃ～～～！」俺の両腕を鷲掴み、「ぐふぅ・・！」両膝蹴りを俺の腹にかましてくれやがった。

（最悪だ・・・！）

そのまま巴投げの要領で俺をカーテンの向こう側、生徒たちが整列しているであろうフローリング床へ投げ飛ばした。バサッとカーテンを押しのけてステージ外へ飛ばされた俺。ステージから床までの高さは約１ｍ。落下するまでの一瞬で体勢を整え、腰を深く落として着地を果たす。そして巻き起こるザワザワ。担当する生徒たちを整列させて体育座りさせていた教員たちが「君、一体何をしているんだい！？」駆け寄って来た。

「あ！」「きゃんっ！？」

立ち上ろうとしたそんな時、ドンッ、と何かがぶつかる音と、カーテン奥のステージからはやてとシャルの短い悲鳴が聞こえてきた。振り返る最中、視界の端にステージから頭から落ちてきたシャルの姿を視認できた。

（避ける？　あとが恐い。抱き止める？　立ち上っても振り返りき

ってもいない中でか？　ええい！）

一瞬の中で頭を駆け巡った思考の果て、シャルを抱き止める体勢に入った。

「のわぁっ！」「きゃっ――あいたぁっ！」

体勢が悪い中でシャルの上半身を抱き止めたのは良いが、シャルの全体重を受け止めることが出来ずに俺の体が海老反り。そのまま俺はシャルを背後へと放り投げてしまった。そしてお互いに背中（俺だけが後頭部追加）を床に強打してしまい、「おぅぅ・・・」悶える。

「ごめんなぁー、シャルちゃん！」

カーテンをそっと開けて顔を出したはやてからの謝罪。どうやらはやてが車椅子でシャルを轢き、そのまま突き落としてしまったようだ。それから俺たち3人は、体育座りして整列している全校生徒たちの目の前で教員数人から注意され、奇異の視線の中で舞台裏へと戻り、大人しく椅子に座った。

「――ったく。酷い目に遭った・・・」

「あはっ、他に生徒のみんな、すっごい驚いてたね」

初日から全校生徒に馬鹿を見せてしまった俺は頭を抱え、シャルは両脚をぶらぶらと上下に振って笑い声を上げた。そして「笑い事や

あらへんよぉ～」はやてもまた頭を抱えた。

「ま、良いじゃん♪　変に取っ付きにくいって思われるより、ああして馬鹿を晒した方が人気も出るってもんだよ♪」

あくまでポジティブなシャルにはもう「はぁ～～」溜息しか出なかった。そんなこんなで始業式は始まり、校長先生の別段ありがたみもない長話、今年度から新しく転勤してきた教員の紹介、そして・・・

「――それでは最後に、今年度から聖祥小学校に通うことになった、新しいお友達を紹介します」

俺たち編入組の紹介となった。ステージ真ん中に置かれた演台の前へと俺たちは移動し、第1学年の2人、第2学年の1人、第3学年の1人、第4学年の俺たち3人、第6学年の1人、計8人の名前が低学年から順に紹介される。

「――第4学年の2組に編入する、八神はやてさん、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトさん、ルシリオン・セインテスト君です。仲良くしてあげてください」

紹介された後は、編入するクラスの列へと並ぶことになった。本来は出席番号順となるらしいのだが、今日だけは俺とはやてとシャルは最後列。まずは最後列の女子の隣へと先にシャルを座らせ、俺ははやてを横抱きに抱え上げて車椅子から降ろして、はやてと一緒に最後列に座った。

「ちょっとぶり。さっきのお前たち、かなり面白かったぞ」

「初日から有名人だよ、八神さん、フライハイトさん、セインテスト君」

最後列1つ前に座る武塔亮介と真神護がそう言って笑った。そして最後列に1人座っていた少女が「お姫様抱っこ、憧れるなぁ～♪私もいつか、お姫様抱っことかしてほしいかも」俺とはやてを羨ましそう見ながらそう言った。

「あ、私、八重刀梅(とうめ)。亮介君から聞いてたけど、本当に綺麗だし可愛いね、3人とも♪」

藍色のロングヘアで、シュシュで一纏めにした後ろ髪を肩前に出している少女、八重刀梅。かつてはこの子の存在が、俺とシャルと亮介・・・3人の関係を繋げたんだったな。懐かしい。八重だけじゃない。よく見れば、クラスメートの大半が見覚えのある顔をしている。なんかもう、この時点で懐かしさを抱くより頭と胃が痛くなってきた。

「可愛いって褒めてくれてありがとう～♪　わたし、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト。シャルって呼んでね♪」

「お、おおきにありがとう。わたし、八神はやていいます。はやてって名前で呼んでもらえると嬉しいな」

「俺は、ルシリオン・セインテストだ。俺も、ルシル、って気軽に呼んでくれ。で、綺麗っていう褒め言葉なら受け取るけど、可愛いっていう褒め言葉は一応、タブーだからそのつもりでお願いするよ」

自己紹介の後、可愛いはタブー、コレ重要、と示すために人差し指1本立てて告げる。

「あ、うん、判ったよ。ルシル君に可愛いはダメ、っと。で、シャルちゃんにはやてちゃん。私も、刀梅って気軽に呼んでいいよ」

「じゃあ、おれのことも、亮介って呼んでくれ」

「あ、僕も。護って呼んでいいから」

「亮介君と・・・」

「護君やね」

最後列付近にだけにフライング気味の自己紹介。そのまま話しこむ前に教員が話し始めたから中断。それから教員の話の間を黙って聴き、シャルにとっては初めてで、はやてにとっては久しぶり、俺にとっては懐かしい、学校の始業式は終わった。そして第1学年から退場し始めたんだが・・・

「やーん、可愛い　」

1・2年生が退場時にシャルに手を振ってから出て行くじゃないか。

シャルも笑顔を振り撒きながら手を振り返している。あ～あ、完全に前世シャルロッテになりつつあるよ、イリスの奴。そして俺たち第４学年の退場となる。まずはなのは達の１組が出て行く。

『あはは、すっかり小さな子たちの人気者になっちゃったね、シャルちゃん』

そんな中で、すずかからの念話が入る。１組の列へと視線を移すと、なのは達が俺たちの方へと振り向いて笑みを浮かべていた。

『あんた達、目立ち過ぎ。こっちまで恥ずかしいやつ入りしちゃうじゃない。少しは自重しなさい』

『にゃはは。シャルちゃんらしいって言えばらしいけど・・・』

『体育館だから大きな話し声は出ないけど、１組でもすでに話題騒然だよ』

『というか、恥ずかしいから少し他人のフリしていい？』

アリサにフェイト、なのはと続き、締めはアリシア。アリサの呆れには同調したいな。で、アリシアにだが、『大丈夫だ、アリシア。君もどちらかと言えばシャル側だ』と返しておく。シャルとアリシア、共に変人クラスだからな。被害に遭う俺が言うんだ、間違いない。

『ひっどぉ～い！　わたし、シャルほど恥ずかしい存在じゃないよ！』

『待てぇ～い！　わたしだって恥ずかしくないわい！　あと、恥ずかしいって言われたの、わたしだけじゃなくてルシルもだからね！』

『はあ！？　俺を君ら側にしないでくれ』

納得できない。俺はまともだ。シャルとアリシアほどぶっ飛んだ性格でもなければ人格でもない。だからそう反論したんだが、『いやだから、さっきので恥ずかしいカテゴリ入りしたんだってば！』アリシアからはそう言われ、『こうなったら一緒に逝こう、ルシル』シャルからは道連れ発言が。

『道連れで逝くならアリシアで頼む。俺を巻き込むな』

『ちょっ、やめてよルシル！　恥ずかしいのはシャルだけで十分じゃん！』

『そうだな、もうそれでいい』

『うわっ、ひっど！　いいもん、いいも～ん。ふ～んだ！』

シャルが拗ね始めたところで話題を切り替える。帰りのことだ。

『はやて、ルシル。シャルから聞いたでしょうけど、今日はバスで帰るわよ』

『ホームルームが終わったら、シャルちゃん達を迎えに行くね』

『うん。もし、こっちのクラスの方が先に終わるようやったら、わたしらが迎えに行くな♪』

なのは達と改めて帰りの約束を交わして、次は俺たち2組の退場だ。矢川先生が俺たちのところへと駆け寄って来て、「それじゃあ、みんなと一緒にクラスへ戻ろうか」とウィンク。

「はい。判りました。ルシル君、シャルちゃん」

「うん。友達も早速できたので、その子たちと一緒に戻ります♪」

はやてに続き、シャルが亮介たちへと一度視線を向けてからそう告げた。すると「大丈夫ですわ、先生。3人はすでにわたくし達2組の仲間ですから。ですわよね？」いつの間にか来ていた咲耶が自信満々にクラスメートにそう言うと、「うんっ！」2組全員が頷き返した。

「それでこそ2組ね♪　それじゃあ木花さん、それに五十鈴さん。クラスのみんなを教室までよろしくね」

「承りましたわ」「はいっ」

クラスメートの人垣からにゅっと出て来た依姫が、咲耶と同時に応える。矢川先生は他に教員と話があるのか、教員が集まっている壁際へと戻って行った。

「ではみなさん、戻りますわよ。ルシル君。はやてさんを車椅子へお願いしますわ」

仕切り屋なのはやはり人生を跨いでも変わらずか・・・いや、委員長だからか。まぁどちらにしろ「ああ」頷き返して、早速はやてを横抱きにして抱え上げる。と、「きゃぁぁぁ！」女子から黄色い歓声が上がり、「お姫様抱っこ！」「いいなぁ！」「私もしてほしいかも！」などなどの声が続く。

「な、なんや恥ずかしなってきたな・・・」

はやてが今さらに顔を赤くしたから、「そうか？　抱き方が少し違うだけじゃないか」と苦笑を漏らしながら彼女を車椅子へと乗せて、俺たち2組は体育館を後にした。

Ｅｐｉｃｏ４恋愛は友情の切れ目

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

始業式が終わり、俺とはやてとシャルは、クラスメートと一緒に４年２組の教室へと戻ることに。体育館を出、昇降口を通り、４棟の校舎を繋ぐ接続塔の中央へと辿り着く。すでになのは達１組の生徒の姿が無いところを見ると、早々に中央階段を上がって行ったらしい。

「それじゃ、ルシル君。付き添い頼めるか？」

「ああ、判った。シャルは・・・」

さっきはシャルが名乗り出していたが、「わたし？　わたしは、みんなと一緒に戻るからいいよ♪」すでにクラスメートと仲が良くなっていて、その子たちと喋ることの方が、優先度として高くなっているようだ。シャルの、誰とでもすぐに仲良くなる才は本当にすごい。

「そっか。じゃあ、シャルちゃん、みんな、また後でな」

「シャル。変なことを言って孤立しないようにな」

「しないも～ん！」

つーんとそっぽを向いたシャルや、これから共に勉学に励むクラスメートと別れた俺とはやては、2人でエレベーターへと乗った。エレベーターの内装は一般的なものとは違って、壁は晴れやかな空のイラストで、足元付近には花畑のイラストが描かれている。それに、階数ボタンのパネル横にはデフォルメされた色んな動物が階数を示す数字を抱っこしているイラストもある。もちろん、点字や点字ブロックも完備。あと車椅子が余裕で旋回できる広さがあるのも良いな。

「初日の半分も経ってへんのに、なんや疲れたなぁ」

「そうだなぁ。身体的というよりは精神的に疲れたよ。アイツの所為で」

「あはは。シャルちゃん、学校に通うこと事態が初めて見たいやし、浮かれてるんやなぁ」

「その浮かれ具合が続く限り、今日のような騒ぎが起こり続けるというのか？」

俺がそう言うとはやてが少しの間、何かを思い浮かべるような表情をした。そして「退屈よりはマシやよ♪」こちらまで嬉しく、楽しくなるような笑顔を浮かべた。何百と繰り返してきた学校生活に飽きてきていたが、はやての為だ、俺もしっかり楽しまないといけないな。

「ふえ？　急に頭を撫でてどうしたん？　ルシル君。・・・まぁ、

気持ちええから、好きなだけ撫でてくれてもええけどな♪」

まるで猫のように目を細めて俺の手を受け入れるはやてに、「卒業まで、どうぞよろしく」俺も笑みを返してお辞儀する。と、はやても「んっ。こちらこそよろしくお願いしますっ♪」お辞儀返し。一緒に頭を上げて笑みを浮かべ合った。

≪ピンポーン♪　３階です。扉が開きます≫

エレベーター内にアナウンスが流れ、ドアが開いた。俺ははやての乗る車椅子のグリップを握り、エレベーターから出る。エレベーターの扉に面しているのは第１校舎。俺たちのクラスのある校舎とはちょうど反対側。時計回りに曲線廊下を歩いて、４年２組の教室を目指す。

「やっぱりシャルちゃん達はまだなんやなぁ」

「階段だからな。ま、一番乗りだから、そこは良しとしよう。もしかすると、この一番乗りが学校生活で、最初で最後かもしれないからな」

「あー、そうかもな」

わざわざ一番乗りを目指して登校するほどせっかちでもなければ、これからちょくちょく管理局の仕事が入って休みや遅刻・早退しなければならないこともあるだろうし。一応、そこのところの配慮はしてもらっているため、よほどの事がない限りは学業優先となって

いる。

「・・・えっと、出席番号順に座るように、か」

黒板にそう記されていたから読み上げた。よく見れば机には名札が張られている。窓際の先頭から1番と始まり、5番を最後列として、次列が6番から始まる、という席順だ。真っ先に「わたしは32番・・・1番後ろやな」はやてが自分の席を見つけた。廊下側、教室後部の出入り口付近で、出席番号の最終番だった。

「あっ、隣はシャルちゃんや！　出席番号27！」

「おお、本当だな。なかなか気の利いた偶然じゃないか」

はやてが自身の席の隣がどんな子なのだろうかと確認して気付いた事実。俺も、出来ればはやて（ついでにシャル）の近くが良いな、と思って付近の席を調べて見る。と、「俺は・・・えー・・・、出席番号16番だな」自分の席を発見。中央列の最後列。窓側・廊下側とは違って、列1組分突き出している。これで俺とはやてとシャルは揃って最後列が決定。まぁ、3人とも視力は悪くないため問題はないが。

「へーい、ただいまー！」

そこに元気いっぱいの挨拶が教室内に響いた。シャルだ。クラスメートを引き連れての帰還だ。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

はやてとルシルと別れた後、わたしはこれから一緒に勉強することになるクラスメートと一緒に、幅が２ｍほどもある中央階段を上る。そんな中で、「シャルさん。あなた、はやてさんやルシル君、それにアリサ・バニングスと親しいみたいですけど・・・」先頭を行く学級委員長（クラスのリーダー的役職らしい）の咲耶が話しかけてきた。

「まぁ親友だし。出会いは去年の春ごろ。最初はなのはとすずかとアリサと仲良くなって、その後にフェイトとアリシア。はやて達とは冬に出会ったの。歳も同じだし、それからは一緒かな」

「冬・・・。最近なんですのね。・・・ということは、わたくしの方が早くはやてさん達とお友達になったのですのね」

「それで？　咲耶はどうなの？　病院で知り合ったって、はやてから聞いたけど」

そこが気になってたから、こっちも訊き返す。すると「いいですわよ。そう、あれは忘れもしない、運命の日ですわ。去年の７月１１日でした」咲耶は当時の思い返すかのように目を閉じて頬を朱に染めた。あのさ、ルシル。もうホントさ、どんだけフラグを立てるような真似するの？　馬鹿なの？　無限女装の刑に処すよ？　いいの？

「わたくしが、姉の結の着替えを病院へ届けに行った時でしたわ。無事に届けた後に飲み物を購入しに自販機コーナーへ行ったのです

けど。そこで少々不良と後ろ指差されそうな男性と遭遇しまして。わたくしが自販機に硬貨を入れた瞬間、その男がわたくしの入れたお金で飲み物を購入したのです」

「うわっ。そんな奴いるの？　強面の人だったの？」

「ええ。祖父が好きな極道モノの映画に出てきそうな男性でしたわ」

文字通り女の子のお金を勝手に使って買い物とか。死刑だよ、死刑。咲耶はそんな奴が相手でも、お金を返してください、ってちゃんと言ったそうなんだけどソイツは、自分のお金が自販機に残っていた、そのお金で買った、だから何も悪いことしてない、なんてふざけた言い訳をして去ろうとした、と。

「――わたくしは相手が誰であろうと不正を許したくありません。古き木花家の一員として。ですけど、やはり体格・体力差などもあって・・・」

咲耶が右手を頬に添えてうっとり。もう話してもらわなくてもオーケーだよ。ルシルでしょ、ルシルが助けてくれたんでしょ。案の定、「ルシル君が助けてくれたんですの　」咲耶はそう続けた。

「その男性がわたくしの腕を掴んでどこかへ連れ出そうとしてきましたところ、わたくし、恐怖から声が出なくなってしまい、そのまま誘拐されそうになったのですわ。そこで助けてくれたのが、ルシル君でしたわ。男性の腕を鷲掴んで、どこへ連れて行く？と言って、止めたのですわ。今思い返してもドキドキしますわ」

２階に上がり終えたところで、咲耶が一時停止。そして、ほう、って切なげに深い吐息を吐いたと思えば、また歩き出した。それほどまでに衝撃的な出会いだったわけか。話を聴いてたわたしや、後ろに着いて来てる他の女子生徒が「おお！」って歓声を上げた。

「で？　咲耶を拉致ろうとした不貞な野郎はどうなったの？」

「ええ。・・・一触即発でしたわ。男性はルシル君にも怒鳴り始めましたもの。さらにはわたくしと同じように連れ出そうとしたのですけど、ルシル君は何かしらの格闘技で男性を組み伏せた後、男性の耳元に何かを囁くと・・・。どういうわけか、男性は顔を青褪めさせて、さらに涙目になって外へと駆け出して行きましたわ」

不思議そうに小首を傾げる咲耶。なんか特別な魔法でも使ったのかなぁ。ルシルは普通の魔導騎士とは違って妙な魔法も使うし。その内の何かで精神攻撃でもしたのかも。

そんなことを考えながら3階へ上がるための階段を目指して廊下を歩く。中央階段は、４階までの直通じゃなくて、階層ごとに少し間を開けて作られてる。万が一転がり落ちた時のことを考えてるのかも。とにかく、３階へ上がるための階段のあるところへ１０歩ほど歩くと、その階段が見えてきた。

「その後は？」

「わたくし、緊張の糸が切れてしまってその場にへたり込んでしまいました。しかも立てなくなってしまうほどに腰を抜かしてしまい

ましたわ。ルシル君はそんなわたくしに易しく、大丈夫かい？と、手を差し出してくださったのですわ　それでも立てないわたくしを背負って、姉の元まで連れて行って下さりましたの　」

それでコロッと参っちゃったわけかぁ。てかさ、わたしにもそんな優しさを向けてくれてもいいでしょうに。今度試してみようか。わたしにもそこまで優しく接してくれるかどうか。

「セインテスト君って、見た目はお姫様なのにやる事は王子様だよね～♪」

「人ひとり抱え上げるなんてかなり力が要りそうなんだけど。ルシリオン君は相当な力持ちなのかも」

「はやてちゃんのお姫様抱っこ！　あれ、すっごく羨ましい！　頼んだらしてもらえるかな♪」

比佐津天音、五十鈴依姫、そして刀梅って会話に入って来た。まずい、これはまずいよ。ルシルの株が上がっちゃう。どうにかして株を暴落させないと。これ以上ライバルなんて増やしたくない。いくら魔法を知らない一般人だとしても、わたしみたく強烈なアプローチでルシルに迫るかもしれない。

――いい？　イリス。１０歳から１２歳までのプレティーン代の乙女はすでに恋愛をするの。とは言え、大半は恋に恋するもの。だけど、中にはイリスのように本当の恋をする乙女もいるの。成熟した恋愛観を持った乙女が――

――そそ♪　だから、少しでも想い人にちょっかいを出すようなライバルが現れたら、叩き潰さないと取られちゃうぞ。でもま、今のところは大丈夫！　最大のライバルははやて様だし、後から出てきた子にメインヒロイン補正なんて無いんだから、ちょっとやそっとのライバルくらいじゃ揺らがないよ――

――叩き潰すにしても、暴力関係はもちろんダメ、とってもナンセンス。時間をかけてもオーケー。ゆっくりと・・・蹴落とそう♪――

フライハイト家のメイドで、わたしの義理の姉とも言えるルーツィアとルーツィエの言葉を思い出す。２人は余裕を持って良いってそう言ってたけど、ルシルの好みのタイプかもしれない場合、わたしとはやての優位性が崩れる可能性もあるわけで。でもルシルだって早々靡くわけもないと思うし。むぅ。難しい。

「無茶はいけませんわよ。ルシル君は必要だからこそはやてさんを抱えているのですわ」

「でも憧れちゃうよ。女の子の夢の１つと思うんだけど、お姫様抱っこ。咲耶ちゃんも同じでしょ？」

お姫様抱っこは女の子の憧れ。刀梅がそう言って咲耶に返すと、「そうそう！」他の女子は一斉同意、咲耶は「なっ・・・！」顔を真っ赤にして絶句。その様子を見た刀梅が「ほらー！」って咲耶の朱に染まった頬をつんつんって突いた。

「～～～～っ！　そんなことありませんわ！」

咲耶が階段1段飛ばしで上がって行った。照れちゃって可愛い。でもルシルは渡さない。そんな咲耶の後を追いかけて、我らが4年2組の教室へ。接続塔と2組の教室との間にある1組の教室を通りかかると、なのはの席に集まってるみんなの姿を発見。

真っ先に気が付いてくれたのはアリシアで、笑顔と一緒に手を振ってくれた。そんなアリシアからなのは達も気が付いてくれて、同様に笑顔と手振りを送ってくれたんだけど、アリサだけが、うげっ、みたいな苦虫を噛み潰したかのような表情を向けてきた。

（アリサ？　なんでそんな表情を・・・って、あー、なるほど）

チラッと前を向くと、咲耶もおんなじ顔をしてアリサに向いてた。ドンだけ仲が悪いの、もう。わたしは「ほらほらー、戻るよ～」咲耶の両肩に手を置いて前に進ませる。もちろん、「またね♪」なのは達への挨拶も忘れずにウィンクをプレゼントなのだ。

「へーい、ただいまー！」

大声で挨拶しながら教室に入る。室内にはすでにはやてとルシルの姿があった。わたしは「どうしたの、そんな後ろの席で？」そう声を掛けながら2人の側へと歩み寄ると、「ここがルシル君の席なんよ」ってはやてがその席の左端に張られた名札のようなものを撫でた。そこには「ルシリオン・セインテスト・・・」縦書きでルシルの名前が記されてた。

「ちなみにわたしの席はあそこで、シャルちゃんは――」

はやてが教室後ろの出入り口間近の机を指差して、そしてわたしの席をどこかを指さそうとしたのを、「ちょい待ち」はやての右腕に手を置いてゆっくりと降ろして、「自分で見つけるよ♪」そう告げる。

クラスメートがぞろぞろ入って来て、「あ、席変わるんだ」「僕はここか」「あたしはこっちね」自分の席を見つけて座ってく。わたし達が入ったことで出席番号が変わる子もいるみたい。

「わたしの席はど～こだ♪」

窓際から探し始める。その最中にもどんどん席が埋まっていく。気付けばはやて達も自分の席に着いてるし。蛇行しながら席の張られた名札を確認していって、「一番最後！！」ようやく自分の席を発見。教室廊下側の一番後ろ、はやてのお隣だった。すっごい遠回りしたんですけど。

「おかえり、シャルちゃん♪　次の席替えまでよろしくな♪」

「ただいま、はやて」

出席番号２７番。３２番であるはやての左隣に座って挨拶を返す。と、はやての前に座る出席番号３１番の刀梅が「近くでラッキー♪」わたし達に振り向いて笑顔を向けてくれた。続いてわたしの前に座る出席番号２６番の天守の１つ前、２５番の天音が「ちょっと天守、

邪魔、退け」天守をしっしって払いのける仕草をした。

「うっさいなぁ。話したいなら席を立って行けばいいじゃん」

「妹のお願いくらい素直に聞きなさいよ」

「どこがお願いだよ。完全に命令じゃんかよ」

「いいから退いてよ。依姫が殴るよ？」

「天音ぇー。私を引き合いに出さなーい」

窓側の前から2番目の席に座る依姫が呆れ口調にそう言った。なんだか懐かしく思えるこのやり取りに自然と笑みが零れちゃう。とそんな時に「はーい、みんな席に着いてー」矢川先生が入って来た。さすがに天音も「また後でね、フライハイトさん」渋々だけど前を向いた。

「みんな、始業式前に伝えた通り、初日のホームルームは係決めと新しいお友達、八神はやてさんとイリス・ド・シャルロッテ・フライハイトさんとルシリオン・セインテスト君に、自己紹介をしようか♪」

矢川先生の提案にみんなが「はーい！」って元気な声で返事。というわけで、早速みんなの自己紹介が始まる。先生が出席番号を呼びながら、その子の名前を黒板に書いていって、呼ばれた子が立って自己紹介っていうスタイル。黒板に記される漢字だって勉強したか

らちゃんと読めるから問題なし。

（でも、一応メモしておこうっと）

念のために持ってきたメモ帳とシャーペンを鞄から出して、その子の名前の漢字と振り仮名を記していく。

１番：浅間火奈（あさま・ひな）
２番：五十鈴依姫（いすず・よりひめ）
３番：榎本恭一（えのもと・きょういち）
４番：大宮紗彩（おおみや・さあや）
５番：大山智樹（おおやま・ともき）
６番：春日太陽（かすが・たいよう）
７番：金山夏彦（かねやま・なつひこ）
８番：加夜奈留美（かやな・るみ）
９番：木花咲耶（きはな・さくや）
１０番：佐保さくら（さぼ・さくら）
１１番：寒川礼二（さむかわ・れいじ）
１２番：菅原道隆（すがわら・みちたか）
１３番：杉原楓太（すぎわら・ふうた）
１４番：住吉七海（すみよし・ななみ）
１５番：諏訪明（すわ・あきら）
１６番：ルシル
１７番：田心知果（たごころ・ちか）
１８番：竜田秋菜（たつた・あきな）
１９番：月読勇也（つきよみ・ゆうや）
２０番：歳神聖（としがみ・せい）

２１番：豊玉春子（とよたま・はるこ）
２２番：内野大地（ないの・だいち）
２３番：中筒翼（なかつつ・つばさ）
２４番：早池峰瀬織（はやちね・さおり）
２５番：比佐津天音（ひさつ・あまね）
２６番：比佐津天守（ひさつ・あまもり）
２７番：わたし
２８番：火照耀（ほでり・あかる）
２９番：真神護（まがみ・まもる）
３０番：武塔亮介（むとう・りょうすけ）
３１番：八重刀梅（やえ・とうめ）
３２番：はやて

難しい漢字ばかりの子も居るし、完全に憶えるまでちょっと時間が掛かりそうな気もする。わたしと同じ異世界人なルシルを横目でチラッと見ると、ルシルはわたしのようにメモしてなかった。ホント余裕だよね、ルシル。わたしと似たような時期にこの世界に来たのにさ。やっぱ頭が良いと違うね。

『シャルちゃん。判らん漢字とかあったら遠慮なく言うてな。それくらいしか出来ひんけど』

『ありがと、はやて。でも大丈夫。日本語ってかなり難しいけど、勉強だけはしっかりしたから、今のところは判るよ』

はやての気遣いにそう応える。恋敵でもあるけど、それ以上の友達。はやてもそう思ってくれていると嬉しいな。わたし達もまた改めて

の自己紹介（呼び名は愛称でいいって追加）を終えた後は、１学期間の係決めに移る。先生が黒板に係の名称を書き記していく。

（委員長２人・体育係４人・保健係２人・飼育係３人・図書係２人・黒板係２人・集配係３人・掲示係３人・教材係３人・植物係２人・レクリエーション係６人の、計３２人）

クラスの委員長（リーダー）だけは前期・後期の２期交代制で任期は半年間。こういう役決めとか初体験だからそわそわしちゃってると、『手を挙げるなよ、シャル』ルシルから思念通話が。

『俺たちは早退・遅刻・欠席が徐々に増えていくかもしれないんだ。時間を取られ、尚且つ重要な係になるわけにはいかない。解るな？』

『言われなくても解ってるってば。このそわそわは違うの』

『ああ、トイレか？　我慢は良くな――』

『デリカシーって言葉を辞書で引いてノートに１００回書いてその紙を呑み込んで来世になっても憶えているようにその脳みそに叩き込んでどうぞ馬鹿ぁぁぁぁーーーーー！！！』

『よく言う。君こそ、俺へのアプローチをもう少し控えろ。せめて歳相応にしろ。俺にデリカシー云々を説く前にそれくらいはしてもらうぞ』

『無理　』

『バーカ』

その悪口一言で思念通話が切れる。そんな中でも「――委員長に立候補いたしますわ！」係決めは進んでいて、咲耶が真っ先に挙手。空気から判る。決まった、って。先生が「木花さんが委員長で良いという人は挙手」そう言うと、誰も手を挙げなかった。やっぱり決まりで、「それじゃあ、もう1人の委員長の立候補を」先生も委員長枠に咲耶の名前を記した。

「誰も居ないのー？」

「推薦でよろしいですか、先生」

誰も手を挙げない中で咲耶が挙手。この時点で嫌な予感が発生。そのすぐ後に「ルシル君を推薦しますわ！」ほら、嫌な予感的中だよ。すると他のクラスメートが一斉に挙手を始めた。

「だったらあたしも立候補と推薦！　はやてちゃんやシャルちゃんと一緒の係になりたい！」

「僕だってルシル君と同じ係になりたい！」

そっからはわたしとはやてとルシルは引っ張りだこ。いやぁ、人気者は辛いね。ニマニマしていると「八神さん達はどう？　何かやりたい係とかある？」先生に訊かれたわたちとはやてが、『どうする？』ルシルに確認を取る。

『そうだな・・・。配役人数が多い係の方が良いだろうな。３人揃ってレクリエーションで良いんじゃないか？　はやてはどうしたい？　何か希望はあるか？』

『うーんと。あんまり階層移動が無いのがええなぁ。あんましルシル君やシャルちゃんの面倒かけるのも悪いし』

『気にするな、はやて。迷惑だなんて思わないでくれ。俺とはやては、家族、だろ？』

『っ、うんっ！　おおきにな、ルシル君♪』

『なんか良い雰囲気のところ悪いんだけどさ。わたしも居ること忘れないでよね。ていうか、はやてには希望を訊いて、わたしには訊かないってどうなのさ？』

恋人みたく見つめ合ってるはやてとルシルの間に頭を割り込ませて視線をシャットアウトさせる。そんでジト目でルシルを睨むと、『すまん。シャルは、何か希望があるか？』素直に訊いてくれた。次に、『はやて。親友に遠慮はなしよ』とはやてに振り返ってジト目を向ける。

『うん。シャルちゃんもホンマにおおきにな♪』

「えっと、３人とも・・・？」

「あ、はい。はやては足のこともありますからレクリエーション係がいいかと。あと、俺とシャル、はやても家庭の事情で早退・遅刻・休みが多々あるかと思いますので、そのことを考えても・・・」

「あ、そうだったっけ。それについて事情は伺っている。あんまり忙しい係は無理よね・・・」

それから色々と話し合った結果、わたしとはやてとルシルはレクリエーション係になった。レクリエーション係は、クラス内でのイベント企画・実行・司会を務める係らしくて、何かしらの行事の時に任される。これなら毎日ってわけじゃないし、居なくても企画書だけでも提出すればクリアだし。いつ空けるか判らないわたし達には都合が良い係だよね。

『連絡します。矢川先生。矢川先生。お電話が入っています。至急職員室までお戻りください。繰り返します――』

「それじゃあ、先生が戻ってくるまでみんなで楽しくお話、ということで。でもあんまり騒いじゃダメだからね」

そう言って教室を後にした先生の姿が見えなくなった途端、わっとわたし達の元に集まるクラスメートのみんな。待っているのは「しつもーん、しつもーん！」の嵐。学校生活の予習としてフェイトとアリシアから初日はどんなものか聞いていたけど、これはちょっと想像以上でビックリ。

「ルシル君、ルシル君。お姫様抱っこって、お願い出来る？」

どこに住んでるとか、好きな食べ物とかスポーツ云々、嫌いな食べ物とか教科云々とかを答えてると、刀梅が早速ルシルにアタック開始。自分の耳がピクッて動いて聞き耳モードになったのを自覚した。ルシルが「お姫様抱っこ・・？」困惑しながら返すと、ルシルの席にたむろってる刀梅や天音や他の子たち（ちゃっかり咲耶も交じってる）が頷いた。

「そっ！　女の子の憧れ、お姫様抱っこ！　でも体重が軽いと言っても女子ひとりを腕の力だけで抱え上げられる男子とか居ないわけで。だけどそこに現れた男子が、ルシル君なのです！」

刀梅にガッツリ詰め寄られて力説されたルシルが「それくらい、なんでもないから出来るけど・・・」若干引き気味に了承すると、ルシルの周りに居た天音や咲耶、わたしやはやての周りに居た女子までもがルシルに顔を向けた。わたしとはやてでジロリとルシルをジト目で見る。

「じゃあ、刀梅から・・・」

「やっほーい！」

ルシルが刀梅、天音、そして「きゃっ。・・・あぁ、わたくし、幸せですわぁ　」咲耶とお姫様抱っこして、さらにしてもらいたい女子が名乗りを上げて、結局はわたしとはやてを除く女子全員がルシルにお姫様抱っこしてもらった。

「短時間に１４人も横抱きするなんて約二万年の中で初めてだな」

「疲れ様、ルシル君」

「早速人気者ね、色男」

最初は不機嫌そうだったはやても、７人くらい抱え上げた頃からルシルの腕を心配しだして、たった今、苦笑気味に労いの言葉を掛けた。で、わたしは変わらず不機嫌気味に声を掛けた。するとルシルは「これくらい問題ないよ。というか、これくらいで不機嫌になるなよ」はやてには優しく、わたしにはやっぱり素っ気なく返してきた。

（む。またわたしだけ）

さすがにちょっとイラッと来たから、携帯電話を片手に「女子のみんな、ちゅうもーく！」わたし達の周りに居る女子にとある写真を見せる。すると「きゃぁぁぁぁ！」「可愛いーーーー！」黄色い歓声を上げた。

「シャル。君、一体何を見せて――って、おい！」

女子の人垣を掻きわけてわたしに詰め寄って来たルシルにも携帯電話のディスプレイを見せる。表示されているのは、クリスマスパーティで強制的に着替えさせたドレス姿のルシル。

「貴っっっ様ぁぁぁぁーーーーーっ！」

「王子様だとか浮かれてるからだよ、バーカ、バーカ！」

携帯電話の取り合いになる。ここでわたしは「へーい、パス♪」天音に携帯電話を放り投げるとキャッチしてくれて、「シャル。あとでデータちょうだい！」そう言って、今度は「わたくしもほしいですわ」咲耶にパス。咲耶に「返却を求む！」ルシルが近寄ると、咲耶は何を思ったのか両腕を広げてハグの体勢を取った。

「なにやってんの、委員長！」

咲耶の手から携帯電話を掠め取る刀梅は、「他にどんな写真があるの？」携帯電話を操作し始めたから、「観るのは写真データだけね！」注意しておく。別段見られて困るものはないけど、そこはプライバシーってことで。

「刀梅、大人しく返せ！」

「まあまあ、減るもんじゃないし♪」

「減るっ！　俺の尊厳値が！　そんな恥、誰にも見られたくないんだって！」

「・・・きゃぁぁぁ！　これも可愛い！　」

「やめろぉぉーーー！」

刀梅とルシルに追いかけっこに発展。刀梅は何かスポーツでもやってるのか、ルシルの追撃を軽やかに躱してくから、わたしとはやては「おお、すごい！」本当に驚いた。そんな追いかけっこもとうとう終わりを迎えた。

「きゃっ・・・・！？」

「っと・・・・！」

刀梅がルシルを躱した瞬間、机の足に躓いて仰向けに、そしてルシルもまた一緒にうつ伏せ状態で転んだ。だけど、転びきる前にルシルは右手で刀梅の後頭部を受け止め、左手は腰に回して刀梅を抱き止めて、右足で床を踏み締めて転倒を防いだ。

「あ、ありがとう、ルシル君」

「携帯返せ」

お芝居を見ているかのような状況だけど、ルシルは変わらず携帯電話狙い。でも刀梅の手に携帯電話はない。第三者として見ていたから判る。刀梅が転んだその際に宙を待ったのを見た。そしてその携帯電話は武塔君の手に渡った。

「あー、亮介。ありがとう、ソレ渡してくれ」

ルシルが武塔君に歩み寄って行く。そんな中で武塔君は床に女の子座りしてる刀梅を見て、そしてギラリとルシルを睨みつけた。ルシ

ルもその目に気付いて「亮介・・・？」差し出していた手を降ろした。

「おれ、絶対ぇ負けねぇ！　お前みたいな女男、気持ち悪いっ！
髪も長いし、顔も女子っぽいし！　この写真だって女子の格好だし！」

武塔君から剥き出しの敵意を真っ向から向けられたルシルが小さく「またか」そう小さく呟いたのをわたしは聞き逃さなかった。武塔君に「ちょっと、亮介君！　急に何で！？　なんでそんな酷いこと言うの！？」刀梅が詰め寄って怒鳴った。

『武塔君。絶対に刀梅に気があるでしょ』

『あ、うん、そうやな。ヤキモチやんな、今の・・・』

『・・・はやて・・・、もしかして怒ってる・・・？』

『別に怒ってへんよ？　うん、怒ってなんかおらへんよ・・・』

はやてははやてで、ルシルが悪く言われてことで、武塔君に少しばかり怒りを抱いちゃってるようで。わたしはまぁ、恋する気持ちは良く解るから武塔君のことを悪くは思えない。というよりは、刀梅と武塔君を応援したい。

「女子に人気なんだから、これからもずっと女子と仲良くしてろよな！」

武塔君はそう言い捨てて、わたしの携帯電話をルシルでも刀梅もでもない、真神君に渡してから自分の席を着いて、両腕を枕にして机に突っ伏した。刀梅が「ちょっと亮介君！」武塔君の席に向かおうとしたけど、「ちょっとー！　話し声が廊下まで聞こえて来てるよー！　はーい、座ってー！」先生が戻って来たことでわたし達は席に着き、嫌な空気なままホームルームは続行した。

Ｅｐｉｃｏ５彼方より蘇る破壊者～Ａｎｃｉｅｎｔ　Ｍｅｔａｌｌｉｃ　Ｄｉｓａｓｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

編入初日、わたしとルシル君、シャルちゃんはたくさんの友達が出来た。それと一緒に、出来たばかりの友達を失った。武塔亮介君。八重刀梅ちゃんのことが好きらしい武塔君は、刀梅ちゃんと仲良くしてるルシル君にヤキモチを焼いて喧嘩を売った。嫌な空気のまま、１学期中の行事の説明や新しい教科書の配布と続いて、わたしらの登校初日は終わった。

「――それじゃあ、木花さん、五十鈴さん。号令を」

「「起立・・・礼！　ありがとうございました！」」

前期の委員長に選ばれた咲耶ちゃんと依姫ちゃんの号令に従って、「ありがとうございました！」みんなが起立してお辞儀した。わたしは立てへんから座ったままお辞儀。先生が「それじゃあ、また明日ね」そう言って教室を後にした。その途端、「「ちょっと、亮介君！　待って！」わたしの前の席に座る刀梅ちゃんが、走って教室から出て行こうとした武塔君を呼び止めた。

「なんだよ」

「なんだよ、じゃないでしょ！　謝って。ルシル君に酷いことを言

ったこと、ちゃんと謝らないとダメだよ！」

「うるさいな！　本当のことだろ！・・・おい、行くぞ」

武塔君は他の男子生徒を数人連れて教室から駆け出てった。そんな武塔君に向かって女子のみんなが「何あれ」「勝手に怒りだして」「気にすることないよ、ルシル君」「自分が非力なのが悪いんじゃん」「悔しかったら自分も刀梅ちゃんにやってあげればいいのに」って口々に非難。

「あー、いいよ。実際、言われたことのほとんどがその通りだし。この髪も顔立ちも女子寄りで、シャルの見せた写真データも、な」

「あぅ、ごめん。まさかこんな事になるなんて・・・」

ルシル君や他のみんなから視線を受けたシャルちゃんが珍しくしゅんってなって落ち込んだ。刀梅ちゃんも「私も悪乗りし過ぎちゃったから。ごめんなさい、ルシル君」ルシル君の目の前まで来て、深く頭を下げた。続けて「わたしもごめん」天音ちゃんや「わたくしにも非はありますわよね」咲耶ちゃんも頭を下げた。

「まぁ、もう済んだ事だから、そんな泣きそうな顔をしないでくれ。な？」

「だけど、仲直り・・・」

「そのことについても、俺が何とかするから。はい、今日は解散！」

ルシル君がパンパンと手を叩いてそうやって促すと、みんなが思い思いに鞄を手に取って教室を後にしてく。刀梅ちゃんも「私、仲直り手伝うから何でも言ってね。それじゃ、また明日」クラスメート数人と一緒に教室を出てった。
それから他のみんなもルシル君だけやなくて、「はやてちゃん、シャルちゃん、また明日」わたしとシャルちゃんにも挨拶をくれたから、「うん、また明日」挨拶を返して、教室を後にするみんなの背中を見送った。

「ルシル君、はやてさん、シャルさん。このような空気の中なのですけど、この後わたくしとお付き合いして頂けますか」

みんなと挨拶を交わしてると咲耶ちゃんがそう言うて歩み寄って来た。ルシル君が真っ先に「あー、ごめんな。そのことなんだが――」そう答えようとした時、「迎えに来たわよー！」アリサちゃんが元気いっぱいな声で教室に入って来て、遅れて「お待たせー♪」すずかちゃん達も入って来た。

「あら、アリサさん。2組になんの御用かしら」

「2組やアンタじゃないわよ、用があんのは。シャル、はやて、ルシル。迎えに来たわよ」

「待ちなさい。これからはやてさん達を学校を案内するのですから、先に帰って頂けます？」

「はあ？　それを決めるのはアンタじゃないでしょうが。こっちは朝から約束してんのよ」

アリサちゃんと咲耶ちゃんは鼻先が触れそうなほど顔を近付けて睨み合った。

「あーもう、ほら。やめようよ」

「アリサちゃん。なんでそうケンカ腰になっちゃうの？」

すずかちゃんとなのはちゃんがアリサちゃんを引き離しに掛かって、「咲耶。悪いけど今日は・・・な」ルシル君が咲耶ちゃんの右肩をポンっと優しく叩いた。わたしも「ごめんなぁ。また明日、お願いしてもええかな？」手を合わせてごめんなさいする。

「・・・仕方ありませんわね。今日は引き下がりますわ」

「ていうか、学校案内ならあたし達がするわよ。親友なんだし」

「他クラスの方は黙っていてくださいな。クラスメートを案内するのなら、同じクラスの者が行うのが道理ですわ」

「でもやっぱ気心の知れた親友の方が良いんじゃない？」

「先程から親友、親友とくどいですわよ。はやてさんとルシル君に限ってはわたくしの方がお付き合い歴は長いですわよ」

「あっそう。でも付き合いの濃さで言えばあたし達の方が上よ。ていうか、アンタの付き合い歴なんて合計すれば数十時間程度でしょ？　病院で会うくらいなんだから。だけどこっちは毎日会ってるし、お泊りもしたし、付き合い歴で言えば何百時間単位よ」

「っ！　それは・・・」

アリサちゃんの言葉に口を噤んでたじろいだ咲耶ちゃんが、「憶えてなさい、アリサ・バニングス！」涙声で捨てゼリフ的なことを吐き捨てて鞄を手に取った後、教室の前の出入口から出ようとした。

「咲耶！　また明日な。今日はありがとう」

「咲耶ちゃん。これからよろしくな」

ルシル君に続いてわたしも挨拶しながら手を振る。すると「またね、咲耶。ありがと♪」シャルちゃんも笑顔で挨拶して大手を振った。さっきの泣きそうな表情から一転、「・・・はい！　ごきげんよう♪」咲耶ちゃんは笑顔になってくれて、1回お辞儀した後で軽やかな足取りで教室を後にした。

「アリサ。さすがに今のは言い過ぎじゃない？」

「咲耶、ルシルのフォローが無かったら泣いてたよ？」

フェイトちゃんとアリシアちゃんから非難を浴びたアリサちゃんが「だって・・・」たじろいだ。うーん、なんでこうなったんかなぁ。

そうしてわたしらもまた教室を後にして、バス停を目指した。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ヴィーター†††

「だっはー。疲れたぁー」

「今日はなかなかにきつかったな・・・」

航空武装隊同士の模擬空戦を行うために第１４管理世界ウスティオに赴いたあたしとシグナム。午前中にウスティオ中央区ディレクタスのど真ん中に広がる超巨大湖――グレースケレ湖の沖合８ｋｍ付近にある架空戦場人工島メガラニカで模擬空戦をやったんだけど、相手がまぁ強かったわけだ。シグナムはまんまと罠に嵌って孤立させられるし、あたしは撃墜回数１回を食らうし。

「今回やりあった向こうの教導隊の班長、強かったよな～」

あたし達が所属してる第２２１２航空隊は戦技教導隊・第２班に率いられて、教導隊１班率いる第１０１３航空隊と模擬戦。勝敗は、２２１２航空隊の負け。ほぼ泥沼だったけどな。戦力差は互角。敗因は、教導隊・１班の戦術が一枚上手だったってことかな。

そんで今、模擬空戦を終えたあたしとシグナムら２２１２航空隊や１０１３航空隊、それに教導隊は、ウスティオ地上本部の展望カフェとかで休憩中だ。ちなみにここの地上本部はグレースケレ湖の畔に建っていて、今居るカフェは湖を見渡せる絶好のポイントだ。

「ロッキー・サブナック一佐か。ミッド式魔導師という括りだが・

・・・」

「ベルカ騎士みてぇだったよな。アリサやフェイトみたいな」

あたしを撃墜したサブナック一佐。何かしらの近接格闘技と射砲撃の複合戦技の使い手だった。そうだな、一番近いのはアルテルミナス・マルスヴァローグか。アイツの戦技にミッド魔法を追加すれば、サブナック一佐の戦技になる。ま、そんなことが判ってもなんら意味ねぇけどさ。

「確かに、な。・・・管理局に勤めて改めて自覚することが多くなった。私もまだまだ未熟者だと。もっと学び、成長しなければ。・・・心が躍る。私は、幸せ者だ」

シグナムはそう言いながら首から提げた待機形態の"レヴァンティン"に触れた。あたしも制服のブラウスの襟元に手を突っ込んで待機形態の"アイゼン"を取り出す。シグナムの言う通りだ。成長できる今を幸せに思う。

「相席よろしいですか？」

改めて夜天(あたしたち)の守護騎士の現状がとんでもなく幸せなものだってことを噛みしめる。そんな時にあたし達にかけられた声。あたしは"アイゼン"から声の主へと顔を向ける。あたしとシグナムを見下ろしていたのは2人の女。

「おう。いいぞ。座れよ、フィレス、セレス。いいよな？　シグナ

ム」

「ああ、もちろんだ」

シグナムにも確認を取る。ま、断るわけねぇけど。何せ片方――セレスはあたし達と同じ２２１２航空隊所属で、さらにはあたしやシグナムと同じ第２分隊員だからな。あたし達の許可を聞いて、「ありがとうございます」「失礼します」２人は小さく頭を下げて、ケーキやティーカップが乗ったトレイをテーブルに置いてから空いてる椅子に腰掛けた。

「つうかよ、セレス。お前、休んでおいてなんでウスティオに居るんだよ。お前が居なかった所為で、あたし撃墜されたんだぞ」

１２歳っつう若さながらもセレスは剣の騎士として結構な腕を持ってる。シャルと同格くらいか。だからセレスが居たら、模擬戦だってもっと事を上手く運べたはず。思い出したらリベンジしたくなってきた。バトルマニアじゃねぇのにな。

「すみません、ヴィータさん。家の仕事で休まざるを得なくて」

「確か、お前やフィレスはミュンスターコンツェルンの・・・」

フィレス・カローラとセレス・カローラ。名前から見て判るように姉妹で、フィレスが姉、セレスが妹だ。２人ともシャルの友人で、今ではあたしら八神家やなのは達とも友人関係になってる。そんな２人は、管理局と聖王教会の両方に籍を置いてる騎士でもあ

る。そんで、管理局運営に必要な資金の出資の大半を賄うミュンスターコンツェルンのトップ、カローラ財閥の令嬢。時折、そっちの仕事もするとは聞いてたけどさ。だからってこの大事な日にそりゃねぇよ。

「はい。今日はウスティオに在る子会社への視察だったんです」

「だから局の制服じゃなくてスーツ姿なわけな」

「お前も随分と大変な道を歩んでいるな、セレス。局に教会に会社とは」

「好きですから♪」

セレス・カローラ。第２２１２航空隊所属の古代ベルカ式騎士。歳は１２歳っつったかな。階級は一等空士。一応は先輩だ。そんなセレスの事情は判ったとして、「フィレスは機動一課の仕事か？」古代遺失物管理部・機動一課の課員のフィレス。制服姿ってことはやっぱ仕事だろうな。

「グレースケレ湖の湖底に遺跡が在るんだけどね。そこにロストロギアがあるって話で、一課が助力要請したスクライア一族がロストロギアを発掘。一課は発掘の手伝いと護衛。ちなみに私の分隊は休憩中だから、こうしてのんびりティータイム」

フィレス・カローラ。機動一課所属の古代ベルカ式騎士。歳は１８歳だっけか。階級は二等空尉。そんなフィレスが、疲れてます、っ

て言いたげに首をコキコキ鳴らした。シグナムが「随分と疲れているようだな。しっかり休んでいるのか？」って声を掛けた。

「私の分隊、夜勤（ナイト）シフトで、少し寝不足なんですよ。ふわぁ。失礼」

「ぶっ通しで発掘してんのか？」

「ううん、夜はちゃんと休むよ。でも警備しておかないと。最近、また増えたの。ロストロギア荒しが」

フィレスの愚痴は聞いたことのあるような話だったから、「もしかしてリンドヴルムか・・・？」あたしは真っ先に思い浮かんだ連中の名前を告げた。すると「正解。ここ数ヵ月、鳴りを潜めていたんだけど、最近また活動を始めてね」ビンゴだった。鳴りを潜めてた期間を訊いてみると、あたしらパラディース・ヴェヒターとの戦後からがスタートだった。

『さすがに部隊２つを立て続けに潰されちゃ滞るわな』

『新たなメンバーを引き入れ、戦力となるように育てる期間だったのかもしれんな』

そういや、あれから全くと言っていいほどに仕掛けて来ないよな。流石に管理局員になっちまったから諦めたのかも・・・って、んなわけないか。今でも堂々と管理局を敵に回してんし。

「あ、シグナムさん、ヴィータ。午後からは私も参戦しますから、

一緒に頑張りましょう！」

模擬空戦は午後も行われる。午前の部じゃ負けたけど、今度は勝って見せる。セレスが差し出して来た右拳へと、「ああ」あたしとシグナムも拳を差し出してコツンと突き合わせた。その時、フィレスが「えっ！？」急に立ち上がったからあたし達はビクッてなった。

「お姉ちゃん・・・？」

「なんだよ、フィレス。驚かせんなよ」

「ごめん、話はあとで！　機動一課・スノー分隊隊長フィレスから各員へ！　スクランブル！リンドヴルムのメンバーが索敵圏に侵入！　真っ直ぐグレースケレ湖に進行中！　ゲイル分隊・フレア分隊・アース分隊と合流し、空戦班はリンドヴルムを迎撃・逮捕！　陸戦班は遺跡のゲートウェイエレベーターと内部を警備！」

フィレスが自分の部下に通信を繋げながらカフェの出入り口へ駆けだした。今回のリンドヴルム迎撃・逮捕は機動一課の仕事だ。けど本音を言えばあたしも出たかった。連中とは因縁もあるしな。だからいつか対リンドヴルムの任務に就いて、絶対にミスター・リンドヴルムをとっ捕まえてやる。

「お姉ちゃん。頑張って・・・！」

展望カフェのパノラマウィンドウに近寄って、グレースケレ湖上空をすっ飛んでくフィレスや他の隊員の姿を見守る。そんで湖上で始

まった機動一課の空戦班１０人とリンドヴルムの私設部隊８人の空戦を、あたし達に続いてカフェに居た他の局員たちも見守り始めた。数で言えば機動一課の方が多い。遠目だからよくは見えねぇけど、フィレスが他の隊員より頭ひとつ抜き出てるのは判る。いくら相手が武器型ロストロギアでも、フィレスら一課員の腕には及ばなかった。次々と撃墜していく。

「さすがお姉ちゃん！」

残り２人となったところで、「うおっと！？」それは起きた。グラグラと揺れ始める足元、っていうよりは地上本部自体が大きく揺れ出した。地震だ。揺れが徐々に大きくなり始めたから片膝立ちすることで転倒を防ぐ。

「なんだ、おい、あれ！」

局員の誰かがパノラマウィンドウの外を指さした。あたしも外、湖面へと目を向ける。湖面にはデケェ渦が巻いてて、その中心から「なんだ！？」いやに太い、青白い砲撃みてぇなもんが発射された。そんでその砲撃は最悪なことに空戦をしていたフィレスたち一課員を呑み込んだ。砲線が途切れた後、フィレス達が次々と湖面に向かって墜落してくのが判った。

「いや・・いや・・・いや・・・いやぁぁぁぁぁーーーーーっ！
お姉ちゃん！　お姉ちゃん！　お姉ちゃん！　おね――っ！？」

「「セレス！？」」

フィレスの撃墜を直に目の当たりにしたことでセレスが気絶した。床に倒れる前にシグナムがセレスを抱き止める。セレスの悲痛な叫び声で、今の光景が現実なんだってことを理解した局員たちが「救援隊をすぐに回せ！」「援軍の要請を！」一斉に騒ぎ出した。

「おい、渦から何かが出て来たぞ！」

「なんだアレは！？」

「巨人！？」

セレスから湖へと目を向ける。渦の中からデケェ全身甲冑姿の巨人が這い出て来ていた。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒シグナム†††

突如として渦より放たれてきた砲撃はフィレスら機動一課の空戦班を撃墜。そして渦から姿を現したのは、全長１５ｍほどの銀色の甲冑とインバネスコートのような白色の外套に包まれた巨人。我々第２２１２航空隊、そして第１０１３航空隊、さらには教導隊の班長２人が協力して巨人の制圧任務に就くこととなった。

『こちら第２２１２航空隊隊長、ジョシュア・エルグランド二佐。遺跡のさらに地下から出現したとされているあの巨人も、おそらくはロストロギアだろう。リンドヴルムの動きからして連中の目的はあの巨人と見ていい。・・・回収できないように機能停止させるぞ』

『第１０１３航空隊隊長のジータ・アルテッツァ三佐です。一課の空戦班に捕まっていたリンドヴルムの私兵隊が撤退、および撤退幇助の新手が接近中とのことです。追撃班と攻撃班、遺跡から脱出したスクライア一族の皆さんと機動一課員の救助班、３つのチームに分けます』

『第２２１２航空隊の第１から第３班は攻撃班。第４班は追撃班。第５班は救助班だ！』

『第１０１３航空隊も班分けします！』

私とヴィータ、そしてセレスの第２分隊も攻撃班に選ばれた。１０１３航空隊は、第１班が攻撃班、第２班が追撃班、第３から第５班が救助班となり、教導隊の班長両名、サブナック一佐、第２班の班長ガウェイン・クルーガー三佐もまた攻撃班となった。

『攻撃班は徹底的に攻撃を浴びせろ！　攻撃班（アタックチーム）・・・交戦（エンゲージ）！！』

『追撃班（パシュートチーム）、救助班（レスキューチーム）・・・ミッションスタート！』

エルグランド二佐とアルテッツァ三佐の号令と共に、最初の砲撃以降なんの動きも見せない巨人へと攻撃を開始する我々攻撃班１３人。そして撤退を始めたリンドヴルムの逮捕するための追撃班、湖面にて救助を待つ発掘隊を救う救助班もそれぞれ行動を開始した。

「撃て、撃て、撃て、撃て！」

巨人を包囲するかのような陣形を取り、一斉に射撃や砲撃を発射していく。私も同僚に遅れることなく、「空牙！」"レヴァンティン"を横薙ぎに振るって魔力斬撃を飛ばし、「おらぁ、行けッ！」ヴィータも "グラーフアイゼン" で魔力弾を打ちつけて発射するシュワルベフリーゲンを6発と打ち放った。

我々の攻撃が一直線に巨人へと向かい、そして着弾した。爆発に呑まれる巨人。巨人は攻撃に晒されても動きを見せず、直立不動のまま。それから1分ほど我らは攻撃を続けたのだが・・・。ダメージが入っていないことを我々に示すかの如くその偉容をまざまざと見せつけて来る。甲冑どころか外套すらにも微細な傷や汚れが付けられないとは。

『おいおい、この感じ、なんか憶えがあんだけど』

『奇遇だな。私も、この理不尽な防御力には憶えがある』

何度目かの空牙を撃ち終えた時、ヴィータからそう思念通話が入ったため、私も同じ考えをしていたことを伝えた。圧倒的な攻撃力と防御力を備えた、"エグリゴリ"・レプリカ。そう、ゼフォンやミュールといったアノ機械兵器と同じ・・・。

『各員、警戒！　マントが開いていくぞ！』

エルグランド二佐からの思念通話が攻撃班全員に回った。巨人が羽織っていた白い外套がバサッと音を立てて広げられた。そして知る。

それは外套などではなく、「翼・・・？」だったのだと。４対８枚の翼は大きく左右に広げられ、その表面が青白く光った。直感に頼らずとも理解できる。あれは、攻撃の前兆だ。

『各員、回避準備！　何かしらのアクションが来るぞっ！』

サブナック一佐からの警告が頭の中にけたたましく響いたその直後、巨人の両腕が勢いよく持ち上がり、１０本の巨大な指先を我々へと向けた。指先には半球状の赤いクリスタルが有り、そのクリスタルが強く発光。と同時に予想される射線上より急速離脱した。

――天上の閃光（ラージョ・デ・シエロ）――

そして十指の先端のクリスタルから発射される青白い砲撃群。攻撃時の予備動作がハッキリして、さらに我々はいつでも回避行動へ移れるよう警戒していたおかげで、全員が直射砲撃を回避しきった。そして巨人は、その巨大さをなんでもないと言うように翼を羽ばたかせることなく静かに空へと上がった。

――天上の閃光（ラージョ・デ・シエロ）――

『各員、魔法を物理破壊設定へ変更！』

『その場に留まり続けるな！　常に動き、的にならないように注意を払え！』

『各員、得意魔法で集中攻撃！』

『近接班は頭部を集中的に狙う！　射砲撃班は両腕と翼を最優先で破壊してほしい！』

各隊長・班長の指示が飛ぶ。近接班の指揮官となったサブナック一佐が、十指から放たれる砲撃の合間を縫って巨人の頭部へと向かって突撃していく。剣の騎士である私や鉄槌の騎士であるヴィータも近接班となる。ゆえに『ヴィータ、行くぞ』迫る砲撃を躱しながらヴィータへとそう告げる。

『おうよ！　鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼンに壊せねえモンはねぇっ！』

私とヴィータもサブナック一佐の後に続くと、『先の模擬戦が楽園（おまえたち）の番人の全てではないと期待するぞ』サブナック一佐からそのような個人的な思念通話が送られてきた。私は『ええ』と、ヴィータは『こういうデカブツ破壊こそがあたしの本領だ！』と応じた。

――勝者の眼光（ルス・デ・グロリア）――

面甲の目の部分に空いている細いスリットの奥、ちょうど眼球部分になる位置が発光した。それは正しく巨人の目なのだろう。そしてそれは攻撃でもあった。スリットの奥から発射される2本の砲撃。私はその砲撃を横移動することで躱し、即座に接近する。

「紫電・・・一閃ッ！」

兜の額部分の窪みに収められている巨大な球状のクリスタルへと攻撃を仕掛ける。燃え盛る"レヴァンティン"を容赦なく振り下ろした。一撃で破壊できずとも少なからず傷は付くだろうと思っていたのだが、「うぐっ・・・！」逆にこちらにダメージが入った。その頑強さに柄を握る両手が痺れ、しかも何かしらの障壁が働いているのか数mと弾き返されてしまった。

「何やってんだよ、シグナム！　だらしねぇぞッ！」

――ラケーテンハンマー――

急襲突撃用の形態を取った"グラーフアイゼン"による一撃が、先ほど私を弾き返したクリスタルへと直撃した。しかし「いってぇ・・・！」ヴィータもまた弾き飛ばされてしまった。
続けて、「別の個所を狙え！」サブナック一佐がガントレット型のストレージデバイスによるアッパーで巨人の顎下を殴り上げ、「フィストカノン！」拳より零距離砲撃を発射した。ヴィータを撃墜したのもアノ攻撃だった。

「硬いな・・・！　これは骨が折れそうだ」

ふるふると右手首を振るサブナック一佐。どうやら今の攻撃で手首を痛めてしまったようだが、「だからと言って退けはしねぇが」ガツンと拳を突き合わせ、集中砲火を行う射砲撃班を薙ぎ払うかのように腕を振るった巨人の首へと攻撃を仕掛けた。

「ヴィータ、首を狙うぞ。頭部を斬り飛ばす！」

「装甲部分よりかは潰しやすそうだよな・・・！」

――勝者（ルス・デ・グロリア）の眼光――

目から放たれる2本の砲撃を回避し、巨人の首の付け根部分へと最接近する。根元ではすでにサブナック一佐が装甲に向かって拳や蹴りを打ち込み続けていた。私たちも根元に降り立ち、巨人が首を動かすことで唸りを上げる駆動音のうるささに顔を顰める。
この巨人の首は旋回と見上げる機能があるだけのようで、首を下に振られて頭部と胴体に挟まれて圧死するという悲惨な目には遭わずに済みそうだ。

「とっととぶっ壊そうぜ。首の装甲は薄そうだし。アイゼン、カートリッジロード」

「ああ。サブナック一佐、お手伝いします」

「おう。任せたぞ。この装甲もクリスタルと同じ妙なバリアが張られている。気を付けろ」

こうしている間にも射砲撃班はいつ撃墜されてもおかしくない砲撃群の中を翔けている。すぐにでも破壊しなければ。"レヴァンティン"を鞘に収め、カートリッジをロード。破壊力ではなく切断力重視の一撃をお見舞いしてくれる。

（ん・・・？　何かしらの文字が書かれているな・・・）

ふと、首を護る滑らかな装甲表面に文字が書かれているのに気が付いた。目を凝らしてよく見てみる。

「・・・Ａ、Ｍ、Ｔ、Ｉ、Ｓ、・・・ア、ム、ティ、ス、と読むのか・・・？　モデルナンバー・・・・ＴＡ０１０９・・・ＢＥＲＧＥＬ、ＭＩＲ・・・バーゲル・・・、ベルゲルミ・・ア・・・いや、ベルゲルミルか・・・？」

Ａ・Ｍ・Ｔ・Ｉ・Ｓ・　Ｍｏｄｅｌ　ｎｕｍｂｅｒ：ＴＡ－０１０９：ＢＥＲＧＥＬＭＩＲ。そう記されていた。それがこの巨人の名前、なのかもしれん。万が一に備え、その文字を記憶していると、「ぼーっと突っ立ってんなよ、シグナム！」ヴィータに叱責されてしまった。すまん、と謝罪してすぐさま攻撃に移る。

「紫電・・・清霜！！」

鞘内に溜めた魔力を爆発させ、"レヴァンティン"の超高速居合いを行う。元々の切断・破壊力を備えた斬撃に、速度を上乗せすることでその威力を格段に上昇させる剣技だ。

「ぐぅぅ・・・っ！　ヴィータ！　サブナック一佐！」

斬れない。目に見えない何かしらの障壁によって衝撃が完全に逃がされた。だがこれで終わりにはしない。弾き飛ばされるより早く２人に合図を出す。真っ先に「ラケーテンハンマァァァーーーッ！」ヴィータの一撃が"レヴァンティン"の間近に打ち込まれる。さら

に「おぉぉぉらぁぁぁぁぁッ！！」サブナック一佐の上段回し蹴りがヴィータの反対側付近へと撃ち込まれた。

（僅かに抵抗が弱まった・・・！）

障壁から伝わってくる抵抗力が緩んだのが"レヴァンティン"の柄を持つ右手から伝わって来た。ヴィータやサブナック一佐も気付いたようだ。ヴィータはカートリッジをロードし、「ぶち貫けッ！」ブースターの噴射力を増加。サブナック一佐は両拳で連打。そして私は鞘に魔力を纏わせての打撃、間髪入れずに「紫電一閃！」を叩き込んだ。

「「「っ！！」」」

バキン、と砕ける音が鳴った。先程まで我らの攻撃を拒んでいた障壁が砕けたことを意味する音だった。"レヴァンティン"が、"グラーフアイゼン"が、サブナック一佐のガントレットが、ようやく装甲へと辿り着いた。ガキィンと金属音が響き渡り、装甲に傷を付けた。いける。そう確信した、その時・・・

――語り継がれし神の審判（トルエノス・デ・ラ・トラディシオン）――

一瞬の閃光、視界が真っ白に染まり、それと同時に鼓膜が破られるかと思えるほどに強烈な爆発音が我々を襲った。

（な、んだ・・・何が・・起きた・・・？　それよりも、私は今・・・立っているのか？　座っているのか・・・？）

視覚や聴覚、三半規管をやられたことで何も見えず、聞こえず、今の自分の体勢すら判らなくなっていた。

（身体は・・・動く。レヴァンティンは、握っているな。今の私の体勢はなんだ・・・？）

触角や身体機能には問題ないようで、目に見えないながらも自分の身体を動かす。それで判ったのは、私は仰向けで倒れているということだった。うつ伏せになり、身体を起こした直後、「なに・・・！？」地面――ではなく巨人の胴体が傾いてしまったことでごろごろと転がってしまう。

（このままでは何十mという高度から湖に落下してしまう！）

空は飛べるが、視覚や三半規管がダメな以上は空間把握が出来ずに墜落や、巨人からの攻撃の危機に晒されるだろう。

（それに、ヴィータとサブナック一佐はどうした！？　無事なのか！？）

2人の姿も声も捉えられない。どうすればいい。解決策が出るより早く私は中空へと投げ出されてしまった。目が見えない。それがこれほどまでに恐ろしいものだとは。浮遊感から落下感へと変わる。墜落だけは免れなければならないため飛行ではなく浮遊の魔法を発動するより早く、「ん・・・？」誰かに抱き止められたのが判った。

『シグナムさん、大丈夫ですか！？』

失念していた。思念通話でヴィータとサブナック一佐に確認を取れば良かった。焦っていたとはいえ基本的な魔法を忘れてしまうとは、とんでもない無様を晒してしまったものだ。自己嫌悪もそこそこに、『お前も無事で何よりだ、フィレス。助かったよ、ありがとう』私を助けてくれたフィレスに礼を返す。

『ヴィータ、サブナック一佐は無事ですよ。ただ・・・巨人と戦っていた航空隊の皆さんが撃墜されました』

『なに！？』

視覚機能が元に戻り始めている中でフィレスから話を聴いた。首の根元に居た時に我らを襲ったアノ閃光と爆音の正体。それは稲妻状の砲撃が８枚の翼から発射されたことで起きたものだった。無数に枝分かれした砲撃は巨人の全方位１ｋｍ圏内を襲い、エルグランド二佐らは躱すことも防ぐことも出来ずに墜とされてしまったとのことだ。そして今、巨人と戦っているのは意識を取り戻したセレスと首都航空隊の面々だそうだ。

「（ようやく視覚機能が正常になったか）もう大丈夫だ、降ろしてくれ」

全ての感覚を取り戻せたことでフィレスに降ろしてもらい周囲を確認。ヴィータやサブナック一佐の無事の姿をしっかりと視認する。そして「なんだ、あれは・・・！？」巨人へと目をやり、その光景に目を疑った。

――氷柱弾雨（セリオン・エクサラシオン）――

氷で出来た全高１０ｍ級の六角柱６本が巨人へと降り注ぎ、巨人を押し潰した。我々の攻撃を受けてよろけることさえしなかった巨人がいとも容易く湖面に伏せられた。フィレスが「あの魔法でさえも傷が付かないんですけどね」嘆息した。

「知っているのか？　そもそもあの魔法は・・・まさか、セレスか！？」

「・・・カローラ家には、古代ベルカ式の魔法とデバイス以外にも、また別の魔法が代々受け継がれているんです。それが・・・」

「あの氷結系の魔法というわけか・・・！」

「はい。まぁ、強力な分、負担も代償も大きいですけど。・・・そろそろ私も参戦しないと。シグナムさんはもう少し休んでいてください」

そう言ってフィレスが巨人と戦うセレス達の元へと飛んで行った。そして、セレスと同じ氷の六角柱を８本と創り出して落下させ、起き上がろうとしていた巨人をまた押し潰した。

――制圧せし氷狼（インバシオン・ローボ）――

――氷星の大賛歌（カンシオン・デ・コンヘラシオン）――

遠目でハッキリとは見えないが、フィレスが狼を無数に放って巨人に突撃させ、セレスが砲撃を放ったのは判った。続けて首都航空隊員が砲撃を撃っていくが、カローラ姉妹のように通用することなく弾かれている・・・ようだ。巨人もカローラ姉妹を標的にして、負けじと十指から砲撃を放つ。

『シグナム！　手伝わなくていいのかよ！』

『あ、ああ！』

ヴィータの思念通話に頷き返し、カローラ姉妹の援護に向かうことを決意。"レヴァンティン"の柄を握り直し、2人と巨人の元へとヴィータと共に向かう。

「（シュツルムファルケンでの狙撃なら、少しは通ってくれるはずだ）・・・っ！？」

「っ！？　なんだか知んねぇけどやべぇ！」

とんでもなく強大な魔力反応、そして濃い殺気。それらが巨人の頭上にある雲の奥から放たれてきた。私はすぐさま『フィレス、セレス、首都航空隊各員、その場から離れろぉぉぉーーー！』思念通話を巨人と戦闘中のカローラ姉妹や隊員たちに通す。

――轟風暴波――

そしてそれは起こった。上空から湖面へと向かって途轍もなく強大

な爆風が吹いた。離脱を始めていたカローラ姉妹や首都航空隊を吹き飛ばし、そして・・・我々も吹き飛ばした。

Ｅｐｉｃｏ６優しくない世界～Ｔｈｅ　Ｆａｔｅ　ｏｆ　Ｒｕｓｙｌｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

登校初日を何事も無く・・・とは言い切れないが終えることが出来、俺やはやて達は今、スクールバスに乗って帰路に就いている途中。俺たちはバス前方付近の席を陣取り、運転席後方に空いている空間――車椅子乗車スペースに居るはやての周囲の席に俺たちは座っている。

（まさかまた亮介から敵視されるとは。しかも原因もまた同じ恋愛絡みで、相手さえも同じときた）

はやて達の会話に参加することなく、俺は窓から外の景色を眺めながらそう考えていた。どうやって亮介と仲直りにするか。かつての契約では、アイツは俺からシャルを奪おうとして、彼女にアプローチをかけ始めた。
それで気付けば亮介はシャルの性格や物腰に惹かれ始め、本気で彼女を好きになってしまったわけだ。果てには本格的に俺を恋のライバルに認定してくれやがった。まぁそのおかげでいつの間にか怨敵⇒好敵手⇒悪友みたいな間柄に。

（しかし今回はそんな手は使えないよな。・・・むぅ。シャルにならどれだけ手を出しても構わないが、はやてに手を出されたら割と本気でこっちもキレそうだ）

ここはやはり亮介の早とちりを修正するのが一番か。刀梅とくっ付けてしまえば万事解決だろう。とまぁ、別段深刻に悩むような問題じゃないと考えを下し、はやて達の会話に耳を傾けることにした。話題は、リインフォースⅡのロールアウトがいつなのか、というものだった。

「あと４日くらいかなぁ。ミミルさんに全部任せてれば先月の半ばくらいに起こせるはずやったんやけどな、わたしが出しゃばった所為で遅なってしもうた」

「出しゃばったってそんな・・・」

「それは仕方ないんじゃない？　だってリインフォースⅡははやてのデバイスで、家族なんだし」

「うんうん。そこはやっぱり他人任せじゃなくて、家主のはやてが参加するべきだったよ」

「アリサちゃんとアリシアちゃんの言う通りだと思うよ、はやてちゃん」

「それにね、はやて。リインフォースが旅立つ前にちゃんと目覚めさせることが出来る。今はそれで良いと思う」

みんなのフォローに、「うん。おおきにな。そう言うてもらえたら楽になった」はやてはそう礼を言って微笑みを見せた。この世界で

のはやて達の幸せぶりに、俺は改めて嬉しく思う。先の次元世界ではリインフォースはクリスマスの日に旅立ち、リインフォースⅡと出逢うことはなく、アリサとすずかも魔導師にならなかったため、ここまで魔法関係に深く関わりを持たなかったし。

（このままずっと何十年も仲良くやって行くんだろうなぁ。シャルもまた、守護神としてではなく現在を生きる人間として存在しているし）

「？？　どうしたの？　ルシル。わたしのこと、ずっと見つめて・・・はっ。とうとうわたしの魅力に気付いて――」

「違う。君たちは本当に仲が良いな、と思っただけだ。そこに男（おれ）ひとりが紛れていて、少しばかり場違い、肩身が狭い、そんな思いを抱いただけだ」

本音半分・嘘半分。前半は紛れも無い事実。後半は嘘に近い。今さら自分以外が女性だというチームであってもなんら抵抗はない。何故なら「気にしないで良いじゃん。ルシルも外見が女の子だし」アリシアが言ったように俺の外見が女性に近しいもので、さらに何度か性別転換の契約を受けているという笑い話のおかげでもある。そう、全ては今さら。

「でさ、話を変えるけど。シャルやはやて、ルシルは午後どうすんの？」

アリサから午後の予定を聞かれた俺たち特別技能捜査課３人。なの

は達はすでにそれぞれ配属される部署の候補生として勤務することになっているため、これから配属部署で仕事だ。

「わたしは一度家に帰ってから、リインフォースと一緒にミミルさんの研究室やな」

時間が許す限りはやてはミッドチルダはサンクト＝オルフェンに居を構えるイリュリア技術者ミミルの研究室へ赴き、リインフォースⅡの完成を急いでいる。今日もそのようだ。俺としても、僅かな期間ながらでも構わない、アインスとリインを同じ時で過ごさせてやりたい思いがある。

「わたしは、リンディ提督たちやアリシアと一緒に買い物。日持ちする食材とか買い込むのに手が必要でさ～」

「アースラスタッフは1週間の休暇が始まったばかりだけど、そんなのすぐだからね。時間があるうちにサクッとやるのがハラオウン家流！」

はやて、シャル、それにアリシアと続き、「俺は、・・・俺も本局に用があるから、はやて達と一緒に向かうよ」俺も午後の予定を伝える。俺の研修先はいくつもある。何故なら評議会から受けた指示によって仕事をこなすのが、俺の局員としての役目だからだ。特に力を入れるよう指示されているのは、内務調査部の調査官になれ、だ。査察・監察・監査、管理局内の不正を調査、正す部署である内務調査部だ。その役割ゆえ、後ろ暗い事をしている連中には良い顔をされない。ならするな、って話なんだが。

（普通、９歳の子供に研修させるような部署じゃないよな）

不正を見つける観察眼、把握力・分析力・総合力と言った情報処理・活用能力が必要となる調査部なのにな。ま、"英知の書庫アルヴィト"の知識を応用すれば問題はないが。それに、下手に戦場に出されるよりはマシだ。魔力消費を抑えることが出来、記憶喪失に悩む必要が無くなる。

「じゃあ一度別れて、スカラボで合流しましょ♪」

アリサからそんな提案が出た。スカラボ――スカリエッティラボの略称だ。第零技術部という堅苦しい名前より愛称っぽくしようというアリシアの提案から決められたものだ。ちなみに技術部長ジェイル・スカリエッティやシスターズの公認で、スカリエッティも使っている。

（先の次元世界とは全くと言っていいほどに別人なんだよな。警戒するのも馬鹿馬鹿しくなるほどの間抜けっぷり）

演技ではないと思う。俺の目が節穴じゃなければ、だけど。今のところは信用してやるさ。信頼はまだお預けで。そこまではまだ出来ない。そう、何かしらの不安が残っているんだ、スカリエッティへの信用を失わせる出来事が在ったような気が。"砕け得ぬ闇事件"の際に、何か・・・。だが、そんな記憶はない。気の所為なのかもしれないが、それで済ませるほど、軽い違和感じゃない。

「・・くん・・・ルシル君！」

「っ？　はやて・・・？」

思い耽っていたことではやてに呼ばれているのに気付くのが遅れた。俺の視線を受けたはやてが「着いたよ、バス停。はよ降りやな」僅かな非難と焦りの含まれた声で返した。目線の先には乗降口で、外ではドライバーがスロープを用意している最中だった。

「すまない。それじゃあみんな。本局で」

なのは達に挨拶し、「うん。またね」彼女たちの挨拶を受けながらはやての車椅子を押してスロープを下る。そして走りだすバス――窓から手を振ってくれるなのは達に手を振り返して見送った。バス停から自宅へと歩く。そんな中、「ルシル君。さっき、刀梅ちゃんや武塔君のこと考えてたん・・・？」はやてがそう訊いてきたため、「その事についてはまぁ、亮介と刀梅をくっ付ければ良いと結論付けた。方法は刀梅と相談だ」と返す。あの子も、仲直りを手伝う、と言っていたし。

「えらく直球やなぁ。けど難しない？　武塔君の片想いかもしれへんのに」

「（先と違ってそうだったら確かにアウトだが・・・）たぶん、刀梅も亮介を少なからずは意識しているとは思う」

「親しい間ってことは見とれば判るけど・・・。うーん・・・」

「ま、ゆっくりやって行こう。急いては事を仕損じる、だよ」

上手くいくまでの間、俺は亮介から敵視されるだろうが、そういうのには慣れ・・・ていることもあってか深刻には捉えていない。ホント、俺の精神はとことん壊れているな。そして俺とはやては自宅へと無事帰宅。２人して「ただいまー！」と挨拶して玄関扉を開ける。

「お帰りなさい、主はやて、ルシル！」

パタパタとスリッパを鳴らして玄関にまで出迎えに来てくれたリインフォース。彼女はすでに局の制服へと着替え終えていて、いつでも出られるように準備万端だった。あとは俺たちだな。

はやてが「わたしらも着替えよか、ルシル君」そう言って自室に向かい始めたから、「ああ」と頷き返して俺も自室へと向かい、局の制服に着替える。着替えを終えた後は、２階の物置に設置したトランスポーターへ。先に着いた俺はシステムを立ち上げる準備をしておく。

「お待たせや、ルシル君」

「こちらも準備を終えたところだから」

こうして俺とはやてとリインフォースは、本局でのチーム海鳴集合場所――スカラボへと直通転送。転送時に生まれる発光に僅かに目を閉じ、次に生まれる浮遊感に身を委ね、気が付けばそこはすでに

スカラボのトランスポータールーム。

「はやて君、ルシリオン君、騎士リインフォース！」

転送された直後、俺たちの名前を呼びながらスカリエッティ、そして彼に付き従うようなに秘書であるウーノが側へ駆け寄って来た。その焦り様にはやてが「どないしました・・・？」困惑気味に返した。

「確か、君と騎士リインフォースは休みだったね？」

「えっ、あ、はい。そうですけど・・・」

「ならば、今からウスティオに向かうといい」

「「「？？？」」」

スカリエッティのその言葉の意味が解らずに小首を傾げていると≪ＰｉＰｉＰｉ≫と、はやて宛に通信が入ったことを報せるコールが鳴った。スカリエッティが「おそらく出れば判るだろう」深刻そうな声色で告げた。

「・・・はい。特別技能捜査課、八神はやてです」

『はやてちゃん！？　シャマルです！　今どちらに居ますか！？』

今にも泣きそうな表情を浮かべたシャマルからの通信だった。その

様子に、俺たちの知人の身に何かが起きたんだと一瞬にして悟った。シャマルの様子に絶句しているはやてに代わり、「何があった？」俺が訊ねてみた。

『シグナムとヴィータちゃんが所属してる部隊が撃墜されたって話が来たんです！』

それは信じられない話だった。シグナムとヴィータの撃墜なんてこと、すぐには信じられなかった。だが、「私もそれを伝えたかったんだよ」スカリエッティがそう話を切り出した。第１４管理世界ウスティオで行われた２個航空武装隊の演習。シグナムとヴィータが所属している第２２１２航空隊も参加することは俺たちも聞いていた。

その午前中の演習後、中央区ディレクタスはグレースケレ湖の湖底遺跡のさらに地下からロストロギアと思われる巨人が出現し、２個航空隊、戦技教導隊２班長、その当時湖底遺跡でまた別のロストロギアを発掘していたスクライア一族・機動一課の空戦班が、その巨人によって全滅させられたのだと。

『詳しくは聞かされていないのですけど、ウスティオ地上本部から医務局へ応援要請がありまして、私も参加することになりました！　あの、ですから――』

「わたしも付いて行ってええか！？　家族がそんな事になってるんなら、わたしも行かなアカンから！」

『はい、お願いします！　シグナムとヴィータちゃんも、はやてち

ゃんのお声を聴きたいと思いますから！』

そういうわけではやてとリインフォースは、医務局から派遣される応援チームに付いてウスティオへと向かうことになった。残念ながら俺はスケジュール的に本局を空けることが出来ないから居残りだ。

「はやて、リインフォース、すまないな」

「ううん。ルシル君は仕事やもん。・・・行って来る！」

「お前は、お前の務めを果たせばいい」

「トーレ。はやて君たちは急ぎだ。手伝ってあげたまえ」

「はい。では行きましょうか」

リインフォースがはやてを横抱きに抱え上げ、トーレが折り畳んだ車椅子を脇に抱え、ダッシュでトランスポーターホールへ向かって駆けだした。３人の背中を見送った後、「ドクター。ウスティオの一件をどこで？」そう問うた。スカラボは基本的に局の仕事に不干渉だ。ゆえに情報が入ることも無い。入るとすれば、シスターズ経由だが・・・。

「うちのクアットロも教育隊としてウスティオの本部に居たのだよ。あの娘も見ていたようでね。あの娘から送られてきた映像の中に、騎士シグナムと騎士ヴィータの姿を確認してね・・・」

「（それはちょうどいい）見せて頂いても・・・？」

「ああ、構わないよ。ウーノ」

「はい、ドクター。クアットロから送られてきた映像がこちらになります」

ウーノが空間キーボードを操作し、俺の前方にモニターを1枚と展開した。僅かなノイズが走った後、クアットロ視点の映像が始まった。どこかの一室のようで、教育隊の教官として授業を行っている最中らしい。

『あら？　あの子たちは確か・・・機動一課の・・・』

クアットロの声でそう聞こえた。クアットロの視線が渦から空へ向く。しかし遠目ゆえに誰かは判別できないが、１０数人単位で空戦を広げている様子が見えた。しかしその不都合は解消される。流石は戦闘機人と言うか、小さくて認識できなかった空戦を行っている連中の姿をズームアップさせることで視認。戦っていたのはフィレスら一課員と、ロストロギアを狙ってやって来たのかリンドヴルムの私兵隊だった。

（しかし強いな、フィレス）

フィレスの騎士としての戦闘能力は、ロストロギアを武装しているリンドヴルムの私兵をも圧倒し、次々と撃墜していき、他の隊員がバインドで捕獲していく。とそんな時、『地震！？』突如としてグ

ラグラと映像が揺れ始めた。揺れ具合から震度５～６くらいか。しかしそれでも授業を受けている局員は悲鳴を上げることなく、冷静に椅子から降りてしゃがみ込んだ。

『グレースケレ湖が・・・！』

１人の局員の驚愕の声が教室内に響き、揺れが収まると同時にクアットロや局員たちが窓へと近づき、窓から眺めることの出来るグレースケレ湖を見た。湖面には直径１００ｍほどの大渦が発生していた。そしてそれは起きた。渦の中心より青白い光線が放たれ、リンドヴルム残党狩りを行っていたフィレスら一課員を呑み込んだ。

「なんてことだ・・・！」

機動一課が撃墜されたというのはこういう事か。それを切っ掛けとしたように私兵隊を捕縛していたバインドが消え、撤退することなくその場に留まる。何故逃げないのか。その理由はすぐに判った。渦の中心、砲撃を放った主がその姿を現した。

「っ！！」

目を疑った。渦より姿を現したのはプレートアーマー姿の巨人。知っている。戦ったこともある。

（Ａｕｔｏｍａｔｉｃ　ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｍａｇｉｃ　ｕｓｅ　Ｔａｃｔｉｃｓ　ａｔｔａｃｋ　Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｔ　ｂａｔｔｌｅ　Ｓｙｓｔｅｍ・・・Ａ・Ｍ・Ｔ・Ｉ・Ｓ・。タイプは広

域砲撃戦型アーティラリー。あんな物まで残って、しかも動いているのか・・・！）

両手を握り拳にする。まただ。また、俺たちの時代の遺物が現代を荒らすのか。過去（おれたち）が現在（いま）を侵す。この世界特有で起きる現象だ。クアットロの目を通してアムティスとシグナムら２２１２航空隊、１０１３航空隊、さらに２個戦技教導隊の戦闘を見守る。

「何なのだろうねぇ、この巨人は。あれほどの巨体を支えられるだけの構造。魔力砲に似て非なる砲撃。ストライカーやエースクラスの攻撃を四方八方から浴びても堪えないその防御力。今すぐにでも実物を解体して調べ尽くしたいものだよ」

スカリエッティの話をスルーしながらモニターを眺め続けていると、地上本部内に流される首都航空隊や戦闘可能な局員へのスクランブル要請を伝える放送が流れた。クアットロも自主的に空へ上がるようだ。教室を出、廊下を駆けている最中・・・

――語り継がれし神の審判（トルエノス・デ・ラ・トラディシオン）――

『きゃぁぁぁぁぁーーーーーっ！！』

雷が落ちた時のような轟音と閃光が生まれ、モニターがしばらく闇に包まれた。

（しかし今のは・・・おそらくアレだろうな・・・）

経験したことがあるものだ。広域殲滅砲撃トルエノス・デ・ラ・トラディオシオン。ヨツンヘイム語で、伝承の雷、という意味を持つ、タイプ・アーティラリーの基本兵装の1つだ。その意味の通り、雷撃のような枝分かれする拡散砲撃を放つ。メリットは広範囲に拡がる砲撃ゆえに囲まれた際には役立つ。デメリットは、ロックオン機能が無いため、狙った相手に当てることが出来ないこと。

『今のは・・・？』

モニターが正常に戻る。それはつまりクアットロの視覚機能が元に戻ったことを意味する。彼女は衝撃で倒れ伏していたようで、最初に映ったのは床だった。頭を振っているのかモニターの映像も左右に揺れる。それでもクアットロは立ち上って再び廊下を駆け、エントランスを通り、外へ出た。外ではすでに十数人と空へ上がる準備をしていた。

『お先に失礼しま～す　』

クアットロは外に出て早々に空へと上がり、巨人の元へ翔け出した。ズームされる映像に撃墜されたと思われたフィレス、そしてセレスが映り込んだ。しかも使っているのはヨツンヘイム式の氷雪系魔術。それにはもちろん驚いたが、今はそれに気を取られていられない。

――轟風暴波――

カローラ姉妹の容赦ない攻撃によって身動きが取れなくなり始めたアムティス。このまま押し切るのか、と思ったところでアムティス

の頭上に広がる雲海より湖面へと向けて流れてきた爆風。アムティスと戦っていた隊員たちを吹き飛ばし、そしてクアットロをも呑み込んだ。ここで映像がプツンと途切れた。

「ドクター。クアットロは・・・？」

「無事さ。私の娘たちは頑丈からね。今ドゥーエとチンクに迎えに行ってもらっているよ」

「そう・・・か。ありがとう、ドクター、ウーノ。見せてくれて。俺、少し用事が出来たから、あとから来るなのは達に――」

「構わないよ。私から伝えておこう」

ドクターに頭を下げ、俺はスカラボを後にする。目指すのは、「リアンシェルト・・・！」俺とシェフィの娘、リアンシェルトの居るであろう運用部オフィス。もしくは、最高評議会のところか。虱潰しに捜してくれる。

まずは運用部のオフィスだ。各部署のオフィスが集中している本局セントラルタワーはエレベーターホールに向かい、そこのエレベーターに乗って上層階へ。そして運用部オフィスの在る階で降りる。

「あら？　ルシル君・・・？　今日は捜査課の仕事は休みよね」

「こんにちは、ガアプ課長。それでは」

エレベーターホールを出ようとしていたところ、俺たち八神家と

シャルが世話になっている特別技能捜査課の課長、クー・ガアプ一等空佐とバッタリ会った。俺は小さく会釈して、ガアプ課長の側を通り抜けようとした。

「待ちなさい」

「何でしょうか？」

制止の声と一緒に俺の左腕を掴んで来たガアプ課長に振り返る。ガアプ課長が「どこへ行く気です？」俺の行き先を訊ねてきたから、「申し訳ないですが教えなければならない理由が解りません」と返す。今は一刻も早くアイツの元へ行きたい。だから邪魔しないでくれ。

「そんなに殺気立っているあなたを素直に行かせるわけにはいかないわ。判っていないようだから教えてあげます。ルシリオン君。今のあなたの顔、酷いわよ。怒りの色いっぱいで、その殺気を向けている相手と会えばそのまま手を掛けそうな程の・・・！」

そう言われた俺は空いている右手で自分の顔に触れる。そして「そこまで酷かったですか？」とぽつりと漏らす。ガアプ課長は「・・・ええ。けど、もう落ち着いた？」俺の左腕を離し、俺の前で身を屈めて俺の目を覗き込んできた。ガアプ課長の済んだ空色の瞳に俺が映っている。少し憔悴しているか。ならさっきまでの俺の顔は、一体どんなものだったんだろう。

「ご迷惑をおかけしました。だけどもう大丈夫です」

暴走しそうだった俺の気を静めてくれたガアプ課長に頭を下げると、彼女は姿勢を直して「ルシリオン君。誰に会いに行こうとしていたの？」不安げな声色で、余り教えたくない事を訊いてきた。言い淀むと「リアンシェルト総部長、かしら・・・？」一発で当てられてしまった。

「・・・・」

「やっぱりそうなのね。・・・初めて出会った時、ルシリオン君、リアンシェルト総部長を前に目を見張っていたでしょう。知り合いなんだってすぐに察せたわ。・・・あの後、総部長にあなたとの関係を訊いてみたけど、知りません、の一点張り。だから勘違いなのかと思っていたけど・・・。ルシリオン君。あなたと総部長は一体どんな――」

「私がなんです？」

「「っ！！？」」

すぐ近くから聞こえた声。気配すらなく、余りにも突然だったために俺とガアプ課長はその場から一足飛びで後退する。先程まで居た場所には局の制服を身に纏ったリアンシェルトが佇んでいた。

「リ、リアンシェルト総部長・・・？　驚かせないでください」

「私の名前が聞こえたからどんな噂話でもしているのかと思って。

それで？　私がなんなのです？」

涼しい顔で俺とガアプ課長を見るリアンシェルト。俺はそんなあの娘に「久しぶりです、リアンシェルト准将。個人的にお話ししたいことがあります。お時間を頂きたいのですが」そう告げる。リアンシェルトは「いいですよ。私の執務室に来なさい」そう言って踵を返しエレベーターホールの外へと歩き出したため、「ありがとうございます」俺も続く。

「ルシリオン君！」

「ガアプ課長。失礼します！」

制止の意味を含んだガアプ課長からの呼びかけに俺は一礼で返す。ガアプ課長からリアンシェルトの背中へと視線を戻すその最中、不安に満ちたガアプ課長の表情を横目で見えた。そして俺とリアンシェルトは廊下を進み、運用部オフィスに到着。複数の課を有する部署の為、オフィスもまたとんでもなく大きい。

「お疲れ様です、総部長」

「休憩からもう戻られたんですか？」

オフィス内を通っていると、運用部所属の局員から次々と挨拶を受けるリアンシェルト。尊敬されているのは確かなようだ。父としては嬉しい。娘が慕われている姿を見られたのは本当に。だが、俺とリアンシェルトの現状が素直に喜ぶことを許さない。

「彼と少し個人的な話をするから、部長室には立ち入らないように」

そうして俺は、運用部オフィスの奥にある総部長執務室へと通された。１０畳ほどの個室で、執務デスクが上座にあり、椅子の後ろと左右の壁には天井に届く本棚が３架。それだけだ。リアンシェルトはコツコツと靴音を鳴らしながらデスクを回り込み、「それで神器王、話とは？」椅子へ座った。

「第１４管理世界ウスティオにてアムティスが発掘された。タイプはアーティラリー」

「そうですか。また随分な骨董品が見つかったものですね。あ、ちなみに私は関与していませんよ」

リアンシェルトは頬杖をついた姿勢を取り、そう言って俺を真っ直ぐ見詰めた。落ち着いていた感情がまた乱れそうになるのを自覚した。グッと握り拳を作り「アムティスが戦闘行動を取り、俺の家族や友人、航空隊員を撃墜した・・・！」続ける。

「そうですか。それはまた運が悪かったですね」

「っ！・・・起動したばかりのおかげか本来の出力が出せなかったようだ、フィレスが無事なのが良い証拠だ」

アムティスの攻撃力はもっと高い。指先から放たれる砲撃、ラージョ・デ・シエロの直撃を受けてすぐに戦場に戻れるわけがない。フ

ィレスがピンピンしているところを見ると、最大出力が出せていないということだ。

「良かったですね。知り合いが亡くならなくて」

「・・・そして！　最後の最後！　家族たちを襲った爆風！　アレはシュヴァリエルの轟風暴波だ！　俺に放つならともかく、普通の局員に放ちやがった！　魔力付加していないからただの爆風だったが、一歩間違えば大殺戮だ！！　ふざけるなっ！　狙うなら俺だけにしろ、襲うなら俺だけにしろ、殺すなら俺だけにしろっ！！」

バァン！とデスクに両手を叩きつけてリアンシェルトを睨みつける。そして「目的は何なんだ！　こんな回りくどい真似をして！　サッサと俺を殺しに来ればいいだろう！！」魔力付加した左拳を振り上げ、リアンシェルトの右頬を殴った。しかしリアンシェルトの首はピクリとも動くことはなく、「ぅぐ・・・！」俺の左拳にダメージが返って来た。

「他のエグリゴリの動向など知りません。各々が好きに活動しています。人間に関わるのも単なる気まぐれに過ぎません。現状に飽きて、殺す気になったらあなたを殺しに来るでしょう。それまではどうぞお好きに過ごしてください、神器王。全ては、時が来れば、ですよ」

俺に殴られた、腫れるどころか赤くもなっていない右頬を小さく撫でながらリアンシェルトはそう言い放った。俺の今の生活は、"堕天使エグリゴリ"の気まぐれの中で得られているものなのだ、と。

そして話はこれで終わりだと言うようにリアンシェルトが仕事を始めた。

「・・・俺は負けない。お前たちの為にも、俺の為にも、家族や友、仲間の為にも・・・！　失礼します、リアンシェルト准将」

一礼し、踵を返して執務室を後にしようとしたら、「再誕神話に関する資料は全てこちらに移しました。まだ知られたくないでしょう？　あなたの正体を」リアンシェルトがそう言った。振り返ると、あの娘は自分の背後にある本棚に指を差していた。アムティスの装甲には型式番号や名前が記されているのは知っている。万が一、それを見た局員が調査すれば、俺やステアの名も記された再誕神話に行き着くだろう。確かにそれはまだ遠慮したい。

「・・・優しいか厳しいか、どちらかにしてくれよ・・・」

「何か言いましたか？」

「いいや。ではな、リアンシェルト。いつか必ずお前も救ってみせる」

「・・・・そうですか」

小さな声で返事をしたリアンシェルトに背を向けて執務室を出、そのまま運用部オフィスを出る。そして近くの休憩所へと入り、誰も居ないことを確認してから壁をガツンと殴った。壁に傷は付かず、痛みだけが俺の左拳に返って来た。

「くそ・・・」

ベンチへと座って両手で顔を覆って俯き、大きく溜息を吐く。と、≪ＰｉＰｉＰｉ≫通信コールが入った。俺の面前に展開したモニターを操作して通信を繋げる。

『ルシル君？　はやてです。今時間ええかな？』

「あ、ああ・・・うん、大丈夫。その安堵の顔からして、シグナムとヴィータは大丈夫そうだな」

通信を入れてきたのははやてだった。少し目が赤いところを見ると泣いてしまったようだが、表情は穏やかだ。だからシグナムとヴィータは無事だと確信した。もし２人の身に何かあればもっと悲痛な表情・・・というよりは、はやてではなくリインフォースかシャマルから通信が入るだろう。

『うん。シグナムもヴィータも無事やよ』

『ルシリオン。シグナムだ。心配を掛けてしまったようだな。すまない。だが私は無事だ』

『おう、ルシル。あたしも問題ねぇよ』

頭やら腕に包帯を巻き、頬に大きな絆創膏を貼ったシグナムとヴィータがはやての両側から顔を覗かせた。血色も良いようだし、本当

に無事なんだと判った。

『それとな。フィレスさんとセレスちゃんも居って・・・。けど、2人や他の隊員さん達もみんななんとか無事やって』

「そうか。良かったよ」

死者が出なかった。それだけが救いだ。はやてとリインフォースはこのままシグナムとヴィータに付き添うそうだ。最後に『ルシル君。研修、頑張ってな』はやてからの応援を聴き、通信を切った。

「問題は山積みだが、それでもまだ取り返しの付かない事態には至っていない。・・・大丈夫、大丈夫だ・・・」

そして俺は、遅刻確定となっている内務調査部への研修を受けるために、「行きますか」調査部オフィスへ向かうことにした。

Ｅｐｉｃｏ７恋する乙女の道は恋する乙女

†††Ｓｉｄｅイリス†††

学校生活２日目。わたし達はスクールバスに乗って登校中で、車椅子専用乗車スペース周囲の椅子に座ってお喋り中。

「でも不幸中の幸いだったわよね。シグナムとヴィータ、打撲と擦り傷だけだったんでしょ」

「フィレスさんとセレスちゃんもそんなに重くないダメージだったんだよね・・・？」

話題は昨日起きたある事件について。ウスティオっていう管理世界で、シグナムやヴィータ、セレスにフィレスと言ったわたし達の友達であり家族、それに２個航空隊・戦技教導隊班長２人、首都航空隊が全滅する事件が起きた。

スクライア一族と機動一課が湖底遺跡でロストロギア発掘中、ロストロギア収集家リンドヴルムの私兵隊が出現。これを迎撃。そこまでは良かった。でも、湖底遺跡のさらに地下から想定外のロストロギアが現れた。甲冑姿の巨人。ソイツがまず２個航空隊と教導隊班長２人を撃墜。その後の人為的に起こされたとされる爆風によって首都航空隊やフィレス・セレス、シグナムにヴィータ達も残らず全滅した。

「うん。シグナムとヴィータはもう昨日の内に全快して、今日も仕

事や」

「フィレスとセレスは爆心地に近かった所為もあって全身打撲と数ヵ所の骨折。だけど命には別状なし。爆風起こした張本人を捕まえてやるって意気込んでる」

買い物から帰ってすぐリンディ提督やクロノ、エイミィ、わたしの知り合いから次々と連絡が入った。それから通信越しのお見舞いをしたら・・・

――調査によれば、最後の爆風は人為的に起こされたものみたいなのよね――

――ロストロギアの効果か、それとも信じたくないけど個人の魔法でしょうか・・・？――

――どちらにしても、ここまでコケにされた以上は黙っていられない――

――絶対にわたしとお姉ちゃんで捕まえてみせます！――

――そうね。局員として逸脱した捜査ってことになるなら教会騎士として捜す！――

包帯グルグル巻き姿なフィレスとセレスだったけど、やる気だけは漲らせてた。あの2人に目を付けられたらアウトかもね、爆風を起こした張本人。フィレスは聖王教会騎士団が一、橙蘭騎士隊オラー

ンジェ・オルヒデーの隊長だ。教会騎士団団長の許可が下りれば即座に捜査に入ると思うし。

「でもさ。そのとんでもなく危ない巨人、リンドヴルムに盗られちゃったんでしょ・・・？」

「そ。しかも湖底遺跡で回収したロストロギアもついでと言わんばかりに機動一課から奪ってった。まったく。本当に厄介な連中だよ」

わたしはアリシアにそう答えて嘆息する。ロストロギアを狙う奴はごまんと居る。大半がついでみたいなものだけど。でもリンドヴルムはロストロギア専門。そこが恐ろしい。飽きるまで眺めた後、武器型は私兵に武装させて、他のは売り払う。そして他の犯罪組織が買ったロストロギアでまた罪を犯す。最悪な循環。

（捕まえたいのは山々なんだけど、広域指名手配の次元犯罪者プライソンと同じようにリンドヴルムの首領もまた一切の個人情報が無いし、居所ももちろん不明）

そんな平和な登校風景に似つかわしくない会話が終わる頃には学校に到着していた。スクールバスを降りて、エントランスへ向かう。昇降口で靴から上履きに履き替えてると、「ふふ♪」鞄に目が行ってつい笑っちゃった。

「どうしたん？　なんか面白いことあった？」

「思い出し笑いなんかして、気持ち悪いわよ」

「気持ち悪い言うな」

アリサの失礼発言にツッコみを返して、「お弁当よ、エイミィ力作の♪　わくわくしてるんだから♪」笑った理由を答える。お弁当なんて初めてって言っていいもん。余計にドキドキわくわくだよ。

「それじゃあ、今日は温かいし、お昼は屋上で食べようよ♪」

「いいわね」

「うん、賛成♪」

「お昼休みになったら2組に迎えに行くよ」

「おかずの交換とかしようよ♪」

今日から通常授業が始まって、お昼も学校で摂る。だからのお弁当なのだ。なのはからのお誘いの提案には1組メンバーのアリサ、すずか、フェイト、アリシアが諸手を上げて賛成したんだけど・・・。

「「「・・・・」」」

2組メンバーのわたしとはやてとルシルは即答できなかった。フェイトからの「どうしたの？　3人とも」って問いに、「悪いけど俺はパスだ」ルシルが先に答えた。もちろん納得できないアリサが「なんでよ」不満げにルシルを見た。

「いやさ、いま俺が陥っている問題、アリサも知っているだろ？」

「あ、ルシル君にやきもち焼いてる男の子が居るっていう・・・」

「ルシルも大変だね。せっかく出来た男友達だったのに」

なのはとフェイト、続いて「頑張ってね、仲直り。手伝えることがあれば遠慮なく言って」すずかがルシルに同情の目を向けた。ルシルは室内専用車椅子が置かれたスペースに歩み寄って、壁の手摺とホイールを繋ぐ鎖に付いた南京錠（鍵は先生から貰ってる）を外しながら、「ありがとう、すずか」すずかに微笑みを向けた。

「そういうわけだからさ。俺はパスな」

「おおきにな、ルシル君」

はやてを抱きかかえて室内用車椅子に乗せ換えたルシルは、今度ははやての乗って来た車椅子を室内用車椅子スペースに置いて、手摺とホイールを鎖で繋いで南京錠をかけた。

「ごめんなんやけど、わたしもルシル君のお手伝いしたいから今日は・・・」

はやても手を合わせてごめんなさい。ここでわたし1人が誘いを受けるわけにもいかなくて。だから「う、うぅ、ごめんなさい・・・」わたしも誘いを断ることにした。

「あー、泣かないでシャルちゃん。ほら、これからずっと一緒なんだから、いつでも一緒できるよ。だから、えっと、うんっ、まずは、クラスの子たちとの親睦を深めるのを大事にしようか？」

「そうだよ。あと3年もあるんだから。最初の数日くらい、どうってことないよ」

「だから大丈夫。問題を解決して、クラスメートともうんと仲良くなった後で、みんなで一緒に食べよう♪」

「うぅ、なのは、フェイト、すずか・・・。ありがとう。ぐす」

なのは達ばかりに偏っちゃダメなんだよね。判ってる。今はまだクラスメートのみんなともっと仲良くならないと。そう改めて思ったわたしは袖で涙を拭って、「よしっ。サクッとルシルと武塔君を仲直りさせよう！」グッと握り拳を作って高々と突き上げた。

「えっと、それじゃあ帰りはどうする？　私たちは休みだけど・・・」

なのはからの確認に「帰りは・・・」これもまた即答できなかった。放課後もまた仲直り作戦の活動時間内かもしれないし。作戦リーダーのルシルからの「未定かな。一緒に帰れそうなら念話で。いいかな？」提案に、「それでいいよ」なのは達はオーケーした。

「咲耶個人を選ぶなら反対なんだけど、2組全体だって言うんなら

しょうがないわね」

「アリサ。いい加減に仲良くしたら？」

「向こうから歩み寄ってきたら考えてやるわよ」

アリサと咲耶もまた仲良しになれば、もっと楽しい学校生活が遅れると思うのに。とにかく、お昼はクラスのみんなと済ませる事、帰りは未定で、一緒に帰れるなら思念通話で伝えるってことを決めた。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒はやて†††

接続塔の中央階段でルシル君やすずかちゃん達と一旦別れた後、わたしはシャルちゃんを付き添いとして一緒にエレベーターに乗った。すると早速、「・・・で？　ルシルは一体どうしようってしてるの？」シャルちゃんから訊かれた。

「ルシル君は、刀梅ちゃんと武塔君をくっ付けるって言うてたけど・・・。ホンマに上手く行くんかなぁ～・・・」

答えた後に腕を組んで唸る。ルシル君の案を聞いたシャルちゃんが「また思い切ったことを考えるね～。なるほど～」微妙に賛同するようなことを言うて苦笑。そんなシャルちゃんに「上手くいくと思うんか？」って訊いてみる。

「どうだろ。刀梅が武塔君をどう思っているかだよね」

「刀梅ちゃんも、武塔君のことを少なからず特別に思ってるって、ルシル君は言うてたよ」

「・・・そう？」

「さあ？」

「まぁ、他の男子よりかは親しそうだったよね。下の名前で呼んでいたし」

「あ、それはわたしも思うてた。そやけど、それだけで刀梅ちゃんも武塔君が好きかどうかは・・・」

「判んないよね～」

シャルちゃんと一緒に唸る。わたしは「とりあえずは、刀梅ちゃんに武塔君のこと訊いてみようって思う」って自分なりに考えた行動予定を伝えると、「まずは状況把握からね。うん、情報収集は大事だよね」シャルちゃんがウキウキし始めた。

エレベーターが3階に到着。シャルちゃんに車椅子を押してもらって外に出て、ルシル君たちが来るまで接続塔と4年の教室が在る第2校舎の繋ぎ目で待つ。みんなが来るまでの間にわたしらの前を通り過ぎるクラスメートや他のクラスの子らと「おはよう！」挨拶を交わしてく。

「お待たせ、はやて、シャル」

ルシル君が駆け寄って来て、「ありがとう、シャル。代わろう」車椅子のグリップを握るためにわたしの後ろに回った。シャルちゃんは「なに？　今日は随分と素直というか何と言うか・・・」少し困惑しながらルシル君と交代、なのはちゃんの側に駆け寄った。

「これから君にも協力してもらうからな。ここで反感を買って敵に回ると厄介だし。それに、君に嫌われるのも嫌だしな」

「～～～～っ！　ルシルがわたしにデレたぁぁぁ～～～～　」

唇を突き出した上でルシル君に抱きつこうとしたシャルちゃんやったけど、ルシル君は「だからって調子に乗るなよ？」シャルちゃんの顔をガシッと両手で鷲掴んで阻止。わたしも「人目のあるところでやったらアカンよ！」注意する。

「つまり2人っきりになれば、キスしてもい――あだっ？」

「馬鹿なこと言ってんじゃないわよ。周りを見なさい」

アリサちゃんのチョップがシャルちゃんの脳天を直撃。よっぽど効いたんか頭を押さえてしゃがみ込んだ。なのはちゃんが「魔力付加打撃はさすがにダメだよ、アリサちゃん・・・」シャルちゃんの頭を撫でながらアリサちゃんをやんわり責めた。

「これくらいの罰は必要よ。ねぇ？　ルシル」

アリサちゃんがわたしらの周りに居る他の生徒を横目で見たからわ

たしらも見る。シャルちゃんの、キス発言を聞いた男子・女子関係なく興味津津って風にわたしらを見てた。ルシル君は溜息ひとつ吐いて、「仕方ないよな」アリサちゃんに同意。フェイトちゃんやアリシアちゃん、果てには「これからは気を付けようね、シャルちゃん」すずかちゃんまでもがこっち側に付いた。

「学習能力が無くてごめんなさーい」

素直なシャルちゃんからのごめんなさいでこの話は終わった。わたしらは「またね」手を振り合いながら、それぞれの教室に入った。2組の教室にはすでに何人かのクラスメートが居った。

「おはようや♪」

「おっはよーっ♪」

「おはよう」

わたし、シャルちゃん、ルシル君と続いて挨拶すると、「おはよう♪」クラスメートから挨拶返しを貰った。そんでわたしらは自分の席に鞄を置いて、「うん」シャルちゃんと頷き合う。目標は刀梅ちゃんと武塔君。そやけどまだ来てへん。そやから他の子らからも情報を得よう。

『ルシル君。ちょうガールズトークするから、少しの間近付かんといてな』

『？？　ああ、了解だ』

ルシル君がわたしらに向き直って小さく頷いた後、教室を出てったから『教室から出てかんでええよ！？』慌てて引き止めようとした。すると『外に用事があるから行くだけだよ。追い出したとか思わないように』ぷっと吹き出したって感じで返してくれた。嘘やないってことは声色で判るから、おトイレかな、って考える。

『・・・じゃあ、シャルちゃん』

『ヤー』

シャルちゃんと一緒に、教卓のところでお話ししてる女子グループに刀梅ちゃんと武塔君のことを訊こうってした時、「ごきげんよう、みなさん」咲耶ちゃんと、「おはよー」依姫ちゃんが教室に入って来た。２人はすぐにわたしとシャルちゃんに気付いて「ごきげんようですわ」「おはよ」挨拶してくれた。

「「おはよう！」」

わたしとシャルちゃんも挨拶を返して、「あ、そうや。委員長の２人なら・・・」去年もこのクラス全体を見て監督してた２人ならきっと、刀梅ちゃんと武塔君のことも何か気付いてるかな。そう思うて、「ちょう訊きたいことがあるんやけど、ええかな」刀梅ちゃんと武塔君について訊いてみることにした。

「――刀梅ちゃんと武塔君の関係・・・？　家が隣通しの幼馴染だ

ったんじゃないっけ？」

「ええ、そうですわ」

「実際さ、武塔君って刀梅のこと・・・好きでしょ」

「バレバレよね～」「周知ですわ」

クラスの女子の大半・男子の一部が武塔君の想いに気付いてるってことや。そやけど一番知っててほしい刀梅ちゃんは気付いてへん、と。漫画みたいやなぁ。本人が気付いてへんくて周りにバレバレやなんて。

とまぁ、教室隅でひそひそ話してたんやけど、気が付けば他の女子のみんなも集まり出して来て、「さっさと告白すればいいのにね」って意見や、「いやぁ、無理でしょ」とか、「八重さん、鈍いですし」とか、「そうそう。弟を見てる感じだし」みたいな悲観的な意見もチラホラ。

「えっと、纏めると・・・武塔君は刀梅ちゃんに片想い。それに気付いてるのは女子の大半・男子の一部。けど当の刀梅ちゃんは気付いてへん。しかも武塔君のことを弟として見てる・・・と」

「随分と難儀な恋ね・・・」

わたしとシャルちゃんは大きく溜息を吐いた。武塔君を1人の男の子として見てるんならまだ望みはあったけど、異性やなくて弟として見てるってゆうのは望み薄・・・みたいな。シャルちゃんが「ル

シルの案、やっぱ没ね」肩を竦めてポツリと漏らした。

「ルシル君の案とはなんですの・・・？」

ルシル君の案について訊ねてきた咲耶ちゃんに、刀梅ちゃんと武塔君をくっ付けてしまおう作戦のことを伝える。すると、「幼馴染は恋人になるってセオリーは所詮フィクションだよね～」途中参加の天音ちゃんがやれやれって肩を竦めた。

「でもさ。２人をくっ付けることだけが解決法とは思わないんだけど・・・」

「武塔君に告白させてサクッとフラれちゃえば、ルシル君を嫌うこともなくなるんじゃ・・・？」

「いやぁ～、武塔君はフラれてもしつこそうだよ？　あんなにやきもちをハッキリと態度で示してるんだもん。フラれた後も引きずって、刀梅ちゃんと仲良しな男子にまたイライラするかもだよ？」

「ちっちゃ～」

「うざぁ～」

女子のみんなから散々な評価を受けた武塔君に同情したくなってきた。みんなでどうやってルシル君と武塔君を仲直りさせるか話し合う。そんな中で、「おはよう！」刀梅ちゃんが教室に入って来て、「みんな集まって何の話してるの？」わたしらに気付いて首を傾げ

た。

「刀梅ー！　ちょっと来てー！」

天音ちゃんが大手を振って刀梅ちゃんと呼んだ。自分の席に鞄を置いて「なに～？」刀梅ちゃんがやって来た。そんな刀梅ちゃんに「今ね、恋バナしてるの　」シャルちゃんが話を切り出す。

「恋バナ？　珍しいって言うか初めての話題だね♪　どんなの、どんなの？」

「ほら、やっぱり好きな男子とか、憧れのシチュエーションとか、みんなで話し合ってたわけ♪　だから刀梅も教えてよ♪」

息をするかのように嘘を吐くシャルちゃんがいきなり核心を突いた。その流れに感心したり、呆けたりとみんなの反応は様々。それはともかく。刀梅ちゃんは「何を？」それでも理解できひんって風に人差し指を顎に当てて明後日の方を見た。

『（アカン。刀梅ちゃんに恋愛感情そのものが無い・・・）シャルちゃん・・・』

「『もうちょい踏み込んで訊いてみるよ』・・・ねえねえ。もしさ、男子から・・・そうだなぁ、・・・付き合って下さい、って告げられたらどうする？」

「う～ん・・・。うん、いいよ。どこに付き合えばいいの？って、

答えるけど・・・」

わたしやシャルちゃん、他のみんなが一斉に大きく溜息を吐いた。そんなわたしらのリアクションにさらに首を傾げる刀梅ちゃん。ルシル君。アカン、これはアカンよ。武塔君とくっ付けるなんて夢のまた夢や。

「わたしさ、恋とかしてみたいんだけど・・・。どういうものか全然解んなくて」

「ひょっとして初恋とかも・・・？」

「あ、うん。それもまだ。ねぇ、私って変？　みんな、初恋とかもう・・・？」

初恋がまだやってことで不安そうになってる刀梅ちゃんからの問い。みんなが、うんって頷いてく。もちろんわたしとシャルちゃんも頷いた。みんなが初恋を済ませたことを知った刀梅ちゃんが「やばい、よね・・・？」焦りを見せた。

「そうでもないと思うよ、うん。初恋が早いも遅いも関係あらへんよ」

「でも気になる男子くらいは居るんじゃない？　もっと仲良くしたいなぁ、嫌われたくないなぁ、みたいな？」

「えっと・・・。男子女子関係なくもっとみんなと仲良くしたいし、

嫌われたくもない・・・けど。でも・・・亮介君とは物心つく前から一緒だったから、亮介君には嫌われたくないかも」

来た、来た来た来た。希望の光が見えた。ルシル君の推測通り、少なくとも武塔君を特別視してるのは確かや。刀梅ちゃんの胸の奥に眠る思いは確認できた。なら後は、その特別な思いを想いにするための作戦が必要になってくる。

どんな作戦を立てるかシャルちゃんと相談しようとした時にチャイムが鳴って、「はーい。みんな座ってー！」担任の矢川先生がやって来た。そうゆうわけで一旦解散や。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒イリス†††

出席確認・健康観察・今日の予定の知らせを行うホームルーム、そして１時限目の算数（前知識にあった通りすんごい楽勝だった）を終えて、本日最初の休み時間。時間にして１０分。わたしは早速「刀梅～！　ちょっと時間ちょーだーい♪」机に教科書やノートをしまい込んでた刀梅に声を掛ける。

「さっきの続き？　うん、いいよ」

話を再開する前におさらい。刀梅の恋愛感覚がとんでもなく未発達だっていうのは判った。恋に恋することも未経験な刀梅。それでも武塔君を大切な存在だとは思ってる。ま、先にクラスメートから聴いてた通り弟感覚だろうけど。弟から好きな人へとシフトチェンジさせてあげれば両想いになって、晴れてミッションクリア。

（はやてに想いを自覚させた時みたく、強制的に自覚させるのがベターかな～）

ふと、武塔君がルシルと刀梅をチラッと横目で見ながら他の男子と一緒に、わたしとはやての席の側にある出入り口から廊下に出て行こうとしてた。ちょうど側に来てくれて、刀梅の視界にも入ってる今なら・・・。わたしの側を通り過ぎる際、武塔君にスッと足払いを掛ける。

「のわっ！？」「きゃあー」

わたしの足に蹴躓いた武塔君。前向きに転ぶより早く武塔君の身体の前にわたしの身体を入れる。すると当然、わたしは武塔君に押し倒される形になるわけで。こんなこと、もうこれっきりだよ。わたしを押し倒していいのはルシルだけなんだから。転倒時に衝撃を和らげるために、みんなに気付かれないように受け身を取る。

「あいたた・・・。うわっ、えっと、えっと！」

四つん這いになってわたしに覆い被さってる武塔君が顔を真っ赤にして大慌て。クロノみたくからかいがありそうな純情さ。やらないけどね。さーて。刀梅のリアクションはどうなのかな～っと。チラッと見ると刀梅も顔を赤くして唇をわなわな震わせて、思考が追いついてないって感じ。そんなわたし達を見て女子は「キャー　」黄色い歓声を、男子は「何やってんだよー！」武塔君をからかう。

「いや、だって、誰かが・・・！」

「ちょっ、亮介君！　何してんの！　早くシャルちゃんから退いて！！」

「え、あ、おう」

刀梅が武塔君の左腕を両手で鷲掴んでグイッと引っ張って、わたしの上から強制的に退かした。そんで刀梅に引っ張られるままに立ち上がりかけた武塔君の足首をわたしは引っ張って、「のわっ？」「きゃあっ！？」改めて転ばせて、今度は刀梅を押し倒させた。

（イエーイ、押し倒し作戦完了♪　これで刀梅も少しは意識するでしょう♪）

「うわっ！　ごめん刀梅！　おれ、こんな・・・！」

「あ・・・う、ううん・・・」

わたしの時とは違って大慌てで刀梅の上から退く武塔君。当の刀梅は頬だけを赤く染めてボケーッと仰向けに呆けたまま。オチた。確かな手応えを感じた。刀梅は確実に、武塔君をさらに特別視した。武塔君が「なあ、刀梅？」名前を呼ぶと、「気にしないで亮介君・・・。大丈夫だから」刀梅もようやく立ち上がって、「ごめん」そう一言謝って教室を飛び出していった。はーい、わたしもてった～～い。教室を出て、刀梅を追う。

『シャルちゃん。これ、やりすぎちゃう・・・？』

教室に残ってるはやてからの思念通話。

『そう？　言葉でどれだけ恋愛を語ってもああいう子にはたぶん伝わらない。以前のはやてと全く同じ。恋の対象を家族として見ているから、本当の想いに気付かず、気付いた時にはもう手遅れ・・・みたいなね。はやてはどう？　あのまま自分の想いに気付かなくて良かったって思う？』

『・・・感謝してる、シャルちゃんには。あのままなんも知らずにモヤモヤして、ルシル君がわたしから離れて行くんを黙って見送る羽目にならずに済んだ・・・』

『どうも。わたしは騎士だからね。正々堂々の戦いを好むんだよ』

『おおきにな』

『どういたしまして』

はやてからの思念通話が切れたら、「シャル」教室から出て来たルシルがわたしの側に歩み寄って来た。わたしは「ルシルもやり過ぎって思う？」先制発言。

「・・・いいや。俺もさっきの見せてもらった。刀梅も自分の想いに自覚しただろうな。なかなかなやり方だったよ、シャル。まず亮介に自分を押し倒させて、それを刀梅に見せたのが大きかった」

「気付いた？　さっすが♪」

始めっから刀梅と武塔君を抱きつかせても、無いとは思いたいけど刀梅がそれでも武塔君を弟感覚で見るかもしれない。となると、武塔君の精神ダメージは計り知れない。自分はあくまで弟役なんだって思い知った武塔君が塞ぎこんだらアウトだもん。

だったら最初にわたしを押し倒させて、刀梅に武塔君も男の子だってことを自覚してもらうのが手っ取り早い。その光景を見た刀梅は、自分と一番仲良かったって思ってた男子が、別の女子と急接近したって焦りを憶える。そしてそれが自分の想いを気付くためのキーとなる。

「はやてと同じ手か。君の強引さには困ることもあれば助けられることもあると理解したよ」

「惚れ直した？」

苦笑したルシルにウィンクしながらそう訊ねてみると、「微妙」とか返してきた。微妙とは何よ、微妙とは。せめて、見直した、くらいは言ってくれてもいいのにさ。ぷぅっと頬を膨らませたわたしは、「お礼の1つくらい言ってくれてもいいんじゃない？」えいっと、ストレートパンチをルシルの胸に軽く打ち込む。

「っと。感謝はしているよ。君のおかげで早いうちに亮介と仲直り出来そうだよ。ま、9歳で考えつき、尚且つ実行していいような作戦ではなかったよな。子供らしさが無いと言うか」

「ふっふっふ。わたしはもう大人なのだ　」

自分でも恋愛に関しては変だって思えるほどに考えが子供らしくないと思う。ひょっとしてシャルロッテ様の影響でも受けてるんじゃないかな。とにかく。えっへんと両手を腰に当てて胸を張ると、「あはは。どの口が言う」ルシルがわたしの頬をツンツン突いてきたから「っ！」ドキッとした。こういう不意打ちにはホントに弱いなぁ、わたし。

「さて。刀梅は亮介への想いを自覚したことで両想いになったわけだ」

「だね。あとは、武塔君が勇気を出して刀梅に告白すれば・・・」

ルシルと頷き合った。刀梅の姿も見失っちゃったし、教室に戻ろっか。ルシルと一緒に教室へ戻ってると、「刀梅からの告白でもアリだよな」そんなことを言ってきた。だから「えー？　ここはやっぱり男子からの告白でしょ」反論する。

「いやいや。女子から告白を受けるのが男のロマンだろ？」

「好き　」

「・・・いやぁ、好きな子からじゃないと断る時は辛いよな」

「ちくしょー！　勇気出して告白したのに！　しぃーたぁーのぉーにぃーっ！」

握り拳にした両手を上下にわたわた振るう。女子からの告白が嬉しいって言ったからしたのに、返ってきたのは相も変わらず拒絶の言葉。

（でもま、だからって挫けないけどね♪）

この流れに乗じて「はぁ。でもさ、男子からの告白だって女子のロマンだよ？」と言ってみる。ルシルのノリが良ければきっと・・・

――そうなのか。じゃあ、好きだ――

（みたいな　）

両頬に手を添えて頭を振る。たとえこの場限りの冗談だとしても、その一言でわたしは幸せになるのだ。期待を込めてルシルへと目をやると、「・・・っておい！」すでに自分の席に戻って次の授業の準備をしてた。

「はぁ・・・『とりあえず、種は蒔いた。少し様子を見ようと思うんだけど？』」

『ああ、それで良い。ここで焦って事を急いて台無しなんて、俺たちより刀梅と亮介が可哀想だからな』

というわけで、今日の作戦は終了。日を置いて少しずつ刀梅と武塔君をくっ付けていけばいいよね♪

Ｅｐｉｃｏ８祝福の風を受け継ぐ者～Ｒｅｉｎｆｏｒｃｅ　Ｚｗｅｉ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

４月も半ばに入った今日この頃。わたし、ルシル君、リインフォース、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、八神家勢揃いでミッドチルダ北部はベルカ自治領ザンクト・オルフェンへと赴いた。

「いよいよなんだなぁ～、新しい家族の目覚め♪」

後頭部の後ろで手を組んで前を歩くヴィータがそう言うてわたしらに振り返って後ろ歩きになる。今日ここに訪れた理由は、祝福の風リインフォースの後継騎である新たな八神家の末っ子、リインフォースⅡを起こしに行くため。で、今はヨーロッパのような街並の中をみんなで歩いて、サンクト・オルフェンの最北部――ノーサンヴァラント海の海岸に向かってる最中や。

「そうだ。みんな。今日から私の呼び名は、アインス、だ。そしてリインフォースⅡのことは、リイン、と呼ぶようにな」

わたしの乗る車椅子を押してくれてるリインフォースがそう言うた。それは以前から決めてたことやから、みんながそれぞれ頷いて応えた。わたしも「うん。アインス」って、リインフォ――やなくてアインスに振り返って笑顔を向ける。アインスはわたしやみんなを順繰りに見回した後、「はい」微笑んでくれた。

「リインが新しくはやての融合騎になるわけだな～」

「アギトちゃんとアイリちゃんが戻ってくれば、もっと賑やかになるんだけれど・・・」

シャマルがポツリと漏らすと、アインスにシグナム、ヴィーータとザフィーラも口を閉ざした。炎の融合騎アギト、氷の融合騎アイリ。古代ベルカ時代、アインス達と一緒にかつての夜天の主オーディンさんの家族として過ごしてた子らで、今は残念ながら行方不明。もし見つけて合流できるんなら、八神家に迎え入れたいと思う。

「早く見つけてやんねぇとな～。砕け得ぬ闇事件ん時に、あたし約束したんだよ。絶対にまた逢える、って。アイツらを必ず見つけ出す、って。それまで待っていてくれ、って」

「ならその約束を果たさねばな」

「ああ。・・・私が旅立つ前にもう1度、アギトとアイリに逢ってみたいな」

アインスが寂しげに言うた。あと2ヵ月もあらへんアインスの寿命。その内に何百年も行方不明なアギトとアイリを見つけ出すなんてまず不可能やって思う。そやけど、アインスのその願いを叶えたいと強く思う。

「アギトとアイリに関しては、シュテルンベルク家が専用の捜索隊

を創設しているそうだから、そちらも当てにしよう」

シャルちゃんから聞いた話やと、融合騎捜索隊が設立されてからもう2百年って話や。それでもまだ見つけられへん。

「そう言うルシル君も、2人の目撃情報とか管理局のネットワークで調べてくれているのよね？」

「真正古代（エンシェント）ベルカの融合騎なんて、喉から手が出るほどの存在だからな。それを鑑みるとすれば・・・。シュテルンベルク家の手を離れ、そして今もなお生きていると言うのなら・・・誰かの手に渡っているか、どこかの古代施設に閉じ込められているか、どちらにしても自由の身じゃないのは確かと見ていい」

ルシル君は、わたしらチーム海鳴のメンバーの中でも特に情報関係の仕事の研修を受けてるから、誰よりも情報収集に優れてる。そんなルシル君がそう言うんなら、アギトとアイリはそうゆう状況なんやろうな。

「ルシル。このままあの2人の情報収集を続けてもらえるか？」

「もちろんだ、アインス。オーディンの家族だったのなら、俺たち――八神家でもある。ま、親権についてシュテルンベルク家とちょっとごたごたが起きるかもしれないけどな。そこは伝説に語られるグラオベン・オルデンからの説得を受ければ、なんとかなるだろう。な？　みんな」

「ああ」「おう」「はいっ」「うむ」

アギトとアイリを迎え入れた後のことを話してると、「――あ、見えてきたな」いつの間にやら目的地に到着や。古代ベルカの中でも最高の技術力を有してたってゆう大国イリュリアの技術を全て継承してる技術者であるミミル・テオフラトゥス・アグリッパさんのお家が見えてきた。海岸から少し離れた小島に建つお城で、名前をエンシェントベルカ技術宮。わたしとアインスが何度もお世話になってるところや。

「いつ見てもいいなぁ。海上に浮かぶ小島に建つ城。ベルカの街並みは本当に美しい」

「あはは。ルシル君、ホンマに好きなんやなぁ～、ここザンクト・オルフェンの景色が」

「まあな。俺のアースガルド（故郷）もそうだったから」

「ルシル君の故郷・・・フェティギアやったな。いつか行ってみたいなぁ」

「・・・そうだな」

ベルカの街並みが大好きなルシル君が言うには、このエンシェントベルカ技術宮はデンマークにあるクロンボー城に似てるって話や。四角形の建物の内側に中庭があるお城やな。そんで、外から見えへん中庭で、製作・再現された技術を試験運用したりしてるようや。

そんで外界に出して良いようなモノやあらへん時は、地下に封印とか解体・破棄するって聞いた。

「みんな、こっちや。アインス」

「はい、主はやて。みんな、付いて来てくれ」

ルシル君たちみんなは、わたしとアインスを迎えに来てくれた際には技術宮の近くまでは来たことはあるけど、中に入ったことはあらへん。そやから中の案内が出来るのはわたしとアインスだけや。

「あの門には進入者を感知する機能があって、ミミルさんの入城許可のない人は強制転移でミッドチルダのどこかに飛ばされるって言うてたけど、ホンマなんかなぁ・・・？」

海岸と小島を結ぶ３０ｍほどの石製の橋（ローマ水道みたいなアーチ橋で、コレもルシル君のお気に入り）を渡る。そんで渡り終えようとゆう頃、小島と橋の境界に立つ扉の無い門が視界に入る。門には島に入って来た人を特別な技術で感知する機能が有って、ミミルさんが入ってええって決めた人は問題なく入れるけど、許可のない侵入者の場合は強制転移やって聞いた。

「ミッドのどこかと言うのが地味に恐ろしいな」

「下手すりゃ海のど真ん中だってこともあるってことだろ？」

「ミミルの話によれば、これまでに企業スパイが３ケタ近く侵入、

その悉くを強制転移させたそうだ」

シグナムとヴィータにそう返したアインス。中には聖王教会の施設ん中に転移してもうて、酷い目に遭った人も居るとか居らんとか。でもま、その人らは許可なしが原因の自業自得。わたしとアインスはもちろん、ルシル君たちも事前にミミルさんが入城許可を取ってくれてるから問題はない。

「ちなみに、この門以外から、例えば・・・空から侵入しようとしたら、対空迎撃用の魔導兵器で迎撃、万が一掻い潜ってもこれまた結界でランダムに強制転移されるそうだ」

「あー、あの屋根んところからチロッと出てる砲身みてぇなやつだよな」

「アレはガトリングガンだな。質量兵器ではなく魔導兵器だからと言って、よく教会や局に運用が許されたなぁ」

技術宮の屋根に備え付けられた全２０門のガトリングガンをわたしも見上げて見る。アレらもまたこれまでの侵入者を拒んできたモンや。そんなセキュリティが万全なここ技術宮のある小島にわたしら八神家は安全に入る。

門を潜るとき全身がピリッと弱く痺れるんやけど、「んぁ」体の隅々まで見られてるような気がしてちょう恥ずかしい。門を潜って敷地内に入って、技術宮のエントランスドアの前へ。するとわたしの面前に空間モニターが展開される。

「えっと・・・パスワードっと」

そんでミミルさんが作った技術宮管制ＡＩから毎朝送信されてくるパスワードを入力。技術宮のエントランスドアを開くパスワードは毎日変わるらしくて、もし間違えたら・・・ドア手前の落とし穴に落っことされて人体実験される・・・らしいわ。そやから毎回パスワードを打ち込むときは心臓バクバクや。

「・・・アインス。これで合うてるよな」

「・・・はい。合っていますよ、主はやて」

アインスに確認を取る。わたしとアインス、２人で間違ってないかキッチリ確認するようにしてる。２人揃って落とし穴に真っ逆さまなんて絶対に嫌やしな。確認した後、パスワード入力キーを押す。すると、『いらっしゃい～』間延びしたミミルさんの声が放送で流れてきた。これもいつも通りのことで、流されたミミルさんの歓迎の挨拶は録音されたものや。その声が合図となって両開きのドアが開く。

「じゃあ行こか。アインス、リインのとこへ行くよ」

「はい、主はやて」

ドアを潜って技術宮内に入る。すると目に見えて「そんな気はしてたが・・・」ルシル君が肩を落とした。シャマルが「どうしたの？」そう訊くと、「内装がちょっとな」ルシル君はそう言って肩を竦め

た。

「まぁ、外観とは違くて内装は機械でビッシリやしなぁ」

鋼鉄で舗装された床に壁に天井、機械部品がその四面から突き出してる。まぁ車椅子が通れるほどには広さがあるから、移動には別段困ることはあらへんからええけどな。突き出してる機械を避けながら廊下を進んでると、「今日は現れませんね」アインスがそう言った。

「何が？」

「ミミルさんの使い魔さんで、ウサギを素体にしてる女の子２人でな」

「フラメルとルルスという名で、初めて技術宮を訪れた際にミミル博士に紹介され、ここに来るたびに何かと世話になっているんだが・・・」

見た目はわたしらほどの子供やけど、フラメルちゃんとルルスちゃんが言うにはわたしらの３倍は生きてるって話や。その２人が姿を見せへんゆうことは、街に出かけて買い物かもしれんな。家事全般を担ってる子らやし。

「ま、居らんのならしゃあないな。このまま向かお」

南に位置するエントランスから真逆の北に位置する地下技術開発区

へと降りるトランスポーターに移動、「そんなに大きないで、順番に乗ってこ」そんで2人ずつ乗って、リインフォースⅡの居る部屋がある地下3階へ向かう。

「アースラみてぇな内装だなぁ。すげぇ歩きやすい」

ヴィータの言う通り地下は1階とは違って突起物があらへん綺麗な廊下が広がってる。ここ開発区では緊急事態が起こることもあるようで、全力ダッシュすることもしばしば。そん時に突起物に転んだりなんかしたら色んな意味で危ないからな。

そう説明した後、「目の前のドアの奥に、リインが居るんやよ」ドリットグレンツェ（第三境界って意味やな）って刻まれたプレートが掛けられたスライドドアを指差す。

「さ、みんなにお披露目や♪」

近付いたことで開いたスライドドアの奥、光溢れる部屋へと入る。20m四方の部屋の中央には7つの生体ポッドが円形状に設けられてて、その内の1つにみんなで歩み寄る。そんで、「あの子が、わたしらの新しい家族、リインフォースⅡやっ♪」ポッド内に漂う小さな女の子――リインをみんなに紹介する。

「おお！　アギトやアイリみてぇにちゃんと小っこい！」

「末っ子やからな♪」

「前に写真で見せてもらった通りアインスに似てる♪　ホントの妹

みたいね♪」

「それはまぁわたしのリクエストやしな♪」

アインスと同じ髪色に髪型。目の色は、今は閉じてるから見えへんけど深紅やなくて青色や。そっくりそのままやとアインスの身代わりみたいなことになると思うたから、顔のパーツは色々とちゃう。アインスの代わりやなくて妹みたいな感じにしてみた。

「ルシリオン。いくら融合騎であっても少女に代わりない。我ら男がそう裸体をまじまじ見るものではないと思うのだが・・・」

「え？　あ、あー・・・そうだな」

ザフィーラとルシル君がスっと裸のリインから目を逸らした。んー、これはギリギリセーフやと思うわ。リインが目を覚ました後やったら完全なアウトやったけどな。ヴィータから「ルシルのスケベ～♪」なんてからかわれてるルシル君にはちょうごめんなさいや。

「さて。・・・どないしよう・・・？」

腕を組んでうーんと唸ると、「起こそうよ、はやて！」ルシル君をからかうのにもう飽きたらしいヴィータにそう言われた。確かに、完成後のリインの所有権はわたしら八神家に移るし、いつでも連れて帰ってもええってミミルさんに言うてもらってるけど・・・。

「とにかく起こして見ましょう、はやてちゃん♪」

「そうやな・・・。うん、起こそうか。アインス、お願い出来るか？」

「はい。判りました。リインフォースⅡ、覚醒シークエンスを開始します」

壁に設けられてる機材にアインスがひとり向かう。そこで生体ポッドの操作を行えるからな。ここの機材はミミルさんの自作、つまり趣味によるもので、その全てがピアノ型・パイプオルガン型ばかり。ちなみにこの部屋の機材はオルガンや。オルガンの前の椅子に座って、「やはり緊張するな」そう言うて深呼吸するアインスの後ろ姿にわたしもドキドキや。

「アインス、綺麗ね～♪」

「本当に美しいな」

「ああ」「だな～」

「ホンマにな」

シャマルとルシル君に同意するシグナムにヴィータ、そんでわたし。アインスの弾くオルガンの音色に耳を傾けてたいけど、リインの漂うポッドに帯状魔法陣が螺旋状に展開されて、ポッドのガラスが上にスライドして開いてく。それと一緒に漂ってたリインがゆっくりと降りて来るから、「シグナム、支えてもらえるか？」手を伸ばす。

「はい。しっかりお支えします」

「あ、私も！」

シグナムとシャマルに両側から支えられながら車椅子から立ち上がって、ポッド内に両手を出してリインを受け止める。とても軽くて小さくて、そんで生きてる証拠に温かな体や。わたしはもう1度車椅子に座らせてもらう。

「シャマル。バッグに入ってる服を」

「あ、はい。リインちゃんのお洋服ですね！」

シャマルが肩から提げてるポシェットにはリイン用の服がしまってある。ポシェットから服を出してくれた。下着にキャミソールワンピースに7分丈のレギンス、そんでブーツ。全部、ルシル君のお手製や。

わたしは料理は得意やけど裁縫はサッパリで、雑巾くらいしか作れへんレベルや。シャマルもアインスもな。さすがに市販の人形の服を買うのもなんや気が引けたから、オーダーメイドで作ろうって話になって・・・。

・―・―・回想や♪・―・―・

「――う～ん・・・」

リインフォースⅡを一緒に生み出すことになってくれたミミルさん

の家――とゆうよりは城のあるミッドから海鳴市の自宅に戻って、夕ご飯をみんなで食べて片付け終えた後、わたしはソファに座って腕を組んで唸った。

「どうかしましたか？　はやてちゃん」

「なんか悩み事？　あたし達で手伝えることかったら何でも言って！」

わたしの両隣に座るシャマルとヴィータに、「リインフォースⅡの衣類についてちょうな～」わたしの悩みを打ち明ける。ツヴァイの背格好は、手の平サイズな妖精タイプ。そんな小さな子の服なんて売ってるわけもなく・・・。

「あー。でも売ってないなら作れば良いんじゃない？」

「「・・・」」

シャマルと目が合って、「出来る？」「出来ますか？」同時に訊き合った。そんでまた無言。ヴィータが「シャマルはともかく、はやても出来ないの？」小首を傾げて訊いてきた。

「ひどい！　私はともかくなんて！　そりゃ出来ないけど！」

「あはは、わたしも出来ひんなぁ。雑巾くらいしか作ったことないわぁ」

服を丸ごと作るなんて芸当、わたしは習得してへん。ま、そこから

の流れでいっぺん作ってみようってなった。
次の日、色んな種類と柄の服を作るために生地を何十種と購入。もちろん独学で一から作れるほどの才能アリと違うから、服の作り方が書いてある本も一緒に購入。自宅に戻って、物置からミシンをザフィーラに取って来てもらって、いざ本を開いて手順を確認っ。

「――って、結構やることあるんやなぁ～」

「まずデザイン画を描かないとダメなんですね～」

「うん。そんじゃあみんな、ツヴァイに着せてみたいって服をイメージして描こうな」

わたし、ヴィータ、シャマル、リインフォースの４人でツヴァイに着せたい服のイメージ画を描くことに。わたしとリインフォースはツヴァイに直接会ってるからすぐにイメージが湧くけど・・・

「そういや、あたしリインフォースⅡとは会ったことねぇんだよな～・・・」

「リインフォースをそのまま小さくしたようなものなんですよね？はやてちゃん」

「うん、そうやな」

「アギトやアイリと同じ背格好で、髪は私と同じ銀で長く、瞳は私とは違って柔和な目つきで色は青だな」

リインフォースが人差し指を立てて説明した。ヴィータもシャマルもそれでイメージが固まったようで画用紙に描き始めたから、「リインフォース。わたしらも」画用紙にイラストを描き始める・・・んやけど、わたし・・・絵心ないなぁ・・・。ふにゃってなってる服のイラストに頭を抱える。騎士甲冑のデザインは上手くいってたんやけど。何がアカンのやろ・・・？

「出来たっ！」

ヴィータが立ち上がった。そんで「こうゆうのはどう！？」自分が描いた服のイラストを見せてくれた。うん、ヴィータもなかなかの芸術肌やった。ヴィータはなんて言うかパンク？系の服が好きで、イラストにもドクロがでかでかと描かれてた。リインフォースⅡにはちょう合わんかなぁ。

「良いと思うんだけどなぁ～。う～ん・・・」

「出来ましたっ！」

納得できひんと言うように渋々座って新しいイラストを描き始めたヴィータに代わって、シャマルがビシッと挙手。そんなシャマルの描いたイラストをみんなで見る。シャマルはなかなかに上手な絵を描いてて、「おお」感嘆の声が漏れた。

「きっと可愛い系が似合うと思うんです♪　ですから、目覚めが春頃だということで、キャミソールワンピースにしてみました！」

「採用！！」

シャマルの掲げて見せてくれた画用紙を指差してそう言うと、「やった　楽しくなってきましたぁー！」ものすごい勢いで画用紙にイラストを描き始めた。シャマルの新たな才能の開花やなぁ。そう感心してると、「オーディンさんが・・・」シャマルがポツリと漏らした。

「シャマルって、お医者さんでもあったオーディンさんの手伝いをしてたんやったよな」

「はい。オーディンさんは医者の他にも服飾品のデザイナーとしても活躍していまして。その、何度かデザインを描いている姿を見たことがあって。その時に私も描かせてもらったことがあって。その経験のおかげですね、こういうのが得意なのは。服飾デザインについては一日の長です」

「そんなことやってたのか、知んなかったな」

「ああ。いつの間に・・・」

ヴィータはそうでもないんやけど、割と悔しそうな表情を浮かべたリインフォースの視線を受けたシャマルが「えっと、たまたまだから」苦笑しながら後ずさった。ま、とにかくデザインをイラスト化する作業はシャマルに任せて、わたしらは次の作業の準備に移ろか。買ってきた本を読むんやけど・・・う～ん、読むだけじゃサッパリ

やな。とりあえずは生地を縫うところまで試行錯誤しながら進めて、ミシンを使って生地を縫うんやけど・・・

「アカン！　縫うたらアカンところまで一緒に縫うてもた！」

全くと言っていいほどに才能が無いんか失敗を繰り返す。シャマルもリインフォースにもさせてみたけど、料理ほど上手くは出来ひんかった。糸切りハサミで糸を切って失敗作を生地に戻してると、「ただいまー」ルシル君からの挨拶がリビングから聞こえてきた。

「おかえりー、ルシル君っ♪」

泊まりで研修をしてたルシル君が帰ってきた。作業を全部ストップして、リインフォース達みんなとわたしの部屋からリビングへ移動して改めて、「おかえりなさい！」首をコキコキ鳴らしてる局の制服姿のルシル君に挨拶する。

「ただいま、はやて。それにヴィータ達も。・・・ん？　はやて、髪」

ルシル君が自分の前髪をツンツンって突いた。わたしの名前を呼んだってゆうことは、わたしの髪になんかあるってことか。触れてみると、「逆、逆」ルシル君が笑う。と、「主はやて。髪に糸くずが付いています」リインフォースがわたしの髪に触れて、糸くずを取ってくれた。

「おおきにな、リインフォース」

「ヴィータもシャマルもリインフォースも、みんな頭に何か付けてるぞ？　何をしていたんだ？」

リインフォース達がルシル君に指摘されたところに付いた糸くずを取ってく中、「実はな――」リインフォースⅡに着させる服を手作りしてたってことを説明する。

「・・・なるほどな。確か、３０ｃｍほどなんだよな、リインフォースⅡの背丈も。そんなサイズの服なんて、人形に着せるよう物しか売っていないだろうし」

「そうなんよ。でもな～、こんなありさまでなぁ・・・」

ルシル君をわたしの部屋に案内して、床に散らばってる失敗作や何十枚ってゆう生地を見せる。シャマルも「面目ないです」、リインフォースも「思った以上に難しくて・・・」そう言うて苦笑。そんでヴィータは「なあ、このデザインって変か？」パンク系の服のデザイン画を見せて訊いた。

「パンクはさすがに無い。ヴィータくらいにしか似合わないだろ」

「チェッ。悪くねぇと思うのにな～。・・・なぁ、お前は裁縫って出来るのか？　オーディンはデザインだけで製作は別の奴がやってたけど・・・」

「俺？　出来るけど。作ろうっか？」

シャマルの描いたデザイン画を見ながらそう確認してくれたルシル君に、「お願い出来るか？」手を合わせてお願いする。そうゆうわけで、リインフォースⅡの衣類製作はルシル君に任せることに決定。ま、いつかわたしやシャマルも作れるように弟子入りすることにもなったけどな。

・―・―・終わりや・―・―・

「ん・・・ぁ・・・」

わたしの両手の平の上に横になってるリインが小さく身じろぎ。そんで目をうっすらと開けた。ルシル君とザフィーラ以外のみんなでわたしの手を囲ってリインを見守る。

「ルシル、ザフィーラ。お前たちもほら」

「ああ」「うむ」

ルシル君と狼形態のザフィーラがアインスとシャマルの間から顔を出して、身じろぎを終えて上半身を起こし始めたリインを見守る。と、「ぅ・・・むぃ・・・？」手の甲で目を擦るリインの目がわたしと合うた。

「はじめまして、そんでおはようや。リインフォースⅡ」

「・・・リイン・・・フォース・・ツヴァイ・・・？」

わたしの手の平の上で横座りしてるリインが復唱して少し黙った後、
「はい。リインフォースⅡ、認証しました」小さく頷いた。ある程度の一般教養はインストールしてあるから、ちょう難しい言葉も使えるし、魔法も修得次第すぐ扱えるようになる。

「わたしのこと、自分のことは判るか・・・？」

「・・・あ、はい。あなたはマイスターはやてです。そしてわたしは、融合型デバイス・リインフォースⅡ、です」

「ん、そうや」

目覚めたばかりやからかな、リインはちょう気後れしてる風や。それはみんなにも伝わってるようで、わたしの手の平を囲うような位置からわたしの両脇へと移動して整列。

「リイン、紹介するな。今日からリインの家族になる・・・」

「あたしはヴィータだ。よろしくな、リイン！」

「私はシャマルよ。リインちゃん、これからよろしくね♪」

「シグナムだ。歓迎するぞ、リイン」

「ザフィーラだ。よろしく頼む」

「ルシリオン・セインテストだ。気軽にルシルと呼んでくれ、リイン」

「・・・最後は私だな。リインフォース・アインスだ。今日からお前が、リインフォースとなる。だから私のことはアインスと呼んでくれ。では改めてよろしく頼むよ、リイン」

良かった、間に合って。アインスとリインを会わせることが出来てホンマに良かった。みんなの自己紹介を聞いたリインが「ふ、ふちゅちゅか者ですが、よろしくお願いしましゅです」噛んだことにもめげずに挨拶をしてくれた。

「無事に起きたのねぇ～」

みんなで微笑み合ってると、間延びした口調の女の人の声が出入り口から聞こえてきた。わたしは「お邪魔してます、ミミルさ――っ！！？？」振り返りながら挨拶しようとして、ミミルさんの格好を見て絶句。ミミルさんの着てる白衣の下に見えるのは白い肌。そんで真黒なブラジャーとパンツ。ミミルさんは下着姿の上に白衣1枚ってゆう格好やった。

「ふわぁ。ごめんなさいねぇ～。徹夜明けで気が付かなかったわぁ～」

男の子なルシル君や、一応男の人なザフィーラが居っても全く隠そうとも恥じらうこともないミミルさん。ここで「ルシル君見ちゃダメよ！」シャマルが後ろからルシル君を両手で目隠しして、「ザフ

ィーラもだ！」ヴィータがザフィーラの首に抱きついて、「むごぉ？」グイッと横に引っ張って頭を逸らさせた。わたしも「ごめんな、リイン！」膝の上に座らせてるリインの顔を、「ふえっ？」左手で覆い隠す。

「ミミル博士！　服を、何か着てください！　せめて白衣のボタンを全部留めてください！」

「あら～、無理よ～。ほら～、胸が大きすぎて留めきれないもの～。それに～、見られて減るものでもないしね～」

顔を赤くしてるアインスにそう言われたミミルさんが両手を腰に当てて胸を張った。バインと跳ねる大き過ぎるミミルさんのおっぱい。開いた口が塞がらへんけど、「へ、減ります！　ルシル君の血が！」わたしも早く隠してほしいから参戦。

「ちょっと待て、はやて！　血！？　俺の血ってなんだ！？　鼻血か、鼻血のことを言っているのか！？　噴いてないぞ、噴いていないから！」

「子供に見られたくらいで恥じらうほど～、私は初心じゃないわよ～」

必死に反論してくるルシル君の鼻からは確かに血は出てへん。うん、判ってるよ。そやけどここは男の子が居るってことを知ってほしいからな、ミミルさんに。そんなわたしの口撃は、ミミルさんの大人としての余裕の前にあえなく失敗。

「うちにはザ、ザフィーラが居ますので！」

「それに、主はやてやリインのような子供には刺激が強すぎますので！」

シャマルとシグナムも参戦してようやく「しょうがないわね～」指をパチンと一鳴らし。するとミミルさんの足元に暗めの青に輝くベルカ魔法陣を展開されて、「疲れるのよね～、これ」その姿を変身させた。とは言うても、ブラウスにタイトスカートッてゆう普段通りの服やったけど。

「ふわぁ～。もうこれでいいわよね～？」

服を着て大きなあくびをするミミルさん。わたしらは一斉に溜息を吐いて、わたしはリインの顔を覆い隠してた手を退けて、ヴィータはザフィーラの首から離れて、シャマルはルシル君の両目を覆い隠してた両手を退けた。２分にも見たへんこの短い時間に疲労はほぼマックスや。

「えっと・・・コホン。ミミルさん。お世話になりました、おおきにありがとうございました！」

リインの誕生がここまで早く出来たのはミミルさんの力があってこそや。そやからわたしは深く頭を下げた。すると、「あ、ありがとう・・ございました」リインもわたしの膝の上で頭を下げた。そんでルシル君たちもお礼を言ってく。

「私の方こそ、ありがとうよ～。融合騎を生み出すなんて、きっと後にも先にも無いと思うし～。良い経験をさせてもらったわ～」

ミミルさんは融合騎を生む技術を持ってる。そやけど融合騎を生むことはもうせえへんって以前言うてた。融合騎に振り回される融合事故で大きな事件・事故を起こしたくないからって。そやからリインフォースⅡが、ミミルさんにとって最初で最後の融合騎になるって。

「困ったことがあったら～、またいらっしゃいな～」

そうしてわたしらは、新しい八神家の家族――末っ子のリインフォースⅡを連れてわたしらの家へと帰った。

Ｅｐｉｃｏ９春ランラン♪

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「～～～～～っ、来ぃぃ～～～～たぁぁ～～～～ぞぉぉ～～～～っ！！」

初めての学校、次元航行部から特別技能捜査課への異動、そんな慌ただしかった４月もいよいよ終わりに近付いてきた今日この頃。わたしがホームステイしてるハラオウン家、なのはの高町家、アリサのバニングス家、すずかの月村家、はやての八神家、みんな揃って花見っていうイベントへとやって来た。

「わぁ、満開だね～♪」

「散る前にお花見が出来て良かったね～」

「本当よね。もしかしたら今年は出来ないかもって思っていたけど・・・」

「スケジュールがいっぱいになる前に、リンディ提督が合わせてくれたんだよね」

「クロノも頑張ってくれたんだよね～♪」

「感謝せなアカンなぁ・・・って、おお！　すごい絶景やなぁ！

な、アインス！」

「はい。とても美しいです」

なのはとすずかとアリサ、フェイトとアリシア、そしてはやてと車椅子を押すアインス（リインフォースって名前は後継騎の子に受け継がれたことで、アインスって呼ぶようにお願いされた）、みんなで小高い丘から目の前に広がる満開の桜林を見て感動。

ちなみに花見っていうのは、桜っていう特定の落葉樹だけじゃなくて、梅や桃の花を眺めながら食事会をするイベントの呼称らしい。

わたしたち異世界組はピクニックの一種だっていう認識。

「そう言えば参加メンバーの数聞いた？　５０人以上になっちゃってるって」

「連絡網が巡り巡ってアースラや本局スタッフまで行っちゃって・・・」

「気が付けば大所帯だよね」

後ろに振り返って見ると、みんなの家族はもちろん、アースラスタッフのみんながシートを地べたに敷いたりお弁当を広げたりと準備中。お弁当は各家庭や管理局組のみんなが持ち寄って、さらには鉄板セットを使ってここで料理を作ったりもする予定。

「わぁ、綺麗です・・・！」

「お？　起きたな、リイン」

「あ、リインちゃん。おはよう♪」

「っ、お、おはよう・・ございますです・・・」

はやての膝に置かれたショルダーバッグのカバーを押し上げるようにして顔を覗かせたのはとっても小さな女の子、リインフォースⅡ。愛称はリイン。わたし達に紹介されてから1週間ちょっと経った。聴いてた通りの可愛さにわたし達みんなリインのことが好きになったんだけど、生まれたばかりってことも原因なのかちょっとおどおどしちゃってる。

「すごいやろ？　桜、ってゆう花なんよ」

「さ・・くら・・・、桜・・・憶えましたです」

目の前をヒラヒラ舞う桜の花びらをキョロキョロと目で追いながらリインが頷いた。と、1枚の花弁がリインの鼻先に触れると、「へくちゅっ」くしゃみした。もうそれだけで可愛い。なのは達もくしゃみしたリインを微笑ましく見る。

「リイン、アインス。今日はみんなで楽しもうな♪」

「は、はいです・・・！」

「はい。主はやて」

本当に幸せそうに笑顔を向け合うはやてとアインスとリインを見て、わたし達も嬉しくなってまた笑顔が生まれた。　それからお花見の準備が整うまで他愛無いお喋りをしながら桜を眺めてると、「あ、はやてちゃん。ヴィータちゃん達も来たよ！」そう言ったなのはの指さす方には、シグナムとヴィータとシャマルとザフィーラが居て、リンディ提督やクロノのところへ合流していた。

「レティ提督も一緒だね。それと、もう1人の女の人は・・・？」

「ちょっ、ヴァスィリーサ准将！？　なんで！？」

「おお、リアンシェルト総部長や」

フェイトの疑問にわたしが答えたんだけど、その正体には驚いた。リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ運用部総部長だった。よほどの事がない限りは本局から出られないって有名なのに。

「あの人がヴァスィリーサ准将さんなんだ・・・」

「名前だけしか知らなかったけど、思ってたより若いんだね～」

「若いって言っても・・・少なくとも３０代後半で、リンディ提督よりは年上だったはず・・・」

「外見って割と当てになんないわよね、あたし達の周りに居る大人たちってさ」

わたしがそう言うとアリサが腕を組んで唸った。わたしもなのは達も「そうだね」って苦笑。リンディ提督やレティ提督、桃子さんも、子持ちとは思えない程にすっごい若い外見だもんね～。

「レティ提督とリアンシェルト総部長にご挨拶せなアカンな。アインス、よろしくや」

「あ、はい」

「みんなはどないする？　一緒に挨拶に行く？」

時空管理局が始まって以来の"無敵無敗（トップエース）"と謳われる氷結の魔導師、ヴァスィリーサ准将やレティ提督に挨拶しに行かない？っていうはやての問いに「行くよ」わたし達も挨拶に行くって答えた。人事などを司る運用部の全権限を有するヴァスィリーサ准将には、わたしやはやて達はもちろん、なのは達も少なからずお世話になってるからね。

みんな一緒に小高い丘を下って、みんなの家族と挨拶を交わしてたレティ提督とヴァスィリーサ准将に「こんにちはー！」挨拶をする。

「あら、こんにちは、みんな。今日はお誘いいただきありがとう」

微笑みを浮かべてくれたレティ提督に、「楽しんでいただければ幸いです♪」みんなで笑顔返し。そしてわたし達の視線はヴァスィリーサ准将へと向けられた。リンディ提督が「レティ。リアンシェルト先輩を強引に誘ったんじゃないの？」ボソッとレティ提督に耳打ちしたのが聞こえた。

「だって先輩、暇そうにしていたから。それに本局を出ることの条件も満たしているし、ちょうどいいかな、って」

リンディ提督とレティ提督のヒソヒソ話をしてる姿をチラッと横目で見たヴァスィリーサ准将は小さく溜息を吐いた後、わたし達に目を向け直した。

「お久しぶりです、フライハイト三士、八神はやてさん、騎士リインフォース。そしてお初にお目に掛かります、高町なのはさん、アリサ・バニングスさん、月村すずかさん、フェイト・テスタロッサさん、アリシア・テスタロッサさん。時空管理局本局・運用部総部長の、リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ准将と申します」

とても綺麗なお辞儀での自己紹介に、わたしとはやてとアインスは「お久しぶりです」ってお辞儀を返して、なのは達は「はじめまして」の挨拶と一緒に自己紹介返し。そしてレティ提督とヴァスィリーサ准将は誘われるままに、大人たちに交じってお喋りを始めた。

「あとは、ユーノ君とルシル君、それと・・・」

「石田先生やな」

ユーノとルシルは、午前中は仕事ってこともあって遅れて合流する予定で、石田先生もそうみたい。でもこれ以上、花見の開始を遅らせると管理局組のスケジュールに問題が発生するって言うことで、

「――テス、テス」ハウリングするマイクを片手にエイミィがマイ

クテスト。エイミィの隣には、なのはのお姉さんの美由希さん。２人もわたし達のように親友みたいな間柄。

「ではでは、お待つまりのみなさん！　おっ待たせいたしましたーっ！　本日の幹事を担当させていただきます、時空管理局・執務官補佐のエイミィ・リミエッタと――・・・」

「高町なのはの姉で、エイミィの友人、一般人の高町美由希でーすっ！」

今日の花見の立案をしたのはわたし達なんだけど、事細かな調整はエイミィと美由希さんが買って出てくれたから、幹事っていう立場なんだよね。

「そして、今回の運営を買って出てくださいましたのが――・・・」

「管理局メンバーにはお馴染み、我らがアースラの艦長、リンディ・ハラオウン提督に、ご挨拶と乾杯の音頭をお願いしたいと思いまーす！」

「はい、みなさん、こんにちはー！　今日はとても綺麗に晴れ、お花見日和になりましたね～♪」

エイミィと美由希さんに紹介されたリンディ提督が挨拶を始めて、

「――とまぁ、硬いお話しはお題目として置いといて。今日は花を愛で、食事を楽しんで、お話をしてこの楽しい時を過ごしましょうーっ♪　それでは、私たちの出会いに、そして今日という良き日に

・・・かんぱ～い♪」マイクを持つ手とは逆、左手に持ってるコップを掲げて音頭を取った。わたし達はジュースに注がれたコップを、大人組はお酒の入ったコップを掲げて、「かんぱーい！」した。

「早速飲み始めたわね、うちのパパと士郎さん。ていうか、リンディさんの乾杯より早くから飲んでたけど」

「にゃはは。お父さんとアリサちゃんのお父さん、仲良しだから」

自分の父親たちのフライングに呆れるアリサとなのは。さてと、それじゃあ「はいはーい、せっかくなんで、身内同士で固まらないで、普段話さない人たちと話して交流を深めましょーっ♪」エイミィの言うように、このイベントを利用してたくさんの人と仲良くなろう、というわけで、わたし達も一旦解散ってことに。

「――挨拶回りを済ませながら食事して、それが終わったらみんなで特等席に行きましょ♪」

アリサが胸を張ってそう言うと、わたしやフェイト、アリシアにはやてが「特等席って？」小首を傾げる。ニコニコ笑みを浮かべるなのはは「にゃはは。私たちだけが知ってる内緒の場所♪」って、すずかは「すごく綺麗な場所なんだ。シャルちゃん達も気に入ってくれると思う♪」って答えてくれた。

「全部済ませたらここに集合よ。そんじゃ解散！」

そうしてわたし達はそれぞれの知人・友人に挨拶するために解散し

た。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒はやて†††

みんなと別れた後、わたしとアインスとリインは、局員やみんなの家族の人たちと改めて挨拶をして、今はクロノ君となのはちゃんのお姉さん――美由希さんが一緒に居る鉄板セットの近くで「うん、美味しい！」クロノ君お手製の焼きそばを食べてる。アインスも「美味い」って微笑んでるし。わたしの膝の上に座ってるリインも、膝に乗せたお皿から面を１本ずつ口に運んでは美味しさに頬を緩ませてる。

「はやてとアインスに好評だと、僕の料理の腕前もなかなかなんだと自信が付くよ」

「あ、それ解る～♪　はやてちゃんのお弁当をさっき貰ったけど、絶品だったよ」

クロノ君と美由希さんからの褒め言葉に「おおきにありがとうございます♪」お礼を返す。それからエイミィさんが戻って来るまで（どうやら注文だけを受けた後どこかへ行って、そのまま戻って来てへんみたい）、クロノ君と美由希さんとお話ししてると、「焼きそば取りに来たわよ～」すずかちゃんとアリサちゃんがやって来た。

「おお、すずかちゃん、アリサちゃん。ちょっとぶり～♪」

「「ちょっとぶり～♪」」

すずかちゃん、アリサちゃんと片手を上げて挨拶してると、「ああ、焼きそば6人前できてるぞ。持って行ってくれ」クロノ君がパックに作り終えたばかりの焼きそばを盛って、美由希さんが「はい、どうぞ～」2人に手渡した。

「クロノの焼きそば、美味しいって評判よ♪」

「私もさっきシャルちゃんから少し貰ったけど、すごく美味しかった♪」

2人からもそう褒められたクロノ君が目に見えて「そ、そうか」テレた。そんなクロノ君を微笑ましく見てると、「そうだ、2人とも。エイミィを見なかったか？　どこで油を売っているんだか戻って来ないんだ」呆れながらもクロノ君は次の焼きそばを作るためにお肉を炒め始めた。

「さっきカラオケんところで見たわよ」

「うん。フェイトちゃんとアリシアちゃんがデュエットしていたんだけど、ノリノリで合いの手を入れてて・・・」

挨拶回りしてる時、確かにフェイトちゃんとアリシアちゃんの歌声を聴こえてたなぁ。アリサちゃんとすずかちゃんの話を聴いてわたしらは一斉にカラオケのある方に顔を向けて、目を凝らして見る。人垣でハッキリとは見えへんけど、「エイミィ、マイク持ってない？」美由希さんの言う通りマイクを掲げて見せてるエイミィさん、そん

で隣でマイク片手にはしゃぐシャルちゃんが見えた。どうやら今度はシャルちゃんとエイミィさんがデュエットするみたいやなぁ。

「美由希さん。すみませんが、あの馬鹿を引っ張って来てくれませんか」

「あ、えっと・・・了解」

苦笑しながら駆け出した美由希さんを見送って、エイミィさんと話し合う姿を見守る。そんで、「・・・あ、アカン、取り込まれた」エイミィさんに肩を抱かれて、シャルちゃんにマイクを渡されてもうた美由希さんがこっちに向いて、ごめーん、って口パクで謝ったのが見て判った。

「アリサ、すずか」

「判ってる。シャルを連れて来るわ」

「あはは・・・。うん、しょうがないよね」

野菜を炒め始めたクロノ君が俯き加減にすずかちゃんとアリサちゃんの名前を呼ぶと、それだけで察した2人がシャルちゃんに向かって駆け出した。大きく溜息を吐くクロノ君に「クロノ執務官も大変だな」アインスが同情の言葉を掛ける。

「はは、ありがとう、アインス。おかわりはどうだ？　はやてもリインも」

「ありがとう。しかし私はもう結構だ。美味しかったよ、ごちそうさま」

「わたしもや」

「あ、あの、わたしは――・・・あっ」

リインがそこまで言うたところでピタッと止まった。わたしとアインス、クロノ君の3人でリインを見る。リインは桜を見上げてて、わたしらも倣って桜の木を見上げると、「お？」桜の花に紛れて枝の中に何か居るのがチラッと見えた。

「小動物でしょうか・・・？　リイン、見えたか？」

「あ、いえ・・・小さな動物だというのは確かだと思うですけど・・・」

ガサガサ動いてるのは確かやなぁ。一度気になったこともあって、その姿を見せるまで見てようとしてたら、「何してるの？　はやてちゃん、アインスさん、リインちゃん」戻って来たすずかちゃんに声を掛けられた。

「枝の上になんや動物が居るらしいんよ」

「リインが見つけたのだが、なかなか姿を見せてくれなくてね」

すずかちゃんとアリサちゃん、そんで連れて来られたシャルちゃんも桜を見上げる。そやけど満開の桜が見事に動物の姿を隠してる。とここで、「へぇ。リイン、飛んで確かめてみたら？」シャルちゃんからそんな提案が。

「ちょっ、八神家のお母さんとして幼いリインにそんな事させられませんっ」

「ですが主はやて。リインは融合騎としてこれから私に代わって共に現場に立ちます。今回は飛行・偵察の練習と言うことで如何でしょう」

リインをギュッと抱いて却下するとアインスがちょう困った風にそう提案してきた。リインも「わたし、祝福の風リインフォースを受け継ぐに足る融合騎だって、アインスに見せたいっ、です」わたしの手から離れてそう意気込んだ。すると「おお！」すずかちゃんとアリサちゃんとシャルちゃんが拍手。アインスも「リイン、お前・・・」感動したって風に微笑んだ。

「・・・リインの思いは解った。・・・よしっ。リイン、桜の花に隠れてる動物がなんなのか調査、そんでわたしらに報告や！」

「は、はいっ、マイスターはやて！」

すぃ～と音もなく高度を上げて行ったリインを見守る。そんでリインの姿も桜の花で見えへんくなった。その直後、「ひゃあ！？」リインの悲鳴が響いた。わたしはすぐさま首から提げてる“夜天の書

リインフォース・アインス"の分身――"シュベルトクロイツ"の首飾りを手にして、騎士甲冑姿へと変身。

「リイン！」

一足飛びでリインの元へ飛び上がる。一瞬だけ桜の花に視界が閉ざされたけど、すぐに開けた。そこでわたしが目にしたんは、「リイン・・・？」が体を左右からリスとハムスター（２匹ともちょう大きいかなぁ）に挟まれて「フカフカですぅ～」とんでもなく頬を緩ませてた姿やった。

「リイン・・・？」

「はぅっ！　マイスターはやて！　ご、ごめんなさいです！」

わたしに気付いたリインが慌ててリスとハムスターから離れようとしたんやけど、「ひゃっ？」２匹ともリインを放さへんってゆう風にさらにギュッと抱きしめた。すると「はわぁ、モフモフです～」リインはまた頬を緩ませた。

「（なんやろ、あのリスとハムスター。野生にしては人懐っこいとゆうか・・・。ん？　リスとハムスター・・・？　あ、もしかして・・・）セレネちゃんとエオスちゃん、か・・・？」

「「大正解っ♪　直接会うのは初めてだよねっ！」」

ハムスターの姿に変身してるんがお姉ちゃんの、セレネ・スクライ

アちゃん。リスの姿に変身してるんが妹の、エオス・スクライアちゃん。ユーノ君のお姉ちゃんに当たる子らや。これまでに通信で３回ほどしか話したことあらへんけど、最初の１回だけで親友って自負できるほどに仲良くなった。そんでいつか、直接会おうね、って約束してたんや。

「はやてー！　リインー！」

「何か居たー？」

チラッとセレネちゃんとエオスちゃんを見ると、２人は器用に前脚で、しぃー、って静かにするように伝えてきた。わたしとリインでコクンと頷くと、２人はウィンクした後、枝の上から飛び降りてしもうた。

「アリサー！　フレイムアイズー！」

「すずかー！　スノーホワイトー！」

「え、ちょっ、エオス、あんたなの！？」

「セレネちゃん！？　セレネちゃん！」

真下から感極まった４人の声が聞こえてきた。わたしは「降りよか、リイン」って手を差し出すと、「はい、マイスターはやて」リインはわたしの手の平に乗った。そんでリインを胸に抱えるようにしてわたしは枝から飛び降りた。地面に降り立ったわたしの元に「主は

やて、リイン」アインスが駆け寄って来た。

「ん。・・・さて。リイン。報告よろしくや」

「はいですっ。報告します、です。桜の中に隠れていたのは、動物の姿に変身していましたセレネ・スクライアさん、エオス・スクライアさんのお2人でした。以上です」

ビシッと敬礼してのリインの報告に、「御苦労さまや、リイン」わたしも敬礼を返した後、その小さな頭をそっと優しく撫でた。そんな時、「ふふ。リインの初任務は偵察だったか」わたしらの後ろから、わたしの家族であり、想いを寄せる男の子「ルシル君！」の声がした。

「遅くなってすまなかったな、はやて」

「ううん、気にせんで。それに、ユーノ君も。こんにちは～♪」

ルシル君の隣には、なのはちゃんのデバイス――"レイジングハート"の元持ち主で、前事件の関係者の1人、ユーノ・スクライア君も一緒やった。わたしの挨拶に対してユーノ君も「うん、こんにちは、はやて」笑顔で挨拶を返してくれた。どうやらセレネちゃんとエオスちゃんを連れて来てくれたんはルシル君とユーノ君らしい。

「それと石田先生も一緒だ」

ルシル君の視線の先、リンディさんと挨拶してる石田先生の姿があ

った。そやから「みんなで挨拶せな行かなアカンな」とゆうわけで、思念通話でシグナム達を呼び戻す。シグナム達と一緒になのはちゃん達も来て・・・

「ちょっとぶり、ユーノ君。セレネちゃんとエオスちゃんは久しぶりだね♪」

「久しぶり、2人とも。・・・あ、アリシアははやて達と同じで直接会うのは初めてになるんだよね」

「通信だと何回か話したことあるけどね～♪」

「「そだね～♪」」

子供組みんなで再会を喜び合った後、わたしら八神家は石田先生の元へ向かうことに。その間、すずかちゃん達はお喋りして待っててくれることになった。

「そうそう。ルシル君。リアンシェルト総部長もいらっしゃってるよ。挨拶どうする？」

「っ！？」

ルシル君の顔色が目に見えて悪くなる。実は、シグナムらもリアンシェルト総部長の名前や姿が出ると、揃って警戒心を強める。前に何でか訊いたところ、わたしにはよう判らんけどリアンシェルト総部長から滲み出る管理局最強のオーラに気圧されてるってことや。

やっぱ歴戦の騎士ってなると、そうゆうのに敏感になってしまうんやなぁ。

「准将への挨拶は俺ひとりでいいよ。はやて達は石田先生と挨拶を済ませて来るといい」

「「「ルシル！」」」「ルシル君！」

小さく手を振ってリアンシェルト総部長の元へ歩き出したルシル君をアインス達が一斉に呼び止めた。あまりの切羽詰まったかのような声色に、わたしやリイン、すずかちゃん達もお喋りをやめてルシル君らを見た。

「大丈夫だよ。それじゃ行ってくる」

満面の笑顔をわたしらに向けた後、ルシル君は去ってった。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

リアンシェルトが居る。この言葉をはやてから聴いた時、どれほど俺を恐怖させたか。共感してくれるのは、リアンシェルトが"堕天使エグリゴリ"の1機だと知っているシグナム達だけだ。古代ベルカ時代において、"エグリゴリ"のメンバーの名前はすでに彼女たちに伝えてあるからな。

局に務めることになって数日となっていたあの日、レティ提督からリアンシェルトを紹介された時のシグナム達の驚きようと言ったら。だからリンディ提督やレティ提督に思いっきり不審がられていたよ

な。ま、色々と言い訳をして有耶無耶にすることが出来たわけだが。

「――リアンシェルト准将。どうもです」

リアンシェルトを遠巻きに眺めながら花見をしていた局の知人や初見の人たち（表情からして、彼女に見惚れているようだ）と挨拶を終えた後、ひとり儚い表情（のように見えるが、実際は退屈でしょうがないって感じだ）をしてひとり桜を眺めていたリアンシェルトに声を掛ける。

「ええ。元気そうで何よりです、ルシリオン研修生」

「ご挨拶に伺いました。『こんなところで何をしている？　目的はなんだ？　俺の監視か？』」

「そうですか。わざわざありがとうございます。『そんなわけがありません。レティ・ロウランに半ば拉致のごとく連れて来られただけです。監視など、そんな暇はありませんから』」

俺とリアンシェルトの視線がぶつかる。少しの間見つめ合った後、「私を見ているより、友人たちと話す方が有意義と思いますけど？」リアンシェルトが先に目を逸らし、両手で包み込むように持っていたコップに口を付け、飲み物を呷った。

「・・・ではこれで失礼します」

リアンシェルトに一礼して踵を返し、みんなの元へ向かうために歩

き出す。ふと、「あれ？　アイツが呑んでいたのって匂いからして酒だよな、ワインっぽい香りがしたし」チラッと背後を振り向くと同時、「きゃぁぁぁ！？　ヴァスィリーサ准将が倒れたぁぁーーーー！！？」悲鳴が上がった。

（あ～あ。アルコールが弱いのは変わらず、か）

リアンシェルトはアルコールに弱い。数口程度なら大丈夫だが、ある一定の摂取量を超えると突然ぶっ倒れる。今がそうだ。女性局員に看てもらっているリアンシェルトを懐かしく思いながら、「・・・和んでいる場合じゃないよな」と頭を振るって、また歩き出す。

「おーい、ルシルく～ん！　こっちや、こっち～っ♪」

石田先生と挨拶を終えたはやてとアインスとリインと合流し（シグナムとヴィータはシャマルとザフィーラは残念ながら別行動らしい）、なのは達の元へ。彼女たちとこれから秘密の場所――さらに綺麗な桜を見られる特等席に向かう。遅れて来た俺とユーノ、セレネとエオスの為に食べ物・飲み物を用意してくれていたなのは達と合流を果たし、彼女たちについて行って、その特等席へ到着。

「それじゃあ、あたし達だけでもう1度、乾杯しましょ♪」

メンバー全員に手渡されていくコップ。そしてシャルが「美味しいジュースを貰ってきたよ～♪」とそれぞれのコップに注いでいく。とそんな時、ビュッと強い春風が吹き、「おっと」俺の髪を結っていた髪紐が解けてしまった。

「すまない、俺のことは気にせずに乾杯は先に始めていてくれ！」

コップを敷かれたシートに置き、靴を履いて飛ばされた髪紐を取りに向かう。髪紐は結構流されてしまっていて、見つけ出すのに少々労してしまった。が、ちゃんと、見つけることが出来た。

「失くすわけにはいかないだろうな、やっぱり。はやてから貰ったプレゼントだし」

俺のバースデープレゼントということで、はやてから贈られた髪紐。買い換えればいいって切り捨てるにはあまりに高価なものだ。もちろん金銭的ではなく感情的なもので、だ。桜の枝に引っ掛かった髪紐を取り、長い後ろ髪をそれで結う。

（さてと。早く戻らないとな）

ダッシュではやて達の元へ向かって、「ん？」視界内に収めた彼女たちの様子に少し違和感を覚える。何かとは言えないが、何かが変だ。しかも既視感もおまけ付き。彼女たちの側に辿り着き、全てが確信へと変わる。

「にゃはははは♪」

「おお、なんや世界が回ってる～♪」

「フェイト～　」

「アリシア～　」

「「ユ～ノ～　　だ～い好き～～　」」

「ぐ、ぐるじい・・・・！」

「あたしはね、同じ炎の騎士として、シグナムに勝ちたいわけよ！」

「そーだねー、今度は勝とーねー♪」

「すぅすぅすぅ・・・Ｚｚｚ」

「わぁーっはっはっは！　騒げ、歌え、踊れぇ～～～い！」

顔を真っ赤にして笑う者・踊る者・感情のままに行動を起こす者・行動を起こされ苦しむ者・人でない何かに力説する者・寝てしまう者、人格が変わってしまう者。その場限りで様々な人種を生み出すその原因は、「誰だ、酒なんか持ってきた馬鹿は・・・」アルコールだ。足元に転がっている酒瓶を手に取る。パッと見はジュースのボトルだが、ラベルをしっかりと読むと酒類であることは判る。だがシャルは詳しく読まなかったようだな。

「ルシルく～ん　」

甘ったるい声で俺を呼ぶのは、踊りを止めたはやてだった。ちなみに笑っているのはなのは。フェイトとアリシアは姉妹愛を確かめる

がごとく抱きしめ合い、セレネとエオスはユーノを左右から抱きしめ、ユーノは首や腹部を締め付けられて失神寸前。アリサは桜の木に向かって話しかけ、すずかは側でそれを眺めながら微笑み、リインは缶ジュースに抱きついたまま眠りこけ、シャルは桜の枝の上で仁王立ちして大笑い。溜息が止まらない。その間も「ル、シ、ル、く、ん　抱っこ～～　」はやてがハグを急いてくる。

「くぺっ？」

「「ユーノ～？　うわぁ～ん、ユーノが死んじゃったぁ～！」」

勝手に殺してやるな、セレネ、エオス。気を失っただけだよ（と思いたい）、ユーノは。すると2人は、今度は「お別れのチュー　」とか言いながらユーノにキスを始めた。なんていうか・・・ユーノ、ご愁傷様。それともラッキースケベとでも送ればいいだろうか。

「ん！　ん！　ん！」

はやてははやてでさらに急かしてくるし、「えへへ♪　うふふ♫　あはは♩」なのはとフェイトとアリシアは手を繋いで円陣を組んでスキップしながら踊りだし、「あたしは、強くなるっ！」"フレイムアイズ"を起動したかと思えば空に掲げてアリサはそう宣誓し、「私もぉ、もっと学んでぇ、みんなのデバイスを看ま～す！」すずかも別の桜に向かって宣誓しだす始末。

「ひゃっほ～い！　見よ、空を華麗に舞う我が姿！」

シャルは枝から枝へと飛び移りながら笑い声を上げ続ける。射撃魔法とかで撃墜したらダメなのだろうか。シャルのはためくスカートから覗く白い下着に溜息を吐いていると、「ルシル君！　わたしを見て！」とうとうはやてが口調を荒げた。何度目かの溜息を吐いて、両腕を伸ばしているはやての体に俺の体を重ねて、横抱きにして抱え上げる。

「やった～♪」

俺の頬に頬ずりしてくるはやてに、「これで満足か、はやて？　もう降ろすぞ」と言うと、「い～や～や～！」ジタバタ暴れ出した。今の子供の俺にそれをされて支えきることなんてできるわけもなく、無様に転倒する羽目に。倒れる瞬間、はやての後頭部だけは守るために左手を差し込み、右手は俺自身を支えるために地面に手を着いた。はやてに覆い被さるような体勢の中・・・

「すまない、はやて！　どこか痛むところは――」

「ルシル君・・・」

はやてが両手で俺の顔をそっと挟み込んだ。まずい。そう思ったがすでに遅し。はやてが俺の頭を自分の胸に抱き込んだ。９歳の子供であるからこそ、子供特有の柔らかさと香りが俺を包み込む。そしてはやては俺の頭を愛おしそうに撫で始めた。これは非常にまずい。

「はや――」

「ルシル君、ひとりでなんでも抱え込み過ぎや。もうちょいわたしを頼ってほしい。騎士としてはまだ半人前やし、頼りないかもしれへんけど・・・、それでも家族やんか、わたしらは。もっと弱いところも見せて」

撫でるのを止めたはやては再び俺の頭を抱きしめた。

「いつかきっと、わたしはルシル君を支えられるほどにまで成長するから。そやから今は引き下がるわ。そやけど必ず・・・絶対にルシル君の隣で、ルシル君と一緒に生きるから・・・。ちょう早いけど、ルシル君。わたしは・・・ルシル君のことが・・・」

それ以上はダメだ。はやてに想いを伝えさせてはいけない。すでに態度からして伝わってはいるが、言葉で直接聞くことだけは未だに無いし、あってはならないと思っている。俺には決めていることが1つあるんだ。はやてから告白をされた時、俺は・・・

「はやて！　ストップだ、それ以上はダメ・・・だ？」

「すぅすぅ・・・Ｚｚｚ」

寝息を立て始めたはやて。ホッと安堵した俺は、はやてを起こさないようにそっと彼女の腕を退かしつつ顔を上げた。と、「ドキドキ」いつの間にか動物形態へと変身していたセレネとエオスが、俺とはやてをジッと見詰めていた。

「チューするの？」

「ギュってしないの？」

外見はリスとハムスターであるため、小首を傾げるその姿はとても可愛らしいんだが・・・「しない！」中身がマセている少女だから遠慮なく声を荒げた。するとセレネとエオスは「それでも男の子か～」とか「意気地なし～」とか、好き勝手なことを言って、アリサとすずかの元へダッシュ。そして、「きゃっ！？」アリサと、「ひゃん！？」すずかの足を伝って服の中に侵入した。

「ちょっ、やんっ、だ、ダメだってば！」

「くすぐったい！　んぁ、そこ、ダメ・・・！」

服の中を動き回られることでアリサとすずかが変な声を出しながらジタバタと暴れ、服の中からセレネとエオス（であることが判っているかどうかは不明だが）を出そうとする。そんな2人を見て・・・

「にゃはは、アリサちゃんの踊り、すっごい激しいね～♪　かっこいい～！」

「すずかー！　しおらしい踊り、可愛いーっ♪」

「わたし達も一緒に踊る～♪」

酔っぱらっている所為で上手く思考できていないなのはとフェイト

とアリシアが、酔いとは別に顔を真っ赤にして悶えているアリサとすずかの側に駆け寄り、「わぁ～い♪」踊り始めた。なんて・・・なんて酷い状況だろう。

「「おらー！　男の子だったら、これくらいやってみろーっ！」」

「出来るかぁぁーーーー！！」

そんな破廉恥な真似、相手が子供だからこそ不可能だ。もちろん大人の女性にもしたらアウトだ。そう、俺が男である以上は絶対に出来ない事だ。というか、「いつまでやっているんだ！？」ツッコみを入れる。アリサとすずかもとうとう座り込んではまだ悶えた後、「ひゃぁぁぁぁ！？」悲鳴を上げて、コテンと倒れ込んだ。うわぁ、アリサに記憶が残っていたら確実に殺されるぞ、セレネとエオス。

「そして、とうとうなのは達も・・・」

座り込んだかと思えばゴロンと寝転がり、なのはとフェイトとアリシアは川の字になってそのまま寝息を立て始めた。あとは、「この程度で眠るなど笑止千万！　もっと騒ぐがよい！」シャルだけだ。しかしこのテンション。やはり既視感は間違いじゃなかった。

「世界を、時代を、魂を越えて現れたな、酔いの鬼神！！」

前世のシャルの悪酔い状態に与えられた称号・酔いの鬼神。今のイリスは正しくその状態だ。いや、イリスなのかも怪しい。ひょっとすると、シャルロッテの人格が表層に出て来ているんじゃないのか？

そんな嫌な予感は・・・

「我が言の葉は幻想紡ぐ鍵～～　」

その呪文を聞いたことで当たっているんだと確信した。シャルロッテが複製術式を発動させる際の呪文だ。"闇の書"事件の決戦の後、俺はシャルロッテに創世結界・"剣神の星天城ヘルシャー・シュロス"を返還した。

シャルロッテがイリスの体の支配権を得た状態――剣戟の極致の至りし者モード時、彼女は魔術を扱えるようになっている。そんな彼女に創世結界を丸ごと返還した。ゆえに、剣戟モードになると、それまでは扱えなかった結界内に残っていた複製術式も当然扱えるようになるわけだ。

「ちくしょう・・・！」

本来は俺とのキス（神秘のある魔力を流し込むための儀式）することで剣戟モードになれるはずなんだが、どうやら酔ったことでイリスが裏に引っ込んでシャルロッテが表に出、さらに"キルシュブリューテ"が暴走気味に目醒めてしまったことによるイレギュラーらしい。ダッシュでその場から逃げる。後の事？　はやて達の事？　同性のユーノの事？　ごめん、見捨てる。だって変な術式を掛けられて恥を晒すなんて真っ平ごめんだ。

「はぁはぁはぁ・・・」

「どうかしたんか、ルシル」

息を切らして来た俺に声を掛けてくれたのはヴィータで、「水でも飲め。落ち着くぞ」シグナムからは天然水のペットボトルを貰った。封が切れているが、誰の飲み止しなのだろうか。まぁ、それほど気にすることじゃないが。

「あら？　はやてちゃん達はどうしたの？」

「何か食べ物を貰いに来たのか？」

シャマルとアインスからの問いに、「えっと、まぁ、その、なんだ・・・」俺は答えを言い淀んでしまう。

「どうしたのだ、ルシリオン。何か起きたのか？」

ザフィーラにすら問われる始末。ヴィータが「んだよ。あたしが見てくるから良いよ」そう言って特等席へ向かおうとするヴィータ。俺は「ちょっと待ってくれ」ヴィータの腕を取って制止を掛ける。

「なんで止めんだよ。何か見られちゃいけねぇもんでもあんのかよ」

不審がるヴィータに、シグナム達も不審の目を向けてきた。はやてやリイン、なのは達が酔っぱらって痴態を晒しているかもしれない、なんて言っても良いんだろうか。そんな迷いも一瞬の後、「レッツ・ファイアーっ！」特等席の方からはやて達みんなの声がした。俺たちがそっちに目を向けた直後、服装が変わったはやて達が姿を現した。

（危なかった。やはり対象を強制着替えさせるディゾルディネ・カンビャメントを使ったか）

先の次元世界や他の契約先世界でもシャルロッテはよくその術式を使っていた。俺は、この術式を使われると予想して逃げたわけだ。予想は見事的中。はやて達みんな、古代ギリシアの女性が身に纏っていた衣服――キトン（ドリス式ってやつだな）を着ていて、背中から一対の白翼を展開。まるで絵画に描かれる天使像。しかも魔法を使って空を飛んでいるから余計にそう見える。しかしその実は、ただの酔っ払い集団。

（ユーノ？　ユーノはどこだ？）

ユーノの姿を捜し、そして見つけた。フェレットモードに変身しているユーノはまた気を失っているようで、セレネに胴体を鷲掴みされてブンブン振り回されていた。ダメだ、その姿に涙が出そうになる。思うのはただ1つ。ごめんなさい、だ。

「なんだなんだ！？」

「まあ♪　はやてちゃんもリインちゃんも可愛い♪」

「写真、写真！」

ヴィータは驚き、シャマルははやてとリインの天使（仮）姿にうっとりし、アインスはデジタルカメラで写真を撮りまくる。そしては

やて達はそれぞれデバイスを起動し、空に向かって砲撃を発射。唖然とする俺たち。放たれた砲撃は花火のように炸裂し、空に色々な魔力光の花を咲かせた。

至るところから拍手喝采が起こる中、フェイトとアリシアだけが両手に骨付き肉を手にしたアルフの側に降り立ち、そして彼女を引っ張ってカラオケ機器の元へ行き、マイクを手に取った。

「「アルフ～～～！」」

「リンディ提督～～～！」

「ク～ロノ～～～！」

「「エイミィ～～～！」」

2人がアルフ達の名前を呼んだ。

「この場をお借りして、お伝えしたい事があります～す！」

「リンディ提督からお話ししてもらった事への返事をしたいです～～～！」

最悪だ。これ、きっとアレだぞ、フェイトの一大決心の思いを伝えるあの場面。それなのに、フェイトは酔っ払っている状態で、しかもカラオケで大々的に伝えるなんてあまりに酷過ぎる。花火が上がり続ける中、「私とアイリシアは、ハラオウン家の子供になりたいですーーー！」フェイトが告げた。

「大好きだよー！　リンディ提督ー！　クロノー！　エイミィー！」

「大好きー！　リンディ提督・・じゃなくて、母さーん！」

「大好きー！　クロノお兄ちゃーん！」

「「大好きー！　エイミィ・・・お姉ちゃーん！？」」

エイミィのところで疑問符が入ったところで僅かな笑い声が起きる。リンディ提督とクロノとエイミィが、フェイトとアリシアとアルフの側に駆け寄り、リンディ提督はフェイト達を抱きしめた。それは紛れもなく母親の姿だった。拍手や「おめでとうー！」が起こり、俺たち八神家も拍手をする。

「「アインス～～っ！」」

「主はやて！　リイン！」

そんな中ではやてとリインが、アインスへと突っ込んで来てそのまま抱きついた。アインスはしっかりと2人を抱き止め、勢いを殺すためにその場でくるくる回った。翻るアインスとリインの銀髪、はやてとリインの背中から生える白い魔力の羽根。俺はアインスから受け取っていた（というか放り投げられた）デジカメの動画撮影機能で、彼女たちの姿を撮る。

「アインス、大好きやよ～　」

「リインも大、大、大好きですよ～　」

「はいっ。私も大好きですよ、愛しています！」

こちらは聖母と赤子の聖画と言った感じだな。はやてとリインを愛おしそうに抱きしめるアインス。俺はその光景をしっかりとデジカメと脳裏に焼き付ける。その３人の姿にシグナム達は涙ぐみ、俺も泣きそうになる。それほどまでに綺麗な光景だった。だというのに・・・

「わぁーっはっはっは！　宴はまだまだ終わらんぞ、皆の衆！　我を楽しませるために、もぉーっと騒げぇ～～い！」

――ディゾルディネ・カンビャメント――

空気を読まない、というよりは読めるほどの思考能力を失ったシャルロッテは、あろうことか花見イベント参加者全員を強制変身させた。そこからはもう大混乱。テンションが上がる者・下がる者、撮影会を始める者などが続出。それは日が暮れ始め、シャルロッテの魔力が尽きるまで行われた。

「――ま、こんな馬鹿騒ぎも悪くは無い、よな・・・」

"異界英雄エインヘリヤル"が一、レイチェル・アルカードのドレスに変身させられた俺はひとり騒ぎの中から離れ、騒ぎを見学しながらアリサの父――デビット氏が持って来たという年代物ワインに

舌鼓を打った。

Ｅｐｉｃｏｌ０－Ａシュテルンベルクの騎士～Ｐｅｒｃｅｖａｌ
＆　Ｔｒｉｓｔａｎ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

５月の上旬。わたしら八神家とシャルちゃんは、ミッドチルダはベルカ自治領ザンクト・オルフェンへと赴いた。その目的は、シュテルンベルク家に招かれたため。そやから今、シャルちゃんの案内で、シュテルンベルク邸のある自治領西区カールレオンへ向かってる最中や。

「ごめんなぁ、シャルちゃん。せっかくの休みやのにわたしらに付き合ってもろて」

「ううん、気にしないで。わたしも実家に用事があったしね～」

シャルちゃんの実家――フライハイト家のお城が在るんは中央区アヴァロンと南区ウィンザインの境目。シャルちゃんの用事があるフライハイト邸とは違う方角や。つまり完全な遠回り。それやのに、シャルちゃんは笑顔で案内してくれてる。

「それにしても、まさかはやて達がすでにパーシヴァル君たちと会ってたなんてね～」

「つい先日、事件現場で偶然会ってな～」

その時の事を思い返す。

・―・―・回想です～・―・―・

「――チーム八神各員、包囲陣形は大丈夫やな！」

『『『はいっ！』』』『うんっ！』

空間モニター４枚にシグナム達が映って、みんなが力強く頷き応えてくれた。そんで「マイスターはやて。被疑者グループは、１０余人の人質を取って立て篭もっていますです！」リインがわたしの側で現状報告してくれてる。

そんなリインの今の格好は、リイン用に拵えた騎士服や。色はアインスとは逆に全体的に白色で、わたしやシグナムのようなオーバースカートを追加したもので、リインはすっごく気に入ってくれてる。

（人質の方たちを無傷で助け出して、なおかつ被疑者グループを１人も逃がさんようにせなアカン。さて、どうしようか・・・）

内務調査部ってゆう部署の研修を行ってるルシル君を除くわたしら八神家は今、ミッドチルダに降りて、特別技能捜査課・チーム八神に協力要請をくれた陸上警備隊１０１部隊の方たちと一緒にとある被疑者グループの逮捕に赴いてる。

そやけど、あともうちょいってゆうところで被疑者グループにわたしら管理局員の存在がバレてしもうて、一時的な逃亡を許して、３階建てのオフィスビルに立て篭もられた。そのうえ人質を取られてしもうた。痛恨の極みや。

「申し訳ない、八神特別捜査官。我々のミスで、気付かれてしまった」

「あ、いいえ。わたし達の方こそフォロー出来ずに申し訳なかったです・・・！」

１０１部隊捜査主任のジェイド・ホンダ一尉が申し訳なさそうに頭を下げた。被疑者グループに見つかったんはホンダ一尉の部下さん達やから、すごく責任を感じてる。そやけど今はごめんなさい合戦をしてる場合やないのはお互いに心得てる。

（どうする。下手に突入したら人質の方たちの身に何か起こるかもしれへん・・・！）

シャマルの旅の鏡で転送救出・・・アカン。こちらに引っ張り込む時に気付かれる。どうすればええんや。ルシル君やったらもっと上手く作戦を立てられるんやろうか。でも今、ルシル君は居らへん、頼ることは出来ひん。それにこれからの事を考えれば、ルシル君に頼りっぱなしってゆうのもアカン。

「マイスターはやて・・・？」

「大丈夫やよ、リイン」

それからわたしら八神家とホンダ一尉や部隊員の人たちと救出作戦を話し合う。そう時間は使えへん。他の建物に狙撃ポイントを置い

て、被疑者を狙撃する射撃魔導師とか、拘束魔法の練度の高い魔導師とか、万が一の突入に備えて話し合ってたところで、ガシャァァン、ってガラスが割れる音が轟いた。それと一緒に男性ひとりが飛び出してきた。

「あの人は・・・！」

わたしらが追ってた被疑者グループの1人やった。さらに同じ窓から「うわぁぁ！」数人の男性が吹っ飛ばされてきた。慌てて１０１部隊の隊員さん達が手錠を嵌めて拘束してく。わたしはシグナム達に合流するように思念通話で伝えて、オフィスビルの出入り口の奥に姿を現した人影に警戒。

「マイスターはやて・・・！」

「リイン、ユニゾンや！」

「はいですっ！」

リイン――リインフォース・ツヴァイは、ストレージデバイス・"夜天の書"の機能の1つとしての管制人格リインフォース・アインスとは違くて、人格型のユニゾンデバイスってゆう括りや。わたしとユニゾンすることでお互いの真価を発揮することが出来る。もちろん、アインスみたく単独戦闘も行える。とは言うても今はまだわたしの支援で精いっぱいやから、今のところは予定、やな。

「「ユニゾン・イン！」」

ユニゾンを終えて、わたしの内にリインの存在を感じながら"シュベルトクロイツ"を構えて、"夜天の書"を開く。ホンダ一尉や隊員さん達も身構えて、「――他人様が大事な話をしているのに騒ぐなんて礼儀がなってないぞ。初等部からもう1度通い直すのをお勧めする」そう気だるそうに独り言を呟いてる男の人を警戒。

「あ・・・！」

男の人がオフィスの出入口から堂々と出て来た。ワイシャツにジャボ（貴族が付けてるスカーフみたいなやつ）、スラックス、革靴ってゆう格好。わたしはその人の顔を見てビックリ。リインからも驚きの感情を感じる。

（ルシル君の大人バージョン、それにオーディンさんにそっくりや！
とゆうことは、この人が・・・！）

その人の髪型はルシル君とおんなじ。顔立ちは、オーディンさんに比べて確実に男の人って感じやけど。髪色は茶色。瞳は青色や。数ヵ月前、シャルちゃん家で見せてもろた写真に写ってた。そう、名前は・・・

「これは管理局・陸士隊のみなさん、お勤めごくろうさまです！
誠に勝手ながら、聖王教会騎士団・銀薔薇騎士隊所属、パーシヴァル・フォン・シュテルンベルクが片付けさせてもらいました」

ルシル君のご先祖様、オーディン・セインテスト・フォン・シュテ

ルヴァロードさんの子孫、聖王教会騎士団の最強の槍騎士、パーシヴァル・フォン・シュテルンベルクさん。そんなパーシヴァルさんはニコッて笑顔を浮かべて、わたしらに敬礼した。

「銀薔薇騎士隊・・・・！」

「あの有名な・・・！」

「ご協力感謝いたします、騎士パーシヴァル。・・・1、2班は被疑者を連行、3、4班はオフィス内の人質の救出。・・・騎士パーシヴァル。申し訳ありませんが、職務ですので事情聴取を行いたいのですが・・・」

隊員さん達に指示を飛ばし終えたホンダ一尉がパーシヴァルさんにそう伝えると、「あー、ああ、判った」渋々と言った風に応じた。とそこに「兄様・・・」か細い女の子の声が聞こえて来た。そっちに振り向くと、出入り口の陰から顔だけを覗かせた、パーシヴァルさん以上にルシル君のそっくりさんが居った。ゴシックロリータとかゆうドレスを着た、デフォルメされたライオンみたいなぬいぐるみを抱えたわたしと同い年くらいの女の子。

「ごめんな、トリシュ。ちょっと管理局の人たちと話して来るから・・・、あ、そこのお嬢さん。そう、君」

パーシヴァルさんがわたしを呼んだから「はい、なんでしょうか？」って応じる。パーシヴァルさんは、トリシュちゃんって女の子に近寄ると片膝立ちして、「君も局員なんだよね。歳も近そうだし、良

かったら一緒にいてあげてくれないか？」肩を抱いてそうお願いしてきた。

「えっと・・・」

「構いませんよ、八神特別捜査官。被疑者グループの事情聴取の際にまたお呼びしますので」

「「ヤガミ・・・？」」

ホンダ一尉からの許可も下りたことで「了解です、ホンダ一尉。騎士パーシヴァル。お引き受けします」って、パーシヴァルさんのお願いに応えることにした。そやからそう言うたんやけど、「え、あ、ああ、ありがとう」パーシヴァルさんはなんでか呆けてて、わたしへの返事がちょう遅れた。

「それじゃあヤガミ特別捜査官。しばらく妹をよろしくお願いするよ。トリシュ、大人しく待っていてくれな」

「はい、兄様。いってらっしゃいませ」

手を振り合うパーシヴァルさんとトリシュちゃん。そんでホンダ一尉はパーシヴァルさんを連れて捜査車へ向かった。そんな2人を見送ってると、「あの、ヤガミ特別捜査官」名前を呼ばれたから、「はい、なんでしょうか、トリシュ・・・さん」ってトリシュちゃんに振り返ったとき、「はやて！」ヴィータ達が合流した。

「みんな、お疲れ様。被疑者グループ全員逮捕や」

「っ！！　ヴィータ様、シグナム様、シャマル様、ザフィーラ様・・・！」

「うお！？　ルシルがドレス着てる！？　つうか、なんでここに居んだ！？」

ヴィータの第一声はそれやった。それほどまでに似てる。でも目つきはルシル君とは違くて柔和で、髪も瞳も色違いや。そんなヴィータに「よく見て、ヴィータちゃん。人違いよ」シャマルが苦笑。トリシュちゃんは「やっぱり本物です・・・！」目を爛々と輝かせたと思えば、「あの！」大きな声を挙げて佇まいを直した。

「わたくし、シュテルンベルク家長女、トリシュタン・フォン・シュテルンベルクと申します。お会いできて光栄です。シグナム様、ヴィータ様、シャマル様、ザフィーラ様」

トリシュちゃんの自己紹介を聞いたみんなが、やっぱり、って風に納得した。トリシュちゃんは「あの、シュリエルリート様はご一緒ではないのですか？」ってキョロキョロ辺りを見回し始める。わたしは「今は居ないんです」って答える。

『マイスターはやて。ユニゾンアウトして、わたしも自己紹介したいです・・・』

「『おっと、そうやったな。それじゃあ』ユニゾンアウト」

リインとのユニゾンを解除すると、「小さいシュリエルリート様ですか！？」トリシュちゃんはまたビックリして、３０ｃｍほどのリインを覗き込んだ。するとリインは「ひゃい、違いますでしゅー！」ササッとわたしの後ろに回って隠れてしもた。

「ご、ごめんなさい！　驚かせちゃいました！」

トリシュちゃんがものすごい勢いで頭を下げた。それを見たリインも慌てて「こちらもごめんなさいです！」トリシュちゃんの前に戻って頭を下げた。

「あの、シュリエルリート様、ではないのですよね・・・？」

「はいです。マイスターはやてのユニゾンデバイス、祝福の風リインフォース・ツヴァイです」

「リインフォース・ツヴァイ、様・・・？」

「はいです、トリシュタンさん」

「トリシュで良いですよ、リインフォース・ツヴァイ様。ヤガミ特別捜査官とシグナム様たちも、どうぞそうお呼びください」

「そ、それじゃあわたしも、リイン、で良いですよ、トリシュ♪」

「はい、リイン♪」

リインとトリシュちゃんが微笑み合って、それから「八神はやてです。時空管理局本局・特別技能捜査課の捜査官なんやけど、まだまだひよっ子。はやて、って気軽に呼んでな。そんで、オーディンさんに代わってシグナム達と一緒に過ごさせてもらってます」わたしらも自己紹介をする。

「はい。それについてはイリスから伺っています。よろしくお願いします、ハヤテ様」

「様付けとか敬語はええよ、トリシュちゃん」

「はい、判りました、ハヤテ。あの、敬語については習慣づいてしまっていて。ですからお気になさらず」

目つきは違うけど、それでも顔立ちはルシル君にそっくりやから、笑顔を浮かべられるとホンマにドキッとする。

「では、次は私が。シグナムだ。シュテルンベルク家の者とこうして再会できたこと、嬉しく思う」

「シグナム様・・・！　私も嬉しいです！」

「じゃあ次、あたしな。ヴィータだ。よろしくな、トリシュ」

「よ、よろしくお願いします、ヴィータ様！」

「次は私ね。はじめまして、トリシュちゃん。シャマルです♪　それにしても・・・オーディンさんとエリーゼちゃん、２人にそっくり♪　会えて嬉しいわ」

「そう言って頂けると嬉しいです！　ありがとうございます、シャマル様！」

「最後だな。ザフィーラだ。・・・ふむ。確かに、主オーディンだけでなくエリーゼ卿の面影もある。エリーゼ卿に負けぬほどに素敵な淑女になるだろう」

「っ！　て、照れてしまいますぅ！　ありがとうございます、ザフィーラ様！」

顔を真っ赤にして照れるトリシュちゃん。ヴィータが『ザフィーラ。らしくねぇじゃん。どうしたよ』思念通話でそう言いながら狼形態のザフィーラに近寄って、肘で小突いた。確かに寡黙なザフィーラにしてはなかなかの褒め言葉を送ったなぁ。みんなでニヤニヤしてザフィーラを見る。

『・・・どうやら思いの他興奮しているようだ』

ザフィーラがちょう照れてることにまた微笑ましくなる。自己紹介を終えて、話は元の「シュリエルリート様、それと・・・セインテスト家直系の御方は・・・？」アインスと、そんでルシル君の話に戻った。

「シュリエルリートのことやけど、今はリインフォース・アインスって名前なんよ」

「リインフォース・アインス、様・・・？」

アインス達が"夜天の書"の守護騎士ヴォルケンリッターやってことは、トリシュちゃんやパーシヴァルさんは知ってるんやろか。とにかく、「名前を変える必要性があってな。それでわたしが新たに名付けたんよ」って伝える。

「はあ。・・・その辺りはシュリエ――いえ、リインフォース・アインス様にお伺いしたいと思います。あの、ですから一度シュテルンベルク邸にお越しいただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

トリシュちゃんからのお誘いに、「よろこんで！」わたしらみんなで応じる。そんで「主はやて、車椅子をお持ちしました」車椅子を預けてた1台の捜査車にまでシグナムに取りに行ってもろて、「おおきにな、シグナム」車椅子に座ってから騎士服を解除。続けてリイン達も騎士服を解除した。

それからわたしらはパーシヴァルさんが戻るまでトリシュちゃんとお話して時間を潰す。そんなところに『八神特別捜査官。第2捜査車へ来て下さい』別の捜査官に呼ばれた。

「了解です、すぐに行きます。・・・リイン、シグナム、ヴィータ」

「はいです」「はい」「うん」

お供はリインとシグナムとヴィータに任せる。そんで、「シャマル、ザフィーラはトリシュちゃんの側で待機な」2人にはトリシュちゃんの話し相手として留守番をお願いすると、「了解です♪」シャマルは敬礼返ししてくれて、「畏まりました」ザフィーラも受けてくれた。

「お気遣いありがとうございます、ハヤテ」

「いってらっしゃ～い♪」

シャマルとザフィーラとトリシュちゃんに見送られながら指定の捜査車に向かい始めたその時、「きゃあ！？」後ろから悲鳴が聞こえた。その声は「トリシュちゃん！？」のものや。シグナムに車椅子を反転してもろて、トリシュちゃんの悲鳴の原因を見た。

「トリシュちゃん！」

「ぅ・・く・・・・」

「このガキの頭をブチ貫かれたくなかったら、いま捕まえた仲間たちを解放し、逃亡をほう助しろ！」

ザフィーラみたいに筋骨隆々って感じの男の人が、トリシュちゃんの首に太い腕を回して締め付けてて、空いてる左手に持ってる拳銃の銃口を側頭部に突きつけてた。今にも飛びかかりそうなシャマルやザフィーラ、シグナム達を「動いたらアカンよ、みんな！」制する。

「八神特別捜査官！　これは・・・！」

「見ての通りです！　どうやらまだ仲間が居たようで・・・！」

「局のデータベースに問い合わせたところ、あと2人ほど居るそうなんです！」

「2人・・・！　とゆうことは・・・」

もう1人どこかに隠れてるか、すでに逃亡してるか。とにかく『みんな、それらしい気配はあるか？』歴戦の騎士としての勘を頼るためにシグナム達に思念通話を繋げる。

『ダメですね、よほどの腕なのか気配が感じ取れません』

『もしくは、この近くに居ないかだな』

『両方とも考えられるな』

『うむ。しかし、もう1人を捜索しようと動こうとしても・・・』

「下手なマネをするんじゃねぇぞ、お前ら！　このガキの頭をブチ貫くからな！　脅しじゃねぇぞ！」

被疑者の男の人が大きな声を出して、「ぅく・・・」トリシュちゃんの首に回してる腕の力を強めた。どうすることも出来ずに被疑者

とトリシュちゃんを包囲するような陣形で待機。そんな時、『問題ありませんよ、みなさん。この程度の危機を乗り越えられず何がシュテルンベルクの騎士でしょうか』トリシュちゃんから思念通話。

『トリシュちゃん？　一体何を・・・？』

首を絞められて苦しいはずやのにトリシュちゃんは強きに微笑みを浮かべた。何をするんかと思うてたら、被疑者の目にたぶん意図的な陽の光が当てられた。目を見張ってた所為もあって「ぐわっ、目が・・・！」被疑者が怯んだ。

その瞬間、トリシュちゃんは踵を振り上げて被疑者の大事なところを蹴った。トリシュちゃんを解放して目と大事なところを押さえる被疑者。あと、わたしの側に居った男性捜査官の人たちが前屈みになった。

――コード・パシエル――

その直後、轟音と一緒にわたしらの間を一筋の銀色の光が高速で駆け抜けて、「うごぉっ！？」被疑者を貫いた。そんでそのまま十数mと弾き飛ばしたかと思うと、さっきまで立て篭もってたオフィスビルの外壁に被疑者を磔にしてようやく止まった。よう見ればそれは「雷撃の槍・・・！？」やった。

「イゾルデ起動」

トリシュちゃんが、抱えたままやったライオン似のぬいぐるみの額にキスした。するとぬいぐるみの首に提げられてた金色の懐中時計

が発光。光が治まると、反りの有る西洋剣２本の柄頭を連結したかのような長い弓がトリシュちゃんの手に握られてた。

「見えていますよ。弓騎士を甘く見ないでください・・・！」

――迅るは怠惰なる眠り姫――

ルシル君と同じサファイアブルーの魔力で形作られた１本の矢を、同じ魔力の弦に番えたトリシュちゃんが「もう遅いです」ポツリとそう漏らして、矢羽根を離した。そんで目にも留まらへん速度で飛んでった魔力矢。その軌跡を追うと、ここから数百ｍと離れたビルの屋上に消えた。

「・・・命中です。ハヤテ、あのビルの屋上に、ライフル型デバイスをこちらに向けて構えていた女性が居ました。私の魔法で今は眠っていますからしばらくは起きません」

「ホンダ一尉！」

「あ、ああ！　第１、第２班はスナイパーの確保！」

ホンダ一尉に指示された８人の捜査官が「了解！」敬礼して、トリシュちゃんの言うたビルに向かわせた。とそこに「トリシュ～～～！」パーシヴァルさんがトリシュちゃんに駆け寄って抱き上げた。

「兄様。ロンゴミアントの表面を使い太陽の光を反射させることで犯人の目を潰す、素晴らしいサポートでした。が、降ろしてくださ

い。みんなが見てます、恥ずかしいです」

「兄妹なんだから良いじゃないか～！　心配したんだぞ～！」

トリシュちゃんを抱え上げてくるくる回るパーシヴァルさんを見て、

「シスコン？」ヴィータが呟いた。すぐに「ヴィータちゃん、しっ。ダメよ、本当の事でも口にしちゃ」シャマルが注意した。シスコンってゆうのはシャマルも思ったらしい。

「あぅ～・・・。あっ！　に、兄様！　そんなことより、シグナム様たちです！」

「シグナム様～？・・・シグナム様？・・・シグナム様だと！？」

ようやくわたしの側に控えてくれてるシグナム達に気が付いたパーシヴァルさん。トリシュちゃんを降ろして、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラの順で見た後、「ふぉぉぉぉぉーーーーっっ！！」叫んだ。わたしら揃ってビクってなる。

「ほ、ほ、ほほほ、ほほ、本物だぁぁぁぁーーーーー！」

そんでパーシヴァルさんは「感激です！」ってシグナム、シャマル、ヴィータの手を握って、ザフィーラだけには首に抱きついた。

「うわぁ、すごい嬉しいです！　本当に絵に描かれたとおりのお姿だ！　シグナム様は凛々しいです！　シャマル様は可愛いです！　ヴィータ様は愛らしいです！　ザフィーラ様はエリーゼ卿の日記に

記されていた通りの狼姿、実に格好いいです！　それで！？　シュリエルリート様はいずこでしょう！？」

パーシヴァルさんが子供のような笑顔を浮かべてはしゃぐ。シグナム達が思い思いに「ありがとう」ってお礼を言ってる中、トリシュちゃんがそんなお兄さんの様子に「気持ちは解りますけど、もう少し落ち着いてはいかがですか？」そう言う。

そやけど、トリシャちゃんもまた興奮冷め止まずってゆう風や。そわそわしながらザフィーラに寄って行って、触れようとしてるんか手を出そうとしては引っ込めるを繰り返してる。

「トリシュタン。触れても構わぬ」

「あ、ありがとうございます、ザフィーラ様。・・・わっ、思ったよりふかふかです　」

トリシュちゃんに撫でられて気持ち良さそうに目を細めるザフィーラ。そんな2人の様子を見て少し落ち着きを取り戻したパーシヴァルさんやったけど、「も、もしかして、この小さな子がシュリエルリート様なのか！？」リインを見て、さっきのトリシュちゃんと同じ反応をした。

「い、いえ、違いますです！」

「兄様！　彼女は、リインフォース・ツヴァイ、という方です。シュリエルリート様とは別人なんですよ。驚かせてごめんなさい、リイン」

「あ、はいです。こちらこそ驚き過ぎてごめんなさいです」

「いやいや、こちらこそ大声を出してごめんな」

リインとトリシュちゃんとパーシヴァルさんが頭の下げ合い終えた時、「八神特別捜査官。そろそろ捜査本部へ戻りましょうか。事情聴取はうちの隊舎で行います」ホンダ一尉からお呼びが掛かった。

「あ、はいっ！　すぐ行きます！　えっとですね、パーシヴァルさん。シュリエルリートの事や、ルシル君――セインテスト家の直系？でしたっけ・・の事は、また後日お話ししたいと思います」

「兄様。ハヤテとシグナム様たちを我が屋にご招待したのですが・・・よろしかったですか？」

「もちろん！　ヤガミ特別捜査官。ご予定が整ったら、この連絡先にメールを送ってくれ。その予定に合わすから」

メールアドレスをパーシヴァルさんから受け取って、今日は解散ってことになった。パーシヴァルさんとトリシュちゃんに見送られながら捜査車に乗りこんで、わたしらチーム八神は陸士１０１部隊の隊舎へと向かった。

・――・終わりや～・――・――・

「――ってことがあってなぁ～」

「あはは。目に浮かぶよ、パーシヴァル君のリアクション！　シュテルンベルク家って、聖王家の事も大事に思ってくれているけど、それ以上にオーディンとグラオベン・オルデンを敬い奉ってるって感じだから。生ける伝説となれば、誰だってテンション上がると思うもん」

シャルちゃんがそう言うと、「なんか照れるぜ」ヴィータは恥ずかしそうに頬を緩めて、「奉られるって、なんか不思議」シャマルはちょう困惑。そんでアインスは「しかし嬉しくもある」って微笑んで、「疎まれるよりかはマシだな」シグナムは唸った。

「ルシルはどういう気持ち？　直系の先祖が信奉されてるのって」

「いや、別に特別な思いは無い、かな」

「なーんだ、つまんないの～」

とまぁ、そんなこんなで到着するシュテルンベルク邸。シャルちゃん家のようなお城やなくて、洋館って感じや。大きな庭を囲う堀をぐるっと回って、庭に入るための門の正面へ。そんでシャルちゃんが門柱に備え付けられてるタッチパネルに触れた。

「こんにちはー！　フライハイト家のイリスで～す。八神家を連れて来たよ～」

親しき仲にも礼儀ありって言葉を真っ向から壊すシャルちゃん。そ

んなシャルちゃんの挨拶に、『久しぶりだな、イリス。ありがとうな、八神家の皆様を連れて来てくれて』そう応じたのは、門扉の前に展開されたモニターに映し出されたパーシヴァルさん。

「親友だもん♪　それに、実家に用があってね～。そのついでだよ」

『そうなのか。・・・急ぎじゃなかったらイリスも一緒にどうだ？　トリシュが会いたがっているぞ』

『兄様？　私の名前が聞こえたのですが、何かご用でも・・・あ、イリス！　こんにちは！』

パーシヴァルさんの顔下から頭を覗かせるようにして姿を見せてくれたトリシュちゃん。表情を輝かせるトリシュちゃんにシャルちゃんも「じゃあ、ちょっとだけ」わたしらと一緒してくれることになった。

『決まりだな。いま門を開けるから、そのまま屋敷の玄関にまで来てくれ』

『お待ちしています！』

モニターが閉じると同時に門扉が左右に分かれて開いた。そんでシャルちゃんが「じゃ、行こうか」そう言うて歩きだしたから、わたしらも庭へと進んだ。

Ｅｐｉｃｏｌｏ－Ｂシュテルンベルクの騎士～Ｐｅｒｃｅｖａｌ
＆　Ｔｒｉｓｔａｎ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

俺とエリーゼの間に生まれた子供――ルルとベディヴィアの子孫にあたる現シュテルンベルク家の人間が住まう屋敷へとついに訪れることになった。俺が内務調査部の研修で居ない間にはやて達はシュテルンベルク家の現当主のパーシヴァル、その妹のトリシュタンと出会ったのだそうだ。そしてお互いの都合があった今日、こうして招待されることとなった。

「なんつうか、シャルん家に比べりゃ質素つうか・・・。まぁ、十分デケェ屋敷だけどさ」

八神の家の４倍ほどの大きな洋館とそれ以上の庭の広さはあるが、外観での絢爛さで言えば確かにシャルの家――フライハイト城に劣ってはいるな。それを聞いたシャルが「まぁうちは特別だしね～」と苦笑した。

「そう言えば・・・なぁ、シャルちゃん。シュトゥラの王族って、現代ではどうなっとんの？」

門から正面玄関へと伸びる石畳の道を歩いている中、はやてがそんな事を急に訊ねたため、「どしたの突然」シャルも呆気にとられた。するとヴィータが「あっ、あたしも気になる！」ヴィータも話しに

乗ってきた。

「わたしも本格的に次元世界に関わるようになったからな。それなりに勉強してるんよ。特に古代ベルカ史をな。そんでグラオベン・オルデンやシュテルンベルク家、シュトゥラについても学んだんよ」

リインフォースⅡの製作を終えたはやては、仕事の空き時間などを利用して次元世界の歴史を勉強し始めた。お気に入りは古代ベルカ史で、ベルカ中期から末期（というか、資料はその年代のものしか残っていない）の歴史をアインスに教わりながら勉強している。

「聖王家の血筋はもう絶えているのよね・・・？」

「雷帝ダールグリュンはどうなったのだろうな」

シャマルやシグナムもまた、かつて関わった王家の現在について気になっているようだ。

「まずイングヴァルト王家ね。血筋は現代でも残ってるよ。しかも直系ね。とは言ってもほとんど没落って感じで、現代じゃイングヴァルトって名乗らずにストラトスを名乗ってるよ」

アインハルト・ストラトスの家族のことだな。あの娘の年齢を考えれば、この時代ではまだ生まれるちょっと前と言った感じだな。

「ダールグリュンの直系についてはもう存続してないって話なんだけど、遠縁にあたる一族が今も続いてるよ～」

この時代では3歳くらいになるのか、ヴィクトーリア・ダールグリュンは。シャルは続けて聖王家の直系や遠縁の血筋全てが途絶えていると話した。それからイリュリア王家の直系が現代でも続いていることも教えてくれた。

「大丈夫なのだろうか。イリュリアには嫌な思い出しかないのだが・・・」

「アインス、大丈夫ですか？　顔色が悪いですよ」

車椅子に座るはやての膝に置かれているショルダーバック――通称お出かけバッグ（今もなお進化を続けるはやて＆アインス作）から顔を覗かせたリインが、イリュリア王家の直系の存在に不安がるアインスを心配した。

「ありがとう、リイン。大丈夫だよ」

「えへへ」

アインスに頭を撫でられ気持ち良さそうに目を細めるリイン。不安がっているのはアインスだけじゃない。シグナム達も表情に陰りがある。そんなみんなの様子に、「あはは、大丈夫だよ」シャルが笑う。

「イリュリア王家の直系って言っても今じゃほとんど権力も武力も無いし、危険視するほどのものじゃないよ」

とのことだ。今は紛争世界や貧困世界を救うための慈善事業の会社も経営しているそうだ。そんな話をしながら３０ｍほどの道を渡り、玄関へと辿り着く。すると自動ドアのように玄関の両開きのドアが外に向かって開いた。

「ようこそお越しくださいました、八神家の皆様方。改めて自己紹介を。シュテルンベルク家、当主のパーシヴァルです」

「トリシュタンです。・・・お会いできて光栄です、ルシリオン様、リインフォース・アインス様。それといらっしゃい、イリス。１年ぶりくらいです？」

「そだね。最近はちょっと忙しくて。久しぶり、トリシュ、パーシヴァル君」

エントランスホールで出迎えてくれたパーシヴァルとトリシュタン兄妹は、俺とエリーゼ２人の面影を持っている青年と少女だ。シャルの挨拶が終えたのを確認。

「八神家にてお世話になっている、ルシリオン・セインテストです。ルシルと気軽に呼んでくれると嬉しい」

「同じく、リインフォース・アインスです。アインスとお呼びください」

俺とアインスの自己紹介も終わり、俺たちは応接室へと通された。

レッドカーペットにアンティーク調の家具、シャンデリア、高そうな美術品と展示台。そして「この絵・・・！」アインス達が壁に掛けられた数枚の絵画の前で足を止めた。

「オーディンさん、アギトちゃん、アイリちゃん・・・。エリーゼちゃん」

「この人が、エリーゼ・フォン・シュテルンベルクさんなんやなぁ」

「アギトとアイリ・・・。わたしとアインスと同じ、融合騎・・・」

「生で見ると、結構大きい絵画だね～」

壁に掛けられていたその絵画は、シャルの家で見せてもらったグラオベン・オルデンの集合絵、俺とエリーゼのツーショット絵、守護騎士のみの集合絵、アギトとアイリのツーショット絵の計４枚だった。

シャマルは感慨深そうに描かれた俺たちの名を呼んだ。はやては、１つの椅子に俺と並んで座って幸せそうに微笑んでいるエリーゼの姿に見惚れている。そしてリインは、１つの椅子に寄り添って座って笑顔を浮かべるアギトとアイリをジッと眺めていた。シャルはその大きさに背伸び。

「懐かしいな。今でもハッキリと思いだせる」

「だな。オーディンとツーショットで描いてほしいって騒ぎになったりしてな」

「ヴィータもちゃっかりオーディンの背中に覆い被さるようなポーズで描いてもらっていたじゃないか」

「あ、あれは、その・・・悪ぃかよ。あたしだって、オーディンと2人だけで描いてほしかったんだよ」

脹れっ面になりながらも照れるヴィータに、「あはは、すまない、意地悪をしたな」アインスがそう謝りながらヴィータの頭を撫でた。

「シュテルンベルク家の家宝ですよ。しかし残念ながら現存しているのはそれらだけなんです。本当は皆さんそれぞれの絵画があったようなんですが、ベルカ崩壊時に喪失してしまって・・・」

コーヒーと何種類ものクッキーの準備をトリシュとしていたパーシヴァルが悔しそうに説明してくれた。確かに俺たち1人ずつの絵も描いてもらったよな。しかしそうか。失われたんだな。だが不幸中の幸いとも思う。残っているのが1人だけが描かれた絵ではなく、2人以上が描かれた集合絵であるというのが。

「――準備が出来ましたので、どうぞこちらへ」

それから少し絵を眺めて思い出に浸った後、応接室中央に設けられた楕円形の足の短いテーブルを囲うソファに座り、クッキーとコーヒーを頂く。はやてとリインはミルクと砂糖を入れたのちに口に含み、「美味しいです♪」と頬を緩ませた。シャルは「うん。相変わらず美味しい」と褒め、そしてシグナム達は「これは・・・！」口

に含んだコーヒーに目を見張った。

（このコーヒーの味は・・・！）

そういう俺も、その味わいに驚いた。今でもハッキリと思いだせる独特のうま味や風味。驚きを顔には出さないように努め、シグナム達の反応を先行させる。

「やはりお判りですか？　このコーヒー、シュテルンベルク家専属のメイドが淹れてくれたんですよ。・・・うん、今日も美味い」

「イリスのフライハイト家のように、シュテルンベルク家にも古くから連なってくれる方たちがいるんです」

パーシヴァルとトリシュもコーヒーに舌鼓を打つ。トリシュの話を聞いたヴィータが「おい、まさか・・・！」表情を輝かせながら反対側のソファに座るパーシヴァルとトリシュへと身を乗り出した。

「アンナ・ラインラント・ハーメルン。モニカ・クラジウス。ルファ・オートクレール。御存じですか？」

「ええ、もちろん♪」

「我々も大変世話になった少女たちだ」

「まさか現代でもアイツらの子孫が居んのか！？」

「今でも会えるのだろうか！？」

食い気味に反応するシグナム達に、当時を知らないはやてとリインとシャルは呆然として、俺は俺で溢れ出て来る懐かしさの感情を押さえ込むことに必死になっているため俯いたまま。

「はい、お三方の子孫も現代に居ます。そして、このコーヒーを淹れてくれたのが、当家自慢のメイドであるディナス・ラインラント・ハーメルンなのです。アンナ・ラインラント・ハーメルンの子孫です」

やはりか。このコーヒーの風味はアンナの出すものだ。そうか。彼女の子孫が居て、その味も受け継がれて来たんだな。ヴィータとシャマルとアインスは「おお！」と嬉しそうに表情を輝かせ、シグナムとザフィーラでさえも「そうか」と一言漏らして微笑んだ。

「お呼びしましょうか？　ディナスは今、キッチンで夕食の仕込みを行っているんですが・・・」

「お仕事中でしたら悪いんで・・・。みんなもそれでええな？」

はやてに訊かれたシグナム達は首肯した。

「あ、兄様。ハヤテ達を夕食にご招待しては？　その時にディナスを紹介しましょう」

「実に良い提案だ、トリシュ！　夕食だけでなく泊まっていっても

らおう！」

「素敵です、兄様！　そうしてもらいましょう！」

パーシヴァルとトリシュが手を取り合って俺たちの意見を聞かずにサクサク決めた。とりあえず「今日明日とお休みやから問題は無いですけど・・・」はやてが俺たちを見た。学校はちょうど土日で休校だし、局の仕事も八神家全員の休日が重なるように調整してある。俺たちははやての意思に任せるということを伝えるための首肯を1回。

「ん。それじゃあ、お言葉に甘えて1泊させてもらいます。お世話になります」

はやてがお辞儀するのに合わせて、「お世話になります」俺たちもお辞儀した。そんな中で「わたしは？　わたしも一緒でオーケー？」シャルがそわそわしながら確認した。パーシヴァルとトリシュの返答は「もちろんオーケー♪」だったため、「よしっ！　お風呂はみんなで一緒に入ろうね～♪」とシャルがはしゃぐ。

「俺も一緒に良いのか！？」

「パーシヴァル君は裏庭の池にでも浸かってれば～♪」

「兄様、冗談もほどほどにしてください。リインが困ってます」

男と一緒にお風呂に入るという話を聞いて「あぅあぅ」顔を赤くし

ているリイン。生まれたばかりと言えでも少女としての恥じらいは十分に持っているからな。そんなリインを見たパーシヴァルが「あはは、ごめん、ごめん。冗談だからな」頭を下げて謝る。すると目に見えてホッとするリインにみんな微笑ましくなる。

「なあなあ。モニカとルファの子孫って何してんだ？　そのディナスって奴と一緒でこの家のメイドなんか？」

「はい。でも今はもう1つの職業の方へ行っています」

「もしかして、お医者様だったりする？」

「シャマル様、正解です♪　モニカ様の子孫ニミュエと、ルファ様の子孫ヴィヴィアンは医者として、聖王医療院でお仕事しています。ちなみに聖王医療院を開院したのは、2人のご先祖なんですよ」

自慢げに教えてくれたトリシュ。それを聞いたシャマルは「嬉しいわ、ホント。モニカちゃんとルファちゃんの意志が現代にまで続いていてくれて」本当に嬉しそうだった。

「さて。そろそろ本題へ入りましょうか」

パーシヴァルが真剣な顔となった。それで俺たちも居住まいを直して話をする姿勢を取る。そんな中でトリシュがソファからひとり離れ、近くにあった美術品のようなナイトテーブルへと向かった。

「アインス様、シグナム様、シャマル様、ヴィータ様、ザフィーラ

様。皆さんの真実について、なんですが・・・」

「それについては・・・なんですけど、パーシヴァルさんとトリシュちゃんは、アインス達の外見に変化が無いことについてはどう思うてます？」

はやてがいきなり核心について切り出す。と、「エリーゼ様の日記です」トリシュが1冊の鍵付きの書物を持って戻って来たかと思えば、そう言いながらテーブルの上に置いた。

「エリーゼ卿の日記の中でも特別な物で、いつの日か再びアインス様たちと出逢えた時、開帳を許す、というものです」

「歴代当主とその親・兄弟にのみに受け継がれてきた物なんです。みながその条件に従ってこれまで開帳せずにいました。ですけど、兄様の代で皆様と会うことが出来ました」

「そういうわけで、皆さんと出会ってから今日までの1週間。俺と妹は、このエリーゼ卿の裏日記を開帳し拝読しました。そして知ることが出来ました。アインス様たちの真実を」

「闇の書の管制融合騎と守護騎士ヴォルケンリッター。それが皆様の正体なんですね」

パーシヴァルとトリシュに見詰められたシグナム達は、その視線から逃れようとすることなくしっかりと受け止めている。そのまま俺たちは"闇の書"事件の大まかな全容を話した。

まずは俺とはやての出会いから。次いで"闇の書"との出会い。それから俺が楽園の番人パラディース・ヴェヒターのランサーとして犯罪者狩りを行い、あとからシグナム達が参戦してリンカーコアを一緒に蒐集した事を話す。

「パラディース・ヴェヒター・・・・！」

「一時期次元世界を席巻したあの騎士隊って、ルシル様たちのことだったんですか！？」

思ったより反応が大きくて驚いた。何故かと問えば、「兄様、ランサーにライバル意識を燃やしてしまっていて・・・」トリシュが苦笑する。聖王教会騎士団最強の槍騎士、シュペーアパラディンのパーシヴァルは、大々的にランサーと名乗って有名になった俺に嫉妬してしまったそうだ。

「あの、ルシル様って、私やハヤテと同い年くらいかと思うんですけど・・・」

トリシュからの問いに俺は、歴代セインテストの魔法を引き継いでいる、というはやて達にも吐いた嘘をこの兄妹にも伝えた。すると「オーディン様の魔法ももちろん・・・？」パーシヴァルが興奮気味に訊いてきた。

「ええ、もちろん。それと、すでに察しているかと思いますが、エヴェストルムも受け継いでいます」

「見せてもらってもいいかい！？」「見させていただいても！？」

左中指にはめた指環を掲げて見せると、兄妹揃ってソファから立ち上がって身を乗り出してきた。その勢いに若干引いてしまったが、

「わ、判りました。エヴェストルム、ニュートラルで起動」"エヴェストルム"をランツェフォルムで起動し、テーブルの上に置いた。

「本物、だよな・・・？」

「もちろん」

「触ってもよろしいですか？」

「どうぞ」

子供みたいに表情を輝かせるパーシヴァルとトリシュ（は、まんま子供だが）が"エヴェストルム"に触れる。そんな中で驚いたのが

「わっ、結構重いですね」トリシュが片手で持ち上げたことだ。はやてがそれを見て、「トリシュちゃん、力持ちなんやなぁ」目を丸くした。

「うちの妹、華奢に見えても同年代の男の子以上の怪力の持ちぬ――あいたっ？」

「コホン！」

トリシュが、黙ってろ、っていう風にパーシヴァルの足の甲を踏ん

だ。そしてトリシュは「どうぞ、兄様。重いですよ」と両手で水平に持ち変え、パーシヴァルに"エヴェストルム"を手渡した。

「ずっしりと来る重み。コレがオーディン様の自作したアームドデバイス・エヴェストルム。俺、伝説に触れてる・・・！」

感極まったのかパーシヴァルの目から1筋の涙が流れた。そこまで感動してくれるのか。嬉しいな。そして話は、"闇の書"を"夜天の書"へと戻すために、何百年と続いた呪いの旅路を終わらせるために、祝福の風リインフォースという名前を管制プログラムだった元シュリエルリートに付けた事も話す。

「それで、リイン――リインフォースⅡはどういった経緯で生まれたのでしょうか」

「・・・私、アインスに寿命が生まれたからだ」

「「っ！？」」

アインスが話を切り出す。"夜天の書"の闇としての旅路を終わらせるため、はやてと守護騎士を未来に生かすため、アインスは消滅の道を選んだ。だが、融合騎としての機能を持つアインスが居なくなれば、はやては魔導騎士として半端になる。だから「・・・それゆえのリインなんですね」とトリシュが1切れのクッキーを両手に持ったまま話を聞いていたリインを見た。

「アインスの想い・願いの為にも、わたしは・・・強くなりますで

す！」

「ああ、期待しているぞ、リイン」

「はいですっ！」

アインスが微笑み、リインは真剣な表情で頷き応えた。"闇の書"関連の話を終えた後、「私たちのことが恐ろしくなっただろうか」アインスが不安げに訊ねる。

「いいえ。闇の書については多少なりと調べたので判っています。皆さんが悪いのでなく、歴代の主が悪いのだ、と。エリーゼ卿の日記を読めば解りますし、こうして直接話すことで判ります。皆さんがオーディン様やエリーゼ卿らとどれだけ楽しく過ごされたのかを。そして今、ハヤテを主として健全な生活をしていることも。ですから怖れなんてありません。トリシュも、そうだよな」

「はい、兄様。私も、皆様に怖れはありません」

パーシヴァルとトリシュからの敬愛感情は守護騎士の真実を知っても消えることはなく、だから「ありがとう」とシグナム達は感謝した。はやてもまた「嫌いにならんでくれてありがとう」と微笑んだ。

「パーシヴァル君、トリシュ。闇の書――正式名を夜天の魔導書って言うんだけど、はやて達が夜天の書の関係者だっていうことは局内で箝口令が敷かれていてさ。２人も教会内ではちょっと・・・」

「もちろんだとも」「もちろんです」

パーシヴァルとトリシュが確約してくれた。そして話は「ここからはシュテルンベルク家当主としての話になります」パーシヴァルの真剣味を帯びた声色で切り出されたものへ。

「ルシリオン・セインテスト君。君、好きな女の子、居るかい？」

どんな話をしてくれるのかと身構えていたら、「はい？」好きな女子が居ないか、なんて質問なんて。いない、その一言を発しようにも・・・

（なんだ、このプレッシャーは・・・！）

俺の両脇に座るはやてとシャルから視線――無言のプレッシャーに口を噤まざるを得なくなった。が、なんとかそのプレッシャーを押しのけて、「いない、かな」と答える。すると「はあ」はやては溜息を吐き、「チッ」シャルは舌打ちしやがった。

「舌打ちってなんだよ」

「べっつに～」

そっぽを向いてクッキー数枚を鷲掴みして一気に頬張ったシャルはもう放っておいて、「急にどうしてこんな質問を？」とパーシヴァルに問うと、返って来たのは「ルシル。妹のトリシュを嫁として貰い、シュテルンベルク家に再び加わってくれないか」まさかの、ト

リシュと結婚してくれ、発言だった。

「ぶはっ！？」

「ぎゃぁぁぁ！　きったねぇー！　シャル、テメェ！！」

「だぁー」

「「主はやて！？」」「はやてちゃん！？」「マイスターはやて！？」

シャルは頬張っていたクッキーを吐き出してヴィータにキレられ、はやては半開きの口から飲んでいたコーヒーを滝のように零し、シグナムとアインス、シャマル、そしてリインを驚かせた。

「ちょっとパーシヴァル君！　急に何言ってんの！　ルシルはね、わたしの将来の夫なの！」

「いつ俺は君の夫になった？　ん？」

「つうか、まずはお前が吹き出したクッキーを片付けろ、こら！！」

「はやてちゃん、スカートがコーヒーで汚れてます！」

「騎士パーシヴァル、トリシュ！　何か拭く物を貸してくれ！」

もうてんやわんや。ここで一旦話を切ることにした。シャルが吹き出したクッキーだったモノを片付け、はやては汚れた服を着替える

ためにトリシュやアインス、リインと共に、トリシュの部屋へ向かった。

「――はぁ。しかし、パーシヴァルさん。どうしてあのような事を・・・？」

「トリシュとの結婚話かい？・・・ルシル。セインテスト家はもう君ひとりしかいないと聞く。オーディン様が一員だったセインテスト家の直系の血を絶やしたくはないんだ。というのが半分。もう半分は、恩返し、というのかな。シュテルンベルク家がこうして存続しているのは、多大にオーディン様とアインス様たちグラオベン・オルデンの皆さんのおかげだと思うんだ。

それに、エリーゼ卿の晩年の裏日記の最後にこう記されていたんだ。守護騎士の皆さんと、皆さんが心より敬愛している主と巡り合えた時は、シュテルンベルク家の全力を以って力になってあげて、と。君もハヤテも血の繋がった親族の居ない、天涯孤独の身だ。だから・・・」

「俺とトリシュの結婚に繋がる、と。・・・トリシュはこの事についてはなんと？　顔合わせ初日なのに俺と結婚なんて・・・彼女は納得して――」

頭痛の種がまた増えた、と若干ストレスを感じながらそう訊こうとした瞬間、「もちろんです！」言い終わるより早く返答が応接室の出入口から聞こえた。そちらに振り向くと、トリシュとアインスとリイン、そして淡い翠色のゴスロリドレスを着たはやてが居た。

「ただいま戻りました。・・・私とハヤテの体格、服のサイズが同じで良かったです」

「きゃぁぁぁぁ！　はやてちゃん、可愛すぎです　」

シャマルが真っ先に魅了された。シグナム達も次々と似合っている、可愛い、と褒めていく。俺も「うん、可愛いよ、はやて」と褒めると、「お、おおきにな♪」はやては照れ笑いを浮かべた。ああ、本当に可愛らしい。

「ずるーい、はやてだけずるーい！　わたしも着るー！」

「イリス。お前は服を汚していないだろ。そのワンピースのままでいれば良いじゃな――」

パーシヴァルがそこまで言ったところで、シャルはティーカップを手に取ってパシャっと自分の服に掛けた。前から・・・そう、前世から解っていたことだが、コイツはやはりバカだった。

「トリシュ、服貸して！」

「・・・こちらに来て下さい、イリス。皆様、再度失礼します」

「はーい♪　ル～シル～、待っててね～　」

シャルはウィンクしながらトリシュと一緒に応接室を後にした。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

トリシュの部屋で、わたしはトリシュの服に着替える。というか「トリシュの服って、結構メンドくさいよね」フリルやレース、リボンにボタンの数が半端じゃない。だからそう言うと、「でしたら、あんな事をしなければよかったじゃありませんか」ってトリシュが溜息を吐く。

「だって～。ルシルがはやてを褒めるんだもん。わたしだって褒められたいんだも～ん」

ドレスの袖に腕を通して、「んん～～～・・・って、ごめん、背中のボタン、留めてくれない？」最後のボタンに手が届かないからトリシュにお願いすると、「イリスは、本当にルシル様がお好きなんですね」そう言いながらボタンを留めてくれた。

「もちろん♪　だからさ、トリシュ」

カチューシャタイプのヘッドドレスを頭に着けて、「もしルシルのことが本気じゃないのだとしたら・・・諦めて」ガチな声で口撃。トリシュはわたしの胸元のリボンやヘッドドレスの歪みを直しながら「確かに私は、ルシル様と直接会ったのは今日が初めてです。ですが――・・・」そう言って、わたしの長い後ろ髪を櫛で梳き始める。超気持ち良い

「一目惚れ、というのでしょうか。一目でルシル様に惚れました」

「ぅぐ・・・！」

経験者だから反論できない。しかも嘘じゃなくて本気で言ってるのが解る。最悪過ぎする。ここにきてまた新しいライバルが出来るなんて絶対に嫌なんだけど。

「イリスもハヤテも、ルシル様を慕っているのは察しています。が、これからは私も参戦させていただきます」

「トリシュ、本気？」

「はい、本気ですとも♪」

トリシュと見つめ合う。そして「早速告白して参ります！」トリシュが駆け出して、応接室へ向かってダッシュ。か弱い見た目なんて詐欺だっていうほどに健康体なトリシュ。騎士としての身体能力も、弓騎士としての視力も、その全てが人並み以上。身体強化なしでの運動能力で言えば、わたしやなのは達以上だと思う。

「あーもう！　速い、足が速い！」

遅れてトリシュの部屋を出て、応接室へダッシュ。トリシュの背中はすでに見えず。遅れて「トリシュ！」応接室に入ると、「ルシル様！　私と結婚してください！」トリシュが堂々と宣言してた。思わずズッコケて、ヘッドスライディング。

「ちょっとー！　いきなり何を言い出してんの！　告白ならまだし

もプロポーズ！？」

「ルシル！　妹もこう言っているんだ！　改めて言おう。トリシュと結婚し、シュテルベルク家に入ってくれ！」

パーシヴァル君からも再提案されたから、「わたしは反対！」挙手。すると「わたしも反対です！」はやても挙手して反対意見を宣言。そしたら「私だって諦めません！」トリシュがあろうことかルシルの隣に座って左腕に抱きついた。

「「あああああああ！！」

はやてと2人揃って絶叫。もう我慢なんない。こうなったら「トリシュ！　ルシルとの結婚を賭けて勝負よ！」"キルシュブリューテ"を起動して切っ先をトリシュに突きつけると、「イゾルデ起動」トリシュも大弓の"イゾルデ"を起動した。

「構いませんよ。管理局ではエースなんて言われているようですけど、騎士団の中ではまだまだ弱いってことを思い出させてあげます、イリス」

「言ってくれるじゃん、トリシュ。わたしだって日々成長しているってことを教えてあげる」

「俺の意見は無視か。判っている、ああ、判っているとも。こうなったらもう男は片隅に追いやられる存在だって・・・」

「あ、あのな、シャルちゃん、トリシュちゃん！　ルシル君を放ってそんな勝手な――」

「それじゃあはやては婚約権争奪戦の不参加ね」

「わたしも出る！」

「もう勝手にしてくれ」

というわけで、わたしとはやてとトリシュのルシル争奪戦が始まった。シュテルンベルク邸の地下には、地上の敷地と同じ広さの模擬戦用の鍛錬場があって、そこでわたしとはやて、そんでリインがチームを組んで、「ま、俺も妹には勝ってほしいからさ」トリシュとその兄パーシヴァル君の２人チームとマジバトルを行うことに。

「シャルちゃん。パーシヴァルさんて、やっぱり強い、やんね」

「馬鹿みたいにね」

「わたしとユニゾンしたマイスターはやてと、シャルさんの２人がかりで勝てる確率って、どれだけです？」

「・・・多く見積もっても２０％、かな」

「思ってた数字よりずっと良いです」

「シャルちゃん、ホンマのところは？」

「・・・５％くらい」

「負け戦確定ですぅ！？」

正直な話、パーシヴァル君が戦うなんて言うとは思わなかった。わたし＆はやて＆リインＶＳトリシュでやるつもりだったし。はやてと協力してトリシュを潰し、そのまま終わろうかと、ね。でも「大丈夫。策はあるから」わたしにはとっておきの策があるので～す。

『（さて、と・・・）シャルロッテ様、今一度目を覚ましてください！』

わたしの前世、最強の剣騎士のシャルロッテ様に戦ってもらう。もうこれしかない。心に語りかけるように思念通話を自分自身に繋げると、『ふわぁ、なに～？　いい夢見てたのに～』寝ぼけ声のシャルロッテ様から返答が。シャルロッテ様に『実は――』これまでの経緯を伝える。

『にゃるほどね～。ルシルってば、次から次へと・・・。そのトリシュって子には悪いけど、私はあなたを応援したいし。いいよ、代わりに戦ってあげる。戦闘後、酷い筋肉痛になっても恨まないでね』

『助かります！　ではわたしの身体、お預けします』

意識が海に沈むかのような錯覚を得て、その代わりにシャルロッテ様の意識が浮かび上がって行くのが判る。そして「うん、久しぶり

の生の空気、美味しい」わたしの意思とは関係なく口が開いて、大人びた声が発せられた。

「はやて、リイン。ユニゾン後、トリシュタンを足止めして。その間に私がパーシヴァルを討つ・・・・！」

「っ！・・・1人で大丈夫なんか・・・？」

「ありがとう、はやて。大丈夫。だから2人も頑張ってね」

「うんっ」「はいですっ」

そしてはやてとリインはユニゾンを果たし、わたしの身体を預かったシャルロッテ様も騎士甲冑に変身して、さらに「この背格好の方が動きやすいんだよね」大人の姿へと変身した。すると「驚いた。大人の姿になると急に美しくなるんだな、イリス」パーシヴァル君がわたしの姿を褒めた。ちょっと嬉しいかも。

「でも、うちのトリシュだって成長すれば君に負けないほどに美しくなる！　ルシル、婚約をするなら今だぞ！」

シスコン発言と一緒に騎士甲冑に変身したパーシヴァル君。右手に携えるのは銀の懐中時計から変形した2m級の長槍、銘を"ロンゴミアント"。ルシルの"エヴェストルム"とは違って、一目で槍だって判る形状。

「恥ずかしいことを言わないでください、兄様」

頬を赤らめてトリシュは再度、金色の懐中時計を大弓、"イゾルデ"に変形させた。そして2人とも、騎士甲冑へと変身。お互いの順部が整ったところで、「あー、じゃあ、テキトーに始め～」ルシルの力ない合図で戦闘開始。シャルロッテ様とパーシヴァル君が同時に一足飛びで最接近。

「私の恋路のため、勝たせてもらうから！」

――炎牙崩爆刃（フェアブレンネン）――

シャルロッテ様が炎を纏う"キルシュブリューテ"を横一線に払うと同時に放たれた火炎斬撃。パーシヴァル君は「俺も、妹の恋路のために負けるわけにはいかないんだよ！」そう言ってそのまま突っ込んで、爆発に呑み込まれた。

――コード・フロガゼルエル――

爆炎の壁の奥から突進して来たパーシヴァル君の"ロンゴミアント"の穂には燃え盛る炎が。そして、そこから剣と槍の超高速剣戟が始まった。多方向からの斬撃を繰り出すシャルロッテ様と、愚直に刺突のみを繰り出し続けるパーシヴァル君。奥に引っ込んでるわたしにまで伝わってくるパーシヴァル君のプレッシャーに、わたしは恐れを抱いちゃってる。

「ちょっと待ってくれ。イリスってこれほどデキる子だったっけか！？」

「いつかはデキると思うけどね！」

シャルロッテ様の、いつか、の期待に恥じないようにもっと自分を鍛えないと。そう思っていると、『強いね、このパーシヴァルって子。こりゃ本気出さないと、逆に失礼だよね・・・！』シャルロッテ様から僅かな焦りを感じた。

――風牙烈風刃（ヴィントシュトゥース）――

「むぉ・・・！？」

シャルロッテ様が一足飛びで６ｍほど後退した直後、爆風の壁を放った。そしてソレは、追いすがろうと突進して来たパーシヴァル君を直撃。後方へと大きく吹き飛ばした。シャルロッテ様は容赦なく・・・

「そーら！」

――光牙烈閃刃（リッター・ネーメズィス）――

剣状砲撃を発射。着地したばかりのパーシヴァル君に着弾、爆発を起こさせた。と、「兄様！？」トリシュの悲鳴が。トリシュはトリシュで、リインとユニゾンしたはやてを追い込んでた。

弓使いとしてのウィークポイント――弓を構え、魔力矢を創り、魔力弦に番え、狙いを定め、発射、っていう工程の多さをものともしないで、はやての射撃・砲撃を相殺、または粉砕しての直接ダメージを与えようとしてた。

「焦ったー！　強いじゃないか、イリス！　どうしてその強さを、騎士昇格試験で披露しない！？」

――コード・サラヒエル――

そんな声と一緒に煙の中から炎の槍が２本と高速で飛来。シャルロッテ様は「またいずれね♪」と"キルシュブリューテ"で炎の槍を切り捨てた。その直後、「またっていつだよ」背後からパーシヴァル君の声。

「１０年くらいあとじゃない？　もっと早いかもだけど」

――コード・フルグルゼルエル――

雷撃纏う"ロンゴミアント"の刺突を、シャルロッテ様は振り向きざまでの"キルシュブリューテ"の一閃で払い落して、すかさず空いている左手の平でパーシヴァル君の頬を「へぶっ！？」パァン！と平手打ち。

よろけたところに、そのままの勢いでシャルロッテ様は回し蹴りを繰り出す。"ロンゴミアント"の払い落し、そのうえビンタ。その２連撃で体勢を崩されたパーシヴァル君は「うごぉ！」背中で回し蹴りを受けることに。

『イリス。初めてあなたと出会った時に伝えたと思うけど、剣士だから、槍使いだから、弓兵だから、そんな先入観で相手をするのはアウト。剣士だから剣しか使わない、なんて道理はないんだからね。

パーシヴァルは、そこを間違った』

『はい・・・！』

蹴り飛ばされるパーシヴァル君に向けて、「雷牙翔裂刃（ガーベル・ベファレン）！！」シャルロッテ様は獣の爪のような５つの雷撃の斬撃を飛ばした。

「させません！」

――雷喰らう怒涛の宝珠――

パーシヴァル君に着弾する前に翔裂刃に立ち塞がったのは魔力球。その魔力球が翔裂刃を呑み込んだ。魔力球を射ったのはトリシュ。見れば、はやてとリインはユニゾンが解除されて、「きゅう～～」バタンキュー。あちゃあ、やっぱりはやてには荷が重すぎちゃったんだ。ごめん。

――閃駆――

「兄様！　大丈夫で――しまっ・・・！」

景色が一瞬で流れる。トリシュの背後を取るシャルロッテ様。それに気付いたトリシュが振り返った。けど、ここでトリシュは弓騎士としてのウィークポイントにその行動を拒まれた。大きな弓を構え、シャルロッテ様に照準を付ける。その２工程が敗因。シャルロッテ様は"キルシュブリューテ"の柄頭でトリシュの腹部を打ち、気絶させた。

――コード・シャルギエル――

氷の槍が２本と飛来。シャルロッテ様は閃駆でその２本の間を駆け抜けて、パーシヴァル君に接近。そして「これで閉幕！」"キルシュブリューテ"に魔力を付加。パーシヴァル君も「上等！」"ロンゴミアント"の穂に銀の魔力を付加した。

「コード・ポースゼルエル！」

わたしの目じゃ捉えられない程の速度で繰り出された魔力付加刺突。その刺突の軌道を左の裏拳で弾き逸らし、パーシヴァル君の懐に侵入。そして"キルシュブリューテ"を逆手に持ったシャルロッテ様は「トドメ！」身体の旋回と一緒に"キルシュブリューテ"を振るった。ヒットするのは脇腹。でも・・・

「ぐぅぅ・・・！」

「お♪　これを受けて吹っ飛ばないなんて、ようやく本気になったのね・・・！」

「１０も歳の離れた子供に、負けるわけにはいかないだろ・・・！　男としてもパラディンとしても！」

振り抜かれた"キルシュブリューテ"。パーシヴァル君は結局、薙ぎ飛ばされた。中空を飛ぶパーシヴァル君はそんな中でも「コード・・・マカティエル！！」銀の魔力で創られた魔力槍を投げて来た。

それを前進することで避けたシャルロッテ様は「どこまでもやってやろうじゃん！」そう楽しそうに言って両脚に力を込めたその瞬間・・・

「うにゃ？」

「『シャルロッテさ――』ま？・・・え？」

いきなりシャルロッテ様が引っ込んで、わたしが表層に出ちゃった。突然、自分の身体の支配権が戻ったことで力の加減が判らず、ガクッと両膝を折っちゃった。その隙をパーシヴァル君が突かないわけもなく。

「もらったぁぁぁぁぁ！！」

――コード・パシエル――

雷撃の槍が、変身が解けて元のサイズに戻った直後のわたしに迫る。もうダメだ、当たる、そう思った時、「もうそろそろいいでしょう」ルシルがわたしを庇った。左手に携える"エヴェストルム"でパーシヴァル君の放った雷槍を弾き飛ばすことで・・・わたしを護ってくれた。

「今のをあんな簡単に・・・。ルシル。つまりそれは、トリシュとの婚約を――」

「するわけないでしょう。こんなアホな事で。俺も、トリシュも、

はやても、シャルも、みんな結婚とか考えるには早すぎる。だから、保留、ということで。どうです？」

「・・・そっか。そうだな。ちょっと焦り過ぎた。だが撤回するつもりはない。真剣に考えてくれよな」

「了解です」

こうしてルシルとの婚約権の争奪戦は終わった。ていうか、『シャルロッテ様、大丈夫ですか？』シャルロッテ様に声を掛ける。すると『ちょっと疲れたっぽい。ごめんね～』陽気な声が返って来た。よかった、ご無事で。一体何があったのかと思ったよ。

「ーーうん。はやてちゃんもリインちゃんも、トリシュちゃんも異常なし♪」

それからはやてとリイン、トリシュが目を覚ますのを待って、起きたところで身体に異常が無いかをシャマル先生に診てもらった。ついでにわたしとパーシヴァル君も。結果はみんな揃って異状なし。

「腹減ったな。今は・・・17時過ぎか。夕食にしよう」

こうしてわたし達は予定通り夕食を頂いた。ちなみに、夕食時にディナス、帰って来たヴィヴィオアンとニミュエを紹介されたシグナム達は、3人の先祖と「似てる！」って興奮してた。

Ｅｐｉｃｏｌｌザンクト・ヒルデ魔法学院～Ｓｃｈｏｏｌ　ｔｏｕｒ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「トリシュちゃん。ホンマにルシル君のこと、好きなん・・・？」

ルシル君との婚約権を賭けた争奪戦なんてとんでもない状況になってしもうた。その原因は、トリシュちゃんがルシル君にプロポーズしたから。そんで今、わたしはリインとユニゾンして新しく出来てしもうた恋のライバル、トリシュちゃんと対峙中や。

「一目惚れです。以前からルシル様のことを慕っていたイリスとハヤテには申し訳ないですけど・・・」

トリシュちゃんが大きな弓、"イゾルデ"をわたしに向けて魔力矢を魔力弦に番えて、「私も参戦させていただきます」サファイアブルーに光り輝く魔力矢の矢羽根から指を放した。

――とぐろ巻く夢幻の拘束蛇――

「速――っ！」

放たれた矢は床をスレスレで飛んで、わたしがどうこうする前にその矢が螺旋を描きながらわたしの周りをグルグル回って、「ぅぐ・・・！」わたしを拘束した。すぐさま「リイン！　バインドの解析！」

をお願いする。

『はいです、マイスターはやて！　少し待ってくださいです！』

トリシュちゃんは追撃せずに待ってくれてる。きっとこれは「まずは挨拶です、ハヤテ」やって思うたわ。初撃から攻撃魔法やったら負けてた。バインド解析、そんで解除、それが終わるまで戦術を考える。

（実力では圧倒的に負けてるんは解ってる。それをどうやってひっくり返すか・・・）

弓使いイコール弓技だけやない。固有の武器らしない突飛な技を使われることを警戒する。ルシル君の教えや。弓技ももちろん警戒や。突飛な技を使われる前に、トリシュちゃんを討つ。

『これは・・・・！　マイスターはやて！　バインドではないです！　これは・・・幻術です！』

「幻術！？・・・・ってことは、幻なんか、これ・・・・！」

リインからの報告に驚く。わたしを拘束してるバインドが、実態のあらへん幻やなんて。トリシュちゃんを見ると、「お気づきです？　そうです、幻術ですよ、そのバインド。動こうと思えば、動けますよ」そう言って微笑んだ。リインも『はいです。動けないのは精神的な問題ですから』そう言うた。

「（幻、これは幻・・・幻なんや）うあああああああ！」

声を上げて体に力を込める。すると思ったより簡単に体の自由を取り戻せた。すると「さすがは夜天の主。正直、もうちょっと苦労すると思ったんですけど」トリシュちゃんが目を丸くした。あれ、ホンマに驚かれてる。ひょっとして結構な幻術やったんやろか。とにかく「リイン、反撃や！」"夜天の書"を開いて、"シュベルトクロイツ"をトリシュちゃんに向ける。

『はいです！　サポートは任せてください、しっかりお支えします！』

「任せるよ！　ブリューナク！」

短剣状の速射系射撃魔法を連射。直線軌道やなくて僅かな曲線軌道でトリシュちゃんに殺到する。続けて「バルムンク！」剣状射撃魔法を、ブリューナクの着弾時に巻き起こった爆発を包囲する形で展開、そんですぐさま発射する。立ち上る煙へとバルムンクが突入した瞬間・・・

『上です！』

「うんっ！」

トリシュちゃんが直上に跳んだ。その体勢はすでに魔力矢の発射態勢。高低差を利用されたら勝てるもんも勝てへん。攻撃される前に空へ上がるために飛行魔法準備。そんで膝を曲げたとほぼ同時、「行ってください！」トリシュちゃんが矢を射って、わたしが跳び上

がった直後に地面に着弾。

――突き上がる狂乱の山脈――

直径２０ｍほどのベルカ魔法陣が広がったと思えば、そっからドリル状の岩石による剣山が発生した。１つの岩石がわたしの居る高度にまで到達。それをバレルロールで回避した時、『マイスターはやて！　トリシュが矢の発射態勢に入りましたです！』リインから警告。剣山の先端高度から脱出。と、トリシュちゃんがある１本の岩山の先端に立って、わたしに向けて弓を構えてた。

「クラウ・・・！」

――翔け抜けし勇猛なる光条――

「ソラス！」

咄嗟に放つんは砲撃クラウ・ソラス。トリシュちゃんも矢を射るとソレは砲撃となって、わたしの砲撃と真っ向から激突。爆発が起きる。狙い撃ちされへんようにすぐにその場から離れる。

――群れ成す煌きの啄み――

直後、煙の向こう側から光の矢が３８本と突き抜けて来た。誘導操作系やないおかげで、その脅威をまともに受けずに済んだ。

「リイン！」

『はいです！』

――ハウリングスフィア――

魔力球６基（ユニゾン中やから出来る数や）を配置。晴れ始めた煙の中にトリシュちゃんの姿を確認した。トリシュちゃんもわたしに気付いたようで、わたしに向けて弓を構えて、魔力矢を創り出して弦に構えようとした。

それこそわたしの狙ってたチャンスや。矢を創って弦に番えるまでの短い間、攻撃は出来ひんし防御も即座に発動できひんはず。回避の可能性もあるけど、それを妨げるための多弾砲撃や。届け、わたしの一撃。

「『ナイトメアハウルッ！！』」

"シュベルトクロイツ"からの１本、トリシュちゃんを包囲するハウリングスフィア６基から６本、計７本の砲撃がトリシュちゃんに向かう。決まった、って思うた。そやけど≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫"イゾルデ"の握りと胴の付け根が上下にスライドして、カートリッジシステムが露わになった。そんで２発のカートリッジをロード。

「中伝・紫電一閃！」

「『炎熱付加！？』」

"イゾルデ"の剣のような胴部分が蒼炎に包まれて、わたしとリイ

ンの砲撃が全弾斬り裂かれて対処されてしもうた。今の魔法は間違いなく、シグナムの紫電一閃や。トリシュちゃんは続けて「中伝・二剣飛翔刃！」"イゾルデ"が2本の双剣に分離。刃部分に魔力付加した状態で投げ飛ばしてきた。

『マイスターはやて！』

「っ・・・！」

ブーメランのように向かって来る双剣。警戒はしてた。弓使いらしくない技。"イゾルデ"の形状から、剣への変形、斬撃攻撃、それくらいはしてくるって思うてた。そやけどブーメランのように剣を飛ばして来るなんてさすがに想定外や。

（フェイトちゃんのハーケンセイバーみたいなこの感じ・・・！）

おそらくやけど防御系じゃ突破される。それほどのプレッシャーが発せられてる。そやから回避を取るんやけど、「追いつかれる・・・！？」わたしの移動速度より速い双剣が、「しまっ・・・！」"シュベルトクロイツ"と"夜天の書"　が弾き飛ばされてもうた。

――中伝・フィアーテ――

「ごめんなさい、ハヤテ。私の・・・勝ちです」

ヴィータの高速移動魔法を使ってわたしの懐にまで入り込んで来たトリシュちゃん。いやや。負けたない。双剣がトリシュちゃんの手

元に戻って、カートリッジがロード。刃に付加されるんは蒼い光と炎。

『マイス――はやてちゃん！』

――パンツァーシルト――

「中伝・紫電十字閃！」

炎を纏う方が縦一線に振り下ろされて、リインの張ってくれたシールドは真っ二つにされてもうた。そんで続けて光を纏う方がわたしに向かって振り下ろされて・・・

「負けたない！！・・・って、あれ・・・？」

手を伸ばした先、そこはベッドの天蓋の内側。そうか、「夢、か・・・」って気付く。伸ばして手を曲げて自分の目を隠す。そんで溜息1回。負けた。完璧に、圧倒的に、どうしようもないほどに。婚約権についてはルシル君が一喝することで白紙に戻った。そやけどもし、もし・・・

「アカンな、弱気になってしもてる」

わたしの両脇で眠ってるアインスとリインを起こさへんように気を付けながらベッド脇の車椅子へ。そんで用意された客室をこっそりと出る。そんで向かうのは「ルシル君・・・」に用意された客室や、だって今すぐ会いたいから。

時刻は午前6時ちょっと前。たぶんルシル君も眠ってると思うから「お邪魔しま～す」小声で挨拶しながら、ルシル君の部屋に入る。静かな部屋。聞こえて来るんはルシル君の寝息だけ。音が立たんように気を付けながら車椅子を進ませて、ベッドのすぐ側へ。

（相変わらずかわい――もとい綺麗な寝顔やなぁ）

想いは留まらず。車椅子からベッドに上って、ルシル君の隣に横になろうとした時、「っ！？」わたしは気付いた。わたしが上った方とは反対側の床に「シャルちゃんとトリシュちゃん・・・！？」がバインドでぐるぐる巻き――蓑虫みたいにされて転がされてた。その姿に呆けてると、「俺のバインドを解いたか、どっちか！」ガバッとルシル君が跳ね起きた。

「きゃあ！？」

そんでわたしをベッドに押し倒して覆い被さってきた。ルシル君はすぐに「って、はやて！？」わたしに気付くと、慌ててわたしの上から退いた。体を起こしてルシル君と、床に転がされてるシャルちゃんとトリシュちゃんを見る。

すると「この2人はな――・・・」ルシル君が説明してくれた。最初はシャルちゃんが押し掛けて来て、勝手にベッドに入ろうとした。そやからバインドで拘束して放置。次にトリシュちゃんとパーシヴァルさんがやって来た。

「――で、パーシヴァルさんはトリシュだけを置いて部屋を出、トリシュひとり俺のベッドに潜り込んでこようとした。だから拘束し

て放置した」

「なるほどな～」

溜息吐いてるルシル君に苦笑。そんでルシル君は「ほら、もう戻るんだ。アインスとリインが心配するぞ」わたしをお姫玉抱っこして車椅子に戻してくれた。わたしは「２人はどないするん？」って訊ねる。

「・・・いや。それぞれの部屋に・・・って、トリシュの部屋がどこにあるか知らないから、シャルの部屋にでも戻すさ」

そう言うたルシル君が大人の姿へと変身して、シャルちゃんとトリシュちゃんを両肩に抱え上げて部屋を出た。わたしも車椅子を押して続くと、「はやて」ルシル君に呼ばれた。そやから「ん？」って振り向く。

「おやすみ。良い夢を」

「っ。・・・うん、おやすみ。その・・・ルシル君も、良い夢を♪」

ルシル君と笑顔で別れたわたしは部屋に戻って、ぐっすり眠ってるリインと、「おかえりなさい、主はやて」起きて待ってくれてたアインスに「ただいま♪」微笑んで、ぬくぬくなベッドに入った。ホンマに良い夢が見れそうや。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

朝を迎え、俺たちは朝の身支度を整えて食堂へ。大きな長テーブルには既に人数分の朝食が用意されていた。そして「おはようございます、皆様」シュテルンベルク家のメイド長、ディナスが出迎えてくれた。アンナの子孫で、彼女の遺伝子が強いようで浅葱色の髪、灰色の瞳はそのままだ。

「「おはようございますっ！」」

そしてもう2人。1人は、モニカの子孫であるニミュエ・クラウジウス。スタイルは抜群。オレンジ色のウェーブがかった長髪をおさげにし、青い瞳は柔和。もう1人は、ルファの子孫であるヴィヴィアン・オートクレール。金髪はボブカット。少し鋭い紫色の瞳。彼女2人もまた、モニカとルファにそっくりだ。

ヴィヴィアンとニミュエに「おはようございます」と挨拶を返し、引いてもらった椅子に腰かける。そしてディナスに作ってもらった朝食を、はやてたち女子組の話をＢＧＭして美味しく頂いた。

「イリスや八神家は今日、どう過ごす予定なんだい？」

食後の一服をしているそんな中で、パーシヴァルからそんな質問が。もちろん「う～ん、特に決めてないですね～」この家に泊まることすら決まっていなかったから、予定も何も無い。はやてのそんな返答に「それは良かった」パーシヴァルが嬉しそうに笑った。

「良かったらザンクト＝オルフェンを案内しようと思ってね。寝る前に色々とルートを考えてみたんだ。有名な観光地に、地元民しか

知らない場所、などなどだ」

「ああーー！　それ、わたしがはやて達だけじゃなくてなのは達とも一緒にやろうって思ってたのにぃーーー！　ダメダメ、はんたーい！」

テーブルにバンッと両手を叩きつけて立ち上がったシャルが不満を漏らす。と、「旦那様。そもそも今日のスケジュールに空きはありません」ディナスが、パーシヴァルのスケジュールが表示された縦に長いモニターを展開した。すると「なんたることだ！」大げさに落ち込むパーシヴァル。

「よしっ！・・・でも、今日はホントどうしようか・・・？　はやて達は何かしたい事とか、行ってみたいところとかない？」

「う～ん。・・・みんなはなんかあるか？　ザンクト＝オルフェンの名所案内以外で」

はやてからそう訊かれた俺たちだったが急に思いつくわけもなく、少し唸り声が続いた。そんな時、「トリシュタンお嬢様。そろそろ御登校の御用意を」ヴィヴィアンがそう告げた。トリシュは胸ポケットに入れていた懐中時計を取り出し、「そうですね。手伝ってください、ヴィヴィアン」と席を立った。

「え？　トリシュちゃん、今日学校なん？」

「あ、はい。ごめんなさい、皆様。今日は平日ですので、登校日な

んです」

ミッドチルダと地球では時差の影響もあって休日がズレているからな。パーシヴァルとトリシュが居ないとなると、いよいよ今日の予定はどうなるかって考え始めた時、「わたし達も一緒に行こう！」シャルがそんなことを言い出した。意味が解っていないはやてやトリシュ達が「はい？」と小首を傾げた。

「トリシュの通ってるザンクト・ヒルデ魔法学院を見学しようよ！」

「それはいいですね！　皆様を、私の友人に紹介したいですし！

イリス、早速！」

「ヤー♪　母様伝手に学院長に連絡を取ってもらうよ！　見学していいか？って♪　やっほぉ～～い！！」

シャルは「あ、母様ー？　イリスでーす！　ちょっとお願いが――」母親に通信を繋げながらものすごい勢いで食堂を出て行った。そして「それでは私は♪」トリシュがニヤリと何かを企んでいる笑みを浮かべて、俺とはやてとヴィータを見る。あぁ、シャルと同じだ。あの笑み、絶対に良からぬ事を考えている。

「あの、トリシュちゃん？　その笑みはなんやろうな～～？」

「イリスは皆様の学院見学の許可を確実に取るでしょうから、私は皆様の服をご用意させてもらいます。学院の敷地内に居てもおかしくない格好になっていただかないと。そういうわけで・・・、ヴィ

ヴィアン、ニミュエ」

「「合点です！」」

トリシュがパチンと指を鳴らすと、ヴィヴィアンとニミュエがにじり寄って来た。嫌だ。俺は、俺は、「絶対に着ないぞぉぉーーー！」食堂から逃げ出すために踵を返し、足に力を込める。だがそれより早く「許可もらったよ　」シャルが戻って来て、俺の逃げ道を塞いだ。

「それは何よりです。さすがはフライハイト家です。Ｓｔ・ヒルデ魔法学院の学院長は六家の一角、アルファリオ家の現当主ですから、フライハイト家の現当主であるイリスのお母様のお願いをちゃんと聞いてくれましたね」

アルファリオ家。元"星騎士シュテルンリッター"の第十騎士、花の姫君チェルシー・グリート・アルファリオの一族か。いや、そんなことより逃げなければ。絶対に女子の制服を着せられる。

「まあね。で？　ルシルはどこへ行こうというのかな？」

「どけ、シャル。俺は嫌なんだ。女子の制服を着るなんて！　トリシュは言った。学院敷地内に居てもおかしくない服装に着替えてもらう、と。現在、学院に通っているのはトリシュだけだ。なら在るのは女子の制服！　つまり・・・！」

女装、ということに。それに、何もここで着替えることもない。学

院に到着後、男子の制服を貸してもらえることだって出来るはずだ。それを必死に訴える。すると「いやですよ、ルシル様。さすがに男の子に自分の制服を着せませんよ」顔を赤らめたトリシュがそう言って、俺に希望をくれた。

「万が一にも男の子に、ブラウスやスカートのサイズがスカスカなんて言われてしまうかと思ったら・・・私、恥ずかしさで死んでしまいます！」

「あー、それ、わたしも解るかも」

「う～ん、確かに男の子の、バスト・ウエスト・ヒップのどれか1つでも、これ、緩いんだけど、なんて言われた日には、言った奴を記憶無くすまでブチのめすかも」

「そうですよね。緩いということは、男の子より体が大きいということですから。それはつまり・・・」

「「「太っているという事！！」」」

はやてとシャルも同意したことで、彼女たちが俺に女装させた時の事を喋り始めた。はやてと俺が出会ってから初めての女装の時の話から始まり、シャルが自分の聖祥小の制服を俺に着せようと画策した事などなど。話を聴いていたトリシュは「まあ！」と驚きを見せていた。それはともかく。女装の危機は去ったことで、俺は笑顔を抑え切れない。

「ディナス。俺の制服は取って置いてあったっけ・・・？」

「おそらくですが。学院の生徒時の旦那様とルシリオン様の背丈も近しいと思いますので、きっと着られるかと」

「良し。ならば早速、ルシルに制服を」

「かしこまりました。ルシリオン様。こちらへどうぞ」

「あ、はい」

こうして俺たちは、Ｓｔ・ヒルデ魔法学院の制服を着たうえで、学院の見学へと向かうことになった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

さぁ、やって参りました、我らが聖王教会の系列スクールの１つであるザンクト・ヒルデ魔法学院。わたしとはやては、トリシュと同じ女子の制服を着用中。わたし達と同じように登校途中の女子生徒から「ごきげんよう」挨拶されるからこちらも「ごきげんよう」挨拶返し。

そんで、ルシルは残念なことに男子の制服。絶対に女子の制服も似合うと思うのにさ。だけど、「女の子のなのに、どうして男子の制服を？」とか「男装女子。いいですね」とか「元の制服でも見てみたい」とか、ルシルを女子視する子らばっか。聖祥小のみんなは男の子って見分けてたのに。何が違うんだろ。

「ちくしょう。何がダメなんだよ・・・」

「ルシル君、心を強く持つんや」

「ルシル。その長い後ろ髪を切ってはどうだ？」

ガックリ肩を落とすルシルにフォローを入れるはやて、ルシルと同じ銀色に輝く長い後ろ髪を手に取って切る仕草をするアインス（外見からして制服は無理ってことで私服姿）。そしてリインは「わたしは、今の髪で良いと思うです」現状維持推し。

「ありがとう、リイン。でも切ろうかなぁ。これから暑くなってくるし」

「そうなると、ますますパーシヴァルやトリシュにそっくりになるね」

「どちらかと言いますと、私や兄様がルシル様に似ているんですよね。オーディン様の一族、セインテスト家の直系ですし」

トリシュが人差し指を顎に当てて苦笑する。なんて言うか「なんか不思議だよね～」わたしも苦笑。不思議な繋がりがあるよね、わたし達って。それからどこまでルシルの髪を切るのか話してると、「みなさんが見学の子たちですね。イリス」名前を呼ばれた。というか、この声は・・・

「おはようございます、イリス、トリシュタンさん。それと・・・

そちらの４人ははじめましてですね。当学院にて講師を務めております、プラダマンテ・トラバントです」

「みんな、紹介するよ。プラダマンテは、聖王教会騎士団・銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼに所属する、剣騎士最強の称号シュベーアトパラディンを得てる騎士で隊長。そして教会シスターでもあるし、フライハイト家に連なる六家の一角、トラバント家の１人。さらにはわたしの剣の師匠なんだ」

イリュリア戦争時、オーディンから返されたというフライハイト家の家宝、オリジナル・"キルシュブリューテ"に宿るシャルロッテ様（精霊って括りらしい。本物はわたしの魂にいらっしゃるから）からは剣技や魔法の術式を教わり、プラダマンテからは精霊シャルロッテ様から精神世界で教わった技術を完成させるための仮想敵として鍛えてもらってた。

「今度はこっちを紹介するね。車椅子に乗ってる子が、八神はやて。んで、側に浮いてるのが、はやての融合騎のリインフォース・ツヴァイ。リインって呼んであげて。車椅子を押しているのがリインフォース・アインス。こっちはアインスって呼ぶこと。で、女の子っぽいけど男の子なのが、ルシリオン・セインテスト。みんな、わたしの大切な友達♪」

シグナムとヴィータ、シャマルとザフィーラは残念ながら急な仕事が入って本局へと戻っちゃったからね。本当ならヴィータにも制服を着せたかったんだけど。むぅ、残念なのだ。

「「「「よろしくお願いします！」」」」

お互いの紹介も終わって、他にも本局で同じ部署に所属してることや古代ベルカ式の使い手であったり、ルシルがセインテスト家直系であることも話す。プラダマンテは「やはり・・・」って興味深そうにルシルを眺めたあと微笑んだ。

それからわたし達は初等部の校舎へ向かいながら、プラダマンテから見学の際の諸注意を受ける。大前提として授業中は騒がない。休憩時間は生徒たちと親交を深めてもいい。けど、授業に遅刻させるようなことはしちゃいけない。講師からの許可があった場合は授業に参加することも可能。

「一緒に授業受けてもいいんですか？」

「はい、構いませんよ。生徒の中には管理局に勤めたい、という子たちも居るので。実際に局員であるイリス達の話を聴いて、見聞を広めるのも授業です」

ほとんど制限の無い見学になりそう。聖祥小とはまた違うＳｔ・魔法学院の空気にわくわくしていると、「それではトリシュタンさんは自分の教室へ。イリスとはやてさん達はこちらへ。学院を案内する者の元へとお連れします」プラダマンテがそう言って踵を返した。

「それでは皆様。また後ほど」

自分の教室へ向かうトリシュとエントランスで別れたわたし達は、プラダマンテに付いて廊下を歩く。そんな中で「そう言えば、セレ

ネちゃんとエオスちゃんもこの学校の通うてるんやんな～」はやてがスクライア姉妹の話を切り出した。

「遺跡発掘も続けてるみたいだから、確実に居るってことはないと思うけど・・・」

「実際に会ったのは花見の時だけだからな。もうちょっと話してみたいよな」

ルシルが花見の時の事を話したから、わたしと・・・顔を真っ赤にしたはやては黙る。原因はわたしにあるってことは十分に反省してる。そう、みんなにお酒を飲ませて泥酔させちゃうなんて・・・。リンディ提督や、その話が家にまで伝わったことで久しぶりに母様と父様にお説教を食らっちゃったし。もうお酒なんて懲り懲りだよ。

「セレネとエオス、アリサに殺されかけたよな」

酔っ払ったセレネとエオスは、同じく酔っ払ったアリサとすずかにセクハラまがいのことをした。そして酔いが醒めた後、わたしとなのはとすずかとユーノとリインは記憶がぶっ飛んでたけど、アリサとフェイトとアリシア、セレネとエオス、そしてはやては記憶が残ってた。だからアリサはそのセクハラにプッツンして、動物形態の2人を棒に吊るしてこんがり丸焼きにしようとした。

（フェイトとアリシアは改めてハラオウン家の養子になることを伝えてハッピーエンドだったけど・・・）

「いくら見た目が動物でも、実際に焼いたら殺人事件だからね。私たちも必死に止めたな」

アインスが苦笑する。本当に大変だったもんね。そんな親友にガチで殺されかけたセレネとエオスは今日、学校に来ているのかなぁ。もし来ているんなら、ＰＴ事件からどれほど成長したのかを確認してみたいかも。

「スクライア姉妹なら登校していますよ。正門で挨拶したのを憶えています」

プラダマンテからそう聞いたわたし達の目標が決まった。トリシュと合流した後、セレネとエオスに逢いに行こう。

Ｅｐｉｃｏｌ２騎士に融合騎、はやてにリイン

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

聖王教会騎士団の精鋭・銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼの隊長（イコール教会騎士最強）であり、剣騎士最強のシュベーアトパラディンであり、教会のシスターでもあり、いま俺たちが訪れているザンクト・ヒルデ魔法学院の講師でもある、シスター・プラダマンテ・トラバント（敬称は騎士ではなくシスターの方がいい、ということだ）に案内され、応接室へと赴いた。そこに居たのは、「シャッハ！」シャルがそう呼んだように、修道服を着たシスターシャッハだった。

「おはようございます、イリス。そしてお久しぶりです、はやてさん、ルシリオン君、アインスさん、リインさん。本日、皆さんを案内させていただく、シャッハ・ヌエラです」

騎士カリムの補佐を務める秘書・護衛であり、教会のシスターでもあるシスターシャッハが俺たちを迎えてくれた。そんなシスターシャッハとは特別技能捜査課での研修時、シャルの家に泊まっている間に騎士カリムに紹介されて知り合った。そして先の次元世界と同じくシグナムと意気投合し、これまでに何度か模擬戦を行っている。ちなみにリインは通信越しでシスターシャッハと会った。

「見ず知らずの講師に案内されるよりかは気楽だから良いけど・・・。カリムは放っておいていいの？」

「ええ。今日はグラシア家のみでの集まりがありますから。ですから今日の私はこちらでお手伝いです」

「そうなんだ。じゃあ今日はよろしく、シャッハ」

シャルに続いて俺たちも「よろしくお願いします」とお辞儀すると、「はい。こちらこそ」シスターシャッハも笑顔でお辞儀に応えてくれた。そして俺たちは始業ベルが鳴るまで応接室でシスター・プラダマンテやシスターシャッハと話した。

「――さて。始業ベルも鳴りましたので、ご案内を始めましょうか」

シスターシャッハが立ち上がり、俺たちも続いてソファから立ち上がって応接室を後にする。シスター・プラダマンテとはここでお別れ。帰り際にもう1度挨拶しに来ることを約束した。廊下を歩く中、「まずはわたし達の知り合いの授業を観に行きたいんだけど」シャルがそう言って、トリシュとスクライア姉妹のことを伝えた。

「えっと、みなさんのお友達であるトリシュタンさん、セレネさん、エオスさんは同じ4年3組だったはずで・・・。今は、第3競技場での魔導競技の実習中ですね」

シスターシャッハは前面に初等部全体のスケジュールが記されたモニターを展開、トリシュ達のクラスの1時限目の科目と実習場所を確認した。

「じゃあ、そこへの案内お願い、シャッハ」

そう言うわけで最初の見学場所が決定。俺たちの友人であるトリシュ達の在籍しているクラスが実習中だという第３競技場へ足を運ぶことになった。そして、校舎より２分と掛けて歩いて件の競技場に到着したんだが・・・「すごい・・・。とゆうか、競技場、なんか・・・？」はやてが目を丸くして驚く光景が目の前にあった。まぁ、俺としては見慣れているものだが。

「第３競技場は約４万３千平方メートルの広さを誇り、その全体が空間シミュレーター仕様ですから、ああいった建造物群を乱立させることも可能なんです」

サッカーのフィールド４枚分の広さだという第３競技場。そこには現在、高さが疎らな四角柱群が１０数棟と乱立している。シスターシャッハの話では、いま行われているのはちょっとしたゲームだということだ。

「――つまり、クラスを２チームに分けて魔導戦をやってるってこと・・・？」

「あくまで実戦に近いスポーツと言ったところでしょうか。生徒のみなさんの周囲にターゲットスフィアと呼ばれる魔力球を帯同させ、そこに魔法攻撃を受けたら失格。時間切れまでに生き残った人数が多いチームが勝利、となってます」

「魔法を使ってのスポーツかぁ。なんや面白そうやな」

「戦闘以外で魔法を使ったのは、最近で言えばお花見の魔力砲花火くらいですね」

そう言ったアインスに「あれは綺麗だったよな」俺も同意。そこに至るまでの経緯は馬鹿話だったが。記憶が飛んでいたシャルも「映像でしか観てないけど、確かに綺麗だったよね～」と笑う。

「あの、シスターシャッハ。わたし達も参加できますか？」

「「リイン・・・？」」

リインからまさかの意見。シスターシャッハは少し考える仕草をした後、「担当の教諭に聞いてみましょう」競技場に向かって歩き出し、彼女に続いてシャル、そして俺たちと続く。着いた競技場の手前には、準備運動を終えたばかりの４年３組の生徒たちが居た。みんなはもちろん運動着姿だ。

「あっ、シャル、はやて、ルシル！」

「それにアインスとリインも！」

真っ先に俺たちに気付いたセレネとエオスが大手を振って迎えてくれた。２人の近くに居たトリシュは声を上げることはせずに綺麗なお辞儀を１回、顔を上げて微笑みを向けてくれた。まぁ、今ので３人が俺たちと知り合いだと判った他の生徒がざわざわと話しだし、俺たちと３人がどういう関係なのかと、彼女たちに群がった。

「シスターシャッハ。もしかして彼女たちが、朝の定例会議に上がっていた見学者の子らですか？」

「はい。イリスさん。はやてさん。ルシリオン君。付添いのアインスさん。リインさん。以上５名が見学者となります。それで早速なのですが、みなさんを実習に参加させてもらうことは出来ませんか？」

「え、ええ、出来ますけど。大丈夫ですか？　イリスさんはフライハイト家の騎士として有名ですけど、はやてさんとルシリオン君はどうなんでしょう？　３組は魔導師としては優秀ですので、少なくともＤランクは欲しいのですが・・・」

「あ、それについては問題ないはずですよ。えっと・・・、ルシリオン君。あなたとはやてさんの魔導師ランクって確か・・・」

シスターシャッハと女性教諭が話し合う。それに聞き耳を立てながら、トリシュ達と手を振り合っているはやて達を微笑ましく眺めているとシスターシャッハからそう訊かれたため、「俺が空戦Ｓ＋で、はやてが総合Ｓですよ」と答えると、「Ｓランク！！？」女性教諭がとんでもなく驚いた。ＡＡＡランクでも珍しいからな。

「それだと３組は束になってもルシリオン君ひとりにすら勝てないかもしれませんよ！」

「あ、それは大丈夫ですよ。俺とはやてとシャルは魔力リミッターを掛けますから。Ｄランクまで下げますよ」

古代ベルカ時代やＰＴ事件ではＡＡランク以下まで魔力を消費すると記憶を失っていたが、魔力上限を増やす要因となったジュエルシードを取り込むという手段のおかげで、その制限も今ではＥランク以下にならなければ問題無しという好条件と化した。そうそうＥランク以下まで魔力を消費するという状況にもならないだろうし、気にすることも無いだろうな。

「そうなんですか。すごいですね。この学級に来たということは、9歳、なんですよね？　それにしては魔力リミッターを自分に掛けることが出来るんですね。すごいです！」

「一応、俺とはやて、アインスとリインも管理局の捜査官として勤めていますから。魔法の鍛錬で学んだんですよ」

「朝の会議で聞いてはいたんですけど、本当に管理局員だったんですね・・・」

管理世界に出掛ける際には持ち歩いていることにしている管理局員ＩＤを見せると、女性教諭は感心しながら俺たちを見回した。とまぁ、そういうわけで俺たち見学組も実習に参加できることとなった。女性教諭が改めて俺たちを3組の生徒に紹介すると、「よろしくお願いします！」挨拶されたからこちらも「よろしくお願いします！」と返す。そして早速チーム分け。3組はすでにチーム分けは済んでいるらしく、あとは俺たちが別れるだけなんだが・・・

「そんじゃあ、わたしとリインはユニゾンして1人と考えて、ルシ

ル君もこっちに入って2人やな」

「うぐぐ・・・！　ずるい、ずるい、ずる～い！　わたし1人だけ仲間はずれ～！」

俺たちが揃ってどちらかに付くのはアンフェアということで、ジャンケンで二手に分かれることになった。その結果、俺とはやてはセレネとエオスの居るチームに入り、シャルはトリシュの居るチームに入ることとなった。トリシュは第4学年だけではなく初等部最強らしい。これでバランスはそれなりに整っただろう。

「オーディン様と同じ魔法を扱いになられるルシル様と、こうして刃を交えることが出来るとは思いもしませんでした。イリス。ルシル様は私に任せてくださいます？」

「強いよ？　大袈裟じゃなくてマジで。パラディース・ヴェヒターとして何十何百と命懸けで戦った経験もあるし。魔力リミッターがあると言っても油断すると・・・」

「ええ、心得ています。ですが私とて、兄様――シュペーアパラディン・パーシヴァル。我が師――ボーゲンパラディン・ガラガース様。シュペーアトパラディン・プラダマンテ様。ファオストパラディン・アルテルミナス様。レイターパラディン・ガリフット様。アクストパラディン・ライオネル様。シュラーゲンパラディン・リシャール様。ゼンゼパラディン・マドール様からの英才教育を受けている身。そう容易く負けるつもりはありません。それに私も学友とランクを合わせるべくリミッターを掛けます。魔力は五分と五分。

勝敗を決するは、己が技術のみ！」

ギラリと力強い戦意の籠った目を向けて来たトリシュ。しかしそれにしても出るわ出るわ、パラディンの名前。剣騎士、弓騎士、槍騎士、拳闘騎士、騎兵騎士、斧騎士、打撃騎士、鎌騎士の８人か。とりあえず「お手柔らかに頼むよ、トリシュ。そしてシャル」やる気を漲らせる２人に微笑む。

「「へっへーん。ユニゾンはやてとルシルがこっちに居るんだから、今日は負けねぇゼ♪」」

両手を腰に置いて仁王立ちするセレネとエオスがトリシュに向かってそう宣言した。どうやらこれまでの競い合いでトリシュに辛酸を舐めさせ続けられているようだな。俺としてもパラディンに鍛えられるというトリシュの本気を見てみたい。はやてと戦った時のが全力でないことは明らかだしな。

「ではみなさん。Ａチームは西の、Ｂチームは東の陣地へ移動してくださーい！」

俺たちＢチームとシャル達Ａチームはそれぞれ競技場の端に移動。そこで俺たちは作戦を立てることにした。真っ先に上がったのは「トリシュが強いんだよ、ホントにさぁ～」トリシュの撃破を最優先にしたい、ってことだ。

そういうわけで、トリシュ撃破を優先としての作戦を立てることに。トリシュは開始早々に建造物の屋上に上がって、そこから相手チームを狙い撃ちするそうだ。ならそれを阻止するのが一番だろう。

「じゃあ作戦を立てよう！」

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

はやてとルシルとは違うＡチームになったわたしは、「トリシュ。これまでと同じ戦い方をすると足元を掬われるからね」って、うちのチームリーダーのトリシュに警告しておく。作戦立案能力に優れたルシルもそうだけど、はやてには指揮官適性ありっていう才能もあるって判ってきてる。こっちも何かしら考えないと一掃される可能性がある。たとえ魔力が抑えられてるとしても。

「そうですね。でもやる事は変えません。上を取ります。乱立する四角柱の屋上を取りませんと狙い撃ちされてしまいますから」

そう、このゲームは何をしても狙撃ポイントを先に確保するのが必勝法。ということなら「わたしが護衛に入るよ。トリシュは狙撃に集中して」わたしが守りで、トリシュを攻めに徹しさせる。他の子たちはトリシュやわたしが居るからってすでに戦勝ムード。だから「作戦を立てた方が良いって」わたしが窘めるんだけど、やっぱり戦勝ムードは変わらない。

「イリス。私とあなたの２人が生き残り、ルシル様たちを全滅させればいいだけです」

トリシュらしくないちょっと冷たいセリフにビックリ。それからわたしはトリシュと２人だけで作戦会議。そんで作戦とまでは言えな

いけど、トリシュを移動砲台としてエリア内を駆け回りながら相手チームを殲滅。その間、わたしが迫り来る攻撃や相手チームを迎撃する。

「はやてとルシルが間違いなくわたし達を潰しに掛かってくるだろうから・・・」

「まずはお2人の撃破ですね。判りました」

そしていよいよ競技開始。陣地上に3色シグナルが表示されたモニターが展開。浮かれてるみんなやわたしとトリシュの身体の近くにバスケットボール大の赤い魔力球――ターゲットスフィア（向こうのチームは青色だそうだ）が創り出された。コレに攻撃を食らうと失格なわけだ。

「はぁ。みなさん。今回の相手はおそらく最強です。これまで以上の警戒を」

トリシュが最後の警告をした。それと同時にシグナルが赤→黄→青へと変わり、『競技スタート！』先生の開始宣言が競技場全体に響いた。一斉に戦場に散っていくチームメンバーを見送って・・・

「行きますよ、イリス！」

「りょ～か～い！」

両脚に魔力を込めて、同時に空に向かって跳び上がる。競技中は、

飛行魔法は禁止だからね。乱立する四角柱の中で一番高い場所を陣取って、そこを狙撃ポイントにする。空戦が出来ない以上、高い場所を陣取った方が有利だからね。そのための跳躍。あと少しで身近な四角柱の屋上へと着くというところで・・・

「魔力反応の接近・・・？　速い・・・・！」

「イリス！」

――フレイムブレット――

――フローズンブレット――

目前を通り過ぎたのは火炎弾と冷気弾。計６発。この魔法は知ってる。そう、この魔法の使い手は「セレネ、エオス！」の２人で間違いない。つうか、跳躍中を狙ってくるなんてタチが悪い。おかげで跳躍の勢いが殺がれて落下してしまう。けど飛行魔法は使用不可。使ったら即失格なのがルール。

――シュヴァーベン・マギークライス――

「トリシュも乗って！」

「はいっ！」

だからベルカ魔法陣の足場を作って着地。広さは確保したからトリシュも着地。ああもう、たったこれだけでも魔力の消費が辛い。

「というか一体どこからの攻撃！？」

「判りません！　跳躍途中もあって視界が狭まっていたので！」

そこを狙われたわけか。こりゃルシルの差し金だね。それにしてもＡチームとＢチームの陣地間の距離は約２４０ｍもある。いくらなんでもこんなに早くこっちの陣地にまで来る方法なんて飛行魔法くらい。一体どうやって・・・。

――フレイムブレット――

――フローズンブレット――

「「っ！」」

今度はハッキリと視認できた発射地点。わたし達が上がろうとしていた柱から４ｍと離れた、こっちと同じ高さの柱の屋上。迫って来ていた６発の火炎弾と冷気弾を、２人でシールドを張って防御。すぐに高低差を利用されての集中砲火を免れるためにもう１度跳躍して、屋上へと上がる。

「セレネ、エオス！　やってくれるじゃ――・・・って、あれ！？」

「居ない、です・・・？」

屋上に立ってすぐ攻撃地点の柱へと目をやるんだけど、居るはずの

スクライア姉妹の姿はどこにも見えず。ということは「狙撃ポイントを放棄した・・・？」ってことになるのかな。わたしがそう小首を傾げると、「もしくはさらに高い柱へ移動したか、ですね」トリシュが補足。そしてそれは現実になった。

――バスターラッシュ・アイシングフレア――

ここより高い柱から火炎と冷気の砲撃が2本と飛来。狙いはトリシュの側に浮遊してるターゲットスフィア。トリシュは横っ跳びすることで躱して、起動した"イゾルデ"を構えた。

とその時、ふと競技場上に展開されたモニターに目が行って、今現在の戦況を確認してしまうことに。わたし達Aチームの残存メンバーを示す数字が、16から5になってた。つまりはすでに11人が失格になったというわけで・・・。しかもはやて達Bチームは17から14・・・たった3人しか失格に出来てないときた。

「うええ！？　なんか一気に減ってるんだけど！！」

「くっ。やはりこうなってしまいましたか・・・！」

――フローズンブレット――

――バスターラッシュ・バージョンエオス――

冷気弾4発と火炎砲撃1発。それらを避けながら、「トリシュ、わたしの後ろに付いて！」スクライア姉妹を失格にするために2人の居る柱に向かって跳躍する。着地と同時に襲撃されることを警戒し

てトリシュを一歩遅らせて跳ばせた。

「今度は逃がさないよ、２人とも・・・！」

着地してすぐ迎撃準備。けどまた逃げられたみたいで、その姿はどこにもなかった。遅れて着地したトリシュが「イリス、上です！」って"イゾルデ"を頭上に向けた。そこに居たのは「鳥・・・？」１羽の大きな鳥だった。よく見れば、ハムスターとリスの姿に変身してるスクライア姉妹の姿と、２人分の青いターゲットスフィアが。

「あの鳥は、学友の１人が変身したものです！」

「あっ！　変身魔法は禁止されてないから・・・！」

確かに鳥の側には３つ目のターゲットスフィアがある。鳥に変身したクラスメートに乗っているんだから、２人の移動速度にも納得だよ。でも、それでも開始直前で２４０ｍと走破するには速度が足らない気がするけど・・・。とにかく、それが判ったから「撃ち落とします」トリシュが魔力矢を創り出して魔力弦に番えた。

「狙い撃ちます・・・！」

――速翔けし一輪の討ち華――

"イゾルデ"から射られたのは一輪の蒼い薔薇。それが一直線に、超高速で鳥の側に浮かぶターゲットスフィアを撃ち抜いた。競技場上に展開されているモニターに表示された、Ｂチームの残存メンバ

ーを表す数字が１４から１３へと減った。

「イリス。セレネさんとエオスさんを討ちます・・・！」

「よしっ！」

２人が乗ってる鳥が羽ばたきながら高度を落とし始めた。それをジッと待つわたし達。鳥の背から降り立った瞬間から再開らしいから、その瞬間をひたすら待ち構える。そしてとうとうわたし達の居る屋上へと降り立った鳥。

「ちょっと！　そんなにガチで待ち構えないでよ！」

「降りるに降りられないでしょ！」

すでに失格になった鳥・・・に変身してる生徒はもう動けないから、その周りを包囲すればスクライア姉妹はもう終わりなのだ。それが判ってるからこそ２人がぎゃあぎゃあ騒ぐ。でもこっちは聞く耳持たず。散々コケにしてくれたお礼はキッチリ返さないとね。

「ほらほら、早く降りなよ～」

「セレスさん、エオスさん。往生際が悪いですよ」

「「友達でしょ！？　少しは距離を取ってくれてもいいじゃんか！！」」

「ダ～メ♪」「ダメです♪」

トリシュと揃って笑みを浮かべる。少し沈黙が降りる。こうしている間にも、わたし達Ａチームの残存メンバー数が・・・２になった。それが示すのは、残っているのはわたしとトリシュだけ、ということだ。

「やられた・・・！　まんまと嵌められた・・・！」

「イリス・・・？」

「あちゃあ、さすがに・・・」

「気付かれちゃったか」

――ブラッディダガーーーー

――アクセルシューターーーー

わたしとトリシュを包囲するように襲いかかって来たのは血色の短剣８本と桜色の魔力弾６発。はやての高速射撃と、ルシルの複製射撃だ。わたし達のターゲットスフィアが撃ち抜かれるより早くその場から離脱。はやての射撃は屋上に着弾して終わったけど、「こんの・・・！」ルシルが放った、なのはから複製した誘導操作弾はうざいくらいに追い縋って来る。

「せいっ！」「やあ！」

わたしは"キルシュブリューテ"を、トリシュが"イゾルデ"を振るうことで全弾迎撃した。そして「来たね・・・！」はやてとルシルがその姿を見せた。わたし達の居る屋上にそっと降り立つ２人が、いつの間にか人の姿に戻って双銃を携えたセレネとエオスと頷き合った。

「これは・・・ルシル様の作戦ですか？　それともはやて様の作戦ですか・・・？」

「ルシル君やよ。トリシュちゃんが入ったチームの勝率は８割。そやからチームメイトは余裕を持つ、油断するんや。そうみんなに聞いた」

「だからトリシュをどうにかすることこそが勝機になる、と踏んだわけだ」

――ブリューナク――

――プラズマランサー――

――フレイムブレット――

――フローズンブレット――

四方から計３０発の射撃魔法が雪崩のように襲いかかって来た。狙いはターゲットスフィア。判りやすいからこそ対処もしやすい。

――クヴァドラート・ヴァイガーン――

すでに最高クラスの結界魔導師として認められているセラティナ直伝のバリアタイプの防御魔法を発動。術式名の通り正方形状で、わたしとトリシュのターゲットスフィアを完全防御。だけど、いま扱える魔力はDランクだからそう長くは保ちそうにない。とは言ってもこの包囲を抜けられることが出来るだけで十分。

（狙うのは、はやて・・・！）

欲張ってルシルを狙うのは自殺行為。ここは手堅いところから攻めて行くのがベスト。はやても強くなってるけど、それでもまだまだ。セレネとエオスからって手もあるけど、逢わなかった期間にどんな新魔法を習得したかは判らない。下手に手を出して返り討ちにあうなんて御免だもん。

「せぇぇーーーいっ！」

「っぐ・・・！」

はやての元へ一足飛びで最接近して"キルシュブリューテ"を振るう。狙いは当然、はやてのターゲットスフィア。でもはやても負けてなかった。わたしの一撃を"シュベルトクロイツ"を水平に構えることで防御して、「セレネちゃん、エオスちゃん！」２人の名前を呼んだ。

――チェーンバインド――

クリーム色の魔力光で創られたチェーンバインドが８本、わたしを拘束しようと伸びて来たから鍔迫り合いを止めて後退。

――マニューバＡ・Ｃ・Ｓ――

「いっけぇぇぇーーーっ！」

はやてが突撃して来た。なのはから教わったっていう突撃技だ。突き出された"シュベルトクロイツ"はやっぱりわたしのターゲットスフィアを狙ってる。さらにはセレネとエオスも突っ込んで来るのが見えた。３対１でわたしを押し切ろうってわけか。

「上等！！　トリシュ！　悪いけど・・・」

「問題ありません！　勝って、ここで合流しましょう！」

――バスターラッシュ・アイシングフレア――

はやての突撃とスクライア姉妹の二重砲撃を躱した後、トリシュとルシルを置いて、はやてとセレネとエオスを引き連れて別の柱の屋上へと移動する。

「リイン！」

『バルムンク、いきます！』

はやてとリインの繰り出すのは剣状射撃魔法。６本のバルムンクが扇状に拡散発射されてきたからシールドを張って防御。間髪入れずに「もらったぁぁーーー！」エオスが両手に携える双銃からバスケットボール大の火炎弾を２発と発射。それを警戒した直後、セレネが同じように双銃から２発の通常の魔力弾を発射。

「「ワイルドファイアーワークス！」」

「っ！！」

火炎弾に着弾する魔力弾。するとそれが切っ掛けとなって火炎弾が炸裂して、小型の火炎弾数十発を全方位にばら撒いた。あぁ、だからファイアーワークスなわけか。

「風牙烈風刃！」

それらに対してわたしが放つのは風圧の壁。わたしと、わたしのターゲットスフィアを覆うように発生させて、迫って来ていた火炎弾を全弾消し飛ばす。

（セレネとエオスは、相変わらず２人で１人のコンビネーションを取っているのか・・・）

なら、先にどっちかを潰そう。片方とはやてのコンビネーションが上手くいくわけないしね。そうと決まれば、サクッと「撃破させてもらうよ！」エオスに向かってダッシュ。待ち構えるのははやて。でもさ「魔力を抑えられてる状態のあなたに、わたしを止められる！？」

わけないよね。

「やってみな判らへんよ！」

――クロイツシュラーク――

"シュベルトクロイツ"に魔力を付加しての直接打撃魔法。魔力付加されているのは先端の剣十字のみ。ゆえに退くことなく前進してはやての懐に入り込んで、振り下ろし中の柄を左腕で防御。即座に"キルシュブリューテ"の刺突ではやてのターゲットスフィアを狙う。

――コンプレッション・クラッカー――

わたしとはやての頭上に発射された魔力弾が1発。撃ったのはセレネだ。その魔力弾が炸裂。何が起こるのかと思えば「（そう簡単には行かないか・・・！）こんのぉぉぉ！」周囲の大気を急激に圧縮し始めた。わたしはその場に留まれずに足が宙に浮いて、吸い込まれそうになる。けどはやてはしっかりと屋上に足を付けてた。

「クリーム色のバインド・・・！　エオスぅぅーーーーー！」

はやての両足首には、対象をその場に固定して捕縛するリングバインドが掛けられてた。セレネが圧縮弾を撃ち、エオスがはやてが巻き込まれないためのバインド発動。

「わたしらの勝ちやっ！」「「もらったぁぁぁーーーー！」」

――バルムンク――

――フレイムブレット――

――フローズンブレット――

体勢を整える前に発射された剣状射撃・火炎弾・冷気弾、計２４発。とにかく今は「パンツァーシルト！」シールドでターゲットスフィアを護る。そしてわたしに向かって来る流れ弾は"キルシュブリューテ"で迎撃。けど遅れてわたしに届こうとしていた火炎弾１発が迎撃できそうにない。当たる、って思った時・・・

「のわっ！？」

大気圧縮による吸引力が突然切れたことで落下。それで運良く躱すことが出来た。お尻から叩きつけられる前に体勢を立て直して着地。そこに「バスターラッシュ！」火炎砲と冷気砲の同時攻撃。横っ跳びして避けたところに「クロイツ・・・シュラァァァーーークッ！」はやてが"シュベルトクロイツ"を振り下ろしてきた。

「ぅぐ・・・！」

「せぇぇぇーーーい！！」

"キルシュブリューテ"を水平に構えて防御。さらにまた「それそれー！」スクライア姉妹の火炎弾と冷気弾が襲いかかって来るし。

力づくではやてを弾き飛ばして、飛来してくる弾幕は「烈風刃！」風圧の壁で迎撃。
弾き飛ばしたはやては「ブリューナク！」そのまま短剣型射撃を連射して来た。それをシールドで防いで、「真空刃！」真空の刃ではやてのターゲットスフィアを狙う。けれど、魔力付加したままの"シュベルトクロイツ"で叩き潰してきた。

（うわぁ、やってくれるじゃんか、はやて・・・！）

全くと言っていいほどに魔力が付加されてないとしても、それなりの威力はある一撃だったのに。本当に強くなったよね、はやて。リインとユニゾンしてるからってこともあるだろうけどさ。それでも・・・

「強くなったじゃん！」

落下を始めたはやての元へ跳ぶ。はやては「リイン、シールド！」自身とわたしとの間にシールドを張って、わたしの攻撃に備えた。わたしは"キルシュブリューテ"を振りかぶりながら最接近。

（セレネとエオスは・・・うん、ちゃんと攻撃準備に入ってるね♪）

そしてわたしは、「あらよっと」"キルシュブリューテ"を振り下ろすことなくシールドを足蹴にして跳ぶ。向かう場所は双銃を構えていたセレネとエオス。

「あ・・・！」『え・・・！？』「「んな・・・！？？」」

驚くはやて達に思わず笑みが出ちゃう。スクライア姉妹はすぐに驚きを押さえ込んで銃口をわたしに向け直した。

「「バスターラッシュ・アイシングフレア！！」」

発射される火炎と冷気の二重砲撃。さすがに魔力弾幕じゃわたしを仕留め切れないって判断しての砲撃かな。わたしは前面にシールドを展開。砲撃が着弾する前にシールドに足を付いて、着弾直前に蹴る。シールドに着弾する二重砲撃が爆発を起こす。直上に跳んだわたしを呑み込む煙幕。

「風牙・・・真空刃！　二連！」

煙幕に呑み込まれる前に確認したセレネとエオスの居場所に向かって真空刃をに連続で放つ。落下が始まる頃、「ぎゃぁぁぁす！」2人の悲鳴が聞こえた。

（もしかしてターゲットスフィアじゃなくて本人に当てちゃった・・・？）

煙幕の下から出て、屋上に着地。すぐにスクライア姉妹を確認する。さっきのはどうやら杞憂だったようで、2人のターゲットスフィアは消失してた。ということは、あとは「はやて！」のみ。

「シャルちゃん！」

――マニューバA・C・S――

例の突撃技でわたしに最接近して来たはやて。わたしは真正面から受け立つために"キルシュブリューテ"を振りかぶって、間合いに入ったはやてのターゲットスフィアに向かって振り下ろした。その結果・・・

「・・・・って、あれぇぇぇーーーー!?」

手応えはあった。それを示すかのようにはやてのターゲットスフィアを真っ二つに斬り裂いた。それなのに、わたしのターゲットスフィアも消失してた。

「やったー!」

『やりましたですぅー!』

「え? へ? な、なんでー!?」

はやてとリインの目線の先、競技場上に展開されてるモニターを見る。そこにはわたし達Aチームの残存メンバー数は0。それはつまりトリシュも負けちゃったってわけで・・・。

「というか待って! どうしてわたしのターゲットスフィアまで消されちゃったわけ!?」

「ごめんな、シャルちゃん。わたしは、リインと一緒なんよ。2対

1ってことや」

はやてが説明してくれた。私への突撃を始める直前に、上空にリインがブラッディダガー1本を待機させていたって。わたしの意識がはやての突撃に集中しているところに、リインが射出。わたしの一撃がはやてのターゲットスフィアに当たると同時に、わたしのターゲットスフィアを撃ち抜いた・・・と。

「本当なら、マイスターはやてが失格しないようにするつもりでしたけど、シャルさんの一撃が速過ぎて間に合いませんでした」

はやてとユニゾンを解除して姿を現したリインがペロッと小さな舌を出して残念がった。はやては「そうゆうわけや。リインが居ってくれたからこそ、わたしはシャルちゃんを失格に出来たんよ」って悔しそうに苦笑。

「はぁぁぁ・・・。うん、わたしの負け。負けだよ」

それでもわたしは生き残れなかった。それはつまり、負け、なのだ。わたしはその場に座り込んで、大の字になって寝転がった。

Ｅｐｉｃｏｌ３欠片を集めて全容を描く

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

ザンクト・ヒルデ魔法学院を見学することになった俺とはやてとアインスとリイン、そしてシャル。そして今は、俺たち共通の友人であるトリシュタンとセレネとエオスの居る４年３組の授業を見学・・・というか、参加している。

魔法を使っての実習科目の１つで体育のような授業だ。クラスを２チームに分け、ターゲットスフィアと呼ばれる魔力球を帯同させて競技場内を駆け回り、相手チームのメンバーのターゲットスフィアに魔力攻撃を当てて失格にする、というゲームだ。

『順調にＡチームのメンバーを失格に出来てますです」

「ルシル君の言った通りやなぁ～。わたしらＢチームが圧倒してるよ。さすがやな、ルシル君」

はやてとユニゾンしているリインからそう報告が入ると、はやてが俺を称えてくれたから「ありがとう、はやて」と笑みを返す。トリシュのワンマンチームなど、トリシュさえどうにかすれば容易く崩すことが出来る。トリシュ以外のメンバーは、トリシュが居れば勝てる、という楽観を抱いている。ほぼ烏合の衆と言える。なら・・・

「こちらは統制の取れたガチンコ戦法。近距離タイプと中遠距離タ

イプの子を2人1組で行動させて、トリシュちゃんの広域狙撃に期待してバラバラに動いてる子らを各個撃破」

『上手いこと作戦が進みました、さすがですぅー！』

確かに上手いこと行ったな。競技開始直後、俺は動物形態に変身させたセレネとエオスをAチームの陣地へ向かって投げ飛ばした。飛行魔法が使えない以上、エリア内での機動力――移動速度が問題になってくる。シャルとトリシュの出撃を止めるためには、高速で投げ飛ばすしかなかった。

「セレネちゃんとエオスちゃん、それにヨルク君もよう頑張ってくれてる」

ヨルク君。俺たちBチームの一員で、全長1m少しのコンドルへと変身している。彼はスクライア姉妹を背に乗せて、空からシャルとトリシュを足止めする2人の移動手段として頑張ってくれている。飛行魔法は禁止だが、変身しての飛翔は禁止されていない。ルールを確認したうえで採った作戦だ。

「さて。行こうか、はやて、リイン。セレネ達もそろそろ限界だろう」

スクライア姉妹にシャルとトリシュを足止めしてもらい、その間にAチームを全滅させる。そして俺たちはスクライア姉妹と合流して、シャルとトリシュを失格にする。先に他のメンバーを全滅させたのは、シャルとトリシュとの戦闘時に邪魔されないため。下手に残し

て、最大のチャンス時に横やりを入れられるなんて最悪過ぎる。

「うんっ！」『はいですっ！』

俺とはやてもツーマンセルでエリア内を駆け、Ａチームの何人かを失格にさせた。これでもうＢチームの他のメンバーだけに任せられる。この状態で逆転できるのは、トリシュとシャルくらいだな。だから俺たちは、あの２人を失格させないといけない。はやてを横抱きに抱え上げて、失格寸前だったスクライア姉妹と、シャルとトリシュの戦いに参入する。そして・・・

「問題ありません！　勝って、ここで合流しましょう！」

「トリシュとの一騎打ちか。・・・いいだろう、やろう」

はやてとスクライア姉妹はシャルと戦うことになり、俺はトリシュと一対一の決闘形式だ。トリシュは大弓型のアームドデバイス、"イゾルデ"を構えて魔力矢を魔力弦に番えた。弓騎士相手に距離が近いから、という条件は役に立たないだろうな。
はやてとの戦いで、近接戦もこなせることは承知しているし、射る矢の効果も全ては掌握していないから、迎撃も回避も下手に取ると痛い目に遭いそうだ。だからと言って、二の足を踏むなど出来ないよな。はやてだって立ち向かったんだし。

「参ります！」

――速翔けし一輪の討ち華――

指を矢羽根から離すのを見逃さず、すぐに一歩分横に移動。その瞬間に先程まで俺が立っていたところを通過した。トリシュが弦を引いて魔力矢を創るより先に「アクセルシューター！」なのはから複製した誘導射撃魔法を５発と一斉発射。

（魔力制限がキツイな。得意（コード）の槍群が放てそうにない・・・）

トリシュは回避を選択しようとしたが、アクセルシューターの誘導操作性能は嫌というほど良く知っている、そう逃げられるものじゃない。トリシュも自身の周囲を高速旋回して包囲してくるシューターに「くっ・・・！」苦悶の声を漏らした。もう諦めるのか？と思えば、彼女は"イゾルデ"の魔力弦を消して、握り部分を両手で握った。

「やぁぁぁーーーッ！」

そして"イゾルデ"を身体ごと旋回させてシューターを真っ二つに斬り裂いていった。やるじゃないか。しかしここで手を緩めるような真似はしないぞ。次は「プラズマランサー、セット」フェイトの雷槍を４本と展開。トリシュは"イゾルデ"を半ばから分離させて双剣へと変形させた。

「エヴェストルム」

ニュートラルのランツェフォルムで"エヴェストルム"を起動して、近接戦に備えることにした。トリシュは両腕を大きく広げ、前傾姿

勢を取った状態で突撃して来た。それに対して「ファイア」俺は雷槍をトリシュの行く手に向けて射出。トリシュの軌道がそのままなら直撃するコースだ。

「っ！！」

トリシュは息を止め、速度を緩めることなくジグザグに右往左往することで、迫る雷槍を紙一重で躱した。弓騎士としての目の良さと、数多くのパラディンに鍛えてもらったという運動神経と身体能力があってこそ出来る芸当だな。

最後の1本を避けて元のコースに戻ったトリシュが"エヴェストルム"の間合いに入ったことで、刺突を繰り出す。ターゲットスフィアを狙うのも良かったんだが、もうしばらくトリシュの技を引き出したかった。

「さぁ、どう反撃する？」

「こう、します・・・！」

「お？」

トンと屋上を軽く蹴って跳んだトリシュが"エヴェストルム"の穂の表面に降りた。俺のターゲットスフィアを狙うためにそこからまた跳ぶと察し、「ツヴィリンゲン・シュベーアトフォルム」"エヴェストルム"の柄を分離させた。

「っ！？」

跳ぶために脚に力を込めた最中に、足場となっていた"エヴェストルム"が真っ二つに折れたことでトリシュもまたガクッと落下。俺は時計回りにクルッと旋回して遠心力を乗せた横薙ぎの一閃を繰り出し、双剣状態の"イゾルデ"を盾にすることで防御したトリシュをそのまま弾き飛ばす。

「これはどうだ・・・・！」

手にしていた"エヴェストルム"を高速回転させるようにして水平に投げ飛ばす。トリシュは未だに空中。それでも「まだ、です・・・！」トリシュは辛うじて双剣で防御したが、"エヴェストルム"の長さと重さ、さらに速度が加わっていることもあって「きゃぁぁぁ！」さらに大きく弾き飛ばされた。

「さぁ、第二波だ」

足元に転がっているもう片方の"エヴェストルム"の柄の下に爪先を差し込んで勢いよく蹴り上げる。跳ね上がった"エヴェストルム"の柄をキャッチ。そして先程と同じように投擲。と同時に俺も駆けだす。着地したばかりのトリシュに"エヴェストルム"が到達。トリシュは両足を１８０度近く開脚することで腰を落とし、"エヴェストルム"をやり過ごした。

「パイチェフォルム！」

一刀目の"エヴェストルム"を落下する前にキャッチし、柄頭より

魔力ロープを伸ばす。魔力ロープはトリシュの頭上を通過した二刀目の"エヴェストルム"の柄頭と連結。鞭形態へと変形させる。手にする"エヴェストルム"をグッと引っ張り、立ち上がり途中のトリシュのターゲットスフィアを背後から襲う。

「（これ以上長引かせて、万が一にもはやて達が負けて俺対シャルとトリシュなんて構図は御免だ）アクセルシューター、スタンバイ」

シューター5発を俺の周囲に展開。うち1発は俺の背後に配置。トリシュは後方宙返りで"エヴェストルム"を避け、"イゾルデ"を連結して大弓へ戻した。そこに「シュート」シューターを発射。

「奔れ・・・！」

――群れ成す煌きの啄み――

射られる矢が途中で炸裂。鳥のくちばしのような矢尻14基となって、シューターを迎撃。残りが俺に殺到する。誘導操作ではなく直射系の射撃魔法のようで、大きく横に移動すれば容易く回避できたと思えば・・・

「貫いました！！」

――速翔けし八輪の討ち華――

高速射撃に分類されるであろう魔力矢が8本、移動先に着いたばかりの俺の目前に迫っていた。しかしまだ甘い。それらを"エヴェス

トルム"で薙ぎ払いつつ、トリシュに向かって突撃を仕掛ける。トリシュはそんな俺に向かって、今のと同じ高速射撃を連射して来た。直射系ほど回避しやすいものはない。いくら速くても、だ。

「プラズマランサー・・・！」

「雷喰らう怒涛の宝珠！」

俺は雷槍6本を一斉発射し、トリシュは矢を1本射る。その矢は魔力球として翔け、雷槍を強引に吸引して呑み込み、消滅させた。その一手が、トリシュ、君の敗北を確実にする。十二分に接近したことで、トリシュは"イゾルデ"を近接戦仕様である双剣形態に変形させた。

「はぁぁぁ！」「せやぁぁぁ！」

"エヴェストルム"を両手に携えた俺と、"イゾルデ"を両手に携えたトリシュで、お互いのターゲットスフィアを寸断すべく剣撃の応酬を繰り広げる。トリシュの剣筋は未熟だが筋は良く、確かに初等部の学生でこのレベルは反則だろうな。

「なにが！　おかしい！　のですか！」

「いや、本当に強いな、って思ったんだ。笑ったんじゃなくて感心したんだ。だから怒らないでくれ」

「なんか！　悔しい！　です！」

俺のフェイントに若干引っかかりながらも流麗だった剣筋がひどく乱れ始めた。トリシュの意識がターゲットスフィアから俺の打倒に切り変わったのが判る。あとは適当なところで、「シュート」ずっと背中の後ろに待機させておいたシューターを発射。それはもう簡単に「あっ！！」トリシュを失格に出来た。それとほぼ同時にシャルが失格になったのが判った。俺たちBチームの勝ちだ。

「ず、ずるいです！　今のはずるいですぅぅーーー！！」

「いや、そういう競技だろ？　目的を失念した君が悪い」

"イゾルデ"を懐中時計に戻したトリシュがポカポカと俺の胸を叩く。彼女の両手首を捕まえると、「納得できません！　再戦を申し込みます！」トリシュがビシッと俺に向けて懐中時計を突きつけた。この競技は3回行われるそうだ。休憩を挟んだ後、もう1度行うとのこと。

「今度はチームメイトを上手く動かそうな。でないと――・・・」

はやてとセレネとエオスとヨルク君、そしてシャルが俺たちの元へ来た。俺はチームメイトのはやて達へ歩み寄った上で「また俺たちが圧勝するぞ？」と挑発の意味を込めた微笑みを向けた。

「次は絶対負けないから！」

「この悔しさをバネにして、次は勝ちます！」

その後、俺たちは残り二戦も何も問題なく行った。シャルとトリシュ、Ａチーム全体も一戦目と違ってすごく動きは良くなったんだが、結局は俺たちＢチームが三連勝。そう容易く逆転されるわけにはいかないさ。とまぁ、こうして最初の見学は終わった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒はやて†††

一時間目を、セレネちゃん、エオスちゃん、トリシュちゃんの居るクラスでの実習参加とゆう形で終えて、そこから別の学年・クラスの教室で座学の見学をしたわたしらは、お昼時ってこともあってザンクト・ヒルデ魔法学院の食堂へとやって来た。

「お弁当持参の生徒も居ますが、ここダイニングで昼食を摂る生徒も居ますし、ここでお弁当を持ち寄って食事をする生徒も居ます」

シスターシャッハからそう説明を受ける。ちなみに食事代は基本的に無料らしくて、聖王教会系列の学校は大体そうらしい。シャルちゃんが言うには「聖王教会は大金持ちなの。それと海や山に挟まれたザンクト・オルフェンが食材の宝庫っていうのも一因かな」とのこと。

「「おーい！」」

「遅れてごめんなさい、皆さん！」

ダイニングの入り口で待つこと数分。わたしらに大手を振りながら

駆けて来るセレネちゃんとエオスちゃん、それにトリシュちゃん3人と無事に合流。ここで「それでは私は少し失礼しますね」わたしらに気を遣ってかシスターシャッハが席を外した。

「ところでトリシュ。その大きな包みはなんだ？　登校時には持っていなかったよな・・・？」

「あ、はい。ディナスが、皆さんと一緒に頂いて下さい、とお弁当を届けてくれたんです。これを受け取りに行っていて遅れてしまいました」

トリシュちゃんが抱えてるんは重箱みたいなお弁当箱や。ディナスさんの厚意に甘えて、みんなでお弁当を頂くことにした。わたしらは食堂の空いてる席を見つけて座る。1つの長テーブルを挟んで椅子は6脚。わたしは車椅子でええし、リインはテーブルの上に直座り。そやから椅子の数は十分や。

テーブルの上にセレネちゃんとエオスちゃんのお弁当2つと、トリシュちゃんが持って来てくれたディナスさんのお弁当箱4つを広げる。みんなで「いただきます！」して早速いただく。ディナスさんの料理はホンマに「美味しい！」から、セレネちゃんとエオスちゃんも自分のじゃなくて、ディナスさんのお弁当をつつく。

「うわっ、何コレほんとうに美味しい！」

「トリシュのお弁当っていつも美味しそうだなぁって思ってたけど、これほどとは思わなかったよ！」

「自分のを食べなさいよ、セレネ、エオス！　あなた達のも十分美味しそうじゃない」

「「だって～。これほどの物を食べちゃったらもう・・・」」

自分のお弁当を見向きもせんとトリシュちゃんのお弁当ばかりを食べる。そんな2人のお弁当箱からおかずを1品ずつフォークで突き刺して口に運ぶシャルちゃん。するとルシル君もトリシュちゃんも「いただきます」って2人のお弁当箱からおかずを貰ってくから、「わたしも、いただきます～」おかずを貰う。それにアインスとリインも「いただきます」貰う。

「美味しいですよ、お2人のお弁当」

「うん。普通に美味しいじゃないか」

「ホンマや。セレネちゃん、エオスちゃん、十分すぎるほどに美味しいよ」

「ああ。不満を抱くほどでもないと思うけど・・・」

「・・・少なくとも、わたしのより美味しい」

評価は上々。お世辞やなくてホンマに美味しい。最後にリインが「コレを作ったのはお2人なんです？」って訊いたら、「そうだよ」セレネちゃんが答えて、「一応は女の子だしね」エオスちゃんが苦笑。

「ぅぐ。なんだろ、２人より女子力が低いって言われてるようで悔しいんだけど」

そう言うてガックリ肩を落とすシャルちゃんを見て、「少なくてもシャルに勝ったのは嬉しいね♪」セレネちゃんとエオスちゃんはタッチを交わした。それから3人のお弁当箱をみんなで食べながら雑談。セレネちゃんとエオスちゃんは、わたしらより1こ年上やのにどうして４年生なんか？とか。

「初等部の魔法学科ってさ、３年までは基本的なレベルで、４年と最終学年の５年は応用的な事を学ぶんだけど」

「どうせ5年から入って中途半端に習うより、1学年落として最初っから習う方が良いって話でね」

そんなことをお喋りしながらお昼ご飯を終えて、お昼休みをどうして過ごそうか、って話になった時、「きゃぁぁぁぁぁ！」悲鳴が上がった。尋常やない悲鳴やったから「ルシル君、アインス、リイン！」局員として現場に向かうことにした。
そんでトリシュちゃん達に案内してもろたんは食堂区画に隣接する、食材を保管しておく倉庫やった。すでに初等部・中等部の生徒やシスター、スーツ姿の先生たちが集まってて、「生徒は下がって！」って生徒たちを近付けへんように必死やった。

「プラダマンテとシャッハが居る！　事情を聴いてみるよ！」

人だかりを縫って駆け出すシャルちゃんにわたしらも続く。そんでシャルちゃんがシスターから聴き出したのは「食材泥棒・・・？」やった。詳しく話を聴くと、この半年、月1の回数で食料庫が荒らされてるらしい。そんで今日、また荒らされてしもうて、最近勤め始めた食堂の職員さんがその光景を見て悲鳴を上げたってことや。

「最初は注意しないと気付かない程度でしたけど、日が経つにつれて多くの食材を、そして派手に荒らされるようになってしまっているのが現状です」

「これまでに何度かトラップや監視カメラを設置したのですが、どれも効果はなくて。荒らされようからして動物の仕業だとは思うんです。それにしてはトラップも監視カメラも引っかからないし映らない、という次第です」

シスター・プラダマンテとシスターシャッハから事情は伺った。とここで「ねえ、ここはわたし達に任せてくれない？」シャルちゃんが事件解決を買って出た。わたしも「何かお役に立てることがあれば、お手伝いします！」願い出る。

「試しに任せてみない？　捜査官としてそれなりに経験も積んだし、学院関係者じゃ目の行かないところにも着眼するかもよ？」

そう言うてウィンクするシャルちゃんに、「学院長に伺ってみます。少し待ってください」シスター・プラダマンテがわたしらに背を向けるとどこかに通信を繋げた。そんで「みなさん。よろしくお願いします」捜査の許可が下りたようや。そうゆうわけで早速調査を開

始や。

「――それにしても酷いですね。手当たり次第に食い散らかしたという感じです」

「そうやね～。足の踏み場もない」

「メチャクチャです～」

食料庫は教室6部屋分の広さはあるけど、車椅子やと動けへんから騎士服に変身。そんでルシル君とアインスとリイン、シャルちゃんらと一緒に捜査。セレちゃんとエオスちゃん、トリシュちゃんは一般生徒の括りになってしもうて外で待機や。

「やっぱりおかしいことばかりだな」

「おーい。関係者への事情聴取を終えて来たよ～」

ルシル君とシャルちゃんには外で関係者に話しの聴き込みを担当してもろてたんやけど・・・。ルシル君の唸るようなその言葉に「なんかあったん？」そう訊いてみる。

「ああ。聴取の結果、野生動物が犯人だろう、という話ばかりだったんだが。どう考えてもおかしいだろ？」

「決まって月一回の荒らし。野生動物が律儀に守るわけがないよ。それに・・・」

「野生の勘であればトラップくらいはクリア出来るだろうが、監視カメラに映らないのは妙だ」

「というわけで、学院関係者に被疑者が居る、とわたしとルシルは結論付けた」

ルシル君とシャルちゃんからそう報告を受けた。聴取内容を箇条書きで記されたデータをモニターで観る。わたしも「そうやね。魔法を使ってのトラップとカメラを解除できる野生動物なんておかしいわ」そう判断した。

「となるとペットでしょうか。荒らされた食材は何かしらの動物の歯型が付けられています」

「そうですね～。ヨダレでベトベトしてますし、飼い主さんがトラップやカメラを解除しているということですかね～」

「そやったらその線で捜査やな」

食料庫荒らしの真実は、学院関係者の誰かがペットを連れ込んで、食料庫の食材を餌として与えてる、と。すると結構大きな動物やなぁ。食い散らかされてた食材を見たけど、牙で突き立てられてるものもあった。たぶん大人のライオンとかよりもうちょい大きい感じや。

「それでなんだが、少々気になる生徒が3人居たんだが・・・」

実地検証をこれくらいにして関係者にもう1度事情聴取を行う段階に移ろうとした時、「え、そうなの？　だったら確保くらいしなよ」

「そうは言っても近寄る前に逃げられたというか。それに体格からして初等部1年で、女子だったから、乱暴な真似は出来なかった」

そう言うてルシル君は肩を竦めた。それはともかくとして「なんで、その子らが怪しいって思うたん？」訊いてみる。逃げられた、だけならこの一件に確実に関わってくるってことはあらへんはず。

「関係者への聴取中に何度か接近した。その時は逃げなかった。が、その子たちに目を向けたうえで近付くと逃げられた。話を聞かれるのが嫌だという表れだ。それに、人は不安な時、体の一部を触るという。他に、リーダー格っぽい子が背中を丸めて腕を組んでいた。これも不安に陥っている仕草なんだ」

「へえ～。査察官研修で教わったの？」

「いや、そういう経験も歴代セインテストとしての能力の1つさ。心理学でね、研修では重宝しているよ」

そうゆうわけで、その女の子3人についてシスターに訊いてみることにした。そんで初等部1年から念のための3年までの生徒名簿と画像を見せてもらうことになって、「この3人だ」ルシル君の記憶力の良さもあってすぐに見つけ出すことが出来た。

「アルマちゃんとベリトちゃんとドロテアちゃんやね」

登校時から放課後までいつも3人で行動してる初等部2年の仲良し3人組とのこと。シスター・プラダマンテが「この生徒たちが、食料庫荒らしの関係者と？」信じられへんって風にルシル君を見た。ルシル君は「それを確かめるために、この3人と話をさせてほしいのですが」って答えた。

「ですけど・・・」

「出来るだけ早いうちに解決しないと、大変な事態になるかもしれません」

渋るシスター・シャッハと、解決を急ぎたいって言うルシル君。リインが「どうしてです？」って真っ先に訊いた。

「月一回の荒らし。初期は注意しなければならない程に少ない被害。日が経つにつれて目に見えて派手な荒らしになってきた。そして今回。これまでとは比べられない程の荒らしとなった」

「そういうことか・・・！」

「アインス？」

「この子らはペットのことを制御できなくなっているんです、主はやて。管理下から離れた獣は・・・危険です」

「にゃるほど。最初は言うことを聴いていたから小さな被害だったけど、だんだん手が付けられなくなって大きな被害へ。そして今日の暴走っぽい荒らしってわけかぁ～」

重い沈黙が降りる。そんで「この３人をここ応接室へ呼びます」シスター・プラダマンテが、アルマちゃんとベリトちゃんとドロテアちゃんに直接連絡を入れて応接室に呼び出した。その時の３人の返答の声は震えてた。待つこと数分、「失礼します」３人がやって来た。わたしらはそれぞれ自己紹介して、わたしらの対面のソファに座らせる。

「それじゃあ、ちょっとお話を聴かせてもらってもええかな？　大丈夫。シスターも学院長も被害届は出さへんってことやから、正直に全部話してもらえると助かります」

出来るだけ優しく語りかける。食料庫荒らしの一件については、３人への厳重注意で済ます、ってことを待ってる時間に学院長とシスターがきめたことや。そやからわたしらはペットの捕獲に切り替えた。これ以上、野放しにしておくわけにはいかへんから。

「なんのことか、わたしには判りません」

リーダー格ってゆうアルマちゃんがそう言うた。すると『鼻に触れている。嘘を吐いていると考えて良い』ルシル君からそんな思念通話が入った。アルマちゃんの右隣に座るベリトちゃんも「ボクも判らないのです」って言うて、左隣に座るドロテアちゃんも何度も頷いて同意を示した。

『ベリトは目を擦り、ドロテアは口元を手で隠そうとする。どちらも誤魔化しや自分の言葉を隠そうとする表れだ。まぁ、そんなことに注意しなくても雰囲気からしてバレバレなんだが』

ルシル君の言う通りや。わたしでも、３人が必死に何かを隠そうと、誤魔化そうとしてるのがよう判る。そやから「君たちが匿っているであろう動物、もう君たちでは手に負えないんだよな」ルシル君がそう断言。嘘や誤魔化しはもう通用せえへんことを示すために。それからわたしらのこれまでの推測を伝える。

「――どうやろ？　間違ってへんかな？」

話し終えた後、わたしが確認を取る。強い握り拳に動揺してるんか目はキョロキョロ。そんでシャルちゃんが「もういいでしょ？　あなた達のためにも、匿ってる子のためにも、正直になって」優しい声色で声を掛けた。

「っ！」

「「アルマちゃん・・・」」

「・・・わたし達も、もうどうすればいいのか・・・解らなくて・・・」

とうとうアルマちゃんが本当の事を話してくれた。事の始まりは半年前。アルマちゃん達が学院の敷地内で花壇を作るための活動中、

地面に埋められてた卵を拾ったそうや。動物図鑑で卵の正体を調べたんやけど判らへんかった。そやから・・・

「どんな子が生まれるのか興味を持って、温めたんです」

「そして生まれたのは・・・」

「ドラゴンでした」

ドロテアちゃんの発したその４文字にわたしら全員が絶句。ドラゴン。魔法があって、異世界があって、いろんな不思議があった。そやからトンデモアニマルも居るんかなぁ、って思うてたけど、まさかドラゴンとは思わんかった。どないしよう。めっちゃ見たい、触りたい。

「最初は、みなさんの言う通り大人しく、言うことを聴いてくれました。本当に小さな命だったんです」

「だけど、時間が経つにつれて大きくなって、我が儘になって、言うことを聴かなくなって・・・」

「・・・今日、気付いたらもう勝手に食料庫に入り込んじゃったんです・・・」

「「「ごめんなさい・・・」」」

その後、アルマちゃんとベリトちゃんとドロテアちゃんから聴取を

終えた後、３人から聴き出した卵の形状と柄を「セレネちゃん、エオスちゃん。どう、心当たりある？」２人に教えて、どんな種類のドラゴンかを訊いてみた。

「う～ん、そんな柄の卵のドラゴンなんて知らないなぁ～」

「新種なのかもよ。そもそもドラゴンなんて管理世界出身者でもそうそうお目に掛かれるものじゃないし。それに、スクライアでも知らない事はたくさんあるよ」

２人からは目ぼしい情報は得られへんかった。そんで「ダメだな。ユーノも知らないそうだ。一応、無限書庫を使って調べてくれるそうだ」ルシル君は数少ない男友達のユーノ君に連絡を入れてもろたんやけど、ユーノ君でもアカンかったようや。

「誰もが認める博識のルシルでも、やっぱ知らない事もあるんだね～」

「当たり前だ。全知全能な人間なんてかえって気味悪いだろ？　俺だって学んでいないものは知らない。ま、一度学んだらもう忘れないから、いつかは全知になるかもな」

そう言うたルシル君はどこか寂しげな顔やった。それからユーノ君からの調査報告が来るまで学院内を調べようってことになって、わたしらはそれぞれ騎士服に着替えて見回りを始める。まずは、アルマちゃん達から聞いた、いつもドラゴンを匿ってるってゆう学院近くの森の中。空と地上両方から捜索。

『しかしＡＭＦを備えたドラゴンとは。対魔導師戦では危険な能力です。主はやて、お気を付けて。ルシル達も、十分に注意してくれ』

もう思念通話くらいしか使えんなったアインスは学院でお留守番。そんなアインスから気遣い。魔法のトラップやカメラが機能せえへんかった理由はそれやった。

ＡＭＦ――アンチ・マギリンク・フィールド。魔力結合や魔力効果発生を無効にするＡＡＡランクのフィールド系魔法防御。フィールド内では攻撃魔法はもちろん、飛行や防御、機動や移動に関する魔法も妨害されて、濃度が増すほどに魔力の結合が解除されるまでの時間が短縮されるって学んだ。

『うん。おおきにな、アイン――』

アインスに応えようとした時、学院からドンって爆発音と、遅れて噴煙が上がった。よう見ると、大きく翼を広げたドラゴン１頭が地面から生えるような形で姿を見せた。

「デカ！」

「想像以上に大きいです・・・！」

「アルマちゃん達・・・１５０ｃｍくらいって言うてたよな・・・？」

「あ、ああ。だがあれはどう見ても・・・３ｍはあるぞ」

とにかくわたしは『アインス、大丈夫か？』アインスの無事を確認する。すると『はい、問題ありません。あの、ドラゴンが出現しました』アインスは答えてくれた。急いでルシル君たちと合流して、『うん、見えてる。すぐに向かうな！』校舎のすぐ側にある第1競技場へ飛ぶ。

『アインス、生徒の避難はどないや！？』

『え、あ、いえ・・・。おそらくもう終わるかと思います』

『終わる・・・？　避難がか・・・？』

『・・・いえ。ドラゴン退治が、です』

アインスから返って来たのは力の無い言葉。ドラゴン退治が終わる。ルシル君らと顔を見合わせる。シャルちゃんが「とりあえず急ご！」先行したから、わたしとルシルとリインも続いた。そんで現場に着く前、「ドラゴンが・・・！」ゆっくりと倒れてくんが見て判った。

「アインス！」

「主はやて！」

第1競技場に降り立って、ドラゴンの側に居ったアインスに駆け寄る。ドラゴンに群がる生徒に、「ほら、離れて！」近付かへんように注意する先生たち。そんで「シスター・プラダマンテ・・・」が剣1本を携えて佇んでた。側にはアムルちゃん達も居って、「ごめ

んね・・・！」泣き崩れてた。

「プラダマンテ。殺したの・・・？」

シャルちゃんがちょう責めるような声色でそう訊いたら、「いいえ。気を失わせただけです。無暗な殺生なんて好みませんから」シスター・プラダマンテは剣を鞘に収めながら答えた。

「このサイズは幼竜です。まだまだ学の足りない子供ですから、本能に忠実なんですよ。そんな子供を殺すわけにはいきません」

その後、ドラゴンの生態を研究してる施設に連絡が行って、ドラゴンは引き取られた。後日に知らせてもらったんやけど、ドラゴンの名前や、その種類が棲息してる世界が判明したことで、その世界に還されたとゆうことや。

「――なんやあっという間に1日が過ぎてもうたな～」

陽が傾き始めた放課後、わたしら見学組はシスター・プラダマンテと挨拶を終えた後、トリシュちゃんとセレネちゃんとエオスちゃんを待つために正門で待機中や。午前中はちゃんとした見学やった。そやけど午後はほとんどドラゴン騒ぎに費やしたけどな。でもま「楽しかったな♪」ってみんなを見る。

「ああ」

「ホント♪」

「そうですね」

「良い経験になりましたです」

こうして、わたしらのザンクト・ヒルデ魔法学院の見学ツアーは終わった。トリシュちゃんとセレネちゃんとエオスちゃんとは途中まで一緒に帰って、わたしら見学組は本局・第零技術部へ戻って、そこから海鳴市に帰った。

Ｅｐｉｃｏｌ４病罹れば利あり害あり

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

「ルシルぅぅーーーーっっ！！」

怒声をあたしは上げた。だってしょうがないでしょ。あたしの姿に変身してるルシルがまたあたしの想定外のことを仕出かしたんだから。そんなあたしに「落ち着いて、アリサちゃん！」なのはがそう言って、「そんな大声出したらダメだよ！」フェイトが注意してきて、「熱が今以上に上がっちゃうから！」そしてすずかが、ベッドの上に立ち上ったあたしを寝かそうと袖を引っ張った。

「うぁ・・・」

みんなの言うように視界がぐらぐら揺れる。あたしは大人しく座って、もう１度ベッドに横になる。すずかがあたしに布団を被し直してくれて、あたしが立ち上った時にベッド縁まで吹っ飛んだ濡れタオルを「アリサさん。大丈夫です？」リインが拾ってくれて、あたしのおでこに乗せてくれた。

「あー、大丈夫よ。ありがとう、リイン。・・・あのさ、ゴメンなんだけど、タオル濡らしてくれる？　ちょっとぬるくなってきたから」

「あ、はいです」

「私がやるよ、リインちゃん」

リインからタオルを受け取ったすずかが、あたしのベッド脇にあるナイトテーブルに置かれてる洗面器にタオルを濡らした後、あたしのおでこに乗せてくれた。あぁ、冷たくて気持ちいい～。

「アリサちゃん。一応、ルシル君を呼び戻すか・・・？」

はやてがモニターに映るルシルからあたしに視線を向けてそう訊いてきた。あたしの部屋の中央に展開されたモニターには今、うちの家で催されてるホームパーティの様子が映し出されてる。

そしてルシルは、熱を出して参加できないあたしに代わって参加してくれてる。最初は、これで大丈夫、なんて思っていたけど、今となっては自分の選択のミスに頭を抱えたくなる。とりあえず「そうね。お願い」ルシルを呼び戻すことにした。

（大事なパーティだったからルシルにあたしの代わりを頼んだんだけど、こんなことになるんなら正直に不参加を選べばよかったわ・・・）

どうしてこうなったのか。それは今朝まで遡らないとダメ。

・―・―・回想よ！・―・―・

「ちくしょう。これ見よがしにイチャイチャしやがって」

シャル達４年２組の教室前の廊下でみんなで話をしてる時、シャルがある方を見ながら悪態を吐いた。そっちを見ると、男子と女子が仲良く並んで笑い合ってる。あれって確か、「あの男子だっけ、ルシルにやきもち焼いて敵視してたのって」少し前まで２組の問題になってた男子と女子。

「そうやよ。ちょう前にシャルちゃんが恋のキューピットを買って出てくれてな。そんで刀梅ちゃんと武塔君、付き合うことになったんよ」

「俺と亮介の問題は片付いたが、今度はシャルがあの２人の様子でイラついているんだよ」

「こっちは全く以って上手くいってないのにぃ～～！　ああんもう！　恋のキューピットなんてやるんじゃなかった！　邪魔してこうようかなぁ？」

「やめんか」

悔しそうに頭を両手で掻くシャル。同じ２組のはやてとルシル、それになのは達が「それは困ったね～」と苦笑。そしてシャルは「ああもう！　ルシル！」に振り向いて、「好き！　付き合って！」って他の生徒の目がある中で堂々と告白。あたし達も、他の生徒のようにギョッとするのが当然なんだろうけど・・・

「ほぼ毎日で堂々告白とか」

ルシルが呆れてるようにあたし達もその光景に慣れてしまって、またか、って感じ。あのはやてすらも「シャルちゃん・・・」憐みの目を向けた。ルシルは「なぁ、シャル。その一発芸、もう面白くないぞ？」なんて言う始末。

「一発芸じゃないよ！　愛の告白だよ！　女の子の一世一代の勇気を、一発芸なんて・・・ひどい！」

「一世一代の意味を調べた方が良いな、シャル。君の人生は何回あるんだよ」

「むぅ！」

頬をぷっくり膨らませてルシルを睨むシャル。そしてルシルは「そうむくれるなよ」両人差し指で膨れたシャルの頬をプスッと刺したから当然、「ぶふー」口から空気が漏れる。あはは、って笑うルシルだけど、シャルの機嫌はちょっと悪いまま。

さすがに「悪かった。謝る。すまない」ルシルが頭を下げた。シャルのそんな態度がちょっと珍しいからあたし達は少し心配になる。けど、シャルはやっぱりシャルだった。シャルはルシルが顔を上げた際に、ルシルの唇と自分の唇が触れるような姿勢を取った。

「アカン！」

「さすがにやめた方が良いって」

「肉体接触のってルシルは嫌いだから、本気で怒られるよ」

はやてとフェイトとアリシアが制止を掛ける。ルシルがそれを聴いて、すすすと音もなく後退した後、「謝って損した」って言って嘆息。シャルは「いいじゃんか～。お互い、初めてじゃないんだし　」なんて言うから、「！！？」周囲がどよめいた。

「おまっ・・・！」

「だよね～、ル～シル～　」

「そういうことを、こんな場所で言うなというように！」

「いいじゃん、ホントのことんだしさ～　」

上目遣いのウィンクをするシャルと、なんでかシャルにだけ、お前、って使う時があるルシルがぎゃあぎゃあ言い争いを始める。そんな2人をいつ止めるか、って時に「へくちっ！」くしゃみが出た。ずずずっと鼻を啜って、「あー、なんか今日は寒いわよね・・・？」周りに居るみんなにそう訊いてみた。するとみんなは顔をそれぞれ見合わせた後、「そうでもないよ？」なのはが小首を傾げた。みんなもそうで、寒がっているのはどうやらあたしだけみたい。

「どれ、少し額を出して見ろ」

「ちょっ・・・！」

シャルとの言い合いをやめたルシルが急にあたしの前髪を押し退け

た上でおでこに手を置いて熱を測ってきた。ルシルは「熱があるじゃないか。よくこれで登校しようなんて思ったな」なんて非難雑じりの声色で言った。ていうか、「いつまで触ってんのよ・・・！」ルシルの手を、首を振って払う。ほら、見なさいよ、シャルとはやてを。やきもちのとばっちりなんか受けたくないのよ。

「ぅあ・・・？」

視界が揺れた。さらに急に脚に力が入らなくなってフラッと後ろに倒れ込みそうになった。そんなあたしを「ちょっ、大丈夫！？」フェイトとアリシアが抱き止めてくれた。そんな2人に「ありがとう」お礼を言って、自分の力で立とうとしても、「あれ・・・？」とうとうその場にへたり込んじゃった。

「「「アリサちゃん！？」」」

「おい、本当に大丈夫なのか・・・！？」

「保健室に連れて行こう！」

「そうやね！　ルシル君。アリサちゃんを背負ってあげて！」

はやてがそんなことを言い出したから、「い、いいわよ！　ひとりで歩けるから！」あたしはそう言いながら両手を付いて立ち上がろうとするけど、思った以上に症状が重いのか立てなかった。

（なにこれ・・・？　何で急にこんな重症になっちゃうわけ・・・！？）

朝起きたときや通学バスの中は、ちょっとダルいなぁ～、くらいだった。咳も無いから、仕事疲れかも知んないって思ってたんだけど。まさかこんなヤバいことになっちゃうなんて。ルシルが「ほら、保健室に行くぞ」おんぶの体勢になる。

「・・・お姫様抱っこよりは・・・マシよね・・・」

なのは達に支えられながらあたしはルシルの背中に乗った。1階の保健室に行くために階段を降りる中、「重くない・・・？」訊いてみる。ルシルは「まさか。こう見えても男だぞ？　これで根を上げるわけがないだろ」って笑う。まぁ、はやてをお姫様抱っこ出来るくらいだし、おんぶくらいなんてことないわよね。

（それよりもさ・・・。いつも思ってることだけど、ホント髪の毛サラサラよね。良い香りもするし）

思わず後ろ髪に顔を埋めてしまう。すごくリラックス出来る香りで、ついウトウト。そしてあたしは保健室に運ばれて、1時間目の休み時間まで休む。その後、あたしは早退することになった。病院で、疲れから来る風邪だっていう診断を受けて、点滴やらした後は自宅でゆっくり休養。

あたしの部屋で休んでると、「アリサちゃん。調子はどう？」なのは達がお見舞いに来てくれた。気が付けば4時近く。結構眠っちゃってたのね。

「なんとかね。熱はまだ引いてないけど、朝よりはマシになった感

じ。アインスとリインもお見舞いに来てくれたんだ。ありがとね」

なのはとすずかとフェイトとアリシア、それにはやてとアインスとリイン、あと「・・・あれ？　ルシルは・・・？」アイツの姿が見えない。すると「ルシル君は、廊下で待ってるんよ」なんてはやてが言ったから、「は？　なんで・・・」って訊き返す。

「えっと、ルシル君が言ってるんだ。アリサちゃん・・・女の子の部屋に、男の子のルシル君がいきなり入っていいのかな？って・・・」

「アリサちゃんから入室の許可を貰ってから入るみたい」

なのはとフェイトが教えてくれた。変なところで紳士なのよね、ルシルってば。あたしは「いいわよ。パジャマ見られたくらいで騒ぐような浅い関係じゃなし」って、ルシルの入室を許可。するとリインが「呼んできますで～す♪」ふわふわと飛んで廊下へ。そして「失礼するよ」リインを伴ったルシルが入って来た。

「気分はどうだ、アリサ？」

「ぼちぼち。・・・今日は迷惑かけたわね。みんなも、ありがとう」

あたしは笑顔を見せる。それが今のあたしに出来るお礼。そしたらみんなも「うん」って笑顔を返してくれた。それから今日の授業で使ったプリントや、授業内容を書き記したノートをクラスメートのなのは達から受けとって、少しの間お喋り。

そんな中、ふと時計を見て、あたしは「あ・・・」と漏らしちゃった。今日の6時からうちで開かれるホームパーティ。パパ達が経営してる会社の重役や取引先のお偉方が参加するって聴いてる。だからバニングス家の長女であるあたしも、パーティに参加するように言われてるんだけど・・・

「（これじゃあ出られないわね・・・）はぁ・・・」

「あ、ごめんね、アリサちゃん。疲れてるよね。もうそろそろ帰るよ」

自然に出た溜息に、すずかがそう勘違いして慌てて立ち上がった。するとなのは達も「そうだね。帰ろうか」帰り支度を始めた。だから「違うのよ。今夜、うちでパーティがあんのよ」事情を伝える。参加者の子供たちとの付き合いってのがあるから、あたしも参加しないといけないことも。

「――っていうわけで、どうしようかって思って・・・」

「そうなんだ～」

「だけど、その様子じゃ出られないよね」

「どうするの？」

「治癒魔法でどうにかなんないの？　ルシル」

「治癒魔法はあくまで怪我に使うものなんだよ、アリシア。だから、病気には・・・」

「そうやなぁ。やっぱり不参加するしかないんとちゃうかな・・・」

この状況をどうにかしようって考えてくれるみんなには感謝しかないわ。だから「ありがとう。パパには申し訳ないけど、不参加ってことにしてもらうわ」この話題を終わらせに掛かった。だって解決策なんて何も無いから。みんなを悩ませるようなことはしたくないもの。

「・・・あ、そうだ！　良いこと思いついた！」

急にアリシアが手をパンッと叩いた。あたし達の視線が全てアリシアに向かう。そして「何か良い方法があるの？」フェイトが訊く。アリシアは胸を張って、あの子が考えついたっていう方法を、あたし達に伝えた。その内容っていうのが・・・

「わたし達の誰かが、アリサの身代わりになればいいんだよ！」

だった。あたしに変装して、あたしの代わりにパーティに参加する。でもそれって、「出来るの？　パパにも気付かれない程に完璧に」かなりの難易度になると思うんだけど。

「とりあえず。アリサの外見に合わせられそうなのはわたしとフェイトくらいだよね」

「えっ？　あ、で、でも、身長を見るとアリシアじゃ足りない、よね・・・？」

「じゃあ、フェイトね。はい、けって～♪」

「えええええっ！？」

止める間もなく勝手に決まったあたしの身代わり。急に指名されたことで困惑するフェイトの髪を結ってたリボンをアリシアは解いて、フェイトの髪型をストレートにした。続けて「フェイト。アリサの声真似！」そんな無茶ぶり。

「え？　えっと、アリサの声真似・・・は、その、コホン。あたし、アリサ・バニングスよ。いつかシグナムを打ち負かすんだから！」

フェイトが後ろ髪をサッと払いながらあたしのモノマネ？をしたんだけど、「ぷふっ」違和感バリバリな所為でアリシアが噴き出した。当然、「っ！？」フェイトは笑われると思わなかったからかショックを受けた。

「笑うなんてひどいよ、アリシア！　アリシアがやってって言ったからやったのに！」

「ごめん、ごめん！　だってまんまフェイトなんだもん！」

わーん！って半泣きなフェイトの頭をよしよしって撫でるアリシア。とにかく、アリシアの案はボツってことに・・・って思ったとき、

「ルシル。お前の変身魔法ならどうだ？」アインスがルシルに振り向いた。あたし達もルシルを見る。そういや変身魔法を使えるんだったわね。しかもかなりの演技派。あたしに成り切るなんて簡単なはず。

「ルシル。あんた、あたしに変身なさい！」

熱や解決策が出た所為かちょっとテンションが上がってきちゃったわ。

「・・・アリサに変身すればいいんだな」

ルシルがスッと立ち上って指をパチンと鳴らすことで生まれた閃光が、あたし達の視界を一瞬だけ閉ざした。視界が開けると、制服を着たもう1人のあたしがそこに居た。

「これでどうだ？　外見も声も、アリサそのまんまだろ？」

あたしの姿をしたルシルがその場でくるっと1回転。なのはが「わぁ。これなら気付かれないね♪」パチパチ拍手。すずかも、あたしとルシルを何度も見比べたり触れたりして、「うん。これは私でも気付かないかも」って驚きを見せる。

「それで？　あたしの着るドレスはどれよ。この状態で着替えるより、そのデザインのドレスに直接変身するわ」

ルシルがそう言って、さっきのフェイトのように後ろ髪をサッと払

った。おお！って歓声が起きる。あたしも、「すごいじゃない。これなら確かにバレないわ」その完成度に思わず拍手。
それからあたしは、今日開かれるパーティの出席者について出来るだけルシルに伝える。そのほとんどが初対面であって、そうそうあたしとルシルが入れ替わってることに気付かれないって。

「でも気を付けなさいよ。うちのパパとママも参加するから」

「その辺りはちゃんと気を付けるわよ」

「ホンマに判らへんね～」

「です～♪」

とりあえず今やれることは全部やったわ。あとは時間が来て、モニターでパーティ会場とルシルを見守るだけね。時間が来るまで何度もルシルの演技の練習。徐々にテンションが上がってく所為で、「あはははは、上手いわホント！」あたしも熱が入ってきた。

「――さて。そろそろ行ってくるよ。何かあったら念話で呼び掛けてくれ」

オレンジ色を基調にしたノースリーブのキャミソールタイプのワンピースと、ボレロカーディガンを組み合わせたパーティドレスを着たルシルが、あたしの部屋を後にする。そしてあたし達は、あたしの姿をしたルシルの様子を、部屋の中心に展開してる大画面モニターで視聴。

まずは、パパとママとの会話。ルシルはあたしに成りきってるおかげか2人には気付かれてない。それからエントランスへ移動して、出席者の歓迎。次々とやって来る出席者の中には、あたし達よりちょっと上かなって感じの歳と思う子供たちが何人かいる。その内の1人の男子がルシルに近づいて、『今日はお招きありがとうございます、アリサさん』ってルシルの手の甲にキスをした。

（うへぇ・・・！）

その光景に鳥肌が立つ。熱が出ていなかったらあたしがあの場に居ることになる。それはつまり、あのキスがあたしの手の甲にされちゃってたわけで。そう思うと「よかった、熱出て」って安堵。

「王子様みたいだね」

なのはがそんなことを言うと、「あー、うん。よく海外のドラマとかにあるね」すずかが同意する。フェイトも「ミッドでもそういう習慣あるよ。敬愛の意味を込めて」異世界情報を語った。

「でもさー。ああいうのって初見で、どうも思ってない男子にやられても気持ち悪いだけと思うんだよね～」

シャルはあたしと同じ考えで、「ルシル君以外にされてしもうたら悲鳴上げるかもしれへんなぁ」サラッと大胆発言をしたはやて。アインスは「オーディン・・・」昔の夜天の主の名前を漏らして、「むぅ？」リインは理解できずに唸るだけ。なんか可愛いわね。

『こちらルシル』

「どうしたの？」

『コイツ、ぶっ飛ばしていいか？』

「なんかごめん。でも耐えて。気持ち悪いのは解るけどさ」

『・・・了解。アリサやバニングス家の立場を悪くするわけにはいかないから』

「ありがと」

そして舞台はエントランスからホールへ。丸テーブルが幾つもあって、その上には料理は並べられてる。ビュッフェ方式の会食だ。パーティ開催の音頭をパパが取って、無事に始まった。ルシルが、パパやママに付いて回りながら大人の出席者に挨拶してくのを見守る。

「完璧やなぁ～」

「どっからどう見てもアリサちゃんだよね」

「もしかして、こっちのアリサが偽物なんじゃないの？」

「んなわけないでしょうが。ルシルが目の前で変身したうえであっちに行ったの、みんなで見たでしょ。ていうか突くな」

「アウチッ」

あたしの頬をつんつん突くアリシアのおでこにベシッとツッコみを入れる。挨拶回りが終わった後、ルシルはさっきの男子たちの相手をするようにパパに言われて、そっちへ向かった。そして男子たちと始まるお喋り。

『なぁ、みんな。俺さ、この子たちを見ているとさ。あの国民的アニメの登場キャラが思い浮かぶというか、なんというか・・・』

「国民的アニメ・・・？」

ルシルと話してる男子3人の姿をよく見る。そして「あっ！」あたし達みんなが察した。

「ドラ〇もんの、の〇太くん、ス〇夫くん、ジャ〇アンくん、です！」

リインが言うように、体が大きくて偉そうな男子、オドオドしてて気弱そうな男子、話の合間にちょっとした自慢話を織り交ぜる男子。言われてみれば確かにそうね。んで、特にその3人がルシルにちょっかい、っていうかアプローチっていうようなことを仕掛けてくる。

「ねえねえ、もしかしてこの3人、ルシル・・・じゃなくて、アリサに気があるんじゃない？」

「そうやんね！　アリサちゃん、モテモテや～♪」

「モテモテですぅ～♪」

「んなっ！　ち、違うわよ！」

そう否定はするけど、ルシル達の会話は将来云々って話になってきた。どこに住みたい、とか、どっちの会社に勤めようか、とか。完全に結婚した後のことを考えての会話だって判る。

『アリサ』

「え、はい、なんでしょう？」

ルシルの様子がガラリと変わったから、つい丁寧語になっちゃったわ。

『コイツら、アリサと結婚したいんだと』

「あ、うん、そうらしいわね」

『断るぞ。いいな？』

もちろん結婚相手をここで決めるつもりなんて初めっからないから「う、うん。いいけど・・・」そう答える。なんていうか、ルシル、不機嫌になってない？　みんなもルシルの様子が変わったことに気付いて困惑してる。

『アリサは結婚したくないんだろ。なら俺が断ってやる。・・・ア

リサをコイツらに渡してたまるか』

最後のは囁き程度だったけど聞こえはしたから「え・・・？」って訊き返す。

「ちょっ、どういうこと！？　なんか意味深なセリフなんだけど！」

「ルシル君、今のどうゆう意味なん！？　まさか、ルシル君はアリサちゃんのことが・・・！？」

「いつ！？　いつからアリサまでライバルになってんの！？」

シャルとはやてがあたしのベッドへ詰め寄って来た。もちろん「あたしにも解んないわよ！」大声で返す。こっちの混乱を引き起こしたルシルはすでに役に入ってて、こっちの声はもう届いてないっぽい。

ルシルは、『まずは、この気弱そうなメガネ少年から断ろう』そう言って、メガネのの〇太君と2人きりになるように、他2人の少年を上手い具合に別のグループへと移動するように差し向けた。人を動かすのも上手いわよね、ルシルって。

『・・・あ、あのね、アリサちゃん。ぼ、ぼく、アリサちゃんが好きです！　お、お父さんにアリサちゃんの写真を見せてもらった時から、その・・・』

少し2人きりで途切れ途切れの会話をした後、意を決したように顔を真っ赤にしたの〇太君がモジモジしながらルシルに告白した。正

直、初対面だし、タイプでもないし、結婚とかもする気もなかったけど、生まれて初めて告白されたってことにはちょっと嬉しかったかも。まぁ、されたのはルシルだけどさ・・・。

（だけど・・・ごめんなさい。今はあたしの願いを優先したいのよ。みんなと、同じ願いを）

魔法の力で困ってる人を助ける。あたし達、チーム海鳴共通の願いのために今は、誰ともそういう関係になるつもりはない。さぁ、ルシル。出来るだけメガネ君が気付かないように振っちゃって。

『ありがとう。好きだって、告白してくれて。すごい勇気が要ったよね』

『アリサちゃん・・・それじゃあ・・・！』

『でもごめんなさい。その告白には応えられないの』

『えっ、あっ、あのっ、だ、誰か、他に好きな人が居るの・・・？』

『そうなの。あたし、好きな人が居るの』

お、定番のお断りのセリフね。の〇太君は『誰、なの？　もしかしてあの2人のどちらか・・・なの！？』ジャ〇アンとス〇夫似のことかって勘ぐった。そうよね、相手が誰かってことになるけど。ま、まぁ、今日くらいはルシルが相手ってことでもいいわよ、うん。

『女子が好きなの。男子に興味ないの。つまりあなたに興味なんてないの。ごめんね』

『え・・・！？　じょし・・・って、女の子のこと、だよね・・・？
え、だってアリサちゃんは女の子・・・？　あれ？』

『そう、同じ女子が好きなの。ごめんね♪』

『でも、女の子同士で結婚なんて出来ない、よ？』

『大丈夫。結婚だけがすべてじゃなし』

『でも、会社の事とか考えないと・・・』

『・・・・しつけぇよ。黙って言うこと聞きゃあいいんだよ』

『っ！？』

『あたしは女子が好き。男子は興味なし。Ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ？』

『う、うぅ、うわぁぁぁーーーーん』

ルシルに詰め寄られた上でメッチャ睨まれたの〇太君は、泣きながらルシルの元から去ってった。その光景にあたし達は全員絶句。そしてあたしは「ルシル。ちょっと戻って来なさい」呼び出しコールを入れる。ルシルは『あ、ああ、判った』簡潔に応じた。

「ただいま～。で、どうした、アリサ？　何か問題でも――・・・」

「大アリよ！！　なによ、さっきの断り方は！　女子が好き！？　しかも最後は若干脅しが入ってたし！　の〇太くんを泣かしてんじゃないわよ！」

戻ってきたルシル（あたしの姿に変身したまま）をビシッと指差しながら怒鳴る。ルシルは小首を傾げながら「事実だろ？　今は彼氏云々よりなのはら女友達の方が大切、だろ」って言った。

「っ！」

「ひょっとして、勘違いしたか？　恋愛感情とかの好きだって思ったのか・・・？　なに、そういう気の女子もいるっていうし。恥ずかしが――」

「～～～～～っ！！！　あちょお～～～～～っ！！」

「ぐはぁ！！」

あたしはベッドの上から跳び上がって、ルシルにドロップキックを喰らわす。

「うっさい、うっさい、うっさい！　しょうがないでしょ！　告白の話してた時に女子が好きって話になれば、そう思ってもしょうがないじゃない！」

「アリサちゃん、熱が上がっちゃうよ！」

「ルシル君、えっと、会場にそろそろ戻ろうか！」

「ほら、アリサはベッドに戻って！」

「タオル、タオル、吹っ飛んだタオルはいずこ～？」

なのはに追い出され気味に会場へ戻ったルシルを見送り、あたしはベッドに戻った。ああもう、どっと疲れたわ。それからまたあたし達は会場をモニターする。ルシルは『次は、あの図体の大きな少年だな』ジャイ○ン君をターゲットにした。またさりげなくターゲットと2人きりになるように仕組んだ。

『豪快な食べっぷりね。見ていて気持ちが良いわ』

『おう！　男は漢らしくだからな！　スポーツだって格闘技だって、おれは一番だぜ！』

『そう。そういうの、なんか良いわね。漢らしい』

『だろ？　男は漢らしく！　女は女らしく！　それがうちの家訓だぜ！』

『あー、じゃあ、あたしとあなたは合わなさそうね』

『え？』

ルシルが、あたしの・・・あたしの姿をしたルシルが・・・片手で大皿を持ち上げて、そこから直接パスタをずるずると大きな音で啜って頬張った。あたしのイメージ総崩れ。ジャ〇アン君が唖然とする。

それでもルシルの手は止まることなく、別の大皿から肉団子をこれでもかってくらいたくさん口に入れて、くちゃくちゃって音を立てて汚らしく食べた。そして食べた後は派手に垂れ流しながらも水を何杯と飲み干して、最後は口に含んだ水でうがいして、コップに水を吐き戻した。ジャ〇アン君はもちろん、あたし達もドン引き。

「アカン。ルシル君、やり過ぎや！」

「あんの馬鹿・・・！　ルシル！　今すぐ戻って来なさい！　」

怒りのボルテージが限界突破。うがぁーっとあたしは咆えながら立ち上がる。

『ん？　何か問題で――』

「あるわよ、ボケッ！　今すぐ来なさい！　Ｈａｒｒｙ，Ｈａｒｒｙ，Ｈａｒｒｙ　！」

ルシルを呼び戻す。そして「そうそう何度も呼ばないでくれないか？　怪しまれるから」そんなことを言いながらルシルが戻ってきた。

あたしは「言いたいのはそれだけ？　ねえ、それだけ？」訊き返す。

すると「??・・・あ、スイーツが欲しかったんだな。美味しそうだったからな」見当違いのことをぬかしやがった。

「よーし。とりあえずアンタを1発殴るわ。歯を食いしばりなさい」

パジャマの袖を捲り上げたうえで魔力を拳に込める。それを見たなのは達が「落ち着いて！」あたしを宥めてきた。ルシルは「スイーツくらいで大袈裟だなぁ」って苦笑。イラッと来た。そんなレベルじゃないんですけど、この怒りは！　そんなルシルに、「は、はよ戻らなアカンな、ルシル君！」はやてがそう言って、ルシルの背中を押して部屋の外に出そうとする。

「ルシル君。さっきのは汚なさ過ぎです！　猛反省してくださいです！」

「あ、ああ。了解だ」

あたしの代わりに怒ってくれたリイン。ルシルはプンプン怒ってるリインにたじろぎながら会場に戻った。あたしは「ありがとう、リイン」お礼を言う。はやてとアインスも「よしよし」ってリインの頭を撫でて褒めた。

『じゃあ最後。自慢しいの少年だな』

ルシルが仕掛けるその前に、「ちょっとルシル。これ以上、あたしのイメージを崩す真似はしないでよね」注意しておく。ルシルは『解っているよ』って言ったけど、解ってないからこそこっちに呼び

戻してんでしょうが。
ルシルはス〇夫君と2人きりになって喋り始める。すると早速、ス〇夫君はさりげなく自慢話を始めた。どこに旅行に行ったのか、旅先で何があったのか、ホントどうでもいいようなことをベラベラと。ス〇夫のニックネームが伊達じゃないって感じ。

『そうです、アリサさん。以前うちから贈った松茸どうでした？　僕の松茸、美味しかったでしょう？　いやぁ、親戚からたくさん送られてきて、あまりに余ってしまったんですけど、良かったです、喜んでもらえたのでしたら！』

あたし、アレあんま好きじゃないんだけどね。しかもス〇夫君、ルシルから返事も無いまま喜んでるって勝手に決めつけちゃってるし。ルシルもルシルでイライラしてるし。これはまずい。絶対にあたしのイメージを崩す返しをまたするわ。

「ルシ――」

『女の子に向かって僕の松茸美味しかったかなんて、これはセクハラかしら～？　きんもーい。あなた御自慢の松茸はもうとっくの昔にあたしの体から汚物として排出されて、トイレから下水へと流れて行ったわ～』

『おぶ・・・っ！？』

「ルシルぅぅ～～～～っっ！！」

生まれてからこれまでにない怒声をあたしは上げた。

・―・―・終わりったら終わりよ！！・―・―・

はやてに呼び戻してもらったルシルが「あのさ、今度はいった――」言い切る前に、「フレイムアイズ！」を起動して斬りかかる。

「すぐ死んで、早く死んで、いま死んで！　お願いだからもう死んでぇぇ～～～～！」

「うおおおおお！！？」

「「「アリサちゃん！？」」」「「「アリサ！？」」」

「アンタを殺してあたしも死ぬわぁぁぁぁ――――！！」

"フレイムアイズ"をぶんぶん振り回す。あたしのイメージを崩すな、って言ったのにあんな言い回しをしてくれたルシル。つまりあれがあたしのイメージってわけ？　信じられないんだけど！

みんなに落ち付くように言われ続ける中、これまでのストレスで熱がさらに上がったことですぐにダウン。アインスにお姫様抱っこしてもらってベッドに戻してもらう。

それからパーティが終わるまでルシルは大きな問題を起こすことなく、あたしの身代わりを務めてくれた。ま、男子数人にはトラウマを与えたけどね。

「そう言えばさ、ルシル。さっき、アリサをコイツらに渡してたま

るか、とか言ってたよね。あれ、どういう意味？」

シャルがそう話を切り出すと、はやてがピクッと反応した。あたしも気になってたから、休む前にしっかりとそのもやもやを晴らしておきたいわ。変身を終えて元の姿に戻ってるルシルは、「ん？ああ、あれか」そう言ってあたし達を見た。

「ほら、アリサは俺たちにとって大事な、同じ願いを持つ仲間だからな」

「あ、やっぱそういう・・・」

「そっかぁ。よかったぁ」

ホッとしてるシャルとはやて。そしてあたしも「ま、アンタはそういう奴よね」ホッとした。そんなこんなで終わる今日という1日。みんなが帰ったことで静まり返る部屋でひとり「なにはともあれ、ありがと、ルシル」あたしを助けてくれたルシルにお礼を言った。

Ｅｐｉｃｏｌ５幸を願う者には福が来る

†††Ｓｉｄｅアインス†††

主はやて達が時空管理局は本局・特別技能捜査課の仕事で家を空けている間、私が家事一般を行う決まりになっている。もちろん私が買って出たことだ。私の後継騎であるリインフォースⅡが生まれ、あの子に私の魔導の全てを与えたことで、私がいま扱える魔法は思念通話のみとなった。単独戦闘もユニゾンも満足に出来なくなった私には、もうこれしか八神家を支えられる術はないから。

「おや、アインスさん。今日は１人かい？」

「あ、はい」

今は買い物途中だ。そして私に声を掛けたのは、私が贔屓にしている肉屋の店主。私はスーパーで買い物をするより、こうして店の者と直接話をしながら買い物をしたいため、少し家より遠いが商店街を訪れることにしている。人と話していると、私は今ここにいると、自分の存在を認識できるから。

（闇の書の終焉からもう半年近く。おそらく私の終わりも近い・・・）

今日は６月４日。そう、私たちの敬い慕う、幼き主である八神はやての誕生日。私たちが未だ"闇の書"と称されていた頃、主はやて

とお会い出来たあの日だ。もう1年と経ったのだな。

「それで今日はどうするかい？　どれも新鮮、どれも美味！　当店自慢の肉ばかり！　アインスさんは美人さんだからね。お安くしておくよ」

「いつもありがとう、店主。・・・では、すき焼きに合うお肉をください」

主はやての誕生日を今夜祝うため、なのは達を家に呼んですき焼きパーティをすることになっている。そのための買い物だ。なのは達もそれぞれ食材を持ち寄ってくれるそうだが、人数が人数だ、こちらでも用意しておくべきだろう。

肉屋を後にし、次は八百屋へ向かう。そんな中、「うおっ、アインスさん、どもっす！」男子学生数人が私に気付いて９０度に体を曲げて一礼した。その光景には商店街の人たちや客も慣れてしまっているおかげで騒ぎは起きない。

「私に会うたびにいつもそのような真似はしないで良いと言っているんだが・・・」

「いえっ！　命の恩人のお1人には常に義を以って挨拶を！」

高校生と呼ばれる歳の男子学生たちは礼をやめようとしない。命の恩人と呼ばれるようになってかれこれ2ヵ月少し。私とルシルとシグナムの3人でこの商店街を回っていた時、私たちはこの学生たち（あの頃は不良と称されていたな）に絡まれた。いわゆる、ナンパ、

というものだ。当然、私たちは無視していたのだが、彼らはそれが気に入らず暴れ出した。

（それを、こちらも力づくで止めたのだったな）

魔法は使えずとも、オーディンより教わった格闘技が私やシグナムにはある。喧嘩慣れしているとは言え素人相手に負けるわけがない。で、この学生たちを退治したことで商店街の人たちから感謝され、八神家は有名になり、人気となってしまった。

それから数日、別の不良学生たちとこの学生たちが大喧嘩。一方的にやられていた学生たちを、私とシグナムとザフィーラ、そしてルシルで庇い、それがきっかけとなってこうして私たち４人を敬うようになった。私にはさん付けで、シグナムには姐さん付け、ザフィーラには旦那付け、ルシルには坊っちゃん付け。

「お荷物、お持ちしましょうか！？」

「いや、結構だ。ではな」

「「「「「はいっ！　お気を付けて！！」」」」」

「お前たちもな」

ビシッとまた礼をする学生たちを置いて買い物を続ける。以前とは違ってボランティアなどにも参加し、商店街の人たちにも受け入れてもらえるようになってきた。

「いやいやぁ、相変わらず人気者だねぇ。あんた達に守られたことであの子たちを更生してくれて、本当に良かったよ。若気の至りとは言っても、過ちに気付くのなら早い方が良い。あの子たちは運が良い方だよ」

「そうですね。ええ、その通りです」

すき焼きに入れる野菜類を購入し、それから次々と食材を購入して、「ただいま」家に帰る。挨拶はもちろん返って来ないはずだったんだが、「おかえり～」リビングから挨拶が返ってきた。エコバッグを置いて「何者だ！」リビングに突撃。

「勝手にお邪魔してるよ～」

「はやてには伝えられないからね。私たちや父様が元管理局員で、あなた達を犠牲にして闇の書を凍結封印しようとしていたって。だからアポなしになってしまったのよ」

リビングのソファで脚を組んでくつろいでいるのは、ギル・グレアム元提督の使い魔の片方、リーゼロッテ。ダイニングのテーブルにはもう片方のリーゼアリアがきちっと椅子に座っていた。

「・・・それで今日は一体なんの・・・？」

玄関からエコバッグを取って来て、食材を冷蔵庫などにしまいこみながら訊ねる。グレアム元提督やリーゼ姉妹は元管理局員だ。お父上の知人の"おじさん"と騙り、主はやてを犠牲にすることを前提

に私たち"闇の書"の封印を企んでいた。

（そのこともあって、主はやてにはグレアム元提督たちの真実を伝えていない。まぁ、グレアム元提督は真実を伝えたうえで謝罪したいと言ってはいるが・・・）

とにかくルシルの機転、それになのは達の協力のおかげで、主はやてを犠牲にすることなく、"闇の書"の旅路を終わらせることが出来た。"夜天の魔導書"という名を取り戻すこともでき、リインフォースという美しい名を、私は得ることも出来た。感謝しても感謝しきれない。

「・・・いやね。以前受け取ったクロノからの報告書で、あなたの寿命が近いって判っていてね。今の内に挨拶しとこうと思って。なんていうか、お疲れ様って」

「正直、あたしは未だにアンタ達のこと、許してないよ。父さまはずっと苦しんできた。あたしだってクライド君――大切な友達を喪った。でも、アンタ達だって苦しんできたって判ったから・・・その、なんだ・・・」

「そうか。わざわざありがとう。リーゼロッテも、ありがとう。グレアム元提督のお加減はどうだろう」

「う～ん・・・ちょっと老け込んだかもなぁ～」

「確かにね。管理局でも幹部クラスの局員だったからね、父様は。

辞職したことで気が緩んだのかも」

それからリーゼアリア、リーゼロッテと1時間ほど話し、2人はトランスポーターを利用して帰って行った。2人に出したお客様用のティーカップを片付けていたら、ふっと手から力が抜けてしまい、「あ・・・！」ガシャンと床に落とし、割ってしまった。

屈んで割れた破片を手に取ろうとした時、「っ！？」激しい眩暈に襲われた。破片の上に倒れ込まないように何とか尻もちを付くことに成功。キッチン台にもたれかかりながら立ち上がろうと試みるが、上手くいかない。

（どことなく体から力が抜けていくような・・・）

治まることのない眩暈、強い倦怠感。明らかに異常事態。原因は判らないが、とにかくどこかに横になるために立ち上がろうと手を付いた。

「っ！！？」

一瞬、ほんの一瞬だが、床に付いていた両手が霧散したかのように見えた。この体は魔力で出来ている。それなら今見えたアレは、「構築限界・・・？」なのだろうか。魔力が霧散することで体が消滅する・・・私の結末だ。

気の所為だと思いたいため両手を目の前に持ってくる。すると、「っ！」指先がほんのうっすらと霧散しかけた。両腕が重力に従ってパタリと床に落ちる。

「・・・だ・・・・」

主はやての、騎士たちの、未来を繋ぐため。

「・・・い・・・・・」

この身を捧げることにしたんだ。

「・・・・や・・・・」

覚悟はしていた。

「・・・・いや・・・・」

後悔もしていなかった。

「・・・・やだ・・・・」

だけど・・・

「・・・いや、だ・・・・」

こうして現実を目の当たりにして・・・・。

「・・・・いやだ・・・・」

思い知る。

「誰か・・・」

死の恐怖を・・・。

「・・・誰でもいい・・・」

永遠の別れを・・・。

「・・・助けて・・・」

死にたくない・・・。

「誰か・・・私を・・・」

消えたくない・・・。

「・・・私を助けてくれ・・・」

一緒にいたい・・・。

「私の時間を、増やしてくれ・・・」

これからもずっと、主はやてやルシル、リイン、騎士たちと共に・・・。

「・・・生きたい・・・！」

視界が涙で滲み始め、頬を伝っていくのが判る。そして漏れ始める嗚咽。必死に唇を噛んで本格的に泣かないように努める。泣いてはダメだ。主はやて達に勘づかれてしまう。この良き日に、私の消滅を考えさせてはいけない。

「止まれ・・・」

涙を止めようと両手で目を擦る。

「止まれ・・・・！」

ゴシゴシ。強く目を擦る。それからどれだけ経っただろう。大声で泣くことだけはなんとか耐えることが出来た。しかし体力だけは戻ることはなく、その場から未だに動けそうにない。もうこのまま消えてしまうのだろうか。主はやて達に別れを告げることも出来ないまま。

「なんて不孝者なのだろう・・・」

とうとう私はコテンと床に倒れた。脳裏に次々と浮かび上がってくるのはこれまでの生涯。オーディンと出会うまでの荒んだ時間。オーディンと出会ってからの幸せいっぱいの楽しかった時間。オーディンを喪ってから、主はやてと出会う前での辛かった時間。そして、主はやてと出会ってからこれまでの時間。

「・・・幸せにしてくれたから・・・、幸せにしてあげたい・・・」

だから選んだ消滅だっただろう、リインフォース・アインス。想いが私の体を動かす。上半身を起こし、キッチン台に手を掛け、両脚に今まで入いらなかった力を込めて立ち上がる。そして時間を掛けながらも破片を片付け、洗濯物を取り込む。今の私の仕事は、主はやて達が居ない間、家を守ること。今日で最期なら、せめて全ての家事を終えておきたい。

「――・・・はぁ・・・・」

気だるいながらも家事を終え、私はリビングのソファに腰掛けて大きく息を吐いた。背もたれに全体重を預けて気を抜くと、急激な眠気に襲われた。なんとなく、眠ったらそのまま、なんて思えてしまう。

「すき焼きパーティが終わり・・・主はやて達がお休みになるまでは・・・」

今日1日だけは、主はやての誕生日だけは必ず生き残らなければ。背もたれから背を離し、前屈みになる。視線が床に向く。

「・・・・!?」

私以外にこの家に誰もいないはずなのに、視界に誰かの爪先が映り込んだ。顔を上げるとそこには「・・・ルシル・・・?」私と同じ長い銀色の髪を有していて、そして蒼と紅の虹彩異色という特徴をした青年が立っていた。身長は１８０ｃｍほど。ルシルの変身か、

と一瞬過るが意味の無い行為をあの子はしないと知っているため、すぐに違うと捨てる。なら・・・

「オー・・・ディン・・・？」

私は幻でも見ているんだろうか。すでにこの世には居ないオーディンがそこに居て、私に微笑みかけていた。あぁ、たとえ幻でも再びあなたと出逢えたことは嬉しいです。

「オーディン。私、頑張りました」

「・・・・」

「精いっぱい生きました」

「・・・・」

「でも・・・まだ、まだ死ねないんです・・・」

「・・・・」

オーディンの幻が私の頭に手を伸ばし、そっと撫でてくれた。久しぶりの感触に嬉し涙が出る。感極まった私は、不思議なことにスッと立ち上がることが出来て、そのままオーディンの胸に飛び込んだ。オーディンはそんな私をあやす様に背中をポンポンと叩いてくれる。

「オーディンが、私のお迎えとしていらしたのでしょうか・・・？」

「・・・・」

「もう逃れられないと・・・・？」

「・・・・」

「・・・私、オーディンの事が好きでした。家族としてではなく、恥ずかしながら女性として、あなたの元に転生したあの時からずっと。これが最期なのでしたら伝えておきたかったです」

心の内を吐露する。何百年と秘めてきていた想いを、都合よく私が見ている幻であろうオーディンに。それでもいい。ただ伝えたかった。私のようなヒトではない者にはあの世なんてあるのかどうか解らない。生まれ変わりなんてものもあるのかどうかも。

「それでも私は願いたいです。いつか、主はやてとルシルとの間に子が産まれたら、それが私でありますように・・・」

オーディンやルシルはオリジナル・ルシリオンのクローンだという。その存在意義は、"エグリゴリ"を救済、その正体は事を成すための生体戦闘兵器。いつ死闘を繰り広げ、その命を落とすか判らない。だからルシルは、シャルの告白を断り続けるし、主はやてとも一緒にならない可能性もある。

それに、最強の"エグリゴリ"であるガーデンベルグを撃破したらルシルもまた、その役目を終えて死ぬことになるだろう。それでも、それまでに結ばれてくれたら、なんて身勝手なことを思ってしまっ

ている。でもそうなるよう願いたい。

「・・・挨拶も無く逝くこと、本当に申し訳ありません。主はやて、ルシル、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン。私、リインフォース・アインスは、幸せでした」

すでに現実と幻覚の境界が曖昧になってしまっていて、オーディンに横に抱え上げられたように錯覚する。一度オーディンの顔を見上げてからその胸に寄り添い、スッと目を閉じた。そうして私の意識は途切れた。

†††Ｓｉｄｅアインス⇒？？？？†††

こんにちはです。わたし、リインフォース・ツヴァイといいます。わたしの生みの親で、マイスターでもある八神はやての融合騎――ユニゾンデバイスです。え？　ツヴァイって数字の２という意味ではないですか、って？

そうなのです。わたしリインにはオリジナルが居るのです。はやてちゃんのデバイスの１つ、"夜天の魔導書"と呼ばれるストレージデバイスの管制システムで、融合騎であるリインフォース。はやてちゃんと、オリジナルのリインフォース・アインスの２人のリンカーコアを、リインの核としてますです。

（ママが２人いる感じですね～♪）

そして今日、６月４日ははやてちゃんのお誕生日なのです。さらにはアインス達がはやてちゃんと初めて言葉を交わした特別大事な日

でもあるです。そういうわけで今日は八神のお家で、なのはさん達お友達みんなをお呼びしてすき焼きパーティをしますです。食材は持ち寄りですけど、今頃はお家でお留守番のアインスも食材を買っている事かと思うです。

（すき焼きはとっても美味しいですから、今からお腹ぐぅぐぅですぅ～♪）

お肉やお野菜、おうどんなどなどをそのまま食べても美味しいですけど、溶き卵に絡めると、さらにとっても美味しくなるのですよ。不思議ですぅ～。

「どうしたの、リインちゃん。すごく楽しそう」

「なにか良い事でもあった？」

「あ、テレサさん、テレジアさん。お疲れ様ですぅ～」

はやてちゃん達が所属してる時空管理局の特別技能捜査課の一員で、リイン達みんなの先輩であるテレサさんとテレジアさんが、はやてちゃんに与えられたデスクの上に居るリインに声を掛けてくれました。テレサさんはとっても優しくて、楽しい女の子です。テレジアさんはとっても優秀で、格好いい女の子です。

「実はですね、今日はすき焼きパーティなのですよ♪」

「スキヤキ・・・って・・・」

「なんです？」

あぅ、そこからなのですね。次元世界によっては食文化が違いますから、こういう時もあると、リインはすでに学習済みなのです。お２人にすき焼きとはどういうものかをお話しします。するとお２人は「美味しそう！」お腹を鳴らしました。

「でも、そのスキヤキでパーティなんて、なにかのお祝い事？」

「はいっ。はやてちゃんのお誕生日なのですよ」

「えっ！？　はやての誕生日なの！？　聞いてないんですけど！」

「わわっ、プレゼントなんて用意してないよ！」

テレサさんとテレジアさんが大慌て。そんなお２人の騒ぎを聞いて、「何かあったんですか？」この課の課長であるクー・ガアプ一佐のデスクからはやてちゃん達が戻って来ました。書類作成を終えたことで提出しに行っていたですが、なにも問題なくＯＫが出たようです。そんなはやてちゃん達にお２人はまず「誕生日おめでとう、はやて！」とお祝いの言葉を贈りました。

「あ、おおきにありがとうございます」

「そしてすぐさま、どうして教えてくれなかったの、と責める！」

「教えてくれたら先輩として、友達として、お祝いもしましたし、プレゼントも用意しましたのに！」

はやてちゃんに詰め寄るテレサさんとテレジアさん。はやてちゃん達は小首を傾げて、「てっきり知っているものかと・・・」ルシル君がそう返しますと、今度はお2人が小首を傾げました。

「クララ先輩が、テレジア先輩とテレサ先輩に伝えておくって・・・」

「テレサ。クララから聞いた？」

「聞いてない」

「「・・・クララぁぁぁぁーーーーーーーーっっ！！」」

俯き加減で体を震わせていたテレサさんとテレジアさんが急に顔を上げて、ものすごい勢いでオフィスから出て行ったです。それを見送ってますと、「八神家はもう終業だから、お友達の皆さんと帰宅していいですよ」ガアプ一佐がリイン達に微笑みかけてくれました。みんなで「お疲れ様でした、お先に失礼します」一礼してからオフィスを出ますです。

「クララ先輩に伝えたのは間違いだったかなぁ・・・」

「う～ん、クララ先輩って我が道を往く人やからなぁ。テレジア先輩に言うとけば良かったかもしれへんな」

はやてちゃんの誕生日が今日だとルシル君が伝えたのは、天然と呼ばれるクララさんです。しっかり者のテレジアさんに伝えておけば良かったのかもしれませんね。苦笑するはやてちゃんとルシル君に、ヴィータちゃん達も釣られて苦笑しました。とにかく今日のお仕事は無事に完了です。さぁ、アインスの待ってくれてるお家へ帰りましょう。

「おーい、みんな～！」

「お疲れ様～！」

海鳴市のお家へ帰るためのトランスポーターがある第零技術部――通称スカラボへ向かう中、私服姿のシャルさんと、制服姿のアリシアさんが技術部区画へ続く廊下の角で待ってくれてました。

「んだよ、シャル。せっかくの休みなのにわざわざ本局にまで迎えに来たんかよ」

「そだよ～。褒めて～♪」

シャルさんがヴィータちゃんにそう答えた後、ルシル君の側へ駆け寄って来ました。シャルさんは仔犬みたいな女の子です。ルシル君は「はいはい、えらいえらい」素っ気なく言います。

「メッチャ棒読み・・・」

「それはそうとアリシア。フェイトは一緒じゃないのか？」

「フェイト？　フェイトならスカラボで、なのはとアリサとすずかと一緒にお茶してるよ。わたしとシャルは、はやて達が待ち切れずに迎えに来たの」

すずかさんとフェイトさんとアリシアさんはお仕事で、シャルさんはなのはさんとアリサさんと一緒にお休みでした。そしてリイン達は、シャルさんとアリシアさんと一緒にスカラボへ向かいます。そんな中、通信コールが入りました。受けたのは、「はい、セインテストです」ルシル君でした。

『セインテスト研修生。すまないが査察課のオフィスに寄ってほしいんだが、いいだろうか』

「はい、判りました。すぐに向かいます。・・・ごめん、行く所が出来た」

「そうみたいやね。それじゃあ、スカラボの応接室で待ってるよ」

「あー、いいよ。いつ戻れるか判らないから。先に家に帰っていてくれ」

「おい、ルシル。今日ははやての誕生日なんだから、泊まりなんかすんなよ」

「そうよ、ルシル君。残業とかになるんだったら断ってね」

「もちろんそのつもりだよ。ちょっと遅くなるかもしれないが、必ずすき焼きパーティには参加するから。それじゃまた後で」

はやてちゃんの頭を撫でた後、ルシル君は査察課のオフィスに向かいました。ルシル君のナデナデはとっても気持ちが良いので、リインも好きです。もう1つの仕事場である査察課に向かうルシル君と別れたリイン達はそのままスカラボへ。そうして到着しますと、応接室でなのはさん達がチンクさんやドゥーエさんとゆったりお茶をしてました。お疲れ様、とみんなで挨拶を交わし終えたあと・・・

「――じゃあ、あたし達は一度自分の家に帰ってから、はやてん家に向かうわ」

「プレゼントと食材を取りに行かないとね」

「前から思ってたけど管理局のお給料ってすごいよね。研修生でもちゃんと貰えるし」

「だからちゃんとしたプレゼントも買えるから良かったよ」

「高価なもんとかはええからね！？　わたしらの年齢にあったもんでええからね！？」

それからドゥーエさんの操作で、なのはさんとアリサさんとすずかさんは、すずかさん家のトランスポーターへ。フェイトさんとアリシアさんとシャルさんは、フェイトさん家へ。そしてリイン達は、

はやてちゃん家のトランスポーターへ帰るです。

「「「ただいま～～♪」」」「ただいまです～♪」

お家の2階に設けられたトランスポーターに到着です。はやてちゃんとヴィータちゃんとシャマルとリインで挨拶するです。シグナムとザフィーラも遅れて「ただいま」挨拶です。ですけど、おかえり、の挨拶が返って来ませんでした。

「アインス～？　居らへんの～？」

「・・・気配がありませんね」

「お買い物に行っているんでしょうか・・・？」

とりあえず1階へ降ります。ヴィータちゃんが真っ先に玄関へ行って、「アインスの靴もサンダルもあるぜ」アインスが家に居ることを示す物があることを確認です。続けて「今晩の食材も買ってきてあります」シャマルも、「洗濯物もしまい込み済みです」シグナムも、「お風呂でもないなぁ」はやてちゃんも、アインスの行方を確認していきます。

「アインス～、どこですぅ～？」

リインは、はやてちゃんとヴィータちゃんとリインのお部屋を確認しますです。ですがやっぱり居ませんでした。シグナムとシャマルの部屋も確認しましたが、「アインスが居らへん・・・」アインス

はどこにも居なかったです。

†††Ｓｉｄｅリイン⇒ルシリオン†††

「どうも、ルシリオンです」

内務調査部・査察課での所用を終えて、急いで第零技術部（スカラボとはなんか呼べない）へ。扉を開けてもらえるように通信を繋げると、室内から『ルシルか。少し待っていてくれ』チンクの返答があった。数秒とせずに扉のロックが外れて、左右にスライドして開いた。応接室にはチンクが１人いて、「はやて達は先に帰ったぞ」俺を出迎えてくれた。

「ええ。俺もこれから帰ります。トランスポーターの操作、お願い出来ますか？」

「もちろんだ。少し待っていてくれ」

チンクと一緒に奥のトランスポーターが設けられた部屋に移動。チンクが転移先である八神邸へと転送されるよう設定している後ろ姿を見守っていると、「今日、グレアム元提督の使い魔、リーゼ姉妹が八神家へ飛んだ」そう話かけられた。

「リーゼ姉妹が・・・」

ドクター・スカリエッティはもちろん、チンクらシスターズも"闇の書"の一件の真実をすべて承知している。それに、グレアム元提

督が何を企んでいたのかもドクターは察知していた。大した情報収集能力だ。

「何をしに行くかは訊いて・・・？」

「アインスに挨拶をしに行く、とだけだ」

「挨拶、か。２人はこっちへ戻って来たんですか？」

「ああ。すでに帰還している。今はどこに居るから知らないが」

「そうですか・・・」

アインスの先がもう無いことは、クロノからの報告書でグレアム元提督たちも知っていると聴いている。挨拶に行ったというのは、おそらくそれが理由だろうな。今さらアインスに危害を加えるとは到底思えないし。

「はやてにはまだ伝えないのか、グレアム元提督たちの事を」

「知らない方が良い事もある、と思う」

先の次元世界では事件後すぐに明かされたが、今回は元提督たちの暴走を初めから食い止めることが出来た。だからはやて達にとっては財産管理をしてくれた恩人という立ち位置だ。そこにわざわざ自分たちを犠牲にすることを企んでいたんです、なんて伝える必要はない。

「・・・まぁ、その辺りについては八神家の参謀がいろいろと考えればいいさ。・・・さぁ、設定完了だ。いつでも転送できるぞ」

「ありがとう。お願いします」

トランスポーターへと入り、俺は八神邸へと転送された。一瞬の視界閉鎖。次に視界が開けた時はもう八神邸2階の物置部屋に設置されたトランスポーターに到着だ。物置部屋から出て階段を下りて行く。

「はやて？　ただいま」

「おかえり、ルシル君・・・」

階段下で俺を出迎えてくれたはやてだったが、どうして小声なんだろうか。リビングダイニングからはリインやなのは達の声が漏れ聞こえて来るが、はやてと同じように声量を落として喋っているようだ。

「何かあったのか？　みんな声が小さいけど」

「アインスがな・・・」

はやての口からアインスの名前が出た時、瞬時にリーゼ姉妹の姿が脳裏を過ぎった。だから「アインスに何かあったのか？」少し緊張しながら訊ねた。するとはやては首を横に振って、そうではない事

を教えてくれた。

「アインスな、どうゆうわけか解らへんけど、ルシル君の部屋で爆睡してるんよ」

「あー、だからみんな小声なんだな～」

はやてと一緒に俺の部屋へと向かい、音を立てないように気を付けて扉を開ける。確かにアインスが俺のベッドでぐっすりと眠っていた。

「まぁ、そうゆうわけで小声なんよ」

「そうか。じゃあ、音を立てないように気を付けながら着替えるよ」

「うん。そうしてもらえると助かるわ」

はやてと別れてひとり自室へ入る。クローゼットの前で局の制服からTシャツにカーゴパンツに着替えていると、「ん・・・うぅ・・・ん・・・」アインスが小さく吐息を漏らして寝返りを打った。体勢を仰向けから横へと変え、俺へと向いた。そしてすぅーっと閉じられていた瞼が開いた。

「おはよう、アインス。俺の洗濯物を置きに来たまま眠ってしまったのか？」

からかい混じりにそう言うと、「？？？・・・！！？」アインスの

目がカッと見開き、勢いよく上半身を起こした。そしてキョロキョロと部屋を見回し、さらには自分の両手、胴体、布団を剥ぎ取って下半身を確認した。明らかに様子がおかしい。

「アインス。何かあったのか？」

「ルシル・・・？　私は、夢を見て・・・？」

「・・・えい」

「あいたた！　いひゃい、いひゃいぞ！」

アインスに近寄って、スベスベで柔らかな頬を左右から引っ張ってやる。頬から手を放すとアインスは自分の手で両頬を擦って、「あれが夢だったのか・・・？」ポツリと漏らした。

「アインス。顔を洗っておいで。すき焼きの調理がもう始まっているようだし。アインスも作る側だろ？」

「！！　いま何時・・・って、５時過ぎ！？　主はやて、申し訳ありません！」

アインスが慌てて部屋を飛び出していった。遅れて部屋を出てリビングに入ると、アインスがはやてを真正面から抱きしめていた。エプロン姿のなのは、フェイト、アリシア、アリサ、すずか、シャルの６人やはやての周りに居たシグナム達もどうしていいか判らないと言った風に眺めていた。

「どないしたん、アインス。悪い夢でも見たんか？」

「・・・えっと、はい。内容はその・・・忘れてしまいましたが」

アインスの背中を優しく叩くはやて。それを見たリインが「アインスは甘えん坊です～」と言うと、「だな～」ヴィータや「ふふ。そうね」シャマルが笑いながら同意。それがきっかけとなって、リビングダイニングがほんわか空気へと変わった。

なのは達からの「おかえり~」の挨拶に「ただいま」と返して、俺もソファへと腰掛ける。今日ははやての誕生日であり、"夜天の書"起動の記念日という特別な日だ。だから俺を除く八神家全員はキッチンに立ってはいけないという決まりだ。ま、アインスとシャマルは立ちたいと聞かないが。

（なのはとアリサとすずか、フェイトとアリシアとシャル。どちらの味付けも楽しみだ）

2チームに分かれてそれぞれ調理することになっている。そして3チーム目として、俺とシャマルとアインスが調理することになっている。人数が人数だからな。すき焼き鍋3つは欲しい。なのは達の調理が終わり、いよいよ俺たちの番となった。

「アインス」

「ああ」

「シャマル」

「ええ」

「「「八神家魂！　オオッ！」」」

はやて直伝味付けのすき焼き、なのは達に見せてやろう。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒アインス†††

私は消滅したはずだった。しかし私は今、こうして主はやてやルシル、リイン、騎士たち、それになのはら友人と共に食卓を囲んでいる。どうして未だに存在しているのか解らない。けれど、今はその事は忘れようと思う。この優しく温かく、幸せな時間を暗くしたくないから。

「ルシルとシャマル先生とアインスのすき焼き、本当に美味しいわね」

「シャルとフェイトとアリシアのも美味いけど、野菜の切り方がすげぇ雑だよな」

「すずかちゃんとなのはちゃんとアリサちゃんのはキッチリ切れてるんやな～」

作り主が違えば味も食材の形も千差万別。だが、どれも美味しいすき焼きだった。食べ終えて食器や鍋を水に浸し、いよいよバースデ

ーケーキの時間だ。ルシル、なのは、フェイト、アリシア、シャル、アリサ、すずかがケーキに１０本のロウソクを円形に刺す。ルシルが火を灯し、リインが部屋の明かりを消すと、部屋は真っ暗になり、ロウソクの火だけが儚げに私たちを照らす。
そして「ハッピーバースデー・トゥ・ユー♪　ハッピーバースデー・トゥ・ユー♫　ハッピーバースデー・ディア・はやて～♬　ハッピーバースデー・トゥ・ユー♪」誕生日を祝う歌を歌い、主はやてがロウソクに勢いよく息を吹きかけて火を消す。火はその一度で消え、「おめでとうー！」大きく拍手で祝う。

（火を一度で消すことが出来れば願い事が叶うという。・・・主はやての願い。叶ってほしいものだ）

ケーキの後はプレゼント渡し、そしてお喋り。笑顔と笑い声に満ちたその時間を、私は見守った。死ぬのは辛い、消えるのは苦しい。でも、最期の最期まで笑っていようと思う。絶望ではなく希望を残すために。

Ｅｐｉｃｏｌ６弱きより強き

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

――舞い振るは、汝の獄火（サラヒエル）――

綺麗なサファイアブルーに燃える炎で形作られた槍が空から３０本と降り注いで来る。

「アルフ！　防御はしちゃダメ！」

「あいよっ！」

炎の槍サラヒエルが向かう先――標的は、わたしアリシアの妹であってわたし自身でもあるフェイトと、その使い魔のアルフ。２人はサラヒエルを発射した術者のルシルの動きに注意しながら、降り注いで来たサラヒエルから大きく距離を取る。

（サラヒエルは着弾した時や着弾前でも爆破できる範囲攻撃が可能な魔法だから・・・）

ギリギリで避けられたって安心した瞬間に爆発に巻き込まれたり煽られたりして、撃墜とか隙を突かれ易くされたりとかしちゃうからね。トレーニングルームの床に突き刺さるサラヒエル３０本は爆発することも消えることもなく残り続ける。

「フェイトとアルフの奴やべぇな。ルシルにフィールドの支配権を取られちまった」

わたしと同じくらいに小さな女の子、ヴィータが唸った。それを聴いたアリサが「きっと大丈夫よ！　初戦とは違うんだから！」声を上げた。わたし達は今、本局のトレーニングルームに居る。

そこで、わたし、なのは、アリサ、すずか、はやて達八神家は、わたしの大切な家族のフェイトとアルフ、チーム海鳴で唯一の男子（ザフィーラはオス扱い的な？）なルシルの模擬戦を観戦中。フェイト・アルフペアｖｓ・ルシルの模擬戦は今回で１４回目。

（勝率は１３戦１３敗・・・・。ルシルは未だに敗け無し・・・・）

攻撃力・防御力・機動力・射程、そのどれもが最強クラスのルシルには誰も勝ったことない。だってホントに反則級なんだもん、ルシルの奴～。なんなわけ。いくら歴代セインテストの魔法と技術を引き継いでるって言っても強すぎ。

「初戦か・・・・。しかし初戦は炎槍でなく風槍のアムブリエルだった。炸裂後に被るダメージは炎と風とはわけが違うぞ」

アリサとおんなじ炎熱系魔法を得意（レベル差は圧倒的だけど）としていて、剣型デバイスを扱う騎士、シグナムが反論した。アリサはシグナムをライバル視していて、シグナムはアリサを弟子扱いしてる。ま、お互いそんな関係を良しとしてるから、仲は良いかな。

「フェイトちゃん、頑張れぇーーー！」

「アルフさんも頑張ってぇーーー！」

なのはとすずかが大きく手を振って、わたしの家族を応援してくれる。なのはとすずか、それにアリサは、フェイトとアルフとわたしの大の恩人なんだよね。プレシアママが起こした事件で、とってもお世話になった。ここには居ないけど、お兄ちゃんのクロノや、わたしとフェイトの現在のママなリンディママ、それにエイミィにも。あとスクライアのユーノにセレネにエオスもそうだね。

「フェイトー！　アルフー！　今日こそルシルにひと泡吹かせちゃえぇーーー！」

お姉ちゃんのわたしだって負けられない。せめて倒せなくても一発くらいは与えてやりたい。フェイトはバリアジャケットを通常のライトニングフォームから、防御力を削ぐ代わりに機動力を上げるソニックフォームに換装した。

「フェイトさんのアレって危なくないです？　フィールド全体に爆弾みたいなサラヒエルが乱立してるですのに、防御力を捨てるなんて・・・」

元はやてのパートナー、リインフォース・アインスの後継騎、リインフォース・ツヴァイ――リインが小さく挙手して質問。

「いんや逆だな。見ろ、リイン。フェイトがさっき以上に近接戦を

仕掛けてんだろ」

「はいです」

ルシルが左手に携えるデバイス、"エヴェストルム"の刺突や薙ぎ払いを紙一重で避け続けるフェイトとアルフ。ピタッと張り付いて離れようとしない。そんな中でフェイトは大鎌のハーケンフォームにした"バルディッシュ"を振るって、アルフは、フェイトの攻撃を対処した直後のルシルに追撃を繰り出す。

距離を開けさせようとするルシルの戦術が潰され続ける。得意の射砲撃や範囲攻撃を使って距離を開けさせようとしても、それで誘爆なんかしたらルシルもどんな目に合うか判らない。だから出来ない。

「ああやって張り着くことでサラヒエルの爆破を食い止めてんだよ。さすがにルシルも自分の至近距離で爆破するわけにもいかねぇだろ？」

「なるほどです。フェイトさんとアルフさんを倒すどころか逆に自分にピンチを招くかもしれないから、ですね」

「フェイトちゃんもアルフも、強うなったな～」

「そうですね。コンビネーションに磨きがさらにかかってます。ですけど・・・」

「ああ。これ以上長引けば、ルシルも手を変えてくるぞ」

シグナムがそう言った直後、フィールドに乱立してたサラヒエルが

全て霧散した。この瞬間、ルシルの戦術はまた何十、何百となって、フェイトとアルフが近接戦をし続ける危険性もグッと高まった。

――輝き燃えろ、汝の威容（ケルビエル）――

「やば・・・！」

「アルフ！」

ルシルを中心に直径１０ｍほどの円が床に描かれた。フェイトとアルフが慌ててルシルの側から離れた直後、円の縁に沿って炎が噴き上がった。あと少し回避が遅かったら負けてた。

――舞い振るは、汝の獄火（サラヒエル）――

――燃え焼け、汝の火拳（セラティエル）――

そんな炎の壁から、サラヒエル４０本くらいと火炎砲セラティエル１０本が全周囲に向けて発射された。ほとんど無差別だから、砲撃と砲撃の間はまちまち。けどそれをカバーするようにサラヒエルが砲撃間にある。フェイトとアルフはジャンプで避けるんじゃなくて、床スレスレにまで体を前に傾けてから、ルシルに向かって一足飛び。

「上に跳べば対空迎撃の的になる。が・・・」

「スレスレもやべぇよな。つうか、ルシルの魔法のバラエティが富み過ぎてんだよな」

「苦手な距離が無いのが強みなのよね、ルシル君」

「器用貧乏でもないし、本当に強い」

炎の壁が無くなってルシルの姿が丸見え。フェイトとアルフは片方が近接、片方が射撃のコンビネーションでルシルを追い詰める。近接することで射砲撃の発射を潰して、射撃でルシルの迎撃を潰す。とここで、「ツヴィリンゲン・シュベーアトやな・・・！」ルシルが"エヴェストルム"を双剣形態にした。ルシルの本気だ。

「フェイトちゃんは、ブレイズフォームに換装だね」

機動力を削ぐ代わりに防御力と攻撃力を上げるバリアジャケットに換装したフェイト。そして始まるフェイトとルシルの斬り合い。"バルディッシュ"1本のフェイトに対してルシルは"エヴェストルム"2本。片方を防御やアルフの迎撃に使って、もう片方をフェイトの迎撃に使う。

「わたしがあそこに居れば・・・」

あれはいつだったかな。4戦目を終えたくらいの時、ルシルに訊いてみた。もし、わたしが魔導師としてレベルが高かったら、フェイト達と一緒に戦ってもいい？って。

――いいよ。フェイトとアリシアとアルフ、3人同時で相手にしよう。アリシアはどんな魔導師になるか判らないから、どんな戦いに

なるか楽しみだよな～――

フェイトとアルフのコンビを強敵として見ていないからこそ言える発言。ルシルはそうは思ってないんだろうけど、わたしは甘く見られてるって思った。悔しい。ルシルは確かに強い。誰もが認めてる。だからこそ、負かしてやりたい。

「アリ・・ん・・・」

ん？　誰かわたしを呼んでる・・・？

「・・シア・・・ん・・・」

きょろきょろ周りを見る。みんなはフェイト達の模擬戦を見てるから、呼んだのは違う人。

「アリシ・・・さ・・・」

もう誰？　幻聴？　虫の羽音みたいなのやめてよ。

「アリシアさん・・・」

模擬戦に集中できないじゃんかもう！

「アリシアさん！」

「（んもう・・・）うるさい！」

そう叫んだ瞬間、視界が一瞬だけ暗転。そして視界が開けて、わたしは呆然となる。今いるのは学校の教室。着てるのは局じゃなくて学校の制服。周りにはフェイトやクラスメイト。そして「おはよう、アリシアさん。良い夢、見れた？」わたしの机の側に立ってるのは先生で、その声はわたしをずっと呼んでたあの声だった。

（授業中に眠ってたぁぁぁーーーーー！！）

夢だった。昨日、本局でやった模擬戦の夢。冷や汗がどっと出た。今わたし、うるさい、って思いっきり言っちゃったよね。わたしは「まぁまぁな夢でした。ごめんなさい」謝った。先生は「はい、よろしい」そう言って教卓に戻ってくれた。ホッと一安心。

『アリシア。眠っちゃダメだよ』

早速、可愛い妹のフェイトからダメだし念話。わたしはこのクラスで一番背が低いから教室で一番前の席だから、後ろに居るフェイトの表情は見えない。だけど判る。絶対に呆れてる。

『にゃはは。アリシアちゃん、昨夜は夜更かしでもしてた？』

『昨夜はアリシアちゃんやシャルちゃんが好きなアニメの映画やってたから、それを観てたのかな？』

なのはとすずかからも念話が来た。確かにシャルと一緒にアニメ映画観てたけど、それが原因でもない・・・ってこともない。面白か

ったです。遅寝も原因だけどそれだけじゃない。もう1つの原因は『今日の陽気が悪い。ポカポカし過ぎでちょー眠い』春の陽気・・・っていうか、もう夏だね。6月の後半だし。

『確かにこうも温かいと眠くなるわよね。お腹もいっぱいだってこともあるし。あたし窓際だからかなりまずいわ』

アリサも念話に参加。それから何事もなく今日最後の5時間目授業は進むかなぁ、なんて思えば、「はい、アリシアさん。この問題を答えて」当てられた。問題は、ヘビとかトカゲとかの種類が何か、ってやつ。

「気持ちわ類です！」

「は～い、違いま～す」

先生のツッコみに、教室に笑いが起きる。ボケる、あえてボケる。転校直後の最初期は大マジメだったんだよ、わたしもフェイトも。けどわたしとフェイトの間違い回答をみんなはボケだと思ってたみたいで爆笑。最初はそういうの嫌だったけど、解っていながら間違ってみて爆笑が起きた時、それは快感に変わったんだよね。でもさ・・・

「はい。次の問題も、アリシアさん」

答える。

「じゃあ、この問題は、アリシアさん」

答えた。

「えっと、アリシアさん。この問題の答えは何？」

もちろん答えたよ。でも先生、これってイジメとかって言わない？　居眠りしちゃったのは悪い事だけど、４連続指名はあまりにひどくありません？　ボケる側にもお休みが必要だと思います。

「――はい、今日はここまで。すずかさん、フェイトさん」

「「起立。礼。ありがとうございました！」」

そんなこんなで理科の授業は終了。そのまま帰りのホームルームが始まる。先生から明日の予定とかを聴いて、ホームルームは終了。先生が教室を出て行ったのを確認してから、「あぅ～～」机に突っ伏す。すると「居眠りなんかしたらダメだよ」フェイト達がわたしの側に集まってきた。

「解ってる～。・・・よしっ。文句を言いに行こう」

「「「「へ・・・？」」」」

鞄を手に取って椅子から立ち上がって教室を出る。後ろから「文句って誰に・・・？」すずか、「って、２組に行くの？　アリシアちゃん」なのは、「そもそもアリシアが悪いんだから、文句も何も無

いんじゃ・・・」フェイト、「誰に文句言いに行くのか判ったわ」アリサが付いて来た。

「お邪魔しま～～すっ！」

シャル、はやて、ルシルの居る４年２組の教室へ入る。わたしの目当てだった友達の姿はすぐに発見できる。どこに居ても目立つ銀色の長い髪。

「ルシルが男子グループに混じって喋ってる！　女子なのに！」

「男子だ！！」

ルシルがすぐにツッコんでくれた。う～ん、このやり取りもそろそろ飽きてきちゃったなぁ～。教室の後ろで女子グループと喋ってたシャルとはやてが「いらっしゃ～い♪」手を振ってくれたから、わたし達も手を振り返した。

「さて。ルシル！」

「俺に用なのか？　しかもアリシアが。シャルと並んで学校では関わりたくない２トップなんだけどな～」

「そんなこと思ってたの！？」

「何気にわたしまで巻き添え食ってるんだけど！？」

わたしとシャルでガーン！　ルシルは「悪い。今日はこれで帰るよ。・・・それで、俺に何の用なんだ」って男子グループに別れの挨拶をしてからわたしの側に来た。わたしは「ルシルの所為で居眠りした上に授業で何回も当てられた！」ビシッとルシルに指差した。

「は？・・・それって俺の所為か？」

「以上終わり！　責任を取ってわたしを強くして！」

「どういうこと？」

小首を傾げるルシルやフェイト達。詳しい話は帰りながら、ってことにしてわたし達は帰路に着く。今日は全員、管理局の仕事が休みだからゆったりと徒歩で帰ることにした。これなら念話を使わなくても魔法の話とか出来る。そしてわたしは、昨日の模擬戦の夢を見たことを話した。

「ほら、やっぱりアリシアの居眠りも連続指名も俺の所為じゃない」

「今、それはどうでもいいの！　大事なのは、フェイトやアルフに混じって一緒にルシルと戦い合えるだけの力が欲しいってことなの！」

ルシルの前に躍り出て、向かい合って真っ直ぐ見詰めると、「そうは言ってもな。俺にも出来ない事はある」目を逸らすことなく真っ直ぐ見詰め返してくれた。誤魔化すことなく真剣に応えてくれてる証拠。わたしだって無理難題を言ってることくらい解ってる。

「でもアリシアちゃん。確かにフェイトちゃんやアルフとは一緒に前線で戦えないかもしれないけど、サポートとして一緒に戦っているんじゃないかな」

「そうだよ、アリシア。私もアルフも、アリシアのサポートには十分助けてもらってるよ」

すずかとフェイトがそう言ってくれるけど、それでも限界がある。フェイトとアルフは強いけど、それでもそれ以上に強い犯罪者だっているし、実際にいた。冷や冷やする場面もあった。そこはわたし達のお兄ちゃんのクロノが助けてくれたから事なきを得た。でももしあの時、クロノが居なかったら？　そう思うと本当に怖かった。そして昨日を含めたルシルと何度もやった模擬戦。常に一緒に戦えなくたっていい。だけど緊急時、フェイトとアルフが危ない事態に陥った時くらいは戦える強さを持ってたい。

「――だから、わたしも力が欲しい。一時的な戦闘能力でもいいから・・・」

わたしの思いを伝える。みんなは黙って、真剣に考えてくれた。でもやっぱり「すまない。俺には案が無い」ルシルを発端に、みんなが「ごめんなさい」って謝ってくれた。わたしも「ごめんなさい。無理を言って」って謝った。そんな簡単に強くなれるんなら誰も苦労しないよね。

「さっ。話はこれまでにして！　今日はどうする？　どっか遊びに行く？」

暗く重い空気を払拭するために明るく振る舞う。今日はとりあえず、「翠屋でケーキいっぱい食べながらお喋り　」いくつか候補が上がって（模擬戦って候補はすぐ却下）、多数決で喫茶店・翠屋の売り上げに貢献しようってことになった。

「いらっしゃ――おっ♪　おかえり、なのは、お友達のみんなも」

翠屋に到着すると、なのはのお父さんで翠屋のオーナー、士郎さんが迎えてくれた。みんなで「こんにちはー♪」挨拶返し。さぁ、どこに座ろうかってところで店の中には他のお客さんがたくさん居ることが判って、わたし達はお店の外のテラス席へ移動。ウエイトレスのお姉さん（なのはのお姉さんじゃなくてアルバイトの）に注文。あとは、注文したケーキとかが来るのをお喋りしながら待つだけ。

「なぁ、ルシル君。さっきから難しい顔してるけど、どうしたん？」

ルシルの方を見ると、はやての言うように眉間にしわが出来てた。アリサが「今さら女子の中に男子1人だから、とか言わないわよね」からかい混じりに笑う。外見は女の子なルシル。着ているのは男子の制服。他の人が見れば男装女子。

「違う。アリシアの事だ。あんなに真剣に悩みんでいるんだ。やっぱりちょっとやそっとで諦めるわけにはいかないだろ」

みんなが「おお！」って拍手。本気で嬉しいこと言ってくれたんだけど。到着したケーキを食べながら、これまで複製されて溜まった

魔法の道具の中から管理局法に引っかからないで、なおかつわたしでも扱える物が無いか検索してるってルシルは教えてくれた。お礼に、「ルシル。あ～ん、して」わたしが頼んだケーキをあげた。嫌がるルシル（ごり押しで食べさせた♪）と、嫉妬するシャルとはやてが面白い。

「ルシル君、ルシル君。たとえばどんな物があるの？」

「たとえば？　う～ん・・・、使えば魔力ランクＳＳほどまでの力を得られる代わりに、効果が切れたら向こう５年、頭がパーになる薬草」

「こわっ」

「装備すれば圧倒的な力を得られる代わりに、寿命が削られていく首飾り」

「ＲＰＧとかで見かける呪われた装備品みたいね」

「自分と他者の能力を入れ替えることの出来る１組の指環」

「それはどんな呪いがあるん？」

「・・・性別が変わる。女性が付けたら男性に、っていう風に。しかも一度付けたら最低１年は外させない」

「こう言ったら失礼かもだけど、碌な物が無いね・・・」

「呪われる系の装備品ばっかなわけないよね？」

「もちろんだよ。でも、まともな物は装備できるだけのレベルにアリシアが達していないし、そういうの度外視した物はロストロギアとか質量兵器とかに分類されそうで」

というわけだった。結局、「俺の持ち物じゃダメだな～。現在のアリシアに合いそうな物は無い」頼みのルシルでもダメだった。やっぱ楽しちゃダメなんだね。この話題はもう切り上げて、みんなで楽しくお喋り。２週間後の土曜日に近所でやる夏祭りに行こうとか、夏休みはみんなで海に遊びに行こうとか。スケジュール組み立てだけであっという間に時間は過ぎて・・・

「それじゃ、また明日♪」

「気を付けて帰んのよ」

迎えに来た車に乗って先に帰るアリサとすずかを見送った後、わたし達も自分の家に向かう。その道中、「そう言えば、セレネとエオスのデバイスは妙だったよね」シャルがポツリと漏らした。

「あー、確かに変な魔力の流れを感じたなぁ～」

はやてがシャルに同意する。セレネとエオスが通ってるっていう魔法学院を見学した時、魔法戦をやったって聞いたけど。その時に見たんだね、２人のデバイス。

「２人のデバイスってどんなのだったの？」

「やっぱり杖とかそういうの？」

「銃だったよ。カートリッジシステム搭載のストレージデバイス」

「かなりゴツいやつやったなぁ。全部が黒で、カッコええ拳銃やったよ」

「リボルバーのＳ＆Ｗ　Ｍ５００をモデルとしていたな。銃身は２１ｃｍちょいで――」

なんか語り始めたルシルは放置。やっぱり男の子だなぁ。銃が好きとか。それはともかくとして、カートリッジかぁ。一時的だけど爆発的な魔力を上昇させることが出来る機構。でもアレってそれなりの魔力を持ってないとダメだし、魔力運用技術も並以上を持ってないとダメ。つまり、わたしじゃダメ、扱えきれないってわけで・・・。あぅ～、ホントにダメダメだよぉ～（泣）

「でもそれの何が妙なの？」

「ルール上、カートリッジは使用禁止だったんだけどさ。セレネとエオスが魔法を使う時、妙に魔力が上昇したんだよね。あれはたぶん・・・別のドーピングをしてる」

「「ドーピング・・・？」」

なのはの質問にシャルがそう答えて、わたしとフェイトは小首を傾げた。そしてルシルは「２人のランクはＤランクらしいんだが、普通にそれ以上の魔力でシャルを翻弄してくれたしな」ってセレネとエオスを褒めた。

「カートリッジとは違う別の魔力上昇機構を手にしてる、ってことかぁ～」

わたしは腕を組んで唸る。もし本当にそう言うのがあるならお目に掛かってみたい。

†††Ｓｉｄｅアリシア⇒フェイト†††

今日も管理局の仕事が休みな私と、姉のアリシア、それに親友のなのはとアリサとすずかは、ミッドチルダは北部・ベルカ自治区、ザンクト＝オルフェンへとやって来た。ここに来るのは結構久しぶり。

「はやてちゃん達も来られると良かったんだけどね」

「お仕事だからしょうがないよね」

シャルとはやて達八神家は全員お仕事で、一緒できなかった。だから今日はシャル達抜きだ。そしてここを訪れた理由は、ある友達に逢うため。私にとって最初は敵対関係だったけど、今ではとっても大切な友達・・・

「「やっほ〜〜〜！」」

「セレネちゃん！」

「エオス！」

すずかとアリサが、こっちに駆け寄って来たセレネとエオスと大手を振り合う。やっぱり"フレイムアイズ"と"スノーホワイト"の原型――"クレイオスソウル"の新旧マスターとしての特別な絆なのかな。とりあえず私たちも「久しぶり！」って手を振る。

それから2人お勧めの喫茶店に入って、一番奥の席に着く。そしてここに来た理由について話し始める。2人のデバイスの秘密。今回こうして会うための約束をする時、2人のデバイスについて訊いてみた。その際にアリシアが自分の抱えてる悩みを伝えたら、直接会って話すって約束してくれた。

「――それでさ。セレネとエオスのデバイスって何か特別な機構とか備えてるの？　直接会えないと話せないってことは、かなり機密の高いやつだったり？」

アリシアがテーブルに乗り出し気味に訊くと、「まあね。私用でとある遺跡から発掘した特別な鉱石なんだよ」そう答えたセレネが耳を隠す髪を掻き上げると、両耳には三日月型のイヤリングが1組。

「初めて触れた人の魔力を記憶する鉱石でね。その人がその鉱石に魔力を流すと何倍にして返還してくれるっていう力を持ってるの」

エオスも同様に髪を掻き上げると、両耳には太陽型のイヤリングが1組あった。アレが2人のデバイスの待機形態なんだ。

「「とりあえず、どんな物か見せるよ」」

「アレジアンス、ヴァリアンス。セットアップ」

「グロリアス、グラヴィタス。セットアップ」

セレネとエオスがデバイスの名前を告げると、計4つのイヤリングが黒い拳銃型デバイスになって、ゴトッとテーブルの上に置かれた。カートリッジ5発を装填するシリンダーを有するデバイス。全部が真黒だからすぐに目が行く。シリンダー下――フレームとグリップの間に埋め込まれてる丸い宝石に。

「コレがその特殊な鉱石・・・？」

「「綺麗　」」

「うん　」

目を輝かせるなのはとすずかにわたしも同意する。一見すると黒いんだけど、よく見ると宝石の中には銀河のような無数の光の集合体があった。それが幻想的で、神秘的で、目を奪われる。

「初めて触れた人限定ってことになると、誰かに取って来てもらうっていうのはダメってことよね」

「「まぁ、そうなるね」」

デバイスをイヤリングに戻すセレネとエオス。アリシアは「その鉱石を扱うのって何か特別な才能とか技術って要るの？」って質問を続ける。アリシアの魔導師としてのレベルはお世辞にもあまり良くない。それなのにデバイスや強さを求めるのは、ひとえに私の為。

（私が危なっかしいから心配や不安にさせてるからなんだけど・・・）

申し訳ない半面嬉しいって思いもあって。アリシアが望むようにしてあげたいし、協力が必要なら何も惜しまないで手伝うつもりだ。

「ううん。特には無い・・・と思う」

「私たちとアリシアは違うからね。やってみないとどうか判らないよ」

セレネとエオスが言うには、鉱石を発掘した遺跡はほとんど手つかずで、鉱石を組み込んだデバイス持ちは次元世界でも2人だけなんじゃないかってことらしい。まぁ、知れ渡っていたら管理局で調査とか何かしらの分類指定にして犯罪組織などに悪用されないように対処していると思うし。

「・・・セレネ、エオス。お願いがあるの」

「いいよ。遺跡の在る場所、教えてあげる」

２人のデバイスから私たちのデバイスにいくつかのマップデータが転送されて来た。それらを確認しながら、遺跡内のどこにトラップがあるとか、強暴な魔法生物が棲息しているけど、私たちが束になれば余裕勝ち出来るとか、教えてもらった。

「陸士学校でいろいろ訓練したんでしょ、アリサもフェイトもなのはも。すずかは元より運動能力が良いし――・・・」

「私たちはこれから１ヵ月、学校にスクライアとしての仕事もあるから付いていけないけどさ――・・・」

「「ラクショ～っしょ　」」

私たちにウィンクするするセレネとエオス。私やアリシア達は顔を見合わせて、「もちろんっ♪」頷いて応じた。こうして私（家に留守番のアルフはあとで呼ぼう）、アリシア、なのは、アリサ、すずかは、魔導師の魔力を強化できるっていう鉱石を採取するため、ミッドチルダを発つことになった。

Ｅｐｉｃｏｌ７親友寄れば難無く苦無く

†††Ｓｉｄｅすずか†††

管理局のお仕事が休みなのを利用して、私、なのはちゃん、アリサちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、アルフの６人で、第１５管理世界アネアへとやって来た。次元港を出て、タクシーで郊外まで移動。そこからはセレネちゃんとエオスちゃんに貰ったマップを確認しながら深い森の中を歩く。

「大丈夫、アリシアちゃん？」

「うぅ、なんとか・・・」

一番後ろを歩く私とアリサちゃんの目の前をふらふら歩くアリシアちゃんに声を掛ける。私たちはバリアジャケットを着ているけど、アリシアちゃんはただの私服。一応、私の魔法でアリシアちゃんを魔力で覆っているから外傷は防げるけど、疲労ばかりはどうしようもない。

「貰った地図だとこの辺りに入り口があると思うんだけど・・・」

「すんすん・・・草木の匂いに混じってカビ臭い空気が風に乗って来てる。近いよ」

先頭を歩くフェイトちゃんとアルフが立ち止まって周りを見回した。

私とアリサちゃん、アリシアちゃんの隣を歩くなのはちゃんも倣って見回すけど、それらしい入り口はどこにも無いって思うんだけど。"スノーホワイト"に「どう？　入口は近いらしいんだけど・・・」訊いてみる。

≪マップと地形を照らし合わせてみたのですけど、この辺りで間違いないと思いますわ、スズカ≫

探査能力に一番優れてる"スノーホワイト"もこう言っているんだし、遺跡への入り口は確実にこの近くなんだ。分散して周囲を探索していると、「ちょっと休憩～」アリシアちゃんがフラフラと岩に座った。その瞬間、「にょわぁっ！？」アリシアちゃんの姿が消えた。

「「「アリシア！」」」「「アリシアちゃん！」」

アリシアちゃんの姿が消えた場所へと駆け寄る。そこに在ったのは子供1人がようやく入れるような小さな穴。真っ暗な穴の中から「目が回るぅ～～～！」っていうアリシアちゃんの悲鳴と何かが転がる音が聞こえてきた。

そしてドッシーンと大きな音が聞こえたかと思えば、「いったぁぁーーーい！」またアリシアちゃんの悲鳴が聞こえてきた。良かった、魔法でアリシアちゃんを護っていて。護ってなかったら、痛い、じゃ済まなかったかもしれない。

「行こう！」

なのはちゃんとフェイトちゃんとアルフが松明代わりの魔力スフィアを創り出して、私たちは急勾配の螺旋階段を急がず焦らず、でも気持ち的に早足で降りて行く。アリサちゃんが「結構深いわね・・・」壁のくぼみにある燭台に火を灯していく。アリサちゃんの言うように2階建ての家よりずっと深い。結局、「やっと着いたね・・・」50階建てくらいの階段を降りたような気がする。

「「アリシア！」」

「フェイト、アルフ！」

階段を降り切ってすぐ、通路の壁にもたれかかって体育座りをしてるアリシアちゃんを無事に発見。アリシアちゃんとフェイトちゃんとアルフが再会の抱擁を交わす。抱擁を終えたアリシアちゃんが「すずか、ありがとう。すずかの魔法のおかげで傷1つなかったよ」って私に笑みを向けてくれた。

「うん。どういたしまして」

「さてと。無事に合流を果たしたし、出発しようじゃない」

みんなでマップを確認して、2手に分かれてる通路をどっちに進むかを決める。向かうは右の通路。そっちに進む前に、「アリシア。あたしの背に乗んな」アルフが人型から狼形態に変身。アリシアちゃんは即「お願〜い。ちょっとだけ休ませて〜」アルフの背中に乗って、「ゴー♪」通路を指差した。

「じゃ、行くわよ」

フェイトちゃんとアルフの代わりに私とアリサちゃんが並んで先頭に立って、私は探査、アリサちゃんは壁に等間隔に並ぶ燭台に火を灯していく。通路は思ったより狭くて、３人が横に並べるかどうかって感じ。ゆるりとカーブと描く通路を警戒しながら進む。

「この近くにトラップがあるみたいだね。・・・スノーホワイト。探査よろしく」

≪かしこまりましたわ≫

"スノーホワイト"の探査能力を最大限に利用して、マップにマークしたトラップ発動のトリガーを発見するのが私の役目。"スノーホワイト"はすぐに床にセットされたスイッチを見つけてくれた。

「みんな、この色違いの石板を踏まないように気を付けてね」

しっかり見ないと判らないけど、色違いの石板の足場がトラップ発動トリガーだ。コレを踏んだらどんな目に遭うのか判らない。みんな、その足場を避けて進む。それから３０分くらい通路を右に左に、数あるトラップトリガーをクリアしながら進んで・・・

「広い空間ね・・・」

「セレネちゃんとエオスちゃんはここで一休みするのが良いって」

学校の教室４部屋分の広さと体育館くらいの高さの在る大部屋に着いた。至る所に穴が開いてたり崩れたりと何かが戦った形跡がある。貰ったマップにはデフォルメされたセレネちゃんとエオスちゃんの似顔絵が描かれている。

セレネちゃんの吹き出しには、この階層の守護者と戦闘。でも勝利♪って書かれてる。エオスちゃんの吹き出しには、もう一安心。ここで一休み　、って書かれてる。というわけで、この広間でちょっと休憩することになって、あちこちにある瓦礫に腰かける。

「アリシア、大丈夫かい？」

「アルフに乗せてもらってたから全然平気だよ♪　アルフの方こそ疲れてない？」

「平気さ、これくらい」

「ここを出てからはちゃんと歩くからね。わたしの事なんだもん。ひとりラクするなんてヤだもん」

「おお、えらいぞ、アリシア！」

アリシアちゃんとアルフを微笑ましく見守っていると、「今、どの辺り？」アリサちゃんが燭台に火を点け終えて私のところに来た。マップを確認すると、いま居るのは第４階層。私たちが入って来た階段で第１から第３までの階層をショートカット出来たことになる。で、私たちの目的――魔力強化の鉱石が在るのは第６階層だから、「――あと、２階層だね」でもここからはもっと気を付けないと。

「第５階層から、殺傷性の高いトラップや強暴生物が増えてくるって書いてある。だから気を引き締めて行かないとね」

「ええ」「「うん」」「おー！」「あいよ」

１０分間の休憩を終えて広間を出て、すぐ近くにあった下層へ降りるための階段を使って第５階層へ降りる。細心の注意を払いながらボロボロな階段を二列縦隊で降りつつ、「かなり傷んでる。みんな、気を付けて」後ろを歩くみんなに注意を促した。その直後、「へ？」アリシアちゃんから抜けた声が漏れた。

「どうしたの、アリシア？」

「アリシア。早く進んどくれ。後がつかえてんだ」

最後尾を歩くフェイトちゃんとアルフ（人型モードに変身した）がそう言うと、冷や汗をダラダラ流すアリシアちゃんはそんな２人や私たちを見て首を横に振るばかり。口を開いたかと思えば、「なんか踏んじゃった」ってアリシアちゃんは自分の足元を指差した。一斉にそっちを見ると、アリシアちゃんの右足が踏んでる足場が他の足場より１ｃｍほど沈んでた。私は「スノーホワイト。コレってもしかして・・・」訊いてみると、≪トラップトリガーですわ、残念ながら≫やっぱりな返答が。

「ちょっ、セレネとエオスのマップにはそんなの書いてなかったわよね！？」

「えっと、そのはずなんだけど・・・」

私たちの現在地とマップを確認するんだけど、この階段にトラップが在るなんて記されてない。う～ん、セレネちゃんとエオスちゃん、出来ればもうちょっとしっかりと調査してくれると嬉しかったんだけど・・・。とにかくどんなトラップからスキャン。調査の結果、足を退けた瞬間に発動するトラップで、階段が崩れて下層へ真っ逆さまというものだった。

「アリシアちゃんの体重以上の重さの岩を足場に乗せれば大丈夫」

「ちょっと待ってな。あたしがさっきの広間から持ってくるよ」

「お願ね、アルフ」

アルフが階段を上がって戻って行った。確かにあの広場の瓦礫を持って来ることが出来れば、トラップはきっと発動しない。アルフを見送ると、「ごめんなさーい」アリシアちゃんがガックリと肩を落とした。

「気にすることないよ、アリシアちゃん」

「そうだよ、アリシア」

「そうね。元はと言えばあの2人がしっかりとトラップの在り処をマッピングしなかった所為よ」

なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃんとアリシアちゃんを慰める。私も「大丈夫だよ」って続いて、「スノーホワイト。記載漏れがあるかもしれないから、これからは１０ｍ進む毎にスキャンして」と指示を出しておく。

「お待ち～。アリシア、足を上げずにちょっと横にずらしておくれ」

「う、うん」

アルフさんが一抱えある岩石を持って戻って来た。アリシアちゃんが言われたとおりに右足を足場の端ギリギリにまでズラすと、「よっこらせっと」ズシンと岩石を足場に置いた。

「アリシアちゃん。ゆっくり足を退けて。アルフはこっち側へ。みんなは逃げる準備を」

万が一のトラップ発動の際にこちら側とアルフ側が隔てられるような事は避けたいから、アルフをこちらに来させる。そして私はアリシアちゃんの手を握って、いつでもダッシュで逃げられるようにしておく。アリシアちゃんが足場から完全に足を退けた。トラップは「・・・発動なし。もう大丈夫」発動しなかった。みんなで安堵の息を吐いて、「行こう」先へ進む。

「――えっと、そこの壁にトラップトリガーがあるから気を付けてね。あ、そこの女の人の顔が彫られた足場もトリガーだから踏まないように。アリサちゃん、そこの燭台に火を点けちゃダメ。それも

トリガーだよ」

「うがぁぁぁ！　さっきからトラップのトリガーばっかじゃないのよ！」

「にゃはは。さすがに身動きが制限されっぱなしだと疲れちゃうね」

「体力的にもそうだけど精神的にもキツキツだよ～」

「しっかり、アリシア」

「あたしが背負うって言ってんのに聞かないし。自分の足で進むっていうのは良い事だけどさ、無茶して倒れたりでもしたら・・・」

「あうぅぅ～～～」

アルフにそう言われたアリシアちゃんは、「お荷物でごめんなさーい」屈んだアルフの背に乗った。バリアジャケットを着ている私たちでも疲労が蓄積し始めてるのに、魔力で体を覆っただけのアリシアちゃんはどれだけの疲労感なのか。

「次の階段まで、まだ結構あるよ。みんな、頑張って」

第５階層に降りてから早４０分。複雑な造りなうえにトラップの数が尋常じゃない。モンスターが出て来ないのが幸いだけど、それでもやっぱり大変だ。セレネちゃんとエオスちゃん、よくデバイスも無しにこの遺跡をクリア出来たなぁ。誰か助っ人とか居たのかな？

「次の角を曲がったら休憩に適した広間があるって書いてあるから、そこで長めの休憩をしよう」

「さんせ～」

"スノーホワイト"で通路をスキャンして角を曲がった瞬間、「っ！？」通路の奥から通路いっぱいの大きさを誇る火炎球が飛んで来た。先頭だった私とアリサちゃんは元来た通路へと跳び戻って回避。

「何よ、今の！」

「大丈夫！？　アリサちゃん、すずかちゃん！」

「ようやくモンスターのお出ましかい！」

「アリシアは下がってて！　アルフはアリシアをお願い！」

「あ、う、うん！」

「・・・あいよ！」

アリシアちゃんと、護衛役のアルフが数歩分と通路を後ずさり。それを確認した私は魔法で手の平サイズの氷の鏡を作る。まずは火炎球を飛ばしたのが何なのかを確認しないと始まらない。角からちょっとだけ鏡を出して、「アレかな・・・？」通路の先に在る闇に包まれた広間で何か蠢くのが見えた。

「でもちょっと暗くてよく見えない・・・」

「どれどれ、あたしにも見せて。・・・むぅ、確かにハッキリとは見えないわね」

「明かりが必要だね。どうしよう・・・？」

「私の電撃で何とかなるかな・・・？」

「それならあたしのフリンジングボムの方が効果的と思うわ」

アリサちゃんが"フレイムアイズ"を通常の剣形態ファルシオンフォームから、銃身下に刃を付けたライフル――銃剣形態のバヨネットフォームに変形させた。と、その直後、「また来た！」暗闇の向こうから私たちの身長くらいの大きさにまで縮んで速度が上がった火炎球が飛来した。私は慌てて手を引っ込めた。

「あつっ・・・！」

熱気で私が持っていた氷の鏡が蒸発した。普通の氷結系魔法じゃ簡単に打ち負けるかな。治癒魔法の基礎中の基礎、ヒーリングで負った火傷を治す。

「なのは。万が一の為にシールドよろしく」

「了解、任せて！」

アリサちゃんは"フレイムアイズ"を、なのはちゃんは"レイジングハート"のカートリッジを1発ずつロード。そしてまた発射されて来た火炎球が2発。アリシアちゃんが「魔力反応を感知して発射して来てる」ポツリと漏らした。

「みたいだね。まず私がシールドを発動して1発目を受けるから――・・・」

「ほぼ同時にあたしがフリンジングボムを撃ち込んでやるわ」

なのはちゃんとアリサちゃんが打ち合わせを終えて、「今っ！」2人同時に通路を出た。アリサちゃんが"フレイムアイズ"の銃口を広間の方に向けて、足元に魔法陣を展開。同時になのはちゃんがラウンドシールドを発動。それを合図に火炎球が1発放たれて来た。

「いっっけぇぇぇーーーーッ！！」

――フリンジングボム――

発射されるバスケットボール大の火炎砲弾1発。遅れてドォンって爆発音と地鳴りが起きたと思えばなのはちゃんとアリサちゃんが戻って来た。フェイトちゃんが「何か見えた？」って訊くと2人は頷いた。

「狼みたいな4足の獣で、アルフやザフィーラの狼形態ん時よりずっと大きかったわ」

「あと、背中に剣とか斧とか、武器がたくさん刺さってたように見えたよ」

ということみたい。私はマップを確認して別ルートで階下に降りられないか確認してみるけど、「あー、あの広間を通らないと下に行けないみたい」ダメだった。アルフが「床下ぶっ壊すかい？」穴を掘る仕草をした。

「ダメだよ、アルフ。地下遺跡だから何が起こるか判らないし」

「ここで生き埋めなんてことになったら確実に死ぬわね」

それだけはどうしても避けたいから、モンスターをどうにかするしかない。ここで会議。帰りのことも考えて、ここで無力化するのは必須。だけどこの先にもモンスターが居るかもしれないから全力戦闘は極力回避。連携については、これまでに何度かチーム海鳴内でチーム分けした対多数の模擬戦してるからそれを応用。

「アリシアとアルフはここで待ってて」

「ああ。判った」

「気を付けてね、フェイト。なのは達も気を付けて」

アリシアちゃんに頷いて応えて、通路の角に集まる。魔法に反応して攻撃を仕掛けてくるようだけど、それがすべてとは限らないって

こともあってあえて魔法を発動した後で広間へ突撃することを決めた。

「まずは私がシールドで防御」

「私がなのはちゃんのシールドを強化」

「で、広間に入ったら即散開よ」

「そして足を集中的に攻撃して、機動力を削ぐ」

今はこれくらいの作戦で十分。そういうわけで、「レイジングハート！」なのはちゃんがカートリッジを1発ロードして通路を出てすぐシールドを発動。

「パワーブースト・シールディングフォース！」

次に私が通路に出て、防御魔法系全般の効果を上昇させるブースト魔法を発動して、なのはちゃんのシールドを強化。なのはちゃんと私の後ろにアリサちゃんとフェイトちゃんが続いて通路を走る。目の前からは視界いっぱいの火炎球。なのはちゃんのシールドに着弾した火炎球が爆発を起こして、通路いっぱいに炎と黒煙が広がった。

『アリシア、アルフ！』

『アリシアはあたしがしっかり護るから安心して！』

『頑張れ、フェイト、みんな！』

２人の居るところにまで炎が届いたようだけど、アルフがしっかりとアリシアちゃんを護ってくれたみたい。なら私たちはこれ以上、アリシアちゃん達に被害が及ばないように急いで広間に進入するだけ。先頭を走るなのはちゃんに続いて私たちも通路を走って、「散開！」広間に入った瞬間に一斉に散る。

「で、デカ！！」

「お、大きい・・・」

通路の燭台にアリサちゃんが火を点けてくれたおかげで少しばかり広間内が明るい。だから視認できた、なのはちゃんとアリサちゃんが見たモンスターの正体。確かに狼のようだけど、脚の長さだけで私の身長と同じくらい。それに体だけじゃなくて脚や頭にまで武器が２０本以上と刺さってた。

『広間の燭台に火を点けてくるわ！』

『私とフェイトちゃんで引き付ける！』

『私は援護に回るよ！　なのはちゃん、フェイトちゃん、大火力砲撃は使用禁止の方向で！』

『『うんっ！』』

アリサちゃんが広間の壁のくぼみにある燭台に火を点けに走って、なのはちゃんは「シューット！」魔力弾アクセルシューターを８発と発射。フェイトちゃんは"バルディッシュ"を大鎌のハーケンフォームで狼の脚に斬りかかるけど、「速い・・・！」狼はその俊敏さで２人の攻撃を避けた。

「重そうな武器がいっぱい刺さってるのに・・・」

なのはちゃんがシューターを操作して、大きく私達から距離を取った狼へ向かわせる。私は「パワーブースト・ガンファイアフォース！」射砲撃魔法全般の威力・速力を強化する魔法を"レイジングハート"に掛ける。

「パワーブースト・スラッシュ＆フィジカルフォース！」

フェイトちゃんには斬撃の切断力と身体能力を上昇させるブーストを掛ける。するとシューターは狼の動きに追い付いて、フェイトちゃんも通常のライトニングフォームで狼の動きに付いて行けてる。

「すずか！　あたしにもブーストお願い！」

「うんっ！　パワーブースト・スラッシュ＆フィジカルフォース！」

壁４面にあるたくさんの燭台に火を点け終えたアリサちゃんにもブーストを掛ける。なのはちゃんのシューターで狼の動きを制限して、アリサちゃんとフェイトちゃんの挟撃が狼を襲う。狼も大きな口から火炎球を連発して反撃してくる。私たちはそれを走っては飛んで

避けて・・・

「壁に張り付いた・・・！」

出っ張りやくぼみに利用して壁に張り付いた狼が大きく咆哮を上げた。すると体中に突き刺さってる武器が光り出して環状魔法陣が武器の数だけ展開されると、ゾクッと悪寒が全身を駆け抜けた。

「みんな気を付けて！！」

私が声を上げた直後、武器の先端から赤・青・黄色、火・氷・雷の光線が無差別に発射されて来た。しかも1発1発が途切れる断続発射じゃなくて持続発射。さらには冷気の光線は氷の轍を、炎の光線は炎の轍を、雷の光線は電撃の轍を床や壁や天井に幾筋も作った。

「厄介な魔法を使うじゃない！」

「しかも魔力量もかなり高い！　食らったらかなり危険だよ！」

光線が途切れるまで避け続けないといけないし、光線が作った3属性の轍にも気を付けないといけない。そんな中でも、「シューット！」なのはちゃんはシューターを、「ファイア！」フェイトちゃんはプラズマランサーを、「うりゃぁぁぁ！」アリサちゃんはフレイムバレットを、狼へと向けて発射。

「スノーホワイト！」

≪フローズンバレット！≫

私も冷気弾を８発と発射。だけど狼の何十本っていう光線が私たちみんなの魔力弾を全て薙ぎ払っちゃった。攻撃を当てるにはまず、あの光線をどうにかしないと。砲撃は広間を壊しかねないからやっぱりダメ。だったら・・・

『私が狼を壁から落とすから、なのはちゃんはバインドで拘束を。アリサちゃんとフェイトちゃんは攻撃をお願い！』

『『うんっ！』』『判ったわ！』

狼の意思とは別に強制的に壁から落とせば空中ではどうすることも出来ないはず。そこをなのはちゃんのバインドで拘束すれば、ほんのちょっとでも攻撃の手が緩むと思う。

（氷の轍が熱で溶けて水になってる。この水を利用すれば・・・）

「すずかちゃん、いつでもいいよ！」

広間の壁面全てが水浸しになってる。それを利用する。なのはちゃんの合図に頷いて、狼へと右手を翳して、「アイシクルスタチュー！」氷結魔法を発動。狼のお腹を突き飛ばすように壁から氷の柱を出現させた。本来の効果は相手を氷の柱に閉じ込めるものなんだけど、今回は壁面の水を利用して氷の柱を突き出させた。いきなりお腹に一撃を貰った狼は苦悶の声を発して宙を舞った。もちろん光線の放出も止んだ。

「レストリクト・・・ロック！」

落下する狼を拘束する桜色に輝く魔力ロープ。すかさず「はぁぁぁぁぁっ！！」アリサちゃんとフェイトちゃんが狼のお腹の下に潜り込んだ。

「悪いわね・・・！」「ごめんね・・・！」

――バーニングスラッシュ――

――ハーケンスラッシュ――

2人は狼のお腹を十字に斬った。ぎゃおおお、って苦痛に満ちた叫び声を上げた狼。レストリクトロックが消失して狼がドサッと床に落下した。そろそろと警戒しながら近づいて行く。狼はこれまでと違って狂気に満ちた瞳じゃなく、どこか安堵を湛えた瞳を私たちに向けて、くぅーん、と一鳴きしたと思えば光になって消えちゃった。残ったのは体中に刺さってた武器と、「首輪・・・？」だった。

「どこかで飼われていたのかしら・・・」

「解らないけど・・・。でも、もしこれが自然的なものじゃなくて人為的にモンスターに変えられたとしたら・・・」

「許せないね・・・」

「うん」

私は首輪を拾ってポケットにしまい込む。遺跡を出たら、どこか温かな場所に埋葬しようと思う。とにかく今は先に進もう。フェイトちゃんがアリシアちゃんとアルフを迎えに行って、私たちは広間を通って下層へと続く階段を下りた。

「次の階層に、あの鉱石があるんだよね・・・？」

「セレネとエオスのマップ通りならね」

「ところどころ漏れがあるけど、さすがに目的地のミスは無いと信じたいけど・・・」

ちょっと不安が残ってるけど、今はこのマップを信じて進むしかない。さっきまでと同じように通路をスキャンしながらトラップトリガーを見つけてはクリアして行く。それを繰り返して進むこと２０分ちょっと。アリシアちゃんが「なかなかに順調だね」って陽気な声を上げた。目的の物が近いおかげかテンションは下がってない。

「あんたはそうでもこっちはなかなかにハードよ」

「トラップだけじゃなくてモンスターの相手もしないといけないしね」

「この階層に降りてきたらどっと増えたもんね～」

モンスターの出現率が高まったのは本当。しかも戦闘の最中でもトラップに気を付けないといけないからすっごく苦労した。でも救いなのはとても弱くて、しかもスライムっぽい姿だったことで、良心もあんまり痛まなかった。

「あ、みんな、待って」

みんなを呼び止めて壁を見回す。みんなからの「どうしたの？」っていう疑問に、「この辺りに隠し通路があるみたいなんだけど」って答える。マップに描かれたセレネちゃんのデフォルメイラストの吹き出しには、ここに隠し通路♪ってある。みんなで壁を叩いたりしてみるんだけど、なかなか見つけられない。

「スキャンしてもダメなの？」

「この辺りだけダメみたい。何か妙な力に妨害されてるっぽい」

フェイトちゃんに答える。さっきから何度も試しているけど、どうも上手くスキャン出来ない。と、ここで「もしかして・・・」アリシアちゃんがそう言って床に膝を付いて、床と壁の繋ぎ目を見始めた。

「アリシア・・・？」

「セレネとエオスが動物形態で進んだ場合、わたし達の人の目線じゃ気付かないかもしれないし」

さすが観測眼が一番優れてるアリシアちゃん。スクライア一族は遺跡探索のために小動物の姿に変身できるようにしてる。その事をすっかり忘れちゃってた。私たちもアリシアちゃんに倣って繋ぎ目付近を見る。

「あ、あった！　ここ！　小さな穴がある！」

「でもどうやって入るわけ？　あたし達には変身魔法なんてないわよ」

「どうにか崩さないようにして穴を開けるしか・・・」

下手に崩して遺跡崩落ということにならないようにしないといけない。それを踏まえてみんなで策を練っていると、「なんか来るよ・・・！」アルフが通路の先を睨みつけた。さらに「ヤバい、なんかヤバい！」アルフが怯え始めた。ここで「っ！」私たちも感じ取れた。とんでもない威圧感。明らかに普通じゃない何かが・・・奥に居る。

「さっきの狼なんて目じゃない程の禍々しい何かが近付いて来る・・・！」

アリサちゃんが"フレイムアイズ"を構えた。私もなのはちゃんもフェイトちゃんもデバイスを構えて、アルフはアリシアちゃんを連れて後ろに下がった。そして「来る！」それは姿を見せた。通路半分くらいの大きさを誇る蛇だった。普通の蛇と違うのは、歯が全て剣で出来ていて、上あごと下あごを1本の槍が貫いてる。それに目

が８つもある。そんな蛇の口の奥に見たことの無い魔法陣が展開された。

「バルディッシュ！　マルチディフェンサー！」

「レイジングハート！　エクセリオンシールド！」

「フレイムアイズ！　ラウンドシールド！！」

「スノーホワイト！　パワーブースト・シールディングフォース！」

みんなの防御魔法すべてを強化する。その直後、蛇の口の奥からどす黒い魔力砲が発射された。最初にフェイトちゃんの多重シールドに着弾。少しの拮抗の後、１枚目を粉砕して２枚目に着弾。これなら防ぎきれるって安心したのも束の間、バキン、ガキン、メキメキ、シールドに何か硬い物が連続で当たる音が響いてきた。しかもシールドが次々に破壊されていってる。

「砲撃の中に武器が混じってる！」

なのはちゃんが叫んだ。よく目を凝らすと、シールドを破壊していってるのは砲撃じゃなくて、砲撃に紛れて飛んで来る剣や槍といった武器だった。その武器がフェイトちゃん、なのはちゃんのシールドを全て粉砕。最後は「あたしのシールドも長くは保たないわ！」アリサちゃんのシールドだけ。

「スノーホワイト！　アイスミラー・ロングサーペント！」

みんなを後退させてからのアイスミラー7枚の多重シールドを発動。一時撤退をすることに。今は身を隠してやり過ごして、居なくなったところで壁の攻略に挑むことを決めた。急いでアリシアちゃんとアルフの元へ、って駆けだす私たち。

「アリシア、アルフ、一旦、ここから離れ――アリシア、アルフっ！！」

先頭を行っていたフェイトちゃんの悲鳴が通路の角の向こうから聞こえた。一番遅れた私も角を曲がって、「うそ・・・」その光景に呆けるしかなかった。さっきまで私たちの目の前に居た蛇が、こっちの方に移動していた。

「アリシア、アルフ！　しっかり！」

「すずか！　治癒魔法！　急いで！」

「私とアリサちゃんで時間を稼ぐ！」

「けどなるべく急いで！」

蛇のすぐ側には床に倒れたアリシアちゃんとアルフの姿が。その2人の名前を必死に呼び続けるフェイトちゃん。なのはちゃんはシューター、アリサちゃんは斬撃で蛇の鼻っ面に攻撃を与えてく。

「スノーホワイト！」

≪承知しておりますわ！≫

私もアリシアちゃんとアルフの側に駆け寄って、「ラウンドガーダー・エクステンド！」ユーノ君直伝の高位結界魔法を発動。防御と肉体・魔力の回復を一緒に行えるすごい魔法だ。フェイトちゃんにも蛇の迎撃を任せようって思って顔を見る。

「あ・・あ・・・！」

「フェイトちゃん・・・？」

フェイトちゃんは私の背後に目を向けていて顔を真っ青にしてた。振り返ると、そこにも蛇が居た。なのはちゃんとアリサちゃんは今も蛇と戦闘中。そう、蛇は移動したんじゃなくて2匹いたんだ。終わりを覚悟した。なのはちゃん達も2匹いたことを確認して顔が青褪めた。

「砲撃が来る！　すずか、防御！！」

後ろから来る蛇に向かってフェイトちゃんが駆け出した。今、どうにか出来るのは私とフェイトちゃんだけ。怖気づいてなんていられない。砲撃が口の中の魔法陣から発射されるなら、閉じてしまえばいい。

そう思って氷の茨型のバインド、アイシクルアイヴィを発動しようとしたとこで、「きゃあああああ！」なのはちゃんとアリサちゃんの悲鳴が背後からした。振り向く前に、2人が私の足元へ滑るようにして転がって来たけど、すぐに立ち上がった。背後の蛇に振り向

くと、そっちもまた砲撃発射態勢だった。

「絶体絶命ね・・・！」

今、２匹同時に砲撃を発射されると確実に撃墜・・・ううん、武器に串刺しにされて死んじゃう。それだけはどうにかして避けないといけない。だけど間に合わない。諦めかけたその時、「全員、伏せなさい」女の人の澄んだ声が聞こえた。有無を言わさないような声色に、私たちは一斉に伏せた。

「瞬神（ソニック・エア）の風矢・・・！」

２匹の蛇の砲撃も臨界というところでそれは起きた。背後の蛇のさらなる奥からとんでもない魔力が発せられて、それが頭上を一直線に通り過ぎて行った。と、思えば前や後ろからガシャンって金属が床に何十個と落ちた音がした。恐る恐る伏せていた上半身を起こす。

「もう大丈夫ですよ」

背後から聞こえた女の人の声。振り向いてみると、２０代前半くらいの女の人が居た。手にしているのは美術品のような弓。蛇が居たところの床には何十っていう武器が落ちてる。さっきの狼と同じ。間違いない。この女の人が倒してくれたんだ。

私たちは「ありがとうございました！」って頭を下げてお礼を言うと、「はい、どういたしまして」とても柔らかな微笑みを浮かべてくれた。そしてアリシアちゃんとアルフも無事に目を覚まして、女の人に私たちは自己紹介。

「わたくしは、フィヨルツェンといいます。ところであなた達はどうしてこのような危険な場所へ？　こう言ってはなんですけど、子供が来るような場所ではありません。わたくしがお送りしますから、早く出ましょう」

やっぱり怒られた。でもここまで来て引き返すわけにもいかない。アリシアちゃんがここへ来た理由を、フィヨルツェンさんに教えた。すると「判りました。その目的をまずは果たしましょう」って歩き出したから私たちも続く。そしてフィヨルツェンさんが通路と隠し通路と隔てる壁に前に立って弓を構えると、右手に風を集束させて1本の矢にした。その矢を弓の弦に番えて・・・

「瞬神（ソニック・エア）の風矢」

射った。その矢は壁に直径2mほどの大穴を開けて、すぐに消滅した。壊したと言うより削り取ったって感じで、どこも崩すことはなかった。そのあまりにアッサリ事を済ませたことに呆けていると、「さ、行きましょう」フィヨルツェンさんが歩き出した。慌てて追いついて、「あ、トラップがあるといけないので」って私は先頭に出る。

「ここの通路に入るのは初めてですが、トラップが発動する仕掛けがどこにあるのかは判りますので大丈夫ですよ」

フィヨルツェンさんは風の流れを読むことで建造物内の異変や違和感を感じ取れるとの事。確かにマップに記されたトラップトリガー

を危なげなくクリアしてく。

「あの、フィヨルツェンさんはどうしてこの遺跡に？」

「・・・ボランティアです。遺跡内で亡くなった方の亡骸や遺品を捜索して外へ運んだり、先ほどのような怪物の撃破をしています。あんなものが外に出るなどもっての外ですから」

「やっぱり亡くなってる人もいるんですね・・・」

「ええ。この遺跡は全１８階層という広大なもので、第８層からは通路の至る所に亡骸があります。怪物についても先ほどの蛇が可愛いと思えるほどのモノがごろごろ居ます」

そんなに深くて、危険な場所だったんだねココ。今さらながらにとんでもない場所に来たって思う。それから２０分。ようやく目的地へと到着した。セレネちゃんとエオスちゃんのデバイスに埋め込まれていたあの鉱石で出来た柱が乱立してた。

「アリシア。さあ」

「う、うん」

フェイトちゃんに促されたアリシアちゃんは恐る恐る柱に近付いて行って、「これでいいんだよね・・・？」柱に触れた。

「「「「わあ♪」」」」

「こりゃすごいね・・・」

アリシアちゃんが触れたら鉱石の中に星空のようなものが生まれて、室内を不思議な光で照らしだした。室内はまるで星空のよう。あまりの神秘的な光景に私たちは見惚れた。

「目的の物は手に入れることは出来ましたね。水を差すのは気が引けますけど、遺跡を脱出してください。入り口まで送ります」

鉱石の柱を私たちの人数分に分断しているとフィヨルツェンさんにそう言われた。目的を果たした以上は下手に残って危ない目に遭うこともないと解ってるから素直に頷いた。それからフィヨルツェンさんを先頭に遺跡を逆走して、「空気が美味しい・・・！」外へと出た。

「フィヨルツェンさん。改めてありがとうございました」

「「「「ありがとうございました！」」」」

アリシアちゃんに続いて私たちもまたお礼を言う。フィヨルツェンさんは「はい。ではわたくしはこれで失礼をしますね」そう言って遺跡内に戻って行った。

「みんなもありがとう！　みんなが居てくれたから、こうして鉱石を手に入れることが出来たよ。本当に、本当にありがとう！」

アリシアちゃんの満面の笑顔が、私たちの最高の報酬だった。こうして私たちの遺跡探検は終わった。

Ｅｐｉｃｏ１８－Ａミッドベルカ相搏つ

†††Ｓｉｄｅなのは†††

７月上旬。私たちチーム海鳴メンバーは今から夏祭りに出掛ける予定。土曜日の今日、スケジュールを合わせてみんな一緒に休みにして、午前中はドクターたち第零技術部――スカラボのみんなの協力で、本局のトレーニングルームを２時間コースで借りて、チーム海鳴で模擬戦。

「にゃはは（やっぱり強かったなぁ～、ルシル君）」

つい思い出し笑い。でもようやくルシル君にひと泡吹かすことが出来た。ミッド式とベルカ式を混同してのチーム分けで、私とすずかちゃんとフェイトちゃんとアルフとはやてちゃんとリインとシグナムさんのチーム、アリサちゃんとシャルちゃんとルシル君とヴィータちゃんとシャマル先生とザフィーラのチームだ。

（ジャンケンで決めたチーム分けだったけど、それでもルシル君ひとりにガッツリ負けそうになったよね）

でもシグナムさんとアルフの２人でアリサちゃん達を食い止めて、すずかちゃんと、リインとユニゾンしたはやてちゃんでルシル君を足止め、私とフェイトちゃんのコンビネーション・ブラストカミリティで纏めて撃墜しようとした時、ルシル君がチームメイトを庇うように前に躍り出た。

（ルシル君は強い。自分を護って、他の誰かを護れる強さを、そして自分より誰かを優先する優しさも持ってる）

だからこういう事態も起きる。ブラストカラミティをほぼ1人で防いだルシル君は戦闘不能。余波に巻き込まれたシャルちゃんも崩れ始めて、私の砲撃やフェイトちゃんの速度に物を言わせたフィールドかく乱、はやてちゃんの広域攻撃で、私たちは勝利。同じチームで2戦目をやって、ルシル君とシャルちゃんのコンビーネーションに完膚なきまでのズタボロにされた。いやぁ～、強かった。

「――良し。浴衣の着付けも無事に終了♪」

鏡の前でくるっと1回転。お母さんに何度も教わったからもう1人でも出来る。浴衣も帯も着崩れ無し。箱付き巾着を手に部屋を出て真っ直ぐに玄関へ。そこで下駄を履いて、「いってきまーす！」家には誰も居ないけど一応、挨拶。お父さん達はみんな翠屋でお仕事中だから。玄関の鍵を閉めていると、「なのは！」私の名前を呼ぶ声が後ろからした。

「シャルちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、アルフ！」

浴衣姿のフェイトちゃん達（アルフだけはいつもの私服姿だけど）が迎えに来てくれた。シャルちゃんとアリシアちゃんが「待ち遠しくて来ちゃった♪」その場で1回転して浴衣姿を見せてくれたから「2人とも、それにフェイトちゃんも可愛いよ♪」拍手。

「なのはも可愛い　」

「結論、みんな可愛い～　」

「う、うん。可愛い」

みんなでハイタッチ。とりあえず携帯電話で写真を撮ろうってことになって、3分ほど写真を撮り合った。みんなと合流したらまた撮ろう。大体満足したところで時間確認する。時刻は2時ちょっと前。約束してる時間は3時。集合場所は夏祭りの会場、海鳴臨海公園。現地集合っていうことで、「早めに着いておこうか」私を迎えに来てくれたシャルちゃん達と一緒に向かう。

「そうだね。ギリギリで着いて待ち合わせに遅れるのもどうかと思うし」

「アリサもすずかも、はやてもきっと同じ考えに至ってるだろうしね～」

「あんまし早く着いたら、先に何か買ってようよ！」

「肉あるかなぁ～、肉♪」

「ダメだよ、アリシア、アルフ。屋台巡りはみんな揃ってから」

「は～い」「へ～い」

フェイトちゃんに注意されたアリシアちゃんとアルフは肩を落としたけど、表情や放ってる空気は明るい。ちょっとやそっとで崩れるようなテンションじゃないんだよね、やっぱり。私もお祭りに行こうって約束をしてからずっとテンション上がりっぱなしだよ。

「そう言えばアリシアちゃん。デバイスの方はどうだったの？」

臨海公園への道中、私はアリシアちゃんにそう訊いてみた。アネアの遺跡探検からもう1週間弱。採って来た鉱石は第零技術部――通称スカラボに預けて、アリシアちゃん専用のデバイス制作をドクターにシスターズ、そしてすずかちゃんにお願いしたって話なんだけど・・・。

「う～ん、それがさ、なかなかデザインが決まらなくって。しかもフェイトには連没くらうし」

アリシアちゃんが溜息を吐いてフェイトちゃんをチラッと横目で見ると、フェイトちゃんは「アリシアが欲張りすぎなんだよ」って呆れた。どういうことか訊いてみると、アリシアちゃんは自分のデバイスが持てるってはしゃいで、いろんな機能を次々と取り入れたいって無理難題を言い始めたそう。

「だって～。正直、諦めてたわたしだけのデバイスが出来るっていうんだもん！　鉱石のおかげで時間制限付きだけどＡＡ＋ランクの魔力も手に入れることも出来たし！　そう簡単に決められないよ！」

アネアの遺跡で採取した鉱石は、初めて触れた人の魔力を記憶する

っていう特殊な能力を持ってる。その鉱石に持ち主が魔力を流すと、鉱石は魔力を何倍にして返還してくれる。普通に考えて負担がありそうな能力。一応、セレネちゃんやエオスちゃんは負担があるかどうか判らないって言ってた。

だけど、アリシアちゃんの身体やリンカーコアには負担が掛かるみたい。やっぱり魔導師としての経験差が大きいらしい。でもアリシアちゃんはそれ以上に戦える力を手に入れた嬉しさ・喜びで、その苦痛もどうってことないって笑ってた。

（シャマル先生が言うには、アリシアちゃんもリンカーコアを使う機会を増やせばいつかは慣れるって言ってたし・・・）

「だからって剣や槍や杖や鞭や双銃を詰め込むなんて欲張り過ぎるよ、アリシア。それだけならまだしもマイクにハリセンとかって意味不明」

「にゃはは・・・。確かにマイクもハリセンもあんまり必要性ないよね・・・？」

この分だとアリシアちゃんのデバイスが完成するのは当分先みたいだね。そんな話をしていると、「お、なのはちゃん達や。おーい！」どこからかはやてちゃんの声が。臨海公園に近づくにつれて人の数が増えてきたから、子供な身長だと見つけるのは難しんだけど・・・

「うわぁ、メッチャ目立ってる・・・」

「行きかう人の視線が集中してる・・・」

はやてちゃんたち八神家は美人さん揃いだからとんでもなく目立つ。はやてちゃんもヴィータちゃんもシグナムさんもシャマル先生もアインスさんも、人型形態になってるザフィーラも浴衣姿。それにリインもヴィータちゃん程の身長になってて、これまた浴衣姿。前から練習してるっていうアウトフレームだね。

「で、ルシルも大人形態ってわけかい。にしても随分と胸元を開けてるじゃないか」

ルシル君は大人の姿をした状態で浴衣姿なんだけど、いつもは衣服の乱れなんて良しとしないでビシッとしているのに今回は着崩してる。なんていうかルシル君らしくない着こなしだ。

「あんなチャラ男なルシルも良い　・・っていうか・・・」

シャルちゃんがうっとり。でもすぐに不機嫌そうになる。それは私やフェイトちゃん達も疑問に思ってることに関係してると思う。それははやてちゃん達の輪の中に混じってる女の人のこと。艶やかな黒髪は地面に届くくらいに長い。その人もまた浴衣姿で、ルシル君の腕にべったりとくっついてた。まるで恋人。

「誰あれ？　なんか見憶えのあるようなないような・・・？　とにかくルシルにベッタリし過ぎ！　はやてもはやてだよ！　なんであんなにこやかに喋ってるわけ！？」

大変です。シャルちゃんがかなりキてます。はやてちゃん達がこちらに向かって来るんだけど、その最中にも女の人は「うっとおしい、離れろ、馬鹿犬」ってルシル君に怒られながらも「ヤです～　」って頬擦りを止めない。終いには「チュー　」ルシル君の頬にキスした。

「っ！？・・・テメェの血は何色だぁぁぁぁ～～～～っ！！」

「シャルちゃん！？」「「シャル！？」」

シャルちゃんがそんなこと（また漫画の影響かなぁ？）を叫んで、ルシル君に「いい加減にしろ！」って怒鳴られても笑顔のままな女の人に向かって駆け出した。止める間もなく突撃していったシャルちゃんは、ルシル君と女の人の間に割って入ろうとするんだけど・・・

「「「「あ」」」」

女の人にベシッとおでこを叩かれて受け流された。それでもシャルちゃんは「こんにゃろぉぉ～～～っ！」諦めずに再突撃すると、「まぁ、待て、シャル」ルシル君がシャルちゃんの頭に手を置いて止めたら、「説明プリーズ！」シャルちゃんはそう言って女の人を睨んだ。

「とりあえず。なのは、フェイト、アリシア、アルフ。こんばんは。浴衣、似合っているよ」

「なのは達が可愛いのは解ってるから！　説明！」

私たちの浴衣を褒めてくれたルシル君にお礼を言うより先にシャルちゃんが説明を急かせた。ここで「ルシル君の使い魔なんよ」はやてちゃんがそう教えてくれた。続いて「そういうわけだ。紹介するよ。俺の使い魔、名をフェンリル」ルシル君が紹介してくれた。フェンリルさん。４月の始業式くらいにルシル君やはやてちゃんから聞いてたのを思い出した。確かアルフやザフィーラと同じ狼素体（だから馬鹿犬呼ばわりなのかなぁ？）の使い魔で、ルシル君が猫派とする原因だったっけ。

「ども～♪　我が愛おしきマスターの第一の使い魔、フェンリルです　よろしく、キラーン☆」

それにしても見た目に反してすごく子供っぽいなぁ。戦闘中でも抱きついて来るって言ってたけど、フェンリルさんを直に見て納得も出来た。あの様子なら確かに場所を選ばずにルシル君に抱きつくと思う。それはともかく私たちも自己紹介すると、「ん。よろしく♪」笑顔をくれた。

「とまぁ、そういうわけだから暴走するな、シャル。せっかく可愛く着飾った浴衣が乱れて台無しになるぞ」

「うん、やめる　」

ルシル君の褒め言葉１つでシャルちゃんは大人しくなった。ちょろい、ちょろ過ぎるよ、シャルちゃん。まぁ、その方が私たちも変に

巻き込まれたりしないで済むから助かるんだけど。それから改めてはやてちゃん達と挨拶を交わして、お喋りしながら臨海公園へと一緒に歩き出す。

「あのさ、ルシル君。その、どうしてそんなに着崩してるの・・・？」

胸元を肌蹴させてることで胸板が結構見えちゃってるから、ちょっと目のやり場に困るというかなんというか。お父さんやお兄ちゃんのものなら気にならないんだけど、ルシル君はなんか色っぽいから気になってしょうがない。

「冬、男物の着物を着ていたのに女に何度か間違えられた。あんな思いはもう嫌だ！」

「えっと、だから・・・？」

「こうして男らしい胸を出しておけば否応なく俺を男と判別できる！良い方法だろ！」

「あー、そういうこと・・・」

今のルシル君を見て女の人って間違うような人は確かに居ないと思う。でも周りの女の人を見て、ルシル君。すっごい注目されてるよ。さらに彼氏さんが不機嫌そうだよ。あとあんまり露出するとお巡りさんに目を付けられるかも。

「むぅぅ～～～」

「グルル・・・！」

私に力説してくれたルシル君は、サラッと始まったシャルちゃんとフェンリルさんの睨み合いに「いい加減にしろ～、お前ら～」呆れ口調で注意。

「だってコイツが威嚇してくるんだも～ん」

「コイツとは無礼な！　マスターは渡さないから！」

「獣がわたしの恋路を邪魔しようっての！？　冬に備えてあんたの毛皮でふかふかコートを作っちゃる！」

「面白いジョークどうもありがとう！　返り討ちにしちゃうから！」

「だからやめいと言うに！　フェンリル、大人しくしないと召喚を即解除するぞ」

「はいっ、やめます！」

「シャル。君もやめないと、なに1つとして奢らないぞ」

「はーい、やめまーす！」

「「「ちょろい・・・」」」

私とフェイトちゃんとアリシアちゃんの声がダブった。これが世に言う鶴の一声。でもシャルちゃんとフェンリルさんは隣に並ぶようなことはしないで、ちょっと距離を開けてる。ん～、仲良くしてほしいなぁ。

「ねえねえ、ルシル。シャルにだけ奢るってふこう～へ～！　わたしにもなんか奢って～！」

アリシアちゃんがルシル君の袖を引っ張ってお願いすると、「いいよ」って即答。フェイトちゃんが「良かったね」ってアリシアちゃんに微笑みかけると、ルシル君は「フェイト達にも何か奢るよ」って言ってくれた。変に断るのもルシル君に悪いし、「ありがとう」ここはお言葉に甘えて奢ってもらおうっと。

「それにしてもすごい人やなぁ。ヴィータ、リイン、はぐれへんようにな」

「リインちゃんは私がしっかりと手を握っていますから大丈夫ですよ～♪」

「ヴィータ、しっかりと私の手を握っていろよ」

「けっ。あたしはそんなガキじゃねぇのによ～」

シャマル先生はリインと手を繋いで、シグナムさんはヴィータちゃんと手を繋いでる。一応、念話っていう手段もあるからたとえはぐれても大丈夫だと思うけど、はぐれないに越した事はないからその

ままでもいいよね。

「あ、なのはちゃん達みんな揃ってる！」

「あたし達が最後になっちゃったわけね」

アリサちゃんとすずかちゃんと無事に合流することが出来た。そんな2人の目が真っ先に向かうのはやっぱりルシル君とフェンリルさん。そんな2人にもルシル君の着崩し姿やフェンリルさんのことを伝えた。フェンリルさんのことは何事もなく受け入れたけど・・・

「ルシル。やっぱ胸を隠しなさい。ただでさえ目立ってんのに、そんな露出狂のような格好は余計目立って素直に楽しめないわよ！」

「目のやり場がちょっと・・・。ルシル君が女性に見られたくないって気持ちも解るけど、ここはごめんなさいだけど・・・」

でもやっぱりアリサちゃんとすずかちゃんもルシル君を見て顔を赤くした。だけど「悪い。だけどもう・・・女性に見間違えられるのは嫌なんだ・・・」ルシル君は拒否。

「あーもう、判ったわよ」

「だ、大丈夫。すぐに慣れると思うから、うん」

ルシル君からの懇願に、アリサちゃんとすずかちゃんが折れた。とにかくこれでチーム海鳴のメンバーは揃った。ということで、「よ

ぉーしっ！　屋台巡りにゴーっ♪」シャルちゃんの言うように夏祭りの醍醐味、屋台巡りに行こう。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒フェイト†††

海鳴市に移り住んでから初めての夏がやって来て、私たちチーム海鳴は夏にだけ開かれる祭りにやって来た。私たちにとってたくさんの思い出のある場所、海鳴臨海公園全体が会場になっている。浴衣っていう、冬に着た着物の薄手バージョンみたいなこの国特有の衣服を着た私たち。この夏祭りに来てる女の人の大半は浴衣姿だ。

「さて。縁日には無かったゲーム系の屋台も数多い夏祭り！　さらに食べ物系の種類もまた然り！　今日1日で全店回れる自信は無い！！　どうしてこんなに多いのか！　嬉しいけど！」

私たちの先頭に躍り出たシャルがくるっと半回転して私たちに向き直って、両腕をバッと大きく広げたうえでそう言った。というかシャル。浴衣であんまりそういうことしない方が良いかも。ふとももまで見えちゃってるから。下手すれば下着まで見えちゃうから。

「まぁ、夏は冬とは違くて外で活動しやすいしなぁ。冬は単純な寒さとか寒さ対策での支度が大変な所為であんま外に出たないけど、夏は薄着すればええだけやから活動しやすいんやよ」

「うん。はやてちゃんの言う通りかも。冬はコタツや暖房の誘惑があるから、あんまり外に居たくないもん。もし冬祭りがあってもちょっと長居は遠慮かも」

「あー、うん。コタツは確かにすごい誘惑だよね」

私もアリシアもアルフもコタツには弱い。シャルは「なるほど！そういうわけか！　あんま気になんないけど！」なんて満面の笑顔を浮かべる。元気過ぎて四季の暑さ寒さなんてあんまり関係ないかも。

「つうか、テンション高ぇなぁ、お前。引くわぁ・・・」

「引かないでよ、ヴィータ！　ヴィータだって初めての夏祭りにウキウキ♪ドキドキ☆なんでしょ！？」

「えーい、抱きつくな暑苦しい！　それに初めてじゃねぇよ。去年もこの祭りに来たっつうの」

「へぇ、そうなんだ。私も、なのはちゃんやアリサちゃんと去年来たんだよ」

「もしかしたらどっかでニアミスしてたかもね」

「そうかもしれへんな～」

私とアリシアとアルフ、シャルがこの街に戻って来る前の話だ。ちょっと疎外感。シャルはそんなことを気にせずに「脱線カッコ悪い！　去年の話は置いておいて、話を本題へ戻します！」パンッと手を強く叩いたら、「逸らしたのはお前だけどな」ヴィータがボソッと

ツッコみを入れて、「ヴィータちゃん。しぃー、ですよ」リインがヴィータの袖を引っ張った。

「食べ物関係については縁日にもやったように人数分を買うんじゃなくて、３人で１つを分け合うようにしよう！　さてここで屋台巡り初のリイン。何故だか判るかな？」

「えっ？　えっと、その・・・ごめんなさいです、シャルさん。リインには判りません」

「ふっふっふ。１人１つの食べ物を買って食べました。次の屋台でも１人１つの食べ物を買って食べました。それを繰り返すとどうなる？」

「・・・すぐお腹がいっぱいになります」

「でもまだまだ食べたい物があります。どうしたらいい？」

「・・・あっ、なるほどです！　分け合うことでお腹が膨れるのを阻止するのですね！」

「Ｙｅｓ，ｔｈａｔ'ｓ　ｒｉｇｈｔ！　お腹に空きを作れるからいろいろな食べ物を食べられるのだ！」

「すごいです、素晴らしいです、シャルさん頭良いです！」

すっごい笑顔と若干のよだれを見せるシャルとリインの周囲に花畑

が生まれたような幻視が・・・。でもシャルのこの作戦はなかなか良くて、いろんな美味しいものを食べることが出来るから反対意見は1つとして出ない。一通り食べた後は、お気に入りの物をそれぞれ好きに購入して、1人でゆっくり食べるんだ。

「食べ物系はそれで良いとして、ゲーム系はどうするの？」

「「やっぱり勝負でしょっ♪」」

すずかの問いに答えたのはシャルとアリシア。好きだなぁ、勝負事。でも私も嫌いじゃない。こういうゲームとかは楽しいから。だから「私も賛成」って小さく挙手。

「面白いじゃない。日本の祭りのゲームで負けるわけにはいかないわ！」

「個人戦だと大変だからチーム戦で良いんじゃないかな？」

「あ、じゃあいつものミッド式チームｖｓ・ベルカ式チームでやる？」

「それやと慣れてへんメンバーが多く居るわたしらの負け確定やない？」

「シグナム達はどうだ？　俺としてはシグナム達もすぐに上手くなると思うから、ベルカ対ミッドで良い勝負になると思うけど」

八神家のリーダーと副リーダーのはやてとルシルの意見が分かれた。

私たちミッド組は口を噤む。シグナムたち騎士は、主のはやての意思を尊重して優先する。でも、「主はやて。我々は大丈夫です」シグナムも、「慣れてないから、って理由で退くわけにはいかないしな」ヴィータも、「ええ。私もベルカの、八神家の一員として頑張ります」アインスも、ルシル側に付いた。

「私は、はやてちゃんと同じチームで頑張りたいです！」

「リインもです！　はやてちゃんとルシル君、シグナム達みんなと同じチームで・・・なのはさん達を倒します！」

「倒されちゃうの！？」

「こういう場合は、勝ちます、だな、リインよ」

「はいです、ザフィーラ！」

「そうやな。家族の絆を見せつけような！」

「決まったみたいね。じゃ、チーム海鳴恒例！　ミッドチームとベルカチームによるゲーム屋台勝負、夏の陣！　Ｉｎ夏祭り！　いざ、出陣！」

こういうお祭り騒ぎ（夏祭りだけに）は大抵シャル（時々、＋アリシア）が取り仕切ることになってる。もう暗黙の了解みたいになってるから誰も文句は言わないし、そもそも一番の適任だって思ってるから、喜んでお任せするよ。

「というわけで、なのは、アリサ、すずか、フェイト、アリシア、アルフのミッドチームと、はやて、ルシル、シグナム、ヴィータ、シャマル先生、アインス、リイン、ザフィーラ、あー、あとお邪魔虫、そんでわたし・・・」

「ちょっと待ちなさいよ！　ベルカチームの人数が多いじゃない！　誰か、こっちに来なさい！」

「お邪魔虫って私のこと？　ねぇ、そこの小娘」

「そうだなぁ。じゃあ、わたしがミッドチームに異動するよ♪　嗚呼、愛し合うわたしとルシルは、人数合わせという悲劇によって敵・味方に分かれて戦い合う運命なのね！　なんていう悲恋！　でも負けない！　戦いの果てにきっと結ばれるのだから！」

「シカト！？」

「俺っていつからシャルと愛し合ってたんだろうな」

「そうやなぁ、きっと夢の世界でちゃう？　シャルちゃん、ホンマにしゃあないなぁ、あはは」

自覚があるのかないのか判らないけど（あるとは思いたくな～）はやてがサラリとキツいこと言った。シャルは自分の世界に入ってて聞いてなかったから反応はないけど、聞いちゃった私たちはシーンと口を噤んで、努めて聞かなかったことにした。

「え、えっと・・・それでもまだ2人多いよね・・・」

「我が主。我は荷物持ちに徹す故・・・」

「そうか？　ザフィーラ、遠慮とかやったら無用やよ？」

「いえ、そういうわけではありませんが。ただ道中に買った物が増えていくとどうしても手荷物が・・・」

「・・・おおきにな、ザフィーラ。頼めるか？」

「お任せを」

ザフィーラが抜けてもまだあと1人、ベルカチームの方が多い。まぁ、1人くらいならどうってことないと思うけど。ルシルが「フェンリル」って、ルシルの数居る使い魔の中でも正式な使い魔っていう女の人、フェンリルの名前を呼んだ。

「えええ！？　私が手荷物番ですか！？　そんな御無体なぁ～・・・」

ガーンとショックに歪む表情のフェンリルがルシルにしがみ付いた。ルシルは「違う。最後まで話を聴け。あと暑苦しい、離れろ」ってフェンリルの両肩に置いて離そうとしたけど、「やーだー！」フェンリルはルシルの腰にしがみ付いて離れようとしない。ルシルの表情がイラッときた、というものに変わった。

「フェンリル、お座り！」

「はいっ！」

まるで犬のしつけのような掛け声。フェンリルは地べたに女の子座りした。他の人からの視線が一気に集中したことで、「っ！　立て、今すぐ！」ルシルがハッとして慌ててフェンリルの両脇に手を差し込んで強制的に立たせた。それから「あはは、どうも」愛想笑いを振りまきながらルシル君はフェンリルの手を引いて走り出したから、「待って！」2人を追いかける。

「あーくそ。いつものクセで犬扱いした・・・！」

「マスター？　私は犬じゃなく狼ですよ～？」

追いついた時、ルシルは頭を抱えていて、フェンリルはそんなルシルの背中に覆い被さるような体勢でもたれかかってた。そんな2人に「ルシル君、フェンリルさん！」はやてが声を掛けると、「ごめん、はやて、みんな。迷惑を掛けた」ルシルは深々と私たちに頭を下げた。私たちはそれだけで機嫌を損ねるようなことはないから、気にしないで、と返す。

「ありがとう。・・・それでだ。フェンリル。俺がお前の名前を呼んだのは、お前を荷物番にするためじゃない。男の俺も荷物番になるから、お前が俺の代わりに参加しろ。そう言いたかったんだ。ちなみに敗北は許さん。勝て」

「っ！・・・はい、我が主。神狼フェンリル。・・・絶対に勝って見せまーす！　はやて達には勝利を！　小娘となのは達には敗北を！」

「はっ、上等じゃない！　あなたとはわたしが決着をつける！」

シャルは見上げるように、フェンリルは見下すようにして、お互いにライバル意識を向けた。なんだろう、２人の間で火花が散ってるような・・・。で、シャルと同じルシルを慕っているはやては、「頑張ろうな、みんな！」そんな２人をスルーして、シグナム達と士気を高め合ってた。

「あたし達も頑張るわよ！　経験の利はこっちにあるんだから！」

アリサが大きく拳を空に向かって振り上げると、「オオー！」私と同じように経験の無いアリシアだけがアリサと同じように拳を振り上げた。と、アリサとアリシアから視線が向けられる。なんであんた達はやんないの？って。私となのはとすずか、それにアルフは顔を見合わせて、「おおー」小さく拳を上げた。

「シャル！　いつまでも睨み合ってないで始めましょ！」

「あ、うん！　まずはそうだなぁ・・・。あ、アレやろう！」

シャルがフェンリルとの睨み合いを切り上げて指差した屋台へと目を向ける。屋台には「輪投げかぁ～。初心者でも大丈夫だね」ってなのはがにこやかに言う。そういうわけで、初戦は輪投げゲームと

いうことになった。

Ｅｐｉｃｏ１８－Ｂミッドベルカ相搏つ

†††Ｓｉｄｅはやて†††

家族や友達、みんな揃っての夏祭りにやってきたわたしら。去年はルシル君やシグナムら家族だけやったけど（それでもすごく楽しかった）、今年はすずかちゃんたち友達も一緒で、まだ屋台巡りとかしてへんのにもう十分楽しい。

そんなわたしらは今、「第一勝負は輪投げ！」チーム海鳴恒例、チーム分けしての勝負事をしてる。基本的にチーム分けの方法は使用魔法式の違いからや。ミッドチルダ式かベルカ式か、ってゆう。まぁ、ミッド・ベルカ混合チームを作って競い合うこともあるけど。

「各チームから代表者2名を選出！・・・で、輪投げって具体的に何すんの？」

「「「「そこから！？」」」」

わたしとすずかちゃんとなのはちゃんとアリサちゃんが同時にツッコミを入れる。シャルちゃんは「いや、輪投げって言うくらいだから輪を投げるんだろうけど・・・」わたしらのツッコみにたじろいだ。けど、「まぁ、大体は合ってるけどさ」アリサちゃんの言うように基本的な事は把握してるみたいや。

「実際に見た方が早いよ」

「シャルちゃんの言うように、目当ての欲しい景品っていう的に向かって輪を投げるんだよ」

みんなと一緒に輪投げの屋台へ向かう。わたしらのような子供が数人とゲーム中や。すずかちゃんの解説と実際に輪投げを見たシャルちゃんは「なるほど。ん、把握完了。初見組も大丈夫だよね？」って、リイン、フェンリルさん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、アルフに確認した。

「こういう単純なモノなら問題ないよ」

「わたしも～♪」

「あたしもさ」

「リインも大丈夫です～」

「わた――」

「よしっ。じゃあ、さっき言った通り各チームから2人選んでね～」

「小娘・・・！」

フェンリルさんをガン無視するシャルちゃん。いくらルシル君にベッタベタやとしても、そこまで敵視することないと思うんやけどな～。まぁ、わたしは以前からフェンリルさんと付き合いがあるから

かもしれへんけど。

「まぁまぁ、フェンリルさん。落ち着いてな」

「はやては優しいから好き　」

わたしをハグしてくれたフェンリルさん。アインスやシグナムくらいの大きくて柔らかな胸にわたしの顔が埋まる。わたしは「おおきにな。わたしもフェンリルさんが好きやよ～　」って抱き返す。あー、すごく安心できる抱き心地やわ～。

「はやてになら、マスターをあげても良いのに～」

「ぶっ！？」

夢心地から一転、地獄へ突き落されてしもうた。シャルちゃんやったら、アピールするチャンス～♪とか思うて、ルシル君にさらにアピールするんやろうけど、わたしにはシャルちゃん程にアピール出来ひんし、しようとも思うてへん。勝手やけど、今はまだみんなで楽しい時間を過ごしたいからや。せめて中学に上がる頃までは、このままがええ。

「あ、あのな、えっと！」

「はいはい、やるなら早くやろう。後がつかえくるからな」

ルシル君が手を叩いて急かした。確かにこれから混んで来るやろう

し、今でも同年代やちょう年上っぽい子供らが集まって来てるし。そうゆうわけで、第一戦・輪投げ勝負に出るメンバーを選ぶことになった。すずちゃんらミッドチームとちょう距離を取って、わたしらベルカチームでメンバーを選ぶ。

「輪投げはどっちかってぇと一番簡単だから、リイン辺りでいいんじゃね？」

「そうね。特別なスキルとか必要ないし」

「そうやなぁ。リイン。やってみるか？」

他のゲーム系はある程度のスキルが必要になってくるけど、これは狙ったところに輪を投げるだけ。難しい事は何もないし。そやからヴィータやシャマルの言い分に賛成する。リインは「ですけど、向こうはそれを予想して上手な人を出して来るかもですし・・・」って不安そうにした。

「勝敗など気にするな、リイン。勝負と銘打っているが、その事実は楽しむことを前提とした遊びだ。シャルロッテの奴もそのつもりだろうしな」

「そういうわけだよ、リイン。楽しんだ者勝ちだ。シグナムの言うように勝ち負けは二の次。楽しんでこい」

シグナムとアインスに背中を押されたリインが、「判りました、リインがやるです！」参加を決意した。あと1人はどないしようかっ

て考えたところで、他のゲーム系屋台の種類を思い浮かべる。ほとんどがしゃがんで行うようなものばかりや。それやったら、「わたしもこの輪投げに参加するわ」わたしもここで参加しとこう。

「そっちは決まった～？」

「うん、決まったよ～」

シャルちゃん達と合流。そんでそのままお客さんが居らんくなったその僅かな時を見計らって店主さんの前に行く。ベルカチームは「わたしとリインやよ」で、ミッドチームは「こっちは、アルフとすずかが行くよ」になって、わたしは自分とリインの２人分の料金２００円を支払って、すずかちゃんとアルフも１００円ずつ支払った。

「勝敗の決め方は、数多く景品を取った方が勝ち♪　荷物持ちが２人も居るから大きい景品でもＯＫだよ♪　そんじゃ、第一回戦、はじめっ！」

店主さんに貰った輪っか５つを手に、車椅子に座った状態なわたしの腰あたりまでの高さがある長テーブルの向こう側、６段づくりの景品台にズラリと並んだ景品に体を向ける。シグナムが言うてた通り勝敗より楽しむことが重要やと思う。シャルちゃんもきっとそんな考えやろう。

（そやけど、やるからには大物を狙いたいよな）

勝敗にこだわって勝ちに行くつもりなら大物より獲り易い小物（背

が高くて細い物とか）を狙う方がええ。そやけど勝つために用途のない置物なんて獲ってもしゃあない。そやったら・・・

（狙うは、あのぬいぐるみ・・・！）

下から2段目の棚にはヴィータが好きなキャラクター、のろいうさぎのぬいぐるみがある。ふと、わたしの隣に居るリインをチラッと横目で見てみる。リインもどうやらのろいうさぎに目を付けたようで、「ヴィータちゃんもきっと喜びますぅー」やる気を漲らせた。

（リインに任せよかな、のろいうさぎは。えっとじゃあ・・・。アレにしよか）

花火セットに目を付ける。7時から打ち上げ花火大会が始まるんやけど、やっぱり自分らでも花火をやりたい。とゆうわけで第一投。えいっ、と4人一斉に輪っかを投げた。結果、「アカン、外した」わたしは外してもうて、「くぅ、外れたぁ！」アルフも、「あっ」リインも、「あぅ」すずかちゃんも外した。

（すずかちゃんは髪留めセットで、アルフは焼き肉店の食事券かぁ）

「はーい、二投目～♪」

シャルちゃんの掛け声で2つ目を投げる。狙いはみんな同じ。結果、「やったですぅー！」リインと、「やった！」すずかちゃんが景品ゲット。ちなみにわたしとアルフはハズレ。それから最後まで投げ続けた結果・・・

「ミッドチームから確認！　すずかは髪留めセットとお菓子セットの２つ、アルフは０！　ベルカチームは、はやては花火セット１つ、リインののろいうさぎ１つの計２つ！　第一回戦・輪投げ勝負は、引き分け！」

２対２とゆうことで、初戦は引き分けになった。なかなかに目立つわたしらは屋台から離れて、次の屋台へ向かおうとした時、くぅ～、ってお腹の鳴る音がわたしらの中から聞こえてきた。

「お腹すいたです～」「腹減った～、肉ぅ～」

リインとアルフやった。遅れて、「屋台巡りの為に昼食抜きにするって決めてたもんね」すずかちゃんや、「模擬選後のお菓子だけじゃやっぱ足んないわ～」アリサちゃんもお腹を鳴らして顔を赤らめた。

「第二戦に行く前にちょろっと腹ごしらえにしようか」

そう提案したシャルちゃんに「賛成～！」わたしら子供組は賛成した。そうゆうわけで第二戦の屋台を決めるついでに食糧調達へゴー♪や。りんご飴とかチョコバナナとかかき氷は、とりあえずは後回しやな。

「第二戦は射的で決定！」

次のゲームは決定した。そんで「エビ焼きとタコ焼きでけって～！」

食べ物も決定。タコ焼きは誰もが知るファストフードやけど、タコの代わりにエビを入れるエビ焼きってゆうのはちょう珍しいかもしれへん。とにかく3人で1パックを分け合うように購入。他の人らの邪魔になれへんように道の端に寄って、「いただきます！」食べ合う。

「エビ焼きもなかなかに美味いですね」

「はふはふっ。タコ焼きも美味しいですぅ～！」

「祭りで売ってる食い物って味とかいろいろ完成度低いのに、なんでか美味く感じるんだよな～」

わたしは、アインスとヴィータとリインの4人で分け合って食べる。シグナムはシャマルとザフィーラ、すずかちゃんはなのはちゃんとアリサちゃん、フェイトちゃんはアリシアちゃんとアルフ、そんでルシル君はフェンリルさんとシャルちゃんが分け合ってるんやけど・・・

「ルシル～」「マスター～」

「「あ～ん」」

「熱っ！　熱い！　一気に突き出して来るな馬鹿！」

あっつあつのタコ焼きとエビ焼きを同時に口に当てられて怒るルシル君。さすがにあれは酷いわぁ。何回もふぅ～ふぅ～して、やっと

口に入れることが出来る熱さになるのに、フェンリルさんとシャルちゃんはそのまま突き出した。下手すると火傷もんや。

「ふぅー、ふぅー。はい、リイン。あーんや」

「あ～ん、ですぅ～♪　はふっ、はふっ」

リインにあーんして、次に「アインス、あーん」にも、「ヴィータ、あーん」にも食べさせる。そんなわたしらを見たフェンリルさんとシャルちゃんも爪楊枝に刺したタコ焼きとエビ焼きにふぅー、ふぅーしてから「あーん　」再チャレンジ。ルシル君は断るのも無理やって判断したようで、２人からのあーんを受け入れた。

「はやて」「主はやて」「はやてちゃん」

「「「あーん♪」」」

「あーん♪」

わたしも、アインス達からのあーんを受けた。うん、美味いな。こうして第一次腹ごしらえも終えて、第二戦の射的に向かうことになった。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒アリシア†††

満腹じゃないけどある程度の腹ごしらえを終えたわたし達は、第二戦を行うために射的屋さんへやって来た。コルク栓を打ち出すコル

ク銃で、欲しい景品を倒したり景品台から落としたりすればゲットっていうゲーム。

「そんじゃ第二戦のメンバーを発表！　なのはとアリシア！」

「アリシアちゃん、頑張ろうね！」

「うんっ。射撃系も目指す以上、負けられないもん！」

本格的に魔法の習得を始めたわたしは、射撃魔法を使うフェイトやなのは達から射撃魔法の手ほどきを受けてる。言うなれば弟子。今からやる射的は魔法の射撃とは全然違うけど、狙ったものを撃ち落とすっていうのは共通だからしっかりやらないと。

「ベルカチーム！　ヴィータ、シャマル！」

「ルシルが居りゃ勝てたんだけどな～」

「わ、私だってやれば出来るもん！」

「もん、って・・・。まぁ、いいや。楽しむことが前提だろうと、勝たなきゃ意味がねぇ。勝つぞ、シャマル！」

「はやてちゃん、リイン。何か欲しい物ありますか？」

「聴けよ！！」

まぁ、そんなこんなで「第二戦・射的！　レディ・・・ファイッ！」シャルの号令の下、わたしやなのは達がライフルタイプのコルク銃の銃口にコルクを詰める。さてと。どれを狙おうかな。あんまり重そうで、倒れにくそうな景品は弾が無駄になるし。でもだからと言ってくだらない物を獲ってもどうしようもないし・・・。

（ぬいぐるみやフィギュアにおもちゃにお菓子、それにゲームソフト、かぁ・・・）

ぬいぐるみかぁ。そろそろわたしの部屋に新しい子を迎えても良いかな。それともゲームソフトにしようかな。非番の時とかみんなでアリサの家でやるし。あー、でもコルク銃で倒せるのかどうか判らない。撃てるコルクは5発。
ここは、最初の目的通りぬいぐるみにしようっと。狙うはデフォルメされたシロクマ。ちょこんと座り込んだ格好で、かなり可愛い。じゃ、早速コルク銃を標的に向けて狙い澄ます。

「狙い撃つぜ！」

トリガーを引くと、気の抜けた音と一緒にコルクが標的に向かって、コツンとぬいぐるみのおでこにヒット。大きく揺らしたけど倒れなかった。んー、残念。見ればなのは達もダメだったみたい。なのは程の射撃系がダメってことは、射撃魔法が得意とかは関係ないっぽい。

「ねぇ、なのは。ちょっとお願いがあるんだけど・・・」

「お願い？　いいよ」

「えっとね・・・」

なのはに耳打ちする。正直、これはなのはのコルクも使うことになるから、なのはの欲しい物を犠牲になるってこと。だけど、「うん、いいよ。面白そうだね、そのやり方♪」なのはは快諾してくれた。

「ありがとう、なのは。それじゃあ、よろしく！」

「オーケー！」

狙いはわたしの標的のぬいぐるみ。ヴィータは当ててはいるけど「ちくしょう、倒れねぇ！」って頭を抱えて、「あん、当たらないわ～」シャマル先生はハズしてばっか。終いには店主さんに当てて「ごめんなさーい！」謝る始末。

「勝った・・・！」

トリガーを引いてコルクを撃ち出す。わたしの撃ったコルクはぬいぐるみにヒット。大きく揺れたところに、「えいっ！」なのはの追撃弾がヒット。さらに大きく揺れて、ぬいぐるみが後ろにコロンと倒れて棚から落ちた。

「「やったー！！」」

なのはとハイタッチ。店主さんや見学者たちが「おお！」って歓声

を上げた。店主さんから「はい、お嬢ちゃん。ナイスショット！」ぬいぐるみを貰って、「持ってて～」ルシルに預ける。
ここで気付いたけどルシルとザフィーラは、アルフやシグナムやアインスに痴漢しようとしてたり盗撮しようとしてたりする男の人たちを人知れず迎撃してた。しつこい人にはピンポイントで殺気を飛ばして、この場から強制退去してる。

「そういう手があったかよ。おい、シャマル。あたしらもアレで行くぞ！」

「ええー、そんな！　まともに当てられてもないのにぃ！」

「だったら当てるようにしろよ！」

「ひーん。ルシル君、代わって～」

シャマル先生が半泣き状態でルシルに助けを求めた。コルク銃を突き出しながら「私が荷物番をするから～！」って懇願。たぶんルシルは射的も上手だと思う。こういうゲームにも万能的な巧さを発揮するに違いない。

「シャマル」

「ルシル君・・・」

ルシルがシャマル先生のコルク銃に手を伸ばして銃身に触れた。パァって表情を輝かせたシャマル先生だったけど、「頑張れ♪」ルシ

ルは笑顔でコルク銃を押し返したから、「ガーン！　そんなぁ・・・・」はい、残念、シャマル先生はゲーム続行です。

「はやてちゃん・・・・」

「シャマル、大丈夫や。勝ち負けなんて気にせんでええ。ヴィータもやよ～♪」

「はーい。・・・しゃあねぇ。シャマル。おまえ適当に撃て。あたしがフォローしてやる」

「あぅぅ。そんな真剣にならなくてもぉ・・・」

2人のそんなやり取りの間でもわたしとなのはは順調にぬいぐるみを撃墜。そんなこんなで第二戦・射的は終了。さっきと同じように通行の邪魔にならないように屋台から離れて、「第二戦は圧倒的大差で決着！」結果発表。

「ミッドチーム！　なのはとアリシアの景品獲得数は3つ！　ベルカチーム！　ヴィータとシャマル先生の景品獲得数は0！　第二戦の勝者はミッドチーム！」

わたし達ミッドチームはメンバー全員とハイタッチを交わす。で、ベルカチームはと言うと、「シャマルよぉ、全弾ハズすってねぇだろ」ヴィータが溜息を吐いて、「だから代わって、って言ったのにぃ～。クスン」シャマル先生は落ち込んでた。そして獲った景品はルシルとザフィーラの手に。ルシルはまだ良いんだけど、ザフィー

ラがぬいぐるみを持ってるのはなんかシュール。

「そんじゃ第三戦と行きますか♪」

シャルはすでに決めてるようで、その屋台へと向かう。そんな中、

「今の内にかき氷食べておこか」ってはやてが提案した。夏真っ盛りでも、夜になるとちょっと涼しくなる。だから日が沈み切る前に食べようってことみたい。

かき氷はお腹に溜まらないからそれぞれ好きな味のやつを購入。ちなみにわたしはブルーハワイってやつ。いろんな味や色があってすっごく迷っちゃった。でもフェイトやなのは達が食べさせ合いっこしてくれるって言うから、一番好きなブルーハワイを買った。

「はむっ。・・・ん～～！　頭キーン来たぁぁーーー！」

この前、初めてかき氷を食べた時に知ったアイスクリーム頭痛に襲われた。すかさずかき氷の器をおでこに当てる。これが一番の対処法だってルシルが教えてくれた。

「にゃはは。ゆっくり食べないとやっぱりダメだね～」

「でもかき氷を食べたら一度はこの頭痛を体験してみたいのよね～」

「アリサはMなの？」

アリサの言い分にわたしも賛成しようとしたらシャルがそう訊いた。意味が解らないわたし達は「Mってなに？」って訊き返す。すると、

「失言！」ルシルがシャルの頭を軽く小突いた。

「いったぁぁーーー！」

「みんな、気にしないでゆっくり食べような」

ルシルの有無を言わせない声色にわたし達は「はーい」返事して、シャルのことを放ってかき氷の続きを食べる。そして「あーん」フェイト達と食べさせ合いっこ。宇治金時、コーヒーフラッペ、カルピス、リンゴ、青リンゴ、マンゴー、オレンジ、コーラ、メロン、レモン、ストロベリー、ピーチ、パイナップル、バナナ、グレープ、ハイビスカスっていう16種類の味だから、みんなからちょっとずつ貰ってく。

「（シグナムの宇治金時はちょっと苦いなぁ。えっと次は・・・）ルシル。ちょっとちょうーだい♪」

「ああ。どうぞ」

「ありがとう♪　アイスいっぱいもらってもいい？」

「いいよ」

ルシルが頼んだのはコーヒーフラッペ。コーヒー味のシロップを掛けたかき氷にアイスクリームを乗せたフラッペってやつ。ルシルのお言葉に甘えてアイスクリームいっぱいとちょっとのコーヒー味かき氷を貰おう。というわけで、「あーん」口を開ける。

「??・・・いや、自分のスプーンで掬ったらどうだ」

「はーやーく～」

「いやな、俺のスプーンだと関節キスになるぞ」

「「「「あ」」」」

ここまで同性だったから気にも留めてなかったけど、ルシルは男の子だった。危ない、危ない。さすがに間接とは言えキスは出来ないよ。しょうがなく自分のかき氷に刺さってるスプーンを手にとって「いただきます」ルシルのかき氷を貰う。コーヒーの苦みがアイスクリームの甘さでちょうどいい感じ。

「じゃ、次はザフィーラのちょうーだ～い」

「うむ」

ザフィーラが差し出して来てくれたのは青リンゴ味のかき氷で、これも美味しかった。ふっふっふ。これで全味制覇なのだ。

「ルシルぅ～、あーん♪」「マスターー、あーん　」

「えっと、あの、ルシル君、あーんや」

シャルにフェンリルは積極的に口を開けて待ち構えて、はやては自

分のメロン味のかき氷を掬ったスプーンをルシルに差し出した。おお、はやて、勇気振りしぼって大胆行動に出ちゃった。さぁ、ルシルはこの3人をどう対処するの？
ルシルはちょっと考えた後、シャルとフェンリルのかき氷に刺さったスプーンを抜いて、そのスプーンで自分のかき氷を掬った。そこまでならなんでもないけど、ルシルはシャルのスプーンをフェンリルに銜えさせて、フェンリルのスプーンをシャルに銜えさせた。

「「っむぐ・・・！」」

慌ててスプーンを口から引き抜くシャルとフェンリル。で、最後にルシルははやてのあーんを受けた。はやてのスプーンをパクっと銜えて「うん、メロン味も美味いな」って微笑んだ。自分でやっておいて顔を真っ赤にして照れるはやて。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！」

シャルは絶叫。フェンリルは「まぁ、はやてになら」って納得。それからわたし達は舌を出し合って変色してるのを見て笑い合う。さて、かき氷を食べたところで、「はーい、第三戦ですよ～・・・」テンション降下中なシャルが指差した屋台には、球入れって書かれてた。

†††Ｓｉｄｅアリシア⇒アリサ†††

第三戦は球入れ。運動会の球入れみたいじゃなくて、ゲームセンターにあるバスケットゴールにボールを入れるみたいなやつ。で、「

ミッドチームはアリサでぇ～、ベルカチームはシーちゃんで～す」
シャルがこのゲームに参加するあたしと、「シーちゃんとは私か？」
シグナムの名前を呼びあげた。

「ぷふっ！　シーちゃんて、シーちゃんて・・・！」

「笑っちゃシグナムに失礼ですよ、ヴィータちゃん！」

シグナムに対しての可愛い呼び名に、ヴィータが吹き出し、それをリインが窘めた。とにかく、あたしの最大のライバル、シグナムとの一騎打ち勝負。ゲーム台は1台ってことで交代して打ち合うことに。

「負けないわよ、シグナム！」

「フッ。この程度の遊戯であれば技術など関係あるまい。勝たせてもらおう」

前の人たち数人のプレイを見学。シグナムはジッと見つめて巧い人の姿勢とか力加減とかを学んでる。そうしてあたし達の番になった。シグナムとジャンケンして、「先攻はあたしね」まずはあたしからになった。店主さんに１００円を支払って、「制限時間は1分。ゴールに入れた回数に応じて景品レベルがありまーす！」店主さんからルールが説明される。

「それではチャレンジャーのお嬢さん、準備はオーケー？」

コクンと頷き返す。店主さんの「それではゲーム・・・スタート！」の掛け声と同時に手元にあるバスケットボールより一回り小さくて軽いボールを手にとって、２ｍほど離れてるゴールへと向けて投げる。入ったかどうかを確認する前に次のボールを手にとって投げる。

「残り１０秒！　８、７、６、５、４、３、２、１、終～了～！」

それを繰り返して１分、ひたすらにボールを投げた。その結果、「ゴール数、１４球！　これは大健闘！！」店主さんの発表に周囲から拍手が起きる。これまでの最多記録と一緒だって話。

「景品は、今日の夏祭りの屋台全店無料券！　えっと、お友達は何人？」

「あたし合わせて１６人、です」

「それじゃあ１６枚ね。１枚につき１店ね」

「ありがとうございます！」

１６枚の今日の夏祭りに出店してる屋台すべてに使える無料券をゲット。次は「これはまたとんでもない美女がチャレンジ！」シグナムの番。ゲーム台と向かい合うシグナムが放つ空気に、あたし達や店主さん、見学者も口を閉ざして固唾を飲む。

「制限時間１分。チャレンジャーのお姉さん、準備はオーケー？」

「ああ、いつでも構わん」

「クールビューティ～　お姉さんの準備も終わったようなので・・・。ゲーム、スタート！」

シグナムの番が始まった。と、「おお！？」どよめきが上がる。シグナムの投げ方が理由だ。あたしや他の人たちはバスケットのシュートのような投げ方をしてた。けどシグナムは「片手投げ！？」のアンダースローだった。右手でボールを鷲掴んで投げて、間髪入れずに左手で鷲掴んだボールを投げて、空いた右手でまたボールを鷲掴んで投げる、を繰り返した。

「すげぇ、１球も外してねぇ！」

「１秒に１ゴールってどんだけだよ！」

しかも百発百中。気だるそうにしての投げ方なのに、１球もゴールに弾かれることなくリングを潜ってく。２０秒、３０秒、４０秒と経っても１球もハズレることなく順調にゴール数を稼いでいって、５０秒に入ったところで、「このままパーフェクトか！？」って店主さんや見学者たちのボルテージが最高潮。そして「終了！」店主さんの一言と一緒に大喝采が起きた。

「なんと６０秒間、一度もハズすことのないパーフェクト！　文句無しの大記録！　クールビューティに盛大な拍手を！」

負けた。文句もなんもないわ。経験アリのあたしと経験ナシのシグ

ナム。どっちが有利かって言うとあたしなのに、ここまで差を付けられると悔しいを通り越して清々しいわ。だからあたしも拍手をシグナムに送る。

「では景品授与！　好きな物を1つ持っていってちょうだい！」

「どれでもいいのか？」

「もち！　ここまでトンデモプレイを見せてもらったからね！」

「では・・・５０ゴールの景品――高級牛肉２ｋｇの引換券で」

シグナムが選んだのは牛肉だった。シグナムってあんまし高級食材とか興味ないって思ってたんだけど。店主さんから加盟店で高級牛肉と交換できる引換券を貰ったことでここでの目的は果たした。店主さんや見学者たちから見送られながらあたし達は球入れ屋台から離れて、第四戦の屋台へと向かう。

「次は、フェイトとアインスの勝負ね～。ダーツとか紙飛行機飛ばしとかあるけど、どうする？　金魚とかスーパーボールは後々が面倒だからやめた方が良いっしょ♪」

「そうやね～。金魚の世話も大変やし、スーパーボールは持っててもしゃあないし。あんま形にならん景品がええかもね。商品券とか引換券とか」

さっきまでローテンションだったシャルだけど、なんとなくテンシ

ョンが元に戻ってる感じがするわ。あたしの表情から察したのか、「さっきまでルシル君に頭を撫でられてたんだよ」ってすずかが教えてくれた。あたしとシグナムの勝負中、落ち込んでるシャルを元気づけるために頭を撫で続けたって話だった。イチャついてんじゃないわよ。

とにかく第五戦のゲームをどうするか、途中でサーターアンダギーやチュロスを食べ歩きしながら探す。そんな中、「ワクドキ☆ざぶ～んの無料券が景品っていう店があるよ」なのはがある屋台を指差した。

「レジャープールやね。夏休みには海行く予定やけど、プールも行く？」

「悪くないわね。夏祭りに海に山、それにプールも制覇しときましょうか」

あたしは賛成。海はすずかん家のプライベートビーチに行く予定で、近くには山もあるから海と山を一緒に楽しめるし、夏祭りは今来てる。だったらプールも行っとかなきゃね。なのは達も賛成意見で、「じゃあ、第四戦はだるま落としに決定～♪」ということになった。

「ミッドチームはフェイト、ベルカチームはアインス！　狙うはレジャープール・ワクドキ☆ざぶ～んの無料券が景品の最高難度・１０段！」

アインスの身長より高いだるま落としに挑戦。子供なフェイトを気遣う店主さんだったけど、「大丈夫です。これくらいなら・・・！」

って一番下の段を自分の身長と同じくらいのハンマーを振り払って打ち抜いた。さらに二段目も打ち抜くから、見学者たちから拍手喝采。アインスも負けじと二段目を打ち抜いたんだけど、こっちの歓声は男の人ばかり。その理由は・・・

「すげぇ、胸が揺れてる・・・！」

「メッチャ脚が綺麗だよな！」

アインスがハンマーを振るうたびにその大きな胸が揺れて、浴衣の裾から白い脚が見えたり浴衣が崩れ始めたりするから。フェイトも実際、脚が見えちゃってるけど子供ってこともあるから、純粋に打ち抜いてるすごさに歓声が上がってる。

「アインス！」「フェイト！」

ここでルシルとアルフが乱入。店主さんに一言断りを入れてからアインスとフェイトをどこかへ連れてった。戻って来た時、２人は浴衣じゃなくてジャージ姿になってた。すると男の見学者たちから大ブーイング。そんな人たちに「あ？」ルシルがギラリと睨み返すと、シーンと静まった。うん、今の眼光は恐いわ。

「おおきにな、ルシル君。助かったわ」

「感謝するよ、ルシル」

「いいよ。俺としても、あの２人の肌をあんな連中に見せたくない

しな」

「ルシル君、お父さんとかお兄ちゃんみたい」

「もしくは恋人かな」

「あんたの感性年齢というか精神年齢というか、絶対に１０歳じゃないわよね」

「ほっとけ。というか、君らも絶対に１０歳じゃないからな、内面的な年齢で言うと」

プレイの続きを始めた２人を見守る中、　あたし達はそんな会話をする。他の１０歳男子だったら、女の家族や友達の肌を他の人に見せたくないって思わないもの。そんなこんなで、「なんと！　２人とも１０段クリア！　大赤字決定だぁぁーーーー！！」フェイトとアインスがだるま落としパーフェクトクリア。夏休みに出掛ける場所がまた１つ増えた。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒ルシリオン†††

チーム海鳴恒例の勝負事・夏の陣も最終戦。対決するのはフェンリルとシャル。そして勝負方法は、「ミス海鳴！　夏祭りの陣！　エントリーしてくれたのは１８人の美女！」だった。ゲームじゃ面白くないと言うフェンリルとシャルは、ミス海鳴を決める催しがあるのを知り、他人に認めてもらった方が面白いという考えに至ってエントリー。ああしてステージに立っているわけだ。

「シャルちゃん、大人モードに変身できたんだね～」

「一体なにを目的として習得したか判んないからちょっと恐怖だわ」

「たぶんシャルちゃんのことだからルシル君関連だと思うんだけど」

「ルシルも大人モードに変身できるから。何か変な事でも思い付いたのかも」

「ルシル君、気を付けてな」

はやての割と本気な声色での忠告に「了解」素直に頷いておく。そんな中、ステージでは司会者が参加者の自己アピールを訊いていて、誰に為に参加したのかっていう問いに「好きな人の為です　」シャルはそう答えた。湧き上がる歓声と、シャルに想われている男に対する嫉妬のブーイングが湧き起こる。

「なぁ、ルシル。お前ってことがバレたら面白い事になるかもな」

ヴィータの含み笑いに「やめろよ、マジで」俺は懇願。そんなことになったら面倒くさい事態に陥ること間違いなし。どうなるか想像していると、マイクを向けられたフェンリルが「マスター、見てますか～　あなたの為に、一番になりまーす♪」俺に向かって手を振りやがった。あのクソ犬、って歯を噛む。ちくしょう、嫉妬の視線が俺に向けられているのがビシビシと伝わって来る。

「マスター？　８番さん、マスターという人とはどういった関係なのかな？」

「マスターはマスターです♪　身も心も捧げたい、大切な御主人様です　」

「そう言ったプレイが好きな人なんですかね～？」

「あなたにだけは絶対に負けないからね！　ミス海鳴も、想い人もわたしが頂く！」

シャルがフェンリルに指差して、フェンリルだけでなく他の参加者にまで宣戦布告。さらに俺に突き刺さる視線。もう嫌だ。逃げ出したい衝動に駆られていると、「ルシル君、決着まで時間掛かりそうやし、ちょう離れよか」はやてが俺の浴衣をちょんっと引っ張った。

「だな。このままここに居たらマジでヤバそうだし」

「ここは人がいっぱいで、リインにはステージが見えないですし、ちょっと苦しいです」

「ヴィータちゃんとリインちゃんが潰されちゃう前に離れた方が良いかと」

「そうやな。車椅子も場所取ってるし」

決まりだ。俺たち八神家はこの場から離脱。なのは達は残るそうだ。

なのは達と一度別れた俺たちは人の少ない場所を探して、そこで休憩だ。近くの屋台を見て回るはやてとヴィータとリインを微笑ましく見守っていると、「わぁ、綺麗」はやて達がある屋台で止まった。

「ガラス細工の店か」

そこはガラスや銀の工芸店だった。値段は他の屋台に比べてちょっと高いが、それでも子供の小遣いでも十分買える良心的なものだった。

「ルシル君。なんか奢ってもらえるって話しやったけど・・・」

「ん？　ああ、何か目当ての物でもあったのか？」

はやてもやっぱり女の子だな。こういうアクセサリーに目を輝かせるなんて。はやては「コレ、ええかな」って1つの指環を手に取った。指環。先の次元世界でのフェイトを思い返させる。分かたれたもう1人の俺と、そんな俺を愛してくれたフェイトは幸せになってくれただろうか。

「いいよ。・・・あ、そうだ」

あることを思い付き、俺は複数のアクセサリーを購入する。リインに「ルシル君。そんなに買ってどうするです？」と訊かれた俺は、「こうするんだよ」と、まずははやての右手を取った。

「右手の人差し指は、自分の意志を貫き通す指なんだよ。集中力を

高めたい時、物事を達成させたい時とかね」

はやての右の人差し指に指環をはめる。若干、気落ちしてそうな表情を見せたが、「おおきにな。大事にする♪」すぐに可愛い笑顔を向けてくれた。次はリインの小さな左の人差し指に指輪をはめる。

「左の人差し指は、精神を導いて能力を向上させる指」

続けてシグナムとヴィータの右手を取って、中指に指輪をはめる。

「行動力や迅速さ、直観力を向上させるのは、右の中指」

次はシャマルの左の中指に指輪をはめる。

「仕事の成功、家内安全や、家族・友人・仕事仲間とより良いコミュニケーションを高め、自身の能力を高める指が左中指だ」

ザフィーラは指が太くて無理だったため、イヤリングにした。許せ、首輪よりはマシだろう。そして最後に「アインス、コレは君の分だ」と彼女の分の指環を手に取り、「我が手に携えしは確かなる幻想・・・」ちょっと細工をしてから、彼女の左手の小指に指輪をはめる。

「叶えたい願いが実現する力を持つのが左小指なんだ」

「願いが叶う・・・。ありがとう、ルシル。最期の最期まで大切にさせてもらうよ」

右手で指環を覆い、両手を胸に抱くように構えたアインスからの微笑み。その頬笑みに癒されていると、「ルシル君にもプレゼントや♪」はやてが俺に指環を手渡した。

「わたしは指環の意味は判らへんから、ルシル君が思う好きな指にはめてな♪」

「・・・ありがとう、はやて。それじゃあ・・・右の人差し指」

「おお、お揃いやな」

「ああ、はやてとお揃いだ」

はやてと手を翳し合って微笑み合う。それからさっきまで巡っていたゲーム屋台を改めて回って時間を潰していると、『はやてちゃん達は今どこ？　合流しようか』なのはから念話が来た。あれから20分少ししか経っていないのにな。

合流場所は、花火が良く見える公園内にある丘の休憩所。夕食をみんなで買ってから合流ということで、念話でどれを購入したか、するかを相談しながら1つとして被らないように購入して、合流場所へ。

「早かったな。ミス海鳴ってそんなに早く終わるものなのか？」

「にゃはは。それが2人ともお互いを妨害し合っちゃって・・・」

「強制失格の即退場を食らったのよ」

呆れるなのはやアリサ、それにフェイト達。つまらない時間を申し訳なかったと、フェンリルとシャルの関係者として深く謝罪を申し上げたい。

さて。気持ちを切り替えて夕食だ。休憩所の、お世辞にも広いとは言えない木製の四角いテーブルにパックを並べ、そこから思い思いに箸を伸ばして食べていく。すると、「はやて達、その指環どうしたの？」とアリシアが小首を傾げた。

「あ、色は違うけど、みんな同じ指環してる～」

「ザフィーラは耳飾りかい。似合ってるじゃないか」

「ホントだ、可愛い♪」

なのはやアルフやすずか、みんなにも見えるように手の甲を向ける。リインが「ルシル君にプレゼントしてもらったですよ～♪」と言うと、「ずるい！　はやて達にだけなんてず～る～い～！」シャルが騒ぎだす。

「ルシル、ルシル。わたしも何か欲しい！」

「そういう約束だもんな。花火を見終わったら買いに行こうな」

「やったー！」

両手を振り上げて喜ぶアリシアの頭を撫でる。なんかもう妹のシエ

ルを見ているようだ、この喜びよう。俺へのイタズラ心が無くなればよいんだけどなぁ。

「シャルにも何か買うから、今は大人しく食べよう。オーケー？」

「オッケー！　指環、指環♪　婚約指環　」

「マスター！　私にも婚約指環をください！」

「ただの指環だ、馬鹿２人！」

そう怒鳴った直後、ドーン！と腹に響く音と一緒に夜空に花火が咲いた。約１万５千発の花火に、俺たちは見惚れた。花火の打ち上げが終わった後は、シャルやアリシア達に指環やガラスのオブジェを購入（計６千円）。思い思いにゲームや食べ物を買い、人が疎らになってきたところで景品の花火をして、俺たちの夏祭りは終わった。

Ｅｐｉｃｏ１９－Ａ子供の自然を得るがごとし

†††Ｓｉｄｅイリス†††

１学期の終業式が終わっての次の日、わたし達は月村家の別荘とプライベーートビーチがあるっていう地方へと電車とバスを乗り継いでやって来た。小高い山の中腹に別荘があって、その裏手は崖に囲まれた三日月状の海岸だってすずかに聞いた。夏をエンジョイするのにすごく適した場所だ。海も山もすぐ近くにある別荘に１泊２日の小旅行。

（感謝だよ～、すずか~♪）

「どうしたの、シャルちゃん？　わたしを拝んだなりなんかして・・・」

「すずか、大好き　」

「わっ！？　えっと、私もシャルちゃんのこと大好きだよ～　」

なのは達の笑い声の中ですずかとハグし合った後、「それじゃ案内するね～」すずかを先頭に整理された山道を進む。車椅子のはやてはザフィーラの背に乗り宴会へ――じゃなくて、別荘へ。体力の無いリインはいつもの小さいサイズで、アインスが肩にかけてるお出かけバッグの中でお休み中。朝早かったしね～。

「潮の香りがしてきた！」

「ホントだ！　波の音もする・・・。近いね、海！」

なのはとフェイトの言うように潮の香りと波の音がしてきた。と、「着いたですか～？」お出かけバッグのカバーが開いてリインがぴょこっと頭を出した。

「あ、ごめんね、リイン」

「起こしちゃった？　ごめん、大きな声出しちゃって」

「ふわぁ～・・・はふぅ。なんとなく起きてたですから気にしないで良いですよ～、なのはさん、フェイトさん」

大きなあくびをして目を擦るリインが、「みなさん、おはようございますですぅ～」ってすぅ～っと空を飛んでわたし達の前に来てお辞儀したから、「おはよう」みんなで挨拶返し。リインも起きたことだし、これである意味勢ぞろいになった。

「それじゃ、改めてゴー！」

他のみんなより先に海を見るために、先頭を往くすずかの隣に並んで歩く。それからお喋りしながら１０分ほど歩くと、「あれが別荘だよ」すずかが道の先を指差した。そこには一軒のログハウスが建ってた。

「2日分の食材は昨日の内にノエルとファリンが搬入してくれたから、買い物に行く必要はなくて、ほとんどの時間を遊びに割けるよ」

「至れり尽くせりだな。帰ったら改めてお礼をしないと」

「いいよ、ルシル君、お礼なんて。私がみんなにいつもお世話になってるから、これが私にとってのみんなへのお礼なんだから！」

「そんな必死にならなくても。・・・判った、判った。ありがたくこのお礼を受け取らせてもらうよ」

「うんっ！」

すずかとルシルのやり取りが終わるより早く「一番乗り～！」わたしはダッシュ。すると「シャルずるい！　わたしが一番だよー！」アリシアもわたしを追ってダッシュして来た。アリシアってば運動神経も体力もあんまし良くない（かつてのなのは並）のに、興味があるものに向かう時はどういうわけか速かったりする。

「「う～みだぁぁぁ～～～～～！！」」

別荘は森の中にぽっかりと空いた円形の庭の中に建ってた。ここまでの道は背の高い木々が陽の光を遮っていて薄暗かったけど、別荘の敷地内は陽の光をまともに受けてるからかなり明るい。

庭に入って別荘を大きく回り込むと見えてくるのは、水平線まで広がる真っ青な海。思わずわたしとアリシアは目の前に広がる海へ向かって一緒に叫んだ。潮の香りに海風、波の音。そのどれもが気持

ち良い。

「おお、気持ちええなぁ！」

「わぁ、すっごく大きくて広いですぅ～！」

「ああ、海鳴市の海も良いが、こちらの海もまた美しい」

目を閉じて深呼吸をしてると、はやて（とザフィーラ）とリインとアインスの感嘆の声が隣から聞こえてきた。アインスとリインはお揃いのノースリーブのロングワンピースを着ていて、ペアルックの姉妹か、もしくは母娘に見える。そこに、「ほら、日差しが強いから帽子」同じ銀髪のルシルが入ると、姉と弟と妹って感じになる。

「おおきにな」

「ありがとう、ルシル」

「ありがとうですぅ、ルシル君」

ルシルが3人に手渡したのは麦わら帽子で、ソレを被ったアインスとリインは深窓の令嬢って感じ。はやては・・・うん、ノーコメントで。わたし？　わたしはすでに被ってるのだ。お嬢云々は言うまでもない。実際のお嬢様だし。

「みんなー、とりあえず荷物を置こう！」

すずかが別荘の角からわたし達に手招きしてるから、「はーい！」返事して戻る。すずかが玄関の扉の鍵を開けて「どうぞ～」わたし達を招き入れてくれたから「お邪魔しまーす」挨拶してログハウスの中に入る。中を一言で言い表すなら、木、かな。壁も家具も木製だしね。なんか温かみを感じる。

「えっと、泊まる部屋は2階にあって、　1部屋に3人が泊まれるようになってるの。まずは部屋割りを決めよっか」

「とりあえず俺とザフィーラ・・・あと、後でフェンリルを召喚するから、この3人は決定で頼むよ」

「うん、判った」

「それじゃあ、わたし達は・・・」

リビングのコの字型ソファにみんな座って部屋割り決めをする。誰が誰と同じ部屋になっても、寝るまではここ1階で喋りまくる予定だからあんまし関係ない。というわけでグーとパーで決めることになって・・・

「私はアリシアちゃんとヴィータちゃんと一緒だね」

「よろしく、なのは！」

「おお、頼むわ」

なのははアリシアとヴィータと同室。

「あたしはアルフとシグナムね」

アリサはアルフとシグナム。

「私ははやてちゃんとシャマル先生、それにリインちゃん！」

「よろしくな、すずかちゃん」

「よろしね」

「よろしくお願いしますです♪」

すずかははやてとシャマル先生。そして・・・

「わたしはフェイトとアインスね」

「アインス、よろしく！」

「ああ、よろしく頼むよ」

部屋割りも決めて、「それじゃあルシル君。荷物、出してもらえるか」はやてがルシルにそう言うと、「ああ。我が手に携えしは確かなる幻想」ルシルが詠唱。するとルシルの周囲の床にわたし達の着替えや水着が入った旅行バッグ、あとはやての車椅子が出現。

ここへはチーム海鳴だけで来ることになったから、電車とかバス移

動だと荷物とか運ぶのが大変。その苦労を、ルシルひとりが背負ってくれた。創世結界っていう所に貯蔵してくれて、わたし達は手ぶらで来ることが出来た。みんなで「ありがとう！」ルシルにお礼を言って、決めた部屋に直行。

「ふっふふ～ん　」

「御機嫌だね、シャル」

割決められた部屋にはシングルサイズのベッドが3つ、鏡台1つ、丸テーブル1脚・椅子3脚で、寝るだけの部屋って感じ。で、わたしとフェイトとアインスは服を脱いで水着に着替える。

「えっへへ～。新しく買った水着を早速着ることが出来て嬉しいな～って♪」

白生地に桜の花びらのイラストが描かれたセパレートタイプの水着に着替える。ていうか、「ホント大きい・・・」ふと目をやったアインスの体に釘付け。黒のビキニタイプの水着で、一般人入り乱れなビーチに居ると絶対にナンパされる、そんなモデル体型。アインスの体のラインを見た後、自分の体を見る。

（将来、あんな風になるのかなぁ・・・）

子供だから当然だけど、すとーん、って感じのわたしの体。ちょっぴり膨らんではきたけど、アインスを見れば無いのと同じ大きさ。そんなわたしの視線に気づいたアインスが「シャル、お前はまだ子

供だ。いずれはちゃんと育つ」そう言って励ましてくれた。

「だと良いんだけど・・・」

「お前や主はやて達もまだまだこれからだ。気長に待てばいい」

最初は微笑みを浮かべてくれてたアインスだけど、ほんの一瞬だけ寂しそうな表情を覗かせた。どうして？なんて考えるまでもない。アインスの寿命も残り僅かだから。わたしはそれを見なかったことにして、「ありがとう、アインス」の胸に飛び込んだ。アインスは拒絶しないでくれて、無言で頭を撫でてくれた。

「ほわぁぁぁ（うわぁ、すごい抱き心地。はやてってば、いつもこんな羨ましい事してんの？）」

このままアインスの胸の中で眠りたい衝動に駆られ始めていると、「シャル、アインス、行こう」フェイトがわたしを現実に呼び戻してくれた。

「うん」「ああ」

3人で部屋を出ると、同じように水着に着替え終えたなのは達と合流。L字階段を降りて1階のリビングへ。すずかが「裏のテラスからビーチに行けるからついて来てね」そう言って先を行く。

この別荘に着いてすぐに回ったテラス側へ行って、テラスから海岸へと続く坂に設けられた階段を一番先に「やっほ～い！」駈け下りる。すぐ後ろから「待ってよ、シャルー！」アリシアが追い駆けて

くる。今度の一番乗りもわたしがいただくのだ。

「「とうちゃ～く♪」」

砂浜を踏む。プライベートビーチの幅は１００ｍくらいで、ビーチチェアやバレーをするための支柱があるけど、それでもゆったり出来そうなほどの広さはある。左右は崖だから、崖の向こう側の居るはずの一般人には見えないし。遅れてなのは達が到着。だけど「あれ？」すずかとルシルとザフィーラが居ないからキョロキョロすると、「パラソルとシートを持って来るって」なのはが教えてくれた。

「お、ルシルの奴、フェンリルを召喚したな」

別荘の庭にサファイアブルーの魔力光が溢れた。魔法を使った証拠だ。それからすずか達を待っていると、「お待たせー！」すずかを先頭に、パラソル３本を脇に抱えた人型ザフィーラ、丸めたシート３枚を担いだ黒のワンピースタイプの水着を着たフェンリル、最後尾は空気の入ってない浮輪やビーチボールを持ったルシル。

「よーし。みんな揃ったことで早速・・・入るぜ～☆」

「入るぜ～☆」

「ダメ、シャルちゃん！」「待って、アリシア！」

アリシアと一緒にスキップしながら海に入ろうとしたら、「ぐへぇっ！？」わたしはポニーテールにした後ろ髪をなのはに引っ張られ

て、「ぎゃふっ？」アリシアはツインテールの片方をフェイトに引っ張られて止められた。

「「く、首がぁ・・・頭皮がぁ・・・」」

痛む箇所を両手で押さえて蹲る。そんなわたし達の頭上から「準備運動しないとダメだよ！」ってお叱りの声が。シートやパラソルの準備を終えたルシル達と横に整列したみんなの元へ「はーい」返事しながら向かって、海に入る前の準備運動をする。

「「もう入ってもいい！？」」

最後の深呼吸を終えると同時に確認すると、「どうぞ」微笑み混じりの許可が下りたことで「やっほ～い！」ダッシュで海に向かった。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒すずか†††

私の家の別荘にみんなで遊びに来て、夕ご飯を作る時間までは海で遊ぶことにした。準備運動も終わって、「やっほ～い！」シャルちゃんとアリシアちゃんがダッシュで海に向かった。バシャバシャと浅瀬に入って行って、「とおりゃぁぁぁ！」ジャンプして飛び込み体勢に入った。だけどそこはまだ浅瀬だった。波が引いて砂浜になったところへ顔面から墜落。

「「いったぁ～～～！！」」

ぺっぺっ、って口から砂を吐き出しながら顔を押さえて痛がるシャ

ルちゃんとアリシアちゃんに、「大丈夫！？」私たちみんなで駆け寄っていると、「あ・・・！」そこに2人へ追撃が。引いていた波がまた押し寄せて「あぶぶぶ！？」2人を呑み込んだ。踏んだり蹴ったりだね・・・。

「シグナム、アインス、2人を救出！」

「「はいっ！」」

シグナムさんとアインスさんがシャルちゃんとアリシアちゃんをお姫様抱っこで救出。パラソル下に敷いてあるシートに寝かせた。みんなで心配してると、アリシアちゃんは「うへぇ、酷い目に遭った。でも負けない！」すぐに体を起こしたけど、シャルちゃんは横たわったまま。どうしたのかと思ってると・・・

『人工呼吸プリーズ。なのは、アリサ、すずか、フェイトの誰か、ルシルに人工呼吸するように促して』

そんな念話が。大丈夫そうだね、シャルちゃんも。さすがに溺れたのを利用するのはダメなことだから、『ルシル君。シャルちゃんが――』さっきの念話の内容をルシル君に伝えた。

「『なるほど。判った』意識や息が無いのか？　人工呼吸だな」

シャルちゃんの表情が目に見えて緩んだし、少し唇を突き出してる。もうこれは演技だってバレバレ。私たちの空気が呆れ一色になってるところに、ルシル君がフェンリルさんを肘で小突くと、フェンリ

ルさんは首を横に高速で振った・・・かと思えば、いきなりフェンリルさんの表情が満面の笑みに変わって、さらに狼の耳がぴょこっと飛び出た。

「待ってろ、シャル。すぐに人工呼吸するからな」

そう言うルシル君だけどスタンバイしてるのはフェンリルさん。そしてフェンリルさんがシャルちゃんに人工呼吸するために口を付けた。ここでシャルちゃんが動く。両腕でフェンリルさんの頭をホールドして目を開けた。まぁ、ルシル君と思っていたのにフェンリルさんだったから当然「っっ！！？？」ビックリするよね。だから「うおーい！」シャルちゃんはフェンリルさんを押し飛ばした。

「な、なんであなたがやるわけ！？」

「マスターに頼まれたから。ホントは嫌だったけど、マスターがお願いを聞いてくれる言ってくれたから　」

「ひどぉ～い！」

「酷いのは君だ。人の心配を利用するのはさすがにまずいだろ」

「ぅ・・・うん、ごめんなさい」

シャルちゃんがルシル君だけじゃなくて私たちみんなに頭を下げて謝ったから、もうこの件は終わり。さ、ここへ来た目的、海に入ろう。泳ぐ子、浮輪で揺られる子、砂浜でお城を作る子、ビーチチェ

アでのんびりする子、いろんな方法で海を満喫。ちなみに私は泳ぐ子組。アリサちゃんとシャルちゃんとフェイトちゃんと競争して、私が1着で勝利。

「くぅー、やっぱり速いわ、すずか」

「改めて運動能力1番を実感するよ」

「常々思うけど、すずかって見た目が文系そうなお嬢様なのに、実際は体育会系とかわけ判ら～ん」

海岸から５０ｍと離れた沖にある１つ岩にタッチした状態で３人と話していると、「そこから先は結界外だから気を付けてなぁ」浮輪に座って波に揺られてるルシル君からそう言われた。結界というのは、一般の人がプライベートビーチに入らないようにするためにルシル君が張ったもの。侵入付加、不可視、の効果がある。

「あれ？　ルシル君ひとり・・・？」

「あんた、フェンリルと一緒じゃなかったっけ・・・？」

「さっきまで犬かきで泳いでたじゃん。狼なのに。プッ」

「ああ、そうだよ。というかシャル。四足動物は基本的に犬かきじゃないか？」

「それでフェンリルはどこに・・・？　海岸にも居ないよね」

フェイトちゃんの問いに、ルシル君が海中を指差した。私たち揃って潜ってみる。そして見たのは、「っ！！？」海中を歩くように泳いでるとんでもなく大きな漆黒の狼。ビックリしちゃって大慌てで海上に顔を出す。

「ちょっ、ルシル！　　アレがフェンリルだって言うの！？」

「かなり大きかったけど・・・！」

「全高５ｍほどにセーブさせての顕現だよ」

「セーブしてってことは・・・もしかして本当はもっと大きいの・・・？」

フェイトちゃんが訊くと、「本来のフェンリルの全高は６０ｍだぞ」ルシル君はとんでもないことを答えたから、私たちは「６０ｍ！？」驚きを見せた。高層ビルと同じくらいの高さということは、全長だと何十ｍになるんだろう。とにかくかなり大きいんだね、フェンリルさんって。

「フェンリルから久しぶりに元の姿になりたいってお願いされたけど、そんなふざけた大きさになったら大変だろ？　少し可哀想だが大きさを抑えた上で元の姿に戻ってもらったんだ。と、浮上してくるぞ、気を付けろ」

海面に上がって来た泡が弾けて、黒い影が近付いて来た。そして「

わわっ！」その巨体が現れることで海面が盛り上がって、私たちは海岸へと押し流されちゃった。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒はやて†††

アインスとリイン、それにザフィーラ（砂集め役）と一緒に砂浜で砂のお城を作ってると、「きゃぁぁぁ！」海の方から悲鳴が聞こえてきた。そっちに目を向けると、海に出てたすずかちゃん、アリサちゃん、フェイトちゃん、シャルちゃん、それに浅瀬に座って波を受けてたなのはちゃんとアリシアちゃんとアルフが「わぁぁーーー！」波に押し流されて、砂浜に打ち上げられた。すずかちゃん達は最初は呆けてたけど、「あはははは！」ビックリしたって大笑いしだした。

「わわ、大きいですぅ～！」

すずかちゃん達が打ち上げられた原因――狼形態のフェンリルさんの大きさにリインも、そんでわたしやアインス、ビーチチェアに座ってたシグナムとシャマルもちょうビックリや。ホンマはもっと大きいって知ってるんやけど、セーブした大きさでも実際に見ると十分驚きや。そんなフェンリルさんの頭の上には浮輪に座ったままのルシル君がポツンと居った。

「ごめんねぇ、みんな～」

「わー」

大きな狼の口から可愛い声での謝罪が発せられた。フェンリルさん

がすずかちゃん達に謝るために頭を下げたからルシル君が落下。頭を挟むように両腕をピンと上に伸ばして潜水体勢になったルシル君。そやけどその前にフェンリルさんが人型に変身して「マスター！」空中でルシル君を抱き止めた。そんでそのまま落下するんやけど、「よいしょっ！」フェンリルさんは海中に沈むことなく海面に降り立った。そんな2人が海岸に辿り着く。

「おーい、みんな大丈夫か～？」

フェンリルさんに降ろされてすぐにみんなを心配するルシル君に、「大丈夫～！」押し流されてもうたすずかちゃん達が笑顔で応える。

「（ほっ。何事もなくて良かったわ）・・・フェンリルさん、元の姿に戻ってどうやった？」

「んー？　うん、なかなかに気持ち良かったよ♪　でもやっぱり完全な姿で顕現したいなぁ～」

「おお、見てみたい！」

「いつか見せてあげたいよ、私の真の姿を。強いし神々しいし、とにかくすごいんだから♪」

笑顔で答えてくれたフェンリルさん。それからフェンリルさんを含めて砂のお城を作り上げて、みんなで記念撮影。そんで今度は全員で海に入る。ちなみにわたしとリインは浮輪装備で、バレーボールのやり方でビーチボールのパスを続けるゲームをやってるヴィータ

達やすずかちゃん達を見守る。膝辺りまで海に浸かってる所為で動きは鈍くてみんな苦戦してるけど楽しそうや。

「ところでルシル君、アインス。２人もみんなに混じって遊んでもええんやよ？」

わたしにはアインスが、リインにはルシル君がそれぞれついて見守ってくれてる。そやからちょう心苦しい。そやけど、「私は好きで主はやてとリインの側に居るのでお気になさらず」ってアインスは微笑んで、「どうせならこの機会に泳ぎを覚えような」ルシル君はそう言ってわたしとリインの頭を撫でた。

「賛成ですぅ！　リインも自分の力で泳いでみたいですぅ～！」

「そうやなぁ。・・・うん、お願いしようかな」

「決まりだな。アインス、協力頼むよ」

「ああ、頼ってくれ」

そうゆうわけで、わたしとリインは泳ぎを習得するための練習が開始。ルシル君指導で基本的な事から教わる。まずは浮輪を取っ払ってこの身１つで浮くことからや。浮輪を取ったわたしはアインスに掴まって水没を回避して、リインは底に足をついて立つ。自力で立てへんってゆうのがすでにアウトっぽいなぁ。

（リハビリのおかげで徐々に脚を動かせるようになってきたし、バ

タ足も弱いけど出来る）

下半身麻痺の原因――"闇の書"の呪いがなくなってから7ヵ月。病院で平行棒を使った歩行のリハビリを繰り返してるおかげで、ホンマに少しずつやけど立って歩けるようにはなってきた。あと悲しいことに筋肉が付いた所為か腕の太さが・・・orz

「――リインも頭まで潜るのは出来ている。じゃあ、まずは浮くことから始めよう。ダルマ浮きというのがあって・・・」

ルシル君が息を吸って止めて、上半身を前に倒して顔を海面に付けて、両足を浮かせてうつぶせ状態になった。さらに『自分のお腹を見るようにして・・・と』両膝を抱えて蹲った。すると背中が海面に少し出た状態でプカッと浮いた。5秒くらいそのままで居ると『慣れてきたら、手足をダラけさせるクラゲ浮きになってみよう』って四肢をダラけさせて浮かぶポーズになった。

「ぷはっ。ま、大体こんなところだろう。これは、人は浮く生き物だ、ということをちゃんと証明する方法だ。さ、俺とアインスがちゃんと付いているから安心してやってみてくれ」

とゆうわけで、ルシル君に言われた通りにダルマ浮きってゆうのをやってみる。わたしは去年、ルシル君やフェンリルさんと一緒にプールに行ったから浮くことくらいは出来る。ダルマ浮きは初挑戦やけど、なんとか出来た。リインはどうやろ、って思うて海中で目を開けて見ると、「ごぼがぼっ!?」ジタバタと暴れて・・・溺れてた。

「（リイン！！）っ、ごぼごぼっ！？」

自力で立つことも出来んクセにリインを助けようと上半身を起こしたわたしも溺れた。アインスとルシル君に助けられたわたしとリインは一度砂浜に上がる。

「び、ビックリしたです～」

「ホンマやよ。リインが溺れてて心臓止まるかと思うたわ」

「ごめんな、リイン、はやても。一応、すぐに助けられる位置に居たけど、俺よりはやてが先に動く結果になって2人が溺れることになってしまった」

わたしが助けようとせんでもルシル君がリインを助けるはずやった。それをわたしがやろうとして結局溺れて、アインスにも迷惑を掛けることに。あぅ、ちょう自己嫌悪や。しょんぼりしてると、「なんでヘコむんだよ。その行動の速さは家族を思うが故だろ」ルシル君がむに～とわたしの両頬を引っ張った。

「そうですよ、主はやて」

「ルシル君の言う通りですぅ♪」

アインスはわたしの頭を撫でてくれて、リインがわたしの手を取って抱いてくれた。ルシル君の手が離れてちょう熱くなってる頬を擦

りながら「うん、おおきにな」溢れる嬉し涙を拭わんと笑顔を作る。

「よし。それじゃ再開だ。リイン、さっき溺れた原因なんだが・・・・」

「はいです。息をするために立とうとしたですが上手に出来なくて・・・・」

「あっ・・・・！　あー、しまった、そうだよな、立つ方法を教えてなかった。ごめん！」

改めてルシル君がダルマ浮きして、「『顔を上げてお尻を下げる。で、足をついて両腕を下げる』」ふぅ、こんなところか」って思念通話で伝えながら見せてくれた。わたしとリインもやってみると、今度は上手く出来たから「イェーイ！」リインとハイタッチを交わす。ダルマ浮きとクラゲ浮き、水平に浮く伏し浮きを反復練習して浮くことに慣れる。

「ルシル。今さらだが、息継ぎについても教えないといけないのではないか・・・？」

背面浮きまで修得したところでアインスがルシル君にそう言うた。すると「あー、そっか、そうだよな」頭を抱えるルシル君。ルシル君にしてはらしくないミス連発。こうゆうことには慣れてへんのやろうね。お世話になります～。

「じゃあ息継ぎの練習だ。まずは水上で息を吸って止めて、立った

まま鼻まで浸かる。『そして鼻から空気を出す』これを繰り返す。で、慣れてきたら伏し浮き状態でやろう」

「「はいっ」」

今度は息継ぎ練習。わたしはアインスに体を支えられて練習する。立ちしゃがみの息継ぎの後は、横に浮いての息継ぎ練習。わたしはアインスに、リインはルシル君にお腹を持ってもろて支えてもらいながら息継ぎする。

それからリインだけ歩きながらの息継ぎもマスター。腰が下がって顔が海中に沈むときに鼻から息を出して、次の一歩の途中で頭が上がった時に口から息を吐く、ってゆう風に。その後は、それぞれのパートナーの手を握ってのバタ足練習や。

「膝、足首、爪先の順番で蹴り降ろすのを意識するんだ」

何度か下半身が沈んで失敗続きやったけど、１０分と繰り返すとちゃんと出来るようになった。次は浮き輪をヘルパー代わりに使って単独水泳。そんで最後に自分の身１つで泳ぐ練習や。

１時間ちょう使っての練習で、「見てくださーい！　リイン、泳げるようになったですぅー！」ってリインが砂浜で休憩中なわたしやアインス、そんでシグナム達に上達した泳ぎっぷりを披露した。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒リイン†††

ルシル君から泳ぎの方法を教わってみんなにリインの泳ぎを披露しましたです。はやてちゃんも浮き輪アリならひとりでも泳げるよう

になったですよ。いつかはみんなで泳いでみたいですね。そして今はみんな揃ってシートやビーチチェアでのんびりジュースを飲んで休憩中です。

「次はどうする？」

アリサさんがみなさんに訊くと「う～ん・・・」すぐには答えが出なかったです。と、「ダイビングでもするか？」ルシル君が提案しました。それに対して「シュノーケルも、タンクやフィンとか、必要な器材とか何も無いけど・・・」すずかさんが困ったような顔をするです。

「問題ないよ。その身1つで出来るからさ」

ルシル君が笑顔でそう答えると、すずかさん達が「どうやって？」と小首を傾げたです。

「あ、そうか。お前、オーディンと同じ魔法が使えんだもんな！」

「水中戦で使ったという魔力コーティングであれば、水中でも陸上のような動きが出来るという魔法だな」

ヴィータちゃんとアインスがそう言いますと、「そんな魔法があるんだ～」なのはさんや、「ルシル、水中戦も出来るんだね・・・」フェイトさん、「すごいね～」すずかさん達が感嘆の声を上げました。ルシル君が「試しに誰かやってみるか？」ってみなさんを見回すと、「やってみたい！」アリサさんとアリシアさんが挙手しまし

た。

「よし。じゃあそこに立って。いくぞ・・・！」

ルシル君がアリサさんとアリシアさんに手を翳して魔法を発動。サファイアブルーに輝く光の膜がお2人の全身を包み込みました。ルシル君は「それで入ってみてくれ」そう言って促すと、「へぇ、どれどれ」お2人は海に入って潜りました。そしてすぐ「すごい、これ！」すごいテンションで戻って来ました。

「この魔法、結構すごいわよ！　海の中でも普通に息も出来るし会話も出来るし！」

「それにね！　普通に潜るより海中が綺麗に見えるんだよ！　フェイトも、みんなも一緒にダイビングしようよ！」

それだけを言ってまた海に戻って行きました。その嵐のような行動にちょっと呆けましたけど、「ルシル君、お願い出来るか？」はやてちゃん達も期待に満ちた表情をしてルシル君を見ますと、「ああ、もちろんだとも。さぁ、行っておいで」ルシル君がリイン達に魔力コーティングを施してくれました。

「って、あれ、ルシル君は行かへんの？　それにザフィーラも」

なのはさん達が海中に潜って、続いてリインやはやてちゃん達も潜ろうとした時、ルシル君とザフィーラは魔力コーティングをせずにビーチチェアに座ろうとしていたので、はやてちゃんが声を掛けた

です。

「あー、ちょっと疲れたからもう少し休ませてもらうよ」

「我もここで待機しております」

「そういうわけだから、俺とザフィーラのことは気にしないでダイビングを楽しんでおいで。アインス、シグナム、ヴィータ、シャマル、リイン、それにフェンリル。はやてを頼むぞ」

「「ああ」」「おう」「ええ」「はいです」「はーい♪」

「・・・うん。じゃあいってきます」

手を振るルシル君に見送られながらリイン達もみなさんに続いて潜りました。でもやっぱり潜る前に息を吸って止めちゃいました。と、「リインちゃん。大丈夫よ、息がちゃんと出来るわ」シャマルに肩を叩かれて「ぷはっ。本当です、息もお話も出来てますぅ！」リインは止めてた息を吐いて、声を出しました。

「水温もあんまり感じないんだね」

「あ、でも水の中に居るっていう浮遊感はちゃんとある」

「だから不思議な感じがする」

「息継ぎや水圧の心配もないから、何時まででも潜っていられるっ

ていうのは助かるよね～」

なのはさん、フェイトさん、すずかさん、シャルさんと、思い思いに感想を言いながら海中を泳ぐです。それからリイン達は時間を忘れてダイビングを楽しみました。お魚の群れに飛び込んだり、クラゲと一緒にプカプカ浮遊したり、タコに墨攻撃を受けたり、その他にも色々な事を経験しましたです。

『みんな。もうそろそろ上がっておいで。陽が沈み始めてからのダイビングは危ない』

ルシル君からそんな思念通話が来たです。そう言えば少し薄暗くなり始めたかも知れません。シャルさんが「お腹も結構空いてきたし、上がろうか」と海面に向かったですから、「夕ご飯作る体力がちょっとピンチかも」とか「簡単なものでいいんじゃない？」とか、ご飯についてお話ししながらリイン達も続いて海面へと向かうです。そして陸上に上がると同時に魔力コーティングが解除されました。

「ん？　なんかすごい良い香りがするんだけど・・・」

「シーフードの香りだ・・・！」

「まさか・・・！　ルシル君ひとりで夕ご飯作ったんか！？」

慌てて別荘に戻りますと、テラスには人数分のタオルを持ったエプロン姿のルシル君が居て、「おかえり、みんな。パスタにピラフにサラダ、グラタン、刺身などなど、魚介類をふんだんに使った夕飯

が待っているぞ」そう言ってリイン達を出迎えてくれました。

「言うてくれたら手伝ったのに・・・」

「そうだよ、ルシル君」

「いや、君たちは遊び疲れているだろ？　体力が余っていた俺がやってもおかしく――って、ほら、今はまず風呂に入ってこい」

ルシル君がリイン達ひとりひとりの頭にバスタオルを掛けてくれました。それからリイン達は体を拭いて砂を落とした後、着替えを持ってお風呂に入りました。お風呂はかなり広かったですけど、全員一緒に湯船に入ることは無理でしたから交代でシャワーを使ったですよ。

そしてお風呂を上がった後は、ルシル君お手製のシーフード料理祭りです。複数の大皿に盛り分けられた料理に舌鼓を打ちながら明日の予定を決めて、シーフード料理祭りは終わったです。

Ｅｐｉｃｏ１９－Ｂ子供の自然を得るがごとし

†††Ｓｉｄｅアリシア†††

すずかの家の別荘に１泊２日の旅行にやってきたわたし達チーム海鳴。ルシルが内緒で作ってくれたシーフード料理をいただいて、今はみんなでお片付け。料理を１人で作ったルシルは、みんな（特にはやて）に言われて片付けの手伝いをさせてもらえずソファに座って新聞を読んでる。おっさんか！

「ねぇねぇ、この後どうする？」

「怖い話でもする？　夏だし、夜だし」

「お化けです！？　リインはちょっと苦手ですぅ」

わたしやヴィータと一緒にお皿を食器棚にしまう係のリインがビクつく。聞けばちょっと前にやってたホラームービーを観てからリインはそういう幽霊とかオバケとかがダメになっちゃったみたい。リインに続いて「にゃはは。私もちょっと遠慮したいかも」なのはもやんわり拒否った。

「なによ、なのは。あんた、まだ怖がりが治ってないわけ？」

「だって～」

「なのはちゃんも幽霊とかダメだもんね～」

チラッと聞いたことはあったけど、本当だったんだぁ。あんな冗談みたいな強さを持った魔導師なのに。そういうわけだから夏の風物詩怪談は却下ということになった。じゃあ、どうするか。お喋りだけでも良いんだけど、やっぱり夏らしいこともやりたいし・・・。みんなで「う～ん」って考えていると・・・

「だったら天体観測なんてどうだ～？」

「マスター？　痛くはないけどちょっとやめてほしいかな～」

新聞を丸めて棒状にしたルシルが、片付けをサボってるフェンリルの頭をソレでポコポコ叩きながらそう提案した。そしてひとり「今夜は快晴。空気も澄んでいるから星空が良く見えるぞ」テラスに出て空を見上げたルシル。

「我が手に携えしは確かなる幻想。・・・こんなこともあろうかと天体望遠鏡も持ってきたしな」

蒼い魔力光と一緒にルシルの側に現れたのは天体望遠鏡２つ。そこまで準備が出来てるんなら「天体観測に決まり！」だね。食器類の片付けを終えて、わたし達は早速天体観測を始める。

「天の川がメッチャ綺麗や～！」

望遠鏡を覗くまでもなくハッキリと見える天の川にはやてや、「わ

ぁ♪」わたし達は感嘆の声を漏らした。それから順番に望遠鏡を覗いてく。わたしの番になって望遠鏡を覗くんだけど、どれがどれだか全く以って判らない。小首を傾げてると、「アレが北斗七星、そしてアレが夏の大三角形やよ」って、はやてが隣に並んでくれて夜空を指差して教えてくれた。

「はやてちゃん、詳しいんだね」

「受け売りやよ、ルシル君の♪　わたしだけやのうてシグナム達も教わった・・・よな？」

「ええ、まぁ。・・・ですが――」

「あんまし憶えてないっていうか・・・」

「忘れちゃいました。あ、でも彦星と織姫の物語は憶えています♪」

「まぁ、あまり必要性の無い知識だしな。忘れてしまってもしょうがないよ」

ルシルから教わったっていう星座の話を忘れたって言うシグナム達に対して苦笑い。はやてが「そうや。あの時と同じ教え方してもらってもええか？」ルシルにそうお願いした。すると、「構わないけど・・・。みんなはどうだ？　星座が判り易くなるようにするだけだが」ってルシルが確認してきた。

「私はお願いしたいかも」

「本とか見ないと難しいから、私もお願いしたいかな」

なのはとフェイトが小さく挙手。わたしとしてはなんとなーくでも良いんだけど、さらにアリサとすずかもお願いしたから「じゃ、わたしもぉ～」それに乗っかる。ルシルは1回だけ頷いて、夜空に左人差し指を向けた。

「えー、まずは星座を見るための目印となる、有名な北斗七星がコレだ」

そう言いながらルシルが指を動かすと、夜空に輝く星を繋げるように蒼い光のラインが入って、北斗七星がハッキリと判るようになった。これにはわたしも「おお！」って思わず拍手して、フェイト達も「すごーい！」って感嘆した。

ルシルは続けて「アレが北極星で、デネブとベガとアルタイルを結んで夏の大三角」って、次々と星を蒼光のラインで繋げて、星座を視覚化してくれた。それだけじゃなくて、「アレとアレとアレを繋げて盾座だ」繋げた星座の絵まで視覚化してくれた。

「これすごいのはすごいんだけどさ、他の人たちには見えないの？」

「見えちゃってたらかなりの騒ぎになっちゃうけど・・・」

アリサにわたしも同意する。でもそこはやっぱりルシルで「魔力持ちにしか見えてないから問題ないさ」とのことだった。でももし、万が一にもなのはやはやてのような特異体が居たらどうするんだろ

う。

「――で、次で最後だな。アレとコレと・・・あとはアレとアレ・・・。よし、完成だ。何の星座か判るか？」

ルシルが星を繋げて視覚化した星座が何なのかっていう問題に「白鳥座！」わたしたち子ども組だけが答える。ルシルが「正解だ」って言うと、白鳥の姿が浮かび上がった。気が付けば夜空にはたくさんの半透明な動物やら物が浮かび上がっていて、すごいなぁって思っていたら、「リアルプラネタリウムだね」ってすずかがウットリした。

「さてと。そろそろいい時間だし、また風呂に入り直して今日は就寝だ」

パンパンって手を叩くルシル。時間を確認すればもう9時で、「朝も早いから、そうしようか」すずかが明日に備えるためにルシルに同意した。

「まずは女子組から入ってくれ。俺とザフィーラは後でいい」

そう言って天体望遠鏡をしまうルシルに、星座講座や先にお風呂に入らせてもらえることに対して「ありがとう」わたし達お礼を言って、テラスを後にした。部屋に戻ってパジャマと替えの下着を取って来る。ルームメイトのなのはとヴィータと一緒に部屋を出ると、「あ？　お前ら着替えは？」手ぶらで階段を降りようとしてる八神家大人組が居た。

「私とシグナムとシャマル、それにフェンリルは後にするよ」
「一応、みんな一緒に入れるようなお風呂だけど、さっきの砂利落としとは違ってゆったり入りたいでしょ？　私たちのような大人が入ると一気に狭くなっちゃうし」
「我々はそのつもりでな。お前たちとは別々に入ることにしたのだ」
「そういうわけでヴィータ。はやてとリインをよろしくぅ～♪　マ～ス～タ～　あ～そ～ぼ～♪」
フェンリルが階段を使わずに、ソファに座ってザフィーラと一緒にテレビを観てるルシルに向かって飛び降りた。と、「げふぅっ！」階下からルシルの苦悶の声が。手摺から身を乗り出してみると、フェンリルの両膝がルシルのお腹を直撃してた。
「何しとんじゃぁぁぁーーーーっっ！！」
「きゃぁぁぁ～～～☆」
ルシルとフェンリルの追いかけっこが始まった。そんな追いかけっこが行われてるリビングにシグナム達が音もなく入ってソファに腰掛けた。八神家大人組＋男子がリビングに集合したのを見届けてお風呂場へ向かう。脱衣所にはすでにフェイト達が居て、「待ってたよ～」って、わたし達の到着を待ってくれてた。

「「お待たせ～♪」」

「リイン。はやての入浴はあたしらに懸かってる。やるぞ！」

「はいですっ！　はやてちゃん、お洋服を脱ぎましょう！」

木組みの椅子に座ってるはやてが「えっ？　ちょっ、服くらい自分で――あああああ！」ヴィータとリインに襲われて――じゃなくて、服を脱がされ始めた。

「アルフ。はやての移動の時はお願い」

「あいよ」

とりあえずみんな服を脱いで浴室に入る。時間短縮の為に洗いっこをやる。蛇口は3つだから3人ずつだ。最初ははやてとアルフとリインから。その3人の頭や背中を流すのは、すずかとアリサとヴィータ。で、すずか達を洗うのはわたしとフェイトとなのは。最後は、わたしとフェイトとなのはとシャルの4人で洗いっこ。髪の毛が湯船に浸からないようにタオルを頭に巻いて、「ふはぁ～～」お湯に肩まで浸かる。

「ちょっと沁みるね～」

「うん、日焼け止め塗ったんだけどね」

なのはとフェイトがそんな会話をする。わたしはそんなに痛くない

から判んないけど。それはともかく話は明日の予定についてになった。今日は海だったから明日は山に入ろうっていうのは前から決めてるんだけど・・・。

「谷川もあるから、そこで泳ぐのも良いかも。そっちも月村の土地だから好きなように遊べるし。あ、でも川を汚すような事はしちゃダメだけど」

「お昼はバーベキューでいいんじゃない？」

「肉！？　肉か！？　肉なら大歓迎だ！」

バーベキューの一言でアルフが目を爛々と輝かせた。ふと、「ねぇ、はやて。ザフィーラとフェンリルって、やっぱり肉好きなの？　ウチのアルフはもうお肉が好き過ぎて大変なんだけど」わたしはそう思ったから訊いてみた。

「ザフィーラは何でも食べてくれるよ。フェンリルさんも・・・何でも食べてくれるなぁ。昔は肉が好きやったって言うてたけど」

「アルフはお肉なら何でも好きだけど、フェンリルも好みとかあるの？」

「何でもってわけじゃないよ、フェイト。あたしは牛肉が好きだ。この前食った高級和牛とか言うのが一番だよ」

アルフが言う高級和牛っていうのは、夏祭りでシグナムが獲ったお

肉引換券で交換してもらったお肉だ。ちょっと前にはやての家にお呼ばれして焼き肉パーティをやった。うーん、美味しかったなぁ～。また食べたいよ～。

「う～ん、フェンリルさんの好みのお肉かぁ。・・・わたしはどうか判らんな～」

「アイツ、人肉って言ってなかったか？」

ヴィータがポツリと漏らした。そんなブラックジョークにわたし達は無言の沈黙を貫くことしか出来なかった。ここで「そんじゃ当の本人に聞いてみっか。『なぁ、フェンリル。訊きてぇことがあんだけど』ヴィータがわたしたち入浴組とフェンリルに念話を使った。

『いいよ～。って、あっ、ちょっ、また私とシャマルをカモる気！？』

フェンリルとシャマルに一体なにが起きてるのか判らないけど、リビングで何かゲームでもやってるんだろね。そしてどんくさそうなシャマル先生と、どうしてかフェンリルが標的にされてる、と。

『むぅ・・・。で、質問って何？』

『お前の好きな肉って何さ』

『どうしてそんな話になってるのか判らないけど、そうだなぁ・・・馬肉！』

フェンリルの簡潔な答えにホッとする。本当に人肉が好きって言われたらどうしようかって。ヴィータが『確かお前、以前――』そう続けようとした時、「『ちっくしょぉぉぉぉーーー！』」念話と現実の声が一緒に聞こえた。声の主は当然、フェンリルのものだった。

「ダメだ、切れちまった。つうか、何やってんだよ。気になるわ～」

『ルシル君。みんなで何やってるん？　かなり騒がしいけど・・・』

『ん？　あー、ポーカー、そしてついさっきからババ抜きをやっているんだ。フェンリルとシャマルは面白いほどに表情が変わるから、俺やシグナムやアインスにカモられているんだよ』

あー、確かにあの2人は隠し事とか出来なさそう。ポーカーは良く知らないけど、ババ抜きなら学校でも何回かやったことがある。アレって結構熱くなるんだよね。はやてが教えてくれたことについてルシルにお礼を言って念話を切った。それからわたし達はお風呂を上がって、就寝するまでババ抜きで楽しんだ。わたしとなのはとリインはぼろ負けだったけどね。

†††Ｓｉｄｅアリシア⇒アリサ†††

ババ抜き大戦を深夜０時までやった後はゆっくり睡眠。そんで朝を迎えての今は9時ちょっと過ぎで、子供組だけで歌を唄いながら山登り中。目指すは山の中腹にあるっていう谷川。そこの渓流で最後のひと泳ぎとバーベキューをする予定・・・なんだけど、今はその途中にあるひまわり畑に向かってる最中。

「天然モノのひまわり畑で、手入れを何もしていないのにすごく綺麗なんだよ！」

すずかが興奮気味に語ってくれた。で、そこまですずかが興奮したのも「すご・・・」実際に目で見たことで理解できた。目の前に広がる黄色の絨毯。丘一面に咲き乱れてるひまわり。パッと見じゃ何百本って感じで、1本1本がシグナム程の高さ。

「良い香りがする・・・！」

「ひまわりの匂いだね～」

「写真！　写真をみんなで撮ろうよ！」

アリシアがフェイトとアルフの手を引いてひまわり畑に突撃からあたし達も続いて畑の入り口に整列する。そしてミッドチルダ魔法陣を足場とする魔法、フローターフィールドにタイマーをセットしたデジカメを置いて戻ってきたルシルに「早く、早く！」シャルとはやてが急かす。

「そんなに急かさなくても大丈夫だよ」

ルシルがシャルとはやての間に入ったのを確認して、「ほら、全員カメラに向いて」あたしは号令をかける。そんでルシルが「5、4、3、2、はい、チーズ」カウント。それを合図に笑顔を浮かべて、パシャっとシャッターが切られた。ルシルが早速、「どれどれ」確

認しに行って、「ぷふっ」吹き出した。

「えっ、なに？」

「どうして吹き出すの？」

「なになに？　映りが悪い子でも居たの？」

「あ、わたし、目が半開きやった？」

「も、もしかしてリインだったです！？」

（ま、まさかあたしじゃないわよね・・・？）

いや、大丈夫だったはずよ。内心ドキドキしながら「見せてみなさいよ」ってルシルに向かって手を伸ばすけど、「やり直しだ、やり直し～。はーい、もう一度並んで～」またタイマーのセットだけして戻ってきた。みんなで「どんなミスだったの？」って訊いても、「ほら、あと４秒。３，２、はい、チーズ」ルシルは誤魔化してばかり。

「・・・おーい、みんな表情硬いぞ～」

またひとり確認しに行ったルシルがそう言う。ちょっと気になったから「今度はあたしがやるわ」列から出てルシルの元へ急ぐ。デジカメははやてん家の物だけど、扱い方は大差ないでしょ。

「さ、カメラを渡して。データは消さないでいいわ」

「・・・笑ってやるなよ」

そう言ってあたしの手にデジカメを置いて列に戻るルシル。ていうか、「最初に笑ったのはあんたでしょ」ってツッコんでから1枚目と2枚目の写真データを観る。2枚目は、確かにみんな表情が硬いような印象を受けるわね。ま、その原因はルシルの所為でしょうけど。1枚目の何がいけなかったのかをハッキリ言ってくれていれば良かったのに。

「（で、1枚目の写真がコレね・・・）ぷはっ」

1枚目を観て何がダメなのかを確認して、それに気付いた瞬間、あたしも思わず吹き出しちゃったわ。慌てて口を手で覆ってももう手遅れで、「アリサちゃんまで！　ねぇ、なにが映ってるの！？」なのは達が騒ぎだす。

「な、なんでもないわ！　えっと、そう、あたしの目が半開きだったのよ！」

事態を収拾するには誰かをスケープゴートにする必要があった。それならあたししか居ないでしょ。

「あはは、やんなっちゃうわ。ルシルにあたしの間抜けな顔見られて」

そこまで言うと、なのは達は目に見えてホッとした。そして、本当に間抜けな顔をしてた本人もどこか安心したのが判った。くっ、見せてやりたいわ、本当はあんたがあたしとルシルを笑わせた張本人だってね。

（シグナム・・・！　それとリイン）

シグナムは微笑みを浮かべているんだけど、タイミングが悪すぎたのか目が半開きな状態で映っちゃった。普段の凛々しくて美人なシグナムを知っているからこそ、こういった間抜け面は凶悪な笑いの種と化すわけね。リインも半開きなんだけど、あの子は可愛いし面白いからそんなに酷いレベルじゃない。

「（さてと。このデータは残しておいてもしょうがないわね。デリート、デリートっと）よし。そんじゃ３枚目の撮影に入るわよ。カウントは１０秒！」

タイマーをセットしてフローターフィールドに置く。さぁ、今度こそはちゃんと撮るわよ。あたしも列に戻ってなのはとすずかの間に入る。そして「――５、４、３、２、はい、チーズ！」カウント。シャッターが切られる直前に瞬きを終えておく。

「今度こそ、ちゃんと撮れたはず」

確認しに行こうとするルシルを手で制してからあたしがカメラの元へ向かう。カメラを手にして早速データを確認。パッと見じゃ問題ない。全員の顔を確認して、「オッケー。三度目の正直ってやつね。

巧く撮れてるわ」みんなの元にカメラを持って戻る。そしてみんなにもデータを確認してもらった後、「そのデータ、ちょうだい。ケータイの待ち受けにする！」アリシアが携帯電話を片手にピョンピョン跳ねる。

「はいはい、また後でね」

とりあえずひまわり畑でちょっと遊んでく。とは言っても、やる事は写真の撮り合いっこだけどね。ま、思い出づくりにはちょうどいいと思うわ。それから２０分ほど遊んで、いよいよ本当の目的地――谷川へゴーよ。山道を歩いてると、水の流れる音が聞こえて来た。そして見えて来た１本の谷川。上流には高さが３ｍくらいの滝があって、下流にも１ｍくらいの滝がある。

「よーし。各員、水着に着替えて全力で遊ぶのだぁぁぁーーー」

男のルシルやザフィーラが居るって言うのに、シャルがブラウスやスカートを一気脱ぎ。焦ったあたし達だったけど、「水着はすでに着こんでるのでーす！　ひゃっほーい♪」シャルは服の下に水着を着ていた。あたし達の焦りをよそにシャルは川の中へと入って行って、「冷たくて気持ち良い～～！」仰向けに浮かんだ。

「ザフィーラ。俺たちは少し外そう」

「うむ」

「ごめんね、ルシル君、ザフィーラ。終わったら念話で呼ぶから」

ルシルとザフィーラが居なくなったのを確認して水着へと着替える。で、ルシル達を呼び戻すと、ルシルもザフィーラもすでに水着に着替え終えていたんだけど・・・。ザフィーラはルシルと同じハーフパンツの水着を履いてるんだけど、それだけじゃなくてアロハシャツとサングラスまで装備。それはまるでヤの付く職業の人みたいだった。

「ルシル君、ザフィーラ！　２人も早うおいで！」

「水が冷たくてとっても気持ち良いですよ～♪」

浮輪を使わずにプカプカと水に浮いてるはやてとリインが２人を呼ぶ。ルシルとザフィーラは頷き返して川へと入ってった。それを見届けたあたしは川の中へと潜る。大自然の川だからか水はとっても澄んでて、川魚があたし達にビックリしちゃってて右往左往してる。

「ぷはっ。・・・ねぇ、なのは、すずか。あそこから飛び降りてみない？」

あたしが指差すのは滝の上。滝と言っても水流はそんなに激しいものじゃないから滝壺に落ちても大丈夫だと思うし、魔導師でもあるからあれくらいどうってことないわ。すずかは「いいよ」って言ったけど、「私は遠慮しまーす」なのはは不参加。ド派手な魔法戦を繰り広げるくせに、こういうのにはてんでダメなんだから。

「シャル、フェイト、アリシア、それにルシルとヴィータはどう？」

狼形態になって犬かきしてるアルフの背中に乗ってはしゃぐフェイト達や、はやてとリインの泳ぎを見守ってるルシルとヴィータ（シグナム達はやらなさそうだから端から誘わない）にも声を掛ける。

「面白そうじゃん。はやて、ちょっと行ってくるけどいい？」

「ええよ。ルシル君も行ってきてええからな。わたしとリインの側にはシグナム達が居ってくれるし」

「じゃあ、少し行ってくるよ」

ヴィータとルシルは参加。そしてフェイト達は「いいよ～」3人揃って参加決定。さらに「私もやりたい！」フェンリルも自主参加。参加組だけ川から上がって、滝の脇の坂をえっちらおっちらと上る。

「わ、結構高～い！」

「アリシアは大丈夫？　怖かったら観てるだけでいいんだよ？」

「こ、怖くなんてないもん！」

滝下を覗き込んだすずかとアリシア。すずかは平気そうだけど、アリシアがちょっと怖気づいたっぽい。けどフェイトに心配されて強がった。それがまずかったわね。アリシアの背後からヴィータが忍び寄って、「じゃあ、早速行こうぜ、アリシア！」アリシアの手を引っ張って滝に飛び降りた。

「ふえ？・・・っ！　ヴィータの・・・ぶわぁかぁぁぁーーーーっっ！」

アリシアの悲鳴というか罵倒というか、それが滝壷へと消えてった。水に飛び込む音、水面に飛び出す音のすぐ後に「馬鹿、馬鹿！　心の準備くらいさせてってば！」アリシアの涙声混じりの怒声と、「わるい、わるい」謝ってはいても悪びれてないヴィータの声が聞こえて来た。

「次行くよー！」

続けてシャルが飛び込む。なんて言うか、らしくない普通な飛び方だったわね。

「おーい、次行くから退いていてくれー」

ルシルがそう言って、滝から距離を取った。助走を付けて飛び込むみたいね。でも「アルフ、頼む」それだけじゃないらしく、アルフを飛び込み地点に立つように指示。アルフはそれだけで判ったみたいで、「あいよ」って腰を少し落として、バレーボールのレシーブの体勢に入った。

「いくぞ！」

「来な！」

ルシルが駆け出して、アルフの手前でジャンプ。アルフは「おら、飛んでけー！」自分の両手の平に乗ったルシルを押し上げて空高く飛ばした。何mって飛んだルシルが空中で前転・後転とか体操選手みたいな技を連続でしながら川に飛び込んだ。あたしや他のみんなも「おお！」って拍手。

「オリンピック選手みたいだったね～」

「地味にすごいわ、アイツ・・・」

ルシルに続いて「よっしゃ。次はあたしだよ！」アルフも助走を付けるために距離を取って、「フローターフィールド！」を階段状に発動して一気に駆け上がった。さっきのルシルより高い地点から川に飛び込んだ。

「さ、さすがにあの高さはちょっと無理だわ・・・」

「だね～」

「私たちは普通に飛び込もう」

すずかやフェイトと話し合ってると、「マスター！　次は私が行きます！」フェンリルが残ってたアルフのフローターフィールドを使って空高くまで上って「やっほぉぉーーー！」若干、使いどころが違う掛け声を上げて飛び込んだ。

「ぷふぅ！　ねえ、マスター！　見てくれてた！？　綺麗な飛び込

みだったでしょ♪」

「わぁぁーーー！　フェンリルさん！　取れてる！　上の水着が取れてる！！」

「ルシル君、ザフィーラ！　あっち向いて！」

「フェンリルさんは早く水着を着て！」

「良いよ、見られても♪　恥ずかしがるほどの初心じゃないし！」

「情操教育に悪いわっ！　とっとと着ろ、馬鹿犬！」

下でちょっとトラぶったみたいだけど、「おーい。次、いつでもいいぞー！」解決したのかルシルが呼ぶ。あたし達3人は手を繋いで「せぇーっの！」一緒に飛び降りた。一瞬の浮遊感の後、バッシャーンと川の中へ。繋いでた手を離して「ぷはっ」水面に頭を出す。

「結構面白いね、これ。アリシア、アルフ。もう1回やろ！」

「ああ！　アリシア、いーー」

「行かない、行かない、もうやらない！　えっと、えっと、あっ、わたしにもやらせてー！」

狼形態のザフィーラとフェンリル（頭のアレはタンコブかしら？）がはやてとリインを乗せて犬かきしてるのを見つけてそっちに泳い

でった。ヴィータが「あちゃあ。やっちまったなぁ」反省。それからあたし達は何度か飛び込みを繰り返して、浮輪に座ってのんびり漂ったりして遊んだ。

「さてと。そろそろ昼食の用意だな。ザフィーラ、バーベキューの準備を始めるから手伝ってくれ。我が手に携えしは確かなる幻想」

「承知した」

先に川岸に上がってたルシルが、創世結界ってところにしまわれてたバーベキューセットを取り出して、同じように取り出した脚の長いテーブルに置かれた食材を包丁で切り始めた。

「なんかさ、あれだよね」

近寄って来たなのはがルシルを見て少し沈んだ声を漏らした。フェイトも「うん」って頷いた。そしてあたしも「そうよね」って2人に同意する。シャルやアリシア、はやて達は「???」小首を傾げるばかり。抱く子には抱ける感情。それは、やるせなさ、だ。あたしとなのはとフェイトは、陸士訓練校での訓練を思い出す。いろいろやったわぁ、ホントに。その中にはサバイバルっぽいのもやった。砂漠・雪原・山岳の行軍とか、もう軍人じゃない？っていうようなやつもやっとわよ。

「ルシル君ひとり居れば、サバイバルなんて単語が一瞬にして要らなくなるよね」

「あの大変だった訓練も楽なものになったと思う」

食材も器材も全て創世結界に放り込んでおけば、いつでも取り出せるっていうルシル。無人島に1人は欲しいわよね。とまぁ、そういうわけで遠い目をするなのはとフェイト。あたしの今の目もそんな感じなんでしょうね。

「でもあんた達は良いわよ。2人でペアを組めて。あたしなんて見知らぬ子といきなり組まされちゃって」

3ヵ月速成コースの入校者はあたし達だけじゃなかった。年上の人ばかり。ま、あたしも「アリサも同い年の子とペアになって楽しそうにしてたよね」フェイトの言うように運良く同い年の入校者とペアを組めた。けどやっぱり知ってるなのはかフェイトと組んでみたかったのよ。

「ねえ、シャル。クラリスって元気してる？」

あたしのペアになった子の名前はクラリス。クラリス・ド・グレーテル・ヴィルシュテッター。フライハイト家に連なる六家の一角のヴィルシュテッター家の令嬢で、古代ベルカ式騎士。シャルやルミナ、ティファレト先生、騎士カリム達のように管理局と聖王教会両方に籍を置いてる。

「クラリス？　元気だよ～。ミッド北部の陸士部隊の捜査官として頑張ってるよ」

「そう。それならいいのよ」

久しぶりに会いたくなったわね。いつかの休暇にでも会いに行ってみようかしら、って予定を考えてると「すごい良い香りしてきた～」シャルが匂いに釣られるように川岸に向かい始めた。ルシルとザフィーラ、手伝いを買って出たシャマル先生の3人が作るバーベキューが完成間近。あたし達は川遊びに勤しんだ。

「よーし、完成ね。みんなー、上がっておいで～」

肉や野菜の焼けた香りがし始めてきた頃、シャマル先生があたし達を呼んだ。アルフはすでに肉串を焼いてるザフィーラの側に居て、「ザフィーラ、ソイツくれ！」お肉を催促してる。あたし達も川から上がって濡れた髪や体をタオルで拭いてから折り畳みチェアに座って、「いただきまーす！」焼き終わったお肉や野菜、ホタテにエビ、ウインナー、いろんな串焼きを食べる。

「ルシル。焼いてばっかで食べれてないでしょ？　あーん、してあげる　」

「いや、いいよ。後で一気に食べるし。あと、選択したものがトウモロコシって。・・・これまた食い難いものを選んだなぁ・・・」

シャルがルシルの口元に運んだのは分割されたトウモロコシの1切れ。でも食べにくいってこともあって却下を食らった。シャルはそれならって「じゃ、もう1回、あーん　」今度はお肉を一切れルシルの口に運んで、ルシルは少し躊躇したけどパクっと食べた。

そんで、シャマル先生にははやてが、あーん、していてお互いが幸せそう。ザフィーラにはなんとアルフがやってた。結構、お似合いなのかもしれないわね。で、同じ狼素体の使い魔なフェンリルは「おっいしぃ～、たっのしぃ～！」ひとりバーベキュー満喫してた。

「――夏祭りと海と山、それに川もクリアしたね～」

「次はプール？」

「フェイトとアインスが獲ったレジャープールの無料券があるし」

「遊びばかりじゃダメだよ。宿題もちゃんとやらないと」

「「えーーー」」

「えー、やないよ。シャルちゃん、アリシアちゃん」

「そうよ。夏休みの宿題は、冬休みの時よりずっと多いんだから。今の内に手を付けてないと後で苦労するわよ」

冬休みの宿題ですら苦労してたアリシア。量的に2倍はある夏休みの宿題は、貰った日くらいから始めておかないと地獄を見る。しかもあたし達には局の仕事もあるし。他の子たち以上に頑張んないといけないわ。

「「間に合わなかったから写させて～」」

そう言って楽な方法を取るとするシャルとアリシア。当然、「却下」あたし達みんながそう下す。ぶーぶー文句を垂れる2人。しゃあなしね。写させる真似はさせてあげられないけど、少しくらいは手伝ってあげようかしら。

昼食を終えた後は一度別荘に戻ってお風呂に入り、帰り支度をする。最初は転移魔法で帰ろうか、なんて案もあったけど、それは旅行の風情をぶち壊すということで却下。やっぱりどれだけ疲れてても来た時と同じように電車とバスを使わないとね。

バスに揺られた後は電車。ローカル線だから人の数も少ない。だからか至る所から寝息が漏れ聞こえてくる。静かな車内、しかもいい具合に揺れるから「ふわぁ・・・」あたしも限界が近いかも・・・。

『アリサ。君も眠ると良い。降りる駅に近づいたら俺たちが起こすから』

ぐっすりと夢の世界に旅立ってるシャルとはやてに挟まれて座ってるルシルがそう念話で言ってきた。起きてるのはあたしとルシル、シグナムとアインスとザフィーラだけ。他のみんなそれぞれにもたれかかって夢の中。

正直、寝顔を見られるのはちょっとなぁ、って思ったけど、「お願いするわ」眠気には勝てそうにないから甘えることにした。あたしの両隣に座って眠ってるなのはとすずかが起きないようにちょっと姿勢を変えて目をつむる。

（楽しかったわね、今年の夏は・・・。来年も・・・こんなに楽しい時間を・・・過ごし・・・て・・・）

あたしもみんなと同じように夢の中へ。こうしてあたし達は1泊2日の旅行を満喫して、明日から再開される仕事への英気を養った。

Ｅｐｉｃｏ２０笑顔～Ｒｅｉｎｆｏｒｃｅ　Ｅｉｎｓ～

†††Ｓｉｄｅリイン†††

「やっほぉ～～～い、ですぅーーー！」

「お、思ったより速いのだな・・・！」

リインとアインスは、前にリインを、後ろからリインを抱っこするような体勢のアインスと一緒にくねくねのウォータースライダーを一気に流れ落ちるです。すずかさんのお家の別荘に小旅行をしてから約２週間の今日、以前からのお約束でしたレジャープール施設・ワクドキ☆ざぶ～んにやって来ましたですぅ。メンバーはいつも通りのチーム海鳴ですね。

「楽しかったですねぇ、アインス」

スライダーの出口に到着してすぐに「ああ。とりあえず離れよう。あの子がすぐにやって来る」アインスに手を引っ張ってられて出口から離れるです。その直後、後続の「ヒーハー！」フェンリルと、「苦しいって言っているだろうが！」さっきのリインみたいに後ろから抱っこされたルシル君が派手に飛び出してきたです。

「ルシル君、大丈夫です？」

「あ、ああ、リインか、大丈夫だよ。ありがとう、心配してくれて」

「マスター！　もう1回、もう1回♪」

フェンリルがルシル君の手を取ってもう1度スライダーへ向かおうとしたですけど、「ひとりで行って来い。俺はのんびりと流れるプールで漂う」ルシル君はそう言って、はやてちゃんとシャマルが居るプールに向かって歩き出し始めたです。この2週間の間、はやてちゃん達と別れて別の部署に泊まり込みで働いてましたから、やっぱりお疲れの様子です。

「むぅ。つまんない。・・・リイン、アインス。一緒にどう？あといくつか種類あるし、この際だから制覇してみない？」

フェンリルからのお誘いです。ここのウォータースライダーの種類は9つもありますから、制覇するのも悪くないですね。ですからリインは「一緒に行きます！」お誘いを受けました。そしてアインスも「リインが行くのであれば、私も行こう」微笑んで受けました。

「じゃあ早速行こう♪　アインスとリインは本当に優しいな～　」

かなりの速度を出してるルンルンスキップのフェンリル。アインスが「待ってくれ。はぐれるから手を繋ごう」と提案。フェンリルは「オーケー。じゃあ――・・・」リインの左手と手を繋いで、アインスにリインの右手と手を繋ぐように言いました。リインを真ん中にして、プールサイドを往くです。

とそこに「ねぇねぇ、俺たちと一緒に遊ばない？」背後から声を掛けられたです。ここに遊びに来て早3時間。アインスヤフェンリル

と一緒に居ると男の人たちに声を掛けられてばかりなのです。ナンパ、というやつですね。学習したですよ。

「あ、あそこが空いてる！　ほら、アインス、リイン、行こうよ！」

「あ、ああ・・・」

「ふえっ？」

これまでは正対して断ってたフェンリルでしたけど、今回は振り向くこともしないで先へ行こうとします。完全無視ですね。けど、「シカトなんてしないでさ～」男の人がリイン達の前に回り込んで来たです。

「申し訳ないが他を当たってくれないか。家族水入らずで楽しんでいるのだ」

「そう言わずにさ。その小さい子は他の人に預けて～」

「君と彼女が俺たちと遊んでよ」

「お誘いありがと。でもお受けしませ～ん。そういうわけでじゃ～ね～」

「いいじゃん、いいじゃん。そんなこと寂しいこと言わないでさ」

「俺たちと夏の思い出を作ろうよ」

男の人2人がアインスとフェンリルの空いてる手を取ろうと手を伸ばしてきたですよ。ここでフェンリルの放つ空気がガラリと変わった気がしたです。

「くどいぞ、人間。我らは家族で遊びたいと言っているのだ。己が欲でその大切な時間を潰そうと言うのか？　極戯けめが。今すぐ我が目の前より去ね。でなければ二度とナンパという斯様な真似が出来ぬようにその身から大事な○×△□を食い千切るぞ」

リインとアインスを庇うように前に躍り出たフェンリルがそう言い放ったです。アインス達よりずっと長い年月――数千年と生きたフェンリルが出すソレはとても怖いものらしく、男の人たちは蛇に睨まれた蛙のように（実際に見たことないですけど）縮こまってしまい、一歩二歩とフェンリルが歩み寄ると、「うわぁぁぁぁぁ！」絶叫しながら去って行きました。

「フェンリル。殺気まで叩きつけることはなかったのでは・・・」

「いいよ、あんな奴ら。アインスだって気付いてたでしょ。奴ら、私とアインスの胸ばっか見てた。下心丸見え。そんなに好きならお互いの胸でも揉んでろって話」

大きな胸を張るフェンリル。同じ女の子でも目が行っちゃうですよ。嘆息したフェンリルはもう1度リインの左手を取って、「さーて。エロガキ共も追い払ったし、早く行こう♪」促したです。だから「アインス、行きましょう」リインはアインスに右手を差し出すです。

「ああ、行こう」

また３人並んで歩くです。目指すはまだ順番待ちの人数が少ないウォータースライダー。列に並んで数分。いよいよというところで、「あ」リイン達３人の口からそう漏れたです。階段横にはキャラクターの立て札があって「１３０ｃｍ以上から利用可能、ですぅ・・・」そう書かれてました。リインのアウトフレームの身長は１２０ｃｍちょっとですので、あと数ｃｍ足りないです。

「身長制限があるやつもあるんだ～。さっきのには無かったのに」

「・・・後ろもつかえていることだし、とりあえず離れよう」

「ま、待ってください。リインは待ってますから、アインスとフェンリルはどうぞ行って来てください！」

リインひとりの所為で、スライダーで遊べないなんて嫌ですからそう言ったんですけど、「ううん。離れよう」一番乗り気だったフェンリルがリインとアインスの手を取って、「お先にどうぞ♪」すぐ後ろに並んでた恋人さん達に先を促してから列から出たです。

「あの、フェンリル・・・？」

「良かったのか？　リインなら私が見ていたし、お前だけでもやって来れば良かったのに」

「いいの、いいの。ひとりでやるなんてつまらないし。アインスだけじゃなくてリインと一緒に楽しみたいもの。２人の内どっちが欠けてもアウト。そういうわけで、スライダーはもうやめて、各種プール巡りにしよう」

フェンリルは本当にそう思ってくれてるって判るです。ですから変にリイン自身を卑下すると、フェンリルの思いを汚しちゃうですから、「はいですっ！」フェンリルの提案に賛成します。アインスも「私もそれで構わない。プール巡りをしながらみんなの様子を見よう」賛成です。

「一番近いのは第３流水プールね。誰か居るかなぁ～」

そういうわけでやって来ました流れるプール。星型をしていて、中央には噴水があるです。プールの形も理由なのか利用者の大半が幼い子供です。フェンリルが「ここには誰も居ないみたいだし、次に行こう」そう言って歩き出しました。そして次に向かうのは、温泉プール、という水ではなく本当の温泉を溜めたプールです。

「あ、シグナムが居るです！」

子供より大人の人数が多い温泉プールに、見慣れたポニーテールがあったです。壁に背を預けて、上げた両腕はプールサイドに乗っけてるです。完全にお風呂に浸かってリラックスしてる感ですね。そんなシグナムに「湯加減はどうです？」声を掛けます。

「お前たちか。いや、少し温いなやはり。天然の温泉だということ

だが、さほど熱くはない。プールが近いこともあるからだろうが」
そう言ったシグナムが温水を両手で掬ってリインの手に掛けたです。確かに「熱くもなく冷たくもないです」お風呂大好きなシグナムが好む水温ではなかったです。
「お前たちもどうだ。水で冷えた体を温めるのにはちょうどいいぞ」
そう誘ってくれたですが、「それほど冷えてないですので・・・」お断りしました。これからまた別のプールに入りますし、どうせ入るなら最後の方が良いです。アインスとフェンリルも同意見でしたので・・・
「リイン達は次のプールに行くです」
「そうか。では私もそろそろ行こう。確か競泳用プールがあったな。そこでひと泳ぎして来よう。また後でな、リイン、アインス、フェンリル」
「はいです」
「後でね～」
「シグナム。ビキニタイプの水着のお前だ。無茶な泳ぎをして、猥褻物陳列の罪で捕まるような真似は――」
「せんっ！　が、気を付けよう」

アインスにそう言われて少し顔を赤らめたシグナムと別れて、次はサーフィンプールという波を作りだす装置のあるプールへ向かいます。到着しますと、確かにそこのプールには波が生まれていて、浮輪に乗って揺られてる人、波打ち際で座ったり寝転がって波を受けてる人、普通に泳いでる人、様々な形で楽しんでました。

「ヴィータとシャルとアリシアだな」

浮輪に座って波に揺られてるヴィータちゃん達を発見です。声を掛けるためにプールに入ると、「わわっ」押し波からの引き波に足を取られてしまい転びそうになったですけど、「ほら、しっかりね」フェンリルに支えてもらって助けてもらいました。

「お前は小さいから歩いて行くより泳いだ方が安定しそうだ。リイン、行けるか？」

「もちろんですよ、アインス。ルシル君に泳ぎを教えてもらったですから余裕なのですよ♪」

スラリとした長い足でしっかりと歩くアインスとフェンリルの間をひとり泳ぐリイン。向かってる最中に、「お、リイン、アインス、フェンリル。お前らも来たのか」ヴィータちゃんが気付いて、リイン達に手を振ったです。

「ここまでリイン泳いで来たの？　えらい、えらい」

「えへへ、ありがとですぅ～♪」

アリシアさん（小さいけどフェイトさんのお姉さんなのですよ）がリインの頭を撫でてくれました。どんなことでも褒めてもらえるととっても嬉しいのです。

「リインも浮輪に座って揺られてみる？　流水プールにはない波があるから楽しいよ」

シャルさんがそう言って浮輪から降りて、リインに浮輪を差し出してくれたです。お言葉に甘えて「お借りするです」浮輪に座って漂うです。押し波が来ると浮輪が大きく揺られました。プールサイド側へ一度押されて、引き波で戻されるです。ヴィータちゃんとアリシアちゃんも同じように戻されて、３人で笑い合うです。

「ありがとうです、楽しかったです、シャルさん♪」

浮輪から降りて、シャルさんに浮輪を返します。シャルさんは「もういいの？　アインスもフェンリルもやってかない？」受け取りながらも小首を傾げました。ヴィータちゃんも「あたしのも貸すぜ、浮輪」そう言って浮輪から降りようとしたですけど、「私たちは次のプールへ行くのだ」アインスがそう言って制したです。

「そうなんか？」

「はいです。いろんなプールを巡りながら皆さんの様子を見るんですよ」

「へぇ～。これまではどこ行って来たの？」

「最初は私とアインスとリインの３人でスライダー巡り。で、さっき温泉プールでシグナムと会ったね」

「温泉って。プールに来てまで風呂に入る奴があるか。アイツ、本当に風呂好きだなぁ」

そう言って笑うヴィータちゃん。シグナムは八神家で一番のお風呂好きですからね。それからリイン達は、まだここに居るって言うヴィータちゃん達と別れて、次のプールへ向かうです。次は、「第２流水プールだ」とアインスが行き先を決めたところで、「あ、アインスさん達だ」そう声を掛けられました。振り向いてみると、「なのはさん、フェイトさん」のお２人でした。

「なのはとフェイトの２人だけ？」

「うん、そうだよ」

「私となのはも別々だったけど、さっき合流したんだ」

「お２人はこれからどこへ行くです？」

「アスレチックプールエリアに行こうって思って」

「いろんな浮輪を足場にした障害物コースっていうし、ちょっと制

覇してみようかって。あとでみんなも来る予定だよ」

「アインスさん達も来ます？」

なのはさんからのお誘いです。リインはアインスとフェンリルを交互に見ます。２人は「どうしたい？」って、リインの答えを訊いてきたです。なのはさんとフェイトさんも「どうしようっか？」リインの目線に合うように屈んで訊いてくれました。

「えっと・・・、はい、ご一緒しますです♪」

お受けしました。すると、「決まりだね！」フェンリルとなのはさんとフェイトさんは笑顔を浮かべて、「では行こう」アインスも微笑んで、リインの背中をそっと押してくれたです。そして向かうはアスレチックプールエリア。プールには棒状・丸太状・円状・球状・四角状・三角状、いろんな浮輪が道を作ってます。

「あ、アリサ達もう来てる」

アリサさんとすずかさん、それにフェイトさんの使い魔のアルフさんが居て、すでにアスレチックプールに挑んでる最中でした。

「もう始めちゃってる」

「私たちも始めちゃおうっか」

「じゃ、初級コースからクリアして行こう」

フェンリルさんの号令にリイン達もそれぞれ応じて、いざ出陣です。アスレチックプールエリアは全長８０ｍ・前幅１０ｍのコースが４種あるです。まずは初級コース。浮輪の種類は平たくて大きいものが多いですね。リインやヴィータちゃん程の背くらいの子供がたくさんチャレンジしてるです。ちなみにアリサさん達は中級ですね。スタート地点に着くまでに順番を決めて、１番・なのはさん、２番・リイン、３番・フェイトさん、４番・アインス、５番・フェンリルになったです。

「１番・高町なのは、行ってきます！」

なのはさんがスタート。なのはさんが余裕で中間付近まで進んだのを確認して、「八神リインフォース・ツヴァイ、行くです！」リインのスタートなのです。最初は、表面が平たい棒状の浮輪がジグザグに並べられた道です。

「わっ、わわっ、ゆ、揺れるです・・・！」

想像以上にムズいです。面積が広いからと言って油断しました。別のコースの人が浮輪から落ちたことで生まれる波や、リイン自身が歩くたびに浮輪が揺れて生まれる波、前や後から来る人が起こす波で水面が常に揺れて、初級コースでもかなり大変です。でも負けません。これくらいクリアしますです。

「――もうちょっと、です・・・！」

落ちること数回。ようやく最後の円状の浮輪を進んで、プールサイドへ「ゴール、ですぅ！」ピョンっと小さく跳んでゴールです。すると「やったじゃない、リイン」アリサさんや「すごい、すごい！」すずかさん、それに「見てたよ、リイン。よう頑張ったな」はやてちゃん、「ナイスファイト」ルシル君が褒めてくれて、アインス達も拍手でリインのゴールを迎えてくれたです。

「何度落ちようと諦めずに挑戦するお前は、本当に格好良かったぞ」

「アインス・・・。ありがとうです！」

アインスに頭を撫でてもらったです。それがとても嬉しかったですよ。

「みんな揃ったことだし。全コース制覇と行こうか！」

シャルさんが拳を振り上げると、アリシアさんを筆頭に「おおーーー！」他の皆さんも倣って拳を振り上げました。リインは初級でも大変でしたけど、皆さんがやるなら「お、おおーー、です」リインもやる気を見せるために拳を振り上げたです。

（やってやるです！）

†††Ｓｉｄｅリイン⇒アインス†††

「――楽しかったなぁ」

レジャープール施設・ワクドキ☆ざぶ～んで1日と遊び倒し、陽が傾き始めた今は家路に着いている最中。途中でなのは達と別れ、私たち八神家は家族だけで帰路を歩く。主はやての乗る車椅子を押し、「そうですね。楽しかったです」私は同意する。水泳とは全身の筋肉を使うために少々疲労が。その所為か酷く体が重く、そして眠い。

「リインも疲れて、お出かけバッグでぐっすりや。ふわぁ。・・・わたしもちょう眠くなってきてしもうたわ」

「はやてちゃん、眠ってもいいですよ。お夕飯は私たちが作りますから。ね、ルシル君、アインス」

「ああ、俺はそれでいいよ。というか、シャマルもアインスも休んでていいぞ。特にアインス。顔色が悪すぎだ」

私のすぐ隣を歩くルシルが私を見上げてそう言った。するとみんなが私へと振り向き、「ホンマや。調子悪いんやったら言わなアカンよ」主はやては心配そうなお顔で注意をし、「どんだけ遊んだんだよ、お前」ヴィータはからかうような口調だが表情はちゃんと、心配だ、と物語っている。

「アインス、車椅子は私が押そう。お前はザフィーラかフェンリルの背に乗せてもらえ」

「変身すればよいのか？」「変身しようか？」

人の姿を取っているザフィーラとフェンリルが私に振り向いてそう

言ってくれたが、「いや、結構だ。ありがとう、シグナム。このまま私に任せてくれ」断り、私を案じてくれたシグナムには礼を言う。この程度の疲労で車椅子を押す役を降りるなど出来はしない。

「アインス。帰ったらシャマルに診てもらってな。シャマル、お願いな」

「はい、お任せを」

「世話になる」

「気にしないで。家族、でしょ♪」

ああ、私は本当に幸せ者だ。主はやてが居て、ルシルが居て、シグナムが居て、ヴィーターが居て、シャマルが居て、ザフィーラが居て、リインが居る。それにフェンリルもだな。家族としてお互いを想い合って過ごせることが出来た1年と少し。とても温かく、充実した時間だった。

――ごめんなさい。・・・貴女の時間は少ししか伸ばせない。・・・それが、運命だから――

「っ・・・！」

急に眩暈に襲われてクラっと来てしまった。みんなは前を向いていたために気付かれることはなかったが、「アインス・・・？」倒れないように踏ん張った際に車椅子がガタッと揺れてしまったことで

主はやてには勘づかれてしまった。

「アインス・・・？　アインス・・・！？　アインス！！」

視界が傾き始める。あの日――6月4日に起こった事が瞬時に脳裏に過った。眩暈、倦怠感。私の体を構築している魔力の霧散によって起こる体の消滅、構築限界、という結末へと至る初期症状だ。あの日から早2ヵ月。もしかすると消滅から免れたのかもしれない、そう思えてもいたのだが・・・

（それほど甘くも優しい世界でもなかったということか・・・）

いや、優しい世界ではあった。本来ならば"闇の書の闇"――ナハトヴァールの消滅と共に私も居なくなる予定だったのだから。それなのに8ヵ月近くも生き長らえることが出来た。十分夢も見させてもらった。これ以上を願い求めるのは傲慢なのかもしれない。

「アインス！　アインス！！」

「どうした！？」

「おい、アインス！」

道路に倒れ伏してしまった私を見、主はやては不安に涙を流し、顔を青褪めさせるルシルやヴィータ、シグナム達。フェンリルに上半身を抱き起こされた私は、あの時と同じように力は入らずとも声は出せるようで、「申し訳ありません。どうやら、私はここまでのよ

うです」と、今の私に起きている状況――構築限界の事を伝える。

「――そういうわけなのです。おそらく私はもう・・・このまま消え――」

力を込めて上げることの出来た右手、その五指の先が僅かばかり霧散している様を見せると、「っ！」みんなは一様に息を呑んだ。主はやてが弱々しく私の手に触れようとした時、

――封時結界――

「とにかく今は家に戻ろう！　フェンリル、はやてを抱えて来い！　シグナム達も行くぞ！」

ルシルは大人姿へと変身した上でミッド式結界魔法を発動。さらに私を横に抱え上げ、フェンリル達に指示を飛ばす。そして大きく跳び上がって、住宅街の屋根を伝って私たちの家へとショートカット。後ろを見てみれば、フェンリルも主はやてを横に抱え上げ、屋根の上を飛び跳ねてついて来ていて、シグナム達は飛行魔法で追って来ている。

「ルシル・・・？」

「君は消えるのが運命なのだと、どこか諦めていた！　どうしようもないことなんだって！　だが、ここまで生き長らえて来たんだ！　覚悟は決まった！　なんとしてでも君の運命を捻じ曲げる！」

「・・・ありがとう。しかしおそらく無理だ。これは不変の運命なんだ」

『ルシル！　結界を張ったのは君か！？　なにか緊急か！？』

クロノ執務官からの通信が入り、ルシルが事情を伝えた。すると『何か手伝えることはないか？』と、クロノ執務官はそう言ってくれた。私の消滅を食い止める手伝いは出来ないか、と。主はやて達だけではない。私を慕ってくれている者は。それがとても嬉しい。

「クロノ執務官、ありがとう。だがルシルにもすでに伝えたが・・・もう手遅れなのだ」

「諦めたらアカン！！」

「そうですよ、アインス！」

すぐ側から聞こえた主はやてと、眠っているはずのリインの声。ルシルの隣へ追いついたフェンリルに抱えられた主はやてと、主はやての腕に抱かれたリインがボロボロと涙を流して私を見ていた。

「クロノ。なのは達に連絡を。はやての家に寄越してくれ！」

『判った！　僕たちも急いでそちらへ向かう！』

通信が切れ、そして私たちは家へと帰り着いた。向かう先は「はやて。ベッドを借りるぞ！」主はやての私室。主はやてを抱えたフェ

ンリルが先行し、「ええよ！　アインスを寝かせて！」許可が下りたことでルシルも部屋へと入り、私を主はやてのベッドへと横たえさせた。

「アインス！　居なくなっちゃ嫌ですぅ！」

「ルシル君！　アインスを助けてあげられへんか！？　わたし、なんだってするから！」

「お願いするです、ルシル君！」

ルシルに懇願する主はやてとリイン。しかしルシルは無言。必死に私の消滅の回避策を考え込んでいる。少し遅れて帰って来たシグナム達も「どうにかならないか・・・？」ルシルへと懇願する。私は自身から質量が消え失せて行っているのが自覚できていた。外見は保っているが、中身が薄くなっていっている感覚だ。

「もう良いのです、主はやて。リイン、シグナム達も。私自身の事だ、よく解るんだ。この運命は変えられない」

「そんな簡単に諦めたらアカンって言うてるやんか！」

ザフィーラが抱えて持って来た車椅子に座りなおした主はやてが私の手を取り、「っ！？」すぐに離した。何故なら手首より先が大きく揺らぎ、霧散しかけたからだ。しかし手を離されると霧散しかけた手が元に戻った。今はまだこの体を保とうと実体化プログラムが頑張ってくれているようだ。

「くそっ！　どうにもなんねぇのかよ！　ルシル、何か手はねぇのかよ！」

「わ、私の治癒魔法で少しでもアインスの体を維持できれば・・・！」

シャマルが騎士服へと変身し、私に治癒魔法・静かなる癒しを掛けた。負傷治療や体力魔力回復、それに防護服修復の効果がある。しかし効果はおそらく望めないだろう。怪我も負っていないし、体力もあるのだ。ただ純粋にプログラムが破綻し続けて行っているだけ。

「はやてちゃん！　アインスさん！」

「来たわよ！」

「ルシル君、私たちに何か手伝える事はない！？」

「何でも言って！　魔力だって何だって貸すから！」

「わ、わたしも魔力少ししか無いけど、どんどん使って！」

「遠慮なんかするんじゃないよ。あたしら仲間だからね」

そこに防護服を私服姿へと戻しながらのなのは達が私の側に集まった。さらに「様子はどうだ？」クロノ執務官や、「アインスさん」リンディ提督、「アインス、しっかり」エイミィまでも私の為に来てくれた。果報者だ、私は本当に。たくさんの人が、私のことを思

ってくれている。

「ルシル。膨大な魔力持ちがここまで揃っている。君の好きなように使え」

みんなの視線がルシルへと向く。そのプレッシャーは一体どれほどのものなのだろう。だから「ルシル・・・」名前を呼ぶ。気負わなくてもいいのだと。ルシルは「みんなの魔力、貰い受ける」足元にミッドでもベルカでもない魔法陣を展開。オーディンも使っていた、セインテストの魔法陣だ。

――女神の救済（コード・イドゥン）――

リインを除く主はやて達の足元に同様の魔法陣が描かれ、「っ！？」少しばかり苦しそうな表情を浮かべた。魔力吸収の魔法だ。みんなの魔力がルシルへと流れ込むのを感じる。

「アインス。胸元に少し触れるぞ」

今のルシルは大人の姿であるから少しばかり羞恥心が煽られるが、「構わない」気にしないように努めて了承する。人差し指と中指が心臓付近にそっと触れた。

「おいで、アメナディエル、ソレウイエル、マカリエル、メナディエル、ライシエル」

――秘密を暴き伝える者達（ステガノグラフィア）――

『はい』『ウィ』『ヤー』『シン』『イエス』

私の胸の上にモニターが展開され、背中に1対の翼を持った3頭身の少女が5人と現れた。と、一瞬だが視界が暗転して「ここは、書庫・・・！？」気が付けばそこはどこかの書庫のような場所だった。目の前には宝石のエメラルドのような色彩の円卓があり、私が座っているのはロッキングチェア。

「私は先程まで主はやてのベッドの上に居たはず・・・、夢、なのか・・・？」

体が自由に動く。自らの足で椅子から立ち上がることも出来る。現実ではないことは確かだ。ここがどこなのかを知るために周囲を探索しようと考え、キョロキョロと辺りを見回す。

「四方八方に書棚がある所為でよく判らないな・・・」

空を飛べれば、とそう思ったら「っ？」体が浮いた。試しに、飛べ、と念じてみると思い浮かべた通りに空を飛ぶことが出来た。そして知る。ここが「とんでもなく広い書庫だな」ということを。私が目を覚ました円形空間を中心に、どれだけの高さか正確には判らないが少なくとも１００ｍ近く、さらに数ｋｍ単位の長さを誇る書棚が何十台と銀河のように渦巻いていた。

「おーい、アインスー！　どこだー！？」

「この声・・・、ルシルか！」

足元から聞こえて来たのはルシルの声。降下しながら「ルシル、私はここだ！」そう応える。ルシルの側へ降り立ち、「ここはどこなのだ？　私はどうなった？」疑問をぶつける。ルシルに椅子に座るよう促され、私は先ほど座っていた椅子へ座り、ルシルは対面の椅子に座った。

「ここは俺の精神世界に形作られている創世結界の1つ、英知の書庫アルヴィト。俺もアインスも精神体だから、君の体が自由に動いているし、魔法が無くても空が飛べるわけだ」

「これが創世結界、なのだな。書庫ということは、複製された魔法などが収められているのだな・・・？」

何万では足りないであろう数の書物が書棚に収められている。ルシルは「そうだよ」とある書棚に手を翳すと、1冊の本がスッと音もなく飛来して来てルシルの手に収まった。その本を円卓に置き、「こういうような物だよ」私の元へ滑らせた。私はその本を手に取り、開いて見てみる。

「夜天の書と同じように記されているのだな」

術式がズラリと記されていた。どうやらこれはなのはの術式が記されているようだ。ディバインシューター、アクセルシューター、ディバインバスター、エクセリオンバスター、などといった術式だ。

「アインス。本題に入ろう」

重々しい口調で話を切り出したルシルに、「やはり私は助からないのだな」と返すと、「すまない。ステガノグラフィアの調査の結果、やはりアインスを救う方法が見つけられなかった」彼は深々と頭を下げて謝った。判っていたんだ、初めから。だから「気にしないでくれ」と微笑み返す。

「・・・違う。そうじゃない。本当は初めから君のことを助けられないと判っていた。家に戻る途中、あそこまで啖呵を切ったのは、はやて達に何をしても君を救えなかったという現実を見てもらうためだ。何もせずにアインスが消えれば、見殺しにしたという罪悪感を抱かせると思った。だからそれらしく振る舞った。俺たちは頑張ったんだって、思わせるために」

懺悔するように俯き、肩や握り拳にした両手を震わせるルシル。私は「ああ」と静かに頷く。責めはしない。その理由が無い。むしろルシルには感謝しかないのだから。私は椅子より立ち上がり、ルシルの元へと向かう。

「なのは達を呼んだのは、アインスと別れの挨拶をさせるためだ。知らぬ間にアインスが消えたとなれば、それは辛いだろうって思ったから」

「ああ」

「魔力は・・・貰った魔力は、俺自身の目的に利用する為だけに吸

収したんだ・・・！　アインスを救うためじゃない・・・・！　俺の勝手な理由の為、なんだ・・・！」

「ああ。きっと、エグリゴリとの戦いで使うつもりなんだろう？
私が許すよ。主はやて達に代わり、私がお前を許すよ」

残る"エグリゴリ"は私たちが苦戦したバンヘルドより上の実力者。魔力は余り余るほどでなければおそらくルシルに勝ち目はない。

「ルシル、ありがとう。この創世結界に来たことで消滅までの余裕を得られた」

ルシルを抱きしめる。消滅まで時間が無いと解り少しばかり焦っていた。しかしここに来られたことで主はやて達に伝えたい想いを整理することが出来たのだ。そのお礼と、優しさゆえに苦しんでいるルシルを慰めるための抱擁だ。

「さぁ、戻してくれ。主はやて達に別れをしないといけない」

「・・・ああ」

視界が再び暗転する。視界が開けると、創世結界へ精神が取り込まれる時と同じ状況のままだった。大人の姿をしたルシルが私の胸元に指先を当てている状態。ルシルは「・・・ごめん」そう小さく謝罪の言葉を発し、私の胸元から指を離した。その謝罪の意味を理解したみんなの表情がみるみるうちに青褪めた。

「ルシルを責めないでやってくれ」

「「アインス・・・！」」

別れが確定したことで主はやてとリインの涙がさらに溢れてきていた。今こそ伝えよう。私がこの８ヵ月、いや、主はやての元へ転生したこの１０年を含めての思いを。

「主はやて。私はとても幸せでした。始まりすらも思い出せない程に永い刻を生きてきました。その中で多くの悲劇や絶望を受けてきましたが、最期はとても幸せな時間を得ることが出来たのです」

主はやてを、リインを、ルシルを、シグナム達を見る。シグナム達にも辛い運命を背負わせて来てしまった。しかしもうその憂いもなくなった。私たちは最後の最後で、この命――魂を懸けるに値する主と出逢えた。これほどの幸福はない。

「ですから泣かないでください」

「アインス・・・！　そやけど、そやけど・・・！」

「無理ですよぉ！」

主はやてやリイン、なのはら子供たちの目からは大粒の涙が零れ続けている。

「お願いします。笑顔で私を送り出してください。なのは達もお願

いするよ。お前たちの優しい笑顔を見ながら、私は逝きたい」

「「アインスさん・・・」」「「「「アインス・・・」」」」

なのは達は袖で涙を拭い、懸命に笑顔を作ろうと努めてくれたから、

「あぁ、心優しいお前たちが私の家族の側に居れば、私は安心して逝けるよ」そう言って笑顔を作ると、なのは達はまた涙を溢れさせたがそれでも笑顔を崩すことはなかった。

「リンディ提督、クロノ執務官、エイミィ。長くお世話になりました。ありがとうございます」

「はい。はやてさん達の事は、私たちが責任を以ってこれからも見守って行きます」

「だから安心して旅立ってくれ」

「うん。安心してね、アインス」

リンディ提督たちにも本当にお世話になった。そのお礼を改めて出来たことが嬉しい。

「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ」

「「ああ」」「おう」「ええ」

「お前たちには本当に苦労をかけてきた。すまなかったな」

「んなことで謝んなよ・・・！　お前だって、あたしらと同じくらい、それ以上に苦しんできたろうが・・・！」

「ああ、その通りだ。お前が気に病むことではない。故に謝らないでいい」

「そうよ、アインス。一緒に苦楽を共にしてきた仲じゃない。今さらそれを謝るのは野暮よ」

「うむ。謝罪は無用だ」

涙を流すヴィータとシャマル、涙を流さないよう努めているシグナムとザフィーラが笑顔を浮かべてそう言ってくれた。ああ、その通りだ。騎士たちに掛ける言葉は謝罪ではなく、「ありがとう」だ。

「・・・ルシル。お前は聡い子だから、なんでも独りで考え、抱え込む癖がある。お前には家族も友人も居る。そう肩肘を張らなくてもいい。みんなで悩み、考え、答えを見つける事も良いものだと私は思う」

子供らしからぬ思考や行動力は、クローンとしての生まれが原因だと知ってはいるが、もう少し子供の部分を出しても良いと思う。欲を言えば、主はやてとも結ばれてほしいが、それは私がいま言うべき言葉でも、言う必要もない言葉。これからの主はやてに任せよう。ルシルは「努力するよ」そう返した。確約はしてくれないか。まぁ、お前らしくはある気もする。

「フェンリル・・・」

「何も心配しないで。私も居るし、はやて達も居るから」

「・・・ああ、任せたよ」

フェンリルも涙で滲む決意の目をしっかりと見、そしてリインへと移す。

「・・・リイン」

「はいです・・・ぐす」

次々と溢れ出る涙を袖で何度も拭うリイン。感情のコントロールがまだ拙いリインには、泣くな、というのも酷か。それでも笑顔を浮かべようと頑張る姿は本当に愛おしく思う。

「リイン。リインフォース・ツヴァイ。名と祝福の風を受け継いだお前に伝えたいことがある。お前はお前だ、リイン。私の代わりなどではく、リインフォース・ツヴァイとしての個人だ。だから気負うことなく胸を張って、強く生きてほしい。・・・主はやてを・・・お支えしてくれ」

「ひっく、ぅく・・・はい・・です・・・はいです！」

涙を拭うことをとうとう諦め、ぎこちなく笑顔を作るリイン。さぁ、

最後は私の、私たちの愛する主への挨拶だ・・・・。

「・・・主はやて」

「うん。アインス」

「どれだけ言っても足りない程に私は幸せでした。私ほど幸福な魔導書など、後にも先にも存在しえないでしょう。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース。新たに頂けたこの美しい名と、夜天の魔導書という真の名を取り戻すことが出来た最後の転生。その主があなたで本当に良かった」

「っ、・・・うん、・・・・うん・・・・！」

「私はここまでですが、あなたの側には温かな家族も、優しき友人も、頼りある仲間もいらっしゃいます」

「そうやね・・・、わたしも幸せ者や・・・！」

「それに、私は生き続けます。目には見えないでしょうが私の魂と、みんなを守りたいという意志は主はやて達の魂と共に居て、あなた達を見守り続けます」

「うん。そやから・・・わたしは、大丈夫やよ・・・！　アインスが見守ってくれてるからな・・・！」

「はい。・・・いつもお側に居ますよ。私の大切な・・・はやて」

「っ！　ぅく・・・う、ぅ・・・ひっく、リイン・・・フォースぅ・・・、リインフォース・・・！」

いつか主も敬語も無用と言っておられたのを思い出し、はやて、と呼んだ。先ほどまで懸命に作っていた笑顔をとうとう崩し、主はやては大泣きしてしまった。抱きしめたい。抱きしめて安心させてあげたい。その意思だけで私は上半身を起こす。しかしそこまでだ。もう足も動かないし、上半身のバランスを取り、腰を捻るだけで精いっぱい。届かない、主はやてを抱きしめるには。

「ぅく・・・！」

「はやて！？」「はやてちゃん！？」

主はやてが車椅子より自力で立ち上がった。震える脚で懸命に立ち、「リインフォース・・・！」誰の支えも必要とせずに一歩、二歩とベッドへと歩いたのだ。ここで私もとうとう涙を流してしまった。泣かないと決めていたのに、主はやての自分の力だけで歩くその姿に、私は涙を流すのを我慢できなくなってしまった。

「はやて！」

「リインフォース！」

私に向かって倒れ込む主はやてを抱き止める。肉体を実体化して初めてあなたを抱き上げた頃よりいつの間にか背も伸び、体重も増え、

大きく成長していたのですね。それを最後にこうして確かめる事が出来、本当に良かった。

「おおきにな！　リインフォース！　わたし・・・わたしは！　リインフォースに逢えて幸せやった！」

「私もです、私もですよ、はやて！　幸せでした、とても幸せでした！」

私ももう涙が止まらない。強く私を抱きしめてくれる主はやてに応えるべく、私も精いっぱいの力を両腕に込めて抱きしめ返す。もうこれ以上望むべくもない。主はやてが自力で歩くその姿を見られたことで私は安心した。視界が涙だけでなく、私を構築していた魔力が粒子化したことで視界が眩しく滲む。

「ありがとうございました、主はやて。ありがとう、ルシル、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン、フェンリル。ありがとう、なのは、アリサ、すずか、フェイト、アリシア、シャル、アルフ。ありがとうございました、リンディ提督、クロノ執務官、エイミィ・・・」

私は最期に見た。涙を流しながらも笑顔を作って私の旅路を見送ってくれる主はやて達を。だから最期にもう1度、「ありがとう」と私は笑顔を作り、この出逢いに、共に過ごした時間に、そして笑顔で別れをしてくれたみんなに感謝した。

こうして私、"夜天の魔導書リインフォース"の永き旅路は終わった。とても、とても幸せに・・・終わった。

その世界に広大な大地は無い。あるかも知れないが確認できない。眼下に広がるのは白い雲海。どこからどう見ようとも地平線の彼方まで雲海が広がっていて果てが見えず、しかも厚みが数十ｋｍとある。さらには何かしらの"力"が働いているのか、侵入を試みても空間把握が困難となり、すぐに出て来てしまう。それゆえに不可侵の聖域と呼ばれるようになった。ならば、大地が無いのであればその世界に住まう生命はどこに居るのか、という話になる。

その答えは雲海の上を見ることで判明する。雲海のさらに上にはまた雲海がある。呼び名は上層雲海。黄金に輝く陽の光が雲の切れ間より降り注ぐことで光のカーテンを生み出し、幻想的な様を見せつけている。ちなみに眼下に広がるのは下層雲海と呼ばれる。そして上層・下層の両雲海の狭間に存在している広大な空間、そこがこの世界に住まう生命の領域。その領域内には無数の浮島が点在していた。島の大きさも、浮いている高度も、その種類も多種多様。建物――ギリシア建築と呼ばれる建築様式の神殿のような――だけの島や、全高数百ｍから数千ｍの山だけの島、森だけの島、湖だけの島、石造りの家が立ち並ぶ街の島などだ。

さらに両雲海を貫き、支えているかのように黄金で出来た柱が乱立している。その柱の側面には老若男女問わずの人物の立像が彫刻されている。この世界や、関係する世界の者が見れば、それら像のモデルが数千年前までに起きていた戦争を終結に導いた大英雄や、そ

れ以前から語り継がれる伝説級の人物の物であると判るだろう。

そして今現在、その世界のとある街の浮島にてトラブルが起きていた。武装した人間たちが、同じく武装している人間たちと戦闘を繰り広げているのだ。片や戦闘に慣れていて攻勢の手を緩めず、片や武装はしているものの戦闘は不慣れなのか防戦一方に追い詰められていた。

「や、やだぁ～！　離して～！　離してよ～！」

「うるせぇんだよ、ガキ！　大人しく変身しやがれ！」

ある家の中、８歳くらいの少女が自分の腕を掴んでいる男へと抵抗していた。床には少女の家族らしい男性と女性が倒れ伏し、鈍器にでも殴られたのか頭から血を流していた。

「おい、コイツらも連行だ」

「男の方は放っておいても良いんじゃね？　使い道なんてねぇしさ。でも女の方は連れてこうぜ。もし"ハズレ"でも別の使い道があるしょぉ」

２０代ほどの男が下卑た笑みを浮かべ、倒れている女性の全身を舐めるように見た。もう片方の男が「俺、お前のそういうところ嫌いだわ～」と非難するが、男は「へへ。男なら普通だろ」と軽く流す。

「お父さん、お母さん！　やだ！　誰か助けて！　助けて～～～！」

少女が泣き叫ぶ。ここでとうとう「いい加減にしやがれ、化け物！」少女を連れ去ろうとしていた男が怒り、「きゃあ！？」少女を勢いよく壁に叩きつけた。けほけほ、と咽る少女に、「化け物め。大人しく人間様の言うことを聞けばいいんだよ。俺たち人が使って初めて価値が出んだよ、"武器"ってのはなぁ！」爪先で蹴りを入れようとした。そこに・・・

「よせ」

若い男の声が室内に響いた。たったそれだけで3人の男は直立不動となり、僅かなりの冷や汗を流し始めた。彼ら3人が声の主に抱く感情は畏怖と敬意。そして恐怖。声の主が室内に入って来る。体格のいい青年だ。オリエンタルブルーの髪を逆立たせ、前開きのハイネックタンクトップ・レザーパンツ・ロングコートと言った衣服を纏っている。そしてワインレッドの瞳で男3人を睨みつけた。

「ソレらは貴重な存在なんだぞ。お前たちよりよっぽどな。少しは丁重に扱え、馬鹿が」

「「「申し訳ありません、シュヴァリエルさん」」」

「それに、連れて行くのはその子供（ターゲット）だけにしておけ、第9小隊・ドラゴンファング。・・・他のメンバーはどうした？」

「べ、別行動中っす！」

「逃げた他のターゲットを追いかけてます！」

「追跡班は紳士な奴らばっかなんで大丈夫と思います！」

シュヴァリエルと呼ばれた青年に睨みつけられビシッと佇まいを直して答えるドラゴンファングのメンバー3人。ドラゴンファング。ロストロギア専門のコレクターであるミスター・リンドヴルムが有する、ロストロギアを蒐集するための実行部隊の1つだ。その証、ドラゴン、そして体のいずこかの部位名が　部隊名に入っている。そしてシュヴァリエル。シュヴァリエル・ヘルヴォル・ヴァルキュリア。元・アースガルド同盟軍・"戦天使ヴァルキリー"の1体で、現在は"堕天使エグリゴリ"の風嵐系最強の1機。

「話は聞いていたな。俺たちリンドヴルムの目的はお前たちだ。人に似て、しかし非ざる者」

シュヴァリエルが少女に近付いてそう言うと、「ひぅ・・・！」少女は怯えて逃げ出した。男3人は「待て！」と追いかけようとしたが「ぐぁ！？」揃って転倒し、テーブルや椅子などに頭部をぶつけて気絶した。何故転んだのか。それは、「この子は渡さない！」少女の両親と思われる男性と女性が3人の足を引っかけたからだ。

「どうしてあの子を庇う？」

「俺たちが、あの子の親だからだ！」

シュヴァリエルの問いに男性が即答する。その声に反応したのか少

女が「お父さん！」戻って来てしまった。女性が「早く逃げて！」と逃亡を促す。そこに、「お前たちは人間。その子は化け物。親子のわけがない」とシュヴァリエルが言い放った。

「黙りなさい！　血の繋がりが何！　人とそうでないからって何！　そんな些細な事、私たち家族には関係ないのよ！」

女性がそう強く反論し、少女を突き飛ばすように家の奥――裏口でもあるのだろうか――へと追いやろうとしたとき、「うぐっ！」男性の呻き声が上ったことで２人は動きを止めた。見れば、シュヴァリエルが男性にのど輪締めを掛け、軽々と持ち上げていた。

「あなた！」「お父さん！」

「ぁぐ・・・逃げ・・・」

「逃げたらどうなるか・・・解っているな・・・？」

脅迫だ。子供心に、仮初とは言え父親を盾にされているのに逃げる、などという選択肢はありえない。そして夫の危機に妻も迷いが生まれる。しかし子供を贄として差し出すわけにもいかない。少女はすぐに答えを出した。妻は同じ答えを出したが、躊躇があった。だから先に少女が動いた。

「お母さん、お願い！」

「っ！・・・・ごめんなさい！」

少女と女性が手を繋ぎ、「我、畏れ怯むことなかれ。我、弱くも退くことなかれ。立ち向かうことこそ、己の強き証明。・・・スフィー・ダンテ！」と、何らかの呪文を詠唱し、名を叫んだ。すると2人の繋いでいる手から強烈な光が溢れ、室内を真っ白に照らした。シュヴァリエルも「っ・・・！」その発光量に思わず両腕で目を庇った。

「・・・回収がしやすくなったな」

光が治まり、シュヴァリエルは自分と対峙する女性を見てそう呟いた。室内に立っているはシュヴァリエルと女性の2人のみ。少女の姿は無い。その代わり女性の手には一振りの西洋剣が握られていた。西洋剣全体が微かに発光し、まるで心臓の鼓動のように点滅を繰り返している。

「魔造兵装番外位：スフィー・ダンテを視認。・・・俺たちのリーダーは、神器であるお前たちをロストロギア扱いとし、ぜひともコレクションに加えたいと言っている」

「この子は物じゃないわ！　生きてる！　温かみもある、感情もある！　成長だってする！　普通の子よ！」

「武器化しているだろ。そしてあんたは今、その子を武器として扱おうとしている」

「それは・・・！　この子を護るために――」

『お母さん、何を言っても無駄だよきっと！　倒しちゃえばいいんだよ！』

少女の声が西洋剣から発せられ、剣身に炎が噴き上がった。シュヴァリエルの言うように少女は武器と化していた。神器。それは遥かに遠き時代より存在している、特別な力を有した物品のことだ。神属が創り出した神造兵装。魔族が創り出した魔造兵装。そして人が特殊な技法で創り出した概念兵装。それらの総称が、"神器"、だ。少女はその内の1つ、魔造兵装の1つだったのだ。

『お父さんを、街のみんなを苦しめたあんた達を絶対に許さない！　お母さん！』

「スフィー・・・」

「いいだろう。来るがいい」

シュヴァリエルは持ち上げていた男性を床に落とし、身構えた。女性は床に倒れ伏して咽る男性を一瞥。生きていることを確認して「スフィー、お願い！」と、シュヴァリエルへ向かって突撃した。そして燃え盛る剣――"スフィー・ダンテ"を横薙ぎに振るう。シュヴァリエルが力の差を見せつけるためにその場から動かずにただ静かに左腕を上げ、前腕部分で刃を防御した。

「『っ！？』」

「効かないな！」

シュヴァリエルは空いている右手で女性の手首を鷲掴み、窓へと放り投げた。ガシャァンと窓ガラスを割って女性は家の外へと投げ出されてしまった。彼はゆったりと家の外へと出、ガラス片で肌を切って血を流す女性へと「大人しく渡せ」と命令する。

「ダメ、渡さない・・・！」

『わたしとお母さんが・・・護る！　この・・・アールヴヘイムの世界を！』

「あの御方が目を醒ますまで・・・！　神器王陛下が再びこの世にご降臨なされるまでは！」

アールヴヘイム。かつては光煌世界と呼ばれた、光に満ちた世界。数千年前、三大原初世界の一角・魔道世界アースガルドと共に、世界の命運を懸けて戦った世界の1つだ。"ラグナロク"によって半壊していたアールヴヘイムだったが、永い年月を掛けて再生していたのだ。

両雲海の狭間である領域を貫く幾本もの黄金の柱の彫刻のモデルは、何を隠そうかつての大戦の英雄・アンスールだ。ルシリオンも、この世界の王女だったカノン・ヴェルトール・アールヴヘイムも、全メンバーの彫刻が柱に彫られている。

「神器王、ねぇ。期待するだけ無駄と思うが？」

女性が疾走する。剣先が石畳の道をガリガリ削り火花が激しく散る。そしてシュヴァリエルに攻撃が届く距離になった時、「せいっ！」女性が"スフィー"を振り上げた。火花と一緒に無数の火の粉が、そして炎を纏う刃がシュヴァリエルを襲う。が、「まだ足りないな。あとどれだけ時間をかければ俺に辿り着く？」と素手で刃を受け止めた。

『っ！』

「知られてる！？」

女性と"スフィー"が息を呑む。"スフィー・ダンテ"。その能力は炎熱発現・・・ではない。それはあくまでカモフラージュ。真の能力がある。それは・・・

「魔造兵装番外位：スフィー・ダンテ。挑戦者の意。持ち主より相手が強ければ強いほど、戦闘中に経験値を稼ぎ、短時間に成長、武器の性能を引き上げて行く。その成長度は無限と云われ、本来であれば上位級の魔造兵装のはずだが、製造年代が新し過ぎる所為で惜しくも番外位」

魔造兵装や神造兵装にはランク分けが存在している。強力であれば強力であるほど、製造年月が新しかろうが上位へ位置づけられる。だが、それまでに創られた兵装が上位を占めているとどうしてもあぶれてしまい、最終的には中位、下位にも入り込めずに番外位に落とされる。

「そら、どうした。俺は強いぞ。俺と戦えば飛躍的に性能が上昇す――」

「『トリウィアスブレイムッ！』」

シュヴァリエルの四方から龍の背ビレのような炎の斬撃が襲いかかる。彼はニッと口端を吊り上げ、そのまま攻撃を受けた。女性と"スフィー"は追撃するために「はあっ！」炎の斬撃を飛ばし続ける。その最中にも"スフィー"を成長し、片刃の片手剣だったモノが両刃となり、剣身も柄も長くなって両手剣となった。

『お母さん、もっと、もっと、もっと！』

「スフィー！？　あなた、声が・・・！」

さらに声の高さが少女のモノから成人のようなモノへと声変わりをした。そんな"スフィー"に、「そんな・・・」そう女性が悔いた。"スフィー・ダンテ"は人間形態時でも成長していた。遅くゆっくりであっても、確実に。人にとっての1年が"スフィー"にとっての1日であってもしっかりと。

しかし本来の武器形態での成長に合わせ、人間形態も急激に成長したのだ。女性はたとえゆっくりでも"スフィー"の成長を楽しんでいた。それが、この数分の間で女性自身となんら変わらない歳となってしまったのだ。そのショックは計り知れない。そしてそれが最大の隙となった。

「結局、人間と作られた者とじゃ同じ時間は過ごせないんだよ・・

・！　どれだけ願ってもな！」

燃え盛る火炎の中から巨大な両刃剣が飛来し、女性のすぐ側を掠めて行った。その衝撃で女性は大きく吹き飛ばされ、彼女の家の外壁に叩きつけられた。その所為か気を失い、地面に倒れた。

シュヴァリエルは治まりつつある火炎よりゆっくりと歩き出して来て、「これで回収だな」コートの懐から何かしらの文字が描かれた帯を取り出し、人の姿になろうとしていた"スフィー"へと投げつけた。

『っ・・・・！？』

帯が"スフィー"に巻き付くと、人化が途中で止まり剣の姿へと戻った。シュヴァリエルが"スフィー"へと歩み寄り、「無駄だ。魔術で創られた兵装だ。神器であろうとその効果をキャンセルする」と言い放ち、完全に沈黙した"スフィー"を手に取って「回収完了」そう呟いた。

それから数時間後、シュヴァリエルと、彼の率いるリンドヴルムの回収実行部隊・第９小隊ドラゴンファング、第７小隊ドラゴンブレス、第４小隊ドラゴンネイルは、彼らのリーダーであるミスター・リンドヴルムの命を実行し、そして果たしたことで帰還の支度をしていた。

「――にしてもすごかったっすよね～、コイツら。管理局の魔導師なんて目じゃない程に強かったすもん。コイツらを使えば管理局にだって勝てるんじゃないっすか？」

とある島に停泊している巨大な船へと回収した神器を運び入れているメンバー達。その1人がシュヴァリエルへ一振りのナイフを見せながら、そうテンションを上げていた。シュヴァリエルは「いいから早く出港の準備をしろ」と、男の尻に蹴りを入れた。

「あたっ。うっす！　今すぐ始めます！」

リンドヴルムが所有する、翼を広げた鳥の形をした３００ｍ級戦艦タイプのロストロギア："ラレス・ドメスティキ"――家の守護神の意――へと男は慌てて走り出して行った。"ドメスティキ"は旗艦である。随伴の無人護衛艦には二等辺三角形をした２００ｍ級戦艦タイプのロストロギア："ラレス・ファミリアレス"――家族の守護神の意――が６隻とあった。

「――転移門へ出港！」

ブリッジに上がったシュヴァリエルが指示を出す。旗艦"ドメスティキ"を中央に、護衛艦"ファミリアレス"が六茫星陣形で港を出、この世界アールヴヘイムと、別次元の世界を繋ぐ特別な転送装置――転移門ケリオンローフィティタへ向かって出港した。両雲海の狭間の領域を進み、そして艦隊の行く手の先に見えて来たのは巨大――全高十数ｋｍ、全幅数ｋｍ――な扉。

「転移門の再ハッキングを開始」

「転移先座標・・・固定！」

「リンドヴルム本拠地、天空城レンアオムへ！」

黄金らしい物で造られた観音開きの扉は外側に向かって僅かに開き、狭間から真っ白な光が溢れ出ていた。その扉――転移門へ続く空路の左右には幾本もの柱が並列して立って道を示しており、艦隊は来た時と同じようにその柱の道の間を突き進んでいくが・・・

「なんだ、この揺れは！？」

順調に見えた航海だったが、全艦を強烈な揺れが襲った。旗艦のクルーが状況を確認する中、「強大な魔力反応５っ！　何か来ます！」旗艦クルーの１人が叫ぶ。直後、下層雲海より何かが飛び出してきた。

それは直径１０ｍはあろう、ダイアモンドのような輝きを放つ正二十面体５つだった。よく見れば１０歳ほどの少年少女がちょこんと乗っており、彼らが艦隊に向けて勢いよく指を差した。それを合図としたように子供たちの姿は蜃気楼のように揺らめいて消え、５つの正二十面体はガチャガチャと崩壊し、それぞれ１２の双三角錐へ変化。

――アレクトス・レイ――

そして計６０の双三角錐より光線が放たれ、最後尾を航行していた"ファミリアレス"六番艦に着弾。スラスターが大爆発を起こし、航行不能に陥った。黒煙を噴き上げながら降下していく六番艦へトドメとばかりに同じ攻撃を加えて、下層雲海へ沈む前に粉々に砕いた。

「あれもロストロギアっすか！？」

「なんて威力だ！　シールドを張っても貫通したぞ！」

「あんなものに狙われたら一溜まりもない！」

「同じロストロギアでこれだけの性能差があるなんて・・・！」

ブリッジが騒然となる。シュヴァリエルはブリッジのモニターに表示されている正二十面体に戻ったソレらを眺め、「アールヴヘイム製概念兵装・ヴンダー・エーデルシュタイン。そんなところに居たか」と呟いた。艦隊を襲ったのは、閃光系の射砲撃魔術に優れたアールヴヘイムがかつて創り出した神器だった。同じロストロギア？　否。年代が、製造法が、魔道形式が、魔力量が、存在そのものが別次元だ。敗北を喫するのは当たり前すぎた。

「旗艦、全速離脱！　後方の四番・五番護衛艦を盾にしろ！　一番・二番・三番は減速！　同様に盾にしろ！」

シュヴァリエルがそう指示を出した後にブリッジを後にしようとしたため、「どこへ！？」クルーが呼び止める。彼は歩みを止めることなく、「回収するんだよ。アレらもロストロギアだ」と答え、ブリッジを後にした。そして甲板へ直接上がるハッチを使って外へ出た。

『四番艦轟沈！　ターゲットが五番艦に移ります！』

シュヴァリエルに報告が入る。彼の視線の先には、"ヴンダー・エーデルシュタイン"の砲撃を受けて粉砕された四番艦の姿がある。

「エラトマ・エギエネス、発動」

シュヴァリエルは背部より孔雀の尾羽の形をした魔力翼２０枚を放射状に展開し、トンッと甲板を蹴って宙へ躍り出た。そして右手に彼の身長を超すほどの大剣、ルシリオン特製の概念兵装・"極剣メナス"を携えた。

「敵だ！」

「エグリゴリ！」

「シュヴァリエル！」

「裏切り者！！」

「カノン様を殺した、憎き仇！」

"ヴンダー・エーデルシュタイン"がシュヴァリエルを視認すると、その色彩が透明から深紅に変わった。まるで憤怒と殺意に染まったかのように。そうして始まる、"エグリゴリ"と神器の戦い。"ヴンダー・エーデルシュタイン"の連携の取れた空間攻撃と、シュヴァリエルの圧倒的な攻撃力と防御力がせめぎ合う。

高速で飛び回る"ヴンダー・エーデルシュタイン"に、機動力最速

とされる風嵐系でありながら鈍速のシュヴァリエル。彼は特攻部隊のヘルヴォル隊の隊長だった。ヘルヴォル隊の役目は、後続部隊の為に先に進撃して、敵地のど真ん中で大暴れして引っかき回す事。ゆえに必要なのは機動力ではなく、攻撃力と防御力なのだ。

「「「「「裏切り者には死を！」」」」」

――アレクトス・グランレイ――

「っ！」

シュヴァリエルを中心にして包囲するような位置取りをした"ヴンダー・エーデルシュタイン"が一斉に砲撃を発射。反射板と化している双三角錐によって、砲撃は縦横無尽に反射を繰り返しシュヴァリエルを完全包囲。

（魔導ならまだしも魔道である一撃だ。俺の防御魔術でも装甲でも無傷では済まないな）

"ヴァルキリー"の中でも1、2位を争う防御の高さを誇るシュヴァリエルでさえも警戒する攻撃力。狂ってはいようとも自身の戦闘能力やスペックだけはしっかりと把握できていた。

「うおおおおおおおおッッ！！！」

――廻天轟乱――

「「「「「っ！？」」」」」

シュヴァリエルが自分を覆うように竜巻を発せさせた。その圧倒的な風圧で"ヴンダー・エーデルシュタイン"は吹き飛ばされてしまい、キラン☆と上層雲海のいずこかへと消えて行った。

「・・・・やり過ぎた・・・・な」

"メナス"を肩に担いで嘆息するシュヴァリエル。"ヴンダー・エーデルシュタイン"の回収を諦め、旗艦"ラレス・ドメスティキ"へ戻ろうとした時、「っ！！？」彼は目を見張った。視線は艦隊・・・の下――下層雲海に向けられている。

転移門まであと僅かというところでそれは起きた。下層雲海より何かが飛び出して来て、"ドメスティキ"の右翼を粉砕したのだ。それは「なんだ、今の魔力砲は！」シュヴァリエルの言うように単純な魔力砲撃だった。とは言え、その威力は尋常ではなかったが。

『シュヴァリエルさん！　指示を、指示を！！』

ブリッジからノイズ混じりの切羽詰まった男の声が届いた。シュヴァリエルが応じるより早く、また下層雲海より何か突き出してきた。今度は左翼を粉砕。胴体のみとなった"ドメスティキ"が大きく揺らぎ、高度をさらに落とし始める。

「馬鹿な！　何故この世界にお前が・・・ヨルムンガンドが居るんだ！！」

シュヴァリエルが叫ぶ。下層雲海より姿を現したのは巨大な白蛇。名をヨルムンガンド。フェンリル、フレースヴェルグ、スレイプニル、ラタトスクなどと言ったアースガルドに棲む、神格を有する知性ある生命の一角だ。アースガルド四王族に（特にフノス）忠誠を尽くすヨルムンガンドが、アースガルドではなくアールヴヘイムに潜んでいた。シュヴァリエルどころか他の"エグリゴリ"にとっても想定外な事態だった。

『くそっ、みんなが、みんなが死んじまう！』

さらに最悪なのは、粉砕された両翼には居住区と第４荷物室があったことだ。粉砕された翼の瓦礫の中には、回収された神器の一部や、リンドヴルムのメンバーが居り、空中へ投げ出されていた。神器は下層雲海へ沈む前に天使のような翼を持ったヒトが回収したが、メンバーは無視されて、下層雲海へと沈んだ。

「――今度はなんだ！？」

地鳴りが空間を揺らす。転移門が閉じようとしていたのだ。シュヴァリエルは焦った。ヨルムンガンドが居るアールヴヘイムに閉じ込められれば、自分はともかくリンドヴルムの３小隊は全滅すると。ゆえに「くそっ！」全ての魔力を移動速度に回し、彼は"ドメスティキ"へと向かう。

「逃がすものか。我の眠りを妨げたうえこの神聖なアールヴヘイムを、下位次元世界の人間風情が穢すとは。その罪深さ、死を以って償え」

ヨルムンガンドより若い男の声が発せられた。含まれているのは怒り一色。ヨルムンガンドが大きな口を開くと、頭上にアースガルド魔法陣が展開された。魔術発動の兆しだ。シュヴァリエルは「させるか！」と、今度は魔力を攻撃力に変換、"メナス"を大きく振るい、強大な真空の刃を同時に幾つも放った。

――剱乱舞刀――

「何奴・・・？」

――ＨＡＧＡＬ（ハガル）――

ヨルムンガンドより超古代魔術・ルーンによる魔力砲が発射された。シュヴァリエルの全力の一撃と真っ向から衝突し、互いの間で魔力爆発が起きた。すぐさまシュヴァリエルが動く。下層雲海ギリギリ上を飛び、"ドメスティキ"へ向かうために。

「この魔力・・・、貴様、シュヴァリエルか！？　何故アールヴヘイムに！？　おのれ・・・！　生み親を、イヴィリシリア様らを討っただけでなく、再生を果たし、平和の時を続けていた高位次元世界に再び戦乱を巻き起こそうと言うのか！」

「知らんな、そんなこと！　俺は、俺のやりたいようにやるだけさ！」

「愚者めが！！　いいだろう。二度とそのような事を口に出来ぬよう、我が存命の糧としてくれる！」

「お前と戯れている暇は無いんでな！　俺たちはこれでお暇させてもらうぜ！」

全長数十ｋｍはあろう巨体ゆえに小回りの利かないヨルムンガンドの側を通り過ぎるシュヴァリエル。"ドメスティキ"がギリギリで転移門を潜り始める事が出来た最中、「転移門が・・・！？」また彼の想定外の事態が発生。転移門が消失しようとしているのだ。閉じるだけならまだしも消えかけている。それが何を示すのか。それは・・・

『転移先座標がメチャクチャになってしまいました！　どこに飛ばされるか判りません！』

『いやだ、いやだ、死にたくねぇよ！！』

『座標の再設定が出来ません！　指示をお願いします、シュヴァリエルさん！！』

ブリッジは大混乱。転移先が不明となった以上一体どんな世界へ飛ばされるか解らないからだ。下手をすれば時代すらも超越して、過去か未来か、それすらも曖昧な次元へと飛ばされる可能性がある。それが転移門の孕む危険性。シュヴァリエルも、「旗艦停止！　止まれ、止まれ！」と指示を出すがもう手遅れ。

『シュヴァリ――ザザ・・ザザザ・・・ザザ』

ノイズの後、ぷつんと通信が切れた。転移門を潜った"ドメスティキ"が消え失せる。くそっ、と歯噛みするシュヴァリエルの背後より「貴様は逃がさん」とヨルムンガンドが殺意を向ける。

――ＩＳ（イス）――

ヨルムンガンドの口より氷の礫を含んだ吹雪が放たれた。直撃すればシュヴァリエルとて無事では済まないほどの威力。だからこそ彼は回避を選んだ。向かうのは今にも消えそうな転移門。護衛艦の真下を潜るように飛ぶことで盾とし、ヨルムンガンドの攻撃をやり過ごすシュヴァリエル。

その途中、あるモノが目に入った。白い下層雲海に紛れて見づらいが、それでも視認できた。少女２人に少年１人だ。いずれも１０歳ほど。一人は綺麗な黒髪をした少年。気を失っているのかグッタリしている。一人はこれまた黒髪の少女で、今にも眠りにつきそうな眠気眼だ。

「んしょ、んしょ。お、重い・・・けど、あともう少しだもんね・・・！」

そして最後の一人。２人とは正反対の真っ白な長い髪、ツリ目で澄んだ水色の瞳、腰からは一対の白い翼を生やしている少女だ。その少女が少年と少女の腰の部分の衣服を引っ張って空を飛び、転移門を今まさに潜ろうとしていた。

「氷結（アイリ）の融合騎！？　お前、無事で――じゃない！　逃がすか！」

シュヴァリエルが白い少女の名を呼んだ。居住区の崩壊に巻き込まれ死んでしまったと思っていた少女の名を。アイリ。氷結の融合騎アイリ・フォン・セインテスト。かつての古代ベルカ時代にて、オーディンと名乗っていたルシリオンを主とした融合騎の少女だった。ベルカ崩壊時よりずっと、もう1人の融合騎、炎熱の融合騎アギト・フォン・セインテストと共に行方知れずだった。ルシリオンは推測していた。2人は誰かの手に渡っているか、もしくは研究施設に捕らわれているのではないか、と。それは見事に当たっていた。アイリは捕まっていた。ロストロギア専門蒐集組織リンドヴルムに。

「わわっ、見つかった！　アイリ、急げ、急げ！　逃げろ、逃げろ！」

一人称を自分の名前とすることは変わっていないアイリ。腰から生やす翼を精いっぱい羽ばたかせて転移門に入ろうとした。しかしそれより先にシュヴァリエルの手がアイリの翼に届いてしまった。

「きゃぅ！？・・・アイリの羽に触らないでって、昔からずっと言ってるよね、マイスター（シュヴァリエル）達の仇！！」

アイリがシュヴァリエルを睨みつける。それに構わず「戻れ！」とシュヴァリエルはアイリの翼を引っ張ったが、それがダメだった。その勢いでアイリが運んでいた2人の子供が彼女の手より離れ、転移門へと消えて行ったのだ。この時点で彼は責められないかもしれない。何せ2人の正体を知らないのだから。2人が消えたことで転移門の扉の閉まる速度が上がり、さらに消失速度もまた上がった。

「っく・・・！　来いっ！」

「痛い！　引っ張らないでって言ってるよね！」

「己ぇぇぇぇーーーーっっ！」

シュヴァリエルがアイリの翼を引っ張り、そのまま転移門へ進入。ヨルムンガンドの怒りの咆哮がアールヴヘイムに轟き渡る。こうしてシュヴァリエルとアイリもまた転移門を潜り先の知れない世界へと飛び、そして転移門ケリオンローフィティタは完全に消失した。

Ｅｐｉｃｏ２２竜の強襲～Ｔｈｅ　２ｎｄ　ｔａｓｋ　ｆｏｒｃｅ：　Ｄｒａｇｏｎ　Ｅｙｅｓ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

夏休みも残り数日となったある日、あたし達チーム海鳴は夏休み最後の思い出に、海鳴市郊外の山中にある温泉旅館・山の宿へと１泊２日の旅行にやって来たわ。

「――あれから１年ちょっとかぁ。・・・１年。口にすればあっという間だったけど、その内容はすごく濃いわよね～」

あたしは思い出深いこの旅館を眺めながらそう言ってみた。あたしとすずかは、この旅館で魔導師になって、初めて魔法戦を経験した。すずかも同じ思いだったみたいで「そうだね。私は色々な事が初めてだったから余計に驚きだったよ」って感慨深げに言った。

「にゃはは。アリサちゃんは、セレネちゃんとエオスちゃんから魔法を知らされていたけど、すずかちゃんはここで一度に知っちゃったんだもんね」

「あたしとフェイトが、アリサとすずかと対面したのもここが最初だっけか？」

「あ、うん。えっと、あの時は本当にご迷惑をお掛けしました」

なのはとフェイトとアルフも当時のことを思い返してるみたいね。ジュエルシードを巡る、なのは・ユーノ・セレネ・エオスと（あとでシャルたち管理局も参戦）、フェイトとアルフとプレシア、そしてテスタメント・ステアの戦いに、あたしとすずかも参加した。そう、あたしとすずかにとってはここがスタート地点。ジュエルシードに願って魔導師にしてもらって、プレシアの名前を取ったＰＴ事件を最後まで見届けた。得たモノもあるし、失ったモノもあった事件だったわ。

（ステアとプレシアは亡くなって、けどアリシアが蘇ったのよね）

悲しい事もあったけど、それでもあたし達はＰＴ事件を乗り越えた。そんな思い出深い場所に、あたし達はやって来た。ＰＴ事件に関わりのあったあたし達が旅館を眺めていると、「話には聞いてたけど、ホンマに歴史ある場所なんやな」はやてが微笑んだ。シャルも「あとで、どこで覚醒したのか見に行きたいなぁ」って、森の方を見た。

「そうね。行ってみようかしら。あたしとなのはとすずか、チーム海鳴初期メンバーの始まりの場所に」

「うん。でも今はとりあえずチェックインだけは済ましておこうか」

散策はいつでも出来るから、思い出の場所巡りはそれからにしようってすずかが提案。みんなはそれで納得みたいで、思い思いに旅館の中へ入ってく。カウンターでチェックインの手続きをするのはシャマル先生と人型に変身したザフィーラ、そしてフェンリル。いくら自分自身の宿泊代（フェンリルの代金はルシル払いのようだ

けど）は出すにしても、あたし達はまだ子供だから、財布からお金を出すわけにはいかない。人数分の宿泊代をまとめてシャマル先生たちに預けて、支払ってもらうことにした。

（大人が子供にそれぞれお金を出させたとなると、旅館の人たちのシャマル先生たちの心証が悪くなってしまうかもしれないしね）

「みんなー。チェックインは済ませたから各自、荷物をお部屋に運んでちょうだ～い♪」

シャマル先生の号令に「はーい！」子供組は返事をして、フェンリルから受け取った大部屋の鍵を手に先を行く。

「わわっ」

「ひゃっ？　はやてちゃん、大丈夫です！？」

「はやて！」

「掴まって下さい、主はやて！」

今のはやては車椅子に乗ってないのよね。自分の足で歩いてるわ。だけどまだしっかりとした足取りじゃなく、松葉杖を使ってなんとか歩ける状態。だから今、はやてはよろけてしまって、リイン、ヴィータ、シグナムに支えられた。

アインスが天へと旅立ってから今日で1週間と少し。その間、はやてはリハビリを病院だけじゃなくて本局でも懸命に続けた。実はア

インスが旅立つ前から補助があれば歩けたそうなんだけど、はやては車椅子を使い続けた。アインスに車椅子を押してもらう、その為に。お互いを必要としたい為のことだったって、数日前にはやては教えてくれたわ。

――そやけどそれももう終わりや。アインスは旅立ったからな。これからは、甘えは許されへん。車椅子はもう卒業。こっからは自分の足で歩いて、父さんや母さんと一緒に見守ってくれてるアインスを安心させたい――

そう笑顔を浮かべてたはやて。その努力は少しずつ実ってる。松葉杖だけどはやて自身だけで歩けるようになったんだから。

「おおきにな、みんな。わたしは大丈夫や。さ、行こ」

はやてがまたひとりで歩き始める。ヴィータとリインがさらに寄り添うようにして左右を固めた。そして改めて泊まる部屋へ向かう。着いたその部屋は３０畳ほどもある和室。宴会でも開けるような場所で、カラオケセットが置かれてある。八神家全員に唄ってもらおうかしらね。

「お夕飯は１９時からだそうで、こちらで食べることになりますね。お布団はセルフで、そこの押し入れから自由に出して良いそうです。お風呂の方は１４時から解放で、露天風呂はもう開いてます」

シャマル先生からそう教えてもらう。現時刻は１３時半。開くまでもう少しね。露天風呂はもう開いてるけど、まだ明るい時間から入

るにはちょっと勇気が要るわ。露天風呂周りのセキュリティーは完璧で、覗きとかの心配はないんだけど、それでもやっぱりちょっと気になるわけよ。

そういうわけで、さっきの約束を早速果たすことに。荷物を置いて旅館の外へ。旅館の周囲にある山林の中を歩いて、時折立ち止まっては「この傷はあの時の・・・」なのはやすずかは樹の幹や地面に付いた傷や窪みを見て当時を思い返す。そうして辿り着いたのは「私とアリサちゃんが、魔導師になった場所・・・」すずかの言うように、始まりの場所だわ。

「この窪み・・・。あたしとすずかがリンカーコアとデバイスを得た時に生まれた衝撃波で出来たやつよね・・・」

外へ向かうように発せられた衝撃波の痕が今でも残ってた。あたしとすずかは屈んで、そっと指先でその窪みをなぞった。ヴィータが「へぇ。はやても言ってたけど、こんなところでも歴史ありなんだな」って感嘆して、あたしの隣に屈んで窪みを撫でた。

次は、あたしとすずかが初めてフェイトとアルフと初めて言葉を交わした、あの川。そこを訪れると、「この橋・・・」フェイトが川に架けられた橋を見てそう呟いた。アルフが「どうしたんだい、その橋が」って小首を傾げる。

「にゃはは。アルフは憶えてないんだね」

「何をだい？」

「あの橋、新しいでしょ」

「ん？　ああ、そうだね。アリサ、それがどうしたってんだい」

「この橋、私が壊した・・・やつだ。たぶん。・・・悪い事しちゃったな・・・」

フェイトが心苦しそうに答えた。そう。前の橋は、フェイトの雷撃で焼け落ちた。その当時はジュエルシードの事で精いっぱいだったフェイト。だから橋なんて関係ない物だったと思うけど、今はきちんと悪い事は悪い事だって、罪悪感を覚えてる。

「ここであたしとすずかは、フェイトとアルフと会ったのよね。ま、会ったことは憶えていてもあたし達が名乗ったのは憶えてないでしょうけど？」

アルフの殺気はいま思い出すだけでもちょっと身震いするわ。

「あぅ。ごめん」

「どういうことです？」

フェイトが申し訳なさそうに謝ると、リインが訊いた。あたし達は、フェイトは事件後の別れの挨拶をするまで、あたし達の名前を憶えていてくれなかったことを話した。ここで名乗ってからどこかで会うたびにあたし達は名前を呼び合っていたのに、フェイトの頭には残っていなかった。うん、ちょっぴり寂しいわよ。

「あの時は色々あって、その・・・」

「にゃはは。解ってるよ、フェイトちゃん。けどもう大丈夫だもんね♪」

「うん。親友だから♪」

なのはとフェイトが笑顔を浮かべ合う。本当に仲が良いわよね。けど、「そうだよね♪」すずかも、「ま、あん時の事もいい思い出よ」あたしも参加。そして「おーい、わたしを忘れてもらっちゃ困るよ～♪」シャルがあたし達４人に勢いよく抱きついた。

「なんや、ちょう疎外感があるなぁ～」

「ですぅ～」

「わたしもその時は眠りに付いてたから知らな～い」

はやてとリイン、それにアリシアがそんなことを言うもんだから、「み～んなも親友なのだ～♪」シャルがあたし達を引っ張ったまままではやて達に突撃。はやてとリインは「わぁ！」シャルに押し倒されて、あたしとすずかは「のわっ！」ヴィータを押し倒し、なのはとフェイトは「ひゃ！」アリシアを押し倒した。

「まったく、何をやっているんだ、君たちは」

「もう。土だらけになっちゃって。早くお風呂に入って浴衣に着替

えちゃいましょ」

散策で十分時間を潰したことで１４時は過ぎたし、服も汚れたし、ちょうどいいわね。みんなで「はーい」応えて、旅館に戻る。泊まる部屋に戻って替えの下着と浴衣を手に、「おっ風呂～、おっ風呂～♪」歌うシャルとアリシアを先頭に大浴場に向かうんだけど・・・。部屋を出る前、「ルシル君とザフィーラは行かへんの？」はやてがお茶を啜るルシル達に声を掛けた。ザフィーラはともかくとしてルシル、アンタおっさんくさいわよ。

「俺は服汚れてないし、寝る前に1回入れば良いかなぁって」

「ルシリオンと同じです」

やっぱり男の子か、ルシル。1日に何度もお風呂に入ることが好きじゃないみたいね。あくまで1日の汚れを落とすだけの行為だって思ってるよう。ザフィーラは確かお風呂がそんなに好きじゃないって、はやてから聞いてたけど。そういうわけだからあたしたち女の子グループだけでお風呂に行くことに。

「ルシル～。男の子しか居ないからって、女の子――特にわたしの荷物とか漁ったりなんかしちゃダメだよ～♪」

「馬鹿を言ってないで早く行け」

シャルのからかいをルシルはサラッと流して、「あ、この菓子美味い」部屋の中央にあるテーブルの上に置かれてるお菓子に舌鼓を打

った。

「ちぇ～。そろそろ別路線でアプローチしないと本気で飽きられる～」

シャルがそう反省した。でも後悔はしてないみたいね。次は何やろうっかなぁ～、って鼻歌交じりだもん。そんなシャルと一緒にスキップするアリシアを先頭にして、あたし達は大浴場へ到着。脱衣所で思い思いに服を脱いでいく中、あたしは「はやて、ソレ・・・」隣で懸命に服を脱いでるはやての胸にあったソレに気付く。

「あ、コレか。うん。アインスの指環やよ」

首に提げられた剣十字"シュベルトクロイツ"に寄り添うように光る指環が1つ。ルシルが夏祭りで買ってくれた指環ね。

「アインスが逝くその瞬間まで身に付けてた指環や。ルシル君が、可能な限り肌身離さず持っていてくれ、って言うから、こうしてシュベルトクロイツと一緒に首に提げることにしたんよ。それにな。なんかこの指環を身に付けてると、ホンマにアインスが側に居てくれる気がするんよ。温かみを感じるって言うか。・・・この指輪はきっとアインスなんよ」

指環を手の平に乗せて愛おしそうに眺めるはやてに「そっか。じゃ、大事にしないとね」そう返す。はやては「うんっ！」って、同性のあたしでもドキッとする笑顔を浮かべた。あたしもなんとなく不思議な感じがしてるのよね、あの指環。ひょっとすると本当にアイン

スの心が宿っているのかもしれないわね。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒すずか†††

お風呂を済ませた後、アリシアちゃんから、卓球をやろう、って提案があったから夕ご飯まで結構本気なゲーム（トーナメント戦もやって、私が優勝したよ）を繰り返した。汗だくになっちゃったからまたお風呂に入り直したけど。そうして夕ご飯。みんなでカラオケしながら、豪華な懐石料理に舌鼓を打った。

ちなみにカラオケは、１人きりじゃなくてデュエットで唄った。なのはちゃんとアリシアちゃん。フェイトちゃんとはやてちゃん。アリサちゃんとシャマル先生。シャルちゃんとシグナムさん。ヴィータちゃんとリインちゃん。アルフとフェンリルさん。そして私はルシル君とデュエット。ザフィーラは最後まで唄わなかった。聴きたかったなぁ～。

「――あー、唄った～」

「一度ノッちゃうと、なかなか止まんないよね～」

「カラオケって楽しいぃ～！」

デュエット大会が終わってからもソロで歌い続けたシャルちゃんとアリシアちゃんとフェンリルさんは、少し声を嗄らし始めたところでカラオケ機器の電源を落とした。備え付け冷蔵庫から自販機で買ったフルーツ牛乳のビンを手に取って、部屋の中央にある足の短い長テーブルでトランプゲーム・ババ抜きをしてる私、なのはちゃん、

フェイトちゃん、はやてちゃん、ルシル君、アルフの元に来た。ちなみにアリサちゃんとアリシアちゃんとヴィータちゃんとリインちゃんは、携帯ゲーム機で狩りを楽しんでて、シグナムさん、シャマル先生、ザフィーラの大人組はお酒を飲みながらお喋り中。

「喉を嗄らすまで唄うなんて馬鹿か。はい、すずか」

私に2枚のカード差し出してるルシル君が呆れる。私は右と左、両方のカードに触れてルシル君の表情の変化を見る・・・んだけど、ポーカーフェイス過ぎて全くと言っていいほど変化が判らない。ルシル君ってギャンブルゲームにとてつもなく強い。心理戦なんかしかけたら倍で返ってくるし。

「にゃはは。でもすごく良い歌声だったよ、シャルちゃん、アリシアちゃん、フェンリルさん」

「うん。フェンリル、歌、上手なんだね」

なのはちゃんとフェイトちゃんの褒め言葉に続いて「なんか不思議と落ち着ける歌声だったよ」私も、フェンリルさんの独特の声色の歌声を称える。唄ったのは演歌で、長い黒髪と浴衣も相まってプロの歌手みたいだった。

（あぅ、ジョーカー引いちゃった・・・）

私がルシル君の手札から引いたのはジョーカー。これで私の手札はジョーカーを含めて3枚。今度は私が「はい、なのはちゃん」に手

札を差し出す。私も努めてポーカーフェイスを作る。なのはちゃんは私の手札に触れては私の顔を見る。さっきの私のように表情の変化を見るためだね。でもこれならどう？　無表情から笑顔に変える。

「・・・えっと、えっと・・・じゃあ・・・これ！　あっ」

「「「「「判り易い・・・」」」」」

「にゃゞっ！」

なのはちゃんはこういうゲームには向いてない。だって素直で、純粋で、隠し事なんて出来ない優しい子だから。なのはちゃんは手札をシャッフルして、「はい、はやてちゃん！」に手札を差し出した。はやてちゃんもなかなかにポーカーフェイスが下手なんだけど、なのはちゃんに比べればマシかな。

「あ・・・、ほっ・・・・、あ・・・・ほっ」

「「「「「判り易い・・・・」」」」」

緊張と安堵の表情の差がハッキリし過ぎだよ、なのはちゃん。はやてちゃんが「ほい、これや」カードを引くと、「はぅぅ・・・」なのはちゃんが肩を落とした。ジョーカー以外が引かれたんだね。で、最終的に「わたしも上がりや♪」はやてちゃんがなのはちゃんの手札2枚の内から1枚を引いて上がったことで、「にゃぁぁぁ！」なのはちゃんの負けが確定。

「もう1回！　あと1回だけ！」

トランプを集めてシャッフルするなのはちゃんがもう1戦を提案。断る理由もないから、第2戦に入る。だけどその前に「ごめんね、ちょっとお手洗いに」私は席を立って、私の代わりにアリシアちゃんが入ってもらうことにした。

「俺も少し席を外すよ。シャル。代わりに入ってくれないか？」

「あいあーい。手加減しないよォ、なのは～　」

「あたしももういいよ。フェンリル、代わっとくれよ」

「いいよ～」

私とルシル君とアルフに代わり、シャルちゃんとアリシアちゃんとフェンリルさんが入った。部屋を出て私はお手洗いに、そしてルシル君は「売店に行くの？」に向かおうとしたからそう訊いてみた。

「ん？　ああ。少し小腹が空いて。部屋に元々あった菓子はもう無いし、食料調達だ」

「珍しいね。だけどルシル君。寝る前にお菓子は美容に悪いよ？」

ルシル君にしては珍しいと思う。ご飯の後ですぐに間食だなんて。ルシル君は「男にそんな心配は無用」って微笑んだ。そんなルシル君と別れてお手洗いへ。用事を済ませて部屋へ戻ろうとした時、「

はい・・・？」誰かに呼ばれたような気がして後ろを振り返ったけど、そこには誰も居ない。小首を傾げながらもまた歩き出して、「・・・？？」今度は気配のようなものを感じたからまた立ち止まる。

≪どうかしまして？　すずか≫

「なにかに呼ばれているような気がして・・・。気配もあったような・・・？」

ちょっと気になったから旅館の外に出て見ることにした。普段ならここまで行動的にならないんだけど、今回はどうしても気になっちゃった。

≪すずか？　お待ちくださいな。皆さんに一言断りを入れた方がよろしいのでは？≫

「気の所為の確率の方が高いし、大事にしたくないからしないでいいよ」

≪ですが・・・≫

「私だって技術者の前に魔導師なんだよ、スノーホワイト。何かあってもすぐに墜とされるような真似だけはしない」

"スノーホワイト"を握り締めて山林の中を行く。気配があったような、って微妙な感覚を頼りに歩いたんだけど、やっぱり何事もなかった。声も気配も気の所為だと見切りを付けて戻ろうとした時、

ガサガサと草が揺れた。
風は無いから、「狐とか狸・・・？」野生動物が居るのかもしれないって思って、ちょっと見てみよう、なんて考えが。気配を殺してその場に留まる。山林の奥から何かが来る気配を察知。草が揺れる音が近くなってきた。

「・・・・・・あれ？」

すぐそこまでと言ったところで草が揺れると音が止んだ。途中で私に気付いちゃったのかな、ってそっちへ歩み寄って行く。すぐ側まで行った時、「きゃっ！？」何かが飛び出して来て、私を押し倒した。

「あいたた・・・。一体何が・・・？　っ！！」

私を押し倒したのは、私と同い歳くらいの子供だった。フェンリルさんみたいに綺麗な黒髪でショートヘア。Tシャツにハーフパンツ姿。靴やサンダルを履いてない裸足。ううん、そんなことより男の子だよね、外見的に。私の胸に顔が押し付けられているような今の体勢に、顔どころか全身が熱くなって「あ、あの！」引き離すために両肩に手を置いて私の上から退かした。

「・・・・ん・・・・う・・・ぅく・・・・」

「・・・あの、大丈夫・・ですか？」

何か苦しそうに顔を歪めているから声を掛けてみるけど、意識は無

いみたいで返答はない。こんな夜更けに子供1人が山林を裸足で歩いていてるのは不自然。それに今日の宿泊客は私たちだけって聞いてるから、他の宿泊客じゃない。明らかに異常事態。

「スノーホワイト。シャマル先生に連ら――」

「見つけたぞ！」

そこまで言いかけたところで、男の人の声が聞こえた。目線を男の子から前へ向けると、前方数m先に暗視ゴーグルのような物を装着した大人数人が居た。月明かりが、その人たちが持ってる凶器を照らし出す。

（剣1、槍1、槌1、全身甲冑1。あと全部の指先に爪の付いたグローブを武装してる人が1。目視5人・・・！）

「おい、原住民のガキが居んぞ」

「チッ。見られたんなら仕方がない。始末しろ」

「うわぁ、嫌だなぁ。辺境の管理外世界で、何の罪もない幼女を殺すなんて」

「放っておいてもいいんじゃない？　どうせ俺たちのことなんて説明できないでしょ」

「その甘さが俺たちの首を絞めるかもしれないだろ。任務は常に徹

底するべきだ」

私を口封じする算段を付け始める人たち。管理外世界って括りを知っているということは、管理世界の人なんだ。それに、簡単に人を殺す話をするなんて完全に犯罪者のそれ。その人たちの狙いはこの男の子。渡すわけにはいかない。

「悪いな、お嬢さん。運が悪かったと、自分の不幸を呪ってくれ」

グローブの人が大きく両腕を振るうと、１０本の指先に付いてた爪部分が高速で飛来した。速い。だけど、私はそれ以上の速さを持つ攻撃を何度も経験してる。

「スノーホワイト・・・！」

≪アイスミラー！≫

爪が到達するより速くシールドを展開すると、「魔法！？　魔導師か！」あの人たちが一斉に身構えた。

「何故、管理外世界に魔導師が居る！？」

「俺の一撃をあっさり防ぎやがった・・・！」

「見た目に惑わされるな。あの子供、戦闘経験があるぞ」

今の攻防で一気に警戒されちゃった。子供だから相手に油断が生ま

れやすくなる、ってルシル君は言っていたけど、相手によっちゃそのアドバンテージも、活きるより先に崩れちゃう。

「・・・ぅ・・うぅ、ここ・・・は・・・・？」

「っ！　気が付いた？　怪我とか苦しいとかは無い？　」

「・・・あ・・・きみ・・・だれ・・・僕・・・は・・・・」

「あ、私、月村すずかっていいます」

「・・すず・・か・・・う・・・・」

≪また意識を手放してしまったようですわね≫

「・・・だったら、早くあの人たちを捕まえないとね」

≪そうですわね。・・・封時結界、発動します≫

戦闘の為の結界を発動。これで周囲の被害を抑えられるし、何よりみんなに異常事態を報せることになる。すぐにでもここに集まってくれるはず。まずはバリアジャケットへと変身。そして男の子を庇うように前に躍り出る。

「時空管理局本局・第四技術部所属、嘱託魔導師、月村すずかです。管理外世界への渡航許可証は・・・やっぱりないですよね？」

「管理局員だと・・・・！」

「くそ！　殺して口封じなんて出来ないぞ」

「相手はガキ1人。事故に見せかけて殺せ」

また、殺せ、って言った。脅迫罪の追加。管理外世界への不法渡航、武装所持、戦闘・傷害未遂、男の子への誘拐・監禁未遂などなど。上げていけば切りがないよ。とりあえず、「えっと～、ごめんなさい。私は1人じゃないんですよ」そう言ってニコッと笑顔を作ってみる。

「なに・・・？」

「・・・なぁ。この世界、管理番号いくつだ・・・？」

「は？　んなこと、どうでもいいだろうが。早くその小娘を黙らせて、あのガキを回収するぞ」

「いいから！」

「・・・確か、第９７管理外世界・地球・・・だったか」

「極東の島国で、国名はニッポン」

「ちなみに、この街の名前は海鳴市です♪」

最後に私はそう付け加えると、1人の男の人の顔が青くなって、「ウミナリ・・・、まさか、お前は・・・チーム海鳴、なのか・・・！」って呻いたから、「はい。そのチーム海鳴です♪」答えてあげた。

「っ！・・・くっそ！　チーム海鳴だ！　管理局広報誌で取り上げられていた！　幼くも局内上位クラスの魔導師が集った、新進気鋭のチーム！　平均魔力・魔導師ランクＡＡＡの！　しかも――」

あー、そう言えば1月前くらい、総務部・広報課の人たちから取材を受けたけど。その時に写真も撮ったし、色々と質問にも答えた。それで魔力や魔導師ランクの事も知ってるんだ。

「やったな。あたしらの希望通りの展開だぜ。因縁に決着がつけることが出来るなんてな」

「ああ。ロストロギア蒐集組織リンドヴルムの私兵隊の討伐が出来るとは」

「だな。俺たちが相手をしよう」

「久々の竜狩りか。腕が鳴る」

ヴィータちゃん、シグナムさん、ルシル君、ザフィーラが騎士服姿で私の目の前に降り立った。そして背後から「すずかちゃん！」「すずか！」なのはちゃん達が私の名前を呼びながら駆けて来てくれていた。はやてちゃんもリインちゃんとユニゾンを果たしていて、「リンドヴルム。闇の書を狙って来てた連中やね」って、シャマル

先生と一緒にルシル君たちに並び立った。

「おいおい。こいつら全員がＡＡＡクラスの魔導師なんかよ」

「しかも管理局員だって？　悪い冗談にも程があんぞ、おい！」

「そんな事は問題じゃない！　その武器型デバイス、防護服・・・、やはり間違いない！　ソイツら・・・パラディース・ヴェヒターだ！」

私の正体にいち早く思い出した人が叫ぶ。他の人たちも自分たちが置かれた非常事態にようやく気付いて、さっきまでの威勢が嘘みたいに一気に沈んだ。ルシル君が「なら、こうしようか」指を鳴らすと、ルシル君たちみんなの頭部がデフォルメされた動物の着ぐるみになった。ルシル君に至っては大人モードにまでなった。リンドヴルムの人たちはいよいよ以って逃げ腰になり始めた。

「く・・・！　たとえそれでも・・・ソレを回収しなければ・・・！」

剣を持ってる人が男の子を睨んだ。その人が身構えると他の人たちも武器を構えた。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒イリス†††

「すずか、シャマル。その子を保護してくれ。俺たちはコイツらを仕留める」

管理世界に名を轟かせてるロストロギア専門の蒐集家のミスター・

リンドヴルムを筆頭とする、リンドヴルムが海鳴市にやって来た。狙いは、すずかの側に倒れている少年みたい。歳はわたし達と同じくらい。魔力を感じることから魔導師だって思うんだけど、あの連中がどうして魔導師を狙うのかは不明。ま、捕まえてから聴取ね。

「一気に決めるぞ。シャマルとすずかとフェンリルは、その子の保護を最優先」

ルシルからわたし達に指示が飛ぶ。フェンリルが男の子を抱きかかえて後退して、すずかとシャマル先生が追いかける。

――テートリヒ・シュラーク――

――紫電一閃――

――守護の拳――

――集い纏え、汝の雷撃槍（コード　フルグルゼルエル）――

そしてわたし達は一斉に攻撃に移る。人数もそうだけど魔力量だけでも十分にリンドヴルムの連中を超えてる。コレって完全に弱いイジメのパターン。でも手加減はしない。これまで局はコイツらに苦汁を舐めさせられていたんだから。

ヴィータは同じハンマー使いを、シグナムは剣使いを、ザフィーラはグローブをはめた奴と、ルシルは槍使いを、そしてわたし達は全身甲冑の奴を。甲冑男は「数の暴力だと！？　貴様ら、それでも管理局員か！」って、彼を包囲するわたし達へ向かって怒鳴った。

「強奪犯がうだうだ言ってんじゃないわよ！　フレイムアイズ！」

――フレイムウィップ――

アリサが繰り出すのは炎の鞭。今ではカートリッジをロードしなくても発動できる攻撃魔法。甲冑男は「くそっ」って悪態を吐いて、わたし達に向かって突進して来た。そして炎の鞭が当たった・・・と思ったんだけど、当たる直前に消滅した。アリサだけじゃなくわたし達も小首を傾げる。

「ハ、ハハ、ハハハ！　ど、どれだけ魔力があっても、やっぱこの甲冑の前じゃ魔導師なんてザコになっちまうんだよな！」

甲冑男の突撃を横や上空に跳ぶことでわたし達は回避して『なのは、フェイト。魔力弾お願い』思念通話で2人に指示すると、『了解！』不満も言わずに答えてくれた。

「アクセルシューター！」「プラズマランサー！」

制止した甲冑男の背後になのはとフェイトの攻撃が撃ち込まれたんだけど、「また・・・！」着弾直前に消滅した。もう1度突撃して来る甲冑男。わたしはすぐさま『はやて、リイン。ベルカ式の魔力弾！』今度ははやてに指示。

『了解や』『はいです！』

――ブラッディダガーーーー

ユニゾンはやてが発動したのは血色の短剣による包囲攻撃。それと一緒にわたしは"キルシュブリューテ"を勢いよく振るって地面を穿って、魔力付加の無い純粋な物理攻撃――石礫を繰り出す。すると、はやて達の攻撃も着弾時に消滅したけど、わたしの石礫は、カツン、と当たった。

「決まり！　ソイツの甲冑、ＡＭＦを使ってる！」

ＡＭＦ――アンチ・マギリンク・フィールド。フィールド系の上位魔法で、魔力結合・魔力効果発生を無効にすることが出来るＡＡＡランク魔法防御だ。出力によっては今のわたし達の通常魔法じゃ決定打を与えることが出来ないうえ近付いただけでバリアジャケットが掻き消される。

「チッ。もうバレたかよ！　だが、判ったところでどうしようもないだろ！　魔力全開でようやくどうにかなるって話だ！　それにな！　コイツの出力はこんなもんじゃないぞ！」

相撲の四股を踏む動作をした甲冑男。すると「うぐっ・・・！」ＡＭＦの出力や効果範囲が上がって、わたし達のバリアジャケットが強制解除されてしまった。唯一、Ｓランクのはやてだけがなんとか騎士服を維持してるけど、「あ、アカン・・・、キツイ・・・」かなりギリギリなよう。

「アルフは下がって！」

フェイトが叫ぶ。アルフは使い魔だ。わたし達よりＡＭＦの効果を受ける度合いが強い。だから「すまないね」アルフは後退。

「形勢逆転だな、おい。チーム海鳴なんて名ばかりのガキの集団じゃないかよ」

余裕を見せ始めた甲冑男は、「ほら、撃ってみろよ魔法」ってなのは達に無防備な体を晒す。ああいう武装の性能だけで自分を強者だって思い込む奴が特に嫌い、大嫌い。仕方ない。骨の１本や２本くらいは覚悟してよね。

「アルフ！　岩！」

後退したアルフにそう言う。それだけでアルフは察してくれたようで、「あいよ！」地面を全力で殴って大小さまざまな岩塊を作ってくれた。そして「おらよ！」アルフが岩を甲冑男に向かって放り投げた。

「馬鹿め！　そんなもんに当たるかよ！　当たったところで――」

甲冑男は自分の防御力を見せつけるかのように両腕を広げて体を晒して、「見ろ！　コイツには傷１つとして付くかねぇ！」岩に当たって見せた。確かに傷は付いてないし、衝撃で倒れるようなこともなかった。わたしは視線で、続けて、ってアルフにお願いする。

「どんだけでも投げるがいいさ！　岩が尽きたところでお前らは終

わりだ！」

「どうすんのよ、シャル」

アリサ、それになのは達が不安そうな目を向けて来た。だけど「問題ないよ。アイツの意識はアルフと岩に向いてる」って微笑んで見せて、わたしはＡＭＦ効果範囲に出る。"キルシュブリューテ"を具現した鞘に収めて、居合いの構えを取る。魔力を脚に集中。見詰めるは甲冑男。深呼吸を１回した後、息を吸って止める。

――閃駆――

前傾姿勢で突撃。効果範囲に入ったことで脚への魔力強化が途絶えるけど、初速を得るだけの強化だったから構わない。甲冑男はわたしの接近に気付いてない。飛来する岩に当たって見せたり、殴って迎撃したり、大笑いしてる。どんだけ間抜けなんだろう。ひょっとすると今まで負けを知らなかったのかも。かなり性能の良い甲冑だし。でもね・・・

「せいっ！」

「うご・・ふ・・・ぐぅっ・・・！？」

鞘から引き抜いた"キルシュブリューテ"を甲冑男の脇下――甲冑の継ぎ目から覗く肉体に直接叩き込む。ボキボキ、メキメキ、右腕の骨が折れた音が耳に届いた。甲冑男が折れた右腕を押さえて「ぎゃぁぁぁぁ！」空を仰ぎながら悲鳴を上げた。わたしはさらに「ふ

んっ！」柄頭で甲冑男の喉を打つ。これで終わり。甲冑男は激痛で意識を手放した。

「騎士を相手に、性能頼りの武装だけで勝てるなんて思わないでよね」

魔力なんかなくたって強い騎士は本当に強い。わたしはまだまだだけど、コイツくらいなら倒せる。それからなのは達に甲冑を外す手伝いをしてもらって、ＡＭＦ効果を解除。甲冑男の正体は１０代後半くらいの青年だった。若気の至り、か。バインドで拘束して、「おーい、そっちは大丈夫か～？」無傷で戻って来たヴィータ達と合流した。

Ｅｐｉｃｏ２３其は天に座す竜を守護せし鉄壁の暴風～Ｃｈｅｖａｌｉｅｌ～

ここは時空管理局に未だ認知されていない無人世界。人の手が何一つとして入っていない為に大地には自然が溢れ、動植物は自然の摂理にのみに従って存在し、空もまた手つかずの澄みきった青空が広がっている。その青一色の中に巨大な黒い影が在り、ゆっくりと空の中を進んでいた。

影の正体はロストロギア専門蒐集組織・リンドヴルムが本拠地としている建造物だ。名を天空城レンアオム。別名を竜の棲み処。その名の通り天空に浮かぶ城だ。いや、城というよりは島だ。１００万平方メートルという広大なエリアに、様々な建築方式の城や塔が幾つも建っている。島の縁全周には砲台が１２基と設けられ、島の下層にはリンドヴルム保有の次元航行艦がためのドッグがある。

時は第２小隊ドラゴンアイズが海鳴市に侵入する十数時間前。

「――くそっ！　なんであの時に言わなかった、アイリ！」

「だって聞かれてなかったもんね～」

レンアオムに数ある城の中でも中央に建つ本城の１階廊下。そこには１人の男と１人の少女が居た。男の名前はシュヴァリエル。リンドヴルムに所属する最強戦力で、"堕天使エグリゴリ"の１機。何故、リンドヴルムに所属しているのかは不明。

少女の名はアイリ。古代ベルカ時代にてルシリオン（オーディン）を主としていた融合騎の1人。リンドヴルム保有のロストロギアの中でも特別扱いをされており、そのおかげで待遇は悪くなく、かなり好き勝手をしていても許される立場に居る。が、隙があれば逃亡する意思はある。だが、シュヴァリエルにバレては失敗を繰り返す。その回数、すでに4桁。

「まさかあの時の子供2人が・・・・！　それを知っていれば俺はみすみす逃すことは無かった！」

「あの時にシュヴァリエルがアイリの羽を引っ張らなかったらまた違ってたのにね。ザマァですね～♪」

ツンツンと逆立った髪をガシガシ掻き毟るシュヴァリエルへとアイリが皮肉を言うと、「クソガキ・・・！」彼のこめかみがヒクついた。今のアイリは本来の３０ｃｍ程の身長で、「リンドヴルムが困れば困るほど、アイリは嬉しんだよね～♪」と、シュヴァリエルの目の前をひらひらと舞う。

「ハエみたく目の前を飛ぶな、鬱陶しい。・・・フン。確かにあの子供2人を逃したのは大きな痛手だったが、すぐにでも見つけて回収するさ。俺たちがこうして元の時代、元の次元世界に戻って来られたのが良い証拠だ」

アールヴヘイムでの一件から数日の今日。転移門ケリオンローフェティタの暴走でどこへとも転移されるか不明だったシュヴァリエル達だったが、転移の結果は1時間～2時間先の未来で、ここ無人世

界に近い別の無人世界だった。直前での座標設定が運良く働いたようだ。

「無事、ね。ドメスティキに乗ってた全員がミイラ化・白骨化していたのに、無事ってよく言えるね」

「倉庫に残っていた神器（ロストロギア）はすべて正常稼働していたし、アイツらも訳の解らない時代や次元に飛ばされることなくホームに戻って来られた。それは幸運じゃないか？」

「・・・・馬鹿みたい」

2人の会話の通り、3小隊のメンバーが乗っていた旗艦"ラレス・ドメスティキ"は　2時間先の未来へと飛ばされていた。転移先はシュヴァリエルとアイリが到着した無人世界とはまた別だが、こことは割と近い無人世界。しかし全員がミイラ化、もしくは白骨化していて、"ドメスティキ"は転移前と変わらない状態だった。純粋な人間だけが急速に成長し、そして果てた状況だった。

「・・・ああ、馬鹿みたいだな。人間は脆い。俺やお前は何百年と生きようと変わらないのにな」

「・・・アイリは・・・普通に成長して普通に死にたいね。時間に取り残されるのはやっぱり嫌だしね」

「あっそ。・・・ま、そんなことはどうでもいいさ。あの2人も直にどっかの次元世界で見つかるだろ。うちのメンバーや有志諸君が

次元世界に散って捜索しているしな。先に転移門に入ったドメスティキが2時間先の未来。最後に入った俺とお前が1時間先の未来。その狭間に入ったあの2人も似たようなもんだろ」

「だと良いね。・・・ふわぁ。アイリ、寝足りないからもう1回寝ようっと。あ、そうそう。起こすと許さないか――」

「シュヴァリエルさん！　ドラゴンアイズから報告です！」

アイリが与えられた自室へ戻ろうとしたその時、1人の青年が忙しなく駆け寄って来た。その青年の報告書データを貰ったシュヴァリエルは「おい、待て、アイリ」ガシッと小さなアイリの体を鷲掴んだ。当然、「やめてってこういう掴み方！　淑女（ダーメ）のエスコートもまともに出来ないの！？」ってぎゃあぎゃあ喚き散らす。

「何が淑女だ、ガキが。・・・子供の内の1人を発見した。発見場所は第22管理外世界ミルマーナ。だが、どうやらソレは自身や相手への強制転送能力を持っているようだ。世界を渡って逃走しているわけだ」

「回収をアイリにも手伝わせるわけ？」

「そういうわけだ。お前はアールヴヘイムであの2人と関わっていただろ」

「偶然なんだけどね。アンタの部屋でのんびりしてたらいきなり空に投げ出されて、とりあえず空を飛んでたら目の前に急に現れて落

下し始めたから助けただけ。だから名前も知らない・・・。だけど、ここに連れて来てもいいなら、友達になりたいって思うけどね」

「おまえ以上に貴重な存在だ。友達どころか使用人になるかもな」

「いいよ、それでも。話が通じる相手なら誰でもね」

こうしてシュヴァリエルとアイリもまた、アールヴヘイムより消えた少年少女を確保するために動きだした。

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

久々にあたしらの前に姿を見せたリンドヴルム。この前は変な巨人型ロストロギア（強かったよなぁ）をまんまと奪われちまったけど、今回はそうはいかねぇ。奴らの狙いっぽい子供はあたしら管理局が責任を以って保護するぜ。つうわけで、あたしらは見事にリンドヴルムを返り討ちにして、今は１つの場所に集めて地面に転がしてある。

『――事情は判った。そこから一番近いところを航行している艦と捜査官チームをすぐに・・・最短で３０分だな。すぐに向かわせるから、そのまま待機を頼む。すずか。申し訳ないがもうしばらく結界維持を任せる』

「はい」

クロノ執務官に連絡を入れて、応援を寄越してもらうことにした。

付近に次元航行艦もねぇし、アースラも今は本局だしな。つうわけだからもうしばらく結界内で、バインドで拘束したリンドヴルム兵を監視することになった。

「それにしても、どうしてリンドヴルムはこの男の子を狙ってやって来たんだろ？」

なのはが小首を傾げる。こん中でリンドヴルムと因縁があったのはあたしら八神家だけだったけど、なのは達も局に入ってからリンドヴルムみてぇな犯罪組織についても多く学んでることで、そんな疑問も当然出てくるわけだ。

「そうよね～。魔力を感じることから見て魔導師よね。もしくは騎士」

「いやいや。こんななよっとした奴が騎士なわけねぇよ」

「そうとは限んないでしょ。あんたやシャマル先生みたいな華奢なのも騎士やってんだし」

アリサとそんな話をしてると、今回のリンドヴルム兵の中で一番若い奴（なのは達がブッ倒した奴だな）が目を覚まして、「くそ・・・。ツイてねぇ、全くと言っていいほどツイてねぇ」ってあたしらを見て自嘲した。

「ああ、そうだな。お前たちはツイていなかった。よりにもよって、我々が居るこの海鳴市へ少数で来て、しかも喧嘩を売ったのだ。自

嘲したくなるのも解る」

シグナムがそう言い放った。運が悪かったとしか言えねぇよな、確かに。だけどソイツは「俺の事じゃない。お前たちだよ、ツイてないのはさ」って嘲笑いやがった。

「どういうことや・・・？」

「ハハ、ハハハ、ハハハ・・・・」

「ちょっとアンタ、笑ってないで答えなさいよ」

「ヒヒ、フフ、フハハハ・・・フヒヒ・・・！」

「うぅ、はやてちゃん。この人、こわいですぅ・・・」

それから何を言っても狂ったように笑い続けるから、もう1度気絶させてから放置ってことになった。怖がるリインをはやてと一緒にソイツから離して、あたしとシグナムとザフィーラとルシルの騎士組だけでリンドヴルム兵の監視を務めて、なのはら魔導師組＋シャマルとシャルは子供の保護優先の陣形で待機だ。

「やっぱりどれもこれもロストロギアだった物のレプリカだな。とは言ってもオリジナルの性能と同等に近いと思う」

「その割にはつまらん能力ばかりだったな。まともな物は甲冑くらいだ」

リンドヴルム兵の装備を確認し終えたルシル。シグナムが言うようにコイツらの武装は大したもんじゃなかった。そんなロストロギアのレプリカを封印したけど、ルシルの表情は晴れない。どっかソワソワしてて、心ここにあらずって感じだ。

「どうかしたんか？　さっきから変に周囲を気にしてんだろ。そこまでお前が周りを気にするなんて珍しいっつうかさ」

「・・・ソイツの言っていた、俺たちがツイていない、っていうのが気になって・・・」

「苦し紛れに負け惜しみではないのか？」

「あたしもシグナムに同意見。最後は狂っちまったし、単純な負け犬の遠吠えだって」

あたしとシグナムがそう言うけど、ルシルの表情も雰囲気も変わらずに暗い。けど、次にルシルが発した言葉に、あたしらもまたそうなっちまうことになった。

「リンドヴルムには・・・エグリゴリが居るんだ」

「「「っ！」」」

そうだった。リンドヴルムにはシュヴァリエルっつう"エグリゴリ"らしき奴が居るんだった。第１４管理世界ウスティオであたしら局

員を襲った暴風。アレはシュヴァリエルが放った攻撃だったって、あとでルシルに聞いた。

――ただの気流操作で起こった暴風だったから死傷者は出なかった。もしアレに攻撃魔力が付加されていたら・・・全員が削岩機にかけられたように粉々にされているところだ――

想像しちまった。生きたまま粉砕されるなんてとんでもねぇよ。あたしら守護騎士が苦戦したうえ殺されちまったバンヘルド。ソイツよりずっと強ぇ"エグリゴリ"の危険存在が今、ひょっとするとこの世界に来ちまうかもしんねぇ。ルシルはそれが気掛かりなんだ。

「ルシリオン、お前の想像が当たるとしたら、我々はどうなる？」

「シュヴァリエルの行動目的で変わってくるとは思う。奴がリンドヴルムの1人として来たのなら、このコイツらや武装は大人しく返そう。少年についても最悪、見捨てるしかない」

局員として、つうか人としてもアウトな選択だよな。けど、下手に刃向かってはやてやリイン、なのは達の誰かから死人が出るのだけはなんとしても避けてぇ。あたしは「もし、エグリゴリとして来たら？」訊く。たぶん答えは聴くまでもない。コイツはきっと・・・

「みんなは何も考えず、ひたすら逃げることにだけ集中してくれ。俺は独り残って、シュヴァリエルを・・・迎え撃つ！」

ルシルは勇ましくそう言ったけど、目には焦りの色があるし、表情

は青いし硬い。ダメだ。今、ルシルとシュヴァリエルを戦わせんのは。でも、あたしもここで負けて死んだらそれまでだ。"夜天の書"はもう無いから、転生機能は働かない。だからってルシル独り残して逃げろって言うのかよ。

「私も逃走の時間稼ぎをしよう」

シグナムがサラッと言い放った。あたしは迷ったのに、シグナムは迷わなかった。だけどルシルが「馬鹿を言うな。転生機能が無いんだぞ。却下だ」ってすぐに断った。それでも「対エグリゴリ用のカートリッジを渡してくれ」シグナムは引き下がらねぇ。

「ルシリオン。お前も持っているのだろ？　エグリゴリに通用する魔力が込められたあの特殊なカートリッジを」

「・・・ダメだ。バンヘルドとは訳が違う。三強なんだぞ、シュヴァリエルは。きっと今の俺のカートリッジじゃ通用しない・・・」

「だがお前は残るのだろ？　まさか自分はクローンだからここで死んでも次があるからと言わないだろうな。お前の後継には記憶が引き継がれないのだろうが。次のセインテストはもう・・・我らの知るお前とは違うのだ」

シグナムはもちろん、さらに「ドラウプニルはあるか？」ザフィーラまでもが残ろうとし始めた。"ドラウプニル"。バンヘルドん時にオーディンがシャマルとザフィーラに渡した腕輪のことだ。アレがあれば対抗できるって、ザフィーラも憶えてたんだな。

「・・・それでもダメだ。みんなも逃げろ。シュヴァリエルは俺独りで迎え撃つ！」

「あ、あのさ！　あたしも――」

そう言いかけたところで・・・

「面白な、そのジョーク。じゃあ、俺と一対一で闘ってもらおうじゃないか」

聞こえちゃいけねぇ声が、はやて達の方から聞こえた。そっちに目を向けると、はやて達のずっと奥の山林から1人の男が音もなく現れた。体格のいい若い男だ。コイツだってすぐに理解した。コイツが、"エグリゴリ"三強の内の1機で、以前にあたしやシグナムら武装隊や特務一課を撃墜した張本人・・・

「シュヴァリエル・・・！」

「「「シュヴァリエル、さん・・・？」」」

ルシルだけじゃなく、なのはとアリサとすずかまでもがソイツの名前を呼んだ。シュヴァリエルともう1機のレーゼフェアっつう奴が

なのは達とすでにコンタクトしてたって言ってたな、ルシルの奴。

「・・・げろ・・・逃げろ！　ソイツもリンドヴルムだっ！！」

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

ルシルは"エヴェストルム"のカートリッジをロード。そんで初っ端から空戦形態になって、シュヴァリエルに向かって突撃した。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒ルシリオン†††

ＶＳ・―・―・―・―・―・―・

其は竜の棲み家を護る防風シュヴァリエル

・―・―・―・―・―・―・ＶＳ

最悪だ、あまりにも早い遭遇だった。元・"戦天使ヴァルキリー"のヘルヴォル隊隊長にして風嵐系最強機、シュヴァリエル・ヘルヴォル・ヴァルキュリア。リアンシェルトの言うようにレーゼフェア、フィヨルツェンと順を追って救っていきたかったんだがな。

（だからと言って退くわけにはいかない！）

シュヴァリエルが姿を見せるかもしれないという想定をしていた時に、俺はふと正月に引いたおみくじの内容を思い出していた。退けば後に不利となる。躊躇わず勝負せよ、という内容だった。おそらく今回の遭遇を示していたのかもしれない。ならば・・・

「俺がシュヴァリエルを引き付ける！　みんなは今すぐにこの場から離れろ！」

戦うしかないだろう。はやて達を俺とシュヴァリエルの死闘に巻き込まないようにするために、彼女たちを問答無用で遠ざけなければ。巻き込み事故で誰かが死んでしまうような事態だけは避けたい。

「あ、あの、でも、シュヴァリエルさん、私たち知り合いで・・・」

「馬鹿！　ソイツにはそんな人間らしい感情なんて持ち合わせてない！」

「酷い言い草じゃないか。ええ？　ま、少し予定が狂ったがいい機会だ。力の差を思い知らせてやるよ！」

シュヴァリエルが"極剣メナス"を具現して携えた。"メナス"は俺が製造した神器だ。全長２ｍの片刃の大剣で、風嵐系術者の魔術効果を高める機能を持たせた。さらにはシュヴァリエル専用ということで重く・堅く・純粋な破壊力に特化した、刀剣類というよりは打撃武器に入るかもしれない武装に調整してある。

「おおおおお！」「フンッ！」

"エヴェストルム"を神器化するための神秘を含んだ魔力カートリッジを計４発ロードしたうえでシュヴァリエルへと斬りかかる。シュヴァリエルは"メナス"による迎撃。刃が衝突すると「きゃあああ！」なのは達が衝撃波で吹っ飛んだ。言葉で逃げてくれないな

ら、こうでもして無理やり距離を開けさせるしかない。

「フェンリル！　はやて達を逃がせ！」

「イエス、マイマスター！」

「フェンリル狼か。後で下手に邪魔されちゃ敵わん」

こちらは両手持ちで斬りかかっているのに、シュヴァリエルは片手だけで柄を持ち、俺の全力の斬撃を受け止めている。判りきっていたが、膂力が圧倒的に違い過ぎる。それゆえに空いている左手がフェンリル達に向けられた。シュヴァリエルの左右で風が渦巻き・・・

――十裂刃風――

「やめ――」

渦巻く風は2つの真空の刃となって放たれ、フェンリルを十字に襲った。今のフェンリルには戦闘能力はないため、「フェンリルさん！？」成すすべなく寸断されて、魔力となって霧散した。はやて達はその光景に目を大きく見開き、ガクガクと体を恐怖に振るわせてその足を止めた。

「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！　はやて達を逃がせ！」

頼りはシグナムら大人だけ。シグナム達は少し迷いを見せたが、それでもはやて達を逃がすために動いてくれた。しかし「わたしは一緒に戦う！」はやてとシャルがそんなことを言いだす始末。するとなのは達にも、残ろう、って空気が。

「いけません、はやてちゃん！　私たちでは相手になりません！」

「馬鹿！　お前が残ってもしゃあねぇんだよ！」

シャマルがはやての腕を掴んで無理やりにでも連れて行こうとし、ヴィータは怒鳴り声を上げてシャルの腕を掴んだ。あのシグナムも「お前たちもだ、残ろうとするな！」と声を荒げたことで、現状がどれだけ危険な事態に陥っているかなのは達も察した。

――舞い降るは、汝の雷光（コード　パシエル）――

鍔迫り合いをこちらからやめ、一足飛びで後退。魔術化させた雷槍４０本を一斉射出し、着弾させる。魔力爆発と放電が発生した。が、シュヴァリエルは「弱い、弱すぎる」障壁も何も張らず、その身１つで受けきった。Ｓランクの魔力程度じゃアイツの装甲に傷１つも付けられないか。

「おっと。その子供は置いて行ってもらおうか」

シュヴァリエルの目が、少年を抱えているアルフに向けられた。シュヴァリエルは管理局員相手に平気で攻撃を加えることが出来るような奴だ。アルフの骨の１本や２本くらいは容易く折るだろう。だ

が、そうはさせない。

「我が手に携えしは確かなる幻想！」

足りない魔力は外から補充するまで。アインスが旅立ったあの日、はやて達から頂いた魔力をここで使う。"魔力炉(システム)"へと魔力を流し込み、使用魔力を強制的にＳＳＳランクへと引き上げる。

（退けば後に不利となる。躊躇わず勝負せよ、か・・・！）

ただ、全開で戦うには足りないのがネックだ。ジュエルシードを使えばいい話なんだが、ジュエルシードの魔力波は管理局のデータベースに登録されている。使ったら最後、テスタメント・ステアの正体が俺だと気付かれる。それだけはまだ避けておきたい。戦闘場所が海鳴市で、側にはやて達が居る。それが俺の最大のデメリット。

「ん？　なんだ、この魔力の増加量は・・・？」

「お前を救うためのとっておきの１つだ！」

――女神の陽光(コード・ソール)――

"エヴェストルム"先端より火炎砲撃ソールを発射。ＳＳＳランク、しかも魔道化している上級術式となったことでシュヴァリエルも迎撃へと移った。竜巻を纏わせた"メナス"の柄を両手で握り、「崩山裂衝ぉぉっ！」真っ向からソールへと刺突。ソールは先端から粉砕され、勢いの衰えない削岩機のような竜巻が俺へと迫る。回避の

ために空へと上がり、「早く逃げるんだ！」なおも迷いを捨て切れていないはやてとシャルへと叫ぶ。

「「でも！」」

今にも泣きそうな表情を見せるはやてとシャル。フェンリルの消滅がよほど堪えているようだ。

――力神の化身（コード・マグニ）――

――崇め讃えよ、汝の其の御名（ミカエル）を――

上級の自己強化術式マグニを発動後、すぐに中級最強の汎用多弾砲撃ミカエルを発動。背より蒼翼２２枚を射出し、シュヴァリエルへ向けて砲撃を連射する。奴は"メナス"や空いている左手での裏拳で迎撃し、迎撃できない砲撃はその身で受けた。が、「よろけさせることも出来ないか・・・！」歯噛みする。

「そこの犬耳！　逃げるならその子供を置いて行きな！」

「俺を放ってどこへ行こうって言うんだ！」

――破り開け（コード）、汝の破紋（メファシエル）――

――集い纏え（コード）、汝の閃光槍（ポースゼルエル）――

――豊穣神の宝剣（コード・フレイ）――

アルフへと突撃を始めるシュヴァリエルの行く手を遮るように俺は降り立ち、障壁・結界破壊、閃光系魔力付加、さらにオートで最善の斬撃を振るうことの出来るフレイを発動。どれも魔道化しているため、傷の１つくらいは付けられ、足止めも出来るはずだ。まずは全蒼翼を周囲へと呼び戻し、「撃てッッ！」２２発の砲撃を斉射。

「っ！」

目の前がサファイアブルーに輝く魔力爆発に染まる。そんな中から「ヌルい！」シュヴァリエルが飛び出して来た。そこで二剣一対形態のツヴィリンゲン・シュベーアトフォルムにした"エヴェストルム"を振るった。フレイの効果によって、俺が振るった軌道が強制的に修正される。振り下ろした右腕はミシミシと音を立てて横薙ぎに、同様に振り落とした左腕はボキボキと刺突へと変更。

「よくこれで俺を斃そうなんて思ったな、神器王」

――風翔涛駆――

ポツリと呟かれた俺の二つ名。次の瞬間、俺は空高く舞っていた。きりもみしているのか視界が空と地と、グルグル回る。そして浮遊感から落下感へと変わる。体勢を整えようとしても体が動かないし魔術も発動できない。思っている以上に身体ダメージが大きいようだ。救いは思考が途切れていないこと。頭の方までパアになっていたらどうしようもない。

「ルシル！」

――閃駆――

あと僅かで地面に墜落と言ったところで、シャルが俺を抱き止めた。助かりはしたが、「・・・ば・・・か・・・」無謀なマネに対する文句も言いたい。しかし上手く発せない。揺れる視界の中、はやてやシグナム達、さらにはなのは達までもがシュヴァリエルに挑もうとしていた。止めようとしても声も出ない、体も動かない、魔術も発動できない。だが、そんなことも言っていられない。

（どの記憶でも持って行け！！）

俺は短期決戦へ持ち込むために創世結界内の複製品――そして記憶を犠牲にし、魔力量を大幅に上昇させた。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

ルシルがあっさりと戦闘不能に陥った。シュヴァリエルは咄嗟に暴風を纏って鳥のような姿になると、妙な軌道で振るわれた斬撃を真っ向から突っ込んでこれを迎撃。そしてルシルを空高くまで吹き飛ばした。"エヴェストルム"は粉々になって、蒼翼も消滅、騎士服も上半分が消し飛んで、ルシルの両腕は曲がっちゃいけない方向に曲がってる。

「ルシル！」

ヴィータの腕を振り払い、わたしは両脚を魔力で強化して閃駆でルシルの元へ。地面に激突するギリギリでキャッチ。頭や鼻、それに口からも血を流していて、目は焦点があってない。けど、「・・・・ば・・・か・・・」馬鹿って言えるほどには頭はしっかりしているみたいで、少し安心。

――第二級粛清執行権限解凍――

なのは達が、男の子を抱えるアルフを護るようにシュヴァリエルと対峙。正直、ルシルをこうも簡単に戦闘不能に出来るシュヴァリエルを相手に勝てるなんて思ってない。けど、ここで退けないって思うのはみんな同じ。わたしも参戦・・・の前に、ルシルをシャマル先生の元へ連れて行こうとしたそんな時、抱き止めていたルシルからとんでもない魔力が発せられた。

――女神(コード・エイル)の祝福――

そしてサファイアブルーの魔力がルシルの全身を包んで、そのダメージを一瞬にして完治させた。ルシルは「ありがとう、シャル」ってわたしに微笑んでくれた後に立ち上がって、「でも早く逃げてくれ。俺でもそう長くは保たない」そう言って・・・

「その子たちに手を出すなぁぁぁぁーーーーーッッッ!!!」

――邪神(コード・ロキ)の狂炎――

「っぐ・・・!?」

ルシルの姿が変わる。両腕両脚に、蒼じゃなくて真っ赤に燃える1mほどの炎の腕と脚を、そして背中から一対の炎の翼を創り出して、シュヴァリエルへと突撃した。その熱気に思わずたじろぐ。

「やっと本気か！　来いよ！」

「うおおおおおおおおおおおおおッ！！」

シュヴァリエルがなのは達からルシルへと振り返って、目をギラリと光らせた。ここからが本番なんだって否応なく理解させられた。暴風纏うシュヴァリエルの大剣と、ルシルの両腕に付加されてる火炎の腕による斬撃と打撃の応酬が始まった。周辺の木々が燃えては暴風で消火されて、大剣で斬り倒されては炎で灰になったりと、一歩間違えば大災害になるような事態が繰り返される。

「・・・みんな！　今の内に逃げるよ！」

わたしはなのは達の側へと駆け寄って、ルシル達から早く離れようとする。シグナム達も「行きましょう、主はやて。お前たちも」この場を後にしようと、はやて達を諭す。

「そやけどルシル君をひとり残すなんて出来ひん・・・！　だって、さっき・・・ルシル君・・・！」

はやてがボロボロ涙を流して今まで以上の迷いを見せた。さっきのルシルを見れば当然だよね。好きな相手だったなら尚更。わたしだ

って今でもあのボロボロの姿には全身が恐怖で震える。下手をすれば死んでた。というより、普通の魔導師だったら確実に死んでる。なのは達も顔を青くしていて、でもデバイスをしっかりと握り締めてる。

「それでも逃げるの！　わたし達が居たって、あの闘いに干渉できないでしょ！」

――燃え焼け（コード）、汝の火拳（セラティエル）――

――女神の陽光（コード・ソール）――

炎の両手の平から火炎砲撃を発射するルシルと、大剣を軽々と振るって斬り裂いて対処するシュヴァリエル。

――咲き乱れし（コード）、汝の散火（マルキダエル）――

炎の腕を振るって火炎弾をバラ撒いたルシルが「ジャッジメント！」ってコマンドトリガー（なのはのシュートや、フェイトのファイア、みたいな単一音声発動）を合図に、数十発の火炎弾を一斉爆破。包囲されていたシュヴァリエルが炎に包まれた。

――舞い振るは（コード）、汝の獄火（サラヒエル）――

ルシルはそこへ向けて１００本以上の火炎槍を「ジャッジメント！」一斉射出。着弾してさらに大爆発が起きた。その爆風だけでこっちが吹き飛ばされそう。あんなふざけた魔力を有した大火力魔法の連

発、並どころか局や教会騎士団の上位でも耐えらんない。なのに・・・

「おら、どうしたよ！　お前の全力はこんなものじゃないだろうが！！」

シュヴァリエルは無事だった。火傷を負った様子も無し。でもロングコートだけはとうとう焼けて破れきっていた。

――無慈悲たれ（コード）、汝（プシエル）の聖火――

そんなシュヴァリエルの背後から蒼炎の龍が現れて、パクっとアイツを丸呑みした。ルシルは「第一級神罰執行権限・・・解凍！！」そう叫ぶと、その魔力がまた跳ね上がった。それはもう人間が出せるような出力じゃなかった。ルシルは目、耳、鼻、口、頭、指先、色んなところから血が噴き出してよろけた。もう限界なんて超えてるのが目に見えて判る。

「いや・・・いやや・・・もうやめて、やめてぇぇぇぇーーーーーっっ！」

悲鳴を上げたはやてがルシルに向かって駆け出そうとしたのを「ダメ！」わたし達みんなで止めた。ホントはわたしだって駆け寄って止めたい。あんな無茶な真似、あまりに危険過ぎ。だけど出来ない。発せられる魔力があまりにも強大過ぎて、接近することすら難しいほどの衝撃波を生んでる。

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想ッッ！！　星填砲シュヴ

ェルトラウテ！」

詠唱したルシルの左脇に２ｍ近い、質量兵器――無反動砲のような物が具現された。炎龍を暴風で吹っ飛ばしたシュヴァリエルが「それでこそだ！」大剣を勢いよく振り下ろした。

――剱乱舞刀（ケンランブトウ）――

「黄金極光（ポラール・リヒト）！！」

真空の刃がいくつも放たれて、「っ！！？」ルシルを斬った。ルシルの右腕は肘の辺りから斬り飛ばされて血を撒き散らしながら宙を舞い、綺麗な長い銀髪も肩辺りでざっくり斬られて、他にも体の至る所から血が噴き出す。

「「「「「っ！！」」」」」

「ルシル・・・くん・・・！」

なのは達が顔を青くしてフラリと倒れ込みそうになったのを支える。ショッキング過ぎる光景だもんね。わたしもショックで倒れそうだけど、なんとか耐える。

「ぐぉあ！」

それと同時にルシルが放った黄金に輝く魔力砲撃がシュヴァリエルを直撃。着弾時に発生した魔力爆発と衝撃波にわたし達は悲鳴を上

げることも出来ずに吹き飛ばされて、気が付けばルシル達から大きく距離が開けられてた。

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想！　神剣ホヴズ！」

「面白れぇぇぇーーーーッ！」

ルシルは片腕が無い状態でも新たに別の武装――クリスタルのような剣身を持つ両刃剣を携え闘い続ける。また、シュヴァリエルの方も左の前腕部を失ってた。さっきの砲撃でようやくダメージを入れられたんだ。お互いに片腕を失ってもルシルとシュヴァリエルは斬り合う。それがあまりにも辛くて涙が溢れ出る。

「っ・・・い・・・つ・・・・」

倒れていた体を起そうとした時、背中に痛みが走ってる。木に打ち付けられた所為だ。それでも懸命に体に起こして辺りを見回す。なのは達は完全に気を失ってるみたい。そしてシグナム達は「行かせて！」ルシルの元へ行こうとするはやてを押し留めていた。

『イリス！　お願い！　体を貸して！』

シャルロッテ様の意識から思念通話が来た。その今まで聞いたこともないような必死さに「はいっ！」わたしは即答した。

『ありがとう！』

わたしの意識が沈んで、代わりにシャルロッテ様の意識が浮かび上がってくる感覚を得る。そして完全に体の支配権がシャルロッテ様に移った。わたしは自分の目に移る光景をシャルロッテ様視点で眺めることに。

「はやて、私が行く！　シャマルは、ルシルの治療のスタンバイと、本局医療局に連絡！　シグナム達はなのは達をお願い！」

そう指示を出すシャルロッテ様が駆け出す。手にはわたしのデバイス・"キルシュブリューテ"。向かうはルシルとシュヴァリエルの死闘の中。

「シュヴァリエルぅぅぅーーーーーっっ！」

怒声を上げるシャルロッテ様。シュヴァリエルの目線がチラッとだけこっちに向くと、「邪魔すんな、剣神！」シャルロッテ様のかつての二つ名で呼んだかと思えば・・・

――十裂刃風・乱刀――

鮫の背ビレのような風の刃を２０、地面を走らせるようにこちらへ放った。フェンリルを消滅させた攻撃だ。シャルロッテ様は「見飽きてるよ、この攻撃は！」そう叫んで、刃と刃の狭間をすり抜けた。だけどすり抜けるための方向転換に消費したその一瞬が、ルシルとシュヴァリエルの死闘に干渉するチャンスを潰した。

「ごはっ・・・・！？」

――轟風暴波――

「な・・・っ！？」

嘘みたいな魔力を発していたルシルが吐血したその瞬間に魔力が消失して、携えてた剣も消え、最悪な事に意識まで失ってしまったようで、シュヴァリエルが放った暴風の直撃を受けた。暴風は地面や木々を大きく穿ちながら、ルシルを何十ｍと吹き飛ばした。その圧倒的な暴力にわたしは思考停止。何も考えられないってなった時、

「あああああああああああああああっ！！！！」

――閃駆――

シャルロッテ様が叫んだ。視界が歪む。超高速で突撃した影響だ。一瞬でシュヴァリエルへと距離を詰めて、「私がお前を殺すッ！」絶対切断能力アプゾルーテ・フェヒターを発動。その能力を宿した"キルシュブリューテ"を振るった。

「クソッ、邪魔すんな！」

「それ以上喋るな！　口を開いていいのは断末魔を上げる時だけよ！！」

流れて込んで来るシャルロッテ様の殺意。そのどす黒さにわたしは得体の知れない感情に呑み込まれそうになる。シュヴァリエルはシャルロッテ様の鋭い斬撃を紙一重で避けつつ、「これでも喰らいな！」

ズボンのポケットから何かを取り出して、こっちに投げた。シャルロッテ様はそれに向かって"キルシュブリューテ"を一閃・・・したのがまずかった。

『「え・・・！？」』

わたしとシャルロッテ様の声が被る。絶対切断能力が強制的に解除されたからだ。その原因らしき刀身に絡みついてるのは幾何学模様が描かれた『お札・・・？』だった。それでもシャルロッテ様は"キルシュブリューテ"による斬撃を繰り出した。

「馬鹿か。お前も、お前だからこそ理解しているだろ。魔導では魔道には勝てないってな！」

刃はしっかりとシュヴァリエルの首に当たったけど、傷1つとして付かなかった。

「大人しく寝てな！」

横薙ぎに振るわれる大剣による一撃。どういうわけか刃の方じゃなくて腹による打撃だった。シャルロッテ様が"キルシュブリューテ"を掲げて盾としたけど、なんてことないその単純な打撃で"キルシュブリューテ"の刀身が砕け散った。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！」

視界が回る。刀身の破壊の衝撃と、大剣の腹による打撃で殴り飛ば

されたからだ。それでも地面に激突する前に体勢を整えて着地。シャルロッテ様がお札を剥がそうとしていたそんな時、

「――いやぁ！　いやぁ！　いややぁ！　目ぇ開けて！　ルシル君！　ルシル君！」

遠く離れたところからはやての慟哭の悲鳴が聞こえた。

『「ルシル・・・！？」』

「助けてシャマル！　ルシル君を助けて！　・・・へん・・・して・・・、して・・ん・・・してへん！　ルシル君・・・！　ルシル君、息してへん！　息をしてへんのや・・・！」

聞きたくない言葉が聞こえた。そっちに意識が全て向いたわたしとシャルロッテ様。そこに、「悪く思うなよ、剣神。これが俺の仕事だ」シュヴァリエルの声がすぐ後ろから聞こえた瞬間、視界がガクンと揺れて・・・わたしは意識を失った。

Ｅｐｉｃｏ２４彼の居ない時間の中で・・・～Ｓａｄ　ｄａｙｓ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「「――起立、礼！」」

「みんな、車には気を付けて帰ってくださいね」

日直の子が号令をかけて、「さようなら」わたしもクラスメイトのみんなも先生にお辞儀。先生が教室を出て行って、クラスメイトの子らも教室を出てく。扉から出てく前に、「はやてちゃん、元気出してね」とか、「ルシル君はきっと大丈夫だよ」とか、「困ったことがあったら何でも言ってね」って、わたしを元気づけてくれた。

「おおきにな、みんな」

わたしは笑顔を作ろうとしたんやけど、上手く出来ひんかった。するとクラスメイトの子らは、無理しないで、って気遣ってくれて、思い思いに教室を出てく。わたしも帰るために机に立てかけてあった松葉杖へと手を伸ばしたんやけど、「あ・・・」掴む前にコツンと指先が当たったことで松葉杖が倒れてもうた。

「しっかり、はやてさん」

「咲耶ちゃん・・・。おおきに」

わたしが通うてる病院の看護師、木花結さんの妹さんで、この４年２組のクラス委員長・咲耶ちゃんが松葉杖を拾てくれた。それを受け取って「よいしょ」っと椅子から立ち上がる。

「お辛いですわね。帰郷してすぐにルシルさんが交通事故に遭われるなんて・・・」

海鳴温泉でのシュヴァリエルらリンドヴルムとの一件から数日の今日は、９月１日。二学期の始業式や。そこで先生からクラスのみんなに、ルシル君が実家のあるノルウェーへ帰郷していて、そこで交通事故に遭うたって知らせた。

ルシル君のホンマの実家は第１２管理世界フェティギアやけど、海鳴市に来たばかりの頃にルシル君はノルウェーの国籍を用意したから、そのままルシル君の出身国はノルウェーになってる。そうゆうわけで、親戚の処にルシル君が帰郷している時、交通事故に遭ったということになった。

（ルシル君・・・）

シュヴァリエルってゆう、とんでもなく強い人にルシル君は負けて、右腕を失ったうえ殺されかけた。ううん、実際に数分の間だけ死んでたんや。そやけどシャマルと、応援に来てくれたベッキー先輩のおかげでなんとか蘇生させることが出来た。そんで全てが終わった後、応援に来てくれた先輩たちが乗ってた次元航行艦シャノンからスカラボ経由で本局に緊急転送されて、スカラボの外で待機してた医務局員の人たちと一緒に医務局へと向かった。

・―・―・回想や・―・―・

手術室の前にある待合室で、わたしらチーム海鳴全員でルシル君の手術が終わるんをひたすら待つ。手術はシャマルやティファレト先生まで参加して行われてて、看護師の人たちが器材を手に忙しなく手術室を出たり入ったりする。それが余計に不安を呼ぶ。

手術が始まってどれだけ経ったやろ。手術室から医務官さんが出て来て、長椅子に座るわたしらのところへやって来たから、わたしは松葉杖を突いてすぐに立ち上る。リンディ提督も立ち上がって「ルシリオン君の容体は・・・？」っ訊ねた。

「小さいお子さんも居ます。場所を変え――」

医務官さんがリンディ提督を連れて場所を変えようとしたから「わたしも聴きます・・・！」わたしはそう言って止める。それでも渋る医務官さんに、「ここで構いません。お願いします」リンディ提督も説得してくれると、「・・・判りました」聞き入れてくれた。

「率直に申しますと・・・非常に危険な状態です。右腕は切り口が鋭く綺麗だったおかげで繋げることが出来ると思いますが・・・。両腕両足だけで数ヵ所の筋断裂・筋膜断裂と複雑骨折。頭蓋骨・鎖骨・胸骨数本・背骨・骨盤もまた酷いものです。さらには全身の切創・擦過傷、腹腔出血、内臓破裂。挙げれば切りがありません。医者である私が言うのもなんですが、正直な話、生きているのが不思議なくらいです。我々も全力を尽くしますが・・・。今夜からしばらくは峠が続くでしょう。ですからご家族にご連絡を。いつルシ

リオン君が旅立っても良いように・・・覚悟をお願いします・・・」

お辞儀した医務官さんが手術室に戻ってく。わたしは足元が崩れたような錯覚を得てその場にへたり込んだ。わたしの名前を呼ぶリインやシグナム達、すずかちゃん達の声がどこか遠い。

「いや・・・いやや・・・。ルシル君・・・ルシル君が・・・死・・・うっ！？」

吐く。旅館で頂いた夕食やったものを吐き出してもうた。ルシル君のボロボロになったあの姿が脳裏に過ぎると、「おぇぇ・・・！」さらにまた吐いた。苦しい、辛い、涙が止まらへん。しかもどうゆうわけか「っ！？・・あ・・・は・・・うぁ・・・！？」息が出来ひんくなった。

「いけない！　過呼吸だわ！」

そんでわたしの意識は飛んだ。次に目が覚めたのは１０時間も後の昼間。

「はやて！」「はやてちゃん！？」「「主はやて！」」

長椅子に横にされてた体を起こす。ヴィータとリインは涙目で、シグナムとザフィーラも不安げにわたしを見てた。辺りを見回すとすずかちゃん達は座ったまま眠ってて、リンディ提督とクロノ君は席を外してて居らんくて、「はやてちゃん。良かったぁ。体は大丈夫？」エイミィさんが声を掛けてくれた。

「なんとか・・・大丈夫です・・・。ヴィータ達にも心配かけたな、ごめんな」

もう何が大丈夫で、何がアカンのか判らへんほどに頭がボーってしてる。リインに「何か飲みますか？」って訊かれて、旅館の夕食からこっち、なにも飲食してへんことを思い出した。それに気を失う前に派手に吐いてしもうたから胃の中は空っぽ。何か入れとかんとアカンし、「お茶、お願い出来るか」そうお願いした。

「はいです。ちょっと待っててくださいね、はやてちゃん」

「リイン、あたしも付いてくよ。お前ひとりじゃなんか不安だしな」

「リインひとりでもお使いくらい出来るですよ」

「そう言って一度、迷子になったじゃねぇかよ」

「それは・・・そうですけど・・・」

そんな会話をしながら自販機に向かったヴィータとリインを見送って、手術室の方を見た。あれから１０時間も経ってるのにルシル君の手術はまだ続いてた。

「ルシル君・・・。神様、どうか・・・どうかお願いします。ルシル君を助けてください」

指を組んで祈る。神頼みしかわたしに出来ることはあらへん。悔しい。そんなことしか出来ひん自分の無力さに腹立たしさを覚える。

――守るべきはやてが居ると思わせてくれるから強くなれる――

ルシル君がそんな嬉しいことを言うてくれたからわたしも・・・

――わたしも守るよ。ルシル君の事。ルシル君を傷つける人が居ったら、わたしが守ったげるからな♪――

そう約束、誓ったはずやのに。何も出来ひんかった。ただ眺めて、叫んで、ルシル君が殺されかけるまで何も・・・何もや。また溢れ出てくる涙。悲しみやのうて悔しさから出てくる。強くなりたい。シュヴァリエルって人すらからもルシル君を助けられるように。

それからさらに2時間。すずかちゃん達も目を覚ましたことでわたしらみんなで寄り添って、リンディ提督とクロノ君も戻って来た頃、ついに手術室の扉が開いて、シャマルにティファレト先生、他１０人ほどの医務官さん達、そんで体中に包帯、チューブやコードが付けられたルシル君が移動ベッドに乗せられて出て来た。

「集中治療室に移動させます。しばらくは面会謝絶となりますから注意してください」

さっき説明してくれた医務官さんがわたしらにそう言って、ベッドに乗るルシル君らと一緒に集中治療室へ去ってった。

「シャマル」「ティファ」

わたしらのところに残ったシャマルとティファレト先生。２人は「全力は尽くしました」って言うて、その場にへたり込んだ。今にも気を失いそうなほどに顔色が悪くて、疲れ切ってた。

「ティファ。ルシルはどうなの？　しばらく峠が続きそうって聞いたけど・・・」

「お嬢・・・。間違いないです。いくら魔法や医学が進んでいても、救えない人は居ます・・・。だけど・・・」

「ルシル君は必ず助けます！　絶対です！」

ティファレト先生やシャマルが強い意志を見せてくれた。

・―・―・終わりや・―・―・

あれから数日。ルシル君は未だに集中治療室で、予断を許されへん容体や。そんでシャマルもあれから家には帰って来てへん。泊まり込みでルシル君の治療に当たってくれてるからな。

「はやてさん・・・？」

「あ、ごめんな、咲耶ちゃん。ルシル君はきっと大丈夫。大丈夫や」

「そう・・・ですわね。ええ、きっとまたあの笑顔をわたくし達に

見せてくれるはずですわ」

咲耶ちゃんとも別れて、「はやて。行こうか」クラスメイトの子らと喋り終えたシャルちゃんのお誘いに「うん」頷いて、一緒に教室を出る。わたしら2組のムードメイカーのシャルちゃんも普段よりずっと沈んでて、今日1日このクラスはずっと静かやった。

シャルちゃんと一緒に廊下に出たら、「迎えに来たわよ、シャル、はやて」アリサちゃん達が居った。すずかちゃんもなのはちゃんもアリサちゃんもフェイトちゃんもアリシアちゃんも、みんないつものような明るい雰囲気やない。

「おおきにな、アリサちゃん」

「ありがと」

「シャルはともかくとして、はやては危なっかしいんだから。足の事もそうだけど、その・・・ほら」

アリサちゃんの言わんとしてることは判る。ルシル君の事や。シャルちゃんもわたしも落ち込み過ぎてあれから食事も睡眠もあんまり取ってへん。そやからしばらくはアリサちゃん家の車で送迎してもらうことになったんや。

「今日も本局へお見舞いに行くんだよね・・・？」

すずかちゃんの問いに「うん」ってわたしは即答する。お見舞いって言うてもルシル君とは会えへんけど。集中治療室の室内へは医務

局に勤める人しか入られへん。そやけどガラス越しにベッドに横たわるルシル君を見ることは出来るから、そのために医務局へ向かう。

「あの一件でわたし達みんな仕事がお休みだし、毎日ちゃんとルシルに会いに行けて良かったよね」

アリシアちゃんがそう儚げに笑みを浮かべる。わたしらチーム海鳴は無期限の休暇をそれぞれ所属してる部隊の上官から言い渡されてる。ルシル君の事、リンドヴルムの事でいろいろと精神的に参ってるやろうからって。

正直、そのお気遣いにはお礼を言いたい。こんな状態で現場に出たとしても、絶対にミスする。そやけどシグナムとヴィータとシャマルは、その休暇を断って今日も仕事に行った。シャマルはルシル君の治療のために、シグナムとヴィータは体を動かす方が、気が紛れてええってことや。

「私たちも一緒していいかな？」

「もちろんや。その方がルシル君もきっと喜ぶと思うから」

ルシル君。海鳴市の空は青く澄んで晴れ渡ってるよ。それやのに、わたしの心の内は曇ってる。ルシル君がひとり居らんだけでこんなに寂しいんやよ。お願いやから早く起きて、またわたしに笑いかけて、名前を呼んでな・・・。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒シグナム†††

「はぁぁぁぁぁーーーーーッッ！」

――紫電一閃――

「ぐあぁぁぁぁーーーーっ！」

魔導犯罪者を一閃の下に斬り伏せる。"レヴァンティン"からカートリッジを排莢し、局より支給される新たなカートリッジを装填する。私とヴィータは、所属する第２２１２航空武装隊の仕事としてある魔導犯罪グループの摘発を行っていた。私がいま斬り伏せたのもグループの１人だ。

カートリッジの装填を終えた私の耳に、「シグナムさん、すごい荒れてますね」同班のセレス・カローラと、「気持ちは解るけどな。あたしもどっちかってぇと荒れてる方だ」家族のヴィータのヒソヒソ声が聞こえて来た。

「ルシル君の事、ですよね・・・。話は聞いてます」

「そっか。いま思い出しただけでも自分の無力さに腹が立つ。なんも出来なかった。ルシルとシュヴァリエルの闘いに干渉できなかった。その意思が潰されたんだ。シュヴァリエルの強さを目の当たりにして・・・、あたしは自分たちの命のために、ルシルを捨てて逃げようとした！」

ヴィータの言葉の節々には自身に対する怒りが滲み出ていた。私とて同じだ。私とて、シュヴァリエルの強さを前に、ルシルへの助勢を躊躇してしまったのだ。何が守護騎士か、何が剣の騎士か。私は

自分の命とルシルへの助勢を天秤にかけ、自分の命を取ったのだ。魔導犯罪者への一撃も、自分の不甲斐なさへの八つ当たりだ。

・――・――・回想だ・――・――・

主はやてからルシリオンが息をしていないという悲鳴が発せられた。シャマルが主はやてとルシリオンの元へと駆け、治癒魔法を発動した。ルシリオンはシャマルに任せるほかあるまい。

そしてシュヴァリエルは、シャルロッテすらも戦闘不能にし、目的とする少年の方へと歩み行こうとしていた。"レヴァンティン"を持つ両手が震える。これまで感じたことの無かった死の恐怖が私の心を掴んでいた。今は死が恐ろしい。主はやて達との別れが怖ろしい。その恐怖が私の体を支配する。

――コイツらや武装は大人しく返そう。少年についても最悪、見捨てるしかない――

ルシリオンはそう言っていた。この場に居る我々が救われるには、おそらくそれが一番なのだろう。だからと言ってこのままシュヴァリエルの思うようにさせていいのか。家族を、ルシリオンをあのような悲惨な目に遭わせたあの男を。友を、シャルロッテを傷つけたあの男を。

「否！」

一歩踏み出す。と、カツンと爪先が何かを蹴った。見ればソレは「エヴェストルム・・・！」の欠片で、しかもカートリッジを装填す

るためのシリンダーの部品だった。カートリッジにはまだ残りがある。"レヴァンティン"と"エヴェストルム"の口径は幸運にも同じだ。

「ルシリオン・・・。オーディン・・・。借ります」

シリンダーからカートリッジを抜き、"レヴァンティン"に装填する。

「あああああああああああああああああああッッッ！！！！！」

そして迷いを断ち切るために声を上げる。バンヘルドにすら殺されてしまった私が、三強の一角であるシュヴァリエルを止めることなど天地がひっくり返ろうとも不可能な事なのだろう。それは重々承知している。だが、一矢報いねば。それが将たる努め。そしていざ、シュヴァリエルへ・・・という時、

「ちょっとシュヴァリエル！　急に艦から居なくなって、ドラゴンハートの連中がうるさくてしょうがないんだけどね！」

また新たな声が聞こえた。その声を聞いた瞬間、先程まで私の胸の内に渦巻いていた決意が消え、代わりにその声への懐古でいっぱいになった。そして、その声の主が姿を見せた。その小さな体、真っ白な髪、腰より生えた一対の白翼は、何百年経とうと色褪せることなく保たれていた。

「アイリ・・・」

「うそ・・だろ・・・。お前、アイリ・・・かよ」

「っ！！」

見間違うことなきかつての家族、氷結の融合騎アイリがそこに居た。

「え・・・え・・・？　うそ・・・？　シグ・・ナム・・・、ヴィータ・・・、ザフィーラ・・・？　それにシャマルも・・・？　ほん・・もの、なの？　夢・・・、幻・・・？」

アイリもまた我々を視認すると自分の頬を抓り、目を大きく見開き、大粒の涙を溢れさせ、「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、なの？」と涙声で我らの名を呼んだ。

「「「アイリ！！」」」「アイリちゃん！」

その問いに答えるべく我らはアイリの名を呼んだ。

「っ、うぅ・・ぅ、ぅ・・・アイ、リ・・だよ・・・アイリ、だよぉ・・・アイリだよぉ！やっと・・・やっと、逢えた・・・！　やっと逢えたぁ・・・！　シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！　やっと逢えたよぉ・・・！」

「おっと。待てよ、アイリ。お前は、リンドヴルムの所有物だろ？」

「ぅあ・・・」

ボロボロと涙を流すアイリが私とヴィータの元へ来ようとしたら、シュヴァリエルがそう言ってアイリの小さな体を鷲掴んだ。そうか。アイリ、お前はリンドヴルムに捕らえられていたのか。これでさらに戦う理由が生まれた。私は「ヴィータ、ザフィーラ！　私がシュヴァリエルを抑える！　お前たちはアイリを確保しろ！」"レヴァンティン"のカートリッジをロードし、シュヴァリエルへと突撃する。

「バンヘルド如きに指1本と触れることすら出来ずに殺された、役立たずの1人か」

「っ！　ああ。その役立たずだ！　だがな、その役立たずにも意地があるのだ！」

――紫電一閃――

アイリを鷲掴んでいるシュヴァリエルの右腕へと"レヴァンティン"を振り下ろすと、ガキンと音を立てて衝突した。が、「っく・・・！」斬り落とすことは出来なかったが、「チッ」奴の握力だけは緩めることが出来た。アイリが解放され、「シグナム！」アイリが私の胸へと飛び込んできた。懐かしい温かみだ。すぐさま「ヴィータのところへ行け、アイリ！」私の側から離れさせる。

「人のもんを奪うなんて公僕のする事じゃないだろ」

「リンドヴルムの犯罪者風情がよく言う！」

――空牙――

"レヴァンティン"を振るい、シュヴァリエルの両目へ向けて魔力刃を放つ。直撃はしたが、「効かねぇよ、この程度の神秘じゃな！」全くダメージを与えることが出来なかった。そして改めて握られた大剣が振るわれる。振り下ろされる大剣を横っ跳びで回避し、「カートリッジロード・・・！」具現した鞘へと"レヴァンティン"を納め、全カートリッジをロード。

≪Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ≫

「飛竜・・・一閃！」

"レヴァンティン"をシュランゲフォルムへと変えた状態で鞘から抜き放ち、至近距離での砲撃級斬撃を繰り出す。シュヴァリエルは斬り返した大剣を盾にし・・・着弾。剣身に付加されていた魔力が爆発を起こす。

「神器王ですら俺には勝てなかった。それがすべてだ」

魔力爆発の際に発生した煙よりシュヴァリエルが飛び出して来た。やはり無傷。しかも「なに・・・！？」ルシリオンの砲撃によって失われていたはずの左前腕が再生していた。

――十裂刃風――

「しまっ・・・・！」

奴の左右に発生した風の渦が刃となって私に放たれ、成す術なく"レヴァンティン"の剣身が粉砕された。

「寝てろ」

「ぐふっ・・・・！」

大剣の柄頭が私の鳩尾に打ち込まれ「げほっ、ぐふっ、ごほっ・・・！」激しく咽る。さらにガシッと顔面を鷲掴みにされ、「っが・・・！」後頭部から地面へと打ちつけられてしまった。後頭部への衝撃が強く、視界が歪む。脳震盪を起こしているようだ。体が動かない。

「アイリ！　戻って来い！　出ないとコイツを殺す！」

「「「シグナム！」」」

私の胸元に硬い感触が当たる。歪む視界の中で見えるのは、シュヴァリエルの持つ大剣の剣先が突き付けられている状態だというもの。アイリがシュヴァリエルに従わなければ、奴はその大剣を無情に落とし、私を貫くだろうな。

（くっ。なんて様だ。アイリを助けるどころか首を絞めているでは

ないか・・・・！）

あまりの悔しさに涙が出そうだ。そんな私の耳に、「判った。だからシグナムには何もしないでよね」と、シュヴァリエルに従う意思を見せたアイリの声が届いた。

「そう、それでいい。こっちへ来い」

「「アイリ！」」

『アイリちゃん！』

「行くな・・・アイリ・・・・！」

私の頭上を飛んでシュヴァリエルの側へと寄り添ったアイリ。アイリは涙を流しながらも「そんな悲しい顔しないで」微笑んだ。

「何百年・・・、何百年と待ってた・・・。シグナムとヴィータとシャマルとザフィーラ、それと・・・シュリエルとアギトは居ないんだね」

アイリの微笑みが陰る。

「でもまた逢えるよね、今みたく・・・。だから待ってる。アイリを迎えに来てくれるのを。何百年と待ったんだもん。あと数年・十数年くらい、待っていられるもん」

「「「アイリ！」」」『アイリちゃん！』

「大丈夫だよ、アイリは。だから心配しないでね。・・・シュヴァリエル。みんなに手を出したら許さないからね」

「判ってる。管理局員を殺す真似はしない」

アイリがシュヴァリエルの肩に座った。そしてシュヴァリエルは「さて。目的を果たすとするか」そう言って、なのは達――正確には少年へと歩き始めた。結局、私は何も出来なかった。自分がほとほと嫌になる。諦めかけたその時・・・

「時空管理局・特別技能捜査課所属、テレサ・テレメトリー一等空士！」

「同じく、トゥーリア・サクロス一等陸尉・・・・！」

「「推参！」」

我々八神家とシャルロッテが所属する部署の先輩である、テレメトリーとサクロス一尉が空から降って来てシュヴァリエルと対峙。さらには武装隊十数人が、バインドで拘束しているリンドヴルム兵の側に転送されてきた。そしてルシリオンと主はやてとシャマルの元には、ベッキー・ペイロード陸曹長が現れた。

「新手かよ。面倒くさいな、おい」

「広域指名手配犯・シュヴァリエルを確認」

サクロス一尉の側に指名手配データが表示されたモニターが展開した。テレメトリーが「まさかリンドヴルムの騎士だったなんてね」と言い放ち、両腕を大きく左右に広げた。

――固有スキル・物質変換／レベル３――

テレメトリーの周辺の地面に大きな穴が幾つも生まれた。穿たれた地面だったモノは白い粒子となってテレメトリーの全身を覆い隠した。次にその姿を見せた時、テレメトリーは全身に白い装甲を纏った姿へと変身していた。以前、任務を共にした際に見た姿だ。確か、高速格闘戦用の軽量甲冑。背中や肘やくるぶしにブースターがあり、それを噴射させての高速移動、高速打撃を可能とする。

「来なさい。私のラブリー・フォース！」

――固有スキル・人形師――

サクロス一尉の号令の下、彼女の周囲に２ｍ近い体長をした１０体の動物のぬいぐるみが現れた。サクロス一尉の自作人形だ。猫や犬、ウサギに熊などなど。全てが二足歩行で、丸っこい両前脚をガツンガツンと打ちつけてシュヴァリエルを威嚇している。

「随分とファンシーな奴が出てきたな。しかも・・・魔導じゃないと来た。だが、魔道の敵じゃないんだよ・・・！」

「行きます！」

「みんな、テレサを援護！」

テレメトリーが背中のブースターを噴射させてシュヴァリエルへ突撃。大剣で迎撃に入るシュヴァリエルだったが、テレメトリーは肘とくるぶしのブースターを利用して、先の読みにくい回避を取り、なおかつ「鬱陶しい・・・！」奴の顔面に拳や蹴りを打ち込んでいく。そこにサクロス一尉のぬいぐるみ軍団が混ざり、シュヴァリエルは一方的に殴られっぱなしとなった。しかし・・・

「何コイツ！　全然効いてない・・・！」

「防御力が高過ぎる・・・！」

どれも決定打にならず、とうとう「廻天轟乱」シュヴァリエルが自身の周囲に発せさせた竜巻により、「きゃあああああ！」テレメトリーとサクロス一尉が吹き飛ばされ、ぬいぐるみは綿を撒き散らしながら粉砕された。

（やはり・・・勝てないのか・・・？）

今度こそダメだと諦める。だが、望みはまだあった。

「ファルコンメン・ツェアシュティーレンッ！！」

シュヴァリエルの背後に転送されてきたのは、特務技能捜査課どころか局内の中でも最強に近い少女・アルテルミナス・マルスヴァローグ空曹長だった。彼女が繰り出した正拳突きが、シュヴァリエルの腰に打ち付けられた。

「うごぉ・・・・っ！？」

（効いた・・・・！？）

シュヴァリエルが反り返る。奴は慌ててマルスヴァローグへと振り返りつつ大剣を横一線に振るった。マルスヴァローグは屈むことでその一撃を躱し、懐が空いたその隙を突いて勢いよく立ち上がり、「もう1発！」奴の鳩尾に拳を打ち込んだ。

「っぐ・・・・！　なんだ、この力は・・・・！？　俺の防壁ごと殴って・・・・！」

「硬・・・っ！　私たちの大事な仲間（かぞく）を苦しめたその罪はちゃんと償ってもらう！！　ツァラトゥストラッ！」

マルスヴァローグの両手首にはめられている腕輪型デバイス・〝ツァラトゥストラ〟が青緑色の魔力光に輝き、周囲の魔力素を両拳に急集束させた。

「上等だよ！　とことん遊んで――っ！？」

シュヴァリエルがそこまで言いかけたところで口を噤み、我々に対して背を向けた。そして「時間切れだ。俺はここで退かせてもらう」そう呟くと大きく跳び上がり、そのままその姿を消した。

・――・――・終わりだ・――・――・

シャマルと、ペイロードの固有スキルのおかげでルシリオンは蘇生できた。が、今もなお予断の許さない危険な状態。このまま死ぬようなことがあれば切腹ものだ。しかもアイリまで奪い返されてしまった。オーディンに顔向け出来ん。

――だから待ってる。アイリを迎えに来てくれるのを。何百年と待ったんだもん。あと数年・十数年くらい、待っていられるもん――

だが顔を伏せてばかりではいられない。アイリは言っていた。迎えに来てくれるのを待っている、と。ならば迎えに行かねばな。ゆえにもっと強くならねば。シュヴァリエルの相手が難しかろうが、それ以外のリンドヴルムを殲滅できるくらいには。

「――シグナムさん。部隊長から集合命令です。壊滅に成功したとのことです」

「行くぞ、シグナム」

「ああ、いま行く」

手錠で拘束した犯罪者を連行し、我々は他の小隊と合流すべく歩きだした。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒アイリ†††

「マイスター・・・・。シグナム、ヴィーダ、シャマル、ザフィーラ・・・」

リンドヴルム本拠地・天空城レンアオムの本城のてっぺんに登って、地平線の彼方を眺めながらアイリの家族の名前を呼ぶ。

・―・―・回想だよ・―・―・

「・・・シグナム、ヴィーダ、シャマル、ザフィーラ・・・」

アイリに用意された私室のベッドにうつ伏せになって、数時間前での出来事を思い返す。アイリにとって初めての家族だったシグナム達とようやく逢えた。それが嬉し過ぎて、こうしてまたリンドヴルムの本拠地・レンアオムへと連れ戻されても辛くない。ううん、ちょっと辛いし寂しいけど、でも信じてるもん。

「また逢える・・・。きっと、絶対、また逢えるから・・・アイリは大丈夫」

そう自分に言い聞かせる。でも「シュリエルとアギト、居なかったな・・・」呟く。まだ"闇の書"が４００頁、埋まってないのかな。気になることはもう１つ。今の主はどんな人なんだろう。マイスタ

ーみたく良い人だったらいいなぁ。

「シュヴァリエル・・・、シグナム達を管理局員って言ってたっけ・・・」

だとしたら今回の主は管理局の人なのかな。じゃあそんなに辛い目には遭ってないよね・・・。シグナム達がアイリを取り戻してくれたらその人がきっと、アイリの新しいマイスターになるんだよね。けどマイスター以外の人を主なんて呼びたくないなぁ。

「逢いたい・・・マイスター・・・。逢いたいよ・・・。またアイリの名前を呼んでほしい・・・。またアイリの頭を撫でてほしい・・・。またアイリに笑いかけてほしい・・・。マイスター・・・マイスター・・・」

叶わないことだって理解しててもそう願わずにはいられない。今のアイリは真剣だっていうのに、くぅ～、ってお腹が鳴った。

「あぅぅ・・・」

成長しないクセにお腹は空くんだもんね。ベッドから降りて、食事を貰うために部屋を出ようとした時、「おい、食事だ」シュヴァリエルがノックもなく部屋に入って来た。淑女の部屋へノックなしとか、礼儀がなってないよ。でも注意しても治らないからもう諦めてる。

「シュヴァリエル・・・！」

コイツさえ居なかったらアイリはシグナム達のところへ帰ることが出来たのに。

「そう睨むな。お前を逃がしたら俺がボスにドヤされる」

「むぅ・・・！」

「はぁ。アイツらがお前の元・家族だったんだよな」

アイリの目の前にモニターが1枚展開された。映し出されてたのは「シグナム達！」の顔写真。シュヴァリエルが「局員のデータだ」って言った。やっぱり局員なんだね、みんな。

「シュヴァリエル。コレなんて呼ぶの？」

シグナム達の名前の前に知らない文字があるからそう訊いてみたら、「ヤガミ、だ」教えてくれた。八神シグナム、八神ヴィータ、八神シャマル。ザフィーラの名前は載ってない。局員じゃない・・・のかな？

「で、だ。コイツが今の主だ」

「ヤガミハヤテ・・・？」

女の子だった。そう言えばシャマルの側に居た子供の顔がこんなんだった気がする。ハヤテかぁ。優しそうな目をしてる。でもなんで

だろう。マイスターの微笑みを思い返させる女の子だ。ハヤテの顔写真を眺めてるとシュヴァリエルが勝手にスクロールして、「っ！！？」そこでアイリは目を疑った。

「マイスター！？　シュリエル！？」

マイスターとおんなじ銀髪に紅と蒼の虹彩異色をした・・・男の子？　ん？女の子？　名前は「ルシリオン・セインテスト・・・！」マイスターと同じファミリーネームだ。そしてもう1人。シュリエルそっくりの女の子が表示された。けどすっごく小さいし、目もシュリエルと違って柔らかで青色。記載情報には、「ユニゾンデバイス・・・」そう記されてた。あぁ、融合騎なんだね。

「なんでまたシュリエルとそっくりなんだろ・・・？　それに名前・・・」

八神リインフォース・ツヴァイ。ツヴァイ・・・、2って意味だよね。シュリエルとそっくりで、ツヴァイの名前。それじゃあ、今のシュリエルの名前は、「リインフォース・・・？」になるのかな。マイスター、シュリエルリートは時限付きの名前だって言ってたし。

「（とにかく・・・）シグナム達は今を生きていて、また逢えるってことなんだ。それにルシリオン！　マイスターにそっくりだし、マイスターの代わりになってもらおうっかな♪」

シグナム達と一緒に過ごせる未来に思いを馳せていたら、「代わりも何も、オーディンと神器王、同一人物だろうが」ってシュヴァリ

エルが言った。

「ジンギ王・・・？　またその名前・・・」

バンヘルドもマイスターを、ジンギ王、って呼んでた。そしてシュヴァリエルは、ルシリオンの事も、ジンギ王、って呼んだ。しかも同一人物だって。一体何を言ってるの？

「どういう・・・こと・・・？」

「オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。ルシリオン・セインテスト。この2人は、同一人物だって言ったんだ」

アイリはシュヴァリエルから聞いた。マイスターの、ルシリオンの正体、そしてシュヴァリエルが、マイスターが救おうとしてた"堕天使エグリゴリ"の1機なんだってことも、全部・・・。

・―・―・終～わり・―・―・

「マイスターもまた・・・アイリ達みたく不老の存在・・・だったなんて・・・」

アイリの口端が吊り上る。嬉しい。アイリの大好きなマイスターも時間で死ぬ人じゃなかった。あの当時から変わって子供の姿だけど、それでもマイスター本人なんだって。それが本当に嬉しい。でもシュヴァリエルは言う。

――神器王は、俺が殺す。要らぬ希望など抱かない方が良いぞ、アイリ――

でも、マイスターは負けない。アイリが、氷結の融合騎アイリが、マイスターを助けて見せる。その時が、アイリとシュヴァリエルの何百年っていう関係に幕が下りる時だよ。

「マイスタぁぁぁぁーーーーっ！　アイリは、ずっと待ってるからねぇぇぇーーーーっ！！」

広い空へ向かって叫ぶ。マイスター。大好き！　早く逢って想いを伝えたいよ。

Ｅｐｉｃｏ２５リンドヴルム迎撃班～Ｔｈｅ　Ｔｅｍｐｏｒａｒｙ
Ｅｘｔｒａ　Ｕｎｉｔ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

ルシル君が意識不明の重体に陥ってから１週間ちょっと。ルシル君をそんな目に遭わせたのは、私とアリサちゃんとすずかちゃん共通の知り合いだったシュヴァリエルさんだった。喫茶・翠屋によくケーキを食べに来てくれてたレーゼフェアさん。そのお代をいつも払わされていたシュヴァリエルさん。みんな笑顔だったのに・・・。

「（レーゼフェアさんはジュエルシードを輸送してた艦を襲撃して、シュヴァリエルさんはリンドヴルムとして・・・ルシル君を・・・）はぁ・・・」

溜息が出る。やっぱりショックだよ。だって２人とも優しい人だったんだもん。お話は面白いし、陽気な人だったし。だから今でも悪い人だなんて思いたくない。けど、管理局員として止めないといけない。

「そういやさ、今日、あたし達が呼ばれたのってどういう理由？」

「リンドヴルムが狙って来てた男の子が目を覚ましたって」

無期限休暇を言い渡されてた私たちチーム海鳴は、リンディさんとクロノ君から呼び出しを受けて本局・医務局へとやって来た。元々、

ルシル君のお見舞いのために本局に来るつもりだったから何も問題ないし、男の子から事情も聞いておきたい。
そうして辿り着いた医務局内にある個人病室へ辿り着くと、「イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトです」シャルちゃんがノックした。すると「どうぞ」リンディさんから返事が来た。プシュッと引き戸がスライド。特別な個室みたいでかなり広く、私たちがみんなは入っても余裕がある。

「あ、はやてちゃん、ヴィータちゃん達も・・・」

リンディさんにクロノ君にエイミィさん、それにはやてちゃんたち八神家のみんながすでに揃ってた。そしてベッドの上ではあの黒髪の男の子が上半身を起こしてて、「あ！・・・ぅ・・・すず・・・か・・・あ！」表情を輝かせた。きらきら輝く黄金の瞳が向いてるのは「え、私・・・？」すずかちゃんだった。

「ぅあ・・・あ、すず・・・か・・・あ・・・！」

男の子が精いっぱいすずかちゃんに向かって手を伸ばす。フェイトちゃんが「あの、この子、言葉が・・・」って誰にとも言わずに漏らした。すずかちゃんが「でも、私、この子がちゃんと喋ってるのを聞きました」って答える。

「たぶんリンドヴルムから逃げる際の襲撃で言語能力、それに・・・記憶を失ってしまったみたいなの。目を覚ます今日までずっとうなされていたし。とても辛い目に遭ったんだと思う」

シャマル先生から伝えられた悲しい話。それに、男の子は私たち――というよりはすずかちゃんが来るまで塞ぎこんでたって。記憶が無くても怖い出来事だけは憶えてる。それがどんなに辛いものか・・・。フェイトちゃんが「でも、どうしてそこまですずかに懐くんだろう？」って話を切り変えるべく、すずかちゃんの手に触れて笑顔を見せる男の子を見た。

「おそらくその少年が意識を手放す直前に、自分を護ってくれたのはすずかだ、という記憶が片隅にでも残っているんだろう。君たちを呼んだのは、彼がすずかの名前を呼んでいたからなんだ。すずかが来てくれたら多少は記憶が戻るかと思っていたんだが、やはり無理だったようだ。参ったな。彼が何者なのか、何故狙われるのか、それを聞きたかったんだが・・・」

「この子もそうだけど、リンドヴルムのシュヴァリエルの襲撃にも備えないといけないわよね」

クロノ君とリンディさんが嘆息する。シャマル先生が言うには男の子の記憶は時間が経てば戻ってくるってことだけど、シュヴァリエルさんの襲撃だけは時間が解決してくれない。尋常じゃないルシル君の魔力や魔法、それらを受けても倒れなかったシュヴァリエルさん。私たちが勝つなんて、どれだけ頑張っても想像すら出来ない。

「君たちのデバイスの記録データを見せてもらったが・・・。正直、局内でシュヴァリエルに勝てる局員が居るとは思えないというのが本心だ。一応、心当たりが1人いるが、あの方が現場に出るにはいろいろと条件が揃わないといけないからまず当てには出来ない」

「リアンシェルト先輩ね」

リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ准ーーじゃなかった、少将（この前、昇格したんだった）。本局どころか次元世界でも最強かもって噂の氷結系魔導師。噂でしか知らないけど、２０年くらい前にたった１人で１つの世界の気候・四季を狂わせて、冬しかない世界へと変えたって聞いた。それで何十年と続いた内乱を止めたって。その強大すぎる魔法と魔力を危険視されて、現場に出られないようにされたとも聞いた。

「はい。ですから、リアンシェルト総部長は度外視します。で、話を戻すが。ルシルのあのデタラメな魔力。発動時、地球周辺で微弱な次元震が感知された。そんなふざけた魔力の攻撃を受けても、シュヴァリエルには左腕１本のダメージしか与えられなかった。その事実が恐ろしい」

クロノ君の表情はこれまで見せたこともないほどに切羽詰まってるって感じだ。そしてリンディさんは「唯一、ルシル君以外で彼に対抗できそうなのは、特捜のアルテルミナスさんくらいね」って小さく溜息を吐いた。

「わ、わたしだってシュヴァリエルと戦える力――絶対切断があります！」

「だが、君のスキルは不発に終わった、終わらされた」

「それは！・・・・あのお札の所為で・・・・。お札さえなければきっと・・・・！」

「・・・観測部の解析課と分析課にあのお札を調べてもらったけど、結果はただの紙片、ということしか判らなかったわ。ロストロギアでもなし。どういう仕組みなのか、未だに不明・・・・。イリスの絶対切断を強制解除することから、スキル封じの紙片だ・・・って、これだとアルテルミナスさんの破壊効果もキャンセルされてしまうわね・・・」

打つ手なしみたいな空気に。とそこに「1つに気なったんだけどね」エイミィさんが小さく挙手。みんなの視線が集まると、「このシーンなんだけど――・・・」モニターを展開して、シャルちゃんとシュヴァリエルさんの戦闘シーンを再生させた。

『馬鹿か。お前も、お前だからこそ理解してるだろう。魔導では魔道には勝てないってな！』

シャルちゃんの一撃を首に受けてもビクともしなかったシュヴァリエルさんがそう言い放ったシーンだ。

『随分とファンシーな奴が出てきたな。しかも・・・魔導じゃないときた。だが、魔道の敵じゃないんだよ・・・！』

さらに特別技能捜査課のテレサ一士とトゥーリア一尉へそう言い放ったシーン。そのシーンで一時停止させたエイミィさんは「魔導では魔導では勝てない、って事だけど、これってどういう意味なのか

な・・・？」って小首を傾げた。

「それは僕も気になっていた。魔導は、魔法の古い言い回しだが、今でも普通に使われるものだ。だからシュヴァリエルの言う魔導と魔導の違いがよく判らないな」

博識なクロノ君でも判らない違い。私も考えてみるけど、当然の如く判らない。でもその答えはすぐに出た。その答えをもたらしたのは「私が知ってる」シャルちゃんだった。そんなシャルちゃんが突然、大人モードへと変身。突拍子過ぎて呆けてると、「ちなみに今の私はイリスじゃないけどね」ってシャルちゃんは微笑んだ。

「シャルロッテ・・・さん・・・？」

私はポツリと漏らした。シャル――イリスちゃんは二重人格で、イリスちゃん本人と前世のシャルロッテさんの人格を有してる。そんなシャルロッテさんは何千年も前の時代を生きてた、伝説級の騎士だって話。その事実はチーム海鳴のみんなが知ってる。そのシャルロッテさんが、イリスちゃんの体を借りて私たちにお話をしてくれるみたい。

「はあ、本当にガラリと雰囲気が変わるわね～。とても大人びていて、騎士然としていて・・・綺麗だわぁ」

「ふふ。ありがとう、リンディ提督。それじゃあ本題に入ろうか。魔導と魔道の違いについて。話は簡単。魔力を扱うために必要な器官が、私たちとシュヴァリエルとじゃ違うという事。リンカーコア

はみんなが持つ器官。シュヴァリエルが持ってるのは魔力炉（システム）と呼ばれる器官」

シャルロッテさんが語る、リンカーコアと"システム"の違い。大気中の魔力を体内に取り込んで蓄積、外部に放出するっていう機能は同じだけど、"システム"っていう器官は魔力を独自に生成する機能もあるらしくて、魔力結合を無効にするＡＭＦ内でも普通に魔法が使えるとの事。さらには蓄積した魔力と生成した魔力を掛け合わせてさらに強大な魔力を生み出すことが出来るって。

「でもそれだけじゃ優劣なんて付かなくない？　総魔力量や出力はリンカーコアより優れてるかもしれないけどさ。確かに魔力出力が強ければ強いほど魔法効果も高まるだろうけど、シュヴァリエルの攻撃にはそんなに魔力が付加されてなかったでしょ。いや、まぁ尋常じゃないのは確かだったけど、それでもルシルの方が圧倒してたわ」

「アリサちゃん、敬語・・・！　シャルロッテさんはすごく年上で、偉い人なんだよ・・・！」

「あ、つい、シャル――あー、イリスと同じ顔だから・・・！」

「いいよ。呼び捨てでもタメ口でも。その方が私もしっくり来るし。んで、話を戻してアリサの疑問に答えるよ。リンカーコアと魔力炉（システム）の最大の違い。それは、神秘、って呼ばれる特殊な力が働いているかどうかなの」

私たちは揃って「神秘？」って小首を傾げる。神秘的とか、神秘主義とか、そういう意味での神秘なのかな？

「魔力炉（システム）の歴史は古くてね。神や天使や精霊、魔物や悪魔が普通に人の世界に干渉していた時代の人間に宿っていた代物なんだよ」

なんか宗教的――オカルトっぽい話が始まっちゃった。みんなもそんな空気だけど、シャルロッテさんは真剣・大真面目だ。だからそれは本当の事なんだと思える。そう言えばルシル君の使い魔も天使さん？達だったし。

「科学が進歩した現代を生きるみんなにしたら、神とか魔物とか何言ってんの？って思えるだろうけど、私が生きていた時代からすればこれが普通だった」

その当時を思い返してるみたいなシャルロッテさん。そんなシャルロッテさんに「つまり・・・？」クロノ君が話の続きを促した。

「うん。つまり魔力炉（システム）は、神秘的な、幻想的な、神話的な、超常的な、そう言った不思議で未知な存在が普通に居る世界で生まれ育まれた物ね。当時はまだ神様とかと関わりがあった時代だからね。必然的に人間は神様たちの力を少なからず授かった状態で生まれていたの。

えっと、超常現象って、科学では解明できないものを言うでしょ。早い話がそれに尽きるの。科学では到達できない領域・神秘。それを含んだ魔力は、現代の魔力を侵す。人の生み出した科学は、星が生み出した神霊には届かない」

「えっと・・・難しくてよく判らないけど、簡単に言うと、現代の魔導師は大昔の魔導師にはどうやっても敵わない、ってことかな・・・？」

「なのはの考え通りね。私たち魔術師の間にはこういう摂理があった。神秘を打倒するにはそれ以上の神秘を以ってあたるべし。だから魔導師は魔術師には勝てないの」

「魔術師・・・」

「うん。神秘の含まれた魔力を操作して何かしらの作用を発生させることを私たちは、魔術、と呼んで、魔術を扱う人間を、魔術師、と呼んだの」

「・・・あっ。シュヴァリエルが言ってた魔導と魔導って・・・！」

「そうだよ、アリシア。アイツは魔法と魔術のことを言ってたわけ。・・・で、重要な話を1つ。シュヴァリエルを斃せるのは、と言うよりは斃して良い資格を持ってるのはルシルだけね」

「どういうこと？」

フェイトちゃんがそう訊くと、シャルロッテさんがシグナムさん達をチラッと見た。私たちもシグナムさん達に目を向ける。シグナムさんたち守護騎士の4人が顔を見合わせた後、「シュヴァリエルは、エグリゴリなのだ」ってシグナムさんが話してくれた。

「エグリゴリって、ルシル君やオーディンさん達セインテスト家が存在目的としてる人たちだよね」

それは"闇の書"事件が終わってすぐ、ルシル君から聞いたセインテスト家の存在理由。命を賭しても"エグリゴリ"と戦って破壊する事こそが、今もなお暴走してる"エグリゴリ"を救う事なんだって言ってた。それが"エグリゴリ（元々はヴァルキリーっていう名前だったみたい）を造り出したセインテスト家の悲願なんだって。

「でもルシル君は・・・」

「はやてちゃん・・・」

とても辛そうな顔をして俯いちゃったはやてちゃんにリインが心配げに名前を呼ぶ。私たちもたぶん似たような表情だと思う。けどシャルロッテさんは「それでもルシルじゃないと」って首を横に振った。

「騎士シャルロッテ。ルシルは勝てるのか・・・？」

「勝つよ。セインテスト家は当時から最強クラスだったからね。ま、その力を受け継いでるルシルが本来の強さを発揮できる環境が出来れば、だけど」

シャルロッテさんがクロノ君にそう答えると、「・・・わたしらが邪魔・・やったんやな・・・」はやてちゃんがポツリと漏らした。

シャルロッテさんはただ小さく頷いた。逃げろ、って言われたあの時、私たちが大人しく逃げていれば・・・ルシル君はあんなに酷い目に遭わなかった。ルシル君をもっと信じていれば・・・良かったのに。

「ルシルの基本戦術は大火力での射砲撃や範囲攻撃。周りを気にしないで戦える環境がベストな戦闘スタイルだ。周囲に護るべきモノ、壊してはいけないモノがあれば、どうしても攻撃手段が限られることになる・・・」

「そういうこと。だから、ルシルが万全になって、シュヴァリエルと対峙した時、私たちは何を置いても逃げの一手。ルシルが自由に、全力全開で戦える環境を用意する。それが私たちに出来る唯一の手助け」

「だけど、ルシリオン君が目を覚ましたとしてもすぐには戦えないでしょう。その間の襲撃は一体どうすれば・・・」

「シュヴァリエルを斃すことはまずルシルじゃないと不可能。今の私でも勝てないと思う。けど、足止めや時間稼ぎくらいなら私や・・・カローラ姉妹、アルテルミナス、ベッキーが出来ると思う」

「彼女たちも魔術を使えるのか！？」

「カローラ姉妹は確認済み。カローラ家もセインテストやフライハイトと同様に古代ベルカなんかよりずっと古い時代から在る家柄だし。アルテルミナスの破壊効果も完璧じゃないけど有効。スキル封

じのお札の対処も考えてる。ベッキーの固有スキルも魔術に近いから、致命傷は与えられないと思うけどダメージは入ると思う」

「決まりだな。今回の一件には1つの部署だけじゃ足りない。特殊編成の部隊が必要になる」

「早速その事を含めて運用部のレティに掛け合ってみるわ。リンドヴルムとシュヴァリエルの迎撃を目的とした臨時特殊部隊の編成について」

クロノ君とリンディさんが話を進めてく。私たちがどうすればいいか迷ってるところで、「リンディ提督、クロノ執務官」シグナムさんが話を切り出した。

「我々もその臨時部隊に入れてもらえないだろうか」

「あたし達、リンドヴルムとは何度もやり合ってるしさ」

「シュヴァリエルへの対処法については我らも反論はない。しかしヴィータの言うようにリンドヴルム兵との戦闘では我らに一日の長がある。決して足手まといにはならぬ」

「そのつもりだよ、始めから。シグナム達はしばらく臨時部隊でのみの任務に就いてもらおう・・・って、私が勝手に決めていいのかどうかだけど。イリスはそうだけど私は局員じゃないし」

「いや、あなたはシュヴァリエルについて誰よりも知っているよう

ですし、イリスやあなたにも臨時部隊に入ってもらいたい」

シャルちゃんとシャルロッテさんが参加するなら「あのっ、私たちも・・・！」お手伝いしたいから、私やみんなも同時に名乗りでた。だけどリンディさん達は即答してくれなくて、少し考える仕草をした。

どうしてなんだろう。私たち、リンドヴルムの人たちをちゃんと迎撃できたのに。確かにシグナムさん達より武器型ロストロギアを相手にした経験はない。だけどそこはみんなで協力すればきっと打ち勝てる。って、みんなでそう説得を試みてみたんだけど・・・

「いや、そうじゃないんだ。君たちは学校があるだろう。イリス一人なら家庭の事情でなんとか休みを取られるが、君たち揃って休ませるわけにはいかないだろう」

即答してもらえなかった理由は、私たちの実力じゃなくて学校があるからなんだ。リンディさんも「そう度々早退や遅刻もさせられないし。詰めっきりなんて論外だものね」って右手を頬に添えて嘆息した。

「でもま、なのは達にも入ってもらうつもりでいるよ。私たちがシュヴァリエルを押さえ、リンドヴルム兵はシグナム達が担当。なのは達は後続の応援部隊。普通に日常を過ごして、緊急時には呼び出し。オーケー？」

シャルロッテさんに私たちは「はいっ！」答えた。それから、基本的に本局に近い無人世界を拠点にして、そこで男の子と一緒にリン

ドヴルムを迎え撃つ事などを決めて、解散しようとしたところで・・・

「っ！・・・すず・・あ・・・ぅあ・・・！」

男の子がすずかちゃんから離れないように必死に手を伸ばして、「あっ！」ベッドから落ちそうになった。けど、すずかちゃんが間一髪で抱き止めたことで事なきを得た。

「すず・・・か・・・あ・・・ぅ・・・あ！」

今にも泣きそうな顔ですずかちゃんをギュッと抱きしめる男の子。すずかちゃんどころか私たちまで照れくさくなる・・・と思ったけど、男の子があまりにも必死で、迷子みたいで。だからかすずかちゃんと男の子が抱き合っててもも恥ずかしいとか、そんな思いはなくて、なんて言うか・・・

「まるで母子ね～」

シャルロッテさんがそんなことを言うものだから「私、お母さんじゃないよ！」すずかちゃんが言い返した。でも困った。すずかちゃんが帰ろうとすると男の子は声を荒げて引き止めようとしちゃう。

「あぅぅ・・・どうしよう・・・」

すずかちゃんが困惑する。いよいよもってどうしようかってところで、「仕方ない、か」シャルロッテさんが溜息を吐いた。

「リンディ提督。１つお願いがあるのだけど♪」

†††Ｓｉｄｅなのは⇒イリス†††

パジャマから学校の制服に着替えて、身嗜みを鏡台の前で整える。ここは海鳴市郊外の山の中にある一軒家。シャルロッテ様がリンディ提督に頼んで、空き家だったこの家を安値で購入してもらってシュヴァリエル迎撃の本拠地とした。ここは街中じゃないから多少の派手な戦闘は出来るし、学校へも車で通えるからかなり便利な拠点だ。

「髪の乱れ、無し♪　笑顔、バッチリ☆　制服、ＯＫ　」

わたし達シュヴァリエル迎撃部隊・・・って言うか、班、になっちゃったんだけど。この臨時部隊の正式名は、古代遺物管理部・機動一課・臨時特殊作戦班。対リンドヴルムについてはすでに一課が専属になっちゃってて、わたし達だけの部隊を作ることが出来なかった。

でもシャルロッテ様やリンディ提督たちが機動一課の課長や各小隊長、さらには監査役をも説得。この特殊作戦班を臨時的に設立させてもらえた。特に力になってくれたのは、運用部の２トップ。リアンシェルト総部長とレティ次長。それにシュヴァリエルの戦闘記録が役立った。

そんなわたしたち特殊作戦班がここの拠点に移ってから初めての朝。

「――おはよう～」

身嗜みを整えて1階のダイニングへ。そこで朝ご飯を作ってくれてるはやてと、その手伝いをしてるリインに挨拶。そして「ルミナ、セレス、ベッキー先輩、おはよう」ダイニングテーブルに着いて朝ご飯をワクワクしながら待つ、同課のアルテルミナス・マルスヴァローグとベッキー・ペイロード先輩、そしてシグナムやヴィータと同じ第２２１２航空武装隊のセレス・カローラにも挨拶。この３人とチーム海鳴全メンバーで、臨時特殊作戦班だ。

「おはようや、シャルちゃん」

「おはようですぅ～」

「「おはよう、イリス」」

「おはようございます、シャルさん」

ルミナとセレスは物心つく前からの親友だから敬語も無用でいいんだけど、ベッキー先輩は年上（１４歳）だし、局員歴としても先輩なのに敬語。まぁ、わたしだけじゃなくて誰に対しても敬語なんなんだけどね。その3人は今、局員の制服じゃなくて私服姿。緊急時以外は私服で過ごすことになってるから。

「なのは達は・・・まだ起きて来てないんだね」

ダイニングとキッチンにははやて達だけ。リビングに目をやってもなのは達の姿はない。時刻は7時。もう起きていてもおかしくない

のに。なんて考えてたら、「イリスが最後だよ」ってセレスが庭を指差した。

「なのは達は朝早くから外で魔法の練習をしてる。えらいね。練習を怠らず、常に成長を続ける。少しは見習ったらどう？　イリス」

「だったらルミナも練習すれば？　パラディンだって練習を続けないと弱くなるんじゃない？成長を怠れば衰退に転じるのは世の習い、って言うくらいだし」

「何それ。何かの格言？　良いこと言ってるところ申し訳ないけど、私とセレスはシグナムさんとヴィータとザフィーラと模擬戦やったんだけど～？」

「ちなみにベッキーさんは固有スキルをこの世界の環境に慣れさせるために朝早くから起きてたし」

「文明が発展している管理世界とは違って、この世界にはまだ信仰心が在るおかげで私のお供も元気です」

負けた。反論できない。確かになのは達は庭で魔法の練習してるし、シグナムとヴィータとザフィーラもなのは達に付き合ってる。ルミナとセレスが「成長を怠れば、なんだって～？」ってニヤニヤとわたしを見る。

「へーい、わたしはお寝坊さんですよ～。成長を怠る、怠け者ですよ～」

「「開き直った！？」」

「いいよ、たまには休みでも。昨日も一昨日も早朝から練習してるんだし」

この班が決まってから1週間。はやてやなのは達も積極的に魔法の練習を再開した。朝早くから夜遅くまで。暇があれば1日中ずっと。もちろんわたしも参加してた。だからちょこっと休みが欲しいなぁ～、なんて思ったり・・・。

「って、あの男の子――ジョンも一緒なんだ」

広い庭（と言っても敷地内と敷地外の境界線が無い）で、練習を終えてタオルで汗を拭いてる女の子集団の中でただ1人の男の子・ジョンが視界に入った。ちなみに偽名ね。いつまでも名前が無いんじゃ呼び難いし。由来は、ジョン・ドゥ。日本で言うところの、山田太郎、とか、鈴木一郎、みたいなありふれた名前から。

「今日も今日とてすずかにベッタリか～」

ジョンはすずかにベッタリで、離れようとすると何が何でも後を追う。すずかのトイレやお風呂、果てには学校にまで付いて行こうとする勇者。わたし達より２ｃｍほど身長が低いけど、やっぱり男の子だからすずかも恥ずかしがるばかり。

（わたし達が何を言ってもやっても言う事を聞いてくれなかったよ

ね・・・）

すずかが、困るから、って言ってもスミスは首を横に振った。けど、すずかが本当に困ってる表情を浮かべると、ジョンは少しずつだけど言う事を聞いた。それからはすずかだけの言葉を聞くようになった。

「あの子、クララと同じ強制転移能力を持ってるみたい」

ルミナがポツリと漏らす。さっきまで行われてた模擬戦で、すずかにアリサの火炎弾が向かった瞬間、スミスが庇うようにして立ち塞がったとのこと。そして火炎弾に手の平を翳すと穴のようなモノが開いて、火炎弾を飲み込んだんだという。

「そうとは言え、ジョンさんは無意識での発動らしく、しかもすずかさんに危険が及びそうになった時、という限定ですが・・・」

「すずかが羨ましい。私も男の子に護ってもらいたいものだよ」

「あー、それ解る。やっぱり女の子だし、男の子に護ってもらうお姫様とかに憧れるよね」

「私も理解できます。憧れますよね」

架空の男子に護ってもらってる様を想像してるのか、ルミナとセレスとベッキー先輩はポケーッと呆けた。でも「無理だよね、それ。3人ともとんでもなく強いし」ってわたしは現実に引き戻す一撃を

発する。すると3人は「はぁ」大きく溜息を吐いた。
ルミナなんて教会騎士団の中でもトップクラスの騎士・パラディンの1人だし。セレスもまたＡＡＡ＋の騎士だし。ベッキー先輩はＡ＋だけど、固有スキルを使えばこれまた強い召喚魔導師だし。この3人を護れる男子なんてそうそう居ない。え、ルシル？　ルシルはわたしとはやてのものだよ。

「はーい、ルミナ先輩、ベッキー先輩、セレスさん、お待たせです」

「リクエストの、純日本の朝ご飯ですよ～」

リインが押して来たキャスター付きのワゴンには白いご飯、お味噌汁、卵焼き、サバのみりん干し、サラダと、「食後にヨーグルトあるからね」はやてが付け加えたデザートが載ってた。ルミナ達は、わたし達の住む日本のご飯を食べたいってことみたい。今夜も和食になること間違いなし。

「わたしがなのは達を呼んで来るよ」

朝ご飯の用意も整ったところで、わたしはなのは達を呼ぶことにした。テラスへ続くガラス戸を開けて、「おはよう、みんな！　朝ご飯の用意できたよ～！」ついでに挨拶すると、「おはよー！」なのは達も手を振って挨拶を返してくれた。そんな中ですずかが「ジョン君。おはよう、って」ジョンに挨拶するよう促した。

「お、おは・・・よう・・・」

「ん。おはよう、ジョン」

ジョンは少しずつだけど言語能力が回復していってる。拙いけど軽くは喋れるようにはなった。でも記憶の方はサッパリ。思い出そうとすると頭痛が起きるようで、シャマル先生からは無理に思い出させない方が良い、って厳命されてる。

そうしてみんなで朝食タイム。わたし達はダイニングテーブルとリビングテーブルに分かれて、「いただきます！」はやて作（リインはあくまで手伝い）の和食を美味しく頂く。

「美味しい！　噂には聞いてたけど、はやてって本当に料理が上手なのね！」

「卵焼きもオミソシルも美味しい！　シグナムさん達は毎日、こんな美味しいご飯食べてるんだ～。いいな～、羨ましいなぁ～」

「はやてさん。リインさん。とても美味しいです」

和食初挑戦のルミナとセレスとベッキー先輩からベタ褒めされたはやては「おおきにです♪」照れくさそうにはにかんだ。リインも「ありがとうですぅ♪」って満面の笑みを浮かべた。ようやく笑顔を見せてくれるようになったはやて。でも、それでもやっぱり器材に囲まれたベッドに横たわって、チューブや計測機器に繋がれたルシルを見ると涙を流しちゃう。

「あ、ジョン。あんた、またニンジンを残してるわね」

「にゃはは。好き嫌いは良くないよ、ジョン君」

「ニンジンがダメな人って本当に居るんだ～」

「ジョンは男の子だよね。見て、ジョンより小さいリインだって好き嫌いなくお野菜たべてるよ」

リビングテーブルから聞こえてきたそんな話声。フェイトがリインを引き合いに出した。そんなリインは、グリーンピースに苦戦していて避けようとしてた。わたし達みんなの視線を一手に受けたリインは、「い、いただきますでぅぅ・・・」泣く泣くグリーンピースを食べた。うん、えらい、えらい。

「お、偉いよ、リイン」

「そのまま苦手を克服しちまえ」

はやてとヴィータがリインの頭を撫でて褒める。シャマル先生も居ることが出来れば同じように褒めていたと思う。でもシャマル先生はルシルの治療に付きっきりだ。

「ほら、ジョン君。私を護ってくれるんだよね。だったら好き嫌いしないで、お野菜をたくさん食べて強くなってね」

「・・・う、うん・・・」

ジョンはフォークで突き刺したニンジンを少しの間にらめっこした

後、パクっと食べた。すずか達が拍手して褒めると、「・・つよ・・くなる・・ぼく・・・」ジョンはそのまま野菜サラダを平らげた。それからみんなで後片付けをして、そろそろアリサの家の車で登校しようかって時間になって・・・

「それじゃルミナ、セレス、ベッキー先輩」

「シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、リイン」

ここ拠点にてジョンの護衛と留守番を担当するルミナ達に「あとはよろしく」ってお願いする。ルミナ達も「ん。任された」って思い思いに応えてくれた。

「ジョン君」

「すず・・・か・・・」

毎朝恒例ジョンの、すずか行かないで、が始まりそう。すずかが「いってきます♪」笑顔で挨拶すると、「あぅ・・・」ジョンはすずかの袖を引っ張ってる自分の手を見て、「いって・・らっしゃい・・・」名残惜しそうに手を離した。お、今日はすんなりと1回で決着がついた。

「ジョン君。夕方にはちゃんと帰ってくるから、それまではお姉さん達の言う事を聴いて、良い子で待っててね」

「・・・うん・・・」

手を振るすずかに、手を振り返すジョン。そしてわたし達は「いってきます！」ルミナ達に見送られながら家を出た。

Ｅｐｉｃｏ２６次元世界を侵すモノ～Ａｎｔｉｑｕｉｔａｓ　Ｐｈａｎｔａｓｉａ～

ロストロギア専門蒐集組織リンドヴルムの本拠地・天空城レンアオム。レンアオムは複数の城や塔が建つ浮遊する島だ。拠点としている無人世界はいま夜中で、レンアオムの住まうリンドヴルム構成員総勢２千人弱（大半は見習い構成員）も静かに寝静まっていた。リンドヴルムの幹部（蒐集実行部隊や組織のバックアップ班）が生活している本城の隣に建つ、ロストロギアを保管する為だけの城にて動きがあった。夜中だというのに数人の人らしき影が音を立てず慎重に、しかし忙しなく城内を駆けていた。

「まさか拉致なんて形で下位次元世界に来るなんて思わなかったな」

「ミッドガルド本星を主軸としてる次元よね。また来られるなんて変な感じ」

「現代ではミットチルダ。下位次元世界を取り締まっている組織は時空管理局。とは言っても、その勢力はお粗末な程に小さい。大戦時代に比べると矮小も良いとこ。所属している魔導師も、平均ランクがＢ」

「Ｂ！？　嘘だろ！　雑兵なんてレベルじゃないだろ！　一般人じゃん、一般じ――」

「「「うるさい」」」「・・・・っ」

「へぶっ、ごほっ、ぐはっ、あばっ！？」

１０歳から１５歳くらいほどの少年少女がそんな話をしている。彼らは、アールヴヘイムにて大戦終結から数千年とのんびり暮らしていた神器だった。今の彼らは人化する術を有し、自力移動を可能としている。本来、神器に意思は有ることはあっても人化する能力は無い。が、経年によって独自の人化能力を学習し、会得したのだ。

「いたた。ていうか、なんでそんなに下位次元世界に詳しいんだ？　お前」

「忘れたの？　わたしは情報収集の魔造兵装番外位・クピドゥス・グノスィ」

ある少女がそう名乗って手の平を壁に翳すと、壁面に管理局のデータが映し出された。彼女の神器としての能力は、自身が望む情報を有しているモノ自体から自由に情報収集できるというものだ。リンドヴルム兵から時空管理局という単語を聞き、すぐに時空管理局本局からデータを収集したのだ。

「管理世界、管理外世界、無人世界、観測指定世界、重要管理指定世界・・・。いろんな括りが在るのね」

「当然と言えば当然だけど、大戦期と現代とじゃ世界名も違うのかよ」

「問題はそこじゃない。わたしがみんなに工作を頼んだ理由がここにある」

「え？　ここから逃げ出すためだけが理由じゃないの？」

"クピドゥス・グノスィ"を筆頭に、捕らえられていた神器（人化できる者たち限定）たちは天空城レンアオムから脱出するためにとある工作活動を行っていた。協力している神器たちは、ただ単純に逃げるためだけと思っていたが、"クピドゥス"は確固とした理由があって脱出工作へと乗り出していた。

「局員データベースに・・・神器王ルシリオン・セインテスト・アースガルド様がいらっしゃった」

ルシリオンの顔写真が表示されると、「っ！！」全員が目を見張って驚きを見せた。他人の空似にしてはあまりにも似過ぎている少年、ルシリオン。しかし本物なのか？という疑問が漏れる。彼らは知らない。ルシリオンが"界律の守護神テスタメント"となっていることを。故の疑問だった。

「たぶん本物。シュヴァリエルがアイリとか言う妖精らしき子との会話の中で、神器王という単語が何度も出てる」

「なるほど。理由は解らないけどルシリオン陛下は今もなお生きていらして、今も牙を研いでいらっしゃると」

「そう。まずは脱出を第一優先。そして誰でも良いからルシリオン

陛下とコンタクトを取る。そして助けて頂こう、わたしたち神器を」

"クピドゥス"の瞳に力強い光が宿る。他の神器たちの目にも改めて光が宿る。そして彼らは、人化できない神器が収められている各部屋を周り、脱出工作を続けて行った。さらには神器ではなく、ロストロギアが保管されている部屋にすら工作を行った。そして残り4部屋と言うところで、とうとう問題が起きてしまった。

「それにしても貴方の能力もなかなかね、ネグロ・リベルタ。大したものよ。ここまで何人かの人間とすれ違ったけど、誰ひとりとして私たちには気付かなかったわ」

「・・・ありが――」

「あ～あ、やっぱ神造兵装のインペリウム・インシグネ・オクドォス様は上から目線だよなぁ。ネグロ・リベルタが概念兵装だからって下に見るのはどうだろうなぁ～」

「はぁ！？　私はただ褒めただけでしょう！　先程から神造(わたし)兵装を目の敵にして！　これだから魔造兵装は厭味ったらしくて頭に来るわ！」

「おーい、クピドゥス・グノスィ。俺たちは厭味ったらしいんだと」

「彼女にではなく貴方に言っているのよ、ヤーヌス・ポルタ！　本当に腹立たしい」

「良いのかぁ、俺に対してそんな態度で。脱出には俺の、魔造兵装としての能力が必須なんだぜ～？　お前だけここに残してもいいんだぞ。そのデカイ乳で人間の男どもを誘惑して自力で逃げ出すか～？」

魔造兵装："ヤーヌス・ポルタ"という１２歳くらいの少年が、神造兵装："インペリウム・インシグネ・オクドォス"という１５歳ほどの少女の豊満な乳房を両手で揉みしだいた。当然「ぶっ壊す！！」"インペリウム"は赤面して激怒。対する"ヤーヌス"は「おお、やってみろ」と挑発。

「や、やめようよ・・・！」「・・・・・っ！」

事の発端の片割れ――概念兵装："ネグロ・リベルタ"は、殺気立っている"インペリウム"と"ヤーヌス"の間に割って入ろうと試みるが、気弱な性格もあって入り切れない。そして先程から無言である少女も側でウロウロするばかり。

「ブリギッド・スミス！　貴女も神造兵装でしょう！　私に手を貸しなさい！」

そんな無言の少女へ向かって"インペリウム"が声を荒げる。少女もまた神造兵装で、真の銘を"ブリギッド・スミス・テトラデカ"。彼らは、神造兵装が２、魔造兵装が２、概念兵装が１という、現代の次元世界においては途轍もない強大な武器だった。

「あっ・・・僕の羽根が・・・！」

取っ組み合い寸前という時、"ネグロ"が焦りを見せる。"インペリウム"と"ヤーヌス"の服に付いていた黒い羽根飾りがヒラリと取れてしまったからだ。すると「おい、お前たち、そこで何をしている！」見回りのリンドヴルム兵４人が声を上げて駆け寄って来ようとした。

「貴方の所為で見つかったじゃないの！」

「神器のクセして乳を揉まれたくらいで怒るお前が悪い！」

"ネグロ・リベルタ"は無数の羽根で編まれた外套型の神器で、その能力は、身に纏った対象の存在感を極限にまで希薄化する、というもの。一部である羽根を他者に付けることでその効果の恩恵をもたらすことも可能。これまで彼らがリンドヴルム兵とすれ違っても気付かれなかったのは、"ネグロ・リベルタ"のおかげだった。

「最悪。まだルミナス・プリズミラとサテッリス・ラーディウスが見つかってないのに・・・」

"クピドゥス"がポツリと漏らすと、「捜索に邪魔な人間どもを殺せばいい」"ヤーヌス"が口端を吊り上げて笑みを作る。対する"インペリウム"は「こういう時の為に私が居るのよ」と微笑みを見せた。

「神秘の無い世界での発動はちょっと辛いけれど・・・。コホン。我は第八天の御旗。我が立つ地は天の御物となりて、その意を天に預からせる。汝よ、抗う事せず身を捧げよ、心を捧げよ、魂を捧げ

よ」

「待って、ダメ」

"クピドゥス"の制止より先に"インペリウム"が何かしらの言葉を詠唱すると、彼女が光に包まれた。光は一瞬で治まる。"インペリウム"が立っていた場所には彼女の姿は無く、代わりに優勝旗のような豪華絢爛な旗が一棹と在った。

『ネグロ・リベルタ。貴方にお願いするわ』

旗より聞こえる"インペリウム"の声に従い、「わかった」"ネグロ"は旗棒を掴んで、「えいっ」"インペリウム"を床に突き刺した。すると血相を変えていたリンドヴルムの見回り班の様子に異変が起きた。表情は穏やかなものへと変わり、神器たちの側へと歩み寄って片膝を突いたのだ。それは目上の者への礼の姿勢だ。

「さすがは、支配の旗、の銘を冠する神造兵装だな。番外位で、しかも量産型でもその効果は確かか」

『褒めるか貶すかどちらかにしてほしいわ、ヤーヌス・ポルタ』

旗型神造兵装："インペリウム・インシグネ・オクドォス"。直訳で第８支配旗。その能力は、彼女を突き立てた地――国１つを天上の支配下に置ける、というものだ。土地が支配下に置かれれば、その地に住まう生物もまた支配下に置かれる。ゆえに見回り班は、天上の先兵たる８番目の"インペリウム"の能力によってその意思を

奪われたのだ。

「よーし。これで捜索を続け――」

「られない。これでインペリウム・インシグネは動けなくなり、しかも神器化したことでシュヴァリエルに感づかれることになる。どちらにしろ、捜索時間は無い。捜索はこれで終わり。ヤーヌス・ポルタ。すぐに神器化して、その能力を発動して」

これまで表情を変えなかった"クピドゥス"が焦りを見せる。彼女にとっていま優先させるべきは、全員がシュヴァリエルに捕縛されないこと、ただ1つ。全滅してルシリオンにいま起きている緊急事態を伝えられず、備えもなく自分たち神器による混乱へと巻き込ませるわけにはいかないと。しかし・・・

「良い子はもう寝ている時間だぞ」

彼らに声を掛ける男が1人。オリエンタルブルーの髪を逆立たせ、ワインレッドの双眸は切れ長。ハイネックの前開きタンクトップとレザーパンツと言った出で立ちだ。彼らが「シュヴァリエル・・・！」と、その男の名前を呼んだ。

「さっきから鼠が居ると思っていたが、人化できる神器（おまえ）たちだったか。で？　ここで何をしている」

その問いかけに「私が時間を稼ぐ。ブリギッド・スミス。お願い」"クピドゥス"は答えることなく無言の少女、"ブリギッド"に手

を伸ばした。"ブリギッド"は力強く頷いて、"クピドゥス"の手を取った。

「天に座する鍛冶の極み手、我を打つ。生み出したるは千差万別の覇鉄(はがね)の魂。怖れ慄け、我は仇討つ天の剣。・・・いざ参らん」

"ブリギッド"の体が発光し、辺り一面を照らし出す。神器化する際の発光だ。光が治まると、"クピドゥス"の両手には黄金で出来た両刃の片手剣と円い盾が有った。

"ブリギッド・スミス"は、神造兵装では珍しくない量産シリーズとして存在する、天上の兵が携える武器である。兵の数だけ創られ、テトラデカは名前の通り１４番目に創造された"ブリギッド・スミス"だ。その能力は、千差万別の武器へと姿を変える、というもので、剣にも槍にも斧にも盾にも、武器という物であるなら無制限に変身できる。

「やる気か、俺と？　さすがに俺も神造兵装・第１００位のブリギッド・スミスシリーズの直撃は危うい。だが、経験が違うぞ」

シュヴァリエルが無手のままで構えを取った。彼の神器・"極剣メナス"は２ｍと言う大剣ゆえ、屋内戦闘には向いていないからだ。

「脱出の時間を稼げればそれでいい。ヤーヌス・ポルタ、インペリウム・インシグネ、ネグロ・リベルタ。今すぐ脱出を」

「いいのか？」

「構わない。シュヴァリエル達の目的からして、ここに残ったとしても私たちに身の危険は無いのは確か。しばらく窮屈な時間を過ごすことになるだろうけど、これまでの惰眠に比べればどうってことない。ルシリオン陛下と迎えに来てくれればそれでいい」

「判った。ネグロ・リベルタ。俺を使え！」

"ヤーヌス・ポルタ"の輪郭が粒子状に崩れたかと思えばすぐに再結集し、"ネグロ"の右手に黒い羽根を飾りとした筆が1本とあった。それこそが"ヤーヌス・ポルタ"の本来の姿。羽ペン型の魔像兵装。"ネグロ"はその羽ペン――"ヤーヌス"を使って壁面に幾何学模様の羅列を記した。

『よし、サインは書いたな。これで全部屋が繋がった！　あとは転生先の名前を書くだけで転送できるぞ！』

魔造兵装番外位・"ヤークト・ポルタ"。羽ペン型の神器で、空間接続を行えるサインを描き、最後に転移先の場所の名前を記すことで、サインが描かれた場所に在る物を纏めて転送できる、というものだ。もちろん転送したい物や範囲を設定することも可能だ。

「急いで！　私ではシュヴァリエルを押さえ・・・きゃあああああ！」

「逃がすかよ！」

神器・"ブリギッド"を手にシュヴァリエルと闘っていた"クピドゥス"が悲鳴を上げる。シュヴァリエルは、"クピドゥス"の振る

う"ブリギッド"の斬撃を全て紙一重で躱し、腹部に掌底を打ち込んだのだ。いかにシュヴァリエルの体に傷を付けられるほどの神秘を有す神器であろうとも、当たらなければ意味は無かった。

「邪魔はさせない・・・！」

「・・・・っ！」

"ネグロ"に向かおうとしていたシュヴァリエルの腕や足にしがみ付く"クピドゥス"と、神器化を解いた"ブリギッド"。シュヴァリエルはそれに構わず歩き続ける。２人の膂力や体重ではシュヴァリエルの力には敵わない。だが拙いながらも"ネグロ"は文字を速く書いていく。あと少しで書き終わるという時・・・

「とりあえず止めるけど、それでいいんだよね～？　シュヴァリエル♪」

新たに追加される声は少女のもの。出所は"ネグロ"の足元――彼の影からだ。その影から音もなく姿を現したのは「レーゼフェアか。久しぶりに顔を出したな」闇黒系の"堕天使エグリゴリ"・レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアだった。

レーゼフェアは"ネグロ"の後ろから抱きつくようにして、"ヤーヌス"を持つ右手首を押さえた。あと僅かで書き終えるはずだったＭｉｄｃｈｉｌｄａの最後の文字であるａ。だがレーゼフェアの出現によって遮られた。それはつまり神器である彼らの希望が途絶え

たことを意味した。

「よっ、久しぶり～。僕は最近ね～、面白い玩具を見つけたんだよ～♪　プライソンとかいう科学者で～、生意気なんだけど、一緒に居て楽しいんだよ。これが結構なぶっ飛び野郎でさ～♪　聖王のゆりかごとかいう兵器などを使って戦争を起こ――」

「そんな事はどうでもいいから、ソイツらを捕まえろ」

「あいあーい♪」

――罪人捕えて罰せしは闇棺（エロジオン・ノワール）――

レーゼフェアが魔術を発動すると"ネグロ"が「なっ・・・！？」驚愕の声を上げる。"ネグロ"の影が蠢いたかと思えば彼の足を伝って全身を呑み込んでいくのだ。そして影はとうとう"ネグロ"の手まで覆うと、彼の手から"ヤーヌス"が零れ落ち、通路の床に転がった。

「なになに？　羽根ペン？　コレ、神器？　壁に何書いてんの？　Ｍｉｄｃｈｉｌｄ・・・ミッドチルド？　あはは、ａが無い、ａが抜けてるよ。バッカで～♪」

レーゼフェアは"ヤーヌス"を拾い上げ、壁に書かれたミッド語を見て笑い声を上げた。そして、ここでシュヴァリエルや神器たちにとって想定外の出来事が起きた。シュヴァリエルにとっては最悪で、神器たちにとっては最高の出来事が。

「僕が続きを書いてあげるよ。Ｍｉｄｃｈｉｌｄにａを書き足して～、はい、ミッドチルダ♪」

ここで"ヤーヌス・ポルタ"の能力が発動。シュヴァリエルにしがみ付いていた"クピドゥス・グノスィ"、"ブリギッド・スミス・テトラデカ"、それに"インペリウム・インシグネ・オクト"、"ネグロ・リベルタ"、"ヤーヌス・ポルタ"の姿が一斉に薄らいだ。シュヴァリエルが慌てて壁面に書かれたＭｉｄｃｈｉｌｄａを壊してでも消そうとしたが、それより早く神器たちの姿は消えた。

「お？　消えた？　すご～い！」

「この馬鹿がぁぁぁぁーーーーッ！！」

レーゼフェアの大ポカにシュヴァリエルが怒声を上げ、「ぎゃん！？いっったぁぁ～～～い！」彼女の頭に強烈なゲンコツを振り下ろした。レーゼフェアは両手で頭を抱え、床を転げ回った。

「シュヴァリエルさん・・・！？」

「あれ？　俺たち何をやって・・・？」

"インペリウム"の神器能力が解除されたことで見回り班も正気に戻り、小首を傾げ合っている。そんな彼らに「兵を集めろ、蔵の確認だ！」シュヴァリエルが指示を飛ばす。見回り班は現状把握を後回しにして「はいっ！」即答し、通信を繋げ始めた。シュヴァリエ

ルも「俺だ。動ける奴は今すぐ出撃準備だ！」と蒐集実行部隊に連絡を取った。

「ねえ、僕、なんで殴られたの？」

「こんの・・・！　俺たちがっ、回収したっ、神器のっ、脱出をっ、お前がっ、手助けっ、し、た、ん、だっ！」

「痛い痛い痛い」

シュヴァリエルが人差し指でレーゼフェアの額をツンツン、ツンツン、ツンツン、突いて突いて突きまくった。いよいよ半泣きになるレーゼフェアは「ぼーく、たーいさん☆」と、魔術・影渡りを発動。レーゼフェアは彼女自身の影を使って何処かへと空間移動した。

「逃げやがった、あんにゃろう・・・。あーあ。どうするんだよ。ボスに怒られんの俺だろ、これ・・・って、あの２つは無事なんだろうな！　サテッリス・ラーディウスとルミナス・プリズミラはっ！」

アールヴヘイムで回収した神器の中で最も強大な物に異変が無いかと確認するべくシュヴァリエルが駆けだす。その２つとは、神造兵装の上位に位置づけられる第３８位：天裁と８８位：光翼。そのどちらもシュヴァリエルに決定打を与えられるだけの攻撃力を有している。もし、それらがルシリオンの手に渡れば、シュヴァリエルやそれ以下のレーゼフェアとフィヨルツェンにとっても脅威となる。

「――・・・はぁ。無事だったかよ」

シュヴァリエルはとある蔵へと入り、自身が抱いた不安が杞憂だったと安堵した。そこには月明かりに照らされた素っ裸の少女が２人、四肢を鎖で拘束されて宙に吊るされていた。そして鎖には神器の能力を封じる、レーゼフェア作のお札が何十枚と張られていた。

「コイツらの無事を確認っと。さて。俺も逃げた奴らを追うか」

シュヴァリエルが踵を返す。脱出した神器たちを再回収するために。だが、『待ちなさい』ある通信によって阻止されることになった。

「なんだよ、リアンシェルト。神器王を半殺しにした事についての説教ならもう勘弁だぞ」

空間モニターに映ったのはシュヴァリエル以上の神秘や魔力を有する、"エグリゴリ"・リアンシェルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア、またの名を本局員・リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサだった。

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「――臨時特殊作戦班、現着しました！」

わたしら特戦班のリーダーを任されてるセレス・カローラ一等空士が代表として、機動一課が抱える分隊の１つ、スノー分隊の隊長でセレスさんの実のお姉さんであるフィレス・カローラ二等空尉に敬礼した。次いでわたしらも倣って敬礼。

「御苦労さま、セレス、それにみんなも」

わたしらは今、ミッドチルダへ訪れてる。どうしてシュヴァリエル迎撃班のわたしらが海鳴市を出てミッドに来てるかと言うと、ミッドに魔法が通じへん武器を持ったリンドヴルム兵が現れたという報せを受けたからや。

「来てもらったのは報告通り、魔法が通用しないリンドヴルム兵が現れたからなの。騎士シャルロッテが教えてくれた、神秘なるものの可能性がアリと判断したんだけど・・・。イリス。あなたの内に眠る騎士シャルロッテの見解はどう？」

シャルちゃんにそう訊ねるフィレス二尉がわたしらにある映像を見せた。映し出されたんは男女６人。その人らはデバイスや妙な物を携えてて、一課の人らと交戦。そやけどフィレス二尉の言うように魔法をリンドヴルム兵に撃ってもなんら効果が見られへんかった。それから逃走。今は他の分隊が追跡中やゆうことみたい。

「ちょっと待って」

シャルちゃんが自分の胸に手を添えて目を閉じた。それから１分ほど。シャルちゃんが目を開ける。

「えっと。とりあえず・・・コイツの持ってる杖をどうにかしないといけないみたい」

シャルちゃんが映像に映るリンドヴルム兵の1人を指差した。その女の人が持ってるんは太陽のレリーフが頭に有る杖や。シャルロッテさんが言うには、その太陽の杖がリンドヴルム兵に"神秘の加護"を与えてるらしい。その所為でリンドヴルム兵の魔法や武装は、一課員の人らより上位の存在になってるとのこと。

「対処法は？」

「えっと・・・。杖先を地面から離せば良いみたい。あの杖の名はオールドー・デ・ソル・・・で、太陽が昇っている時間帯でのみ機能して、杖先を地面に付いているその時だけ持ち主が認めた仲間たちに加護を与えるみたい。神秘を有する武装・神器だね」

シャルちゃんがシャルロッテさんの話を代弁。そのなんとかソルってゆう杖をどうにかさえすればリンドヴルム兵は元の魔導師に戻って、わたしら普通の魔導師でも戦い合えるとの事。

「なるほど。あれが魔法と魔術の違いというわけね。実際に目の当たりにしてようやく理解した。ロストロギアとは別の古代遺失物・神器。面白いじゃない」

シャルロッテさんから教えてもらったのは神秘の話だけやない。神器ってゆう、神秘で形作られた特別な武装があるって話も一緒に聞いた。シュヴァリエルの持つ大剣、"メナス"とかゆうのも神器らしくて、その神器が持つ神秘の所為で単なるデバイスであるシャルちゃんの"キルシュブリューテ"もへし折られた。

――いい？　神器とは打ち合ってはダメ。これも魔法と魔術の関係と同じ。神器は神秘そのものだから、魔法はもちろんデバイス、防護服すら容易く破壊してくる。もう1度言うよ。神器とは打ち合ってはダメ――

シャルロッテさんからの忠告には誰もが頷いた。神秘の怖さは、ルシル君とシュヴァリエルの闘いで嫌というほど教えられたから。

「現代には存在しえないはずの神秘を扱うリンドヴルム、か。それなら話は早い。特戦班。あなた達の手腕に期待するわね。あなた達だけでリンドヴルムを逮捕しなさい。さぁ、行動開始！」

フィレス二尉がパンパンと手を打つ。わたしらは「はいっ！」応えた。これからリンドヴルムと戦ってくんなら、今回の初戦はどうしても負けらへん。

「リイン！」

「はいです、はやてちゃん！」

「「ユニゾン・イン！」」

ユニゾンデバイスとゆうよりはパートナーであるリインとユニゾンしたことで、わたしの準備は完了や。すずかちゃん達もみんなバリアジャケットへ変身。そんで、ルミナ、ベッキー先輩、セレスさんも変身。

ルミナの騎士服は、ビスチェワンピースにショートパンツ、ボレロ、

ブーツ。ベッキー先輩のバリアジャケットはまんま巫女服で、デバイスは神楽鈴。ホンマに日本の巫女さんみたいや。セレスさんの騎士服は黒のインナースーツとスラックス、白のテールコートに黒のブーツで、デバイスは両刃剣。騎士服もデバイスもフィレス二尉とおんなじや。

「こちらスノー1。リンドヴルム兵は今どこ？」

準備が整ったところでフィレス二尉が追跡組へと通信を入れる。

『こちらゲイル1。現在、南部アルトセイム地方へ逃走・・・というよりは何かを捜しているような素振りだ』

『こちらアース1。まずい事になった。東部ラッセン地方に別のリンドヴルムチームが現れたぞ』

『こちらフレア1。西部エルセア地方にも新たなリンドヴルムチームが出現したわ。コイツらにも魔法が通じないみたいだわ』

まさかの複数のチームが同時出現。わたしらは顔を見合わせて、「チームを分けよう」おんなじ意見を出した。現在、リンドヴルムはミッドの東部・西部・南部にそれぞれ出現してる。ならこちらも3チームに分かれて対処するしかない。

フィレス二尉もわたしらの意見を聞き入れてくれた。そうゆうわけで早速チーム分け。まずはフィレス二尉をリーダーにした南部担当チーム。

「南部担当リーダーはフィレス。そしてわたしシャル、はやてとリイン、シグナム、そしてすずかね」

「西部担当チームのリーダーは私セレス。そしてアリサ、フェイト、アルフ、ザフィーラ」

「東部担当チームリーダーは私アルテルミナス。ベッキー、なのは、ヴィータ」

『それじゃあわたしとジョンは留守番なの？』

スノー分隊の指揮車に居るアリシアちゃんから通信が入る。戦闘が出来ひんアリシアちゃんと、リンドヴルムに狙われてるジョン君は指揮車の中で待機中や。ホンマならジョン君をリンドヴルム兵の居るミッドにわざわざ連れて来ん方が良かったんやろうけど、わたしらが海鳴市を空けてる最中にシュヴァリエルに見つかりでもしたら大変や。そうゆうわけでちょう危険やけど、ジョン君も現場に連れて来た。

「そういうことね。ま、すずかも一緒なんだから文句は無いでしょ？ジョン」

『うん、シャル。すずかが側に居てくれるなら、僕は大丈夫だよ』

ジョン君を預かることになってから1ヵ月と経って10月直前。ジョン君はもう流暢に喋れるようになったし、すずかちゃんにベッタリってこともなくなった。それでもまぁ、やっぱりすずかちゃんが

側に居ると上機嫌や。すずかちゃんも弟感覚みたいで嬉しそうやし。そやけど記憶の方は相変わらずで、自分が何者かもまだ思い出せてへん。

（そんでルシル君は今も・・・眠ったままや・・・）

「よし。では散開。南部担当は私に付いて来て。西部・東部チームは・・・――」

フィレス二尉が空を見上げる。そこには輸送ヘリが2機あって、ゆっくりと着陸した。フィレス二尉に「右が東部行き、左が西部行きだから、各員、間違えずに乗る事」そう言われた各チームのみんなが「はいっ」力強く返事して、ヘリに乗り込んでく。

「みんな！　頑張ってな！」

「絶対に勝って、ここにまた集合だよ！」

「負けないように頑張ろうね！」

離陸してくヘリに向かって大手を振って見送る。そんでもう1機、輸送ヘリが来た。アレがわたしらの乗るヘリらしく、「私たちも行こう」フィレス二尉が着陸したヘリに乗り込んだから、わたしらも乗り込む。アリシアちゃんとジョン君の乗る指揮車も発進準備が終わったようで、先に走りだした。

「ソリオ。お願いね」

「はいっ、フィレス二尉！」

ヘリのパイロットは若い男の人やった。わたしらはソリオさんに「よろしくお願いします！」挨拶。

「ああ！　サクッと現場にまで連れて行くから、シートに座って待っていてくれ！」

離陸したことで一瞬やけどふわりと浮遊感を得る。そしてヘリは、わたしらが対処するべきリンドヴルムの居る現場へと一直線に向かうことになった。現場に着くまでの間、わたしらはソリオさんと自己紹介。

フルネームは、ソリオ・クラエッタ一等陸士。スノー分隊専属パイロット。ソリオ一士はお喋りさんで、ご兄弟の事とかを話してくれた。ソリオさん含めて４人兄弟で、ソリオさんは長男。で、下から２番目に唯一の女の子が居るらしい。名前はアルトちゃん。アルトちゃん以外が男の子ってこともあって、アルトちゃんも自分が男の子って誤解してるって。それはちょう可哀想な事実やなぁ・・・。

「――フィレス二尉。そろそろ現着です！」

「ん。それじゃあみんな。予定とは違ったけれど私も参戦させてもらう。私とイリスで杖持ちを潰す。シグナムさん達は残りのメンバーの撃破をお願いします！」

「「「「はいっ！」」」」『はいです！』

「ゲイル分隊とリンドヴルムを目視！　今にもやり合いそうです！」
ソリオ一士から報告を受ける。フィレス二尉が「判った。ここで降りるから、ハッチをお願い」って応えた。
「はいっ。ハッチ開きます！」
ヘリ後部が開いてって、ものすごい風が流れ込んできた。飛ばされそうになった帽子を片手で押さえてると「降下開始！」フィレス二尉の指示が飛んだ。わたしらは力強く頷き返して、まずはフィレス二尉が飛び降りたのを見送る。続いて「行きま～す！」シャルちゃん。そんで・・・
「行くよ、リイン！」
『いつでもオーケーですよ、はやてちゃん！』
わたしも飛び降りた。
・―・―・
時空管理局・本局内に存在する数ある部署の内の１つ、医務局。その病棟区画のさらなる奥には集中治療室と呼ばれる施設がある。重篤患者の容体を２４時間体制で管理し、より効果的な治療を施すことを目的としている。
その集中治療室区画内のとある病室前の廊下に、局の制服と白衣を

着た1人の女性が佇んでいた。ガラス越しに病室内を――正確にはベッドに横たわっている少年を眺めていた。女性の名前は八神シャマル。そして少年の名前はルシリオン・セインテスト。同じ家に住む家族である2人の今の関係は、医者と患者だ。

「・・・ルシル君・・・」

シャマルが大きな窓ガラスに手を添え、ルシリオンの愛称をポツリと漏らした。その表情は悲しみでいっぱいで、今にも泣き出しそうな・・・いや、「ルシル君・・・」涙がスッと流れ落ち、ズルズルと膝を折って跪いてしまった。

「どうすれば・・・よかったの・・・」

涙声でそう呻いた。シャマルも、医務局トップクラスの医療騎士ティファレトも、その他の医者らも懸命に治療に当たった。しかし、医者も魔導師も万能ではない。救える患者が居る。だが、救えない患者、も居るのだ。

「はやてちゃんに、はやてちゃん達にどう伝えればいいの・・・」

シャマルは両手で顔を覆い、とうとう声を出して泣き始めた。懸命な治療の結果、ルシリオンは一命を取り留めた。これは確実だ。だが、問題はそれ以外にあった。"エグリゴリ"・シュヴァリエルとの戦闘で血を失い過ぎたこと、頭部への重度のダメージ、それによる脳内出血、シュヴァリエルに敗れ、手術を行うまでの数十分の間に失血による脳への酸素供給が滞った。その結果が・・・

「再起不能・・・、植物状態・・・・、ルシル君・・・・！」

ルシリオンは植物状態となり、再起不能の診断が下されてしまった。あまりにも最悪な結末。

「ルシル君は必ず助けます、絶対です、・・・そう言ったのに・・・、守れなかった・・・。ごめんなさい、はやてちゃん・・・・、ごめんなさい、ルシル君・・・・、ごめんなさい、オーディンさん・・・！」

シャマルの涙は止まることない。そんな彼女に近寄るのは1人の少女で、局の制服と白衣を身に纏っている。シャマルが足音に気付いて少女の方へと目をやった。

「ティファちゃん・・・」

「シャマルさん・・・、あの、ハンカチを・・・」

少女の名はティファレト・ヴァルトブルク。シャマルらと共にルシリオンの治療に当たっていた医務官の1人だ。ティファレトは制服のポケットからハンカチを取り出し、蹲るシャマルに手渡した。

「ありがとう・・・、ごめんなさい、ティファちゃん。見っともないところを見せちゃって・・・」

「いいえ。仕方ないですよ。ルシリオン君は、シャマルさんの家族

なんですから」

ヨロヨロと立ち上ったシャマルはハンカチで涙を拭き、「洗って返すわね」と白衣のポケットにハンカチを仕舞い込んだ。そうして２人はルシリオンの病室前から去って行った。

それから1時間と少し。ルシリオンの病室前に誰かが近づいて来た。着ている服は局員の青制服。階級章は少将を表している。女性――というよりはまだ少女らしい外見だ。１０代後半から２０代前半ほどで、髪型はシアンブルーのインテークで、背中まで伸びる後ろ髪の毛先は外に向かってカールしている。それとアホ毛が一房、ピョンっと立っている。

「あ、ヴァスィリーサ少将！？　どうして集中治療室へ・・・？」

姿を見せたのは"エグリゴリ"の三強の一角、リアンシェルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアだった。今は本局の少将として運用部の総部長の役職に就いている。そんな彼女の出現に、たまたまそこを通りかかった医務官が驚きを見せた。リアンシェルトは基本的にオフィス区画から出ないからだ。そこ以外でリアンシェルトと出逢うと良い事がある、などという噂もあるほどだ。

「お見舞いです。すぐに去りますから気にしないでください」

「あ、はい・・・」

抑揚のない声でそう言われた医務官はすぐさまその場を後にした。見た目は可愛らしくも少将の階級を持ち、次元世界最強とまで噂さ

れる氷結系魔導師として、古参の局員には畏怖されている。ルシリオンの病室の前にひとり佇むリアンシェルト。彼女の視線はルシリオンに向けられていた。

「愚かですね、無様で、哀れで、どうしようもない。レーゼフェア、フィヨルツェンならまだしも、いきなりシュヴァリエルと衝突するなんて・・・。何を思って仕掛けたのかは解りませんが、それは単なる自殺行為・・・」

リアンシェルトが窓ガラスに手を添えたかと思えば、「ふざけないでください・・・！」軽く叩き、ギュッと握り拳を作った。苛立っているのかリアンシェルトは拳を、いや全身を震わせている。

「一歩間違っていれば、神器王、あなたは死んでいた・・・！　実際、あなたは再起不能の遷延性意識障害だと診断されてしまっている・・・！」

俯いている所為でリアンシェルトの表情は見えない。ただ声は震えている。よほど苛立っているようだ。身の丈に合わずいきなりシュヴァリエルと戦った無謀な行為に対して。リアンシェルトはそのまま病室へと入って行った。それは完全な越権行為。集中治療室の病室内への入室は医務局員だけに許されているからだ。いくら少将と言えど、許可なくの入室は許されない。

「こんなに・・・痛々しい姿になって・・・」

リアンシェルトがルシリオンに装着されている人工呼吸器に手を掛

け、外した。ルシリオンの自力呼吸が弱まっている今、それは殺人に近い行為だった。

「いいですか神器王。次はありません。次にシュヴァリエルと戦えば、今のあなたでは確実に負け、今度こそ死ぬでしょう。悪い事は言いません。相手を変えなさい」

ルシリオンの心電図に変化が見られる。死へと近づいて行く彼の状況を示し始めた。リアンシェルトはそれを横目で見た後、「だから・・・このような無謀な真似はもうしないでください」と、俯いていた顔を上げた。その表情に怒りの色は一切なく、あるのは双眸から溢れ出る涙、悲しみの泣き顔だけだった。そして・・・

「・・・・想うが故に叶いたる願望（プロセラヒ・アグノス）」

リアンシェルトはルシリオンの顔へと自身の顔を近づけ、そっと口づけを交わした。

Ｅｐｉｃｏ２７－Ａ竜の脅威～Ｔｈｅ　１ｓｔ　ｔａｓｋ　ｆｏｒｃｅ　：　Ｄｒａｇｏｎ　Ｈｅａｄ

†††Ｓｉｄｅなのは†††

ミッドチルダに現れたリンドヴルム、その複数の実行部隊を逮捕するために、私たち機動一課・臨時特殊作戦班は３チームに分かれて対処に動いた。私とヴィータちゃん、そして対神秘戦闘の基点になるルミナちゃんとベッキーちゃん（敬称は何でもいいって言うことでさん付けにしたら、ちゃん付けの方が新鮮で良いってことだったから）の４人は、ミッド東部のラッセン地方へ向けて移動中。

「このリンドヴルムの方たちもオールドー・デ・ソルを持っていますね」

ベッキーちゃんがそう指摘する。私たちがいま居る輸送ヘリの貨物室にはモニターが１枚と展開されていて、これから私たちが相手をするリンドヴルム兵６人と、機動一課・アース分隊の人たちが映ってる。そしてリンドヴルム兵の１人が、あの太陽の杖を持ってた。シャルちゃんとシャルロッテさんが言うには、あの杖をどうにかさえすれば、私たち普通の魔導師でも戦えるっていうことだけど・・・。

「私とベッキーで、まずは杖持ちを――」

「ルミナさん。杖持ちは私と供だけでどうにかします。なのはさん、

ヴィータさんと共に他の兵の対処を」

ベッキーちゃんが十数個の鈴が付いてるデバイス（巫女さんが舞とかによく使うアレ、えっと・・・神楽鈴？）"ドゥーフヴィーゾヴ"を揺らしてシャラァン♪と音を鳴らすと、貨物室の空気が変わった気がした。ヴィータちゃんが「喚んだんか？」って訊ねる。

「はい。私の供――五精霊です」

ベッキーちゃんの固有スキル・五行契約は、ベッキーちゃんの出身世界の精霊を使役するっていうもので、対神秘戦には絶大なアドバンテージを誇る、ってシャルロッテさんは言ってた。精霊。神秘の塊。私たちのチームの最高戦力だ。この1ヵ月、海鳴市でベッキーちゃんの精霊さんと何度か戦ったけど、確かに傷1つ付けられなかった。

「・・・判った。杖持ちはベッキーにお願いしてもらう。ベッキーが杖持ちを潰した後、私、なのは、ヴィータの3人で残りの兵を片付ける。それでいい？」

「うん」「おう」

ルミナちゃんに頷き返す。そして・・・

「――さぁ、いよいよ現着だ。お嬢さん達、戦闘準備は整ってるかい？」

アース分隊専属輸送ヘリのパイロット・ヴェノム二等陸士の問いに「はいっ！」私たちは力強く応じた。ヴェノム二士が「良い返事だ。今からハッチを開ける。強風が入り込むから気を付けてな」そう忠告を入れてくれた後、ヘリの後部がゆっくりと開いた。

「よーし、行って来い！」

「じゃ、私から先に降下するから。みんな付いて来て！」

ルミナちゃんがまず飛び降りた。続いて「先行くぜ！」ヴィータちゃんが飛び降りた。ベッキーちゃんを見ると視線が合った。

「えっと・・・」

「それでは、私から先に行かせていただきますね。ヴェーチル、お願いします」

――ヴェーチル・クルィローー――

"ドゥーフヴィーゾヴ"を鳴らすベッキーちゃん。すると貨物室に入り込んで来る風がベッキーちゃんの背中に集まって翼のようなモノを形作った。ヴェーチル。確か風の精霊さんだったっけ。精霊としての姿はスズメだった。

「お先に失礼します」

ベッキーちゃんもヘリから飛び降りた。最後は私だ。私は「ありが

とうございました！」ヴェノム二士にお礼を言ってから飛び降りた。

「レイジングハート！」

≪Ａｃｃｅｌ　Ｆｉｎ≫

初めは重力のままに落下して、地面までもうすぐと言うところで飛行魔法を発動、トンッと着地した。軍服のようなバリアジャケット？で統一されてるリンドヴルム兵の人たちが私たちを見て「子供・・・？」怪訝そうな表情を浮かべた。けど、「気を付けろ。報告にあったチーム海鳴の２人が居る」って、リーダーらしきおじさんが身構えた。

「機動一課・臨時特殊作戦班です。リンドヴルム兵に告ぎます。武装を捨て、大人しく――」

――ショットガンバレット――

ショットガン型のミッド式デバイスを持ってる女の人が問答無用で魔力弾を撃ってきた。咄嗟にシールドを張ろうとしたけど「っ、ダメだ・・・！」すぐに空に上がった。みんなも防御じゃなくて回避行動を取った。神秘の加護を受けた魔法は魔術と化す。防御に回ったら確実に墜とされちゃう。

「公務執行妨害！　ベッキー、ヴィータ、なのは！」

「「はいっ！」」「おうよ！」

まずは杖持ちをどうにかしないといけない。そういうわけだから「ベッキー・ペイロード、推して参ります！　ジムリャー！」対杖持ちを担当するベッキーちゃんが"ドゥーフヴィーゾヴ"を揺らして鈴を鳴らした。すると地面からひょこっとある動物が顔を出した。

「「「もぐら・・・？」」」

愛らしいモグラの精霊・ジムリャーに小首を傾げるリンドヴルムの人たち。けど見た目に反してジムリャーはとんでもない存在。

「ジムリャー！　ゼムリャトリャセェーニエ！」

ベッキーちゃんが精霊魔法の術式名を唱えると、「なんだ！？」地震が発生した。私はすぐに「アクセルシューター・・・」射撃魔法をスタンバイ。ヴィータちゃんもシュワルベフリーゲンの発射態勢だし、ルミナちゃんも中空でクラウチングスタート体勢。

「ジムリャー、ピーカ！」

杖持ちの人は地震の中でも杖の先を地面から離さないように必死だ。そこにベッキーちゃんの精霊ジムリャーが新しい魔法を発動すると、杖持ちの人が立つ地面の至るところが隆起して、「なに！？」土の槍となって襲いかかった。決まった、そう思ったけど・・・

「させん！」

おじさんが携えてた大鎌を振るって、土の槍をバラバラに斬り裂いた。あの人、強い。一目で判っちゃうほどの空気を発してる。

「気を付けろ。この娘たち、オールドー・デ・ソルの能力を知っている。第1小隊ドラゴンヘッド各員・・・ヘッド6を護りつつ退却。俺たちの役目は局員と戦うことに非ず！」

「「「「「はいっ！」」」」」

「退却だぁ？　させっかよ、んな事！　リンドヴルムは1人残らずとっ捕まえる。二度と悪さが出来ねぇようにな！」

「それに、その杖――神器を抜いた瞬間、あなた達は神秘の加護を失うのでは？」

ヴィータちゃんとベッキーちゃんが身構える。太陽の杖は地面に突き立ててないと効果は発揮されない。杖を抜いた瞬間、私たちとドラゴンヘッドは同格の存在になる。そこを攻めればいい。

「神器の事も知っているか。シュヴァリエルさんの言っていたリンドヴルムへの脅威とは、お前たちだったか」

おじさんが1歩2歩と歩み寄って来る。携えているのは大鎌。武器型は基本的にベルカ式だけど、カートリッジシステムは見当たらない。ううん、それどころかデバイスにも見えない。まさか・・・

「全員、気付いたようだな。俺の持つこの鎌も、神器だ。・・・各

員、任務続行。娘たちとのお遊戯は俺、ヘッド1に任せておけ」

おじさん――ヘッド1が他の人を逃がすために立ち塞がると、ドラゴンヘッドが撤退を開始。ルミナちゃんが「ベッキー、ヴィータ、なのは、行って！」ヘッド1に向かって突進した。ヘッド1は「神器持ちを相手に1人で挑むか？」大鎌を振るってルミナちゃんを迎撃。

「判りました。ヴィータさん、なのはさん、逃げた方たちを追いましょう」

ベッキーちゃんがそう言った。でも「ルミナちゃん1人残していくなんて・・・！」私は頷けなかった。相手は神器を持ってるうえにかなり強い人だ。純粋な戦闘能力ならルミナちゃんの方が上だろうけど、向こうには神器のアドバンテージがある。

「大丈夫だ、なのは。ルミナの強さは、たとえ相手が神器持ちだろうと掠れるようなもんじゃねぇ！」

「ルミナさん。お1人でも大丈夫ですか？」

「まったく問題なし！　なのは、今は私を信じて」

ルミナちゃんはヘッド1の斬撃を余裕で避けつつ拳や蹴りを繰り出し続けて、ヘッド1もルミナちゃんの攻撃を避けては大鎌の刃の腹や柄で防御。手数も、余裕っぽさも、ルミナちゃんが勝ってる。それにルミナちゃんにも固有スキルっていう切り札が有る。神器や

神秘には少し届かないらしいけど、それでも一方的に負けるようなことはないっていうのはシャルロッテさんの言。太陽の杖による神秘の加護も無くなれば、ルミナちゃんは絶対に勝つ。私はそう信じて・・・

「お願い、ルミナちゃん！」

「ん！」

ルミナちゃんの笑顔を見て、私とヴィータちゃんとベッキーちゃんは、退却した他のドラゴンヘッドを追うために空を翔ける。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒？？？？†††

「本当にお前ひとりが残ったか。無益な戦闘は好まない。大人しく退いてくれるのなら、俺としては嬉しいんだが？」

ロストロギアを専門に蒐集するコレクター、ミスター・リンドヴルムを筆頭とする組織リンドヴルム。その組織が時空管理局のお膝元、ミッドチルダに現れた。しかも、古代遺失物ロストロギアと呼ばれる物の年代よりずっと古く、そして強大な力を有する物品――神器を装備して。

ミッドに現れた目的は不明。機動一課の報告には、何かを捜索しているらしい、っていうのがあった。何か。決まってる。ロストロギアだ。ミッドチルダに、リンドヴルムが狙うロストロギアが在る。

「リンドヴルムを見逃す？　馬鹿を言わないで。管理局員として、

聖王教会騎士団員として、ここで捕縛する！」

リンドヴルム・第1小隊ドラゴンヘッドのリーダー、ヘッド1と名乗った40代前半ほどの男へとそう言い放つ。教会もリンドヴルムには何度も苦汁を舐めさせられている。良い機会だし、今回の事件でリンドヴルムを壊滅させてみせる。

「聖王教会の騎士でもあるのか。通りで局の騎士とは練度が違うわけだ！」

ヘッド1の持つ武装は深紅の大鎌。コレもまた神器と呼ばれる物らしい。確かにデバイスやただの質量兵器には無い妙な気配を放っている。その大鎌による薙ぎ払いを限界までしゃがみ込むことで回避。神器には、神秘っていう特殊な力が宿っていて、同等かそれ以上の神秘を有していないと防御も迎撃も出来ないって聴いている。だから私は迎撃じゃなくて回避に専念。下手に打ち合って真っ二つにはされたくないからね。

（厄介過ぎる。でも、運が良い事に対処できる魔導師・騎士が局に居た。それが不幸中の幸い！）

その内の1人が・・・

「時空管理局本局捜査部・特殊技能捜査課、古代遺失物管理部・機動一課・臨時特殊作戦班、そして聖王教会騎士団・銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼ、アルテルミナス・マルスヴァローグ空曹長。いざ参ります！」

私だ。神秘は無い。無いけど、それに近い固有スキルを持っている。終極の支配者エクスィステンツ・ツェアレーゲン。触れた物質を自由に分解できる、反則級だって言われているスキルだ。でもそんな都合の良いスキルじゃない。

分解する"力"は私自身の肉体をも壊す。対象を分解する際、魔力で拳や脚などをコーティングする。そうしないとスキル効果が自身にも及ぶから。どういう原理なのか、私も騎士団や局の有識者でも解明できていない。ただ、魔力で体を護ってさえいれば、スキル効果は対象にだけ生じる。それだけ判っていれば何も問題ない。

（まぁそこまでキツイ制限じゃない。ほとんどはBランクの魔力で事足りるし）

たとえAMFを仕掛けられても、私のエクスィステンツ・ツェアレーゲンは封じられない。

「ズィルバーン・ローゼ・・・！　かの有名な騎士団最強部隊・・・！　ならばお前もパラディンなのか！？」

「ヤー。拳闘騎士最強の称号を頂く、ファオストパラディンよ。大人しく捕まってくれれば、私としては嬉しいんだけど？」

「相手に不足なし！　リンドヴルム・第1小隊ドラゴンヘッドの将ではなく、1人の騎士として試合を申し込む！」

俄然やる気を見せてしまった。私は溜息ひとつ吐いて「犯罪者が騎

士を語るな」ヘッド1に突進する。

――終極（エクスィステンツ・ツェアレーゲン）の支配者――

ヘッド1を殺さない程度のスキル効果を発揮したうえで、両拳と靴底以外の両脚（足裏にまでスキルを付加すると、足場の地面まで粉砕してしまうからね。それで一度、ガチで死にかけてしまったし）に魔力コーティング。

ヘッド1の武装は長柄の武装・大鎌。懐に入り込んでしまえば、あとは拳闘家の独壇場だ。私の左肩から右わき腹にかける袈裟斬りに振るわれる大鎌の一撃を、「よいしょ！」大きく跳躍することで回避。

「さらに！」

振り終えた直後の大鎌の石突を跳躍中に両手でキャッチ。そのまま背後に回ろうとしたけど、無理だった。ヘッド1の膂力はかなりのもので、奪い取れなかった。

「神器を狙うことは判っていた！　これが俺とお前たちの差だからな！」

ヘッド1は大鎌を思いっきり振るって私を振り払おうとした。こちらから手を離すことで下手に隙を生むような真似は犯さないようにする。空中で体勢を整えているところに、「はぁぁぁっ！」ヘッド1がその場で大鎌を振るう。

「っ！？」

ゾワッと悪寒が走った。着地するより速く足元にベルカ魔法陣を展開、それを足場にしてもう一度空へと上がる。そこで飛行魔法を発動して宙に留まって、下を見てみる。けれど何も起こっていない。

（私とヘッド１の距離からして中遠距離の斬撃と思ったのに・・・）

不発・・・なわけないか。そうだ。ただの魔法とか、ロストロギアとか、そう言った先入観は捨てないと危ない。アレは神器。正しく超常的な存在で、何を引き起こすかも判らない危険な物。

ヘッド１はさらに大鎌を振るい続ける。振るわれる度に襲われる悪寒。だけど何も起きていない。でも何かを行っているのは確か。そうでないとあんな疲れるだけの行為になんの得があるっていうわけ。

「これで準備は整った・・・！　さぁ来い、パラディン！」

そう言って大鎌の先端を私に向かって突き出した。来い、って言われても・・・、明らかに罠。だけど怯んでばかりはいられない。

「ツァラトゥストラ！」

漆黒に輝く六角形型で、６つの表面に十字架が彫られた腕環・"ツァラトゥストラ"を両手首に装備。一応はデバイス登録しているけど、正直、コレがデバイスなのかも判らない。何せこの"ツァラトゥストラ"は物心つく前から私が持っていた物で、どこで作られたのか、どういう材質なのか、どういう機構なのか、そう言った正体

すらも依然不明。

（魔力の集束量の上昇、出力・運用力の向上などなど。私の固有スキルを円滑に発動できるように作られた、謎の腕環・・・）

私は孤児だ。親の顔も知らない、本当の名前も知らない。聖王教会系列の孤児院前に捨てられていた私は５つまでそこで育てられ、そこの院長に"アルテルミナス"の名を貰った。そしてマルスヴァローグ家に養子として引き取られたことで、"マルスヴァローグ"の姓を貰った。その瞬間、私は１人の人間――アルテルミナス・マルスヴァローグとして完成された。

「はぁぁぁぁ――――ッ！」

思い出に浸るのもこれまでにして、私はヘッド１に向かって急降下。彼は身構えて、私の迎撃態勢に入った。致命傷になる刃に触れさえしなければ問題ない。それはこれまでの攻防で確認済み。狙いはヘッド１の両手。指の骨をへし折ってあげれば大鎌を持っていられないはず。

「運の良い奴め！」

「（運の良い・・・？　まあいいや）せいっ！」

斜めに振るわれる大鎌の刃の腹を爪先で蹴って、軌道を無理やり逸らさせる。予定とは違うけどすかさず靴底にスキル効果を付加して、ヘッド１の顔面へ前蹴りを繰り出す。

（歯や鼻の1本や2本は覚悟してよね！）

ヘッド1は即座に左手を柄から離して、ミリタリーグローブに包まれたその手で私の靴底をパンッとキャッチ。だけど・・・

「むぐぉ・・・！？」

ボキボキと、手首と5本の指の骨を折った音が聞こえた。やっぱり太陽の杖の加護が無ければ普通に攻撃が通る。ヘッド1は脂汗を流しながらも「ふんっ！」無事な右手だけで大鎌を振るってきた。

「仮にも騎士を名乗るなら犯罪なんて起こさないでほしいんだけど！」

「なに・・・！？」

「さっきの続き！　犯罪者のあなたが、1人の騎士として試合を申し込む、なんて・・・騎士を馬鹿にしないでほしいっていう話！」

ヘッド1と再度攻防を繰り返す。ヘッド1は片手ながらも上半身を使って器用に大鎌を振り回し、私の攻撃を上手く迎撃してくる。でもさっきよりは隙が大きい。それにしても動きづらい。得物がただのデバイスなら、回避なんて面倒な動作をせずに済んで、思うがままに粉砕できるのに。そうすれば好き勝手打撃を打ち込める。それが出来ないのが窮屈で仕方ない。

「騎士とは、武と勇を以って正を貫き、義を掲げ、忠を尽くし、礼

節を重んじ、高潔に生きる者！　あなたは・・・・！！」

「ぅぐ・・・・！」

「ただの犯罪者だ！」

大鎌の扱いが僅かに乱れた。その隙を見逃すわけにはいかない。神器というアドバンテージへの警戒の所為で本来の実力を発揮できなかったけど、大鎌さえ無くなれば私に敗北はない。大鎌の柄を取り落としそうになった右手へ向けて拳打を繰り出した。

――チェーンバインド――

「え・・・っ！？」

そこで私の左前腕部を拘束するのは赤いバインド。今この場に居るのは私とヘッド1。アース分隊は戦闘に参加しないし、味方の私にバインドを仕掛けるミスを犯さないはず。そして私とヘッド1はお互いにベルカ騎士のはず。

（ううん、まさか・・・それって私の早とちり・・・？）

ヘッド1と目が合うと、「俺は・・・」私たちの足元にミッド式魔法陣が展開された。

「すまないな。俺は・・・ミッドチルダ式の魔導師だ。騎士を名乗るようになったのは、この神器に選ばれてからだ」

「騙したのね！」

チェーンバインドによって空へと引っ張り上げられた私。空いてる右手でバインドを掴んで、スキル効果で粉砕する。体勢を整えて着地。距離を開けられたから、改めて接近するために駆け出した、その瞬間・・・

「っ！！？」

胸を袈裟切りに斬られた。ヘッド1から目を離していなかったから、大鎌を振るっていないのは確実なのに。それなのに・・・斬られた。斬られた個所を確認する。騎士甲冑は袈裟切りに裂かれていて、その間から見える素肌にも薄らと痕が付いていたけど、血は出ていない。

「それがこの神器・エスパース・ラムの能力だ」

「エスパース・ラム・・・？」

イリスの前世の人格だという騎士シャルロッテから神器の説明も伺っている。神器には最低でも1つ（最高で3つ）の能力が備わっていると。

（つまり鎌を振らずとも相手を斬ることが出来る能力・・・？）

ヘッド1は「パラディンを討つ日が来ようとはな」さっきまでは無

かった余裕を見せる。自分が勝つ事に迷いのない表情。

「（まずは能力を確認しないと・・・！）すぅぅ・・・はぁぁ・・・」

始めからその手を使わなかったのかも気になるし。とにかく魔力出力を上げたうえで全身にスキル効果を付加。これで神秘による攻撃に対して少しばかり抵抗力が上がる、らしい。でも神器のランクによっては無効化される可能性もあるとも聴いた。そうなったら、私に待っている未来は・・・死。もしくは再起不能。

（だからって逃げるわけにはいかない！）

クラウチングスタートの姿勢を取る。大鎌を振るわずに相手を斬ることの出来る能力なら、斬られるより速く突っ込んでやればいい。お尻を上げて、「突貫！」地を蹴って突撃する。的にならないようにジグザグに駆ける。するとヘッド1は身動き1つ取っていないけれど、私の四肢や頬が浅く斬られていく。

（間違いない。振るうことなく相手を斬れるんだ！）

それでも私の突撃速度に付いて来られないのか斬撃は全て浅いもの。勝った。そう思った。でも「あぐぅ・・・っ！」あと少しと言うところで、腹と胸を斬られた。今度は皮膚まで裂かれて出血。久しぶりのダメージにビックリしてよろけた瞬間、「きゃぁぁぁ！」背中を斬られた。

（どうして背中を斬られて・・・！？　距離や範囲を無視して相手を斬られる、ということ・・・！？）

スキル効果のおかげか出血はしたけど致命傷には至っていない。その代わり、上半身はほぼ裸。男を相手にいろいろとポロリは恥ずかしすぎる。私は騎士である前に1人の乙女だ。両腕で乳房を隠して、ヘッド1を睨みつける。

「終わりだな。いくらパラディンであろうとも神器には敵わない。それが証明された」

「っ！（栄えあるパラディンが、神器なんていう意味の解らない武装1つで負ける？）・・・・は、は、恥ずかしくなんてない！」

私の裸くらい見たければ見ればいい。両手を腰に置いて仁王立ちして胸を張る。火が出そうなほど顔が、ううん全身が熱い。ぎょっと目を見開くヘッド1。おじさんなのが救い。若い男の人だったらたぶん無理だった・・・かも。

（というか、アース分隊の人に見られているんじゃ・・・）

「一度変身を解き、再度変身しろ！　魔力に余力があればそれで修復されるだろう！」

「あ、そうか！」

騎士甲冑を解除して局の制服に戻る。そしてすかさず騎士甲冑へと

変身。肉体へのダメージは残っているけど、騎士甲冑は無事に元通り。私は「あ、ありがとう・・・、助かった」お礼を言うんだけど・・・なんなの、この状況。頭がおかしくなりそう。

「だが、それでもお前の負けは確定だ」

「言ってなさい。（あの大鎌の能力はかなり危険。距離も範囲も関係なく斬ってくる。しかも私のスキルを真っ向からスルーしてくる）」

全てが初めての感覚。これまでの１４年間、私のスキルは全ての犯罪者をひれ伏させてきた。それがこんなにも簡単に潰されるなんて。

「最後通告だ、パラディン。退け。次は死ぬぞ」

ヘッド１が大鎌をまた振るった。また襲われる悪寒。

（あれ・・・？　なんだろう・・・？）

さっきは気付かなかったけど、大鎌が振るわれるたびにヘッド１の周囲の空間が歪んでいくように見える。瞬きを何度かする。すると余計にヘッド１周辺の空間が歪んでいるのが見て取れるようになった。目を擦る。それは幻覚でもなく気の所為でもない。大鎌が振るわれる度、至る所に三日月状の歪みが生まれていた。

――クスクスクスクス――

（なに、今の笑い声・・・？）

歪みがハッキリと見えてきた時、私と同じ特徴的な笑い声が聞こえた気がして、周囲を見回す。でも私とヘッド1以外に姿はない。それと思念通話も通信も入っていないのを確認。

――人間という存在がどれだけ罪に塗れた愚かなものか――

また声がしたような気がした。しかも笑い声じゃなく、ハッキリとした言葉が・・・。

――いつまでたっても争いをやめない、やめようともしない存在。どれだけ根絶やしにして、更生させようと努力しても、やはり争いを始める愚者。抑えようと思えば抑えられる欲で同族たる人間を襲い、奪い、殺める――

「???・・・や・・・いや、いや・・・!」

胸の内で何か・・・何か嫌な感情が渦巻き始めた。体が震えだして、思わず自分の肩を抱きしめる。

――その理由が、ただ誰でもいいから殺したかった？　世の中つまらない？　ムカついたから？　相手にされなかったから？　金銭が欲しかったから？――

「なに、これ・・・、なんなの・・・!?」

「パラディン・・・?」

――何て罪深いことなの。その果てには赤の他人を殺すどころか、血の繋がった実の親を、子をも殺めるなんてことも増えてきた――

どす黒い感情が次々と生まれてくる。歯がガチガチと鳴り始めた。こんな感情を生み出す自分自身が恐ろしくなってきた。

――何たる身勝手か！！　愚か愚か愚か愚か愚かッ！　その頭脳はそんなくだらないことのため用意されたものじゃない！　世界をより良い形に持っていく権利を与えられておきながら、自らを生かす自然を破壊し、終には世界を滅ぼすまでに至る――

「うあああああああああああああああッ！！」

この場から、自分自身から逃げだしたい。その思いに駆られてあてもなく走り出す。目の前には三日月状の空間の歪み。邪魔だ、って左手で払い除けようとしたら「っ！？」斬られた。手の甲がバッサリ斬られて血が噴き出す。

「はぁはぁはぁはぁ・・・！」

足が止まる。指を伝う赤い血と空間の歪みを交互に見ていると、さっきまでの恐怖が薄らいでいく。神器攻略の鍵を見つけたかもしれない、そう思うと、意味不明な言葉も感情も邪魔なだけのノイズとして追いやることが出来た。私は足元にあった小石を手に取り、別の歪みへと放り投げる。すると小石が真っ二つにされた。

（もしかして・・・大鎌の本当の能力は・・・！）

ヘッド1へと目をやる。どこか私を心配している目。その目から大鎌へと目を移す。見える。今ならハッキリと大鎌が纏う神秘なる力が見える。大鎌全体を覆う靄のようなもの。アレが神秘・・・。

――だから護る価値なんて無いッ――

うるさい、黙ってて。そんなわけの解らない感情に振り回れている状況じゃない。今はただ、局員として、教会騎士として、目の前の敵を討つ。深呼吸を数回した後、頬を両手で勢いよく叩く。するとヘッド1は「また良い目に戻ったな」って口角を吊り上げた。

そして大鎌を振るう。刃に纏わりつく靄が至る所に放たれていくと、それらは三日月状の歪みとなってそこらじゅうに留まり続けた。それでようやく確信した。ヘッド1の持つ大鎌――神器"エスパース・ラム"の能力がなんなのか。

「見切った！」

ヘッド1へ向かって突撃する。もちろん空間の歪みを躱しながら。ヘッド1がさらに大鎌を振ると、靄がすべて私に向かって来た。そしてそれらは高さも長さも違う歪みと化した。私は触れないように躱す。

「お前、まさか・・・見えているのか・・・！？」

「ええ！　エスパース・ラムの能力。それは、斬撃を自由自在に空

間に留めておく、というもの！」

神秘による不可視の刃を任意の場所に留める。空間が歪んで見えていたその正体こそが、その場に留まっていた神秘の刃そのものだったわけだ。不可視ゆえに回避不可。さっきヘッド1が私に言った、運が良い、というのは・・・私が刃を運よく躱したからだ。

「っく・・・！」

悔しげに呻くヘッド1。そして私は全ての刃を躱し、ヘッド1を攻撃可能範囲に入れた。スキル効果を付加した右拳で拳打を繰り出す。ヘッド1は右手だけで大鎌を操り、防ごうとした。でも私は殴ることなく指を大きく開いたうえで大鎌の柄を鷲掴んだ。

「なに・・・！」

「せいやっ！！」

上げた右足の靴底にスキル効果を付加して、地面を思いっきり踏みつけた。スキル効果・分解によって私たちを中心とした地面に直径5m・深さ3m程度のクレーターが出来る。これをやると上の人にすごい怒られるけど、緊急時だし仕方ない、うん。きっと許してもらえる。

一瞬の浮遊感。突然宙に投げ出されたヘッド1は対処に数瞬だけど遅れる。それが最大の隙。スキル効果を全て解除して、単純な魔力付加した拳打を・・・・

「終わりッ！！」

「うごぉ・・・・！！」

ヘッド1の顔面に打ち込んだ。殴られた衝撃でヘッド1はクレーター底に勢いよく叩きつけられて、そのまま動かなくなった。私は飛行魔法でゆっくりと降りて・・・

「神器エスパース・ラム、回収完了」

側に突き立っていた大鎌を手にした。

†††Ｓｉｄｅアルテルミナス⇒ヴィーター†††

「――あたしらの出番、全然なかったな・・・」

「にゃはは、だね・・・」

あたし達の前に転がるリンドヴルム兵たち。全部ベッキーが従える精霊がやったことだ。リンドヴルム兵を倒したベッキーは、「みんな、お疲れ様でした」って精霊たちを労っていた。神器を相手にしても圧倒的な強さを見せたベッキーと五精霊。

太陽の杖を持ってた女の周囲の酸素を奪って酸欠にし、杖を自ら手放させた。そんで神秘の加護を失った瞬間に他の精霊で一斉攻勢に出て、一気にブッ潰した。

「ご苦労さまでした。リンドヴルム兵の捕縛は、僕たちに任せてく

ださい」

アース分隊の分隊長の敬礼に「お願いします！」敬礼で応える。魔力結合を封じる手錠を掛けられていくリンドヴルム兵。連中が持っていたデバイスはアース分隊員が封印して、太陽の杖――神器・"オールドー・デ・ソル"は、ベッキーの精霊の1体、金属を操る精霊によって作りだされた鋼鉄のケースにしまわれた。あとは・・・

「ルミナちゃん、大丈夫かな・・・」

なのはが漏らす。ルミナの奴が心配だ。あっちは武器型の神器だったし、ベッキーが居るこっちに比べるとその危険度はかなり高い。けど、アイツは仮にも拳闘最強の騎士ファオストパラディンだ。そう簡単に負けるはずがねぇ。それだけが、あたしがアイツの勝利を信じる要因だ。

「ヴィータさん、なのはさん。ルミナさんの元へ参りましょう。まだ戦闘が続いているようであれば加勢したほうがいいです」

「あ、うん。そうだね」

「おう。急ごうぜ」

まずはアース分隊に一言断りを入れる。許可が降りたことであたし達は空へと上がって、ルミナとヘッド1っていう奴らのリーダーが戦ってる場所へと向かって飛んだ。ルミナは割とすぐに見つかった。なのはがクレーターを見つけたからな。

すぐそばに降り立って、別のアース分隊員に付き添われていたルミナに「さすがだな」あたしは声をかけた。ルミナは手や上半身に包帯を巻いていた。それだけヘッド1って奴の神器がヤバかったんだ。

「ルミナちゃん、大丈夫！？」

「大丈夫。この程度の傷で騒ぐようなものじゃないよ」

ルミナは満面の笑顔を浮かべて、ピースサインをあたし達に向けた。なのははピースサインを返し、ベッキーは「信じていましたよ」と微笑んだ。あたしは「騎士だもんな」って返しながら、担架に乗せられて救急車両に乗せられるヘッド1を見た。顔面がものすげぇ腫れてた。どんな攻撃を喰らったんだよ、アイツ。

「まぁとにかく私たち東部担当チームの任務は完了。南部へ戻ろう」

「おう」「うん」「はい」

いくら魔術を扱えるフィレスが側に居るにしてもやっぱはやてとリインの事が気になるしな。つうわけで、あたしらは役目を全うして、輸送ヘリに乗り込んで集合場所の南部へ戻ることになった。

Ｅｐｉｃｏ２７－Ｂ竜の脅威～Ｔｈｅ　８ｔｈ　ｔａｓｋ　ｆｏｒｃｅ　：　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂｌｏｏｄ

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

リンドヴルムがミッドチルダに現れた。しかも魔法が通じない相手も居るという。そういうわけで神秘に詳しいシャル――正確にはイリスの内に宿る騎士シャルロッテの提案によって設立された私たち、機動一課・臨時特殊作戦班が逮捕に動くことになった。
そして今、私、アルフ、アリサ、ザフィーラ、それと特戦班のリーダー（階級が一番上だから）のセレスは、新たに出現したリンドヴルムを逮捕するために、ミッド西部エルセアへ輸送ヘリを使って移動中。

「やっぱり連中の狙いはロストロギアかしら」

「だと思うよ。ロストロギア専門のコレクターが率いる組織だからね」

輸送ヘリの貨物室の両側に備え付けられている長椅子に座って、現場に着くまで話し合う。私たちの間には２枚のモニターが展開されていて、それには機動一課・フレア分隊の追跡から逃れようと、車１台や２人乗りの小型飛空艇１機を使って逃亡しているリンドヴルムが映し出されている。

「小型飛空艇かぁ。また面倒なモノを用意して来たね。しかも武装

付き」

私たち西部担当チームの対神秘戦の要、セレスが腕を組んで唸った。飛空艇に乗るリンドヴルムを捕まえるためには、飛空艇を止めたうえで、引き摺り出さないといけない。かなり手間が必要だ。しかも飛行速度もかなり出ているから、こちらも相応の速度が無いと止められない。

「車の方は対処が簡単じゃないかい？　あたしとザフィーラ、あとアリサでなんとかして、フェイトとセレスで飛行艇をどうにか出来ないかい？」

アルフがもう片方のモニターに移る車を指差した。街中を暴走している車。追跡するのは一課の車両とバイク。一般車が巻き込まれないように路肩に移動していく。早く止めないと大事故になりそう。

「そうとも限らぬだろう。向こうは神秘を保有している可能性が高い。そしてこちらに対神秘の戦闘が出来るのはセレスのみ。万が一にも車に、最悪両方に神秘を扱うリンドヴルムが居るとなれば・・・」

「見事に返り討ち、だね」

ザフィーラの話を継ぐ。神秘や神器と言った特殊な力が関わってきている今回の一件。神秘に挑むにはこちらも神秘を有していないといけない。そうでないとシャルやシグナムのようにデバイスを粉砕されるし、魔法も通用しない。

「とりあえず車を先にどうにかした方が良いんじゃない？　飛空艇ならそうそう大きな事故は起きないと思うし」

アリサがそう提案した。空は広いし、リンドヴルムも自ら建物に突っ込むような真似はしないはす。確かにいつ大事故が起きるか判らない車の方をどうにかするのが一番だ。だからアリサの提案を採用して、詳しい作戦を立てる。

「――じゃあ、私とフェイトとアリサの3人で車を停止させる」

「アルフとザフィーラは、このままフレア分隊と一緒に飛空艇を追跡」

「というわけですから、プロフィア曹長、よろしくお願いします！」

アリサがフレア分隊専属のヘリパイロット、ヒノ・プロフィア陸曹長に声を掛けた。プロフィア曹長は女性のパイロットで、操縦中のその姿はすごく格好いい。

「了解！　それじゃあハッチを開くよ！　強風には気を付けて！」

ヘリの後部ハッチがゆっくりと開いていって、貨物室に強風が入り込んできた。眼下に広がる街並。街上空の飛行許可はもう取ってあるということで、「よーし。行っておいで！」私とアリサとセレスは「行って来ます！」そう応じて、セレスが真っ先に飛び降りた。次いでアリサが飛び降りた。

「・・・アルフ、ザフィーラ」

「あたし達は大丈夫だよ。フェイト達が戻って来るまで仕掛けはしないからさ」

「お前たちも気を付けるのだぞ」

「うん！・・・行って来るね」

遅れて私もヘリから飛び降りた。ヘリはそのまま飛空艇の追跡を再開して、私たちから離れて行く。飛行魔法を発動して、先に飛び降りたセレスとアリサを追う。まずはアリサに追いつく。

「アリサ。かなり速くなったね、飛行速度」

「そりゃあね。毎日、あんた達が特訓に付き合ってくれてるんだし、これくらいは出来なきゃ大問題でしょ」

アリサも飛行魔法を無事に修得して、今のように高速で飛べるようになった。だけど空戦は未だに出来ない。というより諦めている。だから取得している魔導師ランクの種類も陸戦だし。そんなに難しいのかなぁ。

「フェイト、アリサ。お喋りは後で。陸士１０８部隊や地域警邏隊のみなさんの協力もあって、交通誘導が成され始めた。リンドヴルムの車を郊外へ誘導していってくれる」

速度を落として私たちを待っていてくれたセレスに追いつくとそう教えてくれた。セレスの側にはモニターが2枚。映っているのは機動一課の課長とフレア分隊の隊長。２人が西部管轄の両部隊に許可を取ってくれたみたい。

『すまないね。私たちに出来ることはこれくらいだ』

『だからサポートだけはしっかりと務めさせてもらうよ』

「「「ありがとうございます！」」」

通信が切れる。ここまでしてくれたんだ。私たちもしっかりと役目を全うしないといけない。私たちは顔を見合せて強く頷き合う。そして目は街中を高速で走り続けるリンドヴルムの車へ。道路の至る所にバリケードが立てられていって、車は徐々に街から離れて郊外へ追いやられていく。

「そろそろ平地に入るから、そこで叩く！」

「判った！」「オーケー！」

私とアリサで頷き返す。そして車は人の姿がまったくない平地に入った。私たちは一気に高度を落として車へ最接近。セレスが運転席の窓をコンコンとノック。そして「止まれ、リンドヴルム！」って怒鳴った。それでも車は止まることなく、さらにスピードを上げて引き放しにかかった。

「フェイト、アリサ。あれって停車勧告無視ってことでいいんだよね？」

「だね」「まあね」

「そうだよね。じゃあ力づくで、止まってもらおうか」

「それくらいされても仕方ないくらいの危険運転だったものね」

セレスとアリサがニヤリって笑う。いくら相手が犯罪者でも、あんまり無茶な事をしないでね。セレスがアームドデバイス・"シュリュッセル"を脇に構えて、カートリッジを2発ロードした。

「せいりゃぁぁぁぁっ！！」

横薙ぎに振るわれる"シュリュッセル"。そして刃から放たれるのは、アイスブルーの魔力光に輝く純粋な魔力斬撃。それが車の行く手へと打ち込まれて、地面を大きく穿った。物理破壊設定だ。そうなると当然、車は隆起した地面を乗り上げて横転、逆さまになった。ダメだ、どう見てもやり過ぎだ。アリサすら「ちょっと、あれいいの？」って困惑気味だし。

「リンドヴルム自体もそれなりの魔導師の集まりだし、あの程度の事故なら無傷で乗り越えられるはず」

"シュリュッセル"の剣身の腹で自分の肩を叩くセレス。その余裕

は確かなものだった。４ドアの内、３ドアが吹き飛んだ。そして「普通ここまでやるか、公僕がぁ・・・！」助手席から出て来たスキンヘッドにサングラスっていう顔立ちの男の人が出て来た。さらに運転席と後部座席から男の人が２人。

「まるで暴走族ね。髪型もスキンヘッドにドレッドヘアにモヒカン。さらにサングラスに特攻服とか」

アリサが呆れ口調でそう言った。日本に来て初めて知った暴走族って言う人たちの格好と丸被り。うーん、次元世界は不思議だ。

「おいコラ、嬢ちゃん達。いきなり車潰すとかどういう了見だぁ？あ〝あ〝！？」

「どうすんだよ、これ！　本部に戻ったらシュヴァリエルさんに怒られんだろうがよ！」

「この車は超レア物で、云千万クレジットってする代物なんだぞ、おいコラ！」

すごくガラが悪い。けど、良い情報を貰った。シュヴァリエルは近くには居ない、ということを。私たちは頷き合って、「あなた達を逮捕します！」リンドヴルムにデバイスを突き出した。

「おうおう、上等だオラ！」

「ガキだからって遠慮はしねぇゼ！」

「俺たちリンドヴルム・第８小隊ドラゴンブラッド！　俺ブラッド１、そして２と３が、相手をしてやるぜ！」

「いいでしょう、お相手したします！　アリサ、フェイト、下がって！」

この中で神秘や魔術と真っ向から戦えるセレスが先陣を切る。セレスの足元に展開されたベルカ魔法陣がグニャリと歪んで、別の魔法陣に変化していく。そして正四角形の中に雪の結晶、正四角形の四隅からひし形模様が伸びて、それらを六角形のラインが三重と囲う魔法陣となった。

「時空管理局・機動一課・臨時特殊作戦班班長、セレス・カローラ一等空士！　先陣を切らせてもらいます！」

セレスの全身から放出されている魔力から妙な感じを得る。ただの魔力から神秘を有した魔力へ変化したから・・・と思う。そしてセレスの周囲にいくつもの雪の結晶（そのどれもが１ｍ近い大きさだけど）が発生。

――雪晶飛刃（ボラル・ニエベ）――

複数の雪の結晶が高速回転しながらリンドヴルム・ドラゴンブラッドの３人に向かって行く。神秘を有する魔力を使用して、作用を発生させる技法・魔術。魔術に対抗するには魔術しか無い。セレスの今の攻撃は魔術だ。

魔術を防ぐ術は２つ。魔術か神器（神秘の塊だっていう武装）だ。ドラゴンブラッドの３人にそのどちらも無かったら、神秘の扱えない私とアリサがここに残って戦闘し、セレスは飛空艇追跡に戻ってもらって、空を逃げる他のドラゴンブラッドを逮捕してもらう。

（この３人はどっちなんだろう・・・！）

そしてあと少しでセレスの魔術が到達しようというところで、スキンヘッドのブラッド１が特攻服の中から１本の剣を抜いて、雪の結晶をすべて斬り払った。デバイスには見えない両刃剣。魔法も魔術も使った形跡はない、と思う。つまり、あの剣は・・・

「「「神器・・・！」」」

「ブラッド１！　コイツらひょっとして、シュヴァリエルさんが言っていた・・・！」

「俺たちリンドヴルムへの脅威か！　面白い！　俺と、このキャルタンクリ―ヴでどんだけのもんか確かめてやるぜ！　テメェらは金髪２人をどうにかしな！」

「「押忍！！」」

部下に命じ終えたブラッド１がセレスに向かって突進して来た。戦場を移すために駆け出したセレスからの「あと２人はお願い、アリサ、フェイト！」指示に、私たちは「うん！」首肯して他のブラッド２とブラッド３に目をやる。すると２人は首に提げていた・・・

鍵のような物を取り出した。神器、もしくはロストロギアかも知れないって警戒する。

「エクェス！」

「トリス！」

「「セットアップ！」」

杞憂だった。ブラッド2とブラッド3のデバイスは大型バイク。そして2人の手には拳銃と金棒。そのどちらもデバイスだと思われる機械で出来ている。武器とバイクの一体型かな。アリサが「日本の暴走族をさらに凶悪にしたような連中ね」ってポツリと呟いた。

「おらおらぁ！　シュトルムファナティカーのお通りだ！」

「俺たちのロードを邪魔すんじゃねぇぞ！」

「「世露死苦ぅっ！」」

爆音を鳴らしながらバイクが走り出す。私とアリサは背中を向い合せて、「どっちをやる？」訊き合う。1人は拳銃型のミッド式魔導師。1人は金棒型で、カートリッジシステムがないことからストレージデバイスのミッド式魔導師。機動力はなかなか。大型バイクを自由自在に乗りこなしてる。

「あたしに金棒の奴を任せてくれない？」

「それじゃあ私が拳銃の人だね」

"バルディッシュ"を通常の戦斧アサルトから大鎌ハーケンへと変形させる。アリサも"フレイムアイズ"を通常の片刃剣ファルシオンから銃剣バヨネットへ変形させた。さぁ準備は整った。

「機動一課・臨時特殊作戦班、アリサ・バニングス！」

「同じくフェイト・テスタロッサ・ハラオウン！」

「「いきます！」」

――ソニックムーブ――

――ブレイズロード――

私たちを包囲するように周囲を走るブラッド2とブラッド3に向かって突撃した。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒？？？？†††

初めての他部隊への出向。しかも私の大好きなお姉ちゃん、フィレスが所属している機動一課へ。これほど嬉しい事なんて他にはない。だから神器とか神秘とか魔術とか、命の危険がいつも以上に高まる任務だとしても、何も怖くない。それに・・・

（魔術。それに騎士シャルロッテから聴いた、私たちカローラ家の真名の事実）

私のフルネームは、ファビオラ・プレリュード・セレス・カローラ・デ・ヨツンヘイム。歴代の当主より口外無用と厳命されている名前。それをイリスの前世である騎士シャルロッテ様から聴いた時はドキッとした。どうして知っているの？って。聴けば騎士シャルロッテが存命だった頃にヨツンヘイムという世界も王族もいたそうだ。そして、名前と一緒に受け継がれてきた特別な魔法。威力が普通の魔法とは違うと思っていたけど、まさかそれこそが数千年以上も前に滅んだ技術・魔術だったなんて。でもだからこそ私はこの特戦班のメンバーに、さらにはリーダーに選ばれた。

「（騎士シャルロッテ、そして何よりお姉ちゃんの期待に応えるためにも・・・）あなたを逮捕します！」

リンドヴルム・ドラゴンブラッド小隊のリーダー・ブラッド1。その人が私の打破すべき神器持ちの男。携えているのは両刃剣一振り。確かにデバイスやロストロギアには無い、妙な威圧感がある。

――神秘を打倒するにはそれ以上の神秘を以ってあたるべし――

私の魔術が有する神秘が上か、それとも神器の神秘の方が上か。それが勝敗を分ける。

「氷閃刃（イエロ・コラソン）・・・！」

ヨツンヘイム式魔術を発動。私のデバイス・"シュリュッセル"で彼の持つ神器・"キャルタンクリーヴ"で打ち合えば簡単に破壊されるから。剣身を魔術による冷気で覆って神秘を纏わせ、そのうえ攻撃力を増加させる。

「おらぁぁぁぁッ！！」

ブラッド1の接近を目視。"シュリュッセル"の柄を両手持ちして脇に構え直す。そしてお互いが攻撃範囲に入ったその瞬間、ブラッド1は大振りな振り下ろし。そんな一撃、目を瞑っていても避けられる。私は1歩、ブラッド1の右手側へ進みながら"シュリュッセル"を横薙ぎに払った。

「っ・・・！？」

「なるほど。神器持ちイコール強者・・・というわけではない、ですか」

背後に佇むブラッド1へと言い捨てる。防護服のみを破壊するつもりで斬った。神器によるダメージに注意さえすれば、お粗末な剣の腕前であるブラッド1なんて私の敵じゃない。投降を促すために振り向いている最中・・・

「ケンカに手加減してんじゃねぇぞ、ゴラ゛ぁッ！！」

ブラッド1が振り向きざまに"キャルタンクリーヴ"を横払い。慌てることなく"シュリュッセル"を直立に構えて、刃を受ける。そ

して衝撃をまともに受けることなく、流すために振るわれる速度と同じ速度で水平に傾ける。

「あ゛・・・・！？」

シャァン！と金属がすれ合う音が盛大に響いた。そして大振りだった事もあって大きく懐を開けるブラッド1。私は彼の喉仏に"シュリュッセル"の剣先を突き付ける。終わった。ブラッド1も自身の喉仏に僅かに触れる"シュリュッセル"によって身動きを取ろうとしない。

「終わりです。武装を解除し、大人しく投降をし――えっ！？」

ブラッド1が空いている左手で"シュリュッセル"の剣身を握って、自ら自身の胸に突き刺した。その光景に思考が止まる。自害した。させてしまった。

（呆けている場合じゃない！）

出血量が増えると思い"シュリュッセル"を抜かず、柄から両手を離して傷口を押さえようとした。その時・・・

「なんつってな！」

「っ！？」

ギラリと目を輝かせ、口角をギリギリまで上げたブラッド1。振る

われる"キャルタンクリーヴ"。考える間もなく体が動くままにしゃがみ込んで、そのまま一足飛びで後退。そして目はブラッド1へ。

「へっへっへ。残念だったなぁ、管理局員ちゃんよぉ！　俺は、傷つかねぇのよ、死なねぇのよ！」

ブラッド1が私の"シュリュッセル"で自身の体を切り刻み始めた。確かに斬っている。それでも血が出ないし傷も付いていない。そう言えばさっき胸に刺した際にも出血していなかった気が・・・。

「あひゃひゃひゃひゃ！！　すげぇぜ、このキャルタンクリーヴって剣はよぉ！」

「とりあえず私の剣、返していただきます！」

――制圧せし氷狼（インバシオン・ローボ）――

ブラッド1へ突進。さらにはヨツン術式を発動。氷で出来た狼の群れ――総数15頭を創造して解き放つ。私より先にブラッド1へと到達する氷狼たち。ブラッド1は"キャルタンクリーヴ"を大雑把に降り続けて氷狼を真っ二つにしていく。その中でも氷狼は腕や太腿、脇腹など噛み付いて行く。

「効かねぇっつってんだろうがよぉ！」

ちょうど氷狼を寸断していたブラッド1の懐に入り込んで、"シュリュッセル"を持つ左手に「せいっ！」魔力を付加した正拳突きを

打ち込む。効きはしないだろうけど、それでも拳打の衝撃だけはちゃんと通じるようで、「チッ！」"シュリュッセル"を落とした。地面へ突き刺さるより早くキャッチ。

――氷閃刃（イエロ・コラソン）――

再度、魔術による冷気を剣身に付加。上半身を捻りながらの振り上げ。ブラッド1は躱すことなく私の斬撃を受け入れた。斬った感触はそのまま。だけどやっぱり傷は付かない。普通の魔導師には無理な芸当。レアスキルや固有スキルならあり得るかも知れない。でも今に限れば・・・

（神器の能力・・・！）

その確率の方がずっと高い。そうなると、ブラッド1の体にいくら攻撃を入れてもきっと徒労に終わる。ならば神器を潰すのみ。狙いをブラッド1の肉体から神器へと変更。

「はぁぁぁぁぁぁーーーーーッ！！」

「うお・・・！？」

神器・"キャルタンクリーヴ"に連撃を叩き込む。魔術の効果が切れそうになったら「イエロ・コラソン！」を再発動して、カウンターを受けないように最大注意。一応、魔力を使って氷の剣を創り出す術式・エスパーダ・デ・ラグリマというものもあるけど、魔力消費が大きいからあまり使いたくない。

「剣で戦う気であるなら、まずは扱い方を学びなさい、ブラッド1！！」

「クソガキャァァァァーーーーッ！！」

私は"シュリュッセル"を振るい続け、ブラッド1の反撃を許さない。"キャルタンクリーヴ"だけでなく、柄を持つ両手や胴体にも斬撃を打ち込んでいく。だけどやはり男性。"キャルタンクリーヴ"をしっかりと握りしめていて、弾き飛ばすことが出来ない。腕も斬っても柄を離さない。実に面倒な腕力。

「（まぁ騎士に対して、腕力や武装の差だけで勝とうという事がそもそもの間違い）はぁぁぁぁっ！」

「なんだ、このガキの力は！？　こんな細腕のどこにこんな力が・・・！」

私の一撃にブラッド1が弾き飛ばされて後退。足腰がなってない。追撃するために距離を詰めようとしたら、「クソが！」ブラッド1が私に背中を向けて逃げだした。投降するなら追撃はしないけれど、逃走は問題外。追撃するために駆け出したその時、「プリンキペス！」ブラッド1が懐から何かを取り出したのが見えた。鍵だ。

「セットアップ！」

一瞬の発光の後、ブラッド1の側には大型バイクが1台。バイク型のデバイスにブラッド1が乗って、「オラオラァ！　こっからが本

番だぜ！」けたたましい爆音を轟かせて走らせ始めた。

「俺たちドラゴンブラッドは、カルナログ最速の爆走族チーム・シュトルムファナティカーだったんだぜ！　俺たちの本当の戦いは、相棒（バイク）に乗ってからなのさ！」

目測で時速９０ｋｍ近い速度で私の周囲を走り回るブラッド１。徐々に私へと距離を詰めて来ているのも判る。高速で動き続ければ私の攻撃は届かない、とか思っているのだろうけど・・・。

「私がなんの魔法を扱う騎士だったか、もう忘れたのですか？」

――愚かしき者に美しき粛清（センテンシア・コンデナトリア）を――

"シュリュッセル"を地面へと突き刺す動作をトリガーとして、対地凍結術式を発動。私を中心に周囲５００ｍの地面を急速冷凍させる。するとどうなるか。

「グリップが効かねぇ！？」

ガッシャーン！と大きな音を立ててブラッド１のバイクが転倒。ブラッド１もバイクも凍結している地面を何十ｍと滑走。その途中、ブラッド１が"キャルタンクリーヴ"を手放したのをしっかりと見た。

「しまっ・・・！」

慌てて"キャルタンクリーヴ"を取ろうとするブラッド1。この最大のチャンスを見逃すほど私は優しくも間抜けでもない。

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

氷で出来た螺旋状の杭による高速射撃術式を発動。射出するのは25本。足を滑らせながらも、凍る地面をなおも滑る"キャルタンクリーヴ"を手に取ろうとしていたブラッド1より早く「チェック」氷の杭で彼の防護服の裾や袖を貫いて、地面に縫い止める。

「あ、テメ、何しやがる！　離しやがれ！」

「聞く耳持ちません。それとも抵抗しますか？　今度は直接あなたに撃ち込みますよ？」

もう一度、ディアブロ・クエルノを発動して、ブラッド1の面前に配置する。先程までの彼だったなら余裕の表情で、やれよ、みたいなことを言ったんだろうけど、「っ・・・！」今は引きつらせているばかり。確定した。ブラッド1のダメージ無効は神器の能力だったんだ。

「チェックメイトです。大人しくそのまま伏していてください。それでもまだ抵抗を見せるのであれば・・・」

"キャルタンクリーヴ"の側まで歩み寄って、柄を握って拾い上げる。それだけで理解できる神器の強大さ。気分が高揚していくのが判る。自分は強くなったんだって思えてしまう。コレは危険だ、悪

しき者が持っていてはいけない物だ。

――凍（ハウラ・コンヘラル）てつく氷葬棺――

いま放てる限りの冷気で"キャルタンクリーヴ"を凍結させる。私の神秘と神器の神秘が拮抗している、もしくは私の方が弱いのか、完全に凍結するまで数分と掛かってしまったけど、「神器の回収、完了です」無事に任務を果たせた。

「っ！・・・くっっそぉぉぉぉぉーーーーーーっっ！！」

†††Ｓｉｄｅセレス⇒アリサ†††

「クソが！　なんなんだ、なんでこんなガキが、こんなに強ぇんだ！！」

今、あたしが相手にしてるのはブラッド３とかいうモヒカン頭にサングラス、特攻服、それに金棒と大型バイク型のデバイスっていう暴走族のような男。魔力ランクはざっとＡ＋ってところかしら。一般的な武装隊隊長よりは強い。けど・・・

「あんたなんかよりよっぽど強い連中に日々揉まれているからよ！」

――フレイムバレット――

銃口から火炎弾１０発を連射。バイクの軌道を読んで、行く手に撃ち込んでいく。だけど「ああもう！　また避けられた！」バイクの性能が良いのか、それともドライバーのブラッド３の運転技術が良

いのか、どれもこれも紙一重で躱される。

「お返しだ、オラァッ！！」

バイクの前輪を挟みこんだ2本の金属棒（フロントフォークだっけ？）の狭間に備え付けられてるガトリングガン型のデバイスらしいものから魔力弾が無数に連射されてきた。

――ブレイズロード――

両脚から炎を噴射させての高速移動魔法を発動して、その場からダッシュ。魔力弾の壁を躱した後は、「今度はこっちの番よ！」って、フレイムバレット8発を撃ち返す。でもやっぱり避けられた。むぅ、どうしたものかしらね～。

「太陽の騎士モードでこの辺り一帯ふっ飛ばそうかしら」

≪ 馬鹿を言うなよ、アリサ。あんな小物にスリーズ・サンズレガリアを使うな≫

「言ってみただけよ」

ブラッド3程度の相手にそこまでしないと勝てないとなると、あたしは所詮そこまでのレベルだってことになる。ファルシオンとバヨネットフォームの"フレイムアイズ"で大半の敵に勝てるような魔導師にならないと。

「フレイムアイズ！　フレイムウィップ！」

≪応っ！≫

銃身下にある剣身から炎の鞭を発生させて、大きく伸ばしてブラッド３のバイクの前方めがけて横薙ぎ。ブラッド３は迫り来る鞭の対処法として、バイクを転倒スレスレになるまで傾けた上でジャンプした。そうしてあたしの一撃は、バイクとブラッド３の間を空しく通過。で、落下するブラッド３は体勢を立て直し始めたバイクのシートに見事着地して座った。

「アンビリーバボー」

≪今のは本当にすごいな≫

まるで曲芸だったわ。でも驚いてばかりもいられない。ブラッド３があたしに向かって魔力弾を連射して来た。横にダッシュすることでまた躱す。さっきから大体こんな攻防を繰り広げてる。お互いの攻撃が入らず、撃っては避けての繰り返し。

（ああもう！　無傷で済まそうとするのがいけないわけね！　やってやろうじゃない！）

綺麗に勝とうというのがそもそもの間違いなのかもしれない。そう思い至ったあたしは立ち止まって、"フレイムアイズ"の柄を両手持ち。

「とうとう諦めたか、おい！」

ブラッド３があたしの周囲を回り始めて、「恐怖に歪んだ顔を見せてくれよ！」あたしの真正面から突っ込んで来て、魔力弾を連射して来た。

「フレイムアイズ、カートリッジロード！」

マガジン内の残り４発を一斉ロード。"フレイムアイズ"を脇に構えて、前面にラウンドシールドを展開。そして、「ブレイズロード！！」両脚から炎を噴射させた上でブラッド３に向かって駆け出す。

「ハッ！　チキンゲームってわけか！　ガキのクセに面白いゲーム知ってんじゃねぇか！！」

シールドにガツンガツン当たり続ける魔力弾。カートリッジ無しでの発動だったら確実に砕かれてたわね。と、魔力弾に混じって何か飛んで来たのが微かに見えた。そしてソレは「っ！？」あたしのシールドにぶつかって、さらに砕いてきた。咄嗟に首を傾けて、ソレを避ける。頬を掠って行く何か。左頬に痛みが走る。

（金棒を投げて来た・・・！？）

飛んで来たソレの正体は金棒だった。ううん、問題はそうじゃない。魔力弾を防ぐためのシールドを失った。魔力弾の壁に無防備な体を晒すことになってる。全てがスローモーションに見えてしまってる視界の中、ブラッド３の表情が、勝利を確信した、って笑みになっ

たのが判った。
目の前には何十発っていう魔力弾。それにあたしを轢くのも辞さないって程の速度で突っ込んで来るバイク。恐怖に竦みそうになる・・・はずなんだけど、頭の中はどこかスッキリしてて、恐怖心なんてものが生まれて来ない。今はただ・・・

「（これがラストチャンス！！）はぁぁぁぁぁぁーーーーーーッ！！」

――フレアブレード――

「くたばりやがれぇぇぇぇーーーーーッ！！」

勝ちたいって思いだけ。構わず突進を続け、ブラッド３のバイクと３秒としないで衝突するって距離になったところで、剣身を熱して切断力を上げる魔法を発動。全身を掠ってく魔力弾の中を突っ切って、一歩分だけ斜め前に軌道修正して・・・"フレイムアイズ"を振るった。そしてブラッド３のバイクと高速ですれ違っていって・・・

「うごぉぉぉぉーーーーーーー！！」

ガッシャーンと派手な轟音を立てて転倒するバイクと、ブラッド３の悲鳴が背後から聞こえた。あたしは急停止して、振り向きながらマガジンを交換しつつ「フレイムアイズ！！」追撃の魔法を発動準備。

≪カートリッジロード！　イジェクティブ・・・！≫

「ファイア！！」

銃口から火炎砲撃を発射。ブラッド３は転倒した所為かバイクから離れていて、あたしの砲撃は、錐揉みしながら地面を何度もバウンドして転がるバイクへと着弾。そして爆発。さらにカートリッジを２発ロード。

――フォックスバット・ラン――

陸戦、しかも直線限定の高速移動魔法を発動。これまでは太陽の騎士モードでしか発動できなかったけど、特訓のおかげで通常モードでも発動できるようになった。

そしてあたしは、痛みに悶えながらも立ち上がろうとしていたブラッド３へと最接近して、「フリーズ」"フレイムアイズ"を面前に突き立てる。

「っ・・・！　くそっ！」

終わった。とりあえずバインドで拘束して、「こちらアリサ。リンドヴルムの１人を拘束しました」フレア分隊に通信を繋げる。

『お疲れ様です。セレスさんとフェイトさんも無事にリンドヴルムを拘束したと連絡がありました。それと飛空艇の追跡班からも、残りのリンドヴルム２人の拘束に成功したとの報告がありました。これにて西部チームは任務完了とし、南部へ帰還することになります。迎えを寄越しますから、しばらく待機をお願いします』

あたしが最後だったみたいね。さすがはフェイト、それにセレスと言ったところかしら。悔しい半面、もっと頑張ろうって思いが強くなった。

「・・・っふ、ふははは」

通信が切れたところでブラッド3が笑い声を上げ始めたから、「何がおかしいわけ？」って睨みつける。

「そりゃおかしいさ。だってそうだろ？　俺たちドラゴンブラッドが全滅だって？　マジ有り得ねぇわ。笑いたくもなるっつうんだよ、くそっ」

「悪さをすればいつかはこうなんのよ」

「ハッ。でもま、これで終わりと思うなよ。どれだけ俺たちを潰そうが、リンドヴルムは死なない。ざまぁみろ！　リンドヴルムは死なない、滅びない！　不滅なんだ、ふはははははは！！」

それからブラッド3をフレア分隊員に引き渡すまでの間、コイツはずっと笑ってた。

Ｅｐｉｃｏ２７－Ｃ竜の脅威～Ｔｈｅ　３ｒｄ　ｔａｓｋ　ｆｏｒｃｅ　：　Ｒｅｂｉｒｔｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｗｉｎｇ　Ａｎｄ・・・・

†††Ｓｉｄｅはやて†††

リンドヴルムがミッドチルダに現れた。しかも魔法が通じへんような相手も一緒に。ルシル君を倒したシュヴァリエルとおんなじ、魔導師への圧倒的なアドバンテージを持つ人が。しかも３つの小隊がほぼ同時で出現して、その３小隊それぞれに居るとのこと。シャルちゃんの前世の人格、シャルロッテさんからいろいろと説明を受けて設立されたわたしら機動一課・臨時特殊作戦班は、その対処の為に動いた。こちらもチームを３つに分けて出撃。

「機動一課です！　大人しく武装を解除し、投降しなさい！」

輸送ヘリから飛び降りたわたしらはリンドヴルムの行く手に着地して、南部に現れたリンドヴルムを対処するわたしらのチームリーダー、フィレス二尉が投降を促した。そしたら太陽の杖を持ってる女の人がすかさず杖を地面に突き刺した。他のリンドヴルム兵もデバイス、そんで・・・

「注意！　先頭の女の持ってる弓、アレも神器だよ！」

シャルちゃんから警告が入った。他の５人を護るようにフィレス二尉と対峙する軍服の女性の手には虹色に輝く弓が握られてる。フィ

レス二尉が「イリス、その効果は！？」そう訊ねると同時。

「これがその能力よ」

シャルちゃんが答えるより早く女の人が弓を構えた。そんで判る、あの弓の能力。とんでもない雷撃が発生して、それが1本の矢になった。シャルちゃんが先頭に躍り出て「シャルロッテ様！」"キルシュブリューテ"を正眼に構えた。対峙する2人と見守るわたしら。動けへん。嫌な汗が噴き出て来て、虹色の弓や雷光の矢、シャルちゃんと"キルシュブリューテ"から目を離せへん。

「イリス。彼女の相手は私が勤めるから、あなたが杖持ちを」

「・・・・気を付けて、フィレス。とんでもなくヤバい能力よ、あの虹の弓・アルクスは」

シャルちゃんの雰囲気が変わる。シャルロッテさんの人格に交代したんやって判る。フィレス二尉が「なおさら譲れないですね。大人として、局員の先輩として、ね」ってわたしらに向かってウィンク。わたしらに向けられたのはとんでもなく大きな優しさ。そんでリンドヴルムに向けられたんは力強い戦意。それだけでわたしの緊張が薄らいでく。

「みんな離れて！」

――氷閃刃（イエロ・コラソン）――

「っ！」

「主はやて！」「すずか！」

わたしはシグナムに抱え上げられて、すずかちゃんはシャルロッテさんに腕を引っ張られてその場から急速離脱。その直後、視界が真っ白になって、鼓膜が破れるかと思えるほどの轟音が真下からした。遅れて衝撃波が襲って来た。

「ぅく・・・！」

「シグナム！？」

「問題ありません。あの神器持ちはフィレスに任せ、我々は他の兵を討ちます」

「ん！」『了解ですぅ！』

まだ目がしょぼしょぼするけど、撤退をしてるリンドヴルム兵をなんとか視認できるようにはなってる。チラッとフィレスさんを見る。女の人の持つ虹色の弓からは稲光と雷鳴が連続で発生してて、フィレスさんは氷の結晶なようなもんで雷光の矢を防いでは片刃剣型デバイス・"シュロス"で斬りかかってる。

「（フィレス二尉・・・、お気を付けて！）シグナム、わたしはもう大丈夫や」

「はい」

シグナムから離してもらって自力飛行し始めた時、「杖持ちはわたしが担当するね」シャルちゃん（イリスちゃんの人格に戻ってる）が真紅に輝く魔力翼を羽ばたかせて先行。遅れてすずかちゃんが「頑張ろうね！」わたしらの側に来てくれた。

「うん、頑張ろう！」

そうしてわたしらは撤退するリンドヴルム兵（走んのメッチャ速いなぁ）を追跡。まずは「スノーホワイト、バインドバレット！」すずかちゃんがバインド効果を有した魔力弾を１８発と一斉発射。

「ウィング５！」

「はい！」

ウィング５って呼ばれた杖持ちの女の人が、太陽の杖を地面に突き刺した。ああなるとリンドヴルムはわたしら魔導師より上位の魔術師と化す。そしたらわたしとシグナムとすずかちゃんは手も足も出ぇへん。そやけどな、こっちには・・・

「シャルロッテ様！」

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

飛行速度を落としたわたしらやけど、シャルちゃんだけは真紅の翼

を羽ばたかせてさらに急降下。するとリンドヴルムは「馬鹿め！今の俺たちに魔法は通じないんだよ！」って言い放って、杖や銃型のデバイスから魔力弾を撃ってきた。

「甘い！」

――飛刃・翔舞三閃――

シャルちゃん（シャルロッテさんかも）が脇に構えてた"キルシュブリューテ"を一閃。そんで放たれるのは真紅に輝く斬撃３つ。シャルちゃんに向かう魔力弾を真っ二つに斬り裂いてって、杖持ちの人を囲うようにして三角形状に着弾。

「きゃぁぁぁぁぁぁ！」

杖持ちの人の立つ辺りだけが斬り裂かれて砕けたことで体勢を崩して、そんで杖先も地面から浮いた。これでリンドヴルムはまたわたしらと同じ魔導師になったわけや。

「『ブラッディダガー！』」

「バインドバレット！」

わたしとすずかちゃんはすかさず攻勢に出る。わたしは高速射撃、すずかちゃんはバインド弾。狙うは杖持ち以外の人。杖持ちはシャルちゃんに任せるって作戦やからな。狙いは４人。着弾までもう少しというところで・・・

「おっと、そうは問屋が卸さないぜ！」

その内の1人が先頭に躍り出て、軍服の懐から取り出したナイフらしき刃物を振り上げると、ものすごい量の水による壁が生まれてわたしらの攻撃を全て防いだ。

「馬鹿な、3つ目の神器だと！？」

シグナムがわたしとすずかちゃんを庇う様に前に躍り出た。アレも神器なんかシャルちゃんに訊こう思て目を向けると、杖持ちに斬りかかろうとしてたシャルちゃんが「そんな嘘！　どうしてその神器がこんなところにあるわけ！？」驚きを見せて、動きを鈍らせてしもうた。

「えーい！」

太陽の杖を持ってる女の人が掛け声を発して杖を振るった。シャルロッテさん（やと思う）は咄嗟に"キルシュブリューテ"を掲げて盾として防いだけど、ピキピキってヒビが入る音がここまで届いた。

「ああ！　せっかく新調したキルシュブリューテにまたヒビが・・・！　タダじゃないんだぞ、まったくもう！」

「主はやて、月村！」

シグナムの切羽詰まった呼びかけ。ハッとして3人目の神器持ちの

男の人へ視線を戻すと、わたしらを倒すための一撃――水の刃が３つと放たれ終えてたからすぐさまその場から離れる。

「シグナム！　杖持ちをお願い！　そっちは私がやる！」

一人称のイントネーションの違いでイリスちゃんかシャルロッテさんか、の判別が出来る。今の一人称は、私、やったから、やっぱりシャルロッテさんの人格に交代してるんや。

「承知した！　それでは主はやて達は――」

「シグナムと杖持ちの邪魔にならへんよう、他のリンドヴルムをどうにかするわ。それでええな？　リイン、すずかちゃん！」

『はいです！』

「うんっ！」

シグナムが"レヴァンティン"に元から装填されてたカートリッジを取り出して、また別のカートリッジを装填した。そんで「行くぞ、レヴァンティン！」シグナムはひとり杖持ちの女の人へ向かって突撃してった。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒シャルロッテ†††

到底信じられない事態だけど、現代には存在しえないはずの神器が混乱の基点となってしまってる今回の事件。リンドヴルムっていう、

ロストロギアを専門に蒐集する連中が絡んでいるのは確かで、神器の情報をもたらしたのは間違いなくシュヴァリエル。

（だからって神器を実際に見つけだして、実戦に投入なんて有り得ないにも程がある）

大戦時から数千年の今日、当時から存続してる世界も在る。とは言え、そこから神器を発掘とか。まぁ、ロストロギアも発掘したりして回収するって言うんだから運良く見つかるってこともあるんだろうけど。

疑問は尽きることなく。でも、そんな考えを今は横に置いておかないといけない。ミッドチルダに、神器を武装した兵を有する3チームが出現して、現在、私たち機動一課・臨時特殊作戦班は、連中への対抗戦力として同様に3つのチームに分かれて戦闘中。

（フィレスには概念兵装・虹の弓アルクスを任せた）

フィレス、その妹のセレスのカローラ姉妹は、先の次元世界と同じで魔術を扱える。しかも先の次元世界の生まれ変わりっぽくて、フィレスは魔族・メノリアとの融合の影響なのか即戦力レベルの魔術師化が可能。だから雷を矢として放てる弓・アルクスを扱う女の相手を任せた。

別のチームだけど、セレスは、前世においての"ディオサの魔道書"の使用、守護神としてのルシルとの契約による影響か、今世では年若いのに完成されてる魔術師となってる。中の中あたりより下のランクの神器には問題なく勝てるはず。

（まぁシュヴァリエルや他のエグリゴリには勝てないだろうけど）

そしてシグナム。シグナムにも対神器戦を任せた。シグナムは魔術師でもないし神秘も有してない。それでも任せた理由。それは、ルシルの特製カートリッジを扱える唯一のデバイス持ちだから。ルシルは未だに目を覚まさず、デバイスの"エヴェストルム"は修復不能にまで破壊されちゃってるから、どの道、ルシルのカートリッジは今ではシグナムと"レヴァンティン"にしか使えない状態。目を覚ました時、ルシルに怒られちゃうかもだけど、今はシグナムに託す。そして私はというと・・・

「概念兵装、澪結剣ヒュドール・アソオス・・・の試作剣！」

リンドヴルムが持っていたのは、"戦天使ヴァルキリー"が一、水流系の完全機ナーティア・ヒルド・ヴァルキュリアの固有武装、"澪結剣ヒュドール・アソオス"、その試作品。製作者はもちろんルシルだ。でも試作剣はアースガルドと同盟を組んでたいずれかの世界で失ったって噂で聞いていたんだけど・・・。

「その剣、どこで手に入れた！？」

「そ、そんな事どうでもいいだろ！　コイツは俺、ウィング６に授けられた特別な武装なんだ！　それだけで十分！」

試作剣を振るう青年。放たれるのは水の刃。試作剣でありながらその神秘は桁違い。まったく、ルシルも厄介な神器を作ってくれたものだよ。魔術師化すれば楽に勝てるだろうけど、魔術師化にはルシ

ルとのキスが条件となってくる。あとお酒で最高レベルまで酔うこと（しかも運頼り）。
だけど残念ながらその策は両方とも取れない。絶対切断もスキル化してるから、格落ちしてる"エインヘリヤル"程度なら通用するけど、さすがに神器本体までは斬れないし、逆に砕かれる。となれば、持ち主であるウィング6を昏倒させるしかないわけだ。大戦時なら殺して終了なんだけどね。

「せいやっ！」

水の刃を半身ズラすことで避けた後、刀身に攻撃魔力を纏わせての一撃を振るう。狙うは試作剣を持つ右手首。骨折くらいは覚悟しなさい。ウィング6とかいう青年は「うわぁ！」大慌てで試作剣を振り上げた。すると私と彼を隔てる水の壁が生まれた。

――絶対切断（アブゾルーテ・フェヒター）――

神器本体は斬ることは叶わずとも、その能力や魔術ならまだギリギリで斬ることが出来る。絶対切断効果を付加した"キルシュブリューテ"は水の壁を裂き、ウィング6の右手首に届くというところで彼は試作剣を器用に振り回して受けようとしたから、私は慌てて"キルシュブリューテ"を引く。

（ナイフの扱い方はそれなりみたいね）

神器持ちであってもその神秘を全身に纏うようなことはない。それが魔術師と魔導師の違い。神器を扱うからと言って魔術師になるわ

けじゃない。

（犯罪者とは言え、さすがにバッサリ斬るわけにはいかないし）

左手に鞘を持ち、魔力を付加したうえでウィング６の側頭部へ向けて振るう。彼は「ヒッ！」怯えながらも試作剣を頭の高さにまで掲げて防御姿勢を取った。ていうか、そんなに怯えるくらいなら「戦場に出てくるな！」狙いを頭部からガラ空きな腹に変更。

「うごぉ・・・・！？」

「そーら、飛んでけぇー！」

フルスイングして、ウィング６を吹っ飛ばした。今の手応え、直前でシールドを張られたっぽいな。仮にもロストロギア回収がための実行部隊の１人か。精神的には脆そうだけど、魔導師としての腕はまあまあなのかもしれないな～。

（ここで一気に畳みかける！）

――風牙烈風刃（ヴィント・シュトゥース）――

着地させるより早く風圧の壁を叩きつけようとしたけど、ウィング６は中空で試作剣を振るってまた水の壁を発生させた。烈風刃が容易く防がれる。

（むぅ。フィレスやセレスにも、カートリッジに魔力を充填する才

能があれば良かったんだけどな～）

試しにさせてみたけどダメだった。神秘を有する魔力は充填できるんだけど、そのカートリッジをロードすると決まってドッカーン！

冷気爆発が起きる。シュヴァリエルに壊されて、フィレスのカートリッジに壊されて、セレスのカートリッジに壊されて・・・。私とイリスの"キルシュブリューテ"はここ最近ひどい目に遭ってばかりだよ。

「ホント面倒な事をしてくれるよね、リンドヴルムはさ」

「リ、リンドヴルムは！　ボスは！　シュヴァリエルさんは！　世間から爪弾きにされた俺たちを拾ってくれた恩人だ！　貧しいから、体に障害があるから、そんないろんな理由で虐げられていた俺たちを拾ってくれて、育ててくれて、居場所を、仲間をくれたんだ！」

「だからって、犯罪者に成り下がっていいわけ！？　目的の為に盗みや傷害を犯して、今ではそんな物騒な物まで使って暴れて！」

カートリッジをロードして変身魔法を発動。体格を私本来の１６５ｃｍの大人形態へ。そして、高速移動歩法・閃駆でウィング６へ突進。彼は大慌てで「黙れこの・・・！」試作剣を横に振り払った。そして発生するのは津波。高さは約３ｍ、幅は１０ｍほど。だけどさ・・・

「私がさっき水の壁を斬り裂いたこと、もう忘れたわけ！」

"キルシュブリューテ"の刀身に絶対切断を再付加したうえで「せやぁぁぁっ！」波を縦に斬り払って道を確保。と、「あら？」目の前には水で出来た龍が３頭。ルシルの水流系下位術式のアルティフォドスね。私は足を止めることなく・・・

「まずは１！」

先頭の水龍の顎と首を斬り落とし、「そんで２！」次の水龍の顎と首、さらに胴を斬り落とし、「これで最後！」３頭目の龍を顎から尻尾までを真っ二つに斬り裂いた。ウィング６は「なんなんだよ、コイツ！」後退しながら必死に試作剣を振るい続けて、水流系魔術をごっちゃにして放ってきた。

「神器の扱い方が・・・！」

――飛刃・翔舞六閃――

「なってない！」

神器・"断刀キルシュブリューテ"の絶対切断能力のスキル化。そのメリットは発動するのに魔力が要らないということ。意思１つで発動できるのは実にありがたい。ま、神秘が消失したのは痛いけどね。

「う、うぅ、うあああああああ！！」

絶対切断の効果を有した私の斬撃は全ての水流系術式を斬り裂いて

進んで、ウィング６の周囲の地面を大きく穿った。すかさず閃駆で最接近。"キルシュブリューテ"を横一線に振るって「はい、終わり」彼の手首を打ってボキボキとへし折り、「っ！？」右手からポロッと落ちた試作剣の柄を蹴飛ばし、そして鞘で彼の脇腹を打つ。

「ぅぐ・・・！」

「（またシールドを張った・・・！）でも・・・！」

――光牙裂境刃（ツェアライセン）――

間髪入れずに対障壁・結界切断効果を有した魔法を発動。そして"キルシュブリューテ"をウィング６の左肩に打ち下ろす。彼はまた咄嗟にシールドを張ったけど、「あがぁっ！？」そのシールドを斬り裂き、彼の左肩に直接ダメージを入れた。ゴキゴキと骨が折れる音が耳に届く。

「神器を失い、魔導師へと戻った者に敗れるほど・・・」

それでも倒れないウィング６の鳩尾へと・・・

「騎士は弱くない」

「うごぉ！」

柄頭の打撃を全力で打ち込んでやった。ウィング６は盛大に吐いてその場で蹲り、そしてようやく倒れた。そして地面に突き立つ試作

剣を回収、ソレをスノー分隊員に預けた後、"キルシュブリューテ"を鞘に収めて「次！」シグナム達のフォローに戻るため私は駆け出した。

†††Ｓｉｄｅシャルロッテ⇒すずか†††

シグナムさんが、"オールドー・デ・ソル"っていう杖の形をした神器を持つ女性――ウィング５に斬りかかる。そして私とはやてちゃん＋リインは、ウィング２、３、４の３人を相手する。この３人は単なる魔導師で、私やはやてちゃんでも十分戦える相手なのは間違いないんだけど・・・

「ええ感じやよ、シグナム！　その調子でお願いするわ！」

ウィング５の持つ杖は、杖先を地面に当てている間だけ持ち主が仲間と認知している人たちみんなに神秘っていう超古代の特別な"力"の加護を与えるというもの。その神秘の加護を受けている間、私たち魔導師の魔法の一切合財が通用しなくなる。

その圧倒的に不利な要素をどうにかするために、シグナムさんがひとりウィング５と戦っている。私たちの主な作戦は、シグナムさんがウィング５に攻撃を加えることで杖を地面から離れさせて、その間に私たちで他３人を倒すというものだ。

「すずかちゃん、サポートもう一度お願いするわ！」

「うんっ！」

たった今、私たちは協力してウィング２を撃破した。魔導師対魔導師の戦いなら私たちにだって勝機はある。それを証明した。リンドヴルムは確かに強いけれど、私たちが普段相手にしてるチーム海鳴には届かない。

「くっそ！　こっちも全力で戦ってるっていうのに、どうして押されているんだよ！」

「神器の加護が無くなっただけでこの体たらく・・・！　俺たちを信じて本部に残ったシュヴァリエルさんになんて言って詫びれば良いんだ・・・」

ウィング３とウィング４がデバイスをギュッと握りしめて歯噛みした。その話を聴いて私とはやてちゃんは頷き合う。シュヴァリエルさんはこのミッドには来ていない。それはどれだけ私たちを安心させてくれる情報なんだろう。

「このまま易々と捕まってたまるか！」

「そうだ！　恩に報いるためにも、任された仕事くらいはキッチリ果たして見せるんだ！」

マシンガンのようなデバイスを持つウィング３と、武装隊の一般的な杖型のストレージデバイスを持つウィング４の２人が魔力弾や砲撃を撃ち放ってきた。ここで迎撃に移るか回避に移るか、それを決めるにはシグナムさんと杖持ちのウィング５の戦況を確認しないといけない。

『回避です！』

はやてちゃんとユニゾンしてるリインから念話が来た。即座に回避行動に入る。リインははやてちゃんの魔法運用のサポートと、そして今回限りのシグナムさん達の戦闘の監視を役目としてる。杖を地面から離させている時は、アタック、の合図を。杖が地面に付いている時は、回避、の合図を出すようにお願いしてる。

「リイン、その調子や！」

『はいで――あ、アタックです！』

――ブリューナク――

――フローズンバレット――

すでに発動準備を終えていた射撃魔法を一斉発射。ドラゴンウィングの２人もシールドや移動することで対処した。すぐに次の魔法をスタンバイしたところで、『あぅ、またダメです！』リインから残念そうな念話が来た。追撃を中断して、２人の動向に警戒。

（シグナムさんが苦戦してる・・・？）

ルシル君の特製カートリッジを唯一あつかえるシグナムさんの"レヴァンティン"。対神器戦にも十分通用するっていう事で、シグナムさんは魔術師でもなければ神器持ちでもないけど、神器持ちのリ

ンドヴルムと1対1で戦ってる。けど、相手がいくら神器持ちでも歴戦の騎士のシグナムさん以上の実力はないはずなのに・・・

「とにかく今は回避の一手やな・・・！」

私たちに向かってばら撒かれる何十発っていう神秘を有した魔力弾。掠る程度でも危険な弾幕を全力で躱し続けていると、『こちらシグナム。杖持ちを撃破！』シグナムさんから待ちに待った内容の念話が来た。はやてちゃんと頷き合って、即座に攻勢に転じる。

「ごめんなさい、逃がしません！」

――チェーンバインド――

神秘の加護を失ったことに気付いたみたいなウィング3と4が逃げようとしたから、申し訳ないけどバインドで拘束させてもらった。

「おおきにな、すずかちゃん！　リイン、行くよ！」

『はいです！』

はやてちゃんは"夜天の書"のパラパラ捲った後、"シュベルトクロイツ"の先端をウィング3と4に向けた。足元に展開されるのはベルカ式の魔法陣。と、逃げられないって諦めた2人が腕を拘束するバインドを自力で破壊して、はやてちゃんに向かってまた弾幕を放ってきたから、「スノーホワイト！」私が護りに入る。

≪リフレクティブミラー！≫

見た目はアイスミラーだけど効果は違う。名前の通りリフレクト――反射させるためのシールドだ。はやてちゃんの全身を護ってもまだ余裕のある大きさで以って展開して、着弾していく弾幕の1発1発を「お返しします！」反射させていく。

「「うおおおおおお！！？」」

反射してくるなんて思ってもみなかったみたいのウィング3と4は大慌てでシールドを張って防御。そんなところに「遠き地にて、闇に沈め！」はやてちゃんの詠唱が聞こえた。

「『デアボリック・エミッション！』」

はやてちゃんが発動したのは空間作用型の広域殲滅魔法、デアボリック・エミッション。バリア発生阻害効果のある球状の純粋魔力攻撃で、スフィアを中心に広範囲に渡って魔力攻撃を充満させる魔法。ウィング3と4が急に出現して大きく爆ぜたその一撃から逃げることも、防ぐことも出来ずに呑み込まれた。

「主はやて、リイン！」

「すずかー！」

デアボリック・エミッションの効果が未だ続いてる中、シグナムさんとシャルちゃんの声が聞こえた。そっちに振り向くと、シャルち

ゃんは大手を振っていて、シグナムさんはクールに翔けて来ていた。

「シグナム！」「シャルちゃん！」

合流を果たしたところでデアボリック・エミッションの効果が切れて、ウィング３と４は地面に倒れ伏してるのを確認。終わった。スノー分隊の方たちに２人の身柄を預けて、「フィレスのところへ！」シャルちゃんを先頭に私たちはフィレス二尉の元へ飛ぶ。遠くで鳴り響く雷鳴が、まだ戦いが続いてることを証明してる。

「シグナム、シャルちゃん。見た目は怪我ないようやけど、ホンマに大丈夫なん？」

「はい。ルシリオンのカートリッジが切れてしまったことで長引いてしまいましたが、無事に勝利できました。相手の神器が攻撃系ではなかったのが幸いでした」

ルシル君のカートリッジが無い状態で神器持ちに勝ったって言うシグナムさん。いくら神器が武器・攻撃系じゃないとしても、すごい、としか言えない。そしてシャルちゃんは「わたしも、シャルロッテ様が強すぎて楽勝だった♪」ってピース。

「神器の効果は恐いけど、持ち主自身も強くなるわけじゃないのが幸いだよね。強いのは神器なんだから」

私がそう言うと、「全く以ってその通りだよ」ってシャルちゃんが同意してくれた。けどそれは、神器を持たなくても圧倒的な実力を

有してるリンドヴルム兵が攻撃系の神器を持ったら勝てないかもしれない、ってことにもなってくる。もしシャルちゃんやルミナちゃん、ベッキーちゃん、セレスちゃん、そしてフィレス二尉でも勝てないようなリンドヴルムが現れたら・・・

（私たちはどうなるんだろう・・・）

不安が押し寄せてくる。真っ先に思い浮かぶのはシュヴァリエルさん。リンドヴルムの話だと本部に居るみたいだけど。けどもし何らかの理由で現れたら。ルシル君の無残な姿が脳裏に過る。

≪スズカ？　お顔の色が優れませんわ≫

"スノーホワイト"が心配してくれた。不安なのはきっと私だけじゃない。シャルちゃん達だってきっと。だから「大丈夫だよ」って答える。気持ちで負けてたらいざという時に何も出来ない。頬を両手で張ったその時・・・

「「「きゃあ！？」」」「むぅ！？」

空間が大きく揺れて悲鳴を上げる。辺りを見回すと、「なんやアレ！？」はやてちゃんがある方角を指差したからそっちに目をやると、全長１０ｍ近い長さを誇る氷で出来た六角柱が数本とそびえ立ってた。

「フィレスの仕業だね。ガチの魔術だから、いくら神器持ちでもアレを食らったら即死レベルだよ」

シャルちゃんが呆れ笑い。そうして私たちは氷柱の側まで行くと、大きな岩石に腰かけてた「フィレス二尉！」の姿を視認。フィレス二尉は私たちに気付くとピースサイン、そして満面の笑顔を浮かべてくれた。側には凍りついてる虹の弓・"アルクス"と、ウィング1と言うコードネームの女の人が倒れ伏してた。

「さすがシャルロッテ様が一目置くフィレス。ていうか、死なせてないよね・・・？」

「当然よ。まぁ、今すぐ病院に運んだ方が良いでしょうけど」

フィレス二尉は部下の人たちに救急車を呼ぶように指示。とりあえず私は治癒魔法で応急措置。

「すずかー！」

「おーい、みんなー！」

そんなところにジョン君とアリシアちゃんが駆け寄って来てくれた。アリシアちゃんは、フィレス二尉の闘いがすごかったって大興奮。魔術師化したセレスちゃんの戦い方は海鳴市で何度か見たけど、フィレス二尉はそれ以上なんだと思う。

「すずか、格好良かったよ！」

「ありがとう、ジョン君♪」

ジョン君は、私を慕ってくれてる。ジョン君が記憶を失う直前で私が、名乗った、からなんだって聞いたけど。なんていうか、弟が出来たみたいな感じで、少しくすぐったい。だから守りたいって強く思う。リンドヴルムが何を以ってジョン君を狙っているのかは知らないけど、お姉ちゃん（自称だけど）として守り抜いて見せる。

それから西部や東部に新たに現れたリンドヴルムの逮捕に向かっていたなのはちゃん達からも、無事にリンドヴルムの逮捕、そして神器の回収が完了したって連絡が来た。

「――合流地点を地上本部にするということになったから、私たちも行こう」

合流場所が変更されて、ミットチルダ中央区画・首都クラナガンへ向かうことになったから、スノー分隊専用の輸送ヘリへ移動。

「ねえねえ、僕もヘリの方に乗りたい！」

「あ！　わたしも乗りたい！」

ジョン君とアリシアちゃんが手を挙げてそう言ってきた。私たちに許可する権限はないから、みんな一緒にフィレス二尉へと視線を向ける。

「・・・一課員以外が乗るのはあまり好ましくないけれど・・・。ま、特別に良しとしましょう」

「「ありがとうございます！」」

「すずか、帰りは一緒できるね！」

「うん、そうだね」

帰りはアリシアちゃんとジョン君も一緒。ヘリはゆっくりと上昇していって「クラナガンまで空の旅を楽しんでくれ」パイロットのソリオ一等陸士にそう言ってくれたから、

「「「「「はーい♪」」」」」「はいですぅ♪」「よろしくお願いします」

私たちは元気よく返事。ヘリの小さな窓からミッドの街並みを眺めていると、「はい。こちらスノー分隊、フィレスです」フィレス二尉に通信が入った。モニターに移るのはどこかのモニター室のような部屋と、オペレーターらしき女の人（歳はエイミィさんくらいかな）。

『フィレス二尉！　緊急です！』

「ど、どうしたの？」

『クラナガンに新たなリンドヴルムが出現しました！　現在、謎の少年と交戦中！』

ヘリの貨物室にモニターが数枚と展開されて、クラナガンの現状が映し出された。私より少し年上みたいな男の子が武器を携えて、軍

服姿のリンドヴルム2人と戦ってた。周囲には首都航空隊。両者に戦闘行為をやめるよう促してるけど、リンドヴルムは問答無用で航空隊を撃墜していってる。

「なんてことを・・・・！」

「あり得ない・・・、なんであんな神器まで在るわけ・・・？」

私たちがその悲惨な光景に絶句してる中、シャルちゃんがポツリと呻いた。シャルちゃんが驚く神器。男の子の方は黄金に輝く剣と盾。リンドヴルムの方は、1人は綺麗な白銀に輝く年代物っぽいライフル。もう1人は黄金の大剣と盾、そして全身を覆う甲冑姿。

「ぅぐ・・・・！」

ここでジョン君の様子がおかしいことに気付いた。頭を抱えて何かに怯えているかのように体を震わせてた。

「ジョン君！　大丈夫ジョン君！」

「すず・・か・・・！　判らない、判らないよ・・・・！　なんで、どうして、こんなに・・・！」

ジョン君の頭を私の胸に抱きかかえて、背中をそっと撫でる。シャルちゃんが「この子、まさか・・・」何かポツリと呟いたような気がしたから、「どうしたのシャルちゃん？」って訊き返してみるけど、「ううん、なんでもない」って首を横に振った。

「とにかく！　フィレス、急いで現場へ向かって！　神器持ちに対抗できるのは私たちだけ！　首都航空隊じゃ撃墜されるだけよ！」

「ええ、判って――判ってます！　ソリオ！」

「アイアイサー！　全速で首都クラナガンへ向かいます！」

ヘリの速度が上がったことで窓から見える景色がぐんぐん過ぎていく。その間、貨物室は無言。そして私はジョン君をずっと抱きしめてた。記憶を無くしちゃうような酷い目に遭ったと思うジョン君。リンドヴルムの姿を見てフラッシュバックしちゃったのかもしれない。

『こちら東部担当チームリーダー、アルテルミナスです。クラナガンの状況はすでに聴いてます』

『西武担当チームリーダーのセレスです。私たちも一課のオペレーターから話を聴きました』

貨物室に展開された2つのモニターに映るのはルミナちゃんとセレスちゃん。2人もクラナガンに新たに出現したリンドヴルムの所業を聴いて、現場に向かってる最中だと伝えてくれた。そして現場で合流した後、新たなリンドヴルムを束で迎撃して、追われてる男の子を保護しようって事になった。

それからシャルロッテさんの人格に交代したシャルちゃんの口から、リンドヴルムや男の子が持つ神器の詳細を聴いた。正直、私たちが

負けたら管理局が終わる、そんな絶望すら抱きそうになっちゃったけど、でも・・・

（かえって強く思えるようになった。負けられない、って・・・）

そうして私たちの乗るヘリは首都へ到着。リンドヴルムは、男の子を追ってひたすら首都上空をぐるぐる回っていたことで、すぐに発見することが出来た。

「すずか、はやて、リイン、そしてシグナム。あなた達は待機ね」

「「「え・・・？」」」「・・・」

シャルロッテさんからの指示。本当は訊き返すまでもない。私たちが居たところで何も出来ない。それどころか足手纏いになる。それくらい理解してるから、「はい」私たち４人は頷き応えた。

「フィレス。どこまで戦える？」

「ざっと１０分と言ったところでしょうか」

「それだけあれば十分。ベッキーの精霊やセレス、アルテルミナスも居るし。なんとかなるでしょ。それじゃ・・・行こう！」

――真紅の両翼（ルビーン・フリューゲル）――

「はいっ！」

開いた後部ハッチからシャルロッテさんとフィレス二尉が飛び降りて、男の子とリンドヴルムの元へと飛んで行った。

「なんも出来ひんのって・・・ホンマ悔しいな・・・」

「主はやて・・・」「「はやてちゃん・・・」」

俯くはやてちゃん。一大事なのに力になれないことが本当に悔しい。私もそう思う。けど、それと一緒に、良かった、とも思ってる私が居る。今は、ジョン君の側に居たい。私を慕ってくれてる、この男の子の側に。

「え？・・・なんだ、あれ・・・？」

操縦席に座るソリオ一士の呟きが聞こえたから、フロントガラスへと目を向ける。そこには召喚魔法の際に展開される魔法陣があった。そして、その魔法陣から・・・・巨人が現れた。

「アレは・・・、ウスティオに出現した巨人・・・！」

シグナムさんが目を見開く。話には聞いてた。シグナムさんやヴィータちゃん、ウスティオの首都航空隊や機動一課、２個武装隊を一瞬にして撃墜した、ロストロギア扱いの巨人。ソレが今、ミッド首都のクラナガンに召喚された。

「みんな、しっかり掴まってくれ！」

ヘリが巨人を避けようとアクロバット飛行に入った。シートベルトはしてあったけど、それでも足りないから近くにあるバーなどに掴まって重力に耐える。でも「ダメだ、避けきれない！　全員、降下！」ソリオ一士からの指示に、私たちはシートベルトを解いて、開いたハッチから飛び降りた。けど・・・

「「「「「ソリオ一士！！」」」」」

ソリオ一士の脱出を確認する前にヘリが巨人の太腿付近に衝突して爆発炎上。燃え上がるヘリが地面へと墜落してさらに爆発を起こした。ソリオ一士が・・・脱出してない。目頭が熱くなって、泣いちゃいそうになった時・・・

「いやぁ、死にそうだったけど間一髪だったな～。俺は大丈夫だ！　みんなも急いで避難するんだ！」

パラシュートを開いてゆっくりと近くのビルの屋上へ向かうソリオ一士を確認できた。目から溢れ出る嬉し涙。安堵してると、「まずい、気付かれた！」アリシアちゃんを抱えるシグナムさんが焦りを見せた。巨人の大きな手が私たちに向かって伸ばされてきてた。急いで飛行魔法でその場から逃げる。

「アカン、追いつかれる！」

『はやてちゃん！』

「私が囮になります！　その間に――」
「そんなのダメです！　みんな一緒に逃げましょう！」
「そうや、シグナム！」
『シグナムひとり置いて行けないです！』
そうこうしてる内に私たちは巨人の手から逃れられないようなところまで来ちゃってた。思わず目をつむる。
「護る・・・、僕が・・・・、すずかを・・・・、みんなを・・・・、護る！！」
――此処に開門（ゲート・オープン）せり――
「ジョンく――きゃあっ！？」
「ひゃあ！？」「わぁ！？」『真っ白ですぅ！？』「むっ・・・！」
目を開けてられない程の真っ白な光。以前、アリサちゃんの魔法から私を庇ってくれた時以上の発光に悲鳴が出ちゃった。真っ白な光の中、黄金に輝く扉のようなモノが見えた気がした。でも目が潰されちゃうかもっていうような強すぎる光に、すぐに目をつむることになった。
そして、閉じたまぶたの向こう側が暗くなったところで目をゆっくりと開けてみる。するとそこに巨人の姿はなく、私たちの誰ひとり

として撃墜もしてなかった。アリシアちゃんやはやてちゃん、シグナムさんがキョロキョロ周囲を見回して、巨人が居ないことを確認。

「ジョン・・・君・・・？」

私の腕の中で寝息を立ててるジョン君。今のはジョン君の魔法？それともスキル？　判らないけど、今はただ、「みんなを護ってくれてありがとう、ジョン君」私たちを巨人から救ってくれたことに感謝したい。

「とりあえずどこかの屋上に降りよか」

はやてちゃんに続いて近くのビルの屋上へと降り立った、その瞬間・・・

「ギャハハハハ！　見つけた、見つけたぞ！　こんなところに居やがったのか、ケリオンローフィティタ！　ギャハッ、これでシュヴァリエルさんに褒めてもらえるぜ♪」

また別のリンドヴルムがものすごい勢いで屋上に着地して、右腕全体と融合してる氷の大剣を振るって来た。私は咄嗟に「フローティングアイス！」横一列に氷塊を6つと作りだして壁にした。だけど当然とでも言うように氷の壁は氷の大剣に斬り裂かれて砕かれた。

「ゲームオーバーだ！」

私に向かって一直線に向かって来るリンドヴルム。

「すずかちゃん！」『すずかさん！』「すずか！」「月村！」

ジョン君を護らないと。その思いだけで私は反転、迫り来る氷の大剣に背を向けた。次に訪れるのはなんだろう。やっぱり痛みだったりするのかな。それとも痛みも無く氷漬けにされるのかも。

「ごめんね、ジョン君・・・！」

腕に抱えるジョン君を護るために突き飛ばそうとした時・・・

――軍神（コード・チュール）の戦禍――

言いようのない圧倒的な何かが空に現れて、急降下して来たのが直感というか本能というか、説明できない感覚によって判った。そして、背後にソレらが勢いよく落下していくのが轟音で判った。改めてジョン君を強く抱きしめた上で振り返る。私とリンドヴルムを隔てるように並列してる９つの武器が真っ先に視界に入った。

「それ以上俺の大切な家族や友達に刃を向けてみろ。地獄に叩き落とすぞ」

1ヵ月以上、その声を聴けずにいた、私たちみんなにとって大事な友達の声が聞こえた。

「「『ルシル君！！』」「ルシル！」「ルシリオン！」

銀の髪を風に靡かせ、蒼と紅の瞳でリンドヴルムを見下ろし、漆黒の騎士服を身に纏って、蒼く光輝く剣状の翼を１２枚と背負った男の子、ルシル君が空にひとり佇んでた。

Ｅｐｉｃｏ２８其は数多の神器を携えたる至高の王～Ｒｅｘ　ｄｅ　Ｈｉｓｔｏｒｉａ　Ｆａｂｕｌａｒｉｓ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「それ以上俺の大切な家族と友達に刃を向けて見ろ。地獄に叩き落とすぞ」

すずかに攻撃を加えようとしていたリンドヴルム兵を睨みつける。奴が持っているのは魔造兵装の第１０３位、"氷纏装デュック・グラス"。使用者のどちらかの腕、もしくは両腕と融合するタイプの武装だ。武器の形は使用者によって違う。今回のリンドヴルム兵は身の丈以上の大剣としている。一番扱いやすい基本的なスタイルだな。

（しかし問題は、なぜ神器がこの次元世界にあるのか、ということだ）

大戦時から存続している世界も数多い現代の次元世界。リンドヴルムに神器の事を伝えたのはシュヴァリエルだろう。だからと言ってこうも簡単に数多くの神器が見つかるものか？　一体どこの世界で神器を発掘しているのか、確かめる必要があるな。

「『ルシル君！！』」

「ぅわっと！？」

考え事に夢中になっていると、リインとユニゾンしているはやてに抱きつかれて驚いた。そんなはやてに、どうかしたか？と訊こうとしたが出来なかった。はやては「う、ぅう・・ルシル、君・・・良かった・・・ホンマに、ぐす、目ぇ覚ましてくれて・・・ひっく、良かった・・・」俺が無事で良かったと、泣いていたから。泣いてくれていたから。

『良かったですぅ・・・！　わぁ～～ん！』

「はやて、リイン・・・」

なんて温かい涙なんだろう。俺も「心配させてゴメン」はやてを抱きしめ返した。久しぶりにはやての温もりを感じる。また戻って来られて、俺としても嬉しい。ゆっくりとビルの屋上へと降り立ったそんな俺とはやての側に「ルシリオン！」シグナムと、「ルシル復活～！」アリシアが駆け寄って来てくれて、「ルシル君・・・！」少年を抱きかかえたすずかが笑みを向けてくれた。このまま感動の再会、と行きたいところだが・・・

「なんだ、テメェ！　俺の仕事を邪魔してんじゃねぇぞ！」

リンドヴルム兵がそれを許してくれそうにない。神器の壁を破壊できないと諦めた奴が回り込んでやって来た。俺は「みんなは下がっていてくれ」そう言って奴と対峙する。と、「ルシル君！　起きたばっかやのに・・・！」はやてにコートの袖を引っ張られた。ポロポロと大粒の涙を流し続けるはやて。

「大丈夫だよ。今の俺、すごく快調なんだ」

はやての手に自分の手を添え、優しく掴んで袖から離させる。安心してもらえるように俺は満面の笑顔を浮かべ「ありがとう」礼を言い、逆の袖口ではやての涙を拭って見せる。

「シグナム、すずか。はやて達を頼む」

はやてやアリシア、そして少年をシグナム達に預け、このビルから離れて行ったのを確認した俺は改めてリンドヴルム兵と向かい合おうとして、「無視してんじゃねぇぞ！」先制攻撃を仕掛けられた。今の俺の手に神器化できるデバイス・"エヴェストルム"は無い。だが、複製品とは言え神器なら掃いて捨てるほど持っている。

「我が手に携えしは確かなる幻想」

創世結界・"神々の宝庫ブレイザブリク"より取り出すのは「なんだと！？　なんでお前も俺と同じ武器を持ってんだ！」リンドヴルム兵と同じ、"氷纏装デュック・グラス"。大戦時代にてすでに複製してあるソレを俺も装備する。奴との違いは、俺は両腕には氷の突撃槍を融合させていることだ。適合率が高いからこそ可能の両腕融合形態だ。

「なんで、だと？　シュヴァリエルから何も聞かされていないのか。だったら教える義理は無いな」

先に振るわれたリンドヴルム兵の"デュック・グラス"の一撃を左の突撃槍でいなす。ここで「あ、しまった」ミスを1つ犯したことに手遅れだが気付いた。奴の大剣から放たれた冷気の斬撃がオフィス街にそびえ立つビル3棟を凍結させた。

（受け流すだけじゃダメだ。真っ向から防いで相殺しないと）

廃棄都市区画ならどうにでもなるだろうが、いま俺たちが戦っているのは住民の居る都市のど真ん中。市民の避難が済んでいるかどうかも判らない中、周囲に被害を齎すような戦闘は出来ない。というか、あの凍りついたビルの中に人は居ないだろうな。

（居ないことを祈るしかないな）

「シュヴァリエルさんがなんだって言うんだ！」

切り返される一撃を、俺の左腕に融合している突撃槍で受け止め、すかさず右の突撃槍で大剣を打って奴を大きく弾き飛ばし、「さぁ？　なんだろうな、ふふ」挑発めいた笑みを見せてやる。少しでもいいから不信感を募らせ動きを鈍くさせてやる。たとえ不発だとしても、こんな奴に負けるほど俺は落ちぶれてはいないけどな。

「クソガキ・・・！　・・・・はっ、どうせつまんねぇ挑発だろ！？　くだらねぇんだよ！　俺たちリンドヴルム・第0小隊ドラゴンハートは、最強にして絶対の忠誠者なんだよ！　迷いなんざ生まれる余地は無ぇっ！」

リンドブルム兵が"デュック・グラス"を水平に掲げ、「ハート4、行くぜっ！」その腹を俺に向けてきた。知っているさ、その魔術も。奴の右肩から6枚の氷の刃が扇状に伸びた。そして「食らいやがれ！」放たれるのは猛吹雪。

「あぁ、心地よい冷たさだな」

両腕の突撃槍を　十字に掲げ、「そらぁっ！」大きく振り払う。放つのは冷気の斬撃2つ。襲い来る吹雪を真っ向から斬り飛ばし、「うごぉぉぁぁぁぁ！！？」リンドヴルム兵――ハート4の"デュック・グラス"に着弾させる。パキパキとヒビが入る音と一緒に氷の破片が宙に散る。

「同じ神器で、どうして・・・！？」

「持ち主として使うのと、使い手として使うのとじゃ全然違うんだよ、小僧。さぁ、授業の時間だ。実演してやるからしっかり見ていろ」

右の突撃槍の刺突によって巻き起こる螺旋を描く冷気の槍で、また放たれた猛吹雪を貫き消し飛ばし、すぐに屋上を駆けてハート4へと最接近。崩壊寸前の奴の大剣を左の突撃槍で貫き、粉砕してやる。そして俺の"デュック・グラス"を解除し、「授業料は強制徴収だ！」魔力を籠めた拳で奴の顔面に全力ストレート。

「うごぉ！？」

よろけたところに頭を鷲掴んで床へと叩き付け、髪を引っ張り上げて上半身を起こさせた後に鳩尾に蹴りを入れる。凍りつき始めた屋上を転がるハート４。

「あぁ、それとはやて達に恐怖を与えた分も請求させてもらうからな」

純粋な魔法としての閃光系砲撃コード・アダメルを発射し、着弾させる。苦痛の悲鳴を上げることも出来ずに奴は階下へ降りるための扉に衝突、それを突き破ってビル内にまで吹っ飛んだ。

「・・・ドラゴンハート、ハート４・・・撃破完了」

授業にもならなかったな。神器の効果に酔いしれただけの雑魚が相手ならこんなものだろう。これなら"闇の書"事件で初戦闘したロストロギア使いのドラゴンスケイル小隊の方が強かった、そう思える。おそらくハート４も魔導師として戦ったのなら強かったんだろう。惜しいものだ。

吹っ飛んだ奴を追ってビル内に入り、姿を確認する。奴の側に落ちている雪の結晶のようなクリスタルを手に取る。コレが"デュック・グラス"だ。コイツに魔力を籠めることで武装形態となるわけだ。現代で言うデバイスのような代物だな。

「神器なんぞに手を出した報いだ。牢の中で後悔しろ」

ハート４をバインドで拘束し、奴の襟首を引っ掴んで屋上へ戻ると・・・

「ルシル君！」

はやて達が戻って来ていた。そして遅れて「ルシル君、私を置いて行くなんてひどいわ！」シャマルがようやく合流した。

「ごめん、ごめん。でもはやて達がピンチだったし、それに神器持ちを早速1人片付けた。それで許してくれ」

「んもう！　少しはお医者（わたし）さんの言うことを聴いて下さい！」

プンプン膨れるシャマル。そう、俺は目を覚ましてすぐにシャマルと一緒に、ここミッド首都クラナガンへとやって来た。

・―・―・回想だ・―・―・

「ここは・・・？」

目を開けると、そこは見知らぬ天井。いや、どこか見覚えがある。そう、先の次元世界で一度だけ世話になったことがある。それを証明するかのように、俺の体中には包帯が巻かれ、点滴のチューブや電極などなどが付けられていた。

「本局・医務局の集中治療室・・・なのか」

薄暗い室内に心電図の音だけが鳴っている。どうして俺が集中治療室に居るのかを思い出す。そうだ、シュヴァリエルと戦い、そして

・・・負けた。ハッとして右腕を見る。シュヴァリエルの一撃で斬り飛ばされてしまった右腕は「繋がってる・・・」無事にくっ付いていて、ちゃんと動くことも確認。

「頭が軽いと思えば、後ろ髪がバッサリと無くなっているな」

後頭部に触れると、後ろ髪は肩の辺りで切り揃えられていた。まぁ、海鳴市は8月だし、ちょうどいいさ。さてと、目を覚ましたことだし、それを知らせるためにナースコールを使おうとしたら「ルシル君！？」白衣姿のシャマルが勢いよく室内に入って来た。良いタイミングだ。

「シャマ――のわぁ！？」

「ルシル君！」

いきなり抱きつかれた。わけも判らず小首を傾げていると、「ルシル君は二度と目を覚まさないって言われてたのよ！」泣いているシャマルから事情を窺う。シュヴァリエルとの戦闘からなんと1ヵ月以上と経ち、すでに10月入りをしているのだと。そして、俺が負ったダメージは深刻で、再起不能の植物状態――遷延性意識障害として最終診断を下され、医務官全員が匙を投げたのだと。

「――だから私、はやてちゃん達にどうその事を伝えればいいか、悩んでて・・・！」

そこまで酷い状態だったなんて驚きだ。まるで他人事に思えるが、

実際に俺が陥っていた事態。となると、はやて達にはとんでもない不安や悲しみを与えてしまったかもしれない。逢ったら謝らないと。

「だが、俺はこうして起きたし、頭もスッキリ、体調も万全、今すぐにでも戦闘が出来るほどに魔力も回復している。どんな治療を施してくれたんだ？　シャマル」

そこまで最悪な状況だった俺はこうして目を覚ましている。しかもシュヴァリエルに負ける前より体の調子が良いくらいだ。だから訊ねてみたんだが、シャマルは無言。どうやら彼女が治療してくれたわけじゃないようだ。

「じゃあ、ティファ医務官か？」

「・・・いいえ」

「じゃあ誰が・・・？」

「判らないの」

「判らないって・・・。誰か心当たりは？」

「ううん」

「じゃあ、俺はどうやって目を覚ましたんだ？」

上級治癒術式のコード・エイルを無意識に発動した・・・というの

は有り得ない。アレは無意識に発動できるような簡単な術式じゃない。万が一に使ったとしても、今のように意識不明に陥る前より快調になるわけがない。なら中級のコード・ラファエル・・・というのもないな。アレの治癒力ではシュヴァリエルのダメージは治せない。いよいよ以って奇蹟を信じるしかないかも、と思い始めた。

「ただ、気になることがあって・・・。私がこの病室を訪れた理由なんだけれど・・・」

「気になること・・・？」

「ええ。この病室を訪れたそうなの。・・・・エグリゴリのリアンシェルトが」

「なに・・・！？」

今から1間ほど前、リアンシェルトがこの病室を訪れたらしい。シャマルはそれを聴いて慌てて俺のところまで来てくれたそうだ。リアンシェルトは俺にトドメを刺さなかった。弱い者イジメはしたくない、という俺にとっては屈辱的な理由によるものだ。

（俺の内にある、俺の魔力とは別の・・・）

深く探りを入れることで判る微かに残っている魔力の残滓。これはリアンシェルトの魔力だ。ということは、俺を回復させたのはリアンシェルトとなるわけだが。有り得ない。放置しておけばいつかは他の"堕天使エグリゴリ"が本局に侵入し、殺しに来ていただろう。

なのに、わざわざ回復させるなんて意味が解らない。

「あくまで戦闘で殺したいわけか。嫌な拘りだな・・・！」

ガンっとベッドに拳を振り落とす。だが、今だけは感謝しよう。意識の無いまま殺されるなど真っ平御免だ。大きく深呼吸をし、気を落ち着かせてから「はやて達は今どうしてる？」って訊く。

「はやてちゃん達は、その・・・今は・・・――」

そして知る、はやて達が置かれている現状。機動一課・臨時特殊作戦班の事、リンドヴルムが神器を武装している事などなど。さらに「ミッドにリンドヴルムが現れているって！？」神器持ちの居るリンドヴルムがミッドの三地方に現れていることを知った。

「くそっ！　こんなところでのんびりしている場合じゃないだろうが！」

電極や点滴の針をブチブチと外すと、「きゃあ！　そんな無理やり！　もう！　なんてひどい患者さんなの！」シャマルに怒られた。しかし今はそんな事に構っていられない。

「シャマル、制服とエヴェストルムは！？」

「ちょ、ちょっと待って！　ルシル君も出撃する気！？　馬鹿を言わないで！　病み上がりなのよ！」

「こんな事は言いたくないが、リアンシェルトの治癒術式は信頼に値する回復力だ、ほぼ間違いなく全快しているから戦闘は問題なく行える。それに、いくら魔術師化できるカローラ姉妹、魔術に対抗できる固有スキル持ちのシャル、ルミナ、ベッキー先輩が居るとしても、神器によっては一方的な敗北とて有り得るんだ・・・！」

リアンシェルトへの文句は後回し。今は出来るだけ早くミッドに降りることを考えないといけない。シャマルとてそれくらいは理解しているらしく、「はぁ。・・・条件はただ1つ！　私の指示には従うこと、いいわね！」彼女からの指示への絶対順守が条件として、手続き全無視の退院が果たされることとなった。

「感謝するよ、シャマル。それで制服とエヴェストルムは・・・？」

「それが、その・・・制服は少し待ってもらえれば用意できるのだけど・・・。エヴェストルムは・・・あの・・・」

言い淀むシャマルのその様子だけで理解した。どうやら"エヴェストルム"はもう無いようだ。俺が意識を手放す要因となったシュヴァリエルの轟風暴波。アレの直撃を受けたとなれば、再起不能になるまで砕かれても仕方ない。

（クラウス・・・。すまないな）

"エヴェストルム"の2つのシリンダーは、かつての友であるクラウス・G・S・イングヴァルトから譲り受けたものだ。俺がガーデンベルグを救うまで共に戦って行こうと思っていたが、それはどう

やら叶わなかったようだ。

「判った。なら、魔術師としての力を使うまでだ」

こうも早くみんなに魔術や魔術師、神器や神秘と言った話が伝わるとは考えてもみなかった。シャルロッテの奴め、ベラベラと喋り過ぎだ。が、神器が絡んでいる以上は仕方ないか。俺の正体がはやて達に知られるのも早いのかもしれない。

「今は急ぎだ。騎士服でいい。それじゃあ行こう、シャマル」

「ええ！」

病衣から騎士服に変身して、俺とシャマルはミッドへ降りるためにトランスポーターホールへと走り出した。

・―・―・終わりだ・―・―・

地上本部のトランスポーターホールに到着したところで、首都クラナガンにもまた別のリンドヴルムが出現したと知り、こうしてやって来たわけだ。まさかそこですずかやはやて達のピンチに遭遇するとは。不幸中の幸いだな。

「ルシル君、ホンマに大丈夫なん？　無理も無茶もアカンよ？」

「大丈夫だよ、本当に。ささ、詳しい話は後にして、今はリンドヴルムの迎撃を第一に考えよう」

ここに来る途中で通信を聴いた。シャルロッテの人格に交代しているイリスとフィレスが他のドラゴンハート（おそらくとしか言えないが）と戦っているようだし、なのは達も民間人の避難誘導を首都防衛隊などと一緒にしているとのこと。のんびりはしていられない。

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

空戦形態をとったところで「ルシリオン。頼みがある。ドラウプニルを貸してくれ」シグナムが真剣な面持ちでそう言った。"ドラウプニル"。神造兵装の1つで、装備者の魔力に神秘を付加させ、さらに魔力量を増加させることが出来る。つまりは外的に魔術師となれるわけだ。バンヘルドのような"エグリゴリ"にはあまり意味はなかったが、中位や下位神器くらいならどうにかなるかもしれないか。

「その男がジョンを狙っていた。ならば神器を武装した他のリンドヴルムもまたジョンを狙ってくる可能性が高いのだ」

「そうか、判った。我が手に携えしは確かなる幻想」

黄金の腕輪を1つ、"ブレイザブリク"より取り出してシグナムに手渡す。はやてが「ソレはなんなん？」って訊いてきたから、"ドラウプニル"の効果を伝える。すると「わたしも貸して！」はやても欲した。

「いや、申し訳ないけどはやては民間人の避難誘導を頑張ってほし

いんだ。戦闘は俺たちに任せてくれ」

「そやけど・・・！」

「ここまで不安にさせた俺が言うのも身勝手だろうけど、ここはお願いするよ」

頭を下げて頼みこむ。戦闘も大事だろうけど、俺たちの戦闘に民間人を巻き込ませないための避難誘導も大事だ。そう伝えるとはやてはようやく「ん、判った」折れてくれた。

「よし。それじゃあミッションスタート！」

俺はリンドヴルムの撃破のため、そしてはやてとシャマルは、なのは達と合流して民間人の避難誘導の手伝いをするため、シグナムとすずかとジョンはリンドヴルムから逃れるため、それぞれの目的地へと飛んで向かった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

ミッドの三地方に出現したリンドヴルムを協力して撃破したわたしたち臨時特殊作戦班だったけど、リンドヴルムはあろうことか管理局のお膝元――地上本部の在る首都クラナガンに新しく出現。さらには首都航空隊を撃墜するという暴挙にまで出る始末。

連中の目的は、神器（シャルロッテ様の反応からしてかなり強力な）を携えて戦う少年らしく、その捕獲を妨害する航空隊を撃墜し、街中でも構わずとんでもない神器の能力を発動して、流れ弾が建造物

まで破壊してる。

『クラナガンでここまで派手な戦闘をするなんて。指示を出した奴は相当頭がイカレてる！』

今現在、わたしの体の支配権を有するシャルロッテ様が怒りを露わにした。わたしだって『本当に許せませんね』同意する。何としてでも止めないと。

「・・・騎士シャルロッテ」

わたしの隣に並んで飛ぶフィレスがシャルロッテ様を呼んだから、

「ん、なに？」シャルロッテ様がフィレスの方へ向く。フィレスは

「神器の詳細をお聞かせください」簡潔にそう訊いてきた。

「ん。男の子が持ってるのはブリード・スミスシリーズと呼ばれる神器ね。千差万別・変幻自在の武器型神器で、剣にも槍にも盾にもなるの」

「シリーズということは、同じような武器が他にも・・・？」

「私の知るところだと1万以上だと思った」

シャルロッテ様の話に思わず意識が遠退いちゃいそうになった。もし男の子の持つ"ブリード・スミス"以外がリンドヴルムに渡ってたりでもしたら、と思うと。ただでさえ対抗できる戦力が少ない現代の魔導師たち。そこに1万もの神器持ちが現れたりでもしたら、

最悪管理局自体が潰されちゃうかもしれない。

「白銀のライフルは、ウィーチェと呼ばれる神器ね。魔力弾や魔力砲を自在に発射できる代物よ。そして黄金の大剣と盾と甲冑の装備一式は、エクエス・ノービリス。下級天使三隊の内の二隊、天使と権天使の天使長だけが使用できるとされた神の武器。どれもさっきまで相手にしてた神器より格上だから、本気で気を付けないとまずい」

言葉が出ない、っていうところでフィレス二尉が「それでも私たちにしか出来ない事なら逃げるわけにはいきません」って微笑んだ。

「そうね。ここで私たちが負けたりでもしたら、それこそ管理局が終わる。勝つよ、何としてでも」

そうしてわたしの体を使うシャルロッテ様とフィレスは、地上本部が目と鼻の先というような空域で「止まりなさい、時空管理局です！　今すぐ戦闘行動を中止しなさい！」リンドヴルム２人と男の子の元へ辿り着けた。

「邪魔をするな！」

黄金の装備一式を武装したリンドヴルムの１人が斬りかかって来た。首都航空隊員を率先して撃墜していた奴だ。フィレスが「イエロ・コラソン！」冷気を片刃剣型のアームドデバイス、"シュロス"の剣身に纏わせて迎撃に入った。シャルロッテ様が「待って！」って制止をかけるけど手遅れだった。

「っ！！」

パキンと"シュロス"がへし折られる。シャルロッテ様がフィレスの襟首を引っ張り込んで、リンドヴルムの斬撃から救った。切り返される黄金の大剣に、シャルロッテ様とフィレスは急速に後退して攻撃範囲外へと出ることで斬撃から逃れることが出来た。

「私のシュロスが、あんなにもアッサリと・・・」

「さすがは神造兵装の９０位。魔術の効果をキッチリ破壊してくる・・・！」

『それではフィレスの魔術は、連中には通用しないということですか！？』

「そういうこと！　でも、策はある！　フィレスは魔術で遠距離攻撃を！　そして私は・・・！」

シャルロッテ様が視線をやるのはリンドヴルムに追われていた男の子。その男の子は「あなたは・・・剣神シャルロッテ・・・の子孫？」わたしの姿を見て驚きを見せてた。シャルロッテ様は「正確にはフライハイト家の子孫ね！」って答えて、男の子に手を差し出した。

「貸して、ブリード・スミス！　私ならもう少し上手く扱える！」

シャルロッテ様の出した策。それは男の子が持ってた神器を使うと

いうものだった。そんなわたし達に「邪魔立て無用！」ライフル型の神器"ウィーチェ"が火を噴いた。放たれてきたのは魔力砲と魔力弾12発の混合攻撃。なのはのストライクスターズのような攻撃だ。シャルロッテ様たちは防御に回ることなく回避に専念。

「お願いします！」

回避の最中、男の子は両手に携えた黄金の剣と盾を1つの輪っかにしてからシャルロッテ様に手渡した。

――雪花飛刃（ペタロ・アニリョ）――

フィレスが氷で出来た花弁のような円盤を30発と一斉に発射。高速回転するソレらがリンドヴルム2人へ殺到してく。甲冑男は太陽のような形をした盾で15発を防御して、ライフル男は砲撃を撃ち放って相殺させた。

「なら、これでどう！」

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

今度は螺旋を描く氷の杭、その数40。はやてのブラッディダガーのように高速かつ複雑な軌道でリンドヴルム2人を襲う。2人はその速度や数に圧倒されて迎撃が間に合わずに着弾を許した。2人を覆う冷気爆発が起きる。

『ていうか、フィレスの魔術をライフル持ちに当てていのでしょう

か・・・？』

そんな疑問が生まれる。神器の甲冑を纏う奴は死なないだろうけど、ライフル男に関したら体は魔導師だから、魔術の直撃は死に直結しそうなんだけど。わたしの思念通話はフィレスにも繋げてあるから、「緊急事態だったし、ね」なんて言い訳じみたことを言いだし始めた。

「・・・・杞憂っぽいよ、それ」

シャルロッテ様が黄金の輪っかを右手首に通しながらそう言った。冷気の煙から姿を見せたリンドヴルム２人。ライフル男は健在だった。何故なら甲冑男が護っていたからだ。

「あの盾、大きさを変えられるのね」

フィレスが残念がる。甲冑男が持ってる盾の直径が１ｍほどから４ｍほどにまで大きくなってた。

「と思うじゃん？　実は――」

シャルロッテ様からの説明を聴くより早く知った。大剣がグンッと急速に伸びる。そうか、武器の伸長・拡張が自在なんだ。そしてわたし達を払おうと横一線に振るってきた。圧倒的な威圧感の中に、陽の光で輝く黄金が荘厳さ、神々しさを魅せてくる。だけど魅了されてる場合じゃない。

「全力回避！！」

シャルロッテ様が叫ぶ。男の子の手を取ったフィレスと一緒にシャルロッテ様は大剣の薙ぎ払いによる一撃を躱した。けど、「酷い・・・！」５棟の高層ビルが半ば辺りで斬られて、轟音を立てて上階層が崩れていく。

「フィレスはその子を連れて逃げて！」

「ですが！」

「「逃がすかぁぁぁ～～～！！」」

大剣や盾を元のサイズに戻した甲冑男が突撃してきて、ライフル男が砲撃を連射してきた。その全てはフィレスへ向かう。シャルロッテ様は「ブリード・スミス！」という黄金の輪っかを"キルシュブリューテ"と同じ長刀へと変形させると、「さらに絶対切断効果を発動！」って、迫り来る砲撃を全て黄金の長刀で斬り捨て、甲冑男の振るった大剣を真っ向からいなした。

「「っ！？」」

「今！」

「すみません、騎士シャルロッテ、ごめんね、イリス！」

フィレスが男の子を抱えて急速離脱。甲冑男が「ウザいんだよ！」

盾による打撃を繰り出して来た。それを横移動することで躱すシャルロッテ様だったけど、避けた先には砲撃が。リンドヴルムがコンビネーションアタックを仕掛けて来た。甲冑男の盾や図体がライフル男と砲撃を隠してたんだ。

「こういう手は生前に何度も受けたっつうの！」

――飛刃・翔舞一閃――

長刀を振るって放った絶対切断の刃。ソレが砲撃を斬り裂き、甲冑男の振るった大剣も長刀でまた軽々といなした。すると甲冑男は「おい、ハート5！　この女は俺が仕留める！　女局員を追え！」って、シャルロッテ様をひとりで相手にするなんて寝言を言い出す始末。

「あなた達に対抗できるのが私ひとりと思わないことね！　私以上の対抗戦力がまだ居るんだから！」

そう言ってライフル男――ハート5を見逃そうとするシャルロッテ様の様子に、その言葉が偽りない事実だと理解したリンドヴルム2人。さぁどう出るのかって思ってると、「ふはははは！」甲冑男が笑い声を上げた。

「私、なにか可笑しなことでも言った？」

「まあな。しかし残念だったな。俺たちリンドヴルム・第0小隊ドラゴンハート、その全員が神器を武装しているんだ。俺たちに決定

打を与えられなかったあの女に、別任務を終えた仲間を向かわせると・・・。さて、どうなるだろうな～？」

これまでの小隊には1人から3人の神器持ちだけだったけど、いま相手にしてる第0小隊は全員が神器を持ってるってことは、こちらの対神秘の戦力だけじゃ対処しきれないことになる。不安に押し潰されそうになったわたしだったけど・・・

「だから？　ここで私があなた達2人を討つ。そして、私より強い仲間が残りを討つ。はい、終わり」

わたし達にはベッキー先輩が居る。シャルロッテ様が言うには、対神秘戦では最強クラスだっていう精霊を従えてるベッキー先輩。ベッキー先輩が戦ってくれれば安心。不安が薄らいでく。だけどリンドヴルムの方も余裕を崩そうとしない。

『アルテルミナス、セレス、ベッキー。フィレスと合流して！』

シャルロッテ様がルミナ達に思念通話を繋げる。その間にも甲冑男が攻撃を仕掛けてくる。シャルロッテ様は受けることなくいなし続ける。そしてハート5は、フィレスを追うことなく攻撃に参加。シャルロッテ様を倒したうえでフィレスを追うことにしたみたい。

『ごめんなさい、騎士シャルロッテ！』

『フィレス二尉とは合流できそうにありません！』

ルミナとベッキー先輩から予想外の返答が。聴けば甲冑男がこれまでに破壊して来た建造物の崩壊に巻き込まれた人たちの救出作業に追われてるとのこと。ルミナの存在破壊やベッキー先輩の精霊の力は、確かに瓦礫の撤去や埋もれた人たちの救出には必須だ。

『力不足かも知れませんけど、私が行きます！』

セレスは行ってくれるみたい。だけど、フィレス以上の神器や神秘を有するリンドヴルムが現れたりでもしたら、セレスじゃ手も足も出ない事態に陥る。シャルロッテ様から焦りのような不安が流れ込んでくる。

（ヤバい、ヤバい、ヤバい！　本当に最悪な状況！）

シャルロッテ様の意識と共生するようになって初めて感じる、シャルロッテ様のネガティブな感情。シャルロッテ様はリンドヴルム２人の猛攻を捌き続ける。けど、焦りは消えることなく。

「ふはははは！」

「また何か可笑しい事でもあった？　成金野郎！」

「おいおい。俺にはハート３っていうコードネームがあるんだ。成金なんて呼ぶんじゃねぇよ！」

「全身黄金甲冑！　そして傲岸不遜！　大昔に似たような成金野郎と殺り合ったね！　何が英雄王！　顔は良いけどド変態！」

「俺は変態じゃねぇ！」

シャルロッテ様と甲冑男――ハート3が今まで以上に斬り結ぶ。ハート3の斬撃や盾の打撃は掠りもせず、シャルロッテ様の斬撃は傷1つ付けられない。神器のランクで負けてるシャルロッテ様の携える"ブリード・スミス"じゃ、ハート3の神器・"エクエス・ノービリス"を突破できない。絶対切断を付加してもようやく傷が付く程度。

「それで？　何が可笑しいのか教えてもらえる？」

「ああ。それはな――」

ハート3が答えるより早く、『こちら機動一課本部！　特戦班に緊急連絡！』通信が入った。オペレーターから伝えられた最悪な報告。その内容とは、わたし達が協力して捕縛した三地方に出現したリンドヴルムと神器が、別のリンドヴルムの襲撃を受けて奪還されてしまったというものだった。

（そんな・・・）

対抗できる戦力のベッキー先輩とルミナは今、瓦礫撤去・人命救助を優先してるし、わたしとシャルロッテ様は戦闘中で、フィレスは男の子を護るために逃走中、セレスはフィレスと合流するために行動中。ダメだ。圧倒的に人数が足りてない。

「ふはははは！　そういうわけさ！　全て振り出しに戻ったわけだ！　お前たちの頑張りが無駄になったな、管理局！」

「『こんの・・・！』」

せっかく苦労して捕らえたリンドヴルムと神器が奪還された。全てが無駄、それどころか全てにおいて不利な事態に陥ってしまった。ハート3が「俺たちの仲間さの仕業さ！」って笑う。まさか、さっき言ってた別任務って。捕まったリンドヴルムの解放だったわけか。

「リンドヴルムは滅びない、死なない。たとえここで俺たちが全員捕まったとしても、また新たな小隊が再編され、再び次元世界を跋扈するんだ」

振るわれる黄金の大剣。シャルロッテ様の反応が「しまっ・・・！」遅れた。振り下ろされた大剣をギリギリで躱したけど、真紅の両翼の右側がバッサリ切断された。ガクッと体勢が崩れる。両翼は飛行魔法の要だから、片側を失っただけでも上手く飛べなくなる。

「ハート5！　出番だ、撃て！」

ライフル型神器・"ウィーチェ"の銃口が落下中のわたし達に向けられた。

――シュヴァーベン・マギークライス――

側面に展開したベルカ魔法陣の足場を蹴って横っ跳び。直後に砲撃

が降って来たけど、無事に回避。すかさず斬り捨てられた右の翼を再展開するシャルロッテ様が体勢を立て直してるところに、「そーら、逃げろよ！」目の前に高速回転して飛来した黄金の大剣が。咄嗟に"ブリード・スミス"を掲げて盾にして防御。

「『きゃぁぁぁぁぁ！！』」

大きく弾き飛ばされる。空中っていうこともあってどっちが上下か判らなくなる。と、視界に端に砲撃の先端が見えた。

「ヤバ・・・！」

当たる。わたしは思わず目を瞑ろうとしたけど、体の支配権はシャルロッテ様にあるから、迫る砲撃から目を逸らせない。ハート3が「終わりだ！」勝利を確信したっていう風に声を上げた。その時・・・

「ああ。お前たちの・・・終わりだ！」

久しぶりに聞く、愛する男の子の声にわたしも、そしてシャルロッテ様も胸が高鳴った。そして上空から何かが高速回転しながら降って来て、"エクエス・ノービリス"を弾き飛ばした。ガキィンと響く金属音。シャルロッテ様は"ブリード・スミス"を輪っかに戻して、跳ね返った何かをキャッチ。ソレは・・・

『キルシュブリューテ！？』

フライハイト家の家宝である刀、"断刀キルシュブリューテ"だった。シャルロッテ様が「そのレプリカね」って付け加えて、「ダンケシェーン、ルシル　」ハート3へと突撃してくルシルへ投げキッス。レプリカ。あ、そうか。ルシル達セインテストの固有スキルか。そうだよね。フライハイトの城へ行ってわざわざ持って来られるような代物じゃないし。

「新手か！　何人来ようが・・・俺たちの敵じゃないんだよ！」

「そっくりそのまま返させてもらおうか。お前たちは、俺の敵じゃない」

ルシルが携えているのは２ｍ近い深紅のハサミ。ハート3は弾き飛ばされた大剣をキャッチすると同時に伸長させ、すかさずルシルに向かって振り降ろした。ルシルは開いたハサミで挟み込んで大剣を受け止める。激しい火花が散る中、パキンと大剣が真っ二つに寸断された。

「「な・・・！？」」

リンドヴルム２人が絶句。ついでに言うとわたしも絶句。あまりにも容易く神器が切られたその光景が信じられない。

『ルシルの持ってる神器は、対神器とまで言われる魔造兵装、その７９位・・・モルス・フォルフェクス」

対神器の神器。そんな物まで持ってるんだ、ルシル。ルシルは呆け

るハート3を鼻で笑った後、ハサミの刃を2つに分けて、左に持つ刃で"エクエス・ノービリス"の盾を真っ二つに斬り裂き、右の刃をハート5へと投擲して、白銀のライフル・"ウィーチェ"の銃身をこれまた真っ二つ。

「なんだ、コイツは！？」

「俺の神器が・・・！？」

――舞い降るは、汝の雷光（コード）（パシエル）――

ルシルは"ウィーチェ"を失ったハート5へ雷撃の槍4本を射出。その高速の攻撃にハート5は防御も回避も出来ずに「ぎゃぁぁぁぁ！」直撃を受けて墜落。ハート3が「ハート5！」を助けるために急降下。仲間意識は一丁前。だけど・・・

「チェックメイトだ」

ブーメランみたく戻って来た片方の刃をキャッチしたルシルは、今度はハート3へ向けて両手に持つ刃を投擲。2つの刃は高速回転しながら奴へと到達して、ガリガリガリ、って激しい火花を散らしながら甲冑をバラバラに斬り裂いた。甲冑の破片が空を舞い、陽の光でキラキラ輝いてる。そしてルシルは気を失ったらしい2人にチェーンバインドを巻きつかせて、近くのビルの屋上へ思いっきり叩きつけた。終わった、今度こそ・・・。

『つ、強い・・・』

そんな感想しか出て来ない。

『・・・かつて、遥かに遠き古き時代。１０００年と続く戦乱の時代。数多くの魔術師は、鍛え上げた魔術を、携える神器を手に、己の為、家族・友人・恋人の為、国の為、出身世界の為、身命を賭して戦った時代』

『シャルロッテ様・・・？』

『そこに、ひとりの魔術師が居た。彼は特別だった。生まれながらに圧倒的な魔力を有し、誰もが羨む能力を持っていた』

シャルロッテ様の視界にルシルだけが映り込む。

『普通の魔術師であれば1つから3つまでしか有することの出来ない神器を何百・何千と携えることが出来た、魔術師史上類を見ない、唯一無二の特別な魔術師・・・。畏怖と敬意によって彼はこう謳われていた。神器王、と』

『神器・・・王・・・』

わたし達の視線を受けてたルシルが「シャル。状況は切迫している。急ごう」そう言って、明後日の方を見詰めた。新たに出現したドラゴンハート、解放されたリンドヴルム3小隊、別れたみんなとも合流しないといけないし。シャルロッテ様は「ええ！」力強く応えた。

「だけど、その前に・・・」

シャルロッテ様がルシルに近づいたかと思えば「おかえりなさい」キスした。ルシルは抵抗することなく受け入れたから、『あ！　シャルロッテ様だけズルイ！　わたしも！』人格交代するようにお願いするけど・・・

『今はダメ。それに今のキスは、私が魔術師化するための鍵なんだから。イリスが考えているようなやましいものじゃないからね』

『ひどいです～』

でも、今の状況で欲を優先させるわけにはいかないことくらいは理解してるから折れることにした。ルシルの復活や再会のお祝いはリンドヴルムを退けた後で、ね。

「こちら特戦班のイリスです。状況説明をお願いします」

シャルロッテ様が一課の本部へ通信を繋げる。オペレーターは、リンドヴルムは総出でフィレスと男の子、そしてシグナムとジョンを追ってるとのこと。ミッドに来た目的はどうやら男の子のようで、そこでジョンを見つけて、ついでに誘拐しようとしてるみたい。

「そんなことはさせない！　ルシル！」

「ああ！　行こう！」

そうしてわたしはフィレスの方へ、ルシルはシグナム達の方へ向かい、それぞれリンドヴルムを迎撃することになった。

Ｅｐｉｃｏ２９新暦６６年：クラナガンの悪夢～Ｓｅｃｏｎｄ　ｃｏｍｉｎｇ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

ルシル君が目を覚まして、本局からミッドチルダに降りて来て、さらにはリンドヴルムと交戦して、そのうえ神器持ち３人を撃破・逮捕した。機動一課の本部からその連絡を聴いた私は、そういう状況でもないのを理解してるけど「やった！」すごく喜んだ。というか、強すぎるよ、ルシル君。

「つっても状況は変わらずやべぇぞ。全員が神器持ちっつうドラゴンハート。しかもそいつら、あたし達がとっ捕まえた３小隊や神器を奪還しやがった」

「あ、うん・・・。あっ。あの、落ち着いて下さい！　急がず焦らず、前の人を押さないで！」

私とヴィータちゃんは今、ミッドチルダの首都クラナガンに新たに現れたリンドヴルム・ドラゴンハートの人たちが破壊した建物の瓦礫から逃げ惑う民間の人たちを避難させてる。同じチームだったルミナちゃんとベッキーちゃんは、崩れた瓦礫の撤去や埋もれた人たちの救助を手伝ってる。

「またビルが崩れた・・・！」

遠くの方で煙が空高くまで上がってるのが判って、遅れて振動と轟音がここまで届いた。ヴィータちゃんが「ドラゴンハートって連中、遠慮なく壊していきやがる・・・！」って怒りを顕わにした。他の小隊はここまで派手に暴れなかったのに。本当に酷いよ。それから民間の人たちの避難の手伝いを続けていると、「きゃあああ！」悲鳴が聞こえた。

「なのは！　リンドヴルムだ！」

ヴィータちゃんが指差した方向に、こっちに向かって飛んで来る軍服姿のリンドヴルム４人の姿があった。あの人たちは「ドラゴンヘッド・・・！」で間違いない。私たち東部担当チームが捕まえた人たちだ。けど、ルミナちゃんが相手にしたヘッド１、杖持ちのヘッド６の姿は見えない。

「あ、あの子供たちは・・・！」

ショットガン型のデバイスを持った女の人が私たちに気付いた。だけど別の男の人が「放っておけ」って女の人の肩に手を置いて、先へ行こうと促した。でも女の人は「許せない・・・！」肩に置かれた手を振り払って、ショットガンの銃口を私とヴィータちゃんに向けた。すると民間の人たちが悲鳴を上げて四方八方に逃げ出し始める。

「あ、ダメです！　そっちは危ないですから、戻ってくださ――」

「ここに居るよりは安全だわ！」

「局員ならしっかり民間人(おれたち)を護ってくれよ！」

「そもそもこうなる前にしっかりと犯罪者を取り締まれよ！」

「狙われてるのはあなた達でしょう！　近づかないでよ！」

私とヴィータちゃんに向けられる罵詈雑言。やっぱり辛いものがある。でも、だからと言ってここで引くわけにはいかない。私たちは管理局員だもん。ヴィータちゃんが「なのは！　お前は防御担当だ！　んで、あたしが攻撃担当！」そう言って、ドラゴンヘッド４人に向かって突っ込んで行こうとしたら、止めに入った男の人が「いい加減にしろ」女の人を平手打ち。

「え・・・？」「な・・・！」

私とヴィータちゃんが呆けていると、女の人はショットガンを降ろして渋々と隊列に戻った。そして「任務を続行する」って男の人が告げると、再びどこかへと向かって飛び去って行った。ヴィータちゃんが「待て、おい！」って追いかけようとしたけど、「待ちなさい」ある声によって遮られた。

「ナカジマ准陸尉」

「アルピーノ准陸尉」

首都防衛隊の分隊長、クイント・ナカジマ准陸尉と、同じく分隊長

のメガーヌ・アルピーノ准陸尉だ。私たちにここの避難誘導を務めるように指示を出してくれたお2人。そして分隊員の人たちが6人。ナカジマ准陸尉は「追跡をする前に、まずは引き継ぎを。ね？」そう言って、民間の人たちに声を掛けて再整列させて、「みなさん、安心してください。どうぞ焦らず、慌てずに避難してください」アルピーノ准陸尉が歩を進ませる声掛けをする。

「ここの避難は私たちに任せて――」

「あなた達はリンドヴルムの追跡、および逮捕を」

「「お願い出来る？」」

「「・・・はいっ！　お任せください！」」

私とヴィータちゃんはお2人に敬礼して、一気に空へと上がる。目指すはドラゴンヘッド。今度はどんな悪事を働くのか判らない。また手を汚させる前に捕まえないと。

「急ごう、ヴィータちゃん！」

「応よ！」

そうしてわたしとヴィータちゃんは、すでに姿が見えなくなっちゃってるドラゴンヘッドの行方を一課本部に問い合わせてから、その方角へと向かって飛んだ。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒フェイト†††

新たに出現したリンドヴルム、その第０小隊ドラゴンハートがミッドの首都クラナガンで派手に暴れた所為で街は大混乱。混乱に陥る民間人、破壊されて崩れる建物。しかも私たち臨時特殊作戦班が苦労して捕まえた３小隊と神器を奪還までする始末。

「フェイト。こっちは終わったわ。そっちは？」

「うん。問題なく逮捕完了」

最悪なのはそれだけじゃなくて、この混乱を利用して全く関係ない犯罪者まで動き出し始めた。避難誘導の手伝いをしていたけど、罪を犯した人たちの逮捕に参加することになった私とアルフとアリサとザフィーラ。たった今も混乱に乗じて強盗を行った犯罪グループを壊滅させた。

『お疲れ様。今そっちに応援部隊が向かっているから、少しの間でも休憩を取って』

一課本部からそんな通信が入った。けど、私たちだけ休憩するわけにはいかない。何せ、１ヵ月以上と意識不明だったルシルがミッドに降りて来ていて、メンバー全員が神器持ちだって言うドラゴンハートの３人と交戦、そして撃破したってとんでもない連絡を本部から貰ってる。病み上がり直後で神器持ちを３人も倒した。やっぱりルシルは恐ろしく強い。

「アルフ、アリサ、ザフィーラ。逃走しているリンドヴルムを追おうと思っているんだけど・・・」

神器持ち以外は単なる強い魔導師。逃亡するリンドヴルム兵を少しでも捕まえ直しないと。また別の神器やロストロギアを武装して、こんな街中で暴れるような行いをするような真似をさせないために。

「いいわよ。ていうか、あたしもそう言おうと思ってたし」

「あたしも異議なし」

「我もだ」

満場一致となったから、私たちは本部に『逃走したリンドヴルムを追います！』って一言断りを入れてから、近くに逃走中のリンドヴルムが居ないかと訊ねてみる。すると、3小隊がみんなここクラナガンに集まって来ているって答えてくれた。そしてクラナガンで暴れるドラゴンハートは、ジョンと、また別の男の子を追っているらしい。それが目的だから。だけど・・・

「単なる逃走じゃなくて、わざわざ局員が集まってるクラナガンに戻って来てる・・・？」

逃がしてもらえた3小隊はそのまま逃げずに、管理局員が何百人って居るクラナガンに来るなんて。こう言ったらなんだけど自滅、出頭行為だ。

「また捕まるリスクを冒してでもこっちに来る理由って何なのかしら？」

「判らない。でも・・・」

やることは変わらない。リンドヴルムを捕まえる。今はそれだけで十分。ということで、私たちは空へと上がって、リンドヴルムの第８小隊ドラゴンブラッドの居る空域へとすぐに飛んだ。

その間にも本部から通信が入り続ける。逃げたリンドヴルム３小隊は局員との交戦を避けて、ひたすら何かを探すような仕草をしているって。それに神器持ち全員が姿を消したって。今クラナガンに訪れてる３小隊は魔導師のみで構成されてる。それはある意味チャンスな状況だ。

『――あ！　待って！・・・すごい！　イリスちゃんとセインテスト君がまた新たに神器持ち２人を撃破！』

ジョンを護衛するシグナムやすずかと合流したルシルや、フィレスとセレス、そしてジョンと同じリンドヴルムに追われていた男の子と合流したシャルが、さらにドラゴンハートの神器持ちを倒したって報せが。いよいよ以ってリンドヴルムの壊滅が出来そう、なんて思った。だけど・・・

『機動一課本部より各前線局員へ緊急連絡！　クラナガン上空に新たな魔力反応！　注意されたし！』

私たちだけじゃなくて、今現在クラナガンにて任務を全うしてる局

員全員に警告。空を飛んでいた私たちは、その魔力反応の正体が空に出現する様をこの目で見た。

「「「巨人・・・！！」」」

全高１５ｍはあるかもっていう巨大な人型が空に現れた。エメラルドグリーンの全身甲冑と、縁に黄金の装飾に彩られた純白のマント。そして出現と同時にクラナガン上空が曇天に覆われて、さらには１０を超える数の竜巻が発生。ううん、それどころか首都全体を覆うような超超超巨大な竜巻が発生してる。今、私たちは竜巻の中心に居る。

「ちょっ、待っ・・・きゃあああ！」

「アリサ！」

「あたしが掴まえるよ！」

周囲に発生してる竜巻の影響で上手く空を飛ぶことが出来なくなった。特に飛行魔法が危ういアリサが早速暴風に吹き飛ばされた。アルフが一番近かったこともあって、「あ、ありがと、アルフ」アリサを抱き止めた。

「アレが噂の巨人か・・・！」

ザフィーラがそう言った。ウスティオって言う世界で複数の部隊を撃墜した、ロストロギア扱いの巨人。ついさっきその巨人が出現し

たようだけど、すぐにいなくなったみたい。それはともかくとして、巨人が起こしていると思われる竜巻が周囲の建物を風圧で吹き飛ばされたり、ガラス窓を粉々に砕いたり、車を空に舞わせたり。・・・いま見ている光景が信じられない。

『本部から特戦班へ！　セインテスト君からの緊急連絡を伝えます！　各員、リンドヴルムへの追撃を中断し、民間人の避難誘導、救出を最優先として行動し、決して巨人・・・えっと、アムティスには近付かないようにとのことです！』

ルシルが出した指示を本部から又聞き。私たちに出されたのは、民間人の安全を最優先してほしい、ってことだった。確かに今のクラナガンは大混乱に陥っていて、民間人も危険に晒されている。それを理解しているからこそ私たち特戦班は、リンドヴルムとの交戦を避けて、逃げ惑う民間人の安全を確保するために動きだす。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒シャルロッテ†††

神器持ちのリンドヴルムどころか、大戦末期にヨツンヘイム連合が戦場に投入した半自律型の人型戦術兵器、Ａｕｔｏｍａｔｉｃ ｏｐｅｒａｔｉｏｎ Ｍａｇｉｃ ｕｓｅ Ｔａｃｔｉｃｓ ａｔｔａｃｋ Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｔ ｂａｔｔｌｅ Ｓｙｓｔｅｍ――Ａ・Ｍ・Ｔ・Ｉ・Ｓ・（読みはアムティスね）がクラナガンに出現した。

数ヵ月前に、ウスティオって世界で砲撃戦型のタイプ・アーティラリーの１機が発掘されたのは知ってる。でも今、クラナガンに出現したのはアーティラリーじゃない機体だった。いや、ついさっき出

たようだけど、すぐに消えたっぽい。いったい何をしに来たんだか。で、次に出てきたのは、近接戦型のタイプ・セイバーだ。

「どっちにしろ最悪なんだけど・・・」

首都全体を覆うかのような大竜巻、その内側に私たちは居る。周囲には普通サイズの竜巻が数十個と発生していて、建物やら車やらを吹き飛ばし続ける。風嵐系の機体かぁ。まだ救いがあるね。炎熱や氷雪系だったらクラナガンは滅んでた。

「「騎士シャルロッテ・・・」」

フィレスとセレスが不安げに私の名前を呼んだ。２人はタイプ・アーティラリーと戦った経験があるし、その攻撃・防御力の高さは嫌と言うほど知ってると思う。けどね、タイプ・セイバーは近接戦の機体ということもあって、タイプ・アーティラリー以上の防御力を有してるんだよ。魔術じゃおそらくダメ。能力を解放した神器による直接攻撃じゃないと。

「・・・ルシルの言うように、フィレスとセレスはシグナム達と合流して、ジョンとその男の子を護り抜いて。連中の目的はその２人でもあるみたいだし・・・」

他にもあると思うけど、今はそれが主目的と考えた方が作戦も立てやすい。フィレス達は少し悩んだ後、「承知しました」ってこの空域から離れて行った。入れ替わるように「シャル！」ルシルが飛んで来た。

「ルシル！」

ルシルと合流。魔術師化した私とルシルの２人とアムティス１機。対アムティスの戦力としては足りないって言いたいけど、民間人の安全を優先するにはこうするしかない。

「アムティスをまずはどうにかしないとな」

「うん。第一種戦闘行動に入らないのは嬉しいけど、この竜巻をどうにかしないとクラナガンは大損害」

アムティスは第二種戦闘モード（早い話が戦場のど真ん中で待機）に移行すると、その機体が持つ基本機能が稼働する。風嵐系の機体の場合は、今のように竜巻の結界を発生する機能を持ってる。単純な気候操作だから魔術でも何でもないんだけど、こんな街中においてその効果が生む被害は尋常じゃない。

「何を以って第二種戦闘モードなのかは判らないが、何か目的があるのは確かだ。なら、それを放置するわけにはいかない」

「うん」

"キルシュブリューテ"・レプリカの柄を握り直す。そしてさっき回収した神器を、少しでもルシルの力になってくれれば良いと思って渡す。何せ神秘の塊であり、神秘を含んだ魔力を有する神器は、ルシルにトンデモない恩恵を齎すから。

「ああ、ありがとう。神器(コレら)の魔力をコード・イドゥンで吸収すれば、アムティスとそれなりに戦えるだろう」

謎の男の子が持ってた"ブリード・スミス"シリーズ、そしてついさっき、私が撃破したドラゴンハートのハート4が持ってた短剣型の神造兵装、"アングリスト"、ルシルが撃破したハート6の持ってた両刃剣型の魔造兵装、"イェクルスナウト"の3つ。

"氷纏装デュック・グラス"はフィレスに渡した。アレは元々ヨツンヘイムが所有してた神器だしね。ヨツン皇族の末裔のフィレスなら同調率はきっと限界突破。たぶん神器持ちくらいなら余裕で勝てると思う。

――女神(コード・イドゥン)の救済――

ルシルは早速、"イェクルスナウト"から神秘・魔力を吸収する。そうしたら目に見えてルシルの魔力がすごいことになった。すると、「アムティスに動きあり！」こちらに背を向けていたアムティスが振り向いた。兜のアイガードの奥に光る赤い単眼が私とルシルに向いた・・・気がした。

「第一種戦闘モードへの移行を確認！」

――戦滅神(コード・ヴィズル)の破槍――

ルシルが魔術としての上級雷撃系最強の砲撃ヴィズルを発射。第一種戦闘モードになったことで竜巻の結界は解除されて、数十個の竜

巻も全て消滅した。雷撃砲は一直線にアムティスへと突き進んで行って・・・着弾。竜巻は晴れても黒雲は未だに晴れない空に蒼い放電爆発の花が咲いた。

――女神（コード・ソール）の陽光――

次に向かってくのは上級火炎砲撃３発。放電爆発が治まって、そこから無傷なアムティスの巨体が現れたかと思えば火炎砲の直撃を受けて蒼の爆炎が発生、アムティスの姿がまた見えなくなる。

「さぁ、断刀キルシュブリューテ。久しぶりに暴れようか！」

背に展開してる真紅の両翼ルビーン・フリューゲルを羽ばたかせて、アムティスの方へと突撃。今のルシルの魔術の直撃でもまず撃墜できない。案の定、アムティスは黒煙から飛び出して来て、私に向かって突っ込んで来た。あんな巨体なのに、移動速度は時速で約２００ｋｍ強。知ってはいても高速で突っ込んで来る威圧感をそれなりに感じてたりする。

『こ、こわ！　すごくこわっ！』

私の生まれ変わりであるイリスからそんな念話が。初見だと純粋に恐怖ばかりが生まれる。私は『大丈夫。これ以上リンドヴルムの好きにはさせない！』そう返して、絶対切断能力を"キルシュブリューテ"・レプリカに付加。具現した鞘に収めた上で、足元にベルカ魔法陣の足場を展開して着地。

――砕嵐（ペガル・トルメンタ）の鉄拳――

振り被られた右腕。手首から先の拳を高速回転させて、暴風を発生させた。全てを粉砕する嵐を纏ったパンチ。風嵐系アムティスのタイプ・セイバーの基本的な攻撃手段。私は小さく深呼吸。息を吸って、止める。

――真技：飛刃・翔舞十閃――

"キルシュブリューテ"・レプリカを鞘から一気に抜き放つ。刀身から放たれるのは絶対切断の１０の斬撃。アムティスの一撃と真っ向から激突。レプリカとは言え"キルシュブリューテ"は神器だ。しかも魔造兵装の第９位。その切れ味もさることながら能力の絶対切断も・・・

「あっ！」

「馬鹿、シャル、逃げろ！！」

「げふっ？」

襟首を引っ張られたことで首が閉まった。すごい速度で高度が上がった直後、足元を音速突破したアムティスの右腕が通過した。機動力がとんでもないルシルのおかげで、襲い来る衝撃波の影響も受けずに済んだ。

「けほ、けほ、ありがと、助かったよ」

「礼は後！　次が来るぞ！」

――砕嵐の鉄拳（ペガル・トルメンタ）――

アムティスは間髪入れずにアッパーを繰り出して来た。ルシルからの「忘れるなよ、シャル！」お叱りの言葉に、「ごめん！」謝って、私たちはそれぞれアッパーを躱す。

――雷神の天罰（コード・トール）――

遥か上空――成層圏に展開されるアースガルド魔法陣が４枚。そこからアムティスへ向けて蒼雷が雨のように降ってくる。落雷の速度はもちろんのことアムティスの巨体さがその命中率を高める。ガツンガツン当たって行く落雷。そして放電爆発に呑み込まれるアムティス。けどどれも決定打にならない。

（よし。さっきのミスはしっかりと返上しないとね）

さっき放った飛刃は、スキルとしての絶対切断斬撃。神器クラスのアムティスを相手にスキルなんかじゃ通用しない。確実に斬るなら、"断刀キルシュブリューテ"・レプリカの能力としての絶対切断を使わないといけないんだけど・・・

「ルシルー！　どうしよー！　魔力が足んな～い！」

"キルシュブリューテ"・レプリカの全解放にはＳＳＳランクの魔

力が必要だけど、今の私にそこまでの魔力は無い。

――砕嵐の鉄拳（ペガル・トルメンタ）――

――飛刃・翔舞八閃――

とりあえずスキルの絶対切断でもアムティスの魔術くらいは斬り裂けるから、拳に発生させてる暴風を切断してただのパンチへと戻す。でもただのパンチでも直撃は即撃墜になりそうな程の威力だからキッチリと回避。

「知っている！　だが、どうしようもないだろう！」

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

私が魔術を削り、ルシルがアムティスへ魔術を着弾させていくっていう作戦に自然となった。けど、どうしても決定打が与えられない。

「そうだけどさ！　どうせなら破壊したいじゃん！　アムティスなんて百害あって一利なし、だし！」

撤退させるだけじゃ本当に解決にはならないもん。どうやっても斃しておきたい。

（魔術師化してる間だけ魔力炉（システム）化してくれるイリスのリンカーコア。今なら魔術としての契約を結べる・・・！）」

真っ先に思いついたのは魔術としての主従契約術式メンタルリンク。ルシルとまた契約をすれば、"キルシュブリューテ"を全解放できる程の魔力をルシルから・・・って、出来えねぇ！　ただでさえルシルは魔力枯渇による複製品――記憶消失の心配があるんだから、ルシルから魔力を貰うのは無理だ。

「だったら・・・ルシル、契約！　急いで、ダッシュ、ダッシュ、ダ～ッシュ！」

巨体の割に高速で打ってくるコンビネーションパンチを、余裕を持って躱しつつ飛刃を飛ばし、"キルシュブリューテ"・レプリカで両手の親指を斬って血を出させる。

「いやだから無理だって！」

「今は大人しく私の言うことを聴いて！」

私の剣幕に、ルシルも上級砲撃を連発しながら両手の親指を噛んで血を出させた。

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

アムティスの四肢を鷲掴むように現れた白銀の巨腕２対４本。メンタルリンクの為の時間稼ぎだ。急いでルシルと合流して、足元にベルカ魔法陣の足場を展開して着地。そして両手の親指から流れる血が交わるようにルシルの両手と重ね合わせて、親指の血が混じり合うようにする。

「我、ルシリオン・セインテスト・アースガルド」

「我、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト！」

「「我ら、ここに誓いを築き、主従の断りを宣言す」」

そして「契約（メンタルリンク）」最後にキスをすることで（やっほーい♪　いぇ～いい）儀式終了。私とルシルの魔力炉（システム）が繋がる感覚を得る。先の次元世界とは逆で、私がサーバントでルシルがマスター。すぐさま私はルシルへと神秘を有した魔力を流し込む。

「私の魔力をあなたにあげる。だから派手に暴れてやってよ、ルシル！」

「・・・ああ！」

――女神の救済（コード・イドゥン）――

"神器（アングリスト）"から再び神秘を有する魔力を吸収するルシル。私はまともに戦闘が出来るだけの魔力を失ったことで戦線離脱。近くのビルの屋上へ降り立って、遥か頭上で対峙するルシルとアムティスを仰ぎ見る。

――軍神の戦禍（コード・チュール）――

――砕嵐の鉄拳（ペガル・トルメンタ）――

２対のイロウエルを力尽くで破壊して自由になったアムティス。暴風パンチを繰り出したアムティスへとルシルの複製神器による弾雨が降る。神器群がアムティスの装甲を傷つける金属音が空に響き渡った。アムティスのパンチを高速機動で躱したルシルが左腕を高々と掲げる。

――第二波装填（セカンドバレル・セット）――

――侵し難き嵐鎧（ボルティセ・アルマドゥラ）――

それを合図に、さらに神器群が再展開されて空に整列。アムティスは両腕で頭部を防御しつつ、全身を渦巻く暴風でキッチリとガードした。そこに再発射される神器群。ランクの低い神器は、アムティスの暴風の鎧の前に軌道を強制変更されて逸れて行くけど、それでも１０本近くは本体に着弾。金属音と爆発音が轟く。

（堕天使戦争中と違って今は１対１。ルシルも全快ならそうそう負けることはないよね）

"アンスール"がアムティスに敗北した最大の原因は数だ。"界律"の制限によって弱体化した"アンスール"１人に対して、性能が大戦時より変わってないアムティス１０機以上が一斉に襲いかかって来るんだから、そりゃあ堪ったものじゃない。私でも苦戦するどころか、下手したら死んでる。何せ絶対切断解放に必要な魔力を、"界律"によって発揮できないようにされてるんだから。

「勝って！　勝って、ルシル！！」

だけど今、ルシルは私の魔力、そして神器から吸収した魔力、そして神秘を得てる。アムティス1機くらいなら撃破できるような程にまで力を取り戻してる。だから、勝てる、って思った。けど・・・

「っ！？」

ルシルとアムティスのさらに上空が光ったと思えば、「召喚魔法陣・・・！？」が展開されていた。その巨大さ（直径で３０ｍはありそう）だから、召喚魔法陣の下側から出て来たソレの正体がなんなのかすぐに判った。

『ルシル、上！！』

ルシルだって気付いてるだろうけど念話で忠告。その直後・・・

――天上の閃光（ラージョ・デ・シエロ）――

召喚魔法陣から出て来た白銀の巨腕。五指の先端に有るクリスタルから青白い砲撃５発がルシルへと向けて発射された。

――女神の護盾（コード・リン）――

展開されるのはサファイアブルーに輝く、女神が祈る絵が描かれてる円い盾。砲撃は盾に着弾して四方八方に拡散。さすがに奇襲だったからイドゥンで吸収するようなファインプレーは出来なかったか、

ルシル。けど・・・

「もうちょっと考えてよ！」

――飛刃・翔舞八閃――

拡散した砲撃へと飛刃を放って、街中に着弾するより早く叩き斬る。すると『ありがとう、シャル！』ルシルから感謝された。嬉しいけど『礼は後、でしょ』って返す。今はアムティスの迎撃を最優先にしてほしい。何せ・・・

「タイプ・アーティラリー・・・！　ウスティオで発見されたっていう・・・！」

白銀の巨体がクラナガンの空に追加される。ついさっき現れた直後にサクッと姿を消したアムティスだ。純白のインバネスコートっぽい翼がバサッと大きく開かれた。そして４対８枚の翼の表面が青白く光ったから、すぐさま絶対切断スキルを発動。

――語り継がれし神の審判（トルエノス・デ・ラ・トラディシオン）――

空が真っ白に染まり、雷が落ちた時のような轟音がクラナガンを襲った。タイプ・アーティラリーの基本兵装の１つ、広域殲滅砲撃が発射された証。威力はかなり高い。けど雷のように枝分かれする拡散砲撃ゆえに狙った相手に確実に当てることは望めない。あの砲撃は、敵地のど真ん中で放ってこそ意味がある。それに・・・

――女神の救済（コード・イドゥン）――

雷撃のように見えて純粋な魔力砲撃。ルシルにとっては格好の回復アイテム扱い。いくつかがルシルによって吸収されて、他は私の「飛刃・翔舞十八閃！」で寸断してあげれば完全無力化が出来て・・・って、「ルシル！」に迫るタイプ・セイバーの暴風パンチ。

――女神の護盾（コード・リン）――

ルシルはギリギリ障壁を展開して、暴風パンチを繰り出した左手を弾き返した。アムティス・セイバー（識別名が判んないしこう呼ぼう）はすかさず右手でルシルを鷲掴んで、さらに超高速回転させた。そして発生する暴風。あれじゃ手に握られたルシルがバラバラに粉砕されちゃうよ。

『ルシル！』

『大丈夫だ！が、すごい目が回る！　おええええ！』

余裕そうで何よりだよ、ルシル。私は飛刃を放って、発生してる暴風を斬り裂いて無力化させる。と、アムティス・セイバーは右腕を大きく振りかぶって、ルシルを地上へ向けてブン投げた。ほぼマッハ越えの速度で急降下するルシル。あれじゃ体勢も直せない。そして数秒の後、ドォン！って、地面に墜落した音がここまで聞こえた。

――天上の閃光（ラージョ・デ・シエロ）――

アムティス・アーティラリーの１０本の指先から砲撃が発射された。狙うはもちろんルシル。これで最後の「飛刃・翔舞一閃！」を放って、砲撃の数を減らす。結果は１０発中４発を切断。残り６発はルシルの居る地上へと降り注いで、着弾音と爆発音、窓が割れるガラス音、ビルを揺らすほどの振動が発生。

（いくつか吸収できなかった・・・！？）

屋上から少し身を乗り出して地上を見たその直後、アムティス・セイバーが急降下して行って、ルシルが墜落し、砲撃が着弾した場所へ問答無用の着地。

「容赦なさ過ぎ！　つうか、街中でここまで暴れるな！」

アムティス・セイバーの踏みつけで震度６とか７クラスの地震かってほどの揺れが発生。しかも「ビルが崩れる・・・！？」振動は治まることなく、バキバキって足元のコンクリートに盛大なヒビが入った・

「最悪。もう魔力斬撃も飛行魔法も使えないんだけど・・・！」

さっきの一撃で騎士服維持に必要な魔力以外を消費。さぁ、どうやって逃げようか。ルシルの事も心配だけど、こっちもなかなかのピンチっぷり。近くのビルも崩壊しそうな感じだし、目の前にはアムティス・セイバーが居るし。本気でまずいと思ってたら、アムティス・セイバーが吹っ飛んだ。

「わぉ。久しぶりに見る完全形態のフェンリルじゃない・・・！」

吹っ飛ばしたのは本来の姿（全高６０ｍ級）に戻ってたフェンリルだった。ルシル、"異界英雄（エインヘリヤル）"のフェンリルを召喚したわけね。アムティス・アーティラリーの砲撃までも吸収したおかげで可能になった召喚だ。

「これで勝利確定ね」

って、余裕ぶっこいてる状況じゃない。とうとうビルが崩れ始めた。とりあえず隣のビルへ飛び移ろう。そう決めて駆け出そうとしたとき、「おーい、シャル～。大丈夫か～」ルシルがここまで飛び上がって来てくれた。

「ルシル！　えっと・・・大丈夫？」

「なんとかな。だけど死ぬほど疲れた。しばらくは戦いたくない」

「でしょうね」

病み上がり直後に神器持ちやアムティス２機と戦ったんだもんね。そりゃあ疲労も溜まるよ。とにかくルシルの無事は確認できた。さぁ、次はフェンリルとアムティス２機のバトルの行方だ。

「命令に従うだけの脳なし意思なし誇りなしの機械風情が我が主をいたぶるとは何たる恐れ知らずの愚行か！　容易く機能停止できるとは思わぬことだ！」

ブチギレしてるフェンリルに比べたらアムティスなんて小さい子供みたい。フェンリルの猫パンチならぬ狼パンチでアムティス・セイバーはボッコボコに殴られまくって、高々と空へと吹っ飛ばされた。続けてフェンリルの頭突きを喰らってさらに空高く舞う。

「あちゃあ。アザラシで遊ぶシャチみたい・・・」

フェンリルは空中でアムティス・セイバーを銜え込んでぶんぶん振り回した後、アムティス・アーティラリーへと放り投げる。で、2機のアムティスは派手な金属音を轟かせて激突。そんな2機へと向かってフェンリルがジャンプ。

大きく口を開けて、フラフラなアムティス2機の上半身をパクっと呑み込んで、一気に噛み千切った。さらに落下し始めた2機下半身すらも一呑み。咀嚼するたびに盛大な破壊音が轟き渡って、最後はペッと吐き出した。見るも無残。アムティス2機は一纏めのスクラップになってた。

――CEN（ケン）――

フェンリルの開かれた口から放たれるのはルーン魔術による火炎砲撃。それは宙を舞うスクラップと化したアムティス2機を呑み込んで・・・蒸発させた。それと一緒にフェンリルの姿が消える。召喚解除されたみたい。

「はぁ。なんとか顕現の制限時間に間に合ったな」

「お疲れ様、ルシル」

アムティスも撃破したことだし、あとはなのは達の無事を確認するだけ。私は「こちらイリス。特戦班の現状を教えてください」イリスの名前を使って、機動一課の本部へと通信を繋げた。

『リンドヴルムは撤退した模様で、特戦班のみなさんも無事です』

ルシルと一緒にホッと安堵の息を吐く。だけど『ですが・・・』オペレーターの声色が沈んだものになったから、なのは達の無事は確か。だけどそれ以外に何かが起きたんだってすぐに察することが出来た。

『ハート2と名乗るリンドヴルム兵が現れ、その人と交戦したフィレス二尉たちが軽傷を負い、ドラゴンハートに追跡されていた少年が奪還されてしまいました』

信じられなかった。ヨツンヘイムの魔術師として完成してるフィレス＋"氷纏装デュック・グラス"、魔術師セレス、シグナム＋"ドラウプニル"の3人を相手にして勝つようなリンドヴルムが居る・・・？

（シュヴァリエル以外にまだそんな実力者が居るなんて・・・。一体どんな神器を持ってるんだろう・・・）

とにかくリンドヴルムの襲撃は乗り切ることが出来たし、ジョンは護りぬけたみたい。今はそれだけを喜ぼう、と思う。

Ｅｐｉｃｏ３０剣槍エヴェストルム・アルタ～Ｒｅｂｉｒｔｈ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｓａｃｒｅｄ　ｄｅｖｉｃｅ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

クラナガンの悪夢って陰で称されるようになった、リンドヴルムによるクラナガン襲撃事件から1週間と2日。わたしら臨時特殊作戦班は、あの日から今日まで出撃することなく普通な日常を過ごしてた。

わたしらは今、聖祥小学校の屋上でお昼ご飯中。メンバーはわたし、すずかちゃん、アリサちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、シャルちゃん、そんでルシル君や。みんな揃ての学校でお弁当なんて久しぶりや。

（ルシル君もようやく学校に通えるようになったしな）

事件直後、ルシル君は2日も気を失ってしもうて、目を覚ましてからも念のためとゆうことで検査入院を1週間。そんで今日は土日を挟んでの月曜日。登校直後の朝はルシル君の歓迎モードで大騒ぎ。次の休み時間も、そのまた次の休み時間もクラスメートに囲まれてお祝いされてた。

「――にしても、ゲイズ中将、マジでムカつくんだけど」

アリサちゃんが不機嫌丸出しで、自分のお弁当箱に入ってるから揚げを箸でブスリと刺して口に運んだ。アリサちゃん、刺し箸はマナ

ーとしてはあんま良うないんよ。

「けど、仕方ないってこともあるかも・・・？」

「仕方ない？　なのは、それはない、ないわ」

「あぅ・・・」

「局員・民間人合わせての軽重傷者１２９６名、死者１６８名。建物の被害は軽微・小破・中破・大破・崩壊が合わせて３２０棟。車なんて４桁の大被害。地上本部設立以来、最大級の被害だって言うし・・・。それを防げなかったのは事実だよ、アリサ。しかも逮捕できたドラゴンハートのメンバーは全員・・・自害しちゃったし・・・」

局員もそうやけど民間の人たちにも亡くなった人が出たことが問題やったようや。そのほとんどが崩壊した建物に押し潰されてしもうたり、竜巻に巻き込まれて上空から地面に叩きつけられたり。アムティス（それが巨人の通称らしくて、シャルロッテさんの時代の代物とのことや）が原因としてる。

それに首都航空隊に攻撃を仕掛けたドラゴンハート。ルシル君とシャルちゃんがその大半を捕まえたんやけど、機動一課本部への移送中、奥歯に仕込んだ毒薬で自殺してもうた。そうゆうわけでリンドヴルムの本拠地の所在や、首都を攻撃した理由などを聴取できひんかった。得るものはあんま無くて、失うものは余りにも大きかった。

「そうだけどさ～。首都防衛・航空隊や陸士隊は頑張った、けど機

動一課は無様を晒した・・・。何よ、それ。あたし達が居たからこそ、リンドヴルムもアムティスも退けることが出来たんじゃない。それなのに一課だけディスるって。すごく納得いかないんだけど」

「ゲイズ中将って、地上部隊と地上の平和を第一として考えてるんだよね。だから実力のある魔導師を次元航行部隊――海に持っていかれることにかなりご立腹。だから本局や海を嫌う。ちなみにわたしたち聖王教会も目の敵にしてるんだよね～。局の真似事が許せないみたい。ほっとけっつうの」

アリサちゃんどころかシャルちゃんまでプンプン頬を膨らませて怒りだす。レジアス・ゲイズ中将。ミッドチルダは首都クラナガンに在る地上本部の総司令官。そのゲイズ中将は、先のクラナガンの悪夢での機動一課の働きについて結構な酷評やった。リンドヴルムの対処のための機動一課がもう少し迅速に動いていれば、被害は大きくならなかった、みたいな。

「被害云々言うんなら、結界魔法の1つや2つ、無許可で張らせろっての！」

「結界魔法1つ張るのにいちいち地上本部に許可取らないといけないし。そんな時間、待っていられないってね！」

「栄えある時空管理局の地上本部のお膝下だから、結界を張るなんてみっともない？　そんなことを言ってるから、民間の人たちにも被害が出たんじゃん！」

「そうだよ、そうだよ！　それなのにボロクソ言ってくれたよ。わたし、あの人のことすっごく嫌いになった」

アリシアちゃんまで参加して、アリサちゃん達３人は「ねー♪」って首を傾げた。もう止められそうにないほどに勢いづいてるなぁ。ここでルシル君が「魔術や神器、アムティス相手に魔法は意味ないぞ」ボソッと呟いたけど、３人の耳には届かへんかった。

「しかし実際、多くの方々が亡くなったのも確かだ。それについては受け止めるべきだろう」

ルシル君が空を仰ぎ見る。管理局の事情はどうであっても亡くなった人は確かに居るわけで。守りきれへんかったその罪はしっかりと受け止めよう。

「でも味方もちゃんと居てくれるから嬉しいよね」

すずかちゃんが一般生徒の目が無いのを確認して、モニターを２枚展開した。そこに映ってるんは管理世界共通の新聞みたいな物で、そこにはわたしら特戦班の顔写真付きの記事が載ってる。幼いながらも懸命に戦い、市民の避難誘導に努めた勇気ある少女たち、って見出しや。ちゃんと解ってくれてる人も居る。それだけで十分や。

「えっと、そう言えばクロノがこんなこと言ってたよ。ゲイズ中将は優秀な人物で地上の正義の守護者だって。武力の強化によってミッドの犯罪増加率を抑え込むことも出来ているそうだし、治安維持の実力はあるよって」

「だからってあそこまで目の敵にしなくても良いじゃん。こう言っちゃなんだけど、地上より海の方が事件のレベルが段違いなんだし」

「難しいところだよね、そこは。海の方が大変な事件が多いと思う。けど、地上を蔑ろにするのも変な話だし」

どちらを優先するか。そこを考え出すとキリがあらへん。大きいも小さいもあったらアカンからな、こいゆう話やと。ここでルシル君が「ま、どっちにしろ、ゲイズ中将に利用されたな」わたしが作った卵焼きを食べながらそう言うた。わたしらみんな「利用された？」小首を傾げて訊いてみる。

「噂だが・・・ゲイズ中将は、地上の犯罪率減少のための武力増強として、少々強引な手段を取ろうとしているらしい」

「そんな噂、ミッドの陸士部隊に所属してるあたしですら知んないんだけど。ごちそうさま～」

アリサちゃんがお弁当箱を片付けながらそう返すと、ルシル君はアリサちゃんに「仮にも内務調査部だからな。そう言う話には敏感なんだ。ごちそうさま、はやて。今日も美味しかった」そう返して、わたしには手を合わせて微笑んでくれた。

「はい。お粗末さまでした♪」

ルシル君に喜んでもらえるだけでわたしは今日も元気で、幸せでお

られる。夜ご飯は何にしようかなぁ～。

「で？　どんな噂なの？」

「魔導師の数が足りないなら、魔導師に頼らない力を作るしかない、みたいな、な」

その話を聴いたわたしらは「それの何が問題なの？」って疑問に思い至るわけで。ゲイズ中将のやろうと（今はまだ考えてる段階か）してる事は悪いようには思えへんから。そやけど次のルシル君の言葉で、わたしらは考え直すことになった。

「早い話が兵器に手を出そうというんだ。しかも次元航行艦の艦載武装とタメを張れるような。しかも違法な手段にも手を出すんじゃないか、とまで言われている。犯罪への抑止力へは確かになるだろうが、過ぎたる力は周囲や自身を破滅に追い込む」

「あ、あくまで・・・噂、なんだよね・・・？」

「ああ。とは言っても、内務調査部の先輩たちが口々に言っているから、ほぼ真実になってくるかも知れないな」

地上本部の総指令が罪を犯すかもしれへんって、とんでもないスキャンダル。アリシアちゃんが「あくまで噂でも、そんな話をわたし達に漏らしても良いの？」ルシル君に訊いた。すると「喋っても問題ないだろ。何せあくまで噂だしな」って誤魔化した。

「ま、今回の被害を本局所属の機動一課のミスであると糾弾することで、地上本部の行き過ぎた武力強化を本局や世論に認めさせようとしたいわけだ。そうなってくると、余計に噂は真実と化していくだろう。そして真実となった時、本局と地上本部とのパワーバランスが崩れ・・・。さて、どうなるものか」

「あぅ、あんまり怖がらせないでよ、ルシル君」

「あはは、ごめん、ごめん。噂が真実とならないよう、俺たち内務調査部が居るわけだ。ゲイズ中将の権力に屈してなるものか。さ、昼休みももう終わる。行こうか」

ルシル君の若干脅しの入った気がした話はこれで終わり。そんでわたしらはお弁当箱を片付けて教室に戻った。ちなみに午後もまたわたしら4年2組はルシル君の久しぶり登校のお祝いモードやった。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒アリサ†††

学校が終わってすぐ。あたし達は海鳴市郊外にある機動一課・臨時特殊作戦班――略して特戦班の本部へ帰宅。すると早速「おかえり～！」あたし達の中で2人しか居ない男子の内の1人、ジョンがあたし達のところ、正確にはすずかのところへやって来た。

「ただいま、ジョン君。良い子に出来てた？」

「もう。すずか、僕はすずか達と同い年くらいなんだよ。良い子に出来た？なんて子供扱いしないでほしいな」

そう言って反論するジョン。未だに自分が何者なのか、どうしてリンドヴルムに追われてたのか思い出せないジョンだけど、時間が経つにつれてそれなりに年相応な態度をとるようになってきた。けど、ちょっと生意気な方向になったかもしれないわね。

「おかえりなさい、みなさん」

「おかえりなさい、主はやて、皆も」

ジョンと話してると、2階からベッキーとシグナムが降りて来た。ただいま、って挨拶を返した後はそれぞれの部屋（3人1部屋ね）に行って鞄を置いたり着替えたり。下へ降りるために階段室に戻って来たら、「ただいまー！」ルミナの元気いっぱいな挨拶が下から聞こえてきた。

「たっだいまー！」「ただいまですぅ～♪」

「ただいま帰りましたー！」

遅れてヴィータとリイン、そしてシャマル先生の挨拶が。ルシル達の「おかえりなさい」を聞きながら降り切ると、リビングにはシャマル先生とヴィータとリイン、そしてエコバッグを両手に持ったアルフとザフィーラが居た。買い物に行ってたのね。シャマル先生とアルフが食材をしまってる中、「見て、イリス！　コンプリート！！」ルミナが小さな箱の中身をイリスに見せてはしゃいでる。

「おお。集めてた食玩フィギュアをとうとうコンプリートしたんだ～」

「そうなの♪　シルバニ〇ファミリーのフィギュア♪　こんなに可愛くて小さなフィギュア、ミッドに無いから。任務が終わってミッドに帰ることになったらもう手に入らないと思って」

「ダブりはどうするの？　ルミナ」

「もちろん持って帰る。さて。次はどの食玩をコレクションしようかな～。あっ、毎号にパーツが１つ１つ入ってるやつでも買おうかな～」

「コンプ出来ないに１０００円」

「あたしは１１００円」

「賭けないでもらえる？　アリシア、アルフ。でもやっぱり可愛い物を集めるに限るね～♪」

上機嫌なルミナはコンプリートしたフィギュアを飾りに、自分とベッキーとセレスの３人部屋へとスキップで向かった。

「そういやセレスはまだ本局から戻って来てねぇんだな。頼まれてた少女漫画の雑誌と単行本の最新刊買ってきたのに」

ヴィータがエコバッグから分厚い漫画雑誌と単行本を取り出して、

リビングテーブルに置いた。セレスがドはまりしてる少女漫画の最新刊と掲載雑誌だわ。ルミナもそうだけどセレスも日本の漫画やアニメ、フィギュアに興味を持ち始めてる。シャルもアリシアも日本のアニメや漫画が好きだって言うし。

ちなみにセレスが本局に行ってる理由は、先のクラナガンの悪夢で、ハート2との戦闘で破壊されたデバイスの修理を見守るために本局に居る。より堅く、鋭く、強く、どんなリンドヴルムが来ても二度とへし折られないようにするために。

「あの、先に読ませていただいてもよろしいですか？」

「お、おう」

そして超がいくつ付いてもおかしくない真面目なベッキーですら少女漫画の虜。ヴィータから許可を貰ったベッキーは「では早速♪」雑誌を手にリビングのソファへ。ルシルがすかさずお茶の用意を始めた。どういうわけかルシルはベッキーに対しての敬意が一段と高い気がするのよね。ルミナとセレスにはそこそこなんだけど。

「ベッキー先輩。お茶です」

「あ、わざわざありがとうございます、ルシルさん」

3つのL字型ソファに囲まれたリビングテーブルから戻って来たルシルが「すずか。そろそろ出られるか？」って確認すると、「うん。私はいつでもいいよ」すずかも準備万端だって答える。2人の格好は局の制服。これから2人は本局へ行くからね。

「僕も一緒に行く！　すずか、行くからね！」

「えっと、ルシル君。ジョン君も一緒で良いかな？」

「ダメだと言っても聴かないだろ、ジョンは」

「そういうこと♪　判ってるじゃないか、ルシル！」

「ルミナ～！　ジョンが本局へ行くんだって～！　付き添いをお願～い！」

シャルがもう1人のメンバーを名指し。ジョンは変わらずリンドヴルムに狙われる対象だから、ルミナかベッキーかセレスの誰か1人は付き添わないといけない決まり。だったら外出させなきゃ良いって話になるかもだけど、どこに居てもシュヴァリエルやフィレス二尉たちを負かしたハート2クラスのリンドヴルムが来たらアウトだし、何よりルシルの側に居た方が一番の安全だしね。ホント化け物クラスだわ、アイツ。

「判った！　制服に着替えるから少し待ってて！」

「ルミナさん！　私が行きましょうか！」

「いいよ、ベッキー！　やる事ないから暇だし！」

ルミナのドタバタと廊下を走る音がしたかと思えば、「やふ～♪」

階段の手すりに座ってすぅーっと滑り降りてきた。ルミナ、この家で一緒に過ごすようになってからと言うものちょっとずつ大雑把になったって言うか何と言うか。まぁ、真面目キャラはベッキーやルシルだけで十分だから、別に気にしてないけど。

「それじゃあ、行こうか。行ってきます」

庭先に設置したトランスポーターへ向かうルシル達に「いってらっしゃい」挨拶。庭先まで付いて行って、トランスポーターに入るルシル達に手を振る。そして、転送されたことでその姿が消える。

「すずかちゃんも、なんて言うか大変な仕事をお願いされちゃったよね」

「もし私にデバイスマイスターの資格があっても断ってたかも」

「絶対にミスなんて出来ないもんね～」

なのはとフェイトとアリシアがそんな話をしながら家に戻ってく。あたしも「プレッシャーがとんでもないわよね」会話に参加。はやても「わたしも責任重大過ぎて逃げたなるわ」って参加する。

「でも、すずかちゃんは引き受けたね。ルシル君の新デバイスの製作を」

そう。ルシルがすずかを連れて本局ーースカラボへ向かった理由は、ルシルの"エヴェストルム"を作り直すため。頼まれた時は散々無

理だ何だって騒いでたけど、結局は引き受けてこの1週間はずっとスカラボに入り浸り。マリエルさんやドクター達にも協力してもらってるそうだし、かなりすごいデバイスを作るはずだわ。

「ルシルのデバイスは、対エグリゴリの時でも使うみたいだし」

「そう思うとやっぱ恐いな～。ルシル君の命が懸かってくるんやから」

命が懸かってくるのは他の局員もそうだけど、ルシルは特に死へ直結する相手との戦いだから。それでもすずかは、ルシルからの依頼を受けた。

「だけど頑張ってほしいよね、すずかちゃんに」

「デバイスマイスターって夢への一歩目だし。エヴェストルムの製作が、すずかにとって今後の為になる経験になってほしいものね」

頑張んなさいよ、すずか。見るだけじゃなくて実際にその手でハイクラスなデバイスを製作することはきっと良い経験になるわ。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒すずか†††

早くも１１月に入ってからの数日目の今日。私たち特戦班は本局のトレーニングルームを貸し切って、ルシル君の新しいデバイス、"エヴェストルム・アルタ"の運用テストを行うことになった。

「ルシル君・・・」

ルシル君の左中指にはめられた銀の指環を見る。マリーさん、ドクター、そしてウーノさん達シスターズの協力、ルシル君の膨大な知識の元、私をリーダーとした開発チームが1ヵ月と懸けて作りだした、ルシル君の新しいデバイスだ。

・―・―・回想です・―・―・

先日のリンドヴルム首都襲撃事件――クラナガンの悪夢の終結宣言直後に気を失ったルシル君。目を覚ましたのはその2日後で、シャマル先生の権限で強制入院。私たちは、そんなルシル君のお見舞いのために本局・医務局へやって来た。

「具合はどないや？　ルシル君」

「これから1週間も検査入院だと。考えただけで気が滅入るよ」

「無茶をした罰よ、ルシル君。しっかりと休んでもらいますからね」

シャマル先生に叱られたことでしゅんと肩を落としたルシル君に、私たちは苦笑するばかり。それから、ルシル君が1ヵ月と学校を休んでた分のプリントやノート写しを渡しながら、学校や特戦班の本部――海鳴市郊外の家での出来事を話す。私たちの話を聴いて笑顔を浮かべるルシル君に私は、やっとルシル君が戻って来た、そう思えてた。

「やあやあ、ルシリオン君。病み上がり直後でのあの戦いぶり、実に見事だったよ。私や娘たちも大いに盛り上がった」

ルシル君の病室に来たのは、第零技術部・通称スカラボの部長「ドクター！」ジェイル・スカリエッティさんと、シスターズの長女で秘書のウーノ・スカリエッティさんだった。ウーノさんは「お見舞いのお花とフルーツの詰め合わせです」籠に入ったフルーツの詰め合わせをベッド近くの丸テーブルに置いて、「お花はこちらで活けてきますね」手持ちの花瓶を手に、病室を出て行った。

「ありがとう、ウーノさん。・・・それでドクター、単なるお見舞いではない、のでしょう？」

「・・・ふむ。純粋なお見舞いをしたかったのだがね。君の言うように別件もある。君に、コレをどうするかを訊ねに来たのだよ」

ドクターは携えてた小さなジェラルミンケースを開けて中身をルシル君に見えた。

「っ！　ドクター。コレはまさか・・・」

「そうとも。君のデバイス、エヴェストルムのシリンダーさ」

ケースに収められていたのは、シュヴァリエルさんによって修復不可能にまで破壊されたルシル君のデバイス・"エヴェストルム"の2つのシリンダーだった。ルシル君が医務局へ搬送されたその翌日、クロノ君が回収してくれた物だ。

「エヴェストルムを構築するパーツの中で無傷だった物はこのシリンダー2つのみのようだ。それで私が君の元へ赴いた理由だが。このシリンダー、君の新しいデバイスにも使用するかどうかを訊きに来たのだよ」

「・・・無論、使います。ソレは、覇王クラウス・G・S・イングヴァルトから頂いた物であり、歴代セインテストが永年共にしてきたエヴェストルムの一部。ここでその歴史を終わらせるわけにはいかない」

ルシル君がシリンダー1つを手に取って愛おしそうに眺めた。

「ほう。かの有名な覇王イングヴァルトから・・・。君とはこれからも良い付き合いを永く続けたいからね。資材や製作費は私たちスカラボが持とう。リクエストがあれば何でも言ってくれたまえ。よほどの無理難題でなれば全て聞き入れよう」

ドクターが、"エヴェストルム"に代わるデバイスの製作を無料でするって、ルシル君に伝えた。ドクター達の技術者としての腕は次元世界最高レベル。私やなのはちゃん達のデバイスの強化をしてくれたのもドクターやシスターズ、そしてマリーさん達で、その凄さは身を以って体験してる。

「リクエスト・・・。それなら、すずか」

「え・・・？」

ルシル君とドクターの会話の中にいきなり私の名前が出てきたからちょっとビックリ。ルシル君から「すずか。デバイスマイスターとしてのスキルはどこまでかな？」そう訊かれた私は、とりあえずこれまで学んできた知識、得てきた技術を伝えた。
ストレージデバイスくらいのプログラミングなら出来るようにはなってきたけど、インテリジェントデバイスになるとまだまだ。アームドデバイスはストレージに近いこともあって少々。早い話が一から完成までの製作に関わるような事はしたことがないから、デバイスマイスターとしてはまだまだ半人前だということを伝えた。

「そうか。・・・ドクター、俺に1つ提案があるんだけど」

「聴こう。まぁ、すずか君に話を振った時点で察してはいるがね」

ルシル君とドクターが私を見た。なんだろう。すごく大変な事になっちゃうような予感がひしひしと。その不安は見事に的中。ルシル君は「すずか。君がエヴェストルムを作ってくれないか？」なんて言ってきた。

「え？・・・えええええーーーーー！？　む、無理、無理だよ！　わ、私、デバイス製作なんて！　しかもルシル君のエヴェストルムを！？
　ダメ、それはダメな気がする！」

私は断ろうと必死で試みる。ルシル君のデバイスを私が製作する。それはあまりにも無茶で、無謀で、無理難題。まともにデバイス製作をしたことないのに、いきなり友達のデバイスを製作するなんて

とんでもないプレッシャーだよ。
しかも使用者はルシル君だというのが余計なプレッシャー。下手なデバイスなんか作って、シュヴァリエルさんのような強敵と戦ってるその時にシステム不全なんか起こしたら、今度こそルシル君が死んじゃうかもしれない。そう考えると、とても恐ろしい。

「大丈夫だろう。ドクター、すずかのサポートをお願い出来るか？」

「ああ、任せてくれたまえ。私はもちろん娘たち、それに加えマリエル技官にもサポートに入ってもらおう。このサポート体制なら問題はないだろう」

「そういうわけだ、すずか。頼まれてく――」

「そ、それでも無理！　私抜きの方が絶対いいよ、ルシル君！」

ドクター達とマリーさんだけで十分すぎるのに、私のような半人前が入るなんてイレギュラー過ぎるよ。私の存在はプラスどころかマイナス要因になる。しかも私がサポートじゃなくてドクター達がサポート。頭がおかしくなりそうな構図だよ。

「すずか。君の夢はなんだ」

「え・・・？」

「君の、夢は、なんだ？」

「私の夢は・・・」

デバイスマイスター。管理局員のデバイスを管理・製作できる技術者資格。私はデバイスマイスターになって、いつかは私の大切なパートナー・"スノーホワイト"や、なのはちゃん達のパートナーを看ることが出来たらいいな、って。

「デバイス・・・マイスター・・・」

「そうだったよな。なぁ、すずか。その夢への一歩は、まずは実際に製作に一から最後まで、しっかりと関わることだと俺は思う。見て聴いて学ぶ。それも大事だろうけど、実際に経験することの方がずっと為になるはずなんだ。なに。不安がることはないよ。ドクター達がしっかりとすずかを助けてくれるし、俺だってすずか達に丸投げするつもりはない。俺も、俺が有する知識で手伝う」

「だけど・・・でも・・・」

「お願いするよ、すずか。俺の相棒を、君の手で作ってほしい。信頼できる友達であるすずかだからこそ任せたい。友達が一生懸命頑張って作ってくれたデバイスとなれば、俺は今まで以上に頑張れる、以前より強くなれる、そう思うんだ」

ルシル君からの懇願に、私はとうとう「判った・・・。やってみる」受けてしまった。

・―・―・終わりです・―・―・

あれから私は、ルシル君の知識、マリーさんやドクター、それにシスターズの技術協力を元に"エヴェストルム"の製作に勤しんだ。最初はそれはもうてんてこ舞いだった。だけど、確かに見聞きするだけの学習より実際に手を動かして製作する経験の方が、私をより一段と成長させてくれたと思う。そして今日、無事に完成させることが出来た。

「大丈夫だよ、すずか。すずかが頑張ってくれたからな。それにマリエルさんやドクター達も一緒に製作してくれたんだ。心配なんて何1つとしてない。・・・さぁ、始めよう。エヴェストルム・アルタ、起動！」

一瞬の発光の後、ルシル君に左手にはシュヴァリエルさんによって破壊された"エヴェストルム"と似たような剣槍が握られてた。

「うん。無事に起動できたね、イェソドフォルム」

「あはは。流石にそれは杞憂過ぎだろう、すずか。不備なんて起きないよ、みんなで作ったエヴェストルム・アルタだからな」

「う、うん」

まず先代"エヴェストルム"と違うのは柄の長さ。先代は３０ｃｍほどだったけど、新"エヴェストルム"は３倍の９０ｃｍ。ルシル君が体を軸にして先代"エヴェストルム"を振るう時は柄が短かったことで、体自体を回して振るわないといけなかった。でも、柄を

長くしたことで体に触れさせながら振るうことが出来るようになったから、体を回すことなく腕だけで振れるようになった。

「あぁ、これは楽だな。振り回しやすい。標的が視界の外に行かないから隙も出なくなる」

自分の体を軸にしてまるで舞を舞うように"エヴェストルム・アルタ"を振り回すルシル君。それはまるで斬撃の竜巻。近付くモノ全てを斬り刻むような鋭さと速さを持ってる。

「その代わり屋内戦では気を付けて。柄が長くなった分、全体的にも長さが伸びたから」

先代の全長は２ｍ３０ｃｍで、新しいのは２ｍ９０ｃｍ。６０ｃｍの違いは結構大きい。ルシル君は「まぁ基本的に屋内戦では振り回さないから、気にはならないよ」って、振り回してた"エヴェストルム・アルタ"を止めた。満足そうに微笑んでくれてるから、私も嬉しくなる。

「それじゃあルシル君。変形機構のテストに移ろうか」

「了解だ。ゲブラーフォルム」

"エヴェストルム・アルタ"の柄の半ばが分離して、以前のツヴィリンゲンシュベーアト・フォルムのように二剣一対形態に変形。ルシル君は小さい体ながらも片手で１ｍを超える剣を軽々振り回し続ける。そして「ゲブラーフォルムも問題ないな」って、二剣の柄頭

を連結させて通常のイェソドフォルムに戻した。

「そして次が・・・」

「うん。エヴェストルム・アルタに追加した新機能。アリサちゃんのフレイムアイズ、フェイトちゃんのバルディッシュのフルドライブと同じ、魔力剣を生成するモード・イデアフォルム。通常カートリッジ2発で変形可能になるから」

ルシル君の魔法であり魔術の、魔力刃生成術式コード・アブディエルをデバイスの機能として組み込んでみた。ルシル君の魔法・魔術は、現存してる魔法とは全然違くてすごい複雑な術式だったから、私はすぐさまリタイア。ドクターとウーノさんとクアットロさん総出でなんとか再現できた。ドクター達ですら不眠不休で1週間と掛かったし。

「エヴェストルム・アルタ、カートリッジロード」

古代ベルカの王様、覇王イングヴァルトから頂いたっていう伝説級のシリンダーがカートリッジをロード。そして「イデアフォルム」ルシル君が一言。"エヴェストルム・アルタ"が変形する。剣身だった部分が半分に割れて、発生した両刃の魔力刃の樋の部分をカバーするような位置を取るような形だ。

「魔力刃は伸長自在で、結界・防御魔法の破壊効果は基本装備だね」

「それもフェイトとアリサのフルドライブフォームと同じだな」

ルシル君は２つの魔力刃を４ｍずつ伸ばして、全長８ｍ９０ｃｍとなった"エヴェストルム・アルタ"をブンブン振り回しながら「あぁ、これはすごい。術式強化のゼルエルなどを使えば、もっとすごいんだろうな」って笑顔を浮かべた。

「次だね。エヴェストルム・アルタを神器化させるイドフォルム」

先代"エヴェストルム"にあった二槍一対のツヴィリンゲンランツェ・フォルムと、鞭形態パイツェフォルムへの変形機構は取り除いた。ルシル君曰く、もう使わないかもしれないから、とのこと。変形機構のリソースを新機能・イデアフォルムに回せることが出来て、製作側としては大助かりだったけど。

「ここから先は魔術師の本領だ」

ルシル君は騎士服のポケットから、弾頭が蒼銀のカートリッジを２発と取り出して、シリンダーに装填。そして「カートリッジロード」ロードした。ルシル君が"エヴェストルム・アルタ"の剣身に刻んだルーン文字と呼ばれる魔術効果が発揮される。

（やっぱりただの魔力と神秘を含んだ魔力とじゃ全然違うんだ・・・）

肌にビリビリと感じる圧迫感。ルシル君は「うん。神器化も問題ないな」って満足そうに頷いた。神器化機構についてはルシル君ひとりに任せていたけど、無事に完成できて良かった。

「ルシル君。最後にアレを試してみようか」

「ああ。例の特殊鉱石だな。しかし面白い鉱石もあるものだな。流した魔力を何倍にして返還してくれるなんて。今の俺に最適な機構だよ」

セレネちゃんやエオスちゃんのデバイス、それにアリシアちゃんのデバイス（まだ未完成なんだけど）に組み込まれた特殊鉱石。初めて触れた人の魔力を記憶する鉱石で、その人がその鉱石に魔力を流すと何倍にして返還してくれるっていう力を持ってる。

"エヴェストルム・アルタ"に搭載するため、検査入院を終えたその日にルシル君は例の遺跡に潜って、鉱石を採取してきた。しかも私たちがとても苦労した遺跡探索や鉱石採取を2時間少しで完遂。ルシル君の強さを改めて思い知った。

（フィヨルツェンさん居なかったなぁ。もっと下の階層に居たのかなぁ・・・？）

「えっと、直接鉱石に触れて魔力を流さないとダメなんだよな・・・」

柄の半ばに埋め込まれてる2つの鉱石に魔力を流すルシル君。するとルシル君の魔力が目に見えて上昇したのが判る。足元から吹き上がるサファイアブルーの魔力波。見学席に居るみんなから「おお！」感嘆の声が上がった。

「ふふ、ふはは、ははは・・・！　素晴らしい！　普通の魔導戦もそうだけど、対エグリゴリ戦としての武装としても最高の代物だよ、すずか！　やっぱり君に任せて良かった！　鉱石のことを教えてくれたのは君だし。本当に感謝するよ！」

ルシル君がこれまで見せたこともないほどのハイテンションを見せてくれた。ひとしきり"エヴェストルム・アルタ"の機能や性能を確かめた後、「ベッキー先輩。お願いします」見学席に居るベッキーちゃんに一礼した。

「はい、判りました」

頷き返して見学席から降りて来たベッキーちゃんはすでに巫女服のバリアジャケット姿、神楽鈴型デバイス・"ドゥーフヴィーゾヴ"も起動済みで、ルシル君と対峙した。私は「ルシル君。無茶はダメだよ」そう注意してから、２人の魔術戦に巻き込まれないために見学席へ向かう。見学席に着くと、「すごいじゃない、すずか！」アリサちゃんを始めとしたみんなが「すごいよ！」私を褒め讃えてくれた。

「私ひとりじゃ何も出来なかったよ。マリーさんやドクター達がほとんど作ったみたいなものだし」

「謙遜しなくても良いと思うよ、すずかちゃん」

うぅ、今は何を言っても謙遜って思われちゃうみたいだから、「ありがとう、みんな」素直に受け取ろう。照れくさいけどやっぱり嬉

しい。それにやって良かったって改めて思う。ルシル君にも感謝されたけど、私もルシル君に感謝したい。私に、デバイス製作の機会をくれたことを。

「始まるみたいですよ！」

リインちゃんのその言葉に私たちの会話は一度止まる。そして、ルシル君対ベッキーちゃん＋五精霊の魔術使用による模擬戦が始まった。

・―・―・―・―・

リンドヴルムの本部である天空城レンアオム。その本城内に、"堕天使エグリゴリ"の三強の一角にしてロストロギア蒐集実行部隊・第０小隊ドラゴンハートのリーダー・ハート１である戦導の鉄風シュヴァリエル・ヘルヴォル・ヴァルキュリアの姿があった。シュヴァリエルがいま居るのは蒐集したロストロギアなどを保管しておくための倉庫。彼の視線の先には鎖で拘束された複数の神器。中にはここレンアオムより逃亡した人化できる神器たちの姿も在った。

「ブリード・スミスが神器王の手に渡って早１ヵ月近く。しかし未だにここへは来ない。何かの作戦か・・・？」

シュヴァリエルが思案顔になる。人化できる神器の中で唯一ルシリオンの元へ辿り着いた"ブリード・スミス"は必ずここレンアオムの在る無人世界の場所を伝えると思っていた。だが、そう警戒して

いたのに気が付けば1ヵ月と経過。何か企んでいるのではないかと疑うのも無理はない。

「まぁ、いいさ。どのような企みで有ろうと真っ向から吹き飛ばすだけだ」

そう言って倉庫から出るシュヴァリエル。厳重にロックをかけ、朝焼けに染まる廊下を1人歩いていると、目の前から新生・第0小隊ドラゴンハートのメンバー4人が歩いてきた。そんな彼らに連行されるような形で歩く1人の少女。漆黒の髪に銀の瞳、黒のノースリーブワンピースと言った外見。

「シュヴァリエルさん。お目当てのターゲットを発見、確保に成功しました」

新たなハート3である女性がそう報告した。シュヴァリエルは「ご苦労さん。ソレは俺に任せて、お前らは休んでくれ」と労いの言葉をかけ、ドラゴンハートから少女を預かった。2人きりになったシュヴァリエルと少女。

「散々逃げ回っていたのに、結構あっさりと見つかって捕まったんだな」

「ふわぁ・・・。わざとですよ、捕まったのは。逃げ続けるのも楽ではないから」

シュヴァリエルを前に大きなあくびをして答える少女は余裕に満ち

ている。自分の身に危険が無いと理解しているようだ。自分を必死に捜し、傷を負わせるような真似をせずに確保という手段をとった。それが、自分の身の安全が確かなものだとする思考の材料だったのだろう。

「私を確保したその目的は、再びアールヴヘイムへ侵攻することなの？」

「アールヴヘイムだけじゃない。ラグナロク以降、滅亡することなく再建された各世界に眠る神器を回収する。それが俺のボス、リンドヴルムの願いだからな」

「・・・それで下位次元と高位次元を繋げられるほどの機能を有する転移門ケリオンローフェティタの錠である私ローフェティタと、門自身である私の半身、ケリオンを捜索している、と。まぁ、好きにして。どの道、私たちは再びアールヴヘイムに帰る必要がある。その目的の為、あなたやリンドヴルムとやらを利用させてもらうから」

アールヴヘイムに在る転移門ケリオンローフェティタの錠・ローフェティタと名乗った少女。大戦時、各世界に当たり前に在った転移門もまた神器に分類される物だ。転移門の歴史は永く、魔術を生み出した原初王オーディンが存命していた時代以前より存在している。意思を持ち、人化するだけの学習能力も当然有していた。

「だったら大人しく待っていてくれよ。お前の半身、門のケリオンは必ず連れてくるからさ」

「そう願うなら早く連れて来てよ。こんな辛気臭いところに長居したくないから」

シュヴァリエルが淑女をエスコートするかのようにローフェティタを案内する。向かうは彼女の為に用意されていた個室。転移門は神器としては番外位に位置付けられているが、存在年数で言えば1ケタ台でもおかしくない神器だ。シュヴァリエルですらも敬意を払わなければ、という考えに至らせた。

「私たちをアールヴヘイムに送り届けた後、無様にヨルムンガンドに食べられればいい」

ローフェティタは、自身の前を歩いて「とりあえず逃げ出した残りの神器も回収しないとな」と独り言を喋るシュヴァリエルの背中に向けて、彼に聞こえない程度のか細い声でそう呟いた。

Ｅｐｉｃｏ３１－Ａ乙女の恋路を邪魔する奴は首チョンパ

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

海鳴市郊外の山中にひっそりと建つ、俺たち機動一課・臨時特殊作戦班――通称・特戦班の本部である家・・・というか、合宿所みたいな。学校からその家への帰り路の途中、『ねえ、ルシル君』なのはが念話を使って呼び掛けてきた。

『どうした？　なのは。念話まで使うなんて』

『この会話を聞かれるわけにはいかなくて』

なのはの視線の先には『シャル・・・？』が居た。シャルには聞かせたくない話。とりあえずなのはの話を最後まで聴くことにした。

『うん。えっとね、明後日なんだけど、何の日か知ってる、かな？』

『明後日・・・？　今日は１１月１６日・・・。あぁ、シャルの誕生日か』

１１月１６日。前世のシャルロッテ、そして現世のイリスの誕生日。前を歩くシャル、そして彼女と楽しそうにお喋りしているアリサ達を見る。すると俺の視線に気づいたのかアリサが横目で俺を見、『協力してもらうわよ』ウィンクしてきた。どうやらなのは達は、サプライズパーティを行うようだ。

『もちろん協力させてもらうよ。シャルをあっと驚かせてやろう』

去年もなのは達に祝ってもらっただろうが、今年は俺たち八神家、それにルミナ達も一緒だ。派手に祝ってやろうじゃないか。人数も足りているし、金銭的にも十分すぎるだろう。

『バースデーケーキはもちろん翠屋だよね』

そう言うすずかに、なのはと念話が繋がっていないシャル以外が『異議なし』同意を示す。するとなのはは『にゃはは。いつもご贔屓にしてもらってありがとうございます♪』満面の笑みを浮かべた。

「――でさ、なのは・・・って、なに？　なんでそんなすっごい笑顔になってるの？」

シャルがなのはに話を振るべく振り返り、彼女が笑顔になっているのを見て小首を傾げた。なのははビクッと肩を跳ねさせ「な、なんでもないよ！　うん！」下手くそすぎる話題逸らし。あからさまな動揺に俺たちは冷や汗ダラダラ。シャルはなのはに歩み寄り、「んん～？」下からなのはの顔を覗き込むような体勢になる。

「あ、う・・・にゃはは。ホントに、なんでもないんだよ・・・？」

おそらくみんなの心情は一致している。きっと、苦しい、だ。なのは、わざとか？って、そう思えてしまうほどに目が泳ぎ過ぎだ。しかしシャルは「そっか」深くは追及せず、「さっきの話なんだけど

――」振ろうとしていた話の続きを始めた。なのはがそれに応じている中、『なのは・・・』アリシアがなのはを呼んだ。

『わぁーん、ごめんなさーい！　あまりに急だったから！』

『えっと、ほら。なのはは嘘を吐くのが苦手だから、しょうがないよ』

フェイトがフォローに入る。まぁ、何はともあれシャルに気付かれることはない・・・とは言い切れそうにない。シャルはこういうイベント事には鼻が利く。ましてや自分の誕生日となればなおさら。おそらく気付いている。だが、あえて気付かないフリをしていると見ていい。そう。大事なのはサプライズをするんじゃなく、そのサプライズの内容だ。

（なのは達も理解しているだろうな）

去年も祝ったことだろうし。だからこそ去年以上のサプライズでなければ。そうして俺たちは家に着くまでどんなプレゼントにしようか、被らないようにしようとか、俺をプレゼントにしようとか（アリシア、ふざけんな♪）、それにはやてが膨れっ面になったりとか、そんなことを全て念話で話した。残りは帰ってからでも夜中にでも決めよう。

「「「ただいまー！」」」

家に着くと、はやてとシャルとアリシアが元気のいい挨拶と共にス

ライド式の玄関扉を開けた。遅れて俺、なのは、フェイト、アリサ、すずかで「ただいま」と挨拶。すると「おかえりなさい！」真っ先に俺たちを出迎えてくれたのは、海鳴温泉で助けた名無し――今ではジョン・ドゥと呼ばれる少年だった。

（しっかし。どこか懐かしい空気を放っているんだよな、ジョン。どこだったかな～）

脳裏にチラホラと過る懐かしさ。ジョンを含めた特戦班と一緒に暮らすようになってから、ジョンに抱く懐かしさ？のことをずっと思い出そうとするも未だ思い出せず。最近では思い過ごしだと諦めかけている。

「うん、ただいま、ジョン君♪　エプロン付けてどうしたの？」

「えへへ～♪」

誰もが見て判る通りジョンはすずかに好意を抱いている。が、すずかは気付いていない。まるでなのはとユーノのような関係だ。あの2人は、というか、なのはが鈍すぎるからなぁ。ユーノはユーノでアプローチを仕掛けず、伝わらなくても良い、なんて言う始末。それに比べたらすずかはこういう恋愛系の感情には聡いかもしれないから、まだ望みはありそうだ。少なからず大切に思っているようだしな。

「僕さ、シャマル先生たちと一緒にクッキーを焼いたんだ！　あとで一緒に食べようよ！」

「そうなんだ！　うん、一緒に食べようね♪」

すずかとジョンのやり取りを微笑ましく見守っていると、「おかえりなさい、みんな！」シャマルを筆頭に八神家、そして対神秘戦力のルミナ、ベッキー先輩、セレス達みんなからの挨拶が家に溢れる。リンドヴルムという、危険性の高い連中とぶつかっても変わらない空気が好きだ。

「ルシル。時間があったらまた対神器戦に付き合って」

そんな中でルミナが俺にそう言う。俺が"エヴェストルム"（いちいちアルタを付けるのも面倒だ）を手にしたあの日、ベッキー先輩との魔術戦を繰り広げ、満身創痍だったが引き分けに持ち込めた。さすがに今の俺に、ベッキー先輩に勝つだけの神秘を俺個人では引き出せなかった。

まぁ、そんな騎士ではなく魔術師・神器持ちとしての俺にルミナは以前（イリスの聖祥小転入許可を貰う為に行った戦闘）よりさらに強く興味を持つようになり、とことん俺を打ち負かしたくなってしまったようだ。

（正直、あんまり神秘を消費したくはないんだけどな～）

シャルとの契約メンタルリンクのおかげで、大事な一戦の時は多少の無茶も出来るようにはなったと思う。しかしシャルを魔術師化させるためにいちいちキスするのはどうかと思う。シャルやイリスは喜ぶが、はやてがそれはもう恐ろしいわけで。入院中、クラナガン

の悪夢の際にシャルと2度キス（どちらも必要な行為だった・・・だったんだよｏｒｚ）したことがはやてに知られ、それはもうおっそろしい笑顔を見た。

「セレスじゃダメか？　対神器もいいけど、対魔術も結構重要だぞ」

「ちょっと待って、ルシル君。魔術師化の代償は本当にキツイんだって。魔術師化するのは本番だけにさせて」

名指しされたセレスが焦りだす。カローラ姉妹はヨツンヘイム皇族の血筋で、基本的な能力として自在に魔術師化できる。対神秘戦では重要な戦力だ。しかも先の次元世界の生まれ変わりであることで、魔術師としてはかなりレベルが高い。が、自在に魔術師化できるとは言え、なんのデメリットも無いわけじゃない。それこそが、セレスが模擬戦をしたくない理由。

「もう冬だから。さすがにアイスもかき氷もｌｋｇと食べたくないよね・・・」

「はぁ・・・。まったくだよ。魔術師化する代償が、冷たい物ｌｋｇ摂取するなんて・・・。夏でも辛いよ」

フェイトの話にセレスが肩を落とす。どういうわけかカローラ姉妹は魔術師化するたびに、アイスやかき氷と言った冷たい物を口にしないといけない。飲み物でもいいらしいが、余計に腹に溜まるということでかき氷を第一に食べるようだ。

「私なんかよりベッキーさんの方が良い相手になるんじゃ」

「私ですか？　神器は持っていないので、ご期待に添えられるかは判りませんけど・・・」

俺たち八神家が所属する捜査部・特別技能捜査課の先輩捜査官であるベッキー先輩。神属ヒエラルキーの下位であるとは言え、現代では破格の神秘である精霊を扱えるスキルを持っている。しかも5体。大戦時なら勝てただろうが、今の俺個人ではまず勝てない。実際に証明されたしな。

（この神秘を失った時代でありながらも精霊と共に生きるベッキー先輩には、魔術師として最大限の敬意を表したい）

「ベッキーは強すぎだからダメ。ルシルかセレスくらいがちょうどいい」

「強すぎる、ですか・・・」

強すぎるから。そう言われてへコむベッキー先輩。聞いた話だと、ルミナとベッキー先輩とセレスは、自分より強い男子に護られたい願望あるんだと。しかし3人は局内でも強者に入る分類。その中でも一番強いと称されたことでショックを受けようだ。外見は護ってあげたいか弱そうな女の子。しかしその強さは異常。

（彼女たちを護れるような同年代の男子局員なんて居ないだろう。正に夢見る乙女なわけだ）

「いいでしょう？　ルシル。今後の対神器を想定した戦いをしたいの」

ルミナの両手首に漆黒に艶めく一対の腕輪・"ツァラトゥストラ"が出現する。実際に見て、打ち合ったことでハッキリした。アレは、"第四偽典"だった。アルテルミナスの前世、"霊長の審判者ユーステティア"のナンバーⅩⅥ：終極テルミナスの武装。元"界律の守護神テスタメント"として手にした、漆黒のケルト十字――"第四聖典"が堕ちた姿だ。ソレが腕輪として存在している。そして、ルミナのスキルを全面的にコントロールしている。

「（聴けばルミナは孤児で、物心つく前にはツァラトゥストラを持っていたそうだが・・・）いいよ、判った。付き合うよ」

「クスクス♪　ありがとう！」

全てに引っかかりを覚えてしまう。ルミナの出生、喪われたはずの"第四偽典"の腕輪化、それにルミナの特徴的な笑い方。クラナガンの悪夢以前は、あぁ、似ているな～、くらいだった。しかし今の彼女の笑い方や声は確実にテルミナスに近づいている。それに不安を覚えてしまう。これが杞憂で済めばいいんだが。

「やれやれ。この前みたいに庭にクレーターは作らないでくれよ」

鞄をリビングのソファに置いて庭へ出ようとした時、シャマルやジョンが焼いたクッキーを頬張るはやて達に混ざっているシャルが「

ねえねえ、ルシル」俺を呼び止めてきた。

「誕生日プレゼントなんだけどさ。わたし、ルシルとの1日デート券が欲しい！」

「・・・・っ、馬鹿か、お前は！」

サプライズとは。真剣にそう考えるのが馬鹿馬鹿しいほどの爆弾を寄越してくれたよ、この娘は。見ろ、後ろに居るはやて達の顔を。全員がポカーンとしているだろうが。ルミナやセレス、ベッキー先輩ですら口を半開きにしていた。

「だって～。今の内にリクエストしておかないと絶対にクソ真面目なプレゼントにするでしょ、ルシルってば。文系が弱いからそっち系の事典とか辞書とかプレゼントされそうだし。先制しておかないと」

図星だった。シャルは、頭は良いのにどれだけ勉強しても国語の凡ミスが目立つ。だったらドリル系でもプレゼントしようと思っていた。もしくは勉強を見てあげようか、とも。

「いや、だからって・・・」

チラっとはやてを見る。下手に請け負うものなら背後から刺されてしまいそうな危険性が生じるかもしれない。最近のはやては嫉妬と言うかヤキモチと言うか、そういうのを隠すことなく顕すようになってきた。

それが可愛いやら辛いやら。先の次元世界でのフェイトのように、俺なんかを好きになってくれて嬉しい。けど、彼女の想いに応えられないこと、叶わない恋だということを認めさせるのも辛い。幸せを知った今だからこそ、余計に。

「わたしは気にせんよ。シャルちゃんが主役の誕生日やしな。うん、ルシル君、ここはリクエストに応えるべきやない？」

ニコニコ笑顔を浮かべながらクッキーを食べるはやてだったが、左手に持ってるクッキーを粉々に砕いていて、その欠片が本来の３０ｃｍほどの姿でテーブルに座るリインの頭にパラパラと降り注いでいた。リインは黙って受け入れ、なのはがそっとリインを助けてあげ、パッパッと頭のクッキーの欠片を優しく払った。そんなはやての前でシャルのリクエストを受けていいのだろうか。ちょっと怖い。

「ね？　いいでしょ？　１日くらいだもん。はやてもいいよね？」

「ええよ～」

「決まり♪　誕生日の翌日は日曜日だし♪　デート場所は、わたしの地元で良いよね」

あれよあれよと話を進めていくシャル。地元と言うことはザンクト＝オルフェンか。あんまり海鳴市から離れたくないんだが。ジョンの方を見ると、「彼は私たちが護るから大丈夫」セレスが鎖に繋がれた剣のアクセサリーを俺に見せた。ハート２と言う、リンドヴルム・ドラゴンハートの副隊長によって破壊されたデバイス、“シュ

リュッセル"。ソレをドクター達の最新技術によって再生された。

（ハート2との戦闘映像も無し、神器がどんなものか、どういった戦い方をしたのか、シグナム達に訊いても、気が付けば負けていた、だからな～・・・）

「私も付いていますから、安心してシャルさんと、その、あの・・・」

顔を赤らめるベッキー先輩。色恋沙汰は苦手なようだ。まぁとりあえず「判った。1日デートをプレゼントする」シャルのリクエストを受けることになった。するとはやてのクッキーを食べる速度が上がった。となると、ヴィータ達からの非難の視線が集中するわけで。

『ルシル、二股はいけねぇよ』

『サイテーですぅ、ルシル君』

『目の前でシャルちゃんとのデートの約束なんて・・・』

『ルシリオン。さすがにそれはいかんだろう』

視線に続いてお叱りの言葉が。じゃあどうすれば良かったんだ。はやての目の前だろうが別の場所だろうが、受けることにはなっていた。どちらにしろ、シャルと出掛けることが当日になって判ることになる。つまり結局は・・・

（逃げ場なし。シグナム達から非難を受けるわけだ）

しかしまぁ、なんらかのフォローくらいはしないといけないよな。俺ははやての側に歩み寄り「はやて」彼女の背後に立つ。はやては少しばかりそっぽを向いて「デートコース考えとかなな」ムスッとした声でそう言い放った。

「はやて。事件が片付いて落ち着いたら、久しぶりに2人で出掛けよう」

はやての耳に顔を近付けてデートのお誘い（まずい。いつかはやてかシャルに刺されるかも・・・）をすると、「ひゃん！？」はやてが変な声を上げた。しまった。耳に息を吹きかけてしまったか。恥ずかしさ、そして「うんっ♪」喜んでくれているのか顔を真っ赤にしたはやてが俺に振り向き、満面の笑顔を見せてくれた。

「あああああ！　ルシルがはやてにキスしたぁぁぁーーーーー！　わたしとのデートの約束直後で他の女の子にキスとか、ありえ――」

「違う！　ちょっとした内緒話をしただけだ！　なぁ、はやて！」

「うえ！？　あ、うん、そうやよ～♪」

機嫌を良くしたはやて、それにシグナムとヴィータとシャマル。プンプン怒るシャル。顔を赤くして俺たちを見るリインとベッキー先輩、それになのは達。微笑んでいるルミナとセレス。何とか場の空気を和ませる（シャルは度外視でいいや）ことが出来た。

（俺のプレゼントは決まったが、バースデーパーティの演出はまだ未決定。それを考えないとな～）

とりあえずはやて達みんなと相談しないと。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

ドキドキわくわく。今日はルシルとの初デートなのだ。わたしが今いるのは、ミッドチルダ北部はベルカ自治区ザンクト＝オルフェンの南区ウィンザイン。ザンクト＝オルフェンは、わたし達フライハイト家と、それに連なる六家が管理してる領地で、聖王教会の本部が在ったり、わたしの実家も在る。地球で言う西洋建築って呼ばれる街並みで、ルシルはいたく気に入ってくれてるの。だからデート場所にここを選んだ。

「ふんふふ～ん♪」

自分の格好を改めて見る。冬とは言っても日本ほど寒くないから、そんなに厚着しなくても問題なし。白のシャツに黒のセーター、チェック柄のミニスカート、そしてクリーム色のチェスターコート。冬仕様のデート服であ～る。続けて手鏡で髪の乱れを確認。

「髪の乱れ無し、服装もバッチリ♪　約束の時間まで・・・あと３０分。早く来過ぎた～ｏｒｚ」

今日は緊張や興奮で朝４時に起きたし。ちなみに寝たのは深夜０時。

昨日は丸1日バースデーパーティだった。楽しかったなぁ。料理は全部なのは達が作ってくれたもので、味付けは個人で違うから飽きないし面白かった。

「でもまさかビデオレターとはね～。あれには驚いたな～」

今年のサプライズはなんとビデオレター。わたしの知人・友人の録画メッセージビデオだった。なのは達はわざわざここザンクト＝オルデンの聖王教会本部にまで足を運んで、父様や母様、教会騎士団のメンバーにコンタクトを取って録って来てくれた。とても嬉しかったな～。

「すまない、待たせてしまったか？　シャル」

「あ、ルシル♪　ううん、ぜ～んぜん待ってないよ♪」

灰色のダウン、黒のニット、白のシャツ、黒のカーゴパンツっていう格好のルシルが手を振って駆け寄って来た。やばい、デートっぽくてこの時点で最高すぎるんだけど。にやけるのを止められそうにないから、もう笑顔でそう答えるしかなかった。どうか気持ち悪いって思われませんように・・・って、もう以前から手遅れか？

「そうか。それでどうする？　デートコースと言っても、ザンクト＝オルフェンにはさほど詳しくないぞ。君の家や聖王教会本部の在る中央区アヴァロン、Ｓｔ・ヒルデ魔法学院の在る南区ウィンザイン、ミミルさんの研究所が在る北区カムラン、シュテルンベルク家の在る西区カールレオン。いずれも訪れたことはあるが、地理は全

く把握していない。東区ナウンティスなんて掠ってすらいない」

「（ルシルの口からデートって！　今、ハッキリとデートって言った！　ヒャッフ～♪）別にハッキリとしたコースなんて要らないよ。その都度に決めようよ　　じゃ、早速ぅぅ～～・・・レッツゴー♪」

ルシルの右手を取って歩き出す。さてと、まずはどこへ行こうか。やっぱりアヴァロンに行こうか。って、そう言えばなのは達みんな揃ってのザンクト＝オルフェン観光まだやってない。まぁ、本番前の練習としておこうっと。

「まずはバスでアヴァロンに行こう。あそこは見るものたくさんあるし、ベルカ文化が色濃いから色々と楽しめると思うよ」

「判った。判ったから手を離してくれ」

「やだ♪　デートなんだから手を繋いでいようよ♪」

なんなら聖王教会本部にも案内しちゃおう。そういうわけでバスの停留所へ向かう。その道中、ウィンドウショッピングを楽しむことにした。デートが出来る時間は午前9時から午後5時まで。今日中にミッドから海鳴市に帰ることが出来る時間帯。その間なら何をやっても良い。

「――ねぇねぇ、ルシル！　見て見て！　このぬいぐるみ、アルフとザフィーラに似てる♪」

ファンシーショップのディスプレイには可愛い服が飾ってあって、その下には動物のぬいぐるみが並べられてた。その内の２つが子犬フォームのアルフとザフィーラにそっくり。あの２人、同じ狼の使い魔（ザフィーラは守護獣って言い張るけど）なんだし、しかも互いに鍛え合うライバル。なかなか良い雰囲気なんだよね。さすがに男女云々にはならないだろうけど。

「どれどれ？　ぷはっ。確かに似ているな。青と橙の子犬。もしかしてあの２人をモデルにしたんじゃないかってレベルで似ているな」

「だね～。向かい合って鼻ちょんしてる～」

「鼻ちょんは猫の挨拶だよな・・・？」

「それじゃあキスしてるんだよ♪」

動物がキスしてるのを見てるとほのぼのする。ルシルも猫好きだから同意してくれると思ってチラッと見てみると、何か微妙な表情をしてた。どうしたの？って訊いてみると「想像した」と一言。あちゃあ。わたしは純粋に動物のキスだけの想像だったけど、ルシルは先にアルフ達の名前を聴いて、そっちの２人の姿で想像したわけだ。

「えっと。忘れるために、私とする？」

そう言いながら自分の唇に人差し指を当てて見せると、「意味が解らん」即却下を食らった。残念。とりあえず店を後にして次のお店へ。次は普通の洋服店。ディスプレイされた服をルシルと眺める。

そうだ。良い事を思い付いちゃった。

「ルシル、ちょっと見てこうよ」

「え？　あ、あぁ、買うのか？」

「ううん。見るだけ～♪」

店内に入って、他のお客さんをぬって真っ直ぐレディースの子供服売り場へ。鼻歌交じりに子供服を眺めてく。そして目に留まった物を手に取って「ちょっと待ってて♪」試着室へ。ルシルは「出来れば早く」って、周囲をキョロキョロ。大丈夫。男の子の服を着てても後ろ髪が短くても、女の子っぽい顔だから他の女性客は気にも留めてない。そもそも男の子って言っても１０歳の子供。そんな子がレディース服売り場に来ても警戒されないっしょ。

（こういうのもデートっぽいよね～）

セレス達がドはまりしてる少女漫画（わたしは少年漫画の方が好きかな）を借りて予習してきた。今のわたしに敵は無いのだ。着てる服を試着室のハンガーにかけて下着姿になる。そして持ってきた白のニットにシフォンフレアスカートを着て、頭にベレーを被る。準備が出来ればカーテンを開けて「どう？」ルシルに訊ねる。

「へぇ。禄に見ずに持って行ったからどんなふざけた格好になるかと思いきや、なかなかに似合っているじゃないか」

「マジ！？　それじゃ一式買ってこうかな！」

ああもう、嬉しすぎてにやけ顔が止まらない。締めたカーテンの向こう側のルシルから「荷物になるからあとでいいんじゃないか？」って言われたけど、もし帰りにこの一式が購入されてたらアウトだから、「ううん、買ってく～」買えるうちに買っておくことにした。

（そんじゃ次のやつに着替えようっと～♪）

元の服に着替えてから試着室を出て、さっき着てたのを「ごめん、持ってて」ルシルに手渡して、次の服を探す。上はニット系で決めて、今度はチュールスカートで攻めようか。お目当ての服を探し出して試着室へ。そこで着替えて「コレはどうかな？」ルシルに見せる。

「むぅ・・・。素直に認めたくないが――」

「認めてよ」

素直になろうよ、今日くらいはさ。プクッと頬を膨らませて見せると、「あはは。だな。うん、似合ってる」ってルシルが微笑んでくれた。もう最高すぎる。それから何着か選んだり、ルシルに選ばせたり（ルシルのセンスはちと古い）。

「じゃあ、この四式でいいんだな」

「え、あ、うん」

「支払いを済ませてくるよ」

「え、でも・・・。いいの？」

「基本的に俺が買うよ。君の誕生日プレゼントだ。まぁ、高過ぎる物は買えないけど、服くらいは買うよ」

「ありがとう　」

服四式をルシルに買ってもらった。そのお礼としてわたしは・・・

「ほらほら、ルシル。試着室へどうぞ～♪　わたしがルシルの服を見繕ってあげる♪」

「いや、嫌な予感しかしないからいい。どうせ、レディース服を持ってくるんだろ」

ギクッ。

「ほら見ろ。はーい、出るぞ～」

「あ～ん。イジわるぅ～」

そそくさと店を出るルシルの後を追いかける。ひょっとして今ので一気にレッドカードで、今日のデートはこれにて終了・・・なんてことはないよね？　店の外に出ると「ほら、次に行くぞ」ルシルは

待っていてくれた。しかも怒ってるわけでもなく、ただ、しょうがない奴だ、って風に呆れてる感じ。

「（ホッ。良かった～）ん。じゃあ、変に時間潰すより目的地にササッと向かおうか」

下手にルシルをイラつかせてデートそのものが潰れないために少しは自重しよう。というわけで、改めて中央区アヴァロンへ向かうバスの停留所へ向かう。ザンクト＝オルフェンを走る公共交通車両は、ミッドの効率重視の一般的デザインを採用してなくて、クラシカルなデザインばかり。今から停まろうとしてるバスも2階建てのクラシカルバス。

「アヴァロンに付いたらわたしがエスコートするよ」

「ああ、任せるよ」

料金を払った後（これはわたしがルシルの分も払った）、屋根の無い2階に上がる。すでに何人かのお客さんが居て、わたしを見るなり小さくお辞儀してくれたから、わたしもお辞儀返ししながらルシルと一緒に階段近くの席に座る。

「やっぱり有名なんだな、フライハイト家は」

「聖王教信者の人なら、って付くけどね。ザンクト＝オルフェンに住むベルカ人全員が聖王教の信奉者なわけじゃないし。まぁでも、挨拶くらいはするし、されるよ」

「有名人は大変だな。地球で言う芸能人クラスだろ」

「あー、母様が父様と婚約・結婚・妊娠した時やわたしが生まれた時もアヴァロンでちょっとしたお祭りがあったって聞いたし」

「実質的にザンクト＝オルフェンの統治者だからなぁ、フライハイト家は。当然と言えば当然か」

いつかわたしとルシルとでそんなお祭りが開かれればいいなぁ。でもここではそう言わない。今日の最後で、ね。流れてくザンクト＝オルフェンの景色をルシルと一緒に眺める。冬の風がわたしの髪を靡かせる。けど心がポカポカだからちっとも寒くない。そうして２０分くらいかけて中央区アヴァロンへ到着。ここまで来ると完璧にベルカ文化の、ルシルが好きな街並みになってくる。

「――よーし！　エスコートしちゃうよ！」

またルシルの手を引いて石畳の街路を往く。アヴァロンは聖王教信者が多く住んでいるから、「おかえり、イリスちゃん！」とか、「お？　もしかしてデートかい？」とか、「こりゃめでたい♪」とか、「坊主、イリスちゃんを泣かしたら容赦しねぇぞ」って、わたしとルシルに温かな声を掛けてくれる。

「いや、俺は――」

「一応、わたしの旦那様候補なの　」

将来の夫って表現は控える。ホントはすごく言いたいけどね、しかも大声で。周囲の人から感性が起きる。幸せに！っていうお祝いの言葉がたくさん。祝福してもらえるほどにわたしはみんなに愛されてるって、改めて自覚できる。だから叶えたい。ルシルと夫婦になるって夢。

（はやてには悪いけど、わたしは諦めない）

勝たせてもらうからね、はやて。

「あっ。ねぇ、ルシル。ちょっとお腹空いてこない？」

「ん？　あぁ、そう言えば・・・」

「じゃあさ。カリーヴルスト食べようよ！　ベルカ文化定番のファストフードだよ」

「カリーヴルスト・・・、カレーソーセージか」

ちょうど近くにファストフードのスタンドを発見。小さい頃、うちの双子メイドのルーツィアとルーツィエと一緒に食べに来たことが何度もある。懐かしい。ヴルスト――ソーセージを焼く香りがもう堪らない。ルシルも「いいな。食べて行こう」って賛成してくれた。早速お店へゴー。店主のおじさんはわたしを見て「おお！　久しぶりだね、イリスちゃん！」笑顔を浮かべてくれた。

「おじさん！　カリーヴルスト２つ！」

「あいよ！　そっちの・・・お嬢さん？」

「坊主ですね、生物学上では」

「ほら、やっぱり間違えられた～♪」

「ほっとけ」

膨れるルシルを指差して笑う。店主のおじさんは「悪いな、坊主！　ヴルストとポテトをサービスしておくよ！」トレイに乗せられるカリーヴルストとフライドポテト。普通のソーセージとポテト量の１・５倍増。割り勘（どっちが払うか揉めたから）でお金を払って、トレイを持ってテラス席（しか無いけど）へ。

「「いただきます！」」

カリーヴルストは名前の通りカレーソーセージで、ソーセージにカレーパウダーとケチャップを掛けただけって言う単純なモノなんだけど、これがまた美味しい。フォークでソーセージを突き刺してパクッ。

「ん～～～～♪　美味し～い～♪　おじさーん、美味しい！」

「うん。美味い！　とても美味しいです！」

「そいつは良かった！」

ガッハッハ、って大笑いするおじさん。今度はなのは達も連れて来よう。きっとなのは達も喜んでくれるはず。みんなでわいわいしてる様を想像するだけで楽しい。鼻歌交じりでポテトを食べてると・・・

「ほら、シャル。あーん、だ」

「っ！！！？？？」

わたしは自分の目と耳と、そして頭を疑った。信じれない。あのルシルが、あの堅物のルシルが、あーん、だなんて。幻視？　幻聴？　幻想？　けど目の前のルシルは確かにソーセージ１つをわたしに向けて差し出してるし。

「え、あ、う、あの、え、ええ？」

「あーん、だよ。食べないなら良いけど・・・」

「ぅあ！　た、食べる！」

下げられそうになるルシルの持つフォーク。慌ててパクッとソーセージを食べる。どうしよう、味が判らなくなっちゃうほどに幸せすぎるよ。デートっぽい、恋人っぽい、もう最高！

「じゃ、じゃあ、今度はわたしがしたげる！」

フォークでソーセージを突いて「ル、ルシル、あーん！」フォークを差し出す。ルシルはなんの抵抗も無く「あーん」ソーセージを食べてくれた。ヤバい、今思えば関節キスだ。何度も直接キスしてるのに、すごくドキドキする。

「もう1つどう――」

「た、食べる！」

若干食い気味に答える。ルシルは、今度はポテトを突き刺したフォークをわたしに差し出した。あーん、と口を開けて顔を近付けさせて、口を閉じようとした時、ひょいっとフォークが下げられた。よく知るイジワルのあれだ。

「あはははは！」

「も、もう！　ルシルのイジわる！」

「いやいや、すまん、すまん。こういう場合は1度はやっておかないといけないと思ってさ」

そう言って笑うルシルは、自分の分のカリーヴルストの残りを食べ続け始めた。ルシルから進んでしてもらえるなんて思いもしなかった。と、ここでハッとする。ルシルらしくないって言うか、どうもわたしに都合が良すぎるんだよね。もしかして・・・

「偽者・・・？」

「？？？」

考えられる。誰かがルシルの格好に変身してる可能性がある。いやでも。さっきの洋服店じゃ進んで服のコーデを褒めてくれたし。今日は本当にわたしを第一に考えてくれるのかもしれない。

「（そうだよね、やっぱり。ていうか、ルシルに変身して演技できる子なんて、まず居ないし）うん、きっとそうだ」

「なんの話をしているんだ？」

小首を傾げるルシルに「なんでもな～い♪」そう返して、わたしも残りのソーセージとポテトを食べた。

Ｅｐｉｃｏ３１－Ｂ乙女の恋路を邪魔する奴は首チョンパ

†††Ｓｉｄｅイリス†††

カリーヴルストを食べ終えたわたしとルシルは、聖王教会本部へと向けて歩き出す。ルシルと手を繋げようとして、それを妨害してくる買い物袋が目に入った。

「あ、買い物袋どうしようっか」

「だから買うの早くないか？と言ったろうに」

「だって～」

あぅ。ルシルに褒めてもらった服だもん。買いそびれるようなことになったら嫌だったもん。しょんぼり肩を落としてると、「ま、こうすればいいだけなんだけどな。我が手に携えしは確かなる幻想」ルシルがそう詠唱。すると買い物袋がサファイアブルーの光粒子に包まれて、まるで分解されたように粒子化してルシルの胸へと吸い込まれてった。

「俺の創世結界の蔵に移した。これも結構魔力を使うから多用は出来ない。と、いうわけで次の買い物は帰りにな」

「うんっ、ありがとう！」

ルシルの両手が空いた。早速わたしはルシルと手を繋いで歩く。と、
「あらあら、イリスちゃんじゃないかい」いつも礼拝堂へ御祈りを捧げてくれるおばさんが声を掛けてくれた。
「おばさん！　お久しぶりです♪」
「ああ！　そちらの男の子は、あんたの彼氏かい？」
わたしに顔を近づけてニヤニヤって意地悪そうな笑みを浮かべるおばさん。わたしはルシルと繋いでる手を離して、彼から少し距離を取る。そして「わたしの片思い中なの。将来は旦那様にしたいけどね」っておばさんに伝える。
「そうかい。そりゃあ頑張って繋ぎ止めておかないとねぇ」
「そうなの。しかもかなり手強いライバルもいるの」
はやてが最大のライバル。他にも聖祥小のクラスメイトの木花咲耶、シュテルンベルクの弓騎士トリシュが居る。今のところハッキリとルシルを想い慕っているって判るのはわたし含めて４人。ま、ルシルが揺らいでいるのはわたしとはやてだけっていうのは察してるから、トリシュと咲耶は脅威じゃない。
「そのライバルを押さえての逢引かい？　やるじゃないかい」
「それでもまだまだ危ういよ」

「なら、あそこ、フリーデン大広場に行ってみると良いさね。ちょうどザンクト＝オルフェンは芸術強化月間だしね～。全区の広場で演劇やら歌劇やらが催されてるからね。フリーデン大広場にゃ移動遊園地が来てるよ」

「っ！　ありがとう、おばさん、行ってみる！」

ザンクト＝オルフェンは古き良き文化を大事にしていて、年に1回、全区を上げて芸術強化月間っていうのを開催する。広場1つを貸し切って、演劇、演奏、歌劇、絵画の展覧会、フラワーデコレーション、ファッションショー、自作映画の上映などなどが1ヵ月間と出展される。出展希望者は、フライハイト家＋六家の評議会に申請さえすれば、誰でも出展できるようになるから、ザンクト＝オルフェンの住民やミッドチルダ人だけでなく、他の世界の人も来たりする。

「しっかりハートを射止めるんだよ！」

「うんっ！　ルシル、次の行き先が決定～！」

「あ、ああ。今度はどこへ？」

「遊・園・地♪」

デートスポットの定番中の定番、遊園地。行き先はフリーデン大広場。中央区アヴァロン最大の円形広場で、以前にも移動遊園地が出典されたことがある。その時はまだわたしは小さくて、遊びに行けなかったけど。毎年来てくれるなら嬉しいんだけど、大体数年に1

回しか来てくれない。残念。

「遊園地なんて在ったのか？」

「移動遊園地だけどね」

ルシルに芸術強化月間の説明をすると、「へぇ。良い習慣だな」って感心してくれた。そして「他の広場にも行ってみたいな」って、行き先のリクエストをチラッと呟いたのが聞こえた。囁き声だったから、わたしに聞かせようとしたわけじゃない。けど、ここで大きな器を見せるのも将来の妻の務め。

「遊園地でひとしきり遊んだ後、他の広場にも行ってみようよ」

「いいのか？」

「もちろん♪　好きな人の要望を聴くくらいの度量の広さは持ち合わせてるつもりよ　」

ウィンクしてそう言うと、ルシルは「ぷふっ。言うじゃないか」って吹き出して、「でもま、お願いするよ」ってウィンクを返してくれた。これで決まり。遊園地で遊んだ後、ルシルの芸術鑑賞に付き合って、聖王教会本部でちょっとお茶をしてから海鳴市に帰ろう。そういうわけで、移動時間短縮のためにまたバスに乗って、フリーデン大広場へ。

「見えて来た！」

「結構本格的な移動遊園地なんだな」

バスの二階から見えたのは遊園地のアトラクションの数々。停留所に着いて「急ご、ルシル♪」手を引っ張ってバスを降り、フリーデン大広場から放射状に広がる１２の大通りの１つ、ツィトローネ大通りを走る。そして・・・

「わぉ♪」「ほぅ」

かなり本格的な遊園地だった。地球ほどのアトラクションのバラエティは無いけど、行き交う親子連れとかカップルとか、みんな笑顔だ。軽快に鳴るＢＧＭ、それに笑い声。それらがわたしのテンションを否応にも上げさせた。

「まずは・・・あそこが今空いてるっぽいよ！」

ルシルの手を引っ張って、目に付いたアトラクション――空中ブランコへ向かってダッシュ。数組の行列の後ろに並ぶ。順番はすぐに回って来た。２人乗りのブランコにルシルと一緒に座って、係の人に落下防止のシートベルトをはめてもらって、いざテイクオフ。足が地面から離れて宙ブラリ。ゆっくりとブランコが動き出して、速度は最高速へ。

「ん～、風が気持ち良い～♪」

風で髪が乱れてあんまし人目に見られたくないような状態の中、「

わぷっ」ルシルの顔をわたしの後ろ髪が覆った。わたしは「ごめん！」謝りながら後ろ髪を引き戻そうとしたら・・・

「まず纏めておいた方が良かったみたいだな」

乱れ狂うように靡くわたしの後ろ髪をルシルは手櫛で一纏め。そして1房の後ろ髪を使って大本の後ろ髪を縛ってくれた。

「あ・・・ありがと、ルシル」

「どういたしまして」

ルシルに髪を結われた。そんな新しい素敵な思い出が出来た。ルンルン気分の中で、青く晴れ渡る空の中をグルグル回る。なかなかに気持ち良い。そうして2分くらいの空中散歩を楽しんで、空中ブランコから降りる。わたしはすぐさま次の空いてるアトラクションを探す。

「次は・・・コーヒーカップ！」

のんびり歩くルシルを急かすためにまた手を引っ張って走る。ルシルは「そう急がなくても良くないか？」って言うけど、「少しでも速く、数多いアトラクションを乗るなら、これくらいがいいよ！」そう答えた。時間を掛ければ掛けるほど混雑するだろうしね。

コーヒーカップ乗り場へと辿り着いて、「足元にお気を付け下さい」係の人の案内で、ティーカップ型の乗り物に搭乗。7つのカップ全てにお客さんが乗ったことでブザーが鳴る。そして回り始めるカッ

プ。

「ルシル、ルシル！　ハンドル回していい？」

カップ中央にあるハンドル。コレを回すことでカップ自体を速く回せるようになるからね。わたしはルシルからの返答より先に「やっぱ回す～！」ギュイーンと回す。するとハンドルに連動してカップが高速で回転。

「やっふ～～～♪」

「シャル！　おい！　聴け、この馬鹿！」

「え～、な～に～！？」

「速すぎだ！　他の客がドン引きしてる！」

高速で流れる周囲の景色。そんな中でもわたしの目は他のカップに乗ってるお客さんの表情を捉える。ドン引きって言うよりは「感心してるように見えるけど？」小さく拍手もしてるようだし、笑顔を向けてる子供も居る。ということは・・・

「（ひょっとして・・・）こわいの？」

ニヤニヤとルシルに訊いてみると、「俺が、なんだって？」この高速回転の遠心力の最中でも腕、足を組んだうえでわたしをジト目で見るルシル。わたしは「なんでもないです」小さく頭を下げながら

もハンドルを回し続ける。空戦が出来る魔導師・騎士の三半規管ならこの程度の速さ、どうってこともないもんね。

「だから速いっつうに！」

「楽しまなきゃ損だっつうに！」

ルシルがガッとハンドルを鷲掴んで回転を妨害してきたけど、「何事にも全力ぅぅ！」わたしは負けじと回し続ける。その結果、「お降りの際も足元にお気を付けてください」コーヒーカップが止まるまでハンドルを回すか止めるかのちっちゃな争いは続いた。

「目、目が・・・ヤバい、すっごい回ってる、世界が回るぅ～～」

「だから回し過ぎって言ったろうが。ほら、掴まれ」

足元が覚束ない。まともに歩けないほどに目が回ってる。どうやらわたしにはルシルほどの三半規管の強さはなかったみたい。それと、カップの回転を阻止しようとした理由は、わたしのことを考えてのことだったみたい。それを踏まえての「ありがと～」お礼を言って、ルシルの差し出された手・・・を取ることなく腕に抱きついた。

「えへへ～♪」

「はぁ。・・・で、次はどうする？」

グルグル回る視界の中で絶叫が耳に届いたからそっちに目を向ける。

決めた。私は次のアトラクション「スカイハイ！」を指差した。日本の遊園地で言うスペースショットのことだ。その近くには逆――急降下するアトラクション・スカイドロップ（ドロップタワーみたいなやつね）がある。自力で歩けるようになる目で待ってもらって、「よしっ、もう大丈夫！」ルシルと腕を組んだままスカイハイ乗り場へと向かう。

「こういう絶叫系って、飛行魔法が出来る人と出来ない人とじゃ違う感覚なんだろうね」

「そうかもな。急上昇も急下降も、魔法運用のおかげで重力なんて感じないからな。しかも自分の意思で行うものだ。カウントダウンがあるとは言え、上昇も下降もアトラクション次第だからな」

『５、４、３、２、スカ～イ・ハ～イ！！』

カウントダウンが始まって、「わふっ！」地上７０ｍ近くまで急上昇。他のお客さんからは歓声が上がって、わたしとルシルはなんて言うか、うん、やっぱ慣れっていうのがあるのかな。急上昇のＧを感じたけど、あっという間過ぎて。あとはゆっくりと降下。はい、終わり～。

「うん。楽しいのは楽しいんだけど、１回限りじゃちょこっと物足りないかな」

「じゃあスカイドロップってやつはどうする？　今のと逆の急降下モノのアトラクションだが・・・」

「むぅ〜。やめとく・・・、あっ。今度はアレにしよう！」

ルシルの手を引いて、キャラセル（日本ではメリーゴーランドって呼ばれるね）へと向かう。ちょうどお客さんの乗り換え直前で列に並ぶことが出来た。

「メリーゴーランドか。まぁ、君らしいと言えばらしいか」

ルシルがそんなことを言った。らしい。メリーゴーランドがわたしらしい。それはつまり女の子らしいって事になるわけで。ルシルぅ、こやつめぇ、わたしをちゃんと女の子として見てくれてるんじゃない。

「騎士って言えば騎馬。シャルに馬、だな」

「・・・・チッ」

「何故に舌打ち！？」

今どき、騎士に騎馬なんて考えを持ってる人ってそうそう居ない。あ、でもパラディンの中には騎兵騎士レイター・パラディンの階位もある。まぁ、乗るのは馬じゃないけど。

「俺、何かまずいこと言ったか？」

「・・・・ううん。わたしの早とちりが原因。変に怒ってごめん」

素直に謝ると、「そっか」ルシルは深く追求することなくわたしの頭を撫でてくれた。素直なのが一番なんだね。でも素直に告白しても一発芸扱いされるんだけど。それだけはどうにかしてほしいなぁ。そんなことを考えながらメリーゴーランドのステージに上がる。そして馬に跨ろうとした時・・・

「お姫様はこちらです」

ルシルが馬車の乗り口の前で一礼してた。わたしは少し吹き出した後「はい！」ルシルの側まで行って、差し出されたルシルの手を取って馬車に乗った。そしてルシルは馬車に繋がれるようにある馬に乗った。騎士とお姫様って感じで、「ふふ♪」すごく嬉しい。でもちょっぴり向かい合って話がしたかった、って思った。けどそれは大観覧車までとっておこう。

「お姫様、お手をどうぞ」

2分間のメリーゴーランドが終わって、乗った時と同じように差し出された手を取って馬車やステージを降りて、次のアトラクションをどれにしようかな、って辺りを見回してると・・・

「「あー！　シャルとルシルだぁー！」」

ものっすごい聴き憶えの声が聞こえた。遅れて「イリス、ルシル様。お2人だけですか？」3人目の声が。そっちに目をやると、出来れば会いたくなかった3人が居た。うち2人は同じ顔。ミルクティブ

ラウンの髪は、片方は腰まであるロング、片方は肩までのセミロング。瞳は共に桃色。もう1人は、髪色は銀で髪型はインテーク。ルシルとおんなじ。そして着てる服は揃ってザンクト・ヒルデ魔法学院の中等部の制服だ。

「セレネ、エオス、それにトリシュじゃないか！」

そう、わたし達に声を掛けてきたのは、セレス、エオスのスクライア姉妹と、恋のライバルの一角であるトリシュタン・フォン・シュテルンベルクだった。

（なんたること！　ライバルのトリシュだけじゃなく、いろいろと騒がしいスクライア姉妹が一緒なんて・・・！）

ルシルとのデートがメチャクチャにされる。どうすればいい。こうなったら・・・戦るしかない、のかも。どう排除しようかと考えてる最中、「セレネ達は学校帰りか？」ルシルがフレンドリーに話しかけた。ああもう。喋り出したら余計にわたしとルシルの2人っきりの時間が無くなっちゃうじゃない。馬鹿。

「「そうだよ。学校帰りで、広場巡りしてるの」」

「古書売り場などを巡っていました。見てください、ルシル様。なかなかの掘り出し物を安く手に入れることが出来ました！」

「どれどれ。おお！　絶版になっている本のオンパレードじゃないか！　読み終わったら貸してくれないか？」

「もちろんですとも♪　あとで感想をお聞かせください！」

「ああ。感想などは個人の捉え方によって違うからな。新鮮な見方が出来るから楽しいんだよな」

「あ、そうなのですよ！」

ルシルとトリシュがあんなに楽しそうに喋ってる。ふつふつと湧き上がってくる嫉妬心、そして寂寥感。そんなわたしに「ねえねえ、私たちもこれから回るんだ。一緒して良い？」なんて悪魔の提案を、セレネとエオスがぶっ込んできた。

「そう言えば、俺が入院している時に何度か見舞いに来てくれたんだよな。その礼もしたいんだが・・・」

ルシルがチラッとわたしを横目で見た。そうだよ、今はわたしの誕生日プレゼント――デート中なんだよ。断って、断ってよ、断れ。

「セレネ、エオス、それにトリシュ。すまな――」

だけどその願いも虚しく「決まり！　人生初の遊園地巡りへゴー♪」セレスとエオスが、ルシルの両手を取って歩きだした。

「・・・ごめんなさい、イリス。その、せっかくのデートでしたのに。セレネさんとエオスさんは必ず、私が引き離しますのでそれまで堪えてください」

トリシュが本当に申し訳ないって顔で謝ってくれた。トリシュはわたしの邪魔をするつもりはなかったみたい。それが判っただけでも「ううん。ありがと」良かった。そしてわたし達は、セレネとエオスの気の向くまま、ミラーハウスに入ることになった。屋内の通路が鏡で出来ているミラーハウス。1分おきにセレネ、エオス、ルシル、わたし、トリシュの順番で入ってく。

「あいたっ！　あぅ～、鼻打った～」

ペタペタと鏡に触れてルートを探るんだけど、これがなかなかに難しい。床を見ても鏡に反射していてサッパリなのだ。トボトボ歩きながら「んもう～。ルシルはどこなの～？」ルシルの姿を捜す。そしてふと、鏡に映る自分の顔を見て「ひどい顔・・・」今にも泣きそうな顔してるよ、わたし。

「はぁ。トリシュ～、出来れば早くお願いね～」

わたしの後にミラーハウスに入ったトリシュに縋るしかないよ。溜息を何度も吐きながら進んでると「あっ、ルシル！」の姿を発見。ここがミラーハウスだっていうことを忘れて走ったその瞬間、「あ痛っ！？」顔面を鏡に強打。

「おうふ・・・！」

顔を両手で押さえてよろよろと後退する。2度も鼻を打ったことで鼻血が出てないかを鏡で見たその時、「なっ、はぁ！？」信じられ

ない光景が目の前にあった。ルシルが、エオスと抱き合ってた。

「何しとんじゃぁぁぁぁーーーーっ！！」

走った。うん、わたしって学習能力の無いお馬鹿さん。目の前に居るわけるからって言ってもここはミラーハウス。実際に目の前に在じゃない。はーい、3度目の「みぎゃっ！？」鏡に激突。救いは、打ったのは鼻じゃなくて額だったこと。でもその衝撃は強くて、後ろに倒れ込んで尻もち。

「・・・う・・・ぅう・・・もう・・・やだ・・・」

泣けてきた。ていうか、涙が出た。さっきまではあんなに楽しかったのに、どうしてこうなっちゃうの。鏡に映るわたしの顔は、額も鼻も、目も赤くなってた。このまま蹲ってたいけど、他のお客さんも来るかもしれないから懸命に立ち上がって、鏡に手を付いて歩きだす。

「・・・あ、イリス！　追いついてしまいましたね」

背後から声を掛けられたから振り向く。そこにはトリシュが居て、「イリス！？　どうなさったのですか！？」わたしの顔を見てギョッとした。そして「申し訳ありません。早々に立ち去るべきでした」今のわたしの様子を見て全てを察してくれたよう。

「ミラーハウスを出たらすぐにでも私たちは去りましょう。少し待ってください。理由を作ります。・・・とりあえず出口を目指しま

しょう」

わたしの手を引いて立たせてくれたトリシュに続いてわたしも歩きだし、そしてトリシュはどこかに通信を繋げ始めた。わたし達の目の前にモニター2枚が展開される。そこに映し出されたのは、わたしにとっても友達・・・

『はい。アンジェリエです』

『クラリスだよ～』

『どうかしました？　トリシュ』

エメラルドグリーンの長髪はポニーテール、澄み切った青色をした瞳のアンジェリエ・グリート・アルファリオ。そしてスノーホワイトのショートヘア、アップルグリーンの瞳をしたクラリス・ド・グレーテル・ヴィルシュテッター。その2人もザンクト・ヒルデ魔法学院中等部の制服を着てる。

「アンジェ、クラリス。今、お暇ですか？」

『はい。全く以って暇です』

『だから今、カッツェ広場の絵画展に来てるんだよ』

「それはちょうど良いです！　今から合流しましょう。私とセレネさんとエオスさんはフリーデン大広場に居るのですが」

『移動遊園地が出展されている広場ですね。判りました。フリーデン大広場とビルネ大通りの接続地で待ち合わせ、でいいです？』

「ええ。それでお願いします。ではまた後ほど」

トリシュはわたしがモニターに映らないように気を付けながら通信をして、そして切った。

「イリス。ミラーハウスを出た後、人だかりの中に入りましょう。そこではぐれたフリをしてそのまま別れましょう。そして随時、思念通話でお互いの居場所を確認し合えば、バッティングしないでしょう」

「トリシュ・・・。どうしてそこまで・・・？」

「私とて、好きな方とのデートを邪魔されたくありませんから。ですから、あの、もし私もルシル様とデートをするようなことがあれば・・・」

「その時は誠心誠意、全力を以って邪魔者を排除します」

はい、トリシュの恋路に協力することが確定した瞬間でした。でもまぁ、「ありがとう」お礼はしよう。上手くいけばまた、ルシルと2人きりのデートに戻れるんだから。そしてわたしとトリシュはミラーハウスを脱出。出口付近にはルシル達3人が待っててくれた。んだけど・・・

「ヘイ、ルシル。訊きたいことがあるで～す」

「なんだ、その語尾は？　というか、なんで怒ってる？」

「胸に手を置いて訊いてみればよろしいで～す。ちなみに自分の胸ね。エオスの胸に触れたらマジで首を飛ばすで～す」

「は？」「え？」

キョトンとするルシルとエオス。エオスは自分を指差して「私も関係してるの？」って、わたしとルシルを交互に見る。ここで、あれ？って思うわたし。よく考えれば、ルシルとエオスが抱きつく意図が判らない。だってエオスも、姉のセレネも、ユーノが好きなんだから。

「（ひょっとして、わたしの早とちり・・・？）あ、あのさ、ルシルとエオスって、ミラーハウスで抱き合ってた・・・よね・・・？」

「「・・・・・はぁ？」」

ヤバい、確実にわたしの早とちりだ。ルシルもそうだけどエオスの、なに言ってんの？って表情はとてつもなくマズイです、女の子が浮かべて良いようなものじゃないです、はい。どうやら鏡の屈折でそう見えただけのようで。ただ「ごめんなさい」謝るしかなかったので～す。

「イリスの誤解も解けたそうなので、次のアトラクションへ参りましょう」

トリシュの視線がわたしに向いたから頷き返すと、トリシュも小さく頷き返してくれた。さぁ作戦開始。みんなで次のアトラクションを探すため歩きだす。機会はすぐに訪れた。目の前の人だかり。トリシュとわたしが先頭に立って、人だかりに突っ込む。そして「ルシル、手！」ルシルに手を差し出す。

「あ、ああ・・・！」

ルシルと手を繋いで、トリシュ達とは別方向へと駆け抜ける。人だかりを抜けて周囲を確認。そこにトリシュ達の姿はなかった。ホッとしてると『私たちはこのままビルネ大通りへ向かいます』トリシュから思念通話が来た。

『本当にありがとう、トリシュ。お礼は必ずするから』

『はい♪　では次の行き先の連絡の時に』

思念通話を一旦切る。と、「トリシュ達とはぐれてしまったな」ってルシルが周囲を見回した。まさか、捜そう、なんて言わないよね。

「・・・あの3人には悪いが、このまま行こうか」

ルシルがそう言ってわたしの手を引っ張って歩きだしたから「え？　いいの？」って訊き返す。

「今日は君の誕生日プレゼントとしてのデートだからな。さすがにトリシュ達みんな一緒とはいかないだろ。だから君と2人きりになるにはどうすればいいか考えていたが、偶然にも別れたからな。このまま2人で行こう」

「っ・・・、うんっ♪」

こんなに優しいルシル、初めてかも。毎日がこんな風なら良いのになぁ。ルシルの右手と繋がれてるわたしの左手に少し力を込める。離さないように。夢が覚めませんようにって祈りながら。

それからわたしは、トリシュにわたしとルシルの次の行き先、ローラーコースターを伝えた。トリシュはアンジェ達と無事に合流を果たして、反対側にある別のローラーコースターに行くとのこと。

「ルシル、アレに乗ろう！　今、ちょうど空いてるし！」

「ジェットコースターか。いいぞ」

待ってたのは2組4人。その後ろに並ぼうとした他のお客さんより早く列に並ぶ。そのおかげもあって1分とせずにコースターに乗ることが出来た。全長２６００ｍ、最高速度１５５ｋｍ／ｈ、最高部高度９３ｍ、最高落差８９ｍ、最大傾斜度６３度のコースターに乗り込んで、発射されるのを待つ。ブザーが鳴る。ゆっくりと動き出して、３ｍほど進んだ直後で急加速。

「わっふぅ～～～♪」

他のお客さんの絶叫の中、わたしは笑い声を上げ続ける。チラッとルシルを見ると、楽しんでくれてるみたいで笑顔を浮かべてた。そして約3分のコースターを楽しんで、次はどのアトラクションにしようかって辺りを見回す。で、ちょっと早いけど「観覧車に乗ろう！」フリーデン大広場のど真ん中に建つ大観覧車を指差す。

「早くないか？」

「でも、他の広場の展覧会にも行かないといけないし、教会本部にも行きたいし。だから観覧車に乗ったら、ここを後にしよう」

わたしは芸術とかそういうのには知識も無ければ興味も無いけど、ルシルの行きたい所にも行ってあげないとね。だから遊園地での時間は大観覧車で終わり。ルシルは「ありがとうな」って微笑んでくれた。

「んっ♪　じゃあ並ぼっか」

大観覧車の列に並んで、順番が来るのをルシルとお喋りしながら待つ。そんで10分くらいが経過した後、ようやく順番が回って来た。遊園地でのデート、その最後に乗るものと言えば観覧車。出来れば夜景を見たかったけど、残念ながらまた日中。夜景の中での観覧車はまたの機会にとっておこう。

前のカップルや親子が次々と乗り込んで行く中、ピピピ、と通信が入ったことを報せるコール音が鳴った。モニターを展開することなくサウンドオンリーで繋げる。

『ルシル君、シャルさん！』

通信を入れてきたのは予想外にもほどがあるリインだった。その切羽詰まった声色に、緊急事態が起きたってすぐに察したわたしとルシルは「お先にどうぞ！」後ろに並んでたカップルに順番を譲って列から飛び出した。

『海鳴市で何かあったのか、リイン！』

『あの、実は、リイン達もザンクト＝オルフェンに来ていてたんですけど・・・！』

わたし達、特戦班に尾行されてたわけか。ううん、今はそんなことどうでもいい。とにかく何があったのかを訊こうとしたら、ドォーン！とド派手な爆発音が遠くから聞こえてきた。そっちを見ると黒煙が上がってた。間違いない。あそこになのは達が居る。でも黒煙の上がってる場所からして、目視できるほどの距離までは尾行して来なかったみたいだけど・・・。

『あの、リンドヴルムの襲撃が・・・！　きゃあああ！』

『『リイン！？』』

通信が切れた。今の爆発の所為でフリーデン大広場が悲鳴に溢れる。騒々しくなる人たちの中でわたしとルシルは騎士服へ変身。

「ルシルは先に行って！　わたしは教会本部に連絡して、教会騎士団の出撃要請をしとく！」

ザンクト＝オルフェンに管理局の陸士隊舎は無い。ここの自衛戦力は教会騎士団のみだ。だから騎士団の一員でもあるわたしが連絡をしないと。

「ああ、判った！」

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

空戦形態になったルシルが空へ上がり、真っ直ぐ黒煙の上がる方へと飛び去って行った。それを見送りながら教会騎士団へ連絡を入れる。避難誘導のための人員や救出班の編成の要請。対リンドヴルム戦力はわたし達だから、武力は必要ないことを伝える。

（ザンクト＝オルフェンで管理局員が戦闘することはあまり良くないって言うのに・・・！　ルシルとのデートを邪魔してくれたツケはしっかりと払ってもらうから！！）

ザンクト＝オルフェンはベルカ人が自治する領地だ。だから管理局の干渉は受けないようにしてる。つまり特戦班の戦闘行動は本来なら許されない。けど、そうは言っていられないのも確か。評議会に怒られるかもしれない。でもこうなった以上は干渉を許してもらうしかない。

「「「イリス！！」」」「「シャル！」」

通信を終えてすぐ、トリシュ達がわたしの元へ集まった。みんな防護服を着用済み。そのうえで「なにか手伝えることは！？」そう訊かれたから、ここの大広場に居る人たちの避難誘導を任せることにした。
クラリスは教会騎士団員と局員の二足の草鞋で、トリシュとアンジェはザンクト＝オルフェンを知り尽くした教会騎士団員、セレネとエオスはまぁ一般人だけど、居ないよりはたぶんマシ。だから任せられる。

「さっき騎士団出撃を要請したから、それまでは避難誘導は任せる！」

――真紅の両翼（ルビーン・フリューゲル）――

背中から一対の魔力翼を展開して空へと上がる。目指すは何度も起こる爆発と黒煙が上がる場所。こんな距離でも判る。今、ザンクト＝オルフェンに居るリンドヴルムは・・・って言うよりは、神器のレベルがかなり高いって。
クラナガンの悪夢以降、ルシルは念のためって、なのは達みんなに〝ドラウプニル〟って神器を渡した。その神器効果は魔力に神秘を付加して、さらに魔力量を増加させるというもの。でも、それでも・・・不安は消えない。

「なのは達を傷つけたら・・・お前たちの首を撥ね飛ばしてやる・・・！」

起動した〝キルシュブリューテ〟の柄を強く握り締めて、わたしも

黒煙の上がる場所へと飛んだ。

Ｅｐｉｃｏ３２大嵐の前の軽風

†††Ｓｉｄｅはやて†††

ルシル君とシャルちゃんが２人きりでデートすることになってもうた。それがかなりの精神的ダメージやったけど、その直後でのルシル君からのデートのお誘いでそのダメージも即回復。そやから今日のデートは、じっくりと特戦班の本部――海鳴郊外の別荘で、２人の帰りを待とうって思うてた。シャルちゃんとは対等なライバルでおりたいしな。デートの邪魔はせんようにしようって。そやけど・・・

・―・―・回想や・―・―・

「はぁ」

朝早くルシル君とシャルちゃんが出かけた。シャルちゃんは朝の６時、ルシル君は３０遅れて。一緒に目的地に行くんやなくて、現地集合するためやって。その方がデートっぽいって。むぅ、なんや悔しいわ。

ソファの背もたれにもたれ掛って溜息を吐いてると、「はやてちゃん。元気ないです」リインが心配そうにわたしの顔を覗き込んできた。わたしは「なんでもあらへんよ」って、小さなリインを掴まえて胸に抱く。

「さーてと。ねえねえ、こっそり後を付けてみようよ！」

それからわたしとリイン、シャマル、すずかちゃん、なのはちゃんと一緒にテレビで猫ちゃん特集を観てると、アリシアちゃんがそう言うてニシシって笑った。それを聞いたフェイトちゃんが「ダメだよ、アリシア」って窘める。

「でもさ。気になるでしょ？　デートだよ、デート。ドラマやアニメや漫画でくらいしか聞かない、あのデート！」

「あー、確かに気になるかも」

「私も、一体どのようなものかを見てみたい・・・気もします」

「デート、デート・・・見たい」

恋に恋する乙女を地で行くルミナ、ベッキー先輩、セレスちゃんがそれに賛成。さらに「ここに籠ってんのもつまんないしね～」アリサちゃんまでそんなことを言い始めた。それに反対するんは「邪魔しちゃダメだよ」すずかちゃん、「シャルちゃん、本気で怒るよ？」なのはちゃん、そんで「うん。さすがにアカンと思うわ」わたしや。

「別に邪魔するわけじゃないよ。遠くから眺めるだけ。飽きたらバッティングしないよう遊べばいいんだし」

「そう言えばザンクト＝オルフェンは今月、芸術強化月間だっけ。ちょうど良い機会だから私たちも遊びに行こうか。イリスとルシルのデートの見学ついで、ということで」

ルミナがそう言うたから、「芸術強化月間？」のことを知らへんわたしらは小首を傾げた。すると同じザンクト＝オルフェン育ちのセレスちゃんからその説明を受けると、出歯亀反対派やったわたしらも「行ってみたいな・・・」って、そんな気持ちになってしもうたわけで・・・。ベルカの文化を知る良い機会やもん。そう思うてもしょうがないやんか。

「はい。決まり。各自、出撃（おでかけ）準備！」

手をパンパン叩きながらルミナがそう言うと、「おおー！」出歯亀賛成派のアリシアちゃん達が拳を振り上げた。そんで話に乗せられた反対派のわたしらは「ごめん、シャルちゃん、ルシル君」肩を落として謝るしかなかった。でもまぁ、2人のデートがちょっぴり気になってたこともあったことも事実で、ルシル君たちへの謝罪半分ルミナへの感謝半分やったのは秘密や。

・―・―・終わりやね・―・―・

ルミナに乗せられるまま、わたしら特戦班はザンクト＝オルフェンへとやって来た。やって来たのはメンバーの内、わたし、リイン、ヴィータ、すずかちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃん、アリシアちゃん、ルミナとベッキー先輩とセレスちゃん、そんでジョン君や。シグナムとシャマルとザフィーラ、そんでアルフは、別荘の食糧の買い出しなどでお留守番や。

「カリーヴルストかぁ～。良いセンスね、イリス」

カリーヴルストってゆうカレー粉が降りかけられたソーセージを食べるルシル君とシャルちゃんの様子を、望遠モニターを使って離れたところで観る。美味しそうやなぁって思うてると、きゅるる～、ってお腹が鳴る音が近くから聞こえた。

「お腹空いたですぅ～」

頬を赤くしてお腹を押さえるリインにわたしらは微笑み合って、近くのファストフード店へと向かう。そこはハンバーガーの店やった。店主のお姉さんがわたしらを見ると表情を輝かせたんが判った。わたしらみんなの注文をしてくれてるルミナとセレスちゃんと、店主のお姉さんの会話を聞く限りやと、どうやら2人はこの店の常連らしい。

「はーい。みんな、持ってって～」

「私とルミナのお勧め！　ステーキバーガー！」

わたしら人数分のハンバーガーとポテト、そんでイチゴのシェイクセットの乗ったトレイをルミナとセレスちゃんから受け取った。割り勘かと思えば、「え？　あぁ、私とセレスのおごりだから」ルミナがウィンクしてくれた。

「ザンクト＝オルフェンの味をみんなに知ってもらうためにね。お姉さんからの奢りなのだよ♪」

セレスちゃんがえっへんって胸を張った。そうゆうわけでここはお言葉に甘えて「ご馳走になります！」みんなで2人にお礼。それから席に戻って、みんなで「いただきます！」してパクッと食べる。そんな中、わたしはリインのお出かけバッグの中からリイン専用の食器を取り出す。そんで、リインのハンバーガーを少し分解して「はい、リイン」のお口サイズに切って食器に乗せる。

「ありがとうですぅ、はやてちゃん！　いただきますです♪」

小さなフォークでパン、ステーキ、レタス、トマトの順で食べるリイン。わたしもステーキバーガーを頬張る。うん、美味しい。みんなで微笑ましく食べてると、「ぶふっ！」ルミナとベッキー先輩とセレスちゃんが突然シェイクを吹き出した。ゲホゲホ咽る3人の背中を擦るすずかちゃんとなのはちゃんとフェイトちゃん。

「何だって言うのよ急に。ルミナやセレスならともかく、ベッキーまで吹き出すなんて異常事態よ」

「「それどういう意味？」」

「お見苦しいところをお見せしました」

アリサちゃんの言いようにジト目になるルミナとセレスちゃん、ハンカチで口を押さえるベッキー先輩は頬を染めてた。吹いた3人の共通点はモニターを観てたことや。わたしは一体なにを観て吹いたんやろ？って思て、モニターを観るために席を立って、「一体何を見たん・・・？」恐る恐るルシル君とシャルちゃんの様子を見よう

とした。

「映ってへん？・・・ちょっ、ルシル君とシャルちゃんをロストしてるんやけど・・・」

少し目を離した隙にルシル君とシャルちゃんはどこかへと去ってしもうてた。そやけど、これで良かったんかもしれへん。実際に見るまでは気になってしょうがなかったけど、ルシル君とシャルちゃんが２人きりで、談笑しながら同じ料理を食べてるのを見てたら胸がこう・・・キュッと苦しなったし。やっぱこうゆうのはアカンって、お天道様からの警告かもしれへんな。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒なのは†††

シャルちゃんとルシル君を見失った私たちは今、ルミナちゃんから、ザンクト＝オルフェン全区で行われてる展覧会にどんなものが出展されてるのかを聞いてた。私たちは純粋に楽しみたいために、アリサちゃん達はシャルちゃんやルシル君ならどこの広場に行くかを予想するために。私としては、２人のデートを邪魔することなく芸術強化月間を楽しみたいんだけどなぁ～。

（ここに来た理由も、２人のデートを覗き見するためじゃなくて、私たちなりに楽しむためなんだけどな・・・）

でもアリサちゃんとアリシアちゃんをリーダーにした、テート見学し隊はあくまでデート風景を見たいようで、「ルシルは本の虫だし、古書展じゃない？」とか、「シャルは遊園地を選びそう」とか、「

古代ベルカ料理展かも」とか、マップが表示されたモニターを眺めてシャルちゃん達の行先を予想してる。

『ねえ、なのは、すずか、はやて、ヴィータ、リイン』

あーだ、こーだとアリサちゃん達が話してる中、フェイトちゃんが念話を送ってきた。名前を呼ばれたのは覗き見反対派のメンバーだけ。あとジョン君もこちら側に居るんだけど、魔導師じゃないから念話は使えない。私が『どうしたの？』って返すと、『私たちだけでも別行動、しない？』フェイトちゃんがそう提案した。

『そう、だよね。反対派の私たちって元々、純粋に展覧会を楽しみたいからザンクト＝オルフェンに来たわけだし』

『私は賛成。シャルちゃんだって覗き見されながら、デートなんてしたくないだろうし』

『あたしもそうだな。デート観てるよりベルカ料理展に行ってみてぇな』

『あっ、それはわたしも気になってたなぁ』

『リインは、はやてちゃんに付いてくですよ』

『私も、北区の技術展に行ってみたいかも』

フェイトちゃんの提案にはみんなが賛成。そういうわけで「ちょっ

と提案が・・・」モニターのマップを一斉に指差してるアリサちゃん達に声を掛ける。

「もうちょっと待ってて、なのは。すぐにシャル達の居所を探し当てるから」

「んもう！　ルミナ達はシャルとルシルのこと解ってない！　シャルは絶対にルシルの行きたい場所へ行くはずだもん！」

「いやいや。アリシア。ルシルは稀に見る紳士だからね。イリスの行きたい所へ行くと思う」

「私もルミナさんに賛同です。ルシルさんはシャルさんの行動を尊重するでしょう」

「う～ん、イリスはイリスで、自分の誕生日（デート）プレゼントだからと言って何でも自分の思い通りに進ませる事はしない気もする・・・」

そう真剣な顔で話し合うデート見学し隊。それはともかく「私たちは別行動することにしたから」フェイトちゃんが代表して告げた。

「え？　なんで？」

「何で？って・・・アリシア。それにアリサ達も。やっぱりダメだよ、こういうの。それに、私たちは展覧会を楽しむために来たんだし。ルミナも言ってたじゃない。デート見学はついでだって。見失った以上は本来の目的を果たそうよ。シャルとルシルの事はそっと

しておいて、私たちは私たちで楽しもう？」

フェイトちゃんに賛同することを示すために私たちは「うん、うん」頷いて見せる。見学し隊の空気が少し変わった。とは言っても「そうですね。少々浮かれていました。反省です」ベッキーちゃんだけなんだけど・・・。

「そっか。残念だけど、わたし達とは別行動だね」

「あたし達はどうしても見届けてやりたいのよ。シャルの生き様を」

アリサちゃんは一体なにを言ってるんだろね。チラッとルミナちゃんとセレスちゃんを見ると、２人は「うーん。やっぱり古書展かなぁ」アリサちゃんやアリシアちゃん同様、あくまでシャルちゃんとルシル君のデートを覗き見したいみたい。

「えっと、じゃあ、ここで一旦解散して、また通信で合流しよう・・・か？」

すずかちゃんがそう言って手をポンと叩くと、アリサちゃんは「しょうがないわね」って肩を竦めて、アリシアちゃんも「こっちの方が絶対に面白いのに」って嘆息して、私たちの提案を承諾してくれた。

そういうわけで、シャルちゃんとルシル君のデートをあくまで見たいアリサちゃん、アリシアちゃん、ルミナちゃん、セレスちゃんとはここで一旦お別れ。お互い手を振り合って別れる。見学し隊は西区の古書展に行くことにしたみたい。

「それじゃあ、私たちはどこへ行こうか？」

「とりあえずは北区から南に降りてくようにしようか」

「そうやね。北区にはすずかちゃんのお目当ての出展物もあるみたいやし」

「んで、次にベルカ料理展だな」

私たち楽しみ隊は、北区→中央区（いま居るのがここだね）→南区と回るように予定を組んだ。西区と東区はまた別の日に来よう。というわけで、さっそくバス（イギリスとかにある2階建てバス）に乗って、北区カムランへ向かう。

「北区でやってる技術展の出展者って、ミミルさんだよね」

すずかちゃんが出展者記録を見てそう言った。ベッキーちゃんに「お知り合いなのですか？」って訊かれたことで、この中で一番関わりが深いはやてちゃんが説明する。ミミルさん。ミミル・テオフラストゥス・アグリッパさん。はやてちゃんやアインスさんと一緒に、リインフォースⅡ――リインを生み出したすごい科学者さん。シャルちゃんのお家で会って以来まったく顔を合わせてないなぁ。

「なるほど。古代ベルカの技術に精通した方なのですね」

話を聴いたベッキーちゃんは納得したようで、「一度お会いしてみ

たですね～」そう微笑んだ。

「一応親しい間柄やと思うけど、リインが生まれてからは直接逢ってへんなぁ・・・。何度か連絡取ってるだけやわ」

「そういやそうだっけ。つうか、はやてとアインス、そんでリイン以外のあたし達って、ミミルの使い魔に会ったことねぇんだよな」

「リインも会ったことないですよ？　通信にも出ませんですし」

そう言ったヴィータちゃんとリインに「ミミルさんにも使い魔いるんだ」私はそう返した。正直な話、ミミルさんと話したのって出会ったあの日の1回きりだし。だから、はやてちゃんたち八神家以外の私たちのこと憶えてくれてるのかな、って心配になる。

「うん。ウサギを素体にした使い魔でな。こう、頭にウサ耳があるんよ」

はやてちゃんはウサギの耳を表すように両手を頭に乗せてぴょこぴょこ揺らした。ウサギの使い魔さんか～。私、狼素体の使い魔のアルフとザフィーラ（使い魔扱いしたら怒られそうだけど）、そして猫素体のアリアさんとロッテさんのリーゼ姉妹しか知らないから、ちょっと新鮮。

「到着ですぅ～！」

そうして２０分ちょっとのバスの旅を終えて、私たちは北区カムラ

ンの地に降り立った。ちょっと肌寒い感じかな。

「ここからはわたしが案内するな～♪　目的地は技術展の出展場所、ブリーゼ広場♪　こっちやよ～♪」

はやてちゃんがバスガイドのお姉さんみたく私たちの目的地であるブリーゼ広場の方へ指を差した。ザンクト＝オルフェン全区での芸術強化月間って言うちょっとしたお祭りもあって、街路には結構な人だかりが出来てる。

「おぉ、見えてきたな」

その人たちの合間を縫うように街路を進むこと１０分ちょっと。目的地のブリーゼ広場に辿り着いた。なんて言うか、真っ先に視界に入ったのは大砲だった。砲身が２門あって、下の砲身の方が上の砲身よりちょっと短いかな。近くに展開されてるモニターには人だかりが出来てる。アレにこの大砲の説明が書いてあるんだと思う。

「懐かしいな、コレ」

その大砲の説明を読むために移動しようとした時、ヴィータちゃんがそう呟いたのが聞こえた。リインが「知ってるです？　ヴィータちゃん」って訊ねる。私たちみんながヴィータちゃんを見詰めて、「まあな」って遠い目をするヴィータちゃんが話し出すのを待った。

「・・・・・」

けどヴィータちゃんは無言。あれ？って思ってると、ヴィータちゃんがスタスタ歩き出したから「あれー！？」話してくれるのかと思ってた私たちは声を上げた。ヴィータちゃんはそんな私たちのリアクションに「んあ？」小首を傾げるだけだった。

「あのですね、ヴィータちゃん。この大砲のことを知ってるんですよね」

「ああ、まあな。実際にやり合ったことがあんよ。つうか、このミナレットっつう大砲のデカさはこんなもんじゃなぇよ」

このミナレットって大砲は、オーディンさんを主としていた頃の物なんだね。ヴィータちゃんの穏やかな表情から見て、嫌な思い出の中じゃなくて良い思い出の中での出来事だ、っていうのが判った。ヴィータちゃんと一緒に私たちはミナレットの説明モニターを観る。

（目の前のミナレットは縮小サイズのミニチュアなんだね）

本来の大きさは砲身だけで１００ｍ越えの巨大さになる、古代ベルカに栄えた大国イリュリアが使用した二段式砲台。魔力砲と、その魔力砲を拡散させるための反射鏡砲弾を発射できる。魔力砲を拡散させて周囲への被害を大きくする。

「ヒデェもんだったよ、コイツのもたらした被害ってのは。拡散した砲撃は無差別に村や町を焼き払った」

その当時のことを思い返してるのかヴィータちゃんの表情に怒りの

色が浮かんだ。けどすぐに「ま、オーディンがサクッと破壊してくれたけどな」ってニッコリ笑った。次に見たエテメンアンキって言う、成層圏から地上へ向けて砲撃を放つ、悪魔みたいな兵器も「コイツもオーディンが破壊したんだぜ♪」自分の事のように誇らしげに話してくれたヴィータちゃんが微笑ましかった。

「ホンマ、ヴィータはオーディンさんの事が好きなんやな♪　今の家主としてちょう嫉妬するくらいやわ～」

「す、好きと言っても家族として、主として好きだったんだよ、はやて！　あ、あたしが、オーディンに恋してたなんて、そんな馬鹿なこと・・・！」

「えっと、そのつもりで言うたんやけど・・・」

「ヴィータちゃん、オーディンさんに恋してたです？」

リインがそう訊くとヴィータちゃんは顔を真っ赤にして口をわなわなと振るわせて「んなことねぇし！」腕を組んでそっぽを向いた。なんて言うか可愛い。みんなでヴィータちゃんを微笑ましく眺めてると、「ハヤテとリインだ」２人の名前を呼ぶ声が聞こえた。

（あ、ウサ耳・・・）

振り返った先、そこに居たのはウサ耳を生やした私たちと同年代くらいの２人の女の子。はやてちゃんが「フラメル、ルルス！　久しぶりやな～♪」そんな２人の名前を呼んだ。

「お久しぶりです」

「おっす～」

1人は礼儀正しくお辞儀して、もう1人は右手を上げて振った。顔や背格好がそっくりな事から双子だと思うけど、性格は違うみたい。そう言えば私たちって双子の知り合いが何気に多いかも。不思議な縁だなぁ～。

「すずかちゃん達と顔合わせは初めてやんな。紹介するわ。礼儀正しい子がフラメルや」

「我がマスター・ミミルが使い魔、研究補佐担当、妹のフラメルです。以後お見知りおきを」

真っ白なウサ耳と髪は右側でのサイドテール、目は真紅。正に白兎。服装はチャイナドレスで色はやっぱり白。胸元にはウサギの顔の形をした穴が開いてて素肌が見えてるし、スカートのスリットも腰の近くまであるから、強風が吹いたら下着が丸見えになっちゃいそう。というか、ひょっとして穿いてない？

「そんで、こっちがルルスや」

「ちわっす。アグリッパ家の家事担当、姉のルルスだよ」

真っ黒なウサ耳と髪は左側でのサイドテール、目は瑠璃色。ルルス

ちゃんは黒兎だね。服装は黒色のセーラー服みたいなので、スカートの下にはスパッツを着用してる。だから派手に動いても下着が見えることはないみたい。

「2人とも今日はどうしたん？　お買い物の途中か？」

「いいえ。ここの広場で行われている古代ベルカ技術展の案内をさせてもらっています」

「そうなんだぁ～。ミミルが本来やるべきなんだけど、一度研究を始めたら納得するまで止めないからさ～」

「あー、なるほど」

はやてちゃんが苦笑する。どうやら心当たりがあるみたい。そして「案内役ならさ、親睦を深める意味を込めてあたし達を案内してくれよ」フラメルちゃん、ルルスちゃんと一緒に回ろうって話になった。

「あ、それ良いアイディアだよ、ヴィータちゃん」

「うん、そうだね。こうして会えたんだし、もうちょっと話をしようよ」

「私も賛成」

「すずかがそれで良いなら僕もそれで良い」

「私も賛成です。説明には載っていない裏話も聞けそうですし」

「決まりみたいやね。そうゆうわけやから、案内をお願いしてもええやろか？」

ヴィータちゃんの提案にはみんなが賛成。また新しい友達が出来るとあって私のテンションはぐんぐん上がってく。けど、それに反してフラメルちゃん表情は優れない。と、「そうしたいのは山々なんだけどさ」ルルスちゃんが肩を竦めた。

「いくらミニチュアとは言え、兵器関連の出展物にはどういった物なのかの説明がありますから。出展に好ましくないとされる可能性もあります。そういう理由で聖王教会や、管理局の査察官も見学客様に雑じっておられます。私たちはそんな彼らの案内役ですので・・・」

「ゆっくりと話していられないのさ～」

フラメルちゃんとルルスちゃんがチラッと離れた方を見る。そこには見知った顔の知り合いが居た。すると向こうも私たちに気付いて「やあ！」手を振って、こちらに歩いて来た。

「ヴェロッサさん！」

ヴェロッサ・アコースさん。以前、シャルちゃんのお家に遊び行った際に、カリム・グラシアさんと一緒に紹介された。ヴェロッサさ

んと「こんにちはー♪」と挨拶を交わし終えると、「おや？　新入りかな？」ジョン君を見てニッコリ。

「はじめまして。時空管理局本局・内務調査部査察課所属、ヴェロッサ・アコースです」

握手をジョン君に求めるヴェロッサさん。ジョン君は最初にすずかちゃんを見ると、「大丈夫だよ。ヴェロッサさんは」ってすずかちゃんは微笑み返し。すると少し体を引いてたジョン君は小さく頷いて、「ジョン・ドゥ」自己紹介を返しながら握手に応じた。

「ジョン・ドゥ・・・。あぁ、君が例の・・・」

普段のジョン君とは違って人見知りな感じ。そう。今のジョン君は以前の、出会って間もない頃のジョン君だ。ヴェロッサさんはそんなジョン君に「あー、ひょっとして警戒されてるかな？」って苦笑した。

「普段はちと生意気なガキなんだぜ、ヴェロッサ」

「へぇ。いきなり知らない僕という存在が、人見知りのような真似をさせてるわけか。それは悪いことをしてるかな。それじゃあ僕は仕事に戻るよ。でも、その前に・・・」

ヴェロッサさんが辺りをキョロキョロ見回して、「イリスは一緒じゃないのかい？」そう訊いてきた。今の私ならその言葉の意味が解る。ヴェロッサさんはシャルちゃんに逢いたい。何故か。それは好

きだから。シャルちゃんやはやてちゃん、そしてルシル君の関係を見てたら、これまで鈍かった私も解るようになってきた。

（さて、どう言って誤魔化そう）

シャルちゃんとルシル君がデートをしてるなんて知ったら、ヴェロッサさんどうなっちゃうか不安だし。私はすずかちゃん達とアイコンタクト。デートのことは言わない、そう決めようとした。だけど・・・

「あ、シャルさんならルシル君とデート中ですよ♪」

「「「「あ」」」」

「あら、まぁ・・・」

私とすずかちゃんとフェイトちゃんとはやてちゃんは絶句。ベッキーちゃんは右手を頬に添えて困惑。続けて「ついさっきまで盗み見してた。良い雰囲気だった」ジョン君がそう言うと、「な、なな・・なな・・！」ヴェロッサさんはよっぽどショックだったのかフラついて、「お似合い、かぁ～・・・」はやてちゃんも大きな溜息を付いた。一瞬にして心の重傷者が2人も生まれちゃった。

「デート！？　今、デートと言ったかい！？　イリスが、ルシリオン君とデ、デー・・・なぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「はやてちゃん、怖いですぅ～（涙）」

「す、すずか！　ぼ、僕が護ってあげるからね・・・（怯）」

頭を抱えて悶絶するヴェロッサさんの様子にリインとジョン君が怯え始めた。うん、ちょっと怖いよね、私もそうだし。

――無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）――

ヴェロッサさんの周囲に魔力で出来た犬のようなモノが６頭くらい出現した。シャルちゃんから聴いてたヴェロッサさんのレアスキルだ。ていうか、「ヴェロッサさん！？」そんなワンちゃんズを出して一体何をしようと言うんですか。

「イリスとデート・・・イリスとデート・・・」

「アカン！　聞こえてへん！」

ヴェロッサさんのうめき声に釣られるようにワンちゃんズも低いうなり声を上げ始めた。頭の中でＷＡＲＮＩＮＧのアラートが鳴り響く。はやてちゃんが「騎士カリムに連絡や！」って通信を繋げようとした時・・・

「何をやってますか、この子は！」

音も無く急に姿を現して、ヴェロッサさんを背負い投げした１人の女の人。背中から地面に打ちつけられちゃったヴェロッサさんは、ぐへぇ、って抜けた苦悶の声を漏らした。そのあまりにも速くて鮮

やかな背負い投げに、「すごい、見えなかった・・・」フェイトちゃんが驚きを見せる。私も全く見えなかった。

「げほっ、けほっ、シャッハ！？　どうしてここに！？」

「あなたが管理局側の査察としてここへ来ると知り、教会側の査察としてここを任されるはずだったパーシヴァル卿と交代させていただきました」

「んな！？　今朝までここの見回りはパーシヴァル君だって、本人から聴いていたのに！　謀ったね！」

「私が口止めさせていただきました。パーシヴァル卿もあなたのサボり癖には参っていましたから喜んで引き受けてくださいましたし。さっ。早くお仕事に戻って下さい」

「・・・くっ。今日のところはちゃんと仕事してあげるよ」

「毎日やりなさい！」

シャッハさんという女の人に叱られたヴェロッサさんはワンちゃんズを消した後、この場から走り去ってった。そして「では、私たちもこれで失礼します」フラメルちゃんと、「まったね～」ルルスちゃんも、ヴェロッサさんを追って去って行った。

「まったく。優秀なクセにサボり癖があって困ったものです。コホン。お騒がして申し訳ありませんでした、はやてさん、騎士ヴィー

タ、リインさん。そしてお初にお目に掛かります。聖王教会のシスター、シャッハ・ヌエラと申します。どうぞシスターシャッハとお呼びください」

自己紹介を受ける。シャッハさん。聖王教会のシスターさんで、騎士カリムの補佐・護衛役、そしてヴェロッサさんの教育係、とのこと。しかも陸戦ＡＡＡランクで、あのシグナムさんと真っ向から戦って引き分けに持ち込んでるらしい。そんなすごいシスターシャッハに私たちも自己紹介。

「時間があればもっとお話ししたいのですが、残念ながら勤務中ですので、これにて失礼させていただきますね。それでは皆さん、古代ベルカ技術展を引き続きお楽しみください」

シスターシャッハは一礼して去って行った。なんて言うか、短い間に一気に交友関係が広がっちゃった。うん、嬉しいことだから良いんだけど。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒すずか†††

古代ベルカ技術展を４０分くらい掛けて見て回った私たち楽しみ隊。古代ベルカには地球の技術では考えられないような超兵器や、今の地球でも使われているような兵器（次元世界だと質量兵器って呼ばれる）もたくさんあった。特に気になったのはミナレット。エテメンアンキ。聖王のゆりかご。戦船。細菌兵器。腐敗兵器。猛毒の弾丸や霧。移動砲台（地球で言う列車砲）などなど。

「戦争はやっぱりダメだってことだね」

「あんなもん、二度と起こさせちゃいけねぇよ」

「ヴィータ」「ヴィータちゃん」

人道を外れた兵器が普通に使われた時代、旧暦。ヴィータちゃんの言う通りもうそんな時代を訪れさせないようにしなきゃ。その為の管理局、その為の魔法なんだから。

「そろそろお腹が空いてきたね」

なのはちゃんが小さく笑う。時間を見ればお昼は過ぎてる。だから「次の目的、ベルカ料理展にそろそろ行こっか」に向かおうと提案してみる。みんな「賛成～♪」ということになったから、早速カスターニエ広場へ向かうことになった。

「そう言えば、アリサ達は今頃なにしてるんだろ」

「きっとルシル君らを見つけられへんくって、もうやめてるんとちゃうかな？」

「覗き見より普通に楽しんだ方が面白いと思いますし、おそらくそうでしょう」

「連絡入れてみるです？」

「放って置きゃあいいんじゃね？　それよか早くなんか食べようぜ」

通信を繋げようとしてたけどやっぱりやめた。なんかそういう雰囲気だし、それにアリサちゃん達だっていつまでも覗き見なんてするほど頭が残念じゃないと思うし。ベッキーちゃんの言うように今頃は覗き見に飽きて遊んでると思う。だから今はお昼ご飯のことを考えよう。

そういうわけで、到着するのはカスターニエ広場。直径５００ｍほどの円形の広場で、縁に沿ってスタンドが何十軒と並んでて、広場中央に設けられた簡易な組み立て式のテーブル席に百何員クラスの人が座って食事してる。

「そんじゃ各自。被らないように品物を買って・・・、ここ、ここのテーブルに集合っつうことで！」

ヴィータちゃんはシャルちゃんがよく使う方法を取った。被らないようにそれぞれが買って持ち寄れば色々な味を楽しめる、というもの。このシャルちゃんが創案した、屋台制覇作戦はなかなかに利を得ることの出来るもので、一商品をみんなで分け合うから食べる量は少ないけど、その分ほかの料理を多く食べることが出来る。そう言うわけで、テーブル席を確保しておくベッキーちゃんとリインを残したうえで一度解散。

「それじゃあ、ジョン君。一緒に行こうか」

「うんっ！　荷物運びは僕に任せて、すずか！」

「うん、ありがとう、ジョン君」

最近のジョン君は頼もしくなってきたな。それが嬉しくもあるし、弟感覚だった感情もなんて言うか、私の中で少しずつ別の何かに変わって来てる気がして妙な感じもする。私のことを慕ってくれて、大事にしてくれて。うん、それが嬉しい。

「まずは・・・カリーヴルストから・・・」

シャルちゃんとルシル君が食べていたものと同じ料理から購入。半分に切られたソーセージ8個とポテト数十本近くが載せられたお皿（使い捨ての紙製だね）をジョン君に持ってもらって、次の料理を買いに向かう。

「ちょっとだけつまみ食い～」

ジョン君がカリーヴルストのお皿からフライドポテトを1本取って食べたから、「ダメだよ、ジョン君」注意すると、「すずか、あーん」私の口にポテトを1本差し出して来た。断ろうにもジョン君の笑顔には逆らえず、「あーん」に応じた。

男の子にこんなことしてもらうのって初めてだよね。なのはちゃん達のような同性同士でなら何度でもやったことがあるけど。男の子に初めてしてもらった。そう思うとトクンと心臓が高鳴った。

「ルシルがシャルにしてたんだ。シャルはすごく喜んでるように見えた。だから僕もやってみたんだ♪」

これははやてちゃんやヴェロッサさんに聞かれなくてよかった話かも。そう思ってると「すずかは嬉しかった？」って訊かれた。私は少し考えた末に「うん。嬉しかったよ、ちょっとドキドキした」って答えた瞬間、口を閉じた時に唇がジョン君の指に触れた、それを思い返したら急に顔が熱くなった。

「すずか！？　顔が真っ赤！　熱！？　熱でも出たの！？」

「ぅえっ！？　あ、い、ううん、なんでも！　何でもないから！」

「うそだ。だってこんなに・・・」

「っ！！」

ジョン君が空いてる左手で私のおでこに触れて熱を測ってきた。私自身でもおかしいって思えるほどのドキドキ。確かに最近、ジョン君は男の子だな、って思うようになったけど、こんな急にドキドキするものなのかな。

「やっぱり熱があるんじゃない？」

「だ、大丈夫！　熱は熱でも病気の熱じゃないから！」

あたふたと後退しようとして「あっ」小石か何かに躓いちゃったのか仰向けに転びそうになった。耐えようにもそれが許されない程にパニックを起こしてたから全ての行動が制限されていて、踏ん張りきれなかった。でも・・・

「すずか！」

ギリギリのところでジョン君が私の腕を取って、「わわっ！？」抱き寄せるように起こしてくれた。片手にカリーヴルストのお皿を持ってるとは思えないほどの力強さ。私の頭はジョン君の胸に抱きかかえられるような状態になって、一気に顔が熱くなった。頭の中が真っ白になる。

「大丈夫？　すずか。仰向けに倒れると結構危ないんだよ。護身術としてルシルに格闘技を習って知ったんだけどさ。・・・すずか？・・・おーい」

ジョン君からの呼びかけに答えられないほどに真っ白。だけどなんとか「大丈夫だよ、あ、ありがとう」お礼だけは言えた。ジョン君は「ん！」とても嬉しそうに、誇らしそうに微笑んだ。

（うぅ、こんなにドキドキするなんて・・・）

こんな感情は初めて。だけど、その正体は知ってる。これまでずっと見てきたから。でも、自分がそんな感情を抱くなんて思いもしなかった。そんなドキドキしっ放しのまま、白いソーセージ――ヴァイスヴルストや仔牛のカツレツ――シュニッツェル、挽肉や野菜・スパイスを長方形に固めて蒸した物をパンに挟んだ――レバーケースゼンメルなどを購入。そして集合場所に戻った。

「おかえりなさい、すずかさん、ジョンさん」

「ど、どうしたですか、すずかさん！？　お顔が真っ赤です！」

ベッキーちゃんとリインが迎えてくれた。そしてやっぱりツッコみを入れられちゃった。私は「ううん。なんでもないよ」って、そう返すことしか出来なかった。だって恥ずかしいから。ベッキーちゃんは、私とジョン君の間で何かあったって察したようで優しい微笑みを返してくれて、リインは「そうですか」深く訊くことなく、私とジョン君がテーブルに置いた料理に目を輝かせた。

「「お待たせー！」」

「お待たせや～」

「あたしとはやてが最後か」

なのはちゃん達も戻って来た。テーブルに置かれる数々のベルカ料理。とても良い香りがして食欲がそそられちゃう。そうしてみんなで1つの料理を分け合うようにして食べ始める。楽しくお喋りしながら食べるんだけど、テーブルを挟んでの向かいに座るジョン君と目が合うとさっきのことを思い出して顔が熱くなる、を繰り返すことになっちゃった。

「すずか。僕、なにかした？」

「え・・・？」

ジョン君の表情に陰りが出来た。違う、そう伝えたいために首を横に振った。そして「違うよ、ジョン君」微笑みかける。私が照れている所為でジョン君を悲しませてる。

「ジョン君の所為じゃないよ。私自身の問題。だからそんな悲しそうな顔をしないで」

「そっか！　うん、すずかがそう言うんだからそうなんだよね！」

満面の笑顔を浮かべてくれたジョン君は「それじゃあ・・・はい、あーん！」みんなが見てる前でまたポテトを差し出して来た。また顔が熱くなるのが判る。なのはちゃんとフェイトちゃん、リインにベッキーちゃんが頬を染めてジッと見てくるよ。もう頭から湯気が出そうなほどに恥ずかしい。

「すずか・・・？」

「（あぅぅ～～）あ、あー・・・」

目を瞑って顔を近づけようとした時、「美味そうだな」私たちの誰でもない男の人の声が聞こえて、なのはちゃん達が「っ！！？」息を呑んだのが判った。何か異常事態が起きた。直感的に理解できた。ゆっくり目を開けて視線を横にずらして、声の主の顔を見ると「っ！」私も同じように息を呑んだ。見知った顔がそこにあったから。

「あ・・・ぅ・・あ・・・シュ・・・シュヴァリエル・・・です・・・！」

涙を流して怯えてるリインがその人の名前を呼んだ。

「よぉ。お嬢さん達。遊びに来たぜ」

シュヴァリエルさんは口端を吊り上げて不気味な笑みを浮かべた後、ジョン君に向かって手を伸ばした。

Ｅｐｉｃｏ３３明かされる真実～Ｓｔａｔｅ　ｏｆ　Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

最悪すぎる状況が目の前にあった。みんなでベルカ料理に舌鼓を打ちながら楽しくお喋りしていたのに、私たちの目の前にあの人が現れた。私たちの誰よりも強いルシルを瀕死にまで追い込めるほどの戦闘能力を有したあの人が。

「あ・・・ぅ・・あ・・・シュ・・・シュヴァリエル・・・です・・・！」

リインがその名前を呼んだ。ロストロギア蒐集家リンドヴルムの誇る、蒐集実行部隊の全隊リーダー、シュヴァリエル。魔術と呼ばれる超古代の魔法体系と、神器っていう神様や悪魔、魔術師が特別な製法で造った武器を武装している。神器の脅威は身に染みてる。でもだからと言って・・・

「よぉ。お嬢さん達。遊びに来たぜ」

シュヴァリエルの好きにはさせない。ジョンに腕を伸ばすシュヴァリエルの顔面に向かって、「この・・・！」ベルカのスープ料理の一種だっていうアイントプフの器を投げつける。あっつあつのスープだから「う熱っ！？」あのシュヴァリエルでさえも怯んだ。

「すずか！　ジョンを連れて逃げて！」

"バルディッシュ"を起動してバリアジャケットに変身した私は、「ルシル、信じるよ！」変身時に一緒に装備されるように設定していた神器の腕輪・"ドラウプニル"をチラッと見る。左手首にはめてある黄金に光り輝く腕輪。現代の、神秘の無い私たち魔導師の魔法を魔術に変換できるって聴いた。

――ハーケンスラッシュ――

魔力斬撃をシュヴァリエルの首へと向けて繰り出す。魔術に非殺傷設定なんて機能はない。けど、それで構わない。シュヴァリエルは・・・人間じゃないんだから。私の一撃がシュヴァリエルの首に直撃した。

「ドラウプニルか！　良い神器を渡されたもんだな、おい！」

ガキィンと響く衝突音。刃が通らなかった。ルシルから聴いていた通りちゃんとは効いてないみたいだけど、魔力刃が砕かれないのは確か。イケる。これなら一方的な戦闘にならない。ツンツン髪に乗ったスープの食材（ジャガイモやニンジン、レンズ豆とか）を振り落としながら私を睨みつけるシュヴァリエルは、「良い一撃だったが、それじゃあ俺の装甲は破れないぜ！」そう口端をつり上げて笑って、ジョンの手を引いて距離を取るすずかから私にターゲットを移した。

「おーら、もう1発受け取りやがれッ！」

――テートリヒ・シュラーク――

赤い騎士服に鉄槌を携えるヴィータが問答無用でシュヴァリエルの鼻っ面に強力な一撃を打ち込んだ。普通なら鼻の骨どころか頭蓋骨も粉砕するような一撃だけど、ガキィン！と甲高い音と一緒に「痛ってぇなぁ・・・！」シュヴァリエルを僅かに怯ませるほどの効果しかなかった。

「フェイトちゃん、ヴィータちゃん！」

――レストリクトロック――

なのはの声に合わせてその場から即離脱したと同時、なのはのバインドでシュヴァリエルが拘束された。なのはも、リインとユニゾンしたはやても、ベッキーも、すずかもみんな変身し終えていて、揃って左手首に"ドラウプニル"をはめている。

「リイン！」

『はいですっ！』

――封縛――

「スノーホワイト！」

――アイシクルスタチュー――

はやてとリインのバインド魔法、すずかの対象を氷柱に閉じ込める拘束魔法がシュヴァリエルを閉じ込めた。そこにまた「リョート、お願いします！」ベッキーが神楽鈴型のデバイス、"ドゥーフヴィーゾヴ"をシャラン♪と鳴らして、５０ｃｍくらいのクリオネみたいな姿をした氷の精霊を召喚。

――アーイスビェルク――

クリオネ型精霊のリョートが起こす吹雪によって、シュヴァリエルが閉じ込められている氷柱が氷山に閉じ込められた。これで一時の時間稼ぎくらいは出来るはず。今の内にお客さん達を避難させないと。

「って、うん・・・？」

突然の魔法戦で他のお客さんは大騒ぎになるかと思ったけど、思っていたより騒ぎは起こってなかった。全く騒がない人が多数派、当然のように騒ぐ人が少数派、その２つにハッキリと分かれていた。

「教会騎士団です！　避難誘導を行います！　落ち着いて下さい！」

広場の至るところからそんな掛け声が聞こえてきて、騎士甲冑に変身している複数の人たちが声を出しているのが見て判った。あと、お客さんの中にも避難誘導を手伝う人が居るみたい。

「避難誘導は我々教会騎士団と、オルフェン住民が行います！　あ

と、結界魔法も使用して頂けると助かります！」

私たちに近かった女性騎士が私たちに振り向いた。騒ぐ、騒がない人の区別はどうやらザンクト＝オルフェンの住民かそうじゃないか、みたい。それはともかく、女性騎士にそう言われた私たちは頷き返して、「すずかちゃん、結界よろしく！」すずかが結界を張ることにした。

「はいっ！」

――封時結界――

すずかが結界を張ると、周囲から人が居なくなった。さらに「ヴァダー！」ベッキーが"ドゥーフヴィーゾヴ"をシャラン♪と鳴らして、氷の精霊リョートと入れ替えるように１ｍほどのクジラの姿をした水の精霊ヴァダーを召喚した。

「結界を重ね掛けします！　コーカンヴァダー！」

結界の表面全体を覆う水の膜。シャルロッテさんの話だと精霊っていう神秘は、神属ヒエラルキーの３番目に位置するんだって。ちなみに１番は神様、２番は天使、４番は妖精、とのこと。そしてエグリゴリは、３番と４番の間。名前はまだ聞いてないけど、エグリゴリの最強機は天使クラスの神秘だって話だ。と、そんな時、「っ！！？」ゾワッと悪寒が走った。それは私だけじゃないみたいで、なのは達もキョロキョロ周囲を見回している。

「これは・・・かなり厄介な何かが来る前兆ですね・・・！」

ベッキーと同じ意見だ。何かまずいのが来る。直感じゃなくて本能が警告してきた。みんな揃って警戒している中、ゴツ、ゴツ、ってブーツを鳴らす音がフェードインしてきた。なのはが「みんな、あっち！」そう指を差した方に、結界を張った直後には居なかった人影があった。

「あの人も・・・リンドヴルム・・・！？」

「おそらく・・・！」

「はやてはあたしの後ろに下がって！」

深紫色のローブを纏った、たぶん男の人。顔はフードに隠れて見えないし、俯き加減のうえ猫背だから余計に見えない。中でも目を引くのは、薄汚れてはいるけど綺麗な装飾が施された分厚い書物。たぶんアレが神器だ。神器特有の妙な感じがする。ローブ兵は体を左右に揺らすようにフラフラと歩いていて、その行く先には氷漬けにされたシュヴァリエルが居る。

「ルシル君たちに連絡を！」

「リイン！　ルシル君とシャルちゃん、それにルミナ達に応援の連絡を！」

『はいですっ！』

「ルミナ達は私が連絡するよ！」

リインはシャル達に、そして私はルミナ達に通信を繋げて、シュヴァリエルが襲撃してきたことを知らせることに。

『はーい。ルミナです～。イリスとルシルが未だに見つからず～、暇しています～』

こっちはすごく大変な状況だからかルミナのそんなどうでもいい報告にちょっとイラッと来たのは秘密。とにかく『ルミナ！　シュヴァリエルの襲撃を受けた！　場所は、カスターニエ広場！』簡潔に現状を知らせていたら・・・

――リションシャルヘヴェット――

ローブ兵とシュヴァリエルの周囲6ヵ所から火柱が6連続立ち上って、2人の姿を覆い隠した。そして、私たちはその火柱が発生した際の爆風によって「きゃあああああ！」大きく吹き飛ばされてしまったけれど、なんとか空中で体勢を立て直して着地。

「（通信が切れた・・・。でも、ちゃんと場所は伝えたし、すぐに来てくれるはず！）なのは、すずか、はやて、ベッキー、大丈夫！？」

「なんとか！」

「私もジョン君も大丈夫！」

「あたしも問題ねぇ！」

「わたしもリインもや！」

『平気です！』

「私も問題ありません・・・が、かなりの大火力の神器のようです。直撃の代償は炭化でしょう」

「だけど、私とベッキーちゃんの精霊の結界を撃ち抜いたように見えたけど・・・、なんともない・・・？」

私は見ていなかったけど、ローブ兵の神器による火柱はすずかとベッキーの結界を撃ち抜いたらしい。それだけであの書物のレベルがこれまで相手にしてきた神器とは別格ということが判る。シュヴァリエルに続いてそんな相手が現れるなんて、運が悪いにも程がある。

「火柱が消える・・・！」

今度は同時に消失した６つの火柱。宙を舞う火の粉のカーテンの奥、そこには氷漬けやなのは達のバインドから解放されたシュヴァリエル、そしてローブ兵の姿があった。

「仕掛けます！　ヴァダー！」

――ヴァダヴァロート――

ベッキーがそう指示を出すと「キュオーン」ヴァダーがそう一鳴き。すると膨大な量の水の渦が発生。よほど余裕なのかシュヴァリエルとローブ兵は回避も防御もしようとせず、そのまま渦に呑まれた。その様子を確認したベッキーがすぐさま「すずかさん、お願いします！」指示を出すと、「了解！　リフリジレイト・エア！」すずかが冷気の竜巻を発生させて、シュヴァリエルとローブ兵を呑み込んだ渦を瞬間冷凍。２人はまた氷漬けになった。

「このまま出来るだけ時間を稼ぎましょう。私の精霊、ドラウプニルを得た皆さんだけではシュヴァリエルともう１人のリンドヴルムを討つのはまず無理だと思います」

ベッキーに私たちは同意見だって頷き返した。シャルとルシル、ルミナ達もすぐに来てくれる。だからそれまでの時間を稼げればいい。みんなが揃えば、私たちはローブ兵を相手にして、ルシルはシュヴァリエルとの１対１の決闘。そして可能な限り私たちはルシル達と距離を取る。これが特戦班の基本的な戦略だ。

「お前たちだけで時間を稼ぐ、か。そいつは無理だな」

そんな声と一緒にシュヴァリエルとローブ兵を閉じ込めていた氷塊が勢いよく砕け散った。コキコキ首を鳴らすシュヴァリエルが「あ～、確かにすげぇな、神属の術は。だがな。同じ手は二度も食わねぇよ」そう言って、ローブ兵に顎で合図した。するとローブ兵は力なく上半身を仰け反らせた。

「「「「「「っ！！？」」」」」」

『ひゃう！？　な、なな、なんですか、あの顔！？』

「人間、じゃない・・・！？」

仰け反った際に見えたフードの中に隠れていたローブ兵の素顔。人の肌をしていなかった。血の気のない薄紫色の肌で、眼球は真っ黒、虹彩だけが真っ赤。なんて言うかゾンビっていう表現が一番しっくりくる。

「まぁ、厳密に言えば人間じゃねぇな。だが・・・現代の人間以上のスペックを有しているんだぜ？　コイツの持ってる神器、普通の人間じゃあ開くことも読むことも、使うことも出来ないもんだからな。そうだよな、相棒？」

シュヴァリエルの話に出て来た、「相棒？」が引っ掛かった。思わず口から出た私の声にシュヴァリエルが反応。

「俺がリーダーを務める第０小隊ドラゴンハート。そのサブリーダーがコイツ、ハート２だ」

ハート２っていうコードネームに「っ！」私たちは息を呑んだ。そして想像以上に現状が最悪なものなんだと理解した。ハート２。ベッキーの五精霊の次に強いフィレス二尉＋神器、"ドラウプニル"を装備したシグナム、魔術師化していたセレス、その３人を戦闘不能にした・・・とんでもないリンドヴルム兵のコードネーム。

「ハート2。お嬢さん達の相手は任せた。俺は・・・ケリオンの確保に集中する」

シュヴァリエルがジョンの方を見た。しかも、ケリオン、って名前らしき単語も一緒に。すずかが「シュヴァリエルさん！　ジョン君の本当の名前って・・・ケリオン君、っていうんですか？」って訊いた。

「ジョンだ？　なんだ、ソレ自体から名称くらい聴いているだろ？」

「ソレ？　名称？・・・まるで物みたいに・・・！」

「あなた達がジョン君を追いかけ回すようなことをしたから、ジョン君は記憶を無くしちゃったんです！」

すずかが俯いて両拳を力強く握り締めて、なのはがそう怒鳴ると、シュヴァリエルは「記憶が無い？　なるほどな。通りで・・・」何か考え込むような仕草をした。

「ど、どうなんですか！　ジョン君の本当の名前は・・・ケリオン君なんですか！？」

「・・・そうだ。ソレの真名はケリオン。だが、それが今わかったところでなんだって言うんだ？　今日これからお別れなんだからな」

シュヴァリエルはそう言って、２ｍ近い大剣をどこからともなく具

現して携えた。

「っ！　ジリェーゾ！」

ベッキーが"ドゥーフヴィーゾヴ"を激しく鳴らすと、ベッキーの側に全身が漆黒の装甲に覆われた３ｍほどの虎型精霊・ジリェーゾが召喚された。そして「行きませ！」シュヴァリエルへ突撃させた。

「リイン！」

――ハウリングスフィア――

「『ナイトメアハウル！！』」

ジリェーゾがシュヴァリエルへ到達するより早くユニゾンはやての多弾砲撃が着弾。爆煙より飛び出したシュヴァリエルに突撃するジリェーゾは、両前脚でシュヴァリエルを組み敷いた上で大きな口で頭部に噛みつこうとした。だけどそれより早く「重いだろうが！」シュヴァリエルがジリェーゾのお腹に蹴りを入れて引き剥がした。

「シュヴァリエル！　あなたの相手は、ルシルさんが来てくださるまで私とはやてさん、ヴィータさんとリインさんが務めます！」

「精霊使い！　厄介な人間が現代に残っているもんだな！　で、そっちのお嬢さんは奴の家族だったな！」

「ルシル君を死なせかけたその罪、その代償として1発くらいは殴

らせてもらいたいもんや！」

『ですぅ！』

「つうか骨折くらいは覚悟しろよ、シュヴァリエル！」

「ハッ！　面白い！　来なっ！」

ベッキーの精霊とヴィータが前衛と中衛、はやてが後衛のスタイルだ。

「「フェイトちゃん！」」

なのはとすずかに呼ばれてハッとする。そうだ、ローブ兵――ハート2もまたシュヴァリエル並に危険な神器持ちで、しかも普通の人じゃないらしい。私は私でこっちに集中しないと。ちょっとしたミスが命取りになるかもしれない。

なのはは"レイジングハート"をフルドライブのエクセリオンにして、私はフルドライブのザンバーじゃなくて大鎌のハーケンへ、そしてバリアジャケットはソニックフォームに。速度を活かしてかく乱しつつ、なのはとの連携に賭ける。

「すずかちゃん！　私とフェイトちゃんにブーストお願い！」

「うんっ！　ジョ――ううん、ケリオン君は下がっててね！」

「すずか、僕は・・・！」

ハート2が動きを見せる。すかさず私となのはでバインドを仕掛ける。あの書物が神器なら、捲らせない、見せない、読ませない、この制限を掛けてしまえばおそらく封殺できる。ハート2は動きが遅いから、簡単に両腕と頭部を空間に固定することが出来た。

「スノーホワイト、なのはちゃんにガンファイアフォースを、フェイトちゃんにはスラッシュフォースとシールディングフォースを！
はやてちゃんとヴィータちゃんにもお願い！」

すずかの魔法効果を強化するブースト魔法を受けて、「アクセルシューター、シュート！」なのはは射撃魔法８発を発射。続けて「ハーケンセイバー！」私も魔力刃を飛ばす。まずはシューターが神器に着弾していって爆発を起こす。そして煙幕を切り裂くセイバーが、神器に着弾した。

「「「っ！」」」

セイバーと神器の表紙部分の接地点から派手な火花が散る。通用していない。けど、悪い事ばかりじゃない。着弾と同時にセイバーが粉砕されなかったのは、あの書物型神器と"ドラウプニル"の神秘に差が無いことを示している。みんなで攻めれば破壊することも出来るはず。

「バインドバレット！」

ハート2が身をよじると私となのはのバインドがミチミチ音を立て

て千切れ始めたから、すずかが着弾時に対象を拘束するバインドと化す魔力弾を１５発と一斉射出。ハート２は右腕を伸ばして前方に掲げた神器のページを開こうとした。

――ソニックムーブ――

私は一足飛びでハート２へと最接近。バインドバレットより早くハート２に辿り着いて「はぁぁぁ！」すかさず"バルディッシュ"を振るう。ペラペラと捲られ始めたページの間に魔力刃が入る。

（バルディッシュの刃が邪魔してページを捲ることが出来ない？成功だ！）

私を邪魔者としてハート２が真っ赤に輝く目を向けてきた。感情の無い表情。生理的に受け付けないその肌の色、目、雰囲気。間近で見たからかゾワッと全身が総毛立った。と、そこにすずかの魔力弾が襲来。そして着弾して、ハート２の全身にバインドが掛けられた。それを確認して、「神器を回収します！」ハート２の持つ神器を奪い取ろうと試みてみた。そんな時・・・

『こちらルシリオン。現着した。結界内の状況を教えてくれ』

待ち望んでいたルシルからの念話が入った。なのはが『リンドヴルムは２人！　シュヴァリエルさんとハート２！』そう答えた。すると明らかにルシルが『なっ・・・！』動揺したのが判った。でもすぐに『状況確認。シュヴァリエルは俺に任せてくれ！』って、力強い声が返ってきた。

『結界外の避難誘導は順調だ。それにシャルもすぐに来る。すずか。結界内に侵入する際、穴を開ける。すまないな』

『あ、ううん！　大丈夫！　ドラウプニルのおかげか、今ならどんな攻撃を受けても結界を修復できそうだから！』

『そうか』

『こちらはやて！　ヴィータとベッキー先輩と一緒にシュヴァリエルと交戦中！　出来るだけ早い応援をお願いするわ！』

はやて達の方へと目をやる。ベッキーの五大精霊の1体で金属を司っている、装甲を纏った虎型精霊ジリェーゾと、次元世界最強クラスなシュヴァリエルの真っ向からの近接戦が繰り広げられていた。3mって巨体のうえ全身が金属なジリェーゾは虎としての俊敏さを備えていて、シュヴァリエルの斬撃を紙一重で躱し続けながら鋼の爪や牙で攻撃。ヴィータも射撃と打撃の両方を駆使して翻弄、そこにはやての射砲撃が面白いように着弾していっている。

「はっはぁっ！　痛いじゃないか！！」

それでも確かなダメージを与えられていない模様。それにしても「全然取れないぃぃ～～～・・・！」ハート2から神器を奪い取れない。全力で引っ張っているけどビクともしない。神器を支えているのは指の力だけのはずなのに。一体どれだけ怪力なんだろう。

『っ！　了解だ！　これより結界に突っ込む！』

『あっ！　ルシルさん、すずかさんの結界内面には私の精霊の水膜があ――』

『っ！？　ゴボゴボ、ガボガボガボ・・・！』

プツンと念話が切れたけど、すぐに「シュヴァリエルぅぅぅぅーーーーーーっっ！！」ルシルの怒声が直上から聞こえてきた。びしょ濡れっぽい空戦形態のルシルが高速でシュヴァリエルへと突撃。ルシルの手には、すずかやマリエルさん、スカラボのみんなと一緒に作り上げたデバイス、"エヴェストルム・アルタ"が握られている。

「ジリェーゾ！　全砲門開放！！」

ベッキーが"ドゥーフヴィーゾヴ"を鳴らすと、ジリェーゾの装甲のあらゆる箇所に有ったハッチが音を立てて開かれた。

「ラケートナエ・アルージエ・マークシムム・・・、シトゥールム！！」

両前脚、両前腿、首、背中、腰、計13個のハッチの中から数十発の砲弾型魔力弾が発射されて、それらが一斉にシュヴァリエルへ殺到。すると「おい、これは冗談じゃないぞ！」シュヴァリエルが迎撃の為に大剣を振るおうとした。

――闇(コード)よ誘え、汝(カムエル)の宵手――

そんなシュヴァリエルの体を拘束するのは平べったい影の手、その数２０弱。シュヴァリエルは身を捩って逃れようとしたけど「っ！ふざけ――」成す術なく全弾が直撃、大爆発に呑まれた。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒ルシリオン†††

ベッキー先輩の誇る五精霊が一、金属を司る精霊ジリェーゾの各ハッチから射出された魔力ミサイルがシュヴァリエルに全弾直撃。精霊の攻撃の着弾だ、致命傷にはならないだろうが、僅かでもダメージを与えただろう。そう思ったんだが・・・

「痛てぇだろうがクソがぁぁぁぁぁーーーーー！！」

シュヴァリエルはやはり健在。多少の衣類の乱れはあるものの全くと言っていいほどにダメージを負っていなかった。そして俺のカムエルを力尽くで引き千切り、「精霊使いぃぃぃーーー！」ベッキー先輩へ突撃しようとした。

「お前の相手は、俺だぁぁぁぁぁーーーーッ！！」

ＶＳ・―・ＶＳ

其は竜に仇なす者らを斬り潰す破滅の嵐シュヴァリエル

ベッキー先輩とシュヴァリエルの合間に割って入り、そして真っ向から奴に向かって突撃する。左手に握る"エヴェストルム"を一度見、「カートリッジロード！」神秘を有する魔力を籠めた特性カー

トリッジを2発ロード。

「イデアフォルム・・・！」

フェイトの"バルディッシュ"のザンバー、アリサの"フレイムアイズ"のクレイモアと同じ、実体刃ではなく魔法としての魔力刃を生成するモード・イデアフォルムへと変形させる。さらに今のカートリッジで穂に刻まれていたルーンが発動して魔力刃に神秘が付加され、「イドフォルム・・・！」魔術としての魔力刃と化した。

「ベッキー先輩、それにはやて。2人はこのままハート2との交戦に入ってください！　コイツの相手は・・・俺が引き受けます！」

「退けぇぇぇぇーーーーーッ！」

「何をそんなにキレているんだよ、・・・シュヴァリエルぅぅぅーーーーーッ！！」

――崩山裂砕――

――集い纏え、汝の閃光槍（コード　ポースゼルエル）――

全てを粉砕するが如き竜巻を纏わせた大剣、"極剣メナス"による斬撃を繰り出すシュヴァリエル。そして俺は、柄の上下に有る2つ魔力刃を構築している魔力を閃光系に変化させての斬撃を繰り出す。

「（俺たちみんなで造りだしたエヴェストルム・アルタ。・・・信

じるぞ！）」

ギリギリまで引き付けておいて、"エヴェストルム・アルタ"の新機能の１つ、魔力還元の鉱石に魔力を流し込む。所有者が鉱石に魔力を流し込むと、その魔力を何倍にして返還してくれるという能力を持っている。この鉱石は魔力ランクの低い者にとっては喉から手が出るほど手に入れたい代物だろうな。

「なに・・・っ！？」

「おおおおおおおおお！！」

これまでの俺の限界値だった魔力、そして神秘がグッと跳ね上がったことでシュヴァリエルが目を見開く。そのまま俺とシュヴァリエルが振るった互いの刃が衝突する。以前の"エヴェストルム"なら瞬時に砕かれていただろうが、今回は奴の"メナス"の刃を受け止め、さらに捌くことが出来た。奴はそれで冷静さを取り戻し、４ｍほどまで一足飛びで後退した。

「なんだ、この魔力は・・・！？」

「ようやく俺を見たか、シュヴァリエル！　さぁ、俺と遊ぼうか！」

「遊ぼうか、だと？　一体どんな手品を使ってそこまで回復したのか、俺のメナスの一撃を捌けるオモチャを手に入れることが出来たのか、色々と気になることはあるが・・・。良いぜ。遊ぼうぜぇぇぇぇぇ～～～～ッ！」

――崩山裂砕――

――力神の化身&集い纏え、汝の雷撃槍(コード・マグニ)(コード)(フルグルゼルエル)――

シュヴァリエルと斬り合いながらはやて達から距離を取る。すずかの結界は直径2km近い。端に寄れば・・・いや結界を抜け、外で創世結界を展開すれば好きなように暴れられる。

「そういやぁ、なぁ、神器王。なぜリンドヴルムの本拠地に襲撃を掛けなかったんだ？　あれから1ヵ月以上が経過しているぞ」

「・・・なに？」

何を言われたのか本気で解らなかった。リンドヴルム本拠地への襲撃。したいさ。だが、どこに在るのかが未だに判っていないのが現状だ。だからどうしてそんな話題を振ってくるのかが理解できない。

「？？・・・あぁ、そういうことか。・・・ふふ、ふは、ふはは、ふはははは！　本拠地から逃げ出した神器たちの願いも、努力も、全てが無駄になっていたわけだ！　傑作じゃないか！　あはははは！　こいつは笑える！　こんなに良い気分になったのは久しぶりだ！」

「何が可笑しい！？」

――舞い振るは、汝の獄火(コード)(サラヒエル)――

――轟風暴波――

１００本の炎槍を一斉射出。シュヴァリエルは風速２００ｍ強の暴風を槍群に叩きつけることで迎撃した。そして俺たちはまた剣戟を繰り広げる。

「先のクラナガンでの一件でお前たちが回収した神器から本拠地の場所が漏れると思っていたんだよ！」

「ぅぐ・・・！」

重い横薙ぎの一撃を受け止めることは出来たが、踏ん張り切れずに吹き飛ばされてしまう。宙を滑空する俺に向かって一足飛びで突撃して来たシュヴァリエルの刺突攻撃を、「っく・・・！」体を捻ることでギリギリ回避。

そのまますれ違いざまに「おらぁぁぁぁっ！」奴の首に目がけて"エヴェストルム"を振るう。しかし奴はその一撃を歯で噛むことで受け止めた。しかもバキンと、魔力刃を噛み砕いたのだ。目を疑ったよ。

「お返しだ、神器王！」

その言葉に俺はすぐさま上昇。そして奴の周囲に「コード・パシエル、ジャッジメント！」４０の雷槍を展開して、全包囲攻撃を行った。放電爆発に呑み込まれるシュヴァリエル。奴の姿を視認するより早く神秘カートリッジを計４発ロード。

――女神（コード・ソール）の陽光――

放電を続ける爆煙の中から俺に向かって飛び上がって来たシュヴァリエルへ上級炎熱系砲撃を発射。直撃し、奴は地面に叩きつけられるように砲撃に押し潰され大爆発に呑まれた。だが、「神器王！お前は、デカイ失敗を犯した！」奴は顔を煤汚しながらも爆炎の中から悠々と歩き出て来て、その健在さを俺に見せつけた。

「居たんだよ。拠地から逃げ出した神器の中に。人化できる奴が！」

突っ込んで来たシュヴァリエルが振るう"メナス"の斬撃を躱しつつ、こちらも"エヴェストルム"を振るって斬撃を浴びせ続ける。奴の纏う衣服という名の魔力装甲を少しずつ削り続けていく。

「じんか？・・・っ、人化だと！？　馬鹿な！　それほどの神器、俺が気付かないわけが・・・！」

「ブリード・スミス。お前ら管理局が確保したな。ソレだよ。人化できる神器は。だからら俺は、ソレから情報が漏れると思っていた。だがどうだ。お前の手に渡っていながら、お前はブリード・スミスから情報を得なかった。得ていれば、今のこの状況も起きなかったかもな」

"ブリード・スミス"は確かに俺の手に渡った。そして、その神秘の魔力を吸収した。そのおかげで全力フェンリルの召喚も出来たんだ。あの一件の後、そのまま機動一課に渡したんだが。人化する気配はなかった。いや、人化できるだけの魔力を吸収したのがまずか

ったのか？

（くそっ。しかしクラナガンの悪夢から1ヵ月。ブリード・スミスも人化できるだけの魔力は回復しているはず。ならフィレス二尉に連絡して、今すぐに様子を見に行ってもらえば・・・）

「今、局員にブリード・スミスとコンタクトを取らせよう、とか思っただろ」

シュヴァリエルが図星を突いてきた。とは言え、素直に認めたくない思いもあって「いいや。俺が直々に会いに行く」と答えた。すると奴はニヤリと不敵な笑みを浮かべ、「残念。そんな日は来ない」と言い放った。

「それはつまり、俺をこの場で殺す、という宣告か？」

「いんや。機動一課って言ったか。今、そいつらのアジトに俺の部隊が急襲を掛けているんだよ。お前らの手に渡った神器を回収するために、な」

「っ！　貴っ様ぁぁぁぁぁぁーーーーーーッ！」

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

"エヴェストルム"の先端をシュヴァリエルの顔面へと突きつけ、上級閃光系砲撃をゼロ距離発射。着弾時の魔力爆発でシュヴァリエルから遠ざけさせられる。

――剱乱舞刀（ケンランブトウ）――

「奪われた神器は俺の部下が取り返し、予てからの標的だったケリオンを俺が連れ戻す！」

３０近い真空の刃の乱れ撃ちと共にそんな声が俺の耳に届いた。全ての刃を避け、「ケリオン・・・？」そんな疑問と共にお返しとして雷撃系砲撃最強のコード・ヴィズルを発射。奴は真っ向から迎撃するつもりか"メナス"を振り上げながら砲撃に突進。

――振動刃剣――

そして砲撃を縦に真っ二つに斬り裂きつつ、俺へと距離を詰めて来た。純粋魔力による攻撃はもう通用しないのかもしれない。ならば。ちょっと本気の一撃をお見舞いしてくれる。そして弱ったところで、イヴ義姉様とカノンの神器と魔術でシュヴァリエル、お前を救って見せる。

「我が手に携えしは――」

「まだ思い出さないのか、神器王！　ケリオンという名に！」

詠唱を邪魔された。いや、無視して続ければ良かったんだが、ケリオン、という名がさっきから脳裏を過ぎってばかりで集中できない。そもそもケリオンって何のことを言っているんだ。

――予てからの標的だったケリオンを俺が連れ戻す――

シュヴァリエルの言いようからして何ではなく、誰、かもしれない。そこまで考えたところで、「ジョン・ドゥ、彼のことを言っているのか！？」思い至った。

（まだ思い出さないのか、か・・・）

シュヴァリエルや他の〝堕天使エグリゴリ〟の記憶デバイスは、堕天する前と後でキッチリ分かれている。つまり堕天する前の記録は奴らには残っていないらしい。その上での、思い出せないのか、となれば、第一次堕天使戦争の最中で俺とジョン・ドゥ――ケリオンは出会っていることになる。

（彼に懐かしさを抱いていたのは間違いじゃなかったんだ。では、ジョン・・・ケリオンは一体何者なんだ？）

人間じゃないのは確定的だろう。第一次堕天使戦争から数千年と経って生きていられる純粋な生命体など存在しない。そもそも当時の知り合いの顔や名前を忘れるほど俺はボケていない。

「おら！　注意力が散漫になってんぞ、神器王！」

「チッ！」

容赦ないシュヴァリエルの直接斬撃や中遠距離系の真空の刃乱れ撃ちによって思考が妨害され続ける。ストレスが最も溜まり易い最悪

な環境へと陥らせてくれるものだな、こんちくしょう。"メナス"と打ち合う度に欠けていく魔力刃を修復するためにカートリッジをロードし続ける。

（ケリオン・・・ケリオン・・・ケリオン、くそっ、ここまで出かかっているのに思い出せない！）

――シエル。アレこそが××××――

ストレスがマッハで溜まる。頭を掻き毟りたいほどに苛立ちが募る。ケリオンの名前をどこで聴いたのか、彼とどこで会ったのか、思考を巡らせていると、どういうわけかカノンの声が再生された。カノンと何か関係があるのか。それをキーワードとして記憶を探って・・・ようやく、思い出した。

「ケリオン・・・ローフェティタ・・・？」

光煌世界アールヴヘイムに存在する超巨大な転移門の名称だ。思い至ってもすぐに否定する。あり得ない、あってはならない。

――おっきいなぁ～。ねえねえ、カノン。あの転移門の大きさって普通じゃないよね。もしかして、特別な転移門なの？――

――シエル。アレこそがケリオンローフェティタ。最古参の転移門なのです。その大きさは随一。数ある転移門は、同次元間のみの移動を可能としますが、ケリオンローフェティタは私たちが観測しえない次元にも移動が出来るのです。アールヴヘイムが誇る、至高の

転移門です――

「正解だ、神器王。お前らがジョンと呼んでいるアレの正体は、アールヴヘイムの転移門ケリオンローフェティタ、その門部分が人化した姿だ。ちなみに、転移門の力を完全解放するための錠であるローフェティタは回収済みだ」

シュヴァリエルは何を言っているんだ。それではまるで「お前たちリンドヴルムは、アールヴヘイムに行った・・・？」ということになるじゃないか。あり得ない。先の次元世界で"界律の守護神テスタメント"となっていた時期、シャルと共に干渉能力を使ってビフレストを筆頭に様々な世界に転移を何度も試みたんだ。

「ああ、そうとも」

「嘘だ・・・」

だが、何をどうやっても出来なかった。あらゆる次元間すら容易く移動できる"テスタメント"の力ですら出来なかったのに。

「何を以って嘘だって言うんだ？　神器王。いきなりあれほどの数の神器が現れるわけがないだろ？」

解っている。シュヴァリエルの言葉を信じさえすれ俺の抱いていた疑問は解決される。だが本当に帰ることが出来るのか、アールヴヘイムに？　色々と考えたい事、答えを出したい事が多いが、今はただ・・・

「・・・はぁ・・・。深く考えるのは後だ。お前たちリンドヴルムはアールヴヘイムへ渡る術を手に入れ、そこでケリオンローフェティタと神器を掻っ攫ってきた。今はそれを念頭に置いたうえで・・・」

"エヴェストルム"を二剣一対形態のゲブラーフォームへと変形させて、さらにカートリッジを全弾ロード。空となったカートリッジを排莢し、新しいカートリッジ計１２発を装填。

「お前を救い、消滅するまでにリンドヴルムの本拠地の聴き出し、そして彼ら神器を全てアールヴヘイムに返す！」

「やってみろっ！　万が一にも俺は斃せない。億が一に俺を斃せたとしても、俺の代わりになる戦力（ハート２）が居る」

「ハート２・・・」

はやて達とハート２の戦場がある方角へと目をやる。チラッとしか見えなかったが、それほど脅威には見えず、神器特有の神秘もさほど感じなかった。シグナムやセレス、フィレスを倒したということで警戒はしていたんだがな。正直、神器持ち状態だったフィレスが負けたのか理解できない弱々しさだ。

「希望が見えたろ？　じゃあ次は、絶望に叩き落としてやるぜ。教えておいてやるよ、ハート２の正体を。アイツは・・・ホムンクルスだ」

「っ！！」

ホムンクルス。大戦中期に確立された人造人間生成法。人工的に高ランク魔術師や特殊スキル所有者を生み出す技術で、伝聞で残っている生成法は２つ。１つは、蒸留器に材料となる人間の精液やら何やらを入れて生み出すというもの。そしてもう１つは、生まれた赤ん坊に高位霊を入れるというもの。

「ま、正直言うと、プロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅとかいう人造生命技術っていうやつの方がすごいと思ったさ。記憶転写だっけか？だが、そのプロジェクトじゃ出来ないモノを生み出せるのがホムンクルス生成法だ」

嫌な予感がする。その予感が当たっているのかどうかを確認するため「どっちの方法でホムンクルスを作った？」と問う。

「一から造り出したモノに、とある格の高い霊を入れることで完成する、とびっきりの怪物さ」

２つの生成法を複合させて生み出したのか。そもそもどこで生成法を学んだんだ、"エグリゴリ"は。それに、ホムンクルスは誰に造らせたんだ。あぁ、これ以上疑問を増やさないでくれ、と頭を抱えそうになる。

「格の高い霊だと？　格の高いと言っても利用できるのは高位魔導師くらいだろうが」

「いいや。・・・・天使だよ」

あまりに突拍子もない大法螺に「は？」呆けてしまった。何を言うかと思えば、天使を入れたと言う。現代での表層世界（人間界のことな）から神秘が失われたと同時、神属からの干渉も少なった。それは先の次元世界で確認済みだ。つまりこちらからの干渉も出来なくなったというわけだ。そんな中で天使を召喚するなど不可能だ。

「そもそも、さっきチラッと見たが、天使特有の神秘など放っていなかったぞ。魔術師の神秘すらも放っていなかった」

「そりゃあな。スロースターターなんだよ、アイツは。さぁ、次の絶望だ。よく聴け。ハート2の持っている神器は、概念兵装：天使召喚の書・ヒドゥンカリグラフィ。この意味、解るよなぁ？」

「・・・、っ！　クソがッ！」

最悪も最悪。ハート2が予想以上に危険存在だったことが解って全身から嫌な汗が溢れ出た。さっきのハート2が神秘を放っていなかった理由は、その身に天使を宿していなかったからだ。だが、"ヒドゥンカリグラフィ"で天使を召喚し、取り込めば・・・。くそっ。そのためのホムンクルスか。ただの人間、魔術師ですら不可能だが、初めから天使を宿すのに耐えられる器であるのなら・・・。

（ヒドゥンカリグラフィ。かつて、神属と契約を結んだ大預言者が記したという、天使召喚・使役を可能とする魔道書。コレもアール

ヴヘイムから盗んだ物か・・・！）

真実を聞いたその直後、「っ！？」はやて達とハート２の戦場の方角から強烈な神秘と白の閃光が発せられ、さらにはすずかの結界とベッキー先輩の精霊が張った水膜が粉砕された。

「おっと。散々俺に仕掛けておいて今さら背を向けんなよ、神器王！」

はやて達の元へ向かおうとしたが、シュヴァリエルに回り込まれた。一瞬とは言えシュヴァリエルの存在を忘れてしまうほどに切羽詰まっていた。奴は背を向けた俺に攻撃を仕掛けず、わざわざ俺の目の前に回り込んで妨害してきて、"メナス"を横薙ぎに振り払ってきた。両手に持つ"エヴェストルム"を掲げて盾として受け止める。

「おぉぉ・・・らッ！」

「ぐぅぅ・・・！」

重い一撃に俺は大きく薙ぎ払われた。が、宙で体勢を立て直してシュヴァリエルから６ｍほどの地点で着地・・・したばかりの俺へと向かって奴が突撃して来た。俺も遅れて突撃を敢行。

――振動刃剣――

――豊穣神（コード・フレイ）の宝剣――

先に攻撃範囲に入ったのは俺だ。"メナス"は２ｍという大剣だか

らな。横薙ぎに振るわれる"メナス"をスライディングで躱しつつシュヴァリエルの背後へと回り込み、奴が振り返る前に立ち上ってコード・フレイの効果を発動。左右の"エヴェストルム"が最適な斬撃を振るう。

「うおおおおおおおおおおおーーーーーーーッ！！」

二剣の刃がシュヴァリエルの右上腕を挟み込んだ。"エヴェストルム"の魔力刃はシュヴァリエルの纏う衣類という魔力装甲を、そして肉体という装甲を、激しい火花を散らしながら斬り断とうとする。

「この・・・！」

シュヴァリエルの左腕が俺の頭を鷲掴む。ミシミシ、ビキビキ。俺の頭蓋骨を握り潰そうと握力を強める。意識が遠のいていく中でもカートリッジを連続ロード。いよいよ以ってまずい。そう思った時、バキン、と奴の右腕が寸断された。奴の右腕は、手にしている"メナス"の重みによって地面へ落下した。

「届いたぞッ！　お前の神秘に、ようやく届いたぞッ！　シュヴァリエルッ！」

「っ！！・・・・神器王ぉぉぉぉぉーーーーーーッ！！」

「っく・・・！」

シュヴァリエルが俺の頭を鷲掴んだまま、俺をブンブンと振り回し、

「あが・・・っ！」地面へと叩き付けた。背中から全身に駆け巡る衝撃に呼吸が一瞬だが止まった。奴はそんな俺の頭を踏みつぶそうとしてきたため、ゴロゴロと横に転がることで回避したが、地面を踏みつけた際に起こった衝撃波によって俺は宙に舞い飛ばされた。

（イケる、イケる、今ならシュヴァリエルを救うことが出来る！）

体勢を立て直すより早く急上昇。そしてカートリッジの排莢と装填を行い、「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想！」ジュエルシードの恩恵無しでの"アンスール"メンバーの神器具現。幾つかの記憶を失うだろうが、このチャンスを逃すわけにはいかない。

「来たれ、神剣ホヴズ！」

風迅王イヴィリシリアが誇りし剣、"ホヴズ"を"神々の宝庫ブレイザブリク"より取り出した。その瞬間、強烈な頭痛と胸痛に襲われた。そしてすぐに何かを失った喪失感が胸を満たす。だが・・・

「このチャンスだけは必ず・・・実らすんだッ！」

地面に転がる"メナス"を左手で拾い終えようとしていたシュヴァリエルへ急降下。

「斬風・・・！」

"ホヴズ"の具現と一緒に、"英知の書庫アルヴィト"からイヴ義姉様の固有魔術を発動。"ホヴズ"の剣身に切断力を上げる風の層

を付加する術式だ。あと僅かでシュヴァリエルに一撃を与えられる。
そんな時に・・・

――影渡(シュルブリーズ)――

「ご依頼通りに呼ばれて飛び出て僕、参上～～～♪　そして、神器王にパ～ンチ☆」

――闇の女王(サリュ・マンソンジュ)の鉄拳――

俺の影の中から闇黒系"エグリゴリ"、レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアが飛び出して来て、防御も回避も出来ない至近距離での攻撃を撃ってきやがった。

「呼んでないんだよ・・・馬鹿娘・・・」

Ｅｐｉｃｏ３４別れ～Ｊｏｈｎ　Ｄｏｅ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

ルシル君とシュヴァリエルさんが斬り結び合いながら私たちから高速で離れて行ったのを見送った私たちは、ハート２と改めて交戦に入る。ベッキーちゃんが「ジリェーゾ！　行きませ！」"ドゥーフヴィーゾヴ"を鳴らして、鋼の装甲を纏った大きな虎型精霊ジリェーゾをハート２に突進させたら・・・

「えっと・・・あっけない・・・？」

ハート２は僅かに避けようっていう意志を見せたけど、回避行動が遅すぎてあっという間に仰向けに押し倒されて、神器を持つ右腕はジリェーゾの左前脚に押さえつけられた。

「（精霊が相手だと、いくら普通の人間じゃないにしても勝てるわけがない）勝った・・・」

そう一息つく。フェイトちゃん達もそうみたいで、デバイスを持つ手から力を抜いたのが判った。でも完全に緩めることなく私たちはハート２の側へと駆け寄る。今度はフェイトちゃんだけじゃなくて私やすずかちゃん、はやてちゃんにヴィータちゃん達と一緒に、ジリェーゾの足の裏からチラッと出ているハート２の右手が携えている本に手を伸ばす。そして「せぇーっの！」引っ張る。だけど、５人の力を合わせているのにビクともしない。

「やっぱりダメみたいだね・・・」

「うん。魔導師状態で力を強くなってるのに・・・」

「どんだけ怪力なんや、ハート2って・・・」

「こんなひょろっとした奴の膂力じゃねぇだろ、これ・・・！」

「こうなったら壊そう。その為の・・・フルドライブだから」

フェイトちゃんは「バルディッシュ。ザンバーフォーム」ハーケンからフルドライブのザンバーへと変形させた。ルシル君とシャルロッテさん2人からも許可は出ているし、機動一課もそれに賛同してるから。

――回収が難しいと思った際は遠慮なく破壊すること。下手に拘るとしっぺ返しがあるかもしれないからね――

「すずか。ブーストお願い」

「うん！」

「フェイトがダメなら次はあたしな。あたしと鉄の伯爵グラーフアイゼンは破壊に特化してんだからよ」

「うん、その時はお願い」

改めてすずかちゃんの斬撃力強化のスラッシュフォースを掛けてもらったフェイトちゃんは「撃ち抜け、雷神！」カートリッジを数発ロード。そして"ドラウプニル"の効果で爆発的に上昇した魔力にも神秘が付加されて魔力刃から放電を開始。

「ベッキー、もう少しの間ハート2を押さえておいて」

「はい。それが一番の良手でしょう」

ハート2はかなりの怪力。精霊のようなすごいの力じゃないとたぶん押さえつけられないと思うから、このままハート2の拘束に当たってもらうことに。フェイトちゃん以外の私たちは巻き込まれないように距離を取る。そうしてフェイトちゃんはトンッと地面を蹴って3mほどまで飛び上がった。そして逆さまにした"バルディッシュ"の柄を両手で握りしめて剣先を神器の書に向けつつ、「ジェット・・・！」振り上げる。

「ザンバァァァァァ――――――ッッ！」

剣身を急速に伸長させながら"バルディッシュ"は振り降ろされて。剣先が神器の書に直撃する。ガキィンと甲高い音が響いて、衝撃波が数mって離れてた私たちのところにまで届いた。剣先と神器の書の設置点からすごい数の雷が周囲に拡散。

「あああああああああああああッ！！」

フェイトちゃんの叫び声が耳に届く。"バルディッシュ"の魔力刃が壊れないということは神秘が拮抗している証のはずなのに破壊できないのはなんでなんだろう・・・。

『ごめん。カートリッジの効果が切れる。攻撃を止めるよ。これ以上魔法の効果を高めてしまうとハート2を殺めてしまいそう』

フェイトちゃんからの念話。人でないにしても生きている以上は殺害じゃなくて確保しないと。攻撃を中止したフェイトちゃんが私たちの側に降り立って、「ごめん。私の魔法じゃ無理だった」頭を下げて謝った。

「ううん。こればっかりはしょうがないよ、フェイトちゃん」

「神秘関係は私たちの範疇外だし。たぶん、神秘の差以外に何かあるのかもしれないよ・・・？」

「そうやな。あの本にはまた別の力があるのかもしれへん」

「よっしゃ。次はあたしの番だな。アイゼン、ラケーテンフォルム」

今度はヴィータちゃんが"グラーフアイゼン"を強襲型のラケーテンへと変形させて、すずかの「ストライクフォース！」打撃力強化のブーストを上乗せ。さらにカートリッジをロード。

「ラケーテン・・・」

"アイゼン"のブースターが点火。ヴィータは高速回転して遠心力を打撃に上乗せ。左腕にはめてる"ドラウプニル"が金色に輝く。

「ハンマァァァァァーーーーーーッッ！！」

神器の書に向かって振り下ろされた必壊の一撃。"アイゼン"のヘッド部分の突起物が神器の書に直撃して、すごい火花を周囲に散らす。ヴィータちゃんは「まだまだぁ！　カートリッジロード！」ブースターの点火時間を延ばすためにまたカートリッジをロード。数分の拮抗は、「ちくしょう！　ダメだ！」ヴィータちゃんの負けで終わった。

「ヴィータでもアカンかったか・・・」

「ギガントなら可能性はある気もするんだけど・・・」

『その時は神器どころかハート2もペッチャンコになるですよ、ヴィータちゃん』

「・・・そうゆうわけなので、ベッキー先輩・・・」

「ええ、はやて。私の精霊にて、あの書を破壊いたしましょう」

最後の手段、ベッキーちゃんの五精霊による破壊を取ることに。今もなおハート2を地面に押さえつけているジリェーゾの周りに私たちは立って、何時でもバインドを発動できるように待機しておく。そして「ジリェーゾを離れさせます！　皆さん、ご準備を！」ベッ

キーちゃんの合図に「いつでもどうぞ！」みんなでそう答えた。

「ジリェーゾ、離れて！」

スッと音も無くハート2の上から退いたジリェーゾ。それとほぼ同時に私たちは一斉にバインドを発動。計16個のバインドがハート2を雁字搦めにする。そして「ジリェーゾ、標的を破壊して！」ベッキーが神器の書の破壊指示を出すと、ジリェーゾはすぐさま神器の書に目掛けて鋭い鋼の爪が有る右の前脚を繰り出した。

（バインドが・・・！）

ものすごい勢いで引き千切られてくバインド。特に神器の書を持つ右腕を拘束しているバインドが一瞬にして引き千切られちゃった。そしてジリェーゾの一撃を躱そうと右腕を引いたんだけど、それよりも早くジリェーゾの爪が神器の書に直撃。

「「「「「「っ！！？」」」」」」『ひゃっ・・・！？』

その瞬間、呼吸が出来なくなるほどのすごい魔力爆発が起きて、その衝撃で私たち、ジリェーゾすらも空に舞った。みんなの姿を視認できないほどの強烈な真っ白な光、そんな中でさえも2つの紅い光点がその存在を主張してきた。それはハート2の目だった。全ての拘束から解放された、人の姿をした純粋な人でない存在。そして、とうとうその紅い目も見えなくなるほど視界が白に潰されちゃった。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒すずか†††

視界が真っ白になって何も見えない状況が続いちゃってる。これがかなり不安と恐怖を煽ってくる。ハート2っていう強大な敵が今、どこに居るか、何をしているか、全然判らないから。ううん、それよりも・・・

「ジョ――ケリオン君！　ケリオン君！　私の声、届いてる！？」

リンドヴルムに狙われて、そして記憶を失くしちゃったジョン君・・・、ううん、ケリオン君の安否が判らないのが余計に私を不安にさせる。ケリオン君からの返事は無いし、『なのはちゃん、フェイちゃん、はやてちゃん、ヴィータちゃん、リイン、ベッキーちゃん！』念話を送ってもノイズが続くだけ。

（視覚が元に戻るのを待っていたらダメ・・・！）

そう思い至った私は「スノーホワイト。みんなやケリオン君の居場所、判る？」"スノーホワイト"に訊ねてみた。

≪・・・ダメですわ。妙な力が働いていて、皆さんの位置は確認できませんわ≫

近くに居るはずのなのはちゃん達のことすらも判らない現状。不安や恐怖で押し潰されそうになっていた時、「っ！？」少し離れた距離に紅い光点が2つあるのに気付いた。そしてすぐにその正体を察する。ハート2の瞳だ。ハート2はキョロキョロ周辺を見回しているのか瞳があっちこっちに向く。でも、その光点も白い光に呑まれ

て、私の視界はまた白一色に戻った。

（これってどういう原理なんだろう・・・？）

この白一色の世界は魔力爆発が原因だっていうのは判るんだけど、いつまで続くのか、どうやったら収まるのか、その答えが判らない。魔法を使おうにも間違ってなのはちゃん達に当たったりでもしたら大変だし。と、そんなところに「ひゃん！？」お尻を誰かに触られた。慌てて前方に跳び退いて、後ろに振り返ってみるけど誰も居ない。

（ううん。見えないだけで、そこには居るんだ・・・！）

私がさっき立っていた場所にゆっくりと歩み戻ってスッと両手の平を前に掲げる。すると「あ・・・！」何か柔らかいものに触れた。こう・・・プニッというか、ムニュっというか。何に触ったのかは判らないけど、そこに誰か居るのは確認できた。

私が触れた誰かは一度後退したみたいで、私の手から逃れた。でもすぐに「っ！」私の手にさっきの誰かの手が触れて、ギュッと握り合う。そしてお互いに見えない中、顔があるだろうところにもう片方の手を伸ばす。そして・・・

「フェイトちゃん・・・！」

顔だけじゃなくて髪の方にまで手を伸ばしたことで判った。フェイトちゃんの特徴であるツインテールに触れたから。姿も見えないし声も聞こえない。けど、触角が残っているのは良かった。とりあえ

ず手を離さないようにフェイトちゃんの手を握り締める。するとちょんちょんって小さく引っ張られた。

（他のみんなを捜しに行こう・・・かな？）

それに応えるために握る力を弱くした後、もう一度強くした。そして私はフェイトちゃんに引かれるままに歩いて、空いてる右手で周囲を探る。と、フェイトちゃんが握る力に緩急を付けてきて、歩みを止めた。それから少し待ってると、私の腕を誰かが優しく叩いてきて、私の右手を手探り気味だけど取った。

「この髪型・・・、なのはちゃん・・・！」

なのはちゃんの特徴的な髪型に触れたことで認識できた。あとは、はやてちゃんとヴィータちゃんとベッキーちゃんとケリオン君と合流するだけ。今なお白い世界が解けない中、３人で手を繋いで４人を捜す。けど、どれだけ歩いてもダメだった。きっと４人も私たちを捜しているから、すれ違っているのかもしれない。

――すずか――

「っ！　ケリオン君・・・！？」

私を呼ぶケリオン君の声が聞こえた気がする。空耳かもしれない。何せ未だに手を繋いでるなのはちゃんとフェイトちゃんの姿は視認できないし、声も聞こえない。念話は通じない。デバイスの魔力探査も出来ない。だけど・・・

――すずか――

「ケリオン君！」

呼ばれてる。気のせいなんかじゃない。耳じゃない、頭じゃない、こう心に直接呼びかけてくれてるような、不思議な感じ。私はなのはちゃんやフェイトちゃんと繋いでる手をちょっと引っ張った。すると2人は立ち止まってくれた。

（ケリオン君。・・・ケリオン君・・・！）

連絡手段は未だに回復してない。それでも必死にケリオン君の気配を感知しようって目を瞑って集中。

――すずか――

具体的な居場所は判らないけど、本当に何となくだけど「こっち！」から声がしたって思った。そっちに振り向いたその瞬間、白の世界全体に大きな亀裂が入った。差し込んで来るのは太陽の光のカーテン。眩しさに目を細めていると、「すずかちゃん、フェイトちゃん！」そう私とフェイトちゃんを呼ぶなのはちゃんの声が耳に届いた。

「見える！　2人の姿が見えるよ！」

「わ、私も、なのはとすずかが見える！」

姿も見えて、声も聞こえるようになった。ようやくこの白い世界から解放される。視界が眩しい光に満ちて堪らず目を瞑る。その次に瞬間、「やっと起きたわね、あんた達！」耳に届いたのは、「アリサちゃん・・・？」の怒鳴り声だった。
ハッとして目を開けると、青空が真っ先に視界に入った。今の私は地面に仰向けで横になってる状態だった。さっきまで立っていたのにどうして。ううん、それよりも青空が見えるはずがない。結界展開中、外の空間とは隔絶されてるから結界内の色彩は現実とは異なる。慌てて上半身を起こして・・・現状を知った。

「アリサちゃん！？・・・はやてちゃん、ベッキーちゃん、ルミナちゃん、セレスちゃん・・・！」

視線の先、防護服をボロボロにして頭や腕から血を流す5人の姿があった。なのはちゃん達もその様子に絶句してるみたい。そして、その5人がデバイスを向けてる先には見知らぬ人が居た。見知らないと言っても一目見た瞬間、ソレが何なのか判る人もいると思う。現に私がそうだから。

「天使・・・？」

白い翼が4枚と背中から生えていて、その翼のおかげか僅かに宙に浮いていた。それに頭の上には虹色に輝く輪っかが1つ。その輪っかと翼で天使だって認識できる。実際は違うのかもしれないけど、一番しっくりくる表現が天使だった。
そして、あの天使の正体がハート2だっていうのが遅れて理解できた。ローブは脱ぎ捨てられていて、素顔も体（裸だけど、大事な部

分とか無い）も露わになってた。鍛え抜かれた体は薄紫色の皮膚じゃなくて白亜色に変わっていて、皮膚っていうより石像みたいな感じ。そして右手には、虹色の光を放ってる開かれた神器の書があった。

「スノーホワイト！　みんなに広域治癒魔法！　アリサちゃん達、集まって！」

今はとにかくアリサちゃん達の回復だ。

「私とフェイトちゃんで時間を稼ぐよ！」

「うんっ！」

「スノーホワイト！　２人にありったけのブーストを！」

なのはちゃんとフェイトちゃんが攻勢に打って出た。そして私は、２人が全力全開で戦い易いように色々なブーストを一気に発動。斬撃や射砲撃の攻撃力、防御力、機動力などを強化されたなのはちゃんはアクセルシューターで弾幕を張って、フェイトちゃんはバリアジャケットをブレイズフォームへと換装させての直接斬撃ジェットザンバーで攻める。

「リョート！　お２人を援護！」

なのはちゃんとフェイトちゃんの攻撃に合わせてクリオネ型の氷精霊リョートも冷気の息吹を吹き掛け続ける。

「ラウンドガーダー・エクステンド！」

ユーノ君直伝の治癒効果を有した結界魔法を発動。魔法陣内に居る対象のフィジカルや魔力、防護服の回復を行う。回復してる中、アリサちゃん達に「私たち、一体どうなっていたの？」って訊いてみた。

「あたしとルミナとセレスは、はやてやヴィータ、ベッキーの精霊がジョンやあんた達を庇いながらあの天使みたいな奴とガチンコで戦ってたところに乱入したわけだけど・・・。それ以前の事は２人に訊いた方が良いわ」

アリサちゃん達がはやてちゃんとベッキーちゃんを見る。特にダメージが酷いのはベッキーちゃん。吐いた血を拭った跡が口に付いてる。そう言えばヴィータちゃんとケリオン君の姿が見当たらない。それについても聞かなきゃ。

「ジリェーゾの爪が神器の書に当たった瞬間、真っ白な魔力爆発があったやんか・・・」

「うん。それは憶えてる。その後、私となのはちゃんとフェイトちゃんは真っ白に染まったままの世界に居て、そこではやてちゃんとヴィータちゃんとベッキーちゃんを捜してたんだけど・・・」

「いいえ。すずかさん達は実際のところその場で意識不明に陥ったのです。どれほど呼びかけても反応が無かったのですよ」

「意識が飛んでた・・・？（ということは、さっきまでのは全部夢の中の出来事になるの・・・？）」

それにしたってあの白の世界での出来事は鮮明に憶えてるし、なのはちゃんとフェイトちゃんの手を握った感覚だって今もしっかりと残ってる。

「ハート2はすずかちゃん達を無力化した後、えっと、ケリオン君を捕まえようとしたから、わたしとヴィータとベッキー先輩とで仕掛けたんやけど・・・。あんな天使みたいな姿になってしもうてな。そんですずかちゃんの結界や精霊の水膜も一瞬で砕かれたんよ」

「まぁ、そのおかげであたし達ははやて達と合流できたんだけどね。ジョー――じゃなくてケリオンやすずか達を守るために参戦したんだけど、これがまた強すぎんのよ」

「ですからジリェーゾとヴィータさんを護衛として付かせ、標的のケリオンさんを避難させました。ルシルさんとシュヴァリエルの戦闘区域の反対側ですから、ルシルさんが勝てば逃げ切れるはずです」

「（だからベッキーちゃん、血を・・・）ありがとう、ベッキーちゃん」

そしてここには居ないヴィータちゃんにも感謝を。

「いいえ。これは特戦班の一員としての私の意地ですから」

ベッキーちゃんは精霊を同時に召喚、使役は出来ないっていう話だった。巫女としてのレベルがまだ低いからって。仮に出来たとしても身体に何かペナルティが起きるって聴いてた。吐血はきっとそのペナルティによるものだ。

「そう言えばシャルちゃんは・・・？」

「ルシルんとこ行ってる。魔術師化してもらってからこっちに合流するって言ってたわ」

シャルちゃんの姿が見えないことに気付いたからそう訊くと、アリサちゃんが答えてくれて、はやてちゃんが少し不機嫌になっちゃった。シャルちゃんが魔術師化するには、ルシル君の神秘が必要で、そのためにはどうしてかキスが必要とのこと。キスする方法が手っ取り早いってシャルロッテさんが言ってた。

「「きゃあああああ！！」」

なのはちゃんとフェイトちゃんの悲鳴によって話は中断。ハート2は2人の攻撃を六角形型のシールドで完璧に防御。しかもどんな奇襲にも的確に対応してた。そして、そのシールドを発射して2人を突き飛ばした。それだけじゃなくて、信じられないことに鷲掴んでたリョートの頭を握り潰した。

「リョート！　これが神属ヒエラルキーの差・・・！」

ベッキーちゃんが苦しそうに心臓の辺りを掴んだ。精霊に死は無いっていう話だけど、強制的に召喚を解かれると召喚者にも数パーセントのダメージが返ってくるみたい。

「すずか、治癒魔法はもういいわ！　魔術師化したシャルが来るまでアイツを足止めするわよ！」

「あ、うん！　えっと、はやてちゃんとルミナちゃんとセレスちゃんは――・・・」

「もう回復完了や！」

『ですっ！』

「私もいつでもオーケー！」

「同じく！」

「すずかはブーストや回復のために魔力温存でお願い！」

「あ、うん、判った！」

結界を解除した瞬間に私がみんなに全ブーストを掛けると、みんなが一斉に攻勢に移った。

――ディアブロ・クエルノ――

「いっけぇぇぇーーーッ！」

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」

セレスちゃんは螺旋状の氷の杭型射撃ディアブロ・クエルノを５０発近く一斉発射。はやてちゃんは詠唱の後、石化の槍ミストルティンを。

（凍結と石化のダブル拘束攻撃・・・！）

だけど、そのどれもがハート２には効いてなかった。正確には届いてなかった。その全てを小さなシールドで防ぎきってたから。防衛能力が桁違い。

「フェイト！」

「うんっ！」

「ヴォルカニック・スカッシャー！」「ジェットザンバー！」

「「サザンクロス！！」」

アリサちゃんとフェイトちゃんの連携魔法サザンクロス。フルドライブモードの魔力刃による十字刺突攻撃だ。ハート２は向かって来る魔力刃に合わせてシールド２枚を展開。間髪入れずにはやてちゃんの「ブラッディダガー！」と、なのはちゃんの「アクセルシュー

ター！」計３０発近い射撃魔法がハート２を包囲。それすらも小さなシールドで完全防御。

「拳打強化（フェアシュテルケン！）・・・、うらぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

ルミナちゃんがみんなの射砲撃の集中砲火の中に交じってハート２へ突っ込んで行った。大小さまざまなシールドが集中砲火を防いで、ルミナちゃんにもシールドを展開、そして押し返ために射出。

「シュトゥースヴェレ！！」

ルミナちゃんが射出されてきたシールドを殴った。確か今の魔法は、あらゆる防御魔法を貫通する衝撃波を相手に打ち込むっていう・・・。ルミナちゃんは「うげ！」シールドに押し返されてしまったけど、ハート２も「っ！？」大きく前のめりになった。私やみんなは「効いた・・・！？」光明が見えたって思った。

――シヌイ――

ハート２の姿が変わるのを見た。白亜色で美術品のような体が、私が知ってる薄紫色の肌、人としての体（男の人の大事な部分からすぐに目を背ける）に戻った。パラパラと書物のページが勢いよく捲れて、あるページで止まった。

――イェリダー・マルアフ・ピュリキエル――

その直後、空から光の柱が砲撃みたいに勢いよく振って来てハート

2を呑み込んだ。アリサちゃん達が「また天使化する！」って身構えた。ビリビリと肌に感じる強烈な神秘の波動。膝が震える。そして・・・

――シェニシャルヘヴェット――

足元から突き上げるかのような大きな揺れが起きてフラついたところで、「っ！？」光の柱を中心に大きな亀裂が四方八方に伸びた。すぐ側を過ぎた亀裂の中を見る。深い。底が見えないほどに。と、「明かり・・・？」亀裂の底に明るい何かが生まれた。

「っ！！　みんな、亀裂から離れて！！」

そう警告しながら私は亀裂から急いで離れた。その直後、全ての亀裂から3m近い炎の壁が噴き上がった。その熱波と衝撃波によって私は吹き飛ばされて、地面をゴロゴロ転がる。転がり途中に両手を地面に突いて跳ね起きる。周囲にみんなの姿は無くて、「分散させられた・・・！？」一番起きてほしくない状況に追い込まれたことに気付いた。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒ヴィータ†††

トンデモねぇ奴が現れてくれやがったもんだ。あたしは装甲に覆われた大型の虎型精霊ジリェーゾと一緒に、リンドヴルムの狙いであるジョン、いんや、本名はケリオンだったな。とにかくケリオンを連れて逃走中。避難誘導がここまで届いてるのか、人の姿は無ぇ。その分、逃げやすいから助かるけどな。

（本来ならはやての側に居るべき騎士だっつうのにな）

だけどしょうがない気もすんだよな。ベルカ式には遠距離系魔法はほとんどない。ハート2のような怪力で防衛力が高い相手に近接戦はかなり危険な行為だ。だからあたしが、こうしてハート2やシュヴァリエルとの戦場から遠ざかることになっちまってるわけだ。

「僕・・・僕は・・・」

ジリェーゾの背中に乗せられてるケリオンはさっきから虚ろなんだよな。そんなにすずかの側を離れんのが嫌なんかよ。まぁ、とにかく「良かったじゃねぇか。本当の名前が判ってよ」そう言ってやる。ようやく記憶を取り戻せそうなんだしな。

「いやだ・・・、僕は、ジョン・ドゥのままでいい・・・！」

「あ？」

「ケリオンなんて名前知らない！　僕はジョンだ、ジョン・ドゥだ！」

「おいおい、落ち着けって！　ケリオン！」

「僕はケリオンじゃない、ジョンだ！」

「ああ、判った、判ったから落ち着けジョン、落ちるっつうの！」

なんとかケリオンを宥めさせることに成功。今のケリオンにとって記憶を失う前の時間は邪魔なもので、大切なのはすずかに恋してる今、なんだな。だけどそうは言ってられねぇ。お前の正体が判んねぇことにはリンドヴルムが何をやろうとしてんのかがサッパリだ。神器やアムティスなんてトンデモねぇもんまで持ち出すんだから、碌なもんじゃねぇ。

「（とにかく今は・・・）いいか。はやて達はお前を助けるために残った。あたしらはその意志を無駄にしねぇにも逃げ切らなきゃいけねぇわけだ。解るな？」

「・・・うん」

ケリオンはジリェーゾの首にしがみ付き直した。そうだ、今はひたすら逃げるしかねぇ。だから人気のない路地裏を進み続けた。

――影渡り（シュルプリーズ）――

だが、「ハーイ、ストップ～。ここから先は通行止めだよ～」目の前にある建物の影から1人の女が音も無く現れた。

「猫目に猫口、影を移動する・・・、エグリゴリの、レーゼフェアか・・・！」

「正解～♪　そこの少年を回収するようにシュヴァリエルからのご依頼なのだ。だからさ・・・渡してもらおうか」

大きな瞳が細められた。ふざけた様子じゃ考えられねぇほどの殺意をあたしに叩き付けてきやがった。最悪すぎんだろ、この状況。シュヴァリエルにハート2って化け物の次はレーゼフェアかよ。

「ジリェーゾ、逃げろ！」

ケリオンを渡すわけにはいかねぇ。だからそう言ったんだけど、ジリェーゾは体を大きく振るってケリオンをあたしに向かって投げ飛ばしやがった。あたしは「うおい！？」慌ててケリオンをキャッチ。何すんだ、って文句を言う前に、ジリェーゾはレーゼフェアへ向かって突進。レーゼフェアを「なに、ケンカ売る気？　買うのだ～」目にも留まらないほどの速ぇ拳打を繰り出した。ジリェーゾは跳躍して躱した後、建物の壁を蹴ってレーゼフェアを頭上から強襲、地面へ押し潰した。

「（自分が相手をするからあたしに逃げろ、ってか）・・・任せるぞ！　しっかり掴まっとけ、ケリオン！」

「あ、うん！」

ケリオンを背負ってあたしは空へ上がった。もう飛行許可とか関係ねぇ。後はどこに向かうか、そう考えた瞬間、「うおっ！？」目の前を何かが高速で上へと通り過ぎてった。上空を見ると「ジリェーゾ・・・！？」四肢や尻尾を引き千切られて鉄の塊と化してたジリェーゾが空を舞ってた。そんでジリェーゾは召喚を解かれたみてぇで消滅した。

「おいおい、精霊ってエグリゴリより強い神秘を持ってるんじゃなかったのかよ、ルシル・・・！」

下を見る。そこには「ありゃバンヘルドと同じ羽・・・！」レーゼフェアの背中からクジャクの尾羽のような羽が放射状に２０枚って展開してた。

――影渡（シュルプリーズ）り――

そして奴は建物の影に呑まれるように姿を消して・・・

「このエラトマ・エギエネスを発動してる時、エグリゴリの神秘は格段に上昇するんだよ。しかも、この状態での神秘は放出されないで体内に固定される。つまり神秘が跳ね上がったことには気付かない、気付けない。だから、お前の神秘に届いたぞ、なんて喜んでもその上があると知って絶望するのだ～。僕たちだって成長する、・・・くふふのふ～☆」

（聴いてねぇぞ、ルシル・・・！）

近くの建物に建つ煙突の影から出て来たレーゼフェア。あたしに向かって手を伸ばしてくるアイツに反撃をしようにもケリオンを背負ってるから"アイゼン"を振れねぇし、逃げようにもケリオン分の重さで遅くなってる以上は無理だ。

「悪ぃ、ケリオン。逃げ切れねぇ・・・！」

「すずか・・・・！」

――影渡（シュルブリーズ）り――

レーゼフェアの手があたしの右肩を鷲掴んで、「いらっしゃ～い」アイツが出て来た影に引っ張り込まれた。視界が真っ黒に染まったけどすぐに元に戻った。そこで見たのは「はやて！」やなのは達が地面に倒れ伏してる惨状だった。そんではやて達をぼろ雑巾みてぇにしやがったはずのハート2の姿はどこにも無い。

「すずか！　すずか！」

ケリオンがあたしの腕から逃れて倒れ伏してるすずかの元へ駆け寄ろうとしたが、「おっと」レーゼフェアがケリオンの腕を取って制止させて、「そこの赤毛の子もフリーズ。動くと、大昔の銀髪ちゃんと同じように消し飛ばすよ」って、あたしにも脅しを掛けてきたんだが・・・

「大昔の銀髪ちゃんってなんのことだよ・・・！」

「バンヘルドと君らが戦っていたの観てたんだよ、僕。で、神器王と銀髪ちゃんがバンヘルドを殺した後、僕が――」

そこまで聴いたところで理解した。コイツが、ベルカ時代ん時にシュリエルを殺した"エグリゴリ"なんだって。今すぐにでもブッ倒してやりてぇけど、はやて達が人質にとられてる以上は動けねぇ。

「すずか！　すずか！」

「・・・ぅ、・・・あぅ・・・ケリ・・オン・・・く・・・」

「僕、僕は、ジョンで良い！　ジョンが良い！　すずかとこれからも一緒に居たいんだ！　ケリオンなんて知らない！　僕はジョンだ！　今の時間が大好きなんだ！　だから・・・！」

「ケリ・・・ジョン君・・・、ジョン君！」

すずかが立ち上った。もう立つこともしんどいって感じなのに。すずかだけじゃない。はやてやなのは達も「ジョン君を・・・返せ」って立ち上ってく。あたしは「レーゼフェアァァァァァーーーーッ！」アイツの脅しを撥ね退けて、「アイゼン、ギガントフォルム！」変形させての・・・

「ギガントハンマァァァァーーーーーーッ！」

振り向きざま、遠心力を上乗せしたギガントフォルムの"アイゼン"により一撃をレーゼフェアに打ち込んでやった。ドガン！と派手な轟音と衝撃があたしに返って来た。

「うおおおおらあああああああああッ！」

少し間拮抗したけど、負けじと振り抜いてやった。弾き飛ばされたレーゼフェアは「やるじゃんか！」って嬉しそうに笑った。と、そんなアイツへとはやて達の射砲撃に集中砲火が襲って、起きたトン

デモねぇ魔力爆発にアイツは呑まれた。

「すずかぁぁぁーーーー！」

ケリオンがすずかに向かって駆け寄って、すずかも迎え入れるように両腕を広げたその瞬間、「馬鹿だなぁ。あんな程度で僕をどうにか出来るとでも思った？」レーゼフェアがケリオンの影からにゅっと現れて、「ぅあ・・・！」羽交い絞めにした。

「はーい。今までお世話になったみんなにお別れの挨拶をね～」

「ぅぐ・・・い、いや、・・・だ・・・！」

「「レーゼフェアさん！」」「レーゼフェア！」

「なのは、すずか、アリサ。悪いね。これが、僕の役目なんだよ」

――影渡り（シュルブリーズ）――

影に中に入り込んでくレーゼフェアと、「すずかぁぁぁーーーー！」ケリオン。攻撃を仕掛けようにも非殺傷設定なんてもんがねぇ魔術になってる今のあたしらの魔法がケリオンに当たったら確実に死ぬ。

「いや・・・だぁぁぁぁーーーーーッ！」

「お？　来た、来た♪　いいよ、そのまま自分を解放しなよ！」

――此処に開門せり（ゲート・オープン）――

ケリオンから発せられる真っ白な光に「っく・・・！」目を細めた上で空いてる手でひさしを作る。光の中で薄らと見えるのはケリオンから離れてるレーゼフェアと、「黄金の・・・扉・・・？」みてぇなもんが見える。

「見せてあげなよ、君の正体をさ！　果て無き闇あるところに限り無き光あり。二天の狭間で生まれるは永劫の影。我は影の王、闇の支配者、光の仇敵。世は何時しか闇に堕ち影に覆われ光は露と消ゆ」

――闇色に染めたる影国（ブロキュス・ブルビエガレ）――

光が闇に呑まれたことでハッキリと見えることになった。あたしらの前にはレーゼフェアと、黄金の両開きの門・・・だけ。ケリオンの姿はどこにも無い。

「コレが、君らがジョンって呼ぶ正体なのだ。神器の一種である転移門、そのうちの1つ、ケリオンローフェティタ。判った？　人間じゃないんだよ、ジョンは。神器って物が人に変身できる術を手に入れただけの・・・偽物の命、体、人格、・・・人形なんだよ」

言葉を失った。人に変身できる神器なんてあんのかよ、おい。そう思ったのはあたしだけじゃなくて、「うそ！　レーゼフェアさんがジョン君を隠してるんです！」すずかを筆頭に、「影を使ってるんですよね！」なのはや、「返しなさいよ！」アリサが噛み付いた。他のあたしらもレーゼフェアを睨みつける。

「わっかんないかなぁ～。ほら、元に戻るよ」

黄金の門が揺らいでいって、それと同時にケリオンが陽炎のように揺らめきながら現れた。そんで、完全に実体化したケリオンがトサッと地面に倒れて、「ぅ・・・あ・・・」体をすぐに起こした。

「ジョン君！」

「・・・思い・・・出した・・・。僕が、なんなのか・・・」

ケリオンがポロポロ涙を流し始めた。そこにレーゼフェアがケリオンに顔を近付けて、ケリオンに何か耳打ちした。するとケリオンは「判った」って立ち上ると、「すずか、みんな」涙ぐんだ瞳をあたしらに向けた。

「ごめん。・・・今までありがとう。僕、すごく楽しかった」

「ジョン君！」

「はい、決まり。それじゃあね～♪」

――影渡り（シュルプリーズ）――

レーゼフェアはケリオンを連れて影の中に消えていって、遅れて闇の世界が解除された。そして、「ジョン君・・・、ジョン君・・・！」すずかの泣き声だけが残った。

Ｅｐｉｃｏ３５カウントダウン～Ｏｖｅｒｔｕｒｅ　ｔｏ　Ｒｕｉｎ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

アリサ達と思念通話で連絡を取り合いながら向かうのはすずかの結界。そこで今、ルシルやなのは達がリンドヴルムの連中と戦ってる。"キルシュブリューテ"の柄を握り直してカートリッジロード。ルシルから貰った神器、黄金の腕輪・"ドラウプニル"の神秘が上乗せされる。

「うらぁぁぁぁぁーーーーッ！！」

すずかの結界に突入。結界は進入可で脱出不可が基本だから結構簡単に突入できたんだけど、「ガボガボガボ・・・！？」まさかの水攻めにビックリ。慌てて水を掻いて脱出を試みる。ていうか、ルシルもこの水膜に突っ込んだんだよね。わたしのように溺れかけたのかな。

「げほっ、げほっ！　酷い目に遭った・・・！」

肺に水が入ったことで咽る。息を整えて周囲を見回す。リンドヴルムとの戦いは命がけだからまずはアリサ達に伝えたようにルシルと合流しないと。うん、合流して、キスしないと。いかがわしい意味じゃなくて魔術師化するためにね。

「見つけた！って、ちょっと！　相手ってシュヴァリエルじゃん！」

目を疑った。ルシルとシュヴァリエルが1対1のガチンコ決闘を繰り広げてた。蘇るのは海鳴温泉での決闘。ルシルは負けて1ヵ月も意識不明に陥ってた。

（エヴェストルム・アルムがあるって言っても・・・不安だよ）

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

背に展開してる真紅の魔力翼ルビーン・フリューゲルを大きく羽ばたかせて飛行速度を上げたその時、ルシルがシュヴァリエルの右腕を新しい相棒の"エヴェストルム"・アルタで斬り落とした。

「すごい！」『よぉしっ！』

わたしだけじゃなくて心の内に居るシャルロッテ様もガッツポーズ。でもシュヴァリエルも負けじとルシルを地面に叩きつけて見せた。さらに頭を踏み潰そうとまでする始末。早く援護しないと。ルシルはシュヴァリエルの踏みつけを避けて、上空に上がった。そして・・・

『アレは、神剣ホヴズ・・・！　キメに掛かってるね、ルシル・・・！』

ルシルの右手にはクリスタルのような剣身を持った大剣。海鳴温泉の時にもチラッと見た剣だ。神秘っていう概念を知って改めてあの

剣のすごさを感じる。ルシルは"ホヴズ"を構えてシュヴァリエルへと急降下して行く。わたしもそれを追って行くんだけど・・・

『イリス！　ルシルに烈風刃を！　早く！！』

シャルロッテ様からの突然の攻撃命令に戸惑いつつも、その切羽詰まった様子に、わたしも何かが起きるんだって察して「風牙・・・烈風刃！」を放ってみた。その直後、ルシルの影から誰かが出て来た。

『やっぱり出て来たね、レーゼフェア！　大戦時とおんなじやり方・・・！』

遠目でもわたしもすぐにレーゼフェアだって判った。何せ友達のチンクとトーレを倒した奴なんだから。そんなレーゼフェアはすでに攻撃体勢に入っていた。至近距離だからルシルは避けられないし防御も間に合わない。でもさっき放った烈風刃が、ルシルをそんな危機から救いだした。烈風刃によって大きく移動させられたルシルは、レーゼフェアが放った影の拳から逃れることが出来た。

「シャル！？」

「1つ貸しね！」

空の上でルシルと合流を果たす。そして「ルシル！　ん・・・！」わたしからキスをする。魔術師化してるルシルとキスをすると、わたしの内に居るシャルロッテ様の前世、魔術師としての能力が蘇る。

神秘も当然発生して、"ドラウプニル"の効果に上乗せ。そこに絶対切断能力も加われば・・・

「鬼の目に金棒だね♪」

『とんでもない珍解答ね、イリス。鬼が泣くよ、目に金棒なんて喰らったらね。正しくは鬼に金棒。忘れちゃダメよ？』

「ヤー」

「君とシャルロッテがどんな会話をしているのか想像がつくよ。とりあえず、さっきは助かった。ありがとう」

「どういたしまして。じゃあ・・・どうしようか」

シュヴァリエルとレーゼフェア、"エグリゴリ"の2人と対峙する。シュヴァリエルはルシルの全力でようやく渡り合えるような怪物。レーゼフェアは、チンクとトーレを一瞬にして戦闘不能にしたし、まだまだ実力を隠してると思う。どっちも次元世界トップクラスの強敵。

「ここで剣神の登場か。救われたな、神器王」

「でもさ、僕とシュヴァリエルの相手じゃないよ。良い機会だから神器王と剣神、一緒に殺しちゃおうよ」

レーゼフェアは指をポキポキ鳴らしながら歩み寄って来ようとした。

わたしとルシルは最大警戒で身構えて、すぐにでも行動に出られるようにしたんだけど、「おい、待て」シュヴァリエルが制止の声を掛けた。

「なんだよ、シュヴァリエル」

「お前、俺の依頼通りに来たって言っておきながら反故にする気か？」

「え～？・・・あ、あぁ、そうか。ちぇ～。しょうがないなぁ。依頼通り、攫ってくるよ」

――影渡り（シュルブリーズ）――

レーゼフェアが自分の影の中へと沈んでく。と、「待て！　シャル、レーゼフェアを止めるぞ！」ルシルが"エヴェストルム"の穂先から蒼光の砲撃を放った。わざわざ引き止めるなんて何考えてんのって思ったけど、攫ってくるよ、って言葉にはわたしも引っかかるから、「飛刃！」絶対切断に神秘を付加した斬撃を一閃飛ばす。でも、「間に合わない・・・！」ルシルやわたしの攻撃よりも早くレーゼフェアは影の中に消えた。

「シャル、今すぐはやて達の元へ！　ケリオンを拉致されたら終わりだ！」

「いやいや、ケリオンって誰よ！」

初めて聞く単語にちょこっと混乱。だからそう訊いたんだけど、「

おっと。剣神もここで行き止まりだ」シュヴァリエルが片腕のまま大剣をわたしに突き出した。

――崇め讃えよ、汝(ミカエル)の其(コード)の御名を――

「撃てッ！！」

ルシルの背中から離れた２２枚の蒼翼から砲撃が連射された。そして「お前の相手は俺だと言っているだろうが！」ルシルは"ホヴズ"っていう大剣を構えて、シュヴァリエルに突っ込んで行った。その間にも蒼翼から砲撃が連射されて、シュヴァリエルが魔力爆発に呑まれ続ける。

「調子に乗ってんじゃねぇぞ、神器王ぉぉぉぉ～～～～～～～～ッ！！」

――高貴なる堕天翼(エラトマ・エギエネス)――

魔力爆発が一瞬で消し去られて、クジャクの尾羽のような羽を２０枚と放射状に展開したシュヴァリエルが姿を見せた。ルシルは「何を今さら！」突進を止めないでそのまま左手に持つ"エヴェストルム"を振るった。

シュヴァリエルはそれに応じるように"メナス"を掲げてその一撃を防御。そしてルシルは「貰った！」右手に持つ"ホヴズ"を振り下ろした。右腕の無いシュヴァリエルにその一撃を止める術は無い。だけど・・・

「おいおい、俺だって魔術使いなんだぜ」

――天道空流――

「ぅわっ・・・・！？」

足元を掬われて転んじゃうほどの強い空気がシュヴァリエルの方に流れていって、「なんだと・・・・！？」引き起こされた強大な上昇気流がルシルを上空に吹き上がらせた。そしてシュヴァリエルも気流に乗るように急速上昇。

遠目だからハッキリと見えないけど、シュヴァリエルは錐もみ状態のルシルへ向けて大剣を振り下ろしたみたいで、ルシルはそれを"エヴェストルム"と"ホヴズ"を十字に掲げて防御したんだけど・・・

「『ルシル！！』」

"エヴェストルム"の魔力刃が砕け散って、"ホヴズ"がどこかに弾き飛ばされたうえでルシルが地面に叩き付けられた。それでもなお『シャル・・・行け・・・今のうちに！』苦しそうな思念通話でルシルはそう言ってきた。

――廻天轟乱・断壁――

「ちょっ・・・・！」

後ろ髪を引っ張られる思いだけど、ルシルの決死の行動を無駄にするわけにもいかない。そう考えて踵を返した。だけど、直径も全高

も２００ｍほどの暴風の壁が生まれて、わたしとルシルは閉じ込められてしまった。上から出て行けばいい、なんて思ったけど、「空はシュヴァリエル、周りは竜巻の壁・・・」ということもあって逃げられないっぽい。

『イリス。絶対切断で壁を斬って！』

ルシルとシュヴァリエルがまた闘い始めたのが判るほどの魔力波と衝突音を背に、わたしは壁に近付く。ただの風じゃないことはすぐに判った。ビリビリと感じる強大な神秘。そして向こう側が見えないほどの分厚い風の壁。試しに拳大の石を投げ入れてみると、砂粒ほどにまで粉砕された。

「シャルロッテ様・・・、これ、斬れます？」

『・・・・びみょ～。だ・け・ど、やってみて！』

「あ、はいっ！」

"キルシュブリューテ"のカートリッジを全弾ロード。そしてこれまでの鍛錬で使いこなせるようになった固有スキル・絶対切断アブゾルーテ・フェヒターを発動。"キルシュブリューテ"を脇に構えて「せいっ！」全力で振り下ろしたら・・・バキィーンと刀身が真っ二つぅ～～～。

「いやぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーッ！」

泣いた、泣いたよ、わたし。むせび泣くよ。どんだけ"キルシュブリューテ"を壊せばいいの。ルシルと関わってからこれで3回目だよ、"キルシュブリューテ"が壊れるの。うち2回はシュヴァリエルの所為だけど。

『えっと・・・ごめん。無茶言ったね、私』

「うぅ、良いんですぅ・・・」

半ばで折れた"キルシュブリューテ"を涙で滲む目で眺めてると、「ぐぁぁぁぁぁ！」ルシルの悲鳴と一緒に地響きが起きた。振り返ると、「『ルシル！！』」が地面にめり込んでて、シュヴァリエルが「調子に乗った罰だ、神器王」ルシルのお腹を踏みつけてた。

「俺の神秘に届いただと？　違うな。まだ届いていないんだよ。だからお前のエヴェストルム（おもちゃ）は折れ、今こうして俺の足の下に居るわけ、だ！」

「ぐあっ！　がはっ・・・ぐふっ・・・！」

「『ルシル！！』」

――閃駆――

かなりの量の血を吐いたルシル。内臓が傷つけられたんだって判ったから、すぐにシュヴァリエルを引き離すために突撃を敢行。そして、シャルロッテ様から学び習得した、「絶刃――・・・」魔法じ

ゃなくて魔術を発動。魔術発動は、シャルロッテ様がわたしの体の支配権が移った時にしか発動できなかったけど、この魔術だけはわたしのままでも発動できるように鍛えた。

「斬舞一閃！」

これは神秘が付加されてる絶対切断能力を有した魔力刀を生成するというもの。まぁ、魔術師化していること、シャルロッテ様の助けが要ること、などと条件があるけど、"断刀キルシュブリューテ"を毎回ルシルから借りる手間が省ける。

「ふんっ・・・！」

わたしの一撃とシュヴァリエルの大剣が衝突した。激しい火花がわたし達の間で散る中、押し負ける、そう思った時、パキッと何かが割れた音が微かに聞こえた。するとシュヴァリエルが「くそっ。さっきのホヴズが効いたか・・・！」悔しそうに歯噛みして引いた。チラッと見えたけど、大剣の刃に少しヒビが入ってた。

「チッ。このまま神器王を斃そうかと思ったが止めだ。こっちの優先目的は果たした」

「ごふっ、ぐふ・・・げほっ、ま・・・待て・・・！」

ルシルのお腹から足を退けたシュヴァリエルが踵を返して空へと上がる。ゆっくりと立ち上ったルシルはフラフラなのに制止しようとしたから「ダメ！」わたしは抱き止めた。そんなわたし達に「じゃ

あな」シュヴァリエルは言い放って、見えなくなるほどにまで上昇して行って・・・消えた。

「・・・くそっ・・・・」

――女神の祝福（コード・エイル）――

ルシルの全身が蒼い魔力に包まれると、シュヴァリエルに負わされてたダメージがすごい勢いで回復してく。1分ほどで完治したルシルは「・・・タダで転んでたまるか。見ていろ、シュヴァリエル・・・絶対に、逃さない！」そう言って悪魔のような微笑みを浮かべた。あ、でもそんな表情も格好良いかも

†††Ｓｉｄｅイリス⇒ルシリオン†††

俺たち特戦班は合流するため、シャルの実家に集まることにした。アリシアが騎士カリムとシスターシャッハを伴って現れた時は少々驚いたが、海鳴市に居るシグナムとシャマルとザフィーラを除く特戦班が無事に合流を果たすことが出来た。そして今は応接室にて、俺たち特戦班が所属している機動一課・スノー分隊の隊長フィレスと通信を繋げ、互いの現状報告を行っていた。

『まずこちらの状況を報告ね。機動一課も厳しい状況だったけれど、騎士シャルロッテから預かっていた神器のおかげで、ドラゴンハートの襲撃はなんとかなったわね。ドラゴンハート5名、連中が持っていた神器ともに厳重に凍結封印、クラナガンの悪夢の際に回収した神器も奪われずに済んだのだけど・・・。・・・まぁ、リンドヴ

ルムの初撃で隊舎が半壊してしまったけど』

フィレスの背後には崩れた建物――機動一課の隊舎が映り込んでいて、見るも無残に半分が崩れていた。だが、神器を奪われなかったのは実に喜ばしい事だ。

「それじゃあお姉ちゃん。今度はこちらの状況報告。ザンクト＝オルフェンにてドラゴンハートの隊長シュヴァリエルと、副隊長のハート2と交戦。結果は・・・」

俺たち特戦班の班長であるセレスは申し訳なさそうに顔を伏せた。俺以外のメンバーも沈痛な面持ちで、特に酷いのがすずかだ。よほど泣いたのか目の周りが赤い。ちょっと見えない間にケリオンとの仲が進展していたようだ。ケリオンが普通の人間だったなら応援してあげたかったが・・・

「共に敗北。シュヴァリエルとハート2はその後離脱。そして・・・当班で保護していたジョン・ドゥ、本名をケリオン君が、広域指名手配犯のレーゼフェアに拉致されました。彼女はどうやらリンドヴルムと繋がってるようです。そして、ケリオン君の正体も判明しました。その・・・」

セレスは一度区切り、すずかの方を見た。すずかやみんなはケリオンを人間の男の子だと信じて疑わなかった。俺とてそうだ。だからそのショックは大きいだろう。俺はさらに、彼があのアールヴヘイムに存在した転移門だと知ったこと、そしてリンドヴルムがアールヴヘイムに渡っていた事実に大ショックだった。

（だが、この情報は俺に希望をくれた。すずか達みんなには悪いが、な）

「それは私から話すわ」

俺の知るシャルロッテが小さく挙手。今のイリスの人格はシャルロッテのモノだ。俺がアールヴヘイム云々の説明をするより、当時の生き証人というシャルロッテからの説明の方が誤魔化す手間が省けるというもの。

「ケリオンの正体は、転移門と呼ばれる神器の一種が人の姿に変身したモノね」

『そんなことがあるのですか！？』

「ええ。存在年数が長く、その間意思疎通の出来る生命と居続ければ、って、生前に聞いたことがある。実際に見たのは初めてね。で、転移門って具体的に何？って顔してる子たちが居るからついでに説明しとく。

すでに察してる子も居るだろうけど、その名の通り世界間を転移するための装置の事ね。生前の私の時代、トランスポーターとか転移魔法なんて上等なモノは無かった。だから神様たちが設置した転移門を使って私たち魔術師は世界を渡って・・・戦争をしてた。

まぁ、それはさて置いて。現代にさほど現存してないはずの神器がどうしてこれほどまでに出現したか。それについても関係してくるから話すね。どうやらリンドヴルムは、神器が普通に存在している

世界から奪ってきたみたいなの」

シャルロッテが説明を始める。大戦と呼ばれた過去の大戦争、ラグナロクという破滅、そこから再生された次元世界（説明が面倒なのか同盟や連合、単一次元などは伏せた）、そして大戦後、歴史と神器を継承した世界と、継承しなかった世界があって、ミッドチルダは後者と説明。

「神器を継承した世界もあるみたいなのね。ケリオンは、その世界の内の1つに存在してた転移門ね」

「その世界って・・・」

「アールヴヘイム。射撃や砲撃といった遠距離系魔術が最も優れてるとされた光の世界で、そして最も神属の住まう天界に近い世界とも言われてた。何故リンドヴルムがラグナロクによってこちらの次元と隔たれたはずの次元に存在するアールヴヘイムに行けたのかは不明だけれど、問題はそこじゃないから横に置いといて、・・・ケリオンはこっちの次元の世界と別次元のールヴヘイムを繋げる門だから・・・」

「その世界に行けば、ケリオン君を助けられる・・・！」

すずかの表情がパッと明るくなる。"ケリオンローフェティタ"の今後の処遇は色々と考えたいが、今はとにかくリンドヴルムがアールヴヘイムへ向かうことを阻止しなければ。アールヴヘイムからまた別の世界に次元航行船を使って移動、そしてまた神器を強奪して

くるかもしれない。それだけは何としても止めなければ・・・

「おそらくその世界がリンドヴルムの本拠地なんだろう。フィレス二尉。以前回収した神器の中に、黄金の腕輪が在ったと思います。今、近くにありますか・・・？」

人化できる神器である"ブリギッド・スミス"シリーズは天使属が扱う神造兵装の1つだ。人化できるだけのスペックは有している。フィレスの表情が曇り、『それが・・・、その腕輪だけが見つからなくて・・・。今朝確認した時は在ったのに』申し訳なさそうにそう言った。ん？っと、小首を傾げる俺とシャルロッテ。ドラゴンハートの神器強奪は阻止したと言っていたよな。それならどうして・・・

「ドラゴンハートに奪われたんじゃないの・・・？」

『騎士シャルロッテ、それはあり得ません。連中は海上で全滅させましたから、誰1人として隊舎への侵入を許していません』

モニター越しに映し出されたその光景に俺とシャルロッテを除く全員が絶句した。海だったんだろうが、そこは氷河と変わり果てていた。水平線の果てまで広がる氷河の上には大小・高低様々な氷山が乱立していた。氷山の中にはドラゴンハートのメンバーらしい人間が閉じ込められてもいる。さすがヨツンヘイム皇族の直系。完璧に"デュック・グラス"を使いこなしている。

「えっと、じゃあ誰かが持ち出したとか・・・？」

『それこそあり得ません。神器を格納していた部屋には課長と分隊長４人の五重の生体認証が必要なので。クラックされた記録も無いですし、盗むのも不可能なはずです・・・』

となれば、「フィレス二尉。その部屋、内側からのロックはどうなんですか？」考えられるのは２つだ。１つは、レーゼフェアが影渡りを使って誰にも気付かれずに進入して奪って行ったか。そして、もう１つは・・・

『それは・・・可能ね。待って。まさかあなた、うちの隊員たちを疑って・・・！』

若干険しい顔をしたフィレスに「違います。そうではなく・・・。ブリギッド・スミスが自ら出て行ったのか、と」そう答える。フィレスを含めたはやて達が、どういうこと？と訊いてきたため、「人化できる神器が、ソレなんだ」って答えた。

それが２つ目の可能性。"ブリギッド・スミス"が目覚め、リンドヴルム襲撃時の攻撃で隊舎が半壊した際に混乱に紛れて逃げだしたんだろう。あまり良くない状況だな。これから連中の本拠地に乗り込もうっていう時に居ないなど。回収した神器と一緒に・・・

（アールヴヘイムへ帰ろうというのに・・・）

そう思っただけで鼻の奥がつんっとなった。まずい。泣きそうだ。たとえアースガルドでなくても、"界律の守護神テスタメント"のままで、同盟世界へ行けるなんて思いもしなかった。２万年・・・

永かった。あまりにも永い道のりだった。だが・・・ようやく帰る術を手に入れた。

「その情報はどこで手に入れたのよ、ルシル」

「シュヴァリエルだ。クラナガンの悪夢の際に一課がブリギッド・スミスを回収したことで、奴は1ヵ月と本拠地で警戒に当たっていたらしい」

「ルシル君、その情報って信じられるん？」

「どうだろうな。だが、今となってはどうでもいい事だよ」

はやての質問にそう答えた俺は、小首を傾げるみんなの間にあるテーブル上に1枚のモニターを展開。表示されているのは次元世界の座標。そしてある世界の座標横に1つの光点があり、そこからまた別の世界の座標へと光点が移って行き・・・止まった。

『これは・・・？』

「シュヴァリエルに発信器・・・のような魔術を仕掛けておきました。奴の居所はモニターに映っている通りです」

みんなが絶句する中、俺は小さくほくそ笑んだ。してやったりだ、シュヴァリエル、ざまぁみろ、と。そんな俺に気付いたのか「そういうわけだったのね」とシャルロッテが呆れ気味に笑った。彼女は俺の独り言を聴いていたようだしな。俺は「まあな」って微笑み返

し。

『この座標・・・。現在、局では認知してないものな気が・・・。少し待って』

別モニターのフィレスが何やら調べものを始めて、『やっぱり。この座標は局でまだ認知していない、新たな次元世界・・・！』そう言った。リンドヴルムの本拠地がこれまで管理局に発見されなかった理由がそれだった。管理局の調査範囲に届いていなかった。だが、とうとうその尻尾を掴んでやった。そう思ったんだが・・・

『これは厄介な・・・』

フィレスが苦い顔をしたため「厄介って、どういう・・・？」すずかが率先して訊いた。返ってきたのは、「発見されたばかりの世界への渡航は、次元航行部の上層部の許可が要るのよ」という、手続きにどれだけ時間が掛かるか判らないような答えだった。通夜みたいな沈痛な重さが部屋に充満した。

『とは言え、下手をすれば次元世界の存続が危ぶまれるような事態になりかねない本件だから、なんとか手続きを簡略してもらうように頼み込んでみる。少し時間をちょうだい』

そうしてフィレスとの通信が切れる。静寂に包まれる室内の中、「私も一旦オチるね。イリス、交代」シャルロッテがそう言って目を瞑り、トサッとソファに座った。そして「状況はあんまり良くないんだね」シャルの人格へと戻った。

「ケリオン君・・・。早く助けに行かないといけないのに・・・」

「すずかちゃん・・・」

泣き始めるすずかにはやて達が歩み寄って慰める。俺はみんなに「少し席を外すよ」一言断りを入れてから退室。いつ呼ばれても良いようにするためか、シャルの家に使えている双子メイドのルーツィアとルーツィエが廊下で待機していて、部屋から出てきた俺に「ルシル君、どうしたの？」と、子供相手にする優しいお姉さん口調で声を掛けてきた。

「（落ち着いて通信したいしな・・・。なら）お手洗いへ行こうかと」

「ルーツィエ。案内してあげて」

「あいあい！　ルシル君、こちらですよ～♪」

断りを入れる前に妹のルーツィエに手を引っ張られ始めてしまった。しょうがなく手を引かれるままに絨毯の敷かれた廊下を2人で歩く。そんな中、彼女が「イリスをお願いね、ルシル君」ポツリとそう呟いたのが聞こえた。声量の低さからして独り言だったのかどうか判らないため、「もちろんです」俺も呟き程度に返したんだが・・・

「よしっ！　言質取った！　数年後には君もフライハイト家の一員か～。私やルーツィアにとっては義弟になるんだね～」

「なんですと！？」

予想外の返しだった。普通、今回の一件でシャルが無茶をしないように、という解釈するだろう。それだというのにルーツィエは将来についての話をしていやがった。さすがに「今の引っかけは卑怯すぎる！」敬語を忘れて素で反論。

「イリスは優良物件でしょ？　可愛いし、強いし、実家はお金持ちだし、権力もあるし、私たち美人なメイドも付いてくるし。ああ見えても将来の夫候補はかなり居るんだぞ～？」

シャルには幸せになってほしい。前世や"テスタメント"時代の彼女を知っているから、"堕天使エグリゴリ"を救いたいという思いと同等近くにそう願っている。とは言っても、俺が幸せにしてやりたいと思っているわけじゃない。

「今の言質は無効です。これから何があろうとシラを切りますから！」

トイレに着いたことで俺はルーツィエの手から逃れ扉を開ける。そして後ろ手で扉を閉めようという時、「それでも私は、君とイリスが結ばれるように、って願い続けるよ」ルーツィエの懇願めいた声が聞こえた。

「（それでも俺は・・・）っと、そんなことより・・・」

トイレの個室に入って便器の蓋に座り、ある人物へ向けて通信を繋

げる。呼び出しコールが少し続いた後、モニターに件の人物の顔が表示された。俺からの突然の通信であっても無表情は変わらず・・・

『はい、リアンシェルト少将です。・・・・どういったご用件でしょうか、ルシリオン・セインテスト特別捜査官』

淡々と俺の通信に応じた。

・―・―・―・―・―・

ロストロギアを専門に蒐集する組織リンドヴルムの本拠地である天空城レンアオム。様々なデザインの城や塔が建つ浮遊するその島は、拠点である無人世界の朝焼けに染まる空を悠々と進んでいた。

レンアオムの中央にそびえ立つ本城の1階廊下。そこを歩くのは3人。"エグリゴリ"のトップ3の1機であり、リンドヴルムの蒐集実行部隊の総隊長である、シュヴァリエル・ヘルヴォル。ヴァルキュリア。同じく"エグリゴリ"の1機であるレーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。そして、拉致されたケリオンだ。

「本当に、僕があなた達の言うことを聴けば、すずか達を傷つけないんだな・・・？」

「もちろんだとも。先ほどはハート2が半ば暴走してあの子供らを傷つけてしまったが、次は無い。たとえ攻撃されようとも傷つけずに無力化する。まぁ、あの子供らがここレンアオムに来ることが出来れば、の話だが」

ケリオンが大人しく連れ去られた理由は、すずか達が殺されてしまうかもしれないという不安に付け込まれたレーゼフェアからの取引によるものだった。すずか達の安全と引き換えに転移門としての力をリンドヴルムの為に使うこと、という取引。
ケリオンは記憶を取り戻しながらも失っていた時間の記憶も残っていた。ゆえにすずかへの恋心も健在だった。神器である自分と人間であるすずか。報われない恋だとしても、好きになった女の子、共に過ごした友達の為、ケリオンは自分を犠牲にすることを選んだ。

「でもさ、ここには来られないでしょ。この世界って、管理局の調査の手が伸びてない宙域らしいし」

「ああ。だからボスはここ何十年、連中に逮捕されなかったんだからな」

シュヴァリエルが天井を仰ぎ見た。リンドヴルムの首領であるミスター・リンドヴルムが居るのは本城の上階らしい。視線を元の廊下の先へと戻したシュヴァリエルはレーゼフェアとケリオンを伴って歩みを再開し、そしてとある扉の前で足を止めた。

「この部屋に、ローフェティタが居る」

転移門ケリオンローフェティタは現在、2つの部位に分けられている。1つは門自体であるケリオン。そしてもう1つは、門の開閉や座標設定を行う錠のローフェティタ。リンドヴルムのアールヴヘイム侵攻の際、リンドヴルムをアールヴヘイムに閉じ込め、大蛇ヨル

ムンガンドに始末させようと企てて人化した"ケリオンローフェティタ"。その結果は、残念ながら失敗に終わってしまい、今こうしてリンドヴルムに利用されようとしていた。

「入るぞ、アイリ」

ノックもせず扉を開けたシュヴァリエル。部屋の中から「ちょっ、淑女（ダーメ）の部屋に入る時はノック――・・・ああもう！」怒鳴り声が聞こえてきた。部屋の中には、オーディンと騙っていた頃のルシリオンが融合騎としていた少女、アイリ・セインテストが居た。真っ白な長髪に水色のツリ目、服装はワンピース。本来は３０ｃｍほどの身長だが、今は１３０ｃｍほどの姿――ヴァクストゥーム・フォルムになっている。

「アイリだけじゃなくて、今はローフェティタも居るんだけどね！」

さらにもう1人、黒のセミロングヘアに銀の瞳、着替え途中なのか太腿丈のキャミソールという下着姿の少女が居た。その少女こそがローフェティタだ。シュヴァリエルは「そうだったな。すまかった」と、大人しく謝罪すると、アイリが「アイリと態度違い過ぎだよね」プクッと頬を膨らまた。

「別に構わない。裸を見られようがどうせこの体はどうせ作り物。恥じるようなものはないし。で、何の用？　ケリオンを連れて来てくれたの？」

「正しく。お前のお望み通りにな」

シュヴァリエルにそう言われ、ローフェティタの無感情だった表情がガラリと変わった。少女らしい可愛い笑顔だ。シュヴァリエルに背中を押されて部屋に入って来たケリオンを見た途端に「やっと逢えた♪」ローフェティタがケリオンに抱きついた。

「さぁ、全て揃った。さぁ、アールヴヘイムへの道を・・・開け」

「すぐには無理。この下位次元とアールヴヘイムを含めた高位次元を繋ぐにはそれなりの準備が要る。1ヵ月以上ケリオンと離れていたし、調整も必要だし」

ガクッと肩を落とすシュヴァリエル。そんな彼の様子を見ていたレーゼフェアが「はい、残念♪」ケラケラ笑い声を上げ、「ザマァだね♪」日頃シュヴァリエルに馬鹿にされているアイリも笑い声を上げた。

「まぁいい。それで、門を開けるまでどれだけ掛かるんだ？」

「門を開けるのならすぐにでも。だけど、次元を繋げるには最速で7時間くらいは要るかもね。そんなに時間を掛けないと繋げないわけ、下位次元と高位次元はね。ラグナロク後、界律が時間を掛けて神秘の残滓が根強い世界と、弱い世界を隔て、高位次元と下位次元という、また新しい次元の壁を創った。今となってはその2つの壁に穴を開けられるのは私とケリオンくらいね」

「7時間・・・。部隊編成などに費やせばあっという間か。いいだ

ろう。7時間後に迎えに来る。レーゼフェア、ご苦労だったな。もう帰っていいぞ」

「はーい。また何かあったら呼んでよ。じゃあね」

――影渡り（シュルブリーズ）――

レーゼフェアは自身の影の中へと敬礼しながら沈んで行った。シュヴァリエルは踵を返して扉を開け、「アイリ。お前は時間まで2人の世話役だ。いいな？」と、アイリに命令を下して部屋から去って行った。

「べー、だ！」

アイリは、そんなシュヴァリエルの背中にあっかんべーをし続けていた。

――アールヴヘイム再侵攻まで、残り7時間――

Ｅｐｉｃｏ３６天空城レンアオム～Ｌａｎｄ　ｏｆ　ａ　Ｄｅｃｉｓｉｖｅ　Ｂａｔｔｌｅ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

シャルちゃんのお家から本局の艦船ドック近くの待機室に移動したわたしら特戦班。そこで「主はやて、ルシル、リイン！」海鳴市で留守番してたシグナムとシャマルとザフィーラ、そんで「フェイト、アリシア！」アルフが合流。そんで今は、リンドヴルムの本拠地であると思われる世界へ向かうための次元航行艦の手配、出港の手続きが終わるのを待ってる。

「それにしても、たった3時間で出港許可が下りるなんて異例だよね」

「うん、うん。発見されたばかりの世界へ渡航する時って、調査班の編成とかの手間で数日は掛かるのに。フィレス二尉や一課、どんな手品を使ったんだろう？」

セレスちゃんとルミナがそんな会話をしてるのを横で聞く。そこの事情はまだよう知らへんけど、今回の手続きが許可されるまでの速さは有り得ん程のものらしい。そんな2人の疑問に答えるのが「どうやらリアンシェルト少将閣下がお手伝いなさったそうですよ」ベッキー先輩や。んで、その話に一番反応を示すんがシグナムら、わたしの愛する家族や。

「ベッキーちゃん。その話、どこで・・・？」

「え？　はい。特捜課のオフィスに寄った際にガアプ課長とセイジ課長補佐が、そのような話をしていたのを小耳に挟んだんですけど・・・」

シャマルの質問にベッキー先輩が答える。そんでシグナムとヴィータとザフィーラ、シャマルはなんか考え込むような仕草をした。やっぱりリアンシェルト総部長と、シグナムらの間になんかあるんや。今度こそそれについて問い質そうとした時・・・

「カートリッジ組に、神秘カートリッジを配布する。1人につき10発。連続ロードは、シグナムとヴィータは3発まで。なのは達は、リンカーコアがまだ成長しきっていないため2発まで。シャル、君もだ」

「はーい！」

スライド式の扉から入って来たのは、ジェラルミンケースを両手に携えたルシル君とシャルちゃんや。2人はソファの上にケースを置いてガチャッと開けた。中身は話の通りいろんな口径のカートリッジ、それになのはちゃんとアリサちゃん専用のマガジンが入ってた。ルシル君は出港までの時間の空きを利用して、神秘を含んだ魔力が込められたカートリッジを作ってくれてた。なのはちゃん達にカートリッジを手渡してくルシル君とシャルちゃんやけど、「大丈夫か？　ルシル君」の顔色が若干悪い気がしたから声を掛けてみる。

「ああ、大丈夫だよ。回収してある神器から神秘も魔力も吸収したことで、俺自身の魔力は使っていないから疲労も魔力消費も無いよ。もし、俺を見て体調が悪い、みたいなことを考えたのならそれは・・・」

そこまで言ったところでルシル君は明後日の方を遠い目で見た。ドキッとする。そやけどいつもの胸の高まりとは全然ちゃう。今のルシル君の目にわたしらのことは見えてへんって判る。ルシル君がどこか遠いところへ行ってしまうような・・・そんな不安がわたしを襲ってきた。

「ルシル君・・・！」

ルシル君の制服の袖を掴む。ルシル君がどこにも行かへんように、わたしの側に繋ぎ止めておきたいために。するとルシル君は「ん？　はやて、どうした？」いつも通りの、わたしの大好きな微笑みを向けてくれた。顔が一気に熱くなる。それと同時に「ううん。なんでもあらへんよ♪」嬉しさもいっぱいになって不安が消えたから、微笑み返しつつルシル君の袖から手を離す。

「で、だ。カートリッジシステム搭載のデバイス持ちじゃない魔導師・騎士には、・・・コレを渡しておく。我が手に携えしは確かなる幻想」

２つのケースの隣にいくつものカードホルダーが現れた。カード組になるわたしは「コレはなんなん？」って指さして訊いてみた。

「対神器の切り札だよ。神器の能力を抑え込み、なおかつ神秘を封じる札だ。使い方はこうだ。ホルダーから札を出し、投げる」

実際にホルダーからお札1枚を取り出して投げる仕草をしたルシル君。アリシアちゃんが「どうしたの、そのお札」って質問。返ってきたのは「造った」の一言だけ。わたしらが呆けると、「あれ、言ってなかったか？　俺は、神器を造れるんだ」そう言って自慢げに笑った。

話を聴けば、ルシル君のご先祖様には神器作成スキルを持ってる人が居ったらしくて、ルシル君はそのスキルも継承してるとの事。そやけどやっぱり材料の問題や、ルシル君自身の魔力・神秘の消費が著しいから多用は出来ひんらしい。

「一度投げれば後は勝手に神器へ向かって飛んでくれる、追尾機能を付けておいた。迎撃される場合もあるが、神器に当たればその能力を封じられるようになるから、対神器戦はかなり楽になると思う。もっと早く渡したかったが、この枚数と対神器効果だからな。作り終えるのにこの今まで掛かってしまった」

そう謝るルシル君やったけど、時間を掛けた分だけのアイテムを造ってくれたことにみんな感謝してる。わたしもホルダーを受け取って、制服のスカートのベルトに引っかけた。それからフィレス二尉が戻ってくるまでわたしらはリンドヴルムとどう戦うかの作戦を考えた。神器を所有する兵を見つけたら連携して、神器封じのお札で神器を封印、そんでバインドで拘束。問題はハート2やけど、今度はルシル君以外のみんなが一緒に戦うから、きっと大丈夫や。

「みんな、お待たせ。艦の手続きも、応援メンバーの選出も、神器の詰め込みも無事に終わったわ。さ。移動、移動」

手続きを終えて戻ってきたフィレス二尉の指示に「了解！」敬礼して、待機室を出た。ドック横の廊下を歩く中、わたしらが乗艦する次元航行艦が窓ガラス越しに見る。フィレス二尉から聞いた話やとアースラの同型艦で、巡航L級3番艦、艦名はジャスミン。アースラは確か・・・8番艦やったな。

そんでわたしらはジャスミンに乗艦して、ブリッジのスタッフさん達に挨拶。その後はレクリエーションルームで英気を養うことになったんやけど・・・

「ガアプ課長！？」

レクリエーションルームには先客が居った。真っ先に視界に入ったのは、わたしら八神家やシャルちゃん、ルミナ、ベッキー先輩が所属してる特別技能捜査課の課長、クー・ガアプ一等陸佐やった。居ったのはガアプ課長だけやない。

「トゥーリア一尉・・・！」

「エレフ二尉も」

「テレジアさんも居るですぅ！」

「クララちゃん！」

「テレサ先輩やエリザ先輩もか」

海鳴温泉の時にも応援として来てくれたトゥーリア・サクロス一等陸尉。八神家の教育係を担当してくれてたエレフテリア・マーヴ二等空尉。それにテレジア・エイルプス准空尉先輩。クララ・リーク エイジ准陸尉先輩。テレサ・テレメトリー一等空士先輩。エリザヴェータ・テルアウンチェア一等陸尉先輩、といった先輩方、あと機動一課の実働部隊の面々がそろってお茶してた。

「ご苦労様、みんな。あなた達も今のうちに英気を養っておきなさい」

「どーんと先輩たちを頼っておきなって！　このテレサが、並み居るリンドヴルム兵をコテンパンにしちゃうから♪　ね？　クララ、テレジア♪」

「私も全力で頑張るよ！」

「当然です。同じ特捜課の仲間を、管理局をここまでコケにされて黙っていられない」

「シュヴァリエル相手じゃ散々で、神器持ちには勝てないみたいだけど、ただの魔導師相手なら負けない！」

「今日こそリンドヴルムとの長年の因縁に決着をつける・・・！」

「うちの会社にも何度か手を付けられてますから、その借りも一緒

に返しましょう」

頼りになる先輩方とも合流して、わたしら機動一課＋特別技能捜査課（全員やないけど・・・）は一路リンドヴルムの拠点があると思しき世界へと出撃した。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒なのは†††

３時間くらい掛けて次元空間内を航行して辿り着いた、本局でもまだ発見できてなかった異世界に到着。新発見されたばかりな世界への渡航は本来なら調査隊だけしか許されないって聴いた。

まずは調査隊を編成して、魔法文化の有無や生態系などなどを何ヵ月と掛けて調べて、その結果魔法文化があって、生態系に問題がないようなら、管理世界への加入を勧めるためにコンタクトを取る。

上手くいけば新しい管理世界の誕生。でも、管理局が設立されてから何度か拒否を受けて戦争になっちゃったりしたとも聞いてる。ちなみに魔法文化が無かったらそのまま管理外世界に認定されて終わりだそう。

「ケリオン君・・・今、助けるからね」

ジャスミンのトランスポーターホールにみんなで集まって、巨大モニターで宇宙の中に輝く１つの星を見る。ルシル君がシュヴァリエルさんに付けた発信機の役割を果たす魔術が示す座標の世界。そして今は、あの世界にサーチャーを飛ばして偵察中。その映像が・・・・来た。星の映像が世界内の映像に切り変わる。自然豊かな世界みたいで、見たことも無い動植物たちが自然を謳歌してた。

『こちらブリッジ。ザッと生命反応を確認した結果、無人世界であると思われる。あと、この映像を・・・』

また映像が切り替わる。異様な光景がモニターに移った。夢の国ほどに大きな島が空に浮いていて、ゆっくりと移動してた。続いて『この島から多数の生命反応を感知した』とのこと。ここで、「間違いない。アレがシュヴァリエルの、リンドヴルムの本拠地だ」ルシル君が断言した。

「ルシル君、判るの？」

「はい、まぁ。あの浮遊島に意識を集中させると、シュヴァリエルに付けさせた自分の魔力や神秘が判り、それに・・・これは・・・」

ガアプ一佐の質問に途中まで答えたルシル君が押し黙っちゃった。みんなで小首を傾げてると、「とてもまずい神秘を感じるんです」そんな今、聞いておいて良かったのか悪かったのかどうか判らないことを言った。シュヴァリエルさんやハート2以上に厄介な何かがあの島に居る、もしくは在る、みたい・・・。

「とにかく、です。神器持ちやハート2は特戦班で対応し、シュヴァリエルは自分が。ガアプ課長たちは・・・」

「ええ。神器持ち以外の一般兵の逮捕ね。大丈夫。何十人、何百人居ようとも私たち特捜課のスキルを使えば、拘束から即拘置所へ送り込める」

ガアプ一佐や特別技能捜査課のみんなが強く頷き合った。そしてジャスミンは、浮遊島から距離を置くようにして無人世界へと降下を開始。何故なら浮遊島外周には砲台のような物が十数基と並んでるのを確認したから。降下中に集中砲火なんて受けたら一溜まりもないし。大気圏内に降下完了したら、浮遊島へとゆっくり進む。

『ルシリオン捜査官。準備はよろしいか？』

『はい。このままの速度で直進をお願いします、艦長。東部の砲台3基を片付けます。その後は・・・』

『全速前進で浮遊島直上へ突入・・・。その後は機動一課と特別技能捜査課の面々が浮遊島へ降下。戦闘開始。我々ジャスミンは島から距離を取り待機』

ブリッジの艦長と甲板にひとり佇んでるルシル君が通信で今後の私たちの作戦内容を確認した。私たちのこれからの動きはおおよそ2人の話した通りになる予定。モニターに映るルシル君が騎士服のポケットから蒼く輝く石を取り出した。神器から吸収した魔力を物質化させた物で、ルシル君が言うにはドーピング。初めて見た時、ジュエルシードにそっくりだって思った。

『力神の化身（コード・マグニ）、戦滅神の破槍（コード・ヴィズル）、女神の宝閃（コード・ゲルセミ）、女神の陽光（コード・ソール）・・・』

ルシル君の全身がサファイアブルーの魔力に覆われて、頭上にルシル君独自の魔法陣が3つと展開。そして『ジャッジメント！』その

号令の下に3つの魔法陣から、雷撃、火炎、光の砲撃が同時に発射された。
砲速はとんでもなく速くて、特に速いのは雷の砲撃。ジャスミンと砲台の距離は１０ｋｍ近く離れてるのに、発射から着弾まで5秒と掛からずに真正面の砲台に着弾。遅れて他2発が左右の砲台に着弾、派手に起こる魔力爆発。

（うわぁ・・・、あの距離でも当てることが出来るんだぁ・・・）

モニターに映る爆炎に、「おお！」レクリエーションルームに居る一課の人たちが歓声を上げて、指笛まで鳴らした。みんな、砲撃の威力、射程、命中率に驚いてるみたい。正直、私たちルシル君の友達組も驚きだよ。威力や命中率は、模擬戦する度に思い知らされてるから判ってたけど、目標が１０ｋｍ先でも完璧に着弾させることが出来るの射程の広さには驚き・・・というより、若干引いた。

『各員、これよりジャスミンは浮遊島上空へ進入する。トランスポーターの転移先は島の陸地。その後、本艦は後退する。ルシリオン捜査官、引き続き砲台の破壊を頼む』

『了解です』

「ルシル君。シュヴァリエルとの戦いのために魔力温存しとかんと・・・」

はやてちゃんが、砲撃発射準備に入ったルシル君にそう伝える。すると『ありがとう。でも大丈夫』ルシル君がそう言って微笑んだ。

はやてちゃんは「ルシル君の大丈夫って、どこか信頼度が足りひんわ」ボソって呟いた。付き合いの長いはやてちゃんだからこその呟きかも。

『浮遊島上空まで１０秒！』

ブリッジクルーからのカウントに、私たちはグッとデバイスを握り直したり、深呼吸したり、頬を叩いて気合を入れたり、それぞれ戦闘意識を高める。そこに「フェイト、アルフ、みんな！　頑張って！」ジャスミンにお留守番するアリシアちゃんが応援してくれたから、「うんっ！」、「はいっ！」みんな頷き返した。

「――５、４、３、２、１、降下！』

転移時に発生する光で視界が一瞬だけ真っ白に染まって、光が治まったらそこは「ここが、リンドヴルムの本拠地・・・！」ザンクト＝オルフェンと同じような石畳の街路が四方八方に伸びてる、浮遊島の中だ。

「あちこちから鐘の音がして耳が痛いね・・・！」

「侵入者を報せるための警鐘だろう」

アルフとザフィーラの耳がペタッと伏せられてる。聴覚は私たちの中の誰よりも優れてるから余計にうるさく感じるんだね。

「テレジア、お願い出来る？」

「お任せを、ガアプ課長」

テレジアさんが両腕をバッと左右に広げて目をスッと閉じると「すごい数。一斉にこちらへ敵兵が向かって来ます」そう言って、今わたし達が居る地点からどの辺りに、どれだけの人数が、これから私たちに対してどうするか、そういう情報を教えてくれた。

「すごいね・・・」

「うん」

フェイトちゃんの驚きに同意する私。テレジアさんのスキル・広域捜索っていうのは、半径５ｋｍ圏内に居る悪い思考を持つ人の考えてる事を読み取るいうもので、奇襲などの突発的な状況変化を前以て察知できるとのこと。そして、「侵入者を発見！」神器じゃなくてデバイス持ちのリンドヴルム兵が十数人とあらゆる路地から飛び出して来た。

「ただの魔導師ね。１人だけ残して、他は拘置所送りにしましょうか。みんな、バインドを！」

ガアプ一佐の指示に従って、バインド魔法が出来る魔導師全員でリンドヴルム兵を拘束してくと、「参ります！」クララさんがバインドから逃れようともがく兵たちにちょんっと両手で触れてく。するとクララさんに触られた兵たちが一瞬で消えた。クララさんのスキルは強制転送。手で触れた物を、知ってる座標に転送させることが

出来るっていうものらしくて、今の兵たちは管理局が運営する数多くの拘置所（武装隊が待ち構えてる）へと飛ばされた。

「ガアプ課長。よろしくお願いします」

「ええ」

唯一強制転送から助かった兵が1人。すずかちゃんのリングバインドで拘束されたその兵にガアプ一佐が駆け足で近寄って、「時空管理局・特別技能捜査課課長、クー・ガアプ一等陸佐です」ジッとその兵と目を合わせて所属、それに名前を告げた。

「どうやってこの世界に！？　この世界は未だに管理局の調査が行われていないのに・・・！」

「企業秘密です。では、答えてください。神器を持つ本隊、神器やロストロギアがしまわれている場所、リンドヴルム首領や拉致したケリオンの居所、兵の配置・・・、あぁ、あと、この浮遊島の地図を持っているならください」

「ふざけ――・・・はい。これがマップデータです。本隊やボスはここ、レンアオムの中央の位置する本城に居るはずです。これから転移門を開くと言っていたので」

「レンアオムとは、この浮遊島の名称ですか？」

「そうです。天空城レンアオムは、上層部には多数の城と塔、下層

部には次元航行艦を４隻、ロストロギア艦を３隻と格納されているドックがあります。神器やロストロギアの格納庫はこの４つの城内にあります。兵の配置は・・・こうです。ケリオンというのは判りません」

普通なら黙秘するんだろうけど、その兵はスラスラと話してくれた。ガアプ一佐のスキル・強制聴取は、相手と目を３秒間合わせることが発動条件で、一度発動すると相手から嘘偽りのない話を引き出せることが出来るようになる。重大事件の被疑者への取り調べはガアプ一佐が選任してるって聴いた。

「情報は引き出せました。クララ、お願い」

「了解です！　さぁ、楽しい拘置所生活が待ってるよ」

クララさんがトンッと肩に手を置いた瞬間、その兵もどこかの拘置所へと強制的に転移させられた。

「転移門。ケリオンのことね。・・・特戦班はこれより本城を目指してください。特捜課は機動一課と共に一般兵の排除とロストロギア・神器の回収を行います」

そうして私たちは一旦分散することになった。私たち対神器の特戦班が目指すは浮遊島――天空城レンアオムの中央にそびえ立つ本城。そこにケリオン君、それにシュヴァリエルさん達、そして・・・リンドヴルムの首領が居る。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒フェイト†††

リンドヴルムの本拠地があると思われるある無人世界へとやって来た私たちは、リンドヴルムの本拠地・天空城レンアオムっていう空に浮かぶ巨大な島へと降り立った。
そして今は、神器を所有するロストロギア蒐集実行部隊やリンドヴルム首領、それに拉致されたケリオンの居る本城とかいう中央に建つ城へ向かっている最中。

『こちらルシリオン。砲台１２基は片付けた。行き先は・・・中央の城、でいいか？』

「こちらフィレス二尉。そうよ。本隊と首領、ケリオンが居ると、構成員より情報を引き出せた。それと、転移門を開こうとしている、との情報アリ」

『転移門を開く・・・、ということは・・・まさか！　了解です。先行します！』

空を見上げれば、蒼い光の尾を引いて本城へと向かって行くルシルの姿を確認できる。私たちも速度を上げていく。と、『実行部隊を確認。本城入口を護っている。数は１２』ルシルから報告を受けた直後、地上からルシルに向かって射撃や砲撃やら斬撃が何十発と放たれた。だけど今のルシルは空戦形態ヘルモーズ。掠りもしていない。そしてお返しとばかりにルシルも魔術の砲撃を連射。一方的な爆撃だ。

「今の内に突撃します！　デュック・グラス、力を貸してください！」

フィレス二尉が神器、"デュック・グラス"を武装した。両腕と背中に氷のアーマーが生まれて、右腕と同化するかのように大剣が、左腕に同化するかのように１ｍ近い楕円形の盾が造られた。そして、私たちも遅ればせながらも本城の庭に到着。

「新手だ！　例の対神器部隊だ！」

神器を持った兵たちが私たちに気付いた。数人がルシルを撃墜しようとしたままで、他数人が私たちに向き直った。すぐさますずかとルミナとベッキーが、ルシルから渡されていたカードホルダーから札を数枚と取り出して投げた。札は高速で飛んで行って、兵たちは迎撃しようとしたけどそれより早くそれぞれの神器に付着。

「ん？　あれ？　おい、神器の能力が発動しな――」

――ソニックムーブ――

――閃駆――

――ヒルンダプス・カウダクトゥス――

――フォックスバット・ラン――

私とアリサとシャルとシグナムの４人で高速突撃。神器が使えなくなって慌てふためく兵たちの手から神器を弾き飛ばして、なのは達

が一斉にバインドで拘束していく。1ヵ月前にクラナガンで戦った神器兵たちも当然その居たけど、いとも簡単に無力化することが出来た。

「なんていうか、ルシル様様ね」

残りの神器兵を余裕で撃破し終えたルシルを見てアリサが呆れ気味に小さく笑った。ヴィータも「連中にとっての最大の不幸は、こっちにルシルが居たことだな」って、"グラーフアイゼン"の柄で肩を叩きながら笑うから、私やなのは達は「うん、うん」頷いて同意を示した。

『次から次へと来るぞ！　注意！』

空に留まったままのルシルからそんな知らせが入る。やることはさっきと変わらない。垣根や庭に乱立している柱に身を隠して、私たちを迎撃しようと躍起になっているエントランスから飛び出して来る神器兵たちを待ち伏せ。

すずか達が神器封じの札を使って神器兵たちの神器を無力化して、私たちで神器を弾き飛ばして、なのは達がバインドで拘束。ルシルもルシルで城内に直接魔術砲撃を撃ち込んでいっていて・・・綺麗だった本城が見るも無残な廃墟へ変化していった。

「・・・粗方終わった・・・かな？」

エントランスから出て来ていた神器兵がようやく途絶えた。警戒態勢のまま庭に散っていた私たちは庭の中央で合流。そしてすずかが

「サーチャーで城内を探ってみる」そう言って足元に魔法陣を展開。周囲に4つの魔力球――サーチャーを創り出して、エントランスから侵入させた。

「広域遠隔目視観測魔法、ワイドエリアサーチ。コレに先行させてみよう」

4つのサーチャーに続いて私たちも侵入しようとしたその瞬間、私たちは目を疑うような光景を目の当たりにした。空に飛んでもなく大きな黄金の門が現れたのだ。大きさの違いこそあれ、あの門の正体を私たちはきっと知っている。

そう、「ケリオン君・・・！？」ここ数ヵ月と一緒に過ごしてきた私たちの友達、ケリオンで間違いない。あの子の正体である転移門の本来の姿がきっとアレなんだ。その偉容に私たちが呆けていると、ジャスミンから通信が入った。

『レンアオムの下層ドックより次元航行艦と思しき艦艇2隻の出港を確認した！　目的地はおそらくあの巨大な門と思われる！』

ここで私たちは気付いた。神器兵たちは、アールヴヘイムへ向かう人（おそらく首領）が門を潜るまでの時間稼ぎ役――スケープゴートにされたんだって。一番早く行動に移ったのは「これ以上アールヴヘイムで好き勝手をさせてなるものか！」ルシルと、「私も・・・！」すずかだった。

ルシルは空戦形態中だからあっという間に遥か彼方へと飛んで行ったけど、すずかの飛行速度は普通だから完全に置いてけぼりを食らった。でも、行動が遅れた私たちにとっては幸運だった。私たちも

急いで空に上がってすずかと合流、ルシルの後を追おうとしたんだけど・・・

――クヴィウート・キブーシュ――

半透明な半球状の結界が張られてしまって、私たちは閉じ込められてしまった。そして、続けてこの結界を張った術者の姿を視認することになった。本城の屋根に立っている人影。頭上に虹色に輝く環があって、背中からは４枚の白い羽、彫刻のような白い体を持つ・・・

「ハート２・・・！」

天使をその身に宿すことが出来るという、人造生命体・・・ホムンクルス、シュヴァリエル並みに厄介な神秘を有する超常的な存在、ハート２がそこに居た。

・―・―・―・―・

ルシリオンの魔術によって天空城レンアオムの対空防衛砲台の３基が破壊されていたその時、本城にてある動きがあった。シュヴァリエルとアイリ、それに女性１人の計３人が、ここレンアオムの下層ドッグへ続くエレベーターへ向かって歩いて（アイリは本来の姿のため、浮遊している）いた。

「それじゃあ、ハート３は、ハート２と共に本城に残って管理局どもを足止めしておけ」

「了解です、シュヴァリエルさん。・・・あの、転移門の少年と何やら約束していましたが、それは今後も適用されるのですか？」

「ハート2に限って言えば、な。お前には厳守しろ、とは言わないが。まぁ、少しは心がけてやってくれ。ケリオンの最後の願いだ」

「了解です。では、私はこのまま本城の警備、管理局員の足止めの任に就きます」

「ああ、頼む。あー、そうだ。言い忘れていた。命令1個追加だ。神器王・・・、銀髪・虹彩異色のガキは素通りさせていい」

「銀髪・虹彩異色の少年ですね。了解しました」

女性――ハート3は足を止め、下層ドックへ続くエレベーターに乗ったシュヴァリエルとアイリを見送った。扉が閉まり始めた中、アイリはそんな彼女を横目で一度見た後、シュヴァリエルの顔の前へと移動。降下して行くエレベーター内でアイリは「何を考えてるの？」そう訊ねた。

「んあ？　決まっているだろ、この手で神器王を殺す為さ。ハート2やハート3じゃ敵わないだろうしな」

「・・・その為に、イシュリエルっていうサーチャーに気付いていながらも放置してたわけね？」

シュヴァリエルは、ルシルが発信機として使用したサーチャー代わりの魔術・イシュリエルの存在に気付いていた。だが、気付いていながらも彼は何もしなかった。それが不思議でならないアイリは「どうして放置したの？」とさらに質問を続ける。

「神器王はリンドヴルムの本拠地、ここ天空城レンアオムの場所を知ろうとした。それはつまり乗り込もうという意思表示だ。となれば、奴も本気の全力全開で戦いに来るだろう。そして、俺を打倒するつもりということは何かしらの対抗策を得ていると考えられる。そんなアイツを相手に逃げるわけにはいかないだろうが。真っ向からその手を叩き潰す」

拳を強く作ったシュヴァリエルは、「マイスターは負けないもんね、絶対に！」希望を諦めていないアイリを見て鼻で笑った。当然「何が可笑しいの！？」アイリは怒る。アイリは信じて待っていた。自分を助けに来てくれるその日を。そして最も敬愛するマイスター・・・ルシリオンや、かつての家族だったシグナムら守護騎士の元へ帰ることが出来る日を。それを笑われたのだから仕方のないことだ。

「いや別に・・・。あぁ、そうだ、アイリ。お前、俺とユニゾンしろ」

「・・・・・・・・・はぁ！？」

「そんなに驚くことか？」

「あ、当たり前だよね！　アイリと融合！？　正気！？」

シュヴァリエルの命令にアイリが、信じられない、という風に驚愕する。それでも「当たり前だ。思考回路にバグは無い。俺は、正気だ」と、シュヴァリエルはその考えを改めようとはしない。

「融合事故って知ってるよね？　シュヴァリエル」

「融合騎が融合した騎士の意識を乗っ取るっていうあれだろ」

「アイリ。マイスターのことが大好き、愛してる。そんなマイスターとの戦いで、アイリがシュヴァリエルの味方になると思うわけ？」

「おいおい。奴と一緒に居た時間は1年も無いんだろ？　俺とお前の関係はベルカ崩壊時からだ。ちょっとくらいは俺の事を大事に思ってくれないわけ？」

シュヴァリエルは真っ直ぐアイリの目を見てそう訊いた。共に過ごした時間が1年と満たないルシリオンより、何百年と共に居る自分に情があるだろう、と。

「・・・そうだね。あなたは野蛮で乱暴で、紳士には程遠過ぎるけど・・・でも、好感は持ってるよ。あなたの言う通りね」

何かと悪態を吐き合う間柄だったアイリとシュヴァリエル。関係としては良好な部類に入ることだろう。それでも「けど。あなたとマイスターとの好感度の差は、何があっても覆らないの」アイリにとって一番の特別は、ルシリオンなのだ。

「マイスターはね。アイリにたくさんの初めてをくれたのね。初めてのアイリだけの名前。初めての家族。初めての友達。初めての温かな暮らし。初めての恋。初めての悲しい別れ、初めての嬉しい再会。・・・みんな、アイリにとって大事な初めて。・・・でももし、マイスターより先にシュヴァリエルに会ってたら、アイリは身も心もあなたやリンドヴルムに捧げてたかもね」

頬をピンク色に染めてテレ笑いのような笑顔を浮かべるアイリ。シュヴァリエルは「そうかい。・・・それじゃあ、お前に新しい初めてをやるよ。好きな奴との永遠の別れってやつを、な」と、口端をつり上げて笑った。

「最悪だね、そんな初めて」

「俺の中っていう特等席で見せてやるよ。神器王の死に様を」

「アイリと融合したこと、後悔しないように気を付けてよね」

「フッ。・・・無駄話はここまでにしておこうか。ロストロギア艦・ラレス・ウィアレス1番艦に乗艦後、俺たちはアールヴヘイムへ向かう。神器王も追って来るだろう。奴にとって思い出深いあの世界で、奴の人生を終わらせてやるさ」

エレベーターが止まり、両開きドアがスライドして開く。そこはリンドヴルムが所有する移動手段の1つ、通常の次元航行艦やロストロギアに分類される戦艦が停泊しているドック。シュヴァリエルと

アイリは一番手前に停泊している戦艦、"ラレス・ウィアレス"の1番艦へと歩いて行く。

「ねぇ、シュヴァリエル。コレでちゃんとアールヴヘイムに行けるの？　以前みたくスクラップやミイラ化するような最悪は御免被りたいんだけどね」

「問題ないだろ。きちんと座標設定を行うからな」

「ならいいけど」

搭乗口より乗艦した2人はそのまま艦橋へ向かい・・・

「シュヴァリエル、アイリ、搭乗完了です。・・・ボス」

そしてシュヴァリエルは、艦長席に座る何者かへそう報告した。

――アールヴヘイム再侵攻まで、残り・・・・２０分――

Ｅｐｉｃｏ３７竜の矜持～Ｔｈｅ　０ｔｈ　ｔａｓｋ　ｆｏｒｃｅ：　Ｄｒａｇｏｎ　Ｈｅａｒｔ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

ついに"ケリオンローフェティタ"が顕現した。全長１４ｋｍ、全幅５ｋｍという超巨大な転移門。現代の次元世界にその偉容を見せつけている。

初見は幼少の頃だった。フノスがカノンを"アンスール"へとスカウトし、それを承諾したカノンを迎えに行った時だ。その巨大さに、フノスに同行した俺やイヴ義姉様、３人そろって度肝を抜かれたものだ。そんな転移門がとうとう・・・。

（フィレス二尉からの報告ではアールヴヘイムへ繋げることが出来る状態なのだということは判っている。あの巨大さだ。少し開いて出来た隙間だけで、こちらの次元とアールヴヘイムの在る次元を行き来できるだろう）

ガアプ課長のスキル・強制聴取によってリンドヴルム兵から引き出された情報によれば、リンドヴルム本拠地であるここ天空城レンアオムの下層には次元航行艦やらロストロギア艦など数隻が停泊するドックがあるという。

そして今、そのドックより艦が２隻出港したと聞いた俺は、はやて達からひとり離れてその艦を追うことにした。手にする"エヴェストルム"の神秘カートリッジを２発ロード。穂に刻まれたルーン文字がその神秘に反応して発動し、ただのデバイスが神器へと昇華さ

れる。それと同時に、その影響で俺の魔力炉（システム）の稼働率が上昇し、俺自身も魔導師から魔術師へと昇華する。

『ルシル！　アリシアだけど！　フェイト達がハート２の結界に閉じ込められちゃったんだけど！』

レンアオムの下層へ向かうために飛んでいる最中、ジャスミンで留守番しているアリシアから念話が入った。ハート２への戦力は十分とは言えないが、真っ向から戦って一方的に倒されるような戦力じゃないと思っている。だから『大丈夫だ、信じろ！』それだけを言ってやる。確かに気にはなるが、それ以上にシュヴァリエル達を止めなければ、という気持ちが強いため俺は引き返さない。

『そんな・・・、ルシル！』

『アリシア。特戦班総出に加えてフィレス二尉が居るんだ。大丈夫、大丈夫だ、信じろ。っと、切るぞ。そろそろ戦艦と接敵するからな』

『ちょっ、それ、つめた――』

半ば強引だったが念話を切る。そして、全体的に灰色をした三日月状の戦艦２隻を目視した。形状からしてロストロギア艦なのだろう。意識を集中させ、シュヴァリエルに付着させた魔力――イシュリエルの神秘を探り、シュヴァリエルがどちらの艦に乗っているのかを当てる。

「・・・っ！　見つけたぞ、シュヴァリエル！」

当たり前と言うかなんと言うか、先頭を往く戦艦から反応が返って来た。相手はロストロギア。管理局員としては認知されていないロストロギアを独断で破壊するわけにはいかないんだが・・・。

「緊急事態につき申し訳ありません！」

機動一課が回収した神器全てから魔力と神秘を吸収し、そして結晶化させた魔石を魔力炉（システム）に同化させて使用魔力量を無理やり増加させてやる。本来はジュエルシードで行う予定だったことだが、神器というジュエルシード以上の魔力を有するドーピング材を手に入れたため、今回はジュエルシードの役目は無し、だ。俺としては大助かりだ。出来るだけ温存しておきたいからな。

「そこに居るんだろッ、シュヴァリエルッ！！」

その艦に向かってそう叫ぶと、艦全体の至るところに六角形の青い光が生まれ、それより青い光線が何十本と一斉射出されてきた。光線の軌道は3つ。真っすぐの直線、曲線を描くモノ、直角を描くモノ。直線や曲線はまぁ、そういう軌道をする砲撃を俺も使うから気にはならないが、残り1つの砲撃は直角に、しかも連続で曲がりながらも俺へと襲いかかって来たからビックリだ。

「シュヴァリエル、出て来い！　逃げるのか！」

――舞い振（コード）るは、汝（シャルギエル）の麗雪――

光線を躱しながら氷の槍シャルギエルを「ジャッジメント！」４０本と一斉射出。魔術と化している今の俺の魔術に、単なる古いだけの骨董品風情の攻撃などどうってことない、そう思っていた。だが、全弾が光線の弾幕によって迎撃されてしまった。思わず「は？」とあんぐりだ。あの艦にも何かしらの細工が施されているようだな。

（またレーゼフェアの悪ふざけか・・・？）

今の艦の状態はまるでハリネズミ。砲台という概念が無いため艦の３６０度から光線は放たれ、艦体そのものが砲台と化している。しかも、もう１隻からも何十発という砲撃の集中砲火が。

「（俺と戦わずに艦砲だけで済まそうというのか・・・？）上等だ、この前哨戦、準備運動としてやろう！！」

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

ケリオンの正体、転移門"ケリオンローフェティタ"がその偉容を露わにした。てっぺんや底が見えそうにない程にとんでもなく大きな黄金の門で、太陽光に照らされて、ここレンアオム全体が黄金の光の幕に覆われてる。

その"ケリオン"へと向かおうとしてる艦が、レンアオムの下層に有るっていうドックから２隻と出港したってジャスミンからの報告を聴いたルシルは大慌てで飛び去って行った。目的はその２隻の艦。"ケリオン"、ひいてはアールヴヘイムへ向かうということは、十中八九リンドヴルムの首領や、右腕たるシュヴァリエルも一緒だと思う。

（だからルシルはあんなに慌てて・・・）

わたし達も急いでルシルを追おうとしたんだけど、本城と庭全体を覆うように発生した半透明な膜――結界が張られたことで足止め。瞬時に理解できるその神秘の高さ。そして、この結界を張ってわたし達の邪魔をしてくれた術者を視認する。本城の中央にそびえ立つ塔の屋上に立つ1人の男・・・って、言っていいか判らないけど。頭上には虹色に光り輝く環があり、背中からは純白の翼が4枚、衣類1枚と身に纏っていない彫刻のような真っ白な体。その正体は、人工的に造られた生命体・ホムンクルス。ルシルやシュヴァリエルら"エグリゴリ"以上の神秘を有するっていう、伝承だけでしか知らない天使を宿す為だけの器・・・。

（ん？　神器の書、ヒドゥンカリグラフィを持ってない・・・？）

ハート2の手には天使を召還するための魔導書が無かった。これじゃ神器封印の札を貼り付けることが出来ない。最悪なんだけどぉ～・・・。

「邪魔をしないで！　スノーホワイトッ！！」

――パワーブースト・ガンファイアフォース――

「リフレクティブミラー！　フローズンバレット・リバウディングシフト！」

すずかがハート２の周囲に反射鏡を数枚と展開。そこに冷気弾を８発と連射すると、冷気弾は反射鏡内部で２４発に分裂・高速反射した後、ハート２の前後左右・頭上からと連続着弾。ボフッと冷気爆発が起きて、ハート２の姿が真っ白な冷気に呑み込まれた。

「すずかちゃん・・・」「すずか・・・」

ガチギレしてるっぽいすずかの全力攻撃をまともに受けたハート２だったけど、薄れていく冷気の煙の中から余裕の佇まいをわたし達に見せつけてくれた。すずかは「早く結界を解いてッ！」続けて冷気砲撃・バスターラッシュを放った。ここまで敵意と攻撃を与えればハート２だって反撃するはず。だけど、「ん・・・？」ハート２は何もしないで直撃を許した。

「スノーホワイト！　次の魔法を！　みんなも早く！　ハート２を倒さないと！　ルシル君が行っちゃう！　ケリオン君を助けないと！　早く！」

「お、落ち着いて、すずかちゃん！」

「猪突猛進なんてらしくないわよ、すずか！」

「すずか、冷静になって！」

なのはとアリサとフェイトが、すずかを押さえに掛かった。すずかは「離してよ、なのはちゃん、アリサちゃん、フェイトちゃん！」３人を振り払おうと暴れる。わたしはフィレスとセレスとベッキー

に目配せ。すずかを冷静にさせるには、わたし達も参加しないといけない。

『シャルロッテ様！　よろしくお願いします！』

『了～解。少しの間の筋肉痛は勘弁してね！』

シャルロッテ様と人格交代を行う。わたしの意識は深く沈んで、代わりにシャルロッテ様が浮き上がって行く。そうしてわたしはシャルロッテ様の視界から外界を把握することになった。ユニゾンデバイスのリインに訊いてみたけど、はやて達とのユニゾン中も今のわたしのような感じなんだって。

「みんな。やる事は変わらない。ハート2を墜とす。いいね？　シャルロッテ・フライハイト。イリスに代わり、いざ参る！」

シャルロッテ様はそう言って、"キルシュブリューテ"（急ピッチでドクターに直してもらった）のシリンダーに装填された神秘カートリッジを2発とロード。

「フィレス・カローラ、参る！」

右腕と同化してる大剣、左腕と同化してる楕円形の盾、それらを繋ぐように胸部と背中に纏わりつく氷の装甲――"デュック・グラス"を装備してるフィレスが先行突撃。

「セレス・カローラ、参ります！」

セレスは片刃剣型デバイス・"シュリュッセル"の神秘カートリッジをロードしたうえで左手に持つもう1本の、全てが氷で出来た剣――"氷結剣クロセル"（ルシルの複製神器だ）を"シュリュッセル"と重ね合わせた。すると"クロセル"は一度溶けて"シュリュッセル"に纏わりつき再固形化して、両刃の長剣となった。

「えっと、ベッキー・ペイロード、五精霊が一、雷精グローム・・・、往きます！」

ベッキーも神楽鈴型デバイス・"ドゥーフ・ヴィーゾヴ"をシャランと鳴らすと、光で出来た巨大狐が一匹と顕現した。

「八神シグナム、参るぞ！」

"レヴァンティン"の神秘カートリッジをロードしてボーゲンフォルムへと変形させた。

「おっし！　八神ヴィータ、行くぜッ！」

神秘カートリッジをロードしたヴィータは"グラーフアイゼン"をギガントフォルムへ変形させた。そして、フィレス以外のシャルロッテ様たちはそれぞれが持つ中遠距離魔法を一斉発射。フィレスの脇を通ってわたしやセレスの斬撃砲、シグナムのシュトゥルムファルケン、ヴィータのコメートフリーゲンがハート2へ殺到。

『ハート2が今、どんな天使を取り込んでいるのかは判らないけど、

これだけの神秘を一斉に受ければアイツの神秘の盾も多少はグラつくはず！　そこにフィレスの全力一撃で・・・首を飛ばす！』

初めからハート2を殺す作戦だ。人型をしていても所詮は人形だというホムンクルスって話。ちょっと、ううん、かなり抵抗はあるけどハート2は危険すぎる。生かしておいて後々に天使を以って暴れられたりでもしたら管理局、最悪次元世界が滅びかねない。だから・・・

（ここで絶対に決着をつける！）

――マゲンプリッァ――――

攻撃の数と同数のシールドがハート2の周囲に展開されて、攻撃を迎撃するためか射出された。そしてシャルロッテ様たちの攻撃は放たれて来た盾の弾丸に着弾して行って迎撃され始める。そこになのはの「バスタァァァァッ！」ディバインバスター・エクステンション、フェイトの「はぁぁぁぁぁッ」ジェットザンバー、アリサの「うりゃぁぁぁぁッ！」ヴォルカニックスカッシャー、3人の大魔法がシールドの合間を縫ってハート2に着弾。発生した魔力爆発で本城が崩壊、あと爆風で「ちょっとぉぉぉーーーっ！？」フィレスが吹っ飛んだ。

「「「あ」」」

あ、じゃないよ3人とも。やるなら射撃魔法による爆撃・・・もダメか。体勢を立て直したフィレスに「ごめんなさい！」謝る3人に、

「次は気を付けて！」フィレスは魔力爆発の中へ突撃。そしてすぐにガキィンっていう甲高い音が聞こえて、直後に発生した衝撃波が噴煙を吹っ飛ばした。

「ここで新手！？」

ハート2を護るかのように佇んでる1人の女性。その女性の格好を見て真っ先に騎士だって判った。動きやすさ重視の為か綺麗な赤髪はベリーショートヘア。トップスはノースリーブのジャケット、ボトムスはタイツ、オーバースカート、胸当てや手甲・脚甲を装着していて、腰には2本の剣の鞘が有る。あと、背中からはオレンジ色の光の翼が一対あって、両腕にも光の翼が同化してる。明らかに神器によるもの。

「私は、第0小隊ドラゴンハート、ハート3。ここから先は、私が剣として、ハート2を盾として、あなた達の相手を務めさせていただきます」

「ああもう、冗談じゃない！　ここに来て第88位の神造兵装！？　しかも腰の2振りの剣や防具も神器じゃん！　神器フル武装って馬鹿じゃないの！？」

シャルロッテ様が喚く。どうやら新手のハート3はとんでもない人らしい。フィレスがわたし達のところまで一度後退して、「騎士シャルロッテ、どうすれば！？」そう訊ねた。シャルロッテ様が応じる前に「そんなの決まってます！」すずかが太腿に付けたホルダーから札を取り出して、ハート3に向かって投げた。

「神器封じの札だというのは既知です」

――ゾハルコテヴ――

ハート3の前面に発生した綺麗なオーロラ。すずかの投げた札9枚がそのオーロラに触れると一瞬で燃え散った。ハート3は直立したまま光翼が同化した右腕をこちらに向けると、「散開！　全力回避！」シャルロッテ様が大声でそう指示を出した。

――カドゥールオール――

光翼先端から放たれるのは光の羽根の弾丸。その速度はギリギリ目に留まるほどのモノで、シャルロッテ様の指示におかげでみんなは無事に回避することが出来た。もし指示が無かったら・・・全滅してた。

「シュヴァリエルさんからはあなた達を出来るだけ傷つけないよう仰せつかっています。ですが、こちらはあなた達のおかげで随分と家族を喪ってしまいました。命の恩人であるシュヴァリエルさんからの大事な命令。厳命することこそが私の使命。だけど・・・」

ハート3がそこで一度区切って大きく息を吸って・・・

「許せない、お前たちがッ！　私たちの家族を奪ったお前たちがッ！」

そう吐き捨てた。前にも居たなぁ、こんな奴。家族を、仲間を大切

に思うのは良いよ。当然の感情だ。でも、「ふざけないでッ！」アリサがクレイモアフォームの"フレイムアイズ"を突き付けて怒鳴り返した。

「そうだよ・・・！　あなた達の所為で一体どれだけの一般の人たちが亡くなったって思っているんですか！」

「その怒りはこちらも同じだわッ！」

なのはやフィレス、それに他のみんなも一様に怒鳴り返していく。リンドヴルムとのロストロギアを巡る戦いはかれこれ何十年となる。先月のクラナガンの悪夢だけでも3ケタの死者を出した。これまでの争いの中で出てしまった被害者の数を合わせれば軽く4ケタは行くと思う。決して許されない。犯罪者に成り下がっている以上、仲間を奪われた、なんて文句は通用しない。

「チーム分けをする！　私、なのは、フェイト、アリサ、フィレスは、ハート3！　すずか、はやて、アルフ、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、セレス、ルミナ、ベッキーは、ハート2！　一切の手加減なしで・・・撃破せよッ！」

シャルロッテ様によるチーム分けにみんなが頷き返す。シャルロッテ様が一度だけ明後日の方をチラッと見た。視線の先、ずっとずっと遠い先、竜巻が発生してた。ルシルとシュヴァリエルの闘いが・・・始まった。

『ルシルの心配は後ね。ま、今日は勝つだろうけど』

シャルロッテ様がそう言って小さく笑った。そう、ルシルがシュヴァリエルに確実に勝つためのファクターがここレンアオムに揃ってる。ルシル。シュヴァリエルとの決着は、今日ここでつけないとダメだよ。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒すずか†††

シャルロッテさんからハート３の撃破を任された私とはやてちゃん、アルフ、シグナムさん、ヴィータちゃん、シャマル先生、ザフィーラ、セレスちゃん、ルミナちゃん、ベッキーちゃん。

「すずかちゃん。大丈夫？」

「はい、シャマル先生。・・・もう、大丈夫、です」

深呼吸を繰り返す。ケリオン君が本来の"ケリオンローフェティタ"として出現しちゃって、私はもう気が気じゃない。だから半ば暴走してしまった。アリサちゃんの言ってた通り猪突猛進で勝てるような相手じゃない。冷静にならないと。

「さて、どうする。ルシリオンから貰った神器封じの札を貼り付けようにも奴の手には神器が無いぞ」

「気になることはもう１つあるぜ。こうやって対峙してても全っ然襲ってこねぇ。こっちと違って、シャルロッテ達とハート３は派手にやり合い始めてんぞ」

私たちが戦うべきハート2は、瓦礫と化してる本城の直上に浮遊してる。私たちがあれだけ攻撃を加えても迎撃はするけど反撃はしてこない。シャルロッテさんを筆頭になのはちゃん達が、ハート2と魔法を撃ち合いながら私たちのところから離れてく。お互いの攻撃で同士撃ちをしないために。

（結界が大きくなった・・・？　どうやっても私たちを逃がさないつもりなんだ・・・！）

「じゃあさ、放っておいて良いんじゃないかい？　害が無いならさ」

そう言ったアルフさんに私は「ダメです！」そう声を荒げた。ビクッとさせちゃったアルフさんにはごめんなさいだけど、ハート2をどうにかしないとこの結界は解除されない。

「アルフさん。すずかさんの言う通りです。ルシルさんもハート1・シュヴァリエルとの戦闘を開始したようです。となれば、リンドヴルム首領の乗っているであろうあの艦は今、何の制限も無く転移門へ行けます」

「神器が数多く眠る次元に、リンドヴルムが行くようなことがなったらまた、こんな神器での争いが・・・」

ベッキーちゃんとセレスちゃんの言うように、首領の乗ってる艦はフリーになってる。それを食い止めるためにも、"ケリオンローフェティタ"――ケリオン君を救い出すためにも、ハート2は絶対に

倒さないといけないんだ。

「うむ。現在レンアオムはルシリオンにとって有利な戦場になっているとは言え、シュヴァリエルはあまりにも強い。撃破するにも時間は掛かるだろう」

「そう。故にこそハート2の撃破は急務、だ。とにかく奴を無力化する。行くぞッ」

「スノーホワイト！　みんなにブーストを！」

私以外のメンバーにブースト魔法を掛ける。時間帯が夜なら良いんだけど、生憎と今は午後3時（この世界でのだね）だから、私のブースト――レガリアは使えない。あぁ、でも、アリサちゃんのブーストは使えるね。それはともかくとして、さっきみたいに前線に出るような真似は控えて、魔力が尽きるまで私は補助に徹しないと。それが一番なんだから。

――紫電一閃――

「うっしゃぁ！　アイゼン、ラケーテンフォルム！」

――ラケーテンハンマー――

「よーしっ！　女神の鉄拳（ディオサ・プーニョ）！からの・・・っ！」

――氷閃刃（イエロ・コラソン）――

セレスちゃんの魔術が先制。ハート2の足元から勢いよく突き出て来た氷の拳が、ハート2を殴り飛ばした・・・ように見えたけど、殴ったのは足元に展開されたシールドで、ハート2はシールドごと吹き飛ばされただけで直撃じゃなかった。

「「はぁぁぁぁぁぁッ！」」「うらぁぁぁぁぁぁッ！」

宙を舞うハート2へとデバイスを振り降ろしたシグナムさん達。3人の一撃がハート2の張ったシールドに当たった。ヒビ1つと入らないシールドだけど、同方向からの同時攻撃の衝撃でハート2は瓦礫へ向かって急落下して・・・瓦礫や粉塵を撒き散らせながら突っ込んだ。

「ザフィーラ！」

「承知！　穿て、鉄杭！」

――破城の戦杭――

ハート2の落下地点直上に現れたのは長く巨大な杭。ソレが勢いよく落下して、ズドンッ！　空に居る私たちに届くほどの衝撃波と轟音が響き渡って、瓦礫や粉塵が周囲に吹き飛ばす。その中で見えたのは杭の一撃をシールドで食い止めながらも地面に体が半分埋まってるハート2の姿。

「リイン！」

『はいですっ！』

「『遠き地にて、闇に沈め！　デアボリック・エミッション！！』」

そこにさらに追撃。はやてちゃんとリインの広域空間攻撃が爆ぜた。そして次に、アルフとルミナちゃん、ベッキーちゃんの雷の精霊グローム、そしてザフィーラが、デアボリック・エミッションの消失と一緒に姿を見せたハート2へ向かって突撃。それでもハート2は攻勢に出ようとしない。

「シュトゥースヴェレ！」

真正面からのルミナちゃん、右斜め後ろからのアルフ、左斜め後ろからのザフィーラ、頭上からのグローム。ハート2はしっかりシールドを張って対処に移った。最初はルミナちゃんの一撃がシールドに当たる。シールドは壊れることはなかったけど、ハート2は大きく前屈みになって後ろに弾き飛ばされた。

（ルミナちゃんの魔法、確かシールドやバリアを無視する衝撃波を相手に打ち込むっていう・・・）

ルミナちゃんがさらに左のパンチをシールドに打ち込むと、ハート2は大きく反り返った。そこに追撃として「ブリッツフィストッ！」アルフが電撃を纏うパンチを繰り出す。それに対処するようにアルフ側に張られていたシールドが、アルフの真正面に移動しようとしたけど「おっと、邪魔すんじゃないよ！」左手でシールドを鷲掴ん

で移動を阻害したアルフはそのまま右拳をハート2の顔に打ち込んだ。

――鋼の軛――

アルフに殴り飛ばされたハート2を、全方位から拘束杭で貫いて拘束したザフィーラ。

「うおおおおおおおッ！！」

――鉄破震砕打――

繰り出した拳は張られたシールドを当たったけど、ザフィーラは「ならばッ！」そのシールドを殴り押しながらハート2に一撃入れた。そして、すぐさま後退。

「グローム！　ピーカ・モールニヤ！」

鋼の軛に拘束されたままハート2の直上から巨大な雷の槍になったグロームが急降下。ハート2はすぐさまシールドを張ったけど、グロームは直角に曲がってシールドを回り込んでハート2に直撃した。ハート2がとんでもな雷撃の爆発に呑まれた。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒なのは†††

リンドヴルムの本拠地・天空城レンアオムへとやって来た私たち機動一課と特別技能捜査課。そして今、私とフェイトちゃんとアリサ

ちゃん、シャルちゃんの前世の人格なシャルロッテさんとフィレス二尉で、ハート３っていう神器完全武装な女性と戦闘中。

「シャルロッテ！　ハート３の神器の詳細教えて！」

スリーズ・サンズレガリアっていうブーストを使って身体能力や魔力・出力を強化してるアリサちゃんが、ハート３の両腕に同化したり背中から展開されたりしてるオレンジ色の光の翼について訊ねた。

――カドゥールオール――

両腕の光翼から羽根型の弾丸を数十発とばら撒いてくるハート３。その速度はこれまで見てきた魔法のどれよりも速い。私たちの中で最速の射砲撃を持ってるルシルもかなりのものだけど、あの光翼はたぶんそれ以上。

「光の翼は、神造兵装第８８位、光翼ルミナス・プリズミラ！　これまで遭遇した神器より強力よ！　直撃は即死！　掠っても瀕死くらいのダメージが入るから要注意！
防具は、アフドゥ・ハーミン！　装着時に誓約を決め、それを果たしている間は身体能力や魔力を強化できる！　反面誓約が破られた時のリバウンドはシャレにならない！
腰の剣は、１つはアゾート！　効果は神秘中毒の抑制や魔力量増加！
　もう１つは・・・連中に奪還されたキャルタンクリーヴ！　身に付けている間は一切のダメージを負わない！」

シャルロッテさんの話に絶句。これまでにも直撃は危ないものばか

りだったけど、掠ってもアウトな神器はそうなかった。他にも強化系やダメージ無効の神器、あと神秘中毒っていうのは判らないけど、名前の響きからして神秘の持ち過ぎによる害を押さえるっていうこと・・・だと思う。

「つまりは光翼の攻撃には当たらなければ良いということですね！」

――氷星の大賛歌（カンシオン・デ・コンヘラシオン）――

フィレス二尉が右腕と同化してる氷の大剣を大きく振るうと剣先から吹雪の砲撃が放たれた。魔術と神器両方の魔力と神秘を有したとんでもない砲撃だ。

――プリツァアソンテヴァ――

ハート3は回避することなく両腕と背中の光翼を大きく広げて真っ向から突進。フィレス二尉の砲撃を拡散させながら、ハート3はそのままフィレス二尉に突っ込もうとした。当然それを黙って見てるわけがない私たちなんだけど、ターゲッティングするよりも早くフィレス二尉の掲げた左腕と同化してる盾と衝突した。

「こちらの神器の方が神秘のランクが高いそうですよ・・・！」

「きゃぁぁぁぁーーーーッ！！」

氷の盾が砕けて、騎士服が破れたことで左腕の素肌を見せたフィレス二尉が近くにそびえ立つ塔頂上の鐘楼へ弾き飛ばされて、ゴォー

ンと鐘を鳴らした。フィレス二尉はぶつかった鐘と一緒に地上へ向けて落下し始めた。助けに行こうにも・・・

「子供とて容赦はしない！」

――カドゥールオール――

光の羽根の弾幕を張ってくるハート3がさせてくれない。ちょっとした苛立ちを覚えた時、『私は大丈夫だから、あなた達は自分の仕事をしなさい！』フィレス二尉から無事を知らせる念話があった。

「よしっ。みんな、カートリッジを温存しながらで攻撃開始！　せぇぇぇぇいッ！」

シャルロッテさんがひとりハート3と近接戦を繰り広げ始めた。この中で一番の戦闘経験値が高いシャルロッテさんは、私たちがあたふたしちゃう必殺の一撃を見切って、掠らない程度の間合いで躱しながら"キルシュブリューテ"を振ったり、ルミナちゃんやベッキーちゃんから受け取っておいた神器封じのお札を張ろうとしたりするけど、「甘いですね。剣神！」って、どれも光翼で燃え散らされちゃう。

（お札には限りがある。シャルロッテさんとフィレス二尉が近接でお札を張るって作戦もずっと続けられない。どうすれば、あの光翼を攻略できるんだろう・・・！）

『こちらフィレス！　散弾砲、発射します！』

『なのは、アリサ、フェイト！　いつでも大魔法を撃てるように準備！』

『『『はいっ！』』』

私とアリサちゃんとフェイトちゃんは、近接戦を繰りひろげ続けるシャルロッテさんやハート3の居る高度から急いで離れる。私とフェイトちゃんは上昇、アリサちゃんは降下。直後、フィレスさんの居る地点から上空へ向かってアクアブルーに輝く魔力球が光の尾を引いて打ち上げられた。魔力球はゆっくりと曲線を描きながらシャルロッテさんとハート3の頭上へ向かって落ちて来た。

――次元跳躍散弾砲撃（ペカド・カスティガル）――

直径3m近い魔力球が直径50cmほどの8つの魔力球へと分裂して周囲に散らばった瞬間、8つの魔力球が大爆発。シャルロッテさんとハート3の2人が魔力爆発に呑み込まれた。ハート3がどうなったのかは判らないけど、『あっぶな！　死ぬかと思ったぁ！』シャルロッテさんの無事は確認できた。爆発直前、シャルロッテさんは展開したシールドを足場に閃駆を使ったように見えたし。

「このまま一気に全力全開攻撃ッ！」

「なのは！」

「フェイトちゃん！」

はやてちゃんとアインスさんをナハトヴァールから助け出すために使った２人の連携魔法をここにもう一度発動させる。私とフェイトちゃんはそれぞれ魔力スフィアを１０発ずつの計２０発を展開。そして・・・・

「「ブラストカラミティ・・・！　ファイアァァァァーーーーーッッ！」」

私は集束砲ディバインバスター・エクステンションを、フェイトちゃんは砲撃プラズマザンバーを、さらに展開してたアクセルシューターとプラズマバレットを一斉発射。そこにフィレス二尉の魔術、何十頭っていう氷で出来た狼の群れが治まりかけてた魔力爆発の中から姿を見せたばかりのハート３に殺到。

「この・・・！」

氷の狼たちが光翼の迎撃に自ら受けに行く特攻をしてくれたおかげでハート３はその場に留まることになって、私とフェイトちゃんのブラストカラミティの迎撃や回避が出来ずに直撃を受けた。

「フレイムアイズ！」

≪不浄の闇を断ち払うのは太陽の現身。輝ける炎の聖剣！≫

≪「ガラティーン・・・ブレイカァァァァーーーーーーッッ！」≫

魔力と雷撃の複合爆発に呑まれたハート2に追撃するアリサちゃん。直下からの炎熱の集束砲ガラティーンブレイカーは、なお続いてる魔力と雷撃の爆発を呑み込むようにして着弾。全てを吹き飛ばすような大爆発が起きた。

「キャルタンクリーヴによる効果でハート3は傷つかない。それをこちらのチャンスとして、光翼を除く神器を破壊する。それが、私たちの作戦よ」

シャルロッテ様が"キルシュブリューテ"を振り上げて・・・

「飛刃・翔舞十閃ッ！」

縦一線に振り下ろした。

ＡＮＳＵＲＶ其は天翔けて死報告げる凶風の化身なる者～Ｃｈｅｖａｌｉｅｌ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

――屈服（コード）させよ、汝の恐怖（イロウエル）――

ハッキリとは判らないがどこか感じた憶えのある神秘と、風嵐系最強機であるシュヴァリエル・ヘルヴォル・ヴァルキュリアの乗る三日月状の戦艦へ、一対の白銀の巨腕による一撃を真正面からお見舞いしてやる。

リンドヴルムが所有していたロストロギア艦と思われる２隻の艦は、光煌世界アールヴヘイムの在る次元へと繋ぐ転移門、"ケリオンロ－フェティタ"へと向かって航行中だ。もちろんそれを見過ごす俺じゃないんだが・・・

「チッ。一体どんな細工をすれば、今の俺の神秘に対抗できるんだ・・・！？」

ロストロギアには神秘は無い。だと言うのに、艦体そのものが砲台であるロストロギア艦２隻が放って来る艦載砲撃は一対のイロウエルをガリガリ削っていく。ボロボロと破片が宙を舞い、その巨体を小さくしていく。

「いっっっっけぇぇぇぇぇ－－－－－ッ！！」

派手に削られながらもイロウエルは先頭を往く艦の両舷を殴った。衝突音が空に轟く中、「とっとと沈めッ！」さらにイロウエルを再発動。今度は真上からの一撃だ。翼であるだろう箇所がひしゃげながらもその艦は艦載砲を３６０度無差別砲撃を放って来た。

「もう遅い！」

後方を往くもう1隻の艦からの艦載砲をも躱しながら、先頭艦の両翼がへし折れ、ブリッジが潰れたのを確認したが、先頭艦は墜落し始めながらも艦載砲を何十発と放ってくる。鬱陶しい弾幕だがもうその速度も軌道にもなれた。しかしあまりにもしつこいため、先行艦へトドメの一撃をお見舞いしてやる。リンドヴルムの首領も乗っているとは思うが・・・

「どうせ首領も普通ではないんだろ・・・！　其は時に天の使徒にして魔の従僕。畏敬・畏怖をその身に受け、地に救済を施し、絶望を与える。其は我の魂命という宝物を護るがため我を抱擁し汝を喰殺する。死の恐れを知らぬ名声を求めし勇ましき者よ、宝物が欲しくばいざ挑めよ！」

――無慈悲たれ、汝の聖火（プシエル）――

――噛み砕け、汝の冷牙（マトリエル）――

――食い散らせ、汝の嵐顎（ルヒエル）――

――凄惨たれ、汝の毒牙（ログジエル）――

――無残(コード)たれ、汝の悪歯(シャムエル)――

――畏怖(コード)させよ、汝の地顎(トゥアル)――

――照(コード)らし召せ、汝の烈光(イオエル)――

――天(コード)よ怒れ、汝の酷雷(ジェレミエル)――

「宝竜(コード・ファフニール)の抱擁――・・・」

上級儀式魔術ファフニールを発動。中級術式である、炎龍プシエル、氷龍マトリエル、風龍ルヒエル、毒龍ログジエル、闇龍シャムエル、岩龍トゥアル、光龍イオエル、雷龍ジェレミエル、各属性の龍をそれぞれ3頭ずつ、計24頭の龍を対象へと一斉に解き放つ。1つ1つの魔術が中級であっても質量と物量を強化すれば上級となる。

「喰殺粛清(ジャッジメント)ッ！！」

ファフニールは、墜落してもなお艦載砲を放ってくる先行艦へ向かって突撃して行き、艦体に食らい付いてそれぞれの効果を発揮して破壊した。次は後行艦の対処だが、撃墜は控えないといけない。あの艦を使って俺はアールヴヘイムへ行き、回収した神器を戻さなければならないからな。

「（魔石をさらに追加してっと・・・）我が手に携えは友が誇りし至高の幻想・・・！」

――圧戒（ルイン・トリガー）――

機動一課が回収した神器全てから吸収した神秘を有する魔力を結晶化させて造り出した魔石を、魔力炉（システム）に再び同化。"英知の書庫アルヴィト"から実妹シエルの固有魔術、対象に重力負荷を課すルイン・トリガーを発動し、後行艦に１０倍の重力負荷を課して墜落させてやる。さらに・・・

――罪人捕えて罰せしは闇棺（エロジオン・ノワール）――

闇黒の堕天使レーゼフェアの魔術を発動する。重力によって墜落した後行艦の影を利用し、艦体を影で覆い尽くす。本来の効果にはここから影を爆破させる追撃というものもあるが、その工程を行わなければ強力な拘束檻となる。俺はその手を使い、後行艦を封じてやった。

「さぁ、これでどうだ、シュヴァ――」

――轟風暴波――

先行艦を粉砕しながら放たれて来たのは全てを薙ぎ払う圧倒的な暴風。すぐさまその場から急上昇することで躱すものの、「ぅぐ・・・！」その風圧や衝撃波はとんでもなく強く、暴風から数ｍと離れていたのに大きく体勢を崩されて錐もみ状態となってしまった。

「公僕のして良いような真似じゃねぇだろうが、神器王ぉぉぉぉー

ーーーーッ！！」

体勢を立て直し終えた直後、クジャクの尾羽のような翼を放射状に２０枚と背中から展開しているシュヴァリエルがようやく姿を現した。つい数時間前に俺が斬り落としてやった右腕は修復済みで健在。自己修復機能はきちんと働いているようだ。海鳴温泉での第二戦（初戦はベルカ時代だ）でもすぐに直っていたし、腕や脚を斬り落としたくらいでは大したダメージはならないだろう。

（ん？・・・なんだ、あの髪や瞳の色は・・・）

オリエンタルブルーの髪色はアイスブルーに、ワインレッドの瞳の色は紫色へと変色していた。色彩が変わるようになる原因に心当たりがある俺は『アイリ！』念話で呼びかけてみるが返答はない。

「（気のせい・・・ではなく、返事が出来ない状態、なのか・・・？）シュヴァリエル！」

「エグリゴリ（おれたち）と必要（おまえ）なき過去の異物との因縁は今日、ここで終わりだッ！」

「いいや、違う！　俺とお前の決着が今日、つくだけだ！　カートリッジロード！　イドフォルム！」

「お前にとって懐かしきアールヴヘイムで殺してやろうっていう俺の気配りを無駄にしやがって・・・！」

――集い纏え、汝の閃光槍（コード　ポースゼルエル）――

――崩山裂砕――

"エヴェストルム"の神秘カートリッジを2発ロードすることで2つの穂に刻まれたルーンを起動、神器化させたうえで柄に埋め込まれている魔力増強の魔石2つに魔力を流し、数倍にして返還。そして、"エヴェストルム"の両穂に閃光系魔力を付加しての直接斬撃と、シュヴァリエルの粉砕力の高い竜巻を纏わせた"極剣メナス"による直接斬撃が・・・

「「おおおおおおおおおッ！！」」

ＶＳ・―・―・―

はただの機動力強化だと思っていた。しかしその実、神秘の強化という効果も有していた。ドーピングをした俺の神秘ですら届かないほどの高ランク。冗談じゃない。しかし・・・

（天空城レンアオムという、神器が数多く存在するここを戦場とすれば、俺はシュヴァリエルに勝てる・・・！）

「おらぁぁぁぁぁぁッ！」

斬り返された"メナス"の斬撃を後退することで回避すると、シュヴァリエルの左右に暴風の渦が発生。

――十裂刃風――

その渦が風の刃となって十字に放たれた。交差する地点に居れば面白いほどに真っ二つにされる。だが、その交差点に居なければ当たることは無い。まぁ、交差点は術者の意思で変更できるため紙一重を狙うと痛い目を見る。とりあえず上昇し、高低差の有利を取る。

（アイリとユニゾン中だとすると、シュヴァリエルを消し呼ばすような魔術は使えない。さぁ、どうするか・・・）

――殲滅（コード）せよ、汝（カマエル）の軍勢――

「蹂躙粛清（ジャッジメント）！！」

威力を保ったままでの展開できる最大本数、２０００本の槍群カマ

エルを発動し、眼下に居るシュヴァリエルへと１００本ずつに分けて射出していく。今のカマエルには上級に使うような魔力と神秘を与えている。１００本でも当たればそれなりのダメージを見込めるだろう。
そんな俺の猛攻に対してシュヴァリエルは迎撃せずに街路に沿って高速飛翔、建造物を盾にした。もちろんそれだけが狙いじゃないだろう。他に何かを企んでいると思えてならない。神器王や孤人戦争としての俺は、中遠距離および広域戦に特化した魔術師だ。そんな俺から距離を取るなど・・・

「誘っているとしか思えないな・・・！」

機動一課や特捜課のメンバーが周囲１ｋｍ圏内に居ないことを魔力探査（サーチ）で確認し、「何を企んでいるんだ・・・！」上級魔術をさらに発動。天空にアースガルド魔法陣を描く。

――雷神の天罰（コード・トール）――

シュヴァリエルの居る地点へ向かってオートで蒼雷が幾度となく降り注ぐ。シュヴァリエルの場所をトールで確認し、さらに上級術式をスタンバイしようとしたところで、奴が動いた。奴が通ったと思われる街道沿いの城やら塔が崩れ始めたかと思えば、発生した竜巻によってその瓦礫が俺へと向かって高速で突っ込んで来たのだ。避けてしまえばいいんだが、その瓦礫が仲間たちにどんな影響を与えるか判らない。ならば・・・

「トール、標的変更！」

トールの自動ロックオン機能をＯＦＦにして、俺へと向かって来る瓦礫へと雷撃を降り注がせ続ける。１つ、２つ、３つ、・・・２ケタを超える瓦礫をトールで粉砕し続けていた時、砕いた１５個目の瓦礫（なんらかの一部屋丸ごと）から「シュヴァリエル・・・！？」が飛び出して来た。

「そぉぉらぁッ！！」

――崩山裂砕・凍刃――

「なに・・・っ！」

シュヴァリエルの奇襲、"メナス"の剣身に竜巻を纏わせる魔術に氷結付加がされていた。やはり間違いない。シュヴァリエルとアイリがユニゾンしている。とにかく斬撃を大きく後退して躱す・・・のだが、「チッ・・・！」暴風から放たれる冷気で俺の体や"エヴェストルム"が僅かに凍りついた。

「（余裕を持っての距離でこの凍結効果。紙一重での回避は即敗北だな）シュヴァリエル！　アイリは返してもらうぞッ！」

――邪神（コード・ロキ）の狂炎――

"エヴェストルム"を待機形態に戻し、ロキを発動する。両腕と両脚に１ｍの炎の腕と脚を武装し、消失する蒼翼２２枚の代わりに炎の翼が一対と展開される。高機動戦が出来なくなるが、炎熱系術式

の効果を高めることが出来るようになる。シュヴァリエルがアイリの力を引き出して氷雪系術式を扱うならちょうど良いだろう。

「ハッ！　アイリはもう俺のモンだ！　俺の中で、お前の死に様を見せてやるのさッ！」

――剱乱舞刀（ケンランブトウ）・凍刃――

シュヴァリエルが放った真空と冷気の刃の乱れ打ち。真空の刃は回避し、冷気の刃は炎の両腕で真っ向から蒸発させてやる。

「悪趣味な真似を！」

「アイリとはベルカ崩壊時からの付き合いでさ！　いい加減俺だけの物にしたいわけよ！」

――振動刃剣――

刃に紛れて突っ込んで来たシュヴァリエルの振るう"メナス"によって「ぐぉぉ・・・！」炎の両腕が斬り飛ばされてしまう。本来なら斬り落とされようとも俺がロキを解除しない限りは再生する。しかしシュヴァリエルの強大な神秘によって再生が出来ず、騎士服どころか両腕がズタズタに裂かれてのボキボキに骨を折られた。一度ロキを解除する他ない。

――女神（コード・エイル）の祝福――

エイルでズタボロな両腕を瞬時に修復し、また別の魔石を魔力炉(システム)に取り込んで、次の攻撃に備える。

「次は足を貰うぜ！」

――崩山裂衝・凍刃――

「やってみろ！」

冷気を纏う竜巻を纏わせた"メナス"による刺突攻撃に対して俺は真っ向から右の踏み蹴りを繰り出す。足裏が"メナス"によって削られ始めたと同時、「ジャッジメント！」右の炎の脚を爆破させる。奴は「むぉ！？」爆炎に呑まれ、さらに左足の炎の脚も至近距離で爆破、さらに背中の炎翼も爆破させる。

――瞬神(コード・ヘルモーズ)の飛翔――

爆発の衝撃によって墜落する俺は再び空戦形態となり、黒煙を突風で吹き飛ばすシュヴァリエルの全方位に「パシエル！」雷槍２００本を展開して一斉射出。奴は"メナス"を薙いで発生させた爆風でパシエル全弾を粉砕。奴の意識が全てパシエルに迎撃に向いたその一瞬の隙を突き・・・

「戦滅神(コード・ヴィ)の破――、っが・・・！？」

ヴィズルを発動しようとした瞬間、何かが俺にぶつかって来た・・・？

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒アイリ†††

シュヴァリエルと融合したアイリは、マイスター・オーディンの本当の名前、ルシリオンとやっと再会できたんだ。でも、シュヴァリエルからの抑圧の所為でマイスターと思念通話で話すことも、シュヴァリエルを内側から乗っ取る融合事故を引き起こすことも出来ない。

『マイスター！』

シュヴァリエルが仕掛けたトラップ、瓦礫砲弾がマイスターを直撃した。完全物理攻撃だった所為で奇襲に気付かなかったマイスター。シュヴァリエルがマイスターに何度も飛ばした瓦礫砲弾は全部じゃない。奇襲の為に時間差で発動できるトラップを幾つも残してる。子供サイズなマイスターの何倍もある大きさの瓦礫の直撃は、マイスターに隙を作らせるには十分すぎた。

「おらおら、寝てんじゃねぇぞ、神器王！」

――風弾爆破――

ふらついてたマイスターにシュヴァリエルが追撃を加えた。大気を爆発させるって魔術で、マイスターの頭上でソレを起爆した所為で「うぁぁぁぁぁぁ！」マイスターが墜落して、瓦礫の山に叩き付けられた。

『マイスター！　シュヴァリエル、やめて！』

マイスターに向かって突っ込んでくシュヴァリエルに呼びかける。でも『ハハッ！　エグリゴリの役目だ、やめられねぇな！』そう言って、またアイリから魔法を無理やり引き出して"メナス"に冷気を纏わせて振り上げた。すぐ目の前には瓦礫に圧し掛かられて動けない頭から血を流してるマイスター。

――女神の護盾（コード・リン）――

マイスターは女の人が祈る絵が描かれた綺麗な盾を展開して防御に入った。シュヴァリエルはその盾に"メナス"を振り下ろしながら「馬鹿だな、神器王！　防げないことくらい知っているだろ！」そう言った。シュヴァリエルの言うとおりだった。マイスターの張った盾は"メナス"の一撃で砕かれて、圧し掛かってた瓦礫もすべて吹き飛んだ。

「おっ、ご、うごおおおぁぁぁぁあああああああ！！」

『いやぁ！　マイスター！　マイスター！』

"メナス"は右肩からお腹にかけてマイスターの体を斬り裂いて、血飛沫がシュヴァリエルの視界いっぱいに広がった。アイリはシュヴァリエルの目を通して外界を見てることもあって、マイスターの酷い姿を間近で見ることに。

「リアンシェルトからの指示だ。闘うなら確実に殺れ。瀕死なんて

生殺しにはするな、ってな！」

「ごぶっ・・・が・・・うぐ・・・・！　我が手に・・・しは・・・友が・・・かなる・・・」

「肺の片方を潰されながらも詠唱か。よく喋られるな。大したもんだ。さすがガーデンベルグに串刺しにされてもバルドルをぶっ放すような奴だよ、神器王」

ものすごい量の血を吐き出しながらも何か言葉を紡いでくマイスター。アイリは『シュヴァリエル！』何度も呼びかけ続ける。なのに、マイスターの体を穿ったままの"メナス"から冷気を放って、体内から氷漬けにしようとした。

『アイリ、シュヴァリエルの融合騎になるから！　もう逃げようとしないから！　マイスターを殺さないで！』

『ダメだ。言ったろ。これは俺たちの運命だ！・・・逃れられないのさ！』

――反重力（ニクス・フォース）――

「むお！？」『なに・・・！？』

マイスターから勢いよく引き離されるシュヴァリエル。その突然さにアイリもビックリ。それはともかくシュヴァリエルが引き離されたことで"メナス"も引き抜かれたけど、その所為でマイスターの

体からの出血が酷くなる。

――女神の祝福（コード・エイル）――

不安でいっぱいだったけど、マイスターの傷口から蒼い光が漏れだしたらすごい勢いで傷が治って、凍結も解除された。アイリ、この憶えてる魔法、ううん魔術。コード・エイル。マイスターが持つ治癒の魔法の中で一番の物。マイスターはゆっくりと立ち上がってこっちを見上げながら宝石のような物を胸の中に取り込んだ。

「チッ。アレが不足している魔力のサポートをしているわけか。消費させきってやるぜ！」

――風翔涛駆――

暴風を纏っての突撃をするシュヴァリエル。マイスターはそんなシュヴァリエルから距離を取ろうと飛行を始めて、「イロウエル！」魔術を発動。巨大な銀色の右腕が目の前から突然出て来た。でもシュヴァリエルの風の前にそのイロウエルも簡単に砕かれちゃった。視界が銀色の瓦礫いっぱいになって、気付いた時には「見失っちまった・・・！」シュヴァリエルはマイスターの姿を見失った。

――圧壊（ルイン・トリガー）――

ギィン、って妙な音が聞こえたかと思えばシュヴァリエルが「こいつは・・・重力！」いきなし急降下。地面がものすごい勢いで迫って来て・・・墜落した。アイリはシュヴァリエルの内に居るからダ

メージは負わなかったけど、シュヴァリエルはどうなんだろうね。とにかく瓦礫に突っ込んだことで視界が真っ暗だから現状把握が出来ない。

「クソッ！」

視界が開けてすぐに目に入ったのは、目の前に広がる蒼い光。シュヴァリエルは"メナス"を地面に突き立てて、迫り来てる光――砲撃を真っ向から斬り裂いた。

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」

どこからかマイスターの声が反響して聞こえて来た。シュヴァリエルは周囲を一度見回した後で頭上を仰ぎ見て、『うそ、だよね・・・』その視界に映り込んだ光景にアイリは目を疑った。数えきれないほどの黄金に光り輝く魔力球が空に一面に広がってたんだから。

「殲滅姫カノンの・・・！」

――殲滅爆撃（ルフト・アングリフ）――

とんでもない数の魔力弾が雨のように降って来た。シュヴァリエルは仕掛けておいた残りの瓦礫砲弾をここで発動して、自分の頭上に並べるように飛ばした。瓦礫による盾だね。シュヴァリエルは急いでこの場から離れるために、"メナス"で地面を大きく穿って大穴を開けた。そしてその穴へと避難した直後、頭上の瓦礫を粉砕した魔力弾が次々と着弾した。

「決めに掛かって来やがったな神器王。だが、このままじゃ終わらせないぜ！」

地下エリアを飛ぶシュヴァリエルが背面飛行になると"メナス"を振り上げた。マイスターを狙うかのように狙いを定めて「おらぁっ！」振り下ろした。剣身から放たれる風と冷気の刃が３０近く。それらは地表とここ地下を隔てる岩盤をバラバラにして、空へ向かって飛んで行った。でも・・・

「チッ！　また見失っちまった！」

岩盤に開いた大穴から覗く青空にマイスターの姿はなかった。けど、すぐにその行方を知ることになった。地下エリアのずっと奥、暗闇の向こうで黄金の光がフッと燈ったかと思えば・・・

――黄金極光（ポラール・リヒト）――

「奴も地下（こっち）に入って来ていたのか・・・！」

黄金の砲撃が向かって来てた。迫り来る砲撃を避けるためにシュヴァリエルが大穴から出た瞬間、「うおおおおおおッ！」地面スレスレでこっちに向かって飛んで来たマイスターが視界いっぱいに映り込んだ。

「今のは遠隔発生の砲撃か・・・！」

左手に持ってるのは"エヴェストルム"じゃなくて、宝石のような綺麗な剣身を持つ両刃剣。右手には黄金に輝く拳銃。そして今、シュヴァリエルに向かって振るわれたのは剣の方。

「くっそぉぉぉぉぉーーーーーー！！」

避けることが出来ない程の距離っていうこともあってシュヴァリエルは"メナス"による迎撃に入った。マイスターが振るった剣とシュヴァリエルの"メナス"が甲高い音を立てて衝突。視界いっぱいの火花と、目に見えるほどの衝撃波がすごい。

「吹っ飛べぇぇぇぇぇぇーーーーーッ！」

バキンって音が聞こえたら"メナス"が真っ二つにへし折れて、前半分とシュヴァリエルが握ってた柄側がどこかへ弾き飛ばされた。これでシュヴァリエルは武器を失ったことになるんだよね。マイスターはすかさず右手に持つ拳銃の銃口をシュヴァリエルの顔（アイリの顔にも突き付けられてるようで怖いね）に突き付けた。

「俺の・・・！」

――天道空流――

シュヴァリエルが自分の周囲に上昇気流を発生させて「ぅぐ・・・！」マイスターを空へと吹き上がらせた。

「メナスを・・・！」

――氷結圏――

アイリの氷結付加魔法をまた勝手に引き出したシュヴァリエル。マイスターが呑まれてる気流に冷気が付加された。あれじゃマイスター、カチンコチンに凍りついちゃう。でも止めることが出来ない。術者のアイリでも、強制発動を食い止められない。

「壊したくらいで・・・！」

シュヴァリエルが何も無い宙を掴んで引っ張り込むような仕草をすると、呼び寄せられたかのように気流から一筋の風が高速で流れ込んで来た。その風の中には苦しそうにもがく『マイスター！？』が錐揉み状態で居た。

――嵐爪風牙――

両手を熊手のような形にして全部の爪に指の太さほどの竜巻を付加。そして、シュヴァリエルのところまで無理やり引っ張り込まれたマイスターに向かって・・・

「勝てると思うってんじゃねぇぞッ！」

１０本の竜巻の爪を十字に振り下ろした。また目の前が真っ赤になった。マイスターの小さな体は１０本の竜巻の爪で斬り裂かれた。さらにシュヴァリエルは空中で前転して、竜巻を纏わせた両脚でマイスターを踏みつけた。グチャグチャ、バキバキ、ボキボキ、ビチ

ャビチャ、って、聞きたくない音がアイリの耳に届いたから両耳を手で塞ぐ。

（マイスター・・・死んじゃった・・・）

あんな惨い攻撃を受けて無事なはずが無いもんね・・・。涙が溢れてくる。やっと逢えたのに。それなのにお話も出来ないままマイスターは・・・

「こいつは・・・！　やられた！」

『え・・・？』

シュヴァリエルの焦りが含まれた声に伏せてた顔を上げて目を開ける。シュヴァリエルの視界越しに見たマイスターの遺体が魔力となって霧散してく。シュヴァリエルがキョロキョロと辺りを見回し始めたその時・・・

――力神（コード・マグニ）の化身――

「うごぉ・・・！？」

ズドンって鈍い音がしたかと思ったら視界がグルグル回り始めた。その原因が、マイスターからの何らかの攻撃を受けてシュヴァリエルが吹き飛ばされからだって気付くのに少し掛かった。

「蹴られただと！？　どこに隠れてやがった・・・！？　それに今

も！」

地面を転がること数回、シュヴァリエルは四肢を地面に付くことで制動を掛けた。もう一度辺りを見回した後、「そこか！」両腕を払って発生させた風の刃を８つ、瓦礫に向かって放った。

「旋風！」

すると、その瓦礫の裏から空戦形態を解除してるマイスターが飛び出して来た。そして左手に持つ剣を振るうことで円盤状の風の刃を８つと放って、シュヴァリエルの攻撃を相殺した。シュヴァリエルは「早く気付くべきだったぜ！　さっきのお前が手ぶらだったことに！」そう言いながら、また宝石を、今度は２個同時に胸に取り込んでるマイスターへ突撃。

「ウトガルド最後の女王、夢幻王プリムス・バラクーダ・ウトガルドが誇りし最高の幻影術式レフィナド・オラシオン。魔力消費が大きかったが、お前を騙すにはもってこいの作戦だった。まぁ、お前に一撃を入れられなかったから俺の負けだがな。しかし・・・」

――崇め讃（コード）えよ、汝（ミカエル）の其の御名を――

シュヴァリエルの周囲の瓦礫から蒼翼２２枚が現れて一斉に砲撃を放ってきた。解除してたわけじゃんかったんだね。そんな蒼翼はシュヴァリエルの四肢を狙ってる。だからシュヴァリエルは「狙うならココだろうが！」砲撃を避けつつ自分の胸をドンッと叩いて怒鳴った。

「だったらアイリを解放しろ！」

（あ、アイリ・・・足枷になってる・・・）

マイスターにはこれまで何度かシュヴァリエルを倒す機会があったよね。ついさっきの蹴りの時もそう。蹴りじゃなくて別の、全てを吹き飛ばすような魔術を使えばシュヴァリエルを倒すことが出来たかも知れないのに。あれ？って思ってたけど、アイリを巻き込まないようにするためだったんだね・・・。

『アイリ！　聞こえるか！　俺は、ルシリオン・セインテスト！
君のかつての主、オーディンもそうだったセインテスト家の人間だ！』

――光精聖弾（フェー・シュッツェ）――

拳銃から黄金の魔力弾を連射するマイスターがアイリに呼びかけてきてくれた。思念通話だから余所のノイズが入らないからハッキリと耳に届く。アイリもすぐに応えたい。そう思う反面、オーディンとルシリオンが同一人物だってことどうして隠すんだろうね、って思う。現代の次元世界じゃベルカの王様たちは英雄視されてる人たちが多い。マイスターだってそう。オーディンだって名乗れば、きっと人気者になれるはずなのにね。

『そんな嘘は必要ねぇよ、神器王！　アイリには全て伝えてある！
お前とオーディンが同一人物だと！』

「っ！　余計な事を言いやがって・・・」

――疾光砲弾（シュネル・アングリフシュテルメン）・連弾――

「大切な家族だ、仲間だと言いながら自分の事を騙り、騙し、嘯き！
アイリ！　お前、あんな奴が本当に好きだというのか！？　ああ！？」

――剣乱舞刀（ケンランブトウ）――

ボソッと何か呟いたマイスターが撃った砲撃と、アイリにそう問い質すシュヴァリエルが腕を振るって放った風の刃が真っ向からぶつかって爆発を起こすと同時、２人が突撃し合う。拳銃を腰のホルスターにしまったマイスターが振るう剣と、繰り出されるシュヴァリエルの竜巻纏う拳の応酬が始まる。２人は高速で攻撃を繰り出し続けて、そして躱し続ける。でも、「ぐぁっ・・・！」マイスターにだけ攻撃が当たり始めた。

『お願い、シュヴァリエル！　アイリを解放して！』

防御魔力で全身を覆ってるおかげかマイスターは殴られても血を流すだけで済んでる。だけど、ちょっとでも防御力がシュヴァリエルの攻撃力を下回ったら、殴られた場所は問答無用で消し飛んじゃう。

「出来っかよ！　お前を手放すっつうことは俺に、死ね、って言ってるもんだぜ！」

蒼翼２２枚を背中に戻したマイスターは、攻防中に何度かシュヴァ

リエルから距離を開けては宝石を胸に取り込んで、治癒魔術エイルを何度も発動し続ける。そんな中でマイスターの斬撃もようやく当たり始めて、シュヴァリエルもまた装甲を貫かれて傷を負い始めた。

「汚ねぇな、さっきから回復ばっかしやがって！　どこの勇者だ、テメェ！　今なら理解できる！　勇者パーティにフルボッコされるボスの心情が！　どれだけ攻撃を加えても殺しても、アイテム1つ魔法1つで蘇生したり回復したり、くっそ面倒くせぇ！」

「驚いたな！　お前からテレビゲームの話題が出るとはな！　が、1つ言わせてもらえばお前もそれなりの修復速度じゃないか！　アイリとの融合のおかげか！？　実質1対2！　お前に文句を言う資格は無い！」

傷ついては瞬時に回復するマイスターと、マイスターほどじゃないけどそれなりの速さで修復するシュヴァリエル。アイリは、マイスターやシュヴァリエルと言った魔導師でも騎士でもない、魔術師っていう超古代の魔力使いまでも強化できるみたい。つまり今のシュヴァリエルも強化されてる。そんな中でマイスターに押され始めたとなれば、アイリが居なくなったらシュヴァリエルは一方的に・・・

『（アイリは、それでも・・・、マイスターやシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラのところに帰りたい！　そしてアギト、リインフォースⅡにも会いたい！）だから、ごめんね、シュヴァリエル！』

アイリは融合事故を引き起こす為に精一杯の反攻をすることにした。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒ルシリオン†††

（魔石のストックが切れたか・・・！）

イヴ義姉様の"神剣ホヴズ"、カノンの"星填銃オルトリンデ"の顕現維持、２人の複製魔術の発動に必要な魔力、それに俺自身の上級術式に必要な魔力、それらを魔石で補っていたがとうとう底をついてしまった。

『（だが、戦場がここレンアオムというのが、俺にとって最大の優位となる！）クララ先輩！』

『ルシル君の座標確認！　３秒後に転送！　３、２、１！』

一足飛びで後退しシュヴァリエルから距離を取る。特捜課の先輩であるクララのスキル・強制転移によって４つの神器が、俺の騎士服に付いている発信機を元に転送されて来た。そのどれもが片手で持ち易い長柄の武器（槍や戦斧だな）で、ソレらを鷲掴んで魔力吸収のコード・イドゥンを発動。

『ありがとう！　これでまだ戦える！』

クララから複製した強制転送を発動し、魔力が空になった神器を返す。俺がここでシュヴァリエルと決着をつけたかった理由がこれだ。神器の数だけ俺は魔力ドーピングが出来るため魔力枯渇による戦闘不能には陥らないのだ。まぁ、高ランク過ぎる魔力を使っての魔術

発動でも複製品――記憶を失うが、敗死して全てを失うよりはマシだ。

「神器王ぉぉぉぉーーーーーッ！」

「アイリを返してもらうぞ、シュヴァリエルぅぅぅーーーーッ！」

右手で腰のホルスターから"オルトリンデ"を引き抜き、突っ込んで来たシュヴァリエルへ銃口を向ける。そして「フェー・シュッツェ！」魔力弾を数十発と連射。

――嵐爪風牙――

奴は先ほど俺の幻影を引き裂いたように両手を熊手（十指全てを曲げた状態）のようにして指先に竜巻を付加。魔力弾幕を真っ向から十指で引き裂きながら俺へと最接近。

「（イヴ義姉様・・・！）力を貸してください！　家族を救うために！」

救う。それには2つの意味がある。1つは今なお悪夢に捕らわれて暴走しているシュヴァリエル。そしてもう1つはアイリ。もう一度家族として、俺やみんなに力を貸してもらいたい。

「まだ言うか神器王！　家族と言うならさ！　お前の隠し事すべてあの子供たち伝えたらどうなんだよ！」

「伝えて何になる！　伝えたところで未来は変わらない！　俺は・・・（どうせ消えるんだ）！」

それなら最後まで神器王ルシリオンではなく、友達ルシリオンとして見てもらいたい。

（俺だって解っている。これがただの自分勝手な我が儘だと言うくらいは・・・！）

"ホヴズ"の攻撃範囲内に入ったことでシュヴァリエルに向かって刺突を打つ。奴は右手の甲で刺突をいなし、左手の五指による引き裂き攻撃を繰り出して来た。すかさず"ホヴズ"を薙ぎ払いに変更。奴は右腕を掲げて防御に入った。

"ホヴズ"の刃は最初に魔力装甲に拒まれ、拮抗したことで火花が散る。が、すぐにバキンと魔力装甲が砕ける音がし、次いで前腕の1／3まで斬り裂いた。あと少しで斬り飛ばせたがそれより早く奴の右の五指が俺を捉え、腹に5つの穴を開けてくれた。

「ごふっ・・・！」

派手に吐血する。竜巻の爪で内臓がグチャグチャにされた感覚を得る。普通なら致死レベルだが、"界律の守護神テスタメント"という存在であるため、今の俺はかなり死に難い。なんて便利で不便な身体なんだろう。

「がふっ、ごぼっ・・・（まぁ、やられ過ぎてはさすがに死ぬが・・・）マグニッ、エイル！」

身体や魔力、魔術効果のすべてを強化するマグニや治癒術式エイルを発動。傷が治りきる前に両脚の踏み蹴りでシュヴァリエルを４ｍほど蹴り飛ばす。腹から奴の指が抜かれたことで出血が激しくなるが、エイルの効果ですぐに止まる。

続いて右の〝オルトリンデ〟の銃口から「シュネル・アングリフ！」高速砲を撃ち出し、ぷらんぷらん揺れて今にも千切れ落ちそうな奴の右腕を吹っ飛ばしながら俺は奴との距離を詰め、〝ホヴズ〟で右腕を肩から斬り飛ばしてやる。

「どぉらぁぁぁぁぁぁ！」

だがシュヴァリエルの奴もタダでは転ばない。すぐに俺へと接近し、削岩機よろしくな竜巻を纏わせた右の踏み蹴りを繰り出してきた。

「女神（コード・リン）の護盾！」

俺は防性術式第３位のコード・リンを発動。直撃を免れた。しかし「ぐぅぅ・・・！」その威力は結構なもので、リンごと後方に蹴り飛ばされてしまう。

「おぉぉぉぉらぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

体勢を立て直す前に突進して来たシュヴァリエルは、高速旋回して遠心力を大きく加えた回し蹴りをリンへ打ち込んだ。ヒビが入るものの砕かれることはなかったんだが、俺はまたリンごと蹴り飛ばされ、「うごぉ！？」何らかの建造物に突っ込んでしまった。壁を８

枚くらい貫いたところで・・・

――暴槍突牙――

この建造物を破砕しながら飛来するのは放電する竜巻の槍。俺は慌てて天井に砲撃を撃って穴を開け、そこから上階へと逃げる。直後、竜巻の槍は俺が今いた空間を破砕して行った。追撃を警戒した瞬間、悪寒が走った。何を考えるまでもなくさらに上階へ逃げたんだが・・・

「だっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」

――螺子討散（ネジうち）――

それがまずかった。左腕全体が竜巻と化したシュヴァリエルが、俺が屋上まで貫通させた穴を通って急降下して来た。急いで今いる階の部屋へ移動し、今度は扉を蹴破って廊下に飛び出した。が、すでにそこには奴のトラップが仕掛けられていた。窓の外から突っ込んで来るのは尖塔。例の瓦礫砲弾とかいうやつだ。

「疾光砲弾・連弾（シュネル・アングリフシュテルメン）！　槍嵐！」

前方の尖塔、後方のシュヴァリエル。純粋な物理攻撃にはカノンの砲撃連射を、シュヴァリエルにはイヴ義姉様の３本の竜巻を束ねた暴風砲撃を放った。と、「ぐっ・・・ぅぐ！」強烈な頭痛と胸痛に襲われたことで思わず膝を折って、床に両膝を付いてしまった。

「寝ろッ！」

頭上から聞こえたシュヴァリエルの声。外した、反撃を、そう考え至った時にはすでに遅く「ぐぁ！」後頭部を鷲掴まれ、顔面を床に打ち付けられてしまった。しかも1回だけではなく何度も。視界が真っ赤に染まる。額や鼻、口から出た血が床に溜まっている所為だ。抵抗しようにも、記憶消失の際に起きた痛みの所為で体が動かない。

「終わりは呆気ないもんだったな！　なぁ、神器王！」

「かは・・・っ」

今度は片足を鷲掴まれて壁に背中から叩き付けられた。その強さはかなりのもので1回の叩き付けで壁を破壊。そして俺は魔術が使えないまま壁に床に天井、それに家具。いろんなところに叩き付けられた。全身の骨が軋み・・・いや、何本かはもう折れているだろう。

「ク・・・ラ・・・ラ・・先ぱ・・・・い・・・・」

「命乞いかぁ、なぁ！」

気が付けば俺とシュヴァリエルは屋上に居て、奴は俺を空へ向かってポイッと投げ捨てた。先ほど俺が引き千切ってやった奴の右腕は再生済みで、その右手には風の長槍・暴槍突牙が握られ、左手は標準を合わせるためか俺に翳されていた。

（ホヴズも・・・オルトリンデも・・・空戦形態も・・・失った・

・・）

『ルシル君！！』

最悪なこの状況の中、頭の中に直接呼びかけられた。あぁ、感謝だよ、クララ。

「コイツで、俺たちの因縁も終わりだ！　暴槍突牙ぁぁぁぁぁッ！」

シュヴァリエルが槍を投擲した。大気を切り裂きながら目の前に迫り来る槍。そこに、俺の目の前にクララからの贈り物、リンドヴルムが集めていた神器が転送されてきた。軋む両手を伸ばしてキャッチ。すかさずイドゥンで魔力吸収しつつ「ヴィズル・・・！」雷撃砲を発射。砲撃と槍が衝突し爆発を起こした。

「ぅぐ、あ・・・が・・は・・・」

飛翔術式や治癒術式を後回しにしたことで俺はドサッと屋上に叩き付けられた。急いでエイルを発動して瀕死のこの体を回復させるんだが、ダメージが大き過ぎてすぐには完治できない。

「悪足掻きは見っともねぇぞ！」

シュヴァリエルがエラトマ・エギエネスを羽ばたかせながら突っ込んで来た。神器をクララの元へと返し、屋上の床を蹴って宙に身を投げ出す。

「逃がすかぁぁぁぁぁッ！」

地面へ向かって落下している俺へとシュヴァリエルが追撃して来るが、「ヘルモーズ！」空戦形態へ移行して奴からさらに距離を取る。

『クララ先輩！　神器の追加、よろしく！』

『あ、うん！　行くよ！』

飛行を一旦停止して、俺の手元に神器を転送しやすくする。そしてまた目の前に転送されて来た複数の神器を鷲掴んでイドゥンで魔力と神秘を吸収。すぐさまクララの元へと返して飛行を再開。

「神器（アイテム）なんぞ、使ってんじゃ・・・ねぇぇぇぇぇぇッ！」

――廻転轟乱・断壁――

どこかで聞いたようなセリフを叫びながらシュヴァリエルは、奴と俺を中心にして巨大竜巻を発生させた。直径１００ｍほどの竜巻の内部に閉じ込められた俺たちの周囲には、竜巻の影響で無数の城や塔の瓦礫が高速で宙を舞っている。

「さぁ、ファイナルラウンドだ、神器王！」

腕を組んで俺を見下ろすシュヴァリエルがそう告げた。真技を使う気だな。それより早くアイリを救い出さなければ。しかしどうしたものか。

「（やはり、シュヴァリエルにそれなりのダメージを与えて、アイリが融合事故を起こしやすくするのが定石か・・・？）アイリ！少しばかり痛いかもしれないが、耐えてくれな！」

――力神（コード・マグニ）の化身――

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想！　神剣ホヴズ！」

もう一度"神々の宝庫ブレイザブリク"より"ホヴズ"を顕現させる。対するシュヴァリエルは、竜巻に巻き込まれた無数の瓦礫を俺へと飛ばしながら自ら竜巻の中に潜った。

「開け開け、わたしの心。開け開け、わたしの世界。其は地を穿ち、天を穿つ星。来たれ来たれ、わたしの星。奔れ奔れ、わたしの星」

ある魔術の発動に必要な詠唱を開始したんだが、一部を詠唱しただけでＳＳＳランクの魔力を消費した。

――死風凶嵐――

「おらおらおらおらぁぁぁぁぁぁッ！」

クララから次の神器を送ってもらおうにも、竜巻から暴風そのものと化しているシュヴァリエルが超高速で飛び出して来ては俺を一ヵ所に留まらせないように攻撃を仕掛けてくる。"ホヴズ"の斬撃で迎撃しようにも、奴は正しく風の如き動きで軽やかに躱していく。

しかもすれ違いざまに「ぐぁ・・・・！」衝撃波の斬撃を叩きつけてくる。ただでさえ圧倒的に魔力が足りない現状でこのダメージは致命的だ。

「（ジュエルシードを使うか・・・？　いや、ダメだ。アレらはガーデンベルグやリアンシェルト戦のために残しておかなければ・・・）くそっ、どうする・・・！」

「ボサッとしてんなよ！」

蛇のようにうねる竜巻となっているシュヴァリエルは、座標を安定させるべく運良くその場に滞空していた瓦礫に立つ俺へと突っ込んで来た。防性術式を発動するような余裕もないため、すぐにその場から離れる。シュヴァリエルはその瓦礫を砕き終えたらまた竜巻の中へ潜り・・・

「諦めが肝心だぜ！」

――暴槍突牙・乱れ撃ち――

全周囲から何十という槍を飛ばしてきた。空戦形態の機動力を以って躱し続ける中、「そぉら！」シュヴァリエル本体による突進攻撃。タイミングがあまりにも完璧すぎて「ぁが！」直撃を受けてしまい、蒼翼２２枚すべてを砕かれてしまった。ガクッと体勢が崩れ、俺は墜落を始める。

「トドメだぁぁぁぁぁ～～～～～～ッ！」

――嵐爪風牙――

十指と両脚にそれぞれ竜巻の爪を纏わせたシュヴァリエルが墜落を続ける俺へ向かって急降下して来た。

「（あぁ、やはり決めに掛かる時は近距離系魔術だったか。そこのところは戦天使時代と変わらないな！）我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想ッ！」

――業風――

イヴ義姉様と炎帝セシリスの連携魔術を発動する。全てを薙ぎ払う爆風に全てを焼き尽くす火炎を付加した炎嵐攻撃だ。発動したと同時にまた頭痛と胸痛が起き、深い喪失感が去来。

「神器お――」

シュヴァリエルが爆炎の嵐に呑まれた直後に大爆発。爆風によって俺の墜落速度はグッと上がり、「づぁ！」宙を舞う瓦礫の1つの背中から叩き付けられた。一瞬呼吸が出来なくなり咽るが、のんびりしていられない。何故なら・・・

「まだだぁぁぁぁぁッ！」

業風によって戦闘甲冑の上半身部分が焼き尽くされたことで素肌を晒しているシュヴァリエルが黒煙の中から突撃してきたからだ。避

けようにも頭痛と胸痛の影響が抜けない。仰向けからうつ伏せになり手を付いて上半身を起こしたところで、「うごぉぉあああ！」背中を踏みつけられた。その衝撃で瓦礫は砕け、俺はまた別の瓦礫へと今度は腹から叩き付けられた。

「がはっ・・・（肋骨が折れて肺を傷つけたか・・・？）」

薄れる意識の中、吐血と一緒に口から洩れるヒューヒューという呼吸音が耳に届く。まずい。早くエイルで治さなければ、さすがの俺でも両肺が機能しなければ死ぬ。やっぱり今の俺ではシュヴァリエルには勝てないのか。そう諦めかけた時・・・

「うぐぅぅ・・・ア、アイリ・・・！？」

シュヴァリエルが俺の背中から足を退けた。目だけを動かして見ると、奴は頭を抱えてフラついていた。アイリがシュヴァリエルに干渉し始めているんだと判り、『せ・・・んぱ、い・・・』クララに念話を繋げる。すぐに俺の手元に転送されて来る神器。腕を動かすと全身に激痛が走ったが構っていられない。

「（アイリがくれたこの僅かな好機、無駄には出来ない！）イ・・・ドゥン！」

イドゥンを使って神器から魔力を吸収してすぐにエイルを発動。完治までに掛かる時間と、アイリがシュヴァリエルを抑え込める残り時間。全ては時間の勝負だ。

『・・・タ―・・・、マイ・・・タ・・・スタ―・・・マイスタ―・・・、マイスタ―！』

「『アイリ・・・、アイリ！』」

「アイリぃぃぃぃ―――――ッ！」

久しぶりにアイリの声を聴けた。俺の胸は歓喜一色。あぁ、早くシグナム達にも味わわせてやりたい。待っていてくれ、アイリ、みんな。俺は必ずシュヴァリエルを救い、アイリを連れて帰る。

『ルシル君！　リンドヴルムの神器をすべて回収したよ！　今から送るから、存分に使って！』

神器をクララに返したらまた神器が送られて来て、ソレらからも魔力を吸収、そして返還。そんな中で「何故だ、何故オレじゃダメなんだ！」アイリに対してかそう叫ぶシュヴァリエルだが、それでも俺への攻撃はやめない。数十本の暴風の槍を遠隔発動して、俺へと飛ばして来た。

「シュヴァリエル！　これで、お休みだ！」

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

「神器おごぉぉぉ―――――っ！」

空戦形態となった俺はシュヴァリエルへと突撃し、"ホヴズ"で奴

の腹を貫いた。そのまま十数ｍと空を翔けて瓦礫に衝突、"ホヴズ"を引き抜く。奴の腹に開いた傷口から漏れるハンターグリーンの魔力粒子。

「アイ・・・リ・・・・」

『ごめんね、シュヴァリエル・・・。ごめんね、さようなら・・・』

「・・・・ふざけ・・・るなぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーッッ！！！」

――真技――

竜巻の結界が蛇のように変化してシュヴァリエルへと集束して行く。その圧倒的な風圧に、さすがの俺でも姿勢制御が出来ずに錐もみ状態で吹き飛ばされ、また瓦礫に叩き付けられた。今日はとことん叩き付けられる日のようだ。

「俺は勝つ、俺が勝つ、俺の勝ちだ！」

――天召・風神嵐竜――

とうとう真技を発動したシュヴァリエル。そこにはもう人型のシュヴァリエルを居らず、竜の形をした風の塊のみだ。それこそが奴の真技。全長４０ｍの暴風の竜へと変身するというものだ。三対６枚の風の翼を広げればその全幅は２００ｍもなる巨体さ。
奴の羽ばたき１つで１００人単位の人間を粉砕する大嵐を放つことが出来る。今ここでそんな攻撃をされれば、はやて達みんなが死ぬ

どころかレンアオムが空中分解してしまう。現に奴の足元は削岩機で削られたかのように崩壊し始めている。

「いざ目覚めん。いざ開かん。そして、いざ行かん。知れ、これぞわたしの心。見よ、これぞわたしの心。聞け、これぞわたしの心、その名は・・・・！」

それを阻止するために俺は、墜落し始めた無数の瓦礫を躱しながら最後の呪文を唱え終えた。先ほど吸収した魔力を一気に消費。送られ続ける神器から魔力を吸収し続けてもすぐに消費する。だが、それでもカノンの大魔術を発動できるには至った。

「消え失せろッ！」

――竜咆・凄風――

ドラゴンブレスが吐かれる。直撃は俺だけでなくみんなの死。失敗は許されない。

「カノン！　力を貸してくれ！」

――はい！　ルシル様！　私の力、存分にお使いください！――

「殲滅領域（フェアティルゲン・ヴェルトール）ッ！！」

カノンの誇る創世結界フェアティルゲン・ヴェルトールを発動。太陽の浮かぶ晴天が、蒼き満月の浮かぶ夜天へと変化した。瓦礫に覆

われた地面も今は水晶のような大地となっている。

「コレは、殲滅姫の創世結界！？　馬鹿な！　これほどの大魔術を発動できるのか、今のお前に！」

冷静さを取り戻してすぐに狼狽え始めるシュヴァリエル。その威力は"堕天使エグリゴリ"となった後でも味わったことがあるからな。恐怖するのは仕方ないことだ。

「シュヴァリエル！　お前が討ったカノンからの黄泉への手向けだ、受け取れ！」

――殲滅砲火（カタストローフェ）――

何も無い空間から放たれる黄金に輝く数十発の砲撃がシュヴァリエルの全方位から飛来し、奴の頭部、それに翼や前脚・後脚を消し飛ばす。

「アイリを解放してもらおう、シュヴァリエル！」

間違ってもシュヴァリエル本体の居る胸部を消し飛ばす真似は出来ない。アイリとのユニゾンが解除されたのを確認しなければ、な。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒アイリ†††

マイスターの発動した、世界を創るっていう大魔術のおかげでシュヴァリエルの暴走が少し治まって、さらにシュヴァリエルのアイリ

を捕らえ続けてた変な"力"も消えた。

『シュヴァリエル・・・』

『あぁ、俺の・・・負け、か。流石に殲滅姫の創世結界には勝てねぇ。・・・いいぜ、行けよ。いつでも融合解除できるようにした。ほら、さっさと俺の中から出てけ』

精神世界でアイリとシュヴァリエルは向かい合う。シュヴァリエルは犬でも追い払うかのように、しっしっ、ってアイリを追い払うような仕草をした。

『あのね、ありがとう』

『はぁ？　なんでお礼だよ？　普通は悪態じゃね？』

アイリがお礼を言うと、シュヴァリエルは呆れ顔で吹き出した。

『ベルカ崩壊時の混乱で、シュテルンベルク家と散り散りになったアイリを、シュヴァリエルは助けてくれたよね・・・？』

『別に助けたわけじゃねぇ。神器王が遺した血族の最期を見て嗤ってやろうって思っていたら、ぎゃあぎゃあ喚くお前を見つけた。で、お前の喚き声が煩わしかった。放っておくより連れてった方が泣き止むと思った。そんだけだ』

『でもアイリをすぐに放り出さなかったよね。扱いは無礼すぎて酷

かったけど、今日までずっとお世話をしてくれた』

『ボスが望んだだけだ。珍しいもん好きだからな』

『それでも、だよ。シュヴァリエルが助けてくれなかったらアイリはきっと死んでた。気紛れでもいいよ。でもそのおかげでアイリは今日、大好きなマイスターと再会できたんだからね』

『はっ！　・・・・・・さぁ、帰るがいい、アイリ。お前が望む場所へ』

シュヴァリエルが背を向ける。これで最後なんだね。だったらもう一度言うよ。

『ありがとう！』

『フンッ。・・・あぁ、そうだ。神器王に伝えろ。俺を殺せた褒美だ、もう1人の融合騎アギトは別のエグリゴリが有している、とな！』

アイリに振り返ったシュヴァリエルの表情はこれまでに見せたこともない、まるで幼い悪戯っ子のような無邪気な笑顔だった。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒ルシリオン†††

真技が解除され、元の姿に戻ったシュヴァリエルはドサッと結晶の大地に墜落した。そんな奴から小さな少女が1人、光と共に出てきた。ようやく見つけることが出来た。

「アイリ！」

「っ！　マイスター！　マイスター！」

３０ｃｍほどの小さな体。背からは一対の白翼。真っ白な長髪。水色のツリ目。白いドレス。服装はともかく、彼女は間違いなくかつて共に過ごした家族にして戦友、アイリだ。アイリは涙を浮かべて俺の胸へと飛び込んで来たため、俺は〝ホヴズ〟を地面に突き刺して両手を空けた上で抱き止めた。

「お待たせ。迎えに来るのが遅くなった。怒ってもいいぞ？」

「ううん・・・！　また逢えて・・・嬉しい、です・・・！」

涙が頬を伝いながらも満面の笑顔を浮かべてくれたアイリ。俺も笑顔を返したその時・・・

「勝手に俺との戦いを終わらせてんじゃねぇぇぇぇぇ！」

体を構築している魔力が霧散し始めているシュヴァリエルが突進して来た。俺はアイリを胸に庇いながら左手で〝ホヴズ〟を引き抜き、殲滅領域の砲撃で奴の両腕を消し飛ばす。

「シュヴァリエル！？　なんで・・・！？」

「シュヴァリエル！　イヴ義姉様からの手向けだッ！」

――お休みなさい、シュヴァリエル――

「「うおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」」

――斬風――

切断力を上げる風の層を剣身に付加する魔術を発動して、最接近して来たシュヴァリエルの胸を"ホヴズ"で横一線に斬り払った。すれ違いざま、「俺の、負けだ」奴は自らの敗北を認めた。

・――・――・回想だ・――・――・

「だっはぁ！　全っ然勝てねぇ！」

背中からドサッと闘技場に倒れ込むシュヴァリエル。それと一緒に私特製の概念兵装・"極剣メナス"が派手な金属音を立てて同様に倒れた。

「当たり前よ、シュヴァリエル。風嵐系の戦天使（ヴァルキリー）の大半は私、イヴィリシリアの戦闘経験を基にして、ルシルとシェフィリスによって生み出されたんだもの。未来へ歩み続けている私が、過去の経験の化身である貴方に負ける通りはないわ」

シュヴァリエルを打ち負かしたのはイヴィリシリア。アースガルド四王族の一角、レアーナ王家の女王にして、風嵐系最強の魔術師。私は今、イヴ義姉様とシュヴァリエルの模擬戦を見学している。場

所はセインテスト王領グラズヘイム大陸に在る闘技場。模擬戦をするには最適な遺跡だ。
で、イヴ義姉様とシュヴァリエルの模擬戦が行われている理由は、"戦天使ヴァルキリー"の実戦投入の日が近くなったため、各"ヴァルキリー"の最終調整を行っているからだ。特に念入りに調整するのはシュヴァリエルが隊長を務めるヘルヴォル隊。何故ならヘルヴォル隊は特攻部隊だからだ。真っ先に敵陣に突撃する彼らが、敵地のど真ん中で不調に陥ってはあまりにも可哀想だ。

「もう一戦！　イヴィリシリア様、もう一戦お願いしまっす！」

不備が無い事を、私の恋人にして同じ"ヴァルキリー"開発者であるシェフィに報告している中、シュヴァリエルは再挑戦を申し出た。彼は負けず嫌いであるため、１８戦全敗の大敗記録を叩き出していても諦めずにイヴ義姉様に挑戦し続ける。

「待って、もう疲れたわ。流石に魔力もカツカツ」

首をコキコキ鳴らすイヴ義姉様。シュヴァリエルを含めた"ヴァルキリー"は、"ノルニルシステム"が設置されている"ユグドラシル"最下層に在るノルンの泉から常に魔力供給を受ける仕様だ。だが、最強クラスの魔術師であろうと１人の人間の女性であるイヴ義姉様は、使えば当然魔力も枯渇する。いやそもそも１８戦もシュヴァリエルと戦い続けられたイヴ義姉様はすでにとんでもないんだが。

「シュヴァリエル。私はもう疲労で戦えないけれど、そこに居る父君に相手をしてもらったら？」

"神剣ホヴズ"を俺へと向けるイヴ義姉様。シュヴァリエルは「あー、しょうがないっすね」と、やれやれと言った風に嘆息。ちょっと待て。父である私にその態度はどうだよ。いや、別に態度が不満じゃないが、今の何とも言えないつまらなさそうな表情にはちょっとカチンと来たぞ。

「あー、親父？　俺と一勝負、やってくれるか？　や、俺は別にやんなくても良いんだけどさ。イヴィリシリア様が、やれ、って言ってるし」

「・・・フフフ。良いだろう。やってやろうじゃないか。ちょっと私を小馬鹿にしている息子に、父からの愛のお仕置きだ！」

観客席から闘技場の舞台へと降り立ち、"神槍グングニル"をシュヴァリエルに向かって突き出す。シュヴァリエルは私のやる気に冷や汗を流しつつも「お願いしゃす！」一礼して"メナス"を構えた。

「行くぞ、シュヴァリエル！」

「うっす、親父！」

私とシュヴァリエルの模擬戦は、当然私の勝利で終わった。戦闘プログラムは私が組んでいるんだ。当たり前すぎる。それを理解していながらも「悔しいぜ！」歯軋りするシュヴァリエル。

「俺、いつか親父や母さん、イヴィリシリア様にも勝ってやるぜ！

そして、どんな災厄からも守ってやるんだ！　俺って親孝行！」

子供のように無邪気な笑顔を浮かべるシュヴァリエルに、私とイヴ義姉様は「１００年早い」と、笑顔を返した。

・―・―・終わりだ・―・―・

「永く待たせてすまなかったな。・・・お休み、シュヴァリエル」

俺の背後で倒れ伏したシュヴァリエルは、そのまま動くことなく・・・消滅した。

Ｅｐｉｃｏ３８－Ａ竜の終焉　～ＢＡＤＥＮＤ～

†††Ｓｉｄｅシャルロッテ†††

ＶＳ・－・－・－・－・－・－・－・－・－・－・－・－・－・－・－・ＶＳ

其は盲目的に竜を敬愛し魂命を捧げる者ハート３

「いっけぇぇぇぇ－－－－ッ！」

――光牙烈閃刃――

神属の存在する天界に一番近いとされるということもあって、神造兵装を数多く有する世界の代表格である光煌世界アールヴヘイム。そんなところからリンドヴルムが神器を回収して来た所為で今、高ランクの神造兵装を武装した奴と戦うはめに。

「合わせます！」

――氷星の大賛歌（カンシオン・デ・コンヘラシオン）――

私の剣状砲撃とフィレスの氷雪砲撃が、リンドヴルムが保有する私設の蒐集実行部隊の１つ、第０小隊ドラゴンハートのメンバー・ハート３へと向かう。

「光翼よッ！」

――ヘレヴフラッシュ――

両腕と同化してる光の翼を伸長させて光の剣とし、私たちの砲撃を真っ向から刺突、そして破砕。私の烈閃刃は同じ閃光系であっという間に呑まれて、フィレスの砲撃は蒸発させられた。さすがは神造兵装の８８位。魔術に対する優位性は馬鹿みたいに高い。

「うりゃぁぁぁぁぁぁぁッ！」

「せぇぇぇぇぇぇぇぇいッ！」

――デュプルブレイズ・シオンズクリーバー――

アリサとフェイトの連携魔法がハート３を左右から襲う。両腕の"光翼"は未だに伸びきったまま。けどま、さすがは光。一瞬で元に戻って、２人の魔力刃への迎撃に入った。"光翼"の斬撃と、雷と炎の大剣によるハサミのような挟撃が衝突する。結果は見るまでもなく、アリサとフェイトの魔力刃は粉々になった。

「「もう１発ッ！」」

私とフィレスはさっきと同じ砲撃をハート３へと撃ち込む。

――ゾハルコテヴ――

綺麗なオーロラがハート３を護る盾のように発生する。私の閃光系

の魔力は取り込まれ、フィレスの砲撃はまた蒸発。ていうか、閃光系はアウトって何故すぐに思い出さなかったの私。さっき見たくせにｏｒｚ

――バレルショット――

ここでなのはが撃ったのは、バインド効果を持つ不可視の砲撃魔法。本来のバレルショットには殺傷能力は無いんだけど、"ドラウプニル"の効果でなのはら魔導師は一時的な魔術師と化してるし、神秘カートリッジのおかげで十分に殺傷能力がある魔法・・・っていうか、魔術になってる。

「っく・・・！？」

背後からの至近距離からの一撃にハート３は対処しきれずに四肢を拘束された。拘束できるのもほんの一瞬だろうけど、その隙は絶対に逃さない。

――飛刃・翔舞一閃――

――氷閃刃（イエロ・コラソンアギラス）・翔閃――

――ヴォルカニックスカッシャーー――

――ジェットザンバーー――

――エクセリオンバスターー・フォースバーースト――

問答無用のオーバーキルクラスな攻撃をぶちかます。次々と攻撃を受け、最後になのはの４連同時砲撃が着弾、遅れてさらに本命のバスターが着弾して大爆発。起きた衝撃波にはさすがの私も「ふわわっ！？」大きく体勢を崩すほどに吹き飛ばされてしまった。特にアリサなんて「きゃぁぁぁぁぁ！？」墜落しちゃう始末。

「わわ、ごめん、アリサちゃん！」

「ありがと、なのは。あんた、ブレイカーじゃないのによくあんなトンデモな威力を出せたわね」

「驚いた。チーム海鳴の活躍は聞いていたけど、先ほどの集束砲といい、これほどとは恐れ入ったわ。アリサとフェイトも素晴らしい魔導師だし、管理局の未来は安泰ね」

フィレスもなのはの砲撃魔導師としての能力に驚愕。でもその驚愕もすぐに薄まる。何故なら「どれだけの攻撃を受けようと！」ハート３がその健在さを見せつけてきたから。

「さすがは、か」

ハート３の両腕と同化したり背中に展開されてたりするオレンジ色に輝く光の翼を見て嘆息。

（神造兵装第８８位、光翼ルミナス・プリズミラ。閃光系魔術においては最高位とされるアールヴヘイム魔術師と抜群の相性の神器。

ただの魔導師に使いきれるはずがないんだけど・・・）

彼女は"ルミナス・プリズミラ"だけじゃなく、他に3つも神器をその身に付けてる。４つの神器を一度に装備するのは魔術師にとっても害だと言うのに。魔術師は最大で3つまでの神器しか持てない体だ。まぁ、例外としてルシルや雷皇ジークヘルグがいるけど。ともかく神器特有の神秘は、魔術師にとって命とも言える魔力生成・貯蔵器官である魔力炉（システム）の働きに悪影響を及ぼす。いわゆる神秘中毒っていう症状だ。

「謳え、星照らす燃えたる光幕」

ハート3の背中から展開されてる光翼が放射状に開いた。めっちゃ見覚えのあるの姿で、そして詠唱。あのヤバい砲撃を撃つ気だ。

「凶牙波瀑刃！」

神秘カートリッジをロードして、闇黒系魔力を纏わせた"キルシュブリューテ"を大きく振るう。そして発生させるのは闇黒系魔力の津波。狙いはハート3じゃなくその頭上。

「剣神シャルロッテ・フライハイト！　シュヴァリエルさんからの情報通り、私の光翼の性能や技を知っているのね！　本当に小賢しい！」

――カドゥールオール――

「まあね！（強大な神秘を持つ光翼を扱えるだけで十分だと言うのに、防具アフドゥ・ハーミン、不傷剣キャルタンクリーヴまでも・・・！）」

さらにもう一振りの剣を装備してる。これで限界数を超えることになるんだけど、そのもう一振りの剣の効果が、神秘中毒を抑えるというもの。銘を"魔剣アゾート"。装備者の魔力を増強させるだけじゃなくて、神秘中毒を抑え込む効果を持つ。柄頭に付いてる宝玉内には何かの悪魔が封じられているそうだけど、神器の知識は私よりはルシルの方が詳しいかな。

（でもだからってアゾートの抑制する効果にも限界はあるし、今のハート3は常時綱渡り状態）

――凶牙波瀑刃――

『騎士シャルロッテ！　ハート3は何をやろうと？』

両腕の"光翼"の先端から羽根型魔力弾を連射するハート3。私はそれらを避けながら二度目の波瀑刃を放ってまた"太陽光"を妨げると、『察しました』フィレスは感づいたようで、『騎士シャルロッテのガードに入ります』私の護衛を買って出てくれた。

「『なのは、アリサ、フェイト！　私の攻撃頻度が少し落ちるけど・・・』ご自慢の光翼で闇を払ってはどう？　お、嬢、さ、ん♪」

そんなハート3に私たちは問答無用の攻撃を仕掛けてる。"キャル

タンクリーヴ"の効果は身に付けていると一切のダメージを無効化する体を得ることが出来るというもの。"キャルタンクリーヴ"以上の神秘を持った神器による直接攻撃は無効化できないけど、それ以外の、魔術や神器の攻撃は問答無用に無効化できる。まぁ、無効化にも限界はある。

「この・・・！　過去に死んだ人間がッ、現代を生きる人間の争いに・・・」

『えっと、大丈夫です！』

『同じく！』

『やってやるわ！』

大剣形態クレイモアフォームにしてる"フレイムアイズ"を肩に担いでアリサは嘆息。今のアリサはスリーズ・サンズレガリアっていう魔力ブーストのおかげで、なのはやフェイト並の魔力を扱えるし、魔法のレパートリーも近・中・遠とバランスが良いから十分な戦力になってくれてる。

（先の次元世界のアリサを知ってる分、こうして一緒に戦える日を迎えることが出来たのは純粋に嬉しいよ♪）

「関わるなッ！」

――マルアフツィポール――

ハート3の周囲に4つの光球が発生。それらは個別に動き出して、私たちに魔力弾や砲撃を撃ってきた。先の次元世界でなのはが使ってたブラスタービットやルシルの蒼翼のような独立機動砲台か。

「凶牙波瀑刃！」

それでも私は私たちの頭上に闇の波を発生させる。そしてなのは達も光球からの射砲撃を躱しつつハート3への攻撃を続ける。こちらの攻撃は迎撃されたり回避されたり直撃したり。直撃は普通に死ぬような一撃だけど、ハート3の防御力はあまりにも高い。けど、どれだけ体にダメージが入らないと言っても神器には負荷が掛かる。その負荷を高めて、破壊する。それが、ハート3と戦う私、なのは、フェイト、アリサ、フィレスの5人の作戦だ。標的であるハート3は、なのは達の攻撃を受けながらも反撃を行い続ける。

――凶牙波瀑刃――

私も光球からの射砲撃を躱しながら、また太陽光を遮るための魔術を放つ。彼女が放とうとしているのは、放射状に展開した背中の翼に吸収させた太陽光を両翼から放つ、閃光系と炎熱系の属性複合の集束砲撃ネカマーカルネーシェメッシュ。

太陽は神聖は存在。その太陽の熱や光、神秘を吸収した砲撃は対魔術師・対魔族に必殺の威力をもたらす。だけど準備――背中の翼を放射状に広げて数分間の吸収が必要だ。通常の翼モードでも出来そうなんだけど、って疑問は横に置く。とにかくその吸収時間を潰せば問題ない。

（他に月光を利用した氷雪系と閃光系の集束砲撃、太陽光と月光を複合した三属性複合の神罰クラスの砲撃もあるけど・・・。神罰は、月は出てないから今は気にしないでいいかな）

「おのれ・・・・！　痛みも苦しみもなく逝かせてやろうという私の優しさを・・・・！」

とうとうハート3は背中の光翼を閉じて、元の翼モードへ戻した。よしっ。

「とっとと倒れてもらうよ、ハート3！　久々の・・・雷撃最強！　フェイト！　私の攻撃に合わせてランサーを、出来るだけ多くお願い！」

「あ、はいっ！」

「何を企んでいるのかは知らないけど、全てを薙ぎ払ってくれるわッ！」

――ヘレヴフラッシュ――

両腕の"光翼"を5ｍほどにまで伸長させて大きく振るう斬撃を繰り出すハート3。この短時間で何度も思ってることだけど、当たれば即撃墜の斬撃に加え、4つの光球からの射砲撃弾幕がウザ過ぎる。こちらが倒れる方が先か、ハート3の神器が壊れるのが先か、もしくは奇跡的に神秘中毒に陥らない綱渡りを失敗して自滅する方が先

か、それとも・・・・

（フィレスが神器封じの札を貼り付けることが出来るのが先か、ね）

――アクセルシュ―ター――――

「シュ―ット！」

――ヴォルカニックスカッシャ―――――

「どりゃぁぁぁぁぁぁッ！」

――プラズマランサ―――――

「ファイアッ！」

――制圧（インバシオン・ローボ）せし氷狼――

「往きなさい！」

「鬱陶しい事この上ないとは、こういう事を言うのでしょうね！」

私やフェイトに攻撃が届かないように、なのはとアリサとフィレスが囮を買って出てくれた。ハ―ト３はよっぽどさっきの私の妨害が頭にキてるのか攻撃がかなり大雑把になっていて、３人の放つ攻撃に一応は迎撃するけど、アリサの真っ直ぐな斬撃以外の大半は直撃。まぁ、それでもまだ神器も壊れないし自滅もしてくれない。神器破

壊は除外した方が良いかも。

「これもまた我慢比べってやつかな？『フェイト！』」

――雷牙神葬刃・十二連――

とにかくなのは達の弾幕のおかげで私はフェイトの隣に並ぶことが出来た。そして神秘カートリッジを２発ロードして、紅雷を纏わせた"キルシュブリューテ"を大きく横一線に振り払う。放つのは雷撃の斬撃１２発で、全て綺麗に横一列に飛ぶ。

『え？　あ、はいっ！』

――プラズマランサーーー

フェイトは私の斬撃の軌道を見て少し戸惑ったよう。そりゃそうか。私の斬撃はハート３とは全く別の方角に向かってるし。それでもフェイトは迷いに時間を掛けることなく、私の斬撃と同じ速度・高度・軌道で８本と発射してくれた。

フェイトに「ダンケ・シェーン、フェイト♪」お礼を言いつつその場で旋回、"キルシュブリューテ"全体を雷撃の魔力刃へと変化させる。フェイトやアリサのフルドライブの魔力刃のように数ｍと伸長させて・・・

「ハート３！　この一撃はとっても強力よ！　避けた方が良いんじゃないかしらね！　別に私はそれでも良いし♪　少しでも怖いと感じたらどうぞお逃げなさいな！」

――雷牙吼霆刃――

挑発しつつハート3へ目掛けて横一線に振るう。紅雷の魔力刀は先に放っておいた神葬刃やフェイトのランサーを取り込んでさらに巨大にして強大化、必殺の雷撃刀となった。威力は私の有する雷撃系では最強だ。

「真っ向から砕いてくれる！」

――ヘレヴフラッシュ――

両腕の"光翼"を魔力剣として私の一撃へ向けて振り下ろした。衝突する私の雷撃刀とハート3の光翼剣。ついさっきまでならこちらの攻撃が一方的に潰されてたけど、「なにっ・・・！？」ハート3が驚愕の声を上げるほどに拮抗する。

「私とフェイト2人分の魔力と神秘を圧縮したからね！　そう容易く砕けないわよ！」

これまではみんなバラバラの魔力と神秘による攻撃だったから、たとえ同時着弾であっても迎撃されてしまってた。だけど今の一撃は2人だけとは言え圧縮したもの。そう易々迎撃されない。

「（もっと早く使っておけば良かったなぁ・・・。ま、タイミングが合わずに失敗するのが目に見えてるけど）さぁさぁ、焼かれない内に逃げればぁ～？」

「この程度・・・！」

挑発に乗ってるハート3はあくまで真っ向から私を潰したいようで、派手に放電する空間の中で頑張り続ける。

「おおおおおおおおおッ！」

「シュヴァリエルさんから授けられたこの神器に敗北はな――」

「あれ・・・？」

拮抗していた私の雷撃刀が大爆発を起こして、ハート3を呑み込んだ。予定とは少し違ったけど、今の爆発の直撃はかなり効いたと思う。それにこれまでのみんなの攻撃を受けたのも大きい。たぶんこれが最後のチャンス。

「フィレス、今！　なのは達は弾幕！」

「はい！デュック・グラス！　私に最大の力を！」

フィレスの両腕と同化してる大剣と盾が一旦冷気化。すぐさま再構築される。その形は手で持つタイプの大剣と六角形の盾。あと腰にショートソードが2振り。

「「「はいっ！」」」

「あ・・ぐ・・・ぅぐ・・・ぐぉ・・・」

そんな中でようやく姿を現したハート3。全身からバチバチと放電していて、顔面に青筋を幾つも浮かべてギリギリと歯軋りしてるし、キッと充血してる目で私を睨んでくる。とんでもない殺気。あぁ、怖い、怖い。

――ショートバスター――

「シューット！」

――プラズマバレット――

「ファイア！」

――フレイムバレット――

「行けッ！」

そんなハート3へと突っ込むフィレスを追い越すなのは達の攻撃。ハート3は「邪魔をするな！」怒声を叩き付けて、両腕の"光翼"を向けた。そして放つのは砲撃２０連射。なのは達の攻撃は誘導操作が出来る射撃魔法だ。ジグザグに曲がって砲撃を躱す。

『３人とも。強力な１発をスタンバイ！』

"光翼"の砲撃に何発か迎撃されたけど、それでも１０発以上が生

き残ってハート3へと着弾、魔力爆発が起きる。それでもなおハート3は砲撃を止めない。フィレスは迫る砲撃を高機動で回避しつつ、当たる砲撃は盾で防ぐ・・・んじゃなくて軌道を逸らした。

（薄い氷の盾による光の屈折を利用したわけか。光翼より格は落ちるけどさすがはデュック・グラス。神器だからこそ出来る芸当ね）

フィレスはさら右手に持つ大剣を投擲した。ハート3は「氷の剣などに・・・！」って苛立ちを見せて迎撃しようとしたら、「と、思ったら私の思う壺よ」フィレスは指を鳴らす。すると投擲した剣が爆破されて冷気の煙幕となった。フィレスは続けて腰に提げてた2振りのショートソードを持ち、氷の盾を踏むようにしてその冷気の煙幕に突っ込んだ。

――爆ぜる凍煙・穿つ氷刃（エクスプロシオン・デ・スパーダ）――

直後、煙幕からさらに冷気の煙幕が吹き出したかと思えば、巨大な氷の剣が煙幕の中から何十本と全方位から突き出して来た。とんでもない魔術を発動したフィレスに私は思わず「アオスゲツァイヒネト・・・！」素晴らしい、と拍手を贈る。

「おのれぇぇぇぇ！　放せッ、放せぇぇぇぇぇぇぇーーーーッ！」

「逃がさない！　リンドヴルムとの長き因縁を断ち切ることが出来る最大のチャンス！　たとえ後日、私の体に幾日も不調が続いたとしても・・・！　ここで必ずあなたを討つ！」

まるでウニのような形の氷塊の隙間から、自分を凍らせて取り込もうとする氷塊から逃れようとするハート3と、彼女を必死に押さえ込むフィレスの姿が見えた。"光翼"の熱によって氷塊が蒸発し始めてるし、フィレス自身の両手からも蒸気が出てる。押さえ込める時間は短い。

『騎士シャルロッテ！　ハート3の防具とアゾートの封印に成功しました！』

『ダンケ・シェーン！　いつでも退避できるようにしておいてフィレス！』

『了解！　もう少しハート3を押さえ込んでおきます！』

残り3発のカートリッジの内1発をロード。横目に集束砲をスタンバイしてるなのは達の様子を見る。私も急いで属性複合術式をスタンバイ。刀身に炎熱・氷雪・風嵐・雷撃・閃光・闇黒、計6つの属性魔力を段々にして付加。

「滅牙　翔破六天刃！」

頭上に掲げた"キルシュブリューテ"を振り下ろす。刀身から放つのは6属性6刃。

「私はハート3！　私が新たな3を拝命した以上、ドラゴンハートに敗北は許さない！」

――スファーオール――

「「「「ッ！？」」」」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！？」

それはまるで斬撃の嵐。９ｍほどにまで伸長された両腕や背中の"光翼"の斬撃が氷塊を砕き、フィレスを薙ぎ払い、私たちの周囲の城や塔をバラバラに砕いては斬り裂いた。

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

『ジャスミン！　フィレスの安否確認を！　なのは達はそのまま待機！　危なくなったら回避！』

背中に展開してる真紅の魔力翼ルビーン・フリューゲルを大きく羽ばたかせてハート３に突撃しつつそれぞれに指示を出す。

「おおおおおおおおおおおおッ！」

「シャルロッテ・フライハイトぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーーーッ！」

――シャヴィットカヴォード――

幸運にも斬撃の嵐を止めて私ひとりに標的を絞ってくれたハート３。長さを元に戻した両腕と同化してる"光翼"の先端から砲撃を連射してきた。それらを躱しつつ距離を詰めていくんだけど、「しまっ

・・・！」そんな中で紅翼が両方撃ち抜かれた。飛翔術式を失った私は当然墜落することに。ハート3と目が合う。彼女の表情がパァッと輝きを見せた。口の動きで、私の勝ちです、そう勝利を確信したことが判った。

――シュヴァーベン・マギークライス――

魔法陣を展開して足場とする。魔法陣を蹴って方向転換することで砲撃を躱す。さらに魔法陣を連続展開して躱し続けるんだけど、砲速がどんどん速くなってく。ルビーン・フリューゲルじゃ避けきれない。今の回避行動もいつまで保つか判らない。だったら・・・

『イリス。ちょっと辛いかも知んないけど・・・』

『ドンと来てください！　ここまで来たらどこまでも！』

『ありがとね、イリス』

――フォイアロートフェーニクス――

イリスの幼い身体や未成熟なリンカーコアに多大な負担が掛かるから使いたくなかったけど、フィレスが倒れた以上は私がなんとかしないと。背中から薄く長いひし形の魔力翼を8枚と展開。"界律の守護神"時代にルシルの空戦形態ヘルモーズを基に編み出した、私独自の空戦形態を発動した。

『合図出したら問答無用で発射ね！』

なのは達にさらに指示を出して、砲撃弾幕の中を突っ切る中「キルシュブリューテ！」神秘カートリッジを1発ロード。ハート3は「何故当たらない！」私の接近に苛立ちを見せて、消失してた光球を4つとまた展開。それらからの射砲撃も加わって、3ケタ近い攻撃が私に襲いかかって来た。

「これで幕としようか！」

「そうですね！　私も・・・この時を待っていた！」

ハート3の背中の"光翼"が放射状に開いた。私の接近を許してる時点な無駄な悪足掻き。そう思ったんだけど、それが間違い。私に向けられたままの両腕の"光翼"の間に光球が1つ生まれた。

（そんな！　放てるだけの光をいつ吸収してたの！？）

さっきの吸収形態だけじゃ放てるだけの光は吸収できていないはず。疑問は尽きないけど、今はまず高度を保ったまま射線上より退避を優先。

「逃がさない！」

――神罰・ネカマーコハヴ――

目の前が真っ白になる。放たれた神罰クラスの神秘砲撃。キチンと躱したのにその衝撃波で「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」錐もみ状態にな

る。やっぱり直撃は即死だ、これ。

――シャヴィットカヴォード――

体勢を立て直そうとしてる時、通常の砲撃が放たれてきた。体勢を立て直すより早く足元に魔法陣を1枚と展開、蹴ることで無理やり方向転換して回避。すぐにハート3へと再突撃。一度集束砲を放てば、太陽光や月光を吸収するのに時間が掛かるからもう気にしないで良い。

「さっきの続きよ、ハート3！」

――炎牙崩爆刃・八連――

刀身に火炎を纏わせた"キルシュブリューテ"を振るうことで放った火炎斬撃の八連撃。"光翼"の砲撃弾幕に迎撃されるも連続で放ちながらも少しずつハート3に接近。

『なのは、アリサ、フェイト、撃って！』

ここで、3人に集束砲を撃つように指示する。

「「「ブレイカァァァァァーーーーーーーッッ！！」」」

――トリプルブレイカーー――

スターライトブレイカー、プラズマザンバー、ガラティーンブレイ

カー、３つの集束砲がハート３へ向かう。私も「飛刃！」スキルとしての絶対切断に"ドラウプニル"や神秘カートリッジの神秘を加えた一撃を放つ。

「ズリハッドシェメッシュナドバヌート！！」

背中だけじゃなく両腕の"光翼"が大きく開いたかと思えば球体状の光の膜がハート３を覆い、直径１０ｍほどにまで拡大。私たちの攻撃はその光膜に着弾、防がれた。でも完全に私たちの攻撃を防御できたわけじゃない。私の斬撃は貫通してハート３に直撃、なのは達のトリプルブレイカーの魔力爆発も貫通して膜内で大爆発、ハート３が呑み込まれた。

『すみません！　カートリッジが無くなりました！』

『同じくです・・・！』

『あたしも！』

なのは達が戦力外となった。ううん、正確には最後にロードしたカートリッジの神秘付加効果が消えるまではまだ大丈夫なはず。

「（早くキメないと・・・）今度こそ・・・！」

"キルシュブリューテ"の神秘カートリッジ最後の１発を連続ロードして、濛々と立ち上る爆煙の中へと突っ込む。"光翼"の神秘は戦闘開始時に比べればかなり弱ってるけど、それでもまだどこに在

るのかくらいは探知できるだけの強さを持ってる。

「ハート3！！」

「げほっ、ごほっ、剣神・・・！」

――ヘレヴフラッシュ――

――絶対切断（アブゾルーテ・フェヒター）――

両腕の"光翼"による斬撃。こちらは刀身に神秘付加アリの絶対切断効果を有した"キルシュブリューテ"による斬撃。"光翼"の斬撃を躱しつつハート3と肉薄して「せいやッ！」振るう。彼女には"キャルタンクリーヴ"っていう、身に付けている間は一切のダメージ無効という冗談みたいな能力を持ってる。

「っぐ・・・！　効かない事くらい理解しているでしょう！」

「ええ、百も承知よ！」

それでも攻撃はやめない。振るった"キルシュブリューテ"がハート3の体を袈裟切りに斬り裂いた。手応えは確かなのに傷1つとして付いてない。ニッと狂気の笑みを浮かべる彼女は、両腕の"光翼"の形を人の手のような物へと変形させた。

「しまっ・・・！」

私を握り潰そうとする"光翼"の手の片方を"キルシュブリューテ"で防いだけど、５本の爪によって空戦形態の要の翼を半分失った。ガクッと体勢が崩れる。ハート３は「もう片方は鞘で防ぎますかぁ？」狂気より喜色が上回った笑みを浮かべた。

（防御！　ダメ、今すぐ離脱を・・・！）

『シャルロッテ様！　使ってください！』

イリスから念話。確かにアレを使えば"光翼"の一撃を防げるだろうけど。イリスへの負担は空戦形態以上に大きい。

『早く！　シャルロッテ様！　どの道このままじゃわたしもシャルロッテ様も死んでしまいます！』

「『・・・イリス、ごめん！』・・・トロイメライ！！」

首飾りとして隠し持っていた指環を起動して、ラピスラズリ色に輝く刀身を持つデバイス型神器へと変化させる。私は左手に持った"トロイメライ"でもう片方の手を斬りつけて弾き返す。

「な・・・っ！？」

「奥の手中の奥の手、このトロイメライを私に使わせたこと・・・後悔させてやるわ・・・！　トロイメライ、カートリッジロード！」

落下しながら"トロイメライ"の　６連式シリンダーに装填されて

る通常カートリッジを3発と連続ロードした。

・―・―・回想よ・―・―・

管理局の有する次元航行艦の1隻のジャスミンに乗艦して、機動一課や特別技能捜査課の面々と一緒にロストロギア専門のコレクター・リンドヴルムの本拠地が在る世界へと向かうことになった。メンバーそれぞれが好きなように待機してる中・・・

『イリス。ちょっと交代してくれないかな？』

なのは達と喋ってるイリスへとそうお願いすると、『いいですよ』快く即答してくれたイリスに『ありがとう』お礼を言って、早速イリスの人格と私の人格を交代。そして私とはやての間に座るルシルが着てる制服の上着の裾をちょんっと引っ張る。

『ルシル。ちょっと私とデートしてくれる？』

ルシルに念話と繋げると、「『イリス・・・じゃなくてシャルか。判った』すまない、ちょっと席を外すよ」みんなに断りを入れてから席を立った。

「私もお花摘みに行ってきま～す」

ルシルの後を追ってレクリエーションルームを出る。通路でルシルと合流して少しだけ歩く。ある程度レクリエーションルームから距離を取ったところで、「リンドヴルムとの戦いについてなんだけど

ね」話しかける。

「シュヴァリエル、天使化するホムンクルス・ハート2、正直この2人だけで私たちの戦力はいっぱいいっぱいだと思うの」

「だと思います。戦力的にはかなりギリギリかと」

『リンドヴルム首領。本当にそんなのが居るとすれば、たぶん普通の人間じゃない』

「??・・・あぁ・・・『それも同感。少し逸れるが、リアンシェルトの言だが、各エグリゴリは俺を殺すという気分になるまでは飽きるまで次元世界で勝手気ままに過ごすのだと言う』」

イリスに今はまだ伝えたくない情報を遮断するため、彼女には繋がらないように細工した念話で話の続きに入るんだけど、ルシルからの敬語がくすぐったいって、ちょっと逸れたことを考えちゃう。。一応、古代の騎士・ベルカの英雄・最強の剣騎士っていう畏敬の念を抱かれてる私だから、ルシルも口頭だと私に敬語、だけど念話だと普通の口調だ。うん、やっぱりこっちの方がしっくり来るし対等って感じで嬉しい。

『なにそれ！　それってまるでルシルを玩んでるっていうか、なんか嫌な感じ！』

『ありがとう、シャル。で、だ。勝手気ままに過ごすとは言え、たとえ狂っていようともシュヴァリエルがただの人間に下るような性

格なんかじゃない。奴が従うに値する存在だと思えるような奴が、リンドヴルムの首領なんだろうな』

『だよね。シュヴァリエルやハート2との戦闘で満身創痍で疲労困憊になってそうな私たちに、そんな奴を止められるとは思えない。ルシル、たとえあなたが本拠地の神器から全ての神秘と魔力を吸収したとしても・・・』

『今の未成熟な俺では辛勝だろうな』

「『うん』・・・だからね、私にも武器型の神器を授けてほしい」

ルシルを呼び出したのはこの為だ。私の戦力を強化しておきたい。オリジナル神器は、ルシルがすでにコード・イドゥンっていう魔力吸収術式によって魔力も神秘も吸収されてるから、単なる美術品レベルにまで格落ちしてるから使えない。

（フライハイト家の家宝扱いな断刀キルシュブリューテ・レプリカは、ルシルから魔力を貰わないと本領を発揮できないから持って来てない。なら後は、ルシルから複製神器を借りるしかない）

「・・・騎士シャルロッテ。あなたがイリスの体を借りて魔術師化したとしても、神器を扱うその大きな負担はイリスの体に掛かります。魔術師としての観点から、カローラ姉妹は魔力炉（システム）機能を有したリンカーコアを持っているので高位の武器型神器も使えます。ですが、イリスのはあくまでリンカーコア。ハート3に決定打を与えられるだけの高位神器の使用は危険です。神秘カートリッジとドラウ

プニルだけでなんとかしてほしいとしか・・・」

『シャルロッテ様、ルシル！　ちょっといいですか！』

「なに？」「なんだ？」

『シャルロッテ様、神器使ってください！　ルシル、神器貸して！』

「なぁ、イリス。さっきの話は聞いていただろ？　武器型の複製神器は補助系の神器以上に神秘が強い。君がフィレスくらいの歳ならリンカーコアでも多少の負担はあるだろうが使えると思う。しかし今の未成熟な君の体やリンカーコアに与える負担はかなり大きい。下手をすれば数日、いや数ヵ月くらい魔法が使用できないかもしれない」

『でも・・・。あ、断刀キルシュブリューテも神器なんだよね！
わたしの体でも十分使えたじゃない！』

「神器としての能力を解放しなかったからだ。だからやめろ、イリス。君には無理だ。今の君に神器は・・・使えない」

確かにアムティス戦の時は魔力不足だったから、"キルシュブリューテ・レプリカ"を解放できなかった。だから使えたしそんなに負担も掛からなかった。呆れと心配、両方の感情でイリスを諭すルシル。で、私と言えばあまりの自分勝手さにヘコんでた。魔術師化できるから、私が戦うから、そんな事ばかり考えてイリスの体のことをスルーしてた。

「『ごめんね、イリス。私・・・』」

口頭と念話両方でイリスに謝ったら『謝罪は無用なのです！　ルシル、それでも良いから神器貸して！』って彼女の意思は私以上に固かった。それから数分、ルシルと私で説得をしてみたんだけど、イリスは神器を使うって言って聞かない。

「・・・はぁ。我が手に携えしは確かなる幻想」

ルシルが詠唱。そして右手に「っ！！」とても懐かしい一振りの刀が現れた。鼻の奥がツンっとなる。

『ルシル。これ、神器？　どう見てもアームドデバイスなんだけど・・・』

「トロイ・・・メライ・・・！」

震える両手でルシルの手から"トロイメライ"を取って、鞘から刀身を半ばくらいまで引き抜く。綺麗なラピスラズリに輝く刀身に目が奪われる。

『トロイメライ・・・？　それがこのデバイスの銘ですか・・・？』

「ええ」

"トロイメライ"。私の最初で最後のデバイス。"界律（テスタメント）の守護神"

だった頃、先の次元世界で私と短い時間ながらも共に戦った相棒だ。ただのデバイスだった"トロイメライ"だったけど、この"トロイメライ"からは強力な神秘が放たれてる。

（あぁ、そうか。複製されてブレイザブリクから具現化された物は神器化するんだっけ）

なんの変哲もない普通の武器でも、一度"神々の宝庫（ブレイザブリク）"に登録されて具現されれば、神秘を含んだ魔力で構築されるため神器化する。"トロイメライ"も例に漏れずに神器化しちゃってるわけだ。

「イリス。苦しくないか？　」

『えっと・・・うん、ちょっと』

ルシルの問いに答えるイリス。ちょっと、って言ってるけど、声色からして無理してるって判る。私はすぐに「やっぱダメ！」"トロイメライ"をルシルに押し返す。ルシルは受け取った"トロイメライ"を肩に担いで「そういうわけだ。リンドヴルム首領も俺ひとりでどうにかする」そう言った。

『これくらい・・・！』

『へ・・・？』「ん？」

右手が勝手に動いてルシルの手から"トロイメライ"を奪い取った。イリスに体の支配権が戻っちゃった。ルシルが「返すんだ！」取り

返そうとするけど、イリスは「大丈夫だから！」返そうとしないで、あろうことか鞘に刀身を納めた上で局の制服であるブラウス、さらにその下に着てる下着のキャミソール内に"トロイメライ"を突っ込んだ。

「取れるものなら取ってみなさい！　出来るならねルシル！」

ちょうど握るための柄が胸の間。イリスから"トロイメライ"を取り戻すためには、ルシルが下着であるキャミソールの中に手を突っ込み、柄を手に取って引き抜く必要がある。

（こ、これは！　下手に手を突っ込めばセクハラと見なされ、ルシルはイリスに弱みを握られることに！　でも、手を突っ込まないと取り返せない！　イリス、なんて恐ろし――）

「あーらよっと」

「ひゃあん！？」

ルシルは一切の躊躇なく"トロイメライ"をイリスのキャミソールの中から引き抜いた。うん、ブラウスの裾から飛び出してる鞘の方を掴んで引っ張りだすことで。そうだよね。"トロイメライ"はイリスの身長――１３８ｃｍに合わせて１ｍほどの長さになってる。柄が胸の合間に来るようにすれば、必然的に鞘が服から飛び出すもん。そっちから抜けばそりゃ簡単だよね。

『あ～ん、シャルロッテ様からもルシルを説得してくださいぃ～』

胸から"トロイメライ"を無理やり抜かれたためかペタンと女の子座りしてるイリスの体の支配権がまた私に戻った。

「ええ～・・・」

今度はイリスじゃなくてルシルを説得しなければならなくなった。

「あのさ、ルシル。イリスが使っても良いって言ってるんだから、その・・・」

『ルシルぅ～、お願いだよ～』

私とイリスからの説得を続けることまた数分。ルシルはようやく「判った」折れてくれた。

「騎士シャルロッテ。いいですか、トロイメライを使うのは本当に危険な時だけです。『無視したら本気で許さんぞ』」

「判ってる『私はあくまで幻のような存在。現在を生きるイリスの体を最優先にするよ』」

ルシルから手渡された"トロイメライ"のシリンダーを見る。やっぱりカートリッジが入ってなかった。そんな私に「通常のカートリッジで問題ありませんよ」ルシルはそう言った。聴けば通常のカートリッジでもロードすれば、神器としての"トロイメライ"が勝手に神秘が付加された魔力にしてくれるとのこと。

「ありがとう、ルシル。ありがとう、イリス」

「はい『忘れるなよ、シャル。イリスにとって神器は毒だ』」

『頑張りましょう、シャルロッテ様！』

・―・―・終わりよ～・―・―・

――真紅の両翼（ルビーン・フリューゲル）――

背中から魔力翼を展開して、ハート3へと向かって急上昇。そしてカートリッジをロードした"トロイメライ"による「炎牙・・・月閃刃！」を彼女に叩き込む。

「悪足掻きなど見っとも無い・・・！」

ハート3は右腕の"光翼"を盾にすることで防御したけれど、私は"トロイメライ"の刀身に纏ったままの炎を爆発させる。ハート3への一方的な爆炎と爆風によるダメージ狙い。私は右手に持つ"キルシュブリューテ"を振るって黒煙の中へと「飛刃・翔舞三閃！」絶対切断の刃を放つ。間髪入れずに左手の"トロイメライ"を振るって「プラス五閃！」飛刃をさらに追加。次いで私は両翼を羽ばたかせて飛刃を追いかける。

「馬鹿の一つ覚えか！」

黒煙を斬り裂いてハート3へと向かった3つの飛刃は、彼女が振り払った右腕の"光翼"で弾き返された。次にさっき以上の神秘を有する飛刃2閃を左腕の"光翼"で弾き返そうとしたけど、「なに・・・！？」逆に左腕が弾かれ、直後の3閃への対処のために掲げた右腕の"光翼"をも弾かれ、懐ががら空きになった。

「おおおおおおおおおおッ！『なのは、アリサ、フェイト！　最後の一撃スタンバイ！』」

――絶対切断（アブソルーテ・フェヒター）――

両手に持つ"キルシュブリューテ"と"トロイメライ"による十字斬りをハート3に叩き込むけど、そのまま斬り払うことなく二刀で彼女を押さえ込む。

『今ッ！』

『『行きます！』『行くわよ！』

――エクセリオンバスターA・C・S――

――デストラクト・ディターレント――

――ジェットザンバーA・C・S――

なのは達がハート3の背後へと突撃を掛けた。彼女は私に集中し過ぎていてなのは達に気付かなかったようで、3人のデバイスの魔力

刃が背中に刺さったところで気付き、「ガキどもが、まだ抗うか！」怒声を上げた。

『自身の防御を優先に・・・、撃って！』

「エクセリオンバスタァァァァァーーーーーッ！」

「バーストアップ！」

「バルディッシュ！」

桜色の閃光、紅蓮の爆炎、黄金の雷光が溶け込むようにして大爆発。私は前面に最高位の防性術式のハイリヒ・フライハイトを展開することで魔力爆発を防御。その衝撃で大きく吹き飛ばされる中、『3人とも、大丈夫！？』なのは達の安否を確認する。

『『『なんとか大丈夫です・・・！』』』

張りはあるけど疲労困憊って風な声色で無事を伝えてくれたなのは達。これでなのは達は正真正銘に戦力外となった。あと戦えるのは私だけ。"キルシュブリューテ"を待機モードの指環に戻して、"トロイメライ"1本に絞る。刀身を鞘に納め、カートリッジを残り3発をロード。

『う、ぐぅ・・・うぅ・・・！』

イリスから苦悶の声が漏れた。だけど今は耐えてもらうしかない。

せめてこの一撃を当てるまでは。そんな私の苦悩が伝わったみたいで、『大丈夫、です・・・！　キメちゃってください・・・！』イリスから応援を受けた。

『・・・うんっ、ありがとう！』

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

――プリツァアソンテヴァ――

両翼を羽ばたかせて突撃。そしてハート3もまた光の鳥となって突撃して来た。右翼だけを大きく羽ばたかせて回避行動。彼女はそのまま後方へと通り過ぎて行って、私が振り返った時にはすでにこちらに再突撃をしてた。

「やば、当たる・・・！」

――凍結せし巨いなる聖剣（スパーダ・デ・ニエベミトロヒア）――

私とハート3を隔てるように空から降って来たのは、幅が3ｍほどある強大な冷気の剣。一瞬の沈黙の後、その剣からハート3が飛び出して来た。

「っ！・・・ありがとう、フィレス！」

ハート3はカチンコチンに凍り付いていて、最早ただの的と化してた。足元に魔法陣を展開して足場とする。

「牢刃・・・――」

そんな彼女が私の攻撃範囲に入ったことで・・・

「弧舞三閃！！」

絶対切断効果を有した"トロイメライ"の刀身自体と2つの魔力刃による三太刀同時斬撃をハート3に打ち込んだ。砕ける氷の破片が太陽の明かりを反射して眩しいけど、そんな氷の破片と一緒に墜落して行ったハート3をしっかり視認。それを追って急降下した私は・・・

「・・・ふぅ。こちらシャルロッテ。ハート3の撃破を確認。私たちの・・・勝ちよ！」

『はふぅ。・・・お疲れ様でした、シャルロッテ様』

『ええ、イリスも良く頑張ってくれたよ。ありがとね』

瓦礫に倒れ伏した意識が完全に飛んでるハート3、裸の少女（感じ取れる神秘からして光翼の人間形態ね）、それにへし折れた"キャルタンクリーヴ"も確認。こうして神器完全武装のハート3との戦いは、私たちの勝利で幕を閉じた。

Ｅｐｉｃｏ３８－Ｂ竜の終焉　～Ａｎｇｅｌ　Ｏｖｅｒｔｈｒｏｗｎ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「はぁはぁはぁ・・・、あり・・・えへん・・・」

地面に倒れ伏すわたしら対ハート２班。視線の先には、わたしらが戦ってたハート２が空中に佇んでる。ハート２。純粋な人間やないホムンクルスってゆう人形らしくて、その身体を器として天使を宿す存在。天使ってゆう神様に一番近い神秘の塊ってことで、すんごい強いのは判ってた。そやけど・・・

（こんなに強いなんて・・・）

戦闘開始からずっとわたしらは攻撃を続けてた。ホンマに手加減無用で。それやのに傷１つとして付けることが出来ひんかった。しかも、ハート２は攻撃らしい攻撃はしてきてへん。わたしらにしてくる事と言うたら、わたしらの攻撃を防ぐためのシールドを発射して突き飛ばすくらい。たったそれだけやのに、わたしらは全滅してもうた。

『リイン・・・、まだ行けるか・・・？』

わたしのパートナーでありユニゾンデバイスでもあるリインに確認する。リインは今、わたしの中で一緒に頑張ってくれてる。リイン

が居って魔法発動のサポートしてくれるからこそ、わたしは魔導騎士で居られる。

『リインならまだ大丈夫ですよ、はやてちゃん。でも、はやてちゃんがもう限界ですぅ・・・』

少し涙声なリインに『ごめんな。そやけど退けんのや』ルシル君もなのはちゃん達もそれぞれ強敵と戦ってる。それやのにわたしらだけなんも出来ずに倒れてました、なんて言いたくあらへん。

『シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。まだ戦えるか？』

『『『もちろんです！』』』『全然余裕！』

『すずかちゃん、ルミナ、ベッキー先輩、セレスちゃん、アルフはどないや・・・？』

『私もまだまだやれるよ・・・！』

『同様に・・・！』

『私も問題ありません・・・！』

『リタイアする気は無いよ・・・！』

『愚問だね！』

戦闘続行の意思を確認し合って、フラつきながらもわたしらは立ち上った。

「癒しの風、行きます！」

シャマルの治癒魔法によってわたしらの魔力やダメージ回復、防護服修復が完了。するとハート２の背中から生えてる４枚の翼がバサッと羽ばたいた。まるで、大人しく寝ていれば良いものを、って言ってるような感じや。はわたし１人で空に上がって、ハート２の頭上１０ｍほどで停止。

「リイン！　大魔法また行くで！」

『はいですっ！』

"夜天の書"をペラペラと捲って、とあるページで止める。アウグスタさんに体を乗っ取られた時、それ以前に蒐集してた何かしらの魔法が消えて、代わりに追加された魔法を使うために。ルシル君たちが言うには、消えた魔法を合わせてもそれ以上に強力なものやとのこと。ラグナロクやポラールリヒト・ノーヴァのような魔力的やない、物理的な魔法での最強・・・。

「我が呼びかけに応じ参ぜよ。深淵奈落を支配する冥府の女王の槍。空穿つ螺旋の唸りは破滅与える喜びの咆哮。突き進む道妨げる壁を無残に穿ち、其に純然たる破壊を齎す！」

『行くですよぉ・・・！』

「『ヴルフシュペーア・デア・ウンターヴェルト！！』」

対艦の一撃、巨大な螺旋の槍を具現させる。ハート2の対魔力・対物理の防御力は冗談みたい高い。そやけどコレほどのものやとどうやろうな。"シュベルトクロイツ"を脇に挟んで、柄を両手で掴む。そして・・・

「『往っっっけぇぇぇぇぇーーーーッ！！』」

直下に居るハート2へと向かって投げる。槍はゆっくりと回転を始めて、降下し始めた。わたしは『ハート2の様子はどないや！？』シグナムらに確認する。答えてくれたんは『大丈夫、回避行動に入ろうとしてません！』シャマルや。

『（あくまで真正面からわたしらの攻撃を受け切るつもりなんやな・・・！）了解や！　着弾後はみんなにお任せするな！』

唸りを上げてハート2へ向かって降下してた槍が、ズンッって轟音と一緒に降下を止めた。ハート2のシールドにぶつかったんやな。わたしは槍の柄の側まで降下して、"シュベルトクロイツ"の柄を両手で握りしめて振り上げる。

「『クロイツ・・・』」

杖のヘッド部分に魔力を付加。武器に魔力を込めて打撃するベルカ式の本領による一撃をお見舞いしたるわ。

「『シュラァァァァーーーークッ！！』」

槍の石突に"シュベルトクロイツ"の振り下ろす。ガキィーンって甲高い音が響く。すると槍がガクッと落ちた。さらに「あーらよっと～！」振り上げては石突に"シュベルトクロイツ"を叩く。そやけど今度は下がらへんかった。アカン、威力が足りひん。

『はやて！』

"グラーフアイゼン"をギガントフォルムに変形させてるヴィータがやって来て、わたしの横に並んだ。そんで「杭打ち交代！」"アイゼン"を肩に担いでそう言うた。確かにわたしより適役やと思う。

「頼めるか？　ヴィータ」

「おう！」

野球のバッターみたく"アイゼン"をブンブン振り回すヴィータ。わたしはヴィータが抜けた穴を埋めるために急いでシグナム達の元へ翔ける。その途中、「ギガントハンマァァァーーーッ！」ヴィータの掛け声と一緒にドォーン！轟音が空に響き渡ると、槍がまたガクッと下がった。

『さすがヴィータちゃんですね！』

「そうやな！　わたしらも負けてられへん！」

地表へと到着すると、シグナム達は棒立ちのハート２へ猛攻を仕掛けてた。ハート２は片腕を槍の先端へ掲げてて、直径１ｍほどのシールドで完全防御。シグナム達からの飽和攻撃にもシールドを張っては防御。中には直撃してるのもあるんやけど、ハート２はよろけもせえへん。

「リイン！」

『はいです！』

膝辺りまで地表に埋まってしもてるハート２へ「『ブラッディダガー！』」短剣型の高速射撃を１５発と一斉発射。わたしの射撃魔法に合わせて「フローズンバレット！」すずかちゃんも射撃魔法を１５発と発射。全周囲から迫る攻撃にもハート２はシールドを同数展開。完璧に防御したんやけど、爆発時に発生した煙に呑まれた。

「セレス！　ベッキー！」

「「はいっ！」」

「飛竜・・・一閃！」

「グローム！　ピーカ・モールニヤ！」

「氷星の大賛歌（カンシオン・デ・コンヘラシオン）！」

シグナムの砲撃級斬撃、ベッキー先輩の雷精グロームが変化した雷槍、セレスちゃんの氷雪砲撃による左右と背後からの三方同時攻撃。さらにヴィータがまた槍の石突を打ったことで上からの攻撃も追加の四方同時攻撃や。着弾時の衝撃波で煙がかき消えてハート2の姿を視認できた。ハート2はシグナムとセレスちゃんの攻撃をしっかりとシールドで防いでたけど、わたしの槍によって直立不動のまま腰辺りまで沈んでた。

『ヴィータ！全力全開で行ったって！』

重量級の物理攻撃の効く効かへんは横に置いといて、ああして動きを止めることは出来る。いつかは身体にヒビとかはいらへんやろうか、とか、砕ければ良えのになぁ、なんて思うわ。

『うんっ！』

ハート2がシールド越しの槍と一緒にゆっくりと上昇してく。せっかくのチャンスを逃すわけにはいかへん。

「逃さない！」「逃すものか！」

――戒めの糸――

――鋼の軛――

シャマルのデバイス、"クラールヴィント"の指輪と先端の振り子ペンデュラムを繋ぐ魔力の糸による拘束魔法、ザフィーラは対象を

杭で貫くことで拘束できるを拘束魔法を発動。続けて「封縛！」わたしも、「チェーンバインド！」すずかちゃんも、「リングバインド！」アルフも発動した。ハート2は鋼の軛だけにシールドを張って防御したけど、他のバインドはなんも対処しないまま捕まった。

――ギガントシュラーク――

その直後、ヴィータの最強技――ギガントフォルムの"アイゼン"のヘッド部分が超巨大化しての一撃が槍の石突に撃ち込まれた。すると槍はハート2を押し潰して、さらにはここ天空城レンアオムを貫通させてしもうた。

「・・・もしかして、これで決まった・・・？」

そう言ってルミナが地面に開いた大穴を覗き込んだ。わたしらも続いて大穴を覗き込む。見えるのは青い海。そんで海面から突き出てるんは崩れた槍の一部。ハート2の姿はどこにもあらへん。

「最後くらいは私も参加したかったのにな・・・」

「ルミナは戦闘開始からさっきのトドメに入るまでずっと頑張ってたやん。それだけで十分やない？」

わたしが槍――ヴルフシュペーア・デア・ウンターヴェルトを発動する直前までルミナは最前線でシグナム達と戦ってくれてたし、一番ハート2に攻撃を打ち込んでた。ＭＶＰがあれば絶対にルミナが受賞するわ。

「いやいや、待って。まだ居る、感じる・・・！」

セレスちゃんが神器・"氷結剣クロセル"と同化してるデバイス・"シュリュッセル"を構えて周辺を見回した。うん、正直な話そうやないかなぁ～って思うてたよ。警戒態勢に入ってすぐ、バキバキって近くの地面がひび割れ始めて、粉塵と瓦礫を撒き散らしながら大きく爆ぜた。

「なおも健在か・・・！　ルシリオンから貰ったカートリッジも残り1つだ」

「本当にうぜぇ・・・！　あたしもあと1発だ」

シグナムとヴィータがポツリと漏らす。2人のカートリッジを使っての攻撃力は重要やのに。ここでそれを失うんはかなりの痛手や。

「ハート2・・・！　・・・ん？」

堂々と宙に浮くハート2の、白亜の石像のような体をキッと見つめると気になるものがあった。ちょうど胸の中央、心臓の辺りにヒビが入ってるんに気付いた。それをみんなにも伝えようとした時、その辺りが強く発光して、「あっ！」みんなが声を上げるような事が起きた。

「神器だ！」

「体内に取り込んでいたのね！」

ハート2が所有してた書物型の神器・"ヒドゥンカリグラフィ"が光る胸の中から出現した。アレにルシル君から貰った神器封じのお札を貼り付けることが出来れば、わたしらの逆転勝利や。しかも嬉しいことに、「天使化が解除されました！」ベッキー先輩の言うようにハート2が元の普通の人の体（色はまるで腐食してるような薄紫色で気色悪い）に戻った。

――シヌイ――

神器書のページが捲れ始める。新しい天使を召喚して天使化する気や。合図とか何も有らへん中、ルミナが「ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース・・・！」クラウチングスタートからの高速ダッシュでハート2へ突進。

「サポート！」

――雪花飛刃（ペタロ・アニリョ）――

冷気を纏う"シュリュッセル"を振るって氷の花弁を数枚と高速回転させながら放ったセレスちゃんの指示に応じるよりも早く、わたしらはすでに発射準備を終えてた。

「リイン、最速の一撃や！」

『ブラッディダガー、発射です！』

――ブラッディダガーーー

「スノーホワイト！」

――バインドバレット――

「行くよ！」

――フォトンバレット――

「うらぁぁぁぁぁぁッ！」

――シュワルベフリーゲン――

「おおおおおおおッ！」

――鋼の軛――

「ジムリャー！」

――クラードビシェ・ドゥラーク――

わたしとヴィータとアルフは攻撃を、ザフィーラとすずかちゃんは拘束を、ベッキー先輩は地の精霊ジムリャーが発動した・・・攻撃か拘束か判らへんけど、地面から突き上がった４本の岩石の柱に四肢が呑み込まれてる。そこにわたしらの魔法が爆発、煙が発生。そ

こにルミナが突撃した。

「上手く行ったでしょうか・・・？」

「シールドを張れる天使を宿していなかったこともありますし、おそらく――」

――イェリダー・マルアフ・ピュリキエル――

ベッキー先輩とシャマルの話し声が途切れさせたのは『ごめん、失敗！』ルミナからの謝罪の思念通話やった。それとほぼ同時、煙を消し飛ばす炎が噴き上がって、ルミナが「熱っ、熱っ、熱い！」炎に包まれながら飛び出して来た。わたしとシグナムとシャマルは慌ててオーバースカートを外して、バサバサとルミナをはたいて火消し作業。

「っ！　ヴァダー、水を！」

ベッキー先輩が"ドゥーフヴィーゾヴ"をシャランと鳴らして、サメ型の水精ヴァダーを召喚。ルミナを覆うように水の渦が発生して、「けほ、けほ、助かったよ、ベッキー」見事に消火完了や。

「ルミナも無事で良かったわ・・・。そやけど・・・」

オーバースカートを付け直しながらルミナからハート2へ視線を移す。そこには、足元から炎を噴き上がらせてるハート2が居る。ザンクト＝オルフェンで戦って負けた時とおんなじ火の天使を宿して

る。

「これって最悪じゃないかい？　さっきまではただのシールドだったけどさ、炎熱が付いたらいよいよ手が出せないんじゃないか」

「炎熱に耐性が出来ちまうとシグナムもそうだし、セレスも戦力外になるんじゃね？」

「む」

「あぁ、氷結系ですからね私・・・」

「そうなると私もダメっぽい、かな・・・」

シグナムとセレス、それにすずかちゃんが戦力外になりそうな雰囲気や。それだけやない。リインが『ヴィータちゃんも近接攻撃が出来ないですよ』って言うた。そうや、ヴィータは攻撃の大半は近接系やし、あの天使の炎やとさすがに大火力以外の攻撃は全部燃やし尽くされる。いよいよどうやって戦おうかと不安になってたところ・・・

「大丈夫です！　この戦いは私たちの勝利です！」

そう言うたシャマルがニコニコ笑顔を浮かべた。真っ先に「はあ？　あんな化け物相手にあたしら抜きでどう勝つって？」ヴィータがちょう苛立ち気にシャマルに訊き返した。

「神器書がどこにも無くてどうしようかと思ってたけど、持ってるなら盗っちゃえば良いのよ♪」

シャマルの、盗っちゃえば、ってゆう言葉ですぐに理解できた。すずかちゃんは体験済みやし、ルミナ達にも何度か模擬戦で見せたことあるから、全員の表情が希望に満ちたもんになる。ハート2が神器書を持ってへんかったからこれまで使わへんかった魔法やけど、体内に有るゆうんやったら出し惜しみする必要は無い。

「クラールヴィント、お願い！」

――旅の鏡――

"クラールヴィント"で作った鏡の中にシャマルが手を突き入れて、「え～っと・・・」何かを探るような声を出して・・・

「・・・見つけた！」

シャマルが表情を輝かせて手を引っ張り出した。その手に有ったんは間違いなく「神器書！」やった。ルミナだけでなくすずかちゃん、わたしも残りの神器封じのお札を神器書にベタベタと張りまくる。

「さぁ、ハート2はどうなるのかな！」

お札塗れの神器書からハート2へと視線を戻すと、「ケケ、ククク、ケケケ、ッ！！」奇妙な笑い声を上げて苦しみもがく姿が目に入った。しかも体の至るところから小さな爆発が何度も起きてるし、火

も噴いてる。どう見ても「暴走・・・？」のようや。わたしらを閉じ込めてた結界も消失してるし。

「ケケケ、キャキャキャ、ケキャキャキャ、クキャキャキャ！」

ハート2の全身が炎に包まれたかと思えば、炎の尾を引いて空に上がってクルクル回り始めた。

「シンダ、シンダ、ヤツガシンダ！　エグリゴリガシンダ！」

なんか言うてると思うて耳を澄ますと、"エグリゴリ"が死んだ、って聞こえた。それはつまり、「ルシルの奴、シュヴァリエルに勝ちやがった！」ヴィータや、「すごい、すごい！」シャマル、それに『さすがですぅ、ルシル君！』リインが大いに喜んだ。そんでわたしは「ルシル君・・・、良かったぁ」喜びよりも安堵でいっぱいや。

「ジユウ！　ワレハジユウヲエタリ！　カエラネバ！　ワガシュガオラレルミザノモトヘ！」

ハート2が降下を始めたから身構えたんやけど、全く別の方向に向かって行ってドォン！と落下。安堵したのも束の間、とんでもない爆発が起きて、空が真っ赤に染まった。しかもその衝撃もまたすごくて、「きゃあ！」その場で転んでまう。黒煙が立ち上って空を覆い隠す中でも震動が治まらへん。

「ミチハドコダ！　テンヘカエルミチ！！」

また別のところから爆発が起きて、そこから先端が人の顔をした蛇のようなモンに変化したハート2が飛び出して来た。そんで「ミチ！　カエレヌデハナイカ！　ドコダ！」そう叫びながら建物や島を破壊しながら、ミチ、ってゆうんを探し続けるんやけど・・・

「ミチって、この神器書のこと・・・よね？」

ルミナがお札で全体が見えへんくなってる神器書の表紙をポンポンとノック。天使を召喚する本やから、天界に帰るにはこの本を通らなアカンみたい。そやけど、「お札剥がしちゃいます？」ってわたしらみんなに訊いたシャマルには誰も答えへん。どっちにしても良い結果にはならへんことは誰もが解ってる。

（あのまま放っておいたらレンアオム（ここ）が壊されるし、神器書を解放したらまたハート2と戦わなアカンくなるかもしれへんし・・・）

「オノレ、エグリゴリメ！　ワレヲテンカイニカエサズニシヌナド！」

怒りはもう限界みたいやし。八方塞り状態な今、解放するかしないかで話し合おうとした時、「ワカル！　ワカルゾ！」さんざん暴れてたハート2・・・とゆうよりは、ハート2ってゆう器に閉じ込められてもうてる天使が嬉しげな声を上げた。そんでその軌道を変更。向かう先は・・・

「こっち来る！？」

「ちょっ、マジか！　あんなの掠っただけでも炭化じゃねぇか！」

「散開！　1ヵ所に留まらなうように注意！」

ルミナの指示に従ってその場から四方八方にわたしらは飛び立つ。天使の軌道が少し乱れたんやけど、すぐにある1人に向かって突撃を再開した。そうなるってことはすぐにでも判ることやった。

「「「「ルミナ！」」」」「「ルミナちゃん！」」」「ルミナさん！」

神器書を持つルミナが標的にされてた。天使は「ニンゲン！　ソノショモツヲワタセ！」怒声を上げてルミナへ突っ込んでく。ルミナは高速移動魔法で逃げに徹するんやけど、天使はそれ以上の速さで追い縋ってく。しかも火の尾から火炎弾を無差別に何十発とバラ撒いて来る。それがわたしらのルミナへのフォローを邪魔してくるし、ルミナの逃走も妨害。

「ヴェーチル！」

――ツヴィトーク・タイフーン――

ルミナを護るように現れたスズメ型の風精ヴィーチルが、天使の突撃を止めるために暴風の花を作りだした。そんで、その花に突っ込んだ天使は「セイレイゴトキガッ！」怒声を上げて自身を覆う炎を爆破させた。

「っ！？」

『はやてちゃ――』

目の前が真っ赤になって、爆音で耳がキーンとなった。体が浮く感覚、宙を舞う感覚、そんで何かにぶつかった感覚を順々に得た。今のわたしの状況が判らへん。目を開けてるんか、耳が聞こえてるんか、立ってるんか、倒れてるんか、なにも判らへん。

『・・・ちゃ・・・・』

何か聞こえた・・・？

『・・・やて・・・・』

リイン・・・？

『はやてちゃん！』

「リイ・・・ン・・・・」

自分の声が聞こえた聴覚が無事やとゆうのを確認。リインが『静かなる風を発動するです！』"夜天の書"から治癒魔法を発動してくれたおかげで、視覚も回復し始めてくれた。真っ先に視界に入ったんは更地と化した地面やった。あと・・・

「（腕・・・？）っ、ザフィーラ！？」

わたしを庇うように四つん這いになってるザフィーラに気付いた。わたしはザフィーラの下から這い出て、完全に気を失ってる「ザフィーラ！」を仰向けに横たえさせたその時、色んなところから爆発音が轟いた。

「・・・っ！　すずかちゃん、アルフ！」

音の出どころより先に見えたんは、気を失ってるんか俯けに倒れてるすずかちゃんとアルフ、さらに「シグナム、ヴィータ、シャマル！　ベッキー先輩、セレスちゃん！」家族や友達みんなが倒れてるんが見えた。わたしは側に落ちてた"シュベルトクロイツ"に手を伸ばして、杖を支えに立ち上がる。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

「っ！？　ルミナ・・・！？」

また爆発音が聞こえたかと思えば今度は悲鳴付き。声の主が誰なんかはすぐに判った。空を見上げると、ルミナがたった1人で戦ってた。相手は人型の炎の塊。間違いなく天使や。そんなルミナは空を錐揉み状態で吹き飛ばされてて、天使の格好の的になってた。

「リイン、ルミナを優先や！」

『は、はいです！』

「『クラウソラス！』」

"シュベルトクロイツ"の先端から1発の砲撃を発射。ほんのちょっとでもええ。ルミナが体勢を立て直せるだけの時間を稼ぐことが出来れば。砲撃は天使の前方スレスレを通り過ぎてったこともあって、その動きを止めることに成功。

『はやて！？』

ルミナは追撃を受けることなく体勢を無事に立て直してくれた。それを確認して『ルミナ！　本は！？　もうこうなったら解放するしか・・・』天使が怒ってる理由である帰り道を開ければ、怒りは収まるはず。あとはハート2が再召喚する前にまた神器封じのお札を張れば・・・

『ダメ、出来ない！　あの馬鹿天使が無理やり帰ろうとして突っ込んだから、灰も残らない程に燃え尽きた！』

（ちょう気を失ってた間に最悪な展開になってたんやな・・・）

『だからどうにかして倒さないと全滅するわけ！　で、はやてにはみんなを起こしてほしいんだけど、出来る！？』

『うんっ！』

人数は多いけどなんとかなるはず。まずはシャマルを優先に回復させれば、みんなの回復も早くなる。シャマルの側に駆け寄って、「静かなる風よ。癒しの恵みをみんなに」発動。効果が現れるより前

に「っ！！」とんでもない"力"を感じた。
ルミナと天使の方に視線を戻すと、そこには信じたない光景があった。天使が片腕を突き出してて、そんで相対してたルミナはゆっくりと墜落を始めてた。そのルミナの体には真っ赤に輝く三叉槍が突き刺さってた。

『っ！！』

「ルミナ・・・？　ルミナ！　ルミナぁぁぁぁーーーーーッ！！」

魔法には非殺傷設定がある。そやけど神秘の有る魔力での魔術はすべて殺傷力アリのものばかり。その一撃を受けるようなことがあったら・・・。急いでルミナの元へ翔ける。その最中に『リイン！　コードを検索！』"夜天の書"のページを捲り続ける。

『コードって・・・ル、ルシル君の術式を使うですか！？　危険すぎです、はやてちゃん！　ルシル君からも注意されたじゃないですか！　はやてちゃんとリインの体やリンカーコアがもっと成長するまで使うな、って！』

アウグスタさんに乗っ取られた時にはバンバン使われてたけど、あの時は融合騎として最高クラスのアインスや、敵ながら魔力運営技術が巧かったアウグスタさんの２人が居ったからこそ出来たって、ルシル君から使用せぇへんよう注意された時に一緒に聞いた。

（今のわたしやリインのレベルやと、ルシル君の魔法の上級は使えへん。そやけど・・・！）

地面に叩き付けられる前にルミナの両手を取ってキャッチ。ゆっくりと横向きに横たえさせる。三叉槍は一瞬だけ燃えてすぐに消失。ルミナの体に1つの穴だけを残した。

「ルミナ！　気をしっかり持って！」

半開きの目に微かな息、脈も弱なってくのが判る。ルミナが今にも死んでしまいそうな状況に涙で視界が滲んでく中、「リイン！　エイルを、ラファエルでも良えから！」ルシル君の治癒術式の発動のサポートを指示する。

『ラ、ラファエルでもはやてちゃんへの負担は大きいです！』

「そんなこと言ってられへん！　ルシル君を待ってるわけにもいかへんし！」

シュヴァリエルに勝ったようやけどルシル君の今の状態が判らへん。エイルを発動できるだけの余力はあるか、それとも魔法も扱えへんほどにボロボロなのか、も。そんなルシル君に期待するわけにはいかへん。

『でも・・・！』

「今はわたしの心配よりルミナの生死の方が重要や！」

『リインははやてちゃんの家族でパートナーです！　マイスターの

事を優先するのは当然です！』

言い争いに入りそうなほどに切羽詰まってる。こうしてる間にもルミナは・・・。それに天使かてこちらに向かって降下を始めてる。ルシル君の魔法を使うにはリインのサポートが必須やし。迷ってる時間は無い。

「ワレヲコノチニトドメシザイニンニハシヲ！」

「自分で帰り道を燃やしておいて・・・！」

怒りで頭に血が上ってガンガン痛む。そんなわたしの頭の中に『逃げ・・・て・・・。私、もう・・・ダメ・・みたい・・だし・・・』ルミナからの思念通話が。そんなん言われても「嫌や！」としか言えへん。友達を見捨てる真似なんか出来ひん。

『・・リイン・・・、はやて・・・連れて・・・げて・・・』

その思念通話を最後に、ルミナの呼吸が止まった。

「・・・ルミ・・ナ・・・？」

頭の中が真っ白になる。助けられへんかった。

『はやてちゃん！　はやてちゃん！』

「ルミナ・・・、ルミナ・・・。アカンよ、ルミナも一緒に逃げな

・・・」

――ユニゾンアウト・アウトフレーム――

「はやてちゃん！」

誰かに腕を引っ張られる。リインがユニゾン解除してて、さらにヴィータくらいの身長にまで変身してた。

「逃げるんですよ、はやてちゃん！」

「ルミナを置いてけへん・・・」

「ルミナさんは・・・、ルミナさんはもう・・・」

見ればリインの顔も涙に鼻水、ボロボロな泣き顔やった。

「キサマラモシヌガヨイ！」

真夏の日差し以上の熱がわたしを襲った。天使はすぐそこまで来てて、ルミナを貫いたものと同じ真っ赤な三叉槍をすでに振りかぶってた。リインが「はやてちゃん！」わたしに覆い被さってきた。このままやとリインまで居らんくなってまう。わたしはほぼ無意識にパンツァーシルトを四重展開。三叉槍が1枚目を一瞬にして砕く。2枚目もまた一瞬、3枚目も同様。4枚目は2秒くらい保ったけど、やっぱ砕けた。

「あ・・・」

まるで世界のすべてがスローになったような感じの視界になる。リインの肩越しに見える三叉槍の先端。そんで横から突き出されてきた誰かの握り拳にされた右手。誰の？　その答えは、手首にある漆黒の腕輪が示してる。

「ルミナ・・・？」

「へ？・・・ルミナ、さん・・・？」

スローの世界の中でわたしは見た。死んでしもうたはずのルミナが天使の三叉槍を殴って弾き飛ばして、左の拳で天使を殴り飛ばしたんを。わたしとリインを護るように立ち塞がってくれる「ルミナ・・・」の傷が無くなってる背中に声を掛ける。元の速さに戻った世界の中、ルミナはチラッとわたしとリインを見て・・・微笑んだ。

「判らないものね。終極と恐れられたテルミナス（わたし）が、殺すほどに大嫌いだった人間を護るだなんて」

ルミナがボソボソってなんか呟いた。なんて言うたか訊ねる前に「ニンゲンンンン！」天使の怒声が大気を震わせた。

「はやて、リイン。この場から離れて。巻き込まない自信が無いの」

「あ、え、う、うん・・・！」

「ありがとうです、ルミナさん！」

元のサイズに戻ったリインと一緒に逃げ出したところで、ガキィーンって金属を打ち合って鳴らしたような音が背中に届く。聞き覚えのある音や。ルミナの２つの腕輪・"ツァラトゥストラ"を打ち合ってる音や。

「Ｆｏｒｔｉｔｕｄｏ　ｉｎ　ｌａｂｏｒｉｂｕｓ　ｐｅｒｉｃｕｌｉｓｑｕｅ　ｃｅｒｎｉｔｕｒ」

――勇気は勤勉と危険とにおいて――

ガキィーン。

「ｔｅｍｐｅｒａｎｔｉａ　ｉｎ　ｐｒａｅｔｅｒｍｉｔｔｅｎｄｉｓ　ｖｏｌｕｐｔａｔｉｂｕｓ」

――節制は快楽の忘却において――

ガキィーン。

「ｐｒｕｄｅｎｔｉａ　ｉｎ　ｄｅｌｅｃｔｕ　ｂｏｎｏｒｕｍｅｔ　ｍａｌｏｒｕｍ」

――知恵は善悪の識別において――

ガキィーン。

「ｊｕｓｔｉｔｉａ　ｉｎ　ｓｕｏ　ｃｕｉｑｕｅ　ｔｒｉｂｕｅｎｄｏ」

――正義は各人にその権利を帰することにおいて認められる――

ガキィーン！　今まで以上に高い金属音が聞こえた。振り返ってみると、「ま、悪くないけど。こんな生き方も・・・ね！」"ツァラトゥストラ"が飴細工のように融け合って、全く別の物に変わった。

「「十字架・・・？」」

腕輪やった物が２ｍくらいの長さな漆黒の十字架になった。普通の十字架とは違くて中央に輪っかがある。確かケルト十字ってゆう名前やったっけ。ルシル君が好きなデザインや。ルミナは十字架に変化した"ツァラトゥストラ"を振りかぶったまま天使へ突進。天使もまた三叉槍を構えて突進。

「クスクスクスクス・・・！」

「ナニガオカシイ！」

天使が三叉槍を繰り出した。ルミナは"ツァラトゥストラ"を振るって、縦棒の長い方で三叉槍を弾いてその場で旋回、横棒の方で天使を殴った。

「きゃ・・・！？」「ひゃあ！？」

殴り飛ばされた天使がわたしとリインのすぐ側を通り過ぎてった。そっちに振り向くより早くルミナも超高速でまたわたしらの側を通過してった。遅れてそっちに振り向いた時、ルミナは"ツァラトゥストラ"で天使をボッコボコに殴り続けてた。あまりにも圧倒的なその強さに、驚きよりも夢やないかって疑問がいっぱいになる。

「クスクス！　さっさと消えてちょうだい！」

「ムグゥ・・・！」

"ツァラトゥストラ"の打撃で空に舞い上げられた天使は、わたしほどの大きさにまで体を削られてる。ルミナは"ツァラトゥストラ"の先端を宙を舞う天使へ向けて・・・

「クス。終わりよ。さようなら、神属（ぎぜんしゃ）の天使」

――Ｆａｔａ　ｖｉａｍ　ｉｎｖｅｎｉｅｎｔ――

銀色に輝く砲撃を撃った。その砲撃は天使を呑み込んで空へ消えてった。通過した場所にはなんも残ってへん。ううん、何かが落ちて来た。よう見ればハート2であるホムンクルスやとゆうのが判る。天使はもう憑いてへんようやし、神器書ももうあらへん。それはつまり・・・

「勝った、んか・・・？」

「勝ったです・・・？」

リインと顔を見合わせる。喜びが込み上げて来て大声を上げそうになったんやけど、ドサッてルミナが倒れたのを見て引っ込んだ。

「ルミナ！」「ルミナさん！」

側に駆け寄って「リイン！」ともう1度ユニゾンして、気を失ってるルミナに「静かなる癒し・・・！」を掛ける。そんな中、ケルト十字やった"ツァラトゥストラ"がまた融けて、元の2つの腕輪になってルミナの両手首に戻った。ひょっとしてコレも神器なんやろか。なんかそんな感じがする。

「・・・っ！？　あれ、私・・・？　いっつ・・・」

「ルミナ！」

『ルミナさん！』

「なんかすごい頭が痛いんだけど・・・っていうか、私、死んだ！？　死んだよね！？　じゃあここは有名な死後の世界！　もしかしてはやてとリインも死んだ！？　最悪過ぎる！」

ガバッと上半身を起こして頭を抱えるルミナ。天使を斃したこと憶えてへんのやろか。とにかく「ルミナが無事に戻って来てくれて良かった！」ルミナを抱きしめて、生きてくれてることに最大の感謝をしようと思う。

「えっ、どういうこと！？　無事！？　私も、はやてやリインも無事なの！？」

『はいっ、そうですよ！　リイン達もルミナさんも生きてるですよ！』

「生き・・・てる・・・、私、生きてる・・・。生きてるよぉ・・・」

ルミナの目からも涙が溢れ出した。わたしはさらにギュッとルミナを抱きしめると、ルミナも抱きしめ返してくれて、「私、生きてるよぉ！」泣き声を上げた。ルミナの背中をポンポンとあやすように優しく叩く。そんなルミナの様子にわたしもまた涙が溢れだす。

「うぅー。ぐすっ、なんか年上なのに、先輩なのに、見っとも無いトコ見せてるね・・・」

「ううん。そんなことあらへんよ。これはしゃあないと思う。誰だって死ぬのは怖いもんな」

『ですよ、ルミナさん」

「ぐす。ありがと、はやて。もう大丈夫」

泣いた所為か恥ずかしい所為か、もしくは両方か、ルミナは顔を真っ赤にしてわたしから離れた。そんでルミナは咳払いを1回して「えと・・・て、天使はどうなった？」そう訊いて周囲を見回した。

袖で涙を拭いながらわたしは「天使はその、うん、ルミナが斃したんよ」ありのまま答えた。

「えっ、うそ！　私、何も憶えてないんだけど！」

「何てゆうか、そう、まるでシャルちゃんとシャルロッテさんのような感じに人格が変わったようになって」

口調はそのまんまなんやけど、纏う雰囲気がちょう畏れ多いって感じやった。ルミナは「別の・・・人格・・・」なんか心当たりがあるんか考え込み始めた。そんな時・・・

「主はやて！」「はやて！」「「はやてちゃん！」」

「ルミナ！」「ルミナさん！」

「おーい！　２人とも無事かい！」

意識を取り戻してくれたシグナムとヴィータとシャマルとザフィーラ、それにすずかちゃんとアルフとベッキー先輩とセレスちゃんがこっちに向かって駆けて来た。みんなと合流して改めてハート２の撃破を喜んでると・・・

『こちらジャスミン。対ハート２班の皆さんをこれより本艦へ転送します。その場からしばらく動かないでくださいね』

そうゆうことみたいで、その場でわたしらは待機。シュヴァリエル

クラスって言われたハート2をなんとか撃破。ルシル君もシュヴァリエルを倒せたみたいやし。なのはちゃんら対ハート3班はどうなったんやろう。でも不安は無い。シャルロッテさんとフィレス二尉が居ってくれるんやし。きっと勝ってるはずや。

Ｅｐｉｃｏ３９転移門ケリオンローフェティタ～Ｒｏａｄ　ｔｏ　Ａｌｆｈｅｉｍｒ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

ハート３を辛くも撃破した私たちは重傷を負ったフィレス二尉を、ここ天空城レンアオムっていうリンドヴルムの本拠地にまで乗せてくれた、管理局の次元航行艦ジャスミンの医務官と一緒に搬送した。

「フィレス。あとは私とルシルで何とかするから、ゆっくり体を休めてね」

「申し・・わけ・・・ありません・・・」

ストレッチャーに乗せられて運ばれるフィレス二尉にそう伝えるシャルロッテさん。フィレス二尉は肋骨や両腕、右足の骨を折っていて、喋るのも辛いはずなのに「あと、は・・・お願い、します・・・」頷き返した。そして医務室へと直行したフィレス二尉のストレッチャーを見送った私たちは・・・

「では彼女を護送室へお願いします」

「「「「はい！」」」」

次に機動一課の前線部隊の１つ、フレア分隊に連行されてるハート３の方を見る。あの人はシャルロッテさんの一撃を受けて気を失っ

たのに1分としないで目を覚ました、正しく怪物。でもシャルロッテさんとフィレス二尉の魔術のダメージが抜けきっていないこともあって、なんとか自力で歩ける程度の様子。だからたとえ暴れても、あの様子に神器無しなら今の私でも勝てる。

『ふ、ふふ・・・私を倒したところで意味は無い・・・。ボスやシュヴァリエルさん、戦力としてのハート2が居れば、リンドヴルムは死なない・・・！　アハ、ハハ、アハハハハ！』

ハート3は狂気に駆られたような笑い声を念話を使って上げ始めた。何故念話かというと、口が閉じられないようにタオルを頭に巻かれているから。これまで逮捕したリンドヴルム兵はこぞって奥歯に仕込んだ毒薬で自害してる。それを阻止するために私たちは、ハート3撃破の直後にタオルを巻いた。

「おい、黙るんだ！」

フレア分隊の人が念話止めさせようとしていると、『こちらブリッジです。状況報告いたします』ジャスミンの通信士から通信が入った。

『先程、ハート2とセレス一士班の戦闘が終了。これでハート1とルシリオン捜査官の勝利を合わせ、ドラゴンハートの全滅を確認しました』

ドラゴンハートの全滅。それはとても喜ばしい報告だった。反面ハート3にとっては聞きたくなかった報せで、『そんな・・・馬鹿な

・・・』力なく床にへたりこんだ。そんなまるで人形のように体を弛緩させたハート3を、フレア分隊は護送室へと連行して行った。

「ルシル君・・・。シュヴァリエルさんに勝ったんだね・・・。良かったのに、嬉しいはずなのに・・・」

なのは、それにアリサやすずかは、シュヴァリエルと何度か顔を合わせたり話をしたりしたみたいだし、素直にシュヴァリエルの敗北・・・死を喜べないんだと思う。しんみりする中、ここエントランスのトランスポーターに転送の際に生まれる光が発せられた。転送されて来たのは、ハート2の撃破を任されたすずかやはやて達だった。私たちはお互いの勝利と無事に喜び合ったんだけど・・・

「あの、お姉ちゃんは・・・？」

セレスがこの場に居ないフィレス二尉の姿を捜す。フィレス二尉と一緒に戦ってた私となのはが少し沈んだ表情を浮かべたことで、「お姉ちゃんに何があったの！？」セレスが詰め寄って来た。

「命に別条は無いから安心して。今は医務室で治療中よ。セレス、あなたも怪我を負っているようなら行って来なさい」

「え、あ、はい・・・」

シャルロッテさんがセレスを一瞬にして宥めた。外見は１０歳のイリスなのに纏う雰囲気は大人の、不安な状況でも安心できる包み込んでくれる温かさというか優しさがある。セレスは「じゃあ、私、

ちょっと行ってくる」私たちに一度お辞儀して、医務室へと駆けて行った。
セレスを見送ってすぐ、遅れてまた別の転送反応。転送されて来たのはゲイル分隊とストレッチャー1台。乗せられているのはハート2の正体のホムンクルスだった。天使化している時は彫像のようだけど、普段のホムンクルス時は皮膚の色は気色悪いけど普通の男の人の物。大事な部分が隠れるように首から下にタオルケットが掛けられている。

「イリス捜査官。ハート2の事ですが、護送室の方が良いでしょうか？　それとも医務室へ？」

「どれどれ・・・。あれまぁ、上手に焼けちゃって。神器書はどうしたの？」

布団を捲ってハート2の全身を確認したシャルロッテさんの問いに「天使が燃やしたんやけど・・・」はやてが答えた。シャルロッテさんは少し考える仕草をした後「そう。なら護送室へ」ゲイル分隊に指示を出した。ゲイル分隊は敬礼してハート2が載せられたストレッチャーを護送室へ運んで行った。

「さてと。ハート2もハート3も、そしてハート1のシュヴァリエルも倒れた。あとはリンドヴルム首領を探し出して捕縛。それと神器をアールヴヘイムへ返す。それで私たちの戦いは終わる」

私たちみんながその言葉に頷き返す。そんなところに通信士から『こちらブリッジです。ルシリオン捜査官からの通信をそちらにも繋

げます』そんな連絡が入って、私たちの前にモニターが1枚と展開された。映っているのはルシル1人だけど、場所はレンアオムの景色じゃない。どこかの建物の中みたい。

『先ほどブリッジから連絡を貰ったよ。誰も犠牲になることなくハート2とハート3に打ち勝ってくれたようですごく安心した』

「ルシル君も無事そうで何よりや！　無茶とか無理とかしてへんか？」

『俺は大丈夫だよ。シュヴァリエルもなんとか救えたし、今の俺は最高の気分だ。まぁ、シュヴァリエル戦の映像記録は年齢制限を掛けざるを得ない程の血生臭だけどな』

そう言って微笑むルシルだけど「もう！　心配する方の身にもなってな、ルシル君！」はやてはお怒り。一度シュヴァリエルに負けて瀕死にされてしまっていたルシルの姿を思えばそんな気持ちになるのも判る。そしてルシルが『ごめんごめん。で、これからの事なんだが――』ここまで言いかけた時・・・

『マイス――じゃなかった、ルシル♪　ステガノグラフィアがラレス・ウィアレス2番艦の制御プログラムのクラックに成功したよ♪』

モニターの画面外から女の子の声が聞こえてきた。どこかで聞いたことのあるような声なんだけど思い出せない。なのは達もそんな顔。でも「この声・・・おい、まさか！」ヴィータや「ええ、そうよ！」シャマル先生、あのシグナムですら思いっきり「間違いない！」表情を輝かせていた。

『こっち、こっち』

ルシルが画面外に向かって手招きをする。すると『な～に～？』リインくらいの小さな女の子がルシルの側に飛んで来た。以前敵として出会って戦い、友達としてお別れしたアイル・ザ・フィアブリンガーと同じ真っ白な子で、腰の辺りから一対の白い翼を生やした・・・

（思い出した。古代ベルカ時代でのシグナム達の家族だった融合騎・・・・！）

「「「「「アイリ！！」」」」」

シグナムとヴィータとシャマル先生、それにザフィーラがその子の名前を呼んだ。ヴィータとシャマル先生に至っては嬉し涙を流してる。

『っ！　シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ♪　うわぁーん、逢いたかったよぉ～！』

アイリという子も嬉し涙で顔を濡らしちゃった。シグナム達とアイリの再会に私も心が温かくなる。ルシルは『アイリも無事に奪還できた。あとは首領と神器の返却だけ』そう言って、シャルロッテさんの方を見た。

「私はすぐに出られる。けど、フィレスとセレスは戦力外通告。フ

ィレスが重傷。一応骨折だけだけど休んでもらってる。セレスはその付添いね」

モニターが2枚になって、1枚はシグナム達やはやてとリインが喋り合って、もう1枚でルシルやシャルロッテさん、私たちが話し合う。とは言っても私たちはもうやる事は無い。私たちのリンドヴルム攻略戦は、ハート2とハート3を撃破した時点で終わった。ハート3は想定外だったけど、ハート2や3との戦いで私たちが消耗しきることは作戦の内に入っていた。

（悔しいけど、実際に神秘カートリッジは使い潰したし、これ以上の全力全開による戦闘続行が出来るだけの魔力も無い。出来ることと言えば・・・）

『そうですか。今、俺とアイリはアールヴヘイムへ向かうための策としてロストロギア艦のシステムのクラックを終え、特捜課の先輩たちの協力のもと神器を搬入しています』

「了解。私もそっちに向かうわ。首領は？」

『いいえ。1番艦を調査しましたがその姿は有りませんでした。スノー分隊とアース分隊がレンアオム下層の捜索をしてくれていますが、未だに発見の報せはありません。最悪アールヴヘイムにすでに渡った可能性が・・・！』

「捜索の手が足りない、か・・・」

そう、出来ることと言えば「私も捜索に参加します！」それくらいだ。私が挙手すると「私も！」なのはや「あたしも！」アリサ、「わたしらもや！」アイリと喋っていたはずのはやて達もいつの間にかこちらに合流して挙手していた。

「ルシル。どうかしら？」

シャルロッテさんが私たちを一度見回した後、ルシルにそう確認した。するとルシルは『動けるのであればお願いしたい』私たちに頭を下げた。私たちはそんな行為をすぐに止めさせたいから「もちろん！　今すぐに！」即答してモニターに背を向ける。

「ブリッジ。私たちも出ます！　転送よろしくです！　あぁ、私はルシルの元へ！」

『あ、はい！　イリス捜査官はルシリオン捜査官の元へ。なのはさん達は捜索がまだのところへ転送します！』

「そうだ。みんな、首領を見つけたら戦闘を仕掛けないって約束してね。あと、一応はリンドヴルムの戦力は壊滅したけど、私たちの知らない戦力がまだ居る・・・かもしれない。だから単独行動は厳禁ね」

転送の光が発生する中でそう言ったシャルロッテさんに私たちは「はい！」頷いて応えた。そして視界が真っ白に染まって、光が治まればそこは瓦礫と化したレンアオム。シャルロッテさんだけが居ない。ルシルの元へ転送されたんだ。

「さて。どうする。集まって捜索するのは不効率だが・・・」

「それなら2手に別れましょうよ」

というわけで、私となのはとアリサとすずかとアルフ、そしてルミナ。はやてとシグナムとヴィータとシャマルとザフィーラ、そしてベッキー。2つのチームに分けて首領の捜索に入った。

私たちが担当することになったのは転移門"ケリオンローフェティタ"に最も近い遺跡のような場所。円形状の石畳に、縁に沿うように立ち並ぶ円柱状の石柱が数十本。周囲に建造物は無くて、２００m先で動きがあれば気付きそうな程にだだっ広い空間だ。

「・・・捜索するも何も捜すような場所ないんじゃない」

「遺跡みたいなところだし、何か仕掛けとかないかな・・・？」

アリサが愚痴を零して、なのはが石畳をコンコンと"レイジングハート"の柄頭で叩いて歩く。私も周囲に並立している石柱を直に触ったり"バルディッシュ"で叩いたりしながら何かしらのギミックが無いかと確認する。

「スノーホワイト。サーチお願い」

≪かしこまりましたわ≫

「さすがに匂いじゃ判んないね～」

「ぶっ壊せば何か出て来るかな～？」

すずかは探査魔法を発動、アルフは狼形態になって匂いを嗅いで、ルミナはパンチ1発で石柱を粉砕した。そんな風に首領が隠れられるような場所を探して数分。アルフが「うお？　なんだい！？」変な声を上げたから、私やなのは達は何かと思ってそっちに振り向いてみる。転移門を背に、真っ白な光が発生していた。

「敵の攻撃・・・？」

私たちは一斉にデバイスを構えて光を囲う。そんな中、「え・・・？」すずかが警戒を解いてその光へ向かってヨロヨロと歩み寄り始めた。止めようとした時、「す、ず、か・・・」光から声が発せられた。

「ケリオン君・・・！」

「ケリオンの声だわ！」

「じゃあ、この光は・・・！」

光が少しずつ人の形を取り始めて、「ケリオン君！」「ケリオン！」の姿になった。すずかとケリオンが同時に駆けだしてお互いの両手を取った。私たちも遅れて2人の側に駆け寄る。

「ケリオン君！　無事だったんだね！」

「心配したわよ！」

「ちゃんと助けるから心配しないでね！」

「うん！　シュヴァリエルももう居ないから大丈夫！」

私たちはケリオンを安心させるべく声を掛けていく。でもケリオンの表情は晴れることなく、小さく首を横に振って「お別れを言いに来たんだ」泣き笑いを浮かべた。

「お別れ・・・？」

「ごめん、すずか、みんなも。元はと言えば僕のシステムが乗っ取られて、こっちの世界とアールヴヘイムが繋げられなければこんな大事にはならなかった・・・」

「そ、そうだとしても・・・、それじゃ私たちはケリオン君に出会えなかったんだよ！」

「なのは。元より会うべきじゃなかったんだ、僕たちは」

「んなっ！？　ふざけんじゃないわよ！」

「アリサ。ごめん・・・。でも本当の事だから。無関係な人がたくさん死んだ。僕が本来在るべき世界の武器が、こっちの世界の生命を蹂躙したんだ」

「それは、リンドヴルムが悪用したからであって・・・！」

神器は武器だけど、それは使い方によって凶器になる。今回は使う方が犯罪集団だった。だからあんな酷いことになったんだ。

「フェイト。それは結果論だよ。僕がしっかりしていれば良かっただけなんだ。だから、もうお別れにしようと思ったんだ。今、神器お――・・・ルシリオンとシャルが神器を以ってアールヴヘイムへ帰還する。それを最後に僕もアールヴヘイムへ帰るつもりだ。そして、二度と開かないように自己封印を掛ける。だから・・・お別れ」

私たちに背を向けたケリオンに「嫌！」すずかは抱きついて逃がさないようにした。それと同時ジャスミンのブリッジから、リンドヴルム首領を発見、ルシルとシャルがアールヴヘイムに向かった、との報告が入った。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒ルシリオン†††

アールヴヘイムから奪い取られて来た３９個（これで全部じゃないがな）の神器を、電子戦用魔術ステガノグラフィアによって俺の支配下に置いたラレス・ウィアレス２番艦というロストロギア艦に運び入れ終え、そして今は転移門"ケリオンローフェティタ"への出向準備を整えている最中だ。

ブリッジは艦体に合わせての三日月状で、操作盤らしいものは何１つとして無い薄ら暗い空間だ。操作盤は無いが、曲線を描く壁に沿って９０ｃｍほどの円柱が７本と立ち並ぶ。断面には幾何学模様があり、ソレに触れることで操作できるようだ。艦長席には四角柱の

柱があり、コレが本艦のメイン操作システムとなる。コイツにステガノグラフィアを潜り込ませることでシステムを乗っ取ることが出来た。

「マイス――コホン、ルシル～♪」

シュヴァリエルから奪い返すことが出来た家族、アイリが俺の元へと飛んで来た。小さな体で俺の頬に寄り添って頬擦りをしてくる。そんなアイリは「ねぇねぇ、やっぱりマイスターって呼んじゃダメ～？」何度目かの確認をしてきた。

「ああ、ダメだ。今の俺はオーディンではなくルシリオンだ。そこは区別しておきたい」

「変なの～。アイリは、オーディン、って呼んでるわけじゃないんだよ？　アイリを御する資格を有するから、マイスター、って呼んでるだけなんだし。ルシルはこれからアイリのマイスターになる。ほら、マイスター呼びでも良くない？」

「それは・・・」

即座に言い返せない。今後の俺の事を考えれば、アイリのマイスターははやてにしておきたい。そのために今の内に俺への執着を弱らせておきたい。

（バンヘルド、グランフェリア、シュヴァリエルの３機を救うことが出来た・・・）

ガーデンベルグとリアンシェルトの二強は未だに俺を悩ます問題だが、約２年で２機を救えたんだ。この調子で行けば１０年内に俺は"堕天使エグリゴリ"全機を救えるだろう。

（シュヴァリエルめ。厄介な置き土産を遺してくれたものだ。奴がアイリに俺の真実を伝えなければ、こんなに悩む必要はなかったのに・・・）

オーディンとルシリオンは別存在としておきたかった。アイリは、外見からして俺をオーディンと重ねるくらいはあってもマイスターとは呼ばなかっただろう。俺への執着もはやてやリイン、シグナム達の存在によってそんなに強くはならないはずだった。だが、俺がオーディン本人であると知った今、アイリは俺への執着はかなりのものになっている。

（近い将来、ガーデンベルグと戦う時、アイリに別れを告げようとも今度は死ぬまで俺について来るだろうな）

最強の"エグリゴリ"、ガーデンベルグとの戦いは正しく俺の存在を消費して闘うことになる。となれば俺の側、ユニゾンしているアイリは確実に死ぬ。そうならないために、俺への執着を弱めておきたい。だからマイスター呼びではなく名前呼び。とは言っても、これでも弱めることが出来ないかもしれない。いや、真実を知った時点で俺の策は成らない。そう、もう考えるだけ手遅れなんだ・・・。

「（最悪の手段・・・記憶を消すしかない・・・か）・・・じゃあ

アイリ。俺と2人きりの時はマイスター呼びでいい。が、それ以外の時はルシルで頼む」

「アイリとマイスターだけの秘密の約束？」

「ああ、俺とアイリの2人だけの秘密だ」

「っ！　ふふ、うふふ、やったね♪　マイスターの真実を知ってるのもアイリだけ、この約束もアイリだけ、こんなに嬉しい事、幸せな事なんてないよね！」

今はもうアイリの好きなようにさせよう。満面の笑みで万歳を続けるアイリが俺の頭の周りを飛び回る。シグナム達とゆっくり話も出来たし、アイリにとってこの短時間で幸せいっぱいになったんだろうな。数百年。あまりにも待たせ過ぎたもんな。

「アイリ・・・」

「ひゃわっ！？」

俺の目の前に来た時にアイリの頭を撫でてやった。最初は驚いたアイリは「はにゃ～　」破顔して、俺が出した右手の平のちょこんと座りこんだ。とそんな時、「ちょっといい？」ノック3回と一緒に声を掛けられた。

「騎士シャルロッテ・・・？」

アクアブルーの長髪にアザレアピンクの瞳をした少女、シャル（もしくはイリス）がブリッジへ入るためのスライドドアの側に佇んでいた。彼女は「シャルロッテの方よ、ルシル。イリスはちょっとお休み中」ウィンクして、俺の座る艦長席の側まで来た。

「お休み中って。トロイメライをやはり使ったのか。あれだけ無茶はするなと言っただろう」

「許してよ。ハート３の神器が本気でまずかったんだって。光翼と誓鎧と不傷剣、そして魔剣アゾートのフル武装だったんだから」

「光翼までもリンドヴルムの手に渡っていたのか・・・」

「ありゃ？　あんまり驚いてない？」

小首を傾げるシャルに、「コレを見たらな」そう言いながら展開したモニターに表示した左舷貨物室の様子を見せる。雑な動きでも崩れないように壁に固定してある数ある神器の中、簡易のベッドの上に寝かされた少女が１人映り込む。

「女の子？　この子も人化できる神器・・・？」

「ああ。神造兵装の第３８位、天裁サテッリス・ラーディウスだ」

「ぶふっ！？　は、はあ！？　天裁！？」

シャルは思いっきり唾を噴いて驚きを見せる。アイリが「すごいの？」

って俺に訊いてきた。俺は頷いて、"天裁"の恐ろしさをアイリに話す。"天裁サテッリス・ラーディウス"。衛星軌道上から神罰クラスの砲撃を雨のように降らすというものだ。威力も砲速もとんでもなく、俺の最高の防性術式・多層甲冑ゴスペルでも防げないし迎撃も出来ない。狙われたらそこで終了。そんな神器だ。

（大戦時に一度だけアールヴヘイム魔術師が１００人がかりで使ったが、その魔力消費の大きさにそれっきりとなったな・・・）

シュヴァリエルがなりふり構わず"天裁"を使っていれば確実に俺は死んでいた。

「そんなにすごい神器だったんだね」

「ところで。その子がリンドヴルムに捕らえられていた融合騎なんだよね」

身震いしていたアイリにシャルが歩み寄りジロジロと全身を舐めるように見ると、アイリは「な、なに・・・？」身を引きながらシャルの全身を見た。

「あはは。怖がらせたんなら謝るよ。私はシャルロッテ・フライハイト・・・なんだけど、この体の持ち主であるイリスの前世の意識なの。この体の持ち主であるイリス共々これからよろしくね♪」

「前世・・・」

「それと、ルシルがお世話になってるようで。これからも彼のこと助けてあげてね」

「アイリはアイリ・セインテスト。そんな当たり前のこと言われなくても判ってるもんね」

シャルから求められた握手をアイリはジッと見た後、その小さな手で握手に応じた。そんな2人を微笑ましく眺めていた時・・・

「「っ！！」」

悪寒が走った。俺は急いでブリッジの全面にパノラマモニターを展開して、艦の外を映し出す。そして表示するのは直感的に感じた"ケリオンローフェティタ"の扉部分。その巨大さゆえにサーチャーは12基が分布されている。12の分割映像をシャルやアイリと一緒に確認して・・・

「マイスター！　シュヴァリエルが、ボス、って呼んでた人！」

アイリが一番端の映像を指さしたためその映像を拡大、そしてその映像以外を消す。今まさに転移門を潜ろうとしている人間が映りこんだ。ローブを羽織り、頭部がフードで隠れている。離れていても判るこれほどの神秘。どんな神器を持っているのだろうな。

「こちらルシリオン！　ジャスミン、アールヴヘイムへ単独飛行中の首領を発見した！　ラレス・ウィアレスも向かいます！」

『あ、はい、了解です！　お気を付けて！』

「ルシル！　本艦周囲から特捜課員の退避を確認！　いつでもどうぞ！」

「ああ！　ラレス・フィアレス・・・、テイクオフ！」

俺の周囲に展開された空間モニタータイプの操作ボードのキーを叩き、ラレス・フィアレスを離陸時のGが全く無いまま発進させる。ようやく俺は、俺と関わり深い世界へと帰ることが出来るんだ。感無量とはこういう事を言うんだろうな。

「そう言えばさ、ルシル。未回収の神器なんだけど、どうすんの？」

機動一課隊舎より逃走した"ブリード・スミス"や、クー・ガアプ課長の情報で未だに5つの神器が回収されていないのだと言う。この1回で全て返したかったが・・・。

「転移門の開閉システムと座標設定システムの管理権を借りることが出来れば良いんだが、それが無理だった場合は・・・俺が直接持って帰るさ」

ガーデンベルグを救い、アースガルドに封印されている俺の肉体に掛けられた不死と不治の呪いを解除し、"界律の守護神テスタメント"の任を終え、肉体に還ることが出来れば、アールヴヘイムに戻ることも可能だ。それまでは"神々の宝庫ブレイザブリク"に取り込んでおけばいい。

「そう・・・」

「？？？」

重い空気になってしまった。俺がアースガルドに帰れば、おそらくシャルやはやて達とは永遠に会えなくなるだろうしな。寂しげな表情を浮かべるシャルの頭を一撫でし、「アイリ、ユニゾン頼む」アイリの頭も撫でる。

「っ！！　ヤヴォール　」

満面の笑みと一筋の涙を流すアイリが元気よく返事してくれた。アイリから差し出された小さな右手を取り、「融合！」彼女とユニゾンを果たす。彼女が俺の内側に居る感覚、とても懐かしい。安心感があると言うか・・・。

『マイスターの中、本当に久しぶりだね☆』

「少し無茶をさせるかもしれない。すまないな」

ラレス・フィアレスをオートパイロットモードにして、「シャル、頼めるか」彼女の隣を通り過ぎならブリッジの出入口へ向かう。

「愚問だよ、ルシル。そのために私も、イリスも頑張っているんだから」

「ありがとう」

「どういたしまして♪」

（シャルが側に居てくれると言うのも大きな安心感を得られるな）

そして、黄金に光り輝く超巨大な転移門、その僅かに開いている扉から溢れ出す純白の閃光へと艦が進み、「あぁ、ただいまだ」転移門を潜った。アールヴヘイムに戻って来たことが判るほどに全身に神秘の魔力を感じた。シャルも「懐かしい、この感じ」感慨深げに小さく息を吐いた。パノラマモニターに、約2万年ぶりのアールヴヘイムの世界が映った。

「ルシル、泣いてるの・・・？」

「え？・・・あ、あぁ、すまない」

シャルに指摘されて気付く。気付かないうちに俺は涙を流していた。袖で涙を拭い、「さぁ、行こう。首領とご対面だ」ブリッジ両舷にある2つの出入り口の1つから艦内の主要通路へと出る。三日月状の全翼型の艦体であるため、通路も艦体に沿って左右に向かって曲線を描いている。

「シャル。カートリッジを渡しておく」

「ありがと♪　ハート3との戦いで消費しちゃってたから助かるよ」

通路を歩いて中央（ちょうど艦長席の真後ろだな）へ目指し、そして1つのスライドドアを潜る。そこが外界と艦内を隔てる出入り口であるエントランストランスポータールームだ。パネルを操作して転送機能を起動させると足元が光に溢れる。

「ルシル」

「ん？」

「勝つよ」

「ああ！」

『アイリのことも忘れないでよね！』

「おっとごめん、ごめん♪」

最終決戦前の空気が少しだけ緩くなった。そして転送が始まり・・・終わった。視界内が真っ白な光から黄金の光が満ちた世界であるアールヴヘイムへと変わる。

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

――真紅（ルビーン・フリューゲル）の両翼――

上空を覆う上層雲海と地表を覆う下層雲海の狭間、俺たち"アンスール"メンバーの姿が彫刻された黄金の支柱が左右に並び立ち路を

作っている広大な空間が視界に入る。何もかも懐かしい。このアールヴヘイムをこれ以上好き勝手させるものか。
俺が設定したオートパイロット機能によってラレス・フィアレスがかつて住民が住んでいた浮き島の1つへ向かい始める。今もその島に人が居れば、着陸したあの無抵抗の艦から勝手に神器を運び出してくれるはず。たとえそこに住民が居なくても別の島から、何かあった、として来てくれるだろう。

「ミスター・リンドヴルムッ！！」

拡声術式で何倍もの声量にしたうえで首領に呼び掛ける。するとすぐに「こうして直接話すのは初めてだなランサー、いや神器王！」呼び掛けに応じた首領が俺たちの目の前に現れた。

『ルシル。コイツ・・・ヤバい・・・！』

『ああ。直接相対してよく判ったよ。コイツは・・・俺たちと同類だ！』

明らかに現代に存在していいような神秘持ちじゃない。"エグリゴリ"ではない。神器でもない。となると間違いなく魔術師。しかも大戦に参加していても何らおかしくないほどの圧倒的な実力者。誰だ。首領の正体はいったい誰なんだ。

「ミスター・リンドヴルム。シュヴァリエルは消滅し、ホムンクルスも撃破された。リンドヴルム兵も全員が逮捕され、拘置所へと連行された。お前のリンドヴルムは壊滅した。諦めて捕まるといい！」

「馬鹿を言うな、神器王！　私はロストロギアが好きだ、神器も好きだ、あらゆる財宝が好きなのだ！　アールヴヘイムの神器は実に美しく素晴らしいものだった！　なれば別の世界の神器はどうなのだろうな！　まだ見ぬ美しき神器があるだろう！　心が躍る躍る！」

「説得は無理みたいね」

「みたいだな。アイリ、頼むぞ」

『張り切っちゃうもんね！』

"エヴェストルム"の神秘カートリッジを2発とロード。シャルもデバイスの"キルシュブリューテ"の神秘カートリッジを1発ロード。警戒から臨戦態勢に移行。

「神器王。君の精神世界にも数多くの神器が眠っていると聞いた。ソレらも渡してもらおうか！」

首領がローブを脱ぎ捨てた。アイリの言うようにその外見は初老の男性。燕尾服にアスコットタイといった服装で、出で立ちは正に紳士と言った感じだ。だが人間には無いはずの物が首領の異質さを物語らせていた。

「翼と尾・・・！」

「馬鹿な、魔族だと！！　くそっ、今頃になって・・・！」

首領の背中からは黄金の輝くコウモリのような翼が一対、腰と臀部の狭間からは黄金の鱗に覆われた太い尾が生えていた。そこでようやく俺は思い出すことが出来た。どこかで感じた神秘なのかを。首領から感じ取れていた神秘はかつての大戦時、それに魔界へ訪れた際に何度も身に感じた魔族の脅威。自分の間抜けさには本当に殺意が湧いてくる。

「まずは圧倒的な力量差を見せつけてくれよう！　そして私に・・・、我が偉容に屈服せよ神器王！」

――顕現――

首領の体が紅蓮の炎に包まれ、そしてその炎の中から首領の真実の姿が出現した。ビリビリと肌に感じる存在感、魂まで燃やし尽くされそうな程の熱波、俺をちっぽけな人間に落とす強大な神秘。目を疑った。信じたくはなかった。現実であっては欲しくない、と・・・。

「ねぇ、ルシル。私・・・夢、見てるのかな・・・？」

「あぁ、しかもとびっきりの悪夢だ・・・」

「オオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

「「っ！！」」『ひゃあああああ！』

単なる雄叫びで俺とシャルは吹き飛ばされ、「ぐはっ！？」数百ｍと離れていたはずの転移門の扉に叩きつけられた。

「見よ、我が黄金に輝きし美しき肢体を！　聴け、我を最強と讃えし厳かなる名を！　畏れよ人間、敬えよ人間、讃えよ人間！　我が名はスマウグ！　魔界最下層にてあらゆる財を蓄え護る、宝を司りし竜王なり！」

竜王スマウグ。別名黄金竜。それがリンドヴルム首領の正体だった。本来は火竜であるため鱗は真紅なのだが、護るべき宝の１つでもある黄金が自身の炎や熱で溶け、鱗にこびり付いてしまっていることで黄金に輝いている。その全長は約７０ｍ。翼を広げた全幅は１４０ｍ。その巨体さだけで圧倒してくる。

「ダメだ、勝てない・・・、戦いにならない・・・」

Ｅｐｉｃｏ４０ドラゴンソウル～Ｔｈｅ　Ｂｏｓｓ　ｏｆ　Ｌｉｎｄｗｕｒｍ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

心が折れた。リンドヴルムの首領の正体が、よもや魔界最下層の、しかも王クラスの魔族・黄金竜スマウグだったとは。魔族・魔獣属の王クラスの大半がＥＸランクの魔力を有している。それに知能も高い。"エグリゴリ"なんて目じゃない程に強大な戦闘能力を持っている。今の、いや全盛期の俺ですらも全開戦闘でようやく拮抗できるレベルだ。

（逃げるか？　馬鹿な、こんな怪物をアールヴヘイムに放置して逃げるなど論外だ。なら戦うか？　死ぬ、これは死ぬ。八方塞か・・・！　ではどうする！　考えが、解決策が出て来ない！）

「ルシル！」『マイスター！』

シャルとアイリに呼ばれてハッとする。焦りが俺の思考を掻き乱してくる。どうすればいい、シャルの視線がそう訴えてくる。複雑に絡み合った思考をすべて破棄。そして俺は逃げではなく・・・

「シャル。君の魔力を分けてほしい」

「ん、判った」

戦いの道を選んだ。シャルは何も言わずに俺に魔力を送ってくれた。契約術式メンタルリンクの恩恵だ。契約によって魔力炉（システム）をリンクさせ、互いの魔力を受け渡し合えたり、術式発動の負担を分担できたりする。シャルの魔力＋神器から回収して新しく作った魔石、最悪ジュエルシードを使って・・・スマウグを討つ。

「シャルは単独レンアオムへ帰還。なんとしても転移門の意識であるケリオンを見つけ出し、門を閉じ、二度と開かないように自身を封印するように頼んでくれ」

「了か――って、はぁ！？　あなたはどうすんの！？　まさか・・・このままアールヴヘイムに残るわけじゃないでしょうね！？」

「それは・・・」

一度は考えた。だが「ないな。ちゃんと帰るよ」そう返す。リアンシェルトやレーゼフェアは向こう側の次元世界に居る。その２人を放ったままこちらに残るわけにはいかない。

「出来れば具体的な作戦を聴きたい！」

『マイスター。アイリも聴きたいんだよね。あ、マイスターのこと信じてないわけじゃないんだよ！　マイスターの身の安全をハッキリさせておきたいだけで！』

そんな時間は無いんだがな。スマウグは俺を殺すつもりはないようで攻撃は仕掛けてこないが、今もなお全身から放つ熱波には参りそ

うだ。

「スマウグは火竜だ。体内で命の火が燃えている。それゆえに体内に入り込んでしまうほどの大量の水が苦手なんだ。エーギルを使えば何とか・・・」

水流系最強のエーギルを全開発動すれば弱らせることくらいは出来るはず。あとは弱まったところで真技を撃ち込めば殺すには至らなくてもダメージは与えることが出来る・・・気がする。あくまで願望に過ぎない、確実に勝てると考えることが出来ない。神秘の差で言えば2：8。俺が2でスマウグが8。魔力でも神秘でも劣る俺。シャルやアイリに言えないが・・・これは負け戦一直線だ。

『水・・・？　海は海でも雲海しか無いんだけど・・・』

「下の雲海のずっと下には海が広がっているんだ。そこから汲み上げるだけでもSSSランクの魔力を消費しそうだが、そんな悠長なことは言っていられない。アイリ。かなり苦しい戦いになるかもしれない。ごめんな」

『アイリはマイスターの為の融合騎だよ。どこまでも付いて行くし、命だって懸けるよ』

「『・・・ありがとう、アイリ』そういうわけだ、シャル。これが俺の策だ」

シャルを安心させるべく努めて笑顔を作り、「さぁ、シャル、行っ

てくれ」リミッターを全解除、そして水流系最強のコード・ヘーニルの発動に必要な詠唱を始めようとした時・・・

「今度は何者か！　アールヴヘイムに戦乱を起こそうとする愚者は！」

ソイツは現れた。下層雲海から突き出て来たのは巨大な白蛇、名をヨルムンガンド。アースガルドに棲まう神格を有した知的生命体の一角だ。これまた予想外な出来事だった。まさかヨルムンガンドがアールヴヘイムの下層雲海に棲んでいようとは。いや、アースガルドよりアールヴヘイムの方が天界に近いし神秘も濃い。棲み易いのかもしれないな。

「ルシリオン様・・・！？」

「「ヨルムンガンド！？」」

『わぁ、大きい蛇だね・・・』

俺たちやヨルムンガンドは互いに驚愕した。ヨルムンガンドは俺たちの側へ頭部をもたげ、「この魔力、この神秘、間違いない・・・！　本当にルシリオン様なのか！？　それに剣神だと・・・？」大きな蒼い瞳で俺たちを視認した。

「久しいな、ヨルムンガンド！　息災なようで何よりだ！　見た目はこんなのだが、本人だよ！」

「私は一応転生者なんだけどね。ちなみに今はルシルの味方で親友だから敵意は向けないでね」

ヨルムンガンドにそう言って頭の鱗を撫でてやると、「アンスールが瓦解して幾世霜。エグリゴリへの復讐のみを理由に生き永らえてきたが、このような嬉しき日を迎えられようとは！」歓喜の声を上げてくれた。

「しかしルシリオン様の御体はアースガルドにて、フェンリル狼の封印によって眠っておられるはずだが・・・」

「再会を喜び合いたいし、今の俺の状況を詳しくも話したい。が、今は・・・！」

スマウグへと視線を戻す。奴の目にヨルムンガンドへの警戒の色が現れていた。

「承知！　我が死力を以ってあの愚竜めを絞め殺しましょうぞ。しかしルシリオン様らはこのままお帰りになるように」

「は？　いや、何を言っているんだ。俺も共に戦うぞ！」

「お言葉だが今の貴方では我らの戦について来られるほどの力は無いとお見受けする。それが貴方の存在とアースガルドに眠る御体が別々である原因であることはなんとなくだが察することは出来る。ルシリオン様。今は貴方の成すべき事を成されよ。その為ならば我

はこの命を進んで捧げましょう！」

「ヨルムンガンド！！」

俺の意思を無視してスマウグへ突撃するヨルムンガンド。スマウグは口より火炎のドラゴンブレスを吐き、ヨルムンガンドは下層雲海に潜行して回避をしては下方からルーンによる砲撃を発射。スマウグはその巨体さで回避は出来なかったが、翼による打撃で砲撃を弾き逸らした。

「シャル、君は先に帰るんだ！　ここは俺たちでどうにかする！　なんとしても門を閉めろ！　最悪、ヨルムンガンドに後を託して俺も帰る！」

「・・・信じてるからね！　必ず私の元へ帰って来なさい！」

「私、じゃなくて、私たち、な」

そう訂正するもシャルはすでに転移門の扉から溢れ出る純白の光の中へ消えた後だった。

『マイスター・・・！』

「ああ。このまま帰る真似は出来ない。せめめ戦力を増やそう・・・！　第二級粛清執行権限、解凍！」

第２のリミッターを解除して７５パーセントまでの魔力を使用でき

るようにする。続いて魔石1つを魔力炉(システム)に融合させる。これでＥＸランク一歩手前くらいのＸＸＸランクまでの魔力を使えることになった。この時点で魔術を使ったら確実に記憶を失うだろうな。しかし今はアイリとの融合、加えシャルとのメンタルリンクによる負担の分担がある。それに・・・

（ラグナロクの影響で失われたはずのアールヴヘイムの神秘が復活している。数千年の年月でこちらの次元の神秘が再生してくれたのかもしれない）

こちらで戦えば、向こう側以上に魔術師に成り易いし、魔術の威力や効果も本来のものに戻る。その事から早々に記憶を失うことはないと思う。まぁ絶対とは言い切れないが。まったく。今日1日でどれだけ記憶を失う覚悟をすればいいんだか。

「我が内より来たれ、貴き英雄よ。其は天体呑み込む狼、其は世界に風舞わせる鷲、其は氷零の地の番兵なる犬。現れよ、フェンリル、フレースヴェルグ、ガルム！」

とにかく今はスマウグ撃破だ。"英雄の居館ヴァルハラ"から"異界英雄エインヘリヤル"としての神格持ちの狼と鷲と犬を召喚した。

「フェンリル、フレースヴェルグ、ガルム！」

俺の側に控える召喚したばかりの3頭の巨大生物の名前を呼ぶ。オリジナルではないため神秘は数段下がるが、オリジナルのヨルムンガンドと合わせて4頭の総攻撃ならスマウグもタダでは済まないは

ずだ。

「スマウグ竜の撃破を命ずる！　この世界の生命に被害を出すことなく、しかし手段は問うな！」

ニヴルヘイムの番犬たるガルムが雄叫びを上げて下層雲海を駆けて行き、フレースヴェルグも美しい女性の声で「我が友グローイの願いだ。引き受けよう」かつての敬称で俺を呼んだ後、大きな翼を羽ばたかせて翔けて行った。

「マスター」

「フェンリル・・・。頼んだぞ！」

「イエス・マイマスター！」

フェンリルもまた下層雲海を足場に勢いよく駆け出し、「マスターの期待のためにも！」スマウグへ突っ込んでその鋭い牙で奴の尾に噛み付いた。それを見届けた俺はヨルムンガンド達に背を向け、転移門へと向かい始めたんだが・・・

「むおっ！？」

俺のすぐ側を何かが高速で通り過ぎ、その衝撃波で俺は体勢を崩されてしまった。急いで体勢を立て直し、何が通り過ぎて行ったのかを確認すると、「フレースヴェルグ！？」が転移門の扉に叩き付けられていて、体中の至るところが燻っていた。

ヨルムンガンド達の方を見れば、フェンリルは全身に魔力の装甲を纏っての体当たりや噛み付きなどの物理攻撃をし、ヨルムンガンドは口からルーンの砲撃を放ち、ガルムは吹雪を吐いての魔力攻撃を仕掛けていた。

「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

接近戦を試みていたフェンリルがスマウグの右の翼に打たれ、悲鳴を上げながら大きく薙ぎ払われていた。数十トンという巨体を軽々薙ぎ払う奴の筋力はやはり凄まじい。下層雲海に叩きつけられゴロゴロ転がるフェンリルに「失せろ！」奴は炎のドラゴンブレスを吐いて追撃した。

しかしブレスがフェンリルに届く前にヨルムンガンドがスマウグにタックルしたおかげで奴の首は明後日の方を向き、フェンリルは火炙りという難から逃れることが出来た。今度はヨルムンガンドに標的を変えた奴がまたブレスを吐いたが、ヨルムンガンドは再び下層雲海に潜行して回避した。

「グローイ。私の友にして主よ。早く行きなさい・・・！」

フレースヴェルグは大きく羽ばたいて再びスマウグの元へ翔けて行った。そうは言うが、オリジナルのヨルムンガンドを筆頭とした神格持ちを相手にスマウグは善戦している。このまま何もせずに帰ることは・・・

「出来ないよな！」

――力神（コード・マグニ）の化身――

『それでこそマイスターだね！』

上級の強化術式マグニを発動し、俺の魔術師としての能力全てを強化する。治まるどころか徐々に強くなっていく胸痛と頭痛。俺はそれに構わず次の術式の発動をスタンバイ。

『エーギルを使うんだね！』

「いや。俺が単独で戦うならエーギルだが、ヨルムンガンドの存在が俺に冷静さを取り戻させてくれた、活路を見出させてくれた。死闘になることが解っている中での焦りほど自滅させる要因は無い。だから・・・まずはその黄金の鱗を引っぺがす！」

対魔の効果を有している黄金が全身にこびり付いているスマウグにダメージを与えるにはまずその黄金をどうにかしないといけない。それに全快中のスマウグの炎に、俺のエーギルが勝てるとも思えない。おそらく一瞬で蒸発させられる。

「スマウグを弱体化させるのが先だ。我が手に携えしは確かなる幻想！」

"神々の宝庫ブレイザブリク"から４０近い武器型神器を一斉具現。その大半は対竜効果を持ったドラゴンスレイヤーだ。

「軍神の戦禍（コード・チュール）！・・・殲滅粛清（ジャッジメント）ッ！」

号令を下して射出する。７０ｍという巨体を前にすれば名高き神器もまるで爪楊枝。ガキン、ガキン、とスマウグの黄金の鱗に着弾した音が空に響き渡り、神器群は弾かれたあと魔力となって霧散した。

「マスター！？」「ルシリオン様！？」「我が友！？」

俺が逃げずに戦闘に参加したことに驚きを見せるヨルムンガンド達とガルム（も一応は喋れるようだが、ニヴルヘイム王家以外の者には喋ってくれない）。

「今は出来ない、逃げることなど！　最悪の時は逃げるかもしれない、すまない！　だが今はまだその時じゃない！　だから共に戦う！　まずはスマウグを護る黄金を砕く！　第二波装填（セカンドバレル・セット）！」

さらに神器群を３０と召喚。スマウグは「美しい！　なんと素晴らしい！」俺の神器群に目を輝かせている。そんな奴へと「ジャッジメント！」神器群を射出。奴はまるで神器群を抱きしめるかのように両前脚を広げ、着弾時に閉じた。鱗に着弾する甲高い音、そして抱きしめによる砕かれた音が遅れて聞こえた。

「承知！」

ヨルムンガンドが全長５０ｋｍというその長い胴体を活かしてスマウグに絡みつき締め上げる。だが奴は「邪魔をするな神属がッ！」強烈な熱波を放ち、ヨルムンガンドを「ぐぉぉぉ！」引き剥がした。

「フェンリル、ガルム！」

「うんっ♪」

「・・・」

――ＩＳ（イス）――

フェンリルとガルムが同時に大きく開いた口より吹雪の砲撃を放った。スマウグの熱とフェンリル達の吹雪が衝突し、とてつもない水蒸気が発生する。視界が真っ白に染まる中、俺は「サードバレル・セット！」神器群の第三波である２０弱の神器群を展開、そして「ジャッジメント！」全方位から一斉射出。

「フレースヴェルグ！」

「承知！」

大きな翼を羽ばたかせて、鋼鉄すら、下手な神器すらも寸断できる真空の刃を無数に水蒸気へと放つ。神器と鱗の衝突音の直後、フレースヴェルグの風刃が水蒸気を吹き飛ばし、健在さを見せつけたスマウグへ着弾。バチィン！と空気が爆ぜる音が響き渡った。

「くっ、やはりまだ足らないか・・・！」

スマウグが纏う鎧の如き分厚い黄金はどれ１つとして欠けることなく、なおも俺たちに美しい絶望を見せつける。奴は「改めて絶望を

見せ付けてくれよう！」巨大な翼を羽ばたかせて移動を開始した。熱波を撒き散らしながらの突進攻撃。巨体を誇るヨルムンガンド達ですら悶絶しそうな一撃だ。

「（俺が受けたら影も形も残さずに消し飛ぶだろうな）アイリ！！」

『ヤー！　氷結圏、行っくよ～！』

アイリの氷結付加が俺の術式に反映される。俺は「氷結系遠距離攻撃！」ヨルムンガンド達に指示を出す。ヨルムンガンド達は「承知！」と応じてくれて、スマウグの突進攻撃を躱しつつ氷結のルーンによる砲撃を撃ち続ける。

熱の塊でもあるスマウグに着弾すると同時に水蒸気が発生し続ける。奴は水蒸気を振り切って空を翔け、ヨルムンガンド達にブレスを吐き続けていく。ブレスはとうとう下層雲海を穿ち始め、「熱っ！」フェンリル達にもダメージを与え始めていた。

「さすがは王クラス・・・！」

――屈服（コード）させよ、汝の恐怖（イロウエル）・ｖｅｒ・　Ｇｅｓｔｏｂｅｒ――

アイリの氷結付加が施された白銀の巨腕イロウエル一対を発動。スマウグの半分ほどの大きさだが、少しくらいは拮抗できるように神秘を上級術式並に付加させておいた。

「聖拳粛清（ジャッジメント）ッ！！」

ヨルムンガンドの極太な尾による薙ぎ払いのカウンターをまともに受けたスマウグは大きく前のめりになった。それをチャンスとして俺はすかさずイロウエルによる一撃をお見舞いする。イロウエルで奴の両側頭部を同時に殴りつける。魔族であってもちゃんと脳はある。そいつを思いっきり揺らしてやれば。そう思っていたが、考えが甘かった。側頭部に直撃した瞬間、イロウエル全体に一瞬でヒビが入り、砂状にまで粉々にされた。

「マスターは上級だけでお願い！」

フェンリルから遠回しな邪魔だよ発言を食らってしまった。先ほどのイロウエルも上級並だったんだがな。やはり術式の構成や土石系がダメなのか。とにかく『アイリ！　もう一度！』と、氷結圏をお願いする。

『ヤヴォール！』

次の攻撃の為に足元にアースガルド魔法陣を展開して足場とする。そんな中、フェンリルとガルムがスマウグの両脇に噛み付き、フレースヴェルグが頭部に爪を立て、さらに脳天を啄み始めた。ヨルムンガンドも両後脚を締め上げる。

「邪魔だッ！！」

全身より爆炎を吹き上がらせたスマウグ。その一撃によってヨルムンガンド達が炎に呑まれ、そして下層雲海へと吹き飛ばされ叩き付けられる。しかしタダでは転ばない。叩き付けられる前にフレース

ヴェルグを除く3頭は氷結砲撃を放ち、着弾させた。再び水蒸気が発生して奴を覆い隠す。

「集中砲火、今！」

叩き付けられてもすぐに体を起こしたフェンリルが指示を出すと、フレースヴェルグが翼を羽ばたかせて中位の神器クラスと同等の神秘を有する羽根の弾丸を無数に撃ち込み、ガルムは雹混じりの吹雪のブレスを吐き、フェンリルは光のルーン・オセルの砲撃を吐き、ヨルムンガンドは雷撃のルーン・ソールの雷球を吐いた。どれもこれも俺の上級術式のさらに上位・儀式系に属するレベルの威力。それを連続で直撃してもビクともしないスマウグ。本当に勝てるのか不安になってくる。

「（それでも・・・！）優雅華麗なる雪風吹き舞いたる氷結の地、その盟主たる凍結の女王に願い奉る。天より降るは艶やかなる調和。地より昇るは厳かなる軋轢」

ヨルムンガンド達の集中砲火によってその場に留まざるを得ないスマウグの上下にアースガルド魔法陣が1枚ずつ展開される。

「北より来るは虚ろなる勝利。南より迫るは愚かなる敗北」

続けて前後にアースガルド魔法陣が展開。

「東より発するは穏やかなる善意。西より生ずるは静かなる悪意」

さらに左右に展開されるアースガルド魔法陣。全６枚の魔法陣の前面に、魔法陣と同じ直径である１０ｍ級の氷雪系魔力の球体が発生する。

「原初に君臨せし其の意志の下に生まれる六方の混沌にて、表裏を摂理とせし世界を染め上げよ！」

詠唱完了。

「冥女王（コード・ヘル）の氷天！！」

六方の魔力球より同時に放たれる絶対零度の集束砲コード・ヘル。俺の有する最強の氷結系魔術で対魔族で弱体化効果を持つ。ヨルムンガンド達の攻撃が中断され、俺の氷結砲撃が六方からスマウグを襲撃、着弾。派手な冷気と水蒸気を噴き上げながら奴の全身を凍結していく。さらに魔石２つを魔力炉（システム）に融合させる。

「我が手に携えしは確かなる幻想！　凶竜（コード）・・・殲牙（ニーズヘッグ）。スタンバイ！」

武器型神器を数十個使用して竜形に組んだニーズヘッグを８基と一斉展開すると、「ぅぐぅぅぅ・・・！」今まで以上の頭痛と胸痛に襲われた。いくら負担を軽減しようとも、今の壊れかけの俺に優しい環境であろうとも、起こるものは起こるようだ。

『マイスター！』

「大丈夫だ！」

アイリを安心させるべく即答。ニーズヘッグは普通の魔術とは違い、元々神秘を多分に有した神器による物理攻撃だ。チュールと同様に魔術師の体調云々で威力は落ちない。スマウグにはもってこいの一撃だ。コイツで黄金を砕き、ヨルムンガンド達の協力で奴をエーギルに沈ませてやる。これで倒せるまではいかないくても弱らせることは出来るはずだ。

「結界準備！」

ヨルムンガンド達に指示を出し、「其は九界に在りし全ての生命の源にして母たる海を司る者！」コード・エーギルの発動に必須な呪文詠唱を開始。ここから海面まで１２ｋｍほどあるため、汲み上げるのも一苦労だ。向こう側だと不可能な距離だな。

「マスター！　氷が融けそう！」

判っているさ。だがニーズヘッグを撃ち込むまで保てばそれでいい。下層雲海を突き破って汲み上げられてきた海水がスマウグを覆う氷花の直上で大きな塊へとなっていく。それと一緒に氷花も勢いよく融けていく。

「（少し心もとないが、これ以上は無理か・・・！）屠殺粛清（ジャッジメント）！！」

号令を下してニーズヘッグを突撃させる。神器の竜は氷花を砕き、「ぐぉぉぉぉぉ！！」スマウグに直撃した。それを確認し「今！」指示を出す。

――ＥＯＬＨ（エオローー）――

スマウグや汲み上げられた水塊を閉じ込める半球状の膜が展開された。ヨルムンガンドとフェンリルの二重結界。ソレが収縮を始め、俺は水塊の収束を解除した。

「むぉぉぉぉぉーーーーーーーー！！」

スマウグが海水に呑み込まれた。結界に閉じ込められているため海水は漏れることなく、奴が逃れることもない。ジュウ！と水が蒸発する音がして、結界内が真っ白になる。完全に海水に全身が呑まれた。氷花が融けた分の水もプラスだ。確実に体内に水は入り込んだだろう。

（頼むから多少は弱っていてくれよ・・・！）

そう願わずにはいられない。直後「っ・・・！」結界内部が紅蓮の炎に満ち、そして打ち破って大爆発を起こした。爆炎と黒煙が空を染め上げ、「ぐぅぅ・・・！」爆風で吹き飛ばされるも「マスターー！」フェンリルのもふもふした毛皮に抱き止められた。

「助かったよ、フェンリル」

「今の私はエインヘリヤルだけど、マスターの使い魔であることは変わらないから　」

フェンリルより離れてスマウグの方へ視線を戻している中、「門が閉まる・・・！」ゆっくりだが扉が閉まり始めたのが判った。

『みんな。時間制限が出来た。最後まで共に戦えないこと申し訳ない！』

『そんなことないよ、マスター』

『我々はアースガルドやその民と共に生きることを誓いし者』

『友のため、命くらいは懸けよう』

フェンリル、ヨルムンガンド、フレースヴェルグ、そして『あなたはシェフィの想い人だし、今は私のマスターだし』ガルムすらも声を出して応えてくれた。

「やるではないか、神器王！　しかしこの手は我が幼竜の頃より幾度と弄された手段！　対抗策などいくらでも持っている！」

スマウグがその姿を現す。ニーズヘッグのおかげか黄金の1割程だけだが引き剥がされていて、本来の真紅に輝く鱗を覗かせていた。アールヴヘイムでの戦闘だからこそ得られた戦果。向こうの次元世界に戻り、なおかつオリジナルのヨルムンガンドが居ない中では絶対に得られない戦果だ。

「（今この瞬間、この世界だからこそ戦える・・・！　だから・・・）すぅ・・・はぁぁぁ・・・。限界ギリギリまでやってやる！！」

『ヤヴォール！』

『イエス、マイマスター！』

『『承知！！』』

『・・・やる』

「頂くぞ、その神器！」

こちらとあちらの次元を繋ぐ転移門が閉じるまで残り僅か。閉まりきる直前まではヨルムンガンド達と共に「行くぞぉぉぉぉーーーッ！」スマウグをボコボコにしてやる。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒すずか†††

ケリオン君と二度と逢えない。その言葉が私を突き動かした。ケリオン君をどうにかしてこの世界に留める。そのために私は何だってする。

「すずか。ルシル達がアールヴヘイムに向かった。あとは僕が門を閉じるだけなんだ。さぁ、離しておくれ」

「ケリオン君はこれでもう永遠のお別れになってもいいの・・・！？」

ケリオン君は言った。門を閉じて二度とこちらの世界と繋がらない

ように自分を封印するって。次元世界っていう枠組みから外れた全く別の異世界アールヴヘイム。閉じるとか封印とかを度外視したとしてもそんな分かたれた世界、一度離れ離れになっちゃうと本当に永遠に逢えなくなる。

『ねえねえ！　ケリオンだって楽しかったでしょ、こっちの暮らしもさ！　無理に帰らなくても良いんじゃない！？』

ジャスミンからの通信でアリシアちゃんも説得に参加してくれた。ケリオン君は「うん、そうだね」って小さく俯いた。

「でも僕はアールヴヘイムの転移門だ。この世界に存在すること自体が異質で・・・間違い。だから居なくならないとダメなんだ」

「っ！　私は、ケリオン君の意思を聴いてみたい！　ケリオンローフェティタじゃなくて、ケリオン君の！」

神器は人じゃない。それはもう解ってる。解ってるけど、だからと言って二度と逢えないような関係になりたくない。これからもずっと私と、私たちと一緒に過ごしていってほしい。だって私は、ケリオン君のことが好きだから。実のらなくてもいい。せめて友達としてでもいいからこのまま一緒に・・・。

「僕は・・・。僕も、本当は・・・すずか達とこれまでのように楽しく過ごしていきたいよ」

「じゃあ！」

「だけどそれは無理なんだよ。僕だけの意思で決められない。僕の半身、錠のローフェティタが、アールヴヘイムに帰ると言って聴かない」

「それやったらさ。そのローフェティタちゃんって子を説得すればええんやない？」

合流したばかりのはやてちゃんがフォローに入ってくれた。アイコンタクトでありがとうを告げて、「そうだよ。きっと仲良くなれると思う！」私も説得を続ける。ケリオン君は儚げに微笑むと転移門の方を見た。そして「はは。やっぱりローフェティタはダメだって」ポツリと漏らした。

「僕たちケリオンローフェティタは神属が創りし至高の転移門だ。設置されたアールヴヘイムに座することが最大の存在意義。これはもう覆らない。だから・・・帰るよ」

「そんなのダメ！」

私たちとケリオン君が平行線のやり取りを続けていると・・・

「ケリオン見つけたぁぁぁぁぁーーーーーッ！」

上空からシャルちゃん、ううん、シャルロッテさんの大声が聞こえてきた。真紅の翼を羽ばたかせて私たちの元へ降り立ったシャルロッテさんは「急いで門を閉めて！」ケリオン君にそう言った。ケリ

オン君を残そうとしていた私たちからして見ればそれは言ってほしくない言葉で・・・。

「うん。今すぐ閉めるよ」

「ありが――」

「ケリオン君！　ダメ、閉めちゃダメ！」

「のわっ？」

シャルロッテさんを突き飛ばしてケリオン君の腕にしがみ付く。尻餅をついたシャルロッテさんは、「大丈夫ですか・・・？」なのはちゃんとフェイトちゃんから差し出された手を取って「ありがとう、2人とも。すずか、ちょっと待って」立ち上った。私は真っ向からシャルロッテさんと見つめ合う。

「ケリオン君は大切な友達なんです！　永遠のお別れなんて・・・嫌なんです！」

「・・・気持ちは解るよ。大事な人との永遠の別れは本当に辛い。私も何度も味わってる。でもね、今はそんな悠長なことを言っていられないの」

シャルロッテさんが地面に転がる"キルシュブリューテ"の柄を取ってギュッと握った。私も"スノーホワイト"をキュッとはめ治すと、なのはちゃん達が「落ち着こうよ！」私とシャルロッテさんの

間に割って入ってきた。

「ケリオン。最速で門を閉めて。首領の正体は、シュヴァリエルなんか比べ物にならない程の戦力を有した正真正銘の怪物だった。あんなモノをこちらに戻すわけにはいかない。だから閉める必要があるの」

シャルロッテさんの話に私やみんなが息を呑んだ。シュヴァリエルさん以上の怪物。それがどれだけの絶望なのか、私にでも解る。解るけど・・・。私はケリオン君の腕から離れて、足元に魔法陣を展開する。

「なんの真似、それ」

「シュ、シュヴァリエルさんはルシル君が単独で倒せる相手でした！　首領がそれ以上なら、私たちやフィレス二尉が力を合わせれば勝てるんじゃないですか！？」

「ケリオン。早く閉めなさい。これは次元世界の安寧のための管理局としての命令よ」

「シャルロッテさん！　閉めないでケリオン君！」

「ケリオン！」

「ケリオン君！」

シャルロッテさんと睨み合う。みんなで力を合わせれば、もし私たちだけで足りないなら聖王教会最強のズィルバーンローゼ隊の人たちの協力も取り付けて頑張れば、きっと勝てる。そう思うから。

「あなた、管理局を、私たちを裏切る気・・・・！？」

「ごめんなさい・・・それでも、私は・・・ケリオン君の事が・・・！」

シャルロッテさんからの睨み目と圧倒的な敵意が向けられた。口や膝が、全身が恐怖で震えだす。みんなから、落ち付いて、冷静になろう、そんな言葉が掛けられ続ける。たぶん今の私は冷静だと思う。だけど退けない、退きたくない。

「首領の正体は、神属と対を成す魔族と呼ばれる存在で、その中でも最強クラスのドラゴンの王の一角だった。私たちが束になったところで勝てる相手じゃないの」

「きっと方法が在ると思います！　そうだ！　ルシル君が持っていった神器を私たちも使えば――」

「すずか！　こうしている間にもルシルが殺されるかもしれない！　それでいいの！？」

「っ・・・！」

ルシル君の命と私のケリオン君に対する恋心。どちらを取るのが良

いのか、深く考えるような難しい問題じゃなかった。私はとうとう膝を折って屈した。涙が溢れ出てくる。そんな私に「ありがとう、すずか」ケリオン君は優しい声を掛けて、私の頭を胸に抱えてくれた。

「ごめん。でもね、ケリオン・・・」

「いいんだ。それに門はすでに閉じ始めてた。ごめん。早くそう言ってすずかとシャルの喧嘩を止めるべきだった。でも、僕の大好きなすずかが、僕の為に頑張ってくれている姿を見ていたかった。・・・ごめん、元は僕の存在がもたらした事件で、混乱だったのに・・・」

「ケリオン君・・・、ケリオン君・・・！」

「すずか。なのは、アリサ、フェイト、シャル、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル先生、ザフィーラ、リイン、ルミナ、ベッキー。この場に居ないけどセレスやルシルには本当に感謝してる。僕をこれまで守ってくれてありがとう。楽しい思い出をありがとう。今度は僕が、みんなの世界を守ってみせる！」

ケリオン君の体温が消えた。触れられてるのに、そこに温かさはなかった。ケリオン君の本体である転移門、その扉が今まさに閉まりきろうとしてる。開いた扉の隙間から溢れ出す真っ白な光が少しずつ小さくなってく。あれが完全に消えた時、それがケリオン君との永遠のお別れなんだ・・・。誰も一言も発しない重く静かな空気の中・・・

『シャマル！　マイスターを、ルシルを助けて！！　ルシルが、ルシルが・・・！』

沈痛な声をした念話が届いた。シャマル先生が『アイリちゃん、ここよ！』即座に返答。そしてケリオン君が「彼が帰って来た。ローフェティタ。お願い」そう言って転移門の方を見たから私たちもそっちを見る。

「魔力が枯渇してる！　急いで回復してあげて！」

さっきのケリオン君みたいに宙に光が集まって人の形を取った。現れたのは綺麗な長い黒髪に銀色の瞳、ケリオン君とそっくりな顔立ちをした女の子。その子が顔面蒼白で目と鼻と口から血を流すルシル君をお姫様抱っこしていて、側には涙で顔を濡らしてるリインほどの身長な真っ白い女の子（確か名前はアイリちゃん）が居て、「シャマル！」シャマル先生を呼んだ。

「クラールヴィント、お願い！」

≪Ｊａ≫

――静かなる癒し――

シャマル先生の治癒魔法がルシル君に掛けられる。そんな中、「アイリ。スマウグはどうしたの！」シャルロッテさんが問い詰める。アイリちゃんは「ヨルムンガンド達が頑張ってくれてる」涙声で答

えたんだけど、スマウグとかヨルムンガンドというのが私には判らない。

「ケリオン・ローフェティタ！　門はあとどれくらいで閉まる！？」

「ちょっとうるさい剣神。そう騒がなくても間もなく閉じるから。ケリオン、早くこんなシケた次元にお別れしましょうよ　」

ローフェティタさん（ちゃん付けは出来なかった。なんとなくそんな雰囲気だから）がそう言ってケリオン君の背中におぶさった。私はもう何も言えなくて、出来なくて、俯いた。ローフェティタさんは「必ず彼を助けなさいよ」ルシル君を一度だけちゃんと見た後、光となって転移門の方に消えて行った。

「それじゃあ・・・僕も行くよ。ごめんね、ありがとう」

ケリオン君も踵を返して霧散し始める。私たちは「ケリオン君！」の名前を呼ぶ。もう引き止められない。それならもう「ありがとう！」お別れをきちんとしないと。溢れる涙は拭わないまま、私は努めて笑顔を作って手を振る。するとケリオン君もまた手を振り返してくれて・・・消えた。それと同時に、ゴォン、っていう大気を震わす轟音が。転移門の扉が完全に閉まった音だった。

「・・・ふぅ。終わった・・・」

シャルロッテさんがその場にへたり込んだ。その言葉とその様子に、私たちのリンドヴルム攻略戦が今、終わりを迎えたんだということ

が判った。なのはちゃん達もホッとその場に座り込んでいく。私は膝から崩れ落ちて・・・ペタンと女の子座りになる。

（本当に居なくなっちゃったんだね、ケリオン君・・・）

「ジャスミン。リンドヴルムの壊滅と神器の返還を確認しました。回収をお願いします」

『了解しました！　これより転送しますのでその場で待機をお願いします！』

こうして、私たちはジャスミンへと転送されて、墜落して行くリンドヴルムの本拠地だった天空城レンアオム、そして一番下からゆっくりと霧散していく転移門"ケリオンローフェティタ"を背に無人世界を脱出、管理局本局への帰路へと着いた。

・―・―・―・―・―・

空を進む巨大な浮遊島・天空城レンアオムが海上に墜落、静かに海底へと沈んでいく。そして空に浮かぶのが黄金に輝く門――転移門"ケリオンローフェティタ"のみとなった無人世界。夕日に照らされることによって輝きはさらに強まり、無人世界の大地を黄金に染め上げている。その転移門も足元から少しずつ消失していっている。アールヴヘイムへと帰還するための転移中だ。

「グォォォォォォォォォアァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーーッッ！！」

そんな転移門の扉の内側から世界に響き渡るほどの大きな咆哮が発せられた。そしてギギギと金属がすれ違うような音が続き、閉じられていた扉が開き始めた。すると咆哮の声量がさらに大きくになる。

さらに何かしらの攻撃を受けているのか扉にヒビが入り始め、ボロボロと崩れ始めていく。

「おのれ・・・！　神器王ぉぉぉぉぉぉーーーーーーーーッ！！」

扉の隙間から這い出て来たのは真紅の鱗に覆われた巨大な両腕・・・ではなく前脚。続いて出て来たのは竜の頭だった。ところどころに黄金に輝く鱗があるが、真紅に輝く鱗の面積の方が広い。

「このスマウグをここまで痛めつけてくれるとはなッ！　だが、我は勝ったぞ、あの神属どもに！　あとは貴様から神器を奪い取り、そして再び彼の地へと帰るのみだ！！」

黄金竜スマウグ。リンドヴルム首領だった者の正体。魔界最下層にてあらゆる財王を集め、何百年と眺めるコレクター。アールヴヘイムにて、ルシルの去りし後もヨルムンガンド、"エインヘリヤル"のフェンリル、フレースヴェルグ、ガルムの４頭と死闘を繰り広げた。そして・・・勝ったのだ。

「今は貴様に勝利を譲ろう！　しかし！　僅かな休息の後、我は必ず貴様の前に現れよう！」

とうとう全身が転移門の扉の隙間より現れた。黄金と真紅の斑模様と化しているスマウグの体面。そこにはもう神々しさも荘厳さも何も無い。

「グァハハハハハハ！　楽しみぞ、楽しみぞぉぉぉぉぉーーーーーー

ーッ！！」

スマウグは大きな翼を羽ばたかせ、いずこかへと飛び去って行った。

そして残された傷だらけの転移門、その扉はゆっくりとだが再び閉まった。

Ｅｐｉｃｏ４１融合騎とユニゾンデバイス～Ｅｉｌｌｉｅ　ａｎｄ　Ｒｅｉｎｆｏｒｃｅ　Ｚｗｅｉ～

†††Ｓｉｄｅリイン†††

リンドヴルム攻略戦から１ヵ月ちょっとが過ぎて、今年も残り僅かとなったです。１ヵ月。言葉で表すとたった３文字ですけど、本拠地でしたレンアオムから帰って来てから色々ありましたね。

とりあえず簡単に纏めますと、はやてちゃん達が出向していた機動一課・臨時特殊作戦班は、設立理由でした護衛対象のケリオンさんがアールヴヘイムという次元世界とはまた違う異世界に帰りましたし、その正体が本物のドラゴンでした首領のスマウグももう居なくなりましたから、海鳴市郊外の支部を引き払って皆さんそれぞれの自宅に帰りました。ですからルミナさんとベッキーさんとセレスさんもミッドチルダに戻ってしまいました。

（だからリインは今、はやてちゃんのお家に居るですよ～）

ルシル君の目的の"エグリゴリ"でしたシュヴァリエルは撃破されて消滅、ハート２は自我が無いこともあって裁判が開かれることなく今は軌道拘置所です。ハート３の女性――調査の結果、第３管理世界ヴァイゼン出身の元ストリートチルドレンで２８歳。名前はエルマ。ファミリーネームは無いようです。シュヴァリエルの敗北を知ってからというもの精神が不安定になってしまい、今は精神病院で隔離状態なのです。

（未回収の神器は、引き続き特戦班含めた一課総出で探索するです）数は６つ。１つは人の姿に変身できる武器型神器です。それらの回収にはやてちゃん達の協力が必要になった時にはまた招集されるそうです。それまでは通常の業務（八神家は特別技能捜査課のお仕事です）をしていいそうです。こうして無事に事件は終わったのですよ。

（リンドヴルムも事実上の壊滅として処理されました。リンドヴルムに苦渋を舐めさせられ続けた遺失物管理部の一課から五課すべての機動部隊はちょっとしたお祭り騒ぎでしたね）

そして今日１２月２４日、リイン達は管理局のお仕事がお休みですから、クリスマスイブというこの世界のイベントの準備をしてるです。リインのマイスターのはやてちゃんのお家をクリスマスカラーに飾り付けするのですよ。

（本番の２５日はなのはさん達との合同パーティですから、八神家だけのパーティは今日だけなのです）

「ねえねえ、リイン。この星の飾りをてっぺんに刺してほしいんだよね」

リインと一緒にクリスマスツリーの飾り付けをしてるアイリがそうお願いしてきたです。アイリは新しく八神家に入った家族で、何百年も前の古代ベルカ時代の頃にシグナムとヴィータちゃんとシャマルとザフィーラ、そしてかつての夜天の主オーディンさんの家族で

もありました。オーディンさんをマイスター、ヴィータちゃんともユニゾンをしていくつもの激戦を乗り越えた、リインの大先輩なのです。

「はいですよ」

アイリは変身魔法・ヴァクストゥームフォルム（リインで言うアウトフレームですね）ではやてちゃんくらいの身長になっていて、尖った耳は普通の耳に、腰に有る翼も今は無いです（有無自在だそうですよ）。そして２ｍくらいのクリスマスツリーに紐の付いた玩具をツリーに引っ掛けてるです。ちなみにリインは本来の大きさを活かして雪に見せた真っ白な綿を付けるお仕事です。

「この星飾りをツリーのてっぺんに・・・。これでいいです？」

リインの身長の半分ほどの大きさな星飾りを抱えて飛んで、ツリーのてっぺんに飾ります。アイリは「ありがとう、リイン♪」お礼と一緒にリインの頭を撫でてくれたです。とても優しいアイリで、新しいお姉さんが出来た感じです。でも最初は、アイリと家族になることが不安でした。

・―・―・回想なのですよ・―・―・

レンアオムの在った無人世界から本局への帰路の途中、フィレス二尉とセレスさんが居ないジャスミンのレクリエーションルームで、「では改めて自己紹介をするね」ヴィータちゃんほどの身長になってますアイリさんが、真っ白でドレスのような綺麗なワンピースの

裾をつまみ上げたです。

「かつてオーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードを主とした氷結の融合騎、アイリ・セインテストです。本日よりみなさんのお世話になります」

とても綺麗なお辞儀で自己紹介をしたアイリさん。先ほどの通信でアイリと話すことが出来なかったなのはさん達が自己紹介をしていくです。

「マイスター登録ははやてになる。構わないよな、はやて？　あぁ、それとアイリ、名前もセインテストじゃなくて八神な。八神アイリに変更だ」

「えっ？　わたし！？」

「えっ？　名前も変えないといけないの！？」

はやてちゃんとアイリさんがルシル君のお話しにビックリしましたです。アイリさんが「あんまりだ～！」ルシル君に詰め寄ってポカポカ殴り始めました。すると「ルシル君。名前くらいセインテスト姓のままでええんやない？」はやてちゃんがルシル君にそう提案したうえで、「アイリちゃんもその方が良えもんな♪」と、アイリさんに微笑みかけました。

「おお、判る人だね、はやて！　さすがはマイスターが予言して、シグナム達が選んだマイスターだね♪」

「ルシリオン。ここはアイリの好きなようにさせてもいいのではないか？」

「そうやよ、ルシル君。わたしは気にせえへんし。マイスターも、オーディンさん――とゆうよりセインテスト家のルシル君が引き継げば良くない？　オーディンさんも喜ぶ思うし」

はやてちゃんがアイリさんに抱きつきながらそう言いますと、アイリさんがものすごい満面の笑顔を浮かべた・・・のですけど、薄らと開いたままの目は笑っておらず、なんと言いますか、勝った、といった感じな光を宿してました。なんか怖いです。対するルシル君は「ぅぐ・・・」どこか悔しげな表情を浮かべているです。

「とゆうか、ルシル君も管理局入りが確定してから八神姓を名乗らんくなったし。さみしいわぁ。以前みたいに八神ルシリオンって名乗ってもええんやよ？」

「いや、それは管理局に俺やシグナム達があくまで地球人なんだと思わせるためだったからで・・・」

「はい。わたしの大事な名字がルシル君に利用されました～。しくしく」

「あー、ルシルがはやてを泣かせたー！」

「テメェ、ルシル！」

「ひどいわ、ルシル君・・・」

「ルシリオン、お前・・・」

「・・・主を泣かせるのは感心せんな」

シグナム達からも非難が起きたです。嘘泣きのはやてちゃんがリインをチラッと見てきましたので、「さ、サイテーです！」リインも参加しましたら、「えええーーー」ルシル君が膝をついてしまいました。

「トドメや♪　アイリに八神姓を名乗らせるんなら、ルシル君も名乗らなおかしない？　わたしのお家に居るんやし。な？」

「・・・・負けました」

ルシル君がポツリと呟いて立ち上がって、頭をガシガシ掻いたです。どうやら決着のようですね。アイリさんははやてちゃんに抱きついて喜びを見せて、「作戦失敗かぁ」はやてちゃんは残念がってます。どうやらルシル君に八神姓を名乗らせたかったようです。

「ルシル！　アイリはこれからもアイリ・セインテストを名乗るよ！」

「判った。好きにしろ」

「やったね♪」

「それじゃあアイリちゃんのマイスターも、わたしやなくてルシル君に――」

「あ、マイスターははやてで良いよ。名前だけは譲れなかったんだよね。そ・れ・に♪　えへへ～　　約束だよね～　」

アイリさんが両頬に手を添えて照れのような嬉しさのような、おそらく両方の感情を含んだ笑顔を浮かべたので、「？？？」どうしてそんな表情を今、浮かべるのか理由が解らずリイン達は小首を傾げるばかり。

それはともかく。リインは以前アインスから聞きました。アイリという名前もセインテストという名字も、オーディンさんに与えられたのだと。いくらルシル君がオーディンさんと同じセインテスト家の出身者でも、勝手にアイリさんの事を決めるのはダメということですね。

それから本局に着くまでの間、皆さんは思い思いに時間を潰すことになり、ケリオンさんが帰ってしまったことで元気のないすずかさんにはなのはさん達が付いて、八神家はアイリさんの今後について話し合うことになり、ルミナさんとベッキーさんは、特捜課のガアプ課長たちのところに行きました。

「んで。アイリはどうするんだ、これから」

「どうするって？」

「八神家は管理局に務める公務員なんよ」

「同じ融合騎のリインは、局員として魔導師ランクや階級を取得しているの」

リインに視線が集まるです。アイリさんもまたリインを見た後「ルシルはどうしてほしい？」ひとり端っこでお茶を啜るルシル君に訊きますと、今度はルシル君に視線が集中です。

「ん～？　俺はどちらでも構わないぞ。階級に拘らなくてもどうせ仕事となれば俺やヴィータ達に付くことになるだろうしな」

「お？　なんだよ、ルシル。あたしにもアイリを使わせてくれんのか？」

「ヴィータとアイリは昔はユニゾンして戦っていたんだろ。俺がアイリと融合したいのは基本的に対エグリゴリ戦の時だけ。なにせ大半の犯罪者は普段の俺でも十分勝てるしな。だから普段はアイリとのユニゾンは必要ないんだ」

「ちくしょう、事実だからツッコめねぇな」

「ま、ヴィータが乞えばまた融合しても良いよ？」

「かぁー！　これだよ。お前、何百年経ってもその生意気な態度は変わんねぇな！」

「えっへっへ～♪」

ヴィータちゃん達とアイリさんが笑い合います。その当時を知らないリインは少し疎外感を感じちゃうです。それに、リインはヴィータちゃんやシグナムともユニゾンすることもあります。本来ははやてちゃんのユニゾンデバイスですけど、ヴィータちゃん達とのユニゾンも、リインの立派なお役目なのです。でも・・・。

（アイリさんが来たから、ヴィータちゃんとのユニゾンの回数もぐんっと減っちゃうですよね・・・）

シグナムは炎熱変換の騎士ですから相性からして氷結の融合騎であるアイリさんとのユニゾンはしないと思うですけど、行方不明の炎熱の融合騎であるアギトさんが八神家に来ますと、シグナムはアギトさんとばかりユニゾンするようになるでしょうし。それが寂しいと思うのです。

「えっと。リイン、リインフォース・ツヴァイ」

「は、はいです！　なんでしょうか、アイリさん」

いきなりアイリさんに声を掛けられてビックリです。さっきの通信ではリインは自己紹介だけしか出来ませんでしたからね。かなり緊張するのですよ。

「そんな畏まらないでね、リイン。アイリのことも、さん付けしなくていいし。同じ融合騎として、アイリはリインと仲良くなりたいのね。シュリエル・・・、今はリインフォース・アインスだっけ、

アインスもその方が喜んでくれると思う」

「あの、ア、アイリ・・・？」

「うん。リイン♪」

リインはアイリ・・・と微笑み合ってますと、「アイリちゃん。アインスの事をどこで・・・？」シャマルがそう訊きました。そう言えば、ですね。ルシル君から聞いたのでしょうか。はやてちゃん達の視線がまたルシル君に戻りますと、「シュヴァリエルから、ね」アイリが言いました。リイン達は「え？」って訊き返します。

「シュヴァリエルがどうして・・・！？」

「話を聴いたというか、管理局の局員データを見せてもらったんだよね。そこでリインの写真データと名前を見て、ちょっと察しちゃった・・・みたいな。同じリインフォースって名前。アインスとツヴァイっていう番号。姿が見えないアインスにそっくりな外見。総合的に考えて、アインスはもう居なくなったんだって」

当たってるです。はやてちゃんが「アインスはな・・・」あの夏の日、アインスが天に旅立った日の事を話し始めました。はやてちゃんやシグナム達の未来を守るため、アインスは旅だったのだと。

「大切な人のために命を懸ける。さすが、だよね。うん、アイリもきっとそうする」

アイリは懐かしむような表情を浮かべてアインスを讃えました。リインも短いながらもアインスと過ごした時間を思い返すです。

「ちょこっと脱線したけど、アイリはリインに訊きたいことがあるんだ」

「なんでしょうか？」

「リインは融合騎でありながらも管理局員として登録しているんだよね。そんなリインに質問！　融合騎である以上、仕事の時はマイスターのはやての側には常に居ると思うんだよね。それなのにわざわざ管理局員になった。どうして？　何かメリットとかあったりするの？」

「確かにリインは局員にならなくてもはやてちゃん達と一緒に働けるですよ。でも、それだけだと足りなかったんですよ、リインとしては。はやてちゃん達はデスクワークをしていても、リインは見てるだけです。魔法戦の時だけ役に立つユニゾンデバイスではなく、他のお仕事でもはやてちゃん達をお手伝いしたかったから・・・といったところでしょうか」

真剣な表情をしてるアイリに、リインも真剣に答えるです。リインが局員になりたいとはやてちゃん達へ伝えた時の思い、言葉をそのままに。はやてちゃん達に伝えた時、みんなはリインが側に居てくれるだけで十分だと言ってくれましたが・・・

――俺はリインの意思を尊重するよ。小さい体でも立派な八神家の

騎士だからな。局員になってでもはやて達の力になりたいって言うんだ。立派な事じゃないか――

ルシル君がそう言ってくれたおかげで、はやてちゃん達もリインの管理局入りを認めてくれたです。

「お仕事は大変ですし、ミスをすると怒られもします。でも充実した日々ですよ♪」

アイリにそう微笑み返しますと「そっかぁ～。ん、決めた。アイリも局員になる！」アイリはそう決断したです。

「リイン！　融合騎としては先輩だけど、局員としては後輩となるからよろしくね♪」

「は、はいですっ！」

はやてちゃん達から拍手が送られる中、リインと同じ身長にまで戻ったアイリとギュッと握手を交わしました。

・―・―・終わりなのですよ～・―・―・

アイリは、リインの不安をその日の内に晴らしてくれたのです。今ではアイリのことが大好きです。もう1人の融合騎であるアギトさんとも仲良くなれたら嬉しいです。今からお会いするのがすっごく楽しみなのですよ♪

「ニコニコしてどうしたの？　リイン」

「なんでもないですよ～♪」

アイリの顔のすぐ側に寄り添います。アイリもリインに釣られるように笑顔になってくれたです。

†††Ｓｉｄｅリイン⇒アイリ†††

八神家へとやって来て早１ヵ月。レンアオムに居た変わり映えのない何百年に比べて濃い時間だったね。管理局の仕事は本当に大変で、ただマイスター達にくっ付いて魔導犯罪者を狩って、書類をぱぱっと片せば良いと思ってたけどこれがかなり面倒だった。管理局法を一から覚えないといけなかったし。

（リインの言う充実感を得るにはもうちょっと頑張らないといけないみたいだね～・・・）

だけどマイスターやシグナム達と一緒に居られたり戦えたりするのは最高の気分だね。それとみんなとお揃いの制服というのも悪くないし、特別技能捜査課っていう所属課のメンバーも良くしてくれるし。休憩中に美味しいデザートを食べれるのも最高だと思う。はやてとシャマルは、太る～、って嘆いてたけどね～。

「お？　ちゃんと飾り付けで来たようやね」

「はやてちゃん！」

「良い仕事をしたな、アイリ」

「ルシル　」

クリスマスツリーが飾ってあるリビングダイニングに入って来たはやてと、アイリの愛するマイスター・ルシル。この1ヵ月で、はやての人となりは理解できて、シグナム達がはやてを大事にする気持ちも解った。以前のマイスター・オーディン（ホントはマイスター・ルシルだけどね♪）と雰囲気が似ていて、道具じゃなくて家族として接してくれる。アイリにもみんなと同じように愛してくれてる。

「ルシル君、やっぱりまだ魔法は使えないです？」

「あ、ああ。あれから1ヵ月も経ったし、そろそろ元に戻るだろうと思っていたけどな」

「ルシル君はホンマに無理し過ぎや。この長期休暇は良え薬やよ、しっかり休むように！」

マイスターは、シュヴァリエルとスマウグの連戦の影響か魔力炉（システム）が不調になっちゃって、この1ヵ月間魔法も魔術も使えなくなっちゃってる。そういうわけで特捜課としての仕事は無期休養。あーでも内務調査部っていう、管理局組織内を取り締まる警察みたいな部署の仕事は招集命令が来ると出るけど・・・。

「判っているよ。調査部の方も俺の体を心配してくれて仕事量を減

らしてくれているし。というか、せっかくのイブに仕事の話はよそう」

「そ、そうやね、うん。今日は家族水入らずのクリスマスイブ、楽しい話題だけで十分や」

「それじゃあ夕飯の下ごしらえを始めるか」

「おお♪　っとその前に。外で飾り付けしてくれてるシグナムとザフィーラ、ケーキを取りに行ってくれてるヴィータとシャマルのために温かいもん用意せえへんとな」

「そうだな。ヴィータとシャマルはココア、シグナムとザフィーラは緑茶で」

「そうやね。お湯沸かすな～」

台所に向かったマイスターとルンルン気分なはやてが作業に取り掛かる。マイスターの料理の腕は昔から知ってるけど、はやての料理も負けないくらいにすごく美味しい。リンドヴルムの家事担当部門の料理もまぁ美味しかったけど、マイスターとはやての料理には想いがあるんだよね。ただ作るのと、誰かに食べて喜んでもらいたいって想いがあるのとじゃ全然違うもん。

「あ、雪が降ってきたですよ！」

庭の垣根にカラフルな電球を使っての飾り付けをしてるシグナムと

ザフィーラの様子を見ようとしたリインがそう教えてくれた。アイリは「見せて、見せて！」リインの居るところへ向かう。

「え、ホンマに～？　道理で寒いわけやな～」

「初雪だな。ホワイトクリスマスになるかもしれないな」

「去年もそうやったしな～」

マイスターとはやての会話を背中に聞きながらアイリは「おお、雪なんて久しぶりだよ！」曇天から降る雪を見詰める。白。アイリと同じ色。純潔を示す色。アイリが大好きな色。あ、マイスターの黒も大好きだよ。

「リインは生まれて初めてです～！」

「え、そうなの？」

「はいです。リインが生まれたのは今年の春ですし、これまでのお仕事で行った世界でも雪の降るようなところはなかったですし。アイリはどうなんです？　久しぶりだそうですけど・・・」

「ベルカの時はよく見たよ。けどシュヴァリエルに捕まってレンアオムに連れて来られてからは一度もないね。あの世界、季節が無かったから・・・」

温暖で過ごしやすい環境なのは確かだったけど、氷結系のアイリに

とっては暑すぎたんだよね。まぁ空に浮遊する島だったからまだマシだったけど。回収実働部隊の訓練を称して何度か地上に降ろされたけど、暑さですぐに参ってた。そんな過去を思い返しながら、リインと2人で窓の外に見える雪を眺める。

「寒ぃ～！　チラホラ雪降って来たよ、はやて～」

「ただいま帰りました～！」

ヴィータとシャマルが、なのはの家族が経営してる店・翠屋から戻って来た。シャマルの手には白い箱。マイスターやはやてまでもが認める美味しいケーキが入ってる箱だ。この1ヵ月の間に何度か行ってご飯を食べたけど、どれも美味しかったんだよね。

「おおきにな、2人とも！　ココア淹れたからそれで温まってな！」

「ありがと、はやて！」

「ありがとうございます。先に着替えてきますね」

シャマルは自室のある2階に、ヴィータははやての部屋に向かった。ちなみにアイリの部屋はマイスターと同じ。ターニャの屋敷でお世話になった時もアギトお姉ちゃんと一緒にマイスターと同室だったし、同じベッドで眠ったしね。

「アイリ、ヴィータとシャマルの席に運んで行ってくれ」

「ヤヴォール♪」

台所に行って、２人が着替えから戻って来る前にココアをダイニングテーブルへ運ぶ。

「リイン。シグナムとザフィーラも呼び戻したって～！」

「はいですっ。シグナム～、ザフィーラ～。もう入るですよ～」

はやてのお願いを聴いて、リインが窓を開けてシグナムとザフィーラを呼ぶ。アイリが中身のココアを零さないようにテーブルにコップを置いてると、「ただいま戻りました」すぐに２人が戻って来た。

「緑茶を淹れておいた。２人とも、温まってくれ」

「ありがとう、ルシリオン。頂くよ」

「すまんな。頂こう」

マイスターが下拵えの途中で湯呑みを持って来て、椅子に着いたシグナムとザフィーラの前に置いた。そしてヴィータとシャマルも着替えから戻って、アイリが持ってきたココアを飲み始めて、４人揃ってほぉっと息を吐いた。

その様子をアイリはマイスターとリインの３人で見て微笑み合った。ベルカの時みたいにこんな温かな時間をまた過ごせるのをずっと待ってた。マイスター・オーディンの預言を信じて。それがやっと叶った。諦めそうになった時もあったけど、諦めなくて本当に良かっ

たよね。

（アギトお姉ちゃん。・・・待っててね。必ず見つけるから！）

シュヴァリエルは言った。アギトお姉ちゃんはまた別の"エグリゴリ"が有してるって。マイスターとこれからも一緒に"エグリゴリ"と戦って行けば必ず見つけることが出来る。残る"エグリゴリ"は４機。そいつらにマイスターが負けないようにアイリももっと強くならないとね。

Ｅｐｉｃｏ４２雪も積もれば戦となる

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「さむ・・・」

寒さで目を覚ましてしまった。時刻を確認するために身じろぎしようとしたが「ん・・・ぅむ・・・」布団の中から聞こえてきた声の主のおかげで出来なかった。布団の中を覗き込んでみれば案の定「むにゃむにゃ、マイスター・・・えへへ　」アイリが俺にしがみ付いて寝ていた。

（夏もこうだとちょっと辛いかもな～）

起こさないように気を付けながらアイリの両腕を俺からそっと離してからベッドから降りる。そしてクローゼットからセーターにスキニーパンツを取り出して着替え、部屋の隅に置いてあるハンガーラックから取ったフリースの袖に腕を通して着る。遅れて壁に掛けられた時計を見て「６時か・・・」時刻を確認した。学校は冬休みに入り、局の仕事も休みだからはやてが起きるのはもっと後だろう。

「しかし本当に寒いな～」

カーテンを少し開けて窓の外を確認すると外には雪が積もっていた。

「おいおい、初雪にしては降り過ぎじゃないか・・・？」

地方でもないのに５ｃｍくらい積もっていた。通りで寒いわけだ。チラホラと降る雪を眺めていると、「へくちゅっ！」くしゃみが背後から聞こえた。振り向いて見れば、アイリがもそもそと布団の中で動いていた。しかも俺を捜しているのか手が特に動いている。起きているのなら俺を呼ぶだろうし、起きていないうえで俺を捜しているとなると目を覚ますかもしれない。

（ふふ。仕方ないなぁ）

俺はベッドに戻って布団を被り、アイリの手を握る。するとアイリの寝顔は不安そうなものから安心しきった緩みきった表情へと変わった。そしてまた俺にしがみ付いてきた。まさか起きているんじゃ、と思えるほどに流れる動きだった。試しに頬を突いてみると「んみゅぅ・・・」嫌がるどころか破顔した。少しイタズラ心が生まれてプニプニと突き続けていると、ガブッと人差し指を噛まれた。

「～～～～っ！！」

右手で口を押さえて声が出ないように努める。自業自得の結果だが、これは痛い。しかも歯軋りの要領で上下の前歯をギリギリ動かすからダメージ倍増。なんとかアイリの口を開けさせて指を出す。皮膚が切れて血が滲み出していた。小さく「ごめんな」アイリに謝って、彼女の手を離しながらベッドから出る。向かうは洗面所。まずは傷口を洗おう。

（ラファエルが使えたとしてもこの程度の傷で使うのもなぁ～）

シュヴァリエル、スマウグとの連戦で魔力炉（システム）を酷使した影響で、今の俺は魔術師どころか魔導師としての能力も失っている。特にスマウグには上級の中でも高威力を叩き出す儀式系術式を連発した。相手がスマウグではなくレーゼフェアやフィヨルツェンなら俺は絶対勝っていた。

「（そう思うと俺はかなり勿体ない魔力を使ったよな～・・・・）はぁ～～～」

無駄な戦いをした・・・なんて言えないよな。リンドヴルムは次元世界に迷惑をかけまくっていたし、俺が戦わなければ次元世界に戦乱を招きかねなかった。ただ、ただあの場所にレーゼフェアかフィヨルツェンが居れば・・・絶対に救えていたはず。それだけがもう・・・。溜息が全然止まらない。

「救急箱は・・・っと」

氷水のごとき冷たさの水で傷口を洗って、俺の部屋にある救急箱（もう1つははやての部屋）を取りに戻る。アイリは今もベッドの中でぐっすり夢の中。起こさないように気を付けながら勉強デスクの上の棚に乗る救急箱を降ろし、中から傷薬と絆創膏を取り治療を行った。

「んみゅぅ～・・・マイスター・・・？」

布団の中からちょことんと頭だけを出したアイリが俺の名を呼んだ。

眠気眼だが俺の姿をしっかり視認しているようで、「起こしたか？　ごめんな」と謝る。アイリは「だいじょ～ぶ～」そう言って布団から出て来た。今のアイリはヴィータと同じくらいの身長のヴァクストゥームフォルムで、動物――ウサギの着ぐるみみたいなパジャマ（アニメの影響らしい）を着ている。

（ルミナ達もアニメやマンガが好きだったよな～）

アイリもこの1ヵ月、時間さえあればテレビ番組を観て多くの趣味を持ち、知識を蓄え・・・そしてよく寝坊するようになった。観たい深夜番組は録画、録画できない裏番組は徹夜してでも観る。まぁ、何百年とレンアオムに閉じ込められていたんだ。これくらいは大目に見ようというのが八神家の総意だ。

「アイリ。見てみろ、雪が積もって銀世界だぞ」

「えっ、ホント！？」

アイリが窓へと駆け寄ってカーテンを開け、「綺麗（シェーン）」外を見て目を輝かせた。しかもガラッと窓を開けてそこから出て行こうとするから俺は「ちょっと待て」肩を掴んで制止する。

「？？？」

「小首を傾げるな。いくら寒さに強くても風邪をひくぞ。あと窓から出るな。それに二度寝しないなら着替えるように」

「はーい！」

パジャマからタートルネックセーターとキュロットパンツとタイツ、お揃いのフリースといった冬服に着替えるアイリ。そして俺はベルカの時と同じように櫛でアイリの髪を梳かし、髪型を整える。この何百年で1人でも出来るようになったそうだが、俺たちと再会し、俺と同室になったことでまたこうして甘えるようになった。

「よし。ほら、いいぞ」

「ありがと、マイスター♪」

トタトタと玄関へと向かうアイリ。俺も新聞紙を取りに行くために続く。靴に履き替えて外に出る。出る言葉はやはり「さむ」だった。アイリは足跡の付いていない綺麗な雪の上をザクザクと歩いている。

「これなら雪合戦やかまくらも作れそうだな～」

「えっ、なにそれ？　合戦？　火満苦裸？　なんかすごそうだね～♪」

「・・・絶対に変な想像をしているだろ、アイリ」

雪合戦とかまくらの説明をしてやるとアイリの表情がまた輝いた。そして予感通り「やりたい、やりたい！」と言い出した。俺は庭を見て「無理だなぁ。雪が足らないし、この家の庭だとな～」そう言って諦めさせようとした。

「じゃあさ、今日はアリサの家でパーティなんだよね？　あそこの家ってすごく大きいし、出来るんじゃないかな？」

「まぁそこのところは後で訊いてみるよ。ほら、入ろうか。ココアで体を温め――」

ポストからビニールに包まれた新聞紙を取り出して玄関に戻ろうとした時、「えりゃ♪」ボスッと俺の背中に叩き付けられる堅い物。遅れて「冷た！？」服の中に冷たい物――雪が入り込んだ。振り向けばアイリがきゃっきゃ♪はしゃいで雪玉を作っていた。そして・・・

「マイスター、こんな感じなんだよね♪？」

また俺に向かって投げられる雪玉を丸めた新聞紙で打ち砕く。アイリはさらに雪玉を作り始めたため、ヒットした時の冷たさがどんなものかを身を以って教えてやるために俺も雪玉を作り出す、速攻で作り出す、３つと作り出す。

「うりゃ♪」

アイリが投げた雪玉を脇に挟んでいた新聞紙で打ち砕いて、すかさず足元に転がしてある雪玉を取ってアイリに投げる。アイリは「ハズレだよ♪」ひょいっと避けたが、すでに俺はアイリの回避先を予測しての２発目を放り投げた後だ。間髪入れずに、足元を狙われて急ブレーキを掛けたアイリへと向かって雪玉は高速飛来し、「みき

ゃっ、冷たい！？」太腿に着弾した。

「とまぁ、こんな感じだ。ほら、家の中に戻るぞ」

「は～い！」

家の中に戻って濡れた服や体をタオルで拭き、リビングダイニングの暖房を点けて、それから冷えた体をホットココアで温める。アイリはヘッドフォンでテレビを録画した番組を観、俺は新聞を読んでいると「あら？　おはよう、ルシル君、アイリちゃん」シャマルがやって来た。アイリと2人で「おはよう」挨拶を返す。

「暖房を点けておいてくれて助かったわ。でも今日は早いのね、アイリちゃん」

「まあね♪」

それからシャマルと喋りながらはやて達が起きてくるのを待ち、家族みんなが揃ったところでシャマル特製のモーニングセット（トースト・スープ・ベーコンエッグ・サラダ）を頂く。そんな中で・・・

「え？　雪合戦とかまくら？」

「うんっ！　やりたい！　ねえ、はやて。今晩はアリサの家で今日パーティするんだし、その時間までやりたいの！」

今朝のことをはやてに話すアイリ。ヴィータが「こんなクソ寒い日に雪合戦とかアホか」と一蹴すると、「ヴィータは不戦敗だね。騎士なのに。プフフ」アイリが嘲笑した。するとどうなるか。戦闘狂ではないヴィータだが負けず嫌いの気がある。ゆえに「あ〝？」ギロリとアイリを睨みつけた。

「だって寒いから、なんて言い訳で逃げるなんて騎士の風上にも置けないよね～。不戦敗、不戦敗♪　鉄槌の騎士の不戦敗～～♪」

「上等だ！　あたしも参加してやる！　そんで思い知らせてやる！　おい、アイリ！　テメェは敵側に回れよな！　はやて、アリサに連絡よろしく！」

「お、おぉ・・・。りょ、了解や。・・・とりあえず事情だけは伝えておくな」

ヴィータとアイリの視線を受けたはやてはかなり引き気味に了承し、7時半という早朝のため、はやてはメールを送信した。それから朝食を終え、食後のコーヒーブレイク中に「アリサちゃんから返信や。・・・オーケーやって♪」はやてがそう言った。

「決まったな。覚悟しとけよ、アイリ」

「そっちこそ」

そういわけで、夜に開かれるクリスマスパーティまでの間、アリサの家で雪合戦が催されることになった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒アリサ†††

はやてからもらったメールに対してＯＫの旨を伝える返信した後、あたしは庭を除雪しないように使用人のみんなに伝える。アイリが雪合戦したいって言うんだから。楽しみにしてやって来たのに除雪して無くなってたらどんなにヘコむか。

「え～と。なのは達も呼ぼうかしらね。シャルなんてルシルと同じで１ヵ月も局の仕事休まされてるし」

ルシルと同じようにシャルも魔導師としての能力が一時的に麻痺してんのよね。ルシルもメールのやり取りでまだ回復してないようだし。２人ともどんな無茶をしたって言うのかしらね。とりあえず送信するメールの内容は、家で雪合戦を開くから良かったら参加するように。んで、返事はすぐに来た。

――雪合戦！？　うん、私も参加させてもらうよ♪――

――ルシル達も参加するんでしょ？　行く行く　――

――私とアリシアも参加させてもらうよ――

――うん。ちょうど暇していたし遊びに行かせてもらうね――

全員の参加が決定。すずかもなんとか失恋から立ち直ってくれたし。今はケリオンを思い出に出来るほどにまで遊ばせてやるっきゃない

わ。
それから昼食を済ませての午後1時、「こんにちはー！」なのは達がやって来た。そして案内するのは、「見なさい！　雪合戦用ステージ！」庭に作った特製ステージ。両陣営に弾除けに必要な雪壁を作っておいてもらったわ。

「おお、本格的だな！」

「インターネットで公式雪合戦の映像を観たけどホントにそれっぽいね！」

雪合戦開催の原因であるヴィータとアイリの視線の間にバチバチと火花が散る。その2人の様子に事情を知らないなのは達が「え・・・？」あたしやはやて達を見た。早速両陣営に分かれて臨戦態勢に入った2人を眺めつつ、はやてが事情を話した。アイリがヴィータを挑発したことが全ての原因だって。

「それはなんか勿体ないね」

「そやからみんなに協力してもらおう思うて」

はやてからの耳打ちでの提案にあたし達は「オーケーよ」頷き返した。ルシルが「ヴィータ、アイリ。チーム分けするぞ」2人に手招き。そして雪合戦に参戦するメンバーであるあたし、なのは、すずか、フェイト、アリシア、シャル、そしてはやてとルシルとヴィータとアイリの10人は2人1組になってジャンケン。その結果・・・

「はぁ！？　あたしとアイリが一緒になっちまたら意味なくね！？」

「うん、意味ないよね！」

ヴィータとアイリが不満を漏らす。もちろん偶然じゃない。はやての提案通りにするために、２人を同チームにしたうえで協力せざるを得ない状況に追い込む。そのための２人１組でのジャンケンなんだもの。上手く２人を同チームにしてやれたわ。で、その２人と一緒に追い込まれ役になるのは・・・

「わたしと・・・」

「わたしに・・・」

「あたしかーい・・・」

アリシアとシャル、そしてあたしだった。なんか泣きそう。向こうは身体能力がチーム海鳴で１、２位のルシルとすずか。それだけでも厄介なのに３位のフェイト、そしてなのはとはやて。負け戦確定のメンバー分けだった。しかも・・・

「足引っ張んなよな」

「ヴィータこそアイリの邪魔しないでよね」

５人中２人がいがみ合ってんだけど・・・。そんな中であたし達は

両陣営に散る。雪玉から身を護る壁は各陣営に3つ、ジグザグに立てられてる。一度に2人までならしゃがめば全身が隠れる感じね。

「審判のリインと・・・」

「シャマルです♪」

「ルール説明です！」

「勝敗を決める方法は2つ。5人全員が被弾するか、もしくは両陣営の一番奥に立つフラッグを敵チームが奪取することで決まりま～す。味方の雪玉に当たってもアウトなのであしからず。あと、魔法・スキル・デバイスの使用は当然不可です。使ったらペナルティとしてその場で即失格・次戦にも参戦できなくなるので注意してくださいね～」

シャマル先生から改めてルールの説明が入る。とりあえずは向こうのチームが全力でこちらを追いこむって計画だけど。こっちが本気を出しても勝てないわコレ。ムスッとしてるヴィータとアイリを眺めてると、「おーい、2人とも～」ルシルが大手を振って「俺に勝ったら何でも言うことを聞いてやる！」そう宣言した。

「なんでも！？」

「嘘はねぇんだな、ルシル？」

「男に二言はない！　はやてからも許可は貰っているから食事関係

でも何でもござれだ！　ふっふっふ。出来るものなら俺に雪玉を当ててみな」

計画その2。ヴィータとアイリに、2人が協力することによって利益が発生することを教える。2人は案の定表情を輝かせてる。さぁ、後は負けを繰り返して協力させてしまえば解決よ。

（ていうか、ここまでしなくても良いんじゃないかしらね～・・・）

もっと別の解決方法があるような気もするんだけど。ま、とにかく雪合戦の開戦ね。リインがホイッスルを吹いて開戦を知らせる。まずやるべきことは「雪玉の大量生産よ！」からね。玉数を切らさないようにしないと攻め込まれるわ。

「投げる班と作る班に分かれるのよ」

「じゃあアイリが投げる班！」

「あたしもだ！」

「（あ、これお互いを邪魔するパターンだわ）あたしとシャルとアリシアで玉作りよ」

「「ラジャー！」」

3人でせっせと雪玉を作って「しっかり当てなさいよ！」あたしはヴィータに、「頑張って！」アリシアはアイリに雪玉を渡す。で、

シャルは雪玉を作りつつ2人のサポートとして投げる方も担当して、さらにこっちの陣地に侵入者が来ないかの監視の1人3役。

「おらおら、出てこいやルシル！」

「アイリが当てるんだもんね！」

向こうからの雪玉が盛大に降ってくる中、ヴィータとアイリも負けじと投げ続けられる。でも突然、向こうからの攻撃が止んだ。バトル中の作戦は決めてない。作戦によってはあたし達でも勝てるようになってるんだけど・・・。チラッと雪壁から頭を出して様子を見てみる。それでもやっぱり攻撃は来ないし、こっちに侵入もして来ない。

「「ルシル！！」」

数秒間の沈黙の後、ルシルが真ん中の雪壁から大きく身を乗り出して雪玉の投擲体勢に入った。それと同時にヴィータとアイリが同時に雪玉を投げたんだけど、向こう陣地の一番手前の雪壁からなのはとはやてが出て来て、「のわっ！？」ヴィータと「ばふっ！？」アイリの顔面に雪玉をヒットさせた。

「まず・・・！　すずかとルシルが突貫！」

シャルからの警告。あたしとアリシアは雪玉を両手に持って、フラッグに突進してくるすずかとルシルに向かって緩急を付けて雪玉を投げつける。でも2人の身体能力は魔力強化なしでもモンスター級。

当たるわけもなく・・・

「きゃん！？」「ひゃん！？」

アリシアと揃って胸に雪玉を貰って撃墜。残るはシャル1人。で、向こうは5人のフルメンバー。勝敗は決したわ。

「にょわぁぁぁぁぁ～～～～～！」

はい、シャルもルシルとすずかの至近距離での一発で撃墜。あたしが「少しは手加減しなさいよ！」って怒鳴ると、どういうわけか「手加減ってなんだ？」味方のアイリが、変なポーズを取りながら声を太くしてそう返してきた。

「はいはい、ブ○リー、○ロリー」

「似てた♪？」

「どんなアニメキャラのモノマネか判る程度にはね」

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒イリス†††

「は～い。第2戦行くですよ～」

リインのホイッスルが高らかに鳴り響く。さっきと同じように雪玉のストックを作りながらわたしはなのは達の陣地を監視。前半は第1戦と同じ雪玉の投げ合いが続いた。問題は・・・

「アイリ、そこ邪魔だ！」

「はあ！？　ヴィータこそアイリの邪魔してるんだけどね！」

ヴィータとアイリの言い争いによるこちらの攻撃比率の低下。その隙を突いてのあちらの猛攻。戦力差が違い過ぎる。いくらあの２人の為とは言えちょこっと惨めだよ～。

「「ぎゃ～す！」」

ヒートアップして立ち上がったことでただの的と化したヴィータとアイリが被弾。どうしてそこまで邪魔し合うのか。ルシル１人を倒すだけで良いのに、どっちが当てるかで揉めて・・・。

「とりあえず！　アリサ、アリシア、援護よろしく！」

わたしは両手に雪玉を１つずつ手にして、フラッグの側から向こうの陣地へ突撃する。はやてかルシル、どっちか指揮してるか判らないけど統制の取れた攻撃でわたしの動きを制してくる。

「せめて１人でも倒す！」

それでもわたしはアリサとアリシアの援護の下に紙一重で雪玉の弾幕をの中を突っ切り、前衛のすずかとフェイトが隠れる手前の雪壁に最接近、右から回り込む。２人はその場に留まるか逃げるかで一瞬躊躇。

（後退すればアリサ達の攻撃に晒される。なのは達はわたしとすずか達の距離からして同士撃ちを警戒して攻撃できない。で、すずかはわたしとの間にフェイトが居るから雪玉が投げられない。つまりこの瞬間だけは、わたしとフェイトの一騎打ち・・・！）

「わわっ・・・！」

「別に勝っても良いんでしょう？」

フェイトが投げた雪玉が顔面に迫るから首を逸らして回避。狙うなら胴体の方だったよねフェイト。ま、雪玉１つ消費して防ぐつもりだったけどね。左の雪玉を「きゃっ！」フェイトの顔面にお見舞い。次はすずかを狙う。アリサとアリシアで後衛のなのはとはやてとルシルを押さえ込んでくれてるし、すずかだけはここで仕留めておきたい。フェイトの体がお互いにとって壁になってる。だから・・・

「ちょっとごめんね、フェイト」

「へ？」

フェイトをすずかの方に向かって押した。突然のことに踏ん張りが効かなかったこともあって、すずかに向かって倒れ込んだ。すずかは、というかチーム海鳴はみんな優しい。だからすずかはフェイトを抱き止めた。

（勝った・・・！）

「と、勝利を確信した時が一番隙だらけ」

「ルシ――・・・ひゃぁぁん！？　つめ、つめた、冷たい！　入った、服の中に入った！」

背後からルシルの声がしたと思ったら背中に雪玉をぶつけられた。これで２対４。そして結局、この第２戦も負けた。

「くっそ～。いつの間に・・・！」

「なのはとはやてが頑張ってアリサとアリシアを押さえ込んでくれたからな。もしヴィータとアイリがまだ生き残っていたら、俺はフォローに入れずフェイトだけじゃなくすずかも墜とされていただろうな。ま、次の戦いは１戦目と同じように完勝してやるさ」

「「っ！」」

ルシルが自軍の陣地に戻る際にヴィータとアイリをチラッと見て・・・鼻で笑った。応援することでまた張り切らせて競わせることにならないよう、２人を挑発することで協力させようとした。

そして第３戦の開始・・・、その直前。２人がお互いを見て、「ここは一旦・・・」頷き合った。

「少しは冷静になれた？　２人とも」

アリシアがそう訊くと、「おう」ヴィータと、「まあね」アイリが

頷く。ようやく目的が経緯から結果へ変更したみたい。どっちがルシルを倒すかの経緯じゃなく、ルシルを倒して好きな命令を下せるという結果のための協力だ。

「よしっ。じゃあ改めて勝ちに行くよ！」

「「「「おう！」」」」

円陣を組んで意志を高める。

「雪がそろそろ無くなってきたのでこの第３戦で終わりで～す」

「では、第３戦・・・スタートです！」

リインのホイッスルが鳴る。残り僅かになった雪をかき集めて雪玉を作りまくる。そしてある程度の備蓄が整えば本番の雪玉の投げ合いが開始。ヴィータとアイリも連携して投げるようになってくれたから早々撃墜されることはなくなった。

（それでも向こうに押されてるか・・・？）

すずかとルシルの弾速がとんでもない。投げ終えたフォームを見てからの回避じゃギリギリ間に合わない。あの２人に集中すれば今度はなのは達からの攻撃が脅威になる。だからまずは攻撃の数を減らすために攻撃頻度の少ないはやてから墜とす。ヴィータはちょっと躊躇ったけど、あくまでゲームだからってことで納得してもらった・・・んだけど、「ルシルうざぁ～・・・！」アリサが唸る。

「ルシルの迎撃能力が半端じゃないよ～」

アリシアが言うようにルシルがとことんウザい。はやて狙いだってことがバレてるみたいで、はやてに当たりそうになる雪玉に雪玉をぶつけて迎撃してくる。さっきみたいに至近距離での特攻を仕掛けるしかないかな。すずかとルシルを足止めしてもらえればなんとかなりそうだし。はやては後回しにしよう。

「みんな、援護よろしく。特攻を仕掛ける・・・！」

フラッグを取れば勝ちっていうけど、それはなんだか卑怯というか納得のいかない勝利。だから純粋な雪合戦で勝ちたい。雪玉を持ってまた突撃を敢行したら、「すずか・・・！？」も同じように特攻を仕掛けて来た。

「よろしくねシャルちゃん♪」

「誰の指示これ・・・！」

すずかと対峙して、ステップを踏み合いながらお互いに隙を探る。すずかは「はやてちゃんだけど・・・？」そう教えてくれながらも雪玉を持つ右手を繰り出して来た。投げるんじゃなくて直接雪玉をぶつけてくるわけか。付き合うよ。わたしも両手に持った雪玉を拳に見立ててコンビネーションパンチ。すずかと繰り出し合っていると・・・

「ちょっ、フェイトとルシルまで！？」

わたしとすずかの両脇を通って2人がこちらの陣地へ攻め込んで来た。すずかとの攻防の最中で立ち位置がグルグル変わる中、自軍陣地を見るとヴィータとフェイト、アリサとルシルが1対1で攻防を繰り広げてた。

（急になんで特攻を仕掛けて来たわけ？　フラッグ奪取しないのは嬉しいんだけど・・・）

向こう陣地を見る。なのはとはやてが居るはずなんだけど隠れてるみたいで姿は見えない。アリシアとアイリは雪玉を持ってフォローに入れる体勢なのに、なのはとはやては雪玉を投げる気配すらない。となれば、考えられるのは・・・

（誘いか、それとも雪玉が無い・・・？）

誘いという罠なら厄介だけど、雪玉を乱発できるほどの量を作れない状態となっていたら・・・。

「（懸けてみるか）アリシア、アイリ！　ルシルは後！　向こう陣地に特攻！　なのはとはやてを討って！」

こうなったらこっちも1対1のガチンコを仕掛けてやる。アイリは雪玉を数個と抱きかかえる運び屋に徹し、アリシアは両手に1個ずつ携えて投擲を担当。そして・・・

「アリサちゃん、アウト！」

アリサがルシルに撃墜されて・・・

「フェイトちゃん、アウト！」

フェイトがヴィータに撃墜されて・・・

「っしゃぁぁぁぁぁーーーーー！！」

「すずかちゃん、アウト！」

わたしがすずかを撃墜。わたしはすぐさま反転して、駆け出しながら足元の雪を掬って雪玉を作り「ヴィータ！」と一緒に、雪玉１つだけしか持っていないルシルに挑むんだけど・・・。

（下手に投げてヴィータに当てるような無様は出来ない）

しかルシルはわたしとヴィータが常に対角線上に並ぶように立ち位置を調整してくる。だから直接「叩き込む・・・！」ために右手に持つ雪玉を繰り出す。ヴィータも両手に持つ雪玉をルシルに繰り出すと・・・

「「っ！」」

ルシルが消えた・・・んじゃない、高速で屈んだだけ。前後はわたしとヴィータに挟まれてる。頭上からのわたし達の攻撃を避けるに

は左右のどちらかに跳ぶしかない。ならそれに備えておけば・・・。

「甘い！」

「ひゃあ！？」

目の前を通り過ぎるのはルシルが放り上げた雪玉。上半身を反ることで回避したけど、「のわっ！」体を起こす途中でヴィータがそんな声を上げた。シャマル先生が「ヴィータちゃん、アウト！」宣言した。ルシルが持ってたのはわたすに投げた雪玉1つだけのはず。

「これで終わりだ・・・！」

体勢を元に戻し終えたときにはルシルは小さいながらも雪玉を作って手にしていた。わたしはジャンプして雪壁の上に昇って、「はやてちゃん、なのはちゃん、アリシアちゃん、アウト！」の宣言を背中に聞きながらルシルと対峙。

そして「行っけぇー！」ルシルに向かって雪玉を投げつける。1発目はルシルの足元。投擲体勢に入っていたルシルはそのままで一足飛び後退して回避。わたしは1発目を投げたと同時にジャンプして、回避し終えた直後のルシルへ向かって最後の1発を投擲。

「まだ足りないな！」

ルシル横っ飛びしてわたしの投げた雪玉を回避。そして着地したばかりのわたしに向かって雪玉を投げた。わたしはここまでだ。でもこれで終わりにするわけにはいかない。わたしは仰向けに後ろへ体

を傾けた。それで避けられたら儲けもの。たとえアウトになっても・・・

（あの子が居る！）

そして雪玉は、わたしの胸スレスレを通過して行った。そしてわたしは冷たい雪の上に仰向けに倒れ込む。ルシルはわたしが起き上がるまでに追撃しようと雪壁の上に上がったけど、それと同時に「のわっ！？」ルシルに４つの雪玉が直撃。

「・・・や、やったね！　アイリの勝ちだよ、勝ち～～～～～♪」

わたしの頭のすぐ上に居るアイリから勝ち鬨が上がった。アイリが生き残ってる。それだけを考えて雪壁に上ることでルシルの視線をわたしに集中させた。その間にアイリがなんとかしてくれると信じた。そして、アイリは見事にルシルを撃墜。

「みんな勝ったよ～♪」

「やるじゃない、アイリ！」

「最後はお前に良いところを全部持ってかれちまったな！」

「ルシルの虚を突くなんてすごいことだよ！」

アイリとアリサとヴィータとアリシアがルシル撃墜だけでなくチームとして勝利したことに喜び合ってる。なのは達やシャマル先生た

ちも「おめでとー！」って拍手を送ってる。

「ねえ、ルシル」

「ん～？」

「ひょっとしてわざと負けたりした？」

「いんや。避ける自信はあった。雪壁の左右のどちらから行こうが、上から行こうが、な。けどまさか一足飛びで避けられる範囲すべてに雪玉が飛んでくるとは思わなかった」

そう言ってルシルは笑って「俺の負けだ！　なんでも命令していいぞ！」ってヴィータとアイリに拍手を送った。

Ｅｐｉｃｏ４３知っても良し経験しても良し

†††Ｓｉｄｅなのは†††

雪合戦の後は、みんな仲良く雪だるまを作ることになった。場所は雪合戦をしたところとは別の、まだ誰も足跡を付けてない綺麗な雪が残る裏庭。アイリ（呼び捨てで良いってことだから）が期待してたかまくらは、さすがにそこまでの雪は無いから諦めることになっちゃったんだけど・・・

「アイリは１つずつじっくりと思い出を作っていきたいから、今日１日で全部やろうって思わないんだよね」

「お、良いこと言うなアイリ。一気に片付けるよりのんびり楽しむ方が良いよな」

「おい、ルシル、アイリ。しっかり転がさねぇとデコボコになんだろうが」

アイリはそう言って、ルシル君やヴィータちゃんと一緒に雪だるまの頭の部分を作り続ける。胴体を作るのは、はやてちゃんとシグナムさんとシャマル先生とザフィーラの八神家。ちなみに他の私たちは、小さな雪だるまや「ふわぁ♪　雪で作ったウサギですぅ♪」リンゴで作るようなウサギを作ってリインに見せて喜ばせてる。

「ねぇねぇ、正月だけど今年もみんなでお参りするよね？」

小さな雪ネコ（完成度高いし可愛いでビックリした）軍団を作るシャルちゃんがそう訊いてきた。去年とは違って本格的に管理局の仕事を始めてるから休暇スケジュールも合わない日も当然ある。だけどリンディさんがチーム海鳴のお正月休暇を合わせてくれたから、今年もみんな揃って海鳴市でお正月を過ごせることになった。

「もちろんやよ。今年はリインとアイリがお初やしな」

「お正月ってこの世界のイベントなんだよね？　アニメでしか観たことないから今からすっごく楽しみなんだよ♪」

「リインもすごく楽しみです♪」

リインとアイリがうっとりと空を見上げて思いを馳せる。シャルちゃんも去年はあんな感じだったっけ。当時のことを振り返っていたら「きゃあ！？」アイリが悲鳴を上げた。雪ウサギを作る手を止めてそっちを見ると「重い～」アイリが頭部になる雪玉に押し潰されちゃってた。ルシル君とヴィータちゃんとアイリの３人で作った雪玉は結構な大きさで、ルシル君とヴィータちゃんですらも退けるのに少しもたついた。

「おいおい、大丈夫かい？」

「あぅ～、ありがとう、アルフ」

人型形態のアルフが軽々と雪玉を持ち上げてアイリを救出したこと

で事なきを得た。そして、シグナムさん達が作った子供組の身長を超すほどに大きな雪玉に、今度はルシル君たちとアルフの４人で「せぇーの！」雪玉を持ち上げて胴体の雪玉の上に乗せた。雪だるまの基礎部分がこれで完成。あとは・・・

「アイリ。木の枝を拾って来たよ。使い方は判る？」

「うんっ。コレが手なんだよね」

すずかちゃんが雪だるまの完成に必要な部品の１つである枝をアイリに手渡した。太さと長さがあるから、アイリは迷わず胴体の両側に突き刺すと、「アイリ、俺の手袋を使え」ルシル君が手袋をアイリに手渡した。

「ありがとう♪　・・・うん、なかなか」

ルシル君の手袋を木の枝の先に引っ掛けることで雪だるまの手は完成した。あとは顔を作るだけ。それに必要な枝は「ちょうど良い細さの見つけたよ」アリシアちゃんが用意済みだった。

「アリシアありがと！　それじゃ・・・これで・・・」

アイリが雪だるまの表情を作るために、受け取った枝を引っ付けた。でも（　　）こんな形だから「なんか変・・・」その出来に不満そう。だから「アイリ。こうすると良いよ」私が３本の枝の真ん中を折って曲げるっていう細工をちょこっとだけして（^ v^）無表情から笑顔に変えてみる。

「なのは、すごい！　とても可愛くなったよ♪」

アイリのキラキラな笑顔には「喜んでもらえて嬉しいよ♪」私も自然と笑顔になる。そして「完成だね♪」アイリが雪だるまの完成に満面の笑顔で万歳して喜んでるから、私たちも微笑ましくなって「おめでとう！」拍手や万歳で喜びを分かち合う。

「よし。写真だ、写真を撮ろう！」

ルシル君が携帯電話を構えて私たちに雪だるまの側に集まるように言った。リインとアイリが一番乗り気で、リインはその小さな体を活かして雪だるまの頭の上に立って、アイリは雪だるまのすぐ隣に並んでピースサイン。私たちはミニ雪だるまや雪ウサギ、雪ネコを手に持ってスタンバイ。

「はい、チーズ」

ルシル君が何枚か撮って、それからルシル君も写真に入るためにアリサちゃんが使用人の人を呼んで、ルシル君も一緒の写真を何枚も撮った。その後は雪遊びを一段落させてアリサちゃんのお部屋へ。淹れてもらったココアをみんなで飲みながら写真データを送信してもらう。

「――で、話を戻すんだけど。今の内に予定を立てておかない？」

「早朝はやめときたいなぁ。お参りの醍醐味の出店も開いてへんし」

「あ、あたしもパス。午前中はちょっと無理かも」

はやてちゃんとアリサちゃんがそう答えたことで自然と、集まるのは午後からで昼食抜きで、っていう計画が立った。集合場所は去年と違って現地集合。去年は"闇の書の欠片"事件もあって大晦日はアリサちゃんのお家に泊まったけど、今年は何の問題も起きないかもしれないからそれぞれのお家から現地へ向かうことにした。それからお喋りで時間を過ごしていたら、夕食の準備が出来ました、って報せを貰った。

「よっし。それじゃダイニングに行きましょうか！　年に一度のクリスマスだから結構豪華にしてもらったわよ♪」

アリサちゃんに付いてダイニングに行くと、去年のすずかちゃんのお家で開いた時みたく複数の丸テーブルに料理が盛られた大皿が何枚も乗っていた、自分の受け皿に好きな料理をよそって食べるビュッフェスタイルだ。

「さぁさぁ、グラスを持ってって～！」

いろんな味のジュースが注がれたグラスを好みで取る。そしてアリサちゃんが「コホン」ひとり私たちから離れて咳払いを1回。音頭を取る気なんだってすぐに判ったからそのまま待機するんだけど、「おいしいね～♪」アイリや、オモチャのような小さなグラスに口を付けるリインが「美味しいですぅ～♪」グビグビ飲み始めるから、「・・・・」アリサちゃんは固まった。

「リインちゃん、アイリちゃん。ちょっとだけアリサちゃんのお話を聴きましょうね～」

シャマル先生にそう言われた2人は小首を傾げながらも誰ひとりとしてグラスに口を付けてない様子に、2人も察したようでグラスを離した。空になってるグラスにはやてちゃんとルシル君が新しくジュースを注ぎつつ、「アリサ、頼む」アリサちゃんに温度を勧めるようにルシル君がお願いした。

「コホン。えー、今年は本当にいろんな事があったわね。砕け得ぬ闇事件を始めに、シャル達の編入、リインの誕生、アインスの旅立ち、リンドヴルムとの決戦、アイリとの再会と出会い・・・」

目を閉じて思い返す。シュテル達は元気にしてるかな。元気だと良いなぁ。

「来年もまた忙しいかもしれない。でもそれ以上に良いこともあると思う。それをまたあたし達みんなで分かち合いたいわ。嬉しいこと、楽しいことは何倍に、悲しいこと、辛いことは半分に。そんな新しい年を迎えるために、今年の締めくくりは派手に行きましょう！

メリークリスマ～～スっ！♪」

アリサちゃんのメリークリスマスに合わせて「メリークリスマ～～ス！♪」私たちもグラスを掲げて応じた。それから私たちは夜遅くまでクリスマスパーティを楽しんだ。アリサちゃんの言うように来年も精いっぱい楽しむために。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒アイリ†††

クリスマスっていうこの世界独自のイベントの次は大晦日っていうイベントがすぐにやってくる。そしてアイリたち八神家は今、家に近いお寺とかいう場所にやって来てる。なんでも除夜の鐘とかいう行事をするためだって。

「そろそろ順番やな」

鐘楼の天井に鎖で吊るされた木の棒（撞木（しゅもく）って名前。漢字は難しい）で、同じく吊るされた大きな鐘（梵鐘（ぼんしょう）って名前。これも難しい）を打って鳴らすのに意味があるみたいだね。マイスターの話だと、１０８つの煩悩（っていうのは、心や体を惑わしたりする妄念や欲望のことみたい）をベルを同数回鳴らすことで取り除いて、新しい年を綺麗な心と体で迎えよう、とのこと。

「はやて。リインは？」

「ん？　えっと～・・・、あー、やっぱり眠ってしもてるわ～」

ヴィータとはやてが、はやてが肩から提げてるバッグ――通称お出かけバッグの中を見た。あのバッグにはリイン専用の小部屋が詰まってる。リインはまだ生まれて間もない（まだ数ヵ月程度だって言うし）こともあってかよく食べ、よく眠るんだよね。

「リインちゃんは元よりその身体だから鐘は撞けないけど・・・」

「除夜の鐘は聞きたいと言っていたな」

「起こす・・・のも可哀想だな～。可愛い寝顔をしている」

シャマルやシグナム、マイスターと続いてお出かけバッグの中で眠るリインを覗いてく。最後に「でも聴けない方も可哀想だよね」アイリがそう言う。アイリとリインは全て初めてだから、初めてを家族と一緒に経験して行こうねって、って。だからその約束を守るために「リイン、起きて」アイリはリインの小さな体を揺さぶった。

「「「「アイリ・・・？」」」」「アイリちゃん・・・？」

「約束した。初めては2人一緒に経験しようって。リイン、起きて」

「ん・・・アイリ・・・？」

「そろそろベルを打つよ。家族みんなで聴くんだよね？」

「ベル？・・・・っ！　そ、そうです！　リインは――」

眠気眼だったリインも約束を思い出してガバッと起き上がった。けどその際に声を上げたことで「しぃー！」アイリはリインの唇に小指を当てる。周囲を見回して、アイリ達と同じ目的で並んでる他の人たちが変に思ってないか確認する。とりあえず前後に並ぶ親子の2組はリインの声に気付かなったみたいでマイスター達と一緒にホッと一安心。

『ご、ごめんなさいです、アイリ、はやてちゃん達も・・・』

『ええよ。さ、いよいよや。順番に鐘を撞いてくよ』

アイリ達の前の親子がベルを打ち終わったことで八神家の順番になった。頭がツルツルの人（お寺のジュウショクさんって人）が「良いお年でありますように」そう言って、木の棒と繋がるロープをはやてに手渡した。

「せぇー・・・のっ！」

はやてが振り上げた棒がベルに打ち付けられた。そして、ゴォーン、お腹に響くような重厚な音が鳴った。最初この音を聴いた時は想像と違って、こんなもんか、って思ってたけど何度か聴いてると、マイスターやはやての言う通り煩悩とか無くなっちゃいそうな気がしてきたから不思議。気が付けばアイリも鳴らしたい思いでいっぱいになってきたんだよね。それからシグナム、シャマルとヴィータ、ザフィーラと続いて・・・

「さぁ、アイリ。俺と一緒に撞こう」

「あ、うんっ♪」

マイスターと寄り添うように1本のロープを持って「せぇ～の！」棒を振り上げて一気にベルに打ち付ける。そして鳴るベルの音。至近でベルが鳴ったから今まで以上に体に響いた気がした。鐘楼から

マイスターと一緒に降りて、アマザケとかいう飲み物を貰いに行くことになった。

「お酒なのに飲んでも良いです？」

「名前に酒と付いてはいるけどアルコールは含まれていないんだ。だから子供でも飲めるんだよ。まぁ、好みがあるから苦手だという子も居るだろうけど」

リインの疑問にそう答えたマイスターが甘酒を無料で配ってるテントの係員に、アイリ達人数分の甘酒を頼んで、みんなに紙コップが渡った。そして他の客の邪魔にならないようにテントから少し離れたところで、この寺に集まってる人たちがこぞって「１０、９、８――」カウントを始めた。

「そんじゃ。ルシル君、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン、アイリ。今年もホンマにありがとう。そして来年もよろしく。残るアギトも必ず見つけ出して、本当の八神家になろうな」

「ああ。はやて」

「はい。我が主」

「うんっ。はやて！」

「はい。はやてちゃん」

「はい。我が主」

「はいです。はやてちゃん！」

「うん。はやて」

アリサの家でやったように紙コップを掲げて、アイリ達もカウントを開始。そして1までカウントして、0の代わりに「おめでとう～～～！」そうお祝いの言葉を言って甘酒を飲んだ。確かに甘くて体がポカポカする。シグナムとシャマルが壁になって、リインもヴィータから甘酒を貰ってちびちび飲んでる、可愛い。

「美味いな」

「あら、甘くて美味しい」

「ほぉ～。五臓六腑に沁み渡るなぁ～」

はやてがそう言ってホッと一息吐いたら「ぷふっ。なんかオヤジ臭いな」マイスターが笑った。

「お？　こんな可愛い女の子に向かってええ度胸やなぁ～。ん～？」

「あはは、すまない、取り消すからくすぐらないでくれ！」

はやてがマイスターに抱きついて脇腹をくすぐりはじめた。はやてのテンションは高くて、マイスターに「ああ！　はやては可愛い女

の子だよ！」そう言わせるまでくすぐりを止めなかった。

「ふぅ。鐘撞きも終わったし甘酒も貰ったし、そろそろ帰ろか」

こうしてアイリとリインの初めての大晦日は終わって、明日の初詣の為にゆっくり休むことになった。家に帰って順番にお風呂になるんだけど、どうやってもアイリはマイスターと一緒に入れないんだよね。ベルカの時は、マイスターとアイリは何度も一緒にお風呂に入ったのにね。それにアギトお姉ちゃんも嫌がる素振りはするけど最後は一緒に入ってくれたし。それなのに今はダメだなんて納得できないんだよね。

「マイスター、なんで一緒に入ったらいけないの？」

「はやての目があるからなぁ～。彼女を怒らせると怖い」

最後にお風呂に入ったマイスター（基本的に最後なんだけどね）が髪の毛をドライヤーで乾かしてる最中、背中に抱きつきながらそう訊いたらそんな答えが。今のマイスターは、はやてを中心に考えることが多くなってる。

「（なんかつまらない・・・）マイスターは、はやてのこと好きなの？」

「ん～？　あぁ、好きだぞ。誤解のないように言っておくが家族としてだ。エリーゼと同じだよ。今の俺に恋愛なんてしている暇も余裕もない。でも、俺を慕ってくれる、想ってくれる女の子が居る。

どうせ十数年もすれば居なくなるような男に、大切な恋をしている・・・。なんとか諦めてもらいたい。そして新しい恋を見つけて、幸せになってもらいたい。それが今の、ルシリオン・セインテスト・アースガルドとしての一番の願いだ」

今、アイリが抱きついてるマイスターは本物じゃないことはシュヴァリエル、そして後にリアンシェルトっていう"エグリゴリ"からも聞いた。本物のマイスターはアースガルドっていう世界に封印されていて、目の前のマイスターは魔力で肉体を構築された"テスタメント"なんだって。だから不老。でも枯渇すれば記憶を削って体が消滅しないようにする。記憶消失の原因がそれだった。

（記憶消失に関してはオーディンだった頃のマイスターから聞いてた。だけど、体が魔力で出来て枯渇しての云々はリアンシェルトから聞いたことだ）

シュヴァリエルから聞いてたマイスターの正体は、古代の英雄・アンスールで、ガーデンベルグって奴の呪いで不老になったってことだけだった。それよりも詳しいことを教えてくれたリアンシェルトは、バンヘルドともシュヴァリエルともレーゼフェアとも違う雰囲気なんだよね。それに、アイリとリアンシェルトが話をしたこと全てを秘密にするようにも命令された。破ればマイスターが酷いことになるって。だから今もマイスターには言ってない。

「（今はそれでいい。アイリにも解らない真実に、マイスターは必ず辿り着くと信じてるから）・・・マイスター」

「ん？」

「えっと、お、おやすみ！」

「ああ、おやすみ、アイリ」

マイスターの背中から離れて布団の中に潜り込む。ちょこっとだけ布団から頭を出して、マイスターの背中を眺める。今は小さい背中だから余計に思う。支えになりたいって。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒はやて†††

１月１日の元日、わたしらは去年と同じ愛染神社へとやって来て、「明けましておめでとう♪」合流したすずかちゃん達と挨拶をし合う。今年はみんな私服姿やけど、「はやてちゃん達はみんな着物なんだね♪」わたしら八神家はみんな揃って着物姿や。今日のお参りの為にリインは朝からアウトフレームでヴィータほどの身長になってる。

「リインとアイリがお初やからね。奮発して買うたんよ」

リインはシャマルとお揃いのミントグリーン色の生地、そんで撫子の花の柄。アイリは蒼色の生地、そんでコスモスの花の柄。リインとアイリがすずかちゃん達に見せるようにその場でクルっと一回転して、みんなが拍手を送るとリインは顔を赤くして照れて、アイリはドヤ顔で胸を張った

「それじゃあ・・・、去年みたくお参りをした後でおみくじ、そして屋台巡りだよ♪」

シャルちゃんが張り切る。そうゆうわけで早速お参り。２人１組で参拝して、わたしはすずかちゃんから教わった作法の通りに参拝するリインと一緒に神様に報告、そんでお願い事をする。

（アギトがすぐに見つかりますように。ルシル君ともっと仲良くなれますように）

参拝を終えておみくじを引きに行く道中、「アイリちゃんはどんなお願いしたの？」なのはちゃんがそう訊いたら、「アギトお姉ちゃんが早く見つかりますように♪」そう笑顔で答えた。その願いはわたしやルシル君たちみんなの願いやった。

「あとね、ルシルに悪い虫が付かないようにって♪」

アイリがそう言うてシャルちゃんに笑顔を向けると、「ほっほう。宣戦布告かな？」シャルちゃんも笑顔で応じた。そんで「どうせあんたもでしょシャル？」アリサちゃんが呆れ気味にジト目でシャルちゃんを見る。

「当然！　ルシルへの想いを神様に事細かく伝えたよ！」

えっへんって胸を張るシャルちゃんがわたしをチラッと見た。アカン、巻き込まれるって思うたけど、「ほらほら。願い事は胸の内に閉まっておけ」ルシル君が手を叩いて話を切り上げてくれた。

「そうだね。他の参拝客も多くなってくるだろうし、早く済ませちゃおうか」

次はおみくじや。みんなそれぞれくじを引いて来年の運勢を占う。そんな時、「あっ、そうゆうことか」わたしは気付いた。リインに「どうしたです？」訊かれたわたしは去年のおみくじの内容が当たってたことをみんなに話した。

「失せ物・待人の内容は八神家そろって同じやった。そう遅くなく出る、遠くから。便りなく来る、早く。これってアイリのことを差してたんと違うかな」

「あ、本当だ！　今思えばそんな感じだ！」

「偶然にしては出来過ぎですものね！」

ヴィータとシャマル、なのはちゃん達も「すごいね！」って驚いてる中、すずかちゃんが俯いて「邪魔されるって、そういう・・・」そう呟いたのが聞こえた。するとアリシアちゃんが「すずか、どうしたの？」訊ねた。

「私の去年のくじの内容のことで。願望は、他人に妨げられる。待人は、来るが倖せは少ない。恋愛は、思わぬ人に邪魔される。そんな感じで・・・」

一瞬で理解した。ケリオン君の事やって。そやから「ごめん、すず

か。でも、シャルロッテ様も悪気があったわけじゃ・・・」シャルちゃんが謝った。すずかちゃんとシャルロッテさんの言い合いが思い返される。

「あ、ううん、シャルちゃんが謝ることじゃないし、シャルロッテさんが悪いわけでもないよ！　ただ、ちょっと寂しくて。ケリオン君は、ケリオン君の役目を果たそうと頑張ってた。だから仕方ないことだったって今は納得してる。そういうわけだから、もう謝るのは禁止だよ、シャルちゃん」

「・・・うん。ありがとう、すずか」

すずかちゃんとシャルちゃんが微笑み合ってると、「ルシルのおみくじも何気に当たってるよね」フェイトちゃんがルシル君にも話を振った。

「まあな。願望の苦難の中で失うものあり、得るものあり。多くの複製品を失ったし、クラナガンの住民や局員も沢山亡くなった。けど、アイリを取り返せたし、シュヴァリエルを救うことが出来た」

「確か健康もなんか不穏だったな」

「衰退は果てまで変わらぬ、か。今は上り坂だけど、ある一定の歳を過ぎれば弱体化していくということじゃないか？」

「争事じゃお前、一度死にかけてんぞ」

「退けば後に不利になる。躊躇わず勝負せよ。今思えば、時期を間違えていたのかもな。海鳴温泉での闘いのことじゃなく、ザンクト・オルフェンかレンアオムでの決闘のことだったのかもしれない。ま、今となっては過ぎたことだからいくら考えても意味ないけどさ。さ、くじの話はこれくらいにして、結びどころに行こう。今年は俺も結んで行くつもりだし」

ルシル君が先を歩く。そのこともあってルシル君のくじの内容は判らへんかった。考え過ぎかもしれへんけど、まるで去年みたいに見られるのを拒んだような・・・そんな感じがした。

（わたしの恋愛・縁談・・・。告白は時期早々。焦らず待つべし・・・）

ルシル君に続いてわたしらも結びどころで引いたくじを縄に結んでく。結ぶ中、くじの内容を思い返す。恋愛・縁談以外は普通の、気になるような内容やなかった。学業も健康も心配なしやったし。けど恋愛の内容は気になった。シャルちゃんを見る。シャルちゃんは笑顔でくじを結んでる。

（シャルちゃんはどうやったんやろ・・・？）

わたしの最大のライバルのシャルちゃん。シャルちゃんのこともちろん好きやけど、ルシル君を取られるのだけは嫌や。焦らずに待つ。そうは言うけど、シャルちゃんのこれからのアプローチで守れへんかもしれへんなぁ～。

「よーし！　お参りもした、くじも引いた！　あとやるべきことはなに！？　アイリ！」

「ふぇっ！？　お、お店で食べ物を買う、だよね！」

「グレイト！　色んな物があるよね、どうやったら多くの料理を楽しめるか判る！？　アイリ！」

「ひゃい！　シャルさん考案の屋台制覇作戦で、みんなで分け合って食べれば良いです！」

「エクセレント！　そういうわけだから各自、お参りの待ち時間で決めた料理を購入せよ！」

「は、はいです！」「や、ヤー！」

シャルちゃんのハイテンションにリインとアイリがビシッと敬礼して応えた。他の参拝客からは微笑ましさ全開の優しくて温かな視線が向けられる。ちょう恥ずかしい思いをしながら、わたしらは５人３組に分かれて屋台へ突撃した。

「すごい、すごい！　見たことない料理ばかりだね！」

「よ、よだれが止まらないです・・・！」

わたしのチームは、ルシル君とシャマルとリインとアイリや。２人とも匂いだけでものすごい良い笑顔や。そんな２人の様子をルシル

君とシャマルと一緒に微笑ましく眺める。

「来年もこうしてみんなでお参りに来たいですね、はやてちゃん、ルシル君」

「そうやね。来年もまたみんな・・・、出来ればアギトも一緒やとええんやけどな」

「ああ。必ず見つけ出すよ。必ず・・・」

3人で力強く頷き合ってるところに「はやてちゃん！　カステラ発見です！」リインや、「ひゃっほー！　たいやき、クレープ！」アイリの陽気な声が聞こえてきたから苦笑。待たせるわけにもいかへんからわたしらも任された屋台へ向かった。

それから任された料理を購入したわたしらは合流して、みんなで仲良く分け合って食べた。リインとアイリは初めて食べる料理ばかりだったこともあって終始「美味しい～！」ハイテンションやった。

Ｅｐｉｃｏ４４縁を大切にすれば幸が巡る

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「――いやいや、だからそんなに謝らなくても良いって」

『でも・・・』

俺が権威の円卓からの命令で配属させられている部署である本局内務調査部・査察課オフィスで、チーム海鳴のなのは達と通信している。人数分のモニターに映るなのは達は、俺の誕生日を一緒に祝うバースデーパーティに今年は参加できないからと、申し訳なさそうに謝るわけだ。

『あたし達の誕生日の時はちゃんとパーティ開いて一緒に祝ってくれたのに・・・』

『それなのにルシル君の誕生日だけを参加できないってなると・・・』

『心苦しいというか・・・』

『うん・・・。本当にごめんね』

アリサとすずかとフェイトとアリシアもまたずーんと沈み込んでいる。そこまで俺の誕生日のことを大事に思ってくれているのはすご

く嬉しい。嬉しいけど少し重い。男は女の子ほどバースデーパーティに固執はしない・・・と思う。だから「本当に気にしないで良いから」こっちがそこまで悩ませてすまないと謝りたいくらいだ。

「それにさ。これから本格的に目的の役職に就いたりして管理局務めがさらに忙しくなると、普通に集まるのも難しくなるだろうから、今回のはその予行練習みたいなものさ」

とは言っても、小学生の間は基本的に休みが合うように調整される・・・はずなんだが、今回だけはかみ合わなかったようだ。これは本当に運が悪かったということだ。笑顔を浮かべてそう言ってみるんだが、なのは達の表情は一向に晴れることはない。

「だったらさ。また空いた日にお祝いしてくれ。別に当日しか祝ってはいけないなんてルールなんてないしさ」

『・・・うん。それしかない、みたいだね』

『そうね。それじゃまた』

『後日にお祝いしに行くね』

『今日はありがとう。そう言ってくれて良かったよ』

『ルシル、誕生日プレゼント、楽しみに待っててね♪』

「ああ。楽しみ待っているよ」

なのは達が振ってくれる手に俺も手を振り返しながら通信を切り、モニターを閉じる。とそこに「モテモテで羨ましいね、ルシル君」査察官としての先輩であり、嬉しくもない恋のライバル認定をしてくれた、ヴェロッサ・アコースが俺に声を掛けてきた。

「どうもお疲れ様です、ヴェロッサ」

「うん、お疲れ様。いやぁ、羨ましいね～」

俺の両肩に手を置いて同じことを2度も言った。先の次元世界ではありえない程のウザさ。ヴェロッサはイリスに恋をしている。お似合い・・・とまでは言わないが、応援はしたい。いつまでも俺に無駄な時間を割かせるよりはマシだ。だが、恋敵として見られていつも張り合ってくるのは正直勘弁してもらいたい。

「今日は誕生日だそうだね。おめでとう。それで、イリスはどうなのかな？」

「彼女は一応は同課員なので祝ってくれるとは思いますけど・・・」

「へぇ～、そうなんだ。幸せそうで何よりだよ」

ギュッと俺の肩を掴む手の力が強まる。俺は「まぁ嬉しいことは嬉しいですけどね」そう返しつつ俺に与えられたデスクの椅子から立ち上がってヴェロッサの手から逃れる。そしてビシッと敬礼をして・・・

「本日の査察課での仕事はこれにて終了ですので、お先に失礼します！　先輩方、お疲れ様でした！」

「あっ、まだ僕の話は終わっていないよルシル君！」

査察課の先輩たちの「お疲れ様～！」労いの言葉を背中に受けながら逃げるようにオフィスから出る。向かうは特別技能捜査課のオフィス。八神家全員が配属されている部署だ。今日は1日デスクワークという予定だから、はやて達もオフィスに居るはずだ。

（アイリは今日もガアプ課長に怒られているかな？）

この数百年の間にシュヴァリエルによほど鍛えられたのかサポート役である融合騎らしからぬＡＡＡランクの魔導師・魔力ランクを取得し、なおかつ頭の出来も悪くはない。それでも若干のめんどくさがり気質が書類作成ミスを誘っている。

「おっと。まずは昼食か」

いつもは家族で摂るんだが（日によってはなのは達も一緒だ）、今日は生憎と俺は査察課での仕事だったため、昼食ははやて達に先に済ませておくように言っておいた。だからまずは昼食だな。オフィス区画から一般人も出入り自由な生活区画へ向かう。

本局はその巨大さゆえに管理局員やその関係者の家族のみならず普通の一般人も多く住んでいる。仕事の話も聞こえてこないため、仕事に疲れたら憩いの場の公園などで時間を潰すと結構リフレッシュ

出来たりする。先の次元世界での俺はそうだった。

「あ、ルシル！」

レストラン街を歩いていると背後から声を掛けられた。その声の主は確認するまでもなく知っているから「よう。ユーノ」振り向きざまに名前を呼ぶ。そこには俺の数少ない男友達（言ってて悲しくなる）のユーノが居た。

「ちょうど良かった！　行き違いとかにならなくて！」

「ということは偶然じゃなくて俺に用事があったのか？」

「そうだよ。お昼と摂ってから査察課や特捜課に行こうと思っていたんだけど。良かったよ、ここで逢えて」

「連絡をくれたら無限書庫に行ったのに」

「それだと意味ないからさ」

ユーノは脇に挟んでいた包みを「はい。僕からのプレゼント」俺に手渡してくれた。大きさと重さから言ってＡ５判のハードカバーかと思われる。

「ルシルって読書家でしょ？　絶版になってたレア本を見つけたから、プレゼントにはちょうど良いかなって思ったんだ」

「開けてもいいか？」

「もちろん！」

通行の邪魔にならないように近くの噴水公園に寄って、そこに有ったベンチにユーノと並んで座る。包みを丁寧に開けて紙袋より1冊の書物を取り出した。かなり古い物で、紙独自の香りがした。カバーに記されたタイトル、英雄になったバンディクーを一度は見たか、読んだか、と脳内検索。俺は読んだ本のタイトルは忘れない。時折、内容は忘れるが。そして検索の結果・・・

「（未読本だ！）ありがとう、ユーノ！　読んだことのない本だ！」

これまでの読んだことのない本だったことが判明。俺はジャンル、面白いつまらないを問わず本が好きだ、大好きだ、愛している。だからタイトルがB級臭がしようとも全然構わないのだ。

「そうだ、ルシル。時間はある？」

「ん？　ああ、あるけど・・・」

本を紙袋の中に戻しながらそう答えると、「お昼は奢るよ。はやて達はどう？」ユーノがそう言いながらはやて達の姿を捜すように周りを見た。

「いや、今日の昼は俺だけなんだよ」

「そっか。じゃあ僕たけになるね」

「ゴチになります」

ユーノの心遣いを無下に出来ないためお言葉に甘えさせてもらうことにした。そうして互いに近況報告をしながらレストランで遅めの昼食を摂る。

「――それでユーノ。なのはとはちゃんと逢っているか？」

食後のティーブレイクにそう訊ねてみると「ぶふっ！」ユーノがコーヒーを噴き出しかけた。そして咽ながら「急に何を・・・！」若干睨みが効いたジト目を俺に向けてきた。俺は「親友の恋路はほら、応援したいだろ」そんなことを言ってみた。先の次元世界は結局、俺とフェイト、クロノとエイミィだけだったから。その後はどうなったのか判らないが、なのはとユーノは絶対に上手く行くと思うんだよ。

「男2人で恋話ってどうかと思うんだけど・・・」

「で？　なのはとは逢ってるのか？」

「少しは話を聴こう！？・・・・なのはとは時間に余裕があったら逢ってるよ」

「なんだ、結局話してくれるのか」

「なんだよ！　話さないといけない感じだったから話そうと思ったのに！」

からかい過ぎた。プンプン怒っているユーノに「ごめん、ごめん。それで逢ってるって話だけど」謝りつつも話の先を促した。

「なのはが無限書庫にまで逢いに来てくれるからね。お互いに時間がある時はご飯も食べたりもしてる」

「ほうほう。やることはやっているんだな」

「でもそれだけなんだよね、やっぱり」

大きく溜息を吐くユーノ。今回の次元世界のユーノは先に比べて割と積極的か。先では想いはあるけど気付かれないならそれはしょうがない、みたいな感じだったからな。

「ま、俺が言えることは、ゆっくり好感度を上げていけば良いさ、くらいだな。なのははユーノ以外に靡くような乙女でもないし、特別な異性となればユーノを超えるような男も現れないだろう」

「ありがたい話だけど、今のはなのはに対して何気に失礼だよね」

「事実だろ？」

「まあ・・・、そうかな」

「「・・・あはははは！」」

話のネタにしたなのはには悪いが、実際になのはは恋愛に関しては同情レベルを超えた鈍さだ。付き合って下さい、と言われても、いいですよ、どこに付き合いますか？みたいなマンガのノリになるに違いない。

「ルシルの方がどうなの？　シャルとはやての２人から想われてるし、聞けば学校のクラスメイトからも。大変だね♪」

「笑顔で言うなよ。本当に大変なんだぞ」

「はは、ごめん、ごめん♪・・・ところでルシル、話は変わるんだけど」

ユーノの表情が神妙なものへと変わった。なにか大事な話だということはすぐに察することが出来た。だから俺も居住まいを直して聴く姿勢になる。

「こんな時に何なんだけどさ」

「うん」

「局と学校の両方での纏まった休みが出来たらなんだけどさ」

「なんだよ、ユーノ。遠慮なんて無しだぞ」

貴重な男友達だ、大事にしたい。というか今、ゲイだとかホモだとか聞こえた気がしたから周囲を見回してみるが、どうやら気のせいだったらしい。ユーノからの「どうかした？」問いに、「いや、なんでもない。それで、なんだっけ？」話の続きを促した。

「無限書庫の未整理区画の整理を手伝ってくれないかな。ルシルも司書の資格、取っていたと思うんだけど」

確かに俺は無限書庫の司書資格を取得している。無限書庫の出入りや各区画を自由に移動するには司書資格が必要だからだ。書庫内に俺にとって都合の悪い本が無いかを確認するために取ったんだが、リアンシェルトがすでに隠していてくれた。まったく、半端な優しさは逆に辛い。もしかしてそれ狙いだったり・・・するわけないか。俺とシェフィが生みの親と憶えていないし。

「どうかな？　やっぱり家族サービスで忙しかったりする？」

「あはは、家族サービスて。確かにそれも大事だけど、事情を伝えれば判ってくれるさ」

「そう言ってもらえると助かるよ。僕の方としては何時でも良いから、その時が来たら連絡をお願いするよ」

「ああ、任せてくれ」

ユーノと無限書庫内の整理の約束をした・・・ところに、コンコンと窓ガラスをノックする音がした。すぐ横を見ればそこには知人が

1人いた。そこに居たのは「パーシヴァル・・・？」オーディンと名乗っていた頃の俺と、当時世話になっていたエリーゼ・フォン・シュテルンベルクの間に生まれた双子の子孫だ。髪型は俺と同じインテークだが、髪色や瞳の色はエリーゼ譲りの茶色に青色。背丈は175辺りか。

「ルシルとそっくり。あぁ、彼が話に聞いたシュテルンベルクの・・・」

「ああ。魔神オーディンの直系だな」

ユーノと話していると、パーシヴァルが「こんにちは、ルシル」店に入り、そして俺とユーノのテーブル席にまでやって来た。パーシヴァルに「こんにちは」と返し、そして「彼はユーノ・スクライア。チーム海鳴共通の親友だ」と、ユーノを紹介する。

「無限書庫で司書をしているユーノ・スクライアです。お会いできて光栄です、騎士パーシヴァル」

「おお、かの有名なスクライア一族の方か！　こちらこそお会いできて光栄だ！　俺は聖王教会騎士団所属、パーシヴァル・フォン・シュテルンベルクだ」

ユーノと握手を交わし終えたパーシヴァルは席に付き、流れる動作でドリンクセットを注文。そして誰かにメールを送信し「待ち合わせなんだ。時間潰しに少し付き合ってくれ」と頼まれてしまった。

「ユーノ。予定は？」

「僕はまだ大丈夫だから構わないよ」

そういうわけで俺とユーノは、パーシヴァルの連れが来るまで付き合うことになった。とりあえず「誰と待ち合わせなんだ？」一番の疑問をぶつけると、「妹とクラリスと待ち合わせなんだよ」そう答えてくれた。

「トリシュと・・・、クラリス？」

「クラリスはトリシュと同じＳｔ・ヒルデ魔法学院の生徒で、次期レイターパラディンとして名高い騎士なんだよ」

レイターパラディン、騎兵騎士か。そういやアリサが陸士訓練校で組んだペアというのがクラリスだったか。それはともかく、どうして本局に居るのかという話になると、「ドクター・スカリエッティに預けていたロンゴミアントを取りにね」とのことだった。

「第零技術部もそうだけど、あの技術部区画は一般人は立ち入り不可だからですね」

「そうなんだよ。だからイリスやルミナのように教会騎士でもありながら局員でもあるクラリスに取りに行ってもらったんだ」

「？？　トリシュはこの話のどこに入ってくるんだ？」

「本局の一般住宅区画に友達が住んでいるらしいんだ。俺とクラリスが本局に行くと知って付いて来たんだよ」

本局に居る理由にも納得。そして注文したパンケーキ・ドリンクセットが届き、パーシヴァルが食し始めた中で俺は「改めてだけどありがとう」そう頭を下げた。ユーノは小首を傾げ、パーシヴァルは「アイリのことなら、礼は結構だよ」とサラッと返された。

アイリを取り戻してすぐ八神家（俺はある事情で通信で参加）は、アイリを引き取りたいと許可を貰いにシュテルンベルク家に行った。アイリが俺たちの側を離れないことは誰もが解っていたが、シュテルベルク家に話を通さずに引き取るわけにはいかない、と。そこでパーシヴァルは・・・

――アイリは確かにシュテルンベルク家の歴代騎士の融合騎だった。だけどアイリが誰に仕えたい・・・というより共に戦いたいかを決めるのは彼女自身だ。だから八神家の元で暮らすのが一番だと思う。それに実際にアイリと共に戦ったシグナム様たちと一緒に暮らすのが自然だと思うから――

そう言ってくれた。そういうわけでアイリはめでたく八神家入りを果たした。

「――ところでルシルのその紙袋はなんだい？」

それから俺とユーノはドリンクを再注文して、パーシヴァルと世間話をしていた時、俺の側に置かれているユーノからのプレゼントが包まれた紙袋を指差した。今さらながらの指摘だな、と思いつつ「

誕生日プレゼントだよ」そう答えた。

「誰かの誕生日が近いのかい？」

「ルシルのですよ。今日はルシルの誕生日なんですよ。その紙袋は僕がルシルに贈ったプレゼントなんです」

俺とユーノで微笑み合っていると、「聴いてないよ！」パーシヴァルはバンッとテーブルに両手をついて立ち上がったから俺とユーノはビクッとした。ユーノが「言ってなかったの？」と俺に訊いてきたため、言ったかどうかを思い出してみる。そして、「あ、言ってないか」その結論に至った。

「だろうね！　初耳だから！」

「とりあえず落ち着きましょう、騎士パーシヴァル！」

他の客や店員からの視線が集中するからユーノが宥める。パーシヴァルはスッと席に座り直し、「プレゼント、何が良い！？」何を贈れば喜んでくれるか、と訊いてきた。俺は正直に「お祝いの言葉だけでも嬉しいけど」と物品は求めなかった。

「おめでとう、ルシル！　いやしかし、これだけじゃダメだろう、さすがに！　何か、何か贈れる物！」

服のポケットを漁り始めるパーシヴァル。何でも良いが、ゴミのような物を渡されても困るし、怒るぞさすがに。そしてパーシヴァル

は何を思ったか「このアルバムを贈ろう！」そう言ってジャケットの内ポケットから通信端末を取り出して操作を始める。その結果・・・

「「っ！！？」」

テーブル中央に写真サイズのモニターが数枚と展開された。被写体は今の子供姿の俺にそっくりな少女、トリシュタン・フォン・シュテルンベルクだ。年代は今の１１歳（いや、もう１２だったか？）から０歳までのもので、水着姿や家族以外の男に見せてはいけないような写真もあった。だからユーノは両手で目を隠したうえで俯いた。

「ちょっ、なに考え――・・・あ」

パーシヴァルの背後、そこに鬼が現れた。俺の目線に気付かないままのパーシヴァルが「ほら、可愛いだろ？　この時のトリシュはおねしょして、俺に泣きついて来たんだよ♪」そんな話をした瞬間、「何を話しているんですか！」鬼――トリシュが怒鳴り声を上げてパーシヴァルの後頭部を鷲掴み、テーブルにガツンと打ち付けた。

「ルシル様！　観ないでください、観ちゃダメです、目を閉じてぇ～～～～～！」

「のわ～～～～！」

俺の顔に覆い被さるように突撃してきたトリシュは「クラリス！

モニターー閉じて！」と、連れの少女・クラリスにお願いした。大戦時、シャルロッテ率いる騎士団の副団長だったグレーテルの子孫だということで、彼女と同じスノーホワイトのショートヘア、アップルグリーンの瞳を有している。服装は学院制服のトリシュとは違い、局の制服だ。

そのクラリスという子がパーシヴァルの手から通信端末を取り上げ、操作し、モニターを消すまでの間、女子特有の甘い香り、そして柔らかな胸に顔を押し潰されていないといけないわけだ。

（トリシュが今の方が恥ずかしい状態だと気付いたら、俺・・・どうなるんだろ・・・）

「トリシュ、消したよ。というかその男の子の顔にちょうど胸を押し当ててるけど恥ずかしくないの？」

（余計な事を！！）

俺の顔に押さえ付けられていたトリシュの胸が勢いよく離れる。トリシュの顔はもう真っ赤っかで口はわなわな震え、目は涙で潤んでいた。そして・・・

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーッ！！」

パァン！と良い音が鳴った。

「へぶっ！？」

目にも留まらない速度でのビンタが俺を襲った。とんでもない威力で、一瞬だが意識が落ちかけた。撃沈された俺はテーブルに突っ伏し、耳だけで状況を知ることになる。最初に聴こえてきたのは「ごめんなさい！」俺への謝罪。次に「兄様の所為ですよ！」パーシヴァルへぶつける怒声。そして「お客様。他のお客様に迷惑になりますので」店員からの注意。

「ちょっと、ルシル、大丈夫？」

「なんとか・・・」

テーブル下に潜り込んで来たユーノにそう答える。ちょっとの冷静時間の後、改めて「ごめんなさい、ルシル様」トリシュから謝られた。気にしないように言うが、肩を落とすばかりだ。ちなみにパーシヴァルは気を失っている。強いなぁ、トリシュ。

「ねえねえ、ルシル君。どうしてトリシュの恥ずかしい写真をパーシヴァル君に見せてもらってたの？」

「クラリス！？　その話はもういいから！」

注文した特大パフェを、早送りで見ているかのような速さで頬張るクラリスが話を蒸し返そうとするからトリシュがまた怒鳴る。この短時間でトリシュは踏んだり蹴ったりだな。可哀想に。だが気にはなるようで「あの、ルシル様・・・。どうして？」と訊いてきた。

「今日、俺の誕生日なんだけど、パーシヴァルは今日・明日・明後

日と仕事だということでプレゼントを贈れないと知り、慌てた結果がトリシュの写真集みたいな・・・？」

「今日がお誕生日なんですか！？　聞いてませんよ！」

「あー・・・、うん、言ってないよな？　悪い」

「そんな、酷すぎます！　今日、これからプレゼントを買いますので、ここでまた逢えませんか！？」

「いいよ、そんな、今日じゃなくたって。変に慌てるとプレゼント選びも難航するだろうし、妙な物を買いそうじゃないか？」

「っ！　で、では明日、明日の正午、近くの噴水公園でいらしてください！　出来ればお1人で！」

「ああ。明日の正午、噴水公園に1人で。判った」

「ありがとうございます！　では私はこれで失礼します！　ルシル様、ユーノさん、ごきげんよう！　ここの支払いは兄様にしておきますね。クラリス、行きますよ！」

トリシュはパーシヴァルのポケットから財布を取り出して、注文した分のお金を抜きとった上で伝票を手に支払いカウンターへ向かった。その流れるような行動に俺やユーノは何も言えなかった。

「あ、はーい。ごちそうさまです、パーシヴァル君。それじゃあね、

ルシル君、ユーノ君」

トリシュとクラリスが店から去って行き、「はあ」俺とユーノは大きく溜息を吐いた。

「なんか疲れたね、ルシル」

「ああ、疲れたな、ユーノ」

「帰ろうか」

「ああ」

ここの支払いはパーシヴァル持ちになったため、俺たちは「ありがとうございました～♪」そのまま店を出る。パーシヴァルは放っておいたが、まぁいいだろう。

「それじゃあ僕もそろそろ行くよ。・・・誕生日おめでとう、ルシル」

「ありがとう、ユーノ。またな」

ユーノと別れ、改めて特捜課オフィスへ向かい、「お疲れ様でーす」今もなおデスクワークをしていたガアプ課長、セラティナの2人に声を掛ける。しかしはやて達の姿は見えないな。

「お疲れ様、ルシル君。査察課のお仕事、御苦労さまでした」

「お疲れ様です、ルシル」

「・・・はやて達の姿が見えないようですが・・・？」

オフィスにはやて達の姿が無いからそう確認してみたら、「はやて達はもう帰りましたよ？」セラティナがサラッと答えてくれたんだが、「へ？」連絡なしで帰られるとは思わなかったからちょっとばかりショックを受けた。

「そう、なんだ。では俺も帰ります。ガアプ課長、セラティナ。お先に失礼し――」

「おおっと」

「まだ帰らさないよ～？」

「っ！？　クララ先輩！？　テレサ先輩！？」

俺の肩をガシッと掴んできたクララとテレサ。いつの間に、というより「帰らさないとは一体・・・！？」俺を留めておく理由が解らない。さらには「私たちにもお祝いさせてね♪」特捜課のナンバー3、トゥーリア一等陸尉が俺の前に回り込んできた。そして近くのデスクから椅子を持って来て俺を座らせた。

「今朝寄ってくれた時にお祝い出来なくてごめんね♪」

「その代わり、これからお祝いするから」

「ハッピーバースデ～、ルシル君♪」

――リングバインド――

「ちょっ、はあ！？」

四肢をバインドで拘束された。数日前にようやく回復した魔力炉（システム）の回転率を上げてバインドブレイクを発動するんだが、「堅・・・！」なかなかプログラムに割りこめない。どれだけ強固なバインドだよ。

「ガアプ課長！　ヘルプです！」

「ごめんなさいね。助けられないの」

頼みのガアプ課長が使えないと来た。セラティナも手を合わせて「ごめんなさい」と謝った。特捜課揃ってグルかよ。トゥーリア一尉たちは櫛やらリボンやら化粧道具を持って迫ってくる。嫌な予感しかしない状況。必死にバインドのプログラムを侵食して行くが、「おっと、ダメだよ♪」テレサがさらにバインドを掛けてくる。

「（逃げられないのか・・・！）誕生日なのにぃぃぃ～～～～～～！！」

それからどれだけ経っただろう。シュヴァリエルに斬られて短くなっていた後ろ髪も今では背中の半ば辺りにまで伸びている。その後ろ髪を弄られて様々な髪型にされた。ツインテールにポニーテール、

三つ編みおさげ、俗にお団子といわれるシニヨン（後頭部やダブル側頭部）、サイドテール、ロールなどなど。果てには口紅やチークまで入れられる始末。

「「「「「「可愛い　」」」」」」」

「・・・・満足しました？　そろそろ解放してもらいたいんですが・・・・（涙）」

時折、俺を弄っている最中で時計を確認していたのは判っている。何かしらの時間を待っているようだった。今もガアプ課長が時計を確認していた。一体何を待っているのか。嘆息しているとＰｉＰｉＰｉ♪と電子音が鳴り響いた。すると一転「はい。お疲れ様～」俺は解放された。化粧落としでメイクを落とされた後・・・

「はい。化粧箱や装飾品が、私たちのプレゼントです！」

そう言って化粧箱などを渡された。男の俺にこのプレゼントは無いだろ、とツッコみたいが今は「お先に失礼します（泣）」一刻も早く家に帰りたい一心で敬礼し、オフィスを出る。

そしてスカラボから八神家のトランスポーターへ直通転送。トボトボと階段を下りて「ただいま～」ダイニングへ入った瞬間・・・

「「「「「「「おめでとう～！」」」」」」」

祝いの言葉と共にパン！　パン！と破裂音が続いた。パサッと顔に掛かる紙で出来たカラフルなリボン。クラッカーの物だ。

「おめでとう、ルシル君♪」

「「「おめでとう、ルシル！」」」

「おめでとうです、ルシル君！」

「ルシル君、お誕生日おめでとう♪」

「「おめでとう、ルシリオン」」

はやて達がダイニングに集まって、俺にクラッカーを向けていた。テーブルには豪勢な料理が並べられていて、壁には折り紙で作られた鎖が掛けられている。ここで俺は全てを察した。はやて達が連絡も無しにさっさと帰ったのは、この準備をするためだったんだ、と。それを念頭に置けば、特捜課の面々の行動も理解できた。時間稼ぎだ。

（でもだからと言って化粧までしなくても良いだろ・・・）

何かもっと別の手段があったと思うが、もう忘れよう。

「ほら、ルシル君。席に着いて！　今日の夜ご飯は、わたしとシャマルとアイリとリイン、それにシャルちゃんが協力して作ったんよ♪」

見ればリインやアイリの指には絆創膏が何枚か巻かれていた。慣れ

ない調理だっただろうに。俺は2人の頭を撫でながら「ありがとう2人とも。嬉しいよ！」感謝をした。2人は「えへへ♪」と気持ち良さそうに、嬉しそうに笑ってくれた。

「はやて、シャマル、シャルもありがとう！」

「「うんっ♪」」

「ささ、冷めないうちに食べましょう♪」

家族も増えてきたことで新調したダイニングテーブルに着く。そして「いただきます！」楽しく食事会だ。話題は調理中の失敗談――リインが調味料を間違えたり、アイリが力み過ぎてボールを吹っ飛ばしたりしたことや、俺が本局で体験した嬉しいこと――ユーノやトリシュの祝われたこと、悲しいこと――特捜課に化粧させられたことなどなど。ちなみにパーシヴァルの写真の一件は伏せておいた。

「あちゃあ。時間稼ぎのためにルシル君を引き止めておいてください、ってお願いしてたんやけど、そんなことになってたんかぁ～。なんやごめんな」

「写真撮ってないかセラティナに連絡しておかないと！」

「やめてくれ！」

笑い声と笑顔に包まれた夕食の後、「ハッピーバースデ～、ルシル～♪」誕生日の歌と共に運ばれてきたチョコレートケーキがテーブ

ルに載せられた。１０本のロウソクとクリームで、ルシルお誕生日おめでとう　、というメッセージが書かれている。翠屋で頼んでもらっていたのかなと思ってよく見たら、パティシエールの桃子さんには珍しい不格好さがある。

「もう気付いてるかもやけど、このケーキもわたしらの自作なんよ♪」

「アイリがメッセージを書いたんだよ！」

「リインはクリームでデコレーションしたです！」

「わたしとシャマルはスポンジを焼いただけなんやけどな」

「でもとっても上手に焼けたんですよルシル君」

嬉し過ぎてもう泣きそうだ。ちなみにシャルは「わたしはノータッチ」とのことだった。シャマルが綺麗にケーキを切り分けて、それぞれの受け皿によそってくれた。そしてみんなの目が、どうぞ！となっていたため「いただきます！」フォークで一口サイズにして、パクっといただく。リインとアイリが期待や不安が混じった表情で身を乗り出してきている。

「・・・うんっ、美味い！　美味しいよ！」

「「「「やったぁー！」」」」

はやて達が超笑顔で万歳した。こいつは本当に嬉しい。やばい、俺、本当に幸せだ。決意も覚悟も揺らぎそうになる。こんな時間をもっと過ごしたいと思えてしまう。チラッとシャルを見る。彼女も笑顔でケーキを頬張り、はやて達と微笑み合っている。

（俺も生まれ変わったら・・・、なんて都合の良い奇蹟・・・。馬鹿だな、俺）

砕けそうになる心をなんとか繋ぎとめ、俺も笑顔でみんなとの会話に参加した。家族特製のケーキに舌鼓を打っていると、「ルシル。これがアイリのプレゼントだよ♪」アイリが俺の側へとやって来て「チュー　」頬ではなく、あろうことか口にキスして来た。

「「あああああああああ！！」」

はやてとシャルがガタッと立ち上がって叫んだ。リインは顔を真っ赤にして両手で顔を隠し、シグナムは「なにか懐かしいな」と緑茶を啜り、ヴィータは「だな～」とケーキを頬張り、シャマルは「あらあら」右手を頬に添え、ザフィーラは「うむ」と一言。

「わたしのプレゼントもチューにする～～～　」

「させへんよ、シャルちゃん！」

俺に跳びかかろうとしたシャルの腰にタックルを食らわして一緒に倒れ込むはやて。はやては「ザフィーラ、シャルちゃんを少し押さえといて！」と頼み、「承知」狼形態のザフィーラは前脚でシャル

の背中をぎゅむっと踏んだ。

「のわっ！？　ちょっ、ザフィーラ！？」

「すまんな、フライハイト。主の願いゆえ、しばらく大人しくしていてくれ」

「お待たせ、ルシル君！　コレ、わたしらみんなで協力して買ったプレゼントや！」

はやてが自室から持ってきた分厚い紙袋を受け取った。ユーノから貰った物と同じ。袋の中を見せてもらうと、「こいつはまた・・・」古めかしいハードカバー本が４冊と入っていた。

「ルシル君って読書家やろ？　実はな、ザンクト・オルフェンで開かれてた芸術強化月間の古書店で買うたんよ」

「ルシル君は、レンアオムから帰って来てからずっと高熱で、１１月は動けなかったですから、はやてちゃん達と協力して買ったですよ」

シュヴァリエルとスマウグとの連戦で無理がたたって１１月は動けなかったし、その後も魔導師としても魔術師としても不能に陥ったしな。だから楽しみにしていた古書展にも行けなかったんだが。そうか、買っていてくれたのか。でも「どうして早く渡してくれなかったんだ？」という疑問が出るわけで。

「どうせ渡すならお祝いの日に一度に渡した方がもっと喜んでくれると思う、ってシャルちゃんが・・・」

「てへぺろ☆」

ザフィーラから解放されたシャルが舌を出す。ツッコむ気分でもなし。俺は「ありがとう！　大切にするよ！」はやて達の心遣いに心から感謝した。

――翌日。

トリシュとの約束の為に噴水公園にやって来たんだが・・・

「あぅ～。どうしてこんなことに・・・」

学院制服を着たトリシュの背後には黄色い歓声を上げている少女が数人と居た。以前、はやて達と一緒に学院を見学した時に世話になった４年３組の面々だった。だから「セレネとエオスも一緒かよ」スクライア姉妹の２人も居た。トリシュは「頑張れ」だとか「当たって砕けろ」だとか「骨は拾ってあげる」など、応援しているのかどうか判らない声援を受けていた。

「あのっ！　お誕生日おめでとうございます！　誕生日プレゼントと、

お昼ご飯を頑張って作ってみました！」

ベンチに2人で座り（セレネ達はベンチの周りで俺たちを見ている。結構気になる）、トリシュからまた別の古書（コレも未読作だったからすごい嬉しい）と弁当箱を貰った。

「初めて料理したので、絶対に美味しいとは言えないですけど。あ、でも味見はしていますから食べられないことはない、かと。も、もし不味ければ残してください！」

慌てふためくトリシュに「いただきます」と言ってから、デコレーション弁当（桜でんぶで、おめでとう、と書いてある）をいただく。確かにおかず類には焦げた物もあったが、そんなことが気にならない程に「美味しい。うん、美味しい！」上出来な味付けだったから素直に褒めた。

「ほ、本当ですか！？　良かったです！」

嬉し涙を流して喜ぶトリシュの様子にセレネ達も「やったぁ～！」と大喜び。

そんなこんなでとても満足な俺の誕生日は過ぎていった。

Ｅｐｉｃｏ４５－Ａ嬉し悲しも想い次第

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

明日２月１４日はバレンタインデー。女の子が好きな男の子にチョコレートっていう甘いお菓子をあげる日なんだよね。アニメでそんなイベントを学習したアイリは、「アイリ、チョコレート作りたい！」日曜日で学校が休みで、特捜課もまた休みなはやてにそう言ってみた。

（マイスターが調査部の仕事で居ない今が最大のチャンスなんだよね！）

マイスターは調査部（今日は監察課の研修だったかな）、シグナムとヴィータは武装隊、シャマルは医務局、ザフィーラはシャマルの護衛。今、家に居るのははやてとアイリとリインだけ。シャマル以外のシグナム達はバレンタインなんて関係なさそうだからどうでもいいや。マイスターが居ないことが重要なんだからね。

「明日はバレンタインなんだよね！　アイリはルシルに贈りたいのです！」

「そう言うと思うてな。実はもうチョコレート買ってきてあるんよ♪　一緒に作ろうな♪」

はやてがそんなことを言ったから「それじゃダメだよね？」ってジ

ト目で見る。するとはやては「ん、何がダメなん？」って小首を傾げる。アイリも「？？？」小首を傾げる。アイリ達の様子を眺めてたリインまでもが「えっと・・・」小首を傾げる。リビングが妙な空気になってるね。

「あ、もしかして・・・。なあ、アイリ。チョコレートを作る時の材料って何か判るか？」

はやてからの質問にアイリは「チョコの材料？　カカオ？」どこかで聞いたような言葉をそのまま答えると、「一般家庭でカカオから作るんは無理やなぁ～」はやてが苦笑した。そして冷蔵庫の中から市販の、ふっつうの板チョコレートを取り出して来た。

「手作り言うてもカカオからは作れへんのや。こうゆう市販のチョコレートを溶かして、新しく固めるのが手作りチョコってことなんよ」

「え、そんな簡単のでいいの！？」

アニメでよく不味いチョコで主人公を苦しめるってシーンがあったから、手作りチョコってすごく難しいと思ってたのに、まさかの溶かして固めるだけだったなんて。アイリが驚いてると、「チッチッチ。手作りチョコを甘く見たらアカンよ」そう言われた。

「去年もな。ルシル君にチョコを渡そう思うて作ってみたんよ。酷いもんやった・・・」

その当時のことを思い返してるのかはやては遠い目をして明後日の方を見て、人差し指で涙を拭う仕草をした。聞けばなのは達と一緒に作ったんだけど、対して調べもせずに手作りに挑んで失敗した、とのこと。

「溶かして型をとって冷やして終わり、なんて3項目で終わるもんやないんよ？　アイリ」

「う、うん・・・」

両肩をガシッと掴まれて顔をギリギリまで近付けられたからちょっと身を引く。はやてのそのようすからして手作りチョコはアイリが考えてる以上に難しいものみたいだね。だったらやめる？　否。その困難を乗り越えてこそマイスターへの愛を示せるというもの。

「はやて！　ううん、レーラー！　アイリにチョコ作りの秘伝をお教えください！」

「「レーラー？」」

「そ♪　師匠のことだよ！　はやてはチョコ作りの師匠だからね！ね、チョコ作りのこと教えて！」

「うん、ええよ！　わたしもルシル君やクラスのみんな、すずかちゃん達にも作るからな。そんじゃ、エプロンに着替えよか」

「ヤー！」

「リインもお手伝いするですよ～♪」

そういうわけで、アイリははやてとリインと一緒にバレンタインチョコを作ることになったんだよ。マイスターに買ってもらったアイリ専用のエプロン（最初は無地だったけど、マイスターがアイリの顔と名前の刺繍してくれた　）を付けて、チョコ作りを始めた。

「まずはチョコレートを溶かしやすいように細かく刻む」

「ヤー！」

まな板に置いた板チョコを包丁で薄く刻んでく。包丁の扱いはこれで2度目。初めての時は何度か指を切ったけど、マイスター愛のことを思えば怪我なんて怖くないよね。1個刻んだら「はいです！」小っちゃなリインが2個目の板チョコをまな板の上に置いてくれる。

「ありがとう、リイン♪」

2個目の板チョコも刻み終えると、「次はチョコを溶かす作業や」はやてがボウルを取り出して、そこに刻んだチョコを入れるように言ってきた。チョコを溶かすってことだから・・・

（レンジでチンだね♪）

はやてが別のボウルにお湯を注いでる中、アイリはボウルをレンジの中に入れてスイッチオン、というところで「ちょっ、ちょっ、ち

ょぉー！」はやてがものすごい勢いでレンジの中からボウルを取り出した。その様子にアイリとリインはビックリ。

「アカンよ、アイリ。溶かすのにレンジはアカンのや」

「じゃあコンロの火でボッ？」

「それもアカン、アカン。１００パー焦げるからな、それ。去年のアリシアちゃんやよ、その失敗は。・・・チョコを溶かすのに必要なものはこのお湯を張ったボウルなんよ」

はやてはそう言ってチョコ入りボールをお湯入りボウルに浮かべた。そして「はい。コレでゆっくりとかき混ぜてな」ヘラをアイリに手渡した。受け取ったヘラでチョコをかき混ぜてると「お、おお！トロトロしてきた！」チョコが溶け始めた。

「これが湯煎や。お湯の温度は低すぎても高すぎてもアカン。それにお湯がチョコのボウルに入らへんようにな」

溶かし終えたら次は「テンパリングやな。えっと、温度計、温度計は・・・っと」はやてが温度計を用意した。

「テンパリングはな、チョコに含まれてるココアバターの結晶を安定化させることを目的とする温度調整のことや。これはチョコの出来を左右する重要なことやから慎重にな」

はやての説明によると、テンパリングを失敗するとチョコの風味が

劣化したり、口どけが悪くなったり、光沢が無くなったりするんだって。アイリもそんなチョコを食べたくないし、マイスターにあげるわけにもいかない。来年のためにもメモをとる。

「水冷法で行こか。去年もそれやったし。まずチョコのボウルを冷水のボウルに入れてヘラで練り混ぜつつ、チョコの温度を２４度から２５度にまで下げるんよ。そんで最後に湯煎。今度は３１度から３３度まで上げる。

これまでの手順としては、湯煎で溶かして、次に水で冷やし、最後にまた２、３秒くらいの湯煎で３１度ちょっとまで温めるって感じ。テンパリングを終えた後は「いよいよ成形や」クッキングペーパーが敷かれたプレートと、いくつもの金型が用意された。

「アイリ。どの金型をつかー―」

「やっぱりハート一択だよね♪」

選んだのは愛を意味するハート。はやては「そうやな♪」笑って、プレートの上にハートの金型を置いてくれた。その金型のところにボウルのチョコを流し込む。余ったチョコも☆や〇の金型に流し込んでく。

「あとは冷やすだけ・・・っと。よし。うん。テンパリングも失敗せえへんだし。初めてにしては上出来や！」

「おめでとうです、アイリ！」

「ありがとう、はやて、リイン！」

それからチョコが冷えて固まるまでお喋りしつつ、チョコのデコレーションに必要な道具を用意。はやてが「そろそろええかな」そう言ったから、アイリは冷蔵庫から冷たく冷えたプレートを取り出した。

「「「おお！」」」

作ったチョコ3個はどれも綺麗に出来上がってた。さぁ、デコレーションタイム。まず練習のために別の星型チョコの表面に、「だ～、い～、す～、き～、ハ、～、ト♪」ホワイトチョコの入ったチョコペンを使ってメッセージを書くんだけど・・・

「最後の、ト、が小さくなっちゃったし　が入らなかったね・・・」

「その方が手作り感があってもええと思うけどな～」

「リインもそう思うですよ」

はやてとリインがフォローしてくれた。確かに不格好の方が逆に可愛らしく見えるかもね。じゃあ「本番、いっきます！」マイスターに贈るハート型チョコに、だいすき　って書く。文字がそれぞれ小さくなっちゃったけど、なんとか全部入った。

「「「完成ぇ～～！」」」

「ですぅ～！」

作ったチョコははやてが買ってきてくれてた箱にしまって、包装紙で綺麗にラッピング。あとは、本番の明日まで寝かせておくだけ。早く明日にならないかなぁ～。

（マイスターは明日も調査部の研修だから、学校の後は一番近いフェイトの家から本局へ行くって話だし、帰りも遅いっていうし、バレンタインデー当日に渡すには朝早く起きるしかないわけだね）

だから今日は早寝しなきゃね。寝坊して渡し損ねた、なんて最悪な結末だけは回避するためにね。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒イリス†††

２月１４日、乙女にとって年に１度の大事な日・バレンタインデー。昨日の内にルシルへの本命チョコ、なのは達やクラスメイト、ついでにクロノやユーノにあげる友チョコを作っておいた。

（クロノは昨日の内から本局だから、今日の仕事の時に渡せばいいか）

通学バスに乗ってる今、ルシルへの本命やなのは達、クラスメイト（１５人分。あとの半分ははやてが作ってくる）にあげるチョコを入れた保冷効果のあるバッグを何度も覗いて「えへへ～♪」確認する。

「シャル、保冷効果があっても開けてばっかりだと溶けちゃうよ？」

「クラスの子も溶けたチョコなんて食べたくないんじゃない？」

フェイトとアリシアにそう言われるけどやめられないんだよね。早くルシルに渡したい。そんな話をしていると「おはよう、フェイトちゃん、アリシアちゃん、シャルちゃん！」バスになのはが乗ってきた。そんななのはに「おはよう！」3人で挨拶を返す。

「なのはもチョコ持ってきてくれた？」

「うんっ。お昼ご飯の後でみんなで食べようって。シャルちゃん達は？」

「当然♪　チーム海鳴で食べるチョコ、クラスメイトにあげるチョコ、そして！　ルシルへの本命チョコ！」

「友チョコは持って来たよ。クロノやユーノ、ルシルへのチョコは本局で渡そうって思って」

「ルシルって学校でたくさん貰うはずだからね。下手に数を増やすと誰が渡したものかなんて絶対に判らなくなるだろうし」

（そっか。学校で渡すより本局で渡す方が印象に残りやすいのかぁ・・・。盲点だった・・・！）

なのは達が鞄の中から小さな保冷効果のあるポシェットを取り出した。あの中にチョコ5個入りの箱が入ってるわけだ。なのはとアリサとすずかとフェイトとアリシアは同じクラスだから5人で協力して作ったんよね。だから小箱1個にチョコを5個入りにすればクラス全員分になるわけだ。わたしとはやては別々だったのに。来年度は同じクラスになったら良いんだけどな～。

「みんな、おはようや♪」

「おはよう」

次にバスの乗って来たのははやてとルシルだ。アリサとすずかは今日は自家用車での登校だっていうことだから乗らないんだよね。2人に「おはよ～！」挨拶を返して1ヵ所に集まるように座席に座る。

「やっぱりバレンタインデーだな。他の生徒がそわそわしている」

バスにはわたし達以外の生徒も乗ってるからね。そんな子たちの様子もあって今日がバレンタインデーだってルシルが察してる以上は、変にサプライズしても意味ないから「昼食の時に渡すからね～♪」と、保冷バッグをルシルに掲げて見せる。男の子は甘いのが嫌いって言い訳をしないルシルは「ありがとう」笑顔を浮かべて喜んでくれた。

「はやて。クラスメイト分のチョコ、ちゃんと作って来た？」

「もちろんや。チーム海鳴の分とクラスメイトの分。ちなみにルシ

ル君には朝の内に渡しておいたよ」

「ありがとう、はやて。また後日、ゆっくり出来る日に頂くよ」

「うんっ♪」

そんなこんなで学校に着くと余計に男子・女子関係なくそわそわ空気が満ちていた。正面玄関なんてチョコが靴箱に入っていないかって確認し続ける男子の巣窟と化してるし。チーム海鳴ってお世辞とか贔屓とかなしで美少女ぞろいだから・・・

「なんか視線が・・・集まってるような・・・」

「にゃはは・・・、うん、すごい見られてるかも・・・」

「去年もこんな感じだったっけ・・・」

フェイトとなのはとアリシアがちょっと萎縮しちゃってる。こんな可愛い女の子から義理チョコだとしても貰えたら勝ち組だもんね。とまぁ、女子組には熱い視線が注がれてるんだけど、チーム海鳴で唯一の男子であるルシルには・・・

「納得いかねぇ・・・」

「女子みたいな顔しておきながら・・・」

「あの子たちからもチョコ貰うんだろうなぁ～」

「羨まし過ぎる！」

「あれがマンガでよく見るハーレム・・・」

「神様・・・」

ルシルには嫉妬やら羨望やら、結構黒い視線が突き刺さりまくってた。それでもルシルは堂々と歩いてるわけで。とりあえずわたしは「ルシルもチョコ買っておけば良かったね」ルシルをイジることにした。

「はあ？　何で男の俺が買わないといけないんだ？」

「ちょっと女子の制服着て男子に、チョコあげる、なんて言えば、男子もルシルの凛とした可愛さにメロメロにな――」

「なるか、馬鹿。くだらないことを言ってないで教室に向かうぞ」

「はーい」

そんな話をしながら靴箱の扉を開けていると「うおっ！？」ルシルが変な声を上げて、ドサドサって何かが落ちる音がした。そっちを見れば小さな箱――乙女からのバレンタインチョコが数箱とルシルの足元に転がってた。

「今年も大量やなぁ・・・」

「ていうか、俺の上履きどこだ？　チョコばかりで上履きが無いんだけど・・・」

「え、無いの？」

ルシルの靴箱の中を見ればチョコの箱が積まれていて、本来あるべき上履きが無かった。これにはさすがに引いた。ルシルは「チョコは嬉しいけど上履き盗るってなんだそれ・・・」ガクッと跪いた。

「どうしたの？　シャルちゃん、はやてちゃん、ルシル君」

「うわっ、ルシルすごい！　コレ全部チョコ！？」

「チョコいっぱいで嬉しいはずのルシルはどうして心折られてるの？」

なのはとアリシアとフェイトが上履きに履き替えた上でやって来た。ルシルの靴箱にチョコが詰められてる代わりに上履きが無くなったことを話すと、これにはなのは達も「えぇ～・・・」引いてた。とりあえず近くに上履きが無いかを探すんだけど、見つけることが出来なかった。誰かが持ち去ったと考えるしかない。

「はぁ～～・・・。とりあえずチョコは保冷バッグに入れて・・・っと」

ルシルは折り畳まれた保冷バッグを鞄から取り出して、「溶けているんじゃないぞ」チョコをそこに詰め始めた。そして詰め込み終え

た途端に「盗った奴・・・、地獄に堕ちろとは言わないが、酷い目に遭え」ボソッと呟いた。さすがのルシルもお怒りだ。

「なに朝から物騒なこと言ってんのよ」

「おはよ～。みんな、どうしたの？」

わたし達に声を掛けてきたのはアリサとすずかだった。わたし達も「おはよう！」挨拶を返して、ルシルの身に起こった事を話した。

「うわぁ、なにそれ。犯人ってやっぱり女子？」

「とにかくスリッパを借りよう、ルシル君。借りてくるから少し待ってて！」

「ありがとう、すずか」

すずかが職員室に走って行ってくれた。ていうか、それってわたし達が先にやっておくことだったよね。ミスった。ルシルの好感度を上げるチャンスだったのに。そして「借りて来たよ～！」すずかが持って来てくれたスリッパを履いたルシル、わたし達はここに残っててもしょうがないってことで教室に向かうことになった。

「なんか散々な目に遭ったね」

「バレンタインチョコいっぱい貰って良い気分のところに上履き窃盗で嫌な気分に突き落とす。結構エグいやり方だよね」

「見つかるとええなぁ、ルシル君の上履き」

「でも一度盗られた物って戻って来ても使いづらくない？　あたしはそうよ」

「弁償だよ、弁償♪」

「いいよ、自分で買うから。一応チョコを貰ったからな」

「もし上履き盗った子がチョコを置いて行ってなかったら？　それと男子だったら？」

「・・・・男子なら痛い目に遭わせる。女子なら・・・・」

ルシルがそこまで言ったところで口を閉じた。わたし達女子の視線が集中してるから。別に非難するわけじゃないよ、うん。ただ、ルシルがどんな罰を女子に下すのかちょっと興味があるわけで・・・・。

「謝ったら許す！」

優しいんだかヘタレなんだか。なのは達と一緒に苦笑してると、「お、来た来た！」わたし達４年生の教室がある階の廊下に居た１人の男子がわたし達に、というよりはルシルに手を振った。

「亮介・・・・？」

「いやさ、別のクラスの女子たちがお前の靴箱にチョコを入れてたんだけど。上履きが退かした良いけど、どうするか困っていたようだったからさ、俺が預かっといた♪」

わたしとはやて、そしてルシルと同じクラスの男子、武塔亮介君。綺麗な赤髪をルシルのようにうなじ付近で結ってる、けどルシルとは正反対の見た目格好いい系（ルシルは綺麗・可愛い系）男子。彼が後ろ手に回していた両手を前に出した。手に持っていたのは1組の上履き。亮介君の持ってる上履きから、ハッとしてルシルへと視線を移す。

――地獄に堕ちろとは言わないが、酷い目に遭え――

――男子なら痛い目に遭わせる――

さっきそう宣言したルシルは「だったら靴箱で待ってろや！！」亮介君にドロップキックをお見舞い。すると「ぐへぇ」って、亮介君は妙な呻き声を上げながら吹っ飛んだ。

「いってぇ！　何すんだよルシル！」

「うるせぇ、馬鹿！　上履き盗まれたと思ってへコんでたんだぞ！　預かっていたんなら俺が来るまで靴箱で待ってろよ！」

「そんなの寒いだろ！　つうかチョコいっぱい貰って調子乗ってんじゃないのか！？」

「貰える物を素直に貰って何が悪い！　つうか、関係ねぇ！」

リアルファイトを始めたルシルと亮介君。しょうもないオチを知ったわたし達の空気が、もう勝手にすればいいよ、みたいになったからそんな2人の脇を通ってそれぞれの教室に入った。わたしとははやとルシルが所属する2組の教室にはすでに何人かのクラスメイトが居て、「おはよ～！」挨拶を交わし合う。

「くっそ～、マジで蹴りやがったな、お前・・・！」

「俺に与えた精神ダメージに比べえば軽すぎる。裁判起こせば俺が勝つね」

「ざけんな。ここまでボコにされた俺が勝つね」

ルシルと亮介君が教室に入って来た。ルシルの足にはしっかりと自分の上履きがある。そしてルシルは真っ直ぐ自分の席へ。トボトボ歩く亮介君の側へは「もう。だから待つなりメモ残すなりすればいいって言ったのに」1人の女子がそう言いながら向かった。

「でもさ、刀梅（とうめ）・・・。親友なら察すること出来るだろ？」

「いやぁ～、エスパーじゃないと無理だと思うよ・・・」

亮介君と両想いで彼女（わたしがキューピット役した。・・・羨ましくないもん、悔しくないもん）、八重刀梅。藍色のロングヘアをシュシュで纏めて、肩前に後ろ髪を流してる、大人っぽい女の子だ。

「ルシル君、ごめんね。私がメモ残しておけば良かったね」

「それについてはもう怒ってないから。亮介に責任を取ってもらったし。あー、スッキリした♪」

「鬼！　悪魔！　女男！」

「もうそんな軽い悪口じゃ何とも思わんね～」

机の中からいくつものチョコ入りの包みを保冷バッグの中に詰め込むルシルへ、「おはようございます、ルシルさん」1人の女子が近付いた。

「おはよう、咲耶」

このクラスの前期・後期共に委員長になった木花咲耶。チョココロネのように巻かれてる茶色い長髪をポニーテール（わたしはその髪型をドリルポニーと命名した）にしてる。そんな咲耶の手には綺麗にラッピングされた箱が1つ。わたしとはやてはそれをジッと見守る。去年も渡していたからね。焦ることはない。

「バレンタインのチョコレートです。受け取って頂けますか？」

「もちろん！　ありがたく頂戴するよ！」

ホント嬉しそうにチョコを受け取るルシル。このスィーツ大好き男

子め。

Ｅｐｉｃｏ４５－Ｂ嬉し悲しも想い次第

私立聖祥大学付属小学校。チーム海鳴のメンバー全員が通う小学校。２月の寒空の下、その小学校の閉じられた正門に、ダッフルコート、タックスカート、編上げブーツと言った出で立ちで、両手を腰に当てて仁王立ちしている少女が１人。肩にはポシェットを提げている。髪色はまるで雪のように真っ白で、瞳は青空のように透き通った水色をしている。

「待っててね、マイスター・・・！」

彼女はアイリ・セインテスト。八神家の一員として過ごし、ルシリオンの融合騎として彼を支え、そして彼の隠す真実を知る数少ない少女。アイリはキョロキョロと周囲を見渡している。どうやら敷地内に入ろうとしているようだ。さすがに真正面からは悪手だと判断したのか駆け出し、その場から離れた。

「むぅ。抜け道とか無いんだね・・・。しょうがない・・・！」

小学校の周りをぐるっと何周化した後、アイリは何かを決心したのか敷地の裏へと移動して両膝を軽く曲げ、「よいしょっと」跳んだ。アイリは一度のジャンプで３ｍ近い塀の上と飛び乗った。通行人に目撃されるのを避けるためにすぐさま敷地内へと降り、「マイスターの魔力反応は、っと」木陰に隠れた上で目を閉じた。

――魔力探査（サーチ）――

魔力反応を探す魔法を発動した。サーチの熟練度が高ければ、魔力パターンまでも解析できて個人を特定することも可能。アイリはこの何百年とレンアオムで鍛えられたことで「見つけたっ　」ルシリオン独自の魔力パターンの完治に成功できるまでの熟練度を有していた。

「アイリ・セインテスト、行っきま～す♪」

そうしてアイリはルシリオン達の居る校舎へ向かって駆け出す・・・が、「っと、大人に見つからないようにっと」すぐに立ち止まり、近くにあった焼却炉の側に積まれていた段ボールを1箱拝借し、某ＣＩＡ工作員の如くダンボールを被って、カサカサと慎重に向かい始めた。

†††Ｓｉｄｅはやて†††

お昼休みなって、いよいよ本番。ルシル君のところに他のクラスの女の子たちがチョコを渡しに来始めた。ルシル君は「ありがとう！」お礼を言って、女の子の学年とクラスと名前を訊いて、それをノートに書き記してく。ホワイトデーにお返しをするためにや。

（中には本命チョコもあるんやろうけど、ほとんどはホワイトデーのお返し目当てなんやろうな～）

去年のホワイトデーは、ルシル君お手製ラスクを贈られた女の子たち大騒ぎやったからなぁ。その日の放課後にはルシル君のお菓子作

りの腕はプロのお菓子職人って話が女の子たちの中に流れた。そやから今年はそのお返しを目当てにしてチョコを贈る女の子が増えたんや。

気持ちは解らへんでもない。あのラスクはホンマに美味しかった。チョコ、ココア、ハチミツ、キャラメル、オレンジ、ストロベリー、６種類の味のラスクはルシル君も自信作って言うんが解るほどの美味しさやった。今年もあのラスクを食べられるかと思えば今から楽しみや。

「ル～シル～」

「へっへっへ～」

「ハイエナ共め。このチョコは俺が貰った物だ、渡すわけにはいかないな！」

「そう堅いこと言うなって」

「俺たち友達だろ」

「そんなにたくさんあるんだし、少しくらい分けてくれよ」

「虫歯になっちゃうぞ～。太っちゃうぞ～。せっかくの可愛い顔や細い体が、俺にみたいに縦に横に太くなっちゃうぞ～」

チョコをたくさん貰って満足そうなルシル君の側にクラスの男の子たちが空き箱片手に迫る。その視線はルシル君が貰った数々のチョ

コ。去年も軽く争奪戦が起きてたもんな～。まぁ、ルシル君は魔法なんて使わんくても身体能力が高いから、その日の休み時間はチョコを持って逃げ切ってたからなぁ～。

『はやて。なのは達の教室に行く前に・・・』

『うん、そうやな。今のうちにあげよか』

思念通話でシャルちゃんと頷き合って、保冷バッグを手に取る。そんでシャルちゃんと一緒に教団の前にまで行って「男子ちゅうも～く！」教卓をパンパン叩いた。今まさに席を立ってダッシュをしようとしてたルシル君、それに男の子たち、ルシル君を逃がそうと男の子たちを威嚇する女の子たちが一斉にわたしらを見た。

「わたしとはやてから男子たちに、手作りチョコを贈ろうと思う！」

「えっと、一列に並んでくれるかな？　1人1個やけど、勘弁してな」

わたしらがそう言うと男の子たちは「うぉぉぉぉぉぉ！」雄叫びをあげた。そんで1列に並んだ男の子たちに、シャルちゃんと順番にチョコを渡してく。チョコを受け取った男の子の中には泣いて喜んでくれる子や、わたしらからチョコを貰った証拠として携帯電話で写真を撮ってほしいって子も出てきた。シャルちゃんはノリノリで2ショット写真を撮るんやけど、わたしはルシル君の視線の中で別の男の子と2ショットなんて撮りたないってゆうのが本音や。

「ヘイヘイ。わたしが撮ってあげるよ。ほら、横に並んで」

わたしが困ってると、シャルちゃんが男の子から携帯電話を借りて2ショット写真を撮った。

『シャルちゃん・・・その、おおきにな』

『んー？　わたしは好きで撮ってもらってるから気にしないで良いよ？』

それから男の子たちにチョコを配っていくと、「亮介君と護君は、彼女ちゃんに許可取らないとね」シャルちゃんが残る男の子2人の方を見た。亮介君は刀梅ちゃんからチョコもらったみたいやし・・・。

「おーい、耀っち～！　護君にもチョコあげて良い～？」

真神護君の彼女・・・とゆうよりは幼馴染の火照耀ちゃんを呼んだ。耀ちゃんはハーフアップにされた綺麗な夕陽色の髪を揺らして「護は欲しいんでしょ？　貰えばいいじゃん」ルシル君より女の子っぽい顔してる栗毛の男の子、護君をじろっと見た。

「えっと・・・」

「もう！　そんな意地悪しなくたっていいじゃん。はい、護君！」

「あ、ありがとう、シャルちゃん！」

シャルちゃんと護君が微笑み合って、ちょう不機嫌そうな耀ちゃん（ツンばっかでなかなかデレへんのやね）は自分の机の中をチラッと覗いた。どうやらチョコだけは用意してるみたいや。そやけど渡すタイミングが掴めてへんようやな～。

「はやて。わたしのチョコ無くなったから、はやてのを亮介君にあげて～」

「あ、うん。えっと・・・」

刀梅ちゃんをチラッと見ると「私は良いよ。亮介君も、貰うチョコが1個だけよりは嬉しいでしょ♪」って、亮介君に背中をバシッと叩いてわたしの前に押し出した。わたしはちょう照れてる亮介君に「はい、どうぞ」チョコを手渡した。

「よしっ。次は女子のみんなに、友チョコｆｏｒ　ｙｏｕ！」

「今から配るな～♪」

男の子の次はクラスメイトの女の子に友チョコ配りや。みんな「ありがと～！」喜んでくれたし、中にはハグしてくれる子も居った。男の子にも女の子にも喜んでもらえたし、作って来てホンマに良かったって思うた。

「そんじゃあ、ルシル君。1組に行こか」

「お弁当箱を持ってね」

「ああ、判った」

そんでいざ、わたしらチーム海鳴の大半が居る1組の教室に向かうために、弁当箱とすずかちゃん達にあげる分のチョコを持った時、「なんか廊下が騒がしいな」ルシル君がそう言うた。確かに、「誰かの妹？」やとか「しっろ！」やとか「可愛い♪」やとか、廊下の方が騒がしい。

「なんだろう、何か嫌な予感というか・・・」

「ルシル君・・・？」「ルシル・・・？」

ルシル君が廊下へ向かって歩き出したその時、「近い、近い、近いよ！」本来、学校では絶対に聞かへんはずの声が廊下の方から聞こえてきた。ルシル君らと顔を見合わせて、「まさか・・・！」教室の出入り口に視線をやった。その直後・・・

「ここからルシルの反応あり！　・・・ほら、やっぱり！　ル～シル～～～！」

「「「アイリ！！」」」

女の子が教室に飛び込んで来た。やっぱりアイリやった。ルシル君の姿を視認したアイリは満面の笑顔を浮かべて、ルシル君に飛び付いた。

「その子、誰！？」

「わぁ、綺麗な髪～♪」

「うわっ、しっろ！」

「ちくしょう！　またルシルかよ！」

「どれだけモテれば気が済むんだ！」

「祭りじゃ～」

「男だけのお祭りじゃ～」

「いま始まる～」

「モテない男たちの～」

「ルシルに贈る～」

「怒濤の～」

「フェスティバ～」

ルシル君とアイリの周りに集まったクラスメイト（特に男の子たち）が大騒ぎ。ううん、そんなことより今のアイリは私服姿や。先生に

見つかればこんな騒ぎだけでは済まされへん。

「ルシル～。一緒に寝てたんだから起こしてほしかったよね。チョコをあげるチャンスは朝だけしかなかったんだから。明日はもうバレンタインじゃないから、来ちゃったんだよ学校まで　」

「一緒にぃぃ～～～！？」

「寝ただとぉぉ～～～！？」

「もしかしてお風呂も一緒に入ってないだろうなぁぁ～～～！？」

「ん？　一緒に入ったことあるよ♪」

「きゃぁぁぁぁ♪　シャルちゃんとはやてちゃんに新たなライバル出現？♪」

「ていうか、はやてだけじゃなくてその子とも一緒に暮らしてるってどんな関係！？」

「もしかしてもう恋争いに決着済み！？」

「なんやそれぇぇぇぇーーーーー！」「ちょっとルシルーーーーー！」

わたしとシャルちゃんがルシル君に詰め寄る。聞いたことあらへんよ、ルシル君とアイリが一緒にお風呂に入ってたなんて。わたしが家を空けとる時、基本的にルシル君も家を空ける。アイリと一緒に

お風呂に入る時間なんて無いはずやのに。男の子たちの「なんて羨ましい！！」ってゆう大騒ぎを「ちょう黙ってて！」黙らせる。

「ま、待て。違う、入ってない、風呂、入ってない。こら、アイリ！　どうせ夢でも見たんだろ！　な？　そうだよな！　そうだと言ってくれ！」

ルシル君が脂汗をダラダラ流しながら、願うようにアイリにそう言うた。するとアイリは「？？・・・あっ、うん、夢！　夢だよ！　あはは！　入ろうとしたらはやてにいっつも邪魔されるもんね！」何かを誤魔化すかのようにそう言いだした。怪しい・・・。

「ねえ、ルシル？　ホントに夢なのぉ～？」

「まさかホントは入ってる、なんてことはあらへんよね～？」

「ヒィ・・・！」

割と本気で怯えるルシル君の姿にゾクッとした。どこか懐かしい感覚や。そう、ルシル君を初めて家に招いて、わたしの服を着せて女装させた時の、あの感覚や。あぁ、アカン。もっとルシル君をビクってさせたくなってくるわぁ～。

「ちょっと～！　シャルもはやてもルシルも遅い！　いつになったら1組に来んのよ？」

「なんか騒がしいけど・・・」

「って、アイリが居る！」

「え、どうして！？」

「というか、シャルとはやてがメッチャ怖いんだけど・・・」

すずかちゃん達がやって来た。アイリが学校に来た理由、そんでルシル君に詰め寄ってる理由をシャルちゃんが伝えると、すずかちゃん達が反応するよりも早く「きゃぁぁぁぁ、委員長が！」そんな悲鳴が聞こえてきた。そっちを見れば咲耶ちゃんが白目向いて倒れてた。

「ルシル君と・・・お風呂・・・白い子が・・・お風呂・・・寝る時も・・・一緒・・・ふふ、うふふ・・・ふふふふふ・・・」

「しっかり！　傷は浅いぞ、委員長！」

「いやぁ、これもうダメでしょう」

「メディックはどうした！　メディ～～～～ック！」

「ねえねえ、メディックってなに？」

「あ、保健委員のことです」

うちのクラスや騒ぎを聴きつけてやって来た他のクラスの子で大騒

ぎ。ルシル君は「どうしてこんなことに！」文字通り頭を抱えて、「ルシル。はい、バレンタインチョコ　」アイリはこの騒ぎをものともせんかった。

「アイリ、とりあえず今は帰れ、な？」

「やっ。ルシルがアイリのチョコ食べてくれるまで帰らない！」

アイリがピタッとルシル君に寄り添うと、女の子たちからは「きゃぁぁぁぁぁ♪」黄色い声が、男の子たちから「うぉぉぉぉぉ！」なんや黒い感情が籠った叫び声が上げられた。わたしらの視線を一手に受けながらもルシル君は焦りか恐れか、手を震わせながら包装紙を綺麗に剥がして、箱の蓋をそっと開けた。そこにはアイリお手製のハート型のバレンタインチョコ。女の子たちが「おお！」って歓声を上げて、男の子（ｒｙ

「はやてとリインに協力してもらって作ったんだよ！　さ、食べて、食べて♪」

「・・・・い、いただきます」

チョコを一口齧ったルシル君はもぐもぐ咀嚼。そんで「美味しい・・・！」パァっと表情を輝かせた。するとアイリも「やったね　」万歳した。それで満足したんか「それじゃあルシル、アイリは帰るね♪　はやて達にもバイバーイ♪」アイリはわたしらに大手を振った。

「えっと、それでは。ルシルとはやての御同輩の皆様方。大変ご迷惑をおかけいたしました。これにてアイリ・セインテストは失礼させていただきます♪」

アイリは窓をガラッと開けて、ここ3階から飛び降りた。当然「きゃあああああ！」悲鳴が上がるわけで・・・。慌てて窓の側に寄って地上を見るクラスメイト達が「すごい！」やとか「マジか！」やとか「めっちゃスキップしてる！？」やとか「どんな身体能力！？」って、アイリにすごさっぷりに驚きを見せた。

「セインテスト・・・、アイリ・セインテスト・・・、ハッ、まさかもうルシル君と入籍済みなのですか！？　わたくしは神に見放されてしまったのですね！！」

咲耶ちゃんがそう叫んだから「飛躍し過ぎ！」クラスメイトから総ツッコミ。他の子からは「兄妹なんでしょ？」や「姉弟じゃ・・・？」って話が出る。となると「あぁ、だから・・・」どうゆうわけかみんなが納得し始めた。

「ルシル君の家族ならあの身体能力も当たり前かな？って♪」

「お前、人間やめてるもんな♪」

「うっせぇよ亮介」

「兄妹か姉弟かどっちか判らないけど、家族なら一緒に寝たりお風呂に入ったりする・・よな？」

「ん～、ちょっと年齢的にアウトじゃね？」

「でも良かったじゃん、委員長。ルシル君の相手がまだ決まってなくて」

「そ、そうですわね！」

和やかになる教室やけど、ルシル君とアイリの関係を知ってるわたしらはそうそう和まへんよ。アイリのチョコを美味しそうに食べてるルシル君の肩に、わたしとシャルちゃんとで手を置いて・・・

「話の続き・・・」

「しようか、ルシル」

「ま、待て、待ってくれ。入ってない、入ってないから。アイリとは一緒に寝ているだけだから！」

ホンマはルシル君とアイリが同じベッドで一緒に寝るんも嫌やなんやけどなぁ。

「ま、それはお昼ご飯の時に追求しようか。ね？　はやて」

「うん、シャルちゃんっ」

「勘弁してくれ・・・」

†††Ｓｉｄｅはやて⇒アリサ†††

学校の後は管理局の仕事ね。それぞれ自分の家に帰って、自宅のトランスポーターを使って本局へ向かうことになってる。あたしも学校の制服から局の制服に着替えて、庭に作った小屋――トランスポーターを使って本局は第零技術部――通称、スカラボに転移した。

「アリサが最後だね」

「ちょっとぶり、アリサちゃん」

スカラボの応接室には、なのはとすずかとフェイトとアリシア、シャルとルシルがすでに居た。はやてとリインとアイリはちょっと遅れるって話だからまだ来てないわね。チーム海鳴の他には、ここスカラボの主であるジェイル・スカリエッティ技術部長、階級は少将、通称はドクター、あとロリコン。その技術力は次元世界最高だって話で、実はすごい人。でもマッドなサイエンティストって印象が強い。

他にはドクターの秘書を務める、シスターズの長女のウーノ二尉。優しいけど起こった時はかなり恐い、次女のドゥーエ二尉。伊達眼鏡をかけて結構軽い口調の四女のクアットロ三尉。そして・・・

「やっほ～♪　あたしとは初めましてだよね。スカリエッティ家の六女、セイン・スカリエッティだよ♪」

見知らぬ人が居た。とにかく「初めまして、アリサ・バニングスで

す。えっと、セインさん・・・？」お辞儀して自己紹介。

「そんなに堅くなんないで良いよ♪　セインさんはそうゆ～堅っ苦し～ことが嫌いだからさ♪　ウーノ姉たちのことも呼び捨てなんでしょ？　だったらあたしも呼び捨てでオーケー♪」

人懐っこい笑顔を浮かべるセイン。上の姉たちとは違って取っ付きやすいかも。

「アリサ様もお時間があればどうぞお茶を」

「あ、ありがとう、ウーノ」

ウーノがあたしの分のお茶も用意してくれたから、ロングソファに腰掛ける。そして「ルシル。コレ、バレンタインチョコ」向かいに座ってるルシルにあたしお手製のチョコを渡す・・・んだけど「何かあったの？」ルシルの元気のない顔に、あたしは小首を傾げた。

「いや、ありがとう、アリサ。嬉しいよ・・・」

「だったらもっと嬉しい顔を見せなさいよ」

「あのね、アリサ。ルシル、ちょっと胃にダメージ負っちゃっててて」

アリシアが話してくれた。ハラオウン家に向かうルシルと違ってそのまま自宅に帰るはやてに、ルシルは今日貰ったチョコがしまってある保冷バッグを預けたんだけど、その時にいくつかチョコを抜い

て来たんだって。んで、ハラオウン家に着いて、トランスポーターの設定を終えるまでの時間でそのチョコを食べたと。そして・・・

「いきなりぶっ倒れたんだよ。痙攣もしてるし、チョコに毒でも盛られたのかってさ」

「あの時はビックリしたよ。ルシルも、誰かが俺の命を狙ってる、なんてうわ言を言い始めるし」

「フッ。しかし全部いただいぞ。ごちそうさまでした」

「1咀嚼1痙攣してたよね、ルシル。見てるこっちが辛かったんだけど」

「どんな単位よ、それ」

どうやら結構な失敗作が紛れこんでたみたいね。それでもルシルは律義にそのチョコを食べ切った、と。ウーノから出されたお茶を啜りながらルシルは「なのは達のチョコをもう頂いたけど、美味しかったな～」満足そうに微笑んで、「お返し、しっかりしないとなぁ～」まった～りしだした。

「それにしても君たちの世界には面白いイベントがあるものだね。バレンタイン、だったかな？」

ドクターもウーノのお茶を啜りながら、あたしがルシルに渡したチョコを眺める。

「憶えておいて損は無いよ、シスターズ。バレンタイン。それは乙女が想い慕う男の人にチョコをあげる聖なる日。好きな人、大切な人への本命チョコをあげて秘めた想いを伝ええる日！　あー、想い人にあげるのは本命チョコ。基本的に1人の男の人だけにあげる物ね。仲の良い男の人には義理チョコ。これはいくつでも何人でも大丈夫。あと、同性には友チョコ。この3種類ね、憶えておくことは」

「素晴らしい日ですね！」

「そんなイベントがあるなんて、目から鱗です！」

「良いですね～ん♪」

「ちなみに本命と義理は、翌月のホワイトデーの見返りを期待しての先行投資としてでもあるね♪」

「ホワイトデー、ですか？」

「ふむふむ。先行投資とは？」

ウーノとドゥーエは目を輝かせながらシャルの話を一生懸命メモして、クアットロは何を想像してるのかうっとりしてる。セインは混じらずに「ウーノ姉のお茶とクッキー、今日もうんめ～」のんびりお茶を啜りながらお茶菓子を頬張ってる。なんか可愛い、年上なのに。

「ホワイトデーはね、バレンタインに貰ったチョコへのお返しを男の人がする日なわけ。お菓子でも良いし、別の贈り物でも良いから、チョコをくれた人へのお返しを第一とする日。重要なのは、その日にはバレンタインデーにないルールが存在してるの。その1つが3倍返し！」

「「「3倍返し！？」」」

「そう！　男の人はね、女の人から貰ったチョコの3倍のお返しをしないといけないんだよ。それは量じゃなくて質での3倍！　女の子から貰ったチョコが安かろうが、ルシルみたく毒のような不味いチョコであろうが、貰った物以上に価値のあるお返し3倍、さらにもっとなお返しをしないといけないルール！」

シャルの力説に「それはちょっと嫌なルールだね～」ドクターが苦笑。そしてルシルは「毒チョコって、作ってくれた女の子に失礼過ぎるだろうが」お怒りの様子。痙攣するほどのチョコを贈られたのに、それでも相手を責めないその気持ち・・・、格好いいわよ。

「あながち間違っていないから反論できないな・・・。っと、長居している暇がないな。監察課の研修に遅れる。それじゃあ、なのは、フェイト、アリシア、アリサ、すずか。チョコ、ありがとう！」

そう言ってルシルは走ってスカラボから出て行った。ルシルを見送った後、「じゃあ話の続きね」シャルがそう言って、コホンと咳払い。

「必ずしもそのルールを厳守しないといけないわけじゃない。お返しする女の人から幻滅されてもいいならね。お返しが凄ければ凄いほど、その評価は高くなる。場合によってはそれがきっかけで特別な関係になるかもしれない。ホワイトデーとはそう、男の人の度量が試されるイベント！」

「「「なるほど～」」」

「じゃあ他のルールはなんなの」

「よく訊いてくれたセイン！　ホワイトデーのお返しをする男の人に課せられるさらなるルール！　お返しがお菓子の場合に発生するの！　ドクター、しっかり覚えておいてね！」

「ホワイトデーって何気に男に厳しくないかい？　３倍返しとかお返しのルールとか・・・」

「チョコをくれた人に自分をアピールする最大のチャンスなんだから、そんなこと言ってる暇はナッシング！　いい？　マシュマロは絶対にダメ！」

「マシュマロの何がダメなんだい？　私も娘たちも好きなんだが・・・」

「普通の日なら良いよ。でもホワイトデーの時だけはダメ！　マシュマロのお返しの意味は、あなたが嫌い、なの！　ウーノ達、想像してみて。大好きなドクターにチョコをあげた。でもお返しは、嫌

いです、なんて意味のマシュマロだったその時を！」

「それは・・・悲しいですね・・・」

「胸が張り裂けそうになったわ・・・」

「あーん、ドクターの意地わるぅ～」

三者三様のその落ち込みようにドクターは「判った。マシュマロはやめよう」そう堅く決意した。で、「ふ～ん。じゃあ他は？」セインからの話の促しに、シャルは他のお返しの意味を話した。クッキーは友達でいよう、キャンディはあなたが好きです、マカロンは特別な人、とか。

「ドクターはキャンディか、もしくは花束とか高級アクセサリーとかブランド服やバッグとか、そういうので良いと思うよ？」

「ドクター。お返し、楽しみに待っていますね」

「最近、新色のバッグが出たので・・・それでお願いします。たったの２８万クレジットなので」

「ん～、じゃあ私は～、特別に想われたいので～、マカロンで良いですぅ～」

「待ってくれ、娘たち。私はまだバレンタインチョコなる物を貰った覚えが・・・」

ウーノ達からのリクエストにドクターがそう返すと、3人はテーブルの上に置かれた茶菓子を見詰めた。そして「クッキーは私が焼きました」ウーノ、「マシュマロは私が買ってきました」ドゥーエ、「キャンディは私が～」クアットロがそう言って笑顔を浮かべた。

「まさか、これを私へのバレンタインチョコとして贈るということなのかい？」

「「「はい！」」」

「・・・・・・」

これは酷い。あたし達へ出した茶菓子を、ついでみたくドクターへのバレンタインチョコとして贈るなんて。ガックリ肩を落とすドクターをこれ以上見ていられないからあたし達は「失礼しま～す」そっとスカラボから撤退した。

そして、ここ技術部区画の入り口へ向かうことになった。あたし達からのチョコを受け取るためにユーノとクロノがそこに居るからね。歩いて数分、約束通りユーノとクロノが談笑しながら待っていた。あたし達に気付いたユーノは手を振ってくれて、クロノは小さく手を上げた。

「「「「「ハッピーバレンタイン！」」」」」

そんな2人にあたし達は日ごろの感謝の気持ちを込めて作ったチョコを渡した。

この後日談として、シスターズから伝播したバレンタインデーとホワイトデーっていうイベントが本局内にて大いに盛り上がっちゃって、女性局員が男性局員に本命や義理のチョコをあげる事態が大量発生。それだけならまだ良いのよね。だけど、3月のホワイトデーには破産一歩手前まで追い詰められた男性局員が数多く出た、という話も小耳に挟んじゃったりした。なんていうか、ごめんなさい？

Ｅｐｉｃｏ４６魔法少女リリカル☆アリシア～Ｔｅａｍ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａ～

†††Ｓｉｄｅアリシア†††

わたし達チーム海鳴は今、すずかのお家に集まって日本のお祭りの１つ、雛祭りを開催中。雛人形っていうお人形を階段みたいなステージに並べて、ちらし寿司とかハマグリのお吸い物を食べたり、ひなあられ（ピンクや緑、黄、白でとっても可愛い♪）や菱餅（どっかの国旗みたいに３色♪）を食べるお祭りなんだよ。

ご飯の後は、みんなでリアル雛人形を作ろうって話になって、誰がお内裏様（お殿様とお姫様の２人でお内裏様なんだって）になるかで大騒ぎ。そんな中でシャルが、ルシルは女役でも通用する～、なんて言い出したからこれまた大騒ぎ。そして役割が書かれたくじを引いた結果・・・

「シャルちゃんがお殿様で、はやてちゃんがお姫様に決定～♪」

「俺・・・三人官女・・・、完全に女役じゃないか・・・」

ルシルはそう言ってへコんだ。これでみんなの役割は決定。

お殿様はシャル。お姫様ははやて。

三人官女はアリサとルシルとリイン。

五人囃子は、笛のわたし、謡いのなのは、大鼓のすずか、太鼓のヴィータ、小鼓のアイリ。

随身はフェイトとシグナム。

衛士はアルフとシャマル先生と狼形態のザフィーラ。

「みんなー、衣装の方も用意したから着替えてみようか～♪」

すずかのお姉さん・忍さんがニッコニコな笑顔を浮かべてそう言った。そしてメイドのノエルさんとファリンがわたし達に衣装の着付けをしてくれて、赤絨毯が敷かれた中央階段に集合。ルシルも官女の衣装を渋々だけど着てくれたし、何も問題なくチーム海鳴総出演のリアルお雛様が完成した。当然撮影大会も行われた。中でも可笑しかったのは、お殿様のシャルとお姫様のはやてと五人囃子のアイリが、三人官女のルシルを取り合ったことかな。なんかシュールだったよ。

「――さてと。ここでわたしアリシアから、1つ重大な宣言をしたいと思います！」

わたしとフェイトとアルフの3人で写真を撮り終えたところで、同じようにバラバラで写真を撮り合ってたみんなにそう告げた。フェイトが「ここで発表するの？」って耳打ちしてきたから「なんとなく今だって思ったから」そう答える。アルフは「いよいよだね」嬉しそうに微笑んだ。

「ルシル！」

「え、俺に何か関係があるのか・・・？」

「わたしアリシア、そしてフェイトとアルフの3人は、ルシリオン

・セインテストに模擬戦を申し込みます！」

ビシッとルシルに指を差す・・・と、「アリシア。人を指差しちゃダメなんだよ」フェイトに怒られた。だから「ルシルの所為だ～！」って責任転嫁。するとまぁ「俺が悪い要素1つもないぞ」ってツッコみを受けるわけで。

「そもそも君にデバイスなんて無いだろ？　スカラボが製作協力してくれるっていう話だったが、リンドヴルムの一件で開発は後回しにされていたろ」

ルシルの疑問にすずかとフェイトとアルフを除くみんなが小さく頷いた。わたしは「ふっふっふ」不敵に笑って見せた上で「実は！　わたしのデバイスは12月の初めには完成していたのです！」そう言い放った。

「え、そうなの？」

「ていうか、すずかは驚いていないみたいだけど、まさか知ってたの？」

「一応私も開発チームの1人だったから」

「すずかやフェイト達には黙っていてもらったんだよ。見よ！　これがわたしのパートナーの・・・えっと、あれ？・・・あっ、わたしのコートの中だ！」

水戸〇門の印籠みたいに、控えおろう。この"フォーチュンドロップ"（←がわたしのデバイスの名前♪）が目に入らぬか、みたいな。だけど今は五人囃子の衣装を着てることもあって見せつけることが出来なかった。わたしは咳払いを1回して「今日この日、ルシルに挑戦状を叩き付けるこの瞬間の為にね！」さっきの事をなかったことにした。

「俺・・・そこまで目の敵にされていたのか・・・？　何気にショックなんだが・・・」

リンドヴルムとの戦いを終えた後、わたしはドクター達やマリーさん、すずかに頭を下げてお願いした。わたしのデバイスの開発を。わたしはすぐにでも　"力"が欲しかったから。ただのサポートでも良いからみんなと一緒に戦いたかった。魔力も少ないし、戦闘技術も特訓はしてるけど一線級じゃないから弱い。それでもフェイトを支えてあげたかった。

「テスタロッサの誇りに懸けて！　ルシル、あなたにギャフンと言わせてみせるから、覚悟してね！」

「ギャフン」

「「「ルシル君・・・」」」「「「ルシル・・・」」」

「こらぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！」

真顔でそう言ったルシルにわたしは詰め寄って「そういうお約束は

いらないの！」プンスカ怒って見せた。ルシルは「すまん、すまん」苦笑しながら謝った後、「で、いつ戦る？」また真顔になった。ゾワッと悪寒が走った。でも「場所はお母さんが用意してくれてる」わたしは胸を張ってルシルと対峙した。

――んで、数週間後の終業式・・・・

第４学年最後の日、終業式を終えた後はクラスメイトと少しお喋りをして、それから家に帰ってすぐに本局へ直行。お母さんが貸し切ってくれた第８トレーニングルームにチーム海鳴全員で向かう。

「あれ？　ユーノ君、それにクロノ君とエイミィさんだ」

トレーニングルーム前に居たクロノとエイミィとユーノに気付いたなのはが「どうしたの？」駆け寄って、わたし達も続く。

「僕は結界・・・、シャマル先生と一緒に張るようにアリシアにお願いされたんだ」

「僕は妹の成長を見学しに来た。母さんも見学したいと駄々を捏ねていたけど・・・」

「仕事で来られなくなっちゃって。だからこのエイミィ・リミエッタがバッチリ記録することになったんだよ♪」

魔法の先生にしてお兄ちゃんなクロノ、将来きっとお姉ちゃんになるエイミィが観てる前でカッコ悪い真似は出来ない。でもだからこ

そやる気が出てくる。

「結構ガチでやるつもりだったから頼んでおいたの。トレーニングルームも結界が張られるようになってるけど、ルシル本人もそうだけど使う魔法も鬼畜でしょ？」

「鬼畜とか言うな」

ルシルのツッコみはスルーして「ルシルにはハンデを背負ってもらうつもりだけど、念のためにさ」そう言って、わたしはルシルに振り向く。

「ハンデ？　俺の意思はともかくとして、フェイトやアルフはそれでもいいのか？」

「今回はとにかくアリシアの思うままに、っていうのが私とアルフの指標だから」

「ルシルはとにかく強すぎるの！　だからハンデを負ってもらうの！」

「君たちがそれでいいのなら・・・」

腕を組んで唸ったルシルもなんとか了承してくれた。言質は取った、そう思っていたら「アイリはルシルと融合してもいいの？」わたしの前にずずいっと出て来たアイリにそう訊かれた。もちろん「ノー！」両腕でバッテンを作って却下。ルシルひとりでも厄介なのに、そこに融合騎のアイリが参戦なんてことになったらわたし達がギャフン

って言っちゃうよ。

「ちぇー」

「アイリは俺の応援をお願いするよ」

「うんっ！」

そんなこんなでわたしとフェイトとアルフ、そしてルシルはトレーニングルームのステージへ。ユーノとシャマル先生、そしてすずかは制御室に待機で、クロノ達は観客席。

『空間シミュレーターを起動。ステージは廃棄都市区画。結界レベルは最大。プラス僕とシャマル先生が二重で張るから、よほどの馬鹿魔力を使わない限りは問題ないと思う。ルシル、君に言っているんだからね』

「名指しかよ。そんなヘマはしない」

『アリシアちゃんからルシル君へのハンデ内容は以下の通り。1・魔力ランクはフェイトちゃんに合わせてＡＡＡ＋ランク。2・魔力探査を行って居場所を探らない。3・広域攻撃は使わない。4・複製魔法は使わない。5・変換資質は使わない。6・空戦形態は使わない。7・勝敗は各2万点からの減点方式で、0ポイントになったら負け。だけど、アリシアちゃんの一撃をルシル君が1発でも受けて場合は即敗北ね』

シャマル先生からわたしが提示したかったハンデが伝えられる。チラッとルシルを見れば、無言の思案顔を浮かべてた。そして「なぁ、アリシア」口を開いた。さすがにハンデを付け過ぎたかな？って思ったけど・・・

「真っ先に君を撃墜しても良いんだな？　このルールだと」

そうでもなかった。呆れるどころかやる気を見せた。ギラリとした眼光を向けて来たルシルにたじろぎそうになるけど「出来るもんならね！」そう言い返すと、フェイトとアルフがわたしの前に躍り出てくれた。その様子にルシルは「まずはフェイトとアルフを墜とせというわけか。いいだろう」そう言って背を向けて、トレーニングルームの端の方に移動した。

『それじゃあ、シミュレーターを起動するね』

ユーノの合図と一緒にトレーニングルームが様変わりする。だだっ広かった空間にいろんな建造物群が投影された。管理局の技術ってかなりすごいよね。本物じゃないのに触れることだって出来るんだもん。

「じゃあ、アリシアは作戦通りに姿を隠してね」

「あたしらの唯一の勝利要素はアリシアの一撃だ。全てそれに懸かってる。しっかりやるんだよ」

「うんっ、任せといて！」

円陣を組んで3人の右手を中央で重ね合わせて「勝つぞ、おお！」気合を入れた。乱立する建物の陰で見えないルシルの方へと視線を向ける。こんな好条件の中でルシルとの模擬戦なんてきっと今回限り。卑怯だって言われても良い。それでもルシルに勝っておきたい。あのルシルに勝ったんだ、って自信が欲しいから。

「バルディッシュ！」

「フォーチュンドロップ！」

フェイトは三角形型の待機モードな"バルディッシュ"を掲げて、わたしは髪を結ってる片方のリボンの結び目に飾ってある、宝石で出来たフリージア（花言葉が気に入ったから）型の待機モードな"フォーチュンドロップ"に呼び掛ける。

「「セーットアップ！」」

まずはノーマルなライトニングフォームなフェイト。"バルディッシュ"も大鎌のハーケンだし。そしてわたしはまだ換装とか必要無い・・・っていうか持て余すから、ラッキースターフォーム一択で、ノースリーブのアウター、ネクタイ、ミニのプリーツスカート、同じプリーツと燕尾の二重のオーバースカート、両手首にカフス、って感じ。

そして手には、わたしの初めてのパートナーの"フォーチュンドロップ"。キャンディポットの形をしたインテリジェントデバイスだ。

――アリシア君の要望を叶えるために昼夜を問わずに娘たちと共に考え抜いて辿り着いた境地！　それが収容型デバイス！　本体にはＡＩを搭載させてインテリジェントデバイス化し、君の魔導師としての技術を最大限に支援させる。そして、複数のストレージデバイスを収容し、現場の状況によって適切なデバイスを起動させればいい――

複数のストレージデバイスを収容するインテリジェントデバイス。それがわたしの"フォーチュンドロップ"だ。今はまだ３つのストレージデバイスしか積んでない。魔導師としてのレベルを上げれば、その都度新しいデバイスを積んでくれるって話。まぁたくさんあっても今のわたしじゃ扱えきれないからそれで良いんだけど。

「フォーチュンドロップ。ブレイブスナイパーで行くよ！」

≪ブレイブスナイパー、オッケーで～す♪≫

"フォーチュンドロップ"からキャンディみたいな待機状態のデバイスが飛び出して、それが一挺のスナイパーライフルに変形した。ドクターの話だと、ルシルから銃器の話を聴いたり写真を見たりした結果、この・・・えっと・・・なんだったっけ。

「ねえ、ドロップ。このブレイブスナイパーのモデルになった銃器の名前、なんだっけ」

≪シモノフＰＴＲＳ１９４１だよ≫

そうそう。シモノフなんとかっていうスナイパーライフルを選んだんだって聞いた。内緒にすべきルシルに銃器のことを聞くだなんて正直どうなの？って思ったけど、わたしのデバイスとは思わなかったみたい。わたしのデバイスの１つになったなんて知ったら、ルシルはどう思うだろ。ちょっと楽しみ。

（魔石に魔力を流して・・・っと）

グリップに埋め込まれた魔石の欠片に魔力を流すと、数倍になってわたしに返還された。これでやっとＡ＋ランクの魔力だ。今のルシルのＡＡＡ＋には遠く及ばないけど、防がれない限りはその魔力差は関係ない。

『各員、防護服に変身、デバイスの起動が完了。模擬戦開始まで１０秒前。９、８、７、６、５、４、３、２、１、戦闘開始！』

この"ブレイブスナイパー"で発動できる魔法は今のところ超長距離からの弾速重視の高速狙撃・シューティングスター。そして威力重視の狙撃・ジャベリンメテオ。

（ルシルを倒すために使うのがこの魔法だ）

「よし、行こう！」

「あいよ！」

フェイトとアルフが飛び上がって、ルシルの方へと飛び去った。そ

してわたしは狙撃ポイントに着くために「ラビットジャ～ンプ♪」近くの5階建てビルの最上階の窓にジャンプで進入する。

――私の娘たちがアリシア君、君の特訓の相手をしよう――

――アリシア様は先ず移動系と射撃系を習得しましょう。その為のストレージデバイスと魔法プログラムを用意してあります――

クロノやフェイトだけじゃなくて、シスターズからも魔導師としての戦闘理論・技術を叩き込まれたこの数ヵ月。大変だった。イメージは出来るのに体が付いて来ない、なんてことが当たり前。だから結構苛立って、それが原因でまた上手くいかないっていう負のスパイラルによく陥ってた。

（まだまだ未熟だけど、それでもわたしはここまで来たんだ・・・！）

窓枠に足を掛けて、さらに隣の7階建てビルの最上階の窓へ「もう1回！」移動魔法ラビットジャンプを使って跳ぶ。わたしの唯一の移動魔法がコレ。単純な跳躍強化で、1回のジャンプで5階建てビルの高さまでなら行ける。ちなみに命名した経緯は、初めて上手く飛べた時・・・

――フェイト、ほらほら、すっごく跳べた♪――

――アリシア、まるでウサギみたいだね！――

――ウサギ・・・？――

――うん。アリシアのリボン、なんかウサギっぽいから――

そういうわけで決めたんだよね。飛行魔法も短・長距離の高速移動魔法もまだまだ使えないから、このラビットジャンプがスナイパーとしてのわたしの生命線。でもいつかはフェイトみたくソニックムーブとか使ってみたいんだよね。

「ドロップ。支援お願い！」

≪ほーい♪　ターゲッティングシステム開始しま～す！≫

窓枠に銃身を置いて、スコープを覗き込みながら銃口をフェイトとアルフの連携攻撃に捕まったルシルへ向ける。ルシルは通常のイェソドフォルムの"エヴェストルム・アルタ"をバトンのようにブンブン振り回して、フェイト達を接近させないようにしてる。

≪今の状態で撃つとこの前みたいフェイトに当てちゃうかも≫

「嫌なこと思い出させないでよドロップ」

ちょっと前に、クアットロの"シルバーカーテン"っていう固有技能で仮想ルシルを作ってもらって、対ルシル戦の練習をしていたんだけど、その時の狙撃で間違ってフェイトに当てちゃったことがあった。あれは狙撃の難しさを改めて実感した事件だった。確実に相手を狙い撃つ技術。誤射とは言え妹を撃った時の恐怖。フェイトは笑ってわたしを許してくれたけど・・・。

（２度とそんなミスショットをしないためにそれまで以上に狙撃の腕を磨いたんだ・・・！）

当時のことを思い返しながら、スコープ越しに戦う３人を見詰める。ルシルの斬撃の竜巻を掻い潜りながら直接攻撃や射撃魔法、バインドを仕掛けるフェイトとアルフ。ルシルは"エヴェストルム"の斬撃や魔力槍の連射でその全てを完璧に迎撃した。

「フェイト、アルフ・・・。頑張って・・・！」

一瞬でも良いからルシルの動きを止めてもらえれば・・・撃つ。スコープ内じゃ２つの照準円（レティクル）が暴れ回ってる。１つは銃口が向いてる先、もう１つはターゲットを表わしていて、その２つのレティクルが重なり合った時にトリガーを引けば直撃させられる。

≪フェイトのポイント、残り８０００ポイント。アルフのポイント、残り５２５０ポイント。ルシルのポイント、残り１６２００ポイント≫

フェイトとアルフのポイントが１万を切ったけど、それでもちゃんとルシルに攻撃を当ててる。ルシルの残りポイントは気にしないで良い。わたしが１発でも当てればそれで終わりなんだから。あとはフェイトとアルフのどちらかのポイントが０になる前に決着をつけないといけないだけ。

――ソニックフォーム――

フェイトが機動力重視のソニックフォームにバリアジャケットを換装させて、速さでルシルを翻弄する作戦に移った。アルフは中距離からの射撃とバインドの援護。そんな中で、ルシルが私を捜すように目を動かしてるのが判った。気付かれる前に撃ちたい。気が逸るのをなんとか抑えつつ・・・。そして・・・

≪ロックオン！≫

アルフのバインドがとうとうルシルの右足と左足を捉えて、フェイトの斬撃は"エヴェストルム"を弾き飛ばした。ルシルは魔力槍で迎撃に入ろうとしたけど、空いてる右腕はアルフにしがみ付かれて、フェイトのバインドもさらに追加されたうえ、フェイト自身もルシルの左腕にしがみ付いた。

「シューティングスター！」

レティクルがルシルの胸の位置で重なり合って、それと同時にトリガーを引いて魔力弾を1発と発射。

――ラウンドシールド――

ルシルの魔力光のサファイアブルーに輝くシールドが張られて、わたしの魔力弾が防がれた。スコープ越しにルシルと目が合った。読唇術の心得なんてわたし無いのに、見つけた、そうルシルが言ったのが嫌でも判っちゃった。

――闇(コード)よ誘え、汝の宵手(カムエル)――

建造物群に出来てる影から無数の黒く平たい触手が生えて来て、フェイトとアルフを捕まえて引き剥がした。わたしはそれに構わずに「ドロップ！」の支援を受けながら魔力弾を連射した。

――いいかい？　正直、フェイト君、アリシア君、アルフ君、君たち3人だけで全力全開のルシリオン君を倒すのはまず不可能だ。レンアオムでのシュヴァリエル戦の映像記録を拝借して見せてもらったのだがね。彼はもはや人間の領域を1歩も2歩も超えている。彼を倒すというのであれば、ルールやハンデを貰うしかない。ルール無用の戦闘となれば、彼は間違いなく局内で十指に入るだろう――ルシルが強いのは"闇の書"事件の時から解ってる。だからこそルールやハンデに加えて"フォーチュンドロップ"を作ってもらったんだから。

――ルシリオン様に勝つ方法・・・？　正攻法では不可能でしょうから意表を突くのが一番有効的かと――

バインドも遅れてバインドブレイクで解除されて、わたしの魔力弾も躱し切ったルシルがこっちに向かって飛んで来るから、さらに魔力弾を撃っていくんだけど「全然当たらない・・・！」全弾躱された。そしてルシルは高度を下げて建物の陰に隠れた。わたしに狙撃させることなく接近するためだってすぐに判ったから、この場から離れるために移動開始。

「ドロップ！　ラッキーシューターお願い！」

≪ほーい！≫

その最中で"ブレイブスナイパー"を待機モードにしたうえで"フォーチュンドロップ"に戻して、別の待機モードのデバイス・"ラッキーシューター"を取り出した。"ラッキーシューター"は中距離戦用の小型拳銃で2挺ある。このデバイスで使える魔法は、射撃魔法の基礎中の基礎のシュートバレット1つだけ。オリジナルの射撃魔法を作るのはもっと熟練度が上がってから、という約束だから。

『アリシア、そっちは大丈夫！？』

フェイトから念話が入ったから『まだ大丈夫！』そう答える。聞けばフェイトとアルフを拘束してたカムエルはもう解除されてて、2人はすでにこっちに向かってる最中とのこと。わたしがルシルに見つかるまでに、2人がルシルと交戦してくれればまた狙撃できんだけどな。

『あたし達がルシルを押さえるまで見つかるんじゃないよ』

『そうならないためのサーチ封じだし、たぶん見つからないと思う』

サーチ出来ないからわたしをそう簡単に見つけることは出来ない。それに広域攻撃も封じてるからわたしを建物から炙り出すことも出来ない。ルシルは虱潰しに数ある建物の中からわたしを見つけないといけない。捜してる時間が掛かるほどにフェイト達に追い付かれ

て、また戦うことになる。そしたらまたわたしは狙撃に集中できる。

『ルシルとエンゲージ！』

『アリシア、狙撃ポイントに着きな！』

２人からの念話の直後、爆発音が轟いた。わたしが今居るビルのすぐ外からで、窓からフェイトの雷撃が見えた。だから『２階の東に誘い込んで！』２人にお願いする。もう１度"ブレイブスナイパー"にデバイスを変えて、「ここで狙い撃つ・・・！」床にうつ伏せになって、オプションである二脚を立てた"ブレイブスナイパー"を構える。

『判った！』『あいよ！』

ビルの周りを回りながら戦い始めたのが音で判った。あとはわたしが構えてる窓にルシルを連れて来て、少しでもその場に留めてもらえればいい。戦闘音が近付いてくるのが耳、それに肌で感じる。

（来た！）

銃口の先、拾った"エヴェストルム"を使ってフェイトとアルフを迎撃するルシルがやって来た。でもすぐに姿が窓枠の外に出ちゃったからトリガーから指を離す。心臓の音がうるさくなってきた。このドキドキがルシルに聞こえないか不安になる。

――プラズマランサーーーー

――フォトンバレット――

フェイトの雷槍とアルフの雷弾が十数発と空から降って来て、続けてルシルが降下して来た。しかも最高にラッキーなことにルシルはその場に留まった。窓枠の上部分からお腹から下の下半身しか出てないけど「それで十分・・・！」そう判断して、トリガーを引いた。

――シューティングスター――

距離は１０ｍと離れてない。そんな中で弾速重視の１発。空戦形態じゃない今、そしてこの距離でなら絶対に当たる。ルシルの足に向かって進む魔力弾はそのままルシルに当た・・・らなかった。ルシルと魔力弾の間に急にアルフの背中が割り込んで来て「あいたーっ！？」着弾した。

「惜しかったな、アリシア！」

「のわっ！？」

アルフがわたしの方へ向かってルシルに蹴り飛ばされて来た。うつ伏せ状態だったこともあって「にょわぁぁぁぁ！？」わたしとアルフは激突して、２人揃って後ろの壁に叩きつけられちゃった。

「けほっけほっ・・・！」

「アリシア逃げて！」

咽てるとフェイトの必死な声が聞こえた。声をした方を見れば、フェイトとルシルがデバイスによる剣戟を繰り広げてた。

「すまないね、アリシア。あたしはアウトだよ」

わたしの側に倒れてるアルフが謝った。今のアルフはバインドで両足首を拘束されてて、その魔力ロープがルシルの側にまで続いてた。それで察した。アルフが急に割り込んで来た理由が。ルシルは判ってたんだ。わたしが待ち構えてることを。だから大きな隙をわざと作って撃たせた。そしてアルフの両足首にバインドを掛けて、魔力ロープでアルフを射線上にまで引っ張った。

「アリシア。まさか君のデバイスがスナイパーライフルだとは予想だにしなかったぞ。君ならもっと可愛らしい杖だとか思っていたからな！」

ルシルはフェイトの斬撃やプラズマランサーを"エヴェストルム"で迎撃しながら話かけてきた。しかも徐々にフェイトのポイントを減らしていってる。

「最初の1発で決められなかったのは痛かったな。あれだけ息巻いていた君が前線に出なかった。その時点でアリシアは後衛になったと踏んだ。あとはなのはのような射砲撃系の魔導師か、はやてのような広域系の魔導師か、そのどちらかを予想するだけ」

「な、なんでその二択なの！？　すずかとかシャマル先生とかのよ

うな補助系かもしれないじゃん！」

――舞い降るは、汝の無矛（コード パディエル）――

ルシルの側に蒼い魔力槍が８本と展開されて、"エヴェストルム"の斬撃で弾き飛ばしたフェイトに向かって「ジャッジメント！」一斉射出された。フェイトはソニックムーブで避け切るけど回避先にはすでにルシルが向かっていて、「きゃぁぁぁぁ！」斬撃でまた弾き飛ばされた。

「「フェイト！」」

「君の魔導師としての経験は浅い。たとえ誰に鍛えられようと、２～３ヵ月で習得できる魔法は限られる。広域魔法なんてまず無理だ。なら射砲撃になるだろうと思った。で、先の疑問についてだが、シャマルやすずかのような補助、か。君の性格からしてそれは無いと初めから度外視だ」

「むぅ・・・！」

わたしの性格読まれてる。でもまだ足りてない。わたしのデバイスが"ブレイブスナイパー"だけとしか思ってない。それが命取りだよ。わたしは『フェイト、砲撃！』そうお願いする。

「狙撃の腕はなかなかに良かった。よほど特訓したんだろうな。大したものだよ、アリシア。でもだから精神的な罠を張りやすかった。頑張って鍛えた狙撃の腕を信じているからこそ、チャンスがあれば

俺を撃とうとするだろうから。フェイトとアルフが俺をこのビルに留まらせようと動いていたのは攻撃パターンから察せたからな。じゃああとは君の位置を探るだけ。魔力探査なんて必要ないほどに君の気配は感じた。やる気が却って君の居場所を俺に知らせたんだ。あとは適当に俺の盾になるアルフを捕まえ、射線上に入ってやれば・・・。その結果、俺を撃てると確信した故に狙撃し、俺の策にまんまと嵌って同士撃ち。残念だったな」

わたしはルシルに背を向けて逃げるふりしつつ、"フォーチュンドロップ"から3つ目のデバイスを取り出す。背後から「降参することを勧めるよ」ルシルからの降伏勧告が聞こえてきた。わたしは答えることなく、フェイトの一撃を待った。

「ルシル！　私はまだ負けてない！」

――プラズマランサーーーー

フェイトの雷槍がルシルに向かって殺到。ルシルは"エヴェストルム"で斬り伏せながらフェイトに走って行く。そして直接斬撃を狙って"エヴェストルム"を振るうルシルは残念ながら空振り。フェイトは避けた先で・・・

「プラズマスマッシャァァァァーーーーーッッ！」

砲撃を発射。わたしは踵を返して砲撃の行く手へ向かってダッシュ。手にはハリセン型の近接戦用デバイス・"ハリセンスマッシュ"。使い方はそのままで、コレで相手を殴る。けどそれだけじゃない。

別の真価とも言うべき効果がある。それを今、ルシルにお見舞いしたげる。ルシルは防御に回ることなく回避した。となれば砲撃はわたしに向かって来るわけで。

「プラズマスマッシャー・・・」

"ハリセンスマッシュ"を振り被って「ホームラン！」フェイトの砲撃へ向かって振り払った。わたしの"ハリセンスマッシュ"のフルスイングによって砲撃は反射されて、砲撃は回避を終えた直後のルシルの背後へ向かって行って・・・直撃した。そう、"ハリセンスマッシュ"の真価は純粋魔力攻撃を打ち返すことが出来るってこと。どこに打ち返すかはわたしの技量次第だけど、今回は上手くルシルの背後に打ち返すことが出来た。

「はぁはぁはぁ・・・！」

「やった・・・？」

濛々と上がる煙を見詰める。フェイトの魔法だけど、最後はわたしのデバイスによる反射攻撃だから、直撃してればわたし達チームテスタロッサの勝利になるわけなんだけど・・・。ドキドキしながら煙を眺めていると、「あー、負けた！」ルシルが降参ポーズをしながら晴れ始めてた煙の中から出てきた。

「俺の負けだ。最後の1発、回避しきれなかった」

ルシルが負けを認めた。一瞬、頭の中が真っ白になったけどすぐに

「やったぁー！」喜びが湧き上がって来た。フェイトやアルフとハグし合ってるとシミュレーターが解除されて、元のトレーニングルームに戻った。そして「おめでとう！」なのは達からの拍手喝さいを受ける。

「まさかデバイスを複数持っているとはな。まんまとやられたわけだ。えっと・・・ギャフン」

「あ・・・！　ルシルにギャフンと言わせた！　ブイっ♪」

ルシルからも拍手を貰って、その喜びは最高潮になった。あとはもっと魔導師としての腕を磨いて、いつかハンデ無しでルシルと本気で戦って、そしてまたギャフンと言わせたいな。

Ｅｐｉｃｏ４７楽を嬉で返す

†††Ｓｉｄｅはやて†††

４月８日。今日は新学級が始まる日で、わたしももう５年生や。ホンマに早いもんやねぇ。聖祥に編入して１年かぁ。リンドヴルムとの戦いの印象が強烈過ぎてホンマにあっという間やったわ。朝ご飯を作りながらそう過去を思い返して、そんで未来に思いを馳せてると「おはようございます、はやてちゃん！」シャマルが起きて来た。

「おはようや、シャマル。とゆうことはもう７時か」

平日は基本的に７時起きのシャマル。そんで朝食当番の手伝いをしてくれる。シャマルは自分のエプロンを身に付けて「フライパンとか、洗っちゃいますね」シンクに置かれたフライパンや皿を洗い始めてくれた。

「ただいま帰りました、主はやて」

「我が主。ただいま戻りました」

ジャージ姿のシグナムと狼形態のザフィーラが日課の早朝ジョギングから帰って来たから「お帰り！」シャマルと一緒に挨拶を返す。それからわたしとシャマルとシグナムの３人でテーブルに朝食を用意してると、「はよ～」ヴィータがフラフラな足取りで起きてきた。

「（リインはやっぱり遅起きやな。用意が終わったら起こしに行こ）おはようや、ヴィータ」

「ヴィータちゃん、おはよう」

「さっさと顔を洗って眠気を覚ましてこい」

「判ってんよ、うっせぇな～・・・って、あれ？」

ヴィータがキョロキョロとリビングダイニングを見回すから「どうした？」シグナムが訊いた。そしたら「ルシルが起きて来てないんじゃね？」ヴィータはそう答えながらも洗面所に向かった。普段ならもう起きて、ソファに座って新聞や管理局広報を読んでるはずのルシル君が居らへん。

「そう言えばルシル君、珍しくお寝坊さんですね～。ヴィータちゃんに様子を見て来てもらいましょうか？」

「あ、わたしが行くわ！　シャマル、あと任せてもええかな？」

「ふふ。はい、お任せを♪」

シャマルの含み笑いに見送られながらわたしはリビングを出てルシル君の部屋へ。ルシル君の普段の寝顔を見れる機会なんて結構なレアやからな。それに、男の子を起こすなんて、アイリがよく観てるアニメの幼馴染設定みたいや。そうゆうのにもちょう憧れもしてたんは秘密や。

「（失礼の無いようにノック3回して、っと）ルシル君、もう朝やよ～」

そっと扉を開けて部屋を覗き込むと「んなっ・・・！？」一番に目に入った光景にビックリ。仰向けで寝てるルシル君に、アイリがキスしてた。頬ならまだ許す。そやけどガッチリ口にしてた。

「な、な、なな・・・何しとんの！」

「あ、はやて、おはよ～」

アイリを引き剥がしにかかると何とも呑気な挨拶をされた。一応「おはよう、アイリ」挨拶は返したけど「そうやなくて！」両手で、それは横に置いておいて、ってポーズをしながら「寝てる人に勝手にキスするんはアカンよ！」そう言い放った。

「でも昔からよくやってるし・・・」

「昔から！？　それっていつからなん！？」

「ベルカの時からだよね」

「ルシル君やなくてオーディンさんやんか、それ！」

確かに今のルシル君はオーディンさんっぽい。何故ならルシル君は大人モードに変身してるから。雪合戦で勝利したアイリはルシル君

へのお願いでこう言うた。

――2人きりの時だけでいいから、ずっとじゃなくていいから、大人モードに変身して――

そうゆうわけでルシル君は今、大人の姿になってるわけや。

「あ、あー、うん、そうだね。あはは、間違えちゃった♪」

「もう！　もう2度としたらアカンよ」

「えー、別に良いと思うけどね。だってアイリの愛の証だし　」

アイリはそう言うて人差し指を自分の唇に当てて、その人差し指をルシル君の唇に当ててわたしにウィンク。むぅ、アイリはわたしと同い年くらいの身長やのに中身が大人過ぎる。下手に攻撃すると思わぬしっぺ返しがありそうで怖い。そやけど・・・

「それでもルシル君が寝てる間にするんは、ルシル君の意思を考えてへんと思う・・・！」

「だけどこういう時じゃないと出来ないし。ルシルってガード堅過ぎて、頬にキスすることも出来ないんだよね。こうしてキス出来たのも今日が初めてだしね」

今日が初めてってことに僅かな安堵が生まれた。ホッとしてると「はやてもせっかくだからやってかない？」アイリがとんでもないこ

とを言うてきたから「ひゃいっ！？」声がひっくり返ってもうた。

「はやてもルシルが好きなんでしょ？」

「っ！　それは・・・その・・・うん、好きや」

「・・・。アイリはね、はやてに感謝してるの。ルシルに居場所を与えてくれたこと。はやてがルシルをこの家に招き入れなかったら、きっとルシルは今でも独りぼっちだったと思うから。だからね、はやてなら良いよ」

アイリはそう言うてわたしに手招きした。わたしはその甘い誘惑に抗おうとするんやけど、シャルちゃんやアイリにも先を越されてるってゆうちょっとした焦りがそれを邪魔してくる。手招きに誘われるままにベッドに歩み寄る。

「ほら、せっかくの記念に、はやてもルシルに愛（チュー）の証しちゃいなｙｏ♪」

すごいドキドキして心臓の音しか聞こえへんくらいや。さっきまでアイリに説教してた自分を棚に上げて、ルシル君の眠るベッドの上に腰かけて顔を覗き込む。ホンマに綺麗な寝顔で、あまりの緊張に目の前がグルグルしだした。徐々にルシル君に顔を近付けてったその時・・・

「・・ん・・・んん・・・」

「っ！？」

ルシル君が少し身じろぎしたと思うたら寝返りを打って「ひゃん！？」その腕でわたしを抱き込んで来た。それはもう早業で、気が付けばわたしはルシル君に抱きしめられてて、目の前にルシル君の顔がある。顔どころか全身が熱くなって頭の中が真っ白になる。

「・・・あ・・・ぅ・・あの・・・・う・・・・」

「はやてだけずる～い！」

「・・・・ぅ・・・・ん・・・・ゼフィ・・姉様・・・・」

ルシル君がなんか寝言で誰かの名前を言うた。それは女の人の名前で、「ゼフィ姉様って確か・・・」亡くなられたルシル君の家族やったはずと思いだす。寝言でお姉さんの名前を呼んで、代わりとも言えるわたしを抱きしめるルシル君。ルシル君の新たな一面を垣間見てしもうた。

（でもしゃあないよな・・・。どれだけ大人びててもルシル君もまだ子供なんやから・・・）

そう思うと恥ずかしさとか照れくささとかが全部なくなった。緩んだルシル君の腕を離して、今度はわたしがルシル君を抱きしめた。とにかく胸の奥から生まれてくるんは愛おしさで、ルシル君の頭をそっと撫でる。ずっとこのままで居りたい衝動やったけど・・・

「はやてちゃん？　そろそろ朝ご飯を食べないといけな――って、あら♪」

シャマルに呼びかけられてハッとした。遅れて「・・・ん・・ん？　はやて・・・？　えっ！？　はやて！？　一体何を！？」ルシル君が目を覚ましして、目を丸くしてわたしを見た。また生まれる恥ずかしさと照れくささ。

「な、なな、な、ななな、なんでもあらへんよぉぉぉーーーーーーッ！！」

ルシル君のベッドから飛び出してそのままリビングへダッシュした。テーブルにすでに着いてたヴィータが「ビックリしたぁ～」目を丸くしてわたしを見て、「どうしたですか？　はやてちゃん・・・」起きてたリインがそう訊いてきた。

「な、なんでもあらへんよ、うん。さ、ルシル君もアイリも起きたし、待ってよか」

「「？？？」」

わたしは自分の席について、ルシル君たちが来るのを深呼吸しながら待つ。それからしばらくして「すまない、寝坊した」ルシル君と、「おはよ～」アイリ、そんで「お待たせしました」シャマルが来て、それぞれ席に着いた。そんで「いただきます！」して朝ご飯を頂く。

（うぅ・・・、メッチャ顔を合わせづらい・・・）

それから、朝ご飯を食べてからの通学までずっとドキドキしっぱなしやった。ルシル君もどこか気まずそうやったし、少しは意識はしてくれてるみたいで嬉しいやら恥ずかしいやら。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒すずか†††

正門側で待ち合わせをして、みんなで一緒にクラス替えの結果を見に行くことに。小学校生活最後のクラス替えで、これで決まったクラスは卒業まで変わらない。ドキドキしながら掲示板に向かってると知らない男子たちが、クラス替えで騒ぐ女子が邪魔、とか、うるせぇ、とか、そんな話をしているのが聞こえた。

「同じ男の子としてのルシル君はどう思う？」

なのはちゃんがそう訊くと「言い過ぎだとは思うけど、そこまでこだわりはないかな」ってルシル君はそう答えた。これに「さすがにそれはない」アリサちゃんや、「一度くらい一緒になりたい！」シャルちゃんや、「同じクラスで騒ぎたい！」アリシアちゃんが猛反発。私も「最後の２年は一緒になりたいかな」って答える。

「そういうものか。休み時間にならないとどうせ喋れないし、弁当の時もどうせ集まるし」

「解ってないなぁ、ルシルは！　授業を一緒に受けることにも意味はあるのだよ！」

「そうは言っても授業中は喋れないだろ？」

「喋れる授業もあるじゃん。体育とか理科の実験とか音楽とか図工とか」

「喋ってばっかじゃダメだけど、でも一緒だからこそ授業が共有できて嬉しいかな」

アリシアちゃんはこれまでの授業を振り返ってるみたいで満足そうな笑顔を浮かべて、フェイトちゃんがそう付け加えた。ルシルは「言いたいことは解った」小さく頷いて、クラス替え結果の張り紙が貼られてる掲示板を見た。そう、あとは結果を見るだけ。1歩1歩と掲示板に向かうと・・・

「よう、ルシル！　俺たち同じクラスだな！　卒業までよろしくな！」

「ぼくも同じクラスなんだよね」

「本当か、亮介、天守！　はは、それは良いな！」

綺麗な赤い髪と金髪をした男の子たちがルシル君の両脇に陣取って、「ほら、行こうぜ」そう言ってルシル君を連れて行こうとした。だから「ちょっ、ルシル君！？　一緒に見る約束は！？」はやてちゃんが引き止めようとしたけど、「悪い、はやて、みんなも！　俺、男だから♪」満面の笑顔を浮かべた上で親指を立てた。

「信っじらんない！　チーム海鳴の友情より男の友情を取ろうって

わけ！？　ねえ、はやて！」

「・・・えっと、ルシル君にはルシル君の付き合いもまぁあるしなぁ。男の子やもん。男の子の友情も大切にせえへんと・・・。もしいつかルシル君から男の子の友達がみんな離れてって、周りには女の子しか居らへんくなったら、・・・終いにはライバルがわんさか・・・とか」

「絶対嫌それ！　むぅ、しょうがないか。わたし達だけで見よう！」

ルシル君たちを見送った私たちはとうとう掲示板の前に立って、「せぇ～ので見ようね！」目を閉じて合図を確認し合う。そして「せぇ～の！」目を開けて張り紙を見る。自分の名前を必死に探して「あった！」指を差した。なのはちゃん達もほぼ同時に指を差したんだけど、みんなで「ん？」って小首を傾げた。そして遅れて「きゃぁぁぁぁぁ♪」みんなで歓声を上げて抱き合った。

「みんな同じクラスや！」

「すごい、すごい！」

「何か信じらんないわね。もう1回確認しましょ！」

「やっぱりみんな4組だよ、5年4組！」

「ていうかルシルも一緒じゃん！」

チーム海鳴全員が同じ４組っていう奇跡を目の当たりにしちゃった。スキップしちゃいそうな勢いで正面玄関に入って５年４組の靴箱に向かうと「げっ、咲耶！」アリサちゃんが身を引いた。

「あら、アリサさん、それに皆さんも。おはようございます。今年からは同じクラスですわね。卒業までどうぞよろしくお願いしますわ。では」

いつもは口ゲンカに発展しちゃうのに、今日の咲耶ちゃんは大人な対応でアリサちゃんに突っかかることなく挨拶だけをして校舎に向かった。アリサちゃんも呆気にとられてて、でも「気色悪・・・！」そう言って身震い。

「もう、アリサちゃん。せっかくちゃんとしてくれてるのにそんな事言っちゃダメだよ」

「そうは言うけどさ、なのは。普段のアイツの態度知ってんでしょ？それが急にあんなしおらしくなって。うわ、鳥肌立っちゃってる！」

「咲耶ちゃん、そんなに悪い子やないんやけどな～」

「ま、とりあえず今は新しい教室に行こうよ♪」

張り紙に名前と一緒に書かれてた出席番号のシール張られた靴箱に靴を入れて、上履き袋から上履きを取り出して履き替える。そして４階の第５学年教室エリアに上がる。クラス替えで別れることになった元クラスメイトと挨拶しながら新しい教室に到着。教室ではす

でにルシル君が複数の男子と女子と楽しそうにお喋りしてた。

「ん？　なんだ、みんな揃って。早速この教室でお喋りか？」

「ううん。わたしらみんな４組なんよ♪」

「え、本当なのか！？」

ルシル君が私たちにも視線を移したから「うんっ！」頷き返した。ルシル君は「こんな偏ったクラス分けで良いんだろうか？」って唸るけど、卒業まで一緒に過ごせるわけだからすごく嬉しい。ルシル君も「ま、いいか」納得して、お喋りを再開。私たちも自分の席に鞄を置いてお喋りを始めた。５年と６年には林間学校、臨海学校、それに修学旅行もある。今から楽しみで仕方ないねって。

「ねえねえ、学校終わったらなんだけど、午後から本局行かない？　確か今日からだったでしょ、花祭♪」

「本局式のお花見だよね。もちろん行くつもりだったし、みんなを誘おうと思ってたよ」

花祭っていうイベントが今年から本局の第１居住区で開催されることになった。去年、局員も一緒に参加したお花見が大盛況で終わって、参加者から本局でもお花見を楽しみたいって意見が多かったことからリンディ提督、レティ提督、リアンシェルト少将やその知人の将校たちの連名で居住区にイベント専用の区画が整理された。

「それにしてもドクターもすごいよね。桜の種を植えて1年も経たずに満開になるまで成長させちゃうんだから」

なのはちゃんの言うようにたった1年で種から満開状態にまで成長させたドクターはすごいと思う。そして、バレンタインデーやホワイトデーに続いてお花見まで本局に定着することになるかもしれないっていうことで、チーム海鳴の影響もまたすごいねって話になって・・・。

「――じゃあ、今日は午前だけで学校終わるし、家に帰ったらそのまま本局に行きましょ。チーム海鳴って今日、全員休みなんだし」

進級したお祝いの日だってことで今日と明日をまるまる休みにしてもらったから、ゆっくりのんびり花祭を楽しめる。

「シグナム達も今日1日休みやし、みんな連れてくつもりやよ」

「おーい、ルシル～！　放課後は開けておいてよ～！」

「ああ、判った～！」

そういうわけで、放課後は本局の花祭に参加することをみんなで約束した。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒フェイト†††

「おお、やってる、やってる！」

花祭が開催されてる本局・第1居住区にやって来た私たちチーム海鳴は、花祭の大盛況さにかなりビックリしてる。日本のように出店もあるし、何より制服姿の局員や一般市民の人たちが一緒になって楽しんでいる姿が本当に良い。

「にしても・・・デカいわね～・・・・」

「ホント大きいね～」

「アイリ、ＣＭかなんかでこんな大きな樹、観た気がする」

「あ～、あの有名な歌もある大きな樹のことだよね。確かにそれくらい、もうちょっとあるね～」

「モンキーポッドという樹のことだな。俺もあのＣＭの歌は好きだなぁ～」

花祭の会場である円形状の公園のど真ん中に堂々とそびえ立っている大きな桜の樹を見上げる。全長はどれくらいだろう・・・、２５メートル以上はくらいはあるかな。幅なんてその倍くらいはある。改めて1年でここまで成長させたドクターには驚きだ。

そんな巨大桜から舞い降る無数の桜の花びらに子供たちはもちろん、大人の人たちも「綺麗！」って楽しんでる。メインの桜の樹の他には花壇が公園を囲っていて、花の香りもすごい。正しく花の祭りって感じがする。

「とりあえずぐるっと回ってみるか。屋台巡りはその後で良いだろう」

ルシルからの提案に「賛成～♪」して、花壇に植えられた百数種類の花々を眺めながら公園をのんびり歩く。綺麗だね、っていろいろな花に目を奪われていると「んん？　アリサ嬢ちゃんじゃないか」渋い声でアリサの名前を呼ぶ声がした。

「？？　あ、ナカジマ一尉！　お疲れ様です！」

アリサが私たちの前に姿を見せた男の人に敬礼した。ラフな格好だけどアリサの様子、そして階級からして局員なのは間違いないから「お疲れ様です！」チーム海鳴みんなで敬礼した。

「ナカジマってもしかして・・・」

「ああ、クイント准陸尉の知り合いじゃねぇか？」

そんな中でなのはとヴィータがボソボソ話してるのが聞こえた。クイント准陸尉って、私たちに避難誘導の指示を出してくれた首都防衛隊・分隊長の1人だったよね。ナカジマなんて次元世界には珍しい名字だし、たぶんクイント准陸尉の関係者じゃないかなって私も思った。

ナカジマ一尉は「おいおい。今は互いに非番だ。堅苦しい敬礼はナシにしようや」って笑ったから私たちも「はいっ」敬礼している腕を降ろした。そして「アリサ。紹介してよ」アリシアがアリサの脇腹にそっとひじ打ちした。

「そうね。えっと、あたしが捜査官としてお世話になってる陸士１０８部隊の副隊長を務めてるゲンヤ・ナカジマ一尉よ」

「おう。ゲンヤ・ナカジマだ。アリサ嬢ちゃんやウチの女房から話は聞いているし、クラナガンの悪夢やリンドヴルム壊滅のニュースとかで知ってる。会えて光栄だよ、チーム海鳴」

会えて光栄だとか言われたのは初めてだったから思わず頬が緩んじゃっていると、「あの、ナカジマ一尉はクイント・ナカジマ准陸尉の・・・」なのはが小さく挙手した。

「ああ。旦那だ。今、女房と娘２人で遊びに来てんだよ。そうだ、どうせなら会っていてくれ。もうトイレから帰ってくるはずなんだ。・・・お、来た来た」

ナカジマ一尉が大手を振る方を見ると、クイント准陸尉と小さな女の子２人が仲良く手を繋いでこっちに向かって来ていた。そしてクイント准陸尉も私たちに気付いて「あ、久しぶり！」笑顔で挨拶してくれたから「お久しぶりです！」お辞儀した。

「また会えて嬉しい！　あー、でもすずかちゃんとは４日ぶりね」

「あ、はい！　こんにちは、ギンガちゃん、スバルちゃん」

クイント准陸尉と手を繋いでいた２人の女の子と目を合わせるために、すずかは少し体を屈めた上でその子たちに挨拶した。すると髪

の長い子は「こんにちは」綺麗なお辞儀をして、小さい子は「・・・こ、こんにちは」ちょっとおどおどして挨拶を返してくれた。

「さ、ギンガ、スバル。すずかお姉さんだけじゃなくて、お姉さん達みんなに自己紹介して♪」

「はいっ。姉のギンガ・ナカジマです。9歳です」

髪の長いお姉ちゃんがギンガ。落ち着いた雰囲気でとっても礼儀正しい。そんなギンガの背中に隠れようとしている女の子・スバルはどうやら人見知りが強いみたい。ギンガが「ほら、スバル、ご挨拶」って自分の前にスバルを押し出すと・・・

「スバル・ナカジマ、です。7歳・・・です」

ギンガとスバルに私たちも自己紹介を返した後、「銀河と昴、良い名前ですね」って、ルシルが2人の名前を褒めた。

「ありがとう、ルシリオン君！　夫と2人で考えたの♪」

「俺の遠いご先祖様はお嬢さん達の世界の出身らしくてな。だから俺の名前もお嬢ちゃん達のような感じだろ？　中島源也ってな」

グレアム元提督も元は地球はイギリス人だったってことは知ってるから、ナカジマ一尉のお話しはそんなに驚くようなことはなかった。それからクイント准陸尉やナカジマ一尉と話をしていると・・・

「む？　我に触りたいのか？」

「喋った！」

「うん、喋ったね！」

狼形態のザフィーラにそろそろと近付いて手を出しては引いていたギンガとスバルに、ザフィーラが声を掛けると2人して驚きを見せた。私は子犬フォームのアルフに目線をやると、「あたしを喋れるよ！」2人に声を掛けた。

「わっ！？　こっちのわんちゃんも喋った！」

「もしかして使い魔さんですか？」

スバルはまた驚いて、ギンガはすぐにその正体を察した。管理局員の両親を持っているからかな。

「そうだよ。あたしはフェイトの使い魔なんだ！　あたしの綺麗な毛並みにも触れても良いよ♪」

「我は八神家の守護獣だ。我の毛並みも負けてはいないぞ」

「えっと、じゃあ失礼して・・・」

「ふわふわぁ～♪」

ギンガとスバルはアルフとザフィーラを交互に触っては笑顔を浮かべている。アルフとザフィーラも撫でられて気持ち良さそうにしている。と、そんなところに「なぁ、2人とも。ザフィーラに乗ってみぃひん？」はやてがそう提案した。

「え、いいんですか？」

「乗りたい！」

スバルは即答で、ギンガは少し躊躇いを見せた。ザフィーラは「構わぬ」そう言って伏せて、2人が乗りやすいようにした。ナカジマ一尉が「おいおい、良いのかい？」ってはやてやザフィーラに確認すると、「かような小さな少女2人を乗せて走ることなど造作無い故」ザフィーラは即答した。するとスバルは真っ先にザフィーラの背に乗って、遅れて「よろしくお願いします」ギンガは乗った。

「振り落とされぬようにしっかりと掴まれ」

ギンガとスバルはしっかりとザフィーラの毛を掴んで、それを確認したザフィーラは「では行くぞ」私たちの周囲を駆けると、アルフも一緒になって駆け出した。その様子に2人は歓声を上げて、クイント准陸尉やナカジマ一尉に手を大きく振った。

「楽しそうで本当に良かった。ありがとう、はやてちゃん、フェイトちゃん」

「悪いな。お前たちも花祭を楽しんでいたのに」

「そんな気にせんでください」

「私やみんなも今この時間を楽しんでますから」

なのは達も頷くことで同意してくれた。こうして管理局の中で新しい知り合いを作るのは良いことだと思うから。それから5分くらいアルフ達を見守りながら話していたら、きゅ～、ってお腹が鳴った音が聞こえた。しかも3人分。

「はやてちゃん、お腹空いたです～」

「そろそろ何か食べたいよね～」

リインとアイリだった。そして最後の1人は「おとうさん、おかあさん、おなか空いた・・・」スバルだった。3人揃って同じようにお腹を擦るその様子に私たちは「あはは！」思わず笑ってしまった。

「よし。なにか旨いもんでも食べに行くか！　またな、嬢ちゃん達」

「それじゃ、みんな。またどこかで！」

「とっても楽しかったです、ありがとうございました！」

「バイバイ、おねえちゃん達！　アルフとザフィーラもバイバイ♪」

一家団欒なナカジマ家とお別れして、私たちも空腹を満たすために

出店巡りを始める。1品目のハンバーガーを買ってみんなでベンチに座って食べていると、「きゃあ！？」背後から悲鳴とずざざっていう転ぶ音、最後に「わぁぁ～～ん！」泣き声がした。慌てて振り返ると、とても小さな女の子（たぶん1歳ちょっとくらいだと思う）がうつ伏せになって泣いてた。

「あらあら、大変！　大丈夫！？」

「っ！！　レヴィヤタン・・・！」

誰よりも早く行動してたルシル・・・は転んだ女の子を見て驚いて立ち止まって、「もう。早く起こしてあげてルシル君！」そんなルシルを叱りながらシャマル先生が女の子を抱き起した。

「すみません！」

そこに切羽詰まった女の人の声が聞こえてきた。声のした方を見れば、転んだ女の子と同じ1歳くらいの小さな女の子を抱きかかえた「メガーヌ准陸尉！？」が居た。メガーヌ・アルピーノ准陸尉は、クイント准陸尉と同じように首都防衛隊の分隊長だ。

「あ、あなた達は！　あの、ごめんなさい、うちの子なんです！」

シャマル先生の治癒魔法・癒しの風で擦り傷を治してもらってる女の子を見る。まだ小さいから似てるかどうかは言い難いけど、メガーヌ准陸尉が抱きかかえている女の子の方は髪型のクセがそっくりだから、メガーヌ准陸尉の子供だってすぐに判る。シャマル先生が

「はーい、もう大丈夫～♪」治癒を終えた女の子を地面に降ろすと
「ありがとうございます」メガーヌ准陸尉は深く頭を下げた。
「メガーヌ准陸尉にもお子さんが居たんですね。クイント准陸尉と同じ、女の子２人♪」
「ええ。双子なの。長女のルーテシアと次女リヴィア。２人とも元気いっぱいで、もう大変」
ルーテシアとリヴィアという名前の女の子と一緒にベンチに座ったメガーヌ准陸尉がそう言って微笑んだ。大変って言っているけど、決して翳りの無い優しい表情で、これが母親の顔なんだってすぐに判った。
ＰＴ事件でのプレシア母さんの最期、"闇の書"の欠片事件でのプレシア母さんの最後の表情を思い返す。どちらも優しい表情を向けてくれていた。短い時間だったけど、確かに私とプレシア母さんが母娘だった・・・と思う。
「フェイト」
「アリシア・・・？」
アリシアが私の手を握って微笑みかけてくれた。だから私も微笑みを返して、キュッと繋いだ手に少し力を込めた。
「あの、お父さんと一緒ではないのですか？」

「・・・夫は、この子たちが生まれる前に・・・天国に行っちゃったの」

質問したリインが「あわわ、ごめんなさいです！」とても焦って、半泣きになって謝った。その様子にメガーヌ准陸尉も「あー、良いの、気にしないで、泣かないでね！」慌て始めた。反面、ルーテシアとリヴィアは「すぅ、すぅ・・・」夢の中に旅立っちゃった。可愛い寝顔に私たちはもうメロメロで、半泣きだったリインすらも泣き止んで、ずっと見てたい気持ちになってた。けど起こしたりするといけないから、「失礼しま～す」メガーヌ准陸尉と小さく手を振り合いながら別れた。

「ルーテシアとリヴィア、可愛かったなぁ～」

「うん。ギンガちゃんとスバルちゃんも可愛かったよね♪」

「みんな可愛かったです～♪」

「あら。リインちゃんも生まれてすぐはリヴィアちゃんのように泣き虫で可愛かったわよ？」

「きゃぁぁぁ！　そんなこと言わないで良いですよ、シャマル！」

ポカポカとシャマル先生を叩くリインに微笑ましくなる。そんな中で「ルシル。将来、わたしとあなたの間にもあんな可愛い子供作ろうね　」シャルがまたそんなことを言いだした。はやては少しむっとして、ルシルは「バーカ」一言で斬り伏せた。

それから私たちは出店巡りを続けて、夕方くらいまで花祭りを見て、食べて、喋って、今日という日を精いっぱい楽しんだ。

Ｅｐｉｃｏ４８絆は血より強い

†††Ｓｉｄｅシャマル†††

ＰｉＰｉＰｉ♪っていう、目覚まし時計の電子音に「・・・ん・・・」目を覚ます。まずはスイッチを押して目覚まし機能を止める。時刻は午前６時３０分。いつもは午前７時起床の私も、朝食作りの当番の時だけはこの時間に起きるようにしている。上半身を起こして、「シグナムはもう起きているのね」隣のベッドをふと見れば、シグナムの姿はもう無かった。日課のジョギングに出たのね。

「私も自分のお仕事をしないと♪」

ベッドから降りて、パジャマから私服のワンピースとカーディガンに着替える。そして鏡台の椅子に座って櫛で寝癖を梳かす。髪型を整えた後は１階の洗面所で顔を洗ったり、歯を磨いたり、身支度を全て整え終える。ついでに昨晩の溜まった衣服を洗うために洗濯機を回しておく。

「よしっ」

身なりを整え終えた後は早速朝食作りの準備をする。まずは何を作るかなんだけど、「昨日は洋食だったし、和食にしましょ♪」昨日の朝はルシル君が当番で、食パンやベーコンエッグなどの洋食だったから、今日は和食ね。和食は私が初めて学んだ料理で、とても思

い入れのあるもの。だからやっぱり和食が一番って思いが強い。

「エップロン、エップロン♪　あとはシュシュで髪を纏めて～♪」

鼻歌交じりにダイニングのエプロン掛けから取った私用のエプロンを体に付けて、シュシュで後ろ髪を纏める。これで準備完了♪　ご飯作りの準備が出来たら、冷蔵庫の中から卵数個を取り出す。今でも忘れることの出来ない大切な思い出の1つである卵焼きを作るために。あとは、ルシル君と一緒に作ったひじきの煮物が入ったタッパー、それにシグナム用の納豆を指差し確認。

「あとは鯖の煮つけと、お味噌汁と、大根・きゅうりとツナのサラダ。今日はこれで行きましょ♪」

一番時間が掛かる鯖の煮つけから始める。まずは生臭さを取るために鯖の湯切り、次に鍋に醤油・みりん・砂糖・水と分量を量って入れて、沸騰し始めたら切り身を投入、落とし蓋をして、あとはぐつぐつ煮る。

鯖の煮つけが完成するまでの間に卵焼きやお味噌汁の作業に移る。オーディンさん直伝のお味噌汁の作り方をそのまま手法で作って、卵焼きの卵も今では簡単に割れるし、殻も混ざらないし、焼く作業も焦がすことも無くなってる。

「大根、きゅうりを細切りに～♪」

トントンと包丁で細切りにした大根ときゅうりをボウルに入れて塩で揉む。5分置いておくその間に油や水分を切ったツナとマヨネー

ズを混ぜて、それから5分経った大根・きゅうりと混ぜ合わせる。お皿に盛ったら鰹節と千切り乗りをパラパラ降りかけて、醤油を小さじで2杯かけて完成。鯖の煮つけも完成して、料理を盛ったお皿をダイニングテーブルに運んでいると・・・

「おはようや、シャマル」「おはよう、シャマル」

「シャマル、おは～」

「おはようです、シャマル」

「はよ～っす」

「おはようございます、はやてちゃん、ルシル君。それに・・・珍しく早起きなのね、ヴィータちゃん、リインちゃん、アイリちゃん」

はやてちゃんとルシル君だけでなく、普段はお寝坊さんなヴィータちゃんとリインちゃんとアイリちゃんも、同時にリビングに入って来た。

「お～。今日は武装隊の仕事だかんな～。なあ？　リイン、アイリ」

「はいですよ」

「ん～」

はやてちゃんが特別技能捜査課のお仕事が休みで、シグナムとヴィ

ータちゃんが武装隊の仕事の時、リインちゃんとアイリちゃんは2人の融合騎として付いて仕事をすることになった。リインちゃんははやてちゃんだけじゃなく、シグナムやヴィータちゃんともユニゾンして、ユニゾンの練度を高める訓練として。アイリちゃんは純粋にルシル君に褒めてもらいたいから。

「そうだったわね（それにしても、私も医務局の仕事のはずだったのに急に休みになっちゃったのよね）」

私も医務官としての仕事があったのだけど、今日1日休みになっちゃった。まぁゆっくりできる時間が出来て嬉しいことは嬉しい。

「ただいま」

「おかえり、シグナム、ザフィーラ」

はやてちゃん達が仲良く洗面台で洗顔している間に洗い物を済ませていると、シグナムとザフィーラが帰って来たから迎える。これで家族みんなが揃ったことに。そして、みんながテーブルに着いて「いただきます！」私が作った朝食を美味しそうに食べてくれる。

（家族でこうして談笑しながら、私やはやてちゃんやルシル君の作ったご飯を食べる。これが私にとっての幸せの1つでもあったりするのよね）

みんなで「ごちそうさま！」をした後は、はやてちゃんとルシル君は学校の制服に着替えるために自室に戻って、私はとヴィータちゃ

んとアイリちゃんと一緒に洗い物、ザフィーラはお風呂とトイレ掃除、シグナムとリインちゃんは洗濯物干し。

「みんなー！　行ってくるな～♪」

「行ってきます！」

登校時間となったはやてちゃんとルシル君を「いってらっしゃい！」家族みんなで玄関でお見送りする。２人を見送ったあとは、本局に向かうシグナムとヴィータちゃんとリインちゃんとアイリちゃんのお見送り。シグナム達が自室で管理局員の制服に着替えてきた。

「リインちゃん、アイリちゃん、ちょっと待って。ネクタイが曲がってるわ」

「あっ、ありがとうです、シャマル」

「ありがと～。ネクタイってメンド～なんだよね～」

未だに１人じゃ上手くネクタイを巻けない２人の歪んでるネクタイを締め直してあげる。そして今日で何度目かの「クロスタイにしたらどう？」提案をアイリちゃんにしてみる。でもやっぱり「ルシルとお揃いが良いから嫌」って言われた。少々ルシル君に依存し過ぎかと思うけど、まぁ、性格も姿形もオーディンさんに瓜二つだから解らないでもないからキツくは言えないのよね。

「じゃあ１人で結べるようにならないとね♪」

「は～い」

リインちゃんとアイリちゃんの身なりを整えたことで今度こそ準備完了。1階のトランスポーター室に集まって、私とザフィーラは装置内に立つ4人を見守る。

「行ってくる。シャマル、ザフィーラ、留守を頼む」

「んじゃ、今日も気合い入れて暴れてやるか。な？　アイリ」

「ん！　犯罪者狩りだね！」

「リインも精いっぱい頑張るですよ！」

ヴィータちゃんに乗せられてグッと両手の握り拳を作るリインちゃんとアイリちゃん。アイリちゃんは単独戦闘でも十分すぎるほどに強いからさほど心配はないけど、リインちゃんはまだまだなんだから「シグナム。適度にブレーキをお願いね」そう伝えておく。

「ああ、心得ている。無茶も無理もさせんさ。そもそも無茶するような相手も居らんしな」

フッと小さく笑うシグナム。まぁ、シグナムもただでさえ強いのにリインちゃんとユニゾンしちゃったら、それはもう強いと思うから大丈夫でしょうけど。とにかく「いってらっしゃい。くれぐれも無理はしないで、怪我も無いようにね」もう1度注意しておこう。

「ああ」「おう」

「行ってきますです～」

「いってきま～す」

シグナム達が本局へと転送されたのを見送って、「さて。今日はどうしようかしら？」これからの予定を考える。とりあえずみんなのパジャマを洗濯。終わるまではリビングに戻って「ふぅ」ソファに座って一休み。テレビをつけてワイドショーを観る。

「どこの世界でもやっぱり犯罪って起こるのね～」

殺人・強盗・誘拐・人身事故などなど。観ていて気が滅入る事が多いわ。はやてちゃんは賢いから誘惑には惑わされないのは確実。そして魔導騎士でもある・・・のけど、それは変身した後での話。基本的には普通の女の子。一応、登下校中はルシル君やなのはちゃん達が護衛役として居てくれるから大丈夫だとは思うけど・・・。

「あら、スィーツ特集♪」

スィーツ特集のコーナーになってテンションが上がる。なのはちゃんのご家族が経営していらっしゃる翠屋のスィーツも美味しいし、ルシル君が作るケーキも美味しい。でもやっぱり時々は別の物を食べたくなるというか。解って、この気持ち。

「今日の特売は～っと」

テレビを観ながら、今日――金曜日限定の特売が無いかをチラシを確認。まぁ、家族全員がお給料を貰える公務員として働いているから、特売になんて行く必要はないのだけど、はやてちゃん曰く・・・

――安くて良い物を買うのが主婦の鉄則やよ――

とのことだから、私も鉄則に倣って基本的には派手にお金は使わないことにしてる。チラシを全て確認し終えて、冷蔵庫の中を確認。買い足さないといけない食材が無いかを見たうえで「買い物はなし」そんな結論に至った。いよいよやる事がなくなっちゃったわ。

「・・・・暇、暇だわ～。のんびり出来るのは良いけど退屈過ぎてどうにかなっちゃいそう～」

ワイドショーも終わって、洗濯物も干し終えて、ファッション雑誌なども読み飽きてきた。衣類などの買い物は基本的にはやてちゃん達と一緒に行って、選び合って買うから1人では買いに行かないし。特に買い足す食料品も無いし。じゃあ・・・

「ザフィーラ。散歩でも行く？」

「我は、主はやてとご一緒でなければ散歩には行かん。・・・シャマルよ。軽く掃除などをしたらどうだ？　体を動かせば少しは退屈も紛れるだろう」

「・・・そうね～。昨日もやったけど」

そういうわけで掃除機を物置から持って来てお掃除開始。はやてちゃんのお部屋、リビングダイニング、玄関や1階廊下、そしてルシル君のお部屋へ移る。ルシル君とアイリちゃんが生活するスペースは綺麗に整理整頓されているんだけど・・・

「アイリちゃん。女の子なんだからもうちょっと頑張りましょ・・・」

床に雑に脱ぎ捨てられてる衣服はアイリちゃんの物。それらを拾って畳んで、ベッドの上に置いておく。そして掃除機をかけて、ベッド下にノズルを突っ込むと「あら？」コツンと何かに当たった感触が手に伝わって来た。

「ベッド下に何かあ・・・ハッ！」

ベッド下を覗き込もうとして止めた。男の子、ベッド下。この2つのキーワードが頭の中にデカデカと浮かんできた。掃除機のスイッチを切って「やっぱりHな本とかなのかしら・・・？」ドキドキしながらチラチラとベッドを横眼で見る。ルシル君だって男の子なんだもの。そう言ったことに興味を持ってもおかしくないわ。

（も、もしかして私やシグナムもそういう目で見られて・・・！きゃぁぁぁぁぁ♪）

両手を頬に添えていやんいやんと顔を振る。嫌とか気持ち悪いとかそういった気持ちは全くない。むしろ大人っぽくて欲とか自制できそうなルシル君も、ちゃんと健全な男の子だってことが判って逆に安心したわ。あ、でもはやてちゃんとのそう言ったお付き合いはもっと大人になってからね。

「と、とりあえず、どんな本なのかしら・・・」

掃除機のノズル先端のT字ヘッドを使って、ベッド下にある硬い物を取り出そうと試みてみる。んしょ、んしょ、ちょっと苦戦しちゃったけど「取れた♪」ベッド下から取り出せた。出て来たソレは1冊の「アルバム・・・？」だった。

Hな本じゃなくて写真ってことになると、いよいよ被写体が誰か？になってくる。ドキドキしながら手に取って、ごくっと唾を呑む。恐る恐るアルバムのカバーに手を掛けて、目を細める。そして・・・「えいっ！」バッとアルバムを開いて、そっと目を開ける。

「・・・・」

写真は確かに入れられてた。でも被写体は私やシグナムじゃなくて「ルシル君・・・」だった。とりあえず2枚目、3枚目とページを捲っていく。写真にはどれも「ルシル君の寝顔、料理中、掃除中・・・って、学校のまで！？」ルシル君が写っていて、さらには確実に盗撮された物だった。このアルバムの持ち主は「アイリちゃん・・・」で間違いない。アルバムをそっとベッド下に戻して、私は退室した。

†††Ｓｉｄｅシャマル⇒はやて†††

「今日の図画工作は、明後日の日曜日――母の日のプレゼントを作りたいと思います。お母さんへの感謝を込めたメッセージカードや、折り紙でカーネーションを作りましょう」

今日の授業の最後は図画工作。特別教室の図工室で、４人掛けの大きな作業台に着いて、先生から授業内容を伝えられた。そう言えば去年はこんな授業あらへんかったな。

「作り方の描かれたプリントと折り紙、それにカードと封筒を配ります。折り紙は予備がたくさんあるので、必要になったら取っていってください」

先生から白紙のカードや折り紙が配られた。プリントに描かれたカーネーションの作り方は数通りもあって、平面的な折り方、立体的な折り方、カッターでの切り絵、ハサミでの切り絵もある。

わたしが着いてる作業台にはルシル君、アリサちゃん、アリシアちゃんの４人。隣にはすずかちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、シャルちゃんの４人が座ってるから、アリシアちゃんが以前言うてた通り「ねえねえ、みんなはどのカーネーション作る？」早速お喋りを開始。

「あたしはそうね。・・・時間もあるし切り絵をやるわ。カッターマット借りて来なきゃ」

まずアリサちゃんが難易度・高のカッターでの切り絵に挑戦するこ

とを宣言して、図工室後ろにある棚に向かった。すると「私もそっちにしようかな♪」すずかちゃんも続いて席を立って、アリサちゃんの後を追った。

「私は～・・・、ハサミで切り絵やってみようかな♪」

「それじゃあ私も、なのはと同じやつにしようっと♪」

なのはちゃんとシャルちゃんはハサミを使っての切り絵を選択。そんでわたしは「今年は家族の分を作るつもりやから、あんま手の掛からんやつやな」そう言うて、プリントの立体折り紙の絵を指差す。平面の方が簡単で手間も掛からんやろうけど、立体の方が見栄えも良えから立体を選んだ。

去年は本物のカーネーションをシグナムとシャマルとアインスに贈って、ヴィータと生まれたばかりのリインにはお菓子を上げた。なんや"母"の日を度外視してるけど、シグナム達にはお世話になってるからな。それで構わへんって思うてる。あー、あと勤労感謝の日にも贈り物してる。

「な？　ルシル君♪」

「そうだな。今年は手作りのカーネーションをシグナム達に贈ってみようか」

そうゆうわけでわたしとルシル君は立体カーネーションを折ることにした。必要な枚数を手に取ってる中、ルシル君が「で、アリシアはどうするんだ？」って訊くと、「ふっふ～ん。切り絵以外全部！」

なんて大それたことを言うた。

「まぁそういうわけだから、私とアリシアで全種の花束を作ろうと思うんだ」

フェイトちゃんが苦笑いを浮かべて、早速アリシアちゃんと2人で立体と平面両方のカーネーションを折り始めた。そやから「負けてられへんよ、ルシル君！」わたしも、「ああ、派手な花束を作ってやろじゃないか！」ルシル君と一緒にカーネーションを折り始める。すずかちゃんやアリサちゃん、なのはちゃんやシャルちゃんもそれぞれ作業に入った。

「それにしてもアリシア。はやてや俺のように家族分を作るなら解るが、リンディさん1人にそんなに作ってどうするんだ？　エイミィにも贈るのか？」

「は？　ルシル、忘れたの？　わたしとフェイトにはママが2人いるんだよ」

「プレシアさんのための・・・」

「そう・・か。あぁ、そうだったな。失念していた。すまない」

深く頭を下げるルシル君に、「わわっ、良いから、そんなことしないでも！」フェイトちゃんが大慌てで頭を上げさせた。アリシアちゃんも「わたしもなんか言い方キツかったよね・・・。ごめんね、ルシル」そう謝って、話を戻すために3人で笑顔を浮かべ合った。

「えっと、わたしとフェイトもね。はやてと同じ、ママの写真に供えるの」

「エイミィが砕け得ぬ闇事件の時、私たちが母さんやリニスと一緒のところの写真を撮っていてくれたからね」

以前、ハラオウン邸に遊びに行って、フェイトちゃんとアリシアちゃんの部屋に招かれた時に見してもろうたけど、家族、そう一言で言い表せるほどにとっても綺麗な写真やったこと思い返す。そやけどうちの八神家集合写真も負けてへんって自信はある。

「ちょっと休憩〜。・・・ところで。父の日にはなんの花を贈るのが良いか知ってる？　あ、フェイトは知ってるから、しぃー、ね」

集中しすぎて話もせんまま作業が終盤になってきた頃、アリシアちゃんが唐突に話題を振ってきた。母の日に比べて影の薄いって言われてる父の日。その日にも贈る花があるってゆうんは初耳で、少し考えた後にみんなと一緒に首を横に振った。

「むむ。ルシルだけ首振らなかったね。ひょっとして・・・知ってる？」

「俺の知識量を侮るなよ、アリシア」

そう自信ありげに微笑んだルシル君が最後のカーネーションを作り終えて、シグナムとシャマルへのカーネーションの花束を完成させ

た。アリシアちゃんが「じゃあ答えを言ってみて」そう促すと、「薔薇だろ」ルシル君は即答したんやけど・・・。

「え、バラ！？」

わたしの驚きを筆頭に、「なんかイメージと違うわね」アリサちゃんは唸って、「男の人から女の人に贈る花ってイメージが強いもんね」すずかちゃんも同意した。それに「花を贈ること自体が初耳だったよ」なのはちゃんや、「Ｓｔ・オルフェンにもそういう日を制定するように働きかけてみようかな」シャルちゃんが感心した。

「薔薇の色によって意味は違うから、それを考えて贈ると良い。黄色は献身、白色は尊敬、赤は愛情。まぁ、薔薇じゃなくてひまわり、百合、蘭などと言った花を贈るのも良いらしい」

みんなで拍手を送ってると、「じゃ、じゃあこんな話は知ってる？　くしゃみの回数別の意味！」アリシアちゃんが作りかけのカーネーション、その最後の1本をルシル君にビシッと突き付けてそう訊いた。緑の折り紙で作られた茎からポーンっとカーネーションの花が飛び出して、ルシル君のおでこにヒット。

「父の日が関係無くなってるぞ」

作業台に落ちたその花をアリシアちゃんに放り返しながら「ま、いいか。諸説あって必ずしもそう、というわけじゃないが・・・」ルシル君は答え始めた。

「まずは、一誹り二笑い三惚れ四風邪。１回目は批判、２回目は笑い者に、３回目は惚れられ、４回目は風邪という意味だな。どの諸説も基本的に４回目は風邪とされているわけだ。２つ目は一に褒められ二に憎まれ三に惚れられ四に風邪をひく。３つ目は、二の憎まれがフラれに変わる」

「むむぅ、正解だよ・・・。じゃあ――」

アリシアちゃんからの知識戦の挑戦は授業が終わるまで続いて、最終的には８戦８勝でルシル君の完全勝利で終わった。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒シグナム†††

日曜日ということで休みだったはずなのだが、隊からの緊急招集で私とヴィータ、それぞれの緊急時のパートナーとしてリインとアイリが同行し、シャマルは医務官として、ザフィーラはシャマルの護衛として、我らと現場へ。そこで暴れていた武装強盗団を壊滅させてやった。家族揃っての休暇を邪魔された恨みを一緒にぶつけさせてもらったわけだ。

「大変だったわね～」

「雑魚いクセに数だけ多かったのがウザかったよな」

「そのくせ一般人を平気で魔法で傷つけるしね」

「だからこれまで以上の本気でやっつけてやったです！」

そして無事に仕事を終えてヴィータ達と共に家へと帰ると、「すげぇ良い匂い！」ヴィータがダイニングより漂ってくる夕飯の香りに誘われ、「ただいまー！」すごい速さで部屋を飛び出して行った。

「あらあら、ヴィータちゃんたら」

「しょうのない奴め」

「アイリやリイン以上に子供だね♪」

「ですぅ♪」

我々もトランスポーターが設けられた部屋より出、洗面所へ向かう前に「ただいま帰りました」「ただいまです♪」「ただいま～」リビングに顔を出して挨拶をする。

「おかえり、みんな！」

「おかえり。早く手を洗ってくると良いよ」

キッチンで調理している主はやてとルシリオンから挨拶を受ける。そして先に行っていたヴィータは「あ～ん♪」主はやてからエビチリを1つ貰っていた。

「はやてちゃん、リインも！」

「ルシル、アイリも！」

それを見ていたリインとアイリもキッチンへと走って行った。お前たちも十分子供だよ。私は苦笑しながら洗面所へ向かおうとした時、「おーい、シグナム、シャマル、ザフィーラ～♪」主はやてに呼ばれた。右手の菜箸には同様にエビチリが1つ。左手は手招き。表情は満面の笑顔。さすがにこれは断ることが出来ない。シャマルは迷うことなく即座に向かい、「あ～ん♪」主はやてからエビチリを頂いていた。

「シグナム・・・」

「判っているザフィーラ」

ザフィーラと共にキッチンへ向かい、「はい、シグナム。あ～ん♪」主はやてからエビチリを頂き、「あ、あ～ん。・・・とても美味しいです、主はやて」お礼を言う。

「そっか♪」

ソースも自家製で、正しく八神家の味というものだ。それから我々は洗面所で手洗い、自室で私服へと着替えてリビングに戻ってくると、夕食の準備を終えたところだった。それぞれ席へと着いた時・・・

「わたしとルシル君からみんなへの日ごろの感謝を込めて、今日は、みんなが好きな中華料理を御馳走することにしました♪」

中華料理は和食と並んでオーディンからその存在を教わった料理だ。ゆえに自然と洋食以上に好んでいるのが我々だ。まぁ一番は和食、しかも主はやてがお作りになったものだが。

「今日は世話になっている母親を祝う日だが、俺やはやてはみんなから母親以上に支えてもらっているからな。そのお祝いだ」

テーブルに並べられた豪勢な中華料理が、我らの為に作られたというのはとても嬉しかった。家族みんなで「いただきます！」と手を合わせ、主はやてとルシリオン手製の中華料理を頂く。どれも店などで食べるよりずっと美味い。主はやてとルシリオンの想いが詰まっているからだろう。そして談笑しながら食事を終え、片付けも一段落して思い思いにリビングで寛いでいると・・・

「みんなに渡したいもんがあるんやけど、受け取ってもらえるかな」

主はやてとルシリオンがそれぞれの自室へと向かい・・・戻ってきた。その手に携えていた物を見たシャマルが「すごい♪」が歓声を上げ、「折り紙で出来てんのコレ！」ヴィータや、「すごいです！」リイン、「手作りなんだね！」アイリが驚きを見せた。

「ルシル君と合作の手作りのカーネーションの花束と、それに・・・」

「メッセージカードとお菓子を用意したんだ。受け取ってほしい」

主はやてとルシリオンからの祝いだ。受け取らないわけがない。２人の元へ小走りで駆け寄る。

「はい、シグナム。いつも将として頑張ってくれて、おおきにな」

「いえ！　こちらこそいつもありがとうございます！」

主はやてから折り紙で作られたカーネーションの花束と、花の間に挟まれた２枚のメッセージカードを受け取る。それからシャマルも「うぅ、嬉し過ぎて泣いちゃいます～」半泣きで大喜び、ザフィーラも「こちらこそ感謝しております、主」静かに感謝を述べ、「ありがと！　はやて、ルシル！」ヴィータも花束やカードだけでなく、追加の菓子にも喜びを見せた。

「リイン。いつもおおきにな」

「リインこそありがとうですよ、はやてちゃん！」

「じゃあ、アイリには俺から渡そうか。アイリ、ありがとう。俺たちみんなの支えになってくれて」

「～～～～っ！　アイリも今では八神家だもんね！　支え合うのは当たり前だよ♪」

思い思いに主はやてとルシリオンに感謝を返す。手作りというのがまた愛おしい。メッセージカードにも、感謝ばかりが綴られていて、その温かな想いがさらに私の原動力となり、強くする。そして思い

もまた強くなる、この現在(いま)を守りたい、と。その為にも私はもっと強くならねばな。

Ｅｐｉｃｏ４９－Ａ大力は禍の元

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「それじゃあ、みんな。今晩は帰りが遅くなるやろうから、ごめんやけど・・・」

はやてが、俺と彼女を見送りするために自宅のトランスポーター室に並んでいるシグナム達に謝る。俺も「すまないな。今日1日、はやてを独り占めさせてもらうよ」そう謝りながら、オシャレをしているはやてを一度見た。空色のキャミソールワンピース、白色のキュロットスカート、おそらくタヌキのものであると思われる耳の付いたクリーム色のパーカといったコーディネーションだな。

「リインは気にしないですよ、ルシル君♪」

「てか、はやてを危ない目に遭わすようなことはすんなよ」

「判っているさ。はやての安全は最優先だろ」

ちなみに俺は、白のＴシャツの上に灰色のパーカ、さらに黒のジャケット、デニムパンツといった感じかな。オシャレしたはやてに恥をかかせないように、それなりにオシャレをしてみた。

「むぅ。アイリもルシルと2人きりでデートした～い」

そう言ってアイリが俺の腕を引っ掴んで剝れ顔になった。はやての誕生日、６月４日の翌日である５日の今日、俺とはやてはデートすることになり、これからミッドチルダは中央区画の第２湾岸地区に新しく出来たアミューズメントパーク――遊園地へ遊びに行く予定だ。

・―・―・回想だ・―・・―・

八神邸でのバースデーパーティをチーム海鳴全員で催して、はやてを盛大に祝った。なのは達だけで豪勢な料理や、なのはの母親である桃子さん直伝のケーキを協力して作ってくれた。去年もそうだったが作る人によって味が千差万別なため飽きが来なかった。そんななのは達のお手製料理を美味しく頂き、食器類などの片付けも全て終わって、プレゼントをはやてに渡す時間となっていた頃・・・

「ル、ルシル君・・・！」

なのは達からのプレゼントに囲まれていたはやてが、まるで意を決したかのように真剣な顔をして俺を呼んだ。シャルとアリシアのコップにジュースを注ぐという接待中だった俺は「ああ、すぐ行くよ」そう応え、２リットルのジュースのペットボトルを「あとは自分でやってくれ」そう言ってシャルに渡す。

「うっそ～ん！　アリシアは注いで、わたしはセルフってどういうこと！？」

ぷくぅ～っと頬を膨らませたシャルが、渡したばかりのペットボト

ルを俺の頬にぐりぐりと押し付けてきた。俺は「今日の主役ははやてだからな」と、ペットボトルを押し戻してはやての元へ向かう。背中に「バーカ、バーカ！」シャルからの悪態が浴びせかけられるがスルー。

「はやて、どうした？」

「えっとな。ルシル君にももうプレゼント貰たんやけど・・・。その、な・・・」

はやてがモジモジして言い淀む。もうプレゼントを貰たんやけど、というワードから俺に何を言いたいのかを推察する。もう貰った。だけど。その2つのワードでなんとなくだが判ったから「何か他に、俺に願い事あったりするのか？」そう訊ねてみた。

「っ！　えっと、・・・うん」

「はやてばっかりずるい～！　アイリにもプレゼントちょ～う～だ～い～！」

「アイリも誕生日になったらあげるからな」

そう言うとアイリは表情を曇らせて「アイリ。誕生日なんて知らないもん」そう呟いた。そう言えば、アイリもそうだがアギトの正式な誕生日（正確には製造日だが、そういう言い方は嫌いだ）は不明だよな。だから「あ・・・」俺は失言したことを後悔した。

「シグナム達は知らないのですか？　アイリの誕生日」

「ああ。同様にもう1人の融合騎のアギトのことも知らない」

「あたしも知らねぇよ、さすがに」

「オーディンさんがアイリちゃんやアギトちゃんと言った融合騎のデータを確認しようとしたけど、開発室はメチャクチャにされて隠滅されたみたいだから」

シャマルの話に、そうだったな、と思った。技術室は"堕天使エグリゴリ"の誰か（焼かれていたことからバンヘルドの仕業だったんだろうな）によって徹底的に破壊されていたからな。ベルカの時も誕生日を祝うなんて余裕が無かったからなぁ。むぅ、このめでたい日に相応しくない空気が・・・。

「それやったらアイリの好きな日を誕生日にすればええんやない？」

そんな中、はやてがそう提案すると「じゃあ、2月5日にしよう！」アイリは思案する間もなくそう宣言した。

「2月5日って、ルシル君の誕生日だよね」

「そうだよ、なのは。好きな日を誕生日に出来るなら、やっぱりルシルと一緒が良い～♪」

俺の右腕にしがみ付くアイリをみんなが微笑ましく眺めた。そして

みんながまたトランプなどを使って思い思いに過ごし始めたのを確認して「それで、はやて。俺に願い事があるらしいけど」話を本題に戻す。はやては、自分の膝の上でマシュマロを美味しそうに頬張るリインの頭をそっと撫でた後、深呼吸を2度ほどした。

「ル、ルシル君！」

「は、はい。なんでしょう」

はやての鬼気迫る表情と声に思わず敬語で返してしまう。リインも不思議そうな顔をしてはやてを見上げる。

「わ、わたしと・・・デ、デートしてほしい！」

顔を真っ赤にしたはやてが願い事の内容である、デートがしたい、と告げた。はやてのその言葉を聞いたことでリビングの時間がピタッと止まったかのような錯覚が生まれた。シャルなんて目をカッと見開いて、心なしか耳をピクッとさせているように見える。

「デート？　いいぞ。というか、そういう約束していたしな。行こう、デート」

去年の11月のシャルの誕生日の時、2人でどこかに出掛けようと約束していた。だから俺は即OKを出す。はやては「良かったぁ～」とホッとして、リインは「良かったですね、はやてちゃん♪」と笑顔を振りまいた。さて。シャルの方はと言うと・・・

「うん。楽しんで来ると良いよ、はやて。ルシル、しっかりエスコートしなきゃダメだよ？」

サラリとＯＫを出した。アリサが「驚いたわね」とシャルを見れば、「反対はしなくても渋るくらいはすると思ったけど・・・」フェイトもそう言って、シャルの素直さに不思議がっていた。

「ふっふ～ん。ここで渋るなんてナンセンスだよ。去年、わたしもルシルとデートしたけど、そん時に色々と邪魔が入ったんだよね。だから邪魔された時の気持ちは誰よりも深く知ってる。そういうわけで、わたしは笑顔ではやてを送り出すつもり♪」

そう力説してピースサインをしたシャルに、なのは達が「おお！」拍手を贈った。

・―・―・終わりだ・―・―・

アイリまでもが俺とデートしたい（一緒に寝るだけじゃ不満なようだ）と言い出したため、「判った、判った。いつか行こうな」そう言って頭を撫でてやると、「やった！　約束だよ♪」アイリは小指を立てた。指切りだ。だから俺も小指を立て、アイリの小指と絡ませた。

「指切りげんまん、嘘吐いたら凍らせてく～だく♪　指切った！」

アイリのアレンジがされた歌に俺たちは苦笑した。

「じゃ、そろそろ行こうか、はやて」

「うんっ！」

トランスポーターに入り、システムを起動。そして転送が始まり、「行ってきます！」シグナム達に手を振ると、「いってらっしゃい！」手を振り返してくれた。転送の光で視界が白に染まり、治まった時にはすでにそこは本局・技術部区画の最奥、第零技術部。通称スカラボのトランスポーター室。

「ドクターもシスターズも居らへんな・・・」

「この時間に使用することは断っていたんだが・・・」

トランスポーター室には誰も居なかった。私用で使わせてくれたことに対して礼の1つくらいはしたかったんだが。そう思っていたところに「あれ？　はやてとルシルだ。もうそんな時間だっけ？」奥の頑丈そうなスライドドアが1人の少女がやって来た。セイン・スカリエッティだ。

「こんにちは、セイン。ドクター達は居る？」

「ん、こんちは、はやて、ルシル。居ることは居るけど、ドクターやウーノ姉はちょっと忙しいから応対は出来ないんだよ。ドゥーエ姉たちも空けてるし」

聴けばドゥーエは情報部の新人研修への教育隊の1人として参加し、

トーレは戦技教導官の資格を持っているため武装隊の演習に行っており、クアットロもまた教育隊として空け、チンクはお遣い（想像したらなんか微笑ましくなった）で居ないとのこと。そしてドクターとウーノは・・・

「なんか通信相手といろいろと言い争っててさ。ドクターのマジギレっぷりが恐くてあたしだけ逃げて来たわけ。ウーノ姉もドクターを宥めるので精いっぱいみたいだしさ」

セインがそう言って、不安そうにスライドドアの方に振り向いた。先の次元世界とは違ってアホなドクターがキレている姿が想像できない。はやても「なんや大変やね」不安な面持ちだ。俺はその通信相手のことが気になったため「誰と話していたんだ？」と訊いてみた。

「モニターにはＳｏｕｎｄ　ｏｎｌｙってあったから顔は知らないけど、お兄さんみたいだったみたいだよ。ドクターも、兄さん、って呼んでいたし」

「兄・・・だと・・・・！？」

「へぇ～。ドクター、お兄さんが居るんか～。初めて知った～」

耳を疑った。ジェイル・スカリエッティに兄が居る。有り得ない。スカリエッティは最高評議会がアルハザードの技術を使って生み出した人工生命体だ。しかし、スカリエッティが言い争うような相手が居るのもまた事実。それにこれまで奴と接してきた俺の勘が、ス

カリエッティを信用して良いと告げて来ている。

「ドクターにお兄さんが居ったのもビックリやったけど、あのおとぼけドクターが怒鳴るなんて想像できひん」

「そうだな～。日頃のドクターを見ていれば信じられないよな～」

演技じゃないんだ、ドクターやシスターズの間抜けっぷりも。ドクターは無実だ、ドクターに兄が居る、という情報を前提にすることでとある推察が1つ立った。それを証明するためにも通信相手を探った方が良いのかもしれないな。

「そういうわけだからさ。あたしひとりだけの出迎えだけど、それで勘弁してね」

手を合わせて謝るセインに続いて応接室へと向かい、「バイバーイ♪」そのままセインに見送られながらスカラボを後にして、ミッドへと降りるために次元航行船の定期便の発着場へと向かった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒はやて†††

本局からミッドへの次元航行船の定期便に乗ってやって来たんは、第1世界ミッドチルダは首都クラナガン。夏が近くなって気温が高くなった海鳴市に比べれると、まだまだ春って感じの温かさや。

「えっと、遊園地に行くには・・・っと、アレに乗れば良いんだな。ほら、はやて、出発される前に乗ろう！」

「あっ、うんっ！」

ルシル君と一緒にバス停に向かって、路線を確認したルシル君がわたしの手を握って引っ張ってくれた。バスに乗り込んで空いてる席に座る。公共交通機関は基本的に地球と変わらへんから迷いなく乗れる。とは言うても、これまで何度も経験してるから迷いも何もあらへんけどな。

「ルシル君、なんかおやつ食べるか？」

「ああ、貰うよ」

膝に乗せてたポシェットを開けてガサガサと中を漁って、数十個入りのクッキーの袋を取り出す。そんで封を開けて、2枚入りの小さな袋に入ったクッキーを「はい、どうぞ」隣に座るルシル君に渡す。わたしも1個貰おう思うて取り出そうとした時、「はやて」ルシル君に呼ばれたから隣の席に顔を向けた瞬間、「はむ・・・？」唇の間にクッキーを挟み込まれた。不意打ちのあーんやった。

「お、おおきになルシル君♪」

ちょうビックリしたけど進んであーんしてくれたことが嬉しかった。わたしはルシル君から貰ったクッキーを食べ終えて、別のクッキーの袋を開封。シャルちゃんならきっと口に挟んだ上でルシル君に食べさせるようなトンデモ級な事をするんやろうけど、わたしにはそんな勇気も度胸もあらへん。そやから・・・

「はい。ルシル君。あ～んや♪」

「ありがとう、はやて。あーん」

ルシル君にもクッキーをあげて、２人で微笑み合う。あぁ、最高や～って幸せを噛みしめてると、「可愛い」とか「青春ね」とか、ご年配のお客さんがわたしらを見て微笑んでた。恥ずかしいやら照れくさいやらで顔が熱くなってしもうた。対するルシル君は涼しい顔で、「もう１枚食べるか？」なんて言うてきた。当然わたしは・・・

「いただきます♪」

こんな機会はそうそうあらへんやろうからどんな視線も受け流して見せる。ルシル君が差し出してくれたクッキーを「あ～ん♪」パクッと頂く。美味しいクッキーがルシル君の手から貰えたことでさらに美味しさ倍増や。

それからバスに揺られること３０分ほど。到着したんは首都クラナガンや地上本部の在るミッドチルダ中央区画、その第２湾岸地区。そこには１週間後に一般開園される遊園地、ファンタジアパークがある。本来ならお客さんが入れへん期間中やけど、わたしには一般開園前の今日、先行入園できるプレミアムチケットがある。

（おおきにです、リアンシェルト総部長・・・！）

わたしにプレミアムチケットをくれたリアンシェルト総部長に心の

中で感謝した。

・―・―・回想や～・―・―・

わたしら八神家は今、特別技能捜査課のオフィスで、現場に行かへん時の仕事である書類の作成や整理をしてる。わたしらはもうデスクワークはお手の物やけど、「んみゃぁ～！」デスクワークが苦手なアイリがデスクで絶叫した。ヴィータが「うっせ～よ」注意する。

「むぅ～」

「見せてください、アイリ。リインも手伝うですよ」

すぐにフォローに入るんはたまたまアイリの一番近くに居った、アイリと同じ融合騎のリインや。八神家の中ではまだ特捜課の経験は浅いけど、それでもデスクワークはもう完璧って言うほどにまで出来てる。アイリは半泣き状態で「ありがと～」お礼を言うて、リインと一緒に書類を片付け始めた。すると「リインちゃ～ん。あんまり手伝っちゃダメよ～」別のところからそんな注意が飛んで来た。

「トゥーリア一尉、はくじょ～」

アイリが声の主やったトゥーリア・サクロス一等陸尉にそう返した。ふんわりした青いセミロングの髪を耳に掛けながら「ダ～メ。クーとナージャが居ないうちは私が責任者だから」ってニッコリ微笑んだ。

「安心して、アイリ。私はクーよりは厳しくいかないから、まずはミスありでも良いから自分の力でやってみて。間違いがあればその都度修正。習うより慣れろ作戦ね」

「あぅ〜」

デスクに突っ伏すアイリには「頑張れ〜」って応援するしかなく。リインも「アイリ、ファイトです♪」わたしのデスクに戻ってきた。そんでアイリは「もう、もう、もう〜」ぶつぶつ文句を言いながらもキーボードを操作し始めた。

「あの、トゥーリア一尉。お手洗い行ってきます」

「は〜い」

ルシル君が居れば声を大きくしてそんなこと言えへんけど、今日もルシル君は内務調査課の査察課の研修で別行動や。許可を貰ったわたしはオフィスを出て、そんでお手洗いを済ませて手を洗ってると、隣の手洗い場に誰かが立ったんが判った。俯いてた顔を上げて鏡を見てみれば「っ！」ビックリした。

「こんにちは、はやてさん」

「こんにちはです、リアンシェルト総部長」

リアンシェルト総部長と挨拶を交わす。手を洗い終えた後、ハンカチで濡れた手を拭きながら「お先に失礼します」ってお手洗いを出

た時、「待ってください」呼び止められてしもうた。運用部の一切合財を取り仕切る総部長に呼び止められるなんてとんでもなく緊張してまう。同じようにハンカチで濡れた手を拭き終えたリアンシェルト総部長は、「えっと・・・」制服の胸ポケットから1つの封筒を取り出した。

「あなた、こういうのには興味ない？」

差し出された封筒を受け取って「拝見します」一言断ってから封筒を開けて中身を確認する。それは「遊園地のチケット、ですか・・・？」観覧車やジェットコースター、あとマスコットキャラと思しき動物のイラストが描かれてる。

「あの、コレ・・・」

「再来週末にオープンするらしい遊園地の、オープン前に先行入園が出来るチケットって聴いたのだけど・・・」

「ペアチケットですね・・・。どうしたんですか？」

このチケット1枚で2人しか入られへんようや。リアンシェルト総部長は「貰いものだけど、相手が居ないし興味も無いし。良かったらどうぞ」そう言うて微笑んだ。でもなぁ、ペアチケットってことは誰か2人しか行けへんってことやから、家族みんなはアカンわけやし。お断りするべきかな～。

「ルシリオンを誘ってみたらいいのでは？　確かあなた、来週が誕

生日だったと記憶しているけど」

「え゛っ！？　た、確かに誕生日ですけど、ど、ど、どうしてそこでルシル君の名前が・・・！？」

わたしがルシル君が好きってことがバレてるからこそ言えるそのセリフに動揺してまう。わたし、リアンシェルト総部長にルシル君が好きって言うた憶えなんてないし。誰かが喋った、としか考えられへん。じゃあ一体誰が・・・。

「あなたの態度を見ていれば自ずと至る解です」

サラッと言われた。わたしは「そ、そんなに判りやすいですか・・・？」って訊いてみると、「よほど鈍感でなければまず。恋をしたことがある者なら確実に」リアンシェルト総部長はそう言うと寂しげに笑うた。

「リアンシェルト総部長は・・・どっちですか・・・？」

「・・・後者です。現在進行形で恋をしてます。・・・秘密、ですよ？」

失礼かもしれへんけど気になってしもうたからそう訊ねてみたらそんな返答が。人差し指を自分の唇に当ててそう言うたリアンシェルト総部長の表情は変わらず寂しげで、そやけど笑顔ってゆう不思議なものやった。

・―・―・終わりや～・―・―・

リアンシェルト総部長から貰ったこのチケットのおかげで、わたしはルシル君をデートに誘うことが出来たから、感謝してもしきれへん。

とんでもなく広い駐車場に停車したバスを降りて、入場ゲートの方へと歩く。同じバスに乗ってた乗客のほとんどもここが目的だったみたいや。それに観光バス程の大きさな車両が続々とガラガラな駐車場に入ってくる。そう言えばチケットにはナンバリングがあって、確かわたしのチケットには４８８番って記されてたはず。チケット１枚で２人やから、最低でも１０００人近くがここに集まる計算や。

「入場ゲートにはすでに列が出来始めているな。行こう、はやて」

「うんっ！」

さっきみたくわたしの手を取って歩きだすルシル君に続いてわたしも歩を進める。列に並んでる人やわたしらみたく今から並ぼうとしてる人の大半はカップルで、他の人から見たらわたしとルシル君はどない名風に見えるんやろうか、ってちょう気になってみたり。

『本日は当アミューズメントパーク・ファンタジアパークの先行開園にお越しいただきありがとうございます。これより開園いたしますので、入場ゲートにて係員にチケットをお渡しください。そしてフリーパスの機能を有したリストバンドを手首に付けてもらってください。それでは閉園時刻の２２時までどうぞお楽しみください』

それからしばらくすると入場ゲート上に横に長いモニターが展開されて、メッセージと音声が流れた。前に並んでる人たちがわっと動きだして、続々と入場ゲートの改札を通り過ぎてく。

「いらっしゃいませ、お客様。チケットをお願いします」

「あ、はい」

係の女の人にチケットを渡すと、「ありがとうございます。それではどちらかの手をお出しください」わたしは右手首に、そんでルシル君は左手首にプラスチック製らしきリストバンドを巻いてもらって、「ではお楽しみくださいませ！」ここの地図も一緒に貰った。

「まずは・・・ジェットコースターからやろ！」

「初っ端からそこ行くのか？　いいだろう、どうせならフルコンプする気で行こう！」

「オッケーや！」

ルシル君と手を繋いで、わたしはお目当てのアトラクションに乗るために走った。

Ｅｐｉｃｏ４９－Ｂ大力は禍の元

†††Ｓｉｄｅはやて†††

パンフレットに載ってる地図通りに敷地内をルシル君と手を繋いで走って、後々に混雑することを見越して真っ先にジェットコースター攻略に向かう。目指すは全長３．８ｋｍってゆう長さを誇るジェットコースターの乗り場。

「ここのジェットコースター、それぞれ長所別に何種類もあるようだな」

パンフレットのアトラクションの説明欄を読むと「みたいやね。速度一、高低差一、全長一、仕掛け一などなど」の種類別のジェットコースターが８基くらいある。

「もちろん・・・？」

「フルコンプや！」

ルシル君と笑い合って、目的のジェットコースターの乗り場に到着。すると係員さんが「お席は空いてますよ。どうぞ！」って、わたしとルシル君をコースターのあるホームへ上がるための階段を開けてくれた。一応、キュロットスカートってゆう股下のあるスカートやから下着が覗かれることはないんやけど、「俺が先に行くよ」ルシル君が先に階段を上がってくれた。ん～、紳士やね～。

「こちらへどうぞ～。足元にお気を付けてください」

ホームに上がると、コースターにはすでに他のお客さんが乗り込み終えてて、別の係員さんがわたしらを最後尾席に案内してくれた。まずルシル君が奥の席に入って「はやて。手を」座る前にわたしに手を差し出してくれた。わたしは「おおきにな♪」その手を取って、隣の席に立つ。そんで2人一緒に席に座って、安全バーを降ろした。

「あなたにもあれくらいの紳士さがあれば・・・。男装してる女の子に負けてんじゃない」

「いや、俺には無理。なんか恥ずい」

そんなところに、前のカップルさんが今のわたしとルシル君のやり取りのことでそんな会話したんやけど。ルシル君が「男装女子・・・俺のこと？」ガーンとショック受けてもうた。服装は完璧に男物なんやけど、やっぱ顔立ちが女の子寄りやからかな～。

「気にせんで、ルシル君。ほら、そろそろ動くようや」

発車を報せる音色がホームに鳴り響いた。そんでゆっくりとコースターが前進しだして、坂道を登り始める。上昇から急降下するまでのこの短い時間のドキドキ感がたまらへん。とうとう上り坂の頂上に着いて、ガタンとコースターがゆっくりと下りに入った。となれば後は一気に「ふぁ・・・！」加速しての急降下。

「海底トンネル・・・・！」

レールの先には海が広がってて、海中へと続くトンネルが設けられてた。トンネルに侵入するその瞬間、入り口の周りから水柱が幾つも噴き出して来た。

「うぉ、冷たい！」

「おお、すごい！　透明なトンネルや！　海中の透明度もすごいし、海の中を走っているって感じみたいやな！」

透明な海中トンネルの中をすごい速さで走ってくコースター。海ん中をこんな速さで通過できるなんて夢みたいや。海中トンネルを抜けた後は、コースに沿って右に左に曲がっての横Gに翻弄されて、上昇からの下降にはふわっと無重力を感じて、ループ時はルシル君と一緒に「おおおおお！」万歳して、3分と長いような短いコースターを楽しんだ。

「ルシル君、次は速度一に行こ！」

「あ、ああ！」

今度はわたしがルシル君の手を引いて、ここから近いジェットコースター乗り場へダッシュ。すでに楽しんだらしいお客さんとは入れ違いにホームへ上がる。そんで係員さんの案内で先頭車両の一番前の席に座ることになった。

「一番楽しめる席になったな」

「そうやね～。迫力ありそうや」

席に着いて少し、他の座席も埋まったことで「カウントダウン、開始！」係員さんの号令で『Ｓｔａｎｄｂｙ　！　４，３，２，１，Ｆｉｒｅ　！』そんな音声が流れた瞬間、コースターがものすごい速さで発進して、「ふぁ・・・！？」かなりのＧが掛かった。飛行魔法で飛ぶ時のＧとかの諸々は魔法で制御できるから気にならんけど、やっぱこうゆうのが当たり前なんやもんな～。

「すごい加速だな」

一瞬で最高速に至ったコースターはループを繰り返しては、さっき乗ったばかりの全長一のコースの真下を通ったり並んだりする。後ろのお客さん達は歓声や悲鳴を上げてるけど、わたしはあまりの風圧に口も開けらへんし、この速度で体の自由が無いってゆうんは初めての体験やから・・・

「ちょ、ちょう怖い・・・な・・・」

「大丈夫だ。俺がついてる」

「っ！　ルシル君・・・」

安全バーをギュッと握るわたしの右手に、ルシル君が左手を添えてくれた。わたしはバーから手を離して、ルシル君と手を繋ぎたいが

ために右手を翳す。すると人差し指から小指までの４本を握ってくれたから、「おおきに♪」わたしも握り返した。それからホームに戻るまでの1分ちょっとを色々なドキドキで過ごした。

「はぁ・・・、結構ハードやったな～」

「少し待っていろ、はやて。何か飲み物を買ってくる」

乗り場から少し離れたベンチに座って背もたれに体重を預ける。まさかここまですごいやなんて思わへんかった。そんなわたしのために飲み物を買ってこようとするルシル君を「待って！」制止して手招きして、そんで隣の空きをペンペン叩いて隣に座るように伝える。

「？・・・判った」

ルシル君は一度は小首を傾げたけど、お願い通りに隣に腰掛けてくれたから「こうしてれば問題あらへんよ～♪」わたしはルシル君の肩にもたれかかった。

「はやて・・・？」

「ちょっとの間、ひ～と～や～す～み～♪」

かなり大胆なアプローチに入ってるって思うけど、そろそろわたしも本格的に動いて行かなアカンと思うたから。さらに「出来れば頭も撫でてくれるともっと早く回復できると思うなぁ～」なんてネダったみた。

「ぷはっ。あははは！　あぁ、いいよ」

「おおきにな～♪」

うにゃ～ってなりそう・・・とゆうか、「うにゃぁ～　」なってしもうた。今なら告白できる・・・やろか。シャルちゃんも、トリシュも、アイリも、ルシル君にハッキリと好きって想いを伝えてる。そんならわたしも舞台に立つためにそろそろ伝えやなアカンって思う。覚悟を決めるために深呼吸を始める。

「あ、あの、ルシル君、あんな・・・！」

「ん？」

「あんな、わたしな・・・！」

そこまで言いかけたところで「あの、すみません」声を掛けられた。前の方を見れば女性２人が居って、おずおずとわたしとルシル君を見てた。わたしはハッとして「コホン！　な、なんでしょうか・・・」ルシル君にもたれかかってた体を戻して居住まいを正した。

「あの、管理局員の・・・ハヤテ・ヤガミさんと・・・」

拙い発音でわたしの名前を口にしたのは５０代くらいの女性の方で、「ルシリオン・セインテストさん、ですよね・・・？」ルシル君の名前を口にしたんは２０代くらいの女性。顔立ちが似てるから母娘

って感じやろうか。ルシル君と顔を見合わせて「そうですけど」ってわたしが答えると・・・

「やっぱりチーム・ウミナリの！　あたしと娘ね、あなた達の大ファンなの！」

「クラナガンでの事件で助けられたのよ、チーム・ウミナリに」

やっぱり母娘やった。そんなお2人から、リンドヴルムによる攻撃で大打撃を被った首都クラナガンでの出来事を話してもらえた。鋼の巨人アムティスの起こして竜巻によって倒壊したり吹き飛ばされたりしたビルの瓦礫に押し潰されそうになった時、アリサちゃんやフェイトちゃんの砲撃が瓦礫を破砕してくれたおかげで助かって、その後にわたしやすずかちゃんらの避難誘導で難を逃れたって。わたしの避難誘導も助かった一員やって話なんやけど・・・

（う～ん、憶えてない・・・かな～）

お2人の顔をよう見てみるけど、全然思い出せへん。そんなわたしの考えが伝わってしもうたみたいで「あはは。やっぱ憶えてないか～♪」娘さんの方が笑い声を上げた。

「まぁ、しょうがないわよね。あの時の避難民は何百人と居たから。でもね、あたしや娘にとっては忘れようのない、命の恩人なのよ。だからね、ちゃんとお礼を言っておきたかったの」

「ごめんね。えっと、デート中・・・だったよね？」

申し訳なさそうに謝る娘さんに「いえいえ、気にせんで下さい！」そう言うて両手を振る。ルシル君も「休憩中でしたし」微笑んだ。するとお2人も「ありがとう！」ホッと安心してくれた。

（ん～、ルシル君への告白はまたの機会やな～）

残念なような安堵したような複雑な気持ちや。まぁ、でもシャルちゃんやトリシュの告白もキッパリ断ってるし、今わたしが告白したところでＯＫが貰えると思うほど自惚れてへん。たぶん、この恋の戦いに勝つ条件はきっと・・・わたしらが告白するんやなくて、ルシル君に惚れさせて告白させることやって思う。

「それで、その・・・最後にお願いが2つほどあって・・・」

「あたしや娘と一緒に写真を撮ってほしいの。それとサイン！」

「「写真とサインですか？？」」

ルシル君と一緒に小首を傾げる。写真を撮られることは管理局の総務部・広報課の出してる広報紙なんかで慣れてるから気にならんけど、サインを求められるなんてこと初めてやからちょう戸惑ってしまう。

「サインなんて書いたことが無いので、単純に名前を書くことになりますけど・・・」

ルシル君がそう言うと「それで十分だから！」娘さんがグッと親指を立てた。とゆうわけで、まずはベンチに座っての４人揃って写真撮影。撮った後はサインなんやけど、娘さんがバッグの中から取り出したんは1冊のファイル。

「街中でいつ有名人に会っても良いように、サインを貰いたい人たちの写真や雑誌の切り抜きをファイリングしているんだけどね」

「教会騎士団の写真や切り抜きもあるんですね～」

ルシル君の言うように騎士カリムや槍のパラディン・パーシヴァルさん、剣のパラディン・プラダマンテさんなどなどと言った教会騎士団の有名人さんらの物もあった。そんで「この切り抜きにサインをしてほしいかな」って、娘さんがファイルから2枚の切り抜きを取り出した。

「わたしと・・・」

「俺の切り抜き写真・・・」

それは以前、広報課の取材ん時に撮ってもらった個人写真のもので、局員の制服と防護服の2パターンある。わたしとルシル君は差し出された2パターンの写真に名前を書く。カッコつけて芸能人さんみたくシャレた文字で書こう思たけど、そこまで器用やないし却下。普通に漢字で、八神はやて、って書いた。

（ルシル君はどんなふうに・・・って、おお！　カッコええな！）

外国人の書く1つ1つの文字を一筆書きしたかのような、ザ・外国人、って感じのカッコいいフォントで名前を書いてた。さすがやなぁ。とまぁ、そんなこんなでお2人と笑顔で、手を振り合ってお別れした。

「わたしら・・・ホンマに有名人なんやね～」

「ああ、まさかサインを頼まれるとは思わなかったな。サインなんて考えもしなかったから普通に名前を書いただけだ」

「わたしもや～」

2人で苦笑して、「行こうか」ベンチから立ち上がったルシル君が差し出してくれた右手を「うんっ！」取って、わたしも立ち上がる。次のアトラクションもジェットコースター・・・にしよう思うたんやけど、「とりあえず何か腹に入れよう」ルシル君がぐぅ～ってお腹を鳴らしたから・・・

「あはは♪　もうええ時間やし、どこか店に入ろか」

パンフの地図を見て、園内に点在するお食事処の店名を確認、そんで紹介欄を読む。いろいろな主旨のお店があってどれに行こうか迷うけど、手軽に食べられて、すぐにアトラクションへ向かいやすいサンドイッチ専門店に行くことに決めた。そうと決まればすぐに走ってお店に向かう。

「いらっしゃいませ～！」

メニューには何十種類ものサンドイッチ・・・だけやなくてハンバーガーやホットドッグのような物も網羅されてた。ルシル君は「まぁ、パンに具材を挟めばソレはサンドイッチだしな～」そう言うて笑った。それからルシル君とメニューを決め合って、「お願いしま～す！」早速注文。それから少し待つと・・・

「お待たせしました～！　ご注文のチップ・バティ、フランセジーニャ、パニーニ、クロックムッシュになります！」

フライドポテトをパンで挟んだチップ・バティ。カリカリなトーストにハムやトロトロに溶けたチーズを挟んだクロックムッシュ。トマトやレタスや薄切りにしたローストビーフ、それにモッツァレラチーズなどを挟んだパニーニ。ハムやソーセージを挟んだ食パンの上に蕩けたチーズと半熟目玉焼きを乗せて、トマトベースのソースがかけられたフランセジーニャの４品、あとわたしのカフェオレ、ルシル君のミルクティーがテーブルに並べられた。

「「いただきます！」」

４品をルシル君と分け合って食べる。どれも美味しくて、ボリュームもあるから結構お腹に溜まる。さて。ここでわたしは「ルシル君、あ～ん」って、ナイフとフォークを使って切り分けたクロックムッシュをフォークに刺した状態でルシル君に差し出した。あーんアプローチは重要やからな～。

「ありがとう。あーん」

ルシル君がわたしのフォークに刺したクロックムッシュをパクッと食べてくれた。すると「じゃあ俺からも。あーん」切り分けたフランセジーニャを差し出してくれたから、「あ～ん♪」パクッと頂いた。それからルシル君と食べさせ合いしながら昼食を終えた。

「「ごちそうさまでした～！」」

お店を後にして、今度はどのアトラクションに行こうかってルシル君と話し合う。結論で言えば、食べたばかりでジェットコースターなどの絶叫マシンは自殺行為（絶対にいろいろとリバースしそう）やってことで却下。

「少し早いけど観覧車なんてどうだ？」

「え、観覧車・・・」

観覧車は最後の最後に取って置こうって思うてたんやけどな。夜景を眺めながら、みたいな。そう思うてるとルシル君が「昼間と夜とじゃ見える景色も違うし、2パターン楽しめるとでも思えば良いじゃないか」そう言うた。

「なるほど。それもそうやね。ん。観覧車にしよか♪」

そうゆうわけで、食後の休憩として観覧車で時間を潰すことになった。乗り場までゆったり歩いて、「足元にお気を付けてください」

係員さんの案内でゴンドラに乗り込んだ。１周２０分の大観覧車や。それだけ休めばまた絶叫マシンにも乗れるやろ。徐々に高度を上げてくゴンドラから望める景色に「おお・・・！」ルシル君と一緒に感嘆の声を上げた。

「なんでかな～。観覧車から見る景色って、特別綺麗に見えると思うわ～」

「あ、それは俺も思うぞ。なんでだろうな～」

２人して笑い合いながらゴンドラから見える景色を指差して喋る。シグナム達と一緒に暮らすようになってからはホンマに２人きりになれる長い時間なんて無かったから、こうゆう時間は久しぶりでやっぱ嬉しい。

「やっぱ地上本部は高いなぁ～。薄らとやけど見える」

「あんな超高層建造物、日本どころか地球には無いからな」

頂上をちょう過ぎたところで地上本部のセントラルタワーが見えた。座ってるルシル君の隣に座ろうと席を立って指差し合ってると、ガタン、ってゴンドラが揺れたから「ひゃっ？」バランスを崩してルシル君の方へ倒れ込んでしもうた。

「「っ！？」」

心臓が止まるかと思うた。すぐ目の前にはルシル君の見開かれた綺

麗な紅と蒼の瞳がある。鼻先が完全に触れてる。唇は・・・ギリギリ触れてない。そやけど数ｃｍ近付けるだけで完全に触れられる。ごくっと唾を呑む。

――はやてもルシルに愛（チュー）の証しちゃいなｙｏ♪――

以前、アイリに言われた言葉が脳内に流れた。あと、天使なわたしと悪魔なわたしが現れて・・・

――ここは事故を装ってチューしちゃいましょう！　さぁ、勢いに任せて熱いべーゼを！――

天使がそう言うて・・・

――いや、ダメよ。もっとムードのある中で、そう、夜景が一番！　夜になるまで待ちなさい！――

悪魔がそう返した。普通逆やない？　唆すのが悪魔で、諌めるのが天使のはずやのに、役割が逆になってしもうてる。

――ちょっと悪魔！　これは最大のチャンスよ！　それを邪魔するなんて、それでも悪魔なの！？――

――そっくりそのまま返すわ、このイロモノ天使！――

――なによ！――

――なにさ！――

アカン。脳内でハルマゲドンが勃発してもうた。あ〝あ〝あ〝～って頭を抱えそうになると、「ほら、座らないと危ないぞ」ルシル君がわたしの両頬に手を添えて、わたしの顔を離した。あぅ、残念や。でもまぁ、告白もまだなんやし、キスはまたお預けってことにしておこか。

「ありがとうございました。お降りの際には足元にお気を付け下さい」

それからほとんど会話も無く景色を眺めて、観覧車を降りた。気不味くなるかなって思うたけど「じゃあ、次はどこへ行こうか？」ルシル君はわたしの手を握って、笑顔でそう訊いてくれた。わたしはマップを確認して「ゴーカートとか行ってみぃひん？」って、訊いてみた。

「ゴーカートか。ああ、それで良いよ。じゃあ・・・・ん？」

ルシル君の笑顔が急に翳って、足を止めて辺りをキョロキョロ見回し始めた。そやから「どないしたん？」わたしも辺りを見回してみながら訊いてみた。

「・・・感じる。さっきまで無かった・・・神秘が・・・！」

「っ！　ひょっとして神器か！？」

ルシル君の口から出たキーワードにわたしもお仕事モードに入る。神器。神様とか悪魔とかが作ったってゆう、超古代の武器や道具のことや。去年はリンドヴルムのおかげで多くの犠牲者と損害をクラナガンは被った。機動一課がレンアオムで回収できたんは全てやない。あと6つ、神器が未回収や。その内の1つが・・・

「この遊園地にあるって言うんか・・・！？」

「おそらく、としか言えないけどな。悪い、はやて。少し調査をし――」

「謝らんでええよルシル君。デートもわたしにっては大事やけど、神器回収もわたしらの大事なお勤めやしな♪」

それに、サクッと片付けてデートを再開すればええだけやし。そうゆうわけで、この遊園地のどこかにあるらしい神器の探索に入ることになった。ルシル君の神秘探知能力を当てにして歩き始めてすぐ・・・

「あ、このファンタジアパークのマスコットキャラの・・・」

デフォルメされた不思議な動物たち（なんか干支の動物みたいやな）が列を組んでスタッフオンリーって記された、地図には載ってへんお城のような建物から出て来たのが見えた。昼間のパレードかなんかやろうかって思うた時、そのマスコット達が一斉にわたしらの方を見た。

「え・・・！？」「な・・・・！？」

その様子にちょうビクッとした。そんで、どうゆう原理か知らんけど宙に浮くデフォルメ・ドラゴンが大口を開けてルシル君に向かって来ると、デフォルメ・猪、牛、虎などもルシル君にだけに向かって来た。

「ルシル君！」

「はやては離れているんだ！」

一瞬の発光の後、ルシル君は私服から防護服に変身して「コイツら、魔力で出来ている！」一足飛びで後退して、マスコット達の攻撃を躱したすと、今度は蛇や犬や猫や羊も遅れて突進攻撃を仕掛けて来た。

「（リインが居らんけど、ある程度はフォロー出来るはずや！）セットアップ！」

わたしも変身を終えて「封縛！」アインス譲りのバインド魔法で、軽やかに躱すルシル君に追撃を続けるマスコット達を捕らえようとしたんやけど「掻き消された！？」わたしの魔力がパンッと音を立てて弾け飛んだ。

「馬鹿な！　コイツらみんな神秘の魔力で出来ているの――ちょっ、邪魔・・・！」

「ルシル君！」

ルシル君の両脚に絡みついてるデフォルメ・蛇、それに猿やネズミやニワトリがルシル君の顔を襲撃。完全に視界を覆ってる。そんなルシル君に対して他のマスコット達が容赦なく追撃。黙って見てるわけにもいかへんから「ブラッディダガー！」高速射撃を放つけど「アカン！」やっぱり着弾する直前に弾け飛ぶ。

「しょうがない・・・・！」

――我を運べ、汝の蒼翼（コード）（アンビエル）――

ルシル君の背中から蒼く輝く剣状の翼が１２枚と展開されて、ルシル君は空に向かって急上昇。そんな時、「お客様！？　これは一体どういう・・・！？」数人の係員さん達がわたしらの元へとやって来た。その直後、地面に蛇と猿とネズミとニワトリがものすごい勢いで墜落した。

「時空管理局本局・特別技能捜査課の八神はやてといいます。あのマスコットキャラについて詳しくお話を聴かせて頂きたいんですが」

局員ＩＤを提示すると、「本局の・・・！」とか「ヤガミって聞いたことがある・・・！」とか「ほら、チーム・ウミナリじゃないか？」とか、係員さん達がそわそわしだした。そこにルシル君が急速着地して、その衝撃でマスコット達が宙に浮いた。

「エヴェストルム・アルタ、カートリッジロード。イドフォルム」

ルシル君は起動した剣槍"エヴェストルム・アルタ"を振り回して、マスコット達をバラバラに斬り刻んだ。霧散してくマスコット達を見送った後、「同じく特捜課の捜査官、そして査察官として、支配人に会わせて頂きたいのですがよろしいでしょうか？」ルシル君も係員さん達に局員ＩＤを見せた。

「査察官・・・！」

「あ、はい。こちらです！」

係員さんにお城の中に案内されて辿り着いたんは支配人室。そんで室内に通されると、気弱そうな、でも神経質そうな、３０代後半ほどの男性が執務デスクに着いてた。

「なんだね、君たちは？」

「支配人。管理局・本局のヤガミ捜査官とセインテスト査察官だそうです」

わたしらを案内してくれた係員さんがそう言うと、目に見えて肩を震わせてデスクの上に置いてあった1冊の本を引っ手繰って大事そうに抱えた。それを見たルシル君が『間違いない。神器だ』思念通話を送ってくれた。とりあえず自己紹介と、ここへ来た理由を支配人さんに伝えると・・・

「コレは私の物だ！　何の権利があって！」

「支配人。ソレは盗品であり、古代遺失物ロストロギアに該当する物です。この意味、お解り頂けるかと思うのですが」

「そ、それは・・・！　だがしかし！　コレは我がファンタジアパークの目玉となる、大切な物なのだ！　お願いだ！　このままお引き取り願いたい！　どうか！　このファンタジアパークと従業員たち、そのご家族のためにも、この本を譲ってくれ！」

何度もデスクにおでこを打ち付けて涙ながらに懇願する支配人さん。見てるこっちが悪者みたいな感覚に陥りそうになる。わたしは居た堪れんくなって、ルシル君に頼ろうと横を見てみると、ルシル君のあまりの無表情さにわたしはちょう怖くなった。

「支配人。管理局法を守ってください。自分は査察官であり、さらには監査官や監察官としての研修も受けています。残念ですが情に訴えても無意味です」

「〜〜〜〜〜っ！」

「ルシル・・・くん・・・」

キッパリと支配人さんの懇願を切り捨てたルシル君は、涙に濡れて憎しみに染まった支配人さんの視線をしっかりと受け止めた。わたしと違くてルシル君は局員然として仕事をこなしてる。そう言えば、ルシル君が査察官として仕事してる姿を見るんは初めてや。情に流されず、たとえ憎まれても全うするその姿に、怖いって気持ちとす

ごいって気持ちが半々で生まれた。

「支配人。他に目玉を考えてはいかがでしょうか。違法な手段で客を呼んでも、いつか必ず破綻します。このまま続けては、あなたが大切にしているこのパークと関係者諸氏に迷惑が掛かるでしょうし」

「すでに一般開園まで1週間というこの時期にそんな簡単に目玉が出来るわけないだろう！　大人の苦しみを知らない子供が！！」

「支配人！？」

「ルシル君！？」

バンッとデスクを両手で叩いた支配人さんが椅子から立ち上がって、ソファにに座るルシル君の側に駆け寄って来た。そんで胸倉を掴もうとしたんやけど、「さらに公務執行妨害罪まで犯す気ですか？」ルシル君が慌てることなくそう言うと、「では・・・どうすれば良いと言うのだ・・・」支配人さんはその場に跪いた。

「はやて。あと、係員さん。少し席を外してもらっていいでしょうか。ここからは査察官として、ファンタジアパーク支配人と話がしたいので。『すまないな、はやて。後は任せてほしい』」

『・・・うん。判った。お任せするな』

「・・・君。席を外してくれたまえ」

「あ、はい・・・」

ルシル君や支配人さんの指示で、わたしと係員さんは退室する。そんで部屋の外で待つこと数分。ガチャっと部屋のドアが開いて、「お待たせ、はやて」ルシル君が神器やってゆう1冊の本を手に部屋から出てきた。

「ルシル君！　その本、無事に回収できたんやね！」

「ああ、もちろんだとも。神器も回収したし、デートを再開しようか」

そう言うたルシル君は、係員さんにお辞儀を1回して出口へ向かい出したから、わたしもお辞儀をしてからルシル君の後を追った。

「なあ、ルシル君。あの後、どんなこと話したん？　それに、その神器も・・・」

「ああ、実は・・・」

ルシル君が話してくれたあの後の出来事は、ルシル君にしか出来ひん解決案の提示やった。簡単に説明すると、まず支配人さんが手に入れてた神器の名称は"マーラー・キント"ゆうらしくて、その本の白紙ページに描いたイラストをそのまま戦闘用の使い魔として具現化できる能力を持ってるとのこと。

「具現化された使い魔は、自動的に神秘を有する魔術師を迎撃する

よう初めから設定されているんだ」

「あー、だからわたしには向かって来おへんかったんやね・・・」

「で、支配人にはコレと同じ機能を持った本を渡してきた。純粋にイラストを具現して半自律的に動かせるだけの玩具だが、こんな兵器よりは扱いやすいだろう。そして、はやてと係員に席を外してもらったのは、局員としてあるまじき行い・・・取引をしたことを見られたくなかったからなんだが・・・、こうして話していれば意味のない行為だったな」

そう言うて苦笑するルシル君。そやけどそのおかげでファンタジアパークの目玉ってゆうのが無くならずに済んだわけやし。そやから「わたしはな～んも知らへんよ♪」嘘の報告をすることになるけど、それでもこの遊園地には頑張ってほしいからルシル君の計画に賛同する。

「コレを回収した経緯についてはフリーマーケットで偶然見つけたということにしておこうって思う」

「ん。それでいこか」

そんなこんなで未回収神器6つの内の1つを回収できた。なら後は最後までルシル君とデートをするだけや。

「行こ、ルシル君！」

「ゴーカートだったな。ああ、行こう、はやて！」

ルシル君と手を繋いで、わたしらはゴーカート乗り場へ向かった。その後はメリーゴーランドや残りのジェットコースター、コーヒーカップ、バイキング、それにゲームコーナーとかでも遊んで、夕ご飯もレストランで済まして、最後にもう1回観覧車に乗ることにした。

「ルシル君。今日はホンマにおおきにな。わたし、すごい楽しかった。一生忘れられへん誕生日プレゼントや」

ルシル君と同じ側の座席に座って、今日一日のことを感謝した。

「俺も楽しかったから、こちらこそありがとうだ」

2人で肩を寄せ合って夜景を眺めてると、ドォン！って、夜空に大きな花火が咲いた。しかも1発だけやなくて次々と花火が打ち上がって来ては夜空をカラフルに染め上げてく。予告なしのサプライズ花火大会や。良いタイミングで観覧車に乗っててラッキーやな。

「今度は家族みんなで来てみたいな」

「うん。そんでチーム海鳴でも来たいな～」

「だな」

花火の明かりに照らされる中、わたしはチラッとルシル君の横顔を

見た。そんで「チュッ　」頬にキスしてみた。ボッと全身が熱くなる。ヴィータやリイン、シグナムにシャマル、それにアインスには何度かキスしたことあるけど、やっぱり好きな男のやと全然違う。なんか頭の中がぐるぐるして、ちょう涙が出てきた。

「はやて・・・・！？」

「きょ、今日のお礼！　こんなんでゴメンなさいやけど！」

ルシル君の顔をまともに見れへん。でも後悔はしてへんと思う。これで少しはシャルちゃんに追いつけたやろか。両手で顔を覆ってると、「無茶しすぎ」苦笑しながらルシル君はわたしの頭を撫でてくれた。

「ほら、地上に着くまでもう少しだ。それまで花火を見ておかないと勿体ないぞ」

「・・・うん」

両手を離して、俯いてた顔を上げる。ゴンドラに差し込んでくる花火の明かりの中で、わたしは心の中でこの時間に感謝した。

Ｅｐｉｃｏ?ドクター・プライソン～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　ｆｏｒ
Ｅｐｉｓｏｄｅ　Ⅳ～

†††Ｓｉｄｅすずか†††

夏休みに入って数日。私は学校や局の仕事に余裕がある日やある時間は、本局の第零技術部――スカラボにお邪魔するようにしてる。スカラボの主のジェイル・スカリエッティさん（みんなからは親しみを込めてドクターって呼ばれてる）や、私の師匠であり、配属されてる第四技術部の先輩でもあるマリエル・アテンザさんのご厚意で、ドクターの技術を学ばせてもらえるようになってからもう随分と経つ。

「あぅ～、プログラミングが複雑すぎる・・・」

なのはちゃんの愛機・"レイジングハート・エクセリオン"の新機能であるブラスター、アリサちゃんの愛機・"フレイムアイズ・イグニカーンス"の新機能であるヴァラー、フェイトちゃんの愛機・"バルディッシュ・アサルト"の新機能であるライオット、あとヴィータちゃんの愛機・"グラーフアイゼン"の新機能であるツェアシュテールングスフォルム、といった開発を初めて1ヵ月。遅々として進まないプログラミング作業に焦りばかりが募る。

「まぁ、そこまで焦る必要はないさ、すずか君。何も今すぐに必要な機能ではないのだから」

スカラボの奥、チーム海鳴の中でも私しか未だに入れてない研究・開発室にわざわざ私専用の作業デスクを設けてもらった。そんな私のデスクの上にコーヒーが注がれたマグカップが置かれたから、私は「ありがとうございます、ドクター」コーヒーを淹れてくれたドクターに体を向けてお礼を言う。

「確かにみんなの新機能搭載は急ぎではないですけど、だからと言ってのんびりし過ぎるのもどうかと・・・」

「ふふ。まぁ、君のペースで作業を進めてくれたまえ。スピードより正確さが求められる作業なのだから。・・・何か困りごとがあればいつでも声を掛けたまえ。我々スカリエッティ家もまた、君の師なのだからね」

「・・・ドクター。ずっと考えていたんですけど、これまで門外不出だったスカリエッティの技術をどうして私にも教えようって思ったんですか？」

「そうだね～。・・・すずか君は憶えも良いうえに元からの才も良い。それに覚悟も何事にも挑戦しようという気概もある。技術者として必要なものだ。だから私もマリエル君も、君を応援したいのだよ。それに何より友達、仲間思いのとても優しい女の子、だからかな」

次元世界屈指の天才って称されるドクターからそこまで言われちゃったら弱音なんて吐いてられない。コーヒーを飲んで、「よしっ」気合を入れ直して作業に戻る。みんなの新機能フォームは強力な戦

闘力を叩き出すけど、それ以上に体にもリンカーコアにも負担が大きくなる。だから未成熟な子供の内は使用厳禁ってことになってる。だから今すぐ必要なバージョンアップじゃないんだけど、なのはちゃん達からのリクエストもあるから、開発に着手した。

「ドクター。そういった発言は――」

「ロリコンと言いたいのだろう！？　いつになったらその不名誉な称号を取り払ってくれるんだい！？　騎士イリス、君の所為で私の胃は・・・！」

スカラボの秘書であり、スカリエッティ家の長女、ウーノさんがいつの間にか私とドクターのすぐ後ろにまで来ていた。そしてドクターは、シャルちゃんの冗談による不名誉がなかなか消えないことに頭を抱えた。

「うぅ。それでウーノ。私に何か用かい？」

「はい。そろそろクイント・ナカジマ准陸尉、ギンガ様、スバル様がいらっしゃいます」

「あー、もうそんな時間かい？　すずか君。君はどうするかね？」

ドクターとウーノさんの視線が私に向く。私はもちろん「行きます、見学させてください」そう答えて、開いてたモニターやキーボードを閉じる。そしてドクター達と一緒に応接室へ。ソファに座って待つこと数分、ピィーってインターホンが鳴って『クイント・ナカジ

マです』通信が入った。

「クイント准陸尉、どうぞ」

ウーノさんが応じるとプシュッと音を立てて入口のスライドドアが左右に開いた。そこにはクイント准陸尉と、娘のギンガちゃんとスバルちゃんの3人。

「やぁ、いらっしゃい」

ドクターが迎え入れると「お世話になります、スカリエッティ少将」クイント准陸尉はお辞儀して、「今日もお世話になります」ギンガちゃんが続いてお辞儀。最後に「なります」スバルちゃんがお姉ちゃんのギンガちゃんの後ろに隠れるようにして小さくお辞儀した。

「あ、すずかちゃんも居るのね」

「はい。こんにちは、クイント准陸尉、ギンガちゃん、スバルちゃん」

「「「こんにちは」」」

ギンガちゃんの後ろに隠れてたスバルちゃんだったけど、私との挨拶だとちゃんと前に出て挨拶してくれる。だから「何故私の時は・・・」ドクターが気落ちしちゃうわけで。そんなドクターの姿に私やウーノさん、クイント准陸尉は苦笑するしかなく。

「ではいつも通りお嬢さま方はこちらで着替えてください」

応接室の奥、転送室の奥、そのさらに奥に次元世界最高クラスの技術が眠る開発区画に移動するためのもう1つの転送室がある。そこは四角形の部屋で、スカリエッティ家の居住区とさっきまで居た転送室へ繋がる面以外の左右の面には、私もお世話になってる第二研究・開発室、そして私もまだ知らない真の第一研究・開発室へ続くトランスポーターがある。

「お嬢さま方はこちらへどうぞ」

「では私は先に行って検査の準備をしておこう」

ウーノさんがギンガちゃんとスバルちゃんを連れて、居住区へと続くスライドドアの奥に消えて行った。ドクターも第二研究・開発室へ転移するためのトランスポーターに乗って、その姿が消える。転送室に残った私とクイント准陸尉はウーノさん達をそのまま待つことに。そして着替えが終わるまでの間、「すずかちゃんも大変ね」クイント准陸尉が声を掛けてくれた。

「うちのギンガとそんなに歳が変わらないのに、技術者として、魔導師として頑張っていて」

「あー、はい。でも、それ以上に楽しいですから。友達のデバイスを診ることも出来ますし、戦闘で護れることも出来ますから」

戦闘面でも技術面でもチーム海鳴のみんなを支えて、護ることが出

来る。それに「エンジニアはずっと夢でしたから」将来の夢がこういう形で叶えることが出来た。だから大変さもまた楽しさの1つになってると思う。

「そっか。うちの娘たちも、すずかちゃんやチーム海鳴のみんなのように目標や夢を作って、頑張って突き進んでほしい」

クイント准陸尉がそう言って、将来のギンガちゃんやスバルちゃんの成長した姿を幻視しているのかとても温かな笑顔を浮かべた。

「お母さん、お待たせ！」

と、そんなところに入院服のような服に着替え終えたスバルちゃんがやって来て、クイント准陸尉に抱きついた。遅れて「お待たせしました」ウーノさんとギンガちゃんがやって来た。そして私たちは第二研究・開発室へと向かうためにトランスポーターに入って・・・

「転移します」

ウーノさんの操作でトランスポーターは起動して、私たちは第二研究・開発室へ転送された。そこはハニカム構造（いわゆる蜂の巣みたいの六角形状の部屋が集まってる）で、その内の1つであるメンテナンスルームに移動した。

「準備は出来ているよ。ギンガ君、スバル君。いつものように奥の検査台に横になってくれたまえ」

「はい」「うん・・・」

操作台前に立っていたドクターの指示に応えたギンガちゃんとスバルちゃん。２人は操作台とアクリル材の壁に隔たれた部屋に設けられた検査台の上に横になった。検査台に環状魔法陣のようなスキャナーが展開された。そして私たちの居る操作台側の部屋にモニターが何枚も展開されて、２人の身体の詳細が表示される。

「ギンガ・ナカジマ、スバル・ナカジマ、両名の検査を開始する」

ドクターとウーノさんがキーパネルを叩いて、２人を検査していく。あるモニターに映るレントゲンのような全身画を見る。映っているのは骨格画なんだけど、普通の人の物とはかなり違う。本来あるはずのない機械部品が映ってる。そう、ギンガちゃんとスバルちゃんは、ある種のサイボーグだ。

（ＢＮＡＣ（ビーナック）技術。ドクターが数十年前に確立させた、体の一部や臓器を人工的な物に取り換える技術・・・）

Ｔｈｅ　Ｂｏｄｙ　ｗｈｉｃｈ　ｍａｄｅ　Ｎａｔｕｒａｌｎｅｓｓ　ａｎｄ　Ａｒｔｉｆｉｃｉａｌｉｔｙ　ｂｅ　Ｃｏｍｐｏｕｎｄｅｄ。直訳で、自然と人工を混成させた体。事故などの後天性や生まれつきの先天性などで障害のある体の一部や臓器の代わりに、機械部品を移植することでその機能を補わせるっていうものだ。そんなＢＮＡＣ技術による全身サイボーグ化されているのはほんの一握り。

（全身をＢＮＡＣ化できるのは、次元世界広しと言えどその技術を初めて確立させたドクターだけって話）

そのほんの一握りであるシスターズは、ドクターが各管理世界で運営してる孤児院の出身者で、ドクターとは血の繋がりが無い。シスターズ全員が日常生活が困難なほどに体に障害を負ってて、自ら望んでドクターのＢＮＡＣ技術確立のために被験体になったって、ウーノさんやドゥーエさんから聞いた。

（そして、天才技術者故に色んな方面から狙われるドクターを護るために、自ら望んで戦闘能力を追加されたりインヒューレントスキルっていう特別な能力を保有することになったみたい）

シスターズ達がサイボーグなのは初めての顔合わせから割とすぐに聞かされた。フェイトちゃんのお母さんが起こしちゃったＰＴ事件の発端になったジュエルシード強奪事件の映像に、レーゼフェアさんの手によって腕を引き千切られたトーレさんの姿があったし。そして、ギンガちゃんとスバルちゃん。そんな２人もシスターズと同じ全身をサイボーグ化されてる。でもその施術を行ったのはドクターじゃない。

・―・―・回想です・―・―・

ドクターやクアットロさんのアドバイスを受けながら武装隊の基本兵装であるストレージデバイスの分解や再組立て、プログラミングなど学ぶ。マリエルさんや私が配属されてる第四技術部での勉強も

内容が濃いけど、ここスカラボでの勉強はそれ以上の経験になる。

「あら～、すずかさん。また同じところでプログラムミスですよ～？」

クアットロさんからの指摘が結構キツい。なんていうか・・・ねちっこいというか、声は優しんだけど胸にドスッと来るというか・・・。軽くイジられながらも作業を進めていると「ドクター。お客さまです」ウーノさんが私たちの居る第二研究・開発室にやって来た。

「客？　誰だい？　アポもなしに突然来るとは少々・・・」

「いえ。アポは取って頂いています。ミッドチルダ首都防衛隊所属、クイント・ナカジマ准陸尉です」

「あ、そうだったか。今の時間が楽しくて忘れていたよ」

「クイント准陸尉・・・」

聞き覚えのある名前が耳に入ったからつい作業の手を止めてドクター達の方を向くと「知り合いなのかい？」ドクターに訊かれたから、クラナガンの悪夢の時にお世話になった局員さんだって伝えた。

「そうだったのかい。あの事件は実に大変だったね」

「あの、ドクター。本日の予定は・・・の検査となっていますので・・・」

「ああ、判った。ウーノ、クイント准陸尉たちをメンテルームに通してくれたまえ」

「判りました」

ウーノさんが小さくお辞儀して退室。そんな中、「お子さん居たんだ～」私はそう思って、一度会ってみたくなった。だからドクターに「あの、ついて行ってもいいですか？」って、確認してみる。するとドクターより先に「すずかさ～ん？　おサボりはいけませんよ～？」クアットロさんがポンっと肩に手を置いてきた。

「いや、構わないよクアットロ。一緒に来たまえすずか君」

「あ～ん、ドクタ～。甘やかし過ぎですよぉ～？」

そうしてドクターと私とクアットロさんは、ウーノさんの後を追うことに。スライドドアと研究・開発室の各部屋を通って辿り着いたのは、メンテナンスルームって呼ばれるらしい部屋。そこに「あれ？　あなたは確か・・・」私を見て驚くクイント准陸尉と、それに・・・

（わぁ♪　クイント准陸尉にそっくりだ！）

女の子が2人。1人は私より少し小さい子で、たぶん1つか2つくらいの年下だと思う。もう1人はヴィータちゃんくらい・・・7、8歳かな。クイント准陸尉にそっと寄り添ってる2人は本当に可愛い女の子なんだけど、着ているのはどういうわけか入院服。

「お久しぶりです、クイント准陸尉。第四技術部所属、第零技術部弟子、月村すずかです！」

ビシッと敬礼すると、「ええ、久しぶりね！　リンドヴルム壊滅、おめでとう♪　さすがチーム海鳴ね」クイント准陸尉も笑顔で敬礼を返してくれた。そして「私の娘を紹介するね」側に居る２人の女の子の背中をポンと優しく叩いた。

「ギンガ・ナカジマです！」

「あの・・・、スバル・・・ナカジマ、です」

大きい子がギンガちゃんで、小さい子がスバルちゃん、か。私も「月村すずかです♪」笑顔でお辞儀した。

「挨拶もそこそこにして、２人とも。いつものように検査台に横になってくれたまえ」

「はい」「・・・・」

ドクターの指示にギンガちゃんはしっかり返事をして、スバルちゃんは小さく頷いて応えた。その後に２人がチラッと私を見る。どこか不安そうな表情。その意味が解らない私は「ん？」小首を傾げることに。

「ギンガ、スバル。すずかちゃんは大丈夫♪　おかーさんが認める

すごい子だから♪」

えっへんと胸を張るクイント准陸尉の太陽みたいに明るい笑顔に、ギンガちゃんとスバルちゃんは頷いて、ココとアクリル材の壁で隔たれた部屋に設けられてる診察台のようなところに横になった。

「今さらですけどドクター、クイント准陸尉。どうして2人はスカラボに？　普通は医務局じゃ・・・？」

ここは第零技術部。検査するのはデバイスとかの機械類のはずなのに。しかもさっきメンテナンスルームって言ってた。私の疑問に答えてくれたのは「ギンガとスバルはね、私と夫の間に生まれた子供じゃないの」クイント准陸尉だった。

「え・・・？」

「すずかちゃん。見ていて。娘の真実を・・・」

ドクターとウーノさんが操作台のキーパネルを叩くと、2人が横になってる検査台を環状魔法陣が覆った。ドクター達の周囲に展開されたモニターに、2人のレントゲン写真のようなものが表示されて「っ！！」私は驚いた。

「サイボー・・・グ・・・！」

そこには機械部品に塗れた骨格が映し出されてた。シスターズと同じだ。だからハッとしてドクターを見た。ドクターは私を見ること

なく「私ではないよ。彼女たちを生んだのは」そう言った。

「え？　でも、ＢＮＡＣ技術による全身サイボーグ化は破格の技術で、ドクターしか出来ないって・・・」

「はい。確かにドクターにしか出来ない技術・・・のはずですが」

「それでも私ではない」

ギリッと歯噛みしたドクターと、心配そうに見るウーノさんの様子に、この事態がかなり・・・ううん、とんでもなく異常なんだって判って不安になっちゃう。

「ギンガとスバルはね、３年前、ある犯罪者が根城にしているとされた遺跡の捜査中に私が発見、保護した子なの。保護した後あの子たちが、スカリエッティ少将のＢＮＡＣ技術と似た技術でサイボーグ化された子供だったと判り、私は少将を頼った」

「驚いたよ。私の技術がそっくりそのまま使われているだけでなく、アレンジが加えられていた。始めから戦闘用のサイボーグにするために調整された試験管ベビーを利用している。とんだ外道が居るものだよ・・・！」

ここで完全にドクターが怒りを露わにした。私だって頭にキテる。戦闘用のサイボーグを作るために子供を造った。人道や倫理を大きく逸脱してる。これは絶対に許せることじゃない。

「でね。そんな子たちを見放すわけにもいかなくて、引き取ることにしたの。うちの夫と私との間には子供が出来なくてさ、それに・・・」

「クイント准陸尉とギンガ様とスバル様は遺伝子資質が限りなく一致しており、お２人はクイント准陸尉のクローンであると、ドクターは判断しました」

「クローン・・・！」

「彼女たちを生み出した技術者が何かしらの手段でクイント准陸尉の遺伝子を盗み出し、利用したのだろうね」

「ま、そのこともあって今じゃ誰もが羨む仲良し家族よ♪　２人を生んでくれた技術者には怒りもあるけど、また感謝もしてたりする。だって、遺伝的に母娘と言っても過言じゃないからね♪」

そう言って満面の笑顔を浮かべるクイント准陸尉は本当に綺麗だった。

「あの、クイント准陸尉。その犯罪者の名前は・・・」

「・・・広域次元犯罪者、ドクター・プライソン」

疑問をぶつけて返って来た名前がそれだった。その名前を聴いた時、「あれ？」どこかで聞いた名前だと思った。記憶を掘り起こしてみて、「あっ・・・！」思い出した。フェイトちゃんが生まれるキッ

カケとなったプロジェクトFの基礎を作り出した科学者の名前だ。だからクローン技術にも精通してる。そう考えたらゾワッと悪寒が走った。

「・・・彼は本当に・・・狂っているよ」

ドクターのそんな呟きが、すべてを物語ってた。

・―・―・終わりです♪・―・―・

ギンガちゃんとスバルちゃんの検査が終わり、「バイバーイ♪」笑顔でクイント准陸尉たちとお別れした。3人を見送った後、私はパチンと両頬を叩いて気合を入れ直す。

「よし。ドクター。さっきの続き、お願い出来ますか？」

なのはちゃん達の愛機のバージョンアップを引き続き協力してくれるようお願いする。未だにプライソンっていう科学者は捕まってない。チーム海鳴が必ず捕まえるってことはないだろうけど、プライソンのような犯罪者も数多い。そんな人たちの悪行を止めるための力を、みんなに授けたい。

「いいとも。今日は1日暇をしているからね。どこまでも付き合おう」

「私もお手伝いしましょう。ドクターとすずか様を2人きりにするのは不安ですから」

「もうその扱いは無くならないようだね・・・」

ガックリ肩を落として落ち込むドクターに「あの、ロリコンでもドクターのこと尊敬してますから♪」元気づけようと思ってそう言ってみたら「ありがとう（涙）」ドクターは泣いて喜んでくれた。

・―・―・―・―・

――夏も中ごろに差しかかった頃・・・

時空管理局・本局・内務調査部。査察課、監査課、監察課の３つの課に分かれている、管理局そのものや関連組織を取り締まれる権限を有している一種の公安部署である。内務調査部の局員はそれぞれの課の１つにだけ属し、その課に勤めるのに必要な資格だけを持っている。

しかし、中には３つの課すべてに所属し、査察官・監査官・監察官全ての資格を持ち、それぞれの仕事をこなすオールマイティな局員も居る。そんな局員は調査官と称され、執務官クラスのエリートとされている。

調査官になるには条件があり、私情や賄賂に流されない強大な精神力はもちろん、管理局への勤続１０年。次に３資格を全て取得して、それぞれの仕事の経験を積むこと５年。最後に筆記・実技試験、現役調査官との面接、承諾を貰って初めて調査官となれる。そんな調査官の特権として、上官からの命令や恫喝に縛られないために、新

人でも暫定的に准将の階級を与えられ、調査官としてキャリアが上がればさらに上の階級を与えられる。

そんな内務調査部である3課のオフィスがあるフロアに、男性局員1人、女性局員2人の3人組が立った。先頭を歩く男性局員は大柄で、名はゼスト・グランガイツ。所属は第一世界ミッドチルダは首都クラナガンの防衛を担っている首都防衛隊。出身はベルカ自治領ザンクト・オルフェンで、イリスの父リヒャルトとは交友関係にあり、それ繋がりで彼女とは何度も模擬戦を重ねている仲だ。

そんな彼の後に続くのは同じく首都防衛隊、その分隊長であるクイント・ナカジマ、メガーヌ・アルピーノの2人だ。彼らは真っ直ぐに目的のオフィスへ向かい、そして「失礼する」査察課オフィスの入口に設けられている受付カウンターに座る女性局員にゼストは声を掛けた。

「首都防衛隊、ゼスト・グランガイツ一等空尉です」

「はい。任務内容は承っております。戦闘可能な高ランクの魔導師でもある査察官1名を同行させたいとのことで。こちらでご希望に沿う課員を何名かリストアップしていますので、ご自由にお決めください」

カウンターに展開されたモニターに10名近い査察官の顔写真や名前、魔導師ランク、簡単な紹介文が表示された。

「「あっ！」」

クイントとメガーヌが同時に声を上げて、「ルシル君！」ある査察官、ルシリオン・セインテストの顔写真を指差した。

「査察官としての経験は浅いですが、それを優に補える知識や知恵や固有スキル、何より空戦Ｓ＋の古代ベルカ式騎士としての戦闘力もあります。あと大声では言えないのですが、かつて次元世界の犯罪者を震撼させたパラディース・ヴェヒターー、その参謀格であるランサーだった少年です。彼、私のイチオシです♪」

女性局員から説明を受けたゼストは「あぁ、この少年がリヒャルトの言っていた、イリスの想い人か・・・」と、別のところで納得していた。

「隊長！　彼にしましょう！」

「私もルシル君を押します！」

クイントとメガーヌからの熱烈な提案に「戦力的にも申し分ない。それに部下からの願いでもあるしな」ゼストは、ある任務へ同行させたい査察官としてルシリオンを選択した。それからゼストは手続きを終え、ミッドチルダへ降りるための次元港へと２人の部下と共に向かった。

「なんとしてでもドクターー・プライソンの足取りを捉えたいですね」

「そのための違法研究が行われていると密告（タレコミ）があった山岳地帯の捜査だからね。この日のためにいろいろ準備してきたんだから、しっ

かりと成果を上げたいわね」

「違法魔導師が多いという危険地帯だ。気を引き締めていくぞ、クイント、メガーヌ」

「「はいっ！」」

前を行くゼストに向かって首肯するクイントとメガーヌ。この捜査が近い将来に起こる悲劇の幕を開くことになろうとは誰も思ってはいなかった。

Ｅｐｉｃｏ?未来の前の大事

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

夏休みもそろそろ終わりに近づいてきた頃、査察課から俺にある任務が言い渡された。首都防衛隊。騎士ゼスト、クイントさん、メガーヌさんが所属している部隊からの応援要請で、俺は査察官として防衛隊の捜査に同行することになったのだ。
おそらく、先の次元世界で言う戦闘機人事件だろうと思う。が、ドクターやナンバーズは管理局員として生きている。そのドクターの代わりとして、プライソンという科学者が存在している。プロジェクトＦを生み出し、それに最近知ったがギンガとスバルを造ったらしい科学者が。

（何かある。今回の任務）

戦闘機事件では騎士ゼストやクイントさん、防衛隊員数名が殺害され、メガーヌさんが拉致された。結果、ルーテシアもまた捕まってレリックウェポンの実験体にされてしまった。しかも今回は、許されざる嫉妬レヴィヤタン――いや、レヴィ・・・の転生体であるリヴィアも生まれている。となれば、あの子も実験体にされてしまうかもしれない。

（させるか、そんなこと・・・！）

そのためには首都防衛隊のメンバー全員を無事に帰す必要がある。

先の次元世界では救えなかったが今回は違う。救える立場に俺は居る。

「準備は出来た？　ルシル君」

俺の部屋にやって来たはやてに「ああ」そう答え、ボストンバッグを肩に掛ける。そして「ごめんな。急な仕事で、旅行・・・行けなくなった」予てから決まっていた海への旅行は俺だけキャンセルだ。行き先は去年と同じ月村家の別荘。アイリと海で遊ぶ約束をしていたが、反故にしてしまった。

「ううん、ええよ。それより気を付けてな。かなり危険な仕事やって聞いてるよ」

「大丈夫だよ。首都防衛隊の隊長たちはみんな強いし、それに・・・俺も居る！」

そう言って笑ってみせると「ぷはっ♪　そうやな！　ルシル君、強いもんな！」はやては吹き出して、俺の右手を両手で取ると「お・ま・じ・な・い♪」ギュッと握りしめた。デート以降、はやてもなかなかに積極的になってきた。近いうちに告白されるかもしれない。そうなった時は・・・

「・・・ありがとう、はやて。おまじないのおかげで頑張れるよ」

「うんっ♪」

はやてと2人で俺の部屋を出、トランスポーターのある部屋へと向かう。俺を見送ってくれるためかそこにはシグナム達が待っていてくれた。そして「ルシル！」アイリが駆け寄って来て抱き付いてきた。

「アイリ。それにみんなも。俺は旅行には行けないけど、俺の分まで存分に楽しんできてほしい」

「はいですっ」

「おう」

「お言葉に甘えさせてもらうわね」

「すまないな、ルシリオン」

俺を除くチーム海鳴は予定通りに明日と明後日の1泊2日の旅行だ。ちなみに俺も今日はミッドに泊まって、明日早くから任務だ。順調に終われば最終日に合流しようとも考えているんだが・・・。

「いいさ。また休みの日はどこかに遊びに行こう。アイリもそれで良いな」

「う、うぅ～。・・・・約束だからね」

「ああ、約束だ」

俺にしがみ付いていたアイリが離れた。一度アイリの頭を撫でた俺はトランスポーターに入り、「じゃあ、行ってくる」手を振る。はやてとリインとシャマルは笑顔で手を振ってくれて、アイリは渋々と言った感じだが、それでも「気を付けてね」手を振ってくれた。そして俺は八神邸からスカラボへと直通転移。視界が光に閉ざされ、治まった時にはそこはすでに地球から遠く離れた時空管理局・本局。

「来たね、ルシリオン君」

「どうも、ドクター」

俺を出迎えてくれたのは神妙な面持ちのドクター、ジェイル・スカリエッティだった。ほぼ常にと言っていいほどに側に控えているウーノの姿はない。

「明日、ドクター・プライソンと関係があるとされるアジトの捜査に入るそうだね」

「ええ。首都防衛隊に同行する予定で」

「・・・私から言えるのは、細心の注意を払いたまえ、だ。彼はえげつない男だ。何を仕掛けているか判らない。いくら君のような戦闘力を有していても、仕掛けられた罠によっては君とて危ういだろう」

「忠告どうも。にしても・・・プライソンは、未だに性別を含めた個人情報が不明な、希有な犯罪者だ。ドクター、それを何故知って

いる・・・？」

そう訊くとドクターは無言になった。だから俺がその答えを代わりに言ってやろうかと思った時、「私の兄だからだ」ドクターがキッパリ断言した。やはりな。セインから、ドクターに兄が居ると聞き、そして通信で怒鳴り合っていると知ったその後、電子戦魔術ステガノグラフィアで探った結果、プライソンに辿り着いた。

「プライソン。本名はプライソン・スカリエッティ。気付いているだろうか。私とプライソンの名前には意味があることを」

「ＪａｉｌとＰｒｉｓｏｎ・・・。共に檻を意味している」

「ご名答。私と兄プライソンは檻の中に生きているというわけだよ」

最高評議会のことを言っているのか。ジェイル・スカリエッティの正体は、最高評議会がアルハザードの技術を使って生み出した人工生命体で、開発コードは無限の欲望アンリミテッドデザイア。だが、評議会の連中はきちんと手綱を握っていなかった。だから殺された。哀れなものだ。

「（ナンバーズやギンガ達の出生は変わっているが、恐らくドクターはそのままなのだろう）姿形が判る写真か何かは・・・？」

「すまないね。そういった物はない。それどころか顔も見たこともないのだよ」

そんなことを抜かすドクターに「はあ？」俺は本気で不快感を表してしまった。ドクターは苦笑して「ただ解るんだ。声を聴くだけで、私と彼は、２人で１人なんだと」そう言った。同じ方法で生み出された兄弟だとすると、共鳴のような現象が起きているのかもしれないな。

「しっかし。仮にも内務調査部に籍を置いてる俺にそんな重大な事を言うなんて、少々警戒が足らないんじゃないかな～？」

「あっはっは！　まぁ、もしそうなったらそうなったで私は構わないよ。そんな時のために後継者を今、育てているからね」

そう言って少年のような笑みを見せたドクター。誰なのかはすぐに判った。おそらく「すずか、か」のことだろう。スカラボに入り浸って技術を学んでいると言っていたからな。

「これまたご名答。私がいつ居なくなっても良いように、すずか君には今の内にいろいろと叩き込んでおきたい。彼女は遠い将来、技術屋として大物になると私は確信している。うちの娘たちも同意見でね。ま、私が居なくなるという事を考えもしないから、すずか君がスカラボのリーダーになることはないと思っているがね」

「なるほど。俺としてはすずか本人が決めることだから口を出すつもりはないよ」

「それは良かった。てっきりまた敵意を向けられてしまうと思っていたからね」

「・・・？」

「初めて私と顔合わせをした時、君は私に対して明らかに警戒心、それだけでなく敵意を向けていた。初対面であれほどの敵意を向けられるとは思わなかったため、かなり驚いたものだよ」

そらそうだろう。先の次元世界でだがドクターとは敵対していたのだから警戒は当然だし、ヴィヴィオを苦しめ泣かせたクソ野郎だ。敵意を向けるのだって当たり前の話だ。だが、この世界でのドクターは良い男だった。変われば変わるものだな。

「とにかく何が言いたいのかと言うと・・・、遠慮なしで私の兄、プライソンを止めてくれ」

「・・・了解！　じゃあ俺はこれで」

「ああ。無事にここへ戻ってくるのを待っているよ」

俺はドクターと別れてスカラボを出、ミッドへ降りるために次元航行船の発着場である次元港へ向かい、そして船に乗る。船内ではやてが昼食として作ってくれたサンドイッチを美味しく頂き、「着いたぁ～」ミッド中央区画の次元港に到着。ここで1泊するためホテルの宿泊を予定していたんだが・・・

「お、来た来た！　おーい、こっちよー！」

俺を出迎えてくれていた人が居た。その人は「クイント准陸尉・・・？」だった。俺は局の制服ではなく私服姿のクイントさんに駆け寄って「明日はお願いします」敬礼をした。すると「うん、お願いね♪」クイントさんは敬礼を返してくれて、「はーい。それじゃあナカジマ家へご案内しま～す♪」俺が肩に掛けているボストンバッグをスッと手に取り、自分の肩に掛けた。

「クイント准陸尉・・・？」

「ほら、行くよ。おとーさんや娘たちにも許可は貰ったし、今日は家に泊まってね」

「へ？　え、あの、何も聞いてないんですが・・・」

「ええ。だって今、話したから♪」

反論する間もなくクイントさんが次元港まで乗って来た車に俺は乗せられた。すごい押しの強さだ。そしてクイントさんが駆る車は一路ナカジマ邸へ向かって走り出した。

「いや～。君のような有名人と仕事が出来るなんて嬉しいね」

「はあ・・・有名人、ですか・・・」

「そうよ。チーム海鳴は、クラナガンの悪夢での戦闘・避難誘導、リンドヴルム本拠地に乗り込んで壊滅させた立役者として有名だし、八神家はパラディース・ヴェヒターとして局内でも有名だし。君の

ような可愛い男の子があのランサーだと知った時の衝撃ったら。ふふ♪」

「やっぱ気味悪いですか？　こんな子供が有名になるほどの強さを持っていて」

「ぷふっ！　なにそれ自慢？♪　」

「わっ？」

くしゃくしゃと乱暴に頭を撫でられてしまった。本当に豪快な人だったよな。それでいて優しくて、温かくて。これが母親なんだって憧れもあった。俺はそんなクイントさんが好きだった。だから亡くなったと知った時、その原因がスカリエッティと知った時、どれだけ心が乱されたか。

「気色悪いなんて思わないよ。というか羨ましい！　それほどの強さがあれば何だって出来るから！　だから君はその力を正しく使って、弱い人を守っていってほしい。私はそう思うな」

本当に楽しそうに笑うクイントさん。この笑顔をナカジマ家から無くさせるわけにはいかない。グッと握り拳を作り、決意を新たに固める。そしてナカジマ邸へと着き、「ようこそ。ナカジマ家へ♪」クイントさんと一緒に庭へと入る。広い庭にはギンガとスバルが居て、ギンガはすでにシューティングーツの型の練習をしていた。スバルは庭に設けられている長椅子に座って、ギンガの練習風景を眺めていた。

「ただいま、ギンガ、スバル！」

「「あ、おかえりなさい！」」

２人は満面の笑顔を浮かべてクイントさんの側に駆け寄って来て、その後ろについて来ていた俺を見たら、「こんにちは！」ギンガは笑顔を崩さずにお辞儀をしてくれた。まぁ、スバルはギンガの後ろに隠れるようにして「こんにちは・・・」おどおどと挨拶。やっぱこの時期はまだ人見知りの気があるか。

「こんにちは。今日１日お世話になる、時空管理局・本局、内務調査部・査察課・査察官、あと捜査部・特別技能捜査課・捜査官のルシリオン・セインテストです。よろしくお願いします」

「えっと、よろしくお願いします？」

こちらも笑顔を作ってビシッと敬礼入りの挨拶をして見せると、ギンガはどう返せば良いのか思い浮かばなかったのかそう返した。クイントさんが「いらっしゃい、で良いと思うよ」そう言うと、「いらっしゃい、ルシリオンさん！」ギンガはそう言い直した。

「あの・・・いらっしゃい」

遅れてスバルも挨拶してくれた。それから家の中に案内されたところで「コレ、おみやです。みんなで頂いて下さい。我が手に携えしは確かなる幻想」創世結界内から菓子折りを取り出して、クイント

さんに手渡す。何も無いところから急に手土産が出現した所為かギンガとスバルは目を丸くしていた。

「1つはラスク、1つはロールケーキです。お口に合えば良いのですが・・・」

ラスクは俺の手作りで、ロールケーキは翠屋のものだ。俺の物はともかく翠屋のロールケーキは高評価だと思う。

「わざわざありがとう、ルシル君♪　おやつの時間に頂こうか♪」

「「はーい！」」

「じゃあ、ルシル君、客室に案内するからついて来て」

「あ、はいっ」

1階にある来客用の洋室に案内される。そこは7帖ほどの広さがあり、客室にしてはちゃんとクローゼットや鏡台、脚の短いテーブルにデスクもある。とりあえずベッド側にボストンバッグをドサッと置き、リビングへ戻る。クイントさんは冷蔵庫を開けて中身を確認中のようだ。そしてギンガはシューティングアーツの練習を再開していて、スバルもまたさっきと同じように長椅子に座ってギンガの練習風景を眺めている。

（さーて。これからどうやって時間を潰そうか・・・）

ホテルに泊まる気だったため、任務までの時間は適当に外を出歩いたりしようとしていたんだが、こうなってはそれでも出来ない。リビングでウロウロしていると「そうだルシル君。良かったらだけど、ギンガの組手の相手をしてあげてくれない？」クイントさんにそうお願いされた。

「俺は構わないですけど・・・」

「あの子からのお願いでもあるの。管理局の中でも指折りの実力者だって伝えたら、是非って」

チラッと庭に居るギンガの方に目を向けたら、偶然か目が合った。するとギンガはペコっと頭を下げた。クイントさんとギンガ本人からお願いされたとあっては「良いですよ」承諾するしかないだろう。

「ありがとう。じゃあ、私は夕飯の買い物に行ってくるから、娘たちと一緒にお留守番をお願いね」

「判りました。お任せください」

「ん。あぁ、そうだ、ルシル君。何か食べたい物とかある？　リクエストがあれば言って」

「お任せします。けど強いて挙げるなら、クイント准陸尉の得意料理で」

「私の得意料理・・・。判った！　じゃあ今夜はそれで行こう！」

そうして俺はギンガの相手をすることになり、クイントさんは「いってらっしゃーい！」ギンガとスバル、ついでに「いってらっしゃい」俺にも見送られながら、「いってきま～す♪」買い物に出かけた。

「えっとじゃあ、ギンガ、と呼んでも良いかな？」

「あ、はい。それで良いですよ、ルシリオンさん」

「ルシルで良いよ、ギンガ」

「え、あ、それじゃあ・・・ルシル・・さん」

「ＯＫ。よし。始めようか」

制服のジャケットだけを脱いでＹシャツとスラックスになって、軽く準備運動を終える。ナカジマ邸の庭は八神邸より広いから自由に動けるスペースがかなりある。ま、徒手空拳の練習だからそんなに広さは無くても良いんだがな。そして俺とギンガは庭の中央で向かい合い、「よろしくお願いします」礼をし合う。そして・・・

「行きます！」

ギンガは先手必勝とでも言うようにいきなりの正拳突き。俺はいなすことはせずに右前腕を掲げてガードする。いきなり本気を出して差を見せつけるようなことはしない。今はとにかくギンガのレベル

を計る。そしてギンガのレベルに合わせて、そこから段階的にレベルを上げていけば、ギンガも俺の動きに引っ張られてレベルアップしやすいはずだ。

（しかし、重い一撃だな・・・！）

魔力強化が必要ないほどに重い拳打。ギンガはもちろんスバルも練習すればこれくらいの重みを実現できるだろう。俺も反撃として速度を落とした正拳突きを繰り出すと、ギンガはフットワークを活かして拳が届かない距離まで後退して、「はっ！」即座に距離を詰めて来て、上段蹴りを繰り出してきた。それをまた右前腕を掲げてガード。ギンガの攻撃は全てガード、俺の攻撃は防御も回避もしやすい手加減したもの。その応酬を繰り返すこと3分。ＰｉＰｉＰｉと電子音が鳴った。

「あ、ルシルさん、インターバルを挟みます！」

ギンガがそう言いながら構えを解いたため、俺は繰り出しそうになっていた拳を緊急停止。スバルが腰かけている長椅子にギンガと一緒に座る。インターバルについて話を聴けば本気の組手の時は、３分ごとに1分のインターバルを挟むようにクイントさんから言われているそうだ。

「おねーちゃん、タオル」

「ありがとう、スバル♪　ルシルさんもどうぞ」

用意していたタオルをスバルから受け取ったギンガが、俺にもタオルを手渡そうとしてくれた。実際、本気を出していないから汗はかいてないんだが、受け取るのを拒否すると変に思われそうだから「ありがとう」タオルを受け取り、汗を拭くフリをする。

（今の3分間でギンガの大体のスペックは確認できた）

次の3分はギンガに合わつつ、少しずつレベルを上げていく。最初は困惑するだろうが、ついて来ることが出来るようになっていればその時はレベルアップを果たしたことになるわけだ。

「ルシルさん。もう一試合、お願いします！」

「ああ、喜んで」

第2ラウンドだな。ギンガと一緒にまた庭の中央で向かい合い、「よろしくお願いします！」礼をし、構える。そして「せいっ！」先手はギンガで、繰り出すのは中段蹴り。それを両手でパシッと受け止めて押し返す。ギンガが少しよろけたところですかさず反撃のデコピン。

「あたっ・・・？」

目を瞑ったその隙を突いて追撃も出来たが、それではすぐに終わる。ギンガが体勢を整えるまで待機だ。ギンガはさっきまでとの俺とは違うとすぐに察したから構えたまま警戒に入った。

「どうした、ギンガ。来ないなら、こちらから行くぞ」

「っ！」

ギンガとの距離を詰めて連続デコピン。速度は加減してあるため「っく・・・！」ギンガは防御できている。それに不自然にならないようわざと隙を作れば、まだまだ荒いがちゃんと突いて来る。動体視力もなかなかだ。俺のデコピンを受けないよう必死に防御をしながらも反撃するギンガ。互いに一歩も引かない攻防を続けて1分半。

（さぁ、ギアを上げていくぞギンガ・・・！）

デコピンだけでなく蹴りを加えると、「うぐ！？」ギンガは反応しきれずに蹴り飛ばされてしまった。

「おねーちゃん！」

「だ、大丈夫！　お姉ちゃんは大丈夫だから！　行きます！」

ギンガは服に付いた汚れを払うことなく向かって来た。彼女もさらにギアを上げて、まだ拙いがコンビネーションを仕掛けてきた。そんな攻防を続けて第2ラウンドは終了。ギンガは第1ラウンド以上に息を切らし、汗をかいていた。

「おねーちゃん・・・！」

「つ、強い・・・！　やっぱり・・・というか・・・！」

スバルが用意した濡れタオルを、ギンガは仰向けになって目の上に置いている。少しばかりギアを上げる速度が速過ぎたようだ。完全に俺のミスだな。そんなギンガの様子に「どうして？」スバルがポツリと漏らした。

「おねーちゃん。いろんなところ擦りむいて痛そう。それなのに、どうしてそんなに頑張れるの・・・？　痛いの嫌じゃないの・・・？」

「スバル・・・」

「あたし、痛いのも怖いのも嫌い。自分がそうなるのは嫌いで、誰かにそうするのはもっと嫌い。あたしとおねーちゃんの体、普通の人たちと違うから。だから壊したくないものまで壊しちゃうのは・・・すごく怖いよ」

自分が傷つけられたり、誰かを傷つけて与える痛みを嫌っているスバル。そんな彼女は「ルシル・・・さんは、どうして？」俺にも訊いてきた。

「誰だって痛いのも怖いのも嫌だと思うよ。俺だって傷つけたり傷つけられたりするのは嫌だからな」

「じゃあなんで・・・？」

「そうしないと大事な人を守れないから。傷つけないで済めばそれで良い。けど、全てが話し合いで解決できるほど世界は優しくない。

ごめんな。こんな夢のないことを話すべきじゃないんだろうけど、でも現実だ。だから俺は強くなりたい。守りたい人を守りたいから」

そう答えると、「すごい・・・」ギンガは感嘆の声を漏らし、スバルは自分の両手を見詰め、「守るための強さ・・・」弱い力ながらも握り拳を作った。

「あたしも・・・強くならないとダメ・・・なのかな？」

「大丈夫だよスバル。父さんも母さんも、私も居るから」

ギンガが体を起こしてスバルに微笑みかけるが、「でも・・・」スバルには迷いが生まれてしまっていた。後に機動六課が設立されるかどうか判らない今、ここでスバルの将来を決定づけてしまわないか不安だが・・・

「スバルは支えになれば良いんじゃないかな」

「「支え・・・？」」

「スバルは優しい女の子だ。強くならなくても、支えることは出来ると思う。強さで守ること、優しさで支えること、出来ることをやればいいさ」

そう言って笑ってやると、「ルシルさんの言う通りだよ、スバル！」ギンガもそう言ってスバルに微笑みかけた。そしてスバルは「うんっ！」笑顔で頷いた。それから俺とギンガはもう1戦だけ組手をし

た後、俺は2人の勉強を見たりしてクイントさんが買い物から帰って来るまでの時間を潰した。

「ただいまー！」

「「おかえりなさーい！」」

「おかえりなさい、クイント准陸尉」

買い物から帰って来たクイントさんを出迎える俺たち。ギンガとスバルは車に積んである買い物袋を1袋ずつ手にして、えっちらおっちらと家の中へ入っていく。もちろん「俺も手伝います！」残り2袋を両手に持っていこうとしたら、「お客さんにさせられないわ」クイントさんは微笑んで、軽々と重そうな買い物袋を持った。

「今日はみんな大好き鍋料理よ！」

「やった！」「わーい！」

冷蔵庫に食材をしまい込むクイントさんとギンガとスバル。微笑ましい光景に俺も笑みを浮かべた。そして「じゃ、ルシル君のお土産を頂こうか！」ということになり、ロールケーキの箱を開封。

「おお！」「「わぁ♪」」

「チーム海鳴の1人、高町なのはのお母さんは菓子職人でして。とっても美味しいんですよ」

「そうなんだ！　じゃあこのラスクも？」

「あー、いえ。それは俺の手作りでして。すいません、手作りの物で」

味には自信はあるが、店の物じゃないということがちょっとな、と思う俺も居るわけで。でも「すごい！」クイントさんや、「手作りなんですか！？」ギンガや、「美味しそう！」スバルはそんなこと気にしてはいなかった。

「あの、食べて良いですか！？」

「あ、あたしも・・・！」

「もちろんだとも♪　色によって味も違うから、楽しんでもらえると思う」

「それじゃあおかーさんも♪」

ギンガはハチミツ、スバルはストロベリー、クイントさんはココアのラスクを手に取ってパクっと一口。口に合えば良いなぁと思っていると、「美味しい！♪」３人とも笑顔になってくれた。俺はホッと一安心。

「本当に美味しい！　ルシル君、君すごいわ！」

「味が違うから止まらないです！」

「あ、おねーちゃん、ソレあたしが食べようって思ってたのに！」

「まだ同じ味があるから良いでしょ！」

「むぅ～」

ギンガとスバルの小さな争奪戦に、俺とクイントさんは顔を見合わせて「ふふ♪」笑い合った。ナカジマ一尉の分はしっかり残しておくってことになり、今度はロールケーキだ。クイントさんが４枚に切り分けて、ロールケーキも頂く。もちろん翠屋のロールケーキも好評だったよ。世界を超えて好評な桃子さんのロールケーキ・・・すごいなぁ。

そうしておやつの時間も終わり、ギンガは俺との組手の影響か眠ってしまい、スバルも釣られてお昼寝だ。そして俺は、クイントさんの願いでラスクの作り方を教えることに。よほど気に入ってもらえたらしく、「旦那や娘たちにいつでも作ってあげたいから」そう言ってくれた。

「ただいま～！」

それから夕方。クイントさんが夕飯を作り始め、ギンガとスバルが昼寝から起きて来てそう間もなく、ナカジマ一尉が帰宅した。クイントさん達は「おかえりなさい！」と出迎え、俺も「お邪魔しています、ナカジマ一尉」敬礼して出迎える。

「おう、坊主。ちゃんとゆっくりしているか？　明日は重要な任務があるからな」

そう言って俺の頭をくしゃくしゃ撫でたナカジマ一尉は「ちょっと着替えてくるわ」と、一旦自室らしい部屋へ向かい、ラフな格好に着替えてリビングに戻って来た。

「おとーさん！　ルシルさんが作ったお菓子すごい美味しいんだよ！」

「それにすごく強いんです！　私、全然敵わなかったです！」

「あと、勉強も出来るんだよ！　先生よりも判り易かったからすぐに宿題終わったんだよ！」

そしてダイニングテーブルに着くや否やギンガとスバルが今日の出来事を話し始めた。楽しそうに話す2人の様子に「そうかい、そうかい」ナカジマ一尉も笑顔で相槌を打っている。

「悪かったな坊主。娘たちの遊び相手になってくれてよ。大変だったろ」

「いえ、そんなことは。俺も楽しかったので」

改めて家族って良いなぁって思える大切な時間だった。だから本心からそう返すと、ナカジマ一尉は「なら良かった」と、本当に嬉しそうに微笑んだ。

Ｅｐｉｃｏ?魔窟～Ｄｅｖｉｌ'ｓ　Ｌａｂｏｒａｔｏｒｙ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

クイントさんの作った鍋を美味しく頂いた後、ギンガやスバルと一緒にテレビを観ながらリビングで休憩していると、「ルシル君。先にお風呂済ませて来て」クイントさんがそう言ってきた。さすがに女の子より先に入るのは憚られるため「俺よりギンガ達を・・・」と、順番を譲る。

「でもお客さんだし・・・」

「いえ、そうであっても女の子の前に先に入るのは気兼ねします。うちでも入浴は最後ですから」

「そう？　じゃあ・・・ギンガ、スバル」

「「はーい！」」

２人はソファから立ち上がり、風呂場へと向かって行った。ナカジマ一尉は自室で陸士１０８部隊副部隊長としての仕事をし、ギンガ達は風呂場へ。リビングには俺とクイントさんの２人だけとなった。クイントさんは俺のすぐ隣に腰掛け、「本当に不思議だよね」俺の頭を撫でてきたかと思えば「？？」ギュッと抱きついた。

「ルシル君にはちょっと謝らないとダメだな～って思っていた事が

1つあって」

「俺にですか？」

「今回の任務、かなり危険なものになると思う。こちらが選んでおきながらだけど、やっぱりこんな危険な任務に君のような子供を連れて行くことが申し訳なくて・・・」

それが俺に対して謝りたい事だった。正直、"堕天使エグリゴリ"と死闘を繰り返してきた俺にとっては格段にヌルい任務になるだろう。魔族や"エグリゴリ"が相手でないならまず俺に負けはない。問題は俺よりクイントさんら首都防衛隊だ。ナンバーズが敵としていない今、何が敵として待ち構えているか判ったものじゃない。

「俺の方は気にしないでください。まだまだ子供ですけどそれなりに経験は積んでいるつもりです。まぁ、クイントさん達に比べればひよっこですけどね」

「・・・ありがとう、ルシル君」

「・・・？　あの、クイントさん、いつまでハグを・・・？」

話が終わっても俺はクイントさんから解放されなかった。

「ルシル君、男の子なのに抱き心地が良いのよね♪　顔はプニプニでスベスベなのに、体は男の子らしく結構がっしりしてるのよね。髪の毛も羨ましいほどにサラサラだし。あー、離れられないわ～」

それから数分、クイントさんにされるがままで居ると「おいおい。何やってんだ」ナカジマ一尉がやって来て、クイントさんの様子に呆れて苦笑い。クイントさんは「だって抱き心地が良くて」そう言い、あくまで俺を離そうとしなかった。それからさらに数分、「お風呂空きました～！」パジャマ姿のギンガとスバルがやって来て、俺とクイントさんの様子に「？？？」小首を傾げた。

「はーい。それじゃあ今度こそ、ルシル君が入る？」

「いえ、最後で構わないですよ」

「じゃあ、おとーさん。先に入って来て」

「良いのか、坊主。うちの娘が出たんだからお前さんが気兼ねすることないだろ」

「お構いなくです、一尉。ただ、そろそろクイント准陸尉から解放されたいかな～っと」

「だそうだぞ、クイント」

「は～い」

ようやくクイントさんからのハグから解放された。そしてナカジマ一尉は風呂へ向かい、ギンガとスバルはクイントさんの両側に座った。ちなみに俺は3人の邪魔にならないように端っこに移動。

「あー、おかーさん幸せ～♪」

「「わっ？」」

クイントさんは両脇に座るギンガとスバルを抱き寄せ、２人に頬ずりをする。きゃっきゃと弾んだ声を上げ、さっきの俺のようにされるがままだ。クイントさんは頬ずりを堪能した後、「ねえねえ、ルシル君。うちの家族にならない？」突拍子もない提案をしてきた。

「家族・・・？　ルシルさんがお兄さんになる、ということ・・・？」

「ルシルおにーちゃん・・・？」

ギンガとスバルの視線が俺に向けられた。家族になろう。俺はこれまでに２通りの誘われ方をした。１つは養子による兄弟関係、１つは結婚による夫婦関係。前者は以前のはやてで、後者はシャルやトリシュタンだ。クイントさんはどっちなのだろうと（明らかに後者だよな）思って「どちらの意味でしょう？」そう訊いてみた。するとクイントさんはニヤニヤ笑って、ギンガをチラッと見た。

「ギンガって、学校に好きな男の子とか居る？」

俺とギンガを結婚させる気か、この人は。ギンガは顔を赤くして「い、居ません！」答えたら、「じゃあ、ルシル君はどう？」クイントさんがそう言うものだから、「？？・・・っ！！」ギンガはその意味を察してさらに顔を赤くした。そしてスバルは意味を解ってい

ないため、目を丸くしている。

「ルシル君、将来は約束されているわよ～？　顔よし、頭よし、性格よし、家事も出来て、魔導騎士として強い、後の調査官っていう将来有望さもある。その代わりライバルが強い・・・んだよね？」

「・・・まぁ、一応・・・」

はやては後の機動六課の部隊長で、シャルはベルカ自治領ザンクト・オルフェンの実質的なリーダーであるフライハイト家の娘で、トリシュは後に弓のパラディンとなるだろう。あれ、俺、ひょっとして逆玉の輿状態なのか？

「どうギンガ？　頑張って参戦――」

「しません！」

ギンガは大きな声を上げて「おやすみなさい！」それでも律儀に挨拶をしてリビングを出て行った。スバルは最後まで俺たちのやり取りの意味が解らなかったようで、「おやすみなさい」ペコッとお辞儀してからリビングを出て行った。

「あちゃあ」

「クイント准陸尉・・・、変なことを仰らないでください」

「あら？　もしかするとルシル君はもう相手を選んじゃってたりす

る？」

「そういうわけではないですが・・・、いきなり結婚してはどうか？なんて、ギンガが可哀想過ぎます。彼女にも選ぶ権利があるんですから」

こういう話になる度に俺は自分の存在意義や、その想いを裏切ることへの罪悪感で押し潰されそうになる。

（なんか・・・しんどいな・・・）

クイントさんはそんな俺の心情を察したのか、または偶然かまた俺を抱きしめてきた。

「クイント准陸尉・・・？」

「ただ、なんとなくだけどこうした方が良いかな、って思ったの。ルシル君。君、本当に大人びた表情をするよね。私、これでも数多くの人の顔を見てきたから判る。とても寂しそうな顔してた。ごめんね・・・」

「いえ」

心地良いクイントさんの温かさに抵抗しないでいると、「おー。またやってんのか。坊主も大変だな」ナカジマ一尉が風呂から上がって来た。次も譲ろうかと思えば「はい。次はルシル君ね」クイントさんが俺を解放した。

それでも譲ろうとしたら、「それだったら一緒に入ろう♪」なんて言われたから、「お先に頂きます！」俺は即座に折れて、お先に風呂を頂くことにした。だって無理、無理だって。裸を見られるのは構わない。だが、見るのは耐えられない。俺だって男だもん。

「脱衣所のドライヤー、好きに使っていいからね」

「あ、はい！」

そんなわけで俺は先に風呂（とは言ってもシャワーだけだが）に入り、「空きました。ありがとうございます」ソファでくつろいでたクイントさんに空いたことを知らせ、先に順番を譲ってくれたこと、そして今日1日のことを含めて感謝した。

「どういたしまして。それじゃあ私もお風呂を済ませて、明日のために休むわね」

「はい。おやすみなさい」

「おやすみなさい♪」

リビングでクイントさんと別れ、用意してくれた客室のベッドに入って横になる。明日は早い。意識的に思考を切り、すぐに眠りに入った。

そして自然と目を覚まし、時刻を確認する。起床予定時刻の午前5

時半ジャストの目覚めだった。ベッドから降りて大きく伸びをしてから、替えの局の制服へと着替え、鏡台の前で家から持って来た櫛を使って髪を梳かし、ヘアゴムで後ろ髪を縛る。そして洗面所を借りて顔を洗い、歯を磨き、「よしっ」最後にニッと笑顔を作る。

「おはようございます、クイント准陸尉」

「おっ。おはよう、ルシル君。寝坊もしないで、さすがね～」

キッチンにはエプロン姿のクイントさんが居て、朝食を作っていた。それにギンガとスバルとナカジマ一尉の弁当もだ。クイントさんが「さ、出来たわ♪」俺とクイントさんの分の朝食を作り終え、ダイニングテーブルに一般的な洋食風の朝食が置かれた。そして2人で今日の任務の工程を確認し合いながら朝食を頂くこと30分。食器洗いなどの片付けを2人で行っていると、「今日は良い天気になりそうだな」ナカジマ一尉が起きてきた。

「おはよう」「おはようございます」

「今、朝ご飯用意するから」

「あー、いいよ。俺がやるから。おまえはゆっくりしてろ」

「ありがとう」

リビングでクイントさんやナカジマ一尉と他愛無い話をして時間を潰し、そして6時15分ごろ・・・

「ルシル君。そろそろ行こうか」

「はいっ」

「クイント、坊主。気ぃつけてな」

俺とクイントさんは集合場所である地上本部へ向かうため、ナカジマ一尉に見送られながら家を出ようとしたその時、「母さん」「おかーさん」玄関にパジャマ姿のギンガとスバルがやって来た。

「おはよう、ギンガ、スバル。ごめん、起こしちゃった？」

「ううん。お見送りしようってスバルと決めていたから・・・」

「おかーさん、頑張ってね。ルシルさんも、頑張ってね」

「ありがとう2人とも。おかーさんは大丈夫よ。何せルシル君が一緒に仕事してくれるんだから♪」

そう言ってクイントさんがギンガとスバルの頭を撫で、俺に微笑みかけた。だから俺も「大丈夫。クイント准陸尉と一緒に帰ってくるから」そう言って2人に微笑みかけると、スバルが「約束」小指を立てた。

「約束を交わす際の指切りっていう習わしはナカジマ家に古くから残っててな。これまでは家族内だけでやってたんだが。なんの偶然

か俺の遠いご先祖と同じ世界から坊主が来てくれた。悪いが付き合ってやってくれ」

「もちろんですよ。じゃあスバル。指切り」

スバルの小さな小指に自分の小指を絡ませて「ゆ～び～き～り♪」スバルの歌を合図に小指を離す。スバルは「えへへ♪」俺に満面の笑顔をくれた。すると今度は「私もお願いします！」ギンガも小指を差しだしてきたから、彼女の小指とも絡ませる。

「ルシルさん。母さんを、よろしくお願いします！」

「お願いします！」

「頼むぜ、坊主」

「はいっ！」

「いってきます！」

そうして俺とクイントさんは、ナカジマ一尉たちに見送られながら地上本部へ向かった。到着するまでの車中で「どうだったルシル君。うちの家族のこと」クイントさんにそう訊かれたため、「とても楽しい時間を過ごせました」本心で答えた。

「良かった♪　良ければまた遊びに来て。ギンガもスバルも君のこと気に入ってくれたみたいだし」

「その時は是非！　あ、でもギンガとの結婚云々という話はもう無しですよ？」

「ざんね～ん♪」

そんな笑い話を交えて車は走り、地上本部へ到着。局員専用の駐車場に車を停めたクイントさん。そして俺たちは車を降り、「それじゃあルシル君、ついて来て。地上本部、初めてでしょ？」クイントさんの案内で、地上本部内にいくつもあるミーティングルーム、その第3にやって来た。そこは部屋と呼ぶよりは講義室のような場所だ。

「おはようございます、隊長！」

第3ミーティングルームには先客、首都防衛隊・隊長、ゼスト・グランガイツが居た。クイントさんの敬礼に「ああ、おはよう」敬礼を返した騎士ゼストが俺へと視線を移した。だから俺も「本日はお世話になります、騎士ゼスト」そう敬礼してみせた後にハッとした。

「あ、局内ではグランガイツ一尉とお呼びした方が良いですね。失礼しました」

「気にするな。それよりもこちらこそ世話になるぞ、セインテスト査察官。・・・なるほど。良い面構えをしている。イリスの父リヒャルト司祭から娘を盗られたと、時折絡み酒に付き合わされることもあるが。聴いていた話とは随分違うな。まぁ、リヒャルト司祭は

子煩悩ゆえ、か。苦労するな」

そう言って苦笑した騎士ゼストには「いえ」こちらも苦笑するしかなかった。それから席に着いて防衛隊のメンバーが揃うまで待ち、そして「あ、ルシル君。おはよう♪」メガーヌさんを始めとした隊員たちがミーティングルームに集まっていく中、騎士ゼストに挨拶を終えたら俺をチラッと見ていく。メガーヌさん以降の隊員はみんなそんな風に席に着いていった。

「全員揃ったな。では最後のミーティングを始める。が、その前に本日の任務に同行してくれる局員を紹介しよう。本局・内務調査部所属、ルシリオン・セインテスト査察官だ。特別技能捜査課の捜査官としても優秀であり、魔導師ランクＳ＋の古代ベルカ式の騎士だ。それに知っている者も少なくないだろうが、彼はパラディース・ヴェヒターの参謀、ランサーだった男だ。実力もその知識・知恵も申し分ないだろう」

「紹介に与りましたルシリオン・セインテストです。本日はお世話になります。よろしくお願いします！」

椅子から立ち上ったうえで敬礼で挨拶すると、「よろしくお願いします！」クイントさんやメガーヌさんら隊員たち全員が敬礼で返してくれた。一応の犯罪者でもあったパラディース・ヴェヒターの一員だったことには誰からも文句や反対が出なかったことには感謝だ。そして隊員たちからの簡単な自己紹介を受けた後、今回の任務について改めて確認をすることに。

「任務内容についてはすでに伝えている通りだ。中央区南にあるハゲネ山脈が任務先だ。ハゲネ山脈には旧暦の負の遺産である研究施設が多数存在している。その全てが新暦と同時に廃棄されてはいるが、残念なことに今は犯罪者の温床となっている。我々も何度か検挙しているな。その廃棄された研究施設の1つに、広域指名手配犯ドクター・プライソンと関わりがあり、さらには不許可で機能している施設があるという。そこを捜査する」

モニターに山脈のマップが映し出され、廃棄された研究施設の位置を表す光点が7つほど表示された。騎士ゼストは「ある情報により、これよりさらに3つに絞られる」そう言って、4つの光点が消えた。

「隊長。その情報は誰からなのですか？　それに信用できるものなのですか？」

「それが誰なのかはプライバシーのこともあり言えないが、古くから管理局に協力してもらっている民間人だということで、これまでに別の部隊が何度も捜査協力してもらっている。それにその情報のおかげでいくつもの検挙を成功させている。信用は出来るだろう」

「判りました。ありがとうございます」

「・・・その協力者もさすがにどれか1つにまでは絞れなかったようですが、ここまで絞ってくれたことには最大限の感謝ですね」

「しかしハズレを引いてしまった際、次の施設捜査へのタイムラグがかなり無駄というか、危ういですね」

「だからと言って隊を3班に分けるのはあまりにも危険です」

「ですね。3分の1の確率でアタリを引こうというのも難しいでしょうし・・・」

クイントさん達がそう話し合う中、「あの、いいですか」俺は挙手。騎士ゼスト達からの視線を一斉に浴び、「意見であればどれだけでも欲しい」騎士ゼストに促されたから俺は席を立った。

「機能している施設であるのであれば、おそらくセキュリティなどのために電源が入っていると思います。自分には電子戦用の魔法があるので、潜入前に3つの施設に同時にアクセスし、アタリかハズレかを確認できるかと思いますし、セキュリティの網に感知されることなく突破できるように作ってありますから、まず気付かれません」

「ルシル君、すごい・・・」

「セインテスト査察官。それが出来れば本当に大助かりだが、万が一、3つとも機能していたとすればどうする？」

「問題ないと思います。自分の電子戦用魔法、名をステガノグラフィアというのですが、相手側のセキュリティに一切感知されることなくクラックして、情報を引き抜いたり、書き換えたり、破壊することも可能です。ですので、たとえ3つとも機能していようとも、潜入前にその施設のデータを引き抜けば、機能していようがしてい

まいがアタリかハズレかは判ります」

そう答えると「おお・・・！」どよっと小さいながらも驚嘆の声が上がった。騎士ゼストは「これで大きな問題は解決したな」満足そうに頷いてくれた後、「ではもう1つの問題だな」2つ目の問題を出した。

「多くの犯罪者がたむろしている山脈だ。連中と戦闘になるようであれば、その騒ぎから我々の存在が向こうに気付かれてしまう可能性がある」

とのことだ。確かに騒ぎを起こせばそれだけ成功率が下がる。クイントさん達が意見を出し合う中、俺もいろいろと模索してみる。気付かれない内に奇襲して、一撃で黙らせるのが一番手っ取り早い。もっと手っ取り早い方法があるが、それには条件がある。

「あの、ハゲネ山脈のリアルタイムでの状況を知りたいのですが。出来れば天気を・・・」

俺のリクエストに小首を傾げる面々だったが、「ちょっと待って。調べてみる」メガーヌさんが調べ始めてくれた。そして「ライブカメラによるハゲネ山脈の映像を発見。表示するわね」モニターに今のハゲネ山脈の映像が映し出された。

「メガーヌ准陸尉。施設のポイントを当ててください」

「ええ、判ったわ」

リアルタイムの山脈映像に3つの光点が表示された。俺は「何とか出来そうです」そう言って、やろうとしている事を騎士ゼスト達に伝えた。クイントさん達も最初は、信じられない、と言った風に驚いていたが、「出来ます」俺が断言したことで、「判った。それで行こう」騎士ゼストがＯＫを出してくれた。

「全員出るぞ。あとは時間との戦いだ！」

騎士ゼストに「了解！」敬礼で応じ、すぐに地上本部を出る。捜査車両2台で現場であるハゲネ山脈へ向かう。俺は騎士ゼストとクイントさんとメガーヌさん、それに部隊員のアベオ一等陸士、ウラッコ一等陸士と一緒に1号車に搭乗している。

捜査車両は人員輸送車でもあるため両側の壁に長椅子が備え付けられ、向かい合うようにして座っている。俺の向かい側に座るアベオ一士（２２歳の青年だ）が「いやぁ、ホントすごいよ、君」と、屈託のない微笑みを浮かべた

「純粋な戦闘力でも圧倒的で、さらに電子戦用の魔法を使えて、さらには山脈全体に睡眠効果のある霧を発生させるとか。どれだけ万能なんだって話でさ」

ウラッコ一士（アベオ一士と同期の２２歳だそうだ）も肩を竦めて呆れ笑いを浮かべた。そう、犯罪者との戦闘を回避するための手段として、山全体に睡眠効果のある霧を発生させることを思い付いた。俺がハゲネ山脈の映像を求めたのは、今まさに山に霧が発生しているかどうかを確認するためだ。山の天気にもよるが、今日は霧が発

生しやすい気候だと判り、その手段に打って出たわけだ。

「ルシル君、まだ11歳なんだっけ？」

「その若さですごいわね～」

「いえ。先祖代々の魔法を扱えるように生まれたその時から調整を受けますから」

俺の真実を知らないはやて達にも言っている"嘘"を吐いた。息をするみたいに嘘を吐けることにはもう呆れ果てている。調整という言葉にクイントさん達の表情が曇る。ここで話を終わらせることだけはしないのがせめてもの償いだ。

「でもそのおかげで俺は強くなって、助けたい人、救いたい人、大事な人たちを守れるのですから感謝こそすれ恨むことはないですよ。それに、こうして皆さんの役に立てる。俺はそれだけで良いと思うんです」

そう言うと、俺の両隣りに座るクイントさんとメガーヌさんが2人揃って頭を撫でてきた。だから「子供扱いはダメですよ！」そう言って笑いながら頭を振るうと、ウラッコ一士が「だって子供じゃないか♪」ツッコミを入れたことで笑いが起きた。車内の空気はほっこりとしたのを確認して・・・

「それじゃあ、そろそろ準備に入ります」

ハゲネ山脈付近に近付いたことで魔法・・・ではなく魔術をスタンバイ。効果をキッチリ発現させるためだ。魔法として発動しても良いが、魔法として使ったことがないから効果の持続時間が怪しい。そして、目的の山まであと僅かで到着というところで開けたドアから身を乗り出し・・・

「深淵(ラフェルニオン)へ誘いたる微眠の水霧」

下級魔術・水流系の術式を発動。俺が発生させた霧状の龍は、道路を這うようにこの先にそびえ立つ山へ向かって行った。あとは現地の天然の霧と交わり睡眠効果を伝播させれば、山を覆っている霧すべてがラフェルニオンとなるわけだ。水流系の強みは、元からある天然の水を利用できることだ。少ない魔力と神秘で可能になるからな。

「ついでにサーチャーも飛ばしておきます。発見(コード)せよ、汝の聖眼(イシュリエル)」

手の平サイズの魔力球を２０基と創り出し、山へ向かって放つ。そして車内に１ｍ四方のモニターを展開させ「サーチャーからの映像です」そう説明して、イシュリエルから送られてくる映像を２０分割で映し出させる。

モニターには這うように突き進む霧の龍が目標の山に到達し、そして天然の霧と交わった瞬間が映し出された。他の１９基のイシュリエルが映し出すのは、鹿や鳥と言った動物が一瞬にして眠りに落ちる様。さらには「早速、誰かが眠りに落ちたようですね」あるモニターには数人の男がドサッと山肌に倒れ込む様子が映った。

「あれ？　コイツらどこかで・・・」

「指名手配データに確認をとれ」

「はいっ！」

メガーヌさんが調べること数分。眠りに着いたのはカルナログで指名手配を受けた犯罪集団のメンバーだと断定。騎士ゼストは「本部に応援を！」クイントさんに指示を出した。

「セインテスト査察官。睡眠効果の持続時間は？」

「何事も無ければ3時間は確実に眠ったままです。体を揺すられたり大声で呼ばれたりしてもまず起きません。しかし、さすがに本気で殴る蹴るの暴行には耐えられませんが」

「それで十分だ」

山で寝転がっている犯罪者たちの確保は、応援要請をお願いした後続の地上部隊に任せることになり、俺たちはとうとう山の入り口へと辿り着いた。首都防衛隊９名＋俺の１０名は防護服へと変身し、今より登る山を見上げる。

「ルシル君。霧の影響は私たちにもあったりする？」

そう訊いてきたメガーヌさんに「一応はありますけど、こうすれば良いです」起動した"エヴェストルム"を山道に向かって払うと、

山道だけを開けるようにして霧が左右に分かれた。

「・・・何が起きてももう驚かないかも」

「まったく同意見」

メガーヌさんとクイントさんが呆れ笑い。そして、俺が"エヴェストルム"を振るって起こした風圧で霧を掻き分けながら、俺と騎士ゼストで先頭を歩いて山登りを開始。イシュリエルから随時送られてくる寝落ちした犯罪者の座標ポイントを後続の別動部隊に送りつつ歩くこと２０分ほど、ある洞窟に辿り着いた。

「ここの洞窟の奥にある施設が目的の１つだ」

「判りました。それではこれより３施設へのアクセスを始めます。秘伝（ステガノグラフィア）を暴き伝える者達」

『はい』『ウィ』『ヤー』『シン』『イエス』

目の前に展開したモニター内に３頭身の天使が５体と出現する。クイントさんとメガーヌさんが「可愛い♪」歓声を上げた。俺は「目標の３施設を同時クラック。セキュリティに気付かれないよう施設の情報を全て持って来い」ステガノグラフィアに命令を出す。

『ステガノグラフィア一同。お仕事了解です♪』

『いってき～♪』

『いってら～♪』

『メナディエルも来るんだよ！』

『以前にも同じやり取りしたよ～♪』

5体の天使はピョンと跳ねる仕草をした後、その姿を消した。それから待つこと2分ほど。モニター内にステガノグラフィアが「戻って来た♪」ため、「データを見せてくれ」命じた。

『3施設の内、残念ながら2つの施設にしか侵入できませんでしたぁ「（。～。）「』

『侵入できなかった施設のファイアウォールはとっても強力でした┬╱○ │』

『セキュリティを無視すれば行けたです（ │ ～ │ ；）』

『でもそれは命令無視なので～ （。＞д＜。）』

『戻って来た～「（´∀｀）「』

そう報告を受けた。とにかく「2つの施設から持って来た情報はどういうものだ？ 見せてみろ」そう命じると、モニター内にそのデータが表示された。それは「質量兵器のデータ・・・？」だった。

「データ的に見てかなり古いです。２つの施設は完全に大ハズレですね」

かなり破損していて完全には解読できないが、旧暦のデータで間違いないだろう。そういうわけで俺たちの目標はただ１つに絞られた。ここから移動して、また別の洞窟の入口へと着いた。

「セインテスト査察官。トラップや警報、カメラなどのセキュリティは切れるか？」

「確実とは言えませんがやってみます」

騎士ゼストに答え、ステガノグラフィアへ改めて指示を出す。本局のデータベースにすら容易く侵入できたのに、研究施設へは侵入できなかった。それが少し気掛かりだ。それほどのファイアウォールとなれば、この奥にある秘密はとんでもなく大きなものなのだろう。

『マスター。セキュリティの全解除に成功です（ｐ。∀。ｑ）ン』

『でもやっぱりデータベースへのファイアウォールは突破できなーい（・´ω・｀）ゞ』

「そうか。グランガイツ一尉。セキュリティは切りましたが、やはりこの施設で何をしているのかは直接調べないと無理そうです」

本局以上のファイアウォールか。面倒なことにならなければ良いんだがな。

「いや。セキュリティだけでも無力化できれば十分だ」

「あと、セキュリティは無力化できても、防衛戦力が居るかもしれません」

「そこのところは大丈夫よ、ルシル君」

「私たち首都防衛隊は強いんだから」

クイントさんとメガーヌさんが俺の肩に手を置いた。他の隊員たちも「その通りさ」と、笑顔を浮かべた。騎士ゼスト達を絶対に死なせたくない俺は「念のためにこの魔法を使わせてください」そう願い出て・・・

「オプティックハイド」

元はティアナの幻術魔法だが、もう完全に俺の物となっているオプティックハイドを発動。術者や触れた対象の体や衣服に光学スクリーンを展開させて不可視状態にするという魔法だと、騎士ゼスト達に説明した。全員の姿が見えないためどんな表情をしているかは判らないが、ただ驚いているのは確かだ。

「ですが欠点も有ります。匂いまでは隠せないので、嗅覚の鋭い動物と相対したらアウトです」

それが俺の場合の欠点。オリジナルであるティアナの場合は、激し

い動きや多量な魔力運用を行えば行うほどスクリーンの寿命が早く尽きるらしいが、俺はさらに強力にアレンジしているためその心配は無い。

「何から何まで世話になっているな。感謝する」

「ルシル君、ありがとう」

「君とこうして一緒に仕事が出来て良かったわ」

「アルピーノ分隊長。それ言うのちょっと早いですよ」

「あら」

肩の力がみんないい感じに抜けた。そして騎士ゼストの「任務開始だ。行くぞ」号令で、「はいっ！」俺たちは洞窟内へと侵入した。ここから口頭ではなく念話に切り替える。最初の5分くらいは普通に岩肌の洞窟だったんだが、急に金属の通路へと様変わり。全周囲に気を配りながら通路を歩いて行くと、広いドーム状の部屋に辿り着いた。

『ここは・・・メインルームか何かか？』

『隊長。この部屋から6つの通路が伸びてます』

俺たちが来た通路とは別に左右に3つずつの通路が伸びている。あの先に一体何が待ち構えているのやら。

『セインテスト査察官。このメインコンピュータからアクセス出来ないだろうか？』

『やってみます』

『その間に俺たちは、通路の先を調べるぞ』

『隊長。セインテスト査察官にさっきみたくサーチャー飛ばしてもらえれば・・・』

『ダメよ。流石に気付かれるわ』

俺たちの姿は見えない。そこに誰の物とも知れない魔法が通路を飛んでいるのを、この施設の使用者が見たら1発でアウトだ。そんな危険は冒せない。ただ、何があるのか不明の中でイシュリエルの斥候が出来ないのもまた不安だ。いや、信じるのもまた大事だな。

『セインテスト査察官はここでデータ回収を。俺たちは通路の先の捜査に入る。班に分かれるぞ。俺とグアラとライナー、ナカジマとアベオとクラッコ、アルピーノとスタウトとジュークの3班で行くぞ』

『隊長。ルシル君1人残して行くのは・・・』

『む。そうか』

『俺は大丈夫ですよ。捜査チームを減らす方が危険です。何がある
か判らないんですから。あ、でもこちらに戻って来る時は一報くだ
さい。皆さん以外の誰かが来た時は速やかに黙らせたいんで』

そう説得して、俺は１人で作業に入ることにした。メインコンピュ
ータにアクセスを開始。とんでもファイアウォールだったくせには
パスワードも無しでシステムに侵入できた。ナメてんのかと少しイ
ラッと来たが、それはそれで楽だからラッキーだとしよう。

（セキュリティがしっかりしている割りにはデータの破損が多いな。
ひょっとしてここもハズレか・・・？　とりあえずステガノグラフ
ィアにもサルベージを手伝ってもらうか）

ステガノグラフィアを再発動して、データベースに潜らせる。次々
と文字化けなど破損したデータが集まってきた。その中で目を引い
た「アンドレアルフス？　ディアボロス？　アグレアス？」を呟い
てみる。
ＳＯＡＦＡＣ／Ｘ－０１アンドレアルフス。ＳＯＷＲＡ／Ｘ－０１
ディアボロス。ＥＭＦＩＳ／Ｘ－０１アグレアス。どれも悪魔の名
だ。そして前に付いている型式番号のような文字列。経験からして
Ｘは試作機を意味し、数字は開発順。それに文字化けが酷いが、似
たような型式番号のような単語が１０個以上ある。

「おいおい、しかも比較的新しいデータだぞ・・・！　まさかここ
は、兵器開発施設・・・！？」

さらに踏み込んで調べて行く。ミサイルという単語を発見。先ほど

調べた２つの施設の物よりやはり新しいデータだ。そして調べるうちにディアボロスの詳細に行き着いた。

「Ｔｈｅ　ｓｔｒａｔｅｇｙ　ｏｒｄｅｒ　ｗｅａｐｏｎ　Ｒａｉｌｗａｙ　ａｒｔｉｌｌｅｒｙ・・・！　おいおい、戦争でも始めるつもりか！！」

ＳＯＷＲＡ／Ｘ－０１ディアボロスとは、戦略級兵器・列車砲：試作１号機のことを示していた。おそらく解読できない型式番号付きの単語も何かしらの兵器なんだろう。ふざけるなよ、おい。こんな兵器を造ってどうするつもりだよ。さらには遺伝子構造のようなデータが確認できた。

（遺伝子・・・。っ！　まさか、生体兵器・・・！？）

考えたくはないが、プロジェクトＦを生み出したプライソンのことだ、生体兵器くらい簡単に造れるだろう。やばい、あまりに最悪な情報ばかり出て来て頭が痛くなってきた。

『こちらクイント。一旦そっちに戻るからね。・・・ルシル君の方は何か判った？』

クイントさんからの連絡。俺は『最悪な事ばかり判りました』そう答え、『とりあえず皆さんが集まってから話します』伝えておく。騎士ゼスト達が戻って来るまでにさらにデータを集めようとキーを叩いていた時・・・

「・・・っ！？　ルシル君ッ！！　うし――」

――闇の女王（サリュ・マンソンジュ）の鉄拳――

Ｅｐｉｃｏ?約束～Ｃｏｎｔｒａｃｔ　ｏｆ　ａ　Ｄｅｖｉｌ～

ドクター・プライソン。時空管理局の捜査部に勤める局員であれば誰もが知る次元犯罪者だ。首都防衛隊９名、それに加えて本局・内務調査部・査察課の査察官ルシリオンが、そのプライソンと関わりがあるとされる研究施設へと潜入捜査を開始した。

ルシリオンは施設のメインルームと思われるドーム状の部屋にて、メインコンピュータから施設内に残されたデータの回収作業を行い、首都防衛隊は隊長のゼストと他２名の１班、分隊長のクイントと他２名の２班、同じく分隊長のメガーヌと他２名の３班と、３つの班に分かれてメインルームの両側から伸びる６つの通路を捜索し始めた。

『ナカジマ分隊長。やはり分厚い隔壁をどうにかしないとダメみたいです』

『う～ん。流石にこの分厚さは私でも破壊できないかな～』

『というか、そんなことしたら１発で気付かれるでしょうけどね』

クイント班が調べるために入った通路の先には半月状の隔壁があり、彼女たちの行く手を遮っていた。班員の１人である青年・クラッコは『気付かれないようにサッと開けて、サッと閉めれば・・・』そう提案した。

『開けた瞬間を見られたらアウトじゃないかな？』

『俺たちの姿はセインテスト査察官の幻術魔法で見えていない。隔壁が開いたところを見られても誤作動って思われるんじゃないか？』

『・・・ダメ。見られたら原因を調査するだろうから、ルシル君がメインコンピュータにアクセスしているのに気付かれる可能性がある。この隔壁の先がどうなっているか判らない以上、そんな危ない賭けは出来ない』

完全に手詰まりなクイント班は隔壁の前で立ち往生。だからクイントは『しょうがない。ここの通路の捜査は諦めよう』目の前に立ちはだかる隔壁をコツンとノックし、隊長のゼストに念話を繋げた。

『隊長。ナカジマ班ですが、割り当てられた通路が隔壁に閉ざされているので、別通路の捜査へ移ります』

『そうか。こちらの通路は今のところ隔壁は全て開いているが・・・。もしかするとそちらの通路がアタリなのかもしれんが・・・。まずは開いているところから確実に攻めて行こう』

『了解です』

ゼストから許可を貰ったことでクイント班は来た道を後戻りする。その道中、『こちらクイント。一旦そっちに戻るからね。・・・ルシル君の方は何か判った？』メインルームへ戻る前にクイントはルシリオンへと連絡した。

『最悪な事ばかり判りました。とりあえず皆さんが集まってから話します』

ルシリオンとの念話を切った後、『どういうことでしょうね今の』同じ班員である青年、アベオが腕を組んで小首を傾げた。

『まぁ、詳しい事は集合してから話してくれるようだから、私たちは仕事を果たすことに専念。いいわね？』

『『はいっ』』

そしてクイント班がルシリオンの居るメインルームの入り口に着いた時、クイントは見た。メインルームの至るところにある影の１つから何者かの頭が音も無く出て来たのを。

「・・・っ！？」

それは１０代後半ほどの少女だった。バイオレットのショートヘアの髪型はインテークで、カチューシャを付けている。クリムゾンの瞳は猫目で、口もどことなく猫口。ハイネックの黒セーターに白のロングコート、裾から覗くズボンも黒、そして茶色のブーツという格好だ。

影から出て来た少女は迷う素振りも見せず、視認できないはずのルシリオンへ向かって音も無く一足飛びで接近。しかも拳に黒い靄のような纏わせている。完全に攻撃体勢。メインコンピュータのキーを叩いているルシリオンは気付いていない様子だ。それが判ったからこそ・・・

「ルシル君ッ！！　うし――」

――闇の女王（サリュ・マンソンジュ）の鉄拳――

クイントは大きく声を上げた。しかし最後まで言い切るより先に、ドゴンッ！およそ人を殴った時に出る音とは思えない程の轟音と共に、「ぐぁ・・・っ！？」ルシリオンは殴られ、さらに黒い靄が拳の形となって彼を吹き飛ばした。その衝撃で幻術は解かれ、姿が露わになったルシリオンは空間モニターを突き破り、その奥の壁に叩き付けられてしまった。

「むふふ、絶景かな、絶景かな♪」

「ルシル君！」

「なんだ今の・・・！？」

「影から女の子が出て来た・・・！？」

壁に出来たクレーターの中心で「ぅ・・・ぐ・・・」苦悶の声を漏らすルシリオン。少女はさらに追撃を行おうとしているのかルシリオンに向けて手の平を翳した。彼の愛称「ルシル君！」とクイントは叫び、自らの存在を隠すような真似をせずに「このぉぉぉぉ！」少女へと立ち向かって行った。

「カートリッジロード！」

クイントの両手には"リボルバーナックル"という、カートリッジシステム搭載・非人格式・拳装着型のアームドデバイスが装着されている。手首部分には歯車状のパーツ、その名称をナックルスピナーという機構があり、ソレが高速回転することで回転力による打撃の威力強化や、魔力を加速させて撃ち出すことが可能だ。

「はぁぁぁぁぁぁッ！」

クイントの両脚にはローラーが４基付いたブーツが装着されている。それゆえに陸上での高機動戦を可能としている。クイントはナックルスピナーを高速回転させた右の"リボルバーナックル"を振りかぶり、ローラーブーツによる瞬発力で少女へと高速で突撃して行った。

「ナックルダスタァァァァーーーーーッッ！」

そして繰り出すのは魔力を圧縮し、上体から拳を強化して直接相手を殴りつける一撃ナックルダスター。ルシリオンを一心に見つめる少女は避けようとも防ごうともせず、クイントの一撃をまともに右頬に受けた。アベオとクラッコが「直撃！」とガッツポーズをしたが、クイントは「うそ・・・」その顔を驚愕に染めた。

「ちょっと～。僕の邪魔をしないでほしいんだけど」

クイントの拳をまともに受けながら、少女はよろけるどころか、殴られていながらも痛がる素振りも一切見せない。そして少女は、自

分の頬を打った見えないクイントの右拳をギュッと掴んだ。

「どういう方法で姿を消してるのか知らないけどさ。こうして触れられていればどこに居るか判るし、それ以前に移動時にすごく音がするんだよね。ホイール音って言うんだっけ？　あれでも位置が掴めるんだよ」

「っ・・・うっ！」

「「ナカジマ分隊長！」」

少女はクイントの右拳を鷲掴んだまま旋回して、クイントをアベオとクラッコの居る場所へ向かって放り投げた。飛ばされた来たクイントを抱き止めた2人は「おわっ！」その衝撃に踏ん張りきれずに吹っ飛び、仰向けに倒れ込んだ。それと同時に3人の幻術も解除されてしまった。

「そのまま寝てれば？　僕の邪魔しようっていうんなら・・・マジで殺(ヤ)っちゃうよ？」

少女が起き上がり途中のクイント達に振り返った。ただ佇んで居るだけなのにその言いようのない威圧感に、「っ！」アベオとクラッコは委縮してしまっていた。しかし「管理局員である前に大人として、親として、子供を護るのが務めよ！」クイントだけは懸命に自分を奮い立たせた。

「へぇ。神器王とのガチンコの前哨戦としてちょろっと遊んであげ

るよ」

「（ジンギ王？　ルシル君のこと・・・？　ううん、そんなことは今はどうでもいい）来なさい！」

「いいよ、行っちゃうから♪」

クイントへ向かって駆ける少女。クイントは待ち構え、「パ～ンチ♪」少女が繰り出して来た正拳突きをボクシングで言うダッキング（頭を素早く下げて回避する行為）をすることで躱し、即座にカウンターを打つ。

「ナックルバンカー！」

"リボルバーナックル"のスピナーを高速回転させて魔力を高め、拳の前面に硬質の魔力フィールドを作り出し、そのフィールドごと相手に衝撃を叩き込むカウンター用の魔法を発動。その一撃は少女の鳩尾に確実に打ち込まれた。

「これで！　これで・・・？」

「あのさぁ、もっと本気で打ち込んでよ。僕、全然感じないよ♪」

「そんな・・・！」

クイントの目が大きく見開かれる。1ヵ月入院コース送り覚悟の一撃だった。それでも少女は一切の防御をせずに、その一撃を受けな

がらも全くと言っていいほどにダメージを被っていなかった。

「理解できた？　お姉さん。どれだけ頑張っても届かない高みって言うものがこの世には在るんだよ」

ショックで僅かに後退したクイントに手の甲による裏ビンタが襲う。腕を顔の横にまで掲げることでギリギリ防御態勢に入れたが「きゃあああああ！」その衝撃はあまりにも凄まじく、クイントは十数ｍと弾き飛ばされて壁に叩き付けられてしまった。

「ナカジマ分隊長！」

「子供だからって容赦しねぇぞ！」

アベオとクラッコが武装隊で使われているストレージデバイスの杖を少女に向け、「当たれ！」同時に砲撃を放った。少女は「めんどくさ」そう言って肩を竦めて、２つの砲撃の直撃を受けた。魔力爆発によって起きた煙に覆われる少女を警戒しながら、クラッコはクイントの側へ駆け寄り、アベオはルシリオンの元に駆け寄った。

「分隊長、しっかり！」

「げほっ、げほっ・・・！　私は大丈夫・・・。ルシル君は！」

クイントは自分の身よりルシリオンの身を心配した。ただの裏ビンタでこの威力。しかしルシリオンは拳打で、さらには魔法付きの一撃を受けた。自分が受けたものに比べて威力は何倍もあるだろうと、

クイントは気が気ではない。アベオが「セインテスト査察官！」クレーターにめり込んでいるルシリオンを助けようとした時・・・

――地断つ黒光（ミュール・デカローグ）の鎧壁――

ルシリオンとアベオを隔てるように真っ黒な壁が生まれた。そして「せっかくの磔刑なんだからさ、降ろそうとすんなよな～」晴れた煙の中か現れた無傷な少女がアベオに声を掛けた。

「こなくそ！」

クラッコがさらに砲撃を発射。少女は迫る砲撃を裏ビンタで迎撃、粉砕した。アベオもまた砲撃を放つが、少女は手の平を翳したかと思えばそのまま受け止め、同時に握り潰した。クイント達はようやく思い知った。勝てる相手じゃない、と。

「は～い。心が折れた音がしたよ～」

ゴツゴツとブーツの音を鳴らして歩く少女。クイント達は無意識に1歩2歩と後退した。少女は猫口を釣り上げて笑顔を作り、「ほら～、後悔してるでしょ。だから言ったの、に！」少女がクイント達の元へ一足飛びで接近しようとした、その時・・・

――舞（コード）い降るは、汝（マカティエル）の煌閃――

サファイアブルーに光り輝く30本の槍が柵のようにクイント班と少女の間に突き立てられていった。直後「レーゼフェアァァァァー

ーーーッ！」ルシリオンが少女の名前を怒声で叫びながら・・・

――集い纏え、汝の閃光槍（ポースゼルエル）――

真っ黒な壁を蒼い光に覆われた"エヴェストルム"で斬り裂き、レーゼフェアに斬り掛かるも「もう！　コイツらで遊ぶんじゃなかった！」彼女は頬を膨らませつつ後退して躱す。

「これ以上クイントさん達には指１本触れさせない！」

――舞（コード）い降るは、汝の煌閃（マカティエル）――

レーゼフェアの後退を妨げるようにして再び光の槍が３０本と降り注ぎ、彼女をＵ字に囲った。

――戦滅神（コード・ヴィズル）の破槍――

間髪入れずにルシリオンは"エヴェストルム"の先端より「おらぁぁぁぁぁッ！」彼の有する雷撃系砲撃術式においての最強の一撃・ヴィズルをレーゼフェアの至近距離で発射した。

「ぅく・・・！」

「すげぇ魔力だ！」

「女の子が吹っ飛んだ！？」

クイント班がルシリオンの魔法、いや魔術の威力に驚愕。レーゼフェアは雷撃砲の一撃の直撃を受け、この施設の入り口である洞窟の奥へと消えて行った。ルシリオンはそれを見届けた直後、「ぐ・・・」両膝を突いてしまった。

「ルシル君！」「「セインテスト査察官！」」

クイント班が口から血を流すルシリオンの側へ駆け寄った。

「俺は大丈夫です。クイント准陸尉たちは・・・？」

「私は大丈夫！　それより君、血が・・・」

クイントに続き「俺も」クラッコや「僕も」アベオも無事を伝えるために頷いた。ルシリオンも「問題ありません・・・。治癒魔法を掛けたので」と、袖口で口から流れた血を拭い去った。

「アイツの相手は俺がします。クイント准陸尉たちは、グランガイツ一尉たちと合流してください。一尉たちの元にも防衛戦力が向かっているかもしれません。隊を3班に分けている今はかなり危険です。合流して戦力を整えてください」

クイント班はハッと思い至った。レーゼフェアばかりに意識が向いていたために考えが遅れてしまっていた。ゼストや分隊長メガーヌの班にも敵が迫っているかもしれない、最悪交戦に入っているかもしれないことを。

「いやいや、セインテスト査察官のあんなトンデモ砲撃を受けてまだ動けるなんてありえ――」

――昏き淵より手招く罪深き聖域（サンクテュエール・コンフェッシオン）――

クラッコがレーゼフェアの消えて行った通路へと目をやった直後、通路からウネウネとした真っ黒な影の触手がブワッと溢れだしてきた。アベオとクラッコは「ヒッ」身を引いて、「行ってください！　早く！」ルシリオンがクイント班を護るように前に躍り出た。

「でも、ルシル君1人置いて行くなんて・・・！」

「俺は良いですから！　元々俺が相手しないといけないんですよアイツは！　それがセインテストの宿命なので！」

――瞬神の飛翔（コード・ヘルモーズ）――

ルシリオンの背中から剣状の魔力翼１２枚、細長いひし形の魔力翼１０枚、計２２枚の魔力翼が展開された。空戦において絶大な機動力を叩き出せる空戦形態だ。クイントは無力さに歯噛みしたが、「こちらナカジマ班！　隊長、メガーヌ！　応答願います！」ルシリオンの指示通りにゼスト達との合流をすべく、２人に通信を入れるがノイズが混じり繋がらなかった。

「ジャミング・・・！？　それじゃあ念話は！・・・念話もダメ！」

「ステガノグラフィア！　力尽くでサーバーに侵入し、管理者権限

を奪え！　防衛隊が一刻も早く合流できるように隔壁の開閉を行え！
あとナビもだ！」

『ヤー！（|＾|）ゞ』

メインルーム内に隔壁が開閉する音が木霊する。それと同時、「行ってください！」ルシリオンがそう言い、通路から溢れ出す影の触手の中から歩いて出て来たレーゼフェアへと対峙する。そしてクイント班は、『こちらですε＝ε＝ε＝（「＾ω＾）」』ステガノグラフィアのナビゲーションに従って、ある通路へ向かって駆けて行った。

「ルシル君！」

「はいっ！」

「一緒に帰ろうね！」

「もちろんです！」

クイントはルシリオンにそれだけを伝えて、メインルームから出て行く。そして残されたルシリオンと、闇黒系の"堕天使エグリゴリ"、レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリアの死闘の幕が切って落とされた。

・―・―・―・―・

ルシリオンとレーゼフェアを残し、まずはクイントと同じ分隊長であるメガーヌが率いる班との合流を目指すこととなったクイント班。隔壁が次々と開いていき、何者にも邪魔される事なく順調に通路を走って行く。

「セインテスト査察官、本当に大丈夫でしょうか？」

「俺たちが心配してもしょうがない気もするけどな。ナカジマ分隊長の一撃を食らっても平気だったんだぜ、あの子。けど査察官の攻撃には普通に吹っ飛んでた」

「悔しい話だけど、私たちと、ルシル君やあの少女との間には大きな差がある。私たちが居てもかえって邪魔になるだけ。今は信じるしかない・・・！」

「そう・・・ですね・・・」

ひたすら通路を走るクイント班に『こっち近道～ш（。Д。ш）』ステガノグラフィアから指示が出たため、開いたばかりの隔壁を潜ると壁面がガラス張りの通路へと出た。そこで見た光景にクイント班は絶句した。

「なんっだこれ・・・！？」

「航空機・・・？」

５０ｍ近い空中通路の下には大きなドックのような空間があり、航

空機のような物が４種類１機ずつ並んでいた。ステガノグラフィアが『解読済みのデータにあります。出しますか？』そう確認する。クイントは「道すがらお願い！」と答え、部下２人と共に再び走り出した。

『先ほど並んでいた内の２種はＸＵＦシリーズ・シームルグ。ＸＵＳシリーズ・シャックスと断定。Ｘは試作、Ｕは無人、Ｆは戦闘機、Ｓは掩護機、となるようです。ですが、あと２種は未だに解読できてません（＞人＜）』

ステガノグラフィアからの話にクイント班は再び絶句した。ここの施設が兵器開発工場なのだと判ったから。質量兵器開発は現代の次元世界では御法度となっている。旧暦の次元世界はルール無用の質量兵器群の所為で、幾度と滅びに直面することがあった。しかし管理局が発足されたことで新暦となり、それらが違法とされ、質量兵器の無い時代が訪れた。

「ドクター・プライソン！　こんな兵器を造って一体何をするつもり！？」

「明らかに世界に対して戦争を仕掛けるつもりですよ！」

「絶対に生きて本部に戻らないといけないですね！」

この事実を伝える為、改めて意地でも生き抜く覚悟を決めたクイント班。通路を駆け続けてようやく「メガーヌ！」の班と合流することが出来た。メガーヌ班の幻術は解除されており、それを指摘した

クイントに、「どういうわけか勝手に解除されたわ」メガーヌが不思議そうに小首を傾げた。

「ルシル君、その余裕が無くなってる・・・？」

「どういうこと？」

クイントとメガーヌは互いの班に起きたことを報告し合う。メガーヌ班はここまで何事もなく彷徨っていたとのことだ。しかし「兵器開発工場・・・！？」クイント班からの報告に耳を疑った。

「問題はもう1つあるの！　今、ルシル君がプライソンの手先らしい魔導師と交戦中で、たぶんＳ＋ランク並」

「隊長やルシル君と同格・・・！」

「他にも防衛戦力が居るかもしれないからこうして合流を、と思って！」

クイントのあまりの必死さに、メガーヌや部下２人は今の状況がかなり危ういものだと察した。メガーヌがすぐに「隊長たちにも連絡を！」ゼストに通信を繋げるが、「やっぱりジャミングが・・・」クイントが悔しげに呻いたように繋がらなかった。

「念話もダメのようです！」

「えっと、ステガノグラフィア・・・？　うちの隊長たちのところ

までナビお願い出来る？」

『はい。マスターからの命令は、みなさんを合流させることですので！（／"、・ω・，）』

そうしてクイント班とメガーヌ班は合流を果たし、今度はゼストの班と合流するべく通路を駆けだした。それから防衛戦力と対峙することもなく順調に来ていたが・・・

『Ｗａｒｎｉｎｇ ！ Ｗａｒｎｉｎｇ ！ Ｗａｒｎｉｎｇ ！ 、（，。д。、；≡；，。д。、）ノ』

『敵性戦力を感知！ （＼д／）』

『隔壁を閉じ・・・、あれ！？ 管理者権限が奪い返された！？ゞ（＃、Д，＃）ノ』

『状況最悪！、（。、Д，。）ノ』

『各員、臨戦態勢！（ｐ＼ ／ｑ）』

ステガノグラフィアからの警告に、クイント達は臨戦態勢に入った。そして彼女たちの目の前にガシャガシャと音を立てながらソレらは現れた。３０体ほどの多脚歩行型の機械兵器の一群だ。鎌のような手や足を持ち、頭部らしき部分には目のような光が２つ輝いている。

「陸戦兵器も完備ってわけですね・・・！」

「どうします？　分隊長」

「この数を一々相手にしていたら物量で押し切られる」

「一点突破で逃げの一手ね」

クイントとメガーヌが即決した作戦は、全員の攻撃を一点集中し、機械兵器の一群に穴を開け、そこを通ってひたすらに逃げるといものだ。全員が「５！」カウントを開始。それぞれが中距離ないし遠距離の魔法をスタンバイ。そして「今！」の号令で、それぞれが魔法を撃ち放った。魔法は機械兵器数体を薙ぎ払い、逃げ道を確保した。

「走って！」

『管理者権限を奪還！　急いで隔壁を越えてください！　閉めます！ε＝ε＝ε＝（「＾ω＾）」』

『アメナディエル！　管理者権限がまた奪還されそう！（ＴДＴ）』

『コイツ手強いよぉ～！（´；ω；、）』

『ステガノグラフィアたるわたし達が遅れを取るなんて信じらんない！（＃　。Д。）』

クイント達はステガノグラフィアの懸命な働きに感謝しつつ、逃げ

道を走り抜けて機械兵器の包囲を突破。そして閉まり始めていた隔壁を潜り抜けた瞬間、「え・・・？」最後を走っていたアベオとクラッコ、それにメガーヌ班の青年局員、ジューク二等陸士に異変が起きた。それに気付いたクイント達が振り返り、その3人が腹から血を流し、宙に浮いているのを見た。

「「「お〝お〝？　・・・が・・・あぁ〝！？　お〝あ〝あ〝あ〝ぁ〝ぁ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ッ！！？？」」」

最初は何が起きているのか本人たちも理解していなかったが、自分たちの体を何かが貫いていると理解した瞬間、口から多量の血反吐を吐いて断末魔の叫び声を上げた。それと同時、彼らの背後から先程の機械兵器3体がスッと姿を見せた。機械兵器にもステルス機能があったのだ。

「アベオ、クラッコ！」

「ジューク！」

「ジューク先輩！」

駆け寄ろうとしたクイント達だったが、無慈悲にも隔壁が閉まりきった。メガーヌが「開けて！」と、モニターに映るステガノグラフィアに叫ぶ。しかしステガノグラフィアの天使5体はふるふると首を横に振った。

『ダメです（；Д；）』

『開けることは出来ないよ（；Д；）』

『開けたら最後、あなた達も殺される（；Д；）』

『みんなを生かすのがアタシ達の役目（；Д；）』

『それにもう・・・あの3人は助けられない（；Д；）』

メガーヌも、クイント達も本当は理解している。アベオ達の傷は明らかに致命傷で、出血も多量。医療施設が今、この場にない時点で救うことは不可能だということくらいは。それでも感情が追いつかない。それまでに悲惨な光景を見てしまったのだ。

「メガーヌ、スタウト。・・・行こう」

クイントが隔壁に背を向けて歩を進み始めた。彼女は両拳を力強く握り締め、唇からは歯を噛みしめ続けた所為で一筋の血が流れていた。メガーヌ、そして最年少の２０歳の青年であるスタウト三等陸士は後ろ髪を引かれる思いで隔壁に背を向けて「ごめんなさい・・・」ここで犠牲になったアベオ達に謝り、再び通路を駆け始めた。

『敵性戦力を迂回するように隔壁を開閉します！（　´　∀、）』

『マカリエル、メナディエル、ライシエル！　管理者権限を取り返されないように！∠（　。　д。）／』

『ヤー！』『シン！』『イエス！』

ステガノグラフィアは必死にこの施設の管理者権限を取り返されないように頑張っている。クイント達もゼストの班に合流するべく通路を駆ける。しかし『あっ！』ステガノグラフィアが一斉に声を上げた。それと同時、先程まで開いていた隔壁が閉じ、また別の隔壁が開いた。

「ステガノグラフィア・・・？」

『ダメです！　管理者権限はこっちにあるのに、ここの隔壁だけ乗っ取れない！？（；´д｀）』

ステガノグラフィアの話に「やっぱり罠かしら？」メガーヌが警戒した。クイントは「だろうけど。こうなったら行くしかない」そう言って、開いた隔壁の方へと進み始めたことで、メガーヌとスタウトも続いて進みだした。

そうして通路を進み、辿り着いたのはメインルームと同じ大きさくらいのドーム状の空間。足を踏み入れてすぐ『敵性戦力の接近を感知！ヽ（´д｀；）ノ』警告が入る。クイント達3人は背を向け合って身構え、どこから来ても対応できるようにする。

「お？　新手がまた来たよ、アルファお姉ちゃん、ベータお姉ちゃん」

クイント達が入って来た通路の反対側にある通路より3人の少女が現れた。身に纏っている服はまるで学校の制服のようで、白のブラ

ウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが1本入った黒のプリーツスカートとなっている。

「あらいやだ。ついさっき一仕事終えたばかりなのに、もう次の仕事？」

アルファと呼ばれた１８歳ほどの少女はさらに藍色のブレザーを着ている。身長は１６５ｃｍほど。ブロンドのウェーブの掛かったロングヘア。

「アルファ姉さんの言うように、人使いが荒いよね」

ベータと呼ばれた少女は黒いセーターを腰に巻いている。身長は１６０ｃｍほど。栗色のボブで、左目が前髪で隠れている。

「デルタ、頑張っちゃおう♪」

デルタと自称した１２歳ほどの少女はクリーム色のベストを着ている。身長は１４０ｃｍほど。オレンジ色をしたロングヘアをポニーテールにしている。そんな3人の瞳は揃って銀色をしていた。

「あなた達もドクター・プライソンの手の者なの！？」

クイントがそう問い質すと、「パパだよ～。ま、パパが言うには製作者ってことだけど！」デルタが満面の笑顔で答えた。製作者。この一言でクイント達は、アルファ達が純粋な人間じゃないことを察した。特にクイントは、娘のギンガやスバルと同じ存在なのだと察

した。

「ちょっと待って！　さっき新手が来た、と言ったわね？　まさか・・・！」

メガーヌが声を震わせると、「うん？　コイツらのことかな？」ベータがクイント達の目の前にモニターを1枚展開した。そこに映し出されている光景にクイント達は言葉を失った。

「そんな・・・、こんなことが・・・」

「隊長・・・、グアナーさん、ライナーさん・・・」

スタウトはその場にへたり込み、クイントとメガーヌは悲惨な姿になっているゼスト達3人に、思わず構えを解いてしまった。さらには『マスター！？』そんな切羽詰まった声を残し、ステガノグラフィアがモニターごと消えてしまった。

「ステガノグラフィア・・・！？」

「まさかルシル君の身に何か・・・！」

「ルシル君？　あー、レーゼフェア様が相手にするって言ってた子供のことだよね？　そう言えばどうなったんだろう？」

今度はデルタが新たにモニターを展開する。そして映し出された映像に、クイント達の心が音を立てて崩れた。ルシリオンが血だらけ

で倒れ伏していたのだ。側にはレーゼフェアが居り、映像の角度からしてその姿の全体が見えないが、彼女の他にもう2人誰か居る。つまりルシリオンは、3対1の戦いを仕掛けられていたのだ。

「私たちの別荘に勝手に入り込んだその罪はしっかりと償ってもらわないとね。ＩＳ発動。メタルダイナスト」

「土足で上がり込んだ無礼者には礼儀を教えなければね。ＩＳ発動。ヴァイオレントトレーナー」

「ＩＳ発動！　ショックブレイカー♪」

アルファの足元には金色の、ベータの足元には紫色の、デルタの足元には赤色の、魔法陣状のテンプレートが展開された。するとアルファの足元の床が生き物みたく蠢き始め、ベータの両手には紫色に輝く光の鞭が現れ、デルタの手には彼女の身長を超すほどのハンマーが現れた。

（隊長たちだけでなくルシル君まで・・・！）

（退却しようにもステガノグラフィアの案内が無いと・・・）

（死んだ・・・、僕たちも殺される・・・）

心の拠り所でもあったゼストやルシリオンの敗北にショックを受けつつも、クイントとメガーヌは必死に考えを巡らせる。しかしスタウトはもはや生き残ることを諦めている。そんなクイント達へとジ

リジリと距離を詰め始めるアルファ達。

（ルーテシア、リヴィア・・・。ごめんね・・・。でも！）

メガーヌの脳裏に過るのは娘たちの笑顔。父を亡くし、母である自分もここで絶えるかもしれない。死の恐怖が彼女の両足を捉えるが、それでもなお目には戦い、勝ち、生き残る、という強い光を宿していた。

――おかーさん、頑張ってね――

（どんなに絶望的でも負けるわけにはいかない！　約束したもんね、ギンガ、スバル、おとーさん。必ず帰るって！）

クイントもまだ諦めていなかった。そして信じていた。ゼストやルシリオンの生存を。だからクイントも、メガーヌも再び構えを取った。生き残るために。

「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」」

そしてクイントとメガーヌは、余裕に満ち溢れているアルファ達と戦闘を開始した。

・―・―・―・―・

時空管理局は本局、その一室。そこは一切の照明器の無い部屋で、さほど広くもない。その部屋に在るのは円卓と１３脚の椅子のみ。

１３脚の椅子の内１脚には人の形をしたホログラムが座っている。ミッドチルダ地上本部の司令、レジアス・ゲイズ中将だ。
さらに別の３脚にはローマ数字のⅠとⅡとⅢが描かれた時空管理局のエンブレムが浮いている。最高評議会と称される３人だ。そしてもう１脚にはＳｏｕｎｄｏｎｌｙと表示されたモニターが浮いている。彼らは時空管理局評議会。管理局運営とはまた違う事柄を決定する機関であり、通称権威の円卓。

『話が違うじゃないか、レジアス中将。首都防衛隊の連中が俺の別荘にまで捜査に来たぞ。お前は言ったよな。俺は捕まえないと。お前の願い、ミッドチルダから犯罪を無くすために』

Ｓｏｕｎｄｏｎｌｙと表示されたモニターから呆れが含まれた声が発せられた。声の主はどうやらプライソン本人の物のようだ。管理局に広域指名手配されている犯罪者でありながら、プライソンは管理局の上層部と癒着していた。

『私とて止めるつもりだったのだ！　しかし・・・命令が届く前に向かってしまったのだ・・・！』

レジアスの顔が苦悶に歪む。首都防衛隊がプライソンの研究施設の１つに潜入捜査に行くと知ったのは最近のことだったのだ。すぐに理由を付けて捜査が出来ないようにつもりだったのだが、それが間に合わなかった。

『それは互いに残念だったな。しょうがないから迎撃したぞ』

円卓上に数枚のモニターが展開された。映し出されているのは首都防衛隊のメンバーで、誰も彼もが凄惨な様をしていた。

『ゼスト・・・！』

隊長のゼストは全身が鞭に叩かれたようにズタズタにされ、彼の班員だったグアラ空曹は床に出来たクレーターの底に倒れ伏し、ライナー一等陸士の胴体には刃物傷がいくつも付いていた。
メガーヌは四肢がへし折られ、頭や目、耳、鼻、口から血を流した状態で床に叩き付けられており、スタウトは下半身がぺちゃんこに叩き潰されていた。クイントは"リボルバーナックル"を装着していた両腕とローラーブーツを装着していた両脚が断ち切られ、せり上がっている鉄製の床2枚に挟まれていた。アベオとクラッコとジュークは機械兵器からの刺突を受け、床に倒れ伏していた。

『こっちの引っ越しはもうじき終わる。あとは好きに持って行ってくれ。あー、そうそう、クイント・ナカジマとメガーヌ・アルピーノは俺が貰う。2人とも俺の作品としてなかなかの適性を叩き出したからな。それに、俺の作品からあれだけ攻撃を受けながら未だに生きている。大した生命力だ。良い作品になるだろう。それとゼスト・グランガイツ、アレも一応生きてはいるし、人造魔導師素体として使えるが、レジアス中将とはこれからも仲良くしたいから返そう』

『っ！！　ふざけるなッ！　私の戦友を、その部下を愚弄することは許さん！』

レジアスが怒鳴りつけるが、『議長。メガーヌには子供が2人居るそうじゃないか。寄越してくれ』プライソンは空吹く風と聞き流し、メガーヌの娘ルーテシアとリヴィアまで実験素体にしたいからと、2人を研究施設に送るようにリクエストした。

『良かろう。必要な物があれば言うがいい。用意しよう』

評議会議長デュランゴは協力を惜しまなかった。レジアスが強く歯噛みしているところに『お前の願いの為だ。多少の犠牲は仕方ないだろう』評議会議員リョーガが彼に声を掛ける。レジアスは地上の平和を確立したかった。だから犯罪者を、行われる犯罪を、必死に黙認していた。しかし今、戦友ゼストとその部下を好きなようにされたことで、レジアスは揺らぎ始めていた。

『もう少しだぞ、レジアス中将。恒久的な平和がミッド地上に訪れるまで』

甘い蜜のような言葉がプライソンより発せられる。レジアスが無言を貫くこと数分。歯噛みをようやく止めた。プライソンを支持することを選んだのだ。

『プライソン。ルシリオンはどうするのだ？』

『うちの上客の意向で手は出さないことにした。逆らうとこっちが全滅させられるからな。ま、タダで返すことだけは出来ないと言ったら、遺伝子情報とリンカーコアの一部だけ採取することを許された。最高の気分だ』

評議会書記トレイルがそう訊ね、返答したプライソンの声には興奮と喜色が満ちていた。

『そういうわけだから後始末はそっちに任せよう。俺はこれからクイントとメガーヌをイジるから、しばらくは連絡はつかないと思ってくれ。じゃあな』

プライソンとの通信が切れ、続けて評議会3人のモニターも消え、室内に静寂が訪れた。残るはレジアスのホログラムだけとなった。

『・・・すまない、ゼスト・・・許してくれ・・・』

レジアスの謝罪だけが、寂しく木霊した。

Ｅｐｉｃｏ?うそつき～Ｔｅａｒ　ｏｆ　ａｎｇｅｒ　ａｎｄ　ｓｏｒｒｏｗ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

クイントさん達を見送り、俺は"堕天使エグリゴリ"の1機であるレーゼフェアと睨み合う。シュヴァリエルに続いてレーゼフェアともこうして遭遇できたのは幸運と思える。しかしこんな重要な任務の中で、しかも急いでいる時の遭遇は遠慮したかったというのも確か。文句も言っていられないか。

「ここにはなのは達も居ない。クイントさん達の目も無い。・・・・行くぞ！」

"エヴェストルム"のカートリッジを2本ずつロード。さらに2つの柄の魔石に魔力を流して、魔力量を増加させる。そしてその形態を、神秘魔力による魔力刃を生成するフルドライブ・イデアフォルムへと変形させる。魔道と魔導のハイブリット機だ。神器の上位には敵わないが、込める神秘魔力の大小によっては"エグリゴリ"の装甲には届くことは、シュヴァリエルとの戦いで証明できた。

（堕天使戦争を生き抜いたエグリゴリの中で、シュヴァリエルが最高の防御力を誇っていた）

神秘を増加させる効果があると判ったクジャクの翼を展開されると辛くなるが、それでもシュヴァリエル以上の防御力になることは決

してないはずだ。

「上等だよっ！」

――黒き影拳乱舞（ポワン・タンペット）――

レーゼフェアが影を纏わせていた右拳を突き出すと同時、俺の今の身長１４８ｃｍと同程度の大きさを持つ影の拳が１０近く連射されてきた。空戦形態の機動力を活かして回避し、天井付近を陣取って上級術式をスタンバイする。

「影よ、神器王を捕らえてッ！」

通路に詰まっているかのような無数の影の触手が一斉に俺へと伸ばされて来た。シュヴァリエルのように弱点属性が無い風嵐系とは違い、闇黒系にはしっかり閃光系という弱点属性が存在している。焦ることはない。

「曙光神の降臨（コード・デリング）！！」

俺は手の平サイズの閃光系魔力の光球を１つ創り出し、迫り来る影の触手へ向かって投げ捨てる。そして光球は音も無く球体状に爆ぜ、レーゼフェアの影と言う影を散らしていった。

「あー！　あの人間たちに時間を掛けないでとっとと殺しておけば良かった！」

――影渡り（シュルブリーズ）――

「殺されるのは勘弁だが、クイントさん達に時間を掛けないというのは賛成だよ！」

通路の影の塊の中へとレーゼフェアが消えた。この部屋のどこかの影に移動したか、もしくは勝てないと踏んでこの場は退いたか。いや、アイツの負けず嫌いの性格からして大人しく逃げるわけがない。デリングの効果が切れたその瞬間が勝負だな。

（昼神の閃星（コード・ダグ）や光神の調停（コード・バルドル）が使えればもっと簡単にダメージを与えられそうなんだが、ダグは屋外限定・青天・昼間と条件があるし、バルドルは全方位無差別だからな～）

この施設からレーゼフェアを引っ張り出そうかとも思ったがクイントさん達のことが気掛かりで、この場から離れるという選択肢がただの考え止まりになる。速攻でアイツを救えれば良いんだが、いくらシュヴァリエルを救ったとは言っても油断は出来ない。アイツもまた別の新しい魔術を習得しているかもしれないし、何よりフォルテシアの魔術で救うことが俺の課した条件である以上、対闇黒系の機体であるアイツにフォルテの魔術を通すためには先にダメージを与えておく必要がある。

（それでは手間が掛かり過ぎる。だから・・・俺は・・・！）

――力神の化身（コード・マグニ）――

決めた。レーゼフェアはここでは救わない。撤退させることを最優先にし、即座にクイントさん達の援護に向かう。それが俺が今、やるべき事。上級の自己強化魔術マグニを発動し、身体能力と魔術をすべて強化する。

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

デリングの効果が消えた瞬間、上級閃光系砲撃ゲルセミを連射する。ドーム状の部屋がサファイアブルーの光に満ちる。一切の影を作らせないことで奇襲戦法を封じる。だがレーゼフェアにはおそらく直撃していないだろうから、逃げていなければどこかでチャンスを窺っているはず。

――舞い降るは、汝の煌閃（コード マカティエル）――

周囲に光槍マカティエルを３０本と展開した直後、レーゼフェアが閃光爆発の中を突っ切って来た。神秘を宿した閃光系魔力の影響でレーゼフェアの側には影が無い。影の無いアイツの戦力はガタ落ちする。しかしついさっきとは違う点が１つ。

「聖狩手甲（せいしゅてっこう）エオフェフ・・・！」

プレンセレリウスを斬り殺し、シェフィリスを貫き殺し、俺を貫き瀕死の一撃を与え、不死と不治の呪いを掛けた魔造兵装第二位・"呪神剣ユルソーン"。ソレと同じ製作者の手によって造り出された、神属殺しの手甲が両腕に装着されていた。

「これで閃光系魔術は僕に通用しなくなったよ！」

「確かにそうだな」

閃光系・炎熱系・雷撃系の３属性は、神属の威厳そのものとされている。ゆえに神属狩り能力に特化した"エオフェフ"は、"エオフェフ"以上の神秘であろうが問答無用で３属性の魔術を掻き消すことが出来、神造兵装へ与えるダメージも他の神器に比べて異常に高い。

「しかし・・・迎撃してこそその効果が発揮されるんだよ！」

周囲に配置しておいた光槍群を「ジャッジメント！」号令を下して発射。レーゼフェアは"エオフェフ"を振るって頭上から降り注ぐ光槍群を殴り、粉砕していく。

「ぅぐ・・・！？」

しかし光槍群の速度に対応しきれなかったレーゼフェアに４本の光槍が直撃、起こった閃光爆発で体勢を崩した。傷１つ付けられなかったが、隙を生みださせることが出来れば十分だ。俺はその瞬間を逃すような間抜けは犯さない。

「女神の宝閃（コード・ゲルセミ）！」

"エヴェストルム"の先端より砲撃を２連射。レーゼフェアは体勢を崩されながらも１発目を左の"エオフェフ"で粉砕できたが、も

う1発は直撃。床へ向かって墜落して行く。そんなアイツの墜落点になるだろう場所に、アイツの影が生まれた。影に逃げ込んで衝撃を逃がすつもりだろうが・・・

「させるか！」

――舞い降るは、汝の煌閃（コード マカティエル）――

レーゼフェアへ急降下しながら光槍４本を床に向けて発射。光槍が着弾し、閃光系の魔力爆発を起こして影を掻き消すとアイツは「このぉぉぉぉっ！」怒声を上げた。そして俺は"エヴェストルム"の魔力刃でレーゼフェアの胸の間を突く。あくまで突けただけで、突き刺さらなかった。さらに腹に両足を乗せたうえで・・・

「うおおおおおおッ！」

「ごは・・・っ！」

レーゼフェアを床に叩き付ける。"エヴェストルム"を持つ手からアイツの装甲を僅かに貫いた感触を得、両足の裏からも何かを潰した感触を得た。俺はアイツの腹から退かずに"エヴェストルム"の柄を分離させ、「メファシエル！」結界や防性術式を破壊する術式を付加したうえでレーゼフェアの両上腕を突く。

「いったいなぁ。もう！」

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

そして両上腕に砲撃を連発で撃ち込む。レーゼフェアが「痛い！痛い！」もがく。娘の悲痛な叫びに心が痛むが今はクイントさん達を優先しなければ。カートリッジをロードしつつ「すまないな」砲撃の連射をやめない。そしてとうとう「い〝っ・・・だぁ〝ぁ〝ッ！？」バキンと音を立ててアイツの両腕が千切れた。

「このぉぉ・・・！」

「もう退け、レーゼフェア！」

「うるっっさぁぁぁーーーーいッ！」

――高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）――

例のクジャクの尾羽のような翼が２０枚と放射状に展開され、その衝撃で「ぐ・・・」俺は弾き飛ばされてしまった。体勢を立て直した時にはレーゼフェアは近くに転がる両腕を求めて駆け出していた。俺はすかさず「マカティエル！」光槍２０本をアイツに撃ち込みつつ、"エオフェフ"の回収に向かう。そしてタッチの差で俺は右を、レーゼフェアは左の"エオフェフ"を取った。

「あー！　返せっ、エオフェフは僕のだよ！　あと右腕も返せ！」

「元はと言えばコイツは俺の複製神器だ。元の持ち主の手に戻る方が正しいに決まっているだろうが」

レーゼフェアは影の触手を使って左腕を持ち上げ、そして上腕に繋げて修復した。アイツも武装を失くせば戦意も喪失するだろう。俺は「返してほしかったら退け！」と、アイツの右腕を使ってバイバイしてやる。

「あったまキタ！　シュヴァリエルに勝ったからって調子に乗ってると、絶対に痛い目に遭うから！！」

照明がパンパンッ！と音を立てて割れていき、室内が一気に暗くなった。レーゼフェアは何もしていない。なら「新手か・・・！」魔力球を１０基と創り出して、影が出来ないように計算、そして配置して室内を明るくした、その瞬間・・・

――瞬神の風矢（ソニック・エア）――

「っ！！？」

それは起きた。この施設の入口へ続く通路の奥から目にも留まらない速さで何かが飛来して来た。ソレは俺の右手を掠め、「しまっ・・・！」持っていた"エオフェフ"を弾き飛ばし、「ゲットだぜ♪」レーゼフェアの手に戻ってしまった。

――粉砕せし風爆（マーシレス・フラワー）――

さらにソレは飛来し、俺が創り出した照明代わりの魔力球に寸分違わず着弾、ドォン！と轟音を立てて粉砕した。この魔力、そしてあの魔術・・・間違いない。ここに来て予想だにしなかった事態が起

きてしまった。まさかお前までもが、ここに姿を現すなんて思いもしなかったぞ。

「フィヨルツェン・・・！」

シュヴァリエルと同じ風嵐系だが、機体特性としては狙撃型の中遠距離系というコンセプトだ。大戦中はレーゼフェアと組むことが多かった。失念していたわけじゃない。ただ、ベルカで最初に遭遇して以降、この子たちは1対1の戦闘を仕掛け続けて来ていた。確かにザンクト・オルフェンではシュヴァリエルとレーゼフェアが協力していた。しかしフィヨルツェンは現れなかったから、てっきりレーゼフェアとフィヨルツェンは完全に別行動をしているかと・・・。

（くそっ！　完全に油断していた・・・！）

――舞い降るは、汝の煌閃（マカティエル）（コード）――

――粉砕せし風爆（マーシレス・フラワー）――

「くぅぅ・・・！」

――黒き影拳乱舞（ポワン・タンペット）――

光槍を展開したその瞬間に暴風の矢で破壊されてしまった。そこに「そらそらぁ！」レーゼフェアの攻撃、影の拳による弾幕が張られた。回避のために室内を飛ぶんだが、風の矢がさらに何十本と連射されて来た。"エヴェストルム"で迎撃はしても、「うぐぅぅ！」

その物量の所為で思うように飛び回れない。

「あっはは♪　調子に乗った罰だよ神器王！」

――血肉を求む伝道者の凶つ剣（ミシオネール・クリュエル）――

影ばかりが多くなってしまった部屋は今やレーゼフェアの独壇場。壁に出来ているちょっとした小さな影から黒い刃が十数本と突き出して来た。

――瞬神の風矢（ソニック・エア）――

それらを回避した直後に「ぐぁぁぁぁ！」フィヨルツェンの風の矢が俺を襲った。咄嗟に対魔力障壁・ケムエルを発動したことで直撃は免れたが、その衝撃には逆らえずに壁に叩き付けられてしまう。

「ほらほらぁっ！　さっさと逃げないと真っ二つだぞ♪」

俺を斬り、貫き、断とうと影の刃が蠢いては迫り来る。急いで壁から離れ、反撃として「ゲルセミ！」をレーゼフェアへと放てば・・・

――連翔せし荒鷲（チェインズ・ガスト）――

鎖のように連なった複数の風の矢が砲撃の横っ腹に着弾した。矢は、圧縮された魔力の塊である砲撃を吹き飛ばすほどの圧倒的な爆風と化した。ならばと砲撃を連射すると「またか・・・！」フィヨルツ

ェンも連なる矢を連射して迎撃して来た。

――黒き閃光放つ凶拳(ソワール・エロジオン)――

そこにレーゼフェアからの闇黒系魔力の砲撃。それに影の刃の包囲攻撃。回避さえすればどうってことはないが、こちらが攻撃をしようとして魔力槍を展開したり、砲撃を撃てば、「チィ・・・！」フィヨルツェンが百発百中で迎撃してくる。

（ジリ貧だ・・・！　レーゼフェアは後回しだ！）

標的をレーゼフェアからフィヨルツェンへと変更する。最早撤退させるという選択肢は無くなった。クイントさん達に追いつくための最速の方法は、あの２機を速攻で救うことだ。２機の攻撃を機動力を活かして回避し続ける中「我が手に携えしは確かなる幻想・・・！」詠唱。

「ジュエルシード、ナンバー２０！」

"神々の宝庫ブレイザブリク"より取り出すのは、対"エグリゴリ"戦でのブースターとなるジュエルシード。ソレを魔力炉(システム)に取り込んで魔力をドーピングする。

――女神の聖楯(コード・リン)――

俺の前面に女神が祈る姿が描かれ円形の盾・エイルを展開して、通路へと向かって急降下。レーゼフェアが「あ・・・！」俺のその行

動に驚きを見せた。通路には未だに影の塊があるが、フィヨルツェンからの攻撃を通すために穴がちゃんと開いている。そこに砲撃の「ゲルセミ！」を6連発射。影が防ごうとするが、属性ではこちらが有利なため消し飛んでいく。

「お前にはこれをプレゼントだ！」

――復讐神（コード・ヴァーリ）の必滅――

カートリッジをロードしてさらに魔力を増加したうえで、カウンター砲撃のヴァーリを8連射。術者である俺に敵対して攻撃を加えた対象を永続追尾する無属性砲撃だ。しかも相手の迎撃をオートで回避する特性もある。さらに転移術式・影渡りが出来ないように照明代わりの魔力球をバラ撒く。レーゼフェアは「うげぇ！」砲撃と追いかけっこを始めた。

「待っていろ、フィヨルツェン！」

通路の影を消し飛ばし、通路内に進入した直後・・・

――掃討猟蛇（ミュート・スレイヤー）――

風で出来た蛇型の矢が8本と飛来したがリンの防御力には敵わず、着弾と同時に掻き消える。俺は魔力球を通路内にバラ撒き、レーゼフェアが転移して来れないように対策を打ちつつ「見つけたぞ・・・！」フィヨルツェンの姿を視認した。

チェスナットブラウンのロング（以前はセミロングだったのに。伸

びたのか？）、ブロンズレッドの柔和な瞳、赤紫のブラウスに黒のベスト、黒ネクタイ、黒のプリーツスカート。あの頃から変わらない出で立ちだ。そして手には装飾の施された２ｍ近い大弓型神器・"天弓ハガウル"が握られている。

「お久しぶりです、神器王。良い機会だということで、わたくしもこうして御挨拶に上がりました」

――嵐槍百花（クライシス・エア）――

ドリル状の暴風の矢を射るフィヨルツェン。耳をつんざくほどの音を立てながら暴風の矢は迫り、前面に展開している盾・リンに着弾。その風圧で押し返されそうになるも「破壊は出来まい！」俺とリンは暴風の矢を真っ向から防ぎ切った。

――戦滅神の破槍（コード・ヴィズル）――

縦３ｍ・幅５ｍほどの通路いっぱいに雷撃系砲撃・ヴィズル６本による壁を作る。フィヨルツェンにはソレを防ぐことが出来るだけの装甲はない。第一世代・ブリュンヒルデ隊の中で一番脆いのがアイツだからだ。ステアの神器と魔術の直撃を与えれば、先にダメージを与えて弱めるまでもなく勝てるはずだ。

――貫砕せし飄風（ディクライン・ブラスト）――

砲撃の壁を貫いて大きな穴を開けたのはランスのような長矢。矢に纏わりつく複数の風の渦は、魔力結合を力尽くで掻き乱して暴発さ

せる効果を持つ。フィヨルツェンの矢の中でも対魔力攻撃・障壁に優れた一撃だ。だが・・・

（もうお前の頭上だ！）

リンを犠牲にして魔力爆発や発生した放電、煙を隠れ蓑にして俺はフィヨルツェンの頭上へと移動し終えていた。"エヴェストルム"を連結し、さらにカートリッジをロード。そして魔力刃による直接斬撃をお見舞いしようとしたその時・・・

――フランメ・ドルヒ――

目の前が炎に満ちた。攻撃態勢に入っていたことがまずかった。炎熱系の攻撃をモロに食らった俺は「ぐぁぁぁぁ！」着弾時の爆炎と爆風で吹き飛ばされ、ごつごつとした洞窟の壁に叩き付けられてしまった。

「ぅ・・・ぐ・・・、今のは・・・！？」

頭をかなり強く打ったために視界が揺らぐし、体が意思通りに動かせない。"エヴェストルム"を杖に、空いている右手で頭に触れるとヌルっとした。見れば真っ赤な血がベッタリと付いていた。それに内臓を痛めたのか、「ごぶっ・・・！」込み上がってきた血を吐き出す。

「わたくしだけだと思い込んだのが失敗でしたね神器王」

「ふっふっふ～♪　僕とフィヨルツェンだけじゃなかったんだよ」

「レーゼフェア、フィー姉ちゃん！　あたし、良い仕事した？♪」

フィヨルツェンの後ろ髪の中から３０ｃｍほどの少女が出て来た。紅の長髪は４つの房に結われ、紫色のツリ目、尖った耳、腰から生えた一対の羽。先の次元世界と同じ露出の激しい服装。そうか。アイリがシュヴァリエルから聴いていた、"エグリゴリ"の誰かが有しているという話は事実だったんだな。

「アギト・・・！」

俺に攻撃を仕掛けたのは紛れもないアギトだった。俺が彼女の名前を呼ぶと、「あんたさ、誰だか知んないけどさっきから何なのさ」アギトは不快そうに顔をしかめた。

「っ！？・・・レーゼフェア、アギトに何をした・・・！」

「えー？　ちょろっと記憶をイジっただけだよ？　ベルカの頃の記憶はどっか行っちゃったかも♪」

「なっ・・・！」

じゃあアギトは俺のことを本当に憶えていないというのか。いや、ベルカの時と言うのであれば俺だけでなくシグナム達のことも。アイリの時みたく、ただ捕まっているだけかと楽観していた俺をぶん殴ってやりたい。

「なぁ、レーゼフェア。何の話してんだよ？」

「アギトは気にしなくていいよ。さ、僕たちからアギトを奪おうとするあの悪者をやっつけるよ」

「あたしを・・・奪う？　敵か！」

敵意をむき出しにするアギトに、「違う！　俺は！　アギト！」そう言うが、「アギトって名前はレーゼフェアに付けてもらったんだ！　馴れ馴れしく呼ぶな！」怒鳴り返されてしまった。

「アギト。わたくしとユニゾンを」

「おっしゃ！　フィー姉ちゃんとあたしの相性はなかなかだからな！」

フィヨルツェンとアギトが手を取り合い、「ユニゾン・イン！」ユニゾンを果たした。一瞬の発光の後、フィヨルツェンのブラウンの髪色がシグナルレッドへと変わり、瞳の色はブロンズレッドからピンク色へと変わった。

――高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）――

さらにフィヨルツェンの背より展開されたた２０枚の魔力翼は、アギトとのユニゾンの影響か真っ赤に燃える炎の翼と化していた。

「そういうわけですので、わたくし達の反撃です」

――粉砕せし風爆（マーシレス・フラワー）・炎花（ホムラ）――

「残念でした」

――昏き淵より手招く罪深き聖域（サンクテュエール・コンフェッシオン）――

「くっっそぉぉぉぉぉーーーーーーーーーーーーーーーーッッ！！」

迫り来るレーゼフェアとフィヨルツェンとアギトの攻撃に、俺は現実を受け入れられずに叫んだ。

「――・・・っ！？　はぁ！　はぁ！　はぁ！　はぁ・・・・！」

そして、気が付けば俺はベッドの上に横たわっていた。真っ白な天井が真っ先に視界に入った。

「はぁはぁはぁはぁ・・・！　ここは・・・？　俺は・・・？」

事情を呑み込めない俺は上半身を起こし、そしてここが「病院・・・？」であることが判った。左腕には点滴のチューブ、胸には心電図と繋がったコードが付けられ、衣服はもちろん病衣。あと頭や右腕、腹には包帯が巻かれていた。しかし一番の問題は・・・

「視界が・・狭い・・・・？」

左目の視界が暗闇に閉ざされていた。包帯か眼帯かの所為かと思っ

て手で触れてみるが、そんな物は無かった。もちろん目は開いている。しかし見えない。左目の視力が・・・死んでいた。

「はは。焦ることないじゃないか。以前にもあっただろう、俺・・・。女神の祝福(コード・エイル)・・・！」

先の次元世界でも、また別の契約の時でも視力を失うことはたびたびあった。だからそれで騒ぐような真似はしない。とりあえず死以外の状態異常を回復させる上級の治癒術式・エイルを発動する。全身に負ったダメージは回復していくのが判るが、「あれ？」視力が回復することはなかった。さらにもう一度発動してみても、やっぱり治らない。となれば、ダメージによるものではなく、何かしらの神器の効果。

「レーゼフェアの仕業か・・・！」

アイツは神器作成能力を得ていた。俺の知らない神器を造り、その効果で俺の視力を殺した可能性も十分すぎるほどあった。しかしエイルで治癒できないとなると、かなり高ランク。ならば目には目を、神器には神器を、だ。

「我が手に携えしは確かなる幻想・・・！」

創世結界・"ブレイザブリク"にアクセスするための呪文を詠唱する。だがアクセス出来なかった。

「・・・は？　我が手に携えしは確かなる幻想！我が手に携えしは

確かなる幻想！我が手に携えしは確かなる幻想！」

詠唱を繰り返すが、"ブレイザブリク"だけでなく"英知の書庫アルヴィト"・"英雄の居館ヴァルハラ"・"聖天の極壁ヒミンビョルグ"、他3つの創世結界にもアクセス出来なかった。創世結界が使えなくなってしまっていた。

「・・・・」

これぱっかりは人間だった頃はもちろん、"界律の守護神テスタメント"となって約2万年の中で初めての体験だ。頭の中が真っ白になる。これまで当然だった創世結界。それが使えない。俺を魔術師として支えていた柱の1つが・・・折れた。

「・・・そうだ。クイントさんは？　騎士ゼスト、メガーヌさん達は・・・！？」

現実逃避するように思考内容をクイントさん達のことに変えた。ここで眠っているということは潜入捜査は終わっていることを意味する。俺は無様を晒してしまったが、騎士ゼスト達はどうなった。情報を仕入れようとした時・・・

「あ、ルシリオン君！」

「っ！　リンディ提督・・・！？」

私服姿のリンディさんが病室に入って来た。遅れて「良かった。目

を覚ましたんだね！」同じように私服姿のエイミィが入って来た。

「あ、あの！　俺は一体！　首都防衛隊のみんなは！」

ベッドから降りたら「っ！？」思った以上に両脚に力が入らず、へたり込みそうになったが「無理しちゃダメよ！」リンディさんに抱き止められた。

「ありがとうございます、リンディ提督。あの、俺なんかのことより首都防衛隊のみんなは！」

「「・・・・」」

俺の問いに、リンディさんとエイミィは無言を返した。やめてくれ。そんな表情をしないでくれ。それじゃまるで・・・

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒すずか†††

あのクイントさんが・・・亡くなった。ドクター・プライソンのアジトだっていう施設に潜入捜査を行った首都防衛隊９名の内、７名が死亡、１名が意識不明の重体、１名がＭＩＡ（Ｍｉｓｓｉｎｇ ｉｎ ａｃｔｉｏｎの略で、行方不明を差す）っていう状況。そして、査察官として同行したルシル君も、意識不明の重傷で発見された。

その事を知ったのはチーム海鳴のみんなで、私のお家の別荘でバーベキューをしていた時。最初はシグナムさんやシャマルさんの大人組にだけ知らされたんだけど、はやてちゃんが２人の様子を訝しん

で問い質したことで判った。そして、クイントさんの殉職、メガーヌさんのＭＩＡ、面識はないけど防衛隊隊長のグランガイツ一尉の危篤を知った。
その２日後の今日、私たちチーム海鳴は、ミッド西部エルセア地方にて行われてるクイントさんの葬儀に参列してる。近くの教会で葬儀を終え、これからここポートフォール・メモリアルガーデンで埋葬となる。

「おかーさぁーん！」

「ぅ・・・っく・・・・」

スバルちゃんの大きな泣き声が止まない。教会での葬儀から墓地での埋葬までずっと泣いていて、ギンガちゃんも教会では大きな声で泣いていたけど、ここに移動してからは堪えてる。その懸命さが逆に痛々しくて、見てる方が苦しくなっちゃう。
そして棺は墓碑の手前に掘られた穴に納められて、土が被せられ始める。私たちや他の局の関係者は敬礼でそれを見届ける。スバルちゃんの鳴き声はさらに大きく、ギンガちゃんもまた声を上げて泣き始める。クイントさん達の仲の良さを知ってた私も、堪え切れずにボロボロ涙を流す。そうして埋葬が終わって、参列者が去って行く中・・・

「ん？・・・ちょっ、ルシル君・・・！？」

はやてちゃんが声を上げた。はやてちゃんの視線の先、そこには剣翼を背にして、ゆっくりと地上に降り立とうとしてたルシル君が居

た。シャマル先生が「病衣のままで何してるの！？」驚きと怒りが混じった声でルシル君に駆け寄った。

「ルシル、あんた！　点滴の管を付けっぱなしじゃない！」

ルシル君は入院時に着る服のまま、さらにはアリサちゃんの言うように点滴のチューブを腕に付けたまま。明らかに病院から抜け出して来てるのが判った。

「俺のことはいい！　・・・・クイントさん・・・。本当に・・・！」

集まった私たちを掻き分けるようにして、ルシル君はフラフラな足取りでクイントさんの墓碑に向かって行く。そんな時、「・・・つき・・・」背を向けたままのスバルちゃんが何かを呟いた。

「・・・うそつき・・・」

ナカジマ一尉が「スバル・・・？」声を掛けた瞬間、「うそつき！」スバルちゃんがハッキリとそう言った。

「うそつき！　一緒に帰って来るって言ったのに！　おかーさんは大丈夫って言ったのに！　約束したのに！　それなのに・・・！」

私たちに振り返ったスバルちゃんは、クイントさんの遺体（正確には両腕と両足だけで、胴体は無い）が収められた棺を埋葬したばかりの土を両手で掴んで「うそつき！」ルシル君に投げ捨てた。ナカジマ一尉が「スバル！」怒ってやめさせようとするけど、「うそつ

き！　うそつき！」スバルちゃんは言うことを聴かずにルシル君に土を投げ捨て続ける。

「ルシルさんなんて・・・だいっキライ！　うそつきなんてだいっキライ！　うそつき！　かえしてよ！　おかーさんをかえしてよっ！　かえしてよっ！　約束したんだからかえせ！」

スバルちゃんから怨嗟の声、そして土がルシル君に浴びせかけられ続ける。私たちの目に映るルシル君の背中はとても小さくて、今にも消えてしまいそうなほどに弱々しくて。

「スバル！　坊主を責めるのはよせ！　坊主だって一生懸命戦ったんだ！　どうしようもねぇことだってある！」

とうとうナカジマ一尉がスバルちゃんを羽交い絞めにした。ギンガちゃんはルシル君とスバルちゃんとナカジマ一尉をオロオロと見回して混乱してる。ナカジマ一尉の腕の中で暴れてたスバルちゃんは抵抗を止めると「・・・ねば・・・んだ・・・」何かを呟いた。

「・・・し・・・よかっ・・・。しねば・・・たんだ・・・。おかーさんの代わりに・・・ルシルさんが・・・死ねばよかったんだ！」

「っ！！　スバルっ！」

スバルちゃんを乱暴に放したナカジマ一尉が手を振り被って、スバルちゃんを叩こうとした時、「っ！！」スバルちゃんを庇ったルシル君が代わりに頬を叩かれた。その衝撃で張られていたガーゼが剥

がれて宙を舞った。

「坊主！？」

「怒らないであげてください一尉。これは・・・俺の贖罪です・・・。ごめん、スバル、ギンガ、一尉。約束を守れなくてごめん。クイントさんを護れなくてごめん。・・・ごめんなさい」

土下座をしたルシル君が「ごめんなさい」謝り続ける。私は、なのはちゃん達もそんなルシル君を見ていられなくなって目を逸らした。苦しい。親しかった人の死が、親しい友達のあんな姿が、親しかった友達の罵声が。苦しくて、悲しくて、涙が止まらない。

「やめろ、坊主！　子供がそんなことしちゃいけねぇ！　ギンガ、やめさせろ！」

「っ！　あ・・・あ・・・、ルシ・・・あ・・・？」

そう言われたギンガちゃんがオドオドとルシル君に近寄ろうとした時、いきなりバタッと倒れ込んだ。

「ギンガ！？」「おねーちゃん！？」

「ギンガ・・・？」

「シャマル！」

「あ、はいっ！」

ナカジマ一尉とスバルちゃん、それにシャマル先生が倒れたギンガちゃんの元へ駆け寄る。私たちも駆け寄って、「もうよせ、ルシリオン！」シグナムさんはルシル君を無理やり立たせた。

「大丈夫です。感情が追いつかなくて気絶しちゃったみたいですけど・・・。倒れた場所が柔らかな場所でしたし、怪我もありません」

「・・・そうかい。すまねぇな、先生」

「おねーちゃん・・・」

ホッとするんだけど、ルシル君のこともあって素直に喜び合えない空気。ナカジマ一尉は「坊主。あとで時間をくれ」そう言ってギンガちゃんを背負った。

「嬢ちゃん達も今日はありがとな。嬢ちゃん達に見送ってもらって女房も喜んで逝けただろうよ。嬢ちゃん達の大ファンだったからな」

ナカジマ一尉の微笑みに私たちは「はい・・・」と頷くしかなかった。そしてナカジマ一尉たちも帰って、墓地には私たちチーム海鳴だけが残った。

「ルシル君・・・」

「いいんだよ、これで・・・。恨んでくれないと、憎んでくれない

と・・・逆に辛い・・・」

「・・・病院に戻ろう？　ルシル」

はやてちゃんとシャルちゃんがルシル君の腕を胸に抱いた。それからルシル君ははやてちゃん達八神家とシャルちゃんに連れて行かれるように病院に戻って、私たちは先に海鳴市に戻ることになった。

Ｅｐｉｃｏ?－Ａ銃士と挑戦者～Ｔｈｅ　Ｃｒｉｓｉｓ　ｏｆ　Ａｃｅｓ～

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

はやてが特捜課としての仕事が休みん時は、あたしら騎士は武装隊員として仕事することになってる。んで今日は、あたしとシグナム、あとセレスが所属してる第２２１２航空隊と、戦技教導隊に入るために武装隊に所属してるなのはが居る１０１８航空隊が共同演習することになったから、ミッドの北西部・アンクレス地方の演習場にこれから行く予定だ。

そういうわけで今は、アンクレス地方への定期便が出港するまでの残り１時間半の暇を、ドクターの申し出でスカラボで過ごすことになった。メンバーはあたしとシグナムとなのは、そんでリインとアイリの５人。応接室のソファに座って、ウーノが淹れてくれたお茶と作ってくれたクッキーを美味しく頂いてる。

「今日の演習、ぜってぇ負けねぇかんな」

「うん。私だって負けないよ！」

「ヴィータはなのはのことになると、シグナムみたいにバトルマニアになっちゃうよね」

「ですぅ♪」

「おいおい、シグナムの末期症状と一緒にすんなよ」

「待て。私のどこが末期だ？」

「強ぇ奴が居ればすぐに剣を交えたいって考えるお前のバトルマニア病は正に末期だろうがよ」

シグナムにそう言うけど、実はなのはとの勝負になると、どうもいつも負けず嫌いになっちまうんだよなぁ、あたしもさ。"闇の書"事件の一件が理由だろうけど。なんつうか一番のライバルって言うか、負けたくねぇ相手って言うか、あたしを強くしてくれるって言うか、コイツとの模擬戦は楽しいんだよな。ま、そんなこと口が裂けても言えねぇけど。

「えっと、シグナムさん。それにリインとアイリも、今日はお願いします」

「ああ。こちらこそだ」

「はいですよ♪」

「うんっ」

なのはからの挨拶に、あたしに睨みを利かせてお茶を呑む手を止めてたシグナムが小さくフッと微笑んだ。そんでリインもアイリもクッキーを頬張りながら返事をした。

「やぁやぁ。話の花を咲かしているようだね」

そう言いながら応接室にやって来たのはスカラボの主であるジェイル・スカリエッティ少将。見るからにマッドなサイエンティストっぽいが、技術者としての腕は次元世界一だって言われてる。その技術力を買おうとすれば、最低価格で1千万オーバー。あたしらはシャルのコネのおかげでタダで、あたしらのデバイスはかなりハイスペックになった。

「お茶のお代わりはいかがですか？」

それに続いてスカリエッティ家・長女で秘書、あと二等陸尉の階級を持ってるウーノがワゴンを運んで来て、ティーポットを持って微笑んた。あたしとリインとアイリ、そんでなのはは「頂きます」お代わりを貰って、シグナムは「私はもう結構です。ご馳走様でした」断った。

「すまないね君たち。これから客人が来るんだ。応接室を使わせてもらうよ」

「あ、じゃあ私たちはこれで・・・」

「だな。邪魔するわけにはいかねぇし」

客が来るなら邪魔しちゃいけねぇって思ったからあたしらは席を立とうとしたんだけど、「あぁ、構わないよそのままで」そう言ったドクターがなのはの肩に手を置いた。すると「コホン。ドクター」

ウーノが咳払い。

「・・・・。なのは君」

「あ、はい」

「私は君の肩に手を置いている」

「はあ・・・」

「これは・・・セクハラかい？」

ドクターが脂汗を掻きながらなのはにそう訊いた。なのははドクターの顔と自分の肩に置かれた手を交互に見る。そんでなのはは少し考えた後、「いいえ。嫌な思いはしてないですし、ひょっとしたら頭が良くなるかも、なんて思います」ニコって笑った。

「よぉしっ！　聞いたかいウーノ！　なのは君は気にしないと言ってくれたぞ！　しかも、すずか君と同じことを言ってくれた！」

「すずかさん、ですか・・・？」

「そうなんだよ、リイン君。すずか君もね、私に触れられると頭が良くなったりするんじゃないか、と嬉しい事を言ってくれてね」

嬉しそうに笑うドクターの横で「実際には頭は良くなりませんが」ウーノがポツリと呟いたら、「水を差さないでくれたまえよ」ドク

ターはがっくりと肩を落とした。そこに、ビィーっとインターホンが鳴って『ゲンヤ・ナカジマ一等陸尉です』ドクターの言う客――ナカジマ一尉の声がした。

「どうぞ。開いております」

ウーノが応じるとスライドドアが開いて、「お？　嬢ちゃん達・・・」一尉と目が合った。あたしらは席を立ってビシッと敬礼。仮にも上官だかんな。敬語だってちゃんと使うさ。ま、ドクターやシスターズにはもう敬語もなんもねぇけどな。一尉はあたしらの敬礼に「おう」敬礼を返してくれた。

「ギンガ、スバル。嬢ちゃん達に挨拶だ」

一尉の側にはギンガとスバルが居た。最後に会ったのはクイント准陸尉の葬式以来だから、かれこれ2ヵ月ぶりくらいか。

「「こんにちは」」

「あ、はい。こんにちは」

「おう。こんにちは」「ああ。こんにちは」

「こんにちはですぅ」

お辞儀をしての挨拶をくれた2人にあたしらも挨拶を返す。けどアイリだけは挨拶せずに、一尉たちに気付かれないようにスバルを睨

んでた。アイリはあの一件以降、スバルを目の仇にしてるからなぁ。ここで暴走しないだけ大人だ。

「じゃあ、俺はいつも通りここで待ってるから、スカリエッティ少将たちの言うことを聴いて、ちゃんと良い子で居るんだぞ」

「はい」「うん」

「では参りましょうか。ドクター」

「うむ。それではナカジマ一尉、待っていてくれたまえ。なのは君たちもゆっくりして行きたまえ」

そんでドクターとウーノは、ギンガとスバルを伴って奥の部屋に入って行って、入れ代わりに「こんにちは、みなさん」次女のドゥーエがまた別のキャスター付きのワゴンを運んで来た。乗せられてるのはティーカップ3客。それと新しいクッキーが山盛りのお皿が1枚。一尉たちの分だな。ドゥーエは一尉のお茶の用意をして「何かご用があれば呼んでください」また奥の部屋に戻って行った。

「・・・。良い機会だ。なあ、嬢ちゃん達。坊主の様子はどうだ？　あれから嬢ちゃん達チーム海鳴とは会えなくてな。アリサ嬢ちゃんもあれを節目に別の隊に異動しちまったし。ま、俺が108部隊の隊長になったら引き抜くつもりだけどな。って、その話は今は関係ねぇな。俺ぁ、坊主のあれからを知りたかったんだ」

お茶を啜った一尉からの質問。あたしらは顔を見合わせて、頷き合

った。まずは「家じゃまぁ、普段通りに過ごしてるかな」あたしら家族が、家でのアイツの様子を話し始めた。

「ちゃんと喜怒哀楽の感情は生きてはいます。しかし・・・」

「しかしあの事件以降、ルシル君の喜と楽はどこかぎこちないですぅ・・・」

「こう言っちゃなんだけど～。お葬式でのあの子の言葉が一番の原因だと思うんだけどね」

アイリがムスッとした顔でそう言うもんだから、「アイリ！」あたしは頭を叩き、シグナムは肩を掴んで、リインは両手でアイツの口を押えた。

「良いんだよ嬢ちゃん。・・・そうだよな。すまねぇな。ありゃ酷かったよな～」

一尉が右手で顔を覆って大きく溜息を吐いた。そんで今度はなのはの番だ。学校でのルシルの様子はあたしらは知んねぇかんなぁ～。一体どんな感じなんだろ。

「私も、ルシル君の感情のぎこちなさを感じてます。これまでと同じように学校でも変わらずにちゃんと友達付き合いをしてることはしてますけど・・・。それでもやっぱり以前のように本気で、全力で、笑うことはなくなったと思います」

なのはが言うには、ルシルはクラスメイトとはちゃんと笑顔で話しもしてるし、イベントなんかにも積極的に関わって人気者だって話だ。

「でも、どう見ても明らかに喜と楽の感情を殺してるんです。私も以前は自分を抑えてばかりだったから、ルシル君が感情を抑えてるのがすぐ判りました。もちろんチーム海鳴のみんなだって気付いてます」

ルシルの奴、マジでヘコんでたかんなぁ、スバルのあの言葉に。ありゃあたしも堪えるわ。

「そうかい。俺ぁ、女房の葬儀の後、坊主が入院する病院に行ったんだが。そこで言ったんだよ。女房の死を責任に感じているなら、女房の分まで笑ってやってくれ、ってな。クイントは坊主のことが本当に気に入っててな。絶対にそう言うと思ってんだ。だが、そうだよな。そう簡単には割り切れねぇよな」

目頭を揉む一尉はまた大きな溜息を吐いた。そんで「にしてもな。坊主は本局の中でも強い方なんだろ？　相手はどんな奴だったんだ？」ルシルを重体にした相手のことを訊いてきた。

「広域指名手配犯レーゼフェア・ブリュンヒルデ。そして新たに手配されるフィヨルツェン・ブリュンヒルデ。同じく指名手配された、融合騎アギト。この3名がルシリオンを撃墜したと思われます」

"エヴェストルム"に残されてた僅かな記録映像。その1シーンが

静画としてテーブル上のモニターに映し出された。映っているのは3人の女。1人はレーゼフェア。そしてフィヨルツェンだ。共にルシルやオーディンがその存在意義っていう"エグリゴリ"のメンバーだ。そんでもう1人の小せぇ子供が居る。中でも驚いたのがその子供、アギトの存在だった。アイツが向こう側に居た・・・。

・―・―・回想だぜ・―・―・

ひでぇ怪我だったのにコード・エイルって魔術で完治させたルシルは、葬式の後すぐに検査入院ってことで病院に1泊。その翌日、あたしらは先生からルシルの左目が失明しているのを知らされた。

「ルシル君・・・」

目に涙を湛えたはやてが、ベッドの上に座るルシルの左頬に手を添えた。そんでアイリは「ホントに見えないの？」ボロボロ泣きながら、はやてとは反対の右頬に手を添えた。

「大丈夫だよ。右目はちゃんと生きているから、2人の顔もちゃんと見える。だから泣かないでくれ」

ルシルはどっかぎこちない笑顔ではやてとアイリの頭を撫でると、「うん」袖で涙を拭ったはやて達も微笑み返した。とそこに「しかしお前ほどの騎士を返り討ちにする相手など居るものなのか？」シグナムが唸った。ルシルは無言になって、「それは・・・―――」口を開きかけたところで、「こんにちはー」なのは達がやって来た。

「みんな。なんだ、わざわざ来てくれたのか？　それにユーノまで！
うわ、すごい嬉しいぞ！」

「あはは。お互いに数少ない男友達だからね」

「チーム海鳴の仲間だもん」

「当たり前よ」

「退院祝いのフルーツの詰め合わせ、海鳴市に帰ったら渡すね」

「それにしても。あんだけの怪我を目覚めてすぐに自分の魔法で完治させるなんて、やっぱモンスターだね♪」

「っ！？　ア、アリシア！　コラ、なんてこと・・・！」

一気に騒然になる病室。ルシルは笑顔を作るんだけど、やっぱぎこちなかった。あたしですら気付けるんだからはやて達もぜってぇ気付いてるんだろうな。

「でもさルシル。あなたをあそこまで痛めつけられるのって、わたしの中じゃ答えは1つしか無いんだけど・・・」

シャルがそう言ったらシグナムも「やはり、か。嫌な予想は当たってほしくはないな」って俯いた。ルシルはベッド側のナイトテーブルの上に敷かれたハンカチに置かれた"指環"に「エヴェストルム。残された記録映像を」そう命令した。

そして展開されたモニターに映る3人に「っ！！」あたしらは絶句した。あたしら八神家は「アギト・・・！？」の姿に驚いて、なのは達は「フィヨルツェンさん！？」の姿に驚いた。するとルシルが「ちょっと待ってくれ、知っているのか！？」って大声を上げた。

「え、あの、フィヨルツェンさんは・・・」

「どこで会った！？　いつ！　場所は！？」

いつもの冷静さを欠いたルシルに、「落ち付け！」あたしとシグナムとザフィーラがベッドから落ちそうになるアイツを押さえ付けた。すると「ごめん・・・。ごめん」ルシルは大人しくなって、ベッドの上に座り直してくれた。

「わたしがフォーチュンドロップに使う魔石を採掘しに行ったよね。それにルシルも行ったでしょ、あの遺跡に」

「そこでフィヨルツェンさんに出会って、私たちが危機に陥ったその時に助けてくれたんだ」

アリシアとフェイトが答え、なのはとアリサとすずかが同意するように頷いた。そんで次は「ユーノ。君は一体どこで・・・？」ルシルが訊いた。

「フィヨルツェンさんがエグリゴリ・・・！？　そんな・・・。うそだ・・・。だってフィヨルツェンさんは・・・、僕の・・・僕たちの・・・」

ボソボソと呟いてたユーノが俯いていた顔を上げた。血の気が引いて青白い。なのはが「ユーノ君・・・」アイツの腕を掴んで心配そうに顔を覗き込んだ。ユーノは「ありがとう・・・」なのはに礼を言った後、チラッとフェイトとアリシアを見た。その意味が解らねぇのか2人は小首を傾げた。

「・・・ジュエルシードを発掘したのは、僕とセレネとエオスだけじゃないんだ。その場にフィヨルツェンさんも居たんだよ、ルシル」

ジュエルシードって確か・・・なのはとアリサとすずかが魔導師になった切っ掛けになった事件で巡ったロストロギアだったよな。んで、ユーノは続けた。フィヨルツェンとの出会いや一緒に過ごした間のことや別れのことも。そんでフィヨルツェンがユーノ達にとって姉的な立場で、その物腰や強さに憧れてたって。

「・・・この事はセレネとエオスには伏せたい。ごめん。僕はまだ信じられない、信じたくない・・というか。ちょっと混乱してる。2人は僕以上にフィヨルツェンさんが好きだったから、この事については耐えられないと思うから。ごめん・・・」

「いや、こちらこそ辛い思いをさせた」

「ううん。その、ルシル。やっぱりフィヨルツェンさんを救う・・・んだよね」

"エグリゴリ"に対する救いってぇのは厳密に言えば完全破壊だ。

ユーノやセレネ達がフィヨルツェンに特別な感情を抱いてたのは話を聴いてりゃすぐに解る。だからこそユーノは苦しそうなんだな。大事な人の死が確実にされちまって・・・。

「すまないな」

重い空気に満たされる病室。なのは達にショックがあったが、あたしらの方にも、アギト、っつうショックな出来事が起きてんだよな。アイリが「ルシル。アギトお姉ちゃん、どうなったの？」そう訊いた。

「レーゼフェアの術式かまたは神器の効果で、ベルカ時代の記憶を失ってしまっているらしいんだ」

「「「「「っ！！」」」」」

敵側に居るってだけでもショックだってぇのに記憶まで無いってあんまり過ぎんだろ。当時のことを知ってるあたしやシグナム、シャマル、ザフィーラ、そんで妹のアイリは絶句だ。ショックがデカ過ぎてなんも言えなくなった。

「ねえ、ルシル。記憶を消せる神器なんてあるの？」

「難しい物じゃないな。俺だって複製術式の中に記憶改編できる複製術式や神器が多々あるし。俺の創世結界や複製能力を封印する能力の方がずっと難しい」

最後の創世結界云々はあたしらも知らなかったから「？？？」ってなる。ルシルは「奴は、俺の左目を殺すだけじゃ飽き足らず、創世結界と複製能力を封印したんだ」って大きく溜息を吐いた。

・―・―・終わりだ・―・―・

（そっからはまぁ大騒ぎだったよな。左目失明を同時に知ったなのは達もそうだが、ルシルの強みだった複製と創世結界が封印されたってあたしらも知ってさ）

たとえ創世結界の恩恵が無くてもルシルなら大丈夫だろう。複製術式なんて頼らなくても強ぇんだし。けど、"エグリゴリ"が相手となったら絶望的だ。なんとしてもぶつかる前に解呪するっていろいろやってんけど・・・。何とか助けてやりてぇな。

「この２人は強ぇのかい？　えらく美人さんだが・・・」

「共に魔力ランクが推定ＳＳＳオーバー。正確に言えば測定不能なレベルの魔力持ちです。しかも特殊な力を秘め、魔法や物理攻撃が一切通用しません」

「なっ、なんだいそりゃ！？　坊主はそんな２人とやり合ったって言うのかい！？」

魔法じゃなくて魔術。魔導師じゃなくて魔術師。気が遠くなるようなずっとずっと昔。魔法が誕生する前に存在してた魔力運用技術が魔術だ。そして神秘って言う特殊な"力"を持ってて、魔術師を倒

すためにはそれ以上の神秘が必要だってあたしらは聞いてる。すでに経験してるし、確かなことだ。

「自分こそ大変な目に遭っていながら、女房やゼスト隊の死の責任を背負うっていやがるんだ、あの坊主は・・・！　くそっ。ガキが背負えるようなもんじゃねぇってぇのによ・・・！」

自分の膝の上に置いてる手を握り拳にした一尉が「坊主の体に異変が起きてるって噂で聞いたんだがよ。それはどうなんだ？」そう訊ねてきた。

「ええ。左目の視力を完全に失っております。さらには固有スキルも封じられていますし。ルシリオンが言うには呪いである、と」

シグナムが苦い表情でそう答えると「呪い？　あのオカルトのか？　まさかだろ？」一尉は眉を顰めた。普通はそんな反応だろうな。魔法って言ってもそれはもう科学として次元世界に存在してる。だから管理世界の人にとってオカルトは笑い話のネタみたいになってんだけど・・・。あたしらはルシルが苦しんでる姿を実際に見ている以上、全然笑えない。一尉も私たちの様子に「マジか・・・」頭を抱えた。

「治せねぇのかい？」

「手っ取り早く解決するには術者本人を打ち倒すことだって。それにルシルも連中が持ってる特殊な力で解呪する道具を作ってる」

レーゼフェアに掛けられた呪いを解くため、ルシルは半月かけてモノクル型の神器・"森羅万象(プロヴィデンス)の眼"を作った。モノクルなんてかなり珍しい物だから、学校ではすごい人気だったりするってはやてから聞いた。

「そうかい。・・・そんな今の坊主にうちの娘と会わせるのは酷かもしんねぇな」

スバルに、お葬式の時にルシルに言った暴言について謝らせたいって一尉は言った。でもルシルの今の大変さに遠慮気味になっちまった。

「やっぱもうちょい時間空けた方がいいんじゃないかな～」

「もしあの子がまたルシルに暴言吐いたら・・・アイリ、我慢できないよ」

「一尉。スバルの家での様子はどうなのですか？　やはりルシリオンに対しては・・・？」

「・・・まぁ、な。ギンガの方は比較的に精神が大人びてることもあって坊主は悪くないってことくらいは解ってるし、スバルにも謝るように言ってくれてるんだがな。スバルはやっぱ年相応にガキだからな。女房が死んだことの原因が坊主にもあるって考えは変わらなくてな」

「もっと大きくなってからの方が良いかなって、私も思います。無

理やり会わせてお互いが傷つくのはちょっと・・・」

スバルがルシルのことを少しでも恨んでるなら、ルシルへの謝罪は成り立たないと思う。少し悩む仕草をした後、一尉は「・・・もうしばらく待ってみるわ」小さく頷いた。

「話を聴いてくれてありがとうなお嬢ちゃん達」

「「「「はい」」」」

「・・・」

一尉と話を終えた後、あたしらは時間も良い頃合いになったことでミッドに降りるための次元港へ向かった。

†††Ｓｉｄｅヴィーター⇒シグナム†††

私とヴィーターが所属する第２２１２航空隊と、高町が所属する１０１８航空隊が、ミッドチルダは北西部・アンクレス地方の演習場にて共同演習を行うため、本局からここ北西部の次元港へと降り立った我々を待ち構えていたのは、「なんだ？　随分騒がしいな」騒々しい構内だった。

「何かあったんでしょうか？」

「向こうの構内モニターが特に騒がしいし、ちょっと観に行ってみようぜ」

ヴィータが構内の支柱の1つに設けられたモニター前にたむろしている人だかりへと駆け出し、私とアイリとリイン、高町も続いた。

「おいおい、大丈夫かよ」

「怖いわ・・・」

「最近、物騒になったよな」

「犯罪組織同士の抗争なんだろ？」

「少しは迷惑ってもんを考えてほしいもんだよな、おい」

「これじゃ安心して街も歩けなくなるわね」

「局員に死者も出てるようじゃないか」

「ついこの前にも首都防衛隊が全滅したそうじゃないか」

「ゲイズ中将の、地上の武力強化案っていうのも、やっぱり必要になっていると思うぜ？」

他の客たちの会話に耳を澄ませる。この騒ぎの原因は犯罪組織の抗争によるもので、鎮圧に向かった陸士部隊の隊員から死傷者が出ているらしい。パラディース・ヴェヒターとしてなら何も気にせずに介入が出来るのだが、今の我々は局員だ。そう好き勝手は出来ない

のが無念だ。

「ひどいです・・・」

「民間の人にまで被害が・・・」

リインと高町がモニターに映る光景に胸を痛めていた。私も遅れてモニターを観、その凄惨な様子に「惨いな」と私も呻いた。倒れ伏している局員、それに民間人が数人ずつ。それとは別に犯罪組織のメンバーと思われる者たちが血塗れで倒れている。

「ヴィータちゃん、シグナム、なのはさん。リイン達には何も出来ないです？」

「地上の事件は管轄外だ。要請がありゃ手は出せるが、勝手に手は出せねぇよ」

「こういう時は組織っていうのが邪魔になるよね。ベルカの時は問答無用で敵騎士を斃せたのに」

組織に入ることは自由を失うことだ。しかも地上部隊を取り仕切るレジアス・ゲイズ中将は我々が所属する本局を毛嫌いしていると聞く。そんな我々が地上で好き勝手すれば、海と陸の確執がまた大きくなってしまうだろう。

「リイン。残念だけど、私たちに出来ることはないと思う。だからこのまま演習場へ向かおう？」

高町は懸命に助けに行きたい思いを抑え込み、モニターの前から離れると「はいです・・・」リインも続いて離れた。

「こうゆう時にこそパラディース・ヴェヒターに戻りたいって思うよな」

続いてヴィータもモニター前から離れる。そして私も「アイリ。行くぞ」離れようとした時、「ちょっと待って」アイリが呼び止めて来た。距離的に私ひとりが立ち止まり「どうした」と訊ねる。アイリは私に応えることなくモニターを注視しているのみだ。

『――繰り返します。組織間の抗争は熾烈を極め、民間人にも死傷者が出ている模様。鎮圧に当たる第３９９陸士部隊からもまた死傷者が出ているようです。抗争が始まった直後の市民から伺ったのですが、構成員２名が所有する質量兵器らしき武器から放たれる魔法は、局員や敵対勢力の魔導師の防御魔法をまるで何事も無いように貫通していた、とのことです』

現場から生中継をしているリポーターの女性がそう報告した。まるで何事も無いように貫通。それに引っ掛かりを覚えた。そして、件の構成員２名とやらの姿が映し出された。共に防護服を身に纏い、１人は質量兵器である拳銃を所持。色は全身真っ白。もう１人はロングソードを持っている。剣の腕はあるようだな。隙が少ない。

（・・・あの武器、まさか・・・）

「シグナム。アレ、神器だよ！」

私の考えを言葉にしたアイリ。直感的にあの２人が持つ武器が神器であると判った。おそらく"グレイプニル"を所有し、なおかつ神器持ちと幾度と交戦したからだろう。ただの質量兵器かそうでないかの区別が出来るようになった。

「ヴィータ、高町、リイン！　予定変更だ！　抗争に介入するぞ！」

次元港の出入口へ向かって駆ける。戸惑いを見せるヴィータ達だったが、「神器を確認したんだよね！」アイリがモニターに指差しながら私に付いて来たことで、ヴィータ達も事情を理解して私に続いた。

「こちら特捜課のシグナム！　フィレス！」

『あ、シグナムさん。お久しぶりです！　どうしましたか？』

機動一課の分隊長・フィレスに通信を繋げる。我々チーム海鳴の神器回収の任は未だに続いている。ゆえに神器回収時、機動一課・臨時特殊作戦班としてその任を全うすることが出来るわけだが、我々が特戦班として活動する場合は、一課の分隊長や部隊長に連絡する必要がある。

「ミッド北西部・アンクレス地方にて神器２種を確認！　これより特戦班として回収の任に就きたい！」

『っ！　了解！　ちょっと待ってください。アンクレス、アンクレス・・・・あ、コレか！ひょっとして犯罪組織間の抗争ですか！？』

「ああ！　構成員２名が持つ白い銃とロングソードが神器と思われる！」

『えっと・・・、この２人か・・。確かに・・・。判りました！地上部隊への連絡と次元港から現場までの飛行許可はこちらがしておきます。現着したらそのまま交戦に入ってください。応援としてセレスも向かわせます！』

「了解！」

通信を切り、次元港の外に出た直後、飛行許可が下りたという連絡が我々に入った。市街地での飛行魔法の使用は、建造物や航空機などとの衝突、それに墜落事故を避けるために緊急時以外は許可されていない。しかし許可が下りれば飛ぶことは可能だ。

「聞いての通りだ。現着次第、神器回収の任に就く！」

「「了解です！」」「おう！」「はーい！」

我々は防護服へと変身し、主はやてとのデート直後にルシリオンから渡されていた神器の腕輪・"ドラウプニル"を右手首に装着、そして抗争が起こっている現場へ向かうために空へと上がった。

Ｅｐｉｃｏ？－Ｂ銃士と挑戦者～Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｄｏｗｎ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

マイスターは監察課＋監査課の研修で第３９管理世界エルジアに行っちゃって、はやては休みだから家でのんびり。そういうわけで２人の融合騎であるアイリとリインは、準ロードのヴィータとシグナムにくっ付いて武装隊の仕事をすることに。
別の武装隊に所属してるなのはも、ここミッドの北西部・アンクレス地方っていう田舎の演習場に行く予定だったんだけどね。そして北西部の次元港に着いたら着いたで構内が騒がしくて、特に構内モニター前には人だかりが出来ていた。確認すれば騒ぎの原因は、リアルタイムで中継されてる犯罪組織の抗争だった。しかも神器が２つ確認できたから、さぁ大変。

（もちろん黙って見てるわけにはいかないよね！）

神器による事件や事故は、マイスターの心を傷つける。何故なら神器は、マイスターが人として生きていた時代に存在してた物だから。マイスターは過去が現代や未来を犯して、狂わせるのが大っ嫌い。だったらマシスターを愛するこのアイリが黙って放置するわけないんだよね。

「現着後、ヴィータと高町は牽制を頼む」

「おう！」「あ、はいっ！」

「リインとアイリは、連中が防御ないし回避したその隙に捕縛だ。神器持ちだからと言って魔法が通用しないわけではない、というのは既知だからな。神器に魔法が触れさえしなければそう難しくなく捕らえることが可能だろう」

「ヤー！」「はいですっ！」

シグナムからの指示にアイリ達は応じた。目的はあくまで確保で、戦闘じゃない。神器を使われての戦闘がどれだけの被害をもたらすのか判らないからね。で、ヴィータが「お前はどうすんだよシグナム」自分の役割を言わなかったシグナムにそう訊いた。

「我々が事件に介入することは、フィレスから担当の陸士部隊へと連絡してくれるが、やはりこちらからも現場担当に挨拶しなければ失礼だろう」

「緊急時はしょうがなくないですか？」

「リイン。私は局員である前に騎士だ。礼儀は大切にしたい」

「律儀だな、おい。ま、あたしら４人でサクッと片付けるから、シグナムがひとり抜けたところで問題じゃねぇけど」

「ヴィータちゃん。神器相手に油断や慢心は命取りだよ？」

「解ってんよ、そんくらい。あたしらはお前が生まれる前から神器

と関わり合ってんだぞ、なのは」

まぁ、アイリ達は"エグリゴリ"のバンヘルドと戦ったしね。だからその危険性はなのは達以上に理解してる。特にヴィータやシグナム、シャマル、ザフィーラは実際に殺されちゃった経験があるし。

「とにかくだ。神器持ちへの攻撃は全て神器へ。間違っても体には当てるなよ。殺害してしまったらこちらの罪人だ」

そういうわけで、アイリ達は空を翔けて現場へ向かってる。次元港から現場まで約２０分の飛行の末、「現場視認です！」リインが告げた。アイリ達の目線の先、そう大きくも無い街が見えて来た。大きなビルも数えるほどしかないところだけど、それでも人が住んでる街なんだ。そこで抗争なんてふざけてくれちゃった真似、絶対許せないよね。

「では私は現場担当に挨拶をしに行く。少しの間だが空ける」

「さっき言ったろ？　あたしらだけで片付けてやるってさ！　アイゼン、カートリッジロード！」

「レイジングハート、カートリッジロード！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ≫

ヴィータとなのはが、マイスター特製の神秘カートリッジを１発ずつロード。魔力に神秘を付加させる神器・"ドラウプニル"の効果

もあって、今の２人はまぁまぁな魔術師になれてる。カートリッジをさらにロードすることで、さらに魔術師に近付ける。だから余程の格上の魔術師や神器じゃないと、ヴィータやなのは、さらにシグナムには勝てない。

「リイン、バインド用意！」

「はいですよっ！」

シグナムと別れて、アイリ達は陸士部隊と交戦を続けてる神器持ち２人へ空から接近。そして・・・

「なのは！」「ヴィータちゃん！」

≪Ｓｃｈｗａｌｂｅ　ｆｌｉｅｇｅｎ≫≪Ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ≫

物質弾に魔力付加させたヴィータの射撃魔法と、馬鹿みたいな魔力量を圧縮したなのはの魔力弾、計２８発が構成員２人を囲う壁のように着弾してく。

「氷結の軛！」「鋼の軛！」

アイリとリインは、土煙に覆われた構成員２人に対して古代ベルカ式捕獲魔法をお見舞いしてあげる。リインは鋼の軛っていう、ザフィーラだけでなくシャマルも扱える魔法。アイリはそれに氷結付加を施したもの。直撃したら凍らしちゃうよって感じだね。

「アイリ、ユニゾンだ！」

「へーい」

ヴィータに頼まれたから「ユニゾン・イン！」してあげた。アイリはヴィータの中から外界の様子を見る。土煙が晴れるより早く「砲撃！」なのはの警告と同時にヴィータが回避に入る。ヴィータとなのはの居る空に向かって放たれた砲撃は、アイツらを覆う土煙を消し飛ばした。

「あぅ～。神器でスッパリ断ち切られてるですね」

剣使いはアイリとリインの軛を剣で斬り払ったみたい。けど銃使いはお腹と左腕と両足にリインの軛を貫ってた。でも銃を持ってる右腕だけは自由。だから砲撃を撃てたんだね。そんな半ばリタイア気味の銃使いを縫い止めてるリインの軛を、剣使いは携えてる剣を横一線に振り払って破壊した。

「なのは、気ぃ付けろ。あの剣使い、やべぇ感じがする」

「みたいだね。あの人も剣士として強いと思うけど、それ以上に持ってる神器がまずいかも」

ヴィータやなのはの意見にアイリも賛成。あのロングソード、かなり高位の神器かも。こうして直に見て、相対するとよく解る。ヴィータは「リイン！　シグナムとユニゾンしろ！」リインに指示を出

して、続けて「なのは！　まずは・・・！」に声を掛けた。

「はいですっ！」

「うんっ！　まずは銃使いだね！　了解だよ！　剣使いは押さえるから、その間に！」

どう見ても銃使いを先に片付けた方が良いよね。そういうわけで、なのはが射砲撃で剣使いを押さえ込んで、その間にヴィータとアイリが銃使いを近接戦で捻り潰す。え？　戦闘が目的じゃない？　もうそんなこと言ってられない程にまずい相手だって。

「レイジングハート！　エクセリオンモード！」

なのはの"レイジングハート"が槍のような形態に変形して、綺麗なサクラ色の魔力で出来た翼が展開された。アイリ、なのはのデバイスが一番綺麗って思うんだよね。翼がバサッってなる瞬間が堪らなく好き♪

「エクセリオン・・・バスタァァァ――――ッ！」

なのはが剣使いと銃使いの合間に向かって砲撃を発射。２人は迎撃じゃなくて左右に飛び退いて回避。そして銃使いはなのはに向かって、球体状じゃなくてホントの銃弾みたいな形状をした魔力弾を十数発と連射。

「ヴィータちゃん、お願い！」

≪Ａｃｃｅｌ　Ｆｉｎ≫

なのはがヴィータから距離を取って、銃弾を引き付けてくれるその間に、「アイリ！」ヴィータが銃使いへ向かって急降下。

『ヤー！　氷結圏！』

アイリと融合したことでヴィータの魔法や"アイゼン"に付加された氷結能力の効果をさらに増加させる魔法を発動。

「『シュワルベフリーゲン・アイス！』」

そして打ち出すのは、シュワルベフリーゲンに氷結効果を付加した射撃魔法、その数１２発。狙いは銃使い本体じゃなくて周囲の地面。本命をぶちかます前にまずは行動範囲を制限するためにね。銃使いは慌ててなのはからヴィータの氷結弾へ向かって銃弾を連射して、いくつかを迎撃。迎撃されるってことは、ヴィータの神秘があの銃の神秘より負けてるんだね。

『砲撃で迎撃した方が早いのにね』

「なんか事情があんじゃねぇの・・・！」

迎撃しきれなかった氷結弾数発が銃使いの周囲に着弾して、ボフッと白煙を上げて氷の棘が花のように咲かせた。棘に包囲された銃使いは「なんだこら！？」って叫ぶ。それぞれの棘の長さは１ｍちょ

いあるから、破壊しないとその場から逃げれない。だから焦りまくってる。

「テメェを墜とせばそれで終いだろうが！！」

ライフルみたいに銃身の長い真っ白な神器の銃口がヴィータに向けられて、銃弾が連射されて来る。ヴィータは「遅ぇッ！」速度を緩めることなく銃弾の合間を縫うように突っ込むんだけど、『怖っ！』アイリはただ見ていることしか出来ないからかなりの恐怖なんだよね。

「アイリ！　ぶちかますぞ！」

『ヤー！』

「『フリーレンシュラーク！！』」

"アイゼン"の通常形態ハンマーフォルム時での打撃魔法は基本的にテートリヒ・シュラークになる。そこに氷結効果を付加したのがフリーレンシュラーク。当然、直撃時に氷結効果のある冷気を放出するから、防御魔法もデバイスも、もちろん人も凍るわけね。

「思い出した！　マジかよ、聞いてねぇよ！　チーム・ウミナリの騎士じゃねぇかよ！」

目を大きく見開いて驚いてる銃使いは歯噛みして、慌てて銃身上部にある装填と排夾をする穴にカートリッジを込めるんだけど、焦り

からかいくつかポロポロ落としちゃってる。とにかく初見の行動だね。警戒するように言おうにもすでにヴィータは攻撃体勢に入った直後だし、もう手遅れ気味。

「しもやけくらいは覚悟しろよ！」

銃使いが銃のボルトハンドルを引くと、銃口から光が漏れ出した。そんな銃へ向かって振り払われる、冷気の尾を引く"アイゼン"。撃たれるのが先か、弾き飛ばすのが先か・・・

「おらぁぁぁぁぁぁぁッ！」

"アイゼン"に打たれたことで銃口がヴィータから外れた。その瞬間に、『あぶな・・・！』砲撃が発射された。至近距離を通り過ぎてく砲撃が発する衝撃波がすごいけど、「だから遅ぇってんだよ！」振り払われた"アイゼン"が砲撃を放出中の銃を弾き飛ばした。

「んな・・・！？」

「アイリ！」

『アイス・ランツェ！』

神秘付加されてないアイリの魔法なら直撃でも死ぬことはないからね。ヴィータの周囲に氷の礫を１５基と展開、そして『発射（ファイエル）！』銃使いに向けて一斉発射。銃使いは「うごぉ！？」なんて言って吹っ飛んだ。

『ついでにダルマにしてあげるね♪』

――アイスマン――

銃使いの周辺の水分を急速冷凍させて、雪だるま型の氷の中に閉じ込める。閉じ込められてもすぐに凍死とか窒息死しないようにしてあるから、しばらく放置でも問題ないね。"アイゼン"を肩に担いだヴィータの視線が銃使いから地面に転がってる銃に向けられて、その場まで歩いて「回収っと」拾い上げた。

（銃型神器。そのほとんどがマイスターが人間だった頃に作った物だ。ひょっとしてコレもマイスターが作ったのかな・・・？）

マイスターの真実を知って、アイリは寝物語としてマイスターからその当時の事を教えてもらってる。これまでに聴いてきた思い出話の内の1つに、銃型神器の大半はマイスターが作って、率いる部隊の魔術師や、アールヴヘイムの魔術師に授けたって話をしてもらったことがある。

「ルシルにどんな神器か聞きてぇけど、アイツって今は監察・監査課のダブル研修だから通信には出られねぇよな・・・。こういう時はアイツの知識が必要だってぇのにさ。とにかくこんな長ぇもんを戦闘中には持てねぇし・・・。アイリ、あたしの魔力でバインドだ」

ヴィータが不満げに呟いて、アイリにそう指示を出した。擬似的に魔術師と化してるヴィータの神秘魔力での魔法なら、神器を拘束す

ることも出来るからね。

『んじゃあ、リングバインドで良いよね』

――リングバインド――

銃を４つのリングバインドで拘束・・・完了。そして「次だ、アイリ！」ここから離れながら剣使いと交戦してるなのはの方へ視線を向けた。なのはは空から射砲撃をぶっ放し続けて、地上に居る剣使いは炎を纏う剣を空に向かって振るって、炎で出来た剣を扇状に発射してる。

「炎熱系かよ。今のあたしとアイリじゃ相性最悪だな」

あの炎を使う剣の神秘は間違いなく今のヴィーータ達以上のものだ。でも３対１なら。それに、あとで来てくれる真正の魔術師であるセレスが加わればきっと勝てるね。セレスは氷結系だけど、神秘の差によっては属性の優劣はひっくり返る。それが魔術なんだから。

「アイリ。ユニゾン・アウトだ。お前は神器を持って退避してろ」

『しょうがないね。ユニゾンするだけでアイリの氷結能力がヴィーータに付加されちゃうんだし。残念だけど、い～ち抜～けた～』

「『ユニゾン・アウト！』」

融合を解くと、ヴィーータは「じゃあお前は、銃を持って陸士隊と合

流だ」そう言って、"アイゼン"を銃に向けた。アイリは「ヤー。・・・っと、結構重いね」リングバインドを解除して、銃を両手で受け取ってチャッと構えてみる。

「じゃああたしは、なのはと合流すっから」

「気を付けてね、ヴィータ。神器での被害は、ルシルが苦しんじゃうし、悲しんじゃうから」

「おうよ！」

ヴィータがなのはの元へと向かって行くのを見送る。アイリの"ドラウプニル"、持ってくれれば良かったな～。特別技能捜査課としての事件捜査だったなら持って来てるんだけど、武装隊同士の演習って言うから持って来てないんだよね。あぁ、こんな事になるなんて完全に予想外。ヴィータ達みたく常に持ち歩いてないとダメみたいだね。そうじゃないと、こういう状況の時は戦力外通告を受けちゃうし。

（マイスターの役に立つためには、アイリもしっかり神器戦をこなさないとね！）

神器の銃をじっくり観察。効果としては神秘の魔力弾を発射したり、ディバインバスター並の砲撃を撃ったり出来るわけだけど。銃の知識はマイスターから教わってるから、ちょっと見てみる。

モデルはＭ１８９１／３０――モシン・ナガンだね。ボルトアクション式の狙撃銃型。木の部分も鉄の部分も全部が真っ白。弾倉の方

式はボルト下に内蔵されてる固定式。狙撃銃型なのに、スコープは無いのがちょっと寂しい。とにかく安全のために安全装置をＯＮにして、さらにボルトハンドルを引いて薬室からカートリッジを全部抜き切る。

（ちょっと触れただけで込められてる神秘の強さが判るね・・・）

地面に落ちたカートリッジを拾い上げる。カートリッジシステム搭載式のデバイスに使われる形じゃないから、当然マイスターの手で作られたものじゃない。マイスターの作る神秘カートリッジはデバイス用ばかりだし。ということは、カートリッジも一緒にアールヴヘイムから奪って来たわけだね。

「銃使いに直接訊いてみればいっか♪」

マイスターとお揃いの騎士服のポケットにカートリッジをしまって、アイリは銃を肩に担いで氷だるまに閉じ込められてる銃使いの元に向かった。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒なのは†††

「シューット！」

≪Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ≫

西洋剣型の神器を振るう犯罪組織の構成員へ向けて、私と"レイジングハート"は魔力弾を１２発と発射する。もちろん当てるつもり

はなくて、狙うのは神器であるあの剣。神器を携えたとしても持ち主の魔力に神秘が付加されるわけじゃない。神秘を得た魔法――魔術の直撃は大事故に繋がる。だからいつも以上に集中して、魔術と化してる魔力弾の操作をする。

――アドエオナス・リング――

剣使いさんは炎が勢いよく灯った剣を振るって、炎の環を私に向けて放って来た。魔力弾の軌道を操作して衝突しないように気を付けながら私も回避。魔力弾はそのまま剣使いさんの持つ剣へ向かわせる。

≪マスター！　後ろです！≫

"レイジングハート"からの警告に「え・・・！？」後ろを振り返れば、さっき通り過ぎてった炎の環がすごい速さで戻って来てた。私はアクセルフィンでその場からすぐに退避したから避け切れたんだけど、その一瞬の心の乱れで魔力弾の操作を怠っちゃった。立て直そうにもすでに剣使いさんが炎の斬撃で全弾迎撃。

「なあ！　あんた、リンドヴルムを壊滅させたチーム・ウミナリのタカマチ・ナニョハだろ！」

「っ！！　なのはです！　高町、な・の・は！」

まさかまたこんなやり取りをする日が来るなんて思いもしなかったよ。剣使いさんは「わりぃ、わりぃ」人懐っこい笑顔を浮かべて頭

を掻いた。それだけならちょい悪風なおじさんって感じだけど、陸士隊員にも民間人にも死者が出しちゃってる以上は・・・悪い人だ。

「そうそう、タカマチね！　やっぱりと言うか、さすがと言うか、アンタはそこらの陸士隊員とはまさしく別格なんだな。見ろよ。さっきまでは片手剣だったのに、今じゃ両手剣だ」

それは気になってた。ひょっとして私の気の所為じゃないかな、って思ってたけど、やっぱり気の所為じゃなかったんだ。ここに着いたばかりの時は、確かに片手持ちの剣だったのに、今は柄が長くなって両手持ちの剣に変わってた。

（変形する神器なのかな？　ルシル君に連絡を入れたいけど、監察課と監査課の研修は2週間もあるし、通信に出られる時間も無いだろうし。困ったなぁ・・・）

新しく管理世界入りを果たした第３９管理世界エルジア。ルシル君は昨日から学校を休んで、エルジア首都に設立された地上本部へ研修に行ってる。本当は今すぐにでも連絡を取って、あの剣のことを訊きたいんだけど、さすがにルシル君も暇じゃないだろうから気が引けちゃう。

≪マスター。勝利して回収すれば、何も問題ありません≫

「まぁ、今から神器を回収すれば確かに連絡は必要ないんだろうけど・・・」

"レイジングハート"からの提案にも一理あるけど、って悩んじゃう。

「それでなタカマチ！　ものは相談なんだけどな！　俺を見逃してくれないか！」

うんうん唸ってると、剣使いさんがそう言ってきた。何を言うかと思えば見逃せ、だなんて。局員としてもそうだけど、人としてそれは出来ない相談だよ。私が無言で"レイジングハート"の先端を剣使いさんに向けると、「俺はな、子供は傷付けたくないんだよ！」そう言って剣先を降ろした。

「じゃあ！　どうしてこんな事してるんですか！　この抗争の所為で陸士隊員さん達だけじゃなくて、なんの罪も無い一般の人たちにも犠牲者が出ているんですよ！」

「待て、待て、待て！　俺と舎弟はあくまで敵組織の構成員にしか攻撃してねぇよ！　ありゃ向こうの組織の連中がやったことだ！」

「でもあなた達がこんな街中で戦わなかったら、被害は出なかったかもしれないのに！」

「撃たれてる最中で背を向けて逃げろってか！？　それは俺たちに、死ね、って言ってるもんだぞタカマチ！」

「防御魔法であれば、ある程度の質量兵器も耐えられますし、屋内で戦えば――」

「向こうの魔導師の方がランクも所有デバイスのスペックも高いんだよ！　しかも非殺傷設定じゃなく、物理破壊設定でだぞ！　何で局員や市民が死んだのか。それが原因だからだよ！」

「・・・。それでもあなたは犯罪組織の構成員であることには違いありません。だから・・・逮捕します！」

「はぁぁ・・・。しゃあないか。死んでも恨んでくれるなよ、お嬢さん」

――ウェスタス・ソード――

――アクセルシューター・バニシングシフト――

振るわれた剣から剣の形をした炎が扇状に放たれて来た。私は剣と剣の合い間を抜けて、ロックオン機能を使っての精密射撃を行うバニシングシフトを発動。剣をロックオンした魔力弾１６発を「シューート！」一斉発射した。

「甘い！」

――ペロニアス・ディフェンス――

剣を地面に突き刺した瞬間、剣使いさんとの間に幅５ｍ・高さ３ｍくらいの炎の壁が生まれて、魔力弾が全てその炎の壁に突っ込んで行って燃やし尽くされちゃった。

「高町！」『なのはさん！』

「シグナムさん、リイン！」

とそこに、リインとユニゾンを終えたシグナムさんが来てくれた。さらに「なのは！」ヴィータちゃんも合流。だけどアイリの姿はどこにもない。だから『あれ？　アイリはどうしたです？』リインが訊くと、「相性が最悪だろ、アイツの神器とはさ」ヴィータちゃんはそう言って、"グラーフアイゼン"を炎の壁に突き付けた。

「だから回収した銃型神器を見とくように言って、置いてきた」

――ポエナス・グリーフ――

「回避！」

炎の壁が破裂して、炎の礫が無数に飛来してきた。シグナムさんの指示に応じて私たちは散開。さっき以上に熱量があって、さらに神秘が高まってるのが判った。私は「カートリッジロード！」ルシル君特製の神秘カートリッジを1発ロード。ドクンと跳ねる心臓。リンカーコアが暴れ狂う感覚。でも、どこか心地良い感じがする不思議。

『こちら陸士３９９部隊、現場担当！　可能であれば戦場を変更して頂きたい！　先ほどの炎の礫が、火事などの二次被害を齎そうとしている！』

陸士隊員さんから通信が入って辺りを見回すと、街路樹が何本か燃えちゃってた。シグナムさんが「了解！　試みてみます！」応じて、私たちを見た。剣使いさんは今、黒煙の向こう側。私たちの姿は確認できてないはず。作戦を立てて実行に移すなら今しかない

「シグナムさん。あの人、私に見逃せって言ってたんですけど。それを利用できませんか・・・？」

「はあ？　何言ってんだソイツ。頭おっかしいんじゃねぇの！」

「気持ちは解るが抑えろヴィータ。ふむ。・・・その男を見逃したフリをし、街から出たところを・・・」

『討つですね！』

「なるほど！上げて落とす作戦だな！　逃げられたと思ったところに捕まえられる。希望から絶望のどん底に叩き落としてやるぜ！」

ヴィータちゃんが嬉しそうに笑顔を浮かべた。悪い人へは本当に容赦ないよねヴィータちゃん。

「万が一、我々の追跡を撒こうとした時のために追跡班を用意しよう。リイン、ユニゾン・アウトだ」

『はいです！』

「『ユニゾン・アウト』」

シグナムさんからリインが飛び出して「目視されないようにしますね」さらに高度を上げて行った。私は「レイジングハート。ワイドエリアサーチ」を発動する。私の周囲に1つの魔力球を展開。コレらはサーチャーで、広域遠隔目視観測魔法。一度でも対象を発見した時、その対象を捕捉し続けて、私に正確な位置データを送ってくれる優れもの。

「ついでにアイリにも伝えとくか」

ヴィータちゃんがアイリに念話を送っている中で、ドォン！と爆音がしたと同時、黒煙を呑み込むように火柱が立った。肌にビリビリ感じる熱波。そしてそれ以上に「おい。冗談じゃねぇぞ・・・！」ヴィータちゃんの言うように、冗談じゃない神秘の迸りを感じた。

「っ！？　また剣の形が変わってる・・・！」

剣使いさんが持つ剣は大剣へと変わっていた。そして剣身から噴き上がってる炎はさっきまでとは比べ物にならないくらいの神秘を宿してるのが理解できた。

「は、はは、ははははは！すごい、すご過ぎるだろコレ！　今ならどんな魔導師・騎士が来ても勝てるだろ、おい！」

――パウォルス・オンスロート――

大きく振るわれる大剣。そして放たれるのは直径３ｍくらいある炎の塊。その数・・・４０弱。その範囲は広大で、一体どれだけの被害が齎されるのか判ったものじゃない。炎塊は一度空に上がって、弧を描くように落下する軌道だ。上昇から落下までの短い間になんとかして迎撃しないと。

「レイジングハート！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ　！≫

「アイゼン！」

≪Ｓｃｈｗａｌｂｅ　ｆｌｉｅｇｅｎ　！≫

「レヴァンティン！」

≪Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍ．　Ｓｃｈｌａｎｇｅｂｅｉßｅｎ　ａｎｇｒｉｆｆ　！≫

出来るだけ、ううん、全部の炎塊を破壊するために私たちは全力の迎撃に入る。私はディバインバスターを撃って、「放射持続！」"レイジングハート"に指示を出す。そして「いっっぇぇぇーーーッ！」砲撃を放ち続ける中で"レイジングハート"を振るう。すると砲撃はしなって、まるで鞭のようになって炎塊を破壊し続けてく。

「無茶をしやがんな、相変わらず！」

ヴィータちゃんは魔力を付加した物質弾を１２発を連続発射。シグナムさんは連結刃形態になった"レヴァンティン"を振るって、ヴィータちゃんの魔法で勢いが弱まった炎塊を斬り裂いてく。だけど・・・

「ダメ、カバー出来ない！」

数が多すぎて全ての炎塊を破壊できない。このままじゃ、この街が炎に包まれちゃう。さらに神秘カートリッジをロードしながら砲撃を撃ち続けてる。だけどやっぱり「間に合わない・・・！」２０近い炎塊が迎撃できずに地上に落ちる。その光景を見送ることしか出来ない私の無力さに、視界が涙で滲んだ。

『諦めちゃダメ！』

――氷星の大賛歌（カンシオン・デ・コンヘラシオコーロ）・大合唱――

そんな時、セレスちゃんからの念話と、吹雪の砲撃が１５発が飛来してきた。砲撃は１５個の炎塊に着弾、一気に凍結、そして粉砕した。だけど残り５個の炎塊は無事。迎撃も間に合わない。今度こそダメだって思ったけど・・・

「ひゃっほ～い！」

また別のところから砲撃が５連射されて来て、その残りの炎塊を撃ち抜いて消し飛ばした。砲撃の出所へ目を向ければ「アイリ・・・！」

が居て、その手にはもう1つの神器だった銃が握られてた。

「助かったぜ、アイリ、セレス」

「どういたしまして！」

「今、アリサとすずか、フェイトやシャル達もこっちに向かってくれてる！　もう少し粘ろう！」

アイリがアリサちゃん達に応援要請を出してくれてた。みんなは今それぞれの仕事先から最速の手段でここに向かってくれてるとのこと。

「・・・って、おい、なのは、お前！」

私の側に来てくれたヴィータちゃんが私を指差した。私たちの危機を救ってくれたセレスちゃんも「大丈夫なの！？」声を掛けてくれた。そして「なのは、鼻血！」アイリがそう言ってくれたから、私はようやく自分の鼻に手をやった。

「え・・・？」

自分の鼻から出てたかなりの量の血に今さら気付いてビックリした。アイリが「鼻の付根を冷やそうか？」って、そっと私の鼻の付根に触れて、冷気で冷やし始めてくれた。

「高町とアイリは離脱しろ。その出血量は異常だ」

『こちらリインです！　次弾が来るかもです！』

ハッとして剣使いさんを見れば、剣使いさんの両腕が燃えていて、手にしてた大剣がまた別の形に変形しようとしてた。幅の広い剣身がジグザグで細くて長い、波打つものに変わってく。

「フランベルク、またはフランベルジェ、フランベルジュですね・・・！」

セレスちゃんが剣の名前を呼んだ。剣使いさんはそのフランベルクを正眼に構えて、その剣身に今まで以上の炎を灯らせようとしてた。

「これ以上はさせない！」

「あっ、動かないでなのは！」

「もう大丈夫だから。ありがとうアイリ」

袖で鼻血を拭って、アイリに微笑みかける。剣使いさんをこのまま放置するわけにはいかない。何せ街1つを消し飛ばしちゃいそうな神器なんだから。だから鼻血くらいで休むわけにはいかない。ヴィータちゃんと、「先行します！」セレスちゃんが次弾を防ぐために剣使いさんに突撃した。

「止めても無駄か？」

「はいっ！　大したことじゃないですから、余裕で行けます！」

「・・・判った。リイン、戻って来い！　ユニゾンをし直すぞ！」

『はいですっ！』

「私も先に行きます！」

「アイリも！」

シグナムさんにそう伝えて、私とアイリもヴィータちゃん達の後を追う。２人はすでに剣使いさんを近接戦で押さえ込んでた。でも「あ・・・！」それは起こった。ヴィータちゃんの"グラーフアイゼン"と、セレスちゃんの"シュリュッセル"がバキンと音を立てて断ち斬られたのを。

「Ａｈｈｈ

≪Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ≫

「よせ、なのは！」

"グラーフアイゼン"を失って後退するヴィータちゃんからの警告。セレスちゃんは"シュリュッセル"が無くても氷で出来た剣で応戦するけど、打ち合う度に溶かされてる。そこに「退いて！」アイリが銃型神器を発砲。後退したセレスちゃんの脇を通って神秘の弾丸がフランベルクを、さらには剣使いさんに当たった。あっ、て思ったけど、弾丸は小さな炎の盾が防御した。対神秘の防御の術を持ってるんだ。だったら・・・

「なのは、今！」

アイリちゃんの神秘弾が撃ち込まれ続けて、剣使いさんは炎を纏うフランベルクを振るって迎撃。

「レイジングハート！　ストライクフレーム！」

≪Ａｃｃｅｌｅｒａｔｅ　Ｃｈａｒｇｅ　Ｓｙｓｔｅｍ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ…．≫

"レイジングハート"のヘッド先端から魔力刃が伸びる。そして「ドライブ！」私は突撃する。フランベルクは破壊してでも止めないと。砲撃の余波が剣使いさんにもダメージが入るかもしれないけど、対神秘術があるならきっと大丈夫。

「いっけぇぇぇーーーーッ！」

≪Ｅｘｃｅｌｌｉｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ≫

私を迎撃するために振るわれたフランベルクと魔力刃が激突した瞬間、砲撃を発射。フランベルクは剣使いさんからの手から離れて、数ｍ先の樹の幹に突き刺さる。剣使いさんの腕に灯ってた炎も同時に消えた。

「リイン！」

『リングバインド！』

合流したシグナムさんとユニゾンしてるリインがバインドを発動して、剣使いさんを拘束した。

「あー、ちっくしょう。あたしのアイゼンが真っ二つだ」

「私のシュリュッセルも綺麗に真っ二つ・・・ｏｒｚ」

切断面が溶けてるデバイスを持ったヴィータちゃんとセレスちゃんが肩を落としてへコんでる。やっぱり神器とデバイスとじゃスペックとか関係なく一方的に壊されちゃうんだね。

「とりあえず確保は出来たな」

『被害は甚大ですけどね・・・』

素直に安堵したいところだけど、また被害が大きくなってしまって手放しで喜べない。沈んでるとボッと何かが燃える音がして、確認するために振り向こうとしたその時、「伏せて！」セレスちゃんが私の頭を無理やり押さえ付けた。

「きゃぁぁぁぁ！」

それと同時に聞こえたセレスちゃんの悲鳴。そして顔にバシャッと何か温かい液体が掛かった。顔を上げた時、高速回転して飛んでるフランベルクがシグナムさんの"レヴァンティン"を断ち斬ったのが真っ先に見えて、シグナムさんのお腹から酷い量の血が噴き出した。

「シグナムさん！」「セレス！」

見ればセレスちゃんのお腹からも血が溢れ出してた。私の顔に掛かったのは、セレスちゃんの・・・。斬られたセレスちゃんは「ぅぐ・・・。いった・・・」お腹を両手で押さえながらうつ伏せになった。駆け寄るために脚に力を込めてたところに・・・

「馬鹿野郎、なのは！　ボサッとしてん――」

「きゃ・・・っ！？」

横からヴィータちゃんの体当たりを受けて、私とヴィータちゃんはその場に転んだ。頭上をフランベルクが空を切って通り過ぎて行く。

私の上に覆い被さるヴィータちゃんにお礼を言おうとしたんだけど・・・

「ヴィータちゃん？　ヴィータちゃん・・・？　ヴィータちゃん！」

背中がバッサリ斬られて血を流してることに気付いた。ヴィータちゃんはそれでも「いって・・・。っざけんなよマジであの野郎・・・！」立とうとするから「ダメ！」私は制止する。ここで動いたら傷口がもっと広がっちゃう。

フランベルクは剣使いさんに掛けられたバインドを破壊して、自由になったその手に収まった。そしてまた炎が噴き上がる。さらに今度は腕だけじゃなくて頭以外が炎に呑み込まれた。もちろん感じ取れる神秘の量もどんどん上昇してくのが判る。

「陸士隊の医療班に連絡完了！　だけどもう、アイリ達だけじゃ勝てないかもね・・・！」

アイリが銃弾を連射。神秘の魔力弾は炎そのものになった剣使いさんに直撃するけど、まったくダメージを与えてない。あれを見ればそう思いたい。でも「あんなの放って逃げるなんて出来ないよ」私は戸惑いを見せる。あんな危険な神器を放置した場合の被害がどうなるか考えたくもない。だから・・・

「アイリ。援護お願い！　あの神器を破壊する！」

「ちょっ、やめ――」

「・・・ヤー！　って、来たよ！」

こちらに向かって突進して来た剣使いさんに、私とアイリは砲撃を連射する。ここで倒さないと被害が大きくなるばかり。そんなことはもうさせない。

「ストライク・・・スタァァァーーーーズ！！」

「この、この、このぉぉぉーーーーー！！」

さらにエクセリオンバスターとアクセルシューター８発を同時発射。アイリも銃にカートリッジの装填を繰り返しつつ砲撃を連射。

「待て、なのは！　ここいらの避難は済んでる！　街に被害は出るが死人は出ねぇ！　アリサ達が来るのを待て！」

「でも！　少しでもあの人を押さえないと！　命は助かっても家とか思い出が燃え尽きちゃったら、生きるのに大切な気持ちが無くなるかもしれない！」

ヴィータちゃんからの警告にそう返す。大きな災害に遭って、命が助かっても住むお家が無くなって、未来に希望を抱けない人をテレビで観たことがある。管理局員は命だけじゃなくて心も守ってあげられないといけないんだ。だから、どれだけ無茶でも危険でも止められる手段を持ってるならそれを使わないと・・・。

「それに大丈夫だよ、ヴィータちゃん！　さっきみたくフランベル

クを弾き飛ばしてすぐに破壊に移ればなんとかなるはず！　きっと上手く行く！」

私とアイリの砲撃の直撃を受け続けたことでようやく剣使いさんが大きく吹き飛ばされて、大きな看板に激突した。看板はドロドロに溶け始めて、剣使いさんを覆う炎が少しだけ減衰したのが見て判った。大丈夫、私とアイリだけでもまだ押さえられる。

「あ、逃げ出した！」

アイリが叫ぶ。剣使いさんは本能から私たちとの戦闘続行は危険だって判断したのか、踵を返して歩き出した。ここで私もさらにカートリッジをロードしてまた魔力刃を展開。

「馬鹿野郎！　ここで突撃する奴があるか！」

「それでも・・・！　フランベルクを弾き飛ばすにはこれしか！」

――エクセリオンバスターＡ・Ｃ・Ｓ――

「アイリ、援護お願い！　ドライブ！」

「ちょっ！　ダメ、なのは！　応援があとちょっとで来るから、もう少しだけ堪えて！」

ヴィータちゃんとアイリから止められるけど、私は無視して突撃した。もう一度フランベルクを弾き飛ばせばなんとかなる。そして魔

力刃はまたフランベルクと衝突する・・・

「っ！・・・え・・・？」

ことはなかった。魔力刃は剣使いさんのお腹に突き刺さってしまった。撃てない。この状況で砲撃なんて撃ったら、剣使いさんの身がどうなるか判らない。

「撃って、なのはぁぁぁーーーーーッ！」

「馬鹿野郎！　撃てぇぇぇーーーーーッ！」

「・・・あ」

私に向かって振り下ろされるフランベルク。目の前いっぱいには赤い炎。そして・・・私の意識はそこで途切れた。

Ｅｐｉｃｏ?お巡りさんを舐めんなよ～Ｈｕｎｔｉｎｇ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

第３９管理世界エルジア。新たに管理世界入りを果たしたその世界に設立された地上本部へ赴いている俺たち内務調査部。俺は監察課と監査課の研修で、２週間の長丁場になる。学校も休まなければならないし、研修中はこの世界からは出られないから、はやて達と直接顔を合わせられない。

（しかもモニターでの通信も出来ないから、声だけのやり取りになるんだよな）

研修生はもちろん正式な監査官・監察官は任務中、本部や同課員以外への通信は基本的に禁止で、する際には面倒な手続きが要るし、重要機密が万一にも映り込まないようにモニター越し通信も不可。いくら信頼・信用されていたとしても管理局組織の重要な情報を持っている以上は好き勝手に通信が出来ない。それが内務調査部の厳守すべし絶対のルールだ。

「くぁ～・・・、疲れたぁ～」

そんな肩の凝る研修２日目。地上本部での本日の研修を終え、１階ロビーに降りるためにエレベーターに乗っている。宿舎は地上本部からそう遠くないホテルで、１フロアを内務調査部のメンバーで貸し切ってる。そのホテルに帰るために、ロビーを目指す。

左目に付けているモノクル型の神器・"森羅万象(プロヴィデンス)の眼"を外して、右目と合わせて目頭を揉む。左目が全く使いものにならないため、右目ばかりに疲労が蓄積される。書類の文字は小さいし、モニターは見たくないな。眺めっ放しでチカチカするし。しばらくモニターは見たくないな。

（やっぱり眼鏡にしておいた方が良かったかなぁ～。このままじゃ右目の視力が落ちるだろうし）

俺はあえて眼鏡じゃなくモノクルを選んだ。レンズの縁やフレームが視界を僅かでも遮るのが嫌なんだよな。右目は何ともないんだからレンズは伊達になるだろう。正直、伊達のレンズに意味が見いだせない。ファッションとか言うが、それが理解できない。わざわざ視界内にフレームなどの障害を入れるなんて、連中の頭を疑う。特に俺は戦闘者だ。戦闘中のそんな小さな障害が、時に致命的となる。だから左目だけにモノクルを付けることにした。

（でもやっぱり疲労だけはどうしようもないよな～）

あくまで怪我などを治すだけのラファエルを気休め程度に右目に掛けて、両目を閉じて、壁にもたれて一息つく。

――うそつき！――

「っ！」

途端に閉じた両目のまぶたの裏に、あの日から焼きついて離れないスバルの泣き顔が浮かぶ。今度こそ救えると思った。だが、救えな

かった。護りきれなかった。何が約束だ。

――ルシルさんが死ねが良かったんだ！――

あぁ、そう言われても仕方ないよな。だが、死ぬわけにはいかないんだ俺は。恨まれようが、憎まれようが、呪われようが、どんな犠牲が出ようが、俺は生き延びなければならない。俺にとって最古の約束、"堕天使エグリゴリ"を救う。最愛の女性、シェフィリスと交わした絶対に果たさなければならない約束があるから。

「あぁ、もっと、もっとだ、もっと、もっと、もっと！　もっと俺を恨んでくれ、憎んでくれ、呪ってくれ。でないと俺は・・・狂ってしまう」

俺を正常に留まらせるのは怨嗟の声だ。その声が途切れて、俺を許す声だけになったらきっと・・・壊れてしまう。問題はナカジマ家だけじゃない。メガーヌさんの娘であるルーテシアとリヴィア。２人の所在が掴めない。先の次元世界と同じだ。ロストロギア・レリックを使っての人造魔導師開発。プライソン・スカリエッティが、最高評議会の伝手を使って拉致したに違いない。

（ご丁寧に２人はメガーヌさんの親せき筋に預けられた、プライバシーの問題で住所も通信することも許されない、という話だ）

ステガノグラフィアを使ってもルーテシアとリヴィアの所在は掴めなかった。どこまで罪も無い家族を傷つけ、苦しめばいいんだアイツらは。自分自身も許せないが、事を実際に起こしたプライソンと

最高評議会もまた許せない。その償いは必ずさせてやる。
ポォン♪と音が鳴り、エレベーターのドアが開いた。ラファエルを解除してモノクルを掛け直し、エレベーターを降りてロビーを歩く。と、「おーい。ルシリオン君！」ロビーにいくつも設けられている休憩スペースの一角にてお茶を飲んでる監察課と監査課の先輩２人に声を掛けられた。

「お疲れ様です、ブラウン監査官、マーチン監察官」

共に俺の教育係で、揃って５０代の恰幅の良い、気の良い紳士だ。そんな２人に手招きされたからそちらに元へ向かう。

「どうかしましたか？」

「あぁ、この事件なんだけどな」

脚の長い丸テーブル上に展開されている１枚のモニター。２人に促されたことで俺もモニターに映し出されているニュースに意識を向ける。

『――引き続きお伝えします。管理世界標準時、１０月２８日午後、第１世界ミッドチルダ、北西部アンクレス地方にて犯罪組織同士の抗争が起きました。制圧を担当した陸士３９９部隊や民間人からも多くの死傷者が出ております』

犯罪組織による抗争。どこの世界でも起きている悲劇だ。犯罪の無い世界を。それは夢物語だ。人が人である以上、犯罪は消えない。

だから起きる前に、起きたとしても被害が大きくなる前に潰すのが俺たちの役目だ。

『この抗争の制圧に、本局・機動一課から応援として参加した、八神シグナム二等空士、八神ヴィータ二等空士、セレス・カローラ空曹の３名が重傷。高町なのは一等空士が意識不明の重体となっております』

「なのは！？　シグナム、ヴィータ、セレス！？」

「あぁ、やっぱりか。どこかで聞いた名前だと思ったんだよ」

目と耳を疑った。抗争の現場と思われる場所は焼け野原となっており、熾烈な戦闘が起こったのが判る。いやそんなことより、だ。制服のジャケットのポケットから携帯端末を取出し電源を入れ、着信履歴を確認する。履歴は１３０件弱。どれもチーム海鳴のみんなからだ。今すぐ電話を掛け直そうとするが・・・

「っ！（ダメだ、研修中じゃないか今は・・・）」

踏み止まる。しかし「ルシリオン・セインテスト研修生」ブラウン監査官が俺の名を呼び、俺の携帯端末を見た。

「内務調査部・監査課、アストン・ブラウン」

「内務調査部・監察課、デヴィット・マーチン。略式ではあるが・・・」

「「両名の承認により、ルシリオン・セインテスト研修生の通信を許可する」」

そして、俺がはやて達に通信が出来るように許可を出してくれた。俺は「ありがとうございます！」敬礼をし、すぐにはやてに電話を掛ける。たった2回のコール音が鳴った後、『ルシル君！』声量をコントロール出来てないはやての大声が耳を貫いた。キィーンと耳鳴りする左耳から右耳に受話口を当て直し、「はやて。事情はニュースで観た。アイリとリインの名前が出なかったが、2人は大丈夫か？」と訊ねる。2人は融合騎ではあるが、階級をしっかりと持つ局員だ。何かあれば先程みたいに伝えられると思うんだが・・・。

『あ、うん。2人とも無事やよ。ちょこっと怪我しただけや。シグナムもヴィータも、セレスちゃんも意識はある。そやけどなのはちゃんが・・・！』

なのはの容体を聴けば、重度の火傷、右肩から左脇腹への創傷、刃が地面を砕いたことで発生した石礫による裂傷、爆風によって吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた際の骨折、打撲、擦過傷。挙げればキリが無い。しかし、名のある医務官たちの手による12時間という長丁場の懸命な手術のおかげで、一命は取り留めたようだ。

『そやけど・・・そやけど、なのはちゃん・・・、ひょっとしたらもう・・・歩くことも出来ひんかもって・・・！』

それは先の次元世界の時と同じだな。一時は復帰不能とまで言われ

ていたのに、なのはは半年で復帰を果たした。しかも治癒魔法を一切使用することなく。おそらく今回も、命を繋ぎ止めたのならきっと立ち上がるはずだ。

「大丈夫、大丈夫だ、はやて。なのはは強い子だ。誰もが認める芯の通った心の強い子だ。命があるのなら、彼女はきっと戻ってくる。信じるんだ」

本心を言えば今すぐにでもなのはの元へ向かい、そして治癒術式エイルを使って治してやりたい。しかしそれには医務局の許可が下りなければならないし、そこまでの大怪我を治癒魔法で治すのはかえって対象の体に負担を掛ける。俺やシグナム達のように純粋な人間じゃなかったり、成熟した肉体の持ち主なら負担は軽くなるが、なのはの幼い体には・・・。

（それに、なのはのことだ。自分のミスによる怪我の責任は負うって、先の次元世界と同じことを言われそうだな）

しかしそれにしても「なのは達が墜とされるなんて余程のことだぞ。相手は高ランクの魔導師、もしくは騎士か？」モニターに映る抗争勃発直後の映像を観ながら、はやてに何があったか訊いていると・・・

『はやて！　もしかしてルシルからなの！？』

『ア、アリサちゃん！？』

受話口からアリサの声がして、『ルシル！　あんた、何やってんのよ！　早く帰って来なさいよ！』すごい勢いで怒られてしまった。俺だっけ帰ってやりたいんだよ、アリサ。でもな・・・。

「悪いが今はまだ帰れない。帰れたとしても今の俺には何も出来ないからな。俺に出来るのは治癒魔法だけだ。が、医務局から使用許可が下りなければ役立たずも良いところだ」

『っ！　薄情者！　それでも声くらいは掛けられるでしょうが！』

「俺よりアリサ達の声の方が良いに決まってる」

『そんなことないわよ馬鹿！　あんたもチーム海鳴のメンバーでしょうが！』

『アリサ。代わって』

アリサの罵倒の次に聞こえてきたのはフェイトの・・・泣き続けたのか少し枯れた声だった。その声に含まれた感情は静かに燃え滾っている怒りだと判った。フェイトは『私は犯人を許さない。絶対に捕まえる』そう断言した後、ピロリン♪と携帯端末に画像メールが送られてきた。

『なのはやシグナム達を撃墜したのは神器だよ、ルシル』

「っ！！」

『確認できたのは2つ。剣型と銃型で、銃の方は回収できたけど、なのは達を傷つけた剣の方は持ち主が持ったまま消息不明なんだ。いま画像を送ったから、その詳細を知ってたら教えて』

もしかして、という思いもあった。場所がこんなところでなければ大声で叫んでしまいたい、神器と自分への怒りを物に当たってしまいたい。外へ出せない怒りを心の内に留め、大きく溜息を吐いて落ち着かせる。

「判った。確認するから少し待ってくれ」

シグナムとヴィータとなのは、それに加えセレスが居る中で負けてしまうような神器なんて想像がつかない。とにかく、フェイトから送られてきた神器の画像を確認する。1つは、アールヴヘイム製の銃型概念兵装・"聖銃アクケルテ"。そしてもう1つが問題だった。

「スフィー・ダンテ・・・！」

『スフィー・ダンテ・・・？　それがこの剣の名前なの？』

「ああ。なのは達が負けてしまった理由が解ったよ」

俺は魔造兵装番外位・"挑戦者スフィー・ダンテ"の能力、そして攻略法を伝えた。そして最後に「こんな時に君たちの側に居られなくてごめん」謝った。俺がその場に居れば、たとえ居なくてもすぐに連絡が取り合える状況だったなら、なのは達が墜とされることはなかった。攻略法が判っていれば、ヴィータかシグナムと、なのは

だけで勝てる相手だからだ。

『・・・ううん。ルシルも大事な仕事なんだから、責められないよ。えっと、じゃあ最後にはやてに代わるね。ありがとう、ルシル』

『ルシル君』

電話の相手がはやてに代わる。俺は「ごめんな」はやてにも同じように謝る。彼女は『大丈夫、うん、大丈夫や』そう自分を奮い立たせるように言った。だがすぐに『・・・ルシル君・・・、逢いたい』ボソッと呟いたのが聞こえたから、「俺も逢いたいよ、はやて。・・・それじゃ、また・・・」そう返してから通話を、そして電源を切った。

「通信の許可を頂きありがとうございました、ブラウン監査官、マーチン監察官」

「お前さんを帰してやりたいんだが、今回の監査と監察は我々にとってもお前さんにとっても大事なものだ。だからキッチリ2週間、エルジアに缶詰めだ」

「君も今回の研修でグッと監察官と監査官、両方の役職の資格を得るに十分な時間となるだろうから、ここは堪えてくれ」

「お気遣いありがとうございます。大丈夫です。チーム海鳴は、同じ相手には負けませんから」

"スフィー・ダンテ"の能力が判ってさえいれば、チーム海鳴の少人数だけでも勝てる。必要なのは、長距離攻撃が出来、"スフィー・ダンテ"にのみ当てることが出来る者、"スフィー・ダンテ"を封印できるだけの神秘を有する者の2人だ。俺が研修を終えて合流するまでに決着しないなら、俺が二役をこなすのに。いや、それにしても・・・

（くそっ。先の次元世界ではなのは撃墜事件が、首都防衛隊全滅事件の先だったのに・・・）

先に防衛隊全滅事件が起きてしまったことで、ひょっとしたらなのは撃墜事件は起きないかもしれないって希望を抱いていたのに。やっぱり起きる時期がズレるだけなのか。

（フェイトとアリシア。執務官試験と執務官補佐試験まで1週間を切ったというのに・・・）

また落ちてしまうのだろうか。揃いも揃って嫌な展開だ。ただ、無茶だけはしてくれるなよフェイト、と願うだけだ。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

本局・医務局の病棟区奥にある集中治療室。重篤患者の容体を２４時間体制で管理して、より効果的な治療を施すことを目的とする施設。なのははその一室に居る。シュヴァリエルに殺されかけたルシルも入った部屋で、全身を覆う包帯や心電図に繋がるコード、点滴のチューブがなのはからの体から伸びて、その姿が痛々しくて苦し

くなる。

「フェイト、アリシア。２人とも今日はこれから試験でしょ。なのはのことが心配なのは解るけど、体調を整えておかなきゃダメだよ？　アルフも流されてないで止めてあげないと」

時間があればなのはの様子を見に来ているわたしは、なのはが入ってる治療室前の廊下に居たフェイトとアリシア、それにアルフの３人に声を掛けた。フェイト達もよくなのはの見舞いに来てる。というより、チーム海鳴の中で一番多いかも。次点で本局勤めのユーノ、すずかかな。

「なのは、今日は目を覚ましてくれるかな・・・？」

「あれだけの怪我と手術だったし、５日で目を覚ます方がちょっと無理かなって思う」

ただの撃墜じゃなくて神器による撃墜だった。ルシルの話じゃ神器による影響は、"ドラウプニル"のおかげで最小限に抑えられてるはずだってことだけど、それでも追ったダメージは大きかった。そうすぐには目を覚まさないと思う。

「そう・・・だよね・・・」

「フェイト。シャルの言う通りそろそろ会場に行って、復習とかもしておこう？」

「ああ、その方が良いよ。ただでさえ難しい試験だって言うしね」

アリシアはフェイトのジャケットを掴んで、アルフが肩を抱いたことで「うん」フェイトは頷いた。そして３人は、執務官試験と執務官補佐試験の会場に向かった。後ろ姿を見送った後、廊下と室内を隔てる大きなガラス窓にコツンと額を当てる。

「ねえ、なのは。毎日ね、士郎さんや桃子さん、それに恭也さんと美由希さんが来てくれてるんだよ。早く起きて、安心させてあげないとね」

今回の一件で、リンディ提督だけじゃなくて、機動一課の部隊長やフィレスら分隊長、なのはの所属する武装隊の隊長と言った関係者たちも、士郎さん達に謝った。もちろんわたし達チーム海鳴も、すぐに助けに行けなかったことを謝った。

なのはのご家族は、わたし達に何１つとして恨み言を言わなかった。これが娘の選んだ道で、自分たちも応援した。だから誰も恨まないって。でもやっぱり悲しそうで、辛そうで、悔しそうで・・・。

「ごめんね、なのは。応援に行けなくて。・・・ごめんね。・・・・何度でも謝るよ。だからお願い。・・・また笑顔を見せて・・・・」

涙が溢れてくる。早くなのはの笑顔を見たい、声を聴きたい。声が漏れないように唇を噛み締めながら泣いてると、ＰｉＰｉＰｉ♪ってコール音が鳴った。涙を袖で拭い去って、「また来るね、なのは」ベッドに横たわるなのはに手を振って、「はい。イリスです」早足で出口に向かいながら通信に出る。

『イリス！　神器持ちの消息を掴んだわ！　ミッド東部の山岳地帯・第Ａ３区画！　今すぐに出られるのはあなたと、アリサとすずかと、それにはやてとリインとアイリの６名！』

連絡をくれたのはフィレスだった。その内容は待ち望んでたなのは達の仇、ソイツを捕捉したってことだった。わたしは「転送先は決まってる！？」早足から駆け足で、スカラボへ向かう。

『現場に一番近いトランスポートはアグネス医療院で、あちらとはすでに話が付いてるから、転送後は速やかに現場へ飛んで！』

「了解！」

通信が切れ、わたしは技術部区画に降りるためにエレベーターホールへ全力で走ってると、「シャル！」声を掛けられた。そこに居たのは「フェイト、アリシア、アルフ？」の３人が休憩スペースで試験勉強をしてた。

「そんなに急いで何かあったの？」

アリシアからの問いに「え？　あ・・・」わたしは言い淀んだ。今から試験って時に犯人の居所が判ったなんて言ったら、自分たちも出撃するなんて言いかねない。ううん、そう言わなくても試験中ずっと気になって身が入らないかもしれない。

「いや～、その～」

「シャルさん！　のんびり休憩してる暇なんて無いですよ！　早く行かないと神器持ちが逃げちゃうですよ！」

どう誤魔化そうとしていた時、リインの声が背後から聞こえた。あぁ、もう誤魔化しが効きそうにない。だってフェイト達の表情がガラリと変わったから。

「もう、シャルさ――・・・あ」

リインはようやくフェイト達の存在に気が付いたようだ。わたしは振り向きつつ「やってくれたね」リインを少し叱責。はやてとアイリも「あ・・・」今一番聞かれちゃいけない相手に聞かれたって判って、オロオロし始めた。

「神器持ちの行方が判った。今、そう言った・・・？」

「あ、あのなフェイトちゃん！　た、確かにそうなんやけど、ここはわたしらに任せてほしい！」

「そ、そうです！　フェイトさんやアリシアさん、アルフさんの分までリイン達が頑張るですから！」

「う、うん！　アイリ達がボッコボコにしてくるから、フェイト達は試験に集中してね！」

はやて達が宥めようとするけど、「でも！　やっと見つけたのに、

犯人・・・！」フェイトは一向に椅子に座ろうとしない。これはまずい展開だよ。このままじゃフェイト、試験そっちのけにしそうな勢いだよ。

「フェイト！　悔しいのは解るけど、今は試験に集中だよ！」

「アルフ・・・！」

「ねえ、フェイト。今日の試験のためにシャルも、クロノも、エイミィも、なのは達だって、協力してくれたんだよ。その協力を無下にするの？」

「アリシア・・・？」

両拳をギュッと強く握ったアリシアがフェイトの前に立ちはだかった。

「わたしだってなのは達を傷つけたソイツを許せないし、この手で捕まえたい。でもねフェイト。もしこの事でわたし達がその、ダメだったら・・・なのはが悲しんじゃうと思うんだ。だからフェイト。わたし達が今やらないといけないのは、全力で試験に臨んで、そして合格することなんだよ」

「・・・アリシア・・・」

フェイトがよろよろと椅子に座り直した。そして「シャル、はやて、リイン、アイリ。お願い。犯人を捕まえて。私たちの代わりに」小

さく頭を下げた。

「もちろんや！」

「はいです！」

「ヤー！」

「任せておいて」

そうしてわたしとはやて達はフェイト達に見送られながらエレベーターホールを使って技術部区画の奥、スカラボへ。そこで「やっと来たわね」アリサと、「急ごう！」すずかと合流。そして現場近くのアグネス医療院へと緊急転送。医療関係の建物には、患者を別の病院に緊急搬送するためのトランスポーターを設けることが義務付けられてる。今回はそれに助けられた。

「時空管理局、機動一課です！　ご協力感謝します！」

医療院の関係者の方々に敬礼しつつ外へ出、「行くよ！」空へ上がる。"スフィー・ダンテ"って呼ばれる神器を持つソイツは、山岳地帯に立て籠ってるとのこと。現場に向かってる途中、『こちらフィレス。ナビは任せてね』本局の一課オフィスからのモニター通信が入る。

『現着までの間に、ルシル君から教えてもらったスフィー・ダンテに対してのおさらいをしましょう。神器スフィー・ダンテ。敵陣に

独り突っ込んで、1対多数の近接戦に真価を発揮する神器。炎熱発現能力はカモフラージュでその真の能力は、持ち主以上の強敵と対峙した際に、相手の実力を上回るように剣が成長して性能を高めるというもの。一定範囲内に強敵が複数いるとその分、神器やさらに持ち主の戦闘能力まで強化・成長させる、と。恐ろしい物が在ったのね～、過去には』

それがなのは達が負けた最大の原因だった。なのはとユニゾンシグナムとユニゾンヴィータ、さらにはセレス。そんな4人の実力を基に急激に成長した"スフィー・ダンテ"とソイツの前に、なのは達は敗れた。

「そやけど、デメリットもあるんやね」

「近接戦特化の神器だってことね」

「ルシル君が知ってて良かったね、スフィー・ダンテのこと」

「スフィー・ダンテは遠距離攻撃に弱い。それを念頭に置いて作戦を立てたからね」

相手と神器の強化・成長適応圏外からの遠距離攻撃、そしてその攻撃を迎撃できる余裕が無ければ"スフィー・ダンテ"を弾き飛ばすことが出来る。そこを通常の魔法で叩きのめして持ち主の意識を狩り取ってやれば、強化された"スフィー・ダンテ"のオート迎撃も作動しないって話だ。

「そんじゃ、作戦通りわたしが単独で神器持ちをかく乱して、ユニゾンはやてが遠距離攻撃で追撃ね」

「ん！　頑張ろうな、リイン！」

『はいです！　キッチリカッチリ償わせてあげるですよ！』

わたしが最初に神器持ちと1対1でやり合って神器を弾き飛ばして、そこをリインとユニゾンしたはやての遠距離攻撃で追撃をする。

「そんで万が一にシャルとはやてとリインがミスった場合、あたしとすずかとアイリの第二陣が相手をするわ」

「だから安心してね」

「ま、シャルとはやてとリインが先発なら勝負はもう決まったと思うけどね」

二段構えで神器持ちを攻略する。そして『1時の方向、距離５００！　作戦開始！』フィレスの合図でわたし達は散開して、「よっしゃ！」わたし1人でそのまま突撃する。"キルシュブリューテ"の神秘カートリッジをロード。右手首に付けた"ドラウプニル"を一撫でして、「わたしを守ってね、ルシル」チュッとキスする。

「モニター越しでしっかり見てるよ、あなたのこと・・・！」

フィレスから送られてくる向こうの様子が映し出されたモニターを

確認。切り立った崖の中腹にある３０平方ｍほどの平地にはテントが張られていて、焚火をするための石の囲いもしっかりと確認。なのは達を撃墜してから今日までこんなところでサバイバルってか。

「（マジふざけんな！）おらおらおらぁぁぁぁ！　よくもわたしの大事な友達を墜としてくれたな、ゴラぁぁぁぁぁ！！」

――風牙烈風刃――

"キルシュブリューテ"を振り上げて、風圧の壁を放つ。烈風刃でテントを大きく吹き飛ばすと、「な、なんだ！？」寝袋に入ってた神器持ちが大慌てで寝袋から飛び出した。ジャージからチンピラが好むような真っ白なスーツに黒のワイシャツ・赤ネクタイといった防護服に変身して、片手持ちのロングソード・"スフィー・ダンテ"を手に取った。

「ハイ♪　お兄さん。私がここに来た理由、解ります？」

早速"スフィー・ダンテ"が片手持ちから両手持ちへと変形してくのが見て取れた。アイツは「管理局員か・・・！」事情を察したよう。さらにわたしは「ちょっと前に、女の子を墜としたでしょ？」そう言ってやる。

「そうか、お前もチーム・ウミナリの騎士・・・・！　確か、聖王教会の騎士でもあるっていう・・・！」

「そ♪　・・・あなたさ、わたしの親友を半殺しにしたんだよ。そ

の度し難き大罪を犯したあなたのこと、なのは達と同じようにボロ雑巾にしないとスッキリしないわけ」

「っ！　子供や公務員や騎士が言うようなセリフじゃないよな」

「それだけわたし達の逆鱗に触れたんだよ、・・・あなた！」

――閃駆――

「うお・・・！？」

刃を返した"キルシュブリューテ"を左手で逆手持ちして、一足飛びでアイツの懐へ最接近する。横一線に振り被られた"スフィー・ダンテ"をスライディングで躱して、「貰い！」左手に持つ"キルシュブリューテ"を振るって、「い〝っ！？」"スフィー・ダンテ"を持つアイツの右腕を峰打ち。ボキボキって手首の骨が折れる音がしっかり聞こえた。

「そらぁぁぁぁっ！」

立ち上がり途中に右足での踵回し蹴りをアイツの右脇腹に目掛けて打ち込もうとするけど、「チッ！」ソイツはバックステップで躱して、すぐに岩肌に転がってる"スフィー・ダンテ"を拾おうとした。

――フリジットダガー――

リインの魔法である凍結効果がある短剣型高速射撃が２０本近くと

降り注いで来て、"スフィー・ダンテ"を拾おうとしていたアイツを後退させた。大人しく投降してくれれば良いんだけどなぁって思えば、胸ポケットからクリスタル状の待機モードのデバイスを取り出した。

「（起動させる前に・・・ぶん殴る！）おらぁぁぁぁぁーーーーッ！」

――風牙烈風刃――

右手に持ち替えた"キルシュブリューテ"を振るって放つ風圧の壁を「の゛っ！？」アイツに叩き付ける。アイツは後方の岩肌に打ち付けられたけど、まだ動こうとしたから具現した鞘に"キルシュブリューテ"を収めたうえで閃駆で突撃。

「これで・・・チェックメイト！！」

「ぶほぉぉぉっ！？」

鞘の方を両手で持って、突進力を乗せた"キルシュブリューテ"の柄頭をソイツの鳩尾に打ち込んでやった。ソイツは盛大にゲロって倒れ伏した。

「・・・あっちゃあ～。わたし1人で片付けちゃった」

『こちらはやて。さすがやな、シャルちゃん。魔法の準備してたんやけど、わたしとリインの出番まで無かった』

『すごいです、シャルさん！』

『どんどん強くなるのね、イリス。リヒャルト司祭も喜ぶわ』

「それほどでも～・・・あるよ♪」

『調子乗ってるといつか墜ちるわよ、あんた』

『でもこれで、なのはちゃん達に良い報告が出来るね』

ほのぼのしてると、「くっそぉぉぉーーーーっ！」ソイツは這うように駆けて"スフィー・ダンテ"を拾いに向かった。けど焦ることはないよ。すでにわたしのパートナーが魔法をスタンバイしてるんだから。

――ナイトメアハウル――

あと1mちょっとってところで多方向から砲撃が降って来て、ソイツははやての多弾砲撃の直撃を受けた。濛々と立ち上る白煙と、パラパラと降ってくる岩の破片。そして"スフィー・ダンテ"も宙を舞って、ガキィンとわたしのすぐ側に突き立った。

「・・・スフィー・ダンテを回収っと♪」

引き抜いた"スフィー・ダンテ"を振り払って白煙を消し飛ばす。砲撃によって大きく穿たれた岩肌の中心にソイツは倒れてた。わたしは「ふん。お巡りさんを舐めなんなよ！」ヴィータの口真似でそ

う言い放ってやった。なのはかシグナムかセレスかで迷ったけど、ヴィータが一番しっくりくる台詞を言いそうなんだよね。

『おーい、シャルちゃーん。油断大敵やよ～』

『です、です♪』

「あはは、ごめん、ごめん。ま、とにかく完全に伸びてるし、チーム海鳴の完全勝利だよ！」

なのは、シグナム、ヴィータ、セレス。それにフェイト、アリシア、アルフ。わたし達、勝ったよ。良い報告が出来るからもう少し待っててね。

Ｅｐｉｃｏ？－Ａそれは愉快痛快で～Ｃｈｅｅｒｆｕｌ　ｃｈｉｖａｌｒｏｕｓ　ｔｈｉｅｆ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

ミッドでも日本でも歳が明けての１月９日。あたし達チーム海鳴は医務局の病棟区に来てる。

「なのは。リンゴ剥こうか？　あ、他のにする？」

「にゃはは。ありがとう、フェイトちゃん。それじゃ・・・リンゴ、貰おうかな」

そう。なのはがつい先日意識を取り戻して、集中治療室から一般病棟の個室に移動、親族以外の面会も一昨日ＯＫになった。とは言っても負ったダメージは酷いから、ベッドからまだ下りられないし、それ以前に自分の手もまともに動かせない。今も首だけを動かしてあたし達を見てる。

「うんっ。ちょっと待っててね」

「ありがとう」

フェイトがリンゴの皮を剥き始める。なのはは「ごめんね、シャルちゃん。お誕生日、お祝い出来なかった」って謝った。今年のシャルのバースデーパーティは開催しなかった。シャルも、なのはが大

変な時にそんな気分じゃないって言って、自分から開かなかった。もちろんクリスマスパーティもやんなかったわ。

「ううん。なのはがこうして目を覚ましてくれたのが、わたしにとっての最大のプレゼントだよ♪　今は他のことより、なのは自身のことを考えようね？」

「あー、うん、そうだね・・・」

ベッド脇にあるナイトテーブルに置かれた、あたし達5年4組のクラスメイトからの寄せ書きや千羽鶴を見たなのはは目を細めて、「私、頑張るね」そう言って弱々しい笑顔を浮かべた。なのはが完全に歩けるようになるまでは半年以上のリハビリが要るって、なのはの担当医が言ってた。車椅子でならもっと早く学校に通えるようになるらしいけど、局の仕事への復帰に関したらそれ以上になるかもしれないって。

「リハビリをちゃんとやって、またチーム海鳴としてみんなと一緒にお仕事をしたいから」

あたし達も同じ思いだから「うんっ」頷き合った。その後はクラスメイトからのビデオメールを観たり、学校で起こった出来事などを話したりしてたんだけど、「そう言えば、フェイトちゃん、アリシアちゃん」なのはが2人の名前を呼んだ瞬間、フェイトとアリシア、それにあたし達もビクっと肩を震わせる。これからどんな話題がなのはの口から出るのか予想が付いたから。

「えっと、もしかして・・・試験・・・」

「うぅ・・・」

「フェイトと揃って落ちちゃった・・・」

ズーンと肩を落とすフェイトとアリシア。1年に2回ある執務官・補佐試験を受けた2人だったけど、見事に不合格の印を押された。なのはは「ごめん。私の所為もあるよね・・・」そう一言謝った。

「ち、ちがうよなのは！　なのはの所為じゃないよ！」

フェイトが椅子から立ち上がって反論すると、アリシアも「そうだよっ！　単純に難しかっただけだから！」続く。あたし達も結果発表が出る前から、ダメかも、って言われてた。クロノやシャルからも、すごい難しい試験だった聞いてたんだけど、でもまさかアリシアはともかくとしてフェイトまで不合格するなんて思いもしなかったわ。

「うぅ、ごめんねシャル、あんなに試験勉強を手伝ってもらってたのに・・・」

「まぁ、わたしも運良く合格できた感があるし。また半年後の試験に備えて頑張ろうね」

「ありがと～」

「あのクロノでさえも1回落ちてる程の難試験が執務官試験。1発合格できたのって指で数えるほどだよ。知ってる名前じゃリアンシェルト少将だったかな。ま、そんなだから落ち込んじゃダメ。この1回の不合格を、次の試験のための糧にする。オーケー？」

「「うん」」

シャルがアリシアを後ろから抱きしめて頭を撫でながら、フェイトにもフォローを入れた。あたし達はそんな2人に「頑張って！」応援の声を掛ける。と、「あー、もう時間だわ」あたしはあたしで仕事があるからここで離脱になっちゃうわね。

「あ、そっか～。いってらっしゃい、アリサちゃん」

あたしにそう挨拶してくれたなのはに続いて「いってらっしゃい」すずか達もしてくれてると、「じゃあ俺もそろそろ行くよ。またな、なのは」ルシルもそう言って席を立った。

「うん。ありがとう。ルシル君もいってらっしゃい」

「気を付けてな、ルシル君」

「ああ、いってきます」

なのは達に見送られながらあたしとルシルは病室から出て、それぞれの仕事場へ向かうために廊下を歩く。あたしは隣を歩くルシルに「やっぱりなのは、エイルでの完治は拒否ったわね」話しかけた。

「なんとなくそう言われると思ってた」

「あたしもよ。変なところで頑固だからあの子」

今はまだ出来ないけど、今よりもう少し回復したら治癒魔法による治療も行えるって担当医から許可が出たけど、なのははそれを断った。

――この怪我は、私が未熟だったから負っちゃったものだから。それを治癒魔法で治しちゃうと意味のないものになっちゃいそうで、また繰り返しちゃったりしちゃいそうで・・・。だから使うつもりはないよ。どんなにリハビリが辛くても、私は私の力で回復したいんだ――

その揺るぎそうにない決意にあたし達は頷くしかなかった。だからあたし達に出来ることは、なのは自身を信じること。なのはが復帰するまでの間、あたし達はあの子のために全力でサポートする。なのはもそれは許してくれたしね。

「まったくだ」

「あんたもよ、ルシル。あんたもあんたで一切弱音を吐かないし。いつか潰されちゃいそうで怖いのよ」

クイント准陸尉の葬儀の時にスバルから食らった罵声が効いてる。それに、あれ以降ルシルは学校を休んでまで仕事を入れるようにな

った。しかも、どれも体も心も削れるほどに忙しい内務調査部の仕事や研修ばかり。

「ありがとな、アリサ」

「ええい、頭を撫でるな！　あんたは、はやてかシャルの頭を撫でてりゃ良いのよ！」

顔が熱くなるを自覚して、大慌てで首を振るってルシルの手を払い除ける。ルシルは「あっはっは！」大笑いして、脚を止めたあたしの前に1歩2歩と出た。そして「ありがとう」振り向いたルシルは、久しぶりに笑顔を見せてくれた。葬儀以前に普通に見せてくれてた、心からの笑顔を。

「・・・馬鹿ね。その笑顔をあたしに向けないで、あんたを想い慕うあの2人に向けなさいよ」

「・・・努力はするよ。じゃあ、俺は調査部オフィスに向かうからここで。今日はデスクワークだから、何かあれば連絡をくれ」

「りょーかいっ♪」

あたしはミッドに降りるために次元港へ、ルシルはエレベーターホールへ。あたしとルシルは拳をコツンと打ち合って、「頑張ろう！」お互いに応援する。それであたし達は分かれて、次元港に停泊中のミッド北部行き次元航行船に搭乗する。そう間もなく出発時間になって、船は一路ミッドへ。

（ニュース、ニュースっと）

到着までの間に、ミッド全域や他の管理世界で起こってる事件・事故のニュースを閲覧する。どこもかしこも犯罪、犯罪、犯罪のオンパレード。まったく、参るわね。そんな滅入るニュースの中で「ん？」気になった記事を見つけた。

「犯罪組織や犯罪者個人から金品を奪って、募金する義賊が登場・・・？」

なかなか面白い奴が居るものね、次元世界にも。詳細を見れば、サーチャーやカメラに映っていながらも何故か記録されず、肉眼で直視した局員や目撃者の供述もてんでバラバラ。局や有識者の見解じゃ、かなりランクの高い幻術使いだってことらしい。

「ふ～ん。ま、管理局のお膝元のミッドチルダには近寄ろうとしないところを見ると、所詮はそこまでの実力者ってところね」

ミッドから離れた管理世界にばかりに出没してる義賊、通称ファントム。でもちょーっと会ってみたいわよね。幻術使いなんてこれまで戦ったことないから、いつかのためになりそうな気がする。とまぁ、時間も忘れてファントムに関する面白い記事を読んで、気が付けば次元港に到着してた。

「さてと。行きますか！」

あたしが所属するミッド北部ミラ地方を担当する第２１１部隊の隊舎へは、次元港と隣接してる快速レールウェイ（地球じゃ鉄道って呼ばれる物ね）を使って２０分。というわけで、次元港ロビーからレールウェイのホームへ向かってる途中、「アリサ！」背中に声を掛けられた。

「クラリス！　あんたもこれからなの？」

「そうだよ。一緒に行こう」

あたしに声を掛けて来たのは同じ２１１陸士部隊の隊員で、陸士訓練校でペアでもあった、古代ベルカ式の騎士のクラリス・ド・グレーテル・ヴィルシュテッター。シャルやルミナ、セレス達みたいに局と聖王教会の両方に籍を置いてる。魔導師ランクはＡＡＡ＋と、かなり高い。

雪のように真っ白なセミロングの髪（以前はショートだったけど伸ばしたのね）に、アップルグリーンの瞳。階級は、あたし達チーム海鳴の子供組と同じ陸士の二等。あたしも一応は空を飛べるし、ある程度の空戦も出来るけど、取得したのは空士じゃなくて陸士階級だ。陸戦の方が気が楽なのよね。

「そういや今日もデスクワークだっけ」

車両に乗り込んで、空いてる席にあたしとクラリスは並んで座る。そして走り出す車両の窓から景色を眺めながら今日の仕事を話題にして話しかけた。

「うん。北部には聖王教会があることもあって犯罪率が他の地方に比べて低いから。基本的に北部の、特にザンクト・オルフェンに近い区を担当する陸士部隊は大抵暇なんだよ」

「でももし起きた時はかなり悪質で、大きな事件なのよね」

自慢じゃないけどあたしやクラリスのような高ランク魔導師・騎士が、そんなド暇な陸士隊に配属された理由がそれ。

「聖王教会のお膝元で事件を起こすような奴は馬鹿か蛮勇のどちらかだからね」

北部と言ってもベルカ自治領ザンクト・オルフェン以外の土地はミッドチルダの管理下だから、北部で事件を起こしても教会騎士が動くなんてことはない。だけどもし万が一にも騎士たちに追われるようになったらってプレッシャーはあるはず。

「だから普通の神経の持ち主なら事は起こさない」

「起こすのは恐れを知らない蛮勇か、ただの馬鹿か・・・」

それをものともしない奴が起こす犯罪は自然と悪質だったり大きかったりする。そんな犯罪に対抗するためにも、あたし達のような高ランクな戦力が要る。納得もしてるし、クラリスと同じ部隊に配属されたことで、暇な時間は訓練と称して模擬戦をしてるから、あたしとしては結構満足してる。

とまぁ、そんな話をしながらあたし達は目的のステーションに到着。

隊舎へは徒歩で5分ちょっと。クラリスと2人で街路を歩いて他の通行人とすれ違ってると、「ん・・・？」今すれ違った男の人に振り返る。

「どうしたのアリサ？」

「いえ、ちょっと・・・」

外見年齢は大体１８歳から２５歳くらい。身長は１７０ちょっとかしら。キャップを深く被って素顔がちょっと見えない。白のＴシャツ、チェック柄のシャツ、青ジーンズ。背負ってるのは黒のリュックって格好。気になったのは外見とかじゃなくて、あのリュック・・・の中身。

「（この感じ・・・、やっぱりアレよね）クラリス、ちょっと手伝って！」

「タダで？」

「あとでなんか奢るから！」

「なら良いよ」

クラリスは大食いで、気が付けば何かを食べてる。実はさっき逢った時もなんかの串焼きを食べてたし、レールウェイの中でもクッキーを食べてたし、ステーションに着いてすぐに売店で何かを買おうとしてたから止めたばかり。大食いなのは別に構わないのよ。でも

ね、一番許せないのが、どれだけ食べても太らない、なんていう女の子なら誰もが羨む体質持ちだってこと。って、今はそんなことより・・・。

「今の男の人を追うわよ」

「なんで？」

「感じたのよ。あのリュックの中から・・・神器の力を！」

あたしが持ってる黄金の腕輪型神器・"ドラウプニル"のおかげか、神秘を感じ取れやすくなってる。クラリスは「ジンギ・・・？　仁義？」小首を傾げる。そっか。公にはロストロギアって発表されてるんだっけ。

「ロストロギアよ。リンドヴルムの残してった最低最悪の置き土産」

「っ！　危険な物だってことは良く解った。そういうことならタダで手伝うよ」

クラリスも事の重大さに目をパッチリさせた。尾行術は捜査官研修で一通り学んだから、そうそう気付かれることはないとは思う。とりあえず「クラリスは部隊長に連絡入れて」あたしとクラリスの始業時刻まであと1時間もない。万が一遅刻しても叱られないように事情を伝えておかないと。

「こちらミッド北部ミラ地区・陸士２１１部隊、アリサ・バニング

ス二等陸士」

『こんにちは、アリサ。・・・・って、この感じ・・・・。アリサ。まさか・・・神器関連の連絡だったりする？』

通信した相手は機動一課の分隊長の1人、フィレス一尉（クラナガンの悪夢以降に昇格した）。他の分隊長や部隊長でも良いんだけど、やっぱ親しみがあるフィレス一尉の方が通信しやすい。

「そのまさか、です。神秘を感じたんで連絡しました。現在、同隊のクラリス二等陸士と持ち主らしき人物を尾行中」

「どうも。フィレスさん、お久しぶりです」

『久しぶり、クラリス。それでアリサ、神器がどう言った物かは・・・？』

「視認できてません。でも感じたんです」

『・・・うん。とにかく人手を送るから、応援と合流するまでは変に手を出さないこと。万が一気付かれて逃走されそうになった時は、こちらで移動魔法の許可の手配はするから全力で追って』

「「了解！」」

敬礼で応える。モニターが消えて、『一番早く合流できるのはチーム八神ね。チームテスタロッサも遅れて合流予定』念話みたいな脳

内通信に切り替えられる。さすがにモニターを引き連れての尾行なんて速攻バレるからね。それにしても応援がはやて達って。シグナムもヴィータも完全復帰してるし、戦力としては十分過ぎるわよね。あたしとクラリス（ドラウプニルが無いから元より戦力外だけど）の出番が無さそうだわ。

『アリサ、クラリス。ターゲットの写真を送って。こちらで身元を照会するわ』

あたしとクラリスは十数m先を歩くターゲットを尾行しつつ、フィレス一尉の指示に従ってターゲットの写真を携帯端末で撮る。でも「顔が撮れないわね・・・」キャップのツバがすんごい邪魔。クラリスも「ビル風でキャップ飛んでくれないかなぁ～」上手く撮れてないみたい。それに尾行中ってこともあって、前に回り込めないし。む～、難しいわね。

『アリサ。ルシリオンだ』

撮影に四苦八苦してるところに『ルシル！？』から通信が入った。聞けばフィレス一尉からあたし達からの報告を受けたって。

『俺も行ければ良いんだが、残念なことに今日中に片付けないといけない書類が・・・』

『？？・・・ねえ、あんた、なんか泣いてない？』

『気の所為だろ・・・。だが、どんな神器かは見れば、おそらくそ

の効果も判るはずだ。もし神器だと思う物品を確認したら、すぐに画像を送ってくれ』

『ええ、判ってるわ。頼りにしてるわよ』

『ああ』

ルシルと連絡が取り合える状況がすごい心強い。はやて達もフェイト達も来てくれるし。あとは何事も無く神器を確認できれば良いんだけど。はぁ、って溜息を吐いてると「あ、絡まれた」クラリスがボソッと呟いた。見ればターゲットがガラの悪い連中に喧嘩を売られてた。

「どうする？　アリサ」

「どうするって・・・」

あたしとクラリスは局の制服を着てる。そんな中でターゲットとコンタクトするとなると、もう尾行も何もなくなるわ。見て見ぬふりをするか、それとも助けるか。あたしは『フィレス一尉。ごめんなさい！』助ける道を選んだ。この選択が後で酷い結末に繋がるかもしれない。けど・・・

『アリサ。それで良いわ。助けてあげて』

「『っ！　ありがとうございます！』クラリス！」

「んっ！」

クラリスと一緒に「やめなさい！」ターゲットに絡んでる３人の男に制止の声を掛けた。男３人は「げっ、管理局員・・・！」慌ててターゲットの胸倉を掴んでる手を離して、えへへ、と愛想笑い浮かべた。

「その男性と何かしらトラブルでもありましたか？」

「い、いいえ、そんな・・・」

「少し肩がぶつかって、ちょっと熱くなっただけなんすよ」

「あの金髪の子・・・、ひょっとして・・・！」

形だけの聴取をしてると、「あ、逃げる」ターゲットが背を向けて走り去ろうとした。追いかけようにも「あ、やっぱり！」チンピラその３があたしを指差した。

「チーム・ウミナリのアリサ・バニングスちゃん！　俺、ファンなんです！　性格キツそうな目も良いし、声も良いし、魔導師なのに騎士みたいな戦いするのもカッコいいし！　炎熱っていうのがカッコよさに拍車を掛けてるよね！　マジ夢みたいだ！　生きてて良かった・・・！」

「ど、どうも・・・」

子供のように目を輝かせたチンピラその3があたしの両手を取ってブンブン振ってきた。ファンって言われて嬉しい思いもあるけど今は「じゃなくて！　クラリス、追って！」ターゲットがものすごい速さで走ってく。

「ん。判った」

「ねえ！　サインくれないかな！　書く物、紙はっと・・・」

「あの、仕事中だから後にしてくれないかしら・・・」

「後って。こんな機会もう無いからダメでしょ！」

「いやだから急いでんの！　これ以上邪魔したら公務執行妨害よ！」

「うっひょ～！　その声で怒られるとやっぱりすげぇ良い！　ゾクッてした、ゾクッて！」

恍惚とした表情を浮かべたソイツの様子に「うぇ・・・」総毛立って、気持ち悪さにかなり引いた。だから「離しなさい！」って怒ると、「もっと怒って、罵って！」なんて言われた。どうしよう、あたし・・・もうこのまま気絶しちゃってもいいかしら。今はこの気持ち悪い現実から逃げ出したいわ。

「す、すいません！　こいつ、ちょっと性癖が変なんで！」

「こいつは俺たちがなんとかしますから行ってください！」

「お、おい！？　まだサインも貰ってないし、罵られたりないんだ！」

チンピラその1とチンピラその2が気持ち悪いその3を羽交い締めして、あたしから引き離してくれた。

「ありがと！　ご協力感謝します！　でも喧嘩を吹っ掛けるような真似は控えるように！」

「「はいっ！　ご迷惑をおかけしました！！」」

「アリサちゃ～～ん！」

チンピラ3人を置いてクラリスの後を追い掛け始めたら、『ごめん。見失った』クラリスから報告が入った。フィレス一尉からも『身元照明も出来なかったわ』っていう悪い知らせが入った。そして息を切らしてたクラリスと合流を果たす。

「ごめん。足の速さには自信あったけど・・・。人ごみに紛れ込まれて・・・」

「そう。しょうがないわ。あたしもあたしで変なのに絡まれたからね」

本気で落ち込むクラリスを慰める。とりあえずはやて達に連絡を取ろうとしたその時、頭上からマシンガンのような銃弾を連射するような銃声、窓ガラスが割れる音、怒声などが聞こえてきた。振り返

った先には２０階建てのビルがあって、破片が舞ってるのは４階辺り。

「「っ！？」」

窓ガラスが割れたおかげか「なんだコラ！」とか「逃げんな！」とか「どこの組のもんだ！」とか、銃声に紛れて怒声が続く。明らかに異常事態。だから「フレイムアイズ！」あたしと、「シュトルムシュタール！」クラリスは、待機モードのデバイスを手に取る。

「「セットアップ！」」

そして変身。あたしはファルシオンフォームの"フレイムアイズ"を携える。"ドラウプニル"を付けるかどうか迷うけど、神器に関係ない事件だった場合のことを考えて付けないことを選んだ。

「騎士甲冑、装着完了っと」

クラリスの騎士甲冑は、上は詰襟のネックカバー、厚手のノースリーブブラウス、カフスの付いたアームカバー、そしてグローブ。腰には２本のカートリッジベルトがあって、合計４０発くらいある。下はスリットが深いミニタイトスカート、タイツ、そしてロングブーツ・・・と言った感じね。

「きゃぁぁぁぁ！」

「何が起きてる！？」

「この銃声・・・、質量兵器！？」

「逃げろ！　撃たれたら一巻の終わりだぞ！」

民間人は悲鳴を上げて、何かが起きてるビルから離れてく。あたしは「管理局です！　今すぐこの場から避難してください！」大声で避難をするように伝える。民間人は少し混乱しながらも、ビルから降り注いで来る窓ガラスの破片で怪我しないように頭を護りながら離れて行ってくれる。

「屋内戦は嫌だな」

クラリスは自身の身長（１５０ｃｍちょっとくらいかしら）を優に超える長さを誇るカートリッジシステム搭載の方天戟型アームドデバイス・"シュトルムシュタール"を肩に担いだ。刺突用の穂先の左右には三日月の形をした刃（クラリスは月牙って呼んでる）が２つ付いてる。

あと石突には、鬼の金棒のような、六角柱に鋲がズラリと並んだ棍棒もある。その全体的な重量は１５ｋｇだって聞いたわ。だからクラリスは圧倒的な攻撃力を得る代わりに機動力が低い。ま、それをカバーする術もある。それが、今から見ることの出来る手段だ。

「文句は言わない！　念のために相棒を召喚しておきなさい！」

「ん！　汝は遥かなる陸を疾駆する者。地を揺るがすは馬蹄、空を震わすは轟鳴。行く手は苛烈なる戦火、過ぎ去るは打ち斃せし亡者

の群れ。汝が主の命に応じ、いざ参れ！　アレクサンドロス！」

あたしとクラリスの間に展開されるのは、召喚魔法陣って呼ばれる正方形をした魔法陣で、眩い薔薇色の魔力光を放ってる。そんな魔法陣から召喚されたのは1頭の艶やかな黒い毛並みをした馬・・・なんだけど、あたしが知ってる馬より一回り以上近く大きな体を誇ってる。初めて見た時は圧倒されて近付けなかった。

「よく来てくれたね」

クラリスがアレクサンドロスの体を撫でると、一鳴きしたアレクサンドロスが四肢を曲げて伏せた。クラリスが「よっこらせ」って馬上に乗るとまた立ち上って、大きく鳴きながらバイクのウィリーのように両前脚を上げた。まるでナポレオンのあの肖像画みたい。とまぁ、この巨大馬アレクサンドロスや、他にも巨大狼や巨大鳥と言った使い魔が、クラリスの機動力をサポートするのよね。しかも全てが防御・補助魔法を使える。そういうこともあって、クラリスは次世代の騎兵騎士――レイター・パラディンって噂されてる。

「じゃあ、クラリスはここで待ってて！　あたしが様子を見てくるから！」

両脚に魔力を込めたうえで両膝を曲げて、「よっと！」一気に問題の階へ跳んだその直後、「っ！？」何かが割れた窓から飛び出して来て・・・

「うごふ・・・！？」

「ひゃっはっはー！・・・あ？　こりゃ失敬！」

タックルをまともに食らった。そんであたしとソレは揃って地上へ落ちる。その最中、あたしはソレを真正面から見た。まず最初に思ったのはピエロだった。真っ赤で大きなまん丸な鼻、真っ赤な分厚い唇、光マークがペイントされた目、頬にはハートとクラブ、額にはスペード、顎にはダイヤのペイント。彫りが深いそれは肉の顔じゃなくて仮面の物だわ。

「アリサ！」

「いっつぅ～・・・！　ちょっとそこのピエロ！　あの部屋で何をしていたのか聴かせてもらうわよ！」

なんとか着地に成功したあたしは、サンタクロースのような真っ白な袋を肩に担いだ、上下とも真っ赤なスーツを着てるピエロに"フレイムアイズ"の剣先を突き付ける。と、「ピエロ？　どう見ても狼の被り物だけど」クラリスがそんなことを言いだす。どう見ても、って。あんたの目は節穴なの？って疑いたくなるわ。

「いやいやいや。ピエロでしょ！　真っ赤なスーツ着た！」

「ううん。狼の被り物を被った、スウェット姿だよ・・・！」

「はぁ？　そんな馬鹿なこと・・・（ん？　この感じ・・・）」

ついさっき観たニュースの事を思い出した。目撃情報の供述がバラバラ。そしてそのピエロからビシビシと感じ取れる神秘。局や有識者の見解は、高ランクの幻術使いってことだったけど。ううん、それは違うわ。これはきっと「神器の能力・・・！」に違いない。

「あんたが・・・義賊ファントム・・・！」

目の前に立つソイツこそが、犯罪組織や犯罪者から金品を巻き上げるっていう例の犯罪者だって判った。

「おっほっほ♪　そうとも、そうとも！　可愛い、可愛い、ツンデレ風味なロリッ子ちゃん　」

「あ〝？」

そんな失礼なことを言ったかと思えばピエロは右手を差し出してきた。握手かと思って左手を差し伸べてようかなって動かしたその時、「ナイス♪　ちっぱい♪」ソイツはあたしの胸に手を当てて、もう片方の手の親指をグッと立てた。

Ｅｐｉｃｏ？－Ｂそれは愉快痛快で～Ｕｎｄｅｆｅａｔｅｄ　ａｎｄ　Ｉｎｖｉｎｃｉｂｉｌｉｔｙ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

アリサちゃんと、シャルちゃんやトリシュの同郷の親友で教会騎士仲間やってゆうクラリスちゃんが、あろうことか新しい神器持ちと遭遇したってフィレスさんから連絡が入ったことで、わたしら八神家はスカラボ→現場近くの病院経由で北部のミラ地方に到着して、空を飛んで現場に急行中や。

（遅れてフェイトちゃんとアリシアちゃんとアルフも来てくれるとのことやし、焦らず、でも迅速に対処せえへんとな）

『アリサとクラリスが接敵！　街中のライブカメラ映像を拝借しているのだけど、ターゲットの姿だけが霞んでいてハッキリと認識できないの』

フィレスさんから通信が入る。相手の神器がどんな物かも判らへん今、戦闘なんか危険すぎる。ルシル君も今回の一件に、『これじゃ神器の詳細が判らないな・・・！』監察課オフィスからのアドバイザーとして参加してくれることになった。ホンマは一緒に戦ってほしいんやけど、ルシル君にはルシル君の仕事もあるからな。うん、諦めや。

『なんだろう？　アリサがすごい怒ってるわ。・・・あ、交戦を開

始した模様！　アリサ、どうしたの！？　クラリス、状況説明！』

アリサちゃん達とリアルタイムで通信できる環境を整えてくれたフィレスさんの問いに、『狼頭がアリサのおっぱいを触って、おっぱいが小さいことを褒めた』クラリスちゃんからそんな返答が。

『アイツ！　アイツ、ブッ殺す！　何が、ナイスちっぱい、よ！　ロリコンは死すべし！　あのふざけた頭の中を焼き払ってカニ味噌みたいにしてやるわ！』

すごくキレてしもうてるアリサちゃん。うん、理解できる怒りや。女の子の胸を許可なく触ったことだけでも万死に値するレベルやのに、小さいことを褒めるやなんてあの世でも拷問地獄に処さへんと許されへん大罪や。

『アリサ！　カニ味噌は脳みそじゃなくて中腸線――肝臓と膵臓のことだぞ！』

そんなアリサちゃんに冷静なツッコみを入れるルシル君。ルシル君、今は空気を読むところや。そのツッコみはアカン、アカンよ。案の定『判ってるわよ、それくらい！』アリサちゃんの怒りの矛先がルシル君に向かうわけで。

『ていうか、早くあのロリコンの持つ神器の正体を教えなさいよ！　逃げ出してんのよ今！　絶対に逃がさないわ！　必ずとっ捕まえてやる！　あたしの胸に触ったこと、土下座１００回でもさせなきゃ気が治まらないわ！』

『そうしたいが、こちらからはターゲットの姿が確認できないんだよ。何か特徴は無いか？』

『義賊ファントムって記事を調べてみて！　間違いなくソイツよ！』

アリサちゃんからの情報を基に『ファントム・・・。これね！　みんなにデータを送るわ！』フィレスさんが調べ上げて、わたしらにもその情報を送ってくれた。展開されたモニターに表示されるのは、ファントムってゆう、義賊行為を行ってる犯罪者のデータ。

「サーチャーやカメラに映ってんのに記録されない、か」

「正しく今の状況に酷似しているな」

ヴィータとシグナムが唸った。しかも「肉眼での目撃情報がバラバラなのね」シャマルの言うように、完璧に人の目も誤魔化せるだけの術を持ってるみたいや。わたしは「アリサちゃんとクラリスちゃんもそうなん？」って、見えてるファントムの姿が違うんか訊いてみた。

『うん。私は狼の頭をした人型っていう風に見えてる』

『あたしはピエロね！　真っ赤なスーツ着て――あーもう！　外した！』

アリサちゃんのその言葉の直後、視界内に火柱が立った。アリサち

ゃん、手加減なしで攻撃してるな～。とにかく「現着！　これより介入します！」アリサちゃん達を確認したから連絡や。フィレスさんからも『許可します！　アリサを止めてあげて！』戦闘許可が下りた。けど目的がアリサちゃんの制止って。無意識やろか・・・？

「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！　とにかく確保を最優先や！」

「「「はいっ！」」」「おう！」

「リイン、アイリ！　わたしとヴィータのサポートよろしくな！」

『はいです！』『ヤー！』

わたしとユニゾンしてるリインと、ヴィータとユニゾンしてるアイリにも指示を出す。ビルの隙間を急降下して、アリサちゃんとクラリスちゃんを確認。リインが『大きなお馬さんですぅ！』クラリスちゃんが乗る黒い馬の規格外なサイズに驚いた。わたしらも初見やからビックリや。

「アレがターゲットか・・・！」

「そもそもアレは人間なのかしら・・・！？」

神器持ちのターゲットを視認した。アリサちゃんはピエロ、クラリスちゃんは狼頭って言うけど、わたしはヒマワリの頭に玩具のような顔があって、服装は緑色の全身タイツで両手は葉っぱって感じ。

狼頭でもピエロでもあらへん。

「みんな。何に見える？　わたしはヒマワリの着ぐるみなんやけど・・・・」

『え？　リインは海賊風の衣装を纏ったウサギです』

『アイリは吸血鬼っぽいけどね。顔はトマトかな・・・・？』

「あたしは・・・・あれだ。サンバの格好！　顔はきゅうり！」

「私はドアマンの格好に、三日月の頭に見えます」

「ダルマですね、私は。服装は・・・・白衣なので、医師でしょうか」

「・・・・侍です。顔は動物の頭蓋骨ですね」

「みんな見事にバラバラやな・・・・」

外見もそうやけど、その動きは完全に人のものやあらへんかった。アリサちゃんの火炎砲撃をくねくねした動きで躱して、クラリスちゃんの乗る馬の突進をまともに受けて轢き飛ばされたかと思えば、バネのように全身が伸び縮みしてボヨンボヨン跳ね回った。

「なんなのよコイツは！」

――イジェクティブ・ファイア――

アリサちゃんの怒声がハッキリと耳に届いた。そんなアリサちゃんのバヨネットフォームな"フレイムアイズ"の銃口から発射される火炎砲撃がターゲットが当たるかどうかって時、「ひょおおお～～～～！」空気を吸う音と一緒に砲撃がヒマワリの、口に当たる部分の中に吸い込まれてった。

「げぷっ！」

大きなゲップと一緒に輪になった黒煙が吐き出されて、「受け取れ、私の想い！」その輪を射抜くように、先端がハート型の煙を吐き出した。アリサちゃんは"フレイムアイズ"の斬撃で斬り払うと「要らんわ！」怒鳴り声を上げて、火炎弾フレイムバレットを連射。ターゲットは「ひゃっほぉ～い！　やっほぉ～い！」陽気な声を上げながら、闘牛士の持つ赤い布のような物を持って、ヒラリと火炎弾をやり過ごしてく。

「むっきぃーーーーー！」

「アリサ落ち着いて！　怒りで顔がひしゃげてるよ！」

「ひしゃげ――・・・ああもう！　ストレスでぶっ倒れそうよ！」

アリサちゃんの血管いつか切れへんか心配になってきた。これ以上はあのターゲットに好きにはさせへんよ。わたしは「シャマル、ザフィーラ！」捕獲担当の２人の名前を呼んだ。

「はい！」「はっ！」

――鋼の軛――

２人が発動するのは相手を貫いて拘束する魔法。そやけど今は非殺傷なんて設定はあらへんからもう１つの使用方法、囲んで閉じ込めるって形でターゲットを包囲した。

「アリサちゃん！」

「はやて！　シグナム達も来てくれてサンキュー！　でも、アイツをしばくのはあたしだから取らないでね。さぁ、どうしてくれようかしら、ふっふっふ。まずは仮面を剥いで、逆さ吊りにして火で炙ろうか」

悪者笑いをしてるアリサちゃんの様子に『アリサさん、イっちゃってますね・・・』リインが苦笑した。そんな中でクラリスちゃんが「ありがとう。私たちだけじゃ捕まえられなかった」伏せた馬から降りて、わたしらにお辞儀した。

「気にせんでええよ。元よりこの手合いはわたしらの管轄やからな」

チーム海鳴の機動一課として最後の仕事である神器回収。今回のを回収すれば残りは２つ。１つは人に変身できる神器やから、放っておけば向こうからコンタクトを取ってくれるはずってルシル君は言うてる。つまり実質あと１つってわけやな。

『大きなお馬さんですぅ！　カッコいいですね！』

「えっと、リインだっけ？　ありがとう。私の愛馬、アレクサンドロス。私ともどもよろしくね」

『あ、はい！　八神リインフォースⅡです！　よろしくお願いします！』

『誰か。判る限りでいいからターゲットの特徴を教えてくれ。外見はみんなバラバラだというのは判ったが、もう少し踏み込んだ特徴が知りたい』

ルシル君からの通信に、わたしらは今見たターゲットの動きを伝えることに。ゴムのようにくねくねしたり、バネのように飛んだり跳ねたり、魔術化した火炎砲撃を呑み込んだり、とか。ルシル君は『なんか嫌な予感が・・・』って心当たりがあるんか唸った。

「思い当たることがあるんなら教えなさい！」

アリサちゃんがそう言った直後にバキバキって音がして、ガシャァンって音を立てて鋼の軛が粉砕された。慌てて臨戦態勢に戻るんやけど、「あや？」そこにターゲットの姿はなくて、「ああ！　穴掘って逃げてやがる！」ヴィータが言うように地面に大穴が開いてた。

「あんのロリコン野郎！　逃がすものですか！」

アリサちゃんが血走った目で必死に周囲を見回して、そんでクラリ

スちゃんの方を見て一気に殺気だった。わたしらもクラリスちゃんへと視線を向けて、その光景にドン引きした。唯一状況が判ってへんクラリスちゃんは「な、なに・・・？」小首を傾げるだけや。

「クラリス！　足元！」

「へ？　～～～～～っ！　きゃぁぁぁぁぁっ！」

クラリスちゃんの足元にターゲットが居った。掘った穴から顔だけ出して、クラリスちゃんのミニのタイトスカートの中を覗き込んでた。スカートの裾を左手で押さえたクラリスちゃんは、右手に持つ２ｍちょっとはある槍の穂先をターゲットの顔に向けて振り下ろした。

「ひゃっはぁ～！　ナイス、ロリパンツ♪」

「パンツじゃないもん！　アンダースコートだもん！　別に見えても良いもん！」

ターゲットは穴に戻っては瞬時にまた別の穴を掘ってそこから飛び出してきた。すかさず「紫電一閃！」シグナムと、アリサちゃんが「バーニングスラッシュ！」炎の斬撃で前後から挟撃。ターゲットはその一撃を受けて、「っ！！？」胸から上、胴体、腰から下の３分割にバラバラになってしもた。シグナムとザフィーラを除くわたしらは「きゃぁぁぁぁぁっ！」悲鳴を上げた。

「し、し、し、死んでもうたんか・・・！？」

「マジか、マジなのか！　シグナム、アリサ、どうすんだよ！」

「え？　や、だって、そんな・・・・！」

「ま、待て！　本当に殺してしまったのか！？　人を斬った手応えが無かったぞ・・・！？」

「ど、どど、どうしましょう！？」

みんなでオロオロ。フィレス一尉からは『何があったの！？』現状の説明を急かされて、『はやて、みんな！　大丈夫なのか！？』ルシル君には心配された。素直に今起きたことを伝えようとすると、「主！　お前たちも下がれ！」ザフィーラが見るも無残な姿をしてるターゲットからわたしらを庇うような位置取りをした。

「あ、風船みたいに膨らんでる・・・！」

「えっ？　偽物！？」

「やはり通りで手応えが無いと・・・！」

3分割になってたターゲットの体が急激に膨らんでって、パァン！破裂した。目を瞑らんように必死に目に力を込めて、その後のことをしっかり視認。ターゲットの体やって思うてたソレはいつの間にか風船と入れ替わってて、破裂と同時に無数の紙吹雪が舞った。その内の1枚を手に取って見ると・・・

「ロリっ子サイコー　・・・」

そう書いてあった。うん、引いた。ペッと投げ捨てて、いつどこから来るか判らへん変態さんなターゲットに即座に対応できるよう身構える。と、「はやてちゃん！　下です！」シャマルがわたしの足元を指差した。見るより早くスカートを左手で押さえて、"シュベルトクロイツ"の先端を向けつつ視線も下に向けた。

「～～～～っ！」

足元にはいつの間にか穴が開いてて、「ナイスアングル　」そこからターゲットが顔を覗かせてた。管理局に入ってからの騎士服への変身中、自前の下着やのうて、クラリスちゃんのようなアンダースコートを穿くようにしてる。そやから見られてもええんやけど、わざわざ見ようとするような真似をする人は許せへん。

「リイン！」

『ボコにするです！』

「『ブラッディダガー！』」

穴に向かって高速射撃のダガーを２０本と一斉射出。ターゲットは着弾より早く穴の中に消えてって、「うおっ！？」ヴィータの足元に現れた。すぐさまヴィータはゴルフのように"グラーフアイゼン"を振り被って「テメェは・・・！」フルスイングをお見舞いした。

けど「くそっ、逃がした！」！」当たらへんかったようや。そこからはまるでモグラ叩きのような状況に。

「あの、どうしてか私とシグナムのところには来ないのですけど・・・」

「どれだけ待っていても一向に近付いて来んな・・・」

シャマルは捕獲体勢、シグナムは迎撃態勢で待ち構えてたんやけど、ターゲットはわたしかヴィータかアリサちゃんかクラリスちゃんかの４人にしか来ぉへんから待ちぼうけを食らってる。するといくつもの穴の中からポンって空気が破裂する音がして、また紙吹雪が舞った。

「あひゃひゃひゃ♪　私がＢ・Ｂ・Ａのスカートを覗くわけないだろう？」

「「ＢＢＡ？」」

わたしらみんなが紙ふぶきの１枚を手に取って、そんで書かれてる内容に血の気が引いた。紙には、１３歳以上のババアの下着なんぞ大金を積まれても見ない！って、えらく達筆で書かれてた。

「「ババア・・・？」」

シグナムとシャマルに振り返るんがちょう怖い。とりあえずターゲットの命に関わるような攻撃が入る前にわたしらで止めへんとアカ

ンな。

「あーもう、うぜぇ！　アイリ！　ユニゾン・アウトして、お前も攻撃に参加だ！」

『え～？・・・う～ん、まぁ、別にいいけど』

「『ユニゾン・アウト！』」

ヴィータとアイリがユニゾン・アウトしたその瞬間、「ふぉぉぉぉーーーー！！」ターゲットが一番遠い穴から飛び出して来て、「好みにどストレートの幼女キタァァァァ！」アイリに向かって突撃して来た。

「『ブラッディダガー！』」

わたしとリインの包囲攻撃をまともに受けて爆散。その光景にビクッてなるんやけど、また別の穴から無傷なターゲットが飛び出して来て、再びアイリに突撃。そこに「鋼の軛！」ザフィーラの拘束魔法。次々と飛び出してくるソレらの合間を蛇のようににょろにょろ動いて回避しきった。

「マジか・・・！　この・・・！」

――シュワルベフリーゲン――

「うりゃぁぁぁぁっ！」

――フレイムバレット――

ヴィータとアリサちゃんの射撃魔法、計２０発。それらが一斉にターゲットに向かってく。ターゲットは背中に両手を回したかと思えば、どこからともなく身の丈を越える大きな盾を引っ張り出して来た。２人の攻撃はその盾に弾かれてった。

「レヴァンティン！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

ターゲットの進路上にシグナムが立って、鞘に納めた"レヴァンティン"のカートリッジをロード、居合抜きの体勢に入った。そんで「退けババアァァァーーー！」また女の人に対してタブーを叫びながら突撃してくるターゲットに向かって・・・

「私の外見年齢は１９歳！　ば、ババアではない！　まだ・・・まだ少女の年齢だ！」

――紫電清霜――

シグナムはなんやらしくない言葉を吐き捨てながら"レヴァンティン"を鞘から引き抜いた。まさに一瞬。目にも留まらへん速さで振るわれた"レヴァンティン"はターゲットの盾を真っ二つに斬り払って・・・

「私だってまだ・・・おばあさんじゃないですぅー！」

――ペンダルシュラーク――

シャマルの"クラールヴィント"から伸びた振り子４つが高速でターゲットの四肢を貫いた。ガクッと体勢を崩して転びそうになるターゲットへアイリが突進。ターゲットは「あぁ、やっぱり可愛いなぁ～！」って、比喩でもなんでもない、マンガとかで見るようにホンマに目玉だけをポーンと飛び出させてアイリを見た。

「アイリの可愛さにメロメロになるのはしょうがないよね♪　でも・・・罪は罪だよ！」

アイリが飛び出して来た目玉にビンタを食らわすと、目玉はどっかに飛んでって「にょぎゃぁぁぁ！？」ターゲットは空洞になった眼孔を両手で押さえて転んだ。転んだ勢いのままアイリの側まで連続前転で近付いたターゲットを「おしまい！」アイリが足蹴にした。

――竜氷旋――

アイリの足元から上に向かってとぐろを巻くように冷気が昇ってく。至近距離でそんな魔法を受けたターゲットはすごい勢いで凍結されてって・・・完全に氷漬けにされた。閉じ込めるんやなくて完全な凍結封印。ターゲットが動く気配はなくなった。

「・・・ターゲットの確保に成功」

『了解！』

フィレス一尉にそう報告して、わたしらはようやくホッと一息吐いてると、『・・・氷漬けにされたことが影響しているのか、ターゲットの姿をこちらでも確認。私は馬の被り物を被った作業員に見えるかな』フィレス一尉にはターゲットがどう見えてるんか言うた。続けて『俺も確認した。・・・アリサ』ルシル君からも通信が入る。

「なに？」

『君の見ている姿が半分正解だ。ピエロの仮面が当たりで、服装は俺から見るとキャップ、白Tシャツ、チェックのシャツ、青ジーンズ。君とクラリスが送って来たターゲットの服装のままだ』

「おお！　やった・・・って、喜ぶのもどうかだけど」

「じゃあわたしらの目が誤魔化されてるってわけなんやね」

『そういうことだ』

「それでルシル君。このターゲットの持ってる神器って、ピエロの仮面ってことでいいのかしら？」

『ああ。シャマルの推察通りソレが神器だ。仮面型の魔造兵装・道（ヴンシュ・ファイクリング）化師の本能。装着した者の理性リミッターを解除し、本能のままに行動させるという物だ』

ルシル君からの説明に「本能・・・」わたしらはターゲットのこれまでの行動を思い返した。アリサちゃんの胸を触ってその小ささを褒めたり、わたしらのスカートの中を覗き込んできたり、13歳以上はババア呼ばわりしたり、ロリっ子最高って公言したり。うん、完全に変態さんや。そやけど、義賊行為もまた本能なんやな。変な正義感がそうさせたんやろか。

「それでルシル。この仮面の能力って、人の目を騙すだけじゃないんでしょ」

『戦ったのなら解ると思うが、対象が仮面を付けている間、あらゆる法則を無視する体を手に入れることが出来るんだよ。まずはどんな物も再構築できる。たとえば紙を鋼鉄に変えたり、自分の体を別の物に変えたりな。それにゴムやバネのような軟体になったり、斬られても問題なかったりと、攻撃によるダメージを一切受け付けない。全ての法則を味方にするんだ。早い話、仮面を付けている間はどんな攻撃を受けようとも死なない不死身になるってことだ』

今まで見て来た以上にまずい能力を持ってる神器やってことが判ったわたしらは絶句。

「じゃあ・・・今、アイリがターゲットを氷漬けにしてっけど、これってあんまり意味なかったりするんかよ・・・？」

『抜け出そうと思えば今すぐにでも抜け出せるだろうな』

ルシル君がそう言うた直後、氷漬けになってるターゲットを覆うよ

うに小さな竜巻が発生して、氷を砕き始めた。そんで「ひゃっは～い！」ターゲットが解放されてしもうた。宙を舞うターゲットは「目！　私の目はいずこ！」って、アイリのビンタでどっかに飛ばされた目玉を探し始める。

「ルシリオン！　どうすれば奴を止めることが出来る！？」

『戦闘じゃ無理だシグナム！　仮面を外している間、ただの人間である状態でしか勝てないんだ！　俺たちチーム海鳴が束になろうとだ！』

「とゆうことは、わたしらに打つ手なしなんか！？」

これまでは戦闘でどうにか神器持ちを打ち破って来た。そやけど戦闘での制止が出来ひんってことになると、わたしらにはもうどうすることも出来ひん。

『いや！　制限時間があるんだ！　使用者によってまちまちだが、おそらくターゲットは一般人なはず！　となれば、最高で３０分！　時間がくれば強制的に剥がれるから、その時に逮捕と回収を行えば勝ちだ！』

ルシル君から攻略法を聴いたわたしらが勝利を確信した時、『なるほど了解だよ！』って通信が入った直後・・・

――シューティングスター――

空色に輝く魔力弾が飛来して、地面に着弾。すると小さく白い球体2個――ターゲットの目玉が宙を舞った。ターゲットは「目が回るぅぅ～～～！」自分もフィギュアスケーターのようにくるくる回って、「Ｎｏ　！」ドサって転んだ。

『こちらチーム・テスタロッサ！　ただいま現着！』

フェイトちゃんからそう報告が入った。さっきの通信はアリシアちゃんのもので、降って来たのはアリシアちゃんの長距離魔力弾やった。これで戦力は整った。あとは時間が来るまで相手すれば、わたしらの勝ちや。

「ヴィータ！　目玉キャッチ！」

「おうよ！」

地面に向かって落ちてくるターゲットの目玉をヴィータがキャッチすると、「おほう！　幼女が私の目玉をぉ～♪」ターゲットは地面に倒れ込んだままウネウネ悶え始めたから、『気持ち悪いですぅ～！』リインがわたしの中でドン引きしてる。

「うげぇ！　キショイ！」

ヴィータが目玉をポイっと上に放り投げて、"グラーフアイゼン"をフルスイングしてフライを上げた。アイリは「オーライ、オーライ！」頭上から降ってくる目玉を待ち構えて、バレーボールのトスのようにまた打ち上げた。目玉はそれぞれシグナムとシャマルの方

へ飛んで行くんやけど・・・

「触るなババア！　せっかく愛しの白髪ちゃんに触ってもらったのに、お前たちのような年増に触られたら汚れ――」

地面に倒れたままジタバタ暴れるターゲットが叫ぶ。ホンマに命知らずやなぁ～。シグナムとシャマルの顔がみるみる恐ろしいものに変わってく。シグナムは"レヴァンティン"をバットのように構えて、「やかましい！」目玉に大きく打ち放った。

「私の外見年齢はまだ２０代前半ですぅ！」

そんでシャマルは若干涙を浮かべながら目玉に全力のスパイク。ターゲットは「Ｏｈ，ｎｏ！」体をブリッジさせて痛みに悶え苦しんだ。シグナムの打った目玉はアルフが空中で「あらよっ！」スパイク。シャマルの打った目玉は地面に叩き付けられてバウンド。そこにアルフの打った目玉が直撃。

「Ｏｈ，ｍｙ　Ｌｏｌｉ　Ｇｉｒｌ　！！」

そう大声で叫んだターゲットは大人しくなった。そやけど「もっと、もっと私を苛めてくれ、可愛いロリっ子たちよぉぉぉ！」すっと音も無く立ち上がって、背中に手を回す。そんで小さな風船２つを鼻の穴の位置に持って来て、プクッと膨らませたかと思えば、ソレらを眼孔の中に押し込む。すると風船が新しい目になった。

「ホンマに法則とか無視するんやなぁ～」

「幼女、幼女！　ちっぱい、ちっぱい！」

身の危険を感じてまう。それほどまでに本能に忠実なターゲット。もし捕まったりでもしたら・・・。考えるだけでも気絶しそうや。とそこに「プラズマランサー！」フェイトちゃんの魔法がターゲットに問答無用で降り注いで来た。着弾すると、まるでコントのようにターゲットが感電して、骨格が見えたり消えたり。目や鼻や口から黒煙を上げて、「しゅっしゅぽっぽ！」そこら辺を走り回る。

「んん？　んお！？　おお！　ふぉぉぉぉーーーーっ！」

そんでたった今、地面に降り立ったばかりのフェイトちゃんを見た瞬間、雄叫びを上げた。それに、まんまハートの形をした心臓がドックンドックンって胸から飛び出して来てる。

「けしからん！　実にけしからんぞ！　太もも、脇！　なんて眩い！
　そんなはしたないバリアジャケットなんて着て！　君はあれか！
　見られて興奮するタイプか！？　この痴じ――ぎゃふん！？」

「え・・・！？」

フェイトちゃんに向かって突撃するターゲットの頭上から、クラリスちゃんの乗った馬アレクサンドロスが落下して来て、ドスン！踏みつけた。ターゲットは「ほんぎゃぁぁぁぁぁ！？」変な声を上げて押し潰されてしもうた。

「確保っ！」

バインド系の魔法を使えるわたしらは一斉にターゲットを拘束するんやけど、「その太ももに頬擦りするまで捕まってたまるか！」なんて言うて、一瞬だけ小人のようなサイズになってわたしらのバインドから抜け出して、元のサイズに戻りつつフェイトちゃんに突進。

「あたしの御主人様を変な目で見るんじゃないよ！」

「ケモノ娘も大好物だが、幼女になってから出直してこいババア！」

「だったらこれでどうだい！」

ターゲットの言う通りに変身魔法でその体格を小さなものに変えたアルフ。すると「ふぉう♪」ターゲットはフェイトちゃんからアルフへ進路変更。

「これでとっとと墜ちやがれ！！」

――ギガントハンマーーーー

ヴィータの一撃がターゲットを捉えた。巨大化してる"グラーフアイゼン"の一撃を受けたターゲットは「ピヨピヨ」平べったく潰れされたんやけど、潰れたままチョロチョロと動き回ってる。なんや可愛いかも・・・。

「ふんぬっ！　その尻尾でモフモフさせ――」

と、ここでようやくターゲットの顔からヒマワリ・・・やのうてピエロの仮面が剥がれて宙を舞った。ターゲットの格好はアリサちゃんから聞いてたように一瞬でキャップやシャツ姿になった。気を失ってしもうてるんかターゲットは顔面から倒れ込んだのに声も上げへんかった。

「と、とにかく確保や！」

「オッケー！」

アリサちゃんがターゲットに手錠をはめた。そして仮面なんやけど、誰も触ろうとせえへん。もし万が一に触れた人になんらかの干渉をせえへんとは限らへんし。ちょう触ることに抵抗があったり・・・。

「ルシル君。仮面に触れてもなんも問題はあらへんか・・・？」

『ああ。その仮面を付けられる者には条件があるんだ。自分に対して絶対の自信が無い、生きていることに不安・不満を覚えている者、それが仮面を付けることの出来る条件なんだ。はやて達はその条件に当てはまらないだろ？』

わたしらは顔を見合わせる。絶対の自信がどうかは別として、生きてることに不安も不満も無い。それより生きて、好きな人や友達と一緒に過ごせる今は最高に幸せな時間や。そやから「うん。それなら大丈夫やな」わたしが一番近かったこともあって、仮面を拾い上げた。こうして４つ目の神器の回収は終わった。

Ｅｐｉｃｏ?決意は頑張りの源

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

なのはが目を覚ましてから早半年と経過した今日は６月２９日。あの日から今日までの間にいろいろな事が起きた。神器回収はもちろん、学校行事だと５年生の終業式、６年生の始業式。日常だとなのはのお願いもあって、２月のルシルとアイリ、４月のリイン、６月のはやてのバースデーパーティ、豆まきやバレンタイン、雛祭り、花見など、別の部屋で催した。

そして今日は、とても長かった入院生活が終わる・・・なのはの退院日だ。退院をお祝いするために私たちチーム海鳴とユーノ、そしてなのはのご家族が病室に訪れている。母さんやクロノ、エイミィも来たがっていたけど残念ながら仕事の都合で、通信での士郎さん達への退院祝いをするだけになった。

「よいしょっと♪」

なのはが自分の足でベッドから降りて、１歩２歩としっかりとした足取りで歩いて見せた。すると「なのは！」のお父さんの士郎さんやお母さんの桃子さんがなのはを抱きしめた。お兄さんの恭也さんも「良かった！」なのはの頭を撫でて、お姉さんの美由希さんも「うぅ、良かったよ～！」流す涙を袖で拭い続ける。

「お父さん、お母さん。みんなが見てるからちょっと恥ずかしいかも・・・」

「何が恥ずかしいものか」

「そうよ。お母さん達やお友達に心配を掛けさせた罰よ♪」

士郎さん達も私たちと同じように時間があればチーム海鳴の誰か、もしくはユーノに連絡を入れてなのはのお見舞いに来ていた。今となってはスカラボのドクターやシスターズ達ともお茶飲み仲間になってたりするんだよね。しかもウーノ、ドゥーエ、クアットロは桃子さんのことを、師匠、って呼ぶようになった。それに恭也さんは、トーレやチンクと魔法やスキル一切無しの純粋な戦闘を交えて、御神流に興味を持たれて少し困ってた。

「荷物は俺が持つから」

「ありがとう、お兄ちゃん。それじゃあ、みんなも一緒にスカラボに行こうか」

私たち子供組はこれから学校で、シグナムたち騎士は武装隊や医務局の仕事。だからここで一旦の別れだ。病室、そして医務局を出ると、なのはが「ユーノ君。ヴィータちゃん、シグナムさん、シャマル先生、ザフィーラ、リイン、アイリ。今日はありがとうございました」顔を出してくれたことに対してユーノ達にお辞儀。士郎さん達も「ありがとうございました」お辞儀した。

「ううん。気にしないで、なのは。士郎さん達も」

「いえ。友の祝いの日ですので」

「それじゃあ、なのはちゃん。完治したと言っても病み上がりには違いないから無茶はしないようにね」

「そういうこった。あたしもお前とはまた同じ空を飛びてぇかんな。だから今はまだ大人しくしてろよな」

「はいです！」

「アイリはなのはのことも好きだからね♪」

「にゃはは♪　ありがとう、アイリ、みんなも」

そして私たちは海鳴市に戻るためにスカラボへ向かい、仕事に向かうシグナム達と別れた。なのはと士郎さん達が楽しそうに話しているのを、私たちは一歩下がったところで見守る。なのはがああしてちゃんと歩けるようになるまで、半年以上もかかった。

毎日毎日、リハビリを頑張って、1週間ちょっと前にようやく自力歩行が出来るようになった。その間、学校には通わなかった。すべてをリハビリに時間を割くために。授業は先生から出される課題を提出するって形で進めた。そんな賢明な努力のおかげで、なのはは本当に半年で快復した。

「それにしても良かったね、なのは。来月は臨海学校じゃない。夏休みが終われば修学旅行だし。みんなと一緒に行けて本当に良かったじゃん」

「うんっ！　それだけはみんなと一緒に行きたかったから♪」

それは前々から話していたことだ。去年は林間学校があって、最終学年である6年生の一大イベントは、臨海学校と修学旅行の2つ。そのどちらももうすぐそこまで迫って来ている。だからなのはも、その2大イベントのためにリハビリを頑張った。って、なのは自身が言っていたし。

「今日は臨海学校の班決めがあるよ！」

「そうなのアリシアちゃん？　だったらなのはも、みんなも遅刻は出来ないわね」

「ねえねえ。その班って、何人一組なの？」

「4人1組です。とりあえず、チーム海鳴を2組に分けようかなってみんなで決めたよね？」

「となると・・・、ん？　学校に通うチーム海鳴は8人か。唯一の男の子のルシル君もその中に入るのかい？」

「もしかしてなのはと同じ班だったりするのかい？　いや、別に気になるわけではないよ？　ルシル君も、それにユーノ君やクロノ君と言った男の子たちはみんな誠実で、女の子たちを本当に大事に思ってくれている。だから信用も信頼もしているんだ。でもやっぱりね・・・」

「ルシル君。うちの旦那と恭也のお馬鹿発言はスルーして良いからね♪」

「お父さんが親馬鹿で、恭ちゃんはシスコンだから♪」

「親馬鹿で何が悪い！」

「俺は別にシスコンじゃないぞ・・・！」

「もう・・・恥ずかしい・・・」

士郎さん達が思うままに喋るからなのはが顔を赤くして俯いた。そしてルシルは「あはは。俺はさすがに男子班ですよ」そう言って笑った。本当はルシルも一緒に班に入れようって、アリシアやシャルやはやて、もちろん私たちも考えていたけど、ルシルの男友達がそれを拒んだ。

――やっぱ男は男でつるんだ方が面白いって！――

――そうそう！　ぼく達のルシルを女子には渡さないぞー！――

――お、おおー！――

特にルシルと親しい武塔　亮介くん、比佐津　天守(あまもり)くん、真神　護くんの3人がルシルを離さそうとしなかった。それにルシルだってやっぱり同じ男の子と馬鹿騒ぎをやっている方が面白いかもってこ

とで、私たちはルシルを諦めることにしたんだ。

（シャルはやっぱり納得してないんだけど・・・。去年の林間学校でも男子たちと対立しちゃってたし）

それから臨海学校でのイベントがどんなものかを話しながら私たちはスカラボに到着。出迎えてくれたのは「なのは様。退院おめでとう」ウーノと、「もう帰るのかい？」チンクだ。恭也さんはよく絡んで来るトーレが居ないことを確認して人知れずホッとしてた。

「ウーノさん、チンクさん。長い間、お世話になりました。高町家の代表として、お礼を言わせてください」

「いいえ。なのは様には我われ管理局も大変助けて頂いておりますので、これくらいは何ともありません。ですからお顔を上げてください、士郎様。・・・チンク、皆さんを奥へ」

「ああ。ではこちらへどうぞ」

チンクに続いて私たちは海鳴市のそれぞれの自宅への直通転送を行えるトランスポータールームに入って、まずは「みんな。また学校でね」なのは達が転送される。次に「遅刻するんじゃないわよ」アリサ、「お先にごめんね」すずか、家が学校から遠い２人が転送される。

「次は・・・」

「フェイトちゃん達でええよ♪」

「ああ。シャルとアリシアは身支度に時間を掛けそうだしな。フェイトも巻き込まれて遅刻してしまったら大変だ」

「そんなことないもん」

「でもアリシアって、髪を結ぶ位置に３０分くらい掛けるからな～」

「う〝っ！　で、でもシャルだって結びもしないのに髪の手入れに時間かけるくせに・・・」

「乙女の髪の手入れが必要な時間よ！」

額を打ちつけ合いながら「むぅ～！」唸り合い始めたから、「あー もう、ストップ、ストップ」私が間に割って入る。正直どっちもどっちだったりする。それ以前に「２人とも。すでに髪型のセットは終わってるでしょ」本局に来る前に髪の毛を整えている。だからこんな無駄な言い争いはホントに無駄なんだよね。私はアリシアとシャルの手を引っ張ってトランスポーターに入る。

「それじゃあ、はやて、ルシル。また後でね」

「うんっ！」「ああ」

はやて達と手を振り合って、そして私たちは海鳴市の自宅へ転送。留守番のアルフに「ただいまー！」挨拶して、「ほらほら、学校に

行く用意をするよ～」アリシアとシャルの背中を叩く。

「は～い」「ん～」

シャルは自分の部屋へ、そしてアリシアは私と一緒に私たち2人の部屋へ向かう。私たち2人に与えられたそれぞれのクローゼットの前で局の制服を脱いで、代わりに学校の制服へと着替える。この制服を着られる期間も1年を切った。胸のリボンを結びながら、これまでの事を振り返っていると、「フェイトー。着替え終わった～？」アリシアに声を掛けられた。

「終わったよ」

振り返ると私と同じように学校の制服を着たアリシアが居て、「えっへん！」仁王立ちのポーズを取った。そんなアリシアに「胸のリボン、ちょっと歪んでる」そう指摘しながら、「ちょっとジッとしてて」私がリボンを結び直してあげる。

「ありがとフェイト♪」

「うんっ」

勉強デスクの横に掛けられてる鞄を手に取って部屋を出て、「シャル～？」の部屋に向かう途中、洗面所から「髪の乱れな～し♪　リボンもきっちりむ～すんだ♪　笑顔も～良し♪」朝の日課って感じになっちゃってたりするシャルの鼻歌が聞こえてきた。

「シャル？」

「おお、フェイト、アリシア。わたしも準備ＯＫ♪」

「うん。じゃあ・・・。アルフ！　そろそろ行くね！」

家の掃除をしてくれているアルフに声を掛けると、「あいよ！」エプロン姿のアルフが玄関まで見送りに来てくれた。私たちは「いってきます！」挨拶したら、「いってらっしゃい！」アルフは大手を振って見送ってくれた。

そして通学バスの停留所にまで歩いて、停車した通学バスに乗り込む。一番後ろの席には「にゃはは。ちょっとぶりだね♪」なのはが笑顔を浮かべて、小さく手を振ってくれていた。その光景に私の鼻の奥がツンとして泣きそうになった。

（あぁ、本当に久しぶり。なのはとこうして通学バスの中で逢える日なんて・・・）

感極まっていると「～～～～っ、なのは！」シャルがバス内を駆けて、座席に座っているなのはの腰に抱きついた。なのはは「にゃはは♪」自分の太腿に乗せたシャルの頭を優しく撫でた。私たちも「ちょっとぶり、なのは」のところへ移動して、なのはの右隣に私、その隣にアリシア、そしてシャルはなのはの左隣に座って寄り添った。

「なんか久しぶりに制服の袖に通しての登校だから、ちょっとドキドキしてるよ」

「かれこれ半年以上も入院していたからね～」

「クラスのみんな、なのはが戻って来るのを待ち望んでいるから不安も心配も要らないよ」

私たち４組は他のクラスに負けないくらいに仲が良い。去年の運動会だって逆転で１位を獲れたし。だから半年なんて時間があるほど、みんなはなのはの復帰を強く願ってくれている。そのためにビデオメールや寄せ書き、千羽鶴だって、進んで取ってくれたお見舞い方法なんだから。

「うん、そうだね。大丈夫だ」

次の停留所で「おはよう♪」はやてと、「おお。なのはが居る。やっぱりこうでないとな」ルシルが乗車。シャルが窓側に詰めて、アリシアの隣にはやて、反対側の窓側にルシルが座った。アリサとすずかは今日、自家用車で登校するって言っていたから、２人とは学校で合流することになる。

そして通学バスは学校に到着。他の生徒たちみんなが降りた後で私たちも降りて、校舎内に上がるために上靴に履き替える場所、昇降口・靴箱へ。そこで「なのはさん！」４組の委員長・木花　咲耶が、なのはに気付いた。シャル命名のドリルポニーテール（螺旋状の巻き髪だからドリルだって）がみょんって揺れた。

「おはよう、咲耶ちゃん。久しぶりだね」

「ごきげんよう、なのはさん。ええ、本当にお久しぶりです。元気そうでなによりです。はやてさん、ルシル君、シャルさん、フェイトさん、アリシアさんも、ごきげんよう」

スカートの裾を摘み上げてお辞儀した咲耶に「おはよう！」挨拶を返して、一緒に教室へ向かう。廊下を歩いていると、「あ、高町さん！」とか「おはよう！」とか「治って良かったね！」とか「久しぶり！」とか、なのはの復帰を喜んでくれる子たちが挨拶していく。なのはも「おはよう！」や「ありがとう！」って笑顔で応えていく。

「やっぱりなのはは人気者ね♪」

「にゃはは。嬉しいような恥ずかしいような・・・」

「ここは嬉しいと思うところだよ♪」

アリシアがなのはの右腕に抱き付いて笑った。私も「うん。私もそう思う」アリシアに同意する。誰かに親しまれるのは良いことだ。それがいつかきっと財産になる・・・って、母さんが言ってた。お金じゃ買えない、友達っていう財産にって。

「では、なのはさん。教室に到着です。おそらくたくさんの祝福を貰うでしょうから、どうぞ驚かれることなく」

「・・・うんっ！」

私たち４組の教室前に到着。咲耶がそう言ってなのはに微笑みかけ

た。なのはは後ろに控えている私たちを一瞥した後、「おはよう！」大きな挨拶をしながら教室の中に入っていくと、「なのはさん！」「高町さん！」すでに教室に居たクラスメイトから歓声が上がった。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒アリシア†††

なのはの退院祝いで体育の授業がまるまる潰れて、今は２限目の学級会。この時間で、来月・・・と言っても２週間後ってすぐなんだけど、去年の林間学校に次ぐ野外授業の１つ、臨海学校での班を決めることになってる。

「それじゃ、とりあえず好きなように自分たちで決めてみて～！」

担任の矢川先生が黒板に１班、２班、３班って書いていって、わたし達の名前が書かれたマグネットを黒板に張り付けてく。それじゃあ早速「しゅ～ご～！」わたしは人差し指を立てて、フェイト達に集まるように号令を掛ける。

「ま、やっぱこのメンバーがしっくりするわよね」

「きっと修学旅行でもこの班になっちゃうよね。嬉しいし楽しいから良いけど♪」

アリサがわたしのところに集まったメンバーを見て苦笑して、すずかはまったく様変わりしない集まりだって言っても、それが良いって笑ってくれる。わたし達チーム海鳴の中の良さはこのクラスだけじゃなくて別のクラスでも有名だったりする。

そして、その中で唯一の男の子、ルシルへの評判もなかなか。男女関係なく人気もあるけど、やっぱりわたし達カワイイ女の子の中でたった1人の男の子ってこともあって嫉妬を受けることもしばしば。けど、親しくなれば嫉妬から友情に変わる。

（だからルシルは、うちのクラスの男子の輪の中心に居ることが出来るんだよね・・・）

わたし達とは違うところに出来てる男の子の集まり、その中で一番目立ってるのはルシルだ。一緒の班になろうって、他の男の子たちから誘われてる。だけど、特に仲の良い男友達の赤髪の亮介、金髪の天守、茶髪の護の3人が「すでに先約があるんだよな。な？」って、ルシルの肩に腕を回した。

「ずっりぃ！　俺だってルシルを班に入れたいって！」

「僕たちの班にも欲しい！」

「俺の班にもだよ！」

正しく引っ張りだこ。ルシルの両腕や後ろ髪が四方八方から引っ張られて、「おーい。髪は引っ張るな～」ルシルは困惑気味。たぶん一番強い目的は、ルシルの料理の腕だって思う。去年の林間学校で、夕食は各班の自作カレーってことになったことでルシルが本気を出した。その結果、同じ班や味見しに来たクラスメイトの舌を唸らせた。臨海学校でもお昼ご飯の時にカレー作りがあるし。たぶんそれで・・・。

「ルシルも一緒が良かったのに・・・」

「しゃあなしやよ、シャルちゃん。ルシル君を班に入れるのは諦めようって、みんなで決めたやろ？　ルシル君も男友達の付き合いがあるんよ。ルシル君の事を想うんなら、広い心で全てを受け入れることや」

ルシルの様子にシャルが頬を膨らませた。そんなシャルに対して、そう返したはやての大人な発言にわたし達は「おお・・・！」拍手。シャルは「それはそうだけどさ～」解ってはいるって感じだけど納得はしてないっぽい。

「わたしもルシルがやる事には寛大に見守るつもりだけど・・・。でも限度ってあるじゃない？　たとえば、ルシルはわたし達の誰もが知らない女の子とデートなんかして、そっちを選んだらどうなの？　受け入れる？」

「う〝っ・・・。そ、それは極論すぎや。ルシル君はそんな適当な男の子やあらへんし、真剣にわたしらのことを考えて、決着をつけてくれるはずや。そやけど、もしそれが現実に起こって、わたしらが選ばれんかったんやったら、・・・そん時は素直に受け入れるつもりや。まぁ、完全に納得するまでは時間が掛かるやろうけどな・・・」

もし、そうなっちゃった時のことを想像したのははやては悲しそうな苦笑いを浮かべた。ここで「そんな仮定、考えるまでもなくアイ

ツがそんな器用な真似しないでしょ」アリサが、ルシルは新しい恋人候補を作らないって断言した。するとフェイトやなのは、すずかも同意見だって頷いた。わたしだって「ルシルの誠実さは確かだもんね」って同意。

「わたしのたとえが悪かったのは認めるよ。わたしだってルシルが真面目だってことは解ってるから、この話題はもうやめ！　で、それでもやっぱりルシルと一緒に班になりたいわけなの！」

「う～ん・・・、シャルちゃんの気持ちも解るけど、ここはやっぱり女の子だけの班にしよう？　ほら、他の班もキッチリ男女に分かれてるし、ここでルシル君だけ私たちと同じ班にしちゃうと、ルシル君がちょっと可哀想かも・・・」

なのはにそう言われちゃったシャルは「判った。諦めるよ」ルシルのことをようやく諦めた。そんなルシルは今、「えーい！　ジャンケンだ、もうジャンケンで決めろ、お前ら！」って怒って、ルシル争奪戦の決着方法を自分に群がるクラスの男の子たちに提示。教室内に「ジャンケン！」掛け声が拡がる。

あっちはあっちで大変そうだけど、わたし達の班決めもまたそろそろ始めないとだよ。各班４人だけど、わたし達は７人。ということは、チーム海鳴以外のメンバーを入れないといけないわけで。

「とりあえず８人目を探さないとダメだね」

「４組の人数は３２だから、ちょうどの人数で４人１組が８班できるはずなんだけど・・・」

なのはとフェイトに続いてわたし達も周囲を見回して、まだ班が決まってない誰かを探してみる。そして、ある女の子が他の女の子の世話をしてたことで、未だに班が決まっていないのが判った。その子も、黒板に張られた名前マグネットが次々と班分けされていくのを見て、「あ・・・！」ようやく自分の班が決まっていないことに気付いた。

「おーい、咲耶ちゃ～ん！」

はやてが余ってる女の子――咲耶に向かって手を振った。心配なのはアリサと咲耶の仲の悪さってことなんだけど、「しょうがないわね。ほら、咲耶、来なさい」アリサが手招きした。咲耶は少し考えた後、「・・・。お世話になりますわ」わたし達の側に来た。

「それじゃあ・・・8人揃ったし、2つの班に分かれよっか」

「ジャンケンで良いんじゃないかな？」

咲耶とは知らない仲じゃないし、わたしは咲耶と同じ班になっても良いから、すずかのジャンケン案に「さんせ～！」する。

「咲耶はどうかな？」

「わたくしもジャンケンで構いません」

というわけで、「グーとパーで分かれましょ！」グーパーで2組に

分かれることにした。その結果・・・

「えっと、わたしアリシアと、なのはとアリサと咲耶」

「私すずかと、シャルちゃんとフェイトちゃんとはやてちゃん、だね」

とまぁ、こんな班分けに決まったわけで。アリサは「ま、よろしく頼むわよ」そう言って咲耶に右手を差し出すと、「そうですわね。1泊2日お世話になりますわ」咲耶はその手を取って握手した。

『今回の臨海学校で、本当に仲が良くなってくれると良いんだけどね』

『あー、うん。林間学校の時は、アリサと咲耶はあんまり関わらなかったからね』

『去年の運動会でも、2人で大玉転がしをやって、その結果反発して最下位だったし』

『今回の臨海学校でもう少し仲良くなってくれると嬉しいな』

『なんか企ててみる？　2人が仲良くなる計画とか？』

『そうだね。スイカ割りとか肝試しとかあるし、それを利用するのも面白かもしれへんね』

班決めの後に臨海学校のしおりを使ってイベントを確認する時間があるし、アリサとルシル以外のわたし達で念話を使って相談してみようか。とりあえず班も決まったことだし、黒板のところに行こう。ぞろぞろとみんなで黒板の前に行って、それぞれ自分の名前が書かれたマグネットを手に取る。

「お？　はやて達も班が決まったか」

「うん。ルシル君のところも決まったようでなによりや」

ルシルは自分や班員の分のマグネットを手に取って、４班のところに４人のマグネットを貼り付けてく。班員はやっぱり「亮介くんと天守くんと護くんなんだね」ってすずかが言うと、椅子に座ってルシル争奪戦に勝ったことを喜んでる３人をチラッと見たルシルは「アイツら、強運だよな～」って苦笑い。

「そっちはどうなんだ？」

ルシルからの問いに、わたし達は７班と８班のところにマグネットを張るっていう形で答えた。７班のわたし、なのは、アリサ、咲耶。８班のフェイト、すずか、シャル、はやて。それを見たルシルは『アリサと咲耶が同じ班かぁ～。ま、フォローをしてあげてくれ』って念話を送ってきた。

『もちろんやよ。な？　みんな』

『『『『うん！』』』』』

『ああ、そうだな、始めから心配はいらないな。じゃ、お互いに楽しい臨海学校にしような』

それからわたし達はそれぞれの班のリーダーを決めたり、臨海学校で行われるイベントの諸注意なんかを聴いて、当日に向けて胸を躍らせた。

Ｅｐｉｃｏ?女子は相身互い

†††Ｓｉｄｅなのは†††

「あー、風が気持ち良い～♪」

今日から1泊2日の臨海学校になる聖祥小の6年生。私も6年生なので参加して、そして今は目の前に広がる大海原から吹いてくる潮風に身を晒してる。しかも季節は夏真っ盛りな7月中旬だから、冷ややかな風がとっても気持ち良い。小さな丘の上から海を眺めていると、隣に立つシャルちゃんが「気持ち良いけど、新鮮さはないよね・・・」ポツリと漏らした。

「まぁ、住んでる所が海と隣接した海鳴市やからな～」

「でも知らない海だってこともあるから、私は新鮮さがあると思うよ？」

私はすずかちゃんの感想と同意見かな。一応ここは県外だし、ちょっと違う雰囲気があると思う。

「潮風を堪能するのは後でも出来るでしょ。ほら、早くコテージに荷物を置きに行くわよ」

「そうですわね。みなさん、置いて行かれますわよ」

アリサちゃんと咲耶ちゃんが私たちにそう声を掛けて、後ろをすぃ～っと通り過ぎてく。私たちは「は～い！」返事をして、どんどん先を行ってる担任の矢川先生やクラスメイトに追いつくために走って、私たち４組が寝泊りをする第４コテージ村へ向かう。
そして、コテージ村の入り口近くにある管理棟前広場で一度整列をして、管理人さん達に挨拶をした後はコテージ村の施設紹介。炊事場やゴミ捨て場、管理棟には医務室があることなどを実際に回って教えてもらった後・・・

「コテージの鍵を渡すから、各班の班長は取りに来て。コテージに荷物を置いたら、調理場に集合。お昼のカレー作りの準備を始めてください」

先生がこれからの予定を改めて私たちに伝えた。そして、「鍵貰ってくるね」私は７班の班長として先生の元に行って、私とアリサちゃんとアリシアちゃんと咲耶ちゃんの班が寝泊まりするコテージのひも付き鍵を先生から受け取る。そんな私の後に、「せんせ～、鍵くださ～い」８班の班長になったシャルちゃんが鍵を受け取りにきた。

「それじゃあみんな、コテージに行こう！」

「わたし達もゴーゴー！」

私たち７班とシャルちゃん達８班のコテージは隣合わせだから、そこまで一緒に行くことに。８棟のコテージは、円形の広場の縁に沿うように並んで建てられていて、片側に男子・女子って分けられる。

どっちかが異性のコテージに行くには必ず間にある広場を通り抜けないといけないから、そこを先生たちが監視することで行き来できないようになってる。

「また後でね♪」

「うん、また後で！」

シャルちゃん達８班と分かれて、私たち７班は鍵を開けてコテージの中に入る。１階はリビングとお風呂とトイレ、洗面所、それにキッチンも冷蔵庫（炊飯器や電子レンジなんかも完備だ）。リビングには暖炉、四角い脚長のテーブルを囲うソファが４脚。あそこで課題をするんだね。

（確か冷蔵庫には自販機で買ったお茶を入れても良いんだよね）

水筒のお茶は今日１日分だから、明日の分の飲み物は自販機で自由に買っていいってことになってる。室内をぐるりと見てコテージ内を４人で確認してると、「ロフトに４人分の布団が折り畳まれてる！」アリシアちゃんがハシゴを上ってロフトを確認してくれた。

「なのはさん、アリシアさん。そろそろ行きますわよ」

「「は～い！」」

ボストンバッグをリビングに置いた私たちはコテージを出て「っと、鍵を掛けておかないと」ドアに鍵を掛けて、落とさないようにする

ために首に掛けておく。そして向かうのはコテージ村の奥にある調理場。
そこで集まって、管理人さん達から諸注意のお話しを聴く。調理場はもちろん屋外にあるから薪で火を起こすかまどを使うことになる。ご飯を炊くのに使うのは飯ごう。林間学校でも使ったから大丈夫なはず。

「では、各班に分かれて食材と薪を所定の位置から貰って来て、調理を始めてください。力が必要な時は、男子の手を借りてください。男子諸君！　女の子からのお願いはきちんと聞いてあげること！　それが良い男への一日なのだから！」

グッと握り拳を作って力説する先生。クラスの男子たちは「おおおおっ！」力強く答えた。そして早速「おらぁ、ルシル！　手伝え！」シャルちゃんの大声が聞こえてきた。これには「シャルさんは相変わらずですわね」咲耶ちゃんが苦笑した。

「咲耶はいいの？　今ならルシルを馬車馬のようにこき使えそうだけど？」

「馬車馬って・・・アリシア。確かにさっきから声を掛けられてるし・・・。ていうか、別の男子班からも声を掛けられて怒ってんじゃない」

「にゃはは・・・大変だね、ルシル君も・・・」

咲耶ちゃんも実はルシル君のことが好きだったりする。それはチー

ム海鳴どころかクラスのみんなが知ってる事実だ。たぶんルシル君も気付いているだろうけど、ほとんど待ちの構えだから咲耶ちゃんには何も言わないし、何もしない。まぁ、ルシル君もルシル君で、シャルちゃん、はやてちゃん、それにトリシュタンちゃん、3人から慕われているから大変のようだし。

「わたくしは構いませんわ。想いにかまけて頼るのは、わたくしの意義に反しますわ。薪を貰ってきますわ」

サッとドリルポニーテール払って私たちに用意されたかまど前から離れようとする咲耶ちゃん。私は「待って。薪は私が持ってくるよ。咲耶ちゃんは食材をお願い」そんな咲耶ちゃんを止める。

「なのはさん。あなたは最近まで入院なさっていたのですよ？　そんなあなたに薪を持って来させるわけには・・・」

「咲耶の言う通りよ、なのは。あたし達2人で薪を持って来るわ。あんたはアリシアと一緒に食材の方を持って来て。ルシル！　こっちには病み上がりのなのはと非力なアリシアと咲耶が居んのよ！　頼まれる前にあんたから手伝いに来なさい！」

アリサちゃんが他の男子たちと薪運びに勤しんでるルシル君を指差して怒鳴った。ルシル君はハッとして「悪い、なのは！　今行く！」運んでた薪を急いで別の女子班のところに置いて、また薪置き場に走って行った。

「それでよし！　薪はルシルに任せて、あたし達は食材と飯ごうの

準備に入るわよ！　オー！」

「「「オ、オー・・・」」」

そして私たちはカレーの材料のお肉や野菜、４人分のお米がすでに入れられてる飯ごうを取りに行くことに。私は力があんまり要らない飯ごうを取りに行って、他の班がお米を研いでる水場に向かう途中に私たち7班の薪を運び終えようとしてた「ルシル君！」を呼び止めた。

「あぁ、なのは。何か男手があるなら言ってくれ。最優先で手伝わせてもらうから」

「ありがとう、ルシル君。でも私ももう完治してるし。アリサちゃんの気遣いは嬉しいけど、こういう力仕事もリハビリ次いで良いかな～、なんて」

今のところ体に不調は起きてない。だから「私は大丈夫。ルシル君は自分の班を優先してね」そう伝えた。ルシル君はかまどの中に薪をくべた後、「なのはの意思を尊重するけど、本当に困ったら言ってくれな」微笑んで、自分の班の方に戻って行った。

（ルシル君。少しずつ元の笑顔になってきて嬉しいな）

クイント准陸尉のお葬式の後からずっと酷い顔をしてたけど、少しずつ、ほんの少しずつだけど、以前みたいに曇りの無い笑顔を浮かべてくれるようになってきた。でもやっぱり本当の笑顔を浮かべる

のは、スバルちゃんと仲直りしてからかな・・・。
ルシル君を見送った後、私は改めて水場へ。そこでお米を研ぎ終わってかまどのところに戻る。アリサちゃん達からの「おかえりー！」に「ただいまー！」応えて、早速飯ごうをかまどの上に乗せる。上手に炊くにはまずお米に水を含ませないといけない。だからまだ火が点いてない方のかまどに乗せる。確か３０分置くんだったかな。

「アリサちゃんが火加減を見てるんだね」

「まあね。『仮にも炎熱系の魔導師だし。火の扱いは慣れっこよ』」

『にゃはは。そうだね。じゃあ、お願いするね』

『ご飯の炊き加減は林間学校で学んだからね。はやてやルシルの班よりも美味しいご飯を炊いてやるわ！』

アリサちゃんは火吹き竹を使って火加減の調整を始めた。そしてアリシアちゃんは「涙が～！」泣きながら玉ねぎを刻んで、咲耶ちゃんはニンジンを切ってる。なら私は「ジャガイモを任せてもらうね」残りの食材、ジャガイモの皮むき、刻みを担当する。
野菜を切り終わったあとは、野菜や豚肉を鍋で炒める。そこにお水を入れてぐつぐつ煮込む。アクを取り終えたらカレールーを入れて完成。次はご飯。約１５分くらい炊いた後は５分くらい蒸す。そうすることでご飯が掬い易くなるから。そして・・・

「７班特製カレー、かんせー！」

アリシアちゃんがお皿にご飯をよそって、カレーを掛けるとそう高らかに声を上げた。私とアリサちゃんと咲耶ちゃんはパチパチと拍手。それから私たちもご飯をよそってカレーをかける。食べる場所は炊事場の近くに設けられてる食事場。木組みのテーブルと長椅子が2脚で、一度に6人掛け出来そうな大きさだ。

「カレールーに底の焦げが浮いてきてる・・・」

「だぁ～（涙）」

「米の芯が残っててまずい・・・」

「やっぱり男だけじゃまともに料理できないんだよぉ（泣）」

他のテーブル席から男子たちの悲鳴や泣き言が聞こえてくる。そんな中で「いただきます！」私たちは手を合わせて挨拶していると、「なのはちゃん達も無事に出来たようでなによりや」隣のテーブルにはやてちゃん達が着いた。

「うん。去年の林間学校でも作ったし、あれからどうすれば上手くご飯が炊けるかも勉強したから」

「やっぱり何事も復習さえすれば次は上手く行くよね～」

「「「ね～」」」

それから私たちはお互いの班のカレーを食べ比べしながら昼食を終

えた。やっぱりはやてちゃんの料理の腕にはまだまだ敵わないってことは判った。ちなみにルシル君の班は何事もなく上手く作れたみたいで、亮介君たちからは「美味っ！」絶賛の声が上がった。そのおかげで、カレーやご飯作りに失敗しちゃった他の男子の班が集まって来ちゃって、僅かに残ったルシル君のお手製なカレールーの争奪戦が始まっちゃって、それはそれは大騒ぎになったのはまた別の話。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒すずか†††

お昼を食べて食器や調理器具を洗って後片付けを終えた後は、１時間の自由時間。コテージ村の少し奥にある平原（他のクラスの居るコテージ村に繋がってる）でボール遊びをしたり、寝転がって日向ぼっこしたり、好きなように遊んで時間を潰すアウトドア派の子も居れば、コテージでお喋りしたりするインドア派の子も居る。そして私、シャルちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんの８班と、なのはちゃん、アリサちゃん、アリシアちゃん、咲耶ちゃんの７班は合流しての８人で、フライディングディスクを同時に２枚飛ばして遊んでる。

「行ったよ、フェイト！」

「すずかさん！」

「うん！」「はーい！」

シャルちゃんのディスクはフェイトちゃんへ、咲耶ちゃんのディス

クは私へ飛んで来た。私は落下地点を予測してそこに走るけど、フェイトちゃんはいつかの体育でのドッジボールみたくハイジャンプして空中でキャッチ。

「いつ見てもとんでもない運動神経と言いますか身体能力と言いますか・・・。フェイトさんとすずかさんは何気に子供やめてますわよね」

咲耶ちゃんがポツリと漏らすのが聞こえた。何気に私も入ってるけど、ある意味普通の子はやめてるから実は正しいと思う。そしてフェイトちゃんは空中で「アリサ！」ちゃんに向けてディスクを投げた。私は私でディS九をキャッチして「なのはちゃん！」に向かって投げる。

今やってるゲームは、投げる時に誰かの名前を呼ぶ。呼ばれた名前の子は必ずキャッチしないといけなくて、キャッチできなかったら罰ゲーム、と決めたディスクキャッチ。最低限のルールとして、一度に同じ人を指名しないこと。

（真逆に飛ばされちゃったら取れないからね）

防護服に変身して魔法を使えばキャッチ出来ると思うけど、さすがにこんな人前でそんなことをするのはダメだから出来ないし、やろうとも思わないかな。だって私の身体能力には自信があるから。

「よしっ、取れたわ！」

「よいしょ！」

アリサちゃんとなのはちゃんも無事に取れた。そして次のこの名前を呼んでディスクを投げる。名前を呼ぶだけじゃ簡単だからって、しりとりや計算問題なんかを出題したりして、誰かをアウトにしようってことになったんだけど、誰1人としてミスをしなかった。

「ああもう！　そういやここに今、集まってんのって頭の出来も運動能力も平均以上の子ばかりじゃないの！」

とうとうアリサちゃんが決着の見えないこのゲームに苛立ちを見せちゃった。咲耶ちゃんも「確かに埒が飽きませんわね～」ディスクをイジりながら、アリサちゃんに同意。そういう私たちもなかなか終わらないゲームに飽きが出て来てたところ。それに比べてルシル君たち男子組は、他のクラスの男子たちと一緒にサッカーをやっていてすごく楽しそう。

「だったらさ。この自由時間の後は待ちに待った海水浴だし、泳ぎで勝負とか良いんじゃないかな？」

「明日は川で鮎の掴み取りもあるね～」

「生きた魚を触るのは少し躊躇しますわね・・・」

「掴み取りか～。それやったらわたしが勝ちそうやな♪」

「はやてちゃんはこういうのに強そうだね」

「生魚の捌き方はルシル君直伝なんよ♪」

「さすがは無人島に一緒に流れ着くなら誰？ランキングで堂々の1位に輝いたというか・・・」

ルシル君の万能さはもう聖祥小の生徒や先生たちにも知れ渡ってる。そんな中で6年生全体を対象に作られた6年生の手によるランキングで、ルシル君は三冠王に輝いた。1つは今の無人島云々。もう1つは女装させたら可愛い男子ランキングで1位。最後の1つはお婿さんに欲しい男子ランキングで1位。女装ランキングで1位を獲った時、ルシル君は泣いた。そしてお婿さんランキングで、シャルちゃんとはやてちゃんが不機嫌になった。

「えっと・・・じゃあ、そろそろコテージに戻って、水着に着替えとく？」

「そう、だね。時間も良い頃合いだし」

時刻を確認すれば13時16分。30分から海水浴の時間だから、今から着替えてもそんなに早すぎるってこともないし。そういうわけで、私たちはディスクを片付けて、それぞれのコテージに戻ることに。水着は一応自由ということもあって、私は水色のティアードワンピース型の水着を新調しちゃった。

「あ、すずかの水着可愛い　」

「ありがとう、シャルちゃん♪　シャルちゃんの水着も可愛いよ！」

シャルちゃんのセパレートの水着はチューブトップで、上下ともに３ｗａｙのフリルがあって可愛い。フェイトちゃんの水着はビキニで、パレオを腰に巻いてる。はやてちゃんの水着はＡラインのワンピース型で、キャミソールとブルームスカートが一緒のやつだ。そんな４人で記念写真を撮っていると・・・

『なのはだけど、そろそろ海岸に向かおうか・・・？』

なのはちゃんからお誘いの念話が来た。３０分まで残り５分だし『うん。行こうか』海岸へ向かうことを決めた。コテージ村から海岸までは歩いて１分くらいの距離。夏とは言ってもその間に水着で歩くのはちょっと恥ずかしいし、それに風邪をひいたらいけないということで、上着を着てくるように事前に伝えられてるから、私たちみんな指定のジャージの袖に腕を通して、バスタオルを１枚持つ。

「よーし、泳ぐぞ～！」

シャルちゃんに続いてコテージを出て、「おーい！」なのはちゃん達と合流。シャルちゃんが「なのは達の水着も可愛い♪」シャルちゃんが携帯電話のカメラで写真を撮り始める。

「なのはの水着はＡラインのワンピースね。はやてと同じキャミソールだけどスカートは３ｗａｙフリルなんだね。とっても可愛い　」

「にゃはは、ありがとう♪」

「アリサは大胆にもホルター・ビキニかぁ♪　なになに？　そんな大胆ビキニでお目当ての男の子でもオトそうって？」

「違うわよ！　あたしらしさを考えたらこうなったわけ。どうよ？　似合うでしょ？」

「うんっ！　バッチリ！　んでんで？　アリシアの水着は無難にワンピースなんだね。フェイトとお揃いくらいの水着かと思ったけど」

「えー？　う～ん・・・それでも良いと思ったけど、今日はなんとな～くこの水着にしたかったの。でもこの胸にあるリボンは可愛いでしょ？」

「それはもう！　アリシアらしくてとってもグッド♪」

「ありがと～♪」

「さ～い～ご～にっ♪　咲耶の水着はロングスカートのワンピースドレス・・・？」

「いいえ。下に水着を着てますわよ。このドレスも一応は水着ですけど、泳ぐ際には脱ぎますわ」

ちょっと照れた風に水着の上から来てるドレスを捲り上げた咲耶ちゃん。シャルちゃんは「バンドゥ・ビキニとショートパンツ・・・。うん、可愛い♪」水着の種類の名前を言って、ドレスの裾を捲れているその隙を狙ってカシャカシャって写真を撮る。

「シャルさんのエッチ！」

慌ててスカートの裾を押さえる咲耶ちゃんに「どうせ泳ぐ時に脱ぐんでしょ～？」シャルちゃんは厭らしい笑顔を浮かべた。と言うか「シャルちゃん、携帯電話置いてこないと」笑顔で写真のタイトルを入力してるシャルちゃんにそう言う。

「あー、大丈夫。わたしんところのコテージの鍵はまだ閉めてないから。あ、みんなは先に行ってて。まだ撮っておきたい被写体たちが残ってるからさ」

「しょうないわね、あんたも」

「捕まっても知らないよ？」

「訴えられても知らないからね～♪」

「ルシル君に見つかったら酷い目に遭うかもやから要注意な～」

アリサちゃんとフェイトちゃんとアリシアちゃんとはやてが苦笑して、海岸に向かって歩き出す。なのはちゃんは「撮る前に許可を取ってね、シャルちゃん」そう注意してから歩きだして、私も「それじゃあお先に」アリサちゃん達の後を追った。

「砂浜に降りるとまた一段と気持ち良いですわね！」

「うん！」

「早く時間にならないかな～！」

真っ白な砂浜と真っ青は海が広がる海岸に到着すると、すでにクラスメイトや別のクラスの子たちも集まっていて、海に入らないようにしてはいるけど波打ち際ではしゃいでる。海に入るのは全クラスの子が集まって、体操してからって話だからかな。とりあえず残り時間が2分を切ってることもあって、私たちは4組の集合場所へ向かうことに。

「あ、シャルちゃん！・・・とルシル君・・・」

なのはちゃんの視線の先、そこにはルシル君に連行されてるシャルちゃんの姿があった。はやてちゃんが「あちゃ～」顔を手で覆う。ルシル君はシャルちゃんの首根っこを持って、私たちのところへ歩いて来た。ちなみにルシル君の水着は黒のハーフパンツだ。

「なぁ。シャルが携帯電話で女子たちの水着を盗撮したわけだが。君たちは知っていたか？」

『『『『『無許可だったぁぁぁぁーーーーっ！！』』』』』

『だって写真を撮らせてってお願いしても恥ずかしがって撮らせてくれないから』

馬鹿だよ、シャルちゃん。そう言う場合は素直に諦めるんだよ。シ

ャルちゃんは『ヘルプ・ミー』って救助を求めてるんだけど・・・

「ううん。知らんかったよ♪」

はやてちゃんが笑顔で無関係を装うと「み〝っ！？」シャルちゃんがビクッと肩を跳ねさせた。

「あたしも知んなかったわ」

「わたしもー♪」

アリサちゃんとアリシアちゃんも、シャルちゃんが携帯電話で写真を撮ろうとしてたことを知らなかったって伝えた。シャルちゃんは『うっそ～ん！』首を横に振った。ルシル君が「まぁ、そういうわけだ。有罪」シャルちゃんの頭をポンポン叩きながら宣告した。

「ま、待って！　なのはとすずかとフェイト、咲耶にも聞いてみて！」

「足掻くのはよせ。どの道、君が盗撮するのをみんなが知っていようが知っていまいが、注意していようがしていまいが、盗撮したことには変わりなし。シャル。次の誕生日、俺からのプレゼントは無しな」

「みゃっ！？　そんな殺生な！」

「はーい。この話は終了～。はやて、みんな。良い海水浴を」

そう言ってルシル君は男子グループのところに向かった。ガクッと四つん這いになって落ち込むシャルちゃん。そんなシャルちゃんに「えっと・・・。やっぱり許可は必要だよ」なのはちゃんが声をかけた。

「うぅ～・・・。だって～」

「シャルさん。諦めもまた大事ですわよ」

「あぅ～。時間を戻したいよ～」

そんなこんなで、海水浴が始まった。クラス単位で集まって準備運動。そのあとは時間まで好きなように過ごして良いことになってる。私たち7・8班は一緒になって、競泳をしたり、浮輪を使ってのんびり浮いたり、ビーチバレーをしたり、いろんな方法で海水浴を満喫した。定められた休憩時間の後、もう一度海に入って遊んでいると、ドォーンって大きな音と一緒に少し離れたところに水柱が立った。

「な、なんですの！？」

「こんな事が出来るのって・・・」

「うん。ルシル君だけよね・・・」

さらにドォーンって大きな音と一緒に水柱が立ち続ける。はやてちゃんが『今の水柱、ひょっとせんでもルシル君・・・？』ルシル君

に念話を送った。

『ん？　そうだけど』

『ルシル。もしかして魔法を使ったりなんかは・・・・？』

『あはは。そんなわけないだろ、フェイト。純粋な技術だよ。水斬りって言うらしいんだが』

またドォーンと水柱が上がって、男子たちが楽しそうにはしゃいでる。とここで『ねえねえ、どうやるの！？』アリシアちゃんが水斬りの方法を訊くと、『それはだな・・・』ルシル君はその方法を話した。すると早速、アリシアちゃんは真似を始めるわけで・・・。

『最初は脱力気味に。途中はゆっくりで・・・。打つ時に鋭く加速させて・・・。その流れを速く、そして力を入れれば・・・』

ルシル君に教わった通りにアリシアちゃんがやるんだけど、「あれ・・・？」失敗のようで水が少し爆ぜる程度で終わった。咲耶ちゃんは「何をしてるのですか？　アリシアさん」そう訊ねる。

「ちょっと、ルシルの真似をしてみようかなって。よ～い～せっ！」

「あたしもやってみようかしら」

「あ、私も」

アリサちゃんとフェイトちゃんまで水斬りに参加。さすがに3人となると結構派手な水しぶきが上がり始めて、私たちまで注目され始めちゃった。しかも回数を追うごとに水柱の高さが上がっていって、さらに勢いも強くなってく。爆ぜた水がまるで土砂降りの雨のように降ってくる。

「ちょっ、アリサさん、フェイトさん、アリシアさん！　そろそろお止めになった方が・・・！」

「わぷっ！？　先生にそろそろ怒られへんかな～？」

「ルシル君の方もやめてるし、3人もそろそろやめたらどうかな～？」

「なんか嫌な予感が・・・って、あっ！」

気付けば水柱はもう立ってなくて、ルシル君たちは海から出て砂浜に寝転んで砂に埋められてるみたいだった。そして私はアリサちゃん達に視線を戻して・・・見た。アリサちゃんの水着のトップスが水に煽られて取れちゃったのが。

アリサちゃん本人もそれに気付いて「きゃぁぁぁぁ！」両腕で胸を隠して海に潜った。咲耶ちゃんがいち早く「言わんこっちゃないですわね！」飛ばされたアリサちゃんの水着を取るために泳ぎ始める。

「と、とにかく男の子たちに気付かれないようにしないと・・・！」

「アリサちゃん、取れた瞬間は水柱が壁になってくれたからきっと見られてないよ」

頭だけ海面に出したアリサちゃん。私たちはそんなアリサちゃんの周囲に立って壁になる。とりあえず他の子たちは今の惨状に気付いてないみたいで、首から下が砂に埋もれたルシル君たちのところに人目が集まってる。

「うぅ、まさかこんな恥ずかしめを受けることになるなんて・・・！」

「「ごめん、アリサ」」

「フェイトとアリシアの所為じゃないわよ。元はと言えばルシルが・・・！」

「それはさすがにルシル君が可哀想だよ・・・」

「ルシル君もルシル君で大変な目に遭ってるようやしな～」

「なにやってんのよ？」

「寝転んだ体の上にお城が作られてる」

よーく目を凝らして見ると、確かにルシル君や他の男子たちの体の上にお城や塔が建てられ始めてた。そのおかげでアリサちゃんのハプニングには気付かれてないみたい。

「アリサさん。水着を拾って来ましたわよ。早く着けてください」

「咲耶・・・。ありがと」

「どういたしましてですわ」

咲耶ちゃんから水着を受け取ったアリサちゃんは、急いで水着を着け直した。それからはもう水斬りもやめて、スイカ割りイベントの時間になったことで海岸に上がる。その最中、「ルシル君・・・」が可哀想な目に遭ってるのを見た。ルシル君の上に乗ってたはずの砂の塔は崩されていて、その代わりモデルさんのように豊満な女性のスタイルに変更されてた。

「うわぁー、見るな、見ないでくれ～！（泣）」

私たちに気付いたルシル君が顔を背けた。何と言っていいのか。ルシル君も6年生になって男の子っぽいしっかりとした顔立ちにはなったけど、それでもまだ中性的だからその・・・「美人さんだよね」たとえ砂で作られた女性の体でも、顔がそんなんだから綺麗な女性に見えちゃう不思議。

「可愛いというよ表現よりはまだマシだよ、すずか」

「チッ。カメラあれば絶対撮ってたのに・・・！」

「こんな恥ずかしい今の俺を撮ったら本気で怒るからな！　というか、助けてくれ！」

助けを求めてきたルシル君にアリサちゃんは腕を組んで「助けてく

ださい、でしょ？」ニッコリ笑った。ルシル君だそれだけで「俺、何かしたか？」察したみたい。アリシアちゃんが「実はね。さっきアリサの水着が――」そこまで言いかけて、「わーわー！」アリサちゃんが止めに入った。

「と、とにかく助けてください、お願いします！」

「はぁ・・・。まったく、しょうがないわね」

「あ、わたしも手伝うわ」

「わたくしも」

みんなで砂に埋まってるルシル君を救出する。砂まみれのルシル君は「ありがとう。助かったよ」軽くストレッチを始めて、海の中に飛び込んだ。そして「ぷはっ。亮介たちめ。俺を辱めた報いは必ず受けてもらうからな・・・！」砂を全部洗い流してから海岸に戻ってきた。

「ルシル。助けてあげたんだから、わたしのバースデープレゼント・・・」

「・・・判ってる。そもそもさっきのあれは冗談だ。ちゃんと渡すつもりだったよ」

「っ！　ルシル、だいすき～　」

シャルちゃんがルシル君に抱き付いて喜びを示した。すると「ほら、シャルちゃん！」はやてちゃんと、「そろそろ行きますわよ！」咲耶ちゃんがシャルちゃんを引き剥がして、４組の集合場所に向かって歩き出した。

「あ～ん、もうちょっとだけ～」

「ルシル君。スイカ割りが始まるよ」

「あぁ、そっか。もうそんな時間か。ありがとう、なのは。じゃあ、俺も行くよ」

駆け出したルシル君は、「亮介ぇぇぇぇ～～～～！」大声で名前を叫びながら集合場所にすでに居る亮介君に突撃して行って、「な、なんだよルシル！」うろたえる亮介君を軽々と抱え上げた後に「そぉ～い！」海の中に投げ込んだ。さらに数人の男子を同じように抱え上げて海に投げ込む。

「にゃはは。元気だね～」

「でもアイツがあんなに楽しそうに笑ってるのを見ると、安心できるわね」

「うん。このまま素直に自分を出してくれると良いね」

騒ぎも一段落して、いよいよスイカ割りの時間になった。スイカ１玉に対して２つの班でスイカ割りをすることになってる。事前に７

班と8班が組むことを決めてたから、他の班より早くスイカ割りを始めることが出来た。

「ルールは、7人で目隠しした子にスイカの位置を知らせる。だけどその内の6人はデタラメに指示を出して、1人だけが本当のことを言うの。ミスは3回まで。3回ミスしたら次の子にバトンタッチ。みんなに順番を回せるようにしたいけど・・・」

「まぁ、1玉だけですし。順番が回らなくても恨みっこ無しですわよ」

そういうわけで、1順目開始。ジャンケンで打順を決める。トップバッターは「高町なのは、いきます！」で、タオルで目隠しをしたうえでその場で回る。これでどこを向いてるのか判らなくなるはず。私たちからの指示になのはちゃんはしっかりとした足取りで、手に持ったバットを振るう。

「なのはさん。三半規管が強いのかしら。まったく目が回っていないようだわ・・・」

咲耶ちゃんがポツリと呟いたのが聞こえた。そしてなのはちゃんは、正解を出してるアリシアちゃんの指示に応えられずに空振り三振。続けてフェイトちゃん、はやてちゃん、シャルちゃん、咲耶ちゃん、アリシアちゃんと続くけど、さすがに7人中6人からの誤情報に惑わされちゃって、みんな空振りで終わった。

「次はすずちゃんやね」

「うんっ」

タオルで目隠しをして、その場でくるくる回る。そして「あ・・・」目が回ってないことに気付いた。理由は考えるまでもない。空戦なんて３６０度を飛び回る戦いをこれまでに何度も経験してるから、知らないうちに三半規管が鍛えられていたんだ。

「すずかちゃん、もうちょっと右だよ！」

「いいえ。左ですわ！」

「そのままでいいのよ、すずか！」

「残念。回れ右だよ！」

「そのまま直進でいいよ！」

「アカン、アカン。行き過ぎてるよ！」

でもどれが本当の指示か判らないから、「バッターアウト～！」私も空振り三振で終わっちゃった。最後は「まさかあたしにまで回ってくるとは思いもしなかったわ」アリサちゃんだ。私からタオルとバットを受け取ったアリサちゃんから離れて、誰が本当の指示を出すかを決める。

『よーし。ここで咲耶を推そう』

シャルちゃんの提案に私たちは『さんせー！』した。アリサちゃんと咲耶ちゃんの仲良しになろう作戦。今日はずっとそのために動いていたからね。そしてジャンケンでみんなパーを出すことを決める。勝っても負けても関係なく、咲耶ちゃんがグーかチョキを出したらそれで決定だ。

「ジャンケン・・・ポイ！」

作戦通り咲耶ちゃん以外の私たちはパーで、「指示者はわたくしですわね」自分が出したチョキを見詰める咲耶ちゃんは、アリサちゃんを導くナビゲーターになった。

「アリサ・バニングス、行くわよ！」

くるくる回るアリサちゃん。回り終えたら早速「右ですわ！」咲耶ちゃんが指示を出す。続けて私たちも誤まった指示を出した。そしてアリサちゃんは「ここね！」バットを勢いよく振った。だけど「ハズレ！」残念ながらスイカには当たらなかった。すぐに2回目の指示を出し始める。でもその2回目も「ハズレ！」だった。

「あー、なかなか当たらないわねこれ」

バッドを肩に担いでトントンと叩くアリサちゃん。次で当てさせたいけど、変に気遣うと気付かれちゃうかもしれないし。とにかくアリサちゃんを信じよう。そして3回目、最後の指示出しを始める。出来るだけ咲耶ちゃんの声を掻き消さないように気を付けながら「

右だよ！」私も指示を出す。

「いいえ！　アリサさん！　そのまま5歩ほど直進ですわよ！」

「・・・。信じるわよ、咲耶！　うりゃぁぁぁぁーーーーっ！」

振り下ろされたバッドは、スイカのちょうど真ん中を打って真っ二つに砕いた。私たちは「やったぁー！」喜び合う。咲耶ちゃんも「素晴らしいフルスイングでしたわよ」アリサちゃんを称えた。

「あ、ありがと。あんたも良いナビだったわ」

アリサちゃんも嬉しそうに笑顔で応えた。これで少しは仲も良くなったはずだ。それから私たちはスイカを美味しく頂いた。さぁ、夜はバーベキューとキャンプファイア、そして肝試し。もっともっと良い思い出を作らないと。

Ｅｐｉｃｏ?幽霊の正体見たり枯れオババ

†††Ｓｉｄｅイリス†††

海水浴の時間もとうとう終わっちゃって、その後の夕ご飯はバーベキュー大会。昼間の炊事場で、各班が自由に人数分の食材を焼いて食べる。もちろん各班と炊事場が隣接してるから、楽しくお喋りしながら作って食べる、ってことが出来る。そういうわけで、わたし達チーム海鳴＋咲耶の８人は、「美味しい～♪」一緒に食べてる。

「なのは、あ～ん♪」

焼き担当を買って出たなのはに、わたしは自分の取り皿からお肉を箸で取って口の前に運んだ。なのはは「ありがとう、シャルちゃん。！　あ～ん♪」パクっと食べてくれた。すると今度は「じゃあ、わたしがはやてにあげるよ！　あ～ん♪」アリシアが、なのはと同じ焼き担当になったはやてにお肉を「あ～ん♪　うん、美味しい！」食べさせた。

「お前らな、肉ばかり食べるなよ！　野菜を食べろ、野菜を！　あ、こら！　勝手にトウモロコシを網に置くな馬鹿！」

そんな怒声がわたし達のところに届いた。そこにはルシルを班長にした４班の亮介くん、天守くん、護くん、それに別の班の男子たち合わせての８人でバーベキューをしているんだけど、「大変そうや

な～」はやての言うようにルシル1人で切り盛りしてるからかなり大変そう。

「なあ、ルシル君！　わたし手伝おうか？」

孤軍奮闘中のルシルにそう声を掛けるはやて。するとルシルより早く「賛成！」とか「超歓迎！」とか「八神さん、おいでおいで！」とか「女の子に作ってもらう料理・・・良い・・・！」とか、はやてを大歓迎する男子たち。

「ふざけろ、お前ら。始めからお前らの誰かが手伝えば済む話なんだよ。はやて。こっちは大丈夫だから、コイツらに近付かないようにな」

「はあ？　ルシル、一緒に住んでるからって八神さんを独り占めにする気か？　羨ましい奴め！」

「そういやアイリちゃんは元気してる？　・・・あ、なあ、ルシル君。お義兄さんって呼んでいい？」

「フェスティバ～をこの場でもう一度開こう・・・！」

「ねえねえ、八神さんが良いって言うんなら手伝ってもらおうよ！」

「横暴だ～！」

「はやてを巻き込むなって話なんだよ。あとアイリは好みにうるさ

いからフラれるのがオチだ、諦めろ」

「ルシル君。僕が手伝うよ。邪魔をしたくなくて言い出せなかったけど・・・」

「護は優しいな～！　お前らも護を見習え」

ルシル達がぎゃあぎゃあ騒ぐ。だから「ちょっ、燃えてる燃えてる！」ルシル達が食材を焼いてる網に置かれたピーマンと玉ねぎがボッと燃えてた。ルシルは慌てることなくその２つを水道水で洗って火を消して「っと。ほい、亮介、大地、お前らにやる」びしょ濡れになったピーマンを亮介くんの取り皿に、玉ねぎはクラスメイトの内野大地くんの取り皿に乗せた。

「「要らねぇー！」」

「文句があるなら食べるなー」

「あ、ニンジン良い焼き具合だよ」

ルシルと護くんがのコンビネーションで食材を焼いてくんだけど、２人は焼くことに集中して全然食べれてない。わたしは「しょうがないな～。フェイト、交代」なのはに食べさせる役をフェイトに預けて、わたしはルシル達の元へ。

「なになに？　フライハイトさんが焼いてくれるの！？」

「う～ん。焼くのはルシルと護くんがやってくれてるから、わたしはぁ～・・・」

網の上で良い具合に焼けてるお肉を箸で取って、ふーふー息を吹きかけてから「あーん、ルシル～♪」の口に持っていく。と、「あああああ！！」亮介くんと護くん以外の男子が叫んだ。ルシルは「あぁ、ありがとうシャル」素直にお礼を言ってお肉を食べてくれた。

「護くんにも食べさせてあげたいけど、それはわたしじゃない方が良いみたいだし、ね」

チラッと別のかまどの方に目をやると、護くんの幼馴染・火照　耀（あかる）がじーっとわたし達を見てるのが判った。わたしがちょいちょいっと手招きすると、「しょ、しょうがない、うん、しょうがない」ブツブツ言い訳じみたことを言いながらやって来て、網の上からお肉を取って「あ、あーん・・・」護くんの口に差し出した。

「えっと・・・あ、あーん・・・」

ツンばかりでなかなかデレないあの耀が「よしっ！」笑顔を浮かべた。わたしと耀で、ルシルと護くんにお肉や野菜を食べさせてあげていると、他の男子たちが「ルシル、交代してやるよ！」とか「いやいや、僕が代わるよ！」って、わたしからあーんしてもらいたいって考えが丸見えなことを言い始めた。まぁ、その前に・・・

「ありがとう、シャル。あとは焼きおにぎりだけだから、もういいよ」

ルシルが食べ終えちゃった。わたしは「どういたしまして♪」応えて、うなだれた男子たちに「残念だったね～」ウィンクしてから、なのは達のところへ戻る。背中で「耀。僕ももういいよ。ありがとう」護くんと、「そ、そう。どういたしまして」耀のやり取りを聞きながら「たっだいま～！」なのは達に挨拶。みんなからの「おかえりー！」と一緒に焼きおにぎり3個が載ったお皿を受け取った。

「やっぱ締めは焼きおにぎりでしょ♪」

中には焼きそばだとかチャーハンだとかバウムクーヘンを作って食べるって人も居るけど、わたしはこの国で学んだ焼きおにぎりを推すね。醤油だったり味噌だったりと気分で違うけど、どっちも美味しいんだよね。わたしの分として残されてたお肉や野菜と一緒に焼きおにぎりを食べて、「満腹～、満足じゃ～♪」ごちそうさまをした。

「この後は肝試しだったよね」

「うん。男女一組のペアで・・・」

「本音を言えば、このメンバーで行きたかったよね」

「まぁ、相手の男の子はクラスの子だからそんなに緊張することないよ」

食器などの片付けを終えて、コテージに戻りながらそんな話をする。

肝試しは大歓迎なんだけど出発前にくじ引きで決めるって話だし、ペアの相手を選べないのが残念ルール。これでルシルとペアになる可能性が限りなく低くなったわけ。次点でなのはだったけど、女子同士のペアは作られないからこれもアウト。一体どうしろと？

「ま、とにかく楽しんだもの勝ちってことでしょ」

「ですわね。肝試し・・・。心霊系はわたくしの姉の所為で耐性がありますから、結構楽しみですわ」

「あー、結さんかぁ～。わたしも通院してた頃に何度かそうゆう系の話聞かされたな～」

「嫌な思いをさせてしまっていたのであれば、姉に代わって謝りますわ」

「別に嫌ってわけやなかったよ？　あの頃はルシル君に会ってもなくて、進んで治療しようって気持ちもあらへんかった。死ぬんなら別にそれでも構わへんなんて思うてたくらいや。結さんは、そんなわたしに死ぬことの怖さと悲しさを教えてくれてたんやな、ってルシル君に会ってから解ったんよ。そやから嫌でもなかったし迷惑でもなかったよ」

そう言って笑うはやて。ルシルやシグナム達と出会う前は生きることに無気力だったって聞いてはいた。けど初めて聞かされた咲耶は「死だなんてそんな・・・！」軽くショックを受けてるみたい。

「もちろん今はそんなこと考えてへんよ。みんなとこうしておられることが幸せやからな♪」

「それは結構ですわ♪」

そしてわたし達はそれぞれのコテージに帰る。海水浴前に先生に預けてた鍵を使って屋内に入ったんだけど、「あれ？　こんな紙あったっかな？」すずかがキッチンから1枚のプリントを持って来た。ソファに座ってるわたしとフェイトとはやての間にある脚長丸テーブルの上に置いた。

「怪談が書かれてるんやね。・・・この付近は昔、古戦場やってらしくて・・・出るんやって～、お～ば～け～♪」

はやてが幽霊の真似をしたから「きゃぁぁぁ～～～♪」わたしとすずかとフェイトは悲鳴を上げた。フェイトが「先生が肝試しの為の前準備で用意したのかな？」そう言ってプリントに書かれた怪談を読み始めた。海水浴中、先生が鍵を持ってたし、コテージに入れるのは先生くらいだ。

「雰囲気作りってわけやね」

「なのは、大丈夫かな・・・？」

「あー、なのはってまだ幽霊ダメなんだっけ・・・？」

「幽霊に関しては克服してきてるみたいだけど、突然驚かされたり

するのはまだダメみたい」

「なのはちゃんとペアになる子も怖がりだったら大変なことになりそうだよね」

そんな笑い話をして、時間になったことで集合場所であるコテージ村の中央にある広場に集まる。そしてくじ引きでペアを決めるんだけど・・・

「ルシルかよ！！」

「？？？」

その結果、なのはのペアはなんとルシルになっちゃうのだった。なにこれ・・・。ちなみにわたしのペアは、通称メガネ君の金山夏彦くんだった。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒ルシリオン†††

臨海学校初日のイベント夜の部・肝試し。俺はなのはとペアを組むことになったわけだが。はやてはともかくとしてシャルからの視線が少し痛い。

「ルシル君。よろしくね」

「ああ、よろしく頼むよ。コースを確認しておこうか」

「うんっ」

肝試しは男女ペアで行う。渡されたのは懐中電灯1つとコースが記されたプリント1枚、そして目的地に置いて来るための数字が書かれたメダル1枚。林道を通り、祠にメダルを置いて、代わりにメダルと同じ数字が書かれた札を持って帰って来る、というルールだ。それから行く順番を決め、俺となのはは12番目にスタートすることになった。はやて達が次々とスタートし、チーム海鳴では最後の俺たちが「はーい、スタート～！」先生の合図でスタートする。

「行こう、なのは」

「う、うん。行こう」

俺を先頭に歩き出す。林道は整備されているおかげで転ぶようなことはないのは救いだ。なのはは少し怯えながら「大丈夫、ルシル君が居るし、大丈夫」お経のようにそう唱えながらついて来る。

「そう怯えることはないよ。肝試しと言っても脅かし役は居ないんだから、そう気を張らずに――・・・っ！？」

視線を感じたため、話を切って周囲を見回すと「え？　え、なに・・・？」なのはがオドオドして同じように周囲を見回す。

「ねえ、ルシル君・・・？」

「あぁ、いや、誰かに見られていたような気がして・・・」

「にゃっ！？　そ、そういうのは無しだよルシル君！」

本格的に怯えて始めてしまったなのは。俺は「君ほどの魔導師がどうしてそんなに幽霊とかに怖れを抱くんだ・・・？」なのはの怖がりように少し呆れる。彼女が怖がりだというのは先の次元世界から知っているが、常々それが不思議でならなかった。一線級の砲撃魔導師としての実力、意識、精神。どれをとっても優秀なのに。

「ロストロギアや神器の方がよっぽど得体の知れない存在だと言うに」

「ロストロギアや神器は魔法でバーン！出来るけど、幽霊やお化けはどうすることも出来ないからだよ！」

そう力説するなのはがちょっと可愛いと思ったのは秘密だ。そんななのはに「そういう複製術式もあることはあるんだがな」そう伝える。プレンセレリウス――レンの霊媒能力はもちろん、これまでの契約の中で何度もそう言った場面に出くわし、複製してきた。

「じゃあ！・・・・あ」

「ごめんな。今の俺には複製能力は使えないから」

未だに創世結界も使えないし、左目の視力の回復の兆しも一向に見えないという、とんでもないポンコツっぷりだ。ただ「なのはもそうだが、仲間は何があっても守り抜く」そう言って微笑みかける。

「ま、そういうわけでポンコツなりにも頑張ってお守りするので、ある程度はご安心を♪」

「にゃはは。ポンコツだなんて思ってないよ。だからお願いします♪」

俺となのはは改めて林道を進み、目的の祠を目指すんだが「っ！」また視線を感じた。今度は「ルシル君、今・・・！」なのはも感じたようだ。そしてそれは起こった。付近一帯に「結界が・・・！」が張られたのが。

「ルシル君！　これアリサちゃん達が・・・！？」

「いや、違う！　この魔力は彼女たちのものじゃない、第三者にものだ！」

知らない魔力による結界。神秘は感じないため神器によるものでもない。さらに言えばミッド式でもベルカ式でもない結界だ。俺は「なのは！」の名を呼び、"エヴェストルム"を起動させて防護服へと変身する。なのはも「うん！　レイジングハート、セットアップ！」防護服姿へと変身した。

『こちらアリサ！　この結界張ったの誰よ！』

『こちらすずか！　私じゃないよ！』

『わたしとフェイトも同じく！』

『わたしもや！』

『わたしも！』

アリサ達から念話が入り、『こちらなのは！　ルシル君によると第三者によるものだって！』それになのはが応じ、俺も『ミッド式でもベルカ式でもない。警戒！』みんなに警告する。はやてからの『神器なんか！？』の問いに『いや違うな、神秘を感じない』その可能性を否定した。

『とにかく元凶を抑えよう。先程から俺もなのはも視線を感じている。人の目によるものじゃないからおそらくサーチャーだ』

『違法魔導師ってわけね』

『オッケー！』

『索敵に入るね！　スノーホワイト、お願い！』

すずかが索敵に入ろうとしたところで「『にゃぁぁぁぁ！』」なのはの悲鳴が頭の中を貫いて行った。しかも俺だけなのはの口頭での悲鳴も追加されていることもあってキィーンと耳鳴りがする。

「いっつ・・・。どうした、なのは！」

「あ、あれ・・・！」

なのはの指差す方には、何とたとえれば良いのか・・・そう、スーパーマ〇オに登場するテレサのような奴が3体と宙に浮いていた。テレサとの違いは、単眼で、口も手もないことだ。それがなのはの恐怖心に触れてしまったようだ。

『ちょっ、何があったのよ！』

『『なのは！？』』

『な、なにか出た！　テレサ、一つ目のテレサみたいなのが！』

アリサとフェイトとアリシアに答えるより先に、シャルから俺たちの前に現れたテレサもどきと同じ奴が現れたと念話が入った。さらに『わたしのところにもや！』はやての方にも現れたらしい。

『こちらも同じだ。・・・まずは、変に攻撃をせずに合流することを優先しよう。信号弾を上げるからそれを目印に集まってくれ』

『『『『うん！』』』』『ええ！』

なのはの前に躍り出ながら魔力球を1基作り出し、空に向かって放り投げる。そして魔力球が木々の上に到着したのを見計らって炸裂させる。それを見上げていると、「ルシル君、来た！」テレサもどきがこちらに向かって飛んで来た。

「空に上がるぞ！」

――我を運べ、汝の蒼翼（アンピエル）（コード）――

「あ、うん！」

俺は背より１２枚の剣翼を展開させ、地を蹴って空に上がる。なのはも続けて空に上がると、テレサもどきは俺たちを追って来たのを確認すると、「なのは、ルシル！」アリサ達の姿を視認し、無事に合流。それとはやてとシャルの元にも出現したというテレサもどき、計６体も視認。

≪マスター！　一般市民が居ます！≫

≪おい、６人も居るぞ！≫

"レイジングハート"と"フレイムアイズ"からの報告に、「え・・・！？」はやて達みんなが耳を疑った。その中で俺はデジャヴを感じていた。そう。先の次元世界での"闇の書"事件においてのアリサとすずか。

「あっ、テレサ３体が降下！」

「ルシル！」

「仕方ない！　攻撃開始だ！　なのはとアリサは降下中の３体を！　フェイトとアリシアは俺と一緒にこちらに向かって来る６体を！」

正体が判らない今、下手に戦闘を仕掛けて痛いしっぺ返しを食らうのは避けたいんだが。ここで見逃すのはさすがに悪手だろう。

「行くわよ、フレイムアイズ！　バヨネットフォーム！」

≪おっしゃ！　フレイムバレット！≫

「バルディッシュ！　プラズマランサー！」

≪Ｆｉｒｅ　！≫

「フォーチュンドロップ、ラッキーシューターでよろしく♪」

≪シュートバレット・・・発射～～！≫

「レイジングハート！　久しぶりの実戦！　頑張ろうね！」

≪はい！　アクセルシューター！≫

「はやてとすずかはサポートを頼む！」

「了解や！」「うんっ！」

射線上にクラスメイトが居ないことを確認したうえで一斉に攻撃開始。まずは近接攻撃ではなく射撃系で様子見だ。テレサもどきは素早い動きでなのは達の攻撃を回避した。

「舞い降るは、汝の煌閃（マカティエル）・・・！」

「ブリューナク！」

「フローズンバレット！」

光槍２０本を展開、そして「ジャッジメント！」一斉射出。はやてとすずかも即座に魔力弾と氷結弾を発射。なのは達の攻撃を避けきった直後での追撃だ。テレサもどきも今度は避けきれずに直撃・・・しなかった。何故なら「すり抜けた！？」からだ。

「幻術・・・！？」

アリサがそう言うが、直感的に俺はそうじゃないと判断した。それを確認するために"エヴェストルム"を二剣一対のゲブラーフォルムにして「どれ・・！」迫り来ていたテレサもどきに突っ込み、右の"エヴェストルム"の斬撃をお見舞いする。回避行動を取られたが、その先を予測して左の一撃を打ち込んでやると・・・

「おっと・・・！」

「なっ・・・！」

「ルシル君！！」

「エヴェストルムが・・・」

「ひしゃげた・・・！？」

「触れたらアウトっぽいよ、コイツら！」

左手に携えていた"エヴェストルム"の穂がグシャっと、捻り潰されてしまった。ちょっぴり後悔。はやて達の元に戻ると"エヴェストルム"を待機モードの指環へ戻し、閃光系魔力で創り出した槍を両手に「物理攻撃は控えた方が良いな」そう伝える。俺たちに向かって来ているままのテレサもどきに触れないように散開した直後・・・

「うわぁぁぁぁぁ！」

「誰か、誰かぁぁぁ～～～～！」

「きゃあああああ！」

「な、なんだよこいつら！！」

「どなたかいらっしゃいませんか！」

「やだ、やだ、やだぁぁぁぁ！

そんな悲鳴と共にバキバキと木々が大きな音を立てて倒れて行くのが見て取れた。どうやら「下にも・・・！」居るようだ。しかもすごい聞き憶えのあるクラスメイトの声に俺たちは顔を見合わせる。

はやてが「ルシル君・・・！」俺の名を呼ぶと、他のみんなも俺を見る。

「まずは一般市民・・・というか、生徒たちの安全を最優先だ！テレサもどきは俺がなんとかする！」

魔力炉（システム）の稼働率を引き上げて魔術師化する。魔法じゃダメなら魔術でどうだ。

――舞（コード）い降るは、汝（マカティエル）の煌閃――

両手に持つ魔力槍の他に周囲に１８本と展開して「ジャッジメント！」段階的に射出する。緩やかな動きで回避するテレサもどきの回避先を予測したところに第二波を射出して直撃させる。すると今度は「よしっ！」掻き消すことが出来た。神器によるものじゃないが、神秘は通用する存在。

「（結構本気でオバケだったりするのか・・・？）俺とアリシアでテレサもどきを空から撃つ。はやて達は"ドラウプニル"を装着したうえで６人の保護を最優先！」

「「「「「「了解！」」」」」」

はやて達が６人のクラスメイトの方へ向かって急降下。６人、声からして咲耶と依姫（よりひめ）と天音（あまね）、それに亮介と天守と護で間違いない。この共通点はきっと俺か、シャルロッテの２人にしか解らないだろうな。昔の契約でこの６人の前世と出会い、共に高校生活を満喫し、

そして神の使いと俺とシャルロッテの戦いを見られたことで、俺たちの正体を明かした数少ない親友だ。それが原因なのかは判らないが、おそらく・・・だ。

「アリシア、君もドラウプニルを装着してくれ！」

「ん！　ブレイブスナイパー、用意！」

空色の輝くミッド魔法陣の足場フローターフィールドの立つアリシアは、２挺の小型拳銃を宝石のような待機モードに戻し、キャンディポット型のデバイス・"フォーチュンドロップ"に返還。そしてまた新たな待機モードのデバイスが口から飛び出し、それがシモノフＰＴＲＳ１９４１をモデルにした"ブレイブスナイパー"へと変形。

「地上ターゲットよろしく！」

「了解！　シューティングスター！」

そして俺は「お前らは俺が相手だ。アクセルシューター」複製ではなく俺の魔法として作り上げたシューターを発動。その証明として桜色ではなくサファイアブルーに輝いている。空に居る残りのテレサもどきに向かって「シュート！」５０発の魔力弾を一斉発射。アリシアもスコープを覗き込みながら高速射撃弾を連射していく。俺は、回避すら意味のない飽和攻撃で殲滅してやった。

『こちらなのは！　護君と合流！』

『アリサよ。咲耶と合流したわ』

『すずかです。天守くんと合流したよ！』

『シャルだけど。亮介くんと合流！』

『こちらフェイト。依姫と合流！』

『こちらはやて！　天音ちゃんと合流や！』

『（やっぱりか）了解。そのまま合流してくれ。俺は原因を探る』

テレサもどきの発生地点を探って元凶を見つけないと終わらない。今も「うわ、うわ、わらわら湧いて来てるよ！」魔力弾を撃ち続けながらアリシアがそう言う。はやて達もそれぞれ迎撃していることで煙が上がっている。

「これはもう亮介たちを誤魔化せないよな」

「あー、うん、これは無理かな～」

アリシアと一緒に苦笑する。それはともかく「見つけた！」テレサもどきが出現している場所を確認。アリシアに「行ってくる」断りを入れて、俺は元凶へ向かって急降下する。周囲にシューター２０発を展開したまま突っ込んでいく。そして「あそこか・・・！」テレサもどきが出現したその瞬間を見届けた。どうやら亀裂の中から

這い出て来ているようだ。

「ジャッジメント！」

シューター２０発をテレサもどきに放って直撃させ、クリアになった穴の上へ。人ひとりがギリギリ入れる亀裂の中に侵入し「これが・・・元凶」を確認した。亀裂の底には白骨化している死体があり、ちょうど胸のところに１ｍ半ほどの棒状の物が突き刺さっている。

「ん？・・・コレ、デバイスか・・・！？」

錆だらけで気付けなかったが、よく見れば杖型のデバイスだった。となればこの白骨死体は違法渡航者になるわけだ。ふと、肋骨の中に何かがキラリと光った。紫色の宝石が付いた指輪だ。その指輪からテレサもどきが生まれようとしている。

「これはあなたの無念によって生み出された物なんですか・・・？」

レンの霊媒能力があればこの亡骸の魂と会話できるんだが、生憎と今は使えない。ただ「もう大丈夫。あなたをちゃんと見つけました」そう伝える。すると生まれようとしていたテレサもどきが消失した。

『こちらルシル。テレサもどきの原因の視認と停止を確認』

『わたしらの目の前に居ったテレサもどきも消失したよ』

『結界も消失してく』

『ルシル。あたし達は防護服を解除して待つわ、あんたも急いで戻って来て』

『了解』

とりあえず指輪を回収する。創世結界にアクセス出来ないが、ロストロギアの情報は頭に叩き込んである。ゆえにこの指輪の正体もすぐに判った。ロストロギア・ヴィシャスリング。確か自分の思念を不干渉の力場に変える、というものだったか。レンの能力っぽいが、アイツの能力の効果を持った神器を造るのは結局不可能とされたんだよな。それを思えば、コイツはなかなかにすごいよな。まぁ、魔術師の敵ではなかったが。

「とにかく戻らないとな」

それにクロノにも連絡を入れておく必要がある。管理外世界での調査は基本的に執務官が担当することになっている。フェイトとアリシアは二度目の試験も落ちたし（これは先の次元世界と同じだな）、操作が可能なのは今のところクロノだけだ。

「さぁ、亮介たちにどう伝えようか」

それが悩みどころだった。まぁ、なんとかなるか。

ちなみにその後わかったことだが、死体の身元は８年前に行方不明になった２人一組の違法魔導師の片割れで、ロストロギアのバイヤーと言う女だった。輸送中のヴィシャシュリングを強奪した後、完

全に行方をくらませたと言うらしいが・・・。ま、今となっては闇の中だ。

Ｅｐｉｃｏ?確率の支配者～Ｄｉｃｅ　ｏｆ　Ｃｏｎｔｒｏｌｌｅｒ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

夏休みは何事もなく無事に終わっての２学期の始業式。今日は式だけの午前授業で、式が終わればそのまま本局にお仕事へ、とゆうスケジュールや。家族や友達、そんで同僚でもあるルシル君やすずかちゃん達と一緒に昇降口に入ると「ごきげんよう、みなさん」咲耶ちゃんが、いつもビシッと整えてるドリルポニーテールを揺らして挨拶してくれた。わたしらも「おはよう！」挨拶を返して、一緒に校舎に上がる。

「アリシアさん、シャルさん。宿題は終わりまして？」

「もちろん！」

「小学生最後の夏休みだしね～」

えっへん、って胸を張るアリシアちゃんとシャルちゃんやけど「何を偉そうに言うかなこの２人は」アリサちゃんが呆れながら鼻を鳴らすと、「それはどういうことですの・・・？」咲耶ちゃんは喧嘩腰やなくて、普通にアリサちゃんに訊き返した。夏休み前の臨海学校を機にようやくホンマに仲が良くなったとゆうか、以前のように会えば衝突なんてことは完全になくなった。

「シャルとアリシアは、俺たちの宿題を写したんだよ」

「「えへへ～」」

「読書感想文は昨日一日で済ませてたよね～？」

「「あはは～・・・、はぁ」」

しょんぼりするシャルちゃんとアリシアちゃん。咲耶ちゃんも「なるほどですわ」呆れた。小学校最後の夏休みやってことで散々遊んで、その結果が夏休み終盤恒例の大慌てってわけや。

「おはよう」「おはよ～！」

後ろから挨拶を受けたわたしらは振り返って、挨拶をくれたクラスメイトの依姫ちゃんと天音ちゃんに「おはよう！」挨拶を返した。

「ねえねえ、今日も魔法の仕事？」

アリサちゃんやフェイトちゃん、アリシアちゃんとおんなじ綺麗な金髪をした天音ちゃんがそう訊いてきた。すると「コラ！」依姫ちゃんと、「他の方に聞かれたらどうしますの！？」咲耶ちゃんが天音ちゃんを叱った。

臨海学校先で発動したロストロギアによって、わたしらが魔法使いやってことが咲耶ちゃん達に知られてしもうたんや。

・―・―・回想や・―・―・

肝試しが終わって、臨海学校初日の最後のイベント・キャンプファイアと花火。焚火を囲んで踊ったり歌ったりした後は、それぞれ自由に花火をすることになってる。他のクラスメイトが花火を楽しんでる中、「約束通り、お話ししてもらいましょうか」咲耶ちゃんがわたしらチーム海鳴を見た。
咲耶ちゃん、依姫ちゃん、天音ちゃん、亮介くん、護くん、天守くんの6人を護るためにわたしらは魔法を使って、ロストロギアによって作られたテレサもどき（ルシル君命名）を迎撃したわけや。そんで今、その事について説明するところ。

「わたし達は、魔法を使って、魔法による事件・事故を解決する時空管理局って組織に属する魔法使いなの」

シャルちゃんが管理局についてかなり大雑把に伝える。解決する手段も事件・事故も魔法が全てやないけど、そんな詳しく話さへんくてもええやろうし、わたしらがなんなのかを判ってもらえれば今はええ。

「魔法・・・。時空管理局・・・。にわかには信じられませんけど、あの炎の剣や弾丸を見てしまった以上は信じるしかありませんわね」

「そんな組織、聞いたこともないけど・・・。まぁ、魔法なんてファンタジー自体が認知されてないから当然なんだろうけど」

「それで、シャルさん達は時空管理局ってところの魔法使いだってことだけど、あの幽霊みたいなのが、魔法による事件の1つってこ

とかな？」

咲耶ちゃんと依姫ちゃんが唸って、護くんからの問いに「そうやよ」わたしが答えた。ロストロギアってゆう、ほとんどが今は滅んでしもうてる超文明の世界が生み出した遺失物の1つって伝えると、「滅んだ世界・・・ってどういうこと？」天音ちゃんが首を傾げた。

「次元世界って言って、人類が住む星はこの地球だけじゃないんだ。たくさんの人が住む星がある。文化もそれぞれで、魔法文化を持ってる星もあれば、地球みたく魔法文化の無い星もある」

「ちなみにわたしとフェイトとシャル、それとルシルは、この地球出身じゃないんだよ。魔法文化のある世界出身♪」

フェイトちゃんとアリシアちゃんの発言に「えええ！？」咲耶ちゃん達は驚きを見せた。まぁ、それが普通のリアクションやろうね。地球以外に人が住む星があるってこともそうやけど、知り合いが異世界出身なんて誰でも驚くことやと思うわ。

「マジか！　ルシル達って宇宙人なんか！」

「火星人！？　それとも木星人！？　あ、金星人か！」

「ある意味宇宙人だと言ってもおかしくはないけど、俺やシャル達からすれば、亮介たちも宇宙人だぞ。ちなみに俺はフェティギア、シャルとフェイトとアリシアはミッドチルダという世界の出身だ」

テンションが上がる亮介くんと天守くんにそう返すルシル君。咲耶ちゃんは「あの、どうして魔法文化の無い地球生まれのはやてさん達が魔法使いに？」そう訊いてきたから、なのはちゃんはとても珍しい先天性魔導師の才能があって、すずかちゃんとアリサちゃんは願いを叶えるロストロギアの力で、わたしもまたロストロギアの力で魔導師になったことを話した。

「もしかするとシグナムさん達も別の世界の方なのですか？」

「うん、そうやよ。ベルカって世界の生まれや」

さすがに魔法生命体やんて言えへんからそう答えとく。咲耶ちゃん達も授業参観でシグナム達と知り合うてるし、わたしもシグナム達を大切な家族って紹介してるしな。魔法生命体やなんて野暮や。

「1つ気になったんだけど。局っていうことはちゃんとした組織なのよねやっぱり。となると、なのは達ってひょっとして公務員だったりするの？」

依姫ちゃんに「まぁ一応は」ってわたしらは答える。今はもう役職も階級も頂いた正式な局員として登録してるしな。わたしらは自分の役職と階級を咲耶ちゃん達に伝えた。

「捜査官とか陸士とか、警察と軍隊を混ぜ合わせたような組織なんだな管理局って」

「それで合ってるよ。次元世界の秩序と平和を護る組織だからね」

「ですけどみなさんはまだ１２歳。ですのにもう公務員として働ているなんて。労働基準法はないのですか？」

「あー、うん、正直言ってね、人手不足なんだよ管理局って。だからやる気があるなら子供でも勤めることが出来るの。なのは達も、自分の意思と覚悟で管理局に入ることを決めてくれた」

シャルちゃんがわたしらを見たから「うんっ」力強く頷き返した。何かを助けたり救えたりする力を持っているなら、それを困っている人たちの為に使いたい。管理局に入ってこの魔法をみんなの為に役立てたい。その気持ちのうえで管理局務めを選んだことを伝える。

「・・・何ヵ月も入院するようなことになってもその気持ちは変わらないんだ・・・」

さっきから妙に鋭い依姫ちゃんがルシル君となのはちゃんを見てそう言うと、咲耶ちゃん達が「え・・・！？」目を見張った。護くんが「本当なの？」って訊くとなのはちゃんとルシル君は頷いて、怪我を負った経緯をみんなに話した。ルシル君は犯罪者シュヴァリエルとの戦闘で、なのはちゃんはロストロギア（ホンマは神器やけど）との戦闘で。

「事故じゃなかったのかよ！」

「ロストロギアや犯罪者の所為で半年以上も入院って、どんなに危ないことやってんの！」

「やめた方が良いって！」

「いやですわよ！　そんな・・・もし最悪な事になるようなこと・・・！」

亮介くん、天音ちゃん、天守くん、咲耶ちゃんが立ち上がった。近くに居った他のクラスメイトの視線が集まった。依姫ちゃんが「何でもないから気にしないで」って言うとその視線もすぐに外れた。

「じゃ、じゃあルシルの目も、怪我の後遺症なんか・・・？」

「・・・ああ。目が悪くなったって言っていたけど、完全に失明してる。一種の呪いのようなもので、術者に解除させれば元に戻るはずなんだ。このモノクルは、それまでの間に少しでも呪いを弱めておくための道具だ」

魔法に加えて呪いなんて単語も出て来て、ホンマに心配そうにしてくれる咲耶ちゃん達。

「心配してくれてありがとう、みんな。だけど、それでもやっぱりやめるつもりはないんだ」

「ああ。確かに危険な目に遭う、命懸けの現場だってこれからも多くあるだろうが、そんな危険な目に遭うのは俺たちだけじゃない、何の罪もない一般市民も巻き込まれてる可能性がある。それだけは阻止しないといけないんだ。俺たち力を持つ者が。だから・・・退

けない」

なのはちゃんとルシル君がそう言うと咲耶ちゃん達は押し黙った。ルシル君となのはちゃんの眼に宿る強い光を見たからや。そんでわたしらの顔を見た時、諦め顔になった。わたしらも説得しようと思うたんやろうけど、わたしらの目にももちろん宿ってる光を見て・・・。

「決意の固さは理解できました。ですからやめてくださいとはもう申しません。ですが、無理だけはしないでください。どうか・・・」

そう懇願する咲耶ちゃんにわたしらは頷くだけで応えた。それからわたしらが困った時は何か力になるって言うてくれたから、もしチーム海鳴メンバーが重なって学校を休んでしもうた時のノート写しとかをお願いした。

・―・―・終わりや・―・―・

咲耶ちゃんの両手で口を塞がれた天音ちゃんがもごもごってなんか言うてるけど、聞きとれへんなぁ。すると「ひゃあん！？」咲耶ちゃんが変な声を上げて慌てて天音ちゃんの口から手を離した。

「な、な、舐めるとは何事ですか！」

「だって苦しかったから！」

「もう、もう・・・！」

ちょう涙目になってしもうてる咲耶ちゃんがポケットからハンカチを取り出そうとするより早く「ほら、咲耶。使ってくれ」ルシル君がハンカチを差し出した。

「えっと・・・ですが・・・」

「構わないよ。まだ別のを持ってる♪」

ルシル君は逆のポケットから、シャマルがアイロンがけしてくれてるもう1枚のハンカチを取り出した。それを見た依姫ちゃんと天音ちゃんが「さすがお婿にしたナンバー1」拍手すると、「そこの2人、うるさいぞ～」ルシル君はそう言いつつ咲耶ちゃんの手にハンカチを被せた。

「ありがとうございます。洗って返しますから、今日はこのまま預からせてください」

「あー、いいよ。ここで返してもらっても」

「ん？　ルシル君はわたしの唾液が付いたハンカチを持ち返って何するのぉ～？」

「お黙り」

「きゃん！？　依姫がお尻蹴って来たぁ～！」

魔法を通じてもっと仲良くなれた咲耶ちゃん達とわいわい騒ぎながら、今日もまた楽しい学校生活が始まる。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒イリス†††

特別技能捜査課の仕事としてわたしとルミナはペアを組んで、第３管理世界ヴァイゼンの首都防衛隊と一緒に、広域指名手配を受けてた次元犯罪組織をねじ伏せたばかり。特捜課の課長ガアプ一佐に報告を済ませた後、わたし達は隊員輸送車に乗って地上本部へ戻るその途中で・・・

『こちら地上本部・通信指令室。東部アリエース地方にて検挙を受けた違法賭博場より逃走してきた被疑者１名が首都に入りました。これより追跡は首都防衛隊に任されます。至急、現場に急行してください』

そう通信が入った。先頭を行く指揮車に乗る防衛隊長から『フライハイト特別捜査官、マルスヴァローグ特別捜査官。申し訳ないが・・・』わたし達宛に通信が入った。わたしとルミナは顔を見合わせて「お手伝いさせてください」捜査協力をこちらから願い出た。

『協力感謝します。２号車と３号車は護送車と共に本部へ。指揮車と１号車は現場へ向かう』

『被疑者は逃走途中にカージャックをした模様で、運転していた車の持ち主を降ろした後、セカンドアベニュー・Ｔ８区画へ進行中。武器を所持しているとの報告も入っており、十分警戒して任務に当

たってください』

『了解！』

わたし達の乗る1号車と指揮車は進路変更をして、逃走車が入り込んだとされるセカンドアベニュー・T8区画へと向かう。それから少しして『逃走車両を確認した』指揮車の隊長からの指示にわたし達はそれぞれグッとデバイスを握る手に力を込める。

そして、逃走車両に停止するよう呼びかける隊長の勧告が耳に入る。その停止勧告が続けられること1分。とうとう『こちら1号車。逃走車両に体当たりをし、力ずくで止めます！』わたし達が乗ってる1号車のドライバーが指揮車にそう伝えた。なんて力ずくな方法なんだろう。ちょっとビックリ。

「私たちが出て止めたい、って提案するのはやっぱりまずいのかな・・・？」

「あー、やっぱりダメなんじゃない？」

ルミナの提案にそう答える。わたし達の立場は提案できるようなものじゃないし。ルミナが「だよね～」って苦笑していると、「いやいや、それ良いですって！」若い防衛隊員の1人から力強い賛成が。

「「え・・・？」」

「車で体当たりするより、マルスヴァローグ空曹長とフライハイト一士が対処する方が被害も大きくならないかな～っと」

「確かに車の体当たりは双方の車体にダメージがあり、尚且つ向こうの車は盗難車。可能な限り損害を与えない方法で止めるべきだと、私も考えている」

分隊長のおじさんが渋い声で、その隊員の意見に賛成した。ルミナが「では、私たちから提案するのは憚れますので・・・」隊長にこの案を通してもらえるようにお願いする。分隊長さんは隊長に通信を繋げて、わたしとルミナに逃走車両を止めてもらおうって提案してくれた。その結果・・・

『マルスヴァローグ空曹長、フライハイト一士、お願い出来るか？
飛行許可はこちらから申請する』

「「お任せを！」」

輸送車の後部の扉が開けられる。そこから出て車体の屋根に上る。わたしは飛行魔法・真紅の両翼ルビーン・フリューゲルを展開。

「アルテルミナス・マルスヴァローグ！」

「イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト！」

「「参ります！」」

そしてルミナと一緒に輸送車の屋根から飛び立って、先頭を爆走する逃走車両（ハマーみたいな車種だね）へ向かう。徐々に距離を詰

めてくそんな中で「お？」あることに気付いた。ルミナも「イリス。これって・・・！」気付いたみたい。この感じは間違いなく「神秘・・・！」だね。

「こちらフライハイト一士！　逃走犯はリンドヴルムのロストロギアを所持している模様！　申し訳ないですが、この瞬間を以って機動一課員として本事件を担当します！」

『りょ、了解！』

リンドヴルムのロストロギアっていう括りになると、どんな事件でも機動一課主導となる。それほどまでにリンドヴルムが管理世界に影響を与えちゃったってことなんだろうけど。

「さて、問題はどんな神器かってことなんだけど・・・」

「武器を持ってるっていうことだし、やっぱりヤバい神器なんだろうと思うよ」

とりあえず、偶然にもヴァイゼンに査察官として来てるはずのルシルに「シャルだけど。ルシル、今、時間とか大丈夫？」念話を送る。

『シャル？　あ、ああ、問題ないよ。何か困り事か？　ま、ルミナと一緒だから早々困る事なんてないだろうけどな・・・って、神器か？』

「正解！　今さ、違法賭博場から逃げたっていう被疑者を追ってる

んだけど、どうやら武器を持ってるってことみたいでね。もしかすると武器型の神器なんかじゃないかなって思って」

『どんな物かは視認できるか？　剣とか銃とか』

わたしとルミナは飛行速度を上げて逃走車両の両脇に陣取る。そして左右からフロントドアの窓をこんこんとノック。逃走犯は右左のフロントドアの外を飛ぶわたし達の姿にギョッとした。性別は男性。歳は５０代くらいかな。予想以上におじさんでビックリしたよ。白髪混じりでちょこっとやつれてる。ひょっとしたら見た目以上に若いかも・・・？

「子供の局員・・・！？　まさか、あの有名な・・・！　ひぃ・・・！？　か、神さま・・・！」

わたしとルミナの姿を見たその人は血相を変えた。子供の局員。１５歳以下の局員は限りなく少ない。そんな中で有名なわたし達チーム海鳴。子供の局員は自然と限られてくるからね。自然とわたし達だって思い至るのも仕方ない。

「有名人かぁ～」

「ルシルとはやて、それにアリサ、ファンだって人にサインをお願いされたって」

「でもそれってチーム海鳴としてなのよね？　別にサインが欲しいわけじゃないけどなんか羨ましい」

その男の人は運転席と助手席の間にあるコンソールボックスに手を伸ばして、普通のサイズより一回り大きいクリスタルのようなサイコロを振った。明らかにおかしな所作。ブォン！と大きな音を立てて速度を上げた車。

「サイコロっぽいのを突然振り出したんだけど、それって何か意味あるのかな？」

「半透明なクリスタル状のサイコロよ」

『サイコロ・・・。サイコロ・・・』

ルシルにしては珍しくすぐには神器の正体にたどり着けないみたい。ううん、もしかするとあのサイコロは神器じゃないのかも。とにかくこのまま逃がすわけにはいかないから、わたしは翼を大きく羽ばたかせて逃走車を追跡する。

「ちょっ、アイツ、デパートの中に突っ込んでった！？」

「隊長！　救急車両の手配をお願いします！」

『判った！　被疑者の方はよろしく頼む！』

「「了解です！」」

車が突っ込んだデパートへと突入する。建物の中はもうメチャクチ

ャで、ベンチやら観葉植物やらがボロボロだ。わたしは「負傷者は居ませんか！？」そう声を掛ける。返ってくるのは「無事です！」の声。

「すぐに救急隊が来ますので安心してください！」

デパートの中を飛ぶんじゃなくて走りながら、店内に声を掛けながら突っ切る。その結果、突然暴走車が突っ込んで来たのに、なんと軽傷者1人すら出ていなかったってことが判った。

「マジ・・・？」

「どんな偶然と奇跡が起きればそんな都合の良いことが起きるわけ？」

『偶然と奇跡・・・。あっ！　くそ、何ですぐに思い出せなかった！』

ルシルと念話を繋げたままだったのを忘れてた。ううん、今はそんなことより「神器の正体が判ったの！？」だ。デパートの外に出てもまだ暴走してる車を追いかけ続けるんだけど、あれだけの速度で物損も人身も起こさないなんて・・・って、さっきと同じこと思ってる・・・。

『ああ。印象に残っていない神器だったからすっかり記憶の底に沈んでいた。パリ・デ・パスカル。確率操作を行える神器だ』

「「確率操作・・・！？」」

『ああ。自分と対象の確率を反転させるんだ。どんなに不利な状況でも常に自分が有利になる確率を引き寄せる効果を持っている。現場中継を同僚たちと観ているが、正しく効果が発揮されているな。推測だが、高確率で市民を撥ねるという結果を、高確率で撥ねないという結果に反転しているんだろう』

「ある種、最強の神器じゃないソレ・・・！」

耳を疑ったよ。だってそれって「つまりさ。確実に当たる攻撃も、絶対に当たらない攻撃になるんでしょ？」そういうわけだもん。戦闘で使われたら、勝てる確率が負ける確率に変更される。それはさすがに反則だよ。

「ああ。結果の確率反転だ。当たる確率が高い結果を、当たらない確率の結果に反転させる。戦闘に持ち込まれると厄介だが、記録には残っていないからなかなか出て来なかった」

「それでルシル。攻略法は！？」

『パリ・デ・パスカルの所有者との戦闘は、常にこちらが不利になるという圧倒的なディスアドバンテージを負うことになるわけだ。しかし、だからと言って絶対にこちらが負けるという結果にはならない。ちゃんと攻略法がある』

「それを早く教えてってば！」

逃走車はなおも暴走してる。だけど決して人は撥ねないし、車が潰

れるようなダメージが起きるほどの物損事故も起こさない。それでも被害が出てることに変わりはないんだから、さっさと止めないといけない。

「なんとなくだけど攻略法わかっちゃった！　ルシル、その攻略法ってかなり危険だったりする？」

『・・・ああ。俺がその現場に行ければその役を買って出るんだが、そこに行けるまではあと1時間は掛かりそうなんだ。それまで待っていてくれ・・・なんて言えないしな』

「大丈夫、私がやるから。攻略には神秘は必要ないみたいだしね」

『ああ。パリ・デ・パスカルには防御機構は無いからな。確率反転だけの神器だ』

ルミナが嬉しそうにほくそ笑んだ。ちょっと、ムッとなるわたし。わたしも必死に頭を働かせる。わたし達の勝利確率が、神器の能力によって敗北確率に反転する。反転しない方法。そんなものあるのかなぁ・・・。

「（確率を反転させない方法・・・。上も下もない、平等の・・・）あっ！」

「イリスも判ったようで何より」

『さすがというか、やはり、だな』

「ありがと♪　でもこの攻略法ってかなり難しいよ。５０／５０の確率で仕掛けないといけないなんて」

そう。それが"パリ・デ・パスカル"の唯一の攻略法。確率を５０％にした中で逃走犯を捕まえる。だけど攻撃やバインドも確実と思えるから発動するし、おそらく牽制も意味はないだろうし、どうすればいいんだろ。

「ルシル。少し思ったんだけど、たとえば絶対に外れる確率の攻撃をしたら、その確率も反転して絶対当たる・・・なんて・・・」

『それが出来たら苦労しないよ、ルミナ。アレは自分が不利な確率時にしか発動しないんだ。サイコロなんてギャンブルっぽいが神器だが、歴とした反則神器だよ、まったく』

「やっぱりか・・・」

とにかく攻略の手立ては出来た。あとはその方法を考えて、実行に移すだけ。ていうか、「どんだけ物壊してくわけ！？」気弱そうなオッサン（オジサンなんてもう呼んであげない）だったのに、行くとこ行くとこ標識やら信号やらをぶっ壊してく。

『きっとあれだろう。君たちが、自分が損害にかまけている間に逃げ切ろう、そう考えているんだろうな』

「させる・・・かぁぁぁぁぁぁ～～～～～～っ！」

「ちょっ、イリス！」

『馬鹿、突っ込むな！』

意地でも食いついて地べたに這わせてやる。逃走車が撥ね飛ばしてく街路樹や街灯が次々と襲ってくる。だって言うのに車は未だに快調に走り続けてる。それに、事故を回避すると言っても、間接的に事故に巻き込まれる車も増えて来てる。しかも「危ない！！」倒れ込む街灯の先に、小さな男の子と女の子、それに1匹のわんちゃんが。

「ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク！」

両翼を羽ばたかせて進路変更、飛行速度を跳ね上げさせて子供たちのもとへ。"キルシュブリューテ"のカートリッジをロードして「伏せて！」あの子たちを庇うように前に躍り出て、「せぇぇぇぇい！」倒れてきた街灯に連撃を叩き込んでバラバラに斬り裂いた。

「わぁ・・・！」

「きれ～な羽～・・・」

背後から呑気な声が。振り向いて「大丈夫！？　怪我はない！？」片膝立ちして、2人の体にかすり傷1つないか確認する。そこに「イリス！」ルミナが追いついて来た。わたしは「子供たちも、わんちゃんも怪我は無し！」2人やわんちゃんの頭を撫でながら報告。

「みたいね。君たち。お姉ちゃん達、悪い人を捕まえに行かないとダメなんだ。君たちだけで避難できるかな？」

「「うんっ！」」

「良い子たちだ。イリス、急ごう！」

「・・・うんっ！」

両翼を羽ばたかせて地を蹴って空へ上がると、「頑張ってねお姉ちゃん達！」男の子と女の子が大手を振って見送ってくれた。２人に手を振り返しながら、わたし達は逃走車の追跡を再開する。

『シャル。下手に手を出すと余計に被害が出る。手を出して良いのは確実に奴を止めることが出来る方法を得た時だ』

「解ってる！　でも・・・！」

『今、出撃をさせてもらえるように申請を出している。君たちは出来るだけ被害が出ないようにしてくれ』

ルシルがそんなことを言ってきた。わたしは「嫌！」拒絶した。何も出来ないから、何か出来るルシルに預けるなんて、そんなの悔しいし、それまでの時間を放置するわけにはいかない。

「そうね。・・・ルシル。作戦を１つ立てたから、少し聞いてほし

い」

ルミナが対"パリ・デ・パスカル"の作戦をルシルとわたしに提示した。攻略法は危険。ルミナとルシルが言っていたその意味を理解する。ルミナは「私がやる。いいよね？　イリス」そう言って、力強い目でわたしを見てきた。

「どうしたってもう止めること出来ないんでしょ・・・」

「もし私がここで倒れても、残り1つの神器回収に大きなデメリットは起きない。けど、あなたは違う。私と違って魔術師となれる、対神器に優れた戦力になれる。ならここでリタイアする可能性がある行為を行うのは私でいい」

「そんなこと・・・！」

「ま、リタイアするつもりなんてそもそもないけど。相手も単なる一般人みたいだし、そんなに出力を上げた魔力攻撃も出来ない。なら、私の防御力の方が上回るはずだしね」

ルミナはそう言って微笑んで、「どう？　これでいける？」ルシルに問う。ルシルは少し黙った後、『俺の知識にある攻略法もそれしかない』答えた。

「よし。じゃあ早速、行ってみようか！」

ルミナが速度を上げて先を行く。わたしも何度も翼を羽ばたかせて

追翔する。そして逃走車を視界内に収める距離にまで近付いたところで、「あとはよろしく、イリス」ルミナはさらに飛行速度を上げて、逃走車の直上にまで最接近。でもすぐには仕掛けない。場所がまだ人の密集地だからだ。でもすぐに、避難誘導が行われて人の往来が完全になくなった大通りに入ったところで・・・

「車は弁償するから許してよ、持ち主さん！」

魔力を纏わせた両拳を「せいっ！」車の直上で思いっきり打ち付けたルミナ。その瞬間、ルミナと車が青緑色に輝く魔力爆発に呑み込まれた。魔力爆発の直撃を食らった車は白煙の中から横転を繰り返しながら飛び出してきて、何回目かの横転のあと火花を散らしながら滑って・・・ようやく停車した。

これが作戦だった。わざわざ５０／５０を狙うのは難しい。だから１００／１００を目指した自爆作戦。自分と相手、共に１００％被害を受けるなら確率を反転させても意味はない。どっちにしろ同じ被害が待っているんだから。

「ルミナ！？　ルミナ！」

爆発地点に立ち上る白煙の中に居るだろう「無事！？　ルミナ！」に呼びかけ続ける。すると「けほっ。私より、被疑者を・・・！」髪の毛をぼさぼさにしたルミナがしっかりした足取りで歩き出てきた。ルミナは「かなりやり過ぎたけど、大丈夫かな・・・？」逃走犯の身の安全を気遣った。

「人身事故を起こさなかったとはいえ、ここまで派手に暴れたんだ

から骨の1本や2本くらいは覚悟してほしいものだよ」

そうしてわたしとルミナは、廃車確定と化してる車の中で完全に伸びてる被疑者を逮捕した。サイコロ型の神器"パリ・デ・パスカル"も無事に回収完了。けどま、もう少し穏便に、被害が大きくなる前に捕まえてほしかったって、首都防衛隊の隊長にちょこっと叱られたけどね。

Ｅｐｉｃｏ?崇拝者の復讐～Ｃｏｄｅ　３　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｄｒａｇｏｎ　ｈｅａｒｔ～

管理世界や無人世界などの衛星軌道上に設けられている軌道拘置所。そこは世界規模レベルで犯した次元犯罪者やテロリストの中でも、特に危険とされる手段・思想を持った人物とされた重犯罪者を収容するための施設だ。
その拘置所の一室に、１人の女性が収監されている。囚人服を着用しているその女性は、ぶつぶつと何かを呟いてばかりいた。

「シュヴァリエルさん・・・シュヴァリエルさん・・・シュヴァリエルさん・・・」

彼女が呟いていたのは、身寄りも家も家族も何も無いストリートチルドレンだった頃の自分を救ってくれた男の名。彼女は床に座り、壁に背を預け、涙を流しながら恩人の名前を呼び続けている。
彼女の名はエルマ。元ロストロギア専門蒐集組織リンドヴルムに所属していた違法魔導師だった女性。コードネームはハート３。ロストロギアの回収実行部隊の最精鋭部隊ドラゴンハートの実質的な副隊長だった。

「どうして・・・死んでしまったんですか・・・どうして・・・私を置いて逝ったんですか・・・どうして・・・どうして・・・」

チーム海鳴、古代遺失物管理部・機動一課、特別技能捜査課の三隊の協力によってリンドヴルムは壊滅した。エルマはシュヴァリエル

の死を聞かされたことで精神に異常をきたし、逮捕後はずっと精神病院に入院していた。しかし、ようやくまともに会話も出来るまで回復したことで、通常通り聴取や裁判が行われ、その結果ここ軌道拘置所に収監されたのだった。

「私も・・・どうしてまだ生きているの・・・一緒に死にたかった・・・一緒に連れて逝ってください・・・シュヴァリエルさん・・・」

エルマの中にはシュヴァリエルへの崇拝の心しか存在しない。死ね、と言われれば死ぬだろう。それほどまでに彼女の世界の中心だったシュヴァリエルの死は、彼女そのものの世界崩壊を意味していた。それでも自死しないのは、シュヴァリエルから自分が死ぬことの許可を貰っていないから。彼女にとっては生死の選択もシュヴァリエルの指示が全てなのだ。そんな彼女の耳に・・・

「シュヴァリエル、愛されていて羨ましいね～」

そんな声が届いた。エルマは驚くこともなく、というよりは無関心で声の出どころへと目をやった。そこにはベッドがあり、その真下に広がる影の中から音もなく1人の少女が顔を出した。が、「痛っ。狭っ」ベッド下は当然狭いため、その少女は頭をぶつけていた。エルマはそれを一切の感情が籠っていない目で見ている。が、その少女が、彼女の崇拝しているシュヴァリエルの仲間であるということに気付き、「あ・・・」ようやく感情を見せた。だが、檻の中にはカメラが設置されているため動くことはなかった。

『やっほー、やっほー♪　えっと・・・名前なんだっけ？』

『エルマ・・・。ただのエルマです』

『そうそう。エルマ、エルマ。僕、レーゼフェア。殺されたシュヴァリエルと同じエグリゴリなんだけど。何度か会ってるけど憶えてる？』

エルマの頭の中に直接語りかける念話を使ってレーゼフェアは自己紹介。エルマは『憶えています。そんなあなたが何故ここに？』そう答る。すでに自分の在るべき家も、存在意義も失ってしまった。ただ生きているだけの自分に何の用があるのか、と。

『シュヴァリエルの仇を討ちたくない？』

『シュヴァリエルさんの・・・仇・・・？　無理ですよ、私なんか。神器という特殊な武器をフル装備したのに、ただの子供たちに負けた。こんな私が、あのシュヴァリエルさんですら勝てなかったあの子供に勝てるわけが・・・ない』

エルマは知っている。シュヴァリエルがどれほどの実力を持った存在なのかを。そのシュヴァリエルを1対1で撃破したルシリオンの実力をエルマ自身の実力と比べ、勝てないことを理解している。

『ま、神器王が完全ならね。だけど今の王は・・・――』

レーゼフェアはエルマに伝えた。ルシリオンの戦い方を、シュヴァ

リエルの敗因を、そして今の状態を。エルマの表情がみるみる怒りに変わっていった。ドーピングによるシュヴァリエルへの勝利。1対1を好むシュヴァリエル。それを真っ向から汚ない手を使ってねじ伏せたルシリオン。シュヴァリエルはそれでも責めないだろう。負けた自分が悪いのだと。エルマは知っている。だが、それでも許せなかった。

『どうすれば仇を討てますか・・・・!?』

『神器も用意したし、ここから脱獄もさせてあげよう』

『お願いします!』

『オッケー♪　じゃ、行こうか』

レーゼフェアがベッド下より這い出て来る中、ガシャンと音を立ててカメラが破壊された。カメラが作り出していた影を利用して破壊したのだ。そしてレーゼフェアは、しっかりとした足取りで歩み寄って来たエルマの手を取って『さ、久しぶりの外だよ♪』彼女を影の中に引っ張り込んだ。

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

リンドヴルム・ドラゴンハートのハート3ことエルマが今朝、軌道拘置所から脱獄した。そのニュースが機動一課や特別技能捜査課に回ってきた。非常線も張られ、脱獄犯エルマの捜索を行っている。

「それにしても衛星軌道上の拘置所からどうやって逃げたのかしら？
船の出入りも無かったって話だし」

人差し指を顎に当てているシャマルが首を傾げる。あそこにもトランスポーターは設置されてはいる。とは言っても、使われた形跡はないと言う。使われるのは本当に緊急時。刑務官や受刑者が、常駐している医務官や医療施設で手に負えない容体に陥った時に使用される。ゆえに普段はロックが掛けられている。解除するには、拘置所ではなく本局の許可が必要だ。だからトランスポーターを使っての脱獄は不可能だ。

「レーゼフェア・・・だろうな」

俺がボソッと呟くと、はやて達が目を見張って俺を見た。俺たちチーム海鳴は2班に分かれてエルマの捜索の手伝いをしている。俺たち八神家となのは達の2班で、拘置所があった無人世界の近隣にある管理世界、第10管理世界ファトーと第11管理世界ロヌムイに赴き、八神家はファトーを担当することになった。

「あー、確かレーゼフェアもリンドヴルムと関係してたって話やもんな～」

「レーゼフェア。アギトの記憶を奪いやがった・・・！」

「ああ、絶対に許せんな。アギトも、戻るのであれば記憶も一緒に取り返す！」

ヴィータとシグナムが怒りを露わにする。俺とて許せないさ。レーゼフェアはベルカ時代にてリインフォース・アインスを殺した。ジュエルシードを巡る戦いでは、フェイトに精神操作を施した。さらに今度はアギトの記憶をいじった。その償いだけはさせなければならない。

「ルシル君。レーゼフェアに勝てそう？」

「あんま無茶も、無理もせえへんようにな。創世結界が使えへんなら・・・」

「大丈夫だよ、シャマル、はやて。ルシルは強いだけじゃなくて頭も良いんだから！」

不安一色のシャマルとはやてだが、アイリは俺を信じ切っており、創世結界が使えなくても知略で勝てると断言した。信用にも信頼にも応えてやりたいんだが、創世結界無しで勝てるほど"堕天使エグリゴリ"の強さは甘くない。シュヴァリエルのように他の神器からのドーピングが出来れば良いんだが、今回はそんな都合の良い物はないだろう。それでも・・・

「勝つしかないだろう。呪いを掛けてきた術者本人がレーゼフェアだ。創世結界に頼らず、いま扱える全てをフルに利用して、勝利をもぎ取る。それだけだ」

勝率はシュヴァリエル戦に比べれば高いだろうが、それでも決して高くはない。最悪、記憶を削って勝つしかないだろうな。それでア

ギトを取り戻せるなら安い代償だ。

「レーゼフェアが関わっているとして、奴にメリットはあるのか？」

「どうだろうな。今のアイツはプライソンという次元犯罪者の元に居るようだから、プライソンの指示だとすればその行動に納得も行くが・・・。どちらにしろハート3を脱獄させることが出来るのはレーゼフェアくらいだ」

そう考えるとハート3はもう付近の世界には居ないかもしれないな。だからその事を本部に報告しようとした時、ゾワッと悪寒が走った。俺たちがいま居るのはファトーの郊外にある廃墟区画。犯罪者がよく潜伏するという情報を受け、やって来たんだが。明らかに俺たちに、いや正確には俺にだけ殺意が向けられている。

「どうやら当たりやったようやな・・・！　シャマル、ハート3を発見したことを本部に連絡！　リイン、わたしとユニゾン！」

「あ、はい！」

「はいですっ！」

「えっと、アイリはどうすればいい！？」

「お前はあたしとユニゾンだ！」

「ですよね～」

はやてとリイン、ヴィータとアイリがユニゾンを果たす。それぞれデバイスを構えて臨戦態勢に入った直後、「やはり来たなっ！」囚人服を着た1人の女性――ハート3がある廃墟ビルの中から飛び出して来た。当時はベリーショートだった赤髪も今は腰に届くまでの長髪と化している。

「アレは・・・・！」

「「「神器！？」」」

「未回収の最後の1つか！」

ハート3の右手には黄金に輝く片刃剣、左前腕には縦長な六角形の黄金の盾を携えられていた。捜していた6つ目の神器・"ブリギッド・スミス"で間違いない。入手方法はおそらくレーゼフェア。脱獄してから半日も経っていないからな。偶然見つけるなんてことはまずない。

「シュヴァリエルさんを卑怯な手で討って！　恥知らずめがぁぁぁぁぁーーーーー！！」

そう言って片刃剣を振り被った体勢で突撃してくるハート3。俺の前に躍り出たヴィータが「はあ！？　犯罪者風情が何を！！」"グラーフアイゼン"に装填されている神秘カートリッジを2発とロード。

「まったくだ。それに卑怯な手ではなく戦術だ！」

「うるさい、うるさい、うるさい！」

シグナムもまた"レヴァンティン"のカートリッジをロードし、ヴィータに続いてハート3に立ちはだかった。2人の右手首には"ドラウプニル"が装着されている。装着者の魔力に神秘を付加し、疑似的に魔術師化できる神器だ。さらに俺の魔力が込められた神秘カートリッジをロードしたことで、2人は対神器戦にも十分ついて行ける神秘持ちとなっている。

「はやて達は魔法で生身を攻撃！　シグナムとヴィータは生身には当てるなよ！」

――瞬神の飛翔（コード・ヘルモーズ）――

「了解や！」「了解！」

「ああ！」「解ってんよ」

俺も"エヴェストルム"のカートリッジをロードして、"エヴェストルム"の2つの穂に刻まれたルーンを発動させて神器化（イドフォルム）にする。ハート3は「邪魔をするな！」怒声を上げて、左腕の盾を掲げた状態で突撃して来た。

「おらぁぁぁぁぁぁ！」

――フリーレンシュラーク――

冷気を纏う"アイゼン"の一撃が盾に打ち付けられた。その一撃で霜に覆われた盾は大きく弾かれ、ハート3が丸見えとなる。彼女は突きの構えを取っており、片刃剣が突き出されたと同時、「紫電・・・一閃！」シグナムが火炎を纏う"レヴァンティン"を振り下ろした。

刺突と振り下ろしとでは威力差が如実に出る。派手な金属音が鳴り響いて、ハート3の片刃剣は大きく弾き落とされた。さらに俺が「せい！」"エヴェストルム"を振り回して、片刃剣をその手から弾き飛ばす。ハート3はすかさず左腕の盾による打撃を繰り出してきたため、「この程度で・・・！」チェーンバインドで左腕を拘束する。

「はやては攻撃、シャマルとザフィーラは捕縛！」

「ん！」

『ブラッディダガー、行くです！』

問答無用でハート3に撃ち込まれる血色の短剣型高速射撃魔法。着弾時に発生した煙の中に「戒めの糸！」シャマルのバインドと、「鋼の軛！」ザフィーラの拘束杭が突っ込んでいく。その衝撃で煙は晴れ、シャマルとザフィーラのバインドで完全拘束されたハート3の姿が現れた。

「くそっ、くそっ、目の前に仇が居ると言うのにぃぃぃーーーーー！！」

バインドから逃れようともがくハート3。俺は「お前を脱獄させたのは・・・レーゼフェアか？」問い質す。すると「だったらなんだ！？　あの方はくれたんだ、貴様を討つチャンスを！」簡単に答えてくれた。

「馬鹿が。利用されたんだよ、お前は・・・！」

「それでも構わない！　公務員のクセに卑怯な手を使ってまで勝ちに拘ったお前がシュヴァリエルさんを討ったという事実に変わりない！　殺す、殺す、お前はここで・・・殺す！！」

これはもう何を言っても無駄だな。俺は"ブリギッド・スミス"を回収するため、ハート3の左腕に装着されている盾に触れようとしたその時、「っ！？」奴の、レーゼフェアの神秘を至近距離で感じ取った。ハッと彼女の顔を見て、「な・・・！」目を見張った。両目からどす黒い泥・・・ではなく、影が溢れ出て頬を伝ったからだ。

「レーゼフェアめ・・・！」

バッと大急ぎで後退した直後、ハート3の目だけでなく顔の穴という穴から影が溢れ出してきたかと思えば、その影は彼女の肌を覆い隠してコーティングした。それと同時にシャマルとザフィーラのバインドを破壊。

「ルシル君！」

「距離を取れ！」

俺の元に来ようとしていたはやて達に叫ぶ。同時にハート３の着ている囚人服が弾け飛び、全身をピッチリと覆っている影の装甲から何十本と針が突き出してきた。戦友フォルテシアと似た攻撃だ。それらを避けている間、影の針を切り捨てたハート３は地上に突き立っている片刃剣の元へ急降下を始めた。

「させるか！」

――舞い降るは、汝の煌閃（コード　マカティエル）――

闇黒系の弱点である閃光系の魔力で創り出した魔力槍３０本を一斉射出。それと一緒に"ドラウプニル"を装着したはやては「ナイトメア！」砲撃を、「おっらぁぁぁぁ！ヴィータは冷気を纏ったシュワルベフリーゲン・アイス６発を撃ち放った。

俺のマカティエルを含めてその全てが「チッ！」背中から翼のように生えた１０本の人の腕のような物が盾代わりとなって防いだ。１０本５対の影の腕がバッと広がり、まさしく翼のように見える。

「ルシリオン！」

「ああ、解っている！　一筋縄じゃ行かないようだ！」

レーゼフェア本体には遠く及ばない神秘だが、それでも今の俺に比べればずっと上だ。こいつは八神家総出で挑まないと面倒なことになりそうだな。片刃剣を拾い上げたハート３は一度"ブリギッド・

スミス"を輪に戻し、再び武器へと変形させた。その武器の形は「極剣メナス・・・！」シュヴァリエルの大剣と同じものだった。

「ふふ、はは、あはは！　シュヴァリエルさん、シュヴァリエルさん。あぁ、今、あなたを殺した罪深い王を――」

大剣に頬擦りするハート3の声に狂気が満ちている。そして「あなたの元へ送ります！！」地を蹴って俺の元へ突撃して来た。肩に担ぐようにしている大剣を見るに、一番威力の高い振り下ろしなんだろうが・・・。

（背中の10本の腕がきな臭い・・・！）

ならば機能できないように閃光系の一撃で消し飛ばしてやる。右手に閃光系の魔力球を創り『広域攻撃、行くぞ！』はやて達に伝える。ハート3に向かって突っ込もうとしていたシグナムとヴィータがそれを中断した。

「曙光神（コード・デリング）の降臨！！」

突っ込んで来るハート3へと投げた手の平サイズの魔力球が直径10mにまで大きく爆ぜた。その間に俺は"エヴェストルム"を魔力剣生成のフルドライブ・イデア、さらにそこから二剣一対のゲブラーフォルムへと変形させる。

「こんなものぉぉぉーーーー！」

爆ぜている最中でもハート3が飛び出してきた。影の腕の数本がチリチリと崩れているが、10本とも残ってはいる。そこに「翔けよ、隼！」シグナムのシュトゥルムファルケン。さらに「行くぜ、アイリ！」ヴィータと『ヤー！』アイリのコメートフリーゲン・アイス1発。続けて「リイン！」はやてと『はいです！』リインのクラウ・ソラスが、ハート3へと一斉に襲いかかる。

「あはははははは！」

狂気の笑い声を上げたままのハート3の背中に生える10本の腕が勢いよく伸び、はやて達の攻撃を広げた手の平で受け止めた。もちろん完全に防げるわけもなく、シグナムとヴィータの一撃で4本の腕が消し飛んだ。はやての一撃は腕の破壊にまでは至らなかったが、それでも破損はさせた。

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

そこに追撃の閃光系砲撃4発を撃ち込んでやれば・・・よし、はやての分も合わせて5本の腕を消し飛ばせた。が、本体にはダメージが入っていないようだ。純粋に神秘が足りていないんだろうな。とにかく、大剣を振り下ろしたハート3の突撃を横に移動することでやり過ごし、すれ違いざまにカウンターの砲撃「ゲルセミ！」を腹に撃ち込んでやる。

「むぐぅ・・・！」

爆発に呑まれる前に苦悶の声が聞こえたが、影の装甲を打ち破れた

手応えはなかった。まだ墜ちてはいまい。俺の持つ閃光系でもっとも威力が高いのは広域無差別多弾砲撃バルドル。次いでバルドルの前身である広域多弾攻撃ダグ。その下は似たり寄ったりだ。バルドルは被害が大き過ぎるため却下。ならば・・・

「ダグで影を剥ぎ取るか・・・。『儀式詠唱に入る！　サポート、お願い出来るか！？』」

そう伝えるとはやて達から『了解！』快諾を貰った。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒はやて†††

ルシル君が儀式魔術を使う。数あるルシル君の魔術の中でもその威力は絶大や。ハート３の全身にぴったりと張り付いてる影（スタイルラインがハッキリ出るから見てるこっちがなんや恥ずかしい）の装甲はかなり硬くて、それを貫くための儀式魔術や。

「逃げるな卑怯者め！」

シュヴァリエルを斃したルシル君を仇として戦うハート３・エルマさん。脱獄させたんはシュヴァリエルとおんなじ"エグリゴリ"のレーゼフェアって話で、きっと最後の未回収神器・"ブリギッド・スミス"もレーゼフェアが渡したに違いない。

「いと尊き幸いなる天の門の先、輝ける世にて生まれし聖光の主、我らが祈りに応え給え」

どうしてレーゼフェアがそんなことするんか解らへんけど、ルシル君の命を狙ってることだけは間違いない。それに、シグナム達の昔の家族であり、アイリのお姉ちゃんでもある、炎熱の融合騎アギトの記憶をいじって支配下に置いてるってゆう外道っぷり。絶対許せへん。

「主よ、願わくは、過去、現在、未来のすべての悪より、我らを救い給え」

「シグナム、ヴィータ、ザフィーラ！　3人は近接で押さえて！　わたしとシャマルとは後衛や！」

「「「はいっ！」」」「おう！」

詠唱を始めたルシル君の元へ向かって来るハート3の行く手を遮るようにシグナムとヴィータが迎撃に入る。ハート3の振るう大剣を紙一重で躱しながら、「せい！」シグナムと、「おらぁ！」ヴィータがデバイスを振るって、「おおおお！」ザフィーラは魔力を纏わせた拳で、斬撃と打撃を与え続ける。

「砕き給え、我らの歩みを妨げし恐怖という名の足枷を」

そんな中で、背中から新しく生えてきた影の腕が急速に伸びて、シグナム達に殴り掛かった。それに対処するんがわたしとシャマルや。

「ロックオン！」

『はいです！』

「『ブラッディダガー！』」

ダガー16本を一斉発射した後、第二波の16本をスタンバイして「ってー！」それも発射する。シャマルは「クラールヴィント！」の魔力ワイヤー4本を使ったバインド・戒めの糸で影の腕の根元を縛り上げる。

「我らを罪より救い、我らを惑わすものより解き放ち給え」

シグナム達に襲いかかる直前に影の腕を迎撃できたんやけど、わたしのダガーは10本すべてを破壊できたわけやないし、シャマルのバインドもほんの少しの時間しか通用せえへんかった。そやけど「あんがと！」ヴィータと、「感謝します！」シグナムとザフィーラがお礼を言うてくれた。

「滅牙ッ！」

「紫電・・・清霜！」

「クリスタレスハンマー！」

影の腕の動きがのろなったその一瞬の隙を的確に突いたみんなの攻撃が「むが・・・！？」ハート3を大きく弾き飛ばして、近くにあった崩れかけの建物の屋上に墜落させた。少ななってた影の腕での防御は全て砕かれて、大剣もザフィーラが全身を使って制してくれ

てたことで使えんかったからの結果や。

「導き給え、助け給え。そして与え給え。我らが願い奉る主の御威光を・・・！　行くぞ！」

――昼神（コード・ダグ）の閃星――

ルシル君の合図でわたしらはハート３から大きく離れる。ルシル君の儀式魔術に巻き込まれたら間違いなくアカン結末になってまうからな。距離を取った直後、ソレは起きた。空からルシル君の魔力光サファイアブルーに光り輝く柱が降ってきた。

先端に四角錐のある、上に向かって少しずつ狭まってく四角柱。その数２０本。それらが連続でハート３の倒れる屋上に降り注いでく。決まった、って思うたけど「Ａｈｈｈｈｈｈ　！！」ハート３の絶叫に応えるように１０本の影の腕が一対の巨大な両手の平になって、ルシル君の魔術の迎撃に入った。

「無駄だ！　レーゼフェア本体の影ならまだしも、与えられただけの影にコード・ダグは止めることは出来ん！！」

巨大な両手の平に着弾する光の柱の１本目と２本目。影の手がすごい勢いで掻き消されてく。さらに３本目、４本目と着弾したことでとうどう影の手が消滅して・・・

「あああああああああああああ！！」

次々とハート３やその周囲に光の柱が突き刺さってく。着弾と同時

に爆ぜた光の柱は無数の光球に分裂して、それがまた破裂して閃光爆発を引き起こす。ひょっとしてハート3は死んでしもうたんやないか？って思えるほどの容赦の無さっぷりに「アイツ、死んでねぇよな・・・？」ヴィータが戸惑った。

『まぶしいですぅ・・・！』

目の前はもう真っ青。ビリビリと感じる神秘を含んだ閃光爆発は今もなお続いてて、ハート3の生死が不安になってきた。そんな閃光爆発もようやく治まってきて、晴れてきた粉塵の中から見えた廃ビルは影も形も無くなってた。瓦礫の山と化した廃ビルの中心に「ハート3・・・」は居った。

「馬鹿な・・・！　ルシリオンのあれほどの魔術をその身に受けて、なおも倒れないのか・・・！」

「冗談キツすぎんだろ、おい！」

ハート3は神器の大剣を支えにして瓦礫の上に佇んでた。それに影の装甲もボロボロやけど、まだ残ってる。ルシル君を見ると、まさしく絶句って感じでハート3を見てた。

「耐えた・・・耐えた・・・耐えてやった！」

キッと鋭い目をわたしら、とゆうよりはルシル君に向けたハート3が1歩2歩と足を踏み出す。ルシル君は「もう少しで墜ちるんだ・・・！」そう言うて、ハート3に向かって急降下を始めた。シグナ

ムとヴィータとザフィーラも続いて、「主はやてとシャマルはその場に！」シグナムからの指示に「うん・・・！」わたしは頷き返した。

「この程度の影、晴らせることが出来なければレーゼフェアに勝つなど到底・・・！」

「あはははは！　感謝します、レーゼフェアさんんん！！」

大剣を肩に担いだハート3は地を蹴って飛び上がって、急降下するルシル君へ真っ向から突っ込む。そんでルシル君の振り払った右の"エヴェストルム"と、ハート3が振り下ろした大剣が衝突。ガキィンと甲高い金属音が響くと、ルシル君がすかさず左の"エヴェストルム"を振り下ろす。

「もっと、もっと、もっと！！」

ハート3がそう言うと、ボロボロやった影の装甲がまだ復活した。背中からまた影の腕が１０本と生えたかと思えば急速に伸びて、周囲に転がってる大きな瓦礫を鷲掴んだ。それは振り下ろされる"エヴェストルム"の斬撃を躱す為の手段やった。腕が縮んだことでハート3は高速でルシル君の側から離れて、その斬撃を回避した。

――崇め讃えよ（コード）、汝（ミカエル）の其の御名を――

１２枚の剣翼だけがルシル君の背から離れて、影の腕と瓦礫を利用してここ廃墟区画を飛び回るハート3に向かって突撃。剣翼はハー

ト3に追い縋りながらその先端から砲撃を撃ち続けて、ルシル君自身も「どうした、俺を討つんだろう！」砲撃を撃ちながらハート3へ接近を試みる。

『はやてちゃん。リイン達、何も出来ないです？』

「う、うん・・・。ううん！　出来ることがあるはずや！」

ルシル君もシグナム達も少しずつハート3に攻撃を直撃させて、影の装甲を削っててるのが見て取れる。ハート3も負けじと大剣や背中から生える影の腕による反撃を行うんやけど、さすがにルシル君、シグナム、ヴィータ、ザフィーラの4人相手には通じひん。それでも拮抗は崩れへん。影の装甲を砕こうとも、すぐに修復されてくから。

「リイン！　ナイトメアハウル、スタンバイ！」

『は、はいです！』

リインの補助でわたしの周囲に3つの魔力球を展開。そんで「シャマル、旅の鏡お願いや！あれ、リンカーコアを取り出す奴！」シャマルに指示を出す。シャマルは「お任せを！」頷いてくれた。

『みんな！　シャマルの旅の鏡でハート3のリンカーコアを抽出する！　ハート3の動きを止めたって！』

『『『了解！』』』

『あぁ、そうか、その手があったよな・・・。魔術に拘ってしまったのが俺のミスか。旅の鏡のことを失念していた。さすがは俺たち八神家の主はやてだ。ありがとう』

ルシル君が褒めてくれた。それだけでわたしはもう有頂天や。ニヤつくんを止められへん。シャマルが「良かったですね♪」って言うてくれらから「うんっ♪」笑顔で頷く。っと、今はそんな場合やないな。

『多弾砲撃、いきます！』

そう伝えておけばルシル君たちはしっかりと対応してくれるから、返事を待たずに「発射！」魔力球３基と"シュベルトクロイツ"からの計４発の砲撃が、ハート３へと向かって行く。そんでルシル君が"エヴェストルム"で大剣を押さえ込んでくれたおかげで直撃した。

『動きが止まった！』

『我々でこのままハート３の動きを止めます！』

ヴィータとシグナムの報告に、わたしはすぐさま「シャマル！」に指示を出す。みんながハート３をその場で押さえ込んでくれる。その隙を見逃すわけにはいかへんからな。シャマルは「はい！」"クラールヴィント"で鏡を作って、スッと右手を掲げる。あとはハート３が完全に動きを止めるのを待つだけ。ハート３は大

剣から小回りの効く二剣一対のナイフに変えた神器で、ルシル君たちの攻撃を押さえ込んでる。神器頼りやなくて純粋に騎士としての実力が高いのが嫌でも解る。

「「はぁぁぁぁぁぁっ！！」」

「っぐ・・・くぅぅ・・・！」

ルシル君とシグナムからの連続斬撃をまともに受けたことでハート3が吹っ飛んだ。そこに「鋼の軛・・・！」ハート3に向かって拘束杭が伸びる。弾き飛ばされてる中でもハート3はナイフを振るってそれらを寸断した後、「いっけぇぇぇぇっ！」ヴィータの冷気弾8発もまた斬り払った。

「「紫電・・・十字閃！」」

そこにルシル君とシグナムの挟撃が入って、ハート3の持つナイフが2本とも弾き飛ばされた。その瞬間、シャマルが鏡に手を差し入れた。シャマルからハート3へと視線を戻すと、胸からシャマルの右手が突き出てて、その手の平にはハート3のリンカーコアがあった。

「終わりだ！」

――女神（イドゥン）の救済――

ルシル君がすかさず右手をリンカーコアに翳して、その魔力を吸収

し始めた。苦悶の呻き声を漏らすハート3は「おのれ・・・！」ルシル君へと両手を伸ばして、その首を絞めようとした。そやけど、それより早く魔力吸収が終わって「シュヴァリエルさん・・・」ハート3は膝から崩れ落ちて、ドサッと倒れ伏した。わたしとシャマルはルシル君たちの側に降り立って、影の装甲がチリチリと霧散してくハート3を見下ろした。

「神器の回収完了だぜ」

「ようやく機動一課としての任務も完了だね」

ヴィータとアイリが二剣一対のナイフに変形してる"ブリード・スミス"をそれぞれ持って来て、ルシル君に差し出す。ルシル君は着てるコートを脱いで裸になりそうなハート3に被せた後、ヴィータ達から神器を受け取って「ああ、終わったな」本来の黄金の輪に戻した。

「こちら八神チーム、リーダーはやてです。ハート3・エルマの確保、神器の回収・・・完了」

・―・―・―・―・

ルシリオン達がハート3・エルマと戦闘を繰り広げていた廃墟区画より3ｋｍと離れた山の頂に、1人の少女が佇んでいた。バイオレットのショートヘアはカチューシャを付けていることでインテーク化。クリムゾンの瞳は猫目で、口もどことなく猫口。ハイネックの黒セーターに白のロングコート、裾から覗くズボンも黒、そして茶

色のブーツという格好。
彼女の名はレーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。今は"堕天使エグリゴリ"として、ルシリオンの命を狙っている人型の戦術兵器だ、

「なるほど～。あれが今の神器王の実力か～」

彼女はこの山頂からルシリオン達とエルマの戦闘を観戦していた。その目的は、左目の視力を失い、創世結界のパスも失いながらもルシリオンがどれだけ戦えるのかという、戦力確認だ。そのためにルシリオンに殺意を向けるように煽り、脱獄させ、事前に回収しておいた神器"ブリギッド・スミス"を授けた。

「ま、ただの人間に神器王を殺せるわけないのは解ってたし、こんなもんか♪　それにしてもあの魔法、旅の鏡・・・。あれは僕でも防げないかもな～。・・・八神シャマル、か」

あくまでエルマは捨て駒として捉えていたレーゼフェアは踵を返した。そして「とりあえず、ありがとう。えっと・・・ごめん。名前忘れた♪　いいよね、もう会うこともないし」エルマに向かってそう言った後、影を使っての移動・影渡りを使ってその場から消えた。

Ｅｐｉｃｏ?時空を超えて今ふたたび～Ｒｅｔｕｒｎ　ｏｆ　Ｒｉｖａｌｓ～

かつては死に瀕していた世界、エルトリア。死蝕という現象によって水や大地は腐敗して、人が住めない星へと刻一刻となろうとしていた。しかし、その死蝕現象を食い止め、元の美しい世界に戻そうとその生涯を捧げた１人の研究者の成果のおかげで、死蝕現象は僅かながら腐敗の拡散を止めた。

その研究者の名は、グランツ・フローリアン。紛れもなくエルトリアの歴史に名を残すであろう偉大な人物だ。そんな彼には数多くの家族が居る。死蝕の研究・対策の実験過程で製作された死蝕地帯の復旧機材・自動作業機械ギアーズ。その普及型の試作機である２人の少女。

「博士～？　そろそろ朝ご飯ですよ～？」

その内の１人が、グランツ博士の研究室の扉を開けてそう声をかけた。研究室はカーテンが閉められており、朝日が弱々しく室内を照らしている。少女は研究室の中に踏み入り、「昨日、片付けたばかりなのに・・・」と、複雑な計算式が書き殴られた紙が百十数枚近くがデスクや床に散らばっているその様に嘆息した。

「博士。朝ですよ。３日に１回は休みを取る、そういう約束ですから起きてください」

少女は床に散らばった紙を拾っては胸に抱え、デスクの上にドサッ

と置く。始めから積まれていた別の紙束がぐらりと倒れそうになるも「おっと」少女は余裕を以って上から押さえつけることで防いだ。そして少女は窓へと向かい、シャッとカーテンを開けた。温かで眩い陽の光が室内に差し込む。

「・・・ん・・・む・・・う・・・」

男性の呻き声が少女の耳に届いた。少女は明るくなった室内を見回して、「またベッドじゃなく寝袋で寝たんですか・・・」芋虫のように蠢く寝袋を見た。その寝袋から「アミタかい・・・？」少女の愛称が発せられた。

「そうですよ、3日間も研究室に籠っていたんですから、今日1日くらいは部屋を出て陽に当たりましょう」

少女――アミティエ・フローリアンが寝袋に向かって微笑んだ。歳は１０代後半ほど。深桃色の長髪をおさげにし、カチューシャを付けている。青いキャミソールとデニムパンツといった格好だ。

「約束・・・あー、そうだったね。判った、起きるよ」

寝袋のファスナーがジーっと音を立てて開き、Ｙシャツ姿の男性がもそもそと起き上がった。寝ぼけ眼でフラフラな足取りの博士は「おはよう、アミタ」と、フローリアン家の長女であるアミティエに朝の挨拶をした。

「おはようございます博士♪」

それからアミティエと博士は研究室を出、陽の光に照らされて眩い廊下を歩く。そんな中で「あ！　おはよう博士♪」窓の外から博士に挨拶が掛けられた。外には1人の少女が居り、博士に手を振っていた。博士とアミティエは窓へ近寄り、ガチャッと窓を開ける。

「やあ、おはよう、キリエ」

挨拶をしてきたのはフローリアン家の次女、キリエ・フローリアンだ。桃色の長髪を結うことなく流し、2つに割ったような花飾り付きのカチューシャを頭の左右に付けている。白のTシャツにサロペット、そして麦わら帽子、軍手という、何かしらの外作業に適した服装をしている。軍手やサロペットの膝の辺りには土汚れが付いているため、土に触れる作業をしていたのだろう。

「キリエ。私にこんな力仕事なんてさせて・・・って、あら？　おはようございます、博士。3日ぶりですわね」

「おや？　アイルも一緒だったのかい？　おはよう、アイル。今日もまた見惚れてしまうほどの純白な美しさだね」

「まあ！　お上手ですわね博士♪」

タイヤが2つ付いた手押し車を押してやって来たもう1人の少女が、グランツ博士からの褒め言葉に頬を染めて嬉しそうに微笑んだ。少女の名はアイル・ザ・フィアブリンガー。
雪のように真っ白な長髪と肌。キリエと違って真っ白なブラウスと

ティアードスカート、そしてカプリーヌという帽子を被っており、どう見ても作業服ではない。そんな白だけの中で一番のインパクトを放っているのが炎色の瞳だ。
アイルは、新たにフローリアン家の家族となった新入り組の1人だ。新入りとは言ってもフローリアン家の一員となってからすでに7年近くが経っているが。

「キリエ、アイル。そろそろ朝ご飯にしますよ。花壇仕事は後にして、もう入って来てください」

アミティエが朝食の時間だとキリエとアイルに伝えると、「判りましたわ。すぐに行きます」アイルは園芸用こてや中身の無いビニールポットなどが積まれた手押し車を放置して駆け出した。

「ちょっ、アイル！？　やーん！　片付けはジャンケンで決めたのに～！」

キリエは放置された手押し車と、逃げ出したアイルに肩を落とした。そして「んもう。花の移植を手伝いたいって言ったのはアイルなのに～・・・」キリエは渋々と片付けに移った。

「いやいや。朝から良いものが見れたよ！」

「毎朝ちゃんと研究室から出て頂ければ見れますよ？」

「あー、努力はしているんだけどね。やはり僕が生きているうちに少しでもこのエルトリアを生き返らせたい。そう思うと、どうして

も自分のことが後回しになってしまうんだ」

「博士・・・」

博士は人間だ。その命には限りがある。彼の研究によって死蝕現象を食い止めることが出来始めている。少なからず腐敗した大地も徐々にだが元に戻りつつある。しかし、完全にエルトリアが元に戻るまで3ケタ近い年数が掛かる。当然、彼はその景色を見れないだろう。それゆえに、生きている間に少しでも元に戻ったエルトリアを見たいのだ。

「あはは。朝から不景気な話をしてしまったね。さ、ダイニングへ行こう」

「・・・はい」

さらに廊下を進んでT字の角へ差し掛かった時、「なんですかこれはぁぁぁぁぁ！！」アミティエが叫んだ。博士も「おやおや、これは・・・」苦笑い。玄関からリビング・ダイニングへと続く廊下が泥で汚れていた。

屋内土足OKのフローリアン家だが、それは屋外から戻って来る際にはマットで靴裏に付着した汚れを落としてから入ることを決めていたからだ。だと言うのに、廊下には2人分の泥の靴跡が廊下を縦断していた。アミティエは「一体誰が・・・！？」と唸った直後、「あ！」足跡の犯人が誰か察したようだ。

「レヴィ、フラム！　あなた達ですね！」

アミティエは博士を置いて泥の靴跡が向かう先、風呂場へ向かった。そして風呂場へ繋がるドアをノックして「入りますよ！」返事を待たずに開けた。洗面所とカーテンで仕切るタイプの脱衣所に居たのは「やはりあなた達でしたか・・・」アミティエの推測通りの２人の少女だった。

「あー、アミティエ～！　おっはよー！」

アミティエに向かって元気いっぱいに挨拶した少女の名はレヴィ・ザ・スラッシャー。前髪以外の毛先が紺色になっている水色の長髪はツインテール、瞳はワインレッドのツリ目。服装は私服ではなく、バリアジャケットと呼ばれる魔力で作られた服を纏っていた。

「おはようであります！　廊下を汚して申し訳ないであります！」

朝の挨拶と謝罪を述べた少女の名はフラム・ザ・リヴェンジャー。ツーサイドアップにされた薄紫色の長髪、アホ毛が３本と立って揺れている。黄金に輝く瞳は少しツリ目掛かっている。そして彼女もまたバリアジャケットと呼ばれる魔法の服を身に纏っていた。レヴィとフラムの髪や肌、バリアジャケットには泥が付き、履いている装甲付きのブーツなどにも当然泥が付いていた。その動かぬ証拠と、フラムからの先の謝罪によって、家の中を泥だらけにした犯人が２人であることが確定した。

「一体何があったんですか？　バリアジャケットなんか着て。いつもの早朝ランニングだけでこんなに汚れることなんてないですよね？」

「それがさー。ランニング先でモンスターと遭遇しちゃってさ～。人が住んでない区画だったけど、いつか住んでた人が戻って来た時に家が壊されちゃってたら悲しいって思って・・・」

「ゆえに私とレヴィで退治したでありますよ」

「えっと・・・。汚してごめんなさい」

「ごめんなさいであります」

アミティエに泥だらけになった理由を訊かれ、レヴィとフラムは素直に事情を話し、そして家を泥で汚したことを謝った。２人のやんちゃな性格からして泥遊びでもやって帰って来たと思っていたアミティエは自分を恥じ、「私もごめんなさい」２人に謝った。もちろんなぜ謝られたのか解らない２人は「んん？」小首を傾げることに。

「素晴らしい！」

バンッと勢いよく扉が開くと、泥で汚した理由を聞いて感動して涙ぐんだ博士が脱衣所に入って来て、博士を３日ぶりに見たことで表情を輝かせていたレヴィとフラムを称えた。博士は２人に歩み寄り、「君たちのことを誇りに思う、うん！」肩に手を置いて、うんうんと何度も頷いた。

「あ、ありがと博士・・・」

「ありがとうでありますよ・・・」

そのテンションに僅かばかり引いたレヴィとフラム。アミティエは最初、「そうですね。素晴らしい行いですよ、レヴィ、フラム」博士と同様に2人を褒めた。しかし、すぐに「コホン！」と大きく咳払いして博士をジト目で見た。

今から正に泥を洗い落とすために風呂に入ろうとしていた2人の居る脱衣所へノックもせずに入って来た博士。それはあまりにも「デリカシーがありません！」だった。アミティエの怒声に博士は「わわ、すまない！」大慌てで脱衣所を出て行った。

「はぁ。レヴィ、フラム。ゆっくりで良いですから体を綺麗にしてください。着替えは私が持ってきます」

「は～い！」「はいであります！」

レヴィとフラムからの元気いっぱいの返事を聴いたアミティエは脱衣所から出た。そこでドタドタと足音を立てて、廊下をぞうきん掛けしている1人の少女が目の前を通り過ぎて行ったのを見た。

「あ、おはようございます、アミティエ」

「シュテル。あ、おはようございます。掃除してくれているのですか？　それに博士も」

シュテルと呼ばれた少女。フルネームをシュテル・ザ・デストラクター。栗色のショートヘア、青い瞳をし、サファリシャツとハーフ

パンツといった服装だ。彼女はレヴィとフラムが汚した廊下を濡れぞうきんで拭いて掃除していた。そして博士もシュテルの手伝いをしていた。

「はい。一応、妹に当たるレヴィ(ふたり)とフラムの仕出かしたことですし」

「まぁ食事前の軽い運動をと思ってね」

あははと笑う博士に「本音は？」アミティエがそう訊ねると、「可愛いシュテル(むすめ)が目の前で掃除し始めたのに黙って見ているなんて無理さ」そう答え直した。

「ありがとうございます、博士」

「いやいや。当たり前のことをしたまでさ」

微笑むシュテルに満面の笑顔を返す博士。アミティエも「では、私も手伝いますね」そう言って、まずはレヴィとフラムの着替えを取りに行った後、すでに裸になって浴室できゃっきゃっ♪と洗いっこしている2人の影が映るすりガラスの扉に向かって「着替え置いておきますね～」伝えた。

「ありがと～♪」「感謝でありま～す♪」

そして洗濯機に汗で汚れた2人のジャージや下着を放り込んでスイッチ・オンしたアミティエは「さてさて」物置からぞうきんを取って来て、彼女もまた掃除の手伝いを始めた。そこに「何をしていま

すの？」アイルと、「あら～、泥だらけ～」キリエが戻ってきた。そんな2人にアミティエが事情を伝える。

「――と、いうわけでして」

「へぇ～。レヴィも良いことを言うわね～」

「お馬鹿だからこそ本能のままに動いたのですわね。ですが、良い行いですわ」

キリエとアイルも、レヴィとフラムの行為を称えた。そんな2人も掃除を手伝おうかと提案したが、さすがにアミティエと博士とシュテルの3人がかりでの掃除とあってもう終盤だったため「2人は先にダイニングに行っていてください」アミティエがそう言った。

「そう？　じゃあお言葉に甘えて♪」

「お先に失礼しますわ」

キリエとアイルは手を洗うために風呂場へと続く扉をがちゃっと開けた。もわっと湯気が溢れ出て来て、アミティエ、博士、シュテル、キリエ、アイルの目の前に素っ裸なレヴィとフラムの姿が現れた。シャワーを浴びたことで白い肌は赤くなっていて、バスタオルで拭いている途中だからか2人の艶やかな髪が肌に張り付いていた。7人の視線が交わり、「・・・・」無言の時間が僅かに続いた後、「わぁぁぁぁぁぁ！」レヴィとフラムは慌ててバスタオルで体の前を隠し、その場に縮こまった。そしてアミティエとキリエは「博士

は目を閉じて！」バシッと博士の顔を両手で押さえ、「仕切りカーテンくらい閉めなさいなお馬鹿！」アイルが扉を閉めた。

「すまない、すまない、すまない、すまない、すまない！」

裸を見たことに対して何度も謝る博士。その謝罪は、ペザントブラウス・ブルームスカートに着替えたレヴィ、スモックブラウス・ゴアードスカートに着替えたフラムが脱衣所から出てくるまで続いた。

「すまない、レヴィ、フラム！」

「いいよ、博士。ボク達の不注意だったし」

「でありますな」

「まったくですわ。仕切りカーテンを閉めていれば見られることはありませんでしたわよ」

照れくさそうに笑みを浮かべるレヴィとフラムに、アイルが注意した。ようやくアミティエとキリエの両手から解放された博士はそれでも申し訳なさそうにしているため、「ほら、博士！」レヴィと、「朝ご飯でありますよ♪」フラムが、博士の両腕に抱き付いた。もうこの件は忘れようと言う意志表示だと察した博士は「ありがとう」感謝した。

「私とシュテルで後片付けしますから、博士たちはダイニングに行っていてください」

「そうですね。２人で片付けられますし」

「そうかい？　じゃあ、アミタ、シュテル。すまないけど、あとは頼むよ」

「はい！」「お任せを」

そして博士とレヴィとフラムは一足先にダイニングへ向かい、キリエとアイルは改めて風呂場の扉を開け、中に入っていった。アミティエとシュテルは泥水の入ったバケツを手に外へ出て、水を捨てて空になったバケツや綺麗に洗ったぞうきんを干す。

「朝から大変でしたね、シュテル」

「ええ。ですが・・・楽しいです」

「ふふ、そうですね♪」

こんな騒がしい日常が楽しいと微笑み合うアミティエとシュテル。その２人も家へと戻り、綺麗になった廊下を進み、そしてリビング・ダイニングに続く扉を開けた。そこには博士たちが朝食をダイニングテーブルに運んでいた。

「お待たせしました～！　王様、ユーリ！」

「お待たせして申し訳ありませんでした、王、ユーリ」

アミティエとシュテルは、キッチンで朝食を作っていたと思われる2人の少女に挨拶した。

「うむ。朝餉の準備は準備は出来ておる。シュテルとアミティエは先に席に着くと良い」

王や王様と呼ばれた少女。名をロード・ディアーチェ。前髪以外の毛先に黒のメッシュが入った銀色のショートヘア、翠色の瞳をし、キャバリアブラウス・プリーツスカートといった服装で、調理時にはエプロンを着用するようだ。

「まだ準備中だから大丈夫ですよー♪」

新入り組の中で一際小さな少女。名をユーリ・エーベルヴァイン。綺麗な金色の長髪はウェーブが掛かり、瞳もまた見惚れてしまうほどに綺麗な金色をしている。Tシャツにキャミソール・カーゴパンツと言った服装だ。そんな彼女もまたエプロンを着用している。グランツ博士、アミティエ、キリエのフローリアン家。ディアーチェ、シュテル、レヴィ、フラム、アイル、ユーリの通称・紫天一家。この9人が今の新しいフローリアン家として、ここエルトリアを救うために日夜活動している。

家事、特に料理に関して一番腕の良いディアーチェと、そのサポートを喜んで行うユーリの作った朝食がダイニングテーブルに全て運ばれ、「いただきます！」と紫天一家から教わった食事前の挨拶をして、食べながら和気あいあいと談笑する。

「あー、そうそう。みんなに伝えるのを忘れていたよ」
朝食も終盤になっていたところで、博士が話題を切りだした。フローリアン家の娘たち全員の視線が博士に集中したところで、「時間遡航機能を持ったあのオーパーツ・・・」博士がそう口にすると、娘たちはどこか懐かしそうな表情へと変わった。
「かれこれ6、7年くらいになりますか・・・」
「毎日がバタバタしてたからまだ最近のように思うわね～♪」
アミティエとキリエが当時の事を思い出しているのか、懐かしげに微笑を浮かべた。
「ふんっ。子鴉のことなんぞ思い出したくもないわ」
「なのはとの再戦の約束、いつかは果たしたいですね」
「ボクも！　ボクも、オリジナルともう一度戦いたい！　あとアホ犬を泣かしてやるんだ！」
「私もアリサとの再戦、それに紅の鉄騎に貰った1敗の雪辱を果たしたいでありますな～」
「私はすずかとは後腐れなく別れましたし、シュテルやフラムのようにオリジナルと引き分けたわけでもありませんし、レヴィのように負けたわけでもありませんし♪」

ディアーチェ、シュテル、レヴィ、フラム、アイル達もまた思うままに声に出していった。そして「助けてくれたことにもう一度お礼を言いたいですー」ユーリもまた、当時の事を思い返しているようだ。

紫天一家は、チーム海鳴とかつて敵対していた"紫天の書"と呼ばれる、"夜天の魔導書"を乗っ取るためのプログラム群・マテリアルであった。

ユーリ・エーベルヴァイン。"紫天の書"の盟主の称号を有す、システム砕け得ぬ闇（アンブレイカブル・ダーク）という、未知の魔力素を無限に生み出し続ける動力炉。マテリアルの頂点に立つそんな彼女の存在が、かつてチーム海鳴、マテリアル、フローリアン姉妹を交えた大事件を引き起こした。

ロード・ディアーチェ。闇統べる王の称号を有す、マテリアルのリーダー的存在で、"王"のマテリアル。システムU－Dであるユーリの制御を行える唯一の存在で、正しく"紫天の書"の王であり管制人格的立場でもある。

シュテル・ザ・デストラクター。星光の殲滅者の称号を有す、マテリアルの参謀的存在で、"理"のマテリアル。ロード・ディアーチェを支える補助プログラム――王下四騎士の1基。

レヴィ・ザ・スラッシャー。雷刃の襲撃者の称号を有す、マテリアルの末っ子的存在で、"力"のマテリアル。ロード・ディアーチェを支える補助プログラム――王下四騎士の1基。

フラム・ザ・リヴェンジャー。炎壊の報復者の称号を有す、マテリアルの使えない良心的存在で、"義"のマテリアル。ロード・ディアーチェを支える補助プログラム――王下四騎士の1基。

アイル・ザ・フィアブリンガー。氷災の征服者の称号を有す、マテリアルのブレーキ的存在で、"律"のマテリアル。ロード・ディアーチェを支える補助プログラム――王下四騎士の1基。

アミティエやキリエは、エルトリアを救うためにユーリやマテリアル達を求めた。そしてある事件を経て共にエルトリアへ戻り、彼女たちの協力や博士の研究のおかげで、エルトリアに巣食う死蝕現象への対抗策を生み出すことが出来たのだ。

博士の言う時間遡航機能を持ったオーパーツとは、その名の通り時間旅行を可能とする物だ。フローリアン姉妹はそれを使って、ユーリやマテリアルの居る世界――地球は海鳴市、その時代――過去へ時間移動したのだ。

「それで博士。そのオーパーツがどうかしたのですか？」

「僕もね、前々からチーム海鳴の子供たちにお礼を言いたかったんだ。アミタやキリエに協力してくれたこと。それに・・・僕の病を治してくれたエフェルを送ってくれたルシリオン君と言う少年に」

博士は不治の病を罹り、その寿命が残りわずかとなった。キリエが過去に遡ってでも紫天一家を手に入れたかった理由がそれだった。エルトリアの復興を願う博士の研究成果に芽が出たことを、博士が

亡くなる前に見せたかったのだ。
そして紫天一家と共にアミティエ達がエルトリアに帰る際、チーム海鳴の1人であるルシリオンは、いかなる病気や怪我をも治せる魔術コード・エイルを使えるように設定した使い魔・エフェルヘリンズを、彼女たちに気付かれないように一緒に送り出したのだ。その魔術のおかげで、博士の体を蝕んでいた不治の病は完治し、こうして何年もアミティエら娘たちと一緒に過ごせていた。

「僕たちはこれからもっと忙しくなるだろう。その前に、チーム海鳴の子供たちにお礼をしたいんだ」

博士の真剣な声色と表情に、娘たちも自ずと同じような表情になる。博士は「だから、オーパーツを再調整したんだ。安全にチーム海鳴の子供たちの居る世界・時代へ跳べるように」と続けた。その話に目を見張って絶句する娘たち。
素直ではないディアーチェとアイルを含めた彼女たちは、やはりチーム海鳴と再会したいと願っていた。しかし、それは願わないかもしれないとも思っていた。時間遡航のオーパーツの使用回数も当時で限度を超えており、もう二度と使用できないかもしれないと判断が下されたからだ。

「だから死蝕現象の研究の片手間にずっと調整していたんだよ。7年も掛かってしまったけど、安定して時間遡航が出来るようになった」

「またあの子たちに逢えるのですね♪」

「わーお♪　さすが博士ね～♪」
「子鴉らと再びまみえる・・・か。ふふ」
「素晴らしいです、博士！」
「おお！　オリジナル達とまた逢えるのかー！」
「燃えるでありますな！」
「わ、私は別に嬉しくもありませんわ！」
「博士、ありがとーですぅ～♪」
それぞれ喜びを表す娘たちの姿に「喜んでもらえて何よりだよ！」博士も嬉しそうに笑ったあと、「エフェルー！　アレ頼むよ～！」エフェルヘリンズに声を掛けた。ピョコピョコと足音を立ててダイニングへやって来たのは、それはそれは奇妙な姿をした存在だった。
「持ってきましたー、どうぞ～！」
全体的に薄い桃色で、体長は約９０ｃｍ。４０ｃｍほどの長方形状の体の四角からちょこんと三角形の手足が突き出していて、指は無いが物は掴める。頭部は５０ｃｍほどで。のっぺりとした顔があり、鼻の穴は無い。目はパッチリと開き、口の大きさは自由自在。頭部は胴体と切り離すことが可能で、それぞれ別個に動くことも出来る。スライムを基にした汎用人工精霊プロトタイプで、ルシリオンがか

つて作成した使い魔。硬軟自在（液状からゴム、果ては鋼鉄並にまで）のスライムを素体にしている。

「ありがとう、エフェル」

エフェルヘリンズの頭に乗った1枚の携帯端末を手に取った博士。それをテーブルの上に置いて「コレをチーム海鳴の子供たちに渡してほしい」と伝えた。ディアーチェが「コレは？」と訊ねる。

「僕のメッセージと、これまで君たちが研究成果として撮影してくれたエルトリアの大地の映像が収められている」

「博士のメッセージ？」

「博士は一緒に行かないの？」

「・・・うん。安定して時間遡航できるようにはしたけど、やはり人には耐えられないものでね。いつかはチーム海鳴の子供たちを招待できるように調整していきたいんだが。それはまた今度という感じかな。今はとりあえず、忙しくなる前に一度ご挨拶とお礼をしたいんだ」

ディアーチェの問いに答えた博士にアミティエとキリエが再度訊ねると、僅かばかり寂しそうに笑う博士はそう答えた。いつかは人間でも時間遡航できるようにして、今以上に元に戻り始めているエルトリアの大地をチーム海鳴に直接見せてあげたいと。

「そういうわけで、お願いできるかな？　僕の依頼」

娘たちは「もちろん！」力強く首肯した。が、「ですが博士。我々が居ない間の食事などはいかがなさるのですか？」料理担当のディアーチェはそれが不安だった。面倒を見る者が居ない中で博士を1人にすると、高確率で孤独死するのではないか？と。

「誰か1人くらいは残った方が良いかもしれませんわね」

「そうですね。帰還後に博士のピーな姿は見たくありませんし」

「そうね～ん。あ、王様かアイルが残るっていうのはどうかしら？　別にはやてちゃんやすずかちゃんに会いたくないって話だし♪」

「「な・・・！」」

1人ではまともに生きられない博士の生活のために誰かが居残りをしないといけないと判断した娘たち。誰が居残るかを決めることになり、そして真っ先に挙げられたのがツンデレなディアーチェとアイル。

マテリアルは、チーム海鳴の少女メンバーの外見をモデルにしている。ディアーチェは八神はやて。アイルは月村すずか。シュテルは高町なのは。レヴィはフェイト・テスタロッサ・ハラオウン。フラムはアリサ・バニングス。その特異な出生に、マテリアルとチーム海鳴はライバルであり友人であり、そして姉妹と言っても過言ではない関係でもある。

「い、いや、我は王の務めとして子鴉らに挨拶の1つくらいせねば！」
「す、すずかは私に会いたいでしょうし、で、ですから私も行きますわ！」
居残り組に挙げられたことでディアーチェとアイルが慌てて反論。ユーリが「素直になれば良いのに～」と呆れ笑い。シュテルも「全く以ってそうですね」と同意した。
「いやいや。みんな一緒に行ってくれ。エフェルが居てくれるから、僕は1人でも大丈夫さ♪」
「はい。でも王様。出発前には食事は日持ちする物をよろしくです」
そう提案したエフェルヘリンズがグニャリと蠢き、グッと高身長の人型に形を変えた。エフェルヘリンズの通称・家事モードだ。すると目に見えてホッとするディアーチェとアイル。その様子に博士たちみんな笑った。
「では、決まりですね！」
「そうね～♪」
「ふ、ふん。しょうがない、行ってやろう」
「なのははどれだけ強くなったのでしょうか。今から楽しみです！」

「シュテルも燃えているでありますな！」

「ボクもやる気満々だぞー！」

「うるさいですわよ、フラム、レヴィ」

「今からすごく楽しみですー♪」

こうして、フローリアン家は再び時空を超え、海鳴市へ行くことが決まった。

Ｅｐｉｃｏ?奇跡の結成／最強の対魔竜部隊～Ｄｒａｇｏｎ　Ｓｌａｙｅｒ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

１年ってあっという間。そう改めて実感する。まぁ私は半分近くを入院していたから余計にそう感じるんだろうけど。修学旅行、シャルちゃんの誕生日パーティとあった２学期も終わって今は冬休み真っ只中。

仕事については未回収の最後の神器も回収されたし、私はＳランクの魔導師になったし、フェイトちゃんは執務官に、アリシアちゃんは執務官補佐に、ルシル君は新たに監査官になることが出来た。もちろんみんなで盛大にお祝いしたよ。楽しかったなぁ～。

「せっかくコタツでぬくぬくしていたのに、誰よ違法渡航なんかして来る奴って！」

私たちチーム海鳴の小学生組はアリサちゃんのお家に集まって、みんなで冬休みの宿題をやろうって決めていた。そしてコタツ３台を連結させて、ゆったりぬくぬくしながら宿題を片付けていた。そんな時・・・

――緊急事態だ。臨海公園付近の海上に転移反応が発生した。違法渡航者である可能性が大きい――

クロノ君からそんな緊急連絡が入った。私たちはその対処のために

宿題を中断して、現場である海鳴市海上にまでやって来ていた。シグナムさん達が居ないけど、クロノ君やアルフも合流したことでその戦力は本局武装隊の一個部隊以上になってるから、きっとどんな事でも対応できるはず。

「来るぞ！　警戒！」

クロノ君からの指示に私たちはグッとデバイスを握り直して、転移反応が強くなる空間を注視する。そして、カッと眩い光が発せられて・・・違法渡航者たちが私たちの目の前に現れた。私は目を疑った。いつかは逢える。そう思っていながらもどこか諦めていたのに・・・。

「シュテル・・・」

私の姿に似た女の子がそこに居た。しかもシュテルだけじゃない。

「王さま・・・！」

「うそ、フラム・・・！」

「「レヴィ！」」「うげぇ」

「アイルちゃん！」

はやてちゃんにそっくりなディアーチェ、アリサちゃんににそっくりなフラム、フェイトちゃんとアリシアちゃんにそっくりなレヴィ、

すずかちゃんにそっくりなアイル。それに・・・

「お久しぶりです、みなさん！」

「はあ～い♪　お久しぶり～♪」

「お久しぶりです！」

アミタさんとキリエさん、そしてユーリも一緒だった。私は思わず「シュテル！」に抱き付いた。夢でも幻でもない、本当にシュテルが今目の前に居るんだ。はやてちゃんも「久しぶりや～！」ディアーチェに抱き付こうとするんだけど「ええい、うっとおしい！」思いきり拒絶されちゃってた。

「レヴィ、久しぶり！」

「会いたかったよ～♪」

「オリジナル、姉っ子！　久しぶりだな！　来てやったぞ♪」

フェイトちゃんとアリシアちゃんは本当に嬉しそうにレヴィと再会を喜び合うんだけど、「あたしゃ会いたくなかったけどね」アルフは若干不機嫌。対するレヴィも「今度はボクが泣かしてやるからなアホ犬！」敵意剥き出し。フェイトちゃんとアリシアちゃんが「まあまあ」って宥めに入った。

「アイルちゃん。久しぶりだね。元気そうで良かった」

「ええ。お久しぶりですわね、すずか。あなたも元気そうでなによりですわ」

すずかちゃんは両手でアイルの右手を取って、アイルは照れくささを紛らわそうとしてるのかそっぽを向いて、左手で後ろ髪を払ってる。

「フラム！　全然会いに来なかったじゃないのよ、このぉ～！」

「痛いでありますよ、アリサ～！」

アリサちゃんはフラムの肩に左腕を回して、右拳でフラムの頭にグリグリ攻撃。でもなんだかフラムも楽しそうに笑ってる。

「アミタ、久しぶり！」

「はい！　お久しぶりです、イリスさん！」

「久しぶり。ユーリも元気そうだな。良かったよ」

「はいっ。元気ですー！」

「執務官は元気してた～？」

「あ、ああ。僕は元気だったが・・・」

アミタさんとキリエさんとユーリは、シャルちゃんとクロノ君とルシル君の3人と笑顔で挨拶をし合ってる。キリエさんのスキンシップにクロノ君はちょっとたじたじで、ユーリはルシル君に頭を撫でられてとっても気持ち良さそうに目を細めてる。

「お久しぶりです、なのは。・・・一目見て、あなたがあの日より強くなっているのが判りました。今から再戦するのが楽しみです」

「にゃはは。シュテルも当然強くなっているんだよね？」

「はい。エルトリアの危険生物は恐ろしく強く、我々マテリアルが総出で掛からないと勝てないものも居ましたから、かなり鍛えられました。なのははどうです？」

「私もすごく強い人たちと戦ってきたよ。負けたこともあって、半年以上入院することもあったけど」

にゃはは、って笑ってそう答えると、「あなたが負けた・・・！？」シュテルは明らかな驚きを見せた。そんなに驚くことなのかなぁ。シュテルから「それはいつの話ですか？」って聞かれたから、「1年ちょっと前に撃墜されて、半年くらい前まで入院してた」って答えた。

「最近なのですね。今はもう・・・？」

「うんっ。完全復活したし、魔導師Sランクも取得したよ。シュテルとお別れしたあの日に比べれば強くなってる・・・って思う」

「いえ。強くなっていますよ。それは間違いないと思います」

「にゃはは。ありがとう♪」

シュテルが柔らかな微笑みを見せてくれた。そして私たちはこんな寒空の下で長々とお話しするより、アリサちゃんのお家に集まってお話ししようってことになったから、「じゃあ、あたし達について来て」また空を翔ける。

「そう言えば、紅の鉄騎たちは居ないのでありますな」

「あー、ヴィータ達は仕事なんよ。夜には帰ってくるからな、フラム。それで・・・アミタさん達ってどんくらいまでこっちに居れるん？」

「あ、今日・明日・明後日は居ようかなって思ってます」

3日しか居られないんだ。ちょっと・・・っていうより結構寂しい。だからその分、濃い3日間にしないと。いっぱいお話しして、いっぱい模擬戦して。また何年も会えなくなったとしても寂しくないように。

「それでなんだけど～。誰かわたし達を泊めてくれないかしら～？」

「それなら家に来なさいよ。部屋も空いてるし」

「ありがとうございますアリサさん！　いやぁ、助かりました。こっちの世界のお金も持ってませんし。もしみなさんに断られていたら野宿する羽目に・・・」

アミタさん達がアリサちゃんのお家に宿泊することが決定。だったら・・・。

「アリサちゃん！　あのね、私・・・――」

「言わなくても判るわよ、なのは。あんた達も泊まりに来なさい。どれだけ人数が増えようが泊まれるくらいに広いんだから」

そういうわけで、私たちチーム海鳴もアリサちゃんのお家に泊まることになった。朝・昼・夜とシュテル達と一緒に居られるんだ。でも、管理局のお仕事もあるから最終日はゆっくり出来ない。せめてお見送りが出来ればいいんだけど。本局から帰ってくるまでシュテル達、帰らないでいてくれると良いな。

「しかし、君たちはどうして再び海鳴市へ？　また変な事件を起こそうとしているわけじゃないよな？」

「クロノさん。さすがにそれはあんまりですよ」

「そうよ～。忙しくなる前に友達に挨拶しに来ただけよ～、執務官」

「す、すまない。気を悪くしたのなら許してくれ」

アミタさんとキリエさんに挟まれるような形のクロノ君はさっきからたじたじしっぱなしで、普段は絶対に見せないようなその様子がちょっと面白い。

「それで王さま。忙しなる前に、ってどうゆうことなん？」

「・・・・」

「無視せんで～！」

「のわっ？　ええい、抱き付くな、鬱陶しい！」

「王さまが話してくれるまで離さへんよ～♪」

「わひゃっ？　ど、どこを触っておる馬鹿者！」

「なっ！　うそや・・・、そんな・・・！　王さま、わたしをモデルにしてるはずやのに・・・、わたしのより大きい・・・！」

「ひゃあん！？　たわけっ！　変なところを揉むでない！」

――アンスラシスドルヒ――

最近頻発するようになったはやてちゃんからの強力なスキンシップがディアーチェにも襲いかかって、顔を真っ赤にしたディアーチェの周囲にはブラッディダガーと同じ射撃魔法が１２発と展開された。

「わー、ダメですよディアーチェ！」

「止めるでないユーリ！　此奴には一度灸を据えてやらねばならぬのだ！」

ドタバタなはやてちゃんとディアーチェとユーリ。すると今度は「へぇ。オリジナルより成長が早いってことかしら」アリサちゃんがわきわきと両手を厭らしく動かし始めて、フラムへと接近を試みようとするも、「来るなでありますよ～！（怯）」フラムが必死に逃げる。

「まったく。何をやっているのですか、あなた達は？　胸の大きさなど瑣末な問だ――きゃん！？　す、すずか！？」

「えっと、やらないといけない雰囲気だったからつい・・・」

「そんな雰囲気など気のせいですわよ！　ちょっ、お離しなさい！」すずかちゃんとアイルも始めちゃったし、「きゃあ！？」フェイトちゃんと、「わわ！」アリシアちゃんは、「わっはっはー！」レヴィちゃんに襲われちゃってるし。

「執務官。わたしの・・・触ってみる？」

「んなっ！？　触るわけないだろう！」

「あはは♪　顔真っ赤にしちゃって可愛い♪　身長もぐんっと高く

なったし、声変わりもして格好良くなったよね　」

「こら、キリエ！　クロノさんの純情を玩んではいけません！　本気にしちゃったらどうするんですか！？」

「ならない！」

キリエさんはクロノ君で遊ぶし、ユーリは顔を真っ赤にして両手で顔を覆い隠してるし、ルシル君は「男が２人も居る中で何やっているんだ」思いっきり呆れてた。そして私は「にゃはは・・・」シュテルを見ると、シュテルが「っ！」って少し身構えた。

「やめましょう、なのは。これは不毛な争いです」

「そ、そうだよね、うん」

「はい」

シュテルは真面目で良かった。そう安堵した瞬間「にゃっ！？」思いっきり触られた。両腕で胸を隠しながらバッとシュテルから距離を取ると、「なるほど」シュテルは自分の胸に手を置いて、「なのは。ちゃんと成長していますね」そう言った。喜んでいいのか、だまし討ちみたいなことをされたことに怒っていいのか、何か複雑な気分。

「シュテル～～～！」

「なのはも触ってみますか？」

シュテルはそう言って胸を張った。そんな堂々とされるとこっちの方が恥ずかしくなっちゃう。とりあえず「それじゃあ・・・失礼します」シュテルの胸に手を伸ばしたら、「なんて嘘です」シュテルはひょいっと躱した。

「あ！」

「ふふ。なのはは素直ですね。再戦前の前哨戦です」

「負けないよ！」

シュテルが高機動で空を翔け回り始めたから、私も全力で追いかけることに。結局その追いかけっこはアリサちゃんのお家に到着するまで続いた。クロノ君とは途中でお別れして（キリエさんからイジられないようにするためみたい）、アリサちゃんの部屋に移動。そして「わっ、コレなんですか！？」コタツに驚くアミタさんや、「あー、これ一度入ったら出たくなくなるわ～♪」その機能にホクホクなキリエさんを微笑ましく眺めながら・・・

「それで？　忙しいという理由で来てくれたようだけど」

温かなココアをみんなで飲みつつ、チーム海鳴を代表してルシル君が改めて訊ねた。

「あ、はい。エルトリアの再生は、王様たちのおかげで徐々に成果

を出しています。完全に再生するまでは１００年単位になりそうですけど、それでも緑も戻りつつあります」

「それで、これから再生活動の第二段階に移るのね。けどその第二段階に移ったら早々休みが取れるような余裕が生まれないのよん。だったらその前に、チーム海鳴に改めてお礼をしようってことになったの」

それが再び海鳴市に来た理由だった。エルトリアを死に至らそうとしていた死蝕現象をどうにかするために、遠い遠い異世界からやって来たアミタさんとキリエさん。そしてアミタさん達に協力するために、エルトリアへと付いて行ったシュテル達マテリアルとユーリ。お別れしてからずっとエルトリアがどうなったのか気になっていたけど、ちゃんと再生できているようで本当に良かった。

「そうだ。アミタ、キリエ。エフェルは役に立ってくれただろうか？　一応エフェルとのリンクは繋がっているけど、そんなの意味ないくらいにそちらの情報が入って来ないんだ」

「はいっ！　もうルシリオンさんにはどんなに頭を下げても足りないくらいに感謝しています！」

「そう！　そのお礼がしたかったのよ！　エフェルのおかげで博士の病も完治したの！　君のおかげで、博士に再生し始めたエルトリアを見せることが出来たわ！」

ルシル君がグランツ博士の病気をどうにかするために、死んでいな

ければどんな病気でも怪我でも治せるっていうコード・エイルのみ使えるように設定した使い魔を、別れ際にユーリの髪の毛に引っ付けたってことはすでに聞いてた。
ルシル君の使い魔は見事にお仕事したみたい。アミタさんとキリエさんの2人からぎゅ～って抱きしめられるルシル君は「役に立って良かったよ」って、2人に抱きしめられてること以上に、グランツ博士を救えたってことに喜んでるみたいだった。

「あの、ずっと気になってたんですけど、ルシリオン。その左目はどうしたんですか？　その、間違っていたらすみませんけど・・・左目、見えてませんよね？」

ルシル君が付けてるモノクルを見てユーリがそう訊いたら、「それは気になってました」ルシル君を解放したアミタさんも同意して、「え、そうなの？　ファッションじゃなかったのね～」キリエさんが続いた。

「ああ。全く見えないんだ。ある犯罪者に敗れた時にやられたようでね。左目の視力を奪われ、創世結界が使用できないようになってしまったんだ」

ルシル君が負けた。その一言でアミタさん達が絶句した。それに「創世結界とは、複製した魔法や武器を蓄えておく精神世界でしたね。それはあなたの戦力において大きな損失では？」シュテルがそう言うと、「まったくだよ」ルシル君が肩を竦めた。

「それは治りますの？」

「その犯罪者を撃破すればな」

「蒼ハネを倒せるだけの強さかぁ。ボクも戦ってみたいな～」

「かなりの強敵であるようですからな。腕が鳴るであります」

ルシル君に呪いを掛けたレーゼフェアさんと戦ってみたいって言うレヴィとフラムだけど、正直勝てないと思う。はやてちゃんが「勝てるんはユーリだけやないかな～」って呟いた。私たちレーゼフェアさんや"エグリゴリ"を知るチーム海鳴みんなは「うん」頷いて同意を示した。たとえシュテル達が神秘を持っていたとしても、たぶん・・・無理だ。

「私ですか？　ディアーチェ達が束になってもダメなんですか？」

「あー、たぶんダメ。ユーリを解放した時みたくディアーチェと四騎士が融合してる形態ならいい勝負かもだけど」

「あんな真似、二度とするものか！　しかし気に食わんな。我々が束になっても遅れをとるような者が居るなぞ。貴様らの過大評価ではないのか？」

シャルちゃんが言うように、あの最終決戦でのディアーチェの砕け得ぬ闇モードだったら何とかなりそうな気もする。だけど、そんな事を二度としたくないってディアーチェが怒った。あのモードになった経緯はすごく辛いものだったから仕方ないよね。

「そう思うなら後で見せてやるよ、ディアーチェ。エグリゴリという存在がどれだけの物か」

ルシル君の"エヴェストルム"にはシュヴァリエルさんやレーゼフェアさん、フィヨルツェンさんとの戦闘記録が収められている。私たち子供組は、かなりの過激な戦闘だってことで閲覧禁止だけど。ドクターやシスターズからも、見ちゃダメだ、って言われちゃってるし。

「ほう、良かろう。貴様が言うエグリゴリとやらの実力、とくと見させて――」

ディアーチェがそこまで言いかけたところで、ＰｉＰｉＰｉ♪通信が入ったことを知らせるコールが鳴った。受信者は「俺か？　悪いな、ディアーチェ」ルシル君だった。ディアーチェに一言断りを入れてから「はい。ルシリオン」コールを受けて通信を繋げた。

『こちらシャマル！　ルシル君、緊急よ！』

「「シャマル？」」

私たちの前にモニターが展開された。映し出されたのはシャマル先生で、一目で緊迫してる空気が伝わってくる。続けて『ルシリオン。お前に確認してもらい男が居る』シグナムさんが映り込んだ。

『ルシル！　本局にトンデモねぇ神秘を発してる奴が居んだよ！

お前、コイツのこと知ってたりするか！？』

また新しく映り込んできたヴィータちゃんの顔からアングルが移動する。そこは本局の居住区のレストラン街。一般人も入れる区画だ。カメラアングルが行き交う局員や民間人の列に移って、1人の初老の男の人を映し出した。インバネスコートと燕尾服っていう紳士って感じの人だ。

「馬鹿な！　馬鹿な、そんなことがあるわけがない！　ありえない、あってたまるか！」

ルシル君が立ち上がったと思えば、「何故だ、どうして奴がこの世界に居る！？」取り乱し始めた。ルシル君がそこまで取り乱すことなんてほとんどないから、私たちはすごく困惑する。顔色が真っ青になるほどに動揺してるルシル君に「ルシル君！　この人のこと知って――」はやてちゃんがそこまで言いかけたところで・・・

「スマウグだ！　リンドヴルム首領、ミスター・リンドヴルム！」

ルシル君が、その紳士さんの正体を明かした。リンドヴルムの首領。それを聴いて私たちも「そんな！」驚く。だってミスター・リンドブルムことスマウグは、アールヴヘイムっていう全く別の次元世界でルシル君が倒したって話だったのに。そんな私たちに「リンドヴルムとは？」アミタさんや、「スマウグってなになに？」キリエさんが訊いてきた。

『この声・・・え！？』

『ちょっ、はあ！？　フラム・・ってか、マテリアルやユーリ、フローリアン姉妹まで居んじゃねぇかよ！』

『なに！？　いろいろと聴きたい事はあるが、今はスマウグのことだ、ルシリオン！　どうすればいい、指示が欲しい！』

「ねえねえ、スマウグってなんだよ～！」

「リンドヴルムってなんでありますか！？」

「ああ、判っている！　指示・・・指示・・・！　くそっ、この展開は最悪過ぎるだろ・・・！」

「ねえねえ！」

「リンドヴルムやスマウグとはなんでありますか！？」

もう大混乱。状況も切迫してるし、レヴィやフラムもリンドヴルムやスマウグのことを聴きたいって言ってるし。だから『ああもう、うるせぇ！　後で教えてもらえ！』ヴィータちゃんが怒鳴った。するとレヴィとフラムは渋々だけど黙った。

「あとで教えるからちょっと待っててね」

「今は大事な話し中なのよ」

「チェー」

「であります」

フェイトちゃんとアリサちゃんが優しくレヴィとフラムの肩に手を置く。そんな中で「スマウグには手を出すな」悩みに悩んだ結果、ルシル君がそう指示を出した。

『手を出すなって。アイツの好きにさせろってか！？』

「ああ、そうだ！　何か目的があるはずだ。その目的が暴れることでないのなら、下手に手を出さないのが一ば・・・っ！　そうか、神器だ！　スマウグの目的は神器だ！　機動一課に連絡！　神器をスマウグに渡すんだ！　それで戦闘だけは回避できるはずだ！」

『っざけんなよ、ルシル！　尻尾巻いて逃げろってか！』

「ああ、そうだ！　勝てないんだよ俺たちじゃ！　損害が神器だけなら安いものだろうが！」

ルシル君のその話に「そんな・・・」私は無意識に呟いた。"ブリギッド・スミス"と"スフィ・ダンテ"。人の姿に変身できる数少ない神器で、回収後に言葉を交わしたこともあった。"スフィー・ダンテ"は自分を人として、娘として一緒に過ごしてくれた家族への思いが溢れる優しい女の子で、"ブリギッド・スミス"は物静かだけど人化できる他の神器思いの温かな女の子だった。そんな２人を犠牲にするその作戦・・・なんか、いやだな・・・。

『・・・判った。お前がそこまで恐れる相手であるのなら、我々も手を出そうとは思わん』

『な！？　マジか、シグナム！　お前までなんで弱気になってんだよ！』

『スマウグはエグリゴリ以上の神秘を有するという話だ！　そんな怪物を相手に仕掛けるわけにはいくまい！』

『だけど！・・・そうだけどよぉ・・・』

『ルシル君。アミタちゃんやキリエちゃん、ユーリちゃん、マテリアルの子たちにドラウプニルや神秘カートリッジを渡しての総力戦でも勝てないの？』

シャマル先生からそんな提案が出て、自分たちの名前が出たアミタさん達は、「それは・・・！」そう悩みだすルシル君を見た。

「ルシリオンさん。リンドヴルムとかスマウグとか、私たちにはさっぱりですが、何かお役に立てるようなことがあるのであれば何でも仰ってください」

「そうね。君だけじゃなくチーム海鳴のみんなには大きな借りがあることだし、その1つを返すにはちょうどいい機会かも♪」

「貴様がそこまで恐れるスマウグ。我は興味があるな。良かろう。

我らの力を貸してやろう。シュテル、レヴィ、フラム、アイル。異存はあるまいな。とは言え王命であるゆえ、拒否権など無いが」

「拒否などしませんよ、我らが王」

「おお！　どんだけ強いのかすぅっごい楽しみ♪！」

「エルトリアで鍛えた私の魔導！　とくとお披露目するでありますよ！」

「仕方ありませんわね。ゆっくりバカンス気分でしたけど、王命であれば存分に我が魔導を使いますわ」

ディアーチェの王命っていう指示に応えてくシュテル達。そしてディアーチェは「ユーリ。お前はどうだ」ユーリには確認を取った。ユーリは戦うことがあんまり好きな子じゃなかった。だから砕け得ぬ闇事件では苦しんでた。傷つけるのも、壊すのも、大嫌いだって。

「愚問ですよ、ディアーチェ。もちろん私も戦いますよ！　スマウグっていう人は悪い人なんですよね？　しかも尋常じゃない強さ。だったら私は協力したいです！」

「うむ。決まりだな」

脇を閉めて両拳をグッと握り締めたユーリに、ディアーチェは満足そうに頷いた。ルシル君はそれでもまだ迷いがあるみたい。だから「私は・・・見捨てたくない」ルシル君にそう言った。

「なのは・・・？」

「私、スフィー・ダンテやブリギッド・スミスを見捨てたくない。確かに人じゃないかもしれないけど、生きてることに変わりないんだ。そんなあの子たちを、見捨てたくない」

「あたしも、なのはと同意見よ」

「私も！」

「私も」

「わたしもだよ！」

「わたしもやよ、ルシル君」

「わたしも！　シャルロッテ様の力を借りれば、きっと勝てるって！」

アリサちゃん達も私と同じ気持ちであってくれた。ルシル君はさらに迷い、悩んだ後、「判った。スマウグを迎撃しよう」戦う意志を持ってくれた。ヴィータちゃんが『それでこそだぜ！』嬉しそうにガッツポーズを取った。

「シグナム達は、スマウグを尾行してくれ。だが、絶対にこちら側から手を出さないように。今から対スマウグの準備を始めるから、それまでは耐えてくれ」

『了解した』

『おうよ！』

『判ったわ！』

『了解ですぅ！』

『ヤー！』

シグナムさん達がルシル君の指示に応じていく。そして最後にリインとアイリの顔がモニターに映ったら「え・・・！？」アミタさん達が驚きを見せた。その理由はリイン。アミタさん達がエルトリアに戻った後にアインスさんが亡くなったことを知らないから。

「ルシル君！　あの、ごめんね。えっと、スマウグって、ケリオン君の門の先・・・アールヴヘイムで倒したんだよね・・・！」

「・・・門が閉じる直前だったからな。倒れる姿を見ずに戻って来た。だが、必ず勝てると思っていた。当時、俺は、俺の最高クラスの使い魔を何体も召喚したうえで戦った。スマウグと同格に近い子たちだ。その子たちが束になれば勝てる。そう思って・・・ん？　あ・・・！」

「そうだよ。勝敗はこの際関係ないよ、ルシル君。ケリオン君は確かに閉じて、アールヴヘイムに帰ったはずだった。なのにどうして？

どうしてアールヴヘイムに居るはずのスマウグがこっちの世界に居るの？」

すずかちゃんの考えに私たちは絶句した。何故ならその答えは１つだから。私たちの過ごす次元世界と隔絶されたまた別の次元に存在している世界・アールヴヘイムとを繋いでいる神器・転移門"ケリオンローフェティタ"。

リンドヴルムの本拠地・天空城レンアオムでの決戦の後、ルシル君は使い魔さん達と一緒にスマウグをアールヴヘイムに閉じ込めた。ケリオン君は自身であるその門を閉じて、本来の在るべき場所のアールヴヘイムへと帰ったはず。

「ケリオンローフェティタはまだ帰っていないということなのか・・・！？」

せっかく回収してアールヴヘイムに返還したいくつもの強力な武器型神器がまた、この次元世界に流れ込んでいるかもしれない。そんな最悪な結末が脳裏に過ぎる。

「くっ・・・！　とにかく！　はやて達は本局へ今すぐ向かってくれ。機動一課への連絡は俺がやっておく。あとアミタ達の分のドラウプニルとカートリッジを取りに行ってくるから、リンドヴルムやリインのことは、シグナム達と合流するまでに済ませておいてくれ。・・・アミタ、キリエ、ディアーチェ、シュテル、レヴィ、フラム、アイル、そしてユーリ。・・・ありがとう」

アミタさん達にお礼を言った後、ルシル君ははやてちゃんのお家へ

向かった。ルシル君を見送った後は「本局へ行くわよ！」アリサちゃんに続いて、本局のスカラボへ直行できるトランスポーターへと向かう。

「あの、まずはリンドヴルムとスマウグについて教えてください！」

廊下を走る中、そう訊いてきたアミタさん。私たちはリンドヴルムとの戦いを話した。古代ベルカよりずっとずっと昔の時代に存在していた魔術、神秘、それを扱う魔術師、神さまや魔族と呼ばれる超常存在が作り出した神器って呼ばれる物を巡った戦いを。そしてスマウグっていう、魔族でありドラゴンでもある首領が、今再び姿を見せたということも伝えた。

「こんな時に不謹慎ですけど、とても興味深いお話ですね」

「そう？　わたしは過去（むかし）が現在（いま）を侵してるって点で嫌な気持ちよ？」

「ドラゴンかぁ！　エルトリアじゃ何度も戦ってるけど、その神秘っていう特別な力があるわけだしやっぱり違うのかな～？」

「ふん。そのスマウグとか言うトカゲを狩ってやればよいのだろ？　見た目は老紳士だがな」

「神秘という力への対策はルシリオンが用意して頂けるとのことですし、数としての戦力も十分でしょう」

「私たちがユーリを止めるためのカートリッジやプログラムを作り、

あなた達に授けたあの日とは正反対ですわね」

「おお、懐かしいでありますな！」

リンドヴルムについては話した。アミタさん達は思うところは別々みたい。そして次に「あのポンコツ融合騎は逝ったようだな」アインスさんとリインの話なんだけど、ディアーチェはすでに察していたみたい。

「その通りや。アインスはもう居らへん。ってゆうか、またポンコツって言うたな王さま！」

「ええい、さっさと続きを話せ！」

「んもう、あとで謝ってな！・・・さっき映ってたんはリインフォース・ツヴァイ。わたしとアインスのリンカーコアの一部を用いて生み出した、わたしのユニゾンデバイス――ううん、パートナーなんよ」

アインスさんが居ないことを知ったアミタさんやキリエさん、それにユーリがとても悲しそうな表情を浮かべた。アインスさんが慕われていたからこその表情だ。だから「おおきに」はやてちゃんはお礼を言った。

「さ、着いたわ。ここから本局へ直通転送できる」

「覚悟はいい？　フローリアン家。敵は正しく最強クラスの一角。

負ければ確実に死ぬ。勝ったとしても間違いなく無傷じゃ済まされない。退くなら今よ。私もルシルも責めないわ」

アリサちゃんの案内で到着したトランスポーター室。そこでシャルちゃん・・・ううん、雰囲気からして、シャルちゃんの前世の人格のシャルロッテさんが、アミタさん達に最終確認。アミタさん達もシャルロッテさんへとバトンタッチしたシャルちゃんに違和感を抱いたようだけど・・・

「退くつもりはありません」

「そうよ～。ここで逃げるのはノンノン♪」

「あれだけ大見得切っておいて退くなど考えられぬわ」

「ええ。我ら紫天一家の力を見せつけて差し上げましょう」

「やってやるぞー！」

「おお！であります！」

「はぁ。それだけ強大な相手であればコンビネーションが大切になりますわ。どうぞ足を引っ張ることの無いようにお願いしますわ」

「が、頑張ります！」

アミタさん達の覚悟をしっかり聴いたシャルロッテさんは微笑んで

「じゃ、助けてもらおうっか♪」トランスポーターを見詰めた。

Ｅｐｉｃｏ?其は魔境にて畏怖されし財宝護る黄金の竜～Ｓｍａｕｇ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「回収済みの神器６つ、すべて持って来たわ」

「ありがとうございます、フィレス一尉」

はやて達と別れた後、俺はクロノとも合流し、八神邸の自室に向かい、フローリアン家の人数分の"ドラウプニル"（念のために最大具現数を具現化していて良かった）と神秘カートリッジをリュックに詰めた後、機動一課のオフィスへとやって来た。オフィスの奥にある個室に１人で入り、少女２人がソファに座り、神器４つが脚の短いテーブルの上に置かれている様を確認。

「お久しぶりです、神器王」

「なかなかお会いに来てくださらなかったので、少し寂しかったです」

「ああ、すまないな、ブリギッド、スフィ。前にも言ったが俺は今、神器王だということを隠して生きているんだ」

人化できる神器、"ブリギッド・スミス"と"スフィー・ダンテ"。大戦時は人化できない物だったが、その頃からすでに自我があった

ことから俺や他の"アンスール"のことを慕ってくれている。だから今の俺の状況も伝えてある。"界律の守護神テスタメント"のこと、"堕天使エグリゴリ"を救い終わればアースガルドへ還れることなどを。

「そうでしたね。それで、今回はどういったご用でしょうか？」

「どんなことでもお申し付けください。この力の限り、ご協力します」

そう言ってくれる2人に「ありがとう。実はな――」スマウグが今、ここ本局に居ることを伝えた。

「魔界最下層の黄金竜・・・！」

「スマウグ竜様が・・・居るのですか！？」

神属側の"ブリギッド"や魔族側の"スフィー"が驚愕する。どの派閥でも関係なく恐れられる竜族、その中でも特に畏怖の対象である王クラスの一角、黄金竜スマウグ。俺は、リンドヴルムはスマウグが作った組織であり、今まさに2人やテーブルの上に乗った神器が狙われているのだと伝える。

「そうですか」

「私たちに出来ることがあるからこそ、こうして呼んでいただけのですよね」

「察しが良くて助かる。お前たちの魔力が欲しい」

ドーピングの為の神秘と魔力が欲しい。創世結界が使えない以上、スズメの涙程度の竜殺しの術式や神器も使えず、最悪の手段である"ジュエルシード"も使えない。ユーリの絶大な魔力に神秘が加われば、確かに最高の援軍と言えるが・・・、それでも足らない。

「「判りました。どうぞお使いくださいませ♪」」

快諾してくれた2人が光に包まれ、"ブリギッド"は黄金の輪に、"スフィー"は一振りの片刃剣という元の姿に戻った。俺は「ありがとう。コード・イドゥン」最大限の感謝を込め、魔力吸収の術式イドゥンで神器6つから限界まで魔力を吸収する。吸収した魔力を結晶化させ、私服のポケットに忍ばせる。

（スフィー・ダンテの能力に呑み込まれるのは嫌だし、ブリギッド・スミスじゃ火力不足だ）

他の神器もスマウグの神秘には通用しないだろう。それゆえにこんな形でしかお前たちを扱えない俺を許してくれ。そして俺は個室を出、「行きましょうか」外で待っていてくれたフィレスやクロノと共に、シグナム達の居る居住区へ向かう。

「スマウグは未だに居住区をぶらついているようよ」

「スマウグの実力からすれば単独で本局を落とせます。神器が目的

ならここに攻めてきてもおかしくないです。それなのにどうしてまだそんなところに居るのか解りません。が、本局に留まる理由があると言うのは確か」

「そのスマウグを、特捜課のクララ准陸尉のスキル・強制転送で無人世界に飛ばすという作戦、面白いよ」

「本局でスマウグとの戦闘など正気の沙汰ではありません」

それこそ本局が滅ぶ。対スマウグ戦の最大の課題は、本局から無人世界へ強制的に転移させることが出来るかどうか。そのために必要な人員もすでに連絡して用意した。

「だけど、ベッキー陸曹長とアルテルミナス准空尉が居ないのは痛いわね」

「ええ。ルミナの固有スキルは欲しかったのですが、ベッキー先輩の精霊では元より勝ち目はないので、その・・・」

「居なくても構わない、というわけか・・・」

ルミナの固有スキルは神秘を宿せばある程度は使えるが、最下層の魔族であり竜族の王クラスでもあるスマウグ相手に精霊では相手にならない。かえって吸収されて強化さしてしまう可能性もある。

「死んでもそんなこと言えないけどな。とにかく今は、下手に行動に移られる前に急ごうう、クロノ、フィレス一尉！」

「ああ！」「ええ！」

合流までの道程にて「ルシル！」特別技能捜査課の先輩、左側の前髪だけを耳に掛けるといった蜂蜜色の長い髪を揺らす、本作戦の要であるクララや、強制転移させるまでにスマウグが真の姿に戻った時の場合の結界要員の「ルシル！」セラティナ、それに「ごめん、待たせた！」ユーノとも合流。その３人にも"ドラウプニル"を渡す。さらに戦力の１人である「お待たせ！」セレスとも合流。

そして・・・

「はやて、みんな！」

はやて達とも合流を果たす。かなりの大所帯になってしまったが、これもでまだ足りないかもしれない。アミタ達と自己紹介を始めつつ、マテリアルがはやて達にそっくりなことに驚くフィレス達を横目に「ん？　シャルはどうした？」彼女の姿が見えないことに気付いた。

「シャルちゃん、あの後にシャルロッテさんと交代して、今はフライハイト邸へ・・・」

「キルシュブリューテを取って来るって言うてたよ」

ベルカ時代にフライハイト家へ渡した"断刀キルシュブリューテ"・レプリカをか。複製品とは言え宿す神秘はオリジナルと大差ない。だが、スマウグの神秘には通用しない。"キルシュブリューテ"の

神秘は絶大だ。しかし、完全解放したとしても、いくら第９位だとしても、王の一角であるスマウグの神秘には足りない。

「（それでもデバイスのキルシュブリューテよりかはマシか）そうか。判った。・・・スマウグ・・・」

ここから１００ｍほど離れたここから老紳士姿であるスマウグを確認する。

（クソッ。涼しい顔をしているな。オリジナルのヨルムンガンド、エインヘリヤルではあるがその神秘はケタ違いのフェンリル、フレースヴェルグ、ガルムの４体を相手にしていながら勝つのか・・・！）

さすがに年単位が経過すれば、どれだけダメージを負っていても治せるか。とにかくアミタ達に「これを手首にはめてくれ」"ドラウプニル"や神秘カートリッジを渡す。アミタとキリエとユーリ、それにディアーチェとアイルには"ドラウプニル"を。シュテルとレヴィとフラムには"ドラウプニル"とカートリッジを１０発ずつ渡し、なのは達にも１０発ずつ渡す。毎日コツコツと作っておいて良かった。俺は「シャマル。コレを頼む」シャマルに背負っていたリュックサックを預ける。

「これは・・・？」

「カートリッジ組の予備だ。みんな。戦闘中にカートリッジを消費しきったら、シャマルの元で補給してくれ」

みんなにそう伝えておく。いま渡した１０発程度では絶対に足りないことは判っている。俺が今まで地道に作ったカートリッジ、その全てがあのリュックに入っている。完全な総力戦だ。

「黄金の腕輪と薬莢、ですか」

「へぇ。どんなゴツイ兵装かと思えば、超豪華なアクセじゃな～い」

「鏡のように顔が反射して映ってます～♪」

「コレが貴様の言う対策か？」

「確かに腕輪やカートリッジからは不思議な感じがしますね」

「おお、ゴールデンでありますな～♪」

「美しいですわ～」

「なんか手首にはめても変化ないぞ？　このカートリッジをロードすればいいのかなぁ～？」

レヴィは、起動した"バルフィニカス"に装填したカートリッジを、なんとその場でロードしやがった。俺やはやて達も「ちょっ！？」その最悪すぎる行為には絶句した。レヴィは「わわっ！　リンカーコアがビリビリするぅ～！？」と大慌てしつつ魔力を放出させた。

「ようやく姿を見せたな、神器王！！」

スマウグから視線を外していた数秒のうちに、奴は俺たちの背後に立っていた。すでに神秘が膨れ上がっている。多くは無いとは言え人の居るところで変身をする気なのか。魔力炉（システム）の稼働率を引き上げ、魔術師化する。そして・・・

――女神（コード・リン）の聖楯――

「シャマル、クロノ、ユーノ、アルフ！　セラティナ！　急いで結か――・・・っ！」

――顕現――

上級の防性術式のリン４枚を同時展開し、スマウグと隔てるように横一列に並べた。その直後にスマウグの全身からカッと光が発せられ、さらに爆炎が生まれた。俺は真っ先に「はやて！」を庇うように胸に抱いた。

ＶＳ・――・――・――・――・――・――・
其は財宝を集め護りし竜族の王スマウグ
・――・――・――・――・――・――・ＶＳ

炎はリンで防げたが、爆風だけは防げなかったこともあり「ぐぅぅ・・・！」俺たちはゴミのように吹き飛ばされてしまった。俺の腕、というよりははやての腕の中に居るリインの「ふわぁぁぁぁぁ！」悲鳴が微かにだが聞こえた。

「ルシ・・・！」

「舌を噛む、喋るな！」

空中で姿勢を立て直しつつ俺は『みんなは無事か！？』念話でみんなの安否を確認する。すぐに『大丈夫だよ！』なのはを筆頭にみんなから無事を知らせる返答があった。俺ははやてを抱えたまま着地し、「エヴェストルム！」を起動して防護服へと変身。降ろしたはやてとリインも「セットアップ！」変身を終えた。

『結界担当の　５人は結界を！　俺が護衛につくからクララ先輩は煙の外から出てくれ！』

『『判った！』』『了解です！』『任せて！』

『了解！』

クロノも前線で戦わせるかどうか迷っていたが、今となっては結界担当に回ってくれた方が心強い。俺はリインとユニゾンを果たしたはやての手を引いて、スマウグの顕現による爆炎に遅れて発生した黒煙の中から脱出。黒煙の外ではすでにみんなが防護服へと変身し、デバイスを力強く握り締めていた。

「お・・・大きいですー」

ユーリの視線を追ってそちらに振り向くと、「んな・・・！」はやてが絶句。そこには真の姿である全長７０ｍ、翼を全開しているこ

とで全幅１４０ｍという巨体を誇るスマウグが居た。

（黄金の鱗がボロボロだな。ヨルムンガンド達が頑張ってくれたおかげだろう）

想定以上に俺たちの勝率が高いことが判った。しかしそれでも、勝てるかもしれない、程度だが。強烈な熱波を発する奴が雄叫びをあげると黒煙は吹き飛び、「う、うるさい・・・！」はやて達が一斉に耳を塞いだ。

『クララ先輩！』

コルセットを付けたスカート丈がミニなビスチェワンピース・袖口がサーキュラーカフス（やわらかく広がっているフレア形状）になっているアームカバー・太腿までの丈であるサイハイブーツと言った防護服を着ているクララを念話で呼びつつ、彼女の元へ走る。

『いったぁ・・・！　おしり打った～、けど！』

尻を擦りながら立つ上がるクララを右腕で脇に抱え上げ、空戦形態ヘルモーズを発動して空に上がる。シャマル達が結界を張ってくれたおかげで、結界内から無関係者たちの姿が消えた。それに・・・

「さぁ、貴様が保有する神器を渡してもらおうか！　決断するまでの時間を設けてやろう！」

スマウグは"エグリゴリ"とは違って、複製とは言え何百と言う神

器やそれに近い武装を何千と持つ俺を殺す気はないようで、攻撃を仕掛けては来ないのが救いだ。作戦通りにまずはスマウグを強制転移させよう。そのために今はまだ攻撃を加えない。いま攻撃して反撃を食らい結界が破られ、本局を壊されたりでもされたら・・・一体どれだけの死者が出るか判らない。

「大人しく渡せば、貴様の手下どもには危害は加えぬ！」

スマウグのその言いように無視したかったが「取り消せ！　この子たちはみんな仲間だ！」そう怒声を上げ、奴のすぐ側まで突っ込む。常時発している熱波への対抗策として、オーバルプロテクションという名の球体状の障壁を展開。先の次元世界でなのはから複製し、今は俺の魔法であり魔術と化している術式の1つだ。

「一番近い第3無人世界に飛ばすよ？」

「頼む！」

「よしっ！」

スマウグとの距離を詰め、不動の奴の腹部へめがけて突進。そして「あっつ！　熱い！　火傷、火傷しちゃうよ！」クララが半泣きになりながらも「この・・・飛んでけ！」スマウグの腹に触れた。クララのスキルは名の通り触れた対象を、同じ世界や近隣世界へと強制的に飛ばすというものだ。

「あれ・・・？」

「クララ先輩、急いで！」

「ダメ、転移できない！　あっつ！　無理、私のスキルが通用しない！」

最悪な報せが入った。クララは「どうして！？」と、手の平がじゅーじゅー焼かれているにも関わらずバシバシっとスマウグの腹を叩くように触れ続ける。これ以上は「無理だ！」と判断した俺はスマウグより離脱する。プロテクションもヒビが入り始めていたし、なおかつ「なんで・・・！」クララの手が使い物になりそうだった。

――女神の祝福（コード・エイル）――

クララの焼け爛れた両手の平をエイルで治しながら『こちらルシリオン！　作戦変こ――』念話をみんなに繋げた瞬間、「時間切れだ！」スマウグが火炎のブレスを吐き出した。地面がものすごい勢いで炎に包まれる。とうとう攻撃を仕掛け始められてしまった。

『蒼ハネ！　もう無理！　攻撃するよ！』

――光翼連斬――

『焼き殺されるなど堪ったものではないですものね！』

――ティアマト――

好戦的なレヴィと冷静沈着なアイルが交戦に移った。フェイトのハーケンセイバーのような斬撃を連発するレヴィと、８枚と宙に展開した魔法陣から氷山を突き出させるアイルの攻撃がスマウグを襲うが「ほう。降伏ではなく私と戦う選択を取るか？　実によい、来るがいい！」奴には通用しなかった。さらに炎のブレスを奴は吐き続ける。

「クララ先輩は結界担当に移ってくれ！『こうなったら仕方ない！　ここでスマウグを討つ！』」

クララは「うん！」と頷き、シャマル達と一緒に結界を張るために戦線を離脱。そして俺たちは、余裕にふんぞり返っているスマウグへと一斉攻勢に移る。俺は結晶化させた魔力を魔力炉（システム）に同化させ、"エヴェストルム"の神秘カートリッジを４発ロードする。１つ分でフルドライブの魔力刃形態・イデアフォルムに変形させ、２つで穂に刻んだルーンを発動させて神器化のイドフォルムへ。さらに柄に埋め込まれている魔石に魔力を流し、数倍となって返還される魔力と、残り１発分の魔力を用いての・・・

「力神（コード・マグニ）の化身！」

強化術式を発動。俺だけでなくみんなにもマグニを掛ける。さらに「お願いスノーホワイト！」すずかの斬撃・打撃・射撃・機動力・防御力といった強化魔法がメンバー全員に重ね掛けされる。

『黄金の鱗は対魔力に優れた装甲だ！　そこには当てるなよ！』

「アイリ！」

『ヤー！』

「コメートフリーゲン・アイス！」

『乱れ撃ち！』

ギガントフォルムの"グラーフアイゼン"で、冷気を纏うビッグサイズの物質弾を１８発と打ち放つヴィータ。

「まずはその厄介な口を縫いつけてやろう！」

スマウグの全身から放たれる熱波によって物質弾の冷気は吹き飛び、着弾した物質弾は炸裂するものの奴の最も防御力の高い黄金の鱗への着弾だったこともあり、その効果を発揮することが出来なかった。

――鋼の軛・顎――

そこにザフィーラの軛がスマウグの突き出た口に目掛けて突き出る。スマウグは「このようなもの」と鼻で笑い、軛をわざと受けた。上あごには黄金の鱗もあったことで破壊されたが、下あごには鱗はないためサクッと貫いた。が、閉じられた口の隙間から炎が溢れ出し、軛が一瞬のうちに粉砕されてしまった。

「戦滅神（コード・ヴィズル）の破槍！」

スマウグの周囲に舞い散る火の粉の中を翔け抜け、奴の鼻っ面に雷撃系の上級砲撃を撃ち込んだ。しかし「アールヴヘイムでの威勢はどうした！？」全く通用していない。舌打ちしつつ「ヴィズル！」を撃ち続けて行く。

「我が呼びかけに応じ参ぜよ。深淵奈落を支配する冥府の女王の槍。空穿つ螺旋の唸りは破滅与える喜びの咆哮。突き進む道妨げる壁を無残に穿ち、其に純然たる破壊を齎す！」

『ヴルフシュペーア・デア・ウンターヴェルト！』

「せぇぇぇーーーーい！！」

スマウグの頭上に出現するのは、はやてとリインの魔法による巨大な螺旋槍。はやては柄頭を"シュベルトクロイツ"で打ち、槍を放った。それと同時になのはは"レイジングハート"をエクセリオンへ、フェイトは"バルディッシュ"をザンバーへ、アリサは"フレイムアイズ"をクレイモアへ。

シュテルは"ルシフェリオン"をディザスターへ、レヴィは"バルフィニカス"をブレイバーへ、フラムは"タラスクス"をツヴァイヘンダーへ。ディアーチェは「さぁ、トカゲ狩りだ！」"エルシニアクロイツ"をスマウグへと向ける。

「我も子鴉には負けてはおれんな。我が敵を射抜く剣の兵よ。紫天の光の元、軍勢となりこの空を埋め尽くさん！」

――レギオン・オブ・ドームブリンガーーーー

そして詠唱の果て、何十基もの物質剣を展開したディアーチェは「往けい！」剣群を一斉に射出した。スマウグは避けようとも防ごうともしない。対魔力効果を持った黄金を失っている赤い鱗にディアーチェの放った剣群を受けようとも、はやてとリインの槍が頭頂部に当たろうとも「現代の魔術師など所詮はこの程度よ！」ビクともしない。それどころか頭を跳ね上げることで槍を弾き飛ばし、明後日の方に進もうとしていたソレをブレスで焼き払った。

「なのは、行きますよ・・・！」

「うんっ！　行こう、シュテル！」

フルドライブモードの相棒を手に、スマウグの周囲を飛び回りるなのはとシュテルは神秘カートリッジをロードして・・・

「エクセリオン・・・！」

「ルシフェリオン・・・！

「「バスタァァァァーーーーッ！」」

砲撃を発射。桜色の閃光と、轟々と燃える火炎砲と火炎弾８発が、スマウグの顔面に直撃したことで爆発が起き、黒煙が奴の巨大な顔を覆い隠す。

「キリエ、行きますよ！」

「ＯＫ、アミタ♪　Ｋ・Ｚ・Ｇ・　！　キリエ、全力で、頑張るわ！」

――アクセラレイターーーー

「「――からの・・・・、ファイネストカノン！」」

アミタとキリエは目にも留まらない速度でスマウグの周囲を翔け回りながら、それぞれが持つ小型銃・"ヴァリアントザッパー"２挺からの大型エネルギー弾を何発も撃ち込んでいく。

「フレイムアイズ、レガリア発動！」

≪おう！　スリーズ・サンズレガリア、いくぜ！≫

「よっし！　フラム！」

「アリサ！」

「行くわよ！」「行くでありますよ！」

――ヴォルカニックスカッシャーーーー

――アルジンツァン――

アリサとフラムによる燃える大剣を伸長させての刺突攻撃が、スマウグの腹目掛けて突き入れられたと同時、「フラムと熱血っ子に遅

れずに行くぞ、オリジナル、姉っ子！」レヴィが攻撃に移る。

――雷神滅殺極光斬――

「いい加減、フェイトってちゃんと呼んでほしいかも！」

――ジェットザンバー――

「わたしはお姉ちゃん呼びだから不足はないよ！」

――ジャベリンメテオ――

フェイトとレヴィが極大斬撃でスマウグの首を挟撃し、アリシアは展開した魔法陣に寝転がってスナイパーライフル型のデバイス・"ブレイブスナイパー"を構え、「当たれ！」奴の目を重点的に狙って先の尖った魔力弾を撃ち続ける。本当に成長したよな、アリシア。彼女の百発百中の一撃が、アリサ達の攻撃にすら一切のダメージを負わなかったスマウグに初めて回避行動を取らせた。

「目が弱点ですね！」

――ジャベリンバッシュ――

「そのようだ！　レヴァンティン！」

――シュツルムファルケン――

「セレス！」

「うんっ！」

「「悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）！！」

ユーリは背後に浮遊する霧のような赤い２つの魔力――魄翼で造った巨大な槍を放ち、シグナムはボーゲンフォルムにした〝レヴァンティン〟から矢を射た。フィレスとセレスは螺旋状の氷の杭を何百基と展開して、一斉射出。

「ヨツンヘイム人か？　面白い！」

スマウグはブレスで全ての攻撃を焼き払った。俺って馬鹿だな。そうだよな。目には鱗はない。弱点と見て良いだろうに。最下層の魔族・竜種、その王クラスという事実に当てられて、この最大の勝機を見逃していた。

「はっはっは！　神器王よ！　貴様より賢しいのではないか？　この幼き少女たちの方が！」

「チッ・・・！　みんな、目を狙え！」

「おうおう、掛かって来るがよい、幼き英雄たちよ！　我が名は黄金竜スマウグ！　私の――いや、生物としての弱点を知ったところで私の勝利は確定だろうが、それまでの刹那、私を楽しませてくれ！」

大きな翼を力強く羽ばたかせたスマウグ。あまりの突風に「ぐぅぅ・・・！」吹き飛ばされる。そんな中、『クロノだ！　居住区民の避難誘導が始まった！　まだ転移できないのか！？』クロノから念話が来た。体勢を立て直しつつ、クララのスキルではスマウグを強制転移できないことを伝えた。

『なに！？　どうす――』

『待て、今それどころじゃ・・・！』

スマウグの吐く業火弾が容赦なくみんなに向かって行く。みんなはちゃんと軌道とその威力を見極めて回避し、スマウグの顔面――両目を射砲撃で狙い撃っていく。俺も「ヴィズル！」みんなに混じって砲撃を奴の目に向かって放ち続ける。

『スマウグから仕掛けられてしまった！　もうこの場で討つしかない！』

「危ない王さま！」「王様！」

――クラウ・ソラス――

――ファイネストカノン――

「言われずとも判っておるわ！」

――インフェルノ――

回避先を狙われたディアーチェに直撃しようとした業火弾だったが、はやてとアミタが砲撃を撃ち込み、僅かに速度が落ちたことで余裕の生まれたディアーチェが巨大な魔力球４つを降らせることで、業火弾を迎撃した。

『勝てるのか！？』

『勝つしかないだろ！　とにかく結界の維持を最優先に頼む！』

小手先の攻撃ではスマウグは斃せない。弱点となった目に攻撃を加えようとも、スマウグの迎撃能力が高くて全く当たらない。それでもやらなければ、本局が文字通り崩壊することになる。

「アリシア！！」

「え・・・？」

空戦の出来ないアリシアが立つ魔法陣の元へ迫り行く業火弾３発。俺やフェイトがフォローに入るには間に合わない距離だった。しかしそこに「はーい、セーフ♪」キリエがアクセラレイターという高速移動術を使って割り込み、アリシアを脇に抱えて軌道上より離脱した。

「ありがと、キリエ！」

「どういたしまして！」

その様子にホッと安堵しつつ、"エヴェストルム"のカートリッジを８発と連続ロード。

「其は戦場を駆け抜ける戦乙女の将。その美は全てを魅了し、その愛に果てはなく、愛おしむ実りの生誕と成長を見守る・・・」

「ルシル君が詠唱に入った！　みんな、サポート！」

「私も付き合いましょう！」

なのはがいち早く気付き、空を飛び回る俺の護衛としてシュテルと共に付いてくれた。スマウグが「儀式か。どのような魔術を見せてくれるのだ？」俺たちへ向けて口を開けた。喉の奥から真っ赤な光が溢れ出し、それが火炎のブレスとなって吐き出されようとしたその時・・・

「『ギガント・・・フリーレンシュラァァァーーーークッ！！！』」

超巨大化した冷気を纏う"グラーフアイゼン"による一撃がスマウグの口に振り下ろされた。さらに「おおおおお！！」ザフィーラが下あごの真下から拳と蹴りの連撃を打ち込んだことで、口はスマウグの意思には反して閉じられた。直後「むごぉぉぉぉ！？」奴の口の中が爆発し、爆炎と黒煙が溢れ出した。

「豊穣に転じて死と戦をも其は司らん・・・」

「アルゴス・ハンドレッドレイ！」

そこにユーリがスマウグの眉間のところまで行き、大きく広げられたその魄翼から１００発という砲撃を一斉に発射した。続けて「シャルシュガナ！」アイルの冷気砲撃、「トライデントスマッシャー！」フェイトの雷撃砲、「カンシオン・デ・コンヘラシオン！」フィレスとセレスの冷気砲撃、「ヴォルカニックスカッシャー！」アリサの火炎斬撃と、連続して頭部に撃ち込まれていく。

「金色の光を纏いたるその苛烈にして華麗な威容・・・」

スマウグがグラリと仰向けに倒れ込み始めた。みんなの攻撃というよりかは、スマウグの自爆が奴に大きなダメージを与えたようだ。

「チャンスや！　攻撃を絶やすとアカン！」

――クラウ・ソラス――

「うむ！　攻撃を続けよ！　反撃を許すでないぞ！」

――ヨルムンガンド――

はやてとディアーチェも砲撃を放ち、その指示の下にフェイト達も攻撃を加えていく。俺は「なのは、シュテル。俺は大丈夫だ、行ってくれ」と、そわそわしていた２人に告げる。詠唱も残り僅か。スマウグも完全に仰向けに倒れた。あの状態で攻撃するのは難しいだろう。

「うん！　シュテル！」

「ええ！　参りましょう！」

「極光の天幕が靡く時・・・」

なのはとシュテルもスマウグへの情け容赦ない爆撃に参加。奴は起き上がろうと体勢を直そうとするが、「おらぁぁぁぁ！」ヴィータがギガント・フリーレンシュラークでそれを阻止し、ザフィーラも「破城の穿杭！！」巨大な杭を打ち込むことで防ぐ。

「戦士を従え、希望と絶望を戦場へ運び往かん」

詠唱完了。俺の後方にアースガルド魔法陣が６枚と円形に展開。俺の周囲にも６枚の魔法陣、前方にもまた６枚の魔法陣。計１８枚の魔法陣がピラミッド状に配置される形だ。俺は『退避！！』念話で指示を出す。スマウグの側からみんなが退避していくのを確認して・・・

「女神（コード・フレイア）の大戦火！！」

フレイヤを発動。前方の第一層の６枚は時計回り、俺の周囲に展開した第二層の６枚は反時計回り、後方の第三層の６枚は時計回りに回転し始めて、閃光・闇黒・風嵐・雷撃・炎熱・氷雪の６属性による砲撃が断続的に発射され始める。

「すっげぇ、すっげぇ！」

「わぁ、すごいですー！」

問答無用にスマウグへ着弾していく6属性、何十発と言う砲撃。レヴィとユーリが驚きの声を上げる。この魔術を見せるのははやて達にも初めてだが、俺の異常性を知っていることもあって驚きと言うよりは呆れているようにも見える。

「これでもまだスマウグは倒れない！　これ以上、小手先の魔法を使っても意味は無いだろう！　各員、最大魔法を用意！」

下手に魔力を消費をして魔法をちびちび撃ってもジリ貧になるだけだ。だったら大魔法で一気に削った方が良い。

「レイジングハート！　スターライトブレイカー、いくよ！」

「真・ルシフェリオンブレイカー、参ります・・・！」

なのはは魔力集束を始め、シュテルは集束砲の前の直射砲撃の為の魔力チャージに入った。

「よぉーっし！　ボクの必殺技、お見舞いしてやる！」

「雷光一閃！」

水色に輝く雷撃の球体がレヴィの頭上に複数展開される。屋外では

ないことで天然の雷を利用できないフェイトは、その代わりとして周囲にプラズマスフィアを複数展開し、その雷撃をザンバーフォームの"バルディッシュ"の魔力刃に集束させていく。

「フレイムアイズ！」

≪不浄の闇を断ち払うのは太陽の現身。輝ける炎の聖剣！≫

「炎砕、爆砕、大粉砕！」

アリサは足元に展開した魔法陣の上に立ち、魔法陣から噴き上がる炎を"フレイムアイズ"の魔力刃へ集束させていく。フラムも同様に魔法陣の上に立ち、"タラスクス"の魔力刃を突き刺している魔法陣から噴き上がる炎や、その周囲に発生している炎の竜巻８基から魔力刃へと炎を集束させていく。

「響け、終焉の笛！」

「紫天に吼えよ、我が鼓動！　出でよ、巨重！」

はやての足元にはミッド魔法陣、前面にベルカ魔法陣を展開して魔力をチャージ。ディアーチェは前面にミッド魔法陣を５枚と展開して魔力をチャージ。

「「真技！！」」

フィレスとセレスはスマウグの直上へ移動し、正四角形の中に雪の

結晶の紋様、その正四角形の四方の角からひし形の模様が伸び、それを覆う三重の六角形というヨツンヘイム魔法陣を足元に展開。

「私の魔法に合わせなさい、すずか！」

「あ、うん！　お願い、アイル！」

すずかとアイルは、アイルの展開したミッド魔法陣の上に降り立ち、魔法をスタンバイ。

「キリエ！」

「いつでもオッケ～よん♪」

「ユーリも！」

「私も準備万端です！　ルシリオン、みんなの準備、完了です！」

ユーリからの報告に「ああ！」俺は頷き、フレイアの砲撃が切れる前に残りのカートリッジをロードし、すぐさまスピードローダーを使って2つのシリンダーにカートリッジを装填し、そのカートリッジも全弾ロードした。

「（久しぶりに使うな、この魔術・・・）其は狂乱の中に静かに黙する者。鉄靴（てっか）を履き鳴らし、その音を聴きたる者へ恐怖を植え付ける。深き森に在りし其が戦場へ発ち立つ時、傷つきし汝らは絶望す。恐れ、震えよ。汝らの敗残は此処に定めとなろう」

使いどころが難しい術式をスタンバイするために詠唱する。

「フレイアの術式効果が切れる！　アミタ、キリエ、先発を頼む！」

「はいっ！」「判ったわ！」

多属性多弾砲撃フレイアを構築していた１８枚の魔法陣が霧散する。計１００発の砲撃を受けたスマウグだったが、「やるではないか・・・！」それでもまだ起き上がろうと動きを見せる。

「アミティエ・フローリアン！」

「キリエ・フローリアン！」

「行きます！」「行くわよ！」

――アクセラレイター――

２人の姿が掻き消える。次の瞬間には、スマウグの周囲をアミタは翔け回り・・・

「Ｅ・Ｏ・Ｄ・、行きます！」

２本の片刃剣モードにしている"ヴァリアント・ザッパー"で目にも留まらない斬撃をスマウグの腹に叩き込み、さらに双銃モードに変形させて、無数のエネルギー弾で奴を包囲。

「エクス・オービット・ディバージョン！！」

最後に"ヴァリアント・ザッパー"からのレーザーサイトの照射に連動するように、スマウグを包囲していた他のエネルギー弾も一斉に発射され、「むぅ・・・！」着弾して大爆発を起こす。

「Ｓ・Ｒ・Ｉ・、行っくわよ～！」

キリエは双銃を高く掲げ、銃口から伸びる２本のエネルギーのロープの先に巨大なエネルギー球を造り出し・・・

「スラッシュ・レイブ・インパクト！！」

両腕を勢いよく振り降ろすことでそのエネルギー球をスマウグの腹に落とした。そしてまた大爆発を起こす。だがそれでも「はっはっは！　この娘らも面白い技を使うわ！」プスプスと煙が上がっている腹を擦るスマウグが笑い・・・

「どれ、そろそろ反撃をしようか！」

仰向けに倒れ込んだまま口からブレスを吐き出した。その炎は結界のてっぺんに当たるかどうかというところで勢いを失くしたが、「ここに来てそんなものを・・・！」直径３ｍはあろう炎弾となって俺たちの頭上に降り注ぎ始めた。フィレスとセレスは直上に居ながらもなんとか回避できたことで直撃を免れた。

「みんなは動くな！　俺が対処する！」

――崇め讃えよ、汝（ミカエル）の其（コード）の御名を――

しかしはやて達はその場から動けない魔法を使うため、俺が護らなければ。背より２２枚の蒼翼を射出し、それらより砲撃を何十発と放って炎弾を迎撃し・・・

――戦滅神（コード・ヴィズル）の破槍――

俺自身からも雷撃砲を連射。それでも足りないため・・・

「其は時に天の使徒にして魔の従僕。（中略）死の恐れを知らぬ名声を求めし勇ましき者よ、宝物が欲しくばいざ挑めよ！」

詠唱を中略したことで威力はかなり下がるだろうが、魔法の発射態勢に入っているみんなの盾くらいにはなるだろう。

「宝竜（コード・ファフニール）の抱擁！！」

上級儀式魔術ファフニールを発動。中級術式である、炎龍プシエル、氷龍マトリエル、風龍ルヒエル、毒龍ログジエル、闇龍シャムエル、岩龍トゥアル、光龍イオエル、雷龍ジェレミエル、各属性の龍をそれぞれ３頭ずつ、計２４頭の龍を炎弾へと一斉に解き放つ。その直後、強烈な頭痛と胸痛に襲われ、さらに「ごふっ！？」吐血した。

（あぁ、最近なかったから忘れていた・・・。俺、もう限界だった

んだよな・・・）

何か大事な物を失った喪失感が去来する。はやて達から『ルシル君！』と、不安でいっぱいといった感情に満ちた声で名を呼ばれた。それに応えようにも意識が揺らぎ、フッと重力に支配され、墜落し始めたことが判った。

「ルシリオンさん！」

エネルギー弾で炎弾を迎撃しながらもアミタが俺を抱き止めてくれ、「わたし達も手伝うわよ！」キリエもまた炎弾を迎撃してくれた。飛行に意識を割かないことで余裕が生まれた俺は『撃てぇぇぇぇ！』はやて達に攻撃を続けるよう指示を出せた。

「そんじゃ、このボク、レヴィ・ザ・スラッシャーが第二波を貰い受ける！　いっくぞぉ！　雷神封殺爆滅剣！　死ねぇぇぇぇッ！！」

レヴィの頭上の雷球1つ1つから雷撃に繋がれた雷剣がスマウグへと殺到し、起き上がり途中の奴の喉を貫いて、派手な大爆発を起こして強烈な放電が起きる。

「オリジナル！」

「うんっ！　プラズマザンバー・・・ブレイカァァァァーーーーッ！！」

フェイトが"バルディッシュ"を大きく振るい放った強大な斬撃砲

を、レヴィと同じようにスマウグの喉へと撃ち込んだことで、綺麗な水色と金色の放電が発生した。

「シュテル、次は私たちだよ！」

「ええ！なのは、参りましょう！」

「スターライトぉぉ・・・！」

「真・ルシフェリン！」

「「ブレイカァァァァァァ―――――――ッッ！！！！」」

桜色に光り輝く強大な砲撃と、それと同等の強大さを誇る火炎砲撃が発射され、桜色の閃光爆発と火炎爆発が起きた。

「なのは達に続くわよ、フラム！」

「応であります！」

「ガラティーン・・・ブレイカァァァ―――――ッ！」

「ドラッヘン・・・アポカリプス！！」

臨界点まで炎を集束させたアリサの"フレイムアイズ"と、フラムの"タラスクス"が振るわれた。そして発射される剣状砲撃と、7つの頭を持った特大砲撃が着弾して爆発、巨大な火柱が起こる。

「次は私たちが！」

――凍結せし巨いなる聖剣（スパーダ・デ・ニエベミトロヒア）――

「いただきます！」

――永遠なる凍土を生ずる王剣（スパーダ・デ・フリオサタナス）――

フィレスは巨大な冷気の大剣を、もぞもぞと体を捩って起き上がり始めたスマウグに突き刺した。奴の常時発する熱波の影響でとんでもない蒸気が発生する。そんなところに、セレスの放った冷気の剣状砲撃が着弾し、スマウグが真っ白な冷気が覆い包まれた。

「行きますわよ、すずか！」

「うんっ！　月村すずかとアイル・ザ・フィアブリンガー・・・行きます！」

――テンペスト・オブ・エンリル――

――リフリジレイト・エア――

スマウグを覆い隠すように二重の吹雪の竜巻が発生した。その光景を見守り、そして竜巻が治まると「すごいな・・・」俺は目を疑った。スマウグは完全に凍結されていた。しかし、歪な形をした氷の棺が勢いよく融けていくのが目に見えて判る。そして「まだまだぁ！」

スマウグは氷の棺を粉砕して氷の破片を宙に舞い散らせた。

「おっしゃ！　次はあたしらだ！」

「「ああ！」」

「ギガント・フリーレンシュラァァァァーーーークッ！」

「シュツルムファルケン！」

「鋼の軛！」

ヴィータのは思いっきり腹に打ち付けられ、シグナムはスマウグの右目の前でその一撃を射って、奴の右目を射抜いた。ザフィーラはその反対、左目へと鋼の軛を１０本と一斉に突き刺した。右目からは爆炎が上がり、左目はどうなったのかは判らない。

「王さま、わたしらの番や！　ちゃんと付いて来てな！」

「フンッ。よかろう！　貴様こそ腑抜けた先導なぞするなよ、子鴉！」

「ラグ・・・！」

「ジャガー・・・！」

「――ナロク！」「――ノォォォート！！」

ベルカ魔法陣の三角にある円より砲撃が３発、遅れて中央からの１発、計４発の砲撃ラグナロクが着弾。続けて５枚のミッド魔法陣より放たれた砲撃は一度空へ上がり、そして直角に屈折してスマウグに着弾。ラグナロクによる爆発が、ジャガーノートの爆発と、そして発生した重力によって呑み込まれた。

「ユーリ・エーベルヴァイン、行きます！！」

ユーリが高速でスマウグの元へと翔け、スマウグの胸へと両手を突き入れた。旅の鏡に似た転移魔法の一種らしい。そしてユーリは、スマウグの魔力を利用しての巨大な剣を形成しつつ、「よいっしょ！」奴の腹からソレを引き抜いた。ユーリ自身の魔力とスマウグの魔力の混合技であるあの剣の威力は、奴にとっても想定外のものになるだろう。

「これで終わりです！　エンシェント・・・！」

ユーリは大剣をスマウグの直上で振り回し、「マトリクス！！」奴に目掛けて投擲した。スマウグは直感的に危険だと判断したのか、これまで以上のブレスを吐いた。しかし、自分の魔力が利用されているその大剣にブレスは引き裂かれる。次いで前脚で白刃取りをするが・・・

「ダメです、諦めてください！」

ユーリが大剣の柄頭を思いっきり踏みつけたことで、とうとう大剣はスマウグの心臓付近へと突き刺さり、視界いっぱいの大爆発を引

き起こした。アミタに抱えられたままの俺は「これなら・・・・！」スタンバイしておいた魔術を発動する。

「黙神（コード・ヴィーザル）の拒剣！！」

爆発に呑まれたスマウグの直上に、呪いのルーンだけで構築された巨剣を展開。そしてまた起きる「あぐっ・・・・！」頭痛と胸痛。それらの痛みを気力で抑え付け、「食らえぇぇぇぇぇぇッ！！」奴へと落とした。ルーンの巨剣は濛々と立ち上る煙を切り裂き、チラッと見えたスマウグの腹を貫いた。

「ルシリオンさん、あの大きな剣は・・・？」

「ヴィーザル。相手が負ったダメージを回復させないための呪いの剣なんだ。最後の最後、ユーリの一撃は確かにスマウグに通用した。そのダメージを回復させるなんて愚行は犯したくない」

アールヴヘイムでも使えれば良かったんだが、ヴィーザルは闇黒系術式に位置するものだ。アールヴヘイムのような光の具現と言ってもおかしくない世界では発動できないし、仮に出来たとしてもその効果が著しく低下する。

「勝ったのかしらね・・・」

「ルシル、大丈夫？」

「なんとか生きてるよ」

避難していたアリシアを抱きかかえたキリエが側に来て、アリシアが俺を心配そうに見た。正直「これでもまだスマウグは墜ちていないだろう」そうキリエに答える。この程度で奴に勝てるなんて思わない。ただ、ユーリが居てくれれば必ず勝てるはずだ。

「『みんな。もう少しだ。もう一度、全力全開の一撃をお見舞いするぞ・・・！』」

俺は口頭と念話の両方で、先程のようにスマウグへ仕掛けると伝えた。

Ｅｐｉｃｏ?舞い散る桜花の果てに銀雪は舞い降る～Ｓｅｔｔｌｅｍｅｎｔ～

†††Ｓｉｄｅシャルロッテ†††

ベルカ時代、ルシルがオーディンと名乗っていた頃に当時のフライハイト家に授けた"断刀キルシュブリューテ"・レプリカ。私はソレをイリスの実家から借りて来た。うん、無断だったけど、あとで返すからきっと大丈夫。

『シャルロッテ様！　居住区内で戦闘発生って、まさか・・・！』

『クララって子の強制転移が使えなくなってどうしようかって時に、スマウグから戦闘を仕掛けられたことで交戦に入った、と考えるのは妥当でしょうね』

私の来世の人格・イリスに予想を伝える。ルシルは本局での戦闘なんて絶対に仕掛けない。スマウグがどれだけ強大な存在かを知れば、その選択だけは絶対に選ばない。それでも交戦状態だということは、向こうから仕掛けられてしまったに違いない。

とにかく私は、戦場となってしまった本局・居住区へ走る。スカラボから居住区へ向かう中、本局内はエマージェンシーの警報が鳴り響いていて、局員が慌ただしく廊下を走り回ってるのを見る。

「クロノ！　それにユーノ達も！」

私もようやく武装隊やら戦闘を行える執務官やらがわんさか集まってる現場に到着。結界担当のクロノ、ユーノ、アルフ、シャマル先生、セラティナ、あとクララに声を掛けると、「お待ちしていました、騎士シャルロッテ！」クロノから敬礼を返されちゃった。とりあえず「ん。状況は？」クロノ達が張った多重結界を見詰めながら訊ねる。

「戦況的にかなりまずいと、先程アリシアから念話がありました」

「紫天の盟主ユーリと、ルシルの魔術で、僅かなりと弱体化できたようですが、スマウグが本格的に反撃に打って出たようで・・・」

クロノとユーノから報告を受ける。相手の魔力を利用するユーリの魔法は最高の対抗策だ。ユーリを起点に戦術を組み立てれば、そこそこ良い戦いが出来ると思う。とりあえず「私も参戦するから、結界の方お願いね」私も結界内へ進入するべく歩きだそうとしたら「騎士シャルロッテ！」シャマルに呼び止められた。

「なに？」

「私の旅の鏡で、スマウグのリンカーコアを摘出するって方法は取れないのかしら・・・？」

「残念ながら無理。魔族の、特にスマウグのような魔獣属・竜種には魔力生成器官が無いの。その存在自体が魔力と神秘に溢れていて、その攻撃全てが魔術と同等以上になるわけ」

「じゃあさ、生物ってんなら心臓とか、生きるのに必要な臓器があるだろ、スマウグの心臓とかを潰しちまえば良いんじゃないかい？」

アルフがさらりと残酷な手段を提案して来た。その方法を実際にやることになるかもしれないシャマルが「ええっ！？」ドン引き。でも「それも無理」と私は両腕でバッテンを作った。シャマルが目に見えてホッとしたのが可愛かったなぁ～。

「なんでだい？」

「スマウグは火炎竜なの。体内の温度は数千度。臓器だってそれと同じくらいなんだから、触れた瞬間に消し炭にされるからね。そういうわけで搦め手は使えないの。正攻法で、真正面から叩きのめすしか・・・ね」

私が参戦したところで戦況は劇的に好転しない。生前、全盛期の私であったとしても、だ。それほどまでに存在としての格の差があり過ぎる。だけどこうなってしまった以上は、どんな手を使ってでも勝ちに行かないといけない。そう決意して改めて歩を進めた直後・・・

「ああもう！　竜ってこんなに強いの！？」

「カートリッジがすぐ切れちゃうよ～！」

結界の内側から飛び出して来たアリシアとレヴィ。アリシアは不機嫌丸出しで、煤で真っ黒に汚れまくってるレヴィは悔しそうに顔を

歪めていた。そんな2人が私に気付いて「シャルロッテ！　やっと来てくれた！」アリシアは表情を輝かせ、「赫ハネ！　待ってたぞ！」レヴィがニカッと笑った。

「シャマル先生！　フェイトとなのはとアリサ、それにシグナムとヴィータのマガジンとカートリッジちょうだい！」

「ボクのとシュテルのと、あとフラムのも！」

「ええ！　持って行って！」

シャマルは足元に置かれているリュックサックから、"フレイムアイズ"、"タラスクス"用のマガジンと"レイジングハート"、"ルシフェリオン"用のマガジン、それにフェイトやシグナムとヴィータ、レヴィのカートリッジを、アリシアとレヴィに渡した。とんでもない数のカートリッジ。ルシル、かなりの大盤振る舞いね。

「シャルロッテ！　一緒に行こう！」

「え、ええ！」

「スマウグって竜、エルトリアに居る奴なんかよりずっと強いよ！
　でも勝つけどね！」

出入り自由の結界らしく、すんなりと入れた。まぁ一番大事なのは戦闘による被害を外に出さないことだからね。そして私も結界内の戦場に足を踏み入れた。そこは結界外とは全く違う世界だった。

『ひどい・・・・！』

イリスから怒りの感情が流れ込んで来る。至る所に火柱が立っていて、建物の幾つは完全に倒壊してる。それに「グォォォ！！」大気を震わせるような雄叫びが轟き、無事な建物の窓ガラスなどが何百・何千枚と破砕される、地面に亀裂が入る始末。

「シャルロッテ！　わたしの代わりにコレ、みんなに渡して！　わたしじゃどうしても遅れちゃうから！」

アリシアから差し出されたカートリッジとマガジンを「判った。アリシアはここで待ってて」と受け取り、『こちらシャルロッテ！今より戦線に出るわ！』みんなに現着し、戦闘に参加することを伝える。

ＶＳ・―・―・―

「みんな・・・！」

スマウグの周囲には様々な色の魔力光が飛び交っている。桜色はなのは。茜色はアリサ。藤紫色はすずか。金色はフェイト。白色ははやて。蒼色はルシル。紫色はシグナム。赤色はヴィーター。藍白色はザフィーラ。紫色はディアーチェとユーリ。赤色はシュテル。黄色はフラム。翠色はアイル。薄紫色はアミタ。空色はキリエ。射撃、砲撃、スマウグへ接近しての近接攻撃が繰り返されるけど、奴は火炎のブレスで反撃を続けてる。直撃は・・・死だ。

『アリシアからカートリッジを預かったから、ドラウプニル組はカートリッジ組を援護してあげて！』

"ドラウプニル"組のすずか達はさらに苛烈な攻撃をスマウグへ加え始め、カートリッジ組は分散して、まずは「シャルロッテさん！」なのはと、「頂戴します！」シュテルが来た。さすがにみんな一斉には来ないよね。アリサ達は"ドラウプニル"組の援護を受けつつ、私の元へ近づいて来ながらも攻撃を続けてる。

「なのは、シュテル。スマウグはどんな感じ？」

2人の防護服や肌は若干だけど煤汚れてる。砲撃魔導師ということもあって遠距離戦を担当しているのに、それでもあれだけ汚れてる。

「強いよ。私たちみんなの全力全開を受けてもビクともしなかったし、ルシル君の儀式魔術を何度受けても全然堪えてないし・・・」

「今のところスマウグにダメージを与えることの出来たのはユーリだけですが、それ以降警戒されてしまっていて近付けない始末ですね」

私がここに来るまでの間に、なのは達がどんな戦術でスマウグと戦っていたのかを聴いた。

「そう・・・（やっぱりドラウプニルとカートリッジだけじゃ足りないんだ）」

『なのはとシュテル、カートリッジの補給完了！』

『了解だ。次は私とヴィータが補給させてもらいたい』

『あたしとシグナムのデバイスって装填数が少ねぇからな。しかも消費量も半端じゃねぇし』

『援護するでありますよ！』

なのはは魔力砲「ディバイン・・・バスターッ！」を、シュテルは火炎砲3連射の「ブラストファイアー！」を放ちつつ前線に再び加わった。それからシグナムやヴィータ、フェイトとフラムにもカートリッジを渡して・・・

「久しぶりね、スマウグ！　これから私も参戦するから！」

「剣神か！　よい、これで舞台は整ったわけだ！」

私も参戦する。右手に"断刀キルシュブリューテ"を、左手にデバイスの"キルシュブリューテ"を携え、神秘カートリッジをロード。

「双牙・・・烈閃刃！」

両手に携える"キルシュブリューテ"の刀身に閃光系魔力を纏わせ、それを剣状砲撃として放った。スマウグはブレスで迎撃。やっぱ神秘の差があり過ぎて簡単に迎撃されてしまった。とりあえず、『ルシル！』の元へ急ぐ。魔術師化にはルシルとのキスが必要なんだから。

『？・・・あ、そうか！』

ルシルはすぐに察してくれたけど、スマウグへの攻撃が忙しくて私のところにまで来てくれそうにない。やっぱりこちらから行くのが筋だよね。

「飛刃・八閃！」

スキルとしての絶対切断を付加した魔力刃を左右の"キルシュブリューテ"を振るって放ちつつルシルの元へ。そして「ん・・・！」キスを交わす。これで私は一時的に魔術師だ。

（なんかもう・・・ルシルとキスし過ぎてドキドキも何も無くなっちゃたな～）

そう嘆息しながらもすぐにルシルと別れ、「飛刃・八閃！」スマウグの意識を私に向けさせるために攻撃を再開。ユーリの存在を警戒して接近させないようにしているんなら、私も囮になるしかないんだから。

（さぁ、こっちに意識を割け！）

さっきなのはとシュテルから聴いた戦術は、ユーリを最大の攻撃手としてスマウグにダメージを与え、、ルシルがヴィーザル（確かルーンと魔力を馬鹿みたいに使う、ダメージ固定の魔術だったはず）を撃ち込んでスマウグを弱体化。他はその援護。なら私も援護に回るべきだ。

「本来の力を発揮できない魔造兵装（キルシュブリューテ）など見たくはないのだがな」

「だったら目を閉じたらどう！？　その方が私たちは大助かりだけど！？」

――飛刃・八閃――

「そうはいかん。私の魔力を利用するなどという娘も居るからな・・・！」

私の攻撃をブレスで焼き払った後、スマウグはそう言った。そして直上から急降下して来たアミタとキリエ・・・の２人の背後に隠れてるユーリに気付いたようで、奴は首をもたげて口を大きく開けた。

完全に殺す気満々。

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

「させない！」

――絶刃・斬舞一閃――

大きく翼を羽ばたかせて飛行速度を跳ね上げさせ、イリスが組み上げた魔術を私は発動。デバイスの"キルシュブリューテ"の刀身に、神秘が付加された絶対切断能力を有する魔力刃を纏わせる。飛刃のように飛ばせないけど、スキルとしての絶対切断に比べればいくらかマシになる。狙うのは、みんなも狙ってる目。

「せぇぇぇぇい！」

両手に持つ2つの"キルシュブリューテ"を逆手に持ち変え、スマウグの大きな右目へと突き入れ・・・られない。目を護るまぶたが閉じて、私の攻撃を完全防御した。

「先程、あの娘らにも言ったが狙いの着眼点は良い。しかし、私の神秘には届かなかった。それだけだ」

舌打ちをしていると『退いてちょうだい！』アリサから念話が来た。

「うりゃぁぁぁぁぁ！」「おおおおおおおお！」

半物質化の魔力剣を完全な燃え滾る炎の剣になってる"フレイムアイズ"と"タラスクス"を、アリサとフラムはバッテンに掲げて2つの炎の剣を融合。そして・・・

「「プロミネンスキャノン！！」」

振り下ろした。2つの炎の剣は巨大な炎球となって私とスマウグの元に迫って来た。巻き込まれたりしたら私でも墜ちるほどの威力。急いでその場から離れた直後、ドォン！とスマウグの顔の側面に着弾して大爆発。奴の顔がアミタ達から明後日の方へ向いたけど、それより早く不完全とは言えブレスが吐かれたことで、アミタ達は接近を断念して回避行動に移った。

「其は大地の怒りを噴き出せし者。天に牙剥く破壊者を率い、噛み砕く牙に貫かれし者を、断ち斬る爪に穿たれし者を、天より墜とし地へと撒き散らす。しかしてその者らも破壊者と一となりて、共に天へ牙を剥くだろう！」

「彼方より来たれ、ヤドリギの枝！」

『銀月の槍となりて、撃ち貫け！』

「『ミストルティン！』」

「女神の地憤（コード・フィヨルギュン）！」

そこに、石化効果を有する砲撃8発をはやてが放ち、それらはスマ

ウグの右翼の根元に着弾。そしてルシルも儀式術式に必要な詠唱を終えると、スマウグの直下にある公園一面の土を利用した、間欠泉のように勢いよく噴き上がる８つの土石流を造り出し、はやてのミストルティンと同じ右翼に着弾させた。

「凍結せし巨いなる聖剣（スパーダ・デ・ニエベミトロヒア）！」

「永遠なる凍土を生ずる王剣（スパーダ・デ・フリオサタナス）！」

フィレスの発動した冷気の大剣と、セレスの放った冷気の剣状砲撃が、左翼の根元に直撃した。

「アイルちゃん、私たちも！」

「判っていますわ！」

――クーラーイロウション――

すずかとアイルは、スクライア姉妹のように指を絡めての――俗に言う恋人繋ぎをした手を前方に突き出して、展開した魔法陣から砲撃４発を発射。その砲撃も左翼の根元に着弾。すると「なに・・・！？」スマウグが墜落を始めた。右翼は石化、左翼は凍結。翼を羽ばたかせなくなったことで、奴は真っ逆さまに墜落したんだ。

「状態異常は通用する・・・？（ユーリとルシルのヴィーザルのおかげかな？）でもそれなら・・・！」

勝てるかもしれない。それから私たちはデカイ後ろ脚で着地したスマウグへと攻撃を加え続け、アイツもブレスや業火弾で迎撃してくる。被弾は即死。回避を最優先に攻撃を続けるんだけど、「そろそろ飽いてきたな。どれ、これはどうだ」そんな中でスマウグは初めて見せる、熱エネルギーによる光線を吐いて・・・結界魔導師として優秀すぎるセラティナとユーノを含めたメンバーが作った多重結界を撃ち抜いた。

「うそ・・・！」

「まずい、結界が・・・！」

大穴が開いた部分からヒビが拡散して行って、ボロボロと崩れ始めていく。

「はっはっは！　結界とやらは、私とお前たちの戦闘による被害を漏らさないためのものだろう？　それが砕けた今、私の炎は一体どれだけの人間の魂を焼くのだろうな！」

スマウグが攻撃体勢に入る。外には対神秘の力が無い局員たちが居る。ううん、たとえ有っても防げないほどの火炎なんだ。そんなものを結界の外に吐かせるわけにはいかない。私は紅翼を羽ばたかせ、スマウグの真正面を目指す。だけど「やめろぉぉぉ！！」スマウグは圧縮された業火弾を吐き出した。向かうは結界の穴。アレを通り抜け、どこかに着弾したら・・・大勢の人が焼き殺される。

「させません！」

「ここで行き止まりだ！」

――アキレウスシールド――

――女神（コード・リン）の護盾――

ユーリとルシルが業火弾に立ちはだかって、紫色に輝くミッドとベルカ両方の二重シールドと、女性が祈る姿の模様が描かれたサファイアブルーに輝くシールドが展開、そして業火弾が着弾。とんでもない爆発が発生して、目の前が真っ赤な炎いっぱいになる。

――真楯（ハイリヒ・フライハイト）――

フライハイト家の紋章であるFの両側に2頭の翼竜が描かれた、私の最強の防性術式を発動。遅れて爆炎が到達して「ぐぅぅ・・・！」その衝撃に意識が飛びそうになる。こんなバカみたいな神秘と火力、至近距離で貰ったユーリとルシルが心配過ぎる。必死に治まるのを耐えて・・・ようやく「はぁはぁはぁ・・・！」治まった。

『安否確認！』

黒煙で視界が潰されちゃってる。とにかく全員に念話を送ると、『大丈夫です！』なのは達から無事を知らせる念話が返って来た。だけど・・・

『ルシル君！？　ルシル君！』

『ユーリ！　返事をせんか、ユーリ！』

はやてとディアーチェが大声で返事をくれない２人の名前を呼ぶ。私も、みんなも、『ルシル、ユーリ！』２人の名前を呼ぶ。そんな中で「くっ・・・！」とんでもない突風が起こって、視界を潰していた黒煙が吹き飛んだ。

「ほうほう。人間がごろごろしているな。さぁ、神器王！　これで最後だ！　貴様の持つ神器を全て渡せい！　さもなければ、ここに居る人間どもを焼き払うぞ！」

石化と凍結が解除された翼を羽ばたかせていたスマウグが視界に入る。それに結界がすべて破壊されてしまったことで、武装隊や執務官たちは巨大な竜の姿に大騒ぎ。そんな中で私はクロノ達の安否を確認するべく周囲を見渡して、「ルシル！　ユーリ！」の姿が確認できた。横たえられた２人はシャマルの元で治癒魔法を受けていた。それであの２人が撃墜されたんだと判った。

「最悪すぎ・・・！」

対スマウグ戦で一番必要な戦力が墜ちてしまった。ディアーチェが「このトカゲ如きが！」とブチギレて、アミタ達は武装隊員たちから神秘の無い魔法を受けては笑うスマウグを睨みつけた。なのは達もキッと睨みつけると、「よい怒りの目だ。止めて見せよ、我が歩みを」スマウグがルシル達の元に向かって歩き出した。

「ルシル君たちの方へは行かせへんよ！」

「これ以上、我らが盟主に指一本とて触れて見よ！　必ずその首を刎ね飛ばしてくれる！」

『ユーリです！　戦線に復帰します！』

再びなのは達、復活を果たしたユーリの総攻撃が始まる。だけど結界が無いから、流れ弾の威力によってはとんでもない被害が出るかもしれない。だからと言って「放置するわけにもいかないっしょ！」私も攻撃に参加しようとした時、『シャル・・・』私の名前を呼ぶ声が。

『ルシル・・・！』

『あー、くそ。・・・もうこの手段しか無い。俺の魔力を使って・・・創世結界を開け。このままだと、本局や人命が危うい。頼む』

『・・・そうなると、あなたは戦線離脱ということになるけど・・・』

『なんとかする・・・！　好きなだけ持って行ってくれ・・・！』

ルシルの言葉に強い意志を感じ取ったからこそ『解った。詠唱、一緒にお願い』承諾した。ルシルの魔力を引き出す。これでまたルシルは記憶を失う。それはつまりルシルの戦力を削ることと同意。ガーデンベルグを斃すまで保つかどうか判らない恐怖が襲って来る。

でも・・・。ルシルがそれでも良いって言うのなら・・・。

「『其処は剣戟の極致に至りし者の君臨する世。風が鳴き、桜は舞い、陽の明かり、地を満たす。月が輝き、星は流れ、夜の蒼闇、空を満たす。いざ開かれよ、剣神の座する天城と俗世を隔てる聖門。流転する運命・織紡がれる絆に祝福された王の名の下に彼我を招き、その偉容を示せ・・・！』」

――剣神の星天城（ヘルシャー・シュロス）――

"断刀キルシュブリューテ"を縦一閃に振り降ろして現実世界の空間に切れ目を作り、そこに創世結界の術式を割り込ませる。現実世界に開いた切れ目を基点に、創世結界が現実世界を侵すように爆発的に広がる。切れ目から桜の花びらが無数に吹き出し、周囲一帯を桜色一色に塗り替え、そして・・・

「な、なんですかコレは！？」

「わ、わーお・・・」

「世界が変わっただと・・・！？」

「桜・・・」

「おお、すごい、すごい！」

「なんて美しい景色なのかしら・・・」

「こ、これも魔法なのでありますか！？」

「す、すごいですー！」

そこは桜の花びらが舞う私だけの世界。雲１つとしてない蒼天。周囲には城や塔といった建造物群。そして私たちの居るところはコロシアム。創世結界内での戦闘を行うためだけの施設だ。当たり前だけど、創世結界を知らないエルトリア組が驚きを見せた。

――其は生命の源なる母の片割れたる大地の化身――

「行くよ！」

――フォイアロートフェーニクス――

"キルシュブリューテ"のカートリッジを全弾ロードした後で待機モードの指環に戻し、"断刀キルシュブリューテ"の柄を両手で握り直し、「完全解放・・・！」神器としての本来の能力を発動。そして紅翼を散らし、ルシルの空戦形態と同じ薄く細長いひし形の魔力翼を８枚と展開。戦力外のルシルやクロノ達と一緒に武装隊などの連中は結界の外に弾き出したし、これで派手に暴れても問題ない。

「創世結界か！　神器王ならまだしも剣神が使えるとは知らなかったぞ！」

「作戦は同じ！　ユーリ、いける！」

「あ、はい！　ルシリオンが私を庇ってくれたのでダメージは最小限で済み、湖の騎士のおかげで、体も魔力も万全です！」

同様に驚きを見せたスマウグが翼を羽ばたかせて空に飛び上がって、ブレスを吐き出した。私たちはその効果範囲から離脱して、私は早速「真技！」具現した鞘に"キルシュブリューテ"を納めて、居合抜きの構えを取る。

――汝は大地と火を、粗大なるものと精妙なるものを、静かに巧みに分離すべし――

「飛刃・翔舞十閃！」

そして抜き放ち、スキルとは比べものにならない本来の絶対切断能力が付加された斬撃がスマウグを襲う。アイツはブレスによる迎撃をしつつ回避した。

「もうちょいや、王さま！」

「貴様と共闘するなど思いもしなかったが。フンッ。存外に楽しめたぞ子鴉！！」

――フローレンベルク――

「王さまがデレてくれた～！」

「ええい！　今はとにかくユーリをあのトカゲの元まで連れて行くのに集中せんか！」

はやてとディアーチェはお互いの腰に腕を回しての密着状態で、そして2人の魔力を合成した特大砲撃を撃ちながら口喧嘩のようなことを始めた。仲が良いんだか悪いんだか。

「なのは。あなたやチーム海鳴との共闘、大変心が躍りました」

「私も！　これが私の一番望む、シュテルとの関係なんだよ！」

――ヒュペリオンゲイザーーーー

なのはの放つ桜色に輝くエクセリオンバスターに、シュテルの放つ3連火炎砲ブラストフィアーが寄り添うように螺旋を描く。スマウグは空を翔け回りながらブレスや業火弾を吐き、私たちの接近を拒み続ける。

――其は大地より天に昇り、たちまち降りて、優と劣の力を取り集む――

「こうなったら・・・！　ヴェスパーレッドモード！」

ユーリの色彩が変化する。確かあの子の核である永遠結晶エグザミアの出力を上げたらああなるって話だっけ。人格も戦闘向きになる、完全な戦闘形態。でもユーリは「行きますよー！」普段と変わらない口調だった。

――アルゴス・ハンドレッドファイア――

大きく広げた魄翼の翼の表面から特大の火炎砲撃を１００発と発射。スマウグも負けじとブレスを吐くけど、ユーリの機動力をグンと上がっていることもあって効果範囲外に簡単に出ていける。その代わり・・・

「いや～ん！」

「あっつ、あっついです！」

――アクセラレイター――――

キリエとアミタが若干巻き込まれちゃってるけど。ユーリも「ごめんなさい！」謝りつつも「ヘカトンケイルフィスト！」魄翼から、怪物のような巨大な前腕部のみを造り出し、それを射出。ソレらがガツンガツンと音を立ててスマウグに着弾して行く。

――其は万物のうちで最強のものなり――

「墜ちろぉぉぉぉ――――――ッ！」

『ギガント・フリーレンシュラァァァァ――――――ク！！』

「レヴァンティンを剣として使えんのは少々窮屈だな・・・！」

――シュツルムファルケン――

ヴィータの一撃が右翼に打ち込まれたことでスマウグが「おのれ！」ガクッと体勢を崩し、シグナムが２射連発した矢は左翼に着弾して爆発を起こした。翼は撃ち抜けなかったけど、爆発による影響で一時的に翼の羽ばたきが止まった。

「飛刃・翔舞十閃！！」

そこに私も真技を撃ち込む。迎撃も回避も出来ない以上は「むっ・・・！」スマウグはまともに受ける。けど「やっぱ致命には至らないか・・・！」背中に着弾した十閃は、鱗に１０個の太刀傷を付けたけど出血はない。鱗がどうしても撃ち抜けない。やっぱ腹に撃ち込まないとダメか～。

――すべての精妙なものに勝ち、あらゆる物体に滲透するが故に――

「足掻かずに墜ちろ！！」

――破城の戦杭――

墜落寸前のスマウグの背中にザフィーラの対結界魔法である巨大な杭が打ち込まれたことで、アイツは「ぐぅ・・・！」コロシアムの観客席に墜落した。

（魔力攻撃じゃなくて打撃の衝撃で体勢を崩し、その間にユーリの

魔法を仕掛ける。これが一番か！）

「捉えましたよ、スマウグ！」

ユーリがスマウグの背中に着地した。そしてユーリは背中に両腕を突き入れ、「エンシェント・・・！」スマウグの魔力を利用した大剣を引き抜いた。アレが撃ち込まれれば、さらに私たちの勝率が上がる。スマウグもそれを解っているからこそ「おのれぇぇぇぇ！」怒声を上げた。いける。そう思ったけど・・・

「え・・・？」

うつ伏せのままのスマウグの全身が真っ赤に発光し始めた。私は"キルシュブリューテ"をまた鞘に戻し、『逃げてユーリ！　みんなも距離を取って！』念話をユーリ達に送る。送るまでもなく、みんなは本能的にスマウグから距離を取り始めていたけど。そして・・・

「これぞ我、黄金竜スマウグが炎ぉぉぉぉーーーーーーッ！！！！」

――かく、世界は創造せられたり。かくの如きが、示されし驚異の変容の源なり――

――女神（コード・ヨルズ）の土濤――

スマウグの全身から全てを焼き尽くすほどの業火の砲撃が全方位に放たれ、それと同時にアイツを覆い隠すように全周囲から土石の津

波が発生。アレ、ルシルの誇る土石系最強の大魔術だ。私の創世結界のために魔力枯渇状態だって言うのに、苦手な土石系、しかもその土石系最強の魔術を発動、さらには創世結界外から遠隔発動なんて・・・正気の沙汰じゃない。でも、そのおかげで・・・

「って！　防ぎきれてないよ！！」

全高９０ｍ、厚さ１０ｍっていうサイズを誇る１２重の土石の津波を、スマウグの砲撃が貫通して行く。ユーリは津波のおかげで砲撃の直撃は免れたけど「砲撃が止まないです！」大剣を放つ隙を与えられてない。

あの砲撃は全盛期の私やルシルでも防げるレベルじゃないし、「飛刃・一閃！」絶対切断の能力を１つの刃に集束させての１発も「ああんもう、ダメ！！」だった。さすがの王クラス。砲撃はなんとか裂けても本体であるスマウグの熱の装甲に防がれた。

『シャルロッテさん！　結界が！』

すずかからの念話にハッとして空を見る。私の創世結界が大きくヒビ割れ始めていた。さらに『スマウグが燃えだしたぞ！』レヴィからの知らせ通り、スマウグが炎の塊になった。やっぱり私たち人間じゃ・・・

「勝てないの・・・？」

歯噛みした直後、スマウグが爆発した。目の前が炎一色になった。

†††Ｓｉｄｅシャルロッテ⇒ルシリオン†††

ユーリに引っ付けたサーチャーの魔術であるイシュリエルから見ていた創世結界内での戦闘。スマウグは奥の手とでも言うように全身を覆う火炎を爆発させた。

「うそ・・・！」

シャマルが声を震わせる。シャルの創世結界が、強大な火炎によって強制的に解除されてしまい、俺たちの目の前に「オオオオオオオオッ！！」雄叫びを上げるスマウグが現れた。

「フェイト、アリシア！」

「はやてちゃん、みんな！」

「こんな馬鹿なことが・・・！」

アルフ、シャマル、クロノが「う・・・ぅ・・」呻き声を微かに上げて倒れ込んでいるはやて達の名を呼んだ。俺に肩を貸してくれているクロノが「やはり勝てないのか・・・！」悔しげに呻いた。武装隊の連中も「ひっ・・・！」さすがに怯えを見せている。

「クロノ、離してくれ。俺が行く・・・」

「馬鹿を言うな！　先程から吐血も治まらず、何度も記憶を失っているんだろう！？　無茶にも程があるぞ！」

土石系の最強ヨルズと第２位のフィヨルギュン、創世結界展開のための魔力消費で、今の俺の体は中も外もボロボロだ。まともに戦えないどころか自力で歩くことも出来ないが、「あの子たちを逃がすことくらいは出来る・・・！」はずだ。

「しかし・・・！」

「奴の狙いは俺の創世結界に眠る神器やロストロギアの複製品だ。殺されはしない。だが、はやて達は違う。俺を屈服させるために、スマウグは平気ではやて達を殺す。それだけは・・・！」

させてなるものか。クロノもそれが解っているからこそ「僕も囮くらいにはなるだろう」そう言って、氷結の杖"デュランダル"を持ち直した。

「私もよ！」

「あたしもさ！」

「私も！」

「私だってもちろん！」

シャマル、アルフ、セラティナ、クララも、スマウグを睨みつける。俺は「アンピエル！」剣翼１２枚を展開して、それをはやてたち人数分の羽根へと分散。さらに「エイル！」上級治癒術式を発動、羽

根に効果付加させる。はやて達へと羽根を飛ばし、そして触れさせて回復させる。意識が戻れば、自力で撤退させることも出来る。

「シャマル達ははやて達の回収ができ次第、即離脱！　・・・すぅぅ・・・、スマウグぅぅぅーーーー！」

スマウグの意識を俺に向けさせるために大声を上げ、俺は"エヴェストルム"を起動させ、杖代わりにしてよろよろと奴の元へ歩き出す。

「ん？　おお、そこか、神器王。では改めて最後通告だ」

「・・・・判った。その代わり・・・！」

「この娘たちに、これ以上の危害を加えないと約束しよう」

「他の人たちにもだ」

「貴様が私の願いを叶えさえすれば、必ずや約束を果たそう。私は殺戮を好まない。私はひたすらに財が欲しいのだ。命ではない。しかも、私に奥の手を使わせるほどの英雄だ。意識を失っている間に殺すほど、私はクズではない」

スマウグにはスマウグの矜持がある。それが俺たちにとって最大の助かりだ。だが「待ってくれ、スマウグ。俺は今、神器を収めている創世結界が使えないんだ」この事実を伝えた時、奴はどう動くかが不安だ。

「ほう？」

「創世結界のアクセス権が、ある呪いによって失われている。だからすぐには渡せない。しかし必ず――」

「・・・私は永遠に近い年数を生きる。数分、数時間、数日、数年、数十年。その程度の年数は私にとっては刹那に過ぎない。だがな、宝を目の前にしてお預けを受けている今、その体感時間は数千年となるのだ！」

スマウグがはやて達に口先を向けた。口の隙間から漏れ出す炎。

「や、やめ、やめろ・・・やめてくれ・・・やめろぉぉぉぉぉーーーーーーーッ！！」

涙で視界が滲む。こんなことで、こんな形で、はやてを、彼女たちを失うわけにはいかない。いかないんだ。はやて達の元へと何度も転びながらも駆け、「我が手に携えしは確かなる幻想！！」詠唱。しかし、創世結界は応じてくれない。そして・・・「恨むなら神器王を恨め、幼き英雄たちよ」スマウグの口から火炎のブレスが放たれた。

「ちくしょぉぉぉぉぉーーーーーーーーッ！！」

――我が氷雪（ニバス・ブロクス）に炎熱に届かない――

はやて達へと迫っていたブレスだったが、「何をやっているのですか？」そんな聞き憶えのある声と共に猛吹雪の幕が発生し、ブレスを完璧に防いだ。ゾワッと全身に悪寒が走る。近付いて来る。アイツが、俺たちの元へ。俺は声のした方へと振り向き、声の主を視認した。

「リアンシェルト・・・！」

"堕天使エグリゴリ"の1機、局の制服を身に纏ったリアンシェルトがコツコツと靴音を鳴らして、こちらに向かって来ていた。アイツの正体や魔術などを知らない武装隊・執務官連中は手放しで「おおおお！」リアンシェルトの登場に歓声を上げ始めるが、気を失ったのか突然バタバタと倒れ始めた。それにセラティナやクララまでもが倒れてしまった。

「なっ・・・！？」

「おい、何をしている・・・！？」

「これから私が見せる魔術で騒がれては面倒なので、気を失ってもらっているだけですよ」

――私の両手は、大切な存在(ひと)達の血に塗れて――

「「「魔術・・・！？」」」

はやて達の元へ向かっていたクロノとユーノとアルフが、リアンシェルトの口から魔術という単語を聞いたことで驚きを見せた。シャマルはアイツの正体を知っているため、敵意丸出しで睨みつけている。

「リアンシェルト総部長・・・なんで・・・？」

「逃げて・・・・ください・・・・」

「この竜・・・普通じゃない・・・・です」

「いくらトップエースでも・・・勝てないです・・よ・・・・」

――かつて抱いた想いは今、私の存在を大きく軋ませる――

さらに俺のエイルのおかげか意識を取り戻したはやて達も、今この場に姿を現したリアンシェルトを不思議がっている。スマウグへの攻撃には神秘が必要。そこに、次元世界最強と謳われる氷結魔導師であっても神秘の扱えないリアンシェルトが現れても意味はない、と。彼女たちの目がそう言っている。だがアイツは、今の俺とは比べようもないほどの神秘を有しているんだ。スマウグの近くに居る所為か気付いていないようだが・・・・。

「やはりあなたの魔術の影響を強く受けている彼女たちは、そう容易くは眠りに着かなかったのですね」

――この身には、もう貴方への想いはあってはいけない――

アミタ達はクララ達のように意識を失っているままだ。しかし、はやて達は意識を取り戻した状態のまま。リアンシェルトの言う通りなんだろう。

「なんだ、この娘は？　私のブレスを、よもや氷雪系の魔術で防ぐなど・・・」

「・・・。少々はしゃぎ過ぎたようですね、黄金竜スマウグ。これ以上、私の居場所を壊すような真似を控えて頂きたい。それゆえにこのまま去りなさい。それが聴けないと言うのであれば、ここからは私が相手をします」

――そんな私に許されるのは、その存在(ひと)達を傷つけた罪に苛まれ、己を罰する時間のみ――

「ふん。多少はやるようだが、氷雪系の使い手なんぞに私は負けんぞ。我が名はスマウグ！　魔界最下層にて、王の一角に数えられし火炎竜なのだからな！」

「どうしても去らないと？」

「愚問。私は神器王の有する神器が欲しいのだ。これ以上のお預けの時間など、我慢できない！」

――あれから幾星霜。己を許せずにいられない私は、苦しさから逃

れたくて心が凍てつくことを願う――

「そうですか。ならば、仕方ありませんね」

リアンシェルトがスノーホワイトの魔力光に覆われた後、魔術で言う戦闘甲冑、魔法で言えば防護服の姿へと変身した。レースの付いた純白のハイネックのロングワンピース。胸元にはサファイアのブローチ。その上から青のクロークを羽織っている。当時から変わらないデザインだ。

――だけど懸命に消し失わせようとした想いへの未練に泣き、いつか貴方の手で滅ぼされる日を待ち望み続けながら涙する――

「高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）」

リアンシェルトの背よりクジャクの尾羽のような翼が２０枚と放射状に展開された。それを見たはやて達は「そんな・・・・！」と絶句。クロノが「エグリゴリ・・・！？」と膝を折った。

「そうだ・・・。セインテストの悲願。エグリゴリの救済。そのターゲットの1人が、リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサなんだよ」

アイツはとうとうその正体をはやて達にも見せた。とは言え、管理局の幹部である以上、見せたとしてもいろいろと手を回すことも出来るだろうが。

「神器王。こんな大きいだけの火トカゲ相手になんてザマですか。この程度の魔族も斃せないのであるなら、・・・この私には到底勝てませんよ」

――この庭園に咲き誇る薔薇と共に散り逝くその時を、いつか必ず迎えられますように――

「真技・・・」

リアンシェルトの魔力と神秘が膨れ上がり、「なんだ、この娘は！！」スマウグもとうとう困惑し始めた。

「極寒薔薇園（ロドン・パラディソス）」

術式名を告げたリアンシェルトの足元から猛吹雪が発生し、俺たちの視界を真っ白に覆った。次に視界が開けた時、そこは現実とはかけ離れた異世界へと変わっていた。真っ白な満月が浮かぶ夜天。そして地平線の彼方まで続く、無限とも言える数の氷の薔薇の園。雲は無いがさんさんと雪が降っている。

「・・・っ！　はやて達は・・・！？　居ない・・・？　結界の外か・・・！」

リアンシェルトの真技である創世結界・極寒薔薇園の中に居るのは俺、リアンシェルト、スマウグのみ。俺にとっては嬉しいことだ。アイツの氷雪系魔術に巻き込まれる危険が無いのだから。リアンシェルトが足元に咲く氷の薔薇を一輪摘み取り、「では、終わりにし

ましょうか」そう言ってキスをした。直後・・・

――氷刃舞う砕嵐（テュエッラ・クスィフォス）――

「む！？」

スマウグの周囲に咲き乱れる何百という薔薇が一斉に散り、何千という花弁となって奴を覆う竜巻と化した。竜巻の色が徐々に赤く染まっていく。スマウグの鱗を突破し、尚且つ肉を裂いている証拠だ。だが、スマウグとて大人しく負けてはいない。竜巻の内側から光線が突破して来た。

「火炎の竜たる私を・・・氷雪で討とうなどと・・・なんたる屈辱かぁぁぁぁーーーーッ！！」

「うるさい。神器王を討つのは私たちエグリゴリです。それを、火トカゲ如きが横から掻っ攫おうなどと・・・！」

――炎熱を奪取せし雪風（ピュレトス・エピクラテーシス）――

「恥を知れ！」

怒りの形相となったリアンシェルトが手に持つ一輪の薔薇をスマウグへとスッと向けると、さらに散った別の薔薇が渦となって、血だらけになっているスマウグへ向かって行く。スマウグは血が滴る口を開け、「燃やし尽くしてくれる！」と業火弾での迎撃をしたが、業火弾は一瞬にして凍結されてしまい、薔薇の渦と共に空中で砕け

散った。神秘で完全に負けてしまっている証拠だ。

「右翼、頂きました」

「なんだと！？」

スマウグの意識が薔薇の渦に向いている中、奴の後方からも同様の渦が迫って右翼に着弾。すずかやアイル、そしてフィレスとセレスの魔法や魔術を受けてもビクともしなかったスマウグの右翼全体が一瞬にして凍りつき、「ぐごぉぉぉぉ！？」ガシャァンと砕け散った。右翼を根元から失ったスマウグはそのまま墜落を始めた。

「今度はその熱き命と魂を・・・貰い受けます」

――天魔万象（コーリスモス・アントス）を凍てつかせる氷華――

スマウグの墜落するその先に咲き乱れる無数の薔薇が一斉に散ると渦を巻き、奴以上の巨大さを誇る花が大きく咲いた。そしてスマウグはそのまま花の中心へと墜落し、「おのれ、おのれ、おのれぇぇぇぇ！」全身や翼がズタズタに切り裂かれては傷口から凍結が始まる。さらには花弁が閉じ始め、スマウグを閉じ込めようとする。

「こんなに・・・あっさりと・・・」

俺たちがどれだけ頑張って攻撃を加えてもどうにもならなかったスマウグが「馬鹿な、あり得ない、こんなことが、何故だ、な――」リアンシェルト1機の力によって・・・負けた。氷の花弁に覆い尽

くされたスマウグからはもう二度と声は上がらなかった。

「火は氷に強い。そんなセオリーなど、私の前には無意味です」

持っていた一輪の薔薇をスマウグを閉じ込めた巨大な花へと放り投げるリアンシェルト。薔薇が花に当たると砕け散り、続けて花も大きな音を立てて砕け散った。そして中から氷漬けになっているスマウグが現れた。

「良いことを教えてあげます、神器王。今となっては私が、ガーデンベルグをも超える最強のエグリゴリなんです」

「っ！！」

「良かったですね。私に勝てるレベルにまで成長し、そして私を討ったその時こそ、ガーデンベルグに確実に勝てるんです」

リアンシェルトはそう言って俺の顔を見た。ガーデンベルグ以上の強さだって？　冗談はやめてくれ。そう思う反面、良かったという思いもあった。リアンシェルトの言うように、アイツにさえ勝てば俺はガーデンベルグにも勝て、元に戻れるのだから。まぁそれが事実であれば、だが。

「では帰りましょうか。あぁ、そうでした。この後、権威の円卓会議がありますので、ガアプ一佐と共に参加しください。サボりはダメですよ？　ルシリオン特別捜査官」

最下層魔族、その中でもトップクラスであった黄金竜スマウグすらも容易く殺せる創世結界が解除されていく。そして完全に解除されたことで、俺たちは現実世界である本局・居住区へと帰って来た。

「ルシル君！」

「ルシル！」

「無事で良かったよ～！」

俺の名前を呼ぶのは「はやて、シャル！」だった。ヴィータとユニゾンを解いたアイリが飛んで来て、頬擦りをしてくる。アミタ達やセラティナ、クララ、武装隊や執務官連中も無事に目を覚ましており、「スマウグが・・・」俺の背後で氷漬けとなり、そしてバラバラに崩れていくスマウグの姿に呆けた。

「医務局に連絡しました。そちらの民間協力者の皆さんも手当てを受けていってください。それと、チーム海鳴には3日間の臨時休暇を与えます。私から各部署に通達しておきますから、今日の疲れをゆっくり癒してください」

そしてはやて達は、リアンシェルトに声を掛けられたことでビクッと肩を震わし、デバイスをギュッと握りしめた。その表情にあるのは困惑と悲しみ。また知り合いだった者が"エグリゴリ"だったことによるものだろう。

「安心してください。私があなた達に手を出すことは永遠にないの

だから」

そう言ってこの場から立ち去るリアンシェルトの背中を、俺たちは無言で見送った。

Ｅｐｉｃｏ?進撃のフローリアン娘～Ｕｍｉｎａｒｉ　Ｃｉｔｙ　ｔｏｕｒ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

『このような形での挨拶で申し訳ないね。はじめまして。僕の名前はグランツ・フローリアン。エルトリアで研究者をしているんだ』

スマウグとの戦闘後、俺たちは医務局で手厚い治療を受けた後、はやて達とアミタ達はそのままアリサの家へ直帰。そして俺は、ガアプ一佐と一緒に権威の円卓の会議に参加。その内容は俺の今後についての話だった。会議後に俺もアリサの家に向かい、その日は何をする間もなく、俺を含めた全員がぶっ倒れるように眠った。

そして翌日となる今日、俺たちは美味しい朝食を済ませた後にアリサの部屋に集まって、アミタ達が遠路はるばるやって来た理由の１つ、彼女たちの父・グランツ博士からの挨拶と、エルトリアがどこまで回復したかの記録が収められた映像を観ていた。

『まずは、うちの娘たちが迷惑を掛けたことについて謝らせてほしい。いきなりそちらの世界に現れては色々と引っ掻き回し、さぞ混乱させたことだろう。すまない』

「あぅ～」

「博士、蒸し返さなくても良いのに～」

"砕け得ぬ闇"事件についてグランツ博士が語り始めたことで、アミタとキリエがしょんぼり肩を落とし、そして「ごめんなさいでした」アミタと、「ごめんなさ～い」キリエが改めて俺たちに頭を下げて謝った。俺たちは「いえいえ」と気にしないように伝える。確かに色々あったが、その分得られるものがあったのも確かだ。彼女たちとの絆、あと俺個人事になるが複製術式を数多く得られた。

『それでも娘たちを見捨てず、また助けてくれたことに心から感謝している。ありがとう』

「その節は本当にお世話になりました」

「ありがとね～♪」

グランツ博士に倣うようにアミタとキリエもお辞儀した。そしてグランツ博士はフローリアン姉妹への愛を語り始め、小さい頃はもっとやんちゃだったとか、初めての料理は炭化していたとか、聞かれて恥ずかしい内容ばかりだったこともあり、アミタとキリエは顔を真っ赤にして・・・

「きゃぁぁぁぁぁ！　博士、なんてこと言っちゃってくれてるんですかーーーー！」

「いやーん！　聞いちゃダメよーーーーー！」

モニターに前に陣取って「あー！　あー！」大声を上げ続ける。しかし「静かにせんか！　レヴィ！」ディアーチェの指示の下に「ほー

い！」レヴィと、「博士が見えません」シュテルが、アミタとキリエを無理やりモニター前から引き離した。それから俺たちは２人の小さい頃の思い出話を堪能させてもらったわけだが・・・

「あんまりです、博士・・・」

「わたし達の恥ずかしいこと、聞かれちゃったわね～」

「知らないこともありましたな～」

「大変面白い話を聞かせてもらいましたわ。ごちそうさま」

耳まで真っ赤にして若干泣いてるそんなアミタとキリエに、フラムは茶菓子として用意されたクッキーを頬張り、アイルは紅茶を飲みつつ、グランツ博士からの思い出話に満足そうに頷いた。

「え、ちょっ、知らないことも・・・って、どういうこと？」

「えっと、キリエ、それにアミタも知らないかもしれませんが、私たち、結構前に博士から聞いてました、２人の小さい頃のお話・・・」

「博士ぇぇぇぇぇぇーーーーーーッ！」

グランツ博士はかなり面白い人柄のようだ。モニターに映る彼はとても優しい表情をしている。事件当時、アミタやキリエから聞いていた通りの人物像だ。だから直接会って話してみたいな、と改めて

思う。もちろん今の俺としてではなく、"戦天使ヴァルキリー"をシェフィリスと共に開発した当時の私として。

『コホン。娘たちとの思い出話はまだ尽きないが、もう1つの感謝をしなければね。・・・ルシリオン君』

俺の名前が呼ばれた。モニター越しにグランツ博士と目が合う。グランツ博士が身を屈め、『この子、エフェルヘリンズを送ってくれたことで、今の僕が居るんだ』二頭身の人工精霊・エフェルヘリンズを抱え上げた。

『マスター！　お久しぶりです！　私はこっちの世界で、博士やお嬢さん達と楽しく過ごしてまーす！』

『この子の魔術、コード・エイルと言ったかな。その魔術のおかげで僕の不治の病は治り、こうして元気で過ごせている。本当にありがとう』

『マスター。こちらとそちらとは時か――・・・あー、距離があり過ぎる所為でリンクに不具合が生じています。けど、元気でやってます！』

『では！　そろそろ君たちチーム海鳴の協力のおかげで、エルトリアがどれだけ救われたかをお見せしよう！』

エフェル、何か言い直したな。何を言おうとしたんだ？　まぁ、ちゃんと役目を果たしているのであれば問題は無い。グランツ博士が

指を鳴らすと映像が切り替わり、エルトリアの腐食した大地、そしてグランツ博士の研究やユーリ達の協力の元に再生していく大地への経過といった記録映像が流れる。
グランツ博士とディアーチェ、それにシュテルやユーリが何かしらのデータを眺めながら話し合っているもの、アミタとレヴィとフラムがモンスターを狩っているもの、キリエとアイルが砂漠に植木をしているものなど様々だ。

『どうだっただろうか。完全に再生するまではまだまだ時間は掛かるだろう。それでも徐々にだが再生を始めているんだ。これもアミタやキリエ、ディアーチェ達、そしてチーム海鳴のおかげさ。今はまだ君たちを招待できないのが残念だ』

グランツ博士のそんなメッセージが流れると、また彼とエフェルの映像へと切り替わる。

『しかし！　いつか必ず君たちをここエルトリアへ招待したいと考えている。それまではこの記録映像だけで許してほしい。それでは最後になるけど、改めて感謝させてほしい。本当にありがとう。君たちと直接会い、話せる日を待ち望んでいるよ』

『ではマスター。またいずれ！』

手を振るグランツ博士とエフェル。映像はそこで終わった。モニターが閉じられた携帯端末を手に取るアミタ、それにユーリ達、はやて達に俺は「今日はどうするんだ？」と予定を聞く。昨日は結局そんな話をせずに爆睡したからな。

「明日にはみんな帰っちゃうんだよね？　だったら今日は外に遊びに行きたいかも」

なのはが挙手して意見を述べると、「わたしもそれがええな～」はやてや、「私も賛成！」フェイト、「やっぱそれだよね♪」アリシア、それに「うん。遊びに行こうよ」すずかも賛成した。シャルも「そうね。模擬戦なんかよりは良いよね～」と続く。

「ねえねえ！　どっかに遊びに行こうよ！」

アリシアがレヴィの肩に両手を置いて揺らす。なのははシュテルを見詰め、はやては「王さま～」抱きつこうとするも、「いちいち抱き付こうとするでない！」避けられる。

「王さま～。ボクも遊びに行きたい～！」

「私も行きたいであります！」

「レヴィ、フラム。あなた達、オリジナルと再戦できると喜んでいたではありませんの」

アイルにそう言われたレヴィとフラムは「う～ん・・・」腕を組んで唸る。遊びに出掛けるか模擬戦をするかで揺れ動いているようだが、「遊びに行きたいです」ユーリがポツリと言ったことで、「行こう！」２人も遊びに出掛けることを決めたようだ。

「シュテル・・・」

「ユーリのお願いなのであれば、私も賛同しましょう。なのはの今現在の実力は昨日の戦闘で計れました。再戦はまたいずれ・・・エルトリアに招待した時に行いましょう。その時は互いの実力が判りませんし、さぞ楽しい決闘になるでしょう」

「ま、この街を侵略するのもやぶさかではないな」

「このお茶美味しいですわね。茶葉を買いに行きたいですわ」

「あ、じゃあわたしも買い物に行きたいわね～」

「ゆっくりお買い物も楽しみたいですね！」

ディアーチェとアイル、それにキリエとアミタも出掛けることに賛成とした。そうして俺たちは、海鳴市の街に飛び出すことになった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒フェイト†††

今年は暖冬ということもあって防寒着のフル装備でなくても大丈夫だった。着替えは持参して来たレヴィ達だったけど、防寒服は持って来なかったこともあって私たちが貸した。サイズ的にアミタとキリエにはシグナムとシャマル先生のを、ユーリにはヴィータのをだ。そして私たちは公共バスに乗って市街地へ向かって、着いたら着いたで「おお！？　なんかすごい音がするぞ！」レヴィがキョロキョロと辺りを見回して、「あそこだ！」音の出どころだった建物へ駆

けていく。

「あ、レヴィ！」

「どこへ行く！？」

私とディアーチェで呼び止めるけど、「すげぇー！」レヴィは聞かずに建物の中に入っていった。そこは「ゲーセン・・・」アリシアがその建物がなんなのかを漏らした。そこはゲームセンター。お金やコインを使って色んなゲームを楽しむための施設だ。

「ああなってしまったレヴィはもう言うことを聞かん」

「じゃあ最初の行き先はあそこで決まりやな」

そう言うわけで、私たちもゲームセンターの中に入ることに。店内では四方八方から大きな音が聞こえてくる。ユーリは「すごい音ですー！」と耳を塞ぎ、「煩わしいですわね・・・！」アイルはしかめっ面になった。アミタからの「ここはどう言った施設なんですか！」質問に、ゲームセンターがどう言った施設なのか説明をルシルがする。

「とにかく遊んで行こう！　一度ぐるっと回って、気になったゲームがあったら遊ぼう！」

レヴィを捜しつつ、私たちは施設内を歩く。その間、筐体を指差してどんなゲームかを訊ねるアミタ達に私たちは知りうる限り教えて

いった。そんな中、「どうしましたキリエ？」足を止めたキリエにアミタが声を掛けた。

「え？　あ、あー・・・な、なんでもないわよ～」

なんだか誤魔化した風にそう言って戻ってきたキリエ。それを見ていたルシルが「そうだ。何かの記念に何か贈るよ」そう言って、キリエが見ていたらしいクレーンゲームへと歩み寄って行った。筐体の中には種類が豊富な可愛らしいぬいぐるみがたくさん入ってる。

「ユーリはどうかな？」

「あ、欲しいですー！」

「アイリも、アイリも！」

「リインも欲しいですぅー！」

ユーリ、アイリ、リインと言った小さい子がルシルの側に群がる。妹たちにお願いされるお兄さんって感じだ。そう言えば、ルシルには妹が居たって話だったよね。だからかな、その光景が自然に見えるのは。

「よしっ。待ってろよ！」

「ユーリ達はわたしが見てるから、アミタ達はレヴィの方をお願いね～♪」

保護者的な役割を買って出たキリエも早速プレイを始めたルシルの側へ。私たちはクレーンゲームからあんまり離れないようにしながらその辺りでレヴィの姿を捜していると、「居た！」レヴィをある筐体の前で発見。

「レヴィ居た～！」

アリシアがレヴィの元へ駆けて行く。レヴィは「あぅ～。お金な～い」って、バイク型のコントローラーに乗りながら泣き事を言った。すると「じゃあ、わたしとちょっとやってみよっか！」アリシアが自前の財布をポシェットから取り出し、レヴィと自分の分のお金を投入してプレイ開始。

「ハンドルの右がアクセルだよ。こうやって捻ってスピードを出して、曲がり角に差し掛かったら進みたい方向にハンドルを回しつつ、こうバイクの車体を傾けるんだよ」

「ほうほう！　判った！」

２台のバイクに股がるアリシアとレヴィの前にあるモニターにコース映像が映し出されて、カウントシグナルが点灯。そして大きな文字でＧＯと表示された瞬間、２人はアクセル・オン。ＮＰＣの７台と一緒にスタートした２人のバイクは好調なスタートを切るけど、「のわぁ！」レヴィの操作するキャラクターはすっ転ぶ。

「フェイト達みんなは別のところに行っててもいいよ！　レヴィは

わたしが見てるから！」

「くっそ～、負けないぞ！　オリジナル！　もう1台あるから、次のレースはオリジナルも参加しろ！」

レヴィからの直々のリクエストに「じゃあ、うん。いいよ」私は応じた。すると「あたしも残るよ、フェイト」アルフも残ってくれた。するとレヴィが「アホ犬はどっか行け！」なんてアルフに振り向いてまでそんなことを言うからまた事故った。

「なのは達は別のところで遊んでていいよ。レヴィはしっかり監督しておくから」

「ふむ。うぬらと共に居るのならレヴィも暴走はせんだろう。レヴィ。他の者たちに迷惑を掛けんようにな！」

「ほーい！」

「なんや王さま。侵略するとか言うてたのに、ちゃんと気遣いをしてくれるんやね～♪」

「た、たわけ！　我は王ぞ！　物事の分別くらい弁えておるわ！」

ディアーチェからも許可が下りたことで、私たちとなのは達は別行動となった。別の筐体へ向かうなのは達と手を振り合いながら別れて、終始ビリでゴールしたレヴィが「ほら、オリジナル、早く早く！」私もバイクに乗るように急かしてくる。私は「はいはい」苦笑しな

がらもバイクに跨ってお金を投入。そして、ふと思ったけど同じ顔をしてる3人な私たちは・・・

「次もぶっちぎりで勝つよ！」

「へっへ～ん！　もうやり方も覚えたし、ボクが勝つよ！」

「うん。私だった負けないよ！」

モニターに映るシグナルを見詰め、赤から青になった瞬間、私たちは一斉にアクセルをオンにした。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒イリス†††

ルシル達やフェイト達と別れた後、わたし達もゲームを楽しむことにした。わたしとアミタはダンスダンスパーティって言うダンスゲームをプレイ中。楽曲に合わせて矢印オブジェがモニター内に流れてきて、指定されたとおりに足元の前後左右の矢印パネルをタイミングよく踏むゲーム。

「よっ、っと、ほっ、おっ♪」

おさげを揺らしながらしっかりとパネルを踏んでくアミタ。隣で踊るわたしは「初見でそこまでやれるんなんてビックリなんだけど！」アミタの少し不格好だけどちゃんとコンボを稼いでるダンスには本当にびっくり。

「これ楽しいですね！　ダンスなんて生まれて初めてやりましたけど、癖になりそうです！」

満面の笑顔を浮かべるアミタ。わたしは踊り途中ながら携帯電話をポケットから取り出して、動画モードでアミタを撮影。当然わたしのコンボは途切れるし、スコアも散々になっちゃうけど、アミタの楽しそうな顔を撮る方がきっと大事。そして楽曲が終わり、「ふぅ！」アミタが充足感いっぱいと言った風に息を吐いた。

「ディアーチェ達は今は何をやっているんでしょう・・・？」

「少し見に行ってみる？」

「そうですね。もう少しやりたいですけど、他のお客さんにも譲らないといけませんから」

アミタと一緒に筐体を離れる。わたし達の居るところは音ゲー区画で、すぐ近くに「おお！　王さま、やるな♪」はやてと、「我に出来ぬ事など無い！」ディアーチェの2人が太鼓マスターっていうゲームで競い合ってた。側には2人をケータイで撮影してるシャマル先生が居るから、2人の監督かな。

「ディアーチェ、初見でしょ？」

高難度の楽曲だって言うのに完璧にバチを振るってるディアーチェ。

「そのはずですよ。アレ、楽器なんですよね？　エルトリアには在

りませんから」

「そっか。やっぱ魔法とかもコピーしちゃってるし、他にもスキルとか受け継いで・・・あ、料理とかのスキルって・・・」

「はいっ。フローリアン家最高の料理人ですよ王様は♪」

「もう1回、もう1回や、王さま！」

「良かろう！　我の方が貴様より優れていることを何度でも証明してやろう！」

はやての料理スキルもやっぱり受け継いじゃってるみたい。でも、ディアーチェが起動した頃って、はやてってまだこういった場所に来てなかったんじゃなかったっけ？　ということは、純粋にディアーチェの才能だったりするのかな～。それから音ゲー区画を出て・・・

「お！　なのは達を発見！」

「シュテルも一緒ですね！」

シューティングゲームの筐体に、なのはとシグナムとヴィータとシュテルが居て、なのは＆シュテルＶＳ・シグナム＆ヴィータの２対２でプレイ中。ヴィータが「しっかり狙え、シグナム！」ってお怒り中。

「私は弓は使うが銃は門外漢だ、当てにするな！」
「なのは。このまま一気にスコアを引き離しますよ」
「うんっ！　ごめんね、ヴィータちゃん、シグナムさん！」
さすがに相手が悪過ぎでしょ、シグナム、ヴィータ。そんな中で、
「っ！　アミティエ、ちょうど良いところに！　代わってくれ！」
シグナムがわたし達に気付いて、アミタを呼んだ。
「えっ？　私ですか！？」
「頼む！」
「あ、はい！」
シグナムから銃型コントローラーを受け取り、「お願いします、ヴィータさん！」プレイに参加。わたしはシグナムに「お疲れ～」労いの言葉を掛ける。
「ああ。いや、参った。やはり私に射撃は合わん。射撃はいろいろと考えることが多過ぎる」
「あー、解る。弾速・軌道・距離、ホントいろいろあるもんね。やっぱ近付いて斬る。これが合うよ、騎士は」
「まったくだ」

シグナムと微笑み合っていると、「にゃー！　アミタさん、強過ぎ！」なのはや、「さすが銃の扱いではアミタが一番ですね」シュテルが、アミタの猛攻にあたふた。わたしは「アミタ、わたし先行くね～」声を掛ける。

「あ、判りました！」

「私も行こう。アミティエが側に居れば問題ないだろう」

今度はシグナムと一緒に施設内を歩く。次に見つけたのは「アリサ達、はっけ～ん！」だ。アリサとすずか、フラムとアイルがドーム状のアナログゲームをプレイ中。バトラードームって呼ばれるゲームで、一種のピンボールだ。

大きなドーム状の筐体の真ん中にある柱から球が数秒間隔で出て来る。半球状のボードだから球はランダムでプレイヤーが護るべきゴールに向かって転がり落ちて来る。プレイヤーは手元の２つのレバーを操作して転がって来る球を弾き、相手のゴールへと叩き込む。最終的に自分のゴールに幾つ球が入ったかで勝敗が決まる。

「うりゅうりゃ！　しっかり弾かないと負けるわよ！」

「球の数が半端じゃなくなってきたでありますよ！」

「フラム！　あなたの弾いた球が私のところばかりに来ますわよ！」

「あー、やっぱり対角線上の相手にばかりに行っちゃうから」

フラムとアイルがかなり苦戦してるみたい。まぁアリサとすずかは慣れてるだろうしね。これで見てないのはあと、「ザフィーラ・・・？」だけだ。シグナムが「ザフィーラは外だ。こういう場はあまり、な」ゲームセンターの出入口に視線をやった。

「あー、そっか。そろそろみんな集合して、プリクラでも撮って次に行こうか」

それから私たちはみんな集まってのマリオカート大会、そして記念にプリクラを撮りまくって、ゲームセンターを後にした。というか、いつの間にやら大人の姿に変身していたルシルに「ぬいぐるみ獲り過ぎ」そう言ってわたしは呆れた。
嬉しそうに大きなぬいぐるみを抱っこするリイン、アイリ、ユーリ、そして「うふふ～♪」リイン達以上に満面の笑顔を浮かべるキリエ。ルシルはいっぱい余ってるぬいぐるみを大きな袋に詰めて担いでる。あとで貰おうっかな。・・・貰えるかな・・・。

「車を呼ぶわ。その方がこれからも安心して買い物できるし」

「あ、あの！　私たちお金が――」

「んなもの、あたし達が払うわよ」

「忘れられそうになるけど、私たちって公務員で、しっかりお給料もらってるから」

「久しぶりの再会やもん。その記念になんか奢らせて♪」

「ですけど・・・」

「ならこういうのはどうだ？　いつか俺たちをエルトリアに招待してくれるんだろ？　今回のお返しとして、最高のおもてなしをしてくれ」

ルシルがそう提案すると「えっと、じゃあ・・・」アミタも折れ、「任せて～♪　最大限のおもてなしをさせてもらうわ～　」キリエも、その提案を受け入れた。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒すずか†††

ゲームセンターの後は、なのはちゃんのお父さんとお母さんが経営してる喫茶・翠屋でお昼ご飯を済ませた。私たちはそれぞれ家族にマテリアル達のことについて、"砕け得ぬ闇"事件のあとにすぐ伝えておいたから、大きな混乱は起きなかった。

そしてその後は商店街区画をぶらぶらと歩くことになった。ウィンドウショッピングをしながら、気に入ったお店に入っては商品をひとしきり眺める。洋服のお店では・・・

「博士の服もそろそろ替え時なんですよね」

「下着もなかなかに解れていましたから、そちらも新しい物を買って頂きましょう」

「グランツ博士って身長どれくらい？

「これも、これも、これも良いわね～♪」

「おお、この服カッコいいぞ！」

アミタさんとシュテル、付き添いのなのはちゃんはメンズ服コーナー、キリエさんやレヴィ達はレディース服コーナーで服選びをしてる。ちなみに私たちチーム海鳴もレディース服コーナーで、他のマテリアル達と一緒に服選び中。

「アイルはやっぱり白色？」

「もちろんですわ」

「王さまはルシル君と同じ銀髪やし、やっぱ黒やな～」

「もしくは濃い目の紫だな」

「ねえねえ、レヴィ。わたしとフェイトとレヴィの3人でお揃いの服買おうよ！」

「いいぞ。でもカッコイイ奴だぞ！」

「ユーリはどんな服がいい？　可愛い系が似合うかなぁ～」

「お、お任せで・・・」

１人につき１０着ほど買って、その荷物をアリサちゃんのお家の車に放り込み、私たちは再び徒歩でのウィンドウショッピングに戻る。次に「あら～？」キリエさんがある店の前で足を止めた。そこは「園芸店・・・？」だった。こう言ったら失礼だけど、キリエさんと園芸が結びつかない。

「キリエは花壇を作っているんですよ」

「とっても綺麗なんですよ、キリエのお花♪」

「確か、植える花の種類が少ないと嘆いていましたね」

エルトリアの記録映像の中に綺麗な花壇があったけど、あれキリエさんが作ったものだったんだ。シャルちゃんが「じゃあ、今度はここね～」キリエさんの手を引っ張って入店。私たちも揃って入店して、園芸に関連してる道具を眺める。

「種類が豊富なのね～。目移りするわ～♪」

「家庭菜園ですか～。私もキリエに倣って作ってみましょうか・・・？」

「あ、私もやってみたいですー」

「野菜より果物とかにしようよ！」

「レヴィの言う通りでありますよ！　野菜よりは果物、果物より肉であります！」

「肉、肉ってあなた達。お野菜は美容によろしいですのよ？」

「ほう。面白い種や苗もあるのだな。・・・ふむ。暇つぶし程度に我も菜園を作ってみるか」

「迷っちゃうわね～。あ、これも、あれも♪」

「お金のことは気にしないで良いから、後悔の無いように買って良いんだよキリエ」

「あ～ん。ホント～に君たちって良い子すぎる～♪」

園芸店でたくさんの花や果物の種、肥料、道具を何十万円分（どうしよう。１２歳にして金銭感覚がおかしくなってきちゃってる・・・）を購入。それらをまたアリサちゃんのお家の車に乗せて、私たちはまた歩き出す。

「あ、アイルちゃん！　あそこ、あの店！」

「なんですの？　すずか」

「あー、あそこ。家が取り寄せてる茶葉を売ってる専門店よ」

「どこですの！？」

アイルちゃんはどうやら紅茶が好きなようで、茶葉の店があるって言ったら目をキラキラさせた。でもすぐにハッとして「こほん。で、どこの店ですの？」恥ずかしそうにそっぽを向いた。私は「あの店だよ」って指を差す。

「では行きましょう、急ぎましょう、走りましょう」

競歩みたいな速さで店に向かい始めるアイルちゃん。私たちはその様子に苦笑しながら、紅茶専門店へ向かった。店内は茶葉の良い香りがしていて、「素晴らしいですわ～」アイルはうっとりしてた。本当に紅茶が好きなんだね～。

「ねえ、アイル。お茶なんてどれも同じじゃないの？」

「馬鹿を言ってはいけませんわ、レヴィ。茶葉によってはその効能が違いますわよ。気分などによって茶葉を変え、美味しく頂く。きっと博士の研究も捗りますわ」

「博士の研究が・・・」

「捗る・・・」

アミタさんとキリエさんは何を想像したのか判らないけど、「誰か！茶葉の知識をお持ちの方！」アミタさんや、「頭がスッキリするもの、リラックス出来るものは無いのかしら！」キリエさんも、アイルちゃんに続いて瓶詰めにされてる茶葉の効能の説明欄を読み始

めた。でもなかなか決まらず、「迷いますわ～」アイルちゃんが困り始めた。

「アイルよ。どうやら試飲が出来るようだぞ」

「あ、ホントです！　アイル、アミタ、キリエ。試しに飲んでみませんか？」

「そうですね。私たちも飲むことになるでしょうし、好みの茶葉を見つけましょう」

「えー、ボクはいいや。ボクは甘いカフェオレ派だし」

「私も甘い方が好きであります」

「ミルクティーという手もありますわよ」

というわけで、アイル達は紅茶の試飲を開始。その間、店員さんから美味しい入れ方とか飲み方を教えてもらってた。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒アリサ†††

「はぁ～、良い買い物が出来ましたわ～　」

「もうお腹がたぷんたぷんだよ～」

「いやーん、わたしの引き締まったお腹がこんなにふっくらに・・

・」

試し飲みを何度も繰り返すことで、ようやく決めることが出来た紅茶の茶葉を買ったアイル達。付き合わされたアミタ達は「けぷっ」ゲップをして、お腹を擦り続ける。揃ってお腹が出てるわね。

「次はどこへ案内しようかしら」

翠屋、ゲーセン、洋服店、園芸店、紅茶葉専門店と行って、次は行き先を考えながら街路を歩く。人型モードのザフィーラと、大人モードのルシル以外はみんな女子だからか道行く人たちがあたし達を見ていく。

「あの、あそこに行っても良いですか？」

そんな中、ユーリからのリクエストがあったから、あたし達はもちろん「うん！」頷き返した。ユーリの指さす方へと目を向けるとそこには「書店・・・？」があった。ユーリが行きたがっていたのは書店だった。なるほど。これはまた大荷物になりそうね。

「あ、鮫島？　今度は書店の駐車場に車持って来ておいて。・・・うん、そう、そこ」

ケータイを使って、買った荷物を運搬するための車を運転する鮫島に連絡しておく。早速入店して、思い思いに散開。アミタとキリエとアイルはファッションコーナー、はやてとリインとディアーチェはレシピコーナー、アリシアとレヴィとフラム、その付き添いらし

いフェイトとアルフの５人はマンガコーナー、シュテルとなのはは世界の軍隊関係のコーナー。あたしやシグナム達は具体的に行きたいコーナーは無いから、その辺をウロウロ。

「ユーリは本が好きなのかい？」

「あ、はい。博士の書庫にある本など、たくさん読んでます！　ルシリオンも本は好きですか？」

「ああ、大好きだよ。電子書籍という物があるが、俺はやっぱり紙の重みや手触り、香りが好きなんだ」

「解りますー！」

あたしがたまたまついて行ってるルシルとユーリが目の前でガシッと握手を交わした。そんな２人が向かう先は「あ、見つけました♪　園芸コーナーですー！」だった。

「あぁ、なるほど。さっきキリエが買った物の育て方か」

「はいっ！　育て方を失敗すると、その植物に申し訳ないですから。きっちり育ててあげたいんです♪」

「そうか。よし、俺も手伝おう。気になった本は・・・、アリサ！」

ルシルがあたしに声を掛けてきた。何を言いたいか判ってるから「オッケー」側に積み重ねられてるカゴを手に取って２人の元へ。ル

シルからの「ありがとう、アリサ」と、「ありがとうございますー♪」ユーリからのお礼に「ん！」笑顔で応えた。
それからは真剣に本を読んでは「コレ、買って良いですか？」ユーリが本の裏に書かれた値段をルシルに見せてからそう確認して、ルシルは「お金の心配はいらないから、欲しいと思った本はカゴに入れていってくれ」そう言って、ユーリの手から本を取ってカゴに入れた。

「お待たせ～。わたしも手伝うわ～」

そこにキリエも合流して、園芸誌を物色してはカゴの中に放り込んでく。そして「結構な数になっちゃったわね～」カゴの中に積まれた本の数にキリエが少し遠慮がち。ユーリも「ルシリオン。少し減らしましょうか・・・？」ルシルの顔色を窺うんだけど・・・

「気にしない、気にしない。よっと」

そしてルシルはユーリとキリエを伴って、「今度はユーリ個人で欲しい本だな」って別のコーナーへ向かった。あたしは3人を見送って「フラムはどうしてんのかしら」フェイト達と一緒にコミックコーナーに居るフラムの元へ行く。

「レヴィ。ダメでありますよ。未完のシリーズを買っては」

「だってー！　ボク、このシリーズ気に入ったんだもん！」

「だからと言って、続きを買えない本を買っても仕方ないでありま

すよ！」

「なに揉めてんのよアンタ達・・・」

「「アリサ！」」

ホッと安心したようなフェイトとアリシア。アンタ達がついていながら何やってんのよ。事情を聴けば、聞こえてきていた話通り。レヴィは気に入ったコミックを全巻買おうとした。だけど、そのシリーズは未完。そのシリーズを買っても続きが読めないから後悔する、というのがフラムの意見。

「レヴィ、やっぱりフラムの言う通りだよ。続きが読めないってかなり苦痛だよ？」

「うん。完結しているシリーズのコミックを探そう？」

「うぅー・・・」

「レヴィ。この作者の書いてる本を探しましょ。そっちの方がまた面白いかも知れないわよ」

「・・・うん。判った」

なんとか言いくるめて、レヴィがお気に入りの作者の作品で、なおかつ完結してるシリーズを探したんだけど、結局なかった。でも、

「あ、これ面白そう！」別の作者の完結シリーズを気に入って、そ

れの全巻を購入することになった。
それからレジで会計を済ませて（全員分の合計で１００万近くだったこともあって、ルシルがカードで一括払い）、駐車場で待っていてくれた鮫島と、その車にドサッと買った本を載せて、あたし達はまた徒歩で商店街を巡る。

「お？　何でありますか？」

フラムが何かに惹かれたみたいで、目を細めて何かをジッと見た。そこは裏道って感じの路の先にある木造の古き良き駄菓子屋だった。おやつの時間な１５時に近いということもあって、あたし達は駄菓子屋に行くことに。狭い店内に全員が入って、気になった駄菓子をフィーリングで決めて購入。そして・・・

「すっぱ！」

アミタは購入した駄菓子の内の１つ・梅干し飴を口に含んだ瞬間に口を窄めた。

「っ！？　口の中がパチパチしてる！？」

キリエはパチパチ綿アメ。綿型のガムと炭酸ガスの粒型の飴の綿菓子で、口に入ると飴が弾けるってやつ。キリエの口からパチパチと飴が弾ける音が聞こえてくるわね。

「何故うぬらは冒険しようとするのだ。名前からある程度はどういった物かは判断が付くであろう。・・・ふむ。我の駄菓子は当たり

のようだな」

ディアーチェがタバコ型の飴、コーラシガレットをパリポリと噛んで食べる。

「甘いですね～♪」

ユーリは無難にブドウ味の飴玉を頬張る。いろんな味の飴をあげたくなるわ。

「私のも当たりです。癖になりそうな甘さですね」

シュテルはキャラメル。確かにあの甘さって癖になるのよね。あたしも後で買おうっと。

「ぷくーっ！・・・・わっ！？」

レヴィはソーダ味の風船ガムで、初めてにしては上手く膨らませた。だけど、しぼむ前に割れたことでガムが顔面に張りついて「べたべたする～！」剥がすのに苦戦中。

「よっと！・・・あむっ！　甘いでありますな～」

フラムはマシュマロ。袋から取り出したマシュマロを頭上に放り投げてから食べる。どこでそんな知識を得たのかしら。

「あら。結構美味しいですわね、コレ」

アイルは・・・高飛車お嬢様って感じなのに、選んだ駄菓子はなんとデカカツ・ソース味。似合わないと言うか、それを選択した理由を是非とも訊いてみたい気もするわね。そんな感じであたし達は駄菓子を食べ比べっこして、帰り際に自分たちや博士用のお土産として多くの駄菓子を買った。

Ｅｐｉｃｏ?再会の約束～Ａｐｐｏｉｎｔｍｅｎｔ　ｆｏｒ　Ｒｅｕｎｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

夕方となって、最後に行くところは夕ご飯用の食材を買いに行くためのスーパーだと決めて、その前にもう１軒どこかに行こうって話をしながら街をみんなで歩く。その途中に、にゃあにゃあ、猫の鳴き声が聞こえて来た。と思えば、「シュテル・・・？」がバッバッと周囲を見回し始めた。

「わぁ、可愛いですぅ～♪」

ユーリが鳴き声のするところへ向かってトテトテと駆け出した。その先にあるのは「猫カフェ・・・ですか？」アミタさんの言う通りたくさんの猫と戯れることの出来る喫茶店だ。シュテルはそそくさと猫カフェの窓へと早足で向かって、「にゃ、にゃ～？」張り付くように猫の鳴き声を真似た。どうしよう、シュテルが可愛過ぎる。

「シュテル！　可愛いですね～♪」

「はい。とっても」

「「「にゃ～、にゃ～♪」」」

アリシアちゃんとリインとレヴィも窓に張り付いて鳴き声を真似る。

ディアーチェが「えーい！　客が困っておるだろう！　離れんか！」窓を隔てたすぐそこはテーブル席がある。当然お客さんも居て、窓にへばりついてるシュテル達に困惑してたからディアーチェからのお叱りだ。

「なのは。ここに入ればこの愛らしい子たちと触れ合えるのですか？　そうですよね？」

「え、うん。その為のお店だから・・・」

「そうですか。王！」

「言わずともその顔と目を見れば解るわ。おい、子鴉。次はここだ」

「はーい♪」

というわけで、みんなで猫カフェに入店。お金は帰り際に支払う後払い制だから、そのまま私たちは猫のたくさん居る場所へ向かう。店内にはいろんな種類の猫が居て、それを見たユーリ達から「可愛いです～　」ハート乱舞が起こる。

「にゃ～、にゃ～？　にゃあ」

シュテルも自分に群がってくる猫と目線を合わせるためにしゃがみ込んで鳴き声を真似た。私の知る限り表情の変化がちょっと乏しいシュテルだけど、猫を相手にしたらかなり柔らかく微笑みを浮かべてる。私は携帯電話を取り出して、そんなシュテルの写真を撮る。

それから私たちもそれぞれ猫たちと戯れる。猫たちは本当に自由気ままで、私たちの注文したお菓子（ちょっとダイエットしないとダメかな～・・・）やお茶を狙って来る。まぁ、近付いて来てくれるのは嬉しいかも。

「なんかアイルちゃん。お嬢様って感じだね」

「気品あふれる私の元には、気品あふれる猫が近寄るのですわ」

肘掛椅子に脚を組んで座るアイルの膝に、真っ白なペルシャ猫が蹲ってる。確かにお嬢様って感じがする。すずかちゃんはそんなアイルの写真をカシャカシャっと撮る。そんなすずかちゃんの肩にはアビシニアンが1匹乗ってた。

「あはは！　王さまんところには来ぉへんな～！」

「ふ、ふん！　別段なんとも思わんわ。我のカリスマに怖れを成しているのだろう！」

ディアーチェの側には猫1匹と近寄らない。ディアーチェはそうは言うけど、ちょっと残念そう。猫じゃらしのオモチャを取って足元でフリフリすると、1匹のアメリカンショートヘアが近寄って来た。前脚で戯れるその猫にディアーチェの顔が目に見えて輝いた。

「良い笑顔ゲットや♪」

ソファに座るはやてちゃんも膝に座るシャムの背中を撫でながら、

ケータイでディアーチェを撮った。

「おほー！　猫ってすごいな！　めっちゃジャンプするぞ！」

レヴィのツインテールに跳びかかろうとしてる数匹の猫。レヴィはどこか猫っぽいからかよく集まってる。フェイトちゃんとアリシアちゃんの長い髪も、猫にとってはオモチャみたいで「わー！」「きゃー！」2人は大慌て。そんな3人を、私は写真を撮って残す。

「ちょっ、待って！　あんた達にはちゃんとおやつがあるでしょ！」

「アリサ！　誘導であります！」

「にゃんと！？」

「馬鹿フラム！　ティーカップをちゃんと掲げねぇと飲まれんぞ！」

「なんですと！？」

アリサちゃんとヴィータちゃんとフラムは、お菓子やお茶を狙って来る猫にてんやわんや。テーブルに手を出してくる猫からクッキー皿を抱え上げたアリサちゃんだったけど、タワー型のおもちゃの頂上に陣取ってた猫がその皿からクッキーを盗った。
フラムはそれに気付いたけど、その忠告の隙にテーブルに置かれたままのティーカップが載せられたトレイに舌や前脚を出そうとしていた猫への対応が遅れた。けど間一髪でヴィータちゃんがトレイを高く掲げた。でも・・・

「ちょ、おい！　そりゃ反則だろお前ら！」

ヴィータちゃんの足に纏わりついたり、脚を伝って登ろうとする勇者な猫も居た。グラリと倒れこみそうになるヴィータちゃんだったけど、「しっかりしろ」シグナムさんがトレイを預かったことでティーカップを落とすことはなかった。まぁ「あいた！」ヴィータちゃんはうつ伏せで倒れることになったけど。

「助けろよあたしを！」

「まずはティーカップが割れないようにし、中身を零さないことが最優先だ」

そんなアリサちゃん達の写真も撮る。次は、長いソファに座って膝に猫を乗せてるルシル君、シャマル先生、アミタさん、キリエさんを見る。４人の猫を撫でてる姿はなんか大人って感じがしてすごい画になる。穏やかな空気なおかげか、他の猫もそっと寄り添ってく。そんな４人の姿も写真に撮って残しておこう。

「「「にゃ～、にゃ～、にゃ～　」」」

可愛い鳴き声の真似の合唱。そっちにケータイを向ければ、猫と一緒に床に寝転がってるリインとアイリとユーリの姿があったからシャッターチャンスと思って、カシャッと写真を撮る。３人とも小さい子だから猫も警戒心が無いみたいで、背中に乗ったりお腹に乗ったりと自由に３人とスキンシップを取ってる。そして私も・・・

「にゃ～？　にゃ～♪」

自分のところに来てくれる猫の顎や背中を撫でたり、「なのは。隣よろしいですか？」シュテルと一緒に写真を撮ったりと、猫カフェを楽しむ。

「？？　猫がゴロゴロ言い始めました。びょ、病気ですか？　なにか体調が優れないのですか？」

「にゃはは。落ち着いてシュテル。それはリラックスしてるんだよ。シュテルの撫で方が良いんだね」

「そ、そうですか。良かったです」

シュテルはホッと安堵して「ここが良いのですか？」柔らかい微笑みを浮かべて膝に乗る茶猫の喉やお腹を撫で続ける。それを眺めてると、「あ、また新しい猫が来てくれました」シュテルの足元に真っ白な猫やって来た。そして私とシュテルをチラチラと見る。

「あれ？　口の周りを舐め始めた・・・？」

「餌の欠片でも残っているのでしょうか・・・？」

ぺろぺろって口の周りを舐める真っ白な猫。どうしたのかな？って口の周りを見ていると、「あー、それは迷っているんだな」大人モードのままなルシル君がやって来た。その肩には真っ黒な猫を乗せ

てる。

「転移行動というやつだな」

「「転移行動・・・？」」

「相反する思考がぶつかって、思考がもつれた際に起こる行動だな。人にも似たような行動があるんだ。こう困ったりすると頭を掻いたり、腕を組んだりするだろ？　あれも転移行動の一種だ。おそらく、なのはかシュテル、どちらに構ってもらおうかって悩んでいるんだろうな」

とのことだった。私とシュテルの顔つきが似てることもあるのかな。シュテルと一緒に「にゃあ、にゃあ♪」って鳴き声を真似る。するとその猫は、フゥーってシュテルの膝に乗ってる茶猫に威嚇を始めちゃった。

「あぁ、いけません。喧嘩はダメですよ」

珍しく、というより初めて見るシュテルの困惑顔。でも膝に乗る白猫もとうとう、フシャーって臨戦態勢。そんな2匹の姿にシュテルが「喧嘩はダメです」ポツリと呟くと、2匹の猫は威嚇を止めて大人しくなった。

「良い子ですね。喧嘩はいけません。仲良くしましょう」

そう言ってシュテルは身を屈めると白猫を左手で抱え上げて、自分

の膝に乗せた。茶猫と白猫はさっきの威嚇が嘘のように寄り添いながら蹲った。両手で2匹の猫を撫でるシュテルを撮る。今日1日で撮ってきた写真データ、あとでプリントアウトして渡そう。ゲームセンターで撮ったプリクラを張るために書店でプリクラ帳も買ったし、シールとしてプリントアウトすれば大丈夫だと思う。

「あの、そんなに吸ってもお乳は出ませんよ？」

2匹の猫がシュテルの服をちゅうちゅう吸っては前脚でギュッギュッと押し続ける。確か幼い頃のおっぱいを飲む癖が出てきちゃうこともあるんだっけ。すずかちゃんがそんなことを言ってたはず。

「少し待ってください。お乳は出ませんけど、吸わせることくらいは――」

「にゃっ！？　ダ、ダメー！」

シュテルが服を捲くり上げようとするのを慌てて止める。店内には男の人も居るし、そもそもその行動は無意味だよシュテル。それに、シュテルの体って元は私をモデルにしてるんだし、こっちが恥ずかしいよ。

「あ、逃げて行ってしまいました・・・」

「あ、ごめん」

私の大声でシュテルの膝でリラックスしてた猫2匹や側に居た猫た

ちが一斉に逃げて行っちゃった。シュテルはしゅんと肩を落としたけど、「問題ありません。帰りまでまだ時間があります。なのは」私に手を差し伸べてくれた。

「一緒でもいいの・・・？」

「一緒がいいんです」

「っ！　ありがとう♪」

シュテルの手を取って、私たちはまた猫が集まるところへ向かった。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒はやて†††

精いっぱい海鳴市の街を堪能したわたしらは最後にスーパーに寄って、夕ご飯の食材を買ってからアリサちゃんのお家に帰った。そんで今は・・・

「ええい！　王たる我が直々に夕餉を馳走してやろうと言うに！」

「ええやんか！　せっかくの共同作業やし、仲良うやろう！」

わたしと王さまは夕ご飯を作ってる。まぁわたしらだけやのうてルシル君たちみんなも一緒に作ってるけど。それぞれ作業を分担しての作業。調理中にはレヴィがつまみ食いしたり、アイルがさぼったりと色々あったけど、なんとか「完成～！」した。

「結構な量になりましたね・・・。まぁ私とキリエもかなり食べますから問題ないでしょうが」

「それにレヴィやフラムという大食いが居ますから、おそらく問題ないかと」

「こっちにもアルフも居るし」

「リインとアイリもなかなかの大食いやから、大丈夫や」

チーム海鳴とフローリアン家の共同料理。書店で買ったレシピ本を早速参考にして作った料理の数々をダイニングテーブルへみんなで運び入れて、「いただきます！」食べ始める。笑顔と笑い声が溢れる夕ご飯の席。

「あー！　ボクのから揚げ盗った～！」

「えっへっへ～！　隙ありだ・・・って、あー！　わたしのコロッケー！」

「隙ありでありますよ、アリシア！」

「はい、あんたも隙だらけっと」

「んなぁぁぁぁーーーー！」

そんな争奪戦が繰り広げられる中、「む。美味いな」王さまがわた

しの作ったハンバーグを食べて唸ってくれた。そやけど「このコロッケも美味しい」王さまの作ったコロッケも想像以上の絶品やった。アミタさん達の作った料理もとても美味しくて、尊敬とか負けてられへんって思いが生まれた。

みんな揃っての夕ご飯の後片付けを終えた後はお風呂や。アリサちゃん家の浴室はホンマに広いからルシル君とザフィーラを除く女子全員が余裕で入れる。

「王さま～！　背中洗い流しっ子しよ～！」

「良かろう。その手際を見せてもらおう」

案外あっさりとＯＫをくれた王さま。ちょう拍子抜けしたけど「うん！」王さまのすべすべな背中を泡立てたタオルで洗う。ホンマに不思議な感じや。悔しいことに胸の大きさには差が出てるけど、それ以外はわたしとおんなじ。自分の背中を洗ってる感じや。

「ほう。上手いではないか」

「わたしのツボなんよ、ここ♪」

シャマルやアインス、シグナムにヴィーータと背中を洗ってもらってきた。わたしが気持ちええって思うたところを重点的に洗ってみれば、王さまもそこが気持ちええツボやったわけや。

「アリシア。背中向けな。あたしが洗ってやるよ」

「ありがとアルフ♪　あ、レヴィ！　レヴィの背中も洗ったげる！」
「お？　姉っ子の力でボクを満足させられるかな～？　オリジナル。背中を向けろ。ボクが洗ってやるぞ！」
「え、ありがとう。それじゃあ私はシュテルの背中を洗うよ」
「では私はなのはの背中を洗いましょう」
「ありがとうシュテル♪　終わったら私もシュテルの背中を洗うよ」
「じゃあリインがユーリの背中を洗うです！」
「で、では私はアイリの背中を洗います！」
「う～んと、アイリは・・・アミタの背中を洗うね♪」
「ありがとうございます。では私は・・・シグナムさんの背を」
「む。そうか。・・・キリエの背は私が洗おうか」
「どうも～。ならわたしはシャマル先生のお背中を洗おうかしら～」
「なんかゾクッとしたけど、ありがとうキリエちゃん。それじゃ私はすずかちゃんの背中を」
「それじゃあ・・・アイル、私が洗ってあげる」

「お願いしますわ。アリサ。背中を向けなさいな」

「そ？　じゃあお願いしようかしら。フラム」

「お、感謝でありますよ、アリサ。ではリインフォースの背中は私が洗うであります」

そんなこんなで背中や髪の毛の洗い流しっこを順番に繰り返して、「ふは～」湯船に一緒に浸かる。明日の今頃には王さま達はエルトリアに帰ってるんやろうな。隣で気持ち良さそうに目を閉じてる王さまを横目で見る。なのはちゃん達はそれぞれ自分をオリジナルとしたシュテル達と楽しそうにお喋りしてる。

「王さま、あのな・・・」

「ん～？　なんだ子鴉。我は今、風呂の心地よさで寛大である。申してみよ～」

「今度はいつ逢えるん？」

「さてな。こちらとエルトリアは大きく離れておる。転送装置もそうそう何度も使える代物でもなし。我らも帰還後はエルトリアの復興に時間を割かれるため、数年は会いには来れん。うぬらが来るにしても、人間は転送に耐えられんと来ておる。博士が人間でも転移できるよう調整を終えるまではお預けよ」

「そっか・・・」

鼻下までお湯に浸かる。今度逢えるんはまた数年後。長いなぁ。王さまはそんなわたしに「時の流れなど、あっという間よ。思い出した頃にまた会えるわ」そんな優しい言葉を掛けてくれた。

「王さま～、優しい～」

「言うたであろう～？　我は今は寛大であると」

「ん」

そうしてわたしらはお風呂から上がって、「お待たせや～」冬休みの宿題をしてたルシル君にお風呂が開いたことを伝える。お風呂場に向かうルシル君を見送って、わたしらはテレビゲームやトランプ、ゲームセンターで撮ったシールや携帯電話で撮った写真をシールにしてプリントアウト。それらをみんなで買ったプリクラ帳に張るなどして遊んで時間を潰した。そんでルシル君がお風呂から上がって来たことで、客室の割り当てようとしたとき・・・

「手間が掛かるが、女子はアリサの部屋に布団を敷いて全員で寝れば良くないか？」

ルシル君からの提案にわたしらは賛成する。最後の夜やもんな。そうゆうわけでわたしらは布団を運ぶ作業を開始。夏やったらまた風呂に入り直さなアカンほど汗を掻くやろうけど、今は冬やから問題無しや。そんで布団1組に対して2人で寝る布団を敷き終わって・

・・

「それじゃあ俺とザフィーラは客室を使わせてもらうよ。ザフィーラ」

狼形態のザフィーラを連れてアリサちゃんの部屋から出ようとしたルシル君に「ルシリオンさん！」アミタさんが呼び止めた。

「皆さん。ルシリオンさんとザフィーラさんも一緒で良いと思うのですけど・・・」

「そうね～。変な気を起こすような軽い子じゃないと思うし。狼くんはそもそもそう言った心配もないだろうしね～」

「我も構わぬ」

「私も構いません」

「ボクもー！」

「私もであります！」

「変な気を起したら当然覚悟をしてもらいますわよ」

「私も一緒で良いですー！」

アミタさん達に続いてわたしらも、ルシル君とザフィーラが同じ部

屋に寝泊まりすることにOKサインを出した。するとルシル君は「あー、じゃあ俺の布団も持ってくるよ」そう言うて部屋を後をしようとしたんやけど・・・

「布団を敷くスペースが無い・・・」

アリサちゃんの部屋にもう1組の布団を敷くだけの余裕はあらへんかった。わたしとディアーチェ（一緒に寝てくれるよう必死に拝み倒した）、シグナムとヴィータ、すずかちゃんとアイル、なのはちゃんとシュテル、フェイトちゃんとアルフ、アリシアちゃんとレヴィ、アリサちゃんとフラム（の2人は、アリサちゃんのベッドや）、リインとアイリ、シャルちゃんとアミタさん、そんでシャマルとユーリ、キリエさんは1人ってゆう組み合わせ。

「ルシルく～ん？　お姉さんと一緒に寝る～？」

キリエさんが一足先に入った潜った布団から、艶っぽい声を出してルシル君を誘った。ジトっとルシル君を見るわたしとシャルちゃん、そんでアイリ。

「いや。さすがにそれはちょっと。・・・やっぱり俺とザフィーラは客室に行くよ」

「待ってルシル！」

改めてアリサちゃんの部屋を出ようとしてたルシル君を呼び止めるんはアイリやった。そんで「いつものようにアイリがルシルと一緒

に眠れば良いんだよね～」って、ルシル君と一緒に寝ることを提案。

「あ、じゃあわたしがリインと一緒に眠れば良いのね～♪」

「よろしくです、キリエさん」

「はーい、よろしくね～♪」

ザフィーラは布団には入らへんから、蹲って眠れるスペースが空いてればそこで眠るから、これで問題は解決や。さて。このまま大人しく眠るかどうかやな。何かお喋りの話題で持って考えてたら・・・

「うりゃあ！」

アリサちゃんの掛け声と共にルシル君の後頭部に枕が投げられる。そやけど、ルシル君は見ることなく体を傾けてたことで回避。そんで枕は「にゃっ！？」なのはちゃんの顔面に直撃。シュテルがアリサちゃんの投げた枕を手に取ると、「やりましたね、アリサ」アリサちゃんに狙いを定めるようにして枕を振りかぶり・・・

「あいたー！？」

王さまの後頭部にぶつけた。さらに「へい、パ～ス！」レヴィが王さまに枕を投げるんやけど、「うぬら、王に向かって無礼であるぞ！」枕をキャッチして、そのままレヴィに投げ返す。さらに足の甲を枕の下に差し込んで蹴り上げて、枕を空中でキャッチ。ソレを・・・

「ハズレよ～ん♪」

キリエさんに投げるんやけど、ひょいっと軽やかに躱した。でも残念。キリエさんの後ろに居ったアリシアちゃんがキャッチして「えーい！」即座にキリエさんの背中に投げると、「やん！」お尻にヒット。そんなアリシアちゃんへと「おーらよ！」ヴィータが枕を投げつけて、「ノゥ！？」後頭部に当てた。そっからは枕投げの開戦や。

「魔法やスキルは禁止だぞ～」

「っていうか、ルシルに全然当たらないんだけど！？」

勝ち負けなしの枕投げ合戦やから、何度も当てたり当てられたりの繰り返し。わたしもすでに6回くらい被弾してるんやけど、アリサちゃんの言うようにルシル君の回避率は１００％。しかも「ほい、ほい、ほいっと」向かって来る枕をキャッチしては・・・

「ひゃん！」

「何故だぁーー！？」

「あいたーー！」

投げた枕をシャルちゃんと王さまとレヴィに当てた。そんでいつの間にやら枕投げは、ルシル君に枕を当てることが目的と化した。四

方八方からの枕を投げられては空中キャッチ。即座に投げ返す。足元が布団ってこともあって「あたっ！」アミタさんと、「きゃんっ」ユーリと、「わぷっ！」アイルに直撃。

「ええい！　ちょこまかと！」

王さまも本気で当てに行くんやけど、「あたっ！？」手痛い反撃がルシル君から戻ってくる。ルシル君はホンマに背中にも目があるみたいに完璧に避けてく。そやけど「えーい！」リインとユーリが枕を持って特攻。枕で直接叩いたり、手で捕まえたり攻撃するんは禁止やけど、投げる距離は自由や。

「はい。残念」

距離を開ける最中に枕を拾い上げたルシル君は、自分を追いかけてくるリインとユーリへ投擲。その瞬間を狙っての「えい！」わたしらの一斉攻撃。そやけどルシル君は大きくジャンプして全弾回避。そんで華麗に着地したルシル君は側に落ちてる枕を拾い上げようとして・・・

「あたっ？」

頭上から降ってきた2つの枕の直撃を受けた。すると「やったですぅー！」リインと、「やりましたー！」ユーリが大喜びでハイタッチ。わたしらも「作戦成功！」って喜び合う。不思議そうな顔をしてるルシル君に「実はですね～・・・」アミタさんが説明する。リインとユーリの接近を枕で迎撃したルシル。その隙を狙ってのわ

たしらの一斉攻撃。それを躱したまでは良い動きやったけど、わたしらの一斉攻撃はあくまで目くらまし＆その場に足止めするためのものや。迎撃されたリインとユーリは、わたしらの一斉攻撃の最中に枕を天井近くまで放り投げた。

「一斉攻撃の理由は、ジャンプさせて回避させるため。そしてルシリオンさんに枕を拾わせやすくするためなのです」

「そういうわけなのよん♪　あとは、弧を描いて落ちてくる枕にルシル君が気付かないで居てくれるように願って・・・、アウト～♪」

「やられた」

ルシル君のお手上げを見た瞬間、「はふぅ」リインとユーリがパタリと倒れ込んだ。シャマルとディアーチェが近寄って、ホッと安堵した。どうやら2人は眠ってしまったようや。ルシル君が「もう12時過ぎてるな」時刻を確認。時刻を聴いた瞬間に「ふわぁ」急に眠気が襲って来た。

「もう遅いし、寝ようか」

シャルちゃんに「さんせ～」したわたしらは、決めたペアと一緒に布団に入る。わたしの隣には「王さま～」が居る。王さまも「ふわぁ」大きなあくびをした。

「おやすみ～」

「うむ」

目を瞑れば、すぐにわたしは夢の世界に旅立った。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

朝となり、朝食をみんなで頂いた後、いよいよフローリアン家の帰還の時間となる。昨日、商店街で購入した様々な物が収められたビニール袋を1か所に集める。クロノも荷物運びという理由をつけて、キリエと別れの挨拶をさせるために呼び出しておいた。２人の間に恋愛感情なんてものは一切ないが、事件当時に何かあったのかキリエはクロノを気に掛けているんだよな。

「もうちょいここに居ってもバチなんて当たらへんよ～・・・」

「午後からでも良いんじゃないかな～」

「そうだよ。午前の数時間を使えば・・・」

はやてとなのはとフェイトが名残惜しそうに引き止めようとしている。今はまだ午前9時。確かに3日目に帰ると言ってはいたが、さすがに早過ぎると俺も思う。しかし「ごめんなさい」アミタが謝り、「わたし達もそうしたいけどね～」キリエもまだ残りたいと言う。しかし・・・

「博士を置いて来てますし、そろそろ帰ってあげないといけないです・・・」

「側にエフェルが居るにしても生活能力が乏しいであるゆえな」
「私たちが側に居ないといけないのですよ」
「私たちの帰りを待っていますわ」
「それに、他の住民たちもきっと」
「だから、ボク達も本当はまだ居たいけど・・・」
キリエ達の居場所はやはりグランツ博士の側なのだ。それが解るからこそ「そっか」アリサが頷き、「それじゃあ早く帰ってあげないとね」すずかが目を擦った。はやて達もアミタ達の帰りを待つ人たちが居ることに、彼女たちを引き止める事を諦めた。
「みなさん、ルシリオン。本当にありがとうございました！」
「ではな。子鴉、それにリインフォース・ツヴァイ。良い時間であった」
「なのは。再戦はまたいずれの未来で。それまではさようならです」
「オリジナル、姉っ子！　バイバーイ！　アホ犬もついでだ！」
「アリサ、鉄槌の騎士。次に逢う時はもっと強くなっているでありますよ！」

「すずか。次に招待する時、茶葉のお土産をよろしくお願いしますわね」

「それでは。名残惜しいですが、私たちはこれにてお暇させていただきます。お世話になりました！　みなさん、次に逢う時までお元気で！」

「それじゃ行くわね～。執務官も元気でね～！」

アミタ達はそれぞれ荷物を手に、俺たちに手を振る。

「またな、ユーリ！」

「王さま！　元気でな～！」

「バイバイですぅ～！」

「シュテル！　またね、またね～！」

「レヴィ！　元気でね！」

「バイバーイ！」

「あたしの名前はアルフだ！　いい加減に覚えろ！」

「ええ！　あんたも強くなってなさいよ！」

「言ってろ！　次もあたしが勝つかんな！」

「判った～！　必ず持ってくから～！」

「アミタ、またね～！」

「ああ、元気でな！」

「お元気で～！」

「じゃあね～！」

「ああ！　元気で！」

俺たちも大手を振って、空へと上がって行くアミタ達へと再会の約束を返す。こうしてアミタ達は、広く澄みきった大空の中、彼女たちの家族が待つあるべき世界へと帰って行った。

Ｅｐｉｃｏ?新たな時代へ～Ｓｔｅｐ　ｉｎ　ｔｈｅ　Ｆｕｔｕｒｅ～

†††Ｓｉｄｅすずか†††

３月２０日。私は今日、私立聖祥大学付属小学校の全教育課程を修了して、卒業する。今日で最後になる小学校の制服の袖に腕を通す。そして同じように最後になる通学バス。みんなで一緒に乗ろうって決めていたから、私は自家用車で登校しなかった。

「おはようございます！」

「はい、おはよう」

いつもお世話になってるドライバーのおじさんに朝の挨拶。そして私は一番後ろ長ソファの座席に座る。次のバス停に着くまで窓から景色を眺めなる。この景色を見るのも今日で最後なんだなぁ。

「すずか！」

「あ、アリサちゃん！」

次に乗車して来たのはアリサちゃん。アリサちゃんと「おはよ～！」挨拶を交わして、隣に座るアリサちゃんとお話しする。次に乗車して来たのは「おはよ～♪」なのはちゃん、シャルちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃんの４人。私とアリサちゃんも「おはよ～！」

挨拶を返す。そして最後に「おはよう♪」はやてちゃんとルシル君が乗車。これがチーム海鳴の通学組のメンバーだ。

「いやぁ、いよいよ卒業式なんやな～」

感慨深げにはやてちゃんが唸ると、「途中からだったけど、とても楽しかった」フェイトちゃんは目を閉じて頷いた。私となのはちゃんとアリサちゃんは1年生から。フェイトちゃんとアリシアちゃんは3年生の2学期から。シャルちゃんとはやてちゃんとルシル君は4年生からだ。

「うん。でも中等部からの3年は初めから一緒だから♪」

「そうやね。次からはみんな揃って一緒やから嬉しいわ♪」

シャルちゃんとはやてちゃんはとっても嬉しそうに笑う。でも「男女別々の校舎になっちゃうんだよね・・・」アリシアちゃんがルシル君を見ながらそう言った。そう。初等部は共学なんだけど、中等部からは男子校と女子校に分かれちゃう。だから通学組で唯一の男の子のルシル君とは一緒に勉強できなくなるわけで・・・

「ま、そういう仕組みなんだからしょうがないよな。うん、しょうがない」

でもルシル君はあんまり気にしてない風なんだよね。だからこそ「それが納得できないんだけど！」シャルちゃんのテンションが際立っちゃう。はやてちゃんも「なんで男女別なんやろ？」納得できな

いみたい。

「ほら。やっぱり子供から大人への成長過程が著しい期間だからじゃない？」

「アリシア、なんかやらしい顔してる・・・」

「あんた、変なとこだけ大人みたいな感性を持ってるわよね」

「えっへっへ～。体も成長してどんどん可愛くなってくからね。特にわたし達は美少女だから、男の子たちはドッキドキ♪　ルシルも大変だよね～。今以上に可愛くなっちゃうはやてと同じ屋根の下で暮らすんだもん。はやて。気を付けてね♪　ルシルも男の子だから、いつかはやてを襲わ――」

「ないっつうの！」

とうとうルシル君が大声でツッコみを入れて来た。顔を真っ赤にしちゃってるはやてちゃんは恥ずかしそうに俯いて、そしてシャルちゃんは「ルシル！　わたしと一緒に暮らそう！　わたしはいつでも大歓げ――ぎゃふっ！？」暴走寸前で、でも「やめんか！」アリサちゃんのツッコみという名のチョップを受けたことで止まった。

「シャルはダメでしょ～。可愛くてスタイルが良くても下品だし。それだったら、ルシルもわたしの方にトキメクでしょ～♪」

ニヤニヤ笑うアリシアちゃんがしなを作ってポーズを取った。する

と「ペチャパイが何言ってんだか」シャルちゃんがポツリと呟いた。

「う、うるさいな！　あるもん！　ちゃんと膨らんできたもん！　確かにフェイト達に比べればまだ小っちゃいけど、あるもん！　それに、シャルみたいにおっぱいだけじゃなくお腹は出て来てないしぃ！」

「んなっ！？　それは誰にも言わないって約そ――ちょっ、お腹のお肉を摘まむなぁ！」

アリシアちゃんがシャルちゃんの脇腹を両手で掴んで「ぷにぷにだぁ～！」口撃を開始。シャルちゃんも「このぺったんこ～！」アリシアちゃんの胸を両手で鷲掴み。

「２人とも、やめなさいよ！」

「ストップ、ストップ！」

「落ち着いてシャルちゃん、アリシアちゃん！」

「おーい。一応男子な俺を前に何の話をしているんだ君らは、まったく」

ルシル君がアリシアちゃんとシャルちゃんの頭に手を置いて、２人を引き離した。２人は渋々だけど椅子に座り直した。

「アリシア。君はまだ幼い。肉体的な年齢もあって他のみんなに比

べ成長が遅いのは必然だ。だけど、君の母・プレシア・テスタロッサは美しかった。君は彼女の娘だろう？　大丈夫。将来、君も美人になるさ」

「ルシル・・・、ありがと♪」

「で、だ。シャル。俺はどちらかと言うとガリガリにやせ細った女性より、少しふっくらした方が好みだ。ま、太り過ぎはちょっと勘弁だけどな」

「・・・うん。ありがとう　」

しっかりとフォローするルシル君には心の中で拍手を送る。そして自分の座ってた席に座り直そうとする前に、はやてちゃんの頭を優しくポンポンと叩いた。すると元に戻り始めてたはやてちゃんの顔が「っ・・・！」また赤くなった。ルシル君。今はたぶんスキンシップはしない方が良いかもだよ。

そんなこんなで、私たちは学校に到着。ドライバーのおじさんに「ありがとうございましたー！」お礼を言って、バスを降りる。そして「おはよう！」校舎の昇降口に歩く途中にすれ違うクラスメイト達と朝の挨拶を交わし合う。

「おはようございます、皆さん」

そんな時、知り合った時から卒業までずっとクラス委員長だった咲耶ちゃんから挨拶を貰った。いつも通りの艶やかなドリルポニーっていう髪型を揺らしてる。さらに「おは～！」金髪のボブカットの

天音ちゃん、「おはよう」艶やかな黒髪を腰まで伸ばしてる依姫ちゃん、「おっはよう！」藍色の長髪をシュシュで纏めた刀梅ちゃん、「おはよう」夕陽色の髪をハーフアップにした耀ちゃんからも朝の挨拶を貰った。

「おーっす、ルシル！　今日もハーレム登校か？♪」

ルシル君と特に仲の良い男の子、赤髪の亮介君や、「おっはよう！」天音ちゃんの双子の弟の天守君、「おはよう、ルシル君、なのはさん達も」栗色のさらさらヘアの護君が、私たちに挨拶をくれた。

「ん？　すずか、なんかアクセサリー増えてない？」

天音ちゃんが、首から提げてる"スノーホワイト"の待機モード時であるクリスタル、その隣に指輪に気付いた。制服の下に隠れてるのに良く判ったな～。制服の上着の下から"スノーホワイト"を、そして黄金に輝く指輪を取り出す。

「これは・・・」

・―・―・回想です・―・―・

リンドヴルムの首領だったスマウグはアールヴヘイムに閉じ込められてなかった。アールヴヘイムの存在する次元世界と、私たちが過ごしている次元世界を隔てる境界を繋げる唯一の存在、"転移門ケリオンローフェティタ"はまだアールヴヘイムに還ってないってことになる。それはつまり、"転移門"の人化した姿の1人、私たち

の大切な友達だったケリオン君もまた還ってないはず。

（それを確認するために、私たちはまたここに戻って来た・・・）

当時と同じ巡航L級3番艦・ジャスミンに搭乗して、機動一課のフィレス一尉と私たちチーム海鳴の臨時特殊作戦班（シグナムさんとヴィータちゃんとシャマル先生とザフィーラ、それにセレスちゃんとルミナちゃんとベッキーちゃんは別の仕事で居ない）は、回収した6つの神器と一緒に再び彼の地、リンドヴルムの本拠地だった無人世界へと赴いていた。

「っ！　ケリオン君・・・！」

レクリエーションルームに集まっている私たちの前に展開されてるモニターに、途轍もない大きさを誇る黄金に輝く門が宙に浮いてる映像が映し出された。でも「何よアレ。ボロボロじゃない」アリサちゃんが言うように傷1つとして付いていない綺麗だった黄金が、ところどころ無残に崩れていた。門扉の部分には大きな亀裂が走ってるし、大穴も空いてる。

「アレ、大丈夫なわけ？　神器って壊れたらやっぱり死んじゃうんじゃないの？」

シャルちゃんのその言葉に私は血の気が引いた。私は「ルシル君！」に振り向いて、ケリオン君の状態がどういったものかを訊ねる。ルシル君は難しい顔をして、モニターに映る"転移門"を注視する。そして・・・

「大丈夫。おそらく死んでいないよ。そもそも神器は死ねば、二度と修復できないように砂状になるんだ。とは言え、転移門は正式な神器じゃないため、確約は出来ないんだが・・・。しかし転移門から神秘を感じられる。それが生きている証拠なはずだ。とにかく、会いに行ってみよう」

そう教えてくれた。生きてるって確約が欲しかったんだけど、ルシル君にも判らないことだってあるんだ。責めるのは筋違いだ。

「こちらレクリエーションルームのフィレスです。チーム海鳴はこれより転移門と接触します。トランスポーターの起動をお願いします。・・・さぁ、行ってきなさい」

フィレス一尉がブリッジに連絡を入れてくれた。そして私たちチーム海鳴はエントランスのトランスポーターから艦外へと出て、飛行魔法を使って"転移門"の前まで移動する。なのはちゃん、アリサちゃん、シャルちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、ルシル君の6人でそれぞれ神器を持って・・・

「ケリオン君・・・！」

私は両手で"転移門"の崩れた門扉に触れる。なのはちゃん達も「ケリオン君！」名前を呼ぶ。すると『すず・・・んな・・・。・・・ずか・・・みん・・・』ノイズ交じりだけど、確かに私の名前を呼ぶ声が聞こえた。私たちはそれぞれフローターフィールドを展開して、そこに着地。

「「ケリオン君！」」

「「「ケリオン！」」」

「姿を見せなさいよ！」

「ケリオン！　実体化できないのか！？　出来るなら、実体化してやってくれ！」

みんなでケリオン君の名前を呼んでいると、"転移門"の門扉の表面から光の粒子が溢れて来て、それが一ヵ所に集まると「ケリオン君！」の姿になった。だけど「ケリオン君、体が透けて・・・！」ケリオン君の体は、以前と違って透けているし、ところどころにノイズが走ってた。

『またみんなに会えて・・・良かった・・・』

「ケリオン君！」

『・・・みんな。スマウグ竜を逃がしてしまったけど・・・大丈夫だった・・・・？』

私たちは無言になる。スマウグは、リアンシェルト少将の手によって斃された。レーゼフェアさん、シュヴァリエルさん、フィヨルツェンさんも"エグリゴリ"だって判って辛かった。そこにまたリアンシェルト少将までもが、ルシル君の斃す、救うべき敵だったなん

て。

「ああ。俺たちがしっかりと決着をつけてやった。安心しろ、ケリオン」

『そっか。さすが、ですね。・・・だけどこれで、僕もローフェティタも、安心して還れるよ』

安心したように微笑むケリオン君。そんなケリオン君に「ねぇ、還られなくてもいいんじゃないの！？」アリシアちゃんがそう言った。ケリオン君――"転移門"が門扉を閉めた理由、還る理由は、あちらの次元からこちらの次元に神器が入って来ないようにするため、それにスマウグをアールヴヘイムに閉じ込めるため。その内の1つが果たされた。

「そ、そうだよね。ケリオン君やローフェティタさんが人化すれば、門は開かないんだし！」

スマウグはもう居ない、人化すれば門は開かない。つまり、ケリオン君が還る理由はなくなる。でも『なのはの言う通りだけど・・・やっぱり還るよ』ケリオン君はやっぱり還ろうとした。

「どうして！？」

『・・・僕の本体、酷いでしょ？　スマウグが無理やりこじ開けたんだ・・・。ダメージが大き過ぎる。神秘の無いこの次元にこのまま留まり続ける限り、僕たちは死へ向かうんだ』

引き止める理由を考えてた思考が止まる。還らないとケリオン君が死ぬ。そんなことを知ったら引き止めるわけにはいかない。みんなも沈んだ表情を見せる。

「ケリオン。神器を持って来たんだ。今、少し門が開いているな。アールヴヘイムへ共に連れて行ってやってくれないか？」

『もちろんです。神器を、僕の前へ』

こんな時でもルシル君は冷静に事を進める。それが正しいんだろうけど、どこか冷たい印象を抱く。なのはちゃん達は手に持ってる神器をケリオン君の前に差し出した。そして『うん。確かに全部神器だ・・・』ケリオン君は1つ1つに触れていくと、6つの神器は光に包まれて、僅かに開いた門扉の隙間の中へと飛び立って行って・・・門扉が完全に閉じた。アッサリなお別れになっちゃった・・・。

『・・・じゃあ、次は僕だ』

ケリオン君の足先から霧散し始める。私は「ケリオン君！」の手を取ろうとしたんだけど、すぅっとすり抜けちゃった。

『なのは、アリサ、フェイト、アリシア、はやて、ルシル、シャル・・・、そしてすずか。今度こそお別れだ。短い間だったけど、僕はみんなと一緒に過ごせて幸せだった。ありがとう』

「ケリオン君！　私、私は・・・ケリオン君のことが好きでした！」

ようやく伝えることが出来た私の想い。

『・・・うん。僕も同じ想いだよ、すずか。僕もすずかが大好きだ』

ケリオン君が私の目の前に来て、私の額にキスしてくれた・・・のに、やっぱり感触は無くて。ケリオン君が1歩と2歩と離れて行って、『幸せになってね、すずか』手を振りながらケリオン君はまた粒子となって"転移門"へと消えて行った。

そしてあの頃にみたいに一番下から霧散してく。今度は最後の最後までケリオン君が還るのを見送った。今度こそ永遠のお別れ。そう思うと涙が止まらない。両手で顔を覆って泣いていると・・・

「すずかちゃん！」

「アレ！」

なのはちゃんとはやてちゃんの声に私は顔を上げて、涙で滲む視界の中に何か輝いてるのが判った。それはゆっくりと私のところにまで落ちて来て「あ・・・！」キャッチする。

「指輪・・・？」

黄金で出来た指輪だった。ルシル君が「転移門の欠片だな。彼への想いを断ち切りたいなら捨てるべきだな。どうするかは、すずかに任せるよ」そう言って、ジャスミンへと飛び去って行った。

「ちょっ、ルシル！」

「そんなこと言わなくたっていいじゃん！」

アリサちゃんとアリシアちゃんが追いかけるように飛び去って行く。

「ルシル君。どうしてあんなこと・・・」

「たぶんやけどルシル君は、すずかちゃんがケリオン君に縛られへんように言いたかったんやないかな・・・？　すずかちゃんが新しい恋を出来るように・・・」

はやてちゃんの言いたいことは私も解ってた。ルシル君は理由なくあんな冷たいことは言わないって解ってるから。

「すずか・・・」

「・・・もちろん、私は大事にするよ。ケリオン君が遺してくれたものだから。お守りとして一緒に生きて行く！」

袖で涙を拭って、私はケリオン君自身だって言っても過言じゃない指輪を左手の薬指にはめた。

・―・―・終わりです！・・―・―・

新しい恋が出来るかどうかなんて今は考えられない。だから、それまでは一緒に・・・。

「これは・・・私のとても大事な思い出なんだ」

「そっか！」

「委員長として見過ごしたくはありませんけど、仕方ありませんわね」

「ありがとう。咲耶ちゃん！」

そうして私たちは、６年４組の教室へ向かった。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒はやて†††

卒業式が始まる。まずはわたしら卒業生の入場。１組から始まって、そんでわたしら４組。校歌のピアノメロディが体育館に流れる。

（こうして卒業式に出られるなんて・・・ホンマに思いもせえへんかったな・・・）

ルシル君と出会う前、わたしは孤独やった。父さんも、母さんも、お星様になって、足も動かへんくなって、もう生きたいって強く願う意志もなくなってた。そんなところに・・・

――ぶつかったお詫びに、お手伝いしようか？――

ルシル君と出会った。そんでわたしは、最初は女の子やって勘違い

したルシル君とスーパーで一緒に買い物をした。同い年の子と話すことも久しぶりやったし、わたしはルシル君と友達になりたかった。

――また会えるかもしれないし、もう会えないかもしれない。すべては流れるままに――

（あの頃からルシル君は不思議な子やったな～）

その数日後、わたしはルシル君と臨海公園で再会した。

――こんにちは、ルシリオン君――

――こんにちは。少しぶりだな――

（そこでルシル君がわたしのように家族が居らへんくて、さらに帰る家も、住む家もないことを知ったんやったな～）

それぞれの椅子の前に着いて、「一同、礼！」教頭先生の号令でわたしら卒業生は体育館のステージ向かって一礼した。教頭先生から開会の挨拶がされて、そんで国歌斉唱や。

――わたし、ルシリオン君のことがホンマに心配なんよ。ちょっとの間でもええから、わたしの家においで？　わたしに、ルシリオン君のことを手伝わせて。手伝い言うても探し物の手伝いは出来へんけど、住むところとか食事くらいなら手伝える――

（ルシル君をうちに招くことを決めて、わたしは必死に説得したん

やっけ）

――独りはやっぱり寂しい。・・・それにわたし、ルシリオン君と友達になりたいんや。出来ればもっと会いたいし、お話ししたいし。そやから一緒に住めれば、その２つがいっぺんに解決できるな～なんて――

わたしとルシル君の共通した思い・孤独。お互いに独りは寂しかったんや。そんで・・・

――お世話になります――

ルシル君は、わたしと一緒に暮らすことを選んでくれた。そんで、ルシル君が魔法使いやったってことをすぐに知ったんやったな。

（ルシル君が地球にやって来た目的も無事に終わって、どうやって引き止めようかなって考えてたところに、ルシル君自ら残るって、八神を名乗りたいって言ってくれた。それがどんなに嬉しかったか・・・）

「卒業証書、授与」

１組から名前を呼ばれた１人１人がステージに上がって、「卒業おめでとう！」校長先生から直に卒業証書を受け取ってく。

――闇の書ははやて、君を主として目醒め、そして守護騎士も君を主として守り、敬うだろう――

ルシル君とこれからも一緒に過ごしていけることになった直後に、わたしが物心ついた頃から一緒に在った分厚い装飾本が魔法の道具やってことを知らされた。さらには守護騎士ってゆう、新しい家族も出来ることも知った。

――闇の書の起動を確認しました――

――我ら、闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にございます――

――夜天の主の下に集いし雲――

――我らヴォルケンリッター。何なりとご命令を――

わたしの誕生日。"闇の書"は目醒めて、シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータが新しく八神家に加わった。そっからは楽しい日々を送れてたんやけど、わたしの下半身マヒの原因が、"闇の書"やってことをルシル君たちから聞かされた。

――我々は、主はやてを喪いたくありません。ですから、主はやてとの誓いを、申し訳ありませんが破棄させていただきたく思います！――

――はやてを助けるには闇の書を完成させて、はやてを本当の主にするしかないって！――

――ですから私たちに戦闘の許可をお願いします！――

わたしを救うためにルシル君たちが選んだのは、"闇の書"を完成させて、わたしを真の主にすること。そのために魔力が必要で、魔法を使って悪い人たちを懲らしめる意味を込めて、その人たちから奪うって手段やった。

「ルシリオン・セインテスト」

「はいっ！」

４組の番になって、ルシル君が担任の矢川先生に呼ばれる。大きく返事したルシル君は椅子から立ち上がって、ステージの左端に掛けられてる移動階段の前にまで移動。１つ前のクラスメイトの子が卒業証書を受け取って、右端の移動階段からステージを降りるのを合図に、ルシル君が壇上へと上がって校長先生の前にまで向かう。

（そやけど、その手段でルシル君は間違いを犯してしもうた・・・）

「高町なのは」

「はいっ！」

なのはちゃんが椅子から立ち上がって、ステージの校長先生から卒業証書を受け取った。それから「月村すずか」、「アリサ・バニングス」、「アリシア・テスタロッサ・ハラオウン」、「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン」、わたしの親友の名前が呼ばれて、同

様に卒業証書を貰ってく。

（すずかちゃん達と知り合って友達になった後に、犯罪者でもないすずかちゃん達からも魔力を蒐集してもうたことをルシル君たちから聞かされた・・・）

――お初にお目にかかります。我が主。私は闇の書の管制人格にてございます。主の承認の下、無事に起動することと成りました――

"闇の書"のある一定のページが埋まったことで、最後の家族が起きた。シュリエルリート。後にリインフォース、リインフォース・アインスとなる、とっても綺麗な女性。何百年って続く残酷な運命から、アインスやシグナム達を解放する。それがわたしの一番の生きる理由になった。

「イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト」

「はいっ！」

シャルちゃんもまた卒業証書を受け取った。シャルちゃん。ルシル君を巡る最大の恋敵にして親友の1人。正々堂々と戦って、どうしても勝ちたい相手や。ルシル君やシグナム達、そんですずかちゃん達と出会ったことが、わたしに生きたいって思いを強くさせてくれた。わたしはホンマに・・・

（幸せや！）

「八神はやて」

「はいっ！」

４組最後の出席番号３２番、わたし八神はやての名前が呼ばれた。元気よく返事して、そんでステージに上がって卒業証書を受け取った。椅子に戻る途中、保護者席に居るシグナムとシャマルと目が合った。すずかちゃん達のご両親も揃い踏みや。

（さすがにヴィータとリインとアイリは大人モードに変身できひんから、ザフィーラと一緒にお留守番やけどな～）

そんで全組の卒業証書授与が終わって、校長先生からの式辞、さらに来賓祝辞・来賓紹介・祝電披露と続く。

（闇の書の闇を払って、夜天の魔導書ってゆう本当の名前を取り戻すことも出来た）

後にマテリアルとの闇の欠片事件、管理局への入局、アミタさんやキリエさん、王様らとのユーリを巡る"砕け得ぬ闇"事件、わたしとアインスのリンカーコアを利用しての、アインスの後継騎リインフォース・ツヴァイ――リインの誕生、アインスの旅立ち、リンドヴルムとの決戦。

（ルシル君たちと出会ってからの４年。ホンマに濃い出来事ばっかりが起きたなぁ）

一生分の波乱万丈を体験した感じや。でも、わたしらはまだ小学校を卒業するだけ。中学の3年、その卒業後は本格的に管理局員として働くことになるやろう。そうなれば、この4年での出来事以上のことを体験するかもしれへん。そやけど・・・

（忘れへん。一生。みんなとの出会いを、そしていろんな人たちとの別れを）

「式歌斉唱」

仰げば尊しのイントロが始まる。わたしらは万感の思いを込めて唄った。唄い終えた後は、卒業式閉会の言葉、そんで「卒業生、退場」わたしらは、校歌のピアノメロディが流れる中、1組から順に体育館から退場する。

（シャマル、ボロ泣きや♪　シグナムも泣いてくれてる・・・）

シャマルの手には、アインスの写真が収められた小さな写真立てがある。とても綺麗な笑顔を浮かべてるアインスの写真が。

（アインス。わたし、無事に卒業できたんよ。おおきにな。アインスがわたしに未来をくれた。そのおかげや・・・！）

鼻の奥がツンとなる。ホンマはアインスにも見てもらいたかったな。でも、心は一緒や。"シュベルトクロイツ"の待機モードである剣十字の首飾りに寄り添うように提げてる指輪の上に手を置く。アインスが旅立つ直前まで指にはめてた指輪や。

（いつまででも見守ってな、アインス）

そんで体育館から出たわたしらは、４組の教室に戻って来た。泣いてる子たちも居って、しみじみした雰囲気や。男の子のグループに居るルシル君を除くわたしらチーム海鳴は、帰りに翠屋に寄って卒業パーティーを開くって事前に決めてたから、そのことについて話してる。

「はーい、みんな席に着いて～」

担任の矢川先生も教室に到着。わたしら生徒は自分の席に着いて、

「みんな。卒業おめでとう！」先生からお祝いの言葉を貰った。

「初等部はこれで卒業だけど、みんなはこのまま中等部へ自動的に進学だからそんなに寂しくないと思う。まぁ、先生は大好きなみんなと今日でお別れになっちゃうから寂しい。だから暇な時でも良いから逢いに来てね～」

少し目が赤い先生に「はーい！」わたしらは元気よく返事。嬉しそうに笑う先生の「ありがとう！」がとても印象に残った。それから春からの中等部への入学式の日付とか諸注意などを聴いて・・・

「よしっ！　それじゃあ、聖祥小６年４組ホームルーム、これで終了！　木花さん！」

「はいっ！　起立！」

咲耶ちゃんの号令でわたしらは椅子から立ち上がり、「礼！　今までお世話になりました！」先生に一礼した。先生も「こちらこそ、ありがとうございました！」お辞儀。こうしてわたしらの小学校生活に幕が下りた。

みんなと「また中等部でね！」なんて1週間ちょっとのお別れの後の再会を約束しながら、ルシル君含めたわたしらチーム海鳴は校舎を出て正門へ。そんで「お世話になりました！」校舎に向かって一礼した。すると他の卒業生たちも「ありがとー！」とか「また遊びに来るよ！」なんて続く。

「はやてちゃん、ルシル君！」「主はやて、ルシリオン！」

わたしとルシル君の名前を呼ぶ2人の声。シグナムとシャマルや。側にはリンディ提督、クロノ君、エイミィさん、アルフ。そんですずかちゃん達のご両親が居った。保護者会がこの後あって、それが終わり次第、翠屋に集まるって話や。

すでにヴィータやザフィーラ、リインにアイリ、なのはちゃんのお姉さん・美由希さんやお兄さん・恭也さん、すずかちゃんのお姉さん・忍さん達が料理など御用意してくれてるそうや。そんなシグナム達と別れて・・・

「それじゃあ、翠屋にしゅっぱ～つ！」

なのはちゃんの掛け声に「おお！」拳を高々と突き上げて応じる。帰りは徒歩で、ゆったりのんびりと翠屋へ向かう。そんで店に到着すると「卒業おめでとう！」のお祝いの言葉と一緒に、パンパン！

ってゆうクラッカーの破裂音が浴びせられた。それに「わっ！？」ってビックリしてもうた。

「ささ！　今日の主役は席に着いてね～！」

「撮影はこの私、忍が務めます！」

美由希さんにテーブル席に案内されてすぐ、忍さんが高そうなカメラでわたしらを撮影。シグナム達やすずかちゃん達のご両親が来るまで楽しく話をして、「お待たせしました～！」シャマルを先頭に翠屋に到着や。

「ではでは～！　どういうわけか、私エイミィ・リミエッタが乾杯の音頭を取らせて頂くことになりました！　月日が流れるのは早いですね～！　初めてなのはちゃん達と出会ったあの日、もうずっと昔のように思えちゃいます！　色んな困難を立ち向かい、様々な試練を乗り越えて来たチーム海鳴！　その彼女たちは今日！　小学校を卒業し、また1歩成長していきます！　そんなチーム海鳴のみんなの新たな門出に・・・かんぱ～い！」

エイミィさんの音頭に「かんぱーい！」わたしらは手に持ったジュースの注がれたコップを掲げた。そこからはビュッフェ方式の食事会や。テーブル席やカウンター席に置かれた大皿から好きなだけ料理を自分の取り皿によそうってゆうやつ。思い思いに料理をよそって食べる。

「はやてちゃん、ご卒業おめでとうです！」

「うん。おおきにな、リイン！」

頑張ってアウトフレーム（９歳くらいの子供の姿）へ変身してるリインの頭を撫でる。そんでわたしらは夕方近くまで盛大に卒業のお祝いをして・・・「またね～！」解散となった。夕ご飯分の食事もしたから、今日の夕ご飯はもうなんも食べんくてもええかも。すずかちゃん達とお別れして・・・

「父さん、母さん。わたし、今日無事に小学校を卒業できたよ。春からは中学生や。そん時にまた逢いに来るな」

家に帰る前にお墓参り。ルシル君が帰り際に、ご両親に挨拶しに寄ろう、って言うてくれたからや。別に明日でもええと思うたんやけど、今日の内の方が良いってことでそのまま父さんと母さんが眠る墓地へとやって来た。

「はやてちゃんのお父様、お母様」

「はやてはこれからもあたし達がしっかり守るから」

「どうかご安心してください」

「リイン達は、はやてちゃんとずっと一緒です♪」

みんなもお墓に手を合わせて祈ってくれてる。幸せすぎて泣きそうや。今日1日でどんだけ泣きそうになるんやろ。ふと、ルシル君と

アイリが視界に入った。２人とも真剣にお祈りしてくれてるみたいやけど、どこか悲しそうな気もする。

「ルシル君、アイリ・・・？」

「ん？」「なーに？」

わたしに振り向いた２人の表情はいつも通りのものやった。夕陽の影でそう見えてただけやろか・・・。わたしは「ううん。なんでもあらへん」首を横に振って、「そろそろ帰ろか」春先やからかちょう風が冷たい。とゆうわけで、今度こそわたしらの家に向かう。

「「「ただいまー！」」」

ヴィータ、リイン、アイリが真っ先に家の中に入ってく。遅れて「ただいま！」わたしらも家の中へ。

「あ、そうだ。はやてちゃん、ルシル君、シグナム。制服とスーツは明日クリーニングに出すから出しておいてくださいね」

「うん」「「ああ」」

わたしらはそれぞれ自分の部屋に戻って、制服から私服へと着替える。脱いだ制服を手に「お疲れ様」労いの言葉を掛けた。３年間、いま手にしてるんは２着目やけど、今日までお世話になった制服やしな。そんな制服を手に１階に降りて、「はい。シャマル。おおきにな」シャマルに手渡す。

「はい。しっかりクリーニングしてもらって、大切に保管しますね〜♪」

シャマルは他にも小学校で使った教科書やらノートやら体操服やらを保管する気やった。どうもわたしが大人になった時、それらを使って思い出に浸りたいらしい。ん〜、お母さんやな〜。

リビングダイニングに入ると、「ヴィータ、アイリ・・・？」が冷蔵庫を漁ってた。ヴィータは「たくさん歩いたからお腹すいちゃって」って苦笑い。そんでアイリは「あ、シュークリームは〜？」ヴィータにシュークリームの袋を差しだした。

「シュークリームか〜。う〜ん・・・それも良いんだけどな〜」

「ヴィータ。なんか作ろか？」

シュークリームやと物足りんようなヴィータに提案してみると、「あー、いいや。軽いもんで足りると思うし」そう言うて、「あっ、そだ！　ルシル！　お前の作ったドーナツ、食って良いか〜？」って、私服に着替えたシグナムやザフィーラと一緒にリビングに入って来たばかりのルシル君に訊いた。

「なんだ、ヴィータ。お前、あれだけ食べておきながらまだ食べるのか？」

「うっせぇなぁ、シグナム。小腹が空いたもんはしょうがねぇだろううがよ」

「食べても構わないけど、腹を壊すなよ」

「へーいき平気～♪」

「アイリも食べる～♪」

ルシル君のお手製のドーナツをダイニングテーブルに着いて食べるヴィータとアイリ。その様子を見てると「わたしも貰おうっと♪」食べたなってきたから、テーブルに着いて袋からドーナツ1個を取る。

「あー！　みんなドーナツ食べてるー！　私もく～ださい♪」

私服に着替えて来たシャマルもテーブルに着いて「ルシル君、いただくわね♪」作ったルシル君に一言断ってから「いただきます～！」パクッと頬張った。

「シグナムとザフィーラもどうだ？　翠屋から墓地、そして家まで結構歩いたからな。小腹くらいは空いているんじゃないか？」

「む・・・。いただこう」

「では我も1つ貰おうか」

ルシル君にそう言われたシグナムもテーブルに着いて、ドーナツを1つ取って「いただきます」パクッと頬張る。そんで狼形態のザフ

ィーラの口元に「はいです。ザフィーラ」リインがドーナツを差し出して、「いただこう」ザフィーラは大きく口を開けて丸ごとを一口で食べた。

『変なこと言わへんようにな』

シグナムを見てニヤニヤしてるヴィータに先制して忠告しておく。ここでヴィータはいらんことを言うてシグナムを怒らせるんやからな。すると『へーい』ヴィータは出鼻を挫かれたって風にそっぽを向いた。

「みんな。飲み物は何が良い？」

「あ、ルシル君。私も手伝うわ」

「わたしも・・・！」

「いいよシャマル、はやて。俺、立っているしさ」

「そう？・・・じゃあ、コーヒーを」

シャマルに続いてわたしも「ココアでお願いします」みんなも飲み物の注文。ルシル君は手際よく注文通りの飲み物を淹れてくれた。みんなでお礼を言うて、ホッと一息。ドーナツもルシル君が淹れてくれたココアも美味しいし。もう言うことなしや。

夕ご飯はもうそのドーナツだけで事足りたから、そのままお風呂に入って思い思いに就寝まで時間を潰す。そんで時刻は夜１１時。ヴ

ィータもリインもアイリもすでに眠りについて・・・

「おやすみなさい、はやてちゃん、ルシル君」

「主はやて、ルシリオン、おやすみなさい」

「んー、おやすみな～、シャマル、シグナム」

「おやすみ～」

シグナムとシャマルと挨拶を交わして、リビングから出てく2人を見送った。ザフィーラも、リビングに残るわたしとルシル君に頭を下げて玄関へ。ザフィーラは一晩のうちに寝る場所を何度も変える。対泥棒の番犬としての務めやって言うてる。そんなザフィーラも見送って、わたしはリビングの電気を消した。

ルシル君は「じゃあ俺もそろそろ・・・」リビングを出て行こうとしたから「ちょう待って」ルシル君の袖を摘まんで引き止める。そんで「良かったらもうちょい話せぇへん？」って誘ってみたら、「いいよ」受けてくれた。

「ようやく中学生になるんやな～、わたし」

ルシル君と2人きりになって、一緒にソファに座る。リビングを照らすのは月明かりだけ。音もない、ホンマに静かな空間や。

「ああ、あっという間だったな。はやてと出会ってもう4年だ」

「ホンマにな～・・・。・・・よし」

勇気を出して隣に座るルシル君の肩にもたれ掛る。ルシル君は何も言わんとただ受け入れてくれた。それだけで嬉しい。

（小学生はもう終わりや。1週間ちょっともすれば中学生。そろそろ本気で戦いのステージに立たなアカンよな）

遊園地デートでは頬にキスをして見た。思い出すだけでも全身が熱くなる。そやけどもう1歩踏み込んでかなシャルちゃんやトリシュには追いつけへん。そう。わたしだけが未だにやってへんことがある。それを今日、今この瞬間にやる。

「あのな、ルシル君」

「ん？」

ルシル君の声を聴く度に鼓動が速くなる。わたしは深呼吸を1回。そんで視線をルシル君の目と合わせる。

「わたしな。ずっと伝えたことがあるんよ、ルシル君に。初めて会った時からずっと、ルシル君のことが気になってた。最初は、わたしの孤独を埋めてくれる家族やって。そやけど、その思いはいつしか想いになってた」

思いが想いに変わった最大の原因は、海鳴スパラクーアでお互いの家族を紹介していた時、シャルちゃんが初対面のルシル君にキスし

て、さらに告白したからや。

――わたしはルシルが好き、ううん、愛してる。顔合わせは今日、この瞬間だった。でもそれだけで十分って言えるほどにこの想いは確かなもの。もしかしたらこの想いは前世のわたしの影響かも知れない。でもその想いはもうわたしのもの。だから、負けないよ――

――わたしかて・・・・！――

そのやり取りで、わたしはルシル君への恋を自覚した。それやのに、後から現れたトリシュにも告白の先を取られてしもうた。今の楽しい時間を壊したないから、わたしは何かと理由を付けて逃げてばっかやった。そやけどもう・・・遠慮も、逃げもせぇへん。わたしは・・・

「ルシル君が好き！　家族としてやない！　1人の男の子として！　ルシル君が好きです！」

想いを告げた。ルシル君はわたしの想いなんか前々から気付いてるって風に驚くことはなかった。うん。そんなリアクションやろうなぁって予想はついてた。

「・・・正直、嬉しいよ。そう言ってくれて。俺なんかを好きになってくれて、本当に嬉しい」

シャルちゃんやトリシュには見せへんかった反応が返って来たことに驚いた。微笑んだルシル君はわたしに顔を近付けて来たから、ド

キッと心臓が止まるかと思うた。キスされるかと思うたから目を瞑ろうとしたんやけど、「??」コツンと額と額をくっ付けただけやった。

（あー、今のは勘違いは恥ずかしいわぁ～・・・）

別の意味で顔が熱くなる。でもその恥ずかしさも、目の前にルシル君の顔があることのテレに掻き消される。

「でも・・・俺は・・・」

来た。この1回の告白で上手く行くなんて端から思うてへん。そやから「ルシル君！」その先を言わさへんように先制。

「出来れば今すぐ答えを出してほしくないんよ。ルシル君の事情は解ってるつもりや。エグリゴリの救済。それはホンマに危険なことで、自分がいつ戦いに敗れるか判らへんから、わたしらの告白を断ろうとしてるんやろ」

「・・・ああ。知っての通りエグリゴリは強い。残り4機の内、シュヴァリエル以上が2機。リアンシェルトに至ってはスマウグより上だ。正直・・・」

そこから先を言い淀むルシル君。リアンシェルト総部長までもが敵やったなんてショックやった。シグナム達が総部長と会う時いつも警戒してた理由が、スマウグ戦の時にようやく判った。

「でも、勝つんやろ？　ルシル君は」

「ああ、勝つよ」

「だったら、大丈夫や。ルシル君は勝って、わたしらのところに帰って来てくれる。答えはそん時に貰いたい。ルシル君がセインテストの存在意義から解放されたその日に・・・」

このまま勢いで口にキスしようとしてみたけど、さすがにそこまでの勇気は出せへんくて。そやからデートの時みたく頬に「それまで、わたしらに振り回されてな　」キスした。コチコチと時計の針が動く音と、わたしのバクバクってゆう鼓動の音だけが耳に入る。そんな時に、ＰｉＰｉＰｉ♪って通信が入ったことを知らせるコール音が突然鳴ったから「っ！？」わたしだけビクッとしてもうた。

「な、なんや？　こんな遅い時間に・・・！」

「俺、か・・・」

受信者はルシル君やった。そやけど「ルシル君・・・？」はなかなか出ようとせぇへん。なんでかな？って考えて、「あ、わたしか・・・？」内務調査部からの大事な連絡かもしれへんから、わたしの前では出られへんのかって思い至った。

「わ、わたし、もう寝るな。えっと、おやすみな♪」

ルシル君に挨拶してソファから立ち上がって、手を振って自室に向

かう。

「はやて・・・」

「ん？」

呼び止められたから振り返るとルシル君もソファから立ち上がって、わたしを引き止めるかのように手を伸ばしてた。

「あ・・・えっと・・・。うん。おやすみ、はやて」

「変なルシル君♪　おやすみ、ルシル君。また明日　」

ルシル君が手を振って挨拶してくれたから、わたしももう一度手を振って挨拶を返した。自室に入って、勉強デスクのお出かけバッグの中で眠るリインに「おやすみ」小声で挨拶。そんで、ベッドの中で寝相を崩したヴィータの、布団から出た足と腕をしまってから「おやすみ」わたしもベッドに入る。

（・・・っ！　うぅぅ～～～！　言った、ついに告げた！）

さっきの告白を思い出してベッドの中で蹲る。そやけど、それ以上にシャルちゃんとトリシュと同じステージに立てたことが嬉しい。もうこっからは一切の手加減無用。うん！と改めて決意を固めて、わたしはそのまま眠りに着いた。

そんであくる日。カーテンの向こうから差し込んで来る朝陽に「ん・・・ん・・・？」目を覚ました。今日から春休みで仕事もみんな休みやから、みんなして起きてくるのは遅い。時計を確認すると午前7時すぎ。

（やっぱ習慣やなぁ～。時には盛大に昼くらいまで眠ってみたいかも）

ヴィータを起こさへんように注意してベッドから降りる。リビングへ向かう前にまずは「おはよう、アインス」勉強デスクの上に置かれた箱に収められた剣十字と指輪に朝の挨拶。そのアインスの魂を首に提げる。今日もずっと一緒やよ。

「やっぱり誰も起きてへんなぁ・・・」

リビングに入ると、シャマルどころか早起きなルシル君も起きて来てなかった。ルシル君のことを考えると「あぅ・・・」また顔が熱くなる。ルシル君と直接顔を合わせればどうなんかちょう不安。

「ん？・・・テーブルの上になんか・・・」

熱を冷ますようにかぶりを振ったところで、ダイニングテーブルの上に紙が1枚置かれてるのに気付いた。昨夜には無かったから、わたしが起きて来る前に誰かが置いたんやな。わたしはその紙がなんなのかを確認するために手にとって「っ！！？」そこに記されてたメッセージを読んで目を疑った。

「うそ・・・うそ・・・うそや・・・うそや！」

そのメッセージを信じたなくて、確認するためにリビングから飛び出して、「ルシル君！」の部屋へ。ノックも何もせんと扉を開けて・・・

「っ！・・・いや・・・いやや・・・いやぁぁぁぁぁ！」

わたしはその場にへたり込んで泣き喚いた。ルシル君の部屋やったそこにはもう誰も居らんくて、ルシル君の私物も何も残ってへんかった。

こうしてルシル君は、４年と過ごしたわたしの家から姿を消した。

ＥｐｉｓｏｄｅⅢ　：　Ｕｓｕｓ，　ｍａｇｎｕｓ　ｖｉｔａｅ　ｍａｇｉｓｔｅｒ，　ｍｕｌｔａ　ｄｏｃｅｔ・・・Ｆｉｎ

・―・―・次章予告・―・―・

魔法少女、育てます。

新暦６９年。日常では小学生から中学生となり、非日常では各々夢を叶え、チーム海鳴はそれぞれの道で仕事に励む。

「高町なのは教導官って、本当にすごいんだよ！」

「フェイト執務官、アリシア執務官補。お疲れ様です！」

「あれが、八神はやて特別捜査官と八神の騎士たち・・・！　すげぇ！」

「バニングス捜査官、ご協力感謝いたします！」

「やぁ、すずか君。やはり私の目に狂いはなかったよ」

さらに有名になりつつある彼女たちの時は流れて行く。そんな中、はやては決意する。

「わたしな、自分の部隊を持ちたいんよ」

現管理局、特に地上部隊の体制に不満を抱き、その不満を少しでも解消するため、自分の部隊の立ち上げることを決めた。

古くからの本局の協力者たちの力添えにより、彼女の夢は、心強い仲間たちと共に着々と実現へと近付いて行く。

「スバル・ナカジマ二等陸士であります！」

「ティアナ・ランスター二等陸士です！」

「エリオ・モンディアル三等陸士です！」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！」

新しい仲間もさらに増え、彼女の夢はとうとう実現を果たす。

「これが、わたしらみんなの部隊、機動六課や！」

古代遺失物管理部・機動六課。とあるロストロギアと、騎士カリム・グラシアの預言の元に設立された部隊。はやて。なのは。フェイト。アリシア。シグナム。ヴィータ。シャマル。ザフィーラ。リインフォースⅡ。そして新たな仲間たちは、次元世界史に残る大事件に直面し、解決に奔走することになる。

「第零技術部長ジェイル・スカリエッティ中将。あなたを逮捕します」

「はーっはっはっはっは！　俺からのプレゼントだ、我が愚弟・・・ジェイル！」

「こちらアリサ・バニングス二等陸尉。これより機動六課と合流するわ」

「月村すずかです！　みんな、よろしくね♪」

暗躍する本局上層部。そして機動六課のため、それぞれ別の部隊からも集まる仲間たち。

「ちょっとぉぉぉ――――！　誰との子供よ、ルシルぅぅぅ――――――！」

「待つんだ、まずは話を聴け、シャル――ぐはぁっ！？」

そんな中、機動六課の前に現れた２人の幼い少年と少女。その２人の出現に、言われなき暴力を受けるルシリオン。

「ドクター・プライソン・・・彼が首謀者だ！」

「さぁ、始めよう！　戦争だ！　燃えろ、燃えろ、全てを燃やしつくしてやれ、我が作品たち！」

「あなたは本当にそれでいいの！？　ルシル君！」

「ズィルバーン・ローゼ、全騎出撃！」

「何としてもこれ以上の砲撃を撃たせるなぁぁぁぁぁ――――――！」

「ミッドは滅ぼさせない！」

リンドヴルムによって引き起こされたクラナガンの悪夢。それ以上の悪夢がクラナガンを、そしてミッドチルダを襲う。

「私は、あの人に死んでほしくない・・・・！」

「それが裏切りであっても・・・・」

「あたし達が！」

「僕たちが！」

「きっと止めて見せる！」

「予言しよう、神器王！　将来、お前は必ず――」

「黙れぇぇぇぇぇーーーーーーーッ！！」

食い止めろ。無情な戦火を。吼えろ。己たちの意志を通すため。

Next Episode・・・・EpisodeⅣ：Desine fata deum flectis spectare precando.

番外コーナー：えぴそ～ど・スリ～のう～ら～ば～な～！

シャル
「こ～んに～ちは～！　聞こえないぞ～？　こ～んに～ちは～！」

ルシル
「エピソードⅢもとうとう終わったな」

シャル
「ちょっと歌のお兄さん！　挨拶！」

ルシル
「誰が歌のお兄さんだ！」

シャル
「ノリがわる～い。私みたく歌のお姉さんっぽくやっ――」

ルシル
「もういいよ！　こんなどうでも良すぎな前座なんて要らないんだよ！」

シャル
「ちぇー。始めればいいんでしょ～、始めれば～。じゃあ、エピソードⅢの登場キャラから紹介ね～」

浅間火奈（あさま・ひな）

五十鈴依姫（いすず・よりひめ）
榎本恭一（えのもと・きょういち）
大宮紗彩（おおみや・さあや）
大山智樹（おおやま・ともき）
春日太陽（かすが・たいよう）
金山夏彦（かねやま・なつひこ）
加夜奈留美（かやな・るみ）
木花咲耶（きはな・さくや）
佐保さくら（さぼ・さくら）
寒川礼二（さむかわ・れいじ）
菅原道隆（すがわら・みちたか）
杉原楓太（すぎわら・ふうた）
住吉七海（すみよし・ななみ）
諏訪明（すわ・あきら）
田心知果（たごころ・ちか）
竜田秋菜（たつた・あきな）
月読勇也（つきよみ・ゆうや）
歳神聖（としがみ・せい）
豊玉春子（とよたま・はるこ）
内野大地（ないの・だいち）
中筒翼（なかつつ・つばさ）
早池峰瀬織（はやちね・さおり）
比佐津天音（ひさつ・あまね）
比佐津天守（ひさつ・あまもり）
火照耀（ほでり・あかる）
真神護（まがみ・まもる）
武塔亮介（むとう・りょうすけ）

八重刀梅（やえ・とうめ）

ルシル
「４年生時のクラスメイトだな。中にはハコにわ生徒会の登場キャラも居るが」

シャル
「そ♪　このクラスメイトの名前の共通点。憶えてる？　連載当時、ミニコーナーでクイズ出してたよね～」

ルシル
「そうだったな。懐かしい。答えはそう。全員、日本神話に登場する神の名前から取っているんだったな」

シャル
「うん♪　日本神話に詳しい読者くんが居れば、読んでる途中に気付いてる子も居たかもね～」

――ファビオラ・プレリュード・セレス・カローラ・デ・ヨツンヘイム
時空管理局・本局、航空武装隊の第２２１２部隊に所属している、古代ベルカ式の騎士。階級は一等空士。魔導師ランクはＡＡＡ＋。魔力光はアイスブルー。リンドヴルムの壊滅後、空曹へと昇格する。管理局だけでなく聖王教会・騎士団にも籍を置いている二足の草鞋騎士で、蒼薊騎士隊ブラウ・ディステルの隊員。使用デバイスは、鍵を意味する両刃剣シュリュッセル。
氷雪系の魔術に長けているニヴルヘイムと双璧を成す世界、ヨツン

ヘイムの皇族の直系。自由自在に魔術師化できる能力を保有している。しかし、一度でも魔術師化すると、必ず冷たい物を多く摂取しないと再魔術師化できないという欠点も有る。

シャル
「次はこの子ね。前作においてはテスタメント事件を引き起こした首謀者・ハーデとして登場。ＡＮＳＵＲ時代の魔道書であるディオサの魔道書を発見して、ルシルや魔族を召喚したりと大暴れ。今作では、後述の姉・フィレスが生存してるから管理局への復讐心は無いのよね～。しっかり管理局の一員として日夜頑張ってるんだよ」

ルシル
「今作は、前作で亡くなっている者が数多く生き残っているからな。このまま犠牲者が出ないままで完走してくれるといいな」

――アウローラ・プレリュード・フィレス・カローラ・デ・ヨツンヘイム
時空管理局・古代遺失物管理部・機動一課に所属している、古代ベルカ式の騎士。セレスの実姉。階級は二等空尉。魔導師ランクはＳ＋。リンドヴルム壊滅後、一等空尉へ昇格した。管理局だけでなく聖王教会・騎士団にも籍を置いている二足の草鞋騎士で、蒼薊騎士隊ブラウ・ディステルの隊長。使用デバイスは、セレスの物と同型の両刃剣で、銘はシュロス。その意味は、錠。
フィレスもまたセレスと同様に魔術師化でき、その神秘は第一章・大戦編にも十分参戦できる程。

シャル

「今作では機動一課のスノー分隊の隊長を務めてるんだよね」

ルシル
「前作では若くして殉職し、それが原因で妹のセレスが狂ってしまったんだったな」

シャル
「辛い事件だったよ。だけどセレスと同じように今作じゃ立派な局員。テスタメント事件は絶対に起きないよ」

――ソリオ・クラエッタ
機動一課・スノー分隊専用の輸送ヘリのパイロット。ミッドチルダ式の射撃魔導師。階級は一等陸士。魔導師ランクはC。

ルシル
「彼はエピソードⅣのＳＴＲＩＫＥＲＳ編で登場することになる、アルト・クラエッタの兄らしいな」

シャル
「みたいだね～。ソリオからアルトの思い出話を聞いていたって言う設定があるから、再会時に何かあるかも」

――ジョシュア・エルグランド
本局航空武装隊・第２２１２航空隊の隊長を務める二等空佐。

――ジータ・アルテッツァ
本局航空武装隊・第１０１３航空隊の隊長を務める三等空佐。

――ガウェイン・クルーガー
本局・教導隊の第２班の班長を務める三等空佐。

シャル
「彼ら３人は前作のテスタメント事件において、シグナム達に復讐するために蘇った復讐者だったよね」

ルシル
「最期は、はやて達にある課題を遺して昇天して逝ったな。今作ではフィレス達と同様に殉職をしていないから、シグナム達も気が楽だろう」

――トリシュタン・フォン・シュテルンベルク
今より数百年前、オーディンと騙っていたルシリオンと、シュトゥラはアムル領領主のエリーゼとの間に生まれた子供の子孫。兄は聖王教会・騎士団の精鋭であるズィルバーン・ローゼにおいての最強の槍騎士パーシヴァル。
敬語使いが標準。華奢な体格だがその体力はずば抜けている。弓の名手で、１ｋｍほど先のリンゴを魔力矢で撃ち抜けるレベル。パラディン達からの英才教育のおかげで、最強の弓騎士ボーゲンパラディンの後継者として注目されている。
管理局基準の魔導師ランクはＡＡＡ－。魔力光はルシリオンと同じサファイアブルー。兄と同様に複数の魔力変換資質を持つ。使用デバイスは、弓と双剣の２つのモードを有する"イゾルデ"。
名の由来：トリシュタン。アーサー王伝説に登場する円卓の騎士の１人、トリスタンのドイツ語読み。

イゾルデ：恋愛物語トリスタンとイゾルデに登場する、悲恋の相手イゾルデから。
固有スキル：乙女の祝福クス・デア・ヒルフェ。シュテルンベルク家の長女にのみ受け継がれるスキル。対象の体にキスをすることで、自身の魔力を供給できる。能力継承者にはリンカーコアが2つあり、1つは自身のために、もう1つは能力のためにある。

シャル
「ルシルにそっくりな子だったよね」

ルシル
「だったな。髪や瞳はエリーゼのものだが、髪型は俺と同じインテークだった。髪型の遺伝の強さにビックリだよ」

――ディナス・ラインラント・ハーメルン
シュテルンベルク家のメイド。古代ベルカ時代においてエリーゼに仕えていたアンナ・ラインラント・ハーメルンの子孫にあたる。彼女の遺伝か浅黄色の髪と灰色の瞳をしている。
名の由来：ディナス。トリスタン付きの騎士ディナスから。

――ヴィヴィアン・オートクレール。
シュテルンベルク家のメイド。古代ベルカ時代においてシャマルから医学と治癒魔法を学んだ、いわゆる弟子であるルファ・オートクレールの子孫。ルファと同様に綺麗な金髪をボブカットにし、目つきが若干するどい紫色の瞳を有する。
名の由来：ヴィヴィアン。アーサー王伝説に登場する湖の乙女の1人、ヴィヴィアン。

――ニミュエ・クラウジウス
シュテルンベルク家のメイド。古代ベルカ時代においてシャマルから医学と治癒魔法を学んだ、いわゆる弟子であるモニカ・クラウジウスの子孫。モニカと同様にオレンジ色のウェーブがかった髪をおさげにし、優しい青色の瞳をしている。
名の由来：ニミュエ。アーサー王伝説に登場する湖の乙女の1人、ニミュエ。

――アルマ＆ドロテア＆ベリト
ザンクト・ヒルデ魔法学院の生徒。学院内にて幼い竜を無断で飼育。学食の食材を与えていた。
名の由来：ドイツの基本的な女性名から。

――アンジェリエ・グリート・アルファリオ
ザンクト・ヒルデ魔法学院・中等部の生徒。イリスやトリシュタンとは親友。エメラルドグリーンの長髪はポニーテール、澄み切った青色をした瞳を有する。
ベルカ自治領ザンクト・オルフェンの代表であるフライハイト家の下に連なる六家の一角・アルファリオ家の長女。アルファリオ家の格上のフライハイト家の次期当主・イリスには畏敬はなく、ひたすらに友人だと思っている。
聖王教会・教会騎士団所属。所属部隊は、紫唐菖蒲騎士隊プルプァ・グラディオーレ。管理局規定の魔導師ランクはＡＡＡ。
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編にて活躍していた騎士、花の姫君チェルシー・ルリート・アルファリオの子孫。魔術師化できる才を有しているが、未だにその領域には立ててはいない。

――クラリス・ド・グレーテル・ヴィルシュテッター
ザンクト・ヒルデ魔法学院・中等部の生徒。イリスやトリシュタンとは親友。スノーホワイトのショートヘア、アップルグリーンの瞳を有する。
ベルカ自治領ザンクト・オルフェンの代表であるフライハイト家の下に連なる六家の一角・ヴィルシュテッター家の長女。ヴィルシュテッター家の格上のフライハイト家の次期当主・イリスには畏敬はなく、ひたすらに友人だと思っている。
管理局と聖王教会騎士団の両方に籍を置く二足の草鞋騎士。召喚魔導師にして古代ベルカ式騎士。階級は二等陸士。魔導師ランクＡＡＡ＋。管理局での所属はミッド北部はミラ地方を担当する第２１１陸士部隊。教会騎士団としての所属は、翠梔子騎士隊グリューン・ガルデーニエ。
パラディンの一枠である騎兵騎士レイターパラディンの後継者に最も近い騎士。
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編、第二章・堕天使戦争編にて活躍していた騎士で、生前のシャルロッテ・フライハイトの補佐を務めていたグレーテルの子孫。魔術師化できる才を有しているが、未だにその領域には立ててはいない。
使用デバイスは、方天戟型アームドデバイス・"シュトルムシュター ル"。意味は鋼の疾風。

シャル
「あの娘たちもこうして生まれ変わって過ごしてる。それがとても嬉しいの。私は、自分の命を懸けて良かったって思う。そして生まれ変わりでも良いから再会を果たして良かった」

――ルルス
ミミル・テオフラストゥス・アグリッパの双子の使い魔で、姉にあたる。ウサギを素体としており、人型形態時には頭の上からウサギ耳を生やす。目は瑠璃色。服装は黒色のセーラー服、スカートの下にはスパッツを着用。
名の由来：マヨルカ王国・パルマ・デ・マヨルカ出身の哲学者・神学者・神秘家、ライムンドゥス・ルルス。

――フラメル
ミミル・テオフラストゥス・アグリッパの双子の使い魔で、妹にあたる。ウサギを素体としており、人型形態時には頭の上からウサギ耳を生やす。真っ白なウサ耳と髪は右側でのサイドテール、目は真紅。服装は白のチャイナドレス。
名の由来：出版業者でありながら錬金術師、ニコラ・フラメル。

――シュヴァリエル・ヘルヴォル・ヴァルキュリア
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編にて登場した、完全自律稼働人型魔道兵器、"戦天使ヴァルキリー"の１体。
第六世代・ヘルヴォルのシリアルナンバー０１。『戦導の鉄風』の二つ名を持つ。属性は風嵐系で、全風嵐系の"ヴァルキリー"の中では最強である。"ヴァルキリー"軍の切り込み特攻部隊であるヘルヴォル隊、その隊長であるために全世代の中で最高の防御力を誇る。
完結編ではリンドヴルムという、ロストロギア専門のコレクターの元で私兵の総隊長を務めていた。

シャル
「お疲れ様、ルシル。頑張ったね」

ルシル
「ありがとう、シャル。しかしまさか、こんな早い段階でシュヴァリエルとぶつかるとは思っていないかったよ。でもまぁ、みんなのおかげでシュヴァリエルを救うことが出来、なおかつ囚われていたアイリを救うことも出来た。言うこと無しの戦果だよ」

――スマウグ
魔界最下層にてあらゆる財宝を集めるコレクター。魔族・魔獣属・竜種で、全身の鱗に黄金がへばり付いているため黄金竜の異名を持つ火炎竜。その強大さから竜の中でも特別な王クラスである。どう言った経緯で次元世界に出現したかは不明。
老紳士風の人型に変身し、ロストロギアをコレクションするミスター・リンドヴルムを名乗る。シュヴァリエルがベルカ崩壊時にアイリを拉致した頃には、すでに次元世界にて活動していたようである。名の由来：スマウグ。J・R・R・トールキン作・「ホビットの冒険」に登場する、火竜族"ウルローキ"の"最後の世代の一体であるスマウグから。

ルシル
「コイツの登場には心が折れたよ。絶対に勝てないと思っていた相手だったからな」

シャル
「アールヴヘイムでヨルムンガンド達と死闘を繰り返しておきなが

ら勝利を収め、本局でチーム海鳴＆フローリアン家の総攻撃を受けてもビクともしなかった。けど・・・」

ルシル
「最後の最後でリアンシェルトが現れ、真技である創世結界を発動させて凍結粉砕した」

シャル
「勝てそう？」

ルシル
「・・・勝つさ。どんな手段を使おうとも・・・」

――Ａ・Ｍ・Ｔ・Ｉ・Ｓ・　Ｍｏｄｅｌ　Ｎｕｍｂｅｒ／Ｔｙｐｅ　Ａｒｔｉｌｌｅｒｙ－０１０９／ＢＥＲＧＥＬＭＩＲ
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編にて登場するヨツンヘイム連合が大戦末期に投入した、科学も用いて建造された人型戦略魔道兵器。通称アムティスの１機。タイプは砲撃戦を主とするアーティラリーで、個体識別名はベルゲルミル。
名の由来：ベルゲルミル。北欧神話に登場する霜の巨人で、最初の巨人とされるベルゲルミル。

――Ａ・Ｍ・Ｔ・Ｉ・Ｓ・　Ｍｏｄｅｌ　Ｎｕｍｂｅｒ／Ｔｙｐｅ　Ｓａｂｅｒ－０８００／ＨＲＵＮＧＮＩＲ
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編にて登場するヨツンヘイム連合が大戦末期に投入した、科学も用いて建造された人型戦略魔道兵器。通称アムティスの１機。タイプは近接戦を主とするセイバーで、個体識別

名はフルングニル。
名の由来：フルングニル。北欧神話に登場する巨人で、雷神トールに殺害されてしまうフルングニル。

ルシル
「まったく。とんでもない物を掘り起こしてくれたものだよリンドヴルム」

シャル
「コイツらの所為でクラナガンが酷いことになっちゃったもんねぇ。けどフェンリルが噛み砕いてくれたから良かったよ」

――ハート2・ホムンクルス
ロストロギア専門のコレクター、ミスター・リンドヴルムことスマウグの私兵の中でも、特に優秀な戦闘力を有する最精鋭部隊・第0小隊ドラゴンハート、その副隊長。その正体は、"界律"の触角である神属・天使をその身に宿し、その力を行使できるように調整された人工生命体ホムンクルス。

――ハート3・エルマ
ロストロギア専門のコレクター、ミスター・リンドヴルムことスマウグの私兵の中でも、特に優秀な戦闘力を有する最精鋭部隊・第0小隊ドラゴンハート、そのナンバー3。第3管理世界ヴァイゼンにてストリートチルドレンをやっていた。
9歳の頃、ロストロギア回収のためにヴァイゼンを訪れていたシュヴァリエル相手にスリを働き、そして反撃を受けた。その無鉄砲さを気に入ったシュヴァリエルはエルマを拉致。その後、本拠地の無

人世界にてエルマを鍛え、ドラゴンハート最後の世代でハート3に抜擢した。

シャル
「はーい。こっからは、エピソードⅢの主軸となっていた神器やロストロギアを紹介するね～♪」

――ケリオンローフェティタ
光煌世界アールヴヘイムに存在している超巨大な黄金の門。転移門と呼ばれる次元間を繋ぐことの出来る、神属の創造した神器に近い存在。ケリオンローフェティタは数ある転移門の中でも特に強大な力を秘め、原初世界アースガルドを中心とする上位次元世界と、ミッドチルダを中心とする下位次元世界をも繋げられる。
転移門の中で唯一人型に変身でき、門全体のケリオンという少年型と、転移先などの転移能力を管理するローフェティタという少女型が存在している。

シャル
「なんか新しい設定が入って来たよね？　上位次元世界、下位次元世界って」

ルシル
「どうやら神秘が復活した次元かしてない次元かの違いらしい。この設定は実は前作にも使われていたようだ。どうして"界律の守護神テスタメント"の転移能力でアースガルドへ行かないんだ？なんて疑問を持つ読者も居ただろうが、その疑問の答えがこの新設定らしい」

シャル
「テスタメントですら転移できない程の境界の力というわけね。だというのにケリオンはその奇跡を起こせる・・・。結構すごい子だったんだ～」

ルシル
「ああ。本音を言えば還らせたくなかったが、あのままだと死んでしまったからな。しょうがないさ」

――ヴンダー・エーデルシュタイン
アールヴヘイムの魔術師により作成された概念兵装。直径１０ｍはある、ダイアモンドのような輝きを放つ正二十面体。攻撃時には様々な形状へと変形することが出来る。その意味は、奇跡の宝石。

――スフィ・ダンテ
持ち主より相手が強ければ強いほど、戦闘中に経験値を稼ぎ、短時間に成長。武器の性能を引き上げて行く能力を有する魔造兵装番外位。属性は炎熱。敵のレベルに合わせて初期の両刃の西洋剣⇒大剣⇒フランベルジュ⇒炎剣へと徐々に形態を変化させる。さらに持ち主の身体に炎を灯し、その戦闘能力を引き上げさせる。しかし身の丈に合わない強化をされると持ち主の精神は狂化され、終いには心が死んで再起不能になる。
イタリア語で挑戦者の意。

――アクケルテ
アールヴヘイム製の銃型神器。全てが純白で、ボルトアクション方

式のライフル銃。
名の由来：キルギスに伝わる叙事詩・『マナス』に登場する主人公であるマナスが愛用する銃。銃身は鋼鉄、銃口はダマスカス鋼で出来ている。その意味は、白い銃。

――クピドゥス・グノスィ
書物型の魔造兵装、番外位。所有者が望む情報を有しているモノ自体から情報を好き勝手に収集することが出来る。
クピドゥスはラテン語で強欲、グノスィはギリシア語で知識。

――ヤーヌス・ポルタ
羽ペン型の魔造兵装、番外位。空間接続を行える幾何学模様のサインを描き、最後に転移先の場所の名前を記すことで、サインが描かれた場所の一定範囲内に在る物を纏めて転送できる能力を持つ。
ヤーヌスはローマ神話に登場する出入り口と扉の神、ポルタはラテン語で扉。

――ネグロ・リベルタ
無数の羽根で編まれた外套型の概念兵装。身に纏う者の気配を完全に消失させることが出来る。効果発揮中は普通に喋っていても気付かれない。外套の一部である羽根を身に付けた物や者にも効果が発揮される。
ネグロはスペイン語で黒、リベルタはイタリア語で自由。

――インペリウム・インシグネ・オクドゥス
優勝旗のような豪華絢爛な旗型の神造兵装、番外位。この神器を突き立てた地――最大で国1つを天上の支配下に置くことが出来る。

土地が支配下に置かれれば、その地に住まう生物もまた天の支配下に置かれる。
インペリウムはラテン語で帝国・命令権、インシグネは旗。オクドォスは第８。第８の通りこの神器はシリーズ化されており、その数は３ケタ近い。元は魔界を支配するために神属によって造られた。

――ブリギッド・スミス・テトラデカ
汎用武器型神造兵装、第１００位。神属の兵が扱うための神器であり、兵士の数だけ製造されているため、その数は１万に上る。テトラデカは１４番目を意味し、この神器は１４度目に製造されたことになる。
ブリギッドはケルト神話に登場する金属加工の女神、スミスは職人の意味。

――オールドー・デ・ソル
太陽のレリーフが頭にある杖型の概念兵装。太陽が昇っている時間帯でのみ機能して、杖先を地面に付いているその間だけ持ち主が認めた仲間たちに神秘の加護を与えることが出来る。その意味はギリシア語で、太陽の秩序。

――エスパース・ラム
大鎌型の概念兵装。神秘による不可視の刃を任意の空間に留める。不可視ゆえに回避不可だが、神秘の高い高位魔術師はギリギリ見えることもある。フランス語でエスパースは空間、ラムは刃。

――不傷剣キャルタンクリーヴ
両刃剣型の概念兵装。その剣と鞘の持ち主はどれだけのダメージを

負っても超回復し、この剣との同調率が高ければ高いほど、ダメージを完全無効にすることも可能となる。
キャルタンは『ラックサー谷の人びとのサガ』に登場する名剣で、クリーヴはゲール語で剣を意味する。

――虹の弓アルクス
虹色をした古臭い弓型の概念兵装。雷光を支配できる神器で、雷を矢として射ることが出来る。ラテン語でアルクスは虹・弓。虹の弓とは、アフリカはヤオ族民話に登場する神の武器。

――澪結剣ヒュドール・アソオス
ナイフ型の概念兵装。"戦天使ヴァルキリー"が一、水流系の完全機ナーティア・ヒルド・ヴァルキュリアの固有武装、"澪結剣ヒュドール・アソオス"、その試作品。製作者はルシリオン。水による攻撃や防御を可能とする、水流系初の神器。
ギリシア語でヒュドールは水、アソオスは無邪気。

――氷纏装デュック・グラス
氷で出来た武装型の魔造兵装、第１０３位。使用者のどちらかの腕、もしくは両腕と融合して構築される武器で、同調率が低い者は利き腕にのみ同化して大剣と化す。同調率が高ければ自由に武器の形を変更できる。フランス語でデュックは公爵、グラスは氷。

――ウィーチェ
白銀のライフル型の概念兵装。モデルはウィンチェスターライフル。ルシリオンが造り出した数ある銃型神器の1挺。命名はカノン・ヴェルトール・アールヴヘイム。

――エクエス・ノービリス
黄金の装備一式型の神造兵装、９０位。下級天使三隊の内の二隊、天使と権天使の天使長だけが使用できるとされた神属の武器。基本的には伸縮自在の剣、広狭自在の盾、全身甲冑。
ラテン語でエクエスは騎士、ノービリスは高貴。

――モルス・フォルフェクス
深紅に輝く巨大なハサミ型の魔造兵装、７９位。対神器用の神器。この神器の神秘以下の神器を問答無用で断ち斬ることが出来る。分離させることで双剣形態にもなるが、ハサミではなくなるため対神器効果は若干弱まってしまう。
ラテン語でモルスは死神、フォルフェクスはハサミ。

――ヒドゥンカリグラフィ
書物型の概念兵装。神属と契約を結んだ大預言者が記したという、天使召喚・使役を可能とする魔道書。
英語でヒドゥンは秘密の、カリグラフィーは文字。

――光翼ルミナス・プリズミラ
融合型の神造兵装、第８８位。持ち主の両腕と同化する光の翼と、背より展開される光の翼、４つの翼を装備する神器。太陽光と月光、２つの光を司る。
ルミナスは英語で光を発する、プリズミラはプリズム――光を分散するの意。

――誓鎧アフドゥ・ハーミン

防具型の概念兵装。誓約の防具とも呼ばれ、装着時に誓約を決め、それを果たしている間は身体能力や魔力を強化できる。しかし装備中にその誓約が破られた時、リバウンドが起こって全身がズタズタにされる。
アラビア語でアフドゥは誓約、ハーミンは防具の意。

――抑制剣アゾート
剣型の概念兵装。武器というよりは護符の意味合いが強い。身に付けている間は、神秘中毒の抑制や魔力量増加の効果を発揮する。アゾートは錬金術用語で、基本金属。

――天裁サテッレス・ラーディウス
直径４ｍほどの、女性の彫像が磔刑に処された十字架型の神造兵装、第３８位。衛星軌道上からの神罰クラスの砲撃を雨のように地表に向けて発射する。
ラテン語でサテッレスは衛星、ラーディウスは光線。

――道化師の本能ヴンシュ・ファイクリング
仮面型の魔造兵装、番外位。装着した者の理性リミッターを解除し、本能のままに行動させる。対象が仮面を付けている間、あらゆる法則を無視する体を手に入れることが出来る。さらにどんな物も再構築できる。全ての法則を味方にする。装着には条件があり、自分に対して絶対の自信が無い、生きていることに不安・不満を覚えている者と限定される。
ドイツ語でヴンシュは願望、ファイクリングは臆病者の意。

――マーラー・キント

書物型の概念兵装。本の白紙ページに描いたイラストをそのまま戦闘用の使い魔として具現化できる能力。ドイツ語でキントは子供、マーラーは画家の意。

――パリ・デ・パスカル
サイコロ型の魔造兵装、番外位。確率操作を行える神器で、自分と対象の確率を反転させることが出来る。
名の由来：パリ・デ・パスカル。哲学者ブレーズ・パスカルが提案した、パスカルの賭け。

――ヴィシャスリング
ロストロギア。自分の思念を不干渉の力場に変えることが出来る。

――ラレス・ドメスティキ
ロストロギア。翼を広げた鳥の形をした３００ｍ級戦艦。
名の由来：ラレス・ドメスティキ。ローマ神話に登場する家の守護神。
モデル：ライトノベル・ロストユニバースに登場する、意思を持つ宇宙船ロストシップの１機・ネザード。

――ラレス・ファミリアレス
ロストロギア。二等辺三角形の形をした２００ｍ級戦艦。
名の由来：ラレス・ファミリアレス。ローマ神話に登場する家族の守護神。
モデル：ライトノベル・ロストユニバースに登場する、意思を持つ宇宙船ロストシップの１機・ラグド・メゼギス。

――ラレス・ウィアレス
ロストロギア。三日月型の１００ｍ級戦艦。
名の由来：ラレス・ウィアレス。ローマ神話に登場する旅行者の守護神。
モデル：エースコンバット３エレクトロスフィアに搭乗する架空機・ナイトレーベン。

シャル
「大体こんなところかな～」

ルシル
「結構出してきたな。しかも、俺が造った神器まで・・・」

シャル
「そうだよ馬鹿！　何やってんの！？」

ルシル
「俺の所為じゃないだろう、こればっかりは！　ほら、次行くぞ、次！」

シャル
「はーい。それじゃあ最後は、エピソードⅢの裏話コーナー♪」

――エピソードⅢ：Ｕｓｕｓ，ｍａｇｎｕｓ　ｖｉｔａｅ　ｍａｇｉｓｔｅｒ，ｍｕｌｔａ　ｄｏｃｅｔ

ルシル

「まずはエピソードⅢがどういったものだったかを話さないとな。このエピソードは本来、時間稼ぎ用の章だったわけだ」

シャル
「あれでしょ？　魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅの連載が再開されるまでの、ってやつ」

ルシル
「ああ。本作のラストエピソードは『Ｆｏｒｃｅ』を主軸に展開される章だからな。が、うちの作者にタイムリミットが生まれたことで、その意味を失くした」

シャル
「ざ～んねん♪」

ルシル
「次に、リンドヴルム編と日常編の織りなすこの章だが、実はシュヴァリエルとスマウグはこの章で斃さない予定だった。当初、この完結編は7部作だったが、ずっと以前になかなかストーリーが進まないことを憂いた作者が6部作に変更した。その際に消された章にてフィヨルツェンを斃す予定だった。で、シュヴァリエルとスマウグは代わりに1つ前の章にて斃す予定だったわけだ」

シャル
「あー、そうだったね。エピソードⅣ・ＳＴＲＩＫＥＲＳ編でレーゼフェア。エピソードⅤ・再誕編でシュヴァ＆スマウグ。幻のエピソードⅥ・血の紅月編でフィヨルツェン。そしてラストエピソード

の終結編で・・・っていうシナリオだったんだっけ」

ルシル
「で、だ。エピソードⅢのラスボスは本来、アムティスだったんだ。リンドヴルムと本拠地を壊滅させ、全神器とケリオンが還ったのを見送った後で、アムティスが登場。そして決戦。その後は卒業式まで全て日常編。ま、エピソードⅥが消失することを決め、ボスの変更を決めた後、邪魔なアムティスは噛ませ犬となってしまったわけだ」

シャル
「ザマァ！　あ、ねえねえ。エピソードⅥのストーリーって具体的にどんなのだったの？」

ルシル
「あるロストロギアを巡る事件。運命を捻じ曲げ征服する者フェイツ・コンクエスター。何十何百って言う人の命――運命を吸収し、持ち主の運命を好き勝手操ることが出来る。特に高魔力持ちの人の命を奪うことでエネルギーを溜めやすい、通称・征服剣。ソレによる連続殺人魔導師事件。ある理由で被害者は特に双子が多い・・・というような事件だ」

シャル
「あ、だから・・・」

ルシル
「そう。本作に双子が多く登場する理由が、この事件のための生贄

になってもらうためなんだ。さ。裏話はこれで終わりだ」

シャル
「オッケー♪　んじゃ、次回。魔法・魔術紹介のシャルシル先生の魔導紹介教室で～♪」

番外コーナー：シャルシル先生の魔導紹介教室～♪その３っ！

ルシル
「引き続き番外編をお送りするぞ」

シャル
「おー！」

――女神の地憤／コード・フィヨルギュン

ルシル
「俺の土石系における上級術式の１つだな」

シャル
「石化効果を有する土石流による攻撃ね」

ルシル
「ああ。最大で８つまでなら発動できる。他の属性のように速度は無いため、対人戦ではまず使わないな。
其は大地の怒りを噴き出せし者。天に牙剥く破壊者を率い、噛み砕く牙に貫かれし者を、断ち斬る爪に穿たれし者を、天より墜とし地へと撒き散らす。しかしてその者らも破壊者と一となりて、共に天へ牙を剥くだろう・・・という詠唱が必要な儀式魔術だ。
名の由来は、北欧神話に登場する、大地を意味する女神フィヨルギュン」

――女神の土濤／コード・ヨルズ

シャル
「ルシルの有する土石系術式、その最強がこのヨルズだね」

ルシル
「そうだ。こいつも儀式系魔術で、魔力消費が馬鹿みたいにデカイからまず使わないんだがな。１２重の岩石の津波を対象に押し寄せさせる対軍術式なんだ。
其は生命の源なる母の片割れたる大地の化身。汝は大地と火を、粗大なるものと精妙なるものを、静かに巧みに分離すべし。其は大地より天に昇り、たちまち降りて、優と劣の力を取り集む。其は万物のうちで最強のものなり。すべての精妙なものに勝ち、あらゆる物体に滲透するが故に。かく、世界は創造せられたり。かくの如きが、示されし驚異の変容の源なり。
名の由来は、北欧神話に登場する、フィヨルギュンと同様に大地を意味する女神ヨルズ」

――黙神の拒剣／コード・ヴィーザル

ルシル
「闇黒系の儀式術式だな。呪いのルーン文字で構築された大剣で、相手が負ったダメージを治癒されないように固定する術式だ。その見た目から攻撃に思われがちだが、その実補助系の術式だ」

シャル
「これって何気に酷い効果だよね。まるでユルソーンの不治の呪い

・・・」

ルシル
「俺の方がオリジナルだがな。ちなみに・・・其は狂乱の中に静かに黙する者。鉄靴（てっか）を履き鳴らし、その音を聴きたる者へ恐怖を植え付ける。深き森に在りし其が戦場へ発ち立つ時、傷つきし汝らは絶望す。恐れ、震えよ。汝らの敗残は此処に定めとなろう、が呪文だ。名の由来は、北欧神話に登場する男神で、フェンリル狼を撃破するほどの戦士、守を意味する神ヴィーザル」

――女神の大戦火／コード・フレイア

シャル
「これ、前作のカーネル戦で紹介しなかったっけ？」

ルシル
「使ったのは使ったんだが、番外編でその紹介をやっていなかったんだよ」

シャル
「ありゃ～。で、このフレイヤだけど・・・」

ルシル
「儀式術式の砲撃だ。俺の後方にアースガルド魔法陣が６枚と円形に展開。俺の周囲にも６枚の魔法陣、前方にもまた６枚の魔法陣。計１８枚の魔法陣がピラミッド状に配置される形だ。１８枚の魔法陣から閃光・闇黒・風嵐・雷撃・炎熱・氷雪の６属性による砲撃が

断続的に発射され、最終的には１００発ほどまで放たれる

シャル
「ヴィーグリーズ決戦で、私にも使ったよね」

ルシル
「全弾、君の真技で斬り裂かれてたけどな。呪文は、其は戦場を駆け抜ける戦乙女の将。その美は全てを魅了し、その愛に果てはなく、愛おしむ実りの生誕と成長を見守る。豊穣に転じて死と戦をも其は司らん。金色の光を纏いたるその苛烈にして華麗な威容。極光の天幕が靡く時、戦士を従え、希望と絶望を戦場へ運び往かん、だ」

――冥女王の氷天／コード・ヘル

ルシル
「俺の持つ氷雪系術式の中で最強なのが、このコード・ヘルだ。上下・前後・左右からの絶対零度の砲撃による多弾砲撃だな」

シャル
「これって基本的に巨体を誇る相手限定なんでしょ？」

ルシル
「ああ。効果の１つに対魔族というものがある。アンスールとして活動する以前よりヨツンヘイム連合に魔族が居ることは知っていたからな。ソイツらへの対抗策として組み上げた術式だ」

シャル

「やっぱり、恋人のシェフィリスとラブラブでイチャイチャでイヤンイヤンな事しながら作ったわけぇ～？」

ルシル

「アホか。ヴァルキリーを造る、すなわちシェフィと恋人になる以前には出来ていたっつうの。

優雅華麗なる雪風吹き舞いたる氷結の地、その盟主たる凍結の女王に願い奉る。天より降るは艶やかなる調和。地より昇るは厳かなる軋轢。北より来るは虚ろなる勝利。南より迫るは愚かなる敗北。東より発するは穏やかなる善意。西より生ずるは静かなる悪意。原初に君臨せし其の意志の下に生まれる六方の混沌にて、表裏を摂理とせし世界を染め上げよ。が、呪文となる」

――噛み砕け、汝の冷牙／コード・マトリエル――

――食い散らせ、汝の嵐顎／コード・ルヒエル――

――凄惨たれ、汝の毒牙／コード・ログジエル――

――無残たれ、汝の悪歯／コード・シャムエル――

――畏怖させよ、汝の地顎／コード・トゥアル――

――照らし召せ、汝の烈光／コード・イオエル――

シャル

「ぉわ～お。龍のオンパレードだ♪」

ルシル
「ま、今さら説明する必要もないな。各属性の魔力で創り出した龍だ」

――宝竜の抱擁／コード・ファフニール

ルシル
「各属性の龍を３頭ずつ、計２４頭の龍を対象に向けて解き放つ上級術式だな」

シャル
「元が中級だけど？」

ルシル
「儀式術式として発動するため、その神秘や威力、魔力は上級と同等のものとなる。
其は時に天の使徒にして魔の従僕。畏敬・畏怖をその身に受け、地に救済を施し、絶望を与える。其は我の魂命という宝物を護るがため我を抱擁し汝を喰殺する。死の恐れを知らぬ名声を求めし勇ましき者よ、宝物が欲しくばいざ挑めよ。これが呪文だ」

――昼神の閃爆／コード・ダグ

ルシル
「閃光系の上級術式の第２の威力を誇るのがこのダグだ。オベリスクの形をした複数の光の柱を天から降り注がせるという対軍術式だ

な。コレをさらに強力に進化させた術式が、全方位無差別多弾砲撃バルドルだ」

シャル
「突き刺さったら刺さったで分裂して、無数の光球となってさらに炸裂。閃光爆発で完全にトドメを刺す。ただの爆発で済まさないのが厭らしい」

ルシル
「厭らしいとはなんだ厭らしいとは。
いと尊き幸いなる天の門の先、輝ける世にて生まれし聖光の主、我らが祈りに応え給え。主よ、願わくは、過去、現在、未来のすべての悪より、我らを救い給え。砕き給え、我らの歩みを妨げし恐怖という名の足枷を。我らを罪より救い、我らを惑わすものより解き放ち給え。導き給え、助け給え。そして与え給え。我らが願い奉る主の御威光を。が、呪文だな」

――絶刃・斬舞一閃

シャル
「はいはーい！　ここからは私とイリスの魔法や魔術を紹介！　とは言っても、ほんの少しだけどね。最初はコレ、絶刃・斬舞一閃ね。神秘が付加されてる絶対切断能力を有した魔力刀を生成するというものだよ」

ルシル
「イリスが組み上げた術式だそうじゃないか」

シャル
「イエス！　いや～。やっぱり私の生まれ変わりだね、ちゃんと魔術の術式も汲み上げられるほどの才能が有るんだから！」

ルシル
「ああ。しかし、何かしら条件があるとの事だが・・・」

シャル
「あー、うん。まず私がイリスの身体の支配権を持っていること、魔術師化していること、ある程度の私の助力が要る、みたいな？」

ルシル
「たとえそれでもすごい事だと思うぞ」

シャル
「だよね！」

――雷牙吼霆刃

シャル
「正気な話、どうしてここまで出さなかったの？って言いたいレベル。私の雷撃系最強の術式がコレ。周囲の雷撃系魔力や術式を、キルシュブリューテの刀身に付加した雷撃の長刀に吸収させての強烈な一発をお見舞いするの！」

ルシル

「確かに、もっと早く出せる術式だよな。うちの作者は一体なにをやっていたんだ？」

シャル
「どうせ忘れていたんでしょ」

――ドゥーフヴィーゾヴ

ルシル
「俺が魔導師の中でも畏敬を抱ける数少ない人物、ベッキー・ペイロード先輩のデバイスだな。神事などで使われる神楽鈴型なんだが、どちらかと言うと神器の概念兵装に近いな」

シャル
「はーい。詳しく聴くために、ベッキーを召、喚っ☆」

ベッキー
「っ！？　こ、ここは一体どこですか・・・！？」

シャル
『ルシル。ほら、前みたく・・・』

ルシル
『絶対に嫌だ。お前がやれ！』

シャル
「しょうがない。あのね、ベッキー。かくかくしかじか」

ベッキー
「な、なるほど。理解できました。私の精霊や精霊術の紹介をすればいいんですね」

シャル
「そうゆーこと♪　じゃ、早速ドゥーフヴィーゾヴの紹介よろしく♪」

ベッキー
「はい。コレは、私の生まれた集落に何百年以上に亘って受け継がれてきた、五精霊と交信するための神具ですね。デバイス登録をしていますけど、機械でなく神木など清められた材料で、歴代の巫女の手作業によって作られています」

ルシル
「ちなみにドゥーフは精霊、ヴィーゾヴは召喚と言う意味だな。ロシア語が使われている」

――ヴェーチル

ベッキー
「私が使役する精霊は5属性9柱いまして、ヴェーチルは風の属性を司る精霊なんです。見た目は手の平サイズのスズメなんですよ。幼少の頃はよく空を飛ばせてくれてました」

シャル

「ヴェーチルって、そのまんまの意味で、風、なんだよね」

――クルィロー

ベッキー
「ヴェーチルが起こしてくれる風を利用して、自由自在に飛行できる精霊術です」

ルシル
「精霊術の術式名は単純で良いな～。ちなみに飛行という意味だな」

――ツヴィトーク・タイフーン

ベッキー
「可視化した風の花による盾ですね。純粋魔力や物理による攻撃はほぼ無効に出来るはずなんですけど。やはり神秘と言う特別な力の差がありましたのか、天使の攻撃は防げませんでした」

シャル
「神属のヒエラルキーじゃ当然の結果かな。精霊はどうやっても天使の上には立てないように出来るんだから」

ルシル
「ツヴィトークは花、タイフンーンは台風だな」

――グローム

ベッキー
「雷属性を司る精霊、グロームですね。キツネの姿をした精霊でして、雷雨の中でしたらさらに強大な力を扱えるようになりますね」

シャル
「グロームは、雷、だね。確かに名前が体を表しているのは良いね〜」

――ピーカ・モールニヤ

ベッキー
「グロームが雷槍と化して敵に突撃する精霊術ですね」

ルシル
「やはり神属ヒエラルキーの第三位の精霊、それ自体による攻撃なために馬鹿みたいに神秘が高い」

ベッキー
「神属ヒエラルキー・・・。第一位の神、第二位の天使、第三位の精霊、第四位の妖精、でしたっけ」

シャル
「うん。基本的な魔術師は妖精級だね。大戦級の魔術師は精霊と妖精の間。私やアンスールがそうね。ルシル、ステアが精霊と同格。フノスや大戦中期のシルヴィアが天使級ね」

ルシル

「ピーカは槍、モールニャは稲妻だ」

――プラーミャ

ベッキー
「火属性を司る精霊、プラーミャですね。ハムスターとネズミ、どちらにも似ている姿をしています。寒い日などに抱っこするととっても温かいんですよ。あ、でも夏場はあまり近寄っては欲しくないです・・・」

ルシル
「意味は、炎、だな。確かに暑い日に側に来られると若干キライになりそうだ」

――スビェート

ベッキー
「光属性を司る精霊、スビェートですね。とても綺麗な猫の姿をしているんです。光で構築されているため、暗闇のところでは重宝します。ですけど、明るいところだと他の光に同化してしまって見づらくなるというのが少し欠点でしょうか」

シャル
「スビェートもまんま、光、って意味ね」

――ジムリャー

ベッキー
「地属性と司る精霊、ジムリャーです。モグラの姿をしていて、円らな瞳がとっても可愛いんです　」

シャル
「モグラっていうと、嫌な思い出しかないんだけどね」

ルシル
「ハコにわ生徒会では、モグラの姿をした土地神が出現するたびに君のスカートの中に頭を突っ込んでいたな。大胆な犯行だった・・・」

シャル
「ま、ボッコボコにしてあげたから多少は気が晴れたけどね」

ルシル
「血も涙もない殴り方だった・・・。ジムリャーもそのままの意味で、大地、だ」

――ピーカ

ベッキー
「ジムリャーが大地を操って発動させる精霊術で、土石の槍を突き出させるというものです」

ルシル
「ピーカは槍を意味する。基本的な土石系の攻撃方法だな」

――クラードビシェ・ドゥラーク

ベッキー
「地面から突き出させた岩石の柱で相手を呑み込ませて拘束する精霊術ですね」

シャル
「土石系って攻撃も防御も拘束も似たり寄ったりだよね」

ルシル
「使うのが大地だからな。どうやっても術式の種類には限りが生まれるものさ。クラードビシェは墓地、ドゥラークは愚者という意味だ」

――ゼムリャトリャセェーニエ

ベッキー
「局地的に地震を発生させる精霊術です」

ルシル
「意味もそのままに地震だな」

――チムナター

ベッキー
「闇属性を司る精霊で、チムナターです。ヒツジの姿をしています。

チムナターを枕にして眠ると、安眠確実、好きな夢を観ることも出来るんですよ。ですがリアル過ぎる夢は、最悪現実と夢の境が判らなくなってしまい、自力で目覚めないこともあるので要注意です」

シャル
「好きな夢か～。う～ん、悩むな～」チラッ

ルシル
「俺を見るな。どうせ碌でもない夢にするともりだろ？」

シャル
「えっへっへ～　」

ルシル
「チムナターも、闇、というそのままの意味だな」

――ジリェーゾ

ベッキー
「金属性を司る精霊、ジリェーゾです。漆黒の全身装甲に覆われた３ｍほどのの体格を誇る虎の姿をしています。背中に乗ることが出来るんですけど、その、えっと・・・お尻が・・・痛くなります」

ルシル
「あはは、だろうな」

シャル

「笑い事じゃないってば。女の子にとってお尻は大事なんだから！」

ルシル
「性別に関係なく人間には大事な部位だぞ。ジリェーゾは、鉄、という意味だな」

――ラケートナエ・アルージエ・マークシムム

ベッキー
「ジリェーゾの最大攻撃ですね。両前脚、両前腿、首、背中、腰、計１３個のハッチの中から数十発の砲弾型魔力弾を一斉発射する精霊術ですね」

シャル
「この攻撃方法、どっかで見た気がするんだよね。・・・どこだったかな～・・・」

ルシル
「アニメ・デジモンアドベンチャーのメタルガルルモンだな。ワープ進化した際のバンクの最後で、アレが全身からミサイル発射してたろ。あれだ」

シャル
「あぁ・・・思い出した」

ルシル
「ラケートナエはミサイル、アルージエ・マークシムムは最大限、

だな」

――ヴァダー

ベッキー
「水属性を司る精霊、ヴァダーです。サメの姿をしているのですが、別に水の中でしか生けられないことはなく、普通に宙を泳いでいますね」

ルシル
「ヴァダーは、水、の意味だな」

――コーカン・ヴァダー

ベッキー
「形状が自由自在の水の膜――結界を張る精霊術です」

シャル
「水流系が扱えるのはルシルとシェフィリス、あとヴァルキリーのナーティアとミオだけだから、結構レアな存在よね」

ルシル
「自分で言うのもなんだが、本当にレアなんだよ水流系はな。ヴァダーは水、コーカンは繭という意味だな」

――ヴァダヴァロート

ベッキー
「敵を水の渦に呑み込ませて拘束する精霊術です」

ルシル
「意味はそのまま、渦、だな」

――リョート

ベッキー
「氷属性を司る精霊、リョートです。５０ｃｍほどのクリオネのような姿をしています。現実のクリオネの食事シーンは少しアレですが、リョートは消化器官は無いのであの食事シーンは見られません」

シャル
「クリオネ、泳いでる姿が可愛いよね～。でもちょ～っとサイズが大き過ぎるかも」

ルシル
「リョートも他の精霊と同じそのまま、氷、を意味している」

――アーイスビェルク

ベッキー
「発生させた吹雪で対象を凍結封印する精霊術です」

ルシル
「この術式名の意味は、氷山。凍結された姿が氷の山に閉じ込めら

れたようなものになるからだそうだ」

――愚かしき者に美しき粛清を／センテンシア・コンデナトリア

シャル
「次～！　ヨツンヘイム皇族の直系、フィレスとセレスのカローラ姉妹の魔術を紹介！」

ルシル
「前作のセレス戦の後で、彼女たちが直に紹介していたろ？　またやるのか？」

シャル
「わざわざ前作のその1話を読みに行くのも面倒でしょ？　だったらってことで」

ルシル
「それを言えば俺や君の術式紹介も前作に集中しているんだが・・・」

シャル
「うん。だから次のエピソードⅣのウラばなの後で、私とルシルの術式紹介フルバージョンを投稿する予定だよ」

ルシル
「何故エピソードⅣの後なんだ？　今からじゃダメなのか？」

シャル
「私もルシルも、まだ出してない魔術あるでしょ？　次の章で、それら全てが出るんだよ。文字通り魔術師としての全てを出し切る戦いになる。そういうこと♪」

ルシル
「なるほど。判った。じゃあ、先程からこちらをチラチラ見ている2人のためにも、早速始めようか。おーい！」

フィレス
「ようやく出番なのね」

セレス
「やっとですね、お姉ちゃん」

シャル
「ん？　ここがどこで、何のために居るのか、なんか知ってる風？」

フィレス
「魔術紹介なのでしょ？　話は聴いていたから」

セレス
「それに、どうやらここ――創世結界内では私とお姉ちゃん、前世の記憶があるみたいで。シャルとルシルのこともよく憶えてるよ」

ルシル
「それは話が早い。それじゃあ、よろしく頼むよ」

フィレス
「では早速。センテンシア・コンデナトリア。有罪判決、という意味ね。その効果は対地凍結。地に足を付けている者や物にもその効果が発揮されるの。生物の生死は自由自在で、凍死させようと思えば出来るし、ただ氷に閉じ込めようとすればそう出来るのね」

セレス
「前作の私は、これでたくさんの局員を凍結しちゃって・・・。なんて言うか、ごめんなさい」

ルシル
「多くの人間が死んだが、救われた魂も、未来に救われる人間も居るだろう。手段はいろいろと行き過ぎたものだったが、それでも救われるものもあった・・・、と思う」

セレス
「ありがとう、ルシル」

――神速獣歩／ゲパルド・ラファガ

フィレス
「えっと、次は・・・陸戦用高速移動術式のゲパルドっていうのは、最速の哺乳類って言われてるチーターのことね」

セレス
「ゲパルドはチーターで、ラファガというのは突風を意味してるん

だ。突風の如きチーターっていうことなのかな～？」

シャル
「陸の高速移動系の魔術って、どこの世界の術式でも大体は同じなんだよね」

ルシル
「元がルーンから派生したアースガルド式魔術が祖だからな。アースガルドで魔術の基礎が出来てから他の世界へ渡った。その時点で高速移動術式は完成されていた。下手にアレンジして崩すようなことはしないだろ」

――氷柱弾雨／セリオン・エクサラシオン

フィレス
「対空地強襲術式、セリオン・エクサラシオン。氷で出来た大きな六角柱を複数落とすの。弱点属性の炎熱系による迎撃も難しいほどに密度の高い氷塊だから、一度発動すれば確実に敵軍に被害をもたらせることが出来るの」

セレス
「セリオンというのはつららら。エクサラシオンは流れ星っていう意味なんだよ。雨のように降ってくる流れ星。そこにつららという意味の単語を入れたんだね」

――洗練されし氷牙／レフィナド・ランサ

フィレス
「次は、近中距離射撃に分類される、氷槍を放つ術式ね。基本的に直射系と変わらないから、空戦だと牽制に使うことが多いかな」

セレス
「レフィナドっていうのは、術式名に出てる通り洗練された、という意味。ランサは判るよね？　槍って意味なんだよ♪」

――雪風の鉄壁／ベンティスカ・パレドゥ

フィレス
「球状の猛吹雪で自分を覆う攻防一体の術式ね」

セレス
「ベンティスカは吹雪っていう意味を持っていて、パレドゥは壁を意味しているんだ。吹雪の壁。もちろん中は安全圏で何ともないよ？
うん、それはもう何も・・・」

フィレス
「下手すれば自滅モノだから注意が必要なのよね。セレスも幼少の頃、全身が霜やけになって酷い目に遭ったから」

セレス
「思い出したくない・・・」

――涙する皇剣／エスパーダ・デ・ラグリマ

フィレス
「さて次は、氷で刀剣類を作り出すという、攻性と補助の両方に分類される術式ね」

セレス
「エスパーダは、剣、という意味だよ。真ん中の"デ"、これは英語でいうｏｆ。ラグリマは涙を意味してる。涙の剣。刀身に滴る水からこの名が付けられたみたい。大昔のご先祖様のネーミングセンス、この術式だけは褒めたいかも」

フィレス
「とは言え、霜やけや凍傷云々なミスも起こりやすいと言うことで、扱いづらい術式の筆頭だったとか」

――守護宣言デフェンデル・デクララシオン

フィレス
「次に紹介するのは、氷の壁を作り出す防性術式ね」

セレス
「デフェンデル。守るという意味なんだよね。デクララシオン。これは宣言という意味で。守りを宣言する。誰に？　周囲に♪」

――悪魔の角／ディアブロ・クエルノ

フィレス
「次は、全方位から奇襲を仕掛ける、螺旋状の氷の杭弾幕。意味は

そのままね。ディアブロは悪魔。クエルノは角」

セレス
「どこにも杭なんてない。螺旋なんてない。いいじゃないですか！
そういう作品なんだから！」

――女神の鉄拳／ディオサ・プーニョ

フィレス
「次は対地における物理攻撃。足元から氷製の拳が突き出させるの。これもまた↑と同じで、意味はそのまま。ディオサは女神。プーニョは拳。もう少しカッコイイ単語であってほしかった。・・・拳（プーニョ）・・・」

セレス
「この術気の形は術者によって変わるみたい。みんなはダメだよ？
人差し指を立てちゃ。刺さるから。どこに？　女の子に訊いちゃダメ♪」

――咲きし福音／エバンヘリオ・フロセラル

フィレス
「次は、術者の周囲を制圧する圧殺術式。巨大な氷の壁を六方に飛ばすのね。かなり大掛かりな術式で、1対1だと回避され易いの。敵軍のど真ん中、しかも空を飛べない陸戦術者にしか多大な効果を発揮できないときた」

セレス
「使いどころが難しいよ。・・・あ、エバンヘリオ。これは福音って意味。術式効果からして有り得ない単語だよね。フロセラルっていうのは咲くっていう意味。福音が咲くってどういうことなんだろう・・・？」

――雪花飛刃／ペタロ・アニリョ

フィレス
「次は、氷の花弁を飛ばして対象を真っ二つに断ち切る攻性術式ね」

セレス
「ペタロは花弁という意味で、アニリョは環という意味なんだ。ようするに花輪カッター！」

――氷奏閃／イエロ・コラソン

フィレス
「ヨツンヘイム術式における基本中の基本。武具に冷気を纏わせ切断力を上げる補助術式ね」

セレス
「イエロは氷。イエローじゃないよ♪　コラソン。コラと怒られて損・・・ではない。つまらないよね、ごめん。コラソンは心という意味なんだ。氷の心。そうでないと人を斬れないということかな」

――氷星の大賛歌／カンシオン・デ・コンヘラシオン

フィレス
「次は、ヨツンヘイム術式に珍しい砲撃ね」

セレス
「カンシオンは歌という意味があって、コンヘラシオンは氷結という意味だね。そこに"デ"があるから、氷結の歌となるの。歌と言っても音波じゃないよ、魔力砲♪」

ルシル
「そう言えば今作ではバリエーションが出ていたが・・・」

セレス
「あ、うん、そう！　大合唱（コーロ）！　一度に複数の砲撃を放つバリエーション！　その割には魔力消費は少なく、連発も出来てるする優れもの！」

――制圧せし氷狼／インバシオン・ローボ

フィレス
「次は、対軍攻性術式ね。氷で出来た狼の群れを突撃させる制圧力に優れた広範囲攻撃」

セレス
「インバシオンは侵略っていう意味で、ローボは狼。侵略する狼になるの。この狼の形もまた術者それぞれみたい。鳥とか虎とか。芸術家な魔術師が使えば、ビックリなお値段に！」

――魔道抑制結界／イルシオン・コンテネル

フィレス
「次は、魔力炉（システム）を強制停止させるという、対魔術師にとっては最強の一撃となる真技クラスの大魔術。

セレス
「ヨツンヘイムの魔術師の中でも、これは皇族にしか扱えない術式だっておばあちゃんに聞いた。イルシオンは幻想。コンテネルは抑える。幻想を抑える、だね」

シャル
「これ、ホントに戦闘中にされると厄介なんだよね」

ルシル
「いくら停止と固定を司る氷雪系とは言え、他人の魔力炉（システム）に干渉できるなど魔術師の領域を凌駕している。だから不思議で堪らないんだよな」

シャル
「ヴィーグリーズ決戦でヨツンヘイムのクソ皇帝と戦ったけど、その時はどうだったのルシル？」

ルシル
「部下を見捨てて逃げるようなどうしようもないクズだぞ？　使えるはずがない。たとえ使えたとのなら最少から使っているはずだ」

――次元跳躍散弾砲撃／ペカド・カスティガル

フィレス
「対空地広範囲殲滅攻性術式。通称、散弾砲と名付けられた広域攻撃ですね。最初は天高く魔力球を撃ち上げ、目標地点の上空へ向けて落下。途中でいくつもの魔力球へと分裂し、それらが一斉に爆発する。爆発の範囲も広く、初見ではまず躱すことは出来ないわね」

セレス
「ペカドは罪、カスティガルは罰する。罪を罰する、になるの。罪ってやっぱり敵の事だったのかなぁ・・・？」

――極雪轟嵐／ベンティスカ・レモリーノ

フィレス
「対象に吹雪の竜巻を突っ込ませる攻性術式ね。一応は砲撃に分類されるようだけど・・・。う～ん・・・」

セレス
「ベンティスカは先に出ていた通り吹雪。で、レモリーノは竜巻。直撃は当然凍ります。吹っ飛びます。そして粉々になります。絶対に対処しないとデスから要注意。でも防御の上からも同様だから、逃げの一手しかないかな」

――凍てつく氷葬棺／ハウラ・コンヘラル

フィレス
「手より冷気を発し、触れた物を凍結封印することの出来る拘束系の術式ね。先述のセンテンシア・コンデナトリアの縮小版と言ったところかしら」

セレス
「ハウラは檻、コンヘラルは凍る、という意味。私はセンテンシアよりこちらの方が使い易くて好き」

――爆ぜる凍煙・穿つ氷刃／エクスプロシオン・デ・スパーダ

フィレス
「圧縮された圧倒的な冷気を内包した氷の剣を投擲し、何かに着弾させることで炸裂させる。内包されていた冷気がいくつもの大剣状の柱となって全方位へ伸びて、付近に居る対象を圧死させる術式・・・なんだけど、私はそのオーバーキルな威力が恐ろしく、氷塊に触れたものを呑み込み、凍結封印する、という拘束系の術式に変更したの」

セレス
「魔術って魔法のように非殺傷設定なんて優しい機能は無いから・・・。私もお姉ちゃんも、曽祖母から魔術を習っても使うまいってずっと思ってた。だって私たち魔導師・騎士は、命を護るための存在だから」

シャル
「うん。全く以ってその通りだね。魔術はもうこの時代には必要の

ない遺物だから。その気持ち、忘れちゃダメだよ」

ルシル
「ああ。・・・あ。エクスプロシオンは爆発、スパーダは剣、という意味だな」

――凍結せし巨いなる聖剣／スパーダ・デ・ニエベミトロヒア

フィレス
「亡くなった曾祖母より伝えられていた2つ魔術の内の1つね。冷気のみで構築された大剣による斬撃で、私が有する魔術の中で最高の威力・凍結能力を有するわ。その巨大さゆえに振り回せないけど、その代わり巨大さを活かして、突っ込んで来る対象へカウンターとしても使えるから、使いどころはまあまあと言ったところ・・・？」

シャル
「これって結構な威力だよね。完全じゃなかったと言えスマウグの体表を凍結させたんだから」

ルシル
「ああ。ユーリの一撃が効いて僅かに弱体化していたとは言え、なかなか出来ないことだ。で、術式の意味だが、スパーダは何度も出ている剣。ニエベは雪、ミトロヒアは神話、となる」

――永遠なる凍土を生ずる王剣／スパーダ・デ・フリオサタナス

セレス

「ひいお婆ちゃんから教わった、とっても強力な魔術の内の1つ。センテンシア・コンデナトリアをさらに強化した冷気を、剣の形をした砲撃として放つの。この一撃でほとんどの魔力を消費するから、使った後はもうヘロヘロ」

ルシル
「前作にて追加された散弾砲以外は大戦時に何度も見たことがある。フィレスとセレスにとっては真技である術式だが、当時は軍団長クラスが使うような少し強い程度のものだった」

シャル
「あの頃と現代を比べるのはナンセンス過ぎだって」

ルシル
「そうだな。フリオは冷たい、サタナスは魔王、という意味だ」

――迅るは怠惰なる眠り姫

シャル
「それじゃあ次のゲスト！　トリシュタン・フォン・シュテルンベルク！」

トリシュ
「！？　急になんですか！？　え？　ルシル様！？　それにイリス！？　これは一体・・・！？」

シャル

「あー、落ち着いて。えっとね、かくかくしかじか」

トリシュ
「魔導紹介教室・・・？　判りました。ルシル様のお願いですし　」

シャル
「・・・私がこのコーナーの担当なのに・・・。ていうか頼んだの私だし・・・」

トリシュ
「私は弓型のアームドデバイス・イゾルデを扱う騎士でして、攻撃方法も魔力矢により射撃となるんですね。矢に様々な効果を付加して、サポート役と徹することもあります。この術式もそのサポート技の1つで、着弾した相手を瞬時に眠らせる効果があります」

シャル
「こういう対象を無力化する術式って受けると厄介なんだよね～。しかも超長距離からの奇襲ということもあって気付かずにアウトなんてこともしばしば」

ルシル
「長距離系の射撃系の強みがコレだな。相手に気付かれることなく、静かに仕事をこなす」

トリシュ
「その分、かなり地味な仕事になりますが」

――雷喰らう怒涛の宝珠

トリシュ
「対電気変換資質用の魔法ですね。射た矢は途中で魔力球へと変化し、電気変換された魔力のみを吸収するという効果を持っています」

――とぐろ巻く夢幻の拘束蛇

トリシュ
「幻術魔法によって作りだした蛇で対象を拘束する魔法です。精神面に働きかけるもので、拘束されている、逃げだせない、そう考えているうちは絶対に解放されません。が、これは幻だと心から強く思えば、おのずと解放されます」

シャル
「幻術かぁ～。ルシ――っと、オーディンでも複製術式としてしか使わない幻術を使うんだから、トリシュは本当にすごいよね」

ルシル
「魔術としての幻術に比べて魔法としての幻術は発動し易いからな。幻術で相手を惑わすより圧倒的な火力で瞬殺した方が早かった」

シャル
「でも、夢幻王プリムスの幻術は厄介だったよね・・・？　私は直接戦ってる姿を見たことないし」

ルシル

「あの子は別格だ。まぁ、アンスールの敵じゃなかったけどな」

トリシュ
「？？？」

――突き上がる狂乱の山脈

トリシュ
「対地攻撃用の魔法です。地面に矢を撃ち込み、ソレを中心にベルカ魔法陣を最大２０ｍまで展開。魔法陣内の地面を操作して、ドリル状の剣山を突き出せて攻撃する範囲攻撃ですね」

シャル
「うん。やっぱり土石系は似たやつばかりだね」

――翔け抜けし勇猛なる光条

トリシュ
「いわゆる砲撃ですね。魔力を圧縮して作りだした魔力矢を射ると同時に、圧縮していた魔力を解放することで砲撃とします。弓騎士としていかがなものかと思ったんですけど兄様が、『騎士オーディンは砲撃も使っていた。俺より放出特性が高いお前なら出来る！』と言ったので、作りました」

シャル
「ルシルの中級の砲撃クラスだよね」

ルシル
「あぁ、それくらいはあるな」

トリシュ
「砲撃を覚えてからというもの、そのそう快感がたまらなく好きになったのでお気に入りの魔法でもあります♪」

――中伝・紫電一閃

トリシュ
「イゾルデは弓としての形状をしていますけど、胴の部分は反りのある剣なんですね。その刃を利用しての斬撃も可能なんです。そして、この魔法はずっとシュテルンベルク家に受け継がれてきた、シグナム様の古代ベルカ式魔法なのです！！」

ルシル
「シグナム達はアムル民に魔法を教える教室を開いていたからな～。それがまさかこんな形で引き継がれていくとは思わなかったよ」

シャル
「中伝ということは、皆伝もあるの？」

トリシュ
「うん！　私の紫電一閃はまだまだ完璧じゃないから。でも近いうちに免許皆伝を貰います！」

――中伝・紫電十字閃

トリシュ
「イゾルデには２つのモードがあるんです。まず第１形態である弓モードのシュッツェフォルム、そして第２形態である双剣モードのフェヒターフォルム。この魔法は、イゾルデを分離させて双剣形態にしたフェヒターフォルムによる火炎斬撃の２連撃です。元はオーディン様とシグナム様の連携魔法だったようです」

ルシル
「元の十字閃は敵の前後からの挟撃だ。しかし、この連携はただ相手を十字に斬るだけのものだから、武器を２つ持っているならそれで十字に斬っても構わないだろう」

――中伝・フィアーテ

トリシュ
「短距離限定の高速移動魔法ですね。両脚に竜巻を発生させるのまでがヴィータ様と同じです！」

シャル
「シグナムやヴィータと同じ魔法が使えることがホントに嬉しんだ～」

トリシュ
「もちろん！　シュテルンベルク家にとって守護騎士の皆様と同じ魔法が扱えるというのは、本当に光栄なことです！」

ルシル
「シャマルやザフィーラ、アインスの魔法はどうなんだ？」

トリシュ
「シャマル様とアインス様の魔法は特殊なため、私ではちょっと。ですがザフィーラ様の鋼の軛は扱えますよ♪」

シャル
「あ、そう言えばパーシヴァル・・・君の魔法の紹介は・・・？」

トリシュ
「兄様の魔法は、オーディン様やルシル様と同じ効果と名前なので、別に紹介しなくても良いかと♪」

パーシヴァル
「おぉぉぉぉぉーーーーーーーいっ！！」

――ゾハルコテヴ――

シャル
「ほーい。次は神器の光翼ルミナス・プリズミラを装備することで使用できる魔術ね。光のカーテン、まぁオーロラを作り出して迫る攻撃を防ぐというもの」

ルシル
「閃光系は完全無効にするんだよな、アレ。ちなみに意味は、ヘブライ語でオーロラとなる」

――ヘレヴフラッシュ

シャル
「次！　両手と同化しちゃってる、指と同じ数の光の翼を伸長させての斬撃だね」

ルシル
「長さは自由自在なため、何十、何百ｍと先からの長距離斬撃や刺突が来てビックリすることもあるらしい」

シャル
「らしい、か。まぁ光翼は元はアースガルド同盟側の神器だしね」

ルシル
「そういうことだ。ヘレヴは剣、フラッシュは閃光、となる」

――カドゥールオール

シャル
「次！　両腕の光翼の先端から羽根型の魔力弾を発射する攻撃ね～」

ルシル
「連射性が高く、しかも１０方向に撃てる。しかも太陽や月がハッキリと出ているとその威力はうなぎ上りだ。カドゥールは弾丸、オールは光、だ」

――マルアフツィポール

シャル
「独立機動砲台となる光球を複数作り出す攻撃ね。ガンダムで言えばビット、なのはで言えばブラスタービット、ルシルで言えば蒼翼、と言った感じかな」

ルシル
「多方向に多弾、完全に扱いきれることが出来ればこれほど強力な攻撃方法は無いだろう」

シャル
「術者本人からの攻撃にも意識を割かないといけないしね。ルシルと空戦したくない最大の理由の1つだよ」

ルシル
「俺の場合は機動力が落ちるからまず使わないぞ。で、マルアフは天使、ツィポールは天使、となる」

――シャヴィットカヴォード

シャル
「両腕と同化してる光翼の先端から砲撃を放つ攻撃がコレ。まぁ、それだけかな」

ルシル
「シャヴィットは彗星、カヴォードは栄光、となる」

――プリツァアソンテヴァ

シャル
「両腕だけじゃなくて背中の光翼をも羽ばたかせて、超高速で突進する攻撃ね。こんな単純な攻撃がトンデモない威力を持つから、迎撃も防御もしないで避けるのが吉」

ルシル
「プリツァは突撃、アソンテヴァは天災、となる。その威力を正しく表している術式名だよ」

――スファーオール

シャル
「両腕と背中の光翼を大きく伸ばしたうえで、体を旋回させて広範囲を斬り裂く攻撃ね」

ルシル
「前後左右に居たら酷い目に遭うが、上下に居たら回避できるんだよな。まぁ装備者の旋回が横回転か縦回転で変わるから絶対とは言えないが。スファーは大嵐、オールは光、だ」

――ズリハッドシェメッシュナドバヌート

シャル
「両腕・背中の光翼を大きく展開させ、全身を球体状の光の膜で覆

うっていう防御法ね」

ルシル
「全方位からの攻撃に対処できるのは強いよな。しかも直径も変更できるため、装備者だけでなく味方も護ることが出来る。ズリハッドシェメッシュは日の出、ナドバヌートは慈悲、となる」

――ネカマーカルネーシェメッシュ

シャル
「光翼ルミナス・プリズミラの持つ魔術の中でトップクラスの攻撃ね。放射状に展開した背中の翼に吸収させた太陽光を両翼から放つ、閃光系と炎熱系の属性複合の集束砲撃なの。早い話がソーラレイね」

ルシル
「太陽は魔術が生まれる前から神聖は存在とされていた。その太陽の熱や光、神秘を吸収した砲撃は対魔術師・対魔族に必殺の威力をもたらすんだ。絶対に受けたくない攻撃の1つだな。で、その意味だが、ネカマーは天罰、カルネーシェメッシュは日光、となる」

――ネカマーオールヤレアハ

シャル
「本編では未使用で、ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編で何度か扱われた攻撃ね。上のソーラレイと違って、コレは月光を集束させて放つ砲撃なの。属性は氷雪・閃光系。砲撃はとっても綺麗で、青白くて、わずかに雪の結晶が舞散るの」

ルシル
「あー、そんなのだったか。意味だが、オール・ヤレアハで月光、となる」

――ネカマーコハヴ

シャル
「光翼ルミナス・プリズミラ最強の一撃がコレね。上2つを複合させた神罰クラスの集束砲撃なんだよね。直撃は即死。私、よく生きてたなぁ～」

ルシル
「全くだよ。無事でよかった」

シャル
「ありがとう、ルシル」

ルシル
「ああ。ちなみに意味だが、コハヴは星、となる。星の天罰ということだな」

――イェリダー・マルアフ・〇〇〇

シャル
「ハート2ことホムンクルスが使う、魔導書・ヒドゥンカリグラフィの本領と言える効果ね。天界から天使を召喚する一文がコレ。イ

ェリダーは降臨、マルアフが天使っていう意味ね」

ルシル
「〇〇〇の部分に召喚する天使の名前を入れるんだ。危険を知らせる天使ゲディエル、軍事を司るバルミエル、秘教の秘密を明かす（本作では術式の構築を解析する）天使ビディエル、水に関することを告げる天使ヒュドリエル、火に関することを告げる天使ピュリキエル、地下に棲むブリエル、魔術の天使マセリエル、だな」

――シヌイ

ルシル
「ホムンクルスが体内に宿している天使から別の天使に変更する際の呪文だ。シヌイは、変化、を意味するんだ」

――リションシャルヘヴェット

ルシル
「火の天使ピュリキエルをその身に宿していることで使える、天罰級の火炎攻撃だ」

シャル
「神罰級は神による攻撃、天罰級は天使による攻撃ね。地面からいくつもの火柱を突き出せるというものね」

ルシル
「リションは第一、シャルヘヴェットは炎、となる」

――シェニシャルヘヴェット

ルシル
「ピュリキエルの天罰級の攻撃の1つだ。地面に作りだした亀裂から火の壁を発生させるというものだ」

シャル
「どうやら念話とかの通信手段も阻害しちゃうらしいのよね～。しかもただの熱だけでも十分な殺傷能力がある。なのは達が無事で本当に良かったよ」

ルシル
「ああ、本当にな。シェニは第2、シャルヘヴェットは前述と同じで、炎、だ」

――クヴィウートキブーシュ

ルシル
「魔術の天使マセリエルをその身に宿すことで発現可能となる結界術式だな。クヴィウートは不変、キブーシュは征服、となる」

――マゲンプリツァー

ルシル
「円形のシールドを飛ばすという、攻防一体の術式だ」

シャル
「シールドが突っ込んで来るなんて結構シュールな光景だよね。しかもシールドを飛ばすと、本体がガラ空きになるのに」

ルシル
「まぁ、本体自身の防御力が高いからこそ出来る芸当だよな。マゲンは盾、プリツァーは突撃、という意味だ」

――トリウィアスブレイム

ルシル
「スフィー・ダンテの炎熱攻撃の1つだ。対象の四方より地を這う炎の斬撃を放つというものだ」

シャル
「なのはを撃墜したその神器だからあまり好きじゃないんだけどね」

ルシル
「しかし、人化した際の性格は良いお嬢さんじゃないか」

シャル
「そうなんだけどねぇ～・・・。けど、やっぱり・・・」

ルシル
「・・・。それで意味だが、トリウィアはローマ神話に登場する、十字路を司る女神の名前で、ブレイムは非難する・咎めるなどと言った意味だな」

――アドエオナス・リング

ルシル
「炎の輪をした斬撃攻撃だ。まぁ早い話が古代インドで使われていた投擲武器・チャクラムだな。アドエオナは、ローマ神話に登場する来ること・迫ることを司る女神の名だ」

――ウェスタス・ソード

ルシル
「剣状の炎の剣を広範囲に放つ攻撃だ。はやてのバルムンクのようなものか。ウェスタは、ローマ神話に登場するかまどの火の女神の名前だ」

――ペロニアス・ディフェンス

ルシル
「自身の前方に炎の壁を生み出す防御法だ。ペロニアは、ローマ神話に登場する撃退・放逐の女神の名だ」

――ポエナス・グリーフ

ルシル
「上述の炎の壁を破裂させ、いくつもの炎の礫とする攻撃だ。ポエナは、ローマ神話に登場する処罰・復讐の女神の名だ」

――パウォルス・オンスロート

ルシル
「直径３ｍはあろう巨大な炎球を何十と放つ広範囲攻撃だ。パウォルは、恐怖と戦慄を司る男神の名だ」

――剱乱舞刀／ケンランブトウ

ルシル
「俺とシェフィの子供・戦天使ヴァルキリーの１機、シュヴァリエルの風嵐系魔術の１つだ。真空の刃を一度に複数乱れ撃つ、というものだな」

――轟風暴波

ルシル
「風速２００ｍからそれ以上の暴風を相手に叩き付けるという魔術だな」

シャル
「私の風牙烈風刃も同じだけど、さすがにこれほどの風圧は無理だよ」

――崩山裂砕

ルシル
「シュヴァリエルの大剣型の神器である極剣メナス。その剣身に暴

風を纏わせて相手を斬る・・・というより粉砕する魔術だ」

シャル
「これってとんでもなく強力なんだよね。大戦当時、結構有名だったんだよヘルヴォル隊って。連合軍への特攻部隊だからさ。ヴァルキリーの中で最もシュヴァリエルが恐れられてたね」

――崩山裂衝

ルシル
「こいつはメナスの暴風を纏わせたうえでの刺突攻撃だな」

シャル
「直撃を受けるとエグイ結果になるよね・・・」

――風翔涛駆

ルシル
「鳥の形となっている暴風を全身に纏った状態での突進攻撃だ。その速度はなかなかのもので、至近距離で発動されたらまず回避できない。それどころか直撃を食らって少ししてから気付くくらいだ」

シャル
「私は第三者として見ていたけど、グッと身を屈めてからの突進に入る速度がすごい速いんだよね。確かにあれは、至近距離で発動されたくないね。あれを回避できるのは、陸戦最速と謳われたイヴィリシリアだけかも」

――十裂刃風／十裂刃風・乱刀

ルシル
「シュヴァリエルの左右に竜巻の渦が作られ、その渦が地上を十字に突き進む刃となる。ちょうど対象のところでクロスするようになるんだが。正直、クロスする瞬間を見極められれば避けるのは容易い。その欠点を補う、乱刀、というバリエーションがある。風の刃の数を増やし、回避を難しくするというものだ」

シャル
「密集してる中でこれを撃たれたら最悪過ぎ。当時、私が所属してたシュテルン・リッターは基本的にアンスールを相手にしてたから、ヴァルキリーからの被害は受けなかった。ま、それ以上にアンスールからの被害を受けまくってたけど」

――振動刃剣

ルシル
「極剣メナスの剣身に高周波を流すことで切断力を引き上げる補助術式だ」

シャル
「ヤワな神器すらも断ち斬れるっていうレベルの切断力だから、絶対に防御はしちゃダメなんだよね」

――風弾爆破

ルシル
「大気を爆破させるという術式だ。飛翔中の魔術師にとっては厄介で、効果範囲に居るとほぼ確実に墜落する」

シャル
「大戦時、空戦の天才と謳われたルシルですら墜落するんだから、他の空戦魔術師じゃ・・・ね」

――嵐爪風牙

ルシル
「両手の十指や爪先に竜巻の爪を付加し、それらで攻撃する近接格闘戦用の術式だ」

シャル
「メナスの斬撃に比べると威力を落ちそうだけど、その分小回りが効くから近接戦だとさらに厄介だよね」

――廻天轟乱／廻転轟乱・断壁

ルシル
「自分の周囲に1つの竜巻を発生させる攻防一体の防性術式だ」

シャル
「こういうのは風嵐系術者の基本的な魔術かな。ルシルもイヴィリシリアも似たようなの使ってたし」

ルシル
「ああ、そうだな。よほどの貫通力のある魔術以外はほぼ弾き消すことが出来る。で、バリエーションに断壁という結界術式がある。超巨大な1つの竜巻で街1つくらいを包み込んで、侵入・脱出不可の結界を造りだすんだ」

シャル
「キルシュブリューテ・・・砕かれた・・・」

――死風凶嵐

ルシル
「廻転轟乱・断壁の発動中にのみ発動できる魔術だな。全身を風で覆い、竜巻の中に潜り、竜巻の内側に閉じ込めた敵に向かって突進を行うんだ。竜巻の遠心力や風速を利用しているため、その速度はかなりなものだ」

シャル
「ルシルも空戦形態で翻弄されるレベルでしょ？」

ルシル
「まあな。竜巻の直径が狭いほど避けることが出来なくなるんだよ」

――暴槍突牙

ルシル

「ドリル状をした竜巻の槍――まぁ砲撃だな」

シャル
「これもルシルやイヴィリシリアも使ってるよね」

ルシル
「ヴァルキリーの使う魔術のほとんどが、俺やアンスールの魔術が基になっているからな」

――螺子討散／ネジうち

ルシル
「両腕や片腕の前腕部に、上述の竜巻の槍を小型化させたうえで腕に同化させての直接攻撃だ」

シャル
「シュヴァリエルって、風で斬るっていうよりは砕くっていう手段が多いよね」

ルシル
「風を刃状に固定するのも結構面倒だからな。風速を上げることで破壊力を高めて殴る方が簡単なんだよ」

――天道空流

ルシル
「周囲の空気を自身に集束させ、そこから強力な上昇気流を発生さ

せて対象を上空に吹き飛ばす、という天候操作の術式だな」

シャル
「コレは陸戦系にとっては辛いよね。空が飛べないから、打ち上げられたらそのまま落下、そして・・・ベシャッと・・・。おぇ」

ルシル
「ただの上昇気流が凶器になるわけだ」

――天召・風神嵐竜／てんしょう・ふうじんらんりゅう

ルシル
「シュヴァリエルの真技だな。全長４０ｍ級の暴風の竜となる術式だ。３対６枚の翼を有し、開き切ったその全幅は２００ｍ程となる」

シャル
「この術式はかなり騒ぎになったよ。戦場にいきなり竜が現れた、なんてさ。普通にアンスールクラスだよね、シュヴァリエル」

ルシル
「プレンセレリウスには普通に勝ちそうだよな」

――竜咆・凄風

ルシル
「真技状態でのみ発動できるドラゴンブレスだ」

シャル
「真空の刃や竜巻の槍が無数に含まれた暴風だからね。直撃は死だよ」

――斬風

ルシル
「イヴィリシリア――イヴ義姉様の固有魔術の1つで、剣身に切断力を上げる風の層を付加する補助術式だ」

シャル
「この魔術、大戦時に私を斬ったやつだ」

ルシル
「あぁ、そう言えばシャルは大戦時にイヴ義姉様と決闘して負けていたな」

シャル
「笑い事じゃないってば！」

――光精聖弾／フェー・シュッツェ

ルシル
「カノンの固有魔術の1つで、星填銃グリムゲルテやオルトリンデから発射する閃光系魔力弾だ」

シャル

「初めてエンカウントした時は声だけだったけど、２戦目でその姿を見たのね。その時に初めて"銃"っていう存在を見たから、すごく驚いたよ。当時、銃なんて概念は無かったから。見たこともない銃を突き付けられて、？マークを浮かべてたところに射砲撃だもん。でもま、カノンは私の相手じゃなかったけどね♪」

ルシル
「さすがに君のような近接戦特化を相手にすればカノンは勝てないさ。この術式の意味は、フェーは妖精、シュッツェは射手、だ」

――天上の閃光／ラージョ・デ・シエロ

シャル
「アムティスのタイプ・アーティラリーの基本武装の１つだね。１０本の指の先端にある半球状のクリスタルっていう砲門から放つ砲撃」

ルシル
「オリジナルは、アールヴヘイムの魔術師が使っていた光翼ルミナス・プリズミラの砲撃だ。あの翼の先端からの砲撃１０発を参考にした、と言われていた」

シャル
「あー、光翼の方が登場早かったもんね～」

ルシル
「そして意味だが、ラージョは閃光、シエロは天国だ」

――勝者の眼光／ルス・デ・グロリア

ルシル
「頭部の面甲の目の部分に空いている細いスリット、その奥にある眼球状の砲門から放たれる砲撃だ」

シャル
「あれだよね、目からビーム！デ・ジ・キャラット、私好きだったな～♪」

ルシル
「元祖はもっと古いけどな。で、その意味は、ルスは光、グロリアは栄光、となる」

――語り継がれし神の審判／トルエノス・デ・ラ・トラディシオン

ルシル
「コレもタイプ・アーティラリーの基本兵装の1つだな。雷撃のように枝分かれする拡散砲撃を放つ。そのメリットは、広範囲に拡がる砲撃ゆえに囲まれた際には役立つ。デメリットは、ロックオン機能が無いため、狙った相手に当てることが出来ないことだ」

シャル
「距離があれば避けられるけど、至近だったら直撃必至ってわけだ」

ルシル

「その意味は、トルエノスは雷、トラディシオンが伝承、となる」

――砕嵐の鉄拳／ペガル・トルメンタ

ルシル
「アムティスの近接戦用機体であるタイプ・セイバー。その風嵐系の機体の基本魔術がコレだ。手首から先の拳を高速回転させて暴風を発生させての、全てを粉砕する嵐を纏ったパンチだな」

シャル
「巨体さの割に音速突破の一撃を繰り出してくるから厄介。真正面から迫り来る視界いっぱいの拳なんて、とんでもない威圧感だからね」

ルシル
「ペガルは殴る、トルメンタは嵐、となる」

――侵し難き嵐鎧／ボルティセ・アルマドゥラ

ルシル
「タイプ・セイバーの風嵐系機体、その基本防御機構がコレ。全身を渦巻く暴風でコーティングして防御するというものだ」

シャル
「純粋魔力攻撃の大半はカット出来るけど、神器による物理攻撃には若干弱いっていう欠点があったりするんだよね」

ルシル
「大戦時であれば完封勝利できるような雑魚だったんがけどな。今はもういっぱいいっぱいだ。ボルティセは渦、アルマドゥラは鎧、という意味だな」

――ヒュペリオンゲイザー

――プロミネンスキャノン

――クーラーイロウション

――フローレンベルク

シャル
「はーい、最後のゲスト！　なのはとシュテル、アリサとフラム、すずかとアイル、はやてとディアーチェ、そしてフェイトとレヴィよ！」

なのは
「あー、なんか前にも似たようなことが・・・」

シュテル
「ありましたね。随分と昔のように思えますが」

アリサ
「あー、なんか憶えがあるわ」

フラム
「私もであります」

すずか
「うん。私も、記憶にあるよ」

アイル
「ですわね」

はやて
「あれやね、わたしらの魔法を紹介するってゆう」

ディアーチェ
「うむ。今回もやるのだな。良かろう。付き合ってやろう。コレらは我われの連携魔法だ。その威力は絶大だが、忌々しいことにあのトカゲには通用せなんだ」

フェイト
「・・・・・」

レヴィ
「・・・・・」

ルシル
「あー・・・2人のコンビネーション魔法だけが無いよな・・・」

レヴィ

「なんでー！？」

フェイト
「有り得ない・・・」

シャル
「あちゃあ。ちょっと作者！　なんで２人のコンビネーション魔法を用意しなかったわけ！？」

――迅雷風烈・雷轟電撃剣

レヴィ
「おおおお！　なんかカッコよくて強そうな魔法が追加されたぞ！！」

一同
「そう？　なんかダサい・・・」

フェイト
「で、でも私とレヴィのコンビネーション魔法が出来たのは嬉しいかも！　というよりすごく嬉しい！」

ルシル
「良かったな、フェイト、レヴィ」

フェヴィ
「うん！」

シャル
「じゃ、早速紹介してもらおっか。最初は、なのはとシュテルのコンビネーション魔法から！」

なのは
「はーい！　えっと、このヒュペリオンゲイザーは、シュテルとの連携による砲撃です！」

シュテル
「はい。なのはのエクセリオンバスターに寄り添わせるようにして、私の火炎砲撃3連射のブラストファイアーを放つのです」

なのは
「着弾時には魔力爆発と火炎爆発が同時に起こるから、かなり派手だよね」

シュテル
「ええ。なのはの桜色の魔力光と、私の紅蓮の炎のコントラスト。とても魅力的です」

ルシル
「ヒュペリオンは、ギリシア神話に登場する太陽神・光明神の名だな。その意味は、高みを行く者、だ」

アリサ
「じゃあ次はあたしとフラムのコンビネーション魔法の紹介よ！」

フラム
「私とアリサともどもフルドライブモードにしたフレイムアイズとタラスクス」

アリサ
「半物質化してる魔力剣の固定を解くことで純粋な炎の剣にするのね。その状態のデバイスを頭上でバッテンにするように掲げて、あたしとフラムの炎を融合」

フラム
「その融合した炎を球体状にして、敵に放つのがこのプロミネンスキャノンであります！」

アリサ
「即席のコンビネーション魔法だったけど、なかなかに完成度が高かったわよね♪」

フラム
「でありますな♪」

すずか
「アイルちゃん。次は・・・」

アイル
「私たちの魔法ですわね」

すずか

「うんっ！　えっと、アイルちゃんとこう・・・お互いの指を絡めるようにして繋いでっと」

シャル
「あれよね♪　恋人繋ぎってやつ　　ヒューヒュー　」

アイル
「っ！　ば、馬鹿ではありませんの！？　こ、ここ、恋人！？　私とすずかはそう言った関係ではありませんわ！」

すずか
「アイルちゃん、落ち着いて。恋人繋ぎだから恋人って安直だから。ただのからかいだから」

アイル
「そ、そうですわね！　コホン。お見苦しいところをお見せしましたわ。私とすずかの魔力を、ブーストデバイスの機能を用いて融合させるのですわ」

すずか
「そして2人の魔力で展開したミッド魔法陣から凍結効果のある砲撃を放つ！」

アイル
「2人分の魔力ですから、凍結力もまた凄まじいものになりましたわね」

すずか
「うん、そうだね！」

はやて
「王さま、次はわたらしや！」

ディアーチェ
「うむ。我と子鴉の魔力を融合させ、ミッド式と古代ベルカ式を複合させた砲撃だ」

はやて
「いや～。王さまとこんな風に協力して魔法を撃てるなんて感激や♪」

ディアーチェ
「ふ、ふん！　我はもう二度と御免だがな！」

はやて
「あーん！　王さまのいけず～！」

ルシル
「フローレンベルクとは、フランスの武勲詩・『エイモン公の４人の息子』に登場する名剣の銘だな」

レヴィ
「オリジナル！　いよいよボク達の番だぞ！」

フェイト
「うん！　えっと、どんな魔法なんだろ・・・？」

レヴィ
「ほうほう。・・・よし、オリジナル！　この通りに実際にやってみよう！」

フェイト
「え？　でも相手が・・・」

ユーリ
「呼ばれてませんけどジャジャジャジャーン♪　レヴィ、フェイト。その役、私が務めます！」

ルシル
「あー、そうか。ユーリは新しい魔法が出ていないから・・・」

シャル
「ごめんね～、ユーリ。でも最後の挨拶の時にはちゃんと呼ぼうとしたんだよ。忘れてなんかないからね、ユーリのこと」

ユーリ
「ありがとうございますー♪」

レヴィ
「ユーリ、ユーリ！　早速やろうよ！」

ユーリ
「はい！　手加減無用でも良いですよ？　私、強いですから！」

フェイト
「えっと、じゃあ・・・よろしくね。まずはソニックフォームに変身！」

レヴィ
「スプライトフォーム！　んで、次は・・・バルフィニカスを大鎌のスライサーフォームに！」

フェイト
「私のバルディッシュも大鎌のハーケンフォームへ。そして、敵――今回は仮想敵のユーリだけど、その周りをソニックムーブで高速移動」

レヴィ
「ボクもスプライトぉぉ・・・ムーブ！　そんで次は、高速移動しながら光翼斬を連発！」

フェイト
「私も同じようにハーケンセイバーを連発！」

ユーリ
「わわっ！？　全方位からのバリア貫通効果の斬撃がたくさん！」

レヴィ

「ユーリがボクの光翼斬とオリジナルハーケンセイバーに翻弄されてるその隙を突いて、バルフィニカスは大剣のブレイバーに！」

フェイト
「バルディッシュをザンバーへ！　そして・・・ジェット・・・！」

レヴィ
「雷刃滅殺・・・！」

フェイト
「ザンバァァァァーーーーーッ！」

レヴィ
「極光斬！」

ユーリ
「っ・・・！」

シャル
「おお！　黄金と空色、２色の雷光爆発！」

ルシル
「綺麗だな～」

レヴィ
「ふぅ。コレがボクとオリジナルのコンビネーション魔法！」

フェイト
「迅雷風烈・雷轟電撃剣！」

ルシル
「迅雷風烈は、激しい雷と風のこと。または、ものすごく行動が素早い様子。雷轟電撃は、雷轟は雷が鳴り響くこと、雷撃は稲光が走るという意味から、勢いが非常に激しいこと。共に四字熟語だ。フェイトも四字熟語使うし、レヴィの術式名は漢字ばかりだからな・・・らしい」

ユーリ
「けほっけほっ。ビックリしました。防御力が高かったからこれだけで済みましたけど、他の方だったら撃墜されてます」

レヴィ
「ユーリ、ありがとー！」

フェイト
「ありがとう、ユーリ。大丈夫だった？」

ユーリ
「はい！　何とか耐えられました！」

シャル
「じゃ、これでエピソードⅢの魔導紹介教室も終わりね！」

ルシル

「みんな。付き合ってくれてありがとうな」

シャル
「では締めと行こうか。それでは！」

一同
「ありがとうございました！」

アイリ
「おーい！　アイリにも魔法が追加されたのに、スルーとかなんなの！？」

ルシル

「おっと。そうだったか。俺が一緒だから、そんなに怒らないでくれると嬉しい」

アイリ
「しょうがないね♪　マイスターが居てくれるならいっか♪」

――アイスマン

アイリ
「相手の周囲の水分を急速冷凍させて、雪だるま型の氷の檻に閉じ込める魔法だね」

ルシル
「あはは。可愛いな。茶目っ気があって俺は好きだぞ」

アイリ
「わーい！」

――氷結の軛

アイリ
「鋼の軛に凍結効果を付加したのがコレ。囲んでも貫いても凍結しちゃうんだよね」

ルシル
「既存の魔法に何かしらの効果を付加するのは、一から作るより手間が省けるし、基の魔法が確立しているものだから、イメージもし

やすい。俺もアイリとユニゾンしていろんな術式に凍結効果を付加しているからな。よく判る」

アイリ
「マイスター！　今回のエピソードじゃ融合できなかったから、次のエピソードにでは融合しようね　」

ルシル
「ああ、そうだな。その時がきたらよろしく頼むよ」

アイリ
「うん」

Ｅｉｐｉｃｌ－Ａ移ろいゆく季節～Ｔｒａｊｅｃｔｏｒｙ～

時空管理局評議会。それは、旧暦の時代に次元世界を平定し、時空管理局設立後にその一線から退いた３人が、その後も次元世界を見守るために作った組織・最高評議会と、彼らが掲げる理念の下に集った１０人の管理局員や民間協力者から成る、管理局の運営とはまた違った事柄を決めるための組織。通称、権威の円卓。

権威の円卓による評議会が開かれる本局の一室。円卓の周囲に椅子が１３脚あり、うち３脚の上には管理局のエンブレムにローマ数字のⅠとⅡとⅢが刻印されたモニター。椅子に座るように投影されている人型のホログラムは男女５人。全員が局員の制服を身に纏い、階級章からして将官と一佐であることが読み取れる。

「それでは、これより権威の円卓による、時空管理局評議会を開会いたします」

ホログラムではない、少将の階級章を付けた女性局員が開会の挨拶をした。シアンブルーの長髪で髪型はインテーク。背中まで伸びる後ろ髪は毛先が外へ向かってカールしていて、頭頂部から1本の髪（俗に言うアホ毛）が伸びている。瞳は桃色で、冷ややかな目つきをしている。彼女の名はリアンシェルト。本局にて運用部の全てを管理する総部長。

『まずは・・・つい先ほど、居住区で起きた戦闘について窺おうか』

そんな彼女の挨拶が終わったと同時、Ｉのエンブレムの刻まれたモ

ニターより声が発せられた。本会の議長であるデュランゴだ。スマウグによる本局襲撃について話すよう、ホログラムではない2人の人間に命じた。

『特別技能捜査課・課長、クー・ガアプ一等陸佐。同課所属、ルシリオン・セインテスト二等空士。君らの報告では、リンドヴルムの首領だった竜・スマウグは、次元の狭間に閉じ込め、永久的に追放したと言うことだったが。それが何故、本局に現れたのだ』

直に椅子に座っているクー・ガアプは、ルシリオンや八神家、イリスが所属している特別技能捜査課の課長で、直属の上司である。そして椅子に座ることなく、クーの側に控えている少年ルシリオン。Ⅲと刻まれたエンブレムのモニター・リョーガ評議員から尋問された2人は静かに口を開いた。

「スマウグと最後まで戦っていたのは自分です。撃破できるだけの戦力・使い魔を召喚し、これと共にスマウグと交戦。撃破した姿は確認できませんでした。撃破確認を怠ってしまった理由については、報告書に記したとおりです」

アールヴヘイムを次元の狭間、神器をロストロギア、ヨルムンガンドを使い魔、そういった変更点以外は事実を伝えていた。アールヴヘイムでの戦闘、門を閉じた理由、撃破の確認をしなかったのではなく出来なかったことなどだ。

「彼の作戦に非があったとは思えません。確かにスマウグが出現したのは事実ですが、あれは想定が出来ないものです。それに、その

作戦に許可を出したのは私です。責めは私が受けます」

『しかし、いくら犠牲者が出なかったとはいえ本局であれだけの戦闘をされてしまったことへの責任は、スマウグと直接戦い、その報告をしたセインテスト二士にしっかり取ってもらわなければならない』

「待ってください議長！　彼はまだ子供ですよ！　私や、機動一課課長クレフ・マカスキル一等陸佐がリンドヴルム事件すべてに対しての責任を負うとすでに決めていました！　どうか再検討を！」

『無論、君やマカスキル一佐にも責任は取ってもらうつもりだ。が、セインテスト二士にも負ってもらう。これは決定だ』

『ちょうど良い機会だ。この際、セインテスト二士を本格的に正局員へ昇格してはどうか？』

『おお。それは良い考えだ。今回の件に目を瞑れば、それ以外は５０年、いや１００年に１人の逸材』

『うむ。非常勤の嘱託などにしておくには勿体なさすぎる』

『ですが、セインテスト二士が今住んでいる世界には義務教育という制度があり、残り３年は従事しなくてはならないのでは？』

『私たちとの元々の契約は、彼の正局員への昇格はその制度を終えてからというものだったはず』

男性将官たちの会話に女性将官2人が割り込む。円卓メンバーの男性局員は管理局優先、女性局員はさらに個人尊重という考えも持っている。ゆえに契約を無視しての昇格は違反だと唱える。そんなメンバーの会話を無表情で聴いているルシリオン。

『で？　お前はどうしたい、どうされたい？』

そんな彼に男性局員の1人、ロッキー・サブナック一等空佐が訊ねた。彼は男性メンバーの中で唯一と言って良いほどのルシリオンの味方・・・というほどでもないが、他の男性メンバーの中では中立といったところだろう。

「自分は特に言うことはありません。スマウグの件については逃れることなく責任も負いましょう。正局員にするのであれば、それでも構いません。その代わり・・・寮に部屋を用意してください。嘱託とは比べられない程の仕事量になる正局員。それを遠く離れた管理外世界から通うのは面倒なので」

この時期での正局員への昇格はルシリオンにとって計画通りとも言えるものだった。元より聖祥小学校の卒業と同時に世話になっている八神邸から出る予定だったからだ。ゆえにこの提案は願ってもないもの。

『学校はどうするんだ？　義務教育とか言う制度があるんだろ？』

「自分はあの世界にて、他国の出身だという身分を偽っています。

その出身国の学校へ移ると理由をつければ問題ないかと」

『なんだと・・・』

さらりと自らが犯した罪を暴露するルシリオン。不快そうな反応を見せたのは、中将の階級章を付けた男性局員、レジアス・ゲイズのみ。彼は絶対的な正義を信奉し、犯罪者に対しては徹底的に嫌う気がある。普通の人間もそうだが、レジアスはとりわけ度が過ぎるのだ。しかし他のメンバーはスルー。今さら詐称罪など小さな問題・・・にすらならないのだ。

『決まりだな。セインテスト二士。リンドヴルム首領スマウグの安否の確認を怠った責任として、平和な日常を完全に捨て、その心身ともにその時間を管理局に捧げてもらおうか』

『では、来年度・・・。ガアプ一佐。第９７管理外世界・極東島国・・・ニッポンだったか。その学校年度はいつからだね？』

「・・・４月からです」

デュランゴ議長からの問いに、納得が出来ないと不満そうな表情を隠そうともしないクーが渋々答えた。

『ふむ。では４月１日より、ルシリオン・セインテスト二等空士を一等空士へ昇進、正式に局員として採用することにする。皆、構わないな』

クーとレジアス以外はすぐさま『異議なし』と応じ、少し遅れて『異議なし』レジアスが賛同。クーだけは未だに賛同の意を示さない。他のメンバーがクーへと視線を移し、リアンシェルトもまた彼女へと視線を移す。

「ガアプ課長。俺は構いませんよ。どうせ中学――ジュニアハイスクールは男女別の校舎、はやて達と机を並べての勉強はもう出来ないんですから。通ってもつまらないです」

「・・・ふふ。・・・クー・ガアプ、異議なし」

権威の円卓の満場一致でルシリオンの正局員への昇格、一等空士への昇進が決まった。

『リアンシェルト。彼のための部屋を用意してやってくれ』

「了解です。トレイル書記。用意ができ次第、連絡します」

『では、本会はこれにて終了とする』

「はい。皆さま、お疲れ様でした。権威の円卓、時空管理局評議会をこれにて閉会いたします」

リアンシェルトの挨拶が終わると、次々とホログラムがブツンと消えて行き、ローマ数字が刻まれたエンブレムのモニター3つも消えた。この部屋の明かりとなっていたモニターやホログラムが消失したことで室内は薄暗くなる。

「本当に良かったの？　いくら校舎が男女別だからと言っても・・・」

「いいんですよ、ガアプ課長。こんな事になるずっと前から決めていたんですよ、はやての・・・八神の家から出ることを」

クーが椅子を回転させて側に控えるルシリオンへと体を向けて訊ねると、彼は苦笑しながら答えた。

「何故か理由を訊いても？」

「・・・そうですね。これから・・・はやては、それになのは達も今以上に多感な時期に入ります。彼女たちの精神は早熟で、考えも場合によっては大人顔向けの時だってあります。それもでまだ、子供です。そんな頃に同じ屋根の下で同い年の男が居るのは、いろいろと気になる事になると思います。それに俺も、成長していくはやての側に居るのはちょっと恥ずかしいので」

照れて恥ずかしそうな、何とも言えない苦笑いを浮かべてそう答えたルシリオン。思春期になって大変なはやてに気を遣わせたくない、という本心ではない建前を、そうとは知らず信じたクーは目を丸くして、「ぷはっ！　ふふ、うふふ、あはは！」吹き出して笑い声を上げ始めた。

「あらあらあら♪　可愛くてもやっぱり男の子ね、あなた！　あなただってこれから大変になるものね！　頑張れ、男の子！」

クーは笑い過ぎて涙を零しながらルシリオンの頭を撫でた。そんな2人の側にリアンシェルトが歩いて来て「変態。スケベ。エッチ」冷たい視線をルシリオンへ向けてそう言ってから部屋を出て行った。

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「・・・おーい、起きろ～・・・」

「・・・ルシ・・・ルシル・・・」

誰かに呼ばれている。そう知覚して「ん・・・あ・・・」閉じていたまぶたを開ける。俺を呼んでいたのは2人の男。ロガン・リードマン空曹とメルセデス・シュトゥットガルト二等空尉だ。ロガンが運転し、メルセデスは助手席だ。

「すいません。昨夜、遅かったのでつい・・・」

とある現場に向かう車中、俺は後部座席で眠りこけてしまっていたようだ。あくびをかみ殺して謝る。正式に局員となって早1年。俺は内務調査部の査察官・監査官に続いて監察官という3つ目の資格を取得することが出来た。

この1年、その3種の仕事を日夜こなしつつ調査官としての研修も行っている・・・のだが正直、ナメてた。たった1年で管理世界入りを果たした世界は4つ。毎日毎日、その世界に行っていた。昨日も書類整理に追われてほとんど寝ていない。

（あの頃の夢か・・・）

はやてから告白をされたあの夜。リアンシェルトから、寮の準備が整った。いつ入寮してくれても構わない、そう連絡が入った。元より卒業式を終えたら八神の家から出る予定だったし、はやてから直接告白をされても出るとも決めていた。タイミングとしては良い方だった。

（まぁ、手紙だけ残して勝手に家を出たことについてはメチャクチャ怒られてしまったが・・）

「あー、そっか～。君、内務調査部の・・・。大変だね～」

「体は大事にしろよ？　俺たち第１１１１部隊は他の部隊以上にミスは許されないんだからな」

「はい」

この１年で俺に新しい配属先が出来た。それが第１１１１航空武装隊。仕事内容は暗殺。そう、時空管理局の暗部組織だ。権威の円卓の会議の下、暗殺という完全に違法な仕事を請け負う部隊だ。俺もすでに何人かの人間を間接的に殺めている。もうあの頃には戻れない。まぁ、それで良いのだろうが。

「じゃあ、今回のターゲットについておさらいをします」

ロガンがそう言って俺たち３人の前にモニターを展開。表示されて

いるのは２０代から４０代と思われる男数人の顔写真。ロガンからその男たちの情報が伝えられる。今おれ達の居る第１４管理世界ウスティオを拠点にするギャングだ。

「いい歳したおっさんが遊んでんじゃねぇって話だよな～、おい。働け働け」

罪状は集団危険行為。信号無視、スピード違反などの道路交通法違反。拳銃などの質量兵器違法所持。そのうえ一般人への傷害。女性への暴行・誘拐・強姦。さらに強盗などなど。挙げればキリが無い。何度も検挙されているんだが、リーダー格の４０代の男は政治家一家の出で、しかも親戚にはウスティオ地上本部の幹部とのコネがあるとのことで、もみ消されたり軽い刑で出所したりしているそうだ。

「おーい、監察官殿～」

「え～。ウスティオ地上本部の監察は俺じゃないですよ、メルセデス二尉。とは言え、これが事実なら許せませんね。調査部長に報告しておきます」

「さすが最年少１３歳で査察・監察・監査、３種の役職についてる、未来のエリート少年調査官！　年下ながら尊敬するよ！」

「ありがとうございます、ロガン空曹」

ロガン空曹はまさに、優しい親せきのお兄さん、って感じだ。メルセデスは、ガラは悪いが実は性格の良いエセ不良、だな。俺がこの

暗殺部隊に入ってからというもの、このトリオで動くことが多いため、結構仲が良いと思う。

「役職手当で俺らより給料貰ってんだろうな～。いつか奢ってくれ」

「メルセデス二尉。一回り以上歳の離れた子供にたからないでください。恥ずかしいですよ」

「へいへーい」

これから暗殺をしに行こうって空気じゃないよな。ま、俺としても重い空気より、こんな何気ない陽気な空気の方がずっと楽だから良いけど。それから車を走らせること1時間。陽も落ちて夜となったウスティオの大地。そして到着したのは峠道の入り口にあるサービスエリアの駐車場。ターゲット達は走り屋よろしくなカーレースを繰り広げていると調査で判った。特にこの峠をホームコースとしているとのことだ。

「一般車を事故に追いやった事例もあり、死者も出たことがあるようです」

「とんだクズが居るもんだ。さぁ、害虫駆除といこうか。方法は何かあるか？」

駐車場に停めた車内にて作戦会議。俺はすぐさま「俺がやります」挙手。メルセデスが「具体案は？」と確認を取って来たため、「車を操れば問題なしです」即座にそう答えた。

「車を操る・・・？　あ、あぁ、ステガノグラフィアかぁ」
「電子戦用の魔法か。あの反則魔法なら足も付かないだろうが」
「決まりですね。でも本当に良いのかい？　間接的にとは言え人殺しを君は・・・」
「ルシルが１１１分隊に入った頃からずっと言い続けてるな、お前。今さらだよ、今さら」
ロガンは子供である俺が人殺しに加担することを最初から反対していた。そして任務がある毎に、良いのかい？と確認して来る。そして俺は「いいんです。それが仕事ですから」といつものように答える。
ロガンもメルセデスも、それに他のメンバーも、暗殺を仕事と割り切って人を殺している。そして、悪を成して悪を殺す、という汚名や罪を被ってでも、罪を犯しながらも償いをせずにまた罪を重ねる悪を断罪する、という覚悟もある。
（そして、いつか犯罪者として裁かれることも覚悟している）
「そうそう。仕事なんだから、それでいちいち滅入っていたら若禿げになんぞ。それによ。人殺しじゃなくて害虫駆除だって思えば良いんだよ、こういうのはな。ルシルは子供ながらに割り切ってんだ。その覚悟を、お前が揺らすんじゃねぇ」

「・・・はい」

これまでのやり取りには無かったメルセデスの強い言葉にしょんぼりするロガン。俺は「お心遣い、ありがとうですロガン空曹」頭を下げて礼を言う。本当に俺を気遣ってくれているからこそ、俺も心の底から感謝したい。

「うん。でも、辛くなったらいつでも言ってほしい。その分、僕がこの手を汚す・・・！」

「さすがに子供のお前におんぶに抱っこのままじゃ、大人として、先輩として、格好がつかないしな」

「ですね」

メルセデスの言葉に同意すると、彼は「生意気！」後部座席に身を乗り出してまで俺の髪をぐしゃぐしゃに掻き乱した。手櫛で髪を直していると、「来ました」とロガンがそう言った。フロントガラスの向こうへと目をやる。駐車場に続々と入って来るスポーツカー。どれもこれもガラの悪い改造車で、車から出て談笑し始めたそれらのドライバーであるターゲットやギャラリー達も同様にガラが悪い。

「ターゲット、および車両を確認」

「頼むぞ・・・！」

「了解。秘密を暴き伝える者達（ステガノグラフィア）」

電子戦用術式のステガノグラフィアを発動。車外から見られるのを警戒してモニターには出さず、「いつでも支配できるようにターゲットのシステムをクラック。もちろん痕跡は残すな」指示を出す。

『はい』『ウィ』『ヤー』『シン』『イエス』

脳内に聞こえる電子妖精たちの返事。そして10秒とせずに『ミッションコンプリートです！』連絡が入った。俺はメルセデスとロガンに頷きを見せ、準備を終えたことを言外に伝えた。

――発見（コード）せよ、汝の聖眼（イシュリエル）――

そして俺は魔術ではなく魔法としてのサーチャーを、ステルスモードにして窓から放つ。

「タム・リンより通告。これより作戦に入る。繰り返す。これより作戦に入る」

「ジャック・オ・ランタン、了解」

「ヴィル・デ・フラウ、了解」

作戦開始を告げるメルセデス。ちなみに俺のコードネームはヴィル・デ・フラウ・・・なんだが、ヴィル・デ・フラウって女性の姿をした妖精の名前なんだよな。なんで俺にコレを付けたんだよ・・・。ジャック・オ・ランタンがコードネームであるロガンは、ターゲッ

トやギャラリーの車を全台見送ってから駐車場を出て、連中とは逆方向へと車を走らせる。あとは俺がターゲットの車を操り、崖からノーロープバンジーさせればいいだけだ。現場に留まる必要はない。

「次元港に行く前にどっか飯を食いに行こうぜ。腹減った」

「いいですね。ヴィル。君もいいかい？」

「はい。美味しい料理店、調べますね」

作戦中はコードネームで呼び合う。班長（俺たちの場合はメルセデスだな）が作戦終了を宣言するまでは続行するルールだ。とにかくネットワークにアクセスし、近場に評判の良い店があるかどうかを調べる。そんな最中でも俺は、ターゲットの様子をイシュリエル越しで監視している。

「あ。この先に有名なパスタの店があるようですよ」

「決まりだな」

「僕もパスタ好きですから、そこにしましょう」

ロガンの顔の面前に、運転の邪魔にならないように小さくしたマップモニターを展開。それから車を走らせ、件の駐車場に到着したところで『マスター』ステガノグラフィアから連絡が入り、ターゲット達が峠攻めを始めたのだという報告を貰った。脳内に送られてくる映像にもキッチリと映し出されている。

「ステガノグラフィアより報告。ヴィル・デ・フラウ、任務に集中します」

「「了解」」

ターゲット連中は峠道で報告通りにレースをしている。メルセデスとロガンにも見えるようにモニターを展開。法定速度５０ｋｍのところを１６０ｋｍで走行中。これって、俺たちが何もしなくても普通に自滅する未来が待っている予感。だが、今日を含めて３日で暗殺しろ、との命令が権威の円卓――ロッキー・サブナックから出ている以上は・・・

「処刑執行します。ステガノグラフィア。次の低速コーナー、全車の全てのシステムをロック」

アクセル、ブレーキ、ハンドルのコントロールをステガノグラフィアの支配下に置く。そして逃げられないようにドアもロック。ターゲット達は何も知らずに公道レースに熱中している。まさか数十ｋｍと離れたところから車を操られ、事故に見せかけられて殺されるとは夢にも思ってもいないだろう。

『先頭車両から速度を２０ｋｍプラス、ハンドルとブレーキは固定。あと緊急用の防御魔法プログラムも解除。さぁ、ターゲットを谷底へご案内だ』

魔法文明のある世界の車には、事故時に乗員を護るための緊急措置

として防御魔法が発動される機能もあるという。それを発動されてターゲットが生き延びるような真似はさせない。連中には今日ここで死んでもらう。

『任務りょ～かい♪』（＼Д／）ゝ

モニターに映る峠とターゲットの車。ステガノグラフィアは俺の指示に従い、支配下に置いたターゲットの車を操作。車は低速コーナーに差し掛かったが、減速が出来ないどころか加速を続け、そのうえハンドルを切ることも出来ないため、ガードレールを突き破って崖下へと仲良く連なるように落ちて行った。

崖下は小河であるため、木々がクッションになって九死に一生を得るなんていう都合の良い事にもならない。落ちた以上は死だ。それを証明するかのように崖下に落下した車は爆発炎上。そこにさらに1台、2台・・・最終的に7台が崖を落ちて行き爆発、そして炎上。

「ミッション第一段階、完了です」

「「了解」」

生死を確かめる必要性も無いくらいの燃えっぷりだ。それを確認してイシュリエルを解除、モニターを切り、俺たちは夕食を摂るために車を降りて店内へ。一番奥のテーブル席を指定して、それぞれパスタを注文し、俺はカルボナーラ、メルセデスはボロネーゼ、ロガンはペペロンチーノを美味しく頂く。

店内にポップなＢＧＭが流れる中、小さなモニターで複数のニュース番組を観る。ミュートにしているため他の客の邪魔にはならない

だろう。天気やら時事やらのニュースが流ること３０分ほど、デザートを追加注文して食べている中、速報が入った。正に俺たちが引き起こした暗殺――事故のことがテロップとして流れた。

『車を運転していたドライバー、全員が即死か。ま、数十ｍっつう高さからクッションも無く落ちたんだからな』

『事故原因を調査・・・。映像を観る限り真っ黒に焼け焦げてスクラップになってますし、無理でしょうね』

『身元は調査待ち。しかしギャラリーからの聴取で、僕たちのターゲットであることは明らかですね』

とのことだ。それから俺たちは遅めの夕食を終え、車に乗って次元港を改めて目指す。そして「タム・リンより、作戦の終了を宣言する」メルセデスから作戦終了を伝えられた。

「ジャック・オ・ランタン、了解」

「ヴィル・デ・フラウ、了解」

俺とロガンはそう応じた。これにて任務は無事に終了。あとは次元港からミッドチルダを経由して本局へ帰るだけ。っとその前に、俺たちが乗っている車を、レンタカー店に返さないといけない。次元港の敷地地下にあるレンタカー店が運営している駐車場、その入り口に入る直前、魔法で偽装していたナンバープレートを解除。そし

てエレベーターで1階のレンタカー店へ。

「おかえりなさいませ、マッケンジーご一行様。良い旅でしたでしょうか？」

「ええ、実に素晴らしい時間を過ごせたよ。機会があればまた利用させてもらうよ」

「ありがとうございます！　またのご来店をお待ちしております！」

マッケンジーという偽名で俺たちは車をレンタルしていた。身分証も全てが違法作成されたものだ。しかもこのウスティオに降り立ってからずっと変身魔法を使って、まるっきり別人に変身している。今の俺は１９０ｃｍの大男だ。

車の起動キーを受付係に返却して、レンタカー店を後にする。目指すは当初の目的である次元港。俺たちは男性用トイレの個室に入り、

「変身魔法を解除」自身に掛けていた変身魔法を解除した。

「くっはー。１日ずっと変身魔法で居んのも疲れるな」

「僕はもう魔力がすっからかんですよ」

「お疲れ様でした～」

「おう、ご苦労さん」

「お疲れさまです」

トイレを出た後は、コインロッカーに預けておいた本当の身分証や次元航行船のチケットなどを回収。受付でチェックインを済ませて、船へと搭乗。離陸時間になる頃には俺たちは揃って爆睡だ。

『――本日はミッドチルダ首都クラナガン行き、第３９３便にご搭乗頂きましてありがとうございました』

このアナウンスで俺たちは目を覚ました。眠っていたからあっという間だったな。ミッドの次元港に到着して、今度は本局行きの便へ乗り換えだ。その手続きを行うために受付に向かおうとした時、「ルシル君！」名前を呼ばれた。声のした方を見れば、「はやて、リイン・・・！」制服姿の２人が居た。

「ルシル。俺たちは先に行ってるからな」

「うん。時間はまだあるし、ゆっくりと話しておいで」

「え、あ、はい。ではまた後で」

俺とはやての関係が元家族だということは、メルセデスやロガンには知られているからな。２人は俺を気遣って、先に船への搭乗手続きを終えてサクサク乗り込んで行った。

「ごめん、ルシル君。大事なお話ししてた？」

「いいや。大丈夫だよ。はやてとリインは仕事だったのか？」

「はいですよ♪　特別捜査官ですから！」

この1年、はやてとリインはシグナム達と別行動で捜査することが多くなっていた。それに上級キャリア試験にも無事に合格し、今では14歳にして準陸尉。チーム海鳴一番の出世頭だ。

「なぁ、ルシル君。次に海鳴市に帰って来られるのっていつかな？　卒業式のあの日から一度も帰って来てへんやんか。わたしらチーム海鳴も、小学校ん時のクラスメイトのみんなプンプンやよ」

両手を腰に置いての仁王立ち、さらに頬を膨らませてのお怒りモードのはやて。リインも「プンプンです！」同じ格好をする始末。俺はあの日から海鳴市に足を運んでいない。仕事のキツさも理由だが、もう戻れないという思いもあるからだ。

「あー、ごめん。内務調査部って思っていた以上に重労働でさ。これから帰って書類作成だよ」

嘘。これから本局に帰ってやることは、問題も無く無事に人を殺しました、という報告書の作成だ。

「・・・ルシル君、ホンマに疲れてる・・・。無理はせんでな？　ホンマは無茶もしてほしくない。・・・わたしら嘱託とは違くてルシル君は正局員やから、仕事量が増えて大変やってことは解ってるつもりや・・・。それでも、な・・・」

「だからその疲れを癒すために、一度くらいははやてちゃん達のお家に帰って来てくださいです。アイリはヴィータちゃんに連れられて何度も帰って来てるですよ」

あの日、俺はアイリと共にはやての家を出た。本当はアイリも置いて行くつもりだったんだが、念話を使って泣き喚かれたことで俺が折れた。それからは俺とアイリは、リアンシェルトが用意した寮で共同生活。

アイリは基本的にヴィータと合流して武装隊の仕事。いくら俺の融合騎として登録されているとしても、内務調査部のオフィスに入れないからだ。その事もあって、アイリはヴィータやシグナムと一緒に海鳴市に帰ることが多くある。俺も誘われるが、何かと理由を付けて断っていた。だから今回も・・・

「仕事が一段落したら帰るよ」

「もう！　そんなこと言うて結局帰って来てへんのはどこの誰やろな～！」

はやては俺の頬を両手で摘んで引っ張って来るから「あいたた！」かなり痛い。リインも「約束破りは重罪です！」俺の頭をその小さな拳でポカポカ叩いてくる。こんな状況だが癒される、本当に。そんな君たちだからこそ、護りたいからこそ、どんな辛い仕事だって引き受けて見せる。

「あのな、はやて。俺――」

『時空管理局本局行き・第８８１便を御利用されるお客様は、出発時刻まで１０分となりましたので、ご搭乗して頂くようお願いいたします』

そこまで言い掛けたところで、そんなアナウンスが流れた。第８８１便は俺の乗る船だ。俺は「はやてとリインもこの便か？」そう確認すると、「ううん。次の便や」とはやては首を横に振った。

「そう・・・か。俺、行かないと」

そう言うとはやては俺の頬から両手を離し、「うん・・・」寂しそうに俯いた。リインも俺の頭の上から離れ、「はやてちゃん・・・」はやての右肩に乗った。

「それじゃあ、またな」

俺はあの頃のようにはやての頭を撫でることなく、踵を返して受付に向かう。はやてが息を飲むのが背中越しだったが判った。たった数時間前に人を殺したこの手で、あの子の頭を撫でるわけにはいかないだろう、さすがに。でも、このまま別れるのも後味が悪過ぎる。この手を使うしかないよな、もう・・・。

「来週。休みが２日あるんだ。だから・・・遊びに行くよ。はやての家に」

そう伝えてからはやてとリインへと振り返ると、「っ！」はやてはポロポロ涙を流していた。まさか泣かれるとは思わなかったからギ

ョッとした。慌てて「はやて・・・・!?」へと歩み寄る。

「ご、ごめん！　その、なんや、う、嬉しくて・・・・！　ホンマに・・・嬉しくて・・・・！」

両手で涙を拭うはやて。リインは「良かったですね、はやてちゃん！」はやてを慰めるように頭を優しく撫でる。そして『ルシル君。約束破ったら、リインは許さないですよ』と念話を使って、俺に警告して来た。その視線は結構本気の脅しだ。

「『・・・判っている』・・・はやて。約束だ。ちゃんと遊びに行く」

「っ！・・・うん、うん！　約束や！」

小指を差し出してくるはやて。これくらいなら許されるだろう、と思いたい。はやての小指に俺の小指を絡ませ「指切りげんまん♪」約束をする。そして「またな、ルシル君♪」満面の笑顔で俺を見送ってくれるはやてとリインに、「ああ、また！」小さく手を振り返しながら受付を済ませ、メルセデスとロガンの待つ船に登場した。

Ｅｐｉｃｌ－Ｂ移ろいゆく季節～Ｈｅ　ａｎｄ　ｇｉｒｌｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｄａｙ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「ただいまです～」

「八神はやて准陸尉、リインフォース・ツヴァイ二等空士。ただいま戻りました」

事件捜査を終えたわたしとリインは、所属してる本局捜査部・特別技能捜査課のオフィスに帰った。敬礼して挨拶すると「はい。ご苦労様」って、特捜課の課長であるクー・ガアプ一等陸佐が労いの言葉を掛けてくれた。黒のショートヘア、空色の瞳をしてて、仕事に関したら厳しいけど、プライベートやととっても暖かで優しい人や。

「八神准陸尉、お疲れさまでーす」

さらに、とっても綺麗な水色の長髪をポニーテールにしてるシャルちゃんと、「お疲れで～す。准陸尉～」ローズピンクの長髪をおさげにしたルミナ（本名はアルテルミナスって結構長い）からも労いを貰った。ってゆうか・・・

「んもう！　またそうやってからかう～！」

ぷう～っと頬を膨らませて見せる。わたしは上級キャリアの試験を

受け、そんで合格。二等空士から一気に准陸尉へと昇進した。それを理由にいろいろとからかわれる事が多なった。

「でもまさか、一気に階級を追い抜かれるとは思わなかったよ。しかも嘱託に・・・」

ルミナは曹長。准尉の1つ下の階級やな。准尉への昇進試験をルミナは2回落ちてる。そのこともあって今ではわたしの方が上官になるわけなんやけど、上官ぶりたいわけやない。シャルちゃんもルミナも当然解ってるんやけど、一種の気晴らしとしてわたしをからかうんやもん。そろそろ本気で怒ろうかな～。

「それにしても1年で結構変わっちゃったよね、わたし達・・・」

シャルちゃんが寂しそうにそう言うた。チーム海鳴のみんな、中学校に進学してからは小学校の頃以上に仕事がバラバラになってしもうて、管理局で逢うことなんてまずなくなった。リンドヴルムのように協力して事件に当たる、ってゆうほどの大事件も起きへんし。

「特にルシルが完全に離脱したのが大きいというか、さ・・・。少しくらいは相談とかしてほしかったよね。いきなりはやての家から出てくし、学校の進学もやめるし、正式に局員になるし。そのうえ理由を付けて直接逢おうともしない。何よそれぇぇぇぇーーー！！」

「落ち着いて、イリス！　顔が放送事故を起こしてる！」

シャルちゃんの怒りは当然。全く以ってその通りやって同意する。

ルシル君とアイリが出てった翌日。わたしらはルシル君とアイリを本局の中から捜し出して、そんで謝らせた。そん時に教えてくれた理由のこともあって、ちゃんと許した。そやけど、その日以降はもう酷い。全然逢えへんもん！

・――・――・回想や！・――・――・

――はやて。突然、家を出て行くことを許してほしい。君も、俺も、もう孤独じゃない。シグナム達が、なのは達が、君の側に居る。だからもう、俺が居なくても大丈夫だって思う。だから安心して、俺は俺の道を進むことが出来るよ。今まで楽しい時間をくれてありがとう。ルシリオン・セインテスト――

――お世話になりました！　バイバイ、はやて♪　アイリ・セインテスト――

ルシル君の置手紙を読んで、ルシル君とアイリのの部屋に行ってみると、そこはやっぱりもぬけの殻やった。綺麗にベッドメイキングされてて、開かれたクローゼットの中に衣類は1着も残ってへん。

「っ！・・・いや・・・いやや・・・いやぁぁぁぁぁ！」

その場にへたり込んで叫ぶ。認めたなかった。確かにわたしの側にはたくさんの家族と友達が居る。もう孤独やない。そやけど、ルシル君が居らんくなっても平気ってわけやない。それくらい解っててほしかった。

「はやて！？」

「はやてちゃん！？」

「「主はやて！」」

わたしの叫び声を聞いて駆けつけてくれたシグナム達。そんで泣いてるわたしを見て「どうしたの！？」シャマルがわたしの肩を抱いてくれて、「んだよ、これ・・・！？」ヴィータと、「ルシリオンとアイリはどこだ・・・！？」シグナムが、空っぽになってるルシル君の部屋を見て絶句した。

「うそ・・・！　ルシル君とアイリちゃんの私物が何も残ってない・・・！」

「なんでだよ・・・！　アイツら、どこに行ったんだ！？」

「ヴィータ。その紙きれはなんだ？」

「え？　あ、これか・・・。はあ！？　んだよこりゃ！」

ヴィータがわたしの側に落ちてるルシル君の置手紙を読んで怒鳴り声を上げた。そんで「勝手に出て行っただと！？」シグナムも怒りを露わにした。シャマルも続いて手紙を読んで「そんな・・・！」ショックを受けた。

「ザフィーラ！　お前、ルシルとアイリが居なくなることに気付か

なかったのかよ！」

「む。・・・すまぬ。ルシリオンとアイリは警戒外の対象だったため、気付かなかった」

「ったくよ！　お前の耳と鼻は飾りかよ！」

「ヴィータ、言い過ぎだぞ！」

「でも、あれだけの荷物をどうやって運び出したのかしら？　創世結界も使えないのに。そもそも出てくって、行くあてが手あるのかしら・・・？」

「主はやて。ルシリオンと連絡は取れませんか？」

シグナムからそう言われてハッとした。今はショックを受けて悲しんでる場合やない。わたしは自室へと駆け出す。勉強デスクの上に置かれた携帯電話を手にとって操作してると「はやてちゃん・・・？」リインが起きてしもうた。

「ごめんな、リイン、起こしてしもうて！」

「・・・何かあったですか？　はやてちゃん、なにか様子が・・・」

わたしがリインからの問いに答える前に「出て行ったんだよ。ルシルとアイリが」続いてわたしの部屋にやって来たヴィータが答えてくれた。その最中にもわたしは、震える指でルシル君の電話番号を

呼び出す。

「出て行った・・・？　出てった！？　ど、えっ！？　ルシル君とアイリ、この家を出て行ったんですか！？」

「そうなのよ。私たちが寝ている間に、荷物を纏めて出て行っちゃったみたいで」

「置手紙も残されていた」

「そんな・・・！」

リインも突然の別れにショックを受けてる。なんとしてもルシル君とアイリを見つけ出して、勝手に出てったことを叱ってやらな。

『お掛けになった電話番号は、電波の届かないところか、電源が切られておりますので、繋がりません』

「アカン・・・。圏外か電源を切ってる・・・！」

呼び出しコールを切った携帯電話を勉強デスクの上に置いて、わたしは椅子に座って突っ伏した。とそこに携帯電話からメロディが流れ始める。メロディからしてチーム海鳴の誰かからや。わたしは慌てて携帯電話を手に取るんやけど、「すずかちゃん・・・」電話を掛けて来たんはすずかちゃんやった。

「出ないですか？　はやてちゃん・・・」

「今は・・・出るほどの気力ない・・・」

鳴り止まない携帯電話をもう一度デスクの上に置いて、また突っ伏す。そんなわたしの代わりに「私が出ますね」シャマルがデスクの上から携帯電話を取って「はい。シャマルです」呼び出しコールを受けた。

「ええ、おはよう、すずかちゃん。ええ。・・・ええ・・・。えっと、実は・・・」

シャマルが、すずかちゃんに事情を伝えた。ルシル君とアイリが突然いなくなったこと、行方知れずになったこと、を。スピーカーの奥から『ルシル君が居なくなった・・・！？』すずかちゃんの驚きの声が漏れ聞こえてきた。

「そうなの。それで今、はやてちゃんや私たちはてんやわんやで・・・。うん、そうなの・・・。あ、今日はみんなで中学校の校舎を観に行くって約束だったわね・・・」

そうや。来月から通う聖祥中学校の女子校舎をみんなで見学しに行こうって約束してたんやった。そやけど、今のわたしにはそれすら億劫や。

「ええ。・・・ええ。・・・判った。ありがとう、すずかちゃん。待ってるわね。・・・はやてちゃん。すずかちゃん達が来てくれるそうです」

「・・・うん」

それからしばらくして「お邪魔します！」すずかちゃん達が来てくれた。みんな息を切らしてて、ここまで急いで来てくれたってことが判る。そんで「はやてちゃん、大丈夫？」すずかちゃんと、「はやてちゃん・・・」なのはちゃんが、泣き過ぎて目を腫らしてるわたしの心配をしてくれた。わたしは「うん」頷いて応えるだけ。

「確かに荷物とか全部持ってったみたいね、ルシルの奴」

ルシル君の部屋に行って手掛かりを探しに行ってたアリサちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、そんでシャルちゃんがリビングに戻って来た。

「矢川先生に問い合わせてみたよ。どうやらルシルは、生まれ故郷のドイツの学校に進学することになってるみたい。でも・・・」

「ドイツ生まれっていうの、ルシルが魔術を使って偽装した国籍だけど・・・。でもだからってそっちの学校に行くなんて考えられない」

「やっぱり本当の出身世界のフェティギアに帰っちゃったのかな～・・・？」

「携帯電話じゃ連絡とれないってことみたいだけど、念話はどうなのかな？」

「それもダメなのよ、なのはちゃん。念話も繋がらない。完全に界外に行っちゃってるわね」

連絡手段が何もあらへん。みんなが打つ手なしって唸る。そこに「リンディ提督に、フェティギアの住所とか訊いてみたらどうだ？」ヴィータがそう提案した。フェイトちゃんがすかさず「訊いてみる！」リンディ提督に連絡を取り始めた。

「ルシル君が管理局を辞めていないなら、管理局の局員データに問い合わせてみたらどうかな？」

「ナイス、すずか♪　あたしが当たってみるわ」

わたしら八神家の保護観察処分はもう終えてる。そやからいつ管理局を辞めても問題あらへん。もしそうなら、やっぱりルシル君はフェティギアに帰って、本格的に"エグリゴリ"との戦闘に入るつもりなのかもしれへん。

「え？　じゃあ母さんも、ルシルがはやての家を出てくことを知らなかったってこと？」

『当り前よ！　事前に知っていたら必ずあなた達に話すわ！』

スピーカーモードにされてるフェイトちゃんの携帯電話から、リンディ提督から驚きの声が発せられる。そんで『私からリアンシェルト先輩に連絡を入れてみるわ。こちらからまた電話するから！』電

話が切れた。

「リアンシェルト総部長・・・」

「頼りたくない相手1番だが・・・」

「人事の一手を管理する運用部の総部長だし、今は・・・」

「つうか、エグリゴリん中で居場所が判ってんのリアンシェルトくらいだろ？　ひょっとしてあの馬鹿・・・！」

ヴィータの話に「まさか・・・！」わたしはソファから立ち上がった。ルシル君はリアンシェルトを斃すために本局に向かったんか？　無理や、今のルシル君にリアンシェルトは斃せへん。それはルシル君かて理解できてるはずや。

「ルシルとアイリの局員ＩＤは抹消されてないわ。けど・・・アイリはそのまま特捜課の課員として登録されたままだけど、ルシルだけが内務調査部に異動しちゃってるわ・・・」

アリサちゃんからの報告にわたしらは「え・・・？」呆気に取られた。そこにフェイトちゃんの携帯電話から呼び出しコールが鳴ったから、「母さん・・・？」フェイトちゃんは出た。

『先輩から事情を聞いたわ。ルシル君は来年度から正式局員に昇格され、一等空士にも昇進するみたいね。あと、住まいも本局内の寮になってるみたい。たぶん、今は寮でいろいろと整理してると思う

わ・・・。逢いたいのならまずは寮に行った方が良いかも・・・』

「ありがとう、母さん。行ってみるよ」

電話を切るフェイトちゃんや、シグナム達みんながわたしを見る。そんで「はやて。ルシルに逢いに行こう。そして、1発お見舞いしようよ！」シャルちゃんがわたしの前にまで来て、右手を差し出した。

「・・・・うんっ。行こう！」

そんなシャルちゃんの右手を取って、わたしは強く頷き返した。そんでわたしらはトランスポーターを使って、本局の第零技術部――通称、スカラボへと直通転送。そこで「やぁ、こんにちは」スカラボの主、ジェイル・スカリエッティ少将（愛称はドクターで、みんなそう呼んでる）と、「いらっしゃい」スカリエッティ家の五女、チンクからのお出迎えを受けた。わたしらは「こんにちは！」そう挨拶を返して、すぐにここを出て行こうとした時・・・

「あ、そうだ。ねえ、ドクター。昨夜、ルシルとアイリ、ここに来なかった？」

シャルちゃんがドクターにそう訊ねた。

「ん？　昨夜・・・、こちらで言うと早朝か。あぁ、来ていたようだよ。生憎と私は研究中だったこともあって顔を合わせてはいないが。確かチンクが応対していたようだが・・・」

「はい。2人とも多くの荷物を持っていましたから、トーレと共にその荷物を居住区の第3セクションにある第7局員寮へと運び入れる手伝いをしました」

「おや？　彼は居住区に引っ越しをしたのかい？」

「実は――」

シャルちゃんがドクターとチンクに事のあらましを伝えた。すると

「あぁ、だからか・・・」チンクがそう小さく唸った。

「だからって、何かあったん？」

「何かと言うほどでもないが・・・。寂しそうな顔をしていたと思ってな」

寂しそう・・・か。それやったらなんで出てったんやろ。置手紙の内容からして自分の意思で出て行ったことはおそらく間違いない。でも、全部が全部ルシル君の決めたことなんやろか。何か陰謀的な・・・。そう、リアンシェルトが何かルシル君に言うたんかもしれへん。

「まぁとにかく。ルシルとアイリは今日1日、家財道具を買いに行くと言っていたから、第3セクションの家具店を捜せば逢えると思うぞ。行ってみると良い」

チンクから有力な情報を得られた。わたしは「おおきにありがとうございます！」お礼して、みんなと一緒に居住区・第３セクションへと向かった。最初に目指すのは、ルシル君とアイリのこれからの住居である局員寮。

「ってゆうか、ケータイにも思念通話にも出ぇへんってどうゆうことや！？」

「あー、なんか避けられてるっぽいね・・・」

「逃げてるんでしょ、どうせ。あたし達の前から勝手に出て行ったことに後ろ暗いんでしょ」

一切の連絡が取れへん。なんかもう、こう・・・怒りがふつふつと沸いて来た。シャルちゃんから1発お見舞いしようって言われたけど、1発だけやと足りひんかも。

「ここが、ルシルの新しい住まいってわけだな」

目の前にそびえ立つんは２０階建てのマンション。エントランスに入ると「あー、君たち、待ちなさい」管理人室からわたしらを制止する若い女性の声が。わたしは管理人室の窓口に行って、「こんにちは」と管理人のお姉さんに挨拶した後・・・

「わたし、特別技能捜査課所属、八神はやて准陸尉いいます」

局員ＩＤを提示しながら身分を明かす。すると「あ！　チーム海鳴

の！　よく見れば、後ろの方たちみんなチーム海鳴の！」管理人さんのテンションが急激に高なった。そんで「あの、サインとか貰って良いかな！？」管理人室の奥に引っ込んで行きそうやったのを「あの！」呼び止める。

「あの、ここにルシリオン・セインテスト二等空士、アイリ・セインテスト三等空士が入寮したらしいんですけど・・・」

一応確認を取る。ここにルシル君とアイリが入寮したことは、実際にここに荷物を運び入れたチンクから伺ってるけど、そやからと言って管理人さんをスルーして寮内に入ろうとすると通報されそうや。

「あ、あぁ・・・。あ、その、プライバシーの問題でそう言った話はちょっと・・・」

『このリアクションで、アイツがここの寮に居ることを認めてるもんだよな』

『ちょっと抜けてる管理人よね』

ヴィータとシャルちゃんからの思念通話に、『あはは・・・』わたしと、『にゃはは・・・』なのはちゃんが苦笑する。それでもきちんと仕事してる管理人さんの職務妨害するわけにはいかへんし、「お邪魔しました」寮のエントランスから出る。サインが欲しそうな顔してたけど、今はルシル君とアイリを捜す方が先や。

「さてと。これからどうする？」

「ここで待ってれば、外出なり帰宅なりで逢えそうだけど・・・」

「でもさ、ここでみんな揃って待つって言うのも・・・」

「時間の無駄っぽいよね」

「チンクさんの言ってたように、家具店を捜し回ってみる？」

「それも非効率な気がするわね」

「それじゃあ二手に別れましょ。ここで待つ班と捜しに行く班。ルシル君とアイリちゃんを発見したら即連絡」

とゆうわけで、シャマルの提案を採用したらわたしらは、寮の前にシグナムとザフィーラを残して、他のわたしらは第3セクションにある家具店の2店へ。

「わたしとヴィータとシャマルとリイン、そんでシャルちゃん」

「私とアリサちゃんとすずかちゃんとフェイトちゃんとアリシアちゃん」

さらにこの2班に分かれての捜索や。居住区を走るバスに乗る。そんで目的の家具店に近いバス停で降りて、4車線ある道路の歩道を歩いてると、「ルシル君、アイリ・・・！」の姿を見つけた。2人は反対側の歩道を歩いてる。

「シグナムやなのはちゃん達に知らせます」

「背後に回ろう。いきなり現れて驚かせてあげる」

シャマルが念話でシグナム達に伝えてくれた。ニッヒッヒ、ってイタズラっ子のような笑い方をするシャルちゃん。そうゆうわけで、わたしらはルシル君とアイリの背後を取るために行動開始。ルシル君の気配察知能力は尋常やないから難しいけど、今はもうどうにかしてルシル君を懲らしめたいからやる！　それにしても・・・

『ルシル君とアイリちゃん。楽しそうにお喋りしてる・・・』

『あたしらにここまで混乱させておいて・・・』

『なんか、すごいイライラするです・・・』

『うん・・・。悲しんでた自分がアホらしなってきた・・・』

『・・・なんかもう、驚かせるのも手緩い。この鬱憤を・・・！』

――閃駆――

両脚を魔力で強化したシャルちゃんが、前方を行くルシル君とアイリに向かって突撃。止める間もなくシャルちゃんは「おらぁぁぁぁぁっ！」閃駆の速度を保ったままでの飛び蹴りを、「ぐはぁっ！？」ルシル君の背中に食らわせた。

「ひゃぁぁぁぁ！？　マイスターー！？」

文字通り吹っ飛んだルシル君の様子にアイリが悲鳴を上げる。そんで蹴りを繰り出したのがシャルちゃん、その後ろにわたしらが居ることを視認して、「あ、はやて達だ♪」満面の笑顔を浮かべて手を振った。

「はやて・・・！？　それにシャル、ヴィータ達も・・・！」

起き上がったルシル君がわたしらの姿に目を丸くしてる。シャルちゃんが「言いたいことがいろいろあるけど、まずははやてから！」わたしに振り向いた。

「はやて・・・」

「ルシル君」

ルシル君の目の前にまで歩いて行って「っ！」振りかぶった右手で、「っつ！」パァンとルシル君の頬に平手打ち。ルシル君は僅かにフラついて、「すまない」謝った。

「手紙1枚だけ残して！　なんの相談も無く勝手に出てかれて！　辛かった！　泣いた！　そんで心配した！」

涙が溢れ出て来て、ルシル君たちの姿が滲む。両手で涙を拭ってると、ルシル君が「ごめん。配慮が足りなかった」わたしの頭を撫で

てくれた。

「なんで・・・？　何でこんな急に、勝手に・・・わたしらの家を出てったん・・・！？　手紙に、わたしはもう孤独やないから、ルシル君が居らんくなっても平気って書いてたけど、そんなわけない・・・！　ルシル君が最初なんよ・・・！　わたしの孤独を埋めてくれたんは・・・！　ずっと側に居ってくれて、それが当たり前で、ずっと続いてほしかった・・・！」

ルシル君にしがみ付いて、その胸に顔を埋めて問う。いろんな理由を考えた。リアンシェルトが何かしたんやないか、それともわたしに問題があったんやないか、となればわたしの告白が問題かもしれへん、とか。

「うん・・・」

「理由はなんなんかな・・・？　わたしにあるんやったら言うてほしい・・・」

「ある意味、はやてが理由であり、俺自身にもある」

ルシル君がそう答えたら、「はあ！？　はやてになんの問題があるっつうんだよ！」ヴィータと、「どういう理由です！？」リインが怒りを露わにした。わたしは顔を上げて「わたしとルシル君に・・・？」って小首を傾げる。

「あー、いや。俺自身への問題が大きいかも、な」

「で？　その理由って何？　納得できないものだったら、強制的にはやての家に連れ帰るよ？」

ルシル君はそっぽを向いて、コホンと咳払いを1回。

「・・・その、なんだ。はやてももう中学生になる。これまで以上に多感な時期に入るだろう。それに、女の子として心身ともにいろいろと大変になるだろうし。そこに男子が一緒に暮らすとなると、お互いが気遣うことになる。ほら、あれだ。卒業式の朝、アリシアが言っていたように、綺麗に成長して行くはやてに緊張するのもある・・・。ああもう！　はやてとドギマギした関係になりたくないから、はやての家を出て入寮することを決めたんだ！」

顔を赤くして、恥ずかしそうにその理由を教えてくれたルシル君。わたしも顔が熱くなるんを自覚する。嬉しいやら恥ずかしいやらで頭の中がぐるぐるや。嫌われたわけやなかった。わたしのことを案じてくれて、その上わたしをちゃんと1人の女の子として意識してくれてる。それがホンマに嬉しい。

「・・・ノロケかよ！　居なくなった理由、ノロケかぁぁぁ～～～～～い！！」

シャルちゃんが大声で叫んで頭を掻き乱した。ヴィータとリインの怒りも完全に沈下してて、「あらあら♪」シャマルは微笑ましそうにわたしらを眺めてる。

それからすずかちゃん達とも合流して、ルシル君は「申し訳なかっ

た！」深々とみんなにも謝罪した。

・―・―終わり！・―・―・

嬉しい理由やったけど、翌日からはさんざんやった。なかなか連絡も取れへんし、逢うことも出来ひんくなったし。そやから久しぶりに逢うたびに、ルシル君を怒ってる気がする。嫌われたないけど、こればっかりは乙女心を尊重してほしい。

「はぁ・・・。なんか叫んだらスッキリしたかも・・・」

「それは良かったね、イリス。ほら、ササッと書類を片付けるよ」

「うぃー」

シャルちゃんとルミナがデスクワークを再開したから、「よしっ。わたしらもササっと片付けよか、リイン」わたしも、わたし用のデスクに着いて、今回担当した事件の報告書の作成に入る。リインも、わたしのデスクの上に設けられた特製の小さなデスクに着いて、「はいですよっ！」システムを立ち上げた。わたしもシステムを立ち上げて、キーボードを叩いて報告書を書いてく。

「あ、シャルさん。言い忘れてたですけど、さっきミッドの次元港でルシル君と逢ったですよ」

作業を始めて数分。リインが思い出したようにシャルちゃんに報告したら、「なんですと！？」シャルちゃんが勢いよく立ち上がった。

報せるのすっかり忘れてた。別に隠そうとしたわけないよ？

「わたしなんてこの半年、モニター越しの通信でしか話せてないのに～！」

そんでうがーっと唸った。わたしかて直接逢って話すんなんて3ヵ月ぶりやった。ルシル君と逢えたことがどれだけ嬉しかったか。そやからシャルちゃんの気持ちも痛いほどに解る。

「あー、そう言えばルシルって全然このオフィスに来てないか～。ガアプ課長。ルシルって特捜課を辞めたんでしたっけ？」

「いいえ。彼の本籍は確かに内務調査部に変更されたけど、特捜課の一員であることには変わりないわ。まぁ、向こうの仕事が忙し過ぎている所為で、なかなかこちらの仕事に来られないけど」

なかなかって言うても、もう1年もこっちの仕事をしてへん。その分、内務調査部の新進気鋭のエリートやって、チーム海鳴のメンバーってゆうネームバリューも相まって本局でも色んな意味で有名人になってる。

（今や、完璧に、見逃すことなく、騙されることなく、不正を暴いて相手を弾劾、そんで徹底的に、逃れようなく、不正した人や組織を有罪にすることから慈悲無き粛清者・・・パージマシーンって呼ばれてる）

ホンマに嫌な二つ名や。マシーンなんて。ルシル君は確かに最近は

冷たいけど、それでも優しい男の子や。それやのに・・・。

「もう！　もう！　直接逢～いた～い～っ！　さ～わ～りた～い～っ！」

「イリス～。しっかり仕事して～」

座ってる椅子をクルクル回すシャルちゃんと、淡々と作業する呆れ口調のルミナ。わたしは、「オフィスでデスクワークって言うてたから、オフィス前で待ってたら逢えるかもしれへん」って、最大のライバルであるシャルちゃんに伝えた。

「ホントに！？」

「わたしとリインの乗って来た便の1つ前やったし、たぶんまだ調査部オフィスに居ると思う」

「よっしゃぁぁぁぁーーーー！」

テンションうなぎ登りのシャルちゃんやけど「仕事。やる。絶対」ルミナがジロリと見て、一刻も早く仕事を終わらせるように言う。シャルちゃんは「おらおらおらぁぁぁ！」ってものすごい勢いで書類作成を再開。そんで・・・

「確認お願いします！！」

データディスクをガアプ課長に提出した。その速さにガアプ課長は

苦笑しつつ、提出されたデータディスクに収められた報告書を確認して、「はい。御苦労さま」ニコッて微笑んだ。

「お疲れ様でした！　ルミナ、はやて、リイン、お疲れ！」

「お、おぉ・・・おつ～」

「お疲れ様、シャルちゃん」

「お疲れ様ですぅ～」

風のようにオフィスを出てったシャルちゃんを、わたしらは見送った。とそこで「はやては急がなくていいの？」ルミナからそう訊かれた。

「あ、うん。来週、ルシル君がわたしの家に遊びに来てくれるんよ」

「あれ？　じゃあイリスって別に今日慌てて逢いに行かなくても、来週逢えるってこと？」

「そう・・・やね、うん」

泊まって行ってくれるかは判らへんけど、海鳴市に戻って来ることは確かやから、その日まで待てばシャルちゃんもルシル君と逢えると思う。

「ぷふっ」「ぷはっ」

「「あはははは！」」

さっきのシャルちゃんの必死過ぎる様子を思い出すと、悪いんやけどなんや笑い始めてしもうた。心の中で、ごめんな、って謝りながら「あー、楽しみやなぁ来週♪」ルシル君とゆっくり話せるやろうその日をひたすら待ち望んだ。

Ｅｉｐｉｃｌ－Ｃ移ろいゆく季節～Ｓｉｅ　ｉｓｔ　ｅｉｎ　Ｒｉｔｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「ルシルに逢える・・・！」

本局の廊下をひたすら走る。

「ルシルに逢える・・・！」

目指すのは、内務調査部のオフィス。

「待ってろよぉ～・・・！」

目的は、ルシルと顔を直接合わせること。ルシルがはやての家、ひいては海鳴市から出て本局の局員寮に入ってから1年。しかも聖祥中学校への進学も取りやめ、正局員に昇格したことで本格的に仕事量が跳ね上がった。

その所為でわたしやはやて達はみんな、ルシルと直接顔を合わせる時間が急激に少なくなった。しかも本籍が内務調査部に移ったこともあり、特別技能捜査課のオフィスに来ることも少なくなったから、わたしなんて全然逢えてない。

（だけど今！　ルシルは内務調査部のオフィスに居る！　このチャンスを逃したら、次いつ逢えるのか判んない！）

そういうわけで、わたしは全力でルシルの元へと走っているわけなのです。そんな急いでる最中に「イリス！」呼び止められた。どこの誰、このトンデモなく忙しいわたしを呼び止めちゃう愚か者は？って、超絶不機嫌になる。

「あ〝ぁ？」

相手を誰とも確認せずにやっていい返事じゃないけど、それほどまでに今のわたしは急いでいるの。解ってよ、もう。んで、わたしを呼び止めてたのは「こわい・・・」って若干引いてる、わたしやルミナ、カローラ姉妹のように管理局と聖王教会騎士団の両方に籍を置く、二足の草鞋騎士の1人の「クラリス・・・？」だった。

「そんなにイラついてどうしたの？　あ、あー、ひょっとしてあの日？　私もキツイ日はついイライラしちゃ――」

真っ白なセミロングの髪をいじりながら、恥じらいつつもそんなアホなことを言い出すクラリスに「ちがーう！」全力で否定する。クラリスの口を両手で塞いで「発言するなら場所を考えて！」注意する。周囲には男性局員だって居るんだから。恥ずかしそうにするんなら、少しは場所を考えてほしいよ、まったく。

「ぷはっ。・・・ジョーク、ジョーク、ガールズジョーク♪」

「あの日をジョークにするような奴は同性であろうと許さん」

「許さんって。呼び止めたのが私じゃなかったらどうしてたの？たとえば上官とか目上の人だったりとかしたら。それこそイリスの方が許されなかったよ？」

「その時はひたすら頭を下げて謝るよ」

そう苦笑してると「ところでイリス」クラリスが話題を変えた。急いでいる中でこれ以上は留まってられない。というわけで「話はまた後で！」踵を返し、そして走り去ろうとしたんだけど、「来週の昇格試験！」その前に話の内容を聞いちゃった。足を止めて、クラリスへと向き直る。

「イリスも出るよね・・・？　約束したから・・・出るんだよね・・・」

クラリスの言う昇格試験は、管理局内でのものじゃない。教会騎士団内での試験のことだ。騎士団にも昇進や昇格試験がある。普通に見習い騎士、そして見習いを終えて各部隊に正式に所属。これはわたしもクラリスも、ルミナやフィレス、セレス達だって通った道だ。んで、ここから進路が２つに分かれるわけだ。１つは班長→分隊長→隊長と、騎士隊内の役職を上げる昇進試験。１班５人を束ねる班長、５班２５人を束ねる分隊長、１部隊５０人を束ねる隊長、みたいに。そしてもう１つが・・・

「約束・・・」

「え？　まさか、忘れてないよね・・・？」

「あ、ううん、もちろん憶えてるよ、当たり前じゃん」

「私、イリス、トリシュ、アンジェリエ、この４人で、先になっちゃったルミナのようにパラディンになろう」

「うん。わたしがシュベーアトパラディン、クラリスはレイターパラディン、トリシュはボーゲンパラディン、アンジェはシュラーゲンパラディン。４人で強くなろうって約束は、一度も忘れてないよ」

「そのための昇格試験。受けるよね・・・？」

パラディンになるための昇格試験だ。教会騎士団に所属する騎士にはそれぞれ騎種とクラスがある。わたしの騎種は剣騎士、クラスはＡ。クラリスは騎乗騎士のＡ、トリシュは弓騎士のＡ、アンジェリエは打撃騎士のＢ。パラディンになるには、騎種別に試合をして勝ち数を上げて行って、騎種別でのクラス１位になるのが前提条件。最終的に騎種別の頂点に立つＳクラスであるパラディンと決闘して、勝てば晴れて当代のパラディンと交代となる。

「・・・うん。受けるよ。みんなと語り合った夢だからね」

「そっか。イリス、この５年ですごく強くなったから、きっと今回の試験でＡクラスのトップ３になれるよ」

「そのつもり。すぐにみんなに追いついてやるんだから」

わたしは今、Ａクラスの４位。剣を使う騎士が多いせいでその倍率が馬鹿みたいに高い。あと上位３人にしっかり勝たないと１位にはなれないし、下から上がって来る剣騎士にも注意しないと。ちなみに、クラリスとトリシュ３位。アンジェリエはＢの１位。わたしとアンジェは１歩遅れを取ってる。
でも問題は順位じゃなく、最終的なターゲットであるＳクラスが大問題。現在のシュベーアトパラディンであるプラダマンテがクソ強い所為で、ここ１５年の間、パラディンの中で唯一メンバー変更が行われてない。

「その意気！　じゃあ、また来週に！」

「うん、また来週！」

クラリスと別れてすぐに「あ・・・」ハッとした。改めて廊下を全力疾走。内務調査部はその扱う仕事の内容ゆえの機密の多さから、本局の上層階にそのオフィスを構えてる。行くにはエレベーターを利用しないといけない。
急いてエレベーターに乗って、「早く、早く、早く！」握り拳を作った両手を胸の前で振る。そして、ポォン♪到着を知らせる音が鳴って、扉が開く。完全に扉が開き切る前にダッシュして飛び出す。エレベーターホールを突っ切って、廊下に出ようとした時・・・

「おや？　イリス！　イリスじゃないか！」

「？？　あ、ロッサ・・・！」

古くからの知人であるヴェロッサ・アコースが、ものっすごい笑顔になってわたしの名前を呼んだ。エレベーターホールとその先のオフィス区画へと繋がる廊下、その境目の両側に設けられてる休憩スペースの一画に、ロッサが居た。ロッサも内務調査部の査察課に所属する査察官だ。でも服装は局の制服じゃなくて自前のフォーマルスーツ。

「なかなかザンクト・オルフェンに帰って来ないじゃないか！」

「わっ！？　もう！　人目のあるところで抱き付かないでよぉ～！　むぅ～！」

ロッサがわたしをハグしながら頭を撫でてきた。休憩スペースにはロッサのようにスーツ姿の男女の局員や、制服姿の男女の局員が居て、わたしとロッサの様子を微笑ましく眺めてる。

「もう、もう！　わたし、13歳になったんだよ！　恥ずかしいからや～め～て～よ～！」

「あはは！　いいじゃないか！　知らない仲じゃないんだ、恥ずかしがることないだろ？」

ロッサとは物心つく前からの知り合いと言うか友達だから、以前までは抱きつかれても大して気にも留めなかったけど、今はもう多感な時期なんだからあんまりくっ付かないでほしい。あ、でもルシルなら許すけどね。

「ダ～メ！　今日から無暗矢鱈に過剰なスキンシップするの禁止！
わたし、いつまでも子供じゃないんだよ。心身ともに成長してレディになってくんだから、それなりに気を遣ってほしいの！」

プンスカ怒りながらロッサの胸を両手で叩くと、「はいはい♪」ロッサはあくまでわたしを子供扱いしたいみたいで、わたしを解放した後も頭を撫でてくる。もぅ・・・。

「しかしイリス。こんな上層階に何の用だい？　ここから先のフロアは尉官以上の局員か特定の役職に就いてないと入れないよ？」

「判ってる。ちょっと人を捜しに来たの。ルシルなんだけど、ミッドからオフィスに戻って来てるって聞いたから・・・」

「ルシル？　僕は今日はずっと査察課のオフィスに居たけど、彼を見掛けていないなぁ～」

「ということは、監察課か監査課のどっちか・・・？」

小首を傾げてると、ロッサとさっきまで話してたらしい５０歳くらいの男性局員（階級章からして三佐だ）が「ルシリオンは監査課には来ていないぞ」そう教えてくれた。

「そうなんですか？　ブラウン監査官」

「うむ」

「それじゃあ監察課・・・？」

「少し待っていなさい、お嬢さん。おーい、デヴィット！」

ブラウン監査官が反対側の休憩スペースでお茶を嗜んでる、同様に５０歳くらいのおじさん局員――デヴィットさんを呼んだ。するとデヴィットさんが「なんだい？　アストン！」こちらの休憩スペースにまで来てくれた。階級章はこれまた三佐だ。

「今日、監査課にルシリオン君は来たかい？」

「ルシリオン君？　いいや。今日１日オフィスに居たが、彼は来ていないぞ」

「どういうこと・・・？」

査察課・監察課・監査課、内務調査部のどれのオフィスにもルシルは行ってない。でもはやては、ルシルは仕事で報告書を書くって言ってたよね。

（あれ？　ひょっとしてわたしって騙されたわけ？　いや、さすがにはやてがそんな嘘を吐くなんて思えない・・・）

いくら恋のライバルでも、ルシルの事については嘘は吐かないってお互いに信頼してる。じゃあルシルはどこのオフィスで仕事をしてるんだろう。ルシルが所属してるのって特捜課と内務調査部だけのはず。

「まさか・・・わたし達の知らないうちにまた別の仕事とかやってたりする・・・？」

今のルシルってホントに謎が多過ぎて、何かを隠してたりしてても気付けないのが今のチーム海鳴の現状だ。推測の1つとして、ルシルならどこに配属されるかを顎に手を添えて考える。そんなわたしに「イリス。今晩、食事でもどうだい？　出来れば2人きりで・・・」ロッサが何か言ってるけど、今は頭の片隅に置いておく。

「じゃ、じゃあカリムと一緒でいいかい？　さすがにシャッハとはちょっとだけどね・・・？」

「あー、今日は久々に実家に帰るから、ごめんね～」

「そ、そうかい・・・。また誘わせてもらうよ・・・とほほ」

ガックリ肩を落とすロッサ。ご飯くらい断ったくらいでそこまでヘコむことないのに。そんなロッサに「未成年へのチョメチョメはいかんぞ？　ヴェロッサ君」ブラウン監査官と、「せめて成人になってからだぞ」デヴィット監察官が、なんか耳打ちしながらロッサの肩を叩いた。

「？？・・・まぁいいや。ルシルが居ないならしょうがない・・・。じゃあロッサ。またね。ブラウン監査官、デヴィット監察官、ありがとうございました」

ロッサの誘いを断り、２人の監査官と監察官に敬礼したわたしは、トボトボとエレベーターへ向かう。そしてエレベーターが来るのを待っていると、「お嬢ちゃん！」ブラウン監査官がわたしを呼んだ。振り向いたら・・・

「ルシリオン君の目撃情報だ！　医務局に行ってみると良い！　３分前だから、急げば会えると思うぞ！」

嬉しい情報を教えてくれた。わたしは「ありがとうございます！」頭を勢いよく下げてお礼。そして開いたエレベーターに乗り込んで、医務局のある階のボタンを押す。それにしても医務局なんて。どっか怪我でもしたのかな。はやてやリインからはそんな話、出てなかったけど・・・。とにかく、医務局へ行けばいいんだ。

「んで、来てみたは良いけど・・・」

さぁ、どこから捜そうか。ううん、行き違いにならないように入り口で待ってる方が得策かも。あー、でももしすでに用を終えて居なくなってたりでもしたら・・・。うんうん唸りながら右往左往してると「あら？　シャルちゃん？」名前を呼ばれた。

「シャマル先生！　それにティファ・・・！」

チーム海鳴の１人であり、はやての家族で騎士である八神シャマル先生と、医務官でありわたしの元お付きだった騎士であるティファレト――ティファが「久しぶり、お嬢」寝癖で乱れた青い髪を手櫛で治しながら挨拶した。

「どうしたの？　シャルちゃん。怪我・・・ってわけじゃなさそうだし、体調不良かしら？」

「あ、えっと、ルシルを捜してて・・・」

「ルシル君がここへ？　私は見てないけど・・・」

「あ、私は見ました」

シャマル先生は見てなかったけど、ティファはルシルを見ていた。だから「どこ！？」ルシルが今どこに居るのかを訊ねてみたら、「入院病棟区画に向かうのを見ました」ティファは、その区画へ続く廊下を指差した。ルシル。入院病棟区画。この２つで、誰に会いに行ったのかすぐに判った。

「そっか。ありがとう、ティファ。シャマル先生も」

「ううん。あ、ルシル君によろしくね」

「お嬢。一度は家に帰った方が良い。リヒャルト司祭、寂しいって泣いて――・・・あ、ううん、なんでもない」

自分の口を両手で塞いだティファ。もう遅いよ、聞いちゃったよ父様、わたしが帰って来ないからって泣いてるんだ。通信だといつも険しい顔で、厳しいこと言ってくるのに。へぇ～。ニヤニヤするのが止められない。けど今はそんな場合じゃない。

「あ、わたし行くね！」

ティファやシャマル先生と別れて、入院病棟へと早足で向かう。ルシルはきっと、あの人の病室に行ってる。そして「やっぱり・・・・」ルシルがある病室から出てきたのを見た。わたしは「ルシル・・・・！」大声を出さないように、でもルシルに聞こえるようにした声量で呼んだ。

「シャル・・・・！？」

ビクッとしたルシル。やっぱりチーム海鳴の誰かと逢うのを避けてるみたい。ま、避けられても逢いに行くのがわたし達だけどね。ルシルは観念したように「こうして顔を合わせるのは久しぶりだな」そう言って微笑んだ。

「そう思うなら、もう少し直接逢おうって行動を取ってほしいものだよ」

「すまない。普通に忙しいんだよ、調査部って。管理世界が増えるたび、新しく作られる陸士部隊や地上本部の各部署の査察を行わないといけない。明らかに人手が足りないんだよ」

そんな愚痴をもらしつつ首をコキコキ鳴らしたルシルは、「ま、与えられた役目だ。全うしないとな」そう言って、病室の扉を見た。その病室は個室で、扉脇の名札には、ゼスト・グランガイツ、って記されてる。

「騎士ゼスト・・・」

父様の友人でもあり、わたしの剣技を鍛える模擬戦の相手として何度も力を貸してくれた騎士。騎士ゼストは、あの事件から今日までずっと意識を取り戻さない。怪我の方はもう完治してる。けど目覚めない。その理由として、担当医の話だと精神的な問題だっていうことみたい。目覚めたくないから目覚めない、とのこと。

「やっぱりまだ・・・？」

「ああ。一向に目覚める気配がないとのことだ。・・・意識不明者を強制的に目覚めさせるなんて、魔法でも魔術でも存在しないからな。グランガイツ一尉の意思を信じるしかない・・・」

ルシルが改めて病室に入って行くから、わたしも続いて入る。目の前のベッドに横たわる騎士ゼストは、普通に眠っているかのような顔で、声を掛ければ起きそうなものなのに。この一般入院病棟に移されてから、わたしや父様、教会騎士団の関係者も度々お見舞いに来てる。そのたびに思う。すぐに目覚めてくれるって。だけど・・・。

「お久しぶりです、騎士ゼスト。イリスです。・・・騎士ゼスト。あなたはまだリタイアするには早いですよ。まだ、何も終わってないです。休むのは、部下の仇を捕まえてからでも遅くはないです」

「仇を捕まえる、か。仇討ちじゃないんだな・・・」

ルシルがポツリと言った。そんなルシルに、わたしは自分の考えを伝えてみる。

「どれだけ理不尽に、不条理に大切な人を奪われちゃっても、局員である以上は、ううん、人である以上は、やっぱり被疑者を殺害することは絶対に許されないって思う。たとえどんな理由があっても、人殺しだけはダメなんだ。法によって裁いて罪を償わせる。それが、わたし達の仕事だよ」

人殺しだけはやっちゃダメ。どれだけ辛くても、ソイツを殺すことで自分も罪に染まるのは悲しいことだって。それに、殺して楽にするより、何年、何十年って時間を掛けてじっくりと罪を償わせてやる方が良いって思う。

「そうか・・・」

「うん。そうだよ」

それっきり黙るルシルに「変な気を起しちゃダメだからね」釘を刺しておく。ルシルには、殺したいほどに憎んでる相手――プライソンが居る。首都防衛隊とルシルは、アイツのアジトに潜入捜査をして、そして迎撃された。

騎士ゼストは今なお意識不明、クイント准陸尉は殉職、メガーヌ准陸尉はＭＩＡだけど、実質殉職扱い。他の隊員もみんな殉職してる。ルシルには動機がある。ここまでされて、ルシルはプライソンをただ捕まえるだけに留めるだろうか。

（ううん。ルシルならきっと大丈夫。信じよう。ルシルを・・・）

「・・・俺がレーゼフェアとフィヨルツェンを早く撃破していれば・・・・！」

ルシルはあの日の事を今でも強く後悔して、自分を責め立てている。その負い目が晴れるのは、プライソンを逮捕できた時だけ、だと思う。申し訳なさそうに頭を下げてるルシルの頭を、「よしよし」わたしはそう言って撫でた。

「・・・なあ。俺、よしよし、なんて言われて頭を撫でられるほどもう子供じゃないぞ？」

「誕生日的には一番下じゃん。それに、頭を撫でるのはルシルの専売特許じゃないよ」

ふわふわでありながらもサラサラなルシルの髪を撫で続ける。やっと、ようやくルシルと逢えて、触れることが出来た。わたしは満足なのだ。ううん、ここで満足するのは二流だ。騎士ゼストに「また来ます」お辞儀したわたしは、ルシルの手を引いて病室を出て医務局の出口へ向かう。

「ねえ、ルシル」

「ん？」

「今日さ、わたし実家に一度帰るんだけど、夕ご飯一緒しない？」

ルシルを家に、夕ご飯に誘ってみる。でもどうせ「悪い。アイリが寮で待っていると思うから」ほら、断られた。けどここで引き下がるほどわたしは素直じゃないよ。チーム海鳴のメンバーの1人である「あ、ヴィータ？　シャルだけど」に通信を繋げる。

『おう。なんか用か？』

「うん。あのさ、今日さ、アイリを八神家に連れてく予定とかってある？」

『いんや、ねぇけど。あ、でもそれもアリか。最近、連れ帰ってねぇし』

「そっか。ルシルは今日わたしの実家に寄るからさ。アイリはそっちでお願い出来ない？」

ルシルが帰る理由であるアイリをどうにかさえすれば、ルシルも断る理由が1つ減る。ルシルが、断ったはずだぞ、って視線を向けてくる。わたしが応じないと、「またな」そう言ってすたすた帰ろうとするから、「ちょい待ち」襟首をガシッと掴んで引き止めた。

「かはっ・・・！」

「あ、ごめん」

『はあ？　ルシルもこっちに来れば良いじゃねぇかよ。つうか、アイツ全然帰ってこねぇし！　マジなんなんだよ』

わたしからの提案に、ルシルに対して不機嫌そうに鼻を鳴らすヴィータ。チラッとルシルを見ると、すまなさそうに顔を伏せてた。今ルシルをモニターに映させると、ヴィータはどんなリアクションを取るだろう。ちょっと気になるけど、や～らない。

「ルシルには個人的にお願いがあるんだよね。来週、教会騎士団内で昇格試験があるの。わたしの夢、パラディンになるために重要な試験が。ルシルにはそのための模擬戦の相手になってもらおうかなって」

半分本音で、半分建前な理由を伝える。わたしの夢についてはチーム海鳴のみんなは知ってる。だからヴィータも『あぁ、そうなんか。そんじゃあ仕方ねぇか』って納得してくれた。みんな、わたしがパラディンになるって夢を応援してくれてるから。

「ごめんね。アイリのこと」

『気にすんなよ。てか、しっかり気張れよ。ぜってぇ勝て！』

「おうよ♪」

ヴィータと一緒に親指をグッと立て合ってニッと笑う。通信とモニターを切って、「そういうわけだからさ・・・ダメ？」ルシルに向かって手を合わせてウィンク。ルシルは少し考え込んだ後・・・

「はぁ。・・・そういう理由なら、お呼ばれさせてもらうよ。しかし夜更けに模擬戦なんて、いいのか？　明日、仕事は無いのか？」

「うん、明日は休みなんだよ。だからルシルも今日は――」

ＯＫしてくれた。で、すぐにそう訊いてきたから、だから今日は泊まってって、そう言おうとしたんだけど「あ、ルシルって明日・・・！」ルシルの明日の予定を確認し忘れてた。もし明日、ルシルが普通に朝から仕事だったら全ての予定が総崩れだ。

「俺も休みだ」

「じゃあ、泊まってってよ！　母様も、一度ルシルと顔を合わせてみたいって言ってたし♪」

「・・・・」

「お呼ばれするよ、そう言ったからには今さら無しなんて言わないでよ？」

ルシルの右の袖を摘んで逃がさないようにする。ジッとルシルを見詰めること数秒。ようやく口を開いたルシルは「じゃあ、お世話になるよ」ＯＫしてくれた。やった、って喜びそうになったけど、未だにここは医務局内。大声を出すのはマナー違反だ。そして、出たところで「よっしゃー！」ガーツポーズ。

「早く、早く！　次元港へゴーゴー！」

「あ、おい！」

ルシルの手を引いて、本局の次元航行船の発着場である次元港へ駆ける。その最中に、「プリアムス？　今日、友達1人を泊めるから、夕食1人分追加よろしく♪」フライハイト家の女中長、プリアムスに連絡しておく。

『お1人分でよろしいのですね。判りました。客室のご用意もしておきますね』

「ん、お願いね」

これでルシルの食事の件は心配なくなったから、いつ帰っても大丈夫だ。それからわたしとルシルは、ミッド北部の次元港行きの船に乗り込んだ。そして次元港に到着した後は、レールウェイを乗り継いでベルカ自治領ザンクト・オルフェン近くまで行って、バスで中央部アヴァロンと北部カムランの境界近くにあるフライハイト邸へ。

「実家だって言うのに久しぶりに帰って来たかも・・・」

目の前にそびえ立つ城――わたしの家を眺める。中学に進学してから一度制服姿を見せに帰って、父様や母様の誕生日の時にも帰ってるとは言え、もう4ヵ月近くは帰ってないかな。

「家族が居るんだ。ちゃんと大事にしないとバチが当たるぞ」

家族を亡くしてるルシルのその言葉には重みがある。だから素直に「ん。そうだよね・・・」頷いた。とにかく門の脇にあるインターホン代わりのタッチパネルに触れると、門の向こう側――家の方から、リィンゴォ～ン♪って鐘の音が鳴った。

毎度思うけど、これって結構な騒音なんだよね。ご近所さんからの苦情は今のところないけど、わたしがこの家の当主になった暁にはもう少し小さめの音に変えようかな、って思ってる。

『はい』

門扉にモニターが展開されて、「あ、プリアムス！　ただいま！」映るプリアムスに向かって小さく手を振って挨拶。

『お帰りなさいませ、イリスお嬢様。ただいま門をお開けします』

お辞儀したプリアムスの映るモニターが消えて、すぐに門扉が左右に開いた。わたしは「たっだいま～！」門を潜って、「お邪魔します」ルシルは小さくお辞儀してから門を潜った。家のエントランスまでの１００ｍっていう庭を通って、エントランスの両開きの扉の取っ手に手を掛けようとしたら、ガチャッ！と勢いよく先に開いた。

「い〝っ！？・・・づっ・・・う、く・・・おうふ・・・」

うちの玄関扉、外に向かって開くタイプの物だから、取っ手に目をやっていたことで俯いてたわたしの額に扉がゴチッ☆と当たるわけで。両手で額を押さえながらよろよろ後退。

「大丈夫か？　見せてみろ」

ルシルがそう心配してくれて、しかもそれだけじゃなくて顔を近づけてわたしの額に傷が出来てないか診てくれた。あぁ、幸せ。誰が扉を開けたのか判らないし、よくもやりやがったな、ってちょこっと頭にキてたけど、今のこの時間の為だと思えばグッジョブだって言おう。

んで、わたしに扉をぶつけたと判ったのか開けた張本人は一度扉を閉めて、今度はそぉ～っと扉を開けて、隙間から顔を出した。そしてわたしが扉から離れているのを確認した張本人が「ごめんなさい、イリス！」飛び出して来て、わたしを抱きしめた。

「母様、く、苦しい・・・！」

扉を開けた張本人、その正体はどうやら母様だったらしい。ちょっぴり涙を浮かべてる母様が「可哀想に！　赤くなっちゃって！」赤くなってるらしいわたしの額を擦る。

「（ルシルが微笑ましくわたし達を眺めてる！）ちょっ、母様！　恥ずかしいから離れて！」

「母が子を抱きしめることの何が恥ずかしいものですか！」

「だ、だって・・・！」

わたしがルシルの方を見ると母様もつられてルシルの方を見て、「

まあ♪　まあまあ♪」ものすごい速さで私から離れてルシルにハグ。あのルシルですら「っ！？　え・・・？」その速さに目を丸くしてる。母様って一応先代のシュベーアトパラディンだし、わたしなんかよりずっと強い。

「君がルシリオン君ね！　いつもうちの娘がお世話になってます！　イリスの母、マリアンネです♪　娘ともどもよろしくね　」

「あー、いえ。こちらこそお世話になっていますので・・・。ルシリオン・セインテストです、よろしくお願いします・・・」

「なんか不思議な子ね～！　結構がっしりした体格なのに、女の子みたいで♪　抱き心地も良いわ～　」

ルシルの頭に頬ずりしたり、体をぺたぺた触りまくったりしてる母様。そして『パワフルなのは構わないけど、その・・・助けてくれ、シャル』念話でわたしに助けを求めてくるルシル。どちらの意思を尊重するか。選択肢は2つ。母様のやりたいままに見守るか、ルシルからの助けに応じるか。わたしは・・・

「もう！　母様！　ルシルが困ってるじゃない！　放してあげて！」

ルシルを選んだ。すると母様は「あら？　やきもち？　か～わい～♪」なんて、わたしをからかう始末。ここは下手に誤魔化すと要らぬ追撃を食らうから、「そう！　だから放して！」ルシルを抱きしめてる母様の右腕を両手で掴んで引き離そうとするけど・・・

「（むぅ・・・！　この馬鹿力ぁぁ～～～！）もぉぉ～～～！」

ビクともしない。わたしの力じゃ無理だ。母様が大人しくルシルを解放するのを待つしかない。そう思って『ごめん、ルシル』謝って、母様の右腕から両手を離した直後、「隙あり～♪」母様はわたしの肩に右腕を回して、ルシルと一緒にハグしてきた。

「っ！？」

すぐ目の前にルシルの綺麗な色と形をした唇が。ルシルは男の子だから、わたしやなのは達の身長を大きく引き離し始めてる。ちょっと前まではそんなに変わらなかったのにね。

（久しぶりにキスしたい・・・かも）

胸が高鳴る。頭の中がそれでいっぱいになる。母様の腕の中だけどちょっと背伸びしてみる。ルシルの唇と同じ高さにまで背伸びしたそんな時、「オホン！」エントランスの方から大きな咳払いが。

「マリアンネ、何をやっている・・・？」

「あら、あなた」「父様」

父様だった。ちょっと不機嫌ぽい。母様が両腕を広げたことでわたしとルシルは解放された。手櫛で乱れた髪や制服の乱れを直した後、「ただいま戻りました、父様」帰宅の挨拶をする。

「うむ。よく帰った、イリス」

あ、ちょっと機嫌が直った。そして「お久しぶりです、リヒャルト司祭。今晩はお世話になります」ルシルが挨拶すると、「う、うむ・・・」あ、またちょっと悪くなった。

『リヒャルトったら。男の子が泊まりに来るとは思ってなかったみたいで、かなり戸惑ってるわよ』

『あー、友達が泊まるってことしか言ってなかったから・・・』

『男親は娘が本当に大事だから、男の子と仲良くしてるだけで機嫌が悪くなるのよ。イリス、ルシリオン君の事が好きなんでしょ？プリアムスから聞いたわよ。彼を、夫にするって宣言していたこと。それを知ったらリヒャルト、きっと卒倒しちゃうわ♪』

『楽しそうだよね、母様・・・』

『だって楽しいんだもん♪　娘の恋バナほど燃える話は無いわよ！しかもライバルが2人も居るのでしょ？　えっと、チーム・ウミナリのハヤテ・ヤガミちゃんと、シュテルンベルクのトリシュタンちゃん。頑張ってね、イリス』

『もちろん！　ていうか、早くルシルと父様をどうにかしないと・・・！』

父様からのキツ目の視線を受けるルシルが可哀想になってきた。

「『そうね！』・・・ささ。いつまでも外に居ないで、家の内に入りましょう！　ルシリオン君、改めていらっしゃい！」

そうしてわたし達はエントランスホールに入って、「お帰りなさいませ、お嬢さま。いらっしゃいませ、ルシリオン様」女中たちから挨拶を受ける。わたしは、義理の姉にあたる双子のルーツィエとルーツィアに「夕ご飯まであとどれくらい？」って確認。

「「いつでもご用意できるよ」」

双子らしく声がハモる。でももう準備が出来てるんなら、今から模擬戦は出来ないか。しょうがないって諦めて、「父様たちは先にどうぞ。わたし、着替えてきます」父様たちに、先にダイニングへ行っていてくれるように伝えてから、わたしは自室へ。

そこで局の制服から普段着のワンピースに着替え、「お待たせしました」ダイニングに入って、すでにテーブル席に着いてる父様と母様、そしてルシルに挨拶。ダイニングテーブルは全長５ｍほどの長テーブルで、上座の両側に父様と母様が座ってるんだけど・・・

「ちょっと母様！　なんでルシルの隣に座ってるの！？」

母様のすぐ隣にルシルが座ってた。普通こういう場合、母様は父様の隣で、いま母様が座ってる席にわたしが着くべきじゃないの？

「だってぇ～」

「だってぇ～、じゃないよ！　母様は父様の隣！　で、わたしがルシルの隣！　それで良いじゃない！」

「イリスがこわ～い♪　うふふ～♪」

良い歳した母様が甘ったるい声でルシルの左肩に両手を置いてもたれ掛ったから、「もう、母様！」わたしはプンスカだよ。見てよ、母様。父様の機嫌が急降下だよ。それ以上のスキンシップは父様の胃にダメージが行くし、それに何よりルシルの心証が悪くなっちゃうよ。

「イリス。私の隣で良いじゃないか」

「嫌！　父様の隣じゃなくてルシルの隣が良いの！」

「っ！！　そ・・・そうか・・・。私の隣は嫌か・・・。これがかの有名な反抗期・・・」イジイジ

「こらぁ～、イリス。お父さん、へコんでいじけちゃったじゃないの～」

「元はと言えば、母様の所為だからね！」

今日1日でどれだけ怒鳴ればいいんだろ、わたし。とまぁ、そんなこんなで、わたしはルシルを家に招くことが出来たんだけど、もうストレスで胃が痛むよホント。ルシルにもなんかゴメンねって謝りたくなる晩餐だったけど、美味しかったし、楽しかったよ、って言

ってくれたことには最大限の感謝をしたいって思った。

「――それじゃあ、1戦、よろしくお願いします！」

「ああ！　行くぞ、シャル！」

そして、夕ご飯の後に2時間の休憩を挟んだわたしとルシルは、闘技場で模擬戦を行った。ていうかさ・・・

「頑張れ～！　ルシリオンく～ん！」

「ちょっ！　娘の応援をするべきじゃない！？」

母様には困ったものだよ。トホホ・・・。

Ｅｉｐｉｃｌ－Ｄ移ろいゆく季節～Ｔｈｅ　Ｒｏａｄ　ｔｏ　Ａｃｅ　ｏｆ　Ａｃｅｓ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

戦技教導隊。私が中学生になってからようやく入隊できることになった部署だ。教導隊の主な仕事は、局の技術部や一般の魔導端末メーカーの開発した魔導師の新型装備の試験運用、それに新しく組み立てられた戦闘技術の実践テスト。それらをさらに昇華させるための研究などなど。

「よし！　それじゃあ今日も張り切って行こう！」

他にも、訓練部隊との演習での仮想敵役や技能訓練。想定される敵の能力や陣形をシミュレーションしてのものだから、今までやってきた事や考えた事もない飛び方や戦い方することもあって、これが結構面白い。時折、チーム海鳴内での模擬戦（その頻度は小学校時に比べるとすごく少なくなったけど）でやると、意表を突くことが出来たりする。

（いつかシュテルとの試合の時、それに・・・ルシル君にも試してみたいな～）

今は遠いところに居るシュテル、そしてチーム海鳴を半脱退状態だったりするルシル君にも通用するか試してみたい。そう。教導隊は、経験を積み自らもまた強く成長することの出来る部署だ。その経験

を活かして、自分の成長をみんなに見せたい。そして、私のその経験がみんなの為になることが嬉しい。

「高町なのは空曹、入ります！」

今日も教導隊の一員として頑張ろう。そういうわけで、元気よく挨拶しつつ戦技教導隊の本部――オフィスに入る。オフィス内は各班ごとの区画に分かれていて、全６区画。デスクは円卓状で、班によっては大きさは様々で、椅子が１０脚以上ある。わたしが配属されたのは第４班で、その区画へ向かう。

「おはよう！」

「あぁ、おはよう！」

「いやぁ。若い子が入ると、むさ苦しいオッサンばかりのオフィスも急に華やかになるね～」

「アンタも十分オッサンだよ、トマソ一尉」

「あの～、それ以前に、私も一応２０代だから若いと思うのですが？」

「あー・・・・うん、そうだね」

「なんですかその反応！　いくら上官でも怒りますよ！？」

その途中、他の班の隊員から受けた挨拶に「おはようございます！」

私も挨拶を返してく。戦技教導隊に所属する隊員の大半は、私より平均で１５～２０歳ほど上の人たちばかり。それが理由かもだけど、「お菓子、食べるかい？」だとか、「今日も怪我には気を付けるんだよ」など、娘や孫扱いされてる風。

（史上最年少で戦技教導隊に入ったってことみたいだし、それに実際に子供だからしょうがないけど・・・）

丁重にお断りしつつ、私が所属する第４班の上官４人に「おはようございます、今日もよろしくお願いします！」敬礼した。

「おはよう、高町」

デミオ・アレッタ三等空佐。私たち戦技教導隊第４班の班長を務める。ミッド式のオールラウンダー魔導師で、ランクはＡＡＡ＋。赤い髪をスポーツ刈りにした、学生の頃に世界大会で優勝した経験があるほどの（私の歓迎会の時に聞かされた）スポーツマンさん。

「やぁ、おはよう！」

エスティ・マルシーダ二等空尉。茶色の髪をウルフカットにしてる男性局員。ミッド式の射撃魔導師。ランクはＡＡ－。見た目は少し恐いけど妹が３人も居るっていうことで、実際はとても優しい頼れるお兄さんみたいな感じ。

「なのはさん、おはよう」

ヴィオラ・オデッセイ二等空尉。薄い黄色の髪をショートポニーテールにした、ベルカ式の騎士。ランクはＡＡ。シャルちゃんやルミナちゃん達とは違って、教会騎士団には所属しないで管理局のみに務めてる。一度は二足の草鞋をやろうとしたってことみたいだけど、生活リズムが崩れそうだって理由で断念したとのこと。

「やほ～」

ロザリンダ・ベルトーネ事務官。愛称はロザリーさん。この第４班の中で唯一魔力非保有の局員で、第４班の事務官を担当するおっとりしたお姉さん。黒色のロングストレートヘアで、前髪が少し長い所為で目が隠れちゃってる。あとところどころに寝癖があって、ちょこっとズボラかな。

「メンバーも揃ったところで、第４班の始業ミーティングを始めようか。ベルトーネ」

「はい」

私も自分に与えられたデスクに着いて、前面に展開されたモニターに映し出されたスケジュール表を見る。

「本日の第４班のスケジュールは、１０００時から１５００時までミッドチルダ地上本部、首都航空隊との演習となりまして、期間は４日間です」

「なのはさん。気負うことは無いからね。いつも通り、相手をコテ

ンパンにすればいいから♪」

「あ、はい。頑張ります！」

ヴィオラ二尉が微笑みかけてきてくれた。教導隊は教育隊と違って、細かいことに叱ったり怒鳴ったりする暇があるなら模擬戦で徹底的に打ちのめす、っていう方向性だ。だから手加減とか遠慮とか無用。さすがに入りたての新人隊員への技能訓練では必要だけど、首都航空隊所属の魔導師なら本気で仕掛けても大丈夫。

「それでは、第４班出動！」

それから細かいスケジュール（お昼ご飯や休憩時間などなど）を確認して、椅子から立ち上がったアレッタ三佐の号令に「はいっ！」私たちも席から立って敬礼で応じる。

そして第４班は、ミッドチルダは首都クラナガンの中央区にそびえ立つ地上本部へと移動。そこで今日から４日間、演習を行うことになる首都航空隊の面々と顔合わせ。首都航空隊は総勢２８名。その内の半数１４名が交替部隊になる。さらにデイシフト７名とナイトシフト７名に分かれる。

「首都航空隊、ティーダ・ランスター一等空尉です！　首都航空隊隊長アルバート・ヤヌス二等空佐に代わりご挨拶させていただきます！　本日より４日間、よろしくお願いします！」

初日の相手は、ランスター一尉が隊長を務める小隊１４名の内、デイシフトの７名だ。まずは自己紹介をし合って、その後は準備運動。

そして防護服へと変身してすぐさま演習を開始する。短い期間で出来ることなんて限られてくるから、教導隊の方針に従って徹底的に模擬戦漬けだ。

（それにしても・・・やっぱり浮いちゃってるな～）

武装隊員の防護服は共通のデザインで、アレッタ三佐たちもランスター一尉たちも、みんな共通の防護服を着用してる。そんな中で私ひとりだけがオリジナルの防護服を着用してる。それはもう目立ちまくりで。だから４班に配属されての初仕事の時に、私も仕事中は武装隊共通の防護服になろうかな、って考えてたんだけど・・・

――はんた～い。なのはちゃんの防護服はそのままが良いで～す――

――その防護服にしか無い機能もあるんだろう？　なら高町の本領が発揮できるその防護服のままで良い。なに。デザインが違うことなど瑣末な問題だ――

ロザリー准尉やアレッタ三佐がそのままの私で良いって言ってくれた。けれどやっぱり気になっちゃうわけで。でもそんなことを考えてる暇もすぐに無くなる。

「俺は遊撃、オデッセイは前衛、マルシーダと高町は後衛で固定砲台役だ。高町。Ｓランクが後衛に居るとどういう戦況になるかを見せてやれ」

「「「了解！」」」

模擬戦開始。首都航空隊は文字通り、首都クラナガンの空を護る部隊だ。当然戦場は空。各自飛行魔法を発動して、空へと上がる。４対７の戦力差で開始された模擬戦。

「私が戦場を引っ掻き回します！　レーヴェンゲブリュル、カートリッジロード！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

「ナーゲルシュラーク・・・！」

ヴィオラ二尉が槍型デバイス・"レーヴェンゲブリュル"のカートリッジをロード。２ｍ近いデバイス全体に赤い魔力が付加される。そして集まってる航空隊へと単独突撃。ランスター一尉が「散開！」指示を出して、一斉に散らばった。

「クロスファイア・・・シューット！」

銃身下部の中央付近にグリップのような物がある拳銃型のデバイスを手にするランスター一尉。そんな一尉の周囲に展開された魔力スフィア８基から魔力弾が１６発と発射されて、ヴィオラ二尉には４発、残り１２発が私たちに向かって来た。さらに他の航空隊員たちも、射撃魔法において基礎中の基礎になるシュートバレットで弾幕を張ってきた。

「せいっ！」

"レーヴェンゲブリュル"をバトンのように高速回転させて魔力弾を迎撃するヴィオラ二尉。さらに・・・

「ブレードロッド！　ホーミングレイ！」

≪Ｈｏｍｉｎｇ　Ｒａｙ≫

アレッタ三佐のデバイスは杖状の"ブレードロッド"。柄の下部分に刃が付いた物で、杖先端――ヘッド部分は武装隊の一般的な杖型デバイスと同じデザイン。だけど、そのスペックはアレッタ三佐専用機としてチューンされてる。

そんな"ブレードロッド"の先端から碧色の魔力弾が3発と発射された。ソレは光線となって魔力弾幕を迎撃。アレッタ三佐のホーミングレイは、射速も追尾性もＡ＋性能で、しかも込められた魔力の多さによって魔力弾幕に相殺されることなく、その1発でロックオンされた3発を迎撃、計9発を破壊した。

『マルシーダ、高町！』

『『了解！』』

エスティ二尉もまた銃型のストレージデバイス・"ブラストガナー"の銃口から「シューートバレット！」射撃魔法を撃ち放って残りの魔力弾を迎撃、さらに直接隊員を狙い撃ち。でもさすがに首都航空隊。空戦魔導師のエリートの集まりだから誰1人として防御することな

く、完璧に回避した。そこに・・・

「あの、砲撃行きます」

≪Ｓｈｏｒｔ　Ｂｕｓｔｅｒ≫

バスターモードの"レイジングハート"から、魔力チャージから発射までのシークエンスや砲撃自体の速度を重視した高速砲を７連射。すると「うおっ！？」隊員たちは大慌てで回避。足を止めちゃう防御じゃなくて、たとえ無茶な体勢になっても避けたのは良いと思う。ただ、相手が私ひとりだった場合によるけど・・・

「ホーミングレイ！」

「シャワーバレット！」

アレッタ三佐の追尾光線とエスティ二尉の弾幕が、航空隊員たちの正面や真上からと襲いかかる。ヴィオラ二尉は既に退避済みだ。迎撃や防御、回避の最中に「シューット！」私もアクセルシューター１６発による包囲攻撃を行う。

「ウンフォルエンデッド・ピーケ！」

それでも避け続ける航空隊員へ、「往けっ！」ヴィオラ二尉が魔力を纏わせた"レーヴェンゲブリュル"を投擲。ターゲットにされてた隊員が「うわっ！」咄嗟にシールドを張って防御したけど、ガシャァン！と瞬時に破壊された。破壊時の衝撃で吹き飛ぶ中、「のわ

っ！？」私のシューター４発の直撃を受けて撃墜扱い。

≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ≫

「シューット！」

さらに私のディバインバスターで１人、また１人と撃墜していく中・・・

「インパルスストライカー！」

ランスター一尉が単独で私に仕掛けてきた。単純な直射砲撃だから、スッと横移動することで回避。そんな時に『高町。単独でランスター一尉を撃墜してみろ』アレッタ三佐から指示が出た。だから私は『了解です！』応じた。ランスター一尉は私と同タイプだ。撃ち合いになれば、物量が物を言う。

――クロスファイアシューート――

ランスター一尉の周囲に８基の魔力スフィアが展開される。１つのスフィアから複数の魔力弾を撃つ発射体だ。ランスター一尉の「ゴー！」号令の下に８基の魔力スフィアから２４発の魔力弾が一斉に発射された。

「レイジングハート！　アクセルシューター・バニシングシフト！」

≪Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ　Ｂａｎｉｓｈｉｎｇ　ｓｈｉｆｔ≫

"レイジングハート"のロックオン機能を使った精密射撃バージョンのシューター２０発で、ランスター一尉の多弾攻撃を真っ向から迎撃。残り４発は、距離を取りつつ高速砲で迎撃する。ランスター一尉は私へ距離を詰めようとしつつ「シュートバレット！」誘導操作性能の無い魔力弾を連射してくる。

――クロスファイアシュート――

またランスター一尉の周囲に魔力スフィアが８基と展開された。あのクロスファイアシュートっていう空間制圧タイプの多弾攻撃、ランスター一尉の十八番みたい。だけど、どれだけ撃たれたとしても、その全てを撃ち落す。

「もう一度バニシングシフト、行くよ！」

≪Ｓｔａｎｄｂｙ，　ｒｅａｄｙ≫

アクセルシューターを準備したその直後、「クロスファイア・・・」ランスター一尉の周囲に展開されてた魔力スフィアがデバイスの銃口前に集束。そして「アサルトドライブ！」掛け声を合図に集束された魔力スフィアが一体となって砲撃化された。

「わっ！」

≪Ａｃｃｅｌ　Ｆｉｎ≫

"レイジングハート"が高速移動魔法を発動してくれたおかげで直撃は免れた。魔力スフィアを集めてまた別の魔法にする。そう言った使い方があることも、フェイトちゃんとの戦いで知っていたのに。クロスファイアシュートって言う魔法がどう言ったものかを勝手に決め付けた、私の油断が招いた結果だ。

「ヴェロシティレイド！」

ランスター一尉がデバイスの銃口から砲撃を放ちながら接近してくる。さっき見せてもらった砲撃よりチャージが早い砲撃、高速砲だ。高速砲を右に左に避けつつ後退していると、さらにクロスファイアシュートによる飽和攻撃も行ってくる。

（うーん、やっぱり首都航空隊はすごいな・・・！）

――アクセルシューター――

飽和攻撃をシューターで迎撃して退避路を確保しつつ、どうやって撃墜しようかって考える。徹底的に打ちのめすのが教導隊の仕事だし。ここはやっぱりずっと一緒に頑張ってきた魔法を使うところだよね。

「はぁぁぁぁ！！」

≪Ｃｌｅａｖｅ　Ｂｌａｄｅ≫

ランスター一尉のデバイスの銃身下部にあったもう1つのグリップ

から小太刀みたいな魔力刃が展開された。てっきりサブマシンガンモードみたいな物があるのかと・・・って、また先入観を持っちゃってる。

「レイジングハート！」

≪Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ≫

シールドを展開して、ランスター一尉の魔力斬撃をわざと防御する。一尉の周囲にクロスファイアシュートの発射体となる魔力スフィアが６基と展開される。追撃を受けないように後退したところで「ゴー！」一尉の号令が掛かって、１２発の魔力弾が発射された。

「レイジングハート、次のシールドはバインディングで・・・！」

≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ≫

ランスター一尉の放った魔力弾を避けている中、「でりゃぁぁぁぁ！」一尉自らがまた接近を試みてきた。そして私ははまたシールドを展開して、一尉の魔力斬撃がシールドにヒット。

≪Ｂｉｎｄｉｎｇ　Ｓｈｉｅｌｄ≫

「え・・・！？」

ランスター一尉が驚きを見せる。シールドの表面からチェーンバインド４本が発生、一尉の右腕や胴体に絡みついた。見た目は通常の

シールドと同じだから、初見だとたぶん誰もが引っかかると思う。私は「本気で行かせてもらいます！」そう宣言して後退。足元に展開した魔法陣――フローターフィールドに着地して、魔力をチャージ。

「うわっ、うわっ！　やばい、やばい！」

チェーンバインドから逃れようと足掻くランスター一尉へと向けて・・・

「ディバイィィィン・・・バスタァァァァァーーーーッッ！」

チャージし終わった砲撃を撃ち放った。砲撃は一直線にランスター一尉へ向かって行って・・・直撃。そうして模擬戦の第1戦は終了。私たち第4班からは誰1人として撃墜者は出さない完全勝利だった。それから感想戦や休憩を挟みつつ3戦を行って4戦4勝を立てた後、お昼休憩になった。まずはシャワーを浴びて汗を流して、それからレストランで合流。好きなメニューを注文してそれぞれ席に着いてく中・・・

「高町なのは教導官。隣、いいかな？」

「あ、はい、どうぞ」

ランスター一尉が私の隣に着いて、みんな揃ってお昼ご飯を頂く。

「いやぁ、本当に強かったよ高町教導官。君やチーム・ウミナリの

評判は知っていたけど、実際に戦ってみてよく解った。最年少で戦技教導隊や空戦Ｓランクになるのも解るよ」

「ありがとうございます」

ランスター一尉が私やチーム海鳴のことを褒めてくれた。そんな一尉がコトンとテーブルの上に携帯端末を置いた。

「あ、可愛いお人形ですね」

手作りっぽい女の子のお人形がストラップとして付けられてた。

「あぁ、コレかい？　妹が作ってくれたんだ。妹は自分そっくりに作ったようなんだけど、さすがにまだ幼いからね、少し不格好だ。でも僕の誕生日プレゼントに、って一生懸命ニガテな裁縫で手作りしてくれたんだ。それが本当に嬉しくて」

そう言ったランスター一尉は妹さんの作ったお人形を手に、とても優しい頬笑みを浮かべた。そして「あ、これが僕の妹、ティアナ」写真を見せてくれた。ランスター一尉と小さな女の子――ティアナちゃんの映る写真・・・。でも2ショットばかりで、お父さんやお母さんの映る写真は無い。

「ん？　あぁ、父と母は事故で、ね。今となっては僕がティアナの親代わりでもあるんだよ」

顔に出ちゃってたみたいで、ランスター一尉は少し沈んだ表情で答

えてくれた。でもすぐに「だから僕は、僕だけは生き続けないといけない。ティアナを守るためにも」真剣な、強い意志に固められた表情へと変えた。

「ティアナちゃんも、その・・・魔導師なんですか？」

「まあね。僕のクロスファイアシュートなどの射撃魔法を、護身用として習得したいと言われて教えはしたけど・・・」

ランスター一尉はそこまで言ったところで語尾を濁した。どうしたのかな？って小首を傾げていると、「高町教導官は、管理局に入る際、ご家族は反対しなかったかい？」一尉がそう訊いてきた。

「いえ・・・。反対はされなかったです・・・」

お父さんもお母さんも、反対どころか私が初めて抱いた夢を応援してくれた。神器によって瀕死になっちゃった後も、局員や魔導師を辞めさせようとしなかった。

「そうかい。・・・僕は、出来れば入ってほしくない・・・。でも妹は管理局に入り、僕の補佐をしたいって言うんだ」

「ランスター一尉はそれが・・・嫌、なんですか・・・？」

友達だけでもそう言ってくれると嬉しい。それが家族なら余計に嬉しいと思う。フェイトちゃんとアリシアちゃんがそうだったし。でも、ランスター一尉の考えも解る。だってランスター一尉は・・・。

「空戦魔導師って、実はかなり危険な仕事だ。空戦で撃墜されたら死ぬかもしれない。僕もこれまでに撃墜寸前に陥ったことが、死ぬ思いをしたことが二度くらいある。まぁ、それでも空が好きだからまた戻るんだけどね」

「あ、私も空が大好きなんです。私も一度撃墜されちゃいましたけど、それでもまた戻ってきちゃいました！」

そう言って苦笑いを浮かべるランスター一尉に、私も同じだと言うことを伝えた。墜とされちゃっても、やっぱり空が好きなんだって私は強く思った。死ぬことはとっても怖いけど、それでも空に魅了されちゃった私はもう空無しじゃいられないと思う。

「あはは！　だと思ったよ。余程空が好きじゃないと、その歳で戦技教導隊になんてなれないからね！」

大笑いするランスター一尉に釣られて「はいっ！」私も笑った。

「・・・確かに空を飛ぶことが好きになってしまうと、どうしてもう一度って思いが生まれる。それがたとえ危険な仕事であっても。そして撃墜を味わえば、その恐怖もまた理解できてしまう。だからかな。妹の夢を応援はしたい。魔導師でも良い、局員になっても良い、でも空戦魔導師には・・・なってほしくない、そう思ってしまうんだ」

妹のティアナちゃんを大事に想うからこその苦悩だった。どうフォ

ローすればいいのかを考えてるところで・・・

『エマージェンシー！　クラナガン西部上空にてハイジャックが発生。首都航空隊および防衛隊は至急出動せよ！　繰り返す――』

事件発生を知らせるアナウンスが流れた。食事の途中だったけど、「首都航空隊、出ます！」ランスター一尉たちが席を立って、「アレッタ三佐、応援お願い出来ますか！？」アレッタ三佐に応援要請をした。戦技教導隊はその戦力から応援部隊としても重宝されるからだ。

「無論！　俺たちも応援部隊として出動だ！」

「「「「了解！」」」」

そういうわけで、私たち第４班もランスター一尉たち首都航空隊と一緒に出動する。地上本部から出て防護服へと変身、そして空へ飛び立つ。

『西部から首都第２空港へと飛行していた貨物便が、複数名の魔導師によってハイジャックされました。乗員は３名。うち１人が魔法を受け重傷とのことです。ハイジャック犯の狙いは、運搬中の貨物と思われます。針路は当初の目的地・第２空港です。防衛隊は空港へ、航空隊は貨物機の元へお願いします』

地上本部の管制室から現状が伝えられた。私たちはハイジャック犯をどうするかを話し合いながら飛び続けて、そして目視で貨物飛行

機を捉える。そんな貨物機から『局員は出てくんじゃねぇ！』って通信が入った。ハイジャック犯からのものだ。

『た、助けてくれ！』

『黙って運転士てりゃ良いんだよ、オラ！』

『ぎゃあ！？』

『機長！　機長がデバイスで殴られた！　頭から血が！　意識がない！』

通信が乱れる。ハイジャック犯が機長さんを殴ったみたいで、しかも意識が飛んじゃうほどの威力のもの。時間を掛けちゃうと出血による後遺症が出ちゃうかも。でもだからと言ってこれ以上攻めると、もっと酷いことになりそう。手を拱いてる私たちに、『失せろ、失せろ！　轢き殺すぞ！』そんな怒声と一緒に、私たちの方角へと進路が変更された貨物機が向かってきた。

「とりあえず犯人を刺激しないように離れましょう！」

ランスター一尉が指示を出したことで、私たちは「了解！」応じて貨物機から距離を取る。すると『判ればいいんだよ！　もう近付いてくんなよ！』ハイジャック犯がそう吐き捨てた。

『ひぃー！　誰か、助けてく――』

そこで通信が切られた。どうすることも出来ない私たちはただ貨物機を見送ることに。貨物機の針路はまた変わって、「あれ・・・？」第２空港とも違う方角へ向かって飛び始めた。そのことを管制室に報告する航空隊員さんと、「空港に着陸しないとなると、かなりまずい状況ですね」悔しげに唸るランスター一尉。

「うーむ・・・」

「突入して押さえますか？」

「いや、それはダメだろ。貨物機の窓はコックピットだけだ。後部ハッチも乗員の操作なくしては開けられない。無理に魔法で破壊すると、犯人に気付かれ、乗員の身の安全が危うくなるし、機体そのものも空中分解する可能性がある。強行突破は着陸後での最終手段にするべきだ」

「とにかく後を追いましょう。コックピットから見えなければ大丈夫なはずです」

やるべき事が今ないのなら、見つけられるように行動に移すのみだ。私たちは貨物機の後方１５０ｍを飛んで、貨物機の様子を管制室に報告し続ける。貨物機の針路は真っ直ぐ北に向かってる。このままだと首都航空隊の管轄内である首都から出ちゃう。その前にどうにかしないと。そう思ってた矢先、ドォン！貨物機のエンジンが爆発して、左翼の半ばから先が地上へと落下を始めた。

『こちらＣＡ６１１便！　ハイジャック犯が機内を魔法で攻撃！

その影響でファンが止まって魔力エンジンがオーバーヒート！　予備電源でなんとか持ちこたえているが、長くは保たない！　頼む、助けてくれ！　このままじゃ墜落してしまう！』

乗務員さんから最悪の知らせが入った。真下にはオフィス街がある。そんなところに墜落させるわけにもいかないし、翼もまた落とすわけにはいかない。だからとにかく今は、翼の対処が先だ。

「レイジングハート！　エクセリオンモード！」

≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｅｘｅｌｉｏｎ　ｍｏｄｅ≫

カートリッジをロードして、"レイジングハート"をエクセリオンモードへ。さらに続けてアクセルフィンを羽ばたかせて高速移動。翼との距離を詰めて、水平になるように位置調整。そして・・・

「ストライク・・・スタァァァーーーーズ！！」

エクセリオンバスターとアクセルシューター８発による多弾砲撃を翼へ向けて発射。ある程度は破壊できたんだけど、「思ってた以上に破片が・・・！」残っちゃった。

「任せてくれ！」

――クロスファイアシュート――

「ホーミングレイ！」

ランスター一尉とアレッタ三佐の魔法が、細かくなった翼の破片を全て破壊してくれた。でもこれで終わったわけじゃない。貨物機がゆっくりと墜落を始めて行ってる。しかも「隊長！　ハイジャック犯と思われる連中が・・・！」航空隊員さんの言うように開いた搭乗口から5人が飛び出してきて、飛行魔法で逃走を図ろうとした。

「絶対に逃がさない・・・！」

"レイジングハート"をバスターモードに戻して、足元に展開したフローターフィールドに着地。カートリッジを2発ロードしたうえで魔力をチャージ。そして5人をロックオン。

≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ　！！≫

「シューット！！」

私の砲撃の中で最大射程を誇るディバインバスター・エクステンションを発射。ハイジャック犯は貨物機から距離を取っていてくれたから、貨物機に誤射することはない。まず1人を撃墜。放射を途切らせることなく"レイジングハート"を動かしてさらに2人目、3人目、4人目、最後の5人目へと着弾させた。揃って地上へ墜落していくのを確認。

「確保お願いします！」

「あ、はいっ！」

私の砲撃を見てなのか呆けてたランスター一尉たちが、墜落するハイジャック犯たちの確保に向かった。放射を止めた"レイジングハート"の排熱を行う。砲撃の持続放射って機体に要らない負荷を掛けちゃうし。だから「無茶させてごめんね、レイジングハート」謝る。

≪Ｄｏｎ'ｔ　ｗｏｒｒｙ≫

「ありがとう」

「高町！　まだ終わっていないぞ！」

"レイジングハート"にお礼を言ってると、アレッタ三佐から注意を受ける。そうだ、まだ貨物機の墜落を食い止めてない。でも、私たちに貨物機の墜落を食い止める手段なんて・・・。

「とにかく乗員３人を救出しよう！」

「「「了解！」」」

飛行速度を上げて、黒煙を上げつつ高度を下げていく貨物機へと接近する。速度が落ちてなかったら出来なかった行為だけど、なんとか搭乗口から進入できた。私たち４班は急いでコックピットへ向かう。

「管理局です！　大丈夫ですか！？」

「こちらＣＡ６１１便！　どこか不時着させられる広い場所は無いか！？」

操縦桿を握る乗務員さんが管制室と通信をしていた。そして「機長と副機長を診てあげてくれ！」もう片方の操縦席でぐったりしてる機長さんと、機内の後部に居る副機長さんをエスティ二尉とヴィオラ二尉が診る。２人は医学にも精通してるから、きっと大丈夫。

『こちら管制室。２時の方角、距離１０マイルにある森林区内にハイウェイが通っている。そこでなら着陸は可能であると思われる。すでに走行中の避難誘導を開始している。そこまで飛べないか？』

「１０マイル・・・！　判った、やってみよう！」

『健闘を祈る！』

片翼を失いながらも飛行を続けてる貨物機だけど、「きゃあ！」右翼がビルを掠めたことで大きく振動した。そして「クソッ、ダメだ、墜落する！」乗務員さんが諦めてしまった。目の前に迫ってくるのは大小さまざまなビル群。もうダメ。目を瞑りかけた時・・・

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

また大きな振動が貨物機を襲った。だけどその振動は何かにぶつかったものじゃない。迫り来てたビル群がすぐ目の前で止まってる。貨物機がどういうわけか空中で静止してるんだ。

『こちら時空管理局・内務調査部所属、ルシリオン・セインテスト。ＣＡ６１１便を停止してください。貴機は固定していますので、墜落の心配はありません。繰り返します――』

コックピット内にそんな通信が入った。ここでようやく「ルシル君・・・！」安堵の思いでいっぱいになった。私は「エンジン停止、お願いします」乗務員さんにそうお願いすると、「わ、判った！」機器を操作して、貨物機のエンジンを停止させた。

『エンジン停止を確認しました。このまま近くの広場に移動させます。機内でお待ちください』

貨物機がルシル君の魔法か何かで動き出す。そして貨物機は、近くにあった大型駐車場へとドスンと置かれた。垂直離着陸機だったら始めからここに着陸できたんだけど、この貨物機の離着陸には滑走路が必要だから、わざわざ遠いハイウェイを目指したんだ。

（でも結果良ければすべて良し、だよね）

乗務員さんが「助かった・・・」大きく息を吐いた。私たちもホッと一安心して、搭乗口から緊急脱出シュートを出してそこから機外へと脱出。貨物機をチラッと見ると、巨大な白銀の腕――イロウエルが機体を真上から鷲掴んでた。そして役目を終えたっていう風にイロウエルが魔力となって霧散していった。

「ルシル君！」

「ん？　あれ？　なのは・・・！　どうしてここに・・！？」

「うわぁーん！　ありがとー！　本当に助かったよ、ルシル君！」

私は局の制服姿なルシル君の元に駆け寄って、その両手を取ってブンブン上げに振りつつ感謝を伝えた。そして戦技教導隊として首都航空隊と演習をしていたこと、お昼休憩時にエマージェンシーが入って、こうしうて現場に居たことを伝えた。

「そうだったのか・・・。まぁ何はともあれ何事も無かったようで良かったよ」

するとルシル君は久しぶりに微笑みを見せてくれた。最近だと通信でしか見られなかったから、二重に喜びが湧きあがってきた。

それから私たち教導隊第４班と首都航空隊は、今回の事件の事後処理を済ましたんだけど、終わったのが夕方になっちゃったことで、初日の演習は午前中のみだけになっちゃった。まぁ残り３日間はなんの問題もなく、全力全開で演習を行うことが出来たから良かったかな♪

Ｅｉｐｉｃｌ－Ｅ移ろいゆく季節～Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ
ｏｆ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａ～

†††Ｓｉｄｅアリシア†††

フェイトが執務官、そしてわたしが執務官補佐になってから１年ちょっと。今日はお母さんのリンディ提督、お兄ちゃんのクロノ、そして今はまだただの同僚なエイミィが乗るアースラに臨時の戦力として乗艦して、今日もまた事件解決に奔走した。
未だに嘱託だからそんなに忙しくはないけど、でも次元艦に乗って（任務によって乗る艦はまちまち）結構遠い世界に行くことも増えてきちゃったから、学校を休むことが多くなったし、取れる休みの日もバラバラ。だからチーム海鳴のみんなと逢うのは基本的に学校だけになってきてる。それが少し、ううん、かなり寂しい。

「アリシア。今回の事件の報告書、本局に着くまでに終わらせておいてね」

「ほーい」

一応はわたしの上官になる妹（うん、妹。これ大事なことね♪）のフェイトからそう言われたわたしは返事をして、早速書類の作成に入る。お姉ちゃんとして補佐官として、フェイトの夢を支えるのがわたしの役目だから、迷惑はかけられないよね。

「フェイト～、アリシア～、お茶だよ～」

小さな子供姿になってるアルフがえっちらおっちらとトレイを持って、アースラの居住区に作ったまま残ってるわたしとフェイトの部屋にやって来た。フェイトと2人で「ありがとう、アルフ」お礼を言って、トレイからコップを取った。

「ふぅ。零すんじゃないかって冷や冷やしたけど、なんとか持って来れたな」

トレイをデスクに置いたアルフがそう言って汗を拭う仕草をした。だからわたしは「仕事の時以外にもフルフォームに戻ればいいのに」って言ってみた。執務官としての仕事中には、アルフも昔みたく大人姿のフルフォームになる。で、普段は小っこい子供フォーム&子犬フォームになる。

「いやまぁ、フェイトも魔導師ランクSになるし、魔力の量もグッと増えたけどさ。でもやっぱりあたしの維持にはどうしても魔力を消費しちまうだろ？　だったら普段くらいは、フェイトの負担を減らそうって思ってさ」

使い魔を維持するのは、使い魔を生んだ魔導師自身の魔力だ。だからアルフが大人姿になると、その分フェイトの魔力の消費が大きくなる。とは言っても、アルフはとっても優秀な子だから、その消費量はフェイトの魔力量におけるたった数%なんだけどね。だから「そんなこと気にしないのに」フェイトもそう言う。

「いんや。こいつはあたしの使い魔としての意思だからさ。このま

んまで良いんだよ。ま、そういうわけさ、アリシア」

「ん。そっか」

アルフを交えてお喋りしながら報告書を作成を続けること２０分。最初に「ふぅ。終わった」フェイトが終わって、さらに数分後に「お～わり！」わたしも無事にお仕事終了。背筋を伸ばして凝った筋肉をほぐす。そんなところに・・・

『クロノだ。すまないが本局へ戻る前に寄り道することになった。ブリッジに来てくれ』

クロノからそんな通信が入って、「了解！」わたしとフェイトは即応じた。通信が切れた後、「はぁ～・・・」２人揃って溜息を吐く。本局に戻ったらすぐに特別保護施設へ行こうと思ってたのに。アルフも「残念だなぁ・・・」しょぼーんと肩を落としてる。

「エリオ、悲しんじゃうよね？　やっぱり・・・」

「やっと心から笑ってくれるようになってたところなのに、約束破っちゃったら・・・」

エリオ。エリオ・モンディアル。５歳の男の子。わたしとフェイトとアルフの３人だけで請け負った何度目かの任務で赴いた研究施設で、研究用素体として軟禁されてたのを救出・保護した子だ。どうして研究施設に居たのか。その理由は、プレシアママがフェイトを生み出した際に使った技術・"プロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅ・"に

よって生み出されたクローンだったから。

（プライソンとかいう次元犯罪者が生み出したプロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅ・・・・。プレシアママ以外にも、未だにその技術を使ってる人が居る・・・）

それが判ってから、わたしとフェイトは改めてプライソンを筆頭に"プロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅ・"を使っている連中全員の逮捕を決意した。そして、エリオみたいに事件に巻き込まれた子供たちを助ける、それもまたわたし達の目的だ。

「とりあえずブリッジに行こう。寄り道の内容がどんなのか判らない以上、特別保護施設に連絡できないし・・・」

「ん、だね。急ごう」

そういうわけで、ブリッジへと向かったわたし達。そしてそこで、寄り道の内容をクロノから伝えられた。曰く・・・

「ヘンリー・ヨーゼフ・リー・メンゲレ。通称はプロフェッサー・ヘンリー。かつては次元世界に名を馳せた生物学、特に遺伝学などの権威だったが、１８年前に広域指名手配を受けた。彼の下には数名のスタッフが居り、その連中も指名手配を受けている」

ブリッジのモニターに映し出された顔写真と名前。プロフェッサーは正に研究者って言った感じな、目つきの鋭い禿げたお爺さんだった。

「管理・管理外世界問わずに特別なスキルなどを有した子供たちを拉致、もしくは高額で買い取り、そのスキルを再現できないかを研究するため人道に外れた実験を行っている犯罪者集団だ。何人もの犠牲者も出ていて、死を免れたとしても再起不能状態だったりする」

そんなとんでもない〇〇〇ヤローが所有する次元航行艦が今、アースラが航行してる航路付近の次元空間内に居るとのことだった。ここ数年、尻尾を掴めなかったらしい。そんなプロフェッサーが今、管理局の捜査網に引っ掛かった。何としても確保してほしいって、支局からアースラに要請が入ったとのこと。

「子供を実験体に・・・！」

「拉致、お金で買う・・！？」

わたし達にとって一番許せないタイプの犯罪者。当然わたし達の怒りボルテージは一瞬にして臨界点突破。わたしは「そいつを捕まえるんだったら手伝わせて！」クロノにそう言って掴みかかる。

「そんな犯罪者は絶対に許せない！　クロノ、お願い！」

「あたしからもお願いするよ」

フェイトとアルフも、クロノに事件捜査の協力を申し出た。すると「ああ。だから君たちをここへ呼んだんだ」って、始めからわたし達の参加を決めてたって言った。んで、これからプロフェッサーの

艦と同じ次元空間に進入し、そこで停船・投降要請を行うことを話し合い、大人しく言うことを聴けばそれで良し。ダメなら乗り込んで直接確保する、と決めた。

「ではこれよりアースラは、広域指名手配犯プロフェッサー・ヘンリーおよびスタッフの確保のため、次元空間に進入します。あなた達はトランスポーター前で待機を」

お母さ――じゃなかった、仕事中は提督や艦長って呼ばないといけないんだ。えっと、艦長の指示に従ってわたし達はブリッジの艦長席、その背後にあるトランスポーター前で待機。そしてアースラは次元空間内に入って、支局の観測室から送られてくるターゲットの現在位置を目印にして航行。

「艦長！　ターゲット艦を捉えました！　モニターに出します！」

エイミィがブリッジ前面にモニターを展開させて、これから乗り込むことになるかもしれないターゲット艦を映し出した。全長１００ｍほどのタンカーのような艦で、武装兵器らしき物が甲板にズラッと並んでる。

「エイミィ。あの艦って一般販売されてるタイプだよね。見取り図とか出せないかな？」

「あ、うん、すぐに問い合わせてみるよ」

フェイトがエイミィにそう伝えてる中、「こちら時空管理局・次元

航行部所属艦アースラ。ただちに停船せよ」艦長が停戦勧告を出す。

「敵艦甲板の砲台に魔力集束反応！」

オペレーターのアレックスからそんな報告が入った。すぐにアースラの防護シールドの出力を上げて攻撃に備えると、すぐにターゲット艦から砲撃が発射されてきた。グラグラ揺れるアースラ。でもそう易々と墜ちる艦じゃないよ。

「攻撃確認！　クロノ、フェイト、アリシア、アルフ！　敵艦へ突入！　プロフェッサーの確保を！」

「「「了解！」」」「あいよっ！」

攻撃が続く中でわたし達は変身を終えて、ターゲット艦の甲板へと転送。そして「ぶっ壊〜す！」わたし達は砲台の無力化を始めた。フェイトは"バルディッシュ"で砲身を斬り落として、アルフは殴って潰して、クロノは凍らせて砕いて。わたしは"フォーチュンドロップ"が内包する数あるデバイスの内の1つ・・・

「ハリセン・・・スマァァァーーーッシュ！」

ハリセン型のストレージデバイス・"ハリセンスマッシュ"を振るって、放たれた砲撃を砲台に撃ち返すことで壊してく。砲台全てを無力化したのを確認した後は艦内へと突入だ。艦内へと降りるための入り口がシャッターで塞がれちゃってるけど・・・

「ブレイズカノン！」

「トライデントスマッシャァァァーーーーッ！」

クロノとフェイトのマジな砲撃を受けて、シャッターは大きくひしゃげたうえで艦内に吹っ飛んでった。内部の防衛戦力からの攻撃を警戒をしつつ艦内に突入。内装は普通の客船みたいで、ここが犯罪者の拠点だって何も知らなかったら普通に楽しめれそうな程に平和なものだった。ただ1つ、それを拒むものがあるけど。

「早速お出ましか！」

艦内を防衛する浮遊兵器がうじゃうじゃと各部屋の扉から飛び出して来た。球体状のソレには丸いクリスタル状の魔力発射光が設けられてて、そこから魔力弾が放たれた。

「邪魔だよ、さっさと退きな！」

すぐ近くの部屋から飛び出して来た浮遊兵器をアルフがパンチして破壊。わたし達はその部屋に入って、前後から挟み撃ちされた魔力弾幕から逃れる。

「アリシア、援護お願い！」

「オッケー！　ドロップ、ラッキーシューターを！」

≪ほーい！≫

"ハリセンスマッシュ"を飴玉のような丸い待機モードにして"フォーチュンドロップ"に戻す。次に飛び出して来た飴玉をキャッチして、「いくよっ！」2挺の小型拳銃型のデバイス・"ラッキーシューター"を携える。

「アルフ、盾役を頼めるか！」

「任せときな！」

わたしはフェイトと組んで、クロノはアルフと組む。魔力弾幕が途切れるのを見計らって、まずはフェイトとアルフが部屋から飛び出して「ラウンドシールド！」防御魔法を展開。間髪入れずにわたしとクロノも部屋から飛び出して・・・

「「スティンガーレイ！」」

わたしとクロノ、同じ射撃魔法を発射。元はクロノの高速射撃魔法で、わたしのはクロノ直伝。そんな魔力弾を浮遊砲台へと向けて連射して、次々と破壊してく。わたしだって対ルシル戦以降からずっと厳し過ぎる模擬戦を、チーム海鳴メンバーとして繰り返してきた。

（魔導師ランクだってようやく陸戦Bになったし、魔力量だって成長期だからか急激に増えてきた。まぁそれでもまだまだAだけど）

そんなわたしが、単なる機械兵器に負けるわけにはいかないもんね。とまぁ、そうゆうわけでわたしとクロノは、フェイトとアルフが盾

役になってくれたことで安全に浮遊砲台を全機破壊できた。

「こちらクロノ。エイミィ、この間の見取り図を出してくれ」

『りょ～かい！』

わたし達の前に展開されるモニター。表示されるのはこの艦の全体見取り図で、上から見たものと横から見たものの断面図だ。さらにエイミィは『生命反応を捉えたから、そっちのマップに映すね』そう言って、今この艦内に居る生命体の反応も映しだしてくれた。

「僕たちが今居るのは左舷上層階。数は４。右舷上層階に１人。中層に１０人。下層に２人、か」

「右舷と左舷の連絡通路は・・・っと」

「一番後ろと・・・あ、あそこの角だね」

わたしが指差す方には、右舷へと繋がる連絡通路があることを示す案内プレートが壁に付けられてる。クロノが「二手に分かれて挟み込もう」そう言ってチーム分けをしようとした時、わたし達と同じように上層階に居た１人が中層階に下りてくのをマップで確認した。

「クロノ、私たちも降りよう！」

「ああ！　二手に分かれる時のチームは、僕とアルフ、フェイトとアリシアでいくぞ！」

「うん！」「オーライ！」

中層階に降りるための階段を駆け下りて、わたし達も中層階に到着。でもそんな時、「え？　あれ？　なんか生命反応、少なくなってない・・・？」フェイトがマップを指差した。さっき見た時は１０人、プラス１人の１１人だった。でも今は８人になっちゃってる。

「くんくん。・・・なんかヤバいよ。血の臭いがし始めてきた・・・！」

「「「っ！」」」

消えてく生命反応。嗅覚の鋭いアルフが言う血の臭い。明らかに「殺人が起きているかもしれない、急ぐぞ！」駆け出したクロノに、「了解！」わたし達も続く。マップを観ながら廊下を走る中・・・

「ぎゃぁぁぁ！」

「ひ、ひぃぃーーー！」

「た、助け、ぐぎゃあ！」

年老いた男の人の声による悲鳴と、耳を塞ぎたいほどの嫌な音が聞こえてくる。アルフが「その角の先、フェイトとアリシア、覚悟しときな」鼻を押さえながらそう言った。覚悟。それだけでこの先に待ってるものが何かが嫌でも判った。

「うっ・・・！」

そして、角を曲がった先には３人の死体があった。明らかに斬殺されてて、その、上半身と下半身が離れた死体が１つ、お腹に大穴が開いた死体が１つ、壁に叩き付けられて潰されちゃってる死体が１つ。ここまで酷く損傷した死体なんて初めてだから「うぷ・・・」吐き気を催した。

「大丈夫かい？　アリシア。吐いた方が楽になる場合もあるよ？」背中を擦ってくれるアルフに「ありがとう」お礼を言う。けど吐くわけにはいかない。執務官補佐として現場を保存することも大事な仕事。それを荒らすようなことは出来ないよ。

「ひどい・・・！」

「３人とも指名手配を受けてるスタッフだな・・・」

クロノが死体に近付いてしっかりと顔を確認した。そんな中でも「どんどん生命反応が消えてくよ！」スタッフが次々と殺害されてってる。現場を踏み荒らさないように注意しながらわたし達は駆け出して、さらに発見した死体の中を突き進む。そして・・・

「あと少しで追いつくぞ！」

スタッフを殺害し回ってる犯人の反応にようやく追い付いた。だけ

それまでに多くに人が殺された。残る生命反応はわたし達を除外しての下層2人、それプラスに2人の4人。そう。わたし達は今、下層階に来てる。

「ま、待ってくれ！　お前たちの施設から子供を拉致したことは詫びる！　し、知らなかったのだ！　プライソンの研究材料が集められた屋敷だったなんて！」

「父プライソンは大変お怒りなんですよ。謝罪だけで済ますような方ではありませんもの。だから娘である私に、あなた達の殲滅を命じたのですよ」

「ひぃ！　だ、誰かぁぁぁ～～～～！」

ある部屋の中から聞こえてきたしわがれた声と、若い女の人の声による会話。その内容だけで、今回の連続殺人事件の全容が判った。プロフェッサーが、わたし達の追うプライソンが研究で使おうとしてた子供たちの収容所（この時点で怒髪天だよ）から、子供たちを拉致したってこと。

それを知ったプライソンが、娘って言う女の人に指示を出してプロフェッサー一味の殲滅を命じて、こんな事態になっちゃってるってこと。それと同時に、今この艦の中には拉致された子供が居るってことも判った。

「突入するぞ・・・！」

「「了解！」」「おう！」

クロノの合図で、わたし達は一斉に会話が漏れ聞こえてくる部屋へと突入した。まずアルフが木製の扉を蹴破って、「一切の行動を取るな！」クロノが"デュランダル"を室内に向けて、最後にわたしとフェイトで「チェーンバインド！」を発動、プロフェッサーらしきお爺さんと、女子高校生みたいな女の人を拘束する。

「だ、誰だ！？　い、いや、そんなことはどうだっていい！　頼む、助けてくれ！」

「あらあら。どちら様？」

全く違うリアクション。プロフェッサーは恐怖からか真っ青で、女の人は余裕に満ちてる。

「時空管理局、クロノ・ハラオウン執務官だ。プロフェッサー・ヘンリー。僕たちがここに来た理由は話さなくても解るな？　そして、広域次元犯罪者プライソンの関係者。君からも事情を窺おう。ここまでに見てきた死体についてなどをだ」

クロノがそう告げるとプロフェッサーは「判った！　何でも話す！　だから助けてくれ！」必死に命乞いをしてきた。これまでに何人も子供を殺しておいて・・・。でも管理局員としてわたしは、わたし達は、どんな不条理でも理不尽でも、アイツを助けなきゃいけない。

「困るなぁ。邪魔されるのは・・・。あぁ、そうだ。こうすればい

いんだ」

女の人がコントロールパネルのようなモニターを展開したと思えば、「よいしょっ」そんな掛け声を発するとフェイトのバインドを粉々に砕いた。ブレイク魔法なんて使われてないのは確か。今のは間違いなく単純な筋力だけでバインドを破壊したんだ。

「動くな！」

クロノから停止勧告を受けても「その指示には応えられないから、ゴメンね」軽快にキーを叩き続ける女の人。そして「フェイト、アリシア、撃て！」攻撃命令がクロノから降りた。だから魔法を放とうとした。だけどその直前に・・・

「「「っ！？」」」

「ぅあ・・・！？」

全身が急に重くなって、しかも魔法であるわたしのバリアジャケットが強制解除されちゃった。

†††Ｓｉｄｅアリシア⇒フェイト†††

急に体が重くなって全身から力が抜けた。咄嗟に"バルディッシュ"を杖代わりにして、片膝立ちを維持するだけで精いっぱい。クロノも私みたいにデバイス――"デュランダル"を支えにかろうじて立っている感じだ。アリシアに至っては防護服が解除されているし、

アルフはぐったりと床に倒れ伏してる。

「アンチ・マギリンク・フィールド・・・！」

ＡＭＦだ、これ。魔力結合と魔力効果発生を無効にするＡＡＡランクの防御魔法。研修中に習ったし、実際に体験もしている。だけどここまでキツイＡＭＦなんて初めてだ。

「あっ！　アルフ、子犬フォーム！　少しでも良いから魔力消費を減らして！」

「お・・・おー・・・・」

使い魔は魔力生命体だ。その存在を保つには、主人から常時魔力を供給されていないといけない。だからＡＭＦの影響で私からの供給が減っている今、アルフは今まさに生命の危険に陥っている。

「わ、わしは知らんぞ！　に、逃げさせてもらうからな！」

プロフェッサーを拘束してたアリシアのチェーンバインドも見事に消滅していて、自由になった彼は一目散に部屋の出口に向かって駆けだした。制止しようにも全身がだるくて動きづらい。それほどまでに強力なＡＭＦだ。

「逃げられると思っているの？」

――ＩＳメタルダイナスト――

「「「っ！？」」」

「うひぃ！？」

壁の内層を突き破って伸びて来た金属の壁がうねうねと蠢いて出口を覆い隠した。このＡＭＦの中で発動させた何らかの力。おそらく魔力に依存しないタイプの固有スキルだ。最悪な展開。私たちは魔法が発動できないどころか身動きすら難しいのに、相手は魔力に依存しないスキル持ち。いま戦闘になると確実に負ける。

「ヘンリー・ヨーゼフ・リー・メンゲレ。父、プライソンの命によりお前を殺します♪」

「い、い、いやだぁぁぁぁぁーーーーー！」

女性がプロフェッサーに向かって突進。プロフェッサーは出口だったところから動こうとせずに目を瞑り、ひたすら叫ぶのみ。今まさに目の前で殺人が起きようとしているのに、何も出来ないなんて。

「うごけ・・・うご、け・・・動け・・・！」

魔法を発動しようとするけど、魔力結合が上手くいかない。そして女性の振りかぶられた右拳が、「うわぁぁぁぁぁぁ！」顔面をグチャグチャに濡らしてるプロフェッサーに向かって繰り出された。当たる。思わず目を瞑りそうになったその時・・・

――ＩＳディープダイバー――

「セインさん、颯爽登場～♪」

ピッチリとした全身タイツの防護服を着たセインの上半身が壁の中から飛び出してきた。セイン・スカリエッティ。第零技術部のジェイル・スカリエッティ少将（愛称はドクター）の娘の１人だ。どうしてここに居るの？とか、いろいろと考えたいところだけど、今はただプロフェッサーを殺されないようにしてほしい。あの人は、ちゃんと法で裁かないといけないんだ。

「暴れないでよおじいちゃん！」

「なんじゃ！？」

セインがプロフェッサーの腰をガッシリと掴んで、そしてまた壁の向こう側へ消えて行った。その直後に女性の拳が壁に打ち込まれて、「いった～い！」手首がグキッとなった。さらに、ドカーン！と壁が爆発を起こして、「きゃ～ん！？」女性は大きく吹き飛んで、「きゃいん！？」執務デスクに突っ込んだ。

「クロノ執務官、フェイト執務官、アリシア執務官補、アルフ！」

――ＩＳライドインパルス――

濛々と上がる煙の中から「トーレ・・・！？」が飛び出して来た。トーレ・スカリエッティ。セインと同じドクターの娘で、娘だけで

構成された部隊シスターズの中でトップの実力者だ。

「あいたた・・・。ジェイル・スカリエッティの兵隊ですか。これは予想外です」

「執務官たちは、チンク、セインと共にプロフェッサー・ヘンリーの護送を！　この偽者は私が撃破します！」

チンクも来ているんだ。とにかく「今の僕たちでは足手まといだ、行こう・・・！」クロノが不確かな足取りで出口に向かって歩き出した。私も"バルディッシュ"で体を支えて歩きだす。

「アルフはわたしが抱っこしてく・・・！」

ぐったりしたままのアルフをアリシアが抱きかかえてくれた。

「偽者とは、酷い言い草ですね！　言うなれば私たちは姉妹になると言うのに！」

――メタルダイナスト――

「姉妹だと？　ドクターが長年掛けて生み出した医療技術を盗み、それを兵器開発に転用したプライソン！　そして初めから戦闘兵器として造られたお前たちと我々を・・・一緒にするな！」

――ライドインパルス――

そしてトーレと女性が戦闘を開始したのを横目で見ながら廊下から出た。

「こちらです、クロノ執務官！　私が先導します！」

――ＩＳランブルデトネイターーーー

廊下に出てすぐに目の前に飛び込んで来たのは、銀髪とコートを翻しながらスローイングナイフ・"スティンガー"を投擲し続けるチンクと、その"スティンガー"を受ける者たちだった。
全身が真っ黒な上下一体の服（ライダースーツって言うのかな）を着て、ところどころに分割装甲を装着してる。頭はフルフェイスのヘルメット。目を覆うバイザーも装甲に覆われてるけど、いくつもの穴――カメラレンズが付いてる。口の部分は上顎と下顎が開閉式みたいで、半開きになってる人の口や歯が見えてる。

「なんだ・・・こいつらは・・・・！？」

「コイツらもプライソンの兵器です！」

チンクは問答無用で"スティンガー"をその黒い人たちに投擲。黒い人たちは、前腕部分に装着してる装甲から剣を出して"スティンガー"を迎撃するんだけど、触れた瞬間にチンクが「無駄だ！」そう言って、"スティンガー"を爆発させた。
チンクは、触れた金属を爆発物に変化させるスキルを持ってる。そのスキルで"スティンガー"を爆発物に変えて、チンクは攻撃する。だけど、それは魔法じゃないから非殺傷設定は無い。だから黒い人

たちは爆発に呑まれて・・・死んだ。

「チンク！　何やっているの！？」

「いくらなんでも殺すのはダメだぞ！」

私とクロノでそう注意するけど、チンクは廊下を進みながら"スティンガー"を投げては黒い人たちを攻撃して、爆破させて殺害。戦争映画みたく色々な物を撒き散らしながら黒い人たちは倒れ伏していく。

「チンク！」

「安心しろ！　連中はすでに死んでいる！　人間の死体をベースに改造して造られたサイボーグ！　コードネーム、ＬＡＳ・・・Ｌｉｖｉｎｇｄｅａｄ　Ａｒｍｓ　Ｓｏｌｄｉｅｒ！」

――ランブルデトネイター・オーバーデトネイション――

チンクの側に１０本の"スティンガー"が展開されて、廊下の先からこちらに向かって突撃して来る黒い人たちに向かって発射した。そして指をパチンと鳴らして一斉に爆破させて一掃した。

「人道を大きく外れた禁忌の存在だ。死してなお辱められる哀れな亡者。ここで弔ってやるのが救いだ」

「死体を改造するなんてそんな・・・」

「プライソン。そこまでの外道だったとは・・・！」

「絶対に捕まえよう、フェイト・・・！」

「うん！」

そうして私たちはチンクの先導で甲板まで戻って来られた。そこでセイン、手錠とバインドで拘束されてるプロフェッサーと合流した。セインと手を振り合っていると、『クロノ君、フェイトちゃん、アリシアちゃん。アルフ！』ＡＭＦの効果範囲から出られたことで、涙声なエイミィからの通信が入った。

『良かったわ。突然通信が切れるから、何かあったのかと思ったわ』

「ＡＭＦを艦内全域に発動されてしまいました。失態です」

『いいえ。無事で良かったわ。さぁ、プロフェッサー・ヘンリーを連行して、本局へ戻りましょう』

それから私たちだけでアースラへと帰還。セインとチンクとトーレは、プライソンが造ったって言うあの女性の捕獲と、拉致された子供２人の救出が任務だということもあって、艦に残ることになった。緊急任務を無事にとは言えないけど終えた私たちの乗るアースラは再び本局へ向かう。私たちの部屋に設けられたシャワー室で汗や、艦内で染み付いちゃった血の臭いなどを洗い流す。３０分も掛からなかった任務だったけど、その内容はあまりにも酷いものだった。

そして改めて・・・

「ドクター・プライソン。必ず捕まえてやる・・・！」

決意が出来た。人の命を単なる道具程度にしか考えていない犯罪者。絶対に捕まえて罪を償わせてやる。シャワーを浴びた後は、「エリオに連絡しておかないと、だね」今日逢いに行くよ、って約束していたのに、それを破ることになっちゃうことを謝らないと。

「あぅ～。泣かれちゃうと辛いよね～・・・」

「だな～」

アリシアとアルフも辛そうに顔を歪ませる。しょぼ～んと肩を落としてるところで『3人とも～、ちょっとブリッジに来て～』エイミィから一方的な通信が入った。何か急ぎの用事だといけないから、すぐにブリッジへ向かった。

「そういうわけで、3人はこれからトランスポーターを使って本局へ飛びなさい。ちなみに艦長命令よ」

ブリッジに着いた瞬間に母さ――艦長がそんなことを言ってきた。そういうわけで、ってどういうわけかは判らない。だけど「あの、まだ護送も済んでませんし・・・」プロフェッサー・ヘンリーを護送し、なおかつ聴取とか書類作成とかやる事が山積みだから少し渋る。

「ありがとー！　お母さん♪」

「リンディ、ありがとー！」

アリシアとアルフは満面の笑顔で母さんに抱き付いた。本当は嬉しいけど、やっぱり仕事のこともあるから私は素直にお礼が言えなくて。

「元々はアースラが請け負った仕事だ。それに、第零技術部も協力してくれたことだし、彼女たちと一緒に事後処理を行うよ」

「そうそう♪　だからフェイトちゃん達は、あとの事は心配しないで、エリオ君に逢いに行っておいで♪」

「ええ。これはアースラ艦長としての命令でもあり、あなた達の母としてのお願いでもあるわ」

母さん達のその言葉で、「ありがとう！」私もようやく決心。アースラのトランスポーターから中継ステーションを跨いで、本局のトラスポーターホールへ飛ぶ。そこから特別保護施設まで「ダッシュ、ダッシュ、ダッシュ～！」アリシアの掛け声通りに全力で走る。そして・・・

「間に合った～！」

無事に到着。転送移動によって大幅に時間的余裕が生まれたことで、約束の時間の４０分前に施設に到着することが出来た。そこは学校

みたいな施設で、校舎のような建物、運動できるグラウンド、周囲は緑地公園みたいなものになってる。それに、ちゃんと世に出ていけるように勉学や、希望者には魔法の授業も行われる。

「「「エリオ！！」」」

「あっ！　フェイトさん、アリシアさん、アルフ！」

グラウンドを右往左往していたエリオが、満面の笑顔になって駆けて来た。エリオは、私とアリシアとアルフの３人、チーム・テスタロッサの仕事の時に保護した子だ。私と同じ"プロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅ・"によって生み出された子供。

実の親に裏切られて、連れて行かれた研究施設で軟禁されてた。私たちが見つけた時は心も体もボロボロで、世の中すべてが敵、信じるものなんて何も無い、ってとても荒みきってしまっていた。

・―・―・回想です・―・―・

「この前保護した子、エリオ。やっぱり暴走しちゃってるみたい。このままじゃ医務局から追い出されちゃうよ」

アリシアがそう言って、医務局でのエリオの様子を録画した映像を観せてくれた。小さな体から放電させて、看護師さん達を困惑させてしまっている。出自と親御さんから引き離された経緯、研究施設で受けた非道な実験の数々からすれば、人間不信になるのは当たり前過ぎた。

「アリシア。私・・・」

「何か考えがあるなら言ってフェイト。わたし、お姉ちゃんだから。悪い事じゃないなら何でも付き合うよ♪」

「ありがとう、お姉ちゃん♪」

エリオを守りたい。その為にいくつか案を考えた。その内の1つが、保護責任者。エリオの保護責任者になって、あの子が独り立ちするまで守る。そう伝えたら「その話に乗った！」アリシアは快諾してくれた。

「じゃあさ、早速伝えに行こうよ♪」

「うんっ！」

エリオにその事を伝えるために医務局へ。そこではいつものように暴れちゃってるエリオが、看護師さん達を困らせていた。私とアリシアは入室して、「ダメだよ、エリオ。あんまり暴れちゃ・・・」怒鳴るようなことはせず、そっと窘める。

「そうそう。そんな無茶をやってると、エリオ自身も辛いでしょ、苦しいでしょ？」

「・・・っさい・・・、うるさい・・・うるさいんだよ！！」

エリオが大声を発してさらに電圧を上げた放電を行う。看護師さん

達は「あの、コレを・・・」耐電グローブを差し出してくるけど、それを首を横に振ることで断った。私は電気変換資質を持ってるし、何より拒絶しているみたいではめる気にはなれなかった。

「関係ないだろ、あんた達には！　放っとけよ！」

「放っておかないよ」

「うん。それに関係なくないよ。私とアリシアは、エリオに幸せになってほしいと思ったから、あそこから連れ出したんだし」

「頼んでない、そんなこと！　どうせあんた達だって、ぼくのことなんてホントはどうだっていいんだ！　どうせすぐにうらぎって、放りだすんだ！　要らないって、すてるんだ！」

エリオがそんな悲しいことを言う。だから「そんなことない・・・！」エリオの左手を取った時、「さわるなぁぁぁーーーー！」エリオからさらに強力な放電が発せられた。

「フェイト！」

「大丈夫！！」

駆け寄ろうとしたアリシアを止める。さすがにアリシアにはこの電撃は辛い。今はエリオに誰かを傷つけさせるわけにはいかない。この時のシーンが、いつかエリオを苦しませると思うから。そっと左手を両手で包み込むと、放電が治まってくれた。今しかない。エリ

オに私の、私たちの思いを伝えるチャンスは。

「ねえ、エリオ。エリオが今その胸に抱いてる、悲しい気持ちも許せない気持ちも、たぶん・・・私はその全部を解りきってあげることは出来ないと思う。だけど、少しでも解りたいって思う。辛く悲しい気持ちも、分け合いたいって思うんだ。・・・エリオはどこか私に似てる。生まれ方もそうだし、親に拒絶されてしまったこともそう・・・」

「・・・え・・・？」

「一番大好きで、その人のためなら世界だって敵に回せるって思っていた。だけど、要らない子だって、失敗作だって拒絶された。それがすごく寂しくて、悲しくて、死んじゃいそうな程に辛かった」

最終的に私はプレシア母さんから愛を貰えた。だけどエリオが親から愛を貰うことはきっともう無い。

「どれだけ悲しくても、苦しくても、許せないことがあっても、それが永遠に続くことはないんだよ。楽しいこと、嬉しいこと、探していけばきっと見つけることが出来る。私だってそうだった。手を差し伸べてくれる人が居た。エリオにもきっとそういう人が現れるよ。最初は私と、後ろに居る私のお姉ちゃん。一緒に探していこう？

エリオ。そして、お願い。悲しい気持ちで一を傷つけないで。それはエリオ自身も傷ついちゃうから。ね？」

「・・・うん・・・」

抱きしめてあげると、エリオは大きな声で泣いた。

・―・―・終わりです・―・―・

あれ以降、エリオは人を傷つけることがなくなったし、私やアリシア、次に一緒に会いに行ったアルフにも、たどたどしいけどちゃんと話をしてくれるようになった。それに、ちゃんと保護責任者の事も受け入れてくれたし。

「フェイトさん、アリシアさん、アルフ！　今日早かったね！」

「まあね♪　お仕事をササッと片付けて来たんだよ！」

「だから、今日はいっぱい遊べるぞ！」

「やったー！」

あの頃と比べるまでもないとっても良い笑顔。私、この笑顔を守り続けたい。いつか私の代わりにエリオを支えて上げてくれる子が現れてくれるまで。ううん、現れてからも陰ながら、ね♪

Ｅｉｐｉｃｌ－Ｆ移ろいゆく季節～Ｔｈｅ　Ｆｉｒｓｔ　Ｓｅｃｒｅｔ～

†††Ｓｉｄｅすずか†††

中学生になってから、チーム海鳴のみんなと同じ空を飛ぶっていうことが極端に減って寂しい今日この頃。内勤の代表格である技術官の私は余計に飛ぶ機会が少なくなった。だから時折、何らかの任務で誰かが同じ空を飛べたって話を聞くと、あぁ～、ってなっちゃう。自分で技術屋っていう道を選んでおいてなんだけど・・・。

「この前も、なのはちゃんがルシル君に助けてもらったって言ってたし」

ハイジャックされた輸送機が墜落するというところで、ルシル君が巨腕生成の魔法のコード・イロウエルで防いだ。それはニュースになって、ルシル君をまた有名にした。墜落しかけようとも、ルシル君が居れば安心だ、って。そしてルシル君の仕事がまた増えてく。特別救助隊からのスカウトがあったけど、ただでさえ忙しいっていう内務調査部としての仕事との両立は難しいから丁重にお断りした。って、"エヴェストルム"のメンテナンスのために私のところに来てくれたルシル君自身からそう聞いた。

（その事をはやてちゃん達に伝えたら、本当に心配してたし・・・）

それなのに、通信もあんまり出ないし、メールもなかなか返って来

ないし、直接逢うことも出来ないルシル君。心配の言葉も掛けられないってことで、もうみんながお怒りモード。でも今週、ルシル君は1年ちょっとぶりに海鳴市に帰ってくる・・・予定。はやてちゃんと直接指切りをして約束したって言うことだから、たぶん帰って来てくれるとは思う。

（一応その休みを利用して、みんなでシャルちゃんの応援に行こうって話はしてるけど・・・）

ちょうどその期間は、ザンクト・オルフェンでシャルちゃんたち騎士の昇進試験がある。チーム海鳴のみんなでシャルちゃんを応援しに行こうって話していて、休暇も揃うように調整済み。ルシル君にもお誘いのメールを出しているけど、今のところはまだ返って来てない。

「もう。メール返信くらいすぐに出来るはずなのに・・・」

作業の手を止めて、なのはちゃん達の誰からかのメールが来てないかを確認。けどやっぱり来てなかった。はぁ、と溜息を吐いて凝った肩をコキコキ鳴らしてると、「お疲れ様、すずか。休憩してはいかが？」背後から声を掛けられた。

「あ、お疲れ様です、ドゥーエさん」

ドゥーエ・スカリエッティ。ここ第零技術部（通称スカラボ）の部長、ジェイル・スカリエッティ少将の義理の娘の1人で、次女にあたる女性。教育隊や情報部に出向することが多々ある一等陸尉さん。

「ローズティーを用意したから、少し休みましょ」

「ありがとうございます、いただきます！」

作用を中断して、ドゥーエさんが淹れてくれた紅茶や作ってくれたクッキーを美味しく頂く。ドゥーエさんもそうだけど、長女のウーノさんの作る焼き菓子も本当に美味しい。それもこれも義理のお父さんであり、上司でもあるドクター（スカリエッティ少将の愛称）への愛の賜物・・・らしい。

「コレが今、すずかが造っている自立型の魔導端末ね」

ドゥーエさんが私の作業デスクの上に展開されてるモニターを指差した。モニターに映ってるのは、「はい。動物型の汎用型デバイス、その猫タイプの試作機です」私の作品の1つで、プロトタイプの猫型デバイス。

ずっと気にはなってたんだよね。デバイスなんてとんでもない物を開発していながら、自立型デバイスがあんまり開発されてないことに。どこかの魔導端末メーカーは人型の自立型デバイスを開発して、試験運用を繰り返してるのに。だったら私は色んな用途に応えられる動物型のデバイスを開発しようと思い至った。そしてようやく、試作機の1体が完成した。

「可愛いわね。けど見たことない種類の猫ね」

「ペルシャっていう種類の猫をモデルにして作りました」

「コレって本物の猫をベースにした物ではないのよね？」

さすがに本物の猫を改造するわけにはいかないから、外装はリアル重視のぬいぐるみ。だけど本物と見分けがつかないレベルのぬいぐるみは市販されていないから困ってた。それをポロっとみんなに漏らしたら、はやてちゃんがある人に協力をお願いしてくれたことで、その人は本物と見分けがつかない程のペルシャ猫のぬいぐるみを編んでくれた。

「はい。特別技能捜査課のトゥーリア・サクロス一尉に作ってもらったんです」

「あぁ、人形師の・・・」

特別技能捜査課に所属する人は特別捜査官と呼ばれて、全員が何かしらのレアスキルや固有スキルを持ってる。そして、いろんな部署からの応援要請を受けて短期出向、捜査協力を行う。戦闘系スキルだったら武装隊にも出向くことがある。

トゥーリア一尉のスキルは人形師で、自作の人形やぬいぐるみを使い魔に出来るというもの。自作と言う条件もあって、デザインは凝りに凝ってるから完成度はとんでもない。その作成レベルは最早プロ・・・なんて目じゃない程のもの。

「（私だって初めて見た時は鳴き真似して呼んじゃったし）すごいですよね。近くで見ても、触れても本物だって思えちゃいますから」

毛並みや柔らかさまで本物そっくりで、生物特有の温かさが無いってことで初めて偽物だって判る。それほどの精巧さ。とまぁ、そんなトンデモぬいぐるみを使って私は自立型のデバイスを作ってみた。

「すずか、あなたがスカラボに来てから本当に毎日が楽しくなったわ。最近だとほら、アレ。自動掃除機♪　アレ、ドクターの手伝いや仕事などで忙しい時には大助かり♪」

「壱式くんと弐式くんですか？　そう言ってもらえると嬉しいです♪」

私の作品第2号（第1号はエヴェストルム・アルタだ）である自動掃除機。1つはル○バをモデルにした壱式。小さな埃などを吸い込むための物。もう1つは業務用掃除機（あの大きな円柱型のやつ）をモデルにした弐式。キャスター付きだから自動で動いて、壱式では処理しきれない大きなゴミを、マニピュレーター2本で拾い上げて背部に連結されたゴミ箱に捨てるという機能を持ってる。

≪≪≪ 某、参上≫≫≫

噂をすればなんとやら。ドゥーエさんと話をしてると、壱式が3機とやって来た。壱式と弐式には言語機能を付けておいた。使用言語は侍言葉。発案者は時代劇が好きなシャルちゃんで、使用音声も立候補したシャルちゃんとアリシアちゃんの声を録ったものだ。

≪≪≪ 推して参る≫≫≫

「お掃除ご苦労さま」

≪苦しゅうない≫

≪恐悦至極≫

ドゥーエさんが労いの言葉を掛けると、ドゥーエさんの側に向かっていた2機がそう返して掃除を始めた。

「あ、今退くね」

≪かたじけない≫

私がそう言って席を立つと、もう1機がそう言って私の足があった場所を掃除し始めた。インテリジェントデバイス程の知能は無いけど、簡単な応答くらいは出来るようにした。これが結構好評で、特にドクターやセインは、侍言葉を真似しちゃうほど気に入っちゃってる。ちなみにシャルちゃんとアリシアちゃんにも人気だ。

そんな予想外の人気者になってる壱式の掃除の様子を横目に、ちゃちゃっと作業の続きをやってると・・・

≪猪口才な≫

≪小癪な≫

≪洒落臭ぇ≫

何かしらの問題が発生した場合に発せられる音声が聞こえてきた。そっちに目を向けるとデスクの陰に壱式3機が固まっていた。様子を確認するために席から断とうとしたら「私が行くわね」ドゥーエさんがヒールを鳴らして向かって行って、「ちょっとごめんなさいね」壱式3機を散らした。

「お菓子の空き袋（ゴミ）・・・？」

ドゥーエさんがそう漏らしたのが聞こえた。ドゥーエさんがしゃがんでそのゴミを拾おうとしたら・・・

≪ あいや、待たれい≫

≪ 御無体を≫

≪ 某に成敗をさせて候≫

壱式たちが止めに入った。壱式たちはどうも掃除ロボットとしてのプライドが高いというか。開発者の私もビックリ。自分たちのスペック以上のゴミも処理しようとして、結果ゴミを詰まらせてフルメンテ、なんてことも何度かあった。さすがにそう何度も同じ轍は踏んでほしくないから、「開発者命令～！　壱式～、たいきゃ～く！」命令を出す。

≪ 無念でござる≫

≪ 是非も無し≫

≪ 余儀ない≫

ゴミ処理を諦めた壱式たちが他の場所の掃除を終えて、ここ第2研究・開発室から出て行った。ドゥーエさんが「すずかの出したゴミではない、わよね？」そのお菓子の空き袋を摘み上げて私に見せてきた。

「はい。そう言った物を持ち込むこともしないですし・・・」

スカラボに居る内でのお菓子などは、ウーノさんやドゥーエさんがお皿に盛ったものしか食べない。じゃあ誰が？って考えたところで「セインね、間違いなく」ドゥーエさんが呆れた声でそう漏らした。

「あー・・・」

言われてみれば、って納得しちゃう私。私がウーノさん達からのお願いで、日本のお菓子をお土産として持って来ることがある。なんでもこっちじゃ見たこともないのに美味しい物が多くて、こっちで再現したいということで。だから色々と持って来るんだけど・・・

――うんめー！　このデカカツってやつが特に！――

駄菓子の定番、デカカツを特に気に入ったセインが食べながらスカラボ内を歩き回ることが多くなった。ドゥーエさんが摘み上げてるデカカツの空き袋が何よりの証拠。ドゥーエさんはくしゃくしゃと空き袋を丸めて制服のポケットに入れながら「叱っておくわ」ちょ

っと怖い声色でそう言った。

「えっと、あ、お茶とコーヒー美味しかったです、ごちそうさまでした」

「お粗末さま。それじゃあ私は――」

ドゥーエさんがそこまで言い掛けたところで、ビィービィー！って警報が鳴り響いた。私がスカラボに通うことになってから約５年の中で初めてのことだから「え？　え、なに・・・！？」うろたえる。

「っ！　・・・良い機会ね・・・。すずか、あなたも来て！」

「え、は、はい！」

ドゥーエさんと一緒に開発室を出て応接室へと向かう。そこにはドクターやウーノさん、三女のトーレさん、四女のクアットロさん、五女のチンク、六女のセイン、スカリエッティ家が勢揃いしてた。

「すずか君も来てくれたのかい？」

「あの・・・」

どういう状況か判らないからどう答えて良いのか迷う。そんな私に「とりあえず座りましょう」ウーノさんがソファに座るように勧めてくれた。言われるままにソファに座ると、テーブル上にモニターが展開された。表示されてるのは白衣を着たお爺さんなんだけど、

なんか表情から狂気を感じる。

「彼の名はヘンリー・ヨーゼフ・リー・メンゲレ。通称はプロフェッサー・ヘンリー。かつては次元世界に名を馳せた生物学、特に遺伝学などの権威だったんだが、少し前に広域指名手配を受けてしまった」

「管理・管理外世界問わずに特別なスキルなどを有した子供たちを拉致、もしくは高額で買い取り、そのスキルを再現できないかを研究するため人道に外れた実験を行っている犯罪者集団です。すでに何人もの犠牲者も出ていて、死を免れたとしても再起不能状態だったりするとのことです」

ドクターとウーノさんからそう伝えられた。プロフェッサー・ヘンリー。吐き気を催すほどの悪党だった。セインまでもが「うわっ、絶対に許せないね」怒りを露わにした。だけど、こう言った人たちを取り締まるのは次元航行部に所属してる局員たちだ。なのにどうして、ドクター達はこの人の事について話をしてるんだろう・・・。

「そんな彼プロフェッサーが、次元犯罪者プライソンの研究施設から子供たちを拉致したという報告が入った。その子たちを、おそらくすでに解き放っているであろうプライソンの追手より先に確保するのが今回の任務だ」

プライソン。ドクターと同じ通称で呼ばれてる次元犯罪者。プレシアさんがフェイトちゃんを生み出した技術、"プロジェクトF・A・T・E・"の基礎を確立させた科学者でもある人。さらに、ルシル

君が存在意義としてる"エグリゴリ"であるレーゼフェアさんとフィヨルツェンさんを従えてる。

「トーレ、チンク、セイン！」

「「はいっ！」」「んっ！」

「君たちが先発として、プロフェッサーの拠点である次元航行船に突入。情報によれば、次元航行部所属のアースラが支局からの要請でプロフェッサーの逮捕に動いているらしい。子供の救出を最優先に、余裕があれば逮捕に協力するんだ」

アースラ。確か今回の任務では、フェイトちゃんとアリシアちゃんとアルフの、チーム・テスタロッサが同乗してるって聞いてるけど・・・。ううん、不安も心配もない。だって、フェイトちゃん達にクロノ君が加わればそれこそ無敵だから。

「後発はドゥーエ、クアットロ。支局やアースラと連絡し合って所定の場所までプロフェッサーの艦を操縦するんだ」

「判りました」「はぁ～い♪」

そういうわけで、拉致されたという子供の救出のため、トーレさん達が出動することになった。アースラのリンディ提督に向けてスカラボが捜査協力することを連絡し終えたウーノさんが、「ドクター。転移先座標の設定が完了しました」そう報告した。

「ああ。最優先目標は子供の救出。向かってくる敵は殲滅だ！」

ドクターが命令を下した。そして、ウーノさんがプロフェッサーの艦へと直通転送できるように設定し直したトランスポーターから「行ってきます！」トーレさん達は出動した。３人を見送った私やドクター達は応接室に戻って、３人から送られてくる視界映像が表示されてる３分割にされたモニターを観る。

『こちら先発班。無事に目標の艦へと転送完了。これより任務を実行します』

客船のような内装をしてる艦内を進む映像が映る。だけどすぐに『止まれ、チンク、セイン！』トーレがそう叫んで、さらに『すずか！お前は今すぐに席を外せ！』そう言われた。今、何か赤い物が映り込んだような気がするけど・・・。ドクターが「何か問題が生まれたのかい？」そう訊くと・・・

『死体が複数転がっています。パッと見でしたがデータにあったプロフェッサー傘下のスタッフのようです。どれもかなり残虐な殺し方をされていまして、すずかには刺激が強過ぎるかと・・・』

そんな報告が入った。出来たばかりの死体がフェイトちゃん達が今居る艦の中にある。殺したのはフェイトちゃん達じゃない。なら他に、人を殺せるような危ない人が艦の中に居るということになる。それが判ったからモニターから目を離すことが出来ない。

「・・・トーレ、チンク、セイン。こちらで死体が表示されないよ

う設定をする。少し時間をくれたまえ」

『判りました』

ドクターは手元に展開したキーボードモニターのキーを軽快に打ち込んで、「完了だ。任務を続行したくれたまえ」１０秒とせずに作業を終わらせた。指示通りにトーレさん達が再び歩き出す。死体と思われるものは、見せられないよ、って書かれたカンペを持ってるデフォルメされたドクターのイラストで隠されてた。

「ドクター。不謹慎です」

「え、ダメかい？　力作だと思ったんだがね・・・」

「あの、これで良いですから。直す時間も勿体ないですし」

ウーノさんに叱られてしょんぼりしてるドクターに私がそう言った途端、『ＡＭＦ！？』トーレさんとチンクが叫んだ。ＡＭＦって、魔力結合や魔力効果発生を阻害する高ランクの魔法だ。

『まさか、全域に展開されているのか・・・！？』

「艦内精査完了しました。ＡＭＦは艦内システムとはまた別の系統なようで、こちらからの解除は不可能です。それと、生命反応のある部屋のカメラを支配下に置きました」

ウーノさんが忙しなくキーボードモニターのキーを打って、モニタ

ーを2枚追加。映し出されたのは男の子2人が診察台のような物に寝かされたものと、「フェイトちゃん、アリシアちゃん、クロノ君、アルフ・・・！」の4人と、プロフェッサーと呼ばれるお爺さん。あと、藍色のブレザー、白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが1本入った黒のプリーツスカートを着た、ウェーブのかかった金髪の女子高生さん？が1人が映るもの。ううん、そんなことより・・・

「苦しそう・・・！」

フェイトちゃんとクロノ君はデバイスを支えにようやく立っていられてるって風で、アルフはぐったり倒れていて、アリシアちゃんに至っては防護服が解除されて制服姿になっちゃってる。そんな中で、女子高生さんがプロフェッサーに向かって歩き出した。

「セイン、プロフェッサーを殺害させるな！　プライソンのラボの所在地を吐かせる！」

『りょ、了解！　ＩＳ発動、ディープダイバー！』

セインが隔たれた壁の中に潜った。シスターズはそれぞれ固有スキルを持っていて、セインのは無機物に潜行し、自在に通り抜けることが出来るというもの。無機物の内部を泳ぐように移動することで、地下や建造物の内部も自由に移動できる。

実際に壁の中を潜ったセインは、『セインさん、颯爽登場！』なんて言って、プロフェッサーを確保、そしてまた壁の中に潜って廊下へ脱出。そして金属の壁に両手を当てているチンクが『離れていろ』

警告を出した。

『ＩＳ発動、ランブルデトネイター！』

チンクも遅れて壁から離れた直後、壁が大爆発。チンクのスキルは、触れた金属を爆発物に変えるというものだ。それで金属壁を爆発物として爆破させた。

『ん？　なんだアイツらは・・・？』

トーレさんの視界映像に映るのは全身が真っ黒な人、その数１０人。装甲のあるフルフェイスヘルメットや、体の部分部分にも分割装甲を装着してる。一番目が行くのは、両前腕部に装着された装甲から飛び出してる剣で、血に塗れてた。それだけで、あの黒い人たちがスタッフの殺害犯なんだって判った。

『『『『ぎぃぃぃぃーーーーーー！！』』』』

『『『『ぎゃぁぁぁぁぁ・・・・！』』』』

黒い人たちは聞くに堪えない叫び声を上げて、トーレさん達に襲い掛かり始めた。トーレさんと一緒に黒い人たちを殴っては蹴って迎撃するチンクが『私が対処する。トーレはクロノ執務官たちを！』そう促した。

『判った！　ＩＳ発動、ライドインパルス！』

トーレさんもスキルを発動。頑強な素体構築と全身の加速機能によって可能になるっていう、飛行能力を含む超高速機動スキルで、腿や足首、それに手首から魔力じゃないエネルギーの翼・"インパルスブレード"を発生させる。この翼は攻撃にも使うことが出来る。そんなトーレさんが、チンクが開けた壁の中に突撃していった。

「チンク！　構うな、排除せよ！」

黒い人たちを殴っては蹴り続けるチンクにドクターがそう命令を下した。でもチンクは『しかし、相手は人間・・・！』そう言う理由で渋った。

「彼らはすでに亡くなっている者たちだ！　プライソンの非人道兵器、ＬＡＳ！　Ｌｉｖｉｎｇｄｅａｄ　Ａｒｍｓ　Ｓｏｌｄｉｅｒ・・・！　死体をベースに改造して造られたサイボーグだ！　チンク！　死してなお辱められた彼らを解放してやるんだ！」

あまりの真実にクラっときた。死体を改造する？　そんなこと、考えついても実行しないし、そもそも考えつくこと自体が異常。もう吐き気すら催してきた。

『・・・了解です！　ランブルデトネイター！』

チンクがスキルを用いての迎撃を開始。黒い人たちは次々と爆破されてバラバラになってく。その光景に私はチンクの視界映像から堪らず目を背ける。ウーノさんが「チンクからの映像は一時遮断しますね」と、私を気遣って消してくれた。

「ごめんなさい・・・」

「いいえ。私としても、すずかさんにお見せするのは心苦しいので」

そしてトーレさんの視界映像が大きく表示される。トーレさんが相対するのは女子高生みたいな女の人。

『偽者とは、酷い言い草ですね！　言うなれば私たちは姉妹になると言うのに！』

――メタルダイナスト――

『姉妹だと？　ドクターが長年掛けて生み出した医療技術を盗み、それを兵器開発に転用したプライソン！　そして初めから戦闘兵器として造られたお前たちと我々を・・・一緒にするな！」』

――ライドインパルス――

その女子高生さんはどうやら金属を操ることの出来るスキルを持ってるみたいで、室内の内装を破って飛び出して来た金属壁などを使ってトーレさんを追い込む。

「トーレ。彼女も生け獲りするんだ。プライソンについて、話を聞かせて頂こう」

『了解です！』

「あの、ドクター。今のトーレさんとあの人の話・・・」

「ん？・・・あぁ、そうだね。すずか君にも話しておくべきか。プライソンという男がどういった人間なのか」

ドクターが語り始めた。ドクター・プライソン。有機・無機問わずに兵器開発を主とする科学者。兵器開発技能においては、ドクター以上の天才だって。管理局の艦載兵装の１つである魔導砲アルカンシェルも、プライソンが構築した基礎理論が使われてるみたい。そんなプライソンが、元々ドクターが生み出した医療のためだけのＢＮＡＣ技術を、どういう手段で盗みだしたのか判らないけど兵器開発に転用した。これはトーレさんの話通り。セキュリティの高さが次元世界屈指なのにどうやって盗まれているのかは、ドクター達も未だに判らないとのこと。

「彼は探求欲の塊さ。思い付いたら即実行。人道、倫理、そんなものなど持ち合わせない正真正銘の外道。ＬＡＳが良い証拠さ。それに、今トーレと相対している彼女、おそらく私の娘たちと同様に全身が機械化されたサイボーグだろう」

「私たちとあの女が姉妹だっていう話は、おそらくソレが起因してるのでしょうねぇ～」

「しかしアレは初めから兵器として生み出されたもの。生きるために、そして後世の障害を持つ人たちのために施術を受けた私たちとはその存在意義が違います」

「一緒にされたくないものね」

ドクターの怒り混じりの話にクアットロさん、ウーノさん、ドゥーエさんも怒りを露わにした。

「自分が神様にでもなったつもりなのかね。・・・彼は、自分の思い通りの作品を造るために人間を造っているんだよ」

「人間を・・・造る・・・？」

「試験管ベビーとか聞いたことあるかい？　彼は、目的の兵器を造るために適性遺伝子を組み合わせたり、プロジェクトF・A・T・E・のような技術を使ってクローンを造りだすんだ。そして狙い通りに造れた子供を、あの娘のように機械化させて兵器とし、道具とする」

もうフィクション作品の中の物語みたいな話に私の頭はパンクしそう。もちろん原因は怒り。プロフェッサーも外道だったけど、プライソンはさらに酷い。

「私たちスカリエッティ家はね、プライソンが道具として生み出した子供たちを救出するっていう任務を独自に負ってるの」

「プライソンのラボがあると聞けばそこに攻め込んでぇ～、ラボや技術の破壊、子供たちの救出を行うのよぉ～」

「局の仕事より最優先だから、まぁ色々と先方からお叱りを受けるけど」

「故に今回は、ラボどころかプライソンの居場所を知っているであろう彼女の確保も大事になったというわけさ。さて、ドゥーエ、クアットロ。今の内に子供たちの救出を」

「はいっ！」「判りましたぁ～♪」

「ウーノ。君は第1室のメインコンピュータから5人をサポート」

「畏まりました、ドクター」

ウーノさんとドゥーエさんとクアットロさんが応接室から出て、ウーノさんは私が未だに入れない第1研究・開発室へ移動して、ドゥーエさんとクアットロさんは隣のトランスポーターからプロフェッサーの艦へと向けて転移した。

「では続きを話そうか。実はね、これはウーノ達にも隠している事なのだが、実は彼女たちもプライソンによって生み出された試験管ベビーなのだよ」

「え・・・？」

なにかトンデモない話を聞かされてる・・・？

「プライソンがそう言った技術を使って生体兵器を造っているとい

う情報を受けた私は、ミミル君ら古い友人とチームを組んでプライソンの研究施設に潜入。そこでウーノ達を発見して連れ帰った」

ミミル君。ザンクト・オルフェンに拠点を置いてる技術者さんだったよね。リイン――リインフォースⅡの誕生のためにはやてちゃんに協力してくれた、あのミミルさんのことだよね・・・。

「しかしどんな酷い事をされたのか、体はボロボロの状態だった。だから私は、生み出したばかりのＢＮＡＣ技術を用いてあの子たちをサイボーグ化させた」

「あの、ドクターが運営してる孤児院出身で、障害のある子供だったって言う、あの話は・・・」

「改造時に記憶を書き換えさせてもらったのだよ。プライソンによる実験やら研究で負った心の傷をどうにかしたくてね。私は実際に孤児院を運営しているが、ウーノ達が孤児院に居たことはないのだよ。偽りの記憶さ。たとえ後に知られて恨まれようとも、彼女たちの荒みきった心をどうにかしたかった」

とても辛そうに、悲しそうに眉を顰めるドクター。これは責めていいものじゃないよね。だから「今のウーノさん達が笑っていられるのは、ドクターのおかげなんですね」って優しく語りかけた。

「・・・いつかは真実を伝えるよ。それでも私を父と慕ってくれるのなら、私は今以上にあの子たちのために、この人生の全てを費やすつもりさ」

「はい」

「しかしね。救えない子供も居るのもまた事実さ。少し前にプライソンのラボより救出した子供たちを、再び奪い返されてしまったことがあった。今も捜索しているのだがね、見つけられていない」

半年ほど前、ドクター達が荒れてた時期があった。私が来たことを知ると努めて普段通りに装っていたけど、結構バレバレだった。何があったのかを訊いたこともあったけど、何でもないよ、ってはぐらかされてばっかりで・・・。でも、そうなんだ。今の話を聴いて、そうなっちゃうのも理解できる。

「だから何としてもトーレには頑張ってもらい、彼女を確保してもらいたい。・・・セッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、ディード。あの子たちの居場所を聴き出さなくてはね」

（その6人が、プライソンに奪い返された子たちの名前なんだ・・・）

モニターに視線を移して、戦闘領域を室内から廊下へと変えたトーレさんと女子高生さんの戦いを見る。機動力向上のスキルと金属操作のスキル。1人は動、1人は静。2人は拮抗した戦いを続けてた。

『こちらチンク、セイン。執務官たちとプロフェッサーを無事にアースラへ収容しました』

そんな中でチンクから報告が入った。フェイトちゃん達の無事が確認できて心底ホッと出来た。

「ありがとう、チンク、セイン。申し訳ないがチンクはトーレの、セインはドゥーエ達のサポートを」

『了解です』『はーい！』

セインのスキルで一気に下層にまで戻ったチンク達は途中で分かれて、チンクはトーレさんと合流、セインはドゥーエさんとクアットロさんと合流を果たした。ドクターは「これで子供たちを救出できるね」ソファの背もたれに全体重を預けた。

『こちらドゥーエ。子供2名の確保完了しました』

それから間もなく幽閉されてた子供たちの救出が完了したって報告が入った。セインからの視界映像に映るのは、薬か何かで眠らされてるのかぐったりしてる男の子2人がドゥーエさんとクアットロさんに抱っこされてる姿。

「こちらでも確認した。とりあえずドゥーエとセインは一度帰還してくれたまえ」

『判りました』『はーい』

「クアットロはブリッジに赴き、その艦の操縦を」

『はーい♪』

ドクターの指示に従って、ドゥーエさんとセインは甲板へ、クアットロさんはブリッジへと移動開始。ドクターは「よし。これであとは・・・・」トーレさんとチンクの戦闘が映るモニターに視線を戻した。

『一気に決めに掛かるぞチンク！』

――ライドインパルス――

『ああ！』

――ランブルデトネイター――

トーレさんとチンクによる2人がかりの攻撃に、『くぅ・・・・！』女子高生さんが次第に押され始めてた。負けじと金属を操って2人に突撃させるけど、トーレさんはフェイトちゃん以上の速度で攻撃の隙間を駆け抜け、チンクも避けつつ"スティンガー"で女子高生さんを狙い撃ち。そんな攻防が繰り返されてとうとう・・・

『あ〝っ！？・・・あがあああああああああ！！』

女子高生さんの右腕が、トーレさんの右手首から展開されてる"インパルスブレード"で斬り落とされて、チンクの"スティンガー"の爆破を受けた左脚が破壊された。

『この、この・・・このぉぉぉぉーーーーー!!』

『こちらトーレ、チンク。敵性戦力を撃破。これより確保します』

手錠を取り出したトーレさんとチンクが女子高生さんに歩み寄って行く。女子高生さんは心底悔しそうに表情を歪めた後、『イプシロン!!』そう叫んだ。その直後、『っ!?』トーレさん達と女子高生さんの合間を光の柱が通過していった。

『砲撃だと!?』

『魔力ではない! これは・・・私たちと同じエネルギー運用の砲撃だ!』

トーレさんとチンクがその衝撃で廊下の床に伏せた。揺れる視界映像の中、『この屈辱、必ず果たす!』女子高生さんがそう怒声を上げながら床を這って、砲撃で出来た穴へと落ちて行った。トーレさんとチンクが『待て!』穴に向かって駆け寄るけど穴の底は次元空間で、女子高生さんの姿は無かった。

『チッ・・・!』

『申し訳ありません、ドクター。逃しました』

「いや、大丈夫さ。あの娘の確保は失敗したが、ラボの在り処を知るプロフェッサーの確保は出来、子供たちも救出できた。悪くはない結果さ。みんな、御苦労だったね」

こうしてプロフェッサー・ヘンリーを巡る戦いは終わった。救出された男の子2人はやっぱり、プライソンの手によって生み出された子たちだった。2人は特別保護施設に預けることになって、プライソンが逮捕されるまではドクターが保護責任者になることになった。そして、プロフェッサーからプライソンのラボの所在地を聴き出したドクターはシスターズをその地へと向かわせたけど、すでにもぬけの殻になってたって後で知らされた。

Ｅｐｉｃｌ－Ｇ移ろいゆく季節～Ｅｌｄｅｒ　ｓｉｓｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

平和でお気楽だって言われてたミッド北部に数ある陸士部隊、その内の１つである第２１１部隊に所属してるあたし。いつもはそんなに事件・事故も起きないから毎日毎日デスクワークばっかりだったけど、今日は違う。

「おはよう、アリサ」

「おはよう、クラリス」

同じ陸士２１１部隊に所属してる同僚、クラリスと隊舎へと続く路の途中で合流した。いつもは出勤中だろうがなんだろうが関係なく食べ歩きしてるクラリスも、今日ばかりは緊張して・・・

「うん。新しく出来たクレープ屋、なかなかやる。常連になってあげよう」

「そうよね・・・。あんたに緊張感を持てって言うのが間違いなのよね・・・。ってゆうか、寝癖くらいしっかり治してきなさいよ」

寝癖の付いた真っ白なセミロングの髪を撫でつけるんだけど、やっぱ櫛やヘアスタイル剤なんかが無いから直んなかったわ。クラリスは口元に付いたクリームをペロリと舐めた後、「私やアリサ、それ

に航空武装隊も来てくれるから今日の任務は余裕、余裕」そう言った。

「まぁ確かに、今日の捜査は航空隊と合同だって言うけど、どの部隊かによっていろいろと変わってくると思うのよね」

航空武装隊は確かにエリート集団よ。優れた空戦スキルを有してるわ。でも、チーム海鳴として戦ってきたあたしにとっては・・・その、弱いと言うかなんと言うか。武装隊の隊長の魔導師ランクは平均でAで、隊員はB。んで、あたしはAAAとかSとかの連中と全力な模擬戦ばっかりを繰り返してたから、今じゃ陸戦AAA−よ。クラリスだってAAA+だし。

「もしダメそうだったら、私が飛竜を召喚すれば良いし、アリサも一応は空戦できるんだから、ある程度フォローに回れば良い」

「そうなっちゃうのね、やっぱり。そん時はよろしく頼むわよ、クラリス」

「ん」

今日は1日、ある事件捜査に掛かりっきりになる予定。捜査と逮捕をサクッと終わらせても事後処理があるからね、今日だけじゃなくてしばらく事後処理に追われるかもしれないわ。そんな会話をしながらあたし達の所属する隊舎へと到着。エントランスに向かってる中・・・

「あれ？　アルメーラ部隊長とヴァン隊長補佐？」

エントランスから出て来たのは、あたし達２１１部隊の部隊長アルメーラ・ルノー一等陸佐と、部隊長補佐のヴァン・ルノー三等陸佐。共に３０代後半の姉弟。その２人がまるで何かを待つようにエントランス前のターミナルに整列した。

「武装隊の人たちの迎えかしら・・・？」

「たぶん違う。いくら武装隊が本局のエリートだからって、佐官がわざわざ出迎えなんて・・・」

「有り得ないわよね、さすがに」

じゃあ一体、誰を待つために隊舎の外にまで出て来たのかしら。その答えは、あたし達がエントランスに着く前に出た。１台の車がターミナルに入って来た。その車は公共交通機関の１つ、タクシー。後部座席のドアが自動で開いて、そこから降りてきた人物を見たあたしとクラリスは「あ・・・！」指差した。

「遠路お疲れ様でした、セインテスト査察官」

「部隊長室にご案内いたします。どうぞこちらへ」

ルノー部隊長たちが待っていたのってルシルだったのね。敬礼をし合ったルシルや部隊長たちが隊舎の中へと入って行った。なるほど。査察官としてやって来たルシルへの心証を良くするためのものだっ

たわけか。

「ルシル、内務調査部の局員として有名だし、仕方ないかも」

クラリスがそう言う。ルシルは査察官として、監査官として、監察官として、この1年少しで功績を何度も上げてる。不正があれば絶対に見つけ出し、不正を働いた連中を確実に罪に問わせる。

（その結果、慈悲無き粛清者（パージマシーン）なんて恐れられてる始末・・・）

そのうえルシルってば執務官と並ぶエリート役職の1つ、調査官になるための研修まで受けて、未来の最年少調査官ってことでも有名なのよね。ルノー部隊長たちが不正を働いてるとは思わないけど、やっぱ心証を良くしたいって思うんでしょうね。

「ルシルも戦力に加われば、どんな犯罪者であろうと不安なく捕まえれるんだけど・・・」

ルシルがレーゼフェアから受けた呪いは未だに解呪できてないわ。だから創世結界も使えないままだし、左目も失明したまま。やっぱレーゼフェアを斃さないといけないみたいなのよね。まぁ複製なんて使えなくても十分に強いんだけど。

「ルシルは査察官として来たんでしょ？　じゃあ無理よ。というか、アイツの目の前で無様なことやって、笑われるわけにはいかないわ。しっかり活躍してみせるわよ」

「おー！」

そういうわけで、あたしとクラリスも隊舎へと入って、捜査会議室へ直行。すでに先輩の捜査官たちが何人か椅子に着いてた。朝の挨拶と一緒に敬礼し合って、空いてる席にクラリスと一緒に着く。それから１０分ほどして、あたし達２１１部隊の全捜査官が揃う。さらに・・・

「各員、起立！　本日の捜査に協力していただける第２２１２航空武装隊の第２班と第３班の隊員各員に・・・敬礼！」

捜査主任のヴィザ・シトロエン一等陸尉が、２２１２航空隊のメンバーを引き連れて会議室に入って来た。あたしたち捜査官は号令の通りに立ち上がって「よろしくお願いします！」敬礼する。武装隊のメンバー達も「よろしくお願いします！」敬礼返し。

（シグナム・・・）

第２班にはシグナムが居た。ほんの少し前まではヴィータやセレスも居たようだけど、２人揃って別の部隊に異動させられたって聞いてる。まぁさすがに人員が常に足りてない航空武装隊。１つの部隊に、ましてや同じ班にＳ－やＡＡＡ－なんかを集めるのはどうかしてると思うわ。

『今日はよろしく、シグナム』

『ああ。よろしく頼むぞ、アリサ』

シグナム達も席に着いてすぐ、「おはようございます、皆さん」部隊長のアルメーラ一佐と補佐のヴァン三佐、それにルシルまでもが会議室に入って来た。少しざわつく室内だったけど、「静粛にお願いします」ヴァン三佐の一言に静かになった。

「ルシリオン・セインテスト査察官には、本日の捜査に査察官として同行して頂く運びとなった。第２１１陸士部隊捜査部、恥ずかしい真似は出来ないぞ！」

ヴァン三佐の激励に「はいっ！」あたし達は応えた。あたし個人的にもダサい姿はルシルには見せらんないわ。アイツが海鳴を出てった後から今日までの間に、あたしがどれだけ成長したのかを見せつけてやるわ。

「では捜査会議を始める。約半年と掛けて捜査してきた麻薬密売組織を今日、各地方の陸士部隊とタイミングを見計らって一斉検挙する」

メンバーも揃ったことで捜査会議の始まりよ。会議室前方に大きなモニターが展開されて、あたし達が追ってきた犯罪集団の構成員の顔写真や簡単な経歴が表示されて、あたし達の手元にはソイツらや麻薬の購入者たちのデータが表示されたモニターが展開された。

「危険指定麻薬を違法所持、および販売を行っているこの者たちは、魔導犯罪者のみに高額で販売・提供している。麻薬の効果は、リンカーコアを異常に活性化させ、魔導師本人の魔力限界値を強制的に

引き上げさせるというものだ」

すでにその麻薬に手を出して犯罪行為をした魔導犯罪者が別の世界で逮捕・起訴されてる。ソイツらのデータもあって、麻薬の効果には個人差があるんだけど、平均で2ランクアップ。一番効果を引き出させてる奴に至ってはCからＡＡＡ－の4ランクアップ。アホか、なんてツッコミを入れたくなるような上がりっぷりだわ。

「しかし、そんな出鱈目な効果を引き出す物が、体やリンカーコアに対してなんの悪影響を出さないわけもなく。本局より取り寄せた捜査資料によれば、使用者の大半は死に至っている。運良く生き延びたとしても臓器移植が必要となるほどに体内が酷く損傷する。魔導犯罪者による犯罪、被疑者本人の死亡が拡大している。その原因を今日、我々は立ち切る！」

もちろん、そんな旨い話があるわけもないわけで。判ってるだけでも死者が２３人ときてる。この麻薬による死者の共通点は、リンカーコアが暴走したことによって臓器を焼かれての焼死ね。胸元に穴が開いてるのよ、ポッカリと。

そんな麻薬を売っている奴らが、ここ北部ミラ地方を始めとした各地方に堂々と拠点を構えてる。この検挙は、ミッドだけじゃなくて他の管理・管理外世界にも大きく関わる重大な案件だ。緊張するのも仕方ないわ。ま、クラリスだけはいつも通りののほほんだけど。

「密売組織の中には戦闘魔導師も複数人と居り、調査の結果、ここミラ地方に居るだけでも陸戦魔導師が6人、空戦魔導師が6人の計１２人。平均でランクＡ。当部隊やご協力していただける航空隊の

中にはそれ以上の高ランク魔導師が居るため、戦闘に関しては不安は無い。しかし、場所は商店・住宅街となっているため、それを留意して事に当たってほしい」

それから人員配置などの作戦を立てて、連中が拠点とするマンションのある区画へと移動することになった。まずは局の制服から私服へと着替える。局員が大所帯で移動する様なんて、連中を捕まえに来たってわざわざ教えているようなものだしね。さらに有名な局員（わたしやクラリス、シグナムとか）は変装をすることに。

「まぁ変身魔法じゃなくて良かったわ。あんまし戦闘以外で魔力消費したくないし」

「そもそも私は変装するほど有名なのかも怪しい」

更衣室で私服に着替えて、さらに用意してもらったカツラを被ることに。あたしの自慢の金髪は艶やかな黒髪で隠すことに。クラリスのセミロングの雪のような白髪は真っ赤なロングに。

「あんた、白髪の幼騎兵って恐れられてるの知らないわけ？」

巨大な黒馬アレクサンドロスを駆って車道を疾駆して逃走犯を追跡、そのうえデバイスで薙ぎ払う様を見て、市民は熱狂、犯罪者は震え上がってるって話。非公式ながらファンクラブも在るとか無いとか。そういやあたしの非公式ファンクラブってどうなってんのかしら。憶えてればエイミィ辺りにでも聞いてみよう。

「気にしたことないから判らない」

「ま、あんたも十分有名人だってことを解ってればそれで良いわよ」

「そう。・・・お手洗い済ませたいから先に行ってる」

「ん～」

クラリスが先に更衣室を出て行った。あたしはクラリスほど髪が短くないから、纏めるだけでも苦労するわ。そしてようやく髪を纏めてカツラを被る。ロッカーの扉の内側にある鏡で、黒髪になったあたしの姿を確認。

「なんか似合わないわね、あたしに黒髪なんて。どっちかって言うと、クラリスのカツラみたく赤い方が良かったんじゃ・・・」

けど替えのカツラは無い。しょうがないからそのままで更衣室から出ると、「アリサ」あたしの名前を呼ばれたから振り向くと、「パッと見じゃ誰か判んないわよ、シグナム」ド金髪になっちゃってるシグナムがそこに居た。髪型もポニーテールじゃなくて、ルシルみたくうなじ付近での1つ結びだし。

「似合わんか？　まぁ私としても金色は無いだろう、と思ってはいたがな」

「俺は結構イケてると思いますがね、姐さんの金髪も」

「それで髪型をポニーテールにすれば、なかなかかと思います！」

シグナムの後ろに控えてた男女２人がそう言ってフォローするんだけど、「あたし、金髪がダメって言った憶えないんだけど？」似合ってないとは言ってないわよ。というか、「姐さんなんて呼ばせてんの？　シグナム」その呼び名に驚いた。

「いや。私が呼ばせているわけではないぞ」

「俺が勝手にそう呼ばせてもらってるんすよ、バニングス陸曹。あ、自己紹介が遅れました。俺、ヴァイス・グランセニック一等陸士っす！　基本的にスナイパー担当で、時々ヘリパイロットを担当してます！　んで、こっちが・・・」

「ア、アルト・クラエッタ三等陸士です！　整備士をやってます！　あの有名なチーム海鳴の方とお会いできて光栄です！」

「ありがとう。アリサ・バニングス陸曹よ。今日はよろしくね、ヴァイス一士、アルト三士」

「うすっ！」「はいっ！」

ヴァイスはなんかチャラそうだけど、陽気な兄ちゃんみたいな感じで好感が持てるわ。アルトは緊張からか顔を真っ赤にしてて、ちょっとイジリがいがある感じ。でもクラエッタってどっかで聞いた名前よね。どこでだったかしら。

「ヴァイスとアルトは、ヴィータやセレスが居た頃からの部下でな。ヴァイスの狙撃の腕は目を見張るものだ」

「そう言ってもらえると嬉しいっす！　そんな姐さんのカッコ良さに惚れましてね。自然と姐さんって呼びたくなっちまったんすよ！」

「へぇ～。シグナムに惚れた、ねぇ～」

なによ、シグナムはシグナムでそう言った想いを向けられてるんじゃない。あたしはシグナムに近付いて「やるじゃない」って、シグナムのお腹を肘でつつく。すると「なんの話だ？」シグナムは小首を傾げた。

「まあまあ。あんたも一応は女の子なんだから、恋愛もしたって良いのよ？　はやてはあたしが説得してあげるから。それにヴァイス一士も、応援してあげるわよ？　頑張んなさい」

今度はヴァイスの肩を叩こうとしたんだけど、かなり背が高くて無理だったから口にするだけに留めた。

「いや待て、アリサ。なにか勘違いをしているぞ」

「あー、惚れたっつっても恋愛とかじゃなくて憧れみたいなもんすから・・・。確かに姐さんは美人だし、すげぇ格好良いし、付き合えたら男冥利には尽きるんすけどね。なんつうか高嶺の花なんすよ。だから憧れていられるだけで十分つうか・・・」

「そうなの？　ていうか、その言い回しって若干告白入ってるわよね」

「・・・・あ、いや、それは！」

ハッとしたヴァイスがうろたえ始めた。アルトが「先輩、ファイト！」なんて応援し始める。シグナムはただ黙って見守ってるだけ。

「～～～っ！　よっしゃ！　姐さん、好きだ！　付き合って下さい！」

「すまん」

「くはっ！？」

ヴァイスの告白に対して即答したシグナム。この流れに持ってったあたしとアルトは、ガックリ肩を落として「ほら見ろ。絶対こうなると思ったぜ」ブツブツ呟いてるヴァイスに、「ナイスファイト」そう言うことしか出来なかった。

「ち、ちなみに断られた理由、聞いてもいいっすか？　外見とかがダメなんすかね・・・？」

「私は外見で人の好き嫌いはせん。それにヴァイス、お前の外見は良い方だと思うぞ。内面も悪くはないと思う。私個人の見解だがな。魔導師としての腕もあり、優秀な部類だろう」

「姐さん・・・。俺、もう・・・それだけで十分っすよ」

「結構良い評価ね。シグナムがそう言うくらいだから、ヴァイス一士は良い人だってことは理解したわ。で？　それなのに、どうしてダメなわけ？」

思いの他高評価を出したシグナムにちょっと驚きだわ。でもだからこそダメなのかを知りたい。

「私は主はやての騎士だ。この身も心もあの方に全て捧げた。私の幸せは、主はやてのお側に居続けること。それ以上のものは無いだろう。ゆえに、誰かと付き合うといった恋愛は無用なのだ。すまんな、ヴァイス。私は、お前とは男女の関係にはなれん」

「い、いえ！　誤魔化すことなくハッキリと答えてくれて良かったっす！　ありがとうっした！」

なんか予想通りの返答だった。本当にシグナム達ははやて第一主義よね。まぁ、はやてと出会うまでの生き方からすればしょうがないけどさ。

とまぁ、そんなやり取りをした後であたし達は隊舎から出動。捜査車両６台で別々のルートを通って現場近くまで行って、あたしたち第２１１部隊の捜査官はマンション周辺の路上や喫茶店などから監視するんだけど・・・

「まさかマンションの中に配置されるとは思わなかったわ・・・」

「それほど私たちが頼られてる証拠」

あたしとクラリスは高ランク魔導師と騎士っていうことで、まさかのマンション内に配置された。

『構成員たちが拠点にしているのは１０、１１階の２フロアとなる。カーテンが閉められているため室内は確認できないが、サーモグラフィで１７人居ることが確認できた。１０階に１０人、１１階に７人。捜査してきた中でミラ地方に陣取るメンバーの同数と判明』

しかも被疑者が一番多く居るフロアの真下、９階の部屋だ。で、シグナムたち航空隊員は周辺のビルの屋上に潜んでるし、航空隊のスナイパー組（航空隊所属だからって全員が空戦魔導師じゃないのよね）も周辺のビルから狙ってる。

『各地の陸士隊の突入準備が整うまでは各員、待機せよ』

一斉に検挙しないと組織内で連絡が回って、何を仕出かすか判らない。どうせ碌でもないことに決まってるでしょうけど。そうならないようにタイミングを合わせる。これまで検挙できるチャンスがあったのに、それを不意にまでして今日まで待ってきた。全ては徹底的に連中を捻り潰すため。

『皆、お待たせしました。各地方の陸士隊も準備が整ったとのことです。それでは時間合わせを行います。カウント５０！　・・・３、２、１、今！』

今、を合図にカウント数を５０秒に設定。あたしとクラリスはカツ

ラを外して防護服へと変身。そして"フレイムアイズ"をファルシオンフォームで起動させる。クラリスは方天戟型アームドデバイス・"シュトルムシュタール"を起動。刺突用の穂先の左右には三日月の形をした刃――月牙が２つ付いてる。石突には鋲がズラリと並んだ六角柱の棍棒。斬って良し、突いて良し、薙いで良し、殴って良しの近接戦特化のデバイスだ。

「ウンテンフォルム」

クラリスは"シュトルムシュタール"を下半分である棍棒だけの形態へと変形させた。フルサイズだけで２ｍちょいもあるからね。屋内戦の場合、槍部分だけのオーベンフォルムか、棍部分のウンテンフォルムのどちらかにする。そうすることでデバイスが内装に引っ掛からないようにするのよね。

『バニングス、ヴィルシュテッター、スタンバイ』

本部に連絡を入れる。あとはカウントが終わるのを待つだけ。静かに時間が過ぎるのを待って、あたしとクラリスの間に展開されてるカウントを刻むモニターに表示された秒数が１０秒を切り、「３、２、１・・・！」そして０となったその瞬間、ガシャァン！と上階から窓ガラスが一斉に割れる音が聞こえてきた。

（まずは両フロアに向けて催涙ガス弾を撃ち込む）

本局技術部の特製だからその効果は折り紙つき。本部から『マンションより飛び出した敵空戦魔導師６名を視認！　航空隊は追撃を！』

そう連絡が入った。催涙ガスの効果から逃れようとした連中はまず間違いなく外へと飛び出す。敵空戦魔導師が空に上がるのは作戦の内。シグナムたち航空隊が潰す。

『陸戦魔導師３名を視認！　スナイパー班、撃ちます！』

敵陸戦魔導師は愚かにも普通に出口から脱出したようで、周辺のビルからの狙撃できっと全滅されるでしょうね。残り３人はどっから逃げるかしら。そう考えた直後、ドッカーン！と天井が爆発を起こして崩れ落ちてきた。

「ホントに床を壊して階下に降りてくるなんて。シトロエン捜査主任の読みは良く当たる」

「同意するけど、今はそんなこと言ってないでブッ倒すわよ！」

「おー！」

「え？」

「ここにも局員が・・・！」

「くそが・・・！」

床をぶち抜いて降りて来たのは残りの３人。デバイスは一般的な杖型のストレージ。連中があたし達に気付いてデバイスを向けてくるけど、「遅いわよ！」あたしはすでに連中の懐にまで飛び込んだ後。

「はいっ、はいっ、はいっ！」

あたしは"フレイムアイズ"を振るって、連中が握ってるデバイスをその手から弾き飛ばしてやったわ。あたしとしてはこの程度のことは特別じゃないんだけど、「速ぇ・・・！」連中からしてみれば早技らしい。でもま、これであたしの仕事は終わったわ。あとは任せたわよ、クラリス。

「これまで悪さをして甘い蜜を吸ってた。これは自業自得だからしょうがないよね」

「「「ヒィ・・・！」」」

あたしと入れ替わるようにクラリスが突っ込んで来て、「いっぽ～ん」1人を"シュトルムシュタール"でぶん殴った。ソイツは「うごふっ！？」豪快に吹っ飛んで、窓ガラスを突き破って外へ。さらに「にぃ～ほ～ん」逃げだそうとしていた2人目もぶん殴り、ソイツは壁に叩き付けられて行動不能。

「待っ、と、投こ――」

「さ～んほ～ん」

クラリスは"シュトルムシュタール"の先端を、何かを言い掛けた3人目の腹にねじ込むように打ち込んで、「おげぇ・・・！？」盛大に唾液やら何やらを吐きだしたソイツは崩れ落ちた。

「・・・クラリス。やりすぎよ」

「そう？　コイツらはこれ以上に酷い事をやってきた。この程度の痛みすらまだまだ足りてないよ」

そう言って気を失ってる2人を蔑みの目で見下ろすクラリス。あたしは「ほら。手錠を掛けて、連行するわよ」クラリスの肩を叩いて、ソイツらに手錠を掛けた。それから本部に被疑者2名を確保したことを連絡を入れて、マンションから出たんだけど・・・

「何か騒がしい？」

「何かあったのかしら」

護送車へと移送されてく被疑者たちの側に居る同僚の捜査官たちとは別に、捜査車両付近に居る捜査官や武装隊員たちの様子が少しおかしい。移送担当の捜査官に2人を引き渡したあたしとクラリスは、「シグナム」一番近かったシグナムとヴァイスに声を掛けた。

「アリサ、ヴィルシュテッターー」

「どうもです、騎士シグナム。グランセニック一士、お疲れ様です」

「うすっ！　お疲れ様っす！」

「ヴァイス一士たちもお疲れ様。で、何かあったの？」

本題に入ると、「それがですね。漏れがあったらしいんすよ」ヴァイスがそう答えた。さらに・・・

「確保した17人の内、14人は組織の人間だったようなんすけど、他3人が客だったみたいで」

そんなあってほしくない情報が伝えられた。検挙した結果、17人を逮捕。だけどその内の3人が客。じゃあ、組織の人間である残り3人は今どこに居るわけ？ってことになる。

「今、他の捜査官たちが周囲を探索しているが、まだ見つかってはいないようだ」

「かなりヤバい展開です。漏れがあったとなると、その漏れの3人は一体何を仕出かすか」

4人で唸る。状況は限りなくレッド。そういうわけで、あたしとクラリスも付近を捜索するためにシトロエン捜査主任に申し出ようとした時・・・

「非確保だった3名を発見しました！」

同僚から報告が入った。でもその後の内容で、あたし達は凍りついた。あたし達の拠点検挙を知ったその3人は街中で子供を人質にしてビル内に立てこもり、今し方捕まえた連中を解放するように条件を出してきてる、とのことだった。

「とにかく、配置し直しだ！　総員、現場へ急行！」

「人質の身の安全を最優先！　絶対に傷つけてはなりません！」

そういうわけで、あたし達は捜査車両に乗り込んで現場まで直行。その途中、車内で現場の映像を観る。空きビルの４階のベランダに男３人と幼い女の子３人が居て、男たちは女の子たちの首に腕を回して魔力ナイフを突き付けてる。

「うそだろ、おい・・・なんの冗談だよ、こりゃ・・・・！　ラグナ・・・・！　だって今日は、お袋や友達と買い物に行くって・・・・！」

ヴァイスが頭を抱えて狼狽し始めた。あたしがシグナムに視線を移すと、「右端の少女、ヴァイスの妹だ」そう教えてくれた。狼狽するのは当然だった。人質にされてる女の子の１人が、ヴァイスの妹だったのだから。

そして現場に到着して・・・

「スナイパー班は指定の位置にて待機！　航空隊は対象ビルの屋上にて待機！　陸戦部隊は隠密にビル内部へ突入、４階にて待機！」

指示通りにあたし達は動く。スナイパーの１人であるヴァイスは「待ってろ、ラグナ！　必ず助けてやるからな！」血相を変えて指定のビルへ向かって走って行った。そしてシグナムも「また後でな」他の空戦魔導師たちと一緒に移動。あたしとクラリスも、ビル内に突入するために移動開始。

（ルシル・・・）

前線本部である指揮通信車両に乗ったままのルシルは、うちの部隊長や捜査主任と一緒にモニター監視。こう言っちゃホントに悔しいんだけど、アイツが出れば冗談みたいにすぐに片付くんでしょうね。

「アリサ、急いで」

「ええ！」

クラリスや同僚たちと一緒にビル内に突入。その間にも外の様子を見られるように小型モニターを展開しておく。被疑者3人はあたしたち局員が集まって来ているのが判ったみたいで、なんか大声で叫んでるみたい。

「いつ人質に手を出すか判らない今、さっさと位置に着いた方が良いわね」

「早く泣いてるあの子たちを安心させてあげたいね」

捜査主任がネゴシエーター（交渉人資格があるしね）として交渉を開始したのがモニターに映し出される。その間にあたし達は所定の位置に陣取り、突入の合図を待つ。ちなみにあたしとクラリスは、被疑者の居る部屋の出入り口のドア前で待機。あとはヴァイス達スナイパーが被疑者の武装なり本体を狙撃して、あたし達は人質を救出、航空隊が外から被疑者を確保すれば事件解決よ。

『これよりスナイパー班による狙撃が開始される。各員、突入準備！』

モニターに映る被疑者3人はピリピリしていて、捜査主任の交渉や説得には全く耳を貸してないわね。大人しく投降すれば、痛い目に遭わずに済んだのに。

『こちらスナイパー班。撃ちます！』

ヴァイスとは違うスナイパーから連絡が入った直後、スナイパー3人からそれぞれ魔力弾が発射されて、1人、2人と胸を撃ち抜いていって無力化したけど、「っ・・・！？」誰かの1発だけが、最悪なことにヴァイスの妹って言うラグナの左目に着弾した。

「こちらバニングス！　突入します！」

指示を待たずにドアを開けて室内に突入する。一直線にベランダまで駆けて、「て、テメェ・・・！」ラグナを人質にしてた男が魔力ナイフをあたしに向けてきた。あたしがどうにかする前に・・・

「ていっ！」

背後からそんな声が聞こえたと同時、あたしの脇を高速で何かが通り過ぎて行った。ソレはクラリスのデバイス・"シュトルムシュタール"だった。ソレは高速で男の顔面に直撃して、鼻血やら歯やらを撒き散らしながらベランダの向こうへ消えてった。落ちたソイツの確保は外の同僚に任せて・・・

「被疑者の確保をお願いします！　あなた達、大丈夫！？」

ぶっ倒れてる被疑者の確保を同僚たちに任せて、あたしは泣いてる女の子２人の側へ駆け寄る。ラグナ以外の子は鼻を啜りながら頷くことで応えてくれた。でも「ラグナ！」は意識を失ってるようで、ぐったりとベランダの壁にもたれかかってる。左目からは血が溢れ出ていて、かなり酷い損傷を負ってることが判る。

『ラグナ！　ラグナ！　ラグナ！　すまない、俺、俺は・・・・！』

ヴァイスから通信が入る。そうか、ヴァイスが誤射してしまったのね。あたしは「左目を大きく損傷してるわ！　医療班！」本部に連絡を入れて医療班を待機させてから、ラグナを横抱きに抱え上げる。

「「ラグナちゃん！」」

他の子があたしとラグナに駆け寄ってきた。ラグナちゃん、か。おそらくこの子たちが、ヴァイスの言ってたラグナの友達なのね。あたしは「お医者さんに診せてくるから、先に行くわね」そう伝えてからベランダから飛び降りた。飛行魔法を発動して、ササッと地上に降りる。

「バニングス陸曹、こちらへ！」

医療班の医務官に声を掛けられて、あたしはそっちに向かって走る。そして救急車両に乗り込んで、ラグナをストレッチャーに横たえさ

せた。医務官を筆頭に救命士たちがすぐに止血やらの処置を開始。それを見守ってると、「ラグナ！」ヴァイスがやって来た。

「あのっ！　俺の魔力弾が当たって！　非殺傷設定っだったんす！　治りますよね！？」

救急車両に乗り込んで医務官に掴み掛ろうとするヴァイスを「落ち着け、ヴァイス！」シグナムが引き止めた。ヴァイスは「くっ・・・！　お願いします！　治してやってください！」車両から降りて土下座した。

「・・・たとえ非殺傷であっても、子供の眼球は柔らかく繊細な部位ですので、非殺傷の魔力弾でも直撃とあっては失明は免れないかと・・・」

「っ！！　失・・・明・・・？　あぁ、ああ・・ああ・・・あぁぁぁぁぁあああああ・・・ああああああああああああっ！！」

非情な宣告が下された。それを聞いたヴァイスがハッと顔を上げて、両手で頭を抱えて悲痛な叫び声を上げた。だけど、まだ諦めるには早いわ。

「アイツなら・・・！　ルシルならきっと・・・！」

救急車両から飛び出したあたしは、本部へと向かって走る。その途中で、ひとり現場を歩くルシルを発見。あたしは「ルシル！」の名前を呼んで、アイツの元に走る。

「あぁ、バニングス陸曹。お疲れ様です。事後処理に混ざらなくても良いのですか？」

するとルシルはチラッとだけあたしを見ては他人行儀にそう言って、別のところへ向かって歩き出そうとした。だから「待ちなさいよ！」引き止める。

「なんですかバニングス陸曹。僕はそれほど暇ではないんですが」

「はあ？　僕ぅ？　ふざけてんじゃないわよ！　あんた、ずっと事件のこと観てたんでしょ！　だったら民間人に負傷者が出たことも判ってんでしょ！」

「あぁ、ヴァイス・グランセニック一等陸士の誤射。酷いものでしたね。撃たれた子も可哀想に」

ルシルはそれだけを言って、また立ち去ろうとした。あたしの怒りボルテージは臨界点近くまで行った。なんでそこまで判っていながら、思っていながら、そんな他人事みたいでいられるのよ。

「それだけ！？　言うことはそれだけなわけ！？　マジでふざけてんなら承知しないわよ！　アンタなら治せんでしょ！　だったらなんで放っておくのよ！」

肩を掴んで無理やりあたしの方に振り向かせたら、「はぁ・・・。ふざけているのはどっちだ？」ものすごい怒りオーラを放ったルシ

ルがそう言って、「っ・・・・！」あたしの手を振り払った。

「な、なによ・・・」

「ふざけているのは・・・君だ、アリサ・バニングス陸曹。何故解らない」

「・・・？」

あたしの何がふざけてるわけ？って言い返そうとしたら、「セインテスト査察官！」ヴァイスがルシルの側に駆け寄った。

「頼んます！　俺の妹が、俺の不注意で左目の視力を失いそうなんす！　セインテスト査察官なら治せると聞きました！　お願いします！　どうか、この通りっす！」

９０度まで頭を下げたヴァイス。それでもルシルは「無理だ」簡潔に断った。あたしの怒りボルテージがとうとう臨界点突破して、「いい加減にしなさいよ、ルシル！」アイツのネクタイを引っ掴んでやった。

「・・・俺は査察官としてこの場に居る。君は捜査官としてここに居る。俺たちは医務官じゃない。医務官になんの話も通さず、捜査官である君が、査察官である俺を、プロの医務官の意向を無視して、勝手に医療行為をさせようというのか？」

「「っ！」」

「アリサ。俺たちは管理局員なんだよ。組織に属する人間だ。部署や派閥、そう言ったものに縛られるのが当たり前。個人の意思だけで好き勝手に動くことは許されない立場なんだよ。いい加減解れ、アリサ。俺たちはもう、あの頃とは違うんだ」

反論できなかった。あたし達には立場がある。陸士部隊は縄張り意識が強い。地上本部は次元航行部が嫌い。そう言った確執を見てきた。あたしは両拳をギュッと握りしめて・・・そのまま黙った。

「じゃ、じゃあ！　医務官たちから応援要請が入れば、査察官が治療を行ってくれるんすか！？」

「ああ。その時は全力で、グランセニック一士、君の妹の目を治す」

ルシルがそう言ったことで、あたし達はすぐにルシルを連れて救急車両へと戻る。途中シグナム達に、何とかする、って意味を乗せた頷きを見せて、先に事後処理に向かってくれるよう伝えた。そしてルシルを外に待機させたうえで、あたしは医務官たちにルシルの治癒魔法のことを説明した。死んでさえいなければどんな怪我でも治せる魔法、コード・エイルのことを。

「ティファレト医務官やシャマル医務官から聞いてはいたが、本当にそんなことが可能なのか？」

「はいっ。実際に何度か目にしてますから！」

必死にアピールする。正直ルシルのコード・エイルの治癒力は聞いただけじゃ信じられないレベルのもの。だから言葉だけじゃ信じてもらえないこともある。けど、「チーム海鳴のバニングス陸曹がそう言うなら・・・。お願いしましょう！」あたしからのアピールってことで、ＯＫを貰えた。

「ありがとうございます！　ルシル、お願い！」

「失礼します」

車外に居るルシルを呼ぶと、ルシルが医務官たちに一礼しながら入って来た。そして医務官たちからラグナの左目の症状を聴いて、「判りました。それなら問題なく行けそうです」ルシルは左手でラグナの左目を覆った。

「女神の祝福（コード・エイル）」

冷たい色なのにどこか温かなサファイアブルーの魔力光がラグナの左目を包み、車内に満ちた。ルシルは「角膜ＯＫ、水晶体ＯＫ・・・」何かブツブツ呟きながら魔力を放出し続けて、そして・・・

「ふぅ。施術完了。あとは眼科医にでも診てもらってください」

眼球の修復を終えたことを告げた。医務官たちがすぐさまラグナの眼球を診て「すごい！」口ぐちにルシルを称賛した。

「あ、ありがとうございます、セインテスト査察官！　俺、俺・・

・このご恩はぜってぇ忘れません！」

ボロボロ泣き崩れるヴァイスがルシルの左手を取ってお礼を繰り返す。でもルシルは「妹の目が治ったからと言って、君の誤射が帳消しになるわけじゃない」そんな酷い事を言って返した。

「んなっ！？　ちょっ、あんた、今それ言う必要ないでしょ！？」

何でこの1年ちょっとでそんなに意地悪、というか性格が悪くなったのよコイツ。あたしはまたルシルに掴みかかろうとしたんだけど、

「いいんす、バニングス陸曹！」ヴァイスが制止してきた。

「セインテスト査察官の方が正しいっすから。自分のミスで妹を傷つけた責は負います」

ヴァイスがキッと真剣な表情になってルシルにそう言うと、アイツは頷いて「彼女の目に何か異常があれば連れて来てくれ。俺が責任を負う」それだけを言って立ち去ってった。

それからラグナは、念のためにということで病院へ搬送されることになって、ヴァイスや彼女のお母さんが付き添いで救急車両に乗り込んだ。後でヴァイスから聞いたんだけど、ヴァイス達のお母さんや他の子たちのお母さん2人は、ショッピング中に突然被疑者たちに殴られて、その拍子に転んで出来た隙にラグナや他の子たちが連れ去られた、とのことだった。

「何はともあれ、これで解決ね」

「バニングス陸曹！　今日は本当にありがとうございました！　陸曹が居なかったら、査察官や医務官を説得できずにラグナは失明して、俺もきっと壊れてた・・・」

先に事後処理を始めてるクラリスやシグナム達と合流するために現場に戻る最中、ヴァイスがこれまた深く頭を下げてきた。

「気にしないで良いわ。あたしのやりたいようにやっただけだし。だからお礼は結構よ。あぁ、あとアリサで良いわ。シグナムの部下っていうなら、これからもちょくちょくお世話になるでしょうし」

「っ！　格好良い・・・！　了解っす、アリサ姐さん！」

「ぶはっ！？　は、はあ！？　姐さんって、何よ急に！」

「アリサ姐さんの、シグナム姐さんに負けず劣らずの格好良さに俺、惚れたっす！　だから今日からは、アリサ姐さんと呼ばせてもらいます！」

「やめてぇぇぇぇ～～～～～！」

これ以降あたしはヴァイスから、アリサ姐さん、って呼ばれるようになった。

Ｅｐｉｃｌ－Ｈ移ろいゆく季節～Ｋｎｉｇｈｔ'ｓ　Ｔｒｉａｌ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

久しぶりのマイスターと同じ休み。期間はたったの２日。本音を言えば、２人きりのデートみたいなことをしたかったんだよね。でも今日は、シャルやトリシュっていった騎士たちの昇格試験があって、チーム海鳴のみんなで応援しに行こうって予定を立てたから、「仕方ないよね」諦める。

（それに、はやて達もマイスターと逢えなくて寂しそうにしてるし、今回の休みくらいははやて達にマイスターを譲ってあげよう）

アイリはこの１年ちょっとの間にヴィータに誘われて何度も海鳴市に帰ってるんだよね。マイスターも一応誘うんだけど、何かと理由を付けて断ってくる。マイスター、アイリにも何か隠し事してるみたい。内務調査部の仕事だけで、はやて達やなのは達との関わりを少なくしようっていう理由にはならないと思うんだよね。もっと後ろ暗い事をしちゃってるような、そんな気がする。

「ただいま～」

「あ、おかえりなさ～い！」

ベランダの物干し竿にアイリとマイスターの洗濯物を干してると、

ゴミ捨てから旦那様(マイスター)が帰ってきた。アイリとマイスターとのこの夫婦って感じの生活は、アイリの心を毎日満たしてくれるね。ふと時計を見て、「あれ～？」マイスターが部屋から出て3分と経ってたことに驚いた。

「マイスター、外で何やってたの？」

マイスターが2万年と追い続ける仇・"堕天使エグリゴリ"。その1機であり、本局の幹部でもあるリアンシェルトが用意してくれた部屋はなんと最上階の２０階。見晴らしも抜群で、人工の夜景とかも想像以上にグッドなんだよね。

んで、ここマイスターとアイリの愛の巣――寮は、廊下にあるダストシュートを使って、出たゴミを地下の集積場に落とす形式なんだけどね。この部屋からダストシュートまで３０秒も掛からない。それなのに帰って来るまで3分も掛かった。

「すんすん・・・。香水の匂い・・・」

マイスターの服から微かに香ってくる良い匂いに気付いた。後ろ手で組んで軽快なステップを踏んでマイスターの側に寄って「何してたの？」上目遣いでマイスターを見る。

「ん？　あぁ、イスズ一佐と会って話をしていたんだ。ほら、お隣さんのだ」

「ミュー・イスズ一等空佐・・・」

局員って言うよりはホステスって職業の方がお似合いな見た目の、お色気ムンムンな年齢不詳な女の人。所属は確か情報部・諜報室の室長。そんなイスズ一佐は、引っ越して来たばかりはマイスターやアイリにも普通に接してたのに、２週間くらいと経ってたからマイスターへのスキンシップが激しくなってきた。

「またハグされたの・・・？」

「あー・・・、ああ」

「もう！　気を付けてって言ってるのに！　もう、もう！　マイスターは少し隙を見せ過ぎ！　もう少しはしっかりしてよね！」

「いや、まぁ・・・仮にも第１１１１部隊の上司の１人で・・・って、あ、おい、アイリ！？」

マイスターが何か言い訳めいたことを言ってた気がするけど、アイリは慌ててマイスターとアイリの部屋に行く。そしてアイリの誕生日プレゼントとしてマイスターにリクエストして買ってもらったオーデコロンを鏡台の上から手に取る。リビングに戻って「わっ！？　アイリ・・・？」プシュプシュッとマイスターにアイリの香りを振りかける。

「すんすん・・・。うん、これで良しだね♪」

イスズ一佐の香水の匂いがアイリのコロンの匂いで消えたし、マイスターにアイリの匂いが移ったから一石二鳥だね。アイリは満足し

て、コロンを戻すために部屋に戻ろうとした時、ピンポーン♪ってインターフォンが鳴った。

「こんな朝早くから客・・・？」

「あ、アイリが出るよ！」

マイスターが出ようとしてたから、アイリが先に玄関に向かう。モニターに映ってるのは「はやてとリインだ！」の２人で、『おはようや～♪』笑顔で手を振ってる。アイリは「招くけど良いよね？」一応この部屋の主であるマイスターに確認を取る。

「ああ、構わないよ。それにしてもはやて・・・、俺が信用できないから迎えに来たのか・・・？」

ガックリ肩を落とすマイスターを横目で見て苦笑いしつつ、「はやて、リイン。いま開けるね」モニターの側にあるキーを押して、マンション１階のエントランスゲートの開閉を行う。あとはエレベーターでここ２０階にまで昇って来てもらうだけ。

「アイリ。とりあえず、出掛ける準備をしておこう」

「はーい！」

マイスターと一緒に部屋に戻ってお出かけ用の服に着替える。まずは家事用のエプロン、それにパジャマとして着てるネグリジェを脱いで、替わりにロングワンピースにカーディガンを着て、つばの広

い帽子――キャペリンを被る。そしてマイスターはＴシャツにジーンズ、それにジャケットって服装に着替えた。
それから少しして、またピンポーンとさっきとは音の高さが違うインターフォンが鳴った。この音はこの部屋の玄関ドアに備え付けられたものだ。

「はいはーい！」

アイリは玄関ドアのロックを外して、「いらっしゃーい！」ドアを開けてはやてとリインをお出迎え。

「お邪魔しま～す♪」「お邪魔しますですぅ～♪」

はやてとリインが靴を脱いで部屋に上がる。本来は土足で上がる形式の部屋なんだけど、短かったけど日本の八神邸での暮らしが気に入ったアイリが土足厳禁にしようって、マイスターにお願いしたんだよね。はやてとリインと「おはよう」って挨拶を交わして、２人をリビングへ案内。

「ルシル君。おはよう♪」

「おはようです！」

「おはよう、そしていらっしゃい、はやて、リイン。お茶でも飲んでいくか？」

マイスターがキッチンに向かってポットを掲げて見せてそう訊くと、

「う～ん、とぉ～っても嬉しいお誘いやけど・・・」はやてが渋った。珍しいね。

「早い内にザンクト・オルフェンに行った方が良いかと思うですよ、ルシル君。シグナム達やなのはさん達はすでに向かってるですし」

リインがそう言った。シグナム達が居ない理由はそれなんだね。マイスターは「行くの少し早くないか？」時刻を確認した。今は午前7時２０分。今から次元港へ向かってミッド北部行きの便に乗って、次元港からザンクト・オルフェンまでの移動を考えても、シャルの試験は後の方だから少し早いかも。

「シャルちゃんだけを応援するならちょう早いかもやけどな。そやけど、応援するべき友達がわたしらには他に居るやろ？」

ウィンクしてマイスターにそう言うはやてに、「そうか、トリシュも試験を受けるんだったか」マイスターは思い出したかのように１人の名前を口にした。トリシュ、トリシュタン・フォン・シュテルンベルクは、マイスターがオーディンって名乗ってた頃、シュテルンベルク家の当時の当主、エリーゼとの間に生まれたって言う子供の子孫の１人だね。ちなみに兄にパーシヴァルって人も居て、２人揃ってマイスターにそっくり。でも髪や瞳の色はエリーゼのものを受け継いでる。

「アリサさんは、クラリスさんの応援もしたいと言ってたですよ」

「そうゆうわけで、シャルちゃんだけやなくて他のみんなも応援し

ようってことにしたんよ」

「判った。トリシュやクラリスにも世話になったことがあるし、彼女たちの応援もしよう」

「異議な～し」

というわけで、アイリ達は本局の次元港へと出発。バスに揺られて到着した次元港から船に乗ってミッドチルダの次元港へと向かう。その道中、はやてがこれまで直接会って会話できなかった鬱憤を晴らすかのようにマイスターに話題を振りまくる。

「そんでな。リンディ提督がアースラを降りることになって、クロノ君が新しく艦長になるんやって」

「あー、それはメールで見たよ。クロノもとうとう艦長職に就くんだな」

「そうやね～。それとな、昨晩なのはちゃんから連絡もらったんやけど、ユーノ君が無限書庫の司書長に就任するるってゆう話は聞いてる？」

「ああ、もちろん。直接逢える余裕が無かったから、クロノとユーノにはすぐにお祝いのメールを送ったよ」

マイスターがそう言った瞬間、はやてとリインの表情がカッチカチの笑顔で固まった。マイスターはそれに気付かずに「俺も同じ男と

して負けていられないよな」格好いい声色で決意するんだけど・・・

（気付いて、マイスター！　はやてとリインの表情を！）

はやてとリインは目の笑ってない笑顔を浮かべて、ギギギ、って擬音が合いそうな感じでマイスターの方を見た。そしてようやく「あ・・・」マイスターが気付いて固まって、流れるように居住まいを直した。

「なあ、ルシル君」

「っ！・・・はい。なんでしょうか、はやてさん」

「わたしらへのメールは後回しにして、クロノ君やユーノ君へのお祝いメールは即送信ってどうゆうことなんかなぁ？」

どうしよう。アイリ、今すぐこの場から逃げ出したい。あぁ、でももうそろそろ到着するから席を立つことは出来ないし。

「いや、その、あー・・・」

「・・・ま、まさか！　ルシル君、ちょう逢わへん内に女の子より男の子の方が好きになってしもうたん・・・！？」

「待て、待ってくれ、はやて。それ以上はいけない。誤解されるから」

少し前に女の子と間違われてナンパされたこともあって本気でうろたえるマイスターが『助けてくれ、アイリ』思念通話で助けを求めてきた。

『無理』

愛おしいマイスターからのヘルプだったけど、こればっかりは『マイスターの自業自得だと思うんだよね』って伝える。だからしっかりと叱られてもらおう。するとマイスターは『・・・あぁ、そうだな。自業自得だ』折れて、はやてとリインの方に体を向けて頭を下げた。

「すまなかった。本気で謝る。これからはちゃんと返信もする。だから許して下さい」

「・・・ルシル君。ホンマに忙しいんならしゃあないよ、正式な局員の忙しさはわたしもまだ判ってへんから。そやけどほとんどが既読スルーってゆうのだけは勘弁してほしい。みんな心配してるんよ。もしかして体を壊してるから返信できへんのかなぁ～って」

「一応アイリからある程度話を聴けますけど、やっぱりはやてちゃんやリイン達は、ルシル君から直接聴きたいんですよ」

はやてだけじゃなくリインにまでそう言われて、「ごめんなさい」マイスターはボッコボコ。はやてとリインは顔を見合わせて、「はい」硬かった表情も崩して優しい微笑みを浮かべた。マイスターも

ホッとして、「俺からもちゃんとメールするから。その時は返信、お願いします」って告げた。

「うん、こちらもお願いします」

「です♪」

そうしてアイリ達はミッド北部の次元港に到着。そこからバス移動して、ベルカ自治領ザンクト・オルフェンの中央部アヴァロンにある聖王教会本部を目指す。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒はやて†††

「おーい、こっち、こっち～！」

聖王教会本部に到着したわたしとルシル君、それにリインとアイリ。そんなわたしらに大手を振って出迎えてくれてるんは「セレスちゃん！」やった。ついさっきメールで、先に試験会場へ移動することになったから、わたしらのための案内役を１人置いてく、って送られてきたけど。まさかセレスちゃんやったなんて。

「会場へは私が案内するから、付いて来てね」

ボーイッシュな私服姿のセレスちゃんが手招きして、教会本部の奥へと歩き出した。わたしらも続いて歩き出す。教会本部の奥には教会騎士団の詰め所や訓練施設が設けられてるそうや。

「そう言えば、セレスさんは昇格試験を受けないんですか？」

わたしの肩に座るリインが先を歩くセレスちゃんにそう訊いた。セレスちゃんは騎種別に考えるとシャルちゃんとおんなじ剣士に当たる。シャルちゃんとセレスちゃんの闘いかぁ。きっとすんごいんやろうなぁ。

「やっぱり強いシャルさんとはぶつかりたくないですか？」

「え？　あはは。確かにイリスは強いし、絶対切断のスキルを使われたらかなり苦戦するだろうけど、私がイリスより下だなんて思ってないよ。私はパラディンには興味ないから試験を受けないの♪」

セレスちゃんがそう言うてニッと歯を見せて笑った。そんなセレスちゃんに「フィレス一尉と離れ離れになるしな」ってからかい調にルシル君が言うた。セレスちゃんは、お姉さんであるフィレス一尉が隊長を務める蒼薊騎士隊ブラウ・ディステルの隊員や。

「そっかぁ。セレスちゃん、お姉ちゃん大好きっ子やもんなぁ～♪」

「ですぅ♪」

「あぅ。まぁそういうわけで、私は昇格試験は受けないってこと」

照れた表情を浮かべたセレスちゃんが歩幅を大きくしてズンズン先を行くから「照れへんでええのに～♪」わたしらも早足で追い駆ける。そんで教会本部の奥にある訓練施設に到着する。五角形状に並

ぶ5棟のドームが渡り廊下で繋がってるってゆう巨大施設や。

「5棟中4棟のドームには環境に合わせた訓練用シミュレーターが設置されてるの。えっと、今の時刻なら第1クッペルで、受験者たちの宣誓式がやってるね。こっち」

セレスちゃんの案内で第1クッペル（ドームってゆう意味やな）に向かって、騎士のレリーフが掘られた木製の両開き扉を外側に向かって開ける。弧を描く廊下を歩いて、ドーム中央に入るための木製扉を開けて中に入る。

アリーナのように観客席（スタンド）があって、シスターや神父さん達がフィールドに当たる空間の方を見てる。そこには老若男女問わず百数十人と整列してた。よう見れば「シャルちゃん、トリシュ、それにクラリスとアンジェリエも・・・！」わたしらの親友の姿もあった。

「おーい！　はやてちゃん、ルシル君、リイン、アイリ！」

「あ、なのはちゃん！」

わたしらを呼んでくれたんはなのはちゃんやった。シグナム達も一緒に席に座ってる。わたしらも「おーい！」って手を振り返しながらそっちに向かおうとすると、「じゃあ、私はここでバイバイね」ってセレスちゃんが急にそんなことを言うた。

「ん？　セレスは見ていかないのか？」

「予定が空いてたら私も観たかったんだけどね。今日は、お姉ちゃ

んとショッピングなの♪　休みがようやく合ったんだ。だから今日はお姉ちゃんとの時間を大切にするの♪」

満面の笑顔なセレスちゃんはピースサインを作って、「またね！」みんなに手を振ってからスキップしながら帰ってった。そんなセレスちゃんとお別れして、わたしらはみんなの元へ。そんでわたしらも席に着いて、フィールドに整列してるシャルちゃん達を見る。騎種別に並んでるようで、シャルちゃんら剣騎士が並ぶ列の人数は他の列に比べて倍近い。

「あ、ルミナとパーシヴァルさん、それにシスター・プラダマンテも居るな」

騎種別に並んでる列の前方に設けられてる円卓にルミナ達、それに知らん人ら含めて８人が着いてる。

「あの人たちがパラディンなんだって。ルミナちゃんだけ小さいから結構目立つよね」

「現役パラディンで１０代はルミナだけみたい」

ルミナ以外はみんな大人の人で、２０代は確かパーシヴァルさんとシスター・プラダマンテだけ。他の人はみんな４０～５０歳くらいのおじさんなんやけど、一目で普通やない実力を持った騎士やって、こんな遠く離れたところからでも感じるほどの雰囲気を纏ってる。

「ついさっき、今回の昇格試験についての説明がシスター・プラダ

マンテからあったんだけど、思ってた以上にハードよこれ」

「騎種別の試合ってことは聴いてたんだけど、まさか2週間かけての総当たり戦だなんて」

アリサちゃんに続いてすずかちゃんがそう話してくれた。シャルちゃんからは試験の期間なんて聴いてなかったから「そうなん！？」ちょう驚き。2週間、14日間かぁ。今のわたしらならその内の約半分が休みやから、また応援に来られるな。

「総当たり戦の勝ち星で順位を決めて、最終日前日にそれまでの試合で獲得した勝ち星によって序列を決定。んで、1位だった奴が晴れてパラディンへの挑戦権を得られるっつうわけみたいだな」

「しかし。佇まいだけで強者と判る連中が居るな。・・・試合たい・・・！」

「あちゃあ。シグナムの発作が始まったですよ」

「にゃはは・・・」

シグナムは戦って競い合うってゆんが好きな子やからなぁ。でも確かに見ただけで強いって騎士が大勢居る。受験者の人たちを眺めてると、一斉に移動を始めてここ第1クッペルから出て行き始めた。

「試合会場に行くんやな。わたしらも・・・ってあれ？　みんな、どうしたん？」

椅子から立ち上がるわたしとルシル君とリインとアイリ。そやけどシグナム達は座ったままや。とここで「あ、ごめんなさい、はやてちゃん。伝え忘れました」シャマルが謝って、みんなが移動せぇへん理由を教えてくれた。

「丘陵地帯・・・？」

「はい。試験会場となる場所は、ここよりさらに奥に広がる丘陵地帯の指定区画となるそうです。どんな悪地でも十二分に戦えることが出来るように悪環境の中で訓練するようでして。街中での戦闘を念頭に置いた訓練は他のドームのシミュレーターを使うそうです」

「そうなんか～」

シャルちゃんら受験者が居らんくなったフィールドにモニターが複数展開される。映しだれてるんは、戦場となると思われる丘陵地帯。今は誰1人としえ映ってへんそのモニターを眺めながら待つこと数分、「良かったぁ！　まだ始まってない！」元気な声が出入り口の方から聞こえてきた。すごい聞き憶えのある声や。

「セレスちゃん！」

「エオスじゃない！」

「え？　あ、アリサ！」

「すずか！　なのは達も一緒なんだ！」

ザンクト・ヒルデ魔法学院の制服を着たセレスちゃんとエオスちゃんやった。そういや2人は、トリシュとは学年が上がってからもクラスメイトやったな。そんな2人と「久しぶり～♪」挨拶を交わしながら、わたしらの座る席に迎え入れる。

「あのさ、ユーノの司書長就任の祝賀パーティを開きたいんだけど・・・」

「みんなも参加してくれないかな・・・？」

セレネちゃんとエオスちゃんからの提案にわたしらチーム海鳴は顔を見合わせて、「もちろん！」参加することを伝える。とゆうよりは「にゃはは。私たちもその話を前からしてたんだ♪」なのはちゃんの言うように、わたしらもお祝いするためのパーティを開こうって話してた。もちろん、クロノ君の艦長就任祝いもするつもりや。

「「ありがとう♪」」

それからお祝いパーティのスケジュールを話し合って決めてると、「始まるようだぞ」ルシル君がモニターを指差した。モニターそれぞれに対峙してる騎士たちが映しだされてる。その内の2つに「お、早速トリシュとクラリスが試合うんだな」わたしらの友達が映った。

「モニターに名前や所属してる騎士隊、それに騎種や今のクラスが出るんやね」

「トリシュちゃんとクラリスちゃんの相手は揃ってＢクラス１位かぁ・・・・」

金水仙騎士隊ゴルト・アマリュリス所属、トリシュタン・フォン・シュテルンベルク。Ａクラス３位。騎種は弓騎士。対するのは黒篝火花騎士隊シュヴァルツェ・ツュクラーメン所属のＢクラス１位の弓騎士。そんで２０歳くらいの男の人や。

翠梔子騎士隊グリューン・ガルデーニエ所属、クラリス・ド・グレーテル・ヴィルシュテッターー。Ａクラス３位の騎乗騎士。対するのは灰芍薬騎士隊グラオ・ペオーニエ所属のＢクラス１位の騎乗騎士。こっちはクラリスとあんま歳の変わらへんくらいの女の子や。

「シャルにも言えるけど、トリシュやクラリスもすんごい強いのにそれでもＡクラスの１位じゃないんだよね」

アリシアちゃんがポツリと漏らした。この１年ちょっとで仕事をこなす時間が増えて、ミッドで仕事をした際は時々、海鳴市に帰ることなくシャルちゃんの家に泊まることが何度かあった。その際に何度もトリシュ達と模擬戦を行った。だからその強さは身に沁みてる。そんなトリシュ達より強い騎士（パラディンを除く、な）がまだ居ることに驚きや。

「試合開始のカウントが始まったです！」

モニターのど真ん中に表示されるカウント。５秒からカウントが始まって、０になった瞬間、試合開始や。トリシュは手にしてた弓型

のアームドデバイス・"イゾルデ"の魔力弦を引いて、魔力矢４本を指に挟むようにして作り出す。
すると相手の騎士はすかさず右手を突き出したうえでシールドを展開、トリシュに向かって突進した。トリシュはそれに構わずに３本の矢を射出。３本はそのままシールドに着弾して爆発。黒煙が発生して、２人の姿が煙に包まれて見えへんくなった。と思えば、四方八方に魔力矢や光線が放たれて、黒煙を吹き飛ばした。

「相手の騎士のデバイス、トリシュのデバイスと同様に近接戦にも対応できるようだな」

「トリシュちゃんは双剣形態にしないで、あくまで弓矢として扱っているわね」

「大量の矢による中距離物量作戦か」

「あ、相手の騎士も弓矢としてデバイスを使い始めたよ！」

トリシュちゃんの魔力光であるサファイアブルーと、相手の魔力光である黄緑色による魔力矢の応酬が始まった。まるでギリシャのロケット花火祭りみたい。

「負けんじゃないわよ、クラリス！」

アリサちゃんが応援するんはクラリス。アリサちゃんと同じ陸士部隊に所属してて、陸士訓練校では相棒やったって子や。わたしがクラリスと初めて会うたんは神器回収の時や。あん時は大きな黒い馬

・アレクサンドロスを召喚してたんやけど・・・

「ステュムパリデスやな」

全長３ｍ近い巨大な鳥・ステュムパリデスを召喚してる。シャルちゃん家での模擬戦で一度相手にしたけど、半端な空戦スキルやと手も足も出ぇへんと思う。何より純粋な対魔力攻撃耐性があることもあって、おそらく一個武装隊を相手にしても勝てるやろうな。

「わぁ♪　ペガサス！」

「初めて見たぁ♪」

「綺麗・・・！」

相手の騎士が召喚したペガサスになのはちゃん達が歓声を上げる。わたしも「次元世界には幻想がホンマに現実に居ってすごいなぁ！」って歓声を上げる。竜も居ればペガサスも居るような世界。それが次元世界。地球やと完全に伝説上の生き物やしな。こうゆう新しい発見が出来るのがホンマに楽しい。

そんでクラリス達は空戦を繰り広げて、すれ違いざまにデバイスで相手を直接討ちに行ったり、召喚した使い魔同士による攻撃を打ち合ったりと、ド派手な攻防を繰り返す。

「相手の方も強いけど、やっぱクラリスとトリシュの方が上ね」

「戦技教導官としてはどうだったりする？　なのは」

「えっ！？　えっと、うん。トリシュちゃんとクラリスちゃんの方がやっぱり動きが洗練されてる。トリシュちゃんはパラディン全員を師事してるからかな。普通に強いよ。クラリスちゃんも、使い魔のステュムパリデスの方が圧倒的だし、クラリスちゃん自身も強い」

アリシアちゃんからの質問になのはちゃんが答えてく。そんで、なのはちゃんやわたしらの予測通りトリシュとクラリスの２人は無事に勝利を収めた。向こうには聞こえてへんやろうけど「おめでとう！」と一緒に拍手を送る・・・んやけど、他の見学者であるシスターや神父さんは何もせぇへんかったから、わたしらちょう浮いてるかも。

「気にするな。大切な友達の勝利を祝うのに何を躊躇う必要がある」

ルシル君がわたしらにそう言うて一際大きな拍手の音を出した。そうやね。何も変なことやあらへんのやから。わたしらはまた拍手して、トリシュとクラリスの勝利を祝った。それから色んな騎士たちによる１対１の試合を観てく。そんでもう１人の友達の試合が始まる頃になった。

「アンジェリエの試合が始まるわ」

アンジェリエ・グリート・アルファリオ。所属は紫唐菖蒲騎士隊プルプァ・グラディオーレ。Ｂクラスの１位。シャルちゃん達に比べるとちょう遅れてる感じやな。騎種は打撃騎士。デバイスは旗型のアームドデバイス・"ジークファーネ"。その戦い方は、マーチングバンドのカーラーガードみたく旗を棍のように振り回しての打撃

が主や。

「昨日の内にシャルちゃん達に応援メールを送ったから、その応援メッセージを励みにして勝ってほしいね」

「メッセージと一緒に念を送ってやったわよ」

「あー、アリサの念は強そうだよね」

「今からでも遅くないから、念を送ろうか！」

モニターに映るアンジェリエに向かってみんなで両手を翳して、「ファイトォー！　アンジェリエ～！」念を送る。そしてアンジェリエは、相手の白雪中花騎士隊ヴァイス・タツェッテ所属の、メイス型のデバイスを携えるＡクラス３位の男性騎士と試合開始。

「頑張れー！」

「負けんじゃないわよー！」

その直後から相手と真正面からのど突き合い。アンジェリエは〝ジークファーネ〟を振るって、薙ぎや突きによるコンビネーションを繰り出す。そやけど相手はＡクラス３位、しかも男の人であり、メイスって完全な打撃武器型のデバイスでもあることで、アンジェリエを力尽くで弾き返しては攻めに転じる。

「まずいな。動きが読み切られている」

「アンジェリエの動きは決して悪くはねぇ。管理局に入れば優に武装隊の隊長になれるってレベルだ」

「教会騎士団のレベルの高さがよく判るよね」

「さすがは戦闘に特化した魔法体系。強い人がゴロゴロ居る」

他のモニターに映ってる騎士たちの試合。どれもこれも高レベルの戦闘で、もし万が一管理局と教会騎士団が衝突したら管理局が負ける、そう思えるほどや。

「おお！　アンジェリエ、やっと旗を開いた！」

朱色に輝く魔力で出来た旗がバサッと開いた。硬軟・広狭自在の魔力旗で攻防を行う。それがアンジェリエの本来の戦術や。硬くしては魔力刃として斬撃を繰り出して、柔らかくしてはメイスを絡め取って無力化、そんで素手や蹴りでの攻撃。押され気味やった戦況を互角に戻した。そやけど・・・

「あー！　負けたぁぁぁーーーー！」

相手の騎士の方が一枚上手で、アンジェリエが惜敗した。握手してお互いの健闘を称えるアンジェリエ達にわたしらは「ナイスファイトー！」拍手を送った。そんでとうとう我らが大親友シャルちゃんの出番や。

朱朝顔騎士隊ロート・ヴィンテ所属。Ａクラス４位、騎種は剣騎士。

イリス・フライハイト。対するのは桃茉莉花騎士隊ローザ・ヤスミーン所属、Ａクラス３位。武器は双剣。順位で言えばシャルちゃんより上や。

「頑張れー！」

「シャル！　負けるなぁー！」

「前回の試験からどれだけ強くなったか見せてやんなさい！」

「まぁ前回の試合の時は応援に来られなかったけど」

「というか、教えてくれなかったよねシャル」

「あぅ～。私が撃墜されて入院してたから・・・・」

「さすがに応援に来て、なんて言えないか・・・・」

騎士昇格試験は３年に一度行われるらしくて、前回の試験はちょうどなのはちゃんが入院してた時期や。そやけど今回はチーム海鳴勢揃いってこともあって、わたしらの応援にも熱が入る。

「シャルちゃん、頑張ってな・・・・！」

モニターに映るシャルちゃんの勝利を強く願う。そんでカウントが始まって、０になった瞬間、シャルちゃんと相手の騎士が同時に地を蹴った。そっからはいつも通りに強いシャルちゃんの見せ場。直

接斬撃や中・遠距離からの斬撃と戦況に合わせて切り替えて、相手の騎士の反撃を許さへん。

「決まったな」

ルシル君が微笑む。シグナムとヴィータも「ああ」って同意した。シャルちゃんは陸戦でも空戦でも相手を圧倒して、「おお！　勝った！」見事に撃破。みんなでハイタッチしながらシャルちゃんの勝利を喜び合って、「おめでとー！」拍手を送った。

Ｅｉｐｉｃｌ－Ｉ移ろいゆく季節～Ｃｅｌｅｂｒａｔｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

ユーノ君の無限書庫司書長の就任、クロノ君のアースラ新艦長の就任、そしてシャルちゃんのＡクラス１位をお祝いするパーティーを今日、アースラで開くことになった。本当なら、シャルちゃんと同じようにＡクラス１位になったトリシュちゃんやクラリスちゃん、それにＢからＡクラスの６位に上がったアンジェリエちゃんのことも一緒にお祝いしたかったんだけど、どうしても都合がつかなくて断念した。

「食材はもう昨日までに買い込んでおいたから問題ないとして・・・」

「家に帰って着替えを済ませたら即アースラに行って調理を始めないとね」

「人数が人数だしね～。料理の量も数もとんでもないことになるよ」

授業の全てが終わっての放課後、部活や帰宅するために教室から出てくクラスメイト達に「また明日ね～！」手を振って挨拶し合いつつ、私たちチーム海鳴も昇降口に向かいながらこれからのことを相談する。

「でもなんか複雑だよ。Ａクラス１位にはなったけど、プラダマン

テにはボッコボコにされたから」

シャルちゃんが大きく溜息を吐く。シャルちゃん達は昇格試験の２週間を闘い抜いて、見事に１位になった。けど試験最終日に行われた各騎種別の対パラディン戦で、シャルちゃん達はコテンパンにされちゃった。それがどれだけ衝撃的だったか。シャルちゃん達の強さを知っているからこそ余計に信じられなかった。

「マジで驚いたわよ。シスター・プラダマンテとの試合、開始１分とせずに負けたでしょアンタ・・・」

「絶対切断のスキル使ったんでしょ？」

「それでも勝てないって、シスターってどれだけ・・その・・・化け物なんだろう・・・？」

アリサちゃん、アリシアちゃん、すずかちゃんと思い思いに感想を言ってく。みんなが驚いた、シスター・プラダマンテの実力。絶対切断のスキルに一切の怯みもなく、真正面からシャルちゃんを打ちのめしたあのシーンは、思い出すだけでも鳥肌がすごい。

「１５年間の無敗記録が１８年に更新。・・・むぅ～！　どうやったら勝てるの！？」

うがー！って頭を掻き毟るシャルちゃん。正直シスター・プラダマンテに勝てる方法は無いと思う。シグナムさんどころかルシル君でさえも、正攻法じゃ勝てない、って評価を下した相手だし。私自身

も、闘ったらきっと勝てない、って思う。

「はぁ。トリシュ達との約束もまた3年後にお預けか～」

「今はとにかく1位になったことをお祝いしようよ、シャル」

「そうだね。うん、そうだよ、シャルちゃん。次の試験に向けて英気を養う。それが一番だよ」

パラディンになれなかったのは残念だけど、それでも結果は残すことが出来た。それを蔑ろにして暗い雰囲気になるの可笑しいもんね。私たちの言葉に「んっ♪　3年後は絶対に勝つ！」シャルちゃんは背筋をピンッと伸ばして、次の試験に向けて決意を改めた。

「そう言えば、ルシルはちゃんと出席するんでしょうね」

「再三メールしてるし、返信も来てるから大丈夫なはずやよ」

「最近はちゃんとメールを返してくれるようになったよね」

「あとルシル君からもメールをくれるようになったし」

「すごい進歩だよね」

ルシル君と再び繋がれたような感じがしてとっても嬉しかったなぁ。もう同じ空を飛ぶことは難しいと思うけど、でもいつかまた同じ空を飛びたい。そう強く思う。

それから校舎を出て、グラウンドで部活をやってるクラスメイトと手を振り合いながら校門へと向かってると、「あれ？　なんか人だかり出来てるよ」アリシアちゃんが指を差した。

「芸能人でも来てるのかしら・・・？」

「まっさか～」

何か黄色い歓声のような聞こえてきてるんだけど。その人だかりを眺めながら校門まで近付いて・・・「あっ！」原因を見てビックリ。

「「「ルシル君っ！？」」」「「「「ルシルっ！？」」」」

先輩後輩問わず女子に囲まれてる（まぁ女子校だから当たり前だけど）のはルシル君だった。私たちは手を振りながら「ルシル君！」のところまで駆け寄ると、ルシル君や周りの女の子の目が一斉に私たちに向けられた。

「あ、シャルロッテ先輩だ！」

「うわぁ！　月村先輩たちが勢揃いしてる　」

後輩たちがわっと私たちの周りに集まる。私たちの通う聖祥大学付属のこの中学校は、小学校から大学までエスカレーター式だ。だから中学校での1学年違いなら、小学校時代からすでに有名だった私たちのことを知ってる子たちばかりになる。

「セインテスト先輩が居たから、どこかに行かないように確保しておきました！」

それに、私たちと常に・・・と言って良いのかどうかだけど、私たちと一緒に居ることが多かったルシル君もまた有名人。ルシル君が進学しないで海外に帰ったって話も当然知られてる。そして先輩たちは、グッと身長が伸びていよいよ本格的に男の子になってきたルシル君の体をベタベタ触っては黄色い声を上げてる。

（あー、ルシル君すごく困ってる。それに・・・）

チラッとシャルちゃんとはやてちゃんを見る。相手が先輩ということもあって抑えてるけど、かなり不機嫌そうだよ。２人がいつドッカーン！するかハラハラしていると、「あー、先輩方」ルシル君が声を出した。

「すいません。彼女たちと約束がありまして。今日はこれにてお暇したく」

「えー、そうなの～？」

「ざんね～ん」

「ねえ。いつ国に帰るの？」

「今度時間があったら遊んでよ～♪」

先輩たちからの遊びの約束を取り付けられそうになってたルシル君は「あはは。」と愛想笑いで応えて、先輩たちから離れて私たちの側に来た。私たちも後輩たちに「ありがとう」お礼を言って、ルシル君と合流。先輩後輩たちが解散してく中、私たちも歩き出す。まずはそれぞれ自宅に戻って着替えないとね。

「じゃああたしとすずかはここで一旦離脱するわね」

「みんな、アースラでね♪」

アリサちゃんとすずかちゃんは、迎えに来てたアリサちゃん家の自家用車に乗って帰宅の路に着いた。みんなで「アースラで～！」2人の乗った車を見送った。

「・・・あー、参った。いきなり集団で囲まれるとは思いもしなかった」

再び歩き出す中、ルシル君がそう言いながら首をコキコキ鳴らした。私としても校門の前で女子生徒に群がられてるルシル君が居るとは思いもしなかったよ。

「にゃはは。でもルシル君。海鳴市に来るなんてホント久しぶりだよね」

「この前の休みの日は、結局シャルちゃんのお家に泊まったから、海鳴市に帰らなかったし」

「あれだけ帰って来ることを渋ってたのに、今日はどうして海鳴市に？って言うより、中学校前に来てたの？　あ、判った。わたし達の制服姿を見に来たんだ！　もう。言ってくれれば写メくらい送るのに♪」

「違う」

「あ！　なに、もしかして他の女子生徒の制服姿を覗きに来たの・・・！？　だったらわたし、一体どうすれば！」

「当然の如くそれも違うから、どうもせんでよし」

とっても懐かしいシャルちゃんのボケとルシル君のツッコミ。なんかこのやり取りを海鳴市でやってるっていうだけで、心がホッコリする。

「ん？　今日はユーノたち含めての祝賀パーティだろ。遅刻しないように、と念を押されていたから、こうしてやって来たわけだ」

「どこの家のトランスポーターを使ったの？」

「いや普通にはやての家だろう。今はもう出て行った身としては少し悩んだんだが、勝手知ったるというか」

「もちろん大歓迎やよルシル君！　なんなら今日は家に泊まってくか？」

「嬉しい提案だけど、すまない、今日は夜から仕事なんだ。都合によるけど途中でパーティを抜けるかもしれない。アイリは置いて行くから、あの子だけでも泊めてやってくれ」

「それは残念やな」

それから他愛もない話をして、私、シャルちゃんとフェイトちゃんとアリシアちゃん、はやてちゃんとルシル君は、それぞれ自宅に帰るために「アースラで！」手を振り合って別れた。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒イリス†††

学校の制服から私服へと着替えたわたしとフェイトとアリシア、それに留守番してたアルフは、ハラオウン邸に備え付けられてるトランスポーターを使ってアースラへと転移する。そして向かうのは、パーティー会場になるレクリエーションルームなんだけど・・・

「はい。シャルはここまで♪」

「主役はパーティが始まるまで別室待機だよ」

アリシアがドアの前に立ちはだかった。今回のパーティでお祝いされるクロノとユーノとわたしは、開始時間までは会場以外の場所で自由に待つことになってる。だから会場のセッティングが終わるまでは入れさせないつもりなんだ。

「（でも、こう拒まれると逆らいたくなっちゃうのも人の性）・・

・よしっ」

「よし？　あ、まさか・・・・！」

さすがフェイト。同じ屋根の下で５年と暮らしたことで、すぐにわたしの考えを察した。わたしを扉の前から退かそうと両手で押して来たんだけど、「ちょいとごめんね」まずはフェイトからの押しを後方にクルっと回ることで「え・・・？」いなしてフリーになる。押すべき対象だったわたしが急に居なくなったことで、フェイトは前のめりに転びそうになる。

「シャ・・・、フェイ・・・・！？」

わたしの突然の行動にアリシアが混乱を見せる。これはもうクリアしたも同然。アリシアの意識や体は完全にフェイトに向いてる。このままドアに向かうだけで良し。と、そう思ったわたしだったけど、大きな見落としがあるのを忘れてた。

「何やってんだい！」

そう、アルフが居たのを失念してた。だって小さいから見えなかったんだもん。小さい体でわたしに足払いを掛けてきて、「あいたっ！」わたしは体勢を立て直す前に仰向けにすっ転んだ。ちなみにフェイトは、アリシアが手を取ったことで転ぶことはなかった。アリシア、あなた、ホント強くなったよね。

「廊下で寝転んで、何をやっているんだ？」

「「「あ、ルシル」」」

声を掛けてきたのはルシルで、その後ろにははやてやシグナムたち八神家が勢揃いしてた。わたしは「ん」ルシルに向かって手を伸ばす。するとルシルの代わりに「はい、シャルちゃん」はやてがわたしの手を取って立ち上がらせてくれた。

「ありがと」

「どうも♪」

わたしとはやての視線がバチバチと交わる。卒業式の日、はやてはとうとうルシルに告白した、って聴いた。本格的にルシル争奪戦に参戦したんだけど、その当日にルシルが居なくなるって言う想定外の事態になっちゃった。しかも何かと理由を付けてわたし達と距離を取る始末。どれだけ寂しかったか。

『わたし、ルシルに起こしてもらおうって思ったんだけど？』

『うん、知ってる♪　そやからわたしが助けたんよ』

「「・・・・」」

そして最近、ルシルは以前のようにコミュニケーションを取ってくれるようになった。そう。争奪戦も再開となったわけだ。

「シャルロッテ。お前は今日、主役の1人だろう」
「今からあたしらはお前らのために会場のセッティングの手伝いをやんだ。だから・・・」
「ええ。主役は別室で大人しく待っててね♪」
「です！」
手を繋いだままではやてと見つめ合ってると、シグナム達にそう言われた。続けて「ほら。今日は俺も調理組だから、楽しみに待っていろ」そう言って微笑みかけてくれた。それだけでわたしはもう満足です。
「ん。楽しみにしてる。・・・フェイト達も、はやて達も、今日はありがとね」
フェイト達と手を振り合って別れて、私はひとり時間を潰すために艦内をぶらつくことにした。とりあえずは元わたしの部屋に行ってみる。私物はアースラから降りる時に全て持ち出したから、ただの一般室になってた。それから色々と回った後、ブリッジに行くと・・・
「お、今日の主役2人をはっけ～ん！」
「シャルか。君が最後とは思わなかったな」

「久しぶり～」

クロノとユーノ、それに「シャルちゃん、やっほ～♪」エイミィ、元同僚のアレックスやランディを始めとしたスタッフ達が居た。ていうか、「なんで制服着てんの？」クロノにそう指摘する。エイミィや他のスタッフ達はみんな私服なのに。

「馬鹿を言え。アースラに乗艦して運用するのに私服で艦長席に座る奴があるか」

「クロノ君、お堅～い」

「エイミィ達が緩すぎるんだ」

「アースラでクロノとエイミィの夫婦漫才を見ると、あー戻ってきた～って感慨深くなるよ」

「夫婦じゃない！」「えへへ」

クロノは真っ赤になって必死に否定して、エイミィは照れくさそうに微笑みを浮かべた。ほら、もうみんなは2人がそういう関係なんだって判ってるんだから、素直になって交際（と言っていいのか判らないけど）してることを認めてしまえばいいのに。

「はいはい。あ、そう言えばセレネとエオスは今日、来るんでしょ？」

「いや、もう来てるよ。会場でセッティングの手伝いをしてると思

う」

「そっか。あの2人のこと、ちゃんと大事にしてあげてよ」

「判ってるよ。仮にも姉だからね」

「「・・・・」」

クロノを宥めてたエイミィと一緒にユーノをジト目で見ると、「な、なに・・・？」ユーノはたじろいで、「どうしたんだ・・・？」クロノは小首を傾げた。だから「鈍い・・・」エイミィと揃って呆れの溜息を吐く。というか、セレネとエオスって、未だにユーノに告白してないのかなぁ・・・。

「「？？」」

「「なんでもない」」

男どもはこれだからもう。セレネとエオスも苦労するね、ホント。それからはエイミィだけと話したり、携帯端末でネットワーク大戦をしたりして時間を潰すこと「もう1時間かぁ・・・」気付けばそんなに経ってた。あとどれだけ待てばいいのかぁ～、なんて思ってると・・・

『お知らせしまーす。本日の主役、クロノ・ハラオウン艦長、ユーノ・スクライア司書長、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトAクラス1位！　どうぞ会場へお越しくださーい！』

そんな放送がブリッジに流れた。ルシルとシグナムとヴィータとザフィーラを除くチーム海鳴メンバーと、セレネとエオスの声による放送だ。でも、「わたしだけなんか物足りない祝い理由だよね・・・」やっぱりちょっと落ち込む。

――今はとにかく1位になったことをお祝いしようよ、シャル――

フェイトにはそう言われたし、わたし自身も納得はしたんだけど、クロノやユーノに比べるとちょこっと、ね。だからと言って気落ちしてるのはナンセンス。パチンと両頬を叩いて「今は楽しめ！」だ。そしてわたしとクロノとエイミィとユーノ、それにブリッジスタッフは会場であるレクリエーションルームへ。アースラは一応停泊中だから、オートモードにしていても問題ない。何かあればすぐにクロノか通信主任のエイミィに通信が入るしね。

「さて。クロノ君とシャルちゃんとユーノ君が先に入ってね」

レクリエーションルームの前に着くと、エイミィ達が数歩下がってわたし達の背後に着いた。さすがに主役より先に入らないか。そういうわけでわたし達は顔を見合わせて頷き合い、三角陣形でドアに歩み寄った。

プシュッと開閉音と共にドアがスライドした瞬間、「おめでとー！」の言葉と一緒にクラッカーの炸裂音。さらに後ろに居たエイミィ達からも「おめでとー！」とクラッカーの炸裂音が。

「「わっ！？」」「・・・！」

なんとなくだけど、なのは達からのクラッカーは想像できてた。だけど、エイミィ達からも来るとは思わなかったからビックリ。そしてまた「おめでとー！」と一緒に、今度は拍手がわたし達に送られた。

拍手が鳴り止まない中、わたし達はレクリエーションルームに足を踏み入れた。いくつもある長テーブルの上には、ビュッフェ方式ということもあって大皿が何十枚と置かれてて、美味しそうな料理がたくさん盛られてる。

「すごい・・・」

「横断幕まで作ったのか・・・」

わたしとクロノとユーノ、３人分の横断幕が壁に掛けられてた。そんなわたし達は室内に招かれて横一列に並ぶ。そして「はい、ジュースだよ♪」わたしはなのはから、クロノはエイミィから、ユーノはセレスから、ジュースの注がれたグラスを受け取った。

「では！　本日の主役であるクロノ君、シャルちゃん、ユーノ君から一言頂きましょう！」

「「え・・・？」」「なに・・・？」

まさかの無茶ぶり。断ろうにもみんなから拍手が起きちゃってるし、そんな雰囲気じゃない。ここで拒否しようものならこの空気をぶち壊すことに。ここは意を決して、何でもいいから喋ろう。

「コホン。本日は、僕クロノのアースラの新艦長就任、シャルの教会騎士団・剣士Ａクラス１位、ユーノの無限書庫司書長の就任の、祝いの席を催して頂きありがとうございます。前艦長のリンディ艦長に比べあまりに若輩ではありますが、粉骨砕身の思いで努力を重ねて行きたいと思います。よろしくお願いします」

クロノが先陣を切ってくれた。わたしはユーノと頷き合って、「ユーノ・スクライアです」クロノに続いて挨拶をする。

「無限書庫の司書長に就任することになりました。今の僕がここに居られるのは、なのはやシャル、アースラの皆さんと出会ったからだと思います。えっと・・・セレネとエオスにも支えてもらって心強かったです。あの・・・こうしてパーティを開いてくれたこと、とても嬉しく思います。ありがとうございます！」

「えー、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトです！　クロノやユーノとは違って特別な役職への就任ではないけど、剣士でのＡクラス１位はわたしの夢の一歩で、それをお祝いしてくれることはとても嬉しいもので・・・。今回の昇格試験じゃパラディンになれなかったけど、みんなからのお祝いの言葉や応援を糧にして、次こそパラディンになって見せます！」

わたし達の挨拶が終わって治まらない拍手の中、「ではでは！　乾杯の音頭を、我らがリンディ前アースラ艦長に取って頂きましょう！」司会進行のエイミィがマイク片手に言う。

「え？　私で良いのかしら・・・？」

アースラの艦長職を息子であるクロノに譲って（もちろんクロノは艦長になるための試験や研修を行った）第一線を退いたリンディさんは、次元航行部から総務部に異動して内勤職になった。それも、この家で子供３人の帰りを待つため、ってことみたい。今の服装も私服だし、髪型もポニーテールじゃなくてうなじ付近での１つ結び。なんか、お母さん、って感じ。

「やはりここは艦長でないと」

クロノのその言葉にここに居る全員が頷いて同意を示した。リンディさんは「それじゃあ・・・」承諾してくれて、少し考え込んだ後・・・

「クロノ。あなたも１９歳。これほどまでに立派になってくれたことが母としても、前艦長としても、とても誇らしい。きっと天国のクライド（あのひと）も喜んでいるわ。自慢の息子だって」

「母さん・・・」

「イリス。あなたと出会って６年。アースラスタッフとして一緒に働けたのは１年と短かったけど、まるで娘が出来たみたいでとても楽しかったわ。あなたがＰＴ（あのとき）事件、なのはさん達を協力者として迎えてくれたおかげで、こうして素晴らしい"現在（いま）"を過ごせている。ありがとう。あなたの成長、これからもずっと応援させてもらうわね」

「・・・はい！」

あー、ダメだ、鼻の奥がツンとして今にも泣いちゃいそうだよ。

「ユーノ君。無限書庫の司書長就任、おめでとう。管理局発足以来、ずっと混沌としていた無限書庫の整理を行い、まだまだ時間が掛かるでしょうけどその成果を着実に上げて行っているあなたの司書としての手腕、とても素晴らしいものです。これからも頑張っていってください」

「はいっ、ありがとうございます！」

「クロノ、イリス、ユーノ君のますますの活躍を願って。乾杯！」

グラスを掲げたリンディさんに続いて「乾杯！」わたし達もグラスを掲げた。乾杯の後はみんな談笑しながら立食パーティを楽しむ。料理担当はエイミィを筆頭に、はやて、ルシル、シャマル。スイーツはなのは、アリサ、すずか、フェイト。アリシアはなんと味見班という名のサボりだ。

エイミィ達が丹精込めて作った料理の数々を食べ終えて、なのは達が精いっぱい頑張って作ってくれたケーキを食べてると・・・

「さぁ、ここでお祝いメッセージをご紹介したいと思いま～す！」

エイミィがそう言うと大画面モニターが1枚と展開された。なのは達はざわざわ小声で話してるのが聞こえたから耳を澄ましてみれば、

誰がやったの？だとか、知らされてないよねとか聴こえた。どうやら主催者側のなのは達にとっても初耳らしい。
室内の明かりが落とされて映像が見やすくなる。モニターに最初に映し出されたのは・・・

『ユーノ。元気でやっているか？　ペリオだ』

セレネとエオスの実父であり、ユーノにとっても義父にあたる男性・ペリオ・スクライアさんだった。唯一ペリオさんからメッセージを貰えそうなセレネとエオスですら「お父さん！？」驚く始末。

「ペリオさん！」

『お前がロストロギアを探すと言って群を離れてから5年。事件が無事に終わったら終わったで今度は、時空管理局の入局したいと聞かされて驚いたものだ。しかし、それもお前自身が選択した道。俺は応援したいと告げ、お前を見送った。そして気が付けばお前は無限書庫の司書長という大任を任されるほどに成長していた。義理とはいえ父としてとても誇らしい。ユーノ、お前ももう立派な男だ。これからもお前の成長を見せてくれ』

「・・・っ」

「「ユーノ」」

ユーノが嗚咽を漏らすけど、泣き声はだけは噛み殺して耐えてる。
そんなユーノにセレネとエオスが歩み寄って抱き寄せた。ペリオさ

んに続いて他のスクライア一族の面々からもお祝いのメッセージが贈られた。どれもこれも温かな想いに包まれた、家族からのメッセージだった。

「はい。とても心温まるメッセージでしたね。続きましては、この方たちからのメッセージです」

ペリオさん達の集合映像が途切れて、次に映し出された映像に「え・・・！？」わたしどころか、学校組であるなのは達も驚いた。何せ映し出されたのは「咲耶たち、なんで・・・！？」小学校の頃からの友達で、わたし達が魔導師であることを知ってる咲耶、依姫、天音、亮介君、護君、天守君の６人だったから。

『シャルさん。教会騎士団、でしたかしら。その剣士の部においてのＡクラス１位、おめでとうございます』

『おめでとう、シャル。お祝い事があるなら教えてくれないと困るよ』

『そうそう！　わたし達もお祝いしたいもん！』

『映像見せてもらったけど、すげぇ格好良かったぜ！』

『うんっ！　決勝戦って言うのかな？　それは負けちゃったけど、それでも格好良かったし、それまでの試合もすごく格好良かった！』

『でも決勝戦でのシャルは、ちょっとエロかった』

最後に天守君がポツリと漏らすと、亮介君と護君までもが顔を赤くして目を逸らした。そう言えばさっき亮介君、映像を見せてもらった、って言ったよね。それに護君は、決勝戦、って。わたしとプラダマンテの試合は実質決勝戦にあたる。。わたし負けた時に騎士服がボロボロになっちゃって、結構素肌を晒してた。

「〜〜〜〜っ！！」

顔だけじゃなくて全身が熱くなる。咲耶たちが『破廉恥ですわ！』だとか『これだから男子は』だとか『〇ね』だとか、亮介君たちを非難してるけど、今のわたしにそんな余裕はない。一体誰がこのビデオメッセージを撮影したのか、そして誰がわたしの試合映像を見せたのか、それを知りたい。

『なぁなぁ、ルシル。あの試合映像、貰えないか？』

亮介君がカメラに向かってそう言ったことで、このビデオメッセージを撮影したのが誰か判った。わたしは犯人である「ル〜シ〜ル〜・・・！」の元へとドスンドスン足音をわざと出して向かう。そして詰め寄って両肩を鷲掴んだ。

「どういうこと！？　なんで見せたの！？」

「いや、だって実際に見せないと、どれだけすごいのか伝わらないだろ？」

「だからってわたしの恥ずかしいところを見せて良いってことにはならないでしょうが！」

「大丈夫。見られて困るような恥ずかしい部分は布地で隠れてるし」

「そういう問題じゃな～～～～～い！！」

「安心しろ。亮介たちには君の試合映像は渡していない。あの場で見せた1回限りだ」

「だからもぉぉぉ～～～～～～！！」

もういいや、何を言っても上手く返されそう。大きく溜息を吐いたわたしは「もういいよ」そう言ってルシルから離れると、「すまない。配慮が足りなかった」ルシルが頭を下げて謝った。胸がズキッと痛む。そうだよね、ルシルだってわたしを困らせるためじゃなくて、喜ばせようとして撮って来てくれたんだもんね。

「わたしの方もキツく言ってごめんね。ちょこっと減点部分もあったけど、それでもみんなからメッセージを貰って来てくれてありがとう」

「シャル・・・。ああ、どういたしまして」

わたしとルシル、お互いに微笑み合って和解。そして最後のお祝いメッセージが流れる。モニターに表示されたのは、「グレアムおじさん、リーゼアリアさん、リーゼロッテさん・・・」はやてが言う

ように、艦隊指揮官・執務官長と言った経歴を持つ元顧問官、ギル・グレアム、それにその使い魔でありクロノの師匠でもあるリーゼ姉妹だった。

（そして、はやてにご両親の知り合いだと騙って援助していた。さらに、闇の書の封印のためという名目で、はやてごと闇の書を永久凍結封印しようと企てていた。まぁそれもルシルによって阻止されたんだけど）

グレアム元提督が"闇の書"事件の手綱を握ろうとしてたのは、事件後に本人から聴いた話だったんだけど、はやてを犠牲にしようとしてたことを知ったのは中学校の入学式当日だ。はやての家にグレアム元提督とリーゼ姉妹がやって来て、グレアム元提督がこれまで抱えてた秘密を全てはやてに打ち明けた。

（はやては自分を死なそうとしてたグレアム元提督たちを笑顔で許して、それどころかこれまで守ってくれてたことに感謝した。はやてはホント器の大きな子だよ）

『クロノ。久しぶりだな。リンディやルシリオン君から、お前がアースラの艦長に就任すると聞き、こうしてメッセージを送らせてもらうことした』

『やっほー、クロスケ♪　ロッテだよ～♪』

『アリアだよ、クロノ。久しぶり』

『まずは、アースラ艦長就任おめでとう、と贈らせてほしい。あの小さかったクロノが艦長職に就ける程にまで成長するという時間の経過が早いことに驚いているよ』

『本当だよ。あのクロスケが一国一城・・・うんや、一艦の主になっちゃうなんてね～』

『父さまと同じ思いだよ。あんたに魔法を教えてた頃のことがまだつい最近のように思えるのにね』

『私に言えることじゃないが、お前の父はとても優秀で素晴らしい艦長だった。そして母もまた同様に良き艦長だった。共に素晴らしい艦長だった両親を持ったことを誇れ。そして胸を張れ、クロノ。お前もまた優秀な艦長となるだろう』

『うん。クロスケ、おめでとう』

『おめでとう、クロノ。師として誇らしいよ』

『私とアリアとロッテは、この遠き地よりお前たちを応援しているよ。では最後に、改めてアースラ艦長就任おめでとう』

滅多に泣かないクロノも今回ばかりは涙ぐんでる。今がどうあってもグレアム元提督たちはクロノにとっては大恩人だしね。
こうしてわたしとクロノとユーノを祝うパーティーの幕は閉じた。とても美味しい料理を食べれたし、サプライズのビデオメッセージも見れたし、すごく満足できた。今度の主役は一体誰になるのかな。

まぁ誰になっても、今回のパーティーに負けないようなものにするけどね。

「――ところでさ、ルシル。咲耶たちのビデオメッセージ、アレっていつ撮ったの？」

「大体1週間くらい前か」

「それってつまり海鳴市に帰って来てたってことだよね？」

「まぁ、そうなるな」

「わたし達、ルシルが帰って来てるなんて知らなかったんだけど？」

「教えたら、何しに来たの？と訊いてくるだろ？　そうだとサプライズにならじゃないか」

「そんなん訊かんわ！　教えてよ、帰って来たら！　すんごい寂しいんだから！」

「お、おう・・・。というか、学校の帰り道で訊いてきたよな」

「お、おう・・・、ごめん」

Ｅｐｉｃ２チーム海鳴～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　ｆｏｒ　Ｅｐｉｓｏｄｅ　Ⅳ　ｖｏｌ．２～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

「それじゃあ咲耶、午後の授業のノートお願い！」

「ごめん、咲耶ちゃん！　行ってくるね！」

「ええ、任せてくださいな。フェイトさん、なのはさん、お気を付けて」

３年２組のクラスメイトで、小学校からの友達である咲耶に、私となのはは授業の代筆をお願いした。中学校に入ってから何度も繰り返してるやり取りだ。たぶん今頃は、１組のアリサとすずかも同じようにクラスメイトの依姫に、６組のアリシアとシャルとはやては天音に、それぞれ代筆をお願いしてると思う。

「「ありがとう、行ってきます！」」

机横に提げてた鞄を手にとって、なのはと一緒に教室を出る。お昼休みということもあって多くの生徒が廊下を行き来したり談笑したりしてる。そんな中で「なのは、フェイト！」アリシア達が手を振って、私たちと合流した。

「よーし！　全員揃ったし、わたしの家にゴー！」

ここから一番近いのがハラオウン邸だからね。アリシアが先頭に立って駆け出す。私たちも続いて、校舎を出てそのまま私たちの家であるマンションへ直行する。自宅に着いて習慣の「ただいまー！」挨拶をするけど誰からも返って来ない。母さんとクロノとエイミィはアースラに、そしてアルフは無限書庫でユーノの手伝いをやっているはずだ。

「鞄はリビングに置いておいて。一度に転送してもらえるように屋上へ」

家の中にもトランスポーターがあるけど、一度に転送できるのは3人までが限度って大きさだ。みんなが「うん！」頷き返してくれて、今度は私が先頭に立ってマンションの屋上へと上がる。制服はそのままでいいや。どうせアースラで私たちそれぞれの局の制服に着替えるんだから。

『みんな、転送ポートをそこに開くから、その場から離れないでね』

アースラのエイミィからの通信に「はーい！」みんなで応じて、すぐに転送が始まる。足元に展開された大きなミッド式魔法陣の発光が一際強くなり、視界は一瞬だけ真っ白に染まって浮遊感を得る。光が治まって目を開ければ、そこはもうアースラ艦内。で、ミーティングルームに向かう前にまずは更衣室。

そこのロッカーには、エイミィが私たちみんなの替えの制服を用意してくれている。みんなそれぞれの制服に着替えてから、今回の任務についてクロノ達から話を聴くためにブリーフィングルームへと

向かう。

「みんなと同じ任務で同じ空を飛べるって聞いて、わたし嬉しくて夜眠れなかったんだよね～」

「私もシャルちゃんと同じ～。私は技術部の内勤職だから、任務としてみんなと同じ空を飛ぶなんてまず無いから。ちょっと不謹慎だけど、今回の任務が発生して嬉しい」

「最近は模擬戦も少ないしな～。ちょう体が鈍ってきてるわ」

「それじゃあ正局員になる前に一度、模擬戦のスケジュール立てておく？　中学校を卒業したら今の嘱託から正式な局員になるし。ルシル君にも参戦してもらえるようにして」

「なのはの意見にさんせー！　わたしとフェイトも、執務官として長期任務なんかに就くことが多くなるだろうし。・・・あ、それでね、本局の局員寮に部屋を取るつもりなんだよ」

「うん。ちなみにルシルと同じマンションだから、遊びに来てくれたらルシルとも逢えるかもだよ、はやて、シャル」

「そうなんかぁ～。　それはちょう羨ましいな～」

「くぅ～！　わたしだって寮暮らししたいのにぃ～！　卒業したら実家暮らしなんだもんなぁ～」

「そういやシャル、あんたって聖王教会や教会騎士団の仕事も入れてるらしいじゃない」

「そうなんだよ～。やっぱりザンクト・オルフェンを統治する評議会のトップだからね、フライハイト家って。一人娘ってことで、わたしもいつまでも管理局には居られないみたい。なんとか３０歳までは局員で居られるようにしたんだけど、３０歳になったら局員辞めて、教会の聖職に就くことになるよ。今はそのための修行中って感じ」

シャルが管理局を辞める日が確定していたことが結構ショックで、私たちは「残念だね・・・」心から落ち込む。ずっとみんな一緒に、そう思っていた節があったから。

「シャルちゃんがたとえ管理局を辞めたとしてもわたしらチーム海鳴、そして友情は不変で不滅や。だから大丈夫や」

「はやて・・・」

「ま、ルシル君はわたしのお婿さんになってもらうから、シャルちゃんは他の男の人を捕まえとかな行かず後家になってまうよ？」

「っ！　ほ、ほう・・・。良い話で終わるのかと思えば、最後の最後で仕掛けて来たね・・・！　はやては良いじゃん！　すでにヴィータとかリインとか娘のような家族が居るんだから！　わたしには誰も居ないんだよ？　だったらルシルと結婚して、２人の子供を儲けたって良いじゃんか・・・！」

「それはそれ、これはこれ♪」

「むぅ・・・。良いもん、最終的に選ぶのはルシルだし。負けないから！」

「わたしかて負けへんよ！」

ガシッと握手を交わすシャルとはやてを置いて先を往く私たち。そしてミーティングルームに到着、自動でスライドドアが開いて室内に入る。ミーティングルームにはクロノやエイミィ、シグナム達、そして予想外の「ルシル君、アイリ・・・！？」の２人が居た。

「よう。少しぶりだな」

「少しぶり～♪」

「本日の任務には、特別捜査官としてのルシリオンとアイリにも参加してもらうことになった。挨拶はとりあえず後にしてくれ。まずは任務の詳細を伝える」

クロノからそう言われた私たちはそれぞれ席に着いて、「それじゃあ任務内容を説明するね」エイミィの操作の下、テーブル上にモニターが展開された。

「第１６２観測指定世界にある遺跡発掘現場２ヵ所に行って、発掘されたロストロギアを回収。そしてアースラまで護送。以上これが

任務だよ」

「アースラまで？　本局までではなく、ですか？」

「本局までの直通転送ポートのポイントに到着後、クロノ君が移送することになってるから」

「なーんか平和な任務だね～」

「仮にも護送するのは詳細不明のロストロギアだ。舐めて掛からないようにしてくれよ、アリシア」

「はーい。でも実際、チーム海鳴が久しぶりに勢揃いしてるんだよね。このメンバーならロストロギアの暴走すら止められそう」

「あはは、言えてるけどやっぱり慎重にね。どんなロストロギアか判らないから。万が一に発動したら即惑星破壊～みたいな兵器とかだったりしたら大変だから」

「エイミィの例えは極論だが、ロストロギアはそれだけ危険な代物だと言うことだ。みんなも、ただの護送で平和な任務なんて思わないように」

クロノからの注意に「了解！」アリシア含めてみんなで首肯した。それから、観測指定世界へと転移した後はまず最寄りの観測基地に向かい、そこで現地局員から遺跡の場所を聴いて、２チームに分かれて回収に向かうことなどを話した。そして・・・

「レイジングハート！」
「バルディッシュ！」
「リイン！」
「はいです！」
「フレイムアイズ！」
「スノーホワイト！」
「フォーチュンドロップ！」
「キルシュブリューテ！」
「レヴァンティン！」
「グラーフアイゼン！」
「クラールヴィント♪」
「・・・あ、俺もか。エ、エヴェストルム・・・！」
それぞれ待機モードのデバイスを掲げて、「セットアップ！」変身するためのトリガーを口にして、局の制服姿から防護服へと変身す

る。チーム海鳴の中で防護服のデザインが変わったのは私となのはの2人で、ルシルが早速そのことに触れてきた。

「なのはとフェイトの防護服、デザインが変わったんだな」

今のなのははアグレッサーモードという名前の形態。軽量で汎用性に優れていて、魔力の消費もかなり抑えられているから、教導などの長時間の活動が可能になっている。そしてもう1つ、完全戦闘特化のエクシードモードがあるけど、大体は今のアグレッサーモードだ。

「うん。というか、結構前だよ？」

私はと言うと、インパルスフォームという名前の形態だ。攻・防・速をバランスよく調整していたブレイズフォームの発展型。かつてのライトニングフォームは廃止して、なのはのエクシードと同じように、私にもソニックフォームという別の形態への換装システムを採用している。

「私のも随分と前からこのインパルスフォームかな」

「防護服を着た状態でルシル君と逢うことなんてホントに久しぶりだから」

「そうか、もうそんなに一緒の空を飛んでいないのか」

エントランスのトランスポーターへと向かう道中でそんな会話をル

シルと交わす。ルシルがそう思えてしまうほどに、私たちが同じ空を飛ぶ機会がなくなっていた、ということだ。でもだからこそ、今日みたいに一緒に飛べることが親友として嬉しい。

「みんな、帰って来たら同窓会パーティだからね！　美味しいご飯を作って待ってるから！」

「まぁそういうわけだ。だからみんな、何事にも油断なく、無事に戻って来い」

クロノとエイミィに見送られながら私たちチーム海鳴は、任務地である第１６２観測指定世界へと転移した。そこは一面が殺風景な荒野で、緑らしい緑は見えない。とにかく最初の目的地の観測基地を目指して空を翔ける。そして２班に分かれるためのジャンケンをするんだけど・・・

「だぁー！　ルシルと違う班かぁー！」

ルシルと違う班になっちゃったことで、シャルがバレルロールしながら頭を抱える。決まったチーム分けは、私、シャル、すずか、はやてとリイン、シグナム、ザフィーラ。アリシア、なのは、アリサ、ルシル、ヴィータとアイリ、シャマル、となった。

「わたしも違うし、今回は運が悪かったって話やよ、シャルちゃん」

「はやて・・・。うん、そうだね。ルシルも最近は特捜課にも顔を出してくれるようになったし、今日はみんなに譲ってあげよう」

「何よルシル。あんた、特捜課の仕事もまた始めたの？　シャルもそうだけどぶっ倒れやしないか心配するわよ」

「ん？　あぁ、内務調査部の仕事も安定し始めたからな。手が空いた時には顔を出すようにしているんだ」

「でもその分、疲労度の上がり方が大きくなったから、体調を崩さないように気を付けてね、ルシル君」

「大丈夫だよシャマル！　ルシルの体調は、この本妻たるアイリがちゃ～んと毎日見てるんだからね♪」

「「本妻・・・？」」

「そうだよ。だって毎日おはようもおやすみもするし、一緒にご飯食べるし、家事も分担し合うし、まるで夫婦！」

小学６年生くらいにまで身長が高くなっているアイリ（本来の大きさはリインと同じ３０ｃｍほどだけど）が朱に染めた頬に両手を添えて、まるではやてとシャルを煽るかのような流し目で２人を見た。アイリも何気にルシル争奪戦に参加しちゃっているんだよね。しかもアプローチのレベルはシャル並に激しい。

「モテモテで羨ましいですな～」

「そうですな～」

アリシアとアリサが口に手を添えてニヤニヤとイタズラッ子っぽい笑みを浮かべる。2人もルシルとは本当に久しぶりだから、今までの分で溜まったイタズラ心のようなものを吐き出し始める。眉がピクっと動いたルシルが「アリサ姐さん」ボソッと呟いた。

「んな・・・！」

「アリシアさん。年上と思えない小ささと可愛らしさ、それでいていつも元気いっぱいなあなたが好きです。友達からで良いので付き合って下さい」

「ぶふっ！？」

「それ、アリシアが男子校の2年から受けた告白・・・」

アリシアだっていつまででも小さいわけじゃない。まぁ私よりはまだ小さいけど。そんなアリシアに先日、聖祥中学男子校の生徒が告白した。もちろんアリシアは断ったんだけど、初めての真剣な告白ということもあってその話をされると、顔を真っ赤にして狼狽する。

「モテモテで羨ましいですな～♪」

ルシルの反撃を受けたアリシアとアリサは「ぅぐぐ・・・」さらに手痛い反撃を警戒して黙った。ルシルは「情報収集では俺には勝てないよ」と言って笑い声を上げた。

「一体どこから仕入れたのよ・・・！」

「アリサ姐さんについては、ヴァイスから直接だな。仕事でクラナガンに降り立った時、非番だった彼に会ってさ。そこで妹、ラグナの目について経過報告を受けたんだ」

「そ、そう。シグナムからも聞いてるけど、ラグナの目、何も問題ないんでしょ？」

「ああ、俺もヴァイスからそう聴いたぞ。治療のお礼に昼食を奢ってもらった」

「しかし、妹を誤射したというトラウマは拭えず、ヴァイスはスナイパーから離れヘリパイロットに従事するようになってしまった。今では私と同じ首都航空隊の一員だ」

シグナムが寂しそうに言った。身内を誤射してしまったことで武器を置いた武装隊員。その話は、アリサ姐さんの話をすでに聞いていたこともあって感情移入が出来た。実際に私はお姉ちゃんであるアリシアの誤射を受けたこともあるし。アリシアは何とか立ち戻ってくれたけど、やっぱり身内を撃っちゃうとダメな人も居るんだよね・・・。

「わ、わたしの告白のことについては誰から聞いたの・・・？」

「それはアイリからだ。いや普通アイリに話したら俺にも話が行くと思わないか？」

「くぁー！　そうだったー！」

私が背後から抱っこしてるアリシアが暴れるから「アリシア、動かないで」注意する。アリシアの魔導師ランクもいよいよ陸戦Ａに入ったけど、それでもまだ自力で空は飛べないからこうして誰かに運搬してもらわないといけない。以前まではアルフの役目だったけど、アルフはもう前線から離れたから、今は私が運搬役だ。

「お、見えてきたな。あそこが観測基地や」

しばらくの飛行を続けて、ようやく見えてきた最初の目的地。基地手前で降り立ってエントランスの方を見ると、「遠路お疲れ様です！」２人の局員が私たちを敬礼して出迎えてくれた。男の子と女の子って外見で、たぶん私たち学校組の年齢である１５歳から２つ３つ年下かも。

（う～ん・・・、男の子の方は、初めて会ったはずなのに、どこかで会ったような既視感が・・・）

「本局・管理補佐官のグリフィス・ロウランです！」

「シャリオ・フィニーノ通信士です！」

「「「「「ロウラン・・・？」」」」」

私とアリシア、なのはとアリサとすずかは小首を傾げた。どこかで

見た気がする外見、そしてファミリーネーム。頭の中で「あ・・・！」即座に答えを導き出す。

「うん、おおきにな、グリフィス君」

「久しぶりだな、グリフィス。少し見ない間に大きくなって」

「あはは。ルシルさんと最後に会ったのは４年前、僕が９つの時ですよ？」

「もうそんなになるのか」

「久しぶり～。レティ提督は元気？」

「お久しぶりです、シャルロッテさん。母は相変わらずお酒が大好きですけど元気です」

シャルに対するグリフィスの返答で「やっぱり！　レティ提督の・・・！」息子だって確信した。グリフィスは「はい。はじめまして！」緊張からか少しぎこちない笑みを浮かべた。あ、なんか今の笑みはレティ提督に似てるかも。

「えっと、フィニーノ通信士とは初めまして、だよね・・・？」

少し蚊帳の外だったシャリオに私は声を掛ける。この子とは会ってないと思う、うん。シャリオは「はいっ！　でもみなさんのことは、すごく知っています！」目をキラキラさせて羨望の眼差しで私たち

を見た。

「チーム海鳴！　私、大ファンなんです！　その数多くのご活躍に私、いつもすっごく胸を躍らせていたんです！　何百年と破壊不能とされたロストロギアを破壊、管理局設立以前より次元世界で活動していたリンドヴルムの壊滅などなど！　様々な事件を解決してきた、若手エリートチーム！　みなさんと今日お会いできると聞いて、もう3日も前からドキドキして待っていたんです！」

「すみません。シャーリーの管理局入局の志望動機が、みなさんに憧れて、だったので。ですからずっと興奮しっ放しなんです」

愛称なのかシャーリーと呼ぶグリフィスが、上気しながら私たちに迫ってくるシャリオを押し留めた。そんなシャリオの熱弁に「にゃはは。なんか嬉しいね」なのはが照れ笑いを浮かべる。私としても、大ファンって言われたら悪い気はしないよ。

「ねえ、グリフィス。今、シャリオ通信士をシャーリーって愛称で呼んだけど、ひょっとして彼女～？」

「ち、違いますよ、シャルロッテさん！　ただの幼馴染です！」

「さすがに幼馴染が結ばれるなんて、フィクションだけですよ♪　あまりに身近すぎて恋愛対象になりません♪」

「「・・・・」」

シャリオからそう返されたことでシャルとはやてが黙り込んだ。幼馴染に恋している2人にとっては耳が痛い話だ。

「幼馴染かぁ。ひょっとしたら知ってるかもだけど、私たちもみんな幼馴染なんだ。幼馴染の友達って貴重だから、大切にしないとね♪」

「「はいっ！」」

なのはの話に力強く応じるグリフィスとシャリオ。私たちは顔を合わせて照れ笑い。この縁は奇跡のようで、この繋がりはきっと断ち切れない。私たちの友情は間違いなく永遠だ。

「あの、ご休憩の準備をしておりますのでどうぞ中へ。お茶とお菓子を用意していますので」

「「お菓子♪」」

アイリとリインがお菓子に釣られた。それを見たシャリオが「アイスクリームやケーキもあるんですよ♪　」さらに畳みかけてきた。まぁお菓子大好きな2人は顔を輝かせて、じゅるりと涎を啜った。

「お前たち・・・」

「しゃあねぇなぁ・・・」

シグナムとヴィータが呆れを見せた。私たちも苦笑いを浮かべて、

「とりあえず、クロノ達に連絡を取ってみるよ」私は今回の任務の責任者であるアースラ艦長、クロノに連絡を入れる。

『はいはーい。アースラで～す』

「あ、エイミィ？　クロノは・・・？」

『どうした？』

発掘現場に行く前に最寄りの基地で少しばかり休憩する旨を伝えると、『しょうがないな。まぁ何十ｋｍという距離を飛び続けるのも大変だろう。判った。だが長いのはよしてくれ』ＯＫを貰えた。私はみんなに人差し指と親指で輪を作ってサイン。

「「やったー！」」

そういうわけで少しだけ基地で休憩していくことになって、グリフィスとシャリオの案内で休憩室へ。早速リインとアイリはケーキを頬張って、「お味はどうですか？」シャリオにそう訊かれると「美味しいぃ～♪」２人は満面の笑顔を浮かべた。私たちも「いただきます！」クッキーやケーキなどを頂く。

「今回はたまたま一緒に同じ任務を務めることになったが、はやて達が学校を卒業すると今まで以上に同じ空は飛べなくなるんだろうな。卒業したら進学をしないでそのまま正式に局入りするんだろ？」クッキーを食べているルシルがそう訊いてきた。卒業と同時に私た

ちは嘱託から正式な局員となる。それぞれが歩んでいる進路のさらに深くまで突き進む時間が出来るから、今日みたいな勢揃いした任務はもう無いと思ってもいい。

「うん。私は戦技教導隊として今まで以上に他の世界に赴くことが多くなるかな。だから海鳴市から離れて、ミッドのどこかに一軒家を持とうかな～なんて」

「あっ、あたしも一軒家を購入予定よ。あたしはミッド地上部隊の陸士隊から離れないと思うから、中央区画のどっかにしようと思ってるわ」

「わたしら八神家も、卒業と同時期にミッドにお引越し予定や。クラナガンの南側・・・出来れば海の近くがええなぁって思うてるんよ」

「ですけどミッドへのお引っ越しもいろいろと不安なのよね。家賃や間取り、ご近所付き合い、交通の便利性とか・・・」

「勘忍な、シャマル。物件探しを任せてもうてて」

「いえ。みんなの家ですから、手抜きはしたくありませんし。大変でも徹底的に拘ります！」

「私は、スカラボの居住区に部屋を造ってもらうことになったよ。まぁ所属は第４技術部のままなんだけど」

卒業後、チーム海鳴メンバーの全員が海鳴市から離れることになる。それが寂しくもあるけど、未来へ向かうための必要なステップでもある。

「あや？　はやて、ルシルに一緒に住もうって誘わないの？」

「う～ん。アイリの言うように最初は誘おうとしたんやけど、まず間違になく断られるのは判ってるからな。もう諦めてるんよ。中学生のわたしの成長にドキドキするくらいやし、これからの成長にはさらにドキドキするやろうから、やっぱ断るんやろ？　・・・ルシル君のエッチ～」

「ぶふっ！？　げほっ、ごほっ、ぐっ、かはっ・・・！」

お茶を飲んでた最中で、品を作ったはやてからそんなことを言われたルシルが激しく咽だした。はやてが慌てて「ごめん！　ごめんな！」ルシルの背中を擦る。そしてなんとか呼吸を整えたルシルは「死ぬかと思った・・・」って最後に大きく深呼吸。

「ふぅ。・・・理由は明確にはしないが、確かに俺ははやての家に行くことはない。すまないな」

「ほらな～。でも、たまには遊びに来てな？　今はもう名乗ってへんけど、ルシル君は今でも八神家の一員なんやからな」

「・・・ああ。その時は世話になるよ」

はやてとルシルが微笑み合っているところで、「はぁ。やっぱりみなさんはすごいですよね～」シャリオが感嘆の声を漏らした。何がすごいんだろうって小首を傾げていると・・・

「メンバーの大半が入局６年で尉官クラスで、その上なのは教導官、アリサ捜査官、はやて特別捜査官はまだ１５歳なのに一軒家を持とうとしていて。わたしと２つしか歳が変わらないのに、すごいです・・・！」

とのことだった。確かに一軒家を持つなんてかなりすごいことだと思う。同じチームメンバーとしても尊敬するかも。それからグリフィスやシャリオと他愛ない会話をして、「はふぅ。ごちそうさまですぅ～」リインと、「美味しかったね♪」アイリが満足そうに手を合わせた。

「お替りはどうですか？　リインさん、アイリさん♪」

「「お替り♪」」

「あー、シャリオ。心遣いは感謝なんやけど、もうそろそろ発つわ。発掘されたんがロストロギアってことやしな」

「ロストロギアを狙う数ある組織の最大手であるリンドヴルムは潰したが、それでもなお狙う犯罪者も多くいる。そんな連中にも警戒しないといけないからな。今回の発掘が漏れていないとも限らない。可能な限り回収を早めた方が良いと思うんだ」

「そ、そうですね。リインはごちそうさまです」

「じゃあアイリもごちそうさま～」

はやてとルシルの話には賛成できるから、リインとアイリもお替りを断った。そういうわけで私たちもすぐに基地から発つことを選択した。グリフィスとシャリオから発掘現場の座標を聴き、そこまでナビゲートしてもらうことになった。

「あー、ここでなのは達と一旦お別れか～」

基地の外に出て改めて防護服に変身したところで、シャルがそう言ってなのはの肩に頬擦り。なのはは「にゃはは～」そんなシャルの頭を撫で撫で。２人ってチーム海鳴の中でも特に仲が良いんだよね。ちょっと妬けちゃうかも。

「それじゃあ行こうか。はやて達も気を付けてな」

「うん。ルシル君たちも、気を付けてな」

はやてとルシルがコツンと拳を突き合わせて、「みんな。アリシアのことお願いね」私はチーム分けで別々になったお姉ちゃんのことをお願いする。いつもは私が後ろから抱っこして運搬するんだけど、今日は私とは別だから。

「ん～。だ～れ～に～し～よ～お～か～な～♪」

アリシアが鼻歌交じりに運搬役の選択に入った。なのは、アリサ、ヴィータ、アイリ、シャマル先生、そしてルシル。鼻歌が終わると同時にアリシアの人差し指が止まった。

「ルシル！　抱っこ！」

「しゅ～つげ～き」

――我を運べ、汝の蒼翼（コード）（アンピエル）――

アリシアが両手を伸ばして抱っこしてポーズをした途端、ルシルは背中から剣翼アンピエルを展開して真っ先に空に上がった。ポツンと取り残されるアリシアが「あ、こらー、逃げるなー！」なんて言って怒るけど、「こればっかりは・・・」私は呆れた。

「アリシアちゃん。私が抱っこするわ」

「ふやっ？」

シャマル先生がアリシアの運搬役を買って出てくれた。抱え上げられたアリシアは「はふぅ。シャマル先生。柔らかいし良い匂いだし、落ち着くぅ～」体を弛緩させて、シャマル先生に全身を委ねた。

「あらあら♪　それじゃあ行くわね・・・！」

「おー！」

シャマル先生とアリシアも飛び立ったことで、私たちも空へと上がる。そして私、シャル、すずか、はやてとリイン、シグナム、ザフィーラのＢチームと、アリシア、なのは、アリサ、ルシル、ヴィータとアイリ、シャマルのＡチームは、それぞれが目指す遺跡発掘現場へと向かった。

Ｅｐｉｃ３探索者～Ｆｉｒｓｔ　Ｃｏｎｔａｃｔ～

†††Ｓｉｄｅアリシア†††

チーム海鳴のメンバーが勢揃いした久しぶりの任務の内容は、ここ第１６２観測指定世界の遺跡発掘現場から掘り起こされたロストロギアを回収するっていうもの。発見場所は２ヵ所あることで、わたし達も２チームに分かれて現場へ向かってる途中。んでその道中・・・

「シャリオも言ってたけど、わたし達の年齢で尉官って珍しいのかな～？」

暇だったから休憩中の会話の続きをやろうって思って、わたし達Ａチームのメンバー、なのはとアリサ、それにルシルとヴィータとシャマル先生とアイリに話を振ってみた。

「私は二等空尉で、フェイトちゃんも二等空尉相当、アリシアちゃんは准陸尉相当、はやてちゃんが一等陸尉・・・」

「あたしは三等陸尉、シャルは一等空尉、シグナムは三等空尉、ヴィータは准空尉・・・」

「アイリちゃんは一等空士、ルシル君は二等空尉、リインちゃんは空曹ね」

入局６年目の１５歳で尉官クラスってすごいってことだけど、普通に昇進試験を受けていればなんとかなりそうな気もするし、「俺たちは入局した年齢が若かったからな」ルシルが言うように管理局に勤める時期が普通の人に比べて早かったってこともあると思う。

「シャリオだって９歳くらいで入ってみれば、尉官クラスになってたんじゃないかな～」

「いやいや～。アイリも結構頑張ってるけど、まだ一士だよ？　ルシル達の昇進スピードが速過ぎるだけだと思うね」

「おめぇ、昇進試験ほとんど受けてねぇじゃねぇかよ。だから未だに一士止まりなんだよ」

「別にアイリは偉くなろうって思ってないも～ん」

ヴィータの周りを器用にバレルロールしながら追翔するアイリ。でも確かに自分のマイスターやロード以上の階級や役職に就いたりしたら、ちょーっと不自然になっちゃうかも。

「しかし、はやての昇進速度はさすがに速いと言わざるを得ないだろうな」

「にゃはは。はやてちゃん、このまま順調に試験を突破していくと１０代で二等陸佐くらいまでいくんだよね？　チーム海鳴で一番の出世頭だって、ちょっと前に話してたんだよ」

「もう。キャリア試験のためにはやてちゃんは睡眠時間削って猛勉強して、私は気が気じゃなかったわ。ルシル君が居れば少しは止められたと思うのだけど？」

わたしを背後から抱っこしてくれてるシャマル先生の顔は見えないけど、きっとジト目でルシルを見てると思う。そんな声色だったし。スカート組が多いことで一番前を飛ぶルシルが「俺でもきっと無理だったよ」そう言った。

「はやてにははやてのやりたいことがある。そのための勉強だった。俺は応援するけどな」

「でもねルシル君。ニキビが出来た～とか、体調崩した～とか、お寝坊で遅刻する～とか、そういう日が結構あったのよ。それなのにルシル君とは連絡とれないし！」

「おっと、藪蛇だったか」

「もう！」

「そういやルシル。お前、調査官になるんだよな」

「ん？　あぁ、研修も順調だからな。試験を1発合格できるなら、最速で18歳で調査官の仲間入りになると思う。まぁ調査官は結構狭き門だから、さすがに1発とはいかないだろうが」

「調査官になると自然と准将の階級持ちになるんだったっけ？　は

やてもそうだけどアンタも負けてないわよ、ルシル」

「そうは言っても資格を返上したら即調査官になる前の階級に戻されるという、一時的なものだぞ。しかもあくまで調査官だからこその階級で、それ以上の命令権は無し。形だけさ」

「それでも准将っていう階級はすごいと思うよ、ルシル君。調査官を続ければさらに少将、中将になれるって聞いたし」

「そこまでなる気はないかな。准将止まりで俺には十分だ」

そんな会話をしながら空を翔けること15分ちょっと。ようやく「あ、見えてきた！」目的地の遺跡発掘現場上空に到着。ゆっくりと降下して荒野に降り立つ。そこには作業服を着た男女ペアが1組居て、側には一抱えあるケースが1つ。

「大変お待たせしてすみませんでした、管理局の派遣護送隊です！」

「「お待ちしておりました！」」

発掘作業員さんに敬礼。そしてケースの中身を確認させてもらった。作業員さんの話によると「レリック、と呼ばれる結晶型のロストロギアです」とのことで、ケースの中には赤い宝石のような"レリック"が1個収められてた。"ジュエルシード"より少し大きいかな。とっても綺麗。

「レリック、か・・・」

ルシルがふむって唸ったから、シャマル先生が「ルシル君のデータベースにあるの？」そう訊いた。ルシルのトンデモな知識量の中にはロストロギアのリストがある。セインテスト家の遺伝的な特性ってことで、魔術や固有スキル・複製、さらに知識や知恵などが先祖代々受け継がれてる。その中にはロストロギアのリストもあるってこと。

「詳しいデータが無いのは許してほしいが・・・。レリック。その数は最低でも５０個あるとされている。その性質は、高エネルギーを帯びる結晶体で、外部から大きな魔力を受けると規模はまちまちだが大爆発を起こすという危険度の高い物だ。管理局からも第一級捜索指定を受けた、秘匿級のロストロギアだ」

ルシルの話を聞いたわたし達や作業員さん達も「大爆発・・・！？」ケースから距離を取った。

「魔力を受けなければ爆発はしないよ。中継、こちらＡチームのルシリオン。発見されたロストロギア・レリックの情報を、本部（アースラ）とＢチームに伝えてくれ。決して魔力を当てないように、と」

『りょ、了解です！』

ルシルが中継――観測基地のシャリオに通信を繋げた。これでフェイト達やクロノにも連絡が行くから、きっと最悪の事態には陥らないはず。そういうわけで「お預かりします」"レリックケース"をルシルが持ち上げようとしたその時・・・

『こちら観測基地！　第２発掘現場に正体不明の機械兵器群が出現しました！　危険認定、破壊指定許可が出たことでＢチームが交戦開始！　Ａチームのみなさんも周囲警戒をお願いします！』

シャリオから切羽詰まった報告が入って、同時にフェイト達の交戦映像が映るモニターが展開された。なんかカプセルみたいな形をして、カメラレンズのような部位から光線を出したり、さらに「ＡＭＦだね・・・！」なのはの言うように、魔力結合を分断する高位の防御魔法アンチ・マギリンク・シールドを搭載してる。

「おいおい。こっちにもお出ましだぞ！」

「団体さんだね♪」

「所詮は烏合の衆よ」

周囲を警戒してくれてたヴィータとアイリとアリサから報告が入った。３人が指差す方に視線を向ければ、フェイト達が交戦してる機械兵器と同じタイプの物が「うわぁ、２０機ぐらい居る」こちらに向かって来てた。

「なのは。指示をくれ」

「え？　私・・・？」

「俺は小隊指揮官の資格は持っていないんだ。しがない査察・監査

・監察官だよ。公式な任務中である以上は、俺が現場指揮を執ることは出来ない」

「あー、そっかぁ。うん、判った。・・・シャマル先生とアイリは作業員２名の安全を最優先！　ルシル君は４人の護衛！　アリシアちゃんは後衛で遊撃！　私、アリサちゃん、ヴィータちゃんで迎撃！」

そう言って肩を竦めるルシルになのはは嘆息したんだけど、すぐにそう指示を出した。わたし達は「了解！」頷き応えて、指示通りに行動開始。シャマル先生とアイリは作業員さんを護りやすいように陣取り、ルシルはその４人を護りながらわたし達が撃ち漏らしたり新手への対処がしやすいところに立った。

「ドロップ！　ブレイブスナイパーお願い！　狙撃での先制で潰す！」

≪ほーい！≫

キャンディポット型のインテリジェントデバイス・"フォーチュンドロップ"から、ライフル型ストレージデバイス・"ブレイブスナイパー"の待機モードである宝石がポンっと飛び出して、わたしはソレをキャッチして即座に起動。

「ルシル。フローターフィールドお願い出来る？　立射したいんだけど・・・」

「ああ、良いぞ。どこでいい？」

「この辺りでお願い」

快諾してくれたルシルがわたしの指定したところにベルカ魔法陣の足場を展開してくれた。わたしは「ありがとう！」お礼を言って、直立させて持ってた"ブレイブスナイパー"を前に向かって降ろして、二脚（バイポット）銃架を魔法陣上に接地させる。後床を右肩に当てて、スコープを覗き込む。

「ターゲッティングシステム・オン！」

銃口が今向いてる先を表す大円とターゲットの位置を表す小円、２つの照準円（レティクル）がスコープ内に作られた。続けて前床下部にマガジンを装着して、「カートリッジロード！」と指示。一時的に魔力を増加させて、その魔力をある魔法を発動する糧にする。

「ヴァリアブルシュート・・・」

銃口の先端に攻撃用の魔力弾を作り出す。さらにＡＭＦを突破するための外殻の膜状バリアを生成して魔力弾を包む。外側の膜状バリアが敵のフィールドに反応してその効果を中和、その間に中の魔力弾をフィールド内に打ち込むっていう多重弾殻射撃。本来はＡＡランク魔導師のスキルで、射撃型最初の奥義、なんて言われる魔法だ。

「ファイア！」

トリガーを引いてヴァリアブルシュートを発射すると同時に機関部の上部にある排莢口から空薬莢が飛び出した。そして放った魔力弾

は一直線に機械兵器群の先頭の1機に着弾、爆発四散させた。

「よっしゃ、アリシアに続け！　アイゼン！」

――シュワルベフリーゲン――

先制攻撃はヴィータの物質弾８発。ＡＭＦは魔力を打ち消すことが出来る強力な防御魔法だけど、純粋な物理攻撃は防げないデメリットがある。だからヴィータのただでさえ強烈な一撃の直撃を受けた機械兵器８機もまた爆発四散。

「機械兵器ごときがあたしらの護りを突破できると思うなよ！」

「あたしもアリシアと同じ魔法にしようかしらね・・・！」

――ヴァリアブルフレア――

銃剣形態バヨネットフォームな"フレイムアイズ"の銃口に、わたしの魔力弾とは違って火炎弾を作り出して、対ＡＭＦ用の外殻バリアで火炎弾を包んだ。そして「シュート！」発射したんだけど、アリサは立て続けに同じ魔法を発動して、最終的に6連射した。全弾直撃させて、機械兵器6機は今まで以上の爆炎に呑まれて破壊された。

「やっぱりすごいな～、アリサも」

どちらかと言えば騎士寄りのアリサだけど、しっかりミッド式魔導

師としての射撃魔法もなかなかの精度を有してる。なのはにはもう追いつけないって諦めてるけど、アリサには追いつきたいって思ってるわたし。だから負けてられないって強く思う。

「私も3人に負けていられないね！　レイジングハート！」

そう言ってなのはは近くにあった大きな岩塊を砲撃で破砕。？マークを浮かべてると、大小様々な岩の破片に桜色に輝く環状魔法陣が取り巻くように展開された。それを見てなのはが何をやろうとしてるのかが判った。アレってフェイトのランサーと同じやつだ。

「スターダスト・・・フォール！！」

宙に浮いてた破片が残りの機械兵器に向かって高速で射出された。やっぱりあの環状魔法陣、加速発射システムだったんだ。自分の大きさ以上の破片をまともに食らった機械兵器はぺしゃんこに押し潰されて、そして爆発四散した。

「・・・ふと思ったんだが、機械兵器の詳細や開発者の手掛かりを調べるために1機くらい確保した方が良かったんじゃないか・・・？」

「「「・・・・」」」

ルシルからそう言われてわたしとなのはとアリサが黙り込む。するとシャマル先生が「こちらAチーム」中継に連絡を入れて、Bチームは機械兵器の確保が出来たかどうかを確認した。

『あ、はい。すずか技官が3機を凍結捕縛したのですが、機密保持のためか自爆されてしまいました。おそらく完全体での確保は無理かと思います。ですが破片はある程度残っているようでして、調査隊を派遣してもらう予定です』

「そう。ありがとう、シャリオ」

「自爆しちゃうんだ。徹底されてるね」

「元より確保は無理だったわけか」

「どうせ今回だけってことはねぇだろ、勘だけどな。自爆させねぇように少しずつ捕縛方法を考えてくしかねぇだろうな」

「ではAチームはこれよりアースラへの転送ポートへと向かい、そのままアースラへ帰艦します」

『了解です。Bチームも転送ポートへ移動を開始しました。こちらからナビしますね』

そういうわけでわたし達は、襲撃は受けちゃったけど"レリック"を無事に回収できた。ケースはこの中で両手が塞がってても魔法を使えるルシルが持って、そしてわたしはシャマル先生が抱っこしてくれた。準備を整えて、作業員さん達に手を振って空へと飛び立った。

「これで一応は任務完了だね」

「アイリちゃん。アースラに戻るまでが任務よ」

「空に上がった以上は何があっても突破できる確信があるんだけどね」

「それには同意できるけど、油断はしちゃダメよ？」

アイリとシャマル先生がそんなやり取りをしてる中、「確かに、まだまだ続きそうだ」ルシルがそう言って地上を指差した。見ればさっき襲撃して来た機械兵器、その数９機が荒野を突き進んでる。わたしは待機モードにしてる"ブレイブスナイパー"を掲げて見せて「今のうちに潰す？」そう訊く。

「いや。アレらの目的は十中八九ロストロギアだろう。つまり未だ発掘されていないレリックのところへ行こうとしているんだ。そこまで案内してもらおうじゃないか」

「こちらＡチーム。先ほどと同じタイプの機械兵器の一群を視認。ひょっとしたらレリックが他のところにも在るかもしれない・・・！」

『こちらでも確認できました。Ｂチームからも同じ報告が入っています。両方の機械兵器の進路から目的地を算出します』

機械兵器を上空から追跡しつつ、シャリオからの連絡を待つ。

†††Ｓｉｄｅアリシア⇒すずか†††

ロストロギア・"レリック"の回収と護送という任務を請け負った私たちチーム海鳴は、受け取り場所である遺跡発掘現場にて未確認の機械兵器から襲撃を受けた。でもチーム海鳴の前に単なる機械兵器が敵うわけもなく、私たちは余裕を持って２０機中１７機を撃破した。うち3機は私が氷結魔法で捕らえたんだけど、自爆されちゃった。

「――それにしても最低でも５０個とか」

「しかも大きな魔力を当てると爆発を危険物となると、万が一の二次被害が恐ろしいな・・・」

そして今は、"レリック"を受け取ってアースラへ転送するためのトランスポートへと向かってる最中。陸路だと時間が掛かるし、何よりチーム海鳴はアリシアちゃんを除いて全員が飛行魔法を扱えるから。そういうわけで空路で"レリック"を運搬していたところで・・・

「む。どうやら先の２０機だけではなかったようだ」

人型に変身してるザフィーラが眼下に広がる森のある一点を注視してそう言った。鬱蒼と生い茂っている木々の所為で全く見えないけど、「先の機械兵器が居るのか・・・？」シグナムさんの言うように、新手が出現したのかもしれない。

「ああ。森が動いている。先より数は減っているだろうが、おそら

く同型の物だろう」

「主はやて」

「うん。こちらＢチーム。未確認の機械兵器の新手を確認。一直線に突き進んでることから、ひょっとすると未発見のレリックがあるのかもしれへん。このまま空から追跡します」

『こちら観測基地。Ａチームからも同じ報告が入っています。機械兵器の進路から目的地を算出します』

一旦通信が切れる。次の連絡が入るまで、ザフィーラのナビ通りに空から機械兵器を追跡する。未確認の機械兵器。技術官の１人としてかなり興味深い。ＡＭＦを搭載してるってことは、動力は魔力じゃない。あと攻撃も魔力を使用していなくて、詳しくは調査しないと判らないけど一種の光学兵器。完全に違法だ。

「特別捜査官（はやてとシャル）は今回の件、どう考える？」

「そうやなぁ。まず今回現れた機体すべてにＡＭＦが積まれてるってゆうんが怖いな。ＡＭＦは魔導師や現魔法文明にとって天敵や。この世界に出現してるだけで全部って思いたいな。あんなんが他の世界にでもわんさか現れるようなことになった時は、大規模な事件に発展するやろうし」

「機械兵器がレリック、というよりはロストロギアを狙って来たのが引っ掛かるね。製作者はそれを意図して開発したんだから、まだ

続くと思うよ今回のような事。まだ４０個以上が未発見だしさ。執務官はどう考える？」

「シャルと同じかな。それにプラスで技術者タイプの広域犯罪者は何かと厄介だよ。自分の欲のために手段を選ばないのが多いし。被害が拡大する前になんとかして首謀者を付き止めて確保しておきたいね」

今後の事もきちんと視野に入れたフェイトちゃんとシャルちゃんとはやてちゃんの会話に耳を傾けてると、『こちら観測基地。予測座標を送ります』待ってた連絡がシャリオから来た。モニターに表示されたのマップに、機械兵器の予想進路とその目的地を表す矢印と光点が表示される。

「両方とも1ヵ所に向かってるんだね」

私はそう言って指で矢印をなぞる。私たちＢチームと、なのはちゃん達Ａチームが今追跡してる機械兵器の行き先は同じで、このまま追跡を続ければＡチームと挟撃できる構図だ。

「シャリオ。予測進路の先、何があるか判ってる？」

『遺跡と深い縦穴がありますけど、発掘作業員の話ではレリックは発見できなかったそうです・・・』

「でも向かってる以上は何かあるのかもしれないね」

「とにかくレリックがあると思われるところに着いたところで挟撃しよか」

『Ａチームもそのようにしたいとのことです。おそらくレリック付近での交戦ということで、騎士だけで戦闘を行いたいということなんですが・・・』

"レリック"は大きな魔力に当てられると大爆発を起こす代物というのは、シャリオ伝手に聞いたルシル君からの情報だ。確かに中遠距離から魔力攻撃を行うミッド式よりは、直接攻撃を行うベルカ式の方が"レリック"の誘爆を引き起こすリスクは低いと思う。

「メンバーはルシル君、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャルちゃん、とゆうところか・・・。提案はルシル君か？」

『はい。それでそのプラスでアリサ捜査官を入れた６名で、とのことですけど・・・』

そう聞いたはやてちゃんが私たちを見た。その意図を察した私は「異議なし」戦闘班を騎士だけにすることに賛成する。するとフェイトちゃん達も「異議なし」賛成していって、最後に「決まりやな」はやてちゃんも、ルシル君の提案に賛成した。

「シャリオ。こちらから反対意見は無しや。ルシル君たちに機械兵器の迎撃を任せて、わたしらは上空で待機するわ」

『了解です。その旨をＡチームのみなさんに伝えますね』

シャリオとの通信が切れて、そのままナビ通りに空を飛んでいた時に「下がれ！」ザフィーラが突然大きな声を上げて、私たちの前に躍り出たかと思えばシールドを展開した。その直後、視界の端で何か光るものを捉えたって思ってからすぐ、「きゃああ！？」何かがザフィーラのシールドに何かが着弾。その際に発せられた爆発音と衝撃波、そして爆炎に思わず悲鳴を上げちゃった。

「攻撃か！？」

「さらに来ます！」

「スノーホワイト！　全力防御！」

≪お任せを！≫

――アイスミラー八陣の２・ワイドサークル――

中央に１枚、周囲に７枚という広域防御形態で８枚のシールドを展開。直後、また遠くに何かが光ったと思った瞬間に「っ！」シールドに何かが着弾して爆発を起こした。本当にチラッとだけど、どういった攻撃なのかは見えた。

「はやてちゃん！　大口径の銃弾による物理攻撃と視認！」

さっき戦った機械兵器は熱線による光学攻撃で、未確認の新手は銃弾による物理攻撃。どれもこれも殺傷力が高すぎる攻撃手段だ。そ

う伝えると「銃撃・・・。これまた完全に違法やな」はやてちゃんは苦い表情を浮かべた。

「フェイト、シグナム！　攻撃が続くかもしれないから潰しに行くよ！　いいよね、はやて？」

「お願い出来るか？　３人とも」

「うん！」「もちろんです！」

「はやて達は下の機械兵器の追跡を続けて。わたし達は後で追い付くから」

「了解や」

３発目の銃弾が私のシールドに着弾したと同時に、「行くよ！」シャルちゃんとフェイトちゃんとシグナムさんが、砲弾が発射されてるだろう地点に向かって飛び去って行った。それを見送ると、「ダメです、はやてちゃん。観測基地と連絡が取れません。明らかにジャミングを受けてるです」リインからそんな報告が。

「新手の機能の１つやもしれんな。とにかく今は追跡続行や。新手がもしわたしらの足止めやと考えると、このまま残るんは得策やない」

はやてちゃんの言葉に首肯して、私たちは少し高度を下げたうえで森の中を突き進む機械兵器の追跡を続行。その途中で何度も観測基

地やＡチームに念話を送るけど、ジャミングがなかなか解けずにノイズだけが返ってきてた。シャルちゃん達にも念話を送るけど、やっぱり返って来ない。

「すずかちゃん。新手の攻撃は銃弾って話やったけど、いくら銃弾でもあんなに速く、しかも威力のあるって物あるん？」

「う～ん。知らない魔法技術とか使われてたりしたら答えられないけど、でも今回の機械兵器はＡＭＦや純粋な科学を用いた兵装を積んでる。となると、私の知識の中で考えられるのは１つ。レールガン、だと思う」

「レールガン・・・？」

「です？」

「うん、レールガン。Ｅｌｅｃｔｒｏ　Ｍａｇｎｅｔｉｃ　Ｌａｕｎｃｈｅｒ――ＥＭＬ、電磁投射砲、電磁加速砲とも言うね。電磁誘導・・・ローレンツ力を使って物体を加速させて撃ち出す物で、音速の７倍くらい。直撃してたら確実に死んじゃうような攻撃だったけど・・・、ザフィーラが初撃を防いでくれたおかげで、みんな無事だったね」

知識を総動員して導き出した未確認兵器の兵装。推測になっちゃうけど、考えられるのはレールガンだけ。レールガンの発射に必要な大がかりな設備の問題については、地球の科学技術より魔法技術の方がずっと高次なものだから、小型化することくらいさほど問題じ

ゃないはず。

「そうか。おおきにな、ザフィーラ」

「いえ。それが守護獣としての役目ゆえに」

『・・ちら・・・基地・・・こちら観測基地！　Ｂチーム、応答願います！』

ノイズがクリアになって、観測基地のシャリオからの通信が届いたから、はやてちゃんが「こちらＢチーム。すまんな。ジャミングされてたんよ」通信に応じた。

『はい。こちらでもジャミングを確認しました。ジャミング機能を搭載していた飛行型の未確認兵器は交戦したフェイト執務官たちの手によって破壊されて、今ははやて特別捜査官たちと合流すべく飛行中です。あと、Ａチームの方にも同型の飛行機械が多数出現したそうで、これを撃破したとたった今、連絡が入りました』

シャリオからの報告に「本格的にまずい展開になって来たね」私はそう唸った。ＡＭＦを搭載した陸戦兵器と、ジャミングとレールガンを搭載した空戦兵器。どれも並の魔導師じゃ太刀打ち出来ないものだから。

「そうやな～・・・。技術者タイプの広域犯罪者が解き放つ質量兵器。対処できる局員は多くはないとは言え居るやろうけど、そんな局員や必要機材などを集めて部隊を立ち上げ、稼働させるまで数年

は掛かるやろうな。指揮官研修を受けてる身としてその状況を考えると・・・頭が痛いわ」

そう言ってはやてちゃんが頭を抱えた。時空管理局はその大きさからして色々と複雑で、派閥や縄張り争いはもちろんあるし、それ以前に部隊立ち上げや人員確保の手続きとか、1つの部隊における魔導師保有数にも制限があるし、かなり窮屈な組織だったりする。

『こちら観測基地。間もなく機械兵器が目的としているポイントです。Aチームがそろそろ視認できませんか？』

シャリオからの通信で私は周囲を見回してみて「あ、なのはちゃん達だ！」Aチームのみんなの姿が見えたから、「うん。こちらでも視認できた。おーい！」はやてちゃんがシャリオにそう返しながら大手を振った。

私たちはなのはちゃん達と合流して、ハイタッチをし合う。そのすぐ後に、「お待たせ～！」汚れ1つと負ってないシャルちゃん達とも合流できたことで、再度追跡を続行。そして追跡してた機械兵器がとある地点で停止したのを上空から視認した。

「あれが件の遺跡と縦穴か」

「縦穴の中はどうなってるか判る？」

『かなり入り組んでいて、魔法戦を繰り広げるには狭すぎるかと思います』

縦穴内のマップがモニターに表示される。確かに戦闘行為は難しそう。機械兵器を追って縦穴内に突入するかどうか渋る私たち。そんな中で「とりあえずサーチャーを放っておくよ」そう言ってなのはちゃんが桜色の魔力スフィア――サーチャーを3基と作り出して、縦穴へ解き放った。

「ま、レリックを回収して外に出て来た機械兵器から奪っちゃえば問題ないでしょ」

「うはー。アリサってまるで泥棒みたいだね♪」

「うっさいわよアイリ。犯罪者に渡すことに比べたら優しいもんでしょ」

「交戦して奪取することには賛成かな。シャルちゃんたち騎士でお願い出来る？」

「もちろん！　ＡＭＦだろうが熱線だろうが、レールガンだろうがミサイルポッドだろうが、そんな物を積んでるだけの機械兵器相手など、ベルカの騎士の敵じゃない。そう、私たちに――」

「「「「「負けは、無い」」」」」

シャルちゃん、ルシル君、シグナムさん、ヴィータちゃん、あとミッド式だけどアリサちゃんが強く頷いた。ルシル君は持ってた"レリック"ケースをザフィーラに預けて、「エヴェストルム」を起動させた。それから上空で待機してると、突然ルシル君とザフィーラ

がビクッと肩を震わせた。

「「上がれ！！」」

そして同時に大声を上げた。私たちは、何？なんて聞き返すよりすぐに空へと上がって、その直後に縦穴から強烈な閃光が発せられたかと思えばとんでもない爆発が起こった。視界を覆い潰す閃光と、聴覚をマヒさせる爆音に、意識がちょっと飛びそうになった。

「うげぇ、おい、マジかよ・・・」

「うそ・・・。全部吹っ飛んだ・・・」

ヴィータちゃんとアリシアちゃんのそんな声が聞こえた。頭を振って私も地上を見下ろして「そんな・・・」絶句した。直系３ｋｍ、深さは大体１ｋｍほどのクレーターが出来ていた。

『・・・護送・・・こち・・・基地・・・こちら・・・観測・・・護送隊・・・』

今の爆発の影響の所為か観測基地との通信にノイズが入る。ノイズが治まるのを待ってから「こちら護送隊。映像、届いてるか？」はやてちゃんが応じて、こちらの映像を送ると通信越しにシャリオ、それにグリフィスが息を飲むのが判った。

「３つ目のレリックの爆発やと思われる。他の遺跡は確認できてるんか？」

『いえ。今のところは・・・。ですが、とりあえず護送隊のみなさんはアースラへ帰艦してください。転送ポートまでナビしますので』

私たちの任務は"レリック"２つをアースラにまで護送すること。これからここ観測指定世界を調査するのは仕事じゃない。そういうことで「了解」私たちは回収した"レリック"２つを持って、再び転送ポートへと向かって飛び立った。

Ｅｐｉｃ４夢が生まれた日～Ｔｕｒｎｉｎｇ　Ｐｏｉｎｔ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

ロストロギア・"レリック"の回収を何とか終えたあたし達。途中で管理局のデータベースにも登録されてない機械兵器（カプセル型と三角形をした飛行機型）の襲撃を受けたけどね。ま、あたし達の敵じゃなかったわよ。

「転送ポートが見えて来た！」

『みなさん、お疲れ様でした。これでナビを終了します』

ここ第１６２観測指定世界とあたし達が乗って来た船・アースラとを繋ぐトランスポーターへと戻ってきた。大きなミッド式の魔法陣と、それを囲うような１２本の石柱。まるで遺跡のよう。あたし達は「ありがとう！」ここまでナビゲートしてくれたシャリオにお礼を言いつつ地上へと降り立って、トランスポーターの上に立つ。

「こちら護送隊。全員無事に転送ポートに到着しました。転送処理をお願いしまーす！」

『はーい！　転送処理を開始するからじっとしててね～♪』

エイミィからの返答にあたし達はホッと一息吐いた。任務前にアリシアが、平和な任務だ～、なんて言っていたけどその実は結構なス

リルを味わえたわね。相手は不足ありありの機械兵器だったけど、なのは達と久しぶりに共闘できたし。今のところはそれだけで十分よ。

『それじゃあ、転送開始するね』

魔法陣が一際強く輝いて視界を真っ白に染め上げる。そして一瞬の浮遊感を得た後、そこはもうアースラのエントランス。そこには「お疲れ様でした！　ケースをお預かりいたします！」アースラスタッフ４人が敬礼してあたし達を出迎えてくれた。４人とも知らない顔で、月日が経ってることを思い知る。

「ありがとう。これがレリックの収められたケースになる。落としたところで何も問題はないと思うけど、扱いにはそれなりに気を使ってくれな」

「「はい！」」

ルシルとザフィーラがケースを男性局員２人に預けると、２人は「確かにお預かりいたしました」ケースを大事そうに抱えると、「失礼します」女性局員２人を伴って去って行った。去り際、リンディ艦ちょ――じゃなくて、リンディさんやエイミィ、アルフがレクリエーションルームで待ってるって教えてくれた。

「お腹減ったね～」

「母さんが腕によりを掛けて作ってくれてるはずだから、たくさん

美味しい物食べられるよ」

「あー、こう疲れてる時にご飯が用意されてるとホンマに嬉しいわぁ～」

「ごっ飯～ごっ飯～♪」

「デザートがあるともっと嬉しいですぅ～」

まるで行進してるかのような足取りで先頭を往くアイリとリインを微笑ましく眺めながらあたし達も後に続いて、「護送隊全メンバー、ただいま戻りましたー！」帰還報告しつつレクリエーションルームに入る。中にはリンディさんとエイミィとアルフ、それにユーノも居て「おかえりなさい！」あたし達を出迎えてくれた。

「うわぁ、すごい料理の数！　お母さん、1人で大変だったでしょ？」

「あぁ、その辺りはアコース君からの差し入れよ」

アリシアにリンディさんがそう返すと、「おお！　ロッサの料理だぁ！」シャルは笑顔を浮かべて、「ロッサ、来ているんですか？」ルシルはそう訊き返した。リンディさんの話によると、クロノはトランスポートを使ってアースラから本局の研究施設へと"レリック"を護送する（あたし達はパーティ後、海鳴市に帰る予定）んだけど、アコース――ヴェロッサ・アコース査察官は義姉である騎士カリム（局じゃ少将の階級持ちだ）からのお願いで、警護員としてクロノに同行するって話だった。

「ささ。せっかくの差し入れが冷めちゃう前に頂きましょ♪」

リンディさんがパンパン手を叩く。確かにこの厚意を無駄にするなんてとんでもないバチが当たりそうだしね。あたし達は「いただきまーす！」手を合わせて挨拶して、思い思いに取り皿に料理をよそって頂く。てゆうか、アコース査察官の料理もめっちゃ美味いんだけど。ルシルの時にも味わったけど、男の人に家事能力、特に料理スキルで負けると結構へコむわね・・・。

「ほらほら、アリサも～」

1人暮らしになるだろうし、本格的に自炊の勉強でもしようかしら、なんて考えてたところにアリシアに袖を引っ張られながら呼ばれた。振り向けば、アリシア達がジュースが注がれたグラスを片手に「かんぱいしよ、かんぱい♪」そう誘ってきた。なのははユーノを誘っていて、はやてとシャルの2人はルシルを誘ってる。

「集合、集合♪」

アリシアの号令にあたし達は1ヵ所に集まって、「今日はお疲れ様でした！　かんぱ～い！」アリシアの音頭であたし達は「お疲れ様～！」キィンとグラスを軽く当て合って、ジュースを飲む。アリシアはそれで満足したようで「よーし、食べるぞぉ～！」勢いよく料理を食べ始めた。あたし達も談笑しながら食事を楽しんでると・・・

「そう言えばフェイトちゃん。あの子たちの新しい写真ってある？　みんなにも見せてあげようよ♪」

なのはがそう言うと、「あ、見たい！」すずかや、「お、ええな」はやてがフェイトの側に歩み寄る。そんな中で「あの子たち？　なんの話だ？」シグナムが小首を傾げたから、「フェイトが仕事先で保護した子たちよ」あたしが軽く説明する。

「ほう。仕事と言うと執務官のか。確かお前が専門としているのは、ロストロギアの私的利用や違法研究などの捜査だったな」

「はい。事件に巻き込まれてしまった人や保護が必要だった子たちが、保護や救助した後にお礼の手紙や写真を送ってくれるんです」

「特に子供とかに好かれたりするんだよ♪」

「どちらかと言うとアリシアの方が人気があるよ」

フェイトが複数枚と展開したモニターには、小さな子供たちだけの写真やフェイトやアリシア、それにアルフと一緒に撮った写真、拙いフェイト達の似顔絵などなどが表示された。

「まぁアリシアは小せぇかんなぁ。似たり寄ったりのガキに好かれ易いんだろ」

「む。６年前は確かにヴィータとおんなじくらいだったけど。見て、今でははやて並に身長が高くなったし、おっぱいだってちゃんと育

ってきてるもん。目標はとりあえず3人揃って同じサイズなフェイトとなのはとはやて」

「わっ？」

「きゃっ？」

「おっ？」

アリシアが見事なフットワークでなのは達の胸にタッチした後、「次にアリサ」あたしのところに来た。でも、そうそう容易く触らせてやるほどあたしは優しくはないわよ。にしても、いろいろと鈍臭かったアリシアもホント化けたわよね。軽快なフットワークで近付いてくる。けど、一度警戒モードに入ったあたしの「敵じゃないわよ」わざと隙を見せて誘い込んで・・・

「あんまーい！」

突っ込んで来たところで馬跳びの要領でアリシアを飛び越えて、「ひゃぁん！？」背後からアリシアのそれなりに大きくなってる胸を鷲掴み。そんで数回揉んでやれば「ふやぁ～・・・」落ちた。解放してやったら「つ、次は・・・第2位・・・シャル・・・」よろよろと立ち上がって、あたし達の様子を笑いながら眺めてたシャルをロックオン。

「お？　このわたしを相手にやる？　腰抜けるまでやっちゃうよ？」

対するシャルはすんごい厭らしく両手をわきわき。当然アリシアは誤魔化すように口笛を吹きつつ目を逸らし、「第1位の・・・すずか～」に標的変更。学校組で一番胸が大きいのはすずかで、身長が一番高いのがフェイト。アリシアはそのどちらよりも大きくなりたいわけね。一応学校組で一番年上だし。

「ん、私？　良いよ、アリシアちゃん。どうぞ♪」

すずかが、んっ、て胸を突き出してアリシアを待った。すると「お、う、う、むぅ・・・」さすがに堂々とされると身構えるのかアリシアは戸惑って、そして「はぁ」溜息を吐いたかと思えば、「ペチャパイのルシルより膨らんでれば今はいいか」なんて言い捨てた。

「おい、待て。どうしてそこで俺の名前が出る。学校組でもなければ女でもないぞ」

「？？？」

「ＯＫ、判った。俺と遊びたいわけだ。今すぐトレーニングルームを使わせてもらおう」

首をコキコキ鳴らしながらルシルがこっちに向かって来る。これが結構な威圧感で、アリシアに最も近いあたしが「謝りなさい、今すぐ」忠告するとアリシアは「待って！　冗談、ジョーク！」両手を突き出してわたわた振って取り乱す。

「だってさっきからルシルってば写真を見ずにユーノと2人で、し

かも隅っこで話してばかりなんだもん。なんの話してるのか判んないけどさ、もうちょっとこっちに関心持ってくれても良いんじゃない？」

アリシアは両手の人差し指をツンツン突き合わせながら頬を膨らませた。そういやユーノとルシルはこっちに来てないわね。アリシアにそう言われたルシルは「そっか。すまん」ちゃんと謝って、ユーノと一緒に「俺たちにも見せてくれ」あたし達のところへやって来た。

「みんな、良い笑顔だね。心から笑ってるって感じがする」

「それを思うと本当に悲しいな。強い魔力や先天性技能を持っている子はいつも犠牲になる側だ」

ルシルが悲しげな声色でそう言うと、1枚のモニターに映る子供たちを撫でるような仕草をした。なんだかんだ言ってルシルだって、はやてのために次元世界の犯罪者や管理局すら敵に回す、なんて超がいくつも付くほどのお人好しなのよね。

「でも、だからこそフェイトちゃんやアリシアちゃんが、助けてくれてる。だよね？」

「うん。だって・・・」

「子供が将来(ゆめ)を見れず希望も抱けない世界なんて、大人だって悲しいし寂しいから」

それがフェイトとアリシアの原動力なのよね。２人の思いに感動してると「２度も試験に落ちた時はもうダメかと思ったがな」シグナムがからかい口調でそう言った。するとフェイトは「もう！　シグナム、どうしてそう・・・！」脹れっ面になった。

「あぅ～、その時期には私にいろいろありましたし、その所為で多分な心配をさせちゃってましたし・・・」

「う～ん、実際なのはがあんなことになってなくても落ちてたと思う。ちょーむずかったし」

「「うん、むずかった」」

ガックリ肩を落とすフェイトとアリシア。執務官って役職はエリートだしね、そりゃ普通の状況でも落ちる時は落ちるもんよね。娘２人が暗い影落としてる中で「その点、はやてさんは上級キャリア試験に一度で合格して。本当にすごいわ」リンディさんがはやてを褒めた。

「い、いや、そんな！　わたしの場合はタイミング的にも良かったですし、何よりレアスキル持ちってゆう特別措置もありましたし・・・」

フェイトとアリシアを気に掛けるようにチラチラ見ながらそう返すはやて。とりあえずあたしは「ま、これでも食べて元気出しなさい」アコース査察官の差し入れだっていう料理を３品くらい２人の取り

皿によそって手渡した。

「「ありがと・・・」」

「でも上級キャリア試験に受かってホンマに良かったって思います。スキル持ちでスタンドアロンも出来る優秀な魔導師となると、結局は便利アイテム扱いですし。適材が適所に配置されるとも限りませんから。それをどうにかするための佐官までの近道である上級キャリア試験は無事突破。あと必要になる指揮官研修も受けてます」

「部隊指揮官かぁ～。なんか、あんな小さかったはやてちゃんが1つの部隊を丸々取り仕切る立場になるなんて。お姉さん、時の流れが早いことにビックリだよ」

「エイミィ、おばさんっぽい」

「ア～ル～フ～？　だーれがおばさんだってぇ～？」

「いったーー！」

余計なひと言を言ったアルフの頭に両拳でのグリグリ攻撃をするエイミィ。そんな2人を横目に「とりあえず今は準備期間で、しばらくは特捜官のままで渡り鳥状態ですわ」はやてが自分の状況に苦笑した。

「まぁ特捜官は任務によっていろんな部署に飛ばされるからな。しかしその分、多くのコネが出来るし、経験や経歴も積める。部隊指

揮官になるにはあった方が良いものだ。しかしまぁ陸士部隊は縄張り争い意識が海や空より強い。そういう荒波に揉まれるのもまた価値のある経験になるだろう」

「あぁ、クロノ君も似たようなこと言うてたわ」

「実際、陸士部隊の縄張り意識って強いわよ。その所為で犯人追跡中に中断命令を受けることもあるし」

陸士部隊に所属する身として、地上部隊の窮屈さをはやてに話す。確かに管轄区っていうのはあって当然だと思う。けど管轄区を出た瞬間に引き継ぎも碌にしないで、ハイさよなら後は任せてね、ってふざけ過ぎだわ。しかも他の陸士部隊との情報共有すらしないって。バッカじゃないの？っていつも思うもの。

「にゃはは。とりあえずアリサちゃんは今の陸士部隊に不満を持ってるのは判ったよ」

「すごい熱弁だってね、アリサ」

「はい。ジュース」

「あんがと」

地上部隊への不平不満を熱く語っちゃったわ。すずかから受け取ったジュースを飲みほして、「ああもう。こんなテンション下がる話題は切り上げよ！」話題を変えるよう話を振る。

「じゃあ、今度のゴールデンウィークでの旅行についてはどうや♪」

「それ！　そういうので良いのよ、こういう場ではね」

次のＧＷの連休を利用して、はやての指揮官研修先近くにある温泉地へ遊びに行く予定なのよね。休暇期間は４日で、なのはとフェイト、はやてとルシルとリインは初日から、あたしとすずかとシャル、それにアリシアとアルフは２日目のお昼頃に合流予定。シグナムたち八神家も緊急任務がなければ途中参加になる。

「ユーノ君はやっぱり行かないのかな？」

「いや、まぁ今回ばかりは女の子たちだけで。さすがに男１人でちょっと・・・。せめてもう１人、ルシルが居てくれたら考えたんだけど・・・。ルシルはどうせ行かないんだろ？」

「悪いな。ゴールデンウィークは管理局や次元世界には無い概念だからな～。その期間も残念ながら仕事だ」

「まぁそういうわけだから、女の子たちだけで楽しんできてね」

ユーノとルシルが肩を竦め合う。でも「え・・・？」あたし達はルシルの発言について小首を傾げた。するとルシルも「ん・・・？」小首を傾げた。

「ルシル君、休みなんやんね？　アイリから休みを取ったって聴い

てるから、ホテルの部屋も予約してるんやけど・・・」

「え？・・・はあ！？　アイリ、なんの話だ！　そんな話聞いていないぞ！」

「んや？　そうだったっけ？　調査部にはアイリが休暇の申請をしたから、一緒に温泉に行こうね～って話したと思ったんだけど」

「マジか～、聞いてねぇ～・・・。課長たちからもそんな話出てなかったぞ～、おい」

アイリの奴、ルシルを上手いこと嵌めたわね。シャルがルシルのところまで行って「ま、そういうわけだから。一緒に楽しもうね～♪」ルシルの肩をポンッと叩いた。はい、これでルシルの参加は決定。そしてなのははユーノの肩を叩いて・・・

「ルシル君も参加だから、ユーノ君も一緒に来るよね♪　というか、こうなると判っていたから実は部屋も取ってあります！」

ニッコリ笑顔を浮かべた。ルシルが一緒に行くなら自分も行く。そう言ったユーノは「あはは・・・、はい」もう断る理由も無ければ言い訳も無用だわ。とまぁ、そういうわけでゴールデンウィークにはもう1度チーム海鳴として集まることになった。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒ルシリオン†††

あぁ、未来を知っているというのも嫌なものだな。悲惨な出来事が

起きると知りながらも、ある目的のために俺はわざと見過ごした。目の前に広がるのは火炎の海。燃えているのは臨海第８空港。原因は後に判ることになるが、ロストロギア・"レリック"が爆発したことによるものだ。

（なのはにスバルを救出させる。この運命はきっと外してはいけない・・・）

スバル・ナカジマ。俺が傷つけた女の子だ。彼女の母親であるクイントさんを護りきることが出来なかった。護ると、一緒に帰ってくると、約束したのに。だが俺はその約束を果たせなかった。彼女や姉であるギンガ、父親のナカジマ三佐からクイントさんを奪った。恨まれて当然だ。

「ユーノ君は負傷者の治療をお願い！　続々救助されて来るやろうから大変と思うけど・・・！」

「大丈夫！　遠慮も気遣いも無用だよ、はやて！」

災害担当課の部隊や空港のある区を担当する陸士部隊だけでは手が回らない程の大火災。ゆえにいつもは縄張り意識が高い所為で非協力が目立つ別の陸士隊も応援に駆け付け始めている。しかしそれでも圧倒的に人手が足らないし、火の回りがあまりにも激し過ぎた。そんな中、チーム海鳴の同窓会旅行（この前は任務＋パーティだった）現場近くに居た俺、はやて、なのは、フェイト、そしてユーノは、空港内に取り残されている要救助者の救助および消火活動を手伝うこととなった。

「ルシル君、なのはちゃん、フェイトちゃん。危険やけど施設内に突入して救助活動の手伝いをお願いするわ！」

「「「了解！」」」

はやては自分の部隊を持つための指揮官研修をしているため、そのまま臨時の前線指揮官として作戦に参加することとなった。はやての相棒であるリインもまた、彼女の補佐として頑張ってくれている。

（事件を見過ごした分、犠牲者は1人として出させない！）

あまりにも勝手な話だがな。それでも俺は自分勝手な道を歩むと決めたんだ。いつか・・・友達としてではなく局員としてのはやて達と衝突する未来が待っているかもしれないとしても。

「では任務開始や！」

「みなさん、お願いします！」

はやてとリインに見送られながら俺となのはとフェイトは空を翔け、「また後で！」散開して、それぞれ別ルートで轟々と燃え盛る空港へと突入する。俺はその前に、「通信本部。こちら本局０３、ルシリオン・セインテスト」臨時に与えられたコードネームを使い、通信本部――移動指揮車に通信を入れる。

『はい、通信本部。どうしましたか』

「救助が済んで無人となっている区画を教えてほしい。救助と同時に消火を行いたい」

『っ！　了解しました。マップをお送りします。ですがあの、未発見の要救助者が居るかもしれないので・・・』

「無論きちんと確認してから行うよ。ありがとう」

海上スレスレを飛びつつ海水に俺の魔力を当て、「よし」支配下に置いた海水を引き連れて空港敷地内に到着っと。まず海面と陸地の境界に巨大な水球状の中継点――ポンプを空中に固定。馬鹿みたいに魔力を食うが、この中継点が消火活動の生命線になる。

「よしっ、行くか！」

中継点から海水を引き続けながら空港内に入る。そして炎が上がっている場所へと向かって高水圧の水流砲撃を放ち、弱い火なら即消火していく。激しい炎は少々時間が掛かるが、海から直接水を水を引いてぶち当てているためちゃんと消火できている。マップ的に第３セクターと呼ばれるエリアの完全消火に成功。それを報告しようとした時・・・

『本局０３、応答願います』

「こちら本局０３、どうぞ」

本部から通信が入った。通信の内容は、今から進もうとしていた第４セクターに要救助者が数名取り残されているが、火の回りが激しく救助部隊が進めないという。俺は「了解。至急向かいます」そう応じ、さらに第３セクターの消化が完了したことを報告。ついでに、そこから救助隊を進行させるよう進言。

『崩落の危険性とかはあらへんか？』

「確約は出来ないが、損傷レベルは低。問題なしと思われる。安全なルートは水を辿って来てくれれば判る」

『水・・・？　どうゆうことや？　ルシ――本局０３』

「突入口から現在オレの居るところまで海から水を引いて来ているから、水を辿れば判る、というわけだ」

『っ！　了解。本局０３はそのまま消火と同時に要救助者の救助をお願い！』

「了解だ」

はやてとの通信を切り、俺はそのまま第４セクターへと飛び立つ。中継点をいくつも作りつつ消火を繰り返し、ようやく第４セクターに到着した早々オレを待ち受けていたのは炎の壁。膨大な量の海水の砲撃で炎を捩じ伏せて消火しつつ、「見つけた！」要救助者５名を発見。しかし結構まずい状況だ。火の壁に囲まれ、今まさに呑み込まれようとしている。

「誰かー！」

「助けてー！」

「いやー、死にたくない！」

「ママー！　パパー！　お姉ちゃーん！」

「俺はここで死ぬのか・・・」

阿鼻叫喚。俺は「管理局です！　1ヵ所に集まってください！」助けに来たことを大声で伝えつつ追行してくる海水を操作。1ヵ所に集まったのを確認して、要救助者と炎の間に海水を割り込ませて壁とし、拡大させることで炎の壁を押し退けながら消火も行う。炎の壁だけでなく周囲の火にも水の砲撃を撃ち込んで消火していく。完全鎮火させたのを確認して・・・

「もう大丈夫ですよ」

5人に微笑みかける。5人は安堵の表情を浮かべ「ありがとうございます！」俺なんかに礼を言ってくれた。それから救助隊が到着するのを待ち、「ではお願いします」5人を預けた俺は、救助隊からの要請で数名の隊員を伴って消火と救助活動を再開。

『こちら通信本部。本局03、応答願います』

「こちら本局０３、どうぞ」

『スバル・ナカジマという１１歳の女の子を捜しています。姉のギンガ・ナカジマ１３歳の話によると、エントランスホールで逸れたとのことですが、火災後の混乱で、現在どこに居るのか判明していません。捜索をよろしくお願いします』

確か先の次元世界では、ギンガはフェイトに救助されているはずだよな。そしてこのタイミングで『こちら本局０１。スバル・ナカジマを救助しました』なのはからスバルを助け終えたと通信が入る、と。よし、順調だな。あとは残りの要救助者を救い出し、はやての凍結魔法で完全鎮火すれば、今回の大火災は終わりだ。

「こちら本局０３。引き続き消火及び救助活動を行います」

『お、お願いいたします！』

それから俺は救助隊と共に何十人と救い出し、火災もはやての活躍でようやく完全に鎮火した。そして用意された弁当を夕食として頂き、事後処理ももう終わろうかという頃、「坊主！」聞き憶えのある呼び名が背後から掛けられた。振り向けばやはり「ナカジマ一尉・・・」が居た。

「はは。今じゃ三佐だ、陸士１０８部隊の部隊長になったんだよ。有言実行だろ？」

「そうですね。失礼しました、ゲンヤ・ナカジマ三佐」

彼と直接顔を合わせるのは随分と久しぶりになるな。ナカジマ三佐は俺の顔、正確には左目に掛けたモノクル型神器・"プロヴィデンス"　を見て「まだ、左目は治ってねぇのかい？」悲しげな表情を浮かべた。

「ええ、まぁ。ですがもう左の視界が潰れているのも慣れましたし、大した問題はありません。それより、ギンガとスバルが巻き込まれたそうですが、２人の容体は・・・？」

「あ、ああ。多少煙を吸ったようだがそれだけで、入院することもないそうだ。高町嬢ちゃんとハラオウン嬢ちゃんに感謝しねぇとな」

「それは何よりです」

「・・・それとよ、話は変わるが。毎年、女房の墓に花を添えてくれているよな。ありがとよ」

「いえ・・・」

確実とは言えないがクイントさんは生きていると俺は考えている。葬式の時は知らなかったためにクイントさんの死に酷くショックを受けたが、プライソンを叩き潰すための調査の中で敬遠していたクイントさんの死亡した状況を調べた結果、もっと早く調べていれば、と後悔した。

（リボルバーナックルを装着したままの両腕しか見つかっていない

・・・！）

棺に収められていたのは両腕だけ。なら他の身体はどこにある？プライソンの手元にあるに違いない。ＭＩＡのメガーヌさん、それと行方不明になっているルーテシア、リヴィアもまたそうだろう。プライソンとの本格的な衝突はそれ即ちクイントさん達を奪還する戦いでもある。しかしこれはあくまで俺の推測でしかないため、三佐たちには話せない。希望を持たせるわけにはいかない。今はまだ・・・。

『ルシル君。そろそろ撤退しよか』

「『了解。合流する』・・・ナカジマ三佐。自分はそろそろ・・・」

「お、そうかい。今日は本当にありがとうな、陸士部隊を代表して礼を言わせてくれ」

「いえ。これも管理局員としての仕事ですから」

三佐と敬礼し合って踵を返し、そのまま別れた。ギンガとスバルが今、俺のことをどう思っているかについては聞かないし、話されなかった。それが答えなんだろう。彼女たちはまだ幼い。まだ時間は掛かるだろうし、ずっと恨んでくれたままでもいい。負の感情もまた生きるのに必要なものだ。

「「「「お疲れ～」」」」

「ああ。お疲れ様」

はやてとなのはとフェイトとユーノ、４人と合流して互いを労い合う。そしてそのまま予約したというホテルへタクシーで向かう。夜も更け１１時近くだったが無事にチェックイン。

「「「おやすみ～」」」

「うん。おやすみ」

「おやすみ。良い夢を」

はやてとなのはとフェイトが３人部屋へと向かうのを、俺とユーノは手を振りながら見送った。そして俺たちははやて達の部屋から３つ離れた部屋へ入る。

「疲れた～。魔力ももうカツカツだよ」

「ああ、俺もだ」

ユーノは運ばれてくる怪我人を何時間とぶっ通しで治癒魔法で治し、俺は魔力消費の激しい水流系魔法（魔術だったら記憶なんて何百と吹っ飛んでただろうな）を同じように何時間とぶっ通しで発動していた。

「温泉、どうする・・・？」

「あー、そんな気力は無いな。今日はもう即就寝。朝一でシャワー、温泉に入れる時間になったら入る。それでいい」

「同感。・・・ベッド、どっちが良い？」

「どっちでもＯＫだ。好きな方をどうぞ」

「じゃあ一番手前で。奥のベッドまで行く気力が無いよ。ごめん」

「いいさ。鍛えている」

はやて達、正確にはなのはの目の前では気丈に振る舞っていたユーノもとうとう千鳥足。フラフラとした足取りでベッドに向かい、「おやすみ～」そのまま横になってすぐに寝息を立て始めた。俺も奥のベッドに腰掛けて、外した"プロヴィデンス"をベッド間のナイトテーブルに置く。そして、アイリ以外の誰にも話していない、見せていない"秘密"を解除。

「ユーノが起きる前にまた使えばいいだろう・・・」

念のために備え付けの時計のタイマーをセット。仰向けに倒れ込んで目を閉じると、「おやすみ・・・」すぐに眠りにつけた。

≪ＰｉＰｉＰｉ≫

「・・・ん・・・ぅあ・・・朝・・・か」

ちゃんとタイマー通りに起きられたな。ユーノを起こさないためにすぐに切り、俺の"秘密"を隠すための魔法を発動。それから"プロヴィデンス"を手に洗面所へ。洗顔などの身だしなみを整え、もはや気休め程度の"プロヴィデンス"を左目に掛ける。

「よしっ」

その後はナイトテーブルの上に置かれたメモ帳に、朝食を摂りに行く、カードキーを預かる、という旨を書き残しておく。そして部屋を出、すでに開店しているレストランへと向かうためにエレベーターを使って2階へ。時刻は午前8時14分。まだ朝早いということで他の宿泊客は疎らだ。

「おはようございます。お席にご案内させていただきます」

「おはよう、お願いするよ」

レストラン入り口で待ち構えていたグリーター（レストランやラウンジで客を出迎え、テーブルまでご案内する係だな）に案内されたのはパノラマウィンドウ近くの席。グリーターは「ごゆっくりどうぞ」と言い残して入口へ戻って行った。

「とりあえず糖分が欲しいな」

席に着くとテーブル上にメニューが記されたモニターが展開され、

俺はパンケーキとカフェラテの写真をタップして、最後にオーダーというパネルをタップ。これで注文完了だ。待つこと数分、「お待たせいたしました」ウェイトレスが俺の頼んだパンケーキとカフェラテを運んで来てくれた。テーブルに置いて去っていくウェイトレスを見送り、「いただきます」早速頂く。

「あ、ルシル君！　おはよう！」

「「おはよう！」」

パンケーキを食べ終え、カフェラテのお替りを頂いているところで「あぁ、おはよう」私服姿のはやて、なのは、フェイトに挨拶を返す。グリーターの案内で近くの４人がけテーブルに案内された３人と、良く眠れたか？とか、ユーノはまだ眠っている、などと談笑していると・・・

「あんなルシル君」

はやてが突然真剣な表情となって俺の名を呼んだ。その声色に俺もカフェラテを飲むのを中断して「なんだ？」話を窺う姿勢を取った。

「わたしな、今回の一件でより強く思うようになったんよ。わたしの部隊を持ちたい、って。何につけてもミッド地上の管理局部隊が動き出すまであまりにも遅すぎるんよ。今回のような災害救助も、犯罪対策も、発見されたロストロギアへの対策も、そのどれもがや」

「うん。それで？」

「縄張り意識とか無駄の多い手続きとかで後手に回ってばっかで、被害をいたずらに拡大させてるんが現状や。そんな地上部隊を変える切っ掛けとして、少数精鋭のエキスパート部隊をわたしは造りたい。それで成果を徐々にでもええから上げてったら、上層部も少しは考えを改めると思う」

「私とフェイトちゃんは、はやてちゃんのその願いを叶えたい。どうしても」

「うん。だから私たちは、はやての造る部隊に参加するつもりなんだ」

あぁ、そうなのか。こうして機動六課設立へと向かうのか。先の次元世界では話を聞いただけだったしな。俺は「賛成だよ、俺も応援するよ」何故か緊張しているはやて達に微笑みかけると、「うんっ、ありがとう！」ホッとして満面の笑顔を浮かべた。

「はやては本当に優秀だから、確実に部隊は造れるだろう。だが、メンバーはどうするつもりだ？　３人とも知っているだろうが、部隊には魔導師の保有制限というものがある。リミッターを付けてランクを下げるなんて裏技もあるが、チーム海鳴全員をメンバーにすることはどうしても無理だ」

先の次元世界とは違ってアリサやすずかも局員だ。シャルも"界律の守護神テスタメント"ではないから局員のまま。アリシアもフェイト付きの補佐官ゆえに部隊に参加するだろうし、はやて達のリミ

ッターも先以上になるだろう。

「あぁ、やっぱし」

「それも問題だよね・・・」

ガックリ肩を落とすなのはとフェイト。はやてが「ルシル君は、その・・・」不安そうな目を俺に向ける。今は空戦Ｓ＋な俺だが、空戦ＳＳランクを取得するように権威の円卓から指示を受けている。取得できる物は取得しろ、だからな。機動六課設立まで残り４年。その頃にはＳＳランクだ。だから・・・。

「悪い。俺はパスだ。部隊の中じゃなく外から応援させてもらうよ」

「そうやんなぁ～、やっぱりそうなるやんな～。残念やわ～」

なのはとフェイトに続いてはやても撃沈。大きな溜息を吐く３人。それから３人はアリサ達と相談して部隊への参加・不参加を決定することを決めた。俺も先の次元世界の知識ではやて達をサポートすることも決めたよ。はやての夢、俺だって応援したいからな。

Ｅｉｐｉｃ５先駆者と悩める少女～Ｄｒａｇｏｎ　Ｔａｍｅｒ～

とある少女について話そう。生まれは第６管理世界ユージラスはアルザス地方。その地方の少数民族である"ル・ルシエ"の出である。彼女は僅か６歳という幼さながらも、白銀の竜を使役、黒き火竜の加護を受ける、という強大な才に恵まれていた。しかしそれゆえに、少女は部族から追放という処分を受けることとなってしまった。その理由としては・・・

――強過ぎる力は災いと争いしか呼ばぬ――

というものだ。少女の才は恐れられ、また疎まれ、結果部族の平穏のためにという名目の下、６歳という少女を里から追放し当てのない独り旅に出したのだ。少女は幼く小さな飛竜を連れとして里を出、アルザス地方の過酷な環境の中をひたすら歩き続けた。１ヵ月ほどのち、隣のオーラン地方に到着したところで時空管理局の施設に保護され、その後本局の保護施設へと移された。

そして、竜使役というあまりにも珍しく強力なスキルを持つ少女を、管理局は局員として招き入れることを決定。アルザスの竜は次元世界でも有名で、その圧倒的な火力を次元世界の秩序安定に使いたかったのだ。しかしそこには誤算があった。

――竜召喚は確かに凄まじい威力を誇る。だが少女は碌に制御が出来ない――

――召喚された竜は少女に降りかかる危機を振り払うために半ば暴

走状態で、手がつけられない――

――まともな部隊に所属させるにはあまりにも危険。戦場に単独で突撃させての殲滅戦を行わせるしか有用な利用方法はない――

管理局が下した判断がそれだった。しかし当たり前過ぎた話だ。少女はまだ6歳。教育も訓練も碌に受けていないのだ。才能だけで全てが上手く行くわけもない。こればかりは少女の責任ではなく、少女の竜召喚について調査をちゃんとしなかった管理局側の怠慢が、その全てだ。

管理局はそんな少女と竜の力を持て余した。少女は厄介者として追い払われるかのように各部隊を転々と異動させられる。当然少女の顔から明るい表情は失われていった。次第に少女は心すら閉じ始め、こう考えるようになってしまっていた。

――あたしの前にはいつも、あたしが居ちゃいけない場所しかなくて、あたしがしちゃいけない事があるだけ――

自分の居場所はどこに行っても無く、頼れる人も側に居らず、孤独のままに少女の時は流れた。そして今、少女はとある場所へ向かって小さな飛竜1匹を伴い本局内の廊下を歩いていた。少女に言い渡された新たな臨時の所属先は特務三課。

特務とは、臨時任務の為に編成される部隊に付けられるもので、正式には特務機動隊となる。任務内容は様々だが特に多いのは、脅威対策室からの指令で編成される大規模テロや小規模戦乱の鎮圧など、正しく戦場に立つ戦闘特化任務だ。

「特務隊・・・」

少女がポツリと漏らす。特務機動隊は任務内容に関わらずメンバーにはエリートが選抜される。そんなところに自分が呼ばれたことに疑心を抱いていた。しかし1つだけ理解していることもあった。少女の元に届いた辞令に記された任務内容は、とある管理世界での内戦を鎮圧するというものだった。つまり相手を制圧する戦力が必要になる。なら自分が呼ばれた理由は1つ、竜使役による戦力を充てにされている、と。

「キュクルー・・・」

「フリード・・・。ありがとう、心配してくれて」

少女の側を飛んでいた飛竜・フリードリヒ――愛称フリードが不安げな鳴き声を上げて、彼女の頬に頬擦りした。少女は気遣われていると判り、そっとフリードの頭を撫でた。そんな少女とフリードが目的地に近付くにつれ、少女と同じ方へ向かって歩いている緊張した面持ちの局員たちの姿が多くなってきていた。

（見られてる・・・）

若くても２０代後半からの男性局員ばかりの廊下に１０歳にも満たない少女、さらに飛竜を連れているということで自然と周囲の視線が少女たちに集まる。しかも少女をチラチラと見ながらヒソヒソと小声で何かを話している。

いよいよ居心地が悪くなってきたところで、少女たちの目的地であ

る本局艦船ドック・第８待合室に到着した。待合室と呼称ながらもある種の会議室のように長机が幾つも２列縦隊で並んでいる。続々と好きな席に座っていく男性局員たちに続く少女は、一番後ろの隅っこの席に着いた。

「あ～あ～。なんでこうなるかな～」

少女が俯いて机の表面をぼんやりと眺めているところに、少女とは別の幼い女声での愚痴が待合室に響いた。少女もその声に反応して顔を上げ、入口の方へと目を向けた。

「まぁこれも仕事だ。みんなとの買い物（やくそく）はまた今度な」

「ちぇー」

そこには真っ白な長髪、水色の瞳をした少女と、銀色の長髪、蒼と紅の瞳をした青年が居り、白髪の少女は何やらご立腹の様子で、青年はそんな彼女を宥め続けている。その２人に続いて「ほらほら、入った入った」もう１人、ローズピンクの長いポニーテール、エメラルドグリーンの瞳をした少女が入って来た。待合室がざわざわと騒然となる。

「空戦ＳＳランクのルシリオン・セインテスト一等空尉・・・」

「それにパラディンでもあるアルテルミナス・マルスヴァローグ二尉・・・」

「リンドヴルムを潰した部隊の内の２人じゃないか・・・！」

「今回の任務、終わったも同然だろこれ」

管理局の中でもトップクラスの実力者とされる内の２人、ルシリオンとアルテルミナスが部隊に呼ばれたと知った他の局員たちは勝利を確信した。しかし少女は管理局に保護されてから間もないため、彼らの異常性を知らないこともあってただ「綺麗な人たち・・・」という感想しか出なかった。

「え～っと、おっ、　向こうの席が空いてるね」

「え・・・？」

アイリがルシリオンの手を取って少女の座る奥の席へと向かって来た。アルテルミナスもまた「じゃあ私も」２人に続いて少女の近くへとやって来た。

「こんにちは。隣の席、良いかな？」

ルシリオンが少女へ向けて声を掛けると、「え、あの・・・」少女は返答を言い淀んだ。すると「こんな可愛い小さな子を怯えさせるなんてサイテー」アルテルミナスがルシリオンの肩を引っ掴んで少女の前から退かした。

「ルミナ、君もいよいよ俺に対する言動がシャルっぽくなってきたな。可哀想に。彼女の馬鹿っぽさに感染してしまって・・・。気を

しっかり持って、強く生きるんだぞ？」

「やめて、そんな憐れむような目で見るの。君は前の席でアイリと一緒に座って。彼女の隣は私が座るから。それはいいかな？　あ、ダメだったら断って良いから」

改めて隣の席に座って良いかを少女に訊ねたアルテルミナス。少女が小さな声で「はい。どうぞ」頷くと、「ありがとう」アルテルミナスは少女の隣の席に座り、そしてルシリオンとアイリは1つ前の席に着いた。

「私は本局・特別技能捜査課のアルテルミナス・マルスヴァローグ二等空尉。よろしく。そして前に座っているのが、内務調査部と特別技能捜査部を兼任してるルシリオン・セインテスト一等空尉。で、同じ特別技能捜査課のアイリ・セインテスト一等空士」

「よろしくな」

「よろしくね～♪」

「あの・・・あたしは・・・・」

少女は少し戸惑いつつも、自己紹介を受けたことで懸命に自分も名乗り返そうと頑張る。これまで大人ばかりの世界で、飛竜フリードのみと頑張ってきた少女。直接声に出して言われずとも自分は厄介者だとされてきた数ヵ月。部隊に転属した当初は仲間として受け入れられてはいたが、フリードの暴走が原因で少しずつ少女の周りか

ら人は居なくなり、幾度と孤立し続けていた。

「あたしは・・・」

自己紹介をしようとするとその光景がフラッシュバックし、少女の口を自然と閉ざしてしまう。どれだけ仲良くなろうとしても、最終的には離れて行ってしまう。目の前に居るルシリオン達もまた、自分の周りから居なくなってしまうのではないかと恐れてしまうのだ。

「キュクルー」

再び萎縮し始めていた少女にフリードが一鳴きした。少女はその使役の才からフリードを始めとした鳥獣系の動物とある程度だが意志の疎通が出来る。それ故にフリードが鳴いた意味を少女は察した。大丈夫、と。少女はグッと腹に力を入れ、急かすこともせずに優しい表情で彼女の言葉を待つルシリオン達をしっかりと見た。

「あたし・・・は、キャロ・・・・、キャロ・ル・ルシエ、です・・・！　よ、よろしく・・・お願い、します・・・！」

そしてたどたどしいながらも少女――キャロは自己紹介をやりきった。キャロからの精一杯な挨拶に「よろしく♪」ルシリオン達は笑顔で応えた。

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

脅威対策室の指令の下に特務機動隊（エクストラフォース）が設立され、俺とアルテルミナ

スーールミナが特務三課の隊員に選ばれた。任務内容は、第５１管理世界ワイエルバキアで発生している内戦、正確にはクーデターを鎮圧するというものだ。当初は通常の武装隊などで問題なかったようだが、クーデター軍が質量兵器を持ち出したことで戦況は一気に不利に回った、とのことだ。

（戦闘特化と判ってアイリを連れて来たのはまぁまぁ正解だったな・・・）

岩影に隠れて手の平サイズの望遠鏡で覗き見るは、街を丸々１つを覆う城壁。その周辺には、装甲列車が城壁に沿うように何百両と連なり、搭載している砲門を外へと向けている。城壁の上には空から攻撃に備えるための砲台がずらりと並んでいる。さらに城壁に開いている見張り窓には銃火器で武装した男共の姿もある。なんの策も無く接近すると蜂の巣にされそうだ。

「連中の目的、なんだったっけ？」

「管理世界指定からの脱退らしい。元々この世界は軍事に優れていて、今クーデターを起こしている連中は軍事世界を造りたかったようなんだが、それを危惧した政府が管理局と交渉して管理世界入りを果たした」

「あぁ、それが気に入らないのか。馬鹿ねぇ」

「まったくだ」

特務三課の課長である部隊長から俺とルミナは兵器無力化チームのメンバーとして選ばれ、今こうして部隊を代表して敵が根城にしている要塞を眺めている。

「というかさぁ。いくら竜使役が出来るからってこんな幼い子を戦場に駆り出すなんて、バッッッッッカじゃないの！？」

俺たち特務三課の本部であるL級次元航行艦・ビアンカ（今は衛星軌道上にて停泊中）に向かって罵声を浴びせ掛けたルミナ。彼女の手はメンバーの1人である少女、キャロの肩の上に置かれていた。

（くそっ。まさかこんな形でキャロと会うなんて予想外すぎるぞ）

ここワイエルバキアに向かっている最中、アイリとルミナはキャロと打ち解けようと煩わしく感じられないよう細心の注意を払いながらコミュニケーションを取り、少しずつ警戒を解いてくれていった彼女も俺たちに身の上話を話してくれた。

（内容は先の次元世界と大体同じだったが、特務隊に選抜されるなんてことはなかった・・・！）

キャロがこれまで受けてきた扱いに、ルミナは管理局に対して怒り心頭。局員としてではなく聖王教会・教会騎士団として、管理局に抗議するとか言い出したからさぁ大変。局内には聖王教会を良く思わない派閥もある。そこと衝突すると絶対に碌なことにはならない。だから俺は、キャロをしっかりとした保護責任者に預けよう、そう提案した。

――保護責任者ぁ～？・・・あ、あぁ、そっか、うん、なるほど。適任者が近くに居たね。いいよ、あの子のことは任せる――

ルミナはその提案を受けてくれた。誰を保護責任者にするかは言わずもがな。フェイトならきっと先の次元世界と同じようにキャロを大事にしてくれるはずだ。とまぁ、そんな風に俺たちが厄介者とされるキャロと一緒に居ることが部隊長が知り、どうせなら４人纏めて１つの班として最前線に立ってくれないか、と提案という名目で命令を下してきたのである。

「まぁ私たちとキャロを同じチームにしたことで１割だけ許してあげる」

「だね。キャロを他の局員たちに側には置いておきたくないもんね。キャロもぉ、アイリ達と一緒の方が気が楽だもんね～？」

「あ、あの・・・はい」

「キュクルー！」

アイリは珍しく本来の姿である３０ｃｍほどの大きさにまで戻って、フリードが乗るキャロの右肩とは反対の左肩に座っている。キャロもそれで良いと言ってくれたし、何よりアイリの小ささが可愛いとキャロもお気に入りの様子だ。フェイトに引き取られてからもしばらくは怯えて笑顔を見せなかったが、今回はアイリやルミナのおかげで結構早く打ち解けそうだ。

「さてと。武装したレールウェイ、砲台、武装した男たち。レールウェイと砲台に関してはキツ目のＡＭＦがあるらしいし。どう攻略していこうか」

「少し待ってくれ。ここに来るまでに装甲列車の映像記録を見せられて、パッと閃いた。どこかで見たことがあるってね」

俺は前方にモニターを展開した。ルミナが「どれどれ」モニターに顔を近付け、「キャロ。モニターに近付いて」アイリがキャロの頬をペチペチ優しく叩き、「あ、はい」指示に従ってキャロもモニター前にやって来た。

「何かの見取り図、それに設計図・・・？・・・ん？　あれ、これってもしかして・・・！」

「あのレールウェイのものですか？　ルシル一尉」

「ああ。ＴＯＲＡＤ／ＡＴ－Ｘ０１――Ｔｈｅ　ｔａｃｔｉｃｓ　ｏｒｄｅｒ　Ｒａｉｌｗａｙ　ａｒｔｉｌｌｅｒｙ　ｄｅｆｅｎｓｅ／Ａｒｍｉｎｇ　ｔｒａｉｎ・・・、戦術級列車砲防衛用装甲列車・試作１号機。コードネーム、ケンタウロス」

「どうしたのコレ！？」

「以前、首都防衛隊と共にプライソンのアジトに潜入捜査した際に奴のデータベースからパクってきた」

「っ！　そう、騎士ゼストの・・・。いやいや、ちょっと待って。まさか、この1件にはプライソンが関わってるの！？」

「関わってはいるだろうが、クーデターにはノータッチだろうな。あくまで兵器を提供している武器ブローカーという立場だろう」

「ブローカー。・・・あー、そうか。あくまで、自分が造った兵器を実戦に投入して試験運用させることが目的か。試作型っていうことだし、完成型に必要なデータを見返りとして、自分の兵器を与えたわけだ」

「まぁ大体そんなところだろうな」

プライソンが戦争を起こせるだけの兵器を開発をしている。兵器の設計図などを証拠として上層部に公開しようかと思ったが、プライソンが最高評議会によって生み出されたとなると奴はかつてのジェイルのように上層部と繋がりがある。もみ消されるかもしれないと判断した俺は適当な報告書をでっち上げ、本当に信頼できる上司であるリンディさんやレティ提督、あとクロノにも伝え、そしてはやて達にも話が行っている。

「装甲列車は攻撃用・防御用・弾薬保管用・転送室などといった専門車両を何十両と繋げた陸戦兵器のようだ。ＰＡＧＧ――Ｐｈｙｓｉｃａｌ　ａｇｇｒｅｓｓｉｖｅ　Ｇａｔｌｉｎｇ　ｇｕｎ、物理ガトリングガン。コードネームはグリフィン。ＰＡＣ――Ｐｈｙｓｉｃａｌ　ａｇｇｒｅｓｓｉｖｅ　Ｃａｎｎｏｎ、物理砲。コード

ネームはヒポグリフ。どれも並の防御魔法じゃ防ぎきれない威力だな」

「なるほど。城壁上の砲台については何か判ってることは？」

「おそらくだが、これだろうな。ＳＷＡＡ／ＥＭＬＦＸ－０１――Ｓｕｐｅｒ－ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　ａｇｇｒｅｓｓｉｖｅ　Ｅｌｅｃｔｒｏ　Ｍａｇｎｅｔｉｃ　Ｌａｕｎｃｈｅｒ　ｆｏｒｔ／超広域攻撃電磁投射砲砲台・試作機。コードネームはウォルカーヌス。早い話が電磁力を利用して弾を超加速させて撃ち出すという代物だ」

この間、とは言っても半年ほど前だが、"レリック"回収任務の際に俺たちを襲ってきたガジェットドローン（今はまだ未確認の機械兵器扱いだが）はⅠ型とⅡ型だった。驚いたのはⅡ型の兵装が先の次元世界とは違い、光学ビームだけでなく小型レールガンやミサイルポットを搭載している機体もあった。Ⅱ型のレールガンは銃弾だったことで威力も低く防御可能だが、ウォルカーヌスのは砲弾だ。まずシールドは砕かれる。ＡＭＦのこともあるしな。

（ジェイルとは違う、機械兵器開発の天才、か）

４年後、ＪＳ事件とはまた違う事件が起きるんだろうな。ＪＳ事件を知っているからなんてアドバンテージに胡坐をかいてミスするヘマだけはしないようにしないと。

「どれも物理攻撃だって言うのは結構ラッキーな問題ね。私の固有スキルで分解すれば片付く」

「基本的な攻略にはルミナを当てにさせてもらおうか。まずは初撃方法だな。初っ端でコケることはしたくない」

ゴリゴリの力押しでも問題ないような戦力を持っているが、無駄に魔力を消費するような馬鹿な真似はしたくない。万が一にもルミナに俺の"秘密"が知られたらその日の内にチーム海鳴に伝わるだろう。それだけは阻止しなければ。それにキャロも居るし。黙っていてほしいと頼めばフェイトにも話さないだろうが、そんな心労を掛けたくない。

「ふと思いついたんだけど。ルシルって電子戦用の魔法、持ってたよね？」

「ステガノグラフィアか」

「そう、それ。ああいう兵器はどうしたって電子系システムで管理してるはず。それを支配下に置けば戦わずに済む。違う？」

ルミナの提案は装甲列車の映像を観た瞬間に考えついたんだが「後の事を考えると少し悩むな」今1つ乗り切れない。ルミナが「後の事・・？」小首を傾げた。

「アレはあくまで試作型の装甲列車だ。ステガノグラフィアでのクラックは簡単だろうが、もし今後どこかの世界で完成型が暴れ回る日が来たら」

「対策を立てられると面倒だね。試作型より兵装ももっと強力になるだろうしね」

「なるほど。それならどうしても対策の立てようがない私のスキルで真正面からぶっ壊す方が良いか。よしっ、決定。ルシル。装甲列車は私が潰す。ルシルとアイリは上の砲台と武装兵をお願い」

「了解だ」「ヤー！」

ルミナが単独で装甲列車を攻略している間、俺はアイリとユニゾンして城壁に並ぶ砲台や武装兵を攻略する。ワイエルバキアに新設されたばかりの地上本部から貰った城壁内部のデータを見てＡＭＦ発生装置の位置を確認。

「外からの攻撃で潰せそうだね」

「ああ。じゃあ行こうか」

「ええ」「はーい」

ある程度作戦も立てたところで攻略開始だ。本部に連絡を取ろうとしたところで「あの、あたしは・・・！？」キャロが小さく挙手した。ルミナが「キャロ。あなたはここで待機、お留守番ね」そう言いながらキャロの頭を撫でた。

「キャロ。俺たちは初めから君を戦わせるつもりなんて無かった。いいかい？　キャロ。君はまだあまりにも幼い。守る側じゃなく、

今はまだ守られる側なんだよ。確かにの竜使役は凄さまじい戦力だろう。だからと言って君のような子供が、こんな泥臭い戦場に立つ必要はないんだ」

「そうそう。こういう時は私たち大人が先頭に立って戦って、キャロのような子供を守るものなの」

「でも・・・！」

「キャロ。君も成長していつかは守る側に立つことになる。ただ今はその時期じゃないだけだ。だから俺たちに君を守らせてくれ」

俺は片膝をついて、キャロと目を合わせてそう伝える。キャロは少し戸惑いを見せ、次に涙で瞳が潤み、そして小さく嗚咽を漏らし始めた。ルミナとアイリがよしよしと頭を撫でてフリードも一鳴き。

「こちら対兵器（ブレイク）チーム、ブレイカー1。これより戦闘に移ります」

『了解。健闘を祈ります』

特務隊はエリート集団。そう言われても今回の特務三課のメンバーの平均ランクはA。兵器どころかAMFにすら手も足も出ない連中ばかりだ。必然と俺やルミナが真っ先に動くことになる。

「とりあえずキャロとフリードは、この中で待っていてくれ」

――ラッピングバブル――

「ふわっ？」

キャロとフリードを球体状の魔力バリアに包んで浮遊させる。初撃でキャロを傷つけるような事があってはいけないしな。アイリが「すぐ戻ってくるね♪」キャロにウィンクして、俺の元へと来た。そして「ユニゾン・イン！」アイリと融合を果たす。

「ヘマするなよ、ルミナ」

「そっちこそ」

コツンと拳を突き合わせる。ルミナがトントンと小さくジャンプを繰り返している中、俺は地面に両手をついて、「アイリ。よろしくな」魔術発動のサポートを頼む。そして魔力炉（システム）の稼働率を引き挙げて魔術師化し、術式スタンバイ。

『ヤー！』

「ルミナ、行くぞ」

「いつでもＯＫ！」

――戦慄（コード）させよ、汝（スイエル）の地災――

土石系中級術式、局地的に最大震度９を引き起こせるスイエルを発動。しばらくの沈黙の後、カタカタとそこら辺に転がっている小石

が跳ね、そしてズンっと突き上げるかのような縦揺れ、続けて横揺れが発生した。今の俺には震度７で限界だが、ここの地域では地震が起きないという話だし、奇襲にはもってこいの術式だ。

「お？　ツイているな。装甲列車がレールから脱線した！　ルミ・・・って、もう行っているか」

スイエルの持続時間は３分。その間は振動で装甲列車もまともにルミナを狙えないと思っていたが、幸いなことに脱線したことで砲台車両の何両かが大きく傾き、地上へ向けて砲門を向けられない状態に陥っている。

――我を運べ、汝（アンビエル）の蒼翼（コード）――

剣翼１２枚を展開し「いってきます」キャロに手を振って、「お気を付けて」手を振り返してくれた彼女に見送られながら空へと上がり、ルミナに遅れて城壁へと向かう。魔力炉（システム）の稼働率を下げて魔力から神秘を無くす。

『マイスター！　ＡＭＦ発生装置の地点、マーカーするね！』

２人きりになった時限定でのマイスター呼びをするアイリが目の前にモニターを展開してくれて、城壁内のどこにＡＭＦ発生装置があるかマーカーを付けてくれた。

「ありがとう、アイリ。パシエル！」

――舞い降るは、汝の雷光・デュプルジャベリン――

雷槍３０本を展開し、その全てに魔力の外殻で包み込む。

「ジャッジメント！」

そう、これはヴァリアブルシュートと同じ機構だ。外側の魔力バリアでＡＭＦを中和し、本丸である雷槍で城壁を破壊。雷槍はマーカーの示す箇所へ向かって突き進み、ＡＭＦの壁に着弾。少しの拮抗の後、ＡＭＦを貫通して雷槍は狙い通りに城壁に穴を開けた。

「第二波・・・装填！」

さらに３０本と雷槍を再展開して「ジャッジメント！」号令を下して一斉射出。再びＡＭＦに僅かに妨げられるが、出力を変えなかった時点で手遅れだ。ＡＭＦを突破して城壁内に突撃した。そしてアイリが『直撃ぃ～♪』俺の内で嬉しそうに指を鳴らす。

「ＡＭＦが解除されたな」

武装兵が何か叫びながら携えていたライフルを俺に向けてパンパンと撃ってくる。ただの銃弾など目を瞑っていても避けられる。さらに城壁上に何十基と設置されているレールガンからも砲撃が放たれてきた。射角からしてルミナには当たらないだろうし、キャロの方へと向かないように注意を払う。

『マイスター。空戦形態ヘルモーズ、発動するね』

アイリからそう提案される。城壁を1周するだけで何分かかるか判らないし、「そうだな。頼む」アイリの提案を受け入れる。

『ヤー！』

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

剣翼12枚が背よりわずかに離れ、薄く長いひし形10枚の蒼翼を展開。飛行速度を跳ね上げさせ、城壁の外周を飛び回りながらパシエルで城壁とAMF発生装置を破壊していく。そして・・・

「こちらブレイカー1。要塞のAMF発生装置、その全基の破壊に成功。これより砲台の破壊、武装兵の無力化を行います」

『確認しました。引き続きお願いします。ブレイカー2も武装レールウェイの車両をつつがなく破壊していっています。全兵器の破壊を確認後、後続部隊を投入します』

「了解」

15分と掛けてAMF発生装置をすべて破壊し終え、見張り窓や破壊した穴から炎や黒煙が上がる。この時にはもう武装兵は俺への攻撃を完全に止め、消火活動に手一杯といった風だ。消火活動が終わるまで俺やルミナには構っていられないだろう。

『マイスター、マイスター！　見て見て、ルミナ、すっごいよ！』

アイリからそう言われて地上を見れば、ルミナはガトリングガンや砲弾の雨の中を何の苦もなく駆け抜け、装甲列車の８０両弱を見るも無残に分解していっていた。アイツだけ本当に敵に回したくないよな。

「さ。俺たちもレールガンを潰すぞ」

『ヤー！』

城壁上のレールガンからの砲撃はなおも続く。ＡＭＦがもう機能していない今、俺たちの障害にはならない。だから・・・

「大人しく・・・墜ちろぉぉぉぉーーーーッ！！」

――崇め讃(コード)えよ、汝(ミカエル)の其の御名を――

２２枚中２０枚の蒼翼を背より離し、蒼翼を２０の砲門として運用する。先端より砲撃を連射し、レールガンの生命線となる電力供給ケーブルを破壊して砲弾を撃てなくしてから、本体である砲台を粉砕する。

『こちら本部。ブレイカー２が武装レールウェイの全車両を破壊。城塞の門を突破して街に突入しました。これより後続部隊を送りたいので、ブレイカー１、砲台の破壊および武装兵の無力化を急いでください』

「了解。砲台に関しては全基無力化が済んでいる。武装兵も直に無力化する。今すぐ後続部隊を突入させても問題はない」

レールガンの残り８基もたった今、多弾砲撃ミカエルで破壊し終えた。

『っ！　了解しました。ブレイカー１、余力があればそのまま後続部隊と共に敵本部の制圧をお願いします』

「了解。任務を続行する」

城壁の見張り窓から突入し、「パンツァーガイスト・・・！」古代ベルカ式の防御魔法を発動。魔力で全身を覆い包み、ライフルやマシンガンなどの銃火器の攻撃を避けもせずに全弾弾き返す。すると「クソッ、化け物め！」武装兵がそう言い放った。

『失礼しちゃう！　お前らは私利私欲の化け物のクセに！』

――竜氷旋――

武装兵の１人がグレネードランチャーを連発してきたんだが、アイリの氷結魔法のおかげで俺に当たる頃には弾は完全凍結され、摩擦で空中分解した。さらにロケットランチャーまで持ち出してくる大馬鹿者も現れるが、アイリの氷結魔法のおかげでその威力を発揮する前に無力されていく。

「じゃあ今度はお前たちの番だ」

――天よ怒れ、汝の酷雷（ジェレミエル）――

通路いっぱいの大きさを誇る雷龍ジェレミエルを2頭発動し、「食らい尽くせ」通路の左右へ向けて解き放つ。非殺傷設定へと戻しているから見た目に反して軽めのスタンガンくらいの威力しかないが、しばらく動けないようにするには十分な威力だ。武装兵は逃げ惑うが「ぎゃぁぁぁぁ！」感電して次々と倒れ伏していく。

『バインド、バインド～♪　簀巻き、巻き、巻き～♪』

そんな連中にアイリがバインドを掛け、拘束完了だ。雷龍によって武装兵は全滅。城壁の兵器および兵力を完全無力化することに成功したことを本部へ連絡した後は、ルミナや後続部隊に続いて俺とアイリも街へ進撃。俺の広域攻撃とルミナの問答無用なスキル攻撃によって・・・

『こちら本部。クーデター軍より投降の意思あり、と連絡が入った。全制圧チームは攻撃中止。繰り返す――』

クーデター軍の戦意は挫かれ、自ら今回のクーデターに幕を降ろした。クーデターに参加した軍人や関係者はワイエルバキアの局員たちによって連行され、俺たち特務三課の任務は無事に終了した。

「あの、お疲れ様でした・・・！」

「キュクルー！」

本部であるビアンカへ帰艦するための転送ポイントへ向かう前にキャロと合流を果たす。労いの言葉を掛けてくれた彼女に「ありがとう」俺たちは笑顔を返し、「たっだいま～！」アイリはキャロの頭の上に座った。

「あの、ルシル一尉もルミナ二尉も本当にすごくて・・・すごくて・・・」

キャロがそこまで言ったところでブルッと肩を震わせた。その様子にルミナが「怖かった、かな？」穏やか声でそう訊くと、キャロは「あ、いえ！」首を横に振った。

「本当に？」

「・・・ごめんなさい。少し、恐いって思いました。でも、きっとあたしが今まで居た部隊の人たちも、今のあたしのような感じ・・・だったのかな、って・・・。ルシル一尉やルミナ二尉は、自分が恐れられてどう・・・感じますか・・・？」

キャロがおずおずと訊いてきた。俺とルミナは顔を見合わせて、強大な力を持つゆえに畏怖されてきたことに対する考えを伝えることにした。

「私だって最初は恐がられたものだよ。局でも教会騎士団でも、ね。触れた物を例外なく分解するスキル。異常ここに極まれりだしね。けど、結果をきっちり残していけば必ず受け入れられる。認めても

らうためにはやっぱり結果が必要だと思う」

「結果・・・」

「キャロ。望もうと望まないと強い力を持ってしまった以上、責任が付き纏ってくる。力を持つ者ゆえの責任だ。強い力は恐れられるものだ。だが、だからと言って自分まで恐れて疎ましく思ってはダメだ。それは責任放棄。どれだけ優れ、どんな素晴らしい事が出来ようともそれは暴力になる」

6歳の少女に背負わせるにはまだ早すぎるものだ。しかし俺とルミナの言葉が少しでも早くキャロに自信を持たせてやることが出来れば、それに越したことはない。

「だからキャロ。まずは自分の力と向き合おう。一番の早道は意味を持たせる、というのが良いかもしれない。俺は、守りたいものを守り、救いたいものを救う、その信念でこの力をコントロールしている」

「力に、意味を・・・持たせる・・・」

「うん。少しずつでも良いよ、キャロ。いつかあなたが守りたい人のために、恐ろしいかもだけど竜使役をコントロールしていこう。その時までどれだけ恐がられようとも、あなただけは信じてあげて。自分の力を。絶対に君の為になると思うから」

「・・・はい」

こうして俺たちの特務三課としての任務は完了した。ビアンカへと帰艦後、帰還報告を済ませた隊員たちは本局に到着するまで自由時間となった。そういうわけでキャロの相手をアイリとルミナに任せている中・・・

「あ、フェイトか。ルシルだけど、君に折り入ってお願いがあるんだ」

俺はフェイトにキャロのこれまでの経緯を伝えた。するとフェイトは『判った。引き受けるよ♪』喜んでキャロを引き取ると答えてくれた。あとはキャロに、フェイトの事を伝えるだけだな。

Ｅｐｉｃ６－Ａ古代遺失物管理部・機動六課～Ｓｔａｎｄｂｙ～

次元世界の秩序を管理する司法機関、時空管理局。次元空間内に浮かぶ時空管理局の本部である巨大な艦・本局、そのとある部屋。そこは光源の無い真っ暗な部屋だった。その真っ暗な部屋に空間モニターと言う光源が生まれ、部屋の内装がうっすらだが露わになる。部屋の中心には円卓が置かれ、周りに１３の椅子が設けられている。その内の３脚の椅子にホログラムではなく３つのモニターが展開され、それには人の顔ではなく時空管理局のエンブレムと、ローマ数字のⅠ、Ⅱ、Ⅲが表示されていた。

『時空管理局評議会の代表として、まずは祝いの言葉を贈ろうか』

時空管理局評議会。旧暦の時代に次元世界を平定し、時空管理局設立後にその一線から退いた３人が、その後も次元世界を見守るために作った組織・最高評議会と、彼らが掲げる理念の下に集った１０人の管理局員や民間協力者から成る、管理局の運営とはまた違った事柄を決めるための組織で通称、権威の円卓。

『よもや本当にわずか１８歳で内務調査部・調査官になろうとは』

『君ほど優秀な管理局員を迎えていられるこの事実、改めて我々は運が良いのだろうな』

エンブレムが表示されているモニターから男声で、ある人物を称え

る言葉が発せられた。今現在、この部屋に生身の人間が1人だけ居る。身長は１８０ｃｍほど。銀色に輝く髪は肩に掛かるまでの長さ、瞳はサファイアブルーとルビーレッドの光彩異色。左目にはモノクルを付けている。身に纏っている管理局の制服の色はワインレッドを基調とし、肩部分の色はロイヤルパープルをしている。少々派手な色だが、それが調査官の正式な制服だ。

「祝いの言葉など無用です。デュランゴ議長、トレイル書記、リョーガ評議員。私は貴方たち評議会から調査官になるよう指令を受け、それを成しただけに過ぎません」

『まぁそう言うな、ルシリオン・セインテスト一等空尉。いや、その制服を身に纏っている今は准将と言うべきか・・・？』

『謙遜は美学だが、その歳で調査官になったことには素直に胸を張り、誇るといい』

「・・・呼び名はお好きなように。それで、今回わたしを召集した理由は何なのですか？」

１８歳となったルシリオンは調査官になるための研修を無事に終え、試験も突破し、見事最年少で内務調査官となった。おそらくこの記録は今後破られることはないだろう。

『ルシリオン一尉。君に調査官として最初の任務を与えよう』

『この任務を全うした時、君をこの権威の円卓の新たなメンバーと

して迎え入れるつもりだ』

『しかし、いかなる理由であっても職務放棄、何かしらの失態を起こした場合は、ある程度のペナルティを覚悟してもらう』

最高評議会3名からそう伝えられたルシリオンは内心で、誰も円卓入りなど望んでいないんだよクソ野郎、と悪態をついていた。彼が文句もなくひたすら権威の円卓に従っているのは、彼が想うチーム海鳴――己の命と同価値としている親友たちの身の安全のためだ。

（ペナルティ、ね・・・。俺の首輪を改めて締め直すつもりか・・・。失敗したらどうせ俺の真実をはやて達にでもバラすとでも言うんだろう・・・？）

ルシリオンが権威の円卓に下る条件として上げたのは6項目。夜天の主・八神はやてと守護騎士ら八神家を罪に問わない事。八神家が"闇の書"の関係者であったという事実を時空管理局・次元世界全てに公表しない事。管理局に入った彼女たちを犯罪者扱いせずに、管理局に務める同士として接する事。

"闇の書"事件の解決に協力してくれたチーム海鳴の人事を円卓の都合がいいように操らない事。彼がテスタメントだという事実を時空管理局・次元世界・関係者全てに漏らさない事。テスタメントとして手に入れたロストロギア・"ジュエルシード"の所持を認める事。

その条件を円卓が守っている限り、ルシリオンに自由はない。その分、チーム海鳴はそれぞれが決めた進路を進むことが出来る、というものだ。

「データを。調査官になりたての私に合った楽な仕事であることを祈るばかりです」

ルシリオンの手元にモニターが展開され、彼が調査官としての初仕事となる任務内容が表示された。彼の眉がピクリと僅かに動き、「機動六課・・・」彼にとって決して他人事ではない部隊名を口にした。

古代遺失物管理部。ロストロギア関連を専門とする部署で、ロストロギアの捜索や関連する事件・事故の対策・対応、保管などと言った任務を主としている。すでに一課から五課までが稼働しているため、六課となる。

『君の家族である八神はやて二等陸佐を課長とする新設部隊。試験運用ということで稼働期間は1年間となっている』

『その期間中、君は常時隊舎に駐在する特務調査官として、職務を全うしてもらうつもりだ』

『調査官としての立場を弁え、しっかりと職務に励んでくれ』

最高評議会からの話を右から左に聞き流しつつデータの閲覧を続けるルシリオンが「っ！？」ある一文を見て目を大きく見開いた。彼の目に映っているのは機動六課の後見人の項目欄。リンディ・ハラオウン総務統括官、クロノ・ハラオウン提督、カリム・グラシア理事官。それは彼が経験した以前の機動六課と同じ。しかし唯一、違う点はあった。

「リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ・・・！？」

ルシリオンの存在意義である"堕天使エグリゴリ"の救済。その"エグリゴリ"の1機であるリアンシェルトの名前があったのだ。しかも彼女は今、本局の運用部総部長・少将という幹部の1人として、そのうえ権威の円卓とも関わりがある。彼にとってリアンシェルトは正しく目の上のタンコブである。

『リアンシェルトが、君を機動六課の監査役にするよう提案してきたのだ』

（チッ。余計な真似を。完全に嫌がらせだな）

調査官の職務の1つである監査役として機動六課に参加すると、戦力として機動六課に協力することが不可能となる。調査官はあくまで事務仕事一貫。公平・公正を旨とする立場上、出向先の部隊に利となる行動は取れない。たとえ部隊にどれだけの危機が振りかかろうとも、だ。

（端から参加できずとも後で何かと理由を付けて戦力として協力しようと考えていたが、調査官として参加したら最後、解散するその時まで戦闘行為が一切取れない・・・！　俺がプライソンと衝突するのを妨害するつもりか・・・？　リアンシェルトの狙いはなんだ・・・！？）

ギリッと奥歯を噛みしめるルシリオン。しかし「ルシリオン・セイ

ンテスト一等空尉、確かに拝命いたしました」リアンシェルトが裏で手を引いている任務を受けることを承諾した。その理由は2つ。1つは、彼の知られたくない秘密をチーム海鳴に知らされたくないため。そしてもう1つは、自分の戦力を頼りにしなくともチーム海鳴はきっと事件を乗り越えたれる、そう信じたから。

（ま、レーゼフェアが出て来たらさすがにルールを破ることになるがな・・・）

こうしてルシリオンは、ただ事件の経緯を見ている事しか出来ないという不自由な中、機動六課と運命を共にすることとなった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

特務調査官として、来月４月から稼働する機動六課に出向することになったことを部隊長となるはやてに伝えるため、ミッドへ降りるために次元港へ向かうことにした。通信で済ませば良いようなものだが、仮にもはやての夢である部隊へ参加するというものだし、直接顔を合わせて伝える方が喜んでもらえそうだ。
はやてがどんなリアクションをするか考えながら歩いて、すれ違いざまの局員たちからの「お疲れ様です！」に、「お疲れ様です」と応じつつ廊下を進む中・・・

「すげぇ、調査官の制服着てる人と初めて会えたぜ・・・」

「ほら、最年少で、しかも試験を1発合格したっていう・・・」

「ルシリオン・セインテスト一尉だよ」

「あの有名なチーム海鳴の1人だったって人だろ昔？」

「魔導師ランクも空戦ＳＳって・・・。エリート街道まっしぐら過ぎだろ」

エントランスに辿り着くまでにそう言った類のヒソヒソ話が耳に入ってきた。調査官は本局に8人、5つの支局に2人ずつで１０人、計１８人と言った少人数しか居ない所為だろう。誰も好きこのんで査察官・監査官・監察官全ての職務を一手にこなさなければならないクソ忙しく面倒な調査官にはなりたくないから、その人数が少ない・・・と、最近知った。

「あ、マイスター　」

アイリとの待ち合わせ場所だったメインエントランス近くの待合ロビーに着くと、アイリを捜すまでもなく声を掛けられた。そちらに目を向けると、中学生2年生くらいにまで体を大きく出来るようになったアイリが満面の笑顔を浮かべて大きく手を振っていた。

「お待たせ、アイリ」

「ぜ～んぜん待ってない♪」

「そうか。・・・アイリ、俺もミッドに降りる理由が出来たから一緒に行こうな」

「ホントに！？　やったね♪」

権威の円卓の呼び出しがなければ、ひとりミッドへ降りる予定のアイリを次元港まで送った後、俺は自宅の局員寮であるマンションに帰るつもりだったんだがな。とにかく予定変更だ。ここ時空管理局・本局の各部署のオフィスが収まった超巨大な局舎から出て、駐車場へと歩を進める。

「マイスターと一緒～、一緒～♪」

ご機嫌なアイリの鼻歌を微笑ましく聴きながら、駐車場の一画である大型バイク専用の駐輪場に到着。はやて達が中学を卒業してミッドチルダに引っ越して来たのを契機に購入した俺の愛車。バイクと言うよりはリバーストライクだな。商品名は"マクティーラ"。狼という意味だ。

「一緒って。毎日一緒だろうに」

ポケットからリモコンを取り出し、イグニッションスイッチを押してリモート操作でエンジンを掛ける。ほとんどの始動手順をオートで済ませてくれるから、魔法技術で造られたバイクは本当に楽だ。まぁその面倒な手順をやってこそのバイク乗りだというのは俺も思うが、残念ながら管理世界で販売されているバイクは揃ってこのフルオートモデルだ。

「（地球から持ち込むことも法律で出来ないしな・・・）よし、チ

ケットの手配も完了っと。あとは出発時刻までに次元港に行けば良いだけだ」

全長は約２９００ｍｍ。リアタイヤは幅５０ｃｍ、高さ１ｍの１輪。車輪とフレームを繋いでいるスイングアーム上部の左右にマフラーが２本ずつの計４本。フロントタイヤは軽自動車並のサイズの２輪で、ピッタリくっ付いていることもあって１輪にも見える。タンデムシートだから２人乗りは可能だが、サイドカーも一緒に購入した。買い物時には重宝する。魔法技術で屋根も付くから買った物が濡れる心配も無し。

「ほら、アイリ。ヘルメット」

シートを開けてヘルメットを取り出してアイリに差し出すと、「ん♪」長い髪を纏めたうえで受け取り、ヘルメットを被った。俺もヘルメットを被る。この時のために俺は長髪をやめた。いちいち乗る際に纏めるのはすごい面倒だからな。

「ゴー、ゴー♪」

俺とアイリはバイクに跨り、俺の背中に抱き付いて腹にまで両腕を回すアイリに「しっかり掴まっていろよ」そう注意してから発進、次元港へ向かって出発する。

「アイリ。確か今日、機動六課の隊舎に荷物などの搬入作業があるって話だったな」

「うん、そうだよ。はやても隊舎の視察だって話だしね。それに、アイリだって六課のロングアーチスタッフとして参加することになってるし、今日はシャマルに付いて視察なの♪」

先ほど最高評議会のクソジジイ共から貰った機動六課のスタッフリストの中に、聞いていた通りアイリの名前もあった。部隊内での役職は医務官。アイリは対"エグリゴリ"で傷つくことの多い俺のためにシャマルを師事して治癒魔法を学び、医務官の資格も取ってくれた。

ちなみにアリシアもロングアーチ所属の法務担当補佐を務めるようだ。つまりはいつも通りのフェイトの副官となる。スターズ・ライトニングの前線部隊ではなく後衛部隊のロングアーチとして参加することで、魔導師ランクの保有制限を緩くしているようだ。

「マイスターやシャル、それにアリサとすずかは、残念ながら不参加だよね。シャルは聖王教会の仕事でしばらく管理局仕事は休職。アリサは陸士１０８部隊の捜査官。すずかは第４技術部の主任補佐。それぞれの立場で頑張るって、そう言ってたよね・・・。マイスターも魔導師ランクが高すぎて無理だって言うし。アイリ、それがいっちばんの不満なの」

アイリの言うようにシャルとアリサとすずかは不参加となった。以前オレがはやてやなのは、フェイトに言ったように、チーム海鳴のメンバーは全員優秀すぎる魔導師で、どうやっても全員が同じ部隊にはなれない。唯一の例外として特務隊が挙がるが、事案が発生していない現在、どうやってもオールキャストの部隊は造れない。

「その事についてなんだが、俺も機動六課に出向することになった」

「え、うそっ！　ひゃっはー！　やったぁ～！」

「ちょっ、おい、暴れるな！」

フラフラと車体がふらつく。一応、一般に販売されている車輌には転倒を防止するための非常用オートジャイロやタイヤ空転の制御機能、衝突時の防護フィールド発生装置と言った機能の搭載が義務付けられているおかげで倒れることはないが、危険運転に適用されるかもしれない。

「マイスターと一緒に仕事が出来るんだね！　はやて達も喜ぶよ！」

アイリが喜びを表すが、調査官として仕事となるとそんな嬉しいものじゃないんだよ。お互いにな。同じ部隊に居られることが嬉しいって思われるのは悪い気分じゃないが、職務期間中の俺は今まで以上に彼女たちに冷たく接しないといけない。海鳴市を離れてから同じような事をしてきたが、それは直接顔を合わせないから出来たこと。毎日一緒となると精神的にキツイ。

（リアンシェルトめ。これが俺への精神攻撃だとしたら効果抜群だよ、まったく・・・）

「お？　メールだ」

後ろに座るアイリがそう言ったのが聞こえ、俺の腹から右手が離れ

たかと思えばその直後、「は・・・？」腹にリングバインドが掛けられた。すぐに「アイリ、何してる！？」問い質すと、「メール確認するから片手離れちゃうでしょ？　だから落ちないようにね♪」アイリがそう答えた。バイクから落ちないようにリングバインドで俺とアイリの体を括りつけた、というわけだ。

「メールの確認くらい次元港に着いてからでもいいだろうに・・・！」

「緊急メールだったら大変でしょ・・・って、あ、キャロからのメール！　マイスター！　キャロからだよ！」

「聴こえている！」

俺の口添えでフェイトに引き取られたキャロは、先の次元世界と同じように自然保護隊へ配属となった。それから幾度か彼女からメールが届くようになった。アイリやフェイトにアリシア、それと自然保護隊員の人たちのおかげで今ではもうちゃんと笑えるようになっている。

「これからミッドへ向けて任務先の第６１管理世界（スプールス）を発つんだって。アイリと再会できることが楽しみだって♪　・・・マイスターが六課に参加するって話はまだはやて達に伝わってないから、マイスターの名前ないけど・・・」

「変に気遣うなよ」

「うん。でもさ、マイスター。あのキャロが今では陸士隊に入りた

いって志願するほど強くなったんだよ。あの子が塞ぎ込んでた頃を知ってるアイリ達としてはビックリだよね・・・？」

「そうだな。これでライトニング分隊のメンバーはみんなミッド入りだな。スターズはどうなんだ？」

スタッフリストのスターズ分隊のメンバーには2人空きがあった。スバルとティアナだ。確かあの2人は陸士訓練校を首席で卒業し、今は陸士３８６部隊の災害担当課に配属されているはずだ。あの子たちが六課にスカウトされるのは再来週のＢランク昇級試験の後。名前が挙がってなくて当然の話か。

（しかし・・・ティーダ・ランスターの死は結局変えられなかったな・・・）

ティアナの兄・ティーダの死は回避できたと思っていた。彼が亡くなったのは新暦６９年。彼が亡くなった原因である違法魔導師は、パラディース・ヴェヒターのランサーとして活動していた頃に魔導師として再起不能にしてやった。それに没年も過ぎたことで油断したところで、４年前の７１年に殉職を伝えるニュースを観た。

（先の次元世界のように、ティーダの死を愚弄する地上本部の幹部が居たことには呆れしか湧かなかったな・・・）

ティアナがまた無茶をしそうで恐いよ、ホント。

「スターズの分隊長なのはと、副隊長のヴィータが今日、フォワー

ド候補の所属先の陸士３８６部隊に行くって話だよ。何人か候補が居たようだけど、今の候補をスカウトするみたいだね」

「そうか。無事に決まるといいな」

「だね」

次元港に到着し、アイリを降ろして先に搭乗手続きをしておくように言って、俺はひとり貨物ターミナルへ。愛車・"マクティーラ"をコンテナに詰めて次元航行船の貨物室に搬入してもらうためだ。貨物ターミナルの受付カウンターで手続きを済ませ、急いで船の旅客ターミナルへダッシュ。貨物ターミナルと旅客ターミナルを繋ぐバスが通っているが、来るのを待つより走った方が速い。

「マイスター！」

「おう、アイリ。すぐ手続き済ませるからな」

受付カウンターで搭乗手続きを済ませ、アイリと一緒に船内へ。指定席なんだが、以前から予約していたアイリと、つい先ほど予約した俺の席は離れることになった。アイリは「席代わってもらおうよ」なんて言い出すが、「たった数時間の旅だ。頑張れ」離れているのは２時間程度、ここは耐えてもらうしかない。

「は～い」

機内でアイリと一旦別れ、自分の席に着く。ミッドに着くまで音楽

でも聴こうかとしたら『マイスター、お話ししようよ♪』アイリからの念話で出来なくなった。結局ミッド中央区の次元港に到着するまでアイリと念話でだが話し続けた。
次元港に到着した後は貨物ターミナルの受付カウンターで"マクティーラ"を受け取り、機動六課の隊舎がある中央区・南湾岸地区、正確には南駐屯地内Ａ７３区画へと向けて愛車を走らせる。

「マイスター、いっぱい写真を撮られたね～♪」

「こんな色の局制服なんてまずお目に掛かれないからな。管理局にたった１８人しか居ないのに、調査官の制服が管理世界に周知されていることに驚きだよ」

まぁ管理局の公式ホームページに、制服の色によってどの部署に所属しているのか、どの役職なのかが記載されているからなんだが。さらには民間には局員個人のファンクラブが存在する。俺たちチーム海鳴全員にも非公式ながらファンクラブが存在していて、俺のファンクラブもあるわけだ。俺が調査官になったことも、公式ホームページに公表されているようだ。ファンです、って握手も求められたからな。

「お、見えてきたな」

「マイスター、まずいよ。遅刻っぽい」

「なに？　あー・・・遅刻したのはわざとじゃないから、怒られたら俺も一緒に謝るよ」

「おねが～い」

渋滞に何度か引っ掛かりながらもようやく機動六課の隊舎が見えてきた。隊舎は中央区の郊外である南湾岸地区にあるため、「潮風が気持ち良いな」すぐ目の前が海だ。アイリが「海鳴市に似てるよね、雰囲気が」そう言って笑い声を上げた。先の次元世界でも同じ気持ちだったよ。

「搬入作業はまだ続いているな」

「おーい！　はやてー！　シャマルー！」

隊舎のエントランス前に居たはやてとシャマルの側まで行く。俺たちの接近に気付いた２人が「ルシル君！？」驚きを見せた。２人の前で"マクティーラ"を停めて降りる。

「どうしたんルシル君！？　今日ここへはアイリしか来ぉへんはずやったやろ？」

驚きから喜色満面の表情を浮かべるはやてと、そしてやっぱりと言うか「８分遅刻よ、アイリちゃん」視察に遅刻したアイリを注意するシャマル。

「だってここ郊外過ぎるよ～」

「ああ、ちょっとな。シャマル。アイリが遅刻したのは俺の責任で

もある。許してあげてくれ。ここに来るまでに渋滞に引っ掛かってな。すまなかった」

「ごめんなさい」

アイリと一緒にはやてとシャマルに頭を下げると、「渋滞なら、しょうがないわよね・・・」シャマルは右手を頬に添えて渋々許してくれたんだが、「そうゆう時はどうするべきやったかな？」はやては腕を組んでアイリにそう訊いた。

「あぅ・・・。連絡です」

「そうや。報告・連絡・相談、ほうれんそうを大事にする。そうゆう決まりやったよな」

「うん。連絡しなくてごめんなさい」

「ん。アイリも六課の一員や。後輩も出来るし、甘えは許されへんよ」

「うん。じゃない。はいっ！」

ビシッと敬礼をしたアイリに「うん。決まってるよ」はやても敬礼を返した。アイリの遅刻への処分はこれで終わりとなり、「そんで、ルシル君はどうしてここに・・・？」俺が機動六課の隊舎に姿を見せた話に戻った。

「はやて、コレを・・・」

俺たちの間にモニターを展開し、俺が機動六課の隊舎に常駐する特務調査官として出向するよう辞令を受けたことを証明する書類を表示する。すると「え、ホンマに！？」はやてと、「ルシル君も一緒になるのね！」シャマルは、俺の参加に驚きと喜びを表してくれた。

「ああ、1年間よろしく頼むよ。で、だ。調査官として、俺の立場はこうなるんだが・・・」

はやて達にモニターに見せながら説明する。調査官は査察・監察・監査の職務のみを全うすること。出向先の部隊に戦力が必要になろうとも協力の要請を受けず、要請もしないこと。出向先の部隊に親しい者が居ようとも調査官としての立場を示すこと。などなど・・・。

「え～っと、つまりは万が一にも六課に新たに戦力が必要になっても、ルシル君の手は借りられんってことやね」

「ですけどそれは心配無用ですよ。はやてちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃんが3隊長ですし、シグナムとヴィータちゃんも居ます。シャルちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんが居ないのは残念ですけど、それでも十分過ぎる戦力だと思いますから」

「そうやね。で、調査官としての立場を示すってゆうんは・・・？」

はやてが小首を傾げたから、「はやて」俺は微笑みながら彼女の名

前を呼んだ。するとはやては「ちょう照れるわ、ルシル君」と目を逸らした。次に「八神部隊長」赤の他人に挨拶するように心がけて、無心の表情をつくって名前と役職を口にする。

「・・・なんや表情や声色も相まって胸にズキッて来るもんやね・・・」

「これが調査官の立場だよ。調査官としての職務中は、出向先に親しい人が居ようとも私情を持ち込めないんだ。だから俺は職務中、八神部隊長、シャマル医務官、アイリ医務官と呼ぶことになる」

「え～！　なんか嫌だ～！」

「あぁ、そうなんやね・・・。あんまり気分良うないけど、それがルシル君の仕事や。受け入れるわ」

「なんか余計にルシル君が遠くなりましたね・・・」

はやてとシャマルとアイリが「はぁぁ～～～～」大きく長い溜息を吐いた。そんなにガックリすることなんだな。

「それでなんだがはやて。俺専用の執務室が欲しいんだ。本当に今さらだと思うけど・・・その、用意してくれないでしょうか？　お願いします」

稼働まで1ヵ月を切り、物資搬入を今まさに行っている状況下というところでいきなり、自分専用の部屋を用意しろ、なんて命令でき

るほど俺は偉くない。だから敬語で、頭を下げて頼みこむ。というか、機動六課の特務調査官にするならもっと前からにしろ、とリアンシェルトに対して心の内で文句を垂れる。

「え？　他の隊員たちと同じオフィス内じゃアカンの？」

「いや仮にも調査官なので、隊員たちに見られるとまずい書類などもあると思うので、出来れば個別の部屋が欲しいと思う次第で・・・」

そこまで言うと、はやても「そうやな～」考え始めてくれた。そしてシャマルと部屋の空きがないかを相談。それを黙って眺めていると、はやてが小さく首を横に振った。あ、ダメだコレ、と察した。

「寮の方は1部屋空いてるからそこで寝泊りしてもらうけど、残念ながら隊舎に空き部屋は無いんよ」

「でもさすがに寮で仕事するのは効率が悪いでしょう？　ルシル君」

「う～ん・・・」

「とゆうわけで、ルシル君の執務デスクは私の執務室である部隊長室に設置しようと思います♪」

「はやてちゃんのお部屋はとても広いですから、1人分のデスクを置いてもまだ余裕はあるわよ」

はやてとシャマルからの提案に「あー・・・」俺が渋るから、「なんか都合が悪いんか・・・？」はやての表情が僅かに曇った。シャマルも「はやてちゃんと一緒じゃダメなの？」なんて訊いてくる。

「これは完全に俺個人の感情の問題なんだけどさ。調査官として私情を持ち込めない状態で常に八神部隊長などと堅苦しい呼び方をしないといけないし、態度も冷めたものに改めることになる。そんな中ではやての個室で、君と一緒に居る時間が多くなると・・・」

そこで一度区切って俯く。そして「いつか我慢できなくなってしまい、はやてって呼んでしまうぞぉ～！」ガォーポーズでそう伝えると、「きゃー♪　はやて、って呼ばれてまう～♪」はやてもノリに乗ってくれて、頭を抱えて可愛い声を上げた。なんかもう・・・馬鹿になってきたな、俺・・・。いっそぶっ壊れた方が楽になるかもしれない。

「あらあら・・・。って、えっと、ルシル君・・・。それが理由なの？」

最初は俺とはやてのやり取りを微笑ましく見守ってたシャマルだったが、少し戸惑った声色でそう訊いてきた。

「別に誰かに監視されてるわけじゃないんだし、アイリ達の呼び名っていつも通りで良いんじゃない？」

「それはそうなんだが、やはり調査官としての責務を果たさないといけないと思うんだ」

普段通りにはやて達と接していることが万が一評議会に知られでもしたら、即座にペナルティが課せられるかもしれない。所詮は推測でしかないが、少しでもその危険性がある以上は、俺は奴らの指示に従って手足で居るしかない。

「う～ん。そやけどもうホンマに空き部屋はないんよ」

「ルシル君。申し訳ないけどやっぱりはやてちゃんの部隊長室にしかデスクは置けないわ。それがダメなら他のオフィスに席を用意するしかないの」

「もうはやてと同じ部屋で良いんじゃないかな・・・？」

はやて達にそう言われ、やっぱり都合の良いことを並べてるなと猛反省した俺は、「お世話になります」はやて達の提案を受け入れることにした。こうして部隊長室に俺専用のデスクを設けてもらうことになった。

「ん、決まりやな」

「ルシル君。デスクの形状とか機能とかのリクエストある？　今リインちゃんの体格に合うようなデスクを探しているから、ついでに探すわよ？」

「あぁ、他の隊員たちが使うような物で構わないよ。はやて達から回されてくる部隊運営の書類を確認・調査するだけだから」

「判ったわ。追加物品リストに入れておくわね。アイリちゃん。医務室の搬入作業も後で行うから手伝って」

「ヤー！　うおー！　いよいよって思ったらなんか燃えて来た！」

「ま、何はともあれルシル君が私らの部隊を見守ってくれることになったわけやな。恥ずかしい様は見せられへん。しっかり気張らんとな！」

「ええ、そうですね！」

「んっ！」

はやて達が隊舎に振り向くのに倣って俺も隊舎に見上げる。今は信じよう。ＪＳ事件とはまた違う事件が起きようとも、俺が力を貸さなくたってはやて達は乗り越えられるってことを。

Ｅｐｉｃ６－Ｂ古代遺失物管理部・機動六課～Ｏｕｒ　ｄｒｅａｍ　ｓｔａｒｔｓ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

新暦７５年４月２９日。本日いよいよもって予てからの夢やった私の部隊、機動六課が稼働する。選出が一番遅なった前線部隊の１つであるスターズのフォワード２人も、なのはちゃんとヴィータのお眼鏡に適って決定したしな。

（スターズ３、スバル・ナカジマ二等陸士。ナカジマ三佐とクイントさんの娘さんの１人やな。私の指揮官研修先の１つやった１０８部隊に行った先では、お姉さんのギンガと再会も出来た）

４年前の空港火災の際に巻き込まれてもうて、そん時になのはちゃんに救助されたことでスバルが局員を目指すようになった、ってナカジマ三佐から聞いた。けど六課に参加するってことになってちょう不安なこともある。

（ルシル君・・・）

ここ六課の部隊長室である私と、補佐をしてくれるリインの執務室の一画には、もう１セットのデスクがある。そこに座ってるんは私の片想い相手のルシル君。管理局組織でたった１８人しか居らへん調査官って役職に就いてて、職務中限定の階級はなんと准将。今は出向先に長期間常駐するってゆう特務の任を負ってる。

そんなルシル君はクイントさんのお葬式ん時、クイントさんを護り切ることが出来ひんかったってことに苦しんで、スバルはそんなルシル君に、クイントさんの代わりにルシル君が死ねばよかった、みたいなことを言うて・・・。

（そのこともあってルシル君とスバル君が会うんは不安なんよね・・・）

ギンガはもうルシル君に対して苦手意識とか敵意みたいなもんはもう無いって言うてて・・・いんや、初めからそうゆう意識は無くて、あの時のことをずっとルシル君に謝りたいって思うてるって聞いた。そやけどルシル君とはあのお葬式以来会うことが出来てへんってことでちょう辛そうや。それにルシル君は、クイントさんの命日にはお墓参りを毎年欠かさずにしてるんやけど、意図的に時間をずらしてるんかナカジマ三佐たちとは会わへんようにしてるみたいや。

（この機会で仲良くなってもらえるとこっちとしても嬉しいんやけどな・・・）

そんでもう1人、スターズ4、ティアナ・ランスター二等陸士。スバルとは陸士訓練校からのコンビやって話や。カートリッジ式の銃型デバイスを自作できるほどの知識と、射撃魔魔導師としてまだまだ伸びるって、なのはちゃんに言わせるほどの原石。とても意志の強そうな目をしてて、きっと良い執務官になってくれると思う。

（フェイトちゃんとシグナムのライトニングのフォワードは、揃ってフェイトちゃんを保護観察官とする子ら）

ライトニング3、エリオ・モンディアル三等陸士。電気変換資質を持つ近代ベルカ式の騎士見習い。フェイトちゃんとアリシアちゃんとアルフによるチーム・テスタロッサの任務先である違法研究施設で発見、そんで保護した子や。これまでに何度か写真を見せてもらってる。

ライトニング4、キャロ・ル・ルシエ。ほんの少し前にフェイトちゃん預かりとなった、竜召喚・使役のスキルを有した女の子や。キャロがフェイトちゃんに引き取られた経緯はちょう特殊で、ルシル君とアイリ、それにルミナが特務隊の任務先で出会ったのが始まりや。

（いくら強大なスキルやからって、ちゃんとした訓練や教育も済んでへん、たった6歳のキャロをいきなり武装隊に放り込む地上部隊には、ルシル君やルミナはもちろん、私らも頭に来たわ）

そうゆう融通が効かへんところも地上部隊のアカンところや。キャロのそれまでの経緯をルシル君から聞いたフェイトちゃんは、即座にキャロを保護した。それから3年、キャロは自分の意思で陸士隊に分類されるこの機動六課へ参加してくれるようにまで強うなってくれた。まぁフェイトちゃんは、エリオとキャロの保護者ってことで不安そうやけど、アリシアちゃんは、どんと来ぉ～い！やけどな。

「いよいよですね、はやてちゃん」

私の補佐を担当してくれるリインがそう言うてくれたから、「うん！」力強く頷き返した。機動六課設立の名目は、４年前に発見されたロ

ストロギア・"レリック"に関する問題すべてに対処する、とゆうことになってる。

「これまでずっと片手間でしか捜査できひんかったレリック事件。そやけど、その煩わしさからもようやく解放された。この機動六課のおかげで。期間は1年しかあらへんけど、必ずその間に全てに決着をつけて見せる！」

「はいですっ！　リインも頑張るですよ！」

自分のデスクに触れて決意を改める。"レリック"は4年前から何度か発見されてるんやけど、その大半が大爆発を起こして回収不可になってるし、爆発によって死傷者も出てるし、数多くの地区が廃棄されたりもしてる。そのニュースを見るたびに心が痛んでた。知らずデスクに置いてる右手をギュッと握りしめて拳を作ったら・・・

「はやて達なら大丈夫さ」

なんかのデスクワークをしてたルシル君が優しい声色でそう言うてくれた。とっても嬉しんやけど「ルシル君。調査官としての立場はどないしたん・・・？」そう訊き返してしまう。調査官は任務先で親しい人が居っても私情を出してらアカンって厳格な規律がある。そやから今は、はやて、やなくて、八神部隊長、と呼ばなアカンはずなんやけど・・・。先月ルシル君本人が言うてたことやし。

「今はまだセーフってことで頼むよ。これから1年、毎日欠かさず

八神部隊長呼びだ。最後くらい気軽に呼んでみたいものさ。大丈夫。この部屋を出た瞬間から調査官モードに入るよ。だからリインも、今ばかりは許してくれな」

「はいですっ、ルシル君。あ、これから1年ずっとセインテスト調査官って呼ばないといけないですから、今の内にルシル君ってたくさん呼んじゃいますよ♪」

「あはは。そうか、じゃあ俺も今の内にリインと呼んでおこうか」

そうゆうわけで、リインは「ルシル君」と、ルシル君は「リイン」と何度も見つめ合いながら呼び合う。2人と親しい人なら微笑ましいって眺めていられるんやろうけど、もし2人の関係を知らんかったらまるで恋人同士に見えるな。とにかく、なんや羨ましくなってきたから、「ルシル君♪」私も参加する。そんなところに、ピィー、とインターフォンが鳴った。

「はい、どうぞ～！」

「「失礼します！」」

入室の許可を出すとドアがスライドして、「お！　なのはちゃん、フェイトちゃん♪」六課の実働部隊である2分隊の隊長、なのはちゃんとフェイトちゃんが姿を見せてくれた。2人は教導隊の白制服と執務官の黒制服から陸士部隊の茶制服へとお着替え完了や。

「わぁ！　お2人とも、そちらの制服もとってもお似合いで素敵で

す♪」

「にゃはは。ありがとう、リイン」

「ありがとう」

自分のデスクから私の肩にまで飛んで来たリインにお礼を言うたなのはちゃんとフェイトちゃんの視線が、リインのデスク側に立ってるルシル君に移った。私とリインもルシル君へと振り向く。

「君たちが同じ制服を着ていると、本当にようやくって感じがして気が引き締まるな。なのは、フェイト。1年間、はやての夢を支えてあげてほしい」

ルシル君はそう言うてお辞儀したことで、「え？」なのはちゃんとフェイトちゃんが目を丸くした。2人も調査官の立場云々の話は行ってるから、いつも通りのルシル君の態度に驚いたみたいやな。

「あ、えっと・・・」

「うんっ。もちろんだよ！」

困惑するフェイトちゃんと自然と応じるなのはちゃん。フェイトちゃんは「あれ？　あれ？　調査官としての、っていうのは・・・？」小首を傾げるから、ついさっきまで恋人よろしくな名前の呼び合いをしてた私らは苦笑する。

「この部屋を出てから調査官モードになるよ。だから今は、友として普通に名前を呼ばせてくれ、なのは、フェイト」

「あ、あー、そういうことなんだ。うん、じゃあルシル」

「うん、了解、ルシル君。でも1年かぁ。セインテスト調査官って呼ばないといけないんだよね。結構長いよね」

「リイン達みんなは普段通りにファーストネームで呼び合うですけど、ルシル君だけセインテスト調査官って呼ばないといけないって思うと、少し悲しいです」

「ま、その辺りは慣れていってくれ」

他の部隊やと名前の後に役職とか階級を付けて呼ぶのが当たり前やけど、私らはこれまでの関係から名前だけで呼び合うことでもＯＫってことにした。その方が私ららしい部隊って感じがするからな。

「あ、そうだ、ルシル。キャロにはちゃんと調査官の立場とかの話をした？　キャロ、ルシルにも会えることが楽しみみたいだから。再会していきなり、ルシエ三士とか呼ばれでもしたら絶対にショック受けちゃう」

「それについてはこの間、メールで伝えておいたよ。残念がってはいたけど、なんとか納得してもらった。隙を見ては普段の俺として、キャロと話してみるよ」

「うん、ありがとう。それだけでも十分だと思う」

ルシル君とフェイトちゃんがキャロのことを思って微笑み合ってると、「それじゃあ今度は・・・」なのはちゃんがそろそろと挙手。ルシル君が「俺か？　どうした、なのは」なのはちゃんの方に体を向けた。

「もう知ってると思うんだけど、私のスターズ分隊にはスバルが居るの」

「・・・ああ、知っているよ」

「それでその・・・。今日までルシル君が六課に居ることを伝えないのもどうかな～って思って、スバルに伝えてみたんだけど・・・。やっぱり少し戸惑ってるみたいなんだ。クイントさんのお葬式の時にルシル君に言ったことも憶えてるみたいで・・・。だから・・・」

「スバルについては気に掛けるよ。とりあえず挨拶から始めて行こうと思う。あとは彼女が心を開いてくれるのを待つよ。こちらから声を掛けていくと余計に避けられそうだしな」

寂しげに微笑むルシル君に「ごめんね」なのはちゃんは手を合わせて謝った。ルシル君の心労がトンデモないことになりそうやな。あとでシャマルとアイリに、ルシル君の健康診断には気を掛けてもらうように伝えとこう。そう考えてると、ＰｉＰｉＰｉってゆう通信が入ったことを知らせるコール音が鳴った。

「はいはい～っと」

私はすぐにデスクの席に座ってコールを受けて通信を繋ぐ。すると『やっほー！』陽気なな声色で挨拶してくれた「シャルちゃん！」がモニターに映った。私の声に、リインとなのはちゃんとフェイトちゃんも側に来た。

「シャルちゃん！」

「久しぶり！」

「ですぅ～！」

『なのは、フェイト、リイン！　久しぶり～！　２人とも、陸士隊服が似合ってるね♪』

「にゃはは。ありがとう、シャルちゃん！」

「ありがとう、シャル。シャルの修道服も似合ってるよ♪」

『ありがと～！』

シャルちゃんは将来、聖王教会の大幹部になることが決められてる。そうゆうわけもあって１年ほど前から聖王教会の教会職に時間を割くようになった。特別技能捜査課のオフィスに顔を出すことが一気に減ったし、ホンマに寂しなったわ。

『はやて。今日から機動六課が本格的に稼働するんだよね。おめでとう。はやての念願の夢だった部隊、離れたところからだけど応援させてもらうよ』

「おおきにな、シャルちゃん。そんで、六課設立に協力してくれてホンマにありがとう。カリムにも協力を取り付けてくれたし」

『はやての願いとカリムの望みが一緒・・・利害の一致ってやつかな。それと、はやてもはやてでカリムと親交を深めていったからだよ。私がカリムに、はやての目指す部隊設立の後見人になってね～、なんて頼まなくたって、カリムからはやてに依頼してたと思う』

モニターに映るシャルちゃんに頭を下げてお礼を言うと、シャルちゃんはそう返してくれた。４年前の"レリック"回収の任務も元は、カリムがクロノ君に依頼したものやった。その一件から私はシャルちゃんやクロノ君にお願いして、２人抜きでカリムとの交友を始めた。それでもやっぱりスタートはシャルちゃんやからな。

「それでもおおきにって言わせてぇな、シャルちゃん」

『ん。ありがたく受けてとっておくよ♪　んで、ルシル！　居るんでしょ？　顔を見せて！』

綺麗な笑顔から一転、ルシル君に向けて怒声を上げた。ルシル君は人差し指を唇に当てて、首を横に振って居留守を使おうとした。シャルちゃんは『リイン。ルシルは今どこ？』ニッコリと目の笑ってない笑顔を浮かべた。

「えっと、ルシル君は・・・ここには居ないですよ？」

すごく目が泳いでるリインがそう答えた。シャルちゃんは『ん。ありがとう。ルシル～、顔出しなさ～い』確信を持って告げた。リインが不思議そうな顔をして、「え、あの、居ないですよ？」再度シャルちゃんにルシル君が居ないことを伝えるんやけど・・・

『ごめんね～、リイン。あなた、ルシルの名前を聞いた瞬間、目線をモニターから外したでしょ。それに、はやて達も即座にルシルが居ないって答えなかったし、しかも3人揃ってリインと同じ方を見てたし』

「「「Ｏｈ」」」

シャルちゃんには全て見抜かれてた。こうなったらルシル君も観念して「久しぶりだな、シャル」私らの側にやって来て、モニターに映るシャルちゃんに挨拶。

『うん、久しぶり。ようやく顔を出したね、ルシル。特務調査官として監査役も務めるってカリムから聞いたけど、本当だったんだね』

「ああ。今、はやての部隊長室に集まっているんだが、この部屋を出た瞬間から俺は調査官として、まぁ堅苦しい態度ではやて達や他の隊員たちと接しないといけない。しかも1年。気が滅入るよ、まったく」

『あなたも運が無いよ。調査官としての初任務でいきなりはやて達の部隊の担当、しかも常駐する特務。誰が辞令を出したか知らないけどご愁傷様～♪』

シャルちゃんは調査官の立場ってゆうもんを昔から知ってるから、私らと接する態度が冷めたものになるってことも判ってる。そやから、私とルシル君の仲が進展せぇへんって思うてるみたい。そやけど、シャルちゃんやなのはちゃん達にも黙ってる秘密がある。

（六課の後見人の中に、リアンシェルトが居るってゆう秘密が・・・！）

ルシル君を特務調査官に選んだんはリアンシェルトや。後見人であるリンディさん達からその話を聞いた時はもう気が気やなかった。ルシル君からは、リアンシェルトの真の目的が判らない以上は、なのはちゃん達みんなには黙っていようって言われたしな。

「ほっとけ。で、今回の通信は六課稼働の祝いと俺へのからかいが全てか？」

『ブー！　ルシルへのからかいはただのついで。はやて。教会騎士団でのレリック捜査、その全権を私が隊長に就いてる朱朝顔騎士隊（ロート・ヴィンテ）が獲得したって報告が本題。そういうわけだからさ、はやての六課と私の騎士隊で情報共有とか捜査協力し合えたら嬉しいな～って話なの』

シャルちゃんからの提案の返答には「喜んで！」しか出ぇへんから

そう答えると、「よしっ！」シャルちゃんはガッツポーズ。シャルちゃんも六課に参加したがってたからなぁ。

「シャル。私とアリシアがレリック捜査を担当するから、その時はよろしくね」

『ＯＫ。それじゃ、ロート・ヴィンテ（わたしたち）も今日から捜査開始だから、また後日にちゃんと話し合おうね。バァ～イ　』

シャルちゃんと笑顔で手を振り合って別れを惜しみつつ通信を切った。聖王教会にもちゃんと味方が居てくれる。それがホンマに心強いわ。みんなで「頑張ろうな！」って頷き合ってると、ビィーっとまた来客を知らせるインターフォンが鳴った。

「はい、どうぞー！」

「失礼いたします、八神部隊長」

ドアがスライドして私らの前に姿を見せたんは「おお、グリフィス君」やった。私がそう名前を言うと、「ええ！？」なのはちゃんとフェイトちゃんはビックリして、そんでグリフィス君の側に駆け寄った。

「本当にあのグリフィス君！？　久しぶり～！　てゆうかすごい！　私より大きい！」

「うん！　ちょっと見ない間にすごく成長してる！　私も身長で追

い越されちゃった！」

「ご無沙汰しています。高町教導官、テスタロッサ・ハラオウン執務官。その節はお世話になりました」

私もグリフィス君と久しぶりに会うた時は、その成長の速さっぷりには驚いた。ルシル君やクロノ君もそうやったけど、男の子ってホンマに少し見ぃひん間に身長が高くなるんよ。男の子だけかと思えば、アリシアちゃんも急激に身長伸びてきたしなぁ。私はもう完璧に抜き去られてもうたし。それに・・・

（胸のサイズも元学校組の中で置いてけぼり食らってるしな・・・）

身長も胸の大きさも元学校組で一番下になってしもうた私。改めて考えると女の子としての魅力が一番低いのって私かもしれへん。しかも恋敵のシャルちゃんは、すずかちゃんと同率で一番のバストサイズ、身長もシグナムと同じくらいの高さを誇ってる。う～ん、時間が経つにつれて私が不利になってくかもしれへんなぁ。

「グリフィスは部隊長となる私の補佐官でな、それに交替部隊の責任者でもあるんよ。で、シグナムはフォワードの交替部隊の隊長やな」

「グリフィス准尉は部隊の運営などにも協力してくれるですよ」

「いえ、自分はまだまだ若輩ですから微力なものです・・・。ですがセインテスト調査官にもお恥ずかしい姿を見せないよう、誠心誠

意頑張ります！」

「ああ、頑張って俺に楽をさせてくれグリフィス。とは言え、気張りすぎて空回りしないようにな。まぁ君は優秀だからその心配はないだろうが。期待しているよ、俺も、はやて達も」

「きょ、恐縮です！」

ルシル君からの期待してるってゆう激励を受けたグリフィス君はすごく嬉しそうや。けどすぐにハッとして「あの、ご報告よろしいでしょうか」ピシっと佇まいを直したから、「うん、お願いや」報告を促した。

「はい。整備班・交替部隊員を除く、フォワード４名を始め隊員・スタッフの集合が完了し、今はロビーにて待機中です」

「ん、おおきにな。お、予定の時間まで５分か。時間に正確なんは良いことや。じゃあ部隊のみんなにご挨拶しに行こうか」

「「うんっ！」」「はいですっ！」

ロビーに行くためにみんなを連れだって部隊長室から出て行こうとして、「あの、ルシル君・・・？」が私らに付いて来ぉへんかった。リイン達もそんなルシル君に気付いて振り返った。

「いや、俺も一緒で良いのか少し迷ってな」

「何も迷うことないと思うですよ、ルシル君」

「そうやよ。ルシル君も六課の一員や」

なのはちゃんとフェイトちゃんも「うん」て、私とリインの意見に頷いてくれた。グリフィス君も「僕も同じ意見です。1年と一緒なのですから」そう言うてくれたから、「そうか」ルシル君も私らに付いて来てくれた。そんで6人揃ってロビーへ向かう。

（っ！　私の部隊の・・・メンバー・・・！）

ロビーに整列して待機してる何十人ってゆう隊員たちの姿に、私の全身が歓喜に震えた。お立ち台の左隣には各分隊の副隊長のシグナムとヴィータ、それに主任医務官を務めるシャマルが立ってる。私らの姿を視認した隊員たちが佇まいをビシッと立て直す。

私となのはちゃんとフェイトちゃんとグリフィス君は壇上へ、リインはヴィータの隣に浮遊、ルシル君はスバルの視線に気づいてほんの少し横目で見て小さく頭を伏せた後、アリシアちゃんとアイリとエリオの側に居るキャロにウィンク。キャロは頬を染めて嬉しそうに笑顔を浮かべて、ルシル君はシャマルの隣に並んだ。

「機動六課の課長、そして本部隊の総部隊長を務めます八神はやて二等陸佐です。平和と法の守護者・時空管理局に連なる部隊として事件に立ち向かい、人々を護っていくことが使命であり、成すべきことです」

この部隊には実績と実力に溢れて、実戦の経験が豊富な指揮・隊長

陣が居るし、まだまだひよっ子な新人やけど、若いからこそ（私らもまだまだ若いけどな！）の無限大の可能性を秘めてるフォワード４名。さらに、それぞれ優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ。

「全員が一丸となって事件に立ち向かっていけると、そしてどんな困難にも必ず打ち勝って、最後には笑える日が迎えられると思います。っと、あんまし長いのも煙たがられるんで、挨拶は以上ここまで。機動六課課長および総部隊長、八神はやてでした」

拍手を送ってくれる部隊員のみんなに微笑み返す。部隊長の私の挨拶の後は・・・

「機動六課の課長・八神部隊長の補佐官を務めることになりますグリフィス・ロウラン准陸尉です。八神部隊長が隊を空けている時は、僕が指揮を執らせて頂きます。まだまだ若輩者で、何かとご迷惑を掛けることになるかもしれませんが誠心誠意頑張る次第ですので、どうぞよろしくお願いします」

「えっと、八神リインフォース・ツヴァイ空曹長です！　はやてちゃ――じゃなくて八神部隊長、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長の支援・補佐を務めます！　小っちゃいですけど、やる気は大っきいですので、よろしくお願いします♪」

「当部隊のフォワード・スターズ分隊の隊長、そしてフォワードの戦技教導を担当する、高町なのは一等空尉です。よろしくお願いします！」

「当部隊のフォワード・ライトニング分隊の隊長、それと法務担当、広域捜査の主任を務める、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です。広域捜査の補佐をしてくれる姉、アリシア共々よろしくお願いします」

「スターズ分隊の副隊長、八神ヴィータ三等空尉です。高町隊長と一緒にフォワードの教官職を務めることになります。よろしくお願いします」

「ライトニング分隊の副隊長を務める八神シグナム二等空尉です。よろしくお願いします」

「当部隊の主任医務官を務める八神シャマルです！　みんな、小さい傷でも化膿したら大変だから、ちゃ～んと医務室に来て診てもらってくださいね～♪　」

私の補佐をしてくれるグリフィス君とリイン、分隊長のなのはちゃんとフェイトちゃん、分隊副隊長のシグナムとヴィータ、それに六課の医療の全てを統括するシャマルが挨拶。隊員たちからの拍手が起こる中、「それでは最後に」私はルシル君を見る。

「当部隊、機動六課に常時駐在して運営の監査を行っていただく特務調査官からのご挨拶です」

「ルシリオン・セインテスト一等空尉です。八神部隊長の紹介の通り、調査官として機動六課の運営の監査役を務めさせていただきま

す。調査官としての立場上、部隊員・スタッフの方々とは少々距離を置く態度を取らざるをえないため、少なからず不快な思いをさせてしまうかもしれませんが、寛大な心でご容赦ください」

ルシル君はそこまで言うて一度お辞儀。

「機動六課は若手や新人が多い部隊と聞いています。だからと言って監査役として一切手を抜くつもりはないですが、おそらく問題は無いでしょう。皆さんが才能溢れる若手や新人の選りすぐりだとも聞いているからです。私は無念ながら六課に協力することが出来ませんが、皆さんが一丸となれば八神部隊長の仰ったとおりどんな困難をも乗り越えられると思います。長くなりましたが、最後の1つだけ。1年間、よろしくお願いします。以上です」

再び起きる拍手。アイリとキャロは笑顔で、そやけどスバルだけはやっぱり複雑そうな表情やった。

Ｅｐｉｃ６－Ｃ古代遺失物管理部・機動六課～Ｆｏｒｗａｒｄ～

†††Ｓｉｄｅ？？？†††

古代遺失物管理部・機動六課。あたしスバル・ナカジマが所属してる陸士部隊だ。元々あたしの所属部隊は陸上警備隊第３８６部隊の災害担当課で、転属扱いかな。小さい頃は誰かを痛くすることも、自分が痛くなることも嫌いで、だからそういう事が起きないようにずっと逃げてばかりだった。そんな弱い自分の事が本当はあんまり好きじゃなかった。

――そうしないと大事な人を守れないから。傷つけないで済めばそれで良い。けど、全てが話し合いで解決できるほど世界は優しくない。ごめんな。こんな夢のないことを話すべきじゃないんだろうけど、でも現実だ。だから俺は強くなりたい。守りたい人を守りたいから――

自分が痛いのは恐くて嫌いじゃないの？っていうあたしの疑問に、あの人はそう答えた。その時あたしが抱いた思いは、自分はやっぱり強くなった方が良いんじゃないかな、だった。そんなあたしにお姉ちゃんは、お父さんとお母さんと自分があたしの側に居るから大丈夫、って言ってくれた。でも一度生まれたあたし自身への疑問に、それで良いのかなって思いは拭えなかった。

――スバルは優しい女の子だ。強くならなくても、支えることは出

来ると思う。強さで守ること、優しさで支えること、出来ることをやればいいさ――

そんなあたしに一番しっくり来る答えを与えてくれたあの人。お母さんも、お姉ちゃんも、お父さんも、あの人のことが好きだった。幼いながらもあたしだって、あの人のことをお兄ちゃんみたいだなって、好きだったんだと思う。だけどあの日、あの人はあたし達家族との約束を破った。

（判ってる。あの人は何にも悪くないんだってこと。もうあの時の、何も知らない馬鹿なあたしとは違う・・・）

お母さんは任務中に殉職した。お母さんが所属してた首都防衛隊は、隊長とお母さんの友達って人以外はみんな亡くなった。あの人だって死に掛けて、左目の視力や固有スキルを失ったって聞いた。それでもあの人は、自分よりお母さんの死に悲しんで苦しんでた。それなのにあたしは・・・

――うそつき！　一緒に帰って来るって言ったのに！　おかーさんは大丈夫って言ったのに！　約束したのに！　それなのに・・・！　だいっキライ！　うそつきなんてだいっキライ！　うそつき！　かえしてよ！　おかーさんをかえしてよっ！　かえしてよっ！　約束したんだからかえせ！　おかーさんの代わりに・・・ルシルさんが・・・死ねばよかったんだ！――

あの人を、ルシルさんを責めた。しかも、死ねばよかった、なんて暴言。お母さんのお葬式の後、家に帰ったらあたしはお父さんに叱

られた。でも怒った表情じゃなくて、とても悲しそうな表情だった。お父さんのその表情はとても印象が深くて、あたしの心に今日までずっと残ってる。

（あの日からのあたしは余計に自分の殻に閉じこもるようになった。ルシルさんのことやその友達だって人のことも心の奥底に沈めて・・・、弱い自分のままで時間を過ごした・・・。だけど、あの日・・・あたしは出会った）

４年前の空港火災。あたしとお姉ちゃんは、お父さんの部隊に遊びに行くために利用した空港で起こった大規模な火災に巻き込まれた。空港だけじゃなくてその周辺の街一帯までもが廃棄されるようなものだった。お姉ちゃんと逸れて、あたしひとり彷徨っていたところで火災に巻き込まれて、とっても恐い思いをした。

（だけど、そんなあたしを助けてくれた人が居た・・・）

なのはさん――高町なのは一等空尉。初めて会ったのは小さかったからうろ覚えだけど、本局でのお花見。次はお母さんのお葬式。そして空港。助けてもらった時、最初はなのはさんだって判らなかった。記憶の奥底に沈めていたからってこともあるけど、何より成長してた姿だったし。

念のために検査することになって、搬送された病院でお父さんやお姉ちゃんと会って、そこでなのはさんやルシルさん達が救助や消火活動を懸命に頑張ってくれたおかげで、あたしやお姉ちゃんが助かったって聞いて、記憶の奥底に沈めてた思い出が一気に蘇ってきた。

そして・・・。

（何も出来ない自分が嫌になった。優しさで支えるだけじゃダメなんだって。お母さんやお姉ちゃん、それになのはさんみたく、強さと優しさを兼ね備えた格好いい自分になろうって）

それまで基礎の下の下くらいしかやってなかったシューティングアーツをお姉ちゃんから本格的に教わって鍛えてもらって、それにそれまで一切触れてこなかった一生懸命魔法の勉強もして、陸士訓練校を無事に首席で卒業できた。卒業後は陸士部隊の災害救助担当に希望配属されて、日々訓練や任務に明け暮れてた。あれから2年。あたしは今、なのはさんの居る部隊に居る。

「あ、おはようございます！」

「おはよう、スバル。今日も元気いっぱいだね。じゃあ、訓練もビシバシ行くこうっかな♪」

あの日以来からの憧れだったなのはさんが隊長を務める分隊に所属することが出来るだけでも幸せなのに、教導官としてのなのはさんに毎日鍛えてもらえる。なのはさんや八神部隊長たちの力になる、って胸を張って言えるほど強くないけど、スカウトしてもらったことを後悔させないためにも・・・

「スバル・ナカジマ！　精一杯頑張ります！」

出来ることは確実に、出来ないことも出来るように全力全開で頑張る、うん。機動六課の隊員寮・女子階（3階建てで、女子隊員は3

階の男子禁制）の共同洗面所でなのはさんと朝一で会えたことに喜んだ。今日は１日、良いことが起きそう。

†††Ｓｉｄｅスバル⇒？？？†††

機動六課に転属になって数日。あたしティアナ・ランスターは、お兄ちゃんが生前、とってもすごいんだ、って褒めちぎっていた戦技教導官である高町なのは一等空尉――なのはさんが隊長を務めるスターズの分隊員として過ごしている。陸士訓練校からの腐れ縁とも言える相棒（なんて小っ恥ずかしいから言えないけど）であるスバルと同じ分隊員だ。何が悲しくてずっと一緒なんだか。

（だけどそれ以上にあたしは幸運だと思うのよね）

あたしはいつか執務官になるって夢がある。元々は亡くなったお兄ちゃんの夢だったけど、今ではあたしの夢だ。そのためにはまず、もっと実力を身につけないといけない。そんなところに、管理局内の中でもトップクラスの知名度と戦力を誇るチーム海鳴、そのメンバーからの直々のスカウトでここ機動六課に入ることが出来た。そこで直属の上司である戦技教導官のなのはさん、戦技教官のヴィータ副隊長からは戦闘技術を学べて、別の分隊長を務める執務官であるフェイトさんやその補佐官のアリシアさんからは執務官になるための試験対策などを教われる。

（これほど最高の環境はそうそうないわ。部隊の運営期間は１年。１年もあるって言えるけど、逆に１年しかないとも言える。けどこの１年で強くなって、見返してやるわ。ランスターの弾丸は全てを

撃ち抜くってことをね）

お兄ちゃんの口癖だった、ランスターの弾丸は全てを撃ち抜く。その言葉を、お兄ちゃんの死を愚弄した地上本部の連中に認めさせてやる。そのためには教わった戦闘技術や知識などは完全にものにしないといけない。

「ぅあ～」

いま居るのは隊員たちの執務オフィスで、実働部隊の前線組（フォワード）のあたし達も訓練がない時は普通にデスクワークをこなすんだけど、「うっさい、スバル。他の人に迷惑でしょ」スバルが唸り声を上げて仕事をたびたび中断する。

「だって～。デスクワークってやっぱ苦手なんだもん～」

「あんた、前の陸士隊でもデスクワークでぶー垂れてたわよね。ちゃんとしなさいよ？　どこの部隊へ行ってもデスクワークはあるんだから、ちゃんと出来ないと苦労するわよ」

「あーい」

サクサクと仕事を片付けた直後、昼休みを知らせるチャイムがオフィス内に鳴る。キーボードのキーを打つ以外に音が無かったオフィス内が一気に人の声に溢れる。スバルは「あー、お腹空いた～！」なんて大きな腹の音を鳴らした。

「午後からはなのはさんの訓練だし、お腹いっぱい食べておかないと絶対に乗り切れないよ～」

「あたしはそこそこ胃に空きを作っとくわ」

「え～。あ、ダイエット？　体に良くないよ？」

「違うわよ。なのはさんのシゴキが待ってるっていうのに、お腹いっぱい食べたらリバースするっつうの」

訓練校や前所属の陸士隊でも日々厳しい訓練や仕事をこなしてきたけど、なのはさんの指導はそんなのまだ手緩いって感じですごいハード。終わる頃にはまともに話せない程にヘトヘトになっちゃうし、動くのも億劫になるレベル。あんな訓練を1年も受けて何も成長しなかったら、完全に自分の責任よね。

「あたしはリバースしないけどな～」

「あんただけよ」

スバルと一緒にオフィスを出て食堂へ向かおうとした時、「あ、待ってティア」スバルがあたしを呼び止めたうえで「おーい、エリオ、キャロ！」隊員たちの中で特に小っこい（さらに小さい、リイン空曹長も居る）2人に声を掛けた。

実働部隊のフォワードを担当する4人の内の2人、エリオとキャロ。キャロの側には、あの子の友達だっていう小さな竜・フリードリヒが、静かな羽ばたき音で飛んでる。フェイトさんを隊長、シグナム

二尉を副隊長とするライトニング分隊のメンバー。

「エリオとキャロもこれからお昼なんだよね？　同じフォワードのチームメイトとしてもっと親睦を深めたいから、一緒に食べようってお誘いなんだけど・・・」

スバルがあたしを横目で見てきたから「そうね。２人が良ければ一緒しましょ」って、あたしからも誘ってみる。するとエリオは「あ、はい！　ご一緒いたします、ナカジマ二士！」って佇まいを直したうえでそう答えて、「お誘いお受けします、ランスター二士！」キャロも堅っ苦しい口調で答えた。

「ん～・・・、なんかな～」

「こう・・・もっと柔らかい感じで良いわよ、あたし達の呼び方」

「そうそう。所属してる分隊は違うけど、フォワードっていう同じチームなんだからもっと砕けた感じで♪」

あたし達の上司であるなのはさん達も、緊急時以外は本当に友達と話してるような感覚だし。あたし達もそういう関係で良いと思うのよね。

「えっと、ではなんとお呼びすればよろしいでしょうか・・・？」

「普通に名前で良いよ。あたしのことはスバル、ティアのことはティアって。ね？　ティア」

「ええ、あたしもそれで良いわよ」

スバルはあたしの愛称・ティア呼びで、エリオとキャロだけは普通にティアナ呼びはなんか感じ悪いしね。あたし達の話を受け、「はい。じゃあスバルさん」エリオと、「ティアさん」キャロは呼び方を変えてくれたわ。

「うんっ。またちょっと親睦が深まったところで、混んでくる前に食堂に行こうか」

「「はいっ！」」

それからあたし達は食堂へ行って、それぞれ好きな料理を選んで注文。４人で分担して料理をテーブルに運んでくる中、「なんか静かよね」その準備中にあたしはスバルと話してるんだけど、エリオとキャロは一言も話さずに黙々と料理を運んでくる。スバルも「うん。あの２人、全然喋んないね」同意してくれた。とりあえず料理を運び終えて、４人で席に着いて食事を始める。

「あのね、エリオ、キャロ」

「「はい？」」

「隊舎であんた達と出会ってから４日、その間ずっと思ってたんだけどあんた達ってお互いに全然喋んないわよね。２人って兄妹のような関係って聞いたんだけど？」

フェイトさんを保護責任者としてるエリオとキャロ。関係としては兄妹（姉弟って感じじゃないわよね・・・？）が一番しっくりくるわ。

「ルシエさんと会ったのは六課に来た時が初めてなんです。写真などでは何度か見たことがあるんですけど・・・」

「通信とかもなかったわけ？」

「あ、はい。写真だけです」

「わたしとモンディアル三士は、なんと言うか事情と言いますか、そうゆうので別々のところで過ごしていましたので・・・」

エリオとキャロが少し困った顔を見せる。あたしは「悪かったわね。ちゃんと事情も聞かずに勝手なこと言って・・・」いろいろと事情を抱えてるっぽい2人に対して謝る。正直、あたし達も2人とはちゃんとしっかりと話してないのよね。これを機会にもうちょっと話す時間を作ろうかしら。

「あ、いえ、そんな！　お気になさらないでください！」

「フェイトさんやアリシアさんからも、なるべく2人仲良くしてほしいと言われていますので」

「そっか。うん、そうよね、お母さんと・・・お母さんと・・・」

「「「・・・？？」」」

そこまで言ったところであたしは口を噤んだ。フェイトさんをお母さんとすると、フェイトさんのお姉さんであるアリシアさんは伯母さんと言うことになるのよね。仮にもフェイトさんと双子なアリシアさんを伯母さん呼びして良いのかちょっと判らない・・・と言うより、なんか呼びづらい（たとえ年齢に関係ない呼称だとしても）。

「えっと・・・、うん、保護責任者の言うことはちゃんと聞かないとね」

フェイトさんとアリシアさんを一纏めにすることで難を逃れた。あたしの言葉をエリオとキャロは「はいっ！」しっかりと受け入れてくれた。

†††Ｓｉｄｅティアナ⇒？？？†††

わたしの保護責任者になってくれたフェイトさん、そのお姉さんのアリシアさん、そしてわたしにフェイトさん達を紹介してくれたルシルさんとアイリの居る、機動六課・実働部隊の前線組フォワードへ配属になって数日。

そして今はフォワード４人で、隊舎内にある食堂でお昼ご飯を頂いてる。スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士はスターズ分隊。わたしと同じフェイトさん達が保護責任者になってるエリオ・モンディアル三等陸士のライトニング分隊。

「――でさ、アルトってお兄さんばっかの所為で、7歳くらいまで自分が男の子だって思いこんでいたんだって」

「うわぁ。それマジ？」

スバルさんとティアさんの会話を聞きながら食べてると、「・・・本当に会話が無いのね、あんた達・・・」ティアさんが少し呆れた風に呟いた。さっきもモンディアル三士と全然喋らない、って言われた。フェイトさんやアリシアさんには、モンディアル三士と仲良くねって言われてるけど・・・

（仲良くする方法が判らない・・・）

同い年の子ってモンディアル三士が初めてだから、どうして良いのか判らなくてちょっと困ってる。これまで配属された陸士部隊はみんな大人の人だった。特務隊でルシルさんやルミナさん、初めて子供と呼べるアイリと会えたけど、お話しはアイリからしてくれてたから困ることはなかった。

「「すいません」」

「別に謝んなくて良いよ2人とも。・・・ティア、エリオとキャロも会ったばかりなんだから急かすのは良くないよ？」

「そうなんだろうけどさ。アンタみたく無闇に誰とも仲良くなれ、なんて言わないわ。けど、あんた達はライトニング分隊で前線じゃ背中を預け合うのよ？　もちろんあたし達だってフォワードチーム

としてフォローはするわ。でもそれにも状況によっちゃ限度がある。少なくともコミュニケーションはしっかりしておいた方が、あんた達の親も安心するんじゃない？」

「「あ・・・」」

隣に座るモンディアル三士に顔を向けると目が合った。スバルさんも「あー、そうだね。いざという時はちょっと大変だね～」ティアさんの意見に同意した。わたしもティアさんのお話には納得できる。だから・・・

「頑張りましょう、ルシエさん！」

「頑張るであります、モンディアル三士！」

ちゃんとコミュニケーションを取れるように決意すると、「いやだから、まずはそれを直しなさい」ティアさんがガクッと肩を落として、「あはは・・・。うん、だね」スバルさんも呆れ笑い。何がいけなかったのか小首を傾げてると・・・

「呼び方だよ、２人とも。普通に、エリオ、キャロ、で良いんじゃないかな？」

「あと堅苦しい言葉使い。それもやめた方が良いんじゃない？　同い年なんだしさ」

「うんうん。さっきので言うと、頑張ろうキャロ、うんエリオ、く

らいで良いんじゃない？」

「「なるほど・・・」」

言われて初めて気付いた。とりあえず「えっと、エリオ・・・君？」で良いのかな。さすがに呼び捨ては気が引けちゃった。モンディー―ううん、エリオ君も「キャ、キャロ・・・？」どうしてかは解らないけど、顔を赤くしながらだけどわたしの名前を呼んでくれた。

「ま、最初はぎこちないでしょうけど追々慣れていけば良いと思うわよ」

「話のネタに困ったら・・・そうだね～。フェイトさんやアリシアさんのことで話してみたらどうかな？　共通の話題だし、きっと上手く行くと思うけど・・・」

スバルさんとティアさんにアドバイスを貰って本当に良かったって思う。フェイトさんやアリシアさんとの思い出話ならたくさんあるから、いつまででもエリオ君とお話しが出来そう。

「じゃあ時間に余裕がある時とかに話そうか、キャロ」

「はい。じゃなくて、うんっ！」

エリオ君とお話しすることを約束して、スバルさんやティアさんと一緒にお話ししながらお昼ご飯を済ませた。少しずつ混雑してくる食堂から出て、午後からのなのはさんの教導に備えて少しのんびり

することにした。
食堂を出ると、スバルさんはクラエッタ二士に呼ばれて、ティアさんは訓練開始まで自主練習するということで、先に外に向かった。残されたわたしとエリオ君は訓練開始までの３０分ちょっとを使って、スバルさん達からのアドバイス通りにフェイトさんとアリシアさんとの思い出をお話しすることにした。

†††Ｓｉｄｅキャロ⇒？？？†††

以前は世界を憎んでた僕も、今は世界を守るために管理局員としての仕事を頑張ってる。フェイトさんとアリシアさんとアルフが、僕に生きる目的と未来をくれたから。フェイトさんは僕が管理局員、中でも戦闘行為も仕事に含まれるような役職や部隊に就いてほしくなかったみたいだった。フェイトさんのお姉さんであるアリシアさんは・・・

――戦える男の子はポイント高いよ。だって女の子は守ってもらいたいものだしね～――

僕が騎士として強く成長してくれることを応援してくれてるみたい。今はまだフェイトさんにもアリシアさんにも全然通用しない僕の騎士としての実力だけど、けどいつかは２人（アルフは引退しちゃったから）を守れるほどに強くなりたい。それも目的の１つとして、僕はこの機動六課への参加を決めた。

（戦闘のプロである戦技教導官のなのはさんに鍛えてもらえる）

フェイトさん達からなのはさんを始めとしたチーム海鳴のみなさんの話を聴いてるし、僕も管理局の研修生になってから自力で調べてみた。今の僕の年齢の頃にはフェイトさん達はいろいろな偉業を成し遂げてた。ロストロギアに関連する事件を何度も解決したって。そんなすごい人たちが居る部隊・機動六課への参加は、僕を成長させてくれると思った。

（強くなって、六課やフェイトさん、アリシアさんの力になりたい）

そんな僕は、フェイトさんを隊長とするライトニング分隊に配属された。副隊長は古代ベルカ式を扱う騎士のシグナム二尉。僕は近代ベルカ式の騎士見習いだから、シグナム二尉からも騎士としての戦い方や教えを教わりたいって思う。分隊員には僕と同い年の女の子、キョロ・ル・ルシエさん――キャロが居る。竜のフリードを使役・・・というか友達として接してる。僕も少しずつフリードに好かれるようになってきた・・・かも。

「――それでね。アリシアさんってばフェイトさんのお姉さんなのに子供っぽくて♪」

「あ、うん、それ判るよ！　フェイトさん達と遊園地に行った時、アリシアさんが一番はしゃいでいたし！」

キャロは、僕と同じようにフェイトさんを保護責任者としてる。事情はフェイトさん達から伺ってる。少数部族の出身だけど、竜使役の才能が凄まじい所為で里から追放されたって。その話を聞いた時は、どうして？としか考えられなくて、今でも理解できない。

（でもキャロは今、笑ってる。うん、だから良いと思う）

フェイトさん達との思い出を話してくれるキャロの声に耳を傾けて、相槌を繰り返す。時折ボクからも思い出を話して、「うん、そうだね♪」キャロも僕の話に相槌を打ってくれる。話しだしたらもう止まらない。次々溢れてくるフェイトさん達との思い出話に花を咲かせてる中・・・

「お待たせ～♪って、あれ？　エリオとキャロだけ？　ティアは・・・？」

クラエッタ二士に呼ばれていたスバルさんが戻ってきた。僕とキャロしか残っていないことに疑問を抱いて、ティアさんがどこに行ったのか訊いてきた。

「ティアさんなら自主練習をすると言って先に行きましたよ」

「えっ、そうなの！？　そっか、ありがと♪　あたしも先行くから、エリオとキャロも遅刻しないようにね！」

「「あ、はいっ！」」

スバルさんと手を振り合って一旦お別れ。それから思い出話を少しした後、時間的に見てそろそろ訓練服に着替えた方が良いって思って、「一旦中断しようか？」そう伺ってみると、「そうだね。また夜にでも♪」キャロは受け入れてくれた。僕たちも更衣室へ向かお

うとした時、「あ・・・！」キャロが食堂入り口を見て声を上げた。そこに居たのは、銀色の髪と蒼と紅の光彩異色、そして赤い局制服を身に纏ってる男の人と、真っ白な髪、陸士隊制服と白衣を着た女の子。

「ルシ――じゃなくて、セインテスト調査官、アイリ♪　お疲れ様です！」

ルシルさんとアイリさんは、フェイトさん達と同じチーム海鳴のメンバーだ。そしてキャロを最初に保護してくれた恩人。ルシルさんは調査官という立場だから、親しいフェイトさん達にも素っ気ない態度を取らないといけないって悲しんでた。聞いてた通り優しい人だった。アイリさんはキャロの最初の友達で、この数日間の訓練で負った怪我をいつも治してもらってる。

「キャロ、それにエリオ！　お疲れ様。もうお昼は済ませたの？」

「うん。エリオ君やスバルさん、ティアさんと一緒に頂きました♪」

「セインテスト調査官とアイリ医務官はこれからですか？」

「そうなの。ね？　セインテスト調査官♪」

「ああ。そうだ。『昼食くらいはゆっくり食べたいものだよ。1日中デスクワークで肩も目も疲労が溜まってばかりだ』」

これまで黙ってたルシルさんは冷めた声色での口頭と、優しい声色

の念話を使って答えた。調査官は出向先の部隊員との会話もある程度会話を記録しないといけないらしく、だから必要最低限の会話しかしない。だけど念話はその対象にならないってことで、ルシルさんは限られた人にだけ念話で話してくれる。僕とキャロもその内に入ってる。たぶん、キャロへの配慮。

「お疲れ様です、セインテスト調査官。そしてアイリさんも。『調査官のお仕事は大変だって聞いてます。お体には気を付けてくださいね、ルシルさん♪』」

「僕たちはこれより訓練なので・・・『これで失礼します、ルシルさん！』」

ルシルさんとアイリさんに敬礼。

「そう？　頑張ってね、キャロ、エリオ♪」

『なのはの教導も始まったばかりで本当に大変だろうが、乗り越えれば必ず将来に役立つ経験だ。頑張ってくれ』

「「はいっ！」」

食堂の中へ入っていくルシルさんとアイリさんを見送った僕とキャロは、訓練服に着替えるために更衣室へと向かった。

†††Ｓｉｄｅエリオ⇒なのは†††

今日も無事にフォワードの戦技教導を終えた。スターズのスバルとティアナは、陸士部隊の中でも最も重労働な災害担当だったこともあって基礎はなかなか。まぁ私の教導に耐えられるだけの最低の基礎は出来ていなかったから、この４日間で鍛えてみた。これでいよいよ明日から本格的に訓練を始めることが出来るよ。

「なんや嬉しそうやな、なのはちゃん」

「何か良い事あった？」

はやてちゃんとフェイトちゃんがそう訊いてきた。私たちは今、はやてちゃんとリイン、そしてルシル君の執務室である部隊長室に居る。そこでちょっとしたお喋りを楽しんでた。

「え？　あー、うん。フォワードのことでちょっとね。鍛えれば鍛えるだけ伸びるな～って思って」

「そうなんか。手応えはあるってゆう事なんやね」

「うんっ、それはもう♪　呑み込みも早いし、鍛えてるこっちまで楽しくなってくる。いつ出動が掛かっても良いように取り急ぎ準備は終えて、それぞれ伸ばしていく方向性もかなり見えてきたよ」

「エリオとキャロも？」

「もちろんだよ、フェイトちゃん。エリオは高速機動と電気資質を武器に、突撃・殲滅型ガードウィング。キャロはフリードリヒとヴ

ォルテールの竜2騎の使役を切り札として、支援中心に後方型魔導師の完成形を目指すフルバック」

エリオにはフェイトちゃんから教わった魔法がいくつもあって、戦い方もフェイトちゃんにそっくり。

「スバルとティアナはどう？」

「うん。スバルは一撃必倒の爆発力に頑丈な防御性能もあってフロントアタッカーの理想型を目指していくつもり。ティアナは射撃と幻術を極めて、味方を活かして戦う戦術型のガンナー、ポジションはセンターガードだね。で、ティアナをフォワードのリーダーにしようと思う。ちょこっと熱くなりやすいけど指揮官向きの感覚持ちだし、自然と他の3人を引っ張ってくれてる」

首都航空隊のティーダ一尉の忘れ形見であるティアナ。ティーダ一尉の殉職には心を痛めた。教導隊として一緒に空を飛んで、本人からティアナの事についても聞いていたから尚更。だからこそ私の教えられること全てをティアナに叩き込んで、どんな任務に就いても生き残れるような魔導師に育て上げたい。ティーダ一尉を安心させたいから。

「とは言っても、今はまだチームワークとコンビネーションをきっちり学ばせる段階で・・・。いつでも出動できるとは思うけど、どっちの分隊もフル出動はまだ避けたいかも。もう少し確実で安全、安定した戦術を教えたいって考えてる」

４人のデバイスについてもまだ完成しきれてないし。すずかちゃんの弟子であるシャーリーがデバイスマイスターとして、４人のデバイスの開発・調整などを一手に引き受けてくれてる。でもスバルのオリジナル魔法の発動を、デバイスからも出来るようにするのにちょっと苦戦中みたい。

「ん、了解や。そこはなのはちゃんやフェイトちゃんら隊長陣が居ってくれるし。フォワードの配置などについては、なのはちゃんに裁量にお任せや♪」

「うんっ。・・・でもどっちの分隊もそれなりに問題も抱えてて・・・」

「「問題・・・？」」

「ライトニングは絶対的に実戦の経験値が少な過ぎる。まぁそれ以外は特に問題ないから、これからの出動で何とかなるから良いとして。スターズは地力も経験もそれなりにあるけど、２人ともとんでもない突撃思考なんだよね。それはきっちり厳しく教えて直させないと危ない危ない」

リーダーになるティアナまでもが猪突猛進になるとフォワード全体が壊滅しやすい。スバルの手綱はティアナが握っているから、ティアナさえしっかりしてもらえば連鎖的にスバルも直るはず。

「あー、なのはちゃんが小っちゃい頃みたいなもん？」

「全力全開！だね」

「えええ～～～？　いくら私でもあそこまで酷くなかったと思うんだけどな～」

「「あはは！」」

フェイトちゃんとはやてちゃんが笑いだす。からかわれたんだって解って「もう。にゃはは♪」私もつられて笑いだす。とにかく私のやるべきことは、立ち向かうための意志に、撃ち抜く力と元気に帰ってくる技術をしっかりも経させてあげること。そのために、やっぱり全力全開であの子たちとぶつかっていかないとね。

Ｅｐｉｃ６－Ｄ古代遺失物管理部・機動六課～Ｆｉｒｓｔ　Ｍｉｓｓｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

機動六課が稼働して早２週間ちょっと。私はこれからここ部隊長室で、とある人と会議することになってる。室内に設けた隊長陣との会議を行ったり、休憩するためのスペースの長ソファに座ってる。私の右隣には広域捜査担当のフェイトちゃんとアリシアちゃん、左隣には監査役でもあるルシル君が、私とその人との会話に耳を傾けてる。

「久しぶりやね、カリム。ごめんな、なかなか逢いに行けへんくて」

『ううん、気にしないではやて。またゆっくり出来る日があったら来てちょうだい。・・・では、コホン。今日は忙しい中、時間を取ってくれてありがとう。フェイト執務官とアリシア執務官補、そしてセインテスト調査官も、ご苦労さまです。しばらくお付き合いくださいね』

「「はいっ」」

「いえ。これも仕事ですのでお構いなく」

モニターに映る通信相手は、機動六課設立に協力してもらった聖王教会・騎士団の騎士、カリム・グラシア。管理局にも籍を置いてる

二足の草鞋騎士（誰が言い始めたんかは忘れてもうたけど、言い得て妙や）。局内での役職は理事官で、階級は少将。通信を繋げた後は当たり障りない挨拶だけをして、すぐさま本題に入った。

『まずは、教会（こちら）騎士団のレリック捜査担当部隊、朱朝顔（ロート・ヴィンデ）騎士隊から報告のあったガジェットドローンの新型についてです』

新しく展開されるモニターに、これまで見たことのないタイプのガジェットが表示された。ガジェットドローン、通称ガジェットはロストロギア・"レリック"に反応して集まってくる機械兵器のことや。正式名称は開発者しか知らへんから、局は勝手にそう名付けた。

「かなり大きいねコレ。成人の平均身長よりも一回り大きいくらい」

『ええ。遭遇した騎士シャルロッテとの戦闘映像もお見せします』

職務中のシャルちゃんのことを敬称付きで呼んだカリム。以前は騎士イリスやったけど、聖王教会の教皇でフライハイト家の当主やったシャルちゃんのお婆さんが半年前に亡くなったことで、シャルちゃんもフライハイト家の次期当主ってゆう肩書きになった。シャルロッテを名乗れるのは当主と次期当主だけってこともあって、シャルちゃんもようやく正式に、シャルロッテ、って名乗れるようになった。

「アームケーブルに光学兵器（ビーム）、あと蛇腹の腕２本・・・」

「腕２本以外はＩ型と同じなんだね」

２ｍ近い直径をした球体状のⅢ型は、その巨体さと形状を活かして転がっての体当たりってゆう攻撃方法も取る。しかもＡＭＦの濃度も効果範囲もⅠ型以上のようで、空に居た「シャルちゃんの紅翼が一瞬で・・・！」掻き消されてもうた。まぁそれでもシャルちゃんは落下中に絶対切断のスキルを用いた斬撃を放って、Ⅲ型を真っ二つに斬り裂いて破壊した。

『以上です。Ⅲ型の残骸は本局の技術部に要請して回収し終えています。本題はここからです』

Ⅲ型の映るモニターから「このケース・・・！」見覚えのあるケースが映し出された。そんで「レリック・・・！」フェイトちゃんとアリシアちゃんが声を上げた。４年前に発見された"レリック"が収められてたケースと同形や。

『中身は確認できていませんので確実とは言えませんが、おそらく。一昨日付けでミッドチルダに運ばれた不審貨物、確認されたのは２つです。内１つは幸いなことに北部の、ベルカ自治領の近場でしたから今現在、ロート・ヴィンデが追跡中です。もう１つは陸路を使って中央区画に輸送されたところまでは確認できたのですが、不覚なことに見失ってしまいました』

悔しげに顔を歪ませるカリムに、「カリム。ガジェットの動きはどうなってるん？」私はそう訊ねる。

『北部では、ケースの輸送路である海路に沿って進むガジェットが

昨日から確認されているわ。中央区画ではどうなのかしら？』

フェイトちゃんとアリシアちゃんに視線が向く。すると2人は顔を見合わせて、首を横に振った。私らは中央区画の他の陸士部隊に捜査協力を申し出た。最初は難色を示してた各部隊の部隊長たちやったけど、"レリック"の危険性が認めて協力を受け入れてくれた。そやから何かあれば連絡が入るはずや。と、そう思うてた時、部隊長室にアラートが鳴り響いた。

『八神部隊長！』

司令室のグリフィス君から通信が入る。中央区画東部の一区画を管轄としてる陸士部隊からで、エーリム山岳丘陵地区を走るリニアレールをガジェットが襲撃してる、ってゆう内容の報告が入ったとのことや。私はすぐに「すぐ司令室に向かう！」グリフィス君に伝えた。続けて「なのは隊長！」に通信を繋げる。

『うんっ！　今、フォワードとリインを連れてヘリポートへ向かってる！』

「了解や。フェイト隊長！」

「うんっ、私もすぐにヘリポートへ向かう！　アリシアには事後処理の為に一緒に来てほしいんだけど・・・。はやて、良いかな？」

「許可します。2人とも、お願いな！」

「「了解！」」

フェイトちゃんとアリシアちゃんが部隊長室を飛び出してくのを横目で見送って、モニターに映る「カリム！　機動六課、出動します！」に敬礼する。

『ええ、気を付けて！』

カリムとの通信も切れて、私も指揮を執るために司令室へ向かう・・・その前に「セインテスト調査官は・・・！？」って、ソファに座ったまま何かしらを考えてるルシル君に声を掛ける。すると「私も行こう」そう言うて私の後を追って来た。そんで司令室に着いて、隊長席に座る。

「八神部隊長。たった今、フォワード部隊が現場へ向けて出動しました」

「ん。こちらはやて。スターズ、ライトニング、聴こえるか？」

ヴァイス陸曹の駆るヘリに搭乗してるなのはちゃん達に通信を繋げると、『聴こえます！』みんなから返ってきた。私はみんなに現場の状況を伝える。ガジェットは今現在、"レリック"を知らずに運搬してるリニアレールを襲撃中。

無人の貨物列車とゆうこともあって人的被害は無し。そやけどガジェットによって車両の制御は奪われてて遠隔操作できひん。さらにはガジェットは車両内に最低でも３０機。それに飛行型のⅡ型、新型のⅢ型までも出現する可能性あり、と伝える。

「初出動にしてはかなりハードな任務や。スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。問題あらへんか？」

『『『『はいっ！』』』』

「うん、良いお返事や！　なのは隊長、フェイト隊長、リイン、現場指揮と管制をお願いな！　アリシア執務官補は事後処理の方をお願いや！」

『『『『了解！』』』』

さぁ、機動六課の実力を存分に発揮したろな。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒フェイト†††

機動六課としての最初の任務はあまりに突然だった。私が隊長を務めるライトニング分隊、なのはが隊長を務めるスターズ分隊は、副隊長のシグナムとヴィータを除いて今はヴァイスの操縦するヘリに乗って現場へ向かってる最中。

スバルとティアナの手には２人の為に製作されたデバイス、"マッハキャリバー"と"クロスミラージュ"が握られている。ぶっつけ本番で専用デバイスの使用だけど、これまでのなのはの厳しい教導があったことを思えば、きっと最初からでも十分に使いこなせると思う。

（問題は・・・）

不安げなキャロのことが気掛かりだ。これまで陸士隊と特務隊で実戦を肌で感じたとは言っても、そのどれもでキャロ自身が戦ったわけじゃない。キャロに降りかかる危険を察知したフリードが暴走して敵味方問わずに被害を齎した。そのトラウマがまだキャロには残ってる。

（でもだからってここで止めるのはもっといけない。心を鬼にしてキャロを送りださないと。そうしないとキャロはいつまでも自分と向き合えない・・・。だけどフォローくらいは良いよね、うん）

私となのはとアリシアの座る長椅子の真正面に設けられてる長椅子に座るフォワード４人。スバルとティアナは緊張はしてるけど、それでも災害担当とは言え陸士隊で実戦経験を積んでるからガチガチじゃない。エリオも良い緊張具合。私とアリシアとアルフで少しばかり鍛えたおかげかも。

「キャロ」

「あ、はい？」

私の隣に座るアリシアがキャロに声を掛けた。しまった、いろいろ考えている間に遅れを取っちゃった。アリシアはキャロの真正面に立った後に屈んで、キャロの頬に両手を添えた。

「初めて自分で戦わないといけないっていう状況で不安なんだよね？」

「あ、いえ、わたしは・・・・！」

「大丈夫だよ、誰だってそうだもん。でも忘れないで、キャロ。キャロはね、独りじゃないんだよ」

そう言ってアリシアはキャロの頬から手を離して、隣に座るエリオ達へと顔を向けさせた。スバルとティアナは力強く頷いて、「僕も、精いっぱいキャロを護るよ」エリオは男の子らしさを振り撒いた。ちゃんと仲良くなってくれてるようで一安心・・・じゃない。

「う、うん！　それにね、キャロ。私やなのはだって居る。ちゃんとキャロが見える位置で見守っているから。エリオ。それにスバルとティアナも。ちゃんと私となのはが付いてる。だから緊張するな、恐れるな、なんて言わないけど、でもあなた達の側に私たちが居ることは憶えておいてほしい」

私もアリシアに続いてキャロ、そして忘れずにエリオ達にもフォローを入れる。今は不安で押し潰されて身動きを鈍らせないようにしておきたい。私は『ごめんね、なのは。これ、なのはの役目だよね？』フォワードの戦技教導を行ってるなのはに謝る。

『にゃはは、良いよ。キャロやエリオには私よりフェイトちゃんやアリシアちゃんの方が響くと思うしね。スバルとティアナには・・・そうだね、２人に言われちゃったし、何か別の激励でも――』

なのはがそこまで言いかけたところで、『こちらロングアーチ』シャーリーから通信が入った。シャーリーと出会ったのも"レリック"

が関係していた。今ではアリシアと同じように私の補佐官だ。そんなシャーリーの通信に「はいです！」リインが応じた。

『航空型ガジェットⅡ型、確認できるだけで約５０機が現場へ向けて飛行中です』

「りょ、了解です！　なのはさん、フェイトさん・・・！」

リインの目が私となのはに向けられる。こんな時に限って私となのはが外さないといけない状況になるなんて。なのはが「フェイト隊長。私１人でも良いけど・・・？」そう提案してきた。

「フェイトさん。僕とキャロ、それにスバルさんとティアさんは大丈夫です」

「はいっ！　あたし達に任せてください！」

「決して下手は打ちません」

エリオ、スバル、ティアナと、自分たちで解決したいって申し出てきた。私は「・・・私も空に上がるよ」エリオ達を、そして２週間とエリオ達を鍛え続けて来たなのはの教導を信じることにした。うう、そもそも不安に思うことなんてきっと初めからなかったんだ。

「こちらフォワード。空へはなのは隊長とフェイト隊長が上がるです！　リインはフォワード４名と一緒に降下、サポートするです！」

そういうことで、私となのははガジェットⅡ型の殲滅を担当することになった。なのはが「ヴァイス君！　私とフェイト隊長で空を抑える！」ヘリを操縦するヴァイスに伝えた。

「うっす！　今ハッチを開けます！」

ヘリ後部のハッチが静かに開いていく。私となのはで後部ハッチに向かって、「リイン。４人をお願いね」なのはと、「４人とも。しっかりね」私は最後にそう告げてから・・・

「スターズ１、高町なのは！」

「ライトニング１、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン！」

「「行きます！」」

ヘリから飛び降りる。私は待機モードの"バルディッシュ"を、そしてなのはは"レイジングハート"を取り出して、「セーットアップ！」起動させて防護服へと変身する。向かう先はこちらに向かって来ているガジェットⅡ型数十機。

『思えばフェイトちゃんと同じ空を飛ぶのって何気に久しぶりだよね』

『あー、うん、そうだね。１年くらい一緒に飛んでないね』

『また一緒に飛べることが出来たのは嬉しいけど・・・』

『久しぶりに一緒に飛べたのにこんな状況の中というのは、ちょっと悲しいね』

『でもやっぱり・・・』

『一緒に飛べるのは嬉しい♪』

『うんっ♪』

隣を飛ぶなのはと微笑み合う。そしてガジェット群を視界に入れたところで「行こう！」なのはと拳を打ち合わせた。私たちは今デバイスにも自身にも能力限定――リミッターが掛けられている。その理由は部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計規模によるもので、その中に私たちが収められるためには、私となのはとはやての隊長、シグナムとヴィータの副隊長はどうあってもリミッターを掛けないといけなかった。

（万全な状態じゃないけど、でも単なる機械兵器、そしてＡＭＦに遅れを取るほど私たちはヤワじゃない）

そのリミッターがある所為で魔力出力は悲しいほど低くなっちゃっているけど、『Ⅱ型にＡＭＦが無いのは救いだよね～』飛行型のⅡ型はⅠ型やⅢ型と違ってＡＭＦを搭載していない。だから少ない魔力でも十分に破壊が可能だ。

「レイジングハート！」

≪Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ≫

「バルディッシュ！」

≪Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ≫

「シューット！」「ファイア！」

編隊も何もない単に密集して飛行してるⅡ型へ向けて先制攻撃。私たちが放った攻撃を回避しようとしても、味方である他のⅡ型が邪魔になって避け切れない機体も出た。ガジェットは総じて頭が悪いのが救いだ。とは言え、開発者はガジェットが得た経験を基にさらに頭の良いＡＩを積んでくるみたいだけど。とにかく私となのはは Ⅱ型の掃討を開始。私たちの役目はリニアレールに1機たりともⅡ型を通さないこと。

「みんなの初任務、絶対に邪魔はさせない！」

≪Ｈａｋｅｎ　Ｓａｂｅｒ≫

「せいっ！」

大鎌形態（ハーケンフォーム）の"バルディッシュ"を大きく振るって、展開している魔力刃を飛ばす。ある程度の誘導操作が効くから一度の攻撃で数機を撃墜することが出来る。なのはも空を翔け回りながら高速砲で素早くⅡ型を破壊して回って、私と合わせて2分としないでその半数以

上を撃墜した。

『攻撃タイプが揃ってビームだけみたいだね』

『うん。レールガンやミサイルポッドを搭載した機が全く見えない。レールガンタイプが居ないのは嬉しいけど、なんか引っ掛かる』

Ⅱ型には今のところ3種類が確認されている。1つは今戦っている光学兵器（ビーム）を武装とした物、1つは小型ミサイルを何十発と収めたポット3つを搭載した物、1つは電磁力を使って弾丸を超高速で撃ち出すレールガンを搭載した物。光学兵器とミサイルはさほど問題じゃないけど、レールガンは厄介だ。発射から着弾までが短過ぎるし、何より威力が高いうえに射程も広い。

（私となのはなら回避も防御も出来る。けどリニアレールやスバル達を狙われたらアウトだ。スバル達じゃいくら物理攻撃のレールガンでも防げない）

それだけは絶対に防がないといけない。Ⅱ型もようやく「全機撃墜！」となったところで、『スターズ1、ライトニング1！　新手を確認しました！』シャーリーから通信が入った。方角は南南西、距離は900、新手の速度から言ってエンゲージまで・・・あと僅か。

『視認！・・・って、アレは・・・！』

『まさか・・・！』

『シャックスとマルファスか・・・・！』

なのはと私、さらに隊舎司令室に居るはやてからも驚きの声が上がった。新手と言うのは、以前ルシルから貰ったデータにあった「プライソンの航空兵器！」３機だった。陣形は逆三角形で、こちらに向かって低速で飛行中。

先頭を飛ぶ２機は、蒼を基調とした塗装の前翼（カナード）・前進翼・外に向かって斜めにある２枚の垂直尾翼・双発エンジンの機体で、"シャックス"シリーズとされる掩護機。その後方を飛ぶのは、迷彩柄の長い胴体・後進翼・Ｔ字の垂直尾翼・エンジンは左右の主翼下に２基ずつの計４基の機体で、"マルファス"シリーズと呼ばれる輸送機。

『て、敵航空機下部のハッチが開放！　加え転移反応！』

一番後ろを飛ぶ"輸送機（マルファス）"の機体下部のハッチが開き、その下方の空間がぐにゃって歪んでレンズのような物が展開された。そしてそこから「ガジェットⅡ型！！」が４０機と転移して来た。これで確定。ルシルがプライソンのアジトで手に入れた数々の兵器の資料。その内の航空兵器から、製作者不明のガジェットドローンが召喚されてきた。それすなわち今回のガジェット騒ぎは全て・・・。

「「『プライソンが首謀者！』」」

私とアリシア、そして秘密裏にルシルが追っていた広域次元犯罪者・プライソンが、ガジェットを使って"レリック"を集めている。なんの為に。決まっている。"レリック"を使ってまたふざけた研究をするためだ。

「させない・・・、そんなこと・・・！」

「レイジングハート！」

新たに投入されたⅡ型からのビームを回避しつつ、私となのははお返しの攻撃を加えて撃ち落としながら、この場から離脱しようとする"シャックス"・"マルファス"の撃墜を試みようとする。まずは飛行速度の遅い"マルファス"だ。他の２機はＡＭＦを全開にして"マルファス"や自身への攻撃を拒もうとしている。

「（魔力が足りないのが少しネックだけど。足りないなら足りないで工夫するのが魔導師だ・・・！）なのは、少しフォローお願い！」

『了解！』

"マルファス"の掩護だからか"シャックス"の速度も遅い。一網打尽にするなら今しかない。あれほどの機体、ガジェットに比べて量産できるような物じゃないはず。少しでも機体数を減らした方がきっと後々、私たちとって良い方向になると思う。

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ。いま導きのもと降りきたれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス」

ガジェットをなのはに一時的に任せて、私は対ＡＭＦのための気候操作の儀式魔法を発動させる。発動には魔力を使うけど、落雷は純

粋な自然現象。ＡＭＦでは防がれないのは既に確認済みだ。黒雲が空に渦巻いてゴロゴロと稲光が発生。

「え・・・！？」

落雷まで僅かと言うところで掩護機の"シャックス"の機体上面、主翼の付け根付近にあるウェポンベイが開いて、そこからレールガンユニットが出現。そして砲塔は上を向き、轟音と共にレールガンを発射。同時に雷撃が落ちたんだけど、純粋な金属である弾丸であることもあって雷撃が全て集中してしまった。

「だったら――」

『フェイトちゃん！　ごめん、ちょっと手が足りない、かも・・・！』

なのはから苦悶の声色に満ちた念話が。Ⅱ型が次々とリニアレールに向かって突撃していく中、なのはが懸命にそれを阻止してた。私は撤退を続ける3機より『ゴメン、すぐに合流する！』Ⅱ型の掃討を選択した。

（悔しいけど今は六課としての自分を貫こう。ガジェットもプライソンが製作したなら、いつか必ずぶつかるはずだから・・・！）

そうして私となのはは、全てのガジェットを車両に近付けることなく全機撃墜してやった。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒キャロ†††

「エリオ君！」

機動六課として初めての任務は、六課の運用理由のロストロギア・"レリック"の回収。最初は緊張と恐怖で震えが止まらなかった。でもアリシアさんとフェイトさん、それになのはさんやエリオ君たちの言葉のおかげで和らいだ。

（でも・・・、でもやっぱり、わたしは・・・）

ダメだった。"レリック"を狙ってやって来る機械兵器・ガジェットドローン。それと真っ向から対峙して、わたしはまた湧き上がって来た恐怖で足が竦んで、「うわぁぁぁぁ！」エリオ君がⅢ型っていう大きな球体状のガジェットと戦って傷ついてるのを黙って見てるしかない。

「あ・・・あ・・・！　エリオ・・・君・・・！」

「うぐ・・・！　大丈夫！　僕に任せて、キャロは下がってて！
ストラーダ！」

エリオ君は槍型のアームドデバイス・"ストラーダ"を手に、Ⅲ型から伸びるアームの打撃を受け止めたり、本体から放たれてくる光線をギリギリで避ける。でも段々と追い詰められて行っちゃう。

（わたし、また護られてばっかり・・・）

――君はまだあまりにも幼い。守る側じゃなく、今はまだ守られる側なんだよ。確かにの竜使役は凄さまじい戦力だろう。だからと言って君のような子供が、こんな泥臭い戦場に立つ必要はないんだ。まずは自分の力と向き合おう。一番の早道は意味を持たせる、というのが良いかもしれない。俺は、守りたいものを守り、救いたいものを救う、その信念でこの力をコントロールしている――

――いつかあなたが守りたい人のために、恐ろしいかもだけど竜使役をコントロールしていこう。その時までどれだけ恐がられようとも、あなただけは信じてあげて。自分の力を。絶対に君の為になると思うから――

ルシルさんとルミナさんは言ってくれた。ルシルさん、ルミナさん。わたし、守りたい人が沢山できました。わたしを保護してくれたフェイトさんとアリシアさん、六課で出会ったみんな。もちろんルシルさんとルミナさんをも守りたいって思います。

「うわぁぁぁぁーーーーー！」

「っ！！　エリオ君・・・！」

エリオ君がⅢ型のアームに捕まって、そのまま車両の外にまで運び出された。そして「あ・・・！」崖下へと放り投げられてしまった。エリオ君。六課のみんなの中で最初に会った人、エスカレーターを転がり落ちそうになったわたしを助けてくれて、同じライトニングの仲間として、お友達として今日までわたしを支えてくれた。

（守りたい・・・。優しくて、わたしに笑いかけてくれるみんなのことを・・・守りたい。わたしの力で・・・守りたい！）

わたしは「エリオ君！！」を追って車両から飛び降りた。飛行魔法なんて使えない。でも、わたしには「お願い！　フリード！」が居てくれる。大丈夫、わたしはもう恐れない。

（自分の力を信じる。守りたい人を守って、救いたい人を救う。ありがとうございます、ルシルさん、ルミナさん。わたし・・・やります！）

ＡＭＦを放つⅢ型の居る車両から遠く離れたことで魔法が扱える。落下してるエリオ君を抱き止めてフローターを発動、落下を抑える。側にまで来てくれたフリードに「ごめんね、ずっと。窮屈な思いをさせて・・・」これまでのことを謝った。わたしが恐れるから、フリードもまた自分を抑えてたと思うから。

「だけどわたしはもう大丈夫。ちゃんとあなたを制御するから、わたしに委ねて。あなたの翼を、フリード」

「きゅくるー♪」

初めて聞いたかも。フリードのこんな嬉しそうな鳴き声。わたしは頷き返して足元に召喚魔法陣を展開。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！」

フリードを本来の姿に戻すための詠唱を終える。そしてフリードは元の大きな竜へ戻って、咆哮を上げた。フリードの首の根元に付けられた鞍に跨って、手綱を握ったところで「助けてくれてありがとう、キャロ・・・」気を失ってたエリオ君がいつの間にか目を覚ましていて、わたしにお礼を言ってくれた。

「ううん。わたしも、エリオ君にありがとうだよ」

「「えへへ♪」」

お礼を言い合ってると自然で笑い声が出ちゃった。でもこれで終わったわけじゃない。まだⅢ型が残ってる。スバルさんとティアさん、リイン曹長は"レリック"の回収のために後部車両に向かってる。わたしとエリオ君を信じてくれてるからこそ。だったらわたしは、わたしの出来ることをやるだけ。

「フリード！　お願い！」

指示を出してⅢ型の居る車両へとフリードを向かわせる。Ⅲ型は車両間の移動をしないようで、さっきと同じ場所に陣取ってた。迎撃のために本体から光線が放たれてくるけど、フリードなら簡単に避けられる。攻撃が途切れたところで・・・

「ブラストレイ！・・・ファイア！」

フリードに火炎砲撃を発射させた。わたしのブーストデバイス・"

ケリュケイオン"とわたしのブースト魔法で威力は強化してあるんだけど、「硬い・・・・！」Ⅲ型自体の防御力を突破することが出来なかった。

「Ⅲ型のあの形状だと砲撃じゃ貫きづらいと思う。僕とストラーダに任せて、キャロ」

「うん。お願い、エリオ君。わたしはブーストでエリオ君を支えるから。・・・我が乞うは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を・・・」

≪Ｅｎｃｈａｎｔｅｄ　Ｆｉｅｌｄ　Ｉｎｖａｌｉｄ≫

――エンチャント・フィールドインベイド――

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

≪Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ．　Ｓｔｒｉｋｅ　Ｐｏｗｅｒ≫

――ブーストアップ・ストライクパワー――

ＡＭＦなどのフィールド魔法貫通効果を付加するフィールドインベイド、さらに打撃力を上げるストライクパワーを、「ツインブースト・スラッシュ＆ストライク！」エリオ君自身と"ストラーダ"に付加させる。

「エリオ君！」

「うんっ！　うぉぉぉぉーーーーッ！」

エリオ君がⅢ型目掛けて突撃。Ⅲ型はアームケーブルや2本のアームをエリオ君に伸ばして迎撃するけど、「スタールメッサー！！」振り払われた"ストラーダ"の先端から伸びる魔力刃で斬り払われた。

「ストラーダ！」

カートリッジを2発ロードしたエリオ君。"ストラーダ"のブースターが点火して、「一閃必中！」ものすごい速さでⅢ型へ向かってエリオ君は突進。そして魔力刃でⅢ型を突き貫いて・・・

「でりゃぁぁぁぁーーーーっ！」

――メッサー・アングリフ――

そのまま"ストラーダ"を振り上げて、Ⅲ型を真っ二つに斬り裂いた。そして爆発。わたしとエリオ君、そしてフリードでちゃんと敵を倒せることが出来たんだ。それからスバルさん達が"レリック"の回収を終えたこと、フェイトさんとなのはさんがⅡ型のガジェットを殲滅し終えたことが、ロングアーチのシャーリーさんからの通信で判った。

『こちらはやて。フォワード部隊、ええ仕事を見せてもらったよ。お疲れ様や！』

六課の課長、八神部隊長から任務完了の知らせが入って、わたしとエリオ君は「やったね！」ハイタッチを交わした。今回の初任務だけでいろいろあったけど、わたしはきっとこれから変わっていけると思う。ルシルさんとルミナさんの教えを胸に、六課のみんなと最後まで歩き切って見せる。

Ｅｐｉｃ６－Ｅ古代遺失物管理部・機動六課～Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

ミッド北部の第２１１陸士部隊から、ここミッド西部の第１０８陸士部隊に転属・・・と言うより戻って来てもう2年ね。元々あたしはここ１０８陸士隊に所属してた。そして２１１陸士隊に転属になって、数年ぶりにまた１０８陸士隊に帰ってきたことになる。

（あの頃と変わらない隊員も多いし、戻ってきたから初めて顔を合わせる新人も多く居たわね）

知った顔が多く居ると仕事もやり易い。今日もかつて一緒に仕事をしていた捜査官とチームを組んで、質量兵器（拳銃とかね）の密輸を企てていた馬鹿どもを牢屋にぶち込んでやったわ。その一件の報告書をオフィスで書いていると・・・

『呼び出しです。捜査部、アリサ・バニングス二等陸尉。至急、部隊長室にまで来て下さい。繰り返します――』

呼び出しを食らった。うちの部隊の部隊長はゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。あたしが所属してた頃は一等陸尉で、部隊長補佐だった。ん で、そのナカジマ三佐があたしをこの１０８陸士隊に呼び戻した。元より自分が部隊長になったらあたしを呼び戻すって公言してたし、あたし自身それでも構わなかった。クラリスと離れ離れになったの

はちょっと寂しいけどね。

「あたし、なんか呼び出されるようなミスしたっけ・・・？」

「いえ。アリサさんは別段おかしなことはしてなかったはずですが・・・」

あたしの独り言にそう返したのは、あたしのデスクの隣で同じようにデスクワークをしてたギンガ。ギンガ・ナカジマ陸曹。ナカジマ三佐の実子で、歳は１７歳の礼儀正しい出来た部下。捜査官としても戦闘魔導師としても優秀で、この１０８陸士隊の中で唯一、あたしが気兼ねなく背中を預けられる子ね。

ギンガもあたしと同じ捜査部所属で、午前中の捜査にも参加してた。だからあたしが何かドジったのなら、何かしら指摘をしてくれるはず。そんなギンガが何も無いって言うんだから、あたしに落ち度はなかった・・・と思う。

「とにかく行ってみるわ」

「あ、はい」

ギンガと手を振り合ってからオフィスを出たところで、「部隊長室にまで４人分のお茶ですね、判りました」ギンガが誰か（たぶん三佐ね）にそう応じているのが背中に聞こえた。とにかく部隊長室まで早歩きで向かう。そして部隊長室前に着いてインターフォンを鳴らすと、室内から『おう、入ってくれ』ナカジマ三佐の声で入室を許可する旨が伝えられた。

「失礼します」

スライドして開いたドアの奥、そこには１０８陸士隊の部隊長のナカジマ三佐が１人。脚の短い長テーブルを挟んだ応接用ソファの上座側に腰かけてる。三佐は「おう、よく来てくれたなバニングス」と言って、三佐の座るソファの向かいにあるソファに座るように促してきた。

「あの、ナカジマ三佐。あたしに何かご用が・・・？」

あたしもソファに座ってそう訊ねてみた。三佐の雰囲気からして怒ってはいなさそうなんだけど。ドキドキしながら何を言われるのかと待っていると、「これから客が来る。お前さんも合い席してくれや」なんてことはない、接待だった。

（だからギンガに４人分のお茶を用意するように指示したのね）

三佐の言い方に、これから来る客って言うのがあたしやギンガの知人かもしれない、って考えが生まれた。まぁとにかく客が来れば判ることだけどね。それから三佐と他愛ない会話をしながら待つこと数分。

『ナカジマ三佐。お見えになりました』

「部隊長室にまで通してくれ」

隊舎ロビーの受付から通信が入ると三佐がそう応じた。音声だけだったから客の姿を見ることが出来なかったわね。一体だれが来るって言うのかしら。それからまた待つことほんの少し。インターフォンが鳴った。

「おう、どうぞ入ってくれ」

「失礼します」

あたしと同じように入って来たのは「はやて！？　それにリイン！」だった。２人もあたしに気が付いて「おお、アリサちゃんや！」はやては小さく手を上げて、「アリサさん、お久しぶりですぅ～♪」リインはあたしの側まで飛んで来た。

（あぁ、なるほど）

でもこれで三佐の意図が理解できた。あたしとはやてとリインは親友、ギンガははやてがここで指揮官研修していたこともあって知己だもの。はやてがここに来るってことで、粋な計らいをしてくれたのね。直接顔を合わせるのも久しぶりってことで再会をそこそこ喜び合った後、はやてがあたしと同じソファに座って真剣な面持ちになった。ちなみにリインははやての肩の上ね。

「ナカジマ三佐。今日は時間を割いていただきありがとうございます」

「あぁ、気にすんな。で？　急に会って相談がしたいって言ってい

たが。お前の造った新部隊も調子が良いみたいじゃないか。この前、スバルからメールを貰ったよ。大変だが充実した毎日を送ってるってな。そんな順調な中でいきなり古巣の上司に相談となると、その内容はどうも想像つかないぞ」

スバルはギンガの妹ね。あたし自身も数える程度しかあったことがないわ。ギンガ伝手で何度か写真を見させてもらってるけど、４年前の空港火災の前と後じゃ目つきが全然違う。今では憧れだって言うなのはが隊長を務める分隊員の一員で、そして日々訓練漬け。

「そうですね、部隊の方は今のところは、です。ですが優秀なスタッフばかりですので、これからも不安なんてありませんが」

「はいっ！　皆さん、とっても素晴らしい隊員です！」

はやての造った部隊・機動六課。正直な話、あたしも参加してみたかったのよね。でもま、あたしが入るより戦技教導官のなのはや執務官のフェイトが入った方が、はやての望む形になるって部隊創設の話を聞いた瞬間に思ったから、あたしは適当に理由を付けて断った。

「そうかい。で、相談ってことだがどんな内容だ？　お前も気が付けば俺の上官だ。多少の無茶難題でも聞いてやろうじゃないか」

「あはは♪　愛弟子から師匠へのちょっとしたお願いですよ♪」

はやてがそこまで言ったところでインターフォンが鳴った。三佐が

「はいよ」入室を促すとドアがスライドして、「お待たせしました」トレイを手にしたギンガが姿を見せた。

「おっ。久しぶりやな、ギンガ♪」

「ギンガ～、お久しぶりですぅ♪」

「っ！　八神二佐、リイン曹長！　お久しぶりです！」

はやてやリインとの再会に満面の笑顔を浮かべるギンガ。ギンガがテーブルにあたし達のお茶を並べていく中、「ギンガ。お前もこのまま同席してくれ」三佐がそう言ったから、「判りました」お茶を並べ終えたあの子は三佐の座るソファ側に控えた。

「じゃあ聞かせてもらおうか、八神」

「はい。お願いゆうんは密輸物のルート捜査についてなんです」

はやてが展開したモニターに映ったのは赤い結晶体、「レリック・・・！」だった。４年前、チーム海鳴全メンバーが揃った中での最後の任務は、この"レリック"の回収だった。はやてが「うん。六課が担当してるもんや」少し苦い表情を浮かべた。ひょっとして何かしら進展があったのかしら・・・。

「なるほど。そのレリックというロストロギアが通るかもしれないルートの捜査を、俺たちに頼みたいということなんだな」

「はい、そうゆうわけです。詳しいデータはリインが持って来てますので、後で確認して頂ければと思います」

「はいですっ」

三佐は少し考える仕草を取った後、「いいだろう、引き受けた」はやてからの捜査協力の話を受けてくれた。あたしは内心、よっしゃ！ってなった。何故なら・・・

「密輸調査は陸士１０８部隊の本業と言えば本業だ、そういった仕事はキッチリ期待以上にやるさ。・・・密輸調査を主とする係の責任者はバニングスで、ギンガはその補佐だ。どっちとも親しいから使い易いだろ」

そう、密輸関連の捜査係の長はあたしで、ギンガはその補佐を担当してくれている。だからはやての機動六課と協力するとなると、必然的に顔を合わせる機会が増えるわけよ。あたしとギンガはチラッと目を合わせて喜び合った。まさかこんな形で、機動六課に関われるとは思いもしなかったわ。

「はいっ、お願いします！　アリサちゃん、ギンガ。六課の捜査主任はフェイトちゃんやから共同捜査でもやり易いと思う」

「ええ、そうね」

「はい！」

あたしは9歳の頃からの幼馴染だし、ギンガは空港火災の際にフェイトに助けてもらったこともあって、スバルがなのはに抱くのと同じようにギンガはフェイトを尊敬してるわ。ちょっと妬けちゃうけどね。部下が別の誰かを尊敬してるのって。ま、誰とも知れない奴じゃないことだけは助かるけど。

「フェイトさんと一緒に捜査・・・。それはすっごく頑張らないといけませんね！」

「ギンガ。気張り過ぎて空回りなんかして、バニングスや執務官殿に迷惑かけねぇようにな」

「解ってます！」

そう返事したギンガに「ギンガ、ギンガ」リインが声を掛けた。リインからギンガへ何を言うのかしら？なんて考えてると、「捜査協力に当たって、ギンガにデバイスを1機プレゼントします♪」とのことだった。

「え、デバイスを・・・ですか？」

「はいですっ。スバル用に造ったローラーブーツ型のインテリジェントデバイス・マッハキャリバーの同型機、その名もブリッツキャリバー！　もちろんギンガ用にチューニングするですから、何も問題ないですよ♪」

「あの、えっと、それはとても嬉しいことなんですけど、頂いちゃ

っても良いでしょうか・・・？」

嬉しい半面困惑してるギンガ。インテリジェントデバイスってかなり高価な物なのよね。あたしやすずか、なのはだってタダ同然で手に入れたからその価値は全然知らなかったけど、管理世界に来てからインテリジェントデバイスがどれだけ高価なのかを認識して目を見張ったもの。

「貰っとけ、貰っとけ。くれるって言うんだから、そういう場合は遠慮せずに貰っとくもんだ」

「ナカジマ三佐の言う通りやよ、ギンガ。それを断ったらやる気を持て余してる六課のメカニックが悲しむわ」

三佐に続いてはやてからもそう言われたことで「はい。ありがたく頂戴します！」ギンガは素直になった。のほほんとした空気の中、「八神」三佐の厳かな声が響いた。

「あ、はい、なんでしょうか・・・」

「ずっと考えてたんだけどよ。どうしてわざわざ俺のところに捜査協力をしに来た？　他の機動隊や本局の捜査部にはしねぇのか？」

「いえ、もちろんそのどちらにも密輸ルートの捜査協力をしてもらってます。それに聖王教会の騎士団とも協力してます。ただ、地上のことはやはり地上部隊の方が地の利もありますし、よく知ってますから」

はやての目を真っ直ぐ見て、その返答をじっくり聞いてた三佐は「ふむ」また考え込む仕草を取った。あたしとリインとギンガは顔を見合わせる。三佐は何を考えて、今の質問をしたのかしら。

「理由はそれだけか？」

三佐からの質問に、今度ははやてが長考する。あぁ、やっぱり何かしらあったのね。だからあたしは「この前、レリックを回収したでしょ。その時に何かあった？」って訊いてみた。

「そうなのか？」

「・・・。はい。数日前、機動六課はレリックを運搬していたリニアレールを襲撃しているガジェットドローンと交戦、コレを撃破。レリックも無事に回収したのですが・・・。その際にある航空兵器が現場に出現しました」

そう言ったはやてがモニターに映る"レリック"画像を消して、また別の画像を表示させた。あたしは「シャックスとマルファス・・・！」すぐにソレが何か判った。三佐とギンガはモニターに映る航空兵器――戦闘機と輸送機を見て小さく首を傾げた。

「数年前。かつてナカジマ三佐の奥さんであり、ギンガやスバルにとって母であるクイント准陸尉を含めた首都防衛隊の1部隊と、査察官として同行したルシル君が、広域指名手配犯・プライソンの秘密工房へと潜入捜査をしました」

「「っ！！」」

三佐とギンガの顔色がガラッと変わった。その潜入捜査でクイント准陸尉を始めとした部隊員の大半は殉職。隊長の騎士ゼストは依然意識不明のこん睡状態。メガーヌ准陸尉は死亡扱い。ルシルも左目の視力と固有スキルを失った。

「この2つの航空兵器は、ルシル君がプライソンの工房のデータバンクから回収した数々の兵器の設計図にあった物でした。この事から今回のレリック事件の首謀者は、プライソンやと判断しました」

掩護機・"シャックス"と輸送機・"マルファス"の映像が流れる。"マルファス"の下部ハッチから、製作者不明とされていたガジェットドローンⅡ型が何十機と召喚された映像が。プライソンの造り出す兵器の中からガジェットが召喚されてきた、となれば十中八九プライソンが首謀者。またはその関係者になるわね。

「そうかい。女房やゼスト隊の死も無駄じゃなかったんだな・・・」

「余計なお世話かもしれへんと思いましたが、クイント准陸尉たちが追っていた事件の延長線にある本件。ナカジマ三佐やギンガにも少なからず因縁があると思いましたので、密輸調査の件と合わせて、こうしてお願いしに来た次第です」

はやてが三佐とギンガに深々と頭を下げた。そんなはやてに「この事をスバルはもう知っているんですか・・・？」ギンガがそう訊く。

「まだや。正直伝えるかどうか迷うてる状況や。普通は教えるべき情報やし、隠しておいても直に知られる話や。そやけどタイミングもあると思うんよ」

スバルはクイント准陸尉の殉職によっていろいろ大変だったものね。葬儀の時にはルシルに、クイント准陸尉の代わりにルシルが死ねばよかった、とも言っちゃってるし。なんて考えてると、「八神。スバルと坊主の様子はどうなんだ？」三佐が訊く。

「スバルからのメールだと、ルシルさんとの事は大丈夫、とだけしか送られて来てないんです・・・」

「「あー・・・」」

困ったような声を上げて明後日の方へと目をやるはやてとリイン。それだけで今のルシルとスバルの状況を察することが出来た。三佐は「そうかい、ダメかやっぱり」溜息を吐いて、「あの子ったら。嘘を吐いてたのね・・・」ギンガは呆れ果てた。

「ルシルさんが六課に居ると知ってすぐ、謝るなら早い方が良いって言っておいたんですが・・・。あ、まさか今日までずっとルシルさんと話していない、とかはないですよね・・・！？」

「おはようございますやお疲れ様です、みたいな短い挨拶はこれまで何度か交わしてるようですけど、スバルはルシル君をどこか避けてるですね」

「・・・」

「次にスバルと会ったら、私から言っておきます。八神二佐。プライソンの件も私に預からせていただけませんか？」

「そうやね。ギンガからならスバルも落ち着いて聞いてくれるやろうし。ギンガに任せするわ」

「ありがとうございます」

スバルはスバルでいろいろあるんでしょうけど、あたしとしちゃルシルの心労を出来るだけ軽くしてほしいとも思うわね。プライソンが事件に関わってくるとなると、絶対に"エグリゴリ"のレーゼフェア、それにフィヨルツェンが出てくるはずだから。

「まぁとにかくだ。会議室を１つ空けとくから、そこで詳しい会議をしてくれや」

「はいっ。ありがとうございます、ナカジマ三佐。アリサちゃん、ギンガ。よろしくな！」

「ええ！」「はい！」

というわけで、あたしとギンガが所属してる１０８陸士隊も、"レリック"捜査に加わることになった。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒イリス†††

「――そういうわけだから、機動六課のフォワードの皆さんは第９７管理外世界・地球に行っているから、帰還するまでの間の"レリック"捜査はあなた達、朱朝顔騎士隊（ロート・ヴィンデ）に掛かっているわ。だからそのつもりでよろしくね♪」

「・・・・はい？」

朝起きて、今日も"レリック"捜査を頑張ろうって時にカリムに呼び出され、そして聞かされたのはわたし放置の刑の内容。地球は日本・海鳴市に、"レリック"とは違うロストロギアがあるってことで、カリムははやて達に回収要請を出して、それに応じたはやて達は海鳴市に出張任務・・・という名目の里帰り・・・とかさ。

「なんて日だっ！！」

「っ！？」

なんにも聞かされてないよ、そんな話。その心情を露わした言葉をわたしが叫んだら、カリムがビクッとなった。わたしはカリムの執務室に膝から崩れ落ちた。機動六課には入れないわ、出張任務の話を聞かされてないわ置いてけぼりだわ、もう心が折れた。

「イリス！？　イリス、どうしたの！？」

「ねぇ、カリム。わたしって要らない子？　要らない子だよね・・

・？」

「え、ええ？　急にどうしたの？　イリスは別に要らない子じゃないわ」

「イジイジ・・・」

もういじけてやる。床の絨毯にのの字を書きまくってると、カリムが「どうしましょう。セインテスト調査官に相談してみようかしら」なんて聞き捨てならない名前を口にしたからわたしは「ルシル、居残り？」と漏らした。

「ええ。セインテスト調査官は査察・監査任務に従事するから、隊舎からはあまり離れられないのよ」

わたしはゆっくり上半身を起こして、身嗜みを整えつつスッと立ち上がる。そして「よっしゃ！　今日も頑張るか！」気合充填するために両頬をペチッと軽く叩く。ルシルが隊舎に残ってるなら気落ちしてられない。はやて達が戻ってくるまでにどんな手を使っても良いから"レリック"を確保して、六課の隊舎に居るルシルに褒められに行かなくちゃ。

「ふふ。ルシルさんの名前を出せば元気が出るっていう話だったけど、本当だったわ♪」

「ではでは！　教会騎士団・朱朝顔騎士隊（ロート・ヴィンデ）隊長、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト！　本日もレリック捜査に向かいます！」

口元を押さえながら笑顔を浮かべてるカリムに告げて、わたしはカリムの執務室から出る。"レリック"は教会騎士団として働いてるわたしと管理局員として働くなのは達を結ぶ唯一の繋がり。だから教会騎士団内で捜査を行う隊をどこにするかを決定する会議で、わたしは真っ先に名乗り出た。他の隊の隊長はみんな六課メンバーと繋がりが無い人たちばかりだから、即わたしの隊に決定した。

（最初の頃は捜査担当の隊になる理由は不純だったけど、裏で糸を引いてるのがプライソンとなればもう寝ぼけたことは言ってられない）

六課から回ってきた新情報の中に、ルシルがかつてプライソンのアジトから回収した兵器の設計図、その中にあった航空兵器４種の内２種がなのは達の前に現れた。しかもガジェットドローンがその航空兵器から召喚されてきたというおまけ付き。もうルシルに褒めてもらおう、とか、なのは達との繋がりが欲しい、とか、そんな不純な動機は言っていられない。

（あー、でもやっぱりルシルには褒められたいからな～）

さっきもそれで復活したし。だって好きなんだもん、しょうがないじゃない。世界平和と恋愛、そのどちらも選びたいって話だ。だってわたし、まだ１９歳（正確には今年の１１月で、だけどね）の乙女だもん。

とまぁそんなことを考えつつ、わたしが隊長を務める朱朝顔騎士隊ロート・ヴィンデの各班長９人（最後の１人はわたしね）と、今日

のデイシフトの班と捜査担当区がどこかを通信で確認。ちなみに1つの隊の人員数は５０人規定。班は全部で１０班ある。うち半数の班、計２５人が夜勤――ナイトシフトになるわけだ。

「じゃあ、わたしたち第1班は、西区の第１０８陸士部隊と合同捜査ということで。他の班は準備ができ次第、順次出動して」

わたしの指示に『了解です、シャルロッテ隊長！』９人の班長が応じた。フライハイト家の当主で聖王教・教皇だった祖母が亡くなったことで、わたしもとうとう"シャルロッテ"を正式に名乗ることが出来る、フライハイト家の次期当主って位置に立てた。お婆様の葬儀の時はわんわん泣いちゃって、２～3日は目の腫れが引かなかったよ。でもやっぱりシャルロッテって名乗れるのは気分が良いよね～。

「さてと・・・！」

わたしたち朱朝顔騎士隊（ロート・ヴィンデ）、そして蒼薊騎士隊（ブラウ・ディステル）と翠梔子騎士隊（グリューン・ガルデーニエ）の三隊の詰め所として建つ東方聖堂に到着。それはベルカを表す剣十字型の建物だ。各隊５０人が入ってもまだ余裕のある大きさで、緊急時を除く任務前にはお祈りしてから出動というのが暗黙のルールだ。両開き扉を開け、入口――前室から奥へと続く身廊を進む。十字架で言えば横棒となる袖廊と、わたしが歩いてきた縦棒の長い方である身廊が交わる中央交差部に、わたしが班長を務める第1班４人が整列している。

「ロート・ヴィンデ第1班。集まってる？」

わたしは４人の脇を通り過ぎてその前に立ち、「はっ、ここに！」全員揃ってることを確認。小さく頷いてわたしは回れ右。聖堂の一番奥に当たる礼拝室へと体を向ける。そこには祭壇があって、聖王教が崇め奉ってる聖王陛下の像がある。そして壁面には歴代の聖王陛下の肖像画が飾られている。

「祈願！」

胸に右手を添えて、聖王陛下の像や肖像画にお祈りする。内容は自由で良いけど、基本的には隊員の無事を祈る。わたしも、隊員たちに大きな怪我が無いように祈る。１０秒近いお祈りを終えて・・・

「ロート・ヴィンデ第１班、出動！」

「「「「はっ！」」」」

聖堂を出て駐車場へと向かう。各隊にフルサイズバン型の輸送車が１０台ずつ与えられてる。それに乗って現場へ向かう。運転は普通は下の者がやるらしいけど、「乗った乗った～」わたしが運転席に乗る。最初は部下たちに・・・

――自分たちが運転しますから！――

――隊長は、自分たちの隊長なんですから助手席に！――

――フライハイト家の次期当主に運転させて、自分たちがのんびり

するなんて無理っす！――

――恐れ多すぎます！――

反対されていたけど、頑なにわたしが運転するって駄々こねたら向こうが折れてくれた。今では世にも珍しい騎士隊長兼ドライバーだ。せっかく免許を持ってるんだし、ペーパードライバーだなんて絶対に嫌。乗れる機会があるなら乗りたい

（そしていつか、助手席にルシルを乗せて・・・うふふ　）

甘い妄想を振り払って車を走らせる。ベルカ自治領のザンクト・オルフェンを出て、ミッドの東西南北を繋ぐハイウェイへと入る。北部から西部へと入ってしばらくした後、通信が入ったことを知らせるコール音が車内に鳴り響いた。

「はい。こちらロート・ヴィンデ第１班」

『こちら陸士１０８部隊・捜査部、アリサ・バニングス二等陸尉です』

助手席に座るこの班での副官が通信に応じる。通信の相手はアリサだったからわたしは「お疲れ～♪」労いの言葉と、「何か捜査に関係する話？」通信の本題がなんなのかと気楽に訊ねる。

『ええ、お疲れ様。捜査情報についてなんだけど、ガジェットのＩ型が中央区画で確認されたわ。こちらで確認したところ、ガジェッ

トが向かっているポイントはミッド西部・レンスター地区のハイウェイ付近。真っ直ぐハイウェイに向かっているわね。高速交通警備隊に連絡を入れて、これ以上車が進入しないように、車の避難も行ってもらえるよう要請しておくわ』

"レリック"を狙って出現するガジェットが発見されたって言う知らせだったんだけど、「レンスター地区のハイウェイ・・・って言った？」わたしはそう繰り返す。

『そうよ。あたしの所属してる１０８部隊の管轄外だから手が出せないんだけど、こっちの管轄内――スメリア地方にもそのハイウェイが通っているから、その時に仕掛けるわ。それでなんだけど、シャルは今どこに居るのよ。運転中のようだけど・・・』

「正しく。そしてわたし達は今、その件のハイウェイを走行中だったりする」

『え〝っ・・・？』

ガジェットが向かってる先であるハイウェイに今、わたし達は居る。ただこれは「ラッキーよ、アリサ」だと思ったから笑って見せる。向こうから来るって言うんだから接敵と同時に斬り刻んであげる。

『そうは言うけど、ガジェットの機影は確認できてるわけ？』

アリサに言われるまでもなく、ガジェットが確認されたって聴いたと同時に後部に座ってる３人が窓から上空を見て索敵に入ってる。

「今だ視認できず、ね。とにかくこのままスメリア地方にまで車を走らせるつもり」

『そう。あたし達もハイウェイに向かってるわ。予定では５ｔｈサービスエリアに陣を敷くから。ガジェットと接敵する前に合流できることを祈るわ』

アリサとの通信が切れる。とにかく今はガジェットが確認できるまで車を走らせる。そしてようやくアリサの所属する陸士隊が管轄とするスメリア地方に入った。アリサの居る５ｔｈサービスエリアまでもう少しと言うところで・・・

「隊長！　ガジェット視認！」

「バニングス二尉に報告します！」

窓から外を覗き込んでる隊員から報告が入った。そして次に「ガジェットＩ型が・・・大型トレーラーに張り付いてます・・・！」信じられない報告が入った。サイドミラーとバックミラーを見て「うそ・・・！？」目を疑った。

コンボイ型の大型トレーラーの運転席にＩ型が２機、その体をねじ込ませていた。しかもトレーラーは蛇行していて、前や周りを走る車とドッカンドッカンぶつかって事故らせてた。ぶつけられた車は防護フィールドが機能しているおかげで大破はしてない。たぶん死者も出ていないはず。

「くそっ！　陸士部隊はこうなるまで動けないのか・・・！？」

「局は常に後手に回ってばかりだ・・・！」

「愚痴ってないでどうするかを考えるぞ！」

「救急隊に連絡完了です！」

そう言い合う部下たちに「運転交替！　トレーラーに車寄せて！」隣に座る副官にハンドルを握らせたうえで、わたしは窓から出て車上へとよじ登る。そして"キルシュブリューテ"を起動させて騎士服へと変身。空は飛べない。都市部での飛行は原則厳禁。管理局から許可を貰えれば飛べるけどね。

「隊長！　バニングス二尉から、今こちらへ向かっている、とのことです！」

「了解！　わたしがトレーラーに乗り移ったら車を停め、事故車の搭乗者を救出して！　ガジェットはわたしとアリサで対処する！」

「「「「はっ！」」」」

わたし達の前を走る一般車に対して、車を路肩に寄せて停車するように呼びかけるモニターが道に沿って何十枚と展開されていってることで、前を走る車が続々と路肩に寄っていく。これでトレーラーにぶつけられて事故ることは少なくなったはずだ。

「もうちょい、もうちょい・・・っと！」

車上からトレーラーのベッドルーム側の屋根へと飛び乗った。運転席の屋根はガジェットで押し潰されちゃってるからね。とりあえずドライバーは居ないみたい。ガジェットに襲われたことで自力で逃げ出したか、それとも引っ張り出されて落とされたか。

「（ドライバーの安否は気になるけど今は・・・）こっちをどうにかしないとね！」

とにかくこのトレーラーを動かしているのはガジェットだし、まずは破壊してトレーラーの支配権を奪い返さないと。ひしゃげた屋根から大きなお尻を突き出してるガジェットへ向けて"キルシュブリューテ"の刃先を向けた時、「お？」アームケーブルが体中に巻き付いた。

「あっちゃあ。コンテナにも居たんだ・・・」

抱え上げられたわたしはアームケーブルの先を見る。連なるコンテナ2台の内、最後尾のコンテナから別のI型が体半分を屋根から突き出させて、アームケーブルをわたしに伸ばしていた。そう言えばコンテナに穴が空いてるのは位置的に確認できなかったな～。いやぁ、失敗失敗。

――フレイムバレット――

そんな時、わたしを捕らえてたアームケーブルが火炎弾4発によっ

て撃ち貫かれた。晴れて自由になったわたしは先頭のコンテナに着地して、両足に魔力を込める。そして屋根を突き破って完全に姿を露わにしたＩ型へ突進。Ｉ型はＡＭＦを展開したけど・・・

「もう遅い！」

突進力を活かした刺突でガジェットのＡＭＦを、さらに装甲を貫いた。ＡＭＦが消えたと同時に刀身に雷撃系魔力を付加して「雷牙月閃刃！」そのまま輪切りにして破壊してやった。

『まったく。油断大敵よ、シャル！』

『あはは、ごめん。助かったよ、アリサ』

アリサからの念話にそう返す。トレーラーの行く手、その反対車線側にはこっちに向かって走り来るＳＵＶタイプの車が１台。運転席にはアリサが乗っていて、バヨネットフォームの"フレイムアイズ"を窓から出してた。そして助手席には１０８部隊の部隊長であるナカジマ三佐の娘の１人、ギンガが乗ってた。

『シャル！　後方から新手のＩ型４機が迫って来てる！　そいつらはあたしが片づけるから、トレーラーはアンタとギンガで対処して！』

『ギンガ・ナカジマ陸曹です！　お久しぶりです、騎士シャルロッテ！』

僅かに速度を落とした車からギンガが飛び出して、魔力で道を作る

魔法・ウィングロードを発動。足に装着してるローラーブーツでウィングロードを疾走して来た。そして先頭のコンテナから次々と現れるガジェットの1機へ突撃。

「せぇぇ～～～い！」

左腕に装着したアームドデバイス・"リボルバーナックル"の手首部分にある歯車のようなスピナー2つが高速回転。確かナックルスピナーって名前で、魔力を加速、回転の力を加えて撃ち出したり、打撃の威力強化を行うことの出来る機構だったっけ。ギンガはその状態のままI型を真っ向からぶん殴り、その胴体に大穴を開けた。

『ギンガは優秀よ。あんたも安心して背中を預けられるはずよ』

『了解。アリサもヘマをしないようにね』

『I型、しかもたった4機に遅れを取るほどあたしはヤワじゃないわよ』

ギンガを降ろしたことでスピードを戻したアリサの運転する車がすれ違って、そのまま去っていった。確かにアリサなら問題なく片付けるだろうし、心配も不安もないわ。

「ギンガ。わたしは運転席の2機を潰してくるから、その間残りのガジェットをお願い。すぐ戻ってくるから無理も無茶もしないように」

「了解です、騎士シャルロッテ」

「出来れば、シャル、って呼んでほしいかも♪」

「あ、えっと、ではシャルさん」

「ん！　じゃあちょっとの間よろしく！」

「はいっ！」

ギンガと小さく笑みを浮かべ合ってからわたしはトレーラーの運転席へダッシュ。その際横目でギンガを見たけど、Ｉ型なんてなんの問題もないって風に蹴り飛ばしたり殴り飛ばしたりしてた。その分コンテナの屋根がへコんだりひしゃげたりしてるけどさ。ま、確かに安心して背中を預けられるね、あの強さなら。

「わたしも頑張らないとね。後輩に恥ずかしい姿は見せられないし♪」

運転席に頭から突っ込んで、こっちにお尻を向けてるＩ型２機のそんな滑稽な姿を鼻で笑いながら・・・

「氷牙月閃刃！」

冷気を纏わせた"キルシュブリューテ"を横薙ぎに振り払った。斬り裂いた個所から体内を凍結させて機能停止にさせてやった。助手席の方は放っておいても良いけど、運転席の方は退かさないとトレ

ーラーを停められないから、「あらよっと」追撃の斬撃をお見舞いしたらＩ型は音を立てて瓦解した。

「ちょっとお邪魔」

破片を払い除けながら運転席に座って『ギンガ。今からブレーキ掛けるから気を付けて』コンテナの屋根の上で戦ってるギンガに注意するよう促す。

『了解です！』

Ｉ型によって結構メチャクチャにされてるけど、ブレーキやクラッチ、シフトレバーもなんとかなりそう。すぐさま停車させるためにブレーキを踏む。急ブレーキだとギンガが振り落とされるかもだから、出来るだけゆっくりと減速。そして完全に停車したことを確認してシフトレバーをニュートラル、ハンドブレーキを掛ける。

「あとは・・・！」

コンテナ側のＩ型の掃討だけ。運転席の屋根から飛び出してコンテナへと駆け出そうとしたんだけど・・・

「あ、シャルさん。こちらは終わりましたよ？」

２つのコンテナの屋根や壁はもう完全にひしゃげてて、その内部で「ふぅ・・・」手の甲で額の汗を拭うギンガの姿を見た。コンテナ内にはダンボールや金属製のケース、それに１型の残骸も多く散乱

してる。だけどその中で「レリックケース・・・・！」を発見した。

「とりあえずお疲れ様、ギンガ」

「シャルさんもお疲れ様でした！」

わたしとギンガでケースの中を確認。収められてたのは"レリック"で間違いなかった。蓋を閉め直していると『シャル、ギンガ。アリサだけど、そっちの状況は？』アリサから通信が入った。トレーラーの停車および"レリック"の回収を終えたことを伝える。

『そ。ギンガ、よくやったわね。こっちもガジェットの殲滅を完了。トレーラーのドライバーと思われる男性も発見、無事に保護したわ。これで任務完了よ。事後処理があるから、２人はそのまま待機でお願い』

「了解です！」

「ん。判った」

こうしてハイウェイ襲撃事件は幕を閉じた。ちなみにルシルからはな～んにもお褒めの言葉がなかった。チェッ。

Ｅｐｉｃ７－Ａホテル・アグスタ～Ｔｒｏｕｂｌｅｓ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

海鳴市への出張任務を終えて数日後。アイリたち機動六課にまた新しい任務が入った。ミッドチルダの首都・クラナガン、その南東にあるホテル・アグスタで警備任務。

「八神部隊長。いつでも出発できますぜ！」

「ん、了解やヴァイス君。それじゃあ、みんな。ヘリに搭乗や」

ヘリポートに居るアイリ達は、六課専属ヘリパイロットのヴァイスが操縦するヘリに乗り込み始める。ここから現場までは空の旅になるね。はやて、なのは、フェイトの隊長陣。キャロ、エリオ、スバル、ティアナのフォワード陣。はやてとフェイトそれぞれの補佐を務めるリインとアリシア。そしてアイリとシャマルの医療班が乗り込むんだけど・・・

「っと、その前に♪」

ヘリポートまでお見送りに来てるマイスターの方を見る。マイスターは隊舎に常駐する特務調査官だってこともあって、隊舎から離れられないからいっつも留守番になる。この前の出張任務でもひとり隊舎に残ったしね。一緒に海鳴市に帰りたかったな～。

『マイスター、行ってきます！』

『ああ、いってらっしゃい。気を付けてな』

マイスターに手を振ると、マイスターも小さく手を振ってくれた。そしてアイリもヘリに乗って、「出発します！」ヴァイスがヘリを離陸させた。アイリとキャロは窓から外を覗き込んで、今もアイリ達を見送ってくれてるマイスターに手を振る。マイスターは右目だけでも視力は良いから、ちゃんと気付いて手を振り返してくれた。

「ルシルさん、手を振り返してくれました♪」

「やったねキャロ♪」

「うんっ！」

キャロと喜び合う。それだけでやる気は限界突破だよね。そして現場に着くまでの間、はやて達から今日の任務について、フォワード達へのおさらいが始まった。ホテル・アグスタで開催される骨董美術品オークションの会場警備と人員警護が任務。そのオークションに、取引が出来ると管理局から許可が下りてるロストロギアがいくつも出展されるって話。そのロストロギアを"レリック"と誤認したガジェットが現れる可能性が高いというね。ホントに馬鹿だよねガジェットって。

「――で、この手の大型オークションとなってくると密輸物の取引の隠れ蓑にもなったりするから、その点も含めて油断大敵だよ」

「昨夜からシグナム副隊長とヴィータ副隊長、それに他の隊員数人とザフィーラが現場入りしてる。私となのは隊長、フェイト隊長は屋内での警備。フォワードは副隊長の指揮の下で屋外での警備や」

「警備はずっと気を張っていけないから大変だけど、みんな、しっかりね」

「「「「はいっ！」」」」

なのはにそう言われて元気よく頷き返すフォワード４人。それからホテル・アグスタに到着するまでの間、現場の見取り図やそれぞれの外での配置図や警備ルートの再確認をして、ようやく現場に到着。ホテルの屋上のヘリポートに着陸して、みんなは外へと出てくんだけど・・・

「あ、ヴァイス君。あなたも少し降りていてもらえるかしら？」

シャマルがすっごい笑顔で操縦席に座るヴァイスにそう言った。輸送室に残るのははやてとなのはとフェイト、あと薄いケース３箱を胸に抱えてるシャマル、あとアイリ。ヴァイスが「え？　何でですか、先生」そう訊き返すと、「どうしても♪」シャマルは有無を言わさずに出口を指差した。

「ヴァイス君。私たち、これから着替えるから出ていてくれると嬉しいんだけど・・・」

なのはがそう言ったことで「うっす！　すいません、すぐ出ます！」顔を赤くしたヴァイスが慌ててヘリの外に出てった。シャマルは「あらあら。初心なのね～♪」微笑ましく見送って、ケースを長椅子に置いて開いてく。はやて達は思い思いに制服を脱いでって下着姿になったんだけど・・・

「なんや改めてこんな格好になると、格差を見せつけられてまうな～」

はやてが自分の胸となのはやフェイトの胸を見比べて、それはもうガックリと肩を落とした。はやてっていろいろと小さいんだよね。中学生の時はそんなに差はなかったんだけどね。なのはは少し恥ずかしそうにしながら「女の子の魅力はそこだけじゃないよ？」フォローを入れて、「うん。はやては魅力的な女の子だよ」フェイトも同意。

「そうですよ、はやてちゃん。それにはやてちゃんのサイズでも十分じゃないですか。ルシル君だって満足しますよ♪」

シャマルがそんなことを言うものだから、はやてだけじゃなくてなのはとフェイトも「っ！」顔を真っ赤にした。一体ナニを考えたんだろうね～。シャマルは絶対に厭らしい意味で言ったわけじゃないよ。

「そもそも、はやてがみんなの胸を揉むからダメなんじゃないの？」

そんなはやてにアイリはポツリと漏らしてみた。はやてって、親し

い間柄の女の子の胸を揉む趣味を持ってるんだよね。アイリだって最近は揉まれるようになったし。

「でも確かに人に、その、揉まれると大きくなるって言うよね」

「お返しって感じでなのはちゃん達からも揉まれてるはずなんやけどなぁ～。同じ日本人やのに、どうしてこう差が出るかな～。遺伝やろか？」

「それもあるかもね」

「はやてちゃんのお母さんってどんな感じだったの？」

「う～ん。どうやったかな～。そんなに大きなかったかもしれへん」

そんな風にお喋りしてるはやて達にポケットから取り出した携帯端末を向けて、ピロリン♪と写真を撮った。すると「なんで撮ったの！？」はやて達に詰め寄られる。ベルカ時代の頃、エリーゼも胸が小さいことを悩んでたのは聞いてる。で、服飾店の主だったターニャがエリーゼのスリーサイズをマイスターに伝えて、そのサイズでも問題ないかを訊いたってことも知ってる。

「マイスターに送って、はやての今の胸のサイズでも大丈夫？って訊こうかと・・・」

だからアイリも同じようなことをしようかな、って思ったんだけど。

「アカぁぁぁぁ〜〜〜〜ン！！」

「「ダメぇぇぇぇ〜〜〜〜！！」」

どうしてかなのはやフェイトからも大反対を食らった。アイリは「別に裸じゃないんだから大丈夫だよ」そう言いながら送信先をマイスターの端末宛に設定してると、「だからダメ〜〜〜！」フェイトに取り上げられた。

「あー、取った〜！」

「取るよ！　こればかりはさすがに問答無用で取るよ！」

「アイリだって見られたら恥ずかしいでしょ！？」

なのはに訊かれたことにアイリは「別にかな。だってルシルのこと大好きだもんね♪」そう答えた。好きな人になら全部をさらけ出しても大丈夫。まぁ少しは照れくさいかもだけどね。

「なのはとフェイトも、ルシルのこと好きでしょ？」

「た、確かに好きだけど！　それはあくまで友達としてであって！」

「うんっ！　だから写真を送るのははやての下着姿だけにして！」

「ん〜〜・・・、うん、判った」

「ちょっ！？　ちょちょちょちょちょちょ、おぉぉーーーい！　ここに来て裏切りとかあんまりやよ！　アイリ、送ったら本気で怒るよ！」

結構な眼力で凄まれたから「や、ヤー・・・」アイリは大人しく従った。写真データも消すように言われたから消して、はやて達が着替えるのを黙って見守る。

「そやけどせめてもうちょい身長が欲しいな～。私、元学校組で一番チビやし。アリシアちゃんに身長追い抜かれた時の絶望感、いま思い出しても泣きそうやわ」

「あー、アリシアちゃんの身長も急激に伸び出して来たもんね～」

「あれは家族全員が驚いたよ。プレシア母さんも結構背が高かったし、遺伝かも」

「遺伝、やっぱり遺伝かぁ～。この低身長だけはどうにかしたいわぁ。ルシル君の身長と釣り合ってへんからな。シャルちゃんがルシル君と並ぶと絵になるんが、かな～り悔しかったりする」

「シャルちゃんも結構高いもんね～」

胸から身長の話題に切り変わった。はやては自分の身長が低いことを気にしてるけど、「はやてはそのままで良いと思うけどね～」アイリは独り言を呟く。はやての今の身長が、マイスターに一番合うと思うからね。そして着替え終えたはやて達の姿に・・・

「きゃぁぁぁ♪　はやてちゃんもなのはちゃんもフェイトちゃんも、とっても綺麗で可愛いわ♪　あんなに小さかった3人も、お化粧が似合う歳になったのね～。はぁ。時が経つのはあっと言う間ね」

シャマルはメロメロ。そして思い出を振り返ってるのか目を閉じてうっとりしてる。アイリは「ねえ。写真、撮って良い？」はやて達に確認してみた。マイスターに見せてあげたい。はやての綺麗なドレス姿。本当に綺麗なんだもん。

「うん。私からお願いするわ、アイリ♪」

「あ、私もついでで良いから撮ってくれる？」

「私もお願い。あとでデータちょうだい」

「ん！」

はやてとなのはとフェイト、ソロで3枚ずつ、あと3人並んだのも3パターンで撮った。アイリってば写真の才能があるかも。結構良いものが撮れたよ。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒アリシア†††

ここホテル・アグスタで開かれるロストロギアを含めたオークションに備えて、会場警備や人員警護の仕事を請け負ったわたしたち機動六課。実働部隊のメンバーじゃないわたしは、基本的にはフォワードのフォロー、見守りみたいな立ち場かな。進んで戦闘には参加

しない方針だ。
フェイト、なのは、はやての隊長陣は屋内。屋外警備はシグナムとヴィータの副隊長2人、わたしとシャマル先生とザフィーラ、それにリインとアイリ、それに加えてフォワードのエリオ、キャロ、スバル、ティアナになる。うん、圧倒的過ぎるね。
「今回の任務も、八神部隊長と副隊長たちが一緒ですから心強いですよね」
「だね～。この前の海鳴市での出張任務でも後ろに居てくれたから、安心してロストロギアを確保できたもんね」
「コンビネーションも練習通りにしっかりと出来ましたし、褒めてもらえましたから嬉しかったです！」
「けどやっぱ、あたしってイマイチだったと思うのよね～」
「あー、ま～たそうやって自分を悪く言う～。なのはさんとヴィータ副隊長、それにフェイトさんとシグナム副隊長にも褒められたじゃん！」
「それはあくまでコンビネーションの出来でしょ。あたし個人としちゃ、まだまだだって思うわけよ」
「えー！　ティアも強くなったよ！　指揮だってしっかりしてるし！」
持ち場に着くまで、フォワードの4人がちょっと前にやって出張任

務での出来事を喋る。その際にフォワード４人だけでロストロギア（スライムのような奴だった）を撃破、そして封印を行った。その手際にフェイト達が４人を褒めてたっけ。スバルが「ですよね？アリシアさん」わたしに話を振ってきた。

「うん。わたしだって、入隊時と比べてみんな、本当に成長したって思ってる。それにね。ヴィータから、４人が調子に乗るかもしれないから黙ってろ、なんて言われてるんだけど。ルシルもね、みんなのコンビネーション、それに個人的な成長を褒めてたよ」

出張任務の報告をルシルに出した際に、フォワードの戦闘映像も一緒に提出したみたい。んで、それを観たルシルは４人のこれまでの成長を褒めて、そしてこれからの成長に期待してた、ってフェイト達から聞いた。

「ルシルさんが！？　ティアさん！　ルシルさんにも褒められるなんて、やっぱりすごいことなんですよ！」

キャロが満面の笑顔でティアナにそう言った。キャロってば本当にルシル、それにアイリが好きなんだよね。保護責任者側としてはちょっと妬けちゃうくらい。

「まぁ、あのルシルさんにまで褒められたとなると、それはかなり嬉しいけど・・・」

ルシルって実質チーム海鳴で最強だし、魔導師ランクも空戦ＳＳランク。そんなルシルに褒めてもらえれば、きっと誰だって嬉しいと

思う。もうわたしじゃルシルにギャフンと言わせられない。ホント手の届かないところにまで行っちゃったよ。でもま、それでティアナの自分を卑下にする考えも少しは改まったのか、「その評価が暴落しないようにしっかりしないとね」そう自分を納得させた。

「あの、少し話は変わりますけど。ルシルさんが元々、八神部隊長やシグナム副隊長たちと家族だったという話を聞いたんですけど、それって本当なんですか・・・？」

「うん、そうだよ。・・・はやてとシグナムたち騎士の関係って判る？」

エリオからの質問に、わたしはエリオだけじゃなくてスバル達にも向けてそう訊き返した。そうしたらティアナは「スバル。あたし達の中だとアンタが一番詳しいでしょ」スバルに一任した。

「ええ！？　えっと、ギン姉やお父さんからちょこっと聞いただけだなんだけど・・・。副隊長たち、シャマル先生とザフィーラ、それとリイン曹長は、八神部隊長が個人で保有する特別戦力で、家族だってこと。でも出自とか能力の詳細は特秘事項になってるから、詳しいことは知らない・・・。大体そんなところ、です」

"闇の書"関係の話は未だに局内でも秘匿扱いだから、スバル達が知らないのも当たり前な話。ティアナは「やっぱレアスキル持ちはそうよね」って呟いたのが聞こえた。ティアナってなんかこう・・・自分自身に対して自信が無いというか、かなり危ういんだよね。いつかプライベートで話してみようかな。

「うん。でも、そこにあと2人入るんだよね」

「ルシルさんと・・・アイリ？」

「キャロ、正解。結構前になるんだけど、ルシルとアイリも八神家の一員だったんだよ。ルシルははやてと同じ家で過ごして、わたし達と同じ小学・・・プライマリースクールに通ってた。それに本局捜査部・特別技能捜査課じゃ、はやてをリーダーとして捜査も一緒にしていたんだ。はやてとの付き合いの長さで言えば、ルシルが一番だね。そして、はやてを大事にする想いもまた一番強いかも知んない」

「あ、聴きたいかもです、その話」

「あたしも気になります」

キャロとティアナが食いついてきたけど、「あとは念話で話そうか」そろそろ持ち場に着かないと怒られちゃう。というわけで、話は念話に切り替えて続けることに。

『まず、はやてとルシルは天涯孤独の身だったんだ。はやてはご両親を事故で亡くしてて、ルシルは家族を・・・殺されてる』

『『『『っ！？』』』』

（あ、ヤバい。これってわたしが言っていい事じゃないよね・・・。

ごめんっ、はやて、ルシル！）

心の中で合掌して謝る。でももう言っちゃったから後には引けない。

『２人ともその時は８歳。はやては海鳴市の家で独り暮らし。しかも下半身が不自由で車いす無しには移動できない体。そしてルシルは犯人を捜して独りで次元世界を旅してた。そんな時にルシルは海鳴市に降り立って、偶然はやてと出会った。２人は孤独を埋め合うように一緒に暮らし始めた。その後でシグナム達が一緒に暮らすようになったの。出会いの経緯は特秘事項に抵触するから省くけどね』

『なんか、八神部隊長とルシルさんの歴史を知れてる今って、かなりレアな状況よね』

『はい。なんかドキドキします』

『ルシルさんのご家族も・・・殺された・・・』

『スバルさん・・・』

『・・・。シグナム達がはやてやルシルと一緒に暮らし始めて少しした頃、はやての下半身をマヒさせてたものが徐々に上半身にも移って来て、余命幾ばくもない状態だと判った』

『『『『え・・・！？』』』』

今のはやての元気さを見れば考えもしないだろうし、想像も出来な

いかな。

『で、はやてを救うには莫大な魔力が必要だった。そのために真っ先にルシルが動き出した。違法魔導師を襲撃してリンカーコアを奪うって手段で、ね。ルシルに続いてシグナム達も参加。そうしてルシル達はこう名乗って本格的に活動を始めた。パラディース・ヴェヒター、って』

パラディース・ヴェヒターに反応したのは『あの有名な！？』ティアナだけだった。エリオとキャロは年齢的に知らなくても問題ないかな。そんで『え、なに？　そのパラなんとかって・・・』スバルも知らないわけか。まぁ１０年前の話だし、知ってるティアナが特別かぁ。

『あんたね・・・。まぁいいわ。パラディース・ヴェヒターってのは、アリシアさんが言うように指名手配された違法魔導師を何百人と狩り続けて、一時的に次元世界から魔法犯罪を減少させたことまである、すご腕の騎士集団だったのよ。今は管理局員だって噂を聞いてたけど、副隊長たちのことだったのね・・・』

『『そうだったんですね』』

『そうだったんだ』

管理局には守護騎士クラスのベルカ騎士が結構在籍してるから、そうそう特定できないよね。というか地味に強い騎士が多いし。ルミナとか、フィレス一尉とか・・・。

『何も問題なく魔力を回収していったルシル達だったんだけど、その方法があるロストロギアを使うものってわけで、その頃はまだ嘱託だったフェイト達がルシル達の確保に動いたんだけど。ルシル達は当然止まらなくて、次元世界の犯罪者どころか管理局まで敵に回したんだ。それからいろいろあって、はやては無事に救われて、八神家は保護観察処分の管理局従事ってことで管理局に入った』

『八神部隊長を助けるために、ルシルさんや副隊長たちは次元世界に戦いを挑んだんですね』

『確かに八神部隊長を大事に想っていたからこそ出来る行動ですよね』

『でもこれで納得できました。八神部隊長とルシルさんが事務的な話をしていたんですよ。その時、他の隊員が八神部隊長とルシルさんを見て、仲の良い姉弟だったのに六課ではあんなつまらない会話しか出来ないんだな、って寂そうに言ってたんで』

エリオがそう言ったのを締めに、念話でのお喋りは終わり。それぞれが持ち場の警備に専念する。わたしも受け持ったルートを巡回する。そんな中で、『あの、アリシアさん』スバルから念話が入った。

『どうしたの？　スバル』

『あの、さっきのルシルさんの話でちょっと訊きたいことが・・・』

『うん。わたしに教えられることなら・・・』

『ありがとうございます。それで、その・・・ルシルさんのご家族を殺害した犯人は今、どうなってるんですか・・・？』

『現在進行形で、ルシルは救ってるよ』

ルシルの言い方をそのまま使ってみた。ルシルは"エグリゴリ"を倒すんじゃなくて、救う、って表現で撃破していってる。当然スバルは『救う？　え？　逮捕の間違いじゃ・・・？』困惑してるっぽい。

『ルシルの家族を殺害したのは、ルシルの遠いご先祖が造り出した人型の魔法兵器でさ。元々はセインテスト家の味方だったんだけど、敵側に洗脳されて狂っちゃったって。それから何千年とソイツら――エグリゴリとセインテスト家の間で戦闘を続けた。ルシルは言ってた。洗脳されて望んでもいない破壊行為をしてるエグリゴリを撃破して救うことが、セインテスト家に生まれた者の存在意義なんだって・・・』

『・・・ルシルさんは、辛くないんでしょうか、悔しくないんでしょうか、悲しくないんでしょうか。自分の家族を殺されたのに、救えって責務を負わされて・・・』

スバルは少し黙った後、そう言ってルシルの心情を気遣った。スバルも母親を失っちゃってるからね。自分とルシルを重ねてるっぽい。

『それはわたしなんかが口にしていい答えじゃない。そればっかりはルシル本人に訊かないと。・・・ねえ、スバル』

『あ、はい・・・』

『そろそろルシルを許してあげてほしい』

スバルはまだルシルとちゃんと話せてない。クイント准陸尉が亡くなった原因をルシルに押しつけちゃった幼い頃のスバル。ルシルは今もクイント准陸尉の死に苦しんでる。そこにスバルからも避けられてるとなると、その精神的な負担は結構なものだと思うから。

『解って・・・るんです。ルシルさんが悪いんじゃないってことは。ずっと前から。でも、ルシルさんと話そうとすると、お母さんのお葬式の時にあたしが言った暴言と、土下座して謝るルシルさんの姿が頭の中に浮かんで、どうしても逃げ出しちゃうんです。あたしが弱いから、ルシルさんをまだ苦しませる。だけどもう・・・逃げてばかりもいられない、ですよね。ルシルさんの家庭の話を聴いたら。アリシアさん、教えて頂いてありがとうでした！』

『はい、どうも♪』

スバルはスバルで悩んで、ようやくルシルと話すことを決心したみたい。ルシルは優しいから、スバルを傷つけるようなことは言わないと思うし、たぶんこれで解決だ。あたしも巡回を続けてると、「あ、ティアナ」を発見。けど、何か深く考え事してるみたいでぼけーっと佇んでる。

「ティアナ」

「っ！　あ、アリシアさん・・・」

「何か考え事？　お姉さん、相談に乗っちゃうよ？」

「いえ、相談するほどでもないので・・・」

そう言ってティアナは小さくお辞儀して、わたしに背中を向けた。わたしの勘が言ってる。今、ティアナを放っておくと何か仕出かすって。だからわたしは「ティアナってさ。自分が凡人とか思っちゃうタイプでしょ」鎌をかけてみる。

「っ！？」

目を見開いてわたしの方に振り返ったティアナは「どうしてそれを・・・！？」そう訊いてきた。鎌かけ成功だ。

「解るよ。だってわたしとティアナ、似てるもん。周りがすごいとどうしても自分に自信が持てなくて、卑下することもあるよね・・・」

「あ、あー・・・、アリシアさんの周りって・・・」

「そ。フェイト達チーム海鳴のみんな。１０年と一緒だから、その成長を見せつけられてきたわけ。喜ばしい半面悔しかったよ。どん

どん置いてけぼりを食らっちゃって・・・」

わたしの体は年相応に成長してくれたけど、魔力の才能だけは成長してくれなかった。事故で仮死状態になる前にすでに魔導師としては完成しないって解ってたとは言え、息を吹き返せた奇跡もあるってことで期待しちゃってた自分も居たわけで。

「ねえ、ティアナ。ティアナは他の子のこと、どう見てる？」

「・・・スバル達のこともそうですけど・・・。この機動六課って言う部隊そのものにちょっと疑問があるんです」

そう言ってティアナは、六課が保有してる戦力が尋常じゃないってことを指摘した。確かに一般の機動隊でもこれほどの戦力が保有しないよね。するとすれば特務隊くらい。で、その後はにやっぱりティアナの悪い癖みたいな発言が飛び出して来た。ロングアーチのみんなが将来性のあるエリートだって言うし・・・

「僅か１０歳でＢランクのエリオ、竜召喚なんて激レアで強力なスキルを持ってるキャロも、フェイトさんやアリシアさんの秘蔵っ子ですし」

「いやいや、別に秘蔵っ子ってわけでもないよ」

それに１０歳でＢランクってことに驚いてたら、うちの妹や親友たちはどうなわけ。ＡＡＡやらＳやらと一緒に過ごしてきたわたしは、それでも頑張ってきたよ。

「スバルは・・・危なっかしいですけど、潜在能力の塊で・・・。それに優しい家族のバックアップもあります・・・。そうなるとやっぱり、あたし自身の凡人度と言うか、そういうのが浮き彫りになってしまって・・・」

エリオ達もそれなりに濃いからな～。だけどそれを言ったら「ティアナだって、誇れるものあるでしょ」だよ。小首を傾げるティアナに「幻術だよ、幻術」あたしは呆れながら指摘する。

「今のレベルじゃ誇れるものじゃないですよ・・・」

「だったらエリオもキャロも、スバルだってまだまだだよ。というかね、ティアナ。あなたは焦り過ぎてる。なのはの個別スキルの教導も始まったばっか。これから伸びていくんだよ。そもそもスバル達のことがすごいって思うのは、ティアナがちゃんと指揮してるから！」

「あの・・・」

「いい？　ティアナ。あなた達４人はこれからなんだよ。スタート時点で自分と他人を比べるのは感心しないよ。これから伸びていく。今は焦ることなく、なのはの教導官としてのスキルを信じて、スキルアップしていってほしいかな。身内贔屓になっちゃうけど、なのはは本当にすごいから」

少しでもティアナが抱いてる劣等感のようなものを取り払いたい。

ティアナはわたしより重症だもん。わたしの願いの言葉に、「それでもお兄ちゃんは、死んだんです・・・」ティアナが何かボソッと呟いたのが聞こえた。

「え、ごめん。聴こえなかった」

「いいえ。ただの独り言ですから。アリシアさん。それでもあたしは、早く強くなりたいんです。・・・では」

わたしにお辞儀をして、ティアナは足早に自分が担当するルートの警備に戻っちゃった。わたしは頭をわしわし掻きながら、「また話そうっと♪」ティアナに解ってもらえるまで話そうっと決めて、自分のルート警備に戻った。

Ｅｉｐｉｃ７－Ｂホテル・アグスタ～Ｔｅａｍ　Ｓｃｉｔａｌｉｓ～

第１管理世界ミッドチルダ。その首都であるクラナガンの南東は自然が溢れている。その森の中に建つホテル・アグスタ。今現在、そこでは骨董品オークションが開催されている。そんなホテル・アグスタを、鬱蒼と生い茂る木々の中より眺めている人影が３つ。体格から見て１人は成人女性、他２人は１０歳に満たないほどの子供だろう。子供２人はクリーム色をしたお揃いのフード付きコートを着ている。その下に着ている服装はバラバラだ。

「こちらチーム・スキタリス。現場、ホテル・アグスタに到着よ」

成人女性は、純白のロングワンピース、水色の薄い肩掛け（ショール）、白いつばの広いハットを被っており、折りたたんだ白い日傘を持っている。そしてレンズの大きな眼鏡を掛けている。深窓の令嬢という表現が一番しっくり来るだろう。彼女は目の前に展開されているモニターに映る者に向かって、自身が所属しているチーム名と、何かしらの仕事を成すための現場に到着したことを報告した。

『ＯＫ、確認した』

モニターに映る者、それは１０代後半ほどの少女だった。服装は学校の制服のようで、白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが１本入った黒のプリーツスカート、腰に黒いセーターを巻いて

いる。身長は１６０ｃｍほど。栗色のボブで、左目が前髪で隠れている。

「・・・眠い・・・・」

彼女の隣に居る子供、声からして少女がそう言って目を擦る仕草をする。コートの下に着ている服は、黒のノースリーブのセーラー服。セーラー服特有の大きな襟（ジョンベラ）は前後共に燕尾となっている。セーラー服の後ろ側の裾は膝裏までの長さがある。捲かれている黒いスカーフにはスミレが描かれていた。インナーは立て襟の白いノースリーブのブラウス。ファスナー仕立ての前立ては黒のライン。下は黒いプリーツスカート。そしてスカートの裾から少し出るくらいの長さの黒のスパッツ。両手にはめられたグローブの手の甲には半球状の装甲があり、真ん中に切れ目があることから開閉するようだ。

「もう少し待って。これからお仕事だから」

もう1人の少女がそう言って、眠いと漏らした少女の頭を撫でた。その少女の服装は、黒色を基調としたビスチェワンピースで、胸元には大きなリボンをあしらっている。そして両手には、手の甲に半球状のクリスタルが付いた手袋をはめている。

「ん。判った・・・。起きてるように頑張る」

少女は身を寄せ合うようにして、成人女性の見るモニターを見上げた。女性は「娘の1人が今にも眠りそうだから、そろそろお仕事を始めるわね」モニターに映る少女にそう伝えた。女性は側に居る少

女たちの母親らしい。眼鏡の奥にある瞳はとても優しいもので、母性に溢れているのが良く解る。

『ＯＫ。メガーヌ。父さ――プライソンからの任務を再通達するよ。えー、骨董美術オークションに出展される、ある金属板を取って来てほしいのね。手段や被害は問わないから、必ず手に入れて』

「手段や被害は問わないって・・・。あの人は本当に大雑把ね。私たちのやり方でやらせてちょうだい。ベータ、あの人――プライソンに期待して待っているように伝えておいて♪」

『ＯＫ。ルーテシア、リヴィア。メガーヌ・・・お母さんの言うことをちゃんと聞いて、お仕事も頑張って』

モニターに映る少女、ベータが女性と子供２人の名前を口にした。メガーヌ、ルーテシア、リヴィア。メガーヌは首都防衛隊・ゼスト隊の分隊長だった女性だ。広域指名手配犯・プライソンの秘密工房への潜入捜査にて、モニターに映るベータを始めとしたサイボーグに敗れ、ＭＩＡ――行方不明扱いされていた。

そしてルーテシアとリヴィアは、事件後に親戚に預けられたという名目でプライソンに引き渡された子供たちだ。そしてどうやら３人とも記憶の改ざんを受けてしまっているようだ。そうでなければ、自分たちを襲ったプライソンやベータに対して友好的な態度を取るわけがないからだ。

「はーい」「ん・・・」

『ＯＫ。あと、ガジェットドローン（グレムリン）のＩ型４０機とⅢ型１０機をそっちに送ったよ。適当に利用するようプライソンも言ってくれてるから、ルーテシア、あなたの無機物操作魔法・シュテーレ・ゲネゲンで操ってＯＫだから』

ベータとの通信が切れ、メガーヌは改めてホテル・アグスタへと目をやった。

「じゃあ、始めましょうか。女の子なんだからスマートに行きましょ。まずは屋外警備をやってる管理局員をどうにかしないといけないわね・・・」

手に持っていた日傘を開き、森から出ようとしたメガーヌだったが・・・

「ママはここで待ってて。ベータの言ってたように管理局員はガジェットドローン（グレムリン）を使っておびき出すから。ターゲットを取ってくるのは・・・――」

「それ、わたしがやる」

ルーテシアが囮を、そしてリヴィアが本命を買って出た。メガーヌは「途中で眠っちゃうといけないからね」眠いと言っていたリヴィアの意見を却下し、代わりに自分が行くことを言外に伝えた。しかし「わたしは平気。ママはここで待ってて」リヴィアは聞かなかった。

「ママ。こうなったリヴィアは考えを変えないよ」

「この頑固さは誰に似たのかしら？」

眠気眼から完全にやる気満々なしっかりとした瞳になっているリヴィアに、メガーヌとルーテシアは呆れを見せた。それから3人は、屋外を警備している機動六課・実働部隊の巡回ルートをしっかりと見て憶え、ガジェットドローンの出現を待った。

「あ、来た」

ルーテシアがポツリと漏らす。ホテルを全方位から包囲するような陣形で姿を見せたガジェット群。まずⅠ型が１０機、Ⅲ型が２機の第一波。ガジェットの視界映像を観るため、メガーヌはモニターを展開した。

ガジェットの迎撃に出たのは、スターズ２のヴィータ、ライトニング２のシグナムの両副隊長、そして狼形態のザフィーラ、医務官であり融合騎のアイリ。戦闘のプロであるシグナムとヴィータはたとえ能力リミッターを掛けられていようと、機械兵器程度には遅れを取らないは道理。

「あらあら。ベルカ式の騎士は本当に強いわね～。しかも赤い子と真っ白な子がユニゾン。うちの子と同じ融合騎なのね」

「リヴィアでも勝てないよね、さすがに」

「む。近接格闘形態（モード・コンバット）でアギトとユニゾンして、あとスキルを使えば

・・・勝てる、たぶん・・・。それに向こうのは氷結系だし。こっちの融合騎は炎熱系だから・・・おそらく・・・」

両手を腰に当てて頬を膨らませたリヴィアだったが、最後には尻すぼみになった。ルーテシアは可愛い妹の身の安全の為に「しっかりとグレムリンを囮にするよ」気を引き締めた。シグナム達を引き付けることが、リヴィアの仕事のフォローになると解っているからだ。

「アギト。起きて」

「うん・・・？　な～に？　リヴィー・・・？」

リヴィアがポケットに呼び掛けると、ポケットから小さな少女が顔を覗かせた。アギト。真正の古代ベルカ式の融合騎。古代ベルカ時代ではルシリオン達セインテスト家の一員だったが、"堕天使エグリゴリ"の1機であるレーゼフェアの記憶改ざんを受け、ルシリオンを始めとした古代ベルカ時代での思い出を深層意識に封じ込められている。

「これからお仕事。ポケットに入ってると、わたしのスキルでアギト酔っちゃう」

リヴィアはそう言ってポケットから這い出てきたアギトを両手に乗せ、「ママお願い」メガーヌの方へと差し出した。メガーヌは「気を付けてね、リヴィア」微笑み、目を擦っては大きなあくびをしているアギトを受け取った。

「お姉ちゃん。準備ＯＫ。いつでも行けるよ」

「うん。アスクレピオス、行くよ」

ルーテシアは両手にはめているグローブ型のブーストデバイス・"アスクレピオス"にそう語りかけ、足元に紫紺色に光り輝く召喚魔法陣を展開した。

「我は乞う。小さき者、羽搏く者。言の葉に応え、我が命を果たせ。召喚。インゼクト・コンパニエ」

召喚の呪文の詠唱をルーテシアが終えると、魔法陣よりカエルの卵のようなものが何本も伸び出して来た。コンパニエは中隊を意味し、名に相応しき数の金属製の小さな羽虫が孵った。

「ミッション・オブジェクトコントロール。いってらっしゃい、気を付けてね」

主人であるルーテシアからの指示を受けたインゼクトが小さな羽音を立てて彼女の元から飛び立っていき、第二波、第三波のガジェット達に取り付いていく。そんな中、ある1機のインゼクトはガジェットに取り付くことはせずにホテルの敷地内へ進行する。プライソンが狙っている物品がどこにしまわれているかを確認するためだ。

「シュテーレ・ゲネゲン」

ルーテシアがインゼクトを中継点としてガジェットを間接的に操作

し始める。ただ与えられた命令を遂行するだけのガジェットに人の意思が加わることで、その動きがガラリと変わる。シグナムの斬撃を防ぎ、ヴィータの攻撃を軽やかに躱し、ザフィーラに連携攻撃を開始した。

「あらやだ。赤い子がホテルに向かっちゃうわ」

召喚師（ルーテシア）の出現に、彼女たちがホテル側で警戒しているフォワードのスバル、ティアナ、エリオ、キャロの元に行かないかをシグナムが危惧し、ヴィータにそのフォローを回るように指示を出したからだ。そしてその考えは割と的を射ていた。

「させない。ブンダー・ヴィヒト。オブジェクト15機、転送移動」

ルーテシアがさらに召喚魔法を発動させる。まずフォワード4人の元に8機のガジェットⅠ型を送り付け、ヴィータにはⅢ型1機とⅠ型6機を送り付けた。ヴィータにホテルへ戻られると、それだけでリヴィアの安全が脅かされるからだ。

「リヴィア。このライフル型のデバイスを持ってる金髪の女の子には気を付けてね」

「・・・ん。判った」

メガーヌがモニターに映るアリシアを指差した。ホテルの前から一切動こうとはせず、フォワードが迎撃に向かうのを見送っていた。これは当初のアリシアの行動方針に則ったものだ。あくまでフォロ

ー役。フォワードの実戦で積む経験値を横取りしないために。

「うん。局員が良い具合にホテルから離れていってるわね」

フォワードもガジェットに釣られてホテルから徐々に離れていくその様子を見て、メガーヌが満足そうに頷いた。

「リヴィア、ターゲットの在り処を見つけた。今の内に向かって。グレムリン程度じゃ、あの人たちを食い止められる時間は長くない」

「ん。行ってきます、ママ、お姉ちゃん」

――ケレリタース・ルーキス――

リヴィアが音もなく何も無い空間に溶け込むように消えた。彼女の固有スキル名はケレリタース・ルーキス。意味は光速。いわゆる転移能力であるが、彼女自身も未だに理解していない能力の本質が隠されている。

「ルーテシア。リヴィアがお仕事を終えるまでしっかりね」

「うんっ」

ルーテシアはガジェット群を操作し、シグナム達もホテルから引き離しつつ足止めに徹しさせる。そしてリヴィアも、オークションに出品される骨董品がしまわれている場所へと続く場所に到着した。まずは地下駐車場で、六課の隊員とは別にホテルの警備員が警固し

ている。そしてリヴィアは音もなく、姿を見せることもなく、警備員たち数名の顎を真横から掌底で打ち抜いていった。

『ブイ』

一瞬にして昏倒させられた警備員たちを背に、モニターに映るリヴィアはメガーヌ達にピースサインを向けて、誇らしげなドヤ顔を見せた。リヴィアは駐車場と屋内を隔てるシャッターの元へ行き、転移スキルを使ってシャッターを通り抜けた。そしてインゼクトの案内で、出展品の収められている倉庫へ向かって歩き出した。

「っ！　こっちに誰か来る・・・！」

そんな時、メガーヌ達の姿を確認しようとリインフォースⅡ――リインが彼女たちの元へ向かって来ていた。別段姿を見せても構わないスタンスのプライソン一派（プライソン本人は正体を隠しているが）だが、無暗矢鱈に姿を見せないという考えを持つメガーヌは、「可哀想だけど、撃ち落としましょうか」魔力スフィア1発を生成した。

「大丈夫。インゼクトにお願いして追い払ってもらうから」

「そう？　じゃあお願いね」

リインへの迎撃策としてインゼクト8匹が新たに空へと放たれ、そしてリインを撤退させることに成功した。だが、ここで新たな問題が発生した。合流を果たしたシグナムとザフィーラによってガジェ

ット群が掃討されてしまったのだ。それにアイリとユニゾンしているヴィータもまた、ガジェットの掃討を終えてホテルへと向かい始めた。

「・・・。ルーテシア、ここで待っていて。ママ、少し遊んでくるから」

「ダメ。ガリューにお願いするから、ママはここで待ってて」

「・・・は～い」

自分の意見をバッサリと娘に断られてしょんぼりするメガーヌだったが、その半面自分の体を案じてくれることに嬉しくも思っていた。そしてルーテシアは右手を宙に差し出し「ガリュー。ちょっとお仕事、お願いして良い？」はめている"アスクレピオス"にそう語りかけた。するとクリスタルが僅かに発光した。

「ありがとう。時間を稼ぐだけで良いから」

もう一度発光するとクリスタルから紫紺色の閃光が飛び出し、シグナムとザフィーラの元へと飛んで行った。次に「あたしも行くよ」メガーヌの被っている帽子の上で横になっていたアギトがそう言った。あとはヴィータとアイリの足止め役だが、それをアギトが買って出たのだ。

「「え・・・？」」

メガーヌとルーテシアが驚きを見せた。アギトが進んで戦場に立つことが珍しいからだ。当然「大変だよ？　時間稼ぎは特に」ルーテシアと、「今度こそ私が行くから大丈夫よ」メガーヌが引き止める。

「ルールーはインゼクトの操作で手一杯だし、メガーヌも長時間戦えないし。こん中で一番強いリヴィーは宝探しに行ってるし」

しかしアギトも引かず、そう言って肩を竦めた。彼女の言い分には納得せざるを得ないメガーヌ達は「そうだけど・・・」強気に出られない。

「確かに私の魔法戦は時間制限があるけど、それでも足手まといにはならないわ」

それでもメガーヌは、自分が出撃する意見を曲げなかった。

「ママ！」

「大丈夫よ、ルーテシア。無茶はしないから」

「うぅ～～・・・うん。気を付けてね、ママ、アギト」

こうしてメガーヌとアギトが、ヴィータとアイリの足止めに向かうことになった。

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

ホテル・アグスタで開催されてるオークションに出品されるロストロギアを"レリック"と誤認しやがったガジェットが案の定わんさかと出てきやがった。しかもキャロとは別の召喚士が居やがるし、ガジェットの戦闘能力を強化しやがるし。一体どんな奴なのかそのツラを見せてもらいたいもんだ。ま、とにかく今は、フォワードのところへ向かうかもしんねぇソイツを確保しねぇとな。

『そう言えばガジェットは来てるのに、戦闘機とかは出てこないね』

『んぁ？　あぁ、そうだな。でもアレが出て来んのはレリックだって確定したところだけじゃね？　はやて達も言ってたが量産が利くようなもんじゃねぇだろ。あんなん量産されたら堪ったもんじゃねぇよ』

あたしとユニゾンしてるアイリの疑問にそう答える。すずかの話じゃシスターズと同じサイボーグが居るらしいし、ルシルはプライソン製の装甲列車と遭遇したとも言ってた。プライソンは戦争でもおっぱじめる気かって気分だよまったく。

「『っ！？』」

ホテルまでもうちょいってとこで、何かを感じた。具体的なことは言えねぇけど、何かが居る、来る、今。アイリも『この感じ・・・！』何かを察したようだが、あたしより何かの正体に確信を持ってるみてぇだ。

――フランメ・ドルヒ――

その直後、短剣型の火炎弾が２０発と森の中から飛んで来た。見憶えのあるその魔法にあたしとアイリはすぐに「『アギト・・・！』」だって確信した。似たような魔法を使う奴も世の中にはいるだろうが、さっきの感じからしてぜってぇ知ってる奴、アギトのもんだって判る。

「なんで、あたしの名前を知ってんだ？」

そう言って姿の見せたのはやっぱりアギトだった。ま、格好はベルカん時と違ってえらくパンクなもんになっちまってるけど。しっかし、本当に記憶が無いみてぇだな、ちくしょう。

「あたしはヴィーター！　んで、こっちが・・・！」

――ユニゾン・アウト――

「アイリ・セインテスト！」

ユニゾンを解除して、本来の小っちぇ姿になってるアイリをアギトと直接逢わせる。アギトは「お前らの名前なんて訊いてねぇ！」苛立ちを見せてきやがった。なんかこう、結構ショックだな。家族からそんな態度とられると。

「アギトお姉ちゃん。アイリだよ？　マイスター・・・、オーディンに拾われて、新しい名前を貰って、家族になって、一緒に過ごしたよね」

「はあ？　あたしに妹なんか居ないし、名前だってオーディンとかって奴からじゃなくてレーゼフェアから貰ったもんだし。それにあたしの家族は――っと、危ない危ない。誘導尋問とは卑怯だぞ！」

「アギトお姉ちゃん・・・」

「アギト・・・」

やべぇ、かなり胸に来るな。アギトの今の姿にアイリなんて半泣きだ。あたしも泣きてぇが、それ以上にレーゼフェアへの憎悪で頭がズキズキする。アギトはあたし達に敵意をむき出しにして「ちょっと遊んでけ！」周囲に火炎球を１０発と展開した。

「ブレネン・クリューガー！」

そして発射。あたしとアイリはそれぞれ回避に移って・・・

「～～～もうっ！　ヴィータ！　アギトお姉ちゃんをとっ捕まえるよ！」

「応よ！」

アギトを捕まえることを決めた。ユニゾンはしねぇ。２対１で押し切ってやる。こういう場合のコンビネーションはベルカん時から変わんねぇ。あたしが攻撃で、アイリが補助だ。つうわけで・・・

「おらぁぁぁぁーーーーッ！」

――テートリヒ・シュラーク――

"アイゼン"を振りかぶったままアギトに一直線に向かう。アギトは防御に回らずに回避を取った。あたしはわざと空振りして、アギトに僅かばかりの安堵を与えて油断させたその瞬間、「氷結の軛！」アイリが捕縛魔法を発動。アギトの周囲に展開されたベルカ魔法陣3枚から拘束杭が突き出した。アイツを貫いて拘束するんじゃなくて包囲して捕まえようとしたんだが・・・

――エッケザックス――

「んなっ！？」

「チッ、召喚士か！」

青みがかった薄い紫色の砲撃が3発と森の中から放たれて来て、アイリの軛を粉砕した。発射地点を見てはみるが、森が邪魔して判んねぇな。ザフィーラが居りゃ、ある程度は判ると思うんだけど。まぁいい。ここに召喚士が居るってんなら、あたしとアイリで足止めを、いんや捕まえてやんよ。

（新人共の他にシャマルとアリシアが居る。ガジェットくらいならアイツらだけで十分だろ）

――フランメ・ドルヒ――

「おらおらぁッ！」

――フラッターハフト・シュパッツ――

アギトの炎の短剣と、森から放たれて来る魔力弾があたしとアイリに襲い掛かる。アイリは「竜氷旋！」とぐろを巻く冷気を全身から放って、２人からの攻撃を完全凍結させて防御。アイリの奴、マジで強くなってんだよな～。あたしは回避しながら避けきれねぇ奴は"アイゼン"で弾き返すんだが・・・

「むぉ！？」

召喚士からの魔力弾がギリギリのところで軌道を変更してきて、あたしの頬を掠めて行きやがった。あぁ、くそ。誘導射撃ってわけかよ。

「アイリがアギトを押さえる！　ヴィータは召喚士をお願い！」

――フリーレン・ドルヒ――

「行かせるかよ！」

――フランメ・ドルヒ――

炎と氷の相性云々を魔力の高さだけでねじ伏せるアイリ。確かにアイリなら今のアギトくらい単独で撃破できそうだよな。

「おっと」

――パンツァーシルト――

あたしの方にも飛んで来たアギトの魔法をシールドで防ぐ。あたしは「アギトは任せるぞ！」アイリにアギトのことを託して、あたし1人で森へと降下。

「あ、コラ、待て！」

アギトがアイリを放ってあたしに向かって来ようとしてんのが判った。召喚士の元へは行かせたくねぇってか。戦闘能力はさほど高くねぇのか、それとも別の理由か。

「待ては、こっちのセリフなんだけどね！」

「邪魔すんなよ！」

――フランメ・ドルヒ――

――フラッターハフト・シュパッツ――

上から下からと射撃魔法が襲いかかって来る。アギトの魔法は避けんのも防御すんのも楽なんだが、「召喚士の魔法うぜぇッ！」いっつも着弾ギリギリで直角に曲がって来るから、どれもこれも掠っていきやがる。特にムカつくのは・・・

（コイツ、直撃させる気が全くねぇ・・・！）

どれもこれも掠ってくだけで直撃するような軌道じゃねぇってことだ。まるで遊ばれてるような感じがして不愉快だ。アイリは全身から冷気を放って凍結粉砕してるから楽だろうけどよ。こちとらそんな魔法持ってねぇんだよ。

――フラッターハフト・シュパッツ＆モルゲンロートゲホイル――

「ええい、うっとおしい！」

ようやく軌道変化に慣れてきた召喚士からの攻撃を"アイゼン"をぶっ叩いたんだが、その内の1発を打った瞬間、「こいつは・・・！」ソイツがとんでもねぇ爆音と、目も開けてられねぇ閃光が爆ぜた。

（あたしのアイゼンゲホイルやシャマルのクラールゲホイル・・・、アギトのスターレンゲホイルと同タイプの魔法だ。つまるところ召喚士はベルカ式の使い手・・・！）

迎撃を警戒してたんだが、結局は音と光が治まるまで何もされなかった。ただ、アギトがあたしの下に移動していることだけが違う点だ。

『ヴィータ。気付いてる？』

『ああ。コイツら、あたし達を撃墜しようとしてねぇ。まるで・・・

・――』

『『足止めの時間稼ぎ・・・・！』』

アイリと意見が一致した。何せ棒立ちの今のあたし達にすら攻撃を仕掛けて来ようとしねぇ。となれば、もうそれしか考えられない。

『行って、ヴィータ！』

『すまねぇ、ここは任せた！』

あたし達を足止めするってことは、他にも仲間が居る可能性が出てくる。最悪な展開は、"エグリゴリ"のレーゼフェアかフィヨルツェンが来てることだ。そのどちらかに付いて回ってたって言うアギトが居るんだ。可能性は決して０じゃあない。

――ヴァクストゥームフォルム――

３０ｃｍくらいから１５０ｃｍくらいまでデカくなったアイリは「シャルギエル！」ルシルとおんなじ魔法を発動して、両手に氷の槍を２本作り上げた。名前はおんなじだがデザインは違って、穂先がハート型をしてやがる。

「せいっ！」

――フラッターハフト・シュパッツ――

左手に持ってた1本は、また魔力弾を十何発と放ってきた召喚士の居る森へと投擲して、もう1本でアギトに直接攻撃を仕掛けた。シャルギエルは魔力弾を全弾凍結させて無力化したうえで森に着弾、派手に冷気爆発を起こさせた。そんでアギトは「融合騎がこんなに強いなんてアリ！？」必死に回避の一手だ。

『行って！』

『応！』

この場はアイリに任せてあたしはホテル・アグスタへ急ぐ。背後から「あ、行くな！」アギトから呼び止められるが、今はそれどころじゃねぇ。

『こちらスターズ2！　シャマル、ホテルの方にヤバい奴が向かってるかもしんねぇ！』

『ヤバい奴？　何かあったの！？』

向かう途中にホテルで管制指揮を執ってるシャマルに通信を入れて事情を伝える。アギトと召喚士に足止めを食らったことを。そして、アギトが一緒に行動してた"エグリゴリ"が向かってるかもしんねぇことを。

『エグリゴリ！？　ちょっ、嘘でしょ！　アギトちゃんが居ることに驚きたいし喜びたいのに、そんな思いを丸ごと吹き飛ばすような絶望的な報せなんて聴きたくなかった！』

『うっせぇッ！　フォワード達にエグリゴリの手配書を見せて、見つかったら逃げろって言っとけ！』

あたし達じゃどう足掻いても勝てない、つうか戦いにすらならない相手だ。新人たちが遭遇して、もし知らずに交戦したらと思うと冷や汗が止まらねぇ。だが、杞憂だったのか『エグリゴリの姿はやっぱり確認できないわ！』シャマルから通信が入った。

『とりあえず警戒は続けるけど、現れるのはガジェットだけよ』

『こちらはやて。ヴィータ、シャマルから事情は聴いた。そやからルシルく――セインテスト調査官に指示を仰いだら、自分と一緒に居ない限りは襲われない、って話や。見かけたら放っておくのが最優の手段ってことやから、もし接敵したら見逃して。自分の命を最優先や』

『・・・了解』

一緒に居ない限り、か。そうだよな、だからバンヘルドん時、あたし達は殺されちまったんだよな。そんなこんなであたしもホテルに着いて、ガジェットの殲滅に参加しようとしたんだけど・・・

「っ！？　あんの馬鹿・・・！」

ティアナがミスショットをしやがった。クロスファイアを撃ちまくった挙句、うち1発がウイングロード上を走るスバルの背後へと向

かって行きやがる。

（くそっ、間に合わねぇーーーーッ！）

――ソニックムーブ――

「ハリセ～～～ンスマァァ～～～ッシュ！」

あともうちょいでスバルに着弾するってところで、ハリセンを構えたアリシアがスバルと魔力弾の間に割って入って、魔力弾をガジェットの1機へとハリセンで撃ち返してヒットさせた。

「はぁはぁはぁ・・・！　～～～っ、こんの馬鹿野郎が！　何をやってんだティアナ！　無茶をやった挙句に味方を誤射する奴があるか！」

誤射したことにショックを受けて馬鹿みてぇに呆けてるティアナを怒鳴りつける。スバルが「あの、今のコンビネーションの内で・・・」なんてふざけたことを言ってきやがる。あたしは背後に立つスバルのジャケット引っ掴んで・・・

「馬鹿なこと言ってんじゃねぇぞ、おい！　アリシアが居なかったら直撃してたんだぞお前！」

さらに怒鳴りつける。それでもこの馬鹿は「あ、いえ！　あたしが悪いんです！」なんてティアナを庇うようなことを言う。ここで何を言ってもスバルはティアナを庇うっていう悪循環になるって瞬時

に察した。

「もういい、黙ってろ！　こっからはあたしだけでやるから、テメェら2人は引っ込んでろ！」

だから早々に見切りを付けてスバルとティアナを引っ込ませる。今のティアナはただの足手まといだ。スバルも釣られて本来の力も発揮できねぇだろうしな。何よりあたしが許さねぇ。こんな奴らを今、戦場に立たせることなんて。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒アリシア†††

危なかった。ティアナがヴィータの戻りを待たずに４連ロードなんてするもんだから、絶対に何かやらかすって思ってた。予想通りティアナはミスショットをやっちゃって、スバルに誤射未遂。側に居て良かった。ギリギリだったけどクロスファイアを"ハリセンスマッシュ"で撃ち返すことが出来た。

「あ、ティア・・・」

ヴィータに、引っ込んでろ、って言われたことでティアナがホテルの裏手に走り去って行っちゃった。スバルも「待って、ティア！」ティアナを追って行っちゃった。ヴィータはティアナを一瞥した後、さらに追加されてきたガジェットの迎撃に向かった。

「・・・はあ。シャマル。わたしもティアナのフォローに向かうけど。あ、すぐに戻ってくるから」

『了解。こっちはヴィータちゃんが居るから大丈夫よ』

シャマルから許可を貰って、わたしもホテルの裏手へと向かう。その途中、「向こう行ってなさいよ！」ティアナの怒声と、スバルの「ゴメンね、ティア・・・」今にも泣きそうな声での謝罪の言葉が聞こえた。そして、「スバル・・・！」がこっちに向かって走ってきた。

「っ！　アリ・・・シアさん・・・・！」

もう見てるのも辛いほどにボロボロ涙を零してた。わたしは「わたしがちょっと話してみるよ」そう言ってスバルの頭を撫でた。

「っ、うっ、はい、お、おね・・・お願い、します・・・！」

「んっ。お姉さんに任せなさい♪」

スバルと別れて、今度はわたし1人でホテルの裏手へと向かう。わたしの言葉ならきっとティアナも聴いてくれると思うな。同じ大切な人にミスショットしちゃった過去があるから。ホント、ティアナってばわたしにそっくり。恵まれた仲間を持ってたり、その所為で劣等感を抱いちゃったり、焦ってミスショット撃っちゃったり。

（今回の一件はわたしにも責任がある。あの時、ティアナを追っかけてでも話しておけば良かった。そしたら、もっと違う結果になってたかもしれない）

後悔ばかりが出てくる。でも、こんな失敗は今回限りだ。ティアナが歩こうとしてる道を先駆けてるわたしが、あの子を別の道へと導こう。そう思って裏手へ向かうと、そこにティアナの姿はなくて。

「あれ？　ティアナ・・・？」

辺りを捜してみると、「――止まりなさい！」ティアナの声が聞こえた。声の出どころは地下駐車場から。脳裏に最悪な光景が浮かぶ。ここで敵が出てくるとなると高確率で本命。ホテルに直接乗り込んでくるような奴なんて、そうとしか考えられない。

「ティアナ！」

急いで地下駐車場へと降りる。そこにはティアナと、キャロくらいの女の子が対峙してた。まず"エグリゴリ"じゃないことに心底安堵した。その小さな体で大きな長方形型のケースを抱えてるその女の子が「見つかっちゃった」小さな声でそう言ったのが、駐車場内に響いてわたしの耳にまで届いた。そして、足元にスミレ色のベルカ魔法陣を展開。

「「っ！！」」

女の子がフェイトやなのはクラスの魔力を放出した。わたしはすぐに「撃って、ティアナ！」叫んだ。あんな魔力で攻撃されたら、今のティアナ防ぎきれない。ビクッと肩を竦めたティアナが「っ・・・！」"クロスミラージュ"の引き金を引いて、魔力弾1発を発射

したんだけど・・・

「「消え、た・・・・！？」」

一瞬で女の子が消えた・・・かと思えば、ティアナのすぐ後ろにいきなりスッと音もなく現れた。振りかぶられた右拳には魔力が付加されていて、明らかに攻撃動作だって判る。"クロスミラージュ"からの警告で、「っ！」ティアナも後ろに居る女の子に気付いたようだけど、あまりにも遅すぎた。

（馬鹿馬鹿！　何でこういう時に限ってわたしはラッキーシューターを持ってないの！？）

手元にはハリセン型のストレージデバイス・"ハリセンスマッシュ"。純粋魔力攻撃なら問答無用で打ち返せるし、防御魔法も1発とはいかないけど砕くことが出来るし、結構な優れ物。だけど近接系。だから、ここから女の子を攻撃できない。

（迷って・・・いられないよね！）

――ソニックムーブ――

ティアナを助けるために、フェイト直伝の高速移動魔法を緊急発動。そして・・・

「ハーツイーズストライク・・・・！」

目の前が綺麗なスミレ色の魔力光に満ちて、次の瞬間・・・わたしの意識は途切れた。

Ｅｉｐｉｃ８－Ａきっと分かり合えたなら～Ｒｕｓｙｌｉｏｎ　＆
Ｓｕｂａｒｕ～

†††Ｓｉｄｅティアナ†††

両親を事故で亡くしたあたしを育ててくれてた兄ティーダも、管理局の任務中に殉職した。違法魔導師でありながら密輸物を運搬する運び屋だった犯罪者の追跡中、密輸していたロストロギアが暴走、発生した爆発に呑み込まれて・・・。そのすさまじい火力によって、兄の遺体は犯罪者ともども一片すらも残らなかった。
地上本部の上層部はそんな兄の最期の仕事に対して、役立たず、無意味どころか無闇に被害を増やした愚か者、そんなヘマをした奴は死んだ方がマシ、そう評価を下した。もちろん世論はその問題発言を徹底的に叩いて、発言者だった局員は辞職に追い込まれた。

（でも、兄が死んだことに変わりはなくて、その発言が取り消されることもない）

大好きだった兄を貶されたその悲しみ、恨み、悔しさは消えない。だからあたしは決めたんだ。兄の不名誉を晴らすため、あたしが管理局に知らしめると。ランスターの弾丸は全てを撃ち抜けるんだってことを。だからまずは兄が生前語っていた夢である執務官を目指すことにした。士官学校や空隊試験に落ちようとも、執務官の夢への足掛かりとして陸士部隊で頑張って来た。

（そんな中、あたしは・・・八神部隊長たちからスカウトを受けた

・・・）

年下なのに素晴らしい魔導師であるなのはさんに出会い、そして戦技教導を受けてもっと強くなれたことが自慢だって兄から聞かされてた。だからそんななのはさんが居るような機動六課へのスカウトは、あたしのような凡人に務まるのか不安だった。それでも戦技教導官のなのはさん、あたしが目標とする執務官の道を先駆けるフェイトさんの存在が、あとスバルの後押しが、あたしに六課への参加を決意させた。

（強くなれると思った。でもチームメイトとの才能の差を見せつけられると、あたしの凡人さが際立って・・・辛かった）

フォワードのリーダーに選ばれて、一番年上だってこともあって、才能に溢れたスバルやチビッ子たちにあたしの非才さを、情けないところを見せられない。そう思ってた矢先、あたしはスバルを誤射しかけた。アリシアさんが居なかったら、あたしの攻撃はスバルに当たってた。

（ヴィータ副隊長に怒られて当たり前なミスショット・・・）

シャーリーさんに無茶だって言われても、あたしはその忠告を聴かずにクロスファイアを撃った。その結果がミスショット。焦って無茶をやって相棒を撃ちかけた。スバルがあたしを庇おうとするたび、慰めてこようとするたび、自分が情けなくて、惨めに思えて、あの子を突き放した。

（ホントあたしって嫌な奴・・・）

陸士訓練校で、あたしとコミュニケーションを取ろうと構ってきたスバルに言い放った言葉。それでもあの子はあたしの元から離れないし。うざったいところもあるけど、ホントは嬉しかったりもする。スバルを突き放した後、あたしは逃げるように地下駐車場の方へと向かった。そこで遭ったのが、キャロくらいの小さな女の子。普通なら客の子供で迷子、って思うところだったけど、キャロの"ケリュケイオン"と似た手袋を両手をはめていることで、すぐに魔導師だって気付いた。それに警備員が地面に倒れ伏しているのを見たら、あの子が敵だってことは嫌でも判った。

（あの時、ちゃんとヴィータ副隊長たちに連絡を入れていれば・・・）

あたし1人で確保しようとした結果、アリシアさんがあたしを庇って女の子の砲撃をまともに食らった。壁に叩き付けられるアリシアさん、目を離した数秒の内に完全に姿を晦ました女の子。

（あたしはまた、ミスを犯して・・・今度は怪我人を出してしまった・・・）

すぐにシャマル先生とアイリ医務官を呼んで、アリシアさんを治癒魔法で救ってもらった。そして応急処置を受けたアリシアさんはシャマル先生とアイリ医務官と一緒に一足先に隊舎に搬送されて、あたし達フォワードや八神部隊長たちはホテル・アグスタでの事後処理を終えてから帰って来た。

「アリシアさん・・・」

「いや～。お恥ずかしいところを見せちゃってごめんね～」

「いえ・・・」

そして今、あたしはひとり機動六課の隊舎内にある医務室へとやって来た。ベッドのヘッドボードに背中を預けて座っているアリシアさんに話しかけると、そう言って微笑みを浮かべた。そんなアリシアさんは左腕と左足を吊ってる。砲撃の直撃とコンクリートの壁に叩き付けられたことで骨折してしまったからだ。

「アリシアさんは、あたしを怒らないんですか。スバルを誤射しかけたこと、アリシアさんに怪我を負わせたこと・・・」

「わたしの事についてなら気にしないで。可愛い後輩を護るのも先輩の務めだし。誤射についてはすでにヴィータやなのはに怒られて、反省もしてるでしょ？　反省してる子にさらに追い打ちを掛けるのは逆効果」

そんな痛々しい姿ながらもアリシアさんは笑って、あたしを叱ることなく慰めてくれた。アリシアさんの言ってくれた言葉、アリシアさんが搬送されるのを見送った後、なのはさんもそんなことを言ってた。

「スバルへの誤射未遂。今回のことで判ったと思う、焦っちゃうと

こんな大変な事になっちゃう、って。それにしても、ティアナはホントにわたしに似てるよね！」

アリシアさんはそう言って声を出して笑った。あたしと同じように仲間との才能の差に劣等感を抱いたり、強くなろうって焦ってたこともあるって聞いたけど、正直笑い事じゃない。あたしはそれに悩んでるんだから。

――ティアナは時々、一生懸命になり過ぎるんだよね――

なのはさんにもそう言われた。でもそのくらいじゃないと、あたしは強くなれない。

「大切な人を誤射するのまで一緒って。こんな変なところまで似なくても良いのにね♪」

だから少し不機嫌になってると、「え・・・！？」アリシアさんが耳を疑うようなことを言った。

「あー、違う。ティアナは未遂だよね。うはぁ、わたしの方が酷い！ティアナは未遂だったけど、わたしは実際に直撃させちゃったしね」

「あの、アリシアさんも・・・ミスショットを・・・？」

「そうだよ。ティアナとおんなじ焦りから、大切な妹フェイトをこの手で撃った」

「フェイトさんを・・・！」

「えへへ。恥ずかしい話でしょ。わたしの魔力が低かったおかげで、フェイトはそんな大きなダメージは負わなかった。でもやっぱり恐かったよ。手が、全身が震えた」

アリシアさんが無事な右手を眺めて、ギュッと握り拳を作った。アリシアさんの言うことをちゃんと聞いていれば。そんな後悔が溢れてくる。

「ティアナ。あなたはすでに失敗しちゃってるわたしと違って、まだ踏み止まれてる。いい？　強くなろうとする気持ちは悪い事じゃない。でもね。独りで出来ることなんて高が知れてる。今はフォワードの仲間を信じて、一緒に強くなっていってほしい。ティアナはまだ１６。個人的な強さを得るには遅い、なんてことはないよ」

「ですけど・・・！　それだとあたし、スバル達に置いていかれてしまいます！　ただでさえ、スバル達と違ってあたしは訓練の成果が出てないのに！　そうなったら足手まといで、あの子たちと一緒に居ることも出来なくなって・・・」

スバル達は元からある才能に、訓練で鍛えられた実力が伴って強くなってる。数歩分遅れてるあたしが、あの子たちと同じスピードで成長していっても追いつけない。遠く引き離されてその結果お荷物になる可能性だってある。

「そもそもその考えがアウトなんだけどね。わたしだってチーム海鳴最弱・・・は、リインか？　あー、やっぱわたしか。こんな弱いわたしでも、チームのみんなに愛されて、支えてもらって、ここに居る」

「でもそこには妹のフェイトさんが居て、付き合いも１０年です。けどあたし達はまだ1ヵ月も・・・」

まだ出会ったばかり。あの子たちは優しいから、あたしを迎え入れてくれるのは間違いない。そこには同情もないことも理解できる。けど、それだとあたしが耐えられない。

「はぁ・・・。判った。でもせめてスバルと組んで自主練すること。あなた独りで攻撃バリエーション増やしても、スバルがついて来れなきゃ意味が無い。それは解るよね？」

「はい・・・」

スターズとして同じ戦線に立つスバルと一緒。そんな条件が出されたけど、それなら大した問題じゃない。スバルも一緒にレベルアップしつつ、あたしはさらにレベルアップすればいいだけだ。

「ティアナ。そろそろ」

あたしとアリシアさんの2人だけで話せるようにって医務室の外に出ていたシャマル先生とアイリ医務官が戻って来た。あたしは「ありがとうございました」2人に一礼をした後、「今日は本当にご迷

惑をお掛けしてすみませんでした」アリシアさんにも頭を下げてから医務室を出たら・・・

「っ・・・・！」

「あっと、ティアナ。アリシアと話せた？」

「あ、はい・・・。あの、すみませんでした。アリシアさんの事・・・」

フェイトさんとぶつかりそうになった。この機会だからあたしはもう一度フェイトさんに謝った。事件後、アリシアさんがあたしを庇って重傷を負ったと知ったフェイトさんは、あたしに怪我がないことを真っ先に心配した。

――ティアナはそんなに酷い怪我は負ってないみたいだね。良かったよ――

――どうしてあたしなんかよりアリシアさんのところへ行かないんですか・・・？――

――あたしなんかって・・・。そんなこと言ったらダメだよ、ティアナ。・・・アリシアはね、魔導師としても局員としてもみんなの先輩だから、可愛い後輩を護りたいって言ってた。特にアリシアはそういう気持ちが強いんだ。ほら、執務官の仕事ってこういう部隊単位で動かないでしょ？　だからアリシアは後輩が出来たのが嬉しいんだよ――

だから、アリシアさんがあたしを護って怪我をしても、それはアリシアさんの責任ってことでフェイトさんはあたしを責めなかった。それに、"クロスミラージュ"と"フォーチュンドロップ"に記録されてた女の子へのあたしの対応にミスはないってことで、シグナム副隊長やヴィータ副隊長からの叱りの言葉も無かった。

「アリシア自身が許したと思うんだけど？」

「はい」

「だったらもうこの件について謝らなくていいよ。・・・今日はいろいろ大変だったからもう休むようにね」

フェイトさんはあたしにそう言って、入れ替わるように医務室に入って行った。そしてあたしはフェイトさんには悪いと思いつつも、その足でロッカーに向かう。早速あたしのレベルアップをするために。その道中、「ティア・・・！」スバルがあたしに駆け寄って来た。

「こんなとこで何してんのよ、あんた」

「え、あ、う～ん・・・。偶然だよね！」

「下手な言い訳ね」

「あぅ・・・。アリシアさんと話し出来た・・・？」

なるほど。ただでさえへコんでるあたしが、アリシアさんにまでへコませられたかもしれないって思ったわけね。あたしは「ええ」そう一言だけ返して、「ちょっと自主練してくるわ」改めて歩き出す。アリシアさんの条件を考えるとスバルも一緒じゃないといけないけど、あの子も今日は疲れてるでしょうし、今日はあたし1人だけで良いわよね・・・。

「あ、そうなんだ。じゃあ、あたしも一緒にやるよ！」

「アンタも今日は大変だったでしょ。大人しく休んどきなさい」

「そう言うティアこそ、今日は大変だったんだから・・・あ・・・」

そこまで行ったところでスバルが口を閉ざして俯いた。あたしのミスショットに触れたって思ったんでしょうけど・・・。

「スバル。今日の事、悪かったわね。誤射しかけたことも、怒鳴ったことも・・・」

「ティア・・・。ううん、気にしてないよ♪」

「何よ、ニヤニヤして」

「べっつに～♪」

薄気味悪く笑ってるスバルを連れてロッカーへ向かって、そこでト

レーニング服に着替えた。そして隊舎裏に向かったところで、「それで、具体的にどんな練習するの？」スバルに訊かれた。

「そうね。とりあえずあたしの戦術の選択肢を増やすのが一番だと思う。あたしは精密射撃（シャープシュート）をメインとする射撃魔導師。でもそれしか出来ないのが問題なのよ。だから近接系の魔法と技術が必要なの」

取り急ぎあたしに課す課題は、あたしの技数を増やすこと。あたしの幻術は切り札になるほどの練度は無いし、中距離から撃ってるだけじゃ今日みたく接近されたら手も足も出ない。

「なるほど。それじゃああたしは、ティアに格闘戦を教えれば良いんだね！」

「組手の相手は確かに欲しいわね。でも、あたし1人じゃまだダメなのよ。アンタとのコンビネーションも要るわ。上手くいけばさらにコンビネーションの幅も広がるだろうし、エリオとキャロのフォローにももっと回れるはずよ」

「おお！　それは俄然やる気になるよ！」

そういうわけで、あたしとスバルはなのはさんの教導の他に、自分なりのやり方も取り入れて強くなることを決めた。

†††Ｓｉｄｅティアナ⇒スバル†††

ティアの考えた自主練メニューの通りに練習をして3日目。今日も

練習するために朝5時起き。あたしの身体はちょっと特別で、寝起きはかなり良い。けどティアは「寝てる・・・」ぐっすりスヤスヤ。朝早くから自主練、日中はなのはさんからのトンデモなく厳しい教導。疲れない方がおかしい。

（う～ん。やっぱり起こさないと後で怒られるよね・・・）

目覚ましのアラームが鳴り続ける。あたしは「ティア～」を起こすことにした。アラーム音を止めて、「起きて、ティア。時間だよ」体を揺する。すると「ぅあ？　あー、ごめん。世話かけるわね」もそもそとティアが体を起こした。

「今日はやっぱりやめとく？　毎日朝練やってるし、ティアの身体が心配なんだけど・・・」

「これくらいやんなきゃ足らないもの。アンタはどうなの？　体調崩してない？」

「平気平気♪　知ってるでしょ、日常行動なら4～5日は寝なくても大丈夫だって」

「日常じゃないでしょう？」

「だいじょ～ぶだって。・・・あれ？」

ティアと一緒にトレーニング服に着替えるために部屋を明るくしようとしてカーテンを開けると、「シミュレータが動いてる・・・？」

あたし達の訓練用になのはさん達が造ってくれた空間シミュレータが稼働しているのが見えた。

「は？　こんな朝早くからそんなわけ・・・、あ、本当。誰が使ってるのかしら？」

ティアもあたしの隣から窓の外を見た確認。あたしは「行ってみる？」って訊いてみた。ティアは「そうねぇ・・・」少し渋ったけど、あたしは「行こうよ～」強引に向かうことを決めた。

「またアンタの強引さが出て来たわね・・・」

「えへへ♪」

何か知らないけど直感が、行け、って言ってる気がする。寮から静か～に出て、シミュレータへと向かう。その途中で、誰がシミュレータを使ってるのか判った。ビル群の間を飛び交う綺麗な蒼色の魔力が奔るのを見たから。間違いなく「ルシルさん・・・」のものだ。お母さんとルシルさんが任務に行く前日、ギン姉と模擬戦をしたルシルさんが蒼い魔力を発したのを憶えてる。

（アリシアさんからルシルさんの事情を聴いて早3日。ルシルさんとは結局話が出来てないから、これはチャンスかも・・・）

ルシルさんは基本的に八神部隊長の執務室に居るから、顔を合わせることがかなり難しい。でもこれからティアと自主練だし。う～んって唸ってると、「いいわよ。ルシルさんに会いに行きましょ」テ

ィアからそう言ってくれた。

「いいの？」

「いいわよ。アンタが話してる間、あたし1人で自主練やってるから、終わったら合流しましょ」

「ティア・・・。うん、ありがとっ♪」

そうしてあたしとティアはシミュレータへと足を踏み入れた。そこにはガジェットⅠ型とⅡ型とⅢ型、１００機以上と真っ向から戦って余裕で殲滅してるルシルさんの姿があった。１２枚の剣のような蒼い光の翼を背中に展開した姿。左手にはルシルさんの身長を超す長さのアームドデバイス（確か槍だったはず・・・）の"エヴェストルム"。

「うわ、すご・・・」

「うん・・・。空戦ＳＳランクってすごいね・・・」

その圧倒的な火力に、あたしとティアは呆気にとられた。そんなあたしとティアに気付いたのか、ルシルさんはあたし達の側に降り立って、剣の羽を解除した。

「おはよう、スバル、ティアナ。早いな。朝練か？」

「「え？　あ、おはようございます・・・？」」

フレンドリーに話しかけられて戸惑うあたしとティア。ルシルさんは「今の時間くらい素でいさせてくれ」そう言って、人差し指を唇に当てて苦笑した。この時間だけルシルさんは、内務調査官じゃなくてルシルさんなんだってことみたい。

「それで？　朝練なのか？」

「あ、はい。そうです。セインテスト調査官もそうなんですか？」

「まあな。２４時間ずっとデスクワークだから全身が凝って仕方ないんだよ。だからこうして週一で、シミュレータを借りていろいろ発散させてるんだ」

ティアとルシルさんがお互いの質問に答えたところで、「どうせなら2人も使っていくか？　このシミュレータ」ルシルさんが提案してくれた。

「え、いいんですか？」

「なのはの教導が始まるまでの間だけどな。それまでは自由に使っていいとシャーリーやなのはから許可は貰ってる」

「ぜひ！」

ティアが目を爛々と輝かせてルシルさんの提案を受け入れた。明日のなのはさんとの模擬戦の為の復習をイメージトレーニングでする

つもりだった。だけど実際に戦闘フィールドを使えるなら、ただのイメージより完成度が高くなる。

「あ、ありがとう・・・ございます」

あたしもお礼を言うんだけどやっぱりぎこちなくなっちゃう。ルシルさんはあたしを少し見た後、「ティアナ。どのフィールドでいい？」ルシルさんと、「あ、このまま廃棄都市フィールドでお願いします」ティアが話し始めた。

（逃げるなスバル！　もう、あたしは子供じゃない！　ルシルさんを苦しめてるあの過去のあたしの言葉を、現在のあたしの言葉で晴らさないと！）

――こら、スバル。八神部隊長やリイン曹長から聞いたけど、あなた、まだルシルさんとまともに話していないらしいじゃない。まさか手紙に嘘を書いてくるなんて――

ルシルさんと未だに話してないことが八神部隊長とリイン曹長伝手にギン姉にバレて、それはもう怒られた。

――スバルよぉ。お前にもいろいろあると思うが、ルシリオンもお前と同じくらい苦しんでると思うんだ。出来るだけ早く坊主の苦悩を晴らしてやってくれや――

お父さんにもそう言われた。判ってる。判ってるけど、どれだけルシルさんと話そうと思ってもダメだったんだ。でも、アリシアさん

から聞かされたルシルさんの事情を知って、ようやく決心が固まった。ここで逃げたら、また何日も話せなくなると思う。

――2人で話すのが気不味いなら、私も一緒に謝るから――

ギン姉もルシルさんに謝りたいって言ってた。でもここでギン姉に頼るような真似は出来ない。一番罪深いのはあたしだもん。あたし1人で謝るべきだって判ってるから、ギン姉のその提案は断った。

（お父さん、ギン姉。あたし・・・しっかりするから・・・！）

空間シミュレータの操作を行うルシルさんと、ルシルさんの側で操作が終わるのを待つティアを眺める。そして、ルシルさんの操作が終わったのを見計らって「ル、ルシルさん！」意を決して名前を呼んだ。

「お、お話ししたいことがあります！　おじ、お時間を頂けませんか！」

「・・・・。ああ、大丈夫だよ」

「『あたしは先に行って自主練やってるから、アンタはしっかり伝えるのよ』それでは、お言葉に甘えて使わせていただきます」

『うん。ありがと、ティア』

ティアが1人離れていって、あたしとルシルさんを2人きりにして

くれた。ティアを見送った後、「君から話をしてくれて嬉しいよ、スバル」ルシルさんがとっても優しい声であたしの名前を呼んでくれた。鼻の奥がツンとなる。一瞬でルシルさんと初めて会った時のことが脳裏に過ったから。

「あたし、ずっとルシルさんに謝りたかったんです！」

そう口にしたら堰を切ったようにこれまで伝えたかったことが溢れてきた。

「お母さんが死んだこと、全然ルシルさんの所為じゃなかったのに！　ルシルさんだって大変な目に遭ったのに！　あたしはルシルさんに酷い事ばっかり言って！」

――うそつき！　一緒に帰って来るって言ったのに！　おかーさんは大丈夫って言ったのに！　約束したのに！――

「ごめんなさい！」

――だいっキライ！　うそつきなんてだいっキライ！　うそつき！――

「ごめんなさい！」

――かえしてよ！　おかーさんをかえしてよっ！　かえしてよっ！　約束したんだからかえせ！――

「本当に・・・本当にごめんなさい！」

――おかーさんの代わりに・・・ルシルさんが・・・死ねばよかったんだ！――

「ルシルさん！　あたしは！　あたし・・・あたし・・・！」

涙が溢れてくる。深く頭を下げて何度も謝る。

「クイントさんを守れなかったのも、スバル達との約束を果たせなかったの事実だ。だから恨まれて、憎まれて当然だって。これまでずっと思ってきた。だけど・・・。こうして許されると、やっぱり嬉しいな」

「ルシ・・・っ！！」

顔を上げてルシルさんを見ると、ルシルさんの目から涙が流れてた。あぁ、あたしは本当に馬鹿だった。もっと早く、ルシルさんと話していれば良かった。ルシルさんの涙と嬉しげな表情を見て、「今まで本当にごめんなさい！」あたしの涙がさらに溢れてきた。

「ありがとう、スバル。俺を許してくれて。ありがとう」

「っ！　あ、あたしの方・・・こそ！　あたしのこと・・・！　悪く思わないでくれて・・・！　優しく・・・話してくれて・・・！　ありがとう・・・ございます！」

ルシルさんの優しさが嬉しい。もし他の人だったらここまであたしを大事に思ってくれなかったはずだもん。自分だって大変な目に遭ったのに、いくら幼いからと言って、代わりに死ねばよかった、なんて言われたら普通は怒ったり、冷たい態度を取っちゃったり、今後絶対に関わらない関係になるはず。

「あの、ルシルさん」

涙を袖で拭いながら、「今度、お母さんのお墓参り、一緒に行ってくれますか？」そうお願いしてみた。ルシルさんは毎年お母さんのお墓参りをしてくれてる。だけど一度も顔を合わせることがなかった。お父さんからは、ルシルさんがあたしのことを気遣って意図的に時間をずらしてる、って聞かされた。

「ああ、ぜひ。ナカジマ三佐やギンガとも一緒に行ってみたいな」

「はいっ！　お母さんもきっと喜びます！」

だけどもう大丈夫。お母さん、今日までごめんね。今度の命日には、お父さんやギン姉と一緒にルシルさんも連れて行くから。

（朝練が終わったらギン姉にメールしておこうっと♪　ルシルさんと一緒に映る写真データを添付すれば、今度は嘘じゃないって判ってもらえると思うし）

こうしてあたしは、ルシルさんと仲直り出来た。機動六課の稼働中は、内務調査官としての立場があるルシルさんと親しく出来ないけ

ど、「何かあれば念話で話しかけてくれ」口での会話じゃなければ、ある程度は素のルシルさんと話せるっていうのが嬉しい。

「それじゃあ、改めて・・・これからもよろしく頼むよ、スバル」

「はいっ！　こちらこそよろしくお願いします、ルシルさん！」

これで残る問題は今回の事件の首謀者として捜査されてる、お母さんや所属してた部隊の人たちの死の要因になった広域指名手配犯、プライソンとその一派との決着だけだ。ルシルさんとの関係を修復できたことに喜んでると、「俺としても嬉しいことだが、ティアナは放っておいて良いのか？」ルシルさんに言われた。ハッとしてビル群の奥を見る。ティアは、あたしとルシルさんがちゃんと話を出来るように気遣って、先に自主練をやってる。さすがにこれ以上待たせるのはまずいよね。

「あの、ルシルさん！　あとでもう一度時間くれませんか？　ギン姉とお父さんに、ルシルさんとちゃんと話が出来たっていう証拠を送るために写真を撮りたいんです」

「それはまぁ、構わないよ」

「ありがとうございます♪　あ、ティア～！　お待たせ～！」

ルシルさんとの約束を取り付けて、ひとり自主練をやってたティアと合流。ティアはあたしの顔を見て、「さ、始めましょ」何も言わないでくれた。あんだけ大声で泣いちゃったんだし、今のあたしの

目は腫れてるかもしんない。その気遣いに心の中で、ありがとう、お礼を言って、パンッと両頬を叩いて気合を充填。

「あ、ルシルさんはこれからどうします？」

「そうだな・・・。邪魔じゃなければ少し見学していても良いか？」

「構いませんけど、ルシルさんほどの魔導騎士にとっては結構地味で、つまらないものになるかもしれませんが・・・」

「仕事開始まで部隊長室でぼけっとしているのと、朝から自主練に励んでいる後輩を見守るのと、どちらが有意義だと思う？」

ルシルさんにそう訊かれて「後者です」ティアと一緒にそう答えた。あたしだって時間があれば、ぼけーっとしてるよりか少しでも自主練とか誰かの戦闘訓練を見ていたいもん。ルシルさんは「邪魔だと思ったら遠慮なく言ってくれ」って言うけど、絶対にそんなこと言えない。そんなわけで、なのはさん達以上にすごいって言われるルシルさんの目の前で練習を始めるんだけど・・・。

『なんか緊張する・・・』

『え、ええ。ルシルさんってガチの戦闘のプロだし、今のあたし達の動きを見て内心どう思ってるのかも合わせて緊張するわ』

ティアの組手の練習に付き合ってるんだけど、そんなに近くない位置にルシルさんが居るだけで動きが硬くなっちゃう。でもルシルさ

んが邪魔って言いにくいし。どうすればいいかを考えながら、ティアと新しく組んだコンビネーションの練習に入るところで・・・

「あの、ルシルさん。良かったら模擬戦の相手をお願いしても・・・？」

あたしはそう提案してみた。ジッと見てられるよりかはマシになるかな～って思ったからなんだけど、「アンタね・・・」ティアが呆れを見せた。あれれ、結構良い提案だと思ったんだけどな～。

「ルシルさんは、こうしてあたし達と普通に喋ってるだけでも結構際どいのよ？　そこに、さらに模擬戦の相手になってほしい、なんてそんな首を絞めさせるような真似、ルシルさんがいいって言うわけ――」

「いいぞ、やろう」

「ほら、いいぞって言ってるじゃない。すいません、ルシルさん。今の聴き流して・・・って、ええええええええ！？　いいんですか！？　これ、あたし達にとっての利ですよ！？　調査官は、出向先の人たちの利になる事をしてはいけないんじゃ・・・！？」

ティアが1人で騒いで百面相してる。あのティアがここまで振り回されてるのを見るのって初めてかも。

「俺の利でもある。なのはの教導の成果を直に見れて、それに魔導師との実戦は心地よい緊張を与えてくれる」

――我を運べ、汝の蒼翼（コード）（アンピエル）――

「もちろん教導時のなのはに合わせて魔力や戦闘行動も抑えよう」

ルシルさんの背中から１２枚の剣の羽が展開されて、ふわっと宙に浮いた。それがルシルさんにとっての臨戦態勢だと察したあたしは「お願いします！」頭を下げてから構えを取って、遅れてティアも「ありがとうございます！」お礼を言って、"クロスミラージュ"の銃口をルシルさんに向けた。

「君たちに変な癖を付けたら後でなのはに怒鳴られるから、なのはの動きを参考にさせてもらう。手を抜かれたと思わないでくれ」

「はいっ！　スバル！　行くわよ！」

「うん！　ウイング・・・ロード！」

魔力で空中に道を作る魔法ウイングロードを発動した。ルシルさんは剣の羽１２枚を背中から展開して、宙に佇んだまま。訓練時のなのはさんと一緒だ。ティアは近くのビルへと入って行って姿を隠した。あたしも、ウイングロード上を走ってルシルさんから一定の距離を取る。

『ティア、コンビネーションはどうするの？』

『クロスシフトＡで行くわよ。どのシフトでもルシルさんを出し抜

けるとは思えないけど、手堅く攻めていくわよ』

『了解！』

クロスシフトAは、あたしが相手を撹乱してる間に、フリーになってるティアが決めるコンネーションだ。そういうわけで早速あたしは撹乱するためにルシルさんの周りを駆け回る。

――舞い降るは、汝の煌閃（コード　マカティエル）――

ルシルさんの側に強く発光する魔力の槍が12本と展開されて「ジャッジメント」その号令で、あたしに向かって槍が射出されてきた。かなり速い所為で掠ってけど、回避はし切れた。

「第二波（セカンドバレル）・・・装填（セット）」

また魔力の槍が12本と展開。そして「ジャッジメント」あたしに向かって射出されてきたんだけど、「うわっ！？」今度は全部が足元に集中して着弾して来た。スピードに乗ってただけに勢いよくバランスを崩した。

『ティア、あたしピ～ンチ！』

『待ってなさい！』

――クロスファイアシュート――

ルシルさんに向かって放たれる15発のティアの魔力弾。ルシルさんは「撹乱も済んでいない中でのこれはダメだろ」ベルカ魔法陣タイプのシールド、古代ベルカ式だからパンツァーシルトって言う防御魔法を発動した。次々とシールドに着弾して爆発を起こしてく。

――煌き示せ、汝の閃輝――

黒煙の中から蒼く輝く砲撃が飛び出して来て、ティアの居るビルに向かって行った。そして着弾したから「ティア！！」あたしは足を止めてビルを見る。

『けほっ！　あたしはいいから、自分の心配をしなさい！』

ティアから無事を知らせる念話が入ってホッとしたのも束の間、「よくそんな暇があるな、スバル」ルシルさんの声が聞こえた。ルシルさんの居る方を見れば、すぐそこにまで魔力の槍が接近して来てた。

「っつ・・・！」

その場で上体反らしすることでなんとか回避した。体を起こしながらウイングロードを伸ばして宙を駆け抜ける。ルシルさんから『不格好な避け方だったが、やるじゃないか』お褒め？の言葉を貰った。

「あ、ありがとうございます！」

『スバル！　配置し直すから、少しの間耐えて！』

『う、うん！』

ティアがビルの間を移動するのを援護するために、敢えてルシルさんの視界に入るようにしてウイングロードを伸ばす。ルシルさんは「えーっと、こういう場合は・・・」思案顔をした後・・・

「君らの策に乗るのが良いんだろうな」

そう結論付けて「さぁ、しっかり避けろよスバル・・・！　ジャッジメント」また魔力の槍を、今度は２０本近く放ってきた。あたしは必死に避け回りながらティアからの指示を待つ。

『スバル！　もう一度クロスファイアで集中砲火するから、ルシルさんの足止めお願い！』

『ん！』

ルシルさんに接近しつつ、「ジャッジメント」放たれてくる槍を避けて、ティアの準備が整うのを待つ。どれだけ時間が掛かってもって覚悟したすぐに『いつでも行けるわ！』ティアからゴーサインが出た。"リボルバーナックル"のカートリッジ1発をロード、ナックルスピナーを高速回転させたうえで右腕を振りかぶる。

「うぉぉぉぉーーーーーッ！！」

「来るがいい」

そう言ってルシルさんは"エヴェストルム"を振りかぶって、あたしの迎撃態勢に入った。"エヴェストルム"は２ｍちょっとあるし、ルシルさんの身長も１８０ｃｍくらいあるし、リーチ差は結構ある。半端な避け方じゃまず体のどこかを引っ掛けそう。

「リボルバー・・・シューット！」

先制はもちろんあたしで、右拳をルシルさんに向かって突き出す。放つのは射撃魔法に分類される衝撃波。ルシルさんは「せいっ！」"エヴェストルム"を大きく薙ぎ払ってリボルバーシュートを真っ二つに裂いたけど、「っく・・・！」完全に無力化できなかったみたいで、体勢をほんの僅かだけど崩した。

「どりゃぁぁぁぁぁ！『ティア！』」

『オッケー！　巻き込まれんじゃないわよ！』

そんなルシルさんに向かってあたしは突撃を続行。もう一度"リボルバーナックル"を装着してる右腕を振りかぶる。そして体勢を整え終えたルシルさんももう一度"エヴェストルム"を振りかぶった。

「『うんっ！』ナックル・・・ダスタァァァーーーッ！」

「ふんっ！」

あたしの迎撃のために横薙ぎに振るわれる"エヴェストルム"だっ

たけど、「っ！」タイミングを見計らって大ジャンプして回避。右脚に少し痛みが走ったことから、やっぱり完璧に避けれなかったみたい。それでも十分ルシルさんの注意をあたしに引き付けることが出来た。

――クロスファイアシュート――

あたしがルシルさんの頭上を飛び越えているその最中、ティアの制圧射撃が飛んで来た。あたしの行動に意識を割かれてたルシルさんが「ほう」感嘆の息を漏らした直後、魔力弾が次々に着弾していって爆発を起こしてく。その爆風に煽られたあたしは「おわっと」ウイングロードから落っこちそうになったけど、なんとか別のウイングロードを発動したことで無事に着地。

「ルシルさん・・・？」

「これがクロスシフトAか。なるほど」

濛々と立ち上る煙を見ていると、ルシルさんのそんな声が聞こえた。

Ｅｉｐｉｃ８－Ｂきっと分かり合えたなら～Ｎａｎｏｈａ　＆　Ｔｅａｎａ～

†††Ｓｉｄｅティアナ†††

『スバル！　クロスシフトＢで行くわよ！　アンタの一撃でルシルさんの防御を突破してみて！』

『了解！』

クロスシフトＡじゃもうルシルさんに決定打は与えられない。だからすぐに攻め手を切り替える。あたしの本気のクロスファイアは、ルシルさんの多方向に同時展開したシールドを突破できずに防がれた。もうどれだけ撃ってもルシルさんに当てるのはおそらく不可能。なら、防御魔法を突破できる術を持つスバルが本命となるＢで行くしかない。

（それでもダメなら、組んだばかりのＣで・・・！）

ルシルさんのような本当に強い人を相手にするためだけに新しく組み立てたシフトＣ。ルシルさんからなのはさんに伝わらないかが少し不安だけど、元々ルシルさんと模擬戦が出来るって考えた瞬間にこの手を使うつもりだったし、明日のなのはさんとの模擬戦に備えてその完成度を計るにはちょうどいいわ。

「あともうちょっと待ってなさいよ、スバル・・・！」

スバルとルシルさんを見降ろせる位置となるビルの屋上にダッシュして到着早々、双銃型のインテリジェントデバイス・"クロスミラージュ"のカートリッジを1発ずつの計2発をロードして、クロスファイアの魔力(スフィア)発射体を8基と展開。戦場での高低差は重要だ。特にあたしのような射撃系魔導師はね。

「(ルシルさんが動き出した・・・!)あたし達に合わせての行動か・・・」

なのはさんの教導データを基にルシルさんも動いてくれるらしいし、シフトBを誘ってると見ていい。

「ならとくと味わってください! 行くわよ、スバル! クロスファイア・・・シューット!」

魔力スフィアからも魔力弾を発射して、"クロスミラージュ"の銃口からも魔力弾を連射。ルシルさんは飛び回りながらも逃げるスバルを追っていて、あたしの制圧弾幕に気付いたことで足元にミッド魔法陣を展開。周囲に魔力スフィアを5基と展開して・・・

「クロスファイアシュート」

「っ!?」

あたしやお兄ちゃんのものとは色違い、蒼色のクロスファイア10発をあたしの弾幕の迎撃として放った。先発組の10発は相殺され

たけど、残りの１０発はそのままルシルさんに殺到。

――パンツァーシルト――

だけどシールドで防がれた。だからと言ってここで引き下がるわけにはいかないわ。あたしは「おおおおお！」魔力弾を撃ち続けてルシルさんを足止めする。ルシルさんも残り続けるスフィアから魔力弾を順次発射してあたしの魔力弾を迎撃したり、「っく・・・・！」余った魔力弾で直接あたしを狙い撃ちにしてきたりする。さらには・・・・

「あたしの魔力弾をあえて迎撃しないで直接狙ってくるなんて・・・！」

そんな芸当まで披露された。素通りさせたあたしの魔力弾を最低限の動きで躱して対処するルシルさん。スバルに追いついて攻撃を行ってる最中でもそれをやってのけた。格の違いを見せつけられた。それでもあたしは屋内を移動してルシルさんの猛攻を回避し続けては、射撃ポイントに着いてスバルへの援護射撃を始める。

「スバル！」

ルシルさんが動きを止め、スバルが大きく距離を開けた。おそらくこれがベストなタイミング。

『うんっ！』

ルシルさんに向かって振り注ぐあたしの弾幕の中を疾走するスバルに、今度はこちらから仕掛けるように指示を出す。ルシルさんもその場から動かずにあたしの攻撃を防ぐ体勢に入ってる。誘いだとしてもここしかチャンスはない。スバルは右腕を振りかぶった体勢で、あたしの弾幕を対処し続けるルシルさんの背後へと突っ込んで行く。

――パンツァーシルト――

「はい・・・！？」

スバルの行く手にシールドが遠隔発生されて、ウイングロードの先端がガツンとシールドと激突。その勢いのままスバルは前に向かって宙に放り出された。

「ああもう！　ここでそんな手を使うんですか！」

速度もあったことでスバルが体勢を立て直せずに突っ込んでく先にはルシルさんが居て・・・

――風音（シルフィード）よ広きに渡れ――

大きく"エヴェストルム"を横薙ぎに振るうと、５０ｍと離れたあたしの居るところにまで届く暴風が発生した。思わず「ひゃあ！？」その場に座り込んで、吹き飛ばされないように必死に耐える。

「ど、どいてぇぇぇ――――ッ！」

「へ？　ちょっ・・・！？」

顔を上げると目の前にはスバルのお尻があった。その直後に「へぶっ！？」スバルのヒップアタックが顔面に直撃して、「いったぁぁぁーーー！」あたしと、「ごめーーーん！」スバルはゴロゴロと屋上を転がって、「ヒッ・・・！」落っこちた。

「スバルぅぅ～～～！！」

「うんっ！　ウイングロード！」

スバルが発動したウイングロードに着地することで地面に叩き付けられる最悪の事態は免れた。ホッとしてると「来た！」ビルを回り込んだり内部を通り抜けて来た魔力弾１０発が飛来して来た。

「スバル！」「ティア！」

回り込んできた５発はスバルがシールドを張って防御。通り抜けて来た５発には「シュートバレット！」の連射で迎撃してやった。ルシルさんのクロスファイアを対処し終えると「ティア、どうしようか・・・？」スバルが次の戦術について訊いてきた。

「シフトＣで行くわよ。ルシルさんも、このシフトＣは知らないから上手く行けば・・・」

「ひと泡吹かせられそうだね。よし、やろう！」

クロスシフトCは、言うなればあたしとスバルの同時攻撃を行うコンビネーション。あたしは「先行お願い！」スバルに指示を出し、ルシルさんへ突撃させる。あたしも配置に着くために移動を開始。

――クロスファイアシュート――

移動中でも問答無用で飛んでくる魔力弾。あたしはビル内の柱を盾にしたり、魔力弾で迎撃したりと対処しながらビルの上層階を目指す。その途中、「うぉぉぉーーーーッ！」スバルの声が届く。横目で窓から外を、ルシルさんと近接戦を繰り広げるスバルを見た瞬間・・・

――クロスファイア・アサルトドライブ――

ルシルさんは周囲に展開してた複数の魔力スフィアを集束させて砲撃化したクロスファイアをあたしに放ってきた。

「お兄ちゃんのアサルトドライブ！？」

あたしは両手で頭を覆って、部屋の奥へ向かってヘッドスライディング。直後に窓の縁に着弾して爆発、砂埃がブワッと発生した。２発目やクロスファイアの追撃を受けないためにすぐに立ち上がって、さらに上階を目指す。

「どうしてルシルさんがお兄ちゃんの魔法を知って・・・！？」

ルシルさんは一度見た魔法を複製できる固有スキルを持ってた。今

は使えないらしいけど、その魔法の術式を知れば同型の魔導師なら扱える。だからルシルさんが使えてもおかしくないけど、でも一体どこでルシルさんはお兄ちゃんのあの魔法を見たんだろう・・・。

「ううん。今はそんなこと考えてる余裕なんてない」

あたしはビルの上層階へと駆け昇って、２人の頭上にまで移動。そこで「フェイク・シルエット！」を発動。１階部分にあたしの姿をした幻影を４体と作り出して、１体ずつルシルさんの視界に入れるように動かす。

（少しでも集中力を削っておきたい・・・！）

スバルの怒濤の攻撃を涼しい顔で"エヴェストルム"だけで捌くルシルさんは、"クロスミラージュ"を構えるあたしの幻影に目もくれない。

――ラケーテン・パンツァーシルト――

ルシルさんの周囲に４枚のシールドが展開されたと思った直後、その内の１枚が幻影に向かって高速射出されて、「うっそ・・・！」グシャッと押し潰すように幻影を掻き消した。

「シールドを遠隔発生するだけじゃなくて射出するなんて・・・！」

ルシルさんは騎士じゃなくて魔導騎士だってことを改めて痛感する。他の３体も同じようにシールド弾で潰されたけど、『ティア、今！』

スバルがようやくルシルさんを捉えた。左手で"エヴェストルム"の柄を掴み、"リボルバーナックル"の一撃で張られたシールドを打ち貫こうとしてる。完全にルシルさんの身動きをを封じた。チャンスは今しかない。

「クロスミラージュ！」

≪Ｄａｇｇｅｒ　Ｂｌａｄｅ≫

銃口から魔力刃を展開する。フィールド貫通・防御破壊効果を持ってるから、魔力が抑えられてるルシルさんやなのはさんの防御も斬り開いて本体にダメージを入れられる寸法。幻術のコントロールから解放されたあたしは・・・

「せぇぇぇーーーーい！！」

――パンツァーシルト――

ビルから飛び降りて、ルシルさんの頭上へと落下。その途中にシールドが展開される。着地したあたしは魔力刃でシールドを斬り裂いて、そのままルシルさんに打ち込もうとしたけど、「あぁ、やっぱりこうなるか・・・」ルシルさんが嘆息したのが判った。

――公正（コード）たれ、汝（ザドキエル）の正義――

「「っ！？」」

あたしとスバルは同時に魔力の槍２本で作られた十字架に磔にされた。しかも額、首、胸、お腹、両肩、両上腕、両前腕、両手の甲、両太もも、両脛、両足の甲にはいつでも貫けるとでも言うように１８本の槍が待機してる。

ルシルさんはあたし達を見て、「これまでずっとこのシフトの練習をしていたわけだ」そう言って腕を組んだ。なんかヤバい、ルシルさん苛立ってる。スバルが「えっと、はい、そうです・・・」その問いに震えた声で答えた。

「明日の模擬戦で、なのは相手に使おうとしていたのか・・・？ティアナ」

「っ、はい・・・」

ルシルさんの眼光があたしを貫く。全身が緊張に震える中、なんとか応じることが出来た。

「・・・ふむ、そうか・・・。良かったな、最初に使ったのが俺で。なのはに使っていたら君たち２人、彼女の怒りを買って撃墜されていたぞ」

「え・・・？」

スバルが信じられないって言った風に呆けた。けどあたしはどこか、あぁやっぱり、って気持ちもあった。スバルが「何でなのはさんが怒るんですか！？　間違ったことしてないのに！」ルシルさんに噛みついた。

「ティアナ。君は理解しているだろう？」

「・・・このシフトCは、なのはさんの教導から外れているから、です」

なのはさんから教わってる個別スキルトレーニングの中には、あたしの近接戦術は入っていない。それにあたしは中衛、センターガード担当と決められてるのに、スバルと一緒に前衛に飛び出すような真似をした。逸脱した戦術だって叱られても仕方ない。

「そんな！　で、でも強くなろうとする努力じゃないですか！」

「そうだな。頑張るのは良いことだ。その努力は感心できるし応援もするよ。まぁ、ティアナの自主練密度の濃さは褒められたものじゃないが。この前、夜更けにヴァイスから忠告貰っただろう？　変に詰め込み過ぎて妙な癖が付いたらダメだ、と」

ミスショットをしたその日から夜中に1人で自主練することもあった。ヴァイス陸曹にはその時に忠告された。けどルシルさん、一体どこでそんな話を・・・。

「でもルシルさん。結果を出せば、なのはさんだって解ってくれると思うんです。優しいなのはさんならきっと・・・！」

「はあ。・・・こんな穴だらけでリスクしかないような欠陥コンビネーションで結果を出したところで叱られるだけだ。スバルが相手

に食らいついて足止めし、成功したところでティアナの近接技による2人の同時攻撃？　各個撃破をしてくれ、って言っているようなものだ。そうそう戦況が思い通りになるなんて稀なうえ、よほど戦力差がないと上手くいかない。それにだスバル。なのはは、優しいから怒るんだよ。君たちが大切だからだ」

「っ・・・！」

「いいか？　ティアナ、スバル。模擬戦はもちろん特訓はただ実力を上げて強くなるためだけのものじゃない。君たち自身の生存率も高めるためでもあるんだ。それなのに、こんな無茶をやって自分の身を危険に晒すようなことを続けて、それは君たちの強さになるとでも言うのか？」

「「・・・」」

ルシルさんの言葉にはもう何も言い返せなくなったところで、あたし達を磔にしてた十字架や槍が解除されて、少しぶりに地面に足を付けることが出来た。

「ティアナ。自分に足りないと思った近接戦の練習、それは大いに結構。強くなるための努力をする君の意思は尊重しよう。だがな。教導官であり、なおかつ同じ道を辿ったなのはがそれを解っていないと思うか？」

「なのはさんが・・・」

「あたしと同じ道・・・？」

「ああ。なのはも昔は射砲撃だけがすごかった娘だった。近接戦スキルを身に付けたのなんて結構後だったぞ。それまでは近接戦に優れていたチーム海鳴の誰かと組んでいた。正に今の君たちのように。だからなのはは知っている、解っているんだ。射撃系魔導師のメリットもデメリットも。そんな彼女が、執務官志望である君の個別スキルトレーニングのスケジュールに近接戦スキルを組み込んでいないとは思えない」

――あなたは焦り過ぎてる。なのはの個別スキルの教導も始まったばっか。これから伸びていくんだよ――

ホテル・アグスタでアリシアさんに言われたことが脳裏を過った。あたしはまた、突っ走ってた。そしてまた馬鹿なミスをするところだった。

「・・・スターズのフォワードの候補は君たちだけじゃなかった。それでも、なのは達はスバルとティアナを選んだんだ。俺から言えるのはもうこれだけだ。信じろ。数居る候補の中から選ばれた自分を、そして選んでくれたなのはを」

「自分を・・・」

「なのはさんを・・・」

「「信じる・・・」」

「ティアナ、そもそも君は射撃と幻術しかない凡人だと言っているようだな。しかもスバル達と比べて訓練の成果が出ていないという話だったが」

アリシアさんに言った言葉だ。アリシアさんがルシルさんに言うとは思えないけど。あ、アイリ医務官か。ルシルさんの家族だって言うし。でもプライバシーは守ってほしいかも、医務官なんだし。

「スバル。ティアナは教導を受けてから今日まで、全然変わっていないと思うか？」

「そ、そんなことありません！　ティア、すごく強くなりました！　射撃の腕だって上がったし、デバイスの恩恵もあるかもだけど！　でもそれを度外視にしてもティアはすごいです！」

「そんなお世辞なんていいわよ、スバル」

素直に受け取れない。スバルは陸士訓練校の頃からあたしのことを持ち上げてたし。

「それじゃあ俺が率直な評価を下すが、ティアナは十分に成長していると思うぞ。射撃系の魔導師は中遠距離での射砲撃をメインとするから、格闘戦を行うベルカ式魔導師に比べて強くなったという実感が持てないことが多い。だからティアナも成長していないと感じるんだろうが、第三者から見ればちゃんと成長している。自信を持っていいんだ」

「そうだよティア！　ただ判りにくいだけなんだって！　ルシルさんがそう言ってるんだから間違いないよ！」

「それは・・・そうかもしれないけど・・・」

それでもあたしはやっぱり素直になれない。

「信じようよ、ティア。自分のことくらい、自分で信じてあげないとダメだよ」

スバルと顔を見合わせてると、「６時半。もう良い時間だな」ルシルさんがそう言って踵を返した。ルシルさんの背中に目をやると・・・

「俺の伝えたいことは伝えた。明日の模擬戦。このクロスシフトＣを使うかどうかは２人の意思に任せる。自分を貫いてなのはに絞られるか、なのはを信じて練習通りに終えるか、な。・・・っと、そうだ。今日はありがとう。有意義な時間を過ごさせてもらったよ」

あたし達に振り返ることもせずにそう言いながら、ルシルさんはシミュレータから去って行った。それを見送った後、「ティア・・・」不安げな声色でスバルがあたしを呼んだ。明日、シフトＣを使うかどうかはあたしたち次第。

「あたしは・・・」

†††Ｓｉｄｅティアナ⇒なのは†††

「はーい。それじゃあ午前中の纏め、２ｏｎ１の模擬戦を始めるよ。まずはスターズからやるから、スバルとティアナは防護服着用」

「「・・・はいっ！」」

訓練中どこか上の空だったスバルとティアナ。クロスシフトＣを使うかどうかまだ迷っているのかもしれない。昨夜、終業後にルシル君からクロスシフトＣのことについて、模擬戦の映像を交えながら聞かされた。ティアナが何を考えて思って、何に悩んでいるのか、アリシアちゃんから聞かされた話と統合してようやく理解した。

――シフトＣの使用についてはスバルとティアナに一任したので、高町教導官も２人が明日の模擬戦で取る行動に相応しい対応をして頂けるようお願いします――

ルシル君はそう言ってた。もしシフトＣを実行すれば、私は２人を問答無用で撃墜する。練習の時だけ真面目にやってるフリをして、実戦で無茶をするような馬鹿な子を許せるほど私は優しくない。だけど練習通りにやってくるのなら、ちゃんとティアナと話をしよう。

「（私を信じろ、か。ルシル君も嬉しいことを言ってくれるよね♪）・・・それじゃあ、スタート！」

そして始まる模擬戦。スバルとティアナはクロスシフトＡを選択した。スバルが撹乱を担当して、ティアナがビル内部からクロスファ

イアシューートによる制圧射撃。私はトレーニング用に調整したディバインシューーターで全弾迎撃。

「うぉぉぉーーーーッ！」

――ナックルダスターーーー

スバルの一撃をプロテクションで防ぎつつ、「バリアバースト・・・！」プロテクションを爆発させる。こうすることで攻撃を仕掛けてる相手にダメージを与えて、その爆風と衝撃で吹き飛ばして距離を開けさせることも出来る。

「ぅく・・・！」

「お！　やるじゃないスバル！」

「あ、ありがとうございます！」

スバルは爆発に呑み込まれる前に自ら距離を取ったことでダメージを免れた。良い反応速度だ。上の空だった訓練中とは大違い。そんなところに「おっと」レーザーサイトに狙われるのに気付いた。出所を見ればティアナが砲撃の発射態勢に入ってる。発射される前にシューーターで潰そうとしたところに「せぇぇぇーーーい！」スバルが再突撃して来た。

「シューーット！」

――ディバインシューター――

そんなスバルと、砲撃発射態勢のティアナにそれぞれ４発ずつ発射。スバルはシールドで防御しつつ突撃続行、そしてティアナは・・・

――ファントムブレイザー――

砲撃を発射してシューターを蹴散らした。スバルを見ればそそくさと離脱し終えていた。離脱タイミングも悪くない。私もすぐに空に上がって砲撃を回避。そこからはシフトＢに切り替えたりして仕掛けてきたけど、「はい。終了～！」最後までシフトＣを使うことはなかった。

「スバル、ティアナ。ライトニングの模擬戦が終わった後、少し時間をくれるかな？」

肩で大きく息をしてる２人にそう訊くと、「・・・はい」頷いて応えてくれた。そして次はライトニングＦのエリオとキャロが、フェイトちゃんを相手に模擬戦を開始。それを見守る私たちスターズ。大きな問題が起きることなくライトニングの模擬戦も無事に終了。

「これにて本日の教導訓練は終了。それでは解散」

「「ありがとうございました！」」「「ありがとうございました・・・」」

解散の合図をして、居残るように伝えたスバルとティアナはその場

に留まるんだけど、「エリオ、キャロ？」の２人もその場から動かなかった。フェイトちゃんが「２人にも伝えないといけないって思って」そう言ってエリオとキャロを見ると２人は頷いた。

「だな。なのは、お前の教導の意味を教えてやれ。２度と馬鹿なミスしねぇようにだ」

ヴィータちゃんがそう言うとティアナが体を縮めた。もう解ってるんだよね、アリシアちゃんとルシル君の話から、無茶と焦りがどれだけ自分や周りに迷惑が掛かっちゃうか。まず昨夜ルシル君に見せられたスバル達とルシル君のやり取りの映像を、２人が磔から解放されるまでをモニターに流して、見終わったところで私は口を開く。

「ティアナ。昨日のルシル君との模擬戦についてはこの通りルシル君から窺ってるよ。クロスシフトＣの危険性や、さっきの模擬戦で使うかどうかの選択が２人に委ねられていたのも。それで、どうして使わなかったの？　私に使うために組んでたんでしょ」

「・・・あたしが、使わないと決めたから、です・・・。ルシルさんにも言われましたから。使い物にならない、ただ危ないだけのものだと」

「そっか。でも未だに完全には納得はしていないっぽいね」

ティアナの表情を見れば判る。自分が間違っていたことについては納得も理解もしてるようだけど。こりゃ私の失敗談を明かさないとダメみたい。ちょっと恥ずかしいけど、ティアナに解ってもらうに

はこれしかない。

「ティアナの誤射未遂。あれ、結構無茶をやったよね。ヴィータ副隊長との合流を待つことも出来たし、アリシア捜査官の援護だって待てたし、シャーリーから無茶をしてるって警告も受けた。それを無視して無理やり攻撃を実行、スバルを誤射しかけた」

ちょっと意地悪く言ってみる。ティアナは俯いて、拳をギュッと強く握り締めた。

「そしてクロスシフトC。ルシル君の言うようにリスクだらけで、自分たちの身を危険に晒すコンビネーション。強くなろうっていう姿勢は評価できるよ。でも、何か勘違いしているみたいだけど、模擬戦はケンカじゃないんだよ？　練習じゃ真面目に聞いているフリで、本番でこんな無茶をするなんて、練習の意味ないと思うんだけど。私の言ってることややってること、間違ってるかな？」

「いいえ・・・」

「間違っていない、です・・・」

「ん。ねぇ、ティアナ。アリシアちゃんから似てるって言われたでしょ？」

「え？　あ、はい・・・。フェイトさんを誤射した過去を話してくれました」

「これ、恥ずかしながら私にも当てはまるんだよ。私も昔ね、ミスショットじゃないけどティアナと同じ失敗をしちゃったんだ。ヴィータちゃんやアイリからの忠告を無視して、フェイトちゃんたち応援がもうすぐ来るって知っていながら、私は突っ走った」

リンドヴルムの置き土産となった神器回収任務。その1つだった"スフィー・ダンテ"の回収時、私は無茶をやって撃墜されてしまった。その時の戦闘映像をみんなに見せる。

「リンドヴルム事件の後始末だったロストロギア回収任務だ」

ヴィータちゃんがそう補足した。神器の力で炎と一体化してる剣士と戦う私、ヴィータちゃん、シグナムさん、セレスちゃん。でも圧倒的な火力と予想の出来ない攻撃によって・・・

「ヴィータちゃん達は墜ちて、そして馬鹿みたいに突っ込んだ私も墜ちた」

「「「「っ!!」」」」

私もバッサリと斬られるシーンが流れて、スバル達がモニターから目を逸らした。"スフィー・ダンテ"による右肩から左脇腹への創傷、重度の火傷、刃が地面を砕いたことで発生した石礫による裂傷、爆風によって吹き飛ばされて、地面に叩きつけられた際の骨折、打撲、擦過傷などなど。挙げればキリが無い怪我の数々。

「それで、仲間の忠告を無視して突っ走った結果がこれ」

私が本局医務局へ運び込まれるまでの間と、手術後の写真を見せる。改めて見ると本当にエグイというかグロイというか。ズタボロの血まみれな私の姿に、キャロはモニターに視線を戻してすぐに両手で顔を覆って見ないようにして、スバルとティアナとエリオは目を見開いて顔を真っ青にした。

「なのはの受けたダメージは甚大で、魔導師として再起できるどころか、もう2度と歩けないかもしれないって言われてたの。応援に向かっていた私たちは自分を責めたよ。もう少し早くついていれば、って。でもね、意識を取り戻したなのはが謝ったきたんだ。迷惑をかけてごめんね、って・・・」

「無茶をしなきゃいけねぇ、無理でもやらなきゃいけねぇ、無謀だろうが命懸けになろうが一歩も引けねぇ、そんな状況だってあるさ、戦闘も仕事にする局員ならな。このなのはみたいに街を守らなきゃいけねぇっつう無茶はまぁいいさ。守るためのもんだ。でもよティアナ。お前の無茶、あのミスショットは本当にあの時、自分や仲間の安全や、命を懸けてでも撃たなきゃいけなかったのか？」

馬鹿って。まぁあの時の私は確かに馬鹿だったけど・・・。

「私も、アリシアちゃんも、みんなに同じ道を辿ってもらいたくないんだ。無茶をしなくていいように、ちゃんとお仕事から無事に帰って来られるように、教えてきたつもりだったんだけど・・・」

――高町教導官。いや、なのは。ティアナやフォワード達と1度腹

を割って話し合ってみろ。昔の君は、ちゃんと話をしようっていう強い意思があった。しかし今は教導官という立場からか一方的に教え子に、解れ、というスタンスだ。ティアナも兄ティーダ一尉の一件でがむしゃらになり過ぎている。このままでは破綻する未来しかない。ちゃんと話をして、お互いの気持ちをぶつけ合ってみるのも大事だ、と俺は思うよ――

ティアナには伝わらなかった。昨夜の別れ際にルシル君から言われた言葉。六課（いま）みたいに長期間同じ教え子に教導をすることなんてなかったし、ティアナみたいな反抗する教え子は居なかったから、話をする、って簡単で当たり前の行動を忘れてた。ティアナの抱える悩みを解っていながら、私は話をしてこなかった。ダメダメな教導官でごめんね。

「つうかよ、ティアナ。お前、射撃と幻術しか出来ねぇ凡人だって言ってるようじゃんか。馬鹿言ってんじゃねぇって話だ。お前も含めてフォワードはまだ原石っつうか、まだ完成されてねぇ魔導師なんだよ。まだまだこれからだってぇのに勝手に限界作るなよ」

「うん。私もなのはも、当たり前だけど初めから今の実力じゃないんだよ？　１０年と弛まぬ努力を続けて至れたのが今の私たち。みんな、本当にこれからなんだから」

「うん。スバルはクロスレンジの爆発力。エリオはスピード、キャロは優しい支援魔法。そしてティアナは、仲間を射撃と幻術で守って、指揮をしてどんな困難な事態でも切り抜けるチームリーダー。ティアナは自分には才能がないって言ってるけどそんなことない。

立派な資質がちゃんとある」

自分では判らないかもしれないけど、まだ完全には開花してないけど、確かにそれは存在してる。

「ティアナの射撃魔法クロスファイアシュート。ルシル君から受けて見てどうだった？」

「え？・・・ちょっと対処しづらい感じ・・・でした。複雑に動きますし、速いですし、威力もすごくて・・・」

「でしょ？　あれ、ティアナのベストデータと全く同じ弾速・精度・威力に調整されてたんだよ。これがどういう意味か解る？」

「・・・あ、あたしにも同じようなことが出来る・・・？」

ティアナの目に僅かばかり強い光が灯った。私はその言葉に同意するために強く頷き返した。

「1つの魔法でもしっかり極めればそれは奥義となる。クロスファイアはティアナの大事な魅力なんだ。それを蔑ろにするのは本当にもったいないって思ってる。だから中途半端に別の魔法や技術の練習に入ると危ないよ、って教えたかった。それと、ティアナ、クロスミラージュをちょっと貸して」

ティアナはカード型の待機モードの"クロスミラージュ"を起動させて、「どうぞ」渡してくれた。私はお礼を言って「システムリミ

ッター、テストモード・リリース」"クロスミラージュ"に施してあるリミッターの内の1つを解除する。

「モード2って命令してみて、ティアナ」

「・・・モ、モード2」

私から受け取った"クロスミラージュ"にティアナが命令を出すと、その姿を変形させた。銃口からは大きな魔力刃が伸びて、グリップ先端と銃身下部からも魔力刃が伸びてナックルガードを形成した。

「ティアナの着眼点も間違いじゃなかったんだよ。ティアナは執務官志望だから、部隊を卒業したら個人戦がどうしても多くなるだろうから、将来を考えて用意はしていたんだよ」

驚くティアナにそう伝える。執務官は本当に激務だから、射撃だけだとすぐに限界は訪れる。そのための近接戦用形態、ダガーモードだ。そこまで伝えて、"クロスミラージュ"に再度リミッターを掛けた瞬間、ティアナは嗚咽を漏らし始めた。

「近距離(クロス)も遠距離(ロング)も、もう少ししたら教えるつもりだった。だけど今すぐにでもスクランブルが入るか判らない今、現状で使いこなせてる大事な武器をさらに確かなものにしてあげたかった。だけど私の教導って地味だからティアナは、自分だけ成果が見えないって辛くて、苦しんでたんだよね。やっぱダメだね、こうして真っ向から話をしないとお互いに理解は生まれないってことくらい、昔から解っていたのに・・・。ごめんね」

「っ！　ち、ちが・・・あたし、あたしが・・・ごめんなさ・・・ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい・・・・」

私はティアナの側に寄り添ってそっと肩を抱くと、ティアナは私にしがみ付いてただ泣いた。ヴィータちゃんとフェイトちゃんが私とティアナを2人きりにしようと、スバル達と一緒に隊舎に戻って行った。それからティアナが落ち着くまで待って・・・

「あ、あの、すいません。制服、あたしの涙でぐしょぐしょに・・・」

「にゃはは。気にしないで、元より陸士隊服に着替える予定だったし。・・・もう大丈夫？」

「はい、あたしはもう大丈夫です。なのはさん達の思いをしっかりと受けましたから」

「うん。それじゃあ行こうか。みんな食堂で待ってるかもしれないし」

「はいっ！」

ティアナと一緒に寮へと戻る。まずは着替えるために更衣室へ向かうんだけどその途中、「ルシルく――っと、セインテスト調査官！」が前から歩いて来たから呼びかける。

「ん？　あぁ、高町教導官、ランスター二士。ご苦労様。私に何か用でも？」

「昨夜のアドバイス、ありがとうございました」

「あたしも。いろいろお話を頂いてありがとうございました。おかげであたしはもう大丈夫です」

私とティアナは揃ってルシル君に頭を下げてお礼を言った。ルシル君のおかげで私たちはより一層絆を深められたと思うから。ルシル君は「そうか」嬉しさがにじみ出る声でそう言ってくれたと思えば、すれ違いざまにティアナと一緒に頭を撫でられた。そしてルシル君はそのまま歩き去ってった。

「あたし、ルシルさんが見せてくれたようなクロスファイアを撃てるまで・・・ううん、さらにもっと極められるまで精進したいです。ですからなのはさん。これからもご指導よろしくお願いします！」

「ティアナ・・・。うんっ、ビシビシ行くからね♪」

Ｅｉｐｉｃ９彼の者ら、狂人につき～Ｐｒｉｓｏｎ　Ｆａｍｉｌｙ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

個人閲覧レポート。

新暦７５年３月１５日。時空管理局最高評議会および本局運用部総部長リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ少将より、１年間限定の試験部隊となる古代遺失物管理部・機動六課へ調査官として出向するよう指令を受け、これも拝命。１年間隊舎に常駐する特務調査官となる。

（戦力としてはやて達に協力したかったが、敵でも味方でもない中立になってしまったな）

同月１６日。機動六課の後見人である聖王教会騎士にして管理局理事官カリム・グラシア、次元航行部提督クロノ・ハラオウンの両名と、聖王教会本部にて会談。機動六課設立の真の経緯を聴く。騎士カリムの固有スキル、預言者の著書プロフェーティン・シュリフテンによって記された預言を阻止することである、と。

（やはり先の次元世界の預言とは違っていたな。まぁ当たり前な話だが）

クロノとカリムから、はやてのリミッター解除の許可を俺に委ねると言われた。先の次元世界ではあの２人がそれぞれ１回ずつ持って

いたが、どうやら今回は俺１人のようだ。

（というか、もう俺の仕事を増やさないでくれ・・・と思ったのは秘密だ）

同年４月２９日。古代遺失物管理部・機動六課が問題なく発足。聖王教会教会騎士団・朱朝顔陸士隊ロート・ヴィンデとの"レリック"捜査の協力体制が整う。ファーストミッションまでの約２週間、然したる違反もなく順調に稼働。

同年５月１３日。ファーストミッションとなったリニアレールへのガジェットドローン襲撃事件。実働部隊の新人フォワード４名の活躍によって、ロストロギア・"レリック"は無事に回収。同時、本件の首謀者に広域次元犯罪者・プライソンが挙げられる。

（俺がプライソンのアジトから発掘した兵器開発データの中にあった航空兵器が登場し、しかもガジェットⅡ型を召喚した。もう言い逃れは出来ないだろう）

同月１９日。機動六課課長・八神はやて二等陸佐が、第１０８陸士部隊へと赴き、密輸物捜査の協力を申し出、同隊隊長ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐はこれを受諾。"レリック"捜査網を大きく拡大させる。

同月２５日。第９７管理外世界、世界名：地球に出現したロストロギアの回収を、機動六課の後見人カリム・グラシアから依頼を受け、八神部隊長を始めとした実働部隊全メンバーが出動。無事にロストロギアを回収したのを確認。

（一応、査察と言う名目で付いてくるように誘われたが、はやて達が居ない間の六課の査察もあるから断ったんだよな。・・・ま、翠屋のケーキをお土産に貰ったのは良かった）

同日。ミッドチルダ西部・レンスター地区のハイウェイにて"レリック"を運搬中だったトレーラーがガジェットの襲撃を受ける。第108陸士部隊のアリサ・バニングス二等陸尉、ギンガ・ナカジマ陸曹、教会騎士団の騎士イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトの活躍によって、"レリック"は回収され、ガジェットの殲滅も完了。

（幸運な事に死者は出なかったが、事故った車両や破壊された道路やトンネルなどの被害総額がまぁ大きかった）

同年6月3日。ホテル・アグスタにて開催される骨董美術品オークションの会場及び人員の警備。そこで問題が発生した。ティアナの誤射未遂、アリシアの撃墜。

（やっぱり起きてしまったな・・・）

ティアナの暴走は予定調和の如く発生。やはりティーダ一尉の死が引き金になっている。彼を死なさないことが、ティアナ暴走の抑止力になるはずだったわけだ。もう全てが手遅れだが。問題はそれだけではない。さらに問題が続いて起きた。

「プライソン・・・！」

ギュッと握り拳を作る。モニターに映る少女と召喚虫を見詰める。アリシアを撃墜したのは、先の次元世界で見たレヴィヤタンと瓜二つの少女。十中八九リヴィア・アルピーノだ。そして、シグナムとザフィーラの前に現れたのはルーテシアの召喚虫ガリュー。ということは、ヴィータとアイリに向けて射撃魔法を放っていたのは「メガーヌさん・・・」ということになる。

（おそらく先の次元世界のルーテシアのように洗脳されているか、もしくはアギトのようにレーゼフェアの手に寄って記憶を改ざんされているか・・・）

どちらにしろ許されるものじゃない。今のところ俺だけが知る事実だが、現状の六課に伝えることは出来ない。先の次元世界を知っているからこそ辿り着けるこの事実。だから六課自らの捜査で辿り着いてもらわないといけない。

（もう頭が痛い・・・）

それで、ティアナの暴走は続いた。クロスシフトC問題だな。なのはとの模擬戦前に偶然にも俺が練習台になれたのが良かった。アリシアからもありがたい言葉を貰っていたことで、ティアナは先の次元世界のようになのはに撃墜されずに済んだ。あと個人的なものだが、スバルから許してもらえたのが嬉しかった。

（クイントさんの墓参りに一緒に行こうとまで言ってくれたしな）

まぁ、そんなこんなでティアナはなのはと絆を深め、俺もスバルと

仲直りが出来た。そして事件も大きく動き始め、問題もこれからさらに大きく、深くなっていくだろう。今日はフォワード達の休暇。先の次元世界ではヴィヴィオとの邂逅、戦闘機人との"レリック"争奪戦が起きるはず。

「さてさて。一体どんな戦力が送り込まれてくるか判らないが・・・――」

俺のみが閲覧できるレポートを保存してからモニターを消し、「頑張ってくれよ、みんな」俺に用意された隊員宿舎の1室から出る。向かうのは隊舎の部隊長室。そこに俺専用のデスクが設けられている。調査官である以上、出向期間中は1日たりとも休みはないから今日も仕事だ。もう特務依頼が来ても応じたくないな。

「あ、セインテスト調査官！」

「おはようございます、セインテスト調査官♪」

エントランスに着くとそこにはフェイトとエリオが居て、真っ先に俺に気付いたエリオはお辞儀して、フェイトは朝の挨拶を送ってくれた。俺も「おはよう、モンディアル三士、ハラオウン執務官」微笑みを作って挨拶返し。もう挨拶くらい普通にしても良いだろう。本当はダメだが・・・。

「お待たせしました―♪」

トタトタと忙しない足音と一緒にキャロが駆けて来た。エリオとキ

ャロはデートのためにオシャレをしていて、２人とも可愛らしい。エリオがキャロの微笑みに顔を赤くしているのを微笑ましく眺めていると、「おはようございます。セインテスト調査官♪」キャロは俺にも微笑みを向けてくれた。

「おはよう、ルシエ三士。その服、とても似合っていて可愛いよ」

「っ！　あ、ありがとうございます！　そう言ってくれると、とっても嬉しいです！」

『エリオ。男の子だから、しっかりとキャロをエスコートをな』

『あ、はいっ、ありがとうございます、ルシルさん！　一応シャーリーさんからスケジュールを貰ってるので、大丈夫だと思います！』

『そうか。・・・キャロ。せっかくの休暇だ。精いっぱい楽しんでおいで』

『ありがとうございますっ、ルシルさん♪』

念話を使って素の俺のままにエリオとキャロにそう伝える。そして２人は「いってきます！」俺とフェイトに見送られながら街へと出掛けて行った。２人を見送った俺たちは隊舎へと向かう。その途中、バイクの排気音が聞こえてきた。

「あ、スターズのみんなだ」

俺とフェイトの視線の先、そこには真っ赤なバイクに跨ったスバルとティアナ、側にはなのはが佇んでいる。スバルとティアナが「あっ、フェイトさん、セインテスト調査官。おはようございます！」俺たちに気付いて挨拶してくれた。

「おはよう、スバル、ティアナ。バイクで街に出るんだね。事故には気を付けてね」

「良い休暇を」

「「はいっ！　それでは、いってきま～す！」」

バイクに2人乗りしているティアナとスバルが、俺たちに手を振って颯爽と去って行った。俺は踵を返して隊舎へと歩き出す。なのはが「あ、今からオフィスですよね。ご一緒します！」駆け寄って来て、「あ、待って、私も！」フェイトも遅れて駆け寄って来た。3人で隊舎前に来たところで・・・

「おう、なのは、フェイト、あとセインテスト調査官」

「ヴィータちゃん」

「シグナムも」

隊舎からヴィータとシグナムが出て来た。シグナムが「セインテスト調査官。陸士108部隊に行って参ります」俺にそう報告してくれた。

「ナカジマ三佐が合同捜査本部を立ち上げてくれるらしく、その打ち合わせを。ヴィータはあちらの魔導師に戦技指導を行います」

「了解した。ナカジマ三佐にはよろしく伝えておいて下さい」

「はい。ではこれで」

「あの、捜査周りになら私も行った方が・・・」

すれ違おうとしていたシグナムにフェイトがそう言うと、「準備は我われ副官の仕事だ。それに、アリシアが動けない今、お前の仕事量は増えるばかり。良い機会だ、今日はのんびりしていろ」シグナムは気遣いの言葉を掛けた。

「あ、ありがとうございます?で良いんでしょうか・・・?」

「それで構わん。では行ってくる」

「「いってらっしゃーい」」

ヴィータとシグナムも、陸士部隊が採用しているジープタイプの車に乗って108部隊の隊舎へ向かった。これで隊舎に残るのは隊長のみとなった。彼女たちも今日は隊舎で待機となる。改めて隊舎のエントランスを潜り・・・

「それじゃあ私は、医務室に寄って来るね」

「アリシアちゃんのお見舞いだね。うん、それじゃあまたオフィスで」

「うん、オフィスで」

骨折で医務室に入院しているアリシアのお見舞いへ向かうフェイトと別れた。そして次は「セインテスト調査官。私もこれで」オフィスに着いたことで、「ああ」なのはとも別れた。オフィスに入っていくなのはを見送り、俺は仕事場である部隊長室へと向かう。

「ルシル！・・・じゃなかった、セインテスト調査官！」

「おはようです、セインテスト調査官！」

「おはようございます～！」

その途中で、アイリとリイン、それにシャーリーが前からやって来た。俺も朝の挨拶を返して、「これからどこへ？」３人にそう訊ねる。

「私とリイン曹長はメンテナンスルームへ」

「これからもっと忙しくなるでしょうから、それまでにリインのフルメンテをしてもらうですよ」

「アイリは医務室で今日はのんび～り。新人たちが居ないと暇でし

ょうがないんだよね」

医務室の常連となりつつあるフォワードは今日居ないからな。医務室が暇になるのも仕方ないだろう。が、調査官の前でのその発言はいかがなものかと思うぞ、アイリ。そんな3人とも別れ、「おはようございます、八神部隊長」はやてとリイン、それに俺の仕事場である部隊長室へとやって来た。

「あ、おはようございます、セインテスト調査官」

執務デスクの椅子に座ってポケーッとしていたはやて。6月も中盤で少しずつ温かくなってきて、隊舎内も過ごしやすいように環境調整されていることもあって、気を緩めるとうたた寝してしまうんだよな。

「「今日も1日よろしくお願いします」」

お互いにお辞儀しあって、俺も自分専用のデスクの椅子に座って、「さて。始めますか」早速仕事を開始した。

・―・―・―・―・

第1世界ミッドチルダの西部と中央区画を繋ぐ4車線の公道。多くの車両が目的地を目指して走行している。そんな数ある車両の内の1台である大型トレーラーは十数ｋｍの速度超過で公道を進んでいた。しかし、突如として荷台のコンテナが爆発してトレーラーは大きく傾き、そのまま横転する。轟音と派手な火花を周囲に撒き散ら

しながら、トレーラーはすぐ前にあったトンネル内にまで滑り込んで行ってしまった。その途中に薙ぎ払った一般車は計３２台。至るところから痛みに悶える声や、救急・消防隊を呼ぶための通報を行っている声が聞こえてくる。

「・・・いで・・逃げ・・・・」

事故の原因となったトレーラーはトンネルのちょうど半ば付近で止まった。牽引されていたコンテナ車は本体であるトレーラーと分離していて、さらに奥で道路を塞ぐように横たわっている。炎と黒煙を上げるコンテナより幼い子供の声が漏れ聞こえてきた。そして大穴が空いている個所より小さな人影が這い出てきた。

「・・・ヴィオ・・・・」

「・・・セティ・・・・」

出てきたのは幼い子供２人だった。真っ先に這い出てきたのは、炎に照らされながらも美しく輝く銀色の長髪、蒼と紅の光彩異色の瞳を有した子供。その子供に引っ張り出してもらうように這い出てきたもう１人の子供は、炎に照らされてより一層の輝きを際立たせている金色の長髪、赤と翠の光彩異色の瞳を有している。２人揃ってボロボロな、まるで囚人服のような服を着ていて、さらには裸足だ。

「行こう・・・がんばって・・・・」

「・・・う・・ん・・・・」

トンネルの壁面にある非常口を目指して歩き出す２人の子供。銀髪の子供の両手に握られているのは２本の鎖。それぞれの鎖の先端には大きなケースが２つ繋げられている。子供が歩いてケースを引き摺るたびにゴリゴリと地面を擦る音が発せられる。

「ごほっ、こほっ、お、お待ちなさい！」

子供たちを呼び止める声がトンネル内に響き渡る。銀髪の子供が「・・・ゼータ」声の主の名前を発した。その視線の先には１０代半ばと思しき少女が１人、トレーラーの運転席から降り立っていた。艶やかなストレートの黒髪が熱風で揺らめいている。白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが１本入った黒のプリーツスカート、クリーム色のカーディガンという格好だ。

「プライソン・・・我が父上のご命令を、お前たちを輸送する任務を全うしなければ・・・！　そうでなければ、娘としての私の存在価値が！　ＩＳ発動、サウザンドブレス！」

ゼータと呼ばれた少女の足元に黄色に輝くテンプレートが展開された。彼女の両手に握られているのは２つの扇で、バッと勢いよく開かれた。そして「骨折させてでも連れて参ります！」ゼータは２人の子供へと突撃した。

「・・・フォルセティ。ママ・・・」

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ。・・・ぜったい、ママのところに連れ

て行くから・・・！」

金髪の子供が銀髪の子供の名前を不安そうに呼ぶと、銀髪の子供は優しい声色で金髪の子供の名前を呼び返し、そして・・・

――蠢け（ノーム）超然なる大地――

ゼータとの交戦に入った。

・――・――・――・

ミッドチルダ東部にある広大な森林地区。その奥には時空管理局によって広域指名手配を受けている次元犯罪者、プライソンの本拠地の研究所がある。なんてことはない洞窟を入り口として、その奥には人工的に造られた空間が広がっている。施設は蟻の巣の如く地下へと伸びており、彼の製作した兵器の生産施設、格納庫、居住区などが幾つもある。

その施設内の通路を歩く少女５人。それぞれ白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが１本入った黒のプリーツスカートと揃えられた衣装を身に纏っているが、個性を出すつもりか５人とも別々のオプションを身に付けている。

「ねえねえ、誰がパパに報告する？　デルタは嫌だよ」

デルタ。１２歳ほどの少女で、オプションとしてクリーム色のベストを着ている。身長は１４０ｃｍほど。オレンジ色をしたロングヘアをポニーテールにしている。

「ここはやっぱり長女のアルファ姉さんで」

「長女だからって押し付けないで、ベータ。ここは仲良く姉妹全員で・・・。ね？　デルタ、イプシロン」

アルファ。１８歳ほどの少女で、オプションとして藍色のブレザーを着ている。身長は１６５ｃｍほど。ブロンドのウェーブの掛かったロングヘア。

ベータ。１５歳ほどの少女で、オプションとして黒いセーターを腰に巻いている。身長は１６０ｃｍほど。栗色のボブで、左目が前髪で隠れている。

「えー？　いやだよ、怒られるのが判っていながら報告しに行くなんて。下の姉妹がやればいいよ。ね？　イプシロン」

「デルタの意見をイプシロンは拒否します。こういう場合は、責任ある長子が行うべきです」

イプシロン。１０歳ほどの少女で、オプションとしてデフォルメされた猫と鼠のイラストが描かれた灰色のパーカーを着ている。身長は１３０ｃｍほど。青色のセミロングヘアで額を大きく出している。

「えー？　やっぱりそうなっちゃうの？」

「そもそもガンマお姉ちゃん独りだけ自室に引き籠ってるのが納得いかな～い」

「デルタの意見にイプシロンは肯定します。ズルイです、卑怯です」
女3人寄れば姦しいというように、彼女たちは少々騒がしい。彼女たちはプライソンによって一から生み出されたサイボーグだ。長女アルファ、次女ベータ、三女ガンマ、四女デルタ、五女イプシロン、六女ゼータの全6機で、それぞれがある目的の為だけに製作された生体部品。プライソンは自分が造った兵器にはそれぞれ作品名が付けられており、彼女たちの作品名は"スキュラシリーズ"という。
「ガンマはまぁ許してあげて。あの子の機体としての性能を思えば引き籠るのが仕事だから
「だったらベータお姉ちゃんが行ってきてよ」
「どうしてそこで、だったら、になるのか解らない。OK、じゃあこうしよう。多数決で決める。これで文句無し」
ベータの出した採決案にアルファ達は賛同し、そして「イプシロンに決定！」となってしまった。5機中4機がイプシロンに票を入れたのだ、どう見ても末っ子に面倒事を押しつけるダメダメな姉の図だった。フルフルと全身を震わせるイプシロンは、涙を湛えた両目で姉たちをキッと睨みつけ・・・
「イプシロンは姉たちに不快を表します！　いぃーっだ！」
彼女たちの製作者であり父でもあるプライソンの居る研究室へと駆

け出していった。残された姉たちは顔を見合わせてから頷き合った。どうやらイプシロンに押し付けたことへの罪悪感を覚えたことで、「行こう」慌ててイプシロンの後を追うことを決めたようだ。そうして姉妹全員で研修室へと足を運び、何かしらの作業中だった「プライソン」の背中に声を掛けた。

「なんだ？　今はお前たちに構ってる暇はないぞ？　うるさいから向こうへ行っていろ」

デスクチェアに腰かけていたプライソンはクルっと姉妹たちに体を向けた。座っていたのはまだあどけない少年だった。薄紫色の髪はもっさりボサボサとしており、身嗜みには几帳面ではないことが窺える。瞳の色は黄金で釣り目。笑うと八重歯が光る。生意気そうな小僧っと言った感じだ。青いストライプが縦に描かれたYシャツ、蝶ネクタイ、黒ベスト、そして紫色のジュストコールを羽織っている。

「あの、ですね。プライソンがゼータに指示を出していた、その、例の作品の輸送の件ですが・・・」

「んあぁ？　あー、制御端末（プリンツェッスィン）と防衛端末（プフェルトナー）か」

プライソンは操作盤へと体を向き直して、空間モニタータイプのキーボードのキーを軽快に打っていく。展開されたモニターに表示されたのは3つの生体ポッドで、内2つのポッド内に漂うのは2人の幼い子供。体のつくりからして少年と少女だ。

1人は金髪の少女で、ポッド下部の金属板にプリンツェッスィン・

ヴィヴィオと刻印されている。1人は銀髪の少年で、金属板にプフェルトナー・フォルセティと刻印されている。そして最後の1つのポッドは空だが、金属板にはカイゼリン・キュンナと刻印されている。

「そう言えば遅いな。予定ではそろそろ東部に入ったと連絡があってもいい頃だろうが。何をもたもたしているんだ、アイツは」

「あ、あの、イプシロンは――」

「それでですね。ゼータからの視覚情報が私たち姉妹（スキュラ）に届きまして・・・」

「ゼータが、えっと・・・プフェルトナーによって殺害されてしまったようでして・・・」

おどおどしているイプシロンに代わって、アルファとベータがそう報告をした。プライソンは「なんだと？　見せてみろ」ゼータから送られてきた映像をモニターに流すように命令した。モニターが切り替わり、ゼータ視点の映像が流れだす。

『骨折させてでも連れて参ります！』

――蠢け（ノーム）超然なる大地――

扇を手に、銀髪の少年フォルセティと金髪の少女ヴィヴィオへと疾駆するゼータ。彼女たちの間の地面が大きく爆ぜ、大小の石礫や意

識的に構築された石柱が何本とゼータへと殺到していく。

『この程度なんともありません！』

――サウザンドブレス――

ゼータが勢いよく両手に持つ扇を振るうととんでもない突風が生まれ、何十発という石礫を押し返し、石柱も先端から瓦解していく。砕かれた瓦礫などが全てフォルセティとヴィヴィオの元へと殺到する。

――闇(コード)よ誘え、汝(カムエル)の宵手――

そんな瓦礫を受け止めるのは影で出来た、人の腕を形をした平たい触手。さらに・・・

――捕(コード)らえ打て、汝(クシエル)の懲炎――

『な・・・！？　あっづ・・・！？』

ゼータの四肢や胴体に絡みつくのは炎で出来た縄。炎で出来ているため『あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝・・・！』彼女の皮膚や服を焼き始めた。フォルセティがヴィヴィオの視界にゼータが入らないように前から抱きしめると・・・

『護(コード)り給え、汝(ケムエル)の万盾』

術式名を詠唱。するとサファイアブルーに輝く小さな円い盾が無数に展開され、それらが合わさってフォルセティとヴィヴィオを覆うように半球状のバリアへと変化した。

『さようなら、ゼータ』

『ヒッ！　ま、待っ――』

――輝き燃えろ、汝の威容（コード）（ケルビエル）　――

ゼータの足元にサファイアブルーの円陣が展開され、『っ！！』カッと蒼炎が噴き上がった。ゼータは声にならない悲鳴を上げる。全身が機械部品のサイボーグであるため、ただの人間より頑丈で死に難い。だが、それが彼女にとっての絶望だった。生きながらに焼却されているにも拘らず、すぐには死ぬことが出来ないのだ。蒼炎で視界内が満ち、ゼータに背を向けて歩きだすフォルセティとヴィヴィオの後ろ姿が映ってすぐ、ブツンとブラックアウトした。

「映像はここで途切れました。再起動を待ってみましたが・・・一向に行われないので、まず間違いなく死亡したと結論付けられます」

「映像を見て判る通りプフェルトナーはレリックを2つ持ち去っています。いかがしましょうか・・・？」

生まれた理由は何であろうと末の妹を喪ったことで暗い影を落とす"スキュラ"達。そんな中でプライソンは「さすがは魔神オーディンの、か。それでゼータは、どの作品の担当だったか？」悲しみの

感情を一切見せることなく、誰とも言わずにそう訊ねた。

「海洋艦隊の担当ですが・・・」

「あぁ、アイツからの依頼品か。ならゼータが破壊されたくらいで慌てる必要はないな。どうせ海洋艦隊は不要になる」

"スキュラ"はゼータが殺害されたと報告したが、プライソンはゼータが破壊された、と表現した。あくまで彼にとって彼女たち"スキュラ"は生命体ではなく機械作品としか見ていないのだ。たとえそれでも彼女たちは、プライソンを父として敬い続けるだろう。彼の物言いに誰も反論しないどころか嫌な顔1つとしてしないのが良い証拠だ。

「とりあえずプリンツェッスィンとプフェルトナー、ついでにレリックを回収しないとな」

「私たちが出ましょうか？」

「馬鹿を言えアルファ。お前たちは大事な体だ。ゼータみたく使い道がどの道ないような奴とは違って、お前たちの仕事はもうすぐだ。ここで喪ったら俺は本気で怒る」

プライソンが"スキュラ"達にそう伝えると、彼女たちは頬を上気させて嬉しそうに笑みを浮かべた。愛した父から使い道の無いと評されたゼータにとっては堪ったものではない言葉だろうが。

「あの、それでは回収には誰を派遣しますか？」

「スキタリスとシコラクスは？」

「スキタリスは現在、０１はメンテナンス中。０２、０３、融合騎アギトは他のレリック捜索のため街を散策中。シコラクス０１から０４も街に出かけています」

スキタリスはメガーヌをリーダーとするアルピーノ家チームだ。０１はリーダーを示すコード、つまりメガーヌは今、ここ研究所に居るようだ。そしてシコラクス。０１から０４とコードが付けられていることから、メガーヌ達スキタリスと同様のチームが他に居るらしい。

「決まりだな。スキタリスとシコラクスに、プリンツェッスィンとプフェルトナー、レリックの回収をするよう指示を出しとけ。俺はアグレアスの最終調整をやる。おい、ガンマ！」

別の映像に切り変えられたモニターに卵のような物体が映り込んだ。プライソンは「おい！」改めてそう呼び掛けると、その物体が時計回りにクルっと回転。裏側に位置していた窪みがモニターに映り込む。そこには１人の女性が座っていた。

『何？』

２０歳ほどで、アルファ達と同じ白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが１本入った黒のプリーツスカートを身に纏い、オ

プションとして黒のトリミング・コートを羽織っている。身長は１６０ｃｍほど。深紅の前髪と後ろ髪は共に３０ｃｍと長く、顔を完全に覆い隠している。

「何？じゃないでしょ、ガンマ！　プライソンが呼んだらすぐに返事！」

『アルファうるさい。ウチが姉妹（スキュラ）、人造魔導師（スキタリス）、機人（シコラクス）、果てには探索者（グレムリン）やＬＡＳとかの限定兵力（つかいすて）のメンテナンスを一手に引き受けてるの忘れないで』

ゼータは、肩が凝って疲れている、とでも言いたいようにコキコキと首を鳴らして大きな溜息を吐いた。

『で？　このくそ忙しい時に何の用なの、父さん？　ウチ、セッテとオットーとディードの最終調整もあるんだけど？』

ガンマは前髪の奥に隠れている瞳でプライソンをジトっと見た。

「そ、そのままで頼む。あと出来れば、スキタリスとシコラクスのフォローもしてや・・・ってくれ」

『逃走した端末２基とレリックの探索・・・。適当にグレムリンと、余り始めたシームルグシリーズをバラ撒いておけば、機動六課とか言う部隊の航空戦力を空に足止め出来ると思う。それでいい？』

「ああ、それでいい」

『任務了解。イプシロン、シームルグを飛ばすから来て』

「イプシロン、了解」

ガンマとの通信が切れ、イプシロンはプライソンに一礼してから研究室を駆け足で出て行った。プライソンは「アルファ。スキタリスとシコラクスに指示出しとけ」アルファにそう命じると、「承知しました」彼女は恭しく頭を下げた。

「お前たちは待機しとけ。以上だ」

プライソンはそう言って、再び作業を再開した。アルファとベータとイプシロンは踵を返して研究室から出ていくが、デルタだけがその場に留まった。

「ねえねえ、プライソン」

「なんだ。邪魔をするな、あっち行ってろ」

「あぅ。あのね、端末とレリック、早く回収できると嬉しい？」

「ああ、そうだな。局が割り込んでくると面倒くさい。サッサと回収してくれと助かるな」

プライソンからそう言われたデルタは「そっか♪」含み笑いをし、踵を返して研究室からスキップで去って行った。その際の彼女の笑

みは、まるでイタズラっ子のような何かを企んでいるものだった。

Ｅｉｐｉｃｌ０－Ａ機械仕掛けの少女～Ｂａｄ　Ｒｅｕｎｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅティアナ†††

機動六課に入ってから初めてのまともな休暇に、あたしはヴァイス陸曹のバイクを借りてスバルと一緒に街に繰り出した。服やアクセサリーのショップを回ったり、エリオやキャロがデートを任務と誤解してるのに苦笑したりと楽しんで、どこかで一旦休憩を挟もうかってスバルと話していると・・・

「どこ見て歩いてんだよお嬢ちゃん？」

「おいおい、汚れちゃったよ、お兄さん達のスーツ。どうしてくれんの？」

「お母さんかお父さんに連絡してよ、クリーニング代貰いたいからさ」

家族や恋人、友達の憩いの場である噴水公園から、そんな呆れるような話声が聞こえてきた。スバルが「何やってんのあの人たち！」真っ先に公園へと駆けこんで行くから、「ちょっ、待ちなさい！」あたしも急いで追いかける。

「そこの人たち、何をしているんですか！」

スバルが向かう先、そこには数人のガラの悪い男性と小さな女の子1人が居た。男連中が「なんじゃい、お嬢ちゃん達。この娘の知り合いか！？」スバルとあたしをギロリと睨みつけてくる。もう溜息しか出なくなる、馬鹿馬鹿しくて。

「時空管理局、スバル・ナカジマ二等陸士です」

「同じくティアナ・ランスター二等陸士です。事情を窺えますか？」

あたし達は局員ＩＤを取り出すと、男連中は明らかに嫌そうな顔をした。スバルが絡まれてた女の子に「大丈夫？　何かあったのか教えて」話を訊き始めた。その子が何かを喋る前に、リーダー格らしい３０代後半くらいの男性が「これを見てくれよ、局員さん」そう言って、後ろに佇んでいた2人のワイシャツを指差した。

「そのお嬢ちゃんがぶつかって来た所為で、コイツらのスーツがコーヒー塗れなんだよ。これから大事な商談があるって言うのによ。クリーニング代くらい請求させろや」

男性がそう言うと、「違うもん！　ぶつかったのは確かだけど、でもコーヒーは自分で掛けたくせに！」女の子はそう証言。あたしは「そうなですか？」改めて訊ねる。

「おいおいおい、局員さん。そりゃねぇよ。局員相手に嘘を吐くメリットがなんてねぇよ、俺たちのような逸れ者にはな」

「お嬢ちゃん、お父さん達に怒られるのが嫌だからって嘘を吐くの

はいけねぇ。正直であれ、だ」

自分たちがアウトサイダーだってことは理解してるみたいね。だからこそ局員に嘘は吐かないっていう謎理論。アンタ達のような人だからこそ嘘を吐くんでしょうが。

「最悪！　なんなの、コイツら！　これだから人間は汚くて悪い奴！　嘘吐きはお前たちの方でしょ！　とっととくたばれ！」

女の子もとうとう怒っちゃって、とんでもない暴言を吐いた。コーヒーでシャツが汚れてる2人が「ガタガタ言ってねぇで親を呼び出せや！」声を荒げ始める。女の子も「んべー！　嘘吐きにはこれで十分だよ！」あっかんべーで応戦。ともに白熱してきたから騒ぎが大きくなってく。

「（どうすれば・・・）あ、アレ・・・！」

途方に暮れて周囲を見回してると、監視カメラが設置されてることに気が付いた。あたしは少しの間スバルに女の子たちを押さえておくように伝えて、この公園の管理者に連絡を入れる。そして「はーい。注目～！」あたしはモニターを1枚と展開する。

「この映像に真実が隠されているわ」

管理者から監視カメラの映像を借り受けて、それをモニターに流す。まず女の子がモニターに映り込んで、何かを探してるのかベンチの下や遊具の中を覗き込み回ってる。次いで男連中が映る。缶コーヒ

ーを片手に飲む2人が徐々にベンチの下を覗き込んでる女の子に近付いていく。

「「「あ・・・！」」」

そして、女の子が立ち上がったことで缶持ち2人とぶつかる。だけど、コーヒーが2人のシャツに掛かることはなかった。女の子はフラついて尻もちをつき、なんと缶持ち以外の男が缶を叩いてわざとコーヒーを缶持ち2人のシャツに掛けた。

「ほらー！　自分たちでコーヒー掛けてる！　それなのにデルタが悪いって言って！　サイテー、サイテー、サイテーな人間め！」

（デルタ？　変わった名前ね・・・）

男連中は「チッ・・・！」舌打ちをしてこの場から立ち去ろうとする。それを見て「待ってください！」スバルが呼び止めた。男連中は面倒くさそうに振り返って「何か？」苛立ちを隠そうともしないでそう訊いてきた。

「この子に謝ってください！　あなた達の言動は恐喝罪に当たります。このまま立件しても構わないんですよ？　でも未遂ですから厳重注意でもいいです。まぁこのデルタって子が被害届を出さない前提ですが・・・」

「りっけん？　ひがいとどけ？」

「デルタ。この人たちが謝ったら今回の件、水に流して・・・許してあげても良い？　それともやっぱり許さないで――」

「いいよ、謝るならね。ひがいとどけ、とか面倒くさそうだし、・・・どうせあと少しでお前たち人間は・・・」

あたしの提案にデルタは応じてくれた。最後に何か呟いたようだけど聞こえなかった。たぶん変な悪態でも吐いたんでしょうね、気が強い子供だし。改めて「どうしますか？　大人なら謝れますよね？」スバルが男連中に伝える。あたし達だけじゃなく、公園に居る他の人たちからの視線をも一手に受けた男連中は「すみませんでした・・・」デルタに頭を下げて、周囲にガンを飛ばしながら公園から去って行った。

「それで？　君はさっきから何をしてるのかな？　何かを探しているようだけど・・・」

「ん？　そうだよ、探し物の途中。えっと、ありがと？　デルタは学んだよ。人間の中にも良い人間も居るって♪」

なんかさっきからこの子の言い方が引っ掛かるわね。人、じゃなくて、人間、って言うし。まぁあながち間違いじゃないんだけど。そういう教育を受けて来たのかもしれないし。デルタは「じゃ、これで！」そう言って走り去って行った。

「あー、行っちゃった～」

「ま、一度トラブルに巻き込まれたからには、もう同じトラブルを起こさないでしょ。ちょうどいいし、あそこのアイスクリーム屋さんで何か買っていきましょ」

「お、いいね！」

改めて休みを満喫するために、まずはアイスクリームを売ってる屋台に寄って、スバルと一緒に3段重ねを注文。木陰に座って美味しく頂きながら、次はどこへ行こうかと決めていると、キキィー！とブレーキ音が響いた。続けて「危ないだろう！」そんな怒声が。

「「まさか・・・」」

慌ててアイスクリームを食べ終えて、ブレーキ音と怒声が聞こえてきた場所へ向かうと、「デルタ！」が道路脇でうろちょろしてた。しかもクラクション鳴らされてるのに意に介さずに道路内に入ろうとするし。

「待って、待ってデルタ！」

「轢かれるわよ！　こんなところに居ちゃ！」

慌ててデルタを保護すると、「あ、さっきの。なに？」あの子は自分が何をやっているか理解していないようだった。車の走る道路に進入しちゃダメ。そんな小さな子供でも知ってる常識が無いなんてどんだけ箱入り娘なのよ。

「大丈夫だよ、避けてくれてたし」

「それ大丈夫じゃないよ！　絶対あとちょっとで事故起こしてたから！」

「なんて危うい・・・」

スバルと一緒に溜息を吐く。近くの陸士隊に預けるのもなんか不安だし。スバルも同じ考えに至ったのか『あたし達で手伝おうか・・・？』念話でそう提案してきたから、あたしは『そうね、そうしましょ』それを受け入れた。

「デルタ。あたし達も探し物手伝うよ」

「え？　いいよ、デルタ1人で十分だし」

「馬鹿言わないの。ほら、行くわよ」

「うぇぇぇ！？　これがあの有名な誘拐！？」

「違うわよ！」「違うよ！」

あたしとスバルはデルタの肩を掴んでデルタを安全な場所へ連れて行く。デルタは「まぁ好きにすればいいよ」それだけを言ってサッサと立ち去ろうとするから、「待って！」急いで追いかける。

「ねえ、デルタ。何を探してるの？」

「端末。ヴィヴィオとフォルセティ」

「「端末・・・？」」

"ヴィヴィオ"と"フォルセティ"っていうデバイスを探してるってことかしら。次に「どんな形をしてるの？」形状を訊ねる。デルタはあたしの問いに答える前に「おー？　何あれ！」道路の向かいに建つとある施設にダッシュしようとしたから、「だからストップ！」慌てて引き止める。

「なに？」

「く、る、ま！　車が走ってるからダメ！」

「ホント心臓に悪いわ、アンタ・・・」

デルタの腕を引っ張って横断歩道まで連れて行って、歩行者用の信号が青になるのを待つ。その間、「あのうるさい場所にある気がする！」その場でピョンピョン跳ねる。落し物ならデルタが既に言ってるところを探すけど、探し物って言うんだからデルタとは違う人が落としたことになる。だから初めていく場所に探しに行くのも間違いじゃないんだけど・・・。

『とにかく行ってみよう、ティア』

『そうね』

そして横断歩道を渡って、デルタが行こうとしてた施設――ゲームセンターへとやって来た。あたしとスバルも行こうとしていたし、筐体の新作でも確認しときますか。店内に入ると「うるせー♪」デルタが耳を両手で塞ぐけど、その声色は喜色満面。

「ここなーに！？」

「ゲーセンだよ、ゲームセンター。その名前の通りゲームで遊ぶところだよ」

「じゃ、アンタの探し物を探しに――」

「コレなーに～！？」

探し物をするはずがデルタはすぐに筐体へと突撃して行った。スバルと肩を竦め合ってデルタの後を追う。んで、デルタに引っ張り回されるままにゲームを3人でプレイし続けることに。シューティング、レース、スポーツ、格闘と7つくらいゲームをプレイ。

「次次♪」

「デルタ！　探し物しなくていいの！？」

「シコラクスやスキタリスもやってるし大丈夫♪」

「シコラクス・・・？」

「スキタリス・・・？」

他にも"ヴィヴィオ"と"フォルセティ"を探してる人もいるってことか。でもだからってサボるのはどうよ。デルタは「次これが良い！」クレーンゲームの筐体の前に陣取った。

「どれか欲しい物ある？」

「え？　じゃあ・・・コレ！」

デルタが指差したのはカートゥーンに登場するパンダキャラのぬいぐるみだった。スバルが「よーし。あたし得意だから任せて♪」お金を入れてプレイ開始。回数を分けてぬいぐるみを出口へ近付けてく。そして・・・

「「やったぁ～～！！」」

「ホント、アンタってこのクレーンゲームに強いわよね」

「えへへ～♪　はい、デルタ、どうぞ～♪」

スバルからパンダのぬいぐるみを受け取ったデルタは、「おおう、ありがと～！」ギュッと両腕で抱きしめた。あたしは「ほら、もうそろそろ探し物に戻るわよ」そう言ってデルタの頭を撫でる。

「「えー・・・」」

「えー、じゃない」

するとスバルとデルタが同時に不満そうに声を出した。ホントに楽しんでたもんね、アンタ達２人。まぁあたしもそうだけどさ。相変わらずぶー垂れる２人を連れてゲーセンから出たところで、「キャロから全体通信・・・？」が入った。通信をＯＮにしてモニターを展開すると、エリオとキャロ、それとエリオに抱きかかえられてる小さな女の子が映った。

『こちらライトニング４！　緊急事態につき現場状況を報告します！』

その内容は３ｒｄアベニューのＦ２３の路地裏にて、鎖に繋がれた"レリック"ケースを持ってる女の子がマンホールから這い出てきた、というものだった。そして今は意識を失ってるとの事。

『スバル、ティアナ。悪いけどお休みは一旦中断』

「いえ！」

「はいっ、問題ありません！」

なのはさんにそう返す。そして女の子への応急措置と保護の指示を受けたエリオとキャロと合流するように指示を受ける。通信が切れたことであたしは、「悪いけどデルタ」探し物が手伝えなくなったことを伝えようとしたんだけど、「あれ？　居ない・・・」デルタはもうどこにも居なかった。

「あの子の事も気になるけど、今は任務を優先しましょ！」

「あ、うん。一応近くの交番（ボックス）に連絡だけはしておくよ」

スバルの通信が終わるのを待って、「お待たせ！　行こう、ティア！」駆けだすスバルの後追う。エリオとキャロの居る３ｒｄアベニューのＦ２３は結構近いから、そんなに時間を掛けずに「２人とも！」合流を果たすことが出来た。

「実際に見ると本当に小さな子なんだ。ひどい・・・、服装もこんなにボロボロで・・・」

「ケースの封印処理は？」

「あ、それならキャロがやってくれました。レリックの反応を探知してガジェットがここに来ることはないとは思うんですが、その・・・」

あたしの確認にそう答えてくれたエリオが、「おそらくケースはもう１つあるかと・・・」鎖に繋がれたケースのさらに先をあたしに掲げて見せた。そこにはちょうどケース１個分の空きがあった。

「今、ロングアーチに調べてもらってます」

「そう。・・・今、なのはさんとフェイトさん、それにシャマル先生とリイン曹長がこっちに向かってくれてる。それまで現場の維持

と周辺警戒ね」

「「はいっ！」」「うんっ！」

†††Ｓｉｄｅティアナ⇒スバル†††

なのはさん達と合流して、今はシャマル先生が女の子の容体を診察。その結果、「バイタルも安定してるし、危険な反応も無し♪」とのことで、女の子はヴァイス陸曹の操縦するヘリで聖王医療院へ搬送されることになった。

そんな中、女の子が歩いて来たと思われる地下水路、それと海上にガジェットが何十機と現れたって報せが入って、『ロングアーチ。こちらスターズ２とライトニング２』ヴィータ副隊長からの通信も入った。

『あたしは海上で演習中に、んで――』

『私はカルタス捜査主任と打ち合わせ中でしたが、ナカジマ三佐の許可を貰い、スターズ２共々現場に急行中です』

『あと、もう２人援軍を連れて行きたいんだけど・・・』

『１０８部隊のアリサ・バニングスと・・・』

『ギンガ・ナカジマです！』

「『アリサちゃん！』」「アリサ！」

ギン姉と一緒にモニターに映ったアリサさんの姿に、なのはさんとフェイトさんと八神部隊長がすごく嬉しそうな声を上げた。アリサさんも『なのはとフェイトには久しぶりで、はやてにはちょっとぶり♪』嬉しそうになのはさん達の名前を呼んだ。

『別件の捜査中にカルタス主任から連絡を貰ったのだけど、おそらくあたしとギンガが捜査してた事件がそちらの今の状況と関係があると思うのよ。そういうわけで、あたしとギンガもそちらに参加させてほしいんだけど、いいかしら？』

『もちろんやよ、アリサちゃん！　ギンガもよろしくな！』

『はいっ！』

ヴィータ副隊長とシグナム副隊長も来てくれるっていうから心強いのなんのって。さらに「ギン姉・・・！」と、なのはさん達や副隊長たちもその一員であるチーム海鳴の1人、アリサさんが参加するってことになると、ただでさえすごい戦力がさらにトンデモになる予感。

『ほんならヴィータとシグナムはリインと合流、海上の南西方向のガジェットの制圧をお願いや』

『『了解！』』

『です！』

『なのは隊長とフェイト隊長はアリサちゃんと合流、北西部から制圧開始や！』

『『『了解！』』』

『フォワードは地下でケースの捜索とガジェットの撃破。ギンガは地下でフォワードと合流や』

『『『『了解！』』』』

八神部隊長からそれぞれが担当する場所の指定を受けて、あたし達は行動を開始。フォワードのあたし達はバリアジャケットに変身して地下へと突入。

「ギン姉！　まさか一緒に捜査が出来るなんて思いもしなかったよ！」

『そうね、スバル。実戦の場であなたの成長を見せてもらうわね』

「えへへ～。あたし、すっごく強くなったからギン姉、きっと驚くよ～♪」

『ふふ、楽しみにしてるわ。・・・ティアナ、久しぶり』

「はい、ギンガさん、お久しぶりです！」

『現場リーダーはあなただって聞いてる。従うから指示をくれるか

な』

「判りました！」

ギン姉と合流するためにティアが合流地点のポイントになるＦ９４を指定して、あたし達もそこに向かって地下を進む。そんな中、アリサさんとギン姉から２人が捜査してた事件の話を全体通信で聴くことになった。早い話が複数台の車による多重事故だけど・・・。

『トレーラーがけん引してたコンテナ車の側にあった焼死体を１体収容したんだけど、検死の結果どうやらサイボーグのようなのよ。本局のスカラボ――第零技術部のドクターに問い合わせたところ、十中八九プライソン製のサイボーグって話よ』

サイボーグっていう単語にドキッとする。だってあたしとギン姉も同じで、全身に機械が埋め込まれた、純粋な人じゃない。あたし達を生み出したのは、あたし達がいま追ってるプライソン。今回の事件の首謀者がプライソンかもしれないって話を知ったお父さんが、あたしとギン姉に教えてくれた。

お母さんがプライソンの研究所で、あたしとギン姉を保護したんだって。お父さんとお母さんの間に子供が出来なくて、そして遺伝子的にあたしとギン姉とお母さんが似てるってこともあって、引き取ったんだって。

――でもな。たとえ実の親子じゃなくても俺ぁ、お前たちが娘だって思ってる――

もちろんあたしとギン姉も同じ思いだった。お母さんはお母さんで、お父さんはお父さんだって。だから迷うことなんて一切ない。あたしとギン姉を生み出したプライソンは、捕まえるべき悪党だって。

『それでですね。そのコンテナは大きく破壊されていました。おそらく物理破壊設定の魔法による攻撃で内部から破壊されたものだと推測しています。そのコンテナからトンネル内にある非常口扉、さらに避難通路から地下水路へと降りるためのマンホールにまで何か重い物を２つ引き摺った跡、それと小さな子供の足跡が２人分が続いていました』

『女の子はその内の１人・・・！』

『さらに地下にもう１人が居る・・・！』

なのはさんとフェイトさんがハッとした。八神部隊長からの『フォワード！　その子供の捜索・保護を最優先や！』新たな命令に「はいっ！」あたし達は応えた時、キャロの"ケリュケイオン"からガジェットⅠ型４機がこっちに向かって来ているって報せが入った。

「やるわよ、スバル、エリオ、キャロ！」

「おう！」「「はい！」」

ティアに応えて、ガジェットが突き進んでるポイントへと急ぐ。そして「エンゲージ！」ガジェットと接敵した。

「シュートバレット！」

「フリード！　ブラストフレア！」

先制はティアの魔力弾連射と、フリードの吐く火炎弾。ガジェットはＡＭＦを展開して、ティア達の攻撃を無力化する。

「スバル！」「エリオ君！」

「うりゃぁぁぁぁぁッ！」

――リボルバーシュート――

あたしは"リボルバーナックル"のカートリッジを1発ロード。そして近距離射撃の衝撃波を打ち放つリボルバーシュートを繰り出して、ガジェットを大きく弾き飛ばしたうえでＡＭＦを粉砕する。

「せぇぇぇぇい！！」

――スピーアシュナイデン――

その隙を突いたエリオの"ストラーダ"による直接斬撃で、ガジェット４機を真っ二つに斬り裂いて撃破。この数ヵ月の訓練であたし達はすごく強くなった。もうＩ型のＡＭＦくらいじゃ、あたし達の攻撃は防ぎきれない。喜び合うのはまた後にしてそこから先に進むと、「わらわら出てくるよ！」Ｉ型のパレードと遭遇した。

「クロスファイア・・・シューット！」

ティアが制圧射撃を行う。１機につき８発の魔力弾が間髪入れずに撃ち込まれてくから、ガジェットのＡＭＦも役に立たたずで次々本体に着弾、爆散してく。フリードも負けじと火炎弾を連発するものだから、「おおう・・・」まるでガジェットがゴミのようだ、状態になっちゃってる。

「次、行くわよ！」

ティアとエリオを先頭に次いでキャロ、しんがりをあたしが務めて地下を駆ける。と、前方の壁がドカーン！と大きく爆ぜた。サッと警戒態勢に入ると、「あー、驚かせちゃってごめんね」もくもくと上がる砂塵の中からそんな声が聞こえてきた。

「ギン姉！」「ギンガさん！」

「ポイントに着いちゃう前に合流できたのね、良かった」

合流ポイントのＦ９４はまだ先だし。でも「うん！」早い段階にギン姉と合流できて良かった。そしてギン姉は「スバルの姉、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくね」エリオとキャロに微笑みながら敬礼。

「エリオ・モンディアル三等陸士です！」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です！」

「「よろしくお願いします！」」

エリオとキャロはどっか緊張した風に敬礼を返した。こうしてあたし達はギン姉と一緒に"レリック"ケースの回収と、この地下のどこかに居るはずの子供を捜索することに。その道中、パレードじゃなくて最早カーニバルと化したガジェット群と接敵。

だけどティアとエリオとキャロ、それにギン姉が一緒なら、いくらガジェットが何十機と出てきても負ける気がしない。あたし達はキッチリ自分の仕事をこなして、まるで足止めしたいかのように立ちはだかるガジェットを殲滅した。

『こちらロングアーチ０３！』

シャーリーさんが探しだしてくれた"レリック"のあるポイントまでもう少しの時、アルトから通信が入った。ティアが「スターズ４、どうぞ」通信に応じる。

『ポイントＦ９２にガジェット２１機と生命反応を感知！　おそらくもう１人の子供だと思う！　ガジェットから逃げてるみたい！　保護をお願い！』

「了解！　すぐに向かいます！」

"レリック"回収より子供の安全を最優先。そういうわけであたし達はＦ９２へ向かうんだけど、『子供とガジェットがケースのあるポイントへ移動中！　なんだけど、ガジェット反応がどんどん減っ

てく・・・？』アルトから戸惑ってる通信が入った。

「どういうことでしょうか・・・？」

「まさかその子供が撃破した、とか・・・？」

キャロとエリオがそう言う。ティアが「カメラからの映像が無いんですか？」って訊くけど、『どれもこれもノイズばかりで・・・』何も撮れてないっぽい。とにかくあたし達は、子供とガジェットの元へと急ぐ。

あともう少しで着くというところで、「っ！？」通路の先の壁が爆発して、「ガジェット！」のⅢ型やⅠ型６機が飛び出して来た。と言うよりは吹っ飛ばされたって感じで、その大きな胴体にはポッカリと大穴が開いていて、パチパチと燃えてた。

「みんな警戒して！」

ギン姉が先頭で壁に開いた穴へ入っていって、「うんっ！」あたし達も続く。そこはあたし達がこれまで通って来た通路と同じだったんだけど、「ガジェットの残骸の山・・・！」が広がってた。右を見ても左を見てもバラバラに砕かれてるガジェットの残骸で、どれもこれも大穴が開いてる。

「これ、たぶん砲撃によるものね」

「しかも炎熱変換が使われてますよね」

ギン姉とティアがガジェットを見てそう分析した。これはいよいよもう1人の子供が魔法を使って反撃してるのかも。あの女の子や今探してる子供が乗ってたと思われるトレーラーも、内側からの魔法攻撃で破壊されてるってギン姉が言ってたし。

『ガジェットの反応、完全に消失！　生命反応、ケースのあるポイントに到着！・・・って、あれ？　今度は生命反応も消えた！？　どうなってんの！？』

アルトがかなり混乱しちゃってる。でもそんな聞き捨てならない報告で、まさか子供がガジェットと相打ちになっちゃって力尽きたのかもしれない、そんな最悪なビジョンが脳裏を過ぎった。あたしは「そんなこと・・・！」信じたくなくて、ケースのあるポイントへと先行する。

「待ってスバル！」

「独りで突っ込んじゃダメ！」

ギン姉とティアから制止の声が掛かるけど、あたしはそれを振り切った。そして狭い通路を抜けてとんでもなく広く大きな空間――調圧水槽に出た。あたしは「おーい！　助けに来たよー！」子供に聞こえるように大声を出す。

「もう！　スバル、何が待ち構えているとも知れないのに突っ込むなんて危ないじゃないの！」

「あぅ～。でもギン姉！　消えた生命反応って、もしかしたら消えかけてるって感じで、今すぐにでも処置すれば助けられるかもしれない！　だから警戒して手遅れになった、なんて事にはしたくなかったんだよ・・・！」

「それはそうかもしれないけど・・・。でもだからって、助ける前にこちらが墜ちたら全てが台無しになるのよ」

「ギンガさん。とにかく今は、子供とケースを探しましょう！　エリオとキャロは子供の方を探して！　スバルとギンガさんはケースをお願いします！」

ティアの指示であたし達は、手分けしてケースと子供を探すことにした。エリオとキャロは「返事してー！」声を出し続けて、あたしとギン姉は足元をひたすら見ながらプール内を歩き回る。そんな中、「ケースを見つけましたー！」キャロから知らせが入った。

「了解！　ケースの封印処理お願い！」

「はいっ！」

ケースは見つかった。あとは子供を発見するだけ。"マッハキャリバー"の機動力を使ってプール内を虱潰しに探そうとしたその時、「っ！？」ゾワッと悪寒が奔った。ティアが「この感覚・・・！」"クロスミラージュ"を両手に携えて辺りを警戒し始めた。ギン姉も同じなようで、あたしとほぼ同時に構えを取った。

「・・・っ！　エリオ君、キャロちゃん！」

ギン姉がいきなりのトップスピードでエリオ達のところにダッシュしながら、左腕に装着してる"リボルバーナックル"を振り被った。あたしもようやく気付いた。エリオとキャロの背後に、ホテル・アグスタでアリシアさんを撃墜したあの女の子が居たことに。

「シュートバレット！」

ティアがすかさず魔力弾を撃ち込んだ。エリオはキャロに抱きつくようにして横っ飛びして、魔力弾はそのまま女の子へ向かって行くんだけど、「うえ！？」魔力を付加した右手で払い落としちゃった。

「少し痛いかも知れないけどごめんね・・・！」

だけどその一瞬の隙にギン姉は肉薄して、振り被っていた"リボルバーナックル"を女の子に打ち込んだ・・・はずだった。

――ケレリタース・ルーキス――

女の子は一瞬で姿を消して、ギン姉の攻撃を躱した。ギン姉は勢いを止めることが出来ないでそのまま少しだけど前進、そして制動を掛けたその瞬間・・・

「ギン姉！」「ギンガさん！」

女の子はギン姉の背後に音もなくスッと現れて、魔力が付加されて

る右拳をそのままギン姉に繰り出した。

――トライシールド――

――ハーツイーズストライク――

ギン姉がシールドを張ったとほぼ同時、女の子が繰り出した拳がシールドに打ち込まれると、付加されてた魔力が砲撃になって「ぅぐ・・・！」ギン姉を吹き飛ばした。あたしは「ギン姉！」に駆け寄ろうとしたら・・・

「うわぁぁぁぁ！」「きゃぁぁぁぁ！」

今度はエリオとキャロが何かの魔法で吹き飛ばされた。女の子はまだあの位置から動いてない。ということは「新手！？」ティアの言うようにまだ敵が居るんだ。そしてその新手も姿を見せた。女の子だった。２人揃ってキャロくらいの女の子。でも、２人とも魔力量が桁違い。

「あ、待ってダメ！」

魔法で吹き飛ばされた際にキャロが落としちゃったケースをその子が抱きかかえて、ギン姉を吹き飛ばしたあの子も瞬間移動したかのようにスッとその子の隣に移動した。

『あたしが幻術で髪の長い子を確保します！』

『了解！　スバル！　私とあなたはリボンの子を引き離す役目よ！』

『う、うんっ！』

『エリオとキャロは、周囲を警戒しつつ子供を探して！』

『『了解！』』

ギン姉の言うリボンの子っていうのは、瞬間移動をする子に違いない。だって、特徴を答えよ、なんて問題を出されたら真っ先に頭の上にある大きなリボンに目が行くから。髪の長い子は、今"レリック"のケースを抱えてる子のことだ。ティアは姿を隠せる幻術魔法を使って、髪の長い子の確保に動いた。

「「はぁぁぁぁーーーーッ！」」

そしてあたしとギン姉は突撃を敢行。リボンの子はあたし達に振り向いて、足元にベルカ魔法陣を展開。さらにあたし達との間にもベルカ魔法陣を展開した。

――マナクル――

魔法陣から帯状の魔法陣が何枚と突き出して、あたし達に向かって伸びて来た。それらを高機動で回避しつつ突撃を続行。リボンの子は「邪魔・・・！」真っ向からあたし達に向かって突っ込んで来た。ギン姉と一緒に"リボルバーナックル"のカートリッジを1発ロードして、ナックルスピナーを高速回転させる。

「はぁぁぁぁぁッ！」

まずあたしの一撃を繰り出す。リボンの子はその小ささを活かしてしゃがみ込むことで躱して、あたしの腰に抱きついた。そしてまさかの「ぅわっ！？」フロント・スープレックスを掛けられた。そのまま背中から叩き付けられて「ぐへっ！」咽る。

リボンの子はそのままサマーソルトキックでギン姉の顎を狙ったけど、残念足の長さが足りなくてギン姉には届かなかった。ギン姉はそのままリボンの子の両足首を掴んで「捕まえた！」組み伏せた。

「錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

キャロが召喚魔法を使って召喚した鎖で、まずはリボンの子を四肢を拘束した。そしてギン姉が退いた瞬間に首から下を雁字搦めにした。エリオとキャロがあたし達のところに来て、「見つかりませんでした」悔しそうにそう言った。

「こっちも捕まえたわよ！」

ティアはダガーモードにした"クロスミラージュ"の刃を長い髪の子を首にあてがって、「ごめんね。でもこうでもしないと話してくれないでしょ」謝った。そして髪の長い子もキャロのアルケミックチェーンで拘束して、事情聴取とロングアーチへの報告をしようとしたところで・・・

――スターレンゲホイル――

頭上から魔力弾が飛んで来た。ソレが地面に着弾すると、「っぐぅぅ・・・・！」すごい大きな音と強烈な閃光が発せられて、思わず目を閉じて耳を両手で塞ぐ。治まるのをジッと待って、治まったところで瞬きを繰り返しながら目を開ける。

「あ！」

髪の長い子もリボンの子もキャロのアルケミックチェーンから逃れていて、プールの出口に向かっていた。そんな2人の側には「融合騎・・・・！」が居た。名前は確かアギト。ヴィータ副隊長たちの話だと、アイリ医務官の実のお姉さん。プライソン一派の1人によって記憶の改ざんを受けて、アイリ医務官のことを何も憶えてないっていう。

「ったくよ～。ルールー、リヴィー、なんで勝手に行っちゃうかな～。絶対にメガーヌに怒られるよ。ま、いいや。この烈火の剣精、アギト様が来たんだからもう大丈夫！」

髪の長い子をルールー、リボンの子をリヴィーと呼んだアギトが、ギラッとやる気満々な目をあたし達に向けてきた。ケースを取り返さなきゃいけないし、やっぱり戦うことになるんだ。だからあたし達を身構えたんだけど・・・・。

「おーい。アギト、あなたも私のことを置いて行った挙句に仲間外れなんて酷いわよ」

出口の奥の通路から響いてきたその声に「え・・・？」あたしとギン姉は構えを思わず解いた。この声、とても愛おしくて、懐かしくて、でももう２度と聴けないはずの・・・。ありえない、でも聴き間違いなんかじゃない。

「遅いのが悪いんだよ」

「空を飛ぶのは卑怯よ。・・・さて。メガーヌの大事な愛娘を傷つけさせないように頑張りますか」

姿を見せたのは見間違いなんかじゃなく・・・

「お母さん・・・！？」「母さん・・・！？」

亡くなったはずのあたしとギン姉のお母さん、クイント・ナカジマだった。

Ｅｉｐｉｃｌ０－Ｂ機械仕掛けの少女～Ｔｅａｍ　Ｓｙｃｏｒａｘ～

ミッドチルダの北部に存在する廃棄都市区画。４年前、臨海空港で起きた大火災によって街ごと封鎖、廃棄されてしまった区画だ。今、その廃棄都市区画の地下に広がる水路では機動六課のフォワード４名と、メンバーのスバルの姉であるギンガ含めての５名が、広域次元犯罪者プライソンの配下と交戦中。そして地上にたくさん残されている建造物群に、また別の配下が居た。

「あのヘリの中に在るプリンツェッスィンとか言う端末と、レリックを奪い取りゃ良いんだろ？」

どこかイライラしているような雰囲気を纏い、発した声にも苛立ちの色が含まれている少女がそう言う。見た目も活発そうで、赤い髪も短くスポーティだ。右前腕にはガントレット、両脚にはローラーブーツが装着されている。

「つってもどうするっスか～？　あたしら、空戦は出来ねぇっスよ」

洋紅色の長い髪を上向きに結っている少女が特殊な語尾でそう言った。彼女は浮遊している大きなボードの上で胡坐をかき、右手で目の上に庇を作ってヘリの方を見ている。

「撃墜すれば良いって、ガンマが言ってた。プリンツェッスィンはあたし程度の砲撃で死ぬような物じゃないって」

身長を超すほどの筒――砲塔を携えていた少女はどこか不機嫌そうに漏らした。長い茶髪をうなじ付近でリボンで結い、後ろ髪は風に靡いて尻尾のように揺れている。

「まぁとにかくっス！　あたしら機人――チーム・シコラクスの正式な初任務！　ママりんやチーム・スキタリスのお嬢たちからの合図があればミッションスタートっスよ！　ノーヴェ、ディエチ！」

「母さん達が地下水路のレリックとプフェルトナーを回収したって連絡が来たら、あたしは砲撃でヘリを撃墜。ノーヴェとウェンディがレリックケースとプリンツェッスィンを回収」

「んで、墜落ポイント付近にあるビルの屋上で合流だな」

赤色の短髪少女の名はノーヴェ、ボードに乗る少女の名はウェンディ、砲塔を持つ少女の名はディエチというようだ。その３人はかつてジェイル・スカリエッティの娘、シスターズ達がプライソンの研究所から一度は連れ出して保護し、しかし奪還されてしまった少女たちの内の３人だ。

その３人の着ている服装は共通で、体にぴっちりと密着して体のラインがハッキリと判るスーツを着ている。これはジェイルのシスターズに採用しているバトルスーツと同じデザインである。この共通点が、後に悲劇を巻き起こすことになってしまう。

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

海上に出現した3ケタ近いガジェットⅡ型を殲滅するために空に上がった私となのは、それにシグナムとヴィータとリイン。さらにアリサが協力してくれることになった。

『アリサちゃん、よろしくね！』

『なのは、アンタってそんなにテンション高かったっけ？』

『あー、アリサと同じ空を飛ぶなんてかなり久しぶりだから。私も落ち着いているように見えてるかもだけど、すっごくテンション高いよ』

アリサとは年単位で同じ空を飛べていないから、こうやって戦場だとしても一緒に飛べることが嬉しい。アリサも『ま、あたしとしてもこんな形だけど一緒に飛べて良かったわ』なんだか照れくさそう。

『よーし！　張り切ってがんばろー！』

『うんっ！』『ええ！』

というわけで、私たち3人で北西部のガジェットⅡ型の殲滅を開始する。私となのははリミッターを掛けられてるけど、アリサは掛けられてないから『あたしが前に出るわ！　撃ち漏らしはお願い』って、ＡＡＡランクの魔力のままでフレイムウィップを発動。

『うりゃぁぁぁぁッ！』

"フレイムアイズ"からの伸びる炎の鞭を横薙ぎに振るって６機１編隊、計５編隊を撃墜した。でも発生した黒煙に紛れて生き残った２機がアリサの防衛網を突破した。

『こっちは任せて、アリサちゃん！』

――アクセルシューター――

『うん。安心して続けて！』

――プラズマランサー――

なのははシューター４発を発射して、その撃ち漏らした２機を撃墜した。一応わたしもランサーを待機させていたけど出番がなかったな～。それからアリサはフレイムウィップや"フレイムアイズ"の銃剣形態バヨネットフォームでの砲撃や弾幕で、ガジェットⅡ型を問答無用で撃墜してく。

『すごいですね、バニングス捜査官！　さすがチーム海鳴の一員！』

ロングアーチ０１のシャーリーから歓喜の通信が入った。私は「シグナム達やフォワードの状況は？」ここ以外が今どうなってるかを訊ねる。

『あ、はい！　副隊長とリイン曹長は順調にガジェットⅡ型を撃墜していっています。フォワードおよびギンガ陸曹も順調にガジェットⅠ型とⅢ型を撃破。ケースと子供を捜索中です。ただ、ノイズが

酷くて通信や念話、映像が一切出力できないのが少し引っ掛かります』

「ガジェットの新機能かな・・・？」

「たとえジャミングがあってもギンガが居れば問題ないわよ」

『了解。・・・レリックはまだいいとして、子供の方は早く助けてあげたいね』

プライソン製のサイボーグが運転していたトレーラーに"レリック"と一緒に輸送されてた2人の子供。普通に考えればプライソン一派に拉致された。穿った考え方をすれば、私やエリオのように誰かのクローンだったりするのかもしれない。

『よぉーっし！　とりあえず全機撃墜ね！』

そんなこんなでアリサの協力もあって、私となのはが担当となっていた海上北西部に出現したガジェットⅡ型は全滅。3人で「ミッションクリア～♪」ハイタッチを交わしていると・・・

『あ、待ってください！　南西部と北西部の海上に機影を確認！モニターに出します！』

シャーリーが切羽詰まった声でそう報告してくれて、私たちの前にモニターを展開してくれた。映し出されたのは、さっきまでと同じ光学兵装タイプのガジェットⅡ型、目算でその機数は3ケタ。さら

に・・・

「「「シームルグ！」」」

赤黒い塗装をした、双発エンジン・前翼（カナード）付き・外に向かって少し斜めにある２枚の垂直尾翼というデルタ翼機（ルシル談）が１０機と編隊を組んで、ガジェットⅡ型を引き連れてやって来た。シグナム達のところにも"シームルグ"１０機とガジェットⅡ型の３ケタが接近中とのこと。

『おいおい、どんだけガジェットを造り出してんだよ、プライソンは！』

『ガジェットはともかくとしてシームルグはさすがに多いな。ＡＭＦもガジェットとは比べ物にはならん。リミッターが掛けられていては真っ向から戦えんぞ』

シグナムの言うようにガジェットとは違って、純粋に空戦魔導師とのドッグファイトを目的として造られた"シームルグ"との戦闘は、リミッターを掛けられている現状じゃ太刀打ち出来ない。正直そう思ってしまうほどにガジェットとの性能差があり過ぎる。

『っ！　シームルグのウェポンベイが開いたわよ！』

『レールガンユニット・・・！』

"シームルグ"５機の機体上面にあるウェポンベイ２基が開いて、

そこからレールガン２門が出現。銃口がこちらに向けられたのをモニター越しで確認。すぐにその場から離脱したと同時、私たちが居たところを高速射出された弾丸が通り過ぎて行って、遅れてドォン！轟音が空に響き渡った。

「試しにやってやろうじゃない！　フレイムアイズ！」

――フリンジングボム――

"フレイムアイズ"の銃口からバスケットボール大の火炎弾を８発と連射したアリサ。扇状に広がっていく火炎弾が"シームルグ"やガジェットⅡ型群へ向かう。するとさっきとは別の"シームルグ"５機のウェポンベイ２基が開くと、そこにはレールガンユニットとは違う「ミサイルランチャーユニット！」が出現した。垂直発射式のミサイルランチャーから計１４発のミサイルが一斉に発射されて、アリサの火炎弾を迎撃した。

「うわぁ、鬱陶しい真似を・・・！」

圧倒的な火力を持つアリサの魔法を物量で迎撃した"シームルグ"。そのまま私たちのところに突撃して来るのかと思えば、追撃もなく私たちの視界内に入るように海上をグルグル回り始めた。けどガジェットⅡ型だけは攻撃を仕掛けてくるから、こちらも迎撃して撃墜していく。

「シームルグだけは仕掛けて来ないわね・・・」

――フレイムバレット――

「ヴィータちゃん達の方も、ガジェットⅡ型しか仕掛けて来ないって」

――アクセルシューター――

ガジェットⅡ型だけは面白いように撃墜できるのに、"シームルグ"はまるで高みの見物状態。これだとまるで「私たちの航空戦力を計っているか足止め・・・！」この２つになる。

――プラズマランサー――

「フォワードは地下へ子供とレリック探し。シャマル先生はヘリに乗って女の子とレリックを輸送中。となると・・・」

――フリンジングボム――

「「どっちかが本命・・・」」

「もしくは両方ね」

アリサの最後の一撃でガジェットⅡ型を殲滅完了。それでも"シームルグ"は海上での旋回行動をやめない。それどころか「え・・・！？」目を疑う光景が。ガジェットⅡ型がさっき以上の編隊を組んでやって来た。さすがにこればっかりは異常すぎる。さっきの襲撃だけで、シグナム達と合わせて２００機以上を撃墜した。それなのに・・・。

「ああもう！　なのは、フェイト、アンタ達はヘリと地下へ行きなさい！　ここはあたし1人で対処するわ！」

アリサがそんなトンデモな提案をしてきたから「えええ！？」なのはと、「そんなのダメだよ！」私はそれを却下。いくらリミッターが掛けられてないとはいえ、あの数を1人で対処するのはかなり無茶をしないといけない。

「フレイムアイズ。レガリア発動して。正午まで10分と無いけど、その10分で決めるわ」

≪応よ！　レガリアを発動すんのも3年ぶりだな！≫

――スリーズ・サンズレガリア――

「アリサ・・・！」「アリサちゃん・・・！」

アリサの魔力量が一気に膨れ上がった。レガリアはアリサのブースターのような物で、午前9時から正午、午後3時から6時までの計6時間の間にしか使えないけど、その時間制限が気にもならない程に魔力を強化できる。

「でも、アリサちゃん・・・！」

「時間が無いの！　いつまでも囮に時間を費やすのは馬鹿のする事よ！」

アリサが渋ってるなのはにそう怒鳴ったところで・・・

『そんじゃ、その馬鹿な役はわたし達が請け負うか』

『うん。ピエロの如く踊り明かそう』

モニターが展開された。そこに映っているのは「シャルちゃん！？」と「クラリス！？」の２人だった。

『やっほー♪　はやてとルシルから許可は貰ったよ。わたしとクラリスが北西部（そっち）に行って・・・』

『私とルミナでシグナム様たちの居る南西部へ向かいます』

さらに「トリシュ！」と「ルミナ！」までもが別に展開されたモニターに映った。事情を聴けば、シャル以外のトリシュ達は非番で近くに遊びに来ていた。で、シャルはベルカ自治領ザンクト・オルフェンに戻る最中だった。そして、海上でのガジェット騒ぎに気付いてはやてに連絡を取り、こうして協力を願い出てくれたとのことだった。

『そうゆうわけや、なのはちゃん！　なのはちゃんはヘリの護衛、ヴィータとリインはフォワード達と合流！』

『「了解！」』

「それじゃあフェイトちゃん、アリサちゃん、シャルちゃん、クラリスちゃん。ここお願い！」

「ええ！」『うん！』『ん』

「なのは、気を付けて」

「フェイトちゃん達も」

なのはと拳をコツンと打ち合って、全速力で離れて行くなのはを見送った。シャルとクラリスはすぐに来てくれた。真紅に輝く魔力の翼を背に空を翔けるシャルと、召喚獣に乗って海上を進んで来たんだけど、「アンタ、ソイツを召喚するのはどうよ」アリサが肩を竦めた。

「海上を進むならこの子、アスピドケロンしか居ないし。それに・・・」

クラリスの乗る召喚獣・アスピドケロンは全長１００ｍを優に超す巨大な海亀だ。正直、空を時速数百ｋｍで飛び回る航空兵器相手に何が出来るんだろうって思っていた。だけどそれは杞憂だったことを知る。

「海の生き物だからって、鳥を落とせないわけじゃない。アスピドケロン！」

クラリスの声に反応したアスピドケロンが長い首をもたげさせて、

空を飛び回る"シームルグ"とガジェット群を仰ぎ見た。そして「わっ！？」口から勢いよく水を吐いた。それはまるで砲撃のようで、とんでもない水圧によってガジェットは体勢を崩してぶつかり合ったり、体勢を立て直せずに墜落する機体も出た。それに何より・・・

「幻影が混じってる！？」

ガジェットⅡ型は実機と幻影の混成編隊だったことが今の攻撃で判った。私は「ロングアーチ！」に連絡を入れる。

『はい！　幻術パターンを解析するんですね！　お任せを！』

「お願いね、シャーリー！」

偽者相手にチマチマと魔力を使うなんて勿体なさすぎる。なら実機と区別できるように調べてもらうしかない。はやてからの『フェイト隊長。データが欲しい、頑張ってもらえるか？』というお願いに、「了解！」私は応じて"バルディッシュ"の柄を握り締め直す。

「よっしゃ！　フェイト、シームルグはわたしとアリサに任せて。1機残して他は海に沈めてあげる！」

――絶対切断（アブソルーテ・フェヒター）――

「ま、その役回りでも良いわ。フェイト、クラリス。ガジェットは任せたわよ！」

――ブレイズロード――

シャルはそう言って紅翼を勢いよく羽ばたかせて"シームルグ"へと突っ込んで行って、アリサも足元から炎を噴出させてロケットみたく突撃して行った。２人の接近に"シームルグ"も臨戦態勢に入って、レールガンやミサイルランチャーを撃ち放って迎撃。

「クラリス！」

「うん」

私とクラリスもガジェットⅡ型に対処するために動きだす。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒エリオ†††

"レリック"のケースは見つけられたけど、行方不明の子供は結局見つけることが出来なかった。そんな中、ホテル・アグスタでアリシアさんを撃墜した女の子リヴィー、その子とはまた別の女の子ルールー、さらにアイリ医務官の実のお姉さんだって言う融合騎のアギトまでが姿を現した。さらに・・・

「お母さん・・・！？」「母さん・・・！？」

もう１人、今度は大人の女の人が現れた。ロングワンピースとロングカーディガンって服装。スバルさんとギンガさんがその女の人を見てそう言った。どことなく似ている気がするけど、でもスバルさ

んとギンガさんのお母さんはすでに他界してるって、スバルさん本人から聞いてる。じゃあの人は？ってことになるんだけど・・・。

「お母さん！」「母さん！」

「えっと・・・どちら様？　確かに私に娘は居るけど、あなた達じゃないわ」

「「っ！」」

その女の人は冷たくあしらうんじゃなくて、優しく諭すようにスバルさん達に語りかけた。だからスバルさん達はガクッと力なく膝を付いた。スバルさん達のお母さんは「さ。ケースとプフェルトナーを持って帰ろう」ルールーやリヴィー、アギトにそう言って踵を返す。

「でもクイント。プフェルトナーが見つかってない。捜さないとプライソンに怒られる」

「え、そうなの？　困ったな～。管理局員が居るのに。プフェルトナー探しを黙認してくれるかな・・・？」

スバルさん達のお母さん――クイントさんが改めて僕たちの方を見ると、「やっぱやっちゃうか！？」アギトの周囲に火炎球が４基と展開された。ケースを抱えるルールーとリヴィーも、「やる・・・？」こっちに振り返った。僕はキャロを庇うように前に躍り出て「ティアさん！」に指示を仰ぐ。

「スバル、ギンガさん、しっかりしてください！」

ティアさんが"クロスミラージュ"の銃口をクイントさん達に向けながらスバルさん達にそう言うけど、「・・・」お２人はショックから抜け出せないようで両膝立ちでクイントさんを見てるまま。

「ロングアーチや隊長たちと通信も念話も通じないし、これは結構まずいかもね・・・！」

ティアさんの言うように誰かがジャミングをしてるみたいで応援も呼べない状況だ。スバルさんとギンガさんがあんな様子だと、今の僕たちでクイントさん達と戦ったとしてもまず勝てない。ここは悔しいけど退くのが一番なんだろうけど・・・。

「銃を持ってるそこの君。君がリーダーみたいだけど。ここは退いてくれないかな？　ここで足掻いても私たちには勝てないってことは理解してると思う。そこの可愛い子たちも、痛い目に遭いたくないでしょ？」

僕とキャロに目を向けてそう提案してきたクイントさんに、「じゃあ、プフェルトナーを探して早く帰ろう」ルールーと、「ん～」リヴィーが賛成して、魔力放出と臨戦態勢を解いた。もうそれを見送るしかないのかって"ストラーダ"の柄を握りしめる。

「すぅ～～～・・・スバル、ギンガさん！」

ティアさんの大声がプール内に響き渡った。僕たちみんなの視線がティアさんに向けられた。

「もしあの人が本当に2人の母親のクイントさんだとしたら、どうして2人の記憶が無いのか！　アギトと同じように、記憶の改ざんを受けていると見ていいです！　だったら！　記憶が戻るその時まで留置所に勾留しておくのが一番！　違いますか！？　ギンガさん！」

「ティアナ・・・」

「アンタの憧れのクイントさんが、プライソンなんていう犯罪者に良いように操られてるのを、そうやって黙って見てるつもりなの、スバル！？」

「ティア・・・」

ティアさんにそう言われたスバルさんとギンガさんは立ち上って「ありがとう！」ティアさんにお礼を言うと、顔を濡らしてた涙を袖で拭い去って力強く構えを取った。

「母さんが生きていたことを喜ぶべきね、スバル！」

「うんっ！　お母さんの記憶を取り戻す！　その前にまずは、お母さんを捕まえる！」

ティアさんの発破のおかげで気力を取り戻したスバルさんとギンガさん。ティアさんは満足そうに頷いて、僕は「お手伝いします！」

"ストラーダ"を構え直して、「サポートはお任せください！」キャロも臨戦態勢に入ると、「キュクルー！」フリードも大きく鳴いた。

「だから。私はあなた達のお母さんじゃないって。でも、はぁ・・・。やる気になっちゃってみたいで。しょうがない、力尽くで退いてもらおうか」

クイントさんが首から提げてたネックレスを手に、「ソニックセイバー」ポツリと漏らした。足元に展開されたのはベルカ魔法陣で、光に包まれたクイントさんはバリアジャケットに変身した。両腕には、スバルさんやギンガさんの物と全く同じ"リボルバーナックル"が装着されていて、両脚にも足首に歯車のようなパーツ――ナックルスピナーがあるローラーブーツが装着されてる。

「ティア、エリオ、キャロ！　ごめんだけど、ちょっとの間だけ他の子たちの足止めをお願い！」

「その間に母さんを、私とスバルで止めるから！」

スバルさんとギンガさんからのお願いに、僕とキャロは「はいっ！」力強く応じて、ティアさんは「任せてください！」笑顔になった。対するクイントさんは「お願いね」ルールー達にそう一言だけ告げると・・・

――ケレリタース・ルーキス――

「あなたはわたしが・・・」

――トイフェルファオスト――

僕の目の前に音もなく「リヴィー・・・！」が現れた。すでに振りかぶられていた右拳には魔力が付加されてる。咄嗟に"ストラーダ"を構えてその一撃の防御を行う。そして繰り出された拳を柄で受けたんだけど、「ぅぐ・・・！」両手から体、頭へと衝撃が奔った。だから一瞬、意識が飛びかけた。

「ぐぅぅ・・・！」

その所為で吹っ飛ばされて地面をゴロゴロ転がってしまう。その最中にキャロとティアさんのところにルールーとアギトが行って、スバルさんとギンガさんはクイントさんとの戦闘を開始したのが見えた。そして起き上がったと同時・・・

「大人しくしてくれれば、痛くしないから・・・！」

――ボーデンドンナー――

リヴィーはギリギリ目に見える範囲内の速度で真正面から突っ込んで来た。高速移動魔法だ。瞬間移動と高速移動、両方の移動方法を持ってるようだ。厄介なのは瞬間移動で、効果発生時の前後がまったく察知できない。だから奇襲し放題のはずなのに、どうしてただの高速移動魔法を今、使ったんだろう・・・。

――ラケーテンホルン――

リヴィーは高速移動による勢いのままに魔力を両脚に付加して飛び蹴りを繰り出してきた。直感のままに僕は受けずに横っ跳びして躱した。それが正解だってことをすぐに知る。リヴィーの飛び蹴りは、プール内に林立してる支柱を大きく穿って丸ごと1本をダメにした。濛々と立ち上る砂煙の中から・・・

――ボーデンドンナー――

「避けないで」

リヴィーが高速移動でまた突っ込んで来た。真正面から突っ込んで来るならカウンターを狙って待ち構えれば良い。カートリッジをロードしてカウンターに備える。リヴィーの一挙手一投足に全ての意識を割いて、リヴィーが飛び蹴り状態に移ったのをギリギリだけど目で捉えることが出来た。

（ここだ！）

――スピーアシュナイデン――

――ヒンメルブリッツ――

僕は"ストラーダ"を横薙ぎに振るった。確実に入るタイミングだったはず。でも、僕の"ストラーダ"は空を切った。当たる直前、リヴィーは空中で方向転換をしたんだ、僕の頭上へと。リヴィーは

何も無い宙を蹴ったのが僅かだけど見えた。そんな移動魔法も使えるなんて・・・。

「これで・・・」

――ヒンメルブリッツ――

「終わり・・・・！」

――ガイストロースラケーテ――

頭上を見上げたと同時、リヴィーは全身から魔力を放出したうえで僕へと突撃していた。すかさず「ソニックムーブ！」を使って後退。直後、砲撃のように地面に着弾したリヴィーが放出していた魔力が大きく爆発した。その威力は地面に直径１５ｍ・深さ１ｍのクレーターを作った。

「こらー！　そんな威力が高い魔法ばっかり使わないの！　私だけじゃなくて大事なお姉ちゃんも瓦礫の下敷きになるでしょ！」

どこからか聞こえるクイントさんの怒声。チラッと周囲を見回せば、スバルさんとギンガさん、そしてクイントさんの３人は揃ってウイングロードを発動していて、プールの天井近くで空戦を広げていた。しかもスバルさんとギンガさんの猛攻をクイントさんは余裕で捌いてた。

「そうだぞリヴィー！　いくらあたし達でもあんな分厚い岩盤に押

し潰されたら死ぬって！」

「ごめん」

アギトにまで怒られたリヴィーはガックリ肩を落としてしょんぼりした。僕は「ソニックムーブ・・・！」そんなリヴィーに向かって高速移動魔法で突撃した。気落ちしてる中に攻撃を仕掛けるなんて男らしくないとか、格好悪いとか、そう思うけど今はそんな悠長に構えていられない。

「はぁぁぁぁーーーーッ！」

「だったら・・・」

――ボーデンドンナーーー

リヴィーは両手・両脚に魔力を付加したうえで高速移動魔法を使って、真っ向から僕の迎撃に入った。リーチ的に先制は僕だ。"ストラーダ"による薙ぎ払いを繰り出す。リヴィーは「長柄武器の弱点、知らないの？」そう言って、振るわれてる最中の"ストラーダ"の柄を右手で鷲掴んで、「そんな・・・！？」僕の一撃を防いだ。慌てて"ストラーダ"を引こうとしたんだけど・・・

「トイフェルファオスト・・・！」

「ごぶっ・・・！？」

それより早く魔力付加されたパンチをお腹に受けてしまった。その一撃で僕は大きく殴り飛ばされて、「ぐぁ・・・！」支柱に叩き付けられた。僕はそのまま地面に落ちて、「げほっ、げほっ」咽る。

（まさか柄を掴んで攻撃を無力化して来るなんて・・・）

リヴィーは僕が思わず手放してしまった"ストラーダ"をブンブン振り回して、「わたしの勝ち」ピースサインを僕に向けて来た。まずは"ストラーダ"を取り返さないといけないんだけど・・・。

「一体どうやって・・・」

屈伸や伸脚を始めたリヴィーを見るに、僕から逃げようとしてる。確かにデバイスの無い僕は本当に無力だ。キャロやティアさんも「きゃぁぁぁ！」ルールーとアギトの射撃魔法の弾幕で吹き飛ばされて、スバルさんとギンガさんも「うわぁぁぁぁっ！」クイントさんに殴り飛ばされたり蹴り飛ばされたりと圧倒されてる。

「そんな・・・」

気持ちが折れそうになっているところで、「ちょ、なんか来る！魔力反応デケェ！」アギトが攻撃を中断して辺りを見回し始めた。その直後、天井が崩落して砂塵がブワッと広がった。

「リイン！」

「はいです！　捕らえよ、凍て付く足枷！　フリーレンフェッセル

ン！」

その砂塵の中からヴィータ副隊長とリイン曹長の声がして、キャロとティアさんと戦ってたルールーとアギトが氷の塊に閉じ込められた。そしてヴィータ副隊長は"グラーフアイゼン"による「テートリヒ・シュラーク！」を、「ぐふっ！？」屈伸してたリヴィーに容赦なく打ち込んだ。

†††Ｓｉｄｅエリオ⇒ヴィータ†††

はやての指示を受けてあたしとリインは、フォワードとギンガの居る地下へ向かって飛行中だ。あたしとリインの代わりに、ルミナとトリシュがガジェットや"シームルグ"の迎撃を担当してくれることになったからだ。

「ですが本当に助かったですね。ルミナさんとトリシュさんが応援に駆け付けてくれて」

「だな。トリシュは長距離攻撃も持ってんし、ルミナのスキルもシームルグ相手にはもってこいだ」

トリシュはオーディンの長距離砲撃や、あたしやシグナムの魔法も結構扱える。ベルカ時代ん時、あたし達がアムルの住民に教えてた魔法が、現代にまで伝えられてるっつうのは実際嬉しいもんだ。

「こちらスターズ２。ロングアーチ、地下水路内の状況を教えてくれ」

今、フォワードの居るのは北部の廃棄都市区画、その地下に広がる放水路だ。あたしとリインはそこへ通じるルートを目指して飛んでるわけだが、ここに来るまでフォワードの現状を聴いてなかったことに気付いた。

『カメラや通信はどうやってもノイズが回復しないのですが、熱源や魔力反応は届くのである程度は、になりますが・・・』

「それだけで十分だ。教えてくれ」

『あ、はい！　こちらも現在、ガジェットⅠ型、Ⅲ型を撃破しながらケースのあるポイントへ向かって進行中です。しかしいくつか問題も発生しています。行方不明のもう1人の子供によるものかどうかは不明ですが、ガジェット数十機が撃破されています。そして、子供の生命反応がケースの在ると思われるポイントにて消失しました』

ロングアーチのルキノからそんな最悪な報告が入った。リインが「まさか、亡くなって・・・！？」両手で口を押えて悲しげな顔を浮かべた。

『今は何とも言えません。本当に亡くなってしまっているかもしれません。ですが、ステルス魔法を持っていれば、そう言った反応を一時的に隠せることも可能かと・・・』

「あ、そうですね。後者を信じるです」

「ああ」

それからフォワードとギンガがポイントへと到着して、"レリック"のケースを発見したことを知った。けど、もう1人の子供の方は見つからねぇようだ。

『あ、待ってください！　襲撃です！　魔力反応・・・推定Ｓランク！』

「な・・・！？」「え・・・！？」

ここに来てＳランクの敵が出てくるってマジかよ。いや、本命の1つとして数えられてたんだ。ガチの戦力が送り込まれていたとしても不思議じゃねぇ。が、「まずいな」どの魔法系統を使うかは知らねぇがＳランクとなると今のフォワード達には荷が重い。

『待ってください！　そんな・・・！　さらにＳランクの魔力反応！　いえ！　Ａ＋とＡＡランクもさらに出現！』

「なんだと！？」

「高ランク魔導師が４人もですか・・・！」

完全にこっちが本命だ。あたしは「はやて！　あたしのリミッターを解除してくれ！」さすがにリミッターが掛けられてる中でＳランク２人を相手にするのは骨だから要請を出す。はやては『了解や。

フォワードとギンガのこと頼むな、ヴィータ、リイン』あたしのリミッターをすぐに解除してくれた。

「応よ！」「はいです！」

あたし達はしっかり応えて、アイツらの居る地下水路内のプールへ降りるために急ぐ。すでに交戦を始めてるって話だし、「ここ廃棄都市区画だし、地面ぶち貫いてもいいよな・・・？」って直通ルートを造っていいかって遠回りに提案してみる。

『ヴィータ、それはさすがにいくらなんでもアカンよ・・・』

「ですよ、ヴィータちゃん。廃棄されてるとは言え好き勝手して良いわけじゃないです」

「だけどさ・・・」

それでも何とかしてくれないかって頼もうとした時、「っ！？」足元、正確には地下から馬鹿デカイ魔力反応が発せられたと思った次の瞬間、ズドォーン！って大気や地面が大きく震えた。

「なんかヤベぇぞ！」

「フォワード達に何かあったですか！？」

『Ｓランク魔導師による魔法の影響かと思われます！』

『ヴィータ！　さっきの取り消しや！　地面を貫いて地下へ向かって！』

はやての指示に「待ってました！」あたしは"グラーフアイゼン"のカートリッジをロードして、ギガントフォルムへと変形させた。そんで、アイツらの居るプールの直上へ到着して・・・

「ギガントハンマァァァーーーーッ！」

地面に向かって"アイゼン"の一撃を振りおろして大穴を開ける。そこはプールの天井付近にまで繋がる縦穴だった。あたし達はそこを一気に下りつつ、「リイン、敵の位置をリアルタイムで教えてくれ！」そう言うと、「はいです！」リインはあたしの目の前にプール内のマップデータを出して、フォワードとギンガの魔力反応を青、敵の魔力反応を赤で示してくれた。

「リイン、出鼻で挫く！　プールに突入した瞬間にリインはこの固まってるSランクとA＋ランクの2人を捕獲、あたしはもう1人のSランクをぶっ潰す！」

「了解です！」

――ギガントハンマーーーー

そしてあたしは"アイゼン"で天井をぶち抜いてプール内に突入。モニターの表示されてる敵を示す赤ポイントを見て、その場から動いてないのを確認。

「リイン！」

「はいです！　捕らえよ、凍て付く足枷！　フリーレンフェッセルン！」

砂煙から飛び出してすぐ、敵の顔やら何やらを確認することなくリインに指示を出して、リインは氷の檻に対象を閉じ込める魔法で敵2人を確保。そんであたしはもう1人のSランク、エリオの"ストラーダ"を奪ったと思われるガキに・・・

「テートリヒ・シュラーク！」

「ぐふっ！？」

手加減を加えた一撃を食らわしてやると、ガキは大きく吹っ飛んでプールの壁に激突した。その際、手放した"ストラーダ"が宙を舞ってあたしんところに落ちて来たからキャッチ。そんで「騎士が得物を手放すんじゃねぇよ」エリオに返す。

「あ、ありがとうございます、ヴィータ副隊長・・・」

「おう。・・・ん？　あぁ、あのガキか。手加減した上にギリギリでシールドを張りやがった。骨折はしてねぇだろうが打撲でしばらくは動けねぇだろ」

エリオがガキ、この前の一件でアリシアを撃墜した子供を心配そう

に見てたからそう伝える。ぐったりしてるガキを見てたら「ヴィータちゃん！」リインに呼ばれたからそっちを見ると、「クイント准陸尉・・・！？」が居た。

「准陸尉？　私は管理局員だったことなんて一度もないんだけど？」

スバルとギンガが膝をついてるってことは、クイント准陸尉？がやったことになるわけだが・・・。

（外見がそっくりなだけの偽者か？　それとも実は生きてて洗脳されてる・・・っつうのがアタリっぽいな）

実際にアギトがレーゼフェアの魔術で記憶の改ざんをされてる。それに信じてぇ、クイント准陸尉は生きてたって事実を。

「ま、とりあえずアンタ達は公務執行妨害含めての現行犯だ。大人しく武装解除して投降しろ」

「それは困るな～。さすがに捕まっちゃうとプライソンに怒られるし、メガーヌの娘たちが捕まると、メガーヌも悲しむだろうし」

「「メガーヌ・・・准陸尉・・・！？」」

ＭＩＡ扱いのメガーヌ准陸尉の名前がここで出たことにも驚いたが「それに娘だと・・・！？」さっきぶっ飛ばしたガキを見る。メガーヌ准陸尉の子供は確か双子の女の子だったはず。じゃあ、リインが捕獲した２人の内１人も・・・。

「撤退！」

クイント准陸尉がそう叫ぶと同時、あの人のすぐ側にさっきぶっ飛ばしたガキが音も無く現れて２人揃ってまた一瞬で消えた。リインの方も「逃げられたです！」氷の檻を解除、そこには誰も居なかった。やられた。

「とにかくレリックは確保できたわけだな」

気を取り直してあたしがフォワードに向かってそう言うと、「はい、なんとか・・・」ティアナはケースを開けて"レリック"を見せてくれた。問題は子供の方だが・・・。

「まずは地上に出るぞ。レリックだけでも確実に回収だ。子供については他の陸士隊の協力して探してもらう」

「「「はい！」」」

ティアナとエリオとキャロはすぐに返事をしたが、スバルとギンガだけは無言だった。返事をしろ、って普段なら怒鳴るが、死んでたはずの母親が敵として現れりゃしょうがねぇ。が、「スバル。ウイングロードで道を作れ。あたしが殿で出る」そう指示を出す。

「あ、え、はい・・・？」

「ウイングロードだ、スバル。外に出るぞ」

「はい、すいません！　ウイングロード！」

あたしが突入して来た縦穴に螺旋状のウイングロードを発動したスバル。そんで最初にスバル、ギンガ、リインと続いて「おい、ティアナ、キャロ、急げ！」少し離れたところでコソコソしてた２人を呼ぶ。その２人が駆け上がって行くのを見届けて、あたしも地上へ向かった。

Ｅｉｐｉｃｌ０－Ｃ機械仕掛けの少女～Ｄｅｖｉｌｉｓｈ　Ｔｒａｐ～

ミッドチルダ地上本部。ミッドチルダの地上部隊の本部という意味ではなく、いくつもの管理世界に設けられている全ての地上部隊の本部という意味である。中央にそびえる超高層タワーは雲を突き抜けるほどの高さで、周囲に建っている高層タワーも中央タワーに比べれば低いが、それでも市街地に乱立しているビルに比べれば遥かに高い。

「一体何の騒ぎだこれは、オーリス！」

その地上本部の中央タワー最上階に設けられている展望室に１組の男女が居た。ソファーに腰かけている、まるで熊のような巨漢がそう声を荒げた。彼の名はレジアス・ゲイズ。階級は中将で首都防衛隊の代表であり防衛長官である。地上本部長ではないにしてもその実権の多くを握っているため、事実上の地上本部の総司令官とされる。

「本局の遺失物管理部・機動六課、および捜査協力中の部隊の戦闘、そのリアルタイムの映像です」

レジアスの腰掛けるソファの側に控えている眼鏡を掛けたキャリアウーマンと呼ぶに相応しいキリッとした女性がそう報告した。彼女はレジアスの秘書官オーリス・ゲイズ。ファミリーネームから判る通りレジアスの実の娘である。

そんな彼女は展開したモニターに映し出されているのは、海上で"シームルグ"とガジェットドローンⅡ型を殲滅している六課のシグナム、１０８部隊のアリサ、教会騎士団のイリス、アルテルミナス、トリシュタン、クラリスである。

「アレは・・・シームルグか・・・！　チッ、この騒ぎの元凶はやはりプライソンか・・・！」

レジアスが戦闘機"シームルグ"を見て強く握り拳を作った。彼自身が最も嫌い、憎悪する犯罪者であるプライソンと、彼はある目的の為に繋がりを持っている。犯罪を嫌いながらも自らが犯罪を行っているという矛盾を抱えた男だ。抱く思いは地上の平和の為。しかし究極的にはプライソンと変わりなく犯罪者だ。

「オーリス、機動六課の部隊長と後見人は？」

オーリスに訊ねるレジアスに、彼女はモニターの映像を切り替えて後見人のクロノ、リンディ、カリム、そして部隊長のはやてのバストアップ画像を表示し、その名前と役職名を伝えた。レジアスはリンディとクロノを見て「英雄気取りの青二才どもが・・・！」と吐き捨てた。彼にとって次元航行部所属、そして若いと言うだけで嫌悪の対象なのだ。

「部隊長は本局捜査部・特別技能捜査課、八神はやて二等陸佐」

「ヤガミ・・・？　っ！　闇の書事件の被疑者の八神はやてか！で、監査官は誰だ？」

「はい。・・・ルシリオン・セインテスト調査官となっております。最高評議会とリアンシェルト総部長からの指令のようです」

「よりによってあの重犯罪者を調査官に据えただと！？　八神はやてについてもそうだ！　過去に犯した罪は消えん！　今も変わらず犯罪者だ！」

「問題発言です。公式の場では控えてください。でなければ、エンツォ次官のように辞職に追い込まれてしまうかもしれません」

オーリスが後見人枠の画像から監査役を務めるルシリオンの画像へと切り替えると、レジアスがそう声を荒げる。するとオーリスが例を出してそれを窘めた。エンツォは地上本部の防衛次官だった男で、レジアスの示す正義に感化されていた部下だった。

だからこそ犯罪者を徹底的に憎み、使えない局員をも蔑ろにする。その結果、４年前のある事件解決の記者会見の場で、ティーダ・ランスターの殉職に関連する暴言を吐き、世論に徹底的に叩かれ、当時のルシリオンの手によって後ろ暗い事を公の場に晒され、最後は辞職に追い込まれた。その事実を知るのは最高評議会の３名とリアンシェルトだけだ。

「判っておる！　しかしセインテストだと・・・！　あの若造を放っておけばいずれ・・・！」

プライソンとレジアスの関係は、最高評議会どころか管理局の暗部である権威の円卓の誰もが知っており、プライソンの頭脳を利用し

ているのもレジアスだけではない。レジアスは、権威の円卓の正式メンバーではないルシリオンはそれを知らない、と思っている。だからと言って安堵は出来ない。
何故ならレジアスは、ルシリオンがあまりに優秀だということを心の奥底では理解しているからだ。犯罪者ではなく真っ当な局員であったなら、自分の右腕として置きたい、と考えるほどの。ゆえにこそ恐れている。その情報収集能力の高さを、調査官としての立場を、それを用いて自分がプライソンと繋がっている事実に辿り着くのを。
「プライソンが万が一にでも捕まってしまってはワシは・・・・！」
レジアスは、優秀な魔導師を次元航行部を有する本局に取られてしまうのがどうしても許せなかった。地上とて常に犯罪が横行しており、絶対的に魔導師という戦力が足りていない。だからこそレジアスは本局を嫌っているのだ。地上を蔑ろにしている本局を、次元航行部を。
そのため彼は、プライソンに依頼したのだ。魔導師に頼らない武力が欲しい、と。その結果、プライソンはその依頼通りに数々の戦術級、戦略級の兵器群を生み出した。列車砲、装甲列車、戦闘機、人造魔導師、機人、さらには・・・・。
「機動六課の戦力と、協力部隊の戦力は！？」
「こちらになります」
さらに画像を切り変わり、六課や協力部隊における戦力が表示された。六課のスタッフはどれも新人ばかりでそれだけを見れば、1年

間限定の試験部隊、何か問題があれば尻尾切りのように切り捨てられ易い部隊と考えるだろう。

「このふざけた戦力はなんだ・・・！」

しかしその抱えてる魔導師のランクが尋常ではないことにレジアスは気付いた。さらに協力している部隊が抱えている魔導師を見てさらに驚いた。陸戦ＡＡＡのアリサ、陸戦ＳＳのイリス。イリスの従える騎士隊員の大半はＡＡ～ＡＡＡ－相当ばかり。特務機動隊クラスの戦力が、プライソン逮捕の為に動いている。

「プライソンを潰せるに十分な戦力ではないか！　最高評議会もこの件には同意をしていたはずだ！　何故、今になってプライソンを潰すような真似を！」

「・・・如何なさいますか？」

「機動六課の運営をオーリス、お前が直に査察してこい！　何としても問題点、粗を探してくるのだ！　機動六課を解散に追い込めるほどの！」

レジアスが至った最悪のシナリオの回避策、それは機動六課を解散させることだった。しかし「無理です。セインテスト調査官が特務として常駐しています」オーリスが首を横に振った。

「ご存知でしょうが調査官は内務調査部内で最も権力があり、セインテスト調査官が不要と断じれば他の査察官や監察官、監査官でも

干渉できません」

「調査官歴1年に満たん若造だろう！　あの若造と八神はやては家族と言うではないか！　情に流され何かしらの不正を行っているやもしれん！　それを調査部長に進言すれば、お前が割り込むことも出来るだろう！」

レジアスの大声に僅かながらにしかめっ面をしたオーリスだったが「試してみます」簡潔にそう答えた。

†††ＳｉｄｅリインフォースⅡ†††

地下水路での"レリック"の争奪戦をなんとか勝利で収めたリイン達は、地下と地上を繋ぐ縦穴を通って再び日の当たる地上へと戻って来たです。そして今、地上に戻って来たことで回復した通信を使って、はやてちゃん達ロングアーチに地下で起きたことの報告、そして行方不明の子供の捜索を近隣の陸士部隊への要請を申請中です。

『子供の捜索については了解や。こちらで要請しとく。・・・そやけどまさか、クイント准陸尉とメガーヌ准陸尉が生きとって、ルーテシアとリヴィアも捕まってて、揃って洗脳されてるなんてな・・・』

「クイント准陸尉から実際に聞いたから間違いないと思う」

『プライソンの非道っぷりは前々から知ってたけど・・・。それで、スバルとギンガの様子はどないや？』

リインとヴィータちゃんは、1ヵ所に集まってるフォワードとギンガを見るです。みんなのバリアジャケットはボロボロで、どれだけの猛攻を受けたか簡単に想像がつくです。で、スバルとギンガは思いの外に気落ちしてなくて、スバルは「次こそは・・・！」と、ギンガは「母さん、待っていてください」と、次のクイント准陸尉とのエンゲージに向けて意気込んでるです。

『大丈夫なようやね。ほんならヴィータ達はもうしばらくそこで待機してもらっててもええか？　そうやなぁ・・・。近くにハイウェイが通ってるやろ。そこにヘリを降ろすから、そこで待機や』

「了解。おい、お前ら。ハイウェイの上に移動すんぞ」

「「「「了解！」」」」

はやてちゃんの指示通りにハイウェイに移動を開始。ハイウェイの上へと昇るための非常用階段は崩れていたので、スバルとギンガのウイングロードでハイウェイに昇ったです。

「・・・あ、そういや海上やヘリの方の様子はどうなってるんだ？」

ヴィータちゃんがそう訊ねると、『はい。海上でのシームルグ、ガジェット掃討は順調です』ルキノから返答があって、リインとヴィータちゃんの前にモニターが展開されたです。映し出されてるのは海上で戦闘中のアリサさんとシャルさん、シグナムとルミナさんとトリシュさんとクラリスさん。

『フェイトさんは、なのはさんを追ってヘリに向かっています』

「そうか。あの２人が護衛につけゃなんの問題もねぇな」

『はい！』

新たに展開されたモニターは２画面で、なのはさんとフェイトさんの姿を映してるです。お２人とも全速力でシャマルやヴァイス陸曹、保護した女の子や確保したケースを運搬してるヘリに向かってる最中です。

（それにしてもやっぱりすごいですね～、みなさん）

シャルさんが"キルシュブリューテ"を振るって全長４ｍほどの魔力刃を飛ばして、避け切れなかった"シームルグ"を真っ二つに斬り裂いて撃破したです。魔法ではなくスキルとしての攻撃はやっぱりＡＭＦだと防げないようです。アリサさんはガジェットⅡ型４０機を砲撃と火炎弾幕で余裕で撃墜、全滅させたです。

（ルミナさんとトリシュさんの連携もすごいです！）

トリシュさんはルシル君のコード・ウルと同じ魔法を使って、最後の２機になった"シームルグ"の内の１機を４０本近い魔力矢で包囲。ＡＭＦで何本かが消失してるですが、ＡＭＦ効果以上の魔力が込められてるおかげかその大半は着弾、そのまま爆発炎上して海上に墜落して行ったです。ルミナさんは高速移動魔法で"シームルグ"

と肉薄。そして触れた物を問答無用で分解するスキルを纏ったパンチで"シームルグ"をバラバラのコナゴナに粉砕したですよ。

『シームルグとガジェット、共に全機撃墜！』

『やったぁ―！』

ルキノとアルトが歓声を上げたです。あとはなのはさんとフェイトさんがヘリと合流すれば万事ＯＫですね。はやてちゃん達との通信を切って、リイン達は1ヵ所に集まって待機するです。リヴィアの瞬間移動がかなり面倒ですからね。下手に空間を開けてそこを突かれるのは痛いです。

「とりあえず待機中にみんなを回復しておくですよ」

「あ、わたしもお手伝いします！」

比較的ダメージの少ないキャロと一緒に治癒魔法でスバル達を回復。隊舎に戻るまでが任務ですから、いつ新しい任務が入っても良いように、ですよ。スバル、ティアナ、最後にギンガに治癒魔法を掛け終えた直後、「っ！　召喚魔法が使われてます！」キャロから報告が入ったです。

「テメェら、構えろ。団体のご到着だ」

召喚魔法によってこの場に現れたのは「ガジェットⅢ型・・・！」でした。４車線いっぱいに３０機の大行列。クイント准陸尉たちで

はないのは幸いですね。

「リインとエリオとキャロはケースを最優先で守れ。スバルとティアナとギンガは、あたしと一緒に迎撃だ！」

「「「はいっ！」」」

ヴィータちゃんとスバルとギンガが突撃を仕掛けて、ティアナはクロスファイアによる援護弾幕射撃。最早Ⅲ型でも一方的に破壊されて行くだけのガラクタです。ですから「エリオ、キャロ。周囲警戒です」リインはこの状況を怪しく思ったです。

「「はい！」」

ガジェットでヴィータちゃん達を引き離したところでリヴィアの瞬間移動でケースを奪還。有り得る話ですからね。そう考えて警戒しつつ、ヴィータちゃん達の暴れっぷりを見守っていると、「キュクルー！」フリードが空を見上げながら一鳴き。キャロが倣って空を見上げると、「・・・え、なに？」ポツリと漏らしたです。

「なんです・・・って、え、何か光ったです？」

リインも空を仰ぎ見て、何かがキラン☆と光ったのが見えました。目を凝らして見ますと、何かがこっちに向かって降下して来るようにも見えます。だとしたら「襲撃・・・！」ということになりますね。やっぱり二段構えのケース奪還だったわけですね。

「エリオ、キャロ！　ケースをしっかり持っててください！」

――フリジットダガーーーー

射撃魔法のダガーを１５基と展開。発射するタイミングを見計らってるところにさらに、「リヴィー！」エリオから切羽詰まった声が。そっちに目をやると、リヴィー（おそらくリヴィア・アルピーノですね）が佇んでたです。ケースを抱きかかえるキャロを庇うようにエリオがリヴィアと対峙するです。

「ケース。取り戻しに来た」

「たった1人で・・・かい？」

「質問の意味が解らない」

「っ！・・・僕たちを相手に、君がたった1人で――」

「ふふ♪　わたし1人で十分だし」

エリオに対してリヴィアがそう答えるんですけど・・・。これは完全に見下されてるですね。って、そっちばかりにも気を取られてるわけにはいかないです。奪還犯はもう1人、空からも来てるです。ただ、リヴィアが瞬間移動せずに姿を見せたのが引っ掛かるですね。やはり実力差だけで奪えるとでも思ってる証拠でしょうか・・・。

「ん？　人じゃない・・・です？」

リヴィアに警戒しながらも空を見上げて、ようやく空から急降下して来ているのが人ではなく「ハンマー・・・！？」だということに気付きました。ヴィータちゃんのギガントフォルムにした"グラーファイゼン"のヘッド部分と同じくらいの大きさで、柄は２ｍ近いでしょうか。そんなハンマー単体が勢いよく落ちてきたです。

「フリジットダガー！」

リインはすぐさまダガーを発射して迎撃するですけど、一切の軌道修正させることすら出来なかったです。そしてハンマーはハイウェイへと落ちて・・・

――ＩＳショックブレイカー――

「きゃぁぁぁっ！？」「うわぁぁぁぁっ！？」

「え・・・！？」

ハイウェイをその一撃で粉砕したです。リインは空を飛んでるですからなんともないですが、「エリオ、キャロ！」空を飛べない２人は崩壊に巻き込まれて落下。ホールディングネットや柔らかき支柱を発動しようにも、足場となる物が現在進行形で崩壊中ですから不可能。

「エリオ！」

「キャロちゃん！」

――ウイングロード――

ですがその時、崩壊してるハイウェイの瓦礫の中を２本の魔力の道が通ったです。そこを疾走するのはスバルとギンガで、落下中のエリオとキャロを抱きとめたうえで瓦礫の中から無事に脱出したですけど・・・。

「すいません！　ケースを取られてしまいました！」

エリオからの報告に、キャロが抱えてたはずのケースが無いことに気付きました。辺りを見回して、ヴィータちゃんがティアナを手を取って空を飛んでいるのをまず確認。ガジェットⅢ型がハイウェイの崩落に巻き込まれて全滅してるのも確認。でもリヴィアの姿だけは確認できなかったです。

「逃げられた、ですね・・・」

そしてリイン達はヘリが降りられるほどに広い屋上のあるビルへと移動して、「気が重てぇな・・・」ヴィータちゃんが溜息を吐きながらケースを奪われたことについて報告しようという時・・・

「あの、ヴィータ副隊長。ちょっとよろしいでしょうか？」

ティアナがおずおすと手を挙げてヴィータちゃんに話しかけたです。ヴィータちゃんは「んだよ。あとにしろ」と聞く耳持たずでしたが、

「あの、レリックは無事なんです」キャロからのその発言に「は？」ヴィータちゃんと、「はい？」リインは思わず訊き返したです。

「こういう風に奪還されてしまう可能性を考えて、あたしとキャロである対策を立てていたんです」

ティアナがそう言ってキャロが帽子を取ったです。キャロの頭の上には「花・・・？」可愛らしい小さな花が1輪あったです。

「フェイク・シルエット。あたしの幻術でレリックを花に見せてるんです。えっと、こんな風に」

ティアナは指をパチンと鳴らしたことでその花が"レリック"へと変わったです。ティアナとキャロは、フォワードの中でも特に敵との接触が少ないキャロに"レリック"を預けることを考え、こうして実行に移して、大成功を収めたってことでした。

「なるほど。地下でコソコソしていたのはこういうことか。やるじゃねぇか、ティアナ、キャロ」

「ホントです！　お手柄ですよ！」

これで今度こそ、ヘリとなのはさんとフェイトさんが合流すれば万事ＯＫですね。

†††ＳｉｄｅリインフォースⅡ⇒なのは†††

「追い付いた！」

「フェイトちゃん！」

私が先にヘリに向かったんだけど、フェイトちゃんに追いつかれちゃった。私と同じようにリミッターを掛けられていたとしても、さすが六課最速、だね。そうして私はフェイトちゃんは、ヴァイス君の操縦するヘリに向けて全速力で向う。

『待ってください、市街地にエネルギー反応・・・！』

そんな中、シャーリーから切羽詰まった声での報告が入って、私とフェイトちゃんの間にモニターが展開。ここから遠く離れた廃棄都市区画のビルの屋上に強大な魔力・・・じゃない、また別のエネルギー反応が発生してるのが見て判る。

『砲撃のチャージを確認！　ぶ、物理破壊型！　推定・・・エ、Ｓランク！』

ターゲットは間違いなくヘリ。私は「はやてちゃん！」の名前を呼んだ。これだけで『うんっ！　高町なのは、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン、両名の能力リミッターを解除。リリースタイム６０分！』はやてちゃんは私の意を酌んでくれて、すぐに私とフェイトちゃんのリミッターを解除してくれた。

「レイジングハート！」

≪Ｅｘｃｅｅｄ　Ｍｏｄｅ≫

普段のアグレッサーモードはその名前通りに教導用で、長時間の活動の為に汎用性を高めた機能を有してる。けどたった今、アグレッサーから換装したエクシードモードは完全な戦闘用。さらに出力リミッターも完全に解除された。"レイジングハート"もエクセリオンモードへと変形させての完全戦闘態勢。飛行速度も「アクセルフィン！」さらに引き上げることが出来る。

「フェイトちゃんは砲撃主のところへ！　私がヘリの防御を担当する！」

「うんっ！」

フェイトちゃんと別れて私ひとりでヘリへ向かう。そして「撃たれた・・・！」砲撃が発射された。物理破壊タイプでＳランク並のエネルギーを持った砲撃なんて受けたら、ヘリは撃墜するどころか空中で爆発四散する。そうなったら乗ってるシャマル先生、ヴァイス君、それに保護した女の子は確実に・・・。

（それに、レリックが暴走する可能性だってあるのに・・・！）

それを知らないのか、それとも知ってて攻撃したのか、どちらにしても被害は大きくなる。それだけは防がないと。迫り来る砲撃。それでもタッチの差で私の方が早かった。

――ラウンドシールド――

シールドを張って砲撃を防御。リミッターを掛けられたままだったら確実に貫通されてたほどの破壊力だった。でも「こちらスターズ1！　砲撃の防御に成功！　これより犯人の確保に向かいます！」ロングアーチに報告を入れる。

『ありがとうございます、なのはさん！』

『ひやひやしたけど信じてたわよ、なのはちゃん！』

コックピットからはヴァイス君、小さな窓からはシャマル先生が私に向かって手を振ってくれたから、『間に合って良かったです！』手を振り返してから、すぐにフェイトちゃんの元へ向かう。

『こちらライトイング2！　砲撃主と他2名を視認・・・したんだけど・・・』

フェイトちゃんの声が尻すぼみになってく。その理由はサーチャーから送られてきた映像でハッキリした。体のラインが判るピッチリと密着した水色のスーツ。アレは「シスターズの・・・！」着てるバトルスーツと全く同じデザイン。

『考えててもしゃあない！　とにかく確保や！』

「りょ、了解！」『了解！』

はやてちゃんからの指示に応じて、3人の少女の追跡を開始する。

気になるのは赤い短い髪の少女で、「ウイングロード・・・？」のような魔法・・・と言うよりは、シスターズの使うスキルを使ってた。スバルとギンガのような帯状魔法陣じゃなくてテンプレートだし。

「（とにかく今は捕まえることを第一に考えないと・・・！）止まりなさい！」

「市街地での危険魔法使用、および殺人未遂の現行犯で逮捕します！」

その赤い髪の子が「うっせぇ！　止まれって言われて誰が止まっかよ！」乱暴な口調で返した。ん～、昔のヴィータちゃんを見てるみたい。大きなボードに乗って空を飛ぶ子が「うわ、うわ、これ絶対まずいっスよ！」焦ってるような口調だけど、時折こっちに振り返るその顔はどこか楽しんでる。砲塔を抱えてる子は無言でウイングロード（仮）の上をひたすら走って逃げる。

「なのは！」

――プラズマバレット――

「うん！」

――アクセルシューター――

「シューット！」「ファイア！」

制止を振り切っての逃亡ということで、こちらも手加減なしの射撃魔法の雨あられ。３人は「うおおおお！？」とか「わぁぁぁぁ！？」とか「あっぶねぇ～～～！」とか、大慌てで回避行動を取った。そこにさらに追い打ちを掛けようとした時・・・

――ＩＳクローニングクイーン・シルバーカーテンＴｙｐｅガンマ――

「「っ！？」」

３人の姿が一気にブワッと増えた。さっきと同じ「幻術・・・！」で間違いない。とにかく逃がさないために、フェイトちゃんと協力して片っ端から射撃魔法を撃ち込んでいきながら「ロングアーチ！」海上でガジェットの実機と幻術の混成編隊を見破ったように、今回も幻術がどれかを解析してもらいたい。

『はい！　すぐに！』

シャーリーからすぐに実体と幻術の解析情報が送られて来て、「ありがとう！」本物の少女３人の位置を特定。私はカートリッジをロードして魔力をチャージ。一網打尽にするべくストライクスターズをスタンバイしたところで、３人はいきなり地面へ向かって急降下。建物の陰を利用して逃げ切りを図るのかもしれない。

――ＩＳショックブレイカー――

フェイトちゃんが追撃をしようとした瞬間、３人が近づいて行った

ビルが突然崩落。さらに地面も大きく陥没して、周囲の建物がアリジゴクに呑まれるアリのように崩壊してく。そして「フェイトちゃん！！」もブワッと上がってきた砂塵に呑まれた。

『大丈夫！　巻き込まれてないよ！』

砂塵の中からフェイトちゃんが飛び出して来てくれたから本当にホッとした。地面が大きく陥没したことで連鎖的に崩壊したビルは3棟。問題はそれだけじゃなくて、「これは逃げられたよね・・・」3人の姿を完全に見失っちゃった。

「ロングアーチ。あの3人の反応はどう？」

『ごめんなさい。完全にロストしました・・・』

「そう。・・・地下の方は？」

『ケースは奪われましたけど、中身のレリックは無事に回収できました。ですが行方不明のもう1人の子供は依然保護できていません。生命反応が途絶えているのが気掛かりですが、シャルさんの部隊が捜索に当たってくれるそうです』

フェイトちゃんにそう答えたシャーリーなんだけど、生命反応が途絶えたっていうのが確かに不安だ。

『こちらロングアーチ00、はやてや。スターズ、ライトニング、そしてギンガ、ホンマにご苦労様やった。六課隊員は合流後、一度

隊舎に帰還してな。そんで、アリサちゃん、シャルちゃん、ルミナ、トリシュ、クラリス。今回はホンマにおおきにな。みんなが手伝ってくれたから、まぁ被害は小さないけど乗り越えることは出来た。とても感謝してる』

『感謝なんて無用よ、あたしは仕事としてやったわけだし』

『ロート・ヴィンデとして、親友として当たり前のことだしね』

『そうそう。友達が困っていたら助ける。これ常識』

『恋敵以上にとても大切なお友達ですよ、はやて』

『お腹空いた』

こうして廃棄都市区画と海上でのプライソン一派との戦闘は幕を閉じた。

・―・―・―・―・

時空管理局本局、その技術部区画。その廊下を数人の武装隊員と捜査官が列を作って歩いている。彼らが向かっているのは第零技術部。次元世界屈指の頭脳を有するジェイル・スカリエッティを主とする部署だ。捜査官の1人がドアの側のインターホンを押した。

『はい』

「・・・ドゥーエ」

『どちら様？』

通信に出たドゥーエに応えたのは「・・・特別技能捜査課、ナジェージダ三等空佐だ」特捜課の課長補佐を務めるナジェージダ・セイジだった。赤い髪はボブカット、澄んだ翠色の瞳は今、どこか悔しげに揺れている。

『ナージェ？　待って。今、開けるわ』

スライドドアが開き、ドゥーエとナジェージダが顔を合わせることになった。ドゥーエはナジェージダの背後に控えていた他の捜査官や武装隊員に気付いて目を丸くして、「どういうこと・・・？」ナジェージダに問うた。

「・・・ジェイル・スカリエッティ、およびシスターズにはある容疑が掛けられている」

「容疑？　私たちスカリエッティ家に？　ふふ、うふふ！　冗談も大概にしないと、私も本気で怒るわよ？」

ドゥーエの表情から親しみが消え失せ、ナジェージダ達に対して敵意を見せた。武装隊員たちがストレージデバイスを次々と起動させていく。ナジェージダが「待て！」制止の声を掛け、「ドゥーエ、君もだ」応接室の奥から姿を見せたジェイル・スカリエッティ――通称ドクターが、ドゥーエを制止した。

「ドクター・・・」

ドクターの言葉に臨戦態勢を解除したドゥーエ。ドクターの後ろから彼の娘であるウーノ達もぞろぞろと姿を現わした。そしてドクターは「話の続き、聴かせてもらおうか」ナジェージダに話を促した。

「まずはこちらを見てほしい」

ナジェージダがモニターを複数と展開し、「昼頃、ミッド北部の廃棄都市区画にて行われた戦闘だ」そこに機動六課とプライソン一派との戦闘を流した。ドクター達はその映像を軽く眺め、ある映像を見た瞬間に「っ！」モニターに食いつくようにそこに映る少女３人を凝視した。

「ノーヴェ、ウェンディ、ディエチ・・・！」

赤い髪のノーヴェ、ボードに乗るウェンディ、砲塔を抱えるディエチだ。

「彼女たちは、スカリエッティ家と関係しているんだろ。同じバトルスーツ、テンプレート・・・つまりはスキルを扱うサイボーグだ。そして今、彼女たちの名前を呼んだ。これがスカリエッティ家の容疑だ」

「待って！　確かにあの子たちは以前、うちの孤児院で暮らしていたけど、プライソンに拉致されたの！」

「プライソン。その素性の一切合財が不明。しかしその頭脳は天才的。そう、ジェイル・スカリエッティ、あなたのような。広域次元犯罪者プライソン。あなたにはその容疑も掛かっている」

ナジェージダがそう言うと、「は？」愛する父親が犯罪者呼ばわりされたことでシスターズは怒りに顔を滲ませるが、「ふふ、ふはははは！」ドクターは笑い声を上げた。しかし「やってくれるじゃないか！！」一転してそう怒声を上げ、応接室のテーブルをドン！と殴った。

「まさか、ドクターを嵌めるためにわざわざ私たちのバトルスーツと同じデザインを、ノーヴェ達に着せた・・・！？」

「だとすればなんて汚ない奴だ・・・！」

「フフフ、許せないわねぇ～・・・」

ウーノとトーレとクアットロも・・・

「私たちを嵌めるために、ノーヴェ達にこんな真似をさせたのだと思うと・・・」

「ああ、ハラワタが煮えくり返そうな思いだ・・・！」

「絶対に許さないよ！」

ドゥーエとチンクとセインも、同様に怒りを露わにした。ナジェージダは「そういうわけだ。あなた達を逮捕する」後ろに控える捜査官に手錠を用意させた。そして、ガチャッとドクターやシスターズ全員に手錠を掛けた。

「ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン。大人しく連れて行かれようじゃないか。今は、ね」

「連行しろ」

ナジェージダの指示で、ドクター達が応接室から本局内に設けられている拘置所区画へと連行されて行く。その最中、「あなた達がプライソン一派だとは初めから思っていません」ナジェージダがドクターに小声で伝えた。

「ほう」

「すいません。ですが、こうするしか・・・」

悔しげに呻くナジェージダ。ドクターは「構わないさ。今は、ね」そう言ってナジェージダに優しく声を掛けた。ドクターとてこのまま大人しく捕まっているつもりはない。この一件で彼は覚悟したのだ。兄であるプライソンを止めるのは自分だ、と。

「そうだ。私たちがラボを開けている間、あそこはどういう扱いになるんだい？」

「一時的な閉鎖扱いになるかと。本物のプライソンを、はやてが・・・機動六課が必ず捕まえます。それまではどうか大人しく・・・、お願いします」

「そうかい」

こうしてジェイル・スカリエッティとその娘シスターズは、濡れ衣を着せられて拘置所送りにされ、第零技術部は閉鎖となってしまった。

そんなドクター達の連行を、本局から程遠いミッドチルダにて眺めている男が居た。ボサボサな薄紫色の髪、黄金色で釣り目な瞳、笑うと八重歯が光る。生意気そうな小僧っと言った感じだ。青いストライプが縦に描かれたYシャツ、蝶ネクタイ、黒ベスト、そして紫色のジュストコールを羽織っている

「はーっはっはっはっは！　俺からのプレゼントだ、我が愚弟・・・ジェイル！」

彼の名はプライソン・スカリエッティ。ジェイルの実の兄で、己が野望の為に弟を嵌め、こうして大きく笑い声を上げていた。そんな彼のところに、「ただいま～」クイントとノーヴェとウェンディとディエチのサイボーグで構成されたチーム・シコラクスと、「ただいま」ルーテシアとリヴィアとアギトの人造魔導師で構成されたチーム・スキタリスが帰って来た。

「悪かったわね、プライソン。レリックとプフェルトナーの回収に

失敗」

「あたし達も失敗っス。レリックとプリンツェッスィン、回収できなかったっス」

「悪ぃ、プライソン」

「面目ない」

クイント、ウェンディ、ノーヴェ、ディエチが謝った。が、「ああ？　まぁいい。公開意見陳述会、その日に勝負を仕掛ける」プライソンはそう言って、モニターに映る地上本部を見ながらニヤリと笑みを浮かべた。

「で、だ。デルタ～！」

「ひぅ！」

研究室の出入口からこちらを覗き込んでいるデルタを呼んだプライソン。デルタは「ただいま・・・」ばつが悪そうに研究室に入って来た。クイント達はプライソンへの道を開けるように左右に分かれて、デルタの行く手を開けた。

「俺は、お前を含めたスキュラはここに残れ、って言ったな？」

「う、うん」

「だが、お前は俺の命令に従わずに外に出て、姿を管理局に見せなくともショックブレイカーを2発も打った。だな？」

「うん・・・」

「・・・。で？　体の調子はどうだ？　ショックブレイカーは、俺の最高傑作だった振動破砕を超える威力だ。連発はお前の基礎フレームを歪ませる」

「え？　あ、うん、大丈夫・・・。おかしなところはない・・・よ？」

思いの他やさしい言葉を掛けられたデルタは少し困惑したが、自分の体をきょろきょろ見回したり、体のあちこちと触ったりと確認してからそう答えた。

「よし。いいか？　次のミッションまでお前たちは全員休め。外には出ないようにな」

プライソンの指示に彼女たちは「はーい！」応じ、研究室を出て居住区区画へと去って行った。プライソンは彼女たちを見送った後、改めてモニターとキーボードへと体を向き直した。モニターにはただ、2つの月が映し出されていた。

Ｅｉｐｉｃｌｌ－Ａ運命の子供たち～Ｐｒｉｎｚｅｓｓｉｎ　Ｖｉｖｉｏ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

プライソン一派との戦闘を終えた翌日。私はミッド北部の聖王医療院に来ていた。昨日六課が保護した女の子が目を覚ましたってシャルちゃん・・・じゃなくて、ルミナちゃんから連絡が入ったからだ。シャルちゃんとその騎士隊は、廃棄都市区画の地下水路でもう１人の子供を捜索を、昨日の事件後から交代制で捜してくれてるってことで、シャルちゃんの代わりにルミナちゃんが医療院に派遣されたとのこと。

「早く見つかると良いな・・・」

ガジェットを十数機と破壊できるだけの戦闘力を有しているかもしれないけど、それでもきっとあの女の子くらいの幼さのはず。そんな子が生死不明の行方不明というのが耐えられない。万が一にもうダメだとしても、せめて地下から陽の当たる地上へ出してあげたい。

「ああ。今はシャルのことを信じよう」

「・・・はい」

そういうわけでフェイトちゃんから車を借りて、運転免許を取ってない私の代わりに運転してくれたシグナムさんと一緒にやって来た。

シグナムさんが車を駐車場に停めて、私たちが車を降りた時・・・

「おーい、なのは、シグナム！」

「シグナム、なのはさん！」

ペザント・ブラウスとティアード・スカートっていう私服姿のルミナちゃんと、シスターシャッハが医療院のエントランスから駆け寄って来たから、私は「ルミナちゃん！」手を振り返して、「ご無沙汰しているな、シャッハ」シグナムさんは微笑んで応えた。そして私たちは、医療院のエントランスを潜って女の子の病室へ・・・って思ったんだけど・・・

「お呼び立てした手前ですが、申し訳ありませんがしばらくロビーにてお待ちいただけますか？」

シスターシャッハの案内で待合ロビーへ向かうことになった。私とシグナムさんで小首を傾げる。ロビーの一角にある円テーブル1脚を囲うソファ4脚を利用させてもらって、ソファに座ったところで「あー、さっきまで泣いて暴れてたから、今は泣き疲れて・・・ね」ルミナちゃんが肩を竦めて事情を話してくれた。

「暴れてって。何かあったの？」

「あの子、お母さんとフォルセティが居ないって泣いて暴れたの」

「フォルセティ？」

「おそらく、未だ見つかっていないもう1人の子供の名前かと」

「フォルセティ。・・・じゃあ女の子の名前はなんて言うの？」

「ヴィヴィオ。ファミリーネームは判らないみたいね」

「母親が居るとのことだが、父親については？」

「父親については判らないみたい。あと、やっぱりまだ幼いからか母親の名前や住所も判らないみたいだし。でも、フォルセティって子がいつもあの子の側に居て、お母さんに会わせてあげる、って言ったみたい。・・・みたい、ばっかり使って申し訳ないけど、あんなに幼いうえに泣き騒がれてる中での事情聴取なんてやっぱ無理」

「母親と親しい友人・・・かどうかは判らないが・・・その2人が行方知らずで、見知らぬ場所と者を見れば混乱するのは当たり前か」

「そういうわけです」

でもあの女の子――ヴィヴィオが眠ってるって言うんなら、わざわざ部屋まで行って起しちゃうような真似は出来ないし。シスターシャッハは「少し様子を見てきますね」そう言って席を立って、入院病棟へと向かった。

「しかし困ったものだな。さすがに長時間、隊舎を開けるわけにはいかんぞ」

「ですよね・・・」

ヴィヴィオと話をして、六課で預かるか、もしくは可能だったら聖王教会本部に預かってもらえるかどうか、それを決めようと思ってた。それだけの時間は貰ったけど、それ以上の滞在は六課の職務に差し支えると思う。だから出来ればあまり時間が掛けたくないのが本音だ。

「ヴィヴィオと話をしたいらしいけど、どうせならこのまま連れて行っちゃえば。どっちにしろ、六課の隊舎に連れて行くんでしょ」

「うん、そのことなんだけど・・・」

ヴィヴィオはプライソン一派に狙われてるから、一派を迎撃できる程の戦力が整った場所に置いておきたい。戦力だけを考えれば、聖王教会に預けるのが一番だ。たぶんミッドで一番安全な場所だと思う。だけど今回の事件は管理局預かりだし、聖王教会の本部内で匿ってって依頼しても良いのかどうか判らない・・・って、話してみた。

「なるほど。たぶんヴィヴィオの保護についてはＯＫ出ると思う。というか、まず出る。教会が全力を挙げてきっと護ると思うよ」

「そこまで言うのか。その根拠は？」

「あの子が聖王教会にとって――」

ルミナちゃんがそこまで行ったところで、テーブル上にモニターが展開された。映っているのは顔を青くしたシスターシャッハで、『あの子の姿がありません！』耳を疑う知らせを聞かされた。

「え・・・！？」「な・・・！？」

「うっそ！　ちょっ、捜して！　すぐ！」

ルミナちゃんが慌ててソファから立ち上がって、「私はこっちを捜す！」そう言って走り去って行っちゃった。とにかく「私たちも！」シグナムさんと頷き合って、別々の場所を捜すべく散開した。念話で捜索済のエリアを確認し合って、「外に行ってきます」そう断ってたから私は医療院の外に出る。停まってる車の死角を捜してると・・・

「「あ」」

バッチリとヴィヴィオと目が合った。昨夕、私が買ったウサギのぬいぐるみを大事そうに抱えてる。初めて会った時はまぶたを閉じていたから判らなかったけど、この子の瞳ってルシル君と同じように光彩異色なんだ。右目が翠、左目が紅。

「・・・！」

あまりの突然の再会、ヴィヴィオからして見れば初めての出会いだから驚かせちゃったかも。目を丸くしちゃってるし。

「あの・・・」

だから恐がらせないように声を掛けようとしたら「ママ・・・？」ヴィヴィオが小首を傾げながらそう漏らした。

「はじめまして。私――」

「ママ・・・、ママ・・・！」

ヴィヴィオが大粒の涙を溢れさせながら私に抱き付いた。しがみ付いてるヴィヴィオを引き離すのは気が引けたから「よいしょ」抱き上げると、「えへへ♪」嬉しそうに笑顔になって私に体を預けてきた。

「そのウサギのぬいぐるみ、気に入ってくれたかな？」

「あ、うん・・・！」

キュッと大事そうに抱えてくれたヴィヴィオに「ありがとう♪」私からお礼を言った。そして「なのはです。ヴィヴィオ発見しました」シグナムさん達に念話で報告する。ルミナちゃんから待合ロビーで合流するよう言われたから、ヴィヴィオをそのまま抱えながら医療院のエントランスへ。

「なのは、ありがとう・・・！　もう！　勝手に部屋を出たらダメじゃない！」

「っ！・・・・ぅ・・ひぅ・・・・」

私とヴィヴィオを見て真っ先にやって来たルミナちゃんが叱る。やっぱり怒られてるって解るようで、ヴィヴィオが泣きそうになっちゃった。私は「ルミナちゃん。心配したのは解るけど・・・」ちょっと窘める。

「それはそうかも知れないけど、最悪なケースだってあるわけで・・・」

「っ！・・・金色の髪に翠と紅の光彩異色・・・！」

涙を湛えた怯え瞳で見られたルミアちゃんはしょんぼりして、シグナムさんは何故だか驚きを見せた。シスターシャッハが「はい。これが、聖王教会が彼女を保護するという動機です」って、シグナムさんに話した。

「それはどういう・・・？」

「なのは。私たちが何を信仰してるか知ってるよね」

「えっと、聖王様・・・」

「そう。特に最後の聖王と呼ばれるオリヴィエ王女殿下は有名で大人気。そんなオリヴィエ様とヴィヴィオって同じなの。金色の髪に翠と紅の虹彩異色が」

ルミナちゃんがそう教えてくれた。かつての聖王と同じ見た目だから教会は、このヴィヴィオを保護してくれる、と。

「外見の一致は偶然かも知れない。金色の髪を持つ人なんて山ほど居るし、虹彩異色だって珍しいけど全く居ないわけじゃない。けど偶然じゃないかも知れない・・・」

そこまで言ったところでルミナちゃんが口を閉ざしたから「なに・・・？」先を促すと、ルミナちゃんがチラッとヴィヴィオを見たから、私は自分の鈍さを呪った。まだ小さな子だとしても出生がどうのって聞かせていいような話じゃない。

「ま、後者の方は教会で確認中だから、この話題はとりあえず横に置いておいて。先に隊舎に行くか本部に留まるか、ヴィヴィオに訊いてみたら」

「そうだね。コホン。改めまして私、高町なのはっていいます。ヴィヴィオ。とっても可愛いお名前だね。お母さんが付けてくれたの？」

「？？」

まずはそこから切り出してみた。だって私、ママじゃないし。きっと本当の母親と見間違えてるんだよ。だから懐いてくれている今の内に、そっちの情報を聴き出そうとした。だけどヴィヴィオは小首を傾げるばかり。私はシグナムさん達と顔を一度見合わせてると、「ママはママ・・・だよ？」そう言ってヴィヴィオが私をジッと見

た。だから「ママ？」シグナムさん達が一斉に私を見る。

『え、違いますよ？　私、ヴィヴィオのお母さんじゃありませんよ？
　というか知ってますよね、判ってますよね？』

声に出してヴィヴィオの母親じゃない、なんて言うとヴィヴィオがまた泣きそうだから即座に念話に切り替え。ヴィヴィオが「ママ？
　どうしたの・・・？」って、本当に心配してくれてるって判る声色で訊いてきた。そんなに似てるのかな、ヴィヴィオの母親と私って。

「なのは。お前、いつの間に母親に・・・」

「そっか。確認するまでもなかったわけか。なのは、おめでとう。無粋だけど、お父さんってだ――」

「もう！　ルミナちゃんはともかくとして、シグナムさんからボケ始めるなんて！」

ぷんぷん怒るとシグナムさんは「ふふ、すまん」含み笑いをして、ルミナちゃんは「ともかく・・・？」小首を傾げた。私は「とにかく本題に入りましょう！」ササッと話を済ませるために話題を元に戻す。

「えっと。ねえ、ヴィヴィオ」

「？？」

「私はこれから隊舎・・・お家に帰るんだけど、ヴィヴィオはどうしたい？」

「ママと一緒がいい！」

即答だった。置いて行かれないようにって必死に私の制服を握りしめる。ルミナちゃんとシスターシャッハに振り返ると、「ま、なのはをママって呼んだ時点で判ってたけど」ルミナちゃんは肩を竦めて、「ですね」シスターシャッハは苦笑した。

「あの、でも、良いんでしょうか。勝手に決めちゃって・・・」

「そうは言ってもあなたから引き離したら、また泣いて暴れて疲れて眠るの繰り返しになりそうだし。それは教会側としても出来ないから。だから連れて行ってあげて、なのは。強力が欲しいならまた連絡ちょうだい。無償でヴィヴィオを守ってあげるから。・・・それじゃバイバイ、ヴィヴィオ、またね♪」

そう言ってルミナちゃんはヴィヴィオに手を降ると、「ばいばい」ヴィヴィオも手を降り返した。そういうわけで、私はヴィヴィオを連れて六課に帰ることになった。行きは助手席だったけど、帰りは後部座席でヴィヴィオと並んで座る。ヴィヴィオも途中までは窓から景色を見てるおかげでご機嫌だったけど・・・

「すぅ・・・すぅ・・・」

寝ちゃった。前髪が鼻に掛かって少し唸ったから指で少し払ってあげてるところに「む？」シグナムさんが声を漏らした。シグナムさんの方を見れば自然とフロントガラスの向こうを見ることになって、「あれ？」見覚えのある大型リバーストライクが反対車線を走っていて、この車とすれ違って行った。

「今のはルシルだな。奴が隊舎を離れるとは、何かあったのか・・・？」

「どうなんでしょう。でもただ事じゃないのは確かですよね・・・」

特務調査官は基本的に出向先の隊舎から出られないし、休暇も出向期間中は1日たりとも無い激務だし。そんなルシル君が隊舎から離れるなんてよっぽどのことだ。シグナムさんが「とにかく急ごう」そう言って少しスピードを上げた。まぁそれでも法定速度だけど。

「あ、最初は寮に行ってもらえますか？」

「ん？　あぁ、ヴィヴィオを預けておくのだな。承知した」

寮にはアイナさんっていう寮母さんが居る。とりあえずヴィヴィオは私とフェイトちゃんの部屋のベッドで寝かせて、アイナさんに見ていてもらおう。そういうわけで寮に着いて、アイナさんに事情を説明。

「あ、はい。判りました。それでは少しお部屋に失礼させて頂くことになると思うのですが・・・」

「すいません。お忙しい中・・・」

「いえいえ。ヴィヴィオちゃんが目を覚ましたら、通信を入れさせて頂きますね」

「はい。それでお願いします」

ヴィヴィオをベッドに寝かせて、アイナさんに様子を見ていてくれるようにお願いして、私とシグナムさんは隊舎のミーティングルームへ急いだ。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒はやて†††

聖王医療院へ行ってたなのはちゃんとシグナムが帰って来たことで、「ほんなら、ミーティングを始めよか」隊長陣だけやなくてフォワードも入れたミーティングを始める。まずは「それじゃあ私から、これまでの敵性戦力についてを」フェイトちゃんが椅子から立って、楕円形の長テーブル上にモニターを展開した。

「昨日の戦闘で、新たにプライソン一派の戦力を確認できたから、そのおさらいを」

地下水路で行われたフォワード４人とギンガとプライソン一派の戦闘がノイズ交じりで流れる。サーチャーは使いもんにならんくなってたけど、５人のデバイスが記録を残してくれてた。スバルが「お母さん・・・」ポツリと漏らす。プライソン一派には、死亡とされ

てたクイント准陸尉が居った。それだけやない。

「クイント・ナカジマ准陸尉、融合騎アギト。そしてホテル・アグスタでアリシアを撃破した女の子と、今回で確認された女の子。２人の女の子は、クイント准尉の話からしてＭＩＡとされていたメガーヌ・アルピーノ准陸尉の娘、ルーテシアとリヴィアみたい」

エリオと戦った女の子リヴィア、ティアナとキャロと戦った女の子ルーテシアの映像が流れる。クイント准尉の口振りからすると、メガーヌ准尉も生きてるって考えられる。そんでみんなして記憶を弄られてるみたいや。ホンマにド外道やね、プライソン。怒りしか湧いてこぉへん。

「魔力パターンを確認したところ、ルーテシアが召喚魔導師であることが判明。アグスタでシグナムとザフィーラの前に現れた人外も、彼女が召喚したものだと思う」

新たに展開されたモニターに、虫の羽を生やした二足歩行の人型生物が表示された。シグナムとザフィーラを相手に奮闘してる。まぁ結局は体を透明にしての撤退を余儀なくされるほどのダメージを受けたけどな。

「次に、地上での一派について。彼女たちは本局の第零技術部に籍を置くシスターズと同じバトルスーツを着用していた」

映像が切り替わって、シスターズのトーレさんとチンク、そんで昨日の襲撃犯３名が映し出される。５人ともピッチリと体に張り付く

バトルスーツ姿。色もデザインも全く同じや。ドクターやシスターズのことを知らへん人が見れば、シスターズと襲撃犯が仲間やって判断するやろ。

「この事から本局は、ドクターの異名を持つ第零技術部のジェイル・スカリエッティ少将とシスターズ６名を逮捕。今は本局内の拘置所で拘留中だね」

「そんな！」

「チッ。これ完全に嵌められたな」

フェイトちゃんがそう報告すると、スバルは納得できひんって風に声を出して、ヴィータは少し苛立ちを含んでそう言うた。ドクターやシスターズと知り合いな私らはみんな同じ意見や。プライソンは、ドクター達を嵌めるためにわざわざ同じデザインのバトルスーツを着せたんや。少なからず因縁もあるって話やしな。

「親交の深かった第四技術部のすずか、・・・月村すずか技術官に話を聴いたところ、この３名の名前が判明。赤い髪の子はノーヴェ。ボード乗りはウェンディ。砲撃主はディエチ。元はプライソンが人工的に生み出した子供たちで、ドクターから盗んだサイボーグ化技術であるＢＮＡＣを用いて改造された子供たち、とのことだったよ」

プライソンの話をこれまで聴いてきたから、私もある程度は予想はしてた。ティアナとエリオとキャロが少しざわつく中、「つまり、あたしの妹か姉にあたるんですよね・・・」スバルがそう漏らした。

「あたしとギン姉を生み出したのはプライソンですし。参ったな。止めなきゃいけない相手が多いや」

そんな乾いた笑い声を出して言うスバルに、ティアナが「アンタ1人が背負ってんじゃないわよ」そう言うてスバルの額にチョップした。痛がるスバルに「そうですよ！」エリオや「私たちもお手伝いします！」キャロも励ますようにそう言うた。

「ティア、エリオ、キャロ・・・」

「そうだよ、スバル。これは私たちみんなの問題だよ」

「そういうわけだ。お前はクイント准尉のことを考えとけ、とりあえずな」

なのはちゃんとヴィータもスバルに声を掛ける。私も「そうやね。私らのことも頼ってな」微笑みかけた。スバルは少し呆然とした後、「はいっ！」満面の笑顔で頷いた。

「・・・すずかの話だとあとセッテ、オットー、ディードの3名も居るみたい。一度はドクター達がプライソンの研究所から保護したようだけど、残念ながら奪還されたみたい。・・・で、もしかすると、ハイウェイを破壊したハンマーの持ち主がその内の誰かかもしれない」

2m近いハンマーがハイウェイを崩壊させる映像がモニターに流れ

る。正直「これの直撃は受けたくないな」シグナムの言うようにあの一撃は受けたない。それ程までに強大な破壊力やった。

「プライソンの戦力はこれだけじゃなく、ガジェットはもちろんこう言った航空兵器や陸戦兵器もある。フォワードのみんなは憶えておいてね」

複数のモニターが展開されて、これまでに確認されてる兵器群が表示された。ルシル君がかつてプライソンの研究所から引き出したデータも一緒に出す。戦闘機"シームルグ"。攻撃機"アンドラス"。掩護機"シャックス"。輸送機"マルファス"。装甲列車"ケンタウロス"。列車砲"ディアボロス"。電磁砲"ウォルカーヌス"。名前しか判ってへんけど"アグレアス"や"アンドレアルフス"などなど。

「これって本当ですか・・・!?」

「戦争を起こせそうな程の兵器ばかりじゃないですか！」

「僕たちだけで対処できるんでしょうか・・・？」

「ヴォルテールを召喚すればなんとか出来そうな気も・・・」

フォワード達がざわめく。確かにこんなんがミッドや主要世界に現れたら戦争とも呼べる大事件が起きる。

「もしこの兵器群が出現した際は、聖王教会の教会騎士団全体が協

力してくれるように六課と協定を結んでる。そやから安心して、ってゆうのも変な話やけど、私らの任務を全うするようにな」

「「「「はいっ！」」」」

フォワード達が首肯したところで、「もう1つ、覚悟を決めておいてほしい戦力があるの」フェイトちゃんが画像を切り替えた。ライダースーツのような全身真っ黒の服に、ところどころに装着された装甲、フルフェイスのヘルメットのバイザーにも装甲が付けられてて、カメラレンズがいくつか付いてる。

「この人たちが要注意戦力、なんですか？」

「装甲列車や列車砲なんかに比べると大したことなさそうですけど・・・」

「コレはＬＡＳと呼ばれる人型兵器ね。戦力としてはそれほどでもないかな。ただ、その正体がエグイというかなんと言うか・・・」

フェイトちゃんが言い淀んだことで、「ソイツら、死体をベースに改造されたサイボーグだ」ヴィータがサラッと引き継いで、ＬＡＳの正体を伝えた。フォワードは最初、何を言われたんか解ってへんようでポカンとしてる。そやけど、その意味を理解した途端・・・

「いやいやいや！　そんな、死体なんて・・・！」

「何かの冗談ですよね！？」

「死体・・・え、死体・・・？」

スバルとティアナとエリオは混乱して、キャロはまるで気を失ってるかのように無言で明後日の方を見た。４人とも結構ショックを受けてるな～。まぁ私かて最初知った時はホンマにショックで、吐き気を催したもんや。

「プライソン一派の誰かがわざわざ管理外世界に赴いて、墓を荒らして収められた遺体を奪って来ているのだろう」

「管理世界内で墓荒らしが起きているって事件は調べたけど１件も起きてなかった。プライソンは墓荒らしで騒ぎを起こしたくないみたいだね。本当にこう・・・」

肩を震わせるフェイトちゃんの様子にフォワードは黙った。フェイトちゃんがここまで怒りを露わにするんはフォワードの前やと初めてやしな。

「・・・スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。死体とは言え元は生きていた人間だ。お前たちに破壊する真似はさせられん。もし接敵したら逃げても構わん」

「そうだね。ＬＡＳ撃破時の映像を観せてもらったけど、かなりショッキングなものだったよ。スバル達にあんなものを直に見せるわけにはいかないし」

私も見せてもらった。服やヘルメットの下にある死体はもう腐敗してドロドロ。映像で観るだけでも気を失いそうなほどにキツいものやった。あれを現場で実感する勇気は私にはあらへん。そやから「私からもＯＫを出す。フォワードはＬＡＳとの戦闘を禁止。ええな？」部隊長としての命令を出した。

「「「「・・・了解」」」」

「そして最後に。プライソン一派にはもう１組の戦力があるかもしれない。私が実際に見たのは１人だけなんだけどね」

さらにモニターに表示される映像が切り替わる。女子高生のような服装をした女の子と、シスターズのトーレさんとチンクの戦闘シーンや。

「この女の人、もしかして金属を操っているんですか・・・？」

「うん。名前はアルファっていうらしくて、ＡＭＦ下での戦闘ということもあってスキル使いなのは確定。そして・・・」

トーレさんとチンクのコンビネーションによって、アルファの右腕がトーレさんのスキルで斬り飛ばされ、チンクのスキルで左足が爆発して吹き飛んだ。傷口から覗くんは機械部品。

「そのもう１組の戦力もまたサイボーグの集団だと思う」

「フェイトさん。１つ伺いたいんですけど・・・」

「なに、ティアナ？」

「1組だという根拠は・・・」

「あぁ、うん。この後にアルファが、イプシロン、って叫ぶんだけどね」

一時停止されてた映像が再生される。音声は切られてるけど、アルファが何かを叫んだ直後に砲撃がトーレさんとチンク、アルファの間を通過してった。そんでアルファは這って砲撃で開けられた穴へ向かって・・・落っこちた。

「この砲撃もイプシロンと呼ばれるサイボーグのスキルだと思う。そう、ディエチのような。それで、これでどうして複数人いるのかって考えるその理由は、アルファとイプシロンがアルファベットだからなんだ」

「アルファ、ベータ、ガンマ、デルタ、イプシロン。もしこれが開発順だとすれば、最低でもあと3人も居ることになる」

「「デルタ・・・！」」

なのはちゃんが話にスバルとティアナが異常に反応した。私らの視線が2人に集まると、「あたし達、会いました・・・！」スバルがそう言うて、ヴィータが「いつだ！？」問い質すと、「昨日、休暇中にです」ティアナが答えた。

「そう言えば、このアルファって人と服装が似てるかも」

「姿形は憶えてるか？」

シグナムからの問いに、休暇中に立ち寄った公園とゲームセンターの監視カメラに映ってるって2人は教えてくれたから、私はすぐさま「その2つの施設の管理者から映像を取り寄せて」フェイトちゃんに指示を出す。

「了解！」

「スバル、ティアナ。デルタの目的がどうかは訊いてないですか？」

「探し物をしていると言っていました。端末らしいんですが、名前はヴィヴィオとフォルセティ、だそうです」

「「ヴィヴィオとフォルセティ！？」」

リインの問いに答えたティアナの話に、今度はなのはちゃんとシグナムが驚きを見せた。その突然の大声に私らはビックリ。なのはちゃんは「そのデルタは間違いなくプライソン一派だよ」そう言うて、手元にモニターを1枚と展開。映るのはなのはちゃんとフェイトちゃんの部屋で、ベッドの上に昨日保護した女の子が眠ってた。

「報告が遅れちゃったけど、あの子・・・私に懐いちゃって離れようとしなかったから連れて帰って来ちゃったんだけど・・・」

「彼女の名前が、ヴィヴィオ、なのです。そして未だに行方不明の子供の名前が、フォルセティ、だそうです」

シグナムからの報告に「そうか」私は納得した。アルファとイプシロンの間にやっぱり3人おって、それに"レリック"だけやのうてヴィヴィオとフォルセティも連中の狙いやってことが、改めて確認できたからな。問題は2人を端末って呼んだことや。

（端末って呼ぶくらいや。かなり重要な立ち位置に置かれる予定なのかもしれへん。そうなればいつかは取り返しに来るやろ）

「それでね、はやてちゃん。聖王教会に預けることも出来たんだけど、ヴィヴィオがどうして私と一緒に居たいって言って、その・・・」

「うん、構へんよ。なのはちゃんに懐いてるってことやし。あ、なのはちゃん預かりにするけどええか？」

「あ、うん。それについては任せて。というか、もう私しかダメみたいだし・・・」

なのはちゃんがそう言うた後、「じゃあ私からはこれで以上かな」フェイトちゃんが全てのモニターを消したところで、「じゃ、これでフォワードは解散な」私は先にフォワード4人を退室させることにした。ここからの話題は隊長陣限定で進めたい。4人は「失礼します」と一礼して、ミーティングルームを後にした。

「・・・あ、そう言えば、ルシル君ってどこに出掛けたの？」

これから次の話題に入ろうって思うたその時、なのはちゃんがそう訊いてきた。それはこれから私が始めようとしてた話題に関係することやから、この質問への答えから話し始めることを決めた。

「ルシル君な、地上本部に行ったんよ、なのはちゃん」

「え、地上本部？　どうしてまた・・・」

小首を傾げるなのはちゃんに「実はな・・・」ルシル君が職務を一時的に放棄してまで出掛けた理由を私は伝えた。昨日の一件で地上本部に目を付けられてしもうたこと。そんでこの機動六課を、地上本部の息の掛かった査察官が臨時査察したいってことを。これが次の話題の内容や。

「え、それってかなりまずくない・・・？」

「うん、まずい。機動六課はツッコみどころ満載の部隊やしな。新人を多く採用して、1年間限定ってゆう時限付きにすることで、この部隊の本質を隠してたんやけど・・・」

「地上本部の査察ってすごく厳しいのが有名だし。もし査察でアウト食らってシフト変更や配置換えなんて受けたら、六課の運営がガタガタになること間違いないよ」

私とフェイトちゃんで「はぁ・・・」大きく溜息を吐いた。そんでなのはちゃんは「あ、だから・・・」ルシル君が地上本部へ向かったその理由に思い至ったようや。

「特務調査官として六課に常駐してるのに、地上本部から査察させろ、なんて言われたらさすがにルシル君も怒るよね・・・」

「そりゃもうカンカンやったよ。内務調査部からその連絡が入った時、ルシル君も素になって、あのクマ髭オヤジめ、俺にケンカを売るとは上等だよ、後悔させてやる！って、湯呑みをこう・・・握り潰して粉砕したしな」

「怖かったですよ～、あの時のルシル君・・・」

リインがぶるっと体を震わせた。なのはちゃんはそれを聞いて「クマ髭オヤジってゲイズ中将のことだよね・・・。毒舌だなぁ～・・・」苦笑した。私としてもルシル君がそんなこと言うなんて思いもせえへんかったわ。

「でも、これで地上本部の査察は受けないでいいことになる・・・のかな～」

「査察を受けて潔白を証明する、ってパターンもアリやどけね。そやけど、それでアウトを食らったら身も蓋もない。ルシル君に頑張ってもらうしかないと思うてる」

地上本部の査察を乗り越える自信はある。こうゆう場合のためにい

ろいろと手を回して来たんやしな。とは言うても綱渡りになることも事実。そやから出来れば、査察は受けたない、って考えてる。みんなが黙る中、ＰｉＰｉＰｉ♪と通信が入ったことを知らせるコール音が鳴った。

「あ、私だ」

なのはちゃんがコールを受けて通信を繋げた瞬間、『びぇぇぇぇ～～～～！』展開されたモニターからトンデモなく大きな泣き声が聞こえてきた。さっきはグッスリ眠ってたヴィヴィオが目を覚まして、『ママぁぁぁ～～～！』って喚いてた。

『ごめんなさい、なのは隊長！　私では泣き止ませられなくて・・・！』

寮母のアイナさんがモニターの端に映り込んで、申し訳なさそうになのはちゃんに謝った。するとなのはちゃんが「いえ、お気になさらず。ヴィヴィオ！　泣かないで！」モニター越しにヴィヴィオに声を掛けた。

『ひっく、うっ、ママ？　ママ！？　ママ！』

ヴィヴィオは明らかになのはちゃんの声に反応して、なのはちゃんをママって呼んだ。事情を知らへん私とヴィータとフェイトちゃんは「ママ？」小首を傾げた。

Ｅｉｐｉｃｌｌ－Ｂ運命の子供たち～Ｐｕｆｅｒｕｔｏｎａ　Ｆｏｒｓｅｔｉ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

本当に頭にくる。調査官として俺は、はやて達に対してよそよそしい態度を取りながらも職務を全うしてきた。まぁフォワード４人やアイリとは、念話を使って素の俺で話すという反則技を使ってはいるが。それも１週間に数回という少なさだから許してほしい。そんな適度な息抜きをしながら、ストレスが溜まる日々を送ってきた。そこに・・・

――ルシリオン。地上本部から、お前が今請け負っている機動六課に対して査察がしたいとの申し出があったんだが――

先の次元世界でもレジアス・ゲイズが機動六課にちょっかいを出して来たのを思い出した。自らが犯罪者であるにも関わらず、はやて達八神家を犯罪者扱いした大馬鹿者。そして今回も、あの男はプライソンと繋がっている。ステガノグラフィアやサーチャーであるイシュリエルでレジアスの周囲を徹底的に調べてやった。

（俺の仕事場を突っついたお返しに、俺もお前の闇を突っついてやるよ、レジアス・ゲイズ・・・！）

それをネタに思い知らせてやる。というわけで、「こちら内務調査部、ルシリオン・セインテストです」俺はこれから地上本部に乗り

込んで、あの男にケンカを売りに行く。ケンカを始めるためにはレジアスと会わなければいけないということで、まずはあの男との面会のアポを取る。

『これはこれは。お久しぶりです、セインテスト調査官』

「ええ。お久しぶりです、オーリス・ゲイズ三佐」

レジアスの実子であり副官でもあるオーリスが通信に出た。あの男の秘書官でもあるから当然な話だがな。彼女は『それで、本日はどのようなご用件で？』不満と僅かな焦りの色を含んだ声で、俺が通信をした理由を訊ねてきた。甘い、甘いぞ、オーリス。感情を隠しきれていない。俺からの通信を恐れていたな。

「まさか、用件が判らないとでも言うのですか？」

『っ・・・機動六課への査察の件ですね』

「ええ。全く以ってその通りです。解りますか、この怒りが。真面目に職務に励んでいれば、いきなり横槍を入れられて。しかもその理由が、私と八神部隊長以下部隊員が親しい間柄から、情に流されて私が不正をしているかもしれない。その為に第三者の査察を行うべき、だと」

ああ、情に流されている件は認めるさ。だが、それで職務に手を抜いているわけがない。公正公平に機動六課の運営を監査して、その一線だけは絶対に越えないようにしている。それなのに、不正をし

ているかもしれない、なんてあらぬ疑惑を掛けられた。もう本気で怒っているさ。

「仮にも調査官となった私が、いくら部隊員と親しい関係だからと言って不正をするとでも？　冗談じゃない。ただちに査察申し入れを撤回して頂きたい。私の報告は内務調査部や六課後見人からは問題なしと判断が下されている。親しい間柄だからこそ、私は彼女たちを信じているし、不正もしない」

『であれば、こちらからの査察を受け入れても問題が無いのでは？　やましい事があるからこそ、こうして私にそのような事を仰るのでは？』

「・・・チッ。そちらの勝手な査察で、機動六課の運営に僅かでも支障を出したくないんですよ。ただでさえ昨日は広域指名手配犯プライソンが、六課の隊員への殺人未遂や、廃棄都市区画での危険魔法使用などという、ふざけたケンカを売ってきた。おそらく今後も六課に対して手出しをする可能性が高い。そんな大変な時期に、地上本部の事情で彼女たちの邪魔をしないでくれ、という話なんだよ、オーリス・ゲイズ三佐」

思わず舌打ちが出て、口調も苛立ちに塗れてしまった。すると『随分と苛立っているのですね』オーリスが若干責めるような声色で返してきた。さすがに今のは酷いと思い直して「失礼しました」謝っておく。

『査察の件については、撤回するつもりはありませんし出来ません』

「レジアス・ゲイズ中将からの指示だから、ですか？」

『・・・ええ、そうです』

「では直接ゲイズ中将に話を付けるので、アポイントをお願いします」

ようやく俺が伝えたかった本題に入れた。しかし予想通り『出来ません』オーリスはキッパリと断ってきた。だったら切り札その1を使おうか。

「・・・ではゲイズ中将にこう伝えてください。よりによってあの重犯罪者を調査官に据えただと。八神はやてについてもそうだ。過去に犯した罪は消えん。今も変わらず犯罪者だ、と」

『っ！？　それは・・・！』

オーリスが息を呑んで反応した。秘書ならここで反応せずにシラを切り通せ。まぁシラを切ったところで別の切り札を切るんだがな。俺は「どうです？　アポ、取って頂けますか？」もう一度そう伝えた。オーリスは少し黙り、『折り返し連絡を入れさせて頂きます』通信を切った。

（さぁ、どう出る、レジアス・ゲイズ？）

とりあえず地上本部へと愛車のリバーストライク・"マクティーラ"

を走らせ、首都クラナガンへと入ったところでＰｉＰｉＰｉ♪とコール音が入った。コールを受けると『オーリスです。あなたに会われるそうなので、１４時に防衛長官執務室へお越しください』そういう旨が伝えられた。

「承知しました。では、１４時にお伺いします」

『・・・お待ちしております』

通信を切り、俺は速度超過に当たらないほどに速度を上げる。そして地上本部の駐車場の一角にある駐輪場に"マクティーラ"を停め、レジアスの執務室のある中央タワーに入る。エントランスロビーに居た局員が一斉に俺の方を見た。小声で、調査官の制服だ、みたいな話し声が聞こえてきた。本当に珍種なんだよな、調査官って。

「本日１４時に、レジアス・ゲイズ防衛長官と面会するルシリオン・セインテストです」

受付カウンターの女性局員にそう伝えると、「はい。承っております」上層階へと昇るためのエレベーター乗り場を手振りで示してくれた。俺は「どうも」小さくお辞儀してからエレベーター乗り場へ向かう。良いタイミングで１階に降りて来ていたエレベーターに乗って、８０階にあるレジアスの執務室へ。

「お待ちしておりました。セインテスト調査官」

そしてエレベーターから降りるとそこにオーリスが佇んでいた。彼

女の案内でレジアスの執務室に向かい、「こうして直接顔を合わせるのは初めてですね、ゲイズ中将」険しい表情をしているレジアスと顔合わせ。いつもは権威の円卓専用の会議室で、ホログラム相手に話しているからな。

「貴様の目的は何だ。ワシを脅して、一体何を企んでおる・・・！」

「いきなり本題に入りますか。まぁいいでしょう」

レジアスの座る執務デスクの前にまで歩き、「機動六課から手を引いて下さい」簡潔に答えた。レジアスは「やはりか・・・！」歯噛みして、ドンっと執務デスクを殴った。

「やはり貴様は犯罪者だな、ルシリオン・セインテスト！　盗聴した挙句に恐喝とは！」

「フン。それをあなたが言いますか。広域指名手配をされているプライソンと繋がっておきながら局の上層部に知らせず、さらには兵器開発の依頼をしている」

「地上の平和のためだ！　貴様ら海の連中が優秀な魔導師を全て持って行くからこのような事態になっておるのだ！」

「だからと言ってプライソンのようなド外道と協力関係になるとは如何なものか。奴の所為で、あなたの友人であるゼスト・グランガイツ一尉は今もなお昏睡状態。彼の副官であるナカジマ准陸尉とアルピーノ准陸尉、そしてその２人の娘は、奴に洗脳されて駒扱い・

・・・！」

フォワードのデバイスが記録していた戦闘映像を展開したモニターに映し出して怒鳴る。先の次元世界のジェイル・スカリエッティなどが小物に思えるほどに、プライソンは正真正銘のクズだった。

「それでも奴に頼るしかないのだ！　それとも貴様が救うと言うのか、この地上を！　出来まい！」

驚いたな。先の次元世界ではレジアスとほとんど接点が無かったからか、ここまで感情をぶつけてくるなんて思いもしなかった。そして彼は「あと僅かで、地上に安寧を齎すことが出来る」大きく息を吐いた後、そう漏らした。

「列車砲に装甲列車、戦闘機などなど。そんな物をミッドに置いて何の問題は無いとでも？　過剰戦力所有で本局どころか聖王教会、最悪な話・・・世論からも叩かれますよ」

「ふんっ！　海ばかりにしか目を向けん本局になど文句など言わせん。我々が地上を護っているからこそ本局が大きな顔をしていられるのだ。それが解らん馬鹿どもに、邪魔されて堪るものか。二番煎じの聖王教会にも文句は言わせん。世論は問題あるまい。何せ自らが住む世界での安全が懸かっておるのだ。始めは多少なり混乱が起きるだろうが、直に慣れる」

頭は固いままだな。さらにレジアスは「この件については最高評議会からも承認されている」と、俺と彼の共通の上司である最高評議

会の名を出してきた。

「だと言うのになぜ機動六課の設立が許され、最高評議会の命で貴様が特務調査官となり、こうしてワシの邪魔をしてくるのだ！」

「何故って。そちらにも届いているはずですが？　騎士カリム・グラシアの預言が」

「くだらん。あんなものに目を通す暇など無いわ」

本局と聖王教会、そのうえレアスキルまでもが嫌いだというレジアス。その変な拘りの所為で先の次元世界ではあんな大混乱が起きた。そしておそらく今回も、プライソンは何かを仕出かす。そう思うと「本当に愚かだな、お前は」素になってしまった。

「なに！？　なんだ、上司に向かってその言い草は！」

「地上の平和を守るため？　だったら少しは情報を大切にしたらどうだ？　特に未来の情報など、喉から手が出そうなほどに貴重だ。そんな騎士カリムの未来予知を、お前の個人的な意見で切り捨てる。コレを愚かと呼ばずに何と呼べばいい。教えてくれよ」

「～～～っ！　犯罪者は礼儀も知らんようだな！」

顔を真っ赤にして怒鳴りつけてくるレジアスだが、その程度の怒声で怯えるほど俺は若くない。それ以上に「礼儀を説く前にまずは凝りに凝ったそのスキル嫌いを直したらどうだ？」先とは違ってクイ

ントさんやメガーヌさん、ルーテシアとリヴィアの命が懸かっていることもあって、怒りのボルテージは上がりっぱなしで下がる気配なし。あの４人は必ず守り抜く。その為ならどんな上司だろうと牙を剥く。

「貴様・・・！」

「よく聴け。・・・旧い結晶と無窮の強欲が集い交わる地。死せる王と騎士の下、聖地より彼の翼が蘇り、使者たちは開宴を謳い踊る。地を這う鋼の龍の咆哮は破壊を、彼の翼を護りし親鳥は地上に畏怖を、共に翔けし子鳥たちは戦火を齎す。その果てに中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ちる。それを先駆けとし、遥か空の彼方より来たる恐怖の大王により、星の命はその輝きを失う」

俺が機動六課の特務調査官として任命された翌日、聖王教会のカリムの元に報告しに行った際に聞かされた、六課の設立理由となる預言の内容だ。先では"霊長の審判者ユースティティア"の番外位たる大罪と、指示を出していた終極が好き勝手した事もあってメチャクチャな内容だったが、今回も負けず劣らずのトンデモ具合。

（無窮の強欲プライソンと無限の欲望ジェイル・・・）

――開発コード？　随分と懐かしい話だね。・・・私は無限の欲望アンリミテッド・デザイア。プライソンは無窮の強欲エターナリー・グリード。とは言え、どうやら私は失敗作のようだがね。何せそれほどの欲など持ち合わせていないのだから――

この預言内容を知ったその後、俺はその足で本局へと赴いてドクターとプライソンの開発コードを訊いてみた。そして返ってきたのが、無限の欲望と無窮の強欲。これでプライソンが首謀者であることが確定した。レジアスもプライソンの開発コードを知っているのか、「っ・・・！」目を見張った。

「無窮の強欲・・・、つまりプライソンが引き起こす事件が、いま起きているものだ。解説して差し上げようか、ゲイズ中将？」

「・・・無用だ」

預言内容を反芻しているのかレジアスは目をキュッと強く瞑った。先の預言内容とは大きく違うが、地上本部が落ちるのは変わりないようだ。旧い結晶は"レリック"、無窮の強欲はプライソン、集い交わる地はミッドチルダ。

（死せる王はヴィヴィオ。だが、騎士とは誰だ？）

それだけが判らない。他は何となくだが判るんだがな。そんな預言の内容の中でも特にまずいのが、星の命はその輝きを失う、だ。先では管理システムの崩壊だった。それでも十分な混乱を招ける。しかし今回は明らかにミッドチルダという世界が丸ごと1つ滅ぶという解釈が出来る。その方法はまだ判らないが、プライソンの造り出した兵器によるものだのだろう。

「とにかく・・・このままプライソンを放っておくと地上本部どころかミッドチルダという世界が滅ぶ。ゲイズ中将、ミッドに平和を

齎したいのであれば、こちら側・・・機動六課に付いてください」

「なに・・・？」

「プライソンとこのまま繋がっていれば、あなたは確実に共犯者として今の地位を失うでしょう。ですが、ここでプライソンと手を切って、逮捕に協力すれば英雄の地位のままでいられるでしょう」

「何を馬鹿な・・・。ここで手を切れば、それこそ奴は好き勝手にワシが依頼した戦力を揮うだろう。そうなっては元も子も・・・」

「それを阻止するために設立されたのが機動六課だ、と私は思います。おそらく最高評議会もこの預言を見たことで、プライソン逮捕に動いたのではないかと。何せ飼い犬に手を噛まれる状態ですしね、預言が成就すると。だから捕まえたいんですよ、プライソンを。そして奴の技術力を、ジェイル・スカリエッティに引き継がせば・・・。ほら、何も問題は無いでしょう？」

あくまで推測だが、そう考えると合点がいく。プライソンとドクターを生み出し、その頭脳を利用し平和を築き上げ、コントロールが効かなくなり始めたところを逮捕して封じ込める。そして遺された技術力を、ドクターを利用して使い続ける。最高評議会のシナリオは大体こんなところだろう。

「確かにそれならば辻褄が合うだろうが・・・」

（しかし、じゃあどうして俺を戦力として使わないのか、それが理

解できない・・・）

俺を戦力として揃えた方が、対兵器戦で役に立つはずだ。それを封じる目的はなんだ。リアンシェルトからの提案というのが重要だとは思うが。直接問い質そうにも絶対に答えないだろうしな。本当に面倒な娘だよ、まったく。

「どうです、悪い話ではないでしょう？　ここがターニングポイントですよ。ただでさえ犯罪行為を行っているのに、プライソンを利用していると思わされての、逆に利用されたままズルズルと共犯者へと堕ちるか、最高評議会の意を汲んで奴の逮捕に動いて今の地位を守るか。お好きな方をどうぞ」

レジアスは深く考え込み始めた。次に口を開いたのは2分ほどが経過してからだった。彼は「良かろう。貴様の話に乗ってやろう」そう言って鼻を鳴らした。俺は「どうも」と右手を差し出したが・・・

「勘違いするな。ワシは貴様らの味方になるつもりはない、敵にならんだけだ」

握手には応じてくれなかった。俺は差し出していた右手を戻し、「ですが本当に良かった」そう前置きをしてから・・・

「機動六課の後見人、非公式ながらあと3人いましてね。法務顧問相談役のレオーネ・フィルス、武装隊栄誉元帥のラルゴ・キール、本局統幕議長のミゼット・クローベルの御三方です」

「「っ！？」」

そう伝えるとレジアスと、これまで黙って俺たちのやり取りを見守っていたオーリスが目を見張って息を呑んだ。伝説の三提督と謳われる、時空管理局黎明期の功労者。さすがのレジアスもこの３人の名前を聴いては最早黙るしか、本局や機動六課に協力するしかないだろう。

「むぅ・・・」

「彼の三提督までもが機動六課に協力しているなんて・・・」

「あの方たちを敵に回してこれまで通りに局員でいられるわけがないですからね。それでは、地上本部はこれより本局、機動六課、聖王教会に協力してもらえる、と考えてもよろしいですね？」

「・・・好きにしろ」

「感謝します、ゲイズ中将。これにて失礼したします」

敵視している本局と聖王教会とも協力する、そう約束を取り付けた以上はもうここに居る理由は砂粒ほどもないためレジアス達を放ってササッと執務室を出て、そのままエレベーターに乗り込んで１階へ降りる。そして受付カウンターの女性局員に軽く会釈だけして駐車場に行き、"マクティーラ"に乗るための準備をしている最中・・・

（さて、レジアスの件は片付いたが・・・最高評議会はどうしてくれようか・・・）

先はドクターの命令でドゥーエが処分した。しかし今回はそうはいかない。本局内にプライソンの手下は居ない・・・はずだ。となれば、権威の円卓は消滅しないし、俺が自由になることもない。レジアスとは同じ犯罪者だという共通項があるおかげで、俺の秘密は明かさないだろう。

（特捜課のガアプ一佐や暗殺部隊のサブナック一佐、捜査部長官のアーリー中将、情報部長官のコスンツァーナ少将の４人は、俺を道具ではなく同志として見てくれているから敵にはならないと思う）

他の男将校や最高評議会は俺を道具として利用する気満々だから、下手に抗えば俺の秘密をネタに脅してくるだろう。一番消えてほしい連中だ。そしてリアンシェルトと、民間協力者というトリックスターとエーアスト。リアンシェルトは何だかんだ言って黙っていてくれそうな気がする。まぁ俺がレーゼフェアとフィヨルツェンを救ったら完全に敵対してくるだろうが。それまでは放置で良いだろう。

（エーアストの素性はすでに調べがついている。エーアスト・ルター。フリーランス魔導師派遣会社、エモーションサービスカンパニーの社長だ）

そしてトリックスター。コイツだけはサッパリ判らない。どれだけ調べようとも尻尾すら掴めていない。勘だがコイツとはそう遠くな

い未来でぶつかりそうだ。

「ひとり考えていても仕方ない、か・・・」

ヘルメットを被って"マクティーラ"に跨り、「さ、はやて達の元へ帰ろう」アクセルを回して"マクティーラ"を走らせる。

「っと、せっかく首都にまで来たんだ。部隊員のみんなに茶菓子でも買って行くか」

最寄りの有名な名菓店ゴルデンクローネでカステラを購入。雑誌で掲載されるほどの美味しさで、少し前に女子隊員たちが買いに行きたいと話していたのを聞いていたからな。お土産にするにはちょうど良いだろう。特に値段の張る特級というカステラ、１箱１０本入りを2箱と購入。シート下の収納スペースに入れ、改めて隊舎へ向かう。

それからの隊舎までの道程は何事も問題が無く、無事に帰って来られた。ヘリを格納しておくハンガーに隣接しているガレージに"マクティーラ"を停車させ、そのまま隊舎へ。

「あ、セインテスト調査官。おかえりなさい」

「おかえりなさい」

良いタイミングで給湯室から出て来たアルトとルキノに声を掛けられた。2人に「ただいま」と挨拶を返し、「コレ、土産なんだが。みんなで食べてくれ」買ってきたカステラ2箱の入った包みを差し

出す。

「お土産ですか？　ありがとうございま――」

「あああああああ！　ゴルデンクローネの箱じゃないですか！　え、どの商品を買って来て下さったんですか！？」

「え、ゴルデンクローネ！？　本当だ！」

「有名だって言うカステラを」

「「カステラ！」」

目を爛々と輝かせて食いついてくるアルトとルキノ。１箱は交代部隊の隊員たちの分だと告げ、アルトに包みを手渡した。２人は「ありがとうございます！　頂きます！」ものすごい笑顔で一礼して給湯室へと戻って行った。喜んでくれてたようで俺としても満足だ。そして部隊長室へ向かい始めた中、「特級ぅぅぅ～～～～～！！」給湯室からアルトとルキノの歓声が響き渡って来た。苦笑しながら廊下を歩き、そして・・・

「ただいま戻りました、八神部隊長」

はやてとリイン、ついでに俺の執務室である部隊長室に入る。部隊長室の一角に設けられた休憩スペースにははやてを筆頭とした隊長陣であるなのは、フェイト、シグナム、ヴィータの５人と、それプラスリインが勢揃いしていた。それに、なのはに寄り添うように幼

い少女、ヴィヴィオが満足げな顔で座っていた。

（ん・・・？）

しかし何故か俺を見た瞬間、大きく目を見開き、口をあんぐりと開けた。なのは達の目は俺に向いているため、ヴィヴィオの表情に気付いていない。

「お疲れ様でした、セインテスト調査官。それでその・・・どうでした？」

「ええ。地上本部による査察の件についてですがゲイズ中将との会談の結果、査察は行われないことになりました。このまま私が特務調査官として、機動六課の監査を行います」

そう報告するとはやて達は目に見えてホッとした。さらに本事件の期間中限定だが本局や聖王教会との協力体制を敷いてくれるようになったことを伝えようとした時・・・

「ル～シルぅぅ～～～～～～～！！」

俺の名前がこれでもかってくらいに叫ばれた。込められているのは明らかに怒り。そして声の主はどう考えても「シャルちゃん・・・！？」はやて達の言うようにシャルで間違いない。ドアの向こう、廊下がドタドタと騒がしい。みんなの視線がドアへと注がれる。俺に用が

あるのは間違いないからソファから立ち、俺の専用執務デスクの元へ向かう。その直後、プシュッとドアがスライドして開いた。そこに佇んでいたのはやはりシャルだった。

「えっと、シャルちゃん・・・？」

「なんだろう、シャルの纏ってる雰囲気がかなりまずい気がする・・・」

「シャルちゃん、少し振りやね。えっと、どないしたんかな？」

なのはとフェイトとはやてがソファから立ち上がりつつ、俯いたまま佇むシャルに向かって声を掛ける。俯いている所為でシャルの表情が見えないが、フェイトの言うように纏っている雰囲気は結構まずい。というか、なんで俺の名前を、怒りを込めて呼ぶのかが理解できない。

「どういうこと？」

シャルがポツリと何か呟いたのが判ったが、きちんと聞き取れなかったから思わず「なんだって？」俺はそう訊き返してしまった。いや、もしかしたら黙っていてもこの後の結末は変わりなかったのかもしれない。

「ル～シ～ル～・・・・！」

シャルがゆっくりと顔を上げながら俺を睨みつけてきた。結構な怒

りを溜めているな。俺、シャルに何かしたかな。アリサやギンガと協力しての"レリック"回収の件については確かに労いの言葉を掛けなかった、というよりクロノと通信していて顔を合わせられなかった。しかしそんな些細なことでここまで怒るのも変な話。シャルを怒らせた要因が他に何かないかと考え込んでいると、シャルがすぅ～～っと息を大きく吸った。そして・・・

「ちょっとぉぉぉーーーー！　誰との子供よ、ルシルぅぅぅーーーーー！」

そんな訳の解らないセリフをのたまった後、俺に向かって突進してきた。そして平手打ち。だが理由も解らず頬を叩かれる謂れはないから、平手打ちを繰り出した右手をパシッと受け止める。シャルの様子にはやて達が俺たちの元へと駆けて来る。

「そもそも子供って何の話だ！」

「この子のことよ！　アリサ！　Ｃｏｍｅ　ｈｅｒｅ　！」

シャルは部隊長室のドアに向かってそう声を上げた。再び開いたドアの向こう、廊下で待機していたらしい連中が俺たちの前に姿を見せた。まずは何とも言えない表情で俺を見ているフォワードの４人、次に俺たちの親友であるアリサ。・・・で、もう１人の姿に俺は、俺たちは絶句した。そこには俺が居た。いや正確には俺と瓜二つの少年が居た。銀色の髪に紅と蒼の虹彩異色。身長はヴィヴィオより同じくらいか。一卵性の双子だって言っても不思議じゃない程に同じだ。

「あっ、フォルセティ・・・・！」

「ヴィヴィオ・・・！」

シャルのキレっぷりに怯えていたヴィヴィオだったが、俺と瓜二つの少年をフォルセティと呼んで表情に明るさを取り戻し、フォルセティのところにトテトテと駆け寄って行った。その様子を混乱する頭のままで見守っていると・・・

「ちょっとぉぉぉーーーー！　誰との子供よ、ルシルぅぅぅーーーーー！」

「待つんだ、まずは話を聴け、シャル――ぐはぁっ！？」

シャルが改めて激昂。ヴィヴィオとフォルセティに気を取られ過ぎて、シャルの左手による平手打ちをまともに受けてしまった。しかも軽く魔力を付加してくれやがったのか途轍もない衝撃が俺を襲い、ガタン！と執務デスクの反対側に吹っ飛ばされた。

「うわっ、ルシル君！？」

すぐに俺の側に駆け寄って来てくれたのははやて。差し出してくれた右手を握り返して上半身を起こしてもらう。そこから自力で立ち上がり、肩で息をしているシャルを、「落ち着いて！」そう必死に宥めるなのは達を視界に納める。

「この子！　フォルセティ！　もう判ってると思うけど地下にて発見、保護した子！　軽く事情聴取をしたんだけど！　お父さんの名

前がルシル、あなたって言うじゃない！　どういうこと！？　わたしとはやてとトリシュの想いに答えないまま、他の女のヤっちゃったってことでしょ！？　母親はどこの誰！？　フォルセティは知らないって言うし、あなたなら知ってるんでしょお父さん！？」

シャルは全力で叫ぶように話すからもう耳が痛いのなんのって。見ろ、ヴィヴィオとフォルセティが耳を押さえて怯えているじゃないか、可哀想に。つうか、「馬鹿を言え。そんな事するわけないだろうが」溜息を吐きながらそう返す。ヤっちゃった、って単語にスバルとティアナが顔を真っ赤にし、エリオとキャロは小首を傾げている。これ、訴えたら勝てそうだな。

「大体、息子なら――っと・・・」

そこまで言いかけたところで口を噤む。いくら本当に俺が父親じゃないにしても、その話を俺を父と呼ぶらしいフォルセティの前でするわけにはいかない。俺は「とりあえずその話は後だ！」シャルの肩に手を置いて、フォルセティの視線と合うように片膝立ちをする。

「はじめまして、フォルセティ。それにヴィヴィオ。俺はルシリオン・セインテストと言う」

「「はじめまして」」

ヴィヴィオは右手でフォルセティのTシャツ（おそらくシャルかアリサに買ってもらった物）の袖を掴み、左手でなのはの手を取ったうえで挨拶を返してくれて、フォルセティは小さくお辞儀して挨拶

を返してくれた。うん、俺に似て礼儀正しい良い子だ。

「（って、違う！）えっと、あー、その、俺がお父さん？」

自分を指差しながらフォルセティにそう確認してみる。なんだろう、これ。子供に向かって、自分が父親か？と訊くなんてまるで、知らずに余所で子供を作った間男――超絶〇〇野郎みたいじゃないか。はやて達から集まる視線の所為か変な汗が止まらなくなってきた。

「うん、パパ」

フォルセティの一言でこの場が凍りつく。俺を見下ろしているシャルから怒りが再燃したのが気配で感じ、はやても「ルシル君・・・？」元気の無い声で俺を呼んできた。先の次元世界ではヴィヴィオの父親役で、今回は俺と瓜二つのフォルセティの父親役。一体どうしてこうなった。

「ショックだよ、ルシル。ルシルは誠実な男の子だって思ってたのに。海鳴市から離れた途端にどこぞの女とよろしくヤっちゃ――むぐっ？」

これ以上シャルが馬鹿な事を言わないようにその口を右手で塞いでやる。そして『無実だ、信じてくれ！』フォワードも含めたみんなに念話で無実を説く。確かこの頃のヴィヴィオの年齢は6歳。俺は今１８歳。１２歳で子供を作った計算になる。

（そんなのねぇよッ、絶対に有り得ねぇッ！　１２歳で、妊娠が出

来る女性と子供を作るなんて、俺は絶対にそんな事はしない！）

口調が昔、"アンスール"の同性メンバーやステアにだけ使うものに戻ってしまうほどに、ありえない話だとツッコむ。と、この瞬間に、あれ？と不思議な感覚を得た。なんか前にも同じようにツッコみを入れた気がする。デジャヴというやつだ。なんだっただろう。だがそんな記憶は見当たらない。

（なんだ、このモヤモヤ・・・。何か大事な記憶を失っているような気がする・・・）

いやとにかく俺はヤってない。身の潔白を証明するためにどうすれば良いかを必死で考える。とりあえず今言えるのは、俺とフォルセティが似過ぎだということだ。しかしまずは・・・

「フォワード４名。申し訳ないがしばらくの間、ヴィヴィオとフォルセティを別室へ連れて行ってくれないか。これから俺・・・私は、いろいろと隊長たちと大事な話をしないといけない」

ヴィヴィオとフォルセティに聞かせられない内容になるだろう話になるため、２人をキャロ達フォワードに託そうとするが、「や・・・」ヴィヴィオがなのはの手にしがみ付いた。なのはが両膝立ちしてヴィヴィオと目線を合わし、「ごめんね、ヴィヴィオ。大事なお話なの」諭そうとし始める。

「や！　なのはママと一緒に居る・・・！」

「「「「ママ・・・！？」」」」

事情を知らないフォワードは、ヴィヴィオのなのはママ発言に驚きを見せた。まぁ当然なリアクションだよな。その事情説明を含め、「なのはちゃんも一緒に別室に行ってもらって、念話で参加にしよか」はやての案に、俺たちは賛同する。口頭会話と違って限られた人にのみ伝えられる念話という便利なツールがあるんだ。それを使えば問題解決だ。

「あ、うん。じゃあそうしようかな。ヴィヴィオ、フォルセティ。フォワード達（おねえちゃん）と一緒にお話ししようか」

そういうわけで、怒りに燃えるシャルと呆れてるアリサを含めた隊長陣を相手に、俺は身の潔白を証明し、そしてヴィヴィオとフォルセティの正体の推察を伝えることになった。

Ｅｉｐｉｃｌ２君は誰の子？　あの人の子～Ｐａｒｅｎｔ　＆　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

ルシルと全くと言っていいほど似てる男の子フォルセティ。あたしも、ギンガとは別行動（トレーラー事故の件に回ってもらった）でフォルセティの捜索に参加してた。地下水路であの子を発見して、その姿をきっちりと確認した際の衝撃と言ったら。ルシルをそのまんま小さくしたかのような感じですごいビックリしたわよ。
そんなフォルセティは、六課から貰ってた生命反応消失ポイントから結構離れた水路の一番奥で蹲ってた。発見してから地上へ運び出すまでは意識はある程度残っていた。その際の聴取で、名前がフォルセティ、ファミリーネームは不明、母親も不明、ただ・・・

――ぼく、じゃあお父さんのお名前は判るかな？――

――パパの名前は、ルシリオン・・・――

父親の名前が、あたし達の知ってる親友のものだということが判明した。その返答を最後にフォルセティは意識を失った。すぐに近くの聖王医療院へ搬送。精密検査をしている最中に、子供を保護したことを六課へ報告しようとしたんだけど・・・

――ダメ。事前に報告したらルシルに言い訳を考える暇を与えるじゃん――

――言い訳ってアンタ・・・。ルシルが本当に父親だと思うわけ？
そりゃ確かにそっくりだけどさ――

――解る、わたしには解る。遺伝子レベルでルシルと似てるってことが――

――あたしもあの子を見りゃ解るわよ。ソックリってレベルじゃないものね、あの子。だからさ・・・――

――だからルシルに逢って直接問い質す――

――人の話しを少しは聞きなさいよ。はぁ。そうすればいいわ。絶対に怒鳴られるから――

そっからのシャルは怒りを内に込めたまま、フォルセティに合う子供服を用意したりと淡々と仕事をこなした。そしてあの子の検査結果は異常無し。衰弱と空腹が原因で意識が飛んだことが判って、そう時間を置かずにあの子は目を覚ました。点滴と温かいご飯ですぐに元気を取り戻した。

――フォルセティ。あなたのお父さん、ルシリオンのところに行こうか？　ヴィヴィオも一緒だって言うし――

――いく！――

ルシルと、先に保護されてた女の子であるヴィヴィオが居るって知

って、さらにそこに行こうってシャルから言われたフォルセティは、それはもう可愛い！って言ってしまうくらいに満面の笑顔で大きく手を挙げた。うん、あれはしょうがないわよ。あたし達が知ってるルシルで一番若い頃の年齢って８～９歳。でもフォルセティはそれより幼くて、もう完全に女の子にしか見えない。素で、可愛い！って言っちゃうわよ。

「――で？　釈明を聞かせてもらえるんでしょ？」

そして今、あたしとシャルは六課の部隊長室に居る。フォルセティはなのはやヴィヴィオ、それにフォワード４人と一緒に別室へ。あたしの視界にはルシルを睨むシャル、そんな２人を堂々とした面持ちで見守るはやて、そしてヴィータとシグナムとリイン。

（おー、はやてはルシルのことを信じ切ってるって顔ね。つうか、シャルもルシルのことを信じなきゃいけない立場でしょうに。ホント、ルシル関連の恋愛話が絡むと暴走するんだから）

もう溜息しか出ない。そんな中で、「ああ。まず大前提として、俺は無実だ」ルシルが釈明を始めたんだけど。口調が調査官のものじゃなくて素なのはツッコまない方が良いのよね、きっと・・・。

「たとえば俺が女性と子供を作ったとする。そして子供が生まれました。はい、ここでシャル！」

必死にその画を想像しないようにルシルの話を聴いてると、突然シャルを名指しで指名した。シャルは「あ、はい」さっきまでの怒り

がどこへ行ったのか、丁寧に応じた。

「子供とは、父と母の遺伝子両方を持っている。ではその外見がどうなるか答えなさい」

「え？　あー・・・あ！」

思案顔だったシャルが何かしらの答えに行きついたのか声を上げて、「ごめんなさい」ルシルに向かって深々と頭を下げた。シャルが信じられない程に今さら行き着いた答えは、なのは達も絶対に行き着いてるはず。フォルセティを見た瞬間、普通に考えればおかしいことに気付くもの。それを伝えようにもシャルはあたしの話を聴こうともしなかったし。

「これが俺の身の潔白を証明する魔法の言葉だ。・・・親のどちらかと双子かと見間違うほどの子供は絶対に生まれない。そこでだ。俺とフォルセティ、違うところはあったか？」

「・・・ない、です」

そう、これが答え。両親のどちらか片方とすごく似てる子も、広い世の中だしひょっとしたら何人かは居るかも知れない。だけど必ずもう片方の親の何かしらを受け継いでるはず。目や鼻や耳の形とかさ。でもフォルセティは、どう見てもルシルの特徴しか受け継いでいないのよね。目も若干ツリ目だし。あとパッと見が女の子だし。

「相手の女性の特徴が無いんだよ、フォルセティには。だから俺は、

あの子やヴィヴィオの正体についてある推測を立てた」

ルシルがそこまで言ったところで、ＰｉＰｉＰｉ♪と通信が入ったことを知らせるコール音が鳴った。それはあたしへの通信で、「ちょっとごめん」一言断りを入れてからコールに応じる。

『お疲れ様です、アリサさん。ギンガです。今、お時間よろしいでしょうか？』

モニターに映るのは、あたしの直属の部下であり友人でもあるギンガだった。あたしも「お疲れ様、ギンガ」労いの言葉を返す。続けてはやて達が、昨日の戦闘に協力してくれたギンガに感謝や労いの言葉を掛けてった。ギンガも嬉しそうに応じたし。

「それでギンガ。そっちで何かあった？」

『あ、はい。昨日のトレーラー事故の調査について、新しい発見がありましたのでその報告を』

フォルセティとヴィヴィオ、それと"レリック"ケースを運んでいたトレーラーの爆発事故の調査についての続報だ。ギンガの話だと、損傷の激しかったコンテナ内部からある機械部品が見つかった、と鑑識班から報告を受けたとのことだった。

『こちらで再現してみたところ、どうやら生体ポッドのようです。５～６歳の子供が収まるほどの大きさの物が２基ですね』

新たに展開されたモニターに、再現された件の生体ポッドが映し出された。あたしはポッドを見ても特に思うことはなかったんだけど、「コレ・・・」フェイトとはやてが反応した。リインが「知ってるですか、はやてちゃん、フェイトさん？」そう訊ねると・・・

「うん。前に事件捜査の時に少しだけ・・・」

「私は資料を見ただけやけどな。・・・人造魔導師計画の素体培養器、やね」

『はい。私も同じ意見です。アリサさんが戻って来る以前に一度だけ見たことがあります』

2人やギンガがそう話してくれた。プライソン製のサイボーグの死体。ソイツが運転してたトレーラー事故。コンテナから逃げたヴィヴィオとフォルセティ。破壊された素体培養機。もうこれだけであの子たちの正体は確実なものへとなっていく。

「そう。ありがとう、ギンガ。あたしもすぐに戻るから、資料纏めておいて」

『了解です』

ギンガとの通信が切れ、部隊長室はシーンと静まり返った。フォルセティはおそらくルシルの遺伝子データを用いて生み出されたクローンだ。でもヴィヴィオは誰の？ってなる。そんな中で最初に口を開いたのはルシルだった。

「・・・シャル。聖王教会から盗まれたという2つの聖遺物・・・アレ、見つかったのか？」

シャルはハッとした後、「あなたへの怒りでそこまで気が回らなかった。反省・・・」ガックリと肩を落としてしょんぼり。"闇の書"事件も終盤に差し掛かった頃だったかしら。そんな話をシャルから聞いた気がする。聖遺物が教会本部から盗まれたって。・・・って、まさか・・・。

『そっか。ルミナちゃんが言ってたのはそういうことだったんだ・・・』

ここでなのはから念話が入る。シャルが「どういうこと？」って訊き返すと、盗まれた聖骸布の持ち主だったヴィヴィオの身体的特徴が聖王女オリヴィエと一致してるんだけど、それが偶然の一致かも知れない。だけど偶然じゃないかも知れない。ルミナからそう聞かされたって。それはギンガからの報告で、後者だってことがほぼ確定した。

「え、ちょっと待って、なんか、その話だとまるで・・・」

「うん。ルミナちゃんが言いたかった事ってつまり・・・」

「プライソンが関わってる以上、ヴィヴィオとフォルセティは・・・」

「記憶転写型クローニング技術――プロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅ、もしくはただのクローン技術によって生み出された、オリヴィエとオーディンのクローン・・・」

フェイトがそう言った途端、「やっぱりそういう話！？　」シャルが驚いてソファから立ち上がった。

「あんだ？　お前、ヴィヴィオもオリヴィエと同じ紅と翠の虹彩異色持ちだって聞いてなかったのか？」

「聞いてない！　ルミナめ、そんな大事な報告をわたしにしないってどういうこと！？　あとで絶対にシメる！」

結構昔にシャルの家に泊まった際、数いる聖王の中でも特にオリヴィエって王女が好きだって聞かされたしね。たぶんそれは、あたし達以上に付き合いの長いルミナも知ってるはず。ヴィヴィオがそんなオリヴィエのクローンかも知れないって話を、なのはの話を聴く限りルミナはすぐに察していたようだし。だったらシャルに一言あっても良いかもね。

「そやけどシャルちゃん。さっきヴィヴィオと顔を合わせたやんね・・・？」

「・・・ルシルしか見てなかった・・・、不覚！」

ソファに座り直したシャルがテーブルに突っ伏した。そして「あとで挨拶しておかないと。オリヴィエ様のクローン、現代に蘇った聖

王陛下」なんてブツブツ言い始める始末。今日のシャルはホント忙しいわね。頭の血管が切れないか心配だわ。

「ともあれ、ヴィヴィオとフォルセティはクローンだ、と考えるのが妥当だろうな。仮にもしフォルセティが俺の実の息子だっていうなら絶対に認知するし、相手の女性とも結婚しよう。そもそもはやてとシャルとトリシュの告白に答えを出さずにそんな事をするわけないだろう。その辺りは信じてほしかったがな」

ルシルがそう言ってチラッとシャルの方を見た。ますます落ち込むシャルに、ルシルは「ま、それだけ俺を想ってくれているんだと捉えておくよ」なんて苦笑い。ぶたれたことについてはもう許してるっぽい。

「で、話は戻すが、盗まれた聖遺物や盗んだ犯人についてはどうなんだ、シャル」

「え？　あー、うん。結局は犯人も聖遺物も発見できてない。もうあれから１０年近く経ってるし、ズィルバーン・ローゼはもう捜索に関わってないよ。一応捜査部は残っているけどほとんど諦め状態。・・・でもまさか、聖遺物がこんな風に利用されるなんて思いもしなかったよ」

でもこれで犯人は判明した。プライソンの手下が何かしらの手段を使って聖王教会本部に侵入して、オリヴィエとオーディンの聖遺物を盗んだ。そしてフェイトとアリシアの実母であるプレシアのように、残されて遺伝子データを元に２人のクローンであるヴィヴィオ

とフォルセティを生み出した。

「スバルとティアナの話が気に掛かるな。デルタとやらは、ヴィヴィオとフォルセティを端末と呼んでいたらしいではないか。単純に面白半分でクローンを生み出したわけではないだろう」

「シグナムの言うとおりです。きっと何かあるですよ」

そう言ったシグナムとリインに対して、「騎士カリムの預言に当てはめたらどうだ」ルシルがそう返した。あたしは騎士カリムの預言なんて話は聞いてないから「なんの話？」って訊ねてみた。

「そうやね。良い機会やしアリサちゃんにも知っておいてもらおか。実はな・・・」

そう前置きして、はやては機動六課設立の本当の理由を教えてくれた。騎士カリムのスキルである未来予知。その預言の内容を阻止することこそが本当の目的だって。んで、その内容を聴いたんだけど、「ヤバいわね・・・」軽く戦慄する。地上本部の崩壊どころかミッドチルダが滅ぶような内容だった。

「・・・っと。そろそろあたしは戻るわね。ギンガも待ってるし。シャル、アンタはどうすんの？」

もうちょっと長居して預言内容の解釈に付き合いたい気もするけど、あたしは１０８部隊の隊員だ。今は自分の仕事をきっちりとこなさないと。シャルも今は教会騎士団の１部隊を預かる隊長だし、六課

に留まる時間はそうないって思ったんだけど・・・。

「わたしは今日はもうオフシフトだから、このまま六課に残るよ」

そう言ったシャルは笑顔を浮かべて、あたしに手を振った。少しの時間でもルシル達と一緒に居られるのが本当に嬉しいみたいね。

「そう。じゃああたしはこれで」

そしてあたしはフェイト達に見送られながら六課の隊舎を後にした。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒ルシリオン†††

アリサを見送った後、はやて達は改めて預言内容の解釈を続けた。フォルセティは俺の実子じゃない、という身の潔白を証明し終えたことで調査官モードに戻っている俺。そのため彼女たちの話し合いをただ聴いていることしか出来ないことに歯がゆい思いをしているわけだ。

「――旧い結晶はやっぱりレリックやろね」

「無窮の強欲ってぇのは判んねぇな」

「レリックと集い交わる地っていうのはミッドのことかな・・・？」

「じゃあ強欲はプライソンってことでいいんじゃない？」

「死せる王と騎士というのは何でしょう？」

『たぶんだけどヴィヴィオとフォルセティじゃないかなぁ。ヴィヴィオのオリジナルは聖王女オリヴィエ・・・』

「魔神オーディンはアムルの騎士でもあったからな。フォルセティはルシルのクローンではなく、オーディンのクローンなのだろう。つまりは死せる騎士はフォルセティのことを差しているのだろう」

俺もシグナムに賛成だ。俺もフォルセティがクローンだと思い至った瞬間に、死せる騎士があの子なのだと理解した。

「次は・・・聖地より彼の翼が蘇り、やけど・・・。昔、王さまはユーリ――砕け得ぬ闇のその威容は大いなる翼、すなわち戦船かもって言うてたし。おそらくこの預言の翼も戦艦とちゃうんかな・・・」

はやてが随分昔の話を出してきて、彼の翼が戦艦かもしれないと鋭い指摘をした。すると「はやて、ナイス。心当たりがあるよ」シャルがそう切り出す。そしてモニターに展開してそこに映し出したのは・・・

「かつて聖王家が所有していた超巨大な戦艦型ロストロギア、聖王のゆりかご」

彼の翼の正解解釈である"聖王のゆりかご"の画像だった。聖王の一族、アウストラシア王家が所有していた全長数ｋｍを誇る巨大戦

艦。聖王はこの艦の中まで生まれ、育ち、死んでいったことから、ゆりかご、という名前が付いている。

「これまで数多くの歴史学者や神学者や考古学者、それにわたしたち聖王教会もずっと探し続けてきた。でもこれで、ヴィヴィオが端末だって言われた理由は解ったよ。ゆりかごの起動には聖王という鍵が必要なの」

『そういうこと・・・なんだ。聖王女オリヴィエの遺伝子データを持ってるヴィヴィオなら、聖王のゆりかごを動かせる。プライソンはそのためにヴィヴィオを・・・』

なのはの声に込められているのは純粋な怒り。初めから道具として人間を生み出すプライソンに対する、強烈な怒り。

「ゆりかごについて詳しいデータが無いか、母さまに訊いてみる。なのははユーノに連絡しておいて。無限書庫にも何かしらのデータがあるかもしれないし」

『え？　あ、うん、判った！』

シャルが良い具合に話を逸らしてくれたおかげで、なのはの怒りが少し鳴りを潜めた。そしてシャルは、現在の聖王教会の教皇であるマリアンネに連絡を入れるために少し席を離れた。なのはとシャルが戻ってくるまでの間にも解釈は続く。

「使者というのはプライソン一派のことだろうな」

「地を這う鋼の龍はたぶん列車砲とか装甲列車のことだね。咆哮はおそらく砲撃・・・」

「彼の翼――ゆりかごを護りし親鳥は地上に畏怖を・・・。親鳥・・・うーん、なんでしょうか・・・？」

「共に翔けし子鳥たちは戦火を、ってところを見ると、親鳥も戦艦なんじゃねぇかな。子鳥たちっつうのはきっと戦闘機のことだろうしな」

「なるほどです！」

「その果てに中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ちる。これはカリムから教えてもらったように地上本部のことやろうね。プライソン一派と兵器群がミッドに戦争を仕掛けて、地上本部を破壊するってわけや」

「そして最後に。それを先駆けとし、遥か空の彼方より来たる恐怖の大王により、星の命はその輝きを失う。明らかにミッド滅亡を詠ってるよね。恐怖の大王・・・かぁ。なんだろう？」

やはりそこで詰まってしまうんだよな。俺としてプライソンが造り出した兵器だと考えてはいるんだが。奴の研究所から奪取した兵器データの中には最後まで解読できなかった物も多い。その解読できていないデータの中に、世界1つを破壊できるだけの威力を持った兵器が記されているはずだ。はやて達もお手上げのようで首を横に

振った。

「何にせよこのままプライソンを放っておけば地上本部どころかミッドが滅亡するわけや。みんな、これから気を引き締めていこな！」

はやてからの檄になのは達は「『了解！』」力強く応じた。厳かな空気の中、きゅ～、と誰かの腹の虫が鳴った。犯人捜しとは違うがはやて達がキョロキョロと辺りを見回すと、「あぅ、リインです～」リインが腹を押さえて恥ずかしそうにしていた。

「もう17時過ぎやな。混んで来る前に夕食にしよか」

「賛成ですぅ～！」

「シャルも一緒にどう？」

「もち、ご一緒します♪　なのは達みんなも一緒しようよ」

『うん！　ヴィヴィオとフォルセティも一緒に連れて行くんだけど・・・。セインテスト調査官、良いですか？』

はやて達が思い思いにソファから立ち上がって行く中、なのはから何故かそんな確認が。念話ではなくモニター展開での通信であるため、フォルセティの顔もよく見える。不安そうな表情で、父親だと信じている俺を見ていた。

『パパ・・・』

「・・・ご一緒させてもらうよ。食堂でまた会おうな、フォルセティ」

『っ！　うんっ！』

満面の笑顔になったフォルセティに、「可愛い♪」はやてとシャルがだらしなく破顔した。幼さという差異はあるが、俺と同じ顔だからな。なんか複雑な思いだ。そう言うわけで、俺も一緒に夕食を摂ることになった。部隊長室を出て、廊下でなのはやフォワード、ヴィヴィオとフォルセティと合流して、食堂を目指して歩き出す。

「お。シャマルとアイリや。おーい」

「はやてちゃん、それにみんなも♪」

「ひょっとして今からご飯？　アイリ達も・・・って、ええええええ！？」

「ち、ち、小さいルシル君が居る・・・！？」

「・・・」

アイリとシャマルが、俺と手を繋いでいるフォルセティを見てビックリ仰天。しかしザフィーラは無言。アイリはものすごい勢いで駆け寄って来て、身を屈めて視線を合わせたうえで「うわ、うわ、ちっちゃ可愛い～♪」抱きしめ、さらに頭を撫でまくった。

「セインテスト調査官。これ、どういうことかしら？」

そしてシャマルは、シャルと同じレベルだった。シャマルにジトっと睨まれている中、はやてが「ちゃうよ、シャマル。『実はな――』」フォルセティとヴィヴィオの事をシャマルとアイリに話した。

『そうだったんですね！　ごめんなさい、セインテスト調査官・・・』

『おお！　オーディン（マイスター）のクローン！』

シャマルは素直に謝り、アイリは俺を見ながらそう言った。実質オレのクローンだから、俺を見るのは当然だな。そして2人は、フォルセティ、ヴィヴィオと顔を合わせて「こんにちは♪」挨拶。シャマルとアイリに「こんにちは・・・」2人も挨拶返し。そして俺たちはシャマルやアイリと一緒に、改めて食堂へと足を運ぶ。

『あのさ、なんかわたし、避けられてない？　ヴィヴィオとフォルセティに・・・』

シャルが念話でそう訊いてきた。ヴィヴィオはなのはの、フォルセティは俺の隣を、小さな歩幅で一生懸命歩いて付いて来る。ただそんな中で、時折シャルをチラッと見ては顔を逸らすというのを繰り返している。どう見ても怖いものから逃れようとしている子供だ。

『お前さ、コイツらの前で散々怒鳴り散らしてただろ。しかもルシ

――セインテスト調査官をフルスイングのビンタで吹っ飛ばしたしよ』

『くっはぁ！　やっぱりそれが原因か～！　時間を戻す術が有ったらぁ～・・・！』

『あらあら。シャルちゃんは一体何をやっているのかしら』

苦悩するシャルの表情をタイミング悪く見たヴィヴィオとフォルセティはさらにビクッとして、フォルセティは俺と繋いでる手に力を込めてきた。あー、これはもうダメっぽいな。しばらくは避けられるぞ。

『あの、ヴィヴィオとフォルセティの今後ってどうなるんですか？』

『う～ん・・・、今回の事件を解決するまでは六課で預かることになるよ。解決後はそうだね・・・。一応里親を探してみるつもり』

『ですけどもう・・・ママとして見られてますし・・・』

『もうなのはさんから離れるのは無理ではないかと・・・』

キャロの問いにそう答えたなのはだったが、スバルやティアナの言うようにヴィヴィオはもう完全になのはに懐いている。これで引き離すのは酷というものだろう。先と同じようになのはが引き取るのがベストだろう。

『う～ん、やっぱりそうかなぁ～。どうしよう・・・』

『セインテスト調査官も、フォルセティを里親に出す系ですか？』

『ん？・・・ん～・・・』

俺もリインからそう訊かれた。が、これは先とは違って初経験だから困惑する。フォルセティも俺を父と呼び慕ってくれている。オーディンのクローン＝俺のクローンだから、息子ではなく双子のような関係なんだよな、本当に妙な感覚だが。

『うちは本局の寮で、アイリも居るしな。俺は寮を空けることが多いうえに、アイリに世話させるのも大変な事になりそうだし。保護責任者くらいにはなってもいいが・・・』

念話＝素の俺、というクセが付いてきてしまっていることで、全体念話でサラッと普段の口調を使ってしまった。僅かな沈黙があったが、『じゃあさ、じゃあさ！』シャルが何事もなかったように話を続けてくれた。

『もう引き取っちゃえば？　住む家は私の実家で～、ルシルとアイリも一緒に住んで～、ルシルがパパで～、わたしがママ！　きゃぁぁぁぁ　』

シャルがそんなことを言いだした。そこに切り込んでいくのが『ちょう待って、シャルちゃん。それは聞き捨てならへんよ』はやてだった。

『それはどういう意味かな～、はやて？』

『そのまんまの意味やよ、シャルちゃん。セインテスト調査官は・・・、ううん、ルシル君は渡さへんよ』

『またわたしの前に立ち塞がるのね、我が最強の恋敵・・・八神はやて！』

額がくっ付きそうなほどに接近して睨みを利かせるはやてとシャル。まぁ２人の身長差が激しいため、はやてが見上げ、シャルは見下ろすような感じだ。その光景に外野が俺から少し距離を空けて・・・

「あの、八神部隊長とシャルさんって、その・・・」

「ルシルさんのことが好きなんですか・・・？」

「そうですよ。もう１０年と続いてる三角関係なのです」

「正確には、トリシュ・・・、トリシュタン・フォン・シュテルンベルクも入ってっから四角関係か？」

「おーっと。アイリも入ってるよ。五角関係だね♪」

俺に聞こえないようにするためか小声で話し始めた。そこは念話で、俺抜きですればいいものを。俺の耳の良さを知っているだろうに

「ルシルを慕うシャル達はまぁ良い子ばかりだから、ルシルが刺されるような事態に張らないと思うけどね」

「「刺される・・・！？」」

アリサの俺が刺される発言に、キャロとエリオが顔を青くして見せた。そしてアリサとヴィーダが、恋愛とその恋敵のドロドロとした例え話やその結果を教えた。どれもドラマや漫画でよく見かけるものだ。というか、そんな話を2人にするなよ。恋愛に怯えたらどうする気だ。

「よっこらせ」

アリサ達の話に耳を傾けながらはやてとシャルの様子を眺めていると、急に何を思ったのかシャルはその豊満な胸を強調するかのように腕を組んだ。するとはやての口端がヒクッとなった。

「な、そ、それは何のつもりなんやろ、シャルちゃん・・・？」

「べっつに～。ただちょっと重かっただけ～」

明らかに煽っているな。わなわな震えたはやては「別に女の子の魅力は胸だけやないもん！」なんて言いながらシャルの胸を両手で鷲掴みして、「うりゃぁぁぁ！」全力で揉みしだいた。なのははヴィヴィオ、俺はフォルセティ、フェイトがエリオ、そしてシャマルがキャロ、というように後ろから子供たちの目を両手で覆い隠した。

「ひゃあん！？」

「女の子の魅力は体だけやないんやよ！　フォルセティは、わたしら八神家が預かる！」

シャルの胸から手を放したはやては、左手を腰に、そして開いた右手を前方へと突き出した。

「ちょっ、はあ！？　はやてんところって、もうリインみたいな娘がすでにいるじゃん！　シグナム達っていう家族もいるし！　フォルセティくらい、わたしに預からせてくれてもよくない！？」

「それはそれ、これはこれや！　セインテスト調査か――ああもう！　ルシル君は今も八神家の一員やし、ルシル君がフォルセティの保護責任者なり義父なりになるんなら、それはつまり八神家やってことや！」

「ずる～い！　それ、ずる～い！　そうなったら実質、はやてがフォルセティの母親になっちゃうじゃん！」

シャルがそう喚くと、フォルセティが「ママ・・・？」はやてを見て小首を傾げた。はやてが何かを言う前に、「そうだ！　もうこの際、フォルセティに決めてもらおう！」シャルがそう言った。なんかもう結果が見えているんだが・・・。シャル、何があっても強くあれ、だ。

「わたし！　わたしが、フォルセティのママになってあげる！」

シャルが身を屈めてフォルセティと目を合わせてそう言った。しかしフォルセティは「・・・あー・・・」そっとシャルから目を逸らした。その時のシャルの表情は、それはそれは悲しいものだった。思わずこれからはずっと優しくしてやろう、と思えるほどに。そしてシャルはその場に両膝を付き、コテンと廊下に倒れ込んだ。

「うぉぉぉ！？　シャルが死んだ！」

「シャルさん、傷は深いですけど大丈夫ですよ！」

「死んでない・・・。あと大丈夫じゃない」

シャルの心は残念ながらポッキリと折れてしまったようだ。フォルセティは俺の手を取り、反対の手ではやての手を取った。はやては嬉しそうに頬を綻ばせ、そして照れながら俺に微笑みを向けた。

「あのね、フォルセティ・・・。どうしてわたしはダメだったのかな・・・？」

「・・・パパを叩いて、いっぱい怒って、怖い・・・」

「ぐはっ！　タイムマシンがあれば・・・」

シャル撃沈・・・したかと思えば、「いいもん。フォルセティははやてに託すよ。でも・・・！」ゆらりと立ち上った。今日のシャルはなかなか強いな。

「義理の子供じゃなくて、本当の子供を産めばいいんだしね！　ルシルと結婚して、２人の間に本当の子供を儲ければ良いだけだし　」

シャルはそう言って、空いている俺の左腕に抱きついて頬擦りしてきた。はやての呆けっぷりが少し面白い。だが笑っていられるのもここまでだった。シャルは「ささ。ルシルの部屋へ行こう、行こう　」俺を引っ張って寮へと向かおうとし始めた。

「ちょっ、ちょちょちょ、ちょう待って！　ルシル君の部屋に行って何するつもりなん！？」

「ナニをするんだよ～♪　男女がベッドルームでやる事と言えば、はやてだってもう解るでしょ？　〇〇〇だよ～　」

「～～～～～っ！！」

はやてだけではなくなのは達、スバルやティアナも顔を真っ赤にした。そしてエリオとキャロ、あとリインが意味を解っていないことで小首を傾げた。というかこの馬鹿、こんな往来のあるところで一体何を口走っているんだ。怒る前にシャルは俺の顔を上目遣いで見上げながら、１８禁の下ネタを連発して、俺をベッドに誘って来ようとする。

だからみんなで「わぁぁぁ～～～！」大声を出して、シャルのセリフを掻き消す。なのはと俺はすぐに反応してヴィヴィオとフォルセティの耳を塞げたが、フェイトとシャマルは反応しきれず、キャロとエリオにシャルの下ネタを聞かせてしまった。だから・・・

「あの、フェイトさん。〇〇〇ってなんですか？」

「×××？　△△△？」

「はやてちゃん。□□□ってどういう・・・」

そんな3人の口から卑猥な言葉が飛び出る始末。フェイトの顔色が赤から青に急降下。そんなフェイトに代わり、「あー、ダメダメ、そんなこと言っちゃ！」スバルと、「いい？　もう言っちゃダメだし、調べてもダメ。お姉さんたちの約束よ。いいわね？」ティアナが、顔を赤くしたまま、キャロとエリオの目をジッと見てそう伝えた。

「リイン！　そうゆうのはまだ早い、とゆうより必要のない・・・とゆうより、あああ！　一体どう言えばええの！？」

「はやてちゃん！？　もういいです、もういいですから！」

「「あ、はい。判りました」」

スバルとティアナの迫力に、キャロとエリオは素直に応じた。そしてリインは、頭を抱えるはやてを見て自分が口にした疑問を取り下げた。で、こんな混乱を招いた張本人であるシャルは、大して気にも留めずに俺の左腕にその胸を押し付けてくる。

「もう、シャル！　シャルが変な事ばっかり言うから大変になっち

ゃったよ！　エリオとキャロに変な言葉を言わせちゃうし！　いくらなんでも酷過ぎるよ！」

「大丈夫だって。エリオとキャロだって、あと１０年もすれば２人でそういう事するだろうし」

ここでシャルはさらなる爆弾を投下してくれやがった。フェイトはその言葉を聞いて、「・・・」無言。少なからずショックは受けただろうな、って思っていると・・・

「きゅ～～～」

バッターンと直立不動のまま前のめりでぶっ倒れた。あまりのショックに脳が耐え切れず、シャットダウンしたようだ。これにはみんな大慌て。とりあえず、「あっちゃ～」と額を叩いているシャルの頭に・・・

「反省しろ、大馬鹿者」

「あいたっ？」

１発の拳骨を打ち降ろしてやった。とにかく、フォルセティの保護責任者は俺、後見人ははやてとなり、ヴィヴィオは先と同じくなのはが保護責任者で、フェイトが後見人となった。

Ｅｉｐｉｃｌ３そんな何気ない日常～Ｅｉｌｉｅ　＆　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

本局・医務局と聖王教会、両方の遺伝子検査でマイスターの遺伝子を用いて生み出されたクローンだって確定を受けたフォルセティ、それとオリヴィエのクローンだって確定を受けたヴィヴィオ、その２人が機動六課にやって来て早３週間。

「すぅ、すぅ、すぅ・・・」

アイリの隣で寝てるフォルセティの寝顔を見守りながら「ホント、マイスターだよね♪」独り言を呟く。フォルセティの保護責任者になったマイスターは、自分をパパって慕うフォルセティと同室で暮らすことになったんだけど、マイスターは朝が早いからフォルセティを見てる時間が少ないっていうことで、アイリもこの部屋に引っ越してきた。

（本局の寮の時のようにマイスターと一緒に寝られることが出来て嬉しい　）

しかも夫婦のようにフォルセティを挟んでの川の字で、同じベッドで寝ることが出来る。後見人ということで図らずともママになっちゃったはやても立候補したけど、マイスターと一緒に寝てくれるならって条件付きだったから、はやては顔を真っ赤にして立候補を断

念。マイスターと一緒に寝ることへの恥じらいと、すでにヴィータが同じベッドで眠ってるからスペースが無いからね。

「・・・ん、うぅ～・・・？」

フォルセティがマイスターを探すように両手をわしわしと動かし始めた。このまま放っておくと起きちゃうかもしれないね。だから「はーい。お姉ちゃんですよ～　」フォルセティの手をアイリのパジャマにしがみ付かせたうえで、起きない程度に抱きしめてあげる。するとフォルセティはまた、穏やかな寝息を立て始めてくれた。

「・・・。そろそろまずいかも・・・」

それから３０分後の午前７時半。そろそろアイリも起きて、着替えとかの身支度をしないと。始業時間は午前９時から。その時間までにご飯も食べないといけないから、結構慌ただしかったりする。ちなみに終業時間は２０時。２１時までの間に交替部隊への引き継ぎになる。

「ぅ・・・ん・・・」

可哀想だけど起しちゃおうかな、って考えてるところでフォルセティが目を開けた。二度寝を阻止する意味も込めて、「おはよ～」朝の挨拶を掛ける。こうすることで二度寝をほとんど阻止できる。一度なにも言わないで撫でてたら二度寝しちゃって、盛大に遅刻してシャマルから怒られたこともあるんだよね。

「・・・おはよう、アイリおねえちゃん」

目元を右手（フォルセティの利き手はマイスターとは逆なんだよね）でコシコシ擦りながら挨拶を返してくれた。アイリのパジャマを掴んでた左手も離して、ベッドに手を付いて上半身を起こした。アイリも倣って上半身を起こして、そのままベッドから降りる。

「じゃあフォルセティ。身支度を整えに行くよ～」

「うん！」

六課の隊員寮は3階建てで、マイスターたち男性は2階、元々アイリも居た女子（これ大事な線引きね）は3階で寝泊まりする。ちなみに男性は3階へは上がれない。上がったら最後、シグナムとヴィータから総攻撃を受ける・・・予定。洗面台は共通で、それぞれの階層の中間に位置してる。そこで洗顔や歯を磨いたりするんだよね。

「はーい、ガラガラってして～・・・ペッ」

「ガラガラ～・・・ペッ」

部屋に置いてある歯磨きセットやタオルを持って洗面台で顔を洗った後、一緒に歯磨きを終える。プライソンに生み出された後、それなりにまともな生活をしていたのか、ある程度の日常生活の常識など、フォルセティは教えるまでもなく出来てた。ヴィヴィオも、フォルセティと一緒に習ったらしく、ある程度は自分で出来るけどこの子ほどは出来ない。

「それじゃあ・・・――」

歯ブラシやコップの水を切った後、フォルセティと顔を合わせて、「ニッ♪」ってニッコリ笑顔をつくる。フォルセティの歯は綺麗に磨かれてるから「ん、オーケーだよ♪」上手に出来ました、の意味を込めて頭を撫でる。すると、えへへ♪ってはにかんでくれるフォルセティ。

「ああもう！　可愛いな、このこの！」

「ひゃぁぁぁぁ！」

ギュって抱きしめてその場でグルグル回る。っと、こんなことをやってる場合じゃなかった。マイスターとアイリとフォルセティの愛の巣に戻って、「次はお着替えね～」パジャマを脱ぐ。アイリは陸士隊の制服で、フォルセティはスキッパーシャツとアンクルパンツへと着替える。

「フォルセティ、手伝おうか～？」

「だいじょうぶ～！」

フォルセティは何が恥ずかしいのか、アイリと一緒に着替えたくない、見られたくない、なんて言っちゃうんだよね。う～ん、おマセさんめ～。だからアイリ達はそれぞれ部屋の隅っこに寄って、背中を向け合いながら着替える。

「できた～」

「はーい」

フォルセティに振り返って、ちゃんと自分で着替えが出来てるのを確認した。次は櫛でその綺麗な銀色の長い髪を梳く。マイスターは、ヘルメットを被るためっていう理由で後ろ髪をバッサリ切る、なんて愚行を働いてくれちゃったからね～。髪の梳きがいがあるっていうものだね。

「きもちいい・・・」

「寝ちゃダメだからね～」

以前のマイスターのようにうなじ付近で後ろ髪を1本に纏めてゴムで結う。そして今度は「かして～」フォルセティが、アイリの後ろ髪を櫛で梳いてくれる。最近はマイスターもやってくれないし。幸せ倍増。

「ありがとう、フォルセティ。それじゃあパパ達に逢いに行こうか」

「うんっ！」

フォルセティと手を繋いで部屋を出て、1階の食堂へ向かう。階段をゆっくり下りてる中、「パパ！　シャマルせんせー！　ザフィーラ！」食堂に向かってロビーを歩くマイスターとシャマルとザフィ

ーラの姿を発見。フォルセティが大手を振りながら「おはよ～！」朝の挨拶をした。

「おはよう、フォルセティ、アイリ。ちゃんと起きられたようだな。アイリも、いつもありがとう」

「あら、おはよう、フォルセティ君、それにアイリちゃんも♪　あとね、せんせーじゃなくて、おねえちゃん、ね　」

「ああ、おはよう」

「おはよう！　気にしないで、セインテスト調査官。アイリが好きでやってる事だし、それに十分幸せだしね～♪」

「ん。シャマルせんせーおねえちゃん！」

「あぅぅ～・・・。せんせーは要らないのよ、フォルセティ～」

アイリも挨拶を返す。フォルセティがタタタっと階段を急いで掛け降りようとするものだから、「あっ・・・！」足を踏み外して前のめりに倒れた。アイリは慌ててフォルセティを追ってジャンプ。抱き止めて、廊下に激突する前に飛行魔法を使えば、無傷で済ませられるはず。

「「あ」」

マイスターもおんなじ考えだったみたいで、フォルセティに向かっ

て階段を駆け上がってた。マイスターはまずフォルセティを抱き止めて、次にアイリがマイスターにドーン！

「ふんぬぅぅ・・・！」

アイリとフォルセティ、２人分の体重を、階段の上っていう不安定なところでマイスターは支え切ってくれた。アイリは慌てて「フェーフォルム！」本来の姿、３０ｃｍ程度の小さな体に戻る。それだけでマイスターの負担は減るからね。

「よいせっと。ありがとう、アイリ。・・・こら、フォルセティ！危ないじゃないか！」

フォルセティを床に降ろした後、マイスターは階段を駆け降りようとしたフォルセティを怒鳴った。シャマルが「あの、セインテスト調査官。そんな大声で・・・」注意するマイスターを窘めようとした。

「いや。こればかりはきちんと教えておかないといけない。ちょっとした事ですごく痛い思いをしたり、みんなに迷惑を掛けたりするんだ。自分も大変だし、周りの人にも大変な目を遭わせてしまうんだ」

「ご、ごめんなさい・・・パパ・・・」

涙を浮かべはするけど泣かないように耐えるフォルセティは、ちゃんとごめんなさいが出来た。マイスターは「お前に怪我が無くて良

かった。これからは気を付けような」そんなフォルセティをギュッと抱きしめた。

「っ、うん・・うん・・・ごめんなさい・・・！」

それから涙をマイスターのハンカチで拭ってもらったフォルセティが、「えへへ♪」マイスターやアイリ、みんなに満面の笑顔をくれた。アイリもシャマルもメロメロになりながら、改めて食堂へ向かう。

「あっ、はやてママ、リインおねえちゃん、ヴィータおねえちゃん、シグナムおねえちゃん！　おはよ～！」

「おはようや、フォルセティ♪　それにセインテスト調査官、シャマル、アイリも♪」

「おはようです、フォルセティ♪」

「おーっす」

「ヴィータ。挨拶くらいはしっかりやれ。フォルセティが真似でもしたらどうする。おはよう、フォルセティ」

「？？　おーっす？」

「ほら見ろ。フォルセティが真似をしただろうが」

「へーい」

「へーい」

「いかんぞ、フォルセティ。ヴィータのようなガサツな大人になっては、お前の両親が悲しむぞ」

「そこまで言うかよ。女ならまだしも男なら多少はガサツで良いだろ？　セインテスト調査官やクロノ提督は紳士過ぎんだよ。なあ？」

到着した食堂で、はやてとヴィータとシグナムとリインと合流。挨拶を交わすんだけど、シグナムがヴィータの口調を真似るフォルセティを優しく諭す。ヴィータもヴィータで、男らしくなるのが良いって意見。

「はやてちゃんはお母さんとしてどう思います？」

「おおう！？　あー、そうやね・・・」

シャマルから意見を訊かれたはやての顔が赤くなる。フォルセティから、ママ、って呼ばれるのはもう慣れてきたみたいで顔を赤くしなくなったけど、誰かにお母さん扱い、特に不意打ち気味にされると、今みたいに顔を赤くしてビクッてなるんだよね。

「えっと、えー・・・ど、ルシ、あー・・・う～ん・・・」

はやてはどもってはわたわたと手振りを繰り返す。言葉の中にマイ

スターの名前がチョロッと出て来たから、アイリ達の目がマイスターに集中。

「私としては健やかに育っていってくれれば、それだけで良いと思う。口調や性格なんかも、これからの生活で定まって行くだろうし。ガサツでも、淑やかでもいいさ。フォルセティらしさがあれば」

マイスターはそう言って微笑みながらフォルセティの頭を撫でた。くすぐったそうにはにかむフォルセティ。こんな家族団らんって感じが、この3週間続いてる。すでに六課公認の大家族みたい。

「う、ん、そうやね。そう、そうゆう感じや！　元気に居てくれるだけで十分なんよ！」

そんなやり取りをしてると、「おはようございます！」早朝の訓練を終えたフォワード4人がやって来た。フォワード4人とも「おはよう！」挨拶を交わして、朝ご飯を調理カウンターからテーブルへと運んでる最中に・・・

「「おはよう～！」」

なのはとフェイト、それに「おはようございます！」可愛い服を着たヴィヴィオがやって来た。3人にも「おはよう！」挨拶を返して、そのまま朝ご飯を始める。アイリは、マイスターとはやてとフォルセティの4人掛けテーブルに着いて、リインは小さな体だからテーブルの上に直座り。

「今日も暑くなりそうやな～」

「もう8月ですしね。海水浴をしていた頃が懐かしいですぅ～」

「楽しかったよね～。また、家族みんなで海水浴に行きたいよね～」

そう何度も行ってるわけじゃないけど、チーム海鳴で海水浴に行った思い出を振り返る。ふと、フォルセティを見ると、「？？？」小首を傾げてた。何か判らない単語でもあったのかな？

「隊舎の前に海があるのに、泳げないっつうのも酷な環境だよな～」

「別にオフシフトであれば、泳ぐくらいは問題ないだろう。はやて部隊長とセインテスト調査官は、この件について何か問題があるでしょうか」

「私からは何も言うことはあらへんよ。オフの使い方はみんなに一任してるからな」

「私としても同じ意見だよ、シグナム副隊長。自由に過ごしてくれて構わない」

マイスターがそう答えた後、「かいすいよく、ってなに？」フォルセティが訊いてきた。さっき小首を傾げてた理由はそれだったんだね。後ろのなのはとフェイトとヴィヴィオのテーブルからも、「なーにー？」ヴィヴィオが海水浴について質問してた。

「えっと、海水浴というのは、海に入って泳いだりして楽しむことだよ、ヴィヴィオ」

「なのはちゃんの言う通りやね。水着ってゆう専用の服を着て、海に入って遊ぶんよ」

なのはとはやてからそう教わったフォルセティとヴィヴィオは「へ～」上手く想像が出来ないのか力ない返事をした。そんな2人の様子に、「今年はダメだが、来年は海水浴に行こうか」マイスターがそう言った。

「そうやね～。今年は六課の仕事でてんやわんややから、遊びに行くのは無理やろうし。来年なら休暇を合わせて家族旅行って感じで行けるやろ」

「ホント、パパ、ママ・・・？」

「ああ」「うんっ」

「やった！」

マイスターとはやての間に座るフォルセティが満面の笑顔を浮かべて、両手を挙げて万歳した。フォルセティはもう里親に出すことなく八神家で引き取ることになったから、実質の養子だね。ファミリーネームをどうするかは、マイスターとはやての間で相談中。マイスターとしては、セインテストの名は後世に残すつもりはないとのこと。

「それじゃあ私たちもお邪魔しようか♪」

「はやて、セインテスト調査官。私たちもお邪魔していいかな？」

「もちろんや♪　すずかちゃんやアリサちゃんにも声を掛けて、チーム海鳴で久しぶりの旅行っちゅうことで♪」

「どうせならスバル達も一緒の方が良いですよ！」

フォークで突き刺したミニトマトを口に運びながらリインがそう提案した。キャロとエリオ、それとスバルは「ありがとうございます！」誘いを受けたことにお礼を言うんだけど、ティアナだけは少し考える素振りをした。

「ティアナは嬉しくないですか・・・？」

「泳げねぇとかか？」

「あ、いえ。お誘いは嬉しいですし、泳げもしますけど・・・。来年の今頃は、あたしは何をやってるんだろう、って思って・・・」

ティアナはさすがと言うか、機動六課解散後の進路について考えてたみたいだね。ティアナは小さく首を横に振ってから、「でも、その時はよろしくお願いします」海水浴の誘いを受けた。

「ちょーっと横から失礼します！」

別のテーブルに座ってたシャーリーが輪に入って来た。そして「同窓会という形の旅行というのはどうでしょうか！」そう提案してきた。みんなで「旅行？」小首を傾げる。シャーリーのプランは、休暇が合わないメンバーが出ることを考えて最低でも2泊3日。メンバーが入ったり抜けたりしての代わる代わる作戦。

「まぁ一緒したいメンバーとは日程が合わない、なんてデメリットが生まれる可能性が大ですが・・・」

「そうやね～。そやったら幹事はシャーリーに任せてみよか。でもま、来年の話やし、とりあえず同窓会旅行の計画はゆっくり考えてこ」

「はいっ、幹事の任、承りました♪　いやぁ、今から楽しみです！」

そんなこんなで来年、同窓会旅行する予定が組み上げられた。シャーリーは同じテーブルに座るオペレーターのアルトやルキノと、どこの世界、どこの観光地などなど、早速旅行先を話し合い始めた。ちょっと気が早いよね・・・。

「あ、ヴィヴィオ。またピーマン残してる。ダメだよぉ、ちゃんと食べないと」

シャーリー達が主要世界の有名どころの海水浴場や観光地をモニターで探し始める姿に苦笑してると、なのはがヴィヴィオを叱る声が聞こえてきた。そっちを見ると、「ピーマンにが～い！」ヴィヴィ

オが顔をしかめた。

「ほら、フォルセティはちゃんとピーマン食べてるよ」

「ヴィヴィオ。ピーマン、おいしいよ？」

フェイトがヴィヴィオの肩を叩いて、フォルセティの方へと振り向かせる。フォルセティはスプーンにすくったピーマンを食べて見せた。ヴィヴィオとフォルセティは同じオムライスを食べてて、ヴィヴィオは供えられてるピーマンに苦労してるけど、フォルセティは軽快に食べてる。

「えらいよ～、フォルセティ。お肉もお野菜もたくさん食べて、パパみたく格好ようなろうな～♪」

「うんっ！」

「ヴィヴィオ～。お野菜ちゃんと食べないと、ママ達のように美人にはなれないよ～」

スバルがそう言うと、「うぅ～・・・」ヴィヴィオは悲しげな表情を浮かべてママ達、なのはとフェイトを見た。そして残ってたピーマンをスプーンにすくって、「あむ・・・！」パクっと一気に頬張った。ヴィヴィオ。食べるのは良いけど、さすがに一気食いはまずいんじゃ・・・。

「むぐむぐ・・・む・・・ぅ・・・あ゛ぁぁぁ～～～・・・」

数回は咀嚼してたけど案の定苦さに耐えきれずに口を半開きにして、フルフルと首を横に振った。フェイトが慌てて「お皿に出して、ヴィヴィオ！」皿を差し出そうとするけど、「待って、フェイトちゃん！　ヴィヴィオ、ほらお水で流しこんで」なのはが水と一緒に飲み込むように言った。ヴィヴィオは少し迷ったようだけど、コップを手に取って一気に飲み干した。

「はふぅ」

「うん、えらいよ、ヴィヴィオ。・・・ゴメンね、フェイトちゃん。でも吐かせるよりかはもう飲み込ませた方が良いかな、って」

「あ、うん。そうだね。偉いよ、ヴィヴィオ。よく食べれました♪」

「うんっ！」

そんなこんなで、いつも通りに楽しい朝ご飯タイムを終えた。みんなで食器を片付けて、午前中のお仕事に入る。マイスターとはやてとリインは部隊長室。なのはとヴィータとフォワードは訓練。フェイトは捜査主任っていうことで外回り。ちなみにアリシアは今は聖王医療院でリハビリ中。今月中には完全復帰できるとの事。で、アイリは医務官だから医務室へ・・・なんだけど。

「アイリちゃん。医務室はいいから、フォルセティとヴィヴィオの面倒をザフィーラと一緒に見てあげて」

「ヤー。手が必要なときは・・・」

「ええ。ちゃんと呼ぶわね。それまではフォルセティとヴィヴィオのことお願いね」

3日に1回は医務官じゃなくてチャイルドマインダーのような仕事をしてる。最近はフォアワードも、医務室を使う必要のないレベルの怪我しかしなくなったし、暇と言えば暇なんだよね。整備班も軽い傷しか負って来ないし。シャマル1人で十分対処しきれる。というわけで、アイリは白衣を脱いで医務室を出てく。向かうのは隊員寮。親代わりのマイスター達が仕事の時、フォルセティとヴィヴィオは、寮母のアイナさんや遊撃戦力のザフィーラと家事の手伝いや遊びとかやって、マイスター達の終業時間まで時間を潰すからね。

「おお、やってるね」

海上に建設された空間シミュレータからドッカンドッカンと爆発音が続く。セカンドモードの練習も終盤だって言うし、次はサードモードだね。さらに派手な戦闘訓練が拝めそう。どんどん強くなって頼もしくなってくのが判るのが楽しいね。

『ザフィーラ。アイリだけど、フォルセティとヴィヴィオって今なにしてる？』

『我々は今、寮の1階にてかくれんぼをしている』

『おお、かくれんぼ。アイリは今日も子守り側だから、参加させてもらっても良い？』

『ああ。今は一回戦ゆえ、二回戦からの参加になるが』

『ヤー。じゃあ終わるまで待ってるね』

ザフィーラとの思念通話を切る。到着した寮のエントランスを潜って、時間を潰すために食堂へと向かうんだけど、ロビーの片隅にある観葉植物に自然と目が行って、「ぅえ！？」ビックリした。

「トリシュ！？　何やって・・・！？」

「しーっ。大きな声を出さないでください、アイリ。ヴィヴィオに見つかってしまいます」

観葉植物の裏に隠れてる（最早もろバレなレベルだけど・・・）ペプラム・トップスと片側にだけスリットのあるロングワンピースっていう私服姿のトリシュタン――トリシュが居た。トリシュは聖王教会騎士団の1つ、金水仙騎士隊ゴルト・アマリュリスの騎士隊長。シャルと同じようにパラディンに昇格することは諦めてないけど、いつまでも平隊員のままじゃ格好つかないってことで隊長に昇級したんだよね。

『まさか、トリシュもかくれんぼしてるの？』

『あ、はい。フォルセティとヴィヴィオの様子を確認しに来たんで

すけど、フォルセティに誘われてしまってつい・・・』

聖王教会から週1で騎士がやって来て、フォルセティとヴィヴィオの様子を確認することになってる。シャル、ルミナ、トリシュ、クラリスのローテーション制でね。シャルはマイスターへの暴行の所為でフォルセティとヴィヴィオに恐がられてたけど、お菓子づくりでその日の内に2人のハートをキャッチ♪した。

『なるほどね。二回戦はアイリも参加するからよろしくね～』

『判りました。では後ほど』

観葉植物の裏に隠れきれてないトリシュに手を振って、アイリは食堂へ向かった。んで、食堂には「フォルセティ・・・」が隠れてた。テーブルの下に体育座りをしていて、お口にチャックって、ファスナーを閉めるようなジェスチャーをした。

（ああんもう！　可愛すぎるぅ～！）

その可愛さにアイリ、もうメロメロだよ。とりあえずアイリもお口にチャックってジェスチャーをして、フォルセティの隠れてるテーブルから離れたところの椅子に座る。それからのんびりしてると、「フォルセティ～！」を呼ぶ声が聞こえてきた。食堂の入り口を見ると、狼姿のザフィーラ、トリシュを引き連れたヴィヴィオの姿を視認。

「あ、アイリさん」

「やっほー、ヴィヴィオ。ザフィーラとトリシュは見つかっちゃったみたいだね」

「うむ」

「ヴィヴィオは人探しのプロですね。すぐに見つかってしまいました」

「えへへ♪」

トリシュに褒められたヴィヴィオが照れ笑いを浮かべた。最近のヴィヴィオは人見知りすることもなくなって、最初から懐いてたなのはやフェイト、それにフォルセティと同じ顔なマイスター以外の人にも、懐いてくれるようになった。

「ヴィヴィオ。次はアイリも混ぜてくれる？」

「うん、いいよ～♪　フォルセティを見つけた後だけど・・・」

「それで良いよ、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオが1人離れて食堂内を歩き回る。その間、「アイリ。本気で隠れるのはダメですよ？」トリシュからそんなことを言われたから、「そんなこと解りきってるよ」苦笑する。トリシュのあの半端な隠れ方を見ればね。

「ヴィヴィオに見つけてもらい易いように隠れるんでしょ？　手心はちゃんと加えるよ」

「フォルセティ、見ぃ～つけた！」

「見つかった～」

ヴィヴィオが身を屈めながらテーブルの下を覗き込んだ直後、フォルセティを発見したね。というわけでロビーに集まって、「ジャンケン、ポン！」二回戦のオニをジャンケンで決める。んで、「アイリがオニ～！」ということに。

「６０秒数えてね、アイリおねえちゃん」

「あと異性が入れないような・・・トイレ、更衣室に隠れるのもダメですので、そこを注意して捜してください」

「お風呂は？」

「この時間帯は誰も使ってないようですから、オーケーです。あとキッチンは危ないのでダメですから」

フォルセティとトリシュから聞かされたルールに「は～い」応じて、外へと体を向けて目を瞑り、「い～ち、にぃ～」数え始める。フォルセティとヴィヴィオが「かくれろ～♪」可愛い足音を立てて去ってった。トリシュは普通に、でもザフィーラは・・・

（完全に気配を消してる・・・！？）

足音１つ立てないで去ってった。本気過ぎる。とにかく６０秒数え終えて、「アイリ、いっきま～す！」ザフィーラとトリシュをターゲットに絞って捜す。トイレと更衣室はアウトだって言うし。じゃあお風呂から捜してこうか。まずは女子風呂。この時間は誰も使えないから、脱衣所でバッタリハプニングは起きない。

「お邪魔しまーす」

脱衣所に入って棚の周りもしっかり見て、誰も隠れてないことを確認。次は浴場に入るんだけど、「おっと」浴場をデッキブラシで掃除中の、アイナさんとは別の寮母さんが居た。その後ろ姿に「あ、ごめんなさい」一言謝って、脱衣所へと戻った。

「・・・って、んん～？」

なんか違和感を感じたから、そろ～っと浴場と脱衣所を隔てるスライドドアを開ける。寮母さんはデッキブラシでゴシゴシと床を磨いてる。でもずっと待っても一向にこっちに顔を向けようとしないんだよね。だから・・・

「寮母さ～ん」

声を掛けてみる。すると寮母さんは小さく頷くだけで、仕事を中断しないし、こっちに振り返ろうともしない。髪の毛は三角巾で隠れてるから判らないけど、やっぱりどう考えても「トリシュ、見ぃ～

つけたっ♪」だろうね。

「見つかってしまいました～」

トリシュが三角巾を取りながら振り向いて、「結構自信あったんですけど・・・」早々に見つかったことにガックリ肩を落とした。というかね、「本気過ぎない？」用具ロッカーにデッキブラシをしまって、脱いだエプロンや三角巾を綺麗に畳んで棚の上に置くトリシュにそう言う。

「相手がアイリですし。手加減は無用かと」

「そっか。で、無断で借りたの？」

「いいえ！　寮母さんのお1人にちゃんにお願いしてお借りしました！」

「そんなムキにならなくても・・・」

かくれんぼの為だけにそこまでやるトリシュの真面目さにちょこっと感動、んで少し呆れる。とにかくトリシュは発見したから、次はザフィーラだね。隣の男性風呂へ突貫。

「トリシュ・・・？」

「さ、さすがに男性の脱衣所に入るのは・・・」

顔を真っ赤にしてもじもじしてるトリシュに「じゃ、そこで待ってて」そう言って、アイリだけで脱衣所に入る。まず棚の周囲をぐるっと見て回って、誰も隠れてないことを確認。次は浴場。スライドドアを開ける。浴場をぐるりと見て「異常な～し」ということでドアを閉めて、脱衣所からも出る。

「トリシュ、次」

「あ、はい」

次は風呂場に隣接するランドリーに突撃。男女と別れていて、とりあえず男性用のランドリーに入る。ドラム型の洗濯機と乾燥機が１０台ずつの計２０台。幾つか稼働中のもあるね。あと、誰か知んないけど、ランドリーの片隅にある洗濯物干しにトランクスを干してくれちゃってる。だから・・・

「～～～～っ！？」

トリシュがまた顔を真っ赤にして、両手で目を隠した。アイリはマイスターの下着を干すこともしてるから、男の人の下着くらいは別に気になんないんだけどね。

「居ないなぁ～」

「アイリ、早く出ましょう！」

「廊下で待ってればいいのに・・・」

とりあえずランドリー内を見て回る。どこも異常無しか～、と思った直後、「うひゃあ！？」マジでビビった。何せ洗濯機の中に子犬フォームのザフィーラが居たんだから。アイリは洗濯機の蓋を開けて、「何やってるの！？」声を荒げる。ザフィーラは床へと降り立って、子犬フォームから本来の狼フォームに戻った。

「む。すまぬ、よもや内側から開けられんとは・・・」

そう言ってうなだれるザフィーラに、「洗濯機は基本そういう仕様ですから。ザフィーラ様、お気を付けてくださいね」トリシュが注意した。

「入ることはもう二度とあるまいが、その忠告はありがたく頂こう」

「とにかく！　ザフィーラ、見ぃ～つけた！」

トリシュに続いてザフィーラまで労することなく発見できたのはラッキーだったね。もう一度乾燥機や洗濯機の中を確認して、フォルセティとヴィヴィオが居ないのを確認。ランドリーを出て、次は女子用ランドリー。そっちにも2人が居ないのを確認。ロビーに戻って来る。まずは中央階段の裏にある物置小屋を確認。居ない。さらに食堂など1階にある施設を見て回ったんだけど・・・

「居ないね～」

全然見つけられなかった。さすがにこれは予想外。だから「まさか、

さっきのザフィーラみたく、何かあったんじゃ・・・？」なんて不安が募ってく中・・・

「待て。フォルセティは問題ない。我が手伝ったのだ。アイリ、お前はただ捜し切れていないだけだ」

「そういうことです。ヴィヴィオは私が手伝いましたし」

ザフィーラとトリシュからそんなダメ出しが。アイリの捜し方が悪いって言うなら、徹底的に捜してあげるよ。

「フェーフォルム！」

本来の姿に戻って、これまで捜して来た場所を再捜索。ザフィーラとトリシュは、フォルセティとヴィヴィオが隠れるのを手伝った、って言った。つまり独力で隠れられない場所に居る。

「最初はランドリー！」

ザフィーラが隠れてた男性用ランドリーへ。洗剤やら洗濯に必要な物がしまわれた扉付きの棚をロックオン。壁に設けられた棚は天井付近にあって、そこは大人が手を伸ばしてようやく届くところ。そこまで飛んで、ガチャッと扉を開ける。

「あ・・・！」

「フォルセティ、見ぃ～っけ！」

棚の中に隠れてたフォルセティを発見。人型フォルムに変身したザフィーラに降ろしてもらったフォルセティは「あれ～。絶対に見つからないと思ったんだけど・・・」悔しそうに呻いた。そうだね、ヒントが無かったらたぶん見つけられなかったね。

「アイリお姉ちゃんに不可能はないのだ♪」

「おお！」

小さい体のままでフォルセティの頭の上に乗っかって、頭をよしよしって撫でる。さて、次はヴィヴィオになるわけだけど。トリシュが居たのは女子風呂。その辺りに隠れてる可能性がある。

「次は女子風呂！　フォルセティ、Ｇｏ　！」

「うんっ！」

フォルセティの頭の上に座ったまま女子風呂に突撃。脱衣所でフォルセティの頭から飛び立って、スライドドアを開けて浴場内を見下ろすために天井まで上がる。そして・・・

「ヴィヴィオ、見ぃ～つけた！」

浴場の隅に山状に積み重ねられた桶の奥に、ヴィヴィオが体育座りで隠れてるのを発見した。

「あぅ〜、見つかっちゃった」

「アイリの完全勝利ぃ〜♪」

こうして二回戦は終了。かくれんぼはそれから五回戦まで続いて、その後のお昼ご飯までは六課敷地内を散歩をした。こんな何気ない日常が、これからもずっと続けばいいな〜、なんて思うね。だから、フォルセティとヴィヴィオを狙うプライソン一派は必ず捕まえて見せるよ。

Ｅｉｐｉｃｌ４公開意見陳述会へ向けて～Ｓｃｏｕｔ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

私は今、機動六課の後見人の１人であるクロノ君、そんで親友のすずかちゃんにも逢うために本局へとやって来てる。まずは時刻指定を受けてるクロノ君からや。

「本局って、初めて来ました・・・」

同行させたティアナがキョロキョロと周囲を見回した。管理局員って言うても所属する部署によっては本局に来ることなんてホンマにあらへんからな～。

「ティアナも執務官になったら本局での勤務になるからな。クロノ提督やすずかちゃ――月村技術官との面談の後に執務部に行ってみよか」

「是非お願いします！」

目をキラキラさせるティアナ。うん、素直でよろしい。ティアナを今回の面談に同行させた理由は、ティアナの将来の志望職務である執務官に関係してる。執務官になると、次元航行部の艦船の艦長や提督といったお偉いさんと顔を合わせる機会がどうしても多なる。そやから今の内から慣れさせとこかな～、って。

「ん。じゃあまずは艦船ドックやな」

「はい！」

クロノ君が艦長を務めてる新造艦、ＸＶ級クラウディアが停泊してる艦船ドックへ向かう。そんでドックに着いて、管理局が保有する艦が並んでる光景を窓から見たティアナが「すごい・・・」感嘆の声を漏らした。その並んでる艦船の中に懐かしきアースラの艦影もある。

「八神はやて二等陸佐です。クロノ・ハラオウン提督にお取り次ぎ頂けますか」

各艦船へと転送移動するためのトランスポーターに着いて、クラウディアのブリッジに通信を入れる。すると展開されたモニターにオペレーターの女性が映って、『お待ちしておりました。転送いたしますので、その場でお待ちください』すぐにクラウディアへと転送してくれた。

「おお。さすがに新造艦。綺麗やし広いな～」

「あたしもいつかこういう艦に乗って、次元世界の海を渡りたいです」

トランスポーター室から出たところで、「ようこそ、クラウディアへ」クロノ君に出迎えてもらえた。クロノ君の視線がティアナに向いたことで、「紹介するな。うちのフォワードリーダー、執務官志

望の・・・」そう前置き。

「ティ、ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「ああ。僕はクロノ・ハラオウン。すでに聴いているだろうが、フェイトとアリシアの兄だ」

ガッチガチに緊張してるティアナは敬礼しながら自己紹介。そんで応接室へ向かい始めた中、「はやて。この後の予定は？」クロノ君がそう訊いてきた。

「ん？　第四技術部に、すずかちゃんに逢いに行こうって思うてる」

すずかちゃんにあるお願いをしに行くつもりや。部隊運営に不正があらへんかを監察するルシル君の確認もちゃんと取ったし、すずかちゃんと第四技術部主任のマリーさんがＯＫしてくれたら・・・嬉しいなぁ～。

「んで、その後は執務部のオフィスを見学やね。ティアナは必ず執務官になるし、その前にちょろっとな」

「ほう。彼女が執務官になると確信しているのか」

「私ら隊長陣やルシル君も認めてる逸材やし、何よりガッツがある。な、ティアナ？」

士官学校や空隊試験を落ちようともめげることなく、一心に執務官

を目指すその心意気は本物や。ティアナは「恐縮ですぅ」キリッとした表情を続けたいようやけど、残念ながら結構ほころんでる。

「そうか、彼女たちからも認められているのならさぞ優秀なのだろうな。執務官は狭き門だということもあって人手不足でもある。優秀な人材は大歓迎だよ。・・・さて、到着だ。どうぞ」

「お邪魔しま～す♪」

「し、失礼いたします！」

到着した応接室に入る。脚の短い楕円形のテーブルを挟むように置かれたソファ2脚に、私とクロノ君は座る。

「失礼いたします」

1人の女性スタッフさんがワゴンを押して、お茶セット一式とホールケーキを持って来てくれた。私とクロノ君の前にカットされたショートケーキ、良い香りをさせてる紅茶の注がれたティーカップを置いてくれたから「ありがとうございます」お礼を言う。私の座るソファの側に控えるティアナの分もテーブルに置いてくれたから、「ティアナも座ろか」私の隣をポンポン叩く。

「あ、はい、では失礼いたします！　あ、ありがとうございます、いただきます！」

「うふふ。はい、どうぞ♪　では艦長、私はこれで失礼します」

「ああ、ありがとう」

女性スタッフさんは一礼して応接室を後にした。それを見送った後、「にしても珍しいな。クロノ君、甘いもんとか苦手やのに」私はソーサーに置かれたティーカップを手に取って一口。

「苦手なのは変わらないよ。ただ、ロッサが作って来てくれた物だからな。無碍には出来ないし、僕でも食べられるように甘さ控えめにしてくれたようだし、食べないわけにはいかないだろ」

そう言うてクロノ君はフォークを手にケーキを一口。私も一口いただく。うん、美味しいわぁ。甘さ控えめって話やけど、それでも十分過ぎるほどに美味しい。ティアナも「わ、美味しい・・・！」頬を綻ばせて、パクパク食べてく。

「ところでランスター二士」

「っ！？　ぶはっ・・・！　げほっ、ごほっ！」

いきなりクロノ君に話を振られた所為かティアナが盛大に咽た。私は「大丈夫か！？」ティアナの背中を叩いて、ティアナはティーカップを手に取って一気に呷る。それで詰まった物が無くなってくれたんか、「あ、危なかった・・・」そう言うて大きく深呼吸した。

「クロノ君。もうちょい話しかけるタイミングを計るべきやない？」

「す、すまない、ランスター二士」

「あ、いえ！　ハラオウン提督は何も悪くありませんので！　お気になさらないでください！」

クロノ君からの謝罪にかえって焦るティアナが可哀想になってきたから、「そんでクロノ君。ティアナに何を訊こうとしてたん？」話を戻す。

「いや。さっきの話の続きだが、執務官にはどうして？」

「あ、はい。元々は亡くなった兄の夢だったんです、執務官は・・・」

「兄・・・、ランスター・・・。そうか、ティーダ・ランスター一尉の妹さんか」

クロノ君の口からティアナのお兄さんの名前が出たから、「ご存知なのですか！？」ティアナが驚いた。

「ミッド地上本部の動向には、本局も常に気に掛けているからね。あの問題発言が飛び出した会見もリアルタイムで観ていた」

クロノ君はそう答えた。ミッドの地上本部と本局はホンマに仲が悪い。地上本部の防衛長官レジアス・ゲイズ中将は確かに優秀で実力もあって、人を惹きつける牽引力もあり、剛腕な政略家でもある。そやけど、ちょう行き過ぎてる感もあるんよね。本部長にしたって

ゲイズ中将の後輩やから、その思想に染まってしもうてるし。

「それに、だ。ティーダ・ランスター一尉の殉職について問題発言をしたエンツォ・マクドゥガル防衛次官。彼を辞職に追い込んだのはルシルだ」

「「え・・・？」」

クロノ君の発言に私とティアナは耳を疑った。私は「それホンマなん？」って訊いてみると、クロノ君は当時の事を話してくれた。本局のレストラン街でルシル君、クロノ君、ユーノ君の3人で昼食を摂ってた際に、件の問題発言をしたマクドゥガル次官の会見を観たらしい。

「その時のルシルの怒りっぷりは、いま思い返すだけでも恐ろしいよ。あの問題発言を聴いた直後からステガノグラフィアを使って、マクドゥガル次官の身辺を探り始めたからな。後日、マクドゥガル次官のスキャンダルが各局で報道された瞬間、ルシルがやったなとすぐに判ったよ」

「あー、ステガノグラフィアかぁ。なるほどな～」

「あの、ステガノグラフィアとは一体・・・？」

「ルシル君の持つ電子戦魔法のことや。ネットワーク上ならありとあらゆるセキュリティをパスして、欲しいデータだけを奪取できるんよ。ルシル君がその気になれば、管理世界に住む人たち全てのプ

ライバシーを丸裸に出来る」

ティアナに質問にそう答えると、「うわぁ・・・」ちょう顔を青くした。まぁ当然の反応やな。どんなセキュリティを用意しててもステガノグラフィアの突破力には無意味やもん。本局のデータベースにすら、本局に気付かれることもなく侵入できるってゆうチートっぷり。ターゲットにされたら問答無用の降伏しかあらへん。

「あの、兄とルシルさんとの間で何かあったのでしょうか。ルシルさん、兄の魔法を使っていたんです。それに、次官を徹底的に追い詰めたのも、兄に対して何か思うところがあったのでは？と思えるんです」

そう訊かれた私とクロノ君は顔を見合わせて、小さく首を横に振る。

「すまないが、ルシルとティーダ一尉の関係については判らないな。単純にマクドゥガル次官の発言が度が過ぎていた、というのが一番考えられる。正直、僕もマクドゥガル次官の発言には吐き気を催したくらいだ」

「辛辣やなぁ。まぁ私も同じやけど。・・・それと私も、ルシル君とティーダ一尉の関係は知らへんなぁ。ごめんな」

「あ、いえ、お気になさらず・・・！」

そうは言うけど、やっぱり気になってるようでソワソワしてるから「どうしても気になるなら、ルシル本人に直接訊いてみるといい」

クロノ君はストレートな解決法を提示した。確かにそれは一番やろうし、「そうしてみます」ティアナも受け入れた。

「話は変わるが、フォワードは今回の事件の全容について、どの辺りまで聞いているんだい？」

それってフォワードの訊くことやろか。普通は私に訊くべきやと思うんやけど。ティアナがチラッとあたしを見たから、「こうゆうのも大事やよ」頷いて見せた。とりあえずティアナのお偉方と顔合わせと会話に慣れるってゆう経験値を上げるために、クロノ君に任せることにした。

「はい。プライソン一派が地上本部へ襲撃を仕掛けるかもしれない、という段階までは教えてもらっています」

「そうか。なるほど・・・『さすがに騎士カリムの預言は伝えていないようだな』」

『カリムのスキルは機密事項やからね、ある程度はボカさへんとな』

フォワードには預言の話は伝えてない。機密事項ってこともあるけど、ミッド滅亡の阻止が目的、なんてことを先に知らせて変に気張らせんためでもある。頑張り過ぎて空回り、そんで最悪なケース、みたいな事件はティアナの件だけで十分や。

「はやて。襲撃の件を伝えたのはいつだ」

「かれこれ４週間くらいやろか」

フォルセティとヴィヴィオが六課にやって来てすぐに伝えたからな。クロノ君は「ふむ」って軽く頷いて、もう一度ティアナの方へと視線を向けた。

「ではランスター二士。プライソン一派が地上本部へと襲撃したその際、特に気を付けなければならないことは何だと思う」

クロノ君がそう訊ねると、ティアナは何かを察したように真剣な面持ちになって「私見になりますが・・・」そう前置き。

「ガジェットドローンを最も警戒しなければならないかと考えています」

ティアナの答えに、「ほう」クロノ君がそう漏らした。そんで「その心は」ティアナの答えについての詳細を訊ねた。

「地上本部が襲撃されるかもしれないという話を聴き、現在判明しているプライソンの兵器と地上本部の防衛力を調べてみました。地上本部はテロなどの襲撃に対して元より強大な防衛力を備えています。魔法と物理の障壁が１枚ずつ。正しく鉄壁と言っても過言ではない出力ですが、共に魔力を使って展開する物なのでＡＭＦには弱いかと・・・」

ティアナの見解は正解や。地上本部を護る障壁は魔力頼り。列車砲や戦闘機の物理攻撃を永遠とは言わずともある程度は耐えてくれる

やろう。その間に地上部隊や航空部隊で兵器を破壊して回る。聖王教会の騎士団も協力してくれるし、そう難しないはずや。そやけど何百機ってガジェットが障壁に取り付いてＡＭＦを全開発動すると、防御力は落ちるやろう。そこに物理破壊攻撃を食らえば・・・。

「なるほど。洞察力も優れているんだな。素晴らしい人材じゃないか、はやて」

「やろ♪」

「恐縮です！」

クロノ君にも褒めてもらえたティアナはホンマに嬉しそうや。クロノ君は少しばかり俯き加減になって「・・・正直、ルシルの戦力を当てに出来ないと知った時、かなり不安だった」って漏らした。

「彼の広域攻撃と防御は、次元世界屈指のレベルだ。対兵器戦では活躍してくれただろう」

クロノ君はそう言うけど、私としてはルシル君が側に居って見守ってくれるってゆうだけで、すんごい支えになってくれるんやけど。でもルシル君の戦力が重要やってことも理解してる。

「そやけど、それ以上にルシル君はすごい仕事を成してくれたよ」

戦力以上の偉業をルシル君はしてくれた。クロノ君も俯かせてた顔を上げて、「地上本部に協力申請受諾を出させた、だな」そう言う

た。元は地上本部からの無理やりな査察を阻止しに行ったんやけど、どうしてそうなったんかゲイズ中将と協力体制を結んでくるなんて特大なオマケも持って帰ってきた。

「ゲイズ中将は企業や政界からの支援もあるし、管理局最高評議会にも一目置かれてる。そんで本局や海が大嫌い。そやから本局から地上本部が狙われるかもしれへんって注意を呼び掛けても、地上の防衛力は鉄壁や～言うて特別な対策は執らへんかった」

地上本部の武力や発言力はホンマに高うなってて、本局でも危険視されてる。そやから下手に本局が口出しすると、内政干渉や強制介入なんて捉えてさらに諍いが起きる可能性がある。そやから何か大きな問題が起きても即座に本局からの主力投入は表だって出来ひん。

（その問題をどうにかするために、グレーゾーン気味の裏技を使うてまで私らは機動六課を作った）

それもこれも本局預かりでありながら地上で自由に動くため。そんで地上本部が本腰を入れるか、本局と教会の主力投入までの間、前線で問題と戦うための戦力。それが私ら六課の意義。やったんやけど・・・。

「そんなところにゲイズ中将からの、本局からの協力を受け入れる、という話だ。公開意見陳述会の終わりまで、という期間限定だとしても通常じゃ考えられない事態だ。当然、本局は度肝を抜かれたよ。僕と母さんはエイプリルフールかと疑ったくらいだ」

クロノ君の珍しい冗談に「エイプリルフール・・・？」ティアナが小首を傾げた。次元世界にはそんな習慣は無いから当たり前か。

「私やなのはちゃんの出身世界にあるイベントの1つでな。4月1日の午前中にだけ、嘘を吐いてもええんよ」

「へぇ～。変わった風習があるんですね」

「で、だ。時期的に見て十中八九、ルシルが何かしらの手段を使ってゲイズ中将を説得したと考えるのが妥当だな。ゲイズ中将は地上の正義の守護者と謳われているが、黒い噂は絶えない。おそらくはそこを突いたんだろう」

プライバシーを丸裸に出来るルシル君なら、ゲイズ中将の裏まで簡単に探れるやろうし。ルシル君だけは絶対に敵に回したないわ。少しばかりの沈黙の後、「ランスター二士」クロノ君がティアナに声を掛けた。

「あ、はい！」

「今回の事件、おそらく大変な任務になるだろう。だが、はやて達を信じ、共に支え合い、そしてこの任務を完遂して欲しい」

「っ！　はいっ、もちろんです！」

ティアナは立ち上がって敬礼した。それからケーキと紅茶に舌鼓を打って、ふと「そう言えばアースラ、改修中なんか？」クラウディ

アの隣に停泊してたアースラの話題を振る。クロノ君がクラウディアに移ってからアースラは稼働してへんかったしな。

「いいや。経年劣化により、もう長期任務に耐えられない程に痛んでいるとのことで、来月の末に廃艦処分されることが決まったよ」

「そ・・・か・・・。なんや寂しいな、やっぱり。アースラは私らチーム海鳴の旗艦みたいな、思い出深い艦やったからなぁ」

「まぁ、あの艦もこれまで頑張ってくれて来たんだ。そろそろ休ませてあげよう」

「そうやね・・・。っと、ごちそうさまでした♪」

ケーキを食べ終えて、「そんじゃティアナ。そろそろお暇しよか」先にケーキを食べ終えて、紅茶をほんのりと頂いてたティアナに声を掛ける。

「あ、はい。ごちそうさまでした」

「ああ。っと、そうだ。はやて。ロッサからの預かり物だ」

そう言うてクロノ君が私に差し出したんは1枚のデータカードやった。私はそれを受け取りながら「ロッサがここへ来てたんはコレが理由か？」って訊ねる。すると「ゲイズ中将周りのデータが収められている」って答えてくれた。

「今後の捜査に役立ててくれ、だそうだ」

「おおきにな。あとでロッサにもお礼を言わなな♪」

「ああ、そうしてやってくれ」

「ん。じゃあクロノ君。またな」

「失礼いたします、ハラオウン提督」

そうしてクロノ君に見送られながら私とティアナはクラウディアを後にして、そのままの技術部区画へと向かう。時刻を確認して、「まだお昼休みやないし、オフィスに居ってくれるかな～」すずかちゃんへと通信を繋げてみる。すると間を置かずに『はいは～い』モニターに、青い制服と白衣を着たすずかちゃんが映った。

「久しぶり、すずかちゃん」

『はやてちゃん！　久しぶり～♪』

六課設立前に逢ってからは今日まで全然逢ってないし通信もしてへんかったからなぁ、久しぶりなんよね。

「すずかちゃん、今から第四技術部のオフィスに行くんやけど・・・時間ええやろか」

『うん、もちろんだよ♪　確か今日だったもんね、予定日。スケジ

ュールはしっかり守るから、今日は1日オフィスに居るよ』

「了解や。いま向かってるから、ちょう待っててな～♪」

『は～い♪』

通信を切ってそのまま歩みを進める中、「そう言えばティアナはすずかちゃん、月村技術官とは初めてやんね？」一歩斜め後ろを歩くティアナに訊いてみる。スバルはすずかちゃんとはずっと前からの友人やったしな。

「あ、はい。月村技術官ってどういう方なんです？」

「ん～・・・可愛い子かなぁ。あと身体能力がめっちゃ高くて、たぶん今でもなのはちゃんやフェイトちゃんより上かもしれへん。ルシル君とはどっこいどっこいかな～。当然わたしなんか足元にも及ばへんわ～」

「ええ！？　さっきお顔を後ろから拝見しましたけど、その・・・おっとりした方で・・・。強くはなさそうと言うか何と言うか・・・」

「やろ？　初見はやっぱりそうゆう見方なんよ」

チーム海鳴ん中で一番ギャップがあるのはすずかちゃんやしな。あんなおっとりした顔してても肉弾戦に強いんやし。技術官になってから腕は落ちたって言うてたけど、模擬戦した時は冗談やなくて強

かったわ。すずかちゃんとの思い出を振り返りながら、ようやく辿り着いた第四技術部のオフィスへと入る。第零技術部――スカラボとは違くて開発室はまた別のところに設けられてるから、そこには六課のようなオフィスが広がってる。

「失礼します～」

「失礼いたします！」

オフィス内には数人の技術官が居って、私の姿に「すずちゃ～ん。お客さんだよ～！」オフィスの奥にある扉に向かって声を掛けた。すると「は～い！」すずかちゃんが扉を開けて出て来た。

「いらっしゃい、はやてちゃん！　応接室はこっちだから来て～！」

すずかちゃんに手招きされたことで「ティアナ」を伴って、出来るだけ作業中のモニターを見ずにオフィスの奥へと進む。そんですずかちゃんの居る部屋――応接室に入る。

「ゴメンね、ちょっと狭くて。あんまり応接室なんて使わないから」

9畳ほどの部屋に脚の長い長テーブル1脚とパイプ椅子が両側に3脚ずつの計6脚。すずかちゃんは抱えてたダンボールを応接室の片隅にドスンと降ろして、「あとは、お茶と茶菓子っと」応接室の出口に向かおうとした。

「あ、お構いなく。さっき、クロノ君のとこでケーキと紅茶を頂い

たんよ」

「そうなんだ。あなたもかな？」

すずかちゃんにそう訊かれたティアナも「は、はい。頂きました」って答える。そんで「ん。じゃあ、早速お話を聴こうかな。どうぞ」すずかちゃんに椅子に座るように促されたから、私とティアナはパイプ椅子を引いて座る。

「あ、まずは、自己紹介からかな。はじめまして。月村すずか、といいます。はやてちゃんやなのはちゃんと同じ世界出身で９歳からの幼馴染で、チーム海鳴ではフルバックでした。ここ第四技術部で技術官をしてます」

「はじめまして！　ティアナ・ランスター二等陸士です！　機動六課、フォワードのリーダーを務めてます！」

「うん。よろしくね～♪」

すずかちゃんとティアナの自己紹介も終わって、「さて。私に何かお話があるんだよね」すずかちゃんが本題を促してくれた。

「うん。あんまし長居するのも迷惑やろうから単刀直入にお願いするな。すずかちゃん。六課に出向してくれへんやろか」

すずかちゃんへのお願いゆうのが、すずかちゃんの六課への出向願い。すずかちゃんが「シャーリーじゃダメだった？」小首を傾げる

と、ティアナも「シャーリーさん？」の名前がいきなり出て来たことで小首を傾げた。

「すずかちゃんはな、デバイスマイスターとしてのシャーリーの師匠なんよ」

「そうだったんですね」

「さらにさらに、次元世界屈指の天才科学者、第零技術部の部長ジェイル・スカリエッティの弟子でもあるんよ」

「スカリエッティ少将のことですね。プライソンとして誤認逮捕されてしまったという・・・」

ティアナがそう言うと、「うん」すずかちゃんが悲しそうに俯いて、悔しそうにテーブルの上に置かれた両拳をギュッと握りしめた。そんなすずかちゃんに「ドクターとシスターズは今・・・？」そう訊ねてみた。

「あ、うん。今もなお拘留中だよ。スカラボも閉鎖中で立ち入り禁止。本当に悔しいよ。ドクター達スカリエッティ家は何も悪くないのに」

「・・・そんでな、すずかちゃん。もう知ってるやろうけど私ら六課はプライソン一派を追ってる。その協力をしてほしいんよ。技術官として、そんで戦力として・・・」

プライソンが動きを見せると推測してる公開意見陳述会。その日、私ら六課も地上本部の警備をする予定になってる。その間、六課の戦力はシャマルとザフィーラとアイリだけになってまう。ルシル君は調査官やから戦力としては数えられへん。そこを狙われたら、いくらシャマル達でも敵の戦力によっては墜とされてしまうかもしれへん。

「（プライソンがフォルセティとヴィヴィオを取り戻そうとしてる可能性がある以上、六課の防衛力も高めとく必要性がある。そのために私は、六課に出向してくれるさらなる仲間候補に声を掛けてる。すずかちゃんはその3人目や）・・・これ、六課に関するデータが入ってる。このデータを見てからで答えを――」

すずかちゃんに六課設立の真の目的などを記したデータを送ろうとしたら・・・

「必要ないよ、こんなの。はやてちゃんから、大切なお友達からの応援要請を断るわけないよ」

すずかちゃんは首を横に振って、「私でよければ是非協力させて♪」満面の笑顔を浮かべて私のお願いを受け入れてくれた。すずかちゃんのその笑顔に、私はどれだけ救われてきたか。

「うんっ。よろしく頼むわ、すずかちゃん♪」

「こちらこそ♪　六課に直接出向けば、なのはちゃん達のデバイスの最終調整も簡単に出来るだろうし。私としてのメリットも十分あ

るから」

「あ、でもマリエルさんの許可は・・・？」

「もし六課から応援要請が来たら応えてあげて、って言われてるから大丈夫だよ」

なのはちゃん達のデバイスの管理は今やマリエルさんからすずかちゃんに移ってるからな。マリエルさんもそれを酌んで許可を出してくれたかもしれへんな。すずかちゃんは「これからよろしくね♪」ティアナにも微笑みを向けたんやけど、ティアナが反応せえへんかったから、チラッと隣に座るティアナを見る。

「・・・」

ティアナはほーっと呆けてた。その目はすずかちゃんに釘づけやったから、「ティアナ？」すずかちゃんが顔を近づけながら呼んだ。そんでようやく「ハッ！　はい！」再起動。

「す、すいません！　あの、なんでしたでしょうか！」

「あ、うん。これから私も六課でお世話になるからよろしくね、って」

「よろしくお願いします！」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしてるティアナが敬礼して応じた。私は

「何か考え事か？」って訊いてみた。するとティアナが「・・・れてました・・・」ボソボソと何か呟いた。

「「ん？」」

「つ、月村技術官の笑顔に見惚れてました！」

ティアナが呆けてた理由がそれやった。すずかちゃんも頬を少し赤くして「ありがとう♪」さらに追撃の笑顔を私らに向けた。すずかちゃんの笑顔ってすんごい可愛いんよ、うん。久々のとびっきりの笑顔に「おうふ」私もくらっときたわ。ティアナなんてもう「なんか幸せです」ちょう危険領域に踏み込んでる。

「あ、私のことは名前で良いよ。すずかさん、で♪」

「すずかさん・・・はいっ。よろしくお願いします、すずかさん！」

すずかちゃんの母性溢れる笑顔のファンがまた1人増えた今日。私の用事も終わったことで、「そろそろお昼ご飯だね。魚が美味しいお店が出来たんだ。一緒しよう♪」すずかちゃんがお昼に誘ってくれた。

「そうやね。うん、ご一緒させてもらおか」

「はいっ！」

とゆうわけで、私らは新しく出来たってゆうレストランへと向かう。

その途中、「そう言えば応援って私だけなの？」すずかちゃんに訊かれた。ティアナ含めてのフォワードにサプライズってことで、ちょう黙ってた感もあったんやけど・・・。

「うん。すずかちゃんで3人目やよ。1人目はアリサちゃん、2人目はギンガや」

「っ！　ギンガさんも六課に出向してくれるんですか・・・！」

「そうやよ。クイント准陸尉の件もあるしな。やっぱり最前線を担う六課に居った方が、ギンガもモヤモヤせんでええやろ。あ、これスバル達には秘密やよ？」

「あ、はい！」

ギンガの六課出向の話は、元はナカジマ三佐からの提案やった。

――たとえ洗脳されていたとしても、クイントが生きてくれてたのは嬉しかったよ。しかし、拉致された時とまんま変わらないってわけじゃねぇだろう。両腕があったし、改造手術を受けてるだろうな――

首都防衛隊のゼスト隊が全滅したあの事件。プライソンの研究所にはクイントさんは両腕だけが残されてた。そんで地下水路でのクイントさんの両腕はしっかりと存在してた。おそらくサイボーグ化されてると見てもええやろうな。

――八神よ。うちのギンガ、六課に迎え入れてやってくれねぇか。クイントと戦ってからというもの、どこか上の空でよ。仕事のミスは一切ねぇんだが、それでもな・・・――

――判りました。ギンガをお預かりさせて頂きます。あと出来れば、アリサちゃんも一緒に出向させてもらいたいんですけど・・・――

――俺からは問題ねぇよ。アリサに確認してくれや――

そうゆうわけで、私はアリサちゃんとギンガを六課へ出向させることが出来た。こうなったらすずかちゃんも呼ぼうと考えて、こうして無事に呼ぶことが出来たわけや。

「でも、そうですね。やっぱりスバルと一緒に、クイントさんを助けてあげてほしいです」

「本当に驚いたよ。クイントさんが生きていたって話をギンガから聞いて。でもすごく嬉しかった。だからクイントさんを助けてあげたいって思ったし、はやてちゃんたち六課のお手伝いをしたいって、設立の頃からずっと思ってたから。だから今日のお願い、本当に待ち望んでたんだよ」

「おおきにな、すずかちゃん。でもな、これにはちょう問題があってな～」

腕を組んでそう唸ると、「問題？」すずかちゃんとティアナが小首を傾げた。私は「あと1人、誘いたいんやけど誘えへんのよ」ガッ

クリ肩を落とす。

「・・・っ、あー、なるほど。これは怒っちゃいそうだね」

すずかちゃんも察したようで苦笑した。ティアナが「どういうことでしょうか？」って訊いてきたから、「今、六課にチーム海鳴のメンバーの大半が揃ってるんやけどな。でもあと1人残ってるんよ」そう答える。

「第97管理外世界で結成された少数精鋭チーム、チーム海鳴・・・。えっとぉ～、八神部隊長、リイン曹長、なのはさん、フェイトさん、アリシアさん、ヴィータ副隊長、シグナム副隊長、シャマル先生、アイリさん、ザフィーラ、ルシルさん、すずかさん、アリサさん。・・・あ！　シャルさん！」

「そう。もう1人、現在は聖王教会騎士団の1個部隊を預かる隊長、シャルちゃんが居るんやけど・・・」

「シャルちゃんは今、聖王教会幹部としての修行中の身だから、局員としては休職中・・・」

私かてシャルちゃんを六課に誘いたい。そやけどシャルちゃんの立場がそれを許さへん。残念やけど、シャルちゃんの修行が終わるまでは局員として同じ空は飛べへんね～。

「シャルちゃん、のけ者にされた～って怒るだろうね～」

「光景が目に浮かぶな～」

そんな起こるかもしれへん未来に、私とすずかちゃんは苦笑するしかなかった。

Ｅｉｐｉｃｌ５強者の証明～Ｗｈｏ　ｉｓ　Ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ？～

†††Ｓｉｄｅスバル†††

９月に入ってもまだまだ暑さが和らぐ気配を見せない中、あたし達フォワードは午前中の訓練を始めるために、ロッカーで訓練服に着替えて外へ。なのはさんとヴィータ副隊長の待つ海上シミュレータの入り口へ急ぐ。そこには教導隊の制服を着たなのはさんと、あたし達と同じ訓練服を着たヴィータ副隊長が待ってた。

「はーい、フォワード集合～！」

「さっさと並べ～」

ヴィータ副隊長に急かされたあたし達はダッシュでなのはさん達の前に整列する。でもなんでかヴィータ副隊長がニマニマしてる。訓練前に、というか普段の仕事中でもそんな表情なんてしないから、今日は一体どんなキッツイ訓練をするんだろうってちょびっと恐い。

「午前の訓練を始める前に、まずはお前らに大事な連絡がある」

「うん。予想されてるプライソン一派の地上本部襲撃に備え、機動六課に協力してくれる新しい仲間が本日より出向してくれるから、まずはその紹介ね。どうぞ～！」

なのはさんが隊舎の方へ振り向いてそう言うと、タタタっと駆けて来る足音が・・・たぶん3人分くらいしてきた。そしてあたし達に姿を見せた新しい仲間に「うえ！？」あたしは心底驚いた。

「陸士１０８部隊から、アリサ・バニングス二等陸尉とギンガ・ナカジマ陸曹。本局技術部から、月村すずか技術官だ」

「アリサ・バニングスよ。よろしく頼むわよ、あんた達♪」

「ギンガ・ナカジマです。みんな、またよろしくね♪」

「月村すずかです。私は前線魔導師じゃないから一緒に戦うことは出来ないけど、みんなと仲良くなりたいです♪」

何せギン姉とすずかさん、そしてアリサさんだったからだ。ギン姉は言うまでもなく、すずかさんはサイボーグとしてのギン姉やあたしのメンテナンスを何度もやってくれてるし、アリサさんはよくお父さんやギン姉に誘われて家に遊びに来てくれてた。

「アリサとギンガは、今日からお前らと一緒に訓練に参加してもらう。お前らよりずっと強ぇからしっかり揉んでもらえ」

「「「「はいっ！」」」」

尊敬してるギン姉、それにアリサさんと一緒に訓練が出来る。そう考えただけでワクワクが止まらないよ。なのはさんは続けて「キャロ。すずかちゃんはブースト魔法のエキスパートだから、一緒に訓

練に参加してもらおうか」そう言って、キャロとすずかさんを見た。
「魔法を教えるなんて初めてだから、ちょっとぎこちないかもしれないけど、よろしくね、キャロ♪」
「あ、はい、よろしくお願いします！」
というわけで、ギン姉とアリサさんとすずかさんを交えての午前の訓練が開始される。まずは準備運動から。いつも通りあたしはティアと、エリオはキャロと組んでストレッチ。あたし達と同じ訓練服を着てるギン姉とアリサさんも、２人で組んでストレッチ中。その間・・・
「午後からはオフィスで仕事だったよね、なのはちゃんとヴィータちゃん」
「うん」「おう」
「じゃあ午後からレイジングハートとグラーフアイゼン、借りても良いかな？　公開意見陳述会はもう来週だし、リミットブレイクモードの最終調整をやっておこうと思うんだ」
「あ、うん。ありがとう、すずかちゃん」
「サンキュー」
そんな会話が聞こえてきた。だからあたしは「リミットブレイクモ

ードってなんだろうね？」ティアにそう訊いてみたんだけど。ティアは「そのまんま限界突破した超火力モードでしょ」なんて、馬鹿なあたしでもすぐに思い至った答えを返してきた。

「じゃなくて、どういう形態で能力なのかな？ってこと」

「知んないわよ、初めて聞いたんだし。気になるなら直接訊いてきなさい」

「あぅ～」

正論を言われたらもう言い返すことも出来ないわけで。しょんぼりしながらストレッチを続けて、「はーい。集合～！」終わったところでなのはさん達の元に集合する。

「それじゃあ初日ということもあって、局員としての先輩たちと軽く戦ってみようか。アリサちゃん、すずかちゃん、ギンガ。お願いね」

「ええ」「うん」「はい！」

「そういうわけだ！　フォワード一同、防護服着用！」

「「「「はい！」」」」

あたし達フォワードと、ギン姉とすずかさんとアリサさんは揃ってバリアジャケットに変身。そして海上シミュレータに移動して、す

でに展開されてる森林フィールドの中で、あたし達はギン姉たちと対峙する。

「４対３のチーム戦。アリサちゃんとすずかちゃんは魔力出力をＡＡ－まで抑えてね。ギンガは制限無しの全力でね」

「はーい♪」「了解！」

「判りました！」

なのはさんからの指示にギン姉たちはそう応じて、あたし達に体を向けてそれぞれデバイスを構えた。一目見るだけでもうベテランって判る隙の無い構え。

「ギンガさん達は強敵よ。特にチーム海鳴のすずかさんとアリサさんは。アリサさんは確か炎熱系。すずかさんはどんな魔法を使うか知ってる、スバル？」

「えっと、確か氷結系魔法の使い手で、キャロと同じフルバックのブースト魔法使い。あと射砲撃にも優れてて、身体能力もかなり高い」

チーム海鳴のメンバーの中で一番付き合いが深いのはすずかさんだ。だからすずかさんがどんな魔導師なのかは、検査時間の合間にそういう話をよくしてたから知ってる。あたしがすずかさんについて知ってることを伝えると、「結構厄介みたいね・・・」ティアは苦笑した。

『とりあえずスバルはギンガさんを1人で抑えて！　あたしとエリオとキャロで、すずかさんとアリサさんを倒すわよ』

『オッケー！』

『『了解です！』』

念話を使ってのティアからの指示にあたし達は応じて、あたしはギン姉を見詰める。あたしの視線に気付いたギン姉がニッと笑った。そして・・・

「それでは、模擬戦・・・開始！」

なのはさんの合図の直後にあたしとエリオは突撃開始。ギン姉は「スバルは私が！」そう言って、こちらの狙い通りに1対1を仕掛けて来てくれた。

「ギン姉！　あたしがどれだけ強くなったか、見せてあげる！」

「ええ！」

右前腕の装着されてる"リボルバーナックル"のカートリッジをロードして、ナックルスピナーを高速回転させる。だけどギン姉は左腕に装着してる"リボルバーナックル"のカートリッジはロードしないまま。

「おおおおおおおッ！」

――リボルバーキャノン――

「はぁぁぁぁぁぁッ！」

――ナックルバンカー――

お互いに攻撃範囲に入ったことで、あたし達は同時に"リボルバーナックル"を繰り出した。

†††Ｓｉｄｅスバル⇒キャロ†††

「我が乞うは、疾風の翼と清銀の盾。若き槍騎士に、駆け抜ける力と城砦の守りを。ダブルブースト・アクセラレイション＆ディフェンスゲイン！」

エリオ君の機動力と防御力を底上げする。アリサさんはミッド式の魔導師でありながらベルカ式の騎士のような戦い方をする。フェイトさんやアリシアさんに保護してもらって、アルフと一緒に遊園地とか動物園とか遊びに連れて行ってもらってた頃、大切な親友――チーム海鳴の話とか聞かせてもらってたし、私たちフォワードは２ヵ月前の海上戦闘の記録データも観たから知ってる。

「（魔力出力の制限があっても、根柢の強さは変わらない。でもだからと言って初めから諦めたくない・・・！）ティアさん！」

――ブーストアップ・バレットパワー――

さらにティアさんの射撃魔法の威力を強化。エリオ君とティアさんからの「ありがとう、キャロ！」を受け取って、私は同じフルバック（熟練度で言えば目も当てられないけど）のすずかさんを見る。

――ソニックムーブ――

「クロスファイア・・・シューット！」

エリオ君の突撃とティアさんの制圧射撃を、「よっしゃ、来なさい！」アリサさんは真っ向から受け切るつもりみたいで堂々とデバイス・"フレイムアイズ"を構えて・・・

「せぇぇーーーい！」

――フレイムウィップ――

"フレイムアイズ"から伸びる炎の鞭でティアさんの射撃魔法を迎撃して、１０発の魔力弾をすべて斬り払った。そしてエリオ君は、「おわっ！？」なんとアリサさんに脚を引っ掛けられてすっ転んじゃった。でもエリオ君は地面に叩き付けられる前に前転することで衝撃を殺して、「・・・く！」今度は高速移動魔法を使わず、その足でアリサさんの元へ駆け寄ってく。

「ストラーダ！」

――スピーアシュナイデン――

エリオ君の魔力付加斬撃。初めの頃はカートリッジロードと魔法陣を展開しての魔力チャージが必要だったけど、今ではカートリッジ1発だけで発動できるようになった。エリオ君は魔力を纏った"ストラーダ"を振るって、アリサさんへ斬撃や突き攻撃を繰り出し続ける。

「へえ。結構やるじゃない。さすがは幼いながらも騎士というわけね。大した槍捌きだわ」

「ありがとうございます！　あ、でもキャロからのブーストのおかげもあるので！」

涼しい顔で"ストラーダ"を弾き続けるアリサさんが、猛攻を繰り返してるエリオ君を褒めた。そんな中で、『キャロ！　錬鉄召喚スタンバイ！　ターゲットはアリサさん！』ティアさんから指示が入った。

「『了解です！』・・・我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖・・・」

いつでも発動できるように詠唱完了。ティアさんはエリオ君に当たらないように魔力弾を撃ち続けて援護。そしてアリサさんは、エリオ君の刺突を半歩分だけ体を反らして躱した後、空いてる左手でエリオ君の胸倉を掴んで、「わわっ？」ポイッと放り捨てた。直後にティアさんの魔力弾を"フレイムアイズ"の斬撃で対処。

『今よ！』

「錬鉄召喚！　アルケミックチェーン！」

ティアさんの合図に従って即座に発動。魔力弾の対処中のアリサさんの足元に展開された魔法陣から８本の鎖を召喚して、アリサさんを捕らえようとした瞬間・・・

「おっと。アリサちゃんの邪魔をしちゃダメだよ♪」

――シュートバレット――

「え・・・？」「んな・・・・！？」

鎖が８発の魔力弾で弾かれちゃった。アリサさんは「ナイスタイミングよ、すずか！」すずかさんの方を見ずにお礼を言って、「私が何もしないと思ったら、大間違いだよ♪」すずかさんは私たちにウィンク。

『エリオ。アリサさんの足止め、何秒くらい出来る？』

『えっと・・・持って５秒くらいでしょうか。手加減してもらってそれなので、もしかするともっと短いかもしれません』

『スバルは・・・、期待できそうにないわね・・・』

スバルさんとギンガさんは、お互いにウイングロードを発動していて空中戦を繰り広げてた。たぶん、こっちの戦闘には参加できないと思う。だから私たち3人で、アリサさんとすずかさんをどうにかしないと。

『すずかさんも同時に攻略するしかないのよね・・・。しょうがない。あたしがアリサさんを足止めするから、その間にエリオとキャロはすずかさんを無力化して』

『え！？　そんな無茶な――』

『最後まで聴いて。真っ正直に騎士相手に騎士をぶつけるのが間違ってるのよ。搦め手で攻めれば、少しは持つだろうしね』

確かにティアさんなら、と思う反面、『一応アリサさんも射砲撃を使えますけど・・・』そっちの心配もある。剣型のアームドデバイスを使って騎士みたいな戦いをしても、アリサさんはミッド式の魔導師。海上戦闘で見せた火炎射撃と砲撃は、射程は短くてもすごい威力だった。

『望むところよ。キャロ。あたしにも防御力とスピードのブーストをお願い』

「『あ、はい！』我が乞うは、疾風の翼と清銀の盾。若き槍騎士に、駆け抜ける力と城砦の守りを。ダブルブースト・アクセラレイション&ディフェンスゲイン！」

『ありがと。じゃあ、すずかさんのことは頼むわよ』

――クロスファイアシュート――

ブーストを掛けたティアさんは、１０発の魔力弾をアリサさんに撃ち込みながら林の奥へと掛けて行った。シールドで魔力弾を防御したアリサさんは私とエリオ君をチラッと見て、「すずか。こっちは任せたわよ」すずかさんにそう言ってティアさんを追って行った。

「う～ん、２対１か～。ちょっと厳しいかもだけど、精いっぱい頑張るよ♪」

「ストラーダ、フォルムツヴァイ・デューゼンフォルム！」

カートリッジをロードした"ストラーダ"が変形する。石突のところに１つ、穂の両側に２つずつの計４つ、ブースターが追加された。そして「行きます！」ブースターを添加したエリオ君がすずかさんへと一直線に突撃して行った。

「おいで、受け止めてあげる！」

すずかさんの周囲に魔力スフィアが４基と展開されたから、「させません！」私も魔力スフィアを２基と展開。

――フローズンバレット――

――シューティング・レイ――

エリオ君に向かって放たれた魔力弾を私の魔力弾で迎撃した。すぐに新しい魔力弾をスタンバイ。そしてエリオ君はすずかさんの元に辿り着いたんだけど、すずかさんはピョンっと横移動してエリオ君の突撃を躱した。

「ライトブースター！」

"ストラーダ"の穂にある右側のブースターだけが点火を続行して、エリオ君はその場で急速旋回。"ストラーダ"の穂がすずかさんに当たるかどうかって言うところで、「おっと」すずかさんはギリギリ後退して避けたけど・・・

「まだです！」

――スピーアアングリフ――

エリオ君は足を地面に付けることなく、穂の後部に付いてるヘッドブースターと、石突部分のリアブースターを再点火して追撃。すずかさんは「っ・・・！」咄嗟にラウンドシールドを展開して防御。

「キャロ！」

「うんっ！」

――シューティング・レイ――

エリオ君の一撃を防いでる最中のすずかさんに向かって４発の魔力弾を撃ち込む。着弾時に爆発を起こして、すずかさんの姿が砂煙に呑まれた。反撃や追撃に備えて、もう一度射撃魔法をスタンバイ。エリオ君もカートリッジの排莢や装填をしてる。

「けほっ、けほっ。あいたた。すごいね～。新人さんだって聞いていたけど、もう軽く武装隊員と並んでるね。４ヵ月ちょっとでここまで強くなれたのは、あなた達の頑張りと、なのはちゃん達の教導の賜物だ」

砂煙の中からすずかさんが出て来た。私とエリオ君は「槍・・・！？」すずかさんが手にしてる物を見て驚いた。フェイトさん達から聞いたことない槍型に変形してるデバイスを、すずかさんは持ってた。

「ちょこっと本気を見せちゃおうかな♪　手加減しないで良いよ、って言われたし。さぁ、エリオ、キャロ。同じ槍使い同士、ブースト魔法使い同士・・・やろうか」

――フローズンバレット――

「「っ！」」

そう言ってすずかさんは、私とエリオ君に魔力弾を４発ずつ放って来て、すずかさん自体もエリオ君へと向かって突撃した。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒ティアナ†††

「「「「ありがとうございました！」」」」

午前の訓練を何とか乗り越え、あたし達はなのはさん達に一礼。そして解散となって、あたし達は着替えるために寮へと向かう。その最中にあたしは「まだチリチリする・・・」腕の肌をスッと撫でる。

「魔法とは言え焼かれる経験は、ちょっとしてトラウマになるわよ・・・」

アリサさんと1対1で戦ったんだけど、まぁ搦め手云々なんて問題じゃなかったわよ。隠れての幻術包囲からの制圧射撃も、火炎斬撃や高速回避なんかで対処されて。魔力出力が制限されていても、それまで過ごしてきた経験が違い過ぎた。

「すずかさんも、なのはさん達にすら秘密だったデバイス形態を見せてきて、もうコテンパンにされてしまいました」

「まさか槍も使うなんて予想外です」

エリオとキャロも、すずかさんに完全敗北したみたい。スバルはと言うと、「あたしは惜しかったかな～、なんて？」って、ギンガさんの方を見た。

「そうね。本当に強くなったわ、スバル」

「えへへ～♪」

「でも。まだまだ粗いわよ、スバル。私が六課に居る間、徹底的に鍛えてあげるから覚悟しなさい♪　って、私も偉そうに言えないけどね。私も、なのはさん達に鍛えてもらう立場だし」

そう言ったギンガさんが頬を上気させる。すごく解るから心の中でうんうん頷いて同意する。なのはさんやヴィータ副隊長からの教導や、隊長陣とのガチ戦闘で経験を積めるのは正直すごい幸運だし。

「そうだな～。ギンガもまだまだ伸びそうだし。クイント准陸尉を取り戻すまでは、あたし達がお前ら2人を鍛えてやるよ」

ヴィータ副隊長にバシッと背中を叩かれたスバルとギンガさんは、「はいっ！」若干涙を浮かべながらも返事した。そしてあたし達は寮の前まで来たんだけど、そこには・・・

「あ・・・！　アリシアさん・・・！」

あたしの所為で骨折、さらに入院してたアリシアさんが居た。それにフェイトさんも一緒。エリオとキャロが「おかえりなさ～い！」アリシアさんの元へ駆け出した。あたしも遅れて、「あの、おかえりなさい！」アリシアさんの元に駆け寄って一礼した。

「うん、ただいま～。退院予定日からちょこっと遅くなったけど、アリシア・テスタロッサ・ハラオウン執務官補。本日より職務に復帰します♪　アリサ、すずか、ギンガもよろしく！」

「ええ」「うん！」「はい！」

「でも、どうしてこんなに退院が遅れたんだ？　リハビリは順調に行ってたんだろ？」

ヴィータ副隊長がそう訊くと、「あ、はは・・・いや～」アリシアさんは明後日の方を向いて苦笑。

「入院中は食っちゃ寝してたから太っちゃったんだって。だから体重を落として元のスタイルに戻るためにダイエットを――」

「にゃぁぁぁぁ！　内緒だって言ったじゃん、フェイト！」

予定日を過ぎての退院の理由を喋ったフェイトさんとポカポカ叩くアリシアさん。同じ女の子としてはまぁ理解できるからしょうがないわよね、うん。そしてあたし達は戻って来てくれたアリシアさんと一緒にエントランスを潜る。

「なのはママ、フェイトママ！」

ロビーの一角にある休憩スペースに居たヴィヴィオが満面の笑みを浮かべて駆け寄って来て、なのはさんが「お待たせ～。お昼ご飯にしようか」ヴィヴィオを抱き上げた。すずかさんとアリサさんがなのはさん達の元に歩み寄って・・・

「この子がヴィヴィオちゃんなんだね。はじめまして、ヴィヴィオちゃん。なのはちゃんとフェイトちゃんの友達で、すずかって言います♪」

「あたしはアリサよ。よろしくね、ヴィヴィオ」

「でねでね。あたしのお姉ちゃんの・・・」

「ギンガです！　よろしくお願いします！」

「よ、よろしくおねがいします！」

それぞれ自己紹介。ギンガさんの敬礼に倣ってヴィヴィオも敬礼返しすると、「可愛い♪」すずかさんがメロメロ。ほのぼのした雰囲気の中、「ん？　ヴィヴィオ。何を見てたの？」フェイトさんがそう訊いた。ヴィヴィオがさっきまで座ってたテーブルを見ると、モニターが1枚と展開されてた。

「えっとね、フェイトママ。なのはママとフェイトママの・・・きょーざいよービデオ？を見てたの！」

とのことで、実際にモニターを見るとなのはさんとフェイトさんの航空機動データが流れてた。ホントに洗練されてて、思わず見惚れちゃうわね。

「なのはママとフェイトママ、どっちがつよいの？」

ヴィヴィオが突然そんなことを訊いた。なのはさんとフェイトさんはお互いを見合わせて小さく苦笑した後、「同じくらいかな～」そう答えた。それからあたし達やギンガさん、すずかさんとアリサさ

んは、訓練で掻いた汗をシャワー室で流す。

「ギンガ、あたしは先に行ってるわね。はやてやルシルと顔合わせしないといけないから」

「私もお先に行くね～♪　ティアナ達はゆっくりでいいから～」

「「「「はい！　お疲れ様でした！」」」」

これから八神部隊長とルシルさんに挨拶をするとのことで、すずかさんとアリサさんはササっとシャワーを済ませて行った。お言葉に甘えてゆっくりと汗を流した後は制服に着替えて、更衣室から出てエリオと合流。

「シャワー中ずっと考えてたんだけど、なのはさんとフェイトさん、どっちが強いんだろうね～」

スバルがそう漏らしたから、「２人が言ってたように同じくらいなんじゃないの？」って、あたしは心にも無いことを言う。だから「本音は？」スバルがニヤニヤとあたしの顔を覗き込んできた。

「そうね～。なのはさんじゃない？」

「だよね！　航空戦技教導隊の教導官で、１０年と飛び続けた歴戦の勇士だし！」

「負傷のブランクで１年ほど飛んでないけど、エースオブエースは

伊達じゃないでしょ」

あたしとスバルは同意見で、あたし達の分隊長であるなのはさんを推す。でも・・・

「いえ！　フェイトさんだって負けてませんよ！　フェイトさんだって手荒な現場でも陣頭に立って解決してきた一線級の魔導師なんですし！」

「魔導師ランクも、なのはさんと同じ空戦Ｓ＋ですよ！」

エリオとキャロは、２人の分隊長であるフェイトさんを推した。それを苦笑いして眺めてたギンガさんにスバル達は詰め寄って・・・

「ギン姉はどう思う！？」「「ギンガさんはどっちと思いますか！？」」

そう訊ねた。ギンガさんは「あ、あー、えっと～・・・」顔を引き攣らせてあたしの方を見てきたから、「何かしら答えた方が良いかと・・・」あたしも苦笑して返す。

「・・・同じ？」

ギンガさんが当たり障りのない答えを出した。まぁスバル達は納得していないようだから「というかさ、六課の誰が一番なのかしらね」話を逸らすために、八神部隊長たちも巻き込むことにした。すると「そ、そうね！　誰が一番強いんだろう！」ギンガさんも乗ってくれた。

「あ、そうなると気になるね・・・。ヴィータ副隊長もシグナム副隊長も強いし・・・」

「八神部隊長もＳＳランクですし・・・」

「アリサさんやすずかさんも入れると、どうなっちゃうんでしょう・・・？」

話題逸らしのために振った話だったけど、「確かに気になるわ・・・」あたしも本気で気になってきた。というわけで・・・

「え？　私らの中で一番強いのは誰かって・・・？」

受け取りカウンターからそれぞれ昼食のトレイを持ってテーブルに着き、すでに食堂に集まってた八神部隊長たちに意を決して訊いてみた。あたし達の知ってる隊長たちの実力なんてほんの僅かだろうし、直に訊くしかない。

八神部隊長たちは顔を見合わせて一斉に「セインテスト調査官」受け取りカウンターで丼の乗ってるトレイを受け取ってるルシルさんを見た。ルシルさんは側に居るフォルセティに微笑みかけて、フォルセティも微笑み返し。そんな2人を見てさらに微笑むアイリさんとすずかさん。すっごいほのぼのしてる。

「あの、さすがにセインテスト調査官は反則と言うか・・・入れるべきじゃないと言うか・・・」

「そうか？　まぁそうやな。・・・そうやったら私以外かな～。私はホンマに弱いよ。そやから空戦やなくて総合やしな」

「でも、総合とは言ってもＳＳとなると、やっぱり単純に考えても魔力はすごいんじゃ・・・」

「う～ん、魔力が大きいからこそ高速運用が出来ひんし、並列処理も苦手なんよ。どうしても大魔力やと衝突するからな。そやから私は戦闘時、立ち止まっての展開からの発射～ってゆう固定砲台役に徹してる。後方支援専門に適性の低い殴り合いスキルなんて無用やし、鍛えたところで意味無いしな」

「えっと・・・セインテスト調査官は衝突してないように見えますけど・・・」

「そうやね、キャロ。けど衝突するんが、ふ・つ・う、なんよ。セインテスト調査官は普通やない、うん！　私も魔導騎士なんて言われてるけど、実際ホンマもんの魔導騎士は、セインテスト調査官のようなオールレンジの騎士のことを指すんやろね」

八神部隊長はそう言って嘆息した。ここで「お待たせ～！」アイリさんとすずかさん、そしてルシルさんとフォルセティがテーブルに着いた。すずかさんに「なんの話をしてるの？」そう訊かれて、あたしは「六課隊長陣＋すずかさんとアリサさんの中で最強は誰なんでしょう？と・・・」そう答えた。

「最強か～。私じゃないのは確かかな～。今挙げられたメンバーの

中だと最弱かも」

「うっそや～。すずかちゃん、絶対に私より強いわ～。すずかちゃん、支援専門とか言うて近接も十分強いし。ほら、中学の卒業式の後、お祝いに集団戦やったやろ。あの時、すずかちゃん、自分にブースト魔法を重ね掛けして無双してたやん」

「思い出した。それであたし負けたわ」

「わたしなんか真っ先だったし・・・」

「あたしもだ・・・」

「「私も・・・」」

アリサさん、アリシアさん、ヴィータ副隊長、さらにはなのはさんとフェイトさんまでがすずかさんに負けたとのこと。それに対してすずかさんは「もう4年も前だし、さすがに現在だともう勝てないよ」そう言って笑うだけだった。

「えっと、ヴィータ副隊長はどうですか？」

「誰が一番か？ってか。強さと言ってもいろんなもんがあるんだろ」

「じゃあ平均的な強さと言いますか・・・」

「なんだそりゃ。そんなん戦闘時の状況、相手との相性によって左

右される。そんな状況下での、お前の言う平均的な強さつうのは要は何でも屋だ。マルチスキルは所詮、対応力と生存力を上げるもんで、直接的な繋がらねぇぞ。つうわけで、1人の人間が出来ることは1つだけだ。そいつが通用しないと強さにはなんねぇよ。なあ、シグナム」

「ああ。それに我々の実力は伯仲していて、トーナメント形式で戦えば、ルールによるだろうがその都度に優勝者は変わるだろう。ゆえに誰が一番強いのか？という問いの答えは、判らない、だ」

それがヴィータ副隊長とシグナム副隊長の答えだった。今度はキャロが「アリサさんはどう考えますか？」って訊く。

「え、あたし？　正直な話、あたしは最強じゃないわね。最強ってことなんだから陸戦・空戦含めてってことでしょ？　あたしも空戦は出来るけど、射程じゃなのはに及ばないし、機動力じゃフェイトに及ばない。だから空戦じゃ弱い。陸戦限定でなら、なのはとフェイトを相手にまぁなんとか勝率6割くらいじゃない？」

アリサさんの答えはそれ。空戦じゃ勝てないけど陸戦なら勝つことも出来る。ヴィータ副隊長たちと同じ考え方ね。

「ねえ、なのは。あの話をしてみたら？」

ここでフェイトさんがなのはさんにそう言って、「あー、うん。そうだね」なのはさんは頷いた。

「みんなはこんな問題を聞いたことないかな。自分より強い相手には勝つためには、自分の方が相手より強くないといけない」

なのはさんの話にあたし達は顔を見合わせて「いいえ」首を横に振った。そもそもそんな矛盾を抱えた問題、成立するわけがない。

「じゃあ問題を出そうか。なのはの話の矛盾と、その意味をよく考えて答えなさい」

フェイトさんからそんな問題が出された。なのはさんの話を思い返してみるけど言葉遊びのような気がしてならない。あたしとスバル、エリオとキャロは昼食を前にうんうん唸り出した。

†††Ｓｉｄｅティアナ⇒エリオ†††

六課隊長陣、そして今日から出向してくれることになったアリサさんとすずかさんの中で、誰が一番強いのか。そんな疑問が生まれた僕たちフォワードは、その答えを知るべく直にフェイトさん達に訊いてみた。

（自分より強い相手には勝つためには、自分の方が相手より強くないといけない・・・）

なのはさんから聞いたこの話の矛盾とその意味を答えよ、って問題が出された僕たちは必死に考えを巡らせるんだけど、さっぱり解らない。

「やっぱり訓練を重ねて、相手より強くなれば良いんじゃないでしょうか」

とりあえずパッと考えついた答えを言ってみた。

「あの、エリオ君。それだと自分より弱い相手に勝っちゃってることになるかな・・・」

「あ・・・！」

キャロからそう言われてハッとした。ティアさんからも「そもそも特訓や訓練で簡単に強くなれたら苦労しないわよ」叱られた。う～ん、考えれば考えるほどにドツボに嵌りそう。

「ん？　ギンガはなんか納得してない感じね。何か言い分ある？」

「うえ！？　いえ、そんな言い分なんて・・・！」

俯いて少し眉を顰めてたギンガさんの様子に、アリサさんが話を振った。ギンガさんは両手をわたわた振って否定するけど、「ん～？」アリサさんがジト～っと見るから、「昔、母が・・・」ギンガさんはそう前置き。

「打撃系のスタイルは、刹那の隙に必倒の一撃を相手に叩き込んで瞬時に終わらせる。そう言っていたんです。ここからは私個人の考えですが、必要なのは魔力出力・射程・速度・防御能力、自分と相手の個人戦力差、そういったもの全て関係なく、狙うのはただ相手

の急所への正確無比な一撃のみ、と」

「なるほど。クイント准陸尉とギンガの意見も1つの答えだ。彼我の強さと弱さに捕らわれ、戦いの本質を見失っては本末転倒だ。己の強さを驕るのはさらに愚かしい」

「だな。的確な攻撃で一撃必倒。エリオ、お前の騎士の端くれだ。戦いに臨むならその結果は勝利のみ。騎士の一撃はそのためにある。忘れんなよ」

シグナム副隊長とヴィータ副隊長から肯定の意見を貰ったギンガさんは「ホッ・・・」と一安心したみたい。そして僕は「はいっ！」ヴィータ副隊長の言葉に力強く応えた。でもフェイトさんとなのはさんからの問題の答えには辿り着けてない。

その後は、フェイトさん達は談笑して、僕たちはうんうん唸り続けた。そして昼食ももう終盤になったところで・・・

「あ・・・！」

キャロが声を上げた。視線が一斉にキャロへと向けられる。僕もキャロを見て、「何か判った？」って訊いてみた。

「たぶんなんだけど・・・。もしかして、私たちの質問の仕方が悪かったんじゃないかな、って。誰が一番強いんじゃなくて・・・」

「あ、なるほど！　そういうことなんだ」

「「？？？」」

キャロに続いてティアさんも何か解ったみたいなんだけど、僕とスバルさんは小首を傾げるばかり。するとティアさんはスバルさんに耳打ちして、「エリオ君」キャロが僕に耳打ちしてくれた。なんで念話じゃないのか判らないけど、これはこれで良いかも。

「あ、そういうことなんだ」

キャロから聞いた話に納得した。そして僕たちはまず「八神部隊長が、なのはさんやフェイトさん達に勝つ方法ってなんですか？」って、最弱だって自分を評した八神部隊長に訊いてみた。

「ん？　ガチンコ以外の広域戦限定なら、少なくとも負けは無いからな。それを念頭に戦うよ」

「はいです！　最大射程と効果範囲は、反則級戦力のセインテスト調査官含めたチーム海鳴一ですからね！」

「あとは集団戦やな。特にチーム八神としての戦闘なら、どんな相手が来ても負けへん自信があるよ」

「無敵です！」

八神部隊長は誇らしそうに笑って、リイン曹長はえっへんと胸を張った。これがなのはさんの問題の答えなんだ、きっと。アリサさん、それに八神部隊長がすでにヒントを教えてくれてた。

――あたしも空戦は出来るけど、射程じゃなのはに及ばないし、機動力じゃフェイトに及ばない。だから空戦じゃ弱い。でも陸戦限定でなら、まぁなんとか勝率６割くらいじゃない？――

――すずかちゃん、自分にブースト魔法を重ね掛けして無双してたやん――

「自分より総合力で勝ってる相手に勝つためには、自分が持っている相手より勝っている部分で勝負する」

「そのために、自分の一番強い部分を磨き上げて、そしてソレを武器に、誰にも負けないって自信と気概で戦いに臨む」

「チームメンバーそれぞれが誇れる強さを持ち寄れば、もっと万全な強さに近くなる」

「ですからなのはさんの言葉は、正しくもありますけど間違っている、と・・・」

――自分より強い相手には勝つためには、自分の方が相手より強くないといけない――

正しいのは、ティアさんの言う相手の総合力による強さと、自分の突出した強さでの勝敗。これなら矛盾を回避できる。現にアリサさんは得意の陸戦で、すずかさんもブースト魔法っていう突出した強みで、実力的に上らしいフェイトさん達に勝ててる。間違っている

のは、なのはさんのあの話の内容のイジワルさ。大事な部分が抜けているから矛盾に悩むことになる。

「「「「「どうでしょうか・・・？」」」」」

黙って聴いてくれてたフェイトさんとなのはさんに正否を問う。

「どうかな？　なのは教導官？」

「うん。じゃ、正解かどうかはこれからの実地で確かめて行こうか♪」

「「「「「え・・・？」」」」」

そう言ってなのはさんはニッコリ笑った。スバルさんが「正解は教えてくれないんですか？」って訊くと・・・

「んん～？　素直に答えを教えてくれると思うのはどうかな～♪明日が楽しみだね～♪」

なのはさんは鼻歌交じりにそう言った。そのご機嫌さがちょっと怖いと言うか、不安にさせられると言うか。明日、僕は無事に訓練を終えられるのかな・・・。ちなみに「セインテスト調査官の倒し方？」もあるかどうかを訊いてみた。

「あるよ。スバルとティアナとキャロ、あとエリオもギリギリ行けるかな」

「「「あるんですか！？」」」

「僕はギリギリ・・・？」

「・・・最強の武器、泣き落としや！」

「「「「・・・・」」」」

八神部隊長直伝のルシルさん攻略法に僕たちは言葉を失った。そして若干肩を落としてるルシルさんを見て、僕はなんだか胸の奥がキュッと苦しくなった。まだ幼い僕には判らない、男としての最大の弱点に負けるルシルさんにちょっと同情。

Ｅｉｐｉｃｌ６公開意見陳述会に向けて～Ｗｅ'ｒｅ　ａｌｌ　ｓｅｔ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

あたしとギンガ、それにすずかが機動六課に出向することになってから４日。当たり前だけど六課に来てからも変わらず"レリック"関連の捜査で、今日まではフェイトやアリシアと組んで外回りもしてた。とは言え、プライソン一派は完全に鳴りを顰めていて、尻尾の"し"すら掴めてない状況なのよね。

（やっぱりはやて達の推測通り、公開意見陳述会に仕掛けて来るのかしら・・・）

まぁたとえ仕掛けて来ようとも地上本部には、シャル率いる騎士隊ロート・ヴィンデを筆頭にした３個騎士隊、それに本局からも武装隊が何隊かが来てくれるって言うし。ここ六課の隊舎にはあたしとすずか、それにシャマル先生やザフィーラ、アイリも残る手筈になってる。それに最悪、ルシルにルールを破らせて働いてもらえば、そうそう陥落することはないわ。

「お、アリサ姐さん！　こんちはっす！・・・こんな外で何やってんすか？」

隊舎前のターミナルから海をのほほ～んと眺めてると、「あら、ヴァイス」が声を掛けてきた。ヴァイスが姐さん呼びするのは世界広

しと言えど、あたしとシグナムだけでしょうね。最初は嫌だったけど、もう慣れちゃったわよ。

「午後から隊長陣だけの、デバイスのリミットブレイクモードの運用試験戦があるのよ。それまでの時間潰しの日向ぼっこ」

「お、良いっすね。まだあったかい気温ですし。俺も時たまやるっすよ」

そう言って笑うヴァイスに、「なんか慌てたみたいだけど、なんかあった？」そう訊いてみる。結構慌てて隊舎から出て来たようだし。

「妹がこっち来るって連絡がお袋からあって・・・！」

「ラグナが？なんでまた・・・」

ラグナ・グランセニック。名字の通りヴァイスの妹で、人質事件以降、あたしも昔は通信でよく顔を合わせたりしてた。ラグナが凶悪事件の人質になったことで動揺したヴァイスは、彼女を誤射するっていう事故を起こした。非殺傷設定とはいえ、柔らかい眼球への直撃ってことで失明しかけたけど、偶然現場に同行していたルシルが治癒魔法で完治させた。

「いや、まぁ個人的な理由なんすけどね。お袋に頼んだんですけど、どういうわけかラグナが代わりに来るようで。っと、そうだ、アリサ姐さんも一緒にどうです？　ラグナも久しぶりに会ってみたいと思いますし。あ、お暇でしたら、ですが・・・」

「そうね。じゃあご一緒しようかしら」

ヴァイスからのお誘い。兄妹水入らずでの面会を邪魔しちゃ悪いもするのだけど。でも久しぶりだし、挨拶くらいしないと悪いわよね。というわけで、ヴァイスと一緒にラグナを迎えに行くことになった。

「そういやラグナは今年でいくつになるんだっけ？」

「ついこないだ１２歳になったばかりっすね」

「となると、初めて会ってから６年というわけね。しかも１２歳って、結構難しい年頃じゃない？」

「そうっすね～・・・。俺にはアイツを誤射したっつう引け目があるんで、正直そんなに強気に出られねぇんですけど。ちょこ～っと歳相応に生意気になってきましてね。やれ掃除しろだの、やれ不潔だの、やれ早く彼女作れだの、口うるさくなっちまいましたね～」

そう言って嘆息するヴァイス。けどそれは「お兄ちゃんのことを大事に思ってくれてる証拠じゃない」と思うわけよ。肘でヴァイスの脇腹を小突きながら、「大切にしてあげないなさいよ」そう忠告してあげた。

「そうは言っても、プライベートにまでツッコまれるのはちっと勘弁してほしいっすよ」

「頑張れ、お兄ちゃん」

「っ！　う、うっす！　やべぇ、可愛い・・・」

「なんか言った？」

「いえ、なんでも！」

そんな話をしながらここターミナルでラグナが来るのを待つ。ラグナはそう待つことなく、タクシーに乗って現れた。料金はすでに払っているようで、リアドアが開いてすぐに大きなバッグの持ち手を両手で持ったラグナが降りてきた。

「ありがとうございました～。・・・おに――って、アリサさん！　あ、お、お久しぶりです！」

あたしに気付いたラグナは、持ってたバッグをポイッと捨ててあたしの前まで駆け寄って来た。んで、ヴァイスは「おい！」地面にポイされたバッグに駆け寄って拾い上げた。ソレを受け取るのが個人的な理由ってわけね。

「ええ、久しぶりね、ラグナ。少し見ない間にまた可愛くなっちゃって」

「い、いえ、そんな・・・。アリサさんも一段とお綺麗になって、です」

照れ笑いを浮かべながらもあたしの容姿を褒めてくれたラグナに「ありがと♪」お礼を言いつつ頭を撫でる。ラグナの左目は、あの日から変わらずきちんと光を灯している。ま、ルシルの最高の治癒魔法による治療だし、当然と言えば当然かしら。ラグナは恥ずかしそうにあたしから目を逸らして、「そうだ、お兄ちゃん。彼女できた？」突然そんなことを言い出した。

「んな！？」

だからヴァイスも素っ頓狂な声を上げる羽目に。あたしは「ほっほ～」覗き込むようにヴァイスの顔を見上げる。ヴァイスは「ち、違っ、違いますって！」あたしから一歩二歩と後退した。

「機動六課は他の部隊に比べて、年下の若い女性局員が多いから、彼女も出来やすいかもって言ってたでしょ？」

「うお！？　おい、コラ、ラグナ！　お前、急に何を言い出すんだ！」

「なるほど～」

「ち、違うんすよ！　最初はまぁそんな邪な考えも持ってましたけど！　だけど今は、ちゃんと1人の六課隊員として誇りを持って職務に励んでいます！」

バシッと胸を拳で打って釈明したヴァイスを横目に、「お兄ちゃん、２４歳にもなって彼女いないなんて、妹としては心配なの」ラグナはそう言って肩を竦めた。

「お前は俺のお袋よ、大きなお世話だ！　ったく」

「あ、そうだ、アリサさん！　彼氏さんが居なかったらですけど、ウチの兄はどうですか？　顔はまぁ悪くない方ですし、公務員ですし。あ、アリサさんほどは偉くないしお給料も低いでしょうけど。そんなに悪い物件じゃないかとおも――」

ラグナがあたしの両手を取って、兄であるヴァイスをあたしの恋人にって推してきた。あたしが反応するより早くヴァイスが「おまっ！？　マジでいい加減にしとけ！」そう言って、ラグナの頭頂部を鷲掴みして、彼女をあたしから引き離した。

「マジですんません、アリサ姐さん！　ラグナが馬鹿な事を言って！　気にしないでください！」

「お兄ちゃんって、タイプの女の人に対しては奥手でしょ？　わたし、あの事故からよそよそしくなったお兄ちゃんと、昔みたいに仲の良い兄妹に戻りたくてずっと見てたんだよ。そうしたら、お兄ちゃんのヘタレっぷりがまぁ明らかになってきて。好きな人に告白することなくただ見てたら、他の男の人に先を越されちゃう～、なんてことも」

「っ！？　な、ななな、なんでお前、そんな事まで知って・・・！？」

驚きと妹にまでそんな事を知られてた恐怖でヴァイスは顔を青褪めさせた。確かにこれは恐ろしいわ。たぶんだけど、ラグナには協力

者が居るわね。

「それで・・・アリサさんは兄の事、どう思います？」

「聴けよ！」

「あはは。う～ん、そうね～・・・、以前シグナムも言ってたけど、確かにヴァイスの見た目は悪くは無いわね。初見時はまぁチャラそうで陽気なお兄ちゃんタイプの、付き合うなら友達までくらいだよね～的だけど。でも付き合いが長いと、意外に律義な良い男だって判ってくるし」

あたしがヴァイスに対する心証を言うと、ヴァイスは目を点に、ラグナは興奮気味に目を爛々と輝かせていた。ラグナが「じゃあ！」あたしに詰め寄って来た。

「そうね。あたしのヴァイスに対する好感度は結構高いわよ。ま、彼氏彼女の関係にはなれないけど」

「えええ～！」「そ・・・っすか」

共に残念がるラグナとヴァイス。ラグナが「お兄ちゃんの彼女になってくださいよ～」あたしの右手を両手で持ってブンブン振ってくる。でもあたしはまだ１９歳の女の子なのよ。もうちょっと独り身で居たいわけ。

（まぁ、なのはとはやて、それにフェイトとアリシアは、ヴィヴィ

オやフォルセティ、エリオとキャロっていう子持ちみたいなことになっちゃってるけどさ・・・）

あれじゃ結婚せずに一生終わりそうよね。すでに子持ちなんだから。ちなみにルシル争奪戦に関しては、はやてのフォルセティを養子として引き取りってところを突いて、シャルとトリシュはルシルと結婚して実子を生もうとしてる。だけど、ありゃ苦労するわね。ルシルにその気がないんだし。

「というか、あたしなんかよりヴァイスにお似合いな恋人候補が居るわよ♪」

「え？」

「そうなんですか！？」

「ええ。しかもヴァイスとその娘は結構いい雰囲気なのよ。話も合うみたいだし、恋人関係になるならそっちの娘との方が良いと思うわ」

嘘は言ってないわよ。六課の女性隊員の中にはヴァイスとものすごい親しい娘が居る。けどヴァイスは「そんな娘、居たっけか？」腕を組んで唸る始末。それだけであの娘を女の子として見ていないことが理解できた。

「本当ですか！？　ちょっとお兄ちゃん！　そんな人が居るならちゃんと言ってよ、もぉ。お父さんとお母さんも、早く孫が見たいっ

て言ってるんだし」

「ラグナに何を言ってんだ、あの親父とお袋は！」

うがーっと頭を両手で掻き毟るヴァイスにはちょこっと同情。ラグナがあたしに向いて「そのご相手は一体・・・？」ヴァイスの彼女候補が誰なのか訊いてきた。

「ロングアーチ０３・・・」

「０３・・・？　ん！？　まさか・・・！」

「アルト・クラエッタよ！」

バシッとその名前を教えた。ラグナは「そうか、アルトさんが居た・・・！」目からうろこという感じで納得したようだけど、「いやいやいや！　ねえっすよ！」ヴァイスは即拒否ってきた。

「お兄ちゃん！　アルトさんとすっごく仲が良いじゃない！　彼女になってもらおうよ！」

「ねえよ！　確かにアイツとは話が合うし面白ぇし、一緒に居て気を使うこともねぇから楽だぜ？　でもよ、そこに恋愛感情なんてねぇよマジで。アルトは俺にとっちゃ後輩以外の何者でもねぇよ」

あたしとラグナは顔を見合わせて「ハッ」ヴァイスを鼻で笑った、解ってない、判ってないわね、ヴァイス。そういうのが大事なのよ、

恋愛にはね。アルトだってヴァイスと同じようなことを思ってるかもしれないし、あとはキッカケさえがあればコロコロ恋に落ちてゆくわよ。

「ラグナ。ファイトよ？」

「はいっ♪」

「勘弁してくださいよ・・・」

ガックリうなだれるヴァイス。でもアルトは本当に良い娘だから、彼女を見る目をちょこっと変えちゃえばきっと、女の子として好きになっちゃうこと間違いなし。

「あ、そうだ、お兄ちゃん、アリサさん。ここの部隊にはルシルさんが居るって聞いたんだけど・・・」

ラグナが話題を変えて、ルシルが六課に居るかどうか確認してきたから、「ルシルなら確かに居るぜ」ヴァイスが答えた。５～６年前くらいは、ヴァイスもルシルのことをセインテスト査察官って呼んでたけど、ルシルから訂正を食らって今では友達として、ルシル呼び、だ。

「本当！？」

「どうしたの？　ルシルに何か用？」

「あ、はい。近くに居らっしゃるのなら、お礼をしておこうかと・・・。ルシルさんともう一度会って、お礼を伝える。それが今日の目的の1つでもあるんです。お母さんに言って代わってもらったくらいですし」

そう言って照れ笑いを浮かべるラグナ。ラグナやヴァイスにとってもルシルは恩人だからね。そんなラグナの表情を見て、「ルシルだけはやめとけ。勝ち目はねぇから」ヴァイスはそう言ってラグナの肩を優しく叩いた。するとラグナは顔を真っ赤にして、「ち、違うもん！」否定した。

「ライバルは全員すげぇ強ぇぞ。１０年来の幼馴染の八神部隊長と教会騎士のシャルさん。同じく教会騎士の騎士トリシュタン。シャルさんと騎士トリシュタンは良家のお嬢さまで、八神部隊長は同じ家に住んでたこともあるって言うしな～。あー、ホント羨ましいぜ」

「だから違うもん！　た、確かにルシルさんのことは格好良いな～、こうゆう人がお兄ちゃんなら友達に自慢できるな～、って思ってるけど！」

「え？　今、俺・・・ディスられた？」

「だからお兄ちゃんが思ってるような好きじゃないもん！」

「へいへい。判ったからそんなにキレんなよ」

お手上げポーズをしたヴァイスに対して「もう！」ラグナはプンプ

ン頬を膨らませる。とりあえず「ルシルに連絡してみるわ」ラグナと面会できるように取り図ろうとした時・・・

「きゃぁぁぁぁ♪」

「わぁぁ～～い♪」

どこからともなくそんな歓声が聞こえてきて、声の出所である寮のある方へと目をやる。その直後・・・

「ひゃぁぁぁぁ♪」「ゴー、ゴー！」

「アレクサンドロス・・・！」

隊舎の陰から巨大な黒馬アレクサンドロスが飛び出してきた。鞍に跨ってるのは主であるクラリス、それにヴィヴィオとフォルセティ。子供2人は手綱を握るクラリスの前に座っていて、満面の笑顔で歓声を上げてるわ。その後ろにはアリシア、それに狼形態のザフィーラが駆けて来てた。

「あ、ラグナだ」

あたし達のところに来て、クラリスがラグナに気付いたことでアレクサンドロスを止めて地面に降り立った。ラグナは「クラリスさん！？」も居るとは思わなかったようで、すごく驚いて見せた。

「ん。久しぶり。大きくなったね、ラグナ」

「はいっ。お久しぶりです！　その節は本当にお世話になりました。わたしも、友達も、みんな元気でやってます！」

「うん、それは良かった」

クラリスも、あたしと一緒に人質事件を起こした犯人の逮捕に参加した。犯人の逮捕数で言えばクラリスの方が多い。というより重傷者を出した数ね。クラリスの攻撃を受けた犯人はもれなくどこか骨折していたし。

「知らない子が居る」

遅れてやって来たアリシアがラグナを見てそう言ったから、ヴァイスが「アリシアさん、ザフィーラの旦那。コイツは俺の妹で・・・」そう前置きして、ラグナの頭の上に手を置いた。

「あ、はじめまして、ラグナ・グランセニックです！　兄がいつもお世話になっています」

「そうなんだ。わたし、アリシア・テスタロッサ・ハラオウン。で、こっちの狼はザフィーラ。うちの部隊長の使い魔ね」

「使い魔ではない、守護獣だ」

「っ！　喋れるんだ・・・さすが使い、じゃなかった、守護獣さん。あ、よろしくお願いします、アリシアさん、ザフィーラさん」

アリシアとザフィーラにお辞儀したラグナが顔を上げた直後、「っ！？」目を丸くした。その視線の先には、アレクサンドロスの鞍の上に座りっぱなしのヴィヴィオとフォルセティ。気付くの今さら？と思ったけど、アレクサンドロスがクラリスを乗せるためにか自分の意思で伏せたことで、ラグナの身長でも２人が見えるようになったからなのね。

「え？　あれ？　ルシルさん？　ちっさ！　え、小さい！　変身魔法か何かですか！？」

事情を知らない人がフォルセティを見ればそういう反応をしてもおかしくはないわね。あたし達は苦笑して、「その子はフォルセティ。一応、ルシルの義理の息子になるわね」そう紹介する。

「義理の息子ですか！？」

「事情が深すぎて、どういう経緯でそうなったのかは説明できないのよ。とりあえず、ルシルは一児の父親になったと思ってればいいわ」

「はあ。なんか・・・ショックかも・・・」

ボソッと何か呟いたラグナ。聞き取れなかったけど、おそらく愚痴っぽいことでしょうね。とにかく、「そっちの金髪の子がヴィヴィオね」と紹介する。

「フォルセティです」

「ヴィヴィオです」

「「はじめまして」」

「あ、はじめまして、ラグナって言います」

ラグナ達の自己紹介も終わって、「それじゃラグナ。またね」クラリスはアレクサンドロスの鞍に跨ると「Ｌｏｓ　！」合図を出して、アレクサンドロスを再び走らせた。ラグナとヴィヴィオとフォルセティは手を振り合って、そして「またね～♪」アリシアとザフィーラも後に続いて行った。

「・・・じゃあルシルを呼び出してみるわ」

「その必要はないよ」

後ろから声がして、振り向いてみればそこには「ルシル」が居た。ラグナは表情を輝かせて、「お久しぶりです、ルシルさん！」ルシルに駆け寄った。

「久しぶり、ラグナ。元気そうで何よりだ」

「はい♪　あの、ルシルさんもお元気そうで良かったです♪」

ルシルとラグナは挨拶をし合って、２人ともニコッと笑った。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒すずか†††

聖王教会騎士団から騎士が週一で機動六課に派遣されるっていうシステムを知ったのはついさっき。今日やって来たのは、騎兵騎士におけるＡ級１位のクラリスちゃん。アイリと同じように真っ白な髪は肩に掛かる程度のセミロング。瞳の色は綺麗なアップルグリーン。派遣される騎士はどうやらはやてちゃん達と縁のある騎士に限られてるようで、シャルちゃん、ルミナちゃん、トリシュちゃん、クラリスちゃんの計４人がローテーションでやって来る。その全員が陸戦・空戦Ｓランク越えを果たしてるからすっごく強い。

「それじゃあ午後からは何して遊ぼうか？　私は召喚士でもあるから、そっち方面で遊ぶ？とりあえず、私が召喚できるのは馬のアレクサンドロス、亀のアスピドケロン、鳥のステュムパリデス、鶏のコカトリス、鷲獅子のグリフォン、あと飛竜のワイバーンが居るんだけど。どれかを召喚しようか」

「お馬さんに乗りたい！」

クラリスちゃんがここ六課に来るために使ったのは公共交通機関じゃなく、まさかの召喚獣の１頭である巨大な黒馬アレクサンドロスだった。それを見ていたヴィヴィオは驚いて、フォルセティは大興奮。やっぱり男の子だね～。

そしてお昼休憩になって、午後からの職務時間中に何して遊ぶ？って、クラリスちゃんが２人に訊いたところで、フォルセティの今の発言だね。お昼休憩はなのはちゃん達ママとお話したり遊べたり出

来るけど、午後からのお仕事が始まっちゃうと何も出来ないから。

「アレクサンドロスに乗りたいの？」

「うんっ！　ヴィヴィオもいっしょに乗ろうよ！」

「ぅえ？　あぅ・・・わたしは・・・」

表情を輝かせてるフォルセティとは対照的に、ヴィヴィオは少しばかり渋ってる。フェイトちゃんが「危ないことはダメだよ？」２人に言うけど、フォルセティだけは「パパ、ママ、ダメ？」納得できないみたいで、パパのルシル君とママのはやてちゃんに小首を傾げながら訊いた。

「うん、ええよ～　」

はやてちゃんは目をハートにして即ＯＫを出した。ルシル君も「やんちゃで良い。男の子だからな」ＯＫを出して、フォルセティの頭を撫でた。はやてちゃんとルシル君の間に座るフォルセティは「やった～　」万歳して喜んで、その様子にはやてちゃん達は微笑んでる。本当の親子だな～って思う。

「ヴィヴィオも一緒に乗ろ？」

「でも・・・」

「だいじょーぶ。ボクが付いてるから」

「・・・うん。フォルセティがいっしょなら・・・やる」

なんて、まるで恋人のようなやり取りをやっちゃうヴィヴィオとフォルセティ。プライソンの研究所で生まれて、６歳（推定だけど・・・）までそこで育てられたみたいだし（でも母親役が誰だったのかは忘れてるよう）、恋人・・・というよりは、とっても仲の良い兄妹の方が正しいのかな。

「ええー！？　ダメダメ、フェイトママは許しません！」

でもやっぱりフェイトちゃんは却下。となれば、「なのはもそうだよね！？」ヴィヴィオのもう１人のママのなのはちゃんの意見が重要になってくる。フェイトちゃんの必死な確認になのはちゃんは・・・

「う～ん。ヴィヴィオがやりたいなら良いんじゃないかな？」

少し悩んだ後にＯＫを出した。フェイトちゃんの顔がポカーンとなる。その様子に、「た・だ・し」なのはちゃんはそう前置きした。

「クラリスちゃんの言うことは必ず聴く。浮かれて危ないことはしない。それが守れるなら、だよ？　フォルセティ、守れるかな？　あなたに、ヴィヴィオをお願いするからね」

「はいっ！　ヴィヴィオは、ぼくは守ります！」

ビシッと右手を挙手して宣誓したフォルセティ。ヴィヴィオは嬉しそうにはにかんで見せた。なんかもう、２人を見てるだけでこう・・・胸がキュンっとする。

「うん。じゃあいいよ。クラリスちゃん、２人をお願いね」

「ん。確かにお願いされた。ヴィヴィオもフォルセティも、聖王教会にとってすごく重要な存在だから。もし何かがあったらリアルに私の首が飛ぶ」

クラリスちゃんはそう言いながら敬礼した。ヴィヴィオとフォルセティの出生の秘密はもう聞いてる。聖王オリヴィエと魔神オーディンのクローンだっていう２人は確かに、聖王教会にとって特別な存在なのかもしれない。

「なのは～」

「心配しなくても大丈夫だよ、フェイトちゃん。フォルセティもしっかりしてるし、ヴィヴィオだって・・・」

「でもぉ～」

「まぁフェイトの心配性は今に始まったことじゃないし。いいよ、わたしも見てるから」

「我も居よう」

なのはちゃんの撃墜事件からさらに心配性度が上がったフェイトちゃん。気持ちは解るけど、過保護もどうかと思っちゃったりする。アリシアちゃんがしょうがないって風にそう言って、ザフィーラもいつも通りに子守りをすることを伝えた。

「ね？　フェイトちゃん。ここはヴィヴィオ達を信じてあげよう？」

「む～・・・、うん。ヴィヴィオ、フォルセティ。ほんと～に、危ないことはしちゃダメだからね」

「「はーい！」」

というわけで、なのはちゃん達が午後のお仕事をしている間は、クラリスちゃんとザフィーラ、それに午後から待機非番のアリシアちゃんが、ヴィヴィオとフォルセティの子守りをすることになった。そしてお昼休憩があとちょっとで終わるという頃・・・

「よ～し！　ヴィヴィオ、フォルセティ、行こうか！」

「「はーい！」」

クラリスちゃんがヴィヴィオとフォルセティ、それにアリシアちゃんとザフィーラを伴って寮から出て行くのに合わせて、私も一緒に寮を出る。クラリスちゃん達は寮の前に集まって・・・

「汝は遥かなる陸を疾駆する者。地を揺るがすは馬蹄、空を震わすは轟鳴。行く手は苛烈なる戦火、過ぎ去るは打ち斃せし亡者の群れ。

汝が主の命に応じ、いざ参れ！　アレクサンドロス！」

召喚魔法を発動。召喚魔法陣から大きな黒い馬アレクサンドロスが出現。フォルセティは「おっきい～！」大興奮。ヴィヴィオは「かまれない・・・？」少し怯えてフォルセティの後ろに隠れてる。

「大丈夫。アレクサンドロスはとっても優しい子だから。ほら、撫でてみて」

クラリスちゃんがアレクサンドロスの首を優しく撫でると、気持ち良いのか鼻を大きく伸ばした。フォルセティがヴィヴィオの手を引いてアレクサンドロスに近付いて行くと、「よいしょっ」クラリスちゃんが2人を同時に抱き上げた。そしてフォルセティは興味進々に撫でて、ヴィヴィオもそろそろと優しく撫でた。

「じゃあ次。乗馬体験～」

クラリスちゃんがヴィヴィオとフォルセティを降ろして、アレクサンドロスの背中をポンポン叩くと、アレクサンドロスが地面に伏せた。まずは「わくわくしてるフォルセティから乗せようか」って、クラリスちゃんはフォルセティを抱え上げてアレクサンドロスの鞍に乗せた。

「おお・・・！　すごい！　ヴィヴィオも早く！」

「はい、じゃあヴィヴィオ」

次はヴィヴィオを抱え上げるとフォルセティの前に後ろに座らせて、
「最後は私っと」クラリスちゃんが一番後ろに座った。そして軽く
アレクサンドロスを蹴ると、アレクサンドロスは立ち上がった。

「おお！」「ひゃあ！」

「さぁ、軽く走ってみようか」

「ヴィヴィオ、フォルセティ。しっかり手摺りを持ってね」

歩き出したアレクサンドロスを追い掛けるアリシアちゃんがそう言
うと、2人は鞍に設けられてる手摺に掴まった。アリシアちゃんと
ザフィーラも一緒だから、安心してここから離れられるね。
そして私は改めてメンテナンスルームへ。六課の隊舎は古い建物だ
っていうけど、シャーリーの拘りなのか、メンテナンスルームの設
備だけは一級品だったりする。だからなのはちゃん達のデバイスの
調整も、何も問題なくサクッと出来る。

「お待たせ、みんな」

メンテナンスルームの一角に並んでるポッド、その6基中5基の中
に浮いているデバイスに声を掛ける。そのどれもが待機モード。操
作パネルを操作して、ポッドの中から6基のデバイスを取り出す。

（決戦予定日までもう少し。間に合って良かった・・・）

リミットブレイクモードは今から6年前から構想して、少しずつ時

間を掛けて作り上げてきた。ドクターやシスターズのみんなとも協力したから、危険性なども無くオールグリーン。あとは今日、これからの試験運用戦闘で使いこなせるかどうかの確認だけ。

「こんなに遅くなっちゃって、みんなには申し訳ないな・・・」

デバイスのフレームの強化から魔力伝導率エトセトラ。死線を潜り抜けないといけないような一線級の魔導師なみんなのデバイスだから、ここまで掛かっちゃった。でもその期間に見合うだけのスペックは確保できたと思う。

そんな新生デバイスをケースの中へと移して、みんなの待つ海上シミュレータへと持って行くためにメンテナンスルームを出ると、「ルシル君・・・」が居た。特務調査官として働くことになったルシル君は、残念ながら六課の一員として戦闘に参加することは出来ない。だけど・・・

「すずか、君に頼みがある」

ルシル君は普段通りの口調でそう言って、私に左手を差し出した。手の平に乗っているのは1個の指環。待機モードの"エヴェストルム・アルタ"だ。"エヴェストルム"からルシル君の顔へと視線を戻して、「何をすれば良いかな？」そう訊ねる。

「メンテナンスをお願いしたいんだ。対レーゼフェア戦に向けて」

「っ！　レーゼフェアさん・・・」

１０年も前に知り合った、ケーキ大好きなお姉さん。でもその正体が、ルシル君のご家族を殺した人型の兵器だったって知った時のショックは今でも忘れない。

「やっぱり・・・出て来ると思う？」

「おそらく、としか言えないけどな。正直、特務調査官である俺が戦場に出ることは許されない。しかしアイツが出て来たらルールを破ってでも戦うしかない。そのために万全を期す。頼めるだろうか・・・？」

私はルシル君の手の平から"エヴェストルム"を取って、「もちろん♪」笑顔で応える。ルシル君も「ありがとう」微笑みを返してくれた。ルシル君と一緒にエントランスロビーのところまで行って、私は外へ、ルシル君はオフィスへ向かう・・・その前に・・・。

「ルシル君」

「ん？」

「左目の視力と固有スキル、取り戻せると良いね・・・」

レーゼフェアさんに奪われたと思われるルシル君の大切なもの。レーゼフェアさんを救う、つまり斃せばルシル君の左目の視力も複製スキルも取り戻せるはず。ルシル君は私に振り向いて「もちろん、取り戻すさ」自信ありげにニッと笑って、私に小さく手を振ってくれた。私も手を振り返してから外に出て、海上シミュレータへ向か

った。

「なのはママ～、フェイトママ～！」

着いたところで、アレクサンドロスから降りたばかりのヴィヴィオが、なのはちゃんとフェイトちゃんの元へと駆け寄ってく後ろ姿を見た。

「走ると危ないよ～」

「転ばないように気を付けてね～」

なのはちゃんとフェイトちゃんから注意を受けていながらも「うん！・・・ぅあ！？」残念ながらヴィヴィオは派手に転んじゃった。

私とフェイトちゃんと、アレクサンドロスの側に居たフォルセティが「ヴィヴィオ！」に駆け寄ろうとしたんだけど・・・

「待って、フェイトちゃん、すずかちゃん、フォルセティ！」

なのはちゃんに制止させられたから、私たちはその場にピタッと止まる。

「大丈夫。草がクッションになったし、綺麗な転び方だったから、怪我はしてないよ。・・・ヴィヴィオ、大丈夫？」

なのはちゃんは片膝立ちして優しく声を掛けると、ヴィヴィオは顔を上げて「ママ・・・」今にも泣きそうな声でなのはちゃんを呼ん

だ。

「怪我してないよね。なのはママとフェイトママはここに居るから、自分の力で、ひとりで頑張って立ってみようか」

「ママ・・・」

「おいで」

なのはちゃんの教育方針に口は出せないけど、これはちょっと厳し過ぎる気もする。だから「ダメだよ。ヴィヴィオはまだ小さいんだから」フェイトちゃんがそう言って、ヴィヴィオの方に駆け寄って行くと、「ヴィヴィオ！」フォルセティも続いた。そしてフェイトちゃんは「大丈夫？」ヴィヴィオを抱え上げた。

「うん・・・」

「気を付けてね。ヴィヴィオが怪我をしちゃうと、なのはママもフェイトママも悲しくて泣いちゃうから」

「ごめんなさい」

「ヴィヴィオ、平気？」

「うん。ありがとう、フォルセティ」

「うんっ」

フェイトちゃん達がそう話してるところで、「もう。フェイトママ、ちょっと甘いよ」なのはちゃんが加わった。甘いって言われたフェイトちゃんは「なのはママが厳し過ぎるんです」プイッとそっぽを向いちゃった。

「ヴィヴィオ。今度は自分で立ってみようね」

「うん」

とここで、隊舎から午後の始業開始を告げるベルの音が聞こえて来たから、クラリスちゃんとヴィヴィオ達は一旦お別れ。もう一度アレクサンドロスの鞍の上に跨って、海上シミュレータから出て行った。クラリスちゃん達を見送った後・・・

「それじゃあ早速始めようか。リミットブレイクモードの運用試験戦を」

私はケースを開けて、なのはちゃん達にデバイスを返していった。それからなのはちゃん達はリミットブレイクモードを用いた戦闘を重ねて、私はその経過を見たり、なのはちゃん達からの話を聴いたりして、デバイスの調整をその都度に繰り返していった。3時間ほどで全基の調整を終えることが出来て、機動六課隊長陣の準備は万端になった。だから・・・

「いつでも来い！」

Ｅｉｐｉｃｌ７さぁ世界に喧嘩を売りに行こうか～　Ｐｒｅｖｉｏｕｓ　Ｎｉｇｈｔ～

ミッドチルダ東部にある広大な森林地区。その奥にはプライソンの本拠地の研究所がある。なんてことはない洞窟を入り口として、その奥には人工的に造られた空間が広がっている。施設は蟻の巣の如く地下へと伸びており、彼の製作した兵器の生産施設、格納庫、居住区などなどが幾つもある。そんな研究所の居住区の通路を、複数人の少女が歩いていた。

「いよいよっスね～。もうずっとワクワクしっぱなしで、早く暴れたいっスよ♪」

特徴的な語尾を使うウェンディ。

「おう！　廃棄都市区画で下手を打ったからな！」

言葉遣いが少々荒い、ボーイッシュなノーヴェ。

「うん。雪辱を果たす」

茶色い長髪をうなじ辺りで大きなリボンで結ったディエチ。

「そうね～。私の方も、レリックもプフェルトナーも回収できなかったし。今度こそはしっかりとこなさないとね♪」

薄紫色の長髪をポニーテールにしたクイント。彼女ら4人はプライソン一派であるチーム・シコラクスのメンバーだ。が、彼女たちの後ろにさらに3人の少女が居た。

「セッテ、オットー、ディード。今回の任務には、あなた達も出ることになると思うから」

「問題ありません」

ピンク色の長髪、額を護るヘッドギアを装着したセッテが、感情の薄い声でそう返す。

「僕も問題ありません。いつでも出撃できます」

バトルスーツの上に裾の短いショートジャケットとズボン、さらに起伏の乏しい体のラインと言うことでノーヴェ以上に見た目が少年のようだが、他のメンバーと変わらず少女であるオットーが続く。

「素体フレームおよび武装の調整も、昨日の内にガンマによって調整されましたから」

オットーと同じで目付きが少々ジトっとした、栗色の長髪をしたディードがそう締めた。彼女たちは先の廃棄都市区画戦時には、本格戦闘が出来るような状態ではない、未調整の体であったために参加できなかった。しかし明日12日、地上本部にて行われる公開意見陳述会の襲撃には間に合った。

「これでようやく、真のチーム・シコラクスになったわけっスね♪」

「これならどんな相手が来ても負けない」

「おう。セッテ、オットー、ディード、お前らも気張って行けよ」

「「はい。ノーヴェ姉様」」

ノーヴェがオットーとディードの背中を叩き、次いでセッテの背中を叩こうとしたが、彼女はスッと1歩分前進したことでノーヴェの1発を躱した。

「なんだよ・・・」

「私は仮にもあなたの姉。叩かれる謂れはない」

「気合を入れてやってんじゃねぇかよ。判んねぇかな～、このやり取りの良さがよ」

良かれと思っての行動を否定されたノーヴェは文句を言うと、「そうっスよ、セッテ。気合い注入は重要っスよ！」ウェンディが人差し指を立てて胸を張った。ゆえにノーヴェは「ほらな！」バシッとウェンディの背中に平手を1発。

「あいたー！？　ちょっ、オットーやディードに比べて強すぎないっスか、ノーヴェ！？」

「そりゃまぁ、お前は肯定派なんだからいくだろ？　強くさ」

「うへ～。同じくらいが良かったっス・・・」

背中を擦りながら今度はウェンディが文句を言う。ノーヴェは構わずに「んじゃディエチも行っとくか！」次のターゲットをロックオン。ディエチは「あたしはいいよ」そう言って、背中を護るかのように体の向きを変えた。

「まぁそう言わずに、ディエチも1発貰うといいっスよ♪」

しかしウェンディがディエチの腰回りに抱きついてクルッと反転。ディエチの背中がノーヴェの方へ向いたことで、ノーヴェは即座に「気合い注入！」背中を叩いた。また結構力を込めたようで「いった！」ディエチは背中に両手を伸ばして痛がった。

「この馬鹿力・・・！」

「あっはっは！　良し、気合い注入も済んだし、プライソンのところに行こうぜ！」

満足したのか大手を振って歩き出すノーヴェだったが、彼女の背後に佇んだままのウェンディ達の目はどれもノーヴェの背中に向けられていた。ウェンディ達はそろそろと足音を殺してノーヴェの背後に忍び寄ると、一斉に利き手を振り上げた。クイントはその様子に口元を右手で押さえ、笑わないように堪えている。

「せぇ～のっス！」

ウェンディの掛け声で、彼女を含めたセッテ、オットー、ディエチ、ディードは振り被っていた利き手をノーヴェの背中に向けて振り下ろした。バッチーン！と、聞くだけで痛くなるような派手な音が通路に響き、「ぶえ！？」叩かれたノーヴェは痛がる前に前方へと吹っ飛び、「あべしっ！？」床を数回バウンド、さらにずざざーっと床を滑ってからようやく停止した。クイントもこうなるとは思わなかったのか「あらら」目を点にしていた。

「いってー！　ふざけんな、マジで！　いくらなんでも強過ぎんだろ、今の！　つうか、誰だ、頭を叩いた奴は！」

後頭部や背中を擦りながらノーヴェはズンズンと足音を立てつつ戻って来て、「正直に答えろ！」問い質す。セッテ達は視線を逸らすことはなかったのだが、「ウェンディ！」だけが明後日の方を見たことで、ノーヴェも犯人が察したようだ。

「バレたっスか♪　でも吹っ飛ぶほど強烈な1発はあたしじゃないっスよ」

「ああ、そうだろうな。だが、頭を叩いた事実は消えねぇよ」

「えっ？　素直こそ美徳だってママりん言ってたっスよ？　素直に謝ったら許してくれるって！」

ジリジリと歩み寄って来るノーヴェから逃げるウェンディは、謝っ

たのに許してもらえないことに驚き、ママりん――クイントを見た。ウェンディ達の視線を受けたクイントは「あはは・・・」苦笑した後・・・

「こういう場合もあるよ♪」

ニコッと笑って見せた。そしてウェンディはノーヴェに捕まり、「いたたた！」ヘッドロックを受けた。ある程度ウェンディを懲らしめたノーヴェは次に「セッテ。お前、馬鹿力過ぎ」そう嘆息してセッテを見た。

「？？？」

「いやだからさ、あたしを吹っ飛ばしたのお前だろ？　この中で一番の怪力はお前しか居ないんだからな」

ノーヴェの言うように、サイボーグ化手術を行われたメンバーで構成されたチーム・シコラクスの中で、セッテが一番の戦闘能力を有している。空戦ランクで言えばSランクに相当するほどだ。

「そうだった。すまない。許してくれると助かる」

小さくだが頭を下げて謝ったセッテに、「セッテもヘッドロックを食らうっスよ～♪」頭を抱えた涙目のウェンディが言い放つ。しかしノーヴェは「ああ」セッテの謝罪を受け入れて彼女を許した。

「うええええ！？　ちょっと待ってほしいっス！　なんであたしは血

も涙も無いヘッドロックで、セッテは謝罪1発だけで許されるっスか！？」

「いやだってさ。おまえはわざとだろ、どうせ。だがセッテは力加減を間違えただけ。そうだろ？」

「ああ、間違えただけ」

コクリと頷くセッテを見て、ノーヴェが「ほらな」ウェンディへと目を移した。ウェンディが「な～んか納得いかないっス」膨れっ面になっていたところに・・・

「あら、クイントにみんな。そんなところで何をやっているの？」

女性の声が彼女たちの背後からした。クイント達は一斉に振り返る。そこに居たのは「メガーヌ」という名の女性と、「ルーテシア、リヴィア」という名の少女2人と、「アギト」という名の３０ｃｍほどの身長しかない少女1人だった。

「今から出発式でしょ。遅刻すると、スキュラの娘たちからまた顰蹙を貰っちゃうかも」

彼女たちの服装は、クイントを除くチーム・シコラクスのメンバー達のように統一されたバトルスーツではなく、それぞれ別の私服姿だ。メガーヌはネックラインがギャザード・ネックのTシャツ、ふくらはぎまでの長さがあるエプロンワンピース。ルーテシアは変わらずビスチェワンピースで、リヴィアは黒のノースリーブセーラー

服、アギトはボーダー柄のTシャツの上にパーカー、ボンテージパンツ。ちなみにクイントの服装は、膝丈のタートルネックのワンピースにデニムジャケットだ。

「アイツら偉そうだよな〜実際」

「確かにこの前のあたし達は任務をミスったけどさ、随分前だけどアルファだって片腕片足を吹っ飛ばされるミスだって犯してんのにさ。結局お咎め無しってなんだよそれ」

「そうっスよね〜。まぁ、あたしらもお咎め無しだったから強くはツッコめないっスけど。ベータやデルタにイプシロンは仲良くしてくれるっスけど、アルファとガンマだけはあたしらのこと下に見てるって感じがありありとするっス」

「あ、ちょっと解る。プライソンも若干だけどあたし達とスキュラ連中に差を付けてるよね」

目的地であるプライソンの研究室へと再び歩き出しながらアギト、ノーヴェ、ウェンディ、ディエチの4人は、チーム・シコラクスと同じサイボーグ姉妹である"スキュラ"シリーズ、その長女であるアルファと三女であるガンマに対して不満を漏らした。

「クイントは何か思うところはある？」

ノーヴェ達のリーダーでありながら、母親としての役目も宛がわれているクイント。彼女の意見を伺おうとメガーヌが話を振った。

「まぁあの娘たちは、私たち家族の中で最も重要な役割を与えられているからしょうがない気もするかな〜。でも私たちも、あの娘たちが動けない間を護衛するっていう重要な役割でもあるから、そこは尊重してほしいかもね」

クイントの意見は両方を尊重するものだった。プライソンの与えた両陣営のコンセプトがそもそも違う。チーム・シコラクスは"スキュラ"シリーズの護衛役および遊撃部隊として開発されたシリーズだ。プライソンにとっては替えの利く存在でしかない。

「けどゼータの死にはほとんど関心なかったよな、アイツら。マジで信じらんねぇ〜」

「あたし達の誰かが死んでも、プライソンはやっぱり何と思わないんスかね〜・・・」

「お母さんは、あたし達の誰かが死んでもやっぱり・・・？」

姉妹であるにも拘らず末っ子の死を悼むことすらしない"スキュラ"に対し、怒りや憐れみを通り越して恐怖を憶えるノーヴェ。ウェンディの言葉を聴いたディエチが前を往くクイントにそう訊ねる。

「もちろん悲しいわ。だからノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、それにセッテ、オットー、ディード。約束して。任務はとても大事だけど、身の危険を感じたら撤退して。たとえ失敗しても生き残れば次がある。プライソンやスキュラの娘たちに怒られるかもしれない

けど、それでもまずは生き残ること」

ディエチにそう答えた後、クイントはノーヴェ達へとそう伝えた。命を大事に、と。ノーヴェ達はそれぞれ「うんっ！」と首肯した。プライソンは生みの親、そう自覚していながらも彼女たちにとって重要なのは育ての親、クイントなのだ。

「遅い！　集合時刻の３分前に来るとはどういうつもり！？」

クイント達チーム・シコラクスと、メガーヌ達チーム・スキタリスが研究室に到着して即座に聞こえて来たのは、ブロンドのウェーブの掛かったロングヘアをした１８歳ほどの少女・アルファの怒声だった。白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが１本入った黒のプリーツスカート、オプションとして藍色のブレザーを着ている。

「遅刻じゃないだけマシじゃん」

「何か言った、アギト？」

「言ってな～い」

アルファにジロリと睨まれたアギトはぶっきらぼうにそう言いつつ、ルーテシアの頭の上に座り込んだ。ルーテシアとリヴィアが「恐かったね？」アギトを心配すると、「べ、別に恐くなんかない」アギトがプイッと明後日の方へと目をやった。若干恐ろしかったらしい。

「明日からの大仕事では1分1秒の遅れが致命になるかもしれないというのに。そんなのでは困るから、きっちり時間を守れるように再調整を受けた方が――」

アルファがさらに文句を続けようとした時、「馬鹿を言え」彼女たちに背を向けて操作盤に展開されているキーボードのキーを打ち続けていた少年がそう言って、座っているデスクチェアをクルっと回して彼女たちへと体を向けた。

「再調整している暇などあるか」

見た目は９～１２歳ほどの少年だが、実年齢は６０歳を越えている。薄紫色の髪、瞳の色は黄金で釣り目。笑うと八重歯が光る。青いストライプが縦に描かれたＹシャツ、蝶ネクタイ、黒ベスト、そして紫色のジュストコールを羽織っている。名をプライソン・スカリエッティ。史上最悪の科学者だ。

「ですがプライソン！　５分前行動すらちゃんと出来ないようでは・・・！」

「予定時刻を越えなかっただけで十分だ。・・・これで全員が集まったな」

脚を組んだプライソンが「さぁいよいよ宴会の前日だぞ、お前たち」そう言ってパチパチと拍手。アルファ達"スキュラ"も拍手をし始めたことで、スキタリスとシコラクスの両チームも倣って拍手を始める。

「管理世界の注目を一手に受ける公開意見陳述会。俺たちはそれを狙って、時空管理局に喧嘩を売る。俺たちは一夜にして次元世界の歴史に名を残せるわけだ。すでに悪名を得ている俺だが、さらに悪の名声が得られるわけだ。考えただけで興奮するな」

手振りでアルファら作品たちの拍手を止めたプライソンはニタリと凶悪な笑みを浮かべ、「アルファ。作戦の概要説明を」そう促した。アルファは「はい。作戦をおさらいするから忘れないようにね」と応じて一度咳払い。

「作戦開始は明日、９月１２日。公開意見陳述会の終了予定時刻である１９時ジャスト。警戒していながらも結局何も起きなかったと気が緩んだその瞬間。まずは・・・デルタ！」

「はーい♪」

オレンジ色をしたロングヘアをポニーテールにした１２歳くらいの少女・デルタが大きく返事をした。白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが１本入った黒のプリーツスカートという"スキュラ"シリーズ共通の衣服に、オプションとしてクリーム色のベストを着ている。

「それにベータ！」

「うん」

栗色のボブで、左目が前髪で隠した15歳ほどの少女・ベータが頷く。"スキュラ"の共通衣服に、オプションとして黒いセーターを腰に巻いている。

「お前たちは、宴の開始を告げるという大事な役目だ。20時ジャストに、地上本部にウォルカーヌスの一撃をド派手に撃ち込んでやれ」

「うん！」「はい！」

アルファではなくプライソンがベータとデルタにそう指示を出した。"ウォルカーヌス"。昔、第51管理世界ワイエルバキアにて起こった内戦に使用されたレールガンと同名だ。その製作者はプライソンであるため、地上本部に撃ち込むように言った"ウォルカーヌス"も、間違いなくレールガンであろう。

「イプシロン。あなたは、シームルグ、アンドラス、シャックス、マルファス、航空機戦隊を率いてレールガン・ウォルカーヌスより発射されたコンテナミサイル3種の護衛」

「イプシロンは任務を拝命しました」

青色のセミロングヘアで、額を大きく出した10歳ほどの少女・イプシロンが堅苦しい口調でそう応じた。"スキュラ"の共通衣服に、オプションとしてデフォルメされた猫と鼠のイラストが描かれた灰色のパーカーを着ている。

「ガンマ・・・は、もう言わずとも判っているだろうから省略」

この場に唯一集合していない次女ガンマにアルファは諦観して、彼女の担当する作戦の概要説明をスルー。次に「チーム・シコラクス」の概要説明となる。

「０１クイント、０２ノーヴェ、０３ディエチ、０４ウェンディ。あなた達４人は、中央区画随所に建造されている砲台アインヘリヤルの破壊を任せる」

大きめのモニターが宙に展開され、破壊ターゲットであるアインヘリヤルと呼ばれる砲台が表示された。回転砲塔式の三連装砲の砲台で、一個武装隊が直掩として周囲を固めている。

「馬鹿の一つ覚えの如く平和と正義を謳うレジアス・ゲイズが、生意気にも俺とは別口で依頼して造っていた兵器だ。純粋な魔力砲とは言え、その出力はかなり高い。下手に俺の作品に手を出されても面倒だからな。グレムリンと共に徹底的に叩け」

「「「はい」」」「おう」「はいっス」

「０５セッテ、０６オットー、０７ディード。空戦の出来るあなた達３人は、航空機戦隊と共にコンテナミサイルの護衛および航空武装隊の迎撃ね」

「了解」「「はい」」

「最後に、チーム・スキタリス。０１メガーヌ、０２ルーテシア、０３リヴィア、０４アギト。あなた達は機動六課の隊舎を襲撃。プリンツェッスィンとプフェルトナーの回収を最優先に」

「ええ」「「ん」」「あいよ」

「機動六課にはとんでもなく面倒な奴が居るが、リアンシェルトが内務調査官に指名しているから戦力にはならんだろう。最高評議会のクソジジイ共からも脅しを掛けられているから、ルシリオンもそう簡単にはルールを破るとも思えん」

プライソンもルシリオンについては一応の警戒はしているようだ。メガーヌが「万が一、その調査官がルールを破って戦力になったらどうするの？」そう訊ねると、プライソンは「その時は、奴を目覚めさす」ニヤリと笑った。

「これで以上ね」

アルファが満足そうに締めたが、ノーヴェが「おい、アルファ。アンタはどうすんだ？」そう訊いた。"スキュラ"の中でアルファの名前だけが作戦概要に出て来なかったからだ。

「私？　私はアンドレアルフス担当だから、本作戦には参加しないの」

そう答えるアルファの瞳は一段と強く銀色の輝きを発していた。

「お前たち、各々の役目は再確認したな？　俺はこの日をずっと待ちわびていた。俺の誕生から幾年、ずっと思い描いていた舞台だ。だから俺の悲願をお前たちが叶えろ。期待しているぞ」

本当に待ち遠しかったのか、プライソンの表情は輝いている。そして彼はデスクチェアより立ち上がり・・・

「さぁ世界に喧嘩を売りに行こうか」

人知れずに宣戦布告をした。

†††Ｓｉｄｅはやて†††

「いよいよ明日、地上本部にて公開意見陳述会が開かれる。開会時刻の１４時に備えて、もう警備が始まってる。会場となる地上本部の警備には、私たち機動六課も参加することになってるから、なのは隊長とヴィータ副隊長、リイン曹長、フォワード４名、そんでギンガが先発組となって、これから出発や」

「みんな、初めての夜勤シフトになるけど・・・、ちゃんと眠れた？」

「「「「はいっ！」」」」

フェイトちゃんに対して元気よく返事をしたフォワードのスバルとティアナとエリオとキャロ。夜勤シフトは慣れてへんとホンマに辛いからな～。ギンガは局員歴が長いから夜勤ももう慣れてるやろ。

「私とフェイト隊長とシグナム副隊長は明日の早朝に本部入りになるから。それまではよろしくな」

とゆうわけで、私たちは先発組の出発を見送るために隊舎の裏にあるヘリポートへ移動。私は「ヴィータ、リイン。気ぃ付けてな」ヘリに乗り込もうとする2人に声を掛ける。

「おう！」「はいです！」

ヴィータとリインと手を振り合って見送り、「ヴァイス君。よろしくな」ヘリのパイロットのヴァイス君にも声を掛けると、「うっす、お任せを！」親指を立てて応えてくれた。

「あれ、ヴィヴィオ？」

搭乗口の方を見ると、ヴィヴィオと寮母のアイナさんが居った。なのはちゃんは「どうしたの、ここは危ないよ？」って、ヴィヴィオの元まで戻ってく。

「ごめんなさいね、なのは隊長。一応止めはしたんだけど、どうしてもママのお見送りをするんだって」

「そうですか。・・・ありがとう、ヴィヴィオ。でもダメだよ、アイナさんに我がまま言っちゃ・・・」

「あぅ・・・ごめんなさい」

ちょっぴり叱られてしもうたヴィヴィオはしょんぼりすると、「待って、なのは。なのはが夜勤でお出掛けって、今回が初めてだから不安なんだよ・・・」フェイトちゃんがそう言うた。

「あ、そうか。・・・なのはママ、今夜はお出掛けで一緒に居られないけど、明日の夜には帰って来るから。そしたらまた一緒に寝ようね♪」

「ぜったい・・・？　あした、ちゃんと帰ってくる？」

「もちろん！　じゃあ約束。指切りをしよう。ヴィヴィオが良い子で待ってくれてたら、ヴィヴィオの大好きなキャラメルミルク、作ってあげるから♪」

「うん」

なのはちゃんとヴィヴィオは指切りをした。名残惜しそうに別れるなのはちゃんとヴィヴィオに続いて、ヴィータ達もヘリに乗り込んだ。そんで私らは空へと飛び去ってくヘリを見送った。
それから終業時間まで通常勤務して、「よし。ご飯にしよか」食堂へ。そこで「はやてちゃんもこれから？」すずかちゃんと、「あたし達もなのよ」アリサちゃんと合流。

「うん。一緒にどうや？」

「「もちろん♪」」

食堂の受け取りカウンターでご飯一式を受け取って、空いてるテーブルに着く。そんで「いただきます」挨拶。そんで食事をしながら、明日について2人に改めてお願いする。

「私たちが隊舎を空けてる間、すずかちゃんとアリサちゃんが頼りになる。プライソンはきっとヴィヴィオとフォルセティを狙ってくるやろう」

「でしょうね。話には聞いてるけど、2人はプライソン一派にとって重要な存在らしいし」

「でも大丈夫だよ、はやてちゃん。アイリやシャマル先生、ザフィーラも一緒だから。きっと大丈夫だよ」

「うん。そうやな」

すずかちゃんとアリサちゃんは、たとえブーストなんて無くても十分過ぎるほどに強いしな。それにシャマル達だって負けてへん。

「つか、地上本部だって結構まずいわよ？　壊滅するっていうような預言食らってんだし」

「そうだよ。そこが心配」

「おおきにな。そやけど、地上本部の周辺にはシャルちゃんを筆頭に高ランク騎士、それに本局からの応援部隊も展開される。結構安全な方やと思うよ」

まぁそれでも余裕とゆうわけやないけどな。それから私たちは食事を終えて、一緒にお風呂へ。すずかちゃんやアリサちゃんと一緒に入るんやけど、ホンマにすごいんよ。何がって？　こう・・・ボーンと飛び出る大きな果実、みたいな。すずかちゃんは元学校組の中で一番のスタイルやからね。同じ女の子でも魅了されるわ～。

「お邪魔～♪」

「お邪魔しますね～」

すずかちゃんとアリサちゃんの大きくて柔らかな胸を堪能し終えたところで、「お疲れ様、シャマル、アイリ」とも合流。髪や体を洗い始めるアイリに「今日はフォルセティとは一緒やないんやね」そう訊く。するとアイリは・・・

「フォ～ルっセティ～～　」

女風呂と隣接してる男風呂の方へ向かってフォルセティの名前を呼ぶと、「な～に～？」返答が来た。続けて「今、何やってるの～？」って訊くと、「パパに髪の毛あらってもらってる～♪」また返答が、しかも弾んだ声で返ってきた。

「というわけだね」

「なるほど。今日はルシル君と入ってるんやね～」

「そうなんだよね。一緒にお風呂に入ろうって思ったんだけど、ルシルが先に連れて行っちゃった」

「そうなんか～。それは残念やな～」

ルシル君がお風呂に入るのが遅くなるような時は、アイリがフォルセティを連れてお風呂に入ることがある。もちろんアイリが男風呂に入るのはアウトやから、フォルセティを女風呂に入れることになるわけや。

「あの一丁前に恥ずかしがる顔が堪らへんよな～♪」

「だよね～♪　色んなところがちっちゃくて可愛いのに、羞恥心だけはちゃんと持っててね～♪」

アイリとフォルセティのリアクションの可愛さ談義してると、「アンタ達ね・・・」アリサちゃんが呆れて、「フォルセティが可哀想だよ」すずかちゃんがちょっぴり非難。

「そやけどな～」

「あの可愛さからしてやめられないよね～？」

こんなんでも私とアイリは、フォルセティのことを心から愛してるんよ。まぁ若干歪んでるってゆうのも自覚ありやけど。それから男湯のフォルセティを交えてお喋りしながらのんびり体を温める。

「ママ～、アイリおねえちゃ～ん！　僕とパパ、もう出るね～！」

「「はーい！」」

フォルセティから知らされると、「アイリも出よう～っと♪　お先にね～」アイリが湯船から出る。ルシル君、フォルセティと合流するためやろうな。となれば・・・

「すずかちゃん、アリサちゃん。私もお先に出るな」

「はーい」「あいよ～」

私も一緒に湯船を、そんで浴室から出て脱衣所でパジャマに着替える。そんで脱衣所直通で行けるランドリーで洗濯物を洗濯機に入れてスイッチオン。終わったら自分で干しても良し、寮母さんに任せてもＯＫ。

「あ、ママ、アイリおねえちゃん！」

男性専用のランドリーの前に居ったパジャマ姿のフォルセティが駆け寄って来た。遅れてランドリーから出て来たパジャマ姿のルシル君。うん、良いタイミングやったな。

「フォルセティ～♪」

「？・・・ママ、いいにおいがする」

フォルセティを抱っこするとそう言うてくれたから「石鹸の香りかな～」そう返す。

「ねえねえ、フォルセティ。アイリはどう？」

アイリが私とフォルセティの側に来てそう訊くと、フォルセティはアイリに顔を近づけて匂いを嗅いで、「うん！　いいにおい！」笑顔でそう答えた。

「ありがとう～♪　んじゃ部屋に行こうか、フォルセティ。湯冷めしちゃうといけないし」

「うん。ママ、おやすみなさい」

とのことやけど、正直フォルセティを放したたない。ヴィータとリインも今日は居らへんし、「なあ、フォルセティ。今日はママと一緒に寝ぇへん？」そう訊いてみた。するとフォルセティは「いいの！？」満面の笑みを浮かべてくれた。フォルセティが六課に来てから、正式に養子として引き取ってから今日まで、一緒に寝たことなかったからな。

「うん。今日は一緒に寝てるヴィータが居らへんから、ベッドが空いてるんよ。そうゆうわけで、ええかな？　アイリ・・・ルシル君」

「フォルセティがそれで良いなら、アイリは良いよ」

「ああ。私も、フォルセティがそうしたいなら構わないよ」

「おおきにな♪」

ルシル君とアイリからも許可を貰ったことで早速部屋に行くために階段を上がる。そんで「おやすみ、フォルセティ、はやて」ルシル君と、「また明日ね～」アイリの2人と、2階の踊り場で別れることになったところで・・・

「パパとアイリおねえちゃんは一緒じゃないの？」

フォルセティが悲しげな声を漏らした。ルシル君は「また明日、一緒に寝ような」そう言うてフォルセティの頭を撫でるんやけど、その表情は晴れへんかった。そやから私は「ルシル君・・・」意を決した。

「ルシル君さえ良ければ、私やフォルセティと一緒に寝て・・・くれる？」

自分の顔や耳が熱くなるんを自覚しながらそうお願いしてみた。目を点にしてるルシル君は「え、あ、いや・・・」珍しく動揺した。隣に居るアイリが「親子、親子♪」そう言いながら、ルシル君の脇腹を肘でツンツン小突く。

「パパ・・・」

「ぅぐ・・・」

「ルシル君・・・」

「あー・・・」

「今日くらいはね～・・・」

「おー・・・」

私とフォルセティとアイリから視線を受けたルシル君は少し悩んだ後、「判った。一緒に寝よう」とうとう折れた。ルシル君と一緒のベッドで眠る。１０年くらい前にたった一度だけの経験を思い出して、さらに全身が熱くなるのが判った。

「アイリは～、リインのお出かけバッグとパジャマを借りよう～っと」

とゆうわけで、男子禁制の３階へ上がって、私とヴィータとリインの自室へ。

「どうぞ～」

「失礼します」「お邪魔しま～す♪」

まずは私と、抱っこしてるフォルセティが部屋に入ってから、ルシル君とアイリを招き入れる。アイリは早速「フェーフォルム」本来の姿に戻って、私が用意したリインのパジャマに着替える。そんで・・・

「パパはこっち、ママはこっち♪」

フォルセティを真ん中に、私は左隣、ルシル君は右隣の川の字でベッドに入った。フォルセティを間に挟んでると言うてもやっぱりドッキドキや。

「えへへ～、パパとママといっしょ、嬉しいな～♪」

ホンマに嬉しそうなフォルセティの様子に、もっと早くから一緒に寝てあげれば良かったって後悔。フォルセティの方を見ると、「あ・・・」ルシル君と目が合うた。なんかホンマに親子になったような感じがして照れくさい。そやけど、やっぱり嬉しいとゆうか、すっごく幸せを感じてる。

「おやすみ、フォルセティ、ルシル君　」

「おやすみ、フォルセティ、はやて」

「おやすみ、パパ、ママ！」

笑顔で挨拶を交わす。

「アイリにもおやすみをプリーズ！」

「「「あはは！」」」

今の時間を出来れば永遠にしたいな。そう思える瞬間やった。

Ｅｐｉｃ１８強欲が招くは破滅への戦火～Ｂｉｇ　Ｂａｎｑｕｅｔ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

プライソン一派が襲撃して来るかも知れないと推測されている９月１２日の今日、公開意見陳述会が開かれる。私たち機動六課は、会場となる地上本部の警備に参加することになっているから、ヴァイス君の操縦するヘリに乗って六課を後にし、そしていま地上本部へと降り立った。夜勤シフトということで、それぞれ与えられた警備ルートに従って地上本部の周辺を巡回。

（教会騎士団の人たちも、ちゃんと管理局と協力して巡回してくれてる）

防護服姿の騎士団員の姿を発見。男性騎士は共通のヘルメットを被っていて素顔は見えない。あと男性と女性とでデバイスが違うんだよね。女性騎士は槍、男性騎士は穂が長方形の杖。

正直、ゲイズ中将の教会嫌いのこともあって、教会との共同作戦が指示されていたとしても軽めの小競り合いくらいはあるかも、って不安だったけど。中には局員と団員が話し合ってる姿もある。それに安堵してると、カリムさんと同じデザインの女性用団服を着た「シャルちゃん！」を発見。

「あ、なのは！」

お互いに駆け寄って笑顔を浮かべ合う。シャルちゃんからの「なのは達も夜勤シフト？」っていう質問に、「そうだよ。ヴィータちゃんとリインとフォワード、それにギンガ」私はそう答えた。今はそれぞれ別行動中だ。

「そっか。私の部隊も夜勤シフト。明日の昼勤にはアンジェとトリシュの部隊が来る。・・・本当はルミナ達ズィルバーン・ローゼも、警備に参加させたかったんだけどね」

そう言って溜息を吐くシャルちゃん。確かにルミナちゃんのような騎士が数人と警備に入れば、それだけで過剰戦力になっちゃいそう。

「やっぱり管理局との軋轢が残って・・・？」

「ん～、それはちょこっとね。けど最大の理由は、プライソンが教会にも仕掛けて来ないか、ってこと。預言じゃ地上本部への襲撃しか示唆されてなかったけど、教会も一応厳戒態勢に入ることになったの。何せミッドチルダの終焉も預言に出てるからね、何が起こるか判らない」

シャルちゃんの話も尤もだった。プライソンは本当に何を仕出かすか判らないから、警戒し過ぎだなんて事はきっとない。それからちょっとシャルちゃんとお喋りしながら巡回を続けて、そろそろスバル達と合流する時間だな～って考えながら、ふと・・・

「そう言えば、シャルちゃんは屋内警備も担当とかしてる？」

そう疑問に思ったから訊ねてみた。もし一緒になれるなら、休憩の時なんかにもお話しが出来たらな～、なんて。

「あー、ごめん。私たち教会騎士はずっと外周警備なんだよ。ゲイズ中将が本局だけじゃなく教会からの応援をも招き入れたとはいえ、やっぱりどうしても教会は部外者だからね。地上本部内には入れてくれなかったよ」

「そっか。やっぱり異なる組織はすぐには仲良く出来ないんだね」

「聖王教会と仲が悪いのって実際ミッドの地上本部だけなんだよね。もうさゲイズ中将、局を辞めてくんないな～。正直あの人ダメだよね～」

いきなりシャルちゃんがそんなヤバ気な発言をするものだから、「わわー！」慌ててシャルちゃんの口を塞ぐ。ここにはゲイズ中将派の局員が当然の如く多いから、その人たちを刺激するような単語はアウトだよ。

「シャルちゃん、発言には気を付けよう？　ね？　そうしようね？」

「むぐぐ・・・『りょ、了解です、高町教導官殿』」

ホールドアップしたシャルちゃんからの念話に「ん」返事をして手を離す。ぷはっと息を吐いたシャルちゃんは「でも文句は言いたいよ」ぼやいた。

「内部の警備なのにデバイスの持ち込み不可っていうこの矛盾。内部警備担当の頭の悪さが際立って――」

「はい、ストップ」

もう一度シャルちゃんの口を塞ぐ。そして「正直、私も同じ思いだけど、口にしたらダメ」そう言ってから手を離す。地上本部に入る前にはデバイスを預けないといけないって話で、内部で武装できるのは本部に所属してる武装隊だけ。

「ま、内部で戦闘が起こらないように私たちがしっかり外を護るから、安心して待ってね」

「うんっ」

そうして私はシャルちゃんと別れて、スバル達フォワードと合流するために歩き出した。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒イリス†††

わたしの朱朝顔騎士隊ロート・ヴィンデを始めとした騎士隊を含め、地上部隊や本局武装隊が地上本部の警備任務に就いて早十数時間。夜勤明けの仮眠を終えたわたしはベッドから上半身を起こして「んー～！」背筋をグッと伸ばし、そして深呼吸。

「寝心地は覚悟してたけど、思ってた以上に教会の寝台車も悪くないな」

１０ｔトラックのような大きな車両のコンテナ部分にベッドだけを詰め込んだ寝台車。ほとんど使うことのない寝台車だったけど、１日と地上本部に詰め込むわたし達ロート・ヴィンデや黄菊騎士隊ゲルブ・クリュザンテーメのために借りてきた。他の隊は、シフトが終われば教会本部に帰還するけど、わたし達の隊は陳述会が終わるまでは帰れないからね。

（今の時間は・・・１４時５０分か。陳述会はもう始まってるか・・・）

わたしがいま居るトラックは女性専用車両にしているから、わたしの両隣のベッドにはもちろん部下の女性騎士が眠ってる。彼女たちを起こさないように（とは言ってもあと１０分で起床時刻だけど）しながらベッドから降りて、そっと寝台車から降りる。

「おはよう、イリス。時間ピッタリの起床ですね」

「お、アンジェ」

いつもはポニーテールにしてるエメラルドグリーンの長髪を降ろした、わたしと同じ女性用の騎士団服を着たアンジェ――アンジェリエが挨拶をしてくれた。先の昇格試験でとうとうＡクラス１位になれたんだよね。ま、わたしやトリシュ、クラリスと同じように現パラディンにボッコボコにされたけど。

「あ、起きてきたね」

「はよ～っす、トリシュ」

騎士団服を着たトリシュも姿を見せた。普段は降ろしてる茶色の長髪を肩甲骨の辺りで一房に纏めてる。わたしの隊、それに同じ夜勤シフトのゲルブ・クリュザンテーメが眠ってる間、地上本部を警備することになってた2隊、金水仙騎士隊ゴルト・アマリュリスと紫唐菖蒲騎士隊プルプァ・グラディオーレの隊長だ。

「どうしたの、2人とも？」

「教会本部に帰る前に挨拶をしておこうかと思いまして」

わたしの疑問に答えてくれたアンジェに「ありがとう、わざわざ」お礼を言って、若干沈んだ顔をしてるトリシュには「何か言いたい事ありそうだね」そう話を促してみる。

「私たちが警備していた昼間は何もなかったけど、何か起こるのならおそらく陽が落ちてから。だと言うのに、その時間帯に居られなくてごめんなさい」

「気にしないで、トリシュ。教会本部の警備だって大事だし。それに何よりここには機動六課が居る。もちろん本局の武装隊だって居るし、ゲルブ・クリュザンテーメだって居る。これも結構な防衛力だよ」

ゲルブ・クリュザンテーメの隊長であるキュンナ（フルネームは、

キュンナ・フリーディッヒローゼンバッハ）も、わたしやトリシュ、アンジェやクラリスと同じようにＡクラス１位を頂いてる次期パラディン候補だ。ちなみに騎種は鎌騎士。かつてはベルカ一の大国イリュリアを治めていたフリーディッヒローゼンバッハの末裔だけど、それはあくまで過去だし、彼女の家系はもう受け入れられてる。

「・・・そうね。うん、きっと大丈夫・・・」

トリシュには珍しく結構不安がってる。逆にこっちが心配しそうになるレベル。だから何か言葉を掛けようとしたら・・・

「イリス、お願い。私、この任務を終えたら、って・・・――」

「言わないよ！？　そんな死亡フラグ！　まだ１８なのに、そんなフラグを立てて堪るか！」

まさかわたしの死亡フラグを立てて来ようとするとはね。ルシルとのウェディングエンドを向かえないまま死んで堪るか。トリシュは「チェ♪」笑顔で舌打ちした後、「とにかく。危険なのは変わらないから」一転真面目な顔になった。

「うん。大丈夫。教会本部も一応危ないから、そっちも気を付けてね、トリシュ、アンジェ」

「うん」「ええ」

そうしてトリシュとアンジェの隊は撤退していった。それからうち

の隊員たちを起こし、定められた巡回ルートへ向かわせる前に整列させる。そしてこれからの巡回ルートの再確認を始めようとしたところで「イリス先輩！」そう声を掛けられた。

「ん？　どうしたの、キュンナ？」

わたしに声を掛けてきたのは、ゲルブ・クリュザンテーメの隊長であるキュンナ。灰色のショートヘア、翠色の瞳、服装はわたしと同じ女性用団服。

「はい。地上本部警備室から、あたしとイリス先輩の騎士隊の巡回ルートに変更があるとのことで・・・」

そう言ってわたしとの間にモニターを展開して、新しい巡回ルートを示した地上本部周辺のマップを表示してくれた。

「・・・結構外周に回されてるな～。期待されているのか追いやられているのか。まぁどちらにしろ、気になることがあるね」

「なんでしょう？」

新しい巡回ルートをうちの隊員たちにも見えるように別のモニターに表示しつつ、「この指令、いつ来たの？」そう訊いてみる。キュンナの「つい先ほどですが・・・」そんな答えに、わたしは若干イラっときた。

「わたしのところには送られて来てないんだよね、指令書」

「あ、はい。あたしの方からイリス先輩の隊にも伝えるように言われたので・・・」

「そう。つか、普通は両方の隊に連絡するよね」

「そう、ですね・・・」

「他の管理局部隊にもこんな風だったりするのかね～」

「あ、いえ。どうやら管理局の警備部隊の各責任者にはそれぞれ変更の指示が入っているようでして。あたし達は一纏めにされたみたいです」

わたしの機嫌が急落してくのを感じ取れちゃってるのかキュンナはオドオドし始めた。不安にさせちゃってホントに申し訳ないけど、いくらなんでもここまでコケにされたらちょっと頭にくる。確かに教会騎士団という1つの組織ではあるけど、ちゃんと部隊が分かれているんだからさ。そこは面倒くさらずに、ちゃんとやってほしいものだよ。

「はっは～ん。随分とまぁ面白い事をやってくれるじゃない、地上本部。やっぱミッドの地上本部だけは好きになれないわ～」

割と今回の一件でゲイズ派が失脚しないかな～。そんなことを考えてると、「でしたら、聖王教会の勢力を広げませんか？」キュンナがそんなことを勧めてきた。

「はい？」

「ミッドチルダの地上本部と地上部隊は、プライドばかりが高く他世界の地上部隊に比べて排他的で縄張り争いも強く、本局やあたしたち聖王教会とも折り合いが悪い。他世界と同じように協力関係をもっと強めないから、今回の議題で上がるアインヘリヤルなどという兵器を運用しようなどと考えるのです」

「キュンナ。あのね――」

「地上部隊に代わり聖王教会騎士団がミッドチルダを護る剣となりましょう。そう、今こそ亡国ベルカを"再誕"させましょう！　あたし、イリス先輩、トリシュタン先輩、クラリス先輩、アンジェリエ先輩、ガリホディン先輩、グリフレット先輩、ブレオベリス先輩。ＡＡＡ＋からＳ＋ばかりの次期パラディン候補ですし、まさに一騎当千です。他の騎士隊も続けば、今の地上本部が抱える戦力など取るに足りません」

そんな危ない妄想を垂れ流すキュンナに「馬鹿を言わないの」そう窘めつつ、「しぇんぱい！？」プニプニの両頬を引っ張る。

「良い、キュンナ？　ベルカは滅んだの。お互いの正義、打算、欲望をまるっと含めた戦争でね。戦乱の時代はその瞬間に終わったのよ。わたし達の役割は、ベルカの末裔・騎士として今の平和を維持すること。ミッドの地上本部に嫌気が差したからってそんな事を考えちゃダメ」

「・・・ひゃい」

返事を聴いたことでキュンナの両頬から手を離して、「では巡回に入れ！」部下たちに指示を出した後、もう一度キュンナを見る。

「今の妄言は忘れてあげるから、キュンナも他の騎士にあんな事を言わないようにね」

改めてそう忠告すると、「あの、あたしなりのジョークだったのですが・・・。すみません、ブラックと演技が効きすぎました」キュンナは申し訳なさそうに肩を落として、頭を下げて謝ってきた。

「え、そうなの？　そうよね。あなたは賢いから、地上部隊を乗っ取ろうなんてしないよね」

「もちろんですよ、イリス先輩」

あまりにも真剣な声色と表情だったから、思わず本気かと。でもキュンナも16歳、物事をしっかりと捉えられる頭脳はある。いくらなんでも聖王教会がミッド地上部隊に代わって台頭しようだなんてありえない。キュンナの言うようにブラックジョークなのね。

「それではイリス先輩。あたしも巡回を開始致しますのでこれで」

「ええ。わたしも巡回を始めるから」

そういうわけでキュンナと別れたわたしも巡回を開始。その最中に「おーっす、シャル」巡回ルートが被ってた六課の「ヴィータ」とバッタリ会った。

「お疲れ様です、シャルさん」

「お疲れ様、リイン」

ヴィータの側を飛んでたリインとも労いの言葉を交わす。フォワードの姿は無い。あの子たちも与えられたルートを巡回してるんでしょうね。

「なのははもう中？」

「ああ。はやてとシグナムとフェイトもな。騎士(そっち)団はなんかお偉いさんとかは来てないんか？」

「ん？　教会はからはカリムとシャッハとプラダマンテがね」

「カリムさんは理事官でしたっけ」

「そう。今日は教会騎士じゃなく本局理事官として参加してるの。んで、シャッハとプラダマンテはその護衛。プラダマンテが居る時点で内部の安全は確保されたと言っても良いね」

この前の昇格試験の時、たった5分だけどわたしは膝を折らなかった。そして思ったことは、歳を重ねれば重ねるだけプラダマンテは

老いるどころか強くなっていく、だ。もう３〇歳だし、素敵な彼氏さんも居るんだから、さっさと結婚して寿除隊してほしいな～、っていうのが本音だったりする。

「あー、そうだな。お前ほどの剣士でも手も足も出ねぇようなレベルだから、デバイスなんて無くたってそりゃ強ぇんだろうな～」

「そりゃあもう。ガチで人間やめてるしね」

幼少の頃よりわたしは2人の師に鍛えられてきた。1人は精神世界内でのシャルロッテ様。もう1人がプラダマンテだ。シャルロッテ様は優しかったけど、プラダマンテは鬼のような厳しさでわたしを鍛えた。もちろん、デバイスが無い状態での戦闘技術も一緒に。わたし、よくここまで生きて来られたな～。ちなみに母様はわたしを産んでからは一度も剣を取ったことがないから、戦ってる姿は見たことない。

「んじゃ、あたし達はそろそろ行くわ」

「です」

「ん。またね～」

ヴィータ達とも別れて巡回を再開。公開意見陳述会の報道番組やリアルタイムでの陳述会の様子を小さなモニターで視聴しながら、残りの警備時間を潰していく。そして陽も落ちて夜、時刻は１８時５５分。各警備員たちから、やっぱなんも起こらなかったな～、なん

て緩んだ空気が。さらには・・・

「ほら見ろ。地上本部を襲うだなんて有り得ないって思ってたんだよ」

「こんなに無駄に警備を増強してよ。本局と聖王教会は、地上本部を過小評価し過ぎなんだよ」

「ミッド地上本部はやっぱり鉄壁の防衛力だぜ」

そんな呑気なことまで言う始末。これが全管理世界の地上部隊、その本部に所属している局員の本音。本当に馬鹿で、愚か過ぎる。その考えがあまりにもぬる過ぎて、笑い話にもならない。そんな空気の中に居たくなくて、わたしは連中から遠く離れた場所へと移動。高く積み上げられたレンガの花壇に腰かけて、残りの時間をしっかり警戒しながら過ごす。そして・・・

「１９時まであと、４、３、２、１、ゼ――」

カウントダウンをして、０と声に出そうとした瞬間、ドォーン！と爆音が轟いた。可視化できるほどに物理シールドが機能しているのが判る。それほどの衝撃を受けてしまったんだ。

「爆発！？」

「どこからだ！？」

「こちら南ブロック！　今の爆発はなんだ！？」

騒然となる地上本部の警備部隊。わたしは『ロート・ヴィンデ各騎、戦闘準備！』思念通話で部下たちに指示を出して、わたし自身も「キルシュブリューテ、セットアップ」騎士甲冑へと変身する。直後、二度目の轟音と振動が起きた。

・―・―・―・―・

ミッドチルダ東部の森林地区の奥に在る洞窟、その内部にはプライソンらが居住する研究所が蟻の巣状に広がっている。そんな研究所内のプライソンの研究室に、少年のような姿の彼は居た。デスクチェアに腰かけ、部屋の中央に展開された巨大なモニターを眺めている。表示されているのは地上本部の外観と陳述会の様子だ。

「おい、アルファ。アイツらの準備は整っているのか？」

プライソンがモニターから目を離さずにそう呼ぶと、『はい』別にモニターが展開され、ウェーブの掛かったブロンドのロングヘアに銀の瞳の少女・アルファが映った。

『ベータ管制の装甲列車ケルベロスとオルトロスは、デルタ管制の列車砲ディアボロスと共に、南部の荒野地区にて全システムオールグリーンで待機中。レールガン・ウォルカーヌスの照準を地上本部へロック。散弾ミサイル搭載コンテナミサイル・ムオーデルを１９時ジャストに着弾するようにしています』

「ふむ。しかし、やはり俺の作品の名は良い響きだな」

『そうですね、良いネーミングセンスです。ガンマは自室にて電子戦スタンバイ中です。地上本部の防衛システムはすでにクラッキング完了とのことで、合図１つでいつでも好きなようにイジれるそうです』

「仕事が早いな」

『それくらいしかあの子に取り柄は無いですから。チーム・シコラクスの０１クイント、０２ノーヴェ、０３ディエチ、０４ウェンディは、アインヘリヤル１号機と２号機の近辺にて、そして０５セッテ、０６オットー、０７ディードは、中央区画上空にて待機中です』

「今さらだがセッテ達には３号機の破壊を任せた方が良かったか・・・？」

『今からでも向かわせますか？』

「・・・いや、いい」

『畏まりました。チーム・スキタリスの０１メガーヌは、機動六課隊舎の近辺にて待機中です。０２ルーテシア、０３リヴィアは、地上本部付近のビルの屋上にて待機中。ルーテシアはグレムリンなどを召喚した後、護衛のリヴィアと共に機動六課へと向かい、０１と合流予定』

「ルーテシアの召喚魔法は使えるからな。ここで使わないのは宝の持ち腐れだ」

『０４アギトは、レーゼフェア様に呼ばれ、本作戦には不参加となります』

「レーゼフェアが？・・・そうか、判った」

『私アルファ、そしてイプシロンは、共に航空要塞空母アンドレアルフスにて待機中。管制機体である私はアンドレアルフス・コントロールルームにて。航空戦闘機隊の管制機体であるイプシロンは、統合管制機ナベリウスに搭乗し、アンドレアルフスのハンガー内で待機中です』

「パーフェクトだ、アルファ！　きっちり時間通りに事が進んでいる！」

嬉しそうに声を上げるプライソンに『はい！　誠心誠意頑張りました！』アルファは満面の笑顔で応じた。それからというもの公開意見陳述会の終了時刻である１９時ジャストが訪れるまで、プライソンは興奮しっぱなしだった。それは本当に子供のように・・・。

『プライソン。ベータ、デルタ両名より攻撃開始の許可を求められています』

「ああ、構わんぞ。許可しろ、アルファ。開宴の狼煙、戦争の幕開け、ミッド地上本部に宣戦布告だ！」

『了解』

プライソンの目の前に別のモニターが展開された。ミッドチルダの南部にある荒野地区、そして巨大な旋回式砲台を2基と備えた列車砲・"ディアボロス"が映し出される。前に2基、後ろに2基の旋回式台車が計4基あり、車輪1つ1つがレールの軌道に合わせて曲がるようになっている。

そんな"ディアボロス"を牽引するのは、台車と連結されている表面が滑らかなミサイルのような車体を有した装甲列車・"ケルベロス"と"オルトロス"だ。前部は各4両編成の計8両で、先頭車両以外の屋根には砲台が備え付けらている。車両によって砲塔の向いている先が別々で、防衛用と思われる。

後部は5両編成の計10両だ。"ディアボロス"の台車と連結されている2両だけは他の車両に比べて二回りほど大きい。続く残りの8両の屋根には砲台が備え付けられており、おそらくこれも防衛用のものだろう。

『列車砲ディアボロス管制機デルタからプライソンへ報告！　ウォルカーヌスⅠ・Ⅱにムオーデル装填。電磁加速システム・砲身冷却システム、オールグリーン』

「カウントダウンを始めろ！」

『発射カウント開始！　10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、ファイア！』

"ディアボロス"に備え付けられている前方の砲台・ウォルカーヌスⅠより巨大なミサイル・ムオーデルが発射された。続けて後方のウォルカーヌスⅡより『ファイア！』もう1発、ムオーデルが発射された。途轍もない衝撃と轟音だったが、この付近一帯は無人であるためそうそう気付かれることはないだろう。

『ウォルカーヌスⅠ・Ⅱの冷却を開始。次弾装填スタンバイ。砲身の冷却完了後、即時次弾を発射しま～す』

『コンテナミサイルは順調に飛行中。着弾予測時刻は１９時ジャスト』

アルファからの報告通り新たに展開されたモニターに表示されたマップに、目標地点である地上本部を示す赤く光るポイントへ向けて、コンテナミサイル・ムオーデルを示す矢印が表示される。右上にタイムカウントも表示され、１９時が迫って来ていた。プライソンは肘掛に腕を置いて頬杖を突きながらムオーデルを示す矢印を眺める。そして・・・

『１９時まで残り３０秒』

モニターには映っていないが、ここでムオーデルに変化が訪れる。コンテナミサイルと呼ばれるソレは、格納しているミサイルの種類によって名称が異なる。ムオーデルと称されるコンテナミサイルには１０機の散弾ミサイルが格納されている。
レールガンによる飛行速力が弱まってきたことでそんなムオーデルはバラバラになり、その中から小型の散弾ミサイルが出現。地上本

部の上層階へと向かって行き、『１９時になりました』という報告と同時、１０機のミサイルが炸裂した。地上本部が有する物理シールドに拒まれはしたが、僅かに弱まらせた。

『２発目が着弾します。４、３、２、１、着弾』

２発目のムオーデルが物理シールドに着弾し、シールド強度をさらに低下させる。地上本部のリアルタイム映像が新たに展開されたモニターに表示される。地上本部所属の武装隊や警備員たちが一斉に混乱に陥る中、教会騎士団のイリスが率いる朱朝顔騎士隊ロート・ヴィンデ、キュンナ率いる黄菊騎士隊ゲルブ・クリュザンテーメの騎士たちは、即座にデバイスを起動して騎士甲冑へ変身。

「さすがは教会騎士団。地上本部の間抜け共とは違って即座に臨戦態勢に入ったな」

『機動六課のメンバーおよび本局武装隊も臨戦態勢に入りました』

ヴィータやフォワード４名、それにリインフォースⅡとギンガもまたデバイスを起動して防護服へと変身し終えていた。彼女たちと地上本部の行動速度の差異は、明らかに心構えの違いだろう。襲撃されるかもしれないという本局・聖王教会、襲撃なんてされるわけがないという地上本部。当然の結果だった。

『プライソン。カイゼリン・キュンナが居ますが、どうしますか？』

「あぁ？　あー、海洋艦隊と同じ、ハゲジジイからの依頼で造った

作品だったな。構わん、敵として対処しろ。アイツがカイゼリンを教会騎士にした以上は、アレの途中リタイアのリスクもあるって覚悟の上だろう？」

モニターに映るゲルブ・クリュザンテーメの隊長キュンナの顔を見て、プライソンは僅かに残念そうな顔をして「俺の最高傑作だったんだがな」そうぼやいた。

「まぁいい。各隊、さぁ開宴の狼煙は上がった！　派手に暴れてやれ！」

全体通信でそう命令を下すプライソン。ミッド各地に散っている"スキュラ"、シコラクス・スキタリスの両チームから『了解！』返答が入る。さらにモニターの数が増え、各地の状況が映し出された。クイント筆頭チームによるアインヘリヤル破壊作戦。地上本部の武装隊が警護してはいたが、グレムリン――ガジェットドローンのⅠ型とⅢ型が１０機ずつと現れては成す術なく撃破されるしかなかった。召喚魔導師ルーテシアによるグレムリンやＬＡＳの多重召喚。六課や教会騎士団を含めた局の外周警備部隊が応戦を開始。

『プライソン。本部内にて動きがあります。内部警備をしていた戦力が外に出ようとしているようです』

「ガンマ、聞いたな。地上本部内の隔壁を全部降ろせ。加えてＡＭＦ濃度を最大だ。中には教会騎士最強のモンスター女が居るからな、奴だけは出させるな。それと魔力炉はそのままでいい。デルタに仕事をさせる」

『ん～。隔壁全降ろし、ＡＭＦ最大・・・完了』

地上本部のシステムをクラッキングしていたガンマにより、本部内の通路やエントランスなどの隔壁が全て降り、本部への出入りが難しくなってしまった。さらにはＡＭＦの濃度が最大となり、本部内での魔法の使用は一切できなくなってしまった。

『こちらイプシロン。シームルグ１０機、アンドラス１０機・シャックス１０機・マルファス２機、地上本部へ向けこれより出撃させます。イプシロンはこれより統合管制機ナベリウスのコックピット内から航空機戦隊の操作に移ります』

プライソン研究所へと通ずる洞窟の入口より５００ｍほど離れた地点の地面が盛り上がって生まれた大穴から滑走路が伸び上がって来た。そしてそんな滑走路より３２機の航空機が順々に飛び立って行った。

『こちらデルタ。次弾――徹甲ミサイル搭載コンテナミサイル・グレンデルをⅠ・Ⅱに装填。発射カウント開始５秒前。４、３、２、１、ファイア！』

"ディアボロス"の前方レールガン・ウォルカーヌスⅠより新たにコンテナミサイル・グレンデルが発射された。そして先程と同様に後方レールガン・ウォルカーヌスⅡからもグレンデルが発射された。

「地上本部としてのプライドを捨て切れずに、内部警備の応援部隊

に対してデバイス持ち込み不可にしたのがまずかったな、レジアス・ゲイズ」

プライソンの視線が向かう先、そこには懸命に強気な態度を装っているレジアスの映るモニターがあった。

Ｅｉｐｉｃｌ９－Ａその日、ミッドチルダ～Ｍｉｄｃｈｉｌｄａ Ｃｅｎｔｒａｌ Ｏｆｆｉｃｅ～

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

公開意見陳述会の終了予定時刻の１９時。警戒レベルを落としてた地上部隊の警備隊の呑気っぽさに呆れつつ迎えたわけだが・・・

「マジで攻撃してきやがったな、プライソン！」

トンデモねぇ爆発音と衝撃が地上本部の物理シールドを可視化できるほどのレベルで襲ってきた。さらにもう一度「うお！？」二度目の爆発音と衝撃が襲ってきた。あたしはすかさずスバル達フォワードやギンガに「おめぇら、防護服着用！　襲撃に備えろ！」指示を出す。

「「「「「はいっ！」」」」」

それぞれデバイスを起動して防護服へと変身し終えたのを確認した直後、「召喚反応！　多数！」キャロから報告が入ると、敷地内に召喚魔法陣が数えるのも面倒なほどに展開された。魔力光からしてルーテシアによるもんだと判る。

「ガジェットに・・・、くそっ、ＬＡＳまで出してきやがった・・・！」

全身を黒のバトルスーツと装甲で覆い隠した死体兵器が何十体と姿を見せやがった。武装はそれぞれ違ぇな。両前腕の籠手からブレードを伸ばした奴、アサルトライフルのような銃器を構えている奴の２種類だ。

「ヴィータ副隊長、指示を！」

ＬＡＳとの戦闘はあたし達大人が担当することになってはいる。その考えは今も変わらねぇ。それにこっちにはシャルを始めとした戦力が他に居るんだ、コイツらがわざわざ交戦しなくても問題はねぇはずだ。そう、人殺しをさせるわけにはいかねぇよな。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。お前たち４人は本部内に入って、預かってるデバイスをなのは隊長とフェイト隊長、シグナム副隊長に渡してくれ。ギンガは、あたしやリインと一緒にここで反撃だ」

スバルに対してそう指示を出すと、「４人全員ですか・・・？」ティアナが少しばかり戸惑った。なのは達と合流してデバイスを渡すだけの仕事だと思ってるようだが、そいつは違う。

「ルシルが昔、プライソンの研究所からパクってきた兵器のデータの中には、未だに名前しか判ってねぇもんもある。ソイツが何らかの手段で本部内に侵入するかもしれねぇ。いくら隊長たちが強くても、デバイスが無きゃ魔導師としての真価は発揮できねぇ。だから・・・」

「僕たちみんなで向かう・・・。敵戦力と接敵したら戦えるように・・・」

「・・・申し訳ありませんでした、ヴィータ副隊長。これよりフォワード4名。本部内でなのはさん達と合流します。スバル、エリオ、キャロ、行くわよ！」

「「はい！」」

ティアナとエリオとキャロは強く頷いてエントランスの中へ入って行ったが、「ギン姉・・・」スバルはギンガに駆け寄った。ギンガは「スバル。お互いの役目を全力で」そう言って左拳をスバルに向けた。

「うん。・・・全力で！」

そしてスバルは右拳をギンガに向け、拳を軽く打ち合った。スバルはそれで満足したのか「いってきます！」ティアナ達を追って走って行った。それを見送りつつ「リイン、はやて達と連絡は取れたか？」リインに訊く。

「はい。本部内はそう大して混乱はしていないようです。なのはさん達は、事前に決めていたフォワードとの合流ポイントへ向かうそうで――うえ！？」

リインが耳を急に押さえて変な声を上げた。なんだ？って訊こうとしたら、「隔壁が・・・！」ギンガの言うようにエントランスや窓

のシャッターが降りてく。そんでリインからは「内部との連絡が途絶えました！　通信妨害です！」そんな報告が。これで内外が隔絶されたわけだ。

「（これで敵の侵入は防げるが、逆を言えば脱出できないわけでもある）・・・とにかく、あたし達は襲撃して来てる敵戦力の撃破を最優先にする。ギンガはガジェットを。リインはギンガのサポートだ」

「了解！」「了解です！」

「あたしがＬＡＳを相手にしつつ余裕があればガジェットにも対応する。・・・すでにどっかでも戦闘が開始してんな」

遠くから破壊音や爆発音が聞こえてくる。こっちも遅れてらんねぇ。つうわけで、「行くぞ！」あたし達も前線に突入開始。早速ＬＡＳ達が一斉に向かって来た。アサルトライフルによる攻撃は、ガジェットが放つエネルギーと同質のもんだな。問題はその連射力だ。一度防御に回ればシールドもバリアも貫通させられる可能性がある。

（となれば・・・！）

物質弾を８発と作り出して「シュワルベフリーゲン！」"アイゼン"で打ち放つ。狙うはアサルトライフル持ちだ。ブレード持ちと格闘戦してる最中に集中砲火なんてされちゃ堪ったもんじゃねぇかんな。フリーゲンは８体のライフル持ちの腹に着弾、大きく吹っ飛ばした。が、すぐに起き上がって「Ａｈａａａａａ　！」叫び声を上げな

がらライフルを連射してきた。

「チッ、思った以上に硬ぇな・・・」

今日の為に敷地内の至る所に設置されたトーチカで一旦攻撃をやり過ごし、攻撃が止んだその瞬間、とにかく陸戦だと動きが制限されるから空へと上がる。ＬＡＳに航空の能力が無いのは嬉しい話だな。

（ん？　チッ。死体なのにある程度の知能は働くわけか・・・）

ＬＡＳはあたしへの攻撃をやめて、トーチカからガジェットやＬＡＳを攻撃している警備隊に狙いを定めて向かっていく。勇敢にストレージデバイスの杖から射撃魔法を連射する警備隊だったが、威力が足んねぇのかＬＡＳをよろけさせる程度だ。ガジェットに関してもＡＭＦで無力化されてやがる。

「チッ・・・！」

――シュワルベフリーゲン――

物質弾を１２連発で打ち放ってＬＡＳを吹っ飛ばす。そんで「バインド！」あたしは叫んだ。正直、あたしの指示に従うとは思えなかったが、「了解！」警備隊はすぐにバインドでＬＡＳを拘束していった。

（バインドは通用するんだな。地上本部の敷地内を肉片で埋めるわけにもいかねぇし、今はそれで良いか）

あたしは空からフリーゲンを打ち放ってさらにＬＡＳを吹っ飛ばし、転倒した連中を警備隊がバインドで拘束する。それを繰り返してると、「うおっ！？」また爆発音と衝撃が襲ってきた。空を飛んでるからか、その衝撃をもろに受けちまった。

「一体、どっから――うぐっ・・・！？」

さらにもう1回おなじ爆発音と衝撃が。４回と続いたなんらかの攻撃によって「物理シールドが・・・！」とうとうトンデモねぇ轟音を立てて破られちまった。物理シールドが解除されたことで、どこに潜んでたのかガジェットのＩ型とⅢ型が群れを成して、ＡＭＦを展開しながら魔力シールドに取り付き始めた。本局からの応援である航空武装隊が迎撃に入って次々と撃墜してくけど、ガジェットの数が多過ぎて途切れねぇ。

「魔力シールドじゃあの攻撃には耐えらんねぇ・・・！　ロングアーチ！」

期待せずにロングアーチに通信を入れてみた。そしたら『はい。グリフィス！』が応じてくれた。本部内との連絡が無理だが、外部とはまだちゃんと連絡は取り合えるようだな。もっと早くから通信入れときゃよかった・・・。

――シュワルベフリーゲン――

ＬＡＳやガジェットにフリーゲンを撃ち込みながら「判ってる範囲

で状況報告を！」するように指示を出す。

『はい！　現在、地上本部はプライソン一派の兵器によって襲撃を受けています。さらに、地上本部が独自に進めていた魔力砲台アインヘリヤルが、クイント・ナカジマ准陸尉の率いるスキタリス、およびガジェット数十機によって破壊され回っています。直掩の地上部隊も壊滅状態です』

「んだと・・・！？」

――シュワルベフリーゲン――

クイント准陸尉たちは別行動かよ。となると、メガーヌ准陸尉たちはどこだ。召喚はルーテシアの魔法によるもんだったが、アイツらは姿を見せてねぇ。地上本部の別区画のところで戦ってるかもしれねぇが、どうも嫌な予感がする。あたしは「隊舎の警備はしっかり頼むぞ」そう伝えた。なんとなくだが、メガーヌ准陸尉たち、たとえ違っても何かしらの戦力が六課に向かってそうな気がしてならない。ヴィヴィオとフォルセティを奪い返しに・・・。

『はい。シャマル医務官、アイリ医務官、アリシア執務官補、バニングス捜査官、月村技術官、ザフィーラさんもすでに屋外で臨戦態勢に入っております』

「そうか。それでだが、地上本部を襲っている攻撃方法、それがなんだか判るか？」

『いえ。魔力・エネルギー反応が一切感知できず、どういう攻撃なのかは判っていません』

魔力でもエネルギーでもない攻撃方法、そんで使っているのがプライソンとなれば十中八九「質量兵器・・・！」になる。レールガンやミサイルなんてモンがいい証拠だ。なら「熱源を探せ！」それが一番だ。

――シュワルベフリーゲン――

『熱源・・・、あっ、ロケットの熱源ですね！　シャーリー！』

『はい！　地上本部周辺の熱源を探知します！・・・』

順調にＬＡＳを無力化して行く中、「今度は何だ！？」ドォーン！と地上から爆炎が立て続けに発生した。遅れて「ぎゃぁぁぁ！」悲鳴がいくつも上がり始める始末。

『ヴィータ副隊長、大丈夫ですか！？』

「あ、ああ・・・」

目を凝らして見えるのは「おいおい、マジかよ・・・」惨劇だった。そう、バインドで捕らえてたＬＡＳが自爆しやがった。何がキッカケかは判らねぇが警備隊の何人かを巻き込んだらしく、血まみれになっている隊員たちが何人と居るのが判る。

「「「「Ａｈａａａａａａａ　！！」」」」

「くそっ・・・。テメェら！」

――シュワルベーフリーゲン――

生きてんのか死んでんのか判んねぇが、負傷した隊員を避難させようとしている隊員たちにＬＡＳが襲い掛かろうとしてたから、すぐに迎撃を開始。また何体かを吹っ飛ばして、手の空いてるミッド式の隊員にバインドを発動させる。つうか、ＬＡＳやガジェットを撃破できるだけのレベルの魔導師が足りてねぇ。

『ヴィータ副隊長！　熱源を確かに感知できました！　南方よりマッハ６で飛来！　数は２？・・・いえ、また増えた！？　時速２６０ｋｍで飛来中が３２の計３４機！　距離１６０００と３２０００です！』

シャーリーからの報告を受けたあたしはＬＡＳへの攻撃を緩めることなく、南の空へと何度かチラッと見る。でも距離のこともあるが「ダメだ、見えねぇ・・・！」近隣のビルの明かり、さらには星の所為でまるで見えねぇ。

『こちら外周南東区画警備担当・機動六課！　負傷者多数および警備戦力の減少により、防衛ラインの維持が困難になっている！　応援を要請する！』

とにかく戦力を整えねぇと魔力シールドまで貫かれる。それを危惧

しての応援要請をしながらまた上空を見て、「ん？・・・・アレか！」飛来物を遠目だが捉えられた。赤い光・・・おそらくアフターバーナーが尾を引いてる何かが見える。ソレが「分裂！？」したのか、赤い光が１０個くらいに分かれた。

「魔力シールドが・・・！」

その１０個の赤い光が魔力シールドに着弾して、あの爆発音と衝撃が起きた。それで魔力シールドに大きなヒビが入りやがった。しかもそこを狙ってさらにガジェットが何十機と取り付く。あの攻撃は１回につき２発ごとだ。・・・ってことは、もう１発が迫って来てるはず。

『こちら外周北部警備担当！　こちらも手一杯だ！』

『外周北東部警備担当！　すまない、こちらも被害甚大だ！』

『外周北西部警備担当！　こちらから少しは回せる！　もう少し耐えてくれ！』

『こちら外周南部警備担当、教会騎士団所属のフライハイト！　こっちからも増援を送るから、それまで持ちこたえてヴィータ！』

シャルからの通信も入った。ここはアイツに頼るしかねぇ。だから敵の攻撃のことについて伝えようとしたんだが、２発目の攻撃がすぐそこにまで来てた。さっきと同じように１個から１０個の何かになって、魔力シールドに着弾。それでとうとう「やられた！」魔力

シールドまでもが粉砕された。より一層騒々しくなるミッド地上部隊で構成された警備隊員たち。

『シャル！　南方からシールドを打ち砕いた攻撃が飛んでくる！　高度がかなり高ぇ！　次は丸裸の本部に撃ち込まれる可能性があんだ！　それに、六課の探査じゃ３２機の熱源もあと少しで姿を見せる！』

『っ！　南方からね、判った！　地上のガジェットやＬＡＳの迎撃は部下に任せて、わたしが空に上がる！　ヴィータ、迎撃を手伝って！』

『応！　リイン、ギンガ！　あたしはちょっと席を外すぞ！』

『お気になさらず！　私とリイン曹長で凌げます！』

『です！　ヴィータちゃんはヴィータちゃんの戦いを！』

リイン達に連絡を入れたあたしは「おらぁ、これで最後だ！」ＬＡＳへと８発のフリーゲンを打ち放って、着弾したのを確認してすぐに上空へ目指して高度を上げる。

『ヴィータ副隊長、ロングアーチ０３シャーリーです！　３２機の機影をカメラで確認できました！　航空機戦隊です！　シームルグ、アンドラス、シャックスが各１０機ずつの編隊を組み、後方に輸送機マルファスを２機確認できます！』

「（アイツらかよ・・・！）そのデータを各航空部隊にも伝えてやってくれ。あたしとシャルだけじゃ無理だ」

『了解です！』

シャーリーに指示を出し終えた後、「ヴィータ！」シャルと合流した。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒イリス†††

公開意見陳述会の日に推測されてた通り、プライソンが襲撃を仕掛けてきた。ガジェット、それに人の死体をサイボーグに改造したＬＡＳとかいう陸戦兵器など、それぞれ３ケタ越えによる包囲戦。本部や応援の地上部隊の戦力は、正直に言うとあんまし使えないレベルだった。別に弱いってわけじゃない。普通に精鋭を名乗れるレベルの強さは持ってる。けど・・・

（ガジェットに決定打を与えられないとなれば、プライソンの兵器戦じゃ役には立たない）

その魔法のほぼ全てがＡＭＦに拒まれちゃってた。ＬＡＳはＬＡＳで撃破は出来たりしてるけど、元が死体ってことで腐乱した肉片や体液を撒き散らした。それからは阿鼻叫喚。内臓や体液を体に被った隊員たちも居て、みんな盛大に吐いては卒倒した。それを遠巻きに見てたわたしですら卒倒しかけて、なんとか耐えても吐き気がとんでもなかった。うちの部下は堪え切れずに吐いたけど。あ、わたしは耐えたよ、うん。

「地上本部の近くで戦うにはまずい相手ね」

モニターに映る４種の航空機をキッと睨む。何度か交戦したこともある機体もあれば、初めて見る機体もある。見たことのあるのは、赤黒い塗装をした、双発エンジン・　前翼（カナード）付き・外に向かって少し斜めにある２枚の垂直尾翼というデルタ翼機・"シームルグ"シリーズとされる戦闘機。

蒼い塗装の双発エンジン・カナード・前進翼・内に向かって斜めにある２枚の垂直尾翼を持つ、"シャックス"シリーズとされる掩護機。迷彩柄の長い胴体・後進翼・Ｔ字の垂直尾翼・エンジンは左右の主翼下に２基ずつの計４基の機体で、"マルファス"シリーズと呼ばれる輸送機。

（そして・・・）

漆黒の塗装の双発エンジン・カナード・可変後退翼・上下２枚ずつの計４枚の斜め尾翼から構成されている。４枚の尾翼の内、上２枚は上半角の付いた全遊動式水平尾翼で、下２枚は可動部のない安定（ベントラルフィン）翼を持つ、"アンドラス"シリーズとされる攻撃機・・・だっけか。

「（何にしろ、全機を即撃墜！）ヴィータ！」

「ああ。先制で仕掛ける！」

戦闘機隊が到着するのを待ってちゃ地上本部近辺でやり合うことになる。流れ弾を今の丸裸の本部に突っ込ませるわけにはいかない。

だから・・・

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

背中に展開してる一対の魔力翼ルビーン・フリューゲルを大きく羽ばたかせて、南方へと向かって飛ぶ。ヴィータも「おっしゃ！」わたしに続いた。

『こちら本局航空武装隊・第２２１２部隊！　機動六課よりデータを頂きました！　ヴィータ先輩、自分たちもお供いたします！』

その途中で通信が入った。後ろをチラッと見ると３０人の武装隊が居た。ヴィータは「お前ら！」嬉しそうに声を上げた。２２１２航空隊って確か、セレス、それにヴィータやシグナムの古巣の部隊だっけか。

「ああ！」

『同じく本局航空武装隊・第１０１３部隊！　ヴィータ二尉、僕たちも協力します！』

「お願いします！」

さらに３０名の本局の航空隊が参加してくれた。本局からの応援部隊は航空武装隊４隊になってる。うち半分の２隊が協力してくれるとなれば、一方的な不利にはならないはず。

『航空機隊のデータは見たか？』

『もちろんです。本日の警備任務のため、夢に見るほどにまで戦闘データを確認しましたので』

『それに各員、ＡＭＦ対策は済んでいます。本局技術部が試験開発したデバイスを用意してきています』

「はっは！『期待してんぞ！』

展開されたモニターに映る航空武装隊の面々が持ってるのは、スナイパーライフル型のカートリッジシステム搭載デバイスだった。ルシルの銃火器談義に付き合ったこともあるから、Ｈ＆Ｋ　ＰＳＧ１をモデルにしているんだな～って判る。

（ルシルが興味持ってるモノにわたしも理解を深めれば、ルシルともっと仲良くなれる、なんて思ってたからね～。結局、途中で折れちゃったけど・・・）

これは確かに期待できるよ。"キルシュブリューテ"の納められた鞘を握る左手に力を込める。ヴィータも「プライソンの鼻っ面をへし折ってやる！」"グラーフアイゼン"の柄を握り締めた。そして・・・

「視認！」

「剣神モード！」

絶対切断のスキル、アプゾルーテ・フェヒターを発動させる。ＡＭＦなぞに影響されない魔力攻撃じゃなくスキルだ、負けはしない。っと、もうそろそろかな。ヴィータと頷き合って、右手で"キルシュブリューテ"の柄を握り、すぅ～っと息を吸ってから止める。

≪マイスター！　全員がロックオンされた！　攻撃注意！≫

"キルシュブリューテ"から警告が入ったことで、わたしはベルカ魔法陣の足場シュヴァーベン・マギークライスを発動して着地。そして居合抜きの構えを取り、「ふっ・・・！」わたしは鞘から"キルシュブリューテ"を抜き放った。

――飛刃・翔舞連閃――

抜き放たれた"キルシュブリューテ"の刃から放たれるのは絶対切断の刃。わたしの魂の中に居るシャルロッテ様の真技、飛刃・翔舞十閃を、わたしなりにアレンジしたスキル攻撃だ。最初の抜刀で１２、旋回しつつ"キルシュブリューテ"を鞘に収め、正面を向いたところでもう一度抜き放って１２の斬撃を放ち、最後に縦一閃に振り下して４つ。全長１ｍほどの計２８の刃を放つ。

「いっっけぇぇぇぇーーーーッ！！」

連閃を放ったと同時、戦闘機３０機から一斉にミサイルが発射されてきた。１機につきミサイル１０発同時発射ということで、３００発がわたし達に向かって来た。わたしの連閃とミサイルが真っ向か

らぶつかって、「おお、誘爆！」ミサイルの爆発が連鎖的に起こっていく。だけど「エンゲージ！」攻撃を仕掛けてきた戦闘機３０機は健在だ。

「全機、搭載兵装はミサイルポッド！」

「レールガンじゃねぇのは不幸中の幸いだな。さすがにレールガンじゃ防ぎようがねぇもんな！」

「まったくね・・・！　各員、その場で待機をお願いします！」

単独で戦闘機隊へと突撃。わたしの接近に戦闘機隊は迎撃じゃなくて軌道変更を行おうとした。さっきの攻防でわたしへのミサイルは意味が無いって判ったのかな。まぁとにかく、これはチャンスだ。

「絶刃――」

"キルシュブリューテ"の刀身に全長４０ｍの絶対切断の刃を付加して・・・

「斬舞七支閃！」

そこから葉の無い枯れ木の如く、８～２５ｍほどのジグザグな刃を伸ばした広域斬撃を振るう。第三者から見れば、桜色に光り輝く枯れ木を振り回してるように見えるでしょうね。そしてこの一撃で３０機中１９機を斬り刻むことが出来た。

「よっしゃぁ！」

"レリック"と初遭遇したあの日、戦闘機――シャックスと交戦してからずっと構築を考えてた対兵器術式だ。まぁこの七支閃はそりゃあもう制御が難しくて、枝分かれした刃の位置や形や長さはランダムだったりするから、最低５０ｍ圏内に人が居ないこと、対人戦では使用しないこと、制御するために集中できる戦況の中であること、周囲に味方が居ること、と言った条件下でのみ発動するようにしてる。

（少しでも機数を減らすことが出来れば儲けもの！）

斬撃範囲内からギリギリ離れることの出来たのは"シームルグ"４機、"アンドラス"５機、"シャックス"２機の計１１機。あと輸送機"マルファス"２機も一緒に斬り払ってやりたかったけど、他３種の機体速度に比べてゆっくりしてたから見逃す他なかった。ちょっとでも遅れたら生き残りがもっと増えてたと思うしね。

「追撃をお願いします！」

わたしは絶刃を一旦解除して、再展開したシュヴァーベン・マギークライスの上に着地してへたり込む。

「了解です！　１０１３部隊は、１班はシームルグ、２班はシャックス、３班はアンドラスを叩け！」

「２２１２部隊は、シームルグは１班が、アンドラスは２班が、３

班は降下しているマルファスをそれぞれ担当せよ！」

１０１３航空隊と２２１２航空隊それぞれの隊長が部下に指示を出すと、「了解！」隊員たちが１０人ずつに分かれて、１０人がそれぞれの死角をカバーし合いながら攻撃開始。そのどれもが対ＡＭＦに適したヴァリアブルシューートだ。それが各機体にガッツンガッツン当たってく。でも弾殻部分がＡＭＦを突破する前に機体がマッハで離れて行くから、ほとんどが無効化されてるっぽいな～。こりゃ足止めが必要かな。

「シャル！　ウェポンベイが開いて、ミサイルポッドが出て来たぞ！」

「（ちょっとクラクラするけど、そんなこと言ってられないよね！）ヤーー！」

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーーク――

紅翼を大きく羽ばたかせて、ミサイル発射の阻止をするために猛攻を続けるヴィーータや航空隊の元へ高速移動。わたしはミサイルを発射された後の迎撃のために「カートリッジロード！」して、広域魔法をスタンバイ。

（戦闘機本体にＡＭＦはあっても、ミサイルには無いのは不幸中の幸いだよね～）

"キルシュブリューテ"の刀身に魔力を付加して、「せぇ～っの！」振りかぶった直後・・・

――ＩＳスローターアームズ――

――ＩＳレイストーム――

――ＩＳツインブレイズ――

その娘たちは闇夜から突如として現れた。大きなブーメランのような大剣を持つヘッドギアの少女、エネルギーを刃状に固定した双剣持ちのヘアバンドを付けた少女、少女か少年か見た目じゃ判別しにくい子供、計３人がわたし達に奇襲を仕掛けてきた。

「墜ちてください」

「その服装、テメェらもシコラクスか！？」

「これ以上の暴挙は許さない」

「そっくりそのまま返してあげる・・・！」

ヴィータに向かって言ったのはヘアバンドの少女で、わたしに向かって来たのはヘッドギアの少女。彼女は左手に持つブーメランを投擲してきたから、わたしは鞘に魔力を付加した上で「せいや！」ブーメランを鞘で迎撃したんだけど、「重っ！？」見た目通りというか、ブーメランを受けた鞘から左手、そして全身へと衝撃が駆け抜けた。

「ふんっ！」

「邪魔を・・・・！」

左手は痺れて上手く動かせない。だから右手に持つ"キルシュブリューテ"を頭上で水平に構え、少女の振り降ろして来たブーメランをまともに受け・・・ずに流して捌くことに注力する。直撃と同時に刀身を傾け、彼女のブーメランを滑らせてやった。僅かに体勢を崩した彼女の首筋へ向けて即座に「ぅらぁぁぁっ！」峰打ちを打ち込んだ。

「んぐぁ！？」

少女がよろけたところに、「かはっ・・・・！」今度は鳩尾に膝蹴りを入れて、「今は寝てなさい！」その長い後ろ髪を引っ掴んで地上へ向けてぶん投げる。でもその僅かな攻防の所為で「ミサイルが・・・！」撃たれてしまった。

「くそっ・・・・！」

ヴィータはヘアバンドの娘と切り結んでいて、航空隊員たちは「うわぁぁぁぁ！」3人目の子供による幾条もの光線によって次々と撃墜されていってる。戦況は最悪。ミサイルを迎撃できるのは今、わたしただ1人だけ。

「光牙――」

――スローターアームズ・クロッシングダンス――

さっきの少女のブーメランが４つと増えて、どこからともなくわたしの元へ飛来した。ああもうマジで「鬱陶しい！！」けど、ここは回避を最優先、魔法はミサイル迎撃の為に使うべき。そう判断したわたしはマギークライスを足元に展開してソレを蹴り、紅翼を折り畳んだ状態で前方へ跳ぶ。

「閃衝刃！」

紅翼を大きく広げると同時に刺突を繰り出し、刀身に纏わせてた魔力を槍として放つ。地上本部、ミサイル、戦闘機、わたしっていう位置からしてもう全弾の迎撃は難しいけど、誘爆を狙えばまだなんとかなるはず。というか、さっさとシールドを再展開してほしいんだけどね。どうせこんな事態になるなんて予想すらしていなかった所為で、再展開に手間取ってるんでしょうけど。

――ＩＳレイストーム――

「んな！？」

光線が網目状に放たれて来て、わたしの閃衝刃をすべて相殺した。それはつまり・・・

「ダメぇぇぇぇーーーーー！！」

１１０発のミサイルが地上本部に直撃することを示していた。でも

「させっかよ！」ヴィータがシュワルベフリーゲンを１２発と打ち放って迎撃を強行。先頭のミサイルに巧く着弾したことで誘爆が見事に発生したんだけど、「ヴィータ！」がヘアバンドの娘の斬撃を背中にまともに受けて、そのまま墜落してく。

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

紅翼を羽ばたかせて墜落してくヴィータの元へと急ぐんだけど、ヘッドギアの娘のブーメラン３つが襲いかかって来た。それに彼女もブーメランを手に「おおおおおお！」突撃して来る。

「サイボーグなんだから、そんな簡単に死なないでしょ！？」

わたしの周囲に氷結系魔力によって構成されたベルカ魔法陣を６枚と展開。発生するのは氷のオベリスク、そして周囲に溢れ出す冷気。

「氷牙棘華刃！」

その場で旋回して"キルシュブリューテ"で６本のオベリスクを打ち砕いて、破片全てを無数の氷の刃や礫として上方１８０度に一斉放射。さらに冷気を周囲に拡散させる。斬撃・打撃・凍結の３属性による、敵陣内での１体多数戦用術式。

（シャルロッテ様の有する氷雪系魔術最強だって話だね）

ホントにギリギリだったけどブーメラン３つは氷の刃と礫で迎撃できて、「体が、凍る・・・！？」ヘッドギアの少女の持つブーメラ

ンや右腕、そして後ろ髪を凍結していく。

「（ミサイルの直撃はもう諦めるしかない。ただ、着弾場所に誰も居ないことを祈るしか・・・！）ヴィータ！」

墜落し続けてたヴィータを抱き止める。意識を失ってるようで、ぐったりしてる。さすがのヴィータも、騎士服の防御力だけじゃヘアバンドの娘の攻撃を相殺しきれなかったみたい。それほどの威力を有してるってわけか。

「あとは、あなただけです」

「これ以上の戦闘行為を停止するのであれば、こちらからは攻撃は加えません」

「私をこの程度で撃墜できたとは思わないでいただこう」

光線を操る子供、ヘアバンドの少女、そして体の至るところを凍結されていても問題ないとでも言うようにヘッドギアの少女もわたしの前に立ちはだかった。ヴィータはリタイア、航空隊員たちも全滅してるみたい。

「くっ・・・！」

このまま地上本部にミサイルを撃ち込まれるのを黙って見ているしか出来ないなんて。でもさすがのわたしでもヴィータを抱えたまんまじゃこの娘たちの猛攻を潜り抜け、ミサイルや戦闘機を破壊する

のは無理過ぎる。でも、あの術式を使えば・・・或いは。

『もう大丈夫だよ、シャルちゃん、ヴィータちゃん！』

――ストライクスターズ――

『私たちも防衛戦に参加するから！』

――トライデントスマッシャーー――

そんな思念通話に遅れて、桜色に輝く砲撃と魔力弾８発、黄金に輝く雷撃砲が地上から放たれて来てミサイルを迎撃した。思念通話の相手、そして攻撃主は「なのは、フェイト！」だ。これで形勢逆転だ。いくらこの娘たちでも、なのはとフェイトを相手にして勝てるわけがない。そう思ったんだけど・・・

「例の部隊の分隊長２名・・・」

「僕たちの任務はこれで完了した」

ヘアバンドの少女と光線の子供（僕ってことは少年・・・？）がそうポツリと言ったのが聞こえて、ヘッドギアの少女がキッとわたしを睨みつけたかと思うと反転して、「離脱する」飛び去って行った。他の２人も飛び去ろうとするから「待て！」引き止めようとした。でも、そんな彼女たちを追い翔ける状況じゃないことを知る。

『シャルちゃん！　上！』

なのはからの思念通話に頭上を見上げて、わたしは「やられた・・・！」歯噛みした。地上本部の物理と魔力シールドを粉砕した攻撃（ちゃんと見たら巨大なミサイルだってことが判った）が、今まさに地上本部のセントラルタワーに着弾しようとしていたんだから。

「ディバイン・・・バスタァァァァーーーーッ！」

「プラズマ・・・スマッシャァァァーーーーッ！」

なのはとフェイトの砲撃が巨大ミサイルに向かって行くけど、「っ！？」その巨大ミサイルにはＡＭＦ、もしくはシールドか、何にせよ迎撃に備えて防御機構が備えてあったらしく、２人の砲撃を弾いた。そして巨大ミサイルは突如としてバラバラになって、その中から小さなミサイルが１０発と飛び出し、地上本部のセントラルタワーに続々と着弾してしまった。

Ｅｉｐｉｃｌ９－Ｂその日、ミッドチルダ～Ｌｏｓｔ　Ｐｒｏｐｅｒｔｙ　Ｒｉｏｔ　Ｆｏｒｃｅ　６～

†††Ｓｉｄｅアリシア†††

（いやぁ～、久しぶりの重要任務。ちゃんと参加できて良かった～♪）

ホテル・アグスタの警備任務で、リヴィア・アルピーノに撃墜されてからというもの、入院したりリハビリしたりと六課を空けて、みんなにいっぱい迷惑を掛けた。特に海上戦の時なんて、入院中に増えた体重を落とすためのダイエットとかいうふざけた理由で不参加だったし。

（退院してからは一応、フェイトやアリサ、ギンガとも一緒に外回り仕事やったけど・・・。ほとんど実入りの無いものだったし。ここはやっぱりおっきな仕事をサクッとやり遂げないと、復帰したって感じがしない）

そう、公開意見陳述会が開催される今日、プライソンは地上本部、それにわたし達の居る六課の隊舎にも襲撃があるかもしれないという話。地上本部を襲撃する理由は未だに判ってないけど、六課を攻める理由だけは確定してる。

（ヴィヴィオとフォルセティ・・・）

プレシアママがわたしの遺伝子からフェイトを生み出したように、プライソンが古代ベルカの王様オリヴィエと、騎士オーディンの遺伝子から生み出した子供2人だ。何かしらの計画に必要だからこそ、わざわざ聖王教会本部から聖遺物を盗んでまで生み出したんだから、必ず奪い返しに来る。その戦力を迎撃するのが・・・

「お待たせ、アリサ、すずか、シャマル、ザフィーラ、アイリ、ヴァイス」

わたしを含めての7人の防衛戦力だ。他にルシルっていう管理局内でも指折りのSSランクが居るけど、残念ながら内務調査官っていう味方でも敵でもない中立の立場っていうことで一緒に戦えない。でもルシル抜きだって大丈夫。わたし達7人なら、どんな奴らが来ても勝てる。

「これで全員ね。公開意見陳述会が終わる19時まで残り15分。出撃前に防衛戦の配置確認ね。あたしとザフィーラとアイリが前衛。隊舎前のターミナルにて戦線を張る」

「承知した」「ヤー！」

「すずかとシャマル先生は中衛。隊舎エントランスで陣地を張り、サポートをお願い」

「うんっ」「了解！」

「アリシアとヴァイスは後衛で、隊舎屋上から狙撃をお願い。向こ

うはＡＭＦを常備する兵器が主要戦力だから、ヴァリアブルシュートを主要魔法として使って」

アリサからの指示に、「オッケー！」あたしと、「うす！」ヴァイスも頷き応える。そう、勝つ自信はあっても統率の無い戦闘だと危ないから、隊舎のエントランスで集合して、こうして作戦の再確認中。

「アリシアさん、同じスナイパー同士よろしくお願いします！」

「うんっ！」

「それじゃ、１９時に備えて配置につきましょ」

そういうわけで、あたし達はそれぞれ配置先へ向かう。わたしとヴァイスは隊舎の屋上へ上がって、ヴァイスは陸士武装隊共通のバリアジャケットに変身して、ドッグタグ型の待機モードをした"ストームレイダー"を、スナイパーライフル型のカートリッジシステム搭載デバイスに変形させた。

「フォーチュンドロップ！　ブレイブスナイパー！」

≪ブレイブスナイパー、オッケーで～す♪≫

宝石で出来たフリージア型の待機モードをした"フォーチュンドロップ"をキャンディポッドに変形させた。そしてポッドの中から丸いアメ玉のような宝石が飛び出して来て、ソレがスナイパーライフ

ル型のデバイス・"ブレイブスナイパー"に変形。

「こちら後衛。スタンバイ・オッケー！」

『了解。前衛、中衛もすでに準備完了しているわ。あとは１９時に注意して待機よ』

それから１９時までの間、わたしとヴァイスはスコープを覗き込みながら３６０度をしっかり警戒。そして『１９時まで残り１０秒となりました』司令室のグリフィスから連絡が入る。わたしは「・・・５、４、３、２、１、０！」カウントして、とうとう陳述会の終了予定時刻の１９時になった。

『各員、襲撃に備えよ！』

アリサからそう言われるけど、ぐるりと周囲をスコープで覗いても人っ子１人、ガジェットや戦闘機の機影すら見えない。

『八神部隊長より連絡があり、地上本部に襲撃があったそうです！
こちらへの襲撃も考えられるので最大の警戒を、とのことです！』

こっちは静かだけど、地上本部はすごくホットみたい。とにかく地上本部の様子を見るためにスコープをそっちに向けると、「マジかよ。シールドが可視化してんじゃねぇか・・・」ヴァイスと、「そこまで強い攻撃なの・・・？」わたしは、物理シールドがフル稼働してる状況に戦慄した。

『アリシア、ヴァイス。そっちからは何か見えない？』

「いえ。アリサ姐さん。地上本部だけが襲われてるみたいっすよ」

「うん。隊舎周囲にイレギュラー反応なし」

『六課の探査システムでもクリアです』

六課じゃホントに何も起きないのに、「おい、冗談だろ！　シールドが！」地上本部を護る物理シールドが砕けたのがスコープ越しで見えた。ヴァイスがうろたえるのも解る。ゲイズ中将は鉄壁だって評価してる地上本部を護る物理シールドは、他の地上本部にも設けられてるもので、その強固さは有名だ。

『クイント・ナカジマ准陸尉、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、およびガジェット群が、地上本部が勧めていた魔力砲台アインヘリヤルを襲撃。直掩部隊と交戦、これを壊滅』

『クイント准陸尉たちはそっちへ行ったのね・・・。メガーヌ准陸尉、ルーテシア、リヴィアは？』

『地上本部近辺でルーテシアの魔力、召喚魔法が確認されました。おそらく、一派総出で本部を陥落させるつもりかと・・・』

アリサとアルトの通信を聴きながら周囲を警戒してると、『アリシア執務官補、ヴァイス陸曹。南方の空に何か見えませんか？』シャーリーにそう訊かれたから、ヴァイスには周囲警戒を続けさせて、

わたし1人で南の空を見る。

「どうっすか、アリシアさん？」

「う～ん、雲が多い上に星の光が強いからね～・・・。でもシャーリー、南の空になんかあるの？」

倍率とかコントラストの設定を変えつつ南の空を見ながら訊くと、『地上本部の物理シールドを破った攻撃が、そちらから来ているようでして』とのことで、わたしは一層注意して空を見る。でも「わかんね～」だった。さすがに雲を見透かすことは出来ないからサッパリだ。

『どういった攻撃なのかは判ってるの？』

『はい、すずかさん。ヴィータ副隊長から言われたのですが、質量兵器であるため熱源を確認するように、と』

『あぁ、となると攻撃方法は・・・ミサイル、かな？　弾道か巡航かは判らないけど』

技術官としてのすずかはこういった兵装について勉強してるから、結構詳しかったりする。レールガンだってすぐに見抜けたりしたし。弾道とか巡航の違いは、管理外世界・地球で過ごしたことのあるわたしでも判るんだけど、「アリシアさん。そのダンドウとかジュンコウってなんすか？」魔法ありきの管理世界出身者のヴァイスは判らないよう。

「あー、簡単に説明すると、弾道ミサイルはこう・・・弧を描くように飛ぶのが特徴ね。一度大気圏外まで上げて、あとは慣性に従って飛んで来るの。巡行ミサイルは推進力と翼のある物で、こう真っ直ぐに飛ぶの」

「へぇ～。で、メリット・デメリットがあるんすか？」

「えっと・・・『すずか、ヘル～プ！』」

手振りを交えて説明すると、さらに詳しい事を訊かれたから思わずすずかに通信を繋げる。すずかは短く笑った後、弾道ミサイルは射程が長くて迎撃され難く、巡航ミサイルは命中率が高い、って軽く説明した。

『んで、そのどっちかのミサイルが撃たれてるってわけね。六課に撃たれてないのは不幸中の幸いね』

『熱源を探知しました！　加えて機影を確認！　やはり南の空からで、高度２０００ｍの距離３２０００！』

『サーチャーで機影を捉えることが出来ました！　シャックス、アンドラス、シームルグが各１０機、マルファスが２機の３２機編隊！』

『地上本部を攻撃した物は残念ながら確認できませんが、高度は６５００ｍの距離１２０００辺りだと思います！』

グリフィス達からの報告を受けて、スコープの設定を合わせて空を見る。雲の切れ間に「見えた！」戦闘機編隊の影を発見。あとはミサイルを見つけるだけなんだけど、「魔力シールドまで破られちまった！」それより早く着弾しちゃってた。

『各員、来たわよ！』

『魔力反応、増大！』

『召喚魔法を確認！』

アリサ、シャーリー、グリフィスから警告が入った。スコープを覗くまでもなく召喚魔法陣が海上に展開されたのが視認できる。だから「こちら後衛！　敵影視認後、攻撃開始します！」バイポットを立てて、床に伏せて"ブレイブスナイパー"を構える。そしてグリップにはめ込まれた魔石に魔力を流し込んで、「んっ・・・」魔石から数倍にして返還してもらう。これで今のわたしはＡＡＡ＋の魔力だ。

「ヴァイス！」

「うっす！」

ヴァイスも"ストームレイダー"の銃口を召喚魔法陣上に合わせる。そしてガジェットのカプセルタイプのＩ型と球体タイプのⅢ型の頭が出たのを視認して・・・

「「ヴァリアブル・・・」」

「シューット！」「バレット！」

魔力を圧縮して生み出した魔力弾を膜状バリアで包んだ、対ＡＭＦ多重弾殻射撃魔法・ヴァリアブルシュート（もしくはバレット）を発射。召喚途中で撃ち抜くなんて、変身中とか口上中のヒーローに攻撃を加えるっていうＫＹ攻撃だけど、ヒーローはこっち側だからきっと大丈夫、うん。

「ブレイブ、どんどん撃ち抜くよ！」

≪オッケー！≫

――ヴァリアブルシュート――

「俺たちも負けてられねぇぞ、ストームレイダー！」

――ヴァリアブルバレット――

出現しきる前に次々とガジェットを撃ち抜いていく。ヴァイスも百発百中の腕前でどんどん撃ち抜いてく。さすがはかつてはエース級のスナイパーと謳われた魔導師。わたし以上の速さで撃破数を伸ばしてる。わたしだって「負けてられない！」よね。

†††Ｓｉｄｅアリシア⇒アリサ†††

地上本部への襲撃から遅れて始まった機動六課への襲撃。迎撃に出るのはあたし、すずか、シャマル先生、ザフィーラ、アイリ、そしてヴァイス。地上本部近辺にガジェットやら死体兵器ＬＡＳやらを召喚していたルーテシアの召喚魔法が、ここ六課にも発生したとなればルーテシアやリヴィア、メガーヌ准陸尉がこっちに来てる可能性が大。

「その調子よ、アリシア、ヴァイス。おかげであたし達は楽できてるわ！」

隊舎屋上から精密射撃援護してくれてるアリシアとヴァイス。２人が召喚途中のガジェットⅠ型とⅢ型を撃ち抜いていってくれるから、前衛のあたしとザフィーラとアイリ、中衛のすずかとシャマルは、ただ眺めてるだけで良い状況だ。

「バニングス。撃ち漏らしだ、我々の出番だぞ」

馬鹿ほど召喚され続けるガジェット群。アリシア達も頑張って迎撃してくれてたけど、とうとう召喚を許したガジェットも出て来た。ザフィーラが真っ先に駆け出して、「ふんっ！」鋼の軛を発動。Ⅰ型のガジェット４機を拘束杭で真下から貫いた。

「アイリ！」

「ヤー！」

あたしとアイリもいざ出陣よ。"フレイムアイズ"の剣身に炎を纏

わせ、それを大きく伸ばして「フレイムウィップ！」として振るってガジェットⅢ型３機を薙ぎ払う。アイリは「アイスマン！」ガジェット４機の周囲の水分を急速冷凍、ゆきだるま型の氷に閉じ込めた上で「氷結の軛！」拘束杭で貫いて粉砕した。

『警告！　魔力反応増大！　ＳランクとＡＡＡ＋ランク！　・・・メガーヌ准陸尉とルーテシアです！』

アルトから報告が入る。それと同時に、あたしも肌で魔力反応を感知できた。Ｓランクなんてそうはいないもの。だから「すずか、スペルブーストお願い！」こちらも万全の態勢で臨むまで。"フレイムアイズ"を片刃剣ファルシオンフォームから銃剣バヨネットフォームへと変形させる。

『うんっ！　ザフィーラ、アイリ、２人にも行きます！　パワーブースト・スペルフォース！』

あたしたち前衛３人に、対象の魔法の威力を強化するブースト魔法を掛けてもらう。

――グリッツェンラヴィーネ――

ガジェットの召喚が止んだと思った直後、「なんじゃこりゃ！？」海の中から３ケタ近い魔力弾が横一列に飛び出して来て、カクッと軌道を変えてあたし達の居るターミナルに向かって雪崩のように降って来た。すぐに迎撃をって思ってカートリッジをロードしていると・・・

「私と――」

「私で、防ぎます！」

「アイスミラー八陣の3、ウィドゥスウォール！」

「風の護楯！」

すずかとシャマル先生がそう言って、2人は即座にシールド、それぞれ4枚ずつの計8枚が横一列に並んで展開した。直後にガツンガツンと魔力弾の雨がシールド8枚に着弾していく。

（これほどの物量攻撃、ルシルくらいしか使えないって思ってたけど・・・！）

3ケタ近い魔力弾の一斉発射なんて、なのはやはやてですら無理なこと。この薄い紫色の魔力光はメガーヌ准陸尉のもので、彼女は確か近代ベルカ式の射撃魔法使い。いくら近代ベルカ式が、ミッド式魔法をベースに、古代ベルカ式魔法をエミュレートして再現した魔法体系だからと言って、純ミッド式の高位魔導師であるなのは以上の射撃が撃てるとは思えないわよ。

『アリサ！　メガーヌ准陸尉とルーテシアの姿を視認！』

『Ⅱ型に乗って、海上からこっちに向かって来てるっす！』

攻撃が止んだところで入ったアリシア達からの報告に、「撃ち落しなさい」あたしは即指示を出す。わざわざ陸地に降ろして同じ土俵で戦う必要性は感じられないわ。海に落ちたところでサクッとバインドで拘束してやれば、メガーヌ准陸尉たちを傷つけることもないしね。

『りょ～か～い！』

――シューティングスター――

空色に輝く一筋の閃光が海上へ向けて放たれた。さらにもう1発、2発、3発、4発と撃ち続けられる。

――エッケザックス――

――トーデスドルヒ――

撃墜の報の代わりに海の向こうから砲撃1発と射撃魔法（はやて達ベルカ式射撃と同じダガータイプね）12発と飛んで来た。それらを回避しつつ、「アリシア！　しっかり撃墜しなさい！」あんだけ撃っておいて外してんじゃないわよ、って注意する。

『ごめん！　防がれた！　狙撃を続ける！』

「Ⅱ型、メガーヌ准陸尉、ルーテシアを視認！」

すずかの言う通りガジェットⅡ型に乗って海上からこっちに向かっ

て来るメガーヌ准陸尉たちの姿が、肉眼でもギリギリ捉えることが出来た。アリシアの狙撃をシールドで防いでるっぽいわね。その持続力と言い、大した防御力だわ。

――アドラーフリーゲン――

――トーデスドルヒ――

先行して飛来する射撃魔法による空爆。あたしは「フレイムバレット！」で、アイリは「フリーレン・ドルヒ！」で迎撃。アイリの２８発っていう物量のおかげで、その全弾を迎撃できた。

「アリサ！　海上を狙って！」

「え？・・・ええ！」

"フレイムアイズ"の銃口をⅡ型の行く手の海上へと向けて、「イジェクティブ・ファイア！」火炎砲撃を発射。砲撃は一直線に海に着弾して派手に水飛沫を上げた。

「すずか！」

「うんっ！」

――リフリジレイト・エア――

水飛沫を瞬時に凍らせるすずかの氷結魔法。Ⅱ型の飛行速度と高度、

タイミングを考えれば、直撃だったと思うんだけど。すぐに「あらあら」そんな戸惑いの声が頭上から聞こえてきた。凍った水飛沫の頂上に、「メガーヌ准陸尉、ルーテシア」が佇んでいた。

（やっぱりリヴィアの姿が無いわね・・・）

「さぁ、もうひと踏ん張りといきましょうか」

「うん。ママ。さぁ、お出で・・・」

あたし達の居るターミナル全体にいくつもの召喚魔法陣が一斉に展開された。再びガジェットが召喚されてきたんだけど、「無駄よ」即座にアリシアとヴァイスの狙撃によって撃ち抜かれたガジェットは爆散していく。

「メガーヌ・アルピーノ、ルーテシア・アルピーノ。あなた達を保護します。・・・もう1人、リヴィア・アルピーノは今どこに居るのか答えなさい」

ルーテシアと同じSランクで、奇襲とはいえアリシアを戦闘不能にし、エリオを完封したリヴィア。アルピーノ家で一番強いのはおそらくリヴィアだわ。あの子の姿が見えないことが不安でしょうがない。

「自分で探してはどうかしら？　管理局設備のある立派な隊舎が、すぐ後ろに在るのだし」

『ロングアーチ。リヴィアの魔力反応はある？』

メガーヌ准陸尉の視線が隊舎の方へ向く。だったらお望み通りこっちで調べてやるわよ、っていうわけでロングアーチに通信を繋げたんだけど、「・・・・！？」酷いノイズだけが返って来た。これは通信妨害を受けてるわね。

「すずか、シャマル先生。ロングアーチと連絡が取れないわ。様子を見て来て」

「・・・判った。シャマル先生」

「ええ。ザフィーラ、アリサちゃん達をお願いね」

「うむ」

すずかとシャマル先生が踵を返して隊舎の中へと駆けて行ったのを確認して、「プリンツェッスィンとプフェルトナー、返してもらおうかな」あたし達の立つターミナルに1人降り立ってそう言うメガーヌ准陸尉へと視線を戻す。

「あんなに素晴らしかった貴女が、洗脳か改竄かは知らないけど最低な女性になってしまいましたね。あの子たちには、ヴィヴィオとフォルセティと言う名前があるのよ。それを・・・」

「？？・・・大人しく引き渡さないなら、力尽くで取り返すのみよ。ルーテシア」

「ん。ガリューー！」

ルーテシアが何かの名前のような言葉を発した直後、激しい肉のぶつかる音と共に背後から「むっ！？」ザフィーラの驚きの声が聞こえてきた。ザフィーラの方を向くと、虫のような羽を生やした人型の人外が、ザフィーラに殴り掛かっていた。そして男同士？の殴り合いに発展。

「フォーゲルケーフィヒ」

そんでメガーヌ准陸尉は魔力発射体（スフィア）１０基で構成されたリングを３つと展開。ルーテシアはルーテシアで、ガジェットⅠ型とⅢ型の召喚を続ける。

「ザフィーラ、ソイツは任せた！　アリシア、ヴァイス、ガジェット迎撃をしっかり頼むわよ！」

「承知した」

『『了解！』』

戦術は変わらない。あたしとアイリで、メガーヌ准陸尉とルーテシアを抑える。"フレイムアイズ"のカートリッジをロードし、「クレイモアフォーム！」へと変形させる。半実体化した炎熱系魔力の大剣を有する"フレイムアイズ"の柄を両手で握る。

『アイリ、ちょっとだけメガーヌ准陸尉を抑えておいて』

『ヤー！』

――コード・シャルギエル――

アイリは自身の周囲に穂先がハート型の氷の槍を２０本と展開して、

「撃ってきなよ、メガーヌ准陸尉！」って挑発。

「言われずとも♪」

――シュヴァルムシュパッツェン――

メガーヌ准陸尉の周囲に浮遊してる魔力スフィアリングから、小さな魔力弾がガトリング砲のように連射されてきた。アイリも「ってぇぇーーー！」氷槍を一斉発射。メガーヌ准陸尉の攻撃に巻き込まれる前に・・・

「せい！」

――フォックスバット・ラン――

短距離高速移動魔法を発動して、凍った水飛沫の上に立って召喚魔法を発動中のルーテシアの元へと跳ぶ。ルーテシアの目の前で止まったあたしは"フレイムアイズ"を大きく振りかぶる。この時点でルーテシアは「っ・・・！」大きく目を見開いて、ベルカ魔法陣型のシールドを張った。

「（この速さ、オートで張ったわね・・・。でも）無駄よ！」

そのシールドへ向けて「うりゃぁぁぁぁ！」"フレイムアイズ"を横薙ぎに振るった。クレイモアフォームの強みはひたすらに高火力に尽きる。Ｓランクの魔力で作られたシールドだろうが、この火力を以って「ぶった斬る！」わ。斬撃がシールドに衝突。抵抗は確かに感じられたけど、すぐにガシャァン！と破壊した。

「あ・・・」

（安心なさい。刃で斬るんじゃなくて腹の方で打ってあげるわ・・・！）

刃がルーテシアに届く前に"フレイムアイズ"の向きを咄嗟に変え、剣身の腹でルーテシアをぶん殴ってやった。あたしの打撃をまともに受けたルーテシアは吹っ飛び、「ルーテシア！」ターミナルの方からメガーヌ准陸尉の悲鳴が聞こえてきた。

「アイリ・・・！」

凍った水飛沫の上に着地してターミナルを見ればアイリは片膝を突いていて、メガーヌ准陸尉との撃ち合いで押し負けたのがその様子で判る。そして人外は、ザフィーラに蹴り飛ばされたその勢いのままにルーテシアが吹っ飛んだ方へと飛び立った。

（今ならメガーヌ准陸尉を墜とせる！）

ルーテシアは手応えからしてリタイアしたはず。ガリューはルーテシア救出へ、メガーヌ准陸尉は意識を全部ルーテシアへ向けてる。若干卑怯な感じだけど、これはメガーヌ准陸尉たちを救うチャンスでもある。プライソンをブッ倒すまでの間、保護しきればあたし達の勝ちよ。

「ヴォルカニック・・・スカッシャァァァァーーーーー！！」

上段に振り上げていた"フレイムアイズ"を振り降ろしつつ、剣身を大きく伸長させてメガーヌ准陸尉にヒットさせようとした。メガーヌ准陸尉があたしからの攻撃に気付いてこっちを見上げたから目が合った。距離があっても判るほどの怒りを宿した眼光。

（今はどれだけ憎まれたって構わないわ。あなた達をプライソンの呪縛から解き放つためなら・・・！）

でもこれでメガーヌ准陸尉も撃破ってところで　、"フレイムアイズ"の剣身に強い衝撃が奔って「きゃあ！？」半物質化が強制的に解除されて爆炎と化した。

『アリサ！　７時の方から新手のガジェットⅡ型が１６機！　兵装はレールガンとミサイルポッドを搭載した２種！』

『アリサ姐さんのフレイムアイズを撃ち抜いたのは奴らっす！』

アリシア達からの報告を受けた直後にまた、「っく・・・！」レー

ルガンから射出された弾丸が襲ってきて、あたしの立っていた水飛沫を粉々に吹き飛ばした直後にドォーン！と遅れて砲声が聞こえてきた。

「ルーテシアが伸びてる間、Ⅰ型とⅢ型は召喚されないわ！　その内に撃墜して！」

『『了解！』』

「アイリ！　まだ動けるならルーテシアとガリューを捕縛しておいて！」

『ヤー！』

ミサイルポッドやらレールガンから放たれて来る何十発っていうミサイルと弾丸。ここですずか達を隊舎に向かわせたのが裏目に出た。シャマル先生だけでも防御担当として残っておいてもらうべきだったわ。

（レールガンはあたしを、ミサイルは隊舎を狙ってるわね・・・！）

飛行魔法を発動して、その場に留まって的にならないように動き続けながら"フレイムアイズ"を銃剣バヨネットフォームへと戻して、「フレイムバレット！」を連射してミサイルを迎撃しつつ、「メガーヌ准陸尉・・・！」にも火炎弾を撃ち込む。

「この・・・！」

――トライシールド――

ベルカ魔法陣型のシールドを張って防御しながら、ルーテシアを抱えて陸地にまで戻って来たガリューの側まで駆け寄ろうとしたけど、「これで一網打尽！　氷結の軛！」タイミングを見計らってたアイリによる拘束杭が、メガーヌ准陸尉、ルーテシアとガリューを隔離するように突き出した。さらにザフィーラも「鋼の軛！」を発動して、強固な檻としてメガーヌ准陸尉たちを完全に閉じ込めた。

「ナイスよ、アイリ！　んで、あとはガジェットを――」

Ⅱ型へと銃口を向けた直後、隊舎1階と2階から爆炎が上がった。それはあまりに突然で、「きゃぁぁぁ！？」アリシアと、「うぉぉぉ！？」ヴァイスが悲鳴を上げる。

「すずか！　シャマル先生！」

2人からの連絡が無い上、こちらもメガーヌ准陸尉たちとの交戦で精いっぱいだったから、すずか達のことは意識の外へ置いてた。だから今さらになって念話を繋げるけど、ノイズしか返って来ない。

――バスターラッシュ――

藤紫色に輝く砲撃が1発、隊舎の壁を突き破って来た。あの魔力光はすずかのものに違いないから、今の砲撃はバスターラッシュだわ。嫌な予感は当たってた。姿の見えなかったリヴィアが、メガーヌ准

陸尉たちと別行動で六課の隊舎に潜り込んでいたのね。そして今、すずかと交戦に入ったに違いないわ。

「ルシルは何やってんのよマジで！　アイリ、ザフィーラ！　アリシア達と一緒にⅡ型の迎撃をお願い！」

「ヤー！」「承知！」

緊急時でも出向先の利になることはしてはいけない。そのルールの元に内務調査官として徹底して戦力にならないことを貫いてるとしたら、たとえそれがルールだとしてもここまでされて遵守するならマジでハッ倒す。

「邪魔すんな！」

――フリンジングボム――

アリシア達からの迎撃を回避しつつ、あたしに向かってレールガンを撃ち込んで来るⅡ型４機にもうキレた。バスケットボール大の火炎弾を、こっちに向かって来てるⅡ型へ向けて３発と連射。軌道変更して回避に移ったⅡ型だけど、「逃がさないわよ！」火炎弾を同時に炸裂させてⅡ型を爆炎に呑み込ませてやったわ。

「外は任せたわよ！」

Ⅱ型の迎撃をアリシア達に任せて、さらに炎を噴き上がらせた３階へと降り立つ。廊下の至るところに炎が燻ぶっていて、「ごほっ、

ごほっ！」黒煙に咽る。そこら中にガジェットⅠ型やⅢ型の残骸が散らばっていて、「コイツらが自爆したのね・・・！」爆発の原因だと推測。

「すずか、シャマル先生！　みんな！」

ガジェットの残骸を蹴飛ばしながら廊下を突き進んでいると、ドォン！と階下から爆発音と衝撃が伝わってきた。階下に降りるために階段を目指したんだけど、階段が崩落していた。その階段は、ヴィヴィオやフォルセティと一緒に階段遊び・グリコをやった思い出のあるところだった。

「く・・・！」

2階へと飛び降りて、「みんなー！」声を掛けながら燃えている各部屋を覗き、誰も居ないことを確認しながら移動を続けていると、「っ！？」背後に気配を感じた。振り向きざまに"フレイムアイズ"を横薙ぎに振り払う。

「すごい。今の奇襲、この部隊で見破ったのはあなた1人だけ」

「なに・・・？」

あたし1人だけってどういう意味よ。それにこの部隊で、って。それだとまるで・・・。嫌な光景が脳裡に過って、「アンタ、まさか・・・！」リヴィアを睨みつける。するとリヴィアは「クス♪」ニタリと笑って、左手をこっちに差し出して握り拳を開いた。

「スノーホワイト、クラールヴィント・・・！」

リヴィアが握っていたのはすずかとシャマル先生のデバイスの待機形態だった。リヴィアの手に2人のデバイスが握られていると言うことは、すずかとシャマル先生はすでに負けた後だってことになる。

「（ルシル・・・！　ホントに何やってんのよ・・・！）返しなさい、ソレはアンタが持っていていいモノじゃないのよ！」

――フォックスバット・ラン――

高速移動魔法を発動して、一瞬にしてリヴィアへと最接近をする。"フレイムアイズ"の刃の方を向けての斬撃を繰り出す。

――ケレリタース・ルーキス――

「っ！」

リヴィアの姿がなんの予備動作も無しに消滅した。地下水路でのエリオとの戦闘データは何度も観た。結果、リヴィアは高速移動魔法の他に転移スキルを有しているのだと、あたし達は結論付けた。

「フレイムウィップ！」

銃口から炎の鞭を発射して、あたしはその場で旋回しながら振るった。隊舎の廊下の壁を巻き添えに破壊しちゃったけど、今は許して

ほしいわ。あたしの周囲を炎の鞭で護っていたこともあって、「姿を見せたわね」リヴィアが範囲外に現れた。そしてリヴィアは右拳に魔力を付加して、大きく振りかぶった。

「ハーツイーズ・・・ストライク！」

突き出された右拳から放たれる砲撃。ここが狙い目ね。砲撃発射途中の体勢なら、転移スキルも高速移動魔法も使えないでしょう。あたしは前に倒れ込むように体を傾け、砲撃と床の間スレスレをダッシュ。その途中に魔法をスタンバイ。砲撃が途切れた瞬間にはあたしはリヴィアと肉薄していて・・・

「イジェクティブ・ファイア！」

「っ・・・あ・・・！」

銃口をリヴィアに向け、トリガーを引いて火炎砲撃を発射した。砲撃はリヴィアに直撃したのをしっかりと視認できた。一応は火力を抑えてあるとはいえ、直撃を受けた以上は撃墜は必至。砲撃に呑まれて吹っ飛んだリヴィアの手から、"スノーホワイト"と"クラールヴィント"が離れたから、慌てて左手でキャッチする。

「・・・。すずか、シャマル先生・・・！」

あたしの火炎砲撃の所為でスプリンクラーが起動しちゃったけど、異常じゃないからそのまま放置。踵を返して2人や他の隊員たちの姿を捜していると、「今のは危なかった」目の前にリヴィアがスッ

と音もなく現れた。纏ってるロングコートの至るところに破れた跡があるから、無傷ではないようだけど・・・。

（墜ちる前に、転移スキルで逃げたか・・・！）

「怒ったんだから。すっごく痛い目に遭っても知らないんだから！」

足元に藍色の魔力光に輝くベルカ魔法陣を展開したリヴィアが、とんでもない魔力を放出し始めた。リヴィアの姿が一瞬だけ光に呑まれたかと思えば、ノースリーブのセーラー服へと変身していた。リヴィアの防護服も換装機能があることはすでにリサーチ済みだから、驚くほどのものじゃないわ。

「泣いたって許さないからね！」

「それはあたしのセリフよ！」

グッと身構えたリヴィアに続いてあたしも"フレイムアイズ"の銃口を向ける。そしてリヴィアが普通に駆け出して来たから若干拍子抜けしながら「フレイムバレット！」牽制の意味を込めた火炎弾連射。リヴィアは手の甲に小さなシールドを展開して、火炎弾を裏拳で弾きつつ、あたしに突っ込んで来る。

「（テスタメントやルシルと言ったモンスター魔導師と相対した経験が、あたしを冷静にさせてくれるわね・・・）だったら、もう一度吹っ飛ばしてあげるわ！」

――イジェクティブ・ファイア――

火炎砲撃を発射。するとリヴィアは、さっきのあたしのように砲撃と床の間を一足飛びで突っ込んで来た。あたしにその手が通用すると思ったなら・・・

「あたしを甘く見過ぎてい――」

バヨネットフォームは近接戦闘を行えるように刃が銃身下にある。だから懐に入られても凌ぎきる自信があった。でも「あが・・・っ!?」背中に途轍もない衝撃が襲って来た。そのあまりに突然の衝撃に体が反り返って、思わず"フレイムアイズ"を手放してしまった。足が床から離れて、体がリヴィアの方へ吹っ飛ぶ感覚を得た。

「ありがとう、ディード。良いタイミングだった」

リヴィアがそう言ったのが聞こえた。ディード。一度はドクターやシスターズがプライソンの研究施設から保護したけど、奪い返された子供の1人と同じ名前。

（伏兵が・・・まだ・・・居たなんて・・・）

「だから言ったのに。すっごく痛い目に遭っても知らないんだから、って!!」

――トイフェルファオスト――

「ぐふっ・・・・！」

あたしのお腹に打ち込まれた魔力付加のリヴィアの右拳。反り返ってた体が今度はくの字に曲がる。息が出来ない。意識が薄らぐ。膝から床に落ち、蹲ったあたしは盛大に胃の中の物を吐いた。視界が涙で大きく歪む中、リヴィアと、彼女の隣に寄り添うように佇む、あたしを背後から襲ったディートか言う少女を見上げた。

「どうしますか？」

「放っておいたらまた、攻撃されるかもしれないし・・・。ここで倒しちゃおう」

「判りました。一思いに、一撃でその意識を刈り取ってあげます」

リヴィアの右脚に魔力が付加されるのが判って、ディードは双剣を頭上に掲げた。そして・・・

「バイバイ」

――トイフェルフース――

リヴィアは振り上げた右脚であたしを蹴ろうとし、ディードは掲げていた双剣を振り降ろして来た。バリアでなんとか持ち堪えられないか、って思考を巡らせたところで、「そこまでだ！」その一言と同時・・・

――闇よ誘え、汝の宵手――

平たい影の手がわんさかと所々にある影から伸びて来て「っ！？」リヴィアとディードを拘束した。続けてガシャァン！と窓ガラスが破砕されたかと思えば、「アリサ。すずか達は大丈夫だ」今一番知りたかった言葉と一緒にアイツが・・・

「お、おそい・・・わよ、ルシル・・・」

ルシルが現れた。

Ｅｉｐｉｃｌ９－Ｃその日、ミッドチルダ～Ｍｉｓｓｉｏｎ　ｆａｉｌｅｄ～

†††Ｓｉｄｅすずか†††

ヴィヴィオとフォルセティを奪い返すためか、メガーヌ准陸尉とその娘のルーテシアが機動六課に襲撃を仕掛けてきた。でもそのために防衛戦力として隊舎に残ってた私やアリサちゃん、シャマル先生にザフィーラにアイリ、それにヴァイス陸曹は、それぞれの持ち味を活かしてこれを迎撃。だけどその途中でロングアーチとの連絡が取れないと言うことが判って、私とシャマル先生は念のために隊舎内に戻ってその様子を確認しに行くことに。

「ロングアーチ。誰か応答して」

グリフィス君やシャーリーに通信を繋げるけどノイズばかりが返ってくるだけ。酷い通信妨害を受けてる。そんなロングアーチの様子を確認しに行くために階段を駆け上がって、指令室へと向かう。そして指令室のドアの前に辿り着いて、ドアがスライドして「みんな！」声を掛けながら中へ入る。

「「え・・・！？」」

グリフィス君、シャーリー、アルト、ルキノの４人が床に倒れ伏してる光景があった。さらには機材がメチャクチャに壊されていて、火花を散らしては白煙・黒煙を上げていた。私はシャーリーとアル

トとルキノ、シャマル先生はグリフィス君の側に駆け寄って抱き起こして「しっかり！」呼び掛ける。

「ダメ、完全に意識を刈り取られてるわ！」

私がいま抱えているシャーリーもグッタリはしているけど呼吸はちゃんとしている。とにかく「ここに居たんじゃ火に呑まれちゃう」から、みんなを廊下にでも避難させないと。1人ずつ懸命に廊下へと避難させていく。

「これ以上延焼しないように、せめて火を消しておかないと」

ひとり指令室に戻って、「リフリジレイト・エア・・・！」室内に強力な冷気の渦を発生させて鎮火させた。それからシャマル先生と話し合って、グリフィス君たちを緊急時の避難先として決めていた寮に運ぶことを決めたんだけど、どうも人手が足りない。助けを呼ぶにも念話も通信もダメだし・・・。

「とにかく！　引き摺ってでも・・・！　むぅぅ～～～！」

シャマル先生がグリフィス君とルキノの手を取って、ズリズリと引き摺って行く。それしか方法が無いよねって観念した私も「ごめんね～」シャーリーとアルトの手を引っ張ってズルズルと引き摺って行く。出来るだけ怪我をしないように、スカートが脱げないように、そしてグリフィス君たちを襲い、指令室をメチャクチャにした犯人を警戒して、廊下を歩く。

「スノーホワイト。魔力やエネルギー反応はある？」

≪いいえ。隊舎内ではすずかとシャマル先生のみですわね≫

「そう。・・・リヴィアが居るかもって思ったんだけど・・・」

屋外にはメガーヌ准陸とルーテシアだけだったから、まず間違いなくリヴィアが居ると思ったんだけど。ううん、何かしらの魔法を使ってステルスモードに入ってるかもしれないし。もしくは、また別の戦力が来ているかも知れない。

「さーてと。階段はどうしようかしら・・・」

2階へ降りるための階段に到着して、このまま引き摺って降りて良いのかちょっと悩む。でもここでジッとしててもしょうがないからそのまま降りて行く。引き摺っているグリフィス君たちの踵がガッツンガッツン踏み面に当たる。あとでシャマル先生に治癒魔法を掛けてもらおう。そして3階と2階の途中の踊り場を踏んだその時・・・

「「きゃぁぁぁぁぁ！？」」

大きな爆発音と立っていられない程の振動が連続で襲ってきた。警戒はしていたけどその突然の振動に立っていられなくて、私とシャマル先生はドテッと転んじゃった。当然「あー！　ごめん！」グリフィス君たちも、踊り場に後頭部をゴツンと・・・。気を失っているから反応はないけど。

「今の爆発は何！？」

「黒煙が・・・！」

２階からここ踊り場に上がって来る熱を持った黒煙。防護服の袖で口と鼻を覆い隠して、「シャマル先生。どうしましょうか」これからどう動くかを相談する。

「このまま降りるのは危険だわ。しょうがないけど３階に戻りましょう」

「判りました。ごめんね、みんな。とりあえず、スノーホワイト。黒煙を逃がすよ」

≪ 畏まりましたわ！≫

――バスターラッシュ――

壁に向かって砲撃を撃って、壁に穴を開けることで黒煙の逃げ道を作り出した。すると黒煙は私が開けた大穴から外へと一気に流れて行った。これで３階にまで黒煙が来ることはないはず。だから今の内にグリフィス君たちを３階へ運ぶ。廊下に４人を横たえさせて、「クラールヴィント！」シャマル先生が治癒魔法を同時に４人に掛けた。

「すずかちゃん。周囲の警戒をお願い」

「はい！」

――ケレリタース・ルーキス――

「っ！　すずかちゃ――」

――トイフェルフォアスト――

強大な魔力反応を背後に感知した上にシャマル先生の呼び掛け。攻撃される、そんな察知は出来た。出来てはいた。だけど、「んぐ！？」強烈な打撃が側頭部に打ちこまれた私は、そのまま意識を失ってしまった。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒ルシリオン†††

推測通りに公開意見陳述会の開催日に、プライソン一派が地上本部へ襲撃を掛け、そしてここ機動六課の隊舎にも攻撃を仕掛けてきた。ターミナルでプライソン一派を迎え撃つべくシャマル達が待機していたが・・・

「始まったか・・・」

爆発音が続けざまに聞こえ始め、魔力反応が次々と膨れ上がっていく。迎撃部隊のシャマル、アイリ、ザフィーラ、アリサ、すずか、そしてヴァイス。さらにメガーヌさんとルーテシアの魔力を感じる。が、リヴィアの魔力反応だけがどこにも無い。

（別行動を取っているのか？　気付いてくれ、みんな）

俺は立場上、助言することも出来ない役立たずだ。だが「パパ・・・」フォルセティと、「なのはママ、フェイトママ・・・」ヴィヴィオ。怯える2人に「大丈夫。ママ達、アイリお姉さん達が戦ってくれている」」優しく声を掛け、肩を抱いて抱きしめて、その恐怖を和らげさせることくらいは・・・。

「うん。だいじょうぶ、だいじょうぶ。ヴィヴィオ、手、出して」

「？・・・う、うん」

ヴィヴィオが差し出した左手をそっと掴んで「手をつなげばだいじょ～ぶ♪」フォルセティは満面の笑顔を浮かべた。するとヴィヴィオも釣られて「だいじょ～ぶ♪」怯えから一転、安心した笑顔を浮かべてくれた。微笑ましく見守っていると、きゅ～、と可愛らしい腹の鳴る音が聞こえた。

「あぅ・・・。おなかすいちゃった・・・」

ヴィヴィオが照れくさそうに腹を押さえた。すると「ぼくも・・・」フォルセティも腹を押さえて俺を見てきた。俺はここ、緊急時の避難所として決められていた寮の食堂をぐるりと見回す。テーブルを組んで作った簡易のバリケードの中で身を寄せ合っている俺たちと六課の非戦闘員。夜勤シフト組や隊舎を動かすのに必要な人員以外は、万が一に備えて施設外に退去しているため、いま隊舎に居るの

は最低限の十数人程度だ。

「ヴィヴィオ、フォルセティ。ちょっと待っていてね」

そう言って立ち上がるのは、寮母の1人であるアイナさん。母親としての経験を活かして、ヴィヴィオとフォルセティの世話係を担当してくれている。だから2人もアイナさんのことが大好きだ。

「あ、手伝います」

「いえ。セインテスト調査官はそのまま、2人の側に居てあげてください」

立ち上がろうとした俺を笑顔で制し、アイナさんは1人バリケードの間を縫って厨房へと向かった。戦闘員以外の食事は後回しにされていたからな。幼いヴィヴィオとフォルセティが腹を空かせるのはしょうがない。アイナさんは巨大な冷蔵庫から食材を取り出して、「美味しいパンケーキを作るわね♪」と、2人に微笑みかけた。

「「パンケーキ！？　やったー！」」

万歳して喜びを表す元気いっぱいな2人の様子に、不安げな表情になっていた他の隊員たちの雰囲気も柔らかいものになった。それからパンケーキが出来るまでの間、2人とあっち向いてほいをやりながら時間を潰す。

（っ！　リヴィアの魔力・・・！　いきなり現れたな）

突如として魔力を発したリヴィアの存在を探知した。俺は本当にこのまま留まっていていいのか、そう強く思う。だが俺は、もう少し現在（いま）という時間に浸っていたいと願っている。はやてやみんなと同じ時間を、同じ世界で過ごしたいと。

「もう少しで出来るからね～！」

「「はい！」」

厨房から良い香りが漂って来る。そして「はい完成！」アイナさんはパンケーキの乗った皿２枚を手に、「お待たせ」ヴィヴィオとフォルセティの元へと戻って来た。アイナさんを含めた４人の寮母は食堂の調理も担当しているから、見た目からしてもう美味いと判る。

「「いただきます！」」

美味しそうにパンケーキを頬張るヴィヴィオとフォルセティ。俺のクローンなのだから当たり前だが、俺の瓜二つだというのに義理の息子が愛おしい。この最後の契約で、俺はどこまでこの子の成長を見ていられるだろうか。

「セインテスト調査官！」

「グリフィス？　・・・すずか、シャマル！？」

そんな悲痛な叫び声と慌ただしい足音で、柔らかな空気だった食堂

は緊張色へと逆戻り。シャマルがグリフィスに背負われ、シャーリーとアルトがすずかの腕を肩に回すようにして運んで来て、ルキノが少し足を引き摺りながら遅れてやって来た。
気を失っているらしい2人は局の制服に白衣姿という、戦場では命取りになるノーマルな服装になっている。気になるのは「デバイスを持っていない・・・・!?」だ。グリフィス達はシャマルとすずかを床に横たえさせ・・・

「リヴィア・アルピーノの奇襲です！」

「最初は私たちでした！」

「次に目を覚ました時、そこには変身が解除されたシャマル先生とすずかさんが倒れていて・・・」

「リヴィア・アルピーノの姿がなかったので、急いでここに・・・・！」

そう事情を教えてくれた。フォルセティが「シャマルせんせー！」半泣きでシャマルを揺らす。俺は「大丈夫。すぐに目を覚ますよ」フォルセティの肩に手を置く。

「パパ・・・、ホント？」

「ああ、本当だとも。シャマルもすずかも、じきに目を覚ますよ」

――傷つきし者（コード）に、汝（ラファエル）の癒しを――

俺はシャマルとすずかに治癒術式を掛け、「潮時か・・・」ポツリと漏らす。もうルールがどうとは言っていられないな。リヴィアの転移スキルはやはり強力だった。シャマルとすずかが簡単に墜とされるのがいい証拠だ。あの子の転移スキルとルーテシアの召喚魔法は、攻城側としては圧倒的なアドバンテージだ。アルピーノ家が六課の攻略に来たその瞬間、こうなることは決まっていたのだろうか・・・。

「パパ・・・？」

「グリフィス。ここは任せる」

「どちらへ！？」

「緊急特例として、現時刻を以って私、ルシリオン・セインテストも戦闘に参加する。フォルセティ、ヴィヴィオをしっかりと護れよ」

俺は自分の額をフォルセティの額とコツンと合わせ、ヴィヴィオは僕が護ると公言しているフォルセティにそう伝えると、「うんっ。絶対にまもる！」フォークを片手にヴィヴィオの手もしっかりと握るフォルセティが力強く頷いた。それを見届けて俺は片膝立ちから立ち上がり、テーブルの間を縫ってバリケードから出たところで・・・

「セインテスト調査官」

グリフィスに呼び止められたから振り返ると、「お気を付けて」グ

リフィスやシャーリー達が敬礼して送り出してくれた。俺も敬礼を返し、急いで寮から飛び出す。"エヴェストルム"を起動し、防護服へと変身。まずは・・・

――暴力防ぎし、汝の鉄壁（コード　ビュルキエル）――

対物シールドを引き延ばして食堂の内壁すべてを覆い尽くす。これで万が一、寮が倒壊しても食堂は潰れないで済むし、ガジェットのミサイルやレールガンを防ぎ、魔法の流れ弾もある程度は防げるだろう。

――我（コード）を運べ、汝（アンビエル）の蒼翼――

背より剣翼１２枚を展開して空へと飛び立ち、戦況を左右できる戦力であるリヴィアの魔力を探る。ターミナルの方から戦闘音が続いているが、今はまずリヴィアの無力化を優先だ。で、アリサがリヴィアの側に居ることが判明。場所は炎や黒煙に包まれた隊舎、その３階。魔力反応を標として近付くと窓からリヴィアと・・・

（あの後ろ姿と武装・・・、ディードか！）

先の次元世界ではジェイル・スカリエッティの作品・戦闘機人として、今回ではプライソン・スカリエッティの駒・シコラクス（バトルスーツがノーヴェ達と同じだから、そうなのだろう）として存在しているディードが見える。ディードが武装のツインブレイズを振り上げているとなれば、アリサが床に倒れているかもしれないという状況だ。

「（すでに損壊してるからと言って壊していいものではないが緊急事態だ！）そこまでだ！」

――闇(コード)よ誘え、汝(カムエル)の宵手――

最優先に行うのはリヴィアとディードの攻撃を停止させること。そのために平たい影の触手カムエルを発動して、これ以上の戦闘行為が出来ないように2人を簀巻きにする。それを確認して、"エヴェストルム"で窓を叩き割って屋内に突入。

廊下には予想通りアリサが居り、床に蹲っていたが、意識はあるようで顔は俺に向けていた。そして彼女の近くにはシャマルの"クラールヴィント"とすずかの"スノーホワイト"が待機モード状態で落ちていたことから・・・

「アリサ。すずか達は大丈夫だ」

アリサを安心させるべくそう伝えた。すると彼女は嬉しそうに笑顔を浮かべ、「お、おそい・・・わよ、ルシル・・・。馬鹿・・・」次いで俺が戦闘に参加するタイミングの遅さを叱責した。

「俺の事情も少しは酌んでくれ。ほら、立てるか？」

カムエルで口まで塞がれていることで「む～む～！」と唸るリヴィアとディードを横目に、アリサに右手を差し出す。すると「あんま見ないでよ」顔を腕で覆い隠した。近くには吐瀉物があるため、腹に大きな衝撃を受けたんだろう。

「・・・あたしは少し休めば自力で動けるわ。アンタは外をお願い。・・・メガーヌ准陸尉とルーテシアとガリューはなんとか捕まえたけど・・・Ⅱ型がわんさかと来てんのよ」

「判った。シャマル達は避難所の食堂で休んでいる。デバイスを渡してやってくれ」

――傷(コード)つきし者に、汝(ラファエル)の癒しを――

アリサに治癒術式を掛け、「戦力を元に戻すのね。了解よ」俺の指示にそう答えてくれた。俺は頷き、「さてと」カムエルによって簀巻きにされているリヴィアとディードの側へと歩みる。

「気を付けなさいよ、ルシル。リヴィアの転移スキル・・・マジで厄介よ・・・」

「熟知しているよ」

「???」

"界律の守護神テスタメント"として、"霊長の審判者ユースティティア"との死闘は位相空間転移ありきだ。そういう手合いとの戦いも当然慣れている。

「すまないな、リヴィア・アルピーノ」

――深淵（ラフェルニオン）へ誘いたる微睡の水霧――

スプリンクラーが動いていたのか廊下が水浸しだったため、その水分を利用して催眠効果の魔力を含ませた霧を発生させる。アリサの方へ流れて行かないように魔力で風を生み出し、リヴィアとディードのみに霧を吸わせると目がトロンとなり、ゆっくりとまぶたを閉じた。

「よっこらせ」

2人をそれぞれ両方の肩に乗せて、俺は突入して来た窓から外へと出て屋上へと上がる。そこにはアリシアとヴァイスが居たんだが、

「コレは、オットーのプリズナーボクス・・・だったか？」立方体の結界に閉じ込められていた。

「ふむ。あそこにメガーヌさんとルーテシア、あとガリューが隔離されているんだな」

海辺の近くにはザフィーラの鋼の軛で作られた檻が立っている。これで実質残っているのはオットーだけだな。俺はコンコンと結界をノックすると、「んな！？　ルシ――セインテスト調査官！」アリシアと、「何やってんすか！？」ヴァイスが気付いて驚きを見せた。

「シャマル、アリサ、すずかがこの2人に墜とされた。まぁ俺の治癒魔法を使ったからすぐに戦線復帰できるだろうが」

そう答えながらリヴィアとディードのふとももをポンポンと叩いた。

ちなみにこれは決してセクハラではない。胸や尻を触ってはいないからな！・・・いや、どこを触っても嫌がられたらアウトだったっか。

「でも、調査官としてのルールとか・・・」

「もうそんなこと言っていられないだろ実際」

ターミナルではアイリとザフィーラが、光線を放ちまくるオットーや、それに遠くから放たれて来るレールガンを必死に躱しながらも反撃する姿がある。あれはもう持ちそうにない。

「始末書がすごいことになりそう・・・」

「始末書で済めばいいんだがな」

「え、何か言った？」

「いいや」

内務調査部からのペナルティは始末書で済むだろうが、最高評議会からのペナルティは契約通りに俺が"ジュエルシード"を巡って起こったＰＴ事件にて死亡した被疑者・テスタメントであるという秘密の暴露だろうな。

（どうせ当初の予定では、この辺りで姿を晦まそうとしていたんだ。踏ん切りを付ける時が来た、ということなんだろうな・・・）

カムエル1本を使ってリヴィアとディードの体を屋上から乗り出させる。合図1つで地上へ落下させられるように。大きく息を吸い、「プライソン一派、オットーに告ぐ！　ただちに戦闘行為を中止せよ！」アイリの氷弾を避け切ったばかりのオットーに呼び掛ける。彼女の視線が俺たちの居る屋上へ向けられ・・・

「っ！？」

カムエルによって簀巻きにされたリヴィア、それにオットーの妹に当たるディードの姿に、彼女の目が見開いたのが判った。アイリも「え、どうして・・・！？」と同じように目を見開いて驚いている。

「何が狙いだ・・・？」

「まずはこちらに向けて無粋にもレールガンを撃ってくるガジェットⅡ型の攻撃をやめさせろ」

"エヴェストルム"を二剣一対のゲブラーフォルムへと変え、その刃をリヴィアとディードに突き付ける。オットーは「公務員がそのような真似、出来るものか」と、懸命に冷静を装いながらそう返した。Ⅱ型の攻撃も止むことなく、ターミナルへと次々と撃ち込まれていく。

「残念だ」

屋上から伸ばしていたカムエル1本をブチっと解除。ぶら下げられ

ていたリヴィアとディードがスッと落下。オットーが「ディード！」大慌てで飛び立った。俺はそんな彼女の行く手にパンツァーシルトを展開。

「フォイア」

――ラケーテン・パンツァーシルト――

「なっ！？　うわぁ！」

まさかシールドが射出されるとは思わなかったのだろう。オットーは回り込もうとしていたが、それより早く射出されたシールドを腰に受けた彼女は空中でぐるっと一回転して地面にドサッと落ちた。そこを狙ってカムエルでオットーも捕縛。

「ディード！」

少しはリヴィアの心配もしてやれとも思うが、「考えを改めてもらえるか？」リヴィア達が地面に激突する直前に、地面に出来ている影からカムエル２本を伸ばして２人をキャッチして、ここ屋上へと放り投げさせた。２人を屋上から伸ばした別の２本のカムエルでキャッチ。

「俺は本気だぞ、オットー。こちらも命懸けだ。お前たち敵を無傷で捕らえる努力はしよう。だが抵抗があれば、骨の１本や２本くらいは覚悟してもらおう」

「・・・・僕に、その権限はない」

「なれば、誰がその権限を有す？　プライソンか？」

「・・・ガンマ」

ガンマ。アルファやデルタ、イプシロンと並ぶサイボーグ姉妹の1人か。だったら「こちらで勝手に破壊させてもらおう」か。"エヴェストルム"を待機モードの指環に戻し、弓を構える体勢を取る。

――弓神（コード・ウル）の狩猟――

創り出すのは魔力の弓、そして槍の如く長い1本の矢。矢を番え、「そら往け！」羽根から指を離して射る。ウルはある程度進むと、ロックオンした対象の数だけ分裂して一気に蹂躙する。超高速でⅡ型へ突き進むウルは、Ⅱ型の反撃や迎撃を許すことなく着弾し、次々と爆散していった。

「迎撃完了」

「格好つけてないで、早くここから出してよ」

ぷんぷんと頬を膨らませていたアリシアがドンドンと結界を叩いた。ヴァイスも「お願いします」小さく頭を下げた。

――破（コード）り開け、汝（メファシエル）の破紋――

障壁・結界の破壊効果を有する術式メファシエルを付加した右拳の拳打で、アリシア達を捕らえている結界をガツンと殴って叩き割ってやる。

「ふは～。ありがとう、ルシル」

「どうもっす」

「ああ。とりあえず、下に降りようか」

アリシアとヴァイスに対象を浮遊させる魔法フローターを掛け、ゆっくりと地面へと降ろしつつ、リヴィアとディードを抱え上げた俺も屋上から飛び降りた。すると「ル～シル～！」結構ボロボロになってしまっているアイリが抱き付いてきた。

「ねえねえ！　アイリ、すごく頑張ったよ！　褒めて！」

「良く頑張ってくれたな、アイリ。偉いぞ」

リヴィア達を地面にそっと降ろしてからアイリの頭を撫でると、「えへへ～♪」本当に嬉しそうに破顔した。さぁアイリはどうしようか。はやて達の元に置いていっても、どんな手を使ってでも追いかけて来そうだ。それはともかくとして、「ザフィーラ。軛を解除してくれ」遅れて歩み寄って来たザフィーラに頼む。

「いいのか？」

「問題ない。即座に俺が捕縛し直す」

「承知した。アイリ、お前の氷結の軛も解除しろ」

「ヤー」

鋼の軛が解除されると、その中からアイリの氷結の軛が現れ、それも上の方からゆっくりと消えて行き、「シーリングバインド」をスタンバイ。そしてメガーヌさんと、ルーテシアを横抱きに抱えたガリューの上半身が見えたところで発動。

「ぅく・・・！」

メガーヌさんとガリュー、もちろんルーテシアも個別に捕らえた。リヴィアと違ってメガーヌさんとルーテシアはスキルを保有しない純粋な魔導師。魔力の結合を強制的に解除するシーリングバインドは正に魔導師殺し。女性であるメガーヌさんと気を失っているように見えるルーテシアは最早逃れられないだろう。ガリューには特別に「レストリクトロック・・・！」を追加。

「リヴィア！　ディード、オットー！」

「六課襲撃犯はこれで全滅です、メガーヌ准陸尉。大人しく投降してくれませんか？」

メガーヌさんの記憶が無いのがレーゼフェアによる魔術か、プライソンによる施術か、それを確かめるためにジッと眺める。神秘は感

じられないことから、プライソンの洗脳の線が濃厚だろうな。

「悪いようにはしません。まぁ本事件が解決するまでは拘置所に入ってもらい、魔力が使えないように処置をしますが・・・。ですから、お願いします。投降してください」

メガーヌさんに頭を下げて頼みこむ。およそ１０秒くらいだろうか。沈黙が流れた後、「判りました。投降します」メガーヌさんが確かに、そう言ってくれた。俺はそのまま「ありがとうございます！」礼を言ってから顔を上げた。

「オットー、ガリューー。抵抗しないようにね」

「・・・判りました」

メガーヌさんを信じて俺はシーリングバインドやカムエルを一旦解除し、改めて手錠のようにして発動する。意識を失っているルーテシアはヴァイスが、リヴィアは俺が、ディードはザフィーラが、それぞれ横抱きにして・・・

「・・・で、どこ行くんすか？　隊舎はあの、燃えてるし・・・」

「ガレージ、護送車へ。近隣の陸士部隊隊舎の拘置所を借りよう」

「うっす」

隊舎の裏手にあるヘリポートとガレージ。そこにはヘリや陸士部隊

共通の護送車が1台停めてある。ちなみに俺の愛車であるリバースト
ライク・"マクティーラ"もある。

「ルシル。念話が通じるようになったよ。こっちでの戦闘が終わっ
たことを伝えておいたよ」

「ありがとう、アリシア。アリサをこっちに回してくれ。職務規定
違反をすでに犯している俺だが、これ以上の違反は犯せない。アリ
サに護送車を運転してもらおう」

「ん。判った」

ガレージに到着すると、俺の"マクティーラ"やヘリや護送車は無
傷だった。俺は護送車のドアを開けて「メガーヌ准陸尉、乗ってく
ださい」乗車するように促すと、メガーヌさん達は大人しく乗って
くれた。

「ザフィーラ、アイリ、ヴァイス。アリサに同行してくれ。メガー
ヌ准陸尉たちを奪い返しに襲撃を掛けられる可能性がある」

「「了解！」「承知した」

『判ったわ。というか、ルシル。アンタ、シールドを張ってたでし
ょ。入れない所為ですずか達にデバイス渡せないんだけど。どうす
ればいいわけ？』

アリサからそう言われてハッとした。ピュルキエルは結界ではない

から確かに出入りは出来ない。なら、「寮のエントランスで合流しよう」そう伝えた。そこで俺がアリサからシャマル達のデバイスを受け取り、食堂で一旦ピュリキエルを解除してデバイスを渡し、改めてピュリキエルを発動すれば良い。

『なるほど、判ったわ』

「わたしは？」

「アリシア、シャマル、すずか、そして俺で、ヴィヴィオとフォルセティの護衛を続ける」

「オッケー！」

『判ったわ』『了解』

アリサ達にも念話で指示を出し終えた後、俺はひとり寮へと向かう。そしてエントランスで「ルシル！」アリサと合流して、「頼むわよ。あんたを頼りにしてんだから」シャマルとすずかのデバイスを受け取る。

「じゃあアリサ。護送を頼む」

「ええ。アンタ達も、ヴィヴィオとフォルセティをしっかり護りなさいよ」

「ああ、任せろ」

アリサとコツンと拳を突き合わせてから別れた。アリサはガレージへ、俺は食堂へ。すっかり元気になってくれていたシャマルとすずかが「ルシル君！」ピュルキエル越しに出迎えてくれた。しかしすぐにハッとして口を手で押さえた。彼女たちが振り返った先・・・

「ヴィヴィオとフォルセティは眠ってしまっているのか」

「うん。パンケーキを食べてお腹いっぱいになったみたいね」

「それじゃあ起こさないようにしないとな」

食堂の床で蹲るように寝ているヴィヴィオとフォルセティの姿があった。起こさないように食堂の内壁を覆っていたピュリキエルを解除して、「コレを」2人にデバイスを手渡す。これで改めてピュリキエルを発動し、ターミナルで襲撃を待ち構えればいい。シャマル達が防護服への変身を終え、グリフィス達にもう少し待っていてもらうように言って踵を返したところで・・・

「パパ・・・？」

目を覚ましたフォルセティが俺を呼んだ。俺は「すぐ戻って来るから、良い子で待っているんだぞ」微笑みかけた。するとフォルセティは「だっこ」なんて甘えてきた。正直、急いでいるから「また後でな」と言ったら、フォルセティが今にも泣きそうな顔になった。

「セインテスト調査官。抱っこしてあげてください」

アイナさんにそう言われてはもう断ることなど不可能だ。

「パパ・・・、だっこ・・・・」

「ほら、フォルセティ」

上半身だけを起こして両腕を伸ばして来るフォルセティを抱っこするために片膝立ちをして、横抱きに抱え上げた。

「・・・・る・・・・」

「ん？」

「・・まも・・・・ぼく・・・・」

「ん？・・・・あぁ、ヴィヴィオはお前が護ってやれ」

「まもる・・・・護る。ぼくが・・・・僕が・・・・ヴィヴィオを・・・・聖王陛下を・・・・」

「フォルセティ・・・・？」

「僕が、ヴィヴィオ陛下を護る！」

――知らしめよ（コード）、汝（アブディエル）の忠誠――

「え？・・・お〝っ・・・ごはぁ・・・！？」

胸に強烈な熱さを感じ、その直後に脳天に届く激しい痛み。そして吐血。俺の胸に添えられたフォルセティの右手から魔力刃が１つと展開されて、俺の胸を貫いていた。

「「ルシル君！？」」

両膝が折れて両膝立ちした俺はフォルセティを落とした。胸には創傷。心臓や俺の核となっている魔力炉（システム）にダメージが無いのは幸い。じゃない。肺をやられた所為で呼吸がし辛く、吐血が止まらない。シャマル達が駆け寄って来て、俺に治癒魔法を掛け始めた。

「聖王ヴィヴィオ陛下を護る騎士。それが僕、プフェルトナーだ！」

――高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）――

フォルセティの幼い体の背中から、"堕天使エグリゴリ"と同じクジャクの美しい尾羽のような魔力翼が放射状に２０枚と展開された。

――輝き奪う黒き仮面（キアーブーシュ）――

「これは・・・！」

フォルセティから発せられた魔力。その瞬間、左目どころか唯一正常だった右目の視力すら失い、俺は闇に放り込まれてしまった。

「視界が・・・・！」

「何も見えない！」

俺だけじゃなく、シャマルやすずか、さらにはグリフィス達からも視覚異常が起きたと声が上がる。

「ぐふっ、ごほっ、呪われし者（コード）に、汝（ラファエル）の施しを・・・・！」

吐血しながら術式名を詠唱。発動するのはラファエルのバリエーションで、治癒効果は一切ないが、対象に掛けられたマイナス要素の術式効果を解除すると言うもの。俺の胸に開いた創傷を後に、まずは視界回復を優先した。死に難い体で良かった。

「敵魔導師は排除。もしくは無力化せよ。力なき者には慈悲を」

――煌き示（コード）せ、汝（アダメル）の閃輝――

「ぐぁぁぁぁぁぁぁ！」

ラファエルで視覚を取り戻した瞬間、フォルセティは俺の創傷に右手を当て、そこから砲撃を撃った。全身を貫く激痛、そして浮遊感。ゼロ距離砲撃を受けた俺は光の奔流に呑まれ、食堂の窓から外まで吹っ飛ばされた。

「あ・・・ぐ・・・ぐぅ・・あ〝あ〝あ〝・・・・！」

物理破壊設定の砲撃をゼロ距離で受けたら普通は死ぬ。というか死ぬほど痛い。意識が朦朧とする中、「敵戦力、無力化完了。次は施設を破壊」フォルセティが窓から飛び出して来て、空へと上がった。敵戦力の無力化が済んだということは、シャマルやすずかも・・・。

「く・・・そ・・・」

――女神の祝福（コード・エイル）――

上級の治癒術式エイルを発動しつつ、『アイリ・・・1人で来い・・・！』念話で伝える。アリサ達はメガーヌさん達の監視だからな。

『マイスター！？　マイスター！　どうしたの、マイスター！？』

『事情は後で話す・・・急げ』

『ヤー！』

星空の中に、俺と同じサファイアブルーに輝くアースガルド魔法陣が薄らとだが見える。あの子は施設を破壊すると言っていた。どんな魔法を使ってくるか、俺のクローンということもあって見当もつかない。

「其は神域にて永く眠りし天災の王。我らの願いの元、王に盾突く者共を屠るがため、いざ天にて目覚め、地に向け高らかに謳え」

風に乗って聞こえて来たフォルセティの声、というより呪文詠唱。

そして、その呪文内容に血の気が失せた。

「うそ・・・だろ・・・おい・・・・！」

「マイスター！　マイ――んな！？　どうしたのその怪我！」

「もうすぐ治る・・・！　ユニゾンだ、急げ・・・！」

「忠義なる炎熱。至純なる氷結。不屈なる風嵐。正義なる雷撃。希望なる閃光。無情なる闇黒。苛烈なる土石」

「ヤ、ヤー！　ユニゾン・イン！」

アイリとユニゾンを果たす。俺単独であれば記憶消失レベルの魔術を使ったらアウトだが、アイリとのユニゾン状態であればアウトラインが大幅に緩くなる。魔力炉（システム）の稼働率を引き上げ、魔導師から魔術師へと昇華。

「まずは寮を護ることが最優先だ！」

ユニゾン状態でもおそらく１００％の記憶消失率であろう"力"を使う。しかし少しでも和らげば・・・。人差し指に魔力を付加し・・・

「沼地の島として、平原の丘として、妖精丘の木として、月が欠けゆく空の星として、先祖に愛される子どもとして、森の真ん中で、あらゆるものの前に勇敢でいられますように」

――Ｅｏｌｈ――

原初魔術であるルーンを使う。寮の壁に防御のルーン・エオローを刻みつつ詠唱。フォルセティの魔力には神秘が付加されている。ただの防御魔法じゃ大した障壁にはならない。が、「ぐぅあああ・・・！」頭痛と胸痛に襲われる。やはりルーンは神秘が強過ぎ、魔力消費量が大きいためにすぐに記憶を失った。

すでに詠唱を妨害しても無意味なほどにフォルセティの発動率が臨界に近い。なら防御に専念する他ない。と、ここでアリサ達がガレージに居ることに軽く絶望する。今から寮に連れて来るには遅すぎた。隊舎はもう無人であるから諦めているが、ガレージには大事な仲間や知人が居る。

「其の威光を示す七つの聖杖を突き、破滅の音を打ち鳴らせ」

「くそ・・・！」

――万物神（コード・アルフォズル）の粛清――

上空７方向より六課隊舎に向かって飛来するのは、３０ｍ近い長さを誇る７属性の螺旋状の槍。

「ならば、敷地内全体を護り切るのみ！　女神（コード・リン）の護楯、多重展開！」

『ヤー！』

俺の有する防性術式の第２位、女神が祈る姿が描かれたシールド・リンを７枚、直径５ｍと拡大した上で多重展開する。ズキズキと頭と胸が痛み、「うぐぅぅ！」記憶を失ったことを示す喪失感がまた去来し、知らず涙が溢れた。さすがにリンの多重展開もアウトライン越えか。

『ひゃぁぁぁぁ！』

その中でアルフォズルの槍７本がリンに着弾。着弾時に発生した衝撃波が周囲一帯の空間を歪ませた。足元が大きく振動し、バキバキとコンクリートがひび割れる音がし、隊舎３階の一部が崩れた。アルフォズルの脅威はこれからだ。ドリルのように高速回転している槍がそれぞれ開いていって、周囲に圧倒的な殲滅・蹂躙・破壊を齎す竜巻と化した。

『なにこれぇぇぇ！』

「万物神（コード・アルフォズル）の粛清！・・・俺の・・・元真技だ！」

７属性の竜巻の威力は収まることなく、周囲に７属性の射砲撃を何十発と撒き散らして隊舎付近を破壊していく。さらにリンにヒビを入れ始める始末。強度を元に戻し、いやさらに増すために魔力を流し込む。

「あっ、ぐぅ、うぁあああああ！」

強烈な頭痛と胸痛が起き、そこで俺の意識はプッツリと途絶えた。

Ｅｐｉｃ２０－Ａ幕間～Ａｆｔｅｒ　ｏｆ　Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

昨夜、地上本部と機動六課はプライソン一派の襲撃を受けて・・・壊滅した。地上本部を襲ったのは、なのはちゃんとフェイトちゃんとシャルちゃんからの報告で、巡航ミサイルによる攻撃やってことは判ってる。セントラルタワーの上中層がミサイルの攻撃で所々が崩壊してもうた。私らの居った会議室の天井も一部崩落したけど、私はシグナムが、カリムはシスタープラダマンテが護ってくれたから、幸い怪我はなかった。

（そやけど・・・）

隊舎に残ってヴィヴィオとフォルセティの護衛を務めることになってたチーム全員が、検査を含めての入院を余儀なくされるほどに怪我を負ってしもうた。特に酷いんはルシル君やった。調査官としての立場を捨て、ルシル君は前線に出張ってくれた。そんで昔のように、ホンマに酷い怪我を負った。アイリも未だに意識不明のようで、ルシル君とユニゾンしたままや。

「はやて、大丈夫・・・？」

「カリム・・・。うん、大丈夫や」

肩に手を置かれて名前を呼ばれる。機動六課の後見人の1人であるカリムや。今、私は聖王教会本部に来てる。今後の六課の方針を決めるための会議を行うためや。脚の長い円テーブルに付いてるのは私とカリム、そんでクロノ君や。

「寝ずに事後処理をしていたんだろ？　少し仮眠でも取るか？」

「大丈夫や。他のみんなも隊舎で寝ずに仕事してくれてるし、私だけ休むわけにはいかへん」

涙が出るほど頬をパチンと強く叩く。もう３０時間近く休眠を取ってないからな。でもそんなことは言ってられへん。カリムから心配そうな目を向けられたまま。クロノ君は目を一度伏せた後、「そうか・・・。では続けよう」そう言うてテーブル上にＳｏｕｎｄｏｎｌｙと表示されたモニターを1枚と展開。

『御機嫌よう、我が永遠の兄弟にして宿敵・時空管理局の諸君。俺が、お前たちがいつまで経っても正体を掴み切れない天才科学者、プライソンだ。今夜送り届けたプレゼントは、俺からの宣戦布告だ』

流れるんはプライソンからの声明を録音した音声データ。映像はないし、声も加工されてる所為で歳や性別（俺って言うてるけど当てにならへん）は不明や。襲撃が止んだ直後に地上本部や本局に出されたもんや。

『この世に生み出され、そして今日までのうん十年間と溜め込まれた管理局への恨み、辛み、憎しみ、それらを込めさせてもらった。

そして諸々の準備が終えたその日、本格的に俺たちは進撃してミッドチルダ全域を攻め落とし、ミッドチルダを支配する！　止められるものなら止めてみろ、地上本部、本局！　お前たちが俺に依頼して造らせた質量兵器で、ミッドを火の海に変えてやろう！』

プツンと音声が切れたところで、「この声明で本局は大慌てだ」そう言うてクロノ君は大きく嘆息した。ミッドチルダを武力で制圧して支配する。戦乱時代を再び引き起こすのが、プライソンの狙いっぽい。それだけでも十分悩みの種やけど・・・

「俺に依頼して造らせた質量兵器で、というのがさらに嫌な話です」

「ええ。この声明がメディアに流出しないように本局で動いていますが、どれだけ持つか判りません」

カリムやクロノ君の言う通り、プライソンが地上本部と本局から受けた依頼で造った、ってゆうのが一番の悩みの種や。プライソンのその話が真実であれ虚偽であれ、この話が世間に知られたりでもしたら管理局の信用は失墜してしまうかもしれへん。永遠の兄弟ってゆうのもまずい単語や。それは即ちプライソンは、管理局組織と癒着してるって捉えることが出来る。

「プライソンと取引をしている可能性のある容疑者は、ミッドチルダ地上本部・防衛長官レジアス・ゲイズ中将だ。査問委員会を開くことを伝えてはいるようだが、彼はそんな暇などないし、査問されるような疚しい事はしていない、と突っ撥ねているようだ。他にも数名、本局内に居る」

「ロッサの調査報告から、そう判断したんやな？」

「ああ。ゲイズ中将は黒寄りのグレーだ。査問委員会に掛けるだけの理由はあるはずだ。他の数名もグレー枠なんだが、階級や役職が本局内で高いため少々厄介だ。まぁ内務調査部が全面協力してもらうことになったから、問題もじきに解決するだろうが」

ドクター、ジェイル・スカリエッティ少将が確立させた全身サイボーグ化技術・ＢＮＡＣ。それを実際に兵器転用したのはプライソンやけど、実はゲイズ中将も地上部隊の戦力増強を狙って、ドクターに技術提供するように持ちかけてた。もちろん、ドクターがそれを承認するわけもなく。そんなところにプライソンがＢＮＡＣの兵器転用。

（もう随分と昔の話や。そやけど、ゲイズ中将やプライソンは、そんな昔からいろいろと動いてたわけや）

さらには魔法文化が全盛になって以来、主に外科的な処置や調整などで、対象に強力な魔力や魔法行使能力を持たせる技術・人造魔導師計画が生まれた。プライソンはそれにも手を出してる。

（メガーヌ准陸尉やルーテシア・リヴィア姉妹、クイント准陸尉がエネルギー運用やなくて魔法を使い続けてるのがええ証拠や）

すでに成長した人への施術は失敗することが多く、そんで行き着いたのが生命操作技術によって適合率の高い素体――人を生み出すっ

てゆう何度も試みられてきた、倫理から外れた代物。プライソンのプロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅを始めとしたクローン製造や、適性のある素体製造も、この人造魔導師計画に繋がって来る。

（准陸尉たちはどうやら適性があったみたいやな。喜ぶべきもんやないけど・・・）

「プライソンの技術力を使えば、確かに地上の戦力は充実するでしょう。ですがそれは倫理から大きく外れてしまっています。人を、戦力のために改造したり生み出したりするなんて・・・」

「プライソンは確かに天才だ。犯罪者でなければ、スカリエッティ少将と同じように歴史に名を遺せるほどの。だがその頭脳や技術力を間違った方向に使っている。そんな彼と、いかなる理由があれ繋がるのは間違っている」

ドクターのＢＮＡＣは人を救うためのもんや。それを兵器に転用したプライソンへの怒りは一切消えることはない。

「それで今後の方針だが、機動六課にはプライソンの逮捕、レリックの回収を行ってもらうことになる。そして・・・拉致されたヴィヴィオとフォルセティの救出だ」

「っ！」

フォルセティの名前が出て来たことでビクッと肩が跳ねて、膝の上に置いてた両手をギュッと握りしめた。フォルセティとヴィヴィオ

は、メガーヌ准陸尉たちによって拉致された。

「大丈夫、はやて？」

「う、うん、大丈夫や・・・」

ホンマは不安でしょうがない。恐いことをされてへんか、痛いことをされてへんか、泣いてへんか、フォルセティのそんな様子を想像してもうて胸が苦しくなる。私に声を掛けてくれたカリムにそう答えて、声に出さずとも心配してくれてる目を向けてくれてるクロノ君にも、「了解や」頷いた。

「頼む。プライソンからの宣戦布告も発せられたことで、本局は第一種警戒態勢となり、地上本部へ応援部隊をさらに送るつもりだ。・・・そう地上本部の本部長と進言しているんだが・・・」

「ゲイズ中将がそれを許さへん、か」

「あくまで彼に掛かっているのは容疑だからな。黒だと確定していない以上は、こちらの権限で強引に進めるわけにはいかない。それで本局とミッド地上本部の軋轢が決定的になっては、本局や聖王教会からの協力要請に、ゲイズ中将にイエスと言わせたルシルの功績が無駄になってしまう。それだけは回避したい」

「ミッドが滅亡する可能性がある事件にでも発展しなければ、本局と地上本部が好意的ではないとは言え協力できないのは悲しい事ですが、本事件を発端として関係を少しでも良好なものへと変えてい

ければいいですね」

「そのためには、プライソンにお灸を据えやなアカンな」

それから本部からミッドへ送れる戦力や、六課ですぐに動ける人員の確認を行った。地上本部の警備に当たってたなのはちゃんとフェイトちゃんの隊長2人、ヴィータとリインの副隊長と補佐はほぼ無傷。フォワード4名とギンガは、多少の怪我を負ったけどすぐに出撃できるレベルや。問題は・・・

「アリサ達か・・・」

「うん。アリサちゃん、すずかちゃん、アリシアちゃん、ヴァイス陸曹、そんでシャマルとザフィーラ。みんな重傷や。今のところ意識を取り戻したんはシャマル、すずかちゃん、アリサちゃん、アリシアちゃんの4人。一応医師の診断やと、アリサちゃんとザフィーラとヴァイス陸曹以外は魔法ありきで完治1週間ってことや」

六課も戦力が結構削られてしもうたことや。意識を取り戻してるシャマル達はすぐにでも動けるって言うてはくれてる。そやけどドクターストップが掛かった。アリサちゃんなんて腕と脚を骨折してるしな。そうゆうわけで、今すぐにでも戦えるのはなのはちゃん達だけや。

「ルシル君とアイリは・・・」

「ルシルが調査官としてのルールを逸脱して戦闘に参加したことは、

内務調査部にも伝わっている。しかし緊急事態だったいうこともあり、事件の大きさもあって特例として認められて不問と処された。さらには、戦闘行為が可能な状態であれば前線での戦闘を行ってもいいという許可も出た」

クロノ君の話は、嬉しい半面つらいもんもある。ルシル君と一緒に戦えることが嬉しい。そやけど、あんなにボロボロになってしもうたルシル君をすぐに戦場に出すのは、人として、想い慕う者として出来ひん真似や。

「ルシル君はたぶん、もうこの事件中には目を覚まさへんと思う。もし目を覚ましても私からは戦ってなんて言えへんしな。ルシル君が戦うって言うたとしても、引き止めそうやわ・・・」

「そこのところは、君やルシルの意思に任せるよ。・・・これで最後だ。君の要望通り、アースラを運用できるように手続きを済ませておいた。明日の早朝にはミッドへ降ろせる」

「おおきにな、クロノ君」

六課の隊舎は司令本部としての機能せえへん程の損壊で、代わりの司令部が必要になった。じゃあどこに本部は移せばええ？ってことで、いろんな候補を出してく中で行き着いたのが、廃艦工程に移行する前にドックで眠らせてたアースラや。

「僕や母さんのアースラ元艦長の肩書きが活きてくれたよ」

「寮の方は大丈夫？　寝泊まりする場所が無いなら、教会の宿舎を利用する？」

「寮は大丈夫やったよ。ルシル君が護ってくれたみたいや」

損壊の激しい隊舎に比べて寮は食堂以外はほぼ無傷やった。と、カリムにそう答えた直後、通信を知らせるコール音が応接室に響いた。

「私や。ちょう失礼するな。・・・はい」

クロノ君とカリムに一言断ってから通信を入れてモニターを展開。モニターに映るのは「何かあった、フェイト隊長？」やった。フェイトちゃんは今日、みんなの入院先である聖王医療院で、入院してるみんなに付いてくれてる。昨夜、隊舎で何が起きたのかを目を覚ました誰かから聴取するために。

『あ、うん。さっきはアリシアとアリサが目を覚ましたことを報告したんだけど、今回はルシルとユニゾンしたままだったアイリが目を覚ましたって報告を。ルシルは未だに意識が戻らないんだけど・・・。その、アイリに今の私たちが置かれてる状況を説明したら・・・――』

フェイトちゃんの話の内容に「え・・・！？」私は絶句した。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒フェイト†††

メガーヌ准陸尉たちの襲撃を受けて壊滅的被害を受けた機動六課の

隊舎。襲撃に巻き込まれた隊員たちは、ここ聖王医療院の入院棟でお世話になっている。まずは、意識がすぐに回復して聴取を待ってくれているすずかとシャマル先生の病室に来て、その２人から事情を伺うことに。

「最初はね、優勢だったんだけど。アリシアちゃんとヴァイス陸曹が、召喚され続けるガジェットが完全に姿を見せる前に破壊してくれて行ったから」

「でも途中でアリサちゃんが気付いたの。司令部との連絡が取れないことに。それで私とすずかちゃんで司令室の様子を見に行って、そこで気を失ってるグリフィス君たち、機材が破壊されているのを確認したの」

２人の話によると、その後にグリフィス達を避難先の寮に運ぶ最中でガジェットが隊舎に侵入して自爆。隊舎の損壊は大体この自爆の所為みたい。直後にすずかとシャマル先生が、リヴィアの奇襲を受けてアウト。

「それで気が付いたら避難先の食堂に居たの。そこで、私たちが気を失った後で目を覚ましたグリフィス君たちによってここまで連れて来られて、ルシル君が治癒魔法を掛けてくれたことを聴いたんだ。そして、ルシル君が前線に立ったってことも知った・・・」

「その後すぐにアリサちゃんがやって来て、私とすずかちゃんのデバイスを持って来てくれたんだけど・・・。ルシル君が張った広域シールドのおかげで受け取れなくて。そこにメガーヌ准陸尉たちを

全滅させたってアリシアちゃんから念話が入って、近くの陸士隊舎にメガーヌ准陸尉たちを護送することになったって」

アリサに護送車の運転を任せて、ルシルがそのままヴィヴィオとフォルセティの護衛として戦線に立つことになった。アリサと入れ替わるようにルシルがやって来て、シールドを解除。そしてデバイスをすずか達に返して、ターミナルでさらなる襲撃に備えようとしたところで・・・

「フォルセティが・・・、ルシル君を刺したの・・・」

「え・・・!?」

「それに、エグリゴリの・・・あのクジャクの尾羽のような翼を展開したわ」

「ちょっ、え、え!? フォルセティって、エグリゴリだったってこと・・・!?」

ここに来て混乱を招く情報が入ってきた。フォルセティは実は"エグリゴリ"で、敵で、ルシルを刺したということ?・・・って。頭の処理速度が追いつかない。ただ、「いえ。たぶん、違うわ」シャマル先生が否定してきた。

「あの翼は魔術だって話だから、レーゼフェアかフィヨルツェンが教えたのかも知れないわ。とにかく、ルシル君を砲撃で外まで吹き飛ばした後、フォルセティは何らかの攻撃魔法で私とすずかちゃん

の意識を刈り取ったの」

「気が付けば病院・・・だね。でもね、フェイトちゃん。あれは絶対にフォルセティの意志じゃなかった。いきなり豹変したんだよ。言葉遣いもいきなり成人みたいになっていたし。アレは明らかに操られていた・・・！」

「私も同意見よ」

それがすずかとシャマル先生、食堂で意識を失ってた２人からの報告だ。私は「ありがとう、すずか、シャマル先生。今はしっかり休んでね」お礼を言ってから病室を後にした。次の病室へって行きたいところだけど、アリシア達は今も眠っているまま。ボロボロになっていたガレージの外、アリシアとアリサとヴァイス陸曹とザフィーラの４人が、破壊された護送車の近くで倒れているのを発見した。

（現場の状況から戦闘が行われたようで。・・・たぶん、フォルセティがメガーヌ准陸尉たちを解放するために・・・）

そう推察できる。プライソンへの怒り、というよりはもう憎しみが募り続ける。プライソンはすでにフォルセティへの何かしらの施術を終えていたんだ。そして何らかの技術でフォルセティを操った。すずか達の話から考えるに、遠隔で洗脳操作が出来るみたい。

（仕事だった昨夜の事情も大まかだけど判った。私も事後処理に行こう）

エリオやキャロ、スバルとティアナ、それにギンガも六課の事後処理を行ってくれている。入院した隊員の中には私の直接の部下でもあるアリシアやシャーリーが含まれていたから、私がここに来ることになった。
非戦闘員のシャーリー達は打撲や捻挫だけで済んでいて、念のための検査入院で明日には退院できる。でもどう言った経緯であれ留守を任されていたのに、六課を護りきれなかったことを悔いて泣いてしまっていて弱り切っている。その事もあって、詳しい事情も聴けずにお見舞いの挨拶だけで済ませちゃった。

「一応最後にアリシアの顔でも見に行こう」

隊舎に戻る前にもう一度、アリシアとアリサの病室へと向かうことにした。アリシアは、アリサに庇ってもらったみたいで比較的に軽傷だった。地上本部での巡航ミサイルやガジェットなどの迎撃を行っている中、六課と連絡が取れないことに気付いたことで、私とエリオとキャロのライトニングが六課へ急行して、燃える隊舎と荒れ果てた敷地、敷地内に倒れ伏したアリシア達やガジェットの残骸を目の当たりにした。

（キャロは泣いてた・・・。私の居場所を壊さないでって・・・）

そんなキャロをエリオにお願いして、私はひとり敷地内を巡回。ガレージ側でアリシアと、アリシアに覆いかぶさっていたアリサ、そして2人を護るような位置に倒れていたザフィーラとヴァイス陸曹。さらに寮の前で・・・

（物理破壊設定の魔力槍でお腹を貫かれている状態のルシルが寮の前で倒れていた・・・）

痛ましいルシルの姿があった。ルシルの姿の異変に目を疑ったけど、急いで病院へ運ばないといけないって思って後回し。六課と協力体制を敷いてくれている聖王医療院へ連絡して救急車と、ルシルへの応急処置の仕方を聴く。

その間にエリオとキャロに隊舎や寮の様子を見て来るように指示。避難先になっている食堂で、すずかとシャマル先生、シャーリー達が気を失って倒れていること、そしてヴィヴィオとフォルセティの姿が無いことを、とても辛そうな声で教えてくれた。私だって足元が崩れたような錯覚を得てへたり込んでしまったし。

（それから地上本部への襲撃が終わり、地上本部からの厳戒態勢解除の指示が出たことで、夜明け前になのは達が戻ってきた・・・）

なのは達が帰って来るまでの間にルシル達は医療院へと搬送されて、通信で六課の状況を私は伝えた。帰って来ていきなり酷い惨状を見せる隊舎や、ヴィヴィオとフォルセティが拉致された現実を目の当たりにせずには済んだけど、それでも大きなショックだったと思う。

「・・・ん？」

気持ちが暗く沈んでく中、目の前の扉がガチャっと開いたかと思えば「アリシア！？」が出て来た。病衣を着たアリシアは私に気付いて「フェイト！　おはよう！　お腹空いちゃってさ～」なんて言いながら手を振ってきた。

「アリシア～？　フェイトが居るの？　ナースコールってどれなのか訊いて～」

病室からアリサの声も聞こえてきた。早足で病室に入ると、「お、フェイト」アリサも私に手を振った。元気そうで何よりだけど、骨折してる左脚と右腕、頭に巻かれた包帯や顔に張られたガーゼが痛々しい。

「アリサ・・・」

「・・・悪かったわね、フェイト。ヴィヴィオとフォルセティを護れ切れなかったわ」

「謝らないで、アリサ。どうしようもない時だってある・・・」

どれだけ頑張っても、上手く行かないときだってある。私も、みんなも経験してる。世界はそんなに優しくないし甘くない。でも「一度の失敗で全てが終わるわけじゃない」から、これからのやり方次第で挽回だって出来るはず。

「ヴィヴィオとフォルセティは目的があって生み出された。だから命には危険はないと思う。なら助けよう。きっと、私たちが助けに来てくれるのを待ってくれている」

アリサとアリシアに言った言葉は、私に言い聞かせている言葉でもある。けれどこれまでの会議で、ヴィヴィオとフォルセティはプラ

イソンにとって重要な存在だって話してた。プリンツェッスィンとプフェルトナー。２人の開発コードと思しき単語。ベルカ語で王女と守衛。その役割の推測も終えている。だからきっと２人は大丈夫だ・・・。

「ええ、そうね。その通りね。んじゃ、すぐに戦線に復帰できるようにまずは腹を満たす！」

「おー♪」

明るい２人の雰囲気が私の頬を綻ばせる。２人に「すぐにご飯を用意してもらうよ」そう伝えて、医療院の人に連絡を入れる。で、２人がご飯を食べている間に「はやて？　アリシアとアリサが目を覚ましたから、その報告をと思って」連絡を入れておく。

『ホンマか！？　それは良かったぁ～。またなんかあったら連絡してな』

「了解」

はやてもはやてで、ルシルやフォルセティのことが心配で不安で、集中治療室に居るルシルの側に居てあげたいって思っているだろうけど、部隊長として休むことなく仕事をしている。

「で、現状は一体どうなってんの？」

「わたし達、エグリゴリの翼を展開したフォルセティにボコられて

から記憶が無いんだけど・・・」

「あぁ、やっぱりフォルセティが・・・。さっき、すずかとシャマル先生からある程度の事情は聴けたよ」

すずか達から聴いた話を2人にも伝えると、「推測通りだったわけね」アリサと、「守衛の通り、聖王ヴィヴィオを護ったわけだ」アリシアが悔しそうに漏らした。ヴィヴィオは聖王として、古代ベルカ時代の戦船・"聖王のゆりかご"を起動させるための鍵。フォルセティは、そんな鍵として重要なヴィヴィオを護るための騎士。そう結論付けていた。

「プライソンは憎たらしいほどに頭が良いわね。ルシル以上の実力を有するかもしれない魔神オーディンのクローンを据えるなんて」

「わたしとアリサとザフィーラとヴァイス。瞬殺されちゃったもんね・・・」

いきなり視界を封じられて、そこを魔法で追撃をされたって話で、魔力反応と気配、そして匂いでザフィーラが指示をくれなかったら本当に危なかったって。

「重傷か死か。フォルセティが徹底してあたし達を殺しにかかって来なくてラッキーだったわ」

「不幸中の幸いだよね・・・。っと、ザフィーラとヴァイスは？」

「ヴァイスとザフィーラは打撲・擦過傷・骨折などのかなりの重傷で、治癒魔法ありでの治療で全治1月半ちょっと。しばらくは安静にしていないとダメだって」

「そう。・・・ザフィーラとヴァイスがちゃんと護ってくれたから、あたしもこの程度の怪我で済んだし。あとでお礼を言いに行かなきゃね」

「うん、一緒に行こう」

そして、プライソンからの声明内容を伝える。本局と地上本部に宣戦布告をして、戦争の準備が整ってから質量兵器と言う武力でミッドチルダを制圧して支配する、と。その準備期間がどれくらいかは判らないけど、「教会騎士団が総力を上げて、プライソンのアジトを探してくれてる」と伝える。

「期日不明の開戦か。一気に完治させるにはルシルのエイルが必要ね」

「ルシルは今どうしてる？　あとアイリも」

「ルシルは意識不明の重体で、アイリはルシルとユニゾンしたまま意識を失ってるみたいで出て来ないの」

医師の話だと、アイリがルシルとユニゾンしたままのおかげで、ルシルの脈拍とか命に係わる大事な要素がギリギリ保たれているとのこと。そしてマリーさんの話では、ルシルの容体がある程度安定し

たら、アイリの意識が戻るかもしれないという話だ。

「アイツ、こんなのばっかじゃない。何度も死に掛けて・・・」

「はやてとシャルも、不安でしょうがないよねきっと・・・」

それからご飯を食べ終えた2人と挨拶を済ませて退室。すずかとシャマルはもう休んでいるはずだから、最後にシャーリー達、そしてルシルの様子を見てから隊舎に戻ろう。シャーリー達の病室は上の階だから階段室へと向かう中・・・

「え・・・！？」

目の前から局の制服と白衣っていう格好の「アイリ・・・！」が歩いて来たんだけど、フラフラと覚束ない足取り、さらには視線は宙を彷徨っている。私は「アイリ！」へと駆け寄る。名前を呼びながら肩に手を乗せて揺らしていると、「フェイト・・・？」焦点が合って、しっかりと私の目を見た。

「しっかり、アイリ。どうしたの。こんなところで。それにアイリがここに居るってことは、ルシルは大丈夫なの？」

「ルシル・・・、マイスター・・・。・・・っ！　そうだ、ルシルは！？　アイリ、ルシルとユニゾンして、誰かの魔法を防御して、えっと、えっと・・・！」

アイリの様子から記憶が混濁しているみたい。私はしっかりとアイ

リの目を見詰めて、「落ち着いて、アイリ！」少し大きめに声を出す。それでアイリは口を閉じて、「うん、大丈夫、アイリは・・・大丈夫」深呼吸を繰り返して落ち着いてくれた。

「アイリは今までルシルとユニゾンしたままだったんだよ」

アイリにこれまでの事を伝えた。ルシルは意識不明の重体で、アイリもブラックアウトダメージ（過大な魔力ダメージを受けたり魔力を使い過ぎたりして術者に起こる現象で、リンカーコアや肉体にも深刻なダメージが起きる危険もある）で意識不明だったこと、それにマリーさんから聞いた話も一緒にした。

「アイリが・・・ルシルを守ってた・・・？」

「うん。アイリの意識が戻ったのは、たぶんだけどルシルの容体が安定してきたからだと思う」

「・・・あ、思い出した！　誰かの魔法、ううん、アレは魔術だった！　ソレを防御してたらルシルが意識を失って・・・！　それでアイリがルシルの身体の支配権を借りて、どうにかする前に・・・魔力の槍で貫かれたんだ。物理破壊設定だったから、ルシルが死なないように治癒魔法を発動し続けて・・・、アイリも気を失った」

それがルシルとアイリの事の顛末だった。だから発見時、ルシルの髪色は銀じゃなくて白で、防護服も黒色じゃなくて濃い目の灰色だったんだ。でももう1つ、気になることがある。信じられないけど・・・。ううん、今はいいや。

「フェイト。ルシルのところに案内して」

「あ、うん。付いて来て」

アイリを伴って集中治療室棟へ向かって、ルシルの病室がある２階へ。その間に管理局全体が置かれている現状を伝える。アイリは「そう。フォルセティだったんだね、あの攻撃は・・・」辛そうに、そして悲しそうな複雑な表情を浮かべた。

「でも、そういうことならルシルには早く起きてもらわないとね」

「え？　ルシルを起こす方法があるの！？　というか起こしていいの無理やり！？」

「フェイト、しーっ！」

「あっと」

思わず大きな声を出しちゃって、慌てて口を両手で塞ぐ。改めて「大丈夫なの？」訊ねる。

「ルシルは守るため、救うための戦いには大張り切りだよ。それが身内なら特にね。それに今回はエグリゴリまで関わってるし。もし事件解決後まで放ったらかしにされたら、かえって怒るよ」

「確かに・・・。でもどうやってルシルの意識を取り戻させるの？

アイリの治癒魔法だと、ルシルの意識を回復させることって・・・」

「出来ないね、とっても悔しいけど。でも方法はあるんだよ。シュヴァリエルに殺されかけて、敵だったリアンシェルトに負っていたダメージを回復させられるっていう情けが嫌だったみたいだね。こういう状況に陥った場合がもしまた起きたら、アイリが起こすことになってるの」

初耳だった。ルシルって結構隠し事とか秘密とか多いんだよね。何でも自分ひとりで出来るからって、ちょっとそういうのが多いのが悲しいような切ないような。親友なんだからもう少しコミュニケーションを取ってほしいかも。

「アイリがユニゾンして精神世界に居るルシルに干渉して起こすの。普通、ルシルの精神世界に干渉するなんて余程の実力者か、本人に招き入れられない限りは無理なようなんだけど、アイリはと・く・べ・つに許可を貰ってるから出来るんだよね～♪」

えっへんと胸を張るアイリ。それはともかく、一応「はやてに今の話を伝えるね」上司に報告を、だ。アイリは「あ、はやてにも教えてあげないとダメだよね」コクリと頷いた。そういうわけで早速、はやてに通信を入れる。

『何かあった、フェイト隊長？』

さっきの時もそうだったけど、モニターに映るはやての顔色はお世

辞にも良いとは言えない。部隊長として頑張るはやてに私は、労いの言葉より先にルシルを覚醒させる方法と、それをアイリが今から行うことを伝えた。そして、それを行わせていいのかを訊ねてみた。

『正直、目覚めてすぐにルシル君を戦わせるのは気が引ける。調査部から正式に戦闘に参加してええって許可が下りててもな。そやけどアイリの話も理解できる。ルシル君なら確かに・・・解決後まで寝かされてたら怒るかもってな』

はやてがそこまで言って僅かに俯いて数秒後、『アイリ。ルシル君を起こしてあげて』許可を出した。アイリは「ヤー！」元気よく敬礼したんだけど、すぐに「しーっ」私と同時に人差し指を唇に当てた。

「じゃあはやて。ルシルを起こしてから一緒に隊舎に戻るよ」

『うん、お願いな、フェイトちゃん！』

はやてとの通信を切る頃に「ここにルシルが居るよ」病室の前に到着して、スライドして開くドアを潜って室内へ。そこには酸素マスクやら電極やら点滴やらが付けられたルシルの姿がある。そして改めてルシルの異変を目の当たりにする。

「あちゃあ。ルシルの秘密が・・・」

アイリがそう言ったのが聞こえた。ということは、今ルシルに起こっている異変を前々からアイリは認識しているみたい。

「ねえ、アイリ」

「ん～？」

「ルシルの身長が低くなっているのって・・・なに？」

そう。ルシルの身長が恐ろしく低くなっているのだ。１８０ｃｍ程だったのに、ベッドに横たわっているルシルの今の身長は目測だけど、はやてと同じくらいで１５０ｃｍちょっと。３０ｃｍ近く縮んでいることになる。

「・・・ルシルの成長、止まってるの。８年くらい前から」

とんでもない話を聞かされた。ルシルの成長がそんなにも前に止まっていた。つまりは今までのルシルは変身魔法か何かで、わざわざ身長を高く見せていたってことに・・・。

「それじゃ！　アイリ・セインテスト、行っきま～す！」

――ユニゾン・イン――

私が混乱している中、アイリはマイペースにルシルとユニゾンを行っていた。

Ｅｐｉｃ２０－Ｂ幕間～Ｇｒｅａｔ　Ｈｅａｌｅｒ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

フェイトから事情を聴いたアイリは、集中治療室のベッドに横たわるマイスターの元へとやって来た。そこには、変身魔法が解けちゃってて本当の姿、はやてくらいの身長に戻ってる状態なマイスターが居た。アイリがその秘密を知ったのは、本局の局員寮に引っ越してからだね。本当に偶然だったけど、マイスターが風邪で寝込んだ時にＰＯＮ♪と変身が解けた。

（あれにはとっても驚いたけど、はやて達すらも知らない２人だけの秘密ってことでアイリはずっと黙ってきた）

それなのにもうマイスターとアイリだけの秘密じゃなくなっちゃったね、残念。でも２人だけの秘密はまだあるし、アイリのやる気パワーはまだまだいっぱいだよ。

（マイスター、待っててね。すぐに目を覚まさせてあげるから！）

マイスターの遺伝子で生み出されたクローン、フォルセティ。アイリにとっては弟のような存在で、一緒に過ごして来た時間はすごく楽しかった。そんなフォルセティが、どうやら遠隔洗脳か何かで突如豹変し、アイリを始めとした護衛班を撃破した。マイスターだって魔術状態の魔力槍で貫かれて意識不明。

――アイリ。もし俺がまた重体化し、1日以上の意識不明に陥ったら・・・俺とユニゾンして精神世界に潜り込み、俺を叩き起こしてくれ――

マイスター直々にお願いされた大仕事だ、しっかりこなさないと笑われちゃう。だから「それじゃ！　アイリ・セインテスト、行っきま～す！」マイスターとのユニゾンを果たす。視界が一瞬、何も見えない真っ白な世界に放り込まれて、視界が開けた時は真夜中みたく暗いけど完全に真っ暗じゃない世界。

「マイスターに意識があれば、ここから外の世界が見られるんだけどね・・・」

ここがユニゾン時に居られるマイスターの内なる世界。ヴィータとのユニゾン時も共通してこんな世界だね。普通はここから奥、精神世界に潜り込むのは無理。でも今のアイリは特別に許可を貰ってるから問題無し！　しかも、アイリのためだけに新しく作ったパスって話だし、も～最高！

「え～っと・・・。わたしアイリ・セインテストが、マイスター・ルシリオン・セインテスト・アースガルドの世界へと入りま～す！」

最初は小難しい呪文とかが必要なのかな～って思ってたけど、自分の名前をしっかり言うこと、あとアイリだっていうもう1つの証拠、魔力を放出する。魔力パターンというのがあって、個人でそれぞれ違うから魔導師の判別にも使われてるね。

「お？　来た！」

足元に浮かぶのは、サファイアブルーに輝くアースガルド魔法陣。中心に十字架があって、その四方から4つの剣が伸びてる。そしてその剣を繋げるように三重の円環があって、その円環の間に無数のルーンが刻まれてるっていう紋章だ。今度は綺麗な蒼色で視界が染まる。

「よいしょっと♪　英雄（ヴァルハラ）の居館に到着～♪」

アイリが入ったのは創世結界・"英雄の居館ヴァルハラ"。現実世界に具現化するためのパスが使えないマイスターだけど、創世結界そのものを奪われたわけじゃないから、こうやって中に入ることも出来るんだよね。

（でも早く取り戻してあげたいよね・・・）

豪華絢爛な"ヴァルハラ"の中で、アイリが今居るのは赤い絨毯の敷かれた六角形のエントランスホール。シャンデリアが3つあって、大きなのが中央、小さいのが左右に設けられてる。目の前には大きな∩字の中央階段があって、階段室の壁面には子供姿のマイスター、それにお姉さんと妹が描かれた絵画が飾られてる。

「えっと、中央階段を上がって2階へ行って・・・」

マイスターの使い魔・"異界英雄エインヘリヤル"の居る世界へと繋がる大きな両開き扉・"ヴォルグリンド"をチラッと見る。ちょ

こっと冒険した気持ちもあるけど、今はマイスターを目覚めさせるのを最優先。中央階段を上がって2階へ。ここ創世結界・"ヴァルハラはとんでもなく広くて、いっぺん迷ったら自力でエントランスに戻って来る自信は1ミクロンも無い。

「玉座の間、玉座の間・・・っと」

"ヴァルハラ"は一辺が約5kmっていう巨大な八角形をしていて、内部の部屋数は4ケタはある。アイリが目指すのは3階の中央塔にある玉座の間。そこにマイスターの意識、そしてマイスターのお姉さんである"エインヘリヤル"・ゼフィランサスさんが居る。

「待っててね、マイスター！」

廊下の壁にはランプが張り出てるからぶつからないように気を付けて、魔法で廊下をビュン！って飛んで3階へ上がるための階段室を目指す・・・んだけど、最悪なことに「迷った！」ことで、一度廊下に降り立つ。教えてもらった通りに進んだって思ったんだけどな～。

（助けを呼ぼうにも、マイスターは意識ないし、ゼフィランサスさんも玉座の間から出ないし。他のエインヘリヤルが宮殿内に居ることもほとんどないって、マイスター言ってたし・・・）

あ～～って頭を抱える。ここから脱出して現実に戻って、もう一度ユニゾンしてここに来ることも出来るけど、脱出するにはゼフィランサスさんと会う必要がある。すでに八方塞がりなのである。

「マイスターー！　ゼフィランサスさ～ん！」

テクテク歩きだす。廊下という廊下を曲がって、扉という扉を開けては室内を確認。中にはさらに方向感覚を狂わせてくる「ぎゃーっす！　別の廊下！」みたいなトラップが発動してくる。この間取りの畜生建築め。まるで迷路だよ。

「玉座の間じゃなくて謁見の間で良いのに～！」

謁見の間は、1階∩字中央階段の間にあるドアの先にいきなりバァーンと出てくる。あそこなら迷う要素なんて無いのに。溜息を吐きながらトボトボ歩いてると、奥の方の部屋の扉がガチャっと開いた。そこから・・・

「お？　アイリが居るぞ」

「本当であります！」

「こんにちは～♪」

「レヴィ、フラム、ユーリ！？」

今は遠い異世界に居るはずの3人が手を振ってきた。驚きはしたけどすぐに"エインヘリヤル"だってことに思い至った。アイリはそれを念頭に「助けて！」駆け寄ってヘルプを出す。

「ど、どうしたんですか、アイリ？　そんなに慌てて・・・」

「んん？　ひょーっとしてアイリ、エインヘリヤルじゃなくてオリジナルだったりする・・・？」

アイリの事を心配してくれるユーリと違って、レヴィは少し無礼な感じで顔を近付けてジロジロとアイリの顔を覗き込む。フラムが「そうなのでありますか！？」万歳して大げさに驚きを表した。アイリは「うん、そうだよ」頷いて見せる。"ヴァルハラ"は"エインヘリヤル"の世界だから、まずオリジナルが居ることはないからね。

「どうしてまたヴァルハラに・・・？」

ユーリの問いにアイリは「マイスターを起こしに来たの」事情を伝える。"エインヘリヤル"の記憶は、創世結界に登録された時点で止まる。そこからは"ヴァルハラ"内で過ごした記憶が追加されてくし、マイスターの正体も登録された時点で知ることになる・・・みたい。

「――というわけで、玉座の間に行きたいんだよね・・・」

「そうでしたか～。マスターがそんな事に・・・」

ユーリが沈んだ表情を浮かべる。"エインヘリヤル"になったことでマイスターの真実を知ると、マイスターの力になりたいって子が多く出始めるってゼフィランサスさんが言ってたね。ユーリも、マイスターのことをマスター呼びしちゃってるし。

「しかしそういうわけなら、玉座の間に案内するでありますよ」

「ありがとう、フラム！」

「我らが主君のためでもありますからな！」

「蒼ハネを早く故郷のなんとかガルドに返してあげたいしな！」

「アースガルドですよ、レヴィ」

フラムは主君呼びで、レヴィは変わらずに蒼ハネ呼びだったね。とにかく、"エインヘリヤル"のユーリ、レヴィ、フラムの3人に案内してもらえることになった。廊下を歩きながら「でもどうして宮殿内に居たの？」3人に訊いてみる。

「そりゃ冒険だよ。宮殿の外もそれなりに冒険したし、次は王のお城を攻略だ！」

「私たちは腕試しをしているのでありますよ。エインヘリヤルの中には、エルトリアのモンスターなんて目じゃないような強者がゴロゴロ居るでありますからな！」

「私は2人の付き添いです～」

とのことだった。異世界の強者が集う唯一の場所が、ここ"ヴァルハラ"だしね。本物の神様や悪魔や怪物がゴロゴロ居る。ちなみに

ディアーチェとシュテルとアイルは、宮殿の外で別行動中みたい。

「それにしても、マスターの創世結界ってすごいですね～。こんな大きな宮殿があって、外には国があるんですから」

「だから全然退屈しないぞ。吸血鬼なんて初めて見て、初めて戦ったけど、すっごく強かったもんな～。あと見込みがあるのは、なんとかの撃墜王って奴！　アイツの速さもなかなかだった」

「ローズレッド・ストラウス王と閃撃の撃墜王リヒトー・バッハさんですよ、レヴィ」

「私個人としては、ディアーチェとエミヤの料理対決が一番すごかったでありますな～。見て良し食べて良し。もう一度やってほしいであります」

じゅるりと涎を垂らすフラム。オリジナルのディアーチェの料理を食べたことあるけど、確かに美味しかったもんね。そんなユーリ達と喋りながら廊下を歩いて、「玉座の間前に到着です！」とうとう到着した玉座の間の大扉へと続く階段。

「よかった～。一生出られないかと思ったよ・・・。ありがとう、ユーリ、レヴィ、フラム」

「はいっ♪　マスターをどうぞよろしくお願いします♪」

「それじゃあね～、アイリ～」

「さらばでありますよ」

ユーリ達と手を降り合って別れて、アイリは階段を上がって３ｍくらいの高さがある両開き扉を内側に向かって開ける。そこは六角形の大広間。六芒星のレッドカーペット、向かい合うように設けられた２つの玉座。天窓や壁の窓にはステンドグラスがはめられてて、壁のは歴代セインテスト王の肖像、天窓のはアースガルドの紋章だ。

「って、居ないし！」

ゼフィランサスさんが普段座ってるっていう玉座に居なかったし、マイスターの意識も無いし、一体どうなってるわけ。もし、別室に居るとなるともう捜し出すなんて不可能だよ。玉座の側にまで歩み寄って、ふかふかな台座に座る。そして天窓のステンドグラスを見上げると・・・

「あれ、開いてる・・・？」

吹き抜けの壁面に設けられてる廊下（ギャラリー）から外のベランダへ出るための普通の窓が開いてるのが見えた。となれば、マイスター達はベランダに居るはず。アイリは「とう！」ギャラリーに上がる階段を律義に上るんじゃなくて、飛んで窓へとショートカット。窓からベランダへ出ると、"ヴァルハラ"の世界が広がる。城下町や海や山や森や荒野、"エインヘリヤル"によっては住処が違うから、こういった世界になるんだって。

「居た！」

ベランダをぐるりと見回して、捜してたマイスターとゼフィランサスさんを発見。

「しー。ルシルが起きちゃうから」

マイスターとおんなじ銀の髪に蒼と紅の光彩異色、配色がサンタクロースみたいなコート姿のゼフィランサスさんが「ね？」って人差し指を唇に当てた。マイスターは、ゼフィランサスさんの膝枕で眠ってた。

「もうボロボロなの、愛弟（ルシル）は・・・。少し休ませてあげたかったのよ」

マイスターの頭を優しく撫でるゼフィランサスさん。でも「みんな、マイスターの帰りを待ってます」そう伝える。フォルセティだってきっと、パパの助けを待ってる。ゼフィランサスさんがキッと睨みつけてきた。

「たった・・・たった数時間で、ルシルは４％の複製物を消失したの。４％よ！　人数で言えば３０２２人！　術技で言えば約１万！　武装で言えば２９１１個！　大損害よ！　エグリゴリを救うためじゃないのに！」

「でもそれがマイスターの意思だった！」

「それでも姉として、弟がこれ以上苦しむのを黙って見ていられない！」

「・・・だけど・・・」

アイリだってマイスターが苦しむのは嫌だよ。キュッと握り拳を作ってゼフィランサスさんを見下ろしてると、「ありがとう、ゼフィ姉様」マイスターがゆっくりと目を開けて、そう漏らした。

「マイスター！」「ルシル！」

「俺、行かないと・・・。みんなが待っている・・・」

上半身を起そうとするマイスターだったけど、「待って！」ゼフィランサスさんが肩を掴んでやめさせた。

「もうやめよう？　あなたはエグリゴリとの闘いに集中しよう？」

「そうはいきません。今の戦いが、エグリゴリとの戦いに繋がるのです。・・・お心遣いありがとうございます、ゼフィ姉様。俺は・・・目を覚まします」

ポロポロ涙を零すゼフィランサスさんの両頬に手を添えて、親指で涙を拭ったマイスターが微笑んだ。ゼフィランサスさんは目を伏せて「どうしても？」って訊くと、「どうしても、です」マイスターは力強く答えた。

「・・・判った。現実へとお帰りなさい、ルシル。・・・ああもう、ホントお姉ちゃんの言うことを聴かなくなっちゃって。お姉ちゃん、さびしい」

マイスターの肩から手を離したゼフィランサスさん。マイスターは改めて上半身を起こして、「アイリも、約束を果たしてくれてありがとうな」立ち上がった後にアイリの頭を撫でてくれた。

「うんっ　」

「ゼフィ姉様。・・・いってきます！」

「はぁ・・・。いってらっしゃい、ルシル。しっかりね。アイリも、弟をよろしくね」

「ヤー！　この命に代えましてもマイスターをお護りします！」

ゼフィランサスさんはアイリの頭も撫でてくれた。そしてアイリとマイスターの足元に銀色に輝くアースガルド魔法陣が展開された。

「あ、最後に！　ルシル、あなたが複製能力を具現するための権限。誰かがそれを使って、勝手に具現を行ってる。今はまだ、あなたが気付かないような低ランクなおかげで記憶の消失は免れてるけど、最悪ハイランクな何かを具現でもされてしまったら・・・！」

視界が銀色に満ちる前にゼフィランサスさんからそんな報告があった。マイスターは「レーゼフェアかプライソンか、どちらにしろ警

戒が必要だな」って漏らした後、「十分気を付けます！」ゼフィランサスさんに手を振った。そして、アイリとマイスターは現実世界へ帰還。

『アイリ。エイルを発動する。サポート頼むぞ』

『ヤー！』

現実世界のマイスターの意識が回復したことで、すぐにマイスターは上級の治癒術式を発動。重体になってたマイスターの体がみるみるうちに回復してくのが、ユニゾン状態だからこそよく判るね。

『治癒完了。ありがとう、アイリ。ユニゾン・アウトだ』

『ヤー！』

――ユニゾン・アウト――

「っと。ただいま、フェイト」

ベッドの脇に佇んでるままのフェイトに挨拶。"ヴァルハラ"内で過ごした時間は結構経ってるように思えるけど、現実では3分も経ってないはず。

「おかえり、アイリ。ルシルは・・・大丈夫そうだね」

フェイトの視線を追ってベッドに目を向けると、「ああ。戻って来

たぞ」マイスターが上半身を起こしながらそう言った。そして目をフェイトに向けて、「・・・・」固まった。アイリとフェイトで小首を傾げてると、「アイリ。ひょっとして、解除されているか？」マイスターがまた横になりながら訊いてきた。

「あ、うん。マイスターの変身能力、残念ながら解除されちゃってるね・・・」

「フェイト。何も見なかったことにしてくれ。おやすみ」

頭が隠れるほどにまで掛け布団を被った。けどすぐにフェイトが「そんな場合じゃないから！」そう言って、布団を勢いよく捲った。マイスターは縮こまってて、ちょっと可愛いって思った。

「ルシル！　起きて、緊急事態なの！」

「・・・ああくそ！　チビだからってなんだ！」

フェイトに体を揺さぶられること１０秒弱。マイスターはそんなことを言って上半身を起こすと、「今、ミッドや管理局が置かれている状況を教えてくれ」ベッドから降りた。するとフェイトが「あ、つむじ・・・」マイスターを見下ろして、そんなことをポツリと漏らした。するとマイスターは「っ！」慌てて頭頂部を両手で隠した。

「ご、ごめん・・・」

「はぁ。同年代の女子に見下ろされると言うのは、やはり悔しいと

言うか切ないと言うか・・・」

「私もまさかルシルを見下ろす日が来るとは思いもしなかったよ。っと、そんな場合じゃなかった。現状は・・・――」

フェイトから伝えられる今の状況。さっきアイリも聴いたけど、改めて聴き直すとかなりまずいんだよね。マイスターも「本格的な進撃か・・・」顎に手を添えて唸った。

「エヴェストルムは回収されているか？」

「あ、うん。はい、エヴェストルム」

フェイトが上着のポケットから指環形態の"エヴェストルム"を取り出して、マイスターに手渡した。マイスターは"エヴェストルム"を「セットアップ」して、病衣から騎士甲冑へ変身。さらに柄に収められた魔石に魔力を流し込んで・・・

「エイルは４人分か。フェイト。重傷者で４人、教えてくれ」

僅かに回復した魔力で、大怪我を負って完治まで時間の掛かる隊員を治すみたい。フェイトは「ありがとう」お礼を言った後、アリサとザフィーラとヴァイスの３人の名前を挙げた。その他のみんなはエイルじゃなくてラファエルや、ここ医院の治癒魔導師の魔法で十分だって。

「判った。じゃあその３人の病室へ案内してくれ」

「うん、お願い」

そういうことでアイリ達は、集中治療室棟から一般病棟へ移動。まずは一番近いザフィーラとヴァイスの病室から。フェイトがドアをノックすると「はい、どうぞ」ヴァイスから返答があったことで、「失礼するね」アイリ達は入室。

「フェイトさん、アイリ先生、それにセインテス・・・ん？」

ヴァイスがマイスターを見て、目を擦ったり瞬きしたりする。そして「小っさ！？　えっ、なんで！？」混乱した。マイスターは「気にするな。ほら、じっとしていろ」若干不機嫌になりつつもベッドに歩み寄ってく。

「ザフィーラが一番ダメージが大きそうだな」

「え、あ、あぁ。旦那が俺やアリサ姐さん、アリシアさんを庇ってくれたんすよ」

ザフィーラは頭や胴、両足にも包帯が巻かれてる。マイスターは指環モードに戻した"エヴェストルム"にそっと触れて、「よしっ」強く頷いた。

――女神の祝福（コード・エイル）――

マイスターが発動したエイルの光が、ザフィーラとヴァイスを包み

込んだ。ヴァイスが若干「うお！？　折れたところがムズムズする！」変な動きをしたけど、ほんの1分くらいで・・・

「すげえ！　骨折だけじゃねぇ、他の傷も完治してやがる！」

ヴァイスと・・・

「・・・む？　ここは・・・？」

意識不明だったザフィーラのダメージを全て治した。驚くヴァイスに「俺のエイルに不可能はない」マイスターは自慢げに胸を張った。死亡以外ならどんな怪我や病気も治せるのがエイルだしね。こんな魔術を創り出したマイスターはホントにすごいよね。

「次だ、フェイト」

「あ、うん！　ヴァイス陸曹、ザフィーラ。退院手続きはこちらで済ませるから、帰る準備はしておいてね！」

「うっす！」「ああ」

次に目指すのはアリサの居る病室で、「失礼するね」さっきと同じ要領で入室しようとしてたところに、アリサが「そういやあたし、トイレここでやんないといけないんだっけ！？　マジかー！」絶望に叫んでた。そしてアリシアが「おしっこ？　尿瓶、借りて来ようか？」少しばかりウキウキしてる感じで訊いた。なんか変態っぽい。

「コホン。失礼するぞ、アリサ、アリシア」

「うえ、ルシル！？　まさか今の聞いて・・・、聞いて・・・、はい？」

「うそ・・・」

小さくなっちゃってるマイスターの姿に、アリサとアリシアは目を丸くした。アリシアはマイスターに歩み寄って頭や頬を撫でたり、自分の頬を抓ったりして「え、なんで小さいの？」って訊いた。

「ルシル。あんた、変身魔法をわざわざ使ってまでそんな姿にならなくてもいいじゃない。というか、そうする理由がサッパリだわ」

「逆だ、アリサ。今の俺が本当の身長なんだよ、嘆かわしいことにな。この姿に付いて一々説明するのも面倒だから、今は黙っていてくれ。あとではやて達の前で一緒に説明するから」

「それじゃあ今までのルシルの身長は、変身魔法か何かだったってこと？」

「あとで説明すると言っているだろうが。ああ、そうだよ。低身長が嫌でわざわざ魔法を使って高身長を偽っていたんだよ。笑いたきゃ笑え、こんちくしょう」

「「わ、笑えない・・・」」

結構本気でヘコんじゃってるマイスターの姿に、２人も察して笑わなかったけど同情の眼差しも結構つらいものがあるかも。大きく溜息を吐いたマイスターは「一先ず、アリサ、君の体を完治させる」そう言った。

「マジで！？　出来れば早くお願い！　お、お手洗いにね、その、行きたいのよ。自力でお手洗いに行きたいの、マジで」

恥ずかしそうに頬を赤くしたアリサに、「言わなければいいのに、自分で」マイスターがツッコんだ。黙ってれば、マイスターが席を外した後でダッシュでトイレに行けばいいのに。

「う、うるさいわね！　急ぎなの！　お願い、ルシル！」

「わ、判った！　今すぐに発動する！　漏らすなよ！」

「ば、馬鹿！」

アリサがもじもじし始めたからマイスターも慌ててエイルを発動。アリサの身体が蒼い光に包まれた、その時「っ・・・？」マイスターがフラついた。フェイトとアリシアが、マイスターの両側から支えてくれたから倒れ込むことはなかった。

「「「大丈夫！？」」」

「あ、あぁ、大丈夫。エイルの３連続発動は、魔力に少しの余力があるとはいえさすがに堪えるな」

そう言って苦笑するマイスターを、病室の椅子に座らせてくれたフェイトとアリシア。そして骨折が完治したアリサは「ありがとう、ルシル！　ちゃんとしたお礼はまた後で！」ダッシュで病室から去って行った。

「はぁ。これで重傷者は全員だな、フェイト？」

「うん、そうだよ。地上本部組は軽傷で済んでるし。ロングアーチも明日には退院できるレベルだから」

「そうか」

マイスターはそうポツリと漏らした後、「出来ればトリシュに連絡を取り、会いに来てもらえるよう頼んでくれ」アイリ達にそう伝えた後、一瞬で眠りについた。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒ルシリオン†††

完治まで１ヵ月は必要となる重傷者だったアリサとザフィーラとヴァイスを、上級術式のエイルで完治させた後、俺は急激な眠気に襲われて一瞬にして眠りに付いてしまった。記憶消失に陥らずに済んだのは幸いした。

「アンタ、本当に大丈夫なわけ？」

「結構眠ったね、ルシル。もう夜だよ」

「はやて達にはもう連絡を入れておいたから、準備が整ったら寮に帰って来てって」

寝起き直後に、ベッドの上で横座りするアリサと、女の子座りするアリシアからは気遣いを、側の椅子に座っているフェイトからは報告を貰った。アリサとアリシアには「ありがどう、もう大丈夫だ」礼を、フェイトには「身長の事は？」と訊ねる。

「話してないよ。私から話すような話題じゃないし」

「そうか。ありがとう」

俺の成長が止まった原因は、おそらくこの体が魔力で構築されているからだろう。成長期に、シュヴァリエルとの戦いで過度の魔力消費、複製物――記憶消失が続いたからな。今に思えば当然な結果だ。もう人間の体としての成長は望めないから、ずっとこの低身長のままだろう。泣きそう・・・。

「おーい、ルシル。トリシュが来てくれたよ！」

アイリが病室に入って来た。遅れて「ルシル様！」トリシュ――トリシュタン・フォン・シュテルンベルクが駆けこんで来た。服装はカリムやシャルと同じ女性騎士団服。髪型は俺とそっくりのインテークで、髪色は茶、瞳の色は青。

彼女も２０歳となり美人になったが、エリーゼの色素と同様に体の

起伏の乏しさも受け継いでいるようだ。身長はなのはくらいあるが、胸のサイズはアイリ並（中学生ほど）だ。なんて口にしたら、大顰蹙を買うだろうから口が裂けても言わない。

「アイリからの連絡で、ルシル様が私を御指名とのことでしたから、急いで参上しました！」

「わ、わざわざすまない、トリシュ。まずは、息を整えようか・・・」

本当に急いで駆け付けてくれたようで、トリシュは大きく肩で息をしていた。アリシアが「水、水っと」病室隅の脚長テーブルに置かれたポットの水をコップに注いで、「はい」トリシュに手渡した。

「ありがとうございます、アリシア。・・・ぷはぁ、ごちそうさまでした。では早速、私は何をすればよろしいでしょう？」

コップをアリシアに返したトリシュに俺は、「クス・デア・ヒルフェを、俺に使って欲しい」単刀直入に願い、頭を下げた。クス・デア・ヒルフェは、シュテルンベルク家直系の女子、しかも長女にしか受け継がれない固有スキルだ。

受け継いだ長女は生まれながらにリンカーコアを2つ有している。1つは自分用、もう1つがスキル用だ。その効果は、対象に唇で触れると、スキル用のリンカーコアの魔力を、対象へと流し込む事が出来るというもの。オーディンと名乗っていた頃、エリーゼのこのスキルに何度も助けられた。

（いつプライソンの進撃が開始されるか判らない今、魔力が自然回復するのを待ってはいられない）

アリサ達を治癒するために、彼女たちの病室へ向かう間にフェイトから聞いた話だと、プライソンは本格的な戦争を起こすために準備を進め、整い次第にミッドを制圧して自分が支配者にとって代わると言う。

（そんな緊急事態につき、内務調査部から正式に俺を戦力として機動六課に協力するよう辞令が出た）

正式な辞令だ、最高評議会も文句は言えまい。そういうこともあり、のんびりと構えている場合じゃないのが現状だ。トリシュは「アイリから伺いましたが、本格的に参戦なさるとか」そう言った後・・・

「あれ？　ルシル様、遠近法ですか？　何かこう・・・小ぢんまりしていると言うか・・・」

今さらな指摘をしてきた。俺はベッドから立ち上がり、両手を腰に置いての仁王立ちをして見せる。まぁトリシュからも見下ろされるから泣きそうになった。なのはに逢っても泣くかもしれない。

「・・・ルシル様。ギュってします。いいですよね？」

「いいですよね？と確認しておきながら、俺の返答を聴く前にハグするのはやめてくれないか」

「あ、すいません。でもクス・デア・ヒルフェのお代ということで」
そう言われてはもう何も言い返せない。トリシュに成されるがまま、俺はひたすら彼女の腕の中で佇む。

「フォルセティの親権ははやてに取られてしまいましたが、シャルと同じように私は、ルシル様の事は絶対に諦めませんから。覚悟してくださいね 」

――乙女の祝福（クス・デア・ヒルフェ）――

不意打ちだった。いきなり頬にキスを貰い、トリシュの魔力が俺に流れ込んできた。トリシュの魔力量はランクでＳ－だからな。この回復量は正直ありがたい。

「ありがとう、トリシュ。助かったよ。これで俺は気持ちよく戦いに臨むことが出来る」

「はいっ。ルシル様も戦場に立たれるようですし、お役に立てて私としても嬉しいです♪」

本当に俺のことを慕ってくれているんだと判るほどのトリシュの満面の笑顔。なんで俺みたいな奴を想い慕ってくれているのか、申し訳なさが半端じゃない。早々と振ってあげた方が良いんだろうが、あの子たちに何を言っても諦めてくれないからな・・・。

「あ、申し訳ありません。兄から早く帰って来るようメールが来ました。私はこれで失礼いたしますね。ルシル様、アイリ、フェイト、アリシア、アリサ。共に戦場に立てること楽しみにしています」

そうしてトリシュは教会本部へと帰って行った。彼女を見送った後は、シャマル達の治療だ。アイリと「ユニゾン・イン！」して、魔システム力炉への負担を可能な限り軽減させる。

「よし、行くか・・・！」

「ヤー！」

フェイトの案内で、俺たちはシャマルとすずか、さらにはロングアーチの病室へ向かうことになった。

Ｅｐｉｃ２０－Ｃ幕間～Ｔｈｅｉｒ　Ｅｘｐｅｃｔａｔｉｏｎ～

次元の海に浮かぶのは巨大な船でもある時空管理局、その本局。その中にある拘置所エリアの一室にて、紫色の髪に金に輝く瞳を持つ１人の男が「おのれ・・・！」怒りを露わにして、ガツンと壁を殴っていた。彼の名はジェイル・スカリエッティ。通称ドクター。本局・第零技術部の部長を務め、少将の階級を有している。

「まさか本当に地上本部を、はやて君たちの機動六課までをも攻撃するとは・・・！」

彼が観ているのは、プライソン一派によるミッドチルダ地上本部と機動六課への襲撃事件のニュースだ。地上本部の敷地内周辺には、コンテナミサイル・グレンデルによって破壊されて崩れてきたセントラルタワーの瓦礫、それにガジェットや死体兵器であるＬＡＳの残骸が数多く転がっている。しかしＬＡＳだけはモザイク処理が施されている。人の死体が素体なため、腐ってドロドロな臓物や血液が撒き散らされているためだ。その所為で外部警備担当の局員の半数がトラウマを植えつけられてしまった。

「やはり私が・・・同じスカリエッティである私が・・・プライソンを、兄を止めなければ・・・！」

ジェイルとプライソン。共に"檻"を意味する名前を与えられた２人は、最高評議会によって人工的に生み出された存在で、無限の欲

望アンリミテッドデザイア・ジェイル、無窮の強欲エターナリーグリード・プライソンとうコードネームを与えられている。開発順ではプライソンが兄、ジェイルが弟となるが、２人が直接顔を合わせて話したことなど一度もなく、生み出されてからの数十年の間に言葉を交えたのは数回かつモニター越しで、しかも音声のみの加工済みときているため、ほぼ赤の他人だ。

「報道規制がなされているのか？　プライソンなら局を煽るような声明くらい出しそうなものだが・・・」

正しくその通りだった。プライソンは声明を出したが、その内容が管理局にとって非常にまずいものだったため、本局はメディアに流出しないように必死になって規制している。

（どちらにせよ、私がこうして拘留されている間に起こった事件だ。誤認逮捕として私や娘たちの拘留もじきに解除されるだろう。ここから出られたらすぐにプライソンをこの手で・・・）

グッと握り拳を作るジェイル。プライソンが正体不明だからという事もあり、ジェイルのそのずば抜けた知能と技術からプライソンだという疑いによってこうして拘留されている。彼だけではなく、シスターズと呼ばれる彼の娘たちもまた拘留中だ。自分たちの疑いがすぐにでも晴れ、ここ拘置所から出してもらえると考えていたが・・・

「遅いな。もう日を跨いでしまうじゃないか・・・」

待てど暮らせど一向にジェイルを牢から出しに来る局員が来ない。ジェイルは苛立ち気に室内をウロウロと徘徊し続ける。そしてとうとう時刻が管理世界標準時間での0時を回った。ジェイルのイライラもついに爆発し、「何故、誰も来ない！」声を荒げてしまった。しかしすぐに「いけない、落ち着かなければ・・・」深呼吸を繰り返し、冷静を取り戻した。

（正真正銘の外道であるプライソンのことだ、私たちの釈放が先延ばしにされてしまうほどの問題を起こし、本局を混乱させているのかもしれないな）

ベッドに腰掛け、ジェイルはそう考えた。単純に忘れらているのではなく、容疑が晴れていないのでもなく、釈放が遅れてしまうほどの問題をプライソンが起こして、その対応に本局が慌ただしいのだと。だが悠長に牢の中に留まるわけにはいかないと、彼は焦っていた。

地上本部への襲撃は中途半端だと。さらに何かしらの計画を企み、実行するのであろうと。ならば鉄壁を誇る地上本部と、局内でも有名な魔導師が揃う機動六課を陥落させた後、プライソンは何を仕出かすのか、と考えているからだ。

（碌なものではあるまい。何か大きな爪痕を残すために、奴は有する知識や技術を総動員するだろう。その先にあるのは多くの絶望のみだ・・・）

それからジェイルは想定される最悪な事態を数通りと考えてはその解決法を打ち出し、展開した空間モニターにメモを取っていく。ジ

ェイルらスカリエッティ家は通信や念話などの他者との交信は禁止されているが、今のように軽い作業は許されていた。最高評議会の計らいでもある。ただ拘留するだけではジェイルの知恵や知識を無駄にすると考えているからだ。最高評議会にとって、プライソンはすでに用済みだが、ジェイルはまだまだ利用価値があるのだ。

「・・・ん？　ミッドはもう朝か・・・」

8時間ほど作業に没頭していたジェイルは時刻を確認して、「全てが終わるまで私は黙って待つしか出来ないのか・・・？」大きく溜息を吐いた。何せ襲撃事件が発生してから丸1日近く、彼を拘留している牢に局員が来ないからだ。

「頼む。私をここから出してくれ・・・。私に機会を、私の片割れを止めるための・・・」

そんな悲嘆に暮れているジェイルの耳に、コツコツと靴音がゆっくりと近付いて来るのが聞こえてきた。彼はゆっくりとベッドから立ち上がり、スライドドアへと歩み寄って行く。靴音は徐々に大きくなってくる。そして・・・

「（止まった・・・？）ようやく釈放かね？　随分と待たせてくれるじゃないか。よほど忙しいのか、それとも私の存在はサラッと忘れられてしまうほど希薄なのか、どちらだろうね」

靴音がジェイルの居る牢の前で止まったことで、彼はこれまでの扱いからつい皮肉を漏らしてしまった。だがドアの向こう側に居る誰

かは気にも留めないようで無言。そしてそのままパネルのキーを打つ音が聞こえ始める。

「すまない。気が立っていたんだ。・・・ありがとう。1つ注文したいが、地上本部や本局は今、どういう状況なのか教えていただけ――」

ジェイルが最後まで口にする前に解錠されたスライドドアが開き、彼を解放しに来た局員の姿に思わず口を噤んだ。

「ヴァスィリーサ少将・・・!?」

そこに佇んでいたのは1人の女性、リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ。階級は少将、役職は本局運用部・総部長。そして管理局において最高・最強の魔導師、トップエースだ。

「あなたに話があったので、こうしてオフレコでやって来たのです」

リアンシェルトはそう言って、キュッと唇をきつく結んだ。彼女は本局勤めであるにも拘らず、遭遇率が低いレアキャラとしても有名だ。故にジェイルも、まさかリアンシェルトが拘置所に現れ、しかも自分を解放してくれたとなると驚かざるを得なかった。しかもジェイルは聴いている。彼女が、ルシリオンの敵・"エグリゴリ"の1機であると。

「少し失礼しますね。ここの牢は通信や念話などの妨害がされているため、直接出向かなければ話も出来ませんでしたから」

リアンシェルトはジェイルを牢の奥へと押し戻しながら自身も入り、スライドドアを閉め直した。彼女はぐるりと室内を見回して、「さて」ベッドに腰掛けるや否や口を開いた。ジェイルはその強引さに口を半開きにしていたが、「いや、待ってくれ」かぶりを振って口を挟んだ。

「何か？」

「何を目的としてここへ来た？」

「そう警戒せずともよろしいですよ、スカリエッティ少将。最高評議会の下した判断は、プライソンの殺害です」

「っ！・・・そうかい、やはりね。彼は少しばかり遊び過ぎた。粛清されたとしても構わない。私としても、彼の殺害に賛同しよう。捕らえたとしてももう御することは出来ないだろうからね」

ジェイルは大して反感も抱かずにそう返した。嘘でも冗談でもなく本心でプライソンの殺害計画を受け入れた。リアンシェルトは「賢明です。少しばかり反対を受けると思っていましたが」彼の答えに、僅かばかり眉を顰めた。

「プライソンが私の兄だから、と？　肉親だと思ったことは一度ともなく、科学者の面汚し・・・純粋に敵だとしか思っていないよ」

ジェイルが医療技術として生み出した全身サイボーグ化技術ＢＮＡ

C。それを兵器転用したり、サイボーグ化するためにわざわざ人工的に人間を造り出しては改造なども行う倫理から外れた下種、それがプライソンだ。

「それで、私を訊ねて来たのはどう言った理由からなのかな、ヴァスィリーサ少将？」

「機動六課の特務調査官として出向していたルシリオン・セインテストに、内務調査部から特例として戦闘参加許可を受けました。最高評議会はそれに乗り、彼にプライソンを殺害するよう指示を出すでしょう。ですから彼を戦場に出す前に、プライソンを始末する必要があります」

ジェイルの頭の中に？マークが浮かぶ。ルシリオンと"エグリゴリ"は敵対している。そう、ルシリオンを殺そうとしているのだ。だと言うのに、リアンシェルトの話を聴けばまるで戦わせないようにしたい、と願っているようにも聴こえる。自分たちの手で殺してこそ意味がある、と言うのであればジェイルも納得できるが・・・

（どうもヴァスィリーサ少将のこれまでの行動は、ルシリオン君を護っているようにも思えてくる）

すずかや、彼女が属するチーム海鳴越しで手に入れてきたリアンシェルトの行動から見るに、敵として徹底しきれていない気がしてならないジェイル。以前彼は、ルシリオンに殺し殺されるような間柄のリアンシェルトが居て不安ではないか？と訊ねたことがある。

――今の俺じゃ、弱過ぎて戦う気にもならないんです、と。リアンシェルトより弱いエグリゴリであるレーゼフェアとフィヨルツェン、この２機を救ってから戦ってあげるとのことだ――

「ならばレーゼフェアを使ってはどうか？　同じエグリゴリとして、あなたより格下なのだろ？　レーゼフェアを使ってプライソンを殺せばいい。そうすればあなたや最高評議会、管理局、管理世界、全ての悩みの種が消え去る」

「・・・お前には関係ないでしょう？　エグリゴリについての発言をもう一度してみなさい。永久凍結をして、夢すらも見ない永遠の眠りを贈りますから」

「・・・っ！」

リアンシェルトから急に放たれる殺気にジェイルは数歩と後退した。踏み込んではいけない領域、触れてはいけない秘密、口にしてはいけない禁句。彼はそのどれらにも抵触しているのだと察した。

「判った。・・・では本題に入ろうではないか。私に何をさせたい」

「プライソンの暗殺。機動六課や聖王教会騎士団が連中と衝突する前に・・・」

「願ってもない依頼だ。しかしあなた方、権威の円卓には１１１１部隊という暗殺部隊があるではないか。彼らは使わないのかい？」

「暗殺は人目のないところでこそ意味のある行為だと、その程度も解らないあなたではないでしょう？　それに、ルシリオンを暗殺に仕向ける気でしょうから、彼より弱い１１１１部隊を出すまでも無いのですよ」

「これは失礼をした。ではプライソンの暗殺は私が引き受けよう。しかし問題がある。プライソンのアジトがどこにあるか、だ」

「現在、管理局・教会騎士団が鋭意捜索中です」

ジェイルが渋い表情になる。２つの組織の物量捜索作戦より早くプライソンのアジトを見つけなければならない。彼だけではまず不可能な仕事だ。だが「娘たちも一緒に釈放してくれ」ジェイルにはとても頼りになる娘たちが居る。ゆえに彼は、自分だけでなく娘たちの釈放もしてほしいと願った。

「・・・いいでしょう。ではすぐに行動に入りましょう。最高評議会に感づかれては面倒です」

「何を言う、ヴァスィリーサ少将。あなたがただの人間ではないことは、私が生まれた時から知っている。まぁその正体を知ったのはここ数年の間だがね。最高評議会と共にこの時空管理局を設立した最古参の局員。最高評議会と立場は同等、いや４人目のメンバーのはずだ」

「・・・よく調べましたね」

「約１５０年前に最高評議会と共に次元世界をまとめ上げ、それ以降は影に徹していたが・・・約３０年ほど前、突如として表世界に姿を見せた。そして訓練生から改めて局入りをし、その後に武装隊へ入隊。それから出世を繰り返して今や本局運用部の総部長」

「今、私についての話など必要ですか？」

「いいや」

それからジェイルとリアンシェルトは、順々にシスターズの牢へと赴いては囚われている彼女たちを釈放していく。父親と想い慕うジェイルと久しぶりに直接顔を合わせた娘たちは「ドクターー！」と喜びを表し、彼の元へと殺到した。

「随分と待たせてしまったね。さぁ、私たちをこんな牢屋に入れさせた原因であるプライソンに報復をするために準備を始めようじゃないか！」

ジェイルが大げさに腕を広げてそう伝えると・・・

「ええ、畏まりました」

長女ウーノは目を伏せて小さく一礼して・・・

「それはそれは。そそられる仕事ですね」

次女ドゥーエはニタリと笑みを浮かべ・・・

「ああ。腕が鳴る」

三女トーレは腕を組んで、ドゥーエに同意するように頷き・・・

「私たちを牢に入れてくれたお礼として、棺にブチ込んであげますぅ～♪」

眼鏡をキラリと輝かせて仁王立ちする四女クアットロに・・・

「棺では死なすことになるだろう？」

五女チンクがそう訂正したが・・・

「えー？　ここまでコケにされたんだから、サクッと殺っちゃおうよ、チンク姉」

六女セインが頭の後ろで手を組んで、陽気な声で危険な発言をした。チンクは「我々は仮にも公務員だぞ？」と呆れを見せたが、ジェイルは「いや。プライソンを殺害するよ」チンクに向けてそう言った。

「っ！・・・本当なのですか？」

「ああ。プライソンとの因縁を、ここでしっかりと終わらせたいからね。彼はもう生きていてはいけない男だ。彼と同じ技術者として・・・、そして弟として、だ」

ジェイルのプライソンの弟発言に、「っ！？」娘たちは驚愕の表情を浮かべた。管理局内にて明かされなき謎の一角を担っているプライソンの正体。その答えがすぐ側にあったことに驚きを見せたのだ。

「詳しい話は、我らが家・第零技術部にて話そう」

「第零技術部までは私が同行します」

そうしてリアンシェルトを先頭に、ジェイル達は第零技術部へと帰還した。

・―・―・―・―・

ミッドチルダ北部に位置する、ベルカの末裔たちが住まう土地・ザンクト・オルフェン。中央区アヴァロン、北区カムラン、南区ウィンザイン、東区ナウンティス、西区カールレオンの5区からなる。治めているのは領主フライハイト家と、それに連なるグラシア家、ヴィルシュテッター家、カローラ家、アルファリオ家、トラバント家、ヴァルトブルク家からなる六家の七貴族だ。そして現在、アヴァロンにある聖王教会本部・議事堂の専用会議室にて、その七貴族の当主たちが円卓を囲んで険しい表情を浮かべていた。

「聖王オリヴィエ陛下のクローンであるヴィヴィオ様が拉致されてしまったと聞く」

「魔神オーディンのクローンであるフォルセティ君もまた拉致されたそうな」

「機動六課は何をしておったのだ！　護ると言うから預けておけばこの様だ！　やはり教会本部預かりにすれば良かったのだ！」

「仕方あるまいに。六課の主力のほとんどが地上本部の防衛任務に回されておったからな」

「やはり教会騎士団からも護衛を付けるべきだったの。教会本部への襲撃も無かったしの」

「しかし万が一にも襲撃される可能性があった以上、こちらの防衛を疎かにするわけには・・・」

「せめてヴィヴィオ様たちの様子を見に行く任務を与えられていた、グリューン・ガルデーニエ、ゴルト・アマリュリスの隊を、地上本部警備任務が終わり次第向かわせれば良かったのだ」

中年・初老の男女が思い思いに発言していく。議題はやはり聖王女オリヴィエ・ゼーゲブレヒトのクローンであるヴィヴィオが、プライソン一派に拉致された話だ。オーディンもといルシリオンのクローンであるフォルセティも拉致されてはいるが、優先度で言えばヴィヴィオの方が高いらしい。

「しかしこれで、聖王のゆりかごが蘇るかもしれないということか」

ある中年の男性がポツリと漏らすと、「っ！」彼以外のメンバーが息を飲んだ。"聖王のゆりかご"。かつて聖王家が所有していた、

超弩級の空中戦艦である。聖王を崇め奉る聖王教会にとって"聖王のゆりかご"はまさしく至高の聖遺物にしてシンボルとなる。だが・・・

「その万が一に備え、聖王のゆりかごの扱いを決めねばなるまいて」

「扱いも何も、我ら聖王教会が接収すればいいではないか」

「いやいや。管理局がそれを許すわけないぞ、トラバント卿。聖王のゆりかごは、分類上は質量兵器だぞ」

「何を仰る、グラシア卿。管理局とて艦船をいくつも有しているではないか。アレらも質量兵器に抵触するレベルだ。なれば、我ら聖王教会も艦を所有しても良いはず」

「トラバント卿もおかしなことを。局の艦艇とゆりかごを同格に見るのは間違いよ。ゆりかごは単艦で次元世界を席巻し、さらには次元震を起こしてベルカを始めとしたいくつもの世界を、生命の住めぬ不毛の地へと変えるほどの強大な力を有しておる。かような性能を持つ戦艦を所有するのは、管理局から反感を受けるは間違いないわ」

「管理局ばかりに戦力を集めるのはどうかという問題なのですよ、レディ・アルファリオ。管理局と我われ聖王教会は同格であるべきなのです。規模は小さくとも、次元世界の秩序維持に力添えしています。戦闘の行える次元航行艦は1隻と所有していない今、ゆりかごを手に入れるべきだ」

そう力説するのはトラバント家の当主である中年の男性で、銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼの隊長にして剣騎士最強のプラダマンテの兄である。彼はミッドチルダ地上本部の防衛長官であるレジアス・ゲイズ中将に近く、少しばかり度を超えた危険な思想を持っている。

「しかしな、トラバント卿。ゆりかごの起動および運用には、ヴィヴィオ様を鍵として生け贄に捧げなくてはならんのだぞ？　あのような幼い娘を、二度と人として過ごすことの出来ないようにするのか？」

「我らは聖王を崇める聖王教会。その聖王をゆりかごを動かすだけの、自我の無い生体部品にするのは間違っている」

「グラシア卿とヴィルシュテッター卿の言う通りかの。トラバント卿。ゆりかごは現代には無用の長物。次元世界やヴィヴィオ様個人のことも考え、二度と利用されぬように破壊するのが吉だろうて」

「何を世迷言を、ヴァルトブルク翁！　ゆりかごを破壊するなど言語道断！　ゆりかごこそ、聖王教会、ひいては次元世界を守る力となるだろう！　ヴィヴィオ様には申し訳ないが、その幼さを武器に長く鍵の聖王として、その生涯を終えてもらおう！」

「言葉が過ぎるぞ、トラバント卿！　ヴィヴィオ様の、いや人の命を何だと心得ておる！」

「しかしあの娘は、オリヴィエ聖王女様のクローンだと言うではないですか。替えが利くのです。オリヴィエ陛下のクローンを生み出し続ければ――」

トラバント卿がそこまで言ったところで、ガァン！と卓上に両手の平を叩き付けた音が室内に響いた。今まで話していた6人の男女の視線が、これまで無言を貫いていた女性へと向けられた。白い祭服に宝冠（ミトラ）を頭に被り、その恰好から教皇であることが判る。

「黙りなさい、トラバント卿！　言うに事欠いてクローンを生み出し続けるなど、聖王に、生命に対してなんたる冒涜、不遜にして不敬か！　愚考と知りなさい！」

「しかし、マリアンネ聖下！」

教皇マリアンネ。フライハイト家の現当主にして聖王教教皇、ベルカ自治領ザンクト・オルフェンの実質の統治者だ。そしてイリスの母親でもある。そんな彼女の一喝にトラバント卿はたじろいだが、すぐに反論を試みようとした。しかし「よさんか、トラバント卿」他の当主たちが窘める。

「教会本部より盗まれたオリヴィエ様の聖骸布と魔神オーディンの髪環。プライソンは2つの聖遺物からお二方の遺伝子を採取、そしてヴィヴィオ様とフォルセティ君を生み出した。血筋の絶えた聖王の復活は喜ばしいことです。たとえ出生がどのようなものであれ。ですが聖王の血筋であれ、戦乱とは関わりない現代を生きる1人の少女。それをゆりかごを動かすためだけに犠牲にするのは看過でき

ません」

マリアンネは噛みしめるように六家当主たちに語る。トラバント卿を除く6人は小さく頷きを見せ、マリアンネの意見に同意している。

「聖王のゆりかごは確かに教会のシンボルとなりましょう。しかし運用コストがあまりにも非人道的で非効率。よって・・・聖王のゆりかごは接収することなく、管理局と協力して破壊することを決定します」

マリアンネが下した結論は"聖王のゆりかご"の破壊だった。ヴィヴィオのこれからの人生を思い、次いで次元世界の安寧のため、聖王家に縁ある至高の聖遺物になるだろうが、その存在が戦乱を引き起こす可能性のある戦艦であることを考えてだ。

「異議のある者は手を挙げなさい」

「「「「「異議なし」」」」」

「・・・トラバント卿。手を挙げたのはあなただけですね。・・・あなたはゆりかごの接収を望みますか、どうしても？」

「当然です。こればかりは引けません。ただ運用は諦めましょう。しかしゆりかごは必ず教会が接収するべきです。たとえ使えない物だとしても、歴史ある戦艦です。その価値は計りしれません。戦艦としての運用は出来ずとも、また違う使い道があるかもしれません。たとえばゆりかごに使われている技術の解析などです。そのことか

ら、私はゆりかごの有用性を説き、破壊に反対します」

「なるほど。しかし動かない戦艦など邪魔じゃないかの～。資料によれば全長数ｋｍの弩級艦。置き場所はどうするつもりかな？」

「北部ノーサンヴァラント海・オークニー諸島で一番大きいナウンティス島。あそこは無人島ですし、置き場所としては十分かと思いますが？」

卓上に展開されるモニターに、ナウンティス島が表示された。一面が起伏の無い森なため、着陸させるのには問題ないだろう。断崖絶壁なため海上からは上陸は難しそうだが、内陸へ向かうための細い海路があることは確認できる。海路からの侵入者はその海路入口を警備すれば済み、空路からの侵入者も適当に防空戦力を用意すれば良いだけだ。

「ふむ。場所の問題はクリアだな」

「ならば！」

「トラバント卿。いい加減に諦めなさい。ゆりかご自体が存在していることにすでに問題があるのです。それに、ゆりかごを起動させる前にヴィヴィオ様を奪還することになります。ゆりかごは飛ぶことなく、そのまま葬られるでしょう。ゆえに、これ以上の議論は無用ということです。よろしいですね？」

「っぐ・・・！」

マリアンネの断言によってトラバント卿はギリッと歯噛みしたが、「判りました。破壊に賛同します」とうとう折れた。これで満場一致による"聖王のゆりかご"の破壊が決定された。そして議会は閉会となり、当主たちは思い思いにそれぞれの仕事へと戻って行った。

「どいつもこいつも馬鹿ばかりだ・・・！　ゆりかごという強大な力を使うでもなく破壊するだと・・・？　そもそも奴が、ヴィヴィオ様やゆりかごを時期早々に起動させるからいけないのだ！　本来であれば、本件にゆりかごは投入しないはずだったのに！　奴は我らの計画を手伝って起きながら、破綻させるのか・・・！」

周囲に誰も居ないことを確認したトラバント卿は、怒りに任せて廊下の壁を殴った。魔力による強化もしていないにも拘らず、壁に少しばかりの陥没とヒビを与えた。そんな彼の背後から歩み寄って来る人影。トラバント卿はハッとして振り返る。

「はぁ。お前か、プラダマンテ」

「お兄様、随分と荒れているようですが何かありましたか？」

トラバント卿に歩み寄っていたのは彼の実妹、プラダマンテだった。騎士でありシスターでもあるため、服装は修道服だ。尻ほどまでに伸びた長い緋色の髪は外はねで、どこかハリネズミを思わせる。瞳は紫紺色だが、今は不安の色を湛えている。

「ヴィヴィオ様が奴らに拉致されたのは知っているな」

「ええ、騎士団内でも騒ぎになっています。召集が掛かればいつでも救出任務へ出撃できます」

プラダマンテの瞳に力強い光が戻るが、トラバント卿の「救出しなくていい」予想だにしないその発言に、「はい？　一体、どういう・・・」彼女は困惑する。

「先の会議にて、聖王のゆりかごを破壊することが決定された」

「っ！・・・そうですか。かの計画でゆりかごを投入する、とのことでしたが・・・。さすがにここまで大事になってしまっては、聖下たちのお決めになった通り破壊するしかないかと・・・」

「なに！？　お前もそう言うのか、プラダマンテ！」

兄の急な怒声に、プラダマンテはビクッと肩を竦めた。トラバント卿は「ゆりかごを破壊するなど言語道断！　アレは聖王の至高の聖遺物なのだ！」と声を張り上げる。プラダマンテが落ち着かせようと試みるが、「それなのに、聖下や他の当主は何故わからない！」と怒りが収まることはない。

「はぁはぁはぁ・・・！　プラダマンテ。ヴィヴィオ様を取り返す必要はない。ゆりかごの鍵として、当初の予定通りにその生涯を捧げてもらう。必要なのだ、聖王教会にも戦艦クラスの戦力が。解るな？」

「しかし！　私たちの計画から外れたプライソンが新たに立てたミッド支配という計画の通りにゆりかごが運用されれば、ミッドを守護する事どころか壊滅的被害を受ける可能性もあります！　それを見て見ぬふりをしろと！？　騎士でもある私に！」

「今は起動さえすればいいのだ。我々を裏切ったプライソンとその一派の掃討は、ゆりかごが軌道上に上がるまででも遅くはあるまい」

「くっ・・・。管理局が納得しません。今さらゆりかご破壊の指令を取り下げるとは思えません・・・」

「それについては最高評議会や本局将校と話をしてみるつもりだ。何としてでも、ゆりかごを手に入れるのだ」

拳をギュッと握りしめるプラダマンテ。騎士として、ミッドを愛する住民の1人として、見過ごすわけにはいかないことだった。だが兄と共に歩むことを決めた妹として、彼の願いに応えたいとも強く思っている。

「お前やキュンナには期待している。これも聖王教会のためだ、理解してくれ」

トラバント卿はプラダマンテの右肩にポンと手を置いて、耳元でそう伝えた。目を見開くプラダマンテは僅かにキュッと口を結んだが、「了解しました。教会騎士団団長殿」と、兄妹ではなく上司と部下として恭しく応じた。

Ｅｉｐｉｃ２１聖王のゆりかご～Ａｗａｋｅｎｉｎｇ　ｏｆ　Ｌｅｇｅｎｄ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

地上本部と機動六課が襲撃を受けて壊滅してから、そしてヴィヴィオとフォルセティが拉致されてから、２日目の朝。司令部として機能を損失してしまった隊舎の代わりに、はやてちゃんやクロノ君たちが用意してくれたのはなんと「アースラ！」だった。

「チーム海鳴が局に入りたての頃にお世話になっていた、とっても思い出深い艦なんだよ」

フェイトちゃんがエリオとキャロにそう話してるのを背中越しで聞く。アースラは今、海上シミュレータ近くの海上に停泊中だ。でもアースラが大気圏外にあるのって何か違和感というか異様というか、不思議な感じだ。

そんなアースラに、隊舎が再機能するまで寝泊まりすることになった私たち機動六課。そういうわけで、みんなで生活に欠かせない物資を搬送することに。ルシル君が、襲撃の際に怪我をして入院することになってた隊員みんなを治癒してくれたおかげで、誰１人として欠けることがなかったから、問題なく済んでいった。

「――さて。みんなも朝早くからお疲れ様やった。お疲れのところやろうけど、今から隊長会議を行わせてもらうな」

お昼を回る頃には寮からの物資搬送を終えて、みんなでアースラの食堂で昼食を摂った後、六課の隊長陣、それとアリサちゃんとルシル君の7人がここミーティングルームに集まった。昨日は結局、1日中ずっと事後処理に追われていたからね、ミーティングがほとんど出来なかったから。ちなみにすずかちゃんは、シャーリーと一緒にフォワードのデバイスを調整中で、シャマル先生やアイリは医務室の整理中だから、ここには居ない。

「つい先ほど、地上本部から各方面に声明が出された。本事件は地上本部への攻撃という事もあり、今後の調査は地上本部のみで行うと強行に主張してる。そうゆうわけで調査にて判明した情報は、本局・聖王教会へ公開はしない、ってな。機動六課も本局所属ってゆうわけで同様や」

「はあ！？　あたしら機動六課も襲撃を受けて、ボロクソにされちまってんのに！」

「そうよ！　ヴィヴィオやフォルセティだって拉致されてんのに・・・！」

悔しげなはやてちゃんからの報告内容に、ヴィータちゃんとアリサちゃんが怒った。私だって「どうして・・・？　協力してたのに・・・」言いようのない虚無感に襲われた。地上本部は、プライソン一派の襲撃に備えて本局や聖王教会からの応援に応じてくれた。それなのに・・・。

「そうやな。・・・考えられるんは、ゲイズ中将とプライソンが繋

がってるかもしれへんってことでな。ひょっとしたら圧力を掛けられてるのかもしれへん。ゲイズ中将にはミッドチルダ地上本部の防衛長官って守りたい肩書きがあるからな。そうやんね、ルシル君？」

そう言ってルシル君の方を見るはやてちゃん。私たちの視線もルシル君へと向く。はやてちゃんを上座に、右側にスターズの私とヴィータちゃん、アリサちゃん。左側にライトニングのフェイトちゃんとシグナムさん、そしてアリシアちゃんとルシル君。そんな席順だ今のルシル君は、調査官としての赤い制服じゃなくて、私たちみんなが着てる陸士隊の制服だ。特務調査官として機動六課に出向していたルシル君だったけど、六課襲撃に伴って正式に戦力として動けるようになった。制服は別に着替えなくても良いんだけど、ある理由ですぐに用意できた陸士隊制服を着てもらうことに。

「隊長陣みんな、ゲイズ中将への疑惑は知ってるから。ルシル君が知ってる情報、開示してもらってもええやろか？」

「・・・判った。ゲイズ中将とプライソンが関わっているのは確定している。列車砲などの兵器も、元はゲイズ中将や最高評議会付きの本局将校が依頼して造った、地上防衛兵器だ。こんな事件が起きなければ、アインヘリヤルと一緒に陳述会の議題に挙がっていただろうな」

ルシル君の口から語られる衝撃の事実。それははやてちゃんやクロノ君たちが疑っていた通りの話だった。さらには、プライソンが最高評議会によって人工的に生み出された存在で、生みの親として利用していたのに今は反逆を受けて大慌て。だからプライソンを逮捕

させて、その技術力を「ドクターに引き継がせる・・・？」とのことだった。

「犯罪者の技術を、現役局員に引き継がせるなぞ、ドクター自身が許さんだろう」

「普通はな。しかしドクター、ジェイル・スカリエッティもまた、最高評議会によって生み出された人工存在で、プライソンとは兄弟関係に当たる。評議会からの命令や指示にもドクターは応じないだろうが、言うことを聴かすためにどんな手も使うだろう」

ルシル君の話に「えっ！？」みんなが驚いた。一体どれだけルシル君に驚かせられるんだろう。この話もそうだし、ルシル君の本来の身長の事もそうだし。

・―・―・回想だよ・―・―・

事後処理もようやく終わって、片付けが終わった寮の食堂で一息吐く。検査を含めての入院を余儀なくされていたアリサちゃん達も、重体で意識不明だったルシル君が目を覚まして、自分も含めて治癒魔法で完治させたってことらしくて、医療院からタクシーを使ってこっちに向かってるって話だ。

「良かった、ルシル君も目を覚ましてくれて・・・」

フォルセティもきっと、大好きなパパに助けに来てもらいたいはずだから。ヴィヴィオだって、私のことを待ってくれてるはず。ヴィ

ヴィオの笑顔が脳裏に過る。けどすぐに胸の内に去来するのは、ヴィヴィオが痛い目に、辛い目に、苦しい目に、遭っていないか・・・って。

「ヴィヴィオ・・・」

不安で押し潰されそうになる。そんな時に、「心配すんな、なのは」パシンと背中を叩かれた。振り返れば、そこには「ヴィータちゃん・・・」が居た。地上本部警備で撃墜されかけちゃったけど、シャルちゃんのおかげで今はピンピンしてる。

「お前がそんなんでどうすんだよ。不安なのは仕方ねぇよ。でもな、それでも今は強がってでも胸を張ってなきゃならねぇんだ。ヴィヴィオのためにも、フォルセティのためにも、な」

人差し指で目を拭って、「・・・うん」頷き返した。折れそうな心を、私を待ってるヴィヴィオのために、って奮い立たせる。照れくさそうにそっぽを浮いてるヴィータちゃんに「ありがとう」ってお礼を言うと、「おう」頬を掻いて頷いた。それから「お疲れ様や、みんな」はやてちゃんやシグナムさんとも合流して、フェイトちゃん達を待つ。

「ただいま―！」

フェイトちゃん達が帰って来た。お出迎えをするために椅子から立ち上がって、食堂の出入り口に駆け寄った。そこにはフェイトちゃん、アリシアちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、シャマル先生、

ザフィーラ、ヴァイス君、シャーリー達、そして・・・

「ん？」

何か違和感があったから、瞬きを繰り返してよ～く見る。そしてヴィータちゃんが「小っさ！」声を出した。それでようやく自分の目が間違っていないことを知る。ルシル君の身長が、異様に縮んでるって・・・。

「ちょっ、え、どうしたん！？　ルシ――えええ！？」

はやてちゃんは特に驚きを見せてる。今まではルシル君を見上げていたけど、今じゃ身長差はほとんどないし。私は「変身魔法じゃ・・・ないよね？」そう訊いてみた。でもわざわざ魔力を使ってまで身長を低くするわけもなく。だから違うって解ってるのに。

「ああ、これが本来の俺の身長だ。俺の成長は１１歳の頃に止まってしまったんだ」

「１１歳・・・！？　そんな昔から・・・！」

「小学校の頃からずっと、変身魔法を使ってたってことかよ」

「どうしてまた・・・」

はやてちゃんとヴィータちゃんの言葉に、私も不思議に思う。わざわざ魔力を使ってまで・・・。しかも私たちが８年近くも気付かな

かったってことは、はやてちゃんの家で過ごしていた間でも発動していたわけで。そこまでしてどうして・・・。

「・・・男としてのつまらないプライドだよ。親しい女の子より背が低いって、やっぱり格好つかないと言うか情けないと言うか・・・。ギリギリではやての身長より低くないのは救いだがな」

そう言ってルシル君ははやてちゃんと向かい合って、左手で自分とはやてちゃんとの身長を計るように掲げた。はやてちゃんは「なんや、顔が近なってドキドキするわ～」って、頬を赤らめてはにかんだ。

「でも他の娘たちには全員追い越されているんだよな。フェイト、アリサ、すずか、それに・・・なのはと――」

私に振り向いたルシル君が上目遣いで私の顔を見上げた。うわぁ、本当に小さいよ。なんか可愛いって思えちゃう。まぁそんな事を言ったらルシル君の心を折っちゃうことになるんだろうけど。

「アリシアだな。くっそ。アリシアがはやてや他の娘たちより大きくなった時は、それはもうマジか～って思いだったよ」

「私もやよ～」

「えっへん♪」

アリシアちゃんが大きな胸を張った。私だって、アリシアちゃんが

フェイトちゃんクラスの高身長になるとは思いもしなかったよ。そういうわけでルシル君は、私たち女の子より背が低いのが嫌だってことで、変身魔法で高身長に見せてたみたい。

・―・―・終わりだよ・―・―・

「しかし随分と詳しい情報を持っているのだな、ルシル。それも調査部の一員としてのものか？」

これまで黙ってたシグナムさんがルシル君に問うた。確かにドクターやプライソンが最高評議会によって人工的に生み出された存在だっていうのは、いくら調査部のエリートな調査官でも知れるような情報じゃない。

「まぁそこは、俺のステガノグラフィアのおかげ、ということで納得してくれ」

ルシル君のその返答に、私たちは「あぁ」納得できた。ステガノグラフィアは、たぶん次元世界屈指の電子戦最強の魔法。本局のデータバンクにすら一切感知されることなく侵入できるレベルだし。

「・・・なんやまだ隠してるっぽいけど、まぁええか。・・・そんでルシル君。プライソンの正体はもう判ってるんか？」

最初にボソッと何か呟いたはやてちゃん。上手く聞き取れなかったけど、プライソンの正体についての話の方に興味がいってスルーした。みんなの視線を一手に引いたルシル君は「すまない。以前、不

明だ」首を横に振った。

「ルシルのステガノグラフィアでもダメなんだ」

「ああ。向こうには優秀なサイバー・キーパーが居るようだ。ゼスト・グランガイツ一尉の隊に同行してアジトに侵入した際にも、ステガノグラフィアでもクラッキング出来ないシステムに拒まれたことがある」

「電子戦ではこちらが若干分が悪いってわけね。でもま、アンタが戦線に立てるってだけで十分過ぎるわよ」

アリサちゃんにはみんなが同意見。対人やガジェットなどの戦力なら大して問題ないけど、列車砲クラスとなるとこちらもそれ相応の戦力を集めないといけないと思うし。ルシル君は「まぁ期待に応えられるように頑張るよ」微笑んだ。

「ただ、もしかして・・・と思う奴はいる」

「ホンマか？」

「ああ。最高評議会と協力関係にある一般人の中に、貴族風の少年が居るんだが。コイツの目が気になっているんだ」

「でもドクターの兄だっていうなら、その背格好も大人じゃ・・・？」

アリシアちゃんが小首を傾げた。ルシル君は「俺みたいな奴もいる

んだから、背の小さい大人や魔法や施術で体格を変えている奴もいるだろう」って、自分の手を見詰めながらそう言った。

「一先ず、その人の名前を教えてもらってええか？」

「本名は判らない。自称でトリックスター」

「トリックスター・・・。確かに本名じゃないね」

「だがソイツかもしれない。ゲイズ中将は、トリックスターが発言するだけでも嫌悪感を表していた。ああいう態度を取るのは・・・」

「犯罪者に対して、か」

「そういうわけだ」

ゲイズ中将は武闘派で、犯罪者に対しては一切の容赦がない。そのトリックスターって人がただの一般人なら、ゲイズ中将もそんな態度は見せないはず。となれば、トリックスターは犯罪者で、プライソンかもしれない、ってことになる。プライソンは最高評議会と繋がっているんだから、可能性はかなり高い。

「なるほどな。・・・トリックスターについては留意しておこうか」

「話は変わるが・・・。はやて。昨夜、寮でチラッと聞いたが、地上本部を攻撃した巡航ミサイルは、南部地方から飛来したというらしいが・・・」

「うん、そうや。六課だけやなくて、他に陸士隊舎からも報告が挙がってるからな。そやから今朝から局と教会騎士団がそっち方面を捜索中や」

「巡航ミサイルということで、南部方面に列車砲があるのはおそらく間違いないだろうな」

「ミッドへの攻撃の要としての列車砲なんだから、その警備もすごいんじゃ・・・」

「そやけど、地上本部は本格的に本局と教会への協力関係を閉ざしてしもうたからな。ミッドに残存してる応援部隊以外での増援は見込めへん上やろ」

そんな応援部隊も地上本部警備の際、大多数が撃墜されてしまった。だから実質、本局の戦力は当てにならないと思っていい。ミッドの陸士部隊も一緒に戦ってくれるけど、ガジェットの搭載してるＡＭＦに対抗できるだけの魔導師が少ないのが困りもの。ガジェットと戦えるレベルの魔導師は、本局にスカウトしたり本人の希望で転属したりするから少ない。

（ゲイズ中将がプライソンと手を組んでまで造った兵器や、アインヘリヤルを運用しようとしたのも、それが原因みたいだし・・・）

「問題は、南部にプライソンのアジトかあるかどうかだ。推測だけでそちらに戦力を回したが、別の地方からもプライソン一派が出現

しては後手に回らざるを得ない」

「今、使えるミッドの戦力をどう分担するか。それが本事件の鍵となるんだね」

機動六課。本局航空武装隊。ミッド陸士部隊。聖王教会騎士団。それがプライソン一派に対抗できる現状の勢力だ。その勢力を、列車砲・装甲列車・戦闘機・巡航ミサイル・ガジェット・スキタリス・シコラクス・アルファ達、プライソンの逮捕、それぞれに分けないといけない。

「かなり難しいね。というより、戦力差が違い過ぎる・・・」

「我われ隊長陣も分散しなければなるまい」

シグナムさんがそう言った。となれば、誰がどの兵器を担当することになるのか、になるんだけど。フェイトちゃんとアリシアちゃんが真っ先に「だったら・・・」って手を挙げた。

「言わんでも判ってるよ。２人はプライソンの逮捕に動いてもらうつもりやよ。アジト発見の報を受けたら、フェイトちゃんとアリシアちゃん、あと・・・教会騎士団からも応援を借りようか」

「「ありがとう、はやて」」

プライソンはプロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅの生みの親でもある。フェイトちゃんとアリシアちゃん、エリオとも因縁があるからね。そ

れに長年追い続けていた相手だ。逮捕するのなら2人が一番の適任だって思う。
それから私たちは、それぞれが担当する兵器などを決めた。まぁ、あくまで状況が許せばだから、確実じゃないけど。ただ、フェイトちゃん達はプライソン逮捕。私はヴィヴィオ、ルシル君はフォルセティの救出。フォワードとギンガはクイントさん率いるシコラクスの撃破、という風に確定したものもある。

（待っててね、ヴィヴィオ。必ず迎えに行くから・・・！）

ヴィヴィオの笑顔をまぶたの裏に浮かべて、膝の上に置いてる両拳をギュッと握りしめた。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒イリス†††

地上本部、機動六課。襲撃された2つの施設を教会騎士団の代表として見てきたけど、酷いものだった。特に六課の隊舎と敷地なんて、爆撃に遭ったかのようにボロボロだった。けどそれでもルシルが戦線に出張ったからあれだけで済んだ、ってアリシアから連絡貰った。そんなルシルも、調査部から戦闘許可が出たって話だし。こちらの戦力（てふだ）はジョーカーばかりになったようなものね。

「さて、と・・・」

カリムの預言の中にあった、聖地より彼の翼が蘇り、っていう単語。聖王教会は"聖王のゆりかご"だと正式に判断した。そういうわけで、教会に残された資料や本局の無限書庫に残された資料を基に、

ゆりかごを丸裸にする調査が行われてた。

（聖王のゆりかご、か・・・）

フライハイト家と六家が仕えていた聖王ゼーゲブレヒト家。その一族は皆、艦内で生まれ、育ち、そして死んで逝った。そのことから"聖王のゆりかご"なんてしゃれた名前が付けられたらしい。

――イリス。聖王教会は正式に、聖王のゆりかごの破壊を決定したわ。おそらく管理局も同じ判断を下すと思う。フライハイト家の代表として、イリス、あなたがゆりかごの最期を見届けて頂戴――

――はい。母様。しっかりと見届けます――

ザンクト・オルフェンの議会が下したゆりかごの破壊。なんか惜しい気もするけど、調査で知り得たゆりかごの危険性を考えれば、破壊するのは至極当然の結論だった。あんなものが残っていると、せっかく終わった戦乱時代にまた逆戻りしそうだもん。

「久しぶり～、ユーノ」

『うん、久しぶり、シャル。なのはからも連絡を貰ったけど、ミッドは酷い状況のようだね』

「まったくだよ。もうちょい労って、ユーノ」

『あはは。お疲れ様、本当に・・・』

聖王教会本部の敷地内にある騎士団隊舎の1つ・東方聖堂。わたしの率いる朱朝顔騎士隊（ロート・ヴィンデ）や他2隊の隊舎であるそこで、わたしは隊長室から本局へと通信を繋げた。相手はユーノ。本局の無限書庫の司書長を務める、私たちチーム海鳴メンバー共通の幼馴染だ。無限書庫にある"聖王のゆりかご"の資料の調査や、カリムの預言解釈にも一役買ってくれてる。確か、ホテル・アグスタのオークションでも何かしらやってたって話。

「ありがと♪」

『おーい！　あたしも居るぞ～！』

『『私たちも居るんだけど』』

ユーノの頭の上から「アルフ！」がひょこっと顔を出して、ユーノの顔を挟むように「セレネ、エオス！？」がモニター外から顔を覗かせた。アルフは、フェイトの幼少からの使い魔で、今は引退してクロノとエイミィの子供である双子の兄妹の子守りをしてる。

「どうしてまた、あなた達が・・・？」

セレネとエオスは、スクライア一族の一員でありユーノの幼馴染であり義理の姉でもある双子の姉妹だ。チーム海鳴とは、ユーノと同様に"ジュエルシード"を巡るＰＴ事件で一緒に戦った仲で幼馴染。確か今は、ザンクト・ヒルデ魔法学院の教員になるために、学院の教育学部に進学して勉強中のはず。

『あたしはちょくちょく手伝いに来てたぞ』

『『私たちも手伝いのためにね』』

『嘘を言わないでよ、セレネ、エオス。２人は無限書庫の一般区画で僕を見掛けて、そのまま尾行して来ただけじゃないか』

『『しーっ！』』

モニターの向こう側でわいわい騒ぐユーノ達の姿は本当に微笑ましい。けど「コホン。そろそろ本題に入ろうか」って伝える。今にでもプライソン一派が仕掛けてくるかもしれないし。ま、ゆりかごが起動する前に鍵となるヴィヴィオを救出すれば、今かかえてるゆりかご問題は綺麗サッパリ解消するんだけどさ～。

「無限書庫（そっち）と教会（こっち）で知り得たゆりかごの情報を纏めよう」

『うん。それじゃあ僕から報告するよ。えっと、無限書庫に残されてた情報は、先史時代である古代ベルカの時代にですらすでにロストロギア級の古代兵器で、失われた世界アルハザードからの流出物だとも言われていたみたいだね。その――』

『その性能がこれまた恐ろしいね。聖王のゆりかごは、衛星軌道上の到達して２つの月の魔力を受けられる位置に到達すると、その性能を完全に発揮できるようになるみたい』

『うん。極めて高い防御性能を発揮して、艦載砲クラスの攻撃でも容易く突破できないくらいになるようだし。攻撃法は精密狙撃や魔力爆撃といった、対艦だけじゃなくて対地対空にも出来るものばかり。さらには次元跳躍攻撃や次元空間内での戦闘できるようだね』

セレネとエオスが、ユーノの話を横から掻っ攫ってった。ユーノの眼鏡が怪しくキラン☆って光ったようにも見える。というか、「なんか詳しいね。ひょっとしてセレネとエオス、前から来てるの？」って思えるくらいに詳しかった。

『違うよ、シャル。ついさっき僕が2人に話したことを、そのままシャルに伝えただけだよ。というか、もう帰りなよ、セレネ、エオス』

そう言って呆れるユーノに、『ええー！　もう少し一緒に居ようよ～！』2人が文句を言う。好きな男の子の側に少しでも長く居たいって気持ちは痛いほど理解できるから、「まぁいいじゃない」フォローしておく。

『シャルがそう言うなら。でもこれも大事な仕事なんだから、邪魔しないでね。セレネ、エオス』

『『は～い♪』』

『もう。・・・それで、そんなゆりかごの性能が完全に発揮されたら、本局の艦隊とも真っ向から戦闘が出来て、さらには勝てるほどだって僕は睨んでる。万が一にも起動した場合、止める方法は起動

と運用の鍵となる聖王・・・、ヴィヴィオの奪還』

「そう、うん、やっぱりね・・・」

六課で起こった事情も聴いてる。フォルセティが敵になってしまった事、そして一度は捕まえたメガーヌさん達を解放した事。ヴィヴィオはゆりかごに必要な存在だから悪いようにはされないと思う。フォルセティも、プフェルトナーってコードネームが付けられてる以上は、戦線に立たされそうだけど酷いことはされないはず。

『僕からは以上だけど。シャル、教会に残された資料には何か他の事が書かれていたりしてない？』

「あー、うん。性能についてはユーノ達から聞いたものと同じだね。それと、こっちには魔力を受ける前に起動できる武装の資料もあったよ。ゆりかごの側面には左右それぞれ２１門の４２門、艦上部に１４門、計５６門の砲門があるみたい。精密射撃っていうのはコレのことかな」

『『５６門・・・！』』

『とんでもない数だねぇ。近付くことすら出来ないんじゃないかい？』

不安そうなセレネ達に『でも下部や後部には無いから、そこを攻めれば・・・』ユーノがそう指摘した。確かにそうだけど、「その弱点をカバーするための戦闘機隊じゃない？」って思うわけで。プライソンだってゆりかごの欠点くらい百も承知のはず。だから直掩戦

力を用意すると考えられる。

『確かに・・・。そうなると、いよいよ航空戦力が重要になってくるね』

「そうなんだけどさ～。ゲイズ中将が、本局や教会の介入をまた拒み始めたわけ。だからミッドに降ろした武装隊以外に新たな投入は出来ないの。ったく、あの熊さんめぇ・・・！」

『『ぷふっ、く、くまさん・・！』』

ゲイズ中将を皮肉ったニックネーム。元はルシルが、自分の仕事をゲイズ中将の秘書であり娘でもあるオーリス三佐から邪魔されたってブチキレた時（はやて談）に漏らしたモノらしい。ルシルが言ったのはえっと・・・クマ髭オヤジ、だったかな。言い得て妙だよね～。

「あとそれと、ゆりかご内の見取り図も発見できたよ」

『ホント！？　もしヴィヴィオがゆりかごに移された後だってなれば、それほど重要な情報はないよ！』

「救出作戦時には確かに役立つね。えっと、あとは・・・内部の防衛戦力もチラホラと」

ユーノ達に画像データを送る。歩行型の自立型兵器で、古くからゆりかごを護る防衛戦力。他にもゆりかご内部はどこもかしこも高濃

度のＡＭＦが常時展開されていて、普通の魔導師じゃ魔法を使うことすらままならない。

「だからベルカ時代、乗艦していた人たちはみんな、対ＡＭＦの訓練を積んで自分たちは普段と変わらずに魔力を使い、ＡＭＦに慣れてない侵入者たちの魔力運用を阻害させ、有利な状況を造り出すことで艦内の防衛力を絶対のものにしていたみたい」

『現代の魔導師じゃ返り討ちに遭いそうだね』

「なんとか本局からの増援を許可してもらえるように頑張ってもらわないと。教会からも戦力投入を申請してるしね」

六課は捜査方針を"レリック"の捜査、そしてヴィヴィオとフォルセティ、クイントさんたち洗脳組の救出ってことにして、その途中に立ちはだかるプライソン一派をついでに捻り潰すことにしたみたい。地上本部はプライソンに狙いを絞っているし。まぁ悪くないとは思う。教会も便乗しようか～、って考えだ。

『シャルも出るんでしょ？』

「当っ然♪　あと、トリシュやクラリスにアンジェの部隊も出撃予定かな。戦況によっちゃズィルバーン・ローゼも投入することになったよ」

『最強の騎士が集まった少数精鋭部隊だね。それなら陸戦は問題ないかも』

「ガチの化け物集団だからねホント・・・」

剣のパラディンのプラダマンテ。拳闘のパラディンのルミナ。槍のパラディンのパーシヴァルくん。弓のパラディンのガラガースさん。鎌のパラディンのマドールさん。斧のパラディンのラヴェインさん。打撃のパラディンのラヴェインさん。騎兵のパラディンのガリフットさん。みんな馬鹿みたいに強いから、まず敗走はない。うん、断言できる。

『あー、シャルですら勝てない相手が隊長だしね～』

『トリシュ達も昇格試験後はヘコみっぱなしだし』

『学生の頃は、残念会とか開いたりして』

『『楽しかったよね～♪』』

『まだ学生じゃないかい、アンタ達・・・』

過去に思いを馳せてるセレネとエオスに、そうツッコミを入れるアルフ。学生時代って単語に、わたしも聖祥の初等部と中等部に通ってた思い出を振り返る。って、そんな場合じゃなかった。かぶりを振って、「まぁとにかく、知り得た情報は六課と本局、教会にも提出しないと」そう伝える。

『それは僕がやっておくから、シャルはいつでも出撃できるように

準備しておいて。セレネ、エオス。どうせ暇してるんだろうから、このまま情報の纏めを手伝って』

「ありがとう、ユーノ。お言葉に甘えさせてもらうよ」

『『オッケー♪』』

そういうわけで「じゃあまた後で～」手を振り合いながら通信を切ろうとした時、『イリス！　緊急出撃です！』切羽詰まった様子の「トリシュ・・・！？」から通信が入った。その内容は、「プライソンが・・・！？」今まさにミッド全域に対して声明を出してるってものだった。

『――ていた男、プライソンだ。今日は次元世界に新たな記念日が生まれる日となる。ゆえに俺はこうして姿を見せた』

別モニターに映るのは、古い貴族風の衣服を身に纏った１０歳前半くらいの男の子だった。見た目は幼い半面声は大人っぽい。でもまさか「あの子が、プライソン・・・！？」なの。予想すら出来ないその外見に、かなり困惑してる。

『俺たちの準備は済み、今日これより偽善の象徴であるミッドチルダ地上本部および聖王教会に対して、改めて宣戦布告をする。さぁいよいよ祭の始まりだ。俺のスポンサーである最高評議会、そしてヴァーカー・ホドリゲス大将、レジアス・ゲイズ中将、リチャード・フォーカス少将。観ているか？』

プライソンがある局員の名前を名指しした。どの人も将校クラスで、しかも最高評議会なんてトンデモない名前まで出した。そしてプライソンの映るモニターが別の映像に切り替わる。どこかの森林地区かな。かなり広大なんだけど、その中で巨大な昆虫っぽいのが何匹と崖や谷間に張り付いてるのが判る。

『そして聖王教会の諸君。観ているか？　お前たちも捜していたのだろう？　残念だが俺が先に手にさせてもらった』

「森が・・・・！」

広範囲の森がせり上がっていって、「まさか・・・・！」分厚い地盤の下からソレがゆっくりと姿を見せ始めた。二等辺三角形状の全長数ｋｍに及ぶ巨大な艦。間違いない。たった今まで、ユーノ達とソレについて話をしていたんだから・・・・。

『旧暦の時代。一度は世界を席巻し、そして破滅を齎した絶対の力の象徴。古代ベルカの悪夢の叡智！』

「『『聖王のゆりかご・・・・！』』」

トリシュとユーノの声とハモる。２人も目を大きく見開いて、モニターに映る"聖王のゆりかご"を見詰めてる。そんな中で『無論、俺の力はこれだけではない。見ろ、これが俺の全力だ』プライソンの嬉々とした声が聞こえてくる。ゆりかごの後方の森もまたせり上がり始めた。

『ゆりかごは恐ろしく強大な力を秘めている。だが発揮するには少々面倒な工程が必要だ。そのためには護りが要る』

その護りっていうのも姿を見せた。ゆりかごよりかはサイズは小さいけど、それでも局の最新鋭艦船ＸＶ級以上はある巨大な艦だ。外見はマンタ（オニイトマキエイだっけか、正式名・・・）っぽい。そのマンタ艦が、ゆりかごを先導するように高度を上げながら前進を始めた。

『聖地より蘇る彼の翼・聖王のゆりかご。ゆりかごを護り地上に畏怖を与える親鳥・アンドレアルフス』

プライソンが預言に記された単語について語り始めた。ゆりかごを先導してるマンタ艦は"アンドレアルフス"って名前らしい。確かルシルの情報の中にあった名前だったと思う。その"アンドレアルフス"の中央（マンタで言えば口の部分にあたるところ）には大きな穴があって、そこから「戦闘機・・・！」が続々発進して行ってる。

（あそこは滑走路になって・・・――っ！　メガーヌさん！）

滑走路となってるそこに、メガーヌさんとルーテシアとリヴィア、そして小さな融合騎アギトの姿があった。それに地上本部を襲った、セッテ、オットー、ディードの姿もある。

『共に翔けし子鳥・ナベリウス、シームルグ、アンドラス、シャックス、マルファスが、地上に戦火を齎す』

見慣れてる戦闘機４種とは別に、新種の戦闘機が姿を見せた。

『そして、地を這う鋼の龍・ケルベロスとオルトロス、咆哮たるディアボロス』

映像が切り替わる。草木１本と無い荒野地区に不自然な物がデカデカと存在してた。一目で地上本部を襲撃したミサイルを発射したのがアレだって判った。巨大な砲台を２門と備えた列車砲。アレが"ディアボロス"。そして牽引している４台のツルッツルな表面と小さな砲台を何門も備えた装甲列車。アレらが"ケルベロス"と"オルトロス"。

「クイントさん・・・」

さらにはクイントさん、それにノーヴェ、ウェンディ、ディエチの姿もある。そして再びプライソンの映る映像に切り替わった。奴はコツコツと足音を鳴らして歩く姿を、わたし達に見せつける。アングルは左側から後姿へと変わっていって・・・

「ヴィヴィオ！」

プライソンの向う先、背もたれがかなり高い玉座と思われる肘掛椅子に座ってるヴィヴィオが居た。けどフォルセティの姿は無かった・・・。

Ｅｉｐｉｃ２２スカリエッティ～Ｊａｉｌ　＆　Ｐｒｉｓｏｎ～

ミッドチルダ東部に在る森林地区。その深くに在る洞窟の奥に、プライソン一派のアジトがある。

「ガンマ。ケルベロスとオルトロスの格納車両に、追加のミサイルは転送し終えたな？」

居住区にあるプライソンの研究室。そこに彼、プライソン・スカリエッティは居た。１０代前半ほどの少年という外見。薄紫色の髪はもっさりボサボサ。瞳は金色でツリ目。縦ストライプの青いＹシャツに黒のベスト。紫色のジェストコールを羽織っている。

『ウチが任された仕事にミスするとでも？　ムオーデル、グレンデル、共に１０機ずつを転送完了。完全完璧、非の打ちどころ無し』

プライソンに答えたのは、"スキュラ"の三女であるガンマ。２０歳ほどの女性で、深紅の髪は前と後ろ共に３０ｃｍ程あり、顔は前髪の所為でまったく見えない。"スキュラ"共通の衣服である白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが１本入ったプリーツスカートを身に纏い、個人で違うオプションとして、黒のトリミング・コートを羽織っている。

「ならいい。大事な時に弾切れなど、悔やんでも悔やみきれんからな」

２人が話しているのは、南部荒野地区に設置した巨大砲台２門を備えた列車砲・"ディアボロス"が有する巨大レールガン・"ウォルカーヌス"の放つコンテナミサイルの補充の件だ。ミッドチルダの管理局・聖王教会に対して戦争を仕掛けるため、その準備を進めていた。

『父さんの方も、プリンツェッスィンとゆりかごの方、ちゃんと調整してる？　ミッド制圧にはゆりかごが必要なん――』

『当り前でしょう！　プリンツェッスィンとプフェルトナーの調整は、この私と一緒にしたのだから！』

別のモニターが突然展開されたと思いきや、映し出された少女が声を荒げた。ガンマは『アルファ。声のボリューム、いっつも高い』と呆れ果てた。少女の名はアルファ。ブロンドのウェーブの掛かったロングヘア。"スキュラ"の長女にしてリーダーで、プライソンの助手を務めている。"スキュラ"共通の衣服に、オプションとして藍色のブレザーを着ている。

『プフェルトナーへ施した洗脳技術、コンシデレーション・コンソールもちゃんと機能し、ルシリオン・セインテストを撃破できた。プリンツェッスィンへのレリック移植施術も、問題なく済んだもの』

そう言って胸を張るアルファに、「俺に何か用でもあったのか？」プライソンが話を振る。すると彼女はハッとして、『はい。レジアス・ゲイズから再三にわたり、コールが入っているのですが・・・』と、プライソンに通信を繋げた理由を語った。

「レジアス？　そんなもの放っておけ。俺にとってはもう利用価値の無い人間だ。局に捕まろうが自害しようが・・・いや、最後に挨拶くらいはしよう。繋げ」

『はい。では、繋ぎます』

アルファがそう言った直後、レジアスの『プライソン、貴様！』そんな怒声が轟いた。モニターにデカデカと映るのは、顔を真っ赤にして怒りを露わにしているレジアス・ゲイズ。ミッド地上本部の防衛長官を務めている中将だ。

「御機嫌よう、ゲイズ中将」

『ふざけるな！　とうとうワシらに牙を剥きおって！』

「当たり前だろう。俺は犯罪者だ。権威の円卓に入っていたから、円卓メンバーには逆らわない？　馬鹿め。寝言は寝て言え。俺はお前たちの技術提供を。お前たちは俺を逮捕せずに見逃す。その利害だけで成り立っていた。そこに信頼など一欠片も無い」

『その利害は変わらず一致していた！　それなのに何故だ！』

「いや。もう利害は異なった。俺の目的は、初めから管理局という組織への恨みを晴らすことだからな。ほら。もうお前たちと仲良し小好しのフリをする理由はあるまい？　故にレジアス・ゲイズ。お前や最高評議会その他とはこれで契約解消だ」

『おのれ・・・！　後悔するなよ、プライソン！　必ず貴様に正義の鉄槌を下してやろう！』

「何を馬鹿なことを言っている、レジアス・ゲイズ。お前にはもう正義を語る資格などない。お前もすでにこちら側、悪の道に踏み込んだ犯罪者だ」

『黙れ！　ワシは、ワシはミッドの地上の平和を――』

「面倒くさい奴だ。とにかく、俺はお前たちを許さない。さようならだ。良い残り人生を」

レジアスの言葉を途中で遮ったプライソンは、一方的に別れを告げて通信を切った。そして彼は「レジアスとはもう話すことはない。回線を全て遮断しておけ」とアルファへと指示をした。

『畏まりました。では、レジアス・ゲイズからのコールは全てシャットアウトします』

アルファがそう応じ、モニター越しに聞こえてくるキーを打つ音が静まった研究室に響く。そんな静寂の中、『父さん。侵入者』ガンマより聞き捨てならないそんな報告が入った。アルファは『なんですって！？』と驚きを見せたが、プライソンは「ほう？」どこか楽しそうな声色だった。

『モニターに出すから、その後どうするか改めて指示を』

『迎撃に決まっているでしょ！』

『アルファうるさい』

「まぁ待て」

ガンマの映像から研究所へと続く洞窟内部の映像へと切り替わる。モニターに映る侵入者の姿に「っ！」プライソンですら目を見開いた。洞窟内を歩いているのは「ジェイル・・・！」だった。ジェイル・スカリエッティ。プライソンにとっては弟にあたる男だ。

『それに、トーレ、チンク・・・！』

ジェイルの前後に控えているのはシスターズのトーレとチンク。アルファは視線だけで人を殺せるような殺意に満ちた目で、モニターに映るトーレとチンクを睨みつけた。

『疼く・・・！　斬り飛ばされ、吹き飛ばされた、私の腕と脚が・・・！』

かつてアルファは、プライソンの同業者でもあるプロフェッサー・ヘンリーに拉致された実験用素体の子供を奪還、そしてヘンリーとその一派の殺害という任務のため、彼らの移動研究艦へ侵入したことがある。そこで、ジェイルの命で子供の保護に乗り出していたトーレやチンクと交戦した。接戦を繰り広げたが、２対１という状況の中でアルファは敗れた。トーレには右腕を斬り落とされ、チンク

には左脚を爆破された。

『アルファ。顔がキムチ鍋みたいになってる』

『はあ！？　キムチ鍋！？・・・って、何！？』

『あー、知らないならいいよ。ただ、まぁ赤くなってるって言いたかっただけだし』

『ああそう！　父さん！　迎撃の許可を、汚名返上の機会を！　あの時受けた屈辱、必ず晴らしてやる！』

怒りと憎悪で顔を真っ赤にしているアルファに、「やってみろ。指揮権はお前に預ける。ただ、ジェイルは無傷でここまで通せ」プライイソンは迎撃許可と条件を出した。

『あ～りがとうございます！　私と同じように腕と脚を斬り飛ばし、吹き飛ばし、恥辱を味わわせてやる！』

怒りから一転、喜色満面の笑顔を浮かべたアルファ。そんな彼女のテンションに水を指すがごとく、『あ、クラッキングを受け――』ガンマがそう漏らした直後、全モニターが真っ赤になり、デフォルメされた真面目顔のウーノと意地悪く笑っているクアットロのイラストが映し出された。

「こうも簡単に俺のラボを突き止めるとはな。だがそれが面白い。ガンマ！」

くつくつと笑うプライソンは、研究所のセキュリティも担っているガンマの名を叫んだ。すると全モニターが正常に戻り、『弱い、弱い』卵型の椅子に座ってふんぞり返るガンマの姿へと切り替わった。

『父さん。このままクアットロ、ウーノとの電子戦へ突入するから』

『ガンマ！　その前に防衛戦力を出撃させて！』

『ワーウルフなどの準備も完了したし。いいよ。これより第一種警戒態勢に突入。ジェイル以外の兵力を通せんぼ。父さん、ジェイルとはどこで・・・？』

「お前たちのトレーニングルームに誘き寄せろ。そこでなら、じっくりゆっくりと弟と語り合えそうだ」

そう言ってプライソンはデスクチェアより立ち上がり、首を回してコキコキと鳴らした。向かうのは、"スキュラ"やシコラクスにスキタリスと言った人型戦力、彼女たちの固有武装の調整などを行うためのトレーニングルーム。彼女たちが全力で暴れても問題ない頑強な造りだ。

「ミッドチルダ戦争への前哨戦だ、楽しもうか」

・―・―・―・―・

洞窟内を歩くジェイルらスカリエッティ家。先頭を行くのはチンク、

次いでジェイル、最後にトーレの順だ。

『こちらウーノ。これよりクアットロと共にラボのシステムにクラッキングを開始します』

『ドクター。私とウーノ姉様はおそらくそちらに手一杯になるかと思いますぅ。トーレ姉様、チンク。ドクターの警護、しっかりとお願いします～』

「当然だ」「承知している」

モニター越しで交わされるシスターズ達の会話。ウーノとクアットロはどうやら離れた場所に居るようだ。しかしそれも仕方のない事。ウーノには一切の戦闘能力が積まれておらず、クアットロも前線で戦う部類のスキル持ちではない。共に後衛なのだから。

『ドクターもご無理をなさらず。今日という日のために調整していたデバイス・アナンシがあろうとも・・・』

「解っているよ、ウーノ。しかしこの戦いは言わば兄弟喧嘩。娘に喧嘩代行をさせ、当人である私がのんびり待っているわけにはいかないだろ？　それに、プライソンも同じ考えだと思うがね」

ジェイルの右手には装飾の施されたグローブがはめられている。ウーノの話ではデバイスのようだ。ジェイルはグローブ型デバイス・"アナンシ"に一度視線を向けた後、「ドゥーエ、セイン」視線を前に戻して、この場に居ないもう2人のシスターズの名前を呼んだ。

『はい』『ん』

新たに展開されたモニターに、ドゥーエとセインが映り込む。２人の背後に映っているのは黄色い明かりに照らされた通路。そこはプライソンの研究所内の通路だった。

「ヴィヴィオとフォルセティの保護は君たちに掛かっている。我々が派手に暴れている間に、なんとしても２人を見つけて救出するんだ」

『ただ、フォルセティの方は洗脳を受けているようよ。おそらくその実力はルシリオン君クラス。戦闘を避け、なおかつ保護しないといけない。本任務では、一番危険なのはドゥーエ、セイン。あなた達２人よ。十分、警戒しなさい』

ヴィヴィオとフォルセティの救出が任務のドゥーエとセイン。セインの固有スキル・ディープダイバーにて、２人は先行して研究所へと潜り込んでいた。ディープダイバーは、無機物内を潜行できる能力だ。最大３人ほどまで同行できるため、セインはドゥーエを伴って侵入していた。

『大丈夫だよ。そのために、対魔導犯罪者用の即効性麻酔銃を用意したんだし』

『セインのスキルを用いたスニーキングアタックでなら、感知される前におそらく撃ち込めるはずです』

ドゥーエとセインの手には拳銃が握られている。セインの言うように、それは暴れている魔導師に対抗するためにジェイルが開発した麻酔銃だ。リンカーコアの働きを一時的に阻害する魔法プログラムが組み込まれている。ゆえに厳密に言えば麻酔ではないが、一時的に意識も失うため、麻酔銃と名付けられた。

「ドゥーエ、セイン。ウーノとクアットロも、任せたぞ」

『『『了解！』』』『了解です～！』

ウーノ達との通信を切ったと同時にモニターも消えた。ジェイル達はそれからも歩を進め、研究所の入口へと到達した。そんな入り口であるスライドドアの前に、「久しぶりね、会いたかった」アルファやグレムリンのⅠ型１０機とⅢ型５機が並んでいた。入口の側には、これまでには無かった鉄材が多く積み重ねられていた。

「お前は・・・」

「確か、アルファだったな」

「憶えていてもらえて良かった。私が誰とも知らずに破壊されるなど、私自身が許せないもの」

トーレとチンクがジェイルの前に躍り出て、臨戦態勢に移った。アルファは「ＩＳ発動、メタルダイナスト！」を発動した。入口の側に置かれている鉄材が生き物のように動き始め、彼女の側に浮遊し

始めた。メタルダイナストは、金属類を意のままに操れるという、アルファのスキルだ。

「ジェイル・スカリエッティ。我らが父、プライソンがあなたをお待ちしています。案内に従って所内を進んでください」

そう言ったアルファの側にモニターが展開され、矢印が表示された。当然「看過できんな！」トーレが声を荒げた。そんな彼女へ「お前たちの意見は聞いてはいない！」アルファも声を荒げ、右足で地面を踏みつける。すると地面から鋼の壁が勢いよくせり出し、トーレとチンクを隔離した。

「ではこちらへ。プライソンの待つ部屋まで何事も無く辿り着けますのでご安心を」

「・・・。トーレ、チンク！　後から合流しよう！」

「「ドクター！？　お待ちを、ドクター！」」

鋼の檻の向こうからジェイルを制止する声が聞こえてくるが、ジェイルはそれを聞かずに研究所内へと入って行った。通路内の矢印モニターに従って歩き続け、ようやく辿り着いたのは広大な部屋。

「こうして直接顔を合わせて言葉を交わすのは、生まれて初めてというのもおかしな話だな、兄弟」

「同感だよ、プライソン・・・いや、兄さん」

そこでジェイルとプライソンが、この世でたった2人だけの兄弟が、生誕から６０余年と経過した今日、初めて直接会った。だがそれは、永遠の別離を迎える日でもあった。ジェイルは問答無用でグローブ型デバイス・"アナンシ"をはめた右腕を上に向かって振り上げた。

――ガーネットスラッシュ――

五指の先端に付いている鋭利な爪の部分より5本と赤く輝く細い絃が放たれた。プライソンは「問答無用か。ハハッ！」楽しげに横っ跳びして、床に切創を作り出しながら迫り来る絃を躱した。

「プライソン。君は遊び過ぎた・・・！」

――ガーネットランス――

放たった絃を解除したジェイルは右腕を引いて、すぐに貫手を繰り出した。爪より放たれる5本の絃は槍のように勢いよくプライソンの元へ向かう。その速度もあって、「おっと」プライソンの左袖を裂いた。

「面白いデバイスを造ってきたな、ジェイル。端から俺を殺しに来たわけだ。誰の差し金だ？　心当たりが多過ぎて困りものだが」

「我々の生みの親だよ。最高評議会は、君の暗殺を決定した」

「それでお前たちを差し向けたわけだ。てっきり１１１１部隊が来

るかと思ったがな」

ジェイルは白衣を脱ぎ捨て、プライソンはジュストコールを脱ぎ捨てた。共に動きやすくなるための行動だ。ジェイルは右肩をグルグル回して準備運動をし、プライソンは足の屈伸運動を始めた。

「まあいい。誰であれ俺を殺そうとするのなら、受けて立とう。俺もそろそろ本気を出さないとな。兄弟最後の大喧嘩だ」

「見せてみたまえ。天才プライソンの戦闘技術を！」

――ガーネットクロスファイア――

"アナンシ"の爪からそれぞれ１０本、計５０本の絃が前方に向かって放射状に放たれた。うち数本はプライソンへと向かったが、「なんのつもりだ？　下手くそ」彼は軽く横移動することで全て躱した。が、すぐにその認識を改めることになった。他の絃が壁に反射して、一斉にプライソン目掛けて戻って来たのだ。

「っく・・・！」

それを後退することで回避したプライソンだが、絃は壁に当たれば当たるほどに反射を繰り返し、トレーニングルーム内に絃による結界を張り巡らせていき続ける。それすなわち「逃げ場所が・・・！」無くなるということを示していた。

（ジェイルは・・・、あそこから1歩たりと動いていない？　あそ

こが安地か・・・！）

５０本の絃による空間攻撃の中、プライソンはジェイルがその場から動かないことを見破り、迫り来る絃の雨の中を全速で駆け抜けて行く。ランダムのように見えて実は計算し尽くされた絃の軌道。計算で安全地帯を創り出しているのだ。ジェイルは「ようこそ、逃げ場無しの檻へ」ニヤリと笑い、プライソンの背後を絃で封鎖して後退できないようにした。

「お前もだろう、ジェイル！」

「そうだがね。私と君とでは準備が違うのだよ」

ジェイルの左手に突如として出現したのは拳銃だった。モデルはワルサーＰ９９だと思われる。ジェイルは立て続けに引き金を引いて発砲した。プライソンは両腕で頭部を護りつつ直進し、両腕両脚や胴体にも銃弾を受けながらも、「おおおおお！」ジェイルの懐にまで入った。そして振りかぶった右腕で「ぐふっ・・・！」ジェイルの頬に拳を打ち込んだ。さらに空中回し蹴りで、拳銃を蹴り飛ばした。

「っ、子供のような姿をしながら、まさかの肉弾戦とは・・・！」

――ガーネットバインド――

「っと・・・。ふん。馬鹿みたいに銃弾を撃ち込むとは。本当に容赦がないな、ジェイル。体中が穴だらけだ」

プライソンは殴り飛ばされた体勢のまま、絃によって宙に拘束された。

「・・・さすがに、ただの人体ではないわけだね。あれだけ撃ち込んでも怯みもしないとは・・・」

「死に難い体なのは、どうせお互い様だろう？」

プライソンが「ふん・・・！」と力み始める。するとキン、キンと金属音が幾度となく響いた。ジェイルの目線はプライソンの足元だ。そこにはプライソンに撃ち込まれた弾頭が転がっていた。

「鉛玉程度で俺を殺せるとは思わないことだ。そら、行くぞ！」

プライソンを拘束していた絃が一斉に弾け飛び、着地したと同時にプライソンは再び殴りかかった。

「くっ・・・！」

――ガーネットシールド――

ジェイルとプライソンを隔てるようにそびえ立つ絃で出来た壁。プライソンはその壁を躊躇なく殴り、バキバキと破壊した。ジェイルは驚愕に目を見開き、片やプライソンはしてやったりと言った表情だ。

（まさか、これほどの頑強な肉体を持っていようとは・・・！）

焦るジェイルだが、彼にはもう絃による攻撃手段しか残されていない。ゆえに「はあああ！」絃による攻撃を繰り出すしかない。

――ガーネットスネーク――

絃の結界をすべて解除したジェイルは、"アナンシ"をはめた右の手の平をは床に付き、爪より１０本の絃を床に這わせて、向かって来るプライソンへと向かわせた。踏まないように心がけて絃の間を駆け抜けるプライソンだが、相手は絃。ウネウネと動いて、プライソンの両脚に巻き付いた。

「やっぱりか！」

「せい！」

プライソンを捕まえるとジェイルは勢いよく右腕を振り上げ、プライソンを天井へと頭から叩き付けた。続けて床に叩き付け、また天井へと叩き付ける。

「調子になるな、愚弟！」

また床に叩き付けられそうになっていたプライソンは、床に両腕を突き入れて体を固定。そして上半身の筋肉で、今度は絃の先に居るジェイルを壁に叩き付けようとした。だが絃を解除され、ジェイルは振り回されることはなかった。しかし同時にプライソンは自由に

なった。

――ガーネットハンマー――

数ｍと伸ばした絃の先に直径２ｍほどの球体を構成。ジェイルはソレをぶん回して、絃の塊でプライソンを押し潰そうとする。

「なんだ、急にぬるい攻撃になったな、ジェイル！」

小柄な体格を活かして接近戦を挑んで来るプライソンだが、小柄ゆえに歩幅が小さい所為で「むお！？」とうとう絃の塊の直撃を受けた。ボキボキと骨が折れる音。プライソンは吹き飛ばされ、床を何度もバウンドした後に壁に叩きつけられた。

「死に難いのなら、死ぬまで攻撃を加えるまでだ！」

――ガーネットスラッシュ――

振り上げた右腕を勢いよく振り下ろし、"アナンシ"の爪より５本の絃による斬撃を放った。床に切創を刻みながら壁にもたれ掛って座り込んでいるプライソンへ向かう。しかし体の頑丈さが異常であるプライソンは、今の直撃ですら何とでもないという風にスッと立ち上り、攻撃範囲外へと離脱した。

「逃がさない！」

斬撃途中だった絃は急に方向転換をし、プライソンの背後に迫る。

そして「チッ・・・！」絃はプライソンの両足首に巻きつき、彼を宙へと吊り上げた。そこからまた床や壁、天井に叩き付け始めた。

「おいおい。殺すのならせめて一思いにだな」

（これだけの衝撃ですらまったく堪えていない・・・。同じスカリエッティでも、私では死んでいるぞ・・・）

骨が砕け、筋肉が千切れる音が続く中、それでもプライソンは意識を失うどころか全くと言っていいほどに余裕だ。ジェイルはその不気味さに怖気が走った。プライソンもいつまでも振り回されているつもりはなく、体を屈めて足首に纏わりついている絃を掴み、「ふん！」引き千切った。

「させんよ！」

――ガーネットランス――

宙から床へ落下中のプライソンへ向けて、新たに5本の絃を槍の如く放ったジェイル。プライソンは空中でありながらも身を捩らせてこれを回避。絃は一旦消え、プライソンが着地するかどうかという一瞬に・・・

――ガーネットラッシュ――

５０本の糸が、１０本1束で構築された大きめの槍となってプライソンに殺到。1発でも入れば後はされるがままに突っつかれまくる

のみだ。現にプライソンも最初の1発をもろに受け、壁に叩き付けられた後は成す術なく連撃を受けている。
そしてとうとう、ラッシュ中の絃の束の中から引き千切れたプライソンの左腕がゴロッと落ちて来た。その直後、5束の絃の槍が一斉に弾け飛んだ。光となって霧散する絃の中、プライソンがフラフラとした足取りで歩いてきた。

「俺の体にここまでの損傷を与えられたのは、お前が初めてだよ・・・」

ジェイルから10mと離れた位置で立ち止まったプライソンが微かに笑みを浮かべた。ジェイルは一言も発することなく、「ガーネットバインド！」絃を放ち、プライソンの左手首、両足首、腰、首の5ヵ所に巻きつかせた。

「プライソン。トドメを指す前に、君の本当の目的を聞いておこうか」

「・・・まぁ、お前になら目的を話してもいいな。1つは管理局への・・・、正確には最高評議会への復讐だ。40年前、俺にはたった1人だけ愛した女が居た」

諦観めいた息を吐き、プライソンは語り出す。かつて、自分が人工的な存在で、寿命が遥かに長い存在であり、最高評議会の命じるままに技術を生み出し提供する道具だと伝えながらも、プライソンの側に居ると決めた女性が存在していたことを。当時の管理局員で、裏に潜っていたリアンシェルトに代わり最高評議会の世話役だった、

と。

「こんな子供(オレ)の姿でも、愛をくれたたった1人の・・・。その頃、俺は人造魔導師の計画を進めていた。酷い作業だったよ。そんな生死を問わない肉体を実験に使うその計画には、常に素体が必要だった。最高評議会は、いつも通りに素体を提供してくれたよ。ある日、いつも通りに素体が送られてきた・・・！」

プライソンが初めて喜と楽以外の感情を見せた。純粋な怒りだ。彼は続ける。その送られてきた素体というのが、彼女の遺体であった事を。ジェイルはその言葉と感情にあてられ、辛そうに眉を顰めた。

「最高評議会は事故死だと抜かしたよ。どうせ暗殺したのだろ。111部隊はその当時から存在していたしな。それだけでも俺を怒らせるのに十分だ。だがあのゴミ共は、彼女の遺体を素体に使えと送り付けてきた！　解るか、この気持ちが！」

とうとう怒鳴り声を上げたプライソン。今の彼からは想像も出来ない程に、彼は人間を愛していた。今のジェイルと同じだ。だが、愛する女性を喪った事が彼を狂わせた。

「・・・では何故、最高評議会ではなく地上本部をターゲットにした？」

「もちろん最高評議会を殺してやろうと思った。だがあそこには、究極のモンスター・リアンシェルトが居る。レーゼフェアですら手に負えないというのに、それ以上のモンスターを敵に回すほど俺も

馬鹿じゃない。ただ、ある意味で死んでもらうがな」

「なに？」

「お前としても、最高評議会は目の上のたんこぶだろ？　あのような老害、居なくなった方が世のためだ」

「・・・・・」

ジェイルが黙る。最高評議会が邪魔だと考えているのは彼も同じだった。プライソンは続けて、「そしてもう1つ。これこそが俺の真の、何としても叶えたい動機だ」"スキュラ"達ですらも知らない計画の全容を語った。ジェイルの顔が見る見る内に青褪めていく。

「そ、そのような事のために、そのようなくだらい事のために、ミッドチルダを滅ぼす気だというのか！　なんと愚かな！」

「なんとでも言え。さぁ話は終わりだ、ジェイル。殺るなら徹底的にな！　仕損じるなよ！」

プライソンの余裕さに奥歯を噛んだジェイルだが、「言われずともね！」"アナンシ"をはめた右手をギュッと勢いよく握った。ギチギチと音を鳴らしながらプライソンの体を拘束している絃が引き絞られる。

そしてブチッという音と共に、その体がバラバラに千切られた。血の雨が降るとよく言う。今のプライソンは正にそれだった。ドチャッと嫌な音を発しながら床にぶち撒けられた彼の遺体。血の臭いが

トレーニングルーム内に満ちていく。

「・・・・こんなにも呆気ない終わりとは」

ジェイルがそう漏らした直後、『こちら救出班』ドゥーエとセインから通信が入った。展開されたモニターには、意識を失っているらしいフォルセティを抱っこしているドゥーエと、意識があるのか目を開けているヴィヴィオを抱っこしたセインの姿が表示された。

『ドクター。ヴィヴィオとフォルセティを発見、保護しました』

「そうかい。それは良い知らせだ。・・・ヴィヴィオ君。はじめまして。私はジェイル・スカリエッティ。君のお母さんのなのは君やそのお友達の友達だ」

少し怯えを見せているヴィヴィオに、ジェイルは優しく自己紹介をした。

『なのはママの・・・おともだち？』

「そうだとも。君やフォルセティ君を抱っこしている私の娘たちもまた、なのは君たちとはお友達なんだよ」

ヴィヴィオの視線がドゥーエとセインに向けられたことで、２人は笑みを浮かべて頷き返した。ジェイルは「今から君たちをお母さん達の元へ送り届ける。もう少しだけ待っていてくれたまえ」そう伝えた。

『うん。・・・ありがとう、ジェイルさん』

「ふふ。どういたしまして。あぁ、そうだ。私の事は、ドクター、と呼びたまえ、ヴィヴィオ君」

『うん、ドクター。ありがとう』

ヴィヴィオはそれだけを言って、静かに目を閉じて眠りについた。

『このまま合流しないで、聖王医療院へ向かえばいいんだよね？』

「そうとも。本局にすぐに搬送したいが、今は教会に預けるのが得策だろう」

『承知しました。では、私とセインは先行して離脱します』

『ドクター、待ってるからね～』

セインが手を降ったところで通信が切れた。ジェイルは満足そうに一息吐き、「トーレ、チンク」へと通信を繋げた。すぐに『はい』と応じる声と共に、２人が映るモニターが展開された。

「そちらの状況は？」

『私とチンクの足止めを行ったアルファですが、申し訳ありません。破壊してしまいました』

トーレとチンクの足元には、体が大きくひしゃげて機械部品を体のあちこちから飛び出させているアルファの損傷の激しい遺体があった。完全に機能が停止しているようで、銀に輝いていた瞳には光が灯っていなかった。ジェイルからの出来れば生け捕りにしろという命令を遂行できず、トーレやチンクは意気消沈している。そして周囲にはガジェットドローン――グレムリンの残骸が広がっていた。

「・・・残念だが、仕方がない。こちらはプライソンの殺害に成功した。これより残存している兵力を無力化する。私と合流するように」

『了解です』

『すぐそちらへ向かいます』

トーレとチンクとの通信も切り、最後に「ウーノ、クアットロ」と、プライソンの研究所のシステムにクラッキングを行い続けていた2人に通信を入れた。

『はい、ドクター』

『どうなさいました～？』

「プライソンの暗殺を完了した。君らの仕事はどうなっている？」

『まあ！　とても喜ばしい知らせです！』

『でもこちらは喜ばしいことなんてないですぅ。とんでもないセキュリティガードが居ます。先程からシステムを奪っては奪い返されを続けてます～』

『ですが、その過程で現在のラボの状況が判明しました。現在、ラボにはガンマ、イプシロンと呼ばれる姉妹が稼働中。アルファはどうやらトーレ達が撃破したようですね。救出対象のメガーヌ准陸尉、娘のルーテシア・リヴィア、アギト、さらにセッテ、オットー、ディードが居るようです。クイント准陸尉、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディは不在のようです』

「なるほど。・・・君たちはこのままセキュリティを完全に掌握したまえ。救出対象は、私とトーレとチンクで保護する」

『了解しました。お気を付けて』

『マップを送っておきますから～』

ウーノとクアットロとの通信も切ったジェイルは、バラバラになっているプライソンの遺体へと一瞥をくれた。小さくかぶりを振って、「往こう」トレーニングルームの出入口へ歩き出したその時・・・

「言っただろ？　殺るなら徹底的に、仕損じるな、と」

聞こえるはずもない声が背後から聞こえた。ジェイルはバッと勢いよく振り返り、「な・・・！？」驚愕に目を見開いた。バラバラだ

ったプライソンの体が再生していっているのだ。胴体から頭、両腕、下半身と生えてきていた。そして切断されていた部位はそのまま残っている。当然、頭部もだ。

「馬鹿な・・・！」

「見ろよ、ジェイル。バラバラにされても俺は死ねないんだよ。だから俺の真の目的が必要なわけだ！」

そう言いながらプライソンは自分の左前腕を掴み、「ハハハ！」笑いながらブチブチっと引き千切った。千切られた左腕を「なあ！」ジェイルへと向かって投げ捨てる。彼はバシッとその腕を叩き落とし、「化け物め・・・！」と吐き捨てた。

「お前も同じだ、ジェイル・スカリエッティ！」

再生し終えた左腕を振るってからジェイルに突撃するプライソン。あまりの衝撃に対応が遅れたジェイルは、繰り出された左拳によるパンチを「ぐふっ・・・！」まともに腹に受けてしまった。車に轢かれたかのように吹き飛ばされたジェイルは、その勢いのままに壁に叩きつけられた。

「見せてみろ、お前の再生力を。この程度ではケロリとして――」

一足飛びでジェイルの元へ向かい、大きくひしゃげた壁に背を預け床に座り込む彼の目前に降り立った。だが、「何故だ、何故・・・お前は・・・」ジェイルの様子にプライソンはフラリと後退した。

口や頭から流血させ、折れた腕や足は再生される様子すらない。

「お前も！　俺と同じだろう！？　見ろ！」

プライソンは自分の胸に手を突き入れ、なんと心臓を引っ張り出してソレを握り潰す。さらには自分の首をも捻り千切った。首が床に転がり、その目がジェイルに向けられる中で再生される新たな頭部と心臓。

「お前もこれほどの再生能力を持っているだろう！　何故そんな・・・！」

「・・・見れば解るだろう？　私は、そんな化け物じみた再生力など・・・持ち合わせてはおらんよ。・・・ただ、頑丈なだけだ」

「そんなはずはない！　同じスカリエッティならば、すぐにでも再生が行われるはずだ！」

「・・・ふっ。どうやら最高評議会は、よっぽど君に賭けていたようだね、私と違って。そんな酷い体にまでして・・・。ふふふ。ご愁傷様だ、プライソン。君の真の目的、実行したとしてもおそらく――」

「黙れ！」

黙らせるためにジェイルを殴り続けるプライソン。ジェイルは殴られながらも笑みを絶やすことなく、ギラリとした強い光を宿した金

色の瞳をプライソンに向ける。それが気に入らないのか「見るな、そんな目で見るな！」プライソンは殴り続ける。歯が折れようが、血反吐を吐こうが、踏み蹴りで骨を折られようが、臓器が損傷しようが、ジェイルは挑発の笑みを浮かべ続けた。

「この・・・・！　だったら、確かめてやるよ！　我が手に携えしは確かなる幻想！」

「っ！？　その呪文は、ルシリオン君の・・・・！」

プライソンの発した呪文に耳を疑うジェイル。プライソンの手に黒い西洋剣が握られた。彼は「なんてことはない。なんの力も無い剣だ」そう言って、再生された左腕を今度は斬り落とした。だがすぐに再生してしまう。

「ルシリオンから奪い取ったリンカーコアの一部を俺に移植した。すると、こんな力を得られたわけだ。まぁ所詮、俺は紛い物。武器で言えばこんなチンケな物しか具現化できないがな」

「ルシリオン君・・・すまない」

「いや待て・・・。そうだ、そうだ。俺がこの再生能力を手に入れたのは、彼女の遺体を見た後に自殺を試みた後だ。お前も一度死ねば、すぐに再生されるさ！」

「・・・・。ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン。・・・・セッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、

ディード。・・・ありがとう、すまない」

「礼も謝罪も無用だぞ、ジェイル！　再生した後でまた逢わせてやる！」

そうしてプライソンは、ジェイルの心臓目掛けて剣を突き入れた。激しく吐血するジェイルは、「はやて君、イリス君、チーム海鳴の諸君・・・。あとは・・・」それだけを漏らし、静かに目を閉じた。そして、二度と彼が目を覚ますことはなかった。

「・・・俺だけが、不死身というわけか・・・」

待てど暮らせど再生されないジェイルの遺体を目に、そう言ってプライソンは握っていた剣を落とす。剣は床に落ちると同時に魔力となって霧散した。胸に去来する虚しさに、プライソンは「フハハハハハ！」ひとり笑い声を上げ続けた。

「はぁ・・・。アルファ」

『はい。プライソン』

プライソンが通信を繋げたのは、破壊されて死亡したはずのアルファ。しかも彼女は綺麗なままで通信に応じた。

「研究所の内外に居るジェイルの娘たち、どうなっている？」

『はい。ウーノとクアットロは、ベータとイプシロンのスペアボデ

ィとの戦闘で意識停止しました。やはり所詮は後衛組。強くありませんでした』

アルファの映るモニターが切り替わり、そこには森の中で倒れ伏しているウーノとクアットロの姿、その側に"スキュラ"のベータとイプシロンがそれぞれ2人ずつの計4人が映し出された。スペアボディ。文字通り替えの利く体だ。それが戦闘を行っていた。

『トーレとチンクは、私のスペアボディを破壊後、デルタとゼータのスペアボディと戦闘。やはり強いですね。スペアボディでは勝てませんでした。現在は格納庫付近にて休憩中です。追撃しますか？』

「いや、いい。プリンツェッスィンとプフェルトナーは？」

『ドゥーエとセインにはトラップに嵌まってもらい、現在は意識停止中。プリンツェッスィンとプフェルトナーは無事に奪還できました』

ジェイルだけでなく、シスターズも全滅に近い最悪の状況だった。プライソンはしばらく黙った後、「ソイツらやジェイルを纏めて地上本部へ届けてやれ」そう指示を出した。

『よろしいのですか？』

「ここに放置していても仕方がないしな」

『畏まりました』

アルファとの通信を切ったプライソンは、「さようならだ、ジェイル」最後にジェイルへと目を向け、そしてトレーニングルームより去って行った。

Ｅｐｉｃ２３－Ａ新暦７５年ミッド・プライソン戦役～Ｏｕｔｂｒｅａｋ　ｏｆ　Ｗａｒ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

ミーティングルームでの隊長会議を終えて、待機シフトに入ろうとしたところにレッドアラート。アースラの廊下にモニターがいくつも展開され始めた。表示されたのは子供だった。男の子で、貴族のようなコートを纏っている。側に居たルシルが「トリックスター・・・！」って言ったのが聞こえた。

「じゃあこの子が・・・プライソン・・・？」

全くと言っていいほどに想像していなかった外見だった。ドクターの兄だってことだったし、もっと大人で老けているのかと。その子はコホンと咳払いした後・・・

『はじめまして、時空管理局・聖王教会の諸氏。この俺が、お前たちが必死になって捜していた男、プライソンだ。今日は次元世界に新たな記念日が生まれる日となる。ゆえに俺はこうして姿を見せた』

ハッキリと自分で名乗った。ルシルは「やはりコイツか」って漏らして、キッとプライソンを睨みつけた。でもこれでプライソン一派だって濡れ衣を着せられて勾留されているドクターやシスターズは釈放されることになる。

『俺たちの準備は済み、今日、偽善の象徴である管理局・ミッドチルダ地上本部および聖王教会に対して、改めて宣戦布告をする。俺のスポンサーでありクライアントの最高評議会、そしてヴァーカー・ホドリゲス大将、レジアス・ゲイズ中将、リチャード・フォーカス少将。観ているか？』

局員の名指しをしたプライソン。挙げられた名前の局員はみんな、トップクラスの役職に就いてる人たちだ。してやったりって顔をしたプライソンの映像から、どこかの森林地区へと切り替わった。崖や谷間に、昆虫型の大きな召喚獣が何体も張り付いている。

『そして聖王教会の諸君。観ているか？　お前たちも捜していたのだろう？　無念だろうが俺が先に手にさせてもらった』

召喚獣が張り付いていた崖や谷間が大きく崩れて、その直後に広範囲の森がせり上がって行き始めた。そして、地盤の下から巨大な人工物がその姿を見せた。ルシルが「聖王のゆりかご・・・！」そう漏らしたのが聞こえた。名前も大きな戦艦だってことも判っていた。でも想像していたものより遥かに巨大なものだった。

『旧暦の時代。一度は世界を席巻し、そして破滅を齎した絶対の力の象徴。古代ベルカの悪夢の叡智・・・！　聖王のゆりかご！　無論、俺の力はこれだけではない。見ろ、これが俺の全力だ』

ゆりかごの後方の森もまたせり上がって行って、ゆりかごよりは小さいけどそれでもその半分くらいの大きさな艦が姿を見せた。なんかマンタっぽい外見。ゆりかごと同じ高度にまで上昇したその艦は、

ゆりかごと一緒に微速前進を開始した。森林地区がどこか判らない以上、向かう先はどこなのか知ることも出来ない。だからはやては「映像の場所を調べて」ブリッジのシャーリーに指示を出した。

『ゆりかごは恐ろしく強大な力を秘めている。だが発揮するには少々面倒な工程が必要だ。そのためには護りが要る。聖地より蘇る彼の翼・聖王のゆりかご。ゆりかごを護り地上に畏怖を与える親鳥・アンドレアルフス』

「ゆりかごの後ろに付いたあの巨大艦が、アンドレアルフスって奴か・・・！」

そんな"アンドレアルフス"の中央付近に、なんと滑走路があった。

『共に翔けし子鳥・ナベリウス、シームルグ、アンドラス、シャックス、マルファスが、地上に戦火を齎す』

その滑走路がズームアップされた。そこからシームルグなどの見慣れた戦闘機やマルファスという輸送機が次々と飛び立って行くんだけど、その中で「見慣れない航空機が先頭を飛んでる・・・」アリシアの言うように、全体的にブルーカラーで、デフォルメされた猫とネズミのイラストが翼に描かれてる航空機が他の機体を先導していた。。

「ちょっと！　滑走路にメガーヌ准陸尉たちが居るわよ！」

「「アギト！」」

「セッテ、オットー、ディード・・・」

滑走路には、防護服に変身し終えているメガーヌ准陸尉、側にはルーテシアとリヴィアとアギト、地上本部を襲ったシスターズの３人が居た。

『そして、地を這う鋼の龍・ケルベロスとオルトロス、咆哮たるディアボロス』

映像が切り替わる。どことも知れない（移動していなければ南部だとは思うけど・・・）荒野地帯。そこに「列車砲・・・！」が君臨していた。おそらくアレが"ディアボロス"。列車砲の前後から伸びるミサイルのように滑らかな車体と、複数の小型砲台を備えた装甲列車。アレが"ケルベロス"と"オルトロス"。

「クイント准陸尉！」

"ディアボロス"などの兵器を護るようにクイント准陸尉、廃棄都市区画で交戦したシスターズのノーヴェ、ディエチ、ウェンディの姿があった。そしてまたプライソンの映る映像へと切り替わった。彼はコツコツと靴を鳴らして歩いて行って、その先には・・・

「「ヴィヴィオ！」」

背もたれの高い肘掛椅子（おそらく・・・玉座）に座らされているヴィヴィオの姿があった。でも「フォルセティ！？　フォルセティ

は！」はやてがモニターに張り付くようにして、フォルセティの姿を探すけど・・・。

「居らへん・・・フォルセティが・・・」

映像内にフォルセティの姿はなかった。フラつくはやてに「しっかりしろ、はやて」ルシルがそう言って、はやての両肩に手を置いて支えた。はやてはルシルの胸に顔を埋めて「そやけど・・・」不安げに呻いた。私ももう一度モニターを見るけど、やっぱりフォルセティの姿はなかった。

『管理局・聖王教会両勢力と俺たち。どちらがミッドチルダを支配するか、今日、決めてみようじゃないか！』

プライソンはヴィヴィオの顎から頬にかけて手で撫でたから「触るな！」私は思わずそう叫んだ。私の声が届いたわけじゃないだろうけど、プライソンはヴィヴィオの顔から手を離して、『最後に』そう前置きした。

『愚かにもゲーム開始のオープニングテーマが流れる前、会社ロゴが出ているようなタイミングで、俺の研究所に忍び込んだ馬鹿が居た。まぁ痛い目に遭わせてお帰りいただいたが』

また映像が切り替わって、「っ！？」私たちは絶句した。映し出されたのは、服を血で真っ赤に染めるドクター、ジェイル・スカリエッティ。そしてバインドらしき物で拘束されているウーノさん、ドゥーエさん、トーレさん、クアットロさん、チンク、セインだった。

場所は地上本部のメインエントランス前。

「ドクター・・・？　え？　血？」

「まさか・・・死・・・？」

「うそ、そんな・・・！」

「馬鹿な・・・！　ドクター達は、拘留されていたんだぞ・・・！」

ウーノさん達は意識があるみたいで、見てる方が本当に辛くなるほど大泣きしていて、ドクターに向かって何か叫んでいた。でもドクターの顔にはもう血色は無くて・・・肌は白かった。これまでに何度か見てきた、死者の顔だった。

『俺とのゲームは命懸けだということを念頭に置いて掛かって来い。そして俺を、俺たちを打倒して名を上げるもよし。欺瞞と偽善に満ちた管理局の正義とやらを謳って職務を全うするもよし。俺たちは待っているぞ？　虫のようにあがき続けるお前たちを眺めながらな！　デルタ！』

プライソンは声を弾ませてそう言った後、"ディアボロス"の映像に切り替わる。砲塔２門が動き出して同一方向に砲門を向けた。そしてソックブームを生み出しながら、あの巨大巡航ミサイルを発射した。

「ブリッジ！」

『はい！　少し時間をください！・・・・ミサイルの進路は、首都クラナガン！　おそらく・・・！』

「地上本部、か・・・。とことん管理局に喧嘩を売るつもりやな」

再びプライソンの映像に切り替わり、『さぁ。ゲームの始まりだ！』それで戦闘開始を告げる宣言は終わった。ブツンと通信が切れて、通路内が静寂に包まれた。誰も声を出さす動きも見せない。あまりにもショックだった。ドクターの死が・・・。でもそんな中でルシルが「はやて。ミーティングだ。君たちも・・・！」そう言って歩き出した。

「ルシル君・・・」

「ゆりかごも他の兵器も止める。ヴィヴィオもフォルセティも救い出す。プライソンには相応の痛みを味わってもらう。そのためには、俺たちが動かないといけない。怒りも悲しみも、今は胸の内に留めろ。今考えるのは、救いたい人を、護りたいものを、救い護るのみ。違うか？」

ルシルの視線が私たちみんなに向けられた。解るよ、ルシルの瞳には怒りが燃えているのを。だから「うん」私は頷いて、ルシルの元へと歩み寄る。なのはも頷いて、はやては「シャーリー。ミーティングルームに集合するよう、フォワード達に連絡して」指示を出した。

『了解です』

「はやてちゃん。あのミサイルは・・・」

「今の私らじゃ手も足も出せへん。けど地上本部の障壁も復活してるし、おそらく耐えられるはずや。今はそれを信じよ。グリフィス君。一応、地上本部の警備部に報告を」

『判りました』

そうして私たちは再びミーティングルームへ。今度は六課の全戦力が集合。スバル、ティアナ、エリオ、キャロのフォワード４名。すずかとシャマル先生とギンガ。あとグリフィスが、はやての席の側に控えている。

「みんな、プライソンからの宣戦布告は見たな？　ゆりかごは起動して、他の兵器たちも私らに見せつけてきた。これから本格的な戦闘に入る。目的はプライソン一派に拉致されて洗脳を受けてるクイント准陸尉たちを始めとした要救助者の救出と保護。兵器の破壊。そして一派の逮捕や」

「皆さんが集合する前、本局のユーノ司書長、聖王教会の騎士イリスより連絡を受けました。ユーノ司書長からは聖王のゆりかごの詳細なデータを。騎士イリスからは教会騎士団の出撃する隊名を」

グリフィスの展開したモニターに、ゆりかごの内部マップや外観と兵装の位置を映し出された。別モニターには、イリスのロート・ヴ

ィンデ、トリシュのゴルト・アマリュリュス、クラリスのグリューン・ガルデーニエ、アンジェリエのプルプァ・グラディオーレ、その４隊の出撃が決まったことを示す、各隊の紋章旗がザンクト・ヒルデの街に掲げられている映像が。

「ゆりかごと航空艦、そして列車砲と装甲列車の位置は現在、本局や各陸士部隊が割り出している最中です。おそらく、もうすぐ・・・――」

グリフィスがそこまで言いかけたところでコール音が室内に響いた。はやてが応じると、『こちらクロノ』の映るモニターが展開された。

「クロノ君。ちょうどええところに。これから出撃するって報告をしておこうって思うてたんよ」

『そうか。こちらからも報告がある。本局は、聖王のゆりかごを第1級危険指定のロストロギアと認定し、これを破壊することを決定した。聖王教会ひいてはザンクト・オルフェン議会も賛同してくれた。ユーノからゆりかごのデータを受け取っているな？』

「うん。今、モニターに出してる所や」

『ゆりかごの真価が発揮されるのは、衛星軌道上に上がり2つの月の魔力を受けられるポイントに着いてからだ。そこで本局は艦隊を出撃させて、そのポイントに着く前に宇宙空間で撃沈する作戦を実行することになった』

モニターに映るゆりかごのデータを見る。砲門の数、内部のマップ、全区画にはＡＭＦが常時展開、自立型の防衛兵器、そしてクロノが言う衛星軌道上からの兵装についても記されてる。ユーノ、ちゃんと纏めてくれたんだね、判り易いよ。

「宇宙空間・・・。大気圏内での撃沈は出来ひんのやね」

『艦隊がそれまでに到着できない。さらに言えばゆりかごと護衛艦の位置と向かう先が、プライソンのアジトを捜索していた部隊から報告が上がった。東部のＦ９２の森林地区。予測進路は首都クラナガン。大気圏内で撃沈できるならしたいが、たとえ艦隊が到着するのが早いとしても、首都にゆりかごが到着してからになる。首都上空で撃沈するわけにはいかないだろ』

「あれだけ巨大な艦体だ。その残骸を街中に落とすわけにはいかないな」

『そういうわけだ。・・・って、ルシル。君、なんか縮んで・・・』

「その話は後でしてやるから！　今は、本事件の話を進めてくれ・・・」

ルシルも本当に大変だよね。ひょっとして、本来の身長のルシルを見掛けた知人に、いっつも説明とかしてりするのかな。それはなんかすごい労力要りそうだし、何よりルシルのストレスが大変そうだよ・・・。クロノは『そ、そうか。それじゃあまた後で・・・。コホン。で、だ――』たじろいで、咳払いしてから話を本題に元に戻

した。

『六課、おそらく・・・なのはとフェイト、ルシル辺りがゆりかごに突入することになると思うんだが。頼みがある。ゆりかごの駆動炉を押さえてほしい』

「駆動炉を・・・？」

『ゆりかごが衛星軌道上のポイントに到達するまでの予想時間は約４時間後。艦隊が到着するまで最速で４時間半。３０分も差があることになる。この差はかなり大きい。だから――』

「時間稼ぎのための駆動炉封印か、もしくは破壊」

私となのはとルシルが顔を見合わせた。そして「駆動炉は俺が押さえる」ルシルが名乗りを上げた。

「魔力吸収のイドゥンがあれば、駆動炉くらいすぐに終わるだろ」

フォルセティとの戦闘があるかもしれないけど、ルシルには魔力攻撃殺しの魔法イドゥンがある。昔、チーム海鳴で模擬戦した時、なのはを完封した魔法だ。でも属性――変換資質で変換された魔力、私の電撃やアリサの炎熱などの魔力は吸収できない。だけど艦の動力炉（ゆりかごもおそらく魔力で動いてるはず）なら効果覿面だと思う。

『そうか。ならルシルに任せよう。・・・では機動六課。出撃して

くれ。武運を祈る』

私たちは席を立って「了解！」クロノに敬礼をした。

・―・―・―・―・

本局のどこに在るとも知れない広大な空間。明かりらしい明かりは無いが、空間自体が明かりとも言えるため視界は開け、その空間に何があるかは確認できる。正四角形の足場らしき物が縦横無尽に点在しており、中央付近には培養液が満たされたカプセルが3基と並んでいる。そのカプセルの中に浮かんでいるのは、人間の脳と脊髄だ。

『――俺のスポンサーでありクライアントの最高評議会、そしてヴァーカー・ホドリゲス大将、レジアス・ゲイズ中将、リチャード・フォーカス少将。観ているか？』

その脳の収められたカプセル3基の前には、プライソンによる宣戦布告の映像がモニターに映し出されていた。最高評議会の名前が出た瞬間、カプセル内に気泡が勢いよく現れた。それは感情が露わになった証拠だ。

『おのれ、プライソンめ・・・！』

『よもや我々、最高評議会の名を出すとは！』

『しかし何故だ！　サブナック、ガアプ、アーリー、コスンツァー

ナの名が出されていない！』

３つの脳の正体は、最高評議会の議長デュランゴ、評議員リョーガ、書記トレイルだった。１５０年前に次元世界を平定し、７５年前に管理局を設立したことで前線を退いた。それからは管理局の表と裏を支配してきた。とは言え、平時は運営方針には口を出すことはなかった。もっぱら裏の支配者としての存在していた。

『クライアント・・・。奴に仕事を依頼した名前だ。サブナック達は、プライソンとは個人的なつながりが無い・・・！』

『我々も道連れにするつもりか・・・！』

『隠蔽しようにも管理世界全域にリアルタイムで発信されている。最早、内務調査部が我々に迫るのは避けられまい』

『こういう日の為に、ルシリオンを調査部のトップに挿げ替えようとしていたが・・・。おのれ、先手を打たれた』

元は利用するために生み出したプライソンの反逆に、最高評議会は焦っていた。しかしそれだけでは済まなかった。

『――俺の研究所に忍び込んだ馬鹿が居た。まぁ痛い目に遭わせてお帰りいただいたが』

『『『なに！？』』』

モニターに映るジェイル・スカリエッティの遺体と、彼の娘たちであるシスターズ。

『馬鹿な！　何故、ジェイルが殺されている！？』

『拘置所に勾留していたはずだ！　いつの間に脱獄した！？』

『拘置警備課は何をしていた！』

プライソンの後継として考えていたジェイルの死。最高評議会は悉くその計画をかき回されていた。ジェイルを操れる自信はあったのだ。シスターズを人質に取ってしまえば、いくらでもと。だが混乱ばかりしている暇もないのは確か。すぐに、宙ぶらりなってしまうプライソンとジェイルの技術をどうするか、それを決める話し合いになる。まずは自分たちの今後の境遇について話し合うのが普通だろうが、もはや裏から管理局を操れば問題ないと、自然にそう答えが出て来てしまっていた。

『ミミルはどうか？』

『ミミル・テオフラストゥス・アグリッパ、か・・・』

『確かに、プライソンとジェイル、スカリエッティシリーズを我々の依頼で生み出したのはあの女だ。その頭脳はスカリエッティシリーズと同等か、もしくはそれ以上。２人の技術を受け継ぐのに相応しいとも言える。しかし・・・』

『あの女は危険すぎではないか？　複雑かつ理解できない、あの突き抜けた思想・・・。我々はそれを危険と判断し、管理局から追放したのだから』

ミミル・テオフラストゥス・アグリッパ。ミッド北部に位置するベルカ自治領ザンクト・オルフェン、その北区カムランに居を構えている技術者だ。ベルカ先史時代、最も戦力と技術力の高かったイリュリア国の技術者の末裔とされ、融合騎の製作などを行える数少ない存在だ。

『我々と共に次元世界を平定した同胞リアンシェルトが連れて来たため、そのまま局に置いて初代技術部長に据えていたが。彼女への恩だけでは看過できないレベルだった。それほどまでにあの女、ミミルは危険だ』

『ではどうするのだ？』

僅かに沈黙が流れた後、『月村すずか』そう響いた。

『ツキムラ・スズカ？・・・ジェイルの取ったという弟子か！』

『まだ１９と幼いが、ジェイルがその技術を叩き込んだと言うのは有名な話だ』

『しかしその者は、チーム海鳴のメンバーなのだろう？　ルシリオンとの契約はどうする？』

最高評議会を始めとした権威の円卓の支配下に置かれる代わりに、チーム海鳴には手を出すな。ルシリオンとはそういう契約で関係が築かれている。それを反故にした瞬間、ルシリオンは徹底的に敵となり、今以上のまずい状況を運んでくる。ゆえに最高評議会は頭を悩ませる。

『いや待て。先に破ったのはルシリオンだ。機動六課襲撃時、奴は戦闘行為を執った。誰に許可を取らずに。それを餌にすれば、月村すずかの件も受けざるをえんだろう』

『違いない』

『では決定だな。プライソンの一件が片付いた後、ルシリオンを招集す――』

「随分、楽しそうですね。何かありました？」

最高評議会の話に突然割り込む女性の声。現れたのは『おお、リアンシェルト』だった。本局の運用部の一切合財を手中に収めている総部長にして少将の肩書を持つ、管理局最強の魔導師トップエースだ。そして最高評議会と共に次元世界を平定し、管理局を設立した最古参でもあった。

『うむ。ジェイルが脱獄し、しかもプライソンに殺されるというのは予定外だったが、奴とプライソンの技術を継承させる技術者を発見したのだ』

『月村すずか。彼女を新しく我々の顧問技術者として任命しようと思うのだ』

『ジェイルやプライソンに比べればまだまだ使えないだろうが、それはまだ経験の無さが原因。追々役に立ってくれるだろう』

「彼女はチーム海鳴の一員では？　ルシリオンとの契約が――」

『先に契約を破ったのは彼だ。それを餌に、彼を従わせるのだ』

「従わせる？　あの人を・・・？」

リアンシェルトの様子が変わった。顔を俯かせて肩を震わせている。最高評議会は彼女のそんな様子に気付かず、呑気にルシリオンとすずかについて話を進めていた。そしてそれは突然起きた。

『『『っ！？』』』

1基のカプセル内の培養液が急速に凍結していって、議長である『デュランゴ！』の脳が氷の中に沈んだ。他2人の脳が収められたカプセル内に気泡が勢いよく発生する。先と同じ強い感情が現れているからだ。

『どういうつもりだ、リアンシェルト！　何故、デュランゴを！？』

『我々が何か機嫌を損ねるような事でも言ったのか、したのか！？』

「ええ、その通り。あの人を、ルシリオンを従わせる。これほど私をイラつかせる言葉はありません。これまでずっと耐えてきたけど、もう我慢なりません。あの人の大切なお友達であるすずかにも手を出そうとした。・・・これも良い機会でしょうし。そろそろあなた達には退場してもらいますね」

リアンシェルトがニッコリと可憐な笑顔を浮かべた。まるで穢れの知らない乙女のようだ。だがやっている事はある種の殺人だ。たとえ、相手が脳と脊髄だけと言っても。

『我々とあなたの仲ではないか！　あなたの指示通りに我々は戦った！　次元世界を平定した！　時空管理局を作った！　最高評議会を生み出した！　それを！　あなた自ら捨てると言うのか！　なんて、なんて勝手な・・・！』

『何故ルシリオンに固執する！　あの少年とあなたとの間に、一体どのような関係があると！？』

リアンシェルトがその問いに答える前に、通信を知らせるコール音が鳴り響いた。彼女は断りを入れずに「はい」通信に応じた。展開されたモニターに映るのは少女で、その名は「レーゼフェア」だ。リアンシェルトと同じ"堕天使エグリゴリ"の1機で、プライソンとそれなりに親交のある少女。

『リアンシェルト。依頼どおりにコイツらを自殺に見せかけて殺しておいたよ』

レーゼフェアが陽気な声で、そんな物騒な言葉を吐いた。切り替わる映像に映るのは2人の初老の男性局員。執務デスクに突っ伏すような姿勢で、デスク上には血溜まりが出来ていた。彼らの手には拳銃が握られており、こめかみには銃創がある。一見すれば拳銃自殺だが、犯人であるレーゼフェアがすでに殺害したと自供済みだ。とは言え、その事実が公になる事はおそらく永遠には無いだろうが。

『ホドリゲス、フォーカス！？』

遺体の正体は、権威の円卓のメンバーの将校だった。

「あの2人も、あの人を利用しようとしていた。プライソンの暴露によって、どうせ先の無い人たちです。これまで甘い汁を飲んでいたのですし、もういつ亡くなっても問題ないでしょう。そしてあなた達もまた、もう利用価値の無い存在です。どうぞ先にお休みください」

『『待っ――』』

最後まで言い切ることが出来ないまま、書記トレイル、評議員リョーガの脳が収まっていたカプセルも凍結された。リアンシェルトは「安心してください。権威の円卓は、私が引き継ぎますから」と言って、カプセル3基それぞれに手を付いて、ガシャァン！と粉砕した。

『リアンシェルト』

「レーゼフェア。お使い、ありがとう。私からは以上だから、あとはあなたの思うままにあの人と闘ってきてちょうだい」

『うん。それじゃリアンシェルト。僕、先に逝っているね』

「ええ。私も後から逝くから、待っていてね」

『ん！』

リアンシェルトとレーゼフェアは微笑み合いながら手を降り合って、通信を切った。

「私は・・・、私の名は、リアンシェルト。リアンシェルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア。あの人は、ルシリオンは、私の愛した・・・、いいえ今でも愛する父です。これが先ほどの返答です。デュランゴ、リョーガ、トレイル。・・・おやすみなさい」

粉々に砕け散った最高評議会だった3人の脳の破片を見ながら、リアンシェルトは問いに答えた。彼女はその足で医務局へと向かい、そして辿り着いたのはある一般病室で、「失礼します」と入室。ベッドの上には男性が1人、眠りについていた。

「レジアス・ゲイズの処遇については、あなたに任せます。ですからそろそろ目を覚ましましょうか。ゼスト・グランガイツ」

†††Ｓｉｄｅイリス†††

プライソンが本格的に戦闘を行うために、様々な兵器の戦地投入を開始した。本局から、旗艦・"聖王のゆりかご"と護衛艦・"アンドレアルフス"が東部から中央区画・首都クラナガンへ向けて飛行中という連絡を貰ったことで・・・

「空戦が可能な騎士は全員、このまま首都クラナガンへ向けて飛行！　空で航空機およびガジェットの撃破！　陸戦騎士は、他の隊や局の部隊と連携して、戦車・装甲車やガジェットの撃破！」

わたしたち聖王教会騎士団も順次出撃を開始。問題は、さっきのプライソンの声明には登場しなかった兵器・戦車と装甲車だ。ガチの質量兵器。それらが東西南部の地方に突然出現して、首都へ向けて一斉進軍を開始した。その数、それぞれ約２千の計４千台。マジでアホか。数年程度で完成されられるような数じゃない。ずっと前から、今日という日を待っていたんだ。

「銀薔薇騎士隊（ズィルバーン・ローゼ）、出撃！」

そういうこともあって、教会騎士団最強の少数精鋭部隊、ズィルバーン・ローゼもとうとう出撃となった。ルミナとパーシヴァルくん以外が全員４０代以上の中年・初老の騎士。だけどその分の経験がある。いくら若くて魔力もあって、特別なスキルを持っていしても越えられない壁だ。

「ターゲットは陸戦兵器の破壊！　民間人に傷１つ付けさせるな！」

隊長のプラダマンテからの指示にルミナ達が「了解！」応じた。ル

ミナ以外のパラディンは空戦が出来ないから、自然と対陸戦兵器戦となる。さらにわたしや他の隊からも陸戦騎士が街に散開して行く。そしてわたし、トリシュ、アンジェの隊長３人＋空戦騎士は空へ。隊の指揮は副隊長や分隊長たちがしっかりしてくれるから、安心して空へと上がれる。

「汝は遥かなる空を支配する者。羽ばたきは氷獄の風、咆哮は煉獄の炎。行く手に群がる者らを吹き飛ばし、燃やし尽くし、背後に死の山を築く。汝が主の名に応じ、いざ参れ！　ワイバーン！」

クラリスが展開した召喚魔法陣より姿を見せるのは飛竜。クラリスの有する最強の召喚獣。トリシュがそんなクラリスのワイバーンに乗った。トリシュも空を飛べないけど、精密狙撃と高威力砲撃が出来る固定砲台役として一緒に来てもらう。

「今だけはトリシュがロードだから、しっかり守ってあげてね、ワイバーン」

クラリスがワイバーンの首を撫でると、気持ち良さそうに目を細めた。クラリスは残念ながら陸戦側で、ロッサや自分の騎士隊を率いてプライソンのアジトを陥落させる任務に赴く。そんなクラリスとも別れて、私とトリシュとアンジェ、それに空戦の出来る騎士２９人は一路クラナガンへと向かう。

「こちら教会騎士団のイリス。機動六課（アースラ）、応答願います」

『はい。アースラ、ロングアーチ０１・シャーリーです』

「はやて達は出撃した？」

『たった今、出撃をしました』

シャーリーの話じゃ結構チームを分けたみたい。スバルとギンガ、アリサとヴィータとティアナは南部の列車砲・装甲列車攻略。アルトの駆るヘリに乗って向かったらしい。あそこにはクイント准陸尉が居るし、当然だとも思う。んで、護衛艦攻略はシグナムとエリオとキャロのライトニングなんだけど・・・。

「ちょっと少なくない？」

『あとですずかさんが合流予定です』

「ん？　すずかは別行動中なの？」

『はい・・・。地上本部へ』

そう言われてハッとした。ドクターとすずかは技術者として師弟の間柄だし。そうだよね。放っておけないよね、あんなウーノ達を・・・。ホント家族のような関係を築いていたもんね。だから余計に、プライソンへの怒りが膨れ上がる。

――はじめまして、イリス君。私が、ここ第零技術部の部長ジェイル・スカリエッティだ。是非ともドクターと呼んでくれたまえ！――

――ドクター。イリス様が引いていらっしゃいます――

――安心して。マッドサイエンティストっぽいけど・・・――

――そういうことだ――

――根は真面目な人ですから～♪――

――イリス。私チンクも側に居る。そう怯えるな――

――お、怯えてないし！――

はじめてドクター達と出会った頃を思い返した。だけどもう、あの白衣バサッが見られないのね。ドクターの仇は、必ずみんなで取ってやる。

『ウーノ一尉たちと話をした後、すずかさんもアンドレアルフス攻略に参加します。あと、それでなんですが、八神部隊長からシャルさんにお願いが・・・』

「お願い？」

『シャルさんにも、アンドレアルフスの攻略に参加してほしいと』

「あぁ、そういうお願い・・・」

わたしの隣を飛ぶアンジェと、背後を飛ぶワイバーンの鞍に座るトリシュへと目をやる。２人は頷いてくれた。だから「判った。わたしも参加させてもらうよ」そう応じた。

『はい！　ありがとうございます！』

そして、はやてとなのはとフェイト、それにルシルとアリシアが戦闘機隊やガジェットの撃破をこなしながら、ゆりかごに突入する機会を狙っているって話だった。飛べないアリシアは突入班じゃなく、ヴァイス陸曹の駆るヘリからの狙撃で、ガジェットの破壊などのサポート役とのこと。

「そう。わたしとトリシュタンとアンジェリエ、以下２９人の騎士もこれより敵航空戦力と交戦に入る。はやて達にもよろしく言っておいて」

『判りました！　お願いします！』

シャーリーとの通信を切って、そのまま空を翔ける。目指すは東部と中央区画の間。そして「ガジェットを視認！」した。そのずっと向こうには、護衛艦・"アンドレアルフス"のお尻が見える。

「トリシュ、アンジェ！」

「「はい！」」

「「「いざ・・・」」」

わたしは"キルシュブリューテ"を、トリシュは弓形態の"イゾルデ"を、アンジェは魔力旗をすでに展開した"ジークファーネ"を起動して、ギュッと握りしめる。

「参る！」「「参ります！」」

そしてわたしたち教会騎士も、ガジェットとの交戦に入った。

Ｅｐｉｃ２３－Ｂ新暦７５年ミッド・プライソン戦役～Ｂａｔｔｌｅ　Ｆｉｅｌｄ～

†††Ｓｉｄｅすずか†††

ドクターは勾留されていたのにいつの間にか脱獄を果たして、シスターズと一緒にプライソンのアジトに乗り込んだ。さすがドクター。そう言ってあげたい。管理局や聖王教会でも探し出せなかったアジトを探し出せたんだから。ドクターが殺害された。でも・・・。

「死んでしまったら、それこそ何も言えないじゃないですか・・・」

さっきから涙が止まらない。本当はもっと大きな声で喚いて泣きたい。だけど今、喪に服すことも出来ない。プライソンが本格的に動き出したから。私だって戦力として出撃する。でも今は、「・・・ウーノさん」達と話し合うべきだって考えた。そういうわけで、はやてちゃんに我が儘を言って、地上本部へと来させてもらった。

「すずか・・・」

エントランスの待合ロビーに、ウーノさん、ドゥーエさん、トーレさん、クアットロさん、チンク、セインは居た。みんな、目を真っ赤に腫らしていて本当に痛ましい。特にドゥーエさんとクアットロさんが酷い。

「あの、ドクターのご遺体は・・・？」

「つい先ほど、本局の医務局へ移送したわ。いつまでもこんな所に寝かせてはおけないもの」

「きちんと弔って差しあげなければな・・・」

私の問いにウーノさんが答えてくれて、トーレさんがそう続けた。ドクターと最後に顔を合わせたかったけど、さすがに本局まで行くのは無理だ。でも「皆さんは、付いていなくても良いんですか？」って思ったから、また訊いてみた。

「ドクターの側に居たいさ、私たちも。だがドクターはそれを良しとしないだろう」

「プライソンを止める為にあたし達は、ドクターだって戦った」

「ここで戦いを辞めることは、ドクターへの裏切り行為だ。だから私たちは、ミッドに残った。戦い続けるために・・・！」

チンクとセインとトーレさんが、腫れた目で私を見て答えてくれた。シスターズは泣き寝入りをするんじゃなくて、ドクターの遺志を継いでこのまま戦うことを決めた。強い、本当に。私が黙っていると、「すずか。ドクターからの遺言です。聴いてくれるかしら？」ウーノさんがそう言った。

「も、もちろんです！　ドクターの遺してくれた言葉、聴かせてください！」

「月村すずか。もし自分の身に何かが起こり復帰できないようであれば、あなたを第零技術部の主任に任命したい、と」

「・・・・え？」

最初なにを言われたのか解らなかったけど、すぐに浸透して「私が、ですか！？」訊き返した。

「最初で最後の弟子であるあなたに、スカラボと私たちを任せたい、と」

「た、確かに私はドクターの弟子ですけど！　第零技術部を管理できる程の経験も、技術力も、何も無いですし！」

「そこは私たちがしっかりサポートするわ。あなたの判らないことはきちんと教え、導いて行くから安心して」

ウーノさんにそこまで言われるけど、私なんかにドクターの代わりなんて出来るわけがないよ。だって、教えてほしい事、話したい事、もっといっぱいあったもん。それなのにいきなり主任だなんて・・・。

「すずか。私たちは、第零技術部を潰したくはない。そして、ドクターの後任であるなら、誰とも知らん技術者よりお前の方が良い。お前は良い技術者だ。それは、私たちが保証しよう」

「トーレさん・・・」

「私もよ、すずか。ドクターもあなたのことを買っていた。あなたはそう思っていないかもしれないけど、あなたの持つ今の技術力はかなりのものよ」

「ウーノさん」

「私も、スカラボを失いたくない。あそこは私たちの居場所だもの」

「すずか。ドクターの夢、私たちと一緒に守って」

「ドゥーエさん、クアットロさん・・・」

これまで黙っていた2人にまでそうお願いされちゃったら、もう断るわけにはいかない。それに私だってスカラボを、第零技術部を潰したくなんてない。ドクターから学んだ知識、技術、それらを無駄にもしたくたない。

「ウーノさん、ドゥーエさん、トーレさん、クアットロさん、チンク、セイン。本当に私で良いんでしょうか・・・？」

「ドクターの望みであり、シスターズ全員の総意だ」

「そうだよ。主任になってよ、すずか」

「チンク、セイン」

私は一度目を閉じて深呼吸。覚悟は決まった。私は「はい。第零技術部の主任、お引き受けします！」胸の前で右拳をギュッと握って、ドクターの遺志を受け継ぐことを決めた。正直、思いだけで出来るような大任じゃない。だからウーノさん達に助けてもらわないと。

「では主任としての初仕事よ。これから私たちはどうするべきかしら？」

「え？　あの、でも・・・まだ正式に主任になったわけじゃないですし・・・。書類とかいろいろとあるでしょうし・・・」

「第零技術部は、運用部からの影響を受けないの。だから人事の決定権はドクターや、秘書の私にあるのよ。だから私が許可して、当人も納得してくれれば、その日から異動に出来るのだけど。第四技術部には、あとで連絡しておくわ」

「すずかは第零と第四を兼任していた状態だったからな。スムーズに異動できるだろう」

とのことで、第四技術部の主任であるマリーさんに相談も承諾もないまま、私は第零技術部の主任になった。そして改めてウーノさんから「すずか。私たちシスターズに、これからの指示を」促された。

「あ、はい。現在、機動六課、本局航空隊、陸士部隊、教会騎士団は、大まかに分けて対航空戦力、対陸上戦力、２つの戦闘を実施しています」

"聖王のゆりかご"、護衛艦・"アンドレアルフス"、戦闘機隊とガジェットの航空戦力。列車砲・"ディアボロス"、装甲列車・"オルトロス"と"ケルベロス"、戦車と装甲車の陸上戦力。ソレらプラスにクイント准陸尉たちの対人戦力。プライソンのアジト攻略。各戦力は、それぞれに対処するために散開している。

「すずか。指示をお願いしておきながらなのだけど、私とクアットロは、プライソンのラボへの攻撃に参加したいのだけど・・・」

「さっきはクラッキング中に、他の小娘共に背後を取られましたけどぉ、今度はぜって～負けねぇ～」

伊達眼鏡を外し、結っていた後ろ髪を解いて本気モードになったクアットロさん。口調までも変わってる。

「（プライソンの研究所はもう、もぬけの殻だと思うけど、それでも何か本件を早く終わらせられるデータがあるかもしれない）・・・ウーノさん、クアットロさん、それにドゥーエさん。お願いします」

「「了解」」

「私もね？　了解よ」

「トーレさん。護衛艦アンドレアルフスに、空戦の出来るセッテ、オットー、ディードが居ます。私やシャルちゃんと一緒に迎撃をお

願いします。あ、おそらく最初の方は、戦闘機やガジェットⅡ型の掃討から入るかと思いますが・・・」

はやてちゃんは、シャルちゃんに"アンドレアルフス"攻略の協力をお願いするって言っていた。シャルちゃんの答えは知らないけれど、きっと協力してくれるはず。だからシャルちゃんを入れての任務だ。

「承知した。イリスの戦い方も熟知している。問題なく連携できるだろう」

「チンクとセインは、列車砲と装甲列車の攻略のお手伝いをお願いします」

「ノーヴェとディエチ、ウェンディの居るところだな。了解した」

「あたしの妹だしね。お姉ちゃんとしてビシッと躾けてあげるよ」

チンクとセインには、これまたシスターズの妹にあたるノーヴェ達の相手をしてもらいたい。ウーノさん達がソファから立ち上がって、「シスターズ、出撃します！」私に敬礼をしてくれた。

「はい、お願いします！」

そうして私たち第零技術部も、プライソン一派の撃破に動き出した。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒ヴィータ†††

列車砲と装甲列車の撃破を任されたあたしら陸戦チーム。アルトの操縦するヘリに乗って、あたし、アリサ、スバル、ティアナ、ギンガの5人が向かってる。もちろん、こんだけの戦力で攻略できるなんて微塵も考えてねぇ。陸士部隊からも結構な人数が来てもらうことになってっから、その戦力で攻略する。

「スバル、ギンガ」

「「あ、はい」」

「お前らは、クイント准陸尉だけに集中しろ。周りの雑魚はあたし達が押さえる」

ずっと顔を伏せて手を組んでたスバルとギンガに声を掛ける。緊張してんのか顔色が悪ぃしな。クイント准陸尉は、コイツらの大切な母親だ。2人が相手にすんのは当然の流れだ。2人は「お願いします！」顔を上げて、強い光を宿した瞳であたしとアリサとティアナを見た。

「そんで、ティアナ」

「はい？」

「お前には悪いと思ってる。フォワードのリーダーとして、この事件の最後までフォワードを率いてほしかったんだがな。悪ぃけど、あたしの指示下に入ってもらう」

「あ、いえ！　大丈夫です、勉強させてもらいます！」

正直な話、ここまでヤバい展開になるとは思ってなかった。プライソンがここまで馬鹿な真似をするなんてな。とにかく、これ以上悪い方へ転ぶわけにはいかねぇ。さっさと列車砲を片付けねぇと。

「ヴィータ副隊長！　列車砲が見えてきました！」

操縦席のアルトから報告が入った。装甲列車の屋根に備え付けられた砲台を警戒したあたしは「ここまでいい！　ハッチを開けてくれ！」指示を出した。

「了解です！」

「防護服着用！」

あたし達はそれぞれデバイスを起動して、制服から防護服へと変身。徐々に開いて行くハッチから、列車砲と装甲列車が遠目だが見えた。ギンガが「大きい・・・！」って、遠目でも判るほどの巨大さに戦いた。そんな列車砲の巨大な砲塔２門からまた「巡航ミサイル・・・！」が撃たれた。

「アルト、お前はすぐに避難しろ！　よし、行くぞ！」

「お気を付けて！」

ある程度まで高度を下げたヘリのハッチからあたし達は飛び降りた。だだっ広い荒野地区に似つかわしくない馬鹿デカイ人工物。４ｋｍほど離れてんのに、それでもその巨体さを見せつけて来る。そりゃ視界を遮る木々や建造物が全く無ぇ荒野地区だかんな。今すぐにでも突っ込みてぇけど、まだ陸士隊が到着してねぇから、しばらくはここで待機だ。

「――また、ミサイルが・・・！」

戦力が整う前に、列車砲から巡航ミサイルが発射され続ける。はやて達がクラナガンでゆりかごや護衛艦、それに戦闘機隊と交戦しながらも対処してくれるって話だが、それもいつまで続けられるか判んねぇ。

「ヴィータ。これ以上は、いたずらに首都への被害を大きくするだけだと思うわ」

「判ってるよ、んなこと・・・」

クイント准陸尉たちを相手にしながら、装甲列車の射砲撃に注意を払い、そんで列車砲と装甲列車を破壊する。きっちぃな～。もう少し戦力が欲しいところだぜ。とまぁ、そんな風に考えていたところに・・・

『こちら第零技術部、チンク・スカリエッティ二尉とセイン・スカリエッティ曹長。これより列車砲攻略戦に参加します』

チンクから通信が入った。スカラボに懇意にしてもらってるあたしとアリサ、それにスバルとギンガは驚いた。ドクターが殺害されて間もないっつうのに、コイツらはちゃんと局員として、前線に出張って来たんだ。あぁ、すげぇよ。けどやっぱ、目が赤く腫れてる。

「いや、正直うれしいけどさ。本当に大丈夫なの？　その・・・」

『十分、泣いたよ。それに、ここでリタイアするとドクターから叱られる。さらに言えば、喪に服すのはこの一件を片付けてからだ。そうしたら、涸れるまで泣かせてもらうよ』

『早く弔ってあげるために、あたし達シスターズも改めて本格参戦するんだよ』

心配そうに訊いたアリサに、チンクとセインはしっかりとした口調で答えた。だったらこっちも今だけは下手に慰めはしねぇから、「そんじゃ頼むわ。あとどれくらいで到着だ？」って遠慮なしで行くことにした。

『もうすぐだ』

遠くの方から風切り音がフェードインして来た。後方を見ると、「なんだアレ・・・！？」バイクのようなモンが向かって来るんだが、普通の二輪に出せられるスピードじゃねぇし、何よりタイヤが無ぇ。本来、前輪があるはず部分に在んのは、横に寝かされた状態のタイヤ。

「どう見ても市販品じゃないわね・・・」

本体後部の両サイドには、足を乗せるための足場があって、その後部にはブースターが付いてる。どうやら後部ブースターが推進力で、前輪の横タイヤはおそらく浮揚力を担うブースターなんだろ。何せ、空を飛んでやがるからな。後部末端には尾翼と垂直翼。アリサの言うように市販品じゃねぇな、こりゃ。

「お待たせ～！」

「途中で陸士部隊を追い抜いて来たが・・・。やはり行動が遅い」

そんな空飛ぶバイクのハンドルを握ってんのはセインで、タンデムシートの後ろにチンクが座ってた。ヒューンと出力を抑えたような音を発しながらバイクはゴトッと岩場に着陸した。

「地上本部から来たんだろ？　そんで南部の陸士隊を追い抜いて来たとか。どんだけ速いんだよ。つうかコレ、完全に違法だかんな」

「許せ、ヴィータ。局の車に乗られていては日が暮れる。故にドクターのオモチャ――エアロチェイサー試作機を引っ張り出して来たのだ」

チンクがエアロチェイサーっつう名前のバイクのシートを軽く撫でた。目はとても寂しそうだ。一度目を伏せて、開けた時にはもうキリッとした強い目に戻っていた。そんで「それで？　どうする、これから」っていう問いに答える前に、「チッ。また撃ちやがった！」

巡航ミサイルが2発、首都へ向けて撃たれた。

「これ以上は待っていられねぇし。・・・しょうがない。このメンツだけで仕掛けるぞ！」

スバルとギンガは変わらずクイント准陸尉を相手にしてもらう。残りは全員、ノーヴェ達を瞬殺するために動く。セインが「兵器は後回し？　あたしのスキルで潜航しようか？」って挙手してきたが、「却下」だ。

「デルタが内部に居る可能性がある。どんな戦術を執るか判んねぇ奴の居る列車砲の中に、お前1人を送るわけにはいかねぇよ。だったら他の戦力を無力化して、外に引っ張り出すのがベターだ」

本当はさっさと乗り込んで直接この手で引っ張り出してやりてぇが、変にカウンターを貰って返り討ちされるのも洒落になんねぇしな。つうわけで、「手筈通りによろしく頼むぜ」あたし達も交戦状態に入ることに。

「行くぞ！」

「「ウイングロード！」」

スバルとギンガは帯状魔法陣の道を空中に描いて、ティアナはチンクとセインと一緒にエアロチェイサーに乗って（最大2人用らしく、ティアナとチンクは立ち乗りだ）、あたしとアリサは地面スレスレを飛んで、列車砲と装甲列車の元へ向かった。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒シグナム†††

"聖王のゆりかご"の有する兵装からの攻撃が及ばない後部を護衛する巨大な艦、"アンドレアルフス"。ゆりかごの弱点である後部からの攻勢を妨げる為だけに建造されたと言っても過言ではあるまい。その制圧を任された私とエリオとキャロは、主はやて達と共にガジェットや戦闘機の撃破を続けながら、"アンドレアルフス"内への侵入を試みることになっているが・・・。

「はぁぁぁぁ！！」

――紫電一閃――

"レヴァンティン"の剣身に炎を纏わせての直接斬撃で、ガジェットのⅡ型を数機と連続で斬り払う。今回、姿を見せたⅡ型の兵装はビーム兵器のみ。レールガンもミサイルポッドも積んでいないため、労することなく破壊が出来る。

『ルシル君！　巡航ミサイルが接近中！　予測進路が出た、迎撃をお願いや！』

我々、六課の航空戦チームと、協力をしてくれている味方部隊に全体通信が入る。それは主はやてからルシルへの指示だった。南部の荒野地区に陣取っている列車砲・"ディアボロス"の有する巨大レールガン・"ウォルカーヌス"２門から放たれて来る巨大巡航ミサイルの迎撃を、ルシルが一手に引き受けている。

『次は！』

『中央区画のポイントＸ－４０！　商業地区や！』

地上本部への攻撃だけであれば苦労は無いのだが。今になって巡航ミサイルを中央区画全体に留まらず、東部と西部にも撃ち込み始めた。東部と西部の防衛は距離的な問題で、残念ながら素通りさせるしかない。一応、教会騎士団の精鋭が各地に散っていることもあり、今は彼らを信じるしかないだろう。そしてルシルは、中央区画全体を防衛することになり、これからまた迎撃に出る。

『まだ避難が済んでいない地区か・・・！　了解！　誰か、援護を頼む！』

『私が担当しよう』

『よろしく頼むよ、トーレ』

ルシルと、そしてトーレ・スカリエッティからの返答が入った。航空兵器戦開始から少し、すずかとトーレも参戦した。他のシスターズも、プライソンのアジトや列車砲攻略に向かったというのも聞かされている。今は少しでも空戦の出来る戦力が欲しかったところでの、Ｓ＋ランク相当の技量を持つトーレの参戦は喜ばしい事だった。

『ルシル君とトーレが抜けてる間、しっかりと空を押さえるよ！』

ガジェットと戦闘機隊の数は減ることを知らず、破壊すればするほど補充するかのように、ゆりかごからはガジェット、"アンドレアルフス"の滑走路からは、戦闘機隊が続々と飛び立って行く。

（エリオとキャロ、トリシュタンは上手くやれているだろうか・・・）

あの子たちは対戦闘機隊を専門として、この空域のどこかを飛び回っている。戦闘機の基本兵装として強力なＡＭＦが積まれている。私とヴィータの副隊長は、主はやてからの許可で、主はやてとなのはとフェイトの隊長は、調査官としてのルシルの許可で、これまで私たちを縛っていたリミッターを解除した。ゆえにそう大して苦戦するような相手ではないが、やはりどうしても影響を受けるのも事実。その影響を受けにくいのが、魔法ではない純粋な物理攻撃であるドラゴンブレスというわけだ。

『シグナム、アイリ！　そっちにアンドラス1機が逃げた！　3時の方向から来るはずだから、追撃よろしく！』

「了解だ」「はーい！」

ヴァイスの操縦するヘリからの狙撃による味方部隊のサポートをしているアリシアから、攻撃機の破壊を頼まれた。私の側には中遠距離系のサポートとしてアイリが居り、共に3時の方向へと目をやる。ゆりかごや"アンドレアルフス"の周囲には、3ケタの航空魔導師と、敵航空兵器が4ケタの大乱戦。

「捉えた！　行くぞ、アイリ！」

「ヤー！」

その中でなんとか捉えられた"アンドラス"の機影。Ⅱ型の隙間を縫うようにこちらへ向かい、左右の主翼下のウェポンベイより空対地ミサイル（ルシルからの解説で、無駄にどんどん詳しくなってしまう）を2発と投下した。"アンドラス"は攻撃機ということもあり、戦闘開始から掩護機の"シャックス"を伴って地上へ向けて爆撃を行っていた。

「アイリ！」

「コード・シャルギエル！」

地上へ向けて落下しているミサイル2発へと氷槍を8本と発射。誘導性の無いミサイルのおかげで全弾が直撃。瞬時に凍結されて地上へ落ちる前に砕け散った。次は私の仕事だ。"レヴァンティン"を鞘に納め、「カートリッジロード！」をする。

（この日の為に、刃を徹底的に研いだのだ）

人ではない金属の塊であるなら、物理破壊設定で攻撃を行える。足元に魔法陣の足場を作り出して降り立ち、居合抜きの構えを取る。

――ヒルンダプス・カウダクトゥス――

魔法陣を蹴って、私の最速の移動魔法で"アンドラス"へと跳ぶ。私の接近にしっかりと反応し、"レヴァンティン"の攻撃範囲から逃れようと機首を上げて方向転換を試みようとしたが・・・

――レフレクスィオーン・ファーネ――

どこからともなくミサイルが3発と飛来して、"アンドラス"上に着弾して爆発。そのおかげで再び私の攻撃範囲へと無理やり戻された。

「紫電・・・！」

鞘内に溜めていた魔力を爆発させ・・・

「清霜！」

"レヴァンティン"を抜き放つ。その爆発力で抜刀時の速度を引き上げ、破壊力・切断力を急激に高める、一撃必殺の斬撃だ。すれ違いざまに一太刀を入れ、"アンドラス"を縦に真っ二つに斬り捨てた。私を通り過ぎて行った機体は、僅か後に爆散した。

「礼を言う、アンジェリエ！」

先ほどのミサイルによる援護。あれはおそらくアンジェリエのものだ。その姿を探しだして目をやると、朱色の魔力で作られた旗地を展開した状態の旗型デバイス・"ジークファーネ"を持つ彼女が小さくお辞儀した。使用魔法によっては物理系や魔力の飛び道具を、

狙った場所に逸らし返すことを可能とし、あの旗地1つで打撃・斬撃・防御・拘束と多彩な戦術が執れる。

『シグナム、アイリ。ポイントB－11のガジェット部隊の処理をお願いや』

「了解です」「了解！」

主はやてからの指示に応じ、私とアイリは指定ポイントへと翔ける。ポイントに到着するまでの間、戦闘機やⅡ型が続々と撃墜されて行く様を見る。どれだけ強力な戦闘機だろうと、リミッターを解除されたなのはやフェイト、そしてシャルを筆頭とした鍛え抜かれた空戦騎士の前にはただの的でしかないようだ。

（エリオ、キャロ・・・！）

真の姿となっているフリードリヒの鞍に跨るエリオとキャロが、ワイバーンという竜の鞍に跨るトリシュタンに付いて空を翔け回り、戦闘機を中心に撃墜して行っている。言葉ではなく視線だけを交わして、私とアイリは指定ポイントへと向かう。

『こちらルシリオンとトーレ。巡航ミサイルの防御に成功した。これより航空戦力の迎撃戦に再参加する』

ルシルとトーレが無事に仕事を果たして戻って来たと報せる通信が入った。かなり遠いが早速、蒼い魔力爆発が発生し始めたのが確認できる。

『了解。おおきにな、２人とも。ポイントＣ－０１で、戦闘機シームルグの一団が暴れてる。武装隊も騎士隊も手一杯で、なかなか手を付けられへんのや。しかもこれまでのシームルグとは一線を画す機動力と防御力ときた。おそらく本隊なんやろうね、カラーも金色に統一されてるし。護衛艦アンドレアルフスに突入するには、どうしても邪魔やし・・・。お願い出来るか？』

『了解した。すまないが、アイリを借りたい。外のガラクタどもを、一気に片付ける』

『・・・トーレ。アイリと交代してシグナムと一緒に迎撃にあたってもらえるか？』

『お前たちとは長い付き合いだ、何も問題はない』

ここでアイリとは一旦の別れだ。私とアイリはコツンと拳を突き合わせて、「しっかりね」と言って去って行くアイリに、「お前もな」と返した。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒シャマル†††

「これ以上の進軍を許すな！　ミッド陸士武装隊の底力を見せてやれ！」

私とザフィーラは、対陸戦兵器戦のメンバーとして地上の武装隊と合流。中央区画、東部、西部、北部、南部、それぞれに戦車と装甲

車が出現した。それを片付けるのがお仕事の内容。教会騎士団も各地に散開しているとのことだけど、ここにはまだ到着していない。

――シュートバレット――

――シュートバスター――

普段は縄張り争いなどをしている陸士隊が、共通の危機と敵を前にして今は協力して事に当たってる。基礎中の基礎である射砲撃を撃ち続け、戦車・装甲車やＩ型に攻撃を繰り返す。Ｉ型はＡＭＦを積んでいるけど、射砲撃の集中砲火を浴びればどうしようもなく爆散する。戦車と装甲車は、ガジェットや戦闘機と違ってＡＭＦを積んでいないみたい。とは言え、物理破壊設定の魔法でもビクともしない装甲の厚さだけど・・・。

「また・・・！」

戦車と装甲車は2台1組で行動していて、戦車がエネルギー砲撃（質量兵器の砲弾じゃないのよね・・・）を撃っている間、無防備なその巨体を援護するのが装甲車の機関銃（これもエネルギー弾）。さらにガジェットのＩ型が統制の取れた歩兵パレードの如く進軍して来る。エネルギービームの雨あられ。本当いい加減にしてほしいわ。

「えいっ！」

――ペンダルシュラーク――

両手の人差し指と薬指にはめた４つの指輪・"クラールヴィント"から伸びてる魔力ワイヤーを槍のように勢いよく伸ばして、先端に付いてる宝石の振り子でガジェットＩ型を攻撃。ＡＭＦに少しだけ拒まれたけど、ヴァリアブルシュートのように対ＡＭＦの魔力コーティングをした振り子を最後まで拒みきれずに、自身への直撃を許した。爆散するＩ型から振り子を戻した時、「この！」装甲車の砲塔から、砲弾状のエネルギー弾が２発連続で発射された。

「防御担当！　一斉シールド展開！」

――ラウンドシールド×２０――

「クラールヴィント！　負けていられないわよ！」

――風の護楯――

１発目は武装隊の複層シールドで、２発目は私のシールドで防げた。戦車と装甲車は、ほぼ無差別に攻撃を仕掛ける所為で、建造物にも容赦なく被害が出始めてる。だから私や他の武装隊の魔導師が防御を行って、可能な限り建造物を護る。民間人の避難は続けているけれど、まだ完全じゃない。一応、この周囲一帯の避難は終えているけど、だからって建造物に被害を出していいわけじゃない。

「ザフィーラ、装甲車を転ばして！」

「承知した！」

――鋼の軛――

まずは戦車を護る装甲車を攻略する。拘束杭を車体の真下、右側辺りから突き出させた。片輪装甲でなんとか持ちこたえていたけど、「撃って！」私の声に応じてくれた武装隊の射砲撃が着弾して、装甲車が大きな音を立てて横転した。ちょうど屋根の部分がこっちに向いているわね。

「今なら・・・！」

8輪の装甲車には兵装が3つある。砲台から伸びる砲塔が1基、車でいう運転席と助手席の窓にあたる所には銃塔があって、そこから伸びた機関銃が2挺。内1挺は横転したことで下敷きになってる。

――縛り断ち――

"クラールヴィント"から伸ばした魔力ワイヤーで、残りの砲塔と機関銃を縛る。しっかりと巻き付いたのを確認して、「えーい！」右腕を勢いよく退く。物理破壊設定限定で使えるこの魔法は、拘束した物（昔は敵の騎士もだったけど）をワイヤーで締め付けて輪切りにするというもの。とは言っても、あまり大きな物は輪切りには出来ないのよね。

「シャマル、狙われているぞ！」

――狼王の鋼鎧・剛――

戦車の砲門が私に向いていたことに、ザフィーラに言われて気が付いた。砲門奥に白い光が生まれた。次の瞬間、砲弾状の砲撃が発射された。でも私と砲弾の間にザフィーラが割って入ってくれて、代わりに直撃を受けた。爆炎と爆風で「きゃあ！」私や、「うわぁぁ！」近くに居た隊員たちが吹き飛ばされてしまった。

「ザフィーラ！」

黒煙に向かって呼び掛けた直後に、黒煙を穿って砲撃が飛んで来た。防御魔法を展開するにはもう手遅れだから、頭を両手で押さえてその場に蹲った。頭上を通り過ぎて行ったのが衝撃波で判り、さらに言えば被っていた帽子が吹き飛ぶのも判った。直後にドォーン！と背後で爆発音が轟いて、悲鳴も次々と上がった。

『まずいぞ、シャマル！　戦車と装甲車の援軍だ！』

晴れ始めた噴煙の中からザフィーラが飛び出して来て、思念通話でそんな最悪な報せをしてくれた。４車線道路の奥、さっきまで相手にしていた戦車の後方に、新たな戦車と装甲車がＩ型を引き連れて向かって来ていたのが見えた。

「そんな・・・」

心が折れそうになったけど、かぶりを振って身構える。武装隊だって怯まずにＩ型を始めとして攻撃を与えているわ。機動六課の一員として、ここで逃げるわけにはいかない。そう覚悟を決めて、交戦

に入ろうとしたその時・・・

「カッカッカ！　よもや質量兵器との戦いとは。幼き日を思い出すのぅ！」

しわがれつつも子供のように弾んだ声が、空高くから聞こえて来た。みんな揃って頭上を仰ぎ見る。空から人が降って来るのが判る。徐々に人影が大きくなっていって、それが誰なのかを思い出すのに数瞬。思い出すのとほぼ同時、その人は最初に戦っていた戦車の上に墜落した。

「んな・・・！」

一体どれだけの重量だったのか。その人が墜落したことで、戦車が大きく潰れてしまった。その人は「うむ。着地も無事に成功！　カッカッカ！」笑い声を上げながら地面へと降り立った。そして・・・

「機動六課の八神シャマル先生と、守護獣ザフィーラ殿ですな？吾輩は聖王教会騎士団、銀薔薇騎士隊が一、ライオネル・ブンテンバッハ。教皇マリアンネ聖下の命の下、そなたらの力となるべく参上仕った」

自己紹介と、ここへ来た理由を話してくれた。そう、教会騎士団の中でも最強の精鋭部隊ズィルバーン・ローゼに所属する騎士。手に２ｍほどのバトルアックスを携える、斧を武装とする騎士の頂点であるパラディン。騎士ライオネル、その人だ。身長は２ｍ半くらい

あって、その巨体さだけで圧倒されちゃう。

「あ、はい。よ、よろしくお願いいたします！」

私が深くお辞儀をすると「うむ！　かような美女に頭を下げられては、張り切るしかなかろうて！」バトルアックスを肩に担いで、援軍の戦車と装甲車に向き直った。フリューテッドアーマーなんて、時代錯誤な本格的な甲冑を身に包んだ騎士ライオネルは、陽に焼けた禿頭を左手で撫で、側に落ちていたグレイト・ヘルムを手に取って被った。

「では参ろうか！」

柄を両手で握り締めてグッと腰を落とした騎士ライオネルは、「いざ！」その掛け声と共に戦車と装甲車に向かって突撃した。見るからに重そうな甲冑なのに、軽やかに速度を上げて駆けて行く。でもあまりにも無謀な行為。戦車と装甲車の砲塔が騎士ライオネルへと向けられ、そして砲弾が発射された。

「危な――」

最後まで言い切る前に、騎士ライオネルは薄紅色の魔力が付加されたバトルアックスで迎撃。軽々と振るって、エネルギーの塊である砲弾を寸断した。足を止めることなくまずは戦車へ最接近。

「鉄塊など、何の脅威にもならぬわ！」

バトルアックスで砲塔をスパッと斬り落とした後、そのまま車体を駆け昇るとバトルアックスを振り上げて、「ふん！」と勢いよく振り降ろした。その一撃で、戦車は大きくひしゃげて無力化された。

「すごい・・・」

「次！」

装甲車の機銃攻撃をガンガン当てられながらもビクともせず、騎士ライオネルは装甲車へと向かってジャンプした。装甲車がバックを始めたから「逃がさん！」ザフィーラが鋼の軛を発動して、退路を塞いだ。

「おお！　礼を言うぞ、ザフィーラ殿！」

騎士ライオネルは振り上げたバトルアックスを振り降ろし、装甲車もまた大きく潰して無力化した。そして「なんじゃい、つまらん。もっと骨のある兵器は居らんのか？」と言って、今度はガジェットの群れに単独で突撃して行った。そこからは一方的な戦闘、というより破壊行動だった。

「これがパラディン・・・」

「ここまで心強い味方など、そうは居らんな」

ザフィーラの言葉に、私はただ「そうね」頷くことしか出来なかった。

Ｅｐｉｃ２４－Ａ列車砲ディアボロス攻略戦～Ｓｙｃｏｒａｘ１～

†††Ｓｉｄｅティアナ†††

列車砲・"ディアボロス"と装甲列車・"ケルベロス"と"オルトロス"の破壊を任された機動六課のヴィータ副隊長、アリサさん、スバル、ギンガさん、そしてあたしは、第零技術部のチンク二尉とセイン曹長と共に、列車砲へと攻撃を仕掛けることに。

『ヴィータ副隊長。装甲列車の先頭部分から、クイント准陸尉らが降りて来たのが確認できます。武装を持っているので、おそらく迎撃態勢に入っているのかと思われます』

あたし達をヘリでここまで乗せて来てくれたアルトさんから、相手の状況を知らせる通信が入った。アルトさんは装甲列車の対空兵装に巻き込まれないように、下がっていたはずなんだけど・・・。

「判った。ありがとな、アルト」

『はいっ。では、これより現空域より離脱します。皆さん、お気を付けて』

アルトさんとの通信が切れる。スバルとギンガさんの母親であるクイント准陸尉、それにチンク二尉とセイン曹長の妹にあたるノーヴェ達が武装した状態で姿を見せた。それはつまり「やっぱバレるよ

な、そりゃ」ヴィータ副隊長の言う通り、あたし達の迎撃をするためだって考えていい。

「逆に言えば、装甲列車の兵装で門前払いされるよりはマシというわけだ」

チンク二尉がそう言った。あたし、それは正直考えていなかった。でもよく考えれば普通に思い至りそうなものなのに。どうかしてたわ・・・。まぁ、ヴィータ副隊長の「どの道、全部を破壊すんだ。順番が変わるだけだ」って言葉通り、最終的には結果は変わらない。あぁ、だから門前払いって問題が出て来なかったんだわ。

「お。チンク姉。ディエチが砲門をこっちに向けて、エネルギーチャージを始めたよ！」

あたしとチンク二尉の乗ってる空飛ぶバイク・エアチェイサーを操縦しているセイン曹長がそう言った。サイボーグ化されたことで、視界のズームアップも可能だっていうのはスバルから聞いてる。だから「あたしも確認できました！」スバルも言った。

「砲撃の速度は、一度だけだが見てる。この距離だとすぐに到達するな。放たれたと思ったら、各自の判断で回避しろ！」

――ＩＳヘヴィーバレル――

ヴィータ副隊長からの指示を聴いた直後に、「撃ちました！」ギンガさんが声を上げた。遠くから迫り来る砲撃の光をあたしも視認で

きた。以前は推定Ｓランクのエネルギー量だった。あたしじゃどう足掻いたって防げない威力。

「しっかり掴まって、ティアナ！　チンク姉も振り落とされないようにね！」

「は、はい！」「ああ！」

"クロスミラージュ"を腰のホルスターに収めて、セイン曹長の両肩に手を置く。チンク二尉はあたしのお腹に手を回した。そしてエアチェイサーはガクッと進路を変えて射線上から離脱。スバルとギンガさんもウイングロードの軌道を変えて離脱。ヴィータ副隊長とアリサさんもそれぞれ軌道修正して離脱した。そして、ディエチの砲撃がさっきまであたし達が居たところを通過して行った。

「２射目が来ます！」

「あたしがカウンターを食らわせてやるわ！　フレイムアイズ！」

≪やっと出番か！　鈍っちまうよ！≫

アリサさんの"フレイムアイズ"がちょっと文句を言いながら通常の剣形態から銃剣形態に変形して、アリサさんが銃口を列車砲の方角へ向けた。

「イジェクティブ・ファイア！」

そして火炎砲撃を発射。すごい熱波があたし達まで届く。ディエチの砲撃とアリサさんの砲撃が交差して、こっち回避。向こうはドォーンと爆炎が上がった。そのやり取りで、砲撃が中断された。装甲列車からも攻撃が来ないし、そのまま列車砲の周囲２０ｍ圏内に侵入できた。

「あら。また会ったわね。ここまで来た以上、以前みたく引き下がることは出来ないから、覚悟はしておいてね」

「母さん」「お母さん」

クイント准陸尉がスバルとギンガさんに声を掛けて、２人がそう呼び返すと、「はあ？　お前らの母さんじゃねぇし！」ガラの悪い赤毛の娘ノーヴェが反論する。ボードを持つ娘ウェンディも「そうっスよ！　あたしらのママりんっスからね！」そう続けた。

「ち、違うよ！　お母さんは、あたしとギン姉のお母さんだよ！」

「あはは。知らない娘にまで人気過ぎて、参っちゃうね～」

スバルも熱くなって反論。でもギンガさんは「洗脳されている以上、今は何を言っても無駄よ、スバル」冷静さを失わせていない。

「それにね、スバル。私たちの出生から考えて、ノーヴェ達と私たちは姉妹関係になると思う。ここには居ない、セッテ達やアルファ達も同様にね」

「っ・・・！」

スバルやギンガさん、そしてプライソン一派のサイボーグはみんな、プライソンの手によって生み出されて、そしてサイボーグ化された。血の繋がりはないけど、生みの親的なもので考えればプライソンが父親で、スバル達みんなが子供ということになる。

「だから、まとめて助けてあげないと・・・！」

「・・・。う、うんっ」

「スバルとギンガさんは、あくまでクイントさんの保護を最優先にお願いします」

「ティアナの言う通りだ、スバル、ギンガ。お前らの妹は、あたしらが保護するからな」

あたしは"クロスミラージュ"２挺を砲塔を構えたままのディエチ（戦闘不能にはなっていなかったのね）に向け、ヴィータ副隊長は"グラーフアイゼン"をノーヴェに向かって突き出した。

「ハッ、やってみろよチビ！　ウェンディ、行くぞ！　ディエチはサポートだ！」

「了解っス♪」「了解」

ノーヴェとウェンディが構えを取って臨戦態勢に入ったところで、

ヴィータ副隊長が「セイン！　クイント准陸尉を遠くまで運べ！」指示を出した。

「了解！　ＩＳディープダイバー！」

セイン曹長が音も無く地面の中に潜って行った。あたし達はここに来るまでにチンク二尉とセイン曹長のスキルを聴いていたから驚きはしない。なのに「っ！？」ノーヴェ達が驚くのはどうしてなのかしら。チンク二尉たちシスターズは、プライソンのアジトに侵入した。ならその時の戦闘データが、ノーヴェ達にも送られてるはず・・・。

「え・・・？」

クイント准陸尉の背後、足元からセイン曹長が飛び出して来て、クイント准陸尉を羽交い締め。スバルとギンガさんに向けて、目線で列車砲の背後を見やった。そして今度はクイント准陸尉と一緒に地面に潜った。セイン曹長の視線にはあたし達も気付いているから・・・

「ギンガ、スバル！」

「往けっ！」

「往って！」

――クロスファイアシュート――

アリサさんとヴィータ副隊長がノーヴェ達に向かって行って、あたしは制圧射撃でスバルとギンガさんを援護する。少しでも2人が安全に列車砲の背後に回れるように。でも上空からノーヴェ達の前にあの子が、「デルタ・・・！」が降って来た。手に持つ巨大なハンマーの一振りで、あたしの13発の魔力弾を薙ぎ払い、その風圧でヴィータ副隊長とアリサさんもこちらに戻された。

「「デルタ・・・」」

「スバルとティアナ、だったよね。この前はありがと。ゲーセンで獲ってもらったあのパンダのぬいぐるみ、ちゃんとデルタの部屋に飾ってあるよ。でもデルタと2人は敵同士。プライソン・・・、パパの願いのためなら、この命だって懸けられるし、どんな命だって奪える。だから・・・ごめんね」

最初は申し訳なさそうに沈んだ顔と声だったデルタだけど、ハンマーを肩に担いだ時にはもう、完全に敵としてあたし達を見ていた。そして1人でこっちに向かって来て、「スバル、ギンガ！　ここはいいから往け！」ヴィータ副隊長が突っ込む。

「フレイムバレット！」

アリサさんは横に大きく跳びつつ、ノーヴェ達に火炎弾を6発と連射。あたしも2挺のクロスミラージュから「シュートバレット！」を撃ち続け、チンク二尉も「ＩＳ発動！　ランブルデトネイター！」投げナイフを8本と投擲した。

「ＩＳ発動！　ブレイクライナーー！」

――エアライナーーー

ノーヴェは、スバルやギンガさんのウイングロードのようなモノを発動して空に上がり、ウェンディはボードを盾のようにして構え、ディエチはそんなウェンディの後ろに身を隠した。そしてあたし達の攻撃がボードや周囲の地面に着弾して爆発、生まれた噴煙に呑まれた。

「おらぁぁぁぁッ！」

――テートリヒ・シュラーク――

「どりゃぁぁぁぁッ！」

遅れてヴィータ副隊長の"グラーフアイゼン"とデルタのハンマーが衝突。衝撃波が２人の間で発生して、「うわあ！」ヴィータ副隊長がこっちに吹き飛ばされて来て、「ちょっと！」アリサさんが咄嗟に受け止めた。対するデルタは「おっとっとい」ほんの少し後ろによろめいただけだった。

「とにかく今よ！」

「はいっ！」

「後はお願いします！」

――ウイングロード――

スバルとギンガさんが環状魔法陣の道、ウイングロードを発動して、列車砲に比べて車体の低い装甲列車の真上を通って行った。正直、装甲列車の砲撃の迎撃を警戒したけど何も起きなかった。そう思ったのも束の間・・・

「あ・・・！」

列車砲のレールガン2門から巡航ミサイルが立て続けに2発と発射された。とんでもない衝撃波が襲ってきて「きゃあああ！」あたし達や、晴れ始めてた砂煙を吹き飛ばし、「うおおおお！？」空を駆けていたノーヴェが「わぁぁぁぁ！？」地面に落下して、ウェンディやディエチは吹き飛ばされた。

「いたた。・・・『スバル、ギンガさん！』」

あたしは強く打ったお尻を撫でながら、すぐに2人に念話を繋げた。2人のウイングロードは消えてしまっている。ノーヴェみたいに墜落したのかもしれないって、心配になって・・・。

『あたしとギン姉は大丈夫！』

『これから母さんと交戦に入るわ。ティアナ、アリサさん、ヴィータ副隊長。チンク二尉、セイン曹長、よろしくお願いします』

２人は無事だったみたい。ヴィータ副隊長が『おう！　任せとけ！』そう応じると、念話はそのまま切れた。これでクイントさんは大丈夫なはず。なら後はあたし達の役目を果たすだけ。

「こらー！　デルタ！　ミサイル撃つんなら、カウントダウンくらいしろ！」

「そうっス！　危うく戦闘不能になるところだったっスよ！」

いきなりの発射で文句を言うノーヴェとウェンディだけど、どういうわけか目の前に居るデルタじゃなくて、わざわざ列車砲に振り返ってるわね。なんの違いがあるわけ・・・。デルタはデルタで悪びれる様子もないし。

「悪ぃ、お前ら。ノーヴェ達はお前らで対処してくれ。デルタは、あたしがやる」

「えっと～、八神ヴィータ。古代ベルカ式の騎士。空戦ＡＡＡ＋・・・だったっけ？　デルタを１人で相手に出来ると思ってる？　殺すよ？」

「・・・っ！？」

あたしがあのハンマーに叩き潰される様を幻視した。冷や汗がドッと溢れ出して、「はぁはぁはぁ！」呼吸が苦しくなって、涙も出て来た。チンク二尉が「落ち付け、ティアナ二士。しっかり深呼吸を

しろ」と、肩に手を置いてくれた。言われるままに深呼吸を繰り返して、なんとか落ち着くことが出来た。

「上等だよ、てめぇ。同じ鉄槌使いの先駆けとして、キッチリ格の違いを見せてつけてやんよ！　来い！」

「先輩後輩で括ると痛い目を見るよ♪」

ヴィータ副隊長がデルタを引き連れて西へ向かって飛び立った。そっちに目をやっていると、アリサさんが「危ない！」あたしの目の前に躍り出て、「せいっ！」"フレイムアイズ"を振るった。

「あー、惜しかったっスね。あともうちょいで、あたしのエリアルショットがそこのツインテに当たっていたのに」

その一閃で振り払ったのは、ウェンディのエネルギー弾だった。あたしはアリサさんの背中に向かって「ありがとうございます！」お礼を言った。

「ティアナ。戦況の移り変わりは激しいわ。油断しないようにね」

「はい、了解です！」

アリサさんの隣に並び立って、ダガーモードにした"クロスミラージュ"2挺を構える。チンク二尉も投げナイフを指の間に8本と挟み込んで、「ただいま帰還～」セイン曹長も戻って来た。

「ハッ。上等だよ、掛かって来な！」

「ディエチは援護をお願いするっスよ～」

「いいけど。巻き込まれても文句は言わないでよ」

ノーヴェとウェンディとディエチもそれぞれ武装を構えた。そして「ＩＳ発動！」３人の足元にテンプレートが展開された。ノーヴェは「エアライナー！」で空に上がって、ウェンディは砲撃「エリアルキャノン！」を撃った。ディエチはサポートってことらしくて、砲塔を構えたまま待機している。

『セイン。ディエチを押さえろ。下手に高威力砲撃を撃たれると面倒だ』

『了解！』

その場から散開してウェンディの砲撃を回避したところで、チンク二尉の全体念話が送られてきた。敬礼したセイン曹長はすぐに地面に潜って、その姿を消した。

「おらおらぁ！」

――ガンシューター――

空に架かる道（エアライナーっていう名前みたいね）を駆け回るノーヴェの篭手からエネルギー弾が連続で放たれて来た。それらを回

避しつつ、ウェンディの「行くっスよ～！　エリアルショット！」エネルギー弾も回避。

「あたしも行くよ。ノーヴェ、ウェンディ」

――ヘヴィバレル――

「発射」

そこにディエチの砲撃。あたし達を薙ぎ払うように地面を穿ちながら向かって来る。あたしは後退じゃなくて前進することで回避。

「お返しよ！」

――シューートバレットー――

「多少の怪我は許してもらうぞ、ノーヴェ、ウェンディ！」

――ランブルデトネイターー――

「空をうろちょろと・・・！」

――フリンジングボムー――

あたしはディエチへ向けて、チンク二尉はウェンディへ向けて、アリサさんは上空を駆け回るノーヴェへ向けて大きめの火炎球を発射した。ディエチは「ハズレ！」横っ跳びで回避、ウェンディはボー

ドに乗って移動して回避、火炎球は上空で大爆発を起こして、「うおおおお！」エアライナーを粉砕したことでノーヴェが落ちて来た。地面に衝突するかどうかってところで・・・

「おーっとっとい。大丈夫っスか？ノーヴェ」

ウェンディがボードでノーヴェを拾った。

「ああ！　くっそ、あの金髪・・・！」

――エアライナーーー

ウェンディのボードの上からエアライナーを再展開して空に上がるノーヴェだけど、走り出す前に「させんよ！」チンク二尉がナイフを投擲して、ノーヴェのローラーブーツに突き刺した。ノーヴェもチンク二尉のナイフが爆発するってことは理解しているようで「うわ、うわ！」慌てて抜き取ろうとした。

――ＩＳヴァイオレントトレーナーーー

そんな時、紫色に輝く光線がそのナイフ目掛けて飛んで来て、ピンポイントでナイフを粉砕した。光線の出所の方、装甲列車の屋根へと目をやる。そこにはデルタや、敵戦力情報で見たアルファと共通するブラウスとリボンとスカートを身に付けた少女が１人いた。

「あっぶね～。サンキューー、ベータ」

「危うくノーヴェの足が吹っ飛ぶところだったっスね～」

「感謝・・・」

「「セイン！」」「セイン曹長！」

姿を見せたのはベータっていう名前のサイボーグだった。ベータの足元には、さっきと同じ色の光の縄で両脚と背中に回された両腕を拘束されたセイン曹長が寝転がされていて、「ごめーん！　捕まった～！」あたし達にそう謝った。

「無機物潜行スキル。父さんは面白いスキルだと言っていたけど、普通に脅威なんだけど。それはそうとノーヴェ。ジェットエッジはちゃんと動く？　それが無いとあなた、本当に雑魚になるから」

「う、うっせぇな！　ちゃんと動くよ！　見てろ！」

エアライナーの上をまた疾走し始めるノーヴェ。ウェンディも「そんじゃ、ベータも合わせて局員狩りっスよ！」ボードから降りて構えた。その直後、「ひゃあああ！」また巡航ミサイルが発射されて、その衝撃波によってあたし達みんなが一斉に吹き飛ばされた。

「いったた・・・。ミサイル撃たれるたびに戦闘中断って・・・」

急いで立ち上がって周囲を確認。真っ先に見えたのは、装甲列車から地面に落下していたベータとセイン曹長の姿。頭から落ちたのかお尻を突き出した体勢で、ベータのスカートが捲れて派手な黒い下

着を晒してる。なんか目のやり場に困るんだけど・・・。

「いっつ～。・・・あ、縄が解けた！　ディープダイバー！」

自由になったセイン曹長が地面に潜って、それに気付いたベータが「しまった！」バッと起き上がった。でももう手遅れで、セイン曹長は「たっだいま～！」チンク二尉の元へ帰って来た。チャンスはここしかない。

『アリサさん、チンク二尉！　煙幕とか生み出せますか？』

『え？　ええ』

『・・・ああ、任せろ』

チンク二尉が左手の指に挟んでいたナイフを地面に向けて投擲して、アリサさんも"フレイムアイズ"の銃口を地面に向けて・・・

「フリンジングボム！」

火炎球を発射。着弾して爆発が起きて、「ランブルデトネイター！」チンク二尉もナイフを爆発させた。爆炎と共に砂塵がブワッと巻き起こって、視界の状態を一気に最悪なものにした。

『出来れば、あたしの合図まで煙幕を絶やさないでください。セイン曹長。あたしを身を隠せる場所まで連れて行ってください』

『え？　おう、判った！』

セイン曹長にギュッと抱き付かれ、「行くよ！」の掛け声と同時に地面に潜った。思わずあたしは大きく息を吸ってから止めた。地面の中は、なんか水の中を泳いでるような感じ。目を開けるのがちょっと恐いから、閉じたままにしておく。

「ティアナ。着いたよ、ここならすぐにはバレないはず」

「ここは・・・？　列車砲の真下・・・！」

「しーっ！　大声禁止！　それじゃ、あたしは戻るからしっかりね」

「ありがとうございました。・・・よし」

あたしを列車砲と地面の間に連れて来てくれたセイン曹長は、また地面を潜って行った。見送った後、"クロスミラージュ"に特別製のカートリッジを1発と装填。ゴクっと唾を飲む。このカートリッジは出撃前・・・

――君たちみんなに、このカートリッジを渡しておく。いざという時のために使ってほしい。俺の魔力が込められていて、支給されるカートリッジ以上の魔力を得られるだろう――

そう言ったルシルさんから出撃組のみんなに渡された物だ。使用上の注意として、使用は1発ずつで、最短で3分のインターバルが必要とのこと。それを守れば一時的にもあたしは、未知の領域の高ラ

ンク魔力を扱えることが可能になる・・・。

「すぅ・・・はぁ・・・。カートリッジロード・・・！」

ドンッと来る圧倒的な魔力。リンカーコアが暴走しているみたいで、全身が急激に熱くなる。あたしの持続時間は魔法使用ありきで最大2分半。ルシルさんから言われた以上はおそらく間違いない。

「それだけあれば十分。フェイク・シルエット・・・！」

有り余る魔力を使って、あたしとアリサさんとチンク二尉とセイン曹長の幻影を何十体と作り出して、『アリサさん、チンク二尉、もう大丈夫です！』念話で連絡する。それで外から続いて聞こえていた爆発音が聞こえなくなった。

「先ほどからドカンドカンと、噴煙を起こすしか能が無いの？　しかもせっかくの目晦ましを利用しないで突っ立っているだけ。一体何を考え・・・て？」

「なんだよ、こりゃ・・・！」

「なんかいっぱい居るっスよ！」

「これは、幻術！？　そんな・・・！　サイボーグ（あたしたち）の目をも騙してる・・・！」

ベータ達があたしの幻術に驚愕した。あたしとアリサさんとチンク

二尉とセイン曹長、それぞれ１０体ずつの４０体を作り出した。あたしの幻術がサイボーグの目でも通用することは、スバルですでに確認済み。ただ問題は、あたしの幻術は衝撃に弱いこと。だけど、ほんの一瞬でも連中に隙を作り出せるなら、それで十分よ。

†††Ｓｉｄｅティアナ⇒アリサ†††

ティアナの作り出した幻術によって、ベータ達の動きが止まった。でもここで仕掛けるのは早いわね。あたし達が動く時は、アイツらが止まっている時じゃなくて動いている時。チンクやセインと視線で確認し合って、連中が幻影に仕掛けるのを待つ。

「どうせ幻術なんだろ！　本物に当たるまで消し飛ばしてやんよ！」

「賛成っスよ、ノーヴェ！」

「しょうがない」

ノーヴェとウェンディとディエチが真っ先に動いた。あたし達の幻影に向かってエネルギー弾を撃ち込んだり、殴ったり蹴ったりと攻撃を加え始めた。直後にティアナが操作を始めて幻影が一斉に動き出したから、あたし達もそれに合わせて動き出す。

『あたしがノーヴェを墜とすわ。一番近いし』

『では私はウェンディを止めよう』

『じゃああたしがディエチを押さえるよ』

自然とベータは後回しになった。何せアイツ、その場から動かずに幻影を観察するように目だけを動かしているから。あれは下手に仕掛けるとカウンターを食らいそうだし、まずはノーヴェ達を押さえるのが妥当だわ。幻影のチンク達に紛れて、「おらおらおら！」エネルギー弾を連射しまくるノーヴェへと接近する。

『やるなら同時に・・・！』

『承知！』『うん！』

チンクとセインも、ウェンディとディエチへ向かって行って・・・いるはず。正直、本物と幻影の見分けがつかないわ。ティアナの幻術の完成度って、かなり高いのよね。もっと鍛えれば将来的にかなり強い武器になるわ。

『あと数歩で配置に着く』

『あたしも～』

『オッケー。カウント3で、一斉に行くわよ！』

『『『3、2、1、今！』』』

――バーニングスラッシュ――

"フレイムアイズ"の剣身に炎を纏わせての直接斬撃で、ノーヴェの機動力の要であるブーツを狙う。ギンガやスバルの"リボルバーナックル"に付いてるスピナーと同じ歯車をピンポイントで斬り捨てて、さらに生み出していた炎でローラーを焼き払ってやった。

「んな・・・っ!?」

「はい。アウト〜」

驚愕に目を見開いて一切の動きを止めたノーヴェの下顎に、その場で旋回しての遠心力いっぱいの裏拳を叩き込んだ。サイボーグは体の大半を機械化しているけど脳はしっかりと存在している。揺らしてやれば、普通の人間と同じように脳震盪を起こす。ノーヴェが「ぅ、あ・・・!?」両膝を地面に付いてから四つん這いになった。

「無理はしない方がいいわよ、ノーヴェ」

「て・・・め・・・!」

「ランブルデトネイター・・・!」

「のわぁぁぁぁ!」

チンクの方も終わったみたいね。ウェンディのボードが粉々に破砕されたのが横目で確認できた。チンクのスキルって反則なのよね。触れた金属を爆発物に変えるんだから。んで、セインの方はと言うと・・・。

「げほっ、えほっ、いっ・・・、あっ、ちょっ、あたしのイノーメスカノン！　ドロボー！」

「いっただき～♪」

お腹を押さえて蹲っていたディエチが、砲塔イノーメスカノンを抱えて地面の中へ潜るセインに向かって叫んでた。次の瞬間には「チンク姉！」って、チンクの側に出現。ここでティアナの幻術が解けたことで、「よくもこんな・・・！」ベータも動いた。光の鞭をチンクの方へと伸ばして来た。

「させないわよ！」

――フォックスバット・ラン――

一足飛びの高速移動魔法を発動させて、チンクの前に躍り出る。そして「せいっ！」鞭を"フレイムアイズ"の剣身に絡ませた。その隙にチンクが「これで終わりだ！」イノーメスカノンに触れた。

「ちょっ、ダメ、壊しちゃダメ！」

ディエチが涙目で訴え掛けてきたけど、チンクは「ランブルデトネイター」無情にもスキルを発動した上で「返すぞ」ディエチじゃなくてベータに向けて放り投げた。

「爆発物は返さなくていい！」

空いてる左手にも光の鞭を作り出して、その鞭でイノーメスカノンを絡み取って「父さんの作品を、この手で壊さないといけないとは・・・！」悔しげに呻いたベータは、鞭で締めつけてバラバラにした。

「あたしの・・・イノーメスカノン・・・」

「あたしのライディングボード、ディエチのイノーメスカノン、ノーヴェのジェットエッジ。みんな壊れちゃったっス・・・」

「まだ・・・あたしの・・・ガンナックルは・・・無傷、だ！」

軽度とは言え、脳震盪を起こしてる状態で動こうとするなんて。"フレイムアイズ"は今、ベータの鞭で拘束されているけど、シールドを張れば防ぎきれるはずよ。そう考えたところで・・・

「え？・・・いっ、痛っ、いててて！」

突然ノーヴェの右腕が背中に回されて捻り上げられたかと思えば、「そこまでよ」あの子の背後にティアナが現れた。あれは術者や触れられた対象を透明にする幻術魔法・フェイク・シルエットね。

「これ以上の戦闘行為を停止しなさい」

「く・・・っそ・・・！」

ノーヴェはやっぱり立っているのも限界だったようでまた両膝を折って、そして前のめりに倒れ込んだ。ティアナはすかさずバインドでノーヴェを拘束した。ベータを除いて唯一の武装状態のノーヴェが墜ちたことで、残る脅威はベータ1人だけになった。ウェンディとディエチはもう武装が無いし、大したことはもう出来ないでしょ。

「こんな失態、父さんにどう報告すれば・・・！　もう手段は選んでいられない！　オルトロス、ケルベロスの全兵装システムを立ち上げ！　接近中の陸士部隊もろとも・・・吹き飛ばす！　デルタ！　ウォルカーヌスⅠとⅡの砲撃を、休まず撃ち続けて！」

装甲列車の屋根に設けられた二連装砲台が一斉に稼働し始めた。まずったわね。ベータが出て来た時点で、アイツの役割をすぐに考えるべきだったわ。デルタが列車砲の管制を担ってるなら、ベータが装甲列車の管制を担ってるんだって・・・。ベータの鞭を振り払おうとするけど、思った以上に絡みついていて解けない。

「お前のデバイスも、イノーメスカノンのようにバラバラにしてやる！」

「あっそう。でも残念ね。デバイスにはね、待機形態ってもんがあんのよ！」

"フレイムアイズ"を一旦、待機形態の宝石モードに戻してから後退して、ニュートラルのファルシオンフォームで再起動する。顔を真っ赤にして怒りを露わにしてるベータが「撃てっ！」号令を下した。列車砲を中心とすると、北側に立つあたし達に向けられてるだ

けで、その砲門数は計１４門。南側の車両と合わせて２８門の砲撃が、装甲列車の全武装になるわけだ。１４発のエネルギー砲撃が、ノーヴェ達に構わずにあたし達へ発射された。

「ベータ！？　あたし達がまだ退避してないっスよ！」

「ノーヴェなんて、脳震盪を起こしてる上に捕まっていて動けないのに！」

あたし達が砲撃を回避するために動き回ってる中で、ウェンディとディエチが砲撃に巻き込まれそうになっていた。だから２人は、装甲車両の直近っていう安全地帯に退避してるベータに向かって声を荒げた。

「あなたたち汎用のシコラクスシリーズは所詮、私たち特別製のスキュラシリーズを護るためだけの替えの利く壁役！　武装を失った今、その戦力など無に等しい！　なら最期くらいは、局員にしがみ付いて共に果てるくらいはしたらどう！？　そうすれば、父さんも満足するでしょ！」

「そんな・・・！」

「あたし達は仲間でしょ、ベータ・・・？」

「私にとっての仲間とは、スキュラの姉妹だけだから。さぁ、早く局員にしがみ付いて！　仲間意識とやらで、苦しまないように逝かせてあげるから」

ベータの話を聴いて、ウェンディ達はその場にへたり込んでしまった。そりゃ味方に切り捨てられたらそうなるでしょうけど。でも「今はまず、逃げなさい！」って、あたしは怒鳴った。

「ベータ！　アンタ、絶対に許さないから。味方を見捨てたアンタを、アンタ達スキュラとかいう姉妹を、あたし達は絶対に許さない。ウェンディ達や、クイント准陸尉たちの目の前に跪かせて土下座させてやるわ・・・！」

「やってみるといい！　この砲撃の雨から逃げ、なおかつ後方の陸士部隊を護りきることが出来れば、ね！」

あたし達に向けられていた１４門の砲門の内、半分の７門が遥か後方に向けられた。そして３秒とせずにエネルギーの集束が終わって、Ｓランクの匹敵するほどの砲撃が発射されてしまった。

「こちら列車砲攻略部隊、アリサ・バニングス二等陸尉です！　装甲列車による迎撃砲がそちらに向かって発射されました！　至急、回避を！」

こっちに向かって来てる陸士部隊に通信を入れてる最中に、「せいっ！」ベータの鞭が迫って来た。それを後退して躱し、間髪入れずにピンポイントで撃ってきた砲撃も横っ跳びで回避。

「ティアナ、セイン！　ノーヴェ達をどこかに退避させて！」

「りょ、了解です！」

「うんっ！」

ベータなんかに、ノーヴェ達を殺させはしないわ。チンクが「装甲列車の砲台は私に任せてくれ」って、あたしの隣に並び立った。ヴィータはデルタを引き連れて西に飛び立ってから、一切の連絡を寄越さない。そんな余裕が無いのか、デルタがそれほどまでの強さなのか、どちらにしても頼れないわ。

「頼むわよ！　ベータはあたしが撃つわ！」

「ああ！」

「あの世への片道切符は、ただいま無料で配布中よ！」

そうしてあたしはベータと一騎打ち。チンクは装甲列車の砲台攻略に動いた。

Ｅｐｉｃ２４－Ｂ列車砲ディアボロス攻略戦～Ｍｏｔｈｅｒ　＆　Ｄａｕｇｈｔｅｒｓ～

†††Ｓｉｄｅスバル†††

あたしとギン姉のお母さんであるクイントと、血の繋がりはないけどあたしやギン姉の妹に当たるノーヴェとディエチとウェンディ、そしてデルタの防衛している列車砲と装甲列車。その攻略を任されたのは、あたしとギン姉、ヴィータ副隊長とティアとアリサさん、加えて合流したチンクさんとセインの７人。

「お母さん・・・！」

あたしとギン姉の前に居るのは、亡くなったと思われてたあたし達のお母さん。ヴィータ副隊長たちのご厚意で、あたしたち娘でお母さんを救うことになった。

「なるほど。私とあなた達だけのバトルフィールドか。娘たちが向こうで待っているから、早く片を付けさせてもらうね」

お母さんはそう言って両腕に装着した、あたしやギン姉の　"リボルバーナックル"と瓜二つのデバイスのカートリッジをロードした。あたしとギン姉も、"リボルバーナックル"の「カートリッジロード！」を行う。

「・・・やっぱりソレ、私のデリンジャーナックルと同じ物だよね。

この前の地下水道での戦闘の時から気になっていたけど・・・。どこで手に入れたの？」

そう言って構えを取るお母さんに、ギン姉が「後で教えてあげます」そう答えて構えを取った。あたしも遅れて構えを取って「絶対に助けるから！」そう伝えた。

「なるほど。モヤモヤさせて私の気を逸らさせようという腹ね。戦闘には心理戦も必要だし、良い手だと思う」

ノーヴェと同じデザインで色違いのローラーブーツ、確か地下水路の戦闘の時に"ソニックセイバー"って呼んでたソレを両脚に装着してるお母さんは、「ただまぁ、それが私に通用するかどうかは判らないけど・・・ね！」って、踵部分にあるジェットノズルから魔力を噴射させて高速で接近して来た。

「スバル！」

「うんっ！」

あたしの"マッハキャリバー"と、ギン姉の"ブリッツキャリバー"も魔力を使って高速で前進。お母さんへ真っ向から向かって行く。

ＶＳ・―・―・―・―・―・―・―・―・

其は狂人に操られし愛おしき母親クイント

・―・―・―・―・―・―・―・―・ＶＳ

あたしとギン姉は、地下水路でのものや局員時代だった頃のもの、実家に残されてた学生時代のもの、お母さんの戦いを知るために集められる映像を集めて、反復視聴して頭に叩き込んだ。そして思い至った感想は、強い、さすがお母さん、だった。

「「せいっ！」」

お母さんの左拳とギン姉の回し蹴りが衝突した。その間にあたしがお母さんの背後に回り込んでの「せやっ！」ローキックで右太腿を狙う。けど当たる前に、「っく！」藍色に輝く小さなトライシールドが展開されて、あたしの蹴りを防いだ。

「次！」

足を降ろしたギン姉の声に反応して、あたしも足を降ろしてすぐさま2撃目を打ち込もうとする。それより早くお母さんは「次が楽に打ち込めるって？」あたしに裏拳を繰り出して来た。上半身を反らして躱して、すぐに上半身を跳ね上げる。真っ先に視界に入ったのは、「はっ！」ギン姉が"リボルバーナックル"による左の正拳突きをお母さんに繰り出して、お母さんが左手の平で受け止めた様だった。

「はぁぁぁぁッ！」

すかさずあたしも、ナックルスピナーを高速回転させた右の"リボルバーナックル"による拳を繰り出した。お母さんはあたしに背中を向けていたけど、「むぅ・・・！」余裕で右手の平で受け止めら

れた。

「必ず私を挟み込むような位置取り。たった二度の攻防だったけど、すぐに考え至ったわ。・・・この程度で！」

「「いたっ・・・！」」

お母さんがあたしやギン姉の拳をギュッと握りしめてきたから、思わず痛みに悶えてしまった。お母さんはさらにそのまま、"ソニックセイバー"のローラーを駆動させて高速旋回。ジャイアントスイングのようにぶんぶん振り回された後・・・

「っ・・・！」

ギン姉がまず放り投げられて、「わっ・・・！」続けざまにあたしも宙に放り投げられた。目の前にはギン姉。ぶつかる、って思ったところでギン姉が「ウイングロード！」を発動して着地して、「っと！」あたしを抱き止めてくれた。

「あ、ありがとう、ギン姉・・・！」

――ウイングロード――

「うん。って、お礼はまた後！」

ギン姉がウイングロードの先端を下方に向けて伸ばした。お母さんがウイングロードをこっちに向かって伸ばして来てるからだ。そし

てギン姉とお母さんのウイングロードの先端が激突して、バキバキってお互いに崩し合って止まった。

「「はぁぁぁぁぁッ！」」

ギン姉とお母さんが真っ向から突撃し合って、あたしもギン姉の後ろを追走する。スタンバイするのは、あたしの憧れの人であるなのはさんの砲撃魔法から名前を取らせてもらった、あたし唯一の砲撃魔法。

「せやっ！」「っらああ！」

2人は同時に跳び上がって膝蹴りを繰り出して脛同士が激突。ガツンと激しい衝突音が轟いた。ギン姉は宙に居る中でお母さんの両肩を鷲掴んで、ウイングロード上に押さえ込んだ。砲撃の準備は完了。ここでギン姉はお母さんの両肩を掴んだまま前転して、仰向けのお母さんの体が露わになった。

「ディバイン・・・！」

お母さんが反応して行動を起こす前に、左拳の前に作り出していた魔力スフィアをお母さんのお腹に押さえ付けるために拳を振り降ろそうとした時、お母さんが「惜しい。私の足を押さえるべきだった」って、"ソニックセイバー"のジェット噴射を利用して「っぐ！」あたしのお腹に右の爪先を打ってきた。

「かはっ・・・！」

あたしは空中に蹴り上げられた。お母さんはその勢いのまま首を支えに倒立して、自分の肩を鷲掴んでるギン姉の両手を払って、首だけを使っての跳ね起き。そこしかチャンスが無かったこともあって、あたしは「バスタァァァァーーーーッ！」砲撃を放った。

「おっと♪」

お母さんはギン姉のウイングロードから飛び降りることで回避して、地面に激突する前に「ウイングロード！」を発動した。あたしの砲撃は、ウイングロードを破壊しただけで終わった。あたしもすぐにウイングロードを発動して着地して、「げほっ、げほっ」蹴られたお腹を押さえて咽る。

「スバル！」

「ギン姉。ごめん、当たらなかった？」

あたしの砲撃はギン姉の至近に着弾していたから、ほんの少しでもダメージを与えていたらって・・・。あたしの心配に「私は大丈夫。立てる？」そう答えて、ギン姉が手を差し伸ばしてくれたから「うん。何とか」手を取って、立ち上がらせてもらう。そしてウイングロード上を疾走しながら、あたし達の元へ向かって来るお母さんに目を向ける。

「行くわよ、スバル！」

「うんっ！」

あたしとギン姉もそれぞれウイングロードを伸ばしつつ空を駆け回る。そして接近したところに、あたしは強化した拳による「ナックルダスター！」をお母さんに打ち込む。対するお母さんは、「うん。筋は悪くないね」右手の平でガシッと受け止めるんじゃなくて、そっと五指で包み込んだ。そのままあたしの拳に逆らうことなく、右腕を引いて後ろに受け流した。

「ただ、真っ直ぐ過ぎるのはカウンターの餌食になるから、気を付けること♪」

受け流されたことであたしは、お母さんの右脇を通り過ぎるように前進。そしてすれ違いざま、お母さんがそんなアドバイスをしてきた。鼻の奥がツンとして泣きそうになった。そんなあたしの顔のすぐ前に、お母さんのウイングロードが縦に走った。

――キッカースコルピオ――

直後、お母さんの左脚がウイングロードを走って来て、踵部分があたしの顔面目掛けて来た。お母さんが得意とするウイングロードを使っての蹴り技レールスラッシャーの1つで、元はサソリ蹴りっていう技だ。咄嗟に左腕を顔の前にまで上げて、「あぐぅ・・・！」なんとかガード。

「反応も、うん、悪くない。地下水路の頃とは大違い」

だけどその蹴りの重さに上半身が反って、あたしは慌てて体勢を立て直そうとする。それより早くナックルスピナーが唸る右の"デリンジャーナックル"による拳を、あたしの顎に目掛けて振るってきた。痺れる左腕は上がらない。伸びきってた右腕をガードに使うために戻してる中で・・・

「せえええええい！」

――ナックルバンカーーー

あたしの左側からギン姉がウイングロードで疾走しながら突っ込んで来て、ピンポイントでお母さんの右腕に一撃を打ち込んだ。拳の前面に展開した硬質フィールドごと相手に衝撃を打ち込む魔法で、相手のシールドやフィールドを抜いてダメージを与えることが出来る。

「っく・・・！」

お母さんが初めて呻き声を漏らした。お母さんの右拳はあたしの顎から逸れて、ギン姉はあたしの上を跳んでお母さんと一緒にウイングロード上から落ちた。体勢を立て直し終えて、あたしは「ギン姉、お母さん！」ウイングロードを下方に向けて伸ばしつつ疾走。

「ふんっ！」

「たあっ！」

２人はウイングロード上で殴り合いを繰り広げてた。お互いに一歩も引かない苛烈な拳に打ち込み合い。ギン姉の拳は、お母さんの手の平に受け止められたり、頭を逸らすことで躱されたりしてる。対するお母さんの拳は、ギン姉の頬やお腹にちゃんと打ち込まれてる。

（ギン姉、どうして・・・！？）

事前に話し合った作戦じゃ、１対１ではお母さんと戦わない、って決めてたのに。ギン姉はお母さんの左拳を右頬に受けて、体が横に向きそうになったその勢いで右拳をお母さんの頬に打ち込んだ。そして体を前に向ける中で左拳をお母さんの反対側の頬に打ち込もうとしたけど、それは右腕ガードに拒まれた。それで止まらないギン姉は、すぐに右拳でお母さんの鳩尾を攻撃。お母さんは僅かに動きを止めたけど・・・

「っ・・・！　ふふ・・・！」

不敵な笑みを浮かべて、すぐに反撃。フックでギン姉の頬を狙うけど、ギン姉は頭を引いて空振りさせて、すかさずお母さんの頬にもう１発打ち込んだ。でも一切よろけないお母さんもお返しと、ギン姉の頬に目掛けて右拳を繰り出したけど、「はあっ！」ギン姉は額で受けた。

「っ！」「ぐぅ・・・！」

額の骨と手の骨、どっちが丈夫なのか。答えは額の方。それはサイボーグであるあたし達にも当てはまる。だからお母さんが痛そうに

右手をぶらぶらさせてる。ギン姉の額は真っ赤で少し涙を浮かべてるけど、お母さんほどのダメージは入ってないはず。

『ギン姉！』

『ごめん、ちょっと試してみたかったの。今の私が、母さんとどこまで接近戦で付いて行けるか・・・。もう一度コンビネーションで母さんを追い詰めよう』

『うんっ！』

ギン姉は最後に、左上段蹴りをお母さんの頭部に目掛けて打った。今、お母さんは右手を痛めてるからすぐにはガード出来ない。なんて甘い考えだったことを、あたしとギン姉は知る。お母さんは右上段蹴りでギン姉の蹴りを迎撃。"ソニックセイバー"の踵部分にあるブースターの推進力が、お母さんの蹴りの威力を底上げしてたこともあって、打ち負けたギン姉が体勢を崩したところにお母さんは「たあ！」後ろ回し蹴りを打って、ギン姉を蹴り飛ばした。

「きゃああ！」

「ギン姉！　リボルバー・・・！」

ナックルスピナーを高速回転させて生み出した衝撃波を"リボルバーナックル"に纏わせる。お母さんは「知らない技。・・・面白い！」最初は目を丸くして、すぐに笑みを浮かべた。お母さんが知らなくても当たり前。

「キャノン！」

だって纏わせてた衝撃波ごと拳を打ち込むこの技は、あたしのオリジナルだから。高速突進からのあたしの一撃を見て、「さっきのアドバイス、出来れば活かしてほしかったんだけど・・・」お母さんはそう嘆息した。あたし馬鹿だけど、お母さんからの初めてのアドバイスを無視するほどじゃないよ。あたしの右側に移動して死角に入ろうとするお母さんの前で急停止。

「フェイント・・・！？」

「せやぁぁぁぁぁッ！」

そして改めて、回避した先のお母さんへ向けて一撃を繰り出す。お母さんは「っく・・・！」両腕を上げて顔面をガードした上でバリアを張った。構わずにあたしはバリアを殴って、「うぉぉぉぉッ！」勢いを止めることなく押し続ける。

「これは・・・！」

お母さんの張ったバリアを粉砕して、そのまま打ち込もうとしたけど、お母さんは後退してウイングロードから飛び降りることで躱した。新しいウイングロードを展開される前に、あたしは追撃に入る。お母さんを追って下降して、右拳を振り上げつつカートリッジロード。

「ナックルダスタァァァーーーーッ！」

ウイングロードを発動したばかりで疾走の出来なかったお母さんのお腹に打ち込んだ。

「ぐふっ・・・・！」

殴り飛ばされたお母さんは落下するんだけど、途中でまた別のウイングロードを展開。だけど今みたく疾走するより早く「まだですっ！」ギン姉が飛び上がって来て、「ぐぅ・・・」お母さんの背中に左拳を打ち込んだ。

「スバル！」

「ディバイィィン・・・・！」

体の前方に作り出した魔力スフィアを殴って「バスタァァァーーーーッ！」を放った。着弾直前にギン姉は空中回し蹴りでお母さんの背中をを蹴り上げて、確実に当たるようにしてくれた。離脱したギン姉の側を、砲撃に呑み込まれたお母さんが通り過ぎて行って地面に墜落した。

「お母さん・・・」

あたしとギン姉は、お母さんが墜落した側に降り立ってモクモクと立ち上る砂煙を見詰める。今の内の新しいカートリッジを装填しておく。これで終わっていてくれたらいいんだけど・・・。

≪魔力反応が増大して行きます！≫

≪ＡＡＡ－・・・ＡＡＡ・・・ＡＡＡ＋・・・Ｓ－！≫

あたしの"マッハキャリバー"、ギン姉の"ブリッツキャリバー"から報告が入ると同時、砂煙が一瞬にして散った。姿を見せたのは、藍色の魔力を螺旋状に放出してるお母さん。両腕の"デリンジャーナックル"や両脚の"ソニックセイバー"のスピナーを高速回転させていて、クラウチングスタートの体勢を取った。

「行くよ」

ドンッ！ていう轟音と派手な砂塵を立ち上らせたお母さんが、超高速であたしとギン姉の元に突進して来た。真っ先にギン姉に接近して、左腕を大きく振りかぶった。明らかな大振り。カウンターとしてギン姉の繰り出した正拳が先制しそう。

――ストームファング――

けどお母さんは、左腕を引いた勢いを利用して上半身を捻りながら深く伸脚しつつ、後ろ払い蹴りでギン姉を足を払った。ギン姉の体が宙に浮いたところに、立ち上がりながらの回し蹴りで「かはっ・・・！」空いていた左脇腹を蹴って吹っ飛ばした。払い蹴りからの回し蹴りっていう、お母さんの連撃技・ストームファングだ。

「次はあなたよ」

また超高速で突進して来たお母さん。迎撃はダメ。カウンターを食らう確率が高すぎる。横や後ろに移動しても追い付かれる。

（だったら・・・！）

あたしはその場でジャンプしてウイングロードを発動しようとしたところで、「えっ・・・？」足首を掴まれて、そのまま背中から地面に叩き付けられた。

「あぐ！　げほっ、ごほっ」

「はっ！」

「っ！」

お母さんは一回転した後、あたしを地面すれすれを滑空するように放り投げてきた。しかも仰向けだったから、「いたっ！」背中から落ちてゴロゴロと転がる。起き上がり途中、もうすぐ目の前にお母さんが来ていた。

――ハウンドダッシャーーーー

直感だった。お腹に向けてアッパーを繰り出されたって頭が判断する前に、両腕を咄嗟にお腹の前にクロスさせてガード。

「ぐぅ・・・！」

ガード越しに伝わる衝撃に、両足が浮いたのが判った。間髪入れずに「っか・・・？」顎にアッパーを受けて視界が揺らいで、体がさらに宙に浮いた。そして最後にお母さんは、仰向けで後ろに倒れ込み始めたあたしに、ベリーロールからの打ち降ろし蹴りを繰り出してきた。揺れる視界の中、避けられない、って諦めかけた時・・・

≪Ｗｉｎｇ　Ｒｏａｄ　！！≫

"マッハキャリバー"が左脚側だけにウイングロードを発動してくれて、その意思で走った。今のあたしから反撃が来るとは考えてもいなかったみたいで、お母さんはあたしのオーバーヘッドキックを「あぐっ！？」お腹に受けた。

≪Ｒａｉｌ　Ｓｌａｓｈｅｒ　！≫

あたしの足元から頭上へ向かって落ちてくお母さんに対して、"マッハキャリバー"はウイングロードを∩字に展開して、お母さんの頭上に通した。そして"マッハキャリバー"の意思による打ち降ろし蹴りをまた「ぐっ！」お腹に打ち付けた。勢いよく地面に落ちたお母さんを横目に、あたしはそのままウイングロードに着地した。

≪大丈夫ですか？≫

「ぅ・・・あ、う、うん。ありがとう、マッハキャリバー。おかげで助かったよ」

≪ お気になさらず。あなたを守り、共に走るのが私の望みですから≫

「マッハキャリバー・・・。うんっ。あたし達は――」

「相棒だから！」≪ 相棒ですから≫

視界の揺らぎが治まってきた中で、「ギン姉・・・！？」の姿を探す。ギン姉は脇腹を押さえて地面に伏せてた。急いでギン姉のところに降下して、「大丈夫！？」駆け寄って手を伸ばそうとして、「いっつ・・・！」左腕が動かないことに気付いた。

（お母さんのアッパーをガードした時に・・・？）

でも指先はなんとか動くから、神経ケーブルや人工筋肉が断裂したわけじゃないっぽいし、触った感じからするとフレームが歪んだわけでもないっぽいから、一時的な麻痺だと思う。そう言えばさっきのアッパーの前にも、お母さんの攻撃をガードしてたし・・・。

「スバル・・・。私は、大丈夫・・・。痛覚を遮断すれば、もう少しの間は戦える」

よろよろと立ち上がるギン姉を動く右腕で支える。痛覚の遮断は、あたし達の最後の手段だった。人と同じように痛みを感じるあたし達だけど、意図的に遮断することが出来る。痛みを無視できるから無茶も無理も出来るけど、致死レベルのダメージを受けてもすぐに判らないってデメリットがある。

「はぁはぁ・・・、母さんは？」

「えっと・・・」

お母さんが墜落したところを見ると、ゆっくりとだけど両手を付いて上半身を起こしてた。防御力が異常に高い。地下水路での戦闘の時は、あたしとギン姉の拳は掠りもしなかったから判らなかったけど、この戦いで判った。打った時の感触は明らかに人のものじゃない。今さらな事実確認だけど・・・。お母さんもやっぱり、全身をサイボーグ化されてる。

「スバル。ルシルさんから預かったカートリッジ、アレを使いましょ」

ギン姉が提案したのは、出撃前にルシルさんから預かったカートリッジを使おうというもので、ルシルさんの強大な魔力が封じ込められてる。使用上の注意とかが出されるレベルのカートリッジ。

「純粋魔力攻撃であるディバインバスター。それに懸けましょう、スバル」

「強過ぎるから、あんまり使いたくなかったんだけど・・・」

「持久戦になると、正直・・・勝てないと思う」

ギン姉は自分の"リボルバーナックル"から、首や肩をグルグル回してるお母さんへと目を向けた。そしてまた放出した魔力を、"デ

リンジャーナックル"と"ソニックセイバー"の高速回転させたナックルスピナー４つに纏わせた。その状態で右腕を引いたから・・・

「っ！　スバル！」

「う、うんっ！」

あたしとギン姉は左右に散った。３０ｍ近く離れてる中で腕を引いた。さっきみたく高速突進からの拳撃っていう可能性の中に、遠距離攻撃っていう可能性も生まれたから。あたし達の直感は正しかった。ほぼ同時、お母さんは「ストライク・・・イーグル！」引いてた右拳を前方に突き出して、スピナーに纏わせてた魔力を砲撃として放った。砲撃は地面を抉りながら向かって来たけど、なんとか避けられた。

「止まっちゃダメ！」

続けて引いた左腕を見て、ギン姉から忠告が入る。でもお母さんは前に突き出すんじゃなくて、自分の足元目掛けて左拳を打ち込んだ。え？って疑問符が脳裏に浮かんだ直後、お母さんの周囲の岩盤が大きく捲れ上がって、いくつも出来た岩石の塊がお母さんの姿を隠した。

「・・・？」

これから何が起こるんだろうって警戒していると、直径５ｍほどの

岩塊がゆっくりと浮いて行くのが判った。よく見ればお母さんが岩塊を持ち上げてた。そして岩塊をあたしの方へ向けて放り投げた。確かに大きいけど、避けてしまえば大丈夫って判断して動こうとしたら・・・

「レールスラッシャー！」

お母さんが飛び上がって、片足だけをウイングロードに走らせての高速蹴りを岩塊に打ち込んだ。それでお母さんの狙いが判った。粉々に砕け散った岩塊は、小さな石礫になってあたしの元に殺到して来た。

「トライシールド！」

降って来る範囲が広過ぎて思わずシールドを展開。シールドにガツンガツン当たる石礫の中、「お母さん・・・！」がすぐそこにまで迫って来てた。でもギン姉も一緒に来てくれて、あたしに殴りかかろうとしてたお母さんにショルダータックル。お母さんは吹っ飛んだけど、受け身を取ってすぐに立ち上がった。あたしは石礫が治まったとことで、ギン姉と一緒にお母さんへと突進。追撃に入る。

「「ナックル・・・」」

あたしは右の"リボルバーナックル"のスピナーを、ギン姉は左の"リボルバーナックル"のスピナーを高速回転させる。そして圧縮した魔力を纏わせての一撃、「ダスタァァァァーーーーッ！」を、お母さんへと同時に繰り出した。するとお母さんも、両腕の"デリ

ンジャーナックル"のスピナーを高速回転。魔力を圧縮して拳に纏わせて・・・

「ナックルダスタァァァァーーーーッ！」

同じ技を繰り出して来た。お母さんの右拳がギン姉の左拳と、お母さんの左拳があたしの右拳と激突。その激突で生まれた衝撃波が、あたしの髪を大きく靡かせた。

「「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」」」

あたしとギン姉は一歩も退くことなく、"マッハキャリバー"と"ブリッツキャリバー"のローラーを利かせて全力前進。でもすぐにローラーが空転し始めた。対するお母さんの"ソニックセイバー"のローラーはしっかりとグリップが効いてるみたいで、あたしとギン姉を押し返してくる。

「マッハキャリバー！」「ブリッツキャリバー！」

≪≪Ａｂｓｏｒｂ　Ｇｒｉｐ≫≫

グリップ力を強化する機能をオンにすることで、空転を抑えることに成功した。でも完全に拮抗したことで、後にも退けなくなっちゃった。だからあたしとギン姉は「ギア・セカンド！」相棒の出力をさらに向上させるモード２に移行させた。それでようやくあたしとギン姉は、「くっ・・・！」お母さんを押し返し始めることが出来た。

「そう。なら・・・、ソニックセイバー！」

「うわぁぁぁぁ！」「きゃぁぁぁぁ！」

"ソニックセイバー"の踵部分にあるブースターが起動したかと思えば、押し返してたあたしとギン姉を一瞬にして吹っ飛ばした。背中から地面に激突することのないように、クルッと空中で後転することでなんとか両脚で着地。顔を上げた時、真っ先に入ったのはお母さんの右手。お母さんは右手であたしのジャケットを、左手でギン姉のジャケットを引っ掴んでジャンプ。

「せやぁぁぁぁぁぁぁッ！」

「あっ、ぐぅ・・・！」「ぅあ・・・！」

そして着地と同時に、あたし達を背中から地面に叩き付けた。一瞬、呼吸が出来なくなった。さらにお母さんは仰向けに倒れてるあたし達に向かってエルボードロップ。呼吸を整える前にあたしは横に転がって躱した。ギン姉も同じようにして避けてた。

「かはっ、はぁはぁはぁ・・・！」

「う～ん、今のを避けちゃうかぁ。ごめんね。もっと楽に気絶させてあげたかったんだけど、もうちょっとだけ苦しませちゃう」

ギン姉と一緒に立ち上りながら、そう言って構えを取るお母さんを

見詰める。あたしも、ようやく動くようになった左腕と合わせて構えを取る。ギン姉は『私が隙を作るから、その間にお願い』念話でそう伝えてきた。

『・・・うん！』

あたしはその場から後退して、ギン姉が1人でお母さんと交戦に移った。あたしは急いでルシルさんから貰ったカートリッジを"リボルバーナックル"に装填する。ルシルさんの魔力の効果が発揮できるのは、あたしのリンカーコアの容量、使用する魔法、魔力運用力、総合して最大3分。ルシルさんからは伝えられた。

「マッハキャリバー、リボルバーナックル。・・・行くよ！」

≪いつでも！≫

「カートリッジロード！」

ルシルさんの魔力が全身を駆け巡る。リンカーコアが暴走してるような感じで、全身が熱くなってく。思わず「うおおおおおおッ！」叫んだ。全身から魔力が溢れ出す。これがSランク以上の領域なんだ。

「でぇぇぇぇい！」

今までに出せたことのないほどの速度で、お母さんへと突撃する。体の前方に魔力スフィアを作り出そうとしたところで、お母さんと

殴り合いをしているギン姉に呼びかけようとした時、「あぐっ！」ギン姉がボディブローを受けて殴り飛ばされた。

「っ！　リボルバー・・・！」

ギン姉がお母さんの足止めを出来なくなったことで魔力スフィアの生成を中断、急遽スピナーを高速回転させて、生み出した衝撃波を拳に纏わせる。

「はぁぁぁぁぁッ！」

お母さんは　両腕の"デリンジャーナックル"のスピナーを高速回転させて、まず右拳を打ってきた。あたしは迎撃じゃなくて、お母さんのカウンターを真似ることにした。お母さんの拳を左手の五指で包み込むようにして、左後ろじゃなくてわざわざ右後ろへと受け流す。するとちょうどお母さんの胴体が、あたしの右拳の真ん前に来ることになる。

「キャノンッ！」

――プロテクション――

「ぐぅぅ・・・！」

お母さんのお腹に目掛けて打った一撃だったけど、バリアに拒まれた感触を得た。でも「せぇぇぇぇいッ！」構わずに右拳を振り抜く。ガシャァンとバリアを打ち砕いて、「がはっ！」お母さんのお腹に

直撃させることに成功。急いでもう一度、魔力スフィアを作り出して左拳前に保持。

――ウイングロード――

空中にまで殴り飛ばされたお母さんはウイングロードを展開して着地して、「げほっ、げほっ・・・！」お腹を押さえて咳き込んだ。ごめんね、お母さん。痛いよね。でも・・・。

――スバルも、ホントは強いんだから――

「お母さん・・・」

――だってスバルは、お母さんの娘でギンガの妹なんだぞ――

「お母さん・・・！」

――大好きだよ、スバル――

「お母さん！」

「やるじゃない！」

お母さんは貫手にした両手の手首を高速回転させて、まるでドリルのようにした。しかも魔力を纏わせてるからかなり厄介かも。あたしも「ウイングロード！」を発動して、お母さんのところへと疾走する。

「リボルバー・・・！」

「一撃必倒！」

お互いにあと数歩で拳が届く距離になったことで、「ギムレット！」お母さんの両手の貫手が先制で繰り出された。あたしは回避じゃなくバリアのプロテクションを張ることで防ぐ。お母さんの攻撃は貫通性能がすごくて、もう第一関節から先の指があたしのバリア内に食い込んでる。

（お母さんもバリアか何かを張ってるかもしれないけど、撃つならもうここしかない！）

たとえ防がれたとしても、今のあたしなら3連発くらい余裕で撃てる。それほどまでにルシルさんの魔力が強い。

「ディバイン・・・バスタァァァァーーーーッ！」

左拳前に保持してた魔力スフィアを前方に置いて、右拳で殴って砲撃として放射した。同時にバリアを解除して、お母さんの両手の貫手と激突。あたしはすぐに魔力スフィアを作り出しつつ、お母さんの背後に向かって跳び上がった。その直後にあたしの砲撃が、お母さんの貫手で粉砕された。

「バスタァァァァーーーーッ！」

――ディバインバスターーーー

２発目をお母さんの背中に向けて放つ。

「まだまだぁぁぁぁーーーーッ！」

――リボルバーギムレットーー

お母さんは旋回しての遠心力いっぱいの貫手を繰り出して、あたしの砲撃を真っ向から迎撃。その結果、ドリルと化してる貫手に穿たれた砲撃が「拡散・・・！？」された。だけどお母さんの左手の指全部が折れてるのが見てとれた。

「左がダメでも、もうこれで終わりよ！」

魔力スフィアを作るするより早くお母さんの右の貫手が、お母さんのウイングロードに着地したばかりのあたしに迫った。でも"マッハキャリバー"がバリアを即座に展開してくれたおかげで直撃だけは免れたから、急いで魔力スフィアを作り出す。

（間に合え・・・！）

「砲撃を撃たせる前に終わらせる！」

そんな時、お母さんの背後にギン姉が跳び上がって来た。そのまま跳躍してからの「キャリバー・・・！」打ち降ろし蹴りで、「ぐっ！？」お母さんの右肩を蹴った。あたしに集中し過ぎてたのかお母さんは

まともに受けて、ガクッと体勢を崩して上半身を反り返らせた。ギン姉は打ち降ろし蹴りの勢いを利用して横向きのまま宙で一回転。

「キャリバァァァァーーーーッ！」

「ごふぅ・・・！」

そしてお母さんのお腹に左拳を打ち込んだ。お母さんはウイングロードに背中から叩き付けられた。あたしはギン姉がお母さんの肩を蹴った時にはもう動いていた。ギン姉はお母さんを殴った勢いであたしの方に向かって来たから、あたしはギン姉のさらに上に向かって跳んだ。

「スバル、お願い！　お母さんを・・・！」

「ディバイン・・・バスタァァァァーーーーッ！」

お母さんの直上から3発目の砲撃を発射。何も出来ずに砲撃に呑まれたお母さんはウイングロードを突き破ってそのまま地面に激突して、大きな魔力爆発に呑み込まれた。あたしとギン姉は、またお母さんが起き上がって来ないかって警戒しながら地面に降り立って、お母さんが墜落したところに近付く。

「お母さん・・・」「母さん・・・」

クレーターの底にお母さんは仰向けで倒れていて、完全に意識を飛ばしていた。お母さんを撃破したことを確認したあたしとギン姉は、

"リボルバーナックル"を装着してる側の手の甲をコツンと打ち合わせた。

Ｅｉｐｉｃ２４－Ｃ列車砲ディアボロス攻略戦～Ｓｃｙｌｌａ　１～

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

列車砲と装甲列車を防衛する戦力の中で、特に危険だって判断したデルタを、「おら、こっちだ、付いて来い！」なんとかティアナ達のところから引き離せた。デルタの安っぽい挑発に乗ったフリをして、わざわざ挑発だってし返してやったんだ。これで引き離せなかったら、あたしは恥ずいことに。

（見た目通りの子供で助かったぜ）

あたしの後ろを追翔するデルタを俯くようにしてチラッと見る。ヘッドのデカさはコンパクト状態の"ギガントフォルム"と同じくらいで、柄が１５０ｃｍくらいある先切金槌（片方が平面で、片方が尖ったヤツだ）を武器としたデルタは、陽気な声で「待て、待て～！」って大声を上げながらハンマーをブンブン振り回してやがる。ところで、デルタの方を向いて良かったって思うことが起きた。

「ケラウノス！　Ｇｏ　！」

"ケラウノス"っつう名前らしいハンマーのヘッド部分が分離して、振り回されてた勢いであたしんところに飛んで来やがった。ハンマーヘッドの左右の下部にはブースターのようなモンが２基ついてて、その推進力を使ってるからか速度がトンデモねぇ。

「っと・・・！」

急いで上半身を反らして軌道を変更して、足元から迫ってたヘッドを躱す。ヘッドの中央には３０ｃｍくらいの槍のような穂があるから、刺突攻撃も出来るわけだな。ヘッドと柄を繋いでんのは、赤色に光り輝くエネルギーケーブル。あたしの体の側を通り過ぎてったヘッドがデルタんところに戻る前に・・・

「今の内だろ、これ！」

――テートリヒ・シュラーク――

１８０度方向転換してアイツの元に向かう。"アイゼン"の柄を両手で握りしめて繰り出すのは、ハンマーフォルム状態で相手をぶっ叩く一撃。デルタは柄を握ってる右手をクイッと動かすと、背後からヘッドのブースター音が迫って来てんのが聞こえてきた。だがその前に・・・

「おらぁぁぁぁぁッ！」

お前をぶっ叩く。振り被ってた"アイゼン"をデルタ目掛けて振り抜く。さぁ、避けんのか防ぐのか、どっちを選ぶよ。デルタが選んだのは、「んな！？」あたしが想像してなかった選択肢。アイツは左手でパシッと受け止めやがった。

「うおっ！？」

そんでそのままあたしをぶん回して、地面に向かって放り投げやがった。宙でくるっと回って体勢を立て直す。デルタは"ケラウノス"の先端に在る穂先をあたしに向けて、フンッて鼻で笑いやがった。

「スキュラ一の力持ち！　それが、このデルタ！　デルタに打撃技は通用しないから！」

堂々と宣言するデルタ。力持ちなだけで、あたしの一撃を無傷で止められるわけがねぇ。となると、奴自体が恐ろしく頑丈なんだって話になってくる。

「ま、それがどうしたって話だがな！」

――シュワルベフリーゲン――

前方に魔力弾を8発と展開して「おらぁ！」"アイゼン"で打って射出してすぐに、あたし自身も突撃する。デルタの膂力と頑丈さをしっかり見極める必要がある。ハンマーフォルムでどれだけぶっ叩いても平気ってんなら、攻め手を変えるだけだ。

「効かないよ～！」

デルタは"ケラウノス"のヘッド部分をまた分離させて、フレイルのように体の前でグルグル回転させることで魔力弾を弾いた。さらに魔力弾を4発と"アイゼン"で打って射出する。それも弾かれちまうが、その隙にデルタの真横を通り過ぎる。

「お？」

「もう1発！」

振り被ってた"アイゼン"をデルタの背中に向けて振るう。両腕は柄を握っていて塞がってたから、碌に防御も出来ねぇで「あいたっ！」の一言を発して地面に向かって墜落。そんで激突。轟音と一緒に砂塵を舞い上げた。

（硬ぇ・・・！）

デルタをぶっ叩いた時の感触が人のそれとは全然違う。スバルやギンガの訓練、シスターズとの模擬戦の時に得た感触とも違う。一番似てる感触は「アムティス・・・」のような、圧倒的な頑強さ。

「古代ベルカから生きる騎士の力って、こんなものなんだ。痛いだけで死ぬほど痛いわけじゃない。ほら、次、次♪」

デルタは砂埃の付いた服をパッパッと払い、終わると"ケラウノス"を肩に担いで膝を曲げた。あたしは"アイゼン"を「ラケーテンフォルム！」に変形させて、デルタの迎撃に備える。

「そいやっ！」

上空に居るあたしのところにまで跳んで来た。"アイゼン"のブースターを点火して、その場で旋回。そんでデルタへ向かって突っ込

む。デルタは振りかぶられてた"ケラウノス"を「どっせぇい！」振るって来た。

――フェアーテ――

両脚に高速移動用の小型竜巻を発生させて、突っ込むんじゃなくて急停止するために使う。目の前を通り過ぎる"ケラウノス"のヘッド。直後に来る2撃目より早く・・・

「ラケーテン・・・ハンマァァァーーーーッ！」

ブースターを利用しての再旋回したあたしの一撃を、先制でデルタの脇腹に打ち込んだ。アイツは「むぅぅ・・・！」吹っ飛ぶことなく、「マジか、おい」その場で耐えやがった。

「おおおおおおッ！」

それでも"アイゼン"のブースターを抑えることなく振り抜くつもりでいる中、「よいしょっと」デルタが両手で"ケラウノス"を高く掲げた。あたしは「チッ」舌打ちして、ブースターを停止させて即座にデルタから後退。その直後に"ケラウノス"の一撃が降り降ろされた。

「もう1発！」

避けたところでブースターを再点火してデルタに再度一撃を打ち込もう、って思ったんだが。アイツは"ケラウノス"を振り降ろした

勢いで一回転して、両脚の踵落としを繰り出してきた。

「っく・・・」

――パンツァーシルト――

頭上にシールドを張って踵落としを防御。一瞬にしてヒビを入れられちまったが、離脱するのには十分な時間稼ぎになった。後退した直後にシールドが破砕された。

「わぁ～～～～！？」

「は？」

踵落としと振り回される"ケラウノス"の運動力によってデルタはその場で大車輪。デルタはどうやら空戦は不慣れなようで、碌に姿勢制御も出来てねぇ。が、「悪ぃな」あたしは問答無用で攻撃を加えさせてもらうことにした。"アイゼン"のカートリッジをロードして「ギガントフォルム！」へと変形。

――コメートフリーゲン――

そんで作り出した物質弾に魔力を付加して、「おらぁッ！」"アイゼン"で打って射出した。物質弾はアッサリとデルタに直撃。アイツは「ひゃぁ～ん！」って悲鳴を上げながら、また地面に向かって墜落して行って、ドーン！と墜落した。

「効かぁぁ～～～ん！」

だがすぐに"ケラウノス"を振るって砂塵を吹っ飛ばすデルタの姿が見えた。あたしの持つ射撃系で最も威力の高ぇコメートでも、大してダメージを与えられてねぇって結構ショックなんだが・・・。

「空戦はやっぱり難しいなぁ・・・。おーい！　降りて来てさー！　陸戦限定にしない～？」

なんか、マジか～、って言いたくなるような提案をしてくるデルタに、「お前が上がって来い！」って返す。わざわざ向こうが有利になるような真似をするほど、あたしは馬鹿じゃねぇよ。

「じゃあいいもん！　無理やりにでも地上に墜としてあげるから！」

何を言うかと思えば。空戦もろくに出来ねぇような奴が、２０ｍと離れたあたしを力尽くで降ろすことなんて出来るわけが・・・。なんて呆れてたところに、デルタの足元にテンプレートが展開された。こっからアイツも本番ってわけか。"アイゼン"の柄を両手で握りしめて、どんな中遠距離攻撃が来ようとも対応できるように身構える。

「ＩＳ発動！　ショックブレイカーー！」

デルタはくるくると旋回を始めて、そんで６周くらいした後・・・

――エアプレッシャーーー

「飛んでけぇ〜い！」

なんて言いながら急停止した。頭ん中に？マークが浮かんだところで、目の前の空間がグニャッと歪んだ。直後、「ぐはぁ・・・！？」気付いたらあたしは、どっちが上か下か右か左かも判らない程度に錐もみ状態で吹っ飛ばされてた。急いで体勢を立て直す。

（今のは、空気砲か・・・！）

鼻血を左手で拭いながら今の攻撃を考察する。受けた感じから、風圧の壁を相手に叩き付けるっつうシャルの烈風刃を思い出したしな。つっても範囲が絞られてて、攻撃性が烈風刃より高ぇ。

「えいやー！　そいやー！」

――エアプレッシャーーーー

だが見切った以上はもう食らってやるかよ。その場に留まることなく空を翔け回りながら、少しずつ地上に居るデルタの元へと降下。アイツは空気砲を撃つのやめて、あたしの迎撃のために"ケラウノス"の柄を両手で握って構えた。

（ショックブレイカー。名前通りのスキルだとすりゃ、衝撃波を対象に打ち込んでダメージを与えるもんだろう）

ハンマー自体にも重量っつう攻撃力があるが、問題はやっぱりスキ

ルだ。どっちにしろ直撃だけは避けねぇとな。デルタは"ケラウノス"を頭上に掲げて、「どっせい！」地面に向けて振り降ろした。打撃点から発生した衝撃波が周囲を走ったのが見て判った。アイツの周囲の地面に四方八方に亀裂が入ると岩盤が一気に捲り上がって、「うお！？」そんなデケェ岩盤があたしの方に倒れ込んできた。

――ギガントハンマーーーー

岩盤を"アイゼン"でぶっ叩いて破砕する。細けぇ石礫や砂塵があたしの周囲を覆い隠す中、砂塵の壁の向こうから"ケラウノス"を振りかぶったデルタが突撃して来た。けど「目がぁ～！」どっかのグラサン大佐みたいなことを言って、眉間にしわが出来るほどに目をギュッと瞑ってる。

「危ねぇな、おい！　目を瞑ってぶん回すんじゃねぇよ！」

振り回した勢いのまま旋回して遠心力を加えた"アイゼン"を、ちょうど目の前を上から下へ通り過ぎてった"ケラウノス"の側面に打ち込んだ。

「ひゃ！？」

ガキィーン！と甲高い金属音を響かせて、"ケラウノス"を持ったデルタを吹っ飛ばす。これで打ち止めじゃねぇぞ。デルタを追って飛び、振り上げた"アイゼン"を「せいっ！」直下に居るアイツに振り降ろす。

「きゃんっ！？」

地面にめり込むデルタに「悪ぃな。もう1発打ち込むぞ」そう伝えて、その場で前転してもう一度"アイゼン"を打ち込んだ。周囲に砂塵や大小の岩石を撒き散らして出来たクレーターの底で、アイツは大の字で倒れてた。

「さて。・・・どうだ？　まだやるか、デルタ？」

「くぬぬ・・・。もちろんなのさ！」

"ケラウノス"を支えにして立ち上がったデルタ。その銀の瞳はギラリと輝きを増しているが、ポニーテールにしてたオレンジ色の長髪は解けて風に靡いて、着てたベストとブラウスは完全に破けてるから、白い肌と黄色いブラジャーを晒してボロボロだ。

「つうか、なんか着ろ！　あたし1人でおんなじ女だからって、上半身がブラだけって！」

「別に恥ずかしくなんてないし。それに服なんてただの飾りだもん！」

デルタが１０ｍほどの高度まで跳び上がって、高速で前転しながら落下して来た。"ケラウノス"のヘッドに赤く輝くエネルギーが付加されてるところを見ると、これまでとはまた違うガチの攻撃って考えるのが妥当だ。余裕を持って飛び上がりながら後退。その直後にデルタは、ヘッドの尖った方を地面に打ち込んだ。

「わっしょーい！」

――イラプションブレイク――

さっきみたくデルタを中心に四方八方に亀裂が入ったが、地面が捲り上がることはなかった。その代わり亀裂からエネルギーが壁のように噴出した。挟み込まれるような形で噴出したエネルギーの壁の衝撃波であたしは「うく・・・！」体勢を崩しちまって、尻から地面に墜落。

「いって～」

「つ～かま～えたっ♪」

デルタがエネルギーの壁を飛び越えて来て、上半身を起こしたばかりのあたしへ向かって突っ込んで来た。あたしの左右はV字のエネルギー壁。後退は出来ねぇ。前進あるのみだ。起き上がり途中に前へ向かって跳び込んで、左手を付いてクルっと前転。

「そぉーい！」

ガキィーンと金属音がしてすぐにバキバキって地面が割れる音がした。石礫とかに備えて、すぐ背後に単面防御でのバリア・パンツァーヒンダネスを展開。アイツの方へ振り返る中で、バリアに石礫がぶつかってきた。

（壁は消えてんな）

あたしの逃げ場を封じてたエネルギーの壁は全部消えてる。追撃されねぇうちにさらに距離を取らねぇと。デルタの方に体を向けながら後退。アイツは"ケラウノス"を振り被った状態で「逃がさないよ！」あたしに向かって突っ込んで来た。まずは引き付けろ。ここいらで決めねぇと、巡航ミサイルが撃たれっぱなしのままだ。

「えいりゃぁぁぁぁぁッ！」

デルタが"ケラウノス"を横薙ぎに振ろうとしたのを見てすぐに、トンと地面を蹴って跳ぶ。足元を"ケラウノス"が通り過ぎると同時に「ギガントハンマー！」を横薙ぎに振るって、アイツの右肩を打った。

「むぅ・・・！」

吹っ飛ぶデルタを追撃するために飛んで、ドサッと地面に落ちて「おわぁ～！」ごろごろ転がるアイツの直上へ。さらに「ギガントハンマー！」を右上腕に打ち込んだ。地面にめり込んだアイツは「いったいなぁ、もう！」それでも起き上がろうとするから、「だったら投降しろ！」とは言いつつ、さらに"アイゼン"の一撃を打ち込んだ。

「むぎゅ――」

"アイゼン"のハンマーヘッドを持ち上げると、「やっべ、やり過ぎたか・・・？」右腕全体が大きくひしゃげたデルタが倒れてた。

だっつうのに「投降なんて・・・・！」左手を付いて上半身を起こしやがった。

「おいおい、もうやめろって！　右腕、潰れてんだぞ！」

「腕の1本くらい、なんてことないもん！　それにどうせこのデルタは、スペアボディだし」

聞き捨てならねぇセリフを吐きやがった。今まで戦ってたデルタが「スペアボディだ？」ってことは、オリジナルのボディがどこかに居るってことになるわけだが・・・。

「そうだよ。本物のデルタはちゃ～んと脳みそ積んでるけど、このデルタは脳みそじゃなくてＡＩを搭載した自立型の完全機械体（ガイノイド）なの。無茶だって無理だって何だって出来る。だからね・・・！」

デルタが無事な左手だけで"ケラウノス"を肩に担ぎ、あたしの元へ突っ込んで来た。ただのＡＩだから無理も出来る。その上での突撃。となると・・・。直感が働く。あたしは「コメートフリーゲン！」を1発打ち放って迎撃。

「往生際が悪いよ！」

そっくりそのまま返せるセリフを吐いたデルタは"ケラウノス"を振り降ろし、フリーゲンを叩き潰した。両手持ちじゃなかった所為か、アイツの左腕の肘から先がブチブチと千切れた。その最中に"アイゼン"をハンマーフォルムに戻してカートリッジを排莢、そん

で新しく装填してすぐに全弾ロード。

「うりゃぁぁぁぁぁッ！」

両腕がダメになったってぇのにデルタは突っ込んで来る。そんで飛び掛かって来たから「パンツァーヒンダネス・・・」を発動する。さっきみたく単面防御じゃなくて、あたし自身を囲う多面体の完全防御でだ。アイツはバリアの表面にガツンと額を打ちつけた。

「この戦いの記録、オリジナルのお前に反映されんのか？」

「もっちろん♪　ま、あなたはここでどうせ終わるだろうけど」

「やってみな」

ニコッと満面の笑顔を浮かべたデルタは・・・やっぱり自爆した。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒アリサ†††

――ＩＳヴァイオレントトレーナーーーー

ベータの振るう紫色に輝くエネルギーの鞭。最初は右手の１本、両手持ちで２本、そして今じゃ両手合わせて「１８本・・・！」の鞭による空間攻撃を繰り出して来てる。鞭と言うよりは蛇に近くて、地面を這って足元も狙ってくる。

「ブレイズロード！」

両脚に炎を纏わせて、巻き付いてきた鞭を焼き払う。高魔力と高火力でベータのエネルギーを相殺、または粉砕できるのは幸いだわ。にしても「すぐ再生するわね～」焼き払った2本の鞭はすぐに元通り。

「私のＩＳはヴァイオレントトレーナー！　あなたのような野蛮な人間を調教するためのスキルよ！」

「そっくりそのまま返すわよ、野蛮人って言葉！　ノーヴェ達を巻き込んであたし達を吹っ飛ばそうとして！　あの子たち、体は機械でも脳や心は人なのよ。それなのに・・・！」

――イジェクティブ・ファイア――

銃剣形態バヨネットフォームの"フレイムアイズ"の銃口から炎熱砲を撃つ。ベータは自身の前方に18本の鞭を網状に張って、あたしの砲撃を弾いて防御した。ああして鞭同士で繋がると一気に硬度が増すのよね～。分散されてるエネルギーを収束してるからなんでしょうけど・・・。

「ホント、ウザいわ！」

――フレイムバレット――

「あなたこそ、早々に散りなさい！」

網状の鞭の隙間を狙って火炎弾８発を撃ち込むと同時に「ブレイズロード！」両脚の炎をロケットのように噴出させて、ベータの直上へ向かってジャンプ。火炎弾は隙間を狭めることで防いだわね。

「フリンジングボム！」

銃口先に火炎球を発生させて、ベータの直上に向けて発射。火炎弾を防いだばかりの鞭が今度はアイツの頭上に移動して、まるで花弁が閉じるように動いて火炎球を包み込んだ。あたしは逆立ち状態のまま足元に魔法陣の足場フローターフィールドを展開、ソレを蹴ってベータの背後に突っ込む。

――フレイムバレット――

火炎球を封じ込めて花の蕾のような形になってる鞭の隙間から黒煙がボフッと漏れてきた。その隙にさらに火炎弾をベータの背中に向けて連射。ボロボロと崩れてく鞭を切り捨てたベータは新しく鞭を生成して、ペチンペチンと火炎弾を払い退けた。

「よっと！」

飛行魔法を発動して急上昇。ベータは「逃がさない！」両手に持つ１８本の鞭をあたしに向かって振るって来た。地上では避けるのが難しい軌道でも、空中だと楽に避けられるわね。けどここで「しまった！」馬鹿な事をしたって気付いた。

「いかん、アリサ！」

装甲列車の兵装破壊を任せてたチンクに言われるまでもない。装甲列車の屋根に設けられてる二連装砲台の砲門の前に来てしまってた。ベータが厭らしい笑みを浮かべてるのが見えた。あぁ、誘導されたのね。調子に乗り過ぎちゃったわね～。

「粉々に吹き飛べ！」

砲撃発射の前兆である砲門の奥に白い光が生まれた。チンクも兵装破壊に苦労してるっぽいし、「フレイムアイズ！」ついでに破壊してやるわ。銃口を砲撃発射直前の砲門に向けて「フレイムバレット！」を発射。

『チンク、援護お願い！』

――プロテクション――

『任せろ！』

チンクに念話を繋げて、あたしに向けられるベータの攻撃をどうにかしてもらうように頼む。そしてすぐに前面にプロテクションを展開。直後にあたしの火炎弾と砲撃のエネルギーが爆発した。

「くぅ・・・！」

爆炎と黒煙が視界を覆う。さらに砲台の金属片と思われる物もガツンガツンと当たってくる。ここで『今すぐ離脱しろ！』チンクから

警告が入った。その切羽詰まった声色にあたしは従う。バリアを展開したままで急速後退すると、「おっと！」今いたところに砲撃が通過した。

『サンキュ、チンク！』

砲撃の衝撃波で黒煙が吹っ飛んで、あたしが破壊した砲台の無残な姿が露わになった。バチバチと火花やモクモクと黒煙を上げていて、完全にひしゃげてる。これでやっと1基か・・・って、「チンク！全然壊せてないじゃない！」ちょっぴり怒る。

「すまない！　しかしどうやら・・・私とは相性が良くないらしい」

「相性って・・・。触れた金属を爆発物に変化させるっていう、アンタのスキル以上に相性の良いのなんて無いでしょ・・・！」

ベータに向かって投げナイフ・"スティンガー"を投擲しまくるチンクがそんなことを漏らした。するとベータが「そう簡単には壊せないと思え！」そう言って、"スティンガー"を全て鞭で叩き落とした。続けて鞭を槍のように刺突攻撃として一斉に繰り出して来た。あたしは宙で避けて、チンクもステップを踏んで回避し終えた。

「列車砲ディアボロスや装甲列車オルトロスとケルベロスは特別な機能を持った装甲を有している！　容易く貫けるとは思うな！」

だそうだ。チンクがベータの鞭による攻撃を躱しながら装甲列車に近付こうとしたけど、「何あれ・・・」まるで強烈な突風に押し返

されてるような感じで、ある一定の範囲から先に進めてない。さらに"スティンガー"を投擲するけど、すぐに押し戻されるように後ろへ吹っ飛んだ。

「だったら！」

――イジェクティブ・ファイア――

砲台に向けて火炎砲を撃って着弾させる。直撃によって爆炎と黒煙が上がった。けどすぐに、その砲台から砲撃が放たれてきた。ＡＭＦとは違う形で魔力を弾いてるわね。確かに装甲は特別のようだわ。そんな数ある砲門からは砲撃が立て続けに発射されて、遥か北――応援の陸士部隊へ向かってく。

「ああもう！」

"フレイムアイズ"の銃口を、さっきみたく砲門へと撃ち込もうとするんだけど、「させない！」ベータがまぁ邪魔してくるわけで。１８本の鞭であたしとチンクを払い落とそうとしたり、貫いてこようとしたり、さらには砲撃の射線上に誘導しようとしてきたりする。

「チンク！」

「オーバーデトネイション！」

チンクの周囲に２０本近い"スティンガー"が展開されて、一斉にベータに向かって射出された。あたしはタイミングを見計らって、

半球型のバリア魔法「サークルプロテクション！」を発動。

「え・・・？」

バリアでベータを閉じ込めてやった。直後に"スティンガー"が一斉に爆破されて、バリア内に爆炎と黒煙が満ちた。そしてすぐにその威力に耐えきれずにガシャァンと割れて、外に炎と煙が溢れる。

「やったのか、アリサ？」

「どうだろ。装甲列車の砲撃が止んだとはいえ、それだけでベータを無力化できたなんて思うのも早計。ヴィータの方は・・・」

列車砲の有する巨大レールガン・ウォルカーヌスからまた巡航ミサイル2発が発射された。そのことからデルタもまだ終わってないってことよね。ヴィータを相手に粘れる奴なんて、そうそう居ないって思ってたんだけど・・・。

「来るぞ、アリサ」

「オッケー。フレイムアイズ、クレイモアフォーム！」

≪今さらかよ！≫

銃剣形態バヨネットから大剣形態クレイモアへと変形させて、柄を両手で握りしめる。両手からだけじゃなくて腰からも鞭を9本（まるで九尾の狐みたいね）と伸ばしたベータを見詰める。銀の両目は

一際強く輝きを増してた。完全にブチキレモードって感じ。

「はっ！」

チンクが両手の指に挟んでた"スティンガー"８本を投擲すると、ベータは左手の９本の鞭で絡め取る。だけどチンクのスキルによって"スティンガー"は爆発して鞭が吹っ飛んだ。そして右手の９本をチンクに伸ばす。それをあたしは「たぁぁぁぁぁッ！」"フレイムアイズ"で一気に寸断する。次に向かって来るのが九尾の鞭で、槍のように一直線に突っ込んで来る。

「デストラクト・・・！」

まずブレイズロードで両脚だけじゃなくて全身を炎で覆う。んで、"フレイムアイズ"の柄を持った両手を脇に持って来て突進体勢を取る。そして「ディターレント！」炎の推進力を以って相手に突撃する。向かって来てた鞭はあたしの全身を覆う炎によって焼き払われてく。

「なに・・・！？　この！」

再生した両手の１８本の鞭が伸びて来て、半物質化してる魔力の剣身に絡みつかせてあたしの突進を食い止めようとしたけど、「無駄よ！」その全てを灰塵へと変えさせる。

「ぐお・・・！」

"フレイムアイズ"で貫いたベータを仰向けに倒れ込ませて、「あたしの勝ちよ、ベータ！」地面に縫い止める。念のために全身を覆う炎を解除しないままにしておく。

「おのれ！　私の身体に、たとえ非殺傷設定とは言え刃を刺し込むなんて・・・！」

――ヴァイオレントトレーナー――

両手と腰の鞭２７本があたしを貫き、絡ませ、打とうとしたけど、あたしの炎の前には無力。あたしの体に届く前に焼き払われる。ベータの表情は怒りに満ち満ちてたけど、「なんてこと・・・」ようやく抵抗をやめた。

「さぁ、ベータ。装甲列車の砲撃を止めなさい」

「こんな無様、こんな醜態、こんな・・・！」

ガシッと"フレイムアイズ"の剣身を両手で鷲掴んだベータ。ああもう。呆れながらあたしは「チェーンバインド」を発動しようとしたところで、「逃げろ、アリサ！」チンクの警告。ウィーンと機械音が耳に届く。音の出所は装甲列車の砲台で、今のあたし達を狙える砲門すべてが向いた。

「ちょっ、何を考え――」

言い切る前に砲撃が発射された。急いでラウンドシールドを張って、

砲撃を防ぐんだけど「ぅぐ・・・！」その威力に思わず呻く。なのはのバスターやルシルのアダメルを食らった感じ。しかも非殺傷じゃなくて物理破壊だから、魔力消費が激しすぎよ。

「アリサ・バニングス。あなたをここで討てれば、それだけで私の汚名は返上できる！」

「馬鹿！　アンタ、あたしと心中する気！？」

「私はベータのスペアボディ。頭に詰まっているのも脳ではなくてＡＩ。ここで私が壊れようともオリジナルには一切のダメージは無く、また別の機体（わたし）がロールアウトして、今度こそあなたを殺す！」

ＡＩってことはサイボーグじゃなくてアンドロイド、女性型だからガイノイドか。なら無理して護る理由も無いのだけど。でもいくらガイノイドだからって、殺していいわけじゃないとも思うし・・・。

――ディープダイバーーーー

「ごめんね～、アリサ」

「っ！？　セイン！？」

いきなり背後に声を掛けられて、グイッとジャケットを引っ張られて仰向けに倒されそうになった。そしてそのまま地面の中に引っ張り込まれる。僅かな潜行の果て、あたし達は装甲列車から３０ｍと離れたところに浮上した。

「アリサさん！」

「ティアナ・・・」

チンクの側には"クロスミラージュ"を携えたティアナが佇んでた。ティアナとセインには、逮捕したノーヴェとディエチとウェンディの安全確保の為に退かせてたけど、戻って来たってことはあの子たちの避難は済んだのね。

「お前ら！」

「おーい！」

「みなさーん！」

続けてヴィータとスバル、バインドで拘束されたクイント准陸尉を肩に担いだギンガが合流した。みんなの無事を確認し終えてホッと安堵したんだけど、「くそっ。やっぱ本物を押さえねぇと止まらねぇか！」巡航ミサイルやエネルギー砲撃は留まることなく発射され続ける。

「これより列車砲を管制しているオリジナル・デルタ、および装甲列車を管制しているオリジナル・ベータを確保する！」

「セイン。クイント准陸尉を、ノーヴェ達と同様に陸士部隊へ預けて来てくれ」

「りょ～かい！　ギンガ、クイント准陸尉を預かるよ」

「あ、はい。お願いします、セイン曹長」

セインはここでもう一度離脱。クイントさんを背負って地面に潜行してくセインを見送ったあたし達は、「行くぜ、お前ら」ヴィータを先頭にして列車砲と装甲列車の元へ走る。そして５ｍ範囲に入ったところで、「っ！」異変は起きた。

「なにこれ～！」

「何か、不思議な力で押し返される・・・！？」

「一体何なのだ、これは・・・！」

スバルとギンガが、さっきのチンクみたく突風に拒まれてる感じになった。それだけじゃない。あたしやヴィータ、それにティアナは、スバル達よりは装甲列車に近付けてるけど、ある"モノ"だけが進入を拒まれた。

「アイゼン・・・！」「クロスミラージュ・・・？」

「フレイムアイズ・・・」

そう。デバイスだけがスバル達と同じラインで止められた。これってひょっとして「磁力・・・？」よね。今は大小さまざまな鉄片と

なってしまった元ベータをチラッと横目で見る。

「磁力・・・。なるほど。機械の体だから私やギンガにスバルは装甲列車に近付けないのだな」

「デバイスも、特殊な物とはいえ金属だから抵抗を受けるんですね・・・！」

あたしとヴィータとティアナはデバイスを一旦、待機形態へと戻す。するとなんの抵抗を受けることなく装甲列車の至近に近付けた。問題は車内でもデバイスが使えないかも知れないってことなんだけど。さすがにそれはないわよね～。内部なんて機械だらけなんだろうし。でも・・・。

「（ベータやデルタ、クイント准陸尉たちが磁力の影響を受けてなかったってことが引っ掛かるわね。まぁともかく）あたしとヴィータが内部に突入。他のみんなは装甲列車の砲台を破壊し回って。装甲表面じゃなくて、タイミングは難しいけど砲門内部に撃ち込めば、ああいう風に破壊できるわ」

あたしが運良く破壊できた砲台を指を差す。火花も黒煙も治まってるガラクタな砲台。ギンガとスバルとティアナは「了解！」首肯してくれた。チンクは1本の"スティンガー"を目の前にまで持って来て「どこまで通用するかは判らないが・・・。承知した」って応じてくれた。

「よっしゃ！　行くか！」

「ええ！」

そしてあたしとヴィータは、列車砲の前方に連結されてる装甲列車に設けられてるドアへ向かう。レバーハンドルをガチャガチャ動かすけど「やっぱロックされてるわね」開かなかった。鍵穴も当然無いし・・・。

「どれどれ」

物理破壊設定での炎を右手に纏わせて、「フンッ！」ドアを殴ったけど、「あいたた！」炎の効果はまったく働かず、ただ痛い目に遭っただけだった。ヴィータも「おら、開けろ！」どっかの借金取り立て屋みたくドアをゴンゴン叩くけど、それでも開かない。

「仕方ないわね。・・・ヴィータ、ちょっと下がっててて。フレイムアイズ！」

待機形態の"フレイムアイズ"をドアと装甲の間に狙いを定めるように持って来る。そして「ファルシオンフォームで起動」させる。直後にものすごい抵抗を受けるけど、その前にドアと装甲の隙間に剣身を差し込んだ"フレイムアイズ"を使って、「おりゃぁぁぁぁ！」無理やりドアをこじ開けてやるわ。

≪カートリッジロードォ！≫

「タイラントフレア！」

剣身から爆炎を噴き上げさせて、内部からドアを吹っ飛ばすと同時に"フレイムアイズ"を待機形態に戻す。それで磁力の影響を受けずに済む。あたしとヴィータは顔を見合わせて頷き合って、こじ開けた入口から装甲列車内に侵入した。

「やっぱ広いわね」

「日本の電車より二回り以上あるかんな～。この装甲列車」

天井や壁や床にはぎっしり機械が詰め込まれてもなお、あたしとヴィータが並んで歩ける。向かうのは列車砲。装甲列車の砲台はギンガ達が何とかしてくれるだろうしね。優先するのはミサイルの発射停止よ。で、列車砲の車内へと続くスライドドアが自動で開いて、1歩足を踏み入れると・・・

「きっつ！」「うお！？」

とんでもなく濃いＡＭＦが満ちていた。あたしとヴィータは一瞬で変身を強制解除されてしまい、一気に血の気が引いた。変身すら解除される中で、もし迎撃戦力と遭遇したらって。

「心配すんなって。向こうだって、車内で暴れようだなんて考えちゃいねぇだろ」

「そりゃそうでしょうけど。今のあたし達じゃ、ただのナイフで刺されただけで死ぬわよ」

「そん時は、あたしが庇う。あたしの方が死に難いしな」

「普通に逃げるわよ、その時が来たら」

重い体を必死に動かして、装置やら機械部品なんかで一気に狭くなった列車砲内を中腰で歩く。そして列車砲の中心付近に辿り着くと、1つのスライドドアが目の前に。ヴィータを顔を見合わせて、一緒に近付く。

『ここまで来ちゃったんだ、ヴィータ』

プシュッと開いたスライドドアの奥にあった円形の部屋の中央には、天井や床を埋め尽くすほどの赤色と青色のケーブルに繋がれたポッドが1基。そのポッド内にまで伸びてる細いケーブルをうなじや背中に取り付けた、素っ裸な「デルタ・・・」がそこに居た。

「ＩＳ発動。マグネティックドミニオン」

「「っ！？」」

背後から女の子の声が突然して、背中をポンっと叩かれた。振り向きざまに「ちょっ・・・！」グイッと触れられてもないのに強い力で引っ張られて、「かはっ」壁に叩き付けれた。

「スキュラ五女、イプシロン。イプシロンは、人間でありながら磁石になった気分はどうです？って訊ねてみます」

まさかもう1人いたなんて。これって「最悪・・・」な状況だわ。

Ｅｉｐｉｃ２５－Ａ航空空母アンドレアルフス攻略戦～Ｓｙｃｏｒａｘ　２～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「イロウエル！」

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

白銀の岩石で組まれた巨大な両腕を造り出し、中央区画へ撃ち込まれて来た巡航ミサイルを防御する。ミサイルは厄介なことに純粋魔力を弾く装甲を持ち、物理攻撃も通用しない程の頑強さを併せ持っている。結果、迎撃するのではなく防御する、という選択を取らざるを得なくなったわけだ。右手で１発目を、左手で２発目を握り締めて粉砕する。

（魔術師化すれば問題なく迎撃できるだろうが・・・）

フォルセティと戦わなければいけないし、その後はおそらくレーゼフェア戦と続くはず。ここで無駄に魔力や神秘を消費するわけにはいかない。だから最小限の魔力消費で済むイロウエルを、目標に着弾する前の防壁として使うことに決めた。

『ヴィータ達は一体なにやってるんだろうね。全然ミサイルが止む気配が無いよ』

『向こうも向こうで大変なんだろう。防衛戦力がクイントさん達だけとは限らないしな』

俺とユニゾンしてくれているアイリにそう返す。休みなく魔力を使い続ける俺は、いつ記憶消失に陥ってもおかしくない。そのリスクを少しでも軽減するために、アイリとユニゾンしている。

「一先ず、ミサイル２発は防いだ。次弾が来るのは最短でも１０分後。今の内に付近の防衛戦力を削り、シグナム達のために道を作る！」

『ヤー！』

"アンドレアルフス"の直掩機としてこの空域に出現した、金色に統一されたシームルグ１６機による戦隊。その殲滅を頼まれていたが、１０機ほど破壊していたところで巡航ミサイルという邪魔が入ったことで中断していた。

「ウルを放つ。サポートを頼む」

『ヤー！　魔力膜を付加するね！』

右手に魔力弓を、左手に槍の如き矢・ウルを作り出す。俺たちが空けていた僅かな時間に、本局の航空武装隊員から１０名ばかりの撃墜者を出してしまった。もうこれ以上の犠牲は出させないぞ。

『こちら機動六課、ルシリオン。シームルグ戦隊に再度攻撃を仕掛けます。対象機体の周囲に居る航空隊員は、即座に離れてください』

『ロックオン完了！　いつでもいいよ、マイスター！』

ウルの最大展開数は１０００発。最優先は金色のシームルグ戦隊の残る６機。他のシームルグや戦闘機に比べて圧倒的な防御力と機動力、そして攻撃力を有していた。レールガンでもミサイルポッドでもない、熱エネルギーを用いた射砲撃を放つ砲塔を２基、主翼の付け根付近にあるウェポンベイに搭載している。チャージ無しでＡＡＡ＋級の砲撃を連射してくる。さっさと片付けなければ、さらに被害者が出る。

「『弓神（コード・ウル）の狩猟！』」

弓に番えたウルを射る。ウルは十数ｍと飛んだ後に６００本の矢へと分裂して、ロックオンした対象に殺到して行く。避け切れない機体はそのまま直撃して爆散。アイリが矢に魔力膜をコーティングしてくれたおかげで、無駄に魔力を消費することなくアレらのＡＭＦを突破できている。金のシームルグ６機だけは最初の数本を避けたが、さすがに５０本の包囲攻撃には対応できず、空に炎の花を咲かせていく。

「アイリ、次弾いくぞ！」

『ヤー！』

ウルをもう一度作り出して弓に番える。アイリにコーティングとロックオンを任せて、俺は最適な射出位置を探して空を翔け回る。戦

闘機も残り少なくなってきた。次の1射で殲滅してくれる。先程と同じように全体通信で、戦闘機隊と交戦している武装隊員に注意を促す。

『了解です！　いつでもどうぞ、セインテスト調査官！』

『マイスター！　射線確保！　魔力コーティング、ロックオン完了だよ！』

「これで終わりだ！」

――弓神（コード・ウル）の狩猟――

番えていたウルを射って、残りの戦闘機隊へと６００本という矢の雨を降らせてやる。先程の1射で学習したのか、まぁ簡単には墜ちなかった。結局は無意味な時間稼ぎに過ぎないが。躱したところで矢に追い縋られ、追い付かれて、そして撃墜される。変わらないよ、この結果はな。

『こちら機動六課本部アースラ！　戦闘機全機の撃墜を確認しました！　残るは1機となります！　生命反応が確認されることから、サイボーグによって操縦されている有人機と思われます！』

グリフィスからの全体通信がこの空域に響き渡る。最後の1機というのは開戦直前、プライソンの声明時に初めて姿を見せた、他の機体とは違うデザインの航空機。猫とネズミのデフォルメイラストが描かれていることから、子供タイプのサイボーグが乗っているのか

もしれない。

『教会騎士トリシュタンです！　その機体の対処は私たち教会騎士が請け負います！　機動六課、そして航空隊のみなさんは、ゆりかごと護衛艦、ガジェットをお願いします！』

クラリスの召喚獣であるワイバーンを駆るトリシュの案に、俺たち管理局は乗ることになった。俺となのはとフェイトは"聖王のゆりかご"への突入を、シグナムとエリオとキャロのライトニング、すずかとシャルとトーレは"アンドレアルフス"への突入を行うため、それぞれの艦に向かう。

『ルシル君。フォルセティの事お願いな』

『お願いするですよ、ルシル君、アイリ！』

『ああ、任された』

『ヤー！　リインも、はやてを墜とさせないようにね！』

はやてとリインはこのまま武装隊の指揮を執りつつ、ガジェットの破壊を続けることになっている。モニター越しで俺とはやては頷き合って、そして通信を切った。ゆりかごに向かう中で、ゆりかごに近付けさせまいと突っ込んで来るⅡ型１１機へ向け・・・

「邪魔をするな！」

――天壌（コード）よ哭け、汝の剛雷（エネディエル）――

雷撃の塊であるスフィア７基を放つ。それぞれ回避行動に入るが「ジャッジメント！」号令を下して雷球を爆ぜさせる。３０ｃｍほどから一気に１０ｍほどまで爆ぜたことで、Ⅱ型は躱しきれずに巻き込まれて融解した。

「ルシル君！」「ルシル！」

「なのは、フェイト！」

俺と同じようにガジェットを破壊し回っていたなのはとフェイトの２人と合流を果たし、右手に見える超巨大なゆりかごへと目を向ける。開戦当初よりはガジェットの数が目に見えて減っているが、それでも３ケタ半ば程が残っていて、隊員たちと交戦中だ。

「未だに入り口を発見できてないみたい」

「だからガジェットの射出口を破壊して、強行突入をしようかって話も上がって来てるんだ」

「なるほど・・・」

先の次元世界と同じだな。武装隊がゆりかごやガジェットの猛攻を掻い潜って着艦し、射出口をぶち抜いて突入していたっけ。俺はなのはとフェイトに「なら俺が撃とう」申し出た。巡航ミサイルや戦闘機隊に手間を取られていたから、ここまで後回しになってしまっ

たが・・・。

「大丈夫？　ルシル君、フォルセティや最悪レーゼフェアさんとの連戦になるかもしれないのに・・・」

「なんなら私たちが・・・」

「問題ないよ。アイリ、魔力炉（リンカーコア）のセーフティ任せた」

『ヤー！　ウルの再発動をスタンバイ！』

魔力弓と魔力矢ウルを作り出し、ガジェットの射出口を『ロックオン！』する。なのはが「機動六課です！　これより射出口に狙撃を行います。注意を！」付近の武装隊に全体通信を入れた。数十人という隊員たちが一斉に射出光付近から離脱していくのを確認し、「往け！」矢羽根から手を離してウルを射った。

――撃神の殲弾（コード・ヘーニル）Ｆ――

高速で射出口に向かってたウルに、俺の魔力光と同じサファイアブルーに光り輝く魔力弾がピンポイントで激突、全弾が迎撃された。今の攻撃はまさか・・・俺の対多弾攻撃迎撃用術式ヘーニルか。

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）Ｆ――

「「「っ！」」」

ウルとヘーニルが激突した際に発生した煙幕を突き破って飛来するのは砲撃3発。俺たちは散開して回避し、「フォルセティ・・・！」の姿を視認した。今の俺と同じようにヘルモーズを発動した空戦形態。さらには・・・

「女神（コード・シヴ）の金衣も使うのか・・・」

黄金色に光り輝く半透明のロングコートと幾何学模様の描かれた羽衣を装備するシヴを、その小さな体のままであるフォルセティは身に纏っていた。シヴは多層甲冑ゴスペルを創り出す一段階前の多層防御膜だ。

「すまない、なのは、フェイト。俺はここに留まらないといけなくなった」

『こちら教会騎士イリス。護衛艦アンドレアルフスより救出対象のセッテ、オットー、ディードの出撃を確認。これより私と第零技術部のトーレが交戦に入ります』

『機動六課、ライトニング分隊のシグナムだ。これよりアンドレアルフス内に突入する』

俺たちだけじゃなくて他の状況も変わっていく。だから「うん。大丈夫」なのはと、「こっちは任せて」フェイトは頷き返してくれた。

『こちらルシリオン。救出対象のフォルセティを発見。これより確保に移ります』

俺も全体通信で報告する。フォルセティは俺の上級術式までも完璧にコピーしている。相応の痛手を負うことを覚悟しなければならないだろう。"エヴェストルム"をニュートラルのイェソドフォルムで起動。

『はやて。すまないが、巡航ミサイルの防御がしばらく粗末になる』

『大丈夫や。そっちは何とかする。そやからフォルセティを止めたって』

『ああ！』

はやてだけには念話でそう伝えて念話を切る。フォルセティはゆりかごへの突入を試みようとする隊員たちに「来るな！」と怒鳴ると・・・

――知らしめよ（コード）、汝（アブディエル）の忠誠Ｆ――

両手に魔力剣を展開し・・・

――豊穣神（コード・フレイ）の宝剣Ｆ――

オートで最良の剣筋を振るうことの出来る術式を使い、隊員のデバイスだけを斬り払っていく。命を取ろうとしないのは大助かりだ。

――撒（コード）き散らせ、汝（ハダルニエル）の疫病Ｆ――

と思ったのも束の間、サファイアブルーの霧を発生させた。あれは「まずい！」と判断して、「シルフィード！」下級の風嵐系術式を発動。"エヴェストルム"を振り払って爆風を起こし、フォルセティが発生させた霧を晴らす。さらに「エイル！」を発動。治癒効果のある羽根を人数分飛ばして、ハダルニエルの効果範囲に居た隊員たちに触れさせて治癒させる。

「墜落する！？」

「手の空いている隊員は、墜落する隊員の救助を！」

あの霧の術式はハダルニエル。霧を体内に取り込んだ対象を問答無用で病（発病する病はランダムだがどれも致死性は無い）に罹らせるというもので、ある種の拠点無力化用として組んだ術式だ。フェイトが通信で付近の隊員たちに連絡を入れる。墜落する隊員の人数は１５人。サポートに入ったのは１０人だったが、対象を浮遊させるフローターを掛けて墜落を防いだ。

「フォルセティは俺が止める。その間に突入してくれ」

その様子にホッと安堵した後、なのはとフェイトにそう伝えた。２人が「うんっ！」と頷き返したのを見、「行くぞ！」俺が先行してゆりかごへ、フォルセティへと突っ込む。

――舞い降るは、汝の無矛（コード パディエル）――

――集い纏え、汝の閃光槍（ポースゼルエル）――

周囲に魔力槍３０本と展開しつつ、"エヴェストルム"に閃光系魔力を付加。そして「ジャッジメント！」射出口へと向けて斉射。フォルセティはすぐに反応して、「させない！」と叫んで、前方に魔力スフィアを展開。

――氷神の波涛（コード・ウズ）Ｆ――

フォルセティはスフィアを殴り、氷雪砲撃を放射状に１２発と発射。砲線は途切れることなく持続放射され、砲撃の合間を通り抜けようとした魔力槍を凍結して粉砕した。全ての魔力槍を防いだ後で砲撃は解除され、「ヴィヴィオ陛下のところには行かせない！」フォルセティが俺を睨んだ。

「（よし。乗ってくれたな）護って見せろよ、フォルセティ。王女様を護る騎士なんだろ？　さぁ、掛かって来い！」

――邪神の狂炎（コード・ロキ）――

"エヴェストルム"を待機形態に戻したうえで、紅蓮の劫火で構成された腕と脚を武装する。空戦形態を解除せずに発動できるように改良したことで、蒼翼２２枚それぞれの形状を保ったまま炎翼へと変化させることが可能となった。その炎翼の炎を噴出させて、フォルセティへと突撃する。

「敵は排除する！」

――禍神の隷氷（コード・ベルヴェルク）Ｆ――

対するフォルセティは、蒼銀の氷雪で構成された腕と脚を武装するベルヴェルクを発動した。背より展開されるのは、光背（仏像などの背後に描かれる後光のことだ）で言えば、光線が放射状に加わっている放射光と呼ばれる形状の光翼。

（俺の炎熱に対し氷結で来たか・・・）

あえて弱点で対抗するとなると、さて、どんなことをやってくるか。とにかく俺は左腕を振り被り、フォルセティは右腕を振り被った。そして「おおおおおおおッ！」同時に拳を繰り出した。俺の炎拳とフォルセティの氷拳が激突して、ジューッと蒸気が噴き上がる。

「今だ！」

振り被った右拳も繰り出すと、フォルセティは左手でガシッと鷲掴んで止めた。さらに俺たちの周囲を蒸気が覆っていく。その中でなのはとフェイトがゆりかごへ向かって行こうとする。

「待て！」

――舞い振るは、汝の麗雪（コード シャルギエル）Ｆ――

フォルセティが２人に向かって氷槍を３０本と一斉射出したことで、俺は２人に「止まるな！」と伝えつつ・・・

――舞い振るは、汝の獄火――

迎撃用の炎槍を同数展開。ロキやベルヴェルクなどの装備術式を発動中、その属性の中級・下級の術式を魔力消費無しで発動できる。その分、装備術式の展開時間が削られていくデメリットもあるが。

「ヴィヴィオとゆりかごを頼む！」

なのはとフェイトの背後に迫っていた氷槍を炎槍で撃墜させ、「イロウエル！」の右腕だけを発動する。そして俺とフォルセティを掴ませて、「少し付き合ってもらうぞ」南部へと向かって全力で放り投げさせる。

「くぅぅ・・・・！」

時速何百ｋｍで空を吹っ飛ぶ中、フォルセティが苦しそうに呻いた。これほどの速度で空を飛ぶ（正確には飛ばされている）経験が無いんだろう。そしてゆりかごから５ｋｍほど離れたところで速度が落ち始めた。俺のロキもフォルセティのベルヴェルグも解除されて、共に空戦形態に戻る。

「早く戻らないと・・・！」

俺を無視してゆりかごの防衛に戻ろうとするフォルセティ。俺はその行く手を遮るように立ちはだかる。

「すまないな、フォルセティ。少し痛い目に遭ってもらうぞ」

「邪魔をしないで！」

――呑み食せ（コード）、汝の夜影（ライラエル）Ｆ――

――煌（コード）き示せ、汝の閃輝（アダメル）――

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒イリス†††

マンタ型の護衛艦"アンドレアルフス"の攻略のため、その付近でガジェットや戦闘機隊と交戦してたわたしとトーレ、六課のシグナムとエリオとキャロとすずか。みんなの協力で次々と戦闘機とガジェットを撃墜できていってるけど、"アンドレアルフス"の艦体上部に所狭しとエネルギー砲台が備え付けられていて、そこから発射される砲撃がわたし達の接近を拒んでくる。

「ま、ただの兵器に墜とされるほど、わたし達は空戦が下手じゃないってね！　１基たりとも逃すな！　確実に砲台を無力化して！　教会騎士団の底力を見せる時よ！」

左翼端に着艦したわたしは、同じく着艦した氷結魔法が扱えて、しかもＡＡ＋以上の騎士８人に指示を出す。全長２ｋｍ、全幅４ｋｍっていう巨大さを誇る"アンドレアルフス"の上部には約２００基の砲台がある。それをわたしだけで無力化できるなんて思ってない。だからガジェットや戦闘機隊の殲滅に従事してた騎士から候補を選んで借り受け、こうして着艦したわけだ。

「隊長！　ガジェットⅠ型とⅢ型です！」

「いきなり出て来たね・・・！」

艦上には砲台だけしか無かったのに、突然ガジェットが何十機と出現。しょうがないと覚悟して「全騎はガジェットの撃破を最優先！」改めて指示を出す。ガジェットと交戦に入った彼らを見届けて、わたしはわたしの仕事を全うする。わたしの周囲に氷結系魔力で作ったベルカ魔法陣を6枚と展開。発生するのは氷のオベリスク、そして周囲に溢れ出す冷気。

「氷牙棘華刃！」

その場で旋回して"キルシュブリューテ"で6本のオベリスクを打ち砕き、破片全てを無数の氷の刃や礫として上方１８０度に一斉放射。さらに冷気を周囲に拡散させる。私の周囲に並んでた４基の砲台が刃や礫で潰されて、冷気で凍結されて機能停止した。

『トリシュタンです。氷結狙撃、行きます！』

――凍て付かせし青銀の雪草――

さらに上空から冷気の矢が何十本と降り注いで来て、「ごめん、お待たせ！」遅れてわたしの側に着艦したすずかが「アイスバインド！」広範囲に冷気を放った。トリシュとすずかの魔法は、わたしでは凍結範囲じゃなかった別の砲台を次々と凍結させていく。

「よーしよし♪　氷結魔法はちゃんと効いてくれてる・・・ね！」

――氷牙棘華刃――

「純粋魔力や変換魔法はどれも弾かれちゃってたから、最初はどうしようかって思ったけど・・・！」

――アイスバインド――

『私は右翼から攻めて行こうと思う。そちらにはイリスとすずかさんが居ますし』

「あぁ、うん。だね。そんじゃよろしく～」

左翼から艦体中央部に向かって駆けるわたしとすずかで、砲台５０基を次々と凍結して無力化させてく。少しでも危険なく"アンドレアルフス"の滑走路に突入しやすいように。まぁ段々とわたしはガジェット迎撃、その間にすずかが砲台無力化って役割になってきたけど。

「お？　シグナムも来てくれてたんだ」

左翼上の砲台を無力化し終えて中央部に到着したところで、右翼側でガジェットを斬り捨てまくるシグナムの姿を発見。空から降り注ぐトリシュの凍結の矢１００本近くが、シグナムの側の砲台を撃ち抜いて凍結していく。そしてとうとう・・・

「この砲台で最後！　シャルちゃん！」

「うんっ！」

――剣神モード――

絶対切断のスキルを発動して、"キルシュブリューテ"で最後の砲塔を寸断。返す刃で砲台を横一閃に寸断。爆発炎上する前に「リフリジレイト・エア！」すずかが砲台を凍結してくれた。これで"アンドレアルフス"の上方１８０度の空域への防衛砲撃は停止した。

「シグナム、いつでもＧｏ　！」

「ああ！　エリオ、キャロ、艦体後部に回っておけ！」

『『了解です！』』

「トーレもね！　トリシュ、援護に感謝！」

『承知した』

『どういたしまして！』

「各騎士にも感謝を！　本来の任務に戻られたし！」

トーレには行動開始を、トリシュや一緒に戦ってくれた８人の騎士

にはサポートをしてくれたことへのお礼を伝えた。そしてわたしとすずかは頷き合って艦上から飛び立って、トーレ達と合流するべく"アンドレアルフス"の後部へと向かう。

「お待たせ！」

トーレや飛竜フリードリヒの鞍に跨るエリオとキャロの3人と1匹と合流して、"アンドレアルフス"の滑走路後部へと移動したところで・・・

「セッテ、オットー、ディード・・・！」

滑走路からあの3人が出撃して来た。そんな中で、アースラのグリフィスから金色の機体を持ってたシームルグが全滅、残るは生命反応のある機体1機のみとなって、トリシュが対処するって内容の全体通信が入った。わたしとトーレは頷き合って・・・

「こちら教会騎士イリス。護衛艦アンドレアルフスより救出対象のセッテ、オットー、ディードの出撃を確認。これよりわたしと第零技術部のトーレが交戦に入ります」

同じく全体通信を入れて報告する。それで「機動六課、ライトニング分隊のシグナムだ。これよりアンドレアルフス内に突入する」シグナムも、変に意見を出さずにわたしの考えに乗ってくれた。遅れてルシルから、フォルセティとの交戦に入るって内容の通信が入った。

「エリオ、キャロ、それにすずか。我々はこのまま突入するぞ」
「「了解です！」」「はいっ」
「トーレ、援護！」
「ああ！」
こっちに向かって飛んで来るセッテ達の迎撃を、わたしとトーレが担当。スキルを解除したうえで「光牙！」刀身に魔力を付加させる。
「ＩＳ発動！　ライドインパルス！」
トーレは手首付近と太腿と足首からエネルギーの翼であり刃であるインパルスブレードを８枚展開。
「セッテは私が対処する。イリスは・・・」
「オットーとディードね。地上本部での借りはここで返させてもらおうっかな！」
相手は決まった。トーレは「では行くぞ！」そう言って、その姿を掻き消した。トーレのスキルは超高速移動で、瞬間的な速度じゃフェイトと同じかちょい上くらい。そんなトーレはブーメランのような大剣を構えるセッテに突撃した。
――ＩＳレイストーム――

んで、オットーは無数の光線を放って来た。いくつかがエリオとキャロの乗るフリードリヒに向かって行ったから「烈閃刃！」"キルシュブリューテ"を振り降ろして、剣状砲撃を放った。フリードリヒと光線の合間を貫く砲撃が、光線を全て蹴散らしてやった。

「エリオ、キャロ、そのまま往って！」

「「はいっ！」」

――ＩＳツインブレイズ――

"キルシュブリューテ"を振り降ろした体勢なわたしの背後に、赤いエネルギーの刀身を持つ双剣使いの少女・ディードが回り込んで来た。この子も機動力が良い感じなんだよね。わたしは背中に展開してる紅翼をピンと張った状態で、「甘い！」真後ろに立てる。

「ぐっ！？」

ディードを紅翼の表側でバシッと挟み込んで捕まえて、背後からの奇襲を阻止。そのままその場で前転して、「飛んでけぇ～い！」ディードをオットーへと向けて放り投げてやった。

「ん。すずか達はちゃんと滑走路に突入できたね」

無事に滑走路に降り立ったフリードリヒの後姿を確認して、これで戦闘に集中できるって安堵。トーレもセッテと激しく衝突し合って

るし、わたしも自分の仕事をきっちりと果たさないとね。

「・・・って、おーい！　まだ出て来るわけ！」

滑走路に空間の歪みが発生したかと思えば、また戦闘機っぽいのが出現した。大きなミサイルにカナード翼と後退翼、主翼の真後ろに垂直尾翼２枚を付けた感じ。機体にはは有人機と同じデフォルメされた猫とネズミのイラストが描かれてる。単発エンジンが起動して、続々と滑走路から飛び立って行った。

「レイストーム」

そっちに気を取られてたところで、ディードの背後に立つオットーが光線を１５本と放射状に放って、ディードは直進してわたしに突進。振り上げていた右手の「ツインブレイズ！」を振り降ろして来て、慌てて後退することで回避。

（光線が曲がってわたしの方に軌道変更か・・・！）

ディードの外から内へ向かって横に振るう左手のツインブレイズを「速っ・・・！」思わず立てた"キルシュブリューテ"の刀身で受け止める。間髪入れずに右のツインブレイズをハサミみたくわたしを挟み込むように振るって来た。

「おっと！」

その一撃を具現した鞘で受け止めたところで、オットーの光線が背

後から向かって来た。避けることも出来るけど、ディードに当たっちゃうかもしれないしな～。

「だったら！」

パンツァーシルト3枚を三角形状に組み合わせた対魔力完全防御陣の「シュヴェーラーパンツァー！」を背後に発動。続けて「せいや！」右膝を曲げて、彼女のお腹に向けて右前蹴りを繰り出した。

「っ・・・！」

ディードは急上昇して前蹴りを躱すと、「ちょっ・・・！」彼女の居た場所の後方からセッテのブーメランが高速で迫って来てるのが判った。

――ハルトリーゲル・シルト――

4重の六角形状の対物シールドを慌てて展開。直後に背後のシールドに光線が着弾しまくって、次々と爆発を起こしてくけど破壊はされない。そして前方に展開してるシールドに高速旋回してるブーメランが直撃。ガリガリ削られてく中、その場所から離脱したところでシールドが打ち破られた。

「（対物シールドを砕けるほどの破壊力ってわけか・・・）つうか、トーレ！　しっかりセッテを抑えておいてよ！」

『すまん！　しかし、お前もオットーを抑えてもらいたいものだ！

こちらにも光線を撃って来るぞ！』

――レイストーム――

トーレと念話で言い合ってると、オットーはわたしとトーレにそれぞれ１０本の光線を放ってきた。わたしにはディード、トーレにはセッテ、オットーが中衛としてわたしとトーレに援護射撃を加えて来るって感じだ。

「なら・・・！」

光線を避けてる最中に突っ込んで来たディードの二剣振り降ろしを、水平に掲げた鞘で受け止める。すぐに"キルシュブリューテ"を横一線に振るって「うぐっ！」彼女の脇腹に一撃を打ち込んだ。この一撃で終わらせれば儲けものなんだけどな～。

（さっきから鬱陶しい援護射撃を繰り返すオットーから片付ける！）

トーレも同じ考えみたいで、セッテのブーメランによる直接・間接な猛攻をあしらいながらオットーに接近を試みてる。ここまでやったらさすがに気付かれて、オットーはわたしとトーレから距離を取るべく行動を開始して、セッテとディードはわたし達に追って来た。

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

「逃がさない！」

紅翼を大きく羽ばたかせて、飛行速度を一時的に引き上げる。

――スローターアームズ・クロッシングダンス――

そんなわたしの行く手にブーメラン2つが交差するように飛来。単なる武装に手加減なんて一切無用。スキルを再発動して、"キルシュブリューテ"を「一閃！」してブーメランを寸断する。

「イリス！」

「オッケー！」

わたしの横に並ぶトーレと頷き合う。足元をちらりと見ると、良い具合にセッテとディードが固まり始めてくれてる。セッテは「スローターアームズ！」両手のブーメランをわたし達の行く手に向かって投擲。さらに具現したブーメランを続けて4つと投げ放って、計6つのブーメランが前方以外のいろんな角度から向かって来る。んで前方からはオットーの光線。

「もうちょい、もうちょい・・・！」

光線は躱してブーメランは寸断しつつ、セッテとディードを一網打尽するチャンスを窺う。わたしとトーレはわざと速度を落として、後ろの2人との距離を少しずつ詰める。もう一度チラッと足元を見ると、ディードが今まさに攻撃に移ろうとしてた。タイミング的にはまだ早過ぎるけど、ここで仕掛けるしかない。

「ライドインパルス！」

そう判断した時、トーレがいきなりディードに向かって高速移動。わたしはすぐにカートリッジをロードして、"キルシュブリューテ"の刀身に魔力を付加する。さらに周囲の魔力を集束する。対プラダマンテ用に集束を習得したんだ。実戦で初めて使うこの魔法で・・・。

「なにを・・・！？」

トーレにガシッと胸倉を掴まれたディードが驚きの声を上げて、トーレは「おおおおおお！」そんな彼女をセッテへ向かって放り投げた。ここだ、そう思えた。わたし達が追って来ず、さらにセッテ達へターゲットを変更したって気付いたらしいオットーからの光線の雨を、「シュヴェーラーパンツァー！」を展開して防御。

「極光牙・・・煌覇閃謳刃！」

トーレを含めたセッテとディードに向けて、振り降ろした"キルシュブリューテ"から剣状集束砲撃を放った。トーレは直前で高速移動して射線上から退避したけど、セッテとディードは退避することが出来ずに直撃した。

「ディード、セッテ！」

――ライドインパルス――

オットーが動きを止めたところにトーレがすかさず高速移動で最接近して、「ぐふっ！？」鳩尾に強烈な拳打を打ち込んだ。オットーはあっさり意識を失った。そしてセッテとディードは付近のビルの屋上に墜落したから、わたしは２人の元へと降り立つ。

「・・・よし。とにかく確保～、確保～」

完全にのびちゃってるセッテとディードを手錠で拘束して、２人を連行するように近くの部隊に通信を入れた。

Ｅｉｐｉｃ２５－Ｂ航空空母アンドレアルフス攻略戦～Ａｌｐｉｎｅ　Ｆａｍｉｌｙ～

†††Ｓｉｄｅキャロ†††

私とエリオ君とシグナム副隊長のライトニング、それにすずかさんとシャルさんとトーレ一尉の６人は、"聖王のゆりかご"の無防備な後方を護る護衛艦・"アンドレアルフス"の攻略を任された。そして今、艦内に突入するべく滑走路に向かってる途中。

――レイストーム――

そんな中、本当の姿に戻ってるフリードの鞍に跨ってる私とエリオ君へと敵の光線が向かって来た。光線を避けるために手綱を握るエリオ君（今ではすっかりフリードと仲良しだ）が、フリードに回避行動を取らせようとした時・・・

――光牙烈閃刃――

真紅色の砲撃が私たちと光線の間を通り抜けて、光線を全て掻き消してくれて行った。砲撃で私たちを護ってくれたシャルさんが「エリオ、キャロ、そのまま往って！」そう言ってくれたから、私とエリオ君は「はいっ！」頷き返した。

「エリオ君！」

「うん！」

先に滑走路に降り立ってたシグナム副隊長とすずかさんに続いて、私たちも滑走路に降り立つことが出来た。私は「ありがとう、フリード」って首筋を撫でて、いつもの小さな姿に戻してあげる。

「スノーホワイト。艦内へ入るための入り口を探して」

≪かしこまりましたわ≫

すずかさんが両手にはめたグローブ型のブーストデバイス・"スノーホワイト"に指示を出した。滑走路は全長１ｋｍ後半、幅は８００ｍ、高さは１０ｍくらいあるから、入口を探すのも一苦労しそう。

「イレギュラリティソナー！」

滑走路の床に両手を付いたすずかさんを中心にして魔力波が円形状に這うように放たれて、滑走路内すべてを通過した。そして「こっちです！」すずかさんが駆け出したから私たちも追った。すずかさんが滑走路の中央部で立ち止まるとしゃがみ込んで、「ここにハッチがあります」床に手を這わせた。するとプシュッと音を出しながらハッチが開いた。

「内部には防衛戦力が控えていると思われる。シャルやトーレが揃うのを待っていたいが・・・」

シグナム副隊長が艦体後方を見やった。さっきの光線が空を縦横無

尽に通過して行ってて、すごく激しい戦闘だって判る。エリオ君が「どうしましょう？」って訊ねたところで、「我々もご一緒します！」滑走路の前方から、２０人くらいの武装隊員が来てくれてた。

「第２００３航空武装隊、２班と３班です」

「よかったです。通信や念話を入れてたんですけど繋がらなかったので、何かあったのかと不安でしたが・・・」

ある隊員さんにそう言われてシグナム副隊長も「なるほど。これは妨害が働いているのか」確認したみたい。外部との通信や念話が妨害されてるって。

「本局や教会騎士団から新しく援軍が来てくれましたので、少し戦力に空きが出て来たんです」

「そうか。ではよろしく頼む！」

シグナム副隊長の敬礼に「お願いします！」武装隊のみなさんも敬礼した。そうして私たちはハッチから艦内に突入。通路は大人が５人が横に並んで歩けるほどで、５人ずつに分かれて艦内を探索開始。私たちはもちろん、シグナム副隊長とエリオ君とすずかさん、それにフリード。

「一先ず我々はブリッジへ向かおう。アンドレアルフスを操っている何者かが必ず居るはずだ」

出撃前に"アンドレアルフス"の生命反応探査で、ブリッジ周辺に生命反応が固まってるのは判明してる。メガーヌ准陸尉とルーテシアちゃん、リヴィアちゃん、融合騎のアギトの４つ、そしてあと１つがブリッジから。その１つがきっとこの艦を動かしてる人・・・。

（ルーちゃん、リヴィーちゃん・・・）

私たちの最優先任務は艦の制圧。防衛戦力は可能な限り後回しにすることになってる。だから私やエリオ君と年の近いあの２人とは、ちゃんとお話しが出来ないかもしれないっていうのがちょっと心配。

（助けてあげたい。洗脳されて戦わされてるんなら・・・！）

入り組んだ通路内を走りながら私はギュッと両手を握りしめる。隣を走るエリオ君をチラッと見ようとしたところで、「きゃ・・・？」目の前が真っ白に光って、一瞬の浮遊感に襲われた。そして気が付けば「ここは・・・？」さっきまで走ってた通路じゃなくて大きな空間。

「キャロ！」

「エリオ君！」

側にはエリオ君が居て、１人じゃないことに心底ホッとした。でもシグナム副隊長とすずかさんの姿はなかった。不安になりそうな私たちに「侵入者はやっぱりあなた達だったんだ～」そう声を掛けて来たのは・・・

「ルーちゃん・・・！」

「リヴィー・・・！」

私とエリオ君で助けてあげたいって考えてた双子の姉妹、ルーちゃんとリヴィーちゃんの2人だった。2人は私たちのところにまでゆっくり歩いて来てから、「お話しがしたいの！」って話しかける。

「話？　どうする？　お姉ちゃん」

「うーん。私たちの目的は、侵入者の撃退だから・・・」

ルーちゃんとリヴィーちゃんは同時に腕を組んで唸った。双子なんだな〜って思えるほどにシンクロしてる。でも言ってることは物騒で、黙ってたらそのまま戦闘開始に陥りそうだったから「あのね！」慌てて声を掛ける。

「ぼ、僕たちは、君たちを助けてあげたいんだ！」

「私たちを助ける？」

「何を助けるの？　私たちは何も困ってないけど・・・」

洗脳されてるから当然の返答なんだろうけど、だからこそ私たちが止めてあげたい。こんな今の状況に何の疑問を持たずに戦いを強いられてるなんて、いくらなんでも酷過ぎる。

「話っていうのがそれだけなら・・・」

≪Ｍｏｄｅ　Ｃｏｍｂａｔ≫

リヴィーちゃんのグローブ型デバイスからそんな声が発せられると、ツインテールのセーラー服からポニーテールのロングコートに変わった。その形態は解析からして近接格闘戦に優れてるって判明してる。エリオ君もその・・・コテンパンにされちゃったし。

――トーデスドルヒ――

ルーちゃんの側に短剣型射撃魔法が８つと展開された。

「じゃ、リヴィア・アルピーノと――」

「ルーテシア・アルピーノが――」

「「お相手するよ♪」」

†††Ｓｉｄｅキャロ⇒シグナム†††

「エリオ、キャロ、すずか！」

私は独り通路を駆け、突如として姿を消した３人の名前を呼ぶ。魔力やエネルギー、それに物理系の奇襲やトラップには警戒していたが、こうも容易く私の警戒を抜いてくるとは。入り組んだ迷路の如

き通路には、迎撃戦力が何1つとして設けられていないのが救いだ。さらに言えばＡＭＦも無い。

（それはメガーヌ准陸尉たち魔導師が居るからだろうが・・・）

ガジェットも居ないのが引っ掛かる。それ程の防衛戦力がこの艦に居るということなのだろうか。アルピーノ家とは別の戦力が居ると考えるのが妥当なのだが。やはりこの艦を操っている何者か・・・。

「スライドドア・・・」

目の前に見えて来たのはスライドドア。"レヴァンティン"を収めている鞘を握る力を強く握りしめ、自然と開いたドアを潜る。５０ｍ四方の広い部屋の中央に彼女たち、「メガーヌ准陸尉、アギト・・・！」の2人が佇んでいた。

「そう。私たちの相手は、古代ベルカ式の騎士であるあなたなのね」

「メガーヌ、メガーヌ！　さっさとコイツを片付けて、ガキンチョ2人を相手にしてるルールーとリヴィーのところに行こうよ♪」

「なに・・・？」

ルーテシアとリヴィアが相手にしている子供2人。エリオとキャロで間違いないだろう。

――私、ルーちゃんとリヴィーちゃんとお話ししたいんです！――

――僕がリヴィーと戦っても勝てないかも知れません。それでも僕が、僕とキャロが、あの２人を止めないといけないような気がするんです――

――たとえ洗脳されていると言っても、言葉はちゃんと通じると思うから！――

誰がどの戦力と交戦するかを決める会議でのエリオとキャロの発言。２人の親とも言えるフェイトだけでなく、我々も最初は考え直すように言ったのだが２人の熱望から、私の動向という形で決まった。だと言うのに不覚を取ってしまって離れ離れ。

（ランクで言えばエリオはＢ～Ａ、キャロはＣ＋～Ｂ。対するルーテシアとリヴィアは推定Ｓ。アギトの言うように、早々にメガーヌ准陸尉とアギトを確保して、エリオとキャロの元へ急がねば・・・！）

私は居合抜きの構えを取り、「武装を解除し、投降してください」そう語りかける。そう、無駄なものだとしても。

「ごめんなさいね。これが私たちの仕事なの」

――フォーゲルケーフィヒ――

「というわけで、お前はここで終わりだ！」

メガーヌ准尉の体の周囲に魔力発射体１０基による円環が３つと展

開され、アギトの側には炎熱の短剣が１０基と展開された。共に射撃系を得意としている。近接戦主体の私にとっては、相手のレベルによっては苦労する羽目になるが・・・。

（あなたの魔法は心得ている！）

無論アギトの魔法もだ。お前との付き合いは1年と満たなかったが、共に過ごした時間は濃いものだったと・・・。"レヴァンティン"の柄を右手で握りしめ・・・

「時空管理局本局、古代遺失物管理部・機動六課、八神シグナム。いざ！」

「チーム・シコラクス、メガーヌ・アルピーノと――」

――グリッツェンラヴィーネ――

「烈火の剣精アギト！」

――フランメ・ドルヒ――

メガーヌ准尉の発射体のリング3つから何十発という魔力弾を発射される。雪崩のように横広がりに迫り、その中にアギトの短剣紛れ込んでいる。的にならないように足を止めることなく駆け回りつつ・・・

「空牙！」

――シュヴァルムシュパッツェン――

魔力斬撃をメガーヌ准尉へと向けて飛ばすが、准尉の魔力弾連射がこれを迎撃した。あの３つのリングがかなり厄介だな。魔力スフィアは魔力弾を５発撃つと消滅するが、即座に新しいスフィアが生成される。終わりの無いサイクルだ。

（それにしても、准尉は射撃が得意とは言えその術式体系は近代ベルカ式だ。戦闘データを見て重々承知していたが、直に相対すれば魔力的にも魔導師ランク的にもその異質さを改めて実感できる。これは何かしらのドーピングをしているな）

――パンツァーシルト――

体の側面にシールドを展開し、准尉とアギトの周囲を時計回りに駆けて少しずつ距離を詰めて行く。アギトの火炎弾「ブレネンクリューガー！」は、私をしっかりと捉えられておらず走り去ったところに撃ち込まれ続けるが、准尉の魔力弾連射は私の速度にしっかりと合わせてシールドに着弾し続ける。それでも耐えつつ徐々に距離を詰める。

「シュトルムヴィンデ！」

一瞬だが弾幕が途切れたところで"レヴァンティン"を振るって衝撃波を放ち、魔力弾を打ち消しながら准尉へと向かう。

「こんな魔法もあるのね・・・！」

准尉が距離を空けようとトントンっと床を蹴って後退し、１つのリングを形作っている１０基のスフィアを一纏めに集束して、人間の頭部大のスフィアへと変えた。

――エッケザックス――

ソレを砲撃として発射し衝撃波を打ち消した。魔力弾程度なら粉砕できるが、砲撃は無理なようだな。准尉は残りのリング２つを集束させ、大きくしたスフィア２基を側に控えさせた。

「これだけの猛攻に耐えて、さらには接近する。素直に称賛するわ。だけど・・・」

アギトが准尉の頭上へと移動して、「スターレンゲホイル！」魔力弾を床に向けて発射した。お前の魔法は知っている。准尉やアギトの気配と魔力をしっかりと脳裏に刻み込み、２人に背を向けることなく目を閉じて即座に後退する。直後、まぶたの裏からでも判るほどの閃光が爆ぜ、鼓膜が破れてしまいそうな爆音が襲って来た。

――エッケザックス――

「っ！」

その場から右へ向かって駆け出すと、爆音に紛れて爆発音と衝撃が背後から伝わる。直後に反転して体を向け直し、右斜め前に向かっ

て一足飛びで移動。その直後に先程と同じ爆発音と衝撃波が背後に伝わった。砲撃の２連撃だな。

（２発目！）

――パンツァーシルト――

二連砲撃をやり過ごしたところで、即座に前面にシールドを展開したうえで准尉へ向かって突進する。この時にアギトの繰り出した魔法による閃光と爆音は治まるが、耳鳴りはまだ続き、まぶたを開けるも光が強烈過ぎたこともあって未だに鮮明とは言えない。

――フラッターハフト・シュパッツ――

――フランメ・ドルヒ――

研ぎ澄ませた感覚に引っ掛かる複数の魔力反応。両脚に魔力を込め、床を蹴って天井へと跳ぶ。脳裏にこの部屋のイメージを浮かべて、どこで反転し、天井に足裏を付け、膝を曲げればいいか、などというタイミングを計る。

（いくつかの魔力は通り過ぎ、残りの８つの魔力はそのまま追って来るか・・・）

准尉の誘導射撃だな。准尉――大きな魔力反応の居るところに検討を付け、「パンツァーガイスト」を発動して全身を魔力で覆って、天井を強く蹴ってその場へと突っ込む。６つの魔力反応が下方から

向かって来るのが判った。

――ブレネンクリューガー――

ようやく視力が正常に機能したところで、感知していた魔力反応通りにアギトの火炎弾6発が四方八方から迫って来ていた。直下に居る准尉は笑顔を浮かべつつ私を見上げ、デコピン状態にした右手を私へと向けていた。折り曲げられた中指の爪の辺りには小さな魔力スフィアが1基とある。

――シルト・ドゥルヒシーセン――

まずはアギトの火炎弾が私に着弾するが、全身を覆う魔力膜の防御力は突破できない。爆炎と黒煙で僅かに視界が黒に満ちるが、私は急降下中。すぐに視界は鮮明になる。とここで、准尉が魔力スフィアを爪弾きで射出。ビー玉サイズの魔力弾だが、ここでその攻撃となると見た目通りというわけではあるまい。

――パンツァーシルト――

念のために前方にシールドを展開した直後に着弾し・・・

「っ！？・・・くっ！」

シールドやバリアを貫通し、私の生身にダメージを与えてきた。とは言ってもギリギリで顔を逸らしたことで頬を掠っただけだったが、その効果はかなりまずい。防御魔法としての抵抗感が一切感じられ

ないところを見ると、直撃だけは確実に避けねばなるまい。

「穿空牙！」

突進から繋げる零距離の空牙を准尉に打ち込む。咄嗟に両腕を掲げてバリアを張ってガードされたが准尉は耐えきれずに「きゃあああ！」悲鳴を上げ、２０ｍほど先の壁へと向かって吹き飛び、そして壁に激突した。

「メガーヌ！」

（准尉の反撃が再開される前に、アギトだけでも墜とす！）

少し痛いかも知れないが、これもお前の為だ。こういう場合のためにバインドなりを修得していれば良いんだが、恥ずかしながらそこまで器用ではない。"レヴァンティン"を反転させ、准尉に気を取られていることで私に背を向けているアギトへ一足飛びで接近し、そのまま峰打ちを繰り出そうとした時・・・

――アドラーフリーゲン――

ピンポイントで"レヴァンティン"の腹に魔力弾が着弾し、その軌道を逸らされてしまったことで空振ってしまう。そのやり取りでアギトに「いつの間に！」気付かれてしまった。振り降ろした勢いのまま前方に向かって跳ぶと同時・・・

――アドラーフリーゲン――

「この・・・！」

――フランメ・ドルヒ――

准尉とアギトの射撃魔法が私の後を追って撃ち込まれ続ける。バリアも解除され、再発動するのにも僅かな時間を有するために「はっ！」"レヴァンティン"で斬り払って迎撃する。攻撃が止んだところで足を止め、防護服を両手で払っている准尉へと目をやる。

「メガーヌ。アイツ、思った以上にやるよ」

「そうね～。じゃあ、アレをやってみようかしら」

「おう！　レーゼフェアにいろいろと調整してもらって、メガーヌともユニゾン出来るようになったしな！」

アギトはそんな准尉の元へ向かい、そして手を繋いだ。ユニゾンという単語以上に「レーゼフェア・・・！」の名前に反応する。ルシル以外には無闇に手を出さないとは聞いてはいても、背筋にどうしても嫌な汗が流れる。

――今度は貴様だけでなく下僕共も逃がさん・・・！――

――面白な、そのジョーク。じゃあ、俺と一対一で闘ってもらおうじゃないか――

「「ユニゾン・イン！」」

脳裏に過っていたバンヘルドとシュヴァリエルの言葉と存在感に思いだし気圧されてしまっていた私は、准尉とアギトのユニゾンを許してしまった。准尉の紫色の長髪は赤紫色になり、赤い瞳もまた赤紫色へと変わり、背中より翼とは言えない崩れた形状の炎が一対噴き上がっている。そして床より１ｍほど浮き上がっていることから、飛行能力も得ているようだ。

「大した魔力を放つではないですか・・・！」

肌にビリビリと感じる強い魔力。いくらユニゾンしたと言ってもこれ程までに魔力が増大するなど有り得ん。准尉とアギトがユニゾン出来るようにレーゼフェアが調整したという話だったが、それだけではないようだが・・・。

（これはこれでいい流れとも言えるか）

准尉とアギトを纏めて戦闘不能にする好機でもあり、あれほどの魔力なら手加減も無用だろう。手加減なく攻撃を打ち込めるのは助かるしな。

――フランメラート――

１２個の火の輪が時計の数字と同じような位置に展開された。ソレらが高速で回転を始めると「ロックオン！」准尉が私を指差した。

――フォイアフォーゲル・フルーク――

回転している１２個の火の輪から舞い上がる火の粉が火炎弾となったのを見、私は即座に行動開始。まずはその場から離れるために駆け出し、"レヴァンティン"の給弾口に弾頭の蒼いカートリッジを２発と装填する。出撃前にルシルから渡された物で、アイツの魔力が込められている。

（オーディンの事を思い出してしまうな）

私に向かって殺到して来る火炎弾を駆け回って回避しつつ、「レヴァンティン！」カートリッジをロード。ドクンと跳ねる心臓、そしてリンカーコア。荒れ狂う魔力を抑え込み、准尉への攻撃を仕掛けるタイミングを計る。

（アギト。お前と共に組んだこの魔法で、お前の目を覚まさせてやろう！）

お前とのユニゾンをすることではじめて扱える魔法だったが、ルシルの魔力のおかげで私ひとりでも発動できる。しかし准尉の猛攻は途切れることを知らんな。１２個の火の輪は消失する様子も無く、准尉の表情も余裕に満ちている。ならば・・・。

――パンツァーガイスト――

もう一度、全身に魔力の膜を覆って防御態勢に入る。そして足を止めて「いざ！」攻撃態勢に移った。

「アギト！」

准尉の背後に展開されていた１２個の火の輪が前方へと回り込み、砲塔のように１列に並んだ。おそらくこれが互いに最後の一撃だろう。さらにもう１発のカートリッジをロードし、私の魔力を高める。

「火竜・・・！」

私は左手に炎の剣を創り出し・・・

「ドラッヘン・・・」

准尉の前にある火の輪が連結し、まさしく砲塔と化した。

「一閃！」

「ゲブリュル！」

准尉へと向けて左腕を振るって放つは、炎熱の斬撃であり砲撃たる火竜一閃。准尉が放つは炎熱の砲塔自体を攻撃へと変えた砲撃。私と准尉の砲撃が真っ向から激突し、室内を容易く満たすほどの爆炎となった。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒エリオ†††

「リヴィー！」

「さっきから馴れ馴れしいと思う！」

――トイフェルフース――

桁違いの魔力が込められた右足の上段蹴りをしゃがみ込んで躱す。僕はそのままリヴィーの軸足になってる左脚を"ストラーダ"で払うと、リヴィーはバランスを崩して「おわわっ！」後退する。正直言うと、転ばせるつもりだったんだけど。リヴィーのバランス力も凄過ぎる。それでも僕はすぐに立ち上がりながら振り上げた"ストラーダ"を、「えいっ！」浮いてた右足を床に付けたばかりのリヴィーに向けて振り降ろす。

「この・・・！」

リヴィーは体勢を立て直すんじゃなくてそのままバック転。そして蹴り上げた左足の爪先蹴りで"ストラーダ"を迎撃して来た。"ストラーダ"が蹴り弾かれたことで僕は「ぅく・・・！」万歳状態の隙だらけに。

――トーデスドルヒ――

そんな僕の懐へ向かって飛来するのは、ルーの短剣型射撃魔法１２発。今の僕には避ける術も防ぐ術もない。だけど僕ひとりじゃない。

「プロテクション！」

桃色の魔力で作られたバリアが僕の前面に展開されて、ルーの攻撃を全弾防いでくれた。僕はその場から離れたところで、リヴィーの双子のお姉さんだっていうルーと相対してる「ありがとう、キャロ！」にお礼を伝える。キャロだってルーっていう強敵相手に大変なのに。

（これ以上は迷惑を掛けられない・・・！）

とは言ってもリヴィーの強さは本当に尋常じゃない。さっきから一方的に攻められて、殴られて、蹴られてばかりいる。相手が女の子だから、なんて甘い事なんて言ってる暇も余裕もない。

「なんて弱音を吐いてる暇もない・・・！」

体勢を立て直し終えたリヴィーへと「スピーアアングリフ！」突撃する。今の"ストラーダ"は第二形態のデューゼンフォルムで、第一形態のスピーアフォルムよりさらにブースターの数を増やしてる。穂と柄の間にあるヘッド部分の側面に2つずつの計4つはサイドブースター、石突部分の1つはリアブースター、元からある2つはヘッドブースター。大まかに分けて3つあるブースターを駆使すれば限定的だけど空戦が出来るし、それに斬撃力や刺突力もグンッと上がる。

「そんな直線的な動きしか出来ないなら、いくら早くてもカウンターの的だよ！」

そんなことくらい嫌と言うほど理解してるよ。この戦いが始まってからというもの、一体どれだけ殴られ蹴られたか。右拳に魔力を付

加して待ち構えるリヴィーにそのまま向かって行く。

「ハーツイーズストライク！」

突き出された右拳から放たれる砲撃。"ストラーダ"の向きを上方に修正することで、砲撃の真上を乗り越える。足元ギリギリを通り過ぎてった砲撃はもう脅威じゃない。見据えるのはただリヴィー1人のみ。砲撃を撃ち終えたばかりのリヴィーに"ストラーダ"の穂先を向けて突っ込み直す。

――ケレリタース・ルーキス――

穂先がリヴィーに当たるかどうかっていうところで、彼女の姿が一瞬で消えた。リヴィーの瞬間転移スキルだ。"ストラーダ"のブースターをすべて解除した僕は、着地した瞬間に「ソニックムーブ！」を発動。その場からすぐに離れる。

――トイフェルファオスト――

さっきまで居たところに突き刺さるのはレヴィーの魔力の込められた左拳。床に大きな亀裂を入れるほどの威力だ。リヴィーは陸戦限定での高速移動魔法「ボーデンドンナー！」を発動して、僕の元へ突進して来た。柄を両手で握った"ストラーダ"を横に構えてカウンターを狙う。

――ラケーテンホルン――

「はぁぁぁぁぁぁッ！」

――スピーアシュナイデン――

リヴィーは突進から繋げる飛び蹴りを、僕はサイドブースターの片方を点火することで速度と威力を底上げした斬撃を繰り出した。リヴィーの両足の裏が激突する。"ストラーダ"からズンッと両腕に伝わる衝撃に歯噛みする。それでも負けじと振り抜いた"ストラーダ"の勢いのままにリヴィーは跳んで・・・

――ヒンメルブリッツ――

今度は空戦用の高速移動魔法を発動して、瞬時に僕の真後ろへと移動して来た。僕は回避じゃなくて迎撃に打って出る。振り払ったばかりの"ストラーダ"のサイドブースターを再点火。ヴィータ副隊長のラケーテンハンマーと同じ遠心力を加えた一撃（僕の場合は斬撃だ）を背後に立つリヴィーに繰り出す。

「っく！」

「いったた・・・。あのね、だからね？　わたしを相手に近接戦すること自体が間違ってるの。ＯＫ？」

以前みたく"ストラーダ"の柄を掴み取ることで、僕の攻撃を無力化してきたリヴィー。でも今日は一味違うよ。サイドブースターの推進力にものを言わせて「はあああああッ！」"ストラーダ"をリヴィーごと振り抜いた。振り回されるリヴィーは自分から柄を手放

して宙を滑空、数ｍ先で両足と右手を床に付くようにして着地した。

（やっぱり強い。でもここで折れるわけにはいかない！）

カートリッジを新しくロードしたところで、連続する爆発音と「きゃあ！」キャロの悲鳴が聞こえた。思わずレヴィーからキャロの方へと目をやった瞬間・・・

――ボーデンドンナーーー

「優しいね」

耳元でそう言われた気がした。

「だから手加減したげる！」

――トイフェルフースーー

背中に強烈な蹴りを入れられた僕は「うぐっ！」どうすることもなく蹴り飛ばされて、床に伏せてしまってるキャロやフリードの側に落ちた。僕は痛みに悶えつつ体を起こしながら「キャロ、フリード・・・！」って呼ぶ。

「大丈夫・・・。直撃は受けてないから・・・」

「きゅくるー！」

キャロもすぐに体を起こして、フリードも翼を羽ばたかせて飛んだ。先に僕が立ち上ってキャロに手を差し出すと、「ありがとう、エリオ君」キャロは僕の手を取ってくれて、少しふらつきながらも立った。

「お姉ちゃん。なんか攻撃しちゃいけない雰囲気・・・」

「もうこのまま大人しく帰ってもらおうっか・・・」

ルーとリヴィーも合流していて、僕とキャロが臨戦態勢に入るのを待ってくれてた。やっぱり優しい子たちなんだ。だから「どうして！」改めて僕は話しかける。

「どうしてプライソンのこんな狂った計画を手伝っているんだ！プライソンの所為でどれだけの犠牲者や被害が出るって・・・！」

「そうだよ！　この前の本部の襲撃で、多くの人が亡くなったんだよ・・・！」

それに今もおそらく外じゃ多くの人が亡くなってるかもしれない。僕たちがここ"アンドレアルフス"に突入する前、すでに２０名近くの航空武装隊員が撃墜されて亡くなってしまっていた。

「だってママがプライソンを手伝ってるんだし」

「娘として一緒に手伝うのはおかしくない」

「あなた達だって、お母さん代わりの隊長さんの言うこと聴いて戦ってるし」

「それと同じだよ。代わりのお母さんの言うことを聴いてるあなた達、ママの言うことを聴いてる私たち。大切な人が願ってるから、少しでも力になりたくて手伝う。どこかおかしい？」

ルーとリヴィーが交互にそう言って、最後にルーが小首を傾げた。大切な人のため。ソレは理解できる。僕だって最初はフェイトさんやアリシアさんのために、この魔法の力を使おうとしてた。でも今はそれ以上に・・・。

「僕は、僕とキャロの意志でここに立ってる！　大切な人たちの考えを振り切って！　ルーとリヴィー、君たちと話をして、戦わずに止めたかったから！」

「ルーちゃん、リヴィーちゃん！　お母さんのためだって言うなら、こんな事をしてちゃダメだよ！　今やってるのは悪い事なんだよ！　だからもうやめて！」

いくら洗脳されているからって、もう無罪放免で済まされるようなレベルじゃない罪を犯してしまってる。だからこれ以上の罪を重ねさせないようにしたい。キャロの思いを聴いたルーとリヴィーはギュッと拳を握りしめた。

「悪い事をしてるってことは判ってる、私たちだって・・・！」

――トーデス・ドルヒ――

「でもそうしないとママが生きていけないんだもん！」

――マナクル――

僕たちの足元にベルカ魔法陣が展開されたから、僕はキャロの腰に左腕を回して抱きかかえた上で「ソニックムーブ！」を発動。すぐに魔法陣の上から逃れた直後に、魔法陣から帯状のバインドが複数と伸びて来て、僕たちの元へと殺到して来た。さらにルーの射撃魔法８発も続けて発射された。

「リヴィーちゃん！　メガーヌ准陸尉が生きていけないってどういう意味か教えてほしい！」

「僕たちに何か出来ることがあるなら、全力で力になるから！」

僕はキャロを抱えたまま"ストラーダ"のブースターを利用して室内を跳び回る。リヴィーのバインドは解除されたのかすぐに消えて、ルーの攻撃も全弾が外れた。ソレを確認してブースターを停止して、僕たちは改めて２人と相対する。

「無理だし。・・・プライソンが居て初めて私たち家族はこうして居られる」

「だから負けるわけにはいかない。これが悪い事だとしても・・・！」

これまで余裕に満ちてた２人の表情が悔しげなものになった。プライソンにメガーヌ准陸尉の命を握られていて、死なされないために戦わされていることを強いられてるっていうなら、それこそ助けてあげたい。キャロが「それでも！」って言い縋ったけど、２人はもう話を聴くつもりも無いみたい。

（ルシルさん・・・！　力を貸してください！」

ルシルさんから出撃前に渡されたカートリッジを装填して「カートリッジロード！」する。荒れ狂うリンカーコアと魔力に、一瞬だけど意識を持って行かれそうになった。でも必至に耐える。

「ストラーダ。ウンヴェッターフォルム！」

ヘッドブースターとリアブースターの代わりに突起物が出現する"ストラーダ"。僕の電気変換資質を最大限に発揮できる形態だ。速さでも近接戦でも敵わないなら広域攻撃でリヴィーを止めるしかない。

「キャロ。止めよう、僕たちで」

「・・・うん。ルーちゃん、レヴィーちゃん！　私たちはあなた達を助けたいから！　だから勝つよ！・・・蒼穹を走る白き閃光・我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！」

フリードを真の姿へと戻す呪文を詠唱したキャロ。そしてキャロはフリードの鞍に乗って、「ブースト行くよ、エリオ君！」僕にブー

スト魔法を掛けてくれた。攻撃力と防御力と機動力のブーストだ。

「お姉ちゃん。まずは竜から墜とそう」

「うん。サポートは任せて、リヴィア」

「させない！」

――ソニックムーブ――

リヴィーへと突進しつつ攻撃魔法をスタンバイ。フリードの方を見てたリヴィーが僕へと視線を戻した。狙い通りって風に口端を釣り上げた。それでも構わない。僕は"ストラーダ"の穂先に電気を纏わる。

――トーデス・ドルヒ――

リヴィーの背後に立つルーが放つ射撃魔法。時々だけど自主練を手伝ってくれてたアイリさんの同系統の魔法での練習を思い出す。射線をしっかりと見据えて、最小限の動きで全弾を躱す。いくつかが掠って行ったけど、直撃だけは免れた。

「アインファッハクリンゲ！」

手刀にした両手に魔力刃を展開したリヴィー。振るわれる左手の初撃は、キャロの「ラウンドシールド！」で防御できたけど、一瞬で寸断された。次いで右の手刀が繰り出される。

「サンダーレイジ！」

そして僕も"ストラーダ"を振るって、リヴィーの右手の小指側の側面――小指球と穂先が激突。そして発生する電撃に「ぐぅぅ・・・！」リヴィーと「うああ・・・！」ルーが初めて苦悶の声を漏らした。

「キャロぉぉぉーーーー！」

「フリード！　ブラストレイ！」

僕たちの直上から落ちて来るフリードの火炎砲撃（ドラゴンブレス）。僕はギリギリまでサンダーレイジの効果を持続させて、ルーとリヴィーの足止めをする。そして僕は着弾ギリギリで後退して、砲撃に呑み込まれる2人の姿をしっかりと見届けた。着弾時の衝撃と爆発の衝撃で「くぅ・・・！」僕は吹き飛ばされて、床を転がった。

「カートリッジロード！」

すぐに起き上がって新しくカートリッジをロードして反撃に備える。直後に黒煙が晴らされて、「ひょっとして・・・今のが、切り札だったり・・・する？」そう余裕そうに言ってはいるけど、息も絶え絶えって感じで大きく肩で息をしてる姿を晒すリヴィーとルー。

「まだまだだよ！」

「うん！」

２人が膝を折ってくれるまで、もしくは話をしてくれるまで、僕たちは何度でも立ち上がろう。それが作戦だ。

――ボーデンドンナーーー

リヴィーがジグザグに突っ込んで来た。僕は"ストラーダ"を「サンダーレイジ！」足元へと突き立てた。半球状に爆ぜる電撃の膜にリヴィーは構わずに侵入して来た。通用しないのかなって心が折れそうになったけど「痛っ・・・！」しっかりダメージは入ってる。

「この・・・！」

――トイフェルファオスト――

繰り出される右拳を床から貫いた"ストラーダ"の柄で受け止めたら「ぐっ！」その威力と衝撃に思わず柄を手放してしまった。即座に振るわれる魔力付加してない左拳を「えいっ！」僕は額で受けた。

「いっ・・・！」

リヴィーの表情が痛み一色に染まったところで、電撃を纏わせた右拳「紫電一閃！」をリヴィーのお腹に打ち込んだ。"ストラーダ"を失っても攻撃の手段を失さないよう、シグナム副隊長とアイリさんから学んだ魔法だ。

「ぐふっ・・・・！」

電撃は炸裂して僕の左腕の袖と、リヴィーの防護服のお腹付近を焼いて素肌を晒した。殴り飛ばされたリヴィーの姿に、ルーの「リヴィー！」って叫び声が耳に届いた。僕はすぐにソニックムーブを発動して、宙で体勢を立て直して着地したリヴィーの懐深くへ入り込む。

「紫電・・・一閃！」

「トイフェル・・・ファオスト！」

ほぼ同時。僕の右拳はリヴィーの左頬に、リヴィーの左拳は僕の右頬に打ち込まれた。意識が途切れる直前、目に映ったのは、僕の一撃を受けてとうとう両膝を付いたリヴィーと、リヴィーに駆け寄るルーの姿だった。

Ｅｉｐｉｃ２５－Ｃ航空空母アンドレアルフス攻略戦～Ｓｃｙｌｌａ　２～

ミッドチルダ東部にある広大な森林地区。その奥にはプライソンの本拠地の研究所がある。なんてことはない洞窟を入り口として、その奥には人工的に造られた空間が広がっている。施設は蟻の巣の如く地下へと伸びており、彼の製作した兵器の生産施設、格納庫、居住区などなどが幾つもある。

「進め（ロース）、進め（ロース）、進め（ロース）！」

今現在、プライソンのアジトは二度目の襲撃を受けていた。先頭を往くのは巨大な黒馬を駆る少女。雪のように白い長髪を風に靡かせ、アップグリーンの瞳は真っ直ぐ前に向けられている。その名はクラリス・ド・グレーテル・ヴィルシュテッター。聖王教会教会騎士団が一、翠梔子騎士隊グリューン・ガルデーニエの隊長を務めている騎兵騎士。

纏う騎士甲冑のデザインは、上は詰襟のネックカバー、厚手のノースリーブブラウス、カフスの付いたアームカバー、そしてグローブ。腰には２本のカートリッジベルトがあって、合計４０発くらいある。下はスリットが深いミニタイトスカート、タイツ、そしてロングブーツ。

「ガラクタ如きが、クラリスが使い魔アレクサンドロスの疾駆を止められると思わないでね！」

クラリスが振り回しているのは方天戟型アームドデバイス・"シュトルムシュタール"。刺突用の槍の左右には三日月の形をした刃――月牙が2つ。石突には鬼の金棒のような、六角柱に鋲がズラリと並んだ棍棒がある。

行く手を阻んで来るガジェットⅠ型とⅢ型を"シュトルムシュタール"で薙ぎ払っては、黒馬アレクサンドロスの突進と蹄の踏みつけで粉砕して行き、彼女の後を追う部下４９人は全周囲を警戒しつつ、ガジェットにトドメを刺して行く。

「やー、やっぱりすごいな～。僕の出番なんてあまり無いかも・・・」

通路の床に散らばるガジェットの残骸を蹴って退かしながら、クラリス筆頭５０人の騎士隊の後を歩くのは青年。緑色の長髪を流し、真っ白なスーツを着こなしている。彼は本局の内務調査部査察課所属の査察官、ヴェロッサ・アコース。機動六課の後見人の１人であるカリム・グラシアの義弟だ。

「ま、戦力としてはクラリス隊が、アジトのシステム乗っ取りはジェイル少将の娘さん達が・・・。でも捜査は僕がしっかりやらないとね」

――無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）――

足元にベルカ魔法陣を展開したヴェロッサの周囲に、彼の魔力で生み出された半透明の猟犬が１０頭と出現した。ヴェロッサのスキルである無限の猟犬は、創り出された際に込められた魔力が尽きるま

で自立行動を取ることが出来、その活動に彼の魔力に依存しないゆえに運用距離に制限はなく、陸海空も関係なく移動できる。猟犬に相応しくその戦闘力も高く、さらには目視や魔力探査にも引っ掛かりにくいステルス性を有し、その目や耳で得た情報を彼に送信、もしくは記録することも可能。

「よし。アジトに残るお嬢さんを迎えに行こうか」

ヴェロッサは猟犬と共に爆発音が繰り返し轟く通路の先へと向かう。途中途中で通路は枝分かれし、「さぁお前たち、行っておいで」5人1班に分かれて通路の先へ向かう騎士たちに、猟犬2頭を付かせる。そして最後はクラリスを班長とする第1班のみとなり、ヴェロッサはクラリスを除く9人に続く。

――サウザンドブレス――

突如として爆発音が突然途切れたかと思えばその直後、通路の先より強烈な突風が通路内を吹き抜けて来た。ヴェロッサや騎士たちは「うわあああ！」その場に踏ん張りきれずに吹き飛ばされ、床をゴロゴロと転がった。

「今のは・・・！？」

急いで立ち上がったヴェロッサから手を差し伸ばされた騎士は「ありがとうございます」とその手を取って立ち上がる。彼らよりさらに後方まで転がった騎士たちも立ち上がり、「交戦音！」が通路の奥から聞こえて来ることに気付いたことでそれぞれアームドデバイ

スを掲げて、破壊音が轟く通路の先へと駆けて行く。ヴェロッサもまた彼らに続き、そして広い空間へと到着した。そこでは2人の少女が交戦していた。片やクラリス。

「ここから先は通行止めです！」

片や艶やかなストレートの黒髪の少女。銀色の瞳。白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが1本入った黒のプリーツスカート。"スキュラ"シリーズと呼ばれる特別製のサイボーグ姉妹の共通衣服に、個人で別々なオプションであるクリーム色のカーディガンという格好で、両手に扇を持っている。

「あの服装は、第零技術部から頂いた資料にあったスキュラとか言うサイボーグ姉妹の・・・！」

扇をひとたび振れば、恐ろしいほどの突風が吹き荒れる。彼女はゼータ。しかしオリジナルはすでにフォルセティによって殺害されてしまっているため、人格が反映されたＡＩ搭載のスペアボディだ。

「この程度の風でアレクサンドロスの疾駆は止まらない！」

クラリスの駆るアレクサンドロスはしっかりと床を踏みしめ、暴風に負けずにゼータへと突進していく。ゼータは横っ飛びすることで突進を躱し、即座に「エアスライサー！」扇を振るった。放たれるのはカマイタチ。それがアレクサンドロスの横っ腹に直撃するが、僅かな出血というダメージだけで終わった。

「そんな・・・・！」

ショックを隠せずその場に佇むゼータへと向かって「おおおおお！」騎士たちが一斉に剣や槍、斧や鎌と言ったデバイスによる直接攻撃を仕掛ける。しかし「鬱陶しいです！」扇と両腕を大きく広げその場で旋回。自身の周囲に竜巻を発せさせ、「わあああああ！」騎士たちを吹き飛ばし、壁や天井に床と叩き付けていく。

「私の大切な部下をよくも・・・・！」

「侵入者風情が何を！」

ゼータの下段から降り上げられる小型の竜巻を纏う扇と、クラリスの上段から振り降ろされる"シュトルムシュタール"が激突し、「うぎゅぅ・・・・！」ゼータはすぐに左膝を床に付いたが、足元にテンプレートを展開。

「吹き飛ばして差し上げます！」

――オーバー・エフ――

竜巻の勢いをＦ２（家の壁や屋根が吹き飛ぶレベル）からＦ４（家でも吹き飛ぶレベル）へと強めると、「くぁぁ・・・・！」クラリスとアレクサンドロスもとうとう吹き飛ばされ、クラリスは「おっと！」ヴェロッサがキャッチしたが、何百ｋｇという体重のアレクサンドロスは壁に叩きつけられた後、ドスン！と床に激突した。

「ありがとう、ヴェロッサさん」

「僕も手伝うよ、クラリス。行くぞ、お前たち」

クラリスを降ろしたヴェロッサの周囲に新たな猟犬が創り出された。クラリスは「感謝です」彼に頭を下げた後、「お疲れ様、アレク」そう言ってアレクサンドロスの召喚を解いた。

「私たちスキュラは、人間に対しての殺害許可が下りております。ここからは本当に手加減しませんよ」

ゼータは開いた扇を持つ手をクロスさせて構えを取り、物騒なセリフを吐き出した。クラリスは部下を全員下がらせ、自分1人でゼータと正対する。そんな彼女の周囲を警備するように猟犬9頭が配置された。

「我が栄えあるグリューン・ガルデーニエの騎士たちよ！　先行して、第零技術部からの情報にあったガンマを制圧せよ！」

"シュトルムシュターール"をブンブン振り回しながらクラリスがそう伝えると、「ヤヴォール！」部下たちは一斉に広間の先へ向かおうとした。もちろん防衛を任されているゼータはそれを許さず、あろうことか通路と広間の繋ぎ目に向かってカマイタチを放った。天井を崩して通路を塞ぐつもりだろう。

「させるかぁぁーーーっ！」

――トライシールド――

3人の騎士がシールドを展開したうえで跳び上がり、カマイタチが繋ぎ目に直撃するのを防いだ。だが「ぐあ！」彼らの騎士甲冑がところどころ切り裂けれ、そこからブシュッと血が噴き出した。

「手加減は無用と申しましたから」

感情の見えない声色でそう言い捨てたゼータへとクラリスは突進しつつ、改めて「先行！」と伝える。傷を負った騎士3人は自ら立ち上がり、まだ戦えます、という視線をクラリスに向けていたため、彼女はその3人を信じ、そんな指示を出したのだ。

「私は良い部下を持った」

そして彼女は"シュトルムシュタール"をブンブンと振り回してゼータに連撃を繰り出す。少しでも部下が安全にこの広間を突破できるように。続々と奥の通路へと入って行く騎士たちと、その護衛を任された猟犬5頭の姿にゼータが「止まりなさい！」と叫ぶもすでに手遅れ。クラリスの猛攻を回避するので精いっぱいで、追撃を行えなかった。

「ヴェロッサさん。参ります」

ゼータの部下への追撃を食い止め切ったクラリスは、部屋の隅っこに佇むヴェロッサにそう漏らした。その視線は怒りで顔を真っ赤にしているゼータから一切離れない。

「いつでもどうぞ！」

"シュトルムシュタール"を持つ右腕を背後に伸ばし、左腕を前方へ突き出した状態でクラリスは一足飛びでゼータへと突進し、猟犬も彼女共に駆け出す。

「犬畜生は下がりなさい！」

――エアスライサーーーー

先制はゼータの振る扇から放たれるカマイタチ攻撃。猟犬は身軽さを活かして即座に回避。クラリスは前面にシールドを張って防御しつつ最接近し、シールド脇から"シュトルムシュタール"の槍をゼータへと繰り出した。

「荒いです！」

刺突攻撃をジャンプして躱したゼータは"シュトルムシュタール"の柄に上に降り立った。彼女とクラリスの視線がぶつかり合う。柄の上を走ろうとしたゼータだったが、金棒と槍を繋ぐ柄の半ば辺りがガクンと折れ曲がり、「っ！？」一瞬だがゼータは隙だらけになった。その隙を猟犬たちは突き、一斉に跳びかかった。

「猪口才な！」

体勢を崩しながらも床に着地しつつ、ゼータは畳んだ扇を振るって

猟犬を殴打。クラリスは殴り飛ばされる猟犬に、ゼータの隙を生んでくれたことへの感謝の念を抱きながら「ふんっ！」振り上げた金棒を振り降ろした。

「風は私の味か――ぐっ！？」

クラリスは後退することでその超重な一撃を回避したが、彼女の視線は真っ直ぐ金棒を振り降ろしたばかりのクラリスに向いていた。だから気付かなかった。足元に転がっていた槍が、クラリスの足蹴によって勢いよく跳ね上げられたことに。さらに言えばクラリスの頭部を左右から扇で挟撃するべく、両腕を大きく広げて懐を隙だらけにしていたのもまずかった。

「風はお前の味方。けど私にも心強い味方が居る」

フラっと体勢を崩したゼータを見て脳震盪を起こさせてやったと確信したクラリス。即座に金棒を振り上げて追撃に入ろうとしたが、ゼータは金棒を左足で踏みつけてそれを阻止。

「サウザンドブレス！」

そしてクラリスの直近で扇を仰ぎ、「っ・・・！」彼女を吹き飛ばした。咄嗟に猟犬３頭が自分の体をクッションにすることで、クラリスが壁に叩き付けられることはなかった。

「驚いたな。あの衝撃を顎に受けて脳震盪を起こさないなんて」

「当然です。この身に生体部品は1つとして組み込まれておりませんゆえ。脳震盪の原因たる脳を私は持っていません。オリジナルのスキルがコピーされ、人格が反映されたＡＩを積んだスペアボディ。それが私です。オリジナルに比べてスキルは弱く、戦闘能力も低いですが、あなた方程度であれば今のままで十分です」

ヴェロッサの驚きの声にゼータが胸を張ってそう答えた瞬間、ヴェロッサはクラリスの雰囲気がガラリと変わったことを察して、猟犬と共に慌てて来た道へと戻って行った。その様子に怪訝な表情を浮かべるゼータ。クラリスは床に転がっている槍側の"シュトルムシュタール"を拾い上げ、金棒部分の柄と連結させた。

「つまりお前はアレなんだ、人型のデバイスと同じなんだ」

「デバイス扱いされるのは少々遺憾ですけど。その認識で間違いはないですね」

クラリスの問いに答えたゼータは、「なに・・・？」無意識のうちに後退していた。クラリスは「じゃあ手加減なんて要らないんだ」そう言って、"シュトルムシュタール"の柄を両手で握って水平に構えた。

「カートリッジロード」

槍や金棒の付け根部分がスライドして給弾口が姿を顕わし、そしてガシャンと音を立てて元に戻った。その動作でカートリッジが効果を発揮し、魔力が爆ぜた。吹き荒れる魔力に「な・・・！」ゼータ

は驚愕に目を見開いた。

「聖王教会教会騎士団、グリューン・ガルデーニエ隊長、クラリス・ド・グレーテル・ヴィルシュテッター。参ります」

これまで以上の速度で広間内を駆け回るクラリス。ゼータは両手に持つ扇を振るって「エアスライサー！」を立て続けに放ち続ける。クラリスは "シュトルムシュタール" をバトンのように高速回転させてカマイタチを弾きつつ、少しずつ広間の中央へと駆け、金棒に環状魔法陣を3つと展開し、そして天井ギリギリまで跳び上がると・・・

「この一撃を耐えることが出来れば、私の全力を見せてあげる」

――シュテルントレーネ――

そう言って床へ向けて金棒を下にした "シュトルムシュタール" を投擲。一筋の閃光となって落下する "シュトルムシュタール" やクラリスへと向けてゼータは「サウザンドブレス！」全てを薙ぎ払えるレベルの爆風を起こしたが、一切の勢いを殺せることなく床への着弾を許した。

「この魔力量は・・・！」

瞬間、金棒に展開されていた環状魔法陣が広間いっぱいに広がると、"シュトルムシュタール" から強烈な魔力が半球状に放たれた。魔力は環状魔法陣によって砲撃と化し、天井を撃ち貫いて、さらには

天を衝いた。

「いやはや。瓦礫どころか塵１つとして残らない一撃。実に見事だよ」

避難していたヴェロッサが猟犬と共に広間に戻って来た。天井を仰ぎ見ればそこには青空が広がっている。

「この一撃程度なら耐えられると思ったんだけど」

騎士甲冑の所々が破れて素肌を晒しているクラリスがそう漏らした。彼女は一旦変身を解除して騎士団服に戻り、すぐに騎士甲冑へと再変身。新品同様に綺麗になっている。

「じゃあヴェロッサさん。先へ行こう」

「ああ」

そうしてクラリスとヴェロッサは、アジトに残る唯一の生命反応・ガンマの居場所を目指して駆けだした。遅れて空からガシャァン！と何かが落ちて来た。体が大きくひしゃげたゼータで、もう何も言わぬガラクタとなっていた。

・―・―・―・―・

徐々に大気圏外へと高度を上げて往く"聖王のゆりかご"と、その後方を護る航空空母・"アンドレアルフス"。共に全長が数ｋｍと

いう巨大さを誇り、ミッドチルダの市街地上空にその偉容を見せつけている。その２隻の周囲にはガジェットのⅠ・Ⅱ・Ⅲ型が何百機と空を翔け、航空武装隊と交戦していた。そんな中、２隻よりはるか上空にてある戦力がぶつかり合っていた。

「私のロックオンでも追いきれないなんて・・・！」

１つは飛竜ワイバーンの鞍に跨る女性。茶色い長髪をポニーテールにし、澄み切った青い瞳を撃ち墜とすべき敵へ向けている。ショートワンピース、ショートジャケット、オーバースカート、スパッツという騎士甲冑姿。右手には刃渡りが６０ｃｍとある双剣の柄頭を連結したかのような大弓型デバイス・"イゾルデ"が握られている。名をトリシュタン・フォン・シュテルンベルク。金水仙騎士隊ゴルト・アマリュリスの隊長を務める弓騎士。

『ただ１人にこれ程まで時間を割かれるなんて、イプシロンは驚きと共に怒りを覚えます』

１つは戦闘機。全体カラーは青で、デフォルメされた猫とネズミのイラストが機体に描かれている。なだらかな機体形状に後進翼、Ｖ字状に開いた昇降舵を兼ねた尾翼、エンジンは２基を備えている。コクピットはキャノピーではなく装甲に覆われていることで搭乗者の姿は見えないが、イプシロンだと名乗っている。機体名はナベリウス。無人戦闘機隊を遠隔操作するための統合管制機だ。

「大人しく戦闘行為を中断し、投降しなさい！」

トリシュタンは左手の五指にサファイアブルーに輝く魔力矢４本を挟み込み、"イゾルデ"の弦に番えた矢を・・・

――滅び運ぶは群れ成す狩り鳥――

同時に射る。４本の矢が向かうのは６機の戦闘機。先端が鋭利に尖っているミサイルのような形状にカナード翼と後進翼、主翼の真後ろに垂直尾翼２枚を付けた機体で、下部には砲塔１門が備え付けられている。機体にはナベリウスと同じデフォルメされた猫とネズミのイラストが描かれている。機体名はパズズ。ナベリウスの護衛機だ。

「爆ぜて！」

トリシュタンがそう命じると４本の矢が炸裂し、１本につき１００本の閃光となってナベリウスとパズズへ向かって行く。７機に対して４００本の光線という圧倒的な物量攻撃だったが、全機とも軽やかなマニューバで掠ることなく回避しきった。そしてトリシュタンの駆るワイバーンへ向け、パズズは機体下部の砲塔からエネルギー砲撃を発射。６方向からの砲撃だったが、ワイバーンもまた軽やかに全弾を回避しきった。

『隊の頭脳たるイプシロンとナベリウスは、各パズズと正に一心同体。この程度の空間攻撃、避けるなど容易いと、挑発して見せます』

イプシロンからの通信越しの煽りに「そうですか」とトリシュタンは冷静さを失うことなく、高機動戦闘機隊をどうすれば撃墜できる

かを思案する。問題はイプシロンの乗る有人機。撃墜すれば、いくら犯罪者とは言え搭乗者の命に関わるかもしれないからだ。

（隊の頭脳。となれば十中八九、イプシロンの乗る機体が他の機体を操ってると考えてもいいはず・・・。操縦席の装甲を力尽くで引っぺがして、イプシロンを引っ張り出しましょうか。そうすれば他の機体も停止するでしょうし）

そう考えたトリシュタンは「一緒に攻撃してくれますか？」とワイバーンの首筋を一撫で。ここまでは彼女1人で数多くの戦闘機やガジェットを撃滅し続けていたため、ワイバーンは空を移動するためのパートナーとしていたが、ここでようやく戦力として頼った。

「グルル！」

「ごめんなさい。なんて言っているのかは判りませんが、お願いします！」

「グァァー！」

ワイバーンが嘶いて大きく口を開けると、集束砲の如く魔力が集束され始め、それを確認したトリシュタンも先程と同じように指に挟んだ4本の矢を"イゾルデ"の弦に番え・・・

――滅び運ぶは群れ成す狩り鳥――

射った。今度はすぐに炸裂して、ナベリウスとパズズ6機を包囲す

るように球体状に飛び回る。そこに間髪入れずワイバーンから放たれる集束砲――ドラゴンブレス。閃光包囲は見た目では隙間が一切無いように見えるが、攻撃判定があるのは先端の１ｍ程。残りはただの光の尾であるため、そこを上手く突けば光線包囲より逃れられる。実際にナベリウスとパズズは逃れはじめていた。ただ、包囲の中心に到達して球体状に爆ぜたドラゴンブレスの一撃に、脱出に遅れた１機のパズズの左主翼が呑まれた。

「それでも墜ちないんですね・・・！」

器用にバランスを取って飛行を続けるそのパズズは、そのままトリシュタンとワイバーンへと特攻して来た。ワイバーンの回避行動を封じ込めるかのように他５機のパズズより砲撃が発射される。ワイバーンが回避行動に移り、鞍に跨るトリシュタンは指の間に２本ずつの計８本の矢を作り出して・・・

「往けッ！」

――翔け抜けし勇猛なる光条――

まずは親指と人差し指に挟んでいた魔力矢２本を射る。矢は砲撃と化して、前方より迫り来るエネルギー砲２発を真っ向から迎撃。トリシュタンはワイバーンの回避行動合わせて上半身を捻り、残りの４本の矢で砲撃を迎撃し、２本は特攻して来るパズズを撃ち貫いて撃墜した。

「さすが飛竜！　とても良い機動でした！」

「グルル！」

さらに放ち続けられる追撃のエネルギー砲を、ワイバーンは回避してはドラゴンブレスを吐き、トリシュタンは「少しずつでも！」射撃・砲撃と繰り返し放ち続け、少しずつだがパズズの残り5機にダメージを与えて行った。

（でもイプシロンの機体には一向にダメージが入らない。パズズが射線上に入って来て庇う所為ですね・・・）

攻撃を一切行うことなく回避一辺倒のイプシロンの操縦するナベリウス。その機動力もあってどれだけの物量攻撃でも当たらない。なら作戦をシフトチェンジとし、攻撃の当たるパズズから撃墜することにしたトリシュタンは、パズズの欠点を確信するために・・・

「ワイバーン。少しばかり攻撃の手を緩めますね」

トリシュタンとワイバーンは攻撃回数を減らした。するとパズズのエネルギー砲の発射回数が増えた。トリシュタンは「やはり」何かを確信したように頷き、左手に魔力矢を1本と作り出して"イゾルデ"の弦に番える。そしてある1機に標的を絞り、その1機が砲撃を撃つと同時・・・

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

トリシュタンは矢を射った。矢は目にも留まらぬ速度で砲撃の脇を

翔け抜け、砲撃を放ったパズズの右主翼に突き刺さり、ドォーン！と炸裂。主翼どころか胴体をも爆破した。ワイバーンがトリシュタンを称賛するかのように鳴き声を上げ、「見切りましたよ、その動き！」トリシュタンはパズズの攻略法を得た。

『イプシロンはあなたを称賛します。まさか砲撃発射の隙を突いてのカウンターとは。ＡＭＦも片無しの一撃、素晴らしいです』

「無人機が砲撃を放つ際、ほんの数瞬ですけど一切の動きを停止させる。その隙を突けない程、ベルカの騎士は弱くはないですよ」

『イプシロンは自分の油断に自己嫌悪です。ここから先は、我がナベリウスも戦闘に加わります。一切合財の手加減無用で、あなたを墜とします』

ナベリウスの両主翼下に砲塔２門、機体先端の両側に機関銃が２挺と出現。ナベリウスは早速、エネルギー弾を連射する機銃攻撃を開始。パズズ４機も砲撃を連携して放って来るようになった。

（ナベリウスのエネルギー弾が厄介すぎる・・・！）

高威力の砲撃ではなく連射性の高いエネルギー弾に振り回されるトリシュタンとワイバーン。それでもパズズを１機、また１機と撃墜することに成功。残り２機となったところで・・・

「グァー！」

「ワイバーン！」

ワイバーンの右の翼にエネルギー弾が着弾して、穴を６つと空けた。翼の空気抵抗を失ったことでワイバーンはゆっくりと墜落し始めるも、必至に翼を羽ばたかせて空に留まろうとする。そんな時に、『イプシロンはこの言葉を送ります。さようなら、と』ナベリウスやパズズ２機の計３機の砲門が向けられた。

「カートリッジロード！」

"イゾルデ"の持ち手と剣身の２つの繋ぎ目がスライドすると給弾口が現れ、そしてまたガシャンと元に戻るとカートリッジの効果が発揮され、トリシュタンの魔力が一時的に増大。防御魔法を発動しようとしたところで、３機から砲撃が発射された。

（間に合わない！）

――レフレクスィオーン・ファーネ――

――シューティングスター――

脳裏に浮かぶ自らの死に、トリシュタンは思わず目を瞑りそうになったその時、彼女とワイバーンを覆い隠すように朱色に光り輝く魔力の幕が下方から伸びて来て砲撃を反射。さらに空色に輝く閃光がパズズ２機の直下から飛来し、パズズの胴体を撃ち貫いた。直後に反射して来た砲撃の直撃を受けて２機のパズズは爆散した。

「この魔法は・・・！　アンジェ！」

トリシュタンの表情が安堵に満ちる。魔力の幕の正体はトリシュタンの親友であり同僚である騎士アンジェリエの旗型デバイス・"ジークファーネ"の幕の部分。だがワイバーンの墜落という危機からはまだ脱していない上に、『新手！？　せめてあなただけでも！』イプシロンのナベリウスは無傷だ。

「グルル！」

「わっ！？　ワイバーン！？」

ワイバーンは首を曲げるとトリシュタンのジャケットを下の前歯で引っ掛けて、自らの背から彼女をポイッと放り投げた。そしてナベリウスの放った砲撃の直撃を受け、数十m下のビルの屋上に墜落。

「ワイバーン！」

落下を続けるトリシュタン。そんな彼女の窮地を救うのは、機体の頭を斜めに下げたヘリのハッチから手を伸ばし、「捕まえた！」とトリシュタンの左手を掴んだアリシアだった。

「アリシアさん・・・」

「ヴァイス！　トリシュの救出に成功！　このままナベリウスと交戦に入ろう！」

「うっす！　俺は操縦に専念します！」

ヘリを操縦しているのは機動六課のヘリパイロットのヴァイス。ガジェットとの戦闘において優位性に立ったことで、航空武装隊も"聖王のゆりかご"や航空空母"アンドレアルフス"へ続々と突入を始めていた。

「トリシュタン、無事ですか！？」

「アンジェ。私は無事ですけど、クラリスのワイバーンが・・・」

ハッチから見下ろせるビルの屋上に横たわるワイバーンは流血していた。心配そうな目を向けるトリシュタンの目の前で、ワイバーンは展開された薔薇色の召喚魔法陣へと沈んで行って、その姿を消した。被ダメージが高すぎて強制的に召喚が解除されたようだ。

「トリシュ。おそらくワイバーンは大事ないはずです。ですから今は・・・」

ハッチへと降り立ったアンジェリエがそこまで言ったところで、「許さない・・・」トリシュタンがギラリとした瞳で、上空を飛び回るナベリウスを睨んだ。アリシアは「よーし！　やってやろう！」と床に置かれていたライフル型デバイス・"ブレイブスナイパー"を構え直す。

「防御関係は私が行います！」

アンジェリエはヘリから飛び立ち、"ジークファーネ"をバサッと振るった。残る戦闘機は、ナベリウス1機のみ。魔導師のアリシア、騎士のトリシュタンとアンジェリエの共闘が始まる。

†††Ｓｉｄｅすずか†††

"聖王のゆりかご"の後方を護る護衛艦"アンドレアルフス"を制圧するために突入した私とシグナムさんとエリオとキャロの４人だったけど、気が付けば私は独りになっていた。何かしらのトラップか攻撃か、詳しい原因は判らないけど分散させられた。シグナムさん達を捜しつつ通路を巡り、そして辿り着いたのがスライドドアの先にあった・・・

「ブリッジ・・・」

だった。パノラマウィンドウのような横に広いキャノピーで、見えているのはゆりかごのスラスター。壁に沿って設けられている機器。天井を埋め尽くすほどの赤色と青色のケーブルに繋がれたポッドが中央に1基。そのポッド内には、細いケーブルをうなじや背中に取り付けた「アルファ・・・」っていう名前の女の子が収められていた。

『ようこそ。アンドレアルフスの心臓部へ。ジェイル・スカリエッティのたった1人の弟子、月村すずか』

ポッドの中に居るアルファからの通信。内容からして「私だけに何か要件があったの？」ってことになる。ドクターの弟子ってことが

大きな理由らしいけど・・・。

『ええ。我が愛おしき父、プライソンの願いのために。ジェイルの関係者はすべて排除するために。あなたをここへ呼び、邪魔者はスキタリスの連中に任せたのよ』

スキタリス。メガーヌ准陸尉たちアルピーノ家のことだよね。エリオとキャロが心配だけど、今は信じるしかない。

「こんな精密機械に溢れたブリッジで戦闘をするつもりかな？」

『Ｓ＋ランク魔導師と全力戦闘をしたところで、我がアンドレアルフスの心臓には傷１つとして付かないわ』

背後のスライドドアが開いたことで、ハッとして私は振り返った。そこに居たのも「アルファ・・・！？」だった。ポッドのあの娘は下着１つすらも付けて裸体だけど、今入って来たアルファは、以前モニター越しに見た時と同じブラウスとリボンとプリーツスカート姿。でもブレザーは着てない。さらに言えば、両腕と両脚には篭手と脚甲、それに胸甲を装着していて、右手には太刀、左手には小太刀が握られてる。

『そこに居るのはスペアボディ。オリジナルである私とは違って脳ではなく、人格を反映させたＡＩを搭載した完全なるガイノイド。私よりスキル効果は弱く、戦闘力も低い。ですがそれも、トーレとチンクによって破壊された先代スペアボディまでの話。そこに居るのは、オリジナル以上の戦闘力を有した――』

「完全機なのよ！」

オリジナルのアルファの言葉を継ぐようにそう言い放ったスペアのアルファが突っ込んで来た。外から内に向かって横薙ぎに振るわれる太刀の一撃。私の左首筋へ向けて迫り来る太刀の腹に真下から左アッパーを打ち込んで、太刀を無理やり跳ね上げさせることで回避した。

「っ・・・！」

間髪入れずに繰り出されるのは左手に持つ小太刀による刺突攻撃。狙いはまたも首筋。完全に殺しに掛かって来てる。右手の甲を首筋前にまで持って来て、手の甲にバリアを展開することで刺突攻撃を防御。すぐに右腕を外に払うことで小太刀も払い除ける。

「えいっ！」「はっ！」

私とスペアが同時に右の前蹴りを「ぐっ！」お互いのお腹に打ち込んだ。その衝撃に私たちは後方に蹴り飛ばされるけど、転ぶことなく両足でしっかり着地。

≪フローズンバレット！≫

"スノーホワイト"の判断で発動した氷結効果のある魔力弾１３発がスペアに殺到するけど、太刀と小太刀による連撃で直撃前に斬り裂かれた。でも爆ぜる冷気には呑まれた。フローズンバレットは迎

撃されても防御されても問題ないようにしてある。ただの魔力弾と侮ることなかれ、だね。

「この程度の冷気では髪先すらも凍らないわ！」

冷気を太刀で斬り払って、その無事な姿を見せつけてくるスペア。背後のポッドに浮かぶアルファからは『さぁ、心行くまで踊りましょう♪』ダンスのお誘い。

「・・・技術者を招いたこと、後悔しないでね」

私も構えを取って、スペア撃破に注力することにした。

Ｅｐｉｃ２６－Ａ聖王のゆりかご攻略戦～Ｔｈｅ　Ｓａｉｎｔｅｓｔ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

ＶＳ・－・－・－

よ、脅威であることには変わらない・・・・！）

「このぉぉーーーーー！」

――復讐神（コード・ヴァーリ）の必滅Ｔｙｐｅ　Ｆ――

フォルセティより放たれるのは俺と同じサファイアブルーの魔力光に輝く砲撃１発。空戦形態ヘルモーズの高機動力を以って急上昇することで、その砲撃を回避しようと考えたんだが・・・。

（追って来るか。追跡砲ヴァールだな）

――戦滅神（コード・ヴィズル）の破槍――

左手に持つ"エヴェストルム"の穂先を足元から迫る砲撃へ向け、雷撃系砲撃を発射。ヴァールとヴィズルが真っ向から激突し、強大な魔力爆発を起こす。その衝撃波に僅かばかり体勢を崩される。

「早く墜ちてよ！」

――舞（コード）い振るは、汝の獄火（サラヒエル）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

１００本の炎槍を自身の前方に展開したフォルセティ。その穂先は全て俺に向かられている。フォルセティよ。敵である俺が体勢を崩していたのだからそこを狙うべきで、発動するのは発射から着弾までが早い術式にするべきだった。もしくは槍群をこういう風に展開するべきだった。さぁこれが手本だ。

――舞い降るは、汝の煌閃（コード　マカティエル）――

光槍１００本で棒立ちのフォルセティを球状に完全包囲。あの子はハッとして自らに向けられる穂先を見回し、それでも「アングリフ！」と号令を下して、炎槍１００本を上空に居る俺へと向けて一斉発射。俺も「ジャッジメント！」号令を下し、光槍６０本を一斉発射。

「こんなもの！」

――曙光神の降臨（コード・デリング）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

フォルセティを中心に魔力が球状に爆ぜ、俺の光槍を一瞬で消滅させた。さらに・・・

――凶鳥の殺翼（コード・フレスヴェルグ）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

直径１０ｍほどのデリングを突き破って扇状に放たれて来たのは、空間をも歪めるほどの斬れ味を有する風の刃、その数は確認できない。空間の歪みは視認できるが、個別の歪みを観測できるほどの隙間が無い所為だ。だがこの術式は前方１５０度という範囲にしか効果が及ばないため、俺はさらに高度を上げて回避。

『マイスター。アイリ、何か手伝うことある？』

『ん？　今のところは特には・・・』

『アイリだって、フォルセティを助けたいんだよね。な～んか無いかな～？』

俺とユニゾンしてくれているアイリ。彼女が居てくれるおかげで多少の無茶は通せる。それに相手がフォルセティということもあって張り切っている。２人はまるで姉弟のように過ごしていたからな。

――戦狼の砲咬（コード・ヒルドールヴ）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

姿を見せたフォルセティより扇状に放たれるのは、二列横隊を組んだ１２発の尖状砲撃。上６発は上方に向かって、下６発は下方に向かって伸び、俺へと向かう中で曲線を描きつつ狭まって来る。砲撃は狼の牙を表し、その軌道は狼の咬みつきと言ったところだ。

『じゃあアイリ。ステガノグラフィアからの連絡の応答を任せる』

真横――右方へ向かって全力回避。ヒルドールヴはその威圧感で敵を怯ませることで防御か回避かの判断を鈍らせ、回避されたらそれまでの数瞬にスタンバイした術式で追撃、味方が居れば追撃を任せても良い。本命の一撃というよりは連携開始の初撃だな。

――女神の疾翔（コード・グナー）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

案の定、回避したばかりの俺へ突っ込んで来るフォルセティ。全身を魔力でコーティングして槍のように対象に突進するグナーだな。

――女神の陽光（コード・ソール）――

その対策としてフォルセティと俺の間に、上下左右からの火炎砲の十字挟撃を行う。グナーは直進突撃であるため、ある程度のカウンターを狙うことが出来る。フォルセティもカウンターの餌食となり、４発の火炎砲による十字挟撃をもろに受けた。

『うええ！？　この戦いに関係ない仕事を任された！？　しかもあのうるさい４人組の相手とか！　マイスターひどい！』

今現在、プライソンのアジトに襲撃を仕掛けているのはクラリスの率いる騎士隊だけじゃない。外部からウーノとクアットロが電子戦を仕掛けていると、すずかから聴いている。少しでも手助けになればと、ステガノグラフィアを出撃前に発動しておいた。

「おおおおおおッ！」

それにこれはある種のリベンジだ。かつて騎士ゼスト、クイントさん、メガーヌさん達の部隊と共に別のアジトに侵入した際、アジトのセキュリティに負けたことがあるからな。ウーノやクアットロとの共闘であれば負けはしないだろう。ステガノグラフィアもリベンジ出来ると喜んでいたし。

『すまないが俺もフォルセティとの闘いに集中したいんだ。頼まれてくれ』

『むぅ。・・・ヤー。その代わり、フォルセティを助けてあげてね』

『ああ！』

――削り抉れ、汝の裂風（ザキエル）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

アイリにそう応え、フォルセティの放つ攻撃――ドリル状の竜巻砲撃１３発へ・・・

――食い散らせ、汝の嵐顎（ルヒエル）――

暴風の龍１３頭を創り出し、真っ向から迎撃する。大きく口を開けた龍は砲撃を噛み砕き、そのままフォルセティへと殺到して行く。あの子は迎撃でも防御でもなく、回避を選択して急降下。フォルセティはビル群に紛れ込むように縦横無尽に飛び回る。

「其は時に天の使徒にして魔の従僕。畏敬・畏怖をその身に受け、地に救済を施し、絶望を与える。其は我の魂命という宝物を護るがため我を抱擁し汝を喰殺する。死の恐れを知らぬ名声を求めし勇ましき者よ、宝物が欲しくばいざ挑めよ」

ルヒエルを解除し、各属性の龍を３頭ずつ、計２４頭の龍を対象に向けて解き放つ上級術式ファフニールの発動に必要な呪文を詠唱。いつでも発動できるようスタンバイし、フォルセティを追翔するために俺も降下する。地上に近付くにつれ、戦車や装甲車、ガジェット群と交戦している陸士部隊や騎士団の様子を視認できるようになる。

――天壌（コード）よ哭け、汝の剛雷（エネディエル）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

フォルセティの足の裏を確認できた直後、俺たちの間に４０近い放電する魔力球が展開された。あの子の「墜ちろ！」という叫びに反応してか一斉に炸裂し、行く手が蒼い雷光で満たされる。両腕を前方に伸ばして"エヴェストルム"を突き出し、「コード・マグニ！」を発動して防御力を強化。

――集い纏え、汝の雷撃槍（コード・フルグルゼルエル）――

さらに穂に雷撃系魔力を付加した状態で、目の前の雷光空間に突撃した直後、『ルシル！　フォルセティから砲撃３連射！　注意！』念話が届いた。この声は「ルミナ！」だ。俺は上方へと軌道修正して、雷光空間より脱出。

――女神の陽光（コード・ソール）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

足元を通過して行くのは火炎砲３発で、今し方まで居た雷光空間を消し飛ばして行った。あのまま突っ込んで行っていれば最後の３発目でダメージを受けていたな。初めから引き離されまいと突撃せずに、引き離されることを受け入れて回避行動に入っていれば良かった。

「（まぁとにかく・・・）ありがとう、ルミナ。助かったよ」

スクラップと化した戦車の上に立って、俺に向かって手を振るルミナに礼を伝える。戦車や装甲車などルミナの敵じゃないよな。

「さて。フォルセティはどこへ行った・・・？」

魔力探査を行い、あの子の居所を探してすぐ「あそこか！」発見する。この辺りで一番高いビルの屋上。上空からの迎撃に備え、先ほど詠唱したままスタンバイしていたファフニールをいつでも放てるようにする。

――昼神（コード・ダグ）の閃爆Ｔｙｐｅ　Ｆ――

上空に展開された１２個のオベリスク。見逃していた間に詠唱を終えていたか。俺はすかさず「ジャッジメント！」ファフニールを放つ。各属性の龍をそれぞれ３頭ずつ、計２４頭を落下して来るオベリスクへと放つ。噛みつかれたオベリスクは次々と爆発を起こし、首都クラナガンの空を魔力爆発という花火で照らし出した。そして俺は魔力爆発の隙間を縫ってビルの屋上へ移動。

「バルドルだと・・・！」

フォルセティの佇むビルの屋上の直上、球体状に組まれた７つの円環が回転し、その中央に魔力が集束して行く。あの子は「――を受けし者。その御名の下、其に刃突き立てし者へ輝ける聖栽を与えよ」詠唱を続けていた。

（詠唱から始める儀式魔術として発動したバルドルは、一度発動されたらもう止まらない。ならば・・・！）

「哀れな者らは泣き叫ぶだろう。しかし許しは乞わぬだろう。自ら

の罪と過ちを認めることを赦さず恥とするゆえに」

集束して行く魔力球へと向かう。フォルセティは「無駄だよ！　もうどんな術式でも止められない！」と言うが、今の俺には止める術が1つだけある。お前は使えるかどうかは知らないがな。

「これならどうだ！」

――女神の救済（コード・イドゥン）――

回転する円環の隙間を縫って内側に突入。そして空いている右手で魔力球に触れ、その膨大な魔力を吸収し始める。フォルセティからの攻撃に備えて、念のために「アイリ、すまん！　防御を頼む！」とお願いする。

『ヤー！　リンの発動コードを借りるよ！』

――女神の護楯（コード・リン）――

「汝よ。迷うことなかれ、憐れむことなかれ、悔やむことなかれ。汝は希望を司り、光の王。厳粛たれ、堂々たれ、そして公平たれ」

フォルセティの魔力を進行形で吸収しているため、魔力過消費に陥ることもないから記憶消失を危惧する必要も無い。アイリもそれが判っているからこそ、俺の周囲に女神の祈る姿が描かれたシールド・リンを6枚と展開。魔力球のサイズが徐々に小さくなっていく。

「汝は左手に希望を携え、右手には閃光を携える。全ての者に、その御名を轟かせ」

――光神の調停（コード・バルドル）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

フォルセティは詠唱を終え、そしてバルドルは発射されたが、すでに遅かった。全方位へ無差別に放たれる多弾砲撃であるバルドルだが、そのほとんどの魔力を吸収してやったからな。放たれる砲撃も惨めで、１０ｍと進んだところで霧散した。

「ありがとう、フォルセティ。この魔石はありがたく使わせてもらうよ」

俺の目の前に浮かぶ１個の蒼い結晶体。魔力炉（システム）に吸収しきれなかった余剰魔力を固形化した物だ。"ジュエルシード"には当然遠く及ばないが、それでも使い方を間違わなければ、その力を存分に発揮させられるだろう。結晶体をコート下の長衣の胸ポケットにしまい込み・・・

「なんでぇぇぇ――――！」

悲痛な叫び声を上げるフォルセティを見下ろしつつ降下、側に降り立つ。

「フォルセティ。お前では俺には勝てんよ。同じ魔術を使うなら、そこは経験の差になってくる」

「・・・・！」

「覚えてから・・・そうだな、１、２年くらいの術式が、約（オレ）２万年の術式に届くことはない」

オリジナルとしても、仮とは言え父親としても、魔術師としても、魔導師としても、俺がフォルセティに負けることは許されない。

「フォルセティ。俺たちは、ヴィヴィオを傷つけるつもりなんてない。それどころか助けたいんだ。当然、お前の事も。お前たちはプライソンという悪者に操られているんだよ。本当は無理やり戦わされているんだ、お前の望みじゃないんだよ」

ヴィヴィオの事を本当に大事に思っているフォルセティだ。おそらく、この程度の言葉では・・・

「そんなの知るもんか！　僕は陛下を護る騎士だ！　プライソン？　そんな奴知らない！　操られてる？　無理やり？　ちがう！　これは僕の意志、思い、考え、望み！　だから・・・うあああああああ！」

――レリックリミッター・リリース――

止まらないよな。フォルセティの足元に展開されるのは、二重円の中に正五角形と逆五角形を重ねた十角形、その中に円、また中に六角形というデザイン。それはスヴァルトアールヴヘイム魔法陣だ。となれば、「レーゼフェア！」が絡んでいる。あの子の術式体系は

闇黒系に特化したスヴァルト式だからだ。

「この感じ・・・！　やはりレリックを埋め込まれているのか！」

フォルセティの全身から放たれる強大な魔力波。かつてのヴィヴィオの大人化を思い出せる。実際、目の前のフォルセティの姿が徐々に大きく成長していっている。そしてあの子を覆っていた魔力も抑えられ、俺の本来の身長である１８０ｃｍちょいという青年に成長した姿を俺に見せつけてきた。

「僕は陛下を、ヴィヴィオを守護する騎士、プフェルトナー・フォルセティ。僕の前に立ちはだかり、ヴィヴィオに指１本でも触れようとする敵には・・・一片の情けも容赦も無い！」

「っ！？」

フォルセティが急速上昇。目指すは「ゆりかご！」だった。俺も急いで追い翔ける。

――舞い降るは、汝の煌閃（コード）Ｔｙｐｅ　Ｆ（マカティエル）――

上空から俺に向けて放たれて来る光槍８０本。槍の雨の隙間を縫うように翔け抜け、俺も「お返しだ！」光槍８０本を一斉射出。フォルセティも最低限の動きで避け切り・・・

「其は天と大気を司りし偉大にして至高の女帝。鷹の羽衣の纏いて空を翔け、遥かなる世界の空に煌幕を張り揺らめかせる」

呪文を詠唱し始めた。また厄介な術式を発動しようとしているな、まったく。さすがにフリッグの発動を止めないと、局や騎士団といった航空戦力どころか最悪「ゆりかごやアンドレアルフスまで・・・」墜としかねないぞ。

「かの女帝が従えしは１２柱のいと美しき従士。其は巫女、其は医者、其は後見人、其は使者、其は従者、其は鋤、其は恋愛、其は縁結び、其は誓い、其は詮索、其は扉、其は礼儀」

「フォルセティ！　フリッグは使うな！　それは広域対空術式だ！　お前の護りたいヴィヴィオの乗るゆりかごにも危険が及ぶぞ！」

「っ・・・！」

フォルセティが詠唱を中断する。怒りに任せて、俺を倒すことだけを考えての手段だったな。冷や冷やしたが、これで無茶な魔術も発動しないだろう。なんていうのが甘い考えだったと思い知ることになる。フォルセティは一切の攻撃を仕掛けて来なくなり、戦闘空域となっている空を縦横無尽に翔け回る。

「一体なにをしようと・・・？」

武装隊とガジェットの戦闘のど真ん中を突っ切るような真似もする。突然の乱入に驚く武装隊員たちに俺は「すまない！」謝りつつ、せめてもの償いとして"エヴェストルム"でガジェットⅢ型４機をバラバラに斬り裂いてやった。フォルセティとの距離が僅かに開く。

ふと、「まさか・・・・！」フォルセティの手の動きを見て判ってしまった。何も無いところに軽くタッチするかのようなあの仕草・・・。

「最古神（コード・ブーリ）の貴き世界か・・・・！」

アルフォズルと並ぶもう1つの元真技・ブーリ。"神槍グングニル"から所有者と認められていなかった、まだまだ若輩だった頃の・・・。

（フォルセティはどれだけ中継点を作った？）

俺の魔術を使い、アルフォズルを発動できた時点でブーリも使って来るかも知れないと考えられただろうに。自分の迂闊さ、間抜けっぷりにホトホト呆れ果てる。とにかく、どれだけ中継点をバラ撒かれたのかは判らないが、発動される前にフォルセティを叩くしかないだろう。"エヴェストルム"を指環に戻し・・・

「弓神（コード・ウル）の狩猟！」

創り出した魔力弓に番えた魔力矢・ウル3本を同時に射る。3本で３０００発の閃光となり、フォルセティを全方位から襲撃する。特に上方に数を置き、あの子に無茶な回避軌道を取らせることで上昇を鈍らせてやる。さらに運が良いことに数発が剣翼と蒼翼をそれぞれ2枚ずつの計4枚を撃ち抜き、ガシャーン！と粉砕。目に見えてあの子の飛行速度と機動力が落ちた。まぁそこからは血も涙も無い、と言われてしまいそうな程にウルが着弾していく。

「このまま終わらせる！」

魔力爆発の続く閃光の直下からフォルセティが落ちて来た。背中に展開されていたヘルモーズもガタガタに崩れてしまっているが、宙でくるっと体勢を立て直した。その目に灯る強い光から戦意は失っていないと判る。だから今は容赦なくお前を墜とす。"エヴェストルム"を二剣一対のゲブラーフォルムで再起動。

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

フォルセティの周囲に展開された魔力スフィア４つが砲撃となって発射される。ブーリの事もあるため・・・

「させるか！」

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

同じく４発の砲撃を発射して迎撃。俺を思い切り睨みつけてくるフォルセティに、「させんよ」再度言い放つ。そこからはゆりかごの前方で砲撃合戦だ。フォルセティが砲撃を放てば、俺はわざわざ砲撃で迎撃する。不可視の中継点に魔力攻撃を加えられるとブーリが発動される。街中と戦場を飛び回っていた以上、その周囲に被害が出るのは必至。出来れば発動される前にフォルセティを止めたい。

「いい加減に・・・！」

――女神の迅雷（コード・スルーズ）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

「してほしいのは、俺の方なんだがな！」

ロキやベルヴェルクと同じ、装備型の術式を発動したフォルセティ。スルーズは雷撃系で、１ｍ半の腕や脚、背中からは雷マークのようなジグザグな羽が４対８枚と展開される。その術式の効果はロキなどと同じように中級・下級の術式を魔力消費無しで発動できるが、装備中の術式の展開時間が減少する。さらにスルーズにはもう１つの効果が付与される。

「邪魔だぁぁぁぁ――――ッ！」

「っと・・・！」

一瞬にして俺の目の前へと移動し、放電している左手による貫手を繰り出して来た。これがスルーズの固有効果・瞬間移動。当時の俺は接近戦が下手くそ過ぎて、だからほぼ間合いを開けるのに使っていた。

――集い纏え（コード）、汝の閃光槍（ポースゼルエル）――

――力神の化身（コード・マグニ）――

二剣一対形態ゲブラーフォルムで再起動した"エヴェストルム"の穂に閃光系魔力を付加。さらに身体能力や魔力を強化するマグニを発動。

――豊穣神(コード・フレイ)の宝剣――

最後に、俺の肉体の限界を無視してでもオートで最良の斬撃を振るえるフレイを発動。両手に持つ"エヴェストルム"が俺の意思を無視して動き、まずフォルセティの貫手を迎撃。放電する魔力の左腕を一瞬にして斬り落とし、即座に右腕を貫いて"エヴェストルム"の穂に付加した閃光系魔力を爆破させる。

「くぅ・・・・！」

慌てて後退するフォルセティに追い縋ろうとするが、スルーズの瞬間移動効果であっと言う間に距離を取られる。そしてあの子は背に展開していた翼を8枚を切り離し、その先端から中級雷撃砲「バラキエル！」を発射。

「させないと言っているだろう！」

――崇(コード)め讃えよ、汝(ミカエル)の其の御名を――

剣翼アンピエル12枚だけを離し、剣先より砲撃12発を発射して雷撃砲8発を迎撃。そして残り4発でフォルセティを狙う。まぁどれもその高機動性を活かして回避されるが。

「（唯一、助かっているのは、フォルセティが今の真技を使わないこと。まぁEXランクの魔力があって初めて発動できる術式だ、当たり前か・・・）大人しく投降してくれ、フォルセティ。俺だって

お前を追い詰めたくは、傷つけたくはない」

――殲滅(コード)せよ、汝(カマエル)の軍勢――

とか言いながら、俺は２０００本の複数属性の槍群カマエルと多弾砲撃ミカエルで、フォルセティを徐々に追い詰めていく。いくら瞬間移動とは言え、"界律の守護神テスタメント"の、実数世界と虚数世界の狭間・位相空間を行き来する空間転移とは違って、対象はこの世界に留まっている。１００％当たらないということはない。

「これは・・・檻・・・！」

剣翼の柄頭より伸びる魔力の尾が実体化し、俺とフォルセティを閉じ込めるように徐々に直径１００ｍという球体状の檻を形成していく。

「このぉぉーーーー！」

今さら気付いたフォルセティは、残る雷光(スルーズ)の脚甲を纏う両脚による蹴りを檻へと打ち込む。だが、その魔力を檻に吸収され、「うぁ・・・！？」その効果を完全に失った。ミカエルの効果、知らないわけじゃないだろう。ミカエルによって作られた檻への魔力攻撃は、その魔力を吸収され無力化されるどころか強化される。俺のとっておきだ。

「さぁ、お互いに逃げ場無しだ、フォルセティ」

「うるさい・・・」

「ヴィヴィオも必ず救いだす。もう大人しく諦めろ」

「黙れ・・・」

「大丈夫。お前やヴィヴィオを操っているプライソンも、フェイトによって撃破される」

「うるさいよ、黙れよ！　ヴィヴィオォォォォーーーーッ！」

――我を運べ、汝の蒼翼（コード　アンビエル）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

背中に剣翼１２枚を展開したフォルセティは反転して魔力の檻へと突進。そして素手で檻を殴りつけたが、「うぐ！」苦悶の声を漏らした。物理攻撃もまた通用しない。それが判っていながら、あの子は大切なヴィヴィオの元へ馳せ参じようとしている。

「フォルセティ・・・」

――女神の救済（コード・イドゥン）――

右手で檻の魔力を吸収しつつ、徐々に解除していく。檻の隙間から内側に差し込んで来る日の光に、「っ！？」フォルセティは顔を背けた。いきなり顔に光が当たったからだろう。そして檻は完全に消失し、俺たちは再び遥かなる青空の下へと戻って来た。あの子は真っ直ぐゆりかごを目指そうとするが、ヘルモーズの速度を以って俺

は行く手に回り込む。

「退けぇぇぇぇーーーーッ！」

そのまま突っ込んで来るフォルセティの真横から閃光砲撃「ゲルセミ・・・」を撃ち込み、あの子は「うがぁ！？」大きく横に吹き飛ばされた。続けて火炎砲「ソール」で真正面から直撃させた。

「少し痛いが・・・耐えてくれ」

黒煙に塗れながら墜落するフォルセティを「リングバインド！」で宙に拘束し、右手の平に作り出した魔力球を投げる。あの子の胸の前に到達した魔力球は・・・

――曙光神（コード・デリング）の降臨――

直径２０ｍにまで爆ぜ、フォルセティを呑み込んだ。埋め込まれた"レリック"をどうにかするための一撃だ。先の次元世界における、ヴィヴィオに埋め込まれた"レリック"も同様のやり方で破壊した。蒼い光の中に"レリック"の赤い光がうっすらと見え、砕け散ったのが見てとれた。

「・・・」

魔力爆発が治まり、ビルの屋上で仰向けに倒れているフォルセティの姿を視認。その姿は元の６～７歳ほどの子供のもの。"レリック"も先ほど見えた通り反応が消えているし、恐らくはもう大丈夫だろ

う。

「すまなかった・・・。痛かっただろう？　不甲斐ない父親(オレ)を許してくれ・・・」

フォルセティの側に降り立ち、両膝立ちして酷い怪我を与えてしまっていないかを確認。擦り傷くらいはあるが、命に関わるようなレベルのダメージは確認できず、「ほっ」とした。空戦形態を解除し、フォルセティを抱え上げようとした時・・・

――凱旋(トリオンフ)――

「待ってた、この時を！」

――豊穣神(コード・フレイ)の宝剣――

「ぐぅぅ・・・！？」

突如として起き上がったフォルセティの振るう魔力剣に、右肩から左脇、そこから右脇という、∠字に斬られてしまった。しかもこれまでには感じられなかった神秘が魔力に付加され、術式が魔法から魔術へと昇華している。

「いづ・・・！」

魔力剣を持っているフォルセティの右腕が折れた。

「ごはっ・・・・！」

膝元に傷口から溢れ出る出血で血だまりが出来始め、口から吐いた血が飛沫をあげて混ざり合った。まずい、完全に致命傷だ。内臓ごとバッサリやられた・・・。

『マイスターー！？　そんな！　エイルを発動するから、じっとしてて！』

――女神（コード・エイル）の祝福――

涙声なアイリが俺の代わりに治癒術式を発動してくれたが、今の俺は魔導師で、使うのも魔法だから、魔術によりダメージをほとんど回復できていない。だからすぐに魔力（システム）の稼働率を上げ、魔術師化する。

『も、もう一度、発動するね！』

アイリが再びエイルを魔術として発動してくれて、そのおかげで傷口が閉じ、出血が収まりつつある中・・・

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔Ｔｙｐｅ　Ｆ――

フォルセティが空戦形態を展開し、その幼い左手で「うぐ・・・！」俺の首を絞めた。そしてふわりと浮遊感を得、「これで・・・」そう言って空へと急上昇。かなりの出血だった所為で意識が朦朧とするが、ここで俺が墜ちるとフォルセティが何を仕出かすか判ったも

のじゃない。

「陛下は、・・・ヴィヴィオはだれよりも強い。僕が居なくたって・・・、きっと大丈夫」

「な・・・にを・・・」

「誰がゆりかごに侵入して、ヴィヴィオに挑むか判らないけど・・・。どんな相手が来たって、絶対に負けない」

「考えて・・・いる・・・！」

「でもアンタだけは、ヴィヴィオを倒せる力を持ってる。だからアンタだけは確実に仕留めないといけない！」

ゆりかごよりさらに高い、およそ2万m付近。フォルセティはそこで上昇を止めた。ここで俺の傷もほぼ治りかけたが、致命傷だったこともあって魔力を馬鹿みたいに消費し、失血の所為でぼうっとする。

「うあああああああああああッ！」

――汝（コード）の飛翔は、汝の茶毘（カフジエル）Ｔｙｐｅ　Ｆ――

フォルセティの22枚の蒼翼が魔力を放出し、蝶のような翼と化す。その形態に血の気が引く。このカフジエルは「特攻・・・！」術式なのだから。今にして思えば馬鹿な術式を組んだと思う。自爆技な

んて・・・。

「よせ・・・フォルセティ・・・！」

「僕はヴィヴィオが大事なんだ。命を懸けてでも守り抜く！」

フォルセティの全身から迸る魔力の奔流。カフジエルは、術者が魔力を限界以上まで引き出した状態で、対象に激突して魔力爆発させて自分もろとも対象を消し飛ばすというものだ。

「（あの時は若かったんだ！）やめろ・・・！　それが・・・ヴィヴィオの為になると・・・いうのか・・・！」

「なるよ。アンタが消えれば、ヴィヴィオを傷つけられるだけの敵はこの世から居なくなると同義・・・。僕は、ヴィヴィオを生かすための存在なんだ！」

「馬鹿なことを言うな・・・！」

フォルセティがゆっくりと体勢を変え、俺を真下にした。そしてゆっくりと降下を始め、徐々に速度を上げ始めた。地面に激突するまで1分も無い。早々に決着をつけないと。

「ヴィヴィオの為だと？　大切な人の為というのなら・・・死を選ぶな！」

俺の首を鷲掴むフォルセティの左手に、「いいか？　フォルセティ」

俺は両手を添えた。
「お前とヴィヴィオは兄妹のように生まれ、育ってきたんだろ。お互いが大切な人なんだ」
「そうだよ！　だからヴィヴィオを傷つける奴は許さない！」
「それは、ヴィヴィオにとっても同じ思いのはずだ！　なら解るはずだ！」
「何を！」
「お前は、お前の為にヴィヴィオが傷つくのが、苦しむのが嫌だろう！」
「当たり前だ！」
「ヴィヴィオもそうなんだと、何故思い至らない！」
「っ！」
「自分の為に、お前が傷つき、苦しんで、死んだと知れば・・・ヴィヴィオがどれだけ悲しむか！」
「それは・・・」
「大切な人を守りたい。ああ、いいさ！　けどな！　それで命を投

げ出すな！　その人を理由に死を選ぶな！　守りたい人がいるなら、意地汚なくてもいい、無様でもいい、無様でもいい、罵られてもいい、不名誉でもいい、生きろ！　それが本当に守ることなんだよ！　大切な人を置いて先に逝く事ほど、罪な事はないのだからな！」

「だったら・・・アンタが死んでくれればいい！　そうしたら僕はヴィヴィオの元に帰還して、ヴィヴィオに槍を向ける敵を倒すことが出来る！」

「あー・・・、そうはいかないよ。俺にも守りたい人がいる。生きなければならない理由がある。それに何より、息子であるお前に人殺しをさせるわけにはいかないし、心中させるわけにもいかないからな！」

「じゃあ、どうすればいい――っ！？」

そう叫ぶフォルセティをギュッと抱きしめ、「今はゆっくり眠ってくれ」そう耳元で囁いた。

「アイリ・・・」

『うん・・・。アイリは大丈夫。全力全開でゴー♪』

「ありがとう」

――女神（コード・イドゥン）の救済――

アイリの魔力も一緒に消費しつつ、フォルセティの放つ魔力を吸収して消費しきった魔力を回復させ、「また僕の魔力を・・・！？」もがくあの子を離さないように抱きしめる力を強め、余剰魔力を結晶化させる。そして回復したばかりの魔力を使用して・・・

「曙光神（コード・デリング）の降臨！！」

俺を中心に閃光系魔力を球状に爆ぜさせた。俺とフォルセティは「ぐぅぅ・・・！」苦悶の声を漏らす。さらに魔力を増やし、デリングの威力を強化。渦巻く蒼い魔力の中で、反り返るフォルセティの額にスヴァルト魔法陣が浮かび上がる。レーゼフェアの洗脳術式だな。

「ぐぁぁ・・・あああ・・・あああああ・・・！」

「もう・・・少し・・・頑張れ・・・フォルセティ・・・！」

そして魔法陣が破壊されたところでデリングを解除。意識を失ったフォルセティと一緒に戦場となっていない戦域へと降り立った。

『地面まであと３０ｍ・・・。ぺしゃんこにならずに済んだね、マイスター』

「ああ。アイリも付き合ってくれてありがとう。助かったよ」

『どういたしまして♪』

――傷つきし者(コード)に、汝の癒し(ラファエル)を――

俺とフォルセティに中級の治癒術式を掛け、負ったダメージをゆっくりと回復していく。その最中、こちらの世界でのヴィヴィオの戦闘能力を考察する。クローンであるにも拘らず俺の術式を完全コピーしているフォルセティ。

（精神世界でゼフィ姉様から、俺の複製能力が無断で使用されていると注意を受けた・・・。ヴィヴィオが最悪、オリヴィエの魔法を使うとなれば厄介だな）

とにかく今は、レーゼフェア戦に備えて回復だ。ヴィヴィオについてはなのはと、そして先とは違い共に突入しているフェイトに任せるしかないだろう。

Ｅｐｉｃ２６－Ｂ聖王のゆりかご攻略戦～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　ｆｏｒ　Ｅｐｉｓｏｄｅ　Ｖ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

「シスター・プラダマンテ、騎士キュンナ。駆動炉の停止の方、お願いします」

聖王教会騎士団から、精鋭部隊の銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼの隊長で、最強の剣騎士シュベーアト・パラディンのシスター・プラダマンテと、黄菊騎士隊ゲルブ・クリュザンテーメの隊長で、鎌騎士のＡ級１位の騎士キュンナ・フリーディッヒローゼンバッハの２名が、ゆりかご攻略戦に参加してくれることになった。

「ええ。教会騎士団の代表として、しっかりとゆりかごの心臓を止めましょう。キュンナ、サポートを」

「了解です、シスター」

ルシル君がフォルセティと一緒にイロウエルでどこかで投げ飛ばされた後、ゆりかごの外壁を破壊して無理やり開けた突入口に降り立ったところで、シスターや騎士キュンナと合流した。お２人が駆動炉の停止を買って出てくれたことで、私とフェイトちゃんは正直助かった。本来、駆動炉の対処はルシル君の役割だったけど、フォルセティがゆりかごの外に居たことで出来なくなっちゃったから。

「武装隊の皆さんも、コントロールルームの確認をよろしくお願いします」

ゆりかごは広大で、全てのフロアを見て回るだけの余裕はない。それに私とフェイトちゃんは艦内で唯一、生命反応のある玉座の間を目指さないといけない。反応は2つあることから、1つはヴィヴィオ、もう1つはプライソンで間違いない。

「でもコントロールルームに誰も居ないことが気になるね」

「うん。てっきりプライソンが待ち構えているんだと思っていたけど・・・」

シスター達や武装隊と別れて、私とフェイトちゃんはＡＭＦに満ちる通路を飛行魔法で翔け抜け、ヴィヴィオ達の居る玉座の間をひたすら目指した。シャルちゃんからユーノ君伝手に届けられたゆりかご内部のマップ通りに進みつつ・・・

「アレは・・・！」

「情報にあった多脚兵器！」

通路の奥からガシャガシャと音を立てて歩いて来るのは、鎌のような両腕を備え付けてる多脚兵器。確かあの機体には飛行機能もあるって話だったけど、どれもこれも歩いてる機体ばかり。しかも私とフェイトちゃんには目もくれない。飛んでるからって理由なら、随分とお粗末な防衛戦力だ。

「なのは。ひょっとしてコントロールルームか駆動炉へ向かうんじゃ・・・・」

「かも。シスター達の実力は信用してるけど・・・。数が数だしね」

５０機近い戦力を見逃すことも出来ない。私とフェイトちゃんは頷き合って、私はエクセリオンモードの"レイジングハートを"、フェイトちゃんは大鎌形態アサルトフォームの"バルディッシュを構えて攻撃態勢に入った。

「ハーケンセイバー！」

「エクセリオンバスター！」

フェイトちゃんの放った三日月状の魔力刃は兵器群をバラバラに斬り裂いて、私の砲撃で漏れを撃ち抜いて爆散させていく。そうやって兵器群の迎撃を行いながら通路を飛んで、ようやくヴィヴィオの待つ「玉座の間・・・！」の扉が見えてきた。

「思ったより迎撃戦力が少なくて良かったね、フェイトちゃん」

「うん。ＡＭＦの所為で余分な魔力を消費しているけど、出撃前の想定がいい意味で裏切られた感じ。ほぼ万全の体勢でプライソンに挑めるし、ヴィヴィオを止めることが出来ると思う」

扉の前で飛行魔法を解除して床に降り立って、警戒しながら扉に手

を触れようとすると、扉は「っ！」ゆっくりと左右に開いた。通路も十分に広かったけど、それ以上に広い玉座の間がそこにあった。

「「ヴィヴィオ！」」

数十ｍという長方形の広間の奥には、両脇に球体２つが浮遊してる玉座がある。そして座らされてるヴィヴィオの姿も。あの子の側には「プライソン・・・！」も居た。見た目は１０代前半の少年で貴族風な服装。でもその正体は何十年と生きる、最高評議会によって人工的に生み出された天才。それにドクター、ジェイルさんの兄であり仇でもある。

「プリンツェッスィンの母親役の高町なのはと・・・ははっ、俺のプロジェクトＦを利用して造られたプレシア女史のお人形も一緒か。まぁそうだろうな、大体の予想通りだ」

「っ！」

「お人形・・・？」

私の胸の奥で渦巻く怒りの感情。これが挑発だとすれば効果覿面だよ。プライソンの表情から見れば素らしいけど・・・。でもこれまでに溜め込んだ彼へのどす黒い感情が爆発するトリガーには十分過ぎる発言だった。

「この・・・！」

"レイジングハート"をプライソンへ向けて、「チェーンバインド！」を発動。プライソンの両脇に展開したミッド魔法陣から鎖型バインドを伸ばして彼を拘束する。フェイトちゃんが「今、助ける！」高速移動魔法・ソニックムーブで、玉座に座るヴィヴィオの元へと向かった。けど・・・

「ぅ・・・あ・・・ぁあ・・・」

――聖王の鎧――

「きゃあ！？」

苦しそうに呻き声を上げてたヴィヴィオに触れようとした瞬間、「フェイトちゃん！？」が弾き飛ばされた。ヴィヴィオも「ぅあ・・・！」苦しそうに身じろぎする。私はプライソンに向かって「ヴィヴィオに何をしたの！」声を荒げる。

「何をしたか、何をされたか、それをお前たちが・・・――」

私たちの神経を逆撫でるようにニヤリと笑うプライソンは、私のバインドを膂力だけで破壊して、腰の位置に空間モニタータイプのキーボードを展開。そして「その身を以って確かめればいい」両手をキーボードに叩き付けた。すると玉座の両脇にある球体が放電して、間に挟まれてる状態のヴィヴィオが・・・

「ふぁ！？・・・あ、あああ・・・あああああ・・・うあああああああ！？」

これまで以上の苦痛の声を上げた。それはもう悲鳴だった。フェイトちゃんが近付こうとするけど、ヴィヴィオから放出される虹色の魔力流によって拒まれてる。

「プライソン、今すぐ止めなさい！」

――エクセリオンバスター――

プライソンへ向けて砲撃を発射。プライソンは防御・回避せずに「ぐはっ！」そのまま直撃して後ろの壁に叩き付けられてドサッと床に落下。そのまま動かなくなった。すずかちゃん伝手で聞いた話だと、ドクターと1対1で戦い、そして一度はドクターの手によって殺された（あくまでドクターから聞いた話みたい・・・）らしいんだけど、でも蘇ってドクターを殺害し返した・・・と。だからあまりのアッサリさに呆けてしまった。

「ママ・・・？　ママ・・・！　ママ！　なのはママ！　フェイトママ！」

ヴィヴィオに名前を呼ばれたことで、私の意識はヴィヴィオだけに向く。でもプライソンを放っておくわけにもいかない。だから今度は「レストリクトロック！」で拘束しておく。そしてフェイトちゃんの隣へと向かう。

「「ヴィヴィオ！」」

「ママ！・・・こわいよ、いたいよ、なのはママ、フェイトママ！」

ヴィヴィオの悲痛の叫び声に胸が苦しくなってくる。玉座の両脇に浮いてる球体目掛けて、私は「エクセリオンバスターー！」を、フェイトちゃんは「プラズマスマッシャーー！を同時に発射。球体は簡単に撃ち砕くことが出来たけど・・・。

「うぁぁぁあああああああ！」

「「ヴィヴィ――きゃっ・・・！」」

一際強く魔力流が吹き荒れると私とフェイトちゃんは吹き飛ばされて、「うぐっ！」出入り口側の壁に叩き付けられた。軽く咽ながら、球状に変化した虹色の魔力にその姿を完全に覆い隠されたヴィヴィオの方を見る。魔力球が音を立てて崩れると、「ヴィヴィオ・・・？」の姿が変わってた。

「ヴィヴィオ・・・」

「その姿・・・」

スバルやティアナくらいの身長くらいにまで成長したヴィヴィオ。防護服まで着用してる。宙に浮いていたヴィヴィオはトンッと床に降り立つと、俯かせてた顔を上げて、瞑っていた目を開けた。翠と紅の光彩異色の瞳だけど、目つきはヴィヴィオのものと違って少しばかり鋭い。

「あなた達が侵入者・・・。力尽くで排除させてもらいます」

明らかにヴィヴィオとは違う口調。誰？と考えると真っ先に行き着くのは「聖王女オリヴィエ・・・」の人格だ。ヴィヴィオが記憶転写型クローン生成技術・プロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅ・によって生み出されたなら、有り得なくはない話だけど・・・。

「参ります」

――電光石火――

ヴィヴィオの姿がかき消えた。これまでに何度も経験してる高速移動からの奇襲攻撃。フェイトちゃんが半球状のバリア「ディフェンサー！」を発動して、私たちを金色の魔力の膜が覆った。直後、直上に気配を感じ取って見上げてみれば・・・

「破ッ！」

――勇猛果敢――

ヴィヴィオが虹色の魔力を付加した右拳でバリアを打ち付ける瞬間だった。拳がバリアに打ち込まれると、一切の抵抗を受け付けないというほどにアッサリと砕いて、そのまま私とフェイトちゃんの間に落ちて来て、床に拳を打ち付けた。

「「くっ・・・！」」

足が浮くほどに強烈な衝撃波が周囲に発せられた。ほんの一瞬だけど体が強張った。その隙を、仮にも古代ベルカ時代において最強と謳われた聖王女オリヴィエの遺伝子を持つ、ヴィヴィオが見逃すわけもなく・・・。

――剛毅果断――

両脚に魔力付加をしたヴィヴィオは跳んで、「きゃっ！」右脚で私を、「ぐぅ！」左脚でフェイトちゃんを同時に蹴った。私たちは咄嗟にデバイスを盾変わりにしたことで直撃だけは防いだけど、その威力によって踏ん張りきれずに蹴り飛ばされた。でも今度は壁に叩き付けられないように飛行魔法を発動して無理やり止まる。

「いっつ・・・」

"レイジングハート"の柄を握る両手が痺れる。ここまで重い一撃を受けたことなんて、数えることくらいしかない。ヴィヴィオは左右に居る私とフェイトちゃんを横目で何度も見ながら警戒中。こちらから攻撃を仕掛けるだけの隙が見付け出せない。

「「ヴィヴィオ！」」

「・・・？」

――勇猛果敢――

名前を呼んでもヴィヴィオは反応せず、小首を傾げるだけですぐに

両手に魔力を纏わせて、ゆっくりと伸ばしたままの腕を胸の位置にまで上げた。

――驚浪雷奔――

目にも留まらない速度で外側に振られた両拳から高速で放たれたのは直径２ｍほどの衝撃波。私とフェイトちゃんはそれぞれ回避行動を取って躱して、思わずデバイスをヴィヴィオに向けそうになるけど、なんとか思い留まった。

「ヴィヴィオ、お願い！　話を聴いて！」

「私の名前はヴィヴィオではありません。私の名前は・・・、名前は・・・、名前？」

本当に判らないって風に呟くヴィヴィオに手を伸ばそうとした時、「なのは！」フェイトちゃんに名前を呼ばれた。フェイトちゃんはヴィヴィオにリングバインドを六重ほど掛けたから、私も「レストリクトロック！」でヴィヴィオを拘束する。

「プライソン！　ヴィヴィオの洗脳を解け！　今すぐにだ！」

フェイトちゃんが声を荒げる。床に倒れ伏してたはずのプライソンはいつの間にか立ち上がっていて、私のバインドもすでに破壊済み。

「残念。俺はあくまでオマケで、本件の総指揮を担当しているのはガンマだ。俺を倒せばプリンツェッスィンは元通りになると思った

か？　馬鹿め。なら俺がこんな戦場に居るわけがないだろう。八つ当たりとしてもう1発撃ち込んでおくか？　どうせ徒労に終わる」

なんてことを言いながら、プライソンは玉座の間の出入り口に向かう。フェイトちゃんが「待て！」って制止するけど、どうぞ攻撃してください、って風に一切の身構えもなく歩き続ける。

「っ・・・！　お前では、本当にヴィヴィオを止められないのか・・・！」

「ああ、止められないな。俺の作品の1体を止めれば、プリンツェッスィンも、スキタリスとシコラクスも、ガジェットも止めることが出来る。名前はガンマというんだが・・・、待ってろ」

ここでなんとプライソンは通信を繋げた。相手は『なに、父さん。ウチ、局と教会の相手してるんだけど』前髪で目元が隠れてる女性。あの人がガンマ・・・。プライソンが「ははは。なんでもない。ただ顔を見たかっただけだ」なんて冗談っぽく言ったから・・・

『は？　マジでふざけないんでほしいんだけど。ウーノとクアットロだけじゃなく、ステガノグラフィアとかいう鬱陶しいクラッキングプログラムから総攻撃食らってるし、騎士団もアジト内で暴れ回ってるし。父さんの暇潰しに付き合ってる暇なんてない』

それはもう冷たい声色で叱られた。プライソンは悪びれる様子もなく、私やフェイトちゃん、そしてヴィヴィオをチラッと見た後、ニヤリって笑みを浮かべた。何か嫌なことを企んでるってすぐに判っ

た。

「ガンマ。プリンツェッスィンのリミッターを解除しろ」

「「なっ・・・!?」」

『心身ともに壊れる可能性があるけど？』

「構うものか。どうせ用済みだ」

『判った。コンシデレーション・コンソール、起動』

モニターの向こう側でキーを打つ電子音がした。

「やめてぇぇぇーーー！」「やめろぉぉぉーーー！」

私とフェイトちゃんで制止するけど、相手はモニター越し。声だけ出しても意味はなく、「きゃあああああ！」ヴィヴィオが頭を抱えて悲鳴を上げた。首を覆うようにテンプレートが展開されて、さらに魔力が吹き荒れる。

「では高町なのは、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。生きていたらまた会おう」

それだけを言い残して、プライソンは玉座の間から去って行った。追いかけようにもヴィヴィオをまずは止めないと。心身が壊れる・・・。その前に必ず。ヴィヴィオを捕らえていたバインドが全て弾

け飛んで、「倒さないと・・・敵は・・・・！」そう呻いた。

「はあああああ！！」

――勇猛果敢――

両拳に魔力を付加したヴィヴィオが私に向かって駆けて来た。私が「ヴィヴィオ！」って呼んでも、目から光が失われたあの子には全然届いていない。今のヴィヴィオは完全に・・・敵なんだ。

「ゴメンね、ヴィヴィオ。痛いけど、許してね・・・」

私はヴィヴィオに体を向けたまま飛行魔法で玉座の方へと飛んで、「レイジングハート！」のカートリッジを2発とロード。周囲に魔力スフィアを10基と展開。フェイトちゃんも"バルディッシュ"を構えて臨戦態勢のまま、ヴィヴィオの後を追って来る。

「アクセルシューター！」

10発の魔力弾を一斉射出。ヴィヴィオは軌道を見極めてジグザグに駆けて回避して、そのまま私へと距離を詰めてくるけど・・・

――ソニックムーブ――

「はあああああ！」

――ハーケンスラッシュ――

フェイトちゃんがヴィヴィオのすぐ後ろに迫って、"バルディッシュ"を横薙ぎに振るった。だけど「っ！」魔力刃が当たる前に砕け散った。誘導操作してヴィヴィオの背後から当てようとした私の魔力弾も、着弾直前に弾かれて消滅した。

――アクセルフィン――

真っ直ぐ繰り出されたヴィヴィオの拳を急速上昇することで回避。フェイトちゃんが後退したのを確認して、追撃を受ける前に砲撃「エクセリオンバスター！」で迎撃を行って直撃させた。でも魔力爆発の中をヴィヴィオは無傷で突破して来て・・・

「・・・っ！」

――砲煙弾雨――

両手の平に作り出してた魔力弾2発を私に向かって投げつけると、すぐに新しい魔力弾2発を両手の平に作り出して、再展開した魔力刃で背後から斬りかかろうとしてたフェイトちゃんへ向けて投げつける。私たちは念のために防御じゃなくて回避を選択。誘導操作弾じゃないから避けるのは容易い。

「エクセリオン・・・」

「プラズマ・・・」

私は天井近くまで上がって、フェイトちゃんは後退して、ヴィヴィオから距離を取ったと同時に砲撃魔法をスタンバイ。ヴィヴィオが動きを止めて両手の平の間に魔力スフィアを生成しようとしたその瞬間に・・・

「バスタァァァーーーッ！」「スマッシャーーーーッ！」

私たちは砲撃を発射。私の上方からとフェイトちゃんの後方からの砲撃に、ヴィヴィオはスフィア生成を中断して私の砲撃にはアッパーを、フェイトちゃんの砲撃には裏拳を打ち込んだ。

「「っ・・・！」」

なんてことはないその一撃で、私たちの砲撃が殴り返されて来た。慌てて横に移動することで回避。

「まさか砲撃を・・・」

「殴り返すなんて・・・」

しかも大して魔力を付加してない素手で。ヴィヴィオは構えを取って足元ベルカ魔法陣を展開。

――意気軒昂――

そして今まで以上の魔力を放出した。あぁ、この感覚は昔の頃のルシル君だ。圧倒的な魔力の差を見せつけてくる。たぶん、このまま

戦っても決定打を与えられない。だから「すずかちゃん・・・・」に調整してもらったブラスターシステムを・・・起動しよう。

『フェイトちゃん。リミットブレイクモード、行ける？』

『それしかない、か・・・。うん。やろう』

今のヴィヴィオを押さえるには、こちらも相応の限界を突破しないといけない。そう考えての・・・

「レイジングハート！　ブラスター2！　ブラスタービット展開！」

「バルディッシュ！　リミットブレイクモード、ライオットブレード！」

全力全開だ。

・―・―・―・―・―・

"聖王のゆりかご"の後部にある駆動炉の間へと続く通路を走るのは女性1人と少女1人。女性の名はプラダマンテ・トラバント。緋色の長髪は尻ほどまで伸び、毛先に向かうほど外へと向かってはねている。その美しい紫紺色の瞳は、通路の先の先を見据えている。防護服は、上下ともに真っ白なナポレオンジャケットとスラックス、袖に腕を通さずに肩に掛けただけの白いナポレオンコート。右手に握られているのは、一振りのエクスキューソナーズソード。本来の用途である斬首剣としてのデザインであるため、剣先は尖ってはお

らず四角い。カートリッジシステムを搭載していないどころか、造りからしてデバイスですらないようだ。

「この程度がゆりかごの防衛戦力だなんて・・・」

少女の名はキュンナ・フリーディッヒローゼンバッハ。灰色のショートヘア、翠色の瞳。防護服は、白を基調としたノースリーブのブラウス、薄い桃色のヨークスカート、ノースリーブのロングコート。さらにコートの上から乳房の形に合わせたブラジャー型の胸甲を装着している。

両手で握っているのは大鎌の柄。柄頭には５０ｃｍ程の歯車があり、右側からは曲線を描く刃体１ｍの金属刃が伸び、歯車の上部先端から左側に向けて刃体４０ｃｍの魔力刃が８つと真っ直ぐ伸びている。柄尻にも同サイズの歯車があり、左側から曲線を描く金属刃１つと、真っ直ぐ伸びた魔力刃８つがある。

「資料によれば、ゆりかご防衛の本来の要は鍛え上げられた騎士たちとのことだ。さすがに自立型兵器に期待するのも酷だ」

共に聖王教会の騎士団に所属する騎士だ。プラダマンテとキュンナの通って来た道にはバラバラに斬り裂かれたり、何かに押し潰されたかのようにひしゃげたガジェットⅠ型とⅢ型、加えて元よりゆりかごを護っていた歩行型兵器の残骸が転がっていた。

「考えれば考えるほど、プライソンの裏切りには頭に来ますね」

キュンナがそう怒りに震えた声を漏らした。裏切り。それはつまり

彼女もプライソンと繋がりを持っていたということに他ならない。そんな2人の目の前に空間モニターが1枚と展開された。

『お前たちまでもがゆりかごに突入して来るとは。ゆりかごを奪取しに来たのか？　それとも、局に倣って破壊しに来たのか？　どちらにしても残念だったな。ゆりかごは俺の目的の為に使わせてもらった』

映し出されたのは「プライソン！」だった。１０代前半くらいの貴族風の少年だ。キュンナは大鎌の金属刃をモニターに突き付け、「貴様！」と怒声を上げた。対するプライソンは、面倒くさそうに溜息を吐くだけ。それがキュンナの逆鱗に触れたようだ。

「よくも再誕計画を破綻させるような真似をしてくれましたね！この裏切り者が！」

「気持ちは解るけれど待ちなさい、キュンナ。・・・プライソン。お前は今、ゆりかご内に居る。相違ないな」

さらに激昂するキュンナの肩に手を置いたプラダマンテは、プライソンの居所を確認するためにそう訊ねた。プラダマンテの兄から託された特秘任務の中には、プライソンの暗殺も含まれているからだ。局に逮捕され、聖王教会騎士団の幹部とも繋がっていたという事実を漏らされるわけにはいかないからだ。

『ああ。俺の背後に映る通路の内壁が見えるだろ。・・・なんだ、ゆりかご内部や外部に通信が繋がらないのに、俺からの通信は繋が

ったことが不思議か？』

「・・・」

『その表情は当たっているらしいな。簡単だ。局や教会の使う独自に通信回線と、俺たちの使う回線が同じわけないだろ。逆探知される可能性もあるわけだからな』

「ならば結構。ではプライソン。ヴィヴィオ様と聖王のゆりかごは本来、今回の一件では起動しないという作戦だった。これも相違ないな？」

『ああ。お前も知っての通り、プリンツェッスィンとゆりかごは、後の再誕計画で起動する手筈だった。が、どうせ再誕計画は行われることがない。何せ・・・。フッ。だから元々、本件で起動することにしていた。裏切りではないだろ？　ただ、話していなかっただけだ』

キュンナが怒っている理由がそれだった。ゆりかごを起動・運用させるための鍵であるプリンツェッスィン・ヴィヴィオは、キュンナやプライソンの口にした再誕計画と称される作戦を企てた主要人物内で決めていた話の中では、件の計画内で初めて起動・運用されるはずだった。それにも拘らず、プライソンは独自に計画を破綻させるような手段を執った。それが許せないのだ。

「おのれ・・・！　貴様の役目は管理局側に付いて、内側から干渉することでミッド地上本部の評判を落とす事だったのに！」

『落としてやっただろ。レジアス・ゲイズは追い込まれた。あの男はもう、中将や防衛長官という肩書から転げ落ちるしかない』

「ゲイズ中将だけでなく、ミット地上本部そのものが徹底的に世論から叩かれる程のものでなければ、全く意味は無いのです！」

『可愛い顔をして恐ろしい事を言う。まぁ再誕計画は、それを基点にする計画だから当然と言えば当然か』

「それだけじゃないです！　貴様の所為で、騎士団と局でゆりかごの破壊を行うことになった・・・！　本当ならゆりかごでお前の他の兵器を破壊して、その有用性を次元世界にアピールするつもりだったのに。ヴィヴィオ様だって本当は、表舞台には出さずに人知れずその命を消費して頂くはずだった・・・」

『俺の手で生み出してやったのにその態度と言い草。ま、あのハゲにお前を預けた時点で俺の物じゃなくなったわけだが・・・。少しばかり調子に乗っているな、開発コード・カイゼリン』

「そうです、もう私はお前の所有物じゃないです。あの方や計画に賛同して頂いた者たちと一緒にベルカを再誕させ、そしてかつては夢半ばで果たせなかった女王――カイゼリンとなる者。それが私、キュンナ・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルトです」

『ふん。これ以上の文句は聞かんぞ。裏切り？　そもそも俺のよう

な狂人を仲間に入れようという考え自体が間違いだ』

キュンナの怒声を受け流していたプライソンが開き直ったところで、『ようやく連絡が取れました』新たにモニターが展開され、そのような声が発せられた。映し出されているのは、金色の髪をアシンメトリーにした、２０代半ばのスーツ姿の男性だ。

「エーアスト様・・・・！」

キュンナが男性の名前を呼んだ。エーアスト・ルター。今は亡き最高評議会が作り出した評議会――権威の円卓のメンバーで、魔導師派遣会社エモーションサービスカンパニーの社長だ。

『お久しぶりです、キュンナ陛下。シスター・プラダマンテも。・・・プライソン、あなたが今回働いた不貞、我が主も大変お怒りです。償いはしっかりして頂くつもりです』

『はあ。さっきキュンナにも言ったが、俺を信じること、味方に入れることがそもそも間違いだ。エーアスト。お前のマイスターであるあのハゲにも伝えておけ。そしてキュンナも聴け。この世界は俺が貰った。俺の為に使わせてもらう。恨めしいか？　憎らしいか？　俺を殺しに来たいのなら来るがいい。以上だ』

プライソンはそう言い放った後、自ら通信を切った。静まり返る通路で、プラダマンテは怒りで肩を震わせている「キュンナ」に優しく声を掛けた。

『キュンナ陛下。ゆりかごはもう諦めましょう。ここまで事が大きくなっては奪取も出来ません。シスター・プラダマンテも、トラバント卿より奪取せよとの指令が下っているそうですが、お気になさらずに。ゆりかごのデータを奪えるだけ奪ってください。それがいつか再誕計画の力となり、それより先の事にも役立つはずです』

エーアストにそう言われ、キュンナは渋々だが「・・・はい」と頷いた。プラダマンテも「了解」と応えた。エーアストも頷き返したところで、彼の映るモニターに激しいノイズが奔り、そしてブツンと強制的に通信が遮断された。

「・・・お兄様には後で謝らないといけないか・・・」

「心中お察しします、シスター」

大きく肩を落とすプラダマンテに、エーアストのおかげで冷静さを取り戻したキュンナが労わった。そんな2人の背後でカタッと金属片が転がった音がした。ハッとして振り返ると、そこには多脚兵器が1機と居て、頭部には1人の女性が腰かけていた。真紅の前髪と後ろ髪は共に３０ｃｍほどあり、女性の顔面を覆い隠している。白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが1本入った黒のプリーツスカートを身に纏い、オプションとして黒のトリミング・コートを羽織っている。彼女の背後にはグレムリンのⅠ型とⅢ型が、２０機ずつの計４０機が隊列を組んでいた。

「ガンマ・・・！」

「・・・のスペアボディね。ガンマが研究所より出ることなど有り得ない」

キュンナとプラダマンテがガンマ・スペアと相対する。スペアは「やはりお前たちが来たたんだ」そう言って多脚兵器の足元にテンプレートを展開。

――ＩＳクローニングクイーン・メタルダイナストＴｙｐｅガンマ――

プラダマンテとキュンナが向かおうとしていた通路の先の床がせり立ち、２人のこれ以上の進行を妨げるように封鎖した。

「裏切り者には相応の制裁を！」

「そういうわけだから、まずは駆動炉を押さえさせてもらう」

プラダマンテは右腕を左腕側にまで伸ばすと、ギンっと鈍い音が通路内に響き渡った。音の出所は彼女が右手に持つ斬首剣・"シャルフリヒター"の剣身で、空間が６つの球体状に歪んでいる。

――グラヴィタツィオーン・デッケル――

「はっ！」

右腕を水平に薙ぎ払うと"シャルフリヒター"の剣身から６つの歪みが横一列に斜め前へ放たれた。歪みはスペアの両脇を通り過ぎて

行き、グレムリン群の直上にて一斉に爆ぜた。すると何十機というグレムリンが一斉に床に押し付けられ、そのボディが大きくひしゃげ始めた。

「重力・・・！」

「スペア如きが私たちの往く道を妨げようとは！」

キュンナが一足飛びでスペアへと突進。多脚兵器の鎌のような両腕が彼女に向けて振るわれるが、キュンナの振るう大鎌によって紙のように一瞬にして切断された。さらに続けて前脚を切断されたことで態勢を崩し、返された刃で頭部が横一線に切断された。

「くっ！」

――メタルダイナストＴｙｐｅガンマ――

スペアが崩れ落ちる多脚兵器の頭部から跳び立つと、ガラクタと化したグレムリンや多脚兵器の金属ボディを大小様々な刃へと変化させて、プラダマンテとキュンナへ向けて伸ばした。２人はそれぞれ回避行動を取って刃を紙一重で躱し、キュンナは大鎌でスペアを斬り掛かる。

「せいっ！」

――シルバーカーテンＴｙｐｅガンマ――

「幻術・・・！」

しかしキュンナの魔力刃が裂いたのは幻術で造られたスペアだった。彼女はすぐに「守護結界！」円柱状のバリアを展開。

――スローターアームズＴｙｐｅガンマ――

直後に大きなブーメランのような刃が４つと飛来し、キュンナのバリアに四方から襲いかかった。バリアはその一撃で破壊され、彼女はトンッと床を蹴って通路の天井付近にまで跳び上がったことで、その挟撃から逃れた。

『キュンナ。そのままそこに居なさい』

その中でプラダマンテは念話を使ってキュンナにそう伝え、"シャルフリヒター"をバットのように横に構えて・・・

――ラウムシュナイデン・ナーゲル――

「せいっ！」

そして勢いよく振り払った。何事も起きないかと思われたその直後、キュンナを追撃しようとエネルギー剣・ツインブレイズを構えていたスペアが横ストライプのようにバラバラにされた。

「遊んでいる時間は無い。早々にゆりかごを抑える」

「りょ、了解です！」

プラダマンテは行く手を遮る鋼鉄の床に"シャルフリヒター"を突き立て、ツンっと一突き。それだけで壁に成人サイズの穴が開き、2人はその穴を潜って先を急いだ。

Ｅｉｐｉｃ２６－Ｃ聖王のゆりかご攻略戦～Ｍｏｔｈｅｒｓ　Ａｎｄ　Ｄａｕｇｈｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

プライソンとガンマっていうサイボーグの手によって洗脳されていたヴィヴィオは、リミッター解除によって手がつけられない程に強化されてしまった。

「破ッ！」

――撼天動地――

虹色の魔力が込められた拳を玉座の間に打ち付けたヴィヴィオを中心に、魔力が四方八方にジグザグと走った。ルシル君のメタトロンを思い起こすものだ。魔力の轍の側に居ないように離れたところで、魔力が勢いよく噴き上がって強力な防壁となった。

「っく・・・！」

噴き上がり時の衝撃波に体勢が僅かに崩れる。魔力の壁は私とフェイトちゃんを墜とせ、さらには私たちの攻撃を無効化できるだけの高濃度。加えてヴィヴィオの姿が捉えられない。"レイジングハート"の柄を強く握り直して、周囲に浮遊させてるブラスタービット４基で周囲警戒。

（ヴィヴィオ・・・）

今の"レイジングハート"は、すずかちゃんとスカラボの技術力の粋を結集したリミットブレイクモードのブラスターモードだ。自己ブーストを利用している機能で、私と"レイジングハート"に限界を超えた魔力出力を出させる。

本来の使い方は、前衛などの味方と連携して、後方からの支援射砲撃を主とする。すずかちゃん達の努力のおかげで負担は大きく減ったけど、それでも私の体やリンカーコア、"レイジングハート"への負荷は大きい。だから長時間、そして連続使用には不向きとも言える。

『フェイトちゃん！』

『ヴィヴィオはこっちでも確認できない！　気を付けて！』

前後左右を魔力壁で覆われていて、ヴィヴィオの姿や魔力反応に気配など、何も感じることが出来ない。なんて考えていたところで・・・

――天衣無縫――

右方数m先の壁を突っ切って来たのは、全身に魔力を纏って砲弾と化したヴィヴィオ。"レイジングハート"の意思で即座にビット4基がヴィヴィオに向いて、一斉に砲撃4発を発射。でもヴィヴィオを覆う魔力に全弾が掻き消された。

――アクセルフィン――

そして私は急上昇するけど、「速っ・・・・！」ヴィヴィオの突進速度に明らかに負けてる。それでもタッチの差でヴィヴィオの頭上に到達することが出来た・・・んだけど、足元を通り過ぎた際の衝撃が凄まじくて「きゃあああああ！」私は大きく吹き飛ばされて、「かはっ！」天井に背中から叩き付けられた。それとほぼ同時に魔力の壁が解除された。

「なのは！」

私の足元を通り過ぎた後、壁を蹴って方向転換したヴィヴィオの突進を避けきったばかりのフェイトちゃんに名前を呼ばれた。私は「けほっ、けほっ」咽ながらも宙で体勢を立て直して、"レイジングハート"とビットの先端を足を止めた直後のヴィヴィオに向ける。

「エクセリオンバスター・マルチレイド、シュート！」

砲撃5発を一斉発射すると、「金城鉄壁」そう発したヴィヴィオの全身を薄らと魔力が覆った。直後に着弾して、ヴィヴィオは大きな魔力爆発に呑み込まれた。呼吸を整えて、追撃の魔法をスタンバイ。フェイトちゃんも"バルディッシュ"のリミットブレイクモード、二剣一対形態の"ライオットザンバー・スティンガー"を手に、ヴィヴィオに警戒をしている。

「・・・さすがに、キツイかな・・・」

強力なＡＭＦの中、攻撃がほぼ通らない相手、しかも私とフェイトちゃんにとって大切なヴィヴィオ。心も体も想像以上の負担で軋んでる。しかも戦闘開始からすでに５分は経過してる。早く止めないと、ヴィヴィオの心も体も壊れてしまう。

「はあああああああああッ！」

魔力爆発を魔力放出で吹き飛ばしたヴィヴィオ。そして即座にフェイトちゃんへ向かって突撃して行く。私は「アクセルシューター！」を１６発とヴィヴィオへ撃ち込んで、その軌道を阻害させる。

（ヴィヴィオの防御力は桁違いに高い。だけどそれに驕ることなく回避もキッチリやってくる。それが厄介でありながら、行動制限攻撃が通用するのは助かる）

ジグザグに走ってシューターを避けるヴィヴィオへ「はあああああ！」フェイトちゃんは仕掛ける。フェイトちゃんが右手の"スティンガー"で斬り掛かると、ヴィヴィオは左拳でこれを迎撃。電気変換資質による高魔力を圧縮して形成された魔力刃にも拘らず、ヴィヴィオの拳は傷を負うことなく魔力刃を殴り返した。

「やあああああッ！」

フェイトちゃんはその勢いを利用して時計回りに旋回して、左の"スティンガー"での斬撃を繰り出した。ヴィヴィオは伸ばし切っていた左腕を戻しつつしゃがみ込んで、その斬撃を躱した。即座に立ち上がりつつ、フェイトちゃんの脇腹に右拳を打ち込もうとしたか

ら・・・

――アクセルシューターー――

「シューット！」

右腕に目掛けてシューターー1発を高速発射。ガキン！とおよそ人に当たって出るようなものじゃない音が玉座の間に響いて、ヴィヴィオの右腕を下方に弾いた。それでも間髪入れずに左拳を繰り出す。でもすでに体の正面をヴィヴィオに正したフェイトちゃんは、両手の"スティンガーー"を構えて盾として拳を防いだ。

「っ・・・！」

「ぐっ・・・！」

フェイトちゃんは殴り飛ばされるより先にヴィヴィオのお腹に右の踏み蹴りを打ち込んで、2人揃って後方に吹き飛んだ。私は"レイジングハーート"とビットを着地前のヴィヴィオへ向けて、3発とカートリッジロードして魔力チャージ。

――エクセリオンバスターー・マルチレイド――

「シューット！」

「クロス・プラズマスマッシャーー・・・、ファイアァァァーーーッ！」

飛行魔法で宙に留まったフェイトちゃんは、"スティンガー"二剣の剣先に展開した環状魔法陣を砲門として、雷撃砲2発をヴィヴィオへと発射した。私とフェイトちゃんの計7発の砲撃が、床に片足を付けたばかりのヴィヴィオに着弾。玉座の間の3分の1程の大きさの魔力爆発が起きた。爆風に煽られるけど、空中姿勢を整えながら消費しきったマガジンを取り外して、新品のマガジンを装着しようとした時・・・

――電光石火――

無傷なままのヴィヴィオが爆煙を突破して来て、フェイトちゃんへ改めて突進した。カウンターとしての両手の"スティンガー"による十字斬撃を繰り出すフェイトちゃんに対して、ヴィヴィオは何もせずに突っ込んで行く。そして斬撃を両肩にまともに受けたヴィヴィオだったけど、大したダメージは入ってないようで・・・

――旭日昇天――

右手の平に展開していた魔力スフィアごと「がはっ・・・！」フェイトちゃんのお腹に打ち込んだ。防御も何も無い中での一撃に「フェイトちゃん！」は吹き飛ばされて、そのまま壁に叩き付けられた。ヴィヴィオが私を見上げて両膝を曲げたのが判ったから、急いでマガジンを装着してカートリッジも3発とロード。そしてヴィヴィオは私に向かって跳んだのを見計らって、ビット4基を利用しての「レストリクトロック！」を仕掛ける。

「・・・！」

ヴィヴィオの周囲をぐるりと回るビット４基の尾から伸びるバインドにヴィヴィオは拘束された。その間に『フェイトちゃん！』に念話を通すと、『大丈夫・・・、まだ墜ちてないよ・・・』苦しそうな声でそう返答してくれた。

『良かった。少し休んでて、フェイトちゃん。その間は私が何とかして、ヴィヴィオを抑えるから』

『私は大丈夫だよ、なのは。すぐに・・・ぅあ・・・』

壁にめり込んでたフェイトちゃんが床に降り立ったけど、両膝を折って床に四つん這いになった。やっぱりダメージが大きいんだ。右手に持ってた"スティンガー"を手放して、ヴィヴィオの一撃を受けたお腹を押さえてる。

「はあああああああッ！」

ヴィヴィオがバインドを力尽くで弾き飛ばして床に落下、そしてトンッと降り立った。その視線が行くのは立ち上り途中のフェイトちゃん。体の正面もフェイトちゃんに向けたヴィヴィオに、私は急降下して、「させない！」フェイトちゃんとヴィヴィオの間に降り立つ。

「ヴィヴィオ、止まって・・・お願い」

――勇猛果敢――

私の言葉に一切反応せずに両拳に魔力を付加したうえで、私たちのところへ歩いて来る。

「クリスタルケージ！」

ビット1基をヴィヴィオの頭上に配置して、四角錐型の結界を展開させてヴィヴィオを閉じ込める。ヴィヴィオが内面を何度も殴るけど、結界は割られることなくヴィヴィオの攻撃を耐えてくれた。その間に「フェイトちゃん！」の元に駆け寄って、立ち上がろうとしてたフェイトちゃんに肩を貸したところで・・・

――破邪顕正――

「破ッ！」

ヴィヴィオがとうとう結界を破壊して、そのままの勢いでこっちに突っ込んで来た。両拳にはこれまで以上の高濃度な魔力が付加されてる。あんなもので殴られたら即撃墜でもおかしくない。

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　ＥＸ≫

"レイジングハート"が展開してくれたバリアにヴィヴィオが左拳を打ち込む。初撃は防げた。でも続けざまに放たれた右拳の一打でガシャァン！と砕かれた。フェイトちゃんの肩を支えたまま上に逃げようとしたけど、「あっ・・・！」ヴィヴィオは私とフェイトちゃんの足首をガシッと掴んだ。そして私たちを「あっぐぅぅ・・・！」

床に叩きつけた後・・・

――狂瀾怒濤――

ヴィヴィオは床を踏みつけた。背中越しに伝わる衝撃と床が破壊される音、そして強大な魔力。次の瞬間、私たちは強大な魔力流に呑み込まれた。

・―・―・―・―・

プライソンのアジト、その居住区画の最奥。そこは"スキュラ"シリーズと呼ばれる特別製のサイボーグ姉妹の1機、三女ガンマの私室がある。円形状の部屋の中央に卵型の椅子が宙に浮いており、窪みには1人の２０歳ほどの女性・ガンマが座っている。身長は１６０ｃｍほど。深紅の前髪と後ろ髪は共に３０ｃｍと長く、顔を完全に覆い隠している。

「ウーノとクアットロめ！　それだけじゃない、ルシリオン・・・！
　アレのステガノグラフィア！　波状攻撃が鬱陶しい！」

ガンマは今、アジトのコンピュータ防衛に手一杯になっていた。ガンマの役割は各戦力の監視・運用、さらにはアジト防衛と、たった1機でプライソン一派の生命線を担っている。そして今現在、その役割が丸ごと失われてしまうような攻撃を受けていた。

「どちらかに守りを回せば、その間にもう片方が一気に攻め込んで来る・・・！　しかも局や教会からも攻撃が始まるなんて・・・！」

今は亡きジェイル・スカリエッティの娘・シスターズの長女ウーノと四女クアットロ、次元世界屈指の電子戦を行えるルシリオンの電子戦術式ステガノグラフィア、さらには管理局と聖王教会からのアジトのメイン・サブのコンピュータへの同時波状クラッキング攻撃。いくら電子戦特化として開発されたガンマでも、完全に迎撃するのは難しいようだ。

「警報！？　今度は一体なに！」

室内に轟く警報音。椅子の内壁に複数のモニターが展開され、アジト内が次々と制圧されて行く様が映し出される。そして警報の原因は、クラリスを筆頭とする教会騎士隊が居住区にまで侵入したことによるものだ。

「このままじゃ・・・。（ウチのＩＳを使って迎撃する？・・・ダメ。それだと研究所の防壁を抜かれて、プリンツェッスィンどころか、シコラクスやスキタリスの洗脳までもが解除される。父さんの合図が来るまではどうにかして・・・）・・・こうなったら、ローアウト前だけど・・・」

モニターの映像が切り替わり、ガンマと同じ"スキュラ"のアルファ達のスペアボディ、その未完成品が映し出された。衣類どころか人工スキンや義眼の張られてない、鋼色に鈍く光る人型骨格が並列して佇んでいる。

「複製したスキルやＡＩも搭載していないけど、ＬＡＳ以上の戦闘

行為は十分できる。連中の足止めくらいは・・・・！」

ガンマが手元に展開しているモニター型キーボードのキーを打ち、スペアボディの強制起動を行う。するとモニターに映るスペアボディに繋がっていたケーブルが外れ、眼窩内に収められている眼球レンズにポッと光が灯る。そしてガシャガシャと音を立てて歩き出し、ガンマの設定したポイントへ向かい始める。

『やったー！＼（＾ ＿＾）／』

『ようやく防壁を抜いてやったよ！O（≧▽≦）O』

『貴女がガンマね！ やっとその顔を確認！┗（、 皿 ′）┛』

『8年前の借りは、今日ここで返すからね！（＾ q＾ （（○≡（・ω・ ））』

『ボク達ステガノグラフィアが不甲斐なかった所為で、ゼスト隊長、メガーヌ・クイント両准尉、それに他の隊員さん達、いろんな人たちにご迷惑をお掛けしたゞ（。＼ ／。）ノ』

椅子の内面に展開されていたモニター全てに、3頭身の小さな天使のような女の子が5人と映り込む。ステガノグラフィアのインターフェースであるアメナディエル、ソレウイエル、マカリエル、メナディエル、ライシエルだ。

『ようやくその面を拝見させてもらいました～♪』

『ガンマ。あなた達の計画は、亡き父ドクター・ジェイルの名の下に・・・ここで終わりよ』

続けてウーノとクアットロの映るモニターも展開された。前髪に隠されたガンマの目が、表情が、怒り一色に変わる。そしてガンマが「おのれぇぇぇーーーッ！」と叫んだ後、研究所の電脳防壁が全て突破され、その管理権限がガンマの手を離れた。

「まだ！　まだ取り返せないことは・・・！」

なおも諦めないガンマがキーボードのキーを打とうとした時、「いぎっ！？」奇声を発した。右腕に強烈な痛みを感じたガンマはそちらに目をやる。視界に入ったのは右手の甲と前腕に大きな穴が開き、バチバチと火花を散らしている様。

「っ・・・！？」

「本当なら殺してやりたいところだけど、一応はあなた達スキュラと私たちは同じ男の手によって生み出された姉妹だと考えられるし。・・・だから見逃してあげるわ、正解でも不正解でもね」

「ドゥーエ・・・！？　一体どうや――っ！　クアットロのシルバーカーテンによるステルスぅ・・・！」

ガンマの表情が驚愕に染まる。ドゥーエが何も無かった空間から突如として現れたからだ。ガンマの言う通り、クアットロの幻影を操

り、対象の知覚やレーダー・電子システムなどを欺けくことの出来るスキル・シルバーカーテンによって、ドゥーエはステルス状態となり、クラリス達と共にアジト内へ突入した直後に単独行動を開始。迎撃戦力をスルーしつつ、ようやくガンマの部屋へと侵入した、というわけだ。

「フリーズ。ノーヴェ達・・・妹たちは返してもらうわ」

そして今、管理権限を奪還するための作業を始めようとしたガンマを止めるべく、ドゥーエは固有武装――親指と人差し指と中指に伸縮自在の爪を装着したグローブ・"ピアッシングネイル"、その人差し指と中指の爪でガンマの手の甲と前腕を貫いたのだ。

「ウチがこんな失態を犯すなんて・・・！」

「ウーノやクアットロ、それにルシルの攻撃に焦り過ぎたわね」

『ご愁傷様ですぅ～♪』

『ノーヴェ達やクイント・メガーヌ両准尉、それにヴィヴィオの洗脳プログラムを全破棄・・・完了。妹たちは確かに返してもらったわ』

『ガジェットおよびＬＡＳ、それにスペアボディの管制システムも全て乗っ取ってやりました～♪』

自分の存在意義を全て消されてしまったことで、「こんな・・・」

とガンマは力なく項垂れる。ドゥーエも"ピアッシングネイル"の爪を彼女の手の甲と前腕から抜いた。直後に、「聖王教会騎士団です！」クラリス率いる翠栀子騎士隊グリューン・ガルデーニエの第1班、加えて査察官ヴェロッサも、ガンマ私室へと入って来た。

「ドゥーエ一尉。ご無事何よりですよ」

「ええ、アコース査察官」

ヴェロッサにそう返しながらガンマの両腕に手錠をはめようとしたドゥーエ。だがここで、ガンマは「・・・せめて最後に、お前たちの首を・・・獲る」そう漏らした。足元に様々な色が混じり合ったテンプレートを展開。ドゥーエ達が「やめなさい！」と制止するが・・・

――ＩＳクローニングクイーン・ライドインパルスＴｙｐｅガンマ――

ガンマはトーレのスキルを発動。手首と太ももと足首にエネルギー翼を展開し、「うあああああッ！」咆哮を上げて、両手首のエネルギー翼を周囲のドゥーエ達に振るう。ドゥーエはヴェロッサに押し倒されたことで直撃は免れ、クラリスは方天戟型デバイス・"シュトルムシュターク"を盾とすることで防御。

「ウチはスキュラシリーズ・ガンマ！　当研究所の最後の防衛者！　侵入者は・・・排除する！」

†††Ｓｉｄｅなのは†††

「うあっ！」

ヴィヴィオの強烈な蹴りを受けた私はまた、玉座の魔の壁に叩き付けられる。そんな私に追撃を試みようとしたヴィヴィオだけど、「ヴィヴィオ！」フェイトちゃんが立ちはだかってくれた。

――光芒一閃――

ヴィヴィオは貫手にした両手に虹色の魔力刃を展開。フェイトちゃんは"バルディッシュ"の最大火力を誇る大剣形態、"バルディッシュ・ライオットザンバー"による振り降ろしで迎撃。ヴィヴィオは両手の魔力刃を頭上でクロスすることでフェイトちゃんの一撃を受け止めるけど・・・

「ぐっ・・・！」

足元が陥没するほどの衝撃をその身に受けた。壁から脱出した私は即座にビット４基を使って、ヴィヴィオに再度バインドを仕掛ける。フェイトちゃんは大きく後退して"ライオットザンバー"を上段に構えた。私も"レイジングハート"とビット４基をヴィヴィオへ向ける。

「あああああああああッ！！」

――臥薪嘗胆――

ヴィヴィオが吼えると、「っ！」さらに魔力量が増加した。肌に感じる圧倒的過ぎる魔力に、私とフェイトちゃんはデバイスを下げかけた。あまりの高濃度な魔力の防御膜。その防御膜を突破するための術はある。ルシル君から渡されたお手製カートリッジ。でもそれで防御を抜いた後のダメージがヴィヴィオにどれだけの負担になるかが判らない。攻撃に必要以上の魔力を回して、それでヴィヴィオの身に何かあった・・・なんて。

（一体どうすれば・・・）

そう考えてた時、「なのは！」って名前を呼ばれた。ハッとして、「なに・・・？」ヴィヴィオの様子がおかしい事に気が付いた。

「・・・？？」

暴風のような魔力流が急速に収束して行って、S＋ランク程度にまで弱まった。ヴィヴィオ自身も何が起きてるのか判らないみたいで、自分の体を見回してる。

≪ 駆動炉に異常発生、駆動炉に異常発生≫

玉座の間にベルカ語でそんなアナウンスが流れた。ということは「シスター達が・・・！」やってくれたんだ。異変はそれだけじゃなかった。ヴィヴィオが「うあ・・・ああああ！」頭を抱えて苦しみ出した。

「「ヴィヴィオ！」」

「っ！？・・・なのはママ・・・フェイトママ・・・？」

ヴィヴィオの口から私たちの名前が出た。これってやっぱり洗脳が解けてるってこと・・・だよね。私たちが「ヴィヴィオ！」の元へ駆け寄ろうとしたら・・・

「ダメ・・・ダメ、来ないで！」

迎撃としての拳による打撃技を繰り出してきた。さっきまでの容赦無用の攻撃じゃないから、後ろに飛び退くことで容易く回避することが出来た。

「来ないで、ママ・・・！　わたしの体なのに・・・止まらないの・・・！」

「洗脳が解かれただけじゃダメなの・・・？」

「おそらく、ヴィヴィオの体を急成長させた何か――たぶんレリックが関係してると思う」

ヴィヴィオはゆりかごを起動・運用する鍵の聖王として、そして今までのように本人が玉座を守る戦力・人造魔導師として、プライソンによって生み出された。ならフェイトちゃんの言うように"レリック"をどうにかしないと、ヴィヴィオを取り戻せない・・・ということに。

「直接プライソンを問い質したいところだけど、今はヴィヴィオを最優先しないと」

「うんっ！　なのはママとフェイトママがちゃんと、ヴィヴィオを助けるから！」

「待っててね、ヴィヴィオ！」

そう声を掛けるとヴィヴィオは「もう・・・いいの・・・」暗い表情をして、沈んだ声色でそう漏らした。まさかそんな返しが来るなんて思わなかったから、「え・・・？」私たちは訊き返した。

「夢・・・、夢を見たの・・・。それで思い出したの・・・。わたし、わたしは普通の子じゃないって・・・。ずっと大昔の人のクローンなんだって」

「「っ！」」

ヴィヴィオやフォルセティには絶対に漏れないようにしていた、過去の人物のクローンという話。でも私たちがいくらタブーとしていても、遺伝子に組み込まれた記憶を見せないようにすることだけは不可能だ・・・。

「しかもわたしが生み出された理由は、この艦を動かして、みんなの居る世界を破壊して、玉座に侵入してきた人たちを倒すだけの、生きてる兵器として在ること・・・」

ヴィヴィオの瞳から大粒の涙が溢れ出て来て、頬を次々と伝ってく。私とフェイトちゃんで、そのくだらない役割からヴィヴィオを助けてあげたい。だから「違う、そうじゃない」って、ヴィヴィオの言葉を否定する。

「うん。ヴィヴィオは兵器なんかじゃない」

「違わない・・・！　違わないよ！　わたしが兵器だからこの艦は今動いていて、多くの人に迷惑を掛けてる！　さっきだって、ぼんやりだけど・・・なのはママとフェイトママを傷つけてた！　あんなに酷い事・・・いっぱいしたんだよ！　操られてたなんて・・・そんなの言い訳に・・・ならない・・・！」

そう言ってヴィヴィオは自分の両手を見た。洗脳されてた間の記憶は薄ら残っていたようで、私たちに攻撃を加えたことを悔やんでる。けどそれはやっぱりヴィヴィの所為なんかじゃない。

「ママ達だって本当は、わたしの本当のママじゃない・・・！　パパもママもいない、機械の中で生まれたの・・・！　こんなの人じゃない・・・！　本当はこんな悲しいとか、苦しいとか、全部が作り物で、偽者で、やっぱり兵器なんだよ！」

ヴィヴィオのその言葉にフェイトちゃんが1歩と足を踏み出して、「そんなことない」そうキッパリと告げた。フェイトちゃんの前進にヴィヴィオが身構える。きっとあれも意思とは別に、勝手に構えを取っちゃうんだ。私も1歩と足を踏み出してフェイトちゃんの隣

に並ぶ。
「私もね。ヴィヴィオと同じ、機械の中で生まれたんだよ」
「え・・・っ！？」
「私もクローンなんだよ、ヴィヴィオ。アリシア・・・お姉ちゃんの遺伝子を使って、リンディ母さんじゃない、私の本当の母さんの手によって生み出されたの。ねえ、ヴィヴィオ。私、人じゃないかな・・・？」
「あぅ・・・」
ヴィヴィオが返答に困る。フェイトちゃんと過ごした時間を考えれば、肯定なんて出来るわけがない。フェイトちゃんは両腕を広げて、「ヴィヴィオ。生まれ方なんて関係ないんだよ」そう言って微笑んだ。
「そうやって温かな涙を流して、感情を吐露してるヴィヴィオは・・・偽者でも作り物でも、兵器なんかでもない」
「うん。甘えん坊ですぐ泣くのも、転んで1人じゃ起き上がれないのも、それなのに結構やんちゃなのも、フォルセティと一緒だと無茶もやっちゃうのも・・・。それ以上に優しいのも・・・。そんなヴィヴィオがとても大事で・・・大好き！」
「なのは・・・ママ！」

「ヴィヴィオ。私となのはは、確かにヴィヴィオの本当のママじゃないよ・・・。でも私たちはヴィヴィオが大好きで、だからヴィヴィオのママだって胸を張って言いたい！」

「フェイト・・・ママ！」

私とフェイトちゃんは一度顔を見合わせて頷き合った後、改めて泣いてるヴィヴィオを見詰めて、「ヴィヴィオの今の、本当の気持ちを教えて」そう声を掛ける。涙に濡れるヴィヴィオの瞳が揺らいだ。

「本当は・・・ヴィヴィオ、本当は・・・こんなのいやだ・・・！　なのはママとフェイトママとずっと一緒に居たいよ・・・！　だってわたしも・・・なのはママとフェイトママが大好き・・・！　大好きだよぉ・・・！　お願い、ヴィヴィオを止めて・・・、ママ、助けて・・・」

「「うんっ、助けるよ！」」

ヴィヴィオの本心は聞けた。ならあとは、ヴィヴィオをきっちり救い出して、大手を振って六課のみんなの元へ帰るだけ。フェイトちゃんが「私が足止めする。その間に・・・」そう提案して来てくれた。

「うん。魔力ダメージでのノックダウンで、ヴィヴィオを止める。魔力チャージ完了までお願い、フェイトちゃん」

「うんっ！　ヴィヴィオ。なのはママからちょっとキツイお仕置きがあるけど、我慢できる・・・？」

「必ず助けるから！」

「うん、大丈夫・・・！」

私は宙へと上がって集束砲スターライトブレイカー発動の為の魔力チャージを開始。その間にフェイトちゃんが、自分の意思に反してオートで交戦に入るヴィヴィオを押さえてくれる。フェイトちゃんの今の防護服はソニックフォームの発展型の真・ソニックフォーム。これまでのソニックフォーム以上に魔力を速度に全振りしたことで防御力がほぼ無い、超高機動特化形態だ。短距離限定の速度なら、ルシル君の空戦形態以上だし。

「ヴィヴィオ、もう少しだよ！」

「うん・・・！　あ、ダメ・・・魔法が・・・！」

――セイクリッドクラスター――

ヴィヴィオが発動したのは、私の魔法のセイクリッドクラスターだった。１基の魔力スフィアを、「フェイトちゃん！」へと放った。スフィアがフェイトちゃんの側で１０発の小型スフィアに分裂。ソレらがさらに小さな魔力弾となって、フェイトちゃんを完全包囲・・・するより早く、フェイトちゃんはその効果範囲から離脱した。そうだよね、今のフェイトちゃんを止められるのは空間攻撃だけ。

それからフェイトちゃんとヴィヴィオは衝突を繰り返した。私の集束を止めようとヴィヴィオが向かおうとするけど、フェイトちゃんがその機動力を以ってヴィヴィオを食い止めてくれる。

「フェイトちゃん！　スタンバイ完了！」

だから私は無事に集束を終えることが出来た。フェイトちゃんは防護服をインパルスフォームへ換装して、機動力に回してた魔力を防御にも回した。"バルディッシュ"もライオットザンバーからザンバーフォームになって、カートリッジを全弾ロード。

「うんっ！　チェーンバインド！」

そしてヴィヴィオを１０本以上のバインドで拘束した後、フェイトちゃんが私の足元に避難。

「ヴィヴィオ。行くよ」

「うん・・・！」

フェイトちゃんのバインドが次々と千切れ出す。ヴィヴィオが自由を取り戻すその前に・・・

「スターライトぉぉ・・・ブレイカァァァァーーーーーーッッ！！」

――スターライトブレイカーＥＸ－Ｆｏｕｒｔｈ　Ｂｕｒｓｔ――

"レイジングハート"からのスターライトブレイカーＥＸが１発、ビット４基からのフォースバースト４発、計５発による多方向多弾集束砲撃がヴィヴィオに直撃した。激しい魔力爆発の中、ヴィヴィオの胸から"レリック"が浮かび上がって来たのが見えた。そして私の一撃に耐えきれなかったのが砕け散って、消滅した。一際強い魔力爆発が起きてヴィヴィオの姿を見失うけど、その光が治まると「ヴィヴィオ！」の姿をちゃんと確認。床に出来たクレーターの底、そこで元の小さな体に戻ったヴィヴィオが倒れていた。

「・・・ダメ・・・来ないで・・・・！」

フェイトちゃんと一緒に駆け寄ろうとした時、ヴィヴィオからそんなことを言われたからハタと足を止める。

「ヴィヴィオ・・・・」

「どうして・・・？」

「・・・約束・・・したから・・・。今度は・・・自分の力で、立つって・・・」

「「っ！」」

それはある訓練の終了後、ヴィヴィオが私たちの元に走って来ていたところで転んだ。その時に約束したんだ、今度は１人の力で立ってみようね・・・って。ヴィヴィオが今、その約束の通り自力で立とうとしてる。あの時のフェイトちゃんは、半泣きになってたヴィ

ヴィオに我慢できずに手助けしたけど、今のフェイトちゃんはギュッと唇を噛んで、手助けしないように必死に耐えてる。

「「ヴィヴィオ・・・！」」

フラフラながらもヴィヴィオは自力でしっかりと立ち上って見せた。その瞬間、私たちは駆け出して「ヴィヴィオ！」を力いっぱい抱きしめた。

「ただいま・・・なのはママ、フェイトママ」

「「おかえり！」」

Ｅｉｐｉｃ２７恐怖の大王～Ａｇｒｅａｓ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††††

ヴィヴィオをようやく取り戻した私となのは。直後、"聖王のゆりかご"を動かす鍵たるヴィヴィオを失ったことで、ゆりかごが再び眠りに着こうと休眠モードに移行した。ＡＭＦがさらに濃くなって、「っ！」私たちの飛行魔法が強制解除された。

「まずい。なのは、脱出しよう！　ヴィヴィオ、こっちにおいで」

なのはは限界突破のブラスター３での集束砲によって、その体も"レイジングハート"も外から見た以上にボロボロだ。私もライオットを発動したことで結構ガタが来てるけど、なのはに比べたら何ということはない。そんななのはは右腕でヴィヴィオを抱え上げてるから、私は変わろうとした。

「私は大丈夫。でもこれだとプライソンと逮捕できないね・・・」

「・・・今はとにかく、ヴィヴィオを安全無事に脱出させることを優先しよう。それに、ゆりかごが完全にダメになった以上はプライソンも脱出するはず。外で決着をつけよう」

駆動炉を失い、ガンマも敗れ、ヴィヴィオの聖王化も解除されて、ゆりかごは後は惰性で上昇するだけ。この先、プライソンが逆転する目は無い。それにこんなＡＭＦがキツイ中での戦闘なんて、正直

したくない。そう考えていたら・・・

「驚いた。オリジナルに比べて弱体化しているとはいえ、仮にもベルカ最強の聖王女を負かしたのか」

出口から「プライソン・・・！？」が姿を見せた。私はなのはとヴィヴィオを庇うように前に躍り出て、戦斧形態アサルトフォームの"バルディッシュ"をプライソンへ突き付ける。

「何をしに来た！　ヴィヴィオはもう、聖王から解放された！　埋め込まれていたレリックももう無い！　お前は負けたんだ！」

「負けた、負けた、ねぇ・・・。何ならもう1回、プリンツェッスィンを引っ捕まえて、レリックを埋め込んで玉座に座らせてやろうか？」

プライソンがニタリとヴィヴィオを見ると、「ひぅ・・・！」ヴィヴィオがすごく怯えを見せた。当たり前だ。実際に一度、"レリック"を埋め込まれているんだから。なのはがヴィヴィオを遠ざけるように体勢を変えて、私は・・・

「貴様ぁぁぁぁーーーーッ！」

"バルディッシュ"を構えてプライソンへと突っ込む。大した魔法は使えないけど、この一撃くらいは打ち込まないと私のこの感情は抑えられない。プライソンはニヤニヤと笑みを崩さず両腕を大きく広げて、私の一撃を待ち構えた。

「はあああああッ！」

「ぐふっ！」

私のフルスイングの一撃を脇腹に受けて、プライソンは玉座の間の壁に叩き付けられた。でもすぐに大きく陥没した壁の穴から「心地いい痛みだ」と脱出して、トンッと床に降り立った。思わず肋骨を砕いてしまったんだけど、なんてことないって風だ。一度はドクターに殺害されたのに蘇ったっていうシスターズからの話を、すずか伝手で知っている。まさか本当に・・・不死身？

「プライソン、お前の計画は潰えた。殺人罪、世界規模動乱罪、公務執行妨害、違法医術の施術、その他諸々の罪状で逮捕する。大人しく縄に付け！」

「計画が潰えた？　ハハハハハハ！　違う、違うぞ、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン！　これまでの遊戯は所詮、前座に過ぎん。ゆりかごなど、俺の真の目的にとっては単なる時間稼ぎ！」

プライソンの口から聞き捨てならない言葉が出て来た。なのはが「ゆりかごが時間稼ぎ・・・？」って訊き返すと、「そうとも。他の兵器も前座に過ぎん」奴はそう断言した。その様子から負け惜しみじゃないのが判る。

「一体、なにを企んでいる！　答えろ！」

「そう怒鳴るな。俺の本命は、ゆりかごでもアンドレアルフスでもディアボロスでもない。アグレアス。ソレが俺の真の目的を果たすオモチャの名だ。ミッドに戦争を仕掛けたのも、アグレアスを稼働・運用するための時間稼ぎ。判り易く言ってみたが、どうだ？」

"アグレアス"。ルシルが奪取した兵器群の開発コード名の中にそんな名前があったのを思い出した。そう言えば、ずっとその姿を見せていなかった。ゆりかごすら及ばない兵器があるのだとしたら、どれだけの脅威レベルなのか想像も出来ない。

「俺を倒して止めてみるか？　アグレアスの管制はガンマではなく、プライソンだ」

この状況でプライソンを倒す・・・。後ろに居るなのはとヴィヴィオをチラリと横目で見る。今の私に出来ることはただ1つ。プライソンの「望み通りに！」仕掛ける。アイツは「さぁ来い！」構えを取った。"バルディッシュ"を振るうと、奴は素手による拳で迎撃して来た。

「ぐっ・・・！？」

「ひ弱な一撃じゃないか！」

完全に力負けしたことで殴り飛ばされてしまった。床に着地してすぐにもう一度プライソンへと突っ込む。そしてフェイントを交えながら"バルディッシュ"を振るって、奴を出口から遠ざけつつ・・・

「なのは！　先に脱出を！　プライソンは私が押さえておく！」
「えっ！？　ダメだよ、フェイトちゃん！　フェイトちゃんをひとり残してくなんて出来ない！」
「ヴィヴィオを優先して、なのは！　プライソンにまたヴィヴィオを渡すわけにはいかない！
「でも・・・・！」
「フェイトママ・・・・！」
不安そうな声を出すなのはとヴィヴィオ。小柄なクセにプライソンの一撃は重くて疾いこともあって、２人に目を向けることが出来ない。でも「行って！」そう伝えることは出来る。
「ハハハ！　美しい母娘愛と言ったところか！　逃げろ、逃げろ！　鬼さんに捕まらないように！」
「早く！」
「・・・ごめん、フェイトちゃん！」
「フェイトママ！」
なのはが玉座の間から出て行くのをプライソンとの攻防中に確認し

た後、何度目かの"バルディッシュ"とプライソンの拳の激突に、「バルディッシュ！？」の戦斧部分にヒビが入った。だから今度は柄部分で奴の拳を受けるようにするんだけど、「まずっ・・・！」柄の方もヒビを入れられた。

「そらよ！」

「あ・・・っ！」

ＡＭＦの影響もあるけど、単純に近接戦に強いプライソンに押された私はとうとう、"バルディッシュ"の柄を折られてしまった。してやったりって表情を浮かべるプライソンだけど、柄を折ったぐらいでイイ気にならないでほしい。柄の短くなった"バルディッシュ"を振るって攻撃を続ける。柄下部も刺突用として突き出す。

「さすがＳ＋ランク魔導師！　魔力や魔法を大して使えずとも、ここまで戦えるとは大したものだ！」

「きゃあああ！」

"バルディッシュ"の打撃を頭部に受けてもよろけることすらしなかったプライソンの蹴りがお腹に打ち込まれて、私は大きく蹴り飛ばされてしまった。防護服まで解除されていたら、私の上半身と下半身は確実に・・・。

「そーら、トドメだ！」

着地した直後の私に向かって突っ込んで来たプライソン。迎撃するために構えようとしても「っ・・・く」お腹に受けたダメージが結構あって、ふらついてしまった。まずい、対応が遅れた。

「そこまでだ！　プライソン！」

――ラウムゲフェングニス――

ギンッと鈍い音が聞こえたかと思えば、「ぐおっ！？」プライソンが空間に出来た歪みに捕らわれた。そして歪みは収縮して始めて・・・完全に消滅した。

「フェイトちゃん！」

「フェイトママ！」

続けて先に脱出したがはずのなのはとヴィヴィオの声がした。出口の方を見るとシスター・プラダマンテ、それになのはとヴィヴィオが居た。

「どうして・・・？」

「途中でシスターと合流して、フェイトちゃんがひとり残ってプライソンと闘ってるってことを伝えたんだよ。そうしたらシスターが協力してくれるってことで・・・」

「フェイト執務官。このまま脱出しましょう。プライソンは空間隔

絶の檻に閉じ込めたまま、責任を持って連行しますので」

シスターの固有スキルは空間干渉。シャルが言うには、シャルの絶対切断やルミナの物質分解より強力だって話だ。だからシスターの案に「判りました」って答えた。

「そう言えば騎士キュンナは・・・？」

「彼女はコントロールルームへ向かった武装隊と合流中です。ここに来るまでに脱出経路は作っていたので、そこから脱出するよう伝えてあります」

私の疑問にそう答えつつ、シスターは"シャルフリヒター"というデバイスではない、純粋な武器としての剣を床に突き刺すと・・・

――ラウムアウスグラブング――

床に大きな穴が一瞬で出来て、そこを覗き込めば市街地が見えた。穴の内壁は初めからそうだったようにツルツルだ。シスターが「私が殿を務めますので、お先に脱出を」そう言ってくれたから、お言葉に甘えて私、なのはとヴィヴィオ、最後にシスターが穴に跳び込んでゆりかごから脱出した。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒はやて†††

空と陸のガジェットやＬＡＳ、戦車や装甲車といった兵器が一斉に動きを止めた。おそらくなのはちゃん達がプライソンを止めてくれ

たんやろうね。残る航空兵力は、超機動を誇る戦闘機・ナベリウスのみ。搭乗者はイプシロンとゆうサイボーグの少女で、アリシアちゃんとトリシュ、アンジェちゃんが戦ってるのをモニターで見守る。

――シューティングスター――

「お！」

ヴァイス陸曹の操縦するヘリに乗って戦闘に参加してるアリシアちゃんの高速狙撃弾で、とうとうナベリウスの左主翼を貫くことが出来た。一瞬のふらつきってゆう隙を見逃すわけないトリシュの・・・

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

高速狙撃が右主翼を撃ち貫いて、ナベリウスはもう墜落するしかなくなってしもうた。それでもナベリウスは機首にあるガトリングによるエネルギー弾を放つ。

――レフレクスィオーン・ファーネ――

魔力旗を展開した"ジークファーネ"を振るうアンジェちゃんの反射魔法がエネルギー弾を捉え、その全弾をナベリウスに返した。もちろん主翼を失ったナベリウスに回避する術は無くて、全弾が着弾して爆発を起こす。そんでコックピットを覆ってた装甲が破壊されて、キャノピーが丸見えになった。悔しげな表情を見せてる素っ裸なイプシロンとようやくご対面や。脱出装置が働いたみたいで、座

席ごとイプシロンが宙に放り出された。

『イプシロンはあなた達に最大限の称賛と、そして憤怒を贈ります！』

――ＩＳマグネティックドミニオン――

「何や、今の軌道・・・！」

落下してたイプシロンがガクッと９０度に方向転換して、側のビルの外壁に引っ付いた。そんで外壁を垂直に駆け上がって屋上に到着したところで、足元にテンプレートを展開、そんで吼えた。全身から迸る綺麗な紫色の電磁波が、あの子の立ってるビルや、近くのビル４棟を覆い尽くした。

「んなアホなことが・・・」

目の前で起こってる現実に思わず口が開きっぱなしになる。５棟のビルが土台ごと引っこ抜かれて、ゆっくりと宙に浮いたからや。この付近は避難が済んでるけど、やからってビルを５棟引っこ抜くなんて、どんな被害か・・・。

「アカン、あんなもんが振り回されたらこの辺りが壊滅する・・・！」

「こちらルシリオン！　ビルは俺が対処する！　イプシロンを止めろ！」

「ちょっ、ルシル君！？」

ルシル君がアリシアちゃん達に通信を繋げた。私とルシル君は今、戦線を離れて救急車の側で休んでる。ルシル君はフォルセティを保護した後、後を絶たへん巡航ミサイルの迎撃による魔力過消費となって、私は前線指揮官の後任が来てくれたことで、フォルセティを病院へ移送できるようになるまでの救急車の護衛としてや。

「ルシル君、平気か！？」

「イロウエルを発動するだけだ、対して魔力は消費しないよ」

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

モニターに映る白銀の巨腕イロウエル１０本がイプシロンの佇むビルや、その周囲を直立したまま回り続ける５棟のビルをガシッと鷲掴んで止めた。直後、アリシアちゃん達がイプシロンへ総攻撃を開始。あの子は何も出来ずにその全てを受けた。

「むっ！　イプシロンが墜ちたのか、ビルの浮遊力が無くなった・・・！」

「ルシル君、頼むわ！」

「判っているよ！」

十数ｍってゆう高さから４０階建てクラスのビルの落下なんてさらに被害が出ることになる。ルシル君は巨腕を操ってビルをゆっくり

と地面に降ろした。

『こちら六課のアリシア。プライソン一派の1人、イプシロンを確保したよ！』

モニターには、気を失ってるらしいイプシロンがバインドで拘束された映像が映し出されてる。

「了解や。お疲れ様。・・・グリフィス君。なのはちゃん達、シグナム達、アリサちゃん達からの連絡は？」

旗艦・"聖王"のゆりかご、護衛艦・"アンドレアルフス"、列車砲・"ディアボロス"の攻略に向かったみんなからの通信が途絶えて久しい。

『いえ。ガジェットなどの兵器群の停止と共に、南からの巡航ミサイルの接近も止まりましたが、各攻略班からの通信・念話、共にありません』

「そうか・・・」

胸の内に渦巻く不安。便りがあらへんのはええ頼りってゆうけど、状況が状況やしな～。不安がってるそんな私にルシル君が「大丈夫。信じて待とう、はやて」そう優しく声を掛けてくれた。

「うん。そうやんね・・・」

頷き返したところで、『こちらゆりかご攻略班、スターズ1！』なのはちゃんの通信全体が入った。モニターにはなのはちゃんと、なのはちゃんに抱っこされてるヴィヴィオ、側にフェイトちゃんとシスター・プラダマンテの4人。

『拉致されていた救出対象を無事に保護、本件主犯のプライソンも確保しました！』

待ち望んでた報告が入って、私とルシル君はバチンとハイタッチを交わした。さらに突入してた武装隊員たちも全員脱出して、ゆりかごは完全に無人となった。これで局の艦隊も憂いなくゆりかごを撃沈できるわ。

ゆりかご攻略を完了したことを六課の後見人であるリンディ統括官、クロノ君、カリムの3人に報告した後、フォルセティの乗る救急車を始めとした数多くの救急車の護衛を手の空いた武装隊に任せて、ルシル君と一緒に前線本部の簡易テントへ向かう。そこでヴィヴィオを医療隊員たちに預けたばかりのなのはちゃん達と合流して・・・

「はじめましてやね、プライソン」

シスターのスキルで作られた歪曲した空間に捕らえられてるプライソンにそう声を掛ける。彼は「あぁ、大将のお出ましか」まったく余裕って感じで、全然反省も後悔もしてへんみたいや。

「プライソン。本当ならここで1発くらい殴っておきたいが、私情に駆られてそんな無様をはやて達の前で晒すのも辛いからな。ここ

は抑えておいてやる」

「よう、化け物。お前のリンカーコアのおかげで、プフェルトナーは完成したぞ。まぁ所詮はクローンでコピーな欠陥品。お前を大して傷つけずに負けたがな。まったく、プリンツェッスィン共々使えない粗悪品だった。ハハッ、天才の俺とした事がとんだ下手を打ったものだ」

ルシル君、それにフォルセティやヴィヴィオに対してのその暴言。私となのはちゃんとフェイトちゃんはギュッと拳を握りしめて唇を噛むことで、怒りに任せるような真似をせえへんように必死に耐える。

「発言には気をつけろ。何がお前の遺言になるのか判らんぞ。俺への罵詈雑言は聞き流すが、フォルセティとヴィヴィオへの発言を聴き流せるほど、今の俺は優しくないぞ」

「なんて気持ちの良い殺気だ。いいぞ、俺を討ってみろ、化け物め！
さあ！　さあ！　さあ！　俺を殺して見せろ！」

「貴様・・・！」

怒りを露骨に態度で示すルシル君に、逆に私たちは落ち着けた。プライソンはプライソンで煽りまくるし。そやから私は「ルシル君！」の右手を両手でギュッと握りしめる。

「おい、止めるなよ、大将」

「黙ってて！」

プライソンと睨み合う中、フェイトちゃんから「はやて。プライソンが気になる供述をしたの」って報告が。さらになのはちゃんからも「アグレアス。それが本来の狙いみたい」そんな報告が・・・。

「・・・アグレアス。お前のアジトから奪った兵器データの中にあった名だ・・・！」

「プライソン。一体、何を企んでるんや」

「・・・ふん、そうだな。全ての準備が整った以上もう隠すことは何も無いな。判った、全てを話そう。俺の真の目的を。だが、条件が1つだけある。俺の話をオープン回線で各管理局施設と聖王教会本部にも届くようにしろ」

プライソンから提示された条件。そこまでの規模となると私個人では決められへんから、「上と相談してみる」って返答すると、プライソンは「そんな時間は無いと思うぞ。アグレアスはもう、起動している」そう言うて笑った。

「はやて。俺が責任を取る。今の俺は限定的だが准将の階級持ちだ」

「・・・ごめん、お願い出来るか？」

「ああ、任せてくれ。・・・こちら本局内務調査官、ルシリオン・

セインテスト准将。これよりプライソンからの最終声明を、管理局・聖王教会両組織に連絡します」

本件に関わってる部隊や、ゆりかごを撃沈させるためにミッドに急行してる艦隊、その全てに全体通信を繋げて、ルシル君がそう前置き。そんでルシル君は目線でプライソンに合図した。

「あー、コホン。ご機嫌麗しゅう、管理局・教会諸君。そして、我が愛おしき作品・スキュラ達」

プライソンの周囲に勝手に展開された複数のモニター。そこに映ってるんは、生体ポッド内に浮かんでる裸の女の子たち3人。アルファとデルタは判るけど、もう1人の髪の短い女の子の名前は判らへんな。クラリスちゃんやロッサの猟犬と戦う女性が1人、そんで意識を取り戻したらしくて、布で体を包んで女の子座りしてるイプシロンの5人。

「ミッド地上戦はすべてお前たちの勝利として幕を閉じるだろう。機動六課の所為でゆりかごは最早、聖王という中身の無い空っぽの器。艦隊に撃沈される未来が確定したわけだ。教会の連中も派手に暴れてくれた。あぁ、負けたよ。地上戦は俺たちの負けだ。ゆえに全スキュラに命じる。即刻、抗戦行動を停止しろ」

ポッド内の3人と、クラリスちゃん達との交戦を中断してた女性が『了解です』そう答えて、ロッサが大人しなった女性に手錠を掛けた。

「さて。ここからが本題だ。聖王のゆりかご、航空空母アンドレアルフス、列車砲ディアボロス、装甲列車オルトロスとケルベロス、各航空戦闘機６種と陸戦兵器４種による、本戦闘は全て前座に過ぎん。負け惜しみだと思うか？　ゆりかごによる地上爆撃？　列車砲による地方爆破？　陸戦兵器による地上制圧？　ミッドチルダの支配？　そんなもの、ただの時間稼ぎに過ぎない。さぁ、そろそろ第一波のお出ましだ！」

プライソンがそう言い放った直後、アースラのシャーリーから『た、大気圏外から熱源多数！』そんな焦りに満ちた報告が入った。大気圏外ってゆうことは、「宇宙からの攻撃ってことか！？」想像だにしてへんかった事態に驚く。

「プライソン！　大気圏外に在るのか！？　アグレアスが！」

「フハハハ！　そうとも！　ミッドに生きる人間ども、畏怖せよ、今より来たるは恐怖の大王の先兵！」

「・・・っ！　アレ、見て！」

なのはちゃんの指差す方――遥か空を見上げると、「アレはまさか・・・！」私たちは目を見張った。空を流れる幾筋の強烈な閃光。そう、アレはまず間違いなく「隕石・・・！」や。驚いてる私たちを余所にプライソンは笑い声を上げ続ける。そんで隕石はどこかへと落ちて行った。

「グリフィス君！　落下地点は！？」

『隕石の数は７つ！　そのどれもが居住区より遠く離れた海などです！　その大半が大気圏によって燃えてサイズが小さくなっているおかげで、被害は少ないですが・・・これで終わらないとなれば被害は徐々に大きくなってしまいます！』

報告の前半に安堵して、後半で絶望に叩き落とされてしもうた。狂ったように笑い声を上げ続けるプライソンにフェイトちゃんが詰め寄って「何を考えている！？」って問い質した。

「お前の目的は、ミッドの支配じゃなかったのか！？」

「支配ぃ？　そんなもの上っ面の動機だ。言っただろう？　俺には真の目的がある、と。管理局、聖王教会！　そのご都合が良いモノしか見ない聴かない目と耳で、しっかりと刻み込め。俺の目的は、俺の終焉だ！　俺は死にたい！　聴こえるか、最高評議会！　お前たちが俺を不老不死に造ったおかげで、こんな手段を取らざるを得なかった。これは復讐だ！　お前たちの大事なミッドチルダ諸共、俺は死ぬ！　隕石落下はその前の前準備だ！」

ミッドを道連れに死ぬ事。それがプライソンの真の目的やった。プライソンの頭上にモニターが展開されて、宇宙空間に浮かぶ１つの兵器を映し出した。長棒の両端に十字架が１基ずつ付いてて、ゆっくりと回転してる。そんで十字架を繋いでる長棒から何十発ってゆうミサイルが発射され続けてる。

「Ｔｈｅ　Ｅｌｅｃｔｒｏｍａｇｎｅｔｉｃ　ｓｉｇｎａｌ　ｓｙ

ｓｔｅｍ　Ｍｅｔｅｏｒｉｔｅ　Ｆａｌｌ　Ｉｎｄｕｃｔｉｏｎ　Ｓｔａｔｉｏｎ――電磁気信号式隕石落下誘導装置、アグレアス。それが正式名称だ。ミッドの磁気をインプットしたミサイルをミッド周辺の隕石に撃ち込んで、ミッドへと誘導落下させる。まぁ隕石のサイズは選べないため、ムラっ気があるのが失敗だが」

「ふざけ・・・！　くそっ！　クロノ、聞いていたな！　ゆりかごよりまずは隕石とアグレアスの撃破を最優先にした方が良い！」

『ああ！　すでに艦隊旗艦から発令が下った！　到着次第、即座に破壊を実行する！　そちらはプライソンから、停止方法などを聞き出してくれ！』

「了解だ。・・・俺の複製能力や左目の視力について問い質したかったが、今は後回しだ。プライソン、アグレアスを止めろ、今すぐにだ」

クロノ君との通信を切ったルシル君が早速、プライソンを問い質したけど「フフン」憎たらしく鼻を鳴らすだけや。そこにフェイトちゃんが「お前を気絶させれば止まるのか！？」そう声を荒げた。

「お前は言っていたな、自分がアグレアスを管制していると！」

「そうなんか？」

「うんっ。確かに言っていたよ！」

フェイトちゃんに代わってなのはちゃんがそう継ぐと、「よしっ。死なない程度にやってやるよ」ルシル君が指をポキポキ鳴らし始めて、プライソンの前に立ったその時・・・

『プライソ～ン。電磁誘導ミサイル・アポカリプス全弾の発射シークエンスを完了～。あとは勝手に発射され続けるよ～』

ルシル君の宿敵である"エグリゴリ"の1人、「レーゼフェア・・・！？」がモニターに映り込んだ。これまで以上に目を見張ったルシル君が「あの子は何の役割だ！」ってプライソンの胸倉を掴み上げた。普段の私たちなら、落ち着いて、って止めに入るところやけど・・・。本件の現状、ルシル君の宿命からして止められへん。

「プライソンと同じ、アグレアスの管制端末だ。先程、局の艦隊でアグレアスを撃破する、と話していたが無理だ。アグレアスの装甲は魔術でコーティングされている。ハハハ、魔法は魔術には勝てない、だったな。急いだ方が良いぞ。アグレアスも徐々にミッドへ墜落を始めている。隕石とは違って燃え尽きることも無く、地上に激突すればおよそ５４，７６０，０００　ｋｍ²が消し飛ぶように設計してある。さらに衝撃波でミッドの3分の2が吹っ飛ぶだろう」

「「「「なっ・・・！」」」」

耳を疑った。激突しただけで地球で言えばユーラシア大陸以上の範囲が壊滅して、さらに衝撃波による被害も出る・・・。しかも"アグレアス"の装甲が、この世で立った数人しか扱えへん魔術でコーティングされてるなんて。局の艦砲攻撃じゃ破壊できひん・・・。

「～～～っ！　くそがっ！　アグレアスはどこに在り、ミッド激突までの残り時間を教えろ！　俺が直接乗り込んで、レーゼフェアを討つ！」

ルシル君がそんなことを言い出した。確かにそれしか手があらへんやろうけど、言いしれへん不安に駆られた私は思わず「ルシル君・・・！」の右手の袖を掴んだ。

「不安がることはないよ、はやて。どの道、俺が負けたらはやて達もバッドエンドだからな。レーゼフェアに勝ってアグレアスを止める、それしか道が無い」

「うん・・・」

そしてルシル君は、どこか期待してるような表情を浮かべてるプライソンから"アグレアス"の座標を聴き出すと、クロノ君に"アグレアス"の攻略法が管制機として搭乗してるレーゼフェアも倒さなアカンこと、そんで自分とユニゾン中のアイリの2人で乗り込んで、レーゼフェアを撃破するってことを報告した。

『・・・魔術関連とエグリゴリに関しては君に一任するしかない。艦隊は隕石の破壊を最優先にしてもらうよう、旗艦に進言しておく。ルシル、もはや君だけが頼りだ。任せたぞ』

「ああ、任された」

クロノ君との通信を切った後、ルシル君は「じゃあ行ってくるよ」って私たちに声を掛けながら、「ぶふっ！」プライソンの顔面を思いっきり殴った。そして「いってらっしゃい」私たちに見送られながら、聴き出した座標へと転移魔法を使って転移した。

「プッ！　魔力を込めた一撃、良い痛みだった・・・」

口から血と折れた歯を吐き捨てたプライソン。鼻血も出てるけど、一瞬で止まった。さぁ、私たちも負けてられへん。プライソンも管制者ってことやし、もっと情報を聴き出さなな・・・ってところで・・・。

『父さん。嘘、ですよね・・・？　死ぬ事が本当の目的だなんて、嘘ですよね？』

「アルファ・・・」

『嘘だと言ってください！　ミッドを支配して、私たちの思うが儘の世界を造るのが目的だと！』

「ベータ・・・」

『そうだよ、パパ！　デルタ、そんな事のために、パパを死なせるために戦ってきたわけじゃないよ！』

「デルタ・・・」

『イプシロンもお父さんの真の目的には納得できません！』

「イプシロン・・・」

『父さん。ウチ達は、父さんと一緒に生きるために戦ってきた。ウチはその為に父さんを手伝って数多くの兵器を造り出してきた。それを、無駄にするの？　それに隕石とアグレアスの特攻なんて、ウチ達も一緒に死なせるということになる・・・。納得できない！』

「ガンマ・・・」

"スキュラ"姉妹たちが思い思いにプライソンに反感を示し始めた。そのことからプライソンは、姉妹をも道連れに死ぬってゆう真の目的を、姉妹に伝えてへんかったようや。

「お前たち、俺の為にその命を懸けることを厭わない。そう言っていたな？」

『確かに、父さんの為なら死んだって良いとは考えてはいます！ですが・・・！』

アルファって娘が悲しげに呻いたところでガンマが『父さん。これが反抗期』って言うて、手錠を自力で破壊した。

『父さんを止めるから邪魔しないで』

そんでデバイスを構えるクラリスちゃん達にそう言い放つと、卵型

椅子から伸びて来たケーブルをうなじに繋いだ。

『管理局・聖王教会に告ぐ。ウチは各陸戦兵器統合管制機ガンマ。これより局の艦隊到着までの時間、ウチらスキュラが隕石迎撃を行う。邪魔をしないように。アルファ、ベータ、デルタ。全兵装を再起動。イプシロンは・・・今のところは用がないから適当に』

『『父さん。ごめんなさい』』

『デルタ達は、パパに死んでほしくないんだよ』

『イプシロンは役立たず・・・ｏｒｚ』

自分を父と慕っていた"スキュラ"シリーズの反抗にプライソンは「そうか。裏切るのか・・・」って、私たちにだけしか聴こえへん程のか細い声でそう漏らした。その直後・・・

『何よ、コイツら！　一体どこから湧いて出て来たのよ！』

『おい！　わんさか出てきやがった！』

『ＬＡＳがこんなに・・・！？』

『ヴィータ副隊長、アリサさん！』

デルタの映るモニターの外から「アリサちゃん！」と「ヴィータ！」と、「スバル、ティアナ！」の声がして、デルタのポッドへ殺到す

るＬＡＳの迎撃に入った。床に倒れてるイプシロンと全く同じ姿をした子が踏み付けられてるけど・・・その子は誰さん？

『ギンガ陸曹！　そちらを頼む！』

『了解です！』

ベータって娘の収められてるポッド近くでは、チンクとギンガがＬＡＳと交戦中。

『おおおぉぉーーーッ！』

『ああもう！　キルシュブリューテが腐った血肉で汚れるぅ～！』

『シャルちゃん、そっち！』

アルファって娘の収められてるポッド近くでは、すずかちゃんとシャルちゃんとトーレさんがＬＡＳと交戦中。シグナムやエリオとキャロは別行動中みたいで、どのモニターにも映ってへん。そんでガンマのところでは、クラリスちゃん達が、卵型椅子に座り込んでキーボートを高速で打ち続けるガンマを護るように陣取って、ＬＡＳを打ち倒していってる。

『イプシロンはお前たち如きに倒されないと確信しています！』

そんでイプシロンは自身から発する電気で壁を張って屋上にまで昇って来たＬＡＳの大群を覆って、その全てを屋上の床に張り付かせ

た。

「今すぐ、やめさせなさい！」

なのはちゃんが"レイジングハート"をプライソンに向けた。ＬＡＳは明らかにプライソンの意思で動かしてるようにしか思えへんから、私やフェイトちゃんもそれぞれデバイスを突き付けた。

「ふふ、ははは・・・ハハハハハ！　アルファ、ベータ、ガンマ、デルタ、イプシロン！　創造主である俺からの離反！　楽しませてもらったぞ！　だが裏切りは裏切りだ！」

プライソンが遥か上空を見上げる。隕石の軌跡が青空の中を突っ切って、ミッドの地上へ降り注ぎ続ける空を。すでに破壊されてるはずの"アンドレアルフス"上面の砲台からエネルギー砲が何十発って放たれ始めて、中央区画に墜落する軌道の隕石を撃ち抜いていってる。

「プライソン！」

「嫌だね。俺は死にたいんだ。いっちょう派手にな。お前たちを道連れにして。そういうわけで・・・先に逝っていてくれ、我が愛おしく、そして最後に弓を引いた愚かな作品たち！　さらばだ！」

そう言い放ったプライソンが「音声認識！」と言うと、彼の面前に１枚のモニターが展開された。音声認識ってことで、私たちはプライソンの口を塞ごうとしたけど、一足遅く「ペニテンツィアジテ！」

そう発するんを許してもうた。直後、ＬＡＳが一斉に自爆して、全てのモニターがブツンと強制解除された。

Ｅｉｐｉｃ２８手を取り合えば～Ｃｏｏｐｅｒａｔｉｏｎ　ｏｆ
ａ　Ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ　Ｐａｒｔｙ～

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

列車砲と装甲列車を攻略を任された私たちは、両兵器の防衛戦力だった母クイントや妹にあたるノーヴェ達を撃破、無事に保護した。防衛戦力を失った列車砲と装甲列車に乗り込もうとしたんだけど・・・。磁力による防壁がったこともあって、アリサさんとヴィータ副隊長が列車砲に乗り込んだ。

その間、サイボーグであることで両兵器に近付くことすら出来ない私とスバルとチンク二尉は、射撃魔法の使い手として残ったティアナと一緒に、装甲列車の屋根に備え付けられた砲台の破壊を行い、それを完遂した。

それからアリサさん達からの連絡を待つこと数分。突如として磁力防壁が解除された。それでもアリサさん達から連絡が入ることがなく、私たちは２班に分かれて両兵器への突入を決めた。

「ではギンガ陸曹。私たちは装甲列車を調べる。まずは手前の車両からだ」

「はい！」

私とチンク二尉は装甲列車、スバルとティアナは列車砲の調査を行うことに。列車砲と連結されている車両から突入して、３５ｍとある車両内部を駆けて先頭へ向かう。車内の通路は結構狭くて、ここ

で挟撃でもされたら身動き1つ難しくて苦労するのが目に見えてる。

「次の車両が先頭だな。警戒を怠るな」

「了解です」

2両の車内を駆け抜け、先頭車両へ続くドアを視界に収めた。ドアの前で一度立ち止まり、私は左腕に装着した"リボルバーナックル"のナックルスピナーを数回転させた。準備万端だ。チンク二尉と頷き合って、一緒にドアに触れるとプシュッと音を立てて開いた。チンク二尉と背中合わせで突入する。

『――教会諸君。そして、我が愛おしき作品・スキュラ達』

先頭車両内の中央付近に在るポッド内に浮かぶのは、衣類を何1つとして着けていない少女1人。背中から複数のケーブルを生やした彼女の面前に展開されているモニターには、歪んだ空間で四肢を拘束された少年・プライソンと、ルシルさんとなのは隊長とフェイト隊長と八神部隊長が映っている。少女が私たちに気付いたけど、プライソンの話に耳を傾けるためか何もしない。

「待て、ギンガ陸曹。しばらく様子見だ」

確保に動こうとした私を制止するチンク二尉。私はそれに従い、プライソンの話に耳を傾けながらも警戒態勢を維持。モニターから聞こえるプライソンの話は、自らの敗北と"スキュラ"というサイボーグ姉妹の抗戦停止を命じるものだった。

『了解です』

少女が頷いたのを見て、これでこの事件も解決したって安堵した直後、プライソンは衝撃的な言葉を発した。ミッドの支配は真の目的を晦ませるための方便で、"聖王のゆりかご"や列車砲と言った兵器による本戦闘は全て、本命の時間稼ぎ。なのはさん達が騒ぎ出す。聞こえて来たのは隕石という単語。それ以上に気になるのは・・・

『そんな・・・話が、違う・・・』

少女がか細い声でそう漏らしたこと。さらにプライソンの真の目的が、不老不死である自分をミッドを道連れに死ぬことだと知った際の表情が唖然としていた。それから"アグレアス"という本命の兵器が齎す被害がミッドの3分の1を吹き飛ばす物だと判って、ルシルさんが単独で転移移動をしたのを見送った後・・・

『嘘だと言ってください！　ミッドを支配して、私たちの思うが儘の世界を造るのが目的だと！』

『ベータ・・・』

少女――ベータや他の"スキュラ"姉妹がそれぞれプライソンに反感の意思を示し始めた。

『管理局・聖王教会に告ぐ。ウチは各陸戦兵器統合管制機ガンマ。これより局の艦隊到着までの時間、ウチらスキュラが隕石迎撃を行

う。邪魔をしないように。アルファ、ベータ、デルタ。全兵装を再起動。イプシロンは・・・今のところは用がないから適当に』

そしてガンマという娘がオープン回線で、両組織に対してプライソンへ反抗する声明を発した。ベータとアルファも『父さん。ごめんなさい』ガンマに賛同した。と、「屋根から音が・・・？」した気がした。

『チンクと局員。これよりスキュラ一同で隕石の迎撃を開始する。邪魔はしないように』

ベータからそう言われて、私はチンク二尉を見た。チンク二尉は両手の五指に挟んでいたダガーを降ろした。そんな時、今度はドアの奥から物音・・・というよりは「足音！」が聞こえて来た。

「音の数からして団体だぞ・・・！」

チンク二尉が改めてダガーを構えた直後、開いたドアから「ＬＡＳ！？」が押し合いながらもここに入り込んで来た。ベータも驚いたことで、この襲撃が彼女の意思じゃないことが判った。

「ギンガ陸曹！　そちらを頼む！」

「了解です！」

車両の幅は５ｍ程もあるため、ベータのポッドを護るように横に並ぶ私とチンク二尉の間を突破しようと思えば出来なくもない。しか

も人数で言えば圧倒的に向こうが多い。

「ＬＡＳは死体兵器だ。気分が悪くなるかもしれんが・・・！」

「大丈夫です、お願いします！」

私は殴って蹴ってはＬＡＳの両脚をへし折り、転倒して床に両手を付いたところでチンク二尉のダガーは両手の甲を貫いて縫いつけた。そしてチンク二尉のスキルである「ランブルデトネイター！」によってダガーが爆破、ＬＡＳの上半身を吹き飛ばした。腐った臓物がビチャビチャと辺り一面に散らばる。

『ふふ、ははは・・・ハハハハハハ！　アルファ、ベータ、ガンマ、デルタ、イプシロン！　創造主である俺からの離反！　楽しませてもらったぞ！　だが裏切りは裏切りだ！』

途切れることを知らないＬＡＳの大群を捌き続けていると、モニターからプライソンの声が流れて来た。ベータが『父さん、そこまでして・・・』悲嘆に満ちた声を漏らした。

『嫌だね。俺は死にたいんだ。いっちょう派手にな。お前たちを道連れにして。そういうわけで・・・先に逝っていてくれ、我が愛おしく、そして最後に弓を引いた愚かな作品たち！　さらばだ！　音声認識！　ペニテンツィアジテ！』

逝っていてくれ。その言葉に血の気が引いた。これまで私たちの間を突破しようとするだけだったＬＡＳが一斉に足を止め、そして右

腕を心臓付近に突き入れた。私とチンク二尉は直感的に・・・

――シェルコート――

――ファイアプロテクション――

防御魔法のバリアを展開。もちろん、ベータも効果範囲に入るように。直後にＬＡＳが一斉に自爆して、視界が炎一緒に染まる。けれど爆炎はチンク二尉のバリアによって完全に遮断されていて、私のバリアなんて必要ないって思えてしまう。そうして炎の勢いも収まり始めたところで、チンク二尉から『ベータを連れて外に出よう。ここでは派手に立ち回れん』念話でそう提案を受けた。

『了解です！　私が連れ出しますので、一度バリアを解除します！』

『任せた！』

バリアの効果外だったポット上部が砕け、バリア内のポッド下部も砕けたことで満たされていた培養液が全て漏れ出し、漂っていられなくなったベータが機器の上で座り込んでいる。

「逃げます！　背中のケーブルを外してください！」

「・・・仕方がない。装甲列車を放棄する」

ベータは大人しく背中から伸びるケーブルを外した。とは言え、元よりＬＡＳの自爆でその先は焼き切れているけれど。とにかくベー

タを横抱きに抱えて、ＬＡＳの自爆によって壁に開いた穴へとウイングロードを伸ばした後、チンク二尉に「行きます！」そう伝えてから脱出した。

†††Ｓｉｄｅギンガ⇒ティアナ†††

ギンガさんやチンク二尉と別れたあたしとスバルは、装甲列車から列車砲へと続くスライドドアが自動で開いて、スバルに「行くわよ！」と言いつつ、２人で１歩踏み入れた瞬間、「きゃあ！？」ものすごい濃度のＡＭＦによって変身が強制的に解除された。

「きっつ・・・！　何よコレ・・・！」

「バリアジャケットまで解除されるＡＭＦなんて、聞いたことも無いよ・・・！」

この時点で最悪のパターンが脳裏に過ぎる。ヴィータ副隊長とアリサさんもバリアジャケットを解除されて、捕まってしまっているかもしれない、って。とにかくここで立ち止まっていてもしょうがないわ。

「大丈夫だよ、ティア。あたしのサイボーグとしてのスキルは生きてるし。あたしが守ってあげる！」

「っ！　頼りにしてるわよ！」

恥ずかしい事を言われたことで反論しそうになったけど、正直に言

うとかなり助かるから素直に返す。嬉しそうに笑みを浮かべるスバルを連れて、狭苦しい通路を中腰で歩く。そしてようやく辿り着いたスライドドアの前で一度足を止め・・・

「行くわよ、スバル」

「いつでも行けるよ！」

頷き合ってさらに1歩と踏み出すとスライドドアが開いた。突入するとそこには「ヴァイータ副隊長、アリサさん！」と、培養液に満ちたポッド内に漂う「デルタ！」が居た。あと1人の少女が床に倒れ伏していた。

「スバル、ティアナ！？」

「お前ら！」

あたし達の登場に驚きを見せたお2人に、磁力障壁が消失したことで連絡の無かったお2人を捜しに来たことを伝えた。

「あぁ、悪ぃ。念話も通信も外部に届かねぇし」

「そこで倒れてるイプシロンのスペアって子、磁力使いらしくてね。恥ずかしい話、たった今まで捕まってたのよ。壁に貼り付けられて。参ったわよ、まさか人間も磁石化できるなんて」

「まったくだ」

アリサさんとヴィータ副隊長が肩を竦めている中、スバルが「でもよく倒せましたね」感心した。確かにそうよね。磁石化されて壁に貼り付けられた状態で勝つなんて。やっぱりすごい人たちだわ。

『違うし。ガンマがやられたから、無人兵器が一時的に落ちてるだけもん』

「「デルタ・・・」」

『久しぶり、スバル、ティアナ。よくここまで来たね』

素っ裸な上に背中からケーブルを生やしたデルタがポッドの内面に手を付きながら、あたし達に声を掛けてきた。あたしはそんなデルタに近付いて、「今すぐ攻撃を中止しなさい」と伝える。

『んべ。嫌だよ～。これはパパから与えられた任務だもん。さぁ、もういっちょ発射ぁ～～～！』

ポッドの周囲にモニターが2枚と展開され、ミッドの全体マップとターゲットサイト2つ、1から0へと変わる数字が表示された。直後、屋外から届く巡航ミサイル発射を知らせる轟音2回。

「やりやがったな、また！」

「もうスペアは機能停止してる！　力尽くでその中から引っ張り出すわ！」

ヴィータ副隊長とアリサさんが臨戦態勢に入ったことで、あたし（現状、一番役立たずだけど）とスバルもそれぞれ構えを取った。デルタがグッと身構えて『さぁもう1発！』そう言うと、ターゲットサイトが西部と南部に移動した。もちろん黙って見過ごすつもりもなく、ヴィータ副隊長たちが床を蹴って一斉にポッドに向かってデバイスを振るった。

「ぐっ！？」「きゃあ！」「わっ！？」

だけど3人とも力そのものの反発を食らったみたく弾き返された。ヴィータ副隊長とアリサさんは一旦壁に着地するっていう1クッションを置いて床に降り立ったけど、「あいたっ！」スバルは床に尻もちをついた。

「このポッドは対物仕様だから、何をされても破壊されないからね』

そう言ってえっへんと胸を張るデルタ。スバルが「振動破砕なら・・・」って右腕に装着された"リボルバーナックル"に視線を移したその時・・・

『あー、コホン。ご機嫌麗しゅう、管理局・教会諸君。そして、我が愛おしき作品・スキュラ達』

あたし達の前にモニターが展開されて、どういう理屈か判らないけど歪んだ空間に四肢を拘束されたプライソンや、デバイスを構えたままのなのはさん達が映し出された。するとデルタが『パパ！』と

笑顔を浮かべて、すべてのシークエンスを中断した。
だけどプライソンの口から語られる、隕石と"アグレアス"という兵器を地上にぶつけてミッドを道連れに自殺するっていう、巻き込まれるこちらとしては堪ったものじゃない彼の真の目的を耳にして、
「え・・・？」呆けた。

「隕石ってマジかよ・・・！」

「第一波は無人区域に落ちた様ね」

ルシルさんはプライソンを全力で殴った後、転移魔法を使って"アグレアス"へと転移した。プライソンに死ぬのが目的だというのは嘘だと言ってください、って噛みつくアルファやベータに続いて・・・

『そうだよ、パパ！　デルタ、そんな事の為に、パパを死なせるために戦ってきたわけじゃないよ！』

デルタも悲痛な声を上げた。イプシロンやガンマって娘も反感を示し始めた。そしてとうとうガンマが、プライソンの目的を挫くために他の"スキュラ"達と一緒に反抗することを決意した。

『デルタ達は、パパに死んでほしくないんだよ』

デルタがそう言うと、ドォン！と轟音と全身を振るわせる振動が２連続で襲って来た。巡航ミサイルの発射を示すものだ。本当にプライソンに逆らうつもりなんだわ。

「っ？　何か来ます・・・！」

スバルがそう言った直後、死体兵器のＬＡＳがドッと侵入して来た。室内の機器が漏らす電灯に照らされるその黒い装甲に、ゾワッと背筋に悪寒が走った。

「何よ、コイツら！　一体どこから湧いて出て来たのよ！」

「おい！　わんさか出てきやがった！」

「ＬＡＳがこんなに・・・！？」

「ヴィータ副隊長、アリサさん！」

ＬＡＳの濁流に飲み込まれる。もみくちゃにされる中での攻撃に備えたけど、全機はあたし達を素通りしてデルタのポッドに向かって行って、籠手から伸びる剣でポッドに攻撃を加え始めた。

「プライソンの野郎！　邪魔だからってスキュラを始末する気か！」

「そんな身勝手、許さないわよ！　デルタ、ＡＭＦを解除しなさい！」

『う、うんっ！』

強烈なＡＭＦが解除されたことで「セットアップ！」あたし達は再変身。そしてヴィータ副隊長とアリサさんのデバイス一振りでＬＡ

Ｓは一斉に吹き飛ばされ、勢いよく壁に叩き付けられた。

「シュートバレット！」

あたしはすかさず物理破壊設定の魔力弾でＬＡＳの四肢を撃ち抜いて破壊して、身動きが取れないようにした。スバルもＬＡＳを殴り飛ばしつつ、デルタに「守ってあげるからね！」と言ってのけた。

『スバル・・・』

「ま、アンタとは知らない仲じゃないし。ちゃんと生きて罪を償わせてあげる」

『ティアナ・・・。べ、別に頼んでないし！　好きにすればいいよ！』

なんてことを言うけど、デルタの表情は嬉しそうに破顔してるし、照れてるのか頬も朱に染まってる。そうよ、あの子をこんな形で死なせるつもりなんかないわ。そんなあたしの決心を嘲笑うようにプライソンが『――音声認識！　ペニテンツィアジテ！』そう言い放つと、ＬＡＳが一斉に大人しくなったかと思えば一斉に胸に腕を突き入れた。

「全員、防御！」

ヴィータ副隊長が叫んだ。あたし達は指示に従って一斉に防御魔法を発動した。その直後、ＬＡＳが自爆した。バリア越しに満ちる激しい爆炎と黒煙。よほどの威力だったのか、あたしの張ったバリア

に少しずつヒビが入り始めた。

――ヴォルカニックスカッシャーーーー

その時、とんでもない轟音と振動が生まれて、黒煙が一点に向かって流れ始めた。そのおかげで視界がクリアになって、管制室の現状を視認することが出来た。ＬＡＳは肉片すら残さずに炭と化していて、室内に張り巡らされていた機材やケーブルも丸焦げで使い物にならない感じ。そしてデルタの収められていたポッドも破壊されていて、「いったぁ～・・・」痛みに悶えていた。

「おめぇら、外に出るぞ！」

「スバル、デルタをお願い！」

新手のＬＡＳがひしゃげた出入り口に姿を見せたことで、ヴィータ副隊長とアリサさんが足止めに入ってくれた。あたしはスバルと頷き合って、スバルが「デルタ！」を横抱きに抱えて、壁に開いた大穴から外へと伸ばしたウイングロード上を疾走。あたしも後を追うように駆ける。

「外にもＬＡＳやガジェットが・・・！」

列車砲の外、そこにはそれぞれ合わせて３ケタくらいのＬＡＳとガジェットがこちらに向かって進軍してた。あたしは"クロスミラージュ"のカートリッジをロードして、「デルタは任せるわよ、スバル！」迎撃に打って出ようとした時・・・

「スバル、ティアナ！」

「私も付き合おう」

「ギン姉！」

「チンク二尉！」

ベータって娘を横抱きにしたギンガさんとチンク二尉が合流した。

「ティアナ、スバル。お前たちはデルタを護れ」

「ギンガも、そのベータって娘の護衛ね」

「ザコ共は私たちが引き受けよう」

さらにヴィータ副隊長とアリサさんも戻って来て、チンク二尉と一緒に迎撃を買って出てくれた。"スキュラ"の護衛を任されたあたし達が「了解！」と応じたと同時、ヴィータ副隊長たちが駆け出して、一方的な蹂躙を開始した。

「デルタ。手動モードで隕石の迎撃を開始よ」

「んっ。スバル、ティアナ。しばらくデルタ達は動けないから、護衛お願い」

「ナノズリペアシステムをフル稼働。オルトロスとケルベロスの砲台および機関を修復・・・」

デルタとベータの周囲にモニターや細長いキーボードが展開されて、2人は高速でキーを打ち始めた。モニターには損傷率や稼働率っていう表示が映し出されているけど、それでも「砲塔が・・・」動き出した。砲門が向くのは空。一緒に見上げると隕石と思しき一筋の光が何十個と地上へ向かって落ちて来てた。

「発射！」

轟音と衝撃波を伴ってレールガン2門からミサイルが2発発射された。デルタが冷却システムとか次弾装填とかブツブツ言いながらキーを撃ち続けるのを見守っていると、「スバル、ティアナ！」ギンガさんに呼ばれた。

「列車砲の裏から・・・！」

列車砲や装甲列車の屋根や車体下からＬＡＳが何十体と這い出て来て、それがまるでゴキ○リみたいで全身が総毛だった。だけどそんな事を言っている暇も無い。ＬＡＳが一斉にデルタとベータに向かい始めたから、あたし達も迎撃開始。だけど・・・

「しまっ・・・！」

その物量差が災いして、数体があたし達の隙間を縫ってデルタ達に接近した。追い駆けようにもそのほかのＬＡＳが妨害して来る。

「「デルタ！！」」

「ベーータ！」

ＬＡＳの凶刃が目を見開くデルタ達に突き入れられるかどうかって時に・・・

――ストライクイーグル――

――エリアルショット――

――ガンシューター――

――ヘヴィバレル――

直上から砲撃や射撃弾が十数発と振って来て、ＬＡＳの頭部をピンポイントで撃ち抜いてたり、胴体に大穴を開けたりして行った。上を見上げればそこには・・・

「お母さん・・・！？」「母さん・・・・！？」

「ノーヴェ、ウェンディ・・・！？」

クイント准陸尉とノーヴェとディエチ（破壊されたはずの大砲も新たに携えてる）とウェンディの４人が居た。あたし達の元に降り立ったノーヴェ達はチンク二尉に歩み寄って、「チンク・・・お姉ち

ゃん」そう呼びながら申し訳なさそうに顔を伏せた。チンク二尉は「思い出してくれたのだな」今にも泣きそうな表情で微笑みを返した。

「ギンガ、スバル。大きくなったね。それに強くなった。お母さん、ビックリだよ」

「母さん！」「お母さん！」

スバルだけじゃなくギンガさんもボロボロ泣いて、クイント准陸尉の胸に飛び込んだ。親子と姉妹の再会に水は差したくはないんだけど、「ＬＡＳ来てるので出来れば後にしてくれれば・・・」今現在、絶賛戦闘中だから・・・。

「あー、ごめんなさい。えっと、ティアナさん？　娘たちがお世話になっているようで」

スバルとギンガさんの頭を撫でながら、あたしにお辞儀しつつＬＡＳの腹を後ろ蹴りで蹴り飛ばすクイント准陸尉に、「どうも、です」あたしも思わずお辞儀を返すことに。

「ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ。洗脳されていたとはいえ、犯した罪は消えない。ゆえにしっかりと償え」

「おう！」「はいっス！」「んっ！」

こうして戦力が整ったあたし達は、デルタとベータを護るためにＬ

ＡＳの軍勢を相手に戦闘を再開した。

†††Ｓｉｄｅティアナ⇒イリス†††

外でセッテとオットーとディードを撃破し終えたわたしとトーレは、"アンドレアルフス"へと突入してブリッジへと辿り着いていた。真っ先に目に入ったのは、アルファと呼ばれる"スキュラ"の長女をすずかが撃破し終えた様だった。だけどすずか達の奥には、素っ裸無状態でポッドに収められたアルファがもう１人居た。

『たかが魔導師に負ける？　ありえない、こんなの！　私は、私はスキュラの長女で・・・！』

全裸アルファが悔しげに表情を歪めて、両手で髪の毛がガシガシ掻き毟った。ヒステリーって言うのかな。なんかお近づきになりたくないレベルで恐い・・・。

「すずか、大丈夫？」

「あ、シャルちゃん。うん、大丈夫だよ。すごく強かったけどちゃんと勝てたよ♪」

わたしが差し出した手を取ってくれたすずかを立ち上がらせる。すずかの言うように快勝だったわけじゃないみたいで、頬に切り傷があったり、防護服も結構切り裂かれちゃってる。

「ていうか、なんでアルファが２人いるわけ？」

「スペアボディだな。ポッドに居るのはオリジナルで脳を積んでいるサイボーグ。すずかが撃破したのは、脳ではなくＡＩを積んだガイノイドだな。人格やスキルまでコピーされている、恐ろしい存在だ」

「ふーん。早い話がデバイスを擬人化したようなものなんだ～」

トーレはポッド内に漂うオリジナルのアルファに向かって「またお前の顔を見ることになるとはな」トーレがそう言うのを背中で聞く。アルファは髪を掻き毟るのをやめて、トーレをギロリと見下ろした。

『ええ、本当に。忌々しい、恨めしい、口惜しい。月村すずか単独に負けるスペアへの失望も相まって狂おしいほどに・・・！』

とにかく、アルファを押さえれば"アンドレアルフス"も攻略完了だ。そう考えて「んじゃ、あなたの負けだし、そっから出て来てくれる？」って、ポッドから出て来るように言ったところで、『あー、コホン。ご機嫌麗しゅう、管理局・教会諸君。そして、我が愛おしき作品・スキュラ達』プライソンからの通信が入った。

「なのはちゃん達だ・・・！」

「プラダマンテの空間干渉で捕らわれてるんだ～。ありゃもう逃げられないね」

『そんな、父さん・・・！？』

歪んだ空間に四肢を拘束されたプライソンや、周囲に佇むなのは達の姿にわたしはホッとした。対するアルファは顔面蒼白だけどさ。１００％逃げられないスキルで拘束されていながらも一切悲嘆に暮れていないプライソンから、自分たちの敗北や"スキュラ"達への抗戦停止命令を下した。

（なんとか終わった～。一時はどうなるかと思ったけど、異なる組織がちゃんと手を取り合えばミッド存亡の危機くらい乗り越えられるって証明されたね）

プライソンの野望も挫いてやったぞ、そう思ったのに・・・。奴は最後の最後でピーみたいな真の目的とやらを語ってくれたよ。隕石を使ってミッドを壊滅させ、さらには"アグレアス"という兵器を大気圏外から地表に落として確実にミッドを滅亡させ、不老不死の奴自身も自殺する、なんて・・・。

「ふざけんな、マジでさ・・・！」

しかも"アグレアス"を止めるためには、"エグリゴリ"のレーゼフェアを倒さないといけない。だからルシルはアイリを伴って、転移魔法を使って"アグレアス"へと向かった。

『父さん。嘘、ですよね・・・？　死ぬ事が本当の目的だなんて、嘘ですよね？』

「アルファ・・・」

これまでとは違って本当に弱々しい声でそう訊くアルファや、プライソンの真の目的に納得できないと反感を示す下の妹たち。すずかが「知らされていなかったみたいだね・・・」憐憫に満ちた声色でそう漏らした。父親であるプライソンの願いの為に、世界を相手に戦いを仕掛けた"スキュラ"達も所詮は使い捨ての駒だったわけだ。敵だけどさ、そんな哀れな思いをさせていいわけないよね・・・。

『お前たち、俺の為にその命を懸けることを厭わない。そう言っていたな？』

『確かに、父さんの為なら死んだって良いとは考えてはいます！ですが・・・！』

娘として父であるプライソンの死など納得できないってことで、とうとうガンマっていう娘が・・・

『――これより局の艦隊到着までの時間、ウチらスキュラが隕石迎撃を行う。邪魔をしないように』

本格的に反抗することを決意した。ミッドへ降り注ぎ始める隕石の迎撃を買って出て、アルファも『父さん。ごめんなさい』そう謝りながら、ポッド外周にいくつものモニターを展開した。

『あなた達に破壊された砲台はすでにリペア済み。隕石をすべて粉砕する！』

モニターに表示される９つの隕石にターゲットサイトが向いた。直後にＦＩＲＥの表示が浮かんで、わたし達が壊して回った砲台（修理済みとのこと）からエネルギー砲が何十発と発射され始めたその時・・・

『なっ！？』

アルファがわたし達の背後を見て目を大きく見開いた。振り返ってみれば「ＬＡＳ！？」が何十体と出入り口から侵入して来た。考えるよりも早くわたしとトーレは問答無用で迎撃に入る。すずかは念のためにアルファの側に居てもらうことに。何せプライソンは、裏切るのか、なんて漏らしてたし。自殺するのが目的で、それを"スキュラ"達に伝えていなかったとなれば、最早あの娘たちも用済みどころか邪魔者なんだろうし。

（自分を父と慕う娘たちを殺すなんて、そんな真似は絶対にさせない！）

"キルシュブリューテ"に物理破壊設定の魔力を纏わせ、ＬＡＳの四肢を寸断して床に転がす。ＡＩを積んでるとは言え所詮は死体兵器。それなりの魔力を込めてやれば寸断できるんだけど・・・

「ああもう！　キルシュブリューテが腐った血肉で汚れるぅ～！」

でもやっぱり気持ちの良いものじゃないし、何より刃が汚れるわけで。すずかに「シャルちゃん、そっち！」声を掛けられて、即座に「光牙針縫刃っ！」トーレに当たらないように魔力の剣山を周囲に

生やしてＬＡＳを足止め。

「アイシクルアイヴィ！」

そこですずかの氷の茨が何十本とＬＡＳ達に巻き付いて行って凍らせていき始める。んで、トーレと一緒に砕いて完全破壊。順調に対処しきれると思った側から、プライソンは本格的に"スキュラ"を切り捨てるようなことを言い出し、『ペニテンツィアジテ！』って何語か判んないけどそう言い放った。すると新手のＬＡＳ達が一斉に自分の胸に手を突っ込んだ。

「（何かの映画で観たぞ、この展開！）・・・トーレ、下がって！すずか、全力防御お願い！」

２人に指示を出しつつわたしも"キルシュブリューテ"のカートリッジをロード。アルファのポッドの側に集まったところで、すずかが氷結の竜巻タイプの防御魔法・「リフリジレイト・エア！」を発動。さらに「パワーブースト・シールディングフォース！」を発動して強化。その直後に「自爆だと！？」驚くトーレの言うようにＬＡＳが一斉に自爆した。

「アルファ、あなたとこの艦にダメージは？」

『月村すずかの魔法のおかげでほぼ無傷で済んだわ』

「なら結構。すずか、外の黒煙を排出できる？」

「あ、うん。今発動してる竜巻を出入り口から逃せば・・・」

「ん。トーレ、準備は？」

「問題ない、いつでも行ける」

「よし。じゃあ、すずか。お願い」

「うんっ！」

すずかが右腕を振り上げると竜巻が徐々に上部から前傾し出し、ＬＡＳの残骸を巻き込みながら凍結させつつ、ここ管制室の出入り口から通路の奥へと消えていった。ＬＡＳが一掃されたことで暇になるかと思えば、「ねぇ。プライソンってどんだけＬＡＳを造ったの？」なんて呆れるほどに新手が姿を見せた。

「そんじゃＬＡＳ狩り再開と行きますか！」

Ｅｐｉｃ２９希望と絶望を併せ持つ者～Ｔｈｅ　Ｆｕｔｕｒｅ　Ｔｈｒｅａｔ～

†††Ｓｉｄｅキャロ†††

ルーちゃんとリヴィーちゃんの姉妹と交戦して、エリオ君がリヴィーちゃんと相打ちになってことで、残るは私とルーちゃんだけとなった。気を失ってるリヴィーちゃんを膝枕してるルーちゃんに、「まだ、続けるの・・・？」って確認してみる。

「・・・もちろん。リヴィーが居なくても私にはもう１人、ガリューって言う相棒がいるから」

ガリュー。人型の召喚虫だよね。私には飛竜フリードが居てくれるけど・・・。でもこのまま交戦に入りたくない。出来るだけ説得を試みて、上手く行けば最高。ダメでもシグナム副意隊長との合流までの時間を稼げれば・・・。

「メガーヌ准尉の事はちゃんと助けるよ。だからもうやめよう・・・！」

「確証の無い話なんて聞きたくない。絶対にママを助けられる確証を得てからにして」

「ルーちゃん！　もう少し話をし――」

「うるさいっ！　話はこれまで！　ガリュー！」

私の話を怒鳴り声で遮ったルーちゃんは、リヴィーちゃんの頭をゆっくりと床に降ろしてすぐにガリューを召喚した。ガリューはリヴィーちゃんをお姫様抱っこして、部屋の隅っこに連れて行った。

（これ以上は引き延ばせない・・・か。エリオ君・・・）

私もエリオ君の頭を太腿からゆっくりと降ろして「よいしょっ！」っと、エリオ君の両脇に両腕を差し込んで上半身を持ち上げる。私たちの戦いに巻き込まないように部屋の隅っこにズリズリと引き摺っているとトントンと肩を叩かれた。振り向いてみるとそこには「っ！？　ガリュー・・・！？」が居た。

「え？　え？　あの？　え・・・？」

「その子もガリューに運んでもらって。あなたじゃ時間掛かるし」

すでにスタンバイしてるルーちゃんがそう言った。やっぱり優しい子。騙し打ちとか奇襲とか、そういった考えが思い浮かばないくらいにガリューやルーちゃんから敵意が感じられないからお言葉に甘えて「お願いします」お礼を言って、エリオ君をガリューに預けた。

「ねえ、ルーちゃん」

エリオ君がリヴィーちゃんの隣に優しく横にされたのを見て、私は「本当に止まってくれないんだね？」って最終確認を取った。ルー

ちゃんは「しつこい。私たちの意思は変わらない！」って答えて、周囲に短剣型の魔力弾を１２発と展開した。側に控えるガリューもルーちゃんに合わせて構えを取った。

「・・・フリード、行くよ。ケリュケイオン、サードモード！」

両手にはめた"ケリュケイオン"をフルドライブモードにする。両手の甲にあるクリスタルから1対ずつ、計４枚の翼を展開する。

「ブーストアップ・バレットパワー！」

足元にミッド魔法陣を展開して、射撃系魔法の威力を強化する魔法を発動。効果は私とフリードに及ぶ。私も周囲に魔力スフィアを３つと展開。あと「我が乞うは、城砦の守り・・・」コソっと詠唱して、防御力強化のエンチャント・ディフェンスゲインを発動。

「往けっ！」

――トーデス・ドルヒ――

「ケリュケイオン！」

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ≫

私１人にだけ狙って放たれたルーちゃんの攻撃をバリアで防御したと同時、フリードに「目標ガリュー！」を狙ってもらって、火炎砲ブラストレイを発射させる。ガリューは砲撃をジャンプして避けて、

そのまま私に向かって飛び蹴りを繰り出そうとしたけど、フリードの翼による払い除けを受けて宙を舞った。私はバリアを即解除して・・・

「シューティング・レイ！」

ルーちゃんに向けて誘導操作弾４発をクリスタルから展開されてる翼４枚から発射。すぐに別の射撃魔法をスタンバイ。詠唱も必要無くて、チャージ時間もほとんど無くて、しかも多弾連射が可能で、咥えて弾速も速い直射弾の「ウイングシューター！」を６発と発射。

「っ・・・！」

最初の誘導操作弾より早くルーちゃんに到達する直射弾。ガリューが羽を羽ばたかせて無理やり射線上に割り込んで、クロスさせた両腕で直射弾を防御。直後にガリューを回り込んでルーちゃんを直接狙った誘導操作弾も、その身を挺して防御した。

「ガリューー・・・！」

装甲（虫だから外殻？）がボロボロと崩れるガリューの姿にルーちゃんが不安そうな声を上げたけど、ガリューは大丈夫って言いたそうに構えを取った。私とフリードも迎撃に備えたところで、「ぅあ・・・？」ルーちゃんがふらついて、その場に崩れ落ちそうになったのをガリューが抱き止めた。

「何アレ・・・？」

ルーちゃんだけじゃなくてリヴィーちゃんの首と額に環状テンプレートが展開されて、ガシャン！と砕け散った。

「ルーちゃん・・・！？」

「ガンマ・・・が負けた・・・！？　監視の目が無くなった・・・」

ルーちゃんの口から洩れたガンマっていう名前。確かｍスキュラｍってサイボーグ姉妹の１人だったはず。

「・・・どうしよう。ガンマが倒れたらママを調整する人が居なくなる・・・！」

「ルーちゃん・・・？」

「管理局！　急いでママを確保して、技術力の高い技官と部署に搬送して！」

顔を真っ青にして涙を浮かべたルーちゃんが叫んだ。だけど通信も念話も阻害されちゃってるし、どうやって連絡を取り合えば・・・。ううん、そんな事を考えてる暇があるくらいなら、行動あるのみだよね。

「待ってて、ルーちゃん！　私、外と連絡できるように一度脱出し――」

――火龍一閃――

「「きゃ・・・っ！？」」

そこまで言い掛けたところで、火炎砲撃がこの部屋を横断して行った。あまりに突然起こった事態だったから、私やルーちゃん達は小さく悲鳴を上げることしか出来なかった。砲撃で開けられた壁の奥から複数の足音が聞こえてきた。

「・・・シグナム副隊長！」

数人の武装隊員を伴って姿を見せたのは、背中から炎の羽を４枚と展開したシグナム副隊長だった。

†††Ｓｉｄｅキャロ⇒シグナム†††

アギトとユニゾンしたメガーヌ准尉と火炎砲撃の撃ち合いをした私は、「ごほっごほっ」なんとか勝つことが出来た。ルシルのカートリッジが無ければもう少し時間も魔力も消費していただろうな。私の火炎砲や押し返された自身の火炎砲の直撃を受けたメガーヌ准尉は、仰向けで床に倒れ伏していた。

「・・・アギト」

メガーヌ准尉の防護服が解除されたと同時、アギトとのユニゾンも解除されたらしく、准尉の胸からアギトが出てきた。准尉は「あいたた・・・」と呻きながらもゆっくりと上半身を起こし始めた。

「頭がクラクラする・・・。メガーヌ、大丈夫？」

「ええ、なんとか。アギトもブラックアウトダメージを起こさなくて良かった」

アギトも頭を押さえながらふわりと宙に浮き、互いに体調を気遣いあった。私としても２人が無事で良かったと安堵する。思念通話も通信も妨害されている今、２人に何かあった際に助けを呼べんからな。

「メガーヌ・アルピーノ准尉、そして融合騎アギト。武装を解除し、投降して頂けると助かります」

「この・・・！」

アギトがかぶりを振って、周囲に火炎弾を４発と展開した。しかし准尉の「アギト、やめなさい」という制止の言葉に「むぅ・・・」渋々だが従い、火炎弾を霧散させた。そして准尉の肩に着地して、「これからどうすんだよ」と訊ねた。

「ユニゾン状態で負けちゃったんだし。もう魔力もすっからかんだし。これ以上の抵抗は無意味よ。降参しましょう」

「・・・メガーヌがそう言うならしゃあなし、か。おい、そこの騎士。今すぐ、優秀な局の技術者と医者を用意しろ。あとルールーとリヴィーも確保しとけよ。メガーヌはな、くそガンマの調整を定期

的に受けないとヤバいんだよ」

アギトが嫌悪感を剥き出しにガンマという"スキュラ"の名を口にした。即答してやりたいが、外界との交信手段が封じられているとなると、艦外へと脱出しなければならない。しかしエリオとキャロの2人とも合流をしなければ。副隊長としての最低限の務めだ。

「局員さん。あなたの部下の子供たちは今、私の娘と一緒に居るはず。所在地はココよ」

准尉が展開したモニターに"アンドレアルフス"の詳細なマップが表示され、エリオ達を示すであろうポイントが4つと点滅しているエリアが判明した。私たちが居るのは左翼の中央付近だが、あの子たちは右翼の中央付近。直線距離にして3ｋｍ程だ。

「私に行われた調整は今朝だったから、1週間は調整を受けなくても平――っ？」

「准尉！？」「メガーヌ！？」

准尉が頭を抱えたままドサッと倒れ伏した。彼女の額と首に環状テンプレートが展開され、ガシャン！と砕け散った。それが何を示すのかが判らないため、「どういうことだ？」とアギトを問い質す。

「判んねぇ！　メガーヌ、しっかりしろ！　メガーヌ！」

ペチペチと准尉の頬を叩くアギトに、私は「アギト。力を貸してく

れ」と伝える。私に「は？」と振り返る奴に、「ユニゾンだ」と提案する。回りくどく正規ルートを走っていたのでは時間が掛かり過ぎる。ならば大火力魔法による壁抜きをして直線ルートを作った方が手っ取り早い。ということを伝えてみると・・・

「お前、雑すぎねぇ？　確かにそりゃルールー達と合流すんの早くなるけどさ」

呆れ顔になった。なのはやルシルもよくやる手段なのだが・・・。とにかく「どうする？　悪い提案ではないだろう？」と確認し直す。

「・・・しゃあねぇな！　やってやんよ！　メガーヌを早いとこ医者に診せてぇし！　あ、1つ言っておくけどよ、この1回きりだかんな！」

早々にアギトに記憶を戻してやりたいな。しかしベルカ時代の頃の記憶を取り戻した時、現在の記憶はどうなるのだろうか。それだけが少々不安だが・・・。

「しょうもねぇ真似だけはすんなよな、管理局！」

「お前こそしっかりと付いて来い」

「「ユニゾン・イン！」」

アギトと数百年ぶりにユニゾンを果たす。胸の内にアギトの存在感を感じつつ"レヴァンティン"のカートリッジを装填し直している

と、アギトが『・・・あれ？』と漏らした。

「どうした？」

『・・・シグ・・・ナム・・・』

震えた声で私の名前を口にしたアギト。そこには先程までの親しみの欠片も無い声色とは違い、明らかに私を知っている風な声色だった。

「アギト・・・？　まさか、お前・・・！」

『シグナムだ・・・！　あたしの本当のロード・・・！』

アギトが泣き出した。私はすぐにユニゾンを解除させ、目の前に出現したアギトを手の平に乗せる。大粒の涙をポロポロ流すアギトに「長らく待たせてすまなかったな」と謝った。アイリとは違い、洗脳までされて戦わされていた。しかも数百年と。もしその間の記憶もあるのだとしたら、どれだけの悪夢だろうか。

「ううん！　こうしてまた逢えただけであたしは・・・！」

私の胸に飛び込んで来たアギトを抱き止めて「また共に戦ってくれるか？」と訊ねると、アギトは両手で涙を拭い去った。

「もちろんっ！　あたしは烈火の剣精アギト・セインテスト！　マイスターはオーディン、ロードはシグナム、お前だ！」

当時と同様にニッと笑みを浮かべたアギトが右手を差し出して来てくれた。私は「ああ！　では行くぞ！」その手を取り、「ユニゾン・イン！」を再度果たす。

「さて。准尉はどうしたものか」

『メガーヌ・・・。今はとにかく、ルールーやリヴィー、あとシグナムの部下・・・、エリオとキャロ？だっけ。ソイツらとも合流しよう』

「洗脳されていた間の記憶も残っているのだな」

『つってもここ2年くらい前からしか残ってねぇから、それ以前にどんな悪事を働いたか判らないけどさ』

「気にするな。・・・ではアギト、頼む」

『おうよ！　ひっさびさの！　猛れ、炎熱！　烈火刃！』

炎熱付与武器強化魔法を発動してもらい、私の炎熱魔法の火力をさらにグッと跳ね上げさせた。体の正面を向けるのはエリオ達の居る右翼。そしてカートリッジを2発とロードし、壁抜きを行うために左手に火炎の剣を作り出す。

「『剣閃烈火！』」

振り上げていた左腕を・・・

「『火龍・・・一閃！』」

振り下ろした。左手の炎剣は前に真っ直ぐ伸び、火炎砲撃として壁を撃ち抜いて行く。砲撃の威力は減衰することなく、順調に壁を撃ち抜き続ける。

『なあ、シグナム。目標の部屋のどこにルールー達が居るのか判らないのに、大雑把に撃って良かったのかよ』

「・・・あれほどの魔力反応だ。来る前に感じ取れるだろう」

『今の間は何だよ・・・』

別に考えていないわけではない。いくら大火力砲撃だろうが、幾重もの鋼鉄の壁を数ｋｍに亘って貫通できるものではない・・・はず。とにかく「壁に開いた穴を通って行こう」っと歩き出した時・・・

「こっわ！　目の前で火炎砲通過とかこっわ！」

穴の向こうの通路から聞き憶えのある声がした。ひょこっと穴から顔を覗かせたのは「クララ・・・！」だった。同じ特別技能捜査課に所属する先輩局員だ。彼女の後ろには武装隊員が１０人ほど居た。

「クララ、どうしてここに・・・？」

「シグナムさん、その姿・・・って、そうだった！　ついさっき、機動六課の高町教導官とハラオウン執務官、教会の騎士プラダマンテの手により確保されたプライソンから、新たな声明が出されたの」

なのは達は自らの仕事を無事に果たせたのだな。その安堵の次にはプライソンの真の目的とやらに目眩がした。よもや隕石を降らせてミッドを壊滅させ、大気圏外に在る兵器・"アグレアス"の特攻で不老不死の自分を殺すなどと。

「大火力遠距離攻撃が出来る局員・騎士のみんなが本局の艦隊が到着するまでの間、隕石の迎撃を行うことになったの。スキュラのサイボーグ達もプライソンを裏切って、各兵器で迎撃を行ってくれているし」

「そうか。・・・そうだ、クララ。そこに居る女性を確保してくれ。彼女も救出・保護対象の1人で、メガーヌ・アルピーノ准陸尉だ」

「洗脳されてるメンバーの1人でしたっけ。了解です」

技術部のマリエル技官と医務局のティファレト医務官の名を出し、准尉の調整とやらの話も伝えておく。クララは転移スキルを使い、准尉と共に本局へと直通転送した。そして私は武装隊を引き連れ、エリオ達の元へと急ぐ。その間に砲撃を撃つこと2回。それでようやく「・・・シグナム副隊長！」キャロの姿を視認できた。

「ああ。無事で何よりだ。エリオは・・・」

部屋の隅の方でリヴィア・アルピーノと共に横にされていた。武装隊のメンバーの中には医師資格を持っている者も居り、エリオとリヴィアの治療に当たってもらえることになった。しかしリヴィアはともかくとして、何故かルーテシアは顔色が悪く、涙も浮かべている状況。ここでアギトからの『シグナム、ユニゾン・アウトお願い！』という願いのため、ユニゾンを一旦解除する。

「アギト・・・・！？」

「ルールー。ごめん、あたしさ、記憶が戻ったんだ。管理局の八神シグナム。コイツがあたしの本当のロードなんだ」

アギトが私を紹介するとルーテシアは「そっか。いつの日かそうなるって判ってた」と素直に受け入れた。あの子はアギトから私へと視線を移すと、「ママはどうなったの？」と訊ねた。アギトと共に居たのだから、私が准尉と戦ったことは察せられるだろう。

「本局の医務局へと転送した。優秀な技術官と医務官に対応してもらえるようにした。そう不安がらなくても良い」

「・・・良かった」

「シグナム二尉。モンディアル二士とこちらのお嬢さんの治癒を終えました。直に目を覚ますでしょう」

「了解した。感謝する」

それからすぐにエリオとリヴィアが目を覚まし、私たちは状況を簡潔だが確認し合った。ルーテシアとリヴィアは洗脳されてはおらず、准尉の命を盾にされたことで従わざるを得なかったとのことだ。私からはミッドの現状を伝える。隕石と"アグレアス"の脅威によってミッドと人類が滅亡の危機に瀕していると。

「そんな・・・！」

「ミッドチルダを道連れにした自殺なんて・・・！」

プライソン一派の属していたルーテシアとリヴィアの顔色が真っ青になる。そして私はこれより隕石の迎撃に移り、エリオとキャロは現六課の本部であるアースラへ帰艦。ルーテシアとリヴィアもアースラで保護されるよう伝えたのだが・・・。

「シグナム副隊長！　僕たちにもまだ手伝えることがあるかもしれません！」

「ヴォルテールを召喚すれば、隕石の迎撃が出来ます！　それにミッドに居る以上はどこに居ても危険なのは変わりません」

エリオとキャロがアースラへの帰艦を拒み、隕石迎撃の手伝いをしたいと申し出てきた。ヴォルテールについてはデータでしか知らんが、確かにかの竜ならば迎撃も出来よう。

「では手伝ってもらおう。ルーテシアとリヴィアは――」

「待って。私にも巨竜・白天王が居る。あの子なら隕石の迎撃も簡単」

「うんうん！」

ルーテシアとリヴィアも隕石の迎撃を申し出た。その白天王とやらの話を聴けば、「私のヴォルテールと同じだ」キャロの言うように巨大な二足歩行も可能な竜であることが判った。

「でもルーちゃん、リヴィーちゃん。本当に良いの？　手伝ってもらって」

「良いも何もこのままだとミッドは滅ぶし、何より・・・」

「これまで私たちがしてきた事の償いだから」

今は1つでも多く隕石を迎撃できる戦力が欲しいのは確かだ。故に私の独断になるが「頼む！」と、2人の協力を許可した。そして私たちは"アンドレアルフス"から時間を掛けずに脱出するため、再度ユニゾンをしたアギトとの「火龍一閃！」で床に穴を開け、そこから脱出を行った。

「天地貫く業火の咆哮、遥けき大地の永遠の護り手。我が元に来よ。黒き炎の大地の守護者。竜騎招来、天地轟鳴、来よ、ヴォルテール！」

フリードに跨って脱出したエリオとキャロ。キャロの詠唱によって召喚された巨大な黒き竜・ヴォルテールが咆哮を上げる。ルーテシ

アとリヴィアは女性隊員に背負われての脱出で、ルーテシアは簡潔に「来て、白天王！」と声を上げ、白き巨竜・白天王を召喚した。

・―・―・―・―・―・

プライソンのアジト、その居住区の最奥にあるガンマという名の、"スキュラ"シリーズの三女の私室にて、聖王教会騎士団の騎士であるクラリスが率いる隊、それに時空管理局本局は第零技術部の次女・ドゥーエ、本局内務調査部・査察課のヴェロッサが、死体を改造したサイボーグ・ＬＡＳの一群と交戦していた。

「ダメだ。陸戦兵器は騎士団に殲滅食らったし、空戦兵器も局の空戦戦力に蹂躙されたし。グレムリン程度じゃ外のＬＡＳを破壊することしか出来ない」

卵型の椅子に座り、必死にプライソンの真の目的である自殺を食い止めようとするガンマ。しかしこれまでの戦闘で受けた被害の大きさに、彼女の出来ることがあまり無いことが判明したことで悲嘆に暮れていた。今の彼女に出来ることは、列車砲・"ディアボロス"の転送室にミサイルを転送させて補充することくらいだ。

『ふふ、ははは・・・ハハハハハハ！　アルファ、ベータ、ガンマ、デルタ、イプシロン！　創造主である俺からの離反！　楽しませてもらったぞ！　だが裏切りは裏切りだ！』

ガンマ私室内のモニターから発せられるプライソンの非道な声。ガンマの前髪に隠れた瞳から涙が溢れ流れ出す。父と慕った男の真の

目的が自殺にあることを知らされず、ずっと騙されて来たことも悲しければ、用済みだと処理されそうになっている現状も、彼女の心を軋ませていた。

『プライソン！』

『嫌だね。俺は死にたいんだ。いっちょう派手にな。お前たちを道連れにして。そういうわけで・・・先に逝っていてくれ、我が愛おしく、そして最後に弓を引いた愚かな作品たち！　さらばだ！　音声認識！　ペニテンツィアジテ！』

瞬間、室内に居たＬＡＳが一斉に自爆した。ガンマは「～～～～っ！？」声にならない悲鳴を上げ、爆炎と爆風によって吹き飛ばされた卵型椅子と共に宙を舞い、そして落下して「っ・・・・！」背中から床に激突した。

「・・・っ！（体が・・・動かない・・・・。まずい。システムとリンクしたままケーブルが外れたから・・・・！）」

ケーブルを用いてのアジトの全システムと有線接続中はフルガーディアンモードと呼ばれ、タイムラグ無しに意のままにアジトの全機構や防衛戦力、アジト外の各陸戦兵器などの操作などが行える。だが、その最中はその場から大きく動けず、身体能力も通常時の３割程度しかない。ＦＧモードを解除してケーブルを外す際にはいくつかの工程を踏まねばならず、今のように無理やりケーブルが外されるとしばらく体が上手く機能しないのだ。ちゃんと機能できるように調整するのに約１分。その間、彼女は一切の無防備となる。

――トランスファーゲート――

（誰・・・？）

黒煙の中、ガンマの目の前で誰かしらの足が止まった。黒の革靴、ズボンはスラックスではあるが、ヴェロッサの白いスラックスではなく茶色。つまりたった今まで彼女の私室に居たメンバーの中の誰でもないことを示す。その正体不明の人物は片膝立ちをした上で彼女の頭に触れてきたため、彼女は（なにを・・・？）と息を飲んだ。そしてその人物は彼女の耳に口を近付けた。

「迎えに来たんですよ、ガンマ。僕は貴女を生かしたまま拉致するように命令を受けました。ですのでこのまま貴女を転送スキルで連れ去ります。どうかご容赦を」

耳打ちで聞かされた話にガンマは、自分を拉致しようとしている目の前の人物がどこに所属しているのか、すぐに察することが出来た。そしてこのまま拉致されたら、恐らく自分はガラクタ同然にまで使い潰されるまで扱われると理解できた。

「（くっ・・・！）・・・父さん・・・たすけて・・・」

ガンマが僅かに発することが出来た声は誰にも届くことは無く、彼女は謎の人物の言う転送スキルというもので、その人物と共にこの部屋から消えた。

†††Ｓｉｄｅアリシア†††

プライソンの本当の目的がミッドチルダを道連れに自殺することだって判った。さらにはもう用済みだってことで、自分を父親だって慕ってる娘・"スキュラ"の後始末を始めてくれちゃった。それを食い止めるべく、わたしとトリシュとアンジェの３人で、イプシロンを始末しに来たＬＡＳを撃破してく。

「お前たち如きに倒されないと、イプシロンは確信しています！」

――ＩＳマグネティックドミニオン――

そんな中、イプシロンがスキルを発動した。途切れることを知らずに屋上まで這い上がって来るＬＡＳが一斉に屋上に這い蹲った。これってわたし達が居なくても問題ないっぽい。まぁとりあえず、両手に携える小型拳銃型デバイス・"ラッキーシューター"の銃口をＬＡＳ達に向けて、直射型射撃魔法の「ブルーバレット！」を撃ち込んで奴らの両腕をへし折っておく。

「なるほど。万が一にも磁力の拘束から抜けた場合を考えて、ですね」

トリシュが大弓型デバイス・"イゾルデ"の魔力弦に魔力矢１本を番えると、矢尻を空に向けてから「滅び運ぶは群れ成す狩り鳥！」射った。矢は１０ｍほど空に向かった後、小さな矢尻に分裂、そして雨のように降って来てＬＡＳの両肩を撃ち抜いてった。そんな中でプライソンがもう１つの手段を講じてきた。

『音声認識！　ペニテンツィアジテ！』

プライソンがそう発した直後、ドォン！って爆発音がして、付近に倒れ伏してるＬＡＳが一斉に自爆。さらに「ひゃあ！？」ビルが大きく揺れた。その振動にわたし達は立っていられずにしゃがみ込んだ。階下から爆炎と黒煙が立ち上ってくるから、這い上がって来てるＬＡＳもまた爆発したんだって判る。

「イプシロン・・・！？」

「きゅ～～～？」

どこかに頭をぶつけたみたいで、額から血を流して倒れてるイプシロンにアンジェが駆け寄った。それと同時に磁力の拘束から解放されたＬＡＳ達も起き上がって、イプシロンを抱き起したアンジェの元へ向かおうとする。わたしとトリシュで「させない！」立ちはだかって迎撃するんだけど・・・。

「さすがに数が多過ぎますね・・・！」

――皆伝・紫電一閃――

トリシュが火炎を纏った双剣形態になった"イゾルデ"を振るって、２体のＬＡＳの首を刎ね飛ばした。

「本当に・・・！　アリシアさん、イプシロンをヘリに避難できま

せんか？」

――ハルトファーネ――

アンジェもイプシロンを庇いながら旗型デバイス・"ジークファーネ"を振り回して、硬化した魔力幕を帯状に伸ばしてＬＡＳの首、さらには両腕と両脚を一瞬で寸断してく。んでわたしは、"ラッキーシューター"２挺を使っての誘導操作弾、「ホーミングシュート！」でＬＡＳが開けた口に撃ち込んでく。

「うんっ。ヴァイス、ヘリを寄せられる？」

『うす！　つうか、アリシアさん達の今居るビル、さっきから窓ガラスは割れるわ、外壁にヒビが入りまくるわで、今にも倒壊しそうなんすけど！　アリシアさん達も避難した方がいいっすよ！』

言われてみれば確かに足元から振動が伝わってくる。わたし達は頷き合って、とりあえずこのビルから避難を優先することにした。アンジェが「では私がイプシロンを・・・」背負って、ヴァイスにビルの屋上の直上に来てもらう。一時でも着陸するとＬＡＳが乗り込んで来るかも知んないし。

「アンジェが先に乗って、次にトリシュ、んでわたしが殿を務める！」

「判りました！」

ハッチを開けた状態のヘリが屋上の直上に到着して、まずはアンジ

ェがイプシロンを抱えたままジャンプしてハッチに着地。次第に振動が大きくなり始める中、わたしはトリシュが跳び易いように「邪魔ぁっ！」魔力弾で周囲のＬＡＳを吹っ飛ばして制圧する。

「アリシアさん！」

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

目に留まらない高速射撃魔法での援護のおかげで、トリシュに続いて「よっと！」わたしもヘリのハッチに乗り込むことが出来た。すぐにヴァイスにヘリを「出して！」もらって、屋上から離れ始めたところでビルが倒壊して、ＬＡＳも瓦礫と一緒に４０ｍの高さから落っこちた。

「にしても、これからどうします？　隕石の落下が続いてるっすよ」

格納庫内に展開されるモニターに、空から地上に向けて流れ続ける隕石が映し出される。ここ中央区画に落ちてくる隕石は、航空空母の"アンドレアルフス"が迎撃してくれてるけど、それでも対処しきれそうになさそう。

「あ！　八神部隊長たちが動くみたいっす！」

別モニターには"夜天の書"をペラペラ捲ってるはやてや、ブラスタービット４基を展開したなのは、それに"バルディッシュ"をライオットザンバー・カラミティにしたフェイトの３人が映った。

「グランセニック陸曹。近場のビルの屋上に寄って頂けますか？
私も隕石の迎撃を行います」

「了解です！　アリシアさんか騎士アンジェリエのどちらかは残ってくれますか？　イプシロンの護衛が1人も居ないのはまずいんで・・・」

「隕石を砕くだけの威力を持つ魔法は無いし、わたしが残るよ」

デバイスに埋め込まれた魔石の効果時間も残りわずかだし、元よりそこまで威力も無いわけで。だからわたしはヘリに残ってイプシロンの護衛を買って出た。

「私も残ります。残念ながら遠距離攻撃系の魔法は持ち合わせていないので」

アンジェもそう言う理由で隕石迎撃に不参加になった。そしてヘリは倒壊したビルから１００ｍと離れた８０階建て相当のビルの屋上にトリシュを降ろして、その近くでホバリング待機。ヘリの窓から、隕石に向かって魔力砲撃を放ち続けるトリシュや、モニターに映る砲撃連射のフェイト達を見守り続けていると・・・

「ん？　ありゃあエリオとキャロじゃねぇか・・・？」

ヴァイスがそう言った。列車砲"ディアボロス"の攻略に向かったアリサ達や航空空母"アンドレアルフス"の攻略に向かったすずかとシャルとトーレの様子は、プライソンの全体通信の時にチラッと

だけ見れた。だけどシグナムとエリオとキャロの様子は判らなかった。だからちょっぴり不安だったけど・・・。

「あ、ホントだ。フリードに跨ってる！」

ヘリのキャノピーから覗いてみると、飛竜フリードの鞍に座ってるエリオとキャロの姿を確認できた。他には女性武装隊員に背負ってもらってるルーテシアとリヴィアの姿もあった。あの2人をちゃんと救え出せたみたいだけど、メガーヌ准尉が居ない。

（あー、でもクララも居ないし。ひょっとして転移スキルで局か教会の系列病院に送ったかな？）

「召喚魔法陣・・・！　機動六課にも召喚士が居るんですね」

「にしては1つ多いっすね。1つはキャロのだが、もう1つは・・・」

「ルーテシアだね。意識があるみたいだけど・・・。まさか、ここでキャロと召喚バトルなんてしないよね・・・？」

――竜騎召喚――

ちょこっと不安があったけど、キャロの召喚したアルザスの守護竜・ヴォルテールと、ルーテシアが召喚したヴォルテールと同サイズの白い竜は戦うことなく、一緒に隕石の迎撃に参加してくれた。

「アルピーノ家の洗脳もちゃんと解けてるみたいだし一安心・・・」

「っすね～。・・・お、シグナム姐さん・・・・！　ん？　なんだ、あの姿は・・・？」

「今度は何ぃ～？　って、ユニゾンしてる！　え、一体誰と・・・？　あ、アギトじゃない！？」

シグナムの姿がこれまで見たことも無いものに変わってた。髪の色が明るい茶色になってるし、背中から2対4枚の炎の羽が展開されてる。考えられるのは融合騎とのユニゾン。でもリインは今、はやてとユニゾン中。アイリは相性的にユニゾン不可だし、今はルシルとユニゾン中だ。だとすれば残る答えは1つ。レーゼフェアに洗脳されてるかもって話のアギトだけだ。

「取り返せたんだ！　というか、ルシルもひょっとしてレーゼフェアを倒したのかな！？」

隕石を振らせるためのミサイルを撃つ基地であるらしい"アグレアス"を止めるには、管制機のレーゼフェアを倒さないといけないらしくて、ルシルはそのためにアイリとユニゾンしたまま転移魔法で"アグレアス"に乗り込んだ。

「どうなんすかね。連絡がねぇってことは、まだなのかも知れないっすし・・・」

「ルシル・・・」

ルシルがレーゼフェアに勝たないと。しかも時間制限ありで。そうでないとミッドチルダが滅んじゃう。わたしはルシルの勝利を祈りながら、隕石迎撃を続けるフェイト達を見守るしか出来ない自分の非力さに歯噛みした。

「まずいですね。八神部隊長が迎撃できる隕石は、そのサイズが大気圏でかなり燃えて小型化したものだけです。これまで以上のサイズが落ちて来ると、さすがに迎撃は不可能です。さらに言えば・・・」

「魔力も有限で、いつ終わるとも知れない精神的負担で、そう長くは続けられない、だよね。でも・・・」

アンジェの話も尤もだ。いくらみんながすごい魔導師でも、その魔力や威力には限りがある。だけどキャロのヴォルテールとルーテシアの竜が居てくれる。さらにクロノ達、本局の艦隊も到着してくれたら隕石の迎撃に入ってくれるって言うし。だからそれまでなんとか凌いでくれれば、あとはルシルが"アグレアス"を止めて、それで事件は解決だ。

「今は信じるしかない、っすか」

「絶対大丈夫って信じるに値する仲間たちがいるって、結構幸せな事だよ、ヴァイスぅ〜？」

「違いないっす」

「いい言葉です。胸にしっかりと刻んでおきますね♪」

アンジェにそう言われたら急に恥ずかしくなった。でも事実だし、わたしは「えっへん」胸を張った。みんなが大気圏の摩擦で燃えて小さくなった隕石を順調に迎撃してたんだけど・・・。

『こちら本局・観測室です！　現在、ミッドへ向けて直径４００ｍ級の隕石が５つ向かっています！』

ミッドの各戦力に全体通信で入った報告に、わたしの抱いてたこれまでの希望が一気に絶望に変わった。１００ｍ級の隕石の直撃で一体どれだけの被害が出るか判んないのに、４００ｍ級が同時に５つとか。

『艦隊の到着時刻と隕石の到着予測時間は？』

『艦隊到着時間まで残り６分。隕石の１つ目の到着予測時間まで３分、２つ目が４分、３つ目と４つ目が５分となっています』

「間に合わない・・・ではないですか・・・！」

はやてと観測室の通信士の通信にアンジェや、「んな馬鹿なことが・・・！」ってヴァイスが頭を抱えた。わたしもその場に崩れ落ちた。艦隊が間に合う前にミッドが隕石で滅んじゃう。しかも小型の隕石は今もなお落下して来てる。

『ですがご安心ください！　たった今、本局よりトップエースが出撃しました！　あの方なら必ずこの危機をどうにかしてくれます！』

通信士の話に出て来たトップエースという単語に、ヴァイスは「おお！」ってグッと握り拳を作って、アンジェは「噂に聞くあの・・・！」目を爛々と輝かせた。でもわたしは複雑な思いだった。親友の――ルシルの敵はわたし達チーム海鳴の敵だ。でもこの状況をひっくり返せるのはきっと、リアンシェルトだけ・・・。

『こちら本局・総務部、リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサです。これより隕石の迎撃を行います。私の魔法の属性上、少々気温が１０度ほど下がりますので、風邪をひかれぬようにご注意を』

突然空に現れたリアンシェルト。長いクロークと後ろ髪を風に靡かせて、『では始めます』そう一言。足元にミッドチルダ魔法陣を１枚と展開して、魔力を放出した。遠く離れたこの場所にすらビリビリと感じられる強大過ぎな魔力に、「すげぇ・・・」ヴァイスが感嘆の声を漏らした。

――蒼天に座して輝く氷神十二冠（コキュートス・アステール）――

ミッド式でもベルカ式でもない、見たことのないデザインの超巨大な魔法陣？がミッドの空を覆い尽くした。魔法陣を通してるからか太陽の光が綺麗な青色になってて幻想的だ。巨大隕石の先駆けな小型隕石が魔法陣を通過すると、一瞬にして凍結されて粉々に砕け続ける。その様を見て、地上から歓声が上がり始めたのが判る。

「マジですげぇ人だな、リアンシェルト少将！」

「これでこれより来る隕石も問題なさそうです！」

大喜びするヴァイスとアンジェとは違ってわたしは「ルシル・・・。本当に勝てるの？　あんな化け物に・・・」不安でいっぱいだった。

Ｅｉｐｉｃ３０プライソン・スカリエッティ～Ｉｎｆｉｎｉｔｅ
Ｏｎｅ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

宇宙に点在する隕石をミッドに降らせ、なおかつソレ自体がミッドを壊滅させる特攻兵器・"アグレアス"。その管制を担っている片割れが"堕天使エグリゴリ"の１機、レーゼフェアだという。ミッドを護るため、レーゼフェアを救うため、俺とアイリは転移魔法を使って宇宙に漂っている"アグレアス"に乗り込んだ。

「レーゼフェア！　どこに居る！　姿を見せろ！」

『マイスター。アイリ達以外に生命反応が２つあるんだけど・・・。１つはレーゼフェアだとして、あと１つは・・・？』

仄暗い通路内を翔けているとアイリからそんな念話が。まさか、"スキュラ"とかいうサイボーグ姉妹がまだ居るのだろうか。だとすれば、レーゼフェアを救い、"アグレアス"の自壊を設定した後、その娘と一緒に脱出という予定だな。

「とにかく今はレーゼフェアとの接敵だ。・・・それにしても大きい兵器だな。ゆりかごと同程度の全長だぞ」

『距離４００先、生命反応が１つ』

その報告通り、通路の先にあったのは左右に開くタイプのスライドドア。攻撃でぶち抜いてやりたい気分だが、奥に居るのがレーゼフェアではなかった場合を考えて、律義に開くのを待った。ドアはゆったりと開き、その奥にはゆりかごの玉座の間の3倍ほど広い空間がお目見え。

「よう。待っていたぞ、神器王ルシリオン」

広間に響く俺の正体。この声、この口調・・・。広間の奥に在る玉座に座しているのは「プライソン！？」だった。馬鹿な、奴は今、シスター・プラダマンテのスキルである空間干渉（ってことを聴いた時、目が飛び出そうになった）によるバインドを受けている。逃げられるわけがない。

「驚いているな。では答え合わせといこうか」

俺の面前に展開されたモニターに、はやて達に包囲され囚われたままの状態の「プライソン・・・！」が映しだされた。一瞬の混乱の果てに辿り着いたのが「どっちがクローンだ？」ということ。記憶転写型クローン技術・プロジェクトF・A・T・E・の生みの親だ。自分のクローンを造ることも造作もないだろうしな。

「はっはっはっは！　すぐに辿り着いたな、正解へ。俺がオリジナルのプライソンだ。地上のはクローンに過ぎないが、俺の不老不死までしっかりと受け継いでいることで、どちらが真か嘘かなど最早関係なくなった。地上の奴は、俺がアグレアスの最終調整を終えるまでの影武者だ。知っての通り、その役目を存分に果たした」

「隕石とアグレアスによるミッド破壊。恐ろしいのは、それがお前が自殺するためのもだという」

『あり得なさ過ぎだよね！』

星１つを道連れにする自殺など、２万年近く存在してきた俺でさえもなかなか見られない茶番だ。奴は玉座より立ち上がり、「我が手に携えしは確かなる幻想」そう聞き捨てならない呪文を詠唱した。

「始まりと終わりは知らず。時の狭間に遊べ」

――ストップフロゥ――

「俺の・・・――」

『複製術式！？』

ゼフィ姉様の言っていた通り、奴は俺から奪った発動権限を利用し、"英知の書庫アルヴィト"から無断で拝借しているわけだ。しかも短いながらも時間を停止させる術式を発動しやがった。直後に「ぅぐっ！」強烈な頭痛と胸痛に襲われた。その直後には背後から「どうだ？　さらに俺への怒りが湧いただろう？」奴の声がした。

『このぉぉ――――ッ！』

――竜氷旋――

挑発に乗せられたアイリが独自に魔法を発動。竜がとぐろを巻くように俺の周囲を冷気が渦巻く。俺は空いている右手で胸を掴み、振り返りながら"エヴェストルム"を振るった。視界に奴が入る前に、"エヴェストルム"を握る左手から伝わる肉を断つ感触。視界の端が赤一色に染まる。

「くはははっ！　痛い、痛いなぁ、おい！」

全ての防御を放棄していたのか胸を横一線に斬り裂かれ、多量の血を吹き出させながらも笑い、そしてものすごい速度で傷を再生させた。

「さぁ、始めようか。ミッド終焉までのプレリュードを」

ＶＳ・・・

『ヤー！』

――氷結圏――

アイリに氷結付加を発動させ、俺の氷雪系術式の効果を増大させる。

――舞い振るは、汝の麗雪（シャルギエル）――

氷槍６０本を展開して「ジャッジメント！」一斉射出すると、奴は「冷気攻めか！　そいつは試していないな！」そう弾んだ声を出し、両腕を大きく広げて待ち構えた。そして氷槍の８本で全身を貫かれ、その個所より全身に凍結が広がっていく。

「さらに・・・」

『行くよ！』

――吹雪（コード）け、汝の凍波（バルビエル）――

奴の周囲に宝石と見間違うほどの氷柱を７つと突き出させ、ソレらより強烈な冷気を放出。続けて「ジャッジメント！」と号令を下し、氷柱を破砕させて氷雪の竜巻を発生させる。そうして奴は完全に氷像と化した。管制だからと言って殺せばいいってものじゃないだろう。その機能を止めてやればいいはずだ。

『マイスター。トドメ刺した方が良いんじゃないのかな～』

「個人的な感情で言えば、さっさと殺してやりたいが。・・・残念だが今の俺は公務員だ。まずは俺の複製権限を取り返し、左目の視力についても問い質したいしな。今は生かしておく必要がある」

さらに言えば、今の俺には不死を殺しきるだけの術が無い。持ってはいるが、今は奴に奪われている状態だ。まぁ残念ながらあの術式は、いくら複製発動の権限を持っていようが俺にしか発動できない。アイツの最大のミスは、俺から権限を奪ったことだ。たとえ戻って来ても、望み通り殺してはやらないがな。

――赤化旋風――

「あそこまで凍結されてまだ動けるのか・・・！」

炎の竜巻が発生して勢いよく氷を溶かし始めた。凍結封印が出来ないとなると、さぁどうしようか。なんて考えている中・・・

「先ほどの話の続きだが何年か前にお前は、地上本部・首都防衛隊のゼスト隊と一緒に俺の研究所に潜入して、兵器群のデータを掻っ攫って行っただろうが。お前に俺を糾弾する視覚は無いだろう」

凍結から解放された奴がそう言って肩を竦めた後、「ともかく、俺は封印じゃなく死を望んでいるんだよ」ビシッと指を差してきた。

『上等だよ！　マイスター、アイツ死にたがってるんだし。もう殺っちゃおうよ！』

フォルセティやヴィヴィオの事で相当恨み辛みが溜まっているようで、アイリがそう急かしてきたが俺は躊躇した。目の前に居るのがオリジナルで、地上に居るのがクローンのプライソンだ。相対した限り、どちらも全く同じ気配で見分けも付かない。どちらが死んでも問題ないだろうが・・・。

（オリジナルを殺したことを、クローンから局や教会に漏れてはまずい・・・）

「融合騎の言う通りだ。お前なら俺を殺せるのだろう？　ならば何も迷うことはない。俺を殺したところでお前に罪は無い。クローンが黙るからだ。ついで言えば、クローンの方も後で殺してもらえると助かるんだがな・・・！」

――トーデスドルヒ――

奴の周囲に血色の短剣型魔力弾が３０発近くが展開された。アレはルーテシアの魔法だな。高速で射出された魔力弾を空戦形態の機動力を以って回避し、奴自身の影を利用して作り出した影の手・「カムエル！」で奴の四肢を拘束する。

「いやだから～。こうじゃないと言っているだろう」

――メタルダイナスト――

奴の足元の床がうねり、鋭い刃へと形状変化。そして両肩と両太も

もを切断した。四肢を欠損した奴は地面に落下したが、すぐさま新しい四肢を再生させて立ち上がった。

「それにお前は、暗殺部隊のエースだろう。さらに言えば、数千年前にあったという再誕戦争での英雄・神器王、人殺しの天才。犯罪者を殺すことに今さら何を躊躇う？　それでも理由が足りないなら与えてやる。オリジナルである俺も殺さないとアグレアスは止まらない。俺とレーゼフェアが死んで初めてアグレアスが自爆モードに入るのだから。どうだ？　殺る気が出たろ？」

自分を殺すためだけに、よくもまぁここまで遠回りなことをするものだ。死にたいなら、俺が局員になった時に誘えば良かっただろうに。って、最高評議会への復讐も目的の1つだっただろうし、どの道こうなる事は決まっていたか・・・。

「ああもう、いい。判った。そこまでして自死への道行を整えたのなら、最早なにも言うまい。お前のような狂人の願いを聞き入れるなど反吐が出るが世界の為だ」

魔力炉（システム）の稼働率を上げて魔力に神秘を付加し、非殺傷の魔法から物理破壊上等の魔術へと昇華させた。"エヴェストルム"のカートリッジと魔石はレーゼフェア戦に残しておきたい。省エネで叩く。

「さぁ来い、早く、早く、早く！」

――戦滅神（コード・ヴィズル）の破槍――

雷撃系上級砲撃を発射すると奴は「どれどれ！」と、防御も回避もせずに直撃を受け入れ、起こった放電爆発に呑み込まれた。そして放電が治まり始めたところで奴の「あぁ・・・。この程度ではやはり死ねないのか・・・」嘆きの声が聞こえて来た。姿を現した奴の右肩から右腰までがごっそりと抉られているが、グチャグチャと不快な音を立てて臓器などの肉体組織が高速で再生して行っている。

『うっ、気持ち悪い・・・』

アイリが俺の中で吐き気を催して（頼むから吐かないでくれよ？）いる中、信じられないことに「レーゼフェアへの義理を果たすために、少し抵抗させてもらうぞ」などとメチャクチャなことを言い出し始めたため、俺とアイリは「『はあ！？』」素っ頓狂な声を上げてしまう。

『死にたいなら、大人しく殺されてよね！　というか、まずはマイスターの複製権限を返せ！』

――零斬風――

全く以ってアイリと同意見だ。俺の左右に生み出された氷雪の渦より放たれる冷気の刃。奴はジグザグに駆けつつ回避して、「我が手に携えしは確かなる幻想！」と詠唱しつつ俺へと接近を試みた。

――ボーデンドンナーーーー

――女神（コード・グナー）の疾翔――

誰のものかは判らないが複製高速移動術式を発動して、真っ向から最接近して来た奴へのカウンターとして、俺は空戦形態時限定の突進術式グナーを発動。全身を魔力で覆って槍の如く突撃。速度にモノを言わせて奴の胸へドロップキックを食らわせる。

「うごぉ！」

そしてそのまま玉座へと突っ込む。石造りの玉座を粉砕し、さらに金属で出来ている広間の壁に背中から叩き付けてやった。骨や臓器を潰した感触がブーツの裏から伝わり、さらに奴も盛大に吐血したことで致命傷は与えたのは間違いないと判断する。

「ごふっ！　はっはー！　痛いじゃないか！」

――禍神の隷氷（コード・ベルヴェルク）――

喋るたびに血を吐き出す奴が俺の両足首をガシッと掴んできたため、即座に装備術式を発動。限定的に両脚の脚甲だけを装備させ、「っ！？」奴の両腕や全身を再び完全凍結させた。無理やり奴から離れると、まず両腕がバキッと折れた。足首に奴の凍った腕を引っ付けたまま本体へと前蹴りを打ち込むと、ガシャァン！と派手な音を立てて砕け散った。

『ここまで砕け散ったらさすがにダメだよね・・・？』

「むぅ。とりあえず胴体だな」

氷装を解除し、周囲に散らばっている奴の体の破片の中から胴体部分を探す。推測だが複製権限はおそらく、奴のリンカーコアと同化しているはずだ。ならばリンカーコアもろとも奪い返してやる。

――インフェルノⅢ――

「む・・・！」『おわっ！？』

俺の周囲に噴き上がる複数の炎が、凍っていた奴の肉片を溶かし出した。粉々に砕いた程度では死なない、と。辺りを見回すと一際強い魔力を発する破片を見つけた。ちょうど胸の中央辺り――心臓部分だ。リンカーコアの輝きを確認できる。他の肉片を蹴散らしながら向かい、「返せ！」肉片へと手を伸ばすが・・・

――ファイアウォール――

「チッ・・・！」

寸でのところで炎の壁が発生し、奪い返すチャンスを逃すことに。壁の向こう側では、心臓とリンカーコアが収まった肉片を基点として奴の肉体が高速で再生されていくのを見た。壁が解除され、「笑えるだろう？　あれだけ砕けてもまだ死ねないなんて」衣服も元通りに戻った奴が肩を竦めた。

『あぅ～。ごめんね、マイスター。アイリの氷結術式じゃ意味無いみたい・・・』

「いや、今の俺も大して変わらないから気にしないで良い。勝利条件はただ1つ。奴の身動きを止め、リンカーコアごと複製権限を取り返す！」

――浄化（コード）せよ、汝の聖炎（メタトロン）――

俺を中心に床と四方の壁にいくつもの蒼炎の轍を蜘蛛の巣状に張り巡らせてから、「ジャッジメント！」問答無用で号令を下して炎の轍を一斉に爆破させる。すると奴は「火炙りは辛いんだがな～」と文句を漏らし、何もせずに爆炎に呑まれた。

「焼ける、焼けるぞぉぉぉ～～～～・・・――」

――炎熱吸収――

そう叫び声を上げる奴の両手に炎が集束して行き、骨とリンカーコアだけとなった姿を見せた。チャンスが再来したことで宙を蹴って突撃する。奴は肉を再生させながら骨だけの右腕を振りかぶった。

――巻き起こせ（コード）、汝の旋風（アムブリエル）――

――第四波動――

風槍を8本と一斉射出したと同時、奴も右拳を突き出して火炎砲撃を発射。風槍は射線上には無いため、そのまま奴へと向かって行き、俺も宙を蹴って急上昇することで砲撃を回避。床に着弾した風槍が

起こす爆風で奴の骨がバラバラに吹き飛び、リンカーコアだけが宙に浮いていた。また宙を蹴ってリンカーコアを目指す。

――シルバーカーテン――

リンカーコアを掴んだと思えば、そこには何も無かった。デジャブ。先の次元世界でのバール戦を思い出した。瞬時に幻覚を見せられていたのだと判り、発動し易いなのはの球状バリアである「オーバルプロテクション！」を発動。

――ヴァイオレントトレーナー――

直後、バリアに紫色の魔力ロープが縦横無尽に絡まり、ミシミシと締め付けてきた。そしてガシャァン！と砕き、「っ・・・！」俺を簀巻きにした。が、アイリが『竜氷旋！』を発動し、ロープを凍結してくれた。あとは俺の膂力で簡単に砕ける。床に降り立って、完全に肉体を再生させた奴と相対する。

「なかなかに楽しいじゃないか、決闘というのも。人生最後の時間としてはあまりに甘美。レーゼフェアには感謝しなければな。本当はお前に大人しく殺されようと考えていたが、どうせなら戦って死ぬば？という提案を受けてな。いや確かに、ここまで熱くなれるとは思いもしなかった」

『それに付き合わせられるアイリとマイスターの迷惑を考えてほしんだけどね・・・』

「まったくだ・・・！　レーゼフェアの奴、余計なことばかり言って・・・！」

呆れ果てる俺たちに向かって床を蹴って突撃して来た奴は、両腕を胸の前でクロスさせて「それにしても俺とお前は本当に似ている。まるでコインの裏表のようだ」などと言いつつ、左右に両腕を振るった。対する俺たちも床を蹴って奴へと突撃。

『はあ！？　有り得ないんだけど！　お前のような狂人とマイスターが似てる！？　寝言は起きて言うものじゃないよ！』

――サウザンドブレス――

――削り抉れ（コード）、汝の裂風（ザキエル）――

放たれるのは強烈な爆風。目には目を、風には風を。ドリルのように螺旋状を描く暴風の砲撃を発射。貫通力のある俺の砲撃に暴風は容易く穿たれて、その勢いを無くし消失した。そしてお互いに殴り合える位置まで最接近したことで、俺はダンッと力強く床を踏みしめた。

――力神の化身（コード・マグニ）――

――鉄化鬼腕――

俺は上級の全強化術式を発動して左腕を振り被り、足元に黒いベルカ魔法陣を展開した奴は、赤錆色に変化させた右腕を振り被った。

今の低身長な俺となら、そこそこなクロスカウンターになるわけだ。同時に拳を繰り出し、奴の拳は顔を逸らすことで掠りはしたが躱すことが出来た。そして俺の拳は「うごぉ！」奴の鼻っ面に直撃。

「おおおおらぁッ！」

「ぶふぅ・・・！」

拳を振り抜いて、折れた歯や鼻血や血反吐を撒き散らす奴を２０ｍ程まで殴り飛ばしてやった。床に落ちてからバウンドすること１１回の果て、閉まっていた出入り口のスライドドアに激突。ドアすらも打ち破って通路の奥へと消えて行ったが・・・

――ボーデンドンナーーーー

追撃するより早く奴は高速移動で広間へと戻って来た。折った歯や鼻骨は元に戻り、その顔は喜色満面。

「いいや、似ているさ。不条理の被害者としてな！」

――ショックブレイカーーーー

広間の中央付近で奴が床を殴りつけた。床を伝わってくる衝撃波に気付き、即座に宙に飛び上がった。しかし行動に移るのが僅かに遅かった所為で「うおっ！」足元を通過した衝撃波に煽られて体勢を崩してしまった。

――ボーデンドンナーーー

「生まれながらにして人生を定められ、その定めに従い戦いながらも得たモノを奪われる不条理！」

――メタルダイナスト――

足元の金属床が俺を挟み込むようにせり上がり、まるで蚊を叩くように俺に迫って来た。

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

巨腕一対を発動し、叩き潰される前に床を鷲掴んで食い止めたところで、「マグネティックドミニオン！」トンッと胸に掌底を受けた。胸に当たる手の平から全身に駆け巡る衝撃に俺は「ごほっ！」吐血する。宙に居たことでその衝撃を逃す術も無く、俺は大きく吹き飛ばされた。

「しかも！　それから逃れようにも死を与えられていない！　不死を――永遠を無理やり与えられ、失った悲しみを苦しみながら行き続けなければならない！　お前も同じだろう！」

――マグネティックドミニオン――

宙で姿勢を整え、壁に両足を付いて着地したところで、「なに・・・！？」無理やり奴の元へと引っ張り込まれた。先程の掌底。マグネティックドミニオンとか言っていたな。あぁ、俺は今、磁力に支

配されているのか。

――傷つきし者に、汝の癒しを――

治癒術式で受けたダメージを回復させつつ、「実弟のジェイルですら、俺と違って有限だった」そう嘆きを漏らす奴へと影槍の「サマエル！」を発動し、奴自身の影から生えた影槍で貫いてやる。それでも磁力で引っ張り込まれ続けるため、「おおおおおお！」全身を炎で覆う。

「ぐふっ・・・！　はっはっ！　磁力は熱に弱いというのは既知というわけだ！」

「学校で習うからな」

磁力支配から解放された俺は、影槍に貫かれたままの奴へと向かい、シャマルの転移魔法・旅の鏡と同じ効果を持つ「メタスターゼン・トーア！」を発動し、奴の胸へと手を突っ込む。

「ん・・・？」

「残念、ハズレだ」

リンカーコアを抜いた手応えが無いと思えば、奴が俺の右腕を鷲掴んで来て「ランブルデトネイター！」を発動。完全な自爆技に、俺は「パンツァーガイスト！」を発動して全身を魔力で覆った直後、俺と奴の足元の床が爆発を起こした。

「くぅ・・・！」

『マイスター！』

『問題ない・・・！』

急速後退して爆炎の中から脱出した。対する奴は影槍が消えたことで自由になり、体を再生させながら黒煙の中からゆっくりと歩き出て来た。

「俺は不老不死として造られ、お前は人間からテスタメントとして昇華され、苦しい思いを続けている。正直、俺よりお前の方が悲惨だ。2万年？　気が狂いそうになるな、聞いただけで。だから理解してくれるだろう？　同じ自身の終焉を望む者として」

その言葉に思わず「そうだな・・・」と返してしまった。アイリは『マイスター？』と不安そうな声を出した。ハッとして口を噤むが、どうしたって奴の気持ちが理解できてしまう。

「ほら見ろ。馬鹿な奴は不老不死に憧れるが、こんなものは地獄でしかない。大切な物を手に入れても、時間の流れの差異で手の平から零れて行く」

違うと、そう否定できない俺が居る。俺も多くの手を振り解いてきた。好きだと言われた娘たちの想いを踏みにじり、仲間だと肩を組んだ友との絆を断ち切ってきた。そのたびに思っていたさ、どうし

て俺がこんな目に、と。それでもシェフィ達や"堕天使エグリゴリ"の魂を解放する、そう固く決意してこれまで存在してきた。

「だから予言しよう、神器王。将来、お前は必ず仲間を裏切り、そしてその仲間から裏切られると」

「なにを・・・？」

いきなり突拍子もないことを言い出す奴に「・・・ありえない」そう言い返すものの、現状が既に裏切っているようなものだ。強くは言い返せなかった。奴は「嘘が下手だな！」と笑い声を上げて、展開した魔法陣上で四股を踏んだ。

「もっと素直になれよ、神器王！」

――鉄化鬼体――

そして今度は全身が赤錆色となり、「ふんっ！」足元の床に右拳を打ち付けた。鋼鉄の床を貫通させた奴の魔力が「増大している・・・？」ことに気付いた。

――煌き(コード)示せ、汝(アダメル)の閃輝――

とにかく、何をしているかなど後回しにして砲撃を放つ。すると奴は床から右腕を抜き、そのまま裏拳で砲撃を弾き逸らした。

『何かしらのドーピングの可能性あり、だね』

「ああ。奴の体、さらに赤みを帯びているし、僅かに電気を放っているようにも見える」

――舞い振るは、汝の麗雪――

試しに凍らせてみようと氷槍を２０本と撃ち込むが、そのどれもが着弾時に一瞬にして融解した。

「お前が自身の存在意義としている願望――全エグリゴリの救いは、万人にとってはなんてことはないが、お前と親しい者にとっては受け入れ難いものだからだ」

――舞い降るは、汝の煌閃――

いちいち胸に刺さるような事を言いながら、一足飛びで俺へと高速で突っ込んで来た奴へとダメージ優先の光槍４０本を一斉射出すると、その全てが辺り一面に弾き飛んだ。これまで以上の魔力を込めたにも拘らず、１本足りとも通用しなかった。あの体の変化が原因だな。

――ボーデンドンナー＆メタルダイナスト――

奴の姿が描き消え、狙い撃ちを避けるためにこの場から離れようとした時、俺の周囲の床が壁の如くせり上がった。

「何せ、願望の果てにお前が死ぬというのであれば、親しい者たち

は止めるだろう。失いたくない。だから止めたい、と」

気付けば奴はすぐ目の前に居た。繰り出される右拳を、体勢を横向きに変えつつ胸を逸らすことでギリギリ回避。

「解った風なことを・・・・！」

魔力を右膝に込め、奴の腹に膝蹴りを打ち込んだ。奴は「ぐっ！」呻き声を漏らして体をくの字に折った。膝を降ろして、即座に組んだ両手を奴の後頭部へと振り下ろす。床に顔面から叩き付けられた奴の背中を踏みつけ・・・

「ははは・・・、解るさ。言っただろう。俺とお前は同じなんだよ。まるで鏡合わせのようだ」

――力神（コード・マグニ）の化身＆知（コード）らしめよ、汝（アブディエル）の忠誠――

強化術式で威力を高めた魔力剣を「違う。俺は、お前とは違う・・・！」奴の後頭部に突き刺し、脳を貫いた。そして改めて転移魔法を発動し、奴の心臓付近へと右手を突っ込む。しかし「また・・・？」ハズレのようで、リンカーコアを掴むことが出来なかった。

「いいや、同じ。お前の願望が叶えられるチャンスはわずか1回きり。それを逃せば大変なことになるのだろう？」

『コイツ、まだ喋るの・・・・！？　もううるっさい！　黙ってよね！』

脳を貫かれながらも両手を床に付いて上半身を起そうとしたため、影の触手である「カムエル」を発動して、奴の体を拘束して床に伏せさせる。

「ならば、願望が叶うかどうか怪しい瀬戸際に陥った時、いずれお前は手段を選ばなくなる。必要なら悪にも染まるだろう。これまで何千と悪事を働いたお前だ。罪悪感など、これっぽちも湧かないだろう？」

右手を奴の体に抜き差ししながらリンカーコアを探す。不快な言葉が耳に届くが、聞こえないフリをし続ける。

「そうなった時、親しい者たちの存在が邪魔で邪魔で仕方なくなる。何せお前の今の仲間は正義を振りかざす局員と騎士だからだ。だから裏切る」

「黙れ・・・黙れ・・・もう黙れ！」

『っ！？　マイス――』

新たに展開した魔力刃で奴の首を刎ね飛ばす。奴の首は床をゴロっと転がり、光を失った双眸を俺に向けて来た。静かになったところでリンカーコア探しを続行しようとした時、奴の新しい頭部が再生し始めた。

『うげぇ！　気持ち悪い！』

すぐに氷雪系魔力を左手に宿し、再生途中の首に当てて凍結させてやると、頭部の再生が中断された。改めて、というところで・・・

――赤化旋風――

「っく・・・！」

首の無い体から発生する強烈な火炎竜巻に俺は吹き飛ばされてしまった。宙で態勢を立て直した時には奴は完全に復活を果たしていた。

「親しい者たちはお前に死なれたくないと思い、そして正義感からして悪事を働いてまで願望を果たそうとするお前の前に立ちはだかり、邪魔をするだろう。つまりお前の存在意義を無視する裏切りだ」

――フォーゲルケーフィヒ――

魔力スフィア１０基によるリングが４つと奴の周囲に展開された。

――アドラーフリーゲン――

スフィア１基より１０発という魔力弾が発射され始めた。俺は広間内を翔け回りながら「貴様に何が・・・！」反論しつつ、多属性魔力槍群であるカマエル１００本を奴へと射出する。奴もまた床を駆け回って槍群の回避を行い・・・

――ハーツイーズバレット――

スフィアリングより魔力弾を何１０発と連射して来る。俺と奴の間で魔力槍と魔力弾が交差して激突を繰り返し、魔力爆発を起こし続ける。

「俺だから解るんだ、神器王。俺も裏切り、裏切られた男だからな。俺も目的のために作品たちに偽りの目的を伝え騙した。すると真実を知った作品どもは俺の目的を妨げようと裏切った。ほら見ろ。いずれお前が辿る路を先駆しているだろう、俺は」

「～～～～っ！」

俺とはやて達が衝突する画が容易に想像できたため、それ以上の反論が出来なかった。だが「この先、俺たちの関係がどうなろうと、俺は逃げずに受け入れるだけだ！」そう開き直り・・・

『アイリ、もうこれ以上は構っていられない。一気に決めるぞ！』

『・・・ヤー！』

アイリと作戦会議。奴はリンカーコアを体内で移動させることが出来るようだから、まずはこれまで通り外に出させるしかない。

――氷結圏――

――力神（コード・マグニ）の化身＆大地よ凍（コンジェウンド）て付け――

アイリと俺で術式強化、続けて俺が下級氷雪系術式を発動して、右

足で床を強く踏みしめた。右足を起点に床が勢いよく凍り付き始めるが、やはり下級術式。奴は「先ほどの氷の槍が通用しないと解らないのか？」凍ることなく、呆れ声を漏らして肩を竦めた。

「お前を攻略する術がコレなんだ、許せ」

「ほう。ではお手並み拝見だ。今度はしくじるなよ？」

「覚悟しておけ。『アイリ！』」

『ヤー！』

――舞い振るは、汝の麗雪（シャルギエル）――

俺とアイリで氷槍を１０本ずつの計２０本を宙に展開、そして奴やその周辺の凍っている床へ向けて射出すると、各氷槍が一斉に大小様々な六角柱へと変化して強烈な冷気を放ち出す。

「『エーヴィヒ・ベザッツングス・アルメー！』」

「っ！　おお！　今の俺をも凍らせるレベルか・・・！」

余裕ぶっていた奴も凍り付き始め、とうとう全身が氷に覆われた。そして俺は左拳に魔力を込め、アイリとの協力術式の締めとして床の氷を殴った。衝撃が床全体に広がって行き、氷の床や柱、そして奴もろとも派手に砕け散った。視界が真っ白に染まる中、俺とアイリは「ユニゾンアウト・・・！」して、二手に分かれる。そして俺

は白煙の中を突っ込み、白煙の中でうっすらと輝く奴のリンカーコアを目指す。

――ファイアウォール――

リンカーコアを視認したところで、俺の目の前に炎の壁が立ち上った。両手に炎熱系魔力を纏わせ、「どっせい！」炎の壁に十指を突っ込んで、壁を左右にこじ開けに入る。広間の至るところに火柱が立ち、凍っている奴の肉片を溶かしていく。

「何が攻略する術だ。何も変わら――っ！？」

壁の向こうから聞こえていた声が急に途切れた。そして俺がこじ開けた壁の隙間を縫って、その小さな体でリンカーコアを抱えたアイリが「ゲッチュー！」飛び出してきた。

「いつの間にユニゾンを解除して・・・！？」

「おわっ！？」

どこからともなく聞こえた奴の驚愕の声。アイリの持つリンカーコアが強烈な光を発し、ものすごい勢いで血管やら神経が構築され始めた。だからアイリも「キモっ！」そう言ってリンカーコアを放り捨てた。弧を描きながら宙を舞うリンカーコアの周囲に骨格が形成され始める。

「お前の負けだよ、プライソン」

――メタスターゼン・トーア――

転移魔法を発動した俺は右腕を伸ばし、筋肉に覆われ始める前にリンカーコアを掴み取った。俺の右腕に貫かれたまま奴の体は再生を果たし、「あぁ、楽しかった・・・」満足そうに眼を閉じた。

「ふんっ！」

そして俺は奴のリンカーコアを引き抜き、俺の胸から浮き出て来た魔力炉（システム）と同化させると、「やっと帰ってきたな」喪失感が埋まったような感じがした。

「さぁ、これで幕だ、神器王」

「ああ。アイリ、ユニゾンだ」

「ヤー！」

――第二級粛清執行権限――

アイリと再びユニゾンを果たした俺はリミッターを解除し、「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想！」久々に詠唱をした。いくらか記憶を失うだろうが、今は奴を否定――殺すことだけを考える。

（レン。お前のスキル、使わせてもらうぞ）

――真技・穢れし魂（アム・リベラシオン）に厳粛なる浄化を――

「うぐぅぅ・・・！」

『マイスター！？』

強烈な頭痛と胸痛に耐え、左手に巨大な霊体の腕を纏わせて奴に突っ込む。すれ違い様に奴の肉体から人型の魂だけを抜き取り、グッと鷲掴みながら抱え上げる。

『素晴らしい！　なるほど、不死の殺し方は魂の消滅か！』

魂だけとなった奴が歓喜の声を上げた。

「少し違うが、まぁそんなところだ。命ある生物である以上、不死など存在しない。魂をどうにかすれば、不死の体とて無事では済まない」

『あぁ、俺にとっては永遠の器だった肉体から解放されたこの瞬間――死に際というのが、これほどまでに心地いいとは。・・・最高の気分で逝きたいものだ』

奴がそう言うとこの場面でモニターを展開した。一体何をするのかと思えば、モニターに映る映像に奴だけでなく俺やアイリも「っ！」絶句した。未だに艦隊が到着しないのか隕石はミッドの大気圏内にいくつも突入してしまっている。

「リアンシェルトだと・・・・!?」

リアンシェルトがミッド全体を覆うように展開した12枚のニヴルヘイム魔法陣。ソレを通過した大型の隕石は容易く凍って砕かれ、小さくなった隕石の破片をはやて達が砲撃で対処していると言った感じだった。それを見た奴は『ここに来てこの裏切り・・・・!』そう言って歯ぎしりした。

『まぁいいさ。俺の死は確定した。ミッドがどうなろうがもう知った事じゃない。が、少しはやり返さないとな。神器王、俺を殺してくれる礼に良いことを教えてやる。リアンシェルトは、お前の記憶を取り戻している』

「は?」

奴の言葉に思考が追いつかなかった。リアンシェルトが記憶を取り戻しているだと。ありえない、そんなこと。俺は「あってたまるか!」と否定する。記憶が戻っているなら、どうして敵対する。俺の下に戻ってきてくれれば良いじゃないか。自惚れもあるが、リアンシェルトは俺を父親として愛してくれていた。そんな彼女が自分を偽って敵対するなんて考えられない。

『信じる信じないはお前の自由だ。地上に降りたら確かめてみると良い。記憶を取り戻しているのか?とな』

「〜〜〜っ! くそぉぉぉーーーーーッ!」

『あぁ、俺を迎えに来てくれたのか・・・アガーテ・・・』

そして俺は霊体の左手を握り締め、不老不死だったプライソンの魂を強制的に昇天させた。背後でドサッとヤツの空っぽにの体が倒れ、砂状に崩れ去っていった。

Ｅｉｐｉｃ３１スキュラ～Ｗｅ　Ｌｏｖｅ　Ｙｏｕ～

†††Ｓｉｄｅスバル†††

お母さんやノーヴェとウェンディとディエチが正気を取り戻して、ギン姉やティアと一緒にＬＡＳを迎撃する。狙いはプライソンの作品であり、あたし達サイボーグにとっては血の繋がりの無い姉妹にあたる"スキュラ"の次女ベータと四女デルタ。２人は列車砲と装甲列車の管制機体で、今も素っ裸なまま手動で両兵器の各兵装を動かして、ココ南部地方に振って来る隕石を迎撃してくれてる。

「まずい、まずいよ！　ミサイルの予備がもう切れそう！」

「ガンマは何をやって・・・と怒ってやりたいけど、向こうも父さんの刺客に襲われてるだろうし。オーケー。デルタ、ミサイルの発射を抑えて。可能なだけ装甲列車の砲撃で対処する」

「んっ！　スバル、ティアナ。もうちょいだけ粘って！」

デルタにそうお願いされたあたしとティアは「判った！」ＬＡＳをぶっ飛ばして応えた。それからヴィータ副隊長とアリサさんの一方的な蹂躙を横目にデルタ達を護衛しつつ、ＬＡＳの数が減って来ているのを確認していると・・・

「ＬＡＳが・・・」

「退いた・・・？」

ギン姉とお母さんの言うように、デルタ達を殺そうとしてたＬＡＳが突然一斉に引いたと思ったら、１ヵ所に集結し始めた。まぁ１ヵ所に集まったら集まったで、「まとめてぶっ潰す！」ヴィータ副隊長や、「２度と利用されないよう火葬してあげる」アリサさんの格好の的だ。だけど何百体っていう数のＬＡＳが組体操のように体を組み始めると、体内から飛び出して来たケーブル同士が絡み続けて、最終的に６０ｍくらいの「巨人・・・！」みたくなった。

「大きくなったからと、強くなるわけではあるまい！」

――ランブルデトネイター――

「当たり易くなったっつうの！」

――ガンシューター――

「どんどん行くっスよ～！」

――エリアルキャノン――

「狙わなくても確実に当てられる・・・！」

――ヘヴィバレル――

ノーヴェ達が一斉に巨人に攻撃を加え始めると、「あたし達も負け

てらんないわ！」アリサさんや、「転ばして一気に叩く！」ヴィータ副隊長も攻撃に参加して、火炎砲や鉄槌の一撃で巨人を襲う。

「あたし達も参加するわよ！」

――クロスファイアシュート――

「うんっ！」

――ディバインバスター――

制圧射撃を行うティアに続いて、あたしも砲撃を巨人の足へ向けて撃つ。お母さんもはローラーブーツ型デバイス・"ソニックセイバー"の加速力で巨人の足元に突っ込んで、両腕に装着した「デリンジャーナックル！」のカートリッジをロード。ギン姉も左腕の"リボルバーナックル"のカートリッジをロードして、お母さんに追走。

「ストライクイーグル！」

「リボルバーシューット！」

お母さんは両拳から砲撃を同時に発射して、ギン姉は衝撃波を撃ち出す短距離射撃魔法を撃ち放った。そんなあたし達の総攻撃を受けてもビクともしない巨人はまだデルタとベータを狙って、その巨大な右手を地面スレスレに薙いできた。

「逃げろ！」「逃げて！」

ヴィータ副隊長とアリサさんからそう言われて、あたしが「デルタ！」を抱え上げて、ウェンディが「ベータ！」をボードの上に乗せて、即座にその場から離脱。ギリギリで巨人の手による薙ぎ払いを回避したところで・・・

『こちら本局・総務部、リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサです。これより隕石の迎撃を行います。私の魔法の属性上、少々気温が１０度ほど下がりますので、風邪をひかれぬようにご注意を。・・・では始めます』

そんな通信が入って、世界の色が変わった。空全体に超巨大な魔法陣が、最低でも２つ以上展開された。綺麗な水色の魔法陣？で、太陽の光が魔法陣を通過してるからか世界の色が水色になった。そんな魔法陣を通過して来た隕石はどれもが凍結されていて、迎撃するまでも無く空中分解して消滅した。あたし達が「すご・・・！」って驚いてると・・・

「何を企んでんだ、リアンシェルトの奴・・・」

「どういう経緯であれ、これで隕石によるミッド壊滅は回避されたわ、ヴィータ！」

「・・・納得は出来ねぇが、今は頼るしかねーってか。・・・アイゼン！　ツェアシュテールングスフォルム！」

上空に向かって飛んでたヴィータ副隊長が"グラーフアイゼン"を

形態変化させた。巨大なドリルとブースターを誇る鉄槌。話だけは聞いてたけど、あんなドリルで穿たれちゃどんな建物も兵器も一撃で潰されそう。

「フレイムアイズ！　スリーズ・サンズレガリア！」

アリサさんの魔力がグッと跳ね上がった。さらに「ヴァラーフォーム！」って"フレイムアイズ"を形態変化させた。スナイパーライフルのような長い銃身の両側に反りの無い直刀が２つある１ｍ半くらいの長さの大剣と、１ｍくらいのソードブレイカーの二剣。両剣の柄頭から魔力ケーブルが伸びて２つを繋いでる。お２人に共通するのは圧倒的な魔力量。

「巨人への攻撃は局員のあの２人に任せて、私たちはあくまでスキュラの護衛に回りましょ」

「うんっ！」「はいっス！」「はいっ！」

お母さんの指示に応じるノーヴェ達。チンク二尉が「私たちの攻撃が通用しないのであれば、巻き込まれないように動くのが得策か」って、お母さんの考えに同意したからあたしとティアも「はい！」頷き返した。

巨人はその巨体さから信じられない程に大きく動いて、地面を穿っては何ｍ何十ｍっていう岩石を周囲に散らばせてくるから、あたし達はデルタとベータを死なせないように戦場を駆け回り続ける。その中で避け切れない岩石も出てくるけど、「せいっ！」お母さん達がしっかりとフォローしてくれる。

「列車砲と装甲列車が・・・・！」

「潰された・・・・！」

無差別に飛んでくる岩石のいくつかが両兵器に直撃して、脱線させた上に大きく車体を潰した。ボードの上に横座りしてるベータが「お疲れ様」って装甲列車の働きを労うと、あたしがお姫様抱っこしてるデルタも「頑張ったね」って砲塔が折れて横倒しになった列車砲に手を振った。

「アアアアアアアアアアアーーーーーーーッ！！」

「ヴィータ！」

「おう！　さっさと逝っちまいな！　」

「もう利用されないように、火葬してあげるわ・・・！」

――プロミネンスウィップ――

アリサさんが右手に持つ大剣の銃口から、炎の光線がものすごい速さで放たれた。アリサさんが大剣を小刻みに動かすと光線は蛇のように軌道を変更して、巨人の両脚から腰、胴体から両腕へと勢いよく巻き付いた。

「ツェアシュテールングス・・・ハンマァァァーーーーッ！！！」

そこにとんでもなく大きくなった"グラーフアイゼン"を振り下ろしたヴィータ副隊長。ドリル部分が巨人の頭を一撃で穿って、頭を構築してたＬＡＳが何十体と空に舞った。頭部を失った巨人がゆっくりと後ろ向きに倒れ込み始めたところで、アリサさんが炎の光線――鞭を解除。

「カートリッジロード！」

≪地平より出づりし日輪は並びて、天壌に照り渡る朝暉と成るッ！≫

ロード５回の後、銃身を挟んでる２つの直刀から炎が勢いよく噴き上がって、そして半物質化して３ｍくらいの長さの直刀になった。そんな直刀を囲うように４つに環状魔法陣が展開されて、さらに剣先にミッド魔法陣が１枚と展開された。

「いざ天に座して輝け！　其は太陽の化身！」

アリサさんの詠唱によって、魔法陣の前方に１ｍくらいの火球が発生した。

「ソーラー・オーソリティア！」

発射された火球が一直線に巨人の胸に向かって行って、着弾した瞬間に「ぐっ・・・！」大きく爆ぜてまるで太陽のようになった。巨人の全身を呑み込むほどの大きな爆炎はすぐに消えることなくその場に留まり続けた。そして完全に消えた頃には巨人は灰になって、

風に吹かれて空に霧散した。

「よっしゃ。んじゃ、スバル、ティアナ、ギンガ。近くの陸士隊と合流した後、首都クラナガンに帰還だ。クイント准尉、それにノーヴェ達。一応、逮捕っつう形になるから」

「ですが洗脳され、ほぼ強制的に従わされていた件もありますし、それほど重くなることはないかと」

デバイスを元のサイズに戻したヴィータ副隊長とアリサさんが戻って来た。

「お母さん」「母さん」

「ギンガ、スバル。罪を償って必ず帰って来るから、それまでもうちょっとだけ待っ――」

お母さんが逮捕される瞬間を見ることになるって思うと泣きそうになる。そんなあたしとギン姉の頭を撫でてくれるお母さんに抱きつこうとしたところで、それは突然起きた。

――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ　２．０――

「――っ！？」

ウェンディのボードから降りたばかりのベータの胸から上、頭が吹っ飛んだ。遅れて聞こえてくる銃声でようやく「ベータ！？」あた

し達は動き出した。ヴィータ副隊長からの「1ヵ所に集まれ！」その指示に、ヴィータ副隊長とアリサさんを除くあたし達はデルタを護るように1ヵ所に集まる。

「フレイムアイズ！　全魔力を防御に回すわよ！」

≪応！　ブレイズプロテクション！≫

足元にミッド魔法陣が展開されると、半球状のバリアがあたし達全員を覆った。さらに外面に炎の膜が生まれて二重のバリアになった。

「ベータ・・・」

離れたところで倒れてるベータの遺体を見た後、すぐに顔を逸らしたデルタ。ヴィータ副隊長が空に上がって索敵して、アリサさんはそのままバリア前で待機するのを見つつ、あたし達はデルタを囲うように外を向いた状態で円形に並ぶ。全周囲警戒だ。

「デルタ、それにクイント准尉たちも！　この襲撃者の心当たりは！？」

「いいえ、判らないわ」

アリサさんの問いにお母さんが首を横に振って、ノーヴェ達も同様に知らないって答えた。残るデルタも「デルタも判らないかも・・・？」小首を傾げた。

「そう。まぁいいわ。ヴィータがとっ捕まえてくるだろうし。・・・

・アンタは変なことせずに護られてなさい」

「むぅ」

アリサさんの言葉になんでかムスッとしたデルタ。話題を変えようと思ったあたしは「ごめんね。護れなかった」って謝る。ＬＡＳだけが処理部隊だって考えてたこと、勝利したこと、２つの油断が招いた最悪な結果だ。

「ううん。デルタ達、この作戦内で死ぬことも可能性に入れてた。だよね？　クイント」

「・・・ええ。局と騎士団には優秀な魔導師や騎士が大勢居るもの。負けること、死ぬことも考えるのが当たり前。しかもミッド全域を相手にする戦争だったし。まぁアルファとガンマは、負けも死も無いって鼻で笑っていたけど・・・」

「デルタ、死ぬことはそんなに恐くないよ。パパが死ぬことに比べれば。どれだけ刑務所？に入るか判らないけど、これからも一緒に生きていけるならそれでいい・・・って思う。ベータだって、パパが生きてるなら本望だって思う」

デルタにここまで想われてるのに殺そうとするなんて、本当に許せない。１発くらい殴らないと気が収まらないよ。

「アンタ達スキュラがどれだけの刑期になるか判らないけど、暇があったら会いに行ってあげるわよ、デルタ」

「ティアナ・・・」

「うんっ！　出所したら一緒にまたゲーセンに行こうね！」

「スバル・・・。うんっ！　ありがとう2人とも！　ゲーセンかぁ！　ティアナ、またぬいぐるみ獲って！　コレクションしたい！」

何年か十何年か、プライソンや"スキュラ"の刑期はたぶん、かなりのものになると思う。お母さん達の拉致や局員の殺害、地上本部の襲撃、ミッドへの戦争行為。細かい罪状を出したらキリがない。

「（それでもいつか必ず出て来れる。あたしやティアはおばさんになってるかも知んないけど、でも一緒にまた遊びたい）・・・ゲーセンにショッピング、レストラン巡りとか」

「おお！　あっ。ねえねえ、イプシロンも一緒で良い？　あの子、デルタの妹なんだ！　ちょっと生意気だけど、とっても良い子なの！」

「あー、確かに生意気だよな」

「デルタといい勝負っスよ」

「うん。でもまぁデルタよりは礼儀正しいし、ヘイトもあんま溜まんない」

「んべ～。それでもデルタの方がお姉さんだもん。しっかりしてる

もん」

――トランスファーゲート――

背中越しでティアやデルタと遊びの予定を組み立てる。お母さんやギン姉たちがクスクス笑ってる中、「っ！？　デルタ！」チンク二尉が声を荒げた。振り向きざまに耳に異音が届いた。視界の端に真っ先に映り込んだのは、宙に浮いた何者かの右腕。手にしてる剣でデルタの後頭部を貫いて、額から飛び出した刃先がチンク二尉の右目に突き刺さってた。

「「デルタ！！」」

「「「チンクお姉ちゃん！」」」

「「このっ・・・！」」

刃を引き抜いた右腕に向かってお母さんとギン姉が拳を繰り出すと、ボキッって骨を砕いた音がして、手から零れ落ちた剣が地面に突き刺さった。敵はサイボーグじゃない。さらにティアが「逃がさない！」ってリングバインドを発動。右手首を拘束しようとしたけど、それより早く空間の歪みの中に右腕は消えて行った。

「デルタ！」

そしてあたしは膝から崩れ落ちてたデルタを抱きかかえる。デルタの目は虚ろで、「血が止まらない！」額に開けられた刺し傷から人

工血液や電解液が漏れ出してる。もう助からない。頭の中でそう答えがハッキリ出てる。でも、でもさ・・・。

「こんな終わり方・・・ひどすぎる・・・・！」

「・・・パ・・・・パ・・・・デル・・・死ん・・・・でも・・・・ずっと愛・・てる・・・・」

「デルタ・・・・？　デルタ！　デルタ！！」

あたしの腕の中で、デルタはプライソンへの愛情を口にしながら逝った。

「～～～～っ！　プライソォォ～～～～ン！！」

あたしはデルタの遺体をギュッと抱きしめて、デルタやベータ達"スキュラ"を始末しようとしたプライソンに怒りの声を上げた。

†††Ｓｉｄｅスバル⇒すずか†††

アルファを防衛しながらＬＡＳの迎撃を続ける私とシャルちゃんとトーレさん。アルファは"アンドレアルフス"の艦体上面に何十基とある砲台からエネルギー砲を撃ち続けて、ミッドの大気圏外を突破して来た隕石を迎撃してくれてる。

「あのさ、アルファ！　プライソンはどんだけＬＡＳを造ったわけ！？」

――光牙月閃刃――

シャルちゃんが４体のＬＡＳの首を刎ねながらアルファに訊ねた。ＬＡＳは管理外世界から盗掘して来た死体を改造したものだ。その人数イコール盗掘された死体の数になる。これまでの事を考えれば、５０００人クラスの死体が改造されてることになる。

『さぁ知らないわ。盗掘の実行部隊は私たちスキュラでもシコラクスでもスキタリスでもないもの』

シコラクスはクイント准陸尉たちサイボーグチームで、スキタリスはメガーヌ准陸尉や双子の娘のルーテシアとリヴィアの魔導師チーム。そして"スキュラ"は各兵器の管制機として造られたっていうアルファ達のチーム。残りはガジェットやスペアボディになるわけだけど・・・。

――インパルスブレード――

「ではスペアボディが盗掘していたのだな」

『まさか。スペアボディが完成したのは3週間ほど前よ？　プロフェッサーの暗殺だって、オリジナルである私が実行したもの。まぁ、あなたとチンクによって妨害されたけれどね！』

――アイシクルアイヴィ――

「でもだったら残りはガジェットだけになっちゃうけど・・・？」

私も氷の茨による拘束魔法で９体のＬＡＳの四肢を捕らえて、凍結させて身動きを封じさせる。そこをシャルちゃんとトーレさんで攻撃して、ＬＡＳを粉々に砕いた。そして２人で残りの３体を斬り捨てて、ここ管制室に攻め込んで来たＬＡＳを全滅させた。アルファも含めて私たちは「ふぅ・・・」一息吐いた。そんなところに・・・

『こちら本局・総務部、リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサです。これより隕石の迎撃を行います。私の魔法の属性上、少々気温が１０度ほど下がりますので、風邪をひかれぬようにご注意を』

"エグリゴリ"であり、本局総務部の総部長でもあるリアンシェルト少将から、サウンドオンリーでの通信が入った。リアンシェルト少将の正体を知ってる私とシャルちゃんは「え・・・！？」驚いて、アルファは「次元世界最強の魔導師・・・」唾を飲んだ。トーレさんは「本局もとうとう最高戦力を投入したか」安堵の息を吐いた。

『・・・では始めます』

その一言と同時、全身が総毛立つ程の魔力を感じた。キャノピーの向こう側の色が青色に変わった。駆け寄って外を見れば、空全体に見たことの無いデザインの巨大魔法陣が展開されていた。

「見ろ。魔法陣を通過して来た隕石が凍り付いている！」

「迎撃しなくても勝手に空中分解されてる・・・！」

「でもこれで・・・。アルファ。もう隕石の迎撃はいいから、ここから脱出しよう」

シャルちゃんがアルファにそう提案した。"エグリゴリ"で、スマウグっていう竜を単独で撃破するようなリアンシェルト少将なら、もう隕石の脅威は完全に無くなったって考えても良い・・・。

『・・・そう、ね。父さんも捕まってしまったし、このままここに居ても第2第3の刺客が送り込まれて来るだろうし・・・』

悲嘆に暮れた溜息を吐いたアルファ。その表情もとても辛そうで、悲しそうで・・・。でも『父さんへの文句は後にするわ』フッと自嘲気味に笑って、背中やうなじのプラグに繋がれていたケーブルを外した。ポッド内の水溶液がポッド土台の中に流れ落ちて行った後、ガラスが音も無く消えた。

「ふぅ。やっぱり肺で直に吸う空気は美味しいわ。まぁ、ＬＡＳの腐った肉の臭いは酷いけど」

素っ裸のまま濡れた前髪を指先で払ったアルファは、「少し待って。服を着るから」そう言って、ポッド側の床をトンッと蹴った。するとプシュッとその部分が音を立ててスライドして、そこからあの制服のような衣装が乗せられた台が上がって来た。ブラジャーやパンツにソックス、そしてブラウスとスカートとブレザー、最後にローファーを履いた。

「濡れた髪は・・・まぁいいか。さて。とりあえず今は捕まってあげる。父さんの目的が自殺なら、私たちにはもうやる事はないから」

そう言って肩を竦めたアルファと一緒に管制室から出て、アルファから教えてもらった乗降扉を目指して通路を歩く。

「そういや、この艦はオート航行できるんでしょ？　あなたが居なくなったら墜落とか・・・」

「私が抜けたところで墜落するような惰弱な兵器を、父さんが造るわけないでしょう？　ゆりかごに追随するよう設定した。大気圏外で局の艦隊に破壊してもらうわ」

「大気圏外に到達するより早くリアンシェルト少将の魔法で凍結され、空中分解されるだろうがな」

トーレさんの言うようにあの魔法陣を通過した物は、隕石すらも完全に凍結されるレベルだ。とにかく"アンドレアルフス"の処理も決まったことだし、あとはアルファを護送するだけ。

「っと、アルファ。死体の盗掘実行部隊の話、アレまだ終わってないでしょ。ガジェットじゃ無理だし。考えられるのは、信じたくないけどプライソンの上――最高評議会の息のかかった局員・・・」

シャルちゃんの話の内容に、私は「これから大変になるね」って呟いた。プライソンは全体通信を使って、自分の出自や兵器開発の依頼主が管理局の上層部だって発信した。もしこれに死体盗掘まで追

加されたら、管理世界は世論でメチャクチャに叩かれちゃう。

「父さんに協力してくれていたのは何も管理局だけじゃないわ。民間からも協力している組織や企業、フリーランス魔導師も居るの。もちろんイリーガルＯＫな、ね。それに・・・」

「ちょっ、なに？　なんでわたしを見るわけ？」

アルファの含み笑いにシャルちゃんが狼狽した。協力者の話題の中でシャルちゃんを、教会騎士を見るとなると・・・。どうしても嫌な展開が脳裏を過っちゃう。アルファを中央に三角陣形を取ってる私たちの先頭を往くシャルちゃんが立ち止まった。

「答えて、アルファ。あなた達の協力者の中に、聖王教会の聖職者や騎士が居たりする・・・の？」

「あぁ、それは――」

アルファにそう訊ねながらシャルちゃんが振り返ったその直後、「っ！」通路のずっと奥から強烈な魔力反応が生まれた。その間にトーレさんが「ったく！」舌打ちしながらアルファを腕を引っ張って、自分の背後に移動させた。

「もうっ！　今度は何！？」

シャルちゃんも"キルシュブリューテ"を構えて、また前へと振り返り直した。

――ラオフェンドナーーー

その直後、カッと強烈な閃光が発せられたから、私は何を考えるまでも無く「アイスミラー八陣の1！　ロングサーペント！」を発動。通路いっぱいに展開されたシールドが8枚と並ぶ。閃光は瞬きの間に1枚目のシールドに到達して、「え・・・！？」一瞬で砕いてきた。1枚目から7枚目まで砕かれたけど、最後の1枚でなんとか抑えきれた。

「なに、コイツ・・・！」

閃光の正体は人だった。漆黒の学ランに学生帽にマント、そして何より目が行くのはその人の顔。どこで手に入れたのか翁の能面を付けていて素顔が確認できない。デバイスらしき物は持っていないんだけど、全身から紫色の電気が放電されっ放しで、その電気を纏わせたパンチ1発で最後のシールドを破壊した。

「手加減無用で吹っ飛ばす！」

――光牙烈閃刃――

シャルちゃんが"キルシュブリューテ"を振り下ろして、刀身に纏わせてた真紅の魔力を剣状の砲撃として発射した。その人は直撃を受けて、砲撃に押し切られるように通路の奥へと吹き飛んだ。

「アルファ！　アイツらがさっき言ってた協力者なの！？」

「おそらくね。父さんの裏切りに怒って、手の届く私たちを殺しに来たのかも。私たちを殺したところでもう意味も無いのに・愚かな事を」

私とトーレさんでアルファを挟み込むようにして警戒しつつ、さっきの襲撃者に備えている中でトーレさんが「どうするイリス。奴を撃破して大手を振って脱出をするか、もしくは・・・」そう訊いた。

「律義に出入り口から出るよりは、直通出口を作った方が早い！」

"キルシュブリューテ"のカートリッジをロードしたシャルちゃんは、もう一度刀身に魔力を付加した。そしてアルファはスキルの「メタルダイナスト」を発動して、私たちと襲撃者を隔てるように通路の鋼鉄を操作して壁を作った。

「大人しく殺されてやるほど私も優しくは無いわ、襲撃者さん？」

「しっかり罪を償ってもらわなければな。でないとドクターも報われん」

トーレさんの話にアルファが「ふん」って鼻を鳴らした直後、ゴォン！と鋼鉄の壁の向こうから大きな音が響いてきた。私は「シャルちゃん！」と急かす。シャルちゃんが「んっ！　光牙・・・！」"キルシュブリューテ"を振り上げた。

――ギガンティッシュ・シュニット・ヴンデ――

「「「「っ！！？」」」」

壁の向こう側とはまた別に強大な魔力反応を探知。それは頭上からで、一斉に通路の天井を見上げた瞬間、キンッと金属が断ち切れる音が耳に届いた。続けてズズン！と振動が襲って来たから、「何・・・！？」辺りを見回して・・・気付いた。

「「「「アルファ！？」」」」

「ぅあ・・・！？」

肩甲骨辺りから下腹部に向けて斜めに切断されたアルファの上半身がゆっくりとスライドし始めた。さらに"アンドレアルフス"自体も真っ二つに切断されたみたいで、私たちとアルファを隔てて通路が斜めにズレ始めた。

「油断し過ぎた！　ここまでの術者が2人も潜んでたなんて！」

「このままお前を死なせはしない！」

――ライドインパルス――

「すずか！」

――真紅の両翼――

「うんっ！」

トーレさんがスキルを使って、宙に放り出されたアルファの上半身に目掛けて飛んだ。私とシャルちゃんも切断された個所から飛び出して脱出して、私は降って来た下半身をキャッチ。やっぱり機械が大部分占めてるから結構重い。

「迎撃してくれる！」

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

シャルちゃんが翼を羽ばたかせて急上昇して、新手の迎撃に向かった。私も電撃の襲撃者の警戒をしないと。周囲に「バインドバレット・・・！」をスフィアとして１２基と展開させておく。シャルちゃんから『交戦開始！』の報せを受けた。そのすぐ後に"アンドレアルフス"の艦首側がバラバラに寸断されて、３ｍ級の鋼鉄の破片が周囲に散らばった。

「トーレさん離脱を！」

「ああ！　アルファ！」

「大きな声を出さないで。痛覚は遮断しているし、ショック死しないように今調整ちゅ――っ！」

――カタパルトヴィンデ――

「っぐ！？　何をす――」

アルファがいきなりトーレさんを突き飛ばした。アルファがトーレさんから離れて宙に放り出された瞬間、アルファの左眼球と喉と胸に鉄パイプが突き刺さった。

「「っ！？」」

「・・・あ、あぁ・・・父・・・永遠・・・愛して・・・ます・・・」

「アルファ！　逝くな、アルファ！」

改めてアルファを抱き止めたトーレさんが声を掛け続けるけど、アルファはもう・・・。トーレさんが開いたままのアルファの目をそっと閉じさせた。

『ああもう！　ダメ、逃げられた。そっちの状況は？』

『アルファが・・・殺害された』

†††Ｓｉｄｅすずか⇒アリシア†††

「アンドレアルフスが・・・！」

ゆりかごの後ろを飛んでた護衛艦の"アンドレアルフス"が突然真っ二つになったと思ったら、前半分がさらにバラバラになった。真

紅色と藤紫色の魔力光が側にあるのが薄らと見えるから、すずかとシャルが側に居るのが判る。

「つうか、あのデケェ艦をあんなアッサリと斬りやがる戦力がまだ居んのかよ・・・！」

「アレもサイボーグの誰かのスキルでしょうか？」

ヴァイスとアンジェの視線を受けたイプシロンが「ううん。イプシロンは知らない」って首を横に振った。だから「ひょっとして身内？」ってわたしは漏らした。本局から応援も来てくれてるし、中にはそういうレベルの局員か騎士が居てもおかしくない。もしかするとシャルがやったのかも・・・。

「ですが市街地上空での撃墜は禁止されていたはず・・・」

「あー、そうだよね。現に今まさに護衛艦が墜落し始めてるし」

頭を失った艦後部はどうなるか。もちろん墜落だ。でもわたし達には焦りの感情は無い。

――雪皇鯨（ペークシス・パライナ）――

何せリアンシェルトが居る。ゆっくり墜落し始めた護衛艦の後部やバラバラになった艦首部目掛けて、出現したゆりかごの3分の1ほどの大きさの氷のクジラ6頭が突進。その大きな口で破片を呑み込んで、後部には頭突き。それで護衛艦は急速で凍り付いて、空中分

解した。

「開いた口が塞がらない・・・。なに、あのデタラメな強さ？」

「おう、残念だったなプライソン一派。お前さん達の計画は端っから失敗する運命だったわけだ」

「・・・イプシロンはもう、計画の事なんてどうでもいいと判断してる。とにかく今は、お父さんを死なせないようにしたい。イプシロン達は不老だから、何十、何百年でも牢に入れられても何でもないし。その間に説得を試みる」

決意を固めたイプシロンが両手をギュッと握りしめた。正直、ミッドをここまで混乱させたプライソン一派には怒りもあったけど、こうして話をしてみれば"スキュラ"はただ、父親の為に、って理由だったんだよね・・・。

『こちら機動六課、月村すずかです！　プライソン一派のサイボーグ・スキュラの1人、アルファが何者かに暗殺されました！　アリシアちゃん、ヴァイス陸曹、イプシロンの暗殺に注意して！』

「え・・・？」

「「「暗殺・・・！？」」」

すずかから通信が入った。内容はあっちゃダメな最悪な展開なもの。イプシロンが「アルファお姉ちゃんが、死んだ・・・？」弱々しい

声で漏らして、フラッと倒れ込みそうになったから「イプシロン！」わたしは抱き止めた。

「と、とにかく・・・！　了解！　イプシロンの警護を強化するよ！」

「グランセニック陸曹！　ヘリをこの場から動かさないようにお願いします！　アリシアさんはそのままイプシロンの側に。防御は私が行います！　ジークファーネ！」

――シュッツェンクッペル――

魔力の幕がグンッと伸び出して、ヘリの周囲をグルグル回って球状の結界になった。そしてわたしは「手の空いてる魔導師・騎士は、ヘリの護衛をお願いします！」って応援要請を出す。隕石はもうリアンシェルトが対処するから、フェイトたち六課や他の航空隊、騎士隊も手が空いてるはず。

『了解！　六課スターズ1とライトニング1が向かいます！』

『アリシア、待っててね！』

フェイトとなのはが来てくれる。もうそれだけでも十分な戦力。でもさらに外に居るトリシュや他の魔導師・騎士も集まってくれることになった。ヴァイスが「おお、こりゃ世界で一番安全じゃないっすか？」って感嘆の声を漏らした。

「まったく同意見。安心して、イプシロン。絶対に守り抜くから」

「これも犯罪者の結末なんだって思えば、イプシロンは死を受け入れる」

「はあ？　あなたねぇ、仕方ないからって簡単に死を選ばないで。生きてしっかり罪を償うのが、あなたや他のスキュラ、あとプライソンの役目。判った？」

「あぅ、あぅ、あぅ、あぅ」

イプシロンの額を人差し指でツンツン突く。突きを続けようとしたら「判ったからもうやめて」って両手で額を覆って防御。その様子にわたしやヴァイス、アンジェが含み笑いしていた時・・・

――トランスファーゲート――

「「「「っ！？」」」」

いきなり目の前に人が出てきた。昔の日本の学生みたいで、学ランに学生帽にマントって格好。気になるのは、オペラ座の怪人みたいな仮面を付けて素顔を隠してること。髪も目出し帽を被ってるのか見えない。でもどう考えても敵だ。

――トランスファーゲート――

「おいおい、なんだおま――っ！」

「武装を解除して、素顔を見せなさ――」

目の前の空間が波打ったって思ったらそこから人の両手が出て来て、口を開けてたわたしとヴァイスの口の中に銃口を突っ込んで来た。デバイスじゃなくて完全に質量兵器だ。発砲されたら確実に脊髄が吹っ飛ぶ。アンジェは銃じゃなくてナイフで、頸動脈に刃を当てられてる。波打つ空間から出てる腕の細さから見て女性のものだ。わたしとヴァイスは男性の腕。目の前に1人居るから、敵は最低で3人いることになる。

『喋れなくても念話でフェイト達に・・・――ん？　フェイト？　フェイト！』

念話が妨害されてた。外との連絡手段を封じられた。ヘリを覆ってるアンジェの魔力幕だけど、今解除すると即座に首を掻き切りそうだし・・・。

「お前たちは、イプシロンの・・・というよりはスキュラの口封じのために来たの？と問うよ」

そう訊ねたイプシロンの首に右手を掛けた目の前の男は、無言のままで右手にグッと力を込めた。

「っぐ・・・！　お父さん・・・大好き・・・」

呻き声を漏らしながらもプライソンへの想いを漏らしたイプシロンが、わたしを見て小さく微笑んだ。その次の瞬間、バキッとイプシ

ロンの首があまりにも容易くへし折られた。頭部と切り離された胴体が力なく倒れ伏して、物言わなくなったイプシロンの頭を捨てた男はわたし達を一瞥することなく、また音も無くこの場から消えた。加えてわたし達の行動を制限してた3本の腕も引かれて、揺らぎの中に消えて行こうとしたけど・・・。

「このぉぉぉーーーーッ！！」

――ブルーバレット――

「ふざけんじゃねぇぇぇーーーーッ！！」

――シューートバレット――

わたしとヴァイスは即座にデバイスの銃口から魔力弾を、消えかけの空間の歪みの中に連射してやった。魔力弾を呑み込んだ揺らぎはなんの反応も無く消失した。わたしは床に転がってるイプシロンの頭に「護れなくてごめんね・・・」謝った。

『こちら聖王教会シスターー、プラダマンテ・トラバントです。最悪のご報告です。・・・本件首謀者、プライソンが・・・死亡しました』

プライソンを捕まえてたシスターー・プラダマンテから、さらに最悪な展開な報せが入った。

ＡＮＳＵＲⅥ其は恐怖に彩られし宵闇の化身なる者～ＬｅｓｅＦｅａｒ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「・・・」

『マイスター、大丈夫？』

プライソンをこの手で殺し、レーゼフェアを探すために反対方向へと向かって飛んでいた。そんな中、俺の胸の内に渦巻くのは混乱だ。奴は死に際に、リアンシェルトは記憶を取り戻している、なんて言葉を遺して逝った。俺はありえないと否定したが、考える時間が出来るとひょっとして、という思いも生まれる。

（今考えればあの子の行動には不審な点があった）

俺の正体をユーノから隠すように大戦時代の書物を隠し、スマウグ戦でもはやて達を護り、今も彼女たちやミッドを護るために出張ってきている。以前あの子は、自分の居場所を護るため、と言っていた。いくらなんでもそんな理由で"堕天使エグリゴリ"が動くのか？

あくまで俺を殺すのを主目的としているのに・・・。

（そもそも弱い者いじめが嫌だから俺を見逃すというのも変な話だ）

極めつけはシュヴァリエルに負けて植物状態となっていた俺を再生

させた。

――待て、リアンシェルト！　なぜ俺を助けた！――

――あのような無様な結果で死なせるなど、エグリゴリとしては納得できないですから。神器王はエグリゴリとの戦闘によって敗死する。それがこの戦の結末です――

スマウグとの決着後、俺がそう問い質すとリアンシェルトはそう言った。そこまで拘る理由・・・。順を追って"エグリゴリ"と対峙させようとするのが俺を死なせないため、強くするため、これまでの言動が全て演技だとすれば・・・。彼女の心にどれだけの傷を負わせていたことか・・・。

（リアンシェルト、お前はなんて・・・！）

俺や自身を騙してまで、俺に殺されようと決意したあの子への複雑な感情に拳を握りしめていたところに、『ルシル君！』いきなり通信が入った。相手は「はやて！？」だった。これまでずっと通信も念話も遮断されていたはずだが。

『ルシル君、そっちの状況はどうやろ？』

「今レーゼフェアの居るだろう場所へ向かっている最中だ」

オリジナルのプライソンの事は黙っておく。人殺しをしたことは出来るだけ知られたくない。愚かな考えだ、今さらな・・・。

「そっちは・・・リアンシェルトが来たんだな」

『うん。今のところはしっかり隕石を迎撃してくれてる。とゆうか、リアンシェルト・・・少将のおかげで今、ミッドはなんとか無事でいられる状況や。そやけど・・・』

はやては若干不安そうに言った。リアンシェルトは、俺以外には手を出さない、そう宣言しているからはやて達に危害は加えないだろうが、それでも"エグリゴリ"の1機だという事実に怯えているのだろう。

「とりあえず、今のところはリアンシェルトは味方だと考えていい。彼女も彼女で自分の立場を大事にしているようだしな」

『そうか？　ルシル君がそう言うなら信じる』

嬉しいことを言ってくれたはやてが、すぐに少し沈んだ表情を浮かべたことに気付いて「何かあったのか？」そう訊いてみると、彼女は僅かに逡巡した後に『プライソンが急死したんよ』と答えてくれた。

（どういうことだ？　まさかオリジナルの死と直結していたのか・・・？）

オリジナルであるプライソンすら知らなかったのだろうか。オリジナルとクローンの生死直結を。まぁいい。これで俺の正体がプライ

ソンから漏れることはなくなった。

『ルシル君の複製能力や左目の視力について、なんも聴き出せへんかった・・・。ホンマにごめんな・・・』

はやてが沈んでいた理由がそれだった。複製権限はオリジナルから取り戻した事を伝えるべきだろうが、ここは「レーゼフェアが持っているかもしれない。だからそう不安がるな」と伝えておく。どの道、俺の左目の視力は取り戻せていないしな。レーゼフェアから視力と一緒に権限も取り戻した、ということにしておこう。

『・・・ホンマにゴメン』

「大丈夫だよ、はやて」

『うん。そんじゃルシル君。気を付けてな。ちゃんと帰って来――』

「ん？　はやて・・・？」

突如として音声が途切れた。モニター越しのはやては何か喋っているようだが、残念ながら聞こえない。試しに「はやて」と呼ぶが、俺の声もどうやら向こうに届いていないようだ。そのことに気付いたはやても口をパクパクとしている。

「・・・じゃあ、アグレアスは必ず止めるからもうしばらく耐えてくれ、っと」

俺は人差し指に魔力を付加し、宙に指を走らせてそう文字を書いていく。はやてが力強く頷くと口パクで、待ってる、と返してくれた。そして微笑み合いながら通信を切った。

『マイスター・・・！　距離３００ｍ先、神秘を確認』

アイリから報告が入ったことで、俺もレーゼフェアの神秘をハッキリと捉えることが出来た。全長数ｋｍの"アグレアス"内を翔け、

「あそこだな・・・」スライドドアを視認する。

『あのねマイスター。リアンシェルトの事で悩むのはしょうがないと思う。でも今は、このアグレアスを止めるために・・・』

「アイリ・・・。すまない、ありがとう。そうだな、今は・・・」

ミッドを救うのを優先しなければ。リアンシェルトについては今回の一件が片付いてから問い質せばいい。これまでの事を考えればはぐらかされるだろうが、それでも強引に聞き出してやる。

「アイリ、恐らく苦しい戦いになる。負担も大きいだろうが・・・」

『それについては気にしないでね。アイリはマイスターを支える融合騎だもん。辛いことも精いっぱい受け止めるよ。だってマイスターの事が大好きだもん。一緒に戦って一緒に勝とう。ね？』

「本当に俺には勿体ない相棒だよ」

『えへへ　』

心強過ぎる味方のアイリを胸に、俺はニュートラルのイェソドフォルムで"エヴェストルム"を起動し、「せいっ！」スライドドアに向かって振るった。袈裟斬りで寸断されたドアが崩れ始めたところで、閃光系砲撃の「アダメル！」を撃ち放って室内へと吹っ飛ばす。破壊時に発生した煙を突っ切ると、そこはプライソンと戦った広間と全く同じ部屋。唯一の違いは玉座が無く、そして「レーゼフェア」が居ることだ。

「あ、やっと来た！　おっそーい！　あと15分でミッドに墜落するんだから、もう少し手早くプライソンを殺してほしかったよ！」

やれやれと言った風に肩を竦めるレーゼフェアは、両腕に篭手型神器・"聖狩手甲エオフェフ"を装着して、「さぁ始めようよ！　僕は心中なんて真っ平御免だし！」構えを取った。

ＶＳ・―・―・―

「イドフォルム・・・・！」

"エヴェストルム"を実体剣から神秘付加された魔力刃へと神器化させる。残り15分。俺たちが脱出するための時間も必要なため、もう少し短い時間になるだろう。レーゼフェアに訊きたいこともある。リアンシェルトの件で、だ。それを計算して戦闘を終わらせなければ、俺やアイリもミッドと心中になる。

「果て無き闇あるところに限り無き光あり。二天の狭間で生まれるは永劫の影。我は影の王、闇の支配者、光の仇敵。世は何時しか闇に堕ち影に覆われ光は露と消ゆ♪」

――闇色に染めたる影国（ブロキュス・ブルビエガレ）――

――舞い降るは、汝の煌閃（コード マカティエル）――

レーゼフェアの足元から影が勢いよく拡がり始めた。対する俺は光槍を周囲に展開。そして「ジャッジメント！」と号令を下して射出し、天井・壁・床にランダムに突き立てて行く。炸裂させずに維持することで、あの子の影の支配圏を少しでも狭めることが出来るはずだ。

「無駄だよ！　それだけじゃ僕の影を全て消せない！」

――血肉を求む伝道者の凶つ剣（ミシオネール・クリュエル）――

光槍によって消滅している範囲外の影より無数の剣が伸びて来た。

全方位からの刺突・斬撃攻撃だが、避けられないことはないし迎撃だって可能だ。数年前のプライソンでのアジトとは違うところを見せてやる。"エヴェストルム"の魔力刃を構成している魔力を無属性から閃光系に変化させ、「ふんっ！」伸びて来る影剣を斬り捨てていく。

「マグニ！」

――噛(コード)み砕け、汝(マトリエル)の凍牙――

術式や魔力、身体能力を強化するマグニを発動した上で氷雪系の龍・マトリエルを発動。その巨大な口でレーゼフェアに噛みつこうとする。あの子はダンッと強く床を踏みしめ、「串刺しだ！」新たな影剣を床から突き出させて氷龍を迎撃した。氷龍は一瞬で破壊され、氷の破片がぶわっと周囲に舞った。それとほぼ同時に俺はあの子の背後へと回り込む。

「この・・・・！」

振り向きざまの裏拳を繰り出すレーゼフェアだが、すでに俺は"エヴェストルム"の穂先を奴の脇腹に向け終えている。しかし発射するよりあの子の裏拳が到達した。

「ふえ・・・・！？」

レーゼフェアが驚きの声を上げた。何故ならあの子の裏拳が空振ったからだ。とは言っても俺の鼻っ面をギリギリ掠るようなものだっ

たが。

「惜しかったな！」

先ほどの氷龍には2つの意味を込めていた。1つは純粋に攻撃として。まぁ直撃すれば儲けもの程度としか考えていなかったが。もう1つが目晦ましとしてだ。迎撃された場合は、至近距離での攻撃へ移行するつもりだった。そのための下準備。氷の破片が光を乱反射させ、レーゼフェアの間合いを狂わせるというものだ。おかげでの子の裏拳の直撃は免れた。いや本当ギリギリだったが。

――戦滅神（コード・ヴィズル）の破槍――

穂先より放った雷撃系砲撃の直撃により、「のわぁぁぁ！」レーゼフェアが吹っ飛んだが、宙で体勢を立て直して床に降り立った。しかしそこはまだ「攻撃範囲だ」と指をパチンと鳴らす。あの子の側に突き立っている光槍を爆破させると、あの子は「ひゃあん！」悲鳴を上げて閃光爆発に呑み込まれた。

「第二派装填（セカンドバレル・セット）！」

爆破させた分以上の光槍を再展開させ、「ジャッジメント！」光に呑まれたままのレーゼフェアへ向けて射出して床に突き刺していく。

――影渡り（シュルブリーズ）――

背後に気配を感じ、俺は床を蹴って前へ向かって跳び退く。アイリ

が『砲撃体勢！』そう教えてくれた直後、感じ取れていた気配からレーゼフェアの魔力が発せられた。

「そぉーーいっ！」

――黒き閃光放つ凶拳（ソワール・エロジオン）――

急上昇しつつ反転したすぐに足元を砲撃が通過して行った。レーゼフェアは突き出していた右拳を背後へ振り戻した反動でダッシュ開始。そんなあの子へ向けて、俺は周囲に閃光系魔力スフィアを8基と展開。

「往けッ！」

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

8発の上級砲撃を連射。レーゼフェアは「閃光系は通用しないって知ってるよね～？」陽気な声で砲撃を殴って粉砕した。砲撃が粉砕されるまでの間に放射した魔力弾があの子に着弾していくが、「あいたた！」そう軽く言いながら突破して来た。

――戦滅神の破槍（コード・ヴィズル）――

そんなレーゼフェアの背後に雷撃系スフィアを1基と展開し、猪突猛進なあの子の背中に向けて発射する。あの子の足元は砲撃や光槍によって照らされているため影は出来ていない。影渡りによる回避も影操作による防御も出来ない。が、「ハズレ！」あの子はヘッド

スライディングすることで砲撃を回避した。

「リフレクティブミラー！」

複製に頼らずにすずかの反射魔法を発動。レーゼフェアの頭上を通過して俺に戻って来た砲撃を反射鏡で反射させて、今度はあの子の真正面へと向かわせる。立ち上がったばかりのあの子の視界が砲撃で塞がれたのを確認し、あの子の直上へ移動。

「忘れたのぉ？　閃光・炎熱・雷撃系は、僕のエオフェフの前じゃ無力だってことをさ！」

ただの拳打で上級の雷撃砲が粉砕される。レーゼフェアの所有する神器は、神属の威厳を示すとされる閃光と炎熱と雷撃の3属性を無力化させることの出来る籠手・"聖狩手甲エオフェフ"の複製品。そんなことくらいは理解している。俺がオリジナルの持ち主から複製し、レーゼフェアに授けたのだから。

「って、あれ？　居ない・・・？」

砲撃が粉砕された際に放電現象が発生した。おかげでレーゼフェアの視界をさらに妨げたことで、「ふんっ！」俺の直下に居るあの子の背中に"エヴェストルム"を突き立てることに成功した。零距離での一撃を狙ったが・・・

「あま～い！」

――高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）――

レーゼフェアの背中から放射状に２０枚と展開されるクジャクの尾羽のような魔力翼。その衝撃であの子の背中に突き立てていた魔力刃が砕かれ、さらには俺も「っく・・・！」吹っ飛ばされた。

「油断したね？　でも残念！　僕も本気を出すよ！」

――昏き淵より手招く罪深き聖域（サンクテュエール・コンフェッシオン）――

広間一面を覆っていた影が急速にレーゼフェアの元へ収束していく。あの子の足元に広がる影から伸び出すのは、何百本という先端が剣状になった影の触手。あの子を護るように周囲をうねうねと蠢く。

「まずは厄介な照明灯（やり）から排除したげるよ！」

ブワッと広範囲に向けて伸び出す触手が、苦手なはずの閃光系魔力で創られた光槍に巻き付いて呑み込み続ける。魔術は属性の優劣以上に神秘の優劣が重要だ。レーゼフェアの影が俺の光槍の神秘が上回ってしまったのだろう。

「さぁ空に舞っちゃえよ、神器王！」

足元の影をさらに拡げたレーゼフェアが腕を振るうと、３ケタ程の影の触手が鞭のようにしなりながら超速度で伸びて来る。空戦形態は維持しているため、その場に留まることなく、ゆりかごの玉座の間の３倍近く広いこの部屋の宙を飛び回って回避。俺の両拳の前方

に円陣を1枚ずつと展開し、その前方に閃光系の魔力スフィアを10基ずつの計20基を創り出す。

「はっ！」

――浄壊（コード）なせ、汝の光輝（ザグザゲル）――

円陣を殴ってスフィアを魔力弾としてバラけて放つと、無数の触手を足場にして俺の元へ飛び跳ねて来たレーゼフェアが「なにコレ・・・？」小首を傾げた。もし万が一にもレーゼフェアの記憶も戻っていたとすれば、ザグザゲルの効果がどういったものかは知っているはずだが・・・。

（レーゼフェアも演技として知らないフリだとすれば・・・）

胸の内でモヤモヤと渦巻く迷い。リアンシェルトの記憶が戻っていると知らなければ、レーゼフェアとも何も気にすることなく闘えていた。だがあの子の記憶も戻っているとなれば・・・。

（確かめてみるしかないか、やはり・・・）

魔力弾20発はレーゼフェアを避けるように床に着弾すると直径10m程の半球状に炸裂し、床に広がる触手を伸ばす影を一瞬にして消し飛ばしていく。影の本体から切り離された触手上部も宙に掻き消えて行き、俺の至近にまで迫って来ていた影剣も消滅した。触手を足場としていたあの子が「ふわっ？」ガクッと体勢を崩したが、背中に展開している魔力翼を活かしてすぐさま姿勢制御。しかしそ

の僅かな隙を突いた俺は・・・

――力神（コード・マグニ）の化身――

「捕らえよ！」

――リヒテンファーデン――

対レーゼフェア用に組んでおいた閃光系魔力によるバインドを発動する。サファイアブルーに輝く魔力の糸に四肢を拘束されたあの子は「閃光系とか面倒くさいなぁ、もう！」そう言って足掻きを見せるが、マグニによる強化を受け、なおかつ弱点属性によるバインドだ。時間を掛ければ破壊できるだろうが、その時間は与えない。さらにバインドの発光量を上げてやる。

（エオフェフにじかに接触しなければ問題はない！）

「ちょっ、眩しい！　眩しいんだけど！」

レーゼフェアの全身が閃光に呑まれたことで、影による脱出もバインド破壊も不可能となった。弱点属性がハッキリしているあの子は、俺の魔力と神秘がしっかりしていればおそらく"エグリゴリ"の中で一番弱い。だからこそ弱点属性の少ない風嵐系のフィヨルツェンとコンビを組ませていたわけだが。

「レーゼフェア！」

「なにさ！　これで勝ったと思わないでよ！　この部屋は影が出来やすいように設計されているんだから！」

――影分身（トリニテ・アヴェーヌマン）――

レーゼフェアの強みは、自身の影だけでなく遠く離れた影をも支配できる事。現に俺やあの子から離れた地点に出来ている影から、あの子と全く同じ姿の人型の影が何十体と出現した。"エヴェストルム"の穂先に閃光系魔力を付加し、携えている左手を右肩にまで持って来て・・・

「ふんっ！」

勢いよく横に振り払いつつ穂先から光線を放ち、床に横一線のラインを刻み込む。それは俺たちと影分身を隔てる境界線だ。

――天地（コード）に架かれ、汝（ルシフェル）の明けの明星――

"アグレアス"に穴を開けないように威力を限界にまで絞った状態で発動したルシフェル。ライン上に沿うように連続で砲撃が立ち上り、攻撃力を伴った光の壁としてそびえ立つ。本来は屋外で発動するべき対地空多弾砲撃ゆえ、今のルシフェルは４分の１もその効果を発揮できていない。が、レーゼフェアの影分身を蹴散らすことくらいは出来る。

「どうなったの！？　見えないよ～！」

「お前の分身は全て消し飛んだよ。さて、レーゼフェア。お前に2、3、訊きたいことがあるんだがな」

「はあ？　僕が神器王の疑問に答えるとか、そんなのあるわけな――」

「リアンシェルトはヴァルキリーとして記憶が戻っているという。お前はどうなんだ？　レーゼフェア」

「っ！　は、はあ？　何を言ってるのか解らないよ！　き、記憶？　ヴァルキリー？　僕、そんなの知らないもん！」

この質問をするためにレーゼフェアを捕らえたんだが、返って来た答えを聞いて「なるほど・・・」俺は自分の愚かさを呪った。あの子の返答の最初、息を呑んだのが判った。まさか、が現実味を帯びていく。

「レーゼフェア。お前も記憶が戻っているんだな」

「・・・知らないもん！　はあ？　僕はヴァルキリーなんて知らないもん！　僕はレーゼフェア！　エグリゴリのレーゼフェアだもん！」

「レーゼフェア・・・」

「うるさい！　知らないって言ってるでしょ！　むぅ～！　もう放せよ～！」

エグリゴリ(このこ)達はずっと洗脳され続け、記憶はもう戻らず、俺と敵対して、破壊してやることが救済になるという考えしかなかった。父親として最低過ぎるだろう、さすがに・・・。もう少し疑うべきだったんだ。

「頼むよ、レーゼフェア・・・」

バインドの発光量を完全に抑え、さらにバインド自体を解除してレーゼフェアを解放する。アイリが『マイスター!? それは危険過ぎ!』と言うが、素直にさせるにはこれくらいしなければならないだろう。自由になったあの子の頭を胸に抱く。

「っ!」

「本当に記憶が戻っていないなら、今すぐ俺を殺してみろ。出来るだろ、エグリゴリのレーゼフェア・・・」

今の俺は完全に無防備だ。正直、今の状態でレーゼフェアの全力を受けたら死ぬ自信がある。でも信じよう。だってお前は昔から嘘を吐く時はいつも、はあ?とか、もん!が多いものな。

・―・―・回想だ・―・―・

今日もヨツンヘイム連合との戦闘を無事に終え、私たち"アンスール"や"戦天使ヴァルキリー"は、アースガルドはセインテスト王領・グラズヘイムに在るヴァルハラ宮殿へと帰還した。私と恋人のシェフィリスは仲間たちと別れ、本作戦に参加した各"ヴァルキリ

ー"の状態を確認していた。

「ブリュンヒルデ隊が留守番でも、戦線押し返しは楽だったね」

「あの子たちはここ最近ずっと稼働していてくれたしな、少しは休ませてやらないと」

「ティーナやシュヴァリエル達も休ませてあげたいんだけど・・・」

「ヘルヴォル隊は出来るだけ出したいな。あの子たちの高火力と防御力は魅力だからな」

今回の戦闘にはティーナ率いるヒルド隊とシュヴァリエル率いるヘルヴォル隊、そしてクリスト率いるゲイルスケルグ隊の3隊に参加してもらった。ヘルヴォル隊は特攻隊のため、ダメージを負う割合が高い。ティーナ個人もミサイル娘なため、ヘルヴォル隊と並ぶダメージ率だが、撃破率が異様に高い。ハイリスクハイリターンというわけだ。

「アプリコットに回復最優先を指示しておくよ。これから戦勝会だし、主役でもあるあの子たちが参加できないのは可哀想だもの」

「まぁアプリコットから送られてくるデータを見る限り、すでに回復率が８０％超だけどな」

なんてシェフィと話をしていると、『お父様、お母様！　プリメーラですが、今お時間よろしいですか！』そんな念話が入った。相手

は「プリメーラ？」だった。

『どうしたの？　なんか怒っているようだけど・・・』

『そうなんです、お母様！　お父様と一緒に1階の第3調理室へ来て頂けますか！』

プリムがお怒りモードに入っている。感情統制プログラムが強レベルなプリムが怒るとなれば、それは姉心が働いている時だ。"ヴァルキリー"の少年組が何かやらかしたかな。そういうわけで指定の調理室へ来たんだが・・・。

「聴いて下さい、お父様、お母様！　この子たち、戦勝会で振舞われるデザートやスイーツをつまみ食いして、さらには2皿を空にしたんです！」

腕を組んで仁王立ちのプリムの隣には少年組の1人であるソアラが居り、2人の目の前には正座をさせられた"ヴァルキリー"が7人。リオとミオとナーティア、それにコゼットとエミリアとカレンの予想通りな少年組（身長が155cm未満）の一部と、それに「レーゼフェア・・・」だ。

「はあ？　僕はなんのことか知らないもん。最初から空だったもん」

「どの口が言いますか！　ヴァルキリーの開発ナンバリングで1ケタという姉のあなたが、率先して食べていたとソアラから報告が入っています！　リオ、真面目なあなたが居ながらどうして止めなか

ったの？」

「あぅ～。だからダメだって言ったのにぃ～・・・」

名指しを食らったリオがしょんぼり肩を落とした。自分以外の６人はそれほど真面目ではない、外見通りの子供の精神だから止めきれなかったんだろうな。うん、これは仕方がない。真面目君１人が騒いだところで止められないものもある。

「僕もダメだって言ったもん。でもこの子たちがさ～」

「「「「「「ええええーーーっ！」」」」」」

レーゼフェアが肩を竦めると正座させられていたリオ達が叫び、「裏切り者ぉーー！」と罵った。対するレーゼフェアは「はあ？　なんのことか知らないも～ん」としらばっくれる。

「嘘おっしゃい、レーゼフェア！　嘘を吐く時いつも、はあ？と、もん！が付くその口クセ！　さらに言えば、口の周りにマロンクリームが付いている！」

プリムがビシッとレーゼフェアの口を指差すと、あの子は袖口でグイッとクリームを拭って「僕、食べてないもん」白々しい嘘を吐いた。ここでとうとう妹に当たるプリムが「ふんっ！」レーゼフェアの頭に拳骨１発。

「いだっ！　殴ることないじゃん、プリメーラ！　僕って一応お姉

さんなんだよ！？」

「なれば少しは姉らしく振舞ってくれませんかねぇ！　もう！　お父様とお母様も何か言ってください！」

私とシェフィは顔を見合わせて苦笑いをし、「それじゃあみんなで新しく作ろう」と提案。私やシェフィと一緒に菓子作りが出来ることを、リオ達だけでなくプリムまでもが「本当ですか！？」と満面の笑顔を浮かべた。

「僕、食べる係だから～」

「に・が・さ・な・い♪」

逃げようとしたレーゼフェアの両肩に手を置いたプリムは、レーゼフェアを味見係ではなく後片付け戦力として居残らせた。

・―・―・終わりだ・―・―・

「・・・出来ないよ・・・」

レーゼフェアがそう漏らした。確定した。リアンシェルトはまだ確認できていないが、レーゼフェアは確実に記憶を取り戻している。俺は「どうしてこんな・・・」さらにあの子を抱きしめる力を強めた。

「何で戻って来なかった・・・。記憶が戻っているのなら、どうし

て俺のところへ戻って来てくれなかったんだ・・・？」

「戻れるわけない。僕は、僕たちは、大好きな人たちをこの手で殺した。洗脳されてた？　そんなの言い訳だよ」

「それはお前たちが悪いわけじゃない！　責められるべきはお前たちのプロテクトをしっかりしていなかった俺だ！」

"ヴァルキリー"が洗脳されるわけがない、という油断が招いたのが堕天使戦争だ。究極的な原因は開発者であり、こうして生き残っている俺にある。

「それでも僕たちが犯した罪は消えないんだよ！　憶えてる！　この手でフォルテシア様を殺したこと！　血の温かさも、肉を斬った感触も！　あの日から今日までずっと、悪夢として僕を軋ませる！」

ドンッとレーゼフェアに突き飛ばされた俺は「きっとアンスールのみんなは恨んでいない！」と伝える。俺とシェフィが"エグリゴリ"の殲滅を決めた際、そして実際に破壊した際、"アンスール"のみんなは悲しんでくれた。しかも戦闘の中で戦死しても、遺されたメンバーの中から"エグリゴリ"を恨む声が出ることは無かった。

「たとえそうでも！　自分自身を許せないんだよ！　記憶が戻って、自分たちが犯した罪を思い出した時、僕たちは決めたんだ！　せめて敵として父さんと戦って、その手で眠りにつこうって！」

「っ！　バンヘルドも、グランフェリアも、シュヴァリエルも、そ

れにガーデンベルグやフィヨルツェンの記憶も戻っているんだな・・・？」

「・・・うん。戻ってるよ。父さんがベルカって世界に来るよりずっと前に、ね。・・・最初はね、自壊しようとしたんだよ。でも僕たちには、当時のヴァナヘイム王から自壊も自傷も出来ないように、アンスールのみんなを殺すように、特別なプログラムが組み込まれた。だから記憶が戻っても、そのプログラムがある以上は嫌でも父さんと戦わないといけなかった。だからこうして父さんに敵意を持たせるような行動して、僕たちエグリゴリを斃し易いように仕向けてた・・・」

自分の愚鈍さに怒りを覚える。気付けなかった、バンヘルド達が正気に戻っていたことに。気付いてやれば、もっと違う結末を用意できたのかもしれないのに。唇を噛みしめ、拳を握りしめ、皮膚が傷つき血が流れるのも放って「すまない・・・！」頭を下げる。

「・・・父さん。さぁ、再開しようよ。僕と父さんの最期のダンス」

「レーゼフェア！」

構えを取るレーゼフェアに「やめてくれ！」と言うと、あの子は「だったら僕やミッドと一緒に死ぬの？」と冷めた声でそう返された。あの子が消えない限り、"アグレアス"はミッドに向かい続ける。それはミッドの壊滅を意味する。俺は「くそっ！」と吐き捨て、レーゼフェアを破壊すること以外での策を考える。

「ああ、そうだ。ステガノグラフィアなら、アグレアスのシステムをハッキングすれば・・・！」

どれだけの機能を持とうが所詮は機械兵器。システムを掌握してやれば、その管制権限を奪い取ることが、と考えたところでレーゼフェアが管制機だということを思い出す。ハッとしてあの子を見れば・・・

「無理だよ。アグレアス内に管制機器は1つと存在してない。全て僕の頭（ここ）に収まってる。そういう風にするようにプライソンに頼んだからさ」

そう言って人差し指でこめかみをトントンと打った。

「もうこれで父さんは僕を斃すしかなくなった・・・よ！」

――闇の女王（サリュ・マンソンジュ）の鉄拳――

俺に向けて突き出された右拳より直径２ｍの影の拳が放たれた。横移動して回避すると、レーゼフェアは接近戦を仕掛けるためか突っ込んで来た。俺は閃光系砲撃の壁・ルシフェルを解除して、逃げの一手を取る。

『マイスター！？　早くしないとはやて達が・・・！』

「判っている！　判ってはいるんだ！　判っては・・・」

アイリに急かされるが、どうしてもレーゼフェアを斃そうという思いが揺らぐ。あそこまで自分を追い詰めていたあの子たちを、ミッドが危ない、はいそうですか、じゃあ斃します、なんていうほど俺は・・・。

「父さん！」

『マイスター！』

――血肉を求む伝道者の凶つ剣（ミシオネール・クリュエル）――

――コード・シャルギエル――

広間の影から無数の影剣が突き出して来たため、それらを紙一重で回避ながら逃げ回る。アイリはアイリで独断で自身の魔法を発動させ、氷槍１０本を射出して影剣を迎撃する。ユニゾン状態なら俺の神秘も扱えるアイリだ。可能な事だ。

「逃げないでよ、自分の責任から、運命から！　父さんはそんな弱虫なんかじゃなかった！　僕の大好きな父さんは、絶対に背中を向けない英雄だった！」

「それは相手によるぞ・・・、レーゼフェア・・・」

――影分身（トリニテ・アヴェーヌマン）――

影剣１つ１つがレーゼフェアの姿を取る分身となり、１対約１００

となる。あの子本体と分身が一斉に右腕を引き、体の前方に闇黒系魔力のスフィアを展開。そして右拳でスフィアを殴って「ソワール・エロジオン！」砲撃として放射した。全方位からの砲撃に、俺は防性術式ではなく・・・

――曙光神（コード・デリング）の降臨――

攻性術式のデリングを発動。俺を中心に閃光系魔力が球状に爆ぜ、レーゼフェアの砲撃や効果範囲に呑み込まれた分身すらも消滅させた。デリングも消え、改めてあの子の真正面から向かい合う。

「父さん。アグレアスがミッドに衝突するまで１０分を切ったよ。・・・父さんの今の罪は、僕を生かそうとすること。自分の罪を償うなら、僕や残りのエグリゴリを斃すこと。それがアンスールの神器王、ルシリオン・セインテスト・アースガルドとしての最後の務めだよ」

「っ・・・！」

「お願い、父さん。僕に償いをさせて、罰を与えて。父親として、悪い事をした子供を叱ってよ・・・」

――真技・宵闇に咆哮（モンストル・ソワール）する影獣――

二重円の中に正五角形と逆五角形を合わせた十角形、その中に円、また中に六角形という魔法陣を足元に展開したレーゼフェア。両腕を大きく広げ、広間全体から影を自身に集束させていく。さらに広

間全体に影が拡がって行き、室内が薄暗くなる。そしてあの子の姿が、２ｍを優に超える影に覆われた３つ首の獣・ケルベロスと化した。

『もう時間が無い。覚悟を決めて、父さん。娘として最期のお願い』

３つ首の口が大きく開き、巨大な闇黒系魔力弾・砲撃・斬撃が放たれて来た。さらにあの子の周囲の影から円柱が８本とそびえ立ち、そこからも小さな魔力弾や針が放たれて来る。それらを空戦形態の機動力を以って回避し続ける。

『僕を救って、父さん！』

「～～～～っ！　くそぉぉぉーーーーーッ！」

"エヴェストルム"にある２つのシリンダーに収められたカートリッジ全１２発をフルロード。そして待機形態の指環に戻した上で「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想！」と詠唱。左手に携えるのは、レーゼフェアの手によって殺害された闇黒系最強の魔術師、フォルテシアの神器・"宵鎌レギンレイヴ"。

「救ってやる・・・！　今すぐにその悪夢から・・・解放して、眠らせてやるからな！」

――うん。お願い。早く、休ませてあげて、あの子を――

放り投げた"レギンレイヴ"を高速回転させ、ケルベロス・レーゼ

の攻撃を寸断させる。"レギンレイヴ"は闇黒系の神器だが、その神秘はあの子の魔術に込められた以上の物を秘めているため、あの子の魔術を容易く迎撃できる。

『やっとその気になってくれた！』

――影渡り（シュルプリーズ）――

床に広がる影にずぶずぶと潜り込んで行くケルベロス・レーゼ。寸でのところで"レギンレイヴ"の一撃が躱された。俺は頭痛と胸痛に「ぅぐ・・・！」呻きながらも、"レギンレイヴ"を閃光系魔力で８つと構築して投擲する。広間の全面に広がっている影を斬り裂きつつ飛行を続ける。

――影分身（トリニテ・アヴェーヌマン）――

８本とあった影の円柱がケルベロス・レーゼと同じケルベロス形態を取り、雄叫びを上げながら突っ込んで来る。俺は広間中央に陣取りながら自身の周囲に閃光系魔力スフィアを１０基と展開。

――女神の宝閃（コード・ゲルセミ）――

スフィアより砲撃を放射し、ケルベロスを消し飛ばしていく。そんな中で俺の足元に広がる影より『せーい！』ケルベロス・レーゼが飛び上がって来た。俺はその大きな口に呑み込まれ、喉の入り口にて四肢が影と同化しているレーゼフェア本体と顔を合わせた。

「父さん・・・」

「本当に待たせたな。お休み、愛おしいレーゼフェア」

「うん。父さん、おやすみなさい♪」

――曙光神(コード・デリング)の降臨――

閃光系魔力爆発を起こしてレーゼフェアを覆っていた影が消し飛び、宙に放り出されたあの子へ向かって"レギンレイヴ"９つが急速で接近。

――復讐神(エグゼキュシオン・コシュマール)が希うは絶対なる終焉――

全身を斬り刻んだと同時に魔力で構築した"レギンレイヴ"が一斉に爆発してレーゼフェアの装甲を完全に削り取り、複製神器の"レギンレイヴ"がトドメの一撃としてあの子の胸を貫いた。

「っ・・・あぁ・・・言い忘れ・・・た・・・父さん・・・左目・・・視力を無くし・・・なくて・・・――」

魔力爆発に呑み込まれながら消滅して逝くあの子は、とても可愛らしい満面の笑顔だった。そして最期に語った左目の問題。あの子は消滅するその中で教えてくれた。俺の左目は・・・。

Ｅｐｉｃ３２プライソン戦役終結～Ｔｈｅ　Ｔｒｕｔｈ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

プライソンの真の目的から、隕石落下、大気圏外からの兵器特攻など、最悪な状況展開からさらに下があったことに私は「なんでこんな・・・！」両手を握り拳にした。何が原因かは判らへんけど、各地との交信手段の妨害が解除されたことで、各地から続々と報告が入って来た。

「アルファ、ベータ、デルタ、イプシロンが殺害されて、ガンマが拉致、プライソンも原因不明の突然死・・・。事件を終わらせても被疑者を誰１人として逮捕できひんかったら、それは最早負けたと同義や」

すずかちゃんやシャルちゃんからはアルファ、ヴィータやアリサちゃんからはベータとデルタが謎の襲撃者によって殺害されたって報告が入った。そんで、ついさっきまで私やなのはちゃん達とで護ってたヘリの内部でイプシロンも何者かに殺害された。
ヘリに攻撃を加えようとしたアルファ殺害犯と思われる魔導師２人と、イプシロンを殺害した魔導師１人は、古き日本の男子学生みたく学ランに学生帽といった格好。それプラスで素顔や髪を隠す仮面と目出し帽やったって報告が入ってる。

（風と雷の魔導師は、ＳＳランクの魔力と攻撃力を有してた。なのはちゃんとフェイトちゃんの挟撃を事も無げに回避しきった風を操

る魔導師。私やトリシュ、それに他の武装隊員や騎士たちの攻撃を雷撃で塵にした雷を操る魔導師。あれほどの術者が無名のはずがない）

素顔を隠しても魔力パターンを解析すれば、犯罪歴のある違法魔導師に辿り着けるはずや。襲撃犯は最低でも６人。風の魔導師、雷の魔導師、アリシアちゃんとヴァイス君に銃を突き付けた魔導師、アンジェの首にナイフをあてがった女性魔導師、デルタを殺害した銃剣持ち、３人の誰かかもしくは別の転移スキル持ちが１人。転移スキル持ちがおそらくガンマを拉致した。

（すずかちゃん達からの報告で、プライソンに協力してたんは最高評議会連中だけやなくて、犯罪組織なんかも協力してて、管理外世界から死体を盗掘してたってことは判ってる）

"スキュラ"を殺害した目的は、推測やけど口封じやと思う。自分らとの繋がりをあの娘たちから漏れるのを心配した。そやから直接出向いて殺害するなんてリスクまで犯した。そこまでして管理局に知られたない立場の組織もある・・・のかもしれへんな。

（プライソンのアジトへの潜入作戦に参加したロッサからは、ガンマが殺害されたんやなくて拉致されたかもしれへんって報告が入った）

ロッサのスキル・無限の猟犬の性能はピカイチや。あのスキルを用いても後を追えへんってことは、転移スキルでの拉致って考えるのが妥当や。ガンマは他の"スキュラ"以上の高スペックやって話や

し、殺害して口封じするんやんなくて利用することにしたとも考えられる。おそらく奪還可能や。

（そんでプライソンの原因不明の急死。不老不死から解放されたいがために、今回の事件を起こしたのに・・・。何が原因でプライソンは亡くなったんやろう・・・？）

ひょっとしたら私らの気付かん内にプライソンも暗殺されたかもしれへん。となると、本事件の被疑者が暗殺・拉致されたことになるわけで。これは管理局の超絶なヘマになる。私も機動六課の課長としての責任を問われると思う。

「こちらヴァスィリーサ。月の裏側よりミッドへと墜落中の衛星兵器・アグレアスを首都より肉眼で確認。現在、内部にて内務調査部のセインテスト調査官がアグレアスの管理権限を奪うため、管制機と交戦中。そのため私が現在展開している氷結結界の1枚を解除します。衛星軌道中にて隕石を破壊している艦隊各艦は、これまで以上の警戒をお願いします」

リアンシェルト総部長が全体通信を入れた。私は近くに居るから、直接その言葉を耳に入れる。ルシル君は今、"エグリゴリ"の1機であるレーゼフェアと交戦中のはずや。レーゼフェアが"アグレアス"の管制を担ってるってことで、ルシル君はアイリと一緒に突入したからな。

「ルシル君・・・」

総部長が結界を一部解除したのは、"アグレアス"をルシル君やアイリごと凍結させへんためや。正直、"エグリゴリ"はルシル君――正確にはセインテスト家の命を狙ってるから、"アグレアス"ごとルシル君を・・・ってちょっと思うた。

「零鏡ハガルイズ・・・！」

「っ・・・！？」

総部長の前方に出現したのは円い1つの装飾鏡。ソレから発せられてる魔力に総毛立った。この感じは間違いない、神器や。総部長は浮いてる鏡に右手を翳して、そのまま鏡ごと右腕を空へと掲げた。吹き荒れる魔力に「ひゃあ！」吹き飛ばされそうになるのを必死に耐える。魔力は鏡の前方に集束していって、３０ｃｍほどの魔力スフィアになった。恐ろしく圧縮された魔力や。

「何を・・・！？」

「万が一、彼がアグレアスの乗っ取りに失敗した場合、私がアグレアスを墜とします」

「ル、ルシル君は・・・！？　あそこにはまだ、私の大切な家族が・・・っ！」

そうゆうことか。総部長の狙いはおそらくそれ。ルシル君もろとも"アグレアス"を破壊する大義名分が必要なんや。ミッドってゆう惑星1個に、そこに住む何十億人ってゆう人命か、ルシル君とアイ

リの2人の命。しかもルシル君は総部長の殺害目標や。その時が来れば容赦なくルシル君とアイリを殺す。

『はやて。クロノだ。ルシルはまだアグレアスから戻らないのか？』

元は"聖王のゆりかご"を破壊するために本局から寄越された艦隊の内の1隻、クラウディアの艦長を務めてるクロノ君から個別回線で通信が入った。

「うん。10分ほど前に連絡を入れた時、これからレーゼフェアとの交戦に入るって・・・」

『そうか。僕たち艦隊は順調に隕石を破壊し続けられている。まったく。どれだけ隕石を操っているのかは判らないが、途切れることを知らない』

「そうか。・・・クロノ君、とにかく私たちはルシル君の帰還を待つしかない」

『判った。ルシル達が帰還したら連絡をくれ』

クロノ君との通信を終えた後、「リアンシェルト総部長」に声を掛けると、視線は向けてはくれへんけど「何か？」と応えはしてくれた。

「ルシル君は今も頑張って世界を救おうと、あなたの仲間（レーゼフェア）を救おうとしてます。お願いします。ルシル君を信じて、限界まで攻撃を加

えないでください」

「・・・あなたの個人的な願いの為に、ミッドを危険に晒せと？」

「私はルシル君を信じてます。彼は必ずアグレアスを止めます！」

そう断言する。おそらくこれは局員として間違ってると思う。私個人の想いによるお願いや。冷たくあしらわれるかって思うてたけど、「そうですね・・・」ってまさかの同意やった。ポカンとした私やったけど、すぐにあれ？って首を傾げる。今の返し方はおかしいって。それにツッコみを入れてええんやろか。下手に刺激するのも危ういし・・・。

「何か言いたいことでもありますか？　八神六課長」

「・・・おかしなことを仰るので。リアンシェルト総部長は、エグリゴリの仲間であるレーゼフェアが、ルシル君に負けると同義の言葉を発しました」

私の話に頷いたってことは、ルシル君がレーゼフェアに勝つって考えてるってことや。それは"エグリゴリ"の1機としてどうなんやろうって。ゆっくりと私の方へと横顔を見けた総部長が「なるほど。それは失言でした」そう言いながら、私を見てた横目を細めた。

「・・・たとえ仲間であり敵であっても、ルシリオンとレーゼフェアの戦力差くらいは認めています。シュヴァリエルを討った今のルシリオンを斃すことは、属性の相性や神秘の強弱においても、レー

ゼフェアは劣っています。どうやっても勝てないでしょう。・・・・これは少々まずい展開ですか」

総部長が空を見上げた。私も釣られて空を見上げると、「アグレアス・・・・！」が大気圏を突破して、その巨大な姿を見せつけてきた。モニターを展開して"アグレアス"の映像を表示。遠目やけど明らかにゆりかごと同サイズの全長。両サイドには十字の棒があって、ゆっくりと時計回りに回転してる。

『はやて！　ルシルからの連絡はまだかなのか！』

「クロノ君！　まだなんよ！　ルシル君からの連絡も、何も・・・・！」

『八神部隊長、シャーリーです！　アグレアスの落下速度から考えて、破壊限界高度までご、６分！』

「ルシル君、アイリ・・・・！」

早く戻って来て。そやないと「はあ。残念です」総部長がルシル君たちもろとも"アグレアス"を破壊してしまう。周囲が騒然となり始める。当然や。自分たちの命どころか住む世界が、残り数分で破壊されるとなるとな・・・・。

『残り５分！』

『はやて、まだか！？』

『残り４分！』

時間は無情にも過ぎ去ってく。もう一度「ルシル君！」へ通信を繋げるけど、ノイズしか返って来ぉへん。もう私には祈ることしか出来ひん中で、「衝きて（ピュセーマ）・・・」総部長が術式名を唱え始めた。私は改めて「ルシル君！　応答して、ルシル君！」と通信を繋げるけど、でもノイズしかあらへん。

「もう！」

信じてる、ルシル君の事は。そやけど状況が私を焦らせて、苛立たせる。どんどん大きなってくる"アグレアス"に「間に合わへんのか・・・？」私の心も折れかける。でもそんな時、総部長が「やっとですか」フッと笑って、魔術を解除した。

――魔神の極拳（コード・シグフェズル）――

――宝竜の抱擁（コード・ファフニール）――

"アグレアス"の周囲に、直径１００ｍはあろう巨大なサファイアブルーの円陣が１６枚と展開されて、そこからいろんな属性の８頭の龍と８つの巨腕が出て来て、龍は"アグレアス"に絡みついて、巨腕はガシッと艦体を鷲掴んだ。そこからはあっという間やった。"アグレアス"はグシャグシャにへし折られて、ひん曲げられて、握り潰されて、最後には破片１つ残らんほどに燃やし尽くされた。

「こちらヴァスィリーサ。すでにモニターで観ておられるでしょう

が、セインテスト調査官の魔法によってアグレアスが破壊されたのを確認。隕石による脅威も本局の艦隊によってじきに収まるでしょう。・・・ミッドは、ミッドチルダは護られました」

総部長が全体通信でそう報告すると、辺り一帯から「おおおおお！」大歓声が上がった。そやけど「ルシル君は！？　ルシル君はどこ！？」私たちの前にルシル君が姿を見せへん。

「心配要らないですよ、八神六課長。彼はあそこに・・・」

そう言いながら総部長が指差す方向に目を向けると、「ルシル君！」が居った。１２枚の剣翼アンピエルを背に、私に気付いて手を振ってくれた。私はもう待ち切れんくなって「おかえり！」ルシル君の元へと飛んで、そのまま抱き付いた。

「おっと。・・・ああ、ただいま、はやて」

「うん！　アイリも、おかえりや！」

『ん～、ただいま～！』

ルシル君とユニゾンしてるアイリにも声を掛ける。アイリも無事そうで何よりや。ルシル君は「心配を掛けた。ごめんな？」って微笑みかけてくれて、私はようやく心の底から安堵してルシル君から離れた。

「ルシル君、左目・・・まさか・・・」

右目はしっかり私を見てるのに、光を映してない左目は若干ずれてる。そやから「ごめん！　プライソンから左目の事、聞きだす前に・・・！」頭を下げて謝った。"スキュラ"達みんなも失って・・・。

「いや。すべてレーゼフェアの仕業だった。複製権限は取り戻させたが、左目はちょっと複雑な状況でさ」

言葉を濁したルシル君。何か言いづらい事があったみたいやけど。それはもっと落ち着いてから話しした方がええかも。ルシル君は「はやて。少し時間が欲しい」って、総部長へと振り向いた。

「え？　ちょ、まさか2連戦とかする気か！？　こんなところで、このタイミングで・・・！？」

「いいや。話をするだけだよ。構わないでしょう？　リアンシェルト総部長」

ルシル君がちょう煽るような口調で誘うと、総部長が目を伏せた後に「ええ。構いませんよ。セインテスト調査官」応じた。そんで私たちは一旦地上に降りて、私は六課の部隊長として事後処理へ、ルシル君とアイリは総部長と一緒に人の居らんところへ歩いてった。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

アイリを伴ってリアンシェルトと人目の無いところへ向かう。俺の

前を歩く局の制服姿のリアンシェルトが、「あの路地裏を使わせてもらいましょう」と指差した。上部が倒壊している２棟のビルの間だ。側には局員も騎士も居ない。この区画の事後処理はまだ始まっていないようだ。

『アイリ』

『マイスターの思うがままに。マイスターとリアンシェルトは娘だし、それに以前・・・アイリもお世話になったし。口にキスくらいまでなら許してあげるね～♪　あ、その先は許さないけど』

アイリがそう言ってくれた。が、『あの子は娘だ。キスの先なんて有り得んわ』とツッコみを入れておく。あの子が路地裏に入ったところで俺は変身魔法を発動し、本来の身長１８１ｃｍ程へと変身する。

「それでは神器王。お話というのを聞かせて頂きま――っ！？」

俺に振り返ろうとしたあの子を背後からギュッと抱きしめた。息を飲むあの子は「きゅ、急に抱き付くとか何を考えてますか！？」すごい勢いで怒鳴ってきた。それでも構わずにあの子の腹のところで両手を組んで抱きしめる力を強めると、あの子は「ひゃう！？」と小さく悲鳴を上げた。

「は、はな、離しなさい！　今すぐ！　そうでないと殺しますよ！？　殺しちゃいますから！」

俺の腕の中で身じろぎするあの子が喚き散らすが、どう見ても全力じゃない。この子が全力を出したら、軽い身じろぎだけで俺は何十mと吹っ飛ばされてしまう。でもそうならないのは、この子が本気で、全力で俺をどうにかしようと考えていないからだ。

「やってみるといい。さぁ。俺をあの時みたく凍結封印でも、ぶん殴ってでも、魔力放出でも、なんだっていい。俺のような格下ならどの手段でも殺せるぞ」

「っ！　調子に乗っていますね神器王・・・！　八神はやてが、私とあなたが2人きりで居ることは知っている。そして凍結封印でもしてあなたを砕いたら、私が疑われる。などと考えて、私が行動に移せないとでも思いますか？」

「・・・・・」

「・・・何か言ってくれませんか？　本当にやりますよ？　嘘ではありません。やりますよ？　いきますよ？」

「いいよ。やってくれ、リアンシェルト」

俺は俯いて右頬をあの子の左頬に擦り寄せると、「ひゃい！？」また可愛い悲鳴を上げてビクッと肩を跳ねさせた。さらに「さあ。早く。いつでもやってくれ」と急かしてみる。とここでようやくあの子は身じろぎをやめた。

「・・・いです・・・ずるいです・・・。こんなの卑怯で・・・。

知ってしまったんですね。私たちが記憶を取り戻していることを・・・。レーゼフェアから聞いたのですか？　お父様」

とうとう素直になってくれたあの子の問いに、「いや。プライソンからだ」と答えた。この子が隕石迎撃に参加したことがお気に召さなかったプライソンが、腹いせとばかりに喋ってくれた。

「あのクソガキ・・・・！」

「次いでレーゼフェアを問い質したら教えてくれたよ」

「・・・そうですか。でしたら何も言わずともよろしいでしょ？　私たちとお父様の戦いは避けられないものなのです。だからお父様には、私たちを破壊する事に躊躇のないようにしてもらうために・・・」

「こうやって大物犯罪者の側に付いてきた、というわけだ」

そうすれば否応なく"堕天使エグリゴリ"と衝突することになる。プレシア、リンドヴルム、プライソン。連中はみんな世界1つを危機に陥れることの出来るレベルだった。

「はい。あ、ですが、この手で直接人を殺すような真似はしません。今回のように多くの人命、世界の存亡に重大な危機が陥った場合、私や他のエグリゴリが手を貸すように考えていました」

「その割には今回の事件、局員や騎士、民間人からも死傷者が3ケ

タ以上出ているぞ」

「それは私たちエグリゴリが関係なくても出た被害です。出す出さないはこの世界――現代を生きる人々の力次第・・・。ですが本当に無理であれば、スマウグ竜や今回の隕石の時みたく私やフィヨルツェンが動きます。先程までフィヨルツェンも隠密スキルを用いて、隕石の迎撃に参加していたのですよ」

「本当か？　あの子は今どこに・・・？　というか、どの犯罪者の下で活動している？」

フィヨルツェンが付いてる犯罪者の名前を聴こうとしたが、あの子は首を横に振った。

「リアンシェルト・・・！」

「お父様。私たちはこれまでもこれからも敵同士なのです。あなたの腕に抱かれ、この優しい温かさも永遠の中の一瞬。離れたらそこから元の関係に戻りましょう。あなたは神器王として、私はエグリゴリとして、あなたの手でこの身に死を齎されるその日まで」

俺の腕の中でくるっと回って顔を合わせたあの子はつま先立ちをして、「チュッ　」口にキスをしてきた。そして俺の心臓付近に顔を寄せる。

「お父様の手で、罪深い私たちの旅路に終止符を打ってください。それがバンヘルドも、グランフェリアも、シュヴァリエルも、レー

ゼフェアも、そして私も、フィヨルツェンも、ガーデンベルグも、皆が抱くたった1つの・・・一生のお願い、というやつです♪」

「俺は、私は・・・お前たちに謝りた――んむ」

そこまで言い掛けたらまたキスされて口を塞がれた。リアンシェルトってここまで大胆な子じゃなかったんだが。知らない間に大人の女性になっていたというわけか。

「・・・謝ることなど1つもありません。起こった事はもう覆らない。そう、原因はもう変えられない。ならば過程と結果をより良いものにするのが人というものでしょう？」

そう言って1歩2歩と下がるあの子につられて俺は両腕を離した。とても悲しそうな、辛そうな表情を浮かべるあの子に、俺は一体なんと言ってやればいい。この子たちの覚悟も決意も、俺の言葉じゃもう覆らない。

「もっと早く気付いていれば、こうやってバンヘルド達とも話せたのかもしれないのにな・・・」

「それは・・・無理だったでしょう。お父様に気付かれないように、私たちは必死に――」

「いいや。俺はヒントを貰っていたんだ。お前たちの記憶が戻っている。そう聞かされてようやく・・・」

「ヒント・・・？」

「俺がガーデンベルグに敗れ、不死と不治の呪いを受け、フェンリルに封印されたあの日からベルカで再戦するまで、この世界の時間軸で言えば6千年強も経過している。呪いを受けた俺が、その時間を越えて生存していることに、お前たちエグリゴリは疑問を抱かなかった。解呪するにはガーデンベルグを倒さなければいけないのに、何故活動しているのか、と」

瀕死状態だった俺に呪いを解く神器を造る時間も無い。エイルでも解けない。複製された他の神器でも"呪神剣ユルソーン"の呪いは解けない。そもそも造っても解けない。そんな俺が活動しているとなれば・・・。

「それはつまり、俺が本物ではないと知っていたからだ。そしてお前たちの記憶が戻っているとなれば、その正体を確かめようとする。しかし俺の正体を知る者は、この世界において俺と、そして・・・――」

狙ったかのように先の次元世界で親しかった者たちや敵の側に現れる"エグリゴリ"。そして何より一番有り得ないアリシアの復活。そんな事が出来るのは・・・。

「マリア！　お前なのだろう！」

「・・・お久しぶりです、ルシリオン様」

桃花色の肩紐ロングワンピースに白いストラップシューズという格好の、金のロングヘアにアメジスト色の瞳をした少女――５ｔｈ・テスタメント・マリアが音も無く姿を見せた。

「ああ、久しぶりだな。こちらとしてもあまり時間が無い。隠し事なく、正直に答えてくれ。マリア。お前が裏で手を引いていたな・・・？」

「はい。彼女らエグリゴリと偶然出会ったのは事実です。ルシリオン様より伺っていた特徴と一致し、私からルシリオン様のお名前を出し、コミュニケーションをとりました。そこで彼女たちの記憶が戻り、ルシリオン様の行方を探していたことを知りました」

「そこで私たちは、マリア様よりお父様の事を全て聴きました。約２万年と続く生と死を、守護と破壊を、善と悪を命じられるままに・・・奴隷のように実行されてきたと」

「こことは別の、パラレル的な次元世界での話もその時に話しました。彼女たちの落ち込みようは酷いものでした。ですがそれと同時に、ルシリオン様と彼女たちを永遠の牢獄から解放する術も考えつくことが出来たのです」

マリアとリアンシェルトからの説明で、「それが今の状況か・・・」と理解した。俺と敵対して殺されることで贖罪と解放となり、俺もガーデンベルグを殺すことで"界律の守護神テスタメント"より解放される。どちらにも救いはあるが・・・。

「それではお前たちの心が傷ついたままだ・・・」

「はあ。お父様、それは私たちへの罰なのです。あなたが苦しむ必要はありません」

「そう言うが、お前たちは俺とシェフィの大切な愛おしい子供たちだ。そんなお前たちが抱く苦しみを無視しろと？」

「そうです」

感情に僅かな揺らぎも出ないように努めて即答したリアンシェルト。俺は溜息を吐いて「それでも――」と言い掛けたようとした瞬間、「っ！？」全身が動かなくなった。それと同時に魔術師として、魔導師としての能力の一切が封じられたのが判った。

「干渉能力・・・！？　マリア・・・！？」

『マイスター！　ユニゾンアウトも出来ないよ！』

当然だがアイリも完全に干渉能力に捕らわれた。目だけを動かしてマリアを睨みつけると、リアンシェルトは「マリア様は悪くありません、お父様」と咳払い。あぁ、どうせ「これもお前たちの計画・・・」なんだろうな。万が一に俺がこの秘密に感付いた場合、こうしてマリアが出て来て・・・。何をされるのか察することが出来た俺は血の気が引いた。

「待ってくれ、マリア！　頼む！　この真実を俺から消さないでく

れ！」

「・・・ルシリオン様・・・」

「お父様。この真実はいたずらにお父様を苦しめ、悲しませるもの。忘れた方がお父様の為なんです」

やはり記憶を消されてしまう。しかも不都合が出ないように記憶に修正も加えてくるだろう。そうなれば俺は僅かな記憶の異変から辿ることも出来なくなる。

「申し訳ありません、ルシリオン様」

「～～～っ！　リアンシェルト！　私は、お前を娘として愛しているぞ！　シェフィも母親として、ずっとお前たちを愛している！　たとえこの記憶を失ってもこの想いだけは不変だ！」

記憶修正が避けられないならせめて、これだけは伝えておきたい。あの子やガーデンベルグ、フィヨルツェンが少しでも苦しまないように。

「はい・・・はい！　私も、私たちも、お父様とお母様を愛しています！」

リアンシェルトは子供のように涙をボロボロ流した。あぁ、出来ればもう一度だけお前を抱きしめてやりたかった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒シャマル†††

ルシル君による"アグレアス"の破壊、艦隊によるゆりかごと隕石の破壊。それらが終わった時、プライソン戦役の終結が正式に発表された。その後は局と教会は本件における被害の確認、および要救助者の救出を行うことになった。局員や騎士たちが組織の垣根を越えて救助作業に勤しむのを、私とザフィーラも手伝う。

「シャマル医務官！　重傷者です、治療をお願いします！」

「はいっ！」

私は医務官として、現場を忙しなく回っていた。民間人はゆりかごなどの兵器起動を確認してから避難を行ったことで、直接的な被害は出てない。けれど巡航ミサイルや戦車・装甲車の砲撃で崩れた建物に巻き込まれたり、崩落して来た瓦礫に当たったりと、間接的な被害で多くの死傷者を出してしまった。

「気をしっかり持ってください！」

瓦礫に挟まれた男性を助け出し終えていた騎士の皆さんと場所を変わって、まずは応急処置となる治癒魔法を掛ける。出血が止まったところで、治療キットが収められた医務官バッグから治療道具を取り出して処置を施す。

「――あとは病院へ搬送をお願いします！」

「了解です！」

現場で出来るだけの事をやったら、本格的な治療を行える医療施設に搬送する。私は「ふう」と袖で額の汗を拭い去って、「よし、次！」の現場へ向かう。そこは倒壊したビルの瓦礫の山で、武装隊と騎士の皆さんが瓦礫を撤去しながら「もう少しです！」内に向かって必死に声を掛けてる。側には白衣姿の私の同僚の医務官たちが居る。

「シャマル先生！」

「ティファ先生！」

１０年前からの付き合いであるティファレト・ヴァルトブルク医務官と合流。事情を伺えば、この瓦礫の山の下に、少なくとも８人の要救助者が居るとのこと。だけど瓦礫の撤去に手間取ってるとのこと。

「アルテルミナスやシスター・プラダマンテなど、スキル所有者をお呼びしたんだけど、お２人とも別の瓦礫撤去に従事しているようで・・・」

「そう。ザフィーラ、瓦礫の撤去の手伝いをお願い」

「ああ」

私の護衛に付いてくれてるザフィーラも瓦礫の撤去に参加。瓦礫が撤去されるのを待つ間、私たち医務官は打ち合わせ。そんな時に『

こちらルシリオン。瓦礫撤去作業に移ります』そんな通信が入った。

「ルシルく～ん！　こっち～！」

両腕を大きく振って、空からゆっくりと降下して来るルシル君を呼ぶ。ルシル君も私に気付いてくれたみたいで、私たちの側に降り立ってくれた。今のルシル君は変身魔法を使ってるみたいで、本来の身長以上に高くなってた。

「ルシル君。それにアイリも。お疲れのところ悪いけど・・・」

「問題ないよ。良い具合に体も温まっているし、魔力だって充足だ」

『楽勝だったね。レーゼフェアなんて、ルシルとアイリの敵じゃ無かったよ』

「ああ、そうだったな。・・・それじゃあ始めるよ。我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」

ルシル君の口から発せられた呪文。それでルシル君は複製権限を取り戻せたことを知った。ルシル君から漏れ出す魔力量に辺りがざわめく。

「これより瓦礫を浮かせます！　要救助者の回収をお願いします！」

ルシル君の言葉にみんなが「了解です！」と応じて、瓦礫の山から離れてく。瓦礫の山から全員が離れたのを確認したルシル君が地面

に右手を付いた。

「反重力（ニクス・フォース）」

ギンッと鈍い音が聞こえたかと思えば、瓦礫が次々と浮き始めて「おお！」歓声が上がる。そして武装隊員たちが要救助者を保護して、騎士たちが浮いた瓦礫を撤去して、姿の見えた要救助者を他の武装隊員や騎士の皆さんが運び出して、安全な場所で私たち医務官が治療に当たる。それを繰り返して・・・

「――お疲れ様です！　全要救助者の救助を完了！」

「セインテスト調査官。引き続き瓦礫撤去作業にご協力願えますか？」

「もちろん」

次の現場の位置を確認し終えた「ルシル君、ちょっといい？」を呼び止めた。私に振り返った彼は「何かあったか？」って側に駆け寄ってくれた。

「後で知ることになると思うけど、ゼスト・グランガイツ一尉がレジアス・ゲイズ中将、オーリス・ゲイズ秘書官を逮捕したわ」

まずはそれから伝える。グランガイツ一尉は以前、ルシル君と一緒にプライソンのアジトへ潜入捜査した首都防衛隊の一部隊を預かる隊長。メガーヌ准尉やクイント准尉もその部隊の分隊長ね。

「そうか。目を覚ましてくれたんだな・・・。クイントさんとメガーヌさんも喜ぶだろう」

「ええ。あともう1つ。これはアイリちゃんに」

『ん？』

「アギトちゃんを無事に取り戻せたわ。ベルカで一緒に過ごした時間の記憶もばっちり戻ってるって」

シグナムからそう連絡を受けた。これでようやくオーディンさんファミリーが勢ぞろい・・・というわけでもないけど、それでも揃うことは出来た。出来ればアインスが生きてる間にアギトちゃんと合流したかったけれど・・・。

『ホント！？　アギトお姉ちゃん、戻って来る！？』

「ええ。でも洗脳されていたとはいえ、犯してきた罪は消えないわ。数ヵ月、数年は拘置所か隔離施設に入れられると思う」

『・・・それでもいいよ。アギトお姉ちゃんが帰って来てくれるなら。ね？　ルシル♪』

「ああ、だな。ありがとう、シャマル。それじゃ行くよ」

「気を付けて」

ルシル君と手を振り合って、私たちは一旦お別れ。私は私の仕事をきっちりやらないと。

・―・―・―・―・

ミッドチルダ極北部に広がるノーサンヴァラント海。ベルカ自治領の領海内に位置するオークニー諸島・ナウンティス島は、その一面が起伏の少ない森林地区だ。周囲は上陸困難な断崖絶壁で、島内に上陸するには空からの降下か、内面へ続く細い海路から進入するしかない。

「まったく。プライソンの奴め。よもやミッドチルダを道連れに自害するのが真の目的だったとは・・・」

外側は自然豊かだが、その内側はガッツリ機械に侵された鋼鉄の施設。その通路に今、1人の老人が歩いていた。顔はしわを刻んでいるが、しかし首から下は筋肉質で、身長は2m近くはあるだろう。髪型は毛が1本と残っていない禿頭。日焼けしているのか肌は全身褐色。プライソンが生前、依頼主、ハゲジジイ、と称していた人物だった。

『閣下。博士のおかげで、ガンマをネレイデスと接続できました』

老人の側面に展開されたモニターに映る白衣姿の女性がそう報告した。ガンマ。転移スキルを有する何者かに拉致された特別製サイボーグ・"スキュラ"の1体だ。

『元はゼータというスキュラが海洋艦隊の管制機として接続される予定でしたので、同じスキュラとはいえ接続できるか不安でしたが・・・』

女性の背後に在るポッド内には、機械のゴーグルを装着された素っ裸のガンマが水溶液の中に浮かんでいた。背中や首筋からはケーブルが伸び、兵器の管制機としての姿となっていた。

「そうか。では各艦の調整に移れ。プライソンの目的の事を考えれば、艦隊は未完成で在る可能性がある。建造・改修が必要であれば、彼女の手を借りるのだ」

『了解しました』

通信が切れると同時にモニターも消えたことで再び静まり返る通路。老人は再び歩き出し、そしてスライドドアの前に到着する。老人が近付くとドアは左右にスライドし、ドアの奥の部屋へと彼を招き入れた。

「では、ここから始めるとしよう。このグレゴール・ベッケンバウワーが、テウタ様の代わり――キュンナと共にベルカを、レーヴェンベルトを再誕させる」

老人――グレゴールは部屋の中央に設けられた玉座の前で片膝を付き、そう高らかに宣言した。

Ｅｉｐｉｃ３３これからの八神家～Ｈｉｓ　ｃａｓｅ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

プライソンの身勝手な動機によって引き起こされた今回の事件は、"プライソン戦役"と称されることとなった。プライソンを殺し、レーゼフェアを救えはしたが・・・その被害は６６年に起きた"クラナガンの悪夢"以上のものだった。数年前のアジト潜入捜査に際、きっちりレーゼフェアとフィヨルツェンを救い、プライソンを殺しておけば・・・。後悔ばかりが俺を苛む。

「――で？　このくそ忙しい時に俺を呼び出して何のつもりだ、リアンシェルト」

終結から５日目。機動六課の活動を調査する役目を担っている特務調査官として、俺は今日もひたすら書類作成だった。そんな時にリアンシェルトから呼び出しを受けた。あの子とはレーゼフェアを救った後、はやてと共に居たところを見つけ、ご苦労さまでした、と労いの言葉を俺とはやてに送ってすぐに去られたっきり。

「本局評議会――権威の円卓は未だに続いています」

「なに？」

俺に背を向けたまま信じられないことを言い放ったリアンシェルト。確かに向かう先はいつも会議に使っていたあの秘密の部屋のある方

角だ。しかしまだあの組織が残っていることが不思議でしょうがない。

「驚くことはないでしょう。法の抜け穴だけでなく財力・権力を用いて罪から逃れるクズどもは減ることを知らず。１１１１部隊は未だに必要不可欠です。そして１１１１分隊を動かすのに必要な組織が権威の円卓。ならば・・・」

「潰さずに残しておく方が吉だと？　ふんっ。本当に正義を謳う管理局員のようだな。俺を殺すことを至上の目的とするエグリゴリの言葉とは思えないな」

リアンシェルトはいつでも俺を殺せるだけの戦闘力を有しているため、本当に余裕を見せつけて来る。正直、今のあの子の背中は隙だらけだ。救おうと思えば出来そうなんだが、実際に手を出したら即座に俺は死ぬだろうな。

（残るエグリゴリはフィヨルツェン、リアンシェルト、そしてガーデンベルグの３機。次はフィヨルツェンが相手になるだろう。その次がリアンシェルト・・・）

だが勝てるのか、今の俺に。プライソンのリンカーコアのおかげで通常時でＳＳＳランクの魔力をドーピング無しで引き出せるようになった。アイリとのユニゾンやドーピングでＸ－ランクからＸランクとなることが出来る。フィヨルツェン相手なら労することも無く勝てる。しかしリアンシェルトに勝つビジョンを想像すら出来ないときた。

「なかなかに居心地の良い生活ですよ、管理局員というのも。多少暇が多いのが難点です・・・。神器王、あなたと闘う時までは続きそうですが、それを含めて今の時間が愛おしい。とは言え、あなたと殺し合うその時は一切の手加減なしで・・・殺します」

「っ・・・！？」

リアンシェルトから放たれる殺気に思わず俺は2歩3歩と後退するが、「チッ・・・！」爪で手の平の皮膚を裂くほどに両拳を強く握りしめて、殺気に呑み込まれないように耐える。あぁ、ダメだ、改めて思い知った。今の俺にあの子を救うことは出来ない・・・。

「少々遊びが過ぎました。さぁ入りましょう、セインテスト調査官」

いつもの会議室のドアの前へと来た。先にリアンシェルトが開いたドアを潜り入室。遅れて俺も入室し、円卓のみが置かれた会議室を見る。普段はホログラム参加が目立つ会議だが、今回ばかりはさすがに全員生身で参加しているようだな。

（半数以上が空席になってしまったんだ、何か大きな話し合いでもあるのかも知れないな）

本局捜査部の分枝課である特別技能捜査課の課長であり、俺たち八神家とシャルの直属の上司であるクー・ガアプ一佐。戦技教導隊の1班班長であり、暗殺部隊1111航空武装隊の隊長でもあるロッキー・サブナック一佐。本局・支局・各地上本部すべての捜査部の

最高長官であるビディ・アーリー大将。本局情報部の長官であるイレアナ・コスンツァーナ中将・・・の４人。

（それにエーアスト・ルター。フリーランス魔導師派遣会社、エモーションサービスカンパニーの社長）

この中で唯一にして最後の民間メンバー。金糸のようなブロンドのアシンメトリーヘアに金色の瞳、縦に白いストライプの入った黒のスーツ一式という社長然とした、身嗜みをしっかり整えた青年。プライソンの一件で、俺は改めて彼の身辺調査を行った。非合法の手段もいろいろ用いたが、結局粗を探し出すことは出来ず白と決めざるを得なかった。プライソンの事もあったし、エーアストも何かがありそうなんだよな・・・。

「お待たせしました。リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ少将、およびルシリオン・セインテスト一尉です」

俺の分まで名乗ったリアンシェルトはそのまま部屋の中を進み、俺は「ルシリオン君、こっち」ガアプ一佐に手招きされたためにそちらへ向かう。そして彼女は右隣にある空席の肘掛けをポンポンと叩いた。

「ここに座りなさい」

「しかしここは・・・ホドリゲス元大将の席・・・。さらに言えば自分は円卓のメンバーではないのですが・・・」

空席は6脚。その席に座っていたのは、拳銃自殺として処理されたホドリゲス元大将とフォーカス元少将。ようやく目を覚ました騎士ゼストによって逮捕されたゲイズ元中将。そして議長デュランゴ、書記トレイル、評議員リョーガ――最高評議会。最高評議会の全員もまた死亡したことが管理世界中に発表された。

「セインテスト調査官。今日からそこが、あなたの席です」

「はい？　というか、おま――リアンシェルト少将もどこに座って・・・！」

「どこに？　今日からここが、私の席ですから」

リアンシェルトが座ったのは議長デュランゴの席だった。驚いているのはどうやら俺だけのようで、ガアプ一佐たちはあの子が議長の席に着いても何も言わず、あの子が議長になることを納得しているかのようだ。

「では本日の暗殺対象の決議を――」

「いやいやいや！　待て、待ってくれ、待ってください！　自分はかなり置いてけぼりを食らっているんですが！」

しれっと会議を始めようとしやがる。慌てて敬語に戻してから説明を求める。リアンシェルトが議長になることは全員が納得しているなら、俺からは何も言わない。言ったところで意味が無いしな。だが、俺が円卓のメンバーになることには待ったを掛ける。

「俺が権威の円卓に入るなど聞いてはいないし、承諾もしていないんですがね」

「まぁいいじゃないか、ルシリオン。お前もこっち側に来いよ。今さら善人ぶっても手遅れだぞ？　俺たちは必要悪だ。そう割り切って、これまで多くの暗殺を繰り返してきただろう？」

「もう少し言葉を選んではどう？　サブナック」

サブナック一佐が手招きして来る。彼とは１１１１部隊を通じて知らない仲じゃない。共に仕事を遂行したこともある。そんな彼の言葉には頷くしかない。俺はもう善人という枠には入れない。それは"界律の守護神テスタメント"になってから・・・いや、人間で魔術師だった頃からすでに・・・。

「権威の円卓のメンバーになったら自分に何かメリットでも？」

「あなたが私たちに従事していた理由であるチーム海鳴。今後一切、彼女たちへ手を出さないことを、そしてあなたがＰＴ事件の死亡したとされている被疑者、テスタメントであることも黙っておきます。ジュエルシードも変わらず所有していても構いません。あなたを縛っていた脅しのネタの全て、破棄することを約束します」

それが俺のメリットになるらしい。結局は何も変わらず俺は円卓に使役され続けることになるわけだが、「これまでの条件と比べるまでも無い・・・」か。ここに居るメンバーは俺を奴隷ではなく同胞

として見てくれている。それは態度から見てとれる。今、円卓メンバーに入れば、はやて達に俺の正体がいつバラされるかって不安を抱える日々も無くなるわけだ。

「・・・権威の円卓入り、承諾します」

なら答えはそれしかないだろう。リアンシェルトが「では改めてようこそ。権威の円卓へ」と拍手をすると、ガアプ一佐たちも拍手して俺を迎え入れた。それから俺たちは暗殺対象を決める会議を開き、犯罪組織の大物数人と議決した。会議はそれだけで終わり、死亡した元メンバーや逮捕されたゲイズ元中将の話は一切しなかった。アッサリしたものだ。

「では本日の評議会をこれにて閉会とします。お疲れ様でした」

リアンシェルトの解散宣言でメンバーは各々の持ち場へと戻って行く。俺も席を立ってミッドに帰ろうとした時、ポンっと背中を叩かれた。振り向けば「サブナック一佐」だった。

「とりあえず、おめでとさん。これで晴れてお前も円卓の仲間入りだ」

「ありがとうございます・・・と言うべきかどうか迷っています」

「ま、お前は心の奥底じゃ望んでないんだろうが。俺としては嬉しいぞ？　ここだけの話、ホドリゲス大将とゲイズ中将とフォーカス少将が抜けて、議長たちも居なくなって・・・正直ホッとしてる」

まさかの発言に「はい？」と俺は返した。側に居たガアプ一佐も俯いたことで、彼女もそうなのだと察することが出来た。

「今回、プライソンが管理世界全体に向けて名指ししたろ。そして2人は質量兵器――拳銃で自殺。1人は数年間と意識不明だった親友の手によって逮捕。議長たちも自殺として発表されたが、俺の見立てじゃあれは殺されたな。スキュラとか言うサイボーグを殺した連中か、もしくは・・・」

その先は言われずとも解る。内部犯行というわけだ。そして容疑者にアタリを付けるとなれば・・・。俺たちは横目でリアンシェルトを見る。最高評議会の世話係であるあの子なら、連中を殺すことなど造作も無いだろう。

「俺たちは最悪の罪である殺人をやってる。必要悪とはいえ罪は罪だ。でもな。プライソンほどのクズじゃないんだよ。あんな奴を生み出し、散々利用して裏切られた。悲しみより哀れの感情しか湧いて来んよ。だから俺は、連中の代わりにお前が入るのが・・・まぁ嬉しいわけだ」

「そうっすか」

サブナック一佐の言葉を適当に聞き流す。リアンシェルトが最高評議会を殺したとすれば、その理由はなんだ。あの子は"エグリゴリ"のクセに今の管理局員としての時間を大切にしている節がある。だから殺した？のか。いやまだ温い。まだ何か他に理由があるはずだ。

「ま、そんなわけでこれからもよろしくな、ルシリオン」

サブナック一佐がもう一度俺の背中を叩き、そして去って行った。彼を見送っていると「実はね、私もなのよ」とガアプ一佐も本音を漏らした。殺害された最高評議会、自殺した将校２人は、かなり昔からゲイズ元中将より正義にとり憑かれ、暴走気味だったらしい。危ういと思ってはいたが、上官でもあるため進言は出来なかったそうだ。

「ともあれ、暴走しそうで常にハラハラさせられていた元凶は揃って退場。少しは心労が減りそうで良かった。・・・ではルシリオン君、これから頑張って行きましょう」

ガアプ一佐はそう言い残して去って行った。最後に「遠路ご苦労さまでした」とリアンシェルトが俺の背中にそう声を掛け、脇を通り過ぎて去って行こうとした。返すべきかどうか逡巡した俺は、「これからは通信での参加を所望する」と明後日なことを口走っていた。

「であれば局の施設のどこかに私室を手に入れてください。最年少で調査官になったとしても所詮は一等空尉止まりの平局員。ですから・・・」

「偉くなれってことか」

「そういうことです。では私もこれで。・・・私と闘うその日までよい人生を、神器王」

今度こそリアンシェルトは俺の前から去って行った。背中が廊下の角の向こう側へ消えるまで見送った俺は、その足で次元港を目指す。今は管理世界標準時間で１５時過ぎ。六課の隊舎に戻る頃には１８時を回るだろうな。とにかく次元港へ向かい、ミッドの首都クラナガン行きの便に搭乗。

「ねえねえ。あの席の人見て見て」

「ほら、あの人。ニュースで観た・・・」

「ルシリオン・セインテスト調査官でしょ。テレビで観るよりずっと綺麗・・・」

リアンシェルトが全体通信で俺を名指ししたことで、"アグレアス"破壊の立役者として有名人になってしまった。サインをねだられるようなことはないが、こうやってヒソヒソと話のネタにされる。特に嫌なことじゃないが、どうもこういうのは昔から慣れない。

それからゆっくりと機内で過ごし、数時間ぶりのミッド地上だ。次元港を出て、駐輪場に停めてある愛車、リバーストライクの"マクティーラ"の元へ。メガーヌさん達が六課に侵攻した際、正直覚悟はしていたが幸いなことに無傷だった。あの時ばかりは神に感謝したよ。

「ん？　メールか・・・」

ヘルメットを被って"マクティーラ"に跨ったところで、通信端末

にメールが入ったことを知らせるメロディーが鳴った。端末を開いてメール画面を展開する。

『パパ、いつ帰って来る～？　いっしょにご飯たべよ～♪』

『出来れば早う帰って来てな～』

『待ってるからね～♪』

フォルセティとはやてとアイリの顔がアップで表示され、３人の音声が流れた。俺は「ふふ。今から首都の中央次元港から帰るよ、っと」"マクティーラ"に跨った状態で自撮りをし、そうメッセージを添えて返信する。

「よし、帰るか」

アクセルグリップを回して発進、そして一路六課へ。プライソン戦役の陸戦兵器が齎した被害はすぐには癒えず、被害が特に大きかった中央区画は至るところで復旧工事が行われている。だからか迂回する回数も多いが、時間帯からして帰宅ラッシュなはずだが、運が良かったのかさほど遅れることなく六課に到着。

「早く戻ってあげないとな」

ガレージに"マクティーラ"を停めて、急いで寮へと駆ける。チラッと見える隊舎の損壊レベルは酷いが、寮は俺のルーン魔術のおかげでほぼ無傷で済んだ。隊舎の復旧は急ピッチで行われているもの

の、もうしばらくは掛かりそうだ。だから今は海上に設置されているシミュレータの側に停泊しているアースラが一時的な本部となっている。

「あ、パパ！」

寮の前にまで来た時、開いたエントランスドアから「フォルセティ！」が飛び出して来た。あの子もヴィヴィオと同じように"レリック"ウェポンとしてプライソンに施術を受けていたが、今日までの精密検査の結果、ヴィヴィオと揃って問題無しと診断を受けた。俺と戦っている最中の記憶は薄ら残っているようで、最初の頃はずっと謝ってばかりだった。

「おかえり～！」

俺はその場に屈んだうえで両腕を広げ、飛び付いてきたあの子を受け止め「ただいま！」と挨拶を返す。あの子を抱えたまま立ち上り・・・

「ただいま、はやて」

「おかえり、ルシル君♪」

フォルセティに遅れてやって来たはやてと挨拶を交わす。六課課長としての立場から考えれば、この時間帯はまだ忙しいはずなんだが。とりあえず、「パパ、ごはん～」と腹を鳴らしたフォルセティの言うように食堂へ向かう。俺とはやてとフォルセティは横に並んで手

を繋ぎながら食堂へ入ると・・・

「おー、帰ってきたな」

「おっ帰り～　」

ヴィータとアイリから挨拶を貰った。それにシグナムとシャマルとザフィーラも2つのテーブルに着いていて、周りにはなのは達みんなも揃っていた。この早い時間帯で勢揃いは本当に珍しい。なのは達からも「おかえり～♪」の挨拶を受け、「ただいま！」と返していく。

「パパ、こっちっこっち♪」

フォルセティに手を引っ張られて着いたテーブル。そこははやてとヴィータとリインの3人と同じテーブルだ。それにしても結構な御馳走がそれぞれのテーブルの上に置かれている。はやてが「飲み物取って来るな～♪」と受け取りカウンターに向かうと、「ぼくも～」フォルセティも付いて行った。

「ありがとう。・・・なあ、アイリ、ヴィータ」

「な～に？」

「んあ？　なんだよルシル」

調査官は本来、出向先の部隊に知人・友人・家族が居ても他人行儀

で接しないといけないとされている。公私混同が絶対に許されない役職だからだ。が、俺は今回だけは特別に普段通りに振舞うことを許された。それもフォルセティの情操教育云々からだ。さすがに養子として引き取られ、俺とはやてが両親となっている今、演技とは言え目の前で冷めた関係を見せるわけにはいかないしな。

「（調査部長にもちゃんと許可を貰ったし。あの子に淋しい思いをさせずに済みそうだ・・・）今日は随分とメンツが揃っているな。しかも料理も豪勢だ。何かの祝い事か？」

今日が何か特別な日だったかと思考を巡らせるが、特にそう言った日じゃないと頷く。六課が担っている役割からしていつ出動が掛かるか判らないということで、特定の誰かの誕生日の祝いはしない事にしているから、バースデーパーティじゃないのは確かだ。

「あー、そっか。お前朝から居なかったしな。六課に出向してたアリサとすずかとギンガが古巣に帰るんだよ明日」

「うん。だから今日は送別会ってわけだね」

「はあ？　待て、そんな大事な話聴いていないぞ」

「いやだってお前居なかったし」

「メールがあるだろ。くれ」

危うくこのイベントを逃すところだった。文句を返すとヴィータか

ら「こっちはこっちで忙しいんだよ、事後処理とかでな」ムスッとした口調でそう返された。プライソン一派はほぼ全員が死亡した。しかも訳の判らない暗殺者によって。さらに加えて本局の上層部が犯罪者と通じ、しかも自殺・逮捕となれば、管理世界からの大バッシングは当たり前だった。その対応にも忙しいしな～。

「アイリも備品整理とかで忙しかったからね。ごめんね、ルシル」

言外に疲れたと溜息を漏らすヴィータとしょんぼりするアイリ。仕事量が半端なく増えたことは知っているから、「すまん」こちらが謝ってしまう。そんなところに「お待たせや、ルシル君」はやてと、「おまたせ～」フォルセティが帰って来た。

「ありがとう、２人とも」

俺の右隣にフォルセティが座り、あの子の右隣にはやてが座る構図になるが、はやてだけは座ることなく、アリサ、すずか、なのは、フェイト、ヴィヴィオの着いているテーブルと、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガの着いているテーブルの間に向かった。

「ではこれより、本日までお世話になったすずかちゃん、アリサちゃん、ギンガの送別会を始めます！　長々と挨拶をするとせっかくの料理も冷めるし、ささっと終わらせます。ではすずかちゃん、アリサちゃん、ギンガ、お疲れ様でした！」

はやての音頭に合わせて「お疲れ様でした～！」と続く六課メンバー。それからこれまでの忙しさ、これから待ち受ける忙しさを忘れ

るかのように和気あいあいと喋りながら、短い期間ながら世話になったアリサとすずかとギンガに感謝をした。あの3人には本当に助けられたからな。本当に味方として居てくれてよかったよ。

「なあなあ、ルシル君」

フォルセティとヴィヴィオがお互いに「あーん♪」としているのを微笑ましく眺めていると、なのは達と談笑していた「はやて」が近付いてきた。

「ちょう相談なんやけどな、その・・・あんな・・・」

六課の部隊長としてのはやてらしくない言い淀み。だからと言って急かすことなく、その先を黙って待つ。すぐにはやては意を決したかのように頷き、何故か俺の左隣へと移動して来た。そして「フォルセティ、楽しそうやな」と、俺と同じあの子たちを見て小さく笑い声を上げた。

「ああ。本当に兄妹のようだ」

「そやね～・・・。ルシル君。フォルセティはもう養子として八神家に引き取って、名前も八神フォルセティになってる。もちろん住む家は私らの家や」

「？　あー、うん、そうだな」

「前にもちょろっと相談したけど、改めて・・・。ルシル君。一緒

に暮らさへん？　私が養母、ルシル君が養父やし、子供のフォルセティの事を考えれば一緒に住むのがええと思うんよ」

それがはやての話だった。不安を湛えた瞳で俺を見るはやて。俺はその申し出にそう長く思案することなく「そうだな。お世話になろうかな」そう答え、彼女に微笑みを向ける。リアンシェルトからの提案を受けた今、俺にはある程度の自由が利くようになった。もう離れて暮らす理由も無いだろう。

「ホンマか！？　やった！・・・ルシル君たちの部屋は以前から出来てるから、六課解散後にすぐに戻って来れるからな♪」

そう言ってはやては俺に寄り添って、傾けた頭を俺の左肩に乗せた。傍から見えれば完全に恋人同士だ。いやもうフォルセティが居る以上は夫婦になるのか。こいつは非常にまずい。俺への恋心を覚まさしてやるどころか、階段を何段階もすっ飛ばした状態だ。

「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン。六課解散後、ルシル君とアイリとフォルセティが一緒に住むことになったからな～♪」

そんな体勢のまま喜色満面の笑顔と声でそんなことを言うものだから、今の俺たちの様子に気付いていなかった女子メンバーも、俺とはやてを見て頬が赤くなっていく。そこからはもう送別会とかいう空気ではなく、何故か俺とはやてのお祝い空気に変貌していった。

Ｅｉｐｉｃ３４これからのスカリエッティ家～Ｎｅｗ　Ｃｈｉｅｆ～

†††Ｓｉｄｅすずか†††

機動六課への出向期間が終わった私は、元の所属部署の第四技術部に戻って来た。とは言っても、すぐに異動になっちゃうけど。自分のデスク周りの整理をしていると、「すずかちゃん」と背中に声を掛けられた。

「あ、マリーさん。お疲れ様です」

この第四技術部の主任のマリーさん、マリエル・アテンザさんに挨拶。マリーさんは、亡くなったドクターと一緒に、チーム海鳴にたくさん協力してもらった大恩人だ。そして私のお師匠でもある。

「うん、お疲れ様～。身辺整理はどんな感じ？」

「あ、はい。第四技術部から持ち出し厳禁とされる資料の整理はもう終わりました。あとは私個人のデータの転送だけですね」

そう返答しながらデスク上に展開されている空間キーボードのキーをいくつか打って、第四技術部員としての私の専用データベースから、接続しているメモリスティックに個人データを転送する。このデータの中には、なのはちゃん達のデバイスやスカラボでのお掃除ロボットなど、これまでに制作した物やこれから製作する物の設計

図などが収められてる。

「このデータの転送が終われば、いつでも第零技術部へと移れます」

「そっか。えっと・・・じゃあ、その～・・・あっ、うん。荷物を運ぶの手伝おうか？」

「ありがとうございます、マリーさん。でもトーレさんが手伝ってくれますから大丈夫です」

それに私の力だけで運べるほどの荷物だから、わざわざマリーさんの手を煩わせることもない。マリーさんは「そっか。じゃああとは～・・・」と言いながらそわそわしだす。トーレさんが迎えに来てくれるまでの間、もう少し時間があるかな。

「マリーさん」

「あ、はいはい！　なんでしょう・・・？」

困り顔から一転、いつも通りの安心できる笑顔を浮かべてくれたマリーさんと向き合うように椅子から立ち上がった。

「これまで本当にお世話になりました。マリーさんから教わった事、一緒に開発や改良の相談をした事、ずっと忘れません。ありがとうございました！」

深々と頭を下げてこれまでお世話になったことにお礼を言う。思い

起こされる１０年近くの思い出。第零技術部――スカラボへの出入りやドクターへの弟子入りも快く応じてくれた。マリーさんと出会ったから、私はデバイスマイスターという資格があることを知って、この道を行くことを決めれたんだから。

「ううん！　こっちこそ、すずかちゃんと一緒に過ごせて本当に楽しくて、充実して、とても素晴らしい時間だった！　ありがとうね、すずかちゃん。私も今日までの事を忘れない」

マリーさんと握手を交わしていると、「すずか。待たせたな」そう声を掛けられた。声の主は、マリーさんの背後に姿を見せた「トーレさん」だ。

「あ、お久しぶりです、マリエル技官」

「うん、久しぶり、トーレ」

マリーさんとトーレさんが軽く談笑した後、「じゃあ、コレをお願いします」とデスクの脇に置かれたファイルの納められたボックス１箱を示す。紙媒体は今の管理世界の魔導技術の中じゃ珍しいとされるけど、私個人での目的で使っている。ほとんどがメモ帳としてのプリントだ。思いついたことをその場ですぐに書き記したものばかり。

「承知した」

「ではマリーさん。お世話になりました。ありがとうございました！」

改めて感謝を伝えて、「はい！」笑顔で私たちを送り出してくれたマリーさんとお別れ。トーレさんと一緒にスカラボへと向かう。

「・・・あ、トーレさん」

「トーレと呼び捨てで構わん。今日からはお前が私たち第零技術部の主任（リーダー）だ。とは言え、私はこれまでと変わらず、すずかと呼び捨てにさせてもらうが・・・」

「う～ん、今さら呼び捨てにするのはちょっと遅すぎなような・・・。一応は努力しますけど・・・。それでですね、トーレさん。ドクターのお葬式、いつやりましょうか・・・？」

呼び方の話題から本題に戻す。プライソンによって殺害されたドクター、ジェイル・スカリエッティ少将は、医務局での司法解剖の後にシスターズの長女のウーノさんに引き渡された、という話を今朝、ウーノさんから通信で聞いた。

「葬儀か・・・。生前、ドクターと懇意にしていた局員や教会騎士たちから葬儀について連絡を受けたが、近親者のみの葬儀にしようかと考えている」

「そう、ですか・・・」

「しかし、私たちシスターズだけのお見送りではドクターも寂しいだろう。お前やチーム海鳴の子ら、それにマリエル技官もお暇があ

れば参列してもらいたいところだが・・・」

ドクターのお葬式は派手に行うことなく、関わりが深い人たちだけの式にするみたい。でも良かった、私たちも参列できて。ドクターを見送れないのはとても悲しいもの。

「さっきマリーさんと会った時に訊ねてみれば良かったんじゃ・・・？」

「お前の門出の瞬間に茶毘の話など出来るものか」

変に律義なトーレさんに「ありがとうございます」と素直にお礼を伝える。それからはほぼ無言で歩いて、スカラボに「到着！」した。スライドドアの前で私は立ち止まり、ドアの表面に刻印されたＺＥＲＯという文字を眺める。これまでは弟子として何度も潜ったドア。でも今日からは、ドクターの代わりにスカラボの主として潜ることになる。

「どうした、すずか？」

「あ、いえ・・・。すぅ～はぁ～・・・。よしっ。月村すずか、入ります！」

ドア脇のタッチパネルに触れてドアのロックを解除。プシュッと音を立てて開いたドアを潜って、まずは応接室へと入る。次に奥のドアから転送室へと移動。そこをまた通り過ぎて奥のドアを潜る。そこは四角形の屋で、奥のスカリエッティ家の居住区へ繋がるドアと、

さっきまで居た転送室へ繋がるドア以外の左右の壁には、私もお世話になっている第二研究・開発室、そして私もまだ知らない真の第一研究・開発室へ続くトランスポートがある。

「この荷物はどうする？」

「あ、私の私室にお願いします」

「判った」

部屋の真正面にあるスライドドアの先にある長い廊下の奥に、もう１枚のスライドドアがある。そこを潜ればスカリエッティ家と、お世話になってる私の部屋がある居住区へと向かうためのトランスポートが見えてくる。そこから転移して、歯車状の居住区へ。出っ張り１つ１つが個室になっていて、部屋数は全部で４４室。特に大きい東西南北の４部屋は、食堂と大浴場と聖王教会の礼拝堂とドクターの個人研究室になっている。

「１４号室・・・っと」

私に与えられた部屋番のドアへと向かい、「なんか久しぶりに帰って来た感じ・・・」私の部屋のドアの前で立ち止まる。

「２週間ほどの出向だったからな。しかも期間内の密度は濃かっただろう？」

「あー、確かにそうかもです。出向してすぐにプライソン戦役が起

こりましたし・・・」

短い期間に似合わない内容の濃い時間。久しぶりだなって錯覚するのも仕方ないかもしれないな〜。一先ずドア横のパネルに手を置いて指紋認証によるロックを解錠する。スライドドアが開いて、「奥のデスクの上にお願いします」とトーレさんを招き入れた。

「ああ、承知した」

トーレさんが1人室内へと入って行って、リビングにある作業デスクにファイルの収められた箱を置いて、「礼拝堂だ。そこにみんなが居る」と言って私の待つ廊下に戻って来て、次の行き先を教えてくれた。頷き返して、私とトーレさんは揃って礼拝堂へと向かう。礼拝堂の扉は木造で両開きタイプ。内側に向かって右側の扉を開けると、一般的な教会の礼拝堂と同じ造りの空間が目の前に広がった。

「月村すずか、入ります」

「今戻ったぞ」

礼拝堂にはウーノさん、ドゥーエさん、クアットロさん、チンク、セインが居て、祭壇近くの台には柩が置かれている。ウーノさんが「すずか、トーレ、お帰りさない」って挨拶をくれた。

「すずか、見てあげて」

ドゥーエさんに手招きされて、私は祭壇の元へと歩く。そして目を

赤く腫らしたウーノさん達の横を通り過ぎて柩の前に立つ。収められているのはやっぱり「ドクター・・・！」の遺体だった。いつも着ていた服に白衣姿で、表情は亡くなってるって思えない程に穏やかで・・・。視界が涙で滲み出す。

――すずか君――

「ドクター・・・、ドクター・・・！」

ドクターとの思い出が脳裏を次々に過ぎっていく。ありきたりな言葉だけど保護者として時には優しく、科学者の師として時には厳しく、私を導いてくれた大恩人。泣いてる私に「花を添えてやってくれ」チンクが花を差し出してくれた。

「カンパニュラ。花言葉は感謝。お前にピッタリの花だと思い、残しておいた」

「あ・・・。ありがとう、チンク」

チンクから花を受け取って、すでにいろんな花に覆われたドクターの胸の上に「今までありがとうございました」これまでお世話になったことへの感謝と一緒に花を置いた。一礼してウーノさん達に向き直る。

（たぶん、今しかないよね・・・）

意を決して、ドクターの娘であるウーノさん達に伝えることにした。

戦役終結後、六課に帰ったところで気付いた新着メール。

「実は、ドクターからメールが送られて来たんです。受信時刻はドクターの死亡推定時刻と一致していて、たぶんですけど・・・亡くなったことが引き金となって転送される遺書メールかと・・・」

私がそう言うとウーノさん達が目を見張った。いつ伝えようか、いつ観せようか、ずっと考えてた。でも遅くなればなるほどまずい気もして、スカラボに戻ったら伝えようと考えてた。

「・・・すずか。観せてください、この場で」

「ええ。ドクターが居るここで観たいわね・・・」

「死後に伝わるメッセージ・・・」

「ドクターが遺したかったもの」

「しっかりと受けとめなければな」

「うん」

ウーノさん達の思いに私は「判りました」と頷いて柩の前にモニターを展開、そしてドクターのメールを再生する。黒い画面が少し映った後、どこかの部屋が映ってドクターが『やあやあ』と手を振って出てきた。

『私はジェイル・スカリエッティ。時空管理局本局・第零技術部、愛称スカラボの部長だ』

モニターに映る生前のドクターの姿、声にまた視界が涙に滲み出す。

『これより私と娘たちは、実の兄であるプライソン・スカリエッティとその一派の研究所へと向かうう。何故ならばプライソンを殺害する任務を受け、それを承諾したからだ。奴は恐ろしい男だ。全くの無傷で攻略できるとは思えない。しかし、この命に代えてもプライソンを殺し、そして娘たちだけは無事に返すつもりだ』

ドクターの決意にドゥーエさんが「ドクターが生きてこその私たちなのに・・・」って漏らした。

『もし、もし万が一にも・・・私がプライソンと相打ちになってしまった場合。その最悪の結果を想定した時、私は遺された娘たちに伝えておかなければならない事があるため、このメールを遺した。この真実は、娘たちにとって辛いものになるだろう。それは、娘たちの出生の秘密だ。もし聴きたいのであれば、このまま再生してくれ。おそらくないだろうが、聴きたくない場合はここをタップしてくれ』

ドクターの横に矢印マークが表示された。私はウーノさん達にどうするか訊ねようとしたところで、クアットロさんが真っ先にモニターに早足で向かって、矢印マークをバシッと叩いた。

「ク、クアットロさん・・・!?」

「私たちの出生なんて～、正直どうでもいいです～！　ねえ？　ウーノ姉様、ドゥーエ姉様、トーレ姉様、チンク、セイン」

「ええ。出生なんて私たちに関係ないわ」

「私たちの親はこの世でただ1人だけ」

「ジェイル・スカリエッティ」

「あの人だけだ」

「うんっ。だから本当の親とか、どうやって生まれたとか、どうだっていい！」

ウーノさん達がそう言うなら、私がとやかく言うことはない。ウーノさん達の生みの親がプライソンであるって秘密は、私がお墓まで持って行こう。なんて思っていたら、「プライソンなどが父親なんて、死んでも認めたくないわ」ってウーノさんが嘆息して、ドゥーエさん達が頷いた。

「ええ！？　知っていたんですか！？　プライソンが親だって事！」

「あら、やっぱりそうなのね」

思わず喋っちゃった私の言葉にウーノさんが片頬に手を添えると、ドゥーエさんは「これまで多くのヒントがあったもの」って続いた。

「アルファと初めて遭遇した際、彼女は私やトーレを、いやシスターズを指して姉妹だと言っていた」

「私たちは姉妹の意味を、サイボーグだからだと曲解していたわけだ。額縁通りに捉えてしまえば、それが私たちの真実なのだろう」

――偽者とは、酷い言い草ですね！　言うなれば私たちは姉妹になると言うのに！――

チンクとトーレさんの話に、「そう言えば、そんなことを言っていたような～」私は唸った。リアルタイムでモニターでそんなやり取りを観たような気もする。

「さらに言えば、ガンマのシステムにクラッキングを行った際にいくつかデータを掻っ攫ってきたのだけどぉ～・・・」

「その中に、私たちの幼い頃の写真データがあった。スキル名もそう。年月日から、データ時の私たちはドクターの孤児院で過ごしているはず」

「信じるべきはドクターと孤児院で一緒に過ごした思い出だけれど、プライソンがわざわざこんな偽データを作るわけもなく」

「なら考えられるのは、私たちシスターズはスキュラやノーヴェ達と同じ、プライソンによって生み出された人工生命体・・・」

ウーノさんとドゥーエさんとチンクの言う通りだ。でも思っていた以上にショックを受けずに正気を保ってくれたのは良かった。みんな、ドクターを本当に父親として慕っているんだね。

『愛する娘たちへ。・・・愛おしい私の娘、ウーノ。いつも私の側で尽くしてくれた。本当に感謝している。長女として下の妹たちの面倒をよく見てくれ、秘書として私を支えてくれていた。ありがとう、ウーノ』

「・・・っ！　ドク・・・ター・・・！」

『愛おしい私の娘、ドゥーエ。少々私への過剰スキンシップが酷かったが、ウーノと共に側で尽くしてくれた。いつも美味しい料理を作ってくれた。日々、それが楽しみだったと言っても過言ではない。ありがとう、ドゥーエ』

「そんな・・・！　ドクター！」

『愛おしい私の娘、トーレ。その力で私と姉妹たちを護ってくれていた。その強さのおかげで私たちは常日頃、安心安全に過ごすことが出来た。これからも姉妹を護ってやってほしい。ありがとう、トーレ』

「いいえ・・・！　いいえ、ドクター・・・！」

『愛おしい私の娘、クアットロ。研究・開発を手伝ってくれたおかげで、数多くの作品を生み出すことが出来た。その頭脳に助けられ

たことも多々ある。とっても有意義な時間を過ごさせてもらった。ありがとう、クアットロ』

「う・・・うぅ・・・ドクターー・・・」

『愛おしい私の娘、チンク。開発などに必要な物資の調達を率先してくれたことで、物資不足で私の研究や開発が滞ることは一切なかった。護衛としてもまた優秀。小柄な体格でありながら、それをデメリットと感じさせないその実力だった。ありがとう、チンク』

「ドクターー・・・。はいっ」

『愛おしい私の娘、セイン。その元気いっぱいな性格は、少しばかり雰囲気の暗いスカラボに明るさを差し入れてくれていた。いや～。ウーノもドゥーエもトーレもチンクもクールだろう？　クアットロの明るさはセインとは方向性が違うからね。君の明るさにはいつも助けてもらっていたよ。ありがとう、セイン』

「うんっ・・・うんっ、うんっ！」

ドクターのシスターズへの想いと感謝の言葉。関係ないのに私もボロボロ泣いちゃう。ウーノさん達が落ち着くまでドクターの遺言メールを停止。どれだけでも待つつもりだったけど、1分としない内にウーノさんから「すずか。続きをお願い」と促された。

「はい・・・」

『・・・次のメッセージは、私が死んだ後のスカラボについてだ。スカラボは私が最高評議会から、管理局の為の技術開発を行い続けるための牢獄として用意されたものだ。ゆえに私が死んだ後、最高評議会が取る選択肢は2つ。用済みとして潰されるか、後継者を立てて存続させるか、そのどちらかだろう』

曇った表情を浮かべるドクター。前者はなんとなく判っていたけど、後者の後継者って・・・。とここで、ウーノさん達が私を見ているのに気付いた。それで後継者が「私・・・」だってことが判った。

『前者であれば、最高評議会に逆らうことなく受け入れてほしい。そしてスカラボが閉鎖された時、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、君たちはどの部署へ行こうとも重宝される娘たちだ、好きなように生きてもらいたい』

「第零技術部の解散。ありえない、あってはならない」

「私たちの居場所はただ1つよ」

「第零技術部。またの名をスカラボ」

「いくらドクターの遺言とはいえ、スカラボを畳むことだけは・・・」

「出来んな」

「そ～ゆうこと！」

ウーノさんの想いは無駄にしたくないし、私としてもスカラボをここで終わらせるつもりなんてない。モニターに映るドクターを見詰めると、そんなわけないのにドクターと目が合った気がした。

『後者であれば、おそらく後継者はすずか君となるだろう。何せ私の最初にして最後の弟子なのだから。すずか君。君を最高評議会の奴隷にはしたくはない。娘たちが君をスカラボの責任者に据えようとするだろうが、断ってくれても構わない』

「・・・いいえ。私はこのスカラボが大好きです。ドクター、最高評議会はもうありません。ですから安心してください。私は主任として、シスターズのみんなと一緒にスカラボを続けて行きます」

これは宣誓だ。私にとってもスカラボは大切な居場所。私たちを大事に思ってくれているドクターには悪いけれど、ドクターとの思い出と一緒に私たちはスカラボで過ごしていく。

『最後に・・・すずか君。このメールは私の鼓動が完全に停止した際に、君の個人フォルダに送信されるように設定した。娘たちはおそらくメールも見れない程に憔悴しているかもしれないからね・・・。私の勝手で今後、すずか君が大変な目に遭うかもしれないと考えるととてもやりきれないよ。しかし君と技術者としての時間を過ごせたことが、君を技術者として導くことが出来たのが、余りにも幸せなものだった。ありがとう、すずか君』

「ドクター・・・。私も、ドクターからたくさんの事を学べて、と

ても幸せでした。ドクターから教わった知識・技術・心得を決して無駄にすることなく、第零技術部主任として頑張って行きます。ですから・・・天国から見守っていてください」

柩に眠るドクターを改めて見つめる。ウーノさん達も集まって来て「これまでありがとうございました」とそれぞれの言葉で、ドクターに感謝していった。そして最後はみんなで柩の蓋を閉めた。

葬儀は明日。シスターズとチーム海鳴、それにギンガとスバルを呼ぶことになった。日本は火葬だけど、ミッドは海外と同じ土葬スタイル。埋葬地はウーノさん達が話し合って決めて、ドクターが経営しているスカリエッティ孤児院近くにある丘。今もなお孤児院で過ごしている子供たちの笑い声が聞こえるから、と。

「ドクター。それではまた・・・」

柩に声を掛けて、私は礼拝堂を後にした。

Ｅｉｐｉｃ３５これからの高町家～Ｔｈｉｎｋ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｆｕｔｕｒｅ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

監査・監察・査察を一手に引き受ける特別な役職である調査官のルシル君、後見人のリンディ統括官やクロノ君、騎士カリムからも許可を得て、ミッド南部はアシュトン諸島へと私たちはやって来た。今日の目的は、チーム海鳴の誰もがお世話になった第零技術部、通称スカラボの部長だったドクターの葬儀の為だ。

「まさか、ドクターの葬儀に参列する日が来るなんてな・・・」

喪服姿のはやてちゃんが目を伏せた。シスターズから参列を許されたのは、チーム海鳴とヴィヴィオとフォルセティ、スバルとギンガのナカジマ姉妹、ドクターとは直接関係は無かったけどティアナとエリオとキャロ、教会関係者としてシャルちゃんとトリシュちゃんだ。

それに特別に許可を貰って1日限定の仮釈放処置を受けたノーヴェ達。みんな喪服を着てる。ドクターの眠る柩は今、ここ孤児院の側に建つ教会の祭壇に置かれている。孤児院の側ってこともあって参列してるのは私たちだけじゃなくて、孤児院の関係者や子供たちも一緒だ。

「では別れ花をお願いします。まずはスカリエッティ家、次にスカリエッティ孤児院関係者、機動六課、教会関係者の順でお願いしま

す」

喪主を務めるウーノさんがそう告げた。側には数えきれないほどの種類豊富な花が置かれた台がある。教会の二列縦隊で並ぶ長椅子に座る私たちは、椅子から立ち上がって台へ向かうシスターズとノーヴェ達を眺める。そしてそれぞれ花を1輪と手にとって、柩の前に立つ。

「ドクター。これまでお世話になりました」

「どうぞごゆっくりとお休みください」

「私たちスカリエッティ家一同・・・」

「これからもスカラボにて過ごして参りますぅ」

「ですので天国から私たちを見守っていてください」

「ドクターに見守ってもらってるって思うだけで、あたし達はずっと元気だから」

ウーノさん達がドクターに言葉を掛けながら、順に柩の中に花を入れてく。続いてノーヴェ達が柩の前に立つ。

「ドクター。記憶を取り戻した今の状態で・・・」

「また会いたかった・・・」

「ごめんなさい、ドクター」

「あたし達、ちゃんと罪を償います」

「そしたら胸を張って施設から出るっスから・・・」

「その時は私たちも見守ってください、ドクター」

セッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、ディードの順で言葉を掛け、花を入れていった。次に孤児院の関係者と子供たちが花を入れてく。背が足りない子供は、関係者の人たちに抱え上げられて花を差し入れては「ありがとーございました！」って舌足らずだけどお礼を伝えていった。次は私たち六課の順。席を立って、台へと向かう。

「ドクター。すずかです。先日もお伝えしましたが、私が第零技術部、スカラボの主任としてシスターズと一緒に・・・スカラボを守っていきます」

すずかちゃんを筆頭に次々とドクターへの感謝を述べつつ、花を柩の中に差し入れてく。ルシル君がフォルセティを片腕で抱きかかえて、「ドクター。お世話になりました」と肩手で花を差し入れると、「ドクター。ありがとうございました」フォルセティも同様に花を入れた。

「ドクター・・・」

柩の中に眠るドクターを見る。プライソンに殺害されたのに、その表情はなんて穏やかなものなんだろう。でもだからこそ心苦しい。何でドクターが死ななければならなかったの。それだけが本当に悔やまれる。

「今の私たちが居るのは、ドクターのおかげでもあります」

"闇の書"事件の際、八神家を除くチーム海鳴みんなのデバイスを強化してくれた。そのおかげでなんとか事件を解決するまでに至れたし、今回だってすずかちゃんがドクターから学んだ技術の応用で私たちのデバイスが強化されたし。直通の転送ポートだってずっと貸してくれてた。ドクターが居てくれたからこそのチーム海鳴でもある。

「なのはママ。わたしも、ドクターにごあいさつしたい」

ドクターの胸の上に花を置いたところでヴィヴィオはそう言ったから、「はい、ヴィヴィオ。ドクターにお別れを言ってあげて」って抱え上げた。

「ドクター。ヴィヴィオ、ドクターの声おぼえてるよ。なのはママ達のおともだちだって。ヴィヴィオとフォルセティを助けに来てくれた。ありがとうございました。ドクター、おやすみなさい」

そう言ってヴィヴィオも手にしてた花をドクターの胸の上に置いた。六課メンバーの別れ花が終わった後は、「ドクター」シャルちゃん

とトリシュちゃんの教会関係者だ。

「あなたとの付き合いはもう１０年になるね。局入りしてすぐにチンクに付いて第零技術部へ。そこでドクターやウーノ達と出会って、なんでかドクターに気に入れられて。デバイスを改良してもらって。本当にいろいろお世話になったね」

これまで聞いたこともないほどのシャルちゃんの消沈した声。

「正直ね、ドクターが亡くなるなんて考えもしなかった。人はいつか必ず天国に発つ。でもさ、ドクターっていつまでも若いままだったでしょ？　私たちがお婆ちゃんになってもそのまんま～とかさ・・・。なのに・・・何で死んでんのよ・・・馬鹿。・・・ドクター、おやすみなさい。今までありがとう」

涙を浮かべたシャルちゃんも花を入れた。入れ替わるようにトリシュちゃんが柩の前に立って「お久しぶりです、スカリエッティ少将」挨拶した。

「第零技術部との出会いはイリスからの紹介でしたね。そのおかげで、次元世界屈指の技術力で私や兄パーシヴァルのデバイスを改良・強化して頂いて・・・。それがどれだけ私たちの助けになったことか・・・。本当にお世話になりました」

トリシュちゃんも花を入れ、シャルちゃんと一緒にこちらに戻って来て椅子に座った。この後はドクターの冥福を祈りの時間となった。祈っている間、これまでのスカラボでの時間が脳裏を過ってく。

「それではこれより出棺いたします。ご起立してください」

祈りの後にウーノさんがそう告げると同時にドゥーエさん達が柩の蓋を閉めて、黒い布を被せる。地球で言うキリスト式のような葬儀の仕方だ。ウーノさんを除くドゥーエさん達が両側に在る持ち手を取って柩を持ち上げた。そしてウーノさんを先頭にして、ドゥーエさん達、孤児院関係者と子供たち、私たち六課とシャルちゃんやトリシュちゃんと続いて教会から出る。目指すは孤児院と海の間に在る小高い丘の上。

「ドクター。聞こえますか？　ドクターの夢でしたよね。自由の身になることが出来れば、海を一望できるところに住みたいと」

「申し訳ないですわ。まさか、死後にその夢を叶えさせることになるなんて・・・」

「もう少し・・・もう1日、生きてくださっていれば・・・！」

「柩に眠る遺体ではなく元気なそのお体で、こうして私たちと歩けたかもしれませんのに」

「それが残念でなりません・・・」

ウーノさん達の会話が潮風に乗って聞こえてくる。ドクターの夢。その言葉だけでもう泣けてきちゃう。結局はプライソンの勝ち逃げっていう形で終結したプライソン戦役。本当に悔しい。

「ドクターー・・・」

見えてきたのは高さが１ｍくらいある石碑。ドクターの名前とＮｅｗ　Ｅｒａ　１１～７５って生まれ年と没年、Ｒｅｑｕｉｅｓｃａｔ　ｉｎ　ｐａｃｅ（ルシル君から、レクゥィエスカト・イン・パーケって読んで、安らかに眠れって意味だって後で教えてもらった）が刻んである。墓石の前にある先に掘られていた穴の中にドクターの眠る柩が収められる。ドゥーエさん達が穴から出て来て、側にあるキャスター付きの道具箱からシャベルを取り出した。

「待ってくれ。まさか、君たちでドクターの柩を埋葬しようと言うのか・・・！？」

ルシル君が慌ててウーノさん達に駆け寄った。ドクターの葬儀には、専門の葬儀屋さんが誰１人として来てない。だからウーノさん達のやり方は、本来の葬儀のものとは違うんだって思う。親族が柩を埋めるなんて聞いたことが無いし。シャルちゃんやトリシュちゃんに目を向けると、私の視線に気付いた２人は首を横に振った。

「これは必要な儀式なのよ、ルシリオン君。父との決別を、娘である私たちの手で行う。しっかりとお別れをして、ドクターを安心させたいの」

ウーノさんの言葉にドゥーエさん達が頷いて同意を示した。それでルシル君は「判った・・・」って引き下がった。

「では皆さん。最後にもう一度、ドクターが安心して天国に旅立てるように黙祷をお願いします」

目を閉じてドクターの冥福を祈る中、ザッ、ザッて土を穴に戻す音が聞こえてくる。そうしてシスターズの手でドクターの柩は完全に土に埋まった。さらに埋めたところに石板をドンッと敷いた。動物に掘り起こされないようにするためと、献花台としての物みたい。用意されてた花束をそれぞれ置いて、「本日は父、ジェイル・スカリエッティの葬儀にお越しいただきありがとうございました」ウーノさんが挨拶を始めた。

「きっとドクターも、皆さんに送り出されてとても嬉しいと思います。・・・偶にで結構です。ドクター、ジェイル・スカリエッティのことを思い出してあげてください」

こうしてドクターの葬儀は終わった。ウーノさんとドゥーエさんとクアットロさんはこのまま孤児院に残って、トーレさんとチンクとセインはノーヴェ達を海上隔離施設へ送り届けることになって、私たち六課とシャルちゃんやトリシュちゃんは職場に帰ることになってる。シスターズ達と別れて、私たちは岐路に着いた。

「ただいま～」

「「ただいま～」」

六課の寮へと帰り、エントランスで掃除をしてた寮母さんの1人であるアイナさんに挨拶。はやてちゃん達からも挨拶を受けたアイナ

さんは「おかえりなさい！　お疲れ様でした」と挨拶を返してくれた。

「あの、アイナさん」

「はい？　なんでしょう、高町隊長」

それぞれが自室に戻る中、私はアイナさんに声を掛けた。アイナさんにあの事について相談もしないといけないし、「相談がありまして。よければお昼休みに少し時間を取ってもらえますか？」ってお願いすると、アイナさんは「判りました」って快諾してくれた。これ以上、仕事の邪魔も出来ないってことで「お願いします」と一礼してエントランスを後にする。アイナさんと別れて向かうのは、私とフェイトちゃんとヴィヴィオの３人部屋。部屋に入って、喪服から局の制服へと着替える。

「ねえ、ヴィヴィオ」

「な～に～？」

「六課が無くなった後、私はお家に戻るんだけど。ヴィヴィオも一緒に住むよね」

ヴィヴィオを養子として正式に引き取ることにした私は、ヴィヴィオに私の姓を付けた。で、六課解散後は北区に購入した一軒家に戻る。ちなみにミッド極北部のシャルちゃん家、北部の私の家、中央区画のアリサちゃんの家、南部のはやてちゃんの家って、南北に一

列に並ぶようになってる。どこのお家にも遊びに行きやすくするためだ。

「うん・・・？」

「あ、うん、住むんだよ一緒にね。でもなのはママ、お仕事でお家を空けることが多いと思うんだ」

解散まで残り半年。ヴィヴィオは7つぐらいになるし、今でも結構しっかりしてると思う。でもだからって家にひとり残して何日も空けるわけにはいかない。

「一応、私やアリシアも休暇の際にはなのはの家に通うようにするけど。それでもやっぱり一緒に居られる時間も限られてくる」

本局の寮暮らしだったフェイトちゃんとアリシアちゃん。フェイトちゃんも変わらずフェイトママってことで、休日は私の家に遊びに来てくれることになった。それは本当に大助かり。でもフェイトちゃんの言うように、どうやってもヴィヴィオと同じ時間を過ごせない日も出てくるわけで・・・

「だからね。ヴィヴィオ、アイナさんのこと・・・好き？」

「すきー！」

私たちが仕事や訓練などで寮を空けている間、アイナさん（それにザフィーラやアイリも）がヴィヴィオやフォルセティの面倒を見て

くれてる。だからヴィヴィオの答えは訊かなくても本当は判ってた。

「ん。そのアイナさんにね、ママ達が居ない時にヴィヴィオの面倒を見てもらおうって思うんだ。アイナさんなら2人きりでも大丈夫だよね？」

「うんっ♪」

ヴィヴィオは賛成してくれた。もちろん、ずっとアイナさんやフェイトちゃん達に頼り切りってことにならないように、教導隊の勤務内容や勤務時間の調整を行うつもりだ。しばらくは事務に回してもらって、早く家に帰らせてもらうように。あとはアイナさんが引き受けてくれるかどうかなんだけど・・・

「え？　ホームキーパーですか。ええ、私で良ければぜひ！」

食堂での昼食をみんなで終えてのお昼休み。約束通りアイナさんに、六課解散後でのヴィヴィオの面倒を見て頂けないかをお願いしたら、なんとノータイムで快諾してくれた。

「あの、こちらからお願いしておきながらなんですが・・・。良いんですか、そんな即答で・・・」

「問題ないですよ。私もヴィヴィオのこと大好きですし♪」

アイナさんは自分の子育ての経験を以って、ヴィヴィオやフォルセティの世話をしてくれてる。だから本当に安心してヴィヴィオを預

けられる。

「「ありがとうございます、アイナさん！」」

「よろしくおねがいします！」

フェイトちゃんやヴィヴィオと一緒にお礼。それから今後のことについても少し相談。フェイトちゃんやアリシアちゃんも手伝ってくれるけど、執務官もまた激務だから、そうそう帰っては来られない。私の教導官としての勤務内容の変更についてはたぶん、認めてもらえるはず。そのことからアイナさんが家に居てもらって欲しい時間もおのずと決まってくる。

「――高町隊長、テスタロッサ隊長。学校についてはどうします？北部にはいくつも学校がありますけど。私の子供と同じ学校なら、送り迎えもそんなに手間も掛からないと思います」

「あー、そうですね・・・」

「学校。うん、大事だよね」

ヴィヴィオを見る。私たちの視線にあの子は「？？」って小首を傾げながら、私たちを見つめ返した。ヴィヴィオも推定とはいえ、もう小学校に入っていい年齢だ。戸籍の方も用意してもらってるし、なんのハンデもなく過ごしていける。じゃあ学校はどこに・・・ってことになるんだけど・・・。

「でもヴィヴィオはリンカーコアを持ってますし、普通学校よりは魔法学校の方がいいかしら・・・？」

「ヴィヴィオはどうしたい？　魔法が学べる学校もあるけど・・・」

「魔法をしりた～い！　なのはママやフェイトママみたいに、かっこいい魔法つかいになりたい♪」

大きく挙手して将来の夢を語ったヴィヴィオに、私たちは微笑ましくて声を出して笑った。でもこれでアイナさんのお子さんと同じ学校には入らないことに。ここで私は「そうだ、フォルセティはどうするんだろ？」って考えに至った。

「あ、そうだよね。ヴィヴィオ、フォルセティと同じ学校に通いたい？」

「うんっ！」

フェイトちゃんの問いに即答だった。じゃあ「はやてちゃん達に訊いてみようか？」ってことに。私がヴィヴィオを引き取るって決意するよりずっと早く、フォルセティを養子として引き取ってたし。六課解散後の事に関してもすでにいろいろと決めてるかもしれない。

「あ、はやて。今、ちょっといいかな？」

『うん、ええよ～』

はやてちゃんに通信を繋げたフェイトちゃん。はやてちゃんは部隊長室に戻ってるみたい。私はこれまでの経緯を伝えて、「フォルセティってどこの学校に通わせるの？」って訊いてみた。

『学校？　ザンクト・ヒルデ魔法学院に決めてるよ。八神邸のある南部からザンクト・オルフェンまでの距離ってあるし、通学にはちょう不便やけどな。セインテストの血筋なんか、フォルセティも歳に似合わずしっかりしてるし、交通機関もちゃんと整備されてるし。何よりベルカ式やしな～、フォルセティ』

笑って答えてくれたはやてちゃん。Ｓｔヒルデ魔法学院か～。ヴィヴィオも「フォルセティといっしょ・・・」って目をキラキラさせてるし。フェイトちゃんやアイナさんと顔を見合わせて頷き合った。

「はやてちゃん。ヴィヴィオもザンクト・ヒルデに通わせようって思う」

『おお！　同級生やな！　じゃあなのはちゃん。シャルちゃんに連絡したって。学院に入学するのに必要な書類とか、全部用意してもらえるから』

「うん、ありがとう、はやてちゃん！　また何か相談したい事が出来たら・・・」

『いつでも何でも聞いてな♪　同じ子供を持った者同士、協力してレッツ子育てや♪』

手を振り合ってはやてちゃんとの通信を切る。改めてアイナさんに「ありがとうございました」ってお礼を言って解散。アイナさんを見送った後は、「シャルちゃん・・・」に連絡を入れる。

「たぶん、もう戻ってる頃だよね・・・？」

「時間的に今、着いた頃だと思う」

シャルちゃんの個人回線に通信を入れたことで鳴り出すコール音。数秒後に『はいはーい。なのは、何かあった？』シャルちゃんの顔が展開されたモニターに表示された。シャルちゃんに、簡単にこれまでの経緯、ヴィヴィオも魔法学院への入学手続きをしたいってことを伝えた。

『おお！　新入生は大歓迎♪　リンカーコアを有してる子なら、ヴィヴィオ、先生も先輩たちもみんな優しくて良い子だから、きっと楽しいスクールライフを送れるよ～♪』

「うんっ！」

モニター越しでハイタッチを交わすシャルちゃんとヴィヴィオ。こうして、ヴィヴィオもフォルセティと一緒にＳｔヒルデ魔法学院への道を進むことになった。

Ｅｉｐｉｃ３６これからの聖王教会～Ｈｅｒ　ｃａｓｅ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

プライソン戦役をなんとか乗り越えたけど、戦役によって局員や騎士団員の中から何人もの殉職者が出た。今日は亡くなった騎士団員の全体葬儀だ。騎士団施設エリア内にある、渡り廊下で繋がれた五角形を形作る５つのドーム。その内の１つで、騎士団全隊が集まっても余裕で入れる第１クッペルに今、わたし達は集合してる。最前列に隊長と副隊長が横に並び、その後ろに部下たちが縦にズラリと並んだ二列縦隊。

「先のプライソン戦役にて、我らが同志は勇敢に敵に立ち向かい、罪なき市民を護った！」

わたしたち各隊の前に立つのはわたしの母であり、フライハイト家の当主であり、聖王教会の教皇であり、ここザンクト・オルフェンの代表であるマリアンネ。その隣に立つのは、教会騎士団の団長であり、プラダマンテの実兄であり、六家の一角・トラバント家の現当主であるリナルド・トラバント卿。わたしたち騎士の最高司令官だ。

「命を賭して戦い抜いた我らが同志、騎士ゾルタン、騎士フェレーナ、騎士シモーヌ、騎士ティム、騎士サラ、騎士ローゼマリー、騎士スティーブ、騎士ピエール、騎士オスカー、騎士ノーラ、騎士マルター――」

トラバント団長が戦役で殉職した騎士たちの名前を告げていく。中には親しくはないけどそれなりの顔見知りな騎士の名前もある。

「以上１８名に・・・敬礼！」

団長の号令に合わせて、わたし達は柩の上に展開されてるモニターに映る遺影に体の正面を向け、デバイスを胸の前に掲げて黙祷する。母様と団長も柩へ振り返って、母様は教皇の初代聖王の名を冠した杖・"ヴィルヘルム"を、団長は２ｍ越えの片刃の大剣を掲げた。その後は献花、親族による要望によって騎士共同墓地への埋葬などのプログラムを経て、合同葬は終わりとなった。

「――ではロート・ヴィンデ隊、本日の任務に移れ！」

わたしの部隊に解散指示を出して、今日の仕事を始めさせる。わたしのロート・ヴィンデは、プライソン一派の捜査を担当してたから、まぁ仕事があるわあるわ。何せプライソンのアジトのデータから、ミッドだけでなく他世界にも奴の研究所があるって判明して、局も騎士団も協力して調査を行ってるし。今日の仕事は他騎士隊と協力しての捜査で、わたしは本局拘置所で拘留中のノーヴェ達への取り調べに同席することになってる。

（六課からは誰が来るかな～？　やっぱフェイトとアリシアかな～。六課の捜査担当はあの２人だしね）

このまま北部の第３次元港に向かおうとしたところで、「お疲れ～」

って声を掛けられた。振り向けば「クラリス」が居たから、わたしも「ん～、お疲れ～」と挨拶返し。

「クラリスはこれから・・・？」

「私のグリューン・ガルデーニエ隊は、第３世界ヴァイゼンにあるっていうアジトへの捜査。で・・・――」

「私のゴルト・アマリュリス隊は第１１管理世界ロヌムへ」

「プルプァ・グラディオーレ隊は第１２管理世界フェティギアでの研究所捜査です」

クラリスの背後にトリシュとアンジェが姿を見せた。３人とわたし（ここには居ないけどルミナも）は、共にパラディンになって教会騎士団を支えようって誓い合った幼馴染だ。そして今回のプライソン戦役で、場所は違えど共に戦った、本来はわたしの隊だけだったけど、事後処理に駆り出されることになったんだよね、捜査する場所が多すぎて・・・。

「プライソンも、ミッドだけに研究所を造れば他世界にまで出張しなくて済んだのに・・・」

クラリスがお腹を鳴らしながら展開したモニターには、ミッド首都クラナガンで開催される予定だったグルメパーティ。管理世界中のＡ級Ｂ級Ｃ級の料理が一堂に会する祭典だ。クラリスは１年も前から楽しみにしてたんだけど・・・。

「知っての通り戦役の影響で開催は見送られてるし。まぁ素直に諦めて、今日も仕事を頑張りましょう」

アンジェがそう締めくくったところで、わたしは「あ、ごめん、ちょっと着替えて来る～」一旦別れてそれぞれの隊舎へ。ロッカールームで局の制服に着替える。本局はミッド地上本部とは違って教会にも寛容だけど、さすがに捜査部エリアに別の組織である教会騎士団の団服で行くのはアウトだ。

「うん♪　久しぶりに着たけどサイズはバッチリ　」

日々の努力はわたしを裏切らない。局は休職状態で、教会の聖職者としての事務といった体を仕事ばっかりやってたから、そりゃあもう体重がアップアップ。だから溜め込んだストレスを発散するために、母様と模擬戦を繰り返してた。

「おかげでスカートとお腹の間に手が入る～♪」

体型を維持できてることにルンルン気分なわたしは「お待たせ～！」とトリシュ達と合流して、改めて次元港へ向かう。んで、その道中、「どれだけ買うつもりです？　クラリス」トリシュがそう言って呆れる。クラリスはレールウェイの停まる駅ごとに降車しては売店で食べ物を購入を繰り返してる。

「クラリス。あなた、過食症でも患ってるんじゃない？」

「過食症患者は食べてすぐに戻すってやつでしょ？　私、戻すなんて勿体ない真似はしてないし」

そう言ってクラリスは、先の駅で買ったお饅頭４つをさらっと食べて、「けぷ」とげっぷした。トリシュとアンジェが「はしたない・・・」頭を抱えた。

「それにしても、それだけ食べて太らないんですか？」

「そんな細い体のどこに入っているんでしょう・・・？」

「ひゃい！？　くすぐった・・・！」

トリシュとアンジェがクラリスのお腹を触りまくる所為で、クラリスが「やん・・・！」変な声を出す。だから「２人ともやめよう、マジで！」他の座席に座るトリシュ達３隊の部下からの視線をビシビシ感じるから、やめるように言う。

「昔にも話したと思うけど、私って食べても太らない体質だから。お腹は太らないからダイエットも考えなくても良い。この体に感謝♪」

「「「っ・・・！」」」

見た？　あのクラリスの余裕しゃくしゃくな顔。わたし達３人はさ、そりゃあもう努力してるわけよ。食べたら太る、動かないと太る。この自然の摂理に従って日々、体のラインが崩れないように頑張っ

てるっていうのにさ。

「わたしはダイエットで、体重どころか胸のサイズまで減ったこともあるのに・・・！」

「右に同じく・・・！」

わたしとアンジェは自分の胸に触れて歯ぎしりする。そんな中、「ふふ」トリシュが俯いて肩を震わせながら笑った。

「良いではないですか、減るものがあるだけ・・・。ええ、マシです。ふふ、私は減るものがないので、ダイエットも気楽に出来ます～♪」

「「「・・・卑屈」」」

トリシュの絶壁・・・ではなくても小さな胸をチラッと見てすぐに目を逸らした。クラリスも「調子乗ってごめん」って謝るレベルで、今のトリシュは不憫な子だった。

「ごめんって何です？　別に謝ってもらうようなことなんてありませんよ？　胸の大きさがなんです？　かつてのエリーゼ卿もまた、胸が小さいことに悩んでいたようですが、オーディン様は胸のサイズに拘りはないようでした。ルシル様も同様に、この慎ましくも綺麗な形の胸を好いてくれます　」

パァっと表情を輝かせ、ポンっと薄い胸に両手を添えたトリシュ。

反論したいけど、なんとなく今のテンションを下げるのも可哀想だし。アンジェやクラリスも同じ考えなようで、「そうだね」同意をしておく。

「・・・はあ～・・・・胸、大きくしたいです」

「「「・・・」」」

どんよりするトリシュと、あの子から目を逸らし続けるわたし達のレールウェイの旅もようやく終わった。北部の次元港に到着した。トリシュ達と手を振り合って別れて、わたしはひとり本局行きの次元船に乗船する。そして1時間の船旅を終えて、本局捜査部エリアへ。

「あ、来た来た！」

「シャルー！」

廊下の奥からわたしを呼ぶのは「フェイト、アリシア！」だ。２人と合流して、取調室へと向かう。第１１～２０取調室と刻印されたプレートが掲げられた１０枚のドアが見えてきた。廊下には捜査官が数人、さらに捜査部長官のビディ・アーリー中将、そして「ゼストさん・・・！？」が居た。まずはアーリー中将や他の捜査官に敬礼。その後で「お久しぶりです！」ゼストさんに声を掛ける。

「イリス。しばらく見ない内に大きくなったな」

儚げに笑みを零すゼストさんの元に駆け、「いろいろと大遅刻です！」とその分厚い胸板をコツンと叩く。ゼストさんは「ああ。まったくだ」って苦笑した。２人でみんなから少し距離を取って、取り調べ開始時間まで話をすることに。

「あの、今日はどういった・・・？」

「捜査部幹部の、レジアスの取り調べに同行させてもらうことになってな・・・」

何十年と付き合いのあった友達をその手で捕まえるなんて、どれほどの痛みなのか想像も出来ない。もし、この手でチーム海鳴の誰かを逮捕しないといけない事態に陥ったりした時、わたしは迷うことなく捕まえることが出来るのかな・・・。

「そう言えばイリス。ルシリオンとは進展があったのか？」

「ぶはっ！？」

くっそ真面目な考えをしてたところに、ゼストさんから振られそうにない話題が来てビックリ。げほげほ咽ながら「きゅ、急にそんな話題・・・！」ってゼストさんを睨みつける。

「む、すまん。しかしその様子だと、未だに彼を射止めてはいないようだな。あれから・・・５、６年ほど経っているが・・・。よほど真面目なんだろうな、彼は・・・。それともお前のアプローチが弱いのではないか？」

「そうでしょうか？　キスも何度もしましたし、夜の営みにも誘いましたし、両親にも紹介しましたし。あと告白もしましたし」

「・・・お前（リヒャルト）の父親が聞いたら卒倒するな・・・。しかし、そこまでしてお前に靡かないとなると、彼には好きな娘がいるのではないか？」

「超強力なライバルが1人、わたしより下が1人の・・・四角関係？」

両手の親指と人差し指で四角を作りながらそう答えると、ゼストさんはすんごい苦い顔を浮かべた。わたしは「強ライバルははやて、弱ライバルはトリシュですね～」と言うと、「あぁ、あの2人か・・・」と唸った。

「はやてが強敵過ぎるんですよね。はやてら八神家とは家族としての付き合いしてるし、養子を迎え入れて実質夫婦状態になっちゃってるし、ルシルも満更でもなさそうだし。最大の問題は、ルシルと一緒に居られる時間が余りにも違うということです！　今だって他の幼馴染は機動六課って部隊で一緒なのに、わたしは教会でコツコツ聖職者事をやってる始末！　なんだこら！」

チーム海鳴のみんなは局でお仕事、わたし1人で教会のお仕事。別に騎士団が、教会が嫌なわけじゃないんだよ。チーム海鳴の友達が1人として居ないのが問題なのさ。寂しいんだよぉ～～～～。

「彼を教会騎士団に勧誘してみたらどうだ？」

「即断られました～（泣）」

――あのさ、ねぇ、ルシル。ルシルもわたしみたく、局員と騎士団の二足のわらじ・・・やらない？――

――無理、やらない。体が持たない・・・さすがに――

それはもう無慈悲にわたしの意気をへし折って来た。思い返すとなんか泣けてきた。そんなわたしにゼストさんが「ならば、局でお前の部隊を作ってはどうか？」って提案してきた。

「わたしの・・・部隊・・・？」

「お前が残りどれだけ管理局に勤めるかは判らないが、それまでに一部隊を任せられる階級と役職を得て、局に有用な部隊運用計画を提出すれば、メチャクチャな物でなければ通るだろう」

局内にわたしの部隊を作る。考えもしなかった。でもそれが一番現実的かもしれない。部隊長はわたし、補佐がルシル。ルミナやクラリス、あとフィレスとセレスも入れてあげようかな～。このメンツなら、強さを前面に押し出せる部隊がいいな～。戦場でルシルと一緒に孤立して～、背中合わせでこう会話するの。

（シャル。ここは俺が囮になる。君だけでも生きてくれ）

でもわたしは首を横に振って・・・

（ううん。ルシルが残るなら、わたしも残って一緒に戦う）

わたしだけを逃がそうとしてくれるルシルの案を蹴って、わたしはそっとルシルの背中に寄り添うの。

（馬鹿だな。死なせたくないから残るというのに）

そう言って呆れるルシルがわたしに振り返って、ギュッと両肩を掴んで来てね・・・。

（わたしが生きて、ルシルが死ぬなら、わたしはあなたと一緒に死ぬことを選ぶ！）

って、わたしはルシルの胸に飛び込むの。そしたらルシルがわたしをガバッと抱きしめるのね。

（心中だけは真っ平御免だな。意地でも生き残るぞ、シャル！）

そうしてわたしとルシルは窮地から脱するの。無事に隊舎に戻った後、戦場でのドキドキを忘れられないわたしとルシルは・・・

「（夜、肌を重ね合うの　　生死ギリギリの環境だったんだもの。きっとこういう展開になってもおかしくないはず！）吊り橋効果？

既成事実さえ作ってしまえば、わたしのものよ！」

グッと握り拳を作る。そうしたらゼストさんがわたしの頭に手を置

いて、「イリス。一応、お前も女性だ。少しは自嘲するように」ってわたしを注意した。

「捜査官のみなさん、取調室への入室をお願いします」

ここでようやく取り調べ開始時刻になったことで、わたしは「またこうしてお話しすることが出来て、嬉しかったです」とゼストさんに敬礼。ゼストさんも「ああ、俺もだ」って敬礼を返してくれた。フェイト達の元に戻って、それぞれが担当する取調室へと入室。わたしが担当することになったのは・・・

「こんにちは、ディード。今日のあなたを聴取することを任された、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトよ」

「騎士イリス。その節はどうもお世話になりました」

デスクを挟んで椅子に座るのはディード。彼女は席を立ってお辞儀した。わたしも椅子に座りながら、「憶えていてもらってるようでなにより」って返す。

「では聴取を始める前にまず、この聴取は映像として残されます。これは双方の安全の為です。あと、念話・通信と言った外部との連絡手段も妨害されます。そして、あなたには拒否権があります。弁護士を立てる権利もありますので～」

聴取前の常套句を述べてから、ディードの聴取を始める。ディード含めた拉致組は今朝まで調整をしてもらってた。長年、プライソン

に洗脳されてたわけだし。医務局と技術部から、聴取してもＯＫよ♪って許可が下りたことで、今日から聴取開始というわけだ。

「じゃあ一番大切なことを訊くね～。コイツら、知ってる？」

展開した複数のモニターに、"スキュラ"姉妹を暗殺した連中の画像を出す。共通なのは学生服に学帽、マント、目だし帽、お面。厄介なのはその実力だ。巨大艦を一撃で寸断できるレベルの切断力のある攻撃。感知可能範囲外からの高威力狙撃。転移能力。そして何より魔力が推定ＳＳランク。勝てないことはないだろうけど・・・さ。

「申し訳ありませんが、私に答えられるものはあまり多くはありません。おそらく姉たちもそうだと思います」

「ほう。その心は？」

「セッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、私、そして私たちの母として用意されていたクイントさんの部隊・シコラクスは、替えの利く使い捨て戦力なので・・・。プライソンの研究所をご覧になりましたか？　次代のシコラクスやスキタリスの素体となる人・・・」

ディードの言葉に、脳裏に過るのは生体ポッドに収められた人たち。なんでか女性率が高かったけど・・・。とにかく、捜索願が出されてた人が３割、死んだと偽装されて死亡届が出されてた人が２割、残りが遺伝子利用で生み出された人工生命体だった。行方不明だっ

た5割は徹底的な検査の後、ご家族の元に送り届けられた。人工的に生み出された子たちは、改造前だったこともあって、里親を募集することになった。

「そういうわけもあり、私たちはプライソンの客人と直接会うどころか、通信に出ることもありませんでした。おそらく、スキタリスのメガーヌさん達も同様に・・・」

「そう。ありがとう、ディード」

死んで勝ち逃げしたプライソンへの怒りも憎しみも消えることはない。だからこれ以上ディードが辛い思いをしないように「んじゃ、こっからは個人的な聴取ね♪」と話題を変更する。ディードは「なんでしょう」と小首を傾げた。

「出所した後のことなんだけど・・・。あなたはどうする？　アジトのデータをちょろっと見せてもらったけど、あなたとオットーは血の繋がりのある実の姉妹のようね。だからあなた達、か。んでさ、あなた達2人は、出所後どうする？　スカラボ――第零技術部へ入る？」

ドクターの遺志を継いだ、最初で最後の弟子であるすずかがスカラボの最高責任者・主任になったし、不安なことはきっとない。それにウーノ達も、広く見れば姉妹だしさ。

「それは・・・まだ考えていません」

「あれ、そうなの？」

「孤児院でのウーノ姉様たちと過ごした時間は憶えています。ですから姉様たちの元へ帰るのが筋のような気もしますが、何と言いますか・・・ちょっと違うというか・・・」

ディードが迷ってるなら、提案するならここかな～。というわけで、

「じゃあさ、教会（うち）に来ない？」って提案してみる。

「うち？　聖王教会に、ですか・・・？」

「ん、そう！　オットーと一緒でいいからさ。これから聖王教会は騒がしくなると思うんだよね。そのために自由に動けて、なおかつ強い人材が必要なのだよぉ～♪」

来年度から、プライソンと通じてた裏切り者が居るかもしれないザンクト・オルフェンに在るザンクト・ヒルデ魔法学院に、何も知らないヴィヴィオとフォルセティが入学して来る。アルファの言葉を信じるか否か、それは怪しいところだけど、完全に嘘とも言いきれず。終結したあの日から、管理局で言う内務調査部にあたる騎士団の一部隊、無色花騎士隊ファルブロス・ブルーメが、教会と騎士団の内部を捜査してる。でも今のところはそういった後ろ暗い人が発見できてない。

「騎士団が居るのであれば、戦力など必要ないのでは・・・？」

「騎士団は上から命令があって初めて動けるのね。個人的にも活動

制限が結構あるし。だから騎士団に所属しない戦力が要るの。シスターとかね～。あなたとオットーなら文句ないし。あー、あとセッテも欲しいかも。出来ればノーヴェ達も一緒にスカウトしたいけど、あの子たちとの繋がりって、わたしはあんまり無いから無理っぽいな～」

わたしが直接顔を合わせ、声を交えたのはセッテとオットーとディードだけだし。ノーヴェは遺伝子的にギンガやスバルと同じ、クイント准尉のクローンってことになってるのは確定してるから、ノーヴェはナカジマ家に引き取られるかも知んないね。

「返答はすぐじゃなくていいから、ちょこっと考えてもらえたらな～って。あ、ちなみに保護責任者は、わたしでもいいかな？って感じ。わたしじゃ頼りないなって意見があれば、もっと大人に頼むし」

カリム辺りなら憂いなく預けられるし、シャッハっていう教育係も居るし。職場環境も悪くはないと自負してる。

「判りました。あなたには助けていただいた恩もありますし、オットーと前向きに考えてみます」

「マジ！？　ありがとう～！」

とまぁこんな感じで、ディードへの聴取が終わった。聴取後は、他の聴取内容を照らし合わせて得た情報を纏めるという捜査会議を行った。ディードの言うようにクイント准尉やメガーヌ准尉を始め他の娘たちはみんな、"スキュラ"達を暗殺した連中の事は何も知ら

なかったけれど、クイント准尉とメガーヌ准尉からある情報を得られた。

「海洋艦隊・・・」

建造されながらも管制機であるゼータの死亡と言うことで、稼働せずに終わったって話だ。この情報だけで大助かりだよ。海洋艦隊ってことなら、内陸にあるプライソンの研究所には無いって考えられるし。プライソンのアジトが在った世界は全部はミッドを含めて８つ。んで、アジトの数はミッドで４棟、他の７世界に１棟ずつの計１１棟。その中から海に近いアジトを徹底的に捜索すればたぶん・・・。

「団長に報告しておかなきゃ・・・！」

今回の聴取で得られた内容をメールで送信。よしっ、明日から忙しくなるぞ～。

Ｅｉｐｉｃ３７これからのナカジマ家～Ｒｅｓｔａｒｔ～

†††Ｓｉｄｅスバル†††

あまりに大きな被害をミッドに齎した、プライソン戦役と称されることになった大事件が終結して２週間が経った。プライソン一派のほぼ全員が死亡のまま書類送検になって、唯一の生存者であるかもしれない"スキュラ"のガンマは拉致されたということで、あれからも捜索は続けられてる。

（デルタ達を殺したのは、プライソンに協力してた犯罪組織だって言われていて、フェイトさんやアリシアさんも捜査を手伝ってる）

六課だけじゃなくて教会の騎士隊からも数隊、陸士部隊も合同で捜査してる。プライソン戦役以前は縄張り争いや、本部にあてられて本局を毛嫌いしていた陸士部隊も、今回の一件で協力体制を敷いたみたい・・って、ティアやギン姉が言ってた。

ルシルさんやアコース査察官など、情報収集スキルに優れた局員や騎士の人たちがプライソンの本拠地から出来る限りのデータを回収した結果、戦役で登場した兵器の全てをデータ内で発見。

（でも兵器一覧の中に、戦役で投入されていない兵器もあることが判った・・・）

だけど判明したのは兵器の名前だけ。どういった形状なのかはきれいサッパリ消されてたとのことだけど、ミッドのどこかに眠ってる

って考えられてるから、本局・陸士部隊・騎士団の協力が不可欠。しかも拉致されたガンマや、襲撃者のアジトも兼ねてると思われてる。一石三鳥というわけだ。

「スバル～！」

考え事をしてるところで、「ギン姉！」に名前を呼ばれた。六課に出向してたギン姉とアリサさんとすずかさんは、戦役終結から２～３日してから元の配属先に戻った。そんなギン姉が、「お父さん！」の運転する車の助手席から手を振ってくれた。

「おう。待たせたな、スバル。ほら、乗った乗った。ティアナ嬢ちゃん、ちょいとスバルを借りてくぜ」

お父さんが運転席から顔を覗かせてあたしの隣に立つティアにそう言うと、ティアは「いえ。午前はオフシフトなので」そう返した。あたしとティア、なのはさんとヴィータ副隊長のスターズは、午前中がオフシフトになってる。ちなみにライトニングは午後からオフシフトだ。

「んじゃティア。ちょっといってきます！」

「ええ。しっかり甘えてらっしゃい」

「もう！　そんな子供じゃないよ～！」

そしてあたしも車に乗り込むと、窓から身を乗り出して見送りして

くれるティアに手を振る。ターミナルの舗装も少しずつ修復されて、車くらいは入れるようになった。六課の施設から離れて、中央区画の海上に設けられた第1海上隔離施設へ向かう。
そこは幼く若い魔導犯罪者を収監するための施設で、監獄とか言うよりは更生させるためにある。収監された人にはちゃんとした教育を受けさせて、更生させて社会復帰を促すのを目的としてるから。もちろん、収監される時に魔力や能力はほぼ完全に封印される。

「しっかし、ようやく面会が出来るようになったな」

「仕方ないですよ、父さん。状況が状況ですし。2週間ほどでこうして面会できるのも早いくらいですよ」

「はっはっは。だな」

海上隔離施設には今、お母さんやノーヴェ達、アルピーノ准尉やルーテシアとリヴィア姉妹が収監されてる。この2週間はずっと、プライソン一派から本当に解放されたかどうかの確認、身体の調整、洗脳されてた間の記憶があるかどうか、そこから"スキュラ"を殺害した組織の手掛かりを・・・とかの事情聴取。それらが終わったことで昨晩、ようやく隔離施設に移された。その知らせを受けたあたし達はすぐに面会の予約をした。

「よーし。着いたぞ」

駐車場に車を停めて、あたし達は隔離施設のエントランスへ。受付で手続きを済ませて、どの面会室か、面会室へ入る手順などを聴い

てから面会室エリアへと向かう。脱獄封じのためかとても分厚いスライドドアをいくつも通り過ぎて、ようやく「第３面会室・・・」ってプレートに刻まれたスライドドアの前に到着。

「・・・」

「お父さん、どうしたの？」

「緊張してる・・・？」

ドア横のプレートの下にあるタッチパネル。そこに触れば、受付で設定してもらった指紋認証によって、ドアのロックが解錠されるって説明された。お父さんの右手の平はパネルから数ｃｍ離れたまま止まってる。

「へへ。馬鹿言うなよ。俺とクイントは夫婦だぜ？　ただ、終結後に通信で一度話しただけで、こうやって直接逢うのは・・・ルシルの坊主が家に泊まったあの日以来だ。正直なにを言おうか、昨晩グルグル考えてた」

力なく笑うお父さんだったけど、「まっ、なるようになるさ！」すぐにいつも通りの笑顔になってパネルに手を付けた。電子音が何度か鳴った後、ドアが両側にスライドして開いた。面会室は結構広くて、コの字のロングソファにあたし達の大切な人が座ってた。

「お母さん・・・！」「母さん・・・！」

「ギンガ、スバル・・・。ゲンヤさん」

「・・・っ！　クイント・・・！」

お父さんが駆け出してお母さんを抱きしめた。お母さんはちょっと驚いた顔をしたけど、お父さんの背中に両腕を回して「ただいま」って挨拶した。お父さんも「ああ。おかえり」そう返して、お母さんを抱きしめる力を強めた。あたしとギン姉はその様子にまた涙が出ちゃう。

「ゲンヤさん、ギンガ、スバル。改めてただいま。クイント・ナカジマ、ただいま愛する家族の元へただいまよ♪」

「「おかえりなさい！」」

それからあたしとギン姉はお母さんとお父さんにハグし合って、８年間の空白を埋めるようにしばらくそのままで居た。その後は体を寄せ合うようにソファに座って、あたしとギン姉でこの８年の思い出を話した。出来るだけ悲しい話じゃなくて、嬉しかったり楽しかったりした話を・・・。

「あの、ね。ゲンヤさん、ギンガ、スバル」

つい最近までの思い出話をし終えた時、お母さんがばつが悪そうに困り笑顔を浮かべた。あたしとギン姉とお父さんで顔を見合わせてると、お母さんは「相談があるの」って続けた。

「ノーヴェ達のこと・・・なんだけど」

「ノーヴェ？・・・っつうとあれか、ギンガやスバルと同じ・・・」

あたしとギン姉は、元はプライソンによってお母さんの遺伝情報を基に生み出された人間だ。だからあたし達は、お母さんの固有魔法のウイングロードが使える。ついこの間、すずかさんから聞いたけど、ノーヴェもお母さんの遺伝情報を基に生み出されたって。血の繋がりは無いけど、遺伝の繋がりはある。他の子たちとは遺伝の繋がりは無いけど、プライソンの手によって生み出されたっていう繋がりのある・・・姉妹。

「ノーヴェとディエチとウェンディ。あの3人を引き取ろうと思ってる」

「「えっ！？」」

あたしとギン姉は驚きの声を上げた。今出た3人と、セッテとオットーとディードは、お姉さんのチンク二尉たち第零技術部に戻るものだってずっと思ってたから。お父さんは「ほう」って腕を組んで唸るだけ。そしてチラッとあたしとギン姉を見てきた。

「俺ぁ構わないぜ？　お前、洗脳されてる間の記憶もちゃんと残ってんだろ？　その期間、そのノーヴェ達って娘っ子たちとの関係もあるだろうし。お前が引き取りてぇって言うほどだ。きっと良い娘っ子たちなんだろ」

お父さんは賛成派。別にあたしはノーヴェ達が嫌だってわけじゃないんだけど。これって第零技術部に黙って決めちゃって良いのかな～。

「母さん。ノーヴェ達はチンク二尉たちの元へ帰るんじゃ・・・？」

「うんうん。せめてチンク二尉たちに話を通しておかないとまずいんじゃ？」

そろそろと手を上げてそう提案してみると、お母さんはソファから立ち上がると両手を腰に置いて仁王立ちをした。そして「既に了承済み！」ビシッと宣言したから、「えっ！？」また驚いた。まさかＯＫを出されてるなんて・・・。

「洗脳されていた間の記憶の中で私は、ノーヴェ達の母親だった。記憶が戻ったから、はい、そうですか、なんて突き放すことが出来ないの。ノーヴェ達も出来れば、ウチの子たちになりたいって言ってくれたし、ウーノ一尉たちも承諾してくれた。ギンガ、スバル。ダメかな・・・？」

あたしとギン姉は顔を見合わせた後にお母さんへと顔を向けて、ギン姉は「私も構いません。あの子たちとも仲良くなりたいですし」そう言って頷いて、あたしも「これでチーム・ナカジマの完成か～」って腕を組んで頷く。チーム海鳴とかチーム八神家とか、結構羨ましいというか、幼馴染でチームを作ったりっていうのに憧れがあったから。

「おお、いいじゃねぇか！　ナカジマファミリーでもよくないか？」

「う～ん、あたしはチームって使いたいかな～」

お父さんと名付け方で意見を出し合ってる中で、「母さん。セッテとオットーとディードは・・・？」ギン姉が名前の挙がってなかった3人について訊いた。

「一応誘ったんだけど・・・。私とあの3人が一緒に過ごせた時間ってかなり短いの。しかもノーヴェ達と違って、私がお母さんだって記憶の刷り込みもしてないみたいで・・・。お母さんって呼ばれたことはあっても、チーム・シコラクスのリーダー的な意味合いだったのよね・・・」

「そうなんだ。じゃああの3人は第零技術部に帰ることになるのかな・・・？」

なんとなくそれが自然な気もするけど。そう考えてるとお母さんが「セッテは帰る気みたいだけど、オットーとディードは、シャルロッテちゃんからスカウトされてたし」って人差し指を顎に当てた。

「シャルさんが・・・！？」

「この2週間、局と教会から事情聴取を受けていたんだけど、その時にちょろっとね。オットーとディードは、迷惑を掛けたことや助けてくれたことへの恩返しとして聖王教会にへ、セッテは同様に理由で第零技術部への帰還を申し入れたのよ」

すでに手続きも終えていて、この隔離施設から出所したらオットーとディードは保護責任者のシャルさん、セッテは第零技術部の秘書官ウーノ一尉の元へ行くって。

「だから残るノーヴェ達の居場所を私が作ってあげたかったの。最初はまぁぎこちないだろうけど、きっと仲良くなってくれると思ってるわ。じゃあ早速、これからあの子たちのお姉さんとして、仲良くなれるように時間を作っていきましょ♪」

お母さんが満面の笑顔で手をポンっと叩いて、「ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、いらっしゃい！」面会室の奥にあるドアに向かって3人の名前を呼んだ。プシュッと音を立ててスライドしたドアの向こうにあの3人は居た。

「ハロハロ～っス！　手続き上はまだナカジマ家の一員じゃないっスけど、これからはパパリン、ギンガ姉、スバル姉って呼べばいいっスかね～♪」

真っ先にウェンディが駆け出して来て、お父さん、ギン姉、あたしの順で手を握って来た。お父さんは「パ、パパリン？」困惑顔を浮かべて、ギン姉は「ええ。よろしくウェンディ」笑顔を浮かべて、そしてあたしは「なんかこそばゆいかも」頬を掻いた。

「ディエチです。えっと・・・」

「呼び方は何でも構いやしねぇよ、ディエチ。お父さんでも父さん

でも親父でも」

「私も、ギンガって呼び捨てでもいいから」

「あたしも呼び捨てでいいよ。な～んか姉とかお姉ちゃんって呼び慣れてないからこそばゆくってさ」

「ん。じゃあお父さん、ギンガ、スバル」

ディエチとも握手を交わす。最後はどこかもじもじしてるノーヴェ。ばつの悪そうにあたしやギン姉を見ないノーヴェに、ウェンディが「ほらほら、ノーヴェも挨拶っスよ」そう言って頬をツンツン突いた。

「うっせぇな、判ってんよ！」

「ノーヴェ。さっきまで挨拶の練習してたし大丈夫」

「それを言うなってディエチ！　すぅ～はぁ～・・・。ノーヴェ、です。お、お父さん。ギンガ・・・スバル」

「おう。よろしくな」

「よろしくね、ノーヴェ」

「よろしく～」

ノーヴェとも握手を交わした。お母さんも「よしよし」って満足そうに頷いて、お父さんはそんなお母さんの隣に立って肩を抱いて、「大所帯になっちまったな～」なんて言いながらも笑顔だ。

「母さん。家族が増えることは歓迎だけど、その・・・誰が姉で妹になるんでしょう・・・？」

「それについてはウーノ一尉たちから伺ってる。生まれた年月日から決めたの。では発表します！　長女ギンガ！　三女ディエチ！」

おおう、あたしが次女じゃないんだ。あたしはディエチを見て「ディエチ姉・・・？」小首を傾げながら呼んでみると、「う～ん。呼び捨てでお願い」照れ臭そうにはにかんだ。

「四女がスバルね。五女がノーヴェ、六女がウェンディ。呼び方はみんなで決めて頂戴」

「「「ん・・・？」」」

あたしとギン姉とお父さんが同時に唸る。長女・三女・四女・五女・六女。じゃあ次女は誰なんだろう。お父さんが「クイント。お前、間違ってるぞ。ディエチが次女じゃねぇのか」ってお母さんに訊ねた。

「え？　あー、今この場に居ないから飛ばしたのよ、ゲンヤさん」

「なに？」

「この場に・・・」

「居ない・・・？」

セッテは第零技術部、オットーとディードは教会。これで洗脳されてたサイボーグは全員揃ってるから、余りなんて居ない。それじゃあ一体誰が次女に・・・って話になってくる。ノーヴェ達を見ると、ウェンディが「ママリンからギンガ姉たちには秘密って言われてるっスから」って話してくれた。

「実は、ゲンヤさん達の面会日時に合わせてここに来てもらえるように伝えてもらってあるの。もうそろそろ来てくれると思うけど・・・」

お母さんがそう言ったその時、ビーっとドアから電子音が鳴って、一拍置いてプシュッと音を立てて開いた。そこに立ってる人を見て「っ！？」あたしは目が飛び出しそうになった。

「遅くなってしまった。すまない」

右目に眼帯を付けた、小柄な体に銀色の長髪の女の子。紛れも無い「チンク二尉！？」だった。驚くあたしとギン姉を余所にお父さんが「おう。チンク嬢ちゃん、久しぶりだな」って気軽に挨拶して、チンク二尉も「お久しぶりです、ナカジマ三佐」って返すし。

「ちょっ、母さん！？　次女ってまさか、チンク二尉のことなんで

すか！？」

「ええ、そうよ。チンクとは2人が物心ついた頃からの付き合いだし、そんなに驚く事じゃなくない？」

「そうだぞ、ギンガ、スバル。これからは私とも姉妹になるのだ。階級など付けずに名前だけで呼んでくれ」

確かにあたしもギン姉も、うんと小さい頃からチンク・・・さんや他のシスターズとは知り合いだし、何度か本局でご飯を一緒したこともあるし、遊んでもらったことだってある。お母さんが亡くなったと思ってたあの日から列車砲攻略戦までの間も、何度もお世話になってるから全く知らない仲じゃないけど・・・。

「あの、チンクさん」

「スバルよ。姉にさん付けはないだろう。チンクで構わんよ。ノーヴェ達みたくチンク姉でも構わんし、好きに呼んでくれ」

「う～・・・ん～・・・。うん。じゃあチンク姉は、その・・・どうしてナカジマ家に？」

チンク姉って呼ぶのすごい緊張する。確かに昔はお姉ちゃんみたいって思ってたけど、今じゃ上官っていう感じの方が強いからさ。

「ふむ。簡単に言うとノーヴェ達の目付役と言ったところか。3人はこの隔離施設で改めてちゃんと教育を受け、社会復帰するだろう。

出所後はナカジマ家に養子として迎え入れられる。その頃には目付など要らんだろうが、孤児院では私がこの3人と長く過ごしたからな。ナカジマ家内でのクッション役として、私からクイント准尉――母さんに進言した」

「私、以前からチンクが可愛いな～って思っててね♪　OKしちゃった♪」

「クイント・・・」「母さん・・・」「お母さん・・・」

そんな軽いノリで、仮にも上官でもあるチンク姉を娘に迎え入れようとするなんて。ちょっとその行動力に呆れちゃってると、ウェンディが「でもチンク姉が一緒って言うのは嬉しいっスよ」って言ってチンク姉にすり寄った。

「うん。他の姉たちからも優しくはしてもらってたけど、チンク姉が一番遊んでくれてたし」

ディエチや無言のままのノーヴェも、チンク姉の元に擦り寄った。チンク姉は「はっはっは。そう言ってくれると嬉しいぞ」って満足そうに笑って、3人の肩をポンポン叩いた。まぁ確かに、あたし達とノーヴェ達ってそんなに長い付き合いじゃないし、チンク姉が間に入ってくれたら、早く馴染めそうな気もする。

「そういうわけで、父さん、ギンガ、スバル。私は一足早くナカジマ家の一員として共に暮らすことになりますので、どうぞ末長くよろしくお願いします」

チンク姉があたし達の前に来てそう言って一礼したから、お父さんが「嫁入り前じゃあるめぇし」って笑った。チンク姉は「ある意味、嫁入りと考えてもいいかと」って笑い返し。スカリエッティ家からナカジマ家へ来るんだから、確かに嫁ぐと言っても過言じゃないかも・・・。

「とにかく、これで全員が揃ったわね。・・・私たちの出所がいつになるかは、これからの私たち次第だけど、必ずゲンヤさん、ギンガ、スバル、チンクの元に帰るから。それまで待っていて欲しいの」

お母さんがノーヴェ、ディエチ、ウェンディの頭を順にポンっと優しく叩いた後、そう言って微笑んだ。

「パパリン、ギンガ姉、チンク姉、スバル。よろしくお願いするっス♪」

「お父さん、チンク姉、ギンガ、スバル。どうぞよろしく」

「待て、ディエチ。ギンガも姉と成るのだ。しかも長女だぞ？　ギンガにも姉を付けるか、私から姉を取り除くか、どちらかにしろ」

次女のチンク姉には姉を付け、長女のギン姉には姉を付けないのは確かに変だ。というわけで、ディエチは「じゃあギンガ姉で・・・」って決めた。ギン姉は「別に気にしないけど・・・」って言うけど、チンク姉は「いいや、ダメだ」って首を横に振った。

「でもチンク姉はギン姉を呼び捨てだよね・・・・？」

「・・・ギンガ姉さん・・・・？」

「・・・うん。呼び捨てでお願いしま――じゃなくて、お願いチンク」

「む？　そうか・・・・」

ギン姉が本気で困ってるの初めて見たかも。とまぁそんなこんなで、あたしとギン姉にたくさんの姉と妹が出来た。お母さんやノーヴェ達が家に来るのはまだまだ先だけど、まず間違いなく騒がしい日々が待ってるのは確かかな。

Ｅｉｐｉｃ３８これからの陛下と騎士～Ｓｃｈｏｏｌ　Ｔｏｕｒ
ｖｅｒ．Ｎｅｗ　ｅｒａ　７５～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

「アギトお姉ちゃ～ん！」

「おー！　アイリ～！」

アイリ達は、アギトお姉ちゃんと何度目かの面会をするために海上隔離施設へとやって来た。色々と手順を踏んでやって来た面会室にはもうお姉ちゃんがスタンバッてた。アイリは真っ先にお姉ちゃんの元に飛んでいってハグ。本当は八神家全員での面会をやりたいってマイスターやはやて達が言ってたけど、さすがに全員揃って外出できるほど、八神家が就いてる役職は軽くないってことで叶ってない。

「アギトお姉ちゃん、こんにちは！」

「フォルセティ～！　こんにちは！」

フォルセティと初めて顔を合わせた時、お姉ちゃんは、小さいマイスターを見ている気分で変な感じだ、って笑ってた。ある意味それは間違ってない。フォルセティはオーディンでありルシリオンであるマイスターのクローンだしね。お姉ちゃんはその辺の真実を"エグリゴリ"から聞いてないみたいで、マイスターとオーディンが同

一人物であること、"界律の守護神テスタメント"や"アンスール"などの話も知らない。

「ホントお前、いつ見てもマイスターやルシルにそっくりだな！」

フォルセティがトテトテ駆けてお姉ちゃんの側に寄ると、１３０ｃｍくらいの姿に変身してるお姉ちゃんがフォルセティの頭を撫でた。

――アイリ。アギトには、俺の真実を伝えないでほしいんだ――

――それはいいけど・・・。どうしてか訊いてもいいかな・・・――

――知らないなら知らないままでいた方が良い。お互いに・・・、いや、俺に傷つく権利なんてないな。ただ、魔術師・神器王ルシリオン・セインテスト・アースガルドではなく、魔導騎士ルシリオン・セインテストとして、あの子たちの思い出に残りたい・・・――

それがマイスターの願いなら、マイスターだけの融合騎であるアイリももちろん聞き届けたいわけでね。お姉ちゃんにはマイスターの真実を伝えないようにした。

「こんにちは、アギトちゃん」

「今日はシャマルなんだな～」

お姉ちゃん達が海上隔離施設に移送されてから早３ヵ月。週１で面

会に来るようにしてるから八神家のみんな、一度は必ずお姉ちゃんと直に顔を合わせてる。

「それにしてもなんだよ、アイリ。お前だけなんかオシャレしてないか？」

「あ、判る？　えへへ～♪」

アイリは今、お化粧してる。チークで頬をほんのりピンク色にして、無駄に大人びないように気を付けながらの口紅。上から下まで真っ白に徹底した、ボアコート、パパーハ、編み上げのブーツ。下はロングカフスのブラウス、ヨークスカートだ。

「お昼からザンクト・オルフェンに行くんだよ」

「学校の見学をするんだよ～♪」

アイリに続いてフォルセティが目的を伝えた。これからアイリとフォルセティ。あとで合流するはやて、なのはとヴィヴィオと一緒にＳｔヒルデ魔法学院へ見学しに行くんだよね。だからアイリも、恥ずかしくないようにちょこっとオシャレしてみた。

「へぇ～。学校でたくさん友達が出来ると良いな♪」

「うんっ！」

「それでアギトちゃん。今後の事なんだけど、管理局入りするって

ことで良いのよね？」

「おー！　アイリや、シュリエル・・・じゃなかった、アインスの後継騎のリインもやってるんだろ？　アイリやリインに出来て、あたしに出来ないことはないんじゃないかな～って」

なんて言いながらお姉ちゃんはフォルセティの頭を撫で続けるんだけど、「何気に失礼・・・」だよね。そりゃ初めの頃は右往左往の悪戦苦闘だったけど、今じゃ1人でデスクワークも戦闘も出来るし。何より、変身後とは言えお姉ちゃんより背も高いし、スタイルだっていいし、階級だって空曹長になったんだぞ～。

「悪い、悪い。でもま、あたしのロードはシグナムだし、やっぱ戦いの中でならアイツを支えられると思うんだよな。何せあたしは烈火の剣精アギトだかんな。デスクワークとかの仕事については追々覚えてくよ」

「そうね。基本的にアギトちゃんは、シグナムの補佐として動いてもらうことになると思うわ。・・・でもこれで、元グラオベン・オルデンが集まったわね・・・」

「あたしが最後だったんだよな・・・。でもさ、正直言うとさ、アインスとももう1回逢いたかったな・・・。アイリも、アインスとは逢うことが出来なかったんだっけ？」

お姉ちゃんに「うん」って頷き返す。アインスとは結局、再会することは叶わなかった。アイリは、シュヴァリエル達と馬鹿をやって

たその時にアインスを喪ってた。それが本当に悔しい。もっと早く脱出するなり、リンドヴルムが活動してくれていれば、逢えたかもしれないのにね・・・。

「でもアインスの想いは、リインちゃんに受け継がれてるわ。そしてオーディンさんの意志は、ルシル君に受け継がれてる。本人が居なくても、かの信念の騎士は絶えていないって思う」

「・・・そっか。うん、そうだな。あたしらは永遠だって誓い合ったもんな」

それから面会時間ギリギリまでお姉ちゃんとお喋りして・・・

「それじゃあアギトお姉ちゃん、また来るね♪」

「アギトおねえちゃん、バイバイ♪」

「ああ、待ってるよ～♪」

アイリ達はお姉ちゃんと惜しみ合いながら海上隔離施設を後にして、「アイリちゃん。フォルセティをお願いね」午後シフトなシャマルと別れて、アイリとフォルセティはレールウェイの駅へと向かう。

「ママとなのはさんとヴィヴィオ、どこかな～？」

駅のホームに着くとフォルセティが辺りをきょろきょろ。はやて達もレールウェイを利用してＳｔオルフェンに向かうことになってる

から、そっち行きの車両も確認してると、コンコンと車両内から窓をノックする音が。

「あっ、ママ！」

そっちに目をやると、はやてとなのはとヴィヴィオが手を振ってた。アイリとフォルセティは車両の出入り口に向かって走って乗車、はやて達と「合流～♪」した。

「おー、フォルセティ、アイリ、こっちこっち♪」

「フォルセティ～♪」

はやてが空いてる隣の席にポンポンと叩いて、ヴィヴィオは両手で手招き。フォルセティはニコニコ笑顔で席に座ったんだけど、「あれ？　アイリの座る席がない・・・？」ことに気付いた。

「隣の席が空いてるけど・・・？」

「アイリ独りで座れと！？　それはあまりにも酷い仕打ち！」

あの優しいなのはからの提案に、アイリは結構本気でビックリだよ。はやてとフォルセティの間に座ろうともするけど、「せ、狭い・・・」ってことで断念。もうこうなったら本来の姿・フェー・フォルムに変身しようかと諦めかけた時・・・

「フォルセティ。ママのお膝に座ってええよ～♪」

はやてが自分の太ももをポンポン叩いた。アイリは「それだっ！」ってはやてを指差す。席から立ったばかりのフォルセティの両脇に手を差し込んで持ち上げて、アイリが席に座りつつ「よいしょ～っと♪」フォルセティを膝の上に乗せた。

「えへへ～、フォルセティ～　」

「アイリおねえちゃ～ん♪」

「あ～ん、アイリ。それは私の役目やよ？」

「今日だけ～♪」

ああもう幸せだよ。フォルセティを後ろから抱っこしながらお喋りア～ンド車内購買で買ったお弁当を食べて、３０分と掛けてアイリ達の乗る列車はＳｔオルフェン内のヴェラー駅に到着。Ｓｔヒルデ魔法学院はなにもＳｔオルフェンの住民だけが通う学院じゃないから、北部と自治領とミッドの境界線近くに建てられてる。だからミッド運営の公共交通機関も、Ｓｔオルフェンの南部ウィンザインの最南部までなら入ることが出来る。

「ここからは歩きだね」

「フォルセティ、ヴィヴィオ。もっと大きくなるまではママ達が送り迎えするけど、大きなったら2人か、もしくは1人か、友達を作ってたくさんか、どっち道もうちょう後になるやろうけど、いつか

は私たちの付き添いなく登校することになる」

「うん。少しずつでいいから、通学路を憶えてみようね」

「うんっ」「はいっ」

駅から学院までの通学路を歩く。時間的に学院は午後の授業が始まるかどうかってところだね。そんなこんなで到着したＳｔヒルデ魔法学院。

「あ、なのはママ！」

「何か来る！」

ヴィヴィオとフォルセティが前を指差した。２匹の小動物がこっちに向かって駆けて来るのが判った。はやてとなのはが「あれ！？どうしてここに・・・！？」って驚きを見せた。向かって来るのはリスとハムスター。

「「わっ♪」」

リスがヴィヴィオの体を、ハムスターがフォルセティの体を駆け上がって、頭の上に居座った。きゃあきゃあ♪と黄色い歓声を上げるフォルセティとヴィヴィオ。

「久しぶりやな～、セレネ、エオス♪」

「ちょっとぶり～♪　２人とも元気そうで何よりだよ♪」

はやてとなのはが小動物にそう挨拶したのを見て、「あ、スクライアの・・・」ってアイリも思い出した。ユーノ司書長の義理の姉で幼馴染で、でも恋心を抱いてるっていう・・・。同じ恋する乙女として応援したいけど、なのはも含めて結構複雑だからね～。今は保留なのだ。

「「なのはとはやてもご無沙汰～♪」」

フォルセティ達の頭の上で直立して、なのは達に向かって小さな前脚を振った。なんか可愛い仕草だね。

「なのはママとはやてさんのお友達、ですか？」

「そうだよ～♪」

フォルセティ達の頭から地面に降りたハムスター・セレネとリス・エオスが、「へんし～ん！」と掛け声を上げると、２匹が魔力の光に包まれた。光が収まると、ブラウスにベストにストレートスカート、ＯＬ風な格好のセレネとエオスが姿を見せた。

「私はセレネ・スクライア！」

「私がエオス・スクライア！」

伸ばし切った両腕を肩の上まで掲げ、手首は下に向け曲げて、さら

に右足を上げるっていうポーズを取りながらの自己紹介をしたセレネとエオス。フォルセティとヴィヴィオは「おおー！」と拍手して喜ぶけど、あの変なポーズが気になってるアイリ達はポカーンだ。

「君たちの～」

「お名前は？」

「あ、た、高町ヴィヴィオです！」

「八神フォルセティです！」

「「よろしくお願いします！」」

「「は～い♪」」

４人の自己紹介が終わって、学院の敷地内へと入る。その中で、ここＳｔヒルデ魔法学院がどのようなところなのかの説明が入った。まずフォルセティとヴィヴィオがこれから入るが初等科。初等教育の５年制。その後は中等教育を行う中等科があって、そこは３年制とのこと。その上には高等科、大学とあって２年おきに進学。んで、最終的には学士資格まで取得可能な大型学院、と。

「２人は今、大学の教育学部に通ってるんだよね？」

「そうだよ。この学院の先生になるつもりだから」

「ひょっとしたら、いつの日かヴィヴィオやフォルセティの担任になっちゃうかも♪」

「一応、初等科・中等科両方の教員免許を取得予定だから」

「えっと、セレネ先生・・・？」

「エオス先生・・・？」

フォルセティ達が先生付けで呼んだら、セレネ達が「み、満ちてきたぁぁぁぁ！！」いきなりテンションＭＡＸになって叫んだ。けど大丈夫なのかな。今、授業中っぽいんだけど。そんな不安はすぐに的中。ある校舎の窓がバンッと開いて、「誰です！　授業中に叫んでいるのは！」お叱りの声が降って来た。

「「シスター！？　申し訳ありません！」

２人を叱ったのは「シスター・プラダマンテ・・・！」だった。シスターがアイリ達に気付いて、「これはお恥ずかしいところを」ってお辞儀した。シスターはすぐに校舎２階からここに降りて来た。

「ごきげんよう、はやてさん、なのはさん、アイリさん。それに、ヴィヴィオ陛下、騎士フォルセティ」

綺麗にお辞儀したシスターにアイリ達は「こんにちは」って挨拶を返す。そしてフォルセティ達は「あぅ・・・」少し沈んだ声を漏らした。２人のそんな様子に、シスターは頭を下げて「失礼を。ヴィ

ヴィオさん、フォルセティ君」って改めて呼び直した。

「「こ、こんにちは！」」

「よいお返事です」

フォルセティ達とシスターが笑顔になった。シスターが「セレネ、エオス。生徒の皆さんは今、授業中です」って振り向くと、２人は「お騒がせしてすみませんでした」もう一度謝った。

「はい。それでは私はまた、校内の見回りに戻ります。では引き続き、皆さんをご案内して差し上げて。はやてさん、なのはさん、アイリさん。ごきげんよう。ヴィヴィオさん、フォルセティ君。お２人が生徒としてこの学院に通う日を、楽しみにしています」

シスターが中等科の校舎に戻って行くのを見届け終えた後、「ホッ。じゃあ初等科の校舎に行こう」って、セレネ達を先頭にアイリ達は歩き出す。エントランスから上がるとまずは、「学院長にご挨拶をしよう」とのことで学院長室へ。

「教育実習生、セレネ・スクライアと」

「エオス・スクライアです。高町なのはさん、八神はやてさん、アイリ・セインテストさん、高町ヴィヴィオちゃん、八神フォルセティ君をお連れしました」

教育実習生の段階でこんな仕事もするんだね。ちょっと意外。２人

が学院長室の扉をノックすると、室内から「は、はい、どうぞ！」少し焦ったような声での返事。セレネ達が「失礼します」と扉を開けて入室するのに続く。

「よくいらっしゃいました。当学院の学院長を務めます、アイカ・グリート・アルファリオです。娘やイリスさん達から皆さんのお話を聞いています。お会い出来て光栄です」

装飾の施されたアンティーク調の豪華なデスクの向こうに座ってたのはレディースーツ姿の女の人、アイカ学院長。そんな学院長が席を立ってはやて達のところまで来た。

「いえ。こちらも本当にお世話になってます」

はやてとなのはが学院長と握手を交わした後、接客用の足の短い楕円テーブルを挟むソファにアイリ達が座って、セレネとエオスは学院長の座る方のソファの両脇に控えた。

「来年４月より当学院に入学して頂けるとのお話を頂き、私としても大変嬉しい思いです。来年からよろしくね、ヴィヴィオさん、フォルセティさん」

「「はいっ！」」

「元気のよいお返事です♪」

それからはやて達と学院長が今後の予定などなどを確認し合うって

いうところで、「あ、ヴィヴィオさんとフォルセティさんは、学院内の見学をどうぞ」ということになった。

「セレネさん、エオスさん。お2人をご案内してあげてください」

「「かしこまりました」」

「はやて。アイリも念のために付いてくよ」

「うん、そうやな。アイリも一緒に行ったって」

「それじゃあヴィヴィオとフォルセティは、アイリとセレネちゃんとエオスちゃんの言うこと聞いて、しっかり見学して来てね」

フォルセティとヴィヴィオが「はーい！」手を上げて返事した。はやて達と別れて見学を開始して、フォルセティ達が入学する1年生のクラスを中心に見て回る。これで来年、どこに1年生の教室があるか迷わないね。

「どの子も小さくて可愛い～　」

「でしょ～？　あんな子たちに先生って呼ばれたら～」

「やる気が満ち満ちてくるってものだよ」

廊下から教室内を眺めるフォルセティとヴィヴィオを見守りながら、セレネ達と解り合ったアイリはガシッと握手を交わした。それから

普通授業、魔力運用の練習風景、高学年の体育などの授業風景を見学して行った。1、2年生の低学年組はさすがに緩い授業だったけど、3年以上から本格的な魔力運用授業が行われるみたいだね。

「あ、鐘の音・・・。この鐘の音で始業と終業を知らせるのね」

エオスの説明通り複数の教室が騒々しくなってきて、開いたドアから教員や生徒たちが出て来た。フォルセティ達くらいの小さな子供たちがわらわらと廊下に出て来て、女性教員はエオスの元担任だったようで話に花を咲かせて、生徒たちはアイリ達に「ごきげんよう」とか「こんにちは」って挨拶してくれたから、アイリ達も「こんにちは！」と挨拶返し。

「あの、僕たち、来年からこの初等科に通います。あ、八神フォルセティです」

「た、高町ヴィヴィオです！」

フォルセティが率先して自己紹介して、ヴィヴィオも倣って自己紹介。すると生徒たちは「よろしくね！」って2人を迎え入れた。あ～、でも来年なんだから、この生徒たちは先輩になっちゃうわけだけど・・・。まぁ上級生とのコネ作りも悪くない手だよね。フォルセティにはそんな考えなんてないだろうけどさ。

「タカマチさんって、聖王陛下に似ていますね」

おっと。生徒の誰かさんが鋭い指摘をしちゃったぞ。聖王家の特徴

は紅と翠の虹彩異色。この特徴を持った人はもう管理世界には居ないとまで言われてる。プライソン戦役について管理局が公に発表した情報の中には、ヴィヴィオの事は入ってない。当然だよね、聖王オリヴィエのクローンなんて、大々的に発表して良いような軽い内容じゃないから。

（さらに言えば、ここザンクト・ヒルデ魔法学院が聖王教会系列の学校とは言っても、聖王教に入信してる家の子だけが通ってるわけじゃない。だからヴィヴィオが聖王と何かしらの関係があるんじゃないか、って勘繰る子もそんなに居ないはず）

でもやっぱり中には気付いちゃう子も居るわけで。ヴィヴィオは「あぅあぅ」って困り出した。アイリとセレネ達が助け船を出そうって頷き合ったその時には、フォルセティがヴィヴィオの手を握って前に躍り出た。

「あの――」

「ヤガミ君は、あのセインテスト調査官や、魔神オーディン様とそっくりです」

「御親類か御親戚ですか？」

他の女生徒も参加。マイスターはプライソン戦役で大々的に有名人になって、それと同時に聖王オリヴィエとも親交があったオーディン時代のマイスターも聖王教会でさらにさらに有名になって、パーシヴァル君が家宝としてたマイスターの絵画を教会に提供したこと

で、誰もが知る人物となったんだよね。

「えっと・・・」

「アイリさん・・・」

フォルセティとヴィヴィオからの救援要請に「はいは～い♪」アイリが前に躍り出て、マイスターやなのは達が事前に決めてた事情を伝える。クローンの話は絶対禁句。というわけで、フォルセティはセインテスト家の、ヴィヴィオは聖王家の隠れた血筋の直系であることを伝えた。それを知った生徒たちは「わあ！」っと驚きの声を上げた。

「時間的にはもうそろそろかな？　エオス」

「ん。なのは達のところに戻ろうか」

エオスからそう言われたことで見学はこれにて終了。フォルセティ達は未来の先輩たちと笑顔で手を振り合って「ごきげんよう！」って覚えたばかりの挨拶でお別れした。そして学院長室へと向かう。

（ん？　なんか見られてる気配が・・・）

先頭にセレネとエオス、次にフォルセティとヴィヴィオ、最後にアイリと続いて廊下を歩く中、なにやら熱い視線を感じ取れた。それは2階へ上がる階段前でのこと。階段前を横切る中、横目で階段の踊り場を見る。

（あの子・・・どっかで見たような・・・）

フォルセティ達より年上であることは間違いない女の子が1人、踊り場に立ってフォルセティ達を見下ろしてた。2人と同じ虹彩異色の瞳を持っていて、色は紺と青だね。そして髪は碧銀色。昔、ずっと昔にそれと同じ色の身体的特徴を持った人を会った気がするんだけど・・・。

（誰だったかな～？）

記憶の中にある人物と照らし合わせながら戻って来た学院長室。セレネがノックして「ただいま戻りました」と入室すると、はやてやなのはに学院長から「おかえりなさい」って挨拶を受けた。

「どうだったかな、ヴィヴィオ、フォルセティ？」

「「楽しかった！」」

「んっ。2人の今の言葉が一番のＯＫサインやな♪」

こうしてフォルセティとヴィヴィオのＳｔヒルデ魔法学院の見学は終わって、フォルセティに続いてヴィヴィオも、正式に入学することが決定した。

Ｅｐｉｃ３９おかえりなさい～Ｒｅｂｉｒｔｈ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

ミッドに本格的な冬が訪れた１２月後半。自室で残っていた仕事を片付け、「そろそろ休むか」とあくびをしながらストレッチして、凝り固まった体の筋肉をほごす。寝室のベッドにはアイリとフォルセティが寄り添う形で眠っていて、いつも思っているが姉弟のようだ。

「おやすみ、アイリ、フォルセティ」

ベッドの左側から入り、俺、フォルセティ、アイリの川の字で横になる。疲労が溜まっているのかすぐにウトウトし始める。完全に眠りの世界に入る前に「我が手に携えしは確かなる幻想」と、複製したものを具現するため呪文を詠唱。

（本当に待たせてしまったな・・・）

ゆっくりと目を閉じて完全に眠りの世界へ、ではなく「ただいま、我が創世結界」へと移る。プライソンに奪われていた権限を奪還してから４度目の創世結界への進入だ。こうして進入する度に、なんて惰弱で貧弱な欠陥か、と思う。権限を奪われただけで自分の精神世界に入ることが出来ないなんて・・・。

（複製物を奪われたことは多々あれど、権限そのものを奪われるな

んて初めてだったからな・・・）

そんな言い訳をしてしまっている自分自身に呆れ果ててしまう。今後の為に何かしらの対処策をいくつか考えながら、「姉様！」と呼びかける。ここは"英雄の居館ヴァルハラ"の玉座の間。"ヴァルハラ"と"異界英雄エインヘリヤル"の管理を任せているゼフィ姉様の"エインヘリヤル"が居るはずなんだが・・・。しかし玉座に姉様の姿は無かった。

「一体、どこへ行ってしまわれたのか・・・？」

玉座の間からとりあえず出て、廊下で左右をキョロキョロしているところで、「きゃん！」と俺の背中に誰かが勢いよくぶつかって来た。振り向いてみると、「お前は・・・デルタ！？」が居た。複製権限が奪われていたわけだが、複製はされていたわけか・・・たぶん。

「というか、何故に水着姿？」

尻もちをついたデルタに手を差し伸べると、オレンジ色をしたフレアビキニを着たデルタが「あっ、えっと、神器王・・・？」と小首を傾げながらも俺の手を取ってくれた。よっ、と掛け声を発しながらデルタを立たせる。

「ここに居るということは、俺の真実はもう理解しているようだな」

「ここがどこで、あなたが誰なのか、デルタがどうなってるのか、

もろもろ全部」

俺の複製能力によって複製されたモノの所有者は使い魔・"エインヘリヤル"となり、それと同時に俺の真実を知ることになる。だから基本的に同情などで俺の協力してくれるが、我の強い子は結界内でも召喚後でも勝手気ままだ。

「それで？　こんなところで、あと水着で何をやっているんだ？」

「あ、そう！　助けて、追われてるの！」

デルタが俺の背後へと回り込んで来た。彼女が来た方向へと目を向けたところで「デルタ姉様ぁ～！」という悲鳴めいた声が聞こえてきた。この声は「イプシロン・・・」だな。デルタもそうだが、肉眼でもモニター越しでも関係なく、この目で見たものは複製できる。

（スキュラの姿とスキルはモニターでしっかり見ているため、登録はされているわけだ）

廊下の奥から「このままでは犯されると、イプシロンは危惧します！」とスクール水着姿な少女・イプシロンが駆けて来た。さらに廊下の奥から「姉たちを置いて逃げる妹がいますか！」と怒声が。この声はアルファだな。

「イプシロン、こっち！　最強の助っ人がここに居る！」

「ルシリオン・セインテスト調査官！　助けてくださいとイプシロ

ンは懇願します！」

半泣きだったイプシロンやデルタを見捨てるわけにもいかず、「こっちだ！」と2人の手を引いて、3つ奥の扉を開けて入る。天蓋付きのベッドや鏡台、脚の長い丸テーブル、アンティーク調の肘掛椅子、ステンドグラスの扉付きキャビネットなどと言った家具がある15帖ほどの部屋。

「えっと、確かあの辺りに・・・あった」

シャンデリア側の天井に天井裏に抜けるための点検口。真下にテーブルを持って来て、「ここから上階に上がるぞ」と伝える。まずは俺から上がり、「ほら、手を伸ばせ」とテーブルの上に立ったデルタに手を伸ばす。

「あ、うん、ありがとう」

デルタの手を取って「あらよっと」軽々と引き上げる。正直、おそろしく重かったが彼女も1人の女の子。重いなんて言われたくないだろうと思い、言葉を呑み込んだ。次に「イプシロン」の手を取り、天井裏へと引き上げる。

「ありがとうございますとお礼を述べます」

「いや気にするな。で？　君らに一体なにが起きているんだ。アルファの怒りの声も聞こえていたが・・・」

四つん這いで天井裏内を移動し、上階へ上がるための点検口を目指しながらそう訊ねる。デルタとイプシロンは水着姿。アルファの怒声からして彼女も水着姿にさせられているんだろうと考えられる。

「何か判らないけど、ヴァルハラに来てからというものアン・アップルトンとかいう奴が、デルタ達の体をいろいろ触ったり着せ替えしたりしてくるの」

「しかもどこに逃げようとも隠れようとも、的確に捜し出してくる反則ぶりに、イプシロン達はもう、心が折れそうです」

「あー、あの女の子好きの・・・」

ある契約先世界で知り合った女性だ。好きなことがセクハラ、好きなものが可愛い女の子と堂々と宣言している、ちょっと残念な思考の持ち主だ。それ以外は普通に良い女性だんだが・・・。

「君たちはエインヘリヤルでの新入りという立場だからな。先輩としてのスキンシップなんだろう」

「えー！　だからって会うたび会うたび、おっぱいやお尻を触られるのはノーサンキューー！」

「うんうん」

「そうか・・・。っと、アレだアレだ」

見えてきた上階への点検口の真下に着き、両手を付いて立ち上がりつつ点検口の扉を押し上げて開く。まずは俺が出てリネン室内に入り、室内を隈なく確認、次に廊下への扉を薄ら開けて周囲を確認。誰も居ないことを確認して、「デルタ、イプシロン。いいぞ」と声を掛ける。

「ふぅ。思ったより埃っぽくないから良かった」

「ここは俺の精神世界でもあるからな。常に最適な環境に保たれるようになっているんだよ。・・・とりあえず、ブランケットを羽織っているといい」

リネン室を目指した理由がこれでもある。羞恥心をある程度有しているらしい彼女たちを、いつまでも水着一丁で放置というわけにもいかない。2人は「ありがとう」と受け取り、デルタはパレオのように腰に巻いて下半身を隠し、イプシロンはケープのように羽織って胸部を隠した。

「さて、これからどうし――」

そこまで言いかけたところで「見ぃ～つけま～した♪」と、キィーと木の軋む音を発しながら扉が開いた。ハッとして振り向けば、「ゼータ姉様・・・！」とイプシロンが声を震わせて呼んだ。

（ゼータ。確か、フォルセティによって殺害された少女だったよな・・・）

「デルタ姉様、イプシロン姉様。よくも逃げてくださいましたね。おかげで私はもちろん、アルファ姉様も、ベータ姉様も、ガンマ姉様も、それはもうあられもないお姿に・・・」

ゼータはその艶やかな黒髪に合う和服姿なんだが、和服は和服でも花魁みたくなっていて、両肩を露出している。デルタが「なんでバレたし！」と俺を睨みつけてきた。

「いや、俺もよく判っていないんだが・・・。誰かに見られていた・・・？」

「正解！　しっかり見ていたぞ～、ルシル！」

どこからともなく聞こえてくる第三者の声。しかし目に見えているのは、「お尻見えちゃうから～！」と喚くデルタと、「あわわわ！」と慌てふためくイプシロン、そして「この程度の辱めなど・・・！」と、2人のボトムを引っ掴んでいるゼータ。もうひどい混乱だ。

「こっちだ、こっち」

声のする方を見れば、「あぁ、君か、マサムネ」が居た。手の平サイズの小さな女の子で、銀髪ツインテールに眼帯という出で立ちの、スクナと称される神の末裔の1人だ。

「久しぶりだな、ルシル！　マサムネがずっと見ていたからな、お前のこと！」

「・・・君も大変な目に遭っているようだ」

「・・・うん」

マサムネもまた、着せ替え人形の如くゴスロリ衣装を着せられていた。彼女も犠牲者の1人というわけだ。

「ゼータ。デルタとイプシロンは捕まえられた？」

「あ、はい。アルファ姉様」

次に姿を見せたのはウェディングドレス姿のアルファだった。彼女は俺に気付くと否や、「神器王ぉぉぉッ！」とベールを脱ぎ棄て、鼻っ面が引っ付くほどに顔を近付け、俺の顔を両手で挟み込んできた。

「なんですか、あの女たちは！？　胸は触るわ、お尻は撫でるわ、服を着替えさせてくるわ！」

「まぁそういう性癖なんだ、許してやれ！・・・ん？　女・・・たち？」

「いくら同姓と言えど許せるものと許せないものとあるわ！」

アンだけでなく、他にもアルファ達"スキュラ"を弄ぶ何者かが居るのか。その正体はすぐに知れた。廊下から「次は何を着せようかな～♪」鼻歌交じりな陽気な声が聞こえてきた。今まさに俺が捜し

ている人物の声だった。

「アルファ、デルタ達は確保できた～？」

「次の衣装も決まってるから・・・」

「「あ」」

俺を見てゼフィ姉様とアンは口をあんぐり。ゼフィ姉様が真っ先に再起動して「ルシル～　」と俺をハグした。

「お久しぶりです、ゼフィ姉様」

「本当よ！　全くと言っていいほどに逢いに来てくれないんだから！　もう！」

姉様の豊満な胸に包まれながら「アンも、久しぶりだな」と挨拶すると、「ええ、久しぶり。ちょっと見ない間に小さくなって♪」と頭を撫でてきた。彼女の身長は１６３ｃｍだから、完全に俺が見下ろされる立場になっている。

「ゼフィ姉様、捜していたんですよ」

「そうなの？　ごめんね、ルシル。それで、どういった用件？　それともただお姉ちゃんに逢いたかったとか？　だとしたら嬉しいな」

姉様の言うように、姉様に逢いに来た～、って話なら喜んでもらえたんだろうが、残念ながらそうではないのだ。姉様にハグされたまま「あの娘を捜しているんだ、ゼフィ姉様」ここに来た理由を伝える。

「な～んだ残念」

名前を口にせずとも俺の思考を読んだ姉様が肩を落とす。"ヴァルハラ"の管理者である姉様なら、"エインヘリヤル"がどのエリアに居ようとも瞬時にその居場所を割り出せることが出来る。

「えっと～、中庭の花壇に居るわね。呼ぼうか？」

そして"エインヘリヤル"への念話も可能だったり、いつでもどこに居ても近くに召喚で来たりもする。が、「いえ。自分で行きます。ありがとうございました」と礼を述べて姉様の胸から離れる。

「え？　ちょっ、神器王？　デルタ達は！？」

「見捨てるつもりですか！？と、イプシロンは批難します！」

「この女はあなたの姉でしょう！？　何とかしてください！」

「ご慈悲を！」

デルタ達が半泣きで懇願して来るから、「ゼフィ姉様、アン。程々に頼むよ」と頼み込む。ここで散々イジられ、いざ現実に召喚され

た時に反抗されて寝返られては堪ったものじゃない。

「愛しのルシルからのお願いだし・・・」

「久しぶりに会ったかつての同僚だし・・・」

「「しょうがないか～」」

そう言って肩を竦めた姉様とアン。姉様が「じゃあ今日はもう解散」と指をパチンと鳴らすと、デルタ達の服装が見慣れた制服に戻った。彼女たちは「はあ～～」と長い溜息を吐き、その場にペタリとへたり込んだ。

「ではゼフィ姉様。またいずれ！」

姉様の右手を取って甲にキスをし、手を振り合いながら廊下へと出る。ここは3階だ。階段を使うのもまどろっこしい。両開きの窓を外に向かって開け、地上を見下ろせばすぐに「お、発見！」お目当ての人物を見付けた。窓枠に手を置いて「よっ」と飛び降り、花壇を踏まないように着地する。

「っ・・・！」

花壇に咲き誇っている花々にジョウロを使って水遣りをしている彼女は俺を見て、「久しぶりだな、ルシル」と笑顔を浮かべて挨拶をしてくれた。

「ああ、久しぶりだな。・・・１０年も待たせてしまって本当に申し訳なかった。リインフォース・アインス」

ロストロギア・"夜天の魔導書"。初代・祝福の風。名をリインフォース・アインス。アギトも見つけた。あとは君が八神家に戻ってくれば、すべてが元通りとなる。俺の"界律の守護神テスタメント"としての人生が終わるまでに、やっぱり君だけははやて達の元へ帰してあげたかったんだ。間に合って良かったよ。

「迎えに来たぞ。帰ろう、はやて達のところへ」

アインスの今の服装は園芸で汚れても支障の無い、Ｔシャツとサロペットパンツと麦わら帽子、それにエプロンと軍手という完全武装。そんな彼女に俺は手を差し出た。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒はやて†††

これは夢やってすぐに判る光景が目の前に広がってた。茨に拘束された子供の頃の私、今は亡きリインフォース・アインス。そんでアインスに殴り飛ばされたナハトヴァール・アウグスタ。

（これは１０年前、闇の書から夜天の魔導書へ・・・本来の姿へと戻った・・・あの日）

幼い私が拘束された茨から解放されて落下するんやけど、アインスが抱き止めてくれた。そんで激昂したアウグスタを、シグナム達の魔法や技を使って迎撃。血の色に染まってた世界が一変して、星空

の海となった。そんであの、私とアインスにとって決して忘れられへんやり取りや。

『災厄撥ねし魂・導き果てぬ絆・希望の守り手、シュリエルリート。これまで多くの災厄を撥ね退けてきてくれたその気高い魂にありがとう。わたしらとの出逢いまで果てること無く導いてくれたこの絆にありがとう。わたしらの未来に光を灯してくれる希望を守ってきてくれたその手にありがとう。かつての主、オーディンさんから与えられたその名を今ここに空へと返上する。そして、新たな夜天の主の名において、汝と魔導書に新たな名を贈る』

ルシル君に名前を考えるように言われた時からずっと考えてた名前。幼い頃の私に考え付ける名前の中で、一番の出来やったって自負してる。

『強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール・・・、リインフォース』

あまりの懐かしさに鼻の奥がツンとする。あれから10年、それともまだ10年。アインスが旅立って今日まで、ホンマに多くの出来事があったな。

「なあ、アインス。話したい事、聴いてほしい事、たくさんあるんよ」

目を閉じて、両手を胸の前で組む。楽しい事も苦しい事も、いろいろな出来事があったな～。思いを馳せ終えて目を開けたところで、

「ここは・・・」また場所が変わってた。私が居るのは「海鳴市の私の家・・・」やった。

「うわぁ、懐かしいな～♪」

ミッドに引っ越すことになったから、後ろ髪を引かれる思いやったけど引き払った生家や。門から庭へと入ってくと、「アインス・・・！」が居った。縁側に座って幼い私やルシル君、リインとお茶してる光景。

「（そんな日もあったな～）・・・ん？」

アインスが時折、私を見てる気がする。そやけど、そんなわけないって笑う。これは夢やもん。いや夢やからそんな事があるんかもしれへんな。って思うてたら、アインスが私の方へと歩いて来た。

「アインス・・・？」

私の前で立ち止まったアインスはとても綺麗ない微笑みを浮かべて、私の頭を優しく撫でてくれた。

「アインス！」

ハッとすればそこは六課の寮の自室で、「あ・・・」ベッドの上やった。すぐにベッド側のナイトテーブルの上に置かれてるお出かけバックを覗き込む。リインが起きてへんようでホッと安堵。２人が起きひんようにベッドから降りて、鏡台の上にある宝箱を開ける。

「アインス・・・。私に何か伝えたい事、あったんか・・・？」

鎖が通された待機形態の"シュベルトクロイツ"の両側には指輪が2つある。ソレは夏祭りの露店でルシル君に買った貰ったもので、1つは私、もう1つはアインスの物や。

「・・・夢でもええからもう一度逢いたいな・・・」

そう願いを込めて"シュベルトクロイツ"を首に掛けた。それから日の出までぼうっと過ごした。そんでいつも通りの身支度を始める時間になったところで、髪の毛を櫛で梳いて、局の制服に着替えて、鏡で身嗜みをチェック。

「よしっ」

人の前に出ても恥ずかしないことをしっかり確認。ちょう前に起きたリインも「準備バッチリです！」って宙を舞って私の元へ来た。2人で部屋を出て、まずは食堂へ。食堂に行くまでにシグナム達やなのはちゃん達と合流して「おはよう～♪」って挨拶を交える。食堂に着いて、カウンターから朝食が乗せられたトレイを受け取って、いつもの席に着いてく。私、リインがまず着いて、残りの2席は私の大切な人が座る。

「おはよう～ございます！」

そんなところに元気な挨拶が食堂に響いた。入口を見ればフォルセ

ティとアイリ、そんでルシル君が居った。ルシル君たちとも挨拶を交わし終えた後、カウンターへ向かうルシル君とアイリ、ヴィヴィオの元へ行くフォルセティを見守る。

「ヴィヴィオ、おはよう！」

「おはよ～、フォルセティ♪」

「「えへへ～♪」」

フォルセティとヴィヴィオのやり取りは見てるだけでもう幸せや。生まれなんて関係あらへん。重要なんは生き方や。ヴィヴィオと小さく手を振り合ったフォルセティが戻って来て、アイリやルシル君が自分とフォルセティの分のトレイを持って、「お待たせ」と席に着いたところで・・・

「いただきます！」

私の食事前の挨拶に、食堂に居るみんなも「いただきます！」と続いた。思い思いに談笑しながら食事を進めてると、ルシル君が「八神家一同に連絡」そう言うた。私たちだけやなくてなのはちゃん達も談笑を止めて、ルシル君を見た。

「今日中に１０分ほどの時間を俺に欲しいんだ。出来れば全員が揃った状態でね」

朝食後に休憩時間はあるけど、すぐに仕事の準備を始めるもんや。

でもルシル君がわざわざ伝えてくると言うことは、かなり重要な話やと思うし。とゆうわけで、八神家はササッと食事を終えて寮の外の庭へ移動する。

「はやて。アインスの指輪を貸してくれないか？」

「え？　あ、うん」

胸元から"シュベルトクロイツ"を出して、鎖を一度外して指輪だけを離す。そんでルシル君に「どうぞ」って手渡した。今朝はアインスの夢を見て、さらにはルシル君からアインスの話が出て来た。これは偶然なんやろうか。

「１２月２５日。１０年前、あの娘は本来の名を取り戻し、それと共に新たな美しい名を与えられた。それはある種の誕生日だった」

ルシル君の独白に「リインフォース」って私たちは漏らした。ルシル君は足元にミッドでもベルカでもない魔法陣を展開して、魔法陣上で指輪をポロっと落とした。そやけど指輪は地面に落ちることなく宙にふわっと浮いた。

「正直、タイミングはどうしようかと考えていたんだが、ちょうど今年で１０年という節目。運良く複製権限も奪還できたわけだ。なら今年の今日１２月２５日、やるべきだと判断した」

これから何が起こるのか、ルシル君の話を聴いてるだけで推測できた。鼓動が早くなるのを自覚する。

「おいおい、ルシル。マジか・・・・！」

「出来るんですか！？　本当に！」

「すごいすごい！」

ヴィータとリインとシャマルも察したみたいで、テンションがすごい。シグナムが「頼む。アイツもまた、我々の家族なのだ」ってルシル君の肩に手を置くと、ルシル君は「もちろんだとも」って強く頷き返した。

「ルシル君。・・・アインスが、戻ってくるんやんな・・・？」

「ああ。・・・10年前、本当はオリジナルの方を生かしてあげたかったけど、それを成せるだけの技術が俺には無かった。それを見越していた俺は、アインスに贈っていた指輪にある細工をしておいたんだ」

「細工・・・？」

「これから俺が行うのは、アインスのエインヘリヤルの召喚だ。だがエインヘリヤルは本来、登録された時点で現実での記憶が途切れる。アインスも例に漏れずだ。でもな、10年間の思い出を共有できないのはあまりに酷というものだ。だから指輪に細工した。アインスの心は、この指輪のガラス玉に宿っているんだ。そういうわけで、はやてが見ていたものは、オリジナル・アインスの心も見てい

たというわけだ」

――私は生き続けます。目には見えないでしょうが私の魂と、みんなを守りたいという意志は主はやて達の魂と共に居て、あなた達を見守り続けます――

アインスが天に旅立つ前に言うてくれたことを思い返す。ホンマにずっと側で見守ってくれてたんやね、アインス。

「では始める。我が世界より来たれ、貴き英雄よ。・・・其は強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール・・・、リインフォース・アインス！」

宙に浮く指輪がアインスの魔力光である深紫色の光球に呑み込まれると、さらに人型の光が発生して、少しずつアインスの形をしてく。そんで一際強い発光と衝撃波が発せられて、「わぷっ？」両腕で顔を覆う。光と衝撃波が治まったとことで腕を下げると、風に靡く長い銀色の髪が真っ先に視界に入った。

「アインス・・・！」

今日までずっと片時も忘れることのなかった家族が、愛しいアインスが、消えてく魔法陣上に佇んでた。アインスの側に立ってるルシル君が私に振り向いた。さらに私の右肩にシグナムが、左肩にシャマルが手を置いた。

「はやて」

「はやてちゃん」

ヴィータとリインも私を見るから、私はコクリと頷いた。私も頷き返して1歩1歩とアインスの側へと歩み寄ってく。アインスは目を閉じたままで、私が触れられる側まで来ても微動だにせえへん。

「ルシル君・・・？」

「契約を。エインヘリヤルは本来、1時間ほどで顕現限界となって消失する。アインスもこのままだとそうだ。手間は掛かるが消失したらすぐに召喚を繰り返す、なんてことも出来るけど、俺だってあと10年も生きられるか判らないような運命を背負っている。俺の死はアインスの消滅にも繋がるからな。そうなる前に、アインスをヴァルハラから解放して、現世に固定する必要があった」

「そんな、ルシル君・・・。そんな悲しいこと言わんで・・・」

ルシル君の制服の袖を掴む。ルシル君は私の手に自分の手を添えて、「はやて。アインスを」って私の手をアインスの頬へと移した。はぐらかされたのは解る。けどアインスを放っておくわけにはいかへんよな・・・。

「（あとでいくらか文句聞いてな・・・）それでルシル君、どうすればええの？」

「ユニゾンすることで契約が成される。以降は指輪を本体として、

本来の姿フォーム、小人フォーム、指輪フォームの３形態の姿を取れるようになる。しかし彼女の維持には、彼女自身の魔力は元よりはやてにも少しばかり魔力の負担が・・・ある。いいだろうか？」

「もちろんや！　シグナム達とも一心同体やし、アインスともそうなれるなら・・・！」

左手もアインスの頬に添えて、そっと額同士をくっ付けた。そんでアインスとの「ユニゾン・イン」を果たすと、私の内にアインスの鼓動をあるのをハッキリと感じれるようになった。そやけど昔と同じユニゾンの感覚で、契約とか特別な感じはせえへんなぁ～・・・。

「ルシル君、これでええの？」

「ああ。今まさに、契約が結ばれてる最中だ。俺のヴァルハラから完全に切り離されている途中だな。・・・さぁ目覚めるぞ」

ルシル君がそう言うた直後、「っ！」ドクンと心臓が跳ねた。胸に手を添えてると、「ユニゾンを解除してくれ」って言われたことで「ユニゾン・アウト！」をした。私たちの前で改めてアインスが現れた。さっきと違うのは目を開けて、あの懐かしい綺麗な微笑みを浮かべてることや。

「アインス・・・？　アインス！」

「はい。お久しぶりです、主はやて！」

「アインス！」

私はアインスの胸に飛び込んだ。背中に腕を回すと、「またこうしてあなたに触れることが出来て嬉しいです」って抱きしめ返してくれた。ホントはもっとこうしてたいけど、感動の再会を私が独り占めするのもアカンよな。アインスの背中を2回、優しく叩くとアインスが手を離してくれたから、私も手を離して距離を取った。

「「「アインス！」」」

「ヴィータ、シャマル、リイン！」

直後にヴィータ達が駆け寄って来た。シグナムとザフィーラも遅れてアインスの側にやって来て「久しぶりだな。また会えて嬉しいぞ」って再会を喜び合った。そんでアインスは、アイリとフォルセティの側へ。

「アイリ。本当に久しぶりだ。お前やアギトと再会するまでは生きていたかったんだが・・・」

「ううん。こうしてアイリ達の目の前に居るのもアインスだからね。アイリも、またアインスに逢えて嬉しいよ♪」

アインスとアイリが握手を交わすと、アイリが1歩下がってフォルセティを前に立たせた。フォルセティは「アインスおねえちゃん・・・？」って呼んだ。アインスの事はアルバムや思い出話で伝えてあるからな。アインスは片膝を付いてフォルセティと目線を合わせ

た。

「はじめまして、フォルセティ。ああ、私がリインフォース・アインスだ。君ともこうしてお話が出来て嬉しいよ、フォルセティ」

「うんっ！」

アインスにハグされて頭に撫でられたフォルセティが「えへへ♪」って、くすぐったそうにハニかんだ。

「ルシル。お前には感謝しきれない恩が出来たな」

「何を言う。１０年以上もヴァルハラに放置していたんだ。それについての謝罪もある。気にしないでくれ」

「いや。ヴァルハラでの生活もまた充実した、とても楽しいものだった」

「そう言ってもらえると助かるよ」

そんでアインスは最後にルシル君と向き合って、ガシッと握手を交わした。それを見届けた私は「ルシル君、フォルセティ、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン、アイリ」八神家一同の名前を告げる。フォルセティだけは小首を傾げたけど、ルシル君がコソコソっと耳打ちすると、「うんっ、わかった！」って元気よく返事した。

「主はやて、皆、一体・・・？」

アインスの前に横一列に整列した私たちの様子に、アインスもまた小首を傾げた。大事な家族が帰って来た。それなら私たちは、この言葉でアインスを迎えやなアカンよな。私が「せ～の・・・！」と合図を出して・・・。

「「「「「「「「おかえりなさい、アインス！」」」」」」」」」

「・・・っ！・・・ああ、ああ！　ただいま！」

ルシル君のおかげで、こうして私たちはまたアインスと同じ時間を生きられることになった。ホンマにおおきにな、ルシル君。

Ｅｐｉｃ４０新暦７６年：機動六課、解散～Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ａｇａｉｎ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

設立から１年と経った今日、はやての思い描いた夢への足掛かりとなった機動六課も、とうとう解散の日を迎えた。私たち隊長陣、というよりはチーム海鳴は朝早く、はやてやルシルの居る部隊長室に集まった。

「みんな、１年間ホンマにお疲れ様やった」

ソファにははやて、リイン、シグナム、ヴィータ、シャマル、アイリ、そして私、なのは、アリシアの順で座って、床に狼形態のザフィーラがお座りしている。そして調査官のルシルは自分のデスクに着いていて、側には１０年前に天に召されて、去年のクリスマス・１２月２５日に復活した初代リインフォース――アインスが控えている。

（オリジナルのアインスの魂を、エインヘリヤルだったアインスと融合させて、ルシルの使い魔としてじゃなく独立した命に昇華させた・・・とかなんとか）

詳しい話はよく判らないけど、アインスとまた同じ時間を過ごせるようになったことは確かだ。今はそれだけが判っていれば良い、うん。

「なんか、あっと言う間の1年間だったね～」
「つうか、まだ足りないよな。スバル達はまだまだ伸びるっつうのにさ」
フォワードの教導を任されてたなのはとヴィータが、エリオ達への訓練も終わってしまうことを残念がった。そんな2人にアリシアが
「でもさ、エリオ達も幸せ者だよ～♪」って言った。
「確かにな。なのはや教導隊が行う教導期間は、短期で言えば数日から1週間、長くても1ヵ月ほどと言うではないか。それがみっちり1年だからな」
「ですね～。それに怪我をしても優秀な医療班が居たですし♪」
「まあね！　チーム海鳴とその仲間たちの治癒は～♪」
「シャマルとアイリちゃんにお任せですっ♪」
隣同士に座ってるシャマル先生とアイリがハイタッチをした。なのはとヴィータの教導って結構大変だから、これまた生傷が絶えない。でもシャマル先生たち優秀な医療スタッフが居てくれたからこそ、あの子たちは今日まで大きな怪我もなくしっかりやって来られた。本当に感謝している。
「なのは達が教え伝えた技と心構えがあれば、あの子たちはこれか

らの進路を堂々と歩いて行けるだろう」

会話に参加して来たルシルに、「そうだね。この1年で、見違えるほどに逞しくなったから」って私は同意した。

「フェイトちゃんやアリシアちゃんとしては、エリオとキャロは学校に行かせたかったんとちゃう？」

「え？　あー、うん。そうだね。どれだけ逞しくなってもエリオとキャロはまだまだこどもだから・・・」

「わたし達みたいに友達をたくさん作ってとか、たくさんの知識を得られるとか、学校でしか得られない経験もあるしさ。でも・・・」

「エリオとキャロが選んだ道だから、私とアリシアは2人の意志を尊重することにしたの」

一度、エリオとキャロに学校に通わないかどうか訊いてみた。どこの魔法学校だっていいし、ヴィヴィオやフォルセティの通うことになったＳｔヒルデ魔法学院だったら嬉しいな～って。学年は違うけど、ヴィヴィオ達の側にエリオ達が居ると思えば本当に安心できるから。でも2人は丁重に通学を断った。

「キャロは前所属の自然保護隊への復帰、エリオは転属ね。武装隊とか捜査官とかに比べれば危なくはないかしら・・・？」

「自然保護隊員は密漁者の摘発が一番の危険だと思うけど、エリオ

とキャロならたぶん、大丈夫なはずだよ」

「ああ。最近のエリオの技のキレも大したものだからな。並の魔導師では相手にならんだろう」

シグナムはよくエリオと空いた時間に、木製と剣と棒を使っての訓練をしてる。この前、エリオがシグナムから良い一撃を放てた、そう褒めてもらえたって喜んでたし。シグナムのお墨付きなら心配はあんまり要らないね。

「スバルはどこだっけ？」

「特別救助隊だよ。スカウトでね」

アリシアの問いになのはがそう答えると、「すごいじゃないか」ってルシルが驚きを見せた。特別救助隊、通称レスキューは、災害担当部署に所属する局員の誰もが憧れる銀制服を着られる唯一の隊だ。本来は自ら志願して、厳しい試験の元で入隊者を決定するから、スカウトされるのは本当に稀だったりする。

「しかし、ティアナとはここで進路が別々か。彼女は確か・・・」

「私の補佐をしてもらうことになったよ」

私がティアナをスカウトした。シャーリーは事務や渉外を主として、アリシアはシャーリーの護衛や私の後衛サポートを任せている。これまではそれだけで十分だったし、これからもやっていけると思う。

でも、ティアナの夢を理解している今、あの子の力になってあげたかった。

「わたしの後輩ってわけ♪　しかもすごいんだよ、ティアナ。考査試験を満点で合格！　いや～、優秀な後輩が出来るのは嬉しいね♪　わたしとティアナでガンナーズみたいな～」

「おい、大変だぞ、アリシア。君より優秀なティアナがフェイトの補佐に就けば、君の立場が辛くなる」

「ルシル、ひっど～い！　わたしだってまだまだティアナより強いし、仕事だって出来るも～ん！」

アリシアとルシルがわいわい騒ぐ。私は「大丈夫。アリシアにはいつも助けられてるよ♪」ってアリシアの頭を撫でた。

「ちょっ！　フェイト、わたしの方がお姉さんなんだからね！　もう！」

ぷんぷん頬を膨らませて怒るアリシア。でもね、アリシア。そんなジタバタしてるとやっぱり子供みたいだよ。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒なのは†††

「フォワードの進路は決定したが、君たちは元の所属に戻るのか？　昇進・昇格、栄転などは？」

ルシル君のその問いに、「ルシル、お前はどうなんだよ」ってヴィータちゃんが訊き返したら、「なんと、たったの1年で准将から少将へ昇進だ」ってとんでもない答えが返って来た。でもあくまで階級の昇進は調査官としてで、本来の武装隊基準における一尉からの昇進はなかったみたい。

「まぁ、三佐になったとしても部隊を率いるつもりなんて初めからないからな〜。特捜課と調査課の両方に籍を置きながら、最期まで一尉のままでいるつもりだよ。これくらいがちょうどいい責任だ」

「そう言えば、なのはも一尉のままでいるって決めたんだよね？」

「あ、うん。私にも三佐への昇進話があったけど、断っちゃった」

断った理由は、教導隊として現場に残り続けたいからだ。佐官になっても現場でバリバリ戦う局員も居るけど、私はそこまで偉くなるつもりはないし。今の一等空尉のままで十分だって考えてる。ってことをみんなに伝えと、私らしいって笑った。

「そうだ、ヴィータちゃん。あの話、ちゃんと考えてくれてる？」

ちょうど良い機会だし、改めてあの話をヴィータちゃんに振る。ヴィータちゃんを教導隊に入隊してみないかって、誘ってみたんだよね。1回目の提案の時、教導官はガラじゃないとか、私と六課解散後も一緒は気持ち悪いだとか、かな〜り傷ついちゃうようなことも言われたけど、考えておくって検討はしてくれるって、約束はしてくれたし。

「んあ～・・・。ああ、うん。まぁ・・・。やるわ、教導官」

ヴィータちゃんは頬を指で掻きながら、私の提案を受けてくれた。私が「やったー！」って喜ぶと、みんなが「おお！」って拍手してくれた。ヴィータちゃんの実力は本局内で有名だし、教導隊入りもスムーズに済むと思う。

「シグナムは首都防衛隊に戻るですよね」

「ああ。アギトも出所したら局入りを果たすからな。共に職務に就くつもりだ」

「そう言えば、アリサちゃんも首都防衛隊に転属することになったみたいだよ」

ちょっと前にアリサちゃんから連絡が来た。プライソン戦役で首都防衛隊から怪我などの事情で除隊せざるを得ない隊員たちが多く出た。だから地上本部は今、魔導師ランクを問わずに、ミッドの各陸士隊から転属希望を募るなどで戦闘魔導師を補充してる。アリサちゃんには、防衛隊の隊長さん数名が１０８部隊の隊舎まで直々にやって来て、転属してくれるようにお願いしたみたい。

――ま、ギンガ達と一緒に捜査するっていうのも楽しかったけどさ。頭を下げられてまでお願いされたら断れないでしょ。シグナムも居るって言うんだから、所属部隊は違えど会う機会は増えるでしょ――

アリサちゃんはシグナムさんとはライバルって関係だから、同じ職場で働けることが嬉しいみたい。シグナムさんも「今から楽しみだ」ってほくそ笑んだ。

「すずかはちょっと前にニュースになってたよね。ＡＩ搭載のアニマル型デバイスが開発ラインに乗ったって」

すずかちゃんが数年も前から開発してた動物型（犬と猫、あと兎の３タイプ）のインテリジェントデバイス。プライソン戦役によって民間人からも被害者が少なからず出てしまった。死亡や負傷の原因は、崩れた瓦礫などによるものが多かった。防御魔法を使える人が側に居てくれたら・・・。けど民間の魔導師は少ない。だからすずかちゃんは開発した。魔導師に頼らずとも防御魔法を使える自立型デバイスを。

「一般家庭でも購入できるように、ずっと低コストでハイスペックなデバイスを開発しようって頑張ってたからね」

「バリアだけじゃなくて、護身用のスタンバレットも撃てるようになってるんだろ？　少しでもこういった事件や事故、災害で犠牲者が減ってくれることを願うぜ」

「ホンマやね。すずかちゃんの夢、叶ってくれるとええな」

みんながそれぞれの夢を追って、少しずつ叶えて行ってる。私だって負けていられない。私の技術を多くの魔導師に伝えて、どんな苦

難の中でも無事に帰って来てもらえるようにしたい。

「はやては、しばらく部隊指揮はやらないんだったか？」

「あー、うん。今回の一件で、やっぱり自分の力不足を思い知ってな～」

「ですがはやてちゃん。指揮官としてはやてちゃんを引き取りたいっていう申し出が、これでもかってくらいに届いてるですよ」

リインがそう言ってモニターを展開する。内容は表示されてないけど、はやてちゃんを受け入れたい部署から届いてるメール件数は軽く３０件はいってるみたい。

「ん～。そうなんやけどな。やっぱり自分の部隊は持ちたいって考えはまだあるよ。でも私にはまだ早かったって感じかなぁ。そやから、特捜捜査官を続けながら小規模指揮や部隊立ち上げの協力をしてみようって思う」

「それがはやての決めたことなら、俺たち八神家は応援するよ」

「もちろん、チーム海鳴の幼馴染として親友として、私たちも協力するよ！」

「ルシル君、なのはちゃん、おおきにな♪」

「そして最後に・・・」

私たちの視線がアインスさんの方へ向けられる。アインスさんは私たちの中で唯一、制服じゃなくて、裾の長い灰色のセーターと黒のタイツといった格好だ。アインスさんが復活してから4ヵ月。アインスさんは民間人ということで六課の仕事はなに1つ出来ないけど、アイナさんを始めとした寮母さん達が忙しい時、ヴィヴィオやフォルセティの世話をザフィーラと一緒にしてくれた。

「私かい？　ルシルのおかげでこの身はかつてと同じ、いやそれ以上に強化されている。ユニゾンはもちろん、Sランク相手の個人戦も行えるからね」

アインスさんが自分の両手を顔の前に持って来てグッパグッパと開閉を繰り返した。実際にアインスさんと1対1で模擬戦した私たちみんなの感想は、強い、の一言に尽きた。圧倒的な防御力は相変わらずどころか、さらに強化されてた。カートリッジ無しの攻撃じゃビクともしないから本当に驚いた。

（魔法強化無しで私のシールドを破壊するし、機動力は私と同じくらいかな。ルシル君やフェイトちゃんよりは遅い。それに加えて範囲攻撃がえげつないレベルになったし・・・）

背中に展開してる3対6枚の黒翼から魔力の羽根を全方位へ射出するやつとか、デアボリック・エミッションの小型バージョンの複数発射とか、戦い方がルシル君に似て本当に戦いづらい。銀髪恐怖症になるかも・・・。

「本来ならば、融合騎として主はやてや皆をイの一番にサポートするべきなのだろうが、私は嘱託魔導師として局に登録することを決めたよ」

「アインスには、フォルセティの事をお願いしようって思うてるんよ。私たちも上手くスケジュールを調整したり、勤務時間を減らせる職務に就いたり、家族が揃いやすくするつもりやけどね。それでもやっぱり限界が来るわけでな～」

ヴィヴィオとフォルセティは一緒にＳｔヒルデ魔法学院へ通うことになってる。だからはやてちゃん達が早く帰って来られない時は、フォルセティを家で預かろうってはやてちゃん達と決めてた。でもアインスさんが八神邸に居てくれるなら・・・。

「あ、でもなのはちゃん。フォルセティとヴィヴィオってホンマに仲がええから、時々でええからアインスとフォルセティをお邪魔させてもらえるか？　もちろん、ヴィヴィオをうちで預かってもええよ」

「うん。その時はよろしくね、はやてちゃん。アインスさんも」

「ああ。よろしく頼むよ、なのは」

†††Ｓｉｄｅなのは⇒はやて†††

そろそろロビーで機動六課の解散式が始まる時間ってゆうところで、私たちは部隊長室を後にする。１年間とお世話になった、何度も通

った廊下をみんなで歩く。

「あ～あ～。久しぶりにみんな揃っての部隊だったのに、今日で解散とか～」

アリシアちゃんが頭の後ろで腕を組んで、六課の解散を寂しがった。みんなも「寂しくなるね～」って口々に同意してく。それぞれの夢の為にこれからまた別れて歩んでく。私もみんなも、親友の夢を応援してるんやけど、やっぱりこうやって同じ部隊で働きたいって思いも願いもあるわけで・・・。

「そうだね。もうこんな風にみんがが集まることはないのかな・・・？」

「です。ここまでの部隊を立ち上げるのも、とても難しかったですし」

「それにみんなもそれぞれ忙しくなるしね」

アリシアちゃんに続いて、フェイトちゃん、リイン、なのはちゃんが肩を落とした。

「そうやね・・・。そやけど、もしまたこのメンバーが必要になるような事態になったら、もう一度このメンバーを集めるつもりや。もちろん、次は正式にすずかちゃんやアリサちゃん、ルシル君やシャルちゃんも部隊に入れたいな～」

「その時は通常の部隊ではなく、世界規模の事件を担当することになるわけだな」

一番後ろを歩くルシル君の言う通りや。自分で言うてて結構無茶な事やってるって理解できてる。部隊設立にあたって、高ランク魔導師が1つの部隊に固まらへんようにするための処置である魔導師ランクの総計規模。その事もあって、私たち隊長陣はリミッターを付けざるをええへんかった。さらに高ランクのルシル君たちが入れる部隊となると、さらに強力なリミッターが必要になって来るわけで。どう考えても現実的やあらへん。

「それはそれでちょう悲しいな。どうせ集まるなら同窓会がええな～♪」

「あ、海の近い宿泊施設に泊まろうって話でしたね。今から楽しみです♪」

フォルセティとヴィヴィオが海水浴に興味を持ったことで決まった同窓会の内容。みんなが揃って参加できるよう、スケジュールを合わせなアカンな～。ロビーに着くまでの間、ミッドで済ますか他世界のリゾートへ遠出するか、なんて談笑した。一応、幹事はシャーリーに任せてあるんやけどな～。

「さて。ルシル君♪」

「ん？　どうした」

歩くスピードを落としてルシル君の右側に移動。ちなみに左側にはアイリが控えてる。六課の敷地内に居る間のルシル君は、変身魔法を使って身長を高くしてへんから目線も合いやすい。

「ちゃんと挨拶、考えてあるか？　特務調査官として最後もビシッと決めてもらわなな♪」

「挨拶はまぁ簡単だが考えてきた・・・。でも必要なくないか？部隊長のはやてならともかくとして・・・」

「まあまあそうゆうこと言わんで～。1年間、六課を見守ってきてくれた調査官やもん。ビシーっと決めてな♪」

「了解だ。ならはやても部隊長らしく、バシッと決めてくれよ」

「んっ♪」

そんでロビーに到着した私たちは、それぞれの立ち位置に移動する。私となのはちゃんとフェイトちゃんとルシル君は、用意してもらったステージの壇上に横に並んで、シグナムとヴィータとシャマル、そんでアイリとアリシアちゃんは、ステージの側に控えた。

「こほん。言葉にすれば短く、こうして経ってみても短かったような1年間。本日を以って、機動六課は任務を終えて解散します。・・・みんなと一緒に働けてとても楽しく、そして戦うことが出来て、とても心強くて、それでいて嬉しかったです。次の部隊でも、どうかみんな元気に、頑張って！」

長々と挨拶するのも年寄り臭いから、伝えておきたいことだけを簡単に纏めた挨拶をした。拍手を受けた後、「次は、ルシリオン調査官からの挨拶です」って前置きしてから1歩引いた。

「当初に想定されていたロストロギア・レリックを巡る事件に比べ、プライソン戦役と名付けられた本件はあまりにも危険なものでした。機動六課は若手や新人が多い。そのような不安も懸念も、今こうして解散の日を誰1人として欠けることなく無事に迎えたことで、それらがただの杞憂であったことが証明されました。この1年間を乗り越えることが出来た皆さんは、どの部隊へ行っても大丈夫でしょう。調査官としての任務第一号が、この機動六課で良かったと思います。ありがとう！」

こうして私の、私たちの機動六課は終わった。解散式も終わって、それぞれ仲の良い友達や同僚と談笑してる光景を微笑ましく眺めながら、私たちは廊下を歩く。目指すのは海上シミュレータや。

「じゃあフォワードのみんなを誘って来るね♪」

「では私は、フォルセティとヴィヴィオを迎えに行ってきます」

「はーい♪」

なのはちゃんとアインスが一旦離脱したところで、「二次会前に前線メンバー全員が、練習場に集合って・・・。何をするの？」って、フェイトちゃんが人差し指を顎に当てた。私たちみんなは、これか

ら何をするかって知ってるし、フェイトちゃんにもその話が行ってるはずなんやけど・・・。チラッとアリシアちゃんを見ると、「着いてのお楽しみ～♪」ってフェイトちゃんの手を引いてどんどん先に行く。

（言い忘れてたな、あれは・・・）

みんなと顔を合わせて苦笑する。それから到着した海上シミュレータでなのはちゃん達が来るのを待って、「ねえ、みんな。本当に何をするの・・・？」って困惑するフェイトちゃんと、「思い出作りだってば～♪」アリシアちゃんのやり取りを微笑ましく眺める。

「お待たせ～！」

「お待たせしました」

「フェイトママ～！」

「ママ～、パパ～！」

ヴィヴィオはなのはちゃんの側からフェイトちゃんの元へ、フォルセティはアインスから私とルシル君の元へと駆けて来た。私はしゃがみ込んで「フォルセティ～♪」を抱き止めて立ち上がって、ルシル君が頭を撫でた。フェイトちゃんとアリシアちゃんもヴィヴィオと手を繋いだ。

「なのはちゃん、お願いな～」

「は～い！」

なのはちゃんは手元にモニターを展開して、キーを打ってシミュレータを操作。なんもあらへんかったシミュレータ上に満開の桜が何十本と周囲に咲き誇った。フォワードやフォルセティにヴィヴィオが「わあー♪」桜の木々を仰ぎ見ながら歓声を上げた。

「私やなのはちゃん、それにすずかちゃんやアリサちゃんの故郷の花、桜や」

「お別れと始まりの季節に付き物の花なんだよ」

季節は春やし４月、さらには今日で解散や。桜ほど今の私たちに相応しい花はあらへん。みんなで舞い散る花弁を堪能してると、ヴィータが「よし、フォワード一同、整列！」フォワードに指示を出した。なのはちゃんやヴィータと向かい合うように整列するフォワードを側で見守る。

「さて。フォワード４人、１年間の訓練と任務、よく頑張りました。本当にお疲れ様」

「この１年、あたしはお前らを叱ってばっかで、あんまし褒めてやったことはなかったが。・・・お前ら、どこへやっても恥ずかしくねぇほどに本当に強くなった。胸を張れ」

「うん。辛い訓練、きつい状況、困難な任務。けれど一生懸命頑張

って、最後まで諦めることなく、相手にも自分にも負けずにクリアしてくれた。みんな、本当に強くなった。みんなはもう、立派なストライカーだよ」

なのはちゃんがそう伝えると、フォワードの子たちが泣き出してもうた。ヴィータもここまで長い教官経験も無かったせいかな、感慨深くなって「泣くんじゃねぇ、みっともねぇ・・・！」なんて言いながらも自分も泣いてる。私もつられて泣きそうになるわ～。

「感極まっちゃって泣きそうになっちゃうけど、今日はせっかくの卒業、そしてみんなの新しい門出！　桜吹雪が私たちの旅立ちを祝福してくれてる。だから湿っぽいのは無しにしよう！」

「・・・だな！　お前ら！　自分の相棒、連れて来てるだろうな！」

なのはちゃんとヴィータがデバイスを取り出すと、フォワードの子たちはすぐに察して「はいっ！」と元気のええ返事と共にデバイスを取り出した。シグナムも早速"レヴァンティン"を起動してる中で、「え？　え？」フェイトちゃんだけが混乱してた。

「機動六課の解散＆卒業記念！　全力全開の手加減なし！　最後の模擬戦をやるよ！」

なのはちゃんのその一言でフェイトちゃんがとうとう「えええーーーっ！？」って叫んだ。

「全力全開！？　手加減なし！？　そんなの聞いてないよ！」

「本来はアリシアがお前に伝えるはずだったのだが・・・」

シグナムにそう言われたフェイトちゃんがアリシアちゃんをジロリと見ると、「言い忘れたんじゃないよ？　心配性のフェイトに先に言っちゃうと反対するでしょ」って、悪びれもせずに黙ってたことに対しての言い分を伝えた。

「だって～・・・」

「これも思い出だ、やらせてやろう」

「フェイト。スバル達はやる気がある。何よりフォワードは強くなった、君も理解している通り。こうして模擬戦を行うこともう無いかもしれない。だったら受け止めてやれ、フェイト。彼女たちの全力全開を」

「・・・シグナム、ルシル」

「フェイトさん、一槍お願いします！」

「私たち、頑張って勝ちますから！」

「エリオ、キャロ・・・もう。判った。バルディッシュ！」

頭を抱えながらもフェイトちゃんも模擬戦を納得して、"バルディッシュ"を起動して真・ソニックフォームへと変身した。なのはち

ゃん達もデバイスの起動と防護服への変身を終えて、スタンバイ完了や。

「みんな～！　怪我を負っても私とアイリちゃん、ルシル君が居るから～！　安心して全力全開の手加減なしで戦って良いわよ～　」

模擬戦の邪魔にならへんように離れたところで、シャマルが大手を振ってそう伝えると、「はーい！」なのはちゃん達が手を挙げて応えた。

「それでは！　機動六課卒業記念の模擬戦を始めます！」

部隊長やった私が試合開始の号令を下す役を貰った。右腕を掲げる。この手を降ろしたら、最後の模擬戦の始まりや。

「隊長陣ＶＳフォワード！　スタンバイ！」

一斉に構えを取るみんなの姿を目に焼き付ける。いつかまた、その日が来るかも判らへんけど、このメンバーで一緒に働きたいな。私はフォルセティとヴィヴィオに小さく「一緒にな♪」ってウィンク。２人はニコニコして頷いて、私を真似て右腕を上げた。

「レディー・・・！　せぇーの」

「「「ゴー♪」」」

３人一緒に腕を振り降ろした。瞬間、シグナムとヴィータが突撃し

て、エリオとスバルが迎え撃った。一切の遠慮なしな魔法攻撃が縦横無尽に駆け巡り続ける。流れ弾の心配はまずないやろうけど、あったとしてもルシル君とザフィーラとシャマル、それにアインスが居てくれるからな、不安は無いわ。

「ハロハロー♪　六課最後の模擬戦かぁ、派手にやってるね～」

背後から声を掛けられた。声の主を見ぃひんでも誰かは判る。振り返りながら「そうやろ？　シャルちゃん」って名前を呼んだ。振り向いた先には、教会騎士団の団服やなくて、局の制服を着てるシャルちゃんが居った。

「こんにちは、フォルセティ、ヴィヴィオ♪」

「「こんにちは、シャルさん！」」

屈んだシャルちゃんが両手の平を前に翳すと、フォルセティとヴィヴィオが2人揃ってハイタッチした。満足そうに笑みを浮かべたシャルちゃんは立ち上りながら、「調子はどう？　アインス」に声を掛けた。

「ああ。再びこの世界に生まれてから常に万全の状態だよ。ルシルには本当に感謝している。単独で彼女たち隊長陣と渡り合えるだけの戦闘力保有というおまけ付きだ。大切な人たちを護ることが出来る。本当に・・・感謝しているよ」

そう言うたアインスがルシル君の頭を撫でた。今のルシル君は本来

の身長で、アインスより低いからまぁ撫でやすい位置に頭があるわけや。それを見たシャルちゃんが「ルシル。ギュってしていい？」ってハグしようとした。

「却下。というか、今日はどうしたんだ？　団服ではなく制服なんて、今の君には珍しい格好じゃないか」

「でしょ？　今日のわたしの話の内容からして教会騎士じゃなくて、管理局員として居た方が良いかな～、なんて」

シャルちゃんが休職中の局員として制服を着てやって来た。それは一体なにを意味するものなんやろう。背後から爆発音と振動が轟く中、シャルちゃんはルシル君に右手を差し出した。

「ルシル。わたしね、局にわたしの部隊を造るの。だから・・・わたしの副官になって」

ＥｐｉｓｏｄｅⅣ：Ｄｅｓｉｎｅ　ｆａｔａ　ｄｅｕｍ　ｆｌｅｃｔｉ　ｓｐｅｃｔａｒｅ　ｐｒｅｃａｎｄｏ…．Ｆｉｎ

・―・―・次章予告・―・―・

ベルカの騎士たちよ、今こそ立ち上がれ。

「おい、また管理局が不祥事を起こしてるぜ」
「3年前のプライソン戦役。あれも本局の幹部連中が悪かったんでしょ？」
「その点、聖王教会の騎士団には不祥事なんて1つもないからな」
「騎士様の実力も、局の武装隊よりはるかに上なんでしょ？」
「どうせなら、騎士団に守ってもらいたいもんだぜ」
度重なる不祥事によって、管理局への風当たりが強くなる昨今。市民たちの思いは徐々に、聖王教会騎士団の応援へとシフトしていく。
「今こそ！　今こそ我ら教会騎士団が、管理世界の秩序を守護するべきではなかろうか！」
「よしなさい。管理局と聖王教会は、共に尊重し合ってこその組織。どちらかが潰れれば、それこそ管理世界の秩序は失われる」
「今こそ古き良き、誇りあるベルカを再誕させるのだ！」
「クーデターでも起こす気ですか！？」
「あなたはザンクト・オルフェンの統治者に相応しくない！」

「愚昧なる管理局に代わり、我ら真ベルカ騎士団が、ザンクト・オルフェンを守り、ミッドチルダを護る！」

ベルカ自治領ザンクト・オルフェンを統治する評議会内で起きる亀裂。そして、それは起こった。一部の騎士たちによる反乱である。

「まさか、自分たちの故郷に進攻することになるとは思いもしなかった。ねえ、ルシル？」

「俺の故郷はフェティギアであって、ザンクト・オルフェンじゃないんだが・・・。とにかく、乗っ取られたザンクト・オルフェンを解放し、捕らわれている人質を無事に救出する。そして・・・」

「プラダマンテ、キュンナ・・・、２人の大馬鹿。クーデター軍は、パラディンを含めた強大な戦力よ！　心して掛かれ！　時空管理局本局・特務零課・特殊機動戦闘騎隊、出撃！」

ザンクト・オルフェンとミッドチルダ領土の境界線上に、古代・近代問わぬベルカ式を扱う戦闘技能に特化した騎士だけで構成された武装隊、特殊機動戦闘騎隊の隊長イリスと副隊長ルシリオン、以下数名のメンバーが並んでいる。見据えるのは遥か遠くの聖王教会本部。そこに、彼らは居た。

「あなたを愛する家族の1人として、本局医務官として・・・進言するわ。・・・ルシル君。長く生きたかったらもうこれ以上戦っちゃダメ。だから・・・配置換えなんて温い話じゃない。管理局を辞めて隠居なさい」

Next Episode... Episode V: Sera,

tamen tacitis Poena venit pedibus.

番外コーナー：えぴそ～ど・フォ～のう～ら～ば～な～！

シャル
「こ～んにちは～！　聞こえ――」

ルシル
「はい、ストップ。ＥｐⅢの裏バナのスタートと同じだぞ、そのセリフ」

シャル
「そうだったけ？　間が開き過ぎて忘れてたよ。んじゃ、無駄話をして文字数が増え過ぎても退屈させちゃうだろうから、ササッと片付けちゃおうか。まずは登場人物からね～」

ルシル
「なのがが所属する戦技教導隊の第４班からだな」

――デミオ・アレッタ
戦技教導隊・第４班の班長。三等空佐。３３歳の男性。ミッドチルダ式の射撃系魔導師で、射撃能力だけで言えば、なのはを超える。デバイスは武装隊の杖型デバイスを改良した、柄頭に刃を装着したブレードロッド。
名の由来：マツダのデミオ・アレッタ。
――使用魔法
デュアル・ディフェンダー／対物・対魔力シールドを二重展開した多層防御魔法。

ホーミング・レイ／追尾性のある光線を放つ射撃魔法。

――エスティ・マルシーダ

同隊・同班に所属する二等空尉。２６歳の男性。ミッドチルダ式の射撃系魔導師。デバイスは拳銃型ストレージデバイス・ブラストガナー。

名の由来：トヨタのエスティマ・ルシーダ。

――使用魔法

バリアブレイク・ブレット／対バリアプログラムが載せられた魔力弾。

オーバー・ラウンドシールド／３枚のシールドを横に重ねた広域防御。

シャワーバレット／１発目に大きめの魔力弾を放ち、それに２発目を撃ち込むことで炸裂させる無差別弾幕。

――ヴィオラ・オデッセイ

同隊・同班に所属する二等空尉。２６歳の女性。４班で唯一の近代ベルカ式を扱う騎士。上記のエスティとは同郷の幼馴染。聖王教会騎士団と管理局の二足のわらじを試みようとしたが、生活リズムが崩れることを懸念して断念した経緯がある。デバイスは『獅子の咆哮』を意味するレーヴェンゲブリュルという銘の槍型アームドデバイス。

名の由来：ドイツ人女性の一般名のヴィオラ。ホンダのオデッセイ。

――使用魔法

ウンフォルエンデッド・ピーケ／魔力を纏わせた槍を投げ放つ。

シュトーセンシュラーク／攻撃魔力を付加した穂先による刺突。

ナーゲルシュラーク／デバイス全体に魔力を付加しての打撃。

――ロザリンダ・ベルトーネ
同隊・同班に所属する准陸尉。４班の事務官を務める２４歳の女性。４班で唯一、魔力資質が無い。前髪で目が隠れているため陰気っぽく見えるが、性格は明るくおっとりしている。
名の由来：イタリア人女性の一般名のロザリンダ。イタリア自動車関連会社のベルトーネ。

ルシル
「アレッタ三佐、マルシーダ二尉、オデッセイ二尉の３人は、前作で亡霊テスタメントとして登場し、魔族と融合して最後の戦いに臨んだがなのはとレヴィに敗れた」

シャル
「最期は自我を無くしてたし、悲惨な終わり方だったけど・・・。でもこの次元世界じゃテスタメント構成員がみんな存命だから、テスタメント事件は起きないね♪」

――ミュー・イスズ
時空管理局本局の情報部・諜報室の室長を務める三等空佐。年齢不詳の女性。見た目や仕草からホステスと見間違われる、お色気担当局員。裏の所属は暗殺部隊・第１１１１航空武装隊で、コードネームはティターニア。女性を食い物にした犯罪者には徹底的な苦痛を与えた後、遺体の損傷が激しくなるような事故に見せかけて殺害する。
名の由来：いすゞ自動車のミュー。

シャル
「あのさぁ、ルシル。なんでこの人にハグなんかされてんの？」

ルシル
「ジリジリ迫って来るな、恐いぞ。ハグされていたのは数年も前の話までだ。彼女の身長を超したら自然とそう言ったスキンシップは無くなった。まぁ本来の身長である１５３ｃｍちょいになったらまた、ハグされてしまうだろうが・・・。寮はこれから出るし、もう大丈夫だ、うん！」

シャル
「ふーん・・・」

ルシル
「いや本当だから・・・」

――アルバート・ヤヌス
ミッドチルダ地上本部・首都航空隊・ヤヌス隊の隊長を務める二等空佐。
名の由来：英語圏の一般男性名のアルバート。西ドイツの自動車メーカー・ツェンダップのヤヌス。

――ロディウス・モンクトン
ミッドチルダ地上本部・首都航空隊・ヤヌス隊所属の空曹長。
名の由来：韓国はサンヨン自動車会社のロディウス。英語圏の姓のモンクストン。

――ライカン・マコーリー
ミッドチルダ地上本部・首都航空隊・ヤヌス隊所属の一等空士。
名の由来：アラブ自動車メーカー・Wモーターズのライカン。英語圏の姓のマコーリー。

――アルピナ・ノーズブルック
ミッドチルダ地上本部・首都航空隊・ヤヌス隊所属の一等空士。
名の由来：ドイツ自動車会社のチューナー、アルピナ。英語圏の姓のノーズブルック。

――フォルセティ
ルシリオンの遺伝子と魔力炉（システム）の欠片を用いて生み出されたクローン。始めはレーゼフェアに奪取させたオーディンの髪環を用いようとしたプライソンだったが、遺伝子が採取できずにいた。しかしルシリオンとオーディンが同一人物であるとレーゼフェアから聞かされたプライソンは、運よく確保できたルシリオンから遺伝子などを採取し、とある計画の予定にはなかったフォルセティを生み出した。ルシリオンと同じように魔導師と魔術師の両スタイルを使いこなせる。聖王オリヴィエのクローンとして生み出されたヴィヴィオとは兄妹のような関係。機動六課に保護されるまでの育ての親であり名付け親はリアンシェルトとレーゼフェアだったが、フォルセティとヴィヴィオからはその記憶が消されている。
事件後、ヴィヴィオと共にベルカ自治領ザンクト・オルフェンのザンクト・ヒルデ魔法学院に入学。レリックウェポンとしての戦闘能力や魔力はもう無いが、これまでと変わらずヴィヴィオを護れる格好いい騎士になりたい、とのこと。
名の由来：北欧神話に登場するアース神族の1柱、正義・平和・真

実を司る司法の神。

シャル
「ああもう！　私が、というかイリスが引き取ってほしかった～！」

ルシル
「しつこいぞ～。フォルセティが、はやてが良い、と選んだんだ。恨むならイリスを恨め。俺の話を聴かずに早とちりして、俺をボコッた所為だ。知っているか？　最近は暴力系ヒロインは人気無いんだぞ」

シャル
「イリスの馬鹿者ぉ～～～～～！」

ルシル
「次からがＥｐⅣの敵キャラの紹介だ」

――ヘンリー・ヨーゼフ・リー・メンゲレ
プロフェッサーと称される広域指名手配犯。生物学・遺伝学の権威。管理・管理外世界問わず特別なスキルなどを有した子供たちを拉致、もしくは高額で買い取り、そのスキルを再現できないかを研究するため、人道に外れた実験を行っている犯罪者集団のリーダー。逮捕後、裁判の結果、終身刑を言い渡され、投獄中の身。
名の由来：アメリカの有名なシリアルキラー、ヘンリー・リー。人体実験ばかりを繰り返していたナチス親衛隊所属のヨーゼフ・メンゲレ。

シャル
「犠牲者の中には幼い子供も多く含まれてたって話。守護神な私が言える立場じゃないけど、子供を傷つける真似だけは絶対に許せないよ」

――プライソン・スカリエッティ
最高評議会の意思決定の下、古代ベルカ一の大国イリュリアの技術を受け継いだ末裔、ミミル・テオフラストゥス・アグリッパの手によって生み出された人工生命体。記憶転写型クローニング技術・プロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅ・や戦略・戦術級巨大兵器の開発など技術力に優れる天才。不老不死の能力を保有しているため、自身の死を強く願っていた。二卵性双生児の弟、ジェイル・スカリエッティを殺害。最期はルシリオンの手によって、魂を強制昇天されて死亡。名の由来：監獄を意味するＰｒｉｓｏｎの読み方変更。

ルシル
「本当に厄介な存在を生み出してくれたものだよ。とは言え、ミミルからこの真実を聞くのはまだ当分先の話だが・・・」

シャル
「でもさぁ、こっちの次元世界じゃコイツがプロジェクトの構築者だから、居なかったらフェイトは生まれなかったわけだし。それにヴィヴィオとフォルセティも・・・」

ルシル
「それが難しいところだな。メリット・デメリットを兼ね備えた存在か」

――The Body which made Naturalness and Artificiality be Compounded
頭文字を取ってＢＮＡＣ（ビーナック）と称される、ジェイルの生み出した技術。直訳で、自然と人工を混成させた体。事故や病気などの後天性や生まれつきの先天性などで障害のある体の一部や臓器の代わりに、機械部品を移植することでその機能を補わせる技術で、人工臓器や義手と同義。全身サイボーグ化も出来るが倫理的にアウトなため、ただの治療や魔法では完治できない危篤患者にのみ施術が可能であると条件が付けられる。

――スキュラ
プライソンの手によって生み出された人工生命体を、弟ジェイルのＢＮＡＣ技術を転用して全身サイボーグ化させた６人の少女たちの開発コード名。姉妹は白のブラウス、赤いリボン、裾付近に白のラインが１本入った黒のプリーツスカートと、揃えられた衣装を身に纏っている。後述の兵器群などの管制機としての役割を持ち、自身を護れるように戦闘能力も高い。
名の由来：古代ギリシアの長編叙事詩オデュッセイアなどの登場する、上半身は美しい女性で、下半身は魚の怪物・スキュラ。

――アルファ
スキュラシリーズの第１号・長女。１８歳ほどの少女。オプションとして藍色のブレザーを着ている。身長は１６５ｃｍほど。ブロンドのウェーブの掛かったロングヘア。プライソンを恋い慕うが、右腕的な存在は妹のガンマということもあり、彼女とはあまり仲がよ

ろしくない。
保有スキルはメタルダイナスト。あらゆる金属を操ることが出来る。

――ベータ
スキュラシリーズの次女。１５歳ほどの少女。オプションとして黒いセーターを腰に巻いている。身長は１６０ｃｍほど。栗色のボブで、左目が前髪で隠れている。プライソンと任務実行部隊のスキタリスとシコラクスを繋ぐ連絡係を担う。
保有スキルはヴァイオレントトレーナー。エネルギー鞭を複数本と作り出す。

――ガンマ
スキュラシリーズの三女。２０歳ほどの女性。オプションとして黒のトリミング・コートを羽織っている。身長は１６０ｃｍほど。深紅の前髪と後ろ髪は共に３０ｃｍと長く、顔を完全に覆い隠している。自立稼働型の兵器管制、各研究所のセキュリティ管制、各兵器の製造ライン管制などなど、プライソン一派で一番働いている引き篭もり（にならざるを得ない）。
保有スキルはクローニングクイーン。プライソンによって生み出されたサイボーグ全員のスキルを扱える。

――デルタ
スキュラシリーズの四女。１２歳ほどの少女。オプションとしてクリーム色のベストを着ている。身長は１４０ｃｍほど。オレンジ色をしたロングヘアをポニーテールにしている。フォワードのスバルやティアナとは友人関係一歩手前まで進んだが、姉や妹と同様に謎の暗殺集団によって殺害された。

保有スキルはショックブレイカー。強烈な衝撃を生み出すことが出来る。武装の巨大ハンマー・ケラウノスを使うと、さらに強力かつ広範囲に衝撃を這わせることが可能。
――使用スキル
・エアプレッシャー／空間を叩いて、強烈な空気砲を放つ。
・イラプションブレイク／陸地にケラウノスを打ち込み、地面に発生させた亀裂よりエネルギーを噴出させる。

――イプシロン
スキュラシリーズの五女。１０歳ほどの少女。オプションとしてデフォルメされた猫と鼠のイラストが描かれた灰色のパーカーを着ている。身長は１３０ｃｍほど。青色のセミロングヘアで額を大きく出している。姉妹の中で一番ちんまい。妹のゼータより小さいことで、姉妹内で特にイジられやすい。
保有スキルはマグネティックドミニオン。強力な磁力を操ることが出来る。有機物にも強力な磁気を付加させて、磁石化することが出来る。

――ゼータ
スキュラシリーズの六女。１４歳ほどの少女。オプションとしてクリーム色のカーディガンを着ている。ストレートの長い黒髪。身長は１５０ｃｍほど。本編にて最初の死亡者。
保有スキルはサウザンドブレス。微風から爆風まで、いろいろの風を発生させることが出来る。武装の２つの扇を使えば、さらに強力な風を起こせる。
――使用スキル
・オーバーエフ／風圧の強化。

・エアスライサー／真空の刃を放つ。

シャル
「救えなかったね、この娘たち・・・」

ルシル
「ああ。やったことは許されないが、そうだな、更生してくれたらまた別の人生を歩めたかも知れないな」

シャル
「・・・ぷふっ！　今じゃヴァルハラで着せ替え人形みたく弄ばれてるもんね！　あー可哀想♪」

ルシル
「どうせ後輩が出来たら、彼女たちも後輩たちに何か仕出かすだろう。エインヘリヤルになった者の通過儀礼だよ」

――Ｔｈｅ　ｓｔｒａｔｅｇｙ　ｏｒｄｅｒ　Ａｉｒｌｉｎｅｓ　ｆｏｒｔｒｅｓｓ　ａｉｒｃｒａｆｔ　ｃａｒｒｉｅｒ：Ａｎｄｒｅａｌｐｈｕｓ
戦略級航空要塞空母・試作１号機アンドレアルフス。管制機はアルファ。聖王のゆりかごの後方防衛の役割を担う、全長２ｋｍ、全幅４ｋｍのマンタ型の超巨大飛行物体。艦体下部には何十機という航空機を一度に離着陸させるためのハンガーであり滑走路でもある空間が設けられている。艦体上面には所狭しとエネルギー砲撃用の砲台が２００基と設置されている。
名の由来：悪魔学における悪魔の１体で、地獄の３０の軍団を率い

る序列６５番の大侯爵アンドレアルフス。

――Ｔｈｅ　ｔａｃｔｉｃｓ　ｏｒｄｅｒ　Ｒａｉｌｗａｙ　ａｒｔｉｌｌｅｒｙ　ｄｅｆｅｎｓｅ　Ａｒｍｉｎｇ　ｔｒａｉｎ

：Ｘ０１－　Ｋｅｎｔａｕｒｏｓ　：０１－　Ｋｅｒｂｅｒｏｓ

：０２－　Ｏｒｔｈｒｏｓ

戦術級列車砲防衛装甲列車。試験運用機のケンタウロス、完成形のケルベロスとオルトロスの計３基の稼働が確認されている。管制機はベータ。列車砲を牽引し、なおかつ防衛するための兵器で、先頭車両２両、研究所から転送されて来るミサイルの保管用コンテナ車両２両、計４両以外の屋上には砲台が設けられている。

名の由来：ギリシア神話に登場する半人半獣・ケンタウロス。ギリシア神話に登場する冥界の番犬・ケルベロス。ギリシア神話に登場する双頭の犬・オルトロス。

――Ｔｈｅ　ｔａｃｔｉｃｓ　ｏｒｄｅｒ　Ｔａｎｋ：Ｗｅｒｅｗｏｌｆ

戦術級戦車ワーウルフ。管制機はガンマ。グレムリン以上の陸戦戦力として、３ケタのワーウルフが戦場に投入された。

名の由来：東ヨーロッパを起源とされている狼男ワーウルフ。

――Ｔｈｅ　ｔａｃｔｉｃｓ　ｏｒｄｅｒ　Ａｒｍｏｒｅｄ　Ｃａｒ：Ｏｇｒｅ

戦術級装甲車両オーガ。管制機はガンマ。戦車ワーウルフの補助戦力を目的として投入された。

名の由来：多くの伝承や伝説などに登場する人型の怪物オーガ。

――Ｔｈｅ　ｓｅａｒｃｈ　ｔｙｐｅ　ｃｏｍｂａｔ　ｗｅａｐｏｎ：Ｇｒｅｍｌｉｎ
探索型戦闘兵器グレムリン。カプセルタイプのＩ型、戦闘機タイプのⅡ型、球体タイプのⅢ型の３種。完全自立型で、経験を積むことで後継機のＡＩが賢くなる。ガンマやルーテシアの魔法で有人操作モードにもなる。管理局ではガジェットドローンと称されている。名の由来：ヨーロッパの伝承などに登場する、機械の悪戯をする妖精のグレムリン。

――Ｌｉｖｉｎｇｄｅａｄ　Ａｒｍ　Ｓｏｌｄｉｅｒ
動く屍兵器。管理外世界の埋葬墓地から盗掘された比較的新しい死体をサイボーグへと改造した陸戦兵器。外装が硬いため防御力は高いが、一度どこかが崩れるとそこから腐りきった臓物や体液が流れ出し、途端に弱体化する。

――Ｔｈｅ　ｓｔｒａｔｅｇｙ　ｏｒｄｅｒ　ｗｅａｐｏｎ　Ｒａｉｌｗａｙ　ａｒｔｉｌｌｅｒｙ：Ｄｉａｂｏｌｕｓ
戦略級列車砲・試作１号機ディアボロス。超巨大なレールガン・ウォルカーヌスＩとⅡの２門を備えた列車砲。幅は４０ｍ、長さは２００ｍにも及ぶ。管制機はデルタ。名の由来：ギリシャ語で悪魔を意味する単語・ディアボロス。

――Ｓｕｐｅｒ－ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　ａｇｇｒｅｓｓｉｖｅ　Ｅｌｅｃｔｒｏｍａｇｎｅｔｉｃ　Ｌａｕｎｃｈｅｒ　ｆｏｒｔ：Ｖｕｌｃａｎｕｓ
超広域攻撃電磁投射砲砲台ウォルカーヌス１号・２号。ＩとⅡの２門が実戦稼働し、これまでにも小型のレールガン・ウォルカーヌス

・ミニも登場し、試験砲台として投入されていた。レールガンという魔力に依存しない科学による兵器なため、あらゆる物理法則に従わなければならないデメリットがある。しかし魔力を必要としないのもまたメリットであるおかげで、ＡＭＦや魔力素の無い領域での運用も可能。
名の由来：ローマ神話に登場する火の神ウォルカーヌス。

――グレンデル
レールガン・ウォルカーヌス用に製造された、小型ミサイルを１０発と内包する巨大なコンテナミサイルの一種。グレンデルと呼ばれるコンテナミサイルには、着弾寸前に炸裂して広範囲に鉄片を撒き散らす散弾ミサイルが１０発と内包されている。
名の由来：北欧・イギリスの叙事詩ベオウルフに登場する巨人の怪物グレンデル。

――ムオーデル
レールガン・ウォルカーヌス用に製造された、小型ミサイルを１０発と内包する巨大なコンテナミサイルの一種。ムオーデルと呼ばれるコンテナミサイルには、物理装甲・魔力装甲を貫通する特殊徹甲ミサイルが１０発と内包されている。
名の由来：オーストラリアに伝わる幽霊の軍勢ムオーデル。

――Ａｉｒｂｏｒｎｅ　Ｗａｒｎｉｎｇ　Ａｎｄ　Ｃｏｎｔｒｏｌ　Ｓｙｓｔｅｍ：Ｎａｂｅｒｉｕｓ
早期警戒管制機ナベリウス。管制機はイプシロン。全体カラーは青で、デフォルメされた猫と鼠のイラストが機体に描かれている。なだらかな機体形状に後進翼、Ｖ字状に開いた昇降舵を兼ねた尾翼、

エンジンは２基を備えている。コクピットはキャノピーではなく装甲に覆われている。後述の航空機５種を操作するための統合管制機体。管制機であるにも拘らず、両主翼下に砲門が２門、機体先端両側に機銃２挺を搭載し、空戦魔導師以上の機動力を以って交戦することが可能。

名の由来：悪魔学における悪魔の１体で、１９の軍団を指揮する序列２４番の勇猛なる侯爵ナベリウス。

――Ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ｃｏｍｂａｔ　Ａｉｒ　Ｖｅｈｉｃｌｅ：Ｐａｚｕｚｕ

無人航空機パズズ。ナベリウスの専用護衛機として開発、運用された無線運用戦闘機。先端が鋭利に尖っているミサイルのような形状にカナード翼と後進翼、主翼の真後ろに垂直尾翼２枚を付けた機体で、下部には砲塔１門が備え付けられている。機体にはナベリウスと同じデフォルメされた猫とネズミのイラストが描かれている。

名の由来：バビロニア神話に登場する風と熱風の魔神パズズ。

――Ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ｆｉｇｈｔｅｒ　ａｉｒｃｒａｆｔ：Ｓｉｍｕｒｇｈ

無人戦闘機シームルグ。双発エンジン・前翼カナード付き・外に向かって少し斜めにある２枚の垂直尾翼というデルタ翼機。

名の由来：イラン神話に登場する鳥シームルグ。

――Ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ａｔｔａｃｋｅｒ　ａｉｒｃｒａｆｔ：Ａｎｄｒａｓ

無人攻撃機アンドラス。カナード、可変後退翼、上下２枚ずつ計４枚の斜め尾翼から構成される。４枚の尾翼の内、上２枚は上半角の

付いた全遊動式水平尾翼であり、下２枚は可動部のない安定翼ベントラルフィンがある機体。
名の由来：悪魔学における悪魔の１体で、３０の軍団を指揮する序列６３番の大侯爵アンドラス。

――Ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ｓｕｐｐｏｒｔｅｒ　ａｉｒｃｒａｆｔ：Ｓｈａｘ
無人掩護機シャックス。カナード、前進翼・外に向かって斜めにある２枚の垂直尾翼・双発エンジンの機体。下記の輸送機を掩護を目的として製造された。
名の由来：悪魔学における悪魔の１体で、３０の軍団を率いる序列４４番の地獄の大侯爵シャックス。

――Ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ｃａｒｇｏ　ａｉｒｃｒａｆｔ：Ｍａｌｐｈａｓ
無人輸送機マルファス。長い胴体・後進翼・Ｔ字の垂直尾翼・エンジンは左右の主翼下に２基ずつの計４基の機体。格納庫内に転送装置が設けられている。ＬＡＳやグレムリンなどといった、小型兵器を前線に転移させるために製造された。
名の由来：悪魔学における悪魔の１体で、地獄の４０の軍団を率いる序列３９番の強大な大総裁マルファス。

――Ｔｈｅ　Ｅｌｅｃｔｒｏｍａｇｎｅｔｉｃ　ｓｉｇｎａｌ　ｓｙｓｔｅｍ　Ｍｅｔｅｏｒｉｔｅ　ｆａｌｌ　ｉｎｄｕｃｔｉｏｎ　ｓｔａｔｉｏｎ：Ａｇｒｅａｓ
電磁気信号式隕石落下誘導装置アグレアス。管制機はプライソンとレーゼフェア。大気圏外から地表へと落下する巨大特攻衛星。１本

５００ｍの隕石誘導ミサイル発射管４本が、数ｋｍという胴体の両端に十字架のように設置されている。胴体にはエネルギー放射砲台が所狭しと設けられており、大気圏内での全方位攻撃も可能だったが、一度も使用されることはなかった。
名の由来：悪魔学における悪魔の１体で、３１の軍団を指揮する序列２番の大公爵アグレアス。

――Ｔｈｅ　Ｅｌｅｃｔｒｏｍａｇｎｅｔｉｃ　ｓｉｇｎａｌ　ｓｙｓｔｅｍ　Ｍｅｔｅｏｒｉｔｅ　ｆａｌｌ　ｉｎｄｕｃｔｉｏｎ　ｍｉｓｓｉｌｅ：Ａｐｏｃａｌｙｐｓｅ
電磁気信号式隕石落下誘導ミサイル・アポカリプス。ミッドチルダという惑星の磁場を記録したミサイルを隕石に打ち込み、強力なブースターの推進力を以って隕石をミッドチルダへと誘導させ、落下させることが出来る。
名の由来：黙示を意味するギリシア語アポカリプス。

シャル
「一体どれだけの時間を費やしてきたのかな～。アンドレアルフスとアグレアスなんて１年や２年で造れるようなレベルじゃない兵器だしさ。開発費や資材だって馬鹿になんないでしょ」

ルシル
「ああ。最高評議会や一部の将校の協力だけでは絶対に無理だ。他の犯罪組織とも協力体制にあったらしいし、その辺りからも金や資材の流用があったのかも知れないな」

――シコラクス

サイボーグのみで構成された実行部隊。元管理局員のクイント・ナカジマをリーダーとし、プライソンによって生み出された人工生命体であるセッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、ディードで構成される。
名の由来：シェークスピアの『テンペスト』に登場する魔女シコラクス。

――クイント・ナカジマ
元ミッドチルダ地上本部・首都防衛隊所属の准陸尉。隊長ゼスト・グランガイツ率いるゼスト隊の一員として、プライソンの秘密研究所へ潜入。しかし迎撃戦力として立ちはだかったスキュラのアルファ、ベータ、デルタと交戦。部下は全員殺害され、同僚で友人のメガーヌと共に拉致される。後にＢＮＡＣによって全身サイボーグ化された。デバイスはリボルバーナックルの同型機のデリンジャーナックル、そしてローラーブーツ・ソニックセイバー。
――使用魔法
・キッカースコルピオ／ウイングロードを使ってのサソリ蹴り。
・レールスラッシャー／ウイングロードを使っての高速蹴りの総称。
・ストームファング／払い蹴りからの回し蹴り。
・ローールロンド／旋回からの遠心力いっぱいの後ろ回し蹴りｏｒ回し蹴り、追加で逆足のかかと落とし。
・ハウンドダッシャー／高速突進からのボディブロー。アッパーカット、ベリーローールからの打ち降ろし蹴りなどもある。
・ストライクイーグル／直射魔力砲撃。

――スキタリス
ロストロギア・レリックを埋め込まれた強化魔導師のみで構成され

た部隊。元管理局員のメガーヌ・アルピーノをリーダーとし、彼女の実の娘であるルーテシアとリヴィア、さらに融合騎アギトで構成されている。
名の由来：中世・中世以前のヨーロッパの動物寓話集などに登場する怪物スキタリス。

――メガーヌ・アルピーノ
元ミッドチルダ地上本部・首都防衛隊所属の准陸尉。隊長ゼスト・グランガイツ率いるゼスト隊の一員として、プライソンの秘密研究所へ潜入。しかし迎撃戦力として立ちはだかったスキュラのアルファ、ベータ、デルタと交戦。部下は全員殺害され、同僚で友人のクイントと共に拉致された。後にレリックウェポンへと改造され、S＋ランクの魔力を得ることになった。が、しかし失敗作となり、長時間の戦闘が出来なくなった。

――使用魔法
・エッケザックス（ドイツの英雄叙事詩に登場する剣）／直射砲撃。
・フラッターハフト・シュパッツ（移り気な雀）／誘導射撃魔法。
・モルゲンロートゲホイル（暁の咆哮）／閃光と爆音による昏倒攻撃。
・グリッツェンラヴィーネ（閃きの雪崩）／射撃弾幕。
・アドラーフリーゲン（飛翔する鷲）／純粋魔力弾。
・フォーゲルケーフィヒ（鳥籠）／魔力発射スフィア展開。
・シュヴァルムシュパッツェン（雀の群れ）／魔力弾の連射。
・シルト・ドゥルヒシーセン（盾を撃ち抜く）／シールド・バリア貫通弾。
・フランメラート（炎の車輪）／炎の車輪を発射する射撃魔法。
・フォイアフォーゲル・フルーク（火の鳥飛翔）／火炎弾連射。

・ドラッヘンゲブリュル（竜の咆哮）／炎熱砲撃。

――リヴィア・アルピーノ

メガーヌの双子の娘の1人。母メガーヌや姉ルーテシアと同様に、レリックをリンカーコアと融合されたレリックウェポンとして運用されていた。メガーヌやアギト、クイントらシコラクスとは違い、洗脳処置は受けていなかった。レリックウェポンとして失敗作で長時間の戦闘が出来ないメガーヌの延命処置を条件に、プライソン一派に従っていた。

先の次元世界でのレヴィヤタン――レヴィ・アルピーノの生まれ変わり。そのおかげか特異スキル・位相空間転移能力を生まれ持って保有している。

――使用魔法

・ケレリタース・ルーキス（光速）／位相空間転移スキル。

モード・バスター／射砲撃戦用バリアジャケット。

・ハーツイーズバレット／射撃魔法。

・ハーツイーズストライク／直射砲。

・ハーツイーズドライヴ／炸裂砲。

・ハーツイーズドライヴ・エクステンド／集束砲。

・ハーツイーズストライフ／4連砲撃。

・ハーツイーズクラッカー／炸裂弾。

モード・コンバット／近接格闘用バリアジャケット。

・マナクル／魔法陣より帯状のバインドを複数伸ばして対象を拘束。

・マナクル・エクステンド／上記の広範囲版。

・ハーツイーズストライク／直射砲。

・ボーデンドンナー（大地の雷撃）／陸戦限定の高速移動。

・ヒンメルブリッツ（天空の電撃）／空戦限定の高速移動。

・トイフェルファオスト（悪魔の拳）／魔力付加された拳の打撃。
・トイフェルフース（悪魔の足）／魔力付加された蹴り技。
・ヴィルトハルモニー（乱暴なハーモニー）／掌底２連撃。
・ラケーテンファング（推進牙）／高速移動からの拳打。
・ラケーテンホルン（推進角）高速移動からの飛び蹴り。
・ガイストロースラケーテ（汎用なロケット）／高速移動での突進攻撃。
・アインファッハクリンゲ（素朴な刃）／手刀攻撃。
・ドラッフェンナーゲル（竜の爪）／防御魔法を切り裂く効果を付加した魔力爪による斬撃。

ルシル
「リヴィアの事にも驚きはしたが、何よりクイントさんが亡くなっておらず、存命しているということに感謝したよ」

シャル
「まぁサイボーグ、先の次元世界で言う戦闘機人になっちゃったわけだけど」

ルシル
「それでも生きてくれている。それだけで・・・十分だよ」

――レーゼフェア・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編にて登場した、完全自律稼働人型魔道兵器、"戦天使ヴァルキリー"の１体。第一世代・ブリュンヒルデのシリアルナンバー０５。『闇絶の拳』の二つ名を持つ。対闇黒系魔術師用の実験機として開発された。

性格は能天気で、姉としての自覚はあるが姉らしい振る舞いはしない所為で、よく妹たちと馬鹿をやり、真面目な妹たちからは叱られてばかりいる。しかし反省はしない。自分が好きな事は好きなようにやる。それが座右の銘だからだ。

――使用魔術

真技・宵闇に咆哮する影獣／モンストル・ソワール（宵闇の怪物）

闇黒系魔力と影によって生み出される3つ首の獣ケルベロスを装備する真技。強大な神秘によって防御力は尋常ではないが、閃光系魔力には一際弱い。

・影分身／トリニテ・アヴェーヌマン（降臨する三位一体）

影による分身体を作り出す。

・昏き淵より手招く罪深き聖域／サンクテュエール・コンフェッシオン（懺悔の聖域）

屋内限定で発動できる術式。室内いっぱいに影を満たし、その影より無数の影の触手を生やす。

・血肉を求む伝道者の凶つ剣／ミシオネール・クリュエル（残忍な伝道師）

影や闇黒系魔力を刃として突き出させる魔術。

・闇色に染めたる影国／ブロキュス・ブルビエガレ（迷える羊の封鎖）

唯一の儀式術式。屋内限定で発動できる。空間内を全て操作できる影で覆うというもの。高ランクの閃光系魔術師以外にとっては、この術式発動が死に直結した。

呪文は、果て無き闇あるところに限り無き光あり。二天の狭間で生まれるは永劫の影。我は影の王、闇の支配者、光の仇敵。世は何時しか闇に堕ち影に覆われ光は露と消ゆ。

・黒く染めたる凶珠／オビュ・シエージュ（砲弾の包囲攻撃）

闇黒の球体状の魔力弾を任意数発射する。
・闇の女王の鉄拳／サリュ・マンソンジュ（救済の嘘）
拳に付加した闇黒系魔力を、直径１６０ｃｍほどの大きさを誇る影の拳として射出する。
・黒き影拳乱舞／ポワン・タンペット（点の嵐）
上記の影の拳を連射する術式。
・凶つ連道蹴拳／アンタンス・ノワール（黒き激烈）
闇黒系魔力を付加した拳打と蹴打の連撃。
・黒き閃光放つ凶拳／ソワール・エロジオン（侵食する宵）
闇黒系魔力を球状に展開し、その魔力球を殴りつけることで発射できる砲撃。
・影渡り／シュルプリーズ（奇襲）
影を介しての転移術式。
・罪人捕えて罰せしは闇棺／エロジオン・ノワール（黒の侵蝕）
対象者の影を利用して、対象者を影の棺に閉じ込める。影を爆破して殺傷することも可能。
・地断つ黒光の鎧壁／ミュール・デカローグ（十戒の壁）
闇黒系の魔力と影による多層魔力障壁。

シャル
「とうとうレーゼフェアも逝っちゃったね」

ルシル
「ああ。しかもとんでもない真実まで残して逝ったよ。エグリゴリは記憶を取り戻している。俺に破壊されるためにわざと敵対し、俺が戦いやすいように演技をしていた。どれだけあの子たちを傷つけていたか・・・。これまで何百、何千と俺自身の愚かっぷりを呪っ

たが、この真実ほどの衝撃は生まれて初めてだったよ」

シャル
「そうだね・・・。でも、それでも救うんでしょ、あの子たちを。それがお父さんの務めだもんね・・・？」

ルシル
「・・・もちろん。自害も出来ず、アンスールの俺と交戦しなければならないという、クソみたいなプログラムを打ち込まれてしまったあの子たちを・・・これ以上放っては置けない。より強く決意したよ、あの子たちを救うとな」

シャル
「そっか、うん、そうだね。んじゃ、今回はここまで！」

ルシル
「そう言えば、俺と君の魔術紹介はどうするんだ？　前に全部出し切るページを作るという話だったが・・・」

シャル
「それはまた別の機会に！　とのことで、次話からエピソードVを始めるよ～♪」

Ｅｐｉｃａｌ新たなる始まり～Ｆｒｅｓｈ　ｓｔａｒｔ～

†††Ｓｉｄｅアギト†††

プライソン戦役って呼ばれた未曾有の大事件から早２年。んで、あたしアギトが八神家に来てから１年。あたしも今の生活にはもちろん慣れて、あたしを引き取ってくれた八神家の一員として胸を張れるレベルにはなってると思う。

「ふわぁ～」

ベッドの上で目を覚ましたあたしは上半身だけを起こして、「くぅ～」背筋を伸ばす。隣のベッドを見て、「もう起きてんのか」って漏らした通り、すでに誰も居なかった。時計を確認すれば、午前６時２０分だ。あの早起きなら、もう起きててもおかしくないはずだ。あたしもベッドから降りるとパジャマを脱いで、Ｔシャツにキュロットスカートっつう私服をあたし専用のクローゼットから取り出して着替える。

「髪はまた後でいいっか～」

昔から変わらず髪型はツインテールにしてる。自分ひとりでも結えるけどさ。あたしだけがずっと何百年と洗脳されてたんだ。かつての家族に甘えたいって思いがあっても良いと思う。だから結ってもらいたいんだって話さ。

（そりゃまぁ、もう2年も一緒に同じ時間を、同じ家で過ごしてるんだから、甘えなくてもいいんじゃね？ってことになるかもだけどさ・・・）

あたしからして見れば2年も・・・じゃなくて3年しか、なんだよな。だから数百年分の甘えたいなぁ～って・・・。変かな。とにかく、脱いだパジャマを持って部屋を出て、八神家メンバーのそれぞれの私室があるここ2階から1階へと降りる。

「ん。おはよう、シャマル！」

「あら。アギトちゃん。おはよう♪　パジャマ、洗濯かごに入れておいてね～」

エプロン姿のシャマルと朝の挨拶を交わす。シャマルは治癒や補助を担当する湖の騎士だ。今は本局の医務局に勤める医務官で、班を任せてもらえる主任の役職に就いてる。そんなシャマルが今週の洗濯当番だ。だから「うんっ」頷き返して、洗濯機のある脱衣所へ向かう。

「あ、ザフィーラ！　おはよう！」

「アギトか。ああ、おはよう」

筋肉ムキムキな人型形態のザフィーラがお風呂掃除してた。ザフィーラは八神家で唯一管理局員じゃない。でもシャマルの護衛としてよく付いて回ってたみたい。そんなザフィーラがお風呂掃除を基本

的に担当してる。今はその光景にも慣れてたけどさ。出所してこの家に来て、シグナムと一緒に寝て、朝起きて、ザフィーラがお風呂掃除を始めた時の衝撃と言ったら・・・。

（なんかそんなイメージが無かったんだよな～）

洗濯かごにパジャマを入れた後は、洗面台で洗顔と歯磨き。シャカシャカと磨いてると「おーっす」背後から挨拶を掛けられた。鏡に映るのは「おはよう、ヴィータ」だった。グラオベン・オルデンの切り込み隊長だったけど、今じゃ管理局の戦技教導隊の教導官だ。まぁ昔からアムルの人たちに戦い方を教えてたし。似合ってると言えば似合ってるかもな～。そんなヴィータも洗濯かごにパジャマを入れて、あたしの隣で歯磨きを始めた。

「ガラガラ～・・・ペッ。んじゃお先～」

「おー」

脱衣所から出て、お腹が空きそうな良い匂いが漂って来るリビングに入る。リビングと繋がってるダイニングの奥、キッチンを見る。

「お。おはようや、アギト。朝ご飯、もうちょっとで出来るから待っててな～♪」

「おはよう！　ありがとう、はやて！」

局のタイトスカートにブラウス、エプロン姿な八神はやて。八神家

のお母さん、歩くロストロギア、チーム海鳴の出世頭なんて呼ばれてる。んで、あたしの保護責任者でもある。そしてかつてのあたし達のマイスター、オーディンですらも解くことが出来なかった"闇の書"の呪いを解いて、本当の名前の"夜天の魔導書"を取り戻させた功労者の1人。海上隔離施設に居た頃から、あたしに良くしてくれてた。

「おはよう、アギト」

「うん、おはよう、アインス」

リインフォース・アインス。みんなからはアインスって呼ばれてる。マイスター・オーディンが名付けたシュリエルリートは、自分と同じように、そして自分以上にシグナム達守護騎士を大事にしてくれる主に出会った時までの時限ネームだったって、施設に居た頃に教えてもらった。

（はやてが付けたのが、リインフォース、だったわけだ）

災厄撥ねし魂・導き果てぬ絆・希望の守り手、シュリエルリート。そして今は強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース。リインフォース・アインスだ。

「料理をテーブルに運ぶのを手伝ってくれ」

「おう！」

アインスもエプロンを着けてて、はやてと一緒に作った朝ご飯のお皿をダイニングテーブルに運んでる。あたしもアインスのお願いを聞いて、キッチンカウンターからテーブルへと運ぶのを手伝う。

「今日も美味しそう♪」

はやてが作ってくれたのは和食っていう、はやての故郷の料理だ。白いご飯にお味噌汁、卵焼き、ブリの照り焼き、小松菜のお浸し。マイスター・オーディンもよく作ってくれてた料理だ。

「パンでもいいけど、やっぱ朝飯ははやての和食が一番だな♪」

「嬉しいことを言うてくれるな～、ヴィータ♪」

ヴィータとシャマルとザフィーラもリビングにやって来た。

「アギト。ご飯が出来たよ～って、シグナムを呼んでくれるか？」

「うんっ！」

外へと直接出られるリビングの掃き出し窓を開けて、すぐ側の砂浜で木刀を振ってる「シグナム～！」の名前を呼んだ。八神邸の目の前にはプライベートビーチがあって、夏は家族だけ、チーム海鳴って言う幼馴染だけで構成された友達を呼んで、楽しい海水浴が出来る。

「アギトか。おはよう」

「うん！　朝ご飯が出来た～！」

「判った、すぐに戻るとお伝えしてくれ」

シグナムと手を振り合って、あたしは「すぐ来るって～」って伝えながら窓を閉めてテーブルに向かう。そんな中、「おはよう！」元気いっぱいな挨拶の声がリビングダイニングに響き渡った。みんなの視線が声の主の方に向いた。銀色の髪、紅と蒼の光彩異色。Ｙシャツ、短パン、ベストって格好の男の子。

「おはようや、フォルセティ！」

はやてに続いてあたし達も「おはよう！」って挨拶を返した。八神フォルセティ。マイスターの遺伝子を使って生み出されたクローン。クローンにしてはあまりにも似過ぎてるんだよな～。そんなフォルセティをはやてが養子に迎え入れてるから、はやての息子になるわけだ。

「うん、お母さん♪　シグナムお姉ちゃん、ヴィータお姉ちゃん、シャマルお姉ちゃん、ザフィーラ、アギトお姉ちゃん♪」

「ささ。フォルセティも席に着くですよ♪」

「うんっ、リインお姉ちゃん♪」

フォルセティの側に居るのはリイン、リインフォース・ツヴァイ。

アインスとそっくりの外見だけど、性格や目つき、目の色、そして何より体の大きさやスタイルが違う。リインは、はやてとアインスのリンカーコアの一部を融合させた、特別なリンカーコアを核として生み出された融合騎だ。一応はあたしが融合騎としての先輩であり姉でもあるけど、どっちが上か下かは決めてない。

「お待たせしました」

「お疲れさん♪　よし、みんな席に着いたな。それじゃ手を合わせて・・・いただきます！」

トレーニングウェア姿のシグナムも合流して、はやてに続いて手を合わせて「いただきます！」をする。箸の扱いもベルカ時代の時に教わったし、この家に来てからも毎日のように使ってるから、我ながら使い方は上手だと思う。

「今日はシャマル、休みやったっけ？」

「あ、はい。そうですよ、はやてちゃん」

「ちょう重いんやけど、お米が足りひんくなってきたから買って来てもらえるか？」

「判りました。足りない食材や日用品もついでに買っておきますね。ザフィーラ、手伝ってくれるかしら？」

「承知した」

「おおきにな。シグナムとアギトは、首都防衛隊での仕事やね」

「うんっ」「はい」

あたしも今や管理局員。まぁまだまだ新米の三等空士だけどさ。それでもちゃんとあたしのロードであるシグナムの補佐として頑張ってる・・・と思う。それから談笑しながら朝ご飯を食べ終えて、シグナムがお皿を洗って、あたしが布巾で皿の水気を拭い去って食器立てに並べてく。

「「ただいま～！」」

そんな頃、エントランスから2つの挨拶が聞こえてきた。リビングでテレビを観てたフォルセティが満面の笑顔を浮かべてソファから立ち上がって、ドタドタと慌ただしく階段を駆け下りて来る音が聞こえてきた。

「おかえりなさい、お父さん、アイリお姉ちゃん♪」

「ルシル君、アイリ、おかえり！」

声からして階段を下りて来たのははやてで、フォルセティと一緒にアイリとルシルを出迎えた。リビングに入って来たルシル達にあたし達も「おかえり！」って挨拶をした。帰って来た内1人はマイスター・オーディンやフォルセティと同じ顔のルシル、ルシリオン・セインテスト。着てる局の制服はワインレッド色で、本局・支局合

わせて１８人しかいない調査官のものだ。マイスターもその一員だったセインテスト家の直系で最後の１人。マイスターと同じ、"エグリゴリ"の救済を目的としてる。

（バンヘルドを相手に全滅食らったあたし達だったけど、ルシルは単独でグランフェリア、シュヴァリエル、レーゼフェアと、３体のエグリゴリをすでに救ってるって話。明らかにマイスターより強い）

残るのは、あたしが洗脳されてた間に一緒に行動してた（まったく憶えてないけど・・・）って言うフィヨルツェン。本局の総務部の総部長リアンシェルト、そして"エグリゴリ"のリーダー・ガーデンベルグの３体だ。

「ふわぁ。ねむねむだよ～」

ルシルと一緒に帰って来たのは、次元航行部の青制服を着たアイリ。眠たそうに大きなあくびをしてる。アイリは、あたしの妹にあたる氷結の融合騎だ。ルシルもそうだけど八神姓を名乗ってなくて、昔と変わらずセインテスト姓を名乗ってる。あたしもマイスターから貰ったセインテスト姓を名乗るかどうか迷ったけど、今のマイスターはオーディンじゃなくてはやてだし、ロードのシグナムも八神姓だし、だから八神アギトになった。

（にしても、本当にデカイよな～、アイリの奴）

人間サイズに変身する魔法、ヴァクストゥームフォルム。アレ、元はあたしがアイリに教えたものなんだけどさ、１０代前半くらいの

背丈しかないあたしとは違って、アイリの背格好は大人なんだよな。変身魔法を発動して大きな体にするには、それなりの魔力やリソースが必要になってくる。以前のあたしやアイリには大人に変身・維持するだけの魔力も無ければ、変身する必要も無いから、こんな子供の姿なわけだけど・・・。

（アイリは本当にルシルの事が好きなんだな。ルシルの身長を追い越さないように設定して変身してんだから）

妹の恋路を応援したいけど、はやてもルシルの事が好きだしな～。しかも人同士だし。融合騎は人のようだけど人じゃない。寿命で死ぬことも無いし、子供を産むことも出来ない。アイリには悪いけど、あたしははやてを応援しようと思ってる。

「夜勤お疲れ様です、ルシル君、アイリ。朝ご飯はどうします？」

「ありがとう、リイン。食事は次元港で済ませてきたよ」

「シャワーだけ浴びて、すぐに寝るよ～」

「お疲れ様、お父さん、アイリお姉ちゃん」

「ありがとう」

「ありがと～♪」

アイリがそんなことを言いながらフォルセティにおぶさるように抱

き付しめて、プニプニほっぺに頬ずり。そんなフォルセティにルシルが「出かける前に顔を見れて良かったよ」って頭を撫でた。

「うん。僕もお父さんやアイリお姉ちゃんと挨拶できて良かった♪」

「ああ。じゃあお父さん達は休むから。また帰って来てからな」

「うんっ！」

ルシルがリビングを出て行こうとしたら、「ルシル。一緒に入ろう」ってアイリが付いて行こうとした。そんなアイリを「ちょう待ち」ってはやてが止めた。はやてとアイリの身長はほぼ同じで、目線が合ってる2人の間になんか火花が散るのが幻視できる。

「な～に、はやて？　アイリ、疲れてるんだよね～」

「それとルシル君と一緒にお風呂に入ることとは関係あらへんと思うんやけど？」

「2人とも夜勤で疲れてすぐに眠りたい。けどその前にシャワーなりお風呂なり入りたい。別れて入ると時間が掛かる。なら一緒に入った方がお得♪」

「いややわ～。そこはちょうアイリが耐えて――」

「うわ、それは酷いよ、はやて！」

わいわい言い合ってるはやてとアイリを背に、ルシルは「先に入ってこい、アイリ」って苦笑しながら冷蔵庫へ向かって、ミルクをコップに注いで飲み干した。うん、こうなることは割と判ってた。だからアイリも「ざ～んね～ん♪　じゃあお先に頂きま～す　」そんな暢気な声を出してリビングから出て行った。

「フォルセティ。ヴィヴィオの家まで送って行くから用意してくれ」

「は－い！　あ、アインスお姉ちゃん！　お父さんのバイクで行きたい！」

ビシッと挙手したフォルセティ。アインスは嘱託魔導騎士にして融合騎として管理局に登録してるから基本的に家に居て、当番と一緒に家事全般を担当してくれてる。朝の仕事はフォルセティの送り迎えだ。

「ああ、待ってくれ。ルシル。お前のマクティーラを借りても良いだろうか？」

「いいぞ。キーは壁掛けに掛かっているから持って行ってくれ」

「判った。では皆、行ってくる」

「いってきま～す！」

アインスとフォルセティがエントランスに向かうのに、後片付けの手を一旦休めてあたし達も続く。ザンクト・ヒルデ魔法学院の指定

の鞄を背負ったフォルセティがシューズを履き終えた後、「お母さん。いってきます！」ってから体を屈めたはやての頬にキスした。今度ははやてが「ん。いってらっしゃい！」ってフォルセティの頬にキスした。

「え？　もう行くの！？　ちょっ、もうちょっと待ってね！」

バタバタと脱衣所の方から慌ただしい音と声が聞こえてきたかと思えば、「アイリも見送りする～！」って水色のブラとパンツの下着姿で駆けて来た。シャマルが「風邪ひいちゃうわよ？」って呆れた。

「温かいから大丈夫！　フォルセティ、アイリにもチューちょうだい♪」

「あ、うん。アイリお姉ちゃん、いってきます！」

「んっ。行ってらっしゃい、フォルセティ♪」

アイリもフォルセティの頬にキスのお返し。大体これが朝の日常風景だ。ルシルのバイク（車種はリバーストライクっていうらしい）・"マクティーラ"にアインスが跨って、サイドカーにフォルセティが乗り込む。

「ではいってきます！」

「いってきま～す！」

庭先でアインスとフォルセティに向かって手を振って見送ったあたし達も、「そろそろ出勤の準備しないと」ってことで、「あ、シグナム。髪結んで～」ってお願いしながら家に戻って身支度を始めた。

†††Ｓｉｄｅアギト⇒アインス†††

フォルセティを、幼馴染であるヴィヴィオの元へ送り届けるため私は今、ルシルの愛車・リバーストライク（車名はマクティーラという）に乗り、ミッドチルダを縦断するレールウェイのステーションへと向かう。

「なのは。これからレールウェイステーションへ向かう。そちらのステーションに８時１０分着のレールウェイに乗るつもりだ」

『いつも通りのですね。判りました、よろしくお願いしま～す♪』

なのはもまた大きく育ったものだ。私が一度天に召されてから復活するまでの１０年間、私が宿っていた指環からずっと主はやて達やなのは達を見守ってきたから、それほど驚くことはないのだろうが。なのはとの通信を切り、渋滞に巻き込まれることもなくステーションに到着。"マクティーラ"を駐車場に停車させて、「危ないから手を」とフォルセティと手を繋ぐ。

「うんっ！」

それからステーション構内に入り、年間パスを使って改札を通過。フォルセティが「こっち～♪」と私の手を引いて先導してくれる。

ルシルに似て聡い子だ。これまでの道中も一度で全て記憶した。そしてホームへと上がって、目的地である北部のザンクト・オルフェン内にあるステーションの1つ手前のステーション往きのレールウェイ乗り場へ。

「この車両だよね、アインスお姉ちゃん！」

「ああ。そうだ。発車時刻までそうはない。もう乗っておこう」

特別急行車を選んで先頭車両に乗り込む。クロスシート仕様であるため、2人掛けの座席に座りフォルセティと談笑していると出発ベルが鳴り、ステーションよりレールウェイが発つ。

私が再びこの現世に生きることを許されるようになって早2年。私をこうして蘇らせてくれたルシルには、感謝しても感謝しきれない程の恩が出来た。しかし、それと同等に悲しみを背負ってしまっている私が居る。ルシルの"エインヘリヤル"として登録されたことで、私はルシルが主はやて達に隠している真実を知った。

（再誕戦争。アンスール。神器王。ヴァルキリー。エグリゴリ。テスタメント。かつての主であるオーディンとルシルが同一人物・・・）

そう。私たちは何1つとしてルシルの事を知っていなかったのだ。彼を1人の男性として愛している主はやてにも、家族として想い慕っているシグナムら家族にも、親友として仲の良いなのはら幼馴染にも、本当は話してしまいたい。聞いたところでなんだ、と思われるかも知れないが、ルシルは主はやて達に嘘を吐き、騙しているこ

とに心を痛めている。それを当然の罰だとして己に課している。

（いつか自分を追い詰め過ぎて壊れてしまわないかが心配なのだ）

少しでもルシルの心の負担を軽くしてやりたい。そして手伝えることがあれば全力で力になりたい。彼の真実を知っているのは私とアイリ、そしてシャルの前世の人格・シャルロッテ・フライハイトのみ。あと数人、先の次元世界と呼ばれるパラレルワールドからの生まれ変わりがいるわけだが、記憶が無い以上は期待は出来ないだろう。

（だが皆には一言も伝えることは出来ない。そういう契約だからだ・・・）

今の私は、指輪に宿っていた私の魂、"英雄の居館ヴァルハラ"にあった"エインヘリヤル"としてのかつての体、そして先の次元世界での私――リインフォース・リエイスの体の3つから成り立つ。先の次元世界でも、私はルシルの手によって蘇ることが出来たのだ。そして新たに主はやてより、リエイス、という名を授かった。そんな彼女とも私は融合している。そしてそれが、今の私の戦闘力・空戦ＳＳＳに直結しているのだ。・・・。

（ルシルは、私をエインヘリヤルから解放し、この現実の世界に生きる独立存在として固定する条件として、真実を他者に伝えてはならない、行動を妨害してはならない、という制限を課してきた）

これによって私は、ルシルが今後執る行動の意味を察しようとも、

主はやて達には何も言えないのだ。アイリはルシルを第一として考えているため、万が一にもルシルが主はやて達にとって不利益な行動を執ったとしても、最期の最期まで付いて行くだろう。そんな日が来ないことを祈るばかりだ。

「アインスお姉ちゃん・・・？」

「ん？　どうしたフォルセティ」

「なんか悲しそうだったから・・・」

フォルセティが私を心配してくれた。私はあの子の頭を撫でつつ「ありがとう。大丈夫だ」と礼を述べた。オリジナルであるルシルと同様にとても優しい子だ。

「さぁ。もうすぐ着くぞ」

「うんっ！」

窓の外の景色が勢いよく流れて行く様を、窓側に座るフォルセティがうきうきしながら眺めるのを微笑ましく見守る。いくつかのステーションを通過して、高町邸最寄りのステーションに到着。ホームにて停車を待つ客の中に「ヴィヴィオ♪」と、彼女の母であるなのはが居た。２人も私たちに気付き、手を振り返した。車両が停車し、客が続々と乗り込んで来る中、「おはよ～♪」なのはとヴィヴィオが私たちの座席へとやって来た。

「おはよう、ヴィヴィオ、なのはさん♪」

「ああ、おはよう」

1つ前の2人掛け座席を半回転させ、2つの座席を向かい合わせにする。そうすることで私たちは顔を合わせてお喋りが出来るというものだ。

「ねえ、フォルセティ。宿題やってきた？」

「うん、もちろん。答え合わせする？」

「それはコロナと一緒にやろう！」

「あ、そっか。うん、そうしよう！」

フォルセティとヴィヴィオも、すっかり学生生活を満喫している。夕食時にも学校で何があったか、と嬉しそうに話してくれているからな。その様子だけでどれだけ楽しいのか察することが出来る。

「なのは。今日は休みなのか？」

「あ、はい。アインスさん、何か用事があればフォルセティを預かりますけど・・・？」

「いや、大丈夫だよ。今日はシャマルも休みだからね」

嘱託とはいえ管理局員である私も、仕事に出なければならないことが少なからずある。その際は八神家の誰か1人が休みを取得するようにしてはいる。が、それが叶わない日はなのはにフォルセティを預けることもあるのだ。
それから目的のステーションに到着したことで一旦降車して別のホームへと移動。次に乗車するのはザンクト・オルフェンの南部ウィンザイン、その南区内にあるヴェラーステーションへと向かう車両だ。車内では学院の制服を着た生徒たちの姿が目立つ。フォルセティとヴィヴィオは学院初等部では有名人のようで、「ごきげんよう！」と他の初等部生徒と挨拶を交わす。

「お友達が居るならお話しして来てもいいんだよ？」

「フォルセティも行って来たらどうだ？」

なのはと2人でそう提案するがあの子たちは首を横に振って、ヴィヴィオは「今はママ達と一緒に居る～♪」と笑い、フォルセティは「僕もアインスお姉ちゃん達と話す～！」と笑った。そんな2人に私となのはも笑顔になった。

「「と～ちゃ～く！」」

そうしてヴェラーステーションのホームに降り立った私たちの耳に、「ヴィヴィオ～、フォルセティ～！」2人の名を呼ぶ可愛らしい声が聞こえた。

「「コロナ！」」

大手を振って駆け寄って来た1人の少女。名はコロナ・ティミル。フォルセティとヴィヴィオのクラスメイトで友人だ。

「あ、おはようございます！」

「うん。おはよう、コロナ♪」

「おはよう」

お辞儀をして挨拶してくれる、本当に礼儀正しい子だ。私となのははここまでだ。ここからあとは他の友人たちと共に学院まで向かうし、教会のシスター達が学院までの道の要所要所で見てくれているからな。何も不安な事は無い。

「じゃあヴィヴィオ。ママはここまでだから」

「私もだ、フォルセティ。ヴィヴィオとコロナが一緒ならば寂しくはないだろう？」

「「うんっ！　いってきます！」」

「「いってらっしゃい！」」

フォルセティとヴィヴィオとコロナが談笑しながら去っていく姿を、私となのはは後ろ姿が見えなくなるまで見届けた。

Ｅｐｉｃａ２－Ａ特殊機動戦闘騎隊～Ｔｈｅ　０　ｔｈ　Ｅｘｔｒａ　Ｆｏｒｃｅ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

目の前に広がる海から心地の良い潮風が吹いて来る。こういう日は臨海公園でピクニックでもやりたいな～。とは言え、今日はお仕事をするためにここ第５２管理世界アンバーまでやって来たわけだ。

「――んで。一体どこの馬鹿が、軌道エレベータを占拠したって？」

陸地から沖へ向かって約３ｋｍっていう距離に建造された人工島パラディソから大気圏外まで伸びた超高層塔、軌道エレベータ・イーシャを眺める。３ｋｍ離れたところでも見失うのが難しいほどの巨体を誇るエレベータは今、とあるおバカさん達の手によって占拠されてる最中なのよね。

「具体的な要求はされてはいないとのことだ。しかし見て判る通り、プライソン一派に協力していた組織の１つのようだ。人工島パラディソの周囲にアレが見えるだろう？」

わたしに答えてくれたのはルシル。プライソン戦役の頃は、はやての部隊に非戦闘員の特務調査官として居たけど、現在はわたしの部隊・特殊機動戦闘騎隊の戦闘行為可能な副官として、わたしの隣に居てくれる。そんなルシルが展開したモニターに表示されたのは、人工島の周囲に配置されてる「軍艦・・・」が１隻。

「アレの攻略が楽になるヒントか何か無いかと調べてみると、第97管理外世界――地球の過去の大戦時に投入されていた軍艦などと類似しているのに気付いた。大日本帝国・天城型巡洋戦艦。オリジナルに比べると、プライソンの遺産のその攻防力は桁違いだろう」

ルシルが新しく展開したモニター1つには、そのオリジナルの艦艇画像が表示された。細々としたところは結構差異があるけど、大まかな部分はそっくりだ。それを聞いたセレスが「それでも私に海上兵器なんて関係ないよ♪」って胸を張った。

「私のような氷結系魔法の使い手にとって兵器群、特に海上戦力ほどやり易いものはないし～♪」

実際にわたし達は、特騎隊結成から今日までの1年半、請け負った任務の大半はプライソン戦役に投入されたような巨大兵器の攻略ばかり。まぁ適当に魔力やスキル全開で事に当たって殲滅する～みたいな感じで楽に済むからいいけど。

「軍艦制圧はさほど問題じゃないのは判り切ってたけど・・・。連中がプライソンの遺産を手にしているということは、手に出来る間柄だったことになるわけよね・・・？」

「ルミナの言う通りだな。軍艦などという巨大兵器を保有しているとなると、かなり親密だったと思われるな」

「ひょっとしたら、スキュラ達を殺害した暗殺部隊も出て来るかも

・・・」

「じゃあまずは、軍艦から潰してく？　私の召喚獣で一気に決めても良いけど？」

ルミナ、ルシル、セレス、クラリスと思い思いの言葉を発してく。わたしが設立した部隊・特殊機動戦闘騎隊の戦闘組はみんなベルカ式の騎士だ。そして今ここに居るのは少数精鋭の前線組で、全員がS＋以上の戦闘のプロだ。部隊長なわたしも前線で戦っちゃうのだ～。

（ホントはトリシュやアンジェ、セレス（フィレス）の姉も入れたかったけど、あの2人は局員じゃないからさ～。嘱託でもいいから局入りして～、ってお願いしても即却下だったし。フィレスもフィレスで管理局を辞めて騎士団1本に絞ったし）

まぁそんな略して特騎隊と呼ばれるわたしの部隊は、並の部隊では対処できないレベルのテロや戦乱の鎮圧などを担当する本局・脅威対策室直属の特務機動隊で、編成番号は第零、第零特務機動隊を頂いてる。有事が起こって対策室から召集が掛かれば即座に任務に就く。で、専用の対策部隊が設立されるまでわたし達が事に当たるわけ。まぁほとんどわたしの隊だけで片付くけどさ～。

「（わたしが造っておいてなんだけど、反則級の戦闘集団なんだよね～）・・・さて、どうしたものか・・・」

「可能であれば、立て篭もり犯が反撃に出られない程の電撃作戦で

行くべきだ」

そう言ったルシルが展開したモニターに表示されたのは、宇宙から見た美しい青の星アンバー。そんなアンバーを1周する静止軌道上にはオービタルリング・アーカーシャが在って、そこから地上とを繋ぐ軌道エレベータのアヒムサー、イーシャ、ヴェーダ、エーヴァ、オーム、カルマ、キラナ、グル、ケーヴァラ、コーシャ、の計１０基がある。

「管理世界入りするまでは・・・というよりは今現在も、アンバーは付近の衛星から資源採掘を行っている。占拠している連中は局が攻勢に出れば、目の前に在るイーシャを破壊すると脅してきているわけだ」

モニターに映る軌道エレベータが崩壊する想定映像が流れて、破片が広範囲に亘って落下する映像に「うわ・・・」って思わず引いた。当然オービタルリングにも少なからず影響が出るみたい。

「破片くらいならば俺たちが対処すれば、地上に1つたりとも落とさない自信も確信もある。が・・・」

「崩壊上等で攻め込んで軌道エレベータ1基をダメにするのはさすがにね～」

「再建造の時間、費用諸々。それを考えれば、イーシャに被害を出さずにテロ犯を全員とっ捕まえるのが一番か～。・・・こちらナイト1・イリス。シャーリーン。イーシャ内の状況、もうそろそろ探

ることが出来た？」

となれば、こちらもいろいろと準備をしないといけないな。そういうわけで、行動開始前に我が特騎隊の母艦・ＬＳ級艦船シャーリーンのブリッジへと通信を繋げる。

『はい、フライハイト部隊長。軌道エレベータ・イーシャ及びオービタルリング・アーカーシャ運営局の協力の元、施設内の無事な監視カメラより現場のリアルタイムを入手できました。映像、そちらに送ります』

ブリッジに控えてるスタッフから送られてきたエレベータ内の映像。エレベータは全１００階層とあって、居住区や研究区、開発区、農作業区などなどがあるみたい。その中を走るリニアレールが１２便とあり、各階層で停まる仕組みになってるわけだ。

「確認できるだけで１９人か～・・・」

一般に出回ってる杖型から、ちょっぴり高価な銃火器型のストレージデバイスを所有してる男連中。エレベータ・イーシャの管理を行う施設関係者１０人を人質にとって、管理室に立て籠もる５人。研究区に２人。オービタルリングとエレベータを隔てる隔壁の前に３人。エレベータの居住区で住民を人質に取ってる５人。エレベータの基台――第１階層のリニアレールステーションに４人。

（わたし達が来てるのはすでに察知されてるだろうけど・・・。行動に移らないのは余裕の表れか・・・）

例の暗殺部隊との共通点は目出し帽だけ。服はラフな格好だったりスーツだったりとまちまち。そんな連中を見て「どう思う？」ってルシル達に訊ねると、「雑魚」の一言だけが返って来た。

「そんじょそこらの武装マフィアと下っ端なチンピラって感じかな」

「クリアリングはまぁやっているけど、素人の域は出てないわね」

「この程度なら気付かれることもなく殺れるよ」

「殺っちゃダメだからね、ルミナ。・・・んじゃ、こういう作戦でどうかな・・・」

大まかな作戦を立案したわたしは、部下であり戦友であるルシル達に伝える。問題は人工島の周囲に陣取ってる軍艦1隻。これについては「セレス。1人でいける？」って確認してみる。

「もちろん、問題ないよ。海上兵器なんてどれだけ強かろうが凄かろうが、ね」

「ん。わたし達は突入組ね。ルシルは管理室を、ルミナは居住区を、わたしがステーションを、んで・・・」

もう1人の前線組へと視線を移す。１７５ｃｍという長身で、薄い桃色のロングヘアをおさげにした、緊張に染まる濃い目の桃色の瞳のミヤビ・キジョウ陸曹。ミヤビは"スキュラ"やシスターズみた

いにプライソンの手によって生み出された娘だ。拉致されたんじゃなくて一から生み出されたことで、親族は誰1人としていない。引き取り手が局員一家だったことで、彼女も恩返しとして局入り。そしてたった1週間で陸戦ＳＳを獲得した。

「研究区はミヤビ、あなたに任せる。いいね？」

「了解です！　精いっぱい頑張ります！」

ビシッと敬礼したミヤビ。仮にも陸戦ＳＳランクの実力者なんだから、そこまで緊張することもないんだけど・・・。まぁ今回みたく対人で人質解放なんて、そんな繊細な任務が苦手な娘だからしょうがないかぁ・・・。

「ミヤビ。君なら出来る。自信を持て」

「ルシル副隊長・・・。はいっ！」

「よぉーしっ。ではこれより被疑者の逮捕に動く」

そう指示を出した後、「ん？　隔壁エリアはどうするの」ってルミナに訊かれた。それにわたしは「サポート班から1人を召喚～♪」ってウィンクしながら答えて、「先輩、人手が足りないから手伝ってください♪」と個人メッセージを送る。

『お！　今回は私にも出番あり！？　よぉーしっ！　張り切って頑張るぞぉー、おー！』

サウンドオンリーのモニターから元気いっぱいな返事。通信が切れるとすぐと「お待たせ！」1人の女性がこの場に現れた。魔法によるものでもトランスポートによるものでもない、スキルとしての転移能力者。

「特騎隊サポート班、エイダー3・クララ。現着よ♪」

わたしやルシル、八神家がかつて所属してた特別技能捜査課の先輩局員、クララ・リークエイジ。もう27歳な彼女だけど、まぁ小っこいんだな、これが。150cmジャストな身長で、本当に27歳かどうか疑わしい童顔と性格。寿退職や都合退職などで部隊の最低稼働人数が足りなくったことで特捜課が解散となった中、クララ先輩はわたしのスカウトに応じて隊に入ってくれた。

「クララせ～んぱい。転移スキルで助けてほしいんだけどぉ～」

「いいよ。そのためのエイダー3だから！」

先輩に作戦を伝える。ルシルも転移魔法を使えるけど、魔力反応が出ちゃうから感知され易いんだよねぇ。でもスキルとしての転移ならまず感知されない。

「隔壁エリアの3人の逮捕も一緒にお願い」

「了解。シャーリーン。こちらエイダー3。予定転送ポイントの各座標を教えて」

『了解です。すぐに送信します！』

送信されてきた座標を見た先輩が頷くと、「出撃はいつ？」っていう問いに「今すぐ！」って答えた後、「みんなもそれで良いね？」って確認を取る。

「無論だ。早々に片付けてくれる」

「よっしっ！　叩きのめそう、死なない程度に」

「腕が鳴る・・・！」

「すぅ・・はぁ・・・。大丈夫、私は大丈夫」

「そうそう、深呼吸が大事よ」

「では各騎、騎士甲冑を着装！」

「ナイト２・ルシリオン・セインテスト。エヴェストルム、セットアップ」

２ｍ近い剣２本の柄頭を連結させたようなアームドデバイス・"エヴェストルム・オルタ"を起動させたルシル。真っ黒な詰襟の長衣、ズボン、インバネスコート、ブーツっていう騎士甲冑に変身。

「ナイト３・アルテルミナス・マルスヴァローグ。ツァラトゥスト

ラ、セットアップ！」

漆黒に輝く六角形型で、６つの表面に十字架が彫られた腕環・"ツゥラトゥストラ"を両手首に装着したルミナ。ビスチェワンピースにショートパンツ、ショートジャケット、ブーツっていう騎士甲冑へと変身。

「ナイト４・セレス・カローラ！　シュリュッセル、セットアップ！！」

両刃剣型のアームドデバイス・"シュリュッセル"を起動させたフィレス。黒色のインナースーツ、白のテールジャケット、タイトスカート。羽織ってるのは白の袖無しインバネスコート、ロングブーツっていう騎士甲冑に変身。

「ナイト５・クラリス・ド・グレーテル・ヴィルシュテッター。シュトルム・シュターール・・・へ～んしん！」

三日月型の刃――月牙を両側に備えた槍と、六角柱に鋲がズラリと並んだ金棒が連結された方天戟型アームドデバイス・"シュトルムシュターール"を起動させるクラリス。上は詰襟のネックカバー、厚手のノースリーブブラウス、カフスの付いたアームカバー、そしてグローブ。腰には２本の４０発入りカートリッジベルト。下はスリットが深いミニタイトスカート、タイツ、そしてロングブーツっていうデザインの騎士甲冑に変身。

「ナイト６・ミヤビ・キジョウ！　フェーニクスフェーダー、お願い！」

赤い羽根の形をしたアームドデバイス（シャマルのクラールヴィントみたくカートリッジシステムは積んでないけど）の"フェーニクスフェーダー"を起動したミヤビ。薄い紫色の小袖と紫色の袴っていう和風テイストな騎士甲冑に変身。武器は持ってない。ルミナと同じ拳闘士だからだ。

「エイダー3・クララ・リークエイジ。アークフランカー、セットアップ！」

拳打用のナックルダスター型ストレージデバイス・"アークフランカー"を起動したクララ。スカート丈がミニなコルセットを付けたビスチェワンピース、袖口がサーキュラーカフスになってるアームカバー、太腿までの丈であるサイハイブーツっていう防護服に変身。

「んじゃ最後に。ナイト1・イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト！　キルシュブリューテ、セーットア～ップ♪」

155ｃｍの長さを誇る刀身が桜色の刀型アームデバイス・"キルシュブリューテ"を起動する。ハイネック・ノースリーブのレオタードをインナーに、ノースリーブの前開きショートワンピース、コルセット付きのオーバースカート、サイハイソックス、オペラグローブ、キャバリエブーツっていう騎士甲冑に変身する。

（特騎隊の部隊長就任記念として、騎士甲冑のデザインを一新したのだ～♪）

以前のものはガッチガチに肌を隠すようなデザインだった。でも大人になった今は、ちょこっと色気というか艶めかしさというか、アダルティ〜　な感じにしてみた。でも可愛らしさも残すため、髪型を結ばないストレートからハーフサイドアップにしてみた。どうよ？

「「「「「「着装完了！」」」」」」

号令に応じたわたし達みんなの変身が終わる。それを確認して改めて作戦のおさらい。クララのスキルでそれぞれの持ち場に転送。タイミングを合わせた同時攻撃でテロ犯連中を瞬殺して、セレスは軍艦1隻の凍結封印。わたし達の実力からして、こんな大雑把な作戦でも成功率はかなり高い。

「じゃあクララ先輩。よろしく！」

「オーケー！」

先輩がまずルミナの背中をポンと叩くと、瞬きの間にその姿が掻き消えた。次いでクラリス、ミヤビ、ルシルと転移させてった。次はわたしだ。わたしに振り返った先輩から伸びる右手が、ポンッとわたしの肩を叩いた。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒ルシリオン†††

シャルの設立した特務零課――特殊機動戦闘騎隊に副官として入隊してから早1年半。今日も今日とて本局の荒事担当として、管理世界を飛び回る日々。今回は軌道エレベータを占拠したという馬鹿ど

もを殲滅するため、アンバー地上本部からの要請でやって来た。

『こちらナイト2。配置完了』

俺が任されたのはエレベータで一番重要なエリアである管理室。10人の施設管理人を人質に取る5人の実行犯を捕まえることが任務だ。元特捜課の先輩であるクララのスキルで監視カメラの死角である、管理室前のT字通路の段ボールの山の陰に転送された俺は、念話で同様にそれぞれの持ち場に転送されたシャル達に伝える。シャル達からも『配置完了』との報告を返された。

『各騎。すでに脱出できてる施設関係者が各ドアを外部からのハッキングで開く。ハッキングが完了し、ロックが解錠されると同時にドアが開くから、それと同時に突入、被疑者を逮捕という流れで。じゃあカウント30！』

シャルのカウントに耳を済ませ、『――5、4、3、2、1、突入！』という号令に合わせて物陰から跳び出す。ロック中を示す赤ランプから解錠を示す青ランプへと変わったドアが両側にスライドする。開け切っていないドアの間を縫うように入り込む。

「（被疑者5名を視認）・・・カムエル！」

――闇よ誘え、汝の宵手（カムエル）――

新幹線の総合指令所のようなデスク並びと空間モニターがずらっと並ぶ、台形状の管理室の一番奥。空きスペースの床に正座させられ

たうえ両腕を後ろ手で縛られ、布で目隠しをされた管理人１０人と、彼らに銃口を向けている被疑者５人の姿を視認。しっかりとこの目で確認して、連中自身の影を利用して発動した影の触手で、「っ！？　な、なんだこれ・・・！？」反撃の隙すら与えずに簀巻きにしてやった。

「管理局だ。変に抵抗せず大人しくしていれば、痛い思いは済むからそのつもりでな」

「銀髪に紅と蒼の光彩異色・・・！」

「お前はまさか・・・！」

「軍神ルシリオン・セインテストぉ・・・！」

「何でそんな大物が出てくんだよ！？」

「終わりだ・・・」

被疑者たちが俺を見て顔を真っ青にし、ガクッと項垂れた。はやては歩くロストロギア、なのははエースオブエース、リアンシェルトはトップエースなどという、その局員を示す二つ名のようなものがあるわけだ。そして俺の二つ名は軍神。任務先で１対多数戦を繰り広げることも多く、その様を目撃していた現地局員たちからそう呼ばれ、結果その呼び名が広まってしまったようだ。

「いい判断だ。ほら見てみろ。お前たちの仲間も確保されたぞ」

監視カメラ映像が流れているモニターに、同僚のシャル達が被疑者をバインドなどで拘束している様子が映し出されていた。シャルとクラリスとクララはカメラに向かってピースをしているしな。とにかくシャル達も、何も問題なく逮捕できたようでなによりだ。

「おい！　あの刀持ち！　剣神イリスじゃねぇか・・・！？」

「あっちは闘神アルテルミナス！？」

人質となっていた関係者を「大丈夫ですか。怪我をしている方はいますか？」と解放している中、連中は悲痛な声を発し続け、さらに「なんだありゃ・・・！」と連中の口からそう漏れたのが聞こえた。

「戦艦（シーサーペント）が凍り付いてやがる・・・！」

「じゃあ、あの凍結は氷神セレスかよ！？」

「ひょっとして、俺たちを捕まえに来たのは本局の特騎隊・・・！」

若干涙目な連中がモニターから俺へと視線を移してきた。二つ名に神が付くようになった俺とシャルとルミナ、それにセレスは、ただその功績だけでなく管理局規定の魔導師ランクがＳＳ＋ということもある。ちなみに俺たちより１つ下のＳＳランクであるクラリスやミヤビにも二つ名はある。

「最強部隊、遭ったら即アウト、人型戦略兵器、管理局の本気、犯

罪処理屋、破壊の化身、と呼ばれるあの血も涙も無い化け物部隊・・・！」

酷い言い草だ。だが実際に犯罪者界隈からそう呼ばれているのも事実だ。溜息を吐きつつ、「こちら管理室。被疑者５名を逮捕。捕らわれていた関係者もみんな無事だ」と通信を入れる。

『了解。そっちの監視カメラから確認できてるだろうけど、ステーションの被疑者も確保完了！』

シャルに続き、ルミナ達も『こちらも確保完了！』と報告を入れてくれた。ここ以外で人質になっていた人たちも無事なようだ。解放したばかりの管理者たちが「ありがとうございました！　急いで運用を再開します！」と所定のデスクに着き、空間キーボードのキーと打ち始めた。

「さてと。これからお前たちを連行するわけだが。逃げないと誓えるなら自力で歩けるようにする。誓えないのならこのまま引き摺っていく。どうだ？」

「アンタを相手に逃げようなんて馬鹿な真似、出来るわけねぇだろうがよ」

リーダー格らしいブラックスーツ姿の男が言い捨てると、他の４人も「ああ」と観念したように頷いた。カムエルを解除し、連中の両手首に手錠を掛ける。床に転がっているデバイスや質量兵器を１ヵ所に集め、使用できないように封印処理を施しておく。あとは後続

で来るアンバー地上部隊に預けてしまえばいい。連中を引き連れながら管理室を出、ステーションへと移動を始める。

「こちらナイト2。これより被疑者5名をステーションへ連行後、手筈通りにリニアレール下り線に乗車し、エントランスフロアへと移動する」

『了解。エイダー3、あなたの居る階層がわたし達の中で一番上なの。というわけで、あなたの乗る便にわたし達も乗車するから、便のナンバーを教えて』

『了解よ～。えっと、B－8492便の下り線に乗――』

クララがそこまで言い掛けたところで、『こちら管制室。管理局の皆さん。連行専用車両を御用いたします』という通信が入った。モニターには先程助け出した管理人の1人が映っている。俺たちはお言葉に甘え、特騎隊の居る階層にだけ停車する貸切リニアレールを用意してもらった。それからしばらくステーションのホームで待機する中・・・

「で？　お前たちは軌道エレベータを占拠して、一体何をやらかそうと考えていたんだ？」

連中の未だに出されていない要求が何だったのかを訊ねる。リーダー格らしい男が「俺ぁ、元はここのアルバイト従業員だったんだ」と身の上話を始めると、他の4人も元従業員だと教えてくれた。しかしその素性が管理世界で有名な一大マフィア・アウロラファミリ

ーの一員だったことが知られ、解雇されたらしい。

「その腹いせに軍艦シーサーペントを持ち出して、占拠したというわけか・・・？」

「それもあるけどよ。ファミリーの看板を舐められっぱなしで終わらすんじゃねぇって、俺たちの親から叱られちまって・・・」

アウロラファミリーの本気というものを次元世界に轟かせるため、派手に世界1つを敵に回してみようとのたまった最高幹部の1人が居たらしい。ソイツが連中に命じたのはエレベータの破壊。正直、馬鹿としか言いようの無い愚か者だ。

「その割には命じられたままに破壊などせずに占拠を選んだのは何故だ？」

「俺たちこの世界の出身なんだよ。ガキの頃から軌道エレベータを眺めて生きてきた」

「アンバーが管理世界入りする前にファミリーにスカウトされてさ」

「ガキだったからさぁ、俺たち。異世界とかマフィアとか、憧れてんだそういうのに」

「気付けば悪さばっかやってて・・・。ファミリーを抜けようにも根性無くて・・・」

「そんな時にアルバイト募集をやってんのを知って・・・。俺たちは揃って応募して合格。２年と働いて来たんだ」

連中は言った。エレベータやそこに暮らす住民、働く関係者に愛着があったのだと。だから破壊する真似だけは出来なかったと。ま、連中の事情など知ったことはないな。俺にとって重要なのは「軍艦はどこで手に入れた？」だ。

「さっき話した親が持ってたモンだよ。ドン・アウロラがプライソンと繋がりが合ったみたいでさ」

「なるほど。じゃあ、コイツらに会ったことは？」

展開したモニターに、"スキュラ"姉妹を暗殺した奴らを表示させる。連中は口をそろえて、知らない、と答えた。嘘や隠し事をしている様子はない。白と断定していいだろうな。

「俺たち、今度こそ親父たちに殺されるな・・・」

「は？　その心配は要らないだろ。アウロラファミリーは数日後には消滅しているからな」

怯えている連中にそう言うと、「え？」と目を丸くした。プライソン一派と繋がっていたドン・アウロラは捜査対象となった。自然と奴らと衝突することになるのは確かだ。

――トランスファーゲート――

ステーションで待機していたところで、「っ！？」背筋に悪寒が走った。

――護り給え、汝の万盾（ケムエル）――

即座に被疑者５人を護るため、無数の小型の円盾をドーム状に組んだケムエルを発動。俺も瞬時に"エヴェストルム"をニュートラルのイェソドフォルムで起動。

（来たな・・・！）

視界の端に捉えたのは例の暗殺者の１人だ。漆黒の学ランに学生帽にマント、天狗の面を被っている。手にしている武器は槍型のストレージデバイス。ひょっとしたらコイツはベルカ式の騎士・・・。

――ヴォルフ・クラオエ――

「っ・・・！」

奴の槍が俺のシールドに弾かれ、奴自身も後退せざるを得なかったようだ。穂先が向いていたのはリーダー格の男であるのは確認した。"スキュラ"姉妹と同様に殺害する気だったようだ。

「ふざけるなよ、貴様ッ！」

エレベータ内を損壊させないように結界を展開し、確保していた被

疑者５人を結界外へと置き去りにする。これで結界内に居るのは俺と暗殺者の２人だけ。そして暗殺者を撃破するため、俺は一足飛びで奴に最接近した。

Ｅｐｉｃａ２－Ｂ特殊機動戦闘騎隊～Ｃｌｕｅ～

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

幼馴染のイリスが設立した脅威対策室直轄・特務零課、特殊機動戦闘騎隊。戦闘を担当する前戦組はみんなベルカ式の使い手の騎士のみで構成されている。私セレスもイリスのスカウトを受けて、この部隊に入隊することを決めた。最初は騎士団の仕事もあるから乗り気じゃなかったけれど・・・。

・―・―・回想ね～・―・―・

「部隊設立～？」

「あなたが？　局内に？」

ザンクト・オルフェンの実家で、お姉ちゃんと一緒にリビングでくつろいでるところに遊びに来たイリスが、局内に新しく自分の部隊を造るって言ってきた。それだけなら驚きはするけど、おめでとうってお祝いの言葉を贈るつもりだった。

「そう！　でねでね！　フィレスとセレスに、戦闘組として参加してもらいたいの！」

「「え？」」

イリスの造りたい部隊っていうのはガチ戦闘部隊らしく、慢性的な人手不足の所為で大事件の対処にも時間が掛かる局の現状を打破するためのものだってことみたい。各管理世界の地上・航空部隊で対処仕切れない大規模だったり強力だったりした事件の場合、脅威対策室が対処できる部隊の設立を行うんだけど、それだと時間が掛かり過ぎる。イリスはそれをどうにかするため、即座に動ける特務機動隊を造りたい、とのことだった。

「動機としては実に素晴らしいと拍手ものよ。だけどイリス。あなた、ロート・ヴィンデ隊はどうするの？　さすがに両組織の部隊長を務めるなんて、余りにも無謀よ？」

「あー、うん。そっちは除隊するつもり。フリーの教会騎士をし続けながらパラディンを目指しつつ、局の特務隊を引っ張っていこうって考え・・・かな」

イリスがお姉ちゃんの問いにそう答えた。今まで隊長を頑張って努めてきた隊を除隊しても、それでも局の部隊を造りたいって意志は応援したいけど・・・。チラッと隣に座るお姉ちゃんを見る。とりあえずお姉ちゃんが参加するっていうなら、私も参加するつもり。

「それでどうかな？　フィレスとセレスの戦力って本当に貴重なんだよ。それをプライソンみたく世界規模の馬鹿事をやろうとする連中を狩る事に使いたいの！　お願いします！」

「・・・ごめんなさい。あなたのスカウトには応えられないわ」

脚の短いテーブルを挟んだソファに座るイリスが頭を下げてすぐ、お姉ちゃんもまた参加できないって頭を下げて謝った。しょんぼりするイリスが「やっぱり忙しいから・・・？」って訊ねる。

「というよりは、私、これからは騎士団1本に絞っていくために管理局を辞めるのよ」

「「え？・・・えええええええ！？」」

私とイリスが同時にソファから立ち上がって叫ぶと、「いや、なんでセレスまで驚いてんの！？」なんてイリスが訊いてきた。だから私も「私だって初耳だし！　お姉ちゃん、局員やめるの！？」って訊ねる。

「ええ。私ももうアラフォーだしね～。親からも、結婚しなさい、孫が見たい、なんてコソコソ言われる始末。親は局員より聖職者や騎士団員との結婚を望んでるからね。もっと出会いの場と時間が増やせる騎士団1本にすることにしたのよ」

ガーン。頭の中でそんな音が轟くと、私はガクッとその場に崩れて四つん這いになった。何とかしてお姉ちゃんとこれからも一緒に過ごすための打開策を考える。

「セレス・・・？」

「おーい。生きてる～？」

お姉ちゃんはソファに座ったまま、イリスは側までやって来てしゃがみ込んだ。そんなお姉ちゃん達を尻目にうんうん唸った後、「ハッ！」私は天啓を得た。

「そうだ！　お姉ちゃん、私も局を辞めて、お姉ちゃんと一緒に同じ人に嫁ぐ！」

「あーえっとぉ～・・・シスコンもそこまで拗らせると、ちょっと恐い・・・」

「あのね、セレス。何でもかんでも私に付いて来るのは良くないわよ、もう」

バッと立ち上がった私は、グッと握り拳を作った右腕を高く掲げてそう宣言すると、イリスがそう言って引いた。別にどう思われてもいいもん。けどお姉ちゃんも頭を抱えて、大きな溜息を吐いてしまった。

「セレス。お姉ちゃん命令。セレスは局に残って、イリスの隊に参加すること。あと、私と一緒に嫁ぐなんておバカな事は二度と言わないこと。セレスはセレスで、自分だけの恋人を見つけて結婚しなさい。いいわね？」

「よっしゃぁぁぁーーーーー！　フィレスも欲しかったけど、セレス1人でも十分！」

「はーい・・・」

お姉ちゃんにそう言われた以上は、私だけイリスのスカウトを受けることにした。

・―・―・終わり～・―・―・

そんなイリスの部隊・特騎隊設立直後はまぁあんまりやる気は無かったけど、今じゃ誇りを持ってこの隊の任務に従事している。で、今回の私の役目は、プライソンの忘れ形見の１つである海洋艦隊の１隻であろう軍艦。アレの無力化。最悪破壊しても良い。恐ろしく大きな砲台がいくつもあって、アレらが軌道エレベータ・イーシャを破壊するんだろうね。

『セレス。残りカウント２０秒でこちらは活動開始するから。それに合わせて軍艦の無力化をお願い！』

「了解！　いっちょう派手にやるよ！」

特騎隊の氷神セレスとまで謳われるようになった私に、凍り付かせられないモノは無い。小さく深呼吸を繰り返して、『――５、４、３、２、１、突入！』っていうイリスの号令と同時、私は待機してた浜から飛び立って一直線に軍艦へと突っ込む。

「シュリュッセル！」

両刃剣型の"シュリュッセル"の柄頭が上方にスライドして、５連装シリンダーが飛び出した。そして回転した後に今度は下方にスラ

イドして柄の中に戻った。カートリッジを用いて剣身に魔力を付加させる。

（おーっと。砲身がこっち向いた・・・！）

副砲って呼ぶらしい砲門８門が私に向いたのを視認。直後に魔力じゃないエネルギー砲撃が発射されたんだけど、直撃コースは１つとしてないのが判る。つまり「威嚇射撃・・・」ということ。けど止まったり引き返さなかったりすると、「今度は直撃コース」になった。

「ハズレ～♪」

特騎隊はその任務の性質上、本当に強くないといけない。だから日々部隊内で模擬戦をやるんだけど、もうルシルが射砲撃が変態的に厭らしい。いろんな射砲撃を見てきたけど、ルシルの射線は酷い。誘導操作弾と直射弾の混成弾幕で、しかも視覚できないステルス弾まで使ってくる始末。

「（だから見えてる上に遅い砲撃なんて・・・）障害にすらならない！」

――氷柱弾雨（セリオン・エクサラシオン）――

高度を上げることで砲撃の弾幕を避け、高度１００ｍのところで魔法を発動。全長４０ｍ級の六角柱型の氷柱を６本と軍艦の側に落とす。砲撃は迎撃の為に発射されるようになったことで私はフリーに。

「極雪轟嵐（ベンティスカ・レモリーノ）・・・！」

氷柱を穴だらけにはしたけど完全には破壊できなかった軍艦は、海上に落着した氷柱が起こした大波に呑まれた。そこに私の周囲に発生させた球状の吹雪３基を　"シュリュッセル"の腹で打って、「シュ－ト！」の号令と共に竜巻状の砲撃として発射させた。

「よぉ－し、着弾♪」

グラグラと波に揺られている所為で迎撃は出来なかったみたいで、私の攻撃を全て受けた軍艦が急速に凍結していく。そんな中でも砲台を私に向けようと悪足掻きをしてきた。だけど射角が合わせられず、結局は何も出来ずに完全凍結された。

「とりあえず砲台をへし折って、攻撃能力を完全に無力化しておこうか」

完全に動きを止めた軍艦に近付こうとした瞬間・・・

――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ　２．０――

「っ・・・！？」

目の前を何かが通り過ぎて行って、その衝撃に「ひゃあ！？」後方に弾き飛ばされた。急いで体勢を立て直そうとする中でも「ちょっ、待っ・・・！」問答無用で何かが飛来して来て、遅れて轟音が連続

で耳に届く。これは「レールガン・・・！」なんだと察する。

「（弾体は小さい。ガジェットⅡ型の小型レールガン・・・か？）とにかく！」

軍艦から無理やり距離を取らされた。彼我の距離は約１００ｍ。その位置まで来るとレールガンでの攻撃がピタッと止んだ。つまり砲撃手か、その指揮官は、私の撃墜じゃなくて軍艦を護るのが目的なわけだ。

『こちらナイト４！　特騎隊全隊に通達！　現在、謎の戦力と交戦中。敵攻撃手は視認できず！　しかし攻撃方法は小型レールガンと思われる！』

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

『シャーリーン了解！　ナイト２から現在、軌道エレベータ・イーシャ内にてスキュラ暗殺犯の１人との交戦を開始した、と連絡を受けました！　ナイト４も警戒を怠らないでください！』

『こちらナイト１！　ナイト４、敵の狙いが何か判らない？　ナイト２の元に現れた暗殺者の目的は、どうやら本事件の首謀者の殺害らしいの！』

イリス達や母艦シャーリーンへと通信を入れると、ブリッジとイリスからそんな報告が返って来た。だから『軍艦の接収と思われる！』と答える。現に通信しながら放った角型の氷結射撃弾・ディアブロ

・クエルノ２０発が、レールガンによって迎撃されたし。

『じゃあ軍艦は一時置いておいて、砲撃手の確保をお願い。念のために応援としてルミナを寄越すから』

『別に応援は要らないけど、とりあえず了解。シャーリーン、敵の位置は？』

『はい！　ステルス魔法かスキルか、もしくは装備機能なのかは判りませんが姿は視認できません。ですが熱源発生点は初弾が北東２７００。次弾から北に向かって行っていますが、距離は変わらず２７００ジャストです！』

この遮蔽物の少ない広い空で肉眼で捉えられないとなれば、報告通りステルスかなんかを使っていると見てもいい・・・。こういう場合は狙っての一点攻撃じゃなくて広域攻撃で叩き落とすのがベストなんだろうけど。さすがに「むぅ。広域で撃ち込むことは無理かぁ、エレベータが近くに在るし」と結論付けて、もう１つ思い付いた案を採用する。

「さぁどこに居るのかな・・・！？」

――雪花飛刃（ペタロ・アリリョ）――

変換資質を利用して剣身に付加していた魔力を氷結系へと変え、"シュリュッセル"を薙いで氷の花弁を８枚と軍艦目掛けて飛ばす。軍艦を護るなら、さっきみたく迎撃に打って出るはず。

『シャーリーン。砲撃手が必ず姿を見せるはず。しっかり捉えてね！』

『了解です！』

――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ　２．０――

ハイ、来た。目にも留まらない速度で飛来した砲撃。でも花弁を粉砕されるより早く、「もう１発！」と言いつつ、１２枚の花弁を連続発射した。レールガンも負けじと迎撃してくる。

（思ったより連射されて来るな～）

レールガンは砲身なり銃身の冷却が必要だって聞いてる。レールガン持ちは複数機か複数人いるって思っていいのかも。

『こちらシャーリーン！　敵砲撃手の姿を確認しました！』

前面に展開されたモニターを見て、私は「何コイツ！？」って驚いた。全長２ｍ近い大砲のようなデバイス？２門を両脇にそれぞれ挟み込むようにして構えてる男が１人、宙に展開したミッドチルダ魔法陣上に佇んでいた。暗殺犯共通の防護服と思われる仮面に目出し帽に帽子に黒衣姿。完全に連中の関係者ね。

――トランスファーゲート――

「あ・・・！」

暗殺者が背後に発生した空間の歪みの中に後退して消え去った。ああやって転移と出現を繰り返しながら、私の攻撃を迎撃していたんだって判る。

『砲撃手のシグナル・・・ロスト！　どこに転移するのか不明なので、警戒をお願いします！』

「どこに転移するか判らないなら、釣り上げればいいでしょう・・・！　周囲のリアルタイム映像モニターを用意して」

『了解です！』

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

周囲に複数のモニターが展開されて、映し出される景色に注意を払いながら、カートリッジをロードして魔力を増加し、その分の魔力を氷角５０本へと変化させる。どこから襲撃が来ても即カウンターが出来るように角先を軍艦へ向けて展開。さらにもう１発カートリッジをロード。

「シュート！」

まずは、レールガンの連射で全弾が迎撃されないように、直射じゃなくて曲線・直角軌道でバラバラに向かうように射出する。

「さぁどう出る！？」

スタンバイしている術式をいつでも発動できるようにしながら砲撃手の出現を待つ。そしてそれはすぐに訪れた。１枚のモニターに映り込むのは、軍艦を挟んだ向こう側――前方６００ｍに発生した空間の歪み。そこから砲撃手がスッと出て来て・・・

――ブラストディセミネーター――

左脇に挟んだデバイスの砲口から放射状に発射される光線、その数はおよそ２０弱。光線は軍艦の周囲にまで伸び、そしてドォーン！という轟音と一緒に球状に炸裂。角弾の全てを呑み込んで迎撃して来た。

「レールガンの他にもあんな攻撃手段もあるわけか・・・！」

――穿ち止める氷杭（エスタカ・クアルソ）――

スタンバイしてた術式を即座に発動。攻撃じゃなくてバインド効果のある冷気の槍１本を高速射出。砲撃手は迫る槍を迎撃するでも防御するでもなく、背後の歪みの中へ消えることで回避した。

「ほらほら、逃げてばっかりで軍艦を護れると思わないでよ！」

――氷奏刃・飛刃（イエロ・コラソンアギラス）――

離れた所からコソコソと砲撃を撃ち込んで来るだけの腰抜けをあぶり出すため、私も軍艦の周囲を飛び回りながら軍艦へと攻撃を加え

ていく。砲撃手も負けじと迎撃して来るんだけど、「武装が変化してる・・・！」ことが判った。両脇に挟み込んでた大砲型デバイスは持って無くて、右手には拳銃型のデバイスを持って、左手はスナイパーライフル型デバイスのグリップを持ち、長い銃床は脇に挟んでる。

――クロスファイアシュート――

――ブレイクチェンジャー――

魔力弾の連射と、射線が途中で変わって曲線を描く砲撃による弾幕で、私の攻撃を完全に迎撃して来る。ここまで完璧に防がれると「なんか腹立つ」けど、奴の撃破はもう譲るよ。

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース――

空間の歪みから何度目かの出現をした砲撃手の頭上、ルミナが超高速で急降下して来た。ここで砲撃手の背後に在る空間の歪みから腕が2本と出て来て、彼を無理やり歪みの中に引っ張り込んだ。でも・・・

「直撃！」

ルミナの振り下ろされた左拳が砲撃手の頭部に直撃して、帽子や目出し帽がビリビリに破れて、仮面も粉々になった。そのおかげで砲撃手の素顔を捉えることが出来た。若い男性だと思う。曖昧なのは、ルミナの一撃の所為か頭から出血していて、顔が赤く染まっていた

からだ。あれ、殺してないよね・・・。

『ナイト3、現着！　シャーリーン、次の転移先はどこ！？』

『シグナルを完全にロスト！　新たな出現も確認できません！』

――悪魔（ディアブロ・クエルノ）の角――

とのことだから、試しに「シュート！」と軍艦に角弾を放ってみれば何の迎撃もされずに着弾した。さらに「えいっ、えいっ」撃ち込んでも迎撃は無かった。

「完全に撤退したっぽい」

『ああもう。せっかく来たのに・・・。ここで逃げるとはどういうこと？』

そりゃ逃げたくなるって。闘神と謳われる近接最強の騎士だもんね。とりあえず砲撃手は去ったことだし、「で？　軍艦は破壊して良いの？」って問う。

『あ、はい。ナイト1より破壊指示が出ました。ナイト4、ナイト3、軍艦の破壊をお願いします』

『了解！』

「了解。ナイト3。私が周囲警戒するから、破壊はあなたが行って」

『ん、判った』

あれだけの巨体を誇る軍艦を、いくら凍結しているとは言え完全破壊するには結構な魔力と威力が必要。なら魔法じゃなくて魔力消費の無いスキルで圧倒的な破壊が行えるルミナに任せる方が省エネで確実だ。

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

カートリッジをロードして魔力を増加させて、その分の魔力を氷角50本へと変化させる。念のためにどこから襲撃が来ても即カウンター出来るように角先を全周囲へ向けて展開。

「エクスィステンツ・ツェアレーゲン！」

ルミナがスキルを発動して、「ツェアレーゲンシュラーク！」大きく振り上げてた右拳を凍り付いてる軍艦に打ち込んだ。一瞬の静寂の後、ガシャァン！と大きな音を立てて軍艦は大小様々な破片となって周囲に舞い散り、海面に落ちる時には素粒子レベルにまで分解された。

「こちらナイト3と4。軍艦の完全破壊を完遂。暗殺者の妨害も無く、エレベータ外の暗殺者は撤退したと思われる」

†††Ｓｉｄｅセレス⇒イリス†††

ルシルやセレスから襲撃を受けたとの報を貰ったことで、セレスの元にルミナを、ルシルの元には私自身が応援に向かった。本来はリニアレールで被疑者連中を連行して、エントランスホールから堂々と帰る予定だったけど、被疑者全員をクララのスキルでシャーリーンの護送室へ転送させた。護衛としてクララ本人とクラリスとミヤビを同行させた。

（これでシャーリーンに敵が侵入しても、そう簡単にスキュラのように暗殺される心配はないはず）

そしてわたしは、ルシルの張った結界へと突入。ルシルが相手にしているのは"スキュラ"姉妹の長女・アルファの殺害犯と思われる風を操る騎士。航空空母"アンドレアルフス"を寸断した、その圧倒的な切断力は未だ忘れていない。

「3年前の借りは、今日ここで返す・・・！」

だからと言って感情で動くわけにはいかない。ルシルからの報告によれば、暗殺者――風の騎士（仮）は槍を使う騎士。推定魔力ランクはS＋。エレベータの崩壊は連中も望んでいないようで、例の転移スキルによる離脱を試みているようだけど・・・。

（ルシルがガチで捕まえようとしてる以上、まず相手は逃げきれない）

だだっ広い半月上のステーションホールには、ルシルの魔力光であるサファイアブルーに光り輝く魔力スフィアが何十基と展開されて

る。

――舞(コード)い降るは、汝(パシエル)の雷光――

「ジャッジメント！」

周囲に発生させた雷撃の槍を雨のように降らせて風の騎士を追い込んでくルシル。騎士は２ｍ弱の槍型デバイスを振るって、回避しきれない雷槍を弾き飛ばしてく。それだけであの騎士のレベルが高いことが判る。アレで犯罪者だなんて勿体なさすぎる。

――トランスファーゲート――

捌き切ったところで例の空間の歪みが騎士の背後に出現した。彼はすかさず入ろうとするけど・・・

「何度も言っているだろう、逃がさないと！」

――煌(コード)き示せ、汝(アダメル)の閃輝――

ホールの各所に展開されてた魔力スフィアから砲撃が数発と発射される。離脱しようとしてた騎士と空間の歪みの間に撃ち込まれて、床への着弾時に発生した魔力爆発に騎士は「・・・っく！」吹き飛ばされた。そんな彼の向かう先にあの歪みが発生した。

――光牙閃衝連刃――

ルシルの遠隔砲撃が発射されるより早く、わたしは"キルシュブリューテ"の刀身に付加した魔力を槍のように4本と放つ。2本は騎士へと直撃コース、2本は歪みコースだ。彼は宙で槍を振るって私の光槍2本を弾き飛ばして、残り2本は歪みの中に消えた。その直後に歪みが消失して、歪みが元あった地点に彼が降り立った。

『シャル、伏兵への警戒を頼む』

――闇(コード)よ誘え、汝(カムエル)の宵手――

『んッ、任せて！』

わたしの存在に一瞬気を取られて隙を見せた騎士の足元にある影から複数の触手が伸びて来て、「っ・・・！」彼を拘束しようとした。それを横目に、彼を助けようとするであろう伏兵の迎撃を行うべく、わたしは"キルシュブリューテ"を正眼に構えたところで・・・

――グレンツェ・ゲヴィッター――

「「っ・・・！」」

騎士を覆うように球状の暴風が吹き荒れて、影の触手がミキサーに掛けられたように粉砕された。ルシルは"エヴェストルム"の2つあるシリンダーカートリッジを同時にロード。

――破(コード)り開け、汝(メファシエル)の破紋――

――舞い降るは、汝の無矛（パディエル）――

魔力槍を1本創り出すと、バットみたく構えていた"エヴェストルム"を振るって魔力槍の柄頭を打ち、騎士が閉じこもる暴風の結界へと射出した。魔力槍は一筋の光となって飛んで結界に直撃した。穿たれた暴風は一瞬の内に消滅して、魔力槍にお腹を貫かれた騎士の姿が丸見えになった。

「ぐほっ・・・！？」

――公正（コード）たれ、汝の正義（ザドキエル）――

さらに魔力槍2本で形作られた十字架に磔された騎士の喉元に1本の魔力槍の穂先が突き付けられた。ルシルは「まずは名前と出身世界を教えてもらおうか」って歩み寄って、天狗の仮面に向かって手を伸ばしたその時・・・

「王よ。無垢なる我らを楽園へ誘いたまえ・・・！」

騎士がそう告げたと同時、彼の鎖骨から上がドォン！と爆発を起こして吹っ飛んだ。まさかの「自爆・・・！？」に、わたしとルシルは驚愕した。黒煙を上げつつ騎士の死体はガクッと膝を付いて、ゆっくりとうつ伏せに倒れ込む中、「あいた・・・！」頭に何かがぶつかった。

「いった～い。なに～・・・って――」

体の前にその何かが落ちて来たから左手でキャッチ。

「～～～～っ！　目、目、目玉ぁぁぁぁぁぁ！？　きゃあああああああ～～～～～～ッ！！！！！」

それは騎士の目玉だった。ゾワッと全身総毛立ったわたしは目玉をポイした。ルシルは涙を流しながら叫んでるわたしを気にする風もなく、騎士の死体に近寄って「シャル！　脳を探せ！」って指示してきた。

「の・・・！？　脳！？　そんなのＮｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ　！！
馬っっっ鹿じゃないの！？　乙女に脳を探せって！？　鬼ぃ～！
悪魔ぁ～！」

さすがに怒る。グロに耐性があるって思われてたことに怒る。心霊は大丈夫だけど、やっぱりグロはダメなのだ。わたしだってちゃんと乙女なんだよ、こんちくしょう～。

「この騎士、首から下が機械なんだよ！　ひょっとすると・・・暗殺者集団は、プライソンの手によって生み出されたサイボーグからも知れないんだ！」

「へ・・・？」

判明していたプライソンのアジトはもう調べ尽くした。その過程で人造魔導師やサイボーグの素体だった人たちを救出・保護した。調査の結果、素体予定だった人は全員保護したのは確定していたはず。

「そしてもし、生体部品が1つも無かった場合、それはサイボーグではなくアンドロイドだという可能性にもなる。正直、これほどの実力を持つ騎士が量産されているかもしれないとなると、末恐ろしいぞ」

「っ・・・！」

これまでの暗殺犯の仕出かしてきた事を思い返して、別の意味でまた悪寒を感じた。グロは嫌だけど、「判った。脳みそ探すよ！」って床を見回す。それで今さら気付いたんだけど、床に散らばってるのは機械部品ばかりで、さっきの目玉もよく見れば本物じゃない人工物。

それからアンバー地上本部の事後処理班が到着するまで、ルシルと2人で何か暗殺者集団の手掛かりが無いかを調べてみたけど、脳みそのような生体部品は欠片すら発見できなくて、ＡＩチップの破片も無かった。

「ナイト1・イリス、ナイト2・ルシル。これよりシャーリーンに帰艦する。転送お願い」

『了解です。お疲れ様でした。転送ポートを開くので、そのままでお待ち下さい』

「了解。・・・ルシル、お疲れ」

「ああ。お疲れ様、シャル」

隣に立つルシルとコツンと拳を突き合わせた。転送の光に包まれたわたし達は、シャーリーンのエントランスポートへ転送完了。そして「進路、本局」ってブリッジに居る操舵手に指示を出して、ブリーフィングルームへ。

「はい。みんなお疲れ様〜！」

角の丸い長テーブルに着いてる戦闘組のルミナ、クラリス、セレス、ミヤビに労いの言葉を掛けて、ルミナ達からの「お疲れ様でした」を受けつつ上座の席にわたしは座って、右隣の席にルシルが座る。

「みんなのおかげで、今回も後続隊が設立される前に事件を解決できた。んじゃ、デブリーフィングを始めようか」

今回の軌道エレベータ・イーシャの占拠犯グループは無事に全員逮捕できたし、人質もみんな救出に成功。でもここで、例の暗殺集団の内2人が姿を見せたわけだけど・・・。

「――アンドレアルフスをバラバラに斬り捨て、スキュラのアルファを殺害した暗殺者が、まさかプライソン製のサイボーグかアンドロイドだったなんて・・・」

1人はルミナの言うように圧倒的な戦闘力を誇ってた暗殺者・風の騎士。でも彼は、ルシルに捕縛されると自分から他の暗殺者の情報が漏れないようにするためか、頭を吹っ飛ばすっていう自爆を図った。これは結構な痛手だ。

「もう1人の暗殺者は、スキュラの次女ベータを殺害されたと思われる砲撃手ね」

「素顔はバッチリ捉えることが出来たし、ミッド式の魔導師であることも確認できた。騎士がそうだったように、コイツもサイボーグかアンドロイドかな」

セレスがテーブルの中央にモニターを展開し、砲撃手の素顔が露わになったシーンの映像を流した。真っ先に反応したのは「なんだと・・・！？」って席から勢いよく立ちあがったルシルだった。わたし達の視線が一斉にルシルに向けられる。

「ルシル副隊長。もしかしてお知り合いなのですか・・・？」

ミヤビの問いに・・・

「間違いない、・・・ティーダ・ランスター一等空尉・・・。ティアナの兄だ」

ルシルが信じられないって目を見張って、ミヤビへの返答じゃなくうわ言のようにそう言った。

Ｅｐｉｃａ３－Ａマリアージュ事件～Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

今日と明日とで非番な私と幼馴染のアンジェリエは、ミッドの中央区画・首都クラナガンまで足を運んで、久しぶりの休暇を満喫していた。ウィンドウショッピングを堪能して、ちょうど昼時になったことでカフェテラスに入店した。夏真っ盛りだけど今日はさほど暑くはなく、風も気持ち良くてテラス席でおすすめだというサンドイッチセットを注文。

「次はどこへ行こうか、アンジェ」

「そうですね～。今度は購入すると決めてキープしていた物を購入するために、改めてそのお店を回りましょう」

「時間的に始めても問題ないか」

ということで、ウィンドウショッピング巡りしていた際に気に入った服や小物を、今度は見て楽しむのじゃなくて購入するためにもう一度店を回ることに。サンドイッチを美味しく頂きながら、お互いに気に入った服などの話をしていると・・・

「トリシュ、どうしましょう」

アンジェが、私の背後を見ながらそう訊ねてきた。よほど混乱して

いるみたいで、サンドイッチを口に咥えたままという、少々お行儀の悪いことをしてしまってる。学生の頃からマナーには人一倍気を使っていたアンジェがそうなる事態。一体どれほどの衝撃が私の背後にあるのか、ドキドキしながら振り向いてみる。

「？・・・っ！！」

最初は行き交いしている家族やカップルなどで判らなかったけれど、その中で見知った髪型の女性を視界に捉えることが出来て、ビクッと肩を跳ねさせさせてしまう。外に向かって少し跳ねている緋色の長い髪。服装はいつも見慣れている修道服ではなくて、ブラウスにスキニーパンツという私服姿。私たちが所属する教会騎士団の少数精鋭の最強騎士隊、銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼの隊長で、剣騎士の頂点に立つシュベーアトパラディン・・・。

「「シスター・プラダマンテ・・・！」」

そのお人が、若い男性と2人で歩いていた。とても綺麗なブロンドのアシンメトリーヘア、チラリと見えた金色の瞳。その男性の身体的特徴を見て、ふと何年か前に、シスターに恋人がいる説という恋話を聞かされたのを思い出した。

・―・―・回想なのです・―・―・

自分たちで手作りした料理を持ち寄って、教会本部の庭園で私、イリス、クラリス、アンジェの4人で、各隊の隊長就任のお祝いパーティをささやかながら開いていた。イリスとアンジェは普通に美味

しいんだけど、私とクラリスは子供でも作れる簡単なサンドイッチやハンバーガーを持参。

――トリシュお嬢さま。ルシリオン様を射止めるには、まずは胃袋を掴みましょう。殿方はやはり、女性の手料理を食べたいものなのです――

ウチのメイド、ディナスがそう言っていたけど、ルシル様と結婚したとしても共働きで忙しいだろうし、何よりディナスという料理人も居てくれるし。ルシル様も美味しくない私の料理よりは、ディナスの料理の方が好きだって言うだろうし。

（イリスも仲間だと思っていたのに・・・）

重箱なる何段重ねのお弁当箱に、いろんな種類の料理が収められていた。クラリスも種類豊富な手作りクッキーを持って来てくれた。イリスの家にもプロにも負けないメイドが何人も居るし、彼女がここまでの料理を作れるなんて・・・。さらに言えば、クラリスすらにも料理の腕で負けていることに、少なからずショックを隠せないでいる。

「やっぱり私も、何かしらの料理を覚えた方がいいのかな・・・？」

エビマヨというイリスの料理を一口いただいて、真っ先に抱いた思いがそれだった。ただエビをマヨネーズで和えただけなのに、こんなにも美味しい。

「そりゃそうでしょうよ。いつか結婚して、子供を産んで、夫と子供に美味しい料理を食べさせてあげる。ルシルの料理の腕も超絶だし、一緒にキッチンになって共同調理とかも～　」

イリスが両手を赤く染まった頬に添えて、ウネウネと体をくねらせた。私もイメージとして、エプロン姿の私とルシル様がキッチンに立ち、ルシル様との間に出来た幼い男の子と女の子の兄妹がニコニコしながらご飯を待ってる姿を思い浮かべる。

「・・・いい。うん、いい！」

もっと早くに思い至りそうな未来予想図。でもこれでやる気は出た。帰ったら早速ディナスに教えてもらおう。

「イリスは想い人の為に料理の腕を上げたのは判ったけど、クラリスはどうしてこんなにお菓子作りが上手なの？　も、もしかしてクラリスも・・・好きな男性が居たり・・・するの？」

グミがトッピングされたクッキーを1つ手にとって、はむっ、と一口齧る。お店に出しても十分通用する美味しさ。これは趣味だけで到達できるレベルではない。ならイリスのように、そしてこれからの私のように、誰かの為にって・・・。

「好きな人はいる」

「「「いるの！？」」」

私やイリス、これまで黙って食してたアンジェまでもが椅子から立ち上がって訊き返した。いや本当に驚いた。クラリスって特に異性関係の話も噂も聞かないし・・・。

「驚きました。クラリスにも好きな殿方がいるのですね。差し支えなければ、どなたか教えて下さいません？」

アンジェが目をキラキラさせながらクラリスに訊ねる。何気に恋話が好きなアンジェだけど、特に仲の良い私たちの想い人がルシル様だと知っているから、そんなに食いついてはこないの。

「私はここに居るみんなが好き。イリス、トリシュ、アンジェ。今は居ないけどルミナも。昔から一緒に居た、このみんなが好き」

「「「クラリス・・・！」」」

まさかクラリスに感動させられるなんて思いもしなかった（何気に失礼だけれど）から、私たちはクラリスを抱きしめた。それからクラリスの抱き心地を堪能した後、お菓子作りは自分が食べるためだと聞かされて、やっぱり、と苦笑して元の席に座る。

「逆に訊くけど、アンジェはいないの？　好きな人・・・？」

今度はクラリスがアンジェにそう訊ねた。アンジェの恋の噂もそう言えば聞いたことが無い。私たちの視線を一手に引き受けたアンジェは「残念ながら。生まれてこの方、初恋すらまだです」って嘆息した。

「まぁアンジェってわたし達の中で、特に高嶺の花っぽいもんね～」

「確かに。一応、私たちみんな、ザンクト・オルフェンを統べるフライハイト家と六家のお嬢様なのに、一番のお嬢様っぽいのはアンジェだから」

イリスとクラリスの話し方からすると「私も2人と同じガサツだと？」と言われているような気がしたからジトっと2人を見ると、「アンジェよりはまぁ・・・」と目を逸らしながらもそう答えた。確かにアンジェに比べれば立ち居振る舞い、女性らしさは負けてはいると思うけど・・・。

「イリスとクラリスと同格というのは、かなりショックかもしれない・・・」

「トリシュ、それどういう意味？」

「仕方ないよ、イリス。実際にガサツだから、私たち」

ガックリ肩を落とすイリスとクラリスに「ごめんなさい」と思わず謝ってしまった。まぁこんな暗い雰囲気だったけど、すぐに明るく楽しく談笑を始める。それが幼馴染というものでしょう。

「――あ、さっきの恋話で思い出したんだけど。シスター・プラダマンテに恋人がいるみたいだよ」

「「「えぇッ！！？」」」

イリスの突拍子もない話に私たちは目を丸くした。シスター・プラダマンテ。とても壮麗で強くて格好いい女性であるにも拘らず男性の影は一切見えず。何故シスターが結婚出来ないのか、教会騎士団の七不思議の1つとして数えられているけど・・・。

「まっさか～」

「ありえない」

「夢を見たのでは？」

クラリス、私、アンジェとそう返すと、イリスが「割と酷い事を言ってるってこと、自覚した方がいいよ、あなた達・・・」と言って嘆息した。

・―・―・終わりです・―・―・

あの時に聞いていた特徴と一致する男性とシスターは、肩が引っ付きそうな程に寄り添って歩いていた。あの話を聞いた日からシスターに確認する勇気も無かった私たちは、今日という日に実際に目で見るまで忘れていた。

「恋人・・・なのでしょうか？」

「仲慎ましいという様子でもなかったような気がする・・・」

恋人というよりは仕事仲間と言った方がしっくりくる。以前ルシル様に教えていただいた話を想いｆｓづ。心理学におけるパーソナルスペースというものでは、距離が０ｃｍから４５ｃｍ以内の男女は、恋人であることが多いとのこと。シスターと件の男性の距離は、目測だったけど１０ｃｍ以内。前者の距離。でも恋人とは思えない雰囲気だった。

「挨拶に行った方がよろしいでしょうか？」

「あ、それはやめておいた方が。恋人にしろ仕事仲間にしろ、お邪魔するのは邪推だと思う」

もし本当に恋人同士でデート中だとすれば、それを妨害されることがどれだけ恨めしい事か。というわけで何も見なかったとして、シスターのデート？のお邪魔はしないことに。

「「ごちそうさまでした」」

昼食を終え、食事中に立てた予定通りに狙っていた商品を購入するべく、これまで回って来ていた店頭巡りを開始。夏の連休中に海に遊びに行こうと計画しているため、新しい水着やサンダル、小物などを購入しに行く。

キープしていた水着などはまだ残っていて安心した。アンジェはその綺麗なスタイルを隠すようなワンピースタイプで、フリルスカートが可愛い。ちなみに私のは、フレアトップのバンドゥビキニ。胸のサイズが残念な私には、フリルがどうしても欲しいのです・・・

（泣）

「お目当ての水着も無事に買えたし。次は・・・――」

お店を出たところで、ドォーン！と爆発音と衝撃、遅れて上がる「きゃあああ！」という悲鳴が、ここ店頭が立ち並ぶストリート街に轟いた。私とアンジェは黒煙を上がるのを視認して、爆発現場である背の高いビルへと駆ける。

「アンジェ！」

「ええ！　まずはこのエリア一帯を担当する現地の陸士隊と合流しましょう！」

「ヤヴォール。教会騎士がザンクト・オルフェン以外で勝手するのは、さすがにまずいでから」

管理局と騎士団は、お互いのテリトリー内にて無断で捜査・追跡・戦闘する行為は禁止である、と協定を結んでいる。とは言え、現地の陸士隊や事件・事故の捜査官と協力体制を敷くことを承認し合えば、お互いのテリトリーでの行動も可能になる。退避する人々に合い間を逆流するように走る中、「魔力反応・・・・！」があることが判り、さらに「爆発音、連続！」となれば・・・

「「戦闘中・・・・！」」

ということになる。両脚に魔力を付加して、目的のビルへと到着し

たと同時に黒煙が上がる階層目掛けて跳ぶ。そして割れた大窓よりビル内に突入する。オフィスビルだったようで、屋内はデスクがやたらと多いけれど爆発の影響か、今は部屋の片隅に全て追いやられている。

「あの娘は・・・確か」

部屋の中で交戦中なのは2人の少女。1人はバイザーを付けた娘で、もう1人はプライソン戦役で顔を合わせたことのある娘。以前見た時はツインテールで幼っぽさがあったけど、今はストレートにしているからかなり大人っぽくなっている。彼女の名前は確か「ティアナ・ランスター二等陸士・・・？」だったはず。あぁ、違う。今は執務官だと、イリスやルシル様から聞いていたのを思い出す。

「ランスター執務官！」

「え？・・・あっ、騎士トリシュタン、騎士アンジェリエ・・・！？」

「新手か」

バイザーの娘がランスター執務官から後退することで距離を空ける。このまま逃がすわけにはいかない。事後承諾になるけれど、待機形態である十字架型のイヤリング・"イゾルデ・ツヴァイト"を、双剣形態の「フェヒターフォルム！」で起動させつつ、ショートワンピース、ショートジャケット、オーバースカート、スパッツという騎士甲冑姿へと変身。

「ジークファーネ・ヘルト！」

アンジェのバレッタに付いている宝石――"ジークファーネ・ヘルト"の待機形態が発光。腰の方には大きなリボンがあしらわれた、裾が前後共に燕尾なノースリーブのロングジャケット、スキニーパンツ、エンジニアブーツという騎士甲冑姿に変身。左手に携えるのは２ｍのポール。片側の先方３０ｃｍだけが一回り太く、その先端には槍の穂が付いていて一見して槍に見える。

「ランスター執務官！　確保に協力します！」

「え、あ、よろしくお願いします！　そいつ、自爆をするので注意してください！」

口頭だけれどしっかりと協力し合うことを確認した。基本的に執務官が事件捜査の責任者になるから、ランスター執務官と協力を結べば問題は無いはず。しかしそれにしても「自爆・・・！」をするとなると・・・。

「人ではない、か」

「おそらく！」

「アンジェ！」

「ええ！」

見た目は人でも自爆するような奴となると、かのプライソン戦役の投入されたＬＡＳを思い起こさせる。けれど今目の前に居るバイザー娘が、新手か、と言葉を発したのは耳にしている。知性ある人型兵器であり、自爆もする。教会図書館で、似たような記述を読んだことがあるような・・・。

（考えるのはとりあえず後。今は・・・！）

一足飛びでバイザー娘へ突撃する中・・・

「グリッツェンフェッセルン！」

"ジークファーネ"の一回り太い部分より朱色に輝く光の帯が６枚と展開され、私を追い抜いてそのままバイザー娘を拘束しようとしたけど、彼女は近くに転がっていた机や椅子を拾い上げ、迫り来る帯に投げつけた。結果、「あ・・・！」帯がバイザー娘ではなく机と椅子に絡みついた。

――封縛一閃――

「せいっ！！」

残念だけどそれに構わず私はバイザー娘に最接近して、環状魔法陣が展開されている双剣・"イゾルデ"を振るう。机などを投げていた体勢のままだったバイザー娘が回避に動くけれど、それより早く切っ先を掠る程度に当てる。

「っ・・・ぐぅ！？」

すると環状魔法陣が剣身からバイザー娘へと移動し、急速に狭まって彼女を直立姿勢で拘束した。両腕がピッタリ体の側面に引っ付いていることで、体のバランスが取りづらいのかその場に跪いた。

「ランスター執務官。確保完了です」

「あ、ありがとうございますっ、騎士トリシュタン、騎士アンジェリエ！」

万が一に拘束を解除されてしまった場合を考え、私とアンジェでバイザー娘を左右から挟み込んで警戒態勢。ランスター執務官が歩み寄って来る中・・・

――トランスファーゲート――

「・・・っ！？　お２人と――」

ランスター執務官が目を見開き、そこまで言いかけた時にはすでに私たちは振り向きざまに背後に向かって私は右の"イゾルデ"による斬撃を、アンジェは刺突攻撃を繰り出す。視界の端に捉えたのは、"スキュラ"暗殺犯と思しき仮面を付けた女性。目出し帽に狐の仮面、黒のセーラー服。武装は腰のベルトに掛けた短いステッキ型のデバイス。ミッド式の魔導師か。

「え・・・！？」

「なに・・・・！？」

狐面の女性は右手の五指で"イゾルデ"を白刃取りをし、左手の五指で"ジークファーネ"の穂を白刃取りした。驚くのはそれだけでなく、「指力が・・・・！」すごい所為で押すことも引くことも出来ない。背格好からして２０代と思われるけど、おそろしく力が強い。

「本局執務官、ティアナ・ランスターです！　手を挙げて武装を解除しなさい！」

ランスター執務官が拳銃型デバイスの銃口を狐面に向けた。すると狐面は私たちのデバイスから手を離し、私たちは一歩後退しながらもデバイスの先を向けたままでいる。

「仮面を外し、名前と出身世界、あなた達の目的を述べなさい」

「・・・ズィプツェーンテ」

――フリーレンドルヒ・ツヴァイ――

「「「っ！」」」

狐面の周囲に展開される氷で出来た短剣型の魔力弾、その数約５０本。それらが展開された直後に一斉射出されて来た。私は連撃で斬り刻み、アンジェは"ジークファーネ"をバトンのように高速回転させて弾き返し、ランスター執務官は半球状のバリアを張って防御。

それぞれの迎撃によって短剣の直撃は防げたけれど、短剣すべてが炸裂して視界を封じる白煙と化した。

――トランスファーゲート――

「しまった・・・！　これでは何も・・・・！」

「トリシュ！」

「ええ、判っている！」

両手に持つ双剣の柄頭を連結して、大弓形態シュッツェフォルムへと変形。切っ先同士を繋ぐ魔力弦に魔力の矢を番え・・・

――穿ち爆ぜる風巻きの咬釘――

「往け！」

狐面の居た場所の床に向かって矢を射る。射出時の衝撃波で私の周囲の白煙が吹き飛び、着弾と同時に爆風となったことでこのフロア全ての白煙が消し飛んだ。視界はハッキリとしたけど、それと同時に「逃がした・・・！」とランスター執務官が悔しげに漏らしたように、狐面の女性とバイザーの少女の姿が消え失せていた。

†††Ｓｉｄｅトリシュタン⇒ティアナ†††

私が執務官となってから何度目かの任務となった今回の連続殺人事

件。最初の事件は今から3ヵ月前。第６０管理世界フォルスの遺跡地帯で発生した殺人事件。事件は1件だけじゃなく、６件にまで上った。さらに第3管理世界ヴァイゼンに舞台を移し、４件の殺人を犯している。

（そして今日、ここ第1世界ミッドチルダにまで殺人事件が起きる事に・・・）

被害者の共通点は、遺跡研究や古代歴史の学者ということ。死因もまた共通で、鋭利な刃物による喉を貫通する刺傷、もしくは爆破による爆死。最初に拉致されて、何らかの脅迫を受けた後、被害者たちは死亡している。偶然目撃者になったスバルの話によると、ある被害者は殺害されたんじゃなく、自ら喉に刃物を突き立てて自殺したのこと。

（でも被害者たちは、いやだ、死にたくない、殺さないでくれ、と懇願しながら喉に刃物を突き立てたらしいし。精神・肉体操作されている可能性もアリと考えられている。だからこその殺人事件判定だ）

脅迫の内容などは判ってはいない。唯一判明しているのは、加害者の身なりと名前。ついさっきまで相対していたバイザーを装着した少女で、マリアージュという名前。

（私見だけど、マリアージュは人ではなく量産型の兵器。しかも斃されること、死ぬ事を前提に造られてる・・・。体を燃焼液化させての自爆。被害者たちの死因の1つである爆死は、おそらくマリア

ージュの自爆に巻き込まれたものと見ていい）

ここでやるべき事はもう何も無いから、失敗に終わったけどマリアージュ確保に協力してもらった騎士トリシュタンや騎士アンジェリエと一緒にオフィスビルから出たところで・・・

「ティアナ！」

「ギンガさん！」

「・・・あ、騎士トリシュタン、騎士アンジェリエ！」

ミッドで共同捜査をしてもらえることになってるギンガさんに声を掛けられて側に駆け寄る中、ギンガさんが私の後ろに居たお2人に気付いて敬礼をした。お2人は局員じゃないけど、教会騎士としての捜査能力や戦闘能力は、プライソン戦役の活躍からこれまで起きた事件もあって局内でもかなり有名だ。

「あの、お2人はここで・・・？」

「ギンガさん。このビルに現れたマリアージュ2体の内、1体の自爆を見て駆けつけてくれたんです」

ビルのオフィスで起こったことをギンガさんに伝える。遺跡研究・古代歴史の学者の繋がりを調べて、被害者の1人と交友関係にあった人物を探り当てた。その人物は正に今まで居たビルの中に居るとのことで訪ねて来たわけだけど、その人物の代わりにマリアージュ

が2体と居た。

「最初に遭遇した1体はバインドで確保したんですけど、燃焼液化して自爆をしました」

「自爆！？　えっ、それってもしかしてマリアージュって人間じゃない・・・！？」

「おそらくは」

そして2体目の出現と交戦時に、騎士トリシュタンと騎士アンジェリエのお2人が来てくれたというわけだ。ギンガさんに先ほど考えていた私見を伝えると、「なるほど。たぶん、それで合ってると思う」って納得してくれた。そんなギンガさんから騎士トリシュタンと騎士アンジェリエの方へと視線を移すと、「マリアージュ・・・」という名前に反応してた。

「あの、何かご存知だったりしますか？」

「ティアナ。アレ、殺人現場に記されてた詩篇について、何か訊いてみたら・・・」

ギンガさんにそう提案された私は、お2人が古代ベルカ時代より存在している名家のお嬢様だったってことを思い出した。シャルさんもそうだけど、これってかなりすごいコネクションじゃない？って身震いする。小首を傾げるお2人に、いま捜査している事件をあらましを伝えた。

「世界では今そのような事が・・・」

「それで、その詩篇というのは・・・？」

「あ、はい。読み上げますね。・・・詩編の6。かくして王の帰還は成されることなく、大いなる王とそのしもべ達は闇の狭間で眠りについた。逃げ延びたしもべは、王とその軍勢を捜し彷徨い歩く。・・・です」

ある被害者が死の間際に自らの血で綴ったダイイングメッセージだ。騎士アンジェリエが「その詩篇、教会の大図書館で読んだ記憶があります」と、騎士トリシュタンも「あぁ、うん。私もある。オーディン様とエリーゼ様の手記の中に・・・」と、とても有用な情報を教えてくれた。

「あの、他にもイクスという、地名か人名、物名に心当たりは・・・？」

ギンガさんが訊ねた、イクス、という単語にお2人が「あっ！」と何かを思い出したように声を出した。

「冥王イクスヴェリアですね！」

「マリアージュも、イクスヴェリア陛下の固有戦力の名前です！」

騎士トリシュタン達と会わなければ、無限書庫に調査を依頼しよう

としてた。でもその必要はなくなったみたい。私は「出来れば詳しくお願いします！」と頭を下げた。

「頭を上げてください。冥府の炎王イクスヴェリア、ベルカに関連する事柄であれば私たちにも関係があります」

「この事を、教会本部に連絡しても良いですか？」

騎士アンジェにそう訊かれた私は「どうぞ」と答える。古代ベルカの王が関係してるなら、どの道聖王教会にもこの話が行くはず。遅いか早いかの違いだ。騎士アンジェリエが席を外して教会本部に連絡をつけている間、騎士トリシュタンからイクスヴェリアやマリアージュについて話を聴く。

「冥王イクスヴェリア陛下は、マリアージュという死体を利用した固有戦力を有するお方らしいですね。陛下はマリアージュの核となる物を生成する能力を持ち、戦場で散った騎士たちの死体に核を埋め込んで操るそうです。それゆえに冥王」

「ＬＡＳと似たような戦力ですね・・・」

「ですが戦闘能力はかなり高く、人語を介すとなればＬＡＳ以上の高性能ですよ。腕を刃物などに変化させ、燃焼液化して自爆もしますし」

ＬＡＳも自爆もするし武装を装備していたから、当時の私にとっては十分脅威な戦力だった。でもマリアージュの方が本能的にヤバい

って気がするのよね。

「マリアージュが稼働しているということは、イクスヴェリア陛下も目を覚ましているようです」

「あの、騎士トリシュタン。今さらなんですけど、古代ベルカ時代の王が現代にまで生き残っているとは考えられないんですが・・・」

「確かにそうですね・・・」

「詳細は私にも判らないですけど、目覚めと眠りを周期的に繰り返すようなんですね。そういう体質なのかも知りませんが、現代で目覚めたのなら聖王教会はお出迎えをしなくては。オーディン様とは戦友らしいので、セインテスト家とシュテルンベルク家の名を出せば、きっとお話を聞いて頂けるはず」

グッと握り拳を作る騎士トリシュタン。そこに騎士アンジェリエが「お待たせしました」と戻って来た。

「トラバント団長へは通信が繋がらなかったため、フライハイト教皇聖下へお伝えしたところ、イクスヴェリア陛下を教会本部へお連れするようにと、私とトリシュに勅命が下りました」

「そう。・・・ランスター執務官。本件へ本格的に協力したいのですがよろしいですか？　それとイクスヴェリア陛下の身柄は教会預かりにして頂きたいです」

騎士トリシュタンと騎士アンジェリエの綺麗な瞳が私を見た。そして私はギンガさんを見る。すると「本件の担当はティアナだから、あなたが決めて」と頷いてくれた。

「判りました。お2人にも協力して頂きます。が、お2人にはマリアージュの迎撃を担当してもらうことになると思いますが・・・」

「「お任せを！」」

騎士トリシュタンと騎士アンジェリエは共にS＋ランク（3年前にそう聞いてるから、今はもっと上かも）で、実力的には申し分なさ過ぎる。それにイクスヴェリア陛下とお会いした時、騎士トリシュタンが側に居てくれた方が、話もし易いと思う。
お2人にさらにイクスヴェリア陛下の外見、マリアージュの1体が漏らしたトレディアなどの話を聞こうとした時、私に通信が入ったことを知らせるコール音が鳴った。

「ちょっとすいません。・・・はい、こちらティアナ・ランスター」

『やあ、ティアナ。久しぶりだな』

ギンガさん達に一言断ってから通信を繋げてモニターを展開すると、「え？　ルシルさん！？」が映った。ドキッと心臓が跳ねた。もちろん異性だからじゃない。ルシルさんは局内の不正などを暴く調査部の調査官だ。そんな人から個人回線で通信となると、まぁ恐怖なわけで・・・。

「お久しぶりです、ルシルさん。何かありました・・・？」

『ああ。今、本局に居るんだけど、少し時間を貰えないだろうか。出来れば2人きりで話がしたい』

いよいよ以って心臓が早鐘を打つ。ルシルさん、マジな表情なんだもん。執務官として何かまずい事でもやっちゃったのかと、必死に思考を巡らせる。

「ちょっと待ってください！　ルシル様、浮気ですか！？　浮気なのですか！？　私、イリス、はやてと3人から愛の告白を受けておきながら！　男の甲斐性で済ますレベルではありません！　若さですか！？　やはり若さですか！？　２０代はもはやおばさんですか！？」

騎士トリシュタンが血相を変えて私とモニターの間に割り込んできた。ルシルさんが『トリシュ！？　いやそうじゃない。というか、すぐにそっち方面に勘繰るのはやめてくれ』って嘆息しながら否定した。うーん、大変だな～、ルシルさんは相変わらず。

「あのルシルさん。申し訳ないですが、今ある事件を捜査中なのでしばらくミッドから離れられません」

『そうか・・・。通信やメールなどで済ませるような内容じゃないからな～・・・。判った。事件解決の折、また俺に連絡をしてくれないか？』

「判りました」

『トリシュ。またちゃんと話そう』

「はい　」

ルシルさんとの通信が切れ、私は改めてお２人にいろいろと訊ねることにした。

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

アンバーから本局へと戻って来た俺たち特務零課・特殊機動戦闘騎隊は、俺とシャルの２人だけで回収した暗殺者の遺体を第零技術部へと運んで来た。

「それじゃあ、すぐに調査をしてみるから、少しの間だけ待っててね」

「うん、お願いね、すずか」

第零技術部、通称スカラボの主である月村すずか。俺たちチーム海鳴の１人だ。彼女は、横たえられた遺体乗せられたストレッチャーを、「ウーノさん、ドゥーエさん、ストレッチャーをラボへとお願いします」と、シスターズの長女ウーノと次女ドゥーエに託した。

「ええ」

「判ったわ」

そう頷き返した２人はストレッチャーを奥の部屋へと運んで行った。そしてすずかも「ごゆっくり～」と俺たちに手を振って、奥の部屋と入って行った。シャルも「ありがとう～」と手を振り返し、俺は

「ああ」と頷き返した。

「・・・さて。イチャイチャする　」

俺の隣に座っていたシャルが身を寄せ、その豊満な胸を俺の左腕にくっ付けて来た。だから「馬鹿を言え。すずかの今のセリフはそういう意味じゃないぞ」と、シャルの頭に軽く拳骨を降ろした。

「あたっ？　もう。最後までやろうってことじゃないんだからさ～。もう少しは私に夢を見させてもいいんじゃない？」

頬を膨らませながら居住まいを直したシャル。そうやって夢を見せ、さらに想いを募らせてしまうのは逆に可哀想だ。だったら突き放し続ける方がシャルやはやて達の為になる。とは思うんだが・・・。シャルはソファから立ち、ここ応接室から去ろうとした。

「ん？　どこへ行くんだ？」

「お花を摘みに～」

トイレの隠語を答えとして俺に返し、シャルは出て行った。彼女の居ない今が、ちょっとした機会かも知れないな。通信端末を起動し、ある娘へと通信を繋げる。わりとすぐに『はい、こちらティアナ・ランスター』と通信が繋がった。

「やあ、ティアナ。久しぶりだな」

ツインテールという髪形をやめ、ストレートにしたことで随分と大人っぽくなっているティアナ。俺からの個人回線を通しての通信ということでか、『え？　ルシルさん！？』と目を丸くして驚いている。

『お久しぶりです、ルシルさん。何かありました・・・？』

『ああ。今、本局に居るんだけど、少し時間を貰えないだろうか。出来れば2人きりで話がしたい』

例の"スキュラ"暗殺の被疑者の1人の中に、ティアナの兄であるティーダ・ランスターが居る。魔力パターンを解析した結果、何かしらの施術を受けていると思われ、０，１～０，９％の差異はあるがまず本物と見て良いと判断が下された。

（その事を通信やメッセージで伝えるわけにはいかないだろう・・・）

ティアナからの返答を待とうとしたところで・・・

『ちょっと待ってください！　ルシル様、浮気ですか！？　浮気なのですか！？　私、イリス、はやての3人から愛の告白を受けておきながら！　浮気は男の甲斐性～♪で済ますレベルではありません！　若さですか！？　やはり若さですか！？　２０代はもはやおばさんですか！？』

ティアナの前に躍り出て来たのは「トリシュ！？」だった。モニタ

ーに食いつくように顔を寄せ、微塵も思っていないような事を並べ立てまくってる。そもそも何故そこに居て、騎士甲冑姿なのかも判らないんだが・・・。

「いやそうじゃない。というか、すぐにそっち方面に勘繰るのはやめてくれ」

トリシュもまたシャル化してきたな～。最初の犠牲者はルミナだったが、今度はトリシュだ。そんなトリシュの言葉に呆れていると・・・

『あのルシルさん。申し訳ないですが、今ある事件を捜査中なのでしばらくミッドから離れられません』

ティアナが申し訳なさそうに目を伏せた。今のティアナは執務官で、世界をいろいろと巡っているわけだが。彼女も防護服を着用しているところを見ると、もしかしたらトリシュも事件の捜査に関わっているのかも知れないな。

「そうか・・・。通信やメールなどで済ませるような内容じゃないからな～・・・。判った。事件解決の折、また俺に連絡をしてくれないか？」

『判りました』

だったら事件解決後にもう一度話そうと判断。頷き返してくれたティアナの側に居るトリシュにも「トリシュ。またちゃんと話そう」

と伝えておく。すると彼女は満面な笑みを浮かべて『はい　』力強く頷き返した。

「ふぅ・・・」

通信を切ると、「で？　浮気なの？」とドアが開くと同時に「シャル・・・」からもそう訊かれたため、俺は「判り切った質問をするのは愚だと思うが？」と返す。

「だよね♪」

まぁすぐに機嫌を良くして、俺の座るソファに回り込んで来た彼女は「よいしょ　」と、俺の膝の上に座ろうとした。尻が最後まで乗る前に「待て、待つんだ」と腰を両手で鷲掴んで止めさせる。

「ひゃん！」

「よっこらせと」

シャルをそのままにした上で俺は席をズレてから、今まで座っていたところにシャルを降ろす。彼女は「いいじゃない、膝の上に座るくらい」と頬を膨らませた。シャルの部隊に入ってからというもの、肉体的なスキンシップが激しくなった。何度注意しても止めようともしない。

「ダメだ」

「はやてへの義理の為？」

「俺なんかを好きになった君たちの未来の為だ」

「・・・なるほど。堅物というか、律義というか、くそ真面目というか・・・。ま、そんなあなただからこそ、私やイリス、はやて、トリシュも好きになっちゃったわけだけど　」

一人称が僅かに変化し、自身を指しながらも"私"と"イリス"という風に分けたシャル。これはまた随分と「久しぶり」じゃないか。

「ええ、本当に。ここ数年はイリスも精神的に安定していたし。前世の私が表に出るのはダメだって思ってさ」

彼女はシャルロッテ・フライハイト。イリスの前世であり、かつては俺の敵であり、同僚であり、親友だった女性だ。シャルの言うように、５年ほど彼女がイリスの表層意識として上がって来ることはなく、ひょっとしてもう二度と逢えないんじゃないかと思っていたわけだが・・・。

「じゃあ今日は一体何をしに？」

「それよ、それ。ルシル！　とりあえず私の頭を撫でなさい！」

「ああ！・・・はあ？」

シャルが「ん！」と頭頂部を俺に向けてきたから、「よしよし」と

彼女の頭を撫でてやる。手を放そうとすると、「私が、もういい、と言うまで続けて～♪」と猫なで声でリクエスト。久しぶりの再会だということで、俺はリクエストに答えて彼女が満足するまで頭を撫でることにした。

「はぁ。やっぱり好きな人に撫でてもらうのは気持ちが良い～♪」

「そうか」

「ねえ、ルシル。ルシルがこれまでと同じように対人契約で残ることが出来ない。それは解ってるよ。でもさ。何か遺してあげられないの？　あなたとの思い出だけじゃなくて、もっと形のあるものをさ」

「そんなことを言われてもな・・・。その日が訪れるまで稼いだ財産くらいしか遺せないぞ？」

少なくともあと数年は生き残りそうだから、それまでに稼いだ金は相当な額になるだろう。遺産と言うわけだ。だがシャルは納得がいかないのか「違～う。そうじゃないっしょ～」と頭をグリグリする。

「じゃあ一体、何を遺せると？」

「どうせなら子供を遺せばいいじゃない。愛する人との子供なら、きっと――」

また突拍子もない提案をしてきたシャルの言葉を遮るように「喜ぶ

わけないだろうが」と言い放つ。

「俺との間に子を成す？　俺との失恋でいつかはまた、彼女たちも新しい好きな男が出来るだろう。そこに俺との子供が居たら邪魔になってしまうだろうが。それに片親というのも子供が可哀想だ」

彼女たちと子供を成すのは俺だって別に嫌じゃない。俺だって普通の人間だったら、恋をして、結婚をして、家庭を持って、年を取って、そして家族に看取られて逝く、そんな当たり前な生き方を歩みたかった。だが俺は人間じゃない。そして同じ時間を過ごすことが限りなく短い宿命を背負っている。そんな俺との間に子供を成す彼女たちが可哀想だ。

「それでもルシルと結ばれたいと思うよ？」

「たとえそうでも・・・。さっき言ったように失恋から新しい恋が芽生えることだってある」

「じゃあさ。はやてやイリス、トリシュが、自分の知らないところで、自分以外の男と恋に落ちて・・・っていうか、ソイツのものになって悔しくないの？」

頭を上げたシャルが両手で俺の顔を挟み込んで、アザレアピンクに輝く瞳でジッと俺を見詰めてきた。そんな彼女の両手の上から俺も手を添えて、「彼女たちの幸せを願うだけだ」と見つめ返す。先の次元世界のフェイトのように対人契約で残ることも出来ないのなら、俺に出来るのは彼女たちの未来が健やかであるように願い、祈るこ

とだけだ。

「ああもう！　男なら、女の子からの誘いを断らずに、そのままの勢いで食っちゃえよ！」

「食・・・っ！？　なんつう言い方だ！　お前も女性ならばもう少し恥じらいを持つべきだと思うが！？」

「もういいや！　既成事実を作っちゃえば、あなたからも遠慮とかいろいろの抑圧が消えるでしょ！」

「！！？　ちょっ、おま――」

俺をソファに押し倒すとシャルは、「よっこらせ」と腹の上にドスンと座り込んでのマウントポジションを取り、あろうことか制服のジャケットを脱いだ。さらには「待て待て待て！」俺のジャケットのボタンまで外しに掛かる始末。

「やめろと言って・・・って、おい、魔力で身体強化！？　そこまでするかお前は！！」

突き飛ばそうにも今のシャルは身体能力が魔力で強化され、並の膂力ではビクともしない。しかも彼女は自身のブラウスのボタンを外し始めた。開けた胸元からピンク色の下着が見えてしまっている。

（おいおい、さすがにまずいだろう、これ・・・！）

これ以上は好きにさせられない。ならばこちらも本気を出す、と考えたところでプシュッとドアが開く音がした。音がしたのは転送室へと続く側のドアからだ。そっちを仰ぎ見れば、顔を真っ赤にしたすずかと、呆れ顔のウーノとドゥーエの3人だった。

「あの、その、お、お邪魔しましたぁぁぁーーーー！」

すずかが慌てて奥の転送室へと引き返した。そしてウーノは「ここはラブホテルではないわよ？」と嘆息し、ドゥーエは「今すぐお引き取りを♪」と笑顔を浮かべているが、まぁ目が笑っていない。

「違う！　これは・・・！　シャル、退いてくれ！」

「・・・いいところだったのに。・・・ルシル。これだけは忘れないで。あの子たちは何があってもあなたを好きで居続ける。素直になっていいんだよ。あなたも1人の人間なんだから～♪」

シャルが俺の両手を取って、その豊満な胸を掴ませてきた。ドッと嫌な汗が溢れ出た。普通に柔らかく温かい。慌てて引き剥がそうにも強化がまだ効いているらしく、ビクともしない。

「私だって、いつまでもこうやって表に出て来るわけじゃないからさ。・・・あなたの最後の幸せ、私も見てみたいのよ」

シャルがボソボソと何か呟いたようだが、「一体なにをやっているのです！？」ウーノの怒声に掻き消されてしまって聞こえなかった。

「なあ、シャル！　今すぐ俺の手を放してくれ、なっ？」

「・・・・。え？　ルシル・・・？　あれ、わたし・・・？」

一人称がシャルからイリスのものへと戻った。ほんの僅か呆けた後、俺が自身の胸を鷲掴んでいるという状況に気付いたシャルは、「～～～～っ！！？？」一瞬にして顔が真っ赤になり、目が潤み始めてすぐに涙がポロポロ流れ出た。

「きゃあああああああああ――――――ッ！！！！」

「待っ・・・――ぶっ！？」

俺の手首を離し、即座にマウントポジションのままで連続パンチ。しかも魔力で強化されているためすごく痛い。そこで一旦、俺の意識は途切れた。

「・・・ん・・・んぁ・・・？」

次に目を覚ました時、「ゴメンね、ルシル」と謝るシャルの声が耳に届いた。目を開けると彼女の顔がすぐ目の前にあった。どうやら俺は今、シャルの膝枕に頭を置いているようだ。

「なんか生き苦しい・・・？」

「あ、ごめん。鼻血出てたから鼻栓してるの」

鼻の方に手を伸ばすと、丸められているティッシュが鼻の穴２つに突っ込まれていた。鼻血の対処法としては、実はティッシュ詰め込みは間違っているんだがな～。上半身を起こすと、テーブルを挟んだ向こう側のソファには「すずか、ウーノ、ドゥーエ」の３人が腰かけているのが判った。

「すずか、ウーノ、ドゥーエ、先ほどの事は・・・」

「あ、大丈夫。シャルちゃん越しに騎士シャルロッテから事情を聞いたし」

「ええ。話には聞いていましたが、騎士シャルロッテがあそこまで大胆な女性だとは・・・」

「あなたも隅に置けないわね。イリスだけでなく、前世の騎士シャルロッテからも想いを寄せられるなんて」

ドゥーエが楽しそうに流し目で俺を見つつほくそ笑んだ。でもそうか。ちゃんと釈明はしてくれたんだな、アイツは。まぁそれくらいはやってもらわないと割に合わない。

「一応、私の治癒魔法で治したから、傷は残らないよ」

「ありがとう、すずか。世話になった」

「どういたしまして♪　それじゃあルシル君も目を覚ましたことだし、シャルちゃん達が搬送して来た彼について、お話ししようか」

ようやくここスカラボへ来た目的に辿り着けた。シャルと2人して居住まいを直して話を聞く姿勢をとる。ウーノが「まず、彼の機体構造を調べてみたのだけど・・・」とテーブルの上にモニターを4枚と展開。表示されたのは件の暗殺者のレントゲンのようなものや、拾い集めた部品などだ。

「結論から言うと、彼は、プライソン製の機体じゃないよ」

すずかから暗殺者の機体性能がどれだけのものだったかを、モニターを交えて教えてくれた。簡潔に言えば、プライソン製作のサイボーグである"スキュラ"姉妹、そのスペアであるガイノイド、さらにシスターズのスペックを数値化した上で、暗殺者のスペックには遠く及ばないことが判ったとのことだ。

「アルファからのイプシロンと、スペア各機の技術進化を確認してみて、暗殺者の方にはプライソンの技術が何1つとして使われていなかったのよ」

「さらに言えば、暗殺者の機体に使われていた技術は、そのどれもがプライソンの技術以上。これらの状況を見て、暗殺者を開発した科学・技術者は、まず間違いなくプライソンより天才であると思うわ」

ウーノの言葉にシャルが「マジ・・・？」と呟いた。ドクターやプライソン以上の技術力を持つ者など想像も出来ない。ただ、なんとなくだが今回の事件の裏にフィヨルツェンが居るような気がした。

なんのメリットがあるかは判らないが、"エグリゴリ"は必ず巨悪の側に居る。となれば今回もきっと・・・。

「そういうわけで今後も警戒を続けた方がいいと思う。平均出力でS＋ランクの魔力なんて。最大発揮時は、今のルシル君やシャルちゃんのようなSSクラスと同等になるかもしれないから」

「ん。ありがとう、すずか。肝に銘じておくよ」

「今日はありがとう、すずか、ウーノ、ドゥーエ」

暗殺者についての情報はまた後日、纏めて提出してくれるとのことで、俺とシャルはすずか達に感謝を述べてスカラボを後にした。そしてその足で特騎隊のオフィスへと向かう。

「う～ん・・・。今回の暗殺者は雑魚だったけど、これから現れるかも知れない連中はそれ以上の実力者ってわけね」

「だろうな。3年前、戦役時に護衛艦アンドレアルフスをバラバラにしたあの風系魔法の使い手。今日相手にしたあの男とはまた別人であることは判る」

今でもあの映像は忘れない。ああいった真似は俺やシャル、特騎隊のメンバーなら出来ることだから、大して驚くような事じゃない。だが正体不明の魔導師か騎士かが行ったことが問題だ。どこの誰かが判っていれば対策も打てるが、判らない内は何事も後手に回ざるを得ない。

「うん。同じ槍持ちだったけど、直接見てアイツとは違うって判ってたし。ま、遭遇したらどれだけ強かろうが全メンバーとっ捕まえるけど、ね♪」

シャルが右拳を突き出してきたから、「ああ」と俺は左拳を突き出してコツンと打ち合わせた。改めてオフィスへ向かおうとした時、コール音が俺たちの間に鳴り始めた。

「あや？　通信だ。しかも母様から。ルシル、先に行っててていいよ」

「別に急ぎじゃないし。終わるまで待っているよ」

「あはっ♪　そんな優しいルシルが大好き～　」

抱きついて来ようとするシャルの両手から逃れつつ、「早く出ろ、切れるぞ」と注意すると、「おお、そうだった」ようやく通信に出た。

『あ、イリス～♪　ママよ～♪』

いつまでも若く見えるシャルの母・マリアンネさんが展開されたモニターに映る。彼女は俺にも気づき、『あら～、ルシル君♪　次はいつ泊まりに来るの～♪』と手を振ってくれた。シャルの家へは、特騎隊設立祝いのパーティを開いた際に1泊させてもらった。その帰りにも、また泊まりに来てね、と誘われてはいたんだが。もうそんな暇が出来ることもなく、随分と時間が経ってしまった。

「もう、母様。ちゃんと後日、ルシルを招待するから。今は本題にゴーゴー！」

『もう。でもまぁ今は本題の方が重要なのよね。トリシュタンとアンジェリエから、古代ベルカはガレアの王、冥王イクスヴェリアの私兵であるマリアージュが確認された、と連絡を受けたの』

「マリアージュ！？」

「イクスヴェリア・・・！」

イクスヴェリア。本当に懐かしい響きを耳にしたな。彼女と共に過ごした時間はあまりにも短いが、個人的な付き合いも僅かながらにあった戦友だ。

――私の本当の名はイクスヴェリア。フィロメーラは偽名なのです。ごめんなさい。あなたを騙していました――

――永遠の別れとなる前に、あなたにお礼とお別れを告げておきたかったのです。改めて、ありがとうございました。そしてさようなら。どうかあなたの戦いが、あなたの望む形で終わるよう祈っています――

――イクスヴェリア陛下。おやすみなさい。またお逢いしましょう――

――はい。おやすみなさい。いずれまたお逢いしましょう――

イクスヴェリアと過ごした最後の時間が思い起こされる。彼女の頭を撫で、そして彼女の両手で包まれた右手を見る。再会の約束か。当時は、まさかこんな時代まで生き続けるとは思えなかったため、かの約束を果たせる事は二度とないと思っていたが・・・。

（果たすべきなのだろうが、俺の正体を知る人物をこれ以上増やすのも勘弁だな）

アイリは俺を一番に考えてくれているから、あの子から漏れる心配はない。アインスの口封じも完璧だ。俺が存命中の内は、俺の真実は口に出来ない、という条件付けをしているからな。だが、知っているという事実が危ういんだ。

（フォルセティと共に、オーディン・・・と言うよりはセインテスト家の子孫として接するしかないか）

『今のところは私の独断だけれど、イクスヴェリア陛下を教会に招きたいのよ。手が空いていればだけれど、あなた達もミッドに降りて捜索を手伝ってもらいたいの。アンジェリエの話だと、ティアナ・ランスター執務官という局員が、この事件の担当者らしいから』

「おお、ティアナ！　知り合い、友人、戦友だよ、母様！　ね？ルシル！」

シャルに「ああ」と頷き返しながら、先ほどの通信でティアナは、

事件の捜査中、と言っていたのを思い返す。やっぱりトリシュとアンジェも捜査協力していたんだな。

『それで、どうかしら？　私には騎士団を動かす権限が無いから、娘やその友人にしか頼めないのよ』

「ん、判ったよ、母様。わたしとルシルでミッドに降りて捜査協力をするから。アンジェ伝手でティアナに、わたし達も手伝うよ～、って伝えて」

勝手に今後の予定を決められて、「ちょっ・・・！」と止めようとするが「まったく」と諦めた。確かに今日はもう予定は無いからな。我が隊の部隊長の我が儘を聞こうじゃないか。とりあえず「ルミナ達に連絡して、解散するよう伝えておこう」と思う。

『ありがとう、イリス！　ルシル君も　　お礼はたっぷりしてあげるから♪』

ウィンクするマリアンネさんに、シャルが「母様！　いい歳したオバサンがルシルを誘惑しないで！」と怒った。さすがにそれは言い過ぎだぞ、シャル。実年齢ではそうだろうが、見た目ではまだ３０代前半だと言われても信じられる。

『おばっ・・・！　確かにそうだけれども・・・』

母子のそんなやり取りを微笑ましく眺めつつ、「ああ、ルミナか。実はな――」と事後会議を中止しての解散と、イクスヴェリアの保

護を俺とシャルで行う旨を伝えた。

Ｅｐｉｃａ３－Ｃマリアージュ事件～Ａｍｕｓｅｍｅｎｔ　ｐａｒｋ～

†††Ｓｉｄｅアインス†††

「「今日はよろしくお願いします！」」

私とシャマル、それに狼形態のザフィーラに向かって礼儀正しくお辞儀するのは、なのはの娘であるヴィヴィオ、それにうちのフォルセティとも特に仲の良いクラスメイトで友人であるコロナ。今日は私とシャマルとザフィーラとフォルセティ、そしてヴィヴィオとコロナの６人で、中央区画の港湾地区に在るマリンガーデンという公共施設へと遊びに行くのだ。

「ああ、よろしく頼むよ」

「はーい、お願いね♪」

「うむ」

私とシャマルもお辞儀を返して、「さぁ車に乗ってくれ」と私の車に乗車するように促す。私のお給料で購入した車は大型ミニバンタイプで、３列シートで８人乗りとなっている。家族みんなで出かける際には重宝する。私が運転席へ乗り込み、シャマルは助手席だ。シャマルはこの車よりサイズの小さい八神家の共有車の運転も少し怪しいレベルの運転技術の為、シャマルにはこの大型車の運転は任

せないようにしている。

「楽しみだね♪」

「うんっ♪　今日はお誘いありがとう、フォルセティ！」

「どういたしまして、コロナ！」

フォルセティはヴィヴィオだけでなく、コロナも一緒に誘ったようだ。男友達も居るようなのだが、やはりどうもヴィヴィオやコロナと言った女友達を優先する節がある。それが少しばかり気がかりなのだが・・・。ヴィヴィオ、フォルセティ、コロナの順で中間座席に乗り込み、後部座席に図体の大きなザフィーラが乗り込むのを確認し、運転席に座る私の操作でドアを閉める。

「では出発するぞ」

「「「しゅっぱーつ！」」」

そして私の運転する車は一路マリンガーデンを目指して走り出す。その道中、後ろの席に座るフォルセティ達の会話を聞く。

「フォルセティ君、ヴィヴィオ。改めて今日は誘ってくれてありがとう。でも良かったの？　私も一緒で・・・。ヴィヴィオとフォルセティ君って本当に仲が良いから、私お邪魔かなって・・・」

「ううん、そんなことないよ。コロナにはいつもお世話になってる

から。ね？　フォルセティ！」

「うん。コロナは、僕やヴィヴィオにとって初めての友達だから。だから一緒に遊びに行きたかったんだよ」

「フォルセティ君、ヴィヴィオ。あの、これからもよろしく！」

「「うんっ！」」

フォルセティもなかなかに罪な男だ。後ろの3人の様子にシャマルが『プレイボーイなのはルシル君・・・もそうだけど、オーディンさんにそっくりね♪』と思念通話でそう言ってきた。オーディンもエリーゼ卿やアンナ、それに私やシャマル、守護騎士みんなからも慕われていた。オーディンと同一人物であるルシルも、現代では主はやてやシャル、トリシュタンから慕われている。

（界律（テスタメント）の守護神となる前の、神器王ルシリオンだった頃には相思相愛の恋人が居り、戦友や戦天使たちからも慕われていた。彼の優しさがそうさせるのだろう）

ルシルには幸せになってもらいたい。そう強く願うが、それはつまり主はやての幸せを失わせるということに繋がる。ルシルにとっての幸せとは、"堕天使エグリゴリ"を救い、"テスタメント"から解放され、元の人間へと戻り、人間として死ぬ事。しかもこの次元世界での交戦が彼にとって最後の機会。それの妨害は、彼自身の否定に繋がる。そんな真似、出来るわけがない。しかし・・・。

「あ、アインス！　路を1本通り過ぎたわ！」

「っ！　す、すまない！」

考え事していたため、本来は左折するところを通り過ぎてしまった。慌てて近くの駐車場に入り、改めて「すまなかった」とフォルセティ達に謝る。

「あ、大丈夫だよ、アインスお姉ちゃん」

「「はい！」」

フォルセティ達のフォローに感謝しつつ、「事故だけは起こさぬようにな」ザフィーラからの忠告に、「ああ」と頷き返した。それからは何ら問題なく順調に車を進ませ・・・

「「「とうちゃ～く！」」」

マリンガーデンに辿り着いた。続々と降車する中、ザフィーラが人型形態へと変身。ザフィーラは我々の護衛として、そして荷物持ち（これは奴が買って出た提案だ）として同行してもらうからな。狼形態では何かと不便、かつ入場できない。

「皆、はぐれないようにな」

この人込みでは一度はぐれたら合流するのは困難だ。フォルセティ達も思念通話くらいは使えるだろうが、合流するまでにあの子たち

に何かあっては自害ものだ。

「ヴィヴィオ、コロナ！」

「うんっ♪」

「え？・・・あ、うん」

フォルセティがヴィヴィオとコロナに手を差し出すと、ヴィヴィオは一切迷うことなく満面の笑顔で手を取り、コロナは少し顔を赤らめて僅かに逡巡した後、その手を取った。

「ふふ♪　将来、ルシル君みたいに苦労しなければいいんだけど♪」

「その時はその時だ。見守ってやろう」

私とシャマルで先頭を歩き、その後ろをフォルセティ達、最後尾にザフィーラが付く。やはり休日ということもあり、駐車するのも一苦労するほどの賑わいだったが、こうして無事に施設内に入場することが出来た。アーケードの両側に土産屋や衣類店、各食事処が並んでおり・・・

「まあ！　可愛いお洋服もたくさん！」

店頭前に飾られている夏服のディスプレイを見たシャマルがはしゃぎだす。サイズ的にフォルセティやフルフォーム状態のリインやアギトの物だろう。その様子にザフィーラが「待て、シャマル」と制

止した。

「え？　あ、そうだったわね」

「お前たちの決めたスケジュールでは、まずはアミューズメントパークで遊ぶのだったな」

「うん、アインスお姉ちゃん。次にプール、最後に買い物、だよ」

「じゃあこっちから行くのね」

アーケードの天井付近に展開されているモニターには、このマリンガーデンのマップが表示されている。真っ直ぐに行けばショッピングモール街、左に行けば巨大プールと水族館、右に行けば遊園地やゲームセンターなどのアミューズメントパークだ。そういうわけでまずは遊園地へ向かう。

「マリンファミリーパークへようこそ！！」

凱旋門のようなアーチをいくつも潜り、辿り着いたエントランスエリアにある入場チケット購入所で人数分のフリーパスを購入。手首に巻くタイプで、それを付けている間はどのアトラクションも利用できる。ゲートを通過して視界に広がるのは数種類のコースターやカルーセル、観覧車などなどのアトラクション、全部で２８基ある。

「あっ、マリン君とアクアちゃんだ！」

ゲートに隣接する広大な噴水広場には、この遊園地のマスコットである水色のペンギンのマリンと、ピンク色のイルカのアクアが、子供たちと戯れていた。フォルセティ達も「行こう！」と駆け出した。

「シャマル」

「ええ、写真ね♪　」

シャマルがショルダーバッグより携帯端末を取出し、きゃっきゃ♪と黄色い声を上げてマスコットに抱きつくフォルセティ達に「３人とも、そのまま！」とシ声を掛け、端末を目の前に掲げた。

「はい、ピース♪」

「「「ピース！」」」

写真を何枚か撮った後は、早速アトラクションに乗ることに。まずは定番のティーカップから。フォルセティたち子供らだけがカップに乗り込み、私たち大人組は外で端末を構えたり、手を振ったりと見守る。

「きゃあああ♪」「ひゃあああああ！」

「それそれー！」

フォルセティがカップ中央のハンドルを回し、ヴィヴィオは遠心力で体を揺らして歓声を上げ、コロナは両手を胸の前でギュッと握る。

フォルセティは「あっはっは！」と大声で笑い声を上げ、ヴィヴィオを楽しませようとしている。やはり今のところはコロナよりヴィヴィオを優先するか。

「め、目が回ります～」

「あはは！　大丈夫、コロナ？　フォルセティ、調子乗り過ぎ～♪」

「あぅ～。ごめん、２人とも」

ティーカップより降りてきた子供たち。足元の覚束ないコロナの腕を抱くヴィヴィオと、小さく頭を下げて謝るフォルセティ。そして３人は「あはは♪」と大声で笑いあった。改めて３人は手を繋いで、「次！」と他のアトラクションへと目指す。待ち時間が短いアトラクションから済ませるようで、「ミラーゴーストハウス！」に入るようだ。

「ゴースト・・・」

「あら？　コロナちゃん、幽霊とか苦手だったりする？」

「ちょっとだけ、ですけど・・・」

体を縮こませているコロナに、フォルセティとヴィヴィオが「大丈夫！」とコロナを安心させるようにニッコリと笑顔を向け、握っている手の力をさらにギュッと強めた。それで安心できたのかコロナは「うんっ！」と頷き、３人が入口に入って行く。私たちも続き、

鏡で作られた通路を歩く。

「暗いから気を付けてね、ヴィヴィオ、コロナ」

「「うん、ありがとう」」

日本のお化け屋敷のように薄暗く、さらに鏡張りだということで「あいたっ」と子供たちは額をよくぶつけ、「あわっ！？」と蹴躓く。鏡にぶつからないよう、手を前に突き出して歩くように伝えつつ、前へと進んでいたところに、「あ〝あ〝あ〝！」と鏡の向こうからモンスターがぶわっと現れ、鏡に張り付いた。

「「きゃあああああああ！」」

「おうふ！？」

ヴィヴィオとコロナが悲鳴を上げてフォルセティに抱き付いた。その様子を私とシャマルでニヤニヤしながら見守る。フォルセティが「大丈夫、大丈夫だから！」と2人の背中をポンポンと優しく叩く。

「ひゃっ！？　ご、ごめんね、フォルセティ君！」

するとコロナが顔を真っ赤にし、慌ててフォルセティから離れる。で、背後に鏡にドンッとぶつかり、「あいたた・・・」と鏡に振り返ればまた、「あ〝あ〝あ〝！」と別のモンスターが鏡に張り付き、コロナを恐がらせる。

「～～～～～っ！！」

そしてまたフォルセティに抱き付いて顔を赤くする。なんというか可愛らしい女の子だな。ヴィヴィオがフォルセティの右腕に抱き付きながら「コロナもこのまま行こう♪」と誘うと、コロナは僅かに逡巡した後・・・

「フォルセティ君。いいかな？」

そろそろとフォルセティの左腕に両手を伸ばしつつ、上目遣いで尋ねるという連撃を発動。これは男心に堪らないものだ。が、「うん。いいよ」フォルセティはまだ7つになったばかり。慌てるような反応は起こさなかった。それからヴィヴィオとコロナは悲鳴を上げては、「うむぅ・・・！」と腕がきつく締め付けられていることでフォルセティが痛がる、を繰り返した。

「外だー！」

「やっと終わった～！」

迷路のようだったこのゴーストハウスの出口をようやく見つけ、ヴィヴィオとコロナがフォルセティの両手を引っ張っての駆け足で、「ゴール！」と出口から外へと飛び出して行った。私たちも続いて出たところで、「おかえりなさい！」と係員の女性に声を掛けられた。

「よろしければ、場内での写真データをプレゼントいたします。写

真データそのものの贈与しますし、残りデータも責任を持って削除するので、本パークには残りません」

係員が複数のモニターを私たちだけに見えるように展開し、ゴーストハウス内での写真データを見せてくれた。それらを見たコロナが「あぅ・・・」とまた顔を真っ赤にした。まぁフォルセティと密着している姿を、第三者視点で見たのだから。

「コロナは、どのデータ貰う？　僕はコレ～♪」

フォルセティが選んだのは、ヴィヴィオとコロナが口を大きく開けて絶叫しているシーンの物。だから2人から「ダメー！」と猛反対を受けた。そのため、「じゃあコレ」とハウスに入った直後の、私たち皆が映ったデータを選んだ。ヴィヴィオとコロナ、私たちもそれぞれデータを貰い、自身の端末にデータを移動させてから、次のアトラクションへ。

「次はシューティングコースター！」

とのことで、今度は速度の遅いコースターに乗り、備え付けのライフル型のアイテムでコース上に登場する投射された3Dモンスターを倒す、というものだ。このパークのアプリケーションをダウンロードしていれば、各種アトラクションの待ち時間を知ることが出来るため、即座に行動に移せるというわけだ。

「早く早く！」

「混んじゃう前に行きましょう！」

「待って、ヴィヴィオ、フォルセティ君！」

駆け出すフォルセティ達に私たちも続く。大きな施設に到着し、３分待ちと表示されたモニター前の列に並ぶ。３分という話だったが２分もせずに私たちの順となった。２列シートの銃座６基付きのコースターがあり、前列に子供たちが乗り込み、後列に私たち大人が乗り込む。

「ではいってらっしゃいませ～！」

コースターがゆっくりと動き出し、目の前のトンネルを潜る。フォルセティ達は目の前に備え付けられているライフルを構え、いつでもモンスターを狙えるようにキャッキャ♪とはしゃいでいる。トンネルを抜けるとそこは薄暗く、奇抜な色彩の光で溢れた大きな空間。コースターはレールの上をのんびり走り・・・

『オオオオオ！』

「「出たぁぁぁーーーー♪」」

「撃て、撃てぇぇーーーー♪」

レールの両側に設けられた廃墟などのセットや、向かう先の天井や床から半透明で多種多様なモンスターが数体と出現。フォルセティ達が一斉に光線を放ち、モンスター達を迎撃して行く。

『フォルセティ。オーディンさん譲りの射撃の腕ね。百発百中だわ』

『ああ。しかもヴィヴィオ達の獲物まで獲らない気の配りようだ』

さらに言えば、ヴィヴィオ達が狙い撃ちしやすいモンスターを残している。だからヴィヴィオ達のライフルから放たれる光線も、次々とモンスターに当たるようになった。子供たちに攻撃を任せていると、モンスターからの攻撃が強くなり、あの子たちが「わわっ！」と可愛らしく慌てふためく。

「バリア！　フォルセティ、バリア！」

「うんっ！」

ライフル脇に設置された手の平サイズのボタンを押すと、コースターを覆うような光エフェクトが展開され、モンスターの攻撃を防ぐという演出が発生する。被ダメージとモンスター撃破の総合ポイントで、賞品レベルが上がるらしい。

「あぅ～。アインスお姉ちゃん達も手伝って～！」

「「お願いします！」」

必死にお願いされては答えねばなるまい。私たちもライフルを構え、トリガーを引いて光線を放つ。シャマルも「きゃあきゃあ♪」とはしゃぎながら、百発百中とは言えずともモンスターを撃破して行っ

ている。私も負けじと放ち、「アインスさん、すごい！」とコロナに称賛されるレベルでの撃破数を叩きだす。ザフィーラはサポートに徹し、撃破数は一番少ない。
そうして全長約７００ｍのアトラクションを終え・・・

「おかえりなさーい！　獲得ポイントはなんと・・・１万８０００ポイント！　開園以来歴代１位のポイントです！」

出口付近のゲートの係員数名から拍手を送られた私たち。高得点の隠れモンスターを撃破したことが大きいらしい。どうやら私やザフィーラが集中的に狙っていた襲って来ないモンスターがそうだったらしい。

（これならば前半、手伝いを乞われる前から姿を見せていた隠れモンスターも撃っておくべきだったか）

気付いてはいたのだが、フォルセティ達が楽しんでこそ、と考えていたために手を出さなかった。

「では賞品の、マリンガーデン内のお店であればどこへも使用できる商品券３万クレジット分です！」

係員から商品券データを端末に転送してもらい、「すげー！」や「おめでとう！」となどという称賛の声と拍手を他の客から受けながら、私たちはその場を後にした。

「それで次はどうする？」

「えっと。今なら水上コースター、空中ブランコ、垂直落下のスカイフォール、あと――」

「「「水上コースター！」」」

というわけで、次に乗るのは海上にレールが敷かれた水上コースター。掛け足で向かうフォルセティ達の後を追い、乗車するための行列に並ぶ。順が回って来るまで、次の予定であるプールで、どの種類から入るかをフォルセティ達が話し合っているのを聞いていると、「並び順はどうする？　1シート2人乗りだけど・・・」とシャマルが尋ねてきた。

「1シート2人乗りか。フォルセティ、ヴィヴィオ、コロナ。お前たちで決めると良い」

普通に考えれば大人と子供で1組を作るべきなのだろうが、フォルセティとヴィヴィオの事を考えると2人をペアにしてやりたいが、それではコロナが溢れてしまう。だからと言ってあの子たちの意見を聞かずに決めることもしたくはない。

「どうしよっか？」

「ヴィヴィオはフォルセティ君と一緒に乗りたい？」

「え！？・・・えー、あー、わたしは・・・」

「わたしはアインスさん達と乗るから、気にしないでいいよ？」

「・・・僕はザフィーラと、ヴィヴィオはアインスお姉ちゃんと、コロナはシャマルお姉ちゃんと。これでけって～！」

ヴィヴィオとコロナのやり取りに割って入って告げたフォルセティ。ビシッとしたその佇まいに2人も「う、うん」と反論することなく頷き応えた。スムーズに乗るために並んでいる今から乗るペア同士で並ぶ。

「あの、お願いします、シャマル先生」

「ええ。恐かったら言ってね」

「あ、はい」

シャマルとコロナがそう会話しているのを見、「ヴィヴィオ。恐ければ手を繋ごうな」と声を掛けると、「その時はお願いします！」と笑顔を向けてくれた。そしてとうとう順番が回って来た。

「レインコートをどうぞ～！」

コースターに乗車するためのホームに上がったところで、係員の1人より半透明なレインコートを頂いた。水上コースターと言うことで水飛沫が掛かることもあるのだそうだ。レインコートを私服の上から着て、定員10名のコースターの前へ移動する。

「一番前はザフィーラとフォルセティ、次に私とヴィヴィオ、最後にシャマルとコロナの順だな」

事前に決めた席順で乗車し、『それでは安全バーを降ろします！』という係員のマイク越しでの言葉の後に頭上から落下防止用のバーが降り、隣に座るヴィヴィオはギュッとバーを握り締めた。

『水上コースター・アクアドラゴン、Ｓｔａｎｄｂｙ　！　Ｒｅａｄｙ　！　５、４、３、２、１、Ｇｏ　！』

「「ひゃっ！」」

スタート直後から時速１１０ｋｍ／ｈまで急加速をし、そのまま高度５０ｍまで上昇。私の前に座るフォルセティが「来た来た来た・・・！」と興奮した声を漏らした。そしてコースターは上り坂の頂上に到達し、ゆっくりと折り返しを始める。

「ひぅ・・・！」

空から地上――レールの先へと視界が移り、一瞬の浮遊感の後、「ひゃあああああ！」ヴィヴィオとコロナの絶叫が後部へと高速で流れながら急降下するコースター。右に曲がり、左に曲がり、上昇しては下降し、大きなループに小さなループと続き、いよいよ海上レールへと突入する。

「海の上だからか涼しいわね！」

「ああ！」

後ろの席に座るシャマルが大声でそう伝えてきたが、なぜ思念通話を使わないのか、と思う。しかし海上スレスレを走ってはいるが、レインコートが必要なほどの水飛沫は上がらないが・・・。

「む・・・！？」

「「きゃあああああ♪」」

「冷た～い！」

レール両脇に噴水が等間隔で設けられており、通過する直前に噴射するため、顔に水霧が掛かる。水量は多くなく、小雨程度と言うこともあってレインコートでも十分防げる。夏だからこその可能なアトラクションだな。こうして全長３，５ｋｍという長さを誇った水上コースターも、「面白かった～！」そう笑い合うフォルセティ達の様子から、好評だったようだ。

「時間的にお昼前にもう１つ行けるわね。それとも少し早いけど、お昼にしようか？」

シャマルがそう尋ねたところ、きゅ～、と可愛らしい腹の鳴る音がした。出所は子供たち３人。ヴィヴィオとコロナは顔を真っ赤にするが、フォルセティは「あはは、お腹空いた～！」と恥ずかしがることなく両手を腹に置いた。

「ふふ♪　いろいろと叫び過ぎたものね♪」

「そうだな。ではまずは腹ごしらえだ」

「「「はーいっ！」」」

こうして私たちは、次のアトラクションに乗る前に昼食を摂ることになった。

Ｅｐｉｃａ３－Ｄマリアージュ事件～Ｐｏｏｌ～

†††Ｓｉｄｅスバル†††

ティアが今担当してる事件の手伝いをすることになったあたしとエリオとキャロ。ミッドに来てるティアや、エリオとキャロを泊めるためにあたしの部屋を貸していて、そのこともあってある種の集合場所になってるわけだけど・・・。

「ごめんね、スバル。こんな大勢で押しかけちゃって・・・」

「やはり場所を変えよう。すまなかったな、スバル」

「ですね。この人数で、しかも女性の部屋に集まるのはよろしくないかと。ルシル様がそう言った類の男性ではないとは言え・・・」

「ルシルさんであるなら、スバルも心配ないよね？」

「近くのお店でも貸し切りますか？　確か喫茶店があったかと・・・」

リビングダイニングには今、ギン姉、シャルさん、ルシルさん、さらに教会騎士団の騎士トリシュタンさんと騎士アンジェリエさんが居て、ダイニングテーブルに座ってる。そしてリビングのソファにはエリオとキャロ、それにアイリが座っていて、「どうしましょう

か？」って困惑中で、アイリは「スバルがどう思ってるかだよね？」ってあたしを見た。

「うん。ギン姉の言う通り、あたしは気にしませんから。ルシルさんとは古い付き合いですし・・・」

そんなこと言うあたしだけど、ほとんどが喧嘩別れ（しかもあたしから一方的だった）していて、仲直りしたのも４年前だ。でももっと小さな頃には１日一緒に過ごしたし、そう言ってもおかしくないはず。とにかく、お客さん分のお茶を用意していると、ピンポーンとインターフォンが鳴った。

「はーい！」

『あ、ランスター執務官の補佐、ルネッサ・マグナスです』

モニターに映るのは、長年の夢だった執務官に無事なったティアの補佐を務めてる女の人、ルネッサさんだ。あたしは「どうぞ～！」と入室許可を出してルネッサさんを招き入れた。ルネッサさんはティアの執務官だけど、あくまで臨時らしくこの事件が終われば元の所属先へ戻るみたい。

「お疲れ様です、マグナス執務官補」

「お疲れ様です、ナカジマ防災士長」

エントランスから上がって来たルネッサさんと敬礼をし合って、リ

ビングに入ろうとするのを見送ろうとしたら、「・・・・っ！？」ルネッサさんが足を止めた。続けてピンポーンとまた鳴って、「入るわよ～？」ってティアが入って来た。

「あ、ティア。お疲れ～♪」

「ええ。悪いわね、家を提供してもらって」

「ううん。こうして六課の時みたく集まれて、逆に嬉しい♪」

ハイタッチを交わしてると、「そう。・・・・ん？　ルネッサ？　どうしたの、そんなところに突っ立って」って、ティアがリビングに続くドアの前に佇むルネッサさんに訊ねる。

「あ、いえ。話には聞いていたのですが、局や騎士団の中でも特に有名な方たちが一堂に会しているのを目の当たりにすると、やはり緊張をしてしまいます」

「「あー・・・」」

ティアと2人で納得する。ルシルさんやアイリは、六課時代で同じ時間を過ごしたからそうは思わないけど、シャルさんや騎士トリシュタンさん達には、あたしでも緊張する。ティアもそうみたいで、「まぁ理解できるわ」って苦笑した。

「でも突っ立ってるままじゃ話にならないから。行きましょ」

「はい」

「お茶菓子、お茶菓子は～っと」

キッチンでのお茶淹れを終えて、「ティア～。クッキー持ってって～」と用意したクッキーが盛られたお皿を指差す。ティアは「ん～」返事をして、お皿を持ってルネッサさんと一緒にリビングに入った。あたしも遅れて入って、ルシルさん達にお茶を出した。

「えっと、では、マリアージュ事件（仮）の捜査会議を行います」

ティアが1人席を立ってそう宣言した。展開したモニターには「これがマリアージュとなります」って、あたし達の敵となるマリアージュが表示された。

「騎士トリシュタンさん達に伺ったところ、マリーアジュは死体を用いられた戦術兵器であること、作成と運用を行うのは古代ベルカの王の1人、冥府の炎王イクスヴェリアであることが判明しました」

プライソンのＬＡＳと同じように死体から造られてるマリアージュは、なんと人語を解することが出来るみたい。体を武器に変えたり熱線を発したり、燃焼液に変化して自爆したりと、戦い方はＬＡＳにそっくりだけど。別モニターにティアがマリアージュと闘って、そして自爆されたシーンが流れる。

「戦闘力で言えば、今のあたしやスバル、エリオでも十分撃破可能と思われます。ですが・・・」

「教会本部図書館の資料をすぐに漁ってみたところ、マリアージュには先兵や分隊長、軍団長などの役割があり、軍団長の戦闘力はさらに強大との事です」

ティアの視線を受けた騎士アンジェリエさんがそう報告した。冥王イクスヴェリアから軍団長へ、軍団長から先兵へと指令が下りるみたいなんだけど・・・。

「ランスター執務官から伺った話だと、マリアージュはどうやらイクスヴェリアを捜索しているようです。つまり指揮官が軍団長になっているので・・・」

「ソレを撃破すれば本件の被害は新たな軍団長稼働まで猶予を得られます。ですので軍団長との遭遇時は、真っ先に撃破することが優先でしょう」

とのことらしい。マリアージュが何を以って殺人事件を繰り返してるかは未だに判っていないけど、とにかくその軍団長を倒せば、イクスヴェリア保護までの時間稼ぎが出来るみたい。

「それと、マリアージュにはもう1つ捜しているモノがあるらしく、それはトレディアと呼ばれる、人名か地名か、あるいは物名か。それは判らなかったんですが・・・。ルシルさん」

「ああ。トレディアというキーワードで色々と調べた結果、おそらくアタリだろうと思われる人物を発見した。・・・それが彼、トレ

ディア・グラーゼ。第６０管理世界フォルスの、オルセア戦線の活動家。辺境世界の一般人と言うこともあって、捜し当てるのに苦労はしたが・・・」

ティアに促されたルシルさんが展開したモニターに1人の中年の男の人が表示された。続けてルシルさんが「死体兵器繋がりで、アルファ達に尋ねた来たよ」って言ったから、「え？」ってあたし達みんなが首を傾げた。だってアルファや他の"スキュラ"達は、もうこの世には居ないから・・・。

「あぁ～、エインヘリヤルか～。プライソンの複製権限を奪われてたのに、よくヴァルハラに居たね～」

シャルさんがそう言うと、「複製物を顕現できないだけで、複製はされていたんだと思う」ってルシルさんが返した。ルシルさんには他の人の武器や魔法やスキルなどを複製する能力があって、その本来の持ち主の分身を使い魔として造り出すことも出来る。それなら"スキュラ"達と話せる理由も判る。だったらもう一度デルタと話してみたいな～。

「まぁ俺のスキルについては今は置いておいて、だ。アルファ達にマリアージュやトレディアの事を知っているかどうかを尋ねたところ、その事についてはペラペラと話してくれたよ。どうやら彼もプライソン一派に協力していたようだ」

ルシルさんの話によれば、ＬＡＳはマリアージュからヒントを得て開発されたらしく、マリアージュとＬＡＳの量産を一度に行ってた

みたい。でもプライソン戦役が始まるずっと以前に「彼はマリアージュに殺害されたらしい」とのことだ。

「トレディア・グラーゼの死亡については残念ですが、憂慮が無くなったと思えばいいです。問題は、イクスヴェリアの居所と・・・コイツ」

ティアが新たに展開したモニターに、"スキュラ"暗殺犯と同じ仮面に学生帽と学生服、それにマント、デバイスは短いロッド。使う魔法は氷結系で、リイン曹長やアイリの短剣型射撃魔法と似た攻撃を放った。

「なぜ彼らがマリアージュを拉致したのかは判りませんが、彼らもまたイクスヴェリアを狙っているのでは？と推測しています」

「悪用されることだけは必ず回避しなければなりません」

騎士トリシュタンさんの言葉にあたし達は力強く頷いた。そして問題はティアの言う「イクスヴェリアの居場所ですが・・・」だ。ルシルさんに視線が向かうけど、「お手上げだ。スキュラも知らないらしい」と両手を上げてのお手上げポーズ。だから今度は騎士トリシュタンさん達に向く。

「教会に残された古い資料に、こういう一文がありました。冥府の炎王、その役目より解き放たれ、騎士の世界を離れ、始まりの世界にて再び眠りに就く。そこは深き母なる海の底・・・と」

「海底に居る、ということでしょうか？」

「だとしたら、どうやって保護しましょう？　ミッドの海底を捜索するなんて、1日2日では終わりませんよ？」

キャロとエリオの疑問も当たり前だ。あたしだってそう思うし。アイリが「ヒントとか無いの？」って聞いた。

「さすがに生身や棺に入れられての封印とは考えられませんから、おそらく遺跡などに安置されているはず。で、ミッドチルダの海底に存在する遺跡に類する建築物を調べた結果・・・」

騎士アンジェリエさんが展開したモニターにミッドの世界地図が表示されて、海のところに5つの光点が生まれた。話によるとそこに海底遺跡があるとのことなんだけど・・・。

「どこが本命なのか、もしくは全てハズレなのか、確信が持てないのが心苦しいです」

「ポイント付近でマリアージュの目撃情報などが無いか、調べてみます！」

ギン姉が席を立つと、「こちら陸士108部隊、ギンガ・ナカジマ准陸尉――」ってどこかに通信を繋げつつ、リビングを出てエントランスへ向かった。

「・・・7ヵ所かぁ。・・・あ、そうだ、こっちも念のために兵隊

を召喚しておこうっと♪」

そう言うとシャルさんも通信をどこかに繋げる。モニターが展開されて、その相手の顔が表示された。

「ヤッホー、ルミナ♪　特騎隊前線組・・・みんなって今ヒマ？」

『暇と言えばまぁ暇だけど。今、前線組だけじゃなくて後衛組揃って本局のショッピングモールで揃ってショッピング中なの』

相手はルシルさんやシャルさんと並ぶ神層騎士の1人で闘神と謳われる、騎士アルテルミナスさんだった。背後には『おーい！』って他の騎士の皆さんが居た。そして話題は「休暇満喫中に悪いんだけど、ボランティアをお願いしたいの」っていう本題へ。騎士の皆さんが『ボランティア・・・？』って少し嫌そうな顔をした。

「内容は、冥府の炎王イクスヴェリア陛下の保護、んで殺人・破壊を繰り返すマリアージュの迎撃。イクスヴェリア陛下は現在、スキュラ暗殺犯組織にも狙われてる可能性大。局員としても教会騎士としても、それを見過ごすわけにはいかない」

シャルさんのその言葉に皆さんの表情が引き締まって、『了解です！』っと頷いた。それからどこのポイントにどのメンバーが向かうかを決めて・・・

「では、私とスバル、ルネッサ、ルシルさんとアイリがマリンガーデンの遺跡へ。ギンガさんとシャルさんが北部の・・・――」

本事件の指揮権を担ってるティアが最終確認をした。そして「行きましょう！」の号令で、あたし達はそれぞれの目的の遺跡のあるポイントへ向かった。

†††Ｓｉｄｅスバル⇒シャマル†††

「楽しかった～♪」

「うんっ♪」

遊園地の締めのアトラクションとして選んだ大観覧車に乗った私たち。ヴィヴィオとコロナが２人掛けシートに膝立ちして、窓から外の景色を眺めながら満足そうに笑った。私も隣に座るフォルセティに「楽しかったわね♪」と微笑みかける。

「うんっ！」

「あ！　ねえねえ、フォルセティ君！　アインスさんが手を振ってくれてるよ！」

「え、どこどこ！？」

「こっちだよ、フォルセティ！」

ゴンドラが揺れないように注意しながらフォルセティは席を立ち、ヴィヴィオとコロナちゃんの間に座って、アインスとザフィーラの

乗った遅れて来るゴンドラに向かって「おーい！」って3人で手を振った。そしてゴンドラは頂上にまで到達。

「「「わあ♪」」」

窓から見える景色に3人が歓声を上げた。私もその綺麗な景色を見て、「これは残しておかないと」って端末をショルダーバックから取り出して、笑顔で景色を眺める3人をパシャっと写真に収める。そうしてゴンドラは地上へと戻って、遅れて「待たせた」アインスとザフィーラと合流。

「よし。ではもう乗り残しは無いな？」

「うんっ」「「はいっ」」

アインスの確認に3人はビシッと挙手して答えた。これで遊園地を離れるから、その前に噴水広場で、「あの、写真をお願い出来ますか？」と付近に居たご家族にお願いしてみる。父親らしき男性が「いいですよ」と快諾してくれた。

「ありがとうございます！　はーい、みんな並んで～」

前列に子供たちを、後列に私たちが並び、「はい。ピース！」の掛け声で笑顔をつくる。これでもう思い残すことは無いわね。写真を撮っていただいた男性に「ありがとうございました！」と改めてお礼を述べ、端末を返していただく。

「本日はありがとうございました！　またのご来場をお待ちしております！」

入場ゲートの係員さんに手首に巻いたフリーパスを取ってもらって、遊園地を退場した。次は「プールね」ということで、遊園地とは反対側に在るプール施設へ向かう。プールの入場ゲートの立つ係員さんに・・・

「大人3人、子供3人。水着6着と浮輪3つのレンタルをお願いします」

そう伝えて、提示された料金を支払う。そして「ありがとうございます。それでは、ロッカーのカギをお渡ししますね」と、首に掛けられるようにビニール紐の付いた鍵と、水着や浮輪とを交換するチケットを渡してくれた。みんなでお礼を言いながらゲートを潜って、大きな建物へと入る。

「ではザフィーラ。フォルセティの事を頼む」

「ああ。我らは男性用だ、フォルセティ」

横に長い通路の両端に女性用と男性用のドアがある。フォルセティ達と「また後で！」と手を振り合って一旦お別れ。そして女性用のドアを潜ると、これまた広い部屋があって、右手にはレンタル用水着などを貸し出すお店、左側にはロッカーがずらりと並んでいる。

「すみません。水着と浮輪をレンタルしたいのですが」

「あ、はい、いらっしゃいませ！　チケットを頂きます～！」

入場ゲートで渡されたチケット2枚を渡すと、「はい。確認しました。どうぞ～！」とカウンター横にある遮断機のようなゲートを通って、ハンガーに掛けられた何百着って言う水着を見る。

「それじゃあヴィヴィオ、コロナちゃん、好きな水着を選んでね。見つかったらそのまま着替えに行っても良いけど、プールにはまだ行かないこと♪」

「「はいっ！」」

私の注意に返事をした2人は「こっち、こっち♪」と子供用水着の列に駆けて行った。私とアインスもそれぞれ水着選びを始める。私はミントグリーンのトライアングルビキニ。子供たちが居るから出来るだけ派手さを出さないように、露出を抑えつつボトムの両側にリボンをあしらった物を選ぶことで可愛らしさを出す。

「よしっ。色も私好みだし。アインス～？　そっちは～？」

「うむ。私も決まったぞ」

隣の列で選んでたアインスと合流。アイスの手にしている水着は、黒のホルダーネックのビキニ。胸元には大きなリボンがあしらわれてて、「あら。あなたが選ぶにしては可愛い水着」だった。

「ああ。私もそう思う」

ニッコリ笑うアインスと一緒に「ヴィヴィオ、コロナちゃん～？」の姿を捜す。呼ぶとすぐに「はーい！」と顔をひょこっと出した。

「お前たち、水着は選べたか？」

「「はいっ！」」

ヴィヴィオが手にしてるのは、薄いピンク色のワンピースタイプ。フリルのスカートが付いていて、とっても可愛らしいわ。コロナちゃんもワンピースタイプで色は白。肩紐にフリルが付いていて、この水着も可愛い。

「じゃあ着替えましょう♪」

ヴィヴィオとコロナちゃんを先に行かせ、私とアインスでしぼんだ浮輪を3つ手に取って持って行く。鍵に刻印された番号のロッカーを探して、早速水着に着替え始めるんだけど・・・。

「「わぁ～・・・」」

2人からの熱視線に私とアインスが首を傾げると、「すごく綺麗です！」と私たちの裸を褒めてくれた。ちょっと照れくさいけど、褒められるのも悪い気はしないから「ありがとう♪」とお礼を言った。

「さて！　お前たち、プールでは私かシャマルかザフィーラの誰か

の側に居ること。何かあればすぐに声を掛けること。いいな？」

「「はいっ！」」

水着に着替え終えて、ご利用自由なエアーを使って取っ手付きの浮輪を膨らませつつ、アインスがヴィヴィオ達に注意を促した。そうして浮輪を膨らませ終えて、いよいよプールへ向かう。施設のドアを潜って、プールに入る前のシャワーを浴びて・・・

「おーい！」

「フォルセティ～！」

同じくシャワーを浴び終えたばかりなフォルセティやザフィーラと合流した。２人とも膝丈のトランクスタイプね。フォルセティはニコニコ笑顔のヴィヴィオと、もじもじと照れているコロナをジッと見た後、「ヴィヴィオとコロナの水着、とっても似合ってて可愛いよ！」って、２人の水着姿を褒めた。

「うん、ありがとう♪　フォルセティも似合ってるよ～♪」

「あの、ありがとう、フォルセティ君」

仲の良さを見せてくれた子供たちを優しく見守りつつ、目の前に広がるプール各種に「おお！」って私たちは歓声を上げた。プールはいろんな種類があるんだけど、まずは「スライダー！」からとのことで、今のフォルセティ達の年齢・身長でも利用できるスライダー

へ。

「ザフィーラ、浮輪を預かっていてくれ」

「ああ」

持ち込みの出来ない浮輪を預けて、私たち5人でスライダーの列に並ぶ。順番はすぐに回って来て、「5名様ですね。ではどうぞ浮輪に！」と係員がとても大きな浮輪に入って座るように私たちを促した。浮輪の中心に向かって座り込んで、浮輪のふくらみの方にある取っ手を掴み、流水に乗ってチューブ状のトンネルへ進みだす。

「「ひゃあああ♪」」

トンネルを抜ると幅の広いコースを右に左にと揺られながら進んで、ジャンプ台のようなところでさらに大きく左右に揺られて、最後はすり鉢状のステージをグルグル回りながら中心点に流される。

「3人とも！　気持ち悪くない？　気分が優れなかったら、終わった後でちゃんと言ってね？」

「大丈夫です～♪」

「私もなんとか・・・」

「僕も平気～♪」

そうして最後のチューブを通ってゴール。コロナちゃんがちょこっとフラついたけど、「楽しかったです♪」って楽しんでくれたようで何よりだわ。だけど一応、大事を取って「次は流れるプール！」になった。レンタルした浮輪の上に座ったフォルセティ達と一緒に、私たちも流れるプールに入る。

「ヴィヴィオ、コロナ。次はどこに行こうか～？」

「アスレチックプールとかは？」

「噴水広場でゆったり？」

「どっちも面白そうだね～」

残り半日で回るにはあまりにも大きな施設だから、やっぱり迷っちゃうわよね。それから3分くらい流れるプールでお話しして、次の噴水広場へ一休みしに行く。直径６０ｍほどの円形の舞台があって、その中心に大きな傘状の噴水。傘に沿って水が滝のように流れてる。さらに傘のてっぺんからも放射状にシャワーのような放水が行われてる。

「わぁ♪　気持ちいい～♪」

「つめた～い♪」

頭上から降り注ぐ水にヴィヴィオとコロナちゃんが歓声を上げる。フォルセティも「わわっ？　下からも噴水が・・・！」って足元か

ら放射されるシャワーに驚いては笑い声を上げた。

「シャマル、シャマル、こっちへ」

「アインス・・・？」

アインスに手招きされて、噴水広場内にあるジャングルジムのような大きな舞台の近くに移動。そしてアインスに「少し待っていてくれ」って言われて、あの子が離れていくのを眺めてると・・・

「え？・・・わひゃあああああーーーーっ！？」

いきなりザバァーッとトンデモない量の水が頭上から降って来て、不意打ちだったこともあって押し潰されそうになった。顔に張り付いた前髪を指で払いながら頭上を見ると、ただのセットだと思ってた物が実は「鹿威し・・・？」だったことを知る。上に在るチューブから水が流れ落ちて、バケツのような筒に溜まる。そして溜まった水の重みで筒が傾き、下に居るプール利用客に振って来る、と。

「あっはっはっは♪」

「シャマルお姉ちゃん、ビショビショだ～♪」

「「大丈夫ですか？」」

「アインスぅ～？」

楽しそうに笑うアインスとフォルセティ。心配してくれるのはヴィヴィオとコロナちゃんだけ。ザフィーラは相変わらず無言なんだけど、どこか笑うのを耐えてるようにも見える角度で顔を背けてるのが若干むかつくわ・・・。

「すまない、シャマル。ついイタズラ心が働いたのだ、許せ」

「もう」

１０年前では考えられない程に満面の笑顔を浮かべるようになったアインス。それにイタズラだなんて、普段が真面目なだけあって新鮮でもあるから許しちゃうのよね。でもやられっぱなしと言うのも悔しいから・・・

「じゃあ次はアインスの番ね♪」

アインスの手を引っ張って、水の落下するポイントへと連れて来る。そして「逃げちゃダメよ？　うふふ♪」ってアインスの両肩に手を置いて忠告する。アインスは「判った、逃げない」って両手を挙げてのお手上げポーズをとった後・・・

「お前ももう一度浴びようじゃないか」

「ひゃん！？　ちょっ、アインス・・・！」

いきなり両腰を触って来るものだから変な悲鳴を上げちゃった。そして次の瞬間、「～～～～っ！」滝のような水が降って来た。

「気持ちが良いな、シャマル」

「・・・ふふ。そうね♪　フォルセティ達もいらっしゃい。あ、ちょっと小さめな方でね♪」

筒は大・中・小と3種類あるから、小さなフォルセティ達には一番小さい筒の方をお勧め。そして私とアインスは中サイズへ移動。大きいのは水量があり過ぎて、トップが下にずれ落ちちゃいそうになるから。

「「「「「せぇ～の！」」」」」

みんな揃ってバッシャーンと水を浴びて笑いあった後は、普通の25mプールでフォルセティ君たち3人の自由形レースを応援したり（コロナちゃんが思いの他速かった事に驚いたのは秘密）、アスレチックプールのコースでゴールタイムを競いあったり、いろいろなプールを楽しんだ。

夕方の4時半になったところでプールを上がり、ロッカーで私服に着替え、夕食を摂るためにアーケードからレストラン街へと向かう中・・・

「なんか騒がしいわね・・・」

テーマパークなんだから騒がしいのは当たり前な話なんだけど、和気あいあいとした騒がしさじゃなくて、こう・・・不安から来る騒がしさというか。コロナちゃんが「あっ、ルシルさんとアイリさん

だ・・・！」ってある方を指差した。

「ホントだ！　でも局の制服だからお仕事・・・？」

「それにスバルとティアナまで・・・」

ルシル君とアイリがミッドに降りて来てるって言うのは、昨日の朝の内にルシル君から連絡を貰っていたけど。でもティアナにスバルも一緒だなんて。これは事件の匂いがするわね・・・。

「どうする？　手伝いを申し出に行くか？」

「いや。私たちは今日、この子たちと楽しむためにやって来たのだ。やめておこう。それに、ルシルとアイリが居るのだから、私たちの助力など要らんだろう」

ザフィーラの提案に対してそう返したアインス。私も「ティアナとスバルも居るし」と続く。六課解散から3年。あの子たちもそれぞれの現場で研鑽を積んでいるはずだもの。だから私たちはルシル君たちを信じて、レストラン街へと改めて向かう。

「何アレ～？」

「コスプレ？」

「何かのキャラクター？」

何を食べようかって話してたところ、そんな会話が聞こえてきた。気になった私はそのコスプレ?をしてるらしい人の方へと目を向ける。バイザーを付けた女性で、服装は確かにラフな格好とは言えないようなもの。

「何か用か？」

先を往くアインスがそう言ったのが聞こえて前を向くと、アインス達の前にもう1人のバイザーの女性が立っていた。彼女は無言だけど、フォルセティとヴィヴィオを見ているよう。ザフィーラが2人を護るように躍り出た時・・・

「聖王オリヴィエと魔神オーディンの遺伝子を確認。確保します」

女性がザフィーラを避けてフォルセティとヴィヴィオへ手を伸ばそうとした。でも咄嗟にザフィーラがその腕を捕まえ、私とアインスで2人とコロナちゃんを女性から遠ざける。周囲のお客さんがザワザワとしだしたから、私は「管理局員です！」ってモニターに局員ＩＤを表示させる。

「何者だ！？」

ザフィーラが問い質すけど、女性は無言のままザフィーラに殴り掛かろうとした。でもすぐに地面に叩き伏せて、両腕を背後に回してギチッと締め付けた。

「答えてもらおうか。何故、この子たちの事を知っている。名前と

出身世界諸々も教えてもらうぞ」

アインスがそう言って近付いた時、女性がドロッと液状化した。ザフィーラも「む・・・？」と体勢を崩す。すんすんと臭ってくる嫌な臭いに「待って、ちょっと待って！」私は慌てる。

「皆さん、離れて！　今すぐ！　クラールヴィント！」

すぐさま騎士服に変身。そして結界魔法の「隔絶する防封！」を発動して、女性を閉じ込めて隔離する。さらに念のために「アインス！」にも結界を発動してもらえるようにお願いする。

「ああ！」

――ズィーゲル・シュレッケン――

私の張った半球状の結界と女性を閉じこめるようにアインスの六角柱の結界が展開された。直後に女性は自爆をしたけど、私とアインスの結界のおかげで被害はアインスの結界内部の石畳だけだった。でもここで「もう1体居るわ！」ってことを思い出す。もう1体を見た方へと目を向けると、今まさにこちらへ向かって駆け出していた最中。

「させん！」

――鋼の軛――

地面から突き出した拘束杭に貫かれたもう1人の女性も、「また・・・！？」液状化をし始めた。もう一度、結界に閉じ込めてしまおうって考えたその時・・・

――氷結の軛――

さらに拘束杭がドロドロになって地面に落ち始めた彼女を貫き、一瞬にして凍結された。今の魔法は「アイリちゃん！」だ。

「おーい！」

こっちに駆けて来たのは「アイリちゃん！　ルシル君！」の2人だった。

Ｅｐｉｃａ３－Ｅマリアージュ事件～Ｍａｒｉｎ　Ｇａｒｄｅｎ～

†††Ｓｉｄｅエリオ†††

ティアナさんの担当してる事件の手伝いをすることになった僕とキャロは今、古代ベルカの王様の１人であるイクスヴェリアが眠ってるかもしれない海底遺跡、その候補の１つにやって来た。

「入場料を払えれば入れる観光地ということもあって、マリアージュや暗殺者が姿を見せたら大事だ・・・」

マリアージュはすでに何人もの人を殺害しているし、暗殺者も高ランクの魔導犯罪者だ。マリーアジュくらいなら今の僕たちでも十分倒せるって話だけど、暗殺者を相手にすればおそらく負ける。だけど、たぶん・・・大丈夫だ。

「近隣の陸士隊や運営の方々に協力してもらって、遺跡の展覧時間を早めに切り上げさせてもらえましたよ、モンディアル先輩、ルシエ先輩」

そう言って僕たちの元に駆けて来たのは、シャルさんの部隊である特務零課――通称・特殊機動戦闘騎隊、略して特騎隊に所属する局員で騎士のミヤビ・キジョウ陸曹。特騎隊の前線メンバーの皆さんはそのあまりの強さに神層騎士と謳われて、それぞれを示す通り名もある。ルシルさんは軍神、シャルさんは剣神、カローラ一尉は氷

神、マルスヴァローグ一尉は闘神、ヴィルシュテッター一尉は獣神。そしてキジョウ陸曹は・・・。

（鬼神・・・）

そんなキジョウ陸曹と僕とキャロとフリードはチームを組んで、遺跡の南出入り口を監視する役目を担うことになった。

『ねえ、エリオ君。やっぱり言った方がいいと思う・・・』

『あ、うん、そうだよね・・・』

キャロと念話でそう話し合う。僕たちの視線を受けたキジョウ陸曹が「どうしました？」って小首を傾げる。

「あの、僕とキャロに対する先輩呼びについてなんですが・・・」

「階級と年齢でいえば、キジョウ陸曹の方が上なので、先輩と言うのはちょっとおかしいかな～、と」

１３歳で一等陸士である僕とキャロに対し、キジョウさんは陸曹で、年齢は聞いてないから正しい数は判らないけど、明らかに年上。そんな人から先輩って呼ばれると、何ていうか居心地があまり良くないと言うか。僕たちより歳も階級も下の後輩局員からなら、先輩、って呼ばれてみたいけど・・・。

「ですが局員としての経歴であれば、お２人は私より１年先輩です

し」

「それはそうですけど・・・」

「それでも止めて頂ければな～と・・・」

「「お願いします」」

先輩呼びを止めてほしいことをお願いすると、「判りました。では何とお呼びしましょうか？」ということで、「出来ればファーストネームで呼んでくれると嬉しいです」ってキャロがお願いした。

「えっと・・・エリオ君、キャロちゃん・・・？」

「あ、それでいいです！　ね？　エリオ君！」

「うんっ！　ごめんなさい、キジョウ陸曹。本当はこういうのは良くないとは思うんですけど・・・。あの、前所属の六課でも今現在所属してる自然保護隊でも、階級も役職も付けずに名前で呼び合っていたから、それに慣れてるからそうしたいって・・・」

今にして思えば緩かったんだな～って思う。でもキジョウ陸曹は首を横に振った後、「実は特騎隊もそうなんですよ♪」って微笑んだ。シャルさんが隊長だから、なんとなくそんな気はしてた。

「では私のことも名前で呼んでください、ミヤビ、と」

「「はいっ！　ミヤビさん！」」

３人で笑顔で居ると、「それにしてもすごいですね」ってミヤビさんが漏らしたから、「え？」って聞き返す。

「あなた達２人はまだ１３歳。局入りは１０歳。それなのにこんな危険な最前線で戦って・・・。すごいです。立派です。尊敬します。けれど・・・他には選択肢が無かったのですか？　管理局は実力あれば幼くても入局できる。万年人手不足で、優秀な魔導師はのどから手が出るほどに欲しい人材。でも・・・。私はそんな管理局はあまり好きじゃないです。平和のためとはいえ、子供たちを前線で戦わせるなんて・・・」

笑顔から一転、とても悲しそうな表情を浮かべるミヤビさん。確かに僕とキャロは、六課時代に比べればまだ平和な自然保護隊で活動してはいるけど、密漁者などを相手に戦ってる。危険度は抑えられてるけど、それでも怪我をすることだってある。

「でも、それでも僕たちはこの道を選んで、進もうって思ってます」

「何かを、誰かを守れる力を持っているのなら、それの力で守ってあげたいって・・・。私とエリオ君は守られてきましたし、今も遠くからですけど守られてます。ですけど守られてるだけじゃダメだって思うんです」

「力を持つ者としての覚悟と意志。それを胸に秘めて、僕たちは局員を続けていきます」

願いと思いは巡り巡っていく。フェイトさん達の意思を受け継いだ僕たち。その意思がまた誰かに受け継がれたら嬉しいなって思う。

「ごめんなさい。余計なお世話でした。とても素晴らしいと思います、その考え。でも、無理だけはしちゃダメですよ？　大人に頼ることも忘れないでくださいね」

「「はいっ！」」

それから続々と駐車場やレールウェイステーションへと向かうお客さんを見送っていると、『こちら東出入り口のアルテルミナス。そちらは状況は？』って通信が入った。ここから８００ｍと離れてる東出入り口の監視を担当するマルスヴァローグ一尉からだ。

「こちら南出入り口のミヤビ。民間の方たちは順次帰路に付いています。マリアージュや暗殺者の姿は確認できません」

『了解。他の遺跡に回ったチームからも連絡は無いから、まだ警戒は怠らないように』

「「「了解！」」」

マルスヴァローグ一尉との短い通信も終わり、お客さんの数がまばらになって来たその時、「きゅくるー！」空から周囲を警戒してくれていたフリードが大きく一鳴きして、キャロの元に戻って来た。そしてある方角に頭を向けて、さらに「きゅくるー！」強く鳴いた。

「来ましたね」

ミヤビさんが騎士甲冑に変身しつつ、僕たちの前に躍り出た。僕たちの目の前に姿を見せたのは４体の「マリアージュ・・・！」だ。僕とキャロも「セットアップ！」と防護服に変身して、僕は"ストラーダ"を構えた。

「こちら南出入り口！　マリアージュを４体視認しました！　これより迎撃に入ります！」

『了解。こちらも４体を視認し、交戦に入る。勝とうね』

マルスヴァローグ一尉の方にも出現したようだけど、何も心配は要らないと思う。あのルシルさんと同格の騎士なのだから。

「エリオ君とキャロちゃんとフリードリヒ君は民間人の避難誘導と周囲警戒を！」

「「了解！」」

お客さんがまだ帰りきっていない今、誰かが護りに行かないといけない。ミヤビさんに応じた僕とキャロは、「我われも手伝います！」って応援に来てくれた陸士隊の人たちと一緒に、「慌てないでください！」って避難誘導を始めた。

「やっぱりすごく強い・・・」

その最中にキャロがそう言ったから、その目線の先を見る。それでミヤビさんが"鬼神"と呼ばれる所以を見た。クリスタルのような半透明の角を額から2本と生やしたミヤビさんの姿。物語の挿絵などでしか見たことのない鬼の姿そのものだ。そんなミヤビさんは、魔力付加していないただの裏拳で、1体目のマリアージュの頭を事も無げに吹っ飛ばした。

「えいっ！」

――光劉烈破――

薄い水色の魔力を右前腕部分に付加させたミヤビさんは2体目のマリアージュの胸に貫手を突き入れると、直後にマリアージュの上半身がドォン！と吹っ飛んだ。

「てーいっ！」

両手を組んでの振り下ろしを3体目のマリアージュの頭部に打ち込むと、マリアージュは顔面から地面に叩き付けられた。あまりの威力だったのか僅かにバウンド。上半身が反り返ったところでミヤビさんは「でい！」と組んだままの両手を振り上げて、マリアージュを空高く吹っ飛ばした。かと思えば、ミヤビさんもジャンプして、錐もみ状態のマリアージュの片足を掴み取って、4体目のマリアージュに向かって放り投げた。

――紅蓮蹴波――

激突して地面に転がった3体目と4体目のマリアージュ。ミヤビさんの角が半透明から真っ赤に変色すると、右脚に同じような真っ赤な炎が噴き上がった。そして宙に展開したベルカ魔法陣を蹴って、起き上がろうとしてたマリアージュ2体の元へと飛び蹴り態勢で突っ込んで行った。

「どぉ～っせぇ～いっ！」

2体のマリアージュの間に突き入れられたミヤビさんの燃える右脚。炎が周囲に広がると、すぐに半球状に大爆発を起こした。それですでに戦闘不能な1体目と2体目も巻き込まれて、消失し始める炎の中から「撃破完了です」ってミヤビさんが歩き出て来た。真っ赤な角2本も元の半透明に戻っていて、ミヤビさんが「はふぅ」と一息吐く（なんか蒸気のような物が見えたような・・・）と、角がシャァン！と綺麗な音を立てて霧散した。

「避難誘導の方は引き続きお願いします。エリオ君、キャロちゃん、フリードリヒ君。誘導が終わった後はまた周囲警戒をお願いしますね」

それからお客さんの避難誘導を終えた僕たちは、ミヤビさんと一緒に出入り口を護り続けた。

†††Ｓｉｄｅエリオ⇒ルシリオン†††

「――というわけなんだ。マリンガーデンは最悪戦場になる。当然、

そんな事にならないように俺たちも、それぞれの海底遺跡に戦力を割り振っている」

マリンガーデンに遊びに来ていたシャマルとアインスとザフィーラ、それにフォルセティとヴィヴィオとコロナの6人。昨日、八神邸に帰れはしないがミッドに降りて来たと連絡した際、フォルセティがシャマル達と遊びに行く、と言ってはいたが。まさかマリンガーデンとは。

「でもマリアージュが、フォルセティとヴィヴィオに反応したのは気になるよね」

「イクスヴェリア陛下は、オーディンさんやオリヴィエ様と直接お会いしているから、それがマリアージュの行動にも反映されている可能性もあるわよね」

シャマルの言う通りだと思う。暗殺者がマリアージュ1体を拉致したと聞いてはいるが、あくまでマリアージュに指令を下せるのはイクスヴェリアと軍団長のみ。暗殺者組織が関与しているとは思えない。拉致されたのが軍団長とは思えない、というのがティアナやトリシュ達の言だ。

「とにかくだ。シャマル、アインス、ザフィーラ。フォルセティとヴィヴィオ、もちろんコロナも、家に送り届けるまでちゃんと護ってあげてくれ」

「無論だ。必ずや護り抜こう」

「ルシル君、アイリちゃん。気を付けてね」

「んっ♪」

シャマル達と別れようとする中、『本日、マリンパークにお出で頂きましたお客様方にご連絡いたします』と放送が流れ始める。内容は、今日の営業を終了するというものだ。ここアーケードはすでに陸士隊の面々が避難誘導を始めている。短時間ながらも魔法戦が繰り広げられたんだ。とても理解が早く、慌てず、しかし早歩きでマリンパークの出口へと向かう。そんな中で俺を携帯端末でパシャリと写真を撮る客も居る。俺は客寄せパンダじゃないぞ～？

「じゃあフォルセティ。お父さんはまだ仕事があるから」

「うんっ。頑張ってね！　アイリお姉ちゃんも！」

「ありがと～　」

俺とアイリでフォルセティとハイタッチを交わし、他の客と共に出口へ向かう彼女たちの背中を見送ろうとしたその時、ガシャァン！とアーケードのアーチガラスが砕けた音が響いた。

――暴力防ぎし（コード）、汝の鉄壁（ピュルキエル）――

アーケード全体にシールドを張って、ガラスの破片をすべて防ぎはしたが。ガラスを割った張本人である「マリアージュ！」３体の着

地は防げなかった。一斉に騒然となるアーケードだったが・・・

「皆さん、ご安心を！　本局のルシリオン・セインテスト一尉がいらっしゃいます！」

「ですので慌てず騒がず、避難しましょう！」

陸士隊員が俺の名前を出すと、みんなが一様に「おおおお！」と歓声を上げた。悪い気持ちじゃないが、「まずは避難を優先してください！」と告げ、フォルセティとヴィヴィオの元へ駆け出そうとしていた3体のマリアージュへ突っ込む。

「アイリ！」

「ヤヴォール！　そっから先は通せんぼ！　氷結の軛！」

アイリが石畳の地面から突き出させた氷の拘束杭が、フォルセティ達や客たちとマリアージュを隔てる壁となった。マリアージュは燃焼液と変化して自爆する術を持つ。下手にダメージを与えて自爆されることだけは避けなければならない。なら凍らせてしまえばいい、となる。

――舞（コード）い振るは、汝（シャルギエル）の麗雪――

「ジャッジメント！」

氷槍6本と展開し、号令を下して一斉射出。マリアージュ達も俺の

攻撃に気付いて回避しようとするが、単純に動きがノロい。６本全てが３体のマリアージュに突き刺さり、一瞬にして凍結した。

「スバル。アーケードに出現したマリアージュ全５体の対処を完了した」

『了解です！　ティアもすぐに戻るって話ですし、あたし達でやれる事はやっておきましょう！』

「イクスヴェリアの捜索だな」

マリンガーデンの運営会社に問い合わせたところ、海底遺跡もマリンガーデンの目玉アトラクションにする予定だったらしいが、局や建設会社などの関係各位から立ち入り禁止令を受けたそうだ。そして遺跡は今、結界などで封印されているとのことだが、施設の中央管理室から起動・解除が出来るようになっているとのことだ。

『はい。マリアージュが姿を見せたということは、こっちが当たりかもですし』

「暗殺者の中には転移スキルを持つ者も居るからな。一応、警戒しておくがもし遭遇したら無闇に交戦しないように。冗談じゃなく強いからな」

『判りました！　ではあたしはポイントＢからの出入り口から入りますので、ルシルさん達もお願います！』

「「了解！」」

俺は管理室のあるスタッフオンリーの城の地下から入れるという一番遠いポイントＤで、アイリはここアーケードにある遊園地、プール、ショッピングモールの交差点である円形状の中央広場、その側にある管理棟からの出入り口・ポイントＡからの突入だ。

「アイリ。１人で大丈夫か？」

「大丈夫！　アイリは、特騎隊のエイダー２！　何度も前線に参加したし、ＡＡＡ＋の実力だし、氷結系だしね！」

そう言って胸を張るアイリには、実際に何度も助けられているからな。エイダーチームは名前通り後衛支援担当だ。特騎隊の前線組の中で怪我をするメンバーはまず居ないが、任務先での民間人や、俺以外のメンバーが被疑者をボコり過ぎた際に治療に当たってもらう。エイダー１のティファレトを含め、２人は俺たちの生命線だ。

「そうだよな。単体戦力としてもう十分強いからな。じゃあお互いに・・・」

「健闘を！だね♪」

――我（コード）を運べ、汝（アンピエル）の蒼翼――

施設内の飛行許可を取っていることで、俺は剣翼を展開してマリンガーデンの奥へと向かいつつ、サーチャー術式の「イシュリエル」

を施設内にバラ撒く。これでいつどこにマリアージュや暗殺者が出ようが判る。

――舞い振るは、汝の麗雪（シャルギエル）――

前後左右５０ｍ間隔で氷槍を１０００本と空に展開し、それを空に維持する。そうして目的の城の前に着地すると、「お待ちしておりました！」とスーツ姿の男性が数人と俺を出迎えてくれた。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒アイリ†††

スバルやマイスターと別れた後、アイリは1人アーケードの中央広場に残って、アーケードの隅っこにある塔型の管理棟へ向かって走る。管理棟の地下3階へと降りて、遺跡へと繋がるハッチから進入するみたい。管理棟の入り口に辿り着いたその時、ドォーン！と大きな爆発音と振動が襲ってきた。

「わわっ！？　なになに！？」

音の出所を見れば、「ちょっ、あそこって・・・！」シャマル達が居るはずの駐車場付近だよね。アイリは「シャマル、アインス！？」って通信を繋げてみる。でも「ノイズが・・・！」酷くて、なかなか繋がらない。思念通話はどうかなって思って、そっちも繋げてみるけどダメだった。爆発によるある種の妨害かも・・・。

「マイスター！」

今度はマイスターに通信を入れると、『イシュリエル越しで見ていた！』ってすぐに繋がってくれた。状況は、駐車場が大きく爆発したとのことで、被害の方は煙の所為でよく判らないみたい。

「アイリが見に行ってこようか？」

『いや、アイリは任務を続行だ。付近には陸士隊や警備隊も居てくれるし、それに何よりシャマル達も一緒だ。今は様子を確認できないがきっと無事だ。だからマリアージュには後れを取らないだろうし、アインスなら暗殺者とも真っ向から戦える』

「・・・そう、だよね・・・。うん、了解」

マイスターとの通信を切り、管理棟へ入る。待っててくれたスタッフから「こちらです！」って案内されたのは地下深くにあったメチャクチャ広い倉庫。その隅っこの床にスライド式のハッチがあった。遅れて、ビーッてサイレンと警報ランプが機能して、ハッチが左右にスライドして開いてく。ハッチを覗き込むと底が見えない程の縦穴があって、昇降用のハシゴが備え付けられてた。結界はもう解除されてるみたいだね。アイリは腰に白翼を展開して、「よいしょっ」と縦穴を飛び降りる。

『アイリ。遺跡への突入は済んだか？』

「うん。たった今、遺跡内部に進入したよ～」

『了解。念のために隔壁を閉じ、結界を再展開するることになるが、

問題は無いか？』

「う～ん、いま問題が無いかどうか聞かれると返答に困るかも・・・」

これから起こるかも知れない。けど今は起こってない。だから答えられないんだよね。マイスターもすぐに『そうだな。すまない』って謝ってくれた。他の侵入者が現れないとも限られないってことで、ハッチも結界も再び機能するとのこと。そのやり取りの中で、真っ暗だった遺跡が明るくなった。人手が入ってるってことで、ちゃんと光源が用意されてた。

『・・・それでな、アイリ。先程の爆発の件だが、状況が判明した。目撃者の話によると、地面からマリアージュが出現し、そのまま自爆したそうだ。被害状況だが、複数人が火傷や転倒時の擦過傷を負い、車両も何台か廃車行き。そして・・・』

マイスターが口を閉ざした。それだけで「シャマル達に何かあったの！？」って察することが出来た。

『シャマルとフォルセティとヴィヴィオ、それに民間人１０人ほどが崩落に巻き込まれて地下、さらに遺跡内部にまで落下したそうなんだ』

「民間人からも！？　アイリも救助に向かった方が良いかな！？　というか、行った方が良いよね！」

『そちらは応援を呼んで対処する。地上では新たなマリアージュや暗殺者までもが姿を見せた。ここが当たりと見て間違いない。俺は暗殺者とマリアージュの迎撃に移るが、クララ先輩の転移スキルで、各地に散っている他のメンバーを今まさに連れて来てもらっている最中だ。っと、ジャッジメント』

マイスターが何かしらの術式を発動させるための号令を発した。今も戦っているんだ。他の特騎隊メンバーが集まって来てるなら、アイリは何も憂うことなく遺跡を進めばいいんだ。管理局一の治癒魔導騎士のティファレト先生も居るはずだから、即死級の怪我を負っていない人なら治せる。

「マイスター。アイリは先を進むよ。シャマル達は遺跡内に落ちたんだよね？　まずはシャマル達を捜してみるつもり。良いよね？」

『ああ、頼む。崩落現場からすでに地下や遺跡へとアインスとシャルとティファレト、それに陸士隊数名が降りているが、人手が必要かもしれない。・・・アイリも十分に気を付けてくれ』

「ヤー！」

マイスターとの通信も切れて、アイリは駐車場方角へと伸びる通路を飛んで進むことにした。遺跡内部はレンガ造りで、所々が崩れちゃってる。よく何千年も海底に在りながらこれだけの損壊で済んでるなぁ～。

「っ！？　おおっとっと。早速お出ましだね、マリアージュ」

目の前の壁を突き破って来たマリアージュ２体と目が合った。結界再展開までの間に侵入を許しちゃったんだ。というか、さっきからドォーン、ドォーン！って爆発音が続いてるけど・・・。ああもう、嫌な予感しかしないんだけど・・・。

「あなた達さぁ、生き埋め上等で遺跡を破壊してイクスヴェリアを捜してるの？　馬鹿なの？　死ぬの？　あぁ、もう死んでたんだっけ？　アイリ、生者にしか興味無いから。ちょこっと残酷だよ？」

あ、マイスターだけは特別ね。オリジナルのマイスターは今現在、半死人状態だって言うけど、完全には死んでないからカウントしないよ～。

――コード・シャルギエル――

――フリーレン・ドルヒ――

氷槍１本を作って携え、氷の短剣２５本を周囲に展開。氷槍の柄を両手で握りしめて、「まぁいいや。さぁ始めようか」って腰の白翼を大きく羽ばたかせて、臨戦態勢に入ったマリアージュに突っ込む。２体とも右腕を砲塔のような物へと変化させて、直射砲撃を放ってきた。

「せいや！」

氷槍を１体に投擲すると同時に、本来の３０ｃｍほどの身長形態で

ある「フェー・フォルム！」へと戻って、「おーっとと」砲撃のやり過ごす。２射目が放たれる前に、「行って！」って待機させてた短剣を一斉射出。氷槍は当たらずに２体の間を通り過ぎようとしたけど、「どっかーん！」と号令を下す。氷槍を炸裂させて、小さな破片をマリアージュに叩き付ける。

「ヴァクストゥーム・フォルム！」

すぐに１５０ｃｍまでに変身し直しつつ、両手に羽根型の氷のナイフ「クリンゲ・フェーダー！」を作り出して、体の所々が凍りついて動きがぎこちないマリアージュの首を撥ね飛ばした。

「完全に機能停止する前に他の個体に連絡しておいて。次にアイリ達の邪魔をしたら承知しないってね～」

ドサッと倒れ伏してビクビクっと痙攣してた２体のマリアージュは、そのまま動かなくなった。それを確認したアイリは、すぐにシャマル達が居るだろう地点へ向かって改めて通路を飛んだ。

Ｅｐｉｃａ３－Ｆマリアージュ事件～Ｃｈｉｌｄｒｅｎ'ｓ　Ａｄｖｅｎｔｕｒｅ～

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

「あいたた・・・」

全身に奔る痛みで僕は目を覚ました。少しカビ臭くて、「けほっ。砂埃が・・・」舞ってるから咳を何度か繰り返す。体を起こして僕は周囲を見回す。白色のレンガで造られた四角い広間の床には僕と「ヴィヴィオ・・・！」が居た。ヴィヴィオは力なく倒れてたから急いで立ち上がると、「痛・・・！」右脚首から痛みが・・・。

「こんなの・・・！」

右足を引き摺りながらヴィヴィオの元に向かって、「ヴィヴィオ、しっかり！」って声を掛けるけど返事がない。口の前に手を持って来て「大丈夫、息はしてる」って確認する。シャマルお姉ちゃんやアイリお姉ちゃんから、簡単な応急処置などを習っておいてよかった。

「まずは消毒・・・」

ヴィヴィオも擦り傷とかしてるし。背負ってるリュックを床に降ろして、中から医療キットを取り出す。それからヴィヴィオの体勢を仰向けに変えて、お姉ちゃん達に教えてもらった手順を思い起こし

ながら、消毒や絆創膏って処置を施してく。

「よし。これで目で見える範囲の怪我の処置は終わったけど・・・」

あとは目に見えない服の下の怪我なんだけど。さすがにそこまでやったら嫌われる。それだけは絶対に嫌だから、「そこだけは魔法で治そう」って考えに至る。僕とヴィヴィオの足元に、父さんと一緒のサファイアブルーに輝くベルカ魔法陣を展開。そして、お姉ちゃんたち直伝の治癒魔法の「静かなる癒し・・・！」を発動する。

（魔法が必要ないレベルの怪我なら、患者の自己治癒力に任せて処置だけにすること。って約束守れなかったけど・・・。ヴィヴィオを護るためなら・・・）

魔法を掛けてる最中、「う・・ん・・？　フォルセティ・・・？」ってヴィヴィオの意識が戻ってくれた。抱きしめて無事を喜びたい気持ちを必死に抑えて、ヴィヴィオの顔の前で人差し指を立てる。

「ヴィヴィオ。指、何本に見える？」

「え？・・・1本だけど・・・。あ、うん、大丈夫だよ、フォルセティ。意識はしっかりし始めてるし、ちゃんとフォルセティの顔もブレなく見えてる♪」

そう言って上半身を起こしたヴィヴィオが「あ、これって・・・」って、腕や足に巻かれた包帯や張られた絆創膏に気付いた。僕は「ちょっと怪我してたから」って伝える。

「ありがとう、フォルセティ！」

「うんっ！」

ヴィヴィオも目を覚ましたことだし改めて状況を把握。まずは外部と連絡できるかどうか。僕とヴィヴィオで通信端末を取り出して見せ合いっこ。だけど、どっちも壊れちゃったのか「繋がらない・・・」みたい。学院で習った念話も使ってるみるけど、ノイズが酷くてすぐに解除した。

「外との連絡は出来ないね・・・」

「うん。こうなったら救助が来るまでココで待つしかないと思う」

壁が崩れて、天井も上階の瓦礫で塞がってる、いつ崩落するかもしれないココで。頭の中で学院で学んだ魔法、お父さん達から学んだ術を何度も繰り返す。学院での基礎と応用、お父さん達との実戦。それを駆使してヴィヴィオだけでも逃がさないと。

「？・・・ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオが僕の肩にピッタリとくっ付くほどの近くに座り直した。不安がってるって判る。僕がしっかりしないと。頬に叩いて気合いを入れ直そうとした時、「うぅ・・・」って呻き声のようなものが聞こえた。ヴィヴィオと顔を見合わせて、どこから聞こえたのか周囲を見回す。

「フォルセティ。あの瓦礫の後ろじゃないかな・・・？」

僕の袖をクイっと引っ張って来たヴィヴィオが、「ほら、あそこ」って崩れたレンガの山を指差した。僕はヴィヴィオに「ここで待ってて」って伝えて、1人で瓦礫の方へと静かに歩み寄る。そして瓦礫の後ろに回り込んで、「あ、女の子・・・！」が1人倒れてるのを見つけた。

「え、女の子！？　フォルセティ、医療キット！」

ヴィヴィオが医療キットを手にこっちに来てくれる。その間に僕は女の子の上に乗ってる小さな石を払い除ける。背格好からしてたぶんだけど、僕やヴィヴィオと同い年くらい。

「フォルセティ、持って来たよ！　何か手伝えることない？」

「あ、えっと。ちょっと待ってて」

女の子の呼吸は正常だし、気を失ってるけど外傷は見た感じ無いっぽい。目に見える傷はヴィヴィオの時みたく、消毒液や絆創膏などで処置を施す。そして終わったところで、「フォルセティ」ってヴィヴィオが僕の服をクイッと引っ張った。

「さっきから爆発音や地鳴りがあるよ？　それに天井から小さな石を落ちて来てる・・・」

そう言われてみれば、って辺りを見回す。この女の子の処置で精いっぱいだったからそこまで気が回ってなかった。確かに振動がお尻から伝わって来るし、砂が落ちて来てる。

「こういう場合って、あんまり動き回るのは良くないんだけど・・・。瓦礫に潰されて圧死なんて嫌だし。移動しよう、ヴィヴィオ」

「うんっ！」

「僕のリュック、お願い。僕はこの子を運ぶから」

なんとか背負えるように女の子の態勢を変えて、「よいしょっ」と背負う。ヴィヴィヴォと頷き合って仄暗い広間から出る。壁のレンガが薄らと光ってくれてるおかげで、荒れた舗装の通路でも躓くことなく歩ける。

「フォルセティ。そこちょっと出っ張ってるから気を付けてね」

「ありがと！」

先頭を歩いてくれてるヴィヴィオが注意を促してくれるし、このまま安全に進めると思ってた。だけどヴィヴィオと僕の間の床からピシッ、バキッ、って嫌な音がし始める。僕は「走って！」って伝えた直後・・・

「ふわ・・・！？」

「やば・・・！」

足元が一斉に崩れ始めた。僕とヴィヴィオはすぐに駆けだすけど、

「ダメだ・・・！」到底間に合わず、そのまま階下へ落下し始める。

僕はすぐに「フローター！」を発動して、階下の床に叩き付けられることを回避する。

「おお！　すごいフォルセティ！」

「盾役（ガード）と支援役（サポーター）としては、これくらい出来ないとさ・・・」

先に瓦礫が全部階下に落ちるのを見届けながら、僕たちはゆっくりと降下を始める。フローターはあくまで対象を浮かしてそっと降ろすための魔法で、空に飛ばすものじゃないから。効果通りに階下の瓦礫の山に着地した僕とヴィヴィオは、少しでも広い場所に行こうとまた歩き出す。

「んぅ・・・？　んみゃあ・・・？」

背負ってた女の子が呻き声を出して身じろぎをした。そして「あれ？」って目を覚ましたようだ。だから、大丈夫？って声を掛けようとした瞬間・・・

「誰ぇぇぇーーーーーー！！？　いやぁぁぁーーーーーーっ！！」

「へぶっはあああ！？」

思いっきり殴られた。僕に背負われてる状態でのこの威力。絶対に格闘技経験者だよ、これ・・・。殴り飛ばされた僕は、当然背負ってた女の子を離しちゃうわけで。あの子が「きゃん！？」って落ちて尻もちをついた。

「きゃあああ！？　フォルセティ！？　大丈夫！？」

慌てて駆け寄って来てくれたヴィヴィオに上半身を起こされた僕は、「なんとか・・・」って答えながら、手当てされた自分の体を見て呆然としてる女の子に「驚かせたよね？　ごめん」って謝る。

――女の子には常に優しく、紳士的に。まずはこちらに非があったかどうかを考えようか。んでもし、フォルセティに非が無くても、すぐに暴言・暴力に訴え掛けるのはアカン。そやけど家族や友達を護るためなら、そこは大義名分で戦って打ち負かすことを、お母さんとお父さんが許可します――

お母さん達からの約束もあるし、いきなり殴られた事を今は水に流す。あの子だって状況が判らない中で、見知らぬ男の子が自分を背負ってた、なんて混乱してもおかしくないもん。

「えっと・・・。この包帯とかって・・・？」

「うん。この子、フォルセティが手当てしてくれたんだよ」

ヴィヴィオがそう説明してくれると、あの子は「ごめんなさい！」って腰を９０度くらいまで曲げて謝ってくれた。だから「どういた

しまして！」って僕は返した。素直に謝れるのは良い子の証拠だ。

「えっと・・・。あたし、リオ！　リオ・ウェズリー！」

「わたしは高町ヴィヴィオ！」

「僕は八神フォルセティ！」

自己紹介をした後は、今の僕たちの状況をリオに伝える。マリンガーデンの地下深くにある遺跡に僕たちは居るってこと、少しでも安全な場所を探してることなどなど。

「・・・そっか。他に落ちて来た人は・・・居ないんだよね？」

「うん。わたしとフォルセティとリオの３人だけ」

シャマルお姉ちゃんも一緒に落ちて来たと思ったんだけど、その姿が無いから気のせいだったんだね。

「リオも家族で来たの？」

「うん。一緒に落ちて来たんなら心配なんだけど」

「大丈夫。今、僕のお父さんやお姉ちゃん達が救助に入ってくれてると思うから」

「フォルセティのお父さん達って・・・もしかして管理局員？」

僕もヴィヴィオも話してないことをリオが言い当てたから「え？」って聞き返すと、「ルシリオン・セインテストさんでしょ？」ってお父さんの名前を口にした。

「うん。そうだけど。でもなんで・・・？」

「なんでって。だってそっくりだから。それに今思い出したけど、フォルセティとヴィヴィオってザンクト・ヒルデ魔法学院の生徒でしょ？　あたしも同じ学院の生徒で3年生なんだ！」

「え、そうなんだ！　それじゃあどっかですれ違ってたこともあるかもね～！」

それから道すがらお互いの事を話し合う。僕とヴィヴィオはミッド出身だってこと、家族構成、何組の生徒で友達の話。でも生まれた経緯とクローンだって事は黙ってた。いきなりそんな事を教えられてもリオだってどうしたらいいか判らないだろうし。それでリオはルーフェンって世界の出身で、春光拳っていうリオの実家に由来する独自の格闘技を習ってるとのことだった。

「通りであんな態勢で強烈な一撃を打てるわけだ」

ちょっとイジワルしたくなって殴られた左頬を擦るとリオが「ホントごめん！」って本気で謝ってきたから、僕も「ごめん、もう気にしてないから」って謝り返すことに。ヴィヴィオは「イジワル禁止～」って僕の頬を結構強くツンツン突いてきた。

「あはは！　ヴィヴィオとフォルセティは何かやってるの？　２人の親ってどっちも有名な管理局員だし」

「あ、うん。わたしも格闘技やってるんだよ。ストライクアーツっていうの。先生はママじゃなくて、友達なんだけど」

ストライクアーツは、ミッドで一番競技人口が多い格闘技の事。ヴィヴィオとコロナはノーヴェを師匠として、日々自分の格闘技の腕を磨いてる。そしてそれが、僕が後衛魔導師になることを選ばせた理由だったりする。

（たとえこの・・・ヴィヴィオのことが大切だって想いも、ヴィヴィオを護れる騎士でありたいっていう気持ちも、僕を造ったプライソンって人が与えた偽物でも・・・）

その事実を素直に受け止めつつ、ヴィヴィオを大切にしたい、支えたい、守りたいって気持ちは、誰にも否定させたくないって思う。だから最初は僕が前衛で、ヴィヴィオを護る盾役になるつもりだった。でもヴィヴィオがストライクアーツを学んで、ゴリゴリのアタッカーになっちゃったからさぁ大変。

ヴィヴィオの魔力資質って格闘型に不向きな高速並列運用型で、攻防力も並よりちょっと下な学者型か中後衛型。それでもヴィヴィオは前衛型を選択した。ヴィヴィオとコロナの先生であるノーヴェは、視野が広くて反応と動作の速度が優れてるっていうヴィヴィオの良いところから、カウンターヒッターっていう道を示して、そしてヴィヴィオを導いてる。

「あ。わたし達の友達にコロナって子がいるんだけど、ここから出られたら紹介するね。コロナもわたしと一緒にストライクアーツを学んでるんだ～」

「そうなんだ！　フォルセティは？　フォルセティも格闘技やってるの？」

「うん。ヴィヴィオやコロナとは師事してる人は違うけど一応は」

医療関係はシャマルお姉ちゃんとアイリお姉ちゃんから、戦闘技術はシグナムお姉ちゃんやヴィータお姉ちゃんから、格闘技はザフィーラやアインスお姉ちゃんから、魔法はお父さんとお母さんから教わってる。

「でも前衛格闘は僕の領分じゃないから。どっちかって言うと魔法戦が得意だよ」

「時々わたしもコロナもフォルセティと試合するけど、すっごい強いよ！」

「おお、そうなんだ～！　ねえねえ、今度あたしとも試合してよフォルセティ！」

目をキラキラ輝かせてるリオに「いいよ、やろっか」って応えておく。春光拳というのがどう言った格闘技なのか実際に体験して、何が起きても良いように対策などを練っておきたいし。

†††Ｓｉｄｅフォルセティ⇒ヴィヴィオ†††

「あ、広い部屋に出たよ！」

「さっきからずっと思ってたけど、壁が薄ら光ってるのってなんか不思議～！」

「２人はちょっと入口で待ってて。僕が調べてみるから」

わたしとフォルセティ、新しく出来た友達のリオは、原因の判らない爆発で起きた地面の崩落に巻き込まれて、ルシルさんとアイリに教えてもらっていた海底遺跡にまで落ちて来ちゃった。コロナの姿はないから、たぶん崩落には巻き込まれてないんだと思う。それだけは不幸中の幸いだよ。

「フォルセティって、こういうこと得意なの？」

ひとり広い部屋に入って床や壁や天井を調べるフォルセティを見て、リオがそう聞いてたから「うん。サポート系は強いよ」って答えた。でもホントは格闘技でも強いのに、魔力だってＡＡＡ－もあるのに、それでも後衛を選んだフォルセティ。ちょっともったいないな～って思ってた。

「ヴィヴィオ、リオ。ここで救助を待とう」

フォルセティが手招きしてくれたから「うんっ！」って頷き返して

部屋に入る。そしてフォルセティの提案通り、何かがあってもすぐに逃げられるように出入り口付近の床に座り込む。

「はふぅ～」

体力はノーヴェとの訓練で少しは上がったって思ってたけど、やっぱり状況が状況だからか普段より疲れがすぐに溜まっちゃうみたい。リュックから水筒を取り出して、「はいどうぞ、リオ」お茶を注いだコップをリオに差し出す。

「いいの！　ありがとう！　じゃあたしはね～・・・クッキー！」

リオのリュックから出て来たのは、お土産屋さんで売られてたマリンガーデン印のクッキー缶。それを見たら、きゅ～、ってお腹の音がわたしとリオのお腹の中から聞こえた。リオは「あっはっは～、お腹空いた～！」って気にしてない風だけど・・・。

「あぅ、恥ずかしい・・・」

絶対フォルセティにも聞こえたよ今の音。チラッと見ると、フォルセティも自分の水筒のお茶を飲んで「はふぅ～」って一息吐いてるところだった。様子からして今のお腹の音には気付いてないみたいで「よかった」ってホッとする。

「何が良かったの？」

「あ、ううん、こっちの話！　えっと、いただきます！」

リオが空けてくれた缶からイルカの形をしたクッキーを1枚手にとって、「はむっ」と齧る。うん、美味しい。フォルセティも「じゃあ僕も、いただきます！」ってサメの形をしたクッキーを食べて「美味いな～」って頬を綻ばせた。

「あたしも、いただきます！」

どれだけ待てばいいのか判らないけど、独りじゃないから寂しくない。3人でお喋りしてると、フォルセティが急に立ち上がって反対側の出口をキッと睨みつけた。そして「2人はここに居て」って告げて、フォルセティ1人でそっちへ向かおうとした。

「待って！」

わたしも立ち上がってフォルセティの右袖を掴み取る。フォルセティがわたしに振り返ると、「大丈夫。ちょっと見て来るだけだから」って微笑んだ。わたしは少し渋ったけど「う、うん。気を付けてね」って袖から手を離した。

「んっ。リオ。ヴィヴィオのことよろしく」

「判ったー！」

リオと2人でフォルセティの背中を見送る。フォルセティが出口から通路の奥へと進んで行って、その姿が完全に見えなくなったところで、カッと何かが光ったかと思えばフォルセティが「うあああ！」

悲鳴を上げて、部屋の中央にまで飛ばされてきた。体は強張ることなく、ぐるぐる考えることなく、わたしの体はそれが当たり前だって言えるほどの反応で、「うっく・・・・！」フォルセティを抱き止めた。

「「フォルセティ！？」」

「いっつう～・・・。ダメだ、２人とも逃げて、マリアージュだ・・・！」

足元が覚束ないのにフォルセティはまた通路に戻ろうとした。だから「逃げよう！」ってフォルセティの腕を掴んで、無理やり背後の通路へ戻ろうとした。

「ここでどうにかしないとダメだよ！　逃げた先で別のマリアージュと鉢合わせたら挟み撃ちにされて一巻の終わりになる！　どうする、どうすればいい・・・！」

顔を青褪めさせて、こっちに向かって来てるマリアージュをどうやって倒そうか必死に考えてるフォルセティに「わたしも戦う！」って提案してみる。するとやっぱり「ダメだ！」ってすごい剣幕で却下された。

「だけど・・・！」

「相手はアイリお姉ちゃんが言ってた連続殺人犯だ！　しかも自爆するような兵器だ！　そんな奴とヴィヴィオを戦わせるなんて出来

るわけないだろ！」

「じゃあどうするの！　フォルセティだけじゃ相手に出来ないかもしれないでしょ！」

「何とかしてみせるよ！　そのための僕だ！」

「そうやってまた無茶をするつもりなら、わたしは絶対に許さないから！」

「待って待って！　言い争ってる場合じゃないよ、２人とも！」

わたしとフォルセティの間に割って入って来たリオに、「ごめん」って２人で謝る。そうこうしてるうちに、フォルセティを吹き飛ばした犯人、マリアージュがこの部屋に入って来た。

「聖王と魔神を確認。これより確保に入ります」

「「確保・・・」」

改めてそう言われて、アーケードでもマリアージュが、わたしとフォルセティを確保する、って言っていたようなことを思い出した。わたしは小声で「確保されるフリはどうかな？」ってフォルセティに提案してみる。

「危なすぎるよそれは。・・・僕がなんとかしてみせる！」

わたしの事を一番に考えてくれるのは素直に嬉しいけど、もう少し話を聞いてくれても良いと思う。フォルセティは足元に蒼色に輝くベルカ魔法陣を展開して、両手の人差し指に魔力スフィアを1つずつ作り出した。

「まずは・・・・！」

右人差し指をマリアージュに向けたフォルセティに、マリアージュもグッと身構えて臨戦態勢に入った。

「コード・レヴォルヴァー！」

フォルセティの右の人差し指の前方に浮かぶ魔力スフィアから放たれるのは砲撃、と言うよりは細い光線。それが6連発。それらはマリアージュの体に当たることはなくて、全弾が足元に着弾。床を円形に撃ち抜くと同時に爆発した。その爆発で床が崩れて下の階に落下しそうになったマリアージュだけど、「このようなもの・・・」跳んでこっち側に移ろうとした。

「させない！」

――コード・シュロート――

「フォイア！」

左の人差し指から放たれた魔力スフィアはマリアージュの頭上、天井に着弾した。着弾直前に小さな魔力弾にバラけたことで着弾ポイ

ントは広範囲に亘ってる。だから天井の大半が一気に崩落して来て、その瓦礫は「ぅぐ・・・！？」マリアージュの頭に落下。そしてもろとも階下へと落ちて行くんだけど・・・。

「「わあああああ！！」」

わたし達の頭上の天井も崩れて来たから、わたし達はさっき通って来たばかりの通路へ全力逃走。フォルセティは「フォーアベライトゥング」って詠唱して、今度は１０本の指すべてに小さな魔力スフィアを作り出した。

「すご。デバイス無しであんな事が出来るんだフォルセティって・・・！」

「うん。フォルセティ、天才だから」

テストだって常に学年1位だし、魔法戦も強いし、格闘戦も強いし。だから背負っちゃうんだよね。だからわたしも強くならなきゃって思う。わたしだって、フォルセティの事を守りたいし支えてあげたいから。

「止まって！」

先頭を走ってたフォルセティからそう指示されて、「うんっ！」ってわたしとリオも急ブレーキで止まる。耳を澄ませてるようだからわたしも耳を澄ましてみると、コツコツって足音が聞こえてるのが判った。

「まさかマリアージュ・・・？」

「かも知れない。けどそうじゃないかも・・・」

「どういうこと？」

「さっきのマリアージュとは足音が軽いんだ。それに歩幅も狭いみたい」

リオの質問にそう答えたフォルセティに、「そんなのも判るんだ・・・」ってリオが驚いた。

「アーケードでもさっきでもマリアージュの姿形は一緒だった。でも今度は違うかもしれない。そう考えると迂闊に前に出られない。救助隊の誰かであることを願いたいんだけど、足音は1人分。まさかこんな形で実戦を経験するなんてさ～・・・」

フォルセティの深い考察にわたし達は「なるほど～」って感嘆した。フォルセティに庇われるように通路の奥をジッと見詰めてると、足音の主の姿が見えてきた。その姿にわたし達の緊張はほんの少しだけど緩くなった。そこに居たのはわたし達と同い年くらいの女の子だったから。

「え・・・！？　オーディン様、オリヴィエ様・・・！？」

「「え・・・？」」

その女の子が、わたしとフォルセティのオリジナルにあたる人の名前を口にした。目を丸くしてると、「いえ、そんなわけがありませんね」って首を振った女の子が「敵ではありません」って両手を上げた。

「私はイクスヴェリアと申します」

あの女の子こそが古代ベルカの王様の1人、冥府の炎王イクスヴェリアその人だった。

Ｅｐｉｃａ４冥府の炎王～Ｘｗｅｒｉａ～

†††Ｓｉｄｅスバル†††

ヴィヴィオとフォルセティが遺跡内部に落っこちた。しかも内部にはマリアージュまで入って来てるって話だし。無事かどうかを確認したいのに、どういうわけか遺跡の中だと念話も通信も遮断される始末。以前この遺跡を調査したって人たちは、どうやって外部と連絡手段を取ってたんだろう・・・。

（２人がマリアージュと遭遇する前に、なんとしても合流しないと！）

あたしの他にアイリ、それにシャルさんが遺跡内部に突入してるけど、どっちにしても先に合流しないと危ないことには変わりないし。焦りばかりが募ってく。フォルセティは八神家のみんなからの英才教育で、９歳でもう信じられない程に強い。だけどヴィヴィオを守りながら戦うってことになると、経験値が足りてないと思う。

「マッハキャリバー！　生命反応とかまだ拾えない？」

≪はい。連絡系・探知系の魔法が上手く機能しません。地道に探すしかないかと・・・≫

「うぅ～。この遺跡って６階層に分かれてるし、ヴィヴィオ達がどの階層にまで落ちたかくらいは判りたいな・・・」

ヴィヴィオとフォルセティが落ちた場所に一度行ってみたけど、階層をぶち抜いたような崩れ方をした穴があった。しかも瓦礫で穴が埋まっちゃってて、そこから降りることが出来ないから遠回りして、階段っていう正規ルートで階下に降りないといけない。そうなると余計に2人から遠ざかってしまう可能性もあるわけで。

「床を打ち抜いてショートカットが出来ればな～」

≪ 冗談でも笑えませんよ≫

「だよね」

結界で遺跡全体が潰れないようにしてあるらしいけど、内側は普通に崩れてるから無理をするとやっぱり崩落する。急いでるからと言って遺跡を壊す真似は出来ない。

――コード・レヴォルヴァー――

「うわっ・・・！？」

"マッハキャリバー"の速度を４５ｋｍくらいにまで抑えて通路を駆け抜け、大きな広間を突っ切って行こうとしたところに突然、「サファイアブルーの魔力・・・！」の光線が前方の天井を撃ち抜いて来て、さらに止まることなく床まで撃ち抜いた。その所為で前方の天井と床が崩落し始めて、瓦礫が両方の開いた穴を塞いでく。それに巻き込まれないために「マッハキャリバー！」のホイールを逆回転して停止する。

「おっとっと。あっぶな～・・・じゃない！　６連発の光線ということは、フォルセティのレヴォルヴァー！　ちょっ、待って待っ――！」

無駄だと判ってながらも埋まってく天井に手を伸ばしていた時、瓦礫に紛れて何かが落ちて来た。ここに来るまでに何度も殴り飛ばして来た「マリアージュ！」だった。またか～、って思う反面、フォルセティの頭の良さに感心した。
ただ背を向けて逃げるんじゃなくて足元を崩して敵を階下に落とすなんて、緊急時なら尚更すぐには思いつかない。しかもそれがたった９歳の子供が思いつくなんて、普通はありえない・・・と思う。
あー、でもなのはさん達は９歳の頃にはトンデモ戦績を収めてるらしいし。

「まずは、マリアージュを殴る！」

ＬＡＳと違ってマリアージュは喋るから、ちょいやり辛さはあるんだけど・・・。大切な友達をどうにかしようってしてる敵だから「しょうがない！」よね。右腕の装着してる"リボルバーナックル"のカートリッジをロード。

「脅威レベル５の管理局員を視認。迎撃に入り――」

「おおおおおおッ！」

言いきる前にあたしは突進して、高速回転させてるナックルスピナ

ーの生み出した衝撃波を拳に乗せて直接相手に打ち込む打撃魔法・リボルバーキャノンを繰り出す。対するマリアージュは、周囲に瓦礫の山が出来てるから回避は出来ない。だから自然と両腕を体の前に掲げてのガード姿勢をとった。

「ガードの上からぶん殴る！」

一切の手加減なしで両腕に向かって拳を打ち込んだ。でも「は！？」これまでのマリアージュとは違う手応えが襲ってきた。ズブズブと両腕だけじゃなくて胸にまで拳がめり込んだ。そう、マリアージュが体を液状化させたんだ。

「うわ、うわっ！　それはまずいって！」

マリアージュは可燃性の液体に変化できる。ゼロ距離での爆発なんて受けたら、いくらバリアジャケットに変身していたとしても無傷じゃ済まない。引き抜こうとしても、もう一度実体化した両腕があたしの右腕を抱きしめてる所為で、「抜けない・・・！」事態に陥った。

「この・・・！」

ナックルスピナーのスピナーを高速回転させて、マリアージュの胴体にあたる液体を周囲に撒き散らせつつ、"マッハキャリバー"のローラーを逆回転させて全力後退を実行。少しずつ抜けそうになったところで・・・

「おお！　スバルをはっけ～ん！」

――アイスマン――

マリアージュの周囲に冷気が渦巻いたと思えば、一瞬にして氷で出来た雪？だるまになった。すると簡単に腕を引き抜けることが出来て、マリアージュもガシャァン！と崩れた。振り返ればそこには「アイリ！」が居た。真っ白なドレスの裾や腰から生えてる一対の翼を靡かせながら、アイリが「危なかったね～♪」大手を振りながらフワフワ浮いてやって来た。

「助かったよぉ～、アイリ～」

「どういたしまして～。それにしても、ホント至るところにマリアージュが居るね。ここに来るまでに7体を潰してきたし～」

「うん。・・・って、フォルセティ達が見つかった言うか、どこに居るかが判ったんだった！」

「ホント！？　どこどこ！？」

今さっき起こった事をアイリに伝えると、「あれ～！？　何でアイリ達、あの子たちより下の階に居るの？」って首を傾げた。それはあたしも思った事だけど、「今は合流を考えよう！」って伝える。

「上の階に上がるための階段まで戻ろ――って、アイリ・・・？」

急いで来た道を戻ろうとしたんだけど、アイリだけはその場に留まった。何をしてるの？って聞く前にアイリの手元に４枚の羽根が舞い降りて、羽根を指の間に挟み込んだ。

「ラオム・ツー・ストッペン！」

そして羽根を天井に向けて投げ放った。すると羽根の突き刺さった個所を結ぶように魔力のラインが走って、その内側を瞬時に凍結した。パキィンって綺麗な音を立てて天井が割れて、キラキラ輝く氷の破片となって通路に舞った。

「力尽くで破壊して連鎖的に崩落するのを心配したんだろうけど、崩落しないように凍結させちゃえば良いんだよ」

「でも融けたらどの道崩落するんじゃ・・・？」

「そうかもね。でもマリアージュによる破壊活動の所為でもうメチャクチャだし、何より遺跡全体が崩れないように結界があるんだから、大丈夫だいじょ～うぶ～♪」

そんなやり取りをしながらアイリはす～っと音も無く上階に上がって、あたしも魔力の道・ウイングロードを発動して上階に上がる。アイリはさっきと同じように瓦礫を凍結粉砕していて、あたしでも通れるほどの路を造ってくれていた。

「足跡から見るとフォルセティ達、一度この部屋に入った後、来た路を戻って行ったみたいだね」

「マリアージュに襲われたから・・・？」

「だろうね。気になるのは、足跡が３人分だということ。靴の大きさや歩幅、足跡からして・・・２人と歳の近い女の子だね」

アイリが床に薄らと残ってる足跡を見てそう言った。あたしも試しに見てみて、「あー、ホントだ」って、アイリの意見に納得した。

「一般人かも知れない。急ごう、スバル！」

「うんっ！」

凍った床の上に伸ばしたウイングロードを疾走して、前を飛ぶアイリを追い駆ける。そして割とすぐに「見つけた！」ってアイリが嬉しそうに大声を出した。体を傾けてアイリの向こう側を見ると、ヴィヴィオとフォルセティ、あと見知らぬ女の子２人が奥に向かって走ってた。

†††Ｓｉｄｅスバル⇒アイリ†††

「フォルセティ～～～！」

無事な姿で居てくれたあの子たちを見つけた瞬間、アイリは腰の白翼を羽ばたかせて速度を上げて、フォルセティに抱き付いた。

「アイリお姉ちゃん！」

「スバルさんも！」

「うんっ。ヴィヴィオも無事そうで良かった！」

ヴィヴィオにもし何かあったら八神家の沽券に関わるからね。預かっておきながら何で守ってくれなかったの！？って。包帯が巻かれてたり、絆創膏が張られてたり、完全な無傷じゃないっぽいけど・・・。

「あ、フォルセティが手当てしてくれたから平気だよ♪」

「そっか。・・・そっちの子もフォルセティがやったんだよね」

アイリと同じように頭の上に在るリボンと八重歯が特徴的な、活発そうな女の子の怪我の度合いを見ながら「本局医務官、アイリ・セインテストです」って自己紹介すると、「リオ・ウェズリーです！今日からヴィヴィオ達の友達です！」って元気ハツラツとした声で返してくれた。

「スバル寄りの元気っ子だね～」

「あはは、だね～」

「うん。処置も教えた通りにやってる。偉いよ、フォルセティ」

「やった！　ありがとう、アイリお姉ちゃん！」

「んっ。さてと・・・」

もう1人の女の子へと目を向ける。夏とは言え遺跡内の涼しさに耐えられるようなものじゃない薄着で、しかも裸足っていう不審すぎる子だね。スバルが「君はどこの子かな？」って目線を合わせた上で質問した。

「スバルさん、アイリ。この子がルシルさん達が捜してるイクスヴェリアだよ」

「え・・・！？」

「いやいやいや、ちょっと待って！　アイリ、イリュリア戦争でイクスヴェリアに会ったことあるよ！　だから断言できる！　その子は違うよね！」

アイリの知ってるイクスヴェリア陛下は男の人で、もちろん子供なんかじゃなく女の子でもなかった。マイスターだってイクスヴェリアと2人きりで話したことがあるって言ってたし、その上で女の子だったなんて言ってないもんね。。

「戦場では一緒にならなかったので、円卓会議でのことですね」

「っ！　円卓会議のことを知ってる・・・！　でもそれは古代ベルカ史に詳しい人なら、知ってるような知識でもあるし・・・」

決戦前に行われたアウストラシアでの円卓会議は、一部の歴史書にも書かれてるらしいけど、そっち系に詳しい歴史学者や歴史マニアしか読んでいないようなレベルの書物だから、一般人が知ってるわけないんだけど、でも知ってる人は知ってるってレベル。

「では、これはどうでしょう。ダールグリュン帝がオーディン様を試すために挑発を行い、あなたともう1人の融合騎・アギト、それに騎士ヴィータが乗ってしまったのですが、オーディン様と騎士シグナムがお止めになった。これはどうです？」

「本当にイクスヴェリアなんだ・・・」

そこまで詳しい事はさすがに書かれてないよ、どこの歴史書にも。だから信じるしかなかった。でもスバルだけは「えっ？　ホントにこんな小さい子が・・・！？」って未だに信じられないって風だ。

「これでも１０００年以上生きているんですよ？」

「「「１０００年・・・！」」」

ここで驚くのはフォルセティ達。背格好で言えばフォルセティ達３人と似通ってるんだから、イクスヴェリアのことをよく知らない子にとっては当然とも言えるよね。リオが「大お婆ちゃんだ！」って超失礼なことを言ったから、イクスヴェリアが「おばあちゃ・・・！？」ガーンとショックを受けた。

「うわ！　ダメだよリオ！」

慌ててヴィヴィオがリオの口を両手で塞ぐけどすでに手遅れ。壁にもたれかかったイクスヴェリアが「確かに年齢ではお婆ちゃんですけど、でも・・・」ってブツブツ何か言ってる。アイリだってお婆ちゃん扱いされたらああなるよ、うん。

「イクスヴェリア・・・陛下。アイリ達は今の次元世界の秩序安定を担う時空管理局っていう組織の一員なんだけど。マリアージュがあなたを捜す過程であちこちで悪さしてるの。今すぐ機能停止してくれると助けるんだけど・・・」

「倒すことはそう難しくないけど、その数が結構厄介で・・・」

アイリとスバルがそう伝えると、「ごめんなさい。出来ません」ってまさかの返しが。アイリは「マリアージュの統制権限は？」って尋ねる。イクスヴェリア→軍団長→分隊長の順で権限があるって話だったんだけど・・・あれ？

「今の私にはもう・・・マリアージュを生み出すことも操ることも出来ないんです。前に目覚めた際、機能障害を起こすほどのダメージを受けたことが原因ではあると思うのですが・・・」

「えっと、つまりは今動いてるマリアージュって、その前に目覚めた時に造ったヤツで、その戦いの時の負った怪我で権限の全部を失ったってことで、今の君は無力・・・と」

「ざっくりし過ぎてまた落ち込みそうですが、概ねその通りです。

その機能も未だに修復できていない中、マリアージュの軍団長が以前の機能を元に私を再び王として担ぎ、導こうとしたいようで。私を捜している理由はそれでしょう。ですがもう・・・世界は、私やマリアージュが必要になる時代の先を行っていますから、もう終わりにしたいんですけど・・・」

そう言って悲しそうに顔を伏せるイクスヴェリア。望まないのに戦に巻き込まれる悲しさは、マイスターも抱いてるのかな・・・。アイリはスバルと顔を見合わせて、「どうすればいい？」って聞いた。

「軍団長を打ち倒せれば、全てのマリアージュが機能停止します」

「んじゃあ倒そうか、スバル」

「オッケー！」

そうは言うけど、その軍団長がどこに居るのかが判らないんだけどね。それでもやる気満々なアイリ達に「ダメです！　軍団長の強さは尋常ではないですよ！」って水を差してくるイクスヴェリア。

「アイリ達がたとえダメでも、地上にはルシル達が居るから大丈夫！」

「ルシル・・・？　先ほどもその名前が出ていましたがどなたです？」

「ルシルさんは、セインテスト家の直系なんですよ。恐ろしく強いんで、何も問題ないですよ♪」

「そして僕のお父さんです！」

「フォルセティの父親・・・」

スバルの返答を聞いて、目を見開いて驚いたイクスヴェリアがアイリを見てきた。だからマイスター・オーディンはエリーゼと子供を作って、その子孫のシュテルンベルク家が現代に残ってることや、スバルの言うようにマイスターがセインテスト家最後の子孫である（実際はそれも嘘の内なんだけどね）ことなどを伝えた。イクスヴェリアは少し考える仕草をした後・・・

「ヴィヴィオとフォルセティがその、オーディン様とオリヴィエ殿下の遺伝子を基に生み出されたクローンと言うのは・・・」

アイリに近付いて来てそう耳打ちしてきた。2人とも、初めて会ったばかりのイクスヴェリアにそこまで話しちゃったんだね。ということは、リオにも言っちゃってるのかな～。こりゃコロナに伝える日もすぐ近くなるかもね～。

「そうだよ。今はそれぞれ養子縁組で、優しく厳しい家族と楽しく過ごしてるよ」

「そうですか・・・。判りました。少しの間お世話になります」

「うん。スバル、イクスヴェリア陛下を背負ってあげて。さすがに裸足でこんなところを歩かせるわけにはいかないし。マリアージュの迎撃はアイリが請け負うよ」

念のために変身魔法を解除して本来の姿に戻る。変身魔法に回してたリソースや魔力をすべて戦闘に回すためだ。３０ｃｍくらいになると、「わあ！　小っちゃ～い！」ってリオが騒ぎ出した。融合騎ってホント珍しい存在だし仕方ないよね。

「うん、判った。えっとじゃあ・・・なんて呼べばいい・・・でしょうか？　陛下？　でもヴィヴィオも陛下呼びは嫌だって言ってたし・・・」

「だってわたし、陛下じゃないもん。確かにわたしは、大昔の王様の遺伝子で生まれたけど、わたしはわたし・・・オリヴィエさんじゃなくてヴィヴィオだもん。だから陛下じゃないの。でもイクスヴェリアさんは正真正銘の王様だし・・・」

「うん、イクスヴェリア陛下だ」

「陛下！」

「そうですね・・・。ベルカもガリアも無い今、私ももう王ではなくなったので・・・、イクス、と呼んでください。ヴィヴィオ、フォルセティ、リオ。それと・・・」

「スバル！　スバル・ナカジマです！　スバルと気軽に呼んでください、イクス！」

そんなやり取りの後、アイリ達はこの遺跡から脱出するために行動

を開始。魔法に魔力を回せるようになったことで、「壁抜きで一気に遺跡最上階へ向かうよ」って伝えつつ、足元にベルカ魔法陣を展開する。

「巻き込まないようにはするけど、念のために離れててね～。この魔法、発動直後にアイリの周辺をコッチコチに凍らせちゃうから」

スバル達に注意勧告してから、白翼から３０枚の羽根を離して１０枚で１つの輪を作って３重の環状砲塔にする。さらに両手の指に８枚の羽根を挟み込んで、周囲の魔力を集束させる。マイスター直伝の集束砲を今こそ・・・撃っちゃおう～っと。

「ゲシュテーバー・・・」

魔力を集束させた８枚の羽根を一斉に一番手前の輪に投げ放った。

「カノーネ！」

８枚の羽根の魔力が１つに纏まって砲撃と化す。今の小さな体の状態でしか撃てないのがネックだけど、その分破壊力は折り紙つきだ。冷凍集束砲は天井を撃ち抜いて、脱出路を確保してくれた。破壊による通路崩壊も、穴の周囲が凍ってるから防がれてる。

「「「さむ～」」」

アイリの周囲も完全に凍りついていて、氷柱が至るところに立ってる。みんな夏の格好してるから余計寒いよね。アイリは「スバル、

ウイングロードお願い」と指示を出しつつ、アイリは一足先に上階に上がる。

「マリアージュの姿は無し、と。良いよ、スバル、上がって来て～」

穴に向かって声を掛けるとすぐにウイングロードが伸びて来て、フォルセティ、ヴィヴィオ、リオ、そしてスバルとイクスヴェリアの順で上がって来た。スバルがさらに上階へと螺旋状にウイングロードを伸ばしたのを確認して、またアイリから上階へと上がる。

「次で最上階だよね、確か。よしよし。マリアージュの姿も無～し♪　スバル、どうぞ～！」

「は～い！」

スバルの返事の後、タッタッとフォルセティ達が駆けて来る足音が聞こえてきた。みんなが揃ったところで、またアイリが先行して上がろうと「いってきま～す」ってフォルセティ達に手を振りながら飛び上がったその時、いきなりフッと陰った。

「「「「上！！」」」」

フォルセティとスバルとヴィヴィオとリオが叫んだ。そのおかげですぐに「パンツァーシルト！」を発動できた。頭上を確認するより早く、ガァンとシールドを殴った衝撃と音が襲ってきた。シールド越しにアイリに攻撃を仕掛けて来たのが誰かが判った。

「マリアージュ！　みんな、アイリの下から離れてて！」

――フリーレン・ドルヒ――

マリアージュの周囲に氷結の短剣を３０発と展開して、「フォイア！」号令を下して発射。するとアイツはシールドを足蹴にして飛び上がってやり過ごしたかと思えば、左腕の形状を変化させた。銃身というか砲身というか、どちらにしても何かを発射する機構を備えてる腕に。

「発射」

たった一言そう発したマリアージュの砲身から「ニードル弾・・・！」が射出された。ニードル弾がシールドに着弾すると一瞬で貫通、そして砕くとアイリの右脇腹を掠めて行った。ヴァクストゥーム・フォルムだったら直撃してたよ確実に。

「アイリ、気を付けてください！　この信号は軍団長です！」

イクスヴェリアが教えてくれた。だったらこっちも最初から「全力全開！」だよ。重力に従って落ちて来るマリアージュへ向けて、氷槍の「コード・シャルギエル！」を１２本と展開、そして発射。するとアイツは砲身から今度は「火炎放射！？」を放ってきた。

「スバル！　みんなを防御！」

――マオアー・フェーダー――

「うんっ！」

――ファイアプロテクション――

羽根１０枚を前面に飛ばして、ソレを中心に円形のシールドが多数展開される。オリジナルはマイスターのコード・ケムエルだ。小さな円いシールドを何十・何百と広範囲に重ねて展開するアレ。マイスターにケムエルの魔法版プログラムを教えてもらった時、ホントは名前もケムエルにしようとしたんだけど、オリジナルの名前を付けた方が愛着が湧くってことで、羽根の城塞って意味のこの名前を付けた。

「うぐぅ・・・！」

魔法じゃないのにすごい威力。目の前に広がる炎の海の中を突っ切って来たマリアージュは、左腕も砲身に変化させていて、シールドに両腕の砲門をゴツッと当てた。チラッと見えてるニードル弾の先端がアイリに直撃コースだ。

「陛下と聖王と魔神の確保の邪魔をするな」

「うるっさいな～。もう放っておいてあげなよね！」

迎撃用の魔法を準備しようとしたところで、ゾワッと背筋に寒気が奔るレベルの魔力を感じ取った。

――瞬神（ソニック・エア）の風矢――

目にも留まらない速度で飛来した何かがマリアージュの軍団長の頭部を吹っ飛ばして、さらに衝撃波で胸部や両肩も削り取っていった。炎も一瞬で掻き消されたことで、アイリはシールドを解除。そして新しい防御魔法を準備する。

「この特質な魔力・・・。すっごい身に覚えがあるんだよね・・・」

何かが飛来した方へと体を向けつつ、「スバル達は先に行って！」って指示を出す。アイリじゃまず間違いなく足止めすら出来ない相手だよ、この感覚が正しければ。だからみんなを逃がさないと。絶対に味方じゃないもん。

――ウイングロード――

「あれは、仮面持ち・・・！」

最上階へとウイングロードを螺旋状に伸ばしたスバルが攻撃手を見て身構えた。ここ広間と繋がってる通路の奥から姿を見せたのは、般若の仮面、裾の長いスカートのセーラー服姿の女。左手には大きな弓を携えてる。

「たぶん当たってると思うんだけど・・・。あなた、エグリゴリでしょ・・・？」

バンヘルド、シュヴァリエル、リアンシェルト、レーゼフェアと似

通ってるこの魔力・・・間違いないよ。残ってるのは男性型のガーデンベルグ、女性型のリアンシェルトとフィヨルツェンの3機で、リアンシェルトは弓使いじゃないし、属性は氷雪。でも今のは風嵐系。なら消去法で・・・

「フィヨルツェン・・・・！」

ということになるよね。フィヨルツェンが「冥王イクスヴェリアを渡してくれます？」って弓を構えると魔力弦を引っ張った。作り出されるのは風が集束して出来た1本の矢だ。

「急いで！　早く！」

――コード・シャルギエル――

周囲に展開した氷槍１０本を「行けっ！」て射出すると、フィヨルツェンは番えてた矢を弦から離して、弓を横薙ぎに振るった。たったそれだけでアイリの氷槍は全て粉砕された。

「冥王イクスヴェリアの確保を頼まれたので。邪魔しないでもらえます？」

「ホンット、どいつもこいつも・・・！」

フィヨルツェンの魔力が跳ね上がる。あんな魔力での攻撃を受けたら確実にアイリは死ぬ。でもその恐怖より・・・ベルカも戦争もとうの昔に終わってるっていうのに、平和な時代で友達や家族と笑っ

て過ごしてるっていうのに、また戦乱に引きずり込もうとする連中に、アイリの怒りゲージはもう限界突破。

「ふざけ――」

――光牙裂閃刃――

――煌き示せ、汝の閃輝――

フィヨルツェンの頭上から紅と蒼の砲撃が落ちて来て、アイツは何も出来ずに砲撃に呑み込まれた。

Ｅｐｉｃａ５マリアージュ事件終結～Ｅｌｄｅｒ　ｂｒｏｔｈｅｒ'ｓ　Ｐｈａｎｔｏｍ～

†††Ｓｉｄｅティアナ†††

少しある事に引っ掛かりを覚えた私は、ちょっと細工をした上でマリンガーデンに先行したスバルとルシルさんとアイリ、そして私の幻を見送った。こうして何かを欺くような真似をしている理由は、２ヵ月前から私の臨時補佐官として付いてくれている、第６０管理世界フォルスの地上本部・法務局に所属する鑑識官ルネッサ・マグナスの監視のため。

（私の経験と観察、そしてルシルさんから別れ際に伝えられた話の内容は、ルネッサが黒だということを示してしまっている）

信じたくはないし、そうであってほしくないって思いはある。だから疑いをハッキリさせるため、私はステルス魔法のオプティックハイドを発動した状態でルネッサを尾行していた。ルネッサには、民間人の避難誘導の手伝いや、応援の防災隊が別のマリアージュに襲われないようにするための対策をするように頼んでおいたんだけど・・・。

（指示を無視しての単独行動。・・・ルネッサ・・・）

もう判ってる。無断でこんな事をするような子に何も問題が無いなんて。２ヵ月と一緒に捜査していたからかな。やっぱりショックを

受けちゃってるのよね。小さく溜息を吐いてるその間、ドォーン、ドォーン、とマリンガーデンから爆発音が続く。さっきの通信で、マリアージュどころか"スキュラ"暗殺犯――通称仮面持ちの出現も確認したって。

（初めは私とルネッサとギンガさんだけだったのに、今はスバルとエリオとキャロ、トリシュタンさんとアンジェリエさん、さらにはルシルさんたち本局最強の部隊・特騎隊まで参加する大騒ぎに・・・）

「仮面持ちが出てくるなんて想定外だったが、予定はそう変わらない。戦乱と混乱が起きさえすればそれで好いのだから」

ルネッサの声が聞こえて、物陰からそっと様子を窺う。ルネッサの周囲には誰も居なくて、通信でもなさそう。これアレだ、あの子のクセ。ルネッサは独り言が結構多いのよね。ルシルさん曰く、独り言の多い人は精神的に問題を抱えている、とのことだ。

――独り言とは、ストレスを解消するためのもの、周囲にアピールするためのもの、孤独感を無くすためのもの、自分を安心させるためのもの、そう言ったいろいろ意味があるが・・・。さて。ルネッサはどれに当てはまるのだろうな――

ルシルさんはそう言っていた。ルネッサは戦災孤児で、９歳まで戦場に居たって話を聞いたことがある。それが全てじゃないだろうけど、一因は担なってるはず。

「マリアージュの現在稼働数は４２体。防災・武装隊は数百人。マリアージュに自爆させて火災を起こしたのが良かった。イクスヴェリアが居て、死体が増えれば・・・マリアージュをいくらでも造れる。問題はやはり特騎隊と仮面持ち。あれでは死体を増やすことが出来ない」

もう聞いていられなくなって、私は"クロスミラージュ"の銃口を隙だらけな背中へと向ける。使用魔法は捕獲用のスタンバレット。丸1日はまともに身動きが取れないほどの麻痺を与えられる。トリガーに指を掛けて、引こうとした瞬間・・・

――トランスファーゲート――

それは突然現れた。黒のセーラー服に身を包んだ女性が、背中を向けてるルネッサの背後に出現して、首に向かって手を伸ばそうとした。だから私は「伏せて！」ってルネッサに向かって叫びつつ、トリガーを引いてスタンバレットを仮面持ちへ放つ。これでステルス効果が消えちゃうけど、そんな事を言っていられる状況じゃないわ。

「っ・・・！？」

でもよっぽど自分の世界に入ってたのかルネッサは「あぐ！？」仮面持ちに捕まってしまった。しかも私のスタンバレットは確かに仮面持ちの背中に着弾したのに平然としていて、ルネッサを軽々と持ち上げた。

「本局執務官、ティアナ・ランスターです！　仮面持ちに警告しま

す！　武装を解除し、局員を解放しなさい！」

仮面持ちの腰には鞘に納められた剣が1本。ベルカ式・・・と断定するのも危ないのが現在の魔法世界。アームドデバイスのミッド式の魔導師や、杖や拳銃と言ったストレージやインテリジェンスデバイスのベルカ式の騎士とも会ったことあるし。

「ぅぐ・・・ランスター・・・執務官・・・？　どうして・・・」

「今助けるわルネッサ！　もう少しだけ耐えて！」

仮面持ちは未だに私に背中を向けてる。明らかに私をわざと度外視にしているわね。確かに私にはルシルさん達のような魔力も実力も無いけど、私だってそれなりに強くなってるのよ。

「次は攻撃弾を放つわよ！」

「・・・。ルネッサ・マグナスだな。貴様がマリアージュに指令を下せる立場に居ることは調べが付いている。文句も疑問も抱くことなく、我らが元へ下れ」

声は変声魔法でも使ってるのか、女性のものだけど機械音声的だ。私を無視して勝手に話を進める仮面持ち。だから「警告無視を確認！」って、カートリッジをロードして威力を高めた魔力弾を仮面持ちへ6発と連射。

（これで・・・！）

正直、ルネッサを盾にされると踏んでいた私は、誘導操作が出来て、尚且つ仮面持ちの圧倒的なフィールドを突破できる効果のあるヴァリアブルバレットを選択した。これならルネッサが盾にされても操作すればハズすことも出来るし、仮面持ちが自分の防御力を過信しても直撃させられるはず。

（何もしない・・・？　相手が格下だからって、過信は身を滅ぼすわよ！）

――ノート・ヴェーア――

そして魔力弾は、私に背を向けたままの仮面持ちの魔力バリアに拒まれた。そこまでは判ってるわよ。けどそのバリアは本命弾を包む外殻が処理してくれる。効果通り本命弾は仮面持ちのバリアを突破して、ドォン！と着弾、爆発を起こした。

「ルネッサ！　仮面持ちの手から逃れられたらすぐに離れて！」

着弾時に発生した煙で２人の姿が見えなくなる中、私は"クロスミラージュ"のカートリッジを交換して、周囲に魔力スフィアを５基と展開。にしても「ルネッサ！？」が逃げた様子は無い。その答えは煙が晴れたことで判った。仮面持ちは平然と立っていて、地面にうつ伏せで倒れてるルネッサの背中を踏みつけていた。

「ヴァリアブルシュート。射撃型の最初の奥義。着眼点は間違ってはいないが、格上が過ぎる相手には通用しないことは今回で理解で

きたはず」

「くっ・・・！　なら！　クロスミラージュ！」

≪Ｓｅｔ　ｕｐ．　Ｄａｇｇｅｒ　Ｍｏｄｅ≫

２挺の"クロスミラージュ"をダガーモードにして、防御系魔法貫通効果が付加された魔力刃を展開。ヴァリアブルシュート以上に対防御効果の強い一撃なら、仮面持ちにもダメージは入るはずよ。

「その足を退けなさい！」

スフィア８基を引き連れたまま仮面持ちへと突っ込む。仮面持ちはゆっくりと腰の鞘から剣を抜き放って、「貴様はここで大人しくしていろ」と左腕を高く掲げた。

――ハント・フェッセル――

するとルネッサの両手首に群青色に輝く手錠がはめられた。魔力光は群青色で、魔法を使ったことで魔力パターンも収集できた。このデータで前科が無いかを確認できるわ。ルネッサを踏みつけていた足を退けた仮面持ちは「痛い目に遭いたくなければ引け」って私に警告しつつ、同じように突っ込んで来た。

「シューット！」

――クロスファイアシュート――

スフィア2基から4発の魔力弾を発射。最初は足元に2発。よろけさせたり、脚を止めさせることが出来れば儲けもの。仮面持ちは軽くステップを踏むことで回避したけど、その間にさらに別の2基から4発の魔力弾を発射。今度は胴体に向かって四方から向かわせると、仮面持ちは右手に持ってる剣で魔力弾4発を瞬時に寸断した。

（剣の腕は間違いなく一流ね・・・！）

これでミッド式だったら恐ろしいわ。とにかく、剣を持ってる右腕が開き、最後の1基から発射した魔力弾2発で左腕を狙う。

――バインドバレット――

「なにっ・・・！？」

左腕で魔力弾を弾き返そうとした仮面持ちが驚きを見せた。魔力弾を弾き返せると思って払い除けようとしたら、着弾と同時にリングバインドに変化したんだから、まぁ当然よね。

「月村すずか第零技術部主任直伝のバインドバレットよ！」

ここで私は近接攻撃範囲内に入ったことで、両手に持って振り上げていたダガーモードの"クロスミラージュ"を「せぇぇぇい！」全力で降り降ろした。

――フェアナイネン・ズィーー――

あと数ｃｍで魔力刃が仮面持ちの両肩に当たる、というところで、
「え・・・！？」シールド・バリア・フィールドなどの防御系貫通効果のある魔力刃が、一切の効果を見せることなく一瞬にして砕かれた。

――アッブレーヌング・リュストゥング――

さらに左腕を拘束していたバインドも砕かれて、仮面持ちは「殺害は出来ないが、痛めつけることは出来る」って脅し文句を垂れながら私の首へと剣をあてがった。

「それにしても解せないな。何故、裏切者を案じる？　あの女は、局員でありながら管理世界の秩序を乱した」

「それはアンタ達も一緒でしょうが・・・！」

仮面持ちにそっくりそのまま返してやったわ。コイツらだって殺人を犯してるし、管理世界に混乱を齎してる。すると仮面持ちは「反論はしない」って素直にそう言った。

「しかしルネッサ・マグナスとは違う。我々は一切民間人に凶刃を振るってはいない。殺害したのは、民間人に多くの被害を齎したスキュラ、他管理・管理外世界で悪事を働くゴミ共を処理したに過ぎない。だがあの女はどうだ。イクスヴェリア陛下の回収のため、こんな人の多いところにマリーアジュを放った。我々は悪を成しても悪を滅する。しかしあの女の仕出かしたことは犠牲しか出ぬ純粋悪。

もはや生かす価値なし。が、確保せよとの命令だ」

仮面持ちがルネッサにそう言い放ったところで、ルネッサが「あたしは・・・！」キッと仮面持ちを睨みつけた。

「ただ、世界に気付いてほしかっただけ・・・。あたしは戦争孤児で、いつも銃声、爆発音、悲鳴を聞いて育った。トレディアはそんな中であたしを拾ってくれた父であり、同じ平和を夢を見て戦った仲間でもあった。そんな環境から救い出された先に在った平和な世界を、あたしも信じてみたかった。でもただ戦場に比べて人が多いだけで、やってる事は変わらなかった。人同士で戦って、傷つけ合って、殺し合う空っぽな世界だった・・・！　だから挑んで、気付かせてやりたかった。戦いの意味と虚しさを・・・」

ルネッサの独白を聞き終えた私と仮面持ち。ルネッサの想いも解らないでもないわ。私だってその争いで兄を喪ってる。でもだからと言って・・・。何も言えない私に対して仮面は「なるほど。その想いには同調しよう」って声色が少し優しくなった。

「それでも貴様は悪だ。しかし我らと同じ平和を目指す悪だ。故に付いて来い」

仮面持ちが私の喉から剣を離すと踵を返して、ルネッサへと歩み寄りつつバインドを解除した。立ち上がったルネッサがチラッと私を見た後、スッと目を伏せて顔を背けた。

「っ・・・！　させない！　クロスミラージュ！」

改めて2挺に魔力刃を展開する。このままルネッサを拉致されるのを見過ごすわけにはいかないわ。"クロスミラージュ"を構え直して突っ込もうとした瞬間・・・

「お前の魔力パターンの解析は済んだ。もう・・・お前の魔法が私に通用することは無い」

――フェアナイネン・ズィーーー

仮面持ちが振り向きざまにそう言った瞬間、"クロスミラージュ"の魔力刃が一斉に砕け散った。その現象に混乱してはいるけど、すぐに銃口を向けて「シューート！」と魔力弾を放つんだけど、銃口から魔力弾が射出された直後、パァン！と魔力弾が割れた。

「な・・・っ！？」

「言ったはずだ。お前はもう、私に攻撃することも拘束することも出来ないと」

「こんな事って・・・」

訳も判らないまま、魔導師としての私を完全に無力化されてしまった。私は"クロスミラージュ"を構えてる両腕を力なくダラリと降ろした。仮面持ちは私なんてもう用は無いって言わんばかりに、こちらに一切の注意を払わなくなった。

「・・・なに？」

仮面持ちがそう漏らして突然を足を止めた。それから少しばかり棒立ちで居た後、小さく溜息を吐いたのが判った。そして何を思ったのか、「ちょっ・・・・！」ルネッサに向かって右手に持つ剣を振り上げた。私は「逃げて！」ってルネッサに叫びながら駆け出した。

「同志がイクスヴェリア陛下の確保に失敗した。こうなっては最早ルネッサ、貴様は用済みだ。他の犯罪者と同じように、私が粛清する」

（念話！？・・・この付近一帯、何者かに交信妨害がされて――いや、だからか・・・・！）

マリアージュが出現し始めた頃からマリンガーデンの周囲２ｋｍ圏内で念話や通信が出来なくなっていた。私たちが来た時にはもう仮面持ちの仲間が潜んでいたことになる。

「ここで死ぬわけには・・・・！」

振り下ろされるとほぼ同時にルネッサは横に向かって跳んで、私は仮面持ちの背中に「この！」タックルした。でも仮面持ちはよろけることもなくて、「痛っ・・・・！」逆に私が弾き飛ばされて尻もちを突くことに。

「逃がさん」

四つん這いのまま這って逃げようとしたルネッサに向かって一足飛びで接近した仮面持ちに、「やめて！」って私は懇願した。振り下ろされる剣の先にはルネッサの背中がある。無駄だって判っててても私は"クロスミラージュ"の銃口を向けたその時・・・

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

風切り音も無く、魔力の接近すら気付くのが遅れるほどの速度で飛来した矢が、仮面持ちの剣をその手から弾き飛ばした。

「せいやあああああああッ！！」

――爆ぜる氷塔（ケラス・エクリクシス）――

さらに仮面持ちの頭上から、特騎隊のメンバーであるセレス・カローラ一尉が砲弾の如く突っ込んで来て、振り上げていた剣を仮面持ちへ向けて振り下ろした。一瞬にして後退する仮面持ちだったけど、カローラ一尉の剣が地面を穿った瞬間に爆発的な冷気が噴出して、一尉の周辺に大小様々な氷の尖塔がいくつも突き出した。

「やった・・・！？」

そのあまりの凄さと仮面持ちが氷に乗り込まれた様に、私は思わずガッツポーズをした。そんな私の元に「大丈夫？」ってトリシュタンさんが跳んで来た。トリシュタンさんに差し出された手を取って立ち上がらせてもらいつつ、「なんとかですが・・・」って答えた。

「なら良かったです。セレス、そちらはどうです？」

「しっかりと捕らえることが出来たよ」

トリシュタンさんと一緒にセレスさんの元へ向かい、地面を凍らせている氷に足を取られないように氷塔に埋まっている仮面持ちへと近寄る。意識はあるみたいで「さすが特騎隊の騎士ですね」ってトリシュタンさんとカローラ一尉に感嘆した。

「無駄口は結構。ランスター執務官」

「はい。改めて、本局執務官のティアナ・ランスターです。あなたの名前と出身世界、あなた達の目的を包み隠さずに答えてもらいます」

そう問い質している中、トリシュタンさんがひとり私たちから離れて、立ち上がったばかりのルネッサに手錠を掛けた。あなたとはこの事件が終わったら、正式に補佐官になってもらいたかったけど・・・。もう叶わない願いよね・・・。

「良い機会だ、改めて教えてやろう。我らの目的はただ1つ。悪を成してでも悪を滅して世界平和を成し遂げることだ」

「世界平和、ねぇ・・・。それって本気なの？」

「はい、本気です」

仮面持ちの発言に私は疑問が生まれた。私に対しては不遜な態度だけど、カローラ一尉には丁寧語。これって絶対に重要な事よね。カローラ一尉も「どっかで会ったことある？」って訊ねたし。

「騎士と局員を同等に扱うことは、私にとって得などではありませんので」

「局員嫌いってわけ？　私、騎士であり局員でもあるんだけど？しかも自分で言うのも変な話、結構有名人だったりするけど？」

「それでも騎士である以上は最大の敬意を以って対します」

局員嫌いがこの仮面持ちだけなのか判らないけど、とにかく管理局の体制に不満を抱いているのは解った。不満を持つという事は、過去に何かしたの事件に巻き込まれてる可能性もある。そっち方面の情報も当たるようにルシルさん達に伝えておかなきゃ。まぁルシルさんならすでに手を付けてそうだけど・・・。

「残りの詳しい事は、特務零課の方たちが取調室で伺います」

私の仕事はマリアージュ事件の首謀者であるルネッサの逮捕。仮面持ちはルシルさんたち特騎隊の管轄だ。

「連行する前に、素顔だけでも拝んでおこうかな～」

カローラ一尉が仮面持ちの顔へと手を伸ばす。とここで「何か来る！」ってトリシュタンさんが叫んだ。

――スナイプバスター――

細い砲撃が上空から数発と飛来して、仮面持ちを捕らえてる氷塔を粉砕し始めた。その際に破壊された氷の破片が私とカローラ一尉の全身に弾け飛んで来たから思わず両腕で顔面を防御した。

「このエネルギー砲撃は・・・ティーダ・ランスター・・・・!?」

カローラ一尉がそう言ったのが、ガシャン、ガシャンと氷が砕け散る轟音の中で聞こえた。

「ティーダ・・・ランスター・・・・?　お兄ちゃん・・・・!?」

「セレスはその仮面持ちを逃さないように!　私は砲撃手を撃墜します!」

――滅び運ぶは群れ成す狩り鳥――

「了解!」

氷の破片が途切れたことで両腕を下げた私はすぐに空を見上げるけど、その姿は確認できない。後ろを見れば、トリシュタンさんは砲撃手の姿が見えるのか魔力矢を射った。矢は数百本に分裂して、空へと走って行った。そしてセレスさんは、氷塔から逃れた仮面持ちへと剣を振るった。

「あなたの騎士としての力量、測らせてもらおうか！」

――氷奏閃（イエロ・コラソン）――

剣に冷気が乗せられたセレスさんの斬撃。仮面持ちも同様に剣を振るって迎撃したところで、「待っ・・・！」私は重要な事をセレスさんに伝えていないことを思い出した。

――フェアナイネン・ズィーー――

２人の剣が衝突した瞬間、セレスさんの剣の冷気が消し飛んだ。セレスさんが「えっ！？」目を見張って、しかも斬撃の威力に負けて後退させられた。仮面持ちは腰の鞘に剣を戻して、「それではまたいつか」って小さく頭を下げた。

――トランスファーゲート――

それと同時に空間に生まれた歪み。仮面持ちは私たちの「待ちなさい！」制止の声を無視して、ゆがみの中へ消えて行った。私は、消えゆく歪みに向かって「ああもう！　逃がした！」って悔しがってるセレスさんに歩み寄る。聞きたい事があるからだ。

「こちらも逃げられました。やはり空戦が出来る魔導師は手強いですね。まだまだ修行が足らないようです」

トリシュタンさんも砲撃手を逃がしてしまったらしく、自分の不甲斐なさを悔しがってた。

「カローラ一尉。何故さっき、兄の・・・・ティーダ・ランスターの名前を出したのですか・・・・？」

「あー、ルシルから話してもらえるまで黙ってるってわけにはいかないよね・・・・？」

「ルシルさん？・・・あ！」

――少し時間を貰えないだろうか。出来れば2人きりで話がしたい――

――通信やメールなどで済ませるような内容じゃないからな～・・・。判った。事件解決の折、また俺に連絡をしてくれないか？――

つい先日、ルシルさんと交わした約束を思い出す。ルシルさんの話っていうのはきっと、お兄ちゃんの事だったんだ。カローラ一尉も何か知ってるみたいだから私は懇願の意味を込めてじぃーっと見詰める。

「・・・判った。ちょっとした任務の際に、私たち特騎隊は・・・――」

カローラ一尉の厚意で、一尉と砲撃手との交戦映像を観させてもらった。一尉と砲撃手の攻防。お兄ちゃんの魔力光である黄色、クロスファイアシュート、そしてマロスヴァローグ一尉の一撃で仮面が割れて、目出し帽が破れたことで「お兄ちゃん・・・！」の顔が出

て来た。映像はお兄ちゃん？の撤退で終わった。

「・・・と、いうわけ。ルシルの話だと、あなたのお兄さんらしい砲撃手の考えられる正体は３つ。１つは人造魔導師、１つはサイボーグ、１つはクローン。ひょっとしたら第４の候補があるかも知れないということだけど。仮面持ちはプライソンとも繋がりがあったようだし、ね。・・・あなたのお兄さん、どういった経緯で亡くなったっけ？」

「違法密輸を生業とする違法魔導師追跡中、運搬されていた物が大爆発を起こして・・・」

今でもハッキリと思い出せる局からの、お兄ちゃんが死亡した、との連絡。あの日からずっと孤独だったけど、スバルと出逢ってからというものは寂しいなんて思いは少しずつだけど無くなっていったっけ。

「遺体は？」

「容疑者共々・・・灰すら残らなかったので、確認は出来ていません」

だからかな。お兄ちゃんが生きていた、と言われても不思議じゃないし、そうであって欲しいって強く願う。スバルの母親のクイント准尉やメガーヌ・アルピーノ准尉のように、記憶を失っている状態で、仮面持ち達に利用されているんだって・・・。

「カローラ一尉、ありがとうございます。兄の事はまた落ち着いてからよく考えてみます」

「そう。・・っと、通信も繋がるようになったみたい」

コール音が鳴って、カローラ一尉が「はい、こちらナイト４・セレス」って応じた。

『セレス～。シャルだけど、マリンガーデンでの戦闘はすべて終了。起きていた火災も防災隊のおかげで完全鎮火。イクスヴェリア陛下も無事に保護完了。特騎隊一同およびトリシュとアンジェは一旦合流しよう』

「了解。ランスター執務官たちはどうするの？」

「あ、私はギンガさん達と合流後に本件の首謀者、ルネッサ・マグナスを一度１０８陸士隊舎へ連行した後、取り調べを・・・と考えてます」

『そっか。じゃあ一旦お別れね。お疲れ様、ティアナ』

こうしてマリアージュ事件は幕を閉じた。トリシュタンさんやカローラ一尉と別れた私は、連絡しておいたヴァイス先輩が来るまでルネッサと話すため、彼女の側に歩み寄った。

「あたしを尾行していたということは、あたしが黒だと判っていたんですか・・・」

「1つは私の勘。あなた、トレディア・グラーゼの名前を口にするたび、声が寂しそうだったわ・・・。それがずっと気になってたのよ」

「そういった感情が表に出ないように努めてはいたのですが・・・。もう1つは・・・？」

「ルシルさんからの助言。ルシルさんって調査官でしょ。だから心理学にも明るいのよ。あなた、トレディアの話をする時に手をもう一方の手で隠すらしいのよ。ソレ、秘密があるってことらしいわ。で、視線が右下に向くのは、過去に体験した事を思い出すサイン。瞳孔が大きくなるのは交感神経が働く時みたいで、恐怖や悩みや不安を抱いてる反応であるんですって。そしてあなたの独り言のクセ。それも心理学で見抜かれてたわよ」

ルシルさんの知識には毎度驚かせれるわ。調査官としてのルシルさんとは絶対に対峙したくないって本気で思う。ルネッサは「ふっ・・・」って自嘲気味に鼻で笑った。

「どうかした？」

「セインテスト調査官と会ったその瞬間、なんとなくですが・・・こうなってしまう気はしてました。あたしの直感もまた正しかったということですね。・・・最後に1つお聞きしたいことが・・・」

「答えられるものなら」

「以前あたしを副官に、という話。あれはあたしの動揺や心変わりを引き出すためのフェイクで？」

「いいえ。本気だった。あなた、本当に優秀だし。こんな事がなかったら今でも補佐官に付いてもらいたいわ」

本当に残念よ、ルネッサ。少しの間だけ黙った彼女はただ一言「ありがとうございます」とだけ告げた。

Ｅｐｉｃａ６－Ａその日、王は少女になる～Ｆｒｅｅｄｏｍ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「シャマルお姉ちゃん、アインスお姉ちゃん、ザフィーラ！」

「コロナ！」

「「フォルセティ！」」

「ヴィヴィオ！」

無事に任務を終えて、イクスヴェリア陛下が眠っておられた遺跡から脱出した私たちは、地上の駐車場エリアで待ってたシャマル（浅い場所とはいえ落ちたことでちょっと服が汚れてる）達と、ここまで頑張ってたヴィヴィオ達の再会シーンを微笑ましく見守った。ヴィヴィオ達の新しい友達だって言うリオって元気っ娘も、「お母さん、お父さん！」ってご両親と再会を喜び合ってる。ご両親からの「本当にありがとうございました！」ってお礼を受けてるアイリとスバルも嬉しそうに微笑んでる。

「良かったです。ヴィヴィオ達を無事にご家族の元へ帰すことが出来て・・・」

そう言って胸を撫で下ろしてるのは、古代ベルカ諸王の内の１人で冥府の炎王と畏怖されていたガレアの王、イクスヴェリア陛下。正

直な話、おっさんだと思ってた。でも蓋を開けたらビックリ。１０歳くらいの小さな女の子だった。

「ヴィヴィオとリオちゃんの処置は、フォルセティが・・・？」

「う、うん。アイリお姉ちゃんも、よく出来たね、って褒めてくれたけど・・・。ダメ？」

「いいえ！　本当によく処置してあるわ！　えらい、えらい！」

「だよね～♪」

フォルセティがシャマルにハグされて、頭を撫でてもらってる。フォルセティってばいつか医者を目指しそうだよね。というよりは医務官かな。どっちにしても、たとえそれ以外の目標を決めても、すくすくと元気に育って行ってくれたらそれで好いって思う。

「あ、コロナ。新しい友達が出来たんだよ～♪」

ヴィヴィオがコロナにそう言いながら、あの子たちの元へと駆け寄って来たリオを見た。リオはおどけた風に敬礼をしつつ、「リオ・ウェズリー！　よろしくね～！」自己紹介をすると、コロナも「うんっ、よろしく！　コロナ・ティミルです！」って名乗り返した。

「男の子1人で女の子3人か～。将来的にフォルセティも苦労しそうだよね～」

「とは言っても、フォルセティは今のところヴィヴィオ最優先と言った感じだからな。しかも妹的な感じだし」

ヴィヴィオとコロナとリオの美少女３人と一緒に居るフォルセティに、かつてのチーム海鳴の姿を重ねた。ルシルの場合は美少女＆美女が十数人だったけど。ユーノも司書務めじゃなくて武装隊とかに行っていれば、ルシル単独ハーレム？を阻止できていたものを。

「イリス～。特騎隊全騎、揃ったよ」

「あいよ～。はーい、せいれ～つ！」

ルミナから報告を受けたわたしは手をパンパン叩いて、前に特騎隊メンバーを整列させる。左端から順に前線組のルシル、ルミナ、セレス、クラリス、ミヤビ、後衛組のティファレト、アイリ、クララ先輩、セラティナ。ミヤビと先輩とセラティナはベルカや教会とは関わり合いがそんな無いし、陛下護送は教会騎士として仕事なんだけど・・・

「これよりイクスヴェリア陛下を聖王教会本部へと護送しま～す。マリアージュは、本件首謀者のルネッサ・マグナスが機能停止するように最終指令を下したようだから、おそらく襲撃は無い、と思う。仮面持ちについては不明だから、厳戒態勢で陛下をお護りする。セラティナは護送車内に結界を、ミヤビは念のために雷鬼モードで陛下の側に付いて。あと先輩の転移スキルで、教会本部まで一気に飛んで移動。これで仮面持ち連中も手出しは出来ないはず」

「「「了解！」」」

一応は特騎隊のメンバーってことで護送を手伝ってもらうことに。教会騎士団に手配した護送車が到着するまでの間、事務所でお世話になろうかって話してた時、「私たちはどうします？」ってトリシュとアンジェが聞いてきた。

「ティアナの元に付いてなくて大丈夫？」

「ギンガ捜査官とスバル防災士長、エリオ・キャロ両保護官が、ルネッサ・マグナスの護送に付くとのことだから」

「そっか。う～ん・・・陛下の護送には戦力足りてるからな～」

まぁどの道、トリシュ達もザンクト・オルフェンに帰るんだから、「じゃあ一緒に護送をお願い」って応援をお願いしてるところで、「お父さ～ん！　アイリお姉ちゃ～ん！　僕たち、先に帰ってるね～！」って、フォルセティが大手を振った。

「ああ！　気を付けて帰ってくれ～！」

「バイバーイ！」

「バイバ～イ！」

ルシルとアイリも手を振って応えた。ホント家族してるな～、いいな～、羨ましいな～。んでヴィヴィオとコロナとリオ、それにフォ

ルセティも「またね～、イクス～！」って、陛下にかなり馴れ馴れしく挨拶した。教会所属のわたしやルミナ、セレス、クラリス、それにトリシュとアンジェは内心ハラハラだったけど・・・。

「はい！　ではまたいずれ！」

陛下も笑顔で手を振って挨拶を返したからホッと一安心。そんなわたし達の心情を察していただいたのか、「私はもう王ではありませんから」ってわたし達にも微笑んで下さった。

「すでにベルカもガレアも無く、王としての役目も終わっている私は、外見の幼い無駄に歳を取った、もう役に立たない失敗作の兵器ですので・・・」

「イクスヴェリア陛下。そこまでご自分を卑下になさならない方が良いかと。あなたは王という責務から解放され、ようやく1人の少女？・・・女性？として、現代を生きていけばよろしいのですよ。ヴィヴィオもまた、聖王という役割から解放されて、学生として家族や友人と過ごしているのですから」

陛下がしゅんとしているところで、ルシルが陛下の頭を撫でるという暴挙に出た。陛下も目を丸くしてルシルを見上げてるし。ルシルも「しまった、つい」って慌てて手を離そうとした。

「あ、待ってください！　もう少しこのまま頭を撫でて頂けますか？」

頭から離れた手を取って、また自分の頭の上にルシルの手を乗せた

陛下は、「懐かしいです」って本当に気持ち良さそうに目を伏せた。アイリが若干ヤキモチ妬いてそうな感じだけど、相手が陛下だってことでか耐えてるね～。

「あの、オーディン様は亡くなったのですよね？　それでフォルセティは、オーディン様の遺伝子を基に生み出されたクローンであると・・・」

それは家族やあの子たち自身が告げた友人以外、局や聖王教会でも一部の幹部クラスしか知らない秘密。けどヴィヴィオとフォルセティは自分で陛下に伝えていたし、ここに居るメンバーも全員が知ってるから、ポロっと喋っても良いんだけど・・・。

「まぁいいか。そうですよ。魔神オーディンのクローンがフォルセティです」

「そうですか・・・。オーディン様にそっくりなのはフォルセティではなく、あなたのような・・・」

陛下は何か考えてるようで、少しばかり小首を傾げてブツブツと呟いていられたかと思えば、「うん」と頷かれた。そして「ありがとうございました、もう結構ですよ」とルシルに微笑みを浮かべられた。ルシルは「はい」って優しい声色へ返事して、陛下の頭から手を離した。

「えっと・・・。ルシルとアイリは今日はもう上がってもらっていいよ。護送車にそんなに入んないし。先輩に頼んで、マクティーラ

を持って来てもらうし」

「マクティーラって、シャーリーンのハンガーに置いたままだったっけ？　なら護送車が来るまでにダッシュで取りに行ってくるけど・・・？」

「ルシルとアイリって、1ヵ月くらい家に帰ってないでしょ。帰さなかったわたしが言うのもなんだけど、そろそろ八神邸が恋しいだろうし、いいよ」

部下のプライベートもしっかりフォロー出来ないような奴が上に、部隊長を務める資格は無いってね。ルシルとアイリが顔を見合わせた後、「ありがとう！」ってお礼を言ってくれた。ルシルからの感謝で、今日1日の苦労は一瞬で消えちゃうよ～。

「ん。じゃあ先輩。ちょちょっとお願いです！」

「了解！」

先輩がスッと音もなく消えた。戻って来るまでの間に、わたしはルシルの側に寄り沿って「エグリゴリ、見逃して良かったの？」って聞く。遺跡内で"エグリゴリ"の1機であるフィヨルツェンとかいうのと遭遇したけど、アイツは狙っていた陛下を強引に拉致することなく、わたしやルシルと戦おうとすることなく・・・

――これはわたくし達の負けなようですね。ここは大人しく退きましょう――

そう言って踵を返して、また通路の奥へと消えて行った。ルシルは声を掛けることなく、魔術をスタンバイすることなく、あっさりフィヨルツェンを見送った。そこから今の今まで、フィヨルツェンについては何も言ってないからさ・・・。

「あの時の俺たちの最優先目標は、フォルセティ達の救出とイクスヴェリア陛下の保護だ。エグリゴリは俺個人の目的だからな。それにあんな場所で戦っては、全員揃って崩落する遺跡に押し潰されて人生終了だ。なに。再戦の機会できた。仮面持ちを追えば否応にもフィヨルツェンと闘うことになる。今はそれで十分だよ」

「そうだね、うん、そうだ」

本当は戦って、勝って救いたかったんだろうけど、自分を優先しないで他を優先するそんなルシルが本当に大好きだよ。最大のライバルなはやての元に帰すのは、ちょこっと悔しい気持ちもあるけど・・・。今日ばかりは譲ろうじゃないの。

「マクティーラ一丁お待たせ〜！」

先輩がルシルの愛車である"マクティーラ"と一緒に戻って来た。ルシルとアイリが先輩に感謝した後、陛下へと振り返った。

「ではイクスヴェリア陛下。自分とアイリは一足お先に帰宅させて頂きます」

「あ、はい。お気を付けてお帰りください。あの、他の皆さんにもお願いしますが、私はもう王ではないので陛下という敬称と丁寧語は無用です」

「はい。イクスヴェリア」

「じゃあ今日はバイバイ、イクスヴェリア！」

ルシルが"マクティーラ"のシートに跨って、アイリがサイドカーに乗り込んだ。そんな2人の乗る"マクティーラ"にわたし達は手を振って見送った。それからしばらくして教会本部から中型バスタイプの護送車が来てくれた。

「えっと、じゃあ・・・その・・・イクスヴェリア」

「はい」

「護送車へ乗ってくだ・・・くれる、かな？」

「「「「イリスぎこちない」」」」

ルミナとセレスとトリシュと先輩がポツリと呟いた。わたしは「じゃあルミナ達もタメ口使って見せてよ！」って反撃。いくら元王様だって陛下自らが仰っても、生ける伝説でもあるのだ。緊張しない方がおかしい。あとで、やっぱり不敬とみなします、なんて言われたら・・・。考えるだけでも恐ろしい。ルミナ達は「あ～」なんて明後日の方を見て誤魔化すし。こんちくしょー。

「コホン。さっき伝えた通り、護送車にみんな乗って一気に教会本部へ移動しま～す。ミヤビは先に乗って」

「あ、はい！」

――鬼神形態顕現――

額からクリスタルみたいな角を2本と生やしたミヤビ。さらに「雷鬼降臨」と告げると角がイエロートルマリンみたいな色彩に変化した。角の色でミヤビの変換資質が変わるんだよね。赤は火、蒼は水、翠は風、黄は雷、茶は土、って具合に。黄の雷鬼モードの時のミヤビは思考力や体の機動力も格段に上がって、転移能力者でも十分捉えられることは先輩との模擬戦で実証済みだ。

「それじゃあイクスヴェリア。足元に気を付けて乗ってね」

「はい、ありがとうございます」

イクスヴェリアの手を取って、彼女が段差で転ばないようにエスコートしながら護送車に乗り込む。ルミナ達も続いて乗り込んで、「それじゃ聖王教会本部に向けて・・・しゅっぱ～つ！」と拳を振り上げる。そうしてわたし達は、先輩のスキルで教会本部へと発った。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒ルシリオン†††

シャルのお言葉に甘えて俺とアイリは一足先にマリンガーデンを発

った。シャマル達には、はやてに夕飯は要らない、と伝言をお願いしたんだが、このまま寄り道無く帰れば午後7時には着いてしまうな。

「今日はシグナムとヴィーターとアギトは仕事だったか？」

「あ、うん。シグナムとアギトお姉ちゃんは夜勤で、ヴィーターは教導隊としてヴァイゼンに出張中。だから今日はヴィヴィオを家で預かることになってるんだよね」

「あぁ、そうだったか。コロナをまず家に送るだろうから、俺たちが先に着くか・・・。はやてに連絡して――」

「ちょいと待ったマイスター！」

信号で止まったところではやてに、今から帰るよ、って連絡を入れるために通信しようとしたら、アイリが制止してきた。だから通信することが出来ず信号も青になってしまい、仕方なく"マクティーラ"を再び走らせる。

「何でだ？」

「1ヵ月ぶりの帰宅なんだよ？　サプライズ～、サ～プラ～イズ～・・・ドッキリ♪」

「・・・夕飯はどうする？　サプライズで家に帰っても、俺とアイリの分の夕飯は用意されていないぞ。それは正直嫌だ。はやての料

理が食べたい、これかなり本気で」

特騎隊の本部の艦船・シャーリーンには専属のシェフが居るし、本局のレストラン街でも食事を摂ってはいたが、はやての優しい味付けの料理が心底食べたい。金を払ってでも食べたい。

「あー、そっか～。う～ん・・・。じゃあ材料だけ買って、ダッシュで帰ればはやてと一緒にご飯作れるかも？」

「悪くはない提案だが、はやてもはやてですでに材料を買っているだろうから、明後日の方の材料を買って行ったら無駄になるし。ここは可能な限り高速で帰る！」

サプライズというのは反対しない。はやての反応がちょっと楽しみということもあってさ。まぁ彼女のことだからいつも通りに、おかえりなさい！って普段のように挨拶してくれると思う。それでいいと思う。

それから俺は混んでいないルートを検索しつつ帰路を走り、「やっと帰って来られた」と見えてきた八神邸を見て呟く。道中でのアイリからの提案に乗って、少し離れたところでエンジンを切って、音を立てないように敷地内へと入る。

「シャマル達はまだ帰って来てないみたいだね」

「そのようだな」

ガレージに"マクティーラ"を停めて、足音を立てずに忍び足でそ

～っと玄関へ向かう。可能な限り音が出ないようにドアを開けては閉め、靴を脱いでスリッパに履き替えて家に上がる。アイリと2人でそっとリビングとダイニングを覗き込んで、はやての姿を捜すが見当たらない。

「トイレかな？」

「2階に居るかもしれないな」

アイリのサプライズどっきりは不発に終わりそうだ。アイリも「失敗か～」と肩を落とした。2人でリビングに入って、アイリは「喉渇いた～」と、明かりの点いていないキッチンへと向かう。俺もキッチンで手を洗おうと続こうとした時・・・

「わっ！！！！」

「わっひゃあああああっ！？」

はやてがキッチンの陰から飛び出し、アイリを割と本気で驚かせた。アイリは尻もちをついて「無かった、気配なんて無かった！」って叫んだ。

「あー、ごめんなぁアイリ。まさかここまで驚くとは思わへんかったから」

「あぅ～」

エプロン姿のはやてから差し伸ばされた手を取って立ち上がったアイリが、「なんでアイリ達のこと気付いたの？」と尋ねる。俺とアイリもかなり気を使って気配を断っていたはず。それでも気付かれたとなると、はやての感知能力の凄まじいレベルに成長したと驚かざるを得ない。

「ん？　シャルちゃんから連絡を貰ったんよ。ルシル君とアイリを今日帰すから、美味しいご飯でも作ってあげて～ってな」

「あはは。端からネタばれがされていたか～」

「そうや。そやからルシル君とアイリが帰って来るんを心待ちにして待ってたら、どうも私を驚かそうとしてるみたいやん？　それやったらこっちも受けて立とうって思うたんよ。結果は大成功やな♪」

これもシャルなりの気遣いだったんだろう。はやてが楽しそうに笑う姿に、帰って来た、って思いが胸に広がる。そんな俺の元へと駆け寄って来たはやて。キュッと俺の制服の上着を掴むと、「おかえり！」って挨拶をしてくれた。

「ただいま、はやて」

「ただいま～。今度は必ずアイリがはやてを驚かせて見せるからね！」

「ふふふ～、やってみ～♪」

それから俺とアイリは自室で部屋着へと着替え、俺は変身魔法を解

いた上ではやてと一緒に夕飯つくりをし、アイリはリビングのソファに寝転がって、ファッション雑誌に目を通しながらテレビをつけた。放映されていたのは、俺たちがついさっきまで関わっていたマリンガーデンでのマリアージュ事件。リポーターの後ろでは、災害担当の局員が事後処理に追われている姿がある。

「それにしても大変やったな～2人とも。アインスからフォルセティとヴィヴィオが行方不明って連絡が来た時は、ホンマに血の気が引いて卒倒しかけたわ～」

「アイリもだよ～。しかも遺跡にはマリアージュが居て、もう怖くて怖くて。2人の身に何かあったらと思うと・・・」

はやてとアイリが同じタイミングでうんうんと頷いた。手際良くエビの皮を剥いているはやてが「そやけど・・・」と前置き。

「ルシル君とアイリ、それにシャルちゃんが救出に向かったって聞いて、それはもう安心したもんやよ。安心した通りちゃ～んとフォルセティ達を救い出してくれた。2人とも流石やよ～♪　偉い偉い」

そう言ってはやてが俺の頭を撫でてきた。確かに今の俺ははやてと似たような身長（2～3ｃｍばかり上だが）で、撫でやすいだろうが・・・。ちょっとばかり照れくさい。こうやって頭を撫でられるなんて本当に久しぶりだな～。

「はやて～！　アイリも、アイリも～♪」

「はいはい♪　アイリも偉い偉い♪」

ソファからキッチンまでトテトテと駆けて来たアイリも、はやてに撫でてもらって「えっへへ～♪」とご満悦のようだ。スキップでソファに戻っていくアイリを見送る。

「そう言えばルシル君、それとアイリ。明日の予定とかは何か決まってるん？」

「今のところは未定かな。プライソン一派と関わりのあるとされる新しい組織が見つかったんだが、本部が何者かに襲撃されて殲滅を食らってた」

先日の第５３管理世界アンバーで遭遇したテロリストの属していたマフィア、アウロラファミリーの本部は地獄絵図と化していた、という連絡をトレディア・グラーゼの調査中にシャーリーンから受けた。

「おそらく仮面持ちだろうな。連中はどうやら悪を成して悪を滅すを念頭に置いて動いているらしくてな。犯罪者を殺して回って、力尽くで平和を作ろうとしている。ああいう手合いは言葉では止まらない。こちらも力尽くで止めに行くしかない。フィヨルツェンも関わっていることだしな」

今回はフォルセティ達を最優先するため、仕方なく交戦には入らなかった。まぁたとえあの子たちが居なくても交戦しなかったが。遺

跡などという閉所＆崩落危機な場所を戦場にするなど自殺行為だ。

「だからアイリたち特騎隊はしばらく予定が未定なのだ～」

「そうなんや・・・。私、明日空いてるんよ。私とルシル君とアイリの３人でデートせえへん？　明日は平日でフォルセティ達は学校やし、シグナム達も仕事やし、アインスとリインは研修やし。３人で出かけられるんは明日だけやと思うんよ。・・・この１ヵ月、ルシル君とアイリとは遊んでへんかったやろ？　たまには一緒したいな～って・・・どうやろ？」

期待と不安が半々な瞳を俺に向けるはやてに、「俺は構わないよ」と誘いに応じた。するとはやての目が爛々と輝きだす。これで仕事とか入ったりでもしたら、はやてだけじゃなくて俺もすごいショックを受けそうだ。

「アイリはいいや～。家でのんびりしとく～。ひっさびさの休みだしね～。だから～、ルシルとはやての２人きりのデートを楽しんで来て～」

まさかの拒否にはやてが「うえ！？　ええの、アイリ・・・？」と驚いた。俺も、アイリが付いて来るのだとばかり思っていたが・・・。

「アイリとシャルでルシルを独占してたしね。いつまた召集が判らないし、１日くらいはやてが独り占めしても良いって思うよ～♪」

「お、おう・・・。それじゃあお言葉に甘えてっと。ルシル君。私とデートしてくれるか？」

「ああ、もちろん喜んで」

はやてからのお誘いを断るわけがない。ここ最近はずっと戦闘ばかりを行っていたから、こういうゆっくり出来る時間を過ごしたかった。満面の笑顔を浮かべたはやては「やった！　わぁわぁ♪　どこ行こうかな～♪」と小躍りしながらエビチリソースを作り出した。それから数々の料理を作り終えて、はやてと調理器具の片付けをしつつ、どこへ行こうか？と話し合っているところに、通信が入ったことを知らせるコール音が鳴り響く。

「俺か？・・・シャルからだな・・・」

「嫌なよか～ん」

「俺もだ。・・・こちらルシル。何かあったのか？」

『何かあったなんてレベルじゃないよ。イクスヴェリアの事でちょっと助けてほしいんだけど！』

任務への招集かと思えば、イクスヴェリアに何かしらの問題が起こったのだと。ここで先の次元世界でのイクスヴェリアの事を思い起こした。俺はセレスから洗脳されていて実体験はしていないが、彼女が機能不全で眠りに着いた事、シャルが俺から伝わっていた魔術でイクスヴェリアの機能不全を修復して起こした事。おそらく今回

もそれだろうとアタリを付ける。

『とにかく、迎えの先輩をやるから教会本部に来て！　お願い！』

必死に懇願してくるシャルに、「ルシル君、行ったって」とはやてが俺の右手に手を添えた。だから俺は「すぐに帰って来るよ」とその手に左手を添えた。

『イチャイチャしてるのに水を差すのは気が引けるけど、こっちも出来るだけ急いで欲しいんだけど・・・』

「あはは、ごめんな～」

謝ってはいるが俺の腕に抱き付くはやて。シャルは口端をヒクつかせながらも『ありがと～（棒）』と笑顔で応じた。その瞬間、「お邪魔します～！　迎えに来たよ～！」と玄関からクララの声が。

『んじゃ待ってるから～』

シャルとの通信が切れ、俺は「いってきます」とはやてに挨拶すると、「そこまで送るよ」と玄関まで俺の腕に抱き付きながら、アイリと共に付いて来てくれた。

「お、久しぶり、はやて！」

「久しぶり、クララ先輩！」

特別技能捜査課の解散以降、はやてとクララが直接顔を合わせることはなかったからか、挨拶は自然と、久しぶり、だ。俺は靴を履き終え、「いってきます」と手を振り、はやてとアイリからの「いってらっしゃい！」と見送りの中、俺はクララの転移スキルで八神邸を後にした。

「ただいま～。ルシルを連れて来たよ～」

クララの挨拶を耳にして目を開けると、そこは聖王教会本部の応接室だった。コ字状に並べられたロングソファの奥に、ティアードワンピースに着替え終えているイクスヴェリアが腰掛けており、特騎隊メンバーとトリシュとアンジェがソファの後ろに控えていた。彼女たちだけでなく、シャルの実母で現聖王教の教皇である「マリアンネ聖下」も居り、イクスヴェリアの隣に座っていた。

「お久しぶり、ルシル君。急にお呼び立てしてごめんなさいね」

「シャルではなく聖下が自分を・・・？」

「ええ。私から直接連絡を入れようとしても、娘があなたのアドレスを教えてくれないの・・・」

右手を頬に添えてほぅと溜息を吐く聖下にシャルが「絶対ヘンな事するもん・・・」って呆れた。これは話が長くなりそうだと判断した俺は、「自分は何をすれば？」と本題を切りだした。

「あ、そうそう。実は・・・――」

予定外の目覚めだったというイクスヴェリアの話から彼女を調べたところ、彼女の身体機能が不全を起こしていることが判明したとのこと。定期的に休眠と覚醒を繰り返す彼女だが、前回にダメージを負い、今回の予定外の覚醒が原因だろう、というのがティファレトの見解だそうだ。

（やはりそうだったか）

「――で、ティファレトの話では現代の医療技術では治療不可能ということなの。そこで娘たちから聞いていたあなたのコード・エイル。それを頼ろうと考えたの」

「次に眠りに着いたらいつ起きられるか判らないってことで・・・。ねえ、ルシル。お願い、イクスヴェリアを助けてあげて」

聖下とシャルからの懇願だから受けはしたいが、「イクスヴェリア。あなたの意思はどうだ？」と件の本人である彼女に問う。周囲がイクスヴェリアの治療を望み、本人が望んでいないのであれば、この治療は行えない。

「・・・私は休眠と覚醒を繰り返しながらも１０００年以上と生きてきました。それは冥府の炎王、マリアージュの生成素体という兵器として。ですがもう・・・ベルカもガレアも無く、戦乱の時代もとうの昔に終わり、私の役目は完全に終わりました。ですから私も、冥府の炎王としてではなく、イクスヴェリア個人として現代の世界を生きようと思います」

「その答え、確かに聴き届けました」

魔力炉（システム）の稼働率を上げ、俺を魔導師から魔術師へと昇華させる。魔術としてのエイルなら、魔法としてのエイルより効果が格段に高い。

イクスヴェリアの元へと歩み寄る中、「やっぱり・・・」と彼女が何か納得したかのように微笑んだ。

「どうかしたかい？」

「いいえ。・・・それではルシリオンさん。どうぞよろしくお願いします」

ソファより立ち上がったイクスヴェリアのすぐ目の前に立ち、彼女の頭に左手を乗せる。

「女神の祝福（コード・エイル）」

そしてエイルを発動。イクスヴェリアの全身が俺のサファイアブルーの魔力に覆われた。

「（手応えアリ）・・・イクスヴェリア、貴女自身から見て調子はどうかな？」

「あ、はい・・・。何と言いますか・・・スッキリしています。憑きモノが落ちたような、視界が開けて、体が軽くて・・・何かから解放されたみたいで・・・」

イクスヴェリアの瞳からポロポロと涙が溢れ出て来た。不安であるだろう、期待でもあるだろう。それまでの自分と別れ、新たな自分としての出発なのだから。マリアンネ聖下がその豊満な胸にイクスヴェリアを迎え入れ、「おめでとう」と一言。

「っ！・・・・はい」

こうしてイクスヴェリアは眠りに着くことなく、このまま生きていく事となった。

Ｅｐｉｃａ６－Ｂその日、王は少女になる～Ｍｙ　Ｆａｍｉｌｙ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

ルシルのおかげで、いつ目覚めるとも知れない休眠に入ることなく済んだイクスヴェリア。ルシルをまた先輩のスキルで八神邸に送り届けた後、イクスヴェリアの今後について相談し合うことになった。

「さて。イクスヴェリアも１人の女の子になったということで、どの家が引き取るかの話し合いを始めようと思います！」

「え？」

母様の話に目を丸くするイクスヴェリアに、「衣食住はしっかり確保しないと、ね♪」ってわたしがウィンクすると、「あー、なるほどです」って手を合わせて納得してくれた。孤児院なんてありえないし、ここはわたし達が引き取るのがベストなのだ。

「一応、候補者を募ろうと思うのだけど・・・――」

「まずフライハイト家が立候補します！　妹が欲しいです！」

母様に次いでわたしが挙手すると、イクスヴェリアが「一応わたしの方が年上なのですが・・・」って苦笑い。

「他は？　トリシュのシュテルンベルク家、ティファのヴァルトブルク家、アンジェのアルファリオ家、セレスのカローラ家、ルミナのマルスヴァローグ家・・・。あー、それとカリムのグラシア家とプラダマンテのトラバント家にも連絡した方が良いかな～」

「ヴァルトブルク家は辞退。陛・・・イクスヴェリアも、あんまり絡んでない私の家に来ても苦労するだろうし」

ティファのそんな意見にトリシュとアンジェとセレスとルミナも同意して、イクスヴェリア引き取りを辞退。母様が「じゃあカリムちゃんとプラダマンテに連絡しましょうか」って通信を繋げた。

『『はい』』

「急にごめんなさいね、カリムちゃん、プラマンテ」

展開されたモニターにカリムとプラダマンテが映って、母さんがイクスヴェリアの引き取り立候補を募っていて、今のところフライハイト家が名乗りを上げていることを伝えた。

「――で、こちらがそのイクスヴェリアです♪」

母様がイクスヴェリアを体の前にまで抱き寄せて、カリムとプラダマンテに見えるようにした。すると『まあ！　可愛らしい！』ってカリムの頬が綻んだ。可愛いって言われた事が少ないのか、イクスヴェリアは少し目を丸くして、それから「ありがとうございます」って微笑んだ。

『はじめまして、イクスヴェリア陛下。私は、グラシア家当主カリム・グラシアです。モニター越しで恐縮でありますが、お会い出来て光栄ですわ』

『右に同じくお初にお目に掛かります、イクスヴェリア陛下。トラバント家のプラダマンテ・トラバントです。聖王教会騎士団、銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼの隊長を務めております』

「あ、はい。カリムにプラダマンテですね。はじめまして」

自己紹介が終わり、イクスヴェリアと会ったこれまでの話を伝えた。すでにマリアージュの生成能力も失い、指揮権もとうの昔に失い、そして機能不全でいつ目覚めるとも知れない休眠に入るかもしれなかった、ということを。

「それをルシリオンに癒してもらい、休眠に入らなくて済むようになったのです。けど今度はどこでどうやって生きていこうか、という問題に直面しまして・・・。今のところはマリアンネ聖下とシャルが願い出てくれています」

『そうでしたか。・・・私も陛下を迎え入れても良いのですが、やはりここはグラシアよりフライハイトで良ろしいかと。フライハイト家は、ルシルさんのいらっしゃる八神家や特騎隊ともつながりが深いですし、フォルセティやヴィヴィオとも会い易くなると思いますから』

カリムも辞退して残るはプラダマンテ。イクスヴェリアはどこか不安そうな表情を浮かべてプラダマンテを見てる。どうしたんだろう。プラダマンテが結構ガチで恐い人だって見抜いたのかも。

『イクスヴェリア陛下は本当にマリアージュの生成・管制機能を失ったのですか？』

「え？・・・あ、はい。おそらく間違いないかと・・・」

『もう二度と戻りませんか？』

「・・・はい、それは間違いなく。私を生み出した技術者はもう居りませんし、もし万が一にも取り戻せることになったとしても、もう受け入れるつもりはありません」

胸の前で両手の拳をグッと握り締めた。さっきまでの不安そうな表情じゃなくて、外見に似合わないキリッとした表情で答えた。というか、「プラダマンテ。その質問、ちょっとどうなの？」って思ったから口にする。冥王としてのイクスヴェリアしか見てないって感じでさ。

「それってまるでイクスヴェリアの能力が重要って言っているようなもんでしょ」

『早とちりよ、イリス。その可能性があるなら、また仮面持ちに狙われるかもしれない、と危惧したの。陛下の生活に護衛を付けるなど、いろいろと考えなければならない事があるでしょう』

「あ、そっか」

仮面持ちはイクスヴェリアを完全に諦めたとは考えにくい。そしてマリアージュ関連の能力を取り戻せるなら、拉致されてそう言った施術をされちゃうかもしれないし。そこまで頭が回らなかったから、「ごめん」って謝る。

『気にしなくていい。本題の陛下の身元引き取りの件ですが、トラバント家も辞退させて頂きます。陛下をお護り出来る確信はありますが、何せトラバント家には若い子が居ないので。私ももう４０代後半ですし、使用人も３０代が多く、実年齢が数千歳であろう陛下でもおそらく退屈されるのでは、と判断します』

「もう。だからさっさと結婚して子供を作りなさ～いって、昔から言っているのに」

母様が呆れた風に首を横に振って溜息を吐くと、『余計なお世話です先輩』とプラダマンテも溜息を吐いた。でもこれで立候補者はわたし達フライハイト家だけになったわけだけど・・・。母様がイクスヴェリアを後ろから抱きしめる。

「イクスヴェリア。私たちと家族になりましょう？」

「・・・はい。よろしくお願いします」

「やった～～～～っ！　よろしくぅ～～～～♪」

わたしはイクスヴェリアの前から抱きしめた。みんなが祝福の拍手してくれて、本日はこれにて解散ということに。それぞれが帰路に着いて、わたしと母様、そして今日から新しくフライハイト家の一員となるイクスヴェリアを連れて教会本部の外へ出る。

「お疲れ様でした、奥様、イリスお嬢様♪」

敷地外に停まってる白塗りのリムジンの前にはフライハイト家の現女中長で、わたしの義理の姉にもあたる双子姉妹の姉、ルーツィアが控えていて、わたし達を出迎えた。先代の女中長だったプリアムスは、８年前になんとシュテルンベルク家の当主、パーシヴァル君と結婚。もう子供が２人もいて幸せな家庭を築けてる。

―イリス、聞いてください。兄様と義姉様の赤ちゃんがとっても可愛いんです！―

パーシヴァル君とプリアムスの子供の写真データを見せ付けてくるトリシュには苦笑する日々だった。先々代も寿退職だし。今代のルーツィア達もいい歳（３０代前半）だし、そろそろ身を固めても良いと思うんだけどね～。妹としても不安だよ。

「・・・ん？」

「そちらのお嬢さんはどちら様ですか？」

わたしと母様の間に立つイクスヴェリアを見て、ルーツィアが「お

客様ですか？」って小首を傾げた。母様がイクスヴェリアの後ろに回って、その両肩に手を置いて「今日から私の娘よ♪」って返した。

「・・・はい？」

「だから、今日からフライハイト家の末っ子として引き取る、元ガレアの冥府の炎王イクスヴェリア。彼女を養子としてフライハイト家に迎え入れます」

「・・・・えええええええええええ！！？？」

そりゃ驚くよね～。というか、「なんだとぉぉーーーーーー！？」って車の中からも驚きの声が聞こえた。ドアを開けて出て来たのは「あ、父様」だった。母様と違って、歳相応に老けちゃってる父様が「また相談も無く・・・」って頭を抱えた。

「あの、やはりご迷惑なのでは・・・？」

父様の様子にイクスヴェリアが不安そうにしたから、「そんな事ないわよ～？」って母様が後ろからイクスヴェリアを抱きしめた後、「あなた。何か問題でも？」ってジト目で父様を見た。

「いや、そうではない！　私もかのイクスヴェリア陛下を家族に出来るなど、とても光栄なことで、ぜひともお世話をさせて頂きたい！　しかし出来れば妻と娘から事前に話を聞かせてほしかった、というだけでして・・・」

「とのことで。イクスヴェリア。夫もそう言ってくれたことだし、これで心置きなく家族になれるわよね？」

「あ、はい！」

そしてわたし達は車に乗って、一路フライハイト邸へと向かう。その車中で、「ところで」とイクスヴェリアがそう前置きしてわたし達を見た。

「これから何とお呼びすれば？　一応わたしが末の娘になることは判りましたが・・・。私、家族というものを知らないので、どうすれば良いのかが判らないのです」

なんて寂しいことを言うイクスヴェリアに、まずわたしから「シャルって呼んで♪」って伝えると、「姉と呼ばなくていいのですか？」って聞いてきた。

「一応はあなたが妹ってことになるけど、そんな関係に拘らなくても良いかな～って。わたしもイクスって呼ぶし、だからイクスも姉以上の家族としてシャルって呼んで欲しいな～♪」

「私はそうね～・・・、お母さん、母さん、ママ、母様、そのどれでも良いから呼んで欲しいな～」

「わ、私も出来れば父として見て頂ければ・・・。呼称は好きに呼んでもらいたい」

楽しげに笑う母様と照れ臭そうに笑う父様。イクスは少し考えた後、「コホン。では・・・」と居住まいを直した。

「改めてご挨拶させてもらいますね。フライハイト家にお世話になります、イクスヴェリアです。よろしくお願いします、父様、母様、イリス♪」

こうしてイクスがフライハイト家の一員となった。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒？？？†††

イクスヴェリアという自我を抱いたその瞬間から、私は冥府の炎王として生きることが定められていた。母も父も居らず、マリアージュという死体兵器を造り出すために開発された。最初の頃は、何も疑問を抱かず命じられるままに本陣に立ち、戦場で斃れた敵味方を問わずにマリアージュへと変化させ続けた。

「・・・もしもーし。お母さんだけど・・・うん、ありがとう。急で悪いんだけど、２階のイリスの部屋の隣、確か空き部屋だったわよね？　そこを手の空いてるみんなで片付けて、今すぐに使えるようにしてもらえる？・・・うん、そう。詳しくは後でみんなに話すけど、今日から新しい家族が１人増えるのよ。・・・うん、女の子。すっごい可愛いの♪」

まさか生と死を冒涜し続けた私に、家族が出来るなんて思いもしなかった。私の部屋を用意してほしい、と家の人に伝えているのは今日から母になるマリアンネ。すでに５０代半ばらしいですけど、と

てもそうは見えない若々しい女性です。

「あの、家にも他に御兄弟が・・・？」

母様が端末越しの通信相手に対して、お母さん、と自称していたことからそう考えて、父様とイリスの２人に尋ねてみた。

「あ、うん。いるよ。この車を運転してるルーツィアと、いま母様が通信してるルーツィエは、わたしの義理の姉なの♪」

「２人はまだイリスが生まれていない頃に養子として引き取ったのですよ。私も妻も、もちろんイリスも、２人を娘として姉として見ています。使用人のようにしているのは２人の希望なのですよ」

「そそ♪　外に働きに行くより、家で家事手伝いしてる方が楽なんだよ～。妹も一緒だし、お給料というかお小遣いも一応出るし、のんびりも出来るし、職場環境がココほど最高な場所はないよ～♪」

運転席に座ってハンドルを握るルーツィアが、信号で停まったところでこちらに振り向いて笑顔でそう言いました。父様が「本音を言えば外に出て、見識を広めてほしいのだがな」と呆れた風に嘆息なさった。

「あと下にセイン、オットー、ディードっていう義理だけど妹３人がまだ居るね。この３人もイクスのお姉ちゃんになるから、今日は外に出てるから会えないけど、後日顔を合わせたら挨拶をしてあげてね」

「あ、はい。・・・フライハイト家は孤児の引き取りを率先してしているんですか？」

血の繋がりのある娘はシャルだけで、他５人・・・私を含めたら６人は養子ということになりますし。

「いや～、そういうわけじゃないけど。もちろん、ペット感覚で養子にしてるわけじゃないから、そこだけは信じてほしい」

「あ、いえ！　そういうことを疑ったわけではないので！　すいません」

「ううん、気にしないで」

「・・・じゃあよろしく、・・・っと。イクスの部屋も用意できたし、帰ったらまずお風呂、その後は今日はもう遅いから休みましょうか」

「はーい！」「はい！」

それから家に着くまでの間、戦争とは全く無縁な他愛無いお話をたくさんしました。その時間がどれほど私を楽しませてくれたか。今朝までは想像だにしない平和な一時に、私は本当に幸せを、これが家族なのだと感じた。

「おっ、着いた着いた～♪」

家というよりは、もはや城であるフライハイト邸に到着して、車は門を潜ってエントランスの前で停車。

「足元に注意してね、イクスお嬢様♪」

「ありがとうございます、ルーツィア」

ドアを開けてくれましたルーツィアの手を取って車から降りる。そこで私が手を取っているルーツィアとまったく同じ顔、赤い髪、青い瞳、服装を着た女性が、「お疲れ様でした」と彼女の隣に佇んでいることに気付いた。最初は「え？」って混乱しましたけど、すぐに私の手を取ってくれているのは車中での話に出て来たルーツィアの双子の妹である「ルーツィエ・・・？」なのだと判った。

「はいっ！　ルーツィアの妹、ルーツィエです！　姉のルーツィア共々あなたのお姉さんになります！　が、気軽にルーツィエと呼んでね♪」

「あ、はい！　イクスヴェリアです！　イクスと呼んでください！」

私の両手を取って勢いよく上下に振るうルーツィエに、「ちょっとちょっと。イクスの腕がもげちゃう！　馬鹿力なんだから！」とシャルが慌てて止めに入りました。

「うあ、ごめんね！　大丈夫！？」

「あ、大丈夫です」

私は見た目とは違ってかなり頑丈に造られていますし、この程度で肩が外れるようなこともありません・・・と、私が口にしてしまうと、シャル達が悲しそうにしてしまうと何となくですが判っているので、口にはしないようにした。

「ほらほら。いつまでも外に居ないで、早くお風呂にしちゃいましょ♪」

「「「は～い♪」」」「はいっ」

シャルと手を繋ぎ、ルーツィアとルーツィエが開けてくれた両開き扉を潜って邸内へと入りますと、「お帰りなさいませ！」と横一列に並んでいた使用人の方々が出迎えてくれました。

「ただいま～。お風呂の準備できてる？　今日はもう入浴してササッと休むよ」

「ええ、もちろん！」

「オケ。イクス、一緒に入ろう♪」

「え？　あ、はい、よろしくお願いします」

「ん。じゃあこっちね～♪」

シャルに手を引かれて案内されたのは浴場で、とても大きな脱衣場がありました。シャルが壁に設けられた棚の1つの元へと向かい、ある棚板から「今日のところは私の古着で申し訳ないけど・・・」と、丈の長い真っ白なワンピースを手に取り、私に見せてきました。

「わたしが今のイクスの背丈だった頃に着てたネグリジェ♪　きっと似合うよ♪」

「そうでしょうか？　教会で着させていただいたこの服も、可愛過ぎてあまり私には似合っていないような・・・」

いま私の着ているドレスのような衣服を眺める。私のその言葉にシャルは「チッチッチ」と立てた人差し指を左右に振るい、「判っとらんなぁ～、イクス。あなた、とっても可愛いのよ　」とウィンクしました。

「そうでしょうか・・・？」

「そうそう♪　ほら、早く入ろう♪」

服を脱ぎ出すシャルに倣って私も服を脱ぎ始める。ワンピース、キャミソール、パンツと脱いで裸になり、棚板に畳まれて置かれているタオルを手に取り体の前を隠す。対するシャルは恥じらいを一切見せず、タオルで体を隠すことなく佇んでいる。その様子に私は「綺麗です・・・」と、堂々としているシャルの、美術品のような綺麗な裸に見惚れた。

「え？　あぁ、ありがとう♪　騎士は体が資本だからね。それに、いつ男性（ルシル）の前で肌を晒すか判らないし、日々美を求めて頑張っているのです♪」

「っ！？」

いきなりの発言に驚き。私は「ルシリオンの事が好きなのですか？」と尋ねてみると、「大好きだよ。１５年も前からね」とはにかみながら答えてくれました。私とシャルはとても大きな大浴場へと入る。シャルが大理石の浴槽に入る前に片膝立ちをして、桶を使って掬ったお湯を体に掛けました。

「・・・浴槽に入る前にまずは体にお湯を掛けて洗うんですね・・・」

「え？　あ、うん、そうだけど・・・。ガリアって浴槽のお湯に浸かる文化って無かった？」

「いえ。あったようですが、私はずっと濡れた布で体を拭くだけでしから」

「は？　どういう・・・？」

シャルに倣って桶で掬ったお湯を肩に掛けつつ、私は王を冠してはいても所詮は戦場でしか機能しない兵器。そんな私にお風呂に入るなどという贅沢が必要と思われていなかった。戦が起これば目覚め、終われば用無しと休眠されていたあの日々のことを話した。

「――・・・ですので、１０００年以上生きているとはいえ、活動時間は合計で１０年あるかどうかなんです」

でもだからこそ、これまでの人生の中での数少ない出会いは、どれだけ年月が経とうと色褪せることはない。ですから最も印象に残っているオーディン様との短いながらも新鮮な会話も、すぐにでも思い起こすことが出来る。初めて頭を撫でられた事、頑張ったねと褒めてくれた事、また逢いましょうと約束した事。そのどれもが私にとって宝石のような、とても大切な思い出。

（そんなオーディン様もイリュリア戦争の後すぐに死亡したと、次の戦の際に聞いて・・・どれほど悲しんだか・・・）

けれどルシリオンと出会い、言葉を交わし、頭を撫でられた瞬間、私の直感ですけどオーディン様と同一人物なのではないか、と思うように。オーディン様との思い出が鮮烈過ぎて、あのお方が纏っていた空気、雰囲気が正しくルシリオンと同じで・・・。もしかしたらオーディン様も、私のように純粋な人ではないのかもしれない・・・。

「はあ！？　仮にもガレアの王だったんでしょ！？　なのに何、その扱い！」

「戦争ですので、仕方ないと言えば仕方ないかと。他の騎士たちも良くて水浴びだけでしたし」

「だからって・・・。むぅ。納得いかんわ～」

「気にしないで下さい。それはもうすでに遠い過去。大事なのはきっと現在(いま)です」

「・・・だね。よーし、気を取り直して！　お風呂初体験ってことは髪を洗ったこととかないでしょ？　わたしが洗ったげるよ♪」

「あ、お願いします」

シャルと共に洗い場へと向かい、木製の腰掛け椅子に座って、「はーい、シャワー行くよ～。目を瞑ってね～」とまずは髪を濡らしてもらう。そして次にシャンプーという髪や頭皮を洗う洗剤を使い、「わわっ？」私の髪を洗ってくれます。

「ふわぁ・・・とっても気持が良くて、眠ってしまいそうです・・・」

頭を洗ってもらうことと一緒にマッサージをして頂いているのか、とても心地が良くて思わずウトウト。それからコンディショナーと続き、「次いでに背中も洗ったげる～♪」とのことで、私はお願いをした。石鹸を泡立てたスポンジで背中を洗ってもらう中、いきなりシャルに抱きつかれてしまい、「ふわっ！」と驚きの声を上げてしまう。

「あのっ、一体どこを触って・・・！」

「おおっと！　やっぱり体が若いだけあってスベスベでプニプニ～♪」

胸やお腹を両手で触れてくるシャル。変な声が出ないように努めながら体をよじり続ける。ですけど、お尻の方にまで手が伸びた瞬間、「いい加減にしないと、さすがに怒りますよ！」と語気を強めて振り返る。

「うん、いいよ。今の内にわたし、というか家族に怒ることに慣れておいた方が良いし」

「え・・・？」

「なんとなくだけどさ。イクスって怒りや不満とか、外に出さずに抱え込みそうって思って。だから嫌な事があれば、今みたく我慢せずに文句だって言って良いし怒っても良いんだよ。本気でぶつかってこその家族ってもんでしょ♪」

私の体から両手を離したシャルが、「んじゃ、さっきのセクハラごめんなさい」と深々と頭を下げました。手段はちょっと如何なものかと思いますけど、お気遣いには感謝しないといけませんね。

「はい、許します♪」

「ふふ♪」「えへへ♪」

シャルと微笑み合い、その後は泡立ったスポンジを受け取って手の

届く体の部位を自分で洗う。シャルも自分の長い髪を洗い始め、お互いに頭や体を洗い流したところで、「今度は私が背中を洗いますね」と申し出る。

「お、いいの？　それじゃあお願いね～♪」

とても綺麗な水色の長い髪を纏めて体の前に流し、シャルの細いながらもしっかりとした背中をよく見てみると、薄らですけど古傷がところどころに在ることが判った。いつまでも背中を洗わなかった私に、「どうかした？」とシャルに尋ねられてしまいました。

「あ、いえ・・・。傷が・・・」

「え？　あー、うん、まぁ小さい頃の修行でね。傷1つと無い体には出来ないよ。もう古過ぎて痛みも無いし、遠慮せずに擦って良いからね～」

スポンジでシャルの背中を洗い始める私に、「でもま、ルシルと結婚して、子供が出来たら傷跡は全部消すけどね♪」とシャルがグッと握り拳を作りました。

「そうなのですか？」

「やっぱり古傷とはいえ、子供に見せるものでもないじゃない？」

「そういうものでしょうか・・・」

恋愛や結婚など、これまで関わり合いのなかった事ですからよく判らない。そしてシャルの背中を洗い終えた私は、先に浴槽に入っているように促されたことで、「ふぅ・・・」と肩までお湯に浸かる。

「あはっ☆　人生はお風呂はどう？」

「大変素晴らしいですぅ～」

浴槽の縁に後頭部を乗せて、力を抜いてお湯に体を預ける。そうしているとシャルも「お邪魔～」と私の隣に入り、「お風呂は人類至高の文化～」そう言って一息吐きました。

「ねえ、イクス」

「はい」

「学校、通わない？」

シャルからの提案に私はすぐには理解できずに、「・・・はい？」と小首を傾げた。

†††ＳｉｄｅイクスヴェリアＥｎｄ†††

Ｅｐｉｃａ６－Ｃその日、王は少女になる～Ｓｉｓｔｅｒｓ　ｏｆ　Ｆｒｅｉｈｅｉｔ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

お風呂から上がって、脱衣所の壁に設けられてる化粧台の背もたれが無い筒状の椅子にイクスを座らせて、ドライヤーでイクスの髪の毛を乾かしていると、「あれ～？」って声と一緒に脱衣場のドアが開いて、教皇の祭服からロングワンピースっていう部屋着に着替えてる母様が入って来た。

「うそ～、もうお風呂から上がったの？　私もイクスと一緒に入ろうって考えてたのに～。出るの早過ぎるわ～」

子供のように目に見えて肩を落とす母様に、「早いと言われても、もう３０分近く入ってたんだけど」って返す。イクスがホントにお風呂を気に入っちゃって、わたしものんびり入って、世間話をかなりしてた。

「母様がゆっくりし過ぎてる所為もあると思うよ」

「はぁ～・・・。ルーツィエとルーツィアの２人と入りましょうか・・・」

割と本気で落ち込んでる母様が踵を返して、化粧台の反対側の壁に設けられてる脱衣ロッカーの前に移動。そして「はぁ～」って溜息

を繰り返し吐きながら服を脱ぎ始めるのを鏡越しで見る。というかさ、自分の母親ながらどんなアンチエイジングしてんのかね。普通に３０代前半でも通じる若さなんだけど・・・。

「あ、そうだ。イリス。イクスに学校の話をしてくれた？」

ドライヤーを切って櫛でイクスの髪を梳きつつ、「したよ～」って空いてる左手を降るとイクスも「はい。伺いました」って続いた。

「それでどうかしら？　平日は私たち、基本的に仕事に向かうから家を空けることが多いのよ。その間は暇するだろうから、学校で友達を多く作った方が有意義だと思うのね」

「シャルの話では、ヴィヴィオやフォルセティ達の通うザンクト・ヒルデ魔法学院だとか」

「ええ、そうよ。マリアージュの生成能力は失っても、あなたにはまだ魔力がある。それを埋もれさせるのは勿体ないと思うの。期待に目を爛々と光らせるイクス。お風呂の時に、イクスは自分には学が足りないって嘆いてた。それに学校っていうところに憧れがあって、もし通えるのなら通ってみたいって。

「ザンクト・ヒルデ魔法学院なら、戦闘の出来るシスターや騎士も教員を務めているし、安全面でも最高位。魔法の授業もあるから、魔力を無駄にしない。ただ、問題が１つ・・・」

「何か問題があるのですか、母様？」

「ベルカの歴史も一応学ぶのだけど、冥府の炎王イクスヴェリアの項目がちょこっと脚色というか、誇張というか、あんまり良い事が書いてないのよ」

イクスの問いにそう答えた母様。わたしはこっちでは家庭教師というかプリアムスに勉強を教えてもらってたけど、歴史については深くは教わらなかったし、初めての学校は管理外世界の普通校だったから、正直言ってイクスが教科書でなんて言われてるのかは知らない。

「あ、それについては大丈夫です。冥王としての私はきっと、自分から見ても客観的に見ても、非道とも思える事を数多くしてきたのは事実ですから。その責めはちゃんと受け入れます」

「強いのね。イクスが問題ないと言うのなら、新学期の始まりと一緒に編入できるようにしておくわね～♪」

「ありがとうございます、母様♪」

イクスからのお礼に頬を綻ばせた母様は「これで最後」って体にバスタオルを巻きながら前置きして、「学年はどうしようかしら？」って訊ねた。

「シャルともお話しましたが、やはりヴィヴィオ達の居る学年で学びたいです」

「やっぱりそうよね～♪　第３学年の・・・学級はヴィヴィオ達と同じＢ組でいいわね」

「あの、いくら教皇とは言え、そう好き勝手が許されるのでしょうか？」

「母様と学院長って幼馴染なんだよ。まぁ職権乱用になっちゃうけど、そこは学院長たちが調整してくれるよ～」

母様に代わって答えたわたしや、「だから気にしないでいいのよ～」って微笑む母様に、「ご迷惑ではないでしょうか？」って不安がるイクス。だからわたしと母様は「大丈夫！」って、安心させられるように笑顔で力強く答えた。正直それだけで不安を消し去ってあげられたかどうか判らないけど、「判りました。お願いします」とお辞儀してイクスを見て、これで良しとした。

「それじゃあ私もお風呂を堪能して来るわね～♪」

ひとり浴場へと入って行った母様を見送り、わたしとイクスは私室のある３階へと向かって、「とうちゃ～く！」とイクスの部屋のドア前にやって来た。

「んじゃ、今日はこれにておやすみなさい、ってことで」

「はい。おやすみなさい、シャル」

「ん。おやすみね、イクス。よい夢を」

イクスと手を振り合い、部屋に入ったあの子がドアを閉めるまで見届ける。あの子の姿が完全に見えなくなったところで隣のわたしの私室へ。ドアを閉めて「ふぅ」と一息つく。たった1日でまぁいろいろな事が起きたものだよ。天蓋付きのベッドに仰向けでダイブして、「お姉ちゃん、頑張んないとな～♪」って両手を握り拳にする。

「明日はイクスを連れて教会本部にでも行ってみようかな～・・・ふわぁ～」

睡魔が一気に襲いかかって来て、わたしは抵抗することなく受け入れた。でも眠りが浅かったのか、コンコンとドアをノックする音と、「・・シャ・・・ル」誰かに呼ばれた気がして、「誰・・・？」と尋ねながら上半身を起こす。

「あの、イクスです。夜分遅くに申し訳ありません・・・」

「ほいほいっと・・・」

寝ぼけ眼を擦りながらベッドから降りて、「ちょっと待ってね～」と部屋の出入り口へ。ドアを開けると、薄暗い廊下の中にイクスがポツンと佇んでいた。ネグリジェのスカート部分を両手でキュッと握ってるあの子は浅く俯いていて、「その・・・」って口ごもった。

「一緒に・・・寝る？」

こちらからそう提案すると、イクスは顔を上げて「よろしいですか？」って上目遣いで聞き返してきたから、抱きしめたくなる欲求を堪えて「もちろん♪」って答えながらイクスを部屋に招き入れる。わたしのはダブルベッドだから、イクスひとりが増えてもスペースは余裕なのだ。２人でベッドに入って、向かい合って横になる。

「イクスって結構甘えん坊？」

「あ、いえ。ごめんなさい」

恥ずかしそうに目を伏せるイクスをわたしは「良いんだよぉ♪　もっと甘えて～　」って抱きしめる。わたしの胸に埋もれたイクスが「気持ち良いですけど、ちょっと苦しいです・・・」って身じろぎ。

「おっとっとい。ごめんね」

「ぷはっ。いえ、そんな！」

お互いに謝って、「ふふ♪」って笑い合う。そしてイクスは「ちょっと恐かったんです」そう言って、わたしの手を握ってきた。

「寝台で横になっていると、マリンガーデンという施設で皆さんと出会ったことが、目が覚めるとすべて夢・・・という恐怖が生まれたんです。そうしたら急に独りが寂しくて恐ろしくなったんです」

「そっか。でも大丈夫だよ。イクスはちゃんとここに居る」

指を絡めるようにイクスの震える両手を握り返す。それでイクスは安心したように「はい」と頷いて、そっと目を閉じた。イクスが寝息を立てるその時までずっと手を握って、「おやすみ」わたしも目を閉じた。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒イクスヴェリア†††

「・・・はっ！」

急に目が覚めた。周囲を見回して、昨晩と同じ天蓋付きの寝台に横になっているのを確認した。ただ、一緒に寝て頂いた「シャル・・・？」の姿はなかった。寝台から降りて廊下へと出る扉を僅かに開けたところ・・・

「あ、イクス、おはよう！」

「あ、はい、おはようございます、イリス！」

こちらに向かって廊下を歩いて来ていたシャルが私に手を振ってくれました。私も扉を完全に開いて挨拶をし返した。シャルはすでに普段着に着替え終えていて、「今日は総髪なのですね。似合っています！」と髪型を変えていたので感想を伝える。

「総髪？・・・あぁ、ポニーテールのことね。ありがとう♪　トレーニングをする時はポニーテールなの」

そう言って左手の中指にはめられている指輪を見せてくれました。

確かアレがデバイスの待機形態でしたっけ。その綺麗な指輪を眺めていると、シャルから「イクス。お腹空かない？」と聞かれた瞬間、きゅ～、とお腹から音が。

「そう言えば・・・。おかしいですね。昨夜、教会本部で美味しいお料理を頂いたはずですが・・・」

「あはは。実はねイクス。今、１３時半なの。もう朝も昼を過ぎてるんだよ」

苦笑交じりのその言葉に私は「えええ！？」と大声を上げてしまった。まさかの寝坊に、「起こして頂ければ良かったですのに！」と声を上げてしまう。

「いや～。こんな可愛らしい寝顔を見たら、起こすのなんて可愛いそうでしょ♪」

シャルが私の前に空間モニターを展開し、そこに安心した表情でグッスリと眠っている私の姿を映し出しました。さすがに寝顔をこうも残されていると、恥ずかしさのあまりに「ひゃあああ！」と悲鳴を上げてしまう。

「シャル！」

「えっへっへ～♪　朝になって起きようとしても、イクスってば手を放してくれないの♪　なんとか外しても、むぅ～、って愚図っちゃうし♪」

「やああですぅ～～～！」

顔や耳どころか全身が熱くなる。寝相のことまで赤裸々に語られてしまうと、この場に人が居ないとはいえ恥ずかし過ぎます。モニターを手で払って消そうとしますが、シャルが操作をしているのか右に左にと避けられてしまう。

「シャルぅ－－－－！」

「ごめんごめん♪　ほら、まずは着替えて身支度、そんでお昼ご飯。その後はお買い物だよ～」

今日の予定を教えてくれたシャルに「買い物ですか？」と尋ねながら、シャルの部屋ではなく用意して頂いた私の部屋へと手を引かれて入る。1人部屋としては広過ぎるような気もする部屋の中央にまで来たところで・・・

「そ♪　イクスの身の回りの物を買いに行かないとね♪　可愛い服や下着、あと学院の制服もサイズ合わせとかしないとさ。んじゃイクス。ばんざーいして♪」

そう言われたものですから「はい？」と意味が判らずも両手を上げてみる。するとシャルが「ほいしょっと！」と私の着ているネグリジェを勢いよく引っ張り上げました。ネグリジェが容易く脱がされてしまい、下着姿にされてしまった。

「～～～～っ！！　シャル！！　まずは一言ください！」

両腕で自分の体を抱いて怒鳴る。今日1日で私はどれだけ辱めを受ければいいのでしょうか。問題のシャルは「一緒にお風呂に入った仲でしょうが」と椅子の背もたれに服を掛け、クローゼットと呼ばれる収納家具から「ペザントブラウスとショートパンツで良いかな～」と服を一式取り出しました。

「これもわたしの古着なんだけど、今日はコレで我慢してね～」

「・・・私の衣類であれば、シャルの古着だけで十分過ぎると思うのですが・・・」

昨晩着させてもらったネグリジェや、シャルが取り出した一式もそうですけど、古着というには保存状態がよく、新しく購入した物だと言わたら疑いもしません。ですからそう伝えたのですが、シャルは立てた人差し指を左右に振りつつ「ダーメ！」と却下してきました。

「デザインは古いし、やっぱりイクスが自分の意思で選んだ服を着る方が絶対に良いに決まってる。さぁ、ほらほら。いつまでも下着姿でいないで着て、着て♪」

「服を引ん剥いたのはシャルですけどね」

シャルが差し出してくれた服を手に取って袖に腕を通した。そしてシャルは鏡台の椅子に私を座らせて、引き出しから取り出した美術

品のような櫛で私の髪を梳き始めました。その後に洗面所へと案内される中、「おはようございます！」とすれ違う使用人の方々と挨拶を交わしつつ、そこで洗顔や歯磨きなどを行い、そして1階の食堂へ。

「「おはよう、イクス～♪」」

「あ、おはようございます、ルーツィエ、ルーツィア」

昨夜の使用人服とは違い、お2人は飾りの少ないドレスを着用していました。お2人もフライハイト家のご令嬢なのだと実感です。そんなお2人と談笑しつつ、用意してくださった昼食を美味しく頂く。

「午後はイクスを連れて買い物だっけ？」

「車出そうか？」

「ん？　いいよ、2人も今日くらいは休みたいでしょ？　わたしも自分の車持ってるからさ」

「それが不安なんだけど」

「ねえ、イリス。ライセンスを取得して2年だけど運転歴は半年と無いペーパードライバーと、ライセンス取得13年、8m級リムジンを乗り回せるドライバー。どっちが安心できる？」

「ぅぐ・・・！　で、でも運転は出来るし。事故だって起こさない

よ？」

「それは当り前な話。事故るならイリスが独りで乗ってる時でお願いね」

「ひどい！」

テーブルに突っ伏したシャルが、しくしく、と声に出して泣く演技を始めました。そんなシャルを余所目に、お２人が私を見て「私たちも買い物に付いてくよ」と言いましたが・・・。ここはシャルを立てるべきか、それともお２人のお気遣いをお受けするべきか。

「イクスぅ～・・・」

チラッと私を見て悲痛な声で名前を呼ぶシャル。そんな愛玩動物のような瞳で見ないでください。

「・・・。あの、ルーツィエ、ルーツィア。今日はシャルとお出掛けしたいと思います」

元はシャルとのお出掛けという約束でしたから、今日はシャルと２人で出掛けようと思いました。お２人にそう伝えると同時、シャルが勢いよく体を起こして「イクス、大好き～！」と私に抱き付いてきました。

「「どの道わたし達も暇だから、車２台で行こう！」」

「ええー。だったら２人もわたしの車に乗れば良いじゃん」

「「嫌♪」」

「ちくせうｏｒｚ」

そういうわけで、生れてはじめての買い物へ出掛けることとなった。

†††Ｓｉｄｅイクスヴェリア⇒イリス†††

イクスが食事を終えるのを待って、双子の準備も終えたところで、家族・使用人の各車両が駐車されている地下ガレージへ向かう。様々な車種が６０台ほどずらりと並んでいて、まるでサブディーラー。

「あの、すいません。母様と父様は今どちらに・・・？」

「朝早くに教会本部へ行ったよ。教皇と司祭だからね。それがどうかした？」

「いえ・・・。朝のご挨拶を出来ませんでしたから。お仕事中では仕方ありませんね」

挨拶くらいで（なんて言ったら両親に怒られるけど）しょんぼりするイクス。その様子に、「じゃあ行ってみる？」って聞いてみた。

「いいのですか？　お買い物の時間などは・・・」

「どの道、服の品揃えがすごい店は中央区内にあるしね。そのついでに本部に寄ってこう。双子もそれで良いよね？」

「双子じゃなくて、２人一緒に呼ぶ時はルーツィって呼んでって言ってるのに・・・」

「寄り道については問題無し。セインの巡礼やオットーとディードの出張も終わって、本部に帰って来る頃だろうし。良い機会だし、そこでイクスに紹介しよう」

「ありがとうございます！」

買い物前にまずは教会本部に寄ることになったけど、ルーツィアの言うようにわたしにとっては妹で、イクスにとっては姉となるセインとオットーとディードが今頃、本部に到着するかどうかってところだろうし。ついでにイクスを紹介しよう。

「じゃあイリスから先に出て。万が一に事故った時、前に居たんじゃすぐに助けに入れないし」

「うっせえ、こんちくしょー！　上等じゃい、黙って付いて来いやー！」

冗談だと判りつつもそのしつこさに若干ハラ立ちながらも、「イクスこっち！」と手を引いてわたしの車の前にまで移動する。外観は日本で見たことのあるＭＩＮＩ　ＯＮＥのようなコンパクトカー。

「どっちので行く？」

「ジャンケンで決めよう！」

「「ジャンケ～ン・・・ポン！」」

ある２台の前でジャンケンをする双子。ルーツィエの車はＭＲ２でルーツィアの車はＲ３４系。ジャンケンの結果、「じゃあ私ので行こう！」ってことで、ルーツィアの車でお出掛けのみたいね。イクスと２人でわたしの車に乗車して、「出発～♪」と車を走らせる。地下ガレージから外に出て、教会本部へと向かう。その道中、イクスは窓から流れる景色を眺めて、「平和ですね」と漏らした。

「旧暦の戦乱時代や新暦初期に比べれば、だけどね。それでも次元世界には多くの戦乱が起きて続けてる。それでもミッドはうん、まぁ・・・今は平和だよ」

わたしやルシルなんて戦乱の鎮圧などを行う専門部隊だからね。そんなのを何度も見てるよ。イクスは「そうですね。人は争う生き物ですから」って悲しそうに言った後、「シャル！」っていきなり大声を出した。

「な、なに！？　何かあった！？」

車を車道脇に停車させつつ、『ルーツィ！　ちょっと停車するから先に行ってて』って後続の双子に思念通話で知らせると、『何があったか知らないけど、前に停めるよ』ってわたしの車の前に停車し

た。イクスが開いてる窓から身を乗り出して、「彼女は・・・」後方を見ながらそう呟いた。

「彼女？」

上半身を捻ってリアウィンドウから外を見ると、歩道を走るトレーニングウェアを着た1人の女の子の後姿を視認できた。それでイクスが反応した理由も判ったけど、まずは『ルーツィ。出発するよ』って知らせておく。

「イクス。あの子の事は走りながら話すから、まずは車を走らせるよ」

「あ、はい！　すいませんでした、急に声を荒げてしまい・・・」

「気にしないで良いよ。イクス、あの女の子のご先祖とイリュリア戦争に参加したんでしょ？」

後続車が無いことを確認して車を走らせ、双子の車も続いて発進したのを確認。

「ご存知なのですか？」

「そりゃまぁ仮にもここベルカ自治領ザンクト・オルフェンの管理を行うフライハイト家の人間だからね。古代ベルカ時代から続く血族がどこでどうしているかは監視しておかないといけないの」

フライハイト家と六家の仕事の1つに、子孫の監視というものがある。今さら世界統一なんて理由で馬鹿な戦乱を起こさないとは思うけど、気性の荒い当時の王族の性質を引き継いで、そんな馬鹿を起こす奴も現れるかもしれない。それを事前に察知して、説得なりして制止するのだ。

「そうなのですか」

「そっ。で、さっき走ってたのは知っての通りシュトゥラの覇王イングヴァルトの直系の子孫。名前はアインハルト・ストラトス。年齢は11歳。真正古流ベルカの格闘武術、覇王流カイザーアーツの継承者」

イクスの前にアインハルトの簡単なプロフィールが表示されたモニターを展開させる。住所や連絡先は伏せてあるけど、明かしてある「ザンクト・ヒルデ魔法学院の在校生・・・」という項目をイクスが読み上げた。

「イクスはヴィヴィオ達の在籍してる第3学年になるけど、アインハルトは最上級の第5学年ね。ただ、あの子にはちょっと問題があってね」

「問題ですか・・・？」

「わたしも資料でしか知らないんだけど、アインハルト・・・あの子、覇王イングヴァルトの記憶を受け継いでいるみたいなのよ」

わたしの話に「え・・・？」って信じられないって風に漏らしたイクス。わたしも一応は前世のシャルロッテ様とこの体を共有することも少なからずあったから、前世の記憶を持っていてもおかしくは無いって断言できる。

「だからかな。どうも友達も少ないみたいで、孤高の女子学生って感じらしいのね」

「・・・過去に縛られているのですね、彼女も・・・」

「だね。ヴィヴィオやフォルセティの側で時折姿を見かけるって報告が入って来るけど、直接的に関わろうとはしてないようなの。どう解決できるかも判らないし、今はとりあえず様子見だね」

何かしらの接点を、と考えると真っ先に格闘技が思い浮かぶ。ヴィヴィオもノーヴェを師事してストライクアーツを学んでるし。

「私にも何か出来れば、と思うのですけど・・・オリヴィエやクラウスとの関わりは無いに等しいですし。お力にはなれそうにないです」

「ヴィヴィオやフォルセティを、コロナみたく友達として支えてあげて。今はそれで良いよ」

「・・・はい」

そうしてわたし達は最初の目的地の聖王教会本部、その駐車場へと

到着。とは言っても本部から５００ｍほど離れてるけどね。車を降りたわたしとイクス、それに双子はテクテク歩いて本部へ向かい、聖王教の信者の方々から挨拶を受けながらもようやく到着。中庭に回ってみると、「お！」すぐに見憶えのある姿を発見できた。

「おっす～！」

「イリス！」

「「ただいま帰りました、シャル」」

「セインは？」

「今はお手洗いに行っています」

手を振りながら歩み寄ると、シャッハとオットーとディードはお辞儀した。一度にイクスを紹介したかったんだけど、また後でセインに紹介するかぁ。手間が１つ増えることにやれやれしながらも、「ん？」３人の中に見知らぬ小さい女の子が１人、不貞腐れたように佇んでた。その子が何なのか、シャッハに訊ねる前に・・・

「オットー、ディード、ちゅうも～く！」

「彼女が、昨日から我らがフライハイト家の末の妹となったイクスヴェリア・フライハイトだよ！」

「ご紹介に預かりましたイクスヴェリアです。どうぞよろしくお願

いします」

双子がイクスをオットーとディードに紹介し始めて、まずはそっちだった、と自分自身に叱りの言葉を入れる。

「はじめまして、イクスヴェリアお嬢様。僕はオットーと言います」

「オットーの実妹のディードです。よろしくお願いします、イクスヴェリアお嬢様」

「あの、私はお2人の妹となりますので、敬称など不要ですから」

使用人のように恭しくお辞儀するオットーとディートに、イクスが困惑してる。最初の頃はわたしも、シャルお嬢様、って呼ばれたけどやめさせた。イクスからもそうお願いされたことで、変に拘ろうとせずに「はい、イクス」と微笑み返した。

「では僕の事もオットーと敬称無しで呼んでください」

「私もディードと呼んでください」

――ディープダイバーーーー

「へ～。君がイクスヴェリア？　お母さんから写真付きのメールを貰ってたけど、本当に小さい女の子なんだね～」

どこからともなく聞こえてくるもう1人の妹セインの声。辺りを見

回して姿が見えないことを確認して、ふとイクスと同じタイミングで地面を見た瞬間、「きゃっ！」イクスがスカートの前を押さえながら後退した。

「やっほー！　あたしはセイン！　オットー、ディードの姉、ルーツィとシャルの妹！　あたしのこともセインって呼び捨てでいーー」

顔だけを地面から出してるセインは、顔を赤くしてるイクスをスルーして自己紹介に入った。わたしはしゃがみ込んでセインの顔を結構な力を込めた両手で挟み込むと、「あいたた！？　潰れる、顔つぶれる！」って痛がった。

「ねえ、何やってるの？　いきなりスカートを覗き込むとか、あなたってそんな変態さんだったっけ？」

「ち、ちが！　サプラ〜イズ！　サプライズだよ、シャル！　オッ(ふたご)トーとディードが真面目な自己紹介するから、あたしくらいは明るく元気にやろうって気遣いじゃん！」

セインの顔を挟み込んだままあの子を引っ張り上げて、「はい、ここに正座」させる。腕を組んで仁王立ちしてるシャッハが「あとでシゴいてあげますね」って、セインを見下ろしながら笑顔を浮かべた。

「うげ！？　ごめん、シャル、シスターー！　謝るから地獄のシゴキはどうかご勘弁を！」

「あの、私は平気ですから、セインに酷い事はしないでください」スカートの中を覗かれたっていうのにイクスはセインを即行で許すと、セインは「ごめんね～、ありがと～！」本気で感謝した。わたしとシャッハはイクスの優しさに免じて、しょうがなくセインを不問に処した。

「自己紹介も終わったところで、さっきから気になってた事を聞こう。シャッハ、この女の子はどちら様？」

わたし達の会話を邪魔しないように努めたのか、ただ興味が無かったのか、ずっと黙ってた女の子のことを尋ねる。

「今日から修道士見習いとして、聖王教会本部で預かろうと思っています。さぁ、挨拶を。この方はここベルカ自治領ザンクト・オルフェンを後に収める次期フライハイト家当主です」

「へぇ、そうなんだ。じゃあわたしから自己紹介！　イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトよ。今は局員優先だけど、一応は騎士団にも属してるから、ここに居るみんなと同僚になるわけだ。よろしくね♪」

女の子に向かって手を差し出しながら自己紹介すると、「シャンテ・アピニオン」って名前だけポツリと教えてくれた。わたしが差し出してる手を引っ込めないのを見て、遅れて「よろしくお願いします」って握手に応じてくれた。

「ん♪　シャッハはまぁ特訓はキツイけど頑張ってね。一緒に騎士としての仕事に出られる日を楽しみにしてるよ」

「あ・・・うん」

「じゃあわたしとイクスは母様と父様に逢いに行ってくるから、双子は戻って来るまで好きにしてて～。イクス、こっち」

「あ、はい！　失礼します」

みんなに見送られながら、わたしとイクスは教会の中へ向かった。

Ｅｐｉｃａ７－Ａそうだ、合宿へ行こう～Ｏｂｊｅｃｔｉｖｅ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

私とフォルセティとコロナ、そしてこの間のマリンガーデンの事件で新しく友達になれたリオ。そんなわたし達の通ってるザンクト・ヒルデ魔法学院が夏の長期休校に入ったことで、いろいろと自由な時間が出来た。でも宿題は相変わらず多いから、ちょっぴり憂鬱です。

「ねえねえ、そのノーヴェさんって人が、ヴィヴィオとコロナのストライクアーツの師匠なの？」

「師匠というかコーチというか・・・でもうん、そうだよ～♪」

リオにそう答える。強くなる。なのはママとの最初の約束を果たすために、まずは体を鍛えようとした。格闘技は心も体も鍛えるって本で読んだからだ。そしてわたしはどうしてか、誰にも教えを乞うような事しないで独りでトレーニングをし始めた。ママ達や友達を守れるために強くなろうとしてた。だからママ達から鍛えられるのはちょっと違うかな～て。

（いま思えば馬鹿な事をやってたな～）

フォルセティ伝手にザフィーラや、シャルさん伝手にルミナさんとか、すっごい強い格闘騎士が居るんだし。そんな頃、偶然わたしの

特訓を見たスバルさんから基礎を教えてもらった。それから独学で格闘技の本を読んだり、いろいろやってたところにノーヴェが声を掛けてくれて、その時から時間を作ってくれては本格的に教わるようになった。

「私も一応は教わってるけど・・・。ヴィヴィオみたいに本格的な格闘技じゃなくてエクササイズレベルだし」

「まだこれからだよ、コロナ。コロナがトレーニングを始めたのはつい最近だし。最初は上手くいかないことが多くあって、辛いとか面白くないとか思うかもしれないけど。一緒に頑張ろうよ、コロナ」

「フォルセティ君・・・。うんっ、ありがとうっ♪」

コロナにちゃんと体を向けてそう伝えたフォルセティ。2人して笑顔を向け合っていたから、リオが「あれあれ～？　ひょっとして2人ってそういうアレ～♪」なんて、からかうような口調で2人の顔を見比べた。

「あはは・・・？」

「うえ！？　ち、違うよ！」

フォルセティは否定しなくて笑うだけ。コロナは顔を真っ赤にして慌てふためきながら否定。フォルセティは否定しないし、コロナはものすごいリアクションだしで、「あやしいな～♪」ってリオはニヤニヤしっぱなし。

「えへへ・・・？」

「違うってば～！　もう～！」

完全に否定しないフォルセティに、私は何かモヤモヤした気持ちになってきた。コロナも違うって言ってるんだし、フォルセティもすぐに違うって言えるはずなのに。だから「ほら、遅れちゃうよ！」って私は少し声を大きくしてそう言って、ちょっと歩くスピードを上げて前を行く。

「ちょっ、ヴィヴィオ・・・？　どうしたんだよ急に・・・？」

「え、なに？　なんでヴィヴィオが怒ってるの・・・？」

背中にフォルセティとリオの困った声が掛けられたから、「怒ってないよ」って返す。怒ってる、怒ってない、なんて私にも判らないもん。コロナは違うって言ってるのに、フォルセティは笑って誤魔化してばかり。なんですぐに違うって言ってくれないんだろう。あれじゃまるでフォルセティが、コロナのことをその・・・。

「ねえ、フォルセティ。さっき、なんでコロナが違うって言ってたのに、ずっと笑って誤魔化してたの？」

後ろを付いて来るフォルセティにそう聞いたら、「えっと・・・」って言葉を濁した。フォルセティが誰を好きいなってもいいもん。もしコロナなら祝福しないと。コロナは頭もいいし、可愛いし、本

格的な格闘技を習い始めたわたしより守ってあげたくなってもおかしくないし。なんて考えると、胸が苦しくなって泣いちゃいそうになる。

「答えられなかったというか、リオの話の意味が解らなくて・・・。コロナは必死に違うって言うけど、話の内容をしっかり理解していないのにそれに同意すると、コロナやヴィヴィオ達が嫌な思いするかもしれないから。リオの話がどういう意味か聞くべきだったんだろうけど、なんか聞ける雰囲気でもないような感じで・・・」

「へ・・・？」

まさかの返答にわたしは足を止めて後ろに振り返ると、フォルセティ達もピタッと足を止めた。呆けてるフォルセティの顔を見て、なんだかモヤモヤも晴れて来たんだけど、でもこれだけは言わせてね、「バカ」って。

「ええ！？　なんでかいきなりバカ呼ばわり！？」

「あはは♪　ほら、早く行こう！　ノーヴェが待ってる！」

そういうわけでわたし達は予定通りノーヴェの待つナカジマ邸へ。門塀を潜って庭を通り、玄関でインターホンを鳴らすと、すぐに『おう、来たな』ノーヴェの声で応答があった。開いたドアからノーヴェが出迎えてくれて、「さぁ入ってくれ」って促してくれた。

「「「「お邪魔しまーす！」」」」

そう挨拶して家の中に入ってそのままリビングに通されると、ノーヴェが「なんか飲み物用意するから、適当にくつろいでいてくれ」ってダイニングに向かった。お言葉に甘えてわたし達はリビングのソファに座ってノーヴェを待つことにした。

「たっだいま～！　ノーヴェ～。ヴィヴィオちゃん達来た～？」

「ただいまっス～♪　ママりん！　ヴィヴィオ達の靴があるっス♪」

玄関からそんな声が聞こえてきて、足音がリビングに近付いて来る。そして「いらっしゃい！」とリビングに入って来たのは、「クイントさん！　ウェンディ！」の２人だった。

「ヴィヴィオちゃん達が遊びに来てくれるって聞いて、急いで買って来たのよ♪　スイーツスミスのケーキ各種♪」

クイントさんがソファの前にある脚の短いテーブルに白い箱を置いてくれて、ウェンディが箱を開けながら「どれを食べたいかは選んで良いっスよ～♪」って、わたし達も差し出してくれたんだけど・・・。

「おかえり母さん、ウェンディ。ケーキを配るのは良いけど、もう２人お客が来るし、それに何より新入りにまだ自己紹介もしてないから」

ガラスコップやリンゴとオレンジのジュースのパックを載せたトレ

イを持って来たノーヴェにそう言われて、「あ、ごめんなさい！」ってクイントさんがリオを見ると、ウェンディも「そうだったっスね～」って頭の後ろを掻いた。

「はじめま――」

クイントさんが言いかけたところで、ピンポーン♪ってインターホンが鳴った。ノーヴェが「お、来たな。はいはーい！」って玄関に駆けて行ったのを見送ると、クイントさんが「じゃあ改めて。ナカジマ家の――」って、またそこまで言いかけたところで・・・

「「お邪魔します」」

「あっ、イクス！　ディード！」

新しく友達になれた元冥府の炎王のイクスヴェリアと、スバルさんやノーヴェやウェンディの妹のディードがリビングに入って来た。

「ごきげんよう、ヴィヴィオ、フォルセティ、リオ、コロナ。そしてはじめまして。イクスヴェリア・フライハイトと申します」

「あらまあ、また可愛らしい女の子が。ディードもいらっしゃい」

「はい。ご無沙汰しています」

「これで揃ったな。じゃあ改めて新入りの自己紹介ってことで」

イクスがわたしの右隣に座るフォルセティの隣に座ったところで、クイントさん達がリオやイクスに自己紹介。クイントさんはナカジマ家のお母さん。ノーヴェはナカジマ姉妹の五女、ウェンディは六女、ディードはイクスのお姉さん？になってるんだっけ。うーん、複雑だ・・・。

「――それじゃあ、ケーキを食べながらで良いから聴いてくれ」

クイントさんとウェンディが買ってきてくれたケーキ（ちなみに私はイチゴクリームのショートケーキ）を美味しく頂きながらノーヴェの話に耳を傾ける。

「新メンバーに春光拳の使い手のリオ、マネージャーとして手伝いをしてくれることになったフォルセティとイクスを迎え、ヴィヴィオの目標を叶えるために本格的に鍛えて行こうと思う」

ノーヴェの言葉にフォークを握る右手に力が入った。クイントさんが「あら、目標があるの？」って首を傾げたので、「インターミドル・チャンピオンシップ出場を目指してます！」ってわたしは答えた。

「懐かしい！　私も学生時代にメガーヌ――友人と一緒に参加したな～♪」

「おー！　ママりんはどこまで進んだんスか？」

「都市本戦決勝でメガーヌと戦ったんだけど、選抜で負けちゃった

のよね。・・・現在は当時よりレベルが高いのかしらね～」

クイントさんやメガーヌさんも参加したっていうインターミドル。初めは目標とはしてなかったけど、強くなったなら何かしらの実績が欲しいな～って、学院のお昼休みでそう漏らした時・・・

――年齢とかの条件があるからすぐには参加できないけど、ＤＳＡＡが開催するインターミドル・チャンピオンシップに参加してみれば？――

フォルセティがそう提案してくれた。ＤＳＡＡは次元世界のスポーツ競技の運営団体の１つで、インターミドルは全部の管理世界の１０歳から１９歳の魔導師が参加できる公式魔法戦競技会だ。地区の選考会の結果で組み合わせを決めて、ノービスとエリートの２クラスで予選をして地区代表を決める。そこからミッド中央部１７区で選抜された２０人と、前大会の都市本戦優勝者の計２１人で都市本戦をやる。そしてミッド各都市本戦の優勝者から世界代表を決める、とても大きな競技会だ。

（正直、いきなりそんな大きな競技会に出るのは恐れ多いけど・・・）

――ヴィヴィオは努力家で頑張り屋だから、今からしっかり練習を積めば良い成績を残せると思う。もし参加するなら僕に出来る範囲で手伝うよ――

フォルセティがそう言ってくれたから、わたしは出場を決めた。フ

ォルセティの期待を裏切らないようにしたいなって思う。

「予選開始は来年の７月。残り１１ヵ月であたしに考えうるあらゆる特訓で、ヴィヴィオとリオを鍛えるつもりだ。コロナはまだ決めかねているみたいだから保留だ」

「えへへ、ごめんね。今はまだ自信がそんなになくて。フォルセティ君も、支えてくれるって言ってくれてたのに・・・」

コロナは優しいから、わたしに付き合ってくれてるんだよね。でもコロナだって魔法がすごいから、そこを伸ばせばきっとすごい選手になれると思う。でも今は「大丈夫だよ」って微笑むフォルセティに倣って、「うん、焦らなくていいよ」って言ってあげたい。

「そう言えばインターミドルって、デバイスが必要だったんじゃなかったんスかね～？」

「あらウェンディ、よく知ってるわね。インターミドルの参加資格は３つ。１０代であること、クラス３以上のデバイス所し装備すること、コーチとセカンドが居ること」

デバイスが必要っていうことに、判っていてもドキッとする。ウェンディが「ヴィヴィオ達は持ってるんスか？」って聞いてきて、真っ先にリオが「はいはい！　持ってまーす！」って挙手した。ウェンディとリオがチラッとわたしを見てきたから、「持ってません・・・」って肩を落とした。

「なのはママが、基礎も済んでいないうちにデバイスなんか要りません、って・・・」

「あら～。なのはちゃんは戦技教導隊のエースだから、魔法に関してはやっぱり厳しいというかしっかりとしてるのね」

「そうなんです～」

「ま、まあ予選まで1年近くあるんだ。その頃にはなのはさんも、何かしらの事はしてくれるはずだ。もう伝えてあるんだろ？　だったら安心しても良いと思うぜ」

「はい」

「・・・で、だ。ここまで偉そうな事を言ってきたが、あたしはちゃんとしたコーチでもトレーナーでもない半人前だ。だから至らないこともあると思う。でも頼ってもらえた以上、半端な指導はしたくないから、必死に勉強をする。だから・・・お願いします！」

ノーヴェが真剣な顔でそう言ってくれたから、わたしとリオは「お願いします！」って応えて、クイントさんとウェンディが「おー！」って拍手して、ディードも「素晴らしいです、ノーヴェ姉様」って拍手した。

「あぅ、やめてくれよ母さんも・・・。えー、なんだっけ。あーそうそう。今日ここに呼んだのは、夏休み中に遠出をして、合宿をしようって思ってな」

「「合宿！？」」

その言葉の響きでテンションが一気に上がったわたしとリオ。コロナが「すごいジムとかですか？」って聞くと、「生憎とそんな金はあたしは無い！」ってノーヴェが断言した。

「ジムで鍛えるのも良いけどさ。あたしはお前たちには自然の中で、自然に鍛えられる筋肉を付けさせたいわけだ。というわけで。母さん！」

「はいはーい！」

クイントさんが空間モニターを展開して、すぐに『どうも～。メガーヌ・アルピーノです♪』って、クイントさんの話にも出てたメガーヌさんが映った。

『娘のルーテシアと♪』

『リヴィア～♪』

さらにモニターの画面下から飛び出してきたのはルールーとリヴィの双子だった。メガーヌさん達アルピーノ家は今、無人世界カルナージに住んでて、ノーヴェの言う自然というか、大自然に覆われたとっても綺麗な世界（ビデオレターでしか見たことないけど）だ。異世界なんて、なのはママや八神司令、アリサさんにすずかさんの出身世界・地球に行ったっきりだよ。メガーヌさん達と初めて顔を

合わせたコロナ達が自己紹介するのを見届けて、話を本題へ。

「つうわけで、カルナージの大自然に揉まれながら体を鍛える。メガーヌさんにはＯＫ貰ってるからな」

『ご期待に添えられるほど整った施設も設備もないけど、大切なお客様をおもてなしするわ♪』

『ホテル経営を計画しているからね。それにヴィヴィオ達のためにトレーニングアスレチックも、すぐには無理だけどどんどん造ってく予定♪』

『ホテルの目玉が必要だしね～♪　近くには大きな川もあるし、そこで泳げばいい感じのスタミナや筋肉が付く！と思う』

そう力説するルールーとリヴィ。ホテル経営の話は以前の通信でちょこっと聞いてたけど本気だったんだ。カルナージへの到着、宿泊日数はいつでもいつまででも大丈夫ってことで、日程はこれからそれぞれの家庭と話して決めることになった。

「合宿参加の許可を貰ったらあたしに連絡してくれ。ご両親に直接ご挨拶をしないといけないからな」

「「「「「はいっ！」」」」」

たぶんわたしとフォルセティは二つ返事で許可してくれそう。イクスも、シャルさんならすぐに許可しそうだし、というか一緒に付い

て来そう。コロナとリオはどうだろう。一緒に行きたいな～。

『皆さんのお越しを――』

『『『お待ちしております！』』』

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ⇒フォルセティ†††

ナカジマ邸で合宿の話を聞いて、そのまま解散となったから僕たちもそれぞれ家路に着いた。海辺がすぐそこっていう僕の家が見えて来て頃、庭にあたる砂浜を見て「あれ？」っていつもと違うことに気付いた。

「スタンディングバック・・・？」

打撃訓練用の器具が建てられていて、側には「ヴィータお姉ちゃんとザフィーラ」が居た。僕は２人の元へ駆け出しながら「ただいまー！」って挨拶をした。

「おう！　おかえりフォルセティ！」

「ああ」

僕を迎えてくれた２人にスタンディングバックや、さっきは見えてなかったキックミートもあって、ソレを指差して「どうしたの？ソレ」って聞いてみた。

「ん？　ああコレか？　ほら、時々近所の子供に格闘技の指導やってんだろ？　最初は本格的な事はやるつもりはなかったけどさ。これが結構評判良くて親御さんからも、是非とも御指導を、なんてお願いされたからな。だったらあたしとザフィーラもやってやろうってさ」

「そうなんだ～」

「そういうわけでさ、フォルセティ。お前もやらね？　お前も何気に筋が良いしさ。セインテストってやっぱそういう血筋なんかね～」

ヴィータお姉ちゃんに一緒に格闘技をやろうって誘われたけど、「ごめん。僕はいいや」って断った。僕は格闘スタイルじゃなくて魔導師スタイルを目指してるからだ。体を鍛えることは間違ってないって判ってるけど・・・。

「あぁ？　お姉ちゃんが一緒にやろうって言ってるんだから答えは、うん良いよ、だろ？」

「ええー？　ヴィータお姉ちゃん、さすがにそれは横暴だよ～」

左腕を僕の肩に回して、右拳で僕の頭をグリグリするヴィータお姉ちゃん。そんな僕とヴィータお姉ちゃんを見てたザフィーラから「察してやってくれ、フォルセティ」そう言われたから小首を傾げた。

「ヴィータはもっとお前を構いたいのだ。最近はお前もよく出かけていて、なかなか遊んでやれなかったと寂しいのだ。姉心というや

つだな」

ヴィータお姉ちゃんやザフィーラだけじゃなくて、シグナムお姉ちゃんやシャマルお姉ちゃん、アインスお姉ちゃん、リインお姉ちゃん、アイリお姉ちゃん、アギトお姉ちゃんもみんな、僕を本当に大事にしてくれる。それを改めて思う。

「ちっ、違ぇ・・・くもねえけど！　たとえ魔導師目指してても、やっぱ男ならまともに鍛えてねぇもやしっ子でいちゃいけねえって！」

「照れることはないぞ。我々は家族なのだ。愛情を隠すことなく素直に伝えてもおかしくはない」

ザフィーラの話に僕はヴィータお姉ちゃんの両手を取って、「ありがとうヴィータお姉ちゃん！　大好き！　誘ってくれてありがとう！」って、いつも感謝してるって思いを伝えた。

「っ！　お、おう！　あたしもなんだ・・・、お前のこと好きだぞ」

「あ、でも一緒にはトレーニング出来ないよ。来年のインターミドルに向けて特訓するっていうヴィヴィオ達の手伝いをするし」

ヴィータお姉ちゃんと両手を繋いで笑い合いながらそう伝えると、「うおい！　この流れだとあたしらに付くもんだろ！？」って言って、僕の両手を振り払ってヘッドロックを掛けてきた。

「いたたた！　お姉ちゃん、痛い！」

「お前とヴィヴィオの関係は理解しちゃいるし、学校の友達との時間も大事だって思うが、もうちょい家族と遊んでくれ！」

「あぅ～。あっちが先に決めた事だったもん～」

そういうわけで、僕はザフィーラとヴィータお姉ちゃんの作るトレーニング教室への参加は、ヴィヴィオ達とのトレーニングが無い時だけってことで決まった。それから夕ご飯までの間、２人の指導の下、僕は足場の悪い砂浜での走り込みやミット打ちをやった。そして夕ご飯の時、家族が揃ってる席で合宿の話をしてみた。

「ほうほう、カルナージで合宿か～。合宿。懐かしい響きやな～♪」

お母さんが「泊まりの許可なら出すよ。な？　ルシル君♪」ってお父さんを見ると、「もちろん。メガーヌさんが居るなら不安は無いよ」って頷いてくれた。お父さんやお母さんやお姉ちゃん達、なのはさん達も昔、メガーヌさんやクイントさんにお世話になったってことで、とても信頼してる。

「合宿に行くメンバーはいつもの子たちなのか？」

「あ、うん、アインスお姉ちゃん。コロナとリオとイクスは、家族の許可待ちだけど・・・」

「シャルちゃんは結構甘いから、すぐに許可を出して、さらには合宿まで付いて来そうね」

シャマルお姉ちゃんの話にみんなが笑って同意してる中、僕は「あ、そうだ！」ってお父さんに伝えておかないといけない話があったのを思い出した。

「お父さん。都合が合えばお父さんも合宿に付いて来てほしいって、メガーヌさんがお願いしてたよ。なんか、男手を借りたいとかって」

「男手って・・・ガリューだけじゃ足りないってことなのか？」

アギトお姉ちゃんがフォークを加えながらそう呟くと、「礼儀が悪いぞ」ってシグナムお姉ちゃんに叱られた。

「そうなのか。じゃあスケジュールを考えてみるよ。合宿の日程が決まったら教えてくれ。フル参加は出来ないかもしれないが、1日くらいはなんとかなるだろう」

「うんっ！　ありがとう、お父さん！」

ヴィヴィオ達を支えるサポーターとしてもっと力になるためには、ノーヴェが言ってたみたいにもっと勉強しないと。僕にしか出来ないサポートがなんなのかを考えながら、予定とかまだまだ決まってない合宿旅行に思いを馳せた。

Ｅｐｉｃａ７－Ｂそうだ、合宿へ行こう～Ｃｒｅａｔｏｒ～

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

無人世界カルナージ。元は私やママ、妹のリヴィアを隔離しておく檻だった。プライソン戦役で罪を犯した私たちは、魔力封印処置を受けたうえでの８年間の隔離刑を受けた。でも今現在は、模範囚ということで隔離期間も短縮されて去年で終わった。だからもうカルナージから離れても良いんだけど、カルナージの開拓もＯＫって管理局からお達しもあったこともあって、私たちはこの世界で生きていくことを決めた。

（だから今日も、エリオやキャロ、ヴィヴィオ達から送ってもらってる本を読んで勉強中だ）

独学だけど建築学や経営学、それに地学などなどをリヴィアと一緒に勉強してる。今の目標は、ホテルアルピーノの完成。臨時だけどミッドの次元港と結ぶ便が出来て、色んなところから物資を送ってくれるようになったし、夢の実現までそう掛からないと思う。

「お姉ちゃ～ん！　そろそろ次元港に船が到着するって～！」

窓の外から自慢の妹の声が聞こえてきた。読んでいた丸太を組み合わせて建てるログハウスの建築書を本棚に戻して、窓を開けて庭の方を見る。リヴィアが「迎えに行こう～！」って両手を大きく振っていて、私も「判ったー！」って手を振り返した。自室から飛び出

して、1階でお昼ご飯の仕込みをしていたママに「いってきます！」って挨拶。

「いってらっしゃい！　お友達だからと言って失礼のないようにね～！」

「はーい！」

家を飛び出して、「お待たせ♪」庭で待っててくれたリヴィアと合流。家からそう離れていない、簡易だけど一応次元港っていう括りの施設へ向かう。子供でも乗れる移動用カートも手配して寄越してもらおうかな～、って時々考える。

「あ！　おーい！」

リヴィアが道の先に向かって大手を振った。そこには聞いてた通りのメンバーの姿。ノーヴェ、ヴィヴィオ、フォルセティ、コロナとリオとイクス、なのはさんとフェイトさんとアリシアさん、八神司令にリインにアイリにアインスさん、ママ伝手に合宿参加をお願いしていたルシルさんとザフィーラ。それに・・・。

「アリサさんと・・・師匠（すずか）さん！」

予定には入ってなかった2人の姿もあってビックリ。ダメってわけじゃなくて嬉しいんだけど。いくらサプライズでも申請無しでメンバー増員なんてするわけないし。

（あー、ママが一枚噛んでるかなコレ・・・）

まぁとにかく、通信じゃなくて直接会いたかった友達（すずか）さんが来てくれたんだから喜ぼう。私とリヴィアは「カルナージへようこそ！」って出迎えて、「お世話になります！」って言うみんなとお辞儀をし合った後、「ご案内しまーす！」と我が家へと向かう。

「でもまさか師匠まで来てくれるなんて思いもしなかった」

「あれ？　メガーヌさんから聞いてない？　ルーちゃんに会ってあげてってお願いされたんだけど・・・」

「やっぱりママのサプライズだったんだ・・・。ありがとう、師匠！　送ってもらった本や宿題も為になるし、この機会にいろんな事を教えてください！」

「うんっ♪　ルーちゃんは筋が良いから、すぐに資格も取れるよ」

師匠を誘ってくれたママに後でいっぱいお礼を言わないと。私と師匠のやり取りを見てたリオが「ねえねえ。何の話〜？」って興味津々に訊いてきた。

「師匠――すずかさんはね、本局の第零技術部の主任なの♪」

「もっと判り易く言うと、動物型のインテリジェントデバイスが一般向けに売られてるでしょ？　アレってすずかさんが開発して、一般のデバイス開発社でも開発できるようにしたんだよ」

「「おー！」」

私とリヴィアで師匠がどれだけすごいかを伝えると、リオだけじゃなくてコロナも感嘆した。なのはさん達のデバイスのメンテ、ルシルさんの"エヴェストルム"だって開発した技術者なんだから。そんなすごい人を私は師と仰いでる。

「管理局員のオーダーメイドデバイスも造ってるし。デバイスメーカと技術協力してるし。技術者としては超一流。改めて、師匠になってくれてありがとうございます！」

師匠に体の正面を向けてお辞儀すると、「私も、ルーちゃんに教えることが出来てとても楽しいよ♪」って言ってくれた。そんな師匠も今回の2泊3日の合宿にフルで参加できるということで、その短い期間に出来るだけ知識を吸収しようって決意。

「ところでルーテシア、リヴィア。メガーヌさんが男手が要るからと呼ばれて来たんだが、何をすればいい？」

荷物持ちみたく両手に旅行バッグをぶら下げてるルシルさんとザフィーラに、「実はママじゃなくて私が呼びました」って伝える。

「そうなのか？　じゃあ俺とザフィーラでルーテシアの手伝いをするから、はやて達は子供たちのことを頼むよ」

「ん、了解や！」

「ありがとう！　リヴィアはみなさんを案内してあげて」

「ほーい！」

アルピーノ邸が見えてきたところで、テラスからママが「いらっしゃいませ～！」って手を振ってみなさんを出迎えた。とここで一旦別行動に移る。私はルシルさんとザフィーラ、それにルシルさんと別行動をしようとしないアイリの４人で、アスレチック建築予定地――自宅のあるところからちょっと離れた川の支流へと向かう。

「ルシルさん達には、アスレチック製作のお手伝いをお願いしたいです」

展開したモニターにアスレチックの完成希望図を表示させる。それと間違えて「ログハウスの設計図か・・・？」も一緒に展開しちゃった。すぐに消そうとしたけど、「すごいな」ってルシルさんが驚きを見せた。

「独学でここまで図面を引けるとは。ミスも少ないし・・・、才能があるんじゃないのか？」

「ありがとう♪　でもルシルさんもなんか詳しいね。ひょっとしてこういう事にも明るいの？」

「知識だけがあると言った感じか。実際に建てた経験はないが、まあまあな建築家レベルのアドバイスくらいは出来るだろう」

そう言ってルシルさんは、私が描いた図面の問題点を次々と指摘していってくれて、私も「なるほど」って頷きつつ、指摘してもらった事をメモしてく。その後、私とルシルさんとザフィーラはアスレチックの建築を開始。家の裏手にある小川へとやって来て、「木材はかなり揃えてあるんだな」ってルシルさんが資材を確認。

「私とリヴィアとガリューの3人でなんとか。一応、完成予想から計算して数を揃えたけど・・・」

「そうか。もし足りない場合は新しく斬り出して来よう。じゃ、早速始めるとしようか。まずは地盤に穴を開けるところからだ。我が手に携えしは確かなる幻想」

ルシルさんが呪文を詠唱すると、丸太を突き立てる予定箇所の上空に大剣が何十本と展開された。そして「ジャッジメント」の号令と同時に大剣が一斉に地面に突き刺さって、ドリルみたいに高速回転して穴を開けた。

――闇(コード)よ誘え、汝(カムエル)の宵手――

今度はあちこちにある影から平たい触手が何十本と伸びてきて、丸太を次々と持ち上げると大剣の開けた穴へと突き立てていった。ここからは私の想定以上の速さで、ルシルさん達はアスレチックを組み立ててくれた。私は指示、時々ルシルさんのアドバイスで変更とかあったけど・・・。

（あまりに的確過ぎて全部任せちゃいそうになったよ）

ロープクライミング、ロッククライミング、雲梯、小川を利用した水上足場、ロープを使って登る斜面坂、急斜面の鉢状坂などなど、ルシルさん提案の物を合わせて計１３種のアスレチックを、なんと午前中だけで完成できた。

「師匠たちの故郷じゃ面白い番組をやってるんだね～」

"サスケ"っていう激ムズなアスレチックコースを１００人くらいが順に攻略する番組を、建築の指示を出してるところでアイリに見せてもらった。ルシルさんやアイリの提案したアスレチックには、手前に向かって湾曲してる"反り立つ壁"、水場に斜めに立てられた足場をジグザグに設置した"クワッドステップス"や、重さが３種の壁を持ち上げて進む"ウォールリフティング"、同じく重さが３種の壁を押していく"タックル"が造られてる。私も創作意欲が次々生まれてきたけど・・・

「おーい！　お昼ご飯が出来たよ～！」

リヴィアが大手を振ってこちらに向かって駆けて来ていて、側には「八神司令、リイン」の姿があった。時間切れであることが判って私は「とりあえずお昼休憩ということで♪」ってルシルさん達にウィンク。

「わあ！　はやてちゃん、見てください！　サスケですよ！　反り立つ壁ですよ！」

「おおー！　とゆうか、たった2～3時間でここまで造ったんか！？」

「すごっ！　何これ！　ホントにこれ全部木で出来てるの！？」

リヴィアとアイリが各アスレチックにダッシュして、「すごーい！」って見て回り始めた。そんな2人に「おーい、置いて行くぞ～」ってルシルさんが呼びかけると、「はーい！」って元気な返事をした2人が戻ってきた。

「リヴィアって、ルシルさんに結構懐いてるんだよね～」

「そうやね～。事情聴取やら海上隔離施設で何度か会った程度やろ？」

「まあ・・・な。メガーヌさんとは面会する事が多かったし、それが理由じゃないか？」

うん、そう。ママが楽しそうにルシルさんと話してるのを見て、私もルシルさんは信頼できる人なんだって思って、今みたく親しい関係を築いてるけど・・・。でもリヴィアはそれ以前から自分から話しかけてた。どうしてか訊いてみたら・・・

――判らないけど、なんかこう・・・大丈夫だよ、って本能が訴えかけてくるというか。そんな感じ♪――

うちの妹は大丈夫かな？って正直不安になったけど、それが杞憂だってすぐに判った。六課解散後も、いろいろ忙しいはずなのに様子

を見に来てもらってたし。今もこうして時間を作って来てもらってるし。

「そうゆうもんか～。ところでルールー」

「な～に、八神司令？」

「・・・。なあ、ルールー。なんで私だけ名字で役職読みなんかな？」

八神司令にそう言われて「あぁ、そう言えば・・・」って唸ると、リヴィアも「いつの間にかそう呼んじゃってるか～」って何度も頷いた。

「昔はなのはちゃん達みたく、はやてさん、って呼んでくれてたのに。今や堅っっっ苦しい呼び方で呼ばれて・・・。寂しいわ～」

「確かにそうですね～。ですけど、はやてさん、って呼んでました期間もかなり短かったですよね？」

リインにそう言われて、どこで呼び方を変えたのかを思い出すために腕を組んだ。答えが思い浮かんで来る前に「アイリ、知ってるよ～！」ってアイリが挙手した。私たちの視線がアイリに向かう。

「最初は、はやてさん。次に八神部隊長。そして八神司令。呼び方はこう変わってる。んで、変わった理由はズバリ！・・・・エリオとキャロ！」

アイリの話に「あーなるほど～」って私は納得した。余裕さえあればエリオとキャロは隔離施設に面会に来てくれてた。その話の中で、2人ははやてさんを八神部隊長って呼ぶから、私とリヴィアもつられて八神部隊長呼びになった。六課解散後も2人は部隊長呼びで、今じゃ司令って呼んでるから、私たちも司令呼びなわけだ。

「そうゆうわけか～。でもルールーもリヴィーも、局員ってわけやないんやし。前みたいに、はやてさん、って呼んでくれへん？　私だけ名前で呼ばれへんの寂しいわ～」

「は、はやてさんがそこまでお願いするなら・・・了解です、はやてさん」

「は～やてさん♪」

「おお！　これや、これ！　やっぱその呼び方が嬉しいわ♪」

本当に嬉しそうに笑うはやてさんに、私たちも笑い声をあげた。そして家に戻って、「お待たせ～！」ってすでに食卓についてたママ達の元へ。ママだけじゃなくて、なのはさん達かな？　知らない料理も多くある。冷めないうちにみんなで手を合わせて、「いただきます！」だ。

「みんなは午後からは何をするのかしら？」

ママが私たちみんなにそう尋ねたから、私は真っ先に挙手して「あ、ルシルさん！　出来れば午後もお願いします！」って、ルシルさん

の予定を予約する。ルシルさんはいつ本局に戻るか判らないから、居てくれる間は出来るだけその力を借りたい。

「こら、ルーテシア。ルシル君も休暇で来てくれたのだから、そんな働かせてばかりはダメよ」

「あぅ・・・」

ママにそう言われちゃったらもう聞くしかないって思ったけど、「構いませんよ、メガーヌさん」ってルシルさんが言ってくれた。

「穏やかな空気の中で戦闘以外に魔法を使える。これだけで十分な休息ですよ。な？　シャル」

「だね～。私の部隊って世界規模の荒事専門の武装隊だから、魔法を使うのは戦闘時だけだし、常に戦場だし。ルシルの言うとおり、今みたいな日常のための魔法の使い方はそれだけで休みになるの。だ～か～ら、ルシルをこき使ってくれていいよ♪」

「いや、そのセリフは君じゃないだろ」

冷静にツッコみを入れるルシルさんに笑い声が上がった。ノーヴェやなのはさん達やヴィヴィオ達は、川遊びや出来たてホヤホヤのアスレチックプレイをする予定みたい。私たちの方に助けが必要になったならその時は呼んでってことで、その際にはお言葉に甘えようと思う。そしてお昼ご飯とその片付けを終えて、私はルシルさんとアイリとザフィーラ、そしてシャルさんの５人で家の前に集合。

「それで、ルーテシア。俺にしてもらいたい事とはなんだ？」

「実は・・・温泉を掘りたいんです！」

ホテルアルピーノの目玉としたい天然温泉。けど地質調査の費用が笑えるほど高い。掘削作業は魔法を使えば簡単だろうけど、調査系はサッパリだ。数打てば当たる戦法もいいけど、外れた際の穴だらけ被害だけは避けたい。だからルシルさんに頼りたい。エリオ達からルシルさんの知識の豊富さは聞いてたし、さっきのアスレチックの件でもすごかったし。

「源泉を探り当ててほしいというわけか・・・」

「そう！　その通りです！」

「うーん・・・」

ルシルさんが渋りながら、爪先で地面をトントンと蹴りながらも辺りをキョロキョロ。そして「ルーテシア。アレは火山か？」って、家の向こう側にある大きな山を指差した。

「あーえっと・・・ごめん、判らない」

「そうか。・・・ふむ」

「無茶なこと言って・・・ごめん」

ルシルさんに謝ると、「あっはっは！」って大きな声をあげて笑ったかと思えば私の頭をポンポンと優しく叩いて撫でた。ポカンとしてると、「この程度、無茶でもないよ」って微笑んでくれた。

「無茶というのは、Ｓクラスの魔導師を完全無力化できるレベルのＡＭＦに覆われた敵陣地に突っ込んで、敵にバレずに拉致された要人を救出せよ、だ」

Ｓクラス。Ｓ－、Ｓ、Ｓ＋の３ランクを纏めて呼ぶ際に使う言葉だ。ルシルさんやシャルさん達はＳＳクラスの騎士だから、完全には無力化されないだろうけどやっぱり「うわぁ、無茶だね、それは・・・」って同意した。

「だとさ、シャル」

「誰も、突っ込んで、なんて指示してないんだけどね」

「それで、結局どうしたの？」

「うちの隊には穴掘り名人が２人も居るからな。地中にトンネルを掘って、真下から攻めた」

「それを聞いたら、ミヤビはともかくルミナにボコられるよ」

「まぁ聞かれたらな。とにかく、ちょっと待っていてくれ」

――我を運べ、汝の剣翼(アンピエル)(コード)――

ルシルさんの背中から蒼く輝く剣状の翼が１２枚と展開されて、一瞬にして遥か上空へと飛び上がった。そしてすぐに戻って来て、「ただの山だった」って言ってまた、「うーむ」って呻いた。

「火山が近ければ火山(アタリ)性温泉を引きやすいんだが、非火山性温泉を狙いに行くか。ルーテシア。源泉は家から遠くても構わないか？」

「あ、うん。源泉から家の近くまで引けるように何とかするから」

出来れば近くが良いかな。でも高望みはしない。ルシルさんが片膝を付くと、「どれどれ。我が手に携えしは確かなる幻想」って呪文を詠唱しながら両手を地面に付いた。それから移動しては両手を付くっていう動作を繰り返すルシルさん。それに付いて回る私たちだったけど、家の裏にある森林の中に入ったところで「この辺りだな」ってルシルさんが頷いた。

「何か判ったの、ルシル？」

「超音波を地中に発して、水脈を探していたんだが・・・。ちょうどこの真下にあるな」

ルシルさんが足元の地面を蹴った。私は「そんな事も出来るんだ～」ってルシルさんの万能感に改めて驚いた。

「後は掘るだけだな。・・・ザフィーラの破城の戦杭か、はやての

冥府の螺旋槍か、だな」

「呼んで来ようか？」

「・・・いや。俺の複製で済ませよう。我が手に携えしは確かなる幻想」

――冥府の螺旋槍（ヴルフシュペーア・デア・ウンターヴェルト）――

ルシルさんの詠唱の後、私たちの頭上にすごく大きなドリル状の岩が造り出された。そして「ジャッジメント」の号令の後、ゆっくりと回転を始めて降下して来た。掘削に巻き込まれないために避難して、家の裏にある森林の地面を穿つドリルを見守る。

『ちょっ、ちょっとルシル君！？　螺旋槍なんて出して何かあったん！？』

はやてさんから通信が入った。だから私たちは今、温泉を探していて、そしてルシルさんが当たりをつけて掘削中だってことを伝えた。するとモニターの向こう側から『温泉！？』ってヴィヴィオ達の歓声が聞こえてきた。

『お父さん！　温泉掘ってるの！？』

『ルシルさん！　温泉でる！？』

『見せてもらっても良いですか！？』

『てゆうか手伝いたい！』

フォルセティ、ヴィヴィオ、コロナ、リオと次々モニターに顔を出した。次にアリシアさんが『出る確率は？』って訊いたから、ルシルさんは少し考えた後に「五分五分って」答えた。

『ルシルの五分五分って基本的に高確率って感じだよね～。よしっ！何か手伝うよ。待ってて♪』

『僕たちも～！』

『何か手伝う～！』

モニターからアリシアさん達の姿が消えると、再びはやてさんやなのはさん達が顔を覗かせて、『アリシアや子供たちの期待がすごいけど大丈夫？』って、フェイトさんがちょっと不安そうに訊いた。

「五分五分だしな。たとえ火山地帯じゃなくても水脈さえあれば、深く掘りさえすればまぁ大体は当たりになるわけだ。地中は１００ｍにつき３度ほどずつ地温が上がっていくんだ。１ｋｍから３ｋｍほど掘れば、それなりの水温のある温泉を引ける・・・という可能性だ」

みんなで「なるほど～」って感心した。

†††Ｓｉｄｅルーテシア⇒ルシリオン†††

掘削中、ルーテシアより温泉施設の完成予想図を見せてもらった俺たちは、螺旋槍が水脈に届くまでの間にすぐにでも入浴できるよう、簡易にならざるを得ないが人目が気にならない施設を造ることに。これ幸いと、ノーヴェは子供たちに浴場の床になる岩を持って来るように指示を出した。もちろん、子供でも持てるようなサイズでだ。

「どんどん持って来ぉ～い！　加工と研磨は私が請け負う！」

"キルシュブリューテ"を起動したシャルがそう告げる。なのは達はリヴィアと一緒にモルタル造り。ザフィーラとガリューは浴場を隔てるためのウッドフェンスの作成。そして俺はルーテシアの指示に従って、予定されている浴槽の形に沿うように結界を展開。

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」

――圧戒（ルイン・トリガー）――

実妹シエルの重力操作の固有術式を発動し、結界内の地面を１，５ｍほど押し潰すとルーテシアとリヴィアが「すごぉーい！」と歓声を上げた。

『マイスターー、辛くない？』

『ああ。アイリがユニゾンしてくれているから、記憶消失のリスクも軽減されているしな。ありがとう』

『うんっ　』

着々と準備が進んでいく中、ゴゴゴと地鳴りが足元から伝わって来た。俺は「噴き出すぞ！　離れろ！」とみんなに忠告し、みんなが首肯して離れていくのと確認したところで螺旋槍を消失させる。地鳴りは激しさを増し、勢いよく熱水が噴き出した。その様に「出たあああああ！」と騒ぐ子供たちや、「おおおお！」と歓声を上げるはやて達の姿に、俺も「はは・・・！」思わずテンションが上がってしまった。

「よぉーし、よし、よぉーし！　温泉は出た！　後は施設を造るだけ！　みなさん、ファイトぉ～・・・おおー！」

ルーテシアが大きく右拳を振り上げそう宣言すると、子供たちだけでなくはやてとシャル、リインも「おおー！」と倣って拳を振り上げた。

Ｅｐｉｃａ７－Ｃそうだ、合宿へ行こう～Ｈｏｔ　Ｓｐｒｉｎｇｓ～

†††Ｓｉｄｅ？？？？†††

お姉ちゃんの設計を基に、午後はなんと全員参加の露天風呂の建築となった。みんなで岩を集めたり、木を切っては繋ぎ合わてウッドフェンスを造ったり、モルタルを作ったり。友達みんなと工作をしているようですごく楽しい。そして今、私たちは・・・

「すぅ～～～～ごぉ～～～～いぃ～～～～～～！！」

空に居る。正確には空に浮かぶ温泉の中。これだけ聞いたら１０人中１０人が首を傾げると思う。噴き出した温泉のお湯は今、球体状にされて空に浮かんでるのだ。そんな私たちは水着を着て入浴中。

「ぷはっ！・・・はふぅ。いや～、本当にすごいねこの温泉！　これだったらお金を取れる！」

顔に張り付いた髪を払ったお姉ちゃんが空に向かって両手を伸ばした。私も手を空に向かって伸ばしながら「うん。モルタルが固まるまでの間なのは残念だよね」って漏らした。温泉施設の浴槽は、みんなで力を合わせて造ったことで完成はした。でも岩の接着材としてのモルタルが乾くまで時間が掛かる。だからルシルさんは・・・。

・―・―・回想～♪・―・―・

ルシルさんの螺旋槍で掘られた穴から、どぉーん！とお湯が噴き上がった。みんなで大粒の雨のように降って来るお湯に「熱い！　あっつ～い！」って大はしゃぎしながら退避。そんな中、アイリとユニゾンしっ放しだったルシルさんが水柱の元へ１人近付いてった。そして足元にサファイアブルーのベルカ魔法陣を展開。

「とりあえず、しばらくは空で待っていてもらおう」

左手をその水柱に向けると、降って来てたお湯がピタッと止まった。穴から噴き出すお湯は螺旋を描くようにクルクル回りながら空に昇って、先端のお湯は直径２０ｍくらいの球体になった。徐々に大きくなるんだけど、球体の斜め上辺りから放水され始めたことで巨大化は止まった。

「さらに・・・」

――反重力（ニクス・フォースワイドエリア）・広域結界――

ギンッて鈍い音がして、球体の周りの空間が僅かに歪んでるように見え始めた。リオが「ルシルさん、何をしたんですか？」って聞くと、「無重力の檻を張って、お湯が零れないようにしたんだよ」って、さらりとトンデモない答えを返した。だからルシルさんが重力操作を出来るなんて知らない私たちは「え゛・・・？」と口をあんぐり。そしてなのはさん達は「あはは」と苦笑した。

「温泉は一先ずあの場に留めて置く。ほら、今のうちに最低限でも

浴槽を造るぞ」

そう言ってルシルさんは浴槽の素材となる加工済みの岩を抱え上げて、重力で押し潰して出来た穴に敷き並べてから私たちも手分けして岩を並べてく。そんな中、ルシルさんが「ふぅ・・・。人出が少し足りないか」って額の汗を拭いながら呟いた。

「魔力で身体能力を上げていても、ちょっと辛いね・・・」

「排水管なども同時に進めないといけないし・・・」

「そうやね～。少しばかり大人が足りへんかもな～」

「男がルシルとザフィーラだけっていうのもキツイかも」

なのはさんとフェイトさんとはやてさんとアリシアさんが唸った。魔力を使って人並み以上の力を引き出せてる大人組でも、さすがに人手が足りないって思えるほどの重労働なんだよね。ちなみにシャルさんは、ノーヴェやヴィヴィオ達と交じって排水管を通す穴掘りしたり、岩を"キルシュブリューテ"で切断して加工したり。アリサさんとすずかさんとアインスさんとザフィーラ、それにガリューは、湯船の縁になる大岩の運搬だ。

「ルシル君。影の触手（カムエル）って今は使えへんのかな・・・？」

「・・・まぁ何とかなるか」

「ちょう待ち。今の間にこっちが不安になったわ・・・」

「いや俺ももう少し役に立たないとな。・・・我が内より来たれ、貴き英雄よ。汝らは鋼の体を持つ、罪に塗れし乙女。鋼を操り、暴力の光を振り、破壊の波を流し、磁力を発し、風を発する。来たれ・・・」

すでにめちゃくちゃ役に立ってるルシルさんが詠唱し終えたら、その周囲5ヵ所に魔力が収束し始めた。魔力はすぐに人型になって、「あ・・・！」その姿に私は声を上げた。プライソンの元で過ごしていた際に何度も見たその姿。お姉ちゃんも「なんで・・・」って漏らして、ノーヴェは「テメェら・・・！」って殺気立った。

「現実に召喚される日が来るなんて思わなかったわ」

「アルファ・・・」

「やっと・・・やっと、地獄から抜けられた・・・」

「ベータ・・・」

「くぅ～！　本物の太陽だ～！」

「デルタ」

「ヴァルハラの風も悪くはなかったですけど、イプシロンはやはり現実の方が良いです」

「イプシロン・・・」

「デルタ姉様やイプシロン姉様に同意ですね。太陽の暖かさ、風の心地良さはやはり現実に限ります」

「ゼータ・・・！」

プライソンの娘、"スキュラ"６姉妹のうち5人がそこに居た。現実で生死不明の行方不明なガンマだけが居ない。ノーヴェが「テメェら死んだはずだろ・・・！」って宝石型の待機モードな"ジェットエッジ"を取り出したから、フォルセティとヴィヴィオが「ストーップ！」って制止に入った。

「ええ、私たちは見事に殺されたわ。だからここに居る私たちは偽者なのよ」

「ルシリオンのスキルによって存在している、魔力の塊の使い魔。それが私たち」

アルファとベータがそう説明して、私とリヴィアとノーヴェはルシルさんの方を見る。ルシルさんから"エインヘリヤル"の説明を受けた。話を聴けば聴くほど、ルシルさんの特異性に開いた口が閉じなくなった。

「そういうわけだからノーヴェ。君やクイントさん達が受けた仕打ちは理解できるが、このアルファ達は俺の使い魔で、完全に俺の支

配下にある。和気藹々してくれ、とまでは言わないが、せめてケンカ腰にならないでくれると嬉しい。ルーテシアとリヴィアも、どうか・・・」

「あ、はい・・・。ルシルさんがそう言うなら、判りました」

「う、うん」

「いいよ～」

「ありがとう。さて、スキュラ諸君。今現在、我々は天然露天風呂を造っている。君らにはその手伝いをしてもらう。現場責任者はルーテシアだ。彼女の指示を最優先に従ってもらう。無論、拒否権はない」

ルシルさんが"スキュラ"にそう伝えると、アルファは簡潔に「承知しているわ」そう答えるとお姉ちゃんに向き直って「指示を頂戴、監督」って言って、着ていたブレザーを脱いだ。

「マスター。上着が邪魔だから霧散させておいて。あと一応言っておくけど、匂いは嗅がないでください」

「か、嗅ぐか！　お前は俺を何だと思っている！？」

「あなたの姉は嗅ぐでしょう！　それに他の変態エインヘリヤル連中も！　もう夫どころか恋人も出来ないレベルで穢されたわ！」

あのアルファが両手を顔で覆って、首を勢いよく横に何度も振った。ルシルさんはルシルさんで「姉様・・・」って、右手で両目を覆って呆れ果てたっぽい。ルシルさんに実の家族が居るなんて聞いたこともなかったから、私は「あれ？　ルシルさんって家族が居るんですか？」って聞いてしまった。

「・・・ああ、居たよ。今は両親や妹と一緒に空から見守ってくれているよ」

「あ・・・」

居た。という過去形。空から見守ってる。その暗喩で、ルシルさんの家族がもうこの世に居ないことを知った。お姉ちゃんが肘で私の脇腹を小突いて来て、「ごめんなさい」って謝って、私も「ごめんなさい」って頭を下げた。

「構わないよ。元はと言えばアルファ、お前が変な事を言ったのが悪い」

「事実でしょう？」

「姉様に限ってはそうかもしれないが・・・。とにかく、時間は無限じゃない。ほら、作業開始～」

「判ったわ。・・・ルーテシア、指示を頂戴」

「あ、うん。じゃあ露天風呂の床になる岩を並べてくのを手伝って」

それから"スキュラ"達の協力もあって、露天風呂の7割方が歓声した。あとは洗い場と脱衣場と屋根、あと露天風呂を囲うウッドフェンスの設置。でももう夕方になったところで、「今日はもうここまでにしよう！」ってお姉ちゃんが作業の中断を告げた。

「あらあら。午後の数時間でここまで完成させるなんて、みんなすごいわね～。・・・あら？　あなた達は・・・」

ここで様子を見に来たママが"スキュラ"が居ることに気付いた。私やお姉ちゃん、ノーヴェみたく驚くのかと思ったら、確かに最初は目を大きくして驚き顔を浮かべたけどすぐに「久しぶりね。どうしたの？」って微笑んだ。私とお姉ちゃんは「あのね！」って、ルシルさんより早く率先して説明した。

「そうなの？　局員だった頃からルシル君の凄さは知っていたけど、そんなのまだまだ序の口だったのね～」

ママは右手を頬に添えて苦笑いした後、「あなた達もご飯を食べる？」って"スキュラ"達に聞いたんだけど、ルシルさんが「ああ、結構ですよメガーヌさん。もう少しで時間切れで消えますから」って、"スキュラ"達の返事より早く答えちゃった。

「時間切れ？」

「ええ。召喚時間の限界です」

ルシルさんの使い魔・"エインヘリヤル"は現実世界に長くは居られないみたいで、"スキュラ"達も例に漏れず、もうそろそろ居なくなっちゃうらしい。そんなルシルさんの言葉に、"スキュラ"達が「はあ！？」って一斉にルシルさんを睨みつけた。

「ちょっ・・・！　あんだけ働いたのに、報酬無しでヴァルハラに帰れって言うの！？」

「イプシロンはマスターの悪逆非道にして鬼畜な所業に、断固異議を唱えます！」

「あなた、本当にいい度胸をしているわね？」

「せめて感謝の言葉くらいあってもいいのでは？」

「銀髪恐怖症に陥ってしまいそうです・・・」

「「「は～んたい！」」」

「です！」

「「「は～んたい！」」」

「です！」

「「「は～んたい！」」」

「です！」

ルシルさんに詰め寄った"スキュラ"に、「じゃあ何をしたいんだ？」ってルシルさんが聞くと、「あの温泉に入りたい！」ってデルタが指を差した。アルファ達もご飯じゃなくて、せめて温泉に入りたいって答えた。

「それくらいはまぁ時間はあるか・・・。水着に着替えさせるから、そこでしばらく立って待機しておけ」

ルシルさんのその言葉に、私は「そんな魔法もあるの？」ってフォルセティに聞いてみたけど、「う～ん・・・？」って首を傾げたから、フォルセティと一緒にはやてさん達を見た。するとアインスさんが「ああ、ある。衣類だけの強制変身魔法だ」って答えてくれた。便利なようだけど強制っていうのは恐いなぁ～。

「水着？　なぜ風呂に入るのに水着が要る？」

「いいか、べータ？　風呂は裸で入る。そして、側には男の俺、フォルセティ、ザフィーラが居る」

「・・・だから？　触れられるのは困るけど、裸を見られた程度で恥じるような不細工な体じゃないわ」

アルファがいきなり服を脱ぎ始めて、ヴィヴィオとコロナとリオは「わっ！？」って両手で目を覆って、アインスさんが「いけない」ってフォルセティの目を覆って、そしてはやてさんが「ルシル君。

目を瞑って。今すぐ」ってドスの利いた声でそう言った。ザフィーラは何も言わず、何も言われないまま自分から顔を逸らした。

「ああもう。・・・我が手に携えしは確かなる幻想。変化せしめし（ディゾルディネ・カンビャメント）乱音」

詠唱したルシルさんが指をパチンと鳴らすと、素っ裸で仁王立ちしてるアルファやデルタ、脱ぎ始めてたベータ、恥ずかしがって萎縮してるイプシロンとゼータが、ポンッ、って音と一緒に発生した煙に覆われた。煙はすぐに晴れて、"スキュラ"みんなの服装が水着になってた。だから初めてルシルさんの強制変身魔法を見た私たちは「おお！」歓声を上げた。

「マスター、マスター！　どうやって入るの！？」

「え、あぁ、フローターフィールドでも構わないが、手っ取り早く水柱に乗ればいい」

「んっ！　イプシロン、ゼータ、行こう！」

「え・・・？」「わ・・・？」

デルタが２人の手を取って水柱に突っ込むと、「おおー！」って歓声を上げながら水柱の勢いに乗って、上空１０ｍくらいにある球状の温泉まで運ばれて行った。その様子にヴィヴィオ達も「面白そー！」ってテンション爆上げ。

「フォルセティ、コロナ、リオ、イクス！　水着に着替えて来よう！」

「「「うんっ！」」」

「あ、はいっ！」

ヴィヴィオ達が家に向かって走って行くのを見送ってると、アルファ達が「ではお先に」ってデルタ達を追うように水柱に入って行った。これまでの様子を見てママも「まあ面白そうね！」って興奮した。

「メガーヌさんもいかがです？」

「そうね～。でも若い子に交じって、こんなおばさんが水着というのも、ねぇ～」

ルシルさんにママも誘われたけど、ママはそう言って戸惑った。娘の私が言うのもなんだけど、ママって歳に比べてすっごい若いんだよね見た目が。２０代って言われたって絶対信じられるレベルだし。ルシルさんも「そうですか？　メガーヌさんは十分若いですよ」って言ってくれたし。

「まあ嬉しい！　若い男の子にそう言ってもらえるなんて、お世辞でも嬉しいわね～♪」

笑顔なママとルシルさんの背後、はやてさんとシャルさんがジト目なのがすっごい印象に残った。アリサさんが「アンタ、人妻を口説

くなんて・・・」って呆れた風に言うと、ルシルさんは「口説いてない。事実を言ったまでだ」変に繕うことなく、堂々と反論した。

「ほら。馬鹿な事を言ってないで、アリサ達も水着に着替えて来い。メガーヌさん。夕食は俺に任せて下さい。腕に縒りを掛けて作らせてもらいます！」

「え、でも・・・ルシル君はお客様だし、今日は朝からいろいろと手伝ってもらっているし・・・。それにルシル君は一緒に入らないの？」

「ええ。俺は水着を持って来ていないので。みんなが寝静まった頃に1人で入らせてもらいますよ」

私は見逃さなかった。シャルさんの目が光り輝いたのが。今日の深夜、ルシルさんの怒りの声がカルナージに響き渡りそうだな～。

・―・―・終わり～♪・―・―・

お湯の浮力に身を任せてプカリと浮かぶ。ルシルさんが球状のお湯の外側に無重力の結界を張ってくれてるおかげで落下の心配はない。

「ふぅ～。良いお湯～♪」

「ええ、本当に。よもや死後にこのような体験が出来るなんて、本当に不思議ですね～」

「イプシロンもゼータに同意します～」

近くに漂ってたデルタとゼータとイプシロンも、蕩けきった顔で温泉を堪能してる。アルファとベータも「ほぉ・・・」って、ママと一緒にノンアルコールのお酒を嗜んでる。あそこまでママの緩みきってる姿って見たことないかも。

「ヴィヴィオ達もずっと泳ぎっぱなしだけど、明日ぜったいに筋肉痛で動けないでしょアレ」

「イクスも泳ぎ方を教わったら教わったで、結構長い時間を泳いでるよね」

「元気だね～」

「元気ですね～」

デルタやゼータと一緒に温泉の中を元気よく泳ぐヴィヴィオ達を見守る。イクスも最初はあっぷあっぷと溺れかけてたけど、すずかさん達が丁寧に泳ぎ方を十数分と教えただけであれだけ泳げてるから、すずかさん達もイクスもすごい。

「ぷはっ。すっごい楽しい～！」

「でもそろそろ上がらないとのぼせちゃうかも～」

「指もふやけちゃってる～！」

「そうですね。人生初の温泉も堪能しましたし」

「お腹も空いてきたしね」

ヴィヴィオ達が私たちの近くに浮上してきて、私みたく力を抜いて湯面に浮かんだ。デルタ達も同じように浮かんだところに、『スキュラ諸君。召喚限界だ』ってルシルさんから通信が入った。

「えーもう？　もうちょっと現実(そと)世界で遊びたーい！」

「イプシロンもデルタ姉様に同意です！」

「まったくよ！　温泉だけで済むと思って！？」

デルタやイプシロンに続いてアルファまで文句を言ったけど、シャルさんが「あなた達、せめて温泉だけは、って言ってたじゃないの」そうツッコみを入れた。

「温泉に酒と来たら、もちろん食事でしょう！」

『却下。もう限界。はいまた来週～』

「「「「「ちょっ――」」」」」

ルシルさんが軽い口調でそう言いながら手を振ると、"スキュラ"達が一斉にポンっと消失した。そのあっさりさにポカンとしたけど、

まぁルシルさんに頼めばまた会えるらしいし、「行っちゃったね～」ってかる～く言うと、お姉ちゃんやヴィヴィオ達も「だね～」って続いた。

ま、そんなこんなで空中温泉は、ルシルさんのおかげでとっても思い出深い入浴になった。ルシルさんが居なくても、毎日じゃなくても、この空中温泉を再現できないかな～。ホテルアルピーノの目玉になりそうなんだけどな～。

†††Ｓｉｄｅリヴィア⇒イリス†††

ルシルの作った空中温泉を存分に堪能した私たちは、アルピーノ邸へと戻って来て、ルシルが作った夕食を、「いただきます！」と挨拶して頂く。食事中、明日の予定などをみんなで話し合う。

「師匠！　明日から早速、御指導御鞭撻のほどを！」

「うん♪　短い間の滞在になっちゃうから、密度の濃い授業になるけど？」

「望むところです！」

ルーテシアはすずかによる技術教育かぁ。ルーテシアも何気にそっち系が強いみたいだし、将来は名のある技術官になるのかな。

「ねえ、なのは、フェイト、アリシア、シャル、はやて、ルシル、アインス。だったらあたし達は久々に模擬戦やんない？　個人戦というよりはチーム戦♪」

アリサがそう言ってウィンク。なのはは「チーム戦かぁ！」って満更でもなさそうで、アリシアも「おお！　ナイスアイディア♪」って親指を立てた。

「チーム海鳴内での模擬戦も、ここ最近やってへんしな～。ユニゾンありなら構わへんよ。な、リイン？」

「はいです！　はやてちゃんとユニゾンすれば負けなしです！」

「では私は単独での戦力として、ですね」

「ち・な・み・に。ルシルとアインスは同じチームにならない事。アンタ達が組んだら誰にも手に負えないわ」

そう言ってアリサが肩を竦めた。ルシルとアインスは共にオールレンジの魔導騎士だ、あの2人が手を組んだらそれこそ手が付けられないもんね。だからわたしも「賛成～」って挙手した。

「俺としては構わないが・・・。ノーヴェ」

「え、あ、はい？」

ここでルシルが突然ノーヴェに話を振ったから彼女もビックリしたみたい。ルシルが「俺に何か言いたい事があったんじゃないか？」って尋ねると、「・・・あー、いえ」ってノーヴェは少し考えた末に、渋った感じにそう答えた。

「ん？」

「・・・その、ルシルさんにお願いしたい事があったのですが・・・」

「俺に頼み事？　水臭いぞ、ノーヴェ。俺に出来ることがあったら遠慮なく言ってくれ。息子が世話になっているんだ」

「では遠慮なく」

ノーヴェが居住まいを直すと「コホン」と1回咳払いをして、両手をテーブルに付いた。

「ルシルさんの複製スキルを見込んでお願いします。1日、いえ半日だけでもいいです。特訓に付き合ってくれませんか？」

それがノーヴェの頼み事だった。頭を下げてまで頼んだノーヴェの姿を見て、ヴィヴィオとリオとコロナ、それにフォルセティも食事を中断して、「お願いします！」って頭を下げた。

「もちろんだとも。俺に出来る事があるなら、遠慮なく言ってくれ」

Ｅｐｉｃａ７－Ｄそうだ、合宿へ行こう～Ｒｏａｄ　ｔｏ　Ｇｏｌｅｍ　ｍｅｉｓｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

夜も更けてみんながようやく寝静まった頃にアイリとマイスターは、マイスターの水流系術式によって作られた空中温泉の元へとやって来た。ちょうど満月が浮かんでるから、魔力で明かりを灯さなくても十分明るいね。

「じゃあ水着を用意しないとな」

「アイリは別に裸のままで良いんだけどね～。寮住まいだった時も、アイリって割と裸でマイスターの前に出てたし」

ちなみに持ってきてたアイリや他のみんなの水着はメガーヌさんに洗濯、干してもらってるから着られないんだよね。

「その都度カーテンを必死に閉めるために、俺は調理中だろうがなんだろうが部屋中を駆け回ったんだけどな。万が一にも第三者に見られてしまえば、ロリコン疑惑を掛けられて、社会的に抹殺されるのは確実・・・」

「年齢的で言えばアイリも十分大人なんだけどね～」

科を作ってマイスターにウィンクすると、マイスターは「そうだな

～」って棒読みでそう言って、アイリの頭をポンポン叩きながら目の前を通り過ぎた。マイスターにはホント色仕掛けって通用しないんだよね～。

「我が手に携えしは確かなる幻想」

――変化せしめし乱音（ディゾルディネ・カンビャメント）――

マイスターが指を鳴らすとポンッと耳触りの良い音がして、アイリとマイスターが煙に呑まれる。一瞬、裸になった解放感を得て、すぐに胸とお尻が水着に締め付けられる拘束感を得る。煙も晴れて自分の体を確認。

「・・・マイスター。布の面積がちょっと広くない？」

スカートのようなフリル付きの真っ白なワンピースタイプ。冷たいプールでなら別に良いんだけど、温泉ならもっと露出度が高くても良いと思うんだよね。アイリのその軽い文句に、「え、ダメか？」って割と本気で驚いた。

「マイスターが選んでくれた水着だから嬉しいんだけど、ここはいっちょアダルティ～な♪」

「ア、アダルティ？・・・む～・・・、じゃあコレでどうだ？」

再変身させてもらって、今度は「トライアングルビキニ。うん、いい感じ♪」って満足。気付けばマイスターもトランクスタイプの水

着に変身済で、「夏以外には空中温泉はダメだな」って、空に浮かぶ球体を仰ぎ見た。昼間は螺旋状の水柱があったけど、今はマイスターが掘削した穴は魔法陣で塞がれてる。

「夕食時にもルーテシアに言ったが、水脈の規模からして向こう１００年以上は涸れることはないだろうが、無駄に汲み上げるのももったいないからな」

「だね～。じゃあマイスター。アイリがあそこまで運ぶからじっとしててね～」

空中温泉へ続く水柱ももう無いし、今日１日で結構魔力を消費したし、ここはアイリがマイスターを連れてくのがベスト。だからマイスターに抱きつこうとしたら、「じゃあ頼む」って手だけを差し出された。

「え、あれ？　抱っこは・・・？」

マイスターを抱きしめるジェスチャーをすると、「いや必要ないだろ？」って首を傾げた。確かにマイスターの手を取って飛べばいいんだけどね。でもそれじゃ「アイリの柔らかオッパイを押しつけられないよね？」って聞き返した。

「何言ってるんだ？」

「だから、後ろからでも前からでもマイスターに抱きついて、ドキドキさせようって作戦なの！」

はやてよりは小っちゃいけど、形や柔らかさなら結構レベルが高いと思うんだけどなぁ。マイスターは「今さら過ぎてドキドキも何もないぞ」って呆れた。そりゃまぁ素っ裸な状態で抱きついたこともあるから、物足りないって言われてもしょうがないけどさ・・・。

「そっか。もうアイリの裸じゃ満足できないんだね・・・？」

「・・・そんな誤解を招く言い方は本当にやめてくれ、頼むからさ。というか、どいつもこいつもシャル化するのやめてくれ・・・」

「むぅ。マイスターだって男なのに、どうしてこうそっちの欲が無いの？」

「俺の実年齢を知ってるだろ？　三大欲求すら・・・あー、いや、睡眠欲以外は制御できるほどに存在してきたんだ」

「うーむ。もし・・・はやてならどう？」

「なあ、もうこの話はやめよう。ある種のセクハラだぞ」

アイリの頭をコツンと優しくゲンコツしてきたマイスターに、アイリは「はーい」素直に頷いてマイスターの手を取った。そして腰から一対の白翼を展開、大きく羽ばたいて空へと上がろうとした時、「へい、タクシー。相乗りお願い出来るか～？」って後ろから声を掛けられた。

「「はやて・・・！？」」

「満月の夜に温泉って乙なもんやな～」

そこに居たのははやてなんだけど、今のはやては「はや、ちょっ、なんて格好を・・・！」ってマイスターがガチで狼狽える格好だった。バスタオル1枚を体に巻いた状態で、マイスターは両手で目を覆いながら明後日の方を見た。ここまで狼狽えるマイスター、ベルカ時代を含めて初めてかも・・・。

「ふ、冬やなくて、うん、良かったわ～」

マイスターに比べて平然としてるはやて。と思えば、耳まで真っ赤っかで、手も胸と股を隠すような位置に持って来てるし。居心地悪そうに視線を彷徨わせてるはやてに、アイリは「はやても入りに来たの？」って聞いた。

「ルシル君が夜に入るって聞いてたからな。ほら、家やと一緒に入れへんやろ？　さすがに私も恥ずかしさで1発ＫＯレベルやと思うし。そやけどあそこまで大きな露天風呂ってなると、ちょう恥ずかしさは残るけどルシル君と一緒に入れるかな～って・・・」

「マイスター。睡眠欲以外の食欲や性欲は制御できるんじゃなかったっけ？」

アイリはニヤニヤとマイスターに歩み寄った。マイスターは「うく・・・」って悔しげに呻いた後、「はやて。水着に着替えさせるけ

どいいか？　というか着替えさす」って、はやてに有無を言わさずに指をパチンと鳴らした。はやてが覆われた煙が晴れると、白と水色のストライプ柄なビキニに変身してた。

「おお！　これならポロリもあらへんな♪」

「そんなこと言わなくていいから・・・。アイリ、頼む」

「ほーい！」

右手でマイスターの、左手ではやての手を取って、改めて空中温泉へ向かって飛び立つ。マイスターから「重力結界は無いから気を付けてくれ」という忠告を受けた。マイスターの妹・シエルの重力魔術は、他の"アンスール"やシエルの真技以外に比べて魔力消費がちょい低いから、アイリとユニゾンさえしておけばそう簡単には記憶消失には至らない。

「とつげ～き！」

「「ちょっ・・・！」」

勢いを抑えないまま温泉に突っ込んだ。閉じてた目を開けて、温泉の中心でマイスター達と水泡の中で視線を交わし合う。そしてアイリ達は手を離して一緒に上の水面へ泳いで、「ぷはっ！」と顔を出す。

「おーい、アイリ～？」

「突っ込むなら突っ込むって言ってくれへんかな～？」

「あっはっは！」

アイリが大きな声で笑うと、マイスターとはやても顔を見合わせてから「あはは！」って笑い声を上げた。３人で笑い合った後、川の字になって水面に浮かんで満月を見上げる。

「そう言えば・・・真っ先に来そうなシャルが来ないな」

「あ、アイリもそれ思った。はやてですら来ちゃうんだし、シャルが来ないのは天変地異の前触れかもね～」

「シャルちゃんならもう寝てるよ～？」

「「え！？」」

まさかのすでに就寝とは。はやての方を見ると、はやての目が泳いでることに気付いた。だから「はやてが何かしたの？」って聞いてみた。マイスターも「はやてにしては珍しいな～」って苦笑。

「ちゃうよ！？　私が率先してやったわけじゃないんよ！？　ただ・・・」

「「ただ？」」

「疲れ果てて眠そうにしてたシャルちゃんに、アインスの眠りに霧をお願いして・・・な」

「・・・」

「それ、やってるよね、はやて・・・」

「うぁ～、やっぱそう思うか～・・・」

両手の人差し指の先端同士をツンツンしながら答えたはやて。眠りの霧って、オリジナルはマイスターの下級水流系術式の1つだったよね。アインス復活の際、マイスターはマイスターと同等以上の戦闘力をアインスに付加した。その時にマイスターの術式も幾つか習得させたみたいだし。

「でも、ふ～ん。はやてが恋敵に妨害を、ね～」

「あぅ～。シャルちゃん、結構フラフラしてたからな。あの状態でお風呂なんて危ないな～って」

「それは妨害ではなく、優しさ、だな」

「ルシル君、おおきにな♪」

「ま、八神家のお父さんとお母さん＋アイリの家族水入らずっていうのも、良いものだと思うよね」

このすぐ後に、はやてが戻って来るまで起きて待ってるっていうアインスも呼んで（リイン達は爆睡中ってこともあって誘えなかった）、アイリ達４人で静かな温泉を楽しんだ。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒ヴィヴィオ†††

合宿２日目。メガーヌさんとはやてさんとアインスさん作の美味しい朝ご飯を食べた後に１時間の休憩を挟んで、わたしとコロナとリオ、フォルセティとイクス、それにリヴィとルシルさんとアイリは、トレーニングウェアに着替えてアスレチック広場へと移動していた。

「よし。いつも通りに準備運動！」

「「「「はい！」」」」

「イクスも無茶しないレベルでな」

「はいっ！」

イクスはあくまでサポーターだから、トレーニングしないで見学だけで良いんだけど・・・

――いえ。何事も挑戦、経験です。それに学院でも似たような授業がありますし。何より友達と共に汗を流すのは気持ちが良いですから――

そう言って、イクスはノーヴェのトレーニングに付き合ってくれる。

イクスもコロナみたいに学者タイプなのに、フィジカルトレーニングもきっちり大切にするすごい子なのです。

「アイリとリヴィ、それにルシルさんも、トレーニングに参加するの？」

「ああ、御一緒させてもらうよ」

「私は基本、朝と夕とで走りこみをするから」

「まあね。融合騎でもスタイルには気を遣うんだよ」

「変身魔法でその姿になってるのに・・・ですか？」

「そうだよコロナ。融合騎でも太っちゃうんだから、変身後もダイレクトに残っちゃうのさ」

そう言ってアイリは着てる上着を捲ってお腹を見せてきたけど、普通に引き締まってるように見える。でも「ほらね～」ってお腹のお肉をちょいっと摘まんで見せた。

「う～ん、でもそれくらいのお肉なら普通じゃないかな～？」

「ヴィヴィオの言うとおりだな。ボディビルダーやアスリートを目指すなら止めはしないが。アイリはそのままで十分引き締まっていると思う。なあ？　フォルセティ」

「うんっ！　アイリお姉ちゃんは今のままで格好いい！」

ルシルさんとフォルセティがそう言うと、アイリは嬉しそうにお礼を言った後、「ま、胸は減らしたくないからね～♪」って揺れる胸を張った。そんなアイリと一緒に念入りに準備運動をして、「じゃあ先ずはランニングだ」ってノーヴェの指示が出て、わたし達は「はいっ！」って答えて走り出す。

「どれどれ。ランニングなんて久しぶりだな」

「あ、ルシルさんは別に走らなくても・・・！」

「息子とその友達とのコミュニケーションだ。それに俺のような戦闘魔導騎士には、こういった基礎練も必要だよ」

ルシルさんがわたしたち子供の速さに合わせて走ってくれている中、リオが「ルシルさんって、すごい騎士なんですよね！」って目をキラキラさせた。アイリが「空戦ＳＳ＋、通り名は軍神な、オールラウンダーだよ♪」って自慢げに語った。なのはママとフェイトママでも空戦Ｓ＋だから、ルシルさんのすごさを改めて思い知れる。

「おお！　ルシルさんからも何か教わってみたら、あたし達ももっと強くなれるかも・・・！」

「そうは言っても俺が教えられるのは、ストライクアーツなどのスポーツ格闘ではなく、犯罪者を本格的に叩きのめす技だ。君たちに教えていいものじゃない」

「な、なるほど～」

「じゃあスパーリングの相手とか？」

「ヴィヴィオやリオとは身長差が違い過ぎて、お父さんじゃ務まらないよ」

そう言うフォルセティに続いて私も「ルシルさんのスキルが重要なんだよね」って唸る。ノーヴェは、ルシルさんのスキルを頼りにしたいみたいだったし。

「ヴィヴィオやリオは、独自の魔法は持っているのか？」

「はいっ、はいっ！　あたしはあります！」

リオが走りながらも元気よく答えた。リオはデバイスも持ってるし、すごい強いし、魔法も使えるし、リオってホントにすごい子なんだよね。でも「わたしも一応は・・・」って小さく挙手した。

「ヴィヴィオは確か、なのはのレイジングハートを借りて、魔法の練習をしているんだったか？」

「あ、うん。レイジングハートは優秀だから、思いついた魔法もしっかりアシストしてくれるけど・・・。レイジングハートが無かったり、授業で借りられるストレージだったりじゃ、うまく発動できなくて、まだまだ未熟なのです」

わたしはしょんぼり肩を落とす。でも今回の合宿だとママも、貸してあげる、って言ってくれたし。フィジカルトレーニングだけの合宿で終わらずに済みそう。ルシルさんは次に、「コロナは、創成と操作が得意だと聞いているよ」って声をかけた。

「あ、はい！　私に合ってるのがその魔法だったので、伸び代のある創成を頑張ろうって決めました！」

「お父さん！　コロナの創成魔法ってすごいんだよ！　僕とヴィヴィオって、創成も操作も下手だから。ね？　ヴィヴィオ」

満面の笑顔でフォルセティにそう振られて、わたしは「あはは・・・はあ・・・」乾いた笑い声を上げた。ルシルさんは「得意不得意があるのは当たり前だ。気にするな」ってフォローしてくれた。

「話を聞く限り、どうも俺の担当はコロナになりそうなんだよな。俺は騎士は騎士でも魔法戦を得意とする魔導騎士だ。俺の複製スキルなら、コロナの創成魔法のスキルアップにも役立ちそうだよ」

ルシルさんがそう予想した。みんなで、そうかも～、なんて笑いながらランニングが終了。ストレッチをしてると、ノーヴェが「あの、ルシルさん」って呼んで、２人で何やら話し始めた。

「・・・それは、あの子が決めたら、ということだな」

「あ、はい、それでお願いします。・・・よし、集合！」

号令をかけたノーヴェの元に集合して、今日のトレーニングの予定が発表された。わたしとリオは、昨日ルールーやルシルさん達が高速で組み立てたアスレチックで体力作り、そのあとにリヴィアとの組み手だ。

「正直こう言っちゃ格好悪いが・・・リヴィアはあたしより強い。あたしの見立てじゃインターミドルの都市本戦レベル。お前らが目指す将来のライバルの仮想敵としては、何も問題ないはずだ。つうわけで、リヴィア、後々で手伝いを頼む」

「オッケー！　よろしくね、ヴィヴィオ、リオ♪」

「うんっ！」「はいっ！」

「んで、コロナ。お前は、ルシルさんの協力の元に創成や操作魔法のスキルアップをしてやってもらおうと思う」

ノーヴェがそう言ってコロナ、続いてルシルさんを見た。ランニング中に話してた予想がまさに起きた。ルシルさんは静かに頷いた後にコロナを見て、「決めるのは君だ」と告げた。

「インターミドルに出場するかどうかは保留って話だったが、何かのきっかけで出場したいってなった時の為に、今からお前の得意分野を伸ばしておこうって考えたわけだ・・・。どうだ、やってみるか？　ルシルさんは、局どころか管理世界でも指折りの魔導師でもある。こんな機会、滅多にないと思うぞ？」

コロナは口を閉ざして小さく俯くと、握った両手を胸の前に持って来た。ランニング中、コロナは結局答えを口にしなかった。今も何か深く考えてるみたいだし。やっぱりコロナはインターミドルには出場しないのかな。それはコロナが決めることだけど、ちょっと寂しいな～って思っちゃう。

「どうだ？　コロナ」

「・・・あの、ルシルさん。わたし、強くなれるでしょうか・・・？」

顔を上げたコロナが、ノーヴェの隣に立つルシルさんに尋ねると、ルシルさんは体を屈めて目線をコロナに合わせたうえで「それは、コロナ次第だ」って、大丈夫とか絶対とか甘い言葉じゃなくて、あくまでコロナの頑張りに懸かってるってことを伝えた。

「・・・お願いします！」

少し考えた後、コロナは勢いよくお辞儀した。ルシルさんは「決まりだな」って嬉しそうに、でも大人として指導者としての険しさを少し残しながら頬を緩ませた。それから私たちはアスレチックエリアに移動して、わたしとリオ、それにリヴィアの３人で体力作りを始めて、コロナとルシルさんは休憩スペースへ。フォルセティとイクスはアイリから医学の勉強だ。

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ⇒ルシリオン†††

ノーヴェに頼まれ、俺はフォルセティとヴィヴィオの共通の友人であるコロナ・ティミルの、創生・操作魔法のトレーニング指導を請け負うことになった。俺の知っているコロナの魔法は、ゴーレム創生。先の次元世界にて、セレス率いるテスタメントのサフィーロとして活動していた時、来年のインターミドルを観戦している。

（その際に、コロナの魔法もしっかり複製しているが・・・。彼女のデバイスが完成していない過去である今、あそこまでの魔法を教授するわけにもいかない）

そもそもゴーレム創生はコロナが頑張ってたどり着き、習得した魔法だ。俺が一から教えるなどという近道を辿らせては彼女のためにはならない。とりあえずアスレチック側に建てた休憩スペース・あずまやに移動する。

「さて。まずは、コロナ、君がなりたい戦闘スタイルがどういうのか聞いてもいいかい？」

なら俺のやるべき事はアドバイスで導くこと。コロナは頭のいい子だと聞いている。自ずと自分に合うスタイルを、実践して確かめるまでもなくイメージだけで固めるはずだ。

「えっと、はい、そうですね・・・。わたしは、ヴィヴィオ達みたいにそんなに運動が得意なわけじゃないんです。ですから、創成したものを前衛に、わたしは後衛でサポートするのが一番かな、と」

コロナは僅かな思考の後、そう答えを導き出した。俺は「なるほど。

良い答えだ」と返し、実際に創成魔法を見せてもらえるように頼む。現時点でのコロナの魔法を複製し、術式からどう改良していくかを話して決めればいい。

「あの、デバイスが無いと、魔法が使えないので・・・」

「ああ、だから・・・」

予想は付いていた。この歳でデバイス無しでの魔法発動は、ほとんど無理なものだ。左手の中指にはめていた指環・"エヴェストルム"をコロナに差し出した。最初はその行為が何を意味するのか理解できなかったようで、コロナは「はあ・・・」と指環を見つめながら空返事。

「エヴェストルムはストレージデバイスで、その容量も膨大だ。性能は申し分なし」

「・・・？・・・えっ！？　あ、あの、でも・・・・！　ルシルさんのような命懸けの戦場で戦う騎士のデバイスを、わたしのような子供で、魔導師として素人レベルがイジるのは・・・！」

不安そうなコロナに、「問題ないよ。フォルセティにも使わせているから」と伝える。フォルセティも、俺と同じようにデバイスを介さずに高威力・高効果の魔法を発動できる。しかし確実性が俺に比べて無いに等しい。

だから新しい魔法を開発した際は、必ず"エヴェストルム"を一度通して発動させるようにしている。"エヴェストルム"はオートで

術者の発動した術式も記録できる（ようにした）ため、その問題点を本人や第三者が閲覧し、改良しやすくなる。

「（まぁ、俺とはやてとアインスの３人で、徹底的に術式を精査して、暴発しないように気を付けているが）・・・とにかく、そういうわけだから。変に遠慮せずに思いっきり使ってくれていい」

「ふぁ・・・！？」

俺はテーブルの上に載っているコロナの右手を手に取り、指環のサイズに合う指を探す。９歳の女の子であるコロナの手は小さく、指も細い。親指が合いそうだが・・・。顔を赤くしているコロナに今さら気付いたが、申し訳なく思いつつも「親指だな」と彼女の親指に指環をはめる。

「その状態で魔法プログラムを起動すれば、エヴェストルムがプログラムを読み込んで発動をフォローする」

「あの、じゃあ・・・や、やってみますね」

あずまやより出て広い場所へと移動する。コロナは何度も深呼吸して足元に小さな召喚魔法陣を展開し、「創成（クリエイション）！」と岩石で構成された、２０ｃｍほどの大きさのゴーレムを造り出した。

「ど、どうでしょうか・・・？」

「うん。このゴーレムは操作できるかい？」

答えを知っていながらも俺はそう尋ねると、「あ、いえ。操作するには、クリスタルを核にしないとダメで・・・」とコロナはそう答えた。

「このサイズにクリスタルを入れた状態での操作は？」

「それなら出来ます」

「よし。ゴーレムのサイズを徐々に上げていこう。プログラムは構築できているかい？」

「えっと・・・ごめんなさい」

現時点ではこのサイズが精いっぱいということか。"エヴェストルム"に記録されたコロナの魔法の術式をモニターに表示させて、「問題ないよ。俺も手伝うから、一緒に完成させよう」と伝えた。

「はい、お願いします！」

コロナの創成魔法の術式は難解なものではなく、子供らしいシンプルさがある。これならノーヴェに頼まれた複製による手助けも必要ないな、今のところは。魔術でいう術式は魔法ではプログラムといい、魔法の構築式を教えれば、基本的に同じ魔法を他人も扱えることが出来る。それが魔法のメリットだな。

「えっと・・・ここは・・・」

「そうだな。少し複雑になるけど、こうすれば・・・魔力消費が抑えられる」

「あ、なるほどです。でもエヴェストルムの性能頼りになってしまうのは・・・」

「大丈夫、そこは考えて組み立てているよ」

コロナ自身にプログラミングさせながらのアドバイス。呑み込みも早く理解力もある彼女だからこそ、こちらも楽しくなってくるというもの。ある程度術式を整えさせては、「はい、発動」と指示を出して彼女にゴーレムを創成させる、を繰り返す。そんな中・・・

「あの、ルシルさん。1つ聞いても良いですか？」

「ん？」

「わたしの魔法って複製されてますか？　もしされているのでした、わたしのゴーレムをルシルさんがアレンジ発動したら、一体どうなるのかな？って思いまして・・・」

そう聞いてきた。複製したモノをアレンジ出来るということは、昨夜の夕食時に話したからな。俺が「見せようか？」と聞き返すと、「ぜひっ！」とお願いされたため、「我が手に携えしは確かなる幻想」と詠唱し、コロナの魔力光である黄色の召喚魔法陣を展開。

「（名前はそうだな・・・）灼熱の巨神、スルト！」

ムスペルヘイムの王の１人であったスルトの名を冠した１０ｍ級ゴーレムを創成する。轟々と燃える岩石の巨兵を見たコロナは、「すごい・・・」と口を半開き。さらにアスレチックの方から「何アレ～！？」とヴィヴィオ達の驚きの声が聞こえてきた。

「とまぁ、これが俺なりのアレンジだ」

「すごいです！」

「これからも研鑽を積んで行けば、ゴーレムは必ずコロナや友達を護れる頼れる戦力となるだろう。日々精進を怠らず、だよ」

「はいっ！」

それからも改良と構築を繰り返すこと数回。とうとうコロナが「はぁ・・・はぁ・・・」と息を切らし始めた。

「（魔力も限界に近いか）・・・じゃあとりあえず一旦休憩だ」

「はいっ！」

あずまやへと戻り、「はふぅ～」とテーブルに突っ伏すコロナに、「お疲れ」と労いの言葉を掛ける。

「いえ、ありがとうございます。ルシルさんのおかげで、ゴーレム

もあそこまで大きく出来ました！」

居住まいを直し、頭を下げて礼を述べてくれたコロナの視線が別の方を向く。俺もそちらへと目を向け、俺の知るゴーレム、ゴライアスより一回りほど小さなゴーレムを視界に入れる。デザインもゴライアスに似通って来たし、完成まではもう一押しだが・・・。ここらからコロナの裁量で最適化させていくべきだ。

「どういたしまして。あとはコロナ自身のデバイスと、操作するのに必要なゴーレムとリンクするクリスタルだが・・・」

「うぅ、どうしましょう？　わたし達がインターミドルに参加できるのは来年ですけど、なにか焦ってしまいます」

溜息を漏らすコロナ。ヴィヴィオも何気にデバイスを持たせてくれないと嘆いていたな。なのはのことだから、その辺りはしっかり考えているだろうが。コロナはそう言った繋がりは無いに等しいらしい。

「それなら、コロナ」

「はい、なんでしょう？」

「すずかかルーテシア、どちらかに頼んでみよう」

だから俺はそう提案するのだった。

Ｅｐｉｃａ７－Ｅそうだ、合宿へ行こう～Ｔｒａｉｎｉｎｇ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

アルピーノ邸やアスレチックエリアなどから遠く離れただだっ広い平地であたし達は今、チーム海鳴名物のチーム戦を久々に行っていた。チーム分けは、あたしとなのはとシャルとアリシア。フェイトとユニゾンはやてとアインスとザフィーラ。

（対ユニゾンはやてとアインスのためにルシルをこちらに入れたかったけど・・・。今回の合宿の主役はあくまでヴィヴィオたち子供だし、そっちの特訓の手伝いを優先させないと）

「「はあああああっ！」」

――風牙烈風刃――

――ラケーテン・シュトルム――

シャルの放った暴風の壁に、風と電撃を身に纏ったアインスが突進。アインスは暴風の壁を突破できはしたけど、纏ってた風と電撃が消し飛んだ。リーチのある分、シャルが突っ込んで来たアインスに向かって・・・

――光牙月閃刃――

真紅に輝く魔力を付加した"キルシュブリューテ"を振るった。アインスはすかさず"キルシュブリューテ"を持つシャルの右手首をキャッチして攻撃をキャンセル。さらに空いてる右拳に魔力付加して、「ふんっ！」即座に殴りに行った。

「わたしの左手はまだ生きてるんだけど？」

シャルの左手には鞘が握られていて、その鞘でアインスの腹を打った。さらに「風牙烈風刃！」ってほぼ零距離の一撃をアインスに叩きつけた。アインスは「うく・・・！」苦悶の声を漏らして、暴風の壁に押されるように後方に吹っ飛んだ。シャルは追撃のために地を蹴ってアインスに向かって、体勢を立て直される前にさらに攻撃を加え始めた。

（反則なアインスには、反則なシャルをぶつけるのが一番よね♪）

「うりゃうりゃー！」

――ブルーバレット――

右手に握る小型拳銃型デバイス・"ラッキーシューター"から、水色の直射魔力弾を連射するのはアリシア。対するのは人間形態に変身しているザフィーラ。うっすらと魔力の膜を纏っていて、アリシアの魔力弾が着弾してもよろつきもしない。

「やっぱ堅いな～」

アリシアが左手に握っているハリセン型デバイス・"ハリセンスマッシュ"の柄をギュッと握りしめたところで、ザフィーラの発動した足元から突き出る拘束杭・「鋼の軛！」をステップで回避。その僅かな瞬間にザフィーラがアリシアに一気に接近した。

「ブルーバレット！」

魔力弾を足元に何発も撃ち込むことで、アリシアを中心にぶわっと土煙が発生した。

――クラスターマイン――

「ラピッドジャンプ！」

急停止できなかったザフィーラが土煙を突っ込むかどうかってところで、アリシアが一瞬にして遥か上空へ跳んだ。直後、ドォン！と土煙が大爆発。また新しく土煙が生まれて、ザフィーラが「ぐおぉ・・・！」苦悶の声を漏らしながら飛び出してきた。

「スティンガーレイ！」

「く・・・！」

――狼王の鋼鎧――

さっき以上の速度で上空から飛来するアリシアの魔力弾。ザフィーラはさらに身に纏う魔力量を増大させて防御力アップしたんだけど、

「む・・・！」ザフィーラはわざわざ回避行動に移った。

「バリア貫通効果か・・・！」

ザフィーラが呻いた。それが回避に移った理由なのね。アリシアは上空に魔法陣の足場・フローターフィールドを展開して、そこからザフィーラを集中砲火。そんなアリシアに・・・

――クラウソラス――

――エクセリオンバスター――

真っ白に輝く砲撃が向かうけど、それを桜色に輝く砲撃が迎撃した。相手チームのはやてと、うちのチームのなのはの砲撃だ。２人は前線に出ずに後衛での支援攻撃担当ね。はやてからのおっそろしい支援射砲撃も、エースオブエースのなのはの正確無比な援護のおかげで決定打にはなってないわ。んで、あたしの相手は・・・

――プラズマランサー――

「ハーケンスラッシュ！」

――フレイムバレット――

「バーニングスラッシュ！」

戦闘スタイルやデバイスの変形機構もそっくりなフェイトだ。電撃

の槍を炎の魔力弾を迎撃しつつ、あたしとフェイトは得意な近接魔法で衝突。あたしは"バルディッシュ"の魔力刃から漏れる放電に僅かに感電して、フェイトは"フレイムアイズ"の剣身から溢れ出る炎の熱に、「うく・・・」呻き声を上げた。それでもあたし達は剣戟をやめない。

「やっぱ強い奴と戦うと面白いわ！」

――フレイムウィップ――

一旦フェイトから距離を取るとすぐに炎の鞭を発動して、フェイトへ向かって振るった。まぁフェイトはアインス、ルシルに次ぐ高機動タイプだから、あっさり避けられちゃうんだけど。炎の鞭発動時、"フレイムアイズ"は直接攻撃にはすぐに転じれないってことをフェイトは知ってるから・・・

「アリサも、シグナムになんか似てきた気がする・・・！」

――ソニックムーブ――

「失礼ね。あれほど病んでないわよ！」

一瞬で距離を縮めて来ていて、すでに"バルディッシュ"を振り被っていた。シールドを張るにはすでに手遅れな距離。でもね、フェイト。あたしだって首都防衛隊で日々研鑽を積んでるのよ。

――ブレイジングスマッシュ――

「このおおおおおッ！」

「・・・っ！？」

空いてる左腕の指先から肘までの間に爆炎を付加する。こっちもシールドは張れないけど、フェイト、アンタもこの距離じゃシールドは張れないわよ。燃え滾る開いた左掌底を、突っ込んで来たフェイトのお腹に打つ込む。

「くぅぅ・・・！」

フェイトが爆炎に呑みこまれた。あたし自身の攻撃力に加えて、フェイトの突進力も加算されての一撃だったけど・・・。

（手応えが弱い・・・！？　うそ！）

爆発によって後方に吹っ飛んだフェイトだけど、たぶんそれだけじゃないわね。炎と黒煙の中から姿を見せたフェイトの防護服は、その下から乳房の下半分までの範囲を焼かれていて素肌を見せてるけど、フェイト自身にはあんましダメージが入ってないっぽいわ。

「えほっ、えほっ・・・。ビックリしたぁ・・・、すごいねアリサ！
　こんな魔法も使えるなんて！」

「・・・ダメージが完璧に入る前に後退した、ってところかしらね」

「うん。ギリギリでなんとか直撃する前に離脱したよ。あと1歩、バルディッシュの反応が遅れていたらきっと・・・私は撃墜されてた」

フェイトの防御力の低さは相も変わらず。あたしの魔法の直撃を受けたらまず勝てるわ。ええ、当たれば、ね。フェイトは「真ソニックフォーム」と防護服を超高機動モードへと移行させた。

「バルディッシュ。ライオットザンバー・スティンガー」

大鎌形態から魔力剣の二刀流形態へと変形した"バルディッシュ"。あの形態のフェイトがおそらく最も速くて鋭い。それはつまり本気だってこと。だからあたしも・・・

「フレイムアイズ。ヴァラーフォーム」

"フレイムアイズ"を変形させた。スナイパーライフルのような長い銃身の両側に、反りの無い直刀が2つある1m半くらいの長さの実体ある大剣と、1mくらいのソードブレイカー状の魔力剣の二刀流だ。

「来なさいフェイトッ!!」

「ん!」

――ソニックムーブ――

フェイトの姿が掻き消える。あたしは足元に魔法陣を展開して、「ストームフレア！」と魔法を発動。魔法陣から炎の渦が巻き上がって、あたしを炎の中に覆い隠した。フェイトみたく高速移動からの奇襲を封じるために、ルシルのコード・ケルビエルをあたしなりに組んでみた魔法だ。

（まぁ問題は、炎の中から外は何も見えないし、魔力反応も探知できないってことなのよね・・・）

この状態で砲撃が来てもあたしは気付けない危うさがある。さすがに集束砲レベルなら気付けるけどさ。でも今のあたし達はチーム戦の最中だから、なのはからの『アリサちゃん、今！』って合図で、あたしは炎の渦を解除。

≪アリサ、3時の方向、来るぞ！≫

"フレイムアイズ"からの警告。あたしはそっちへ顔へ向けるより早く右手に持つ大剣の銃口を向け、火炎弾・「フレイムバレット！」を連射しつつ顔を向けた。フェイトはその機動力を以って回避し続けて、最後は大きくジャンプ。

「せぇぇぇーーーーい！」

そしてあたしの直上にまでやって来て、右手の"スティンガー"を振り下ろしてきた。あたしは左手のソードブレイカーで受け止める。"スティンガー"は魔力で構築されているわ。だからガシャン！と

一瞬で破壊した。あたしのソードブレイカーは名前の通り、魔力で出来た剣や刃などをジグザグの刃に挟みさえすれば、即座に破壊できるようプログラムを積んでる。

「っ！」

砕け散る"スティンガー"に一瞬目を見張るフェイトだったけど、即座に左手の"スティンガー"を振るったから、あたしは受けずにスッと後退してその斬撃を避けた。空振ったフェイトは勢い余って地面を穿って、頭を大きく下げた前屈のような姿勢になった。そんなフェイトの隙だらけな背中へとすぐに大剣の銃口を向けるんだけど・・・

「んな・・・！」

「砲撃じゃなくて、直接斬り掛かってれば良かったと思うよ、アリサ・・・！」

フェイトは"スティンガー"を振り下ろした勢いのままに前転。踵であたしの大剣を踏みつけた。その所為で今度はあたしがフェイトに頭を下げる体勢に。地面に剣先が埋もれた大剣を踏んづけたまま、フェイトは放電する右手の"スティンガー"をあたし目掛けて振り落した。

「まだよ！」

でも左手のソードブレイカーはまだ生きてるわ。あたしは大剣の柄

を手放しすことで右手を自由にして、両手持ちしたソードブレイカーを咄嗟に頭上に掲げて"スティンガー"の一撃を防御、そして粉砕する。

「っく・・・！」

――ソニックムーブ――

「逃がさないわよ！」

――フォックスバット・ラン――

高速移動で後退するフェイトに、あたしも高速移動で追い駆けた。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒フォルセティ†††

イクスと一緒に、アイリお姉ちゃんから医術、特にスポーツ医学を専門に教わってる僕。合宿に来てからもそれは変わらず、アイリお姉ちゃんが用意してくれた専門書などを用いて、もすごい濃い時間を過ごした。

「すんすん・・・」

精密な人間大サイズの人形を使って捻挫の処置を実践していたところで、部屋の外から取っても良い匂いがしてきた。チラッとドアの方を見ると、「いけませんよ、フォルセティ」ってイクスに叱られちゃった。

「ご、ごめん！」

急いで体育座りの姿勢を取ってる人形の足首にテーピングをして、「処置完了！」ってアイリお姉ちゃんに伝える。僕の処置が上手くいってるのか確認した後、「上出来ね♪」って、僕とイクスと頭を撫でてくれた。

「よしっ。フォルセティは復習だから当然として、初めてのイクスも数回の練習でほぼ完ぺき。んじゃ、時間ももういい頃だし、午前の授業はこれにて終了。手を洗って、メガーヌさんのお手伝いに行こう♪」

「「はいっ！」」

部屋を後にして1階へ降りて、洗面台でイクスと一緒に手を洗った後はダイニングへ。キッチンにはメガーヌさんとガリューが居て、メガーヌさんが調理、ガリューは食器を出したりとかの手伝いをしてる。

「何かお手伝いします！」

「野菜の皮むきくらいなら、ですけど・・・」

「アイリは料理できるから、なんでも言ってね～」

メガーヌさんにそう申し出ると、メガーヌさんはフライパンを振り

ながら、「あら、ありがとう♪　じゃあ――」ってキッチンを見回した。

「アイリちゃんは、そっちの鍋を見てくれるかしら？」

「ヤー♪」

「フォルセティとイクスは、キッチンの人手は足りてるから・・・外に居るお母さん達を呼んで来てくれる？」

「「はいっ！」」

僕とイクスは家を出て、まずは一番近いアスレチックエリアを目指して歩いてると、「そう言えば、ずっと気にはなってたのですが・・・」ってイクスが口を開いて、僕の方を見てきた。

「フォルセティは、インターミドルには出場しないのですね。男子の部ももちろんありますし、何よりあなたは勝ち抜けるだけの実力もありますし。どうしてかな、と」

そういえばイクスにはその理由は話してなかったっけ。じゃあ良い機会だし、僕がインターミドルに挑戦しない理由を話しておこう。

「あーうん。僕はやっぱり支える側でいたいから。それに、ヴィヴィオ達の試合を応援したいんだ。僕はそれで良いと思ってる」

それが一番の理由だ。ヴィヴィオ達の活躍を録画とかじゃなくて、

リアルタイムでこの目でしっかりと見届けたい。そのためにはフリーな時間が多くないといけない。だから挑戦しないんだって。

「そうですか。なれば私も、もう何も言いません。ごめんなさい、余計なお世話でしたね」

「ううん。ありがとう、気にかけてくれて」

イクスと笑顔を浮かべ合って、僕たちアスレチックエリアへ到着。ヴィヴィオ達もすでにトレーニングを終えていたようで、こっちに向かって歩いて来ていた。先頭を行くノーヴェが「よう。ひょっとしてお迎えか？」って聞いてきた。

「うん。メガーヌさんが呼んできてって」

「そうか、ありがとうな。ルシルさん、あたし達はこのままなのはさん達の元へ向かいますんで、先に戻ってくれていいですよ」

「そうか？　じゃあ先に戻って、メガーヌさんを手伝ってくるよ」

お父さんが先に家に戻って、僕たちはお母さん達が模擬戦してる平地へ。まだ結構離れていてもドカンドカン！と爆発音が続いて聞こえるし、いろんな魔力光が空を飛び交ってるのが見て判る。そして高ランク魔導師同士の模擬戦を僕たちは見た。感想はただ一言、すごすぎる、だ。

「あー、今のうちに言っておくけどな。もうちょいお前たちの実力

を高めた後、お前らもあの模擬戦に参加な」

「「「ふぁっ！？」」」

ヴィヴィオとコロナとリオが変な声を上げた。僕とイクスも目を丸くして「え？」ってノーヴェを見た。あの冗談みたいな魔法が飛び交う戦場に、ヴィヴィオ達も参加する？　僕だって絶対に入りたくない、あんな・・・。

「判るか？　なのはさん達は今、魔力出力を大幅に絞ってるんだよ。お前たちの仮想敵になれるようにな。インターミドルの出場選手、中でもトップクラスはマジで強い。そんな連中とぶつかった時、まともに戦うには、今のうちからそれ以上の強敵と戦って経験値を稼ぐっきゃねェってわけだ」

数日・数週間の練習よりたった一度の強敵との実戦って聞きもするから、ノーヴェのその言葉に僕たちは「なるほど～」って頷いたところで、ビィー！って大きな音量でのブザーが鳴った。それを合図にお母さん達は一斉に戦闘行動を中断して、デバイスやバリアジャケットを解除した。

「なのはママー、フェイトママー！」

「お母さん、アインスお姉ちゃん、ザフィーラ！」

「お？　おーい！」

「あれー？　迎えに来てくれたの～？」

「ありがとな～♪」

「ですぅ～♪」

お母さん達と合流した後はお父さん達の待つ家に戻って、そしてメガーヌさんとアイリお姉ちゃんのお昼ご飯を美味しく頂く中、「最後の午後の予定はどうする？」って話になった。カルナージ合宿は明日の午前で終わりだから、何かをするならもう今日の午後しかない。

「あたしは、午後もヴィヴィオとリオのトレーニングを・・・。なのはさん、ヴィヴィオにデバイスを貸してあげれますか？」

「あ、うん、いいよ。レイジングハート、午後はヴィヴィオに付いていてあげてね」

≪Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ≫

なのはさんが首から提げてた"レイジングハート"を、「よろしくね、レイジングハート♪」ヴィヴィオに渡した。ノーヴェは次に「ルシルさん。午後からもう一度、手伝いをお願い出来ますか？」ってお父さんに申し出た。

「ああ、構わないよ。ところで話の腰を少し折るが・・・。すずか、ルーテシア」

「ん？」「はい？」

「コロナにデバイスを造ってあげてくれないか？」

お父さんがすずかさんとルーテシアにそうお願いすると、コロナが「お願いします」って頭を下げた。すずかさんとルーテシアが顔を見合わせた後、ルーテシアが「はいっ！」元気よく手を挙げた。

「デバイスマイスターの資格はまだ獲ってないしまだまだ勉強不足だけど、軽い気持ちで請け負うなんて思ってない！　でも・・・私にやらせてほしい」

ここまで真剣な顔を見せるルーテシアなんて初めてだった。だから僕とヴィヴィオは茫然となった。お母さん達だけじゃなくて、メガーヌさんやリヴィアもそんな感じだ。

「・・・あ、えっと・・・。コロナ。私、精いっぱい頑張るから。コロナのデバイス、私に造らせて？」

「え、あ、はい・・・。お願いします」

ルーテシアの迫力に気圧されながらだけど、コロナは改めてルーテシアに頭を下げた。

「ルーちゃん。デバイスマイスターの師匠としてのテストです。コロナの要望を叶えつつ、デバイスを完成させること。困った事があ

ったら相談してほしいし、アドバイスもしっかりさせてもらうからね。でも何から何まで口出しはしないつもり。1年後には予選が始まっちゃうから、製作期間は最大で半年ね。出来る？」

「はいっ、出来ます！」

こうしてコロナのデバイスは、ルーテシアが用意してくれることになった。お父さんが「よかったな」ってコロナに笑いかけると、コロナも嬉しそうに「はいっ！」満面の笑顔を浮かべた。

「なのはがデバイス持てないんじゃ午後からは模擬戦は出来ないわけね」

「そんなら露天風呂の完成を目指そ♪　湯船や洗い場は出来てるけど、フェンスや屋根、脱衣場も出来てへんし」

「脱衣場のような本格的な建築はさすがに無茶だけど、せめてフェンスくらいは完成させておきたいよね」

アリサさんが小さく溜息を吐いたら、なのはさんとフェイトさんが露天風呂の外周りを完成させようって話を出した。するとお父さんが「フェンスなら今、スキュラに造らせているよ」って、さらりと告げた。ちょっとだけ静寂が訪れて、「え、いつから？」ってリヴィアが聞いた。

「ん？　昼頃に君たちと別れた後、家に戻る前にちょっとな。まともに作業が出来るのは今日だけだし、午後からも何かしらの手伝い

があると思っていたしな。なら俺の代わりに、召喚時の魔力消費が比較的少ないスキュラにもう一度出張ってもらおうって考えたわけだ」

「あらあら。それじゃああの子たち、お昼ご飯も食べていないの？　用意した方が良いかしら？」

「あ、お気になさらず。必要なのは食事ではなく魔力素なんで。召喚さえしてしまえば、あとは勝手に魔力素を吸収して、顕現の限界時間まで指示通りに働いてくれるんで・・・」

席を立ったメガーヌさんにお父さんがそう言って引き止めた。なんて言うか、もはやそれは奴隷みたいな・・・。そう考えてるのは僕だけじゃないみたいで、みんなが口を閉ざした。それから"スキュラ"の事は気にはなるけどお昼ご飯を終えて、食後休憩を1時間挟ん後にそれぞれ午後の予定を過ごす。アイリお姉ちゃんの授業を受ける僕とイクスは、ヴィヴィオ達の特訓が見られる休憩所に居るんだけど・・・

「――傍若無人にして厚顔無恥！　悪逆非道・大欲非道なマスターに、モノ申～～～～す！」

「もう少し、私たちの扱いを改善してほしいのですが・・・」

そこに上下一体の作業服、軍手、バンダナ代わりのタオルを頭に巻いたデルタとゼータがやって来て、ノーヴェと話をしてたお父さんに直談判した。

「・・・。で、俺のエインヘリヤルを、ヴィヴィオ達の特訓に使いたいんだったな」

「え？　ええ、まぁ、そうです。が・・・」

２人を無視して話を進めようとするお父さんに、ノーヴェは答えながらもチラッと戸惑いながら２人を見た。そんなお父さんの様子にデルタが「シカトすんなコラぁー！」って、ポカポカ殴り始めた。

「いくら私たちがあなたの使い魔（エインヘリヤル）とは言え、待遇があまりに酷いとストライキを起こします！」

ゼータはお父さんの右の袖をちょんっと摘まんでの抗議。お父さんは小さく溜息を吐いて、「要求は？」って聞くと、２人が「え？　えっと～・・・」って言い淀んだからノーヴェが「お前ら、要求も決めずに・・・」って呆れた。

「だ、だって！　こんなアッサリ受け入れるなんて思わなかったし！」

「ヴァルハラでのセクハラをやめてほしいです！」

戸惑うデルタと違って、ゼータはビシッと挙手してすぐに要求した。デルタは「そんなことが出来るわけ――」って言い捨てようとしたけど、お父さんは「いいぞ」って即答。

「どぅえ！？　いいの！？　１８禁レベルのセクハラも本当にやめ

てくれるの！？」

「じゅっ・・・！？・・・姉様は一体なにをやって・・・」

お父さんが両手で顔を覆って項垂れたら、デルタが「ゼフィランサスはそこまではやってこないけどさ～。他の百合好きエインヘリヤルがね・・・」って肩を竦めた。

「では、私たちの要求は受け入れてもらえると？」

「姉様にはちゃんと伝えておこう」

「よっしゃー！　アルファ、ベータ、イプシロン！　グッドニュース！」

「ありがとうございます！」

デルタとゼータがスキップしながら温泉の方へ戻って行った。お父さんは「待たせた。じゃあヴィヴィオ、リオ。魔法を見せてくれ」って2人に向き直った。

「「は、はいっ！」」

「ソルフェージュ！」

リオが手に取ったのは六角形のアミュレット型のインテリジェントデバイス・"ソルフェージュ"を起動した。バリアジャケットまで

は装着しなかったけど、魔力の流れがハッキリと変わった。

「レイジングハート、お願い！」

ヴィヴィオはなのはさんの長年のパートナーである"レイジングハート"を起動。待機形態の丸い宝石のままだけど、それでもスペックはすさまじい。

「よしっ。ヴィヴィオ、リオ、お前たちの魔法をルシルさんに見せてみろ」

ノーヴェの指示に「はいっ、あたしから行きます！」ってリオが挙手して、足元にベルカ魔法陣を展開。そして右拳から炎を噴き上げさせた。

「紅蓮拳！」

拳を突き出して放射するのは炎の砲撃。空高くにまで上がった砲撃を見届けた後、リオはお父さんに「以上です！」って一礼してから下がった。次はヴィヴィオで、"レイジングハート"を握りしめて、「すぅ・・・はぁ・・・」大きく深呼吸。足元に虹色に光り輝くベルカ魔法陣を展開。さっきのリオと同じように右拳に、火じゃないけど魔力を付加すると・・・

「いきます。ディバイン・・・バスタァァァーーーーっ！」

グッと構えをとって、突き出したと同時に砲撃を放った。魔法を撃

ち終わったヴィヴィオとリオがお父さんの前に整列したのを確認したノーヴェは、「ではお願いします」ってお父さんに一礼。

「我が内より来たれ、貴き英雄を。其は古の王の末裔、其は春光拳の使い手。来たれ、高町ヴィヴィオ、リオ・ウェズリー」

そうしてお父さんは詠唱した。お父さんや僕の共通の魔力光、サファイアブルーの魔力が２つの人型に集束していって、ヴィヴィオとリオになった。僕たちは「おお！」って歓声を上げたんだけど、すぐに？マークが浮かんだ。

「なんか所々が違う・・・？」

「うん。ヴィヴィオの髪がショートで、あたしの髪がロングになってる・・・」

そう、オリジナルと"エインヘリヤル"とじゃ外見が変わってた。僕たちの視線を受けたお父さんは教えてくれた。生きている人の"エインヘリヤル"を召喚するには、オリジナルと区別がつくように外見をアレンジしないといけないって。それが昔から決まってるルールなんだって。

「ま、とにかく、これで準備万端だ。よし、お前ら、午後の特訓は見ての通り自分とのスパーリングだ。自分の戦い方を客観的に見て、そして体験する。これほどの特訓は他にはない。しっかり勉強しろ」

「「はいっ！」」

こうしてヴィヴィオとリオは、自分とまったく同じ実力の"エインヘリヤル"とのスパーリングに入った。

Ｅｐｉｃａ７－Ｆそうだ、合宿へ行こう～Ｗａｌｈａｌｌａ～

†††Ｓｉｄｅイクスヴェリア†††

デデン♪と、クイズ番組の出題時に使用されるような効果音が鳴り、『問題です！』とどこからともなく声が発せられた。そんな中、コロナは「きゃーきゃー！　来てる、来てるからぁー！」そう悲鳴を上げっ放しです。

「偽者だって判っててもかなり怖いぃー！」

ヴィヴィオもコロナと同じように背後を何度も振り返りつつ、私たちの行く手を遮る両開きの扉を見詰める。背後から迫って来るのは、四つん這いや匍匐などの姿勢のゾンビと呼ばれる人たち。死体を兵器に変えるという私の性質状、ゾンビという存在にはさほど恐怖を感じませんけど・・・。

（ヴィヴィオやコロナ、悲鳴を上げてはいませんけどリオにとって、あれほどのグロテスクな死体が動き、迫ってくる様は確かに恐ろしいでしょうね）

眼球が無かったり、垂れ下がっていたり、所々が骨、肉や臓器が見え隠れしていますし。私たちが今いるココも、僅かに薄暗いですから余計に不気味に映ってしまいますね。

「ヴィヴィオ達には指１本と触れさせない！」

――コード・デリンジャー――

フォルセティは、矢面に立つようにゾンビの大群と対峙しており、両手の人差し指の先端に生成した魔力球より魔力弾を連射して、これを迎撃しました。大変格好いいですが、吹き飛ばされたゾンビは絶えることなく、次から次へと通路の奥から向かってきています。

『回答者コロナ。現在、管理世界に流通しているデバイスの種類を答えよ』

「え！？　あ、はい！　インテリジェントデバイス、ストレージデバイス、アームドデバイス・・・えっと、すっごく珍しい融合型デバイス、です！」

コロナが出題された問題に解答しますと、ピンポンピンポーン♪と正解を示す効果音が聞こえて、閉ざされていた扉が自動で奥へ向かって開きました。急いで扉を潜りますと、その扉はすぐに閉まってくれたので、迫り来ていたゾンビともお別れです。

「助かった～」

「うぅ・・・。ここに来る前に、エインヘリヤルがモンスターに変装していると聞いたけど、本格的すぎてやっぱり怖い・・・」

「ねえ、フォルセティ。ルシルさん、ホントすごいね～」

ヴィヴィオは扉に背を預け、コロナは赤い絨毯の敷かれた廊下に座り込み、リオは苦笑をしながらルシルさんのことを称えた。

「正直、お父さんのヴァルハラに来たのは初めてだから、僕もここまですごいなんて思わなかったよ」

そう、私たちは今、ルシルさんの精神世界に展開されているという創成結界・"ヴァルハラ"へとやってきています。とはいっても、肉体は現実にあり、精神だけが"ヴァルハラ"に移されているのですが・・・。それだけでも十分凄いことですよね。

・―・―・回想です・―・―・

とても美味しい夕食をいただた後、なのはさん達や"スキュラ"のみなさんのおかげで完成した露天風呂に、私たち女性のみが堪能中。ちなみにルシルさんとフォルセティは後で入ります。

「みなさん、今回は本当にありがとうございました」

「おかげで露天風呂施設やアスレチック、一気に充実できたよ♪」

「私からもお礼を。本当にありがとう。アルファ達も、ありがとう」

ルーテシア、リヴィア、そしてメガーヌさんが礼を述べました。本当に驚く速さで完成しましたね。製作に携わったなのはさん達が「どういたしまして♪」と返し、アルファ達は「命令だから仕方なくよ」と言って肩まで浸かりました。何気に楽しんでいましたよね。

「えー、コホン。ヴィヴィオ、コロナ、リオ、フォルセティ、んでイクス。第1回カルナージ合宿はどうだった？」

ノーヴェの問いに私たちは迷うことなく「楽しかった！」と答えました。私はどれも初体験が多く、綺麗な川で泳ぐなんてそれこそ堪能しました。だからこそ「私は、これからも多くの初体験を続けていきたいです。早く学院に通ってみたいです」と感慨深くなる。

「うんっ。すっごく楽しいよ♪」

「勉強は大変だけどね～」

リオががっくり肩を落としたところでアイリが「ところで宿題の進捗はどう？」と尋ねました。夏休みが終わるまでまだ2週間ほどあるようですので、まだ残っていそうなものですが・・・。

「僕はもう終わらせたよ」

「わたしは7割くらいかな～」

「私もヴィヴィオと同じくらい」

「・・・半分ちょっと。ちょっと遊び過ぎてた所為かも・・・」

ヴィヴィオ達の進捗情報に再び肩を落とすリオは勉強が苦手、というわけでもありませんが、遅れているようです。言っている通り少

し勉強に時間を割かなかったからでしょうね。

「イクスはどう？　フォルセティ達からいろいろと見聞きしているそうだけど」

「あ、はい。その、これまで必要のなかったものでしたので、少し苦労していますが・・・」

冥府の炎王としての私は機能でしたから、勉学など読み書きが出来さえすれば問題なかった。魔法にしても、マリアージュのコア生成は一種のスキルでしたし、私は本当に何もなかった。

「そっか～。・・・よし。じゃ、イクスに補習をプレゼントしよう」

まさかの提案に私が「はい？」と小首を傾げていると、アイリはモニターを展開して「もしもーし」と言うと、通信相手から『入浴中にどうした？』そう応答がありました。その声は紛れもなく「ルシル君！？」の声だったので、そう発したはやてさんをはじめに、私とアイリ、それにアインスさん以外のみなさんが一斉に鼻の下まで湯船に浸かりました。

「大丈夫だよ。サウンドオンリーだから、ルシルにはこっちの様子は見えてないから♪　ルシル、相談があるんだけど・・・」

・―・―・終わりです・―・―・

こうしてアイリとルシルさん主催の補習が始まったのです。最初に

ヴィヴィオ、次にフォルセティ、先ほどのコロナと出題され、３人は間違えることなく正解を示しました。みんなで一息吐いているところで・・・

「「「「アゞアゞアゞアゞ・・・！」」」」

「「っ！？」」

どこからともなく呻き声のようなものが聞こえ、さらにはゴロゴロと雷鳴が轟き、廊下の窓が光り、ドォーン！と落雷。

「「「～～～～～っ！！？」」」

声にならない悲鳴を上げたヴィヴィオとコロナは、近くに居たフォルセティに抱きついて、そして３人一緒に転んでしまいました。

「あははは！　なに今の！　おもしろーい！」

その様子にひとり笑うリオでしたが、窓がバンッと叩かれた音に「ひぅっ！？」びくりと肩を竦ませ、私も「なんです！？」と思わず目を瞑ってしまった。私は音の出所を探して、窓の外へと視線を向けたその時、「バァ！」とおよそ人とは思えない青白い顔をした女性が数人、窓の外からこちらを覗き込んでいました。

「にゃぁぁぁぁぁ！？」

「ひゃぁぁぁぁぁぁ！」

「ぐげぇぇ・・・！」

ヴィヴィオ達がまた悲鳴を上げ、２人にしがみ付かれているフォルセティは呻き声を上げたので、私は急いで「２人とも。もうその辺りで」と彼の救出に動く。コロナはすぐに顔を真っ赤にして、謝りながら離れましたけど、ヴィヴィオは離れることなくフォルセティと一緒に立ち上りました。

「もう大丈夫だってヴィヴィオ。もう居ないから・・・」

「う、うん・・・。洋館に薄暗い中での雷にお化けって・・・。ルシルさん、イジワルだよ・・・」

「ヴィヴィオって案外怖がりだよね♪　ビックリはするけど、そこまでビビる事ないじゃん♪」

そう言って胸を張るリオに視線が集まり、「あ・・・」彼女の身に異常が起きる瞬間を目にしてしまいました。ヴィヴィオとコロナが「リオ、足、足」と指差すのですが、リオは自分を怯えさせようとしている、と考えたようで「その手には乗らないよ♪」と満面の笑顔。

「あの、リオ。足元を見た方が・・・」

「え？　イクスがそう言うなら・・・」

私の言葉には耳を貸してくれたリオが自らの足元へと視線を移し、「〜〜〜〜〜っ！！？」声にならない悲鳴を上げました。床より顔と両手のみを出し、リオの両足にしがみ付く亡霊が複数体。

「き、気持ち悪いぃぃーーーーー！」

リオは魔法陣を展開して、全身から炎と電撃を発しました。亡霊はそれを受け消失。それらに疲れながらも私たちは再び歩みを進め、新たな扉の前に辿り着いた。

『問題です！　回答者フォルセティ。魔法を発動させる為の行為をトリガーと言いますが、その種類、内容を答えよ』

出題されたと同時、廊下の窓すべてからバンバン！と叩く音が鳴り始め、さらには何十体の亡霊がガシャン！と割って入って来た。亡霊の呻き声と雷鳴による音響攻撃が、ヴィヴィオとコロナの精神を削っていってしまいます。

「フォルセティ！　急いで！」

「う、うん！　えっと、呪文詠唱、コマンド、アクショントリガー、デバイスによる自動発動の４つ！　呪文は、儀式魔法や大規模な魔法発動に必要。コマンドは、単一音声による発動。アクショントリガーは、設定した特定の動き。デバイスの自動発動は、そのままの意味」

『ピンポンピンポーン♪』

正解を示す効果音が鳴るとともに扉も開き、私たちは急いで扉を潜りました。また一息吐こうとしたのですが、バンバンバン！と閉じたばかりの扉が力強く叩かれたので休む間もなく次の扉へ。この廊下では、窓でもなく廊下を隔てる扉でもなく、いくつもの部屋を隔てる扉が連続で開いていきました。

「来る！」

「あぅ・・・。もう叫び過ぎて喉が・・・・」

「うん。痛いよね・・・・」

ヴィヴィオとコロナが喉を押さえながら1歩2歩と後退したところで、「アアアアア！」そうゆう呻き声と共に扉からが亡霊出てきた。これまでならここで悲鳴を上げていたヴィヴィオとコロナでしたが、今度は悲鳴を上げることなく亡霊たちを同情の目で見ました。亡霊たちも気付いたようで、呻き声を出すのをやめて棒立ちになりました。

「笑いたければ笑えばいいじゃない」

「昼は露天風呂つくりで、夜は夜でこんな仮装で脅かし役・・・・」

「まぁデルタは楽しんでやってるけどね～」

「生前では経験できなかった事を出来ていますし」

「だからってセクハラだけは許せないと、イプシロンは付け加えておきますが」

そう。亡霊の正体は、先ほどまで一緒に温泉に浸かっていた"スキュラ"の5人。と思ったのですが、見知らぬ6人目が居たので「ん・・・？」と小首を傾げる。ヴィヴィオとフォルセティが「ガンマ・・・！」と驚きました。前髪で目元が完全に隠れていますが、血の涙の化粧が施されているのが見えますね。

「ガンマ・・・」

「えっと、久しぶり・・・」

「ウチのこと憶えているんだ、驚いた。久しぶり、プリンツェッスィン、プフェルトナー」

†††Ｓｉｄｅイクスヴェリア⇒ヴィヴィオ†††

ルシルさんの"エインヘリヤル"として召喚されていなかったガンマが、お化けの仮装をして（させられて？）わたしとフォルセティの前に現れた。憶えているんだ、って驚かれたけど、正直あんまり記憶に残ってない。直接会ったことは一度もなくて、モニター越しに何度か話したことがある・・・だけだったはず。

「ガンマ、それ違う。僕はフォルセティ、そしてヴィヴィオだよ」

「・・・そ。まぁこれで亡霊役も終わりだし、ウチはこれで失礼するよ」

「私も。全く驚いてくれたかったもの」

「なら私も。我々の神器王（マスター）は本当に人使いが荒い」

ガンマに続いてアルファとベータが、「またね」ってわたし達に手を振りながら去ろうとするんだけど、足を止めて右に左とキョロキョロして「どうやったら帰れるのかしら？」ってアルファが首を傾げた。

「それにこの仮装も戻らない」

「ウチ、アルヴィトに戻って早く続きを読みたいんだけど」

肩を落としてるアルファ達と違って、デルタが「まあまあ、いいじゃんか♪」って笑った後、「あ〝あ〝あ〝♪」って呻き声を発しながらわたし達に駆け寄って来て、わたしをギュってハグした。

「イプシロンとゼータも、せっかくなんだから楽しもう！　ほらほら、フォルセティとコロナとリオが空いてるから♪」

「これもまた、マスターからの指示ですからね。では、コホン。お、おああああああ！」

「イプシロンも参ります。が・・・ガオォォーーーー！」

ゼータはコロナに、イプシロンはリオにハグ。わたし達の視線が余ったフォルセティに集まると、「僕は男子だから」ってちょっと寂しそうに苦笑い。そうしたらデルタがわたしから離れて、「じゃあデルタがやる～♪」って言ってフォルセティをハグしたところで・・・

『問題！　回答者イクスヴェリア』

イクスが指名された。わたし達は「頑張って！」って声援を送ると、イクスが「頑張ります！」と意気込んだ。イクスは夏休みが終わってからの編入になるけど、これまでに何度か一緒に勉強会を開いたから、すごく難しい問題じゃなかったら答えられると思う。

『魔法資質と魔力資質について答えよ』

「はい。魔法資質は個人個人で差のある、得意な魔法技術の種類、といいましょうか。遠隔発生、近接、放出などなどがあります。魔力資質は遺伝性が強く、その使い魔も似た資質を得ることが多いそうです」

以前、勉強会した時に教えた模範解答を、イクスはスラスラと答えた。正解音を待つまでもなく正解だってわたし達は判ってる。遅れて正解音が鳴って、ドアが勢いよく開いた。

「やりました！」

喜ぶイクスに「おめでとう！」を送って、わたし達はハイタッチを交わしてから先へ向かおう・・・とする前に、「アルファ達はどうするの？」って聞いた。

「そこの部屋で待っているわ。あなた達がゴールすれば、自ずとこのふざけた仮装も元に戻るでしょうし。デルタ、あなたもそれでいいわね？　変に付いて行って馬鹿な目に遭わされるのは勘弁よ」

「へーい。じゃあね」

手を振って見送ってくれるデルタ、それにイプシロンとゼータにわたし達も手を振って、次のドアへと向かうために歩き出す。ドアを潜って長い廊下に足を踏み入れた瞬間、「ほわっ！？」床がグニャッと沈んだ。そしてボヨンってトランポリンみたく跳ねる。

「わはは♪　すごいすごい！　めっちゃ跳ねる♪」

「あぅ～！」

リオはすぐに体勢を立て直して廊下（トランポリン）を楽しんでて、コロナはされるがままに跳ね続けてる。わたしもなんとか体勢を立て直そうとするんだけど、「む、難しい」からお尻で跳ねちゃってる。

「あの、フォルセティ、リオ。よろしければ手を貸して頂けませんか？」

「あたしが近いから手を貸すよ。フォルセティは、ヴィヴィオとコ

ロナの方を手伝ってあげて～」

フォルセティの方を見れば、フォルセティもすでに体勢を立て直して床に着地してた。わたしとコロナは一緒に手を差し出した。距離的に2人とも同じくらい。フォルセティはわたしとコロナ、どっちを先に助けてくれるだろう。わたしだったら嬉しいな、って思ってた時もありました。

「フローター！」

フォルセティが対象を浮遊させる魔法を発動して、わたしとコロナを浮かばせた。なんだろう、なんか納得できない。フローターのおかげでゆっくりと体勢を立て直せたわたしとコロナはそのまま着地。

「大丈夫だった2人とも？」

「「・・・うん。ありがと」」

「・・・？　とりあえずフローターフィールドで足場を作れば、トランポリンの廊下をカット出来ると思う」

フォルセティが足元にベルカ魔法陣を展開して、廊下の床から少し離れた位置にフローターフィールドを、廊下と同じ長さになるように何十枚と一気に発動。最初にフォルセティが上がって、踵でコンコンとフィールドを蹴って、「よし。大丈夫。ヴィヴィオ、手を」って手を差し出してくれた。

「あ、うん、ありがとう♪」

それだけでさっき抱いた不満が消し飛んだ。フォルセティの手を取って足場に上がって、それからコロナ、イクスと続いて、リオは自力でピョンっと上がった。次のドアまでてくてく歩きながら「今度はリオだね～」って喋っていると・・・

『Ｗａｒｎｉｎｇ　！　Ｗａｒｎｉｎｇ　！　Ｗａｒｎｉｎｇ　！』

そんな警告が廊下に響いた。さらにわたし達が通って来た廊下の奥から「ズルは禁止なのだぁ～」って声がした。後ろに振り返ると廊下が綺麗さっぱり無くなっていて、代わりにブラックホールのような真っ黒な渦があった。声はそこから聞こえてくるみたい。

「フォルセティ！　ズルはナッシング！」

渦から出てきたのは、大砲２門を背中に備えた機械のドラゴン？と、その首に跨った「リヴィー！？」だった。リヴィーも"ヴァルハラ"に行きたいって言ったから、一緒に来たんだけど姿が無かったから心配してたんだけど・・・。

（お化けの仮装をしてるってことは、エインヘリヤル・・・？）

廊下いっぱいの大きさのドラゴンが雄叫びを上げると、「っ！」ビリビリと肌や窓が震えた。リヴィーが「再度警告！　ズルはダメ！」って言うと、ドラゴン？の頭をポンポン叩いた。するとドラゴン？の口が開いた。

「「「「リヴィー！？」」」」

なんと口の中にもう1人のリヴィーがうつ伏せで寝転がって、両手で頬杖を突いていた。こっちのリヴィーは仮装してないからきっとオリジナルだ。そんなオリジナル・リヴィーが「やっほー♪」って笑顔を浮かべた。

「ちょっ、何やってんのリヴィー！」

「えー？　エインヘリヤルの私と一緒に、ヴィヴィオ達が不正をしないかの監視をしてるのー！」

わたしの質問にそう答えたリヴィーに、「そんな勝手に・・・！」ってフォルセティが言うと、2人のリヴィーが同時に「勝手じゃないよ」って頬を膨らませた。

「ここヴァルハラの主、ゼフィランサスさんって人に頼まれたんだもん」

ゼフィランサスって、ルシルさんの亡くなったお姉さんだよね。〝スキュラ〟も大変な目に遭わされてるって言う・・・。わたし達とはぐれた後、そんな事になってたんだ・・・。

「ま、そういうわけだからね。ズルは無しってことで。さあ、ムゲンドラモン！　悪い子たちにお仕置きだ！　スタンバイ！」

ムゲンドラモンっていう名前らしいソレの大砲がこっちに向いたから「ストップ、ストーップ！」わたし達は大慌て。フォルセティも「すぐに解除するから！」って言った瞬間・・・

「∞キャノン！」

砲撃が発射された。フィールドを全力で走って次のドアを目指したんだけど、「きゃあああああ！」間に合わなくてわたし達は吹っ飛んだ。そして床に叩き付けられた・・・んだけど、ボヨンボヨンと跳ねて、吹っ飛ばされた勢いのまま前に向かって跳ね続けちゃう。

「お？・・・了解です！　おーい、ゼフィランサスさんから、脅かし役と出題役をするよう頼まれたから～」

「このまま攻撃続行～♪」

まさかの展開に「ちょっ・・・！」と待って、って言おうとしたけど・・・

――∞キャノン――

それより早く砲撃が放たれてきた。しかも連射してくる。見た目は砲撃というより射撃に近くなったかな。威力もそんなにないようだし。でもその所為でわたし達は「にゃあああ！」トランポリンのような床に玩ばれることに。ムゲンドラモンの攻撃が床に着弾すると、それはもう床がうねるうねる。

「じゃあそろそろ問題です！　回答者はリオ！」

ドアが見えてきたところで出題されたと同時に、ムゲンドラモンからの攻撃も止んだ。"エインヘリヤル"のリヴィーから「出題・回答中は手を出さないからね」って安心できる言葉が。

「じゃあリオ！」

「頑張って！」

「うんっ！　どんと来い！」

「魔力変換資質について答えてちょ～だい」

そう出題された瞬間、「よし！　コレは即答できる！」ってリオがガッツポーズ。

「えっとね～。魔力の変換を意識しなくても出来ちゃう資質のこと。ある種の才能だけど、その代わり純粋魔力の大量放出を苦手になっちゃうってデメリットがあったりするんだよ。炎とか雷とかの資質保有者は結構多いみたいで、凍結が珍しいんだ。ちなみに保有者じゃなくても魔力を変換することも出来るね。ま、保有者に比べて手間が掛るから、普通はわざわざ変換しないみたいだけど」

リオやフェイトママやアリサさん達が前者で、フォルセティやルシルさん達が後者だ。そんな自信満々な回答をしたリオを称えるかのように『ピンポンピンポーン♪』正解音が鳴って、ドアが開いた。

大手を振ってドアを潜るリオに続いてわたし達も潜った。

「あれ？　リヴィー達は？」

2人のリヴィーとムゲンドラモンが付いて来なかったからそう聞くと、「そこはエリア外だから」って答えてくれたと同時、バンッとドアが閉まった。

「脅かし役や出題役を任されたという話でしたが、もう終わったのでしょうか・・・？」

「だよね～。まさかもうクビになったとか？」

「さすがにそれは早すぎだよ」

そう話しながら廊下を進んでると、「おーい！」どこからかリヴィーの声が聞こえてきた。さらにもう一度「おーい！」って声がして、ふと窓の外を見ると、綺麗な白いドラゴンに跨った2人のリヴィーが手を振ってた。

「じゃあ早速、始めるよ～」

「元気よく走ってね～」

「「ブルーアイズホワイトドラゴンの攻撃！　滅びのバーストストリーム！」」

ドラゴンの開いた口から「また砲撃ぃーー！？」が発射されてきて、窓を突き破り、廊下を横断して、壁を穿った。しかも「また連射！」で、わたし達は全力で次のドアを目指して走り出す。止まったら確実にアウトだもん、あの威力。

「問題！　２週目！　回答者ヴィヴィオとフォルセティ、２人一緒に！」

「ううっ！？　こ、こんな時にーー！？」

「ドアも見えてないのにぃーーーー！」

「ほらほら、行くよ！　魔法分類を答えよ！　ヴィヴィオはミッド・ベルカの攻撃について、フォルセティは防御・補助・結界・捕縛の種類！」

ブルーなんとかドラゴンの砲撃から逃げてる最中で答えさせるこの酷さ。とにかく、答えないと始まらないし終わらない。

「ミッド！　射撃、砲撃、打撃、斬撃、魔力斬撃、遠隔発生、広域攻撃！　ベルカ！　魔力付与攻撃、射撃！」

「正解！」

答えてる最中にドアが見えて来て、オリジナル・リヴィーがそう言ったと同時にドアが開いた。ドラゴンからの砲撃が途切れたけど、わたし達はスピードを落とさずにドアを潜る。そして勢いよく閉ま

った直後、扉を破壊して現れたのは巨大な蛇？

「次、フォルセティ！」

「ハガネール！　当たらない程度にかみなりのキバ！」

放電する牙での噛み付きをしてくるハガネール。"エインヘリヤル"・リヴィーが当てないように、って注意してくれたのは助かるけど、後ろから聞こえてくる歯の打ちつけ音が怖すぎるよ。

「防御。シールド、バリア、フィールド。補助。インクリー、デクライン。結界。サークル、エリア。捕獲。バインド、ケージ。以上！」

「お、正解！」

正解はしてもハガネールとの追い駆けっこは終わらない。まだ追ってくるし、ドアは見えない。それどころか「行き止まり！？」だった。でもフォルセティがすぐに「階段！　踊り場だよ！」って言ってくれた。急いで階段を上って、１つ上の階層に足を踏み入れるとすぐに足り出す。

「も、もう、限界、かも・・・！」

肩で大きく息をしてるコロナがとうとう足を止めた。それに構わず壁に出来た黒い渦からは「次の問題いくよ～」って、骨格だけの四足歩行動物に跨った２人のリヴィーが出て来た。フォルセティが「俺が背負う！」ってコロナを背負った。羨ましいな～って思いなが

らも、そんな余裕がないことにげんなり。ここはフォルセティに任せて、わたし達は走り続ける。それから何度か問題を解いたあと・・・

「そこがゴールだよ」

「全２０問、ミス無しでクリア♪」

「んじゃ、私は先に戻ってるね～」

辿り着いたのは大きなドア。オリジナル・リヴィーの姿が蜃気楼のように消えて、"エインヘリヤル"・リヴィーは「ささ、入って入って！」って促してくれた。頷いたわたし達はドアに手を置いて、「せーの！」グッと押して開く。すると眩い光が溢れ出してきて、ふわっと浮遊感が襲ってきた。

「おめでとう！　これからも勉強を頑張って、誇れる自分になってね♪」

最後に女の人の声が聞こえた。こうして"ヴァルハラ"での補習は終わって、そして2泊3日のカルナージ合宿も終わりになる。わたし達は"ヴァルハラ"から帰ってすぐに就寝。そして最後のメガーヌさんお手製の朝ご飯を食べた後、いろいろと片づけ。そして次元港へ。

「メガーヌさん、ルーテシア、リヴィア。お世話になりました！」

なのはママに続いて「お世話になりました！」ってお礼をした。

「はいっ。ホテル・アルピーノをこれからも御贔屓に♪」

「「御贔屓に♪」」

こうして第1回カルナージ合宿も無事に終わった。

Ｅｐｉｃａ８－Ａ邂逅～Ｋｏｅｎｉｇ　ｄｅｒ　Ｕｎｔｅｒｗｅｌｔ　ｕｎｄ　Ｋａｉｓｅｒ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「ふんふふ～んっと♪」

自室で鼻歌を口ずさみながら、「コレとコレ～♪」っとクローゼットから白のジャケットと黒のワンピースを引っ張り出す。今日の主役はわたしでもないけど、さすがに普段着で行っていいわけでもなし。身支度を整えた後、屋敷のエントランスホールへ。

「お待たせ、イクス！」

「あ、いえ。私もちょうど今、準備を終えて来たところですから」

エントランスホールに先に着いてたイクスに「制服とっても似合ってるよ♪」って褒める。今のイクスはいつもの普段着じゃなくて、ザンクト・ヒルデ魔法学院の夏用制服だ。それなりに長かった夏休みも終わり、今日から新学期。んで、イクスは今日から登校なのだ。いやぁ～、聖祥小の初登校時を思い出すよ～。

「ありがとうございます！　これまでに幾度かこの格好を褒めてくれましたけど、それでも嬉しいです」

照れ笑いするイクスが愛おしすぎてハグしたいけど、制服が皺にな

っちゃうのはさすがにまずいから自重。そこに「ごめんなさいね。一緒に行けなくて」って謝罪の言葉と一緒に「母様」が姿を見せた。

「本当なら母親の私が行くべきなのだろうけど、どうしても外せない予定が・・・・」

「平気ですよ、母様。母様はお仕事ですし。それにシャルが居てくれます」

「本当に良い子で・・・・。シャル、イクスをお願いね」

「大丈夫だよ。じゃあいってきます！」

「いってきます！」

「はい。いってらっしゃい♪」

母様と手を振り合って外に出て、わたし達を学院まで送ってくれるリムジンへと向かう。車の前に立っていたルーツィエが「待ってたよ～」って出迎えてくれた。それに側にはオットーとディードが並んで待ってた。わたし達が3人に近付くと、オットーが車のドアを開けてくれた。

「イクス。ドア枠に頭をぶつけないように気を付けてください」

「ありがとう、オットー」

イクスが乗り込んだ後、わたしも乗り込んだんだけど、「まさかの挨拶なし！？」だった。イクスにはちゃんと気を付けるように言ったのに・・・。するとオットーは「もう必要ないのでは？」なんて言う始末。

「ディードぉ～」

「ぅ、シャル、仮にも私たちの姉なのですから、そんな情けない声を出さないでください。・・・もう。シャル。乗り込む際は頭に気を付けてくださいね」

「ありがとう。遅いけど」

もうイクスの隣のシートに座っちゃってるよ。まぁとにかく「いってくるよ」って手を振ると、イクスも「オットー、ディード、いってきます！」って嬉しそうに手を振った。

「はい。いってらっしゃいませ」

「学院生活、楽しんで来てください」

「はいっ♪」

「オットー、ディード。わたしはこのまま本局へ向うから、またしばらく家を空けることになると思う」

「判った。気を付けて行ってきてください」

「ん。出して、ルーツィエ」

「では出発します」

一路Ｓｔ・ヒルデ魔法学院へ。基本的にイクスは車で送り迎えになる。イクスがヴィヴィオ達と合流できるのは学院の敷地内になるからだ。何せヴィヴィオ達の住む町とわたし達の住む町は正反対だからね。

「じゃあ私は駐車場で待ってるから、学校が終わったら戻ってきてね、イクス」

学院に到着して、わたしが車から降りる時にルーツィエがイクスにそう伝えたら、「あの・・・」ってイクスが返答に渋った。わたしも経験しているからすぐに察せた。

「帰りはヴィヴィオ達とどこか遊びに行きたいんでしょ？」

「あ、はい。ダメ、でしょうか・・・？」

「判った、良いよ。でも帰りに連絡をくれる？　そこまで迎えに行くから」

「ありがとう、ルーツィエ！」

イクスも車を降りて２人で校舎へ。客人用のエントランスから入っ

て教員室に向かう途中、「ごきげんよう♪」って挨拶された。そこには「ヴィヴィオ、フォルセティ、リオ、コロナ！　ごきげんよう！」の４人が居て、こっちに向かって駆け寄って来た。

「合宿ぶりね、４人とも。ちょっと先生と話してくるから、よかったらここで待っててもらえる？」

わたしがそう伝えると４人は「はいっ！」って元気良く返事をしてくれた。んで、わたしとイクスは教員室に入る。ほぼ１０割が聖王教信者とシスターいうこともあって顔見知りばかり。

「お待ちしていました。イクスヴェリア様・・・じゃなかった、イクスヴェリアさんの担任となる、カヤ・ペリノアです。憶えていますか・・・？」

「はい。以前、校舎を見学させていただいた時にお世話になりました」

イクス、それにヴィヴィオとフォルセティとコロナの担任は、わたしも教会本部で何度も言葉を交わしたことのあるシスターの１人、シスター・カヤ。治癒魔法や自身や他者への強化魔法が得意な衛生隊――水色扶桑花騎士隊ヘルブラウ・ヒビスクス所属だ。そんなシスター・カヤと今後のスケジュールの確認などの話をした後・・・

「ではイクスヴェリアさん。クラス委員長が迎えに来てくれるので、教室まで案内してもらってください」

「委員長・・・。確か、フォルセティとコロナがそうでしたね」

「はい。2人とはお友達でしょうから、不安はないと思います」

すでにヴィヴィオ達が迎えに来てくれているのを知っているイクスは、「はいっ。お先に失礼します！」とソファから立ち上がりシスター・カヤに一礼をしてから、「シャルも。お仕事がんばってください」って微笑んでくれた。

「ありがと♪　イクスも楽しんで来てね」

手を振り合ってイクスを見送った後、「いやぁ、緊張しますね～」ってシスター・カヤがホッと一息ついたから、「先生がそれでどうするんですか」ってわたしは苦笑した。

「騎士イリスは貴族だからですよ。一般家庭生まれの私にはきっついです。聖王、魔神の末裔のヴィヴィオさとフォルセティ君に続き、冥王本人であるイクスヴェリアさんが加わるとなれば、気を失なっても笑われませんよ」

「あはは。でもさ、どの子も良い子だから心労は無いでしょ？」

「ええ、それはもう。困っていたら助けてくれますし。クラスのまとめ役として頑張ってくれますし・・・」

「なら何も問題なしでしょ。イクスも良い子だから、絶対に苦労することないはずよ」

「はい。ですね。・・・よしっ、頑張ります！」

シスター・カヤとの話も終わって、「失礼しまーす」と教員室、そして校舎から出たところで、「あ、シャルだ！」って声を掛けられた。

「この双子特有のハモり方は・・・ほら、セレネとエオスじゃん」

義理の弟にあたるユーノに恋する双子の乙女（って歳じゃないか）のセレネとエオス。教員ってことで化粧はうっすらだけど、それでも魅力的な大人の女性になってる。服装だってシックなレディースーツだしさ。

「なんでここに？・・・って、イクスが通うのって今日からだっけ？」

「あ、そうか！　あーでも残念。私もセレネも、担当クラスが違うからなかなか会えないんだよね」

「来年のクラス替えにちょっと期待」

2人も今では1クラスを任される教員なのよね。いやぁ、世の中面白い。ここで、「ユーノとの進展は？」って聞いてみた。わたし達は1人の男性を想い、強力なライバルもいる同志。気にはなっていたりする。

「・・・その事、ね」

「進展はまったく無いよ」

残念な返答だったけど、２人は微笑んでいて陰りを見せない。何か反撃のチャンスでもあるのかな？って思ってたら、「ユーノへの片思い、もうやめようかなって、さ」そんなことを言いだした。

「え・・・？」

「ユーノにとって私たちはどこまで行っても、姉、なんだよ。どれだけアプローチをしても、姉としてのスキンシップって思われちゃうの」

「愛の告白なんてする気も失せるってものだよ」

空を仰ぎ見て自嘲する２人に、「そんなこと・・・」ってフォローしようするけど、二の句が継げなかった。本当は判ってたから。ユーノはもう、なのはしか見ていないって。なのはは悲しくなるほど鈍いし、ユーノも奥手だから全然進展する気配はないけど。でも、それだけで今は十分って感じなんだよね・・・。

「決め手はヴィヴィオだった。ただでさえユーノとなのはは２人で何度か逢っていたのに、ヴィヴィオの読書家っていう趣味が高じてさらに逢う頻度が多くなって・・・」

「アポなしで無限書庫のユーノに逢いに行った時にさ、見たの。３人が仲良く楽しそうに話をしてる姿を」

「その時に私たちは悟った。・・・もう潮時なんだ、って」

それは失恋を自覚した話なのに、それでもやっぱり2人の表情は普段通り。これまでの2人のユーノに対する想いを知っているから、かえってこちらの胸が締め付けられる。私の表情が今どうなってるのか自覚できないけど、「そんな悲しそうな顔しないで」って言われた。

「あ、だからって、なのはもヴィヴィオも嫌いになるわけじゃないよ？」

「なのはは変わらず大切な友達で戦友だし、ヴィヴィオも生徒で友達だし」

「負け惜しみに聞こえるかもしれないけど、ユーノには幸せになってほしい」

「「ね～♪」」

そう言って満面の笑顔を浮かべる「セレネ、エオス・・・」になんて声を掛ければいいのかもう判らない。

「ねえ、シャル。私たちね。別々の男性からお付き合いしてもらえませんか、ってお誘いを受けてるの」

「私たち、ＯＫしようって考えてる」

「ちょっ、え、待って、いいの・・・？」

もう引き止めるのは無理だって解ってるけど、つい口に出してしまった。セレネは「うん。格好いいし」って微笑んで、エオスも「優しいし」って照れ笑い。だからもう「そっか」ってわたしも受け入れるしかなかった。

「おっと。そろそろ行かないと。またね、シャル」

「また暇があったら遊びに行こう♪」

「あ、うん」

2人と手を振り合って別れようとした時、「あ、そうだ」って2人は足を止めて、わたしに振り返った。そして「先輩からアドバイスを」って真面目な顔になった。

「シャル。1人の男性を想い続けるのは素敵だよ。でもね・・・」

「諦めて、新しい恋を探すのもまた勇気だと思う」

それだけ言って、セレネとエオスは校舎の中へと入って行った。わたしはその場に佇んだまま、「それでも・・・！」って両拳を力強く握り締めた。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒イクスヴェリア†††

人生初の学生生活、その初日。私は質問攻めに遭った。聖王教会系列のミッションスクールということもあり、ベルカ史に詳しい生徒もいまして、私のイクスヴェリアという名に反応を示す子も少なくなく・・・・。

「はふぅ～・・・」

私が冥王本人であるということは、その歴史的に見て伏せた方が良いということで、私は直系の同名として振る舞うことになった。その事を説明するだけで結構な疲労が。騎士カリムも歴史マニアでしたが、それに負けず劣らずのマニアが居たのは想定外です。思わず机に突っ伏して一息吐いた。

「お疲れ様～♪」

「僕とヴィヴィオも、1学年の頃に味わったよ。先祖というかオリジナルというか、その人が有名だと大変だよね」

「私はその当時は見てる側だったけど、大変だな～って思ってたよ」

私の席にやって来てくれたヴィヴィオとフォルセティとコロナ。私の初めての友達です。質問攻めの際にも幾度か助け船を出してくれましたから、本当に助かりました。

「ねえ、イクス。朝にも聞いたけど、放課後は時間があるんだよね？」

「はい。シャルからも許可をもらっていますし、大丈夫です」

「やった♪　じゃあ今日、学院周辺を案内するよ♪」

「はい！　お願いします！」

そうして放課後となり急いで帰り支度を終え、級友のみなさんと「ごきげんよう！」と挨拶を交わし、ヴィヴィオ達と廊下へ出ると、「やっほー♪」とリオが出迎えてくれました。リオだけは別のクラスなので、休み時間や今のように放課後でなければ逢えないのです。

「ねえねえ、今日はどうすんの？　どこか遊びに行く？」

「校舎はこの前に見学したってことだから、学院の周りを案内しようかな～って」

「帰り道の買い食いはダメだけど、ウィンドウショッピングとか寄り道とかは許されてるから」

「いろいろ見て回ろうね、イクス♪」

そういうわけでして、学院周辺の案内をしてもらうことになり、校舎のエントランスへ向かうのですがその途中、視界の端にポツリと1人で佇んで、こちらを見ている少女の姿を捉えることが出来た。

（彼女は・・・）

私は歩く速度を僅かに落とし、彼女の方へと体を向ける。すると彼女は私の視線に気付き、踵を返して立ち去ろうとした。ですので、「すいません。先に行って待っていてください」とヴィヴィオ達に伝えた。

「あ、うん」

「トイレ？」

「「「デリカシー！」」」

「あいたっ！？」

ヴィヴィオとコロナとリオの３人に殴られたフォルセティに苦笑しつつ、「ではいってきます」と私は手を振って、彼女の後を追う。彼女に声を掛ける同級生は居らず、どこか孤高の雰囲気を醸し出していますね。人気が少なくなって来たところで・・・

「何か御用ですか？」

彼女はそう言って立ち止り、私へと振り返りました。碧銀の髪、紺と青の光彩異色。それはまさしく「覇王イングヴァルト・・・」の身体資質。そう漏らしてしまうと、「あなたは・・・！？」と目を見開きました。

「この姿でこうして普通に言葉を交わすのは初めてですね、覇王クラウス」

「・・・噂は本当だった、ということでしょうか。冥府の炎王イクスヴェリア陛下・・・？」

「はい。・・・貴女はかの覇王の記憶と覇王流を継承している、と聞き及んでいます」

「少し、場所を変えていいでしょうか？」

「でしたら私の友人の元へ参りませんか？　ヴィヴィ――」

「行きません！」

ヴィヴィオ達の元へ行きましょう、と提案しようとした途端、彼女は――アインハルト・ストラトスはそう声を荒げました。ですので付近に居る他の生徒たちの視線を一手に引き受けることに。

「・・・はぁ。とりあえず場所を移しましょう。近くに空き教室がありますので」

「判りました」

彼女の後に続いて入った教室は確かに無人で、しかも付近にも人気は無いので、ここでなら多少大きな声を出しても外にまでは漏れないでしょう。室内に入ったきりこちらに振り向かない彼女に「なぜ、ヴィヴィオ達の元へ行かないのです？」と尋ねた。

「その考えこそ私にとって、なぜ？ですよ、イクスヴェリア陛下」

「・・・聖王女オリヴィエ、魔神オーディン様。その本人ではないとはいえ、かつての貴女が共に戦った戦友で、友人なのでしょう？」

「たった今、あなたが言った通りです。あの2人は、オリヴィエ殿下でもなくオーディンさんでもない、ただのクローン。仲良くする道理はありません」

複製（クローン）。あの子たちと深い関係になった今、その言葉が胸に刺さって痛む。あの子たちが生み出された経緯はすでに聞き及んでいます。兵器として利用されるために生み出されたのだと。悲しかった。この子たちまで・・・と。

「この短時間に疑問ばかりが生まれてきますね。ならば問いましょう。どうして貴女は、ヴィヴィオとフォルセティを見守るような真似をしているのです？　先ほどもそうでしたが、以前からあの子たちを見守っているそうではないですか」

「・・・！」

「なぜです？　友人になりたいからなのではないですか？」

「違います・・・」

「切っ掛けが欲しいのですか？　では私と共に参りましょう。あの子たちは本当に優し――」

「違いますっ！」

声を荒げて否定をしてきました彼女は肩で息をして、数度の深呼吸の後に「私に友人など不要です」と言い捨てました。

「ではどうして？」

「私は覇王。覇王ハイディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルト。覇王クラウスの思いを受け継いでいます」

「それがなにか？」

「覇王とは読んで字のごとく覇を成す王なのです。現代を生きる古きベルカの数多の王を打倒し、そしてベルカの、ミッドチルダの、いいえあらゆる次元世界の天地に覇王の名を轟かせる。それが私の成すべき事なのです。聖王も、魔神も、雷帝も、そして冥王、あなたも・・・。私が打ち倒します」

あまりの愚見にさすがの私も絶句せざるを得なかった。彼女はそれだけを宣言して、私の隣を通り過ぎようとしましたが、私は「待ちなさい！」と制止する。

「何を言っているのか解っているのですか！　ベルカという世界はもうすでに亡んでいるのです！　当時の王も当然死去していますし、その末裔も争いとは無縁の世界に生きています！　それを、貴女の独り善がりな執念で邪魔をするというのですか！」

「・・・。覇王流カイザーアーツと覇王イングヴァルトの強さを証明するためです」

「それは志半ばで討たれたことへの恨みも入っていますか？」

「いいえ。それは逆恨みというものです。・・・悲願なのです。私の記憶の中に居る彼、クラウスの・・・。天地に覇を以て和を成せる王となる、と」

それは本末転倒な気がしますが・・・。次元世界では未だに紛争が、そして犯罪が起きています。完全な平和な世界とは言えませんが、ベルカ戦乱時代に比べればまだ平和な方です。それを彼女が乱すなんて愚の骨頂としか・・・。

「理由はどうであれ、あの子たちに手を出すということは、２人の御家族や聖王教会騎士団を手に回すということ。その覚悟はおありですか？」

その大半がＳクラスの魔導師・騎士。私もかつては数多くの英傑を見てきました。だからこそ判る。アインハルトは決して弱くはありません。ですがそれはあくまで子供の範囲内での話。今の彼女はまさしく井の中の蛙。クラウスの記憶を持っていようとも、実際に戦闘を経験しなければ、自身の今の実力を理解でないはず。

「・・・。それが必要なのであれば」

「どうしてそこまで・・・」

「・・・弱かった所為で、強くなかった所為で、彼は彼女を救うことが出来なかった・・・。その後悔が私を苛むんです・・・。ですがその後悔をぶつける相手ももう居ません・・・！　ならせめて、この現代で覇王こそが最強であると示すしか・・・！」

これは私ひとりでは解決できないようです。クラウスの、オリヴィエを救えなかった、という後悔があまりにも強すぎて、子孫であるアインハルト・ストラトスの心を苛んでいる。冥王イクスヴェリアとしての私は、彼らとは談笑できるほどの交友関係ではなかった。だから私の言葉は届かない。

（だからと言ってここでヴィヴィオを出すのは、あまりにも勝手です・・・）

ヴィヴィオの優しい心なら、アインハルトの傷ついた心を癒してくれるでしょうが、それを丸投げするわけには・・・。グッと握り拳を作って、「話が無ければ、これで失礼します」と去っていく彼女の背中を見送った。

Ｅｐｉｃａ８－Ｂ邂逅～Ｆｏｒ　ｈｅｒ　ｓａｋｅ～

†††Ｓｉｄｅイクスヴェリア†††

アインハルトとの邂逅より１週間。私も学院生活にすっかり慣れ、ヴィヴィオ達以外の友人にも恵まれています。そして今日は、ヴィヴィオ達がノーヴェさんから指導を受ける日。私もトレーニングウェアを用意して、体づくりのために一緒にランニングをし、その後にストライクアーツ練習場へ移動。ノーヴェさんの指示でヴィヴィオとリオ、フォルセティとコロナが組み手を始めた中・・・

「ノーヴェさん。少しお話があります」

「話？　ああ、いいぞ」

ノーヴェさんにアインハルトの事を相談してみた。過去から受け継がれている聖王と覇王の因縁によるアインハルトの心労。このままでは彼女が何か大きな過ちを起こしそうで・・・。私と彼女はそう深い関係でないにしても、共に大国イリュリアを相手に戦った戦友。見捨てるわけにもいきません。

「――なるほどな。そのアインハルトって子は、スポーツとか好きそうか？」

「あーいえ。おそらく興味はないかと。最強を目指すと言って聞きませんし。聖王（ヴィヴィオ）やフォルセティ、もしくはルシルさんをも敵に回す

という始末で・・・」

「うはぁ。軍神(ルシル)さんを敵に回すとか・・・。マジで言ってんのかよ。あの人に膝を突かせるなんて、局と教会騎士団合わせても１０人いるかどうかだろ。もし本気だってんなら、さすがにやめさせねぇとな」

ノーヴェさんはグッと握り拳を作り、さらに「それに教え子(ヴィヴィオ)達を預かる身としちゃ、黙って見過ごせねぇ」と力強く頷きました。

「・・・なぁイクス。最強を目指すって話だが、あれか？　ベルカ時代みたく殺し合いみたいなニュアンスか？」

「さすがにそれは無い、と思いますが・・・」

礼儀正しい子でしたし、纏う雰囲気も誠実そうでした。犯罪に手を染めるような真似だけはしないはず。ノーヴェさんは「うーむ」と腕を組んで深く考え込みました。やはり難しい相談だったのでしょうか。

「話を聞く限りじゃ、アインハルトはスポーツとしての格闘家の方が向いてると思うんだけどな。格闘家だって自分の実力で最強を目指してんだ。戦乱時代の殺し合いと現代のスポーツとじゃそりゃ違う事もあるだろうさ。でもどっちも勝つ事を目的としてる。アインハルトに、それを説く。もうこれっきゃないだろ」

「なるほどです。ではやはり一度、ヴィヴィオと顔合わせさせた方

がいいでしょうか？」

「だな。ヴィヴィオの心は広く、思いやりもある。アイツの優しさを頼るしかない」

ノーヴェさんと強く頷き合い、「急ぎの方が良いですか？」と確認すると、「ソイツはすぐにでも動きそうか？」と聞き返されたので、「おそらく、すぐには動かないかと」と答える。

「その心は？」

「シャルから聞いた話ですけど、アインハルトはヴィヴィオとフォルセティが学院に入学した当初より2人を確認していたそうです。それでも手を出さないのは、迷いがあるからか・・・もしくは待っているか、です」

「待っている？」

「自分の実力が他の王と拮抗するか超越するか、ヴィヴィオ達が打倒するに相応しい実力を身に付けるか、です。あくまで私個人の意見ですので、正解かどうかは不明ですが」

「いや、お前の感想を信じるよ。・・・とりあえずアインハルトと話してみよう。次の練習日は2週間後だ。そん時に連れて来てもらえると助かる」

「判りました」

さて、どうやってアインハルトを連れて来ましょうか。今からその事だけを考える。彼女はもう私の話を聞かないでしょうし、無理やりというわけにもいかないでしょうし。ノーヴェの練習メニューをしっかり終えた後の一度目の休憩時、「ヴィヴィオ。ちょっといいですか？」と、タオルで汗を拭う彼女に声を掛ける。

「ん、なーに？」

「それとフォルセティ」

「どうしたの？」

この件にもっとも関わりのある（本人たちは知らないですが）２人に声を掛ける。２人だけが呼ばれたことでコロナとリオが顔を見合わせ、コロナが「じゃあまた後で・・・」とリオのトレーニングウェアの袖を引っ張りました。

「待ってください。コロナとリオも一緒に居てください。今後の私たちに関わってくる事なので」

「こ、今後・・・」

「なんか大事な話・・・？」

そう身構えなくてもいいのですが。ともかく「仲間が１人増えるかも、という話です」と伝えると、ヴィヴィオ達は「おお！」と歓声

を上げました。

「ねぇねぇイクス、どんな人なの！？」

「わたし達の知ってる子！？」

「強い？　強い？」

ヴィヴィオ達からの質問攻めを受ける私を見てフォルセティが「待って待って、落ち着こう！」と助けてくれました。ノーヴェさんも「整列！」と指示を出し、「はいっ！」とヴィヴィオ達を整列させました。

「よし。じゃイクス。続きを」

「あ、はい。実は――」

ノーヴェさんに相談した事をヴィヴィオ達にも伝えた。すると「覇王イングヴァルト・・・」とヴィヴィオが呟きました。ヴィヴィオはオリヴィエのクローン。金色の髪、紅と翠の光彩異色、虹色の魔力光は受け継いでいますが記憶を継承していませんので、覇王イングヴァルトについては知識でしか知りえないでしょう。

「あの～。それでわたしは何をすればいいのかな？」

「アインハルト・ストラトスと闘ってくれませんか？」

「うえっ！？　えっと、闘うってそれは試合ということでいいの？」

「はい。もちろんです」

ヴィヴィオとアインハルト。聖王女と覇王。良い方にも悪い方にも転がるかもしれませんが、丸投げすることなくそこは私たちみんなでフォローしましょう。すぐには判り合えずとも、必ずアインハルトを過去から連綿と続く悲劇の記憶から救ってあげたい。

「練習が終わったら図書館に行って、覇王イングヴァルトを調べてみようか・・・？」

「それ良いかも♪　覇王流だっけ？　それの対策も考えないと」

「コロナ、リオ、ナイスアイディア！　ヴィヴィオ、僕たちも手伝うからアインハルト先輩攻略を考えよう！」

「「「先輩呼びなんだ・・・」」」

「おかしいかな・・・？」

アインハルトは初等部の最上学級の第5学年で、私たちは第3学年。先輩後輩の関係なのは間違いありませんけど。ここはやはり「敬称はさん付けでいいのでは？」とフォルセティに提案する。いきなり先輩呼びはかえって失礼な気がします。

「じゃあアインハルトさんで。じゃあこの後は、図書館へ直行って

いうことで良いんだよね？」

「うん！」

そういうわけで、練習メニューをすべて終え、シャワールームで汗を流して着替えた後、「図書館にしゅっぱ～つ！」するのですけど・・・。

「悪ぃな。あたしはこれからバイトでさ」

ノーヴェさんはアルバイトや救助隊のお手伝いをしており、さらに私たちのコーチを引き受けてくれています。その忙しさは相当なものでしょうから、私たちは「ありがとうございました！」とお辞儀をして感謝を示す。

「おう！　そんじゃまた2週間後な」

ノーヴェさんと手を振って別れた後、早速図書館へと向けて歩き出す。その最中に通信端末を取り出して、中央図書館に寄り道してきます、という旨のメールをルーツィアへと送信。するとすぐに、迎えの連絡はまたちょうだい♪と返事がきました。

「覇王流ってどんな技があるのかな～」

道すがらリオがそう漏らしました。イリュリア戦争時、私は前線本部で敵味方構わず死体をマリアージュ化させていたので、覇王流の詳細はよく判っていないですし・・・。ここで、「あ、イクス」

とフォルセティに呼ばれました。

「なんでしょう？」

「僕のオリジナルである魔神オーディン。その人はイクスや聖王女オリヴィエ、そして覇王クラウスと同じ時代に生きて、そして友人だった。だよね？」

「ええ、そうですよ。私は友人と呼べるかどうかは怪しいですが」

もう少し御三方と言葉を交わせれば良かったのですが、国がそれを許さず、私自身も積極性が無かったため、それは最後まで叶わなかった。唯一の救いは、オーディン様と僅かな時間ですが２人きりでお話できたこと。長い人生、それに比べて短い活動期間の中で、それは私の大切な思い出。

「残念ながら僕は引き継げなかったけど、セインテスト家の人間には複製ってスキルが代々引き継がれていくみたいなんだ。初代から当代のお父さんまでに複製されてきたスキルなどを全部扱えるってことでさ」

「なるほど！　ルシルさんなら覇王流を複製してるかもしれないってことだね！」

「それなら早速、連絡をしてみようよ！」

「待ってリオ。フォルセティ君。ルシルさん、今日はお仕事？」

「え？　あー、うん。今日はミッド地上本部で待機、だったかな・・・」

「それなら連絡入れても大丈夫なんじゃない？」

「うーん。じゃあ・・・」

特務零課や内務調査部の本部がある本局ではなく地上本部。何かお仕事をしていそうな気がしますが・・・。リオに言われるままにフォルセティがルシルさんへと通信を入れることに。モニターが展開され、コール音が数秒鳴った後、『どうした～、フォルセティ』とルシルさんがモニターに表示されました。

『あれ、なんだ、ヴィヴィオ、コロナ、リオ、それにイクスも一緒か。そういや今日はノーヴェとのトレーニングで、フライハイト邸に泊まる日だったか。お疲れ様』

ルシルさんに名前を呼んでもらえるだけで胸の内が温かくなる。胸の前でキュッと両手を組んでいると、フォルセティが「ちょっと聞きたい事があって」と本題を切り出しました。そして私が、アインハルト・ストラトスの一件をどうにかしたいということを伝える。

『あぁ、その話か。俺もシャルからその話を聞かされているよ。前世の記憶に縛られて、大切な子供の時間や楽しい学生生活が送れないのは可哀想だと考えていたんだ』

ルシルさんの言葉に私は全面的に同意する。今の学生生活は本当に楽しくて、夢のような時間で。それを謳歌できないのは本当に悲しい事。そして話は本題の「覇王流、複製してない？」という質問へ。

『なるほど。アインハルトは覇王流も受け継いでいるらしいからな。その対策で俺を頼ってきたか。ふふ、うん、悪くない』

「その反応は！　ルシルさん、複製してあるの！？」

「見せてほしい！って贅沢は言わないので、どういうものかだけ教えてください！　参考にしたいです！」

「お父さん、お願い！」

「あ、でもお暇な時に満たせてもらえると嬉しいです！」

リオ、ヴィヴィオ、フォルセティ、コロナに続いて私も「ルシルさん」とお願いする。

『・・・クラウスが覇王流を極めたのは、オーディンが戦死した後に勃発した聖王戦争、そのさらに後なんだ。イリュリア戦争時には確かに覇王流の兆しはあったが・・・。アインハルトの今現在扱える覇王流は、俺の知る不完全ではなく完成されたものかもしれない』

クラウスが覇王と呼ばれたのは確かに聖王戦争後から。覇王流も聖王戦争時辺りから完成していたものと思われますので、オーディン様は不完全な覇王流しか複製できていないのでしょう。

「あの、それでも教えてほしいです」

『判った。俺の知るクラウスの戦い方は、断空と呼ばれる技術を用いたものだ』

「「「「「断空・・・？」」」」」

『足先から練り上げた力を拳足に乗せて撃ち出す、というものだ。その破壊力は凄まじい』

そう言ってルシルさんは数歩ほど後退して、全身がモニターに映るようにしました。そして構えを取り、その断空という技術を私たちに見せてくれました。ポカンと口を開けている私たちに、ルシルさんは『今のが断空だ。が、この程度なら練習すれば誰でも出来ると』と言い、さらに『覇王流はさらに今のを極めたものだ』と続けました。

「な、なるほどです・・・」

『ヴィヴィオ。俺が一度スパーリングの相手をしてみようか？　不完全ながら断空の威力を体験してみると良いと思うが・・・。どうだろう？』

「良いんですか！　ぜひ！　ぜひぜひ！」

モニターに顔を近付けてルシルさんからのお誘いをＯＫしましたヴ

ィヴィオ。そしてルシルさんは、明日の日曜日と来週の土日なら空いているとのことで、その日に私たちはフォルセティの家でもある八神邸にお呼ばれさせてもらうことになりました。

†††Ｓｉｄｅイクスヴェリア⇒アリサ†††

「アンタね～。物に八つ当たりするなんて、らしくないし見っともないからやめなさいよ」

会議室で怒鳴りまくってたルシルを心配したあたしは、アイツの様子を展望ロビーにまで見に来ていた。ロビーに来てみれば１人だけだったルシルは、何を思ったのか妙な技を使った上での正拳突きをして、拳から強烈な衝撃波を放った。その影響で近くにあったソファのいくつかを吹っ飛んだ。

「違う。そんな子供っぽい真似をするか」

「ふーん。ま、別にいいわ。ほら、ソファを直すわよ」

「ああ、すまん」

ルシルと一緒に転がってるソファを元の位置で立てる中、「で？何やってたのよ。誰かと通信してたみたいだけど」って聞くと、アイツは「見てたんじゃないか」って苦笑した。ルシルの前にはモニターが展開されていたしね。誰と通信していたのかは見えなかったけど。

「ヴィヴィオ達からちょっとした相談をな」

「なるほど。だから機嫌が治ってるわけね～」

ついさっきまでルシルは調査官としてある案件を担当してた。ミッド地上本部の財務部所属の局員による横領事件。本来は地上本部の監査が調査するべきなんだろうけど、財務課担当の監査官がグルだったこともあって、とうとう本局の調査部からルシルが派遣されてきたのよね。

・―・―・回想よ・―・―・

地上本部の会議室の1室を借り切っての調査会。あたしは首都防衛隊第4隊・バニングス隊の隊長として、地上本部に所属する局員として、傍聴席として用意されている後部の席に座る。隣には第3隊・グランガイツ隊の隊長のゼストさん。

「――ギャンブル？　否定はしないさ。それを趣味にしている者もいれば仕事にしている者もいる。借金？　すればいいさ。金を借りるほどに落ちぶれたのは自業自得、自己責任だ。だが何故そこで横領なんていう話が出てくる？」

件の横領局員にはそう言い放ち・・・

「秩序と正義を司る管理局、その内部を取り締まる調査部の一員が、金銭に目が眩んで悪事に手を貸した？」

監査官にはそう言い放った。２人ともルシルよりずっと歳のいった局員で、思いっきり歯を噛んで大声を上げるのを耐えてるわね。どうせ、若造風情が、とか思ってんじゃないの。

「お２人はそれなりの地位と役職に就いている。局より頂いている給金も並の局員より高い。人生を棒に振ったな。で、マッカン会計官。あなたは横領した金で借金の返済をするどころか、さらにギャンブルに手を出しているな。随分と馬鹿な真似をしているものだ」

そう言ってルシルが複数枚と展開したモニターには、借用書やらカジノで豪遊している会計官やらが表示された。すると会計官が「プライバシー侵害だ！」って怒鳴って、ルシルを指差した。

「プライバシー侵害？　はぁーッ！　プライバシー侵害だと？　捜査官が犯罪の調査をしたらプライバシー侵害か？　ふざけた事を抜かすのもいい加減にしろよ貴様・・・！　しかもこのうちの何枚かは貴様が年甲斐もなくやっているブログに乗せられている物だ！　プライバシー侵害などと怒鳴るならブログなどするな！」

あそこまでルシルがキレるのってなかなか無いわよね。会議室に居る他の局員も、ルシルの放つ怒気に気圧されているのか息を呑んでる。

「我々は管理局員だ！　正義と秩序を胸に次元世界の平穏を守る守護者だ！　それを自ら破ってどうする！　自覚を持てよ！　今の局に対する世論を聞いたことがあるか！？　不正続きで信用できない、だ！　それを加速させるような真似を、勤続何十年というあなた達

が起こしてどうする！　その所為で我々調査部も無能扱い！　俺が世話になった先輩は心を病んで辞めたよ！　お前たちのような自覚の足りない連中の所為でな！　あぁ、これは俺個人の恨み辛みだ！　どうぞ聞き流してもらって結構！　だが忘れるな！　少数の不正でも、多数の人間に迷惑を掛けているということを！　以上！」

・―・―・終わりよ～・―・―・

って、散々怒鳴りまくったルシルは、仕事が終わると同時に真っ先に会議室を出て、あたしは後を追って来たんだけど・・・。ヴィヴィオ達との通信で機嫌が治ってるっぽいから良かったわ。ソファを全部直し終えた後、「よう、坊主、アリサ嬢ちゃん」って野太い声が掛けられた。

「「ナカジマ三佐、クイントさん。お疲れ様です」」

展望ロビーの出入り口に居たのは、以前あたしがお世話になっていた陸士１０８部隊の隊長、ゲンヤ・ナカジマ三佐と、その奥さんのクイント・ナカジマ二尉。クイントさんは「ルシル君。凄い啖呵切りだったわね～♪」って笑いながら、ルシルに向けて親指を立てた。

「いえ。お恥ずかしいところをお見せしまって・・・」

「んなことねぇよ、坊主。スカッとしたぜ、お前さんの啖呵」

「うんうん♪　あ、そうだ。ルシル君、今夜空いてる？　良かったらウチ来ない？　アリサちゃんも夕食に誘ってるんだけど、どう？」

「・・・そうですね。はやて達も今日は居ないので。・・・はい、ありがとうございます。お誘いお受けします」

というわけで、ルシルも一緒にナカジマ家の夕食会にお呼ばれすることに。それからあたし達は、クイントさんの運転する車に乗り、一路ナカジマ邸へ。そうしてナカジマ邸の駐車スペースにバックで入ってるところに、「おかえりなさいっス～、パパりん、ママりん♪」って出迎えの挨拶が聞こえてきた。

「ルシルさんとアリサもいらっしゃいっス～♪」

なんでかルシル（やなのは達）にはさん付けで、あたしは呼び捨てなのよね。まぁ元１０８所属っていう間柄だし、たびたびナカジマ家にお呼ばれしてるから、なのは達以上に親しくなるのは当たり前なんだけど・・・。

「ただいま、ウェンディ。あの子はもう来てる？」

「っス！　今はチンク姉とスバルから勉強を教わってるっスよ！」

「オーケー♪　ささ、アリサちゃん、ルシル君、上がって上がって」

三佐とクイントさんの後に続いて家の中へ。最後にウェンディがドアを閉めて、あたし達はリビングに上がったんだけど。そこにはスバルとチンク、それに見覚えの無い男の子がテーブルを囲んで座っていた。

「おう、ただいま！」

「ただいま～！」

三佐とクイントさんが挨拶するとスバル達も「おかえりなさい！」って返した後、あたしとルシルを見て「いらっしゃーい！」って言ってくれた。

「お邪魔するわね」

「ご相伴に与るよ」

あたしとルシルの目が男の子に向けられる。ナカジマ家は三佐以外みんな女子だから、そこに子供とは言え男が混じっていると不自然というかなんというか、ね。

「あ、紹介します！　この子はトーマ、トーマ・アヴェニール。以前あたしが保護した子で、普段は保護施設で過ごしているんですけど、時々こうやってウチに招くんです。トーマ。こちらはルシリオン・セインテストさん。あたしやギン姉にとってはお兄ちゃんのような人なんだ。こちらアリサ・バニングスさん。以前はお父さんの隊に居て、ギン姉の先輩だった人なんだ」

「ルシリオンだ。これからも長い付き合いになると思うから、ルシル、と呼んでくれ」

「アリサよ。あたしもこうやって時々お呼ばれするから、その時はまたよろしくね」

「あの、はいっ、よろしくお願いします！」

トーマは礼儀正しい子なんだけど、どこか陰りのある子でもあった。その勘のようなものの正体はすぐに判った。

「えー、いいじゃん。一緒にお風呂に入ろうよ～♪」

「無理だから！　俺、男子だから！」

「恥ずかしがる事ないっスよ～♪　頭を洗ってあげっるスよ～♪」

「1人で洗えるから～！」

「あ、じゃあ私も一緒に入ろうっかな～♪」

「お前ら・・・。純情な男子をからかうんじゃねぇよ・・・」

スバルやウェンディ、さらにはクイントさんからも一緒にお風呂に入ろうって誘われてるトーマ。クイントさん達がわいわい騒いでる中、あたしとルシル、それにギンガとチンクは、庭のガゼボ（日本でいうあずまや）のベンチに座ってる。

「トーマが生まれたのはヴァイゼンの遺跡鉱山のある町だ。その遺跡鉱山が崩落、町全体も連鎖崩壊するという事故が新歴７４年に起

きた。トーマはそのたった1人の生き残りなのだ」

「管理局は公式に事故として処理したのですが、トーマの話によれば、崩落直後に男女2人組を現場で目撃したとのことで・・・」

「その2人が崩落を招いた犯人ということかしら・・・？」

「・・・トーマの目撃証言から追加調査が実施されることになりましたが、未だに確固とした情報は上がって来ていません」

あたしの問いにギンガがそう答えてくれた。その会話中、ルシルは局のデータベースにアクセスして、件の調査報告を引っ張り出してた。モニターに表示されてる報告書をあたし達も一緒に閲覧していると・・・

「助けて～！　ギン姉～、チンク姉～！」

「トーマ！　別に気にすることはないだろう～！」

「チンク姉！？」

「母さんやスバル達も、トーマが久しぶりに泊まるのが嬉しいのよ～！」

「ギン姉！？」

真面目なギンガとチンクからのまさかの裏切りに、トーマの表情が

絶望一色に染まったのが遠目でも判った。すると「ルシルさ～ん！　割とマジでお願いします！」ってルシルに助けを求めた。まぁ同じ男子だし、そのチョイスは悪くは無いと思うわ。

「やれやれ。・・・ギンガ、チンク。フッケバインで調べてみてくれ」

それだけを言い残してルシルは家の中へ戻って行った。クイントさん達とトーマの間に割って入って、説得を始めてみたい。で、あたし達はルシルの言ったフッケバインっていう単語を調べてみた。

「トーマの言ってた特徴通りだ・・・！」

「銃剣、本、藍色の翼の刺青・・・！」

そいつらは凶鳥フッケバインと名乗る、管理外世界で強盗殺人を繰り返す犯罪集団だった。

「トーマ。まぁなんだ。女性と一緒に風呂に入れるのは今の内くらいだし、一緒に入ってやってくれ」

「ぎゃー！　まさかのルシルさんからも裏切りぃ～～～～！」

トーマはトーマで酷い事になっちゃってるし。でもギンガは「ありがとうございます」ってルシルへの感謝を述べ、チンクは「私の方でも調査してみよう」ってモニターを見つめた。

Ｅｐｉｃａ８－Ｃ邂逅～Ｈｅｉｌｉｇｅｒ　Ｐｒｉｎｚｅｓｓｉｎｕｎｔ　Ｋａｉｓｅｒ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

物心がついた頃から私の中にあった、知りえないはずの記憶の数々。最初は訳も判らず、両親に言っても気の所為だと、夢を見たのだと、そう言い聞かされ続けた私は、そうゆうものなのだと思い聞かせることにした。

（ですが記憶（ソレ）を見る頻度が増えて、私は少しずつ塞ぎ込んでいってしまって・・・）

見かねた両親が私を病院へと連れて行き、そこで私の夢は前世の記憶だということが判明した。それから病院から連絡を受けた、Ｓｔ・オルフェンを管理するフライハイト家と、それに連なる６つの家柄――六家の自治領評議会から、私の記憶について尋ねたいという役員の方々が来て追加調査。そして私が承継しているのは古代ベルカの諸王の１人、覇王イングヴァルトその人のものだと断定されました。

（この碧銀の髪も、紺と青の光彩異色も、すべてイングヴァルト王家の身体特徴と一致している、と）

そして記憶承継のための通院をお願いされ、その費用は全額評議会持ちになり、今後の進学や学費も３割ほど評議会が支払ってくれる

ことになり、Ｓｔ・ヒルデ魔法学院への入学も勧誘という形で受けた。

（そして３年前に起こったプライソン戦役。そこで私は、聖王の復活を目の当たりにしました）

聖王家の中でも特に同調率が高い者でなければ、動かすこともままならないと云われる"聖王のゆりかご"が、このミッドチルダに出現しました。ソレを、以前からニュースなどで知っていた魔神オーディン（というよりは、セインテスト本家の末裔らしいお方）と守護騎士ヴォルケンリッターのお方たちを含めた、管理局や聖王教会騎士団の方々が撃沈させました。

（その１年後に学院に入学してきたのは・・・オリヴィエ王女殿下とオーディンさんのクローンであるというヴィヴィオさんとフォルセティさんだった）

入学式前に校舎見学という旨で、初等部の校舎にやって来ましたお２人を見かけた私のあの時の衝撃と言ったら今でも忘れもしません。後日、通院時に同行して頂けるシスターに駄目元でお２人の事を伺ってみると・・・

――そうですね・・・。覇王と聖王と魔神の関係は、聖王教会所属の関係者なら知っていることですし、貴女もいずれ知ることだと思うので話しますが、一応他言無用でお願いしますね――

そう注意されたのちに聴かされたのは、ヴィヴィオさんとフォルセ

ティさんは、聖王教会本部より盗まれたオリヴィエ殿下とオーディンさんの聖遺物から採取された遺伝子データを基に、プライソンによって生み出されたクローンである事。ヴィヴィオさんは"聖王のゆりかご"を動かすためだけの生体部品。フォルセティさんはヴィヴィオさんを護るための防衛機構。この話を聴いた瞬間、私の内に生まれたのは純粋な怒り・・・。

（オリヴィエ殿下は世界のためにその身を犠牲にして、オーディンさんもまた、自分の成すべき事を後回しにしてまでイリュリアと戦ってくれました。２人は決して兵器ではありませんでした・・・）

それを兵器として利用するためにクローンとして現代に蘇らせた。クラウスの記憶の影響以上に、私の個人的な感情でも怒りしか湧き出てこなかった。ですから校舎で見かけるたび、いえ自らお２人の姿を捜すようになっていた。

（ですが声は掛けられなかった。お２人は私の知るオリヴィエでもオーディンさんでもないのだから・・・。私の、クラウスの一方的な思いをぶつけてしまわないように・・・）

その３年後の今年、今度は冥府の炎王イクスヴェリア陛下の固有戦力、マリアージュが各管理世界に出現し、そして殺人事件を起こし続けるという事件が発生。マリンガーデンでその事件は解決したとされたのですが・・・。

（今度はヴィヴィオさん達の側に、イクスヴェリア陛下と同じ名を有する少女が現れた）

私の知る限りイクスヴェリア陛下は大人の男性でした。が、例によってシスターに話を伺ったところ、イクスヴェリア陛下ご本人ということで。そんな陛下が私に会いに来て下さるとは思いもしませんでした。

――この姿でこうして普通に言葉を交わすのは初めてですね、覇王クラウス――

陛下はすでに私の記憶の事を知っているようでした。名字がフライハイトとなっていましたので、Ｓｔ・オルフェンと聖王教会のトップであられるフライハイト家の一員になったのは間違いありません。ご家族から私の事を聞いていてもおかしくないです。

（そんな陛下から、ヴィヴィオさん達と会うように提案されましたが・・・）

私はそれを拒否した。恐ろしかったから。私の背負っているものを、ヴィヴィオさん達にも背負わせてしまいそうで。それが嫌で、もうヴィヴィオさん達の元へと向かわないようにしていたのですが・・・。

「また来たのですか・・・。今日は一体なんの御用ですか、イクスヴェリア陛下？」

「はい。改めて貴女をヴィヴィオとフォルセティと会わせようと思いまして」

「それは以前にお断りしました。覇王(わたし)は聖王女(ヴィヴィオ)さんとは会うつもりはありません。話がそれだけでしたら、私はこれにて失礼させていただきます」

陛下に一礼をして、立ち去るために脇を通り過ぎようとしたところで、「待ちなさい、アインハルト・ストラトス」と、有無を言わさないような語気で制止されてしまった。

「貴女の・・・覇王の悲願は、天地に覇を成すこと、でしたね。ならばいつか必ずヴィヴィオ達と顔を合わせることになります。では今から顔を合わせたところで何が問題です？」

「・・・問題は・・・」

答えられない。こうしてまた言葉を交わさないように、ヴィヴィオさん達から距離を取っていたから、言い訳も何も考えていなかった。陛下は「あなたがヴィヴィオ達に会わない理由を考えてみました」と言い、再び私の前に立ちはだかりました。

「考えられたのは2つでした。1つは今のヴィヴィオ達が倒すに相応しくない弱さだからです。オリヴィエのクローンとは言え、ヴィヴィオが受け継いでいるのは金の髪と紅と翠の光彩異色、そして虹色の魔力光。その圧倒的な戦闘能力は見る影もなし。だから仕掛けない。もう1つは・・・貴女が迷っているから」

「・・・！　なにを・・・。ありえません。私が何に迷っていると

・・・？」

陛下の瞳が、私の瞳を真っ直ぐ射抜く。見透かされている。陛下は「あなたの感情は表情に出にくいのですね。が、その綺麗な紺と青の瞳は感情に揺れています」と、自身の瞳を指差しました。

「確信しました。迷いと恐れ、ですね。以前あなたは言っていましたね。その後悔をぶつける相手ももう居ません、と。ならばぶつけなさい、ヴィヴィオに。彼女には貴女の事は話してあります。それでもなお貴女と会ってみたいと言いましたよ。わたしに出来る事ならやります、と」

「・・・優しさだけでは覇王は救われませんし、私の拳はヴィヴィオさんをかえって苦しめる結果になるだけです。ですので、お誘いは丁重にお断りさせていただきます」

改めて一礼したところで、「それではいつまで経ってもアイン(あなた)ハルトは救われません」と陛下が私の両肩に手を置きました。

「クラウスは自分ひとりで背負い込まず、周囲に助けを求めたようですよ？」

イリュリアとの戦争で、クラウスはすぐにオーディンさんに助けを求めた。あのお方が自らの目的のためにベルカへ来たと知っていながら。それでもオーディンさんは応え、グラオベン・オルデンを率いてすごい功績を上げてくれました。

「いくら覇王の記憶を承継していても、貴女はまだ11歳の子供です。まだまだ幼い。すべてを背負って苦しむ必要はありません。頼りなさい、周囲を。弱音を吐いたっていいのです」

子供を諭す大人のような事を言う陛下。事実、私は子供で、陛下は数千年を生き永らえている正真正銘の王。私より少し背の低い方なのに、なんと堂々とした御姿なのでしょうか。ですが、それでもまだ踏ん切りがつきません・・・。

「（とはいえ、これ以上断りを入れたとしても、おそらく誘いは後日にまで続くのでしょう・・・）判りました。お誘いをお受けします」

「そうですか！　では早速これから！」

満面の笑顔を浮かべる陛下ですが、残念ながら「行けません」と私は断った。すると陛下は「はい？」と心底不思議そうに小首を傾げて、「あれ？　今、お受けします・・・って」と、大変ショックを受けていられるようで・・・。

「今日は記憶承継のための通院日ですので」

「・・・あ！　そうですよね！　貴女にも予定はありますよね！
これはうっかりでした、申し訳ありません！」

「いえ。通院日は3ヵ月に一度ですので、明日からまた時間が生まれます。ですが私個人的にも鍛錬の時間がありますから、そう長く

はお付き合い出来ませんが」

鍛えて、鍛えて、鍛え抜いて、この体を如何なる者と戦っても負けないほどに屈強に鍛える。そのための鍛錬の時間を削るわけにはいかない。

「それで構いません。では後日改めてお誘いします」

「判りました。ごきげんよう、イクスヴェリア陛下」

「ごきげんよう、アインハルト」

陛下と別れ、一路校舎のエントランスへ。そして校舎を出たところで、「アインハルトさん！」そう名前を呼ばれた。そちらへと目を向けて、「今日もよろしくお願いします。シスター・トルーデ」と頭を下げる。あのシスターが、私の通院にいつも一緒に来ていただいてる方だ。

「うん。よろしくね」

†††Ｓｉｄｅアインハルト⇒ヴィヴィオ†††

当初の予定だったアインハルトさんとの顔合わせは、アインハルトさん個人の予定で流れちゃった。それから2週間後の今日、ノーヴェの予定もキッチリ合って、アインハルトさんと会えることになった。

「うぅ～、なんか緊張する～」

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ。僕たちがちゃんと見守ってるから」

「うんっ！　精いっぱい応援するね！」

「ルシルさんとの特訓を思い出せ～♪」

ストライクアーツ練習場にやって来たわたし、フォルセティ、コロナ、リオ、そしてノーヴェ。みんなトレーニングウェアを着て、イクスとアインハルトさんを待ってる中、緊張するわたしへのフォルセティ達の声援に、「うん！」って頷く。

（合計４週間の特訓期間。ルシルさんは仕事で忙しい中でも時間を割いてまでミッドに帰って来て、わたしの特訓に付き合ってくれた）付き合ってくれたルシルさんのためにも、ただ何も得られないで負けるわけにはいかない。

・―・―・回想～♪・―・―・

ルシルさんが休みだっていう土曜日に、わたしとコロナとリオとイクスは、フォルセティのお家にやって来た。八神家のお家は海辺にあるから、さざ波の音と潮の香りがなんだか心地良い。八神邸の前にある砂浜はプライベートビーチで、毎年の夏にはよく海水浴してる。

「「「「こんにちはー！」」」」

「いらっしゃーい！」

「よく来たね。ルシルももう少ししたら帰って来るそうだから、中に入って待っていると良い」

出迎えてくれたのはフォルセティとアインスさん。２人ともとっても綺麗な銀色の髪をしてるから、本当の姉弟にも見えちゃう。銀髪って実はかなり珍しいらしいんだけど、知り合いにはもう何人も居たりする。フォルセティ、ルシルさん、アインスさん、リイン、チンクの５人。不思議な縁だよね。

「「「「はーい！」」」」

アインスさんに誘われるままに家に上がって、案内されたリビングで冷たいジュースをいただく。それからちょっとお喋りした後、「じゃあそろそろ着替えて、浜辺で準備運動しておこうっか」って、フォルセティが席を立った。

「あ、うん、そうだね。えっと・・・」

わたし達も席を立って、どこで着替えようかなって辺りをキョロキョロ。するとアインスさんが「フォルセティ。男子はお前だけだ」ってフォルセティに伝えたら、「うん。自分の部屋で着替えて来る！」ってフォルセティがリビングから出て行った。

「風呂は沸かしておくから、存分にルシルに鍛えてもらうと良い」

「「「「ありがとうございます！」」」」

外から見えないようにカーテンを閉めてくれたアインスさんにお礼を言って、私服からトレーニングウェアに着替えた後は砂浜へゴー。わたしとフォルセティ、コロナとリオの２人１組で準備運動。イクスは、イクスくらいの身長にまで変身したアインスさんとだ。それからランニング。砂に足を取られるから、これがかなり足腰に来る。

「あ、この音・・・！」

３往復目に入ろうかっていうところに、バイクのエンジン音が遠くから聞こえてきた。道路の方へ眼を向けると、"マクティーラ"を運転する「ルシルさん！」が帰って来た。フォルセティと一緒に「おかえりなさい！」って大きく手を振って挨拶をすると、「ただいまー！」って返してくれた。

「待たせてすまない！　すぐ用意するから！」

「あ、大丈夫でーす！」

八神家の駐車場に消えて行ったルシルさん。ちょっとクールダウンしてたら、「よしっ。始めようか！」ってルシルさんも砂浜にやって来た。格好はわたし達と同じようにトレーニングウェアだ。

「アインハルト・ストラトスと試合をするのは、ヴィヴィオだけで

良いんだよな？」

「はいっ！」

「以前にも言ったが、現在のアインハルトの扱う覇王流と、今から俺がヴィヴィオに見せる覇王流は、その完成度が違うと考えてくれ」

「はい。判ってます」

この前見せてもらった断空っていう技。モニター越しでもすごい威力だって判った。最初の試合は魔法無しってことになってるけど、アインハルトさんに魔法あり試合でも良い？って確認とって、ＯＫが出たらそのままか、後日に再試合に誘おうって話になってる。

（わたしだけアインハルトさんの技を知るのは、ちょっと卑怯な気もするけど・・・）

――大事な試合の時は、相手の事を調べるのは当たり前だ。無策で場当たり的に突っ込むのは素人だ。いいか？　遊びや趣味なら勝ちに拘らなくて良い。そいつは本人の問題だ。が、本気で勝ちたい、って思うんなら情報を得ろ。相手だってお前に勝ちたいから研究するだろう――

ノーヴェに以前そう言われた。今回も、アインハルトさんはわたしの技とか知らないし。でもアインハルトさんの事情を聞く限り、今出せる全力で戦わないといけないって思った。だから・・・。

「でも知っておきたいです！」

「だよな。そのために今日来たのだから」

ルシルさんの足元にサファイアブルーのベルカ魔法陣が展開されると、ルシルさんの姿が光に包まれた。光が治まると、わたし達の前に小さくなっちゃったルシルさんが居た。みんなでポカンとしてると、ルシルさんは「現在のアインハルトの体格に似せてみた」って屈伸や伸脚しながら教えてくれた。

「準備運動はこんなものだろう。じゃあヴィヴィオ。準備はいいかい？」

「いつでもＯＫです！」

離れてくフォルセティ達を余所にわたしとルシルさんは砂浜に残って、一定の距離を保ったうえで構えを取った。そう言えばルシルさんとの１対１で闘いって初めてかも。身長も低くなってるからフォルセティと被るけど、こうやって対峙してみると受ける空気が違う。一切の隙が無い。こっちから攻め込めない。

「あの、その隙の無さも覇王流と関係してますか？」

「ん？　あー、ごめん。違う。わざと隙を作るというのは難しいんだよな～・・・。ま、とりあえず拳を交えてみよう、ヴィヴィオ」

「あ、はい！　お願いします！」

グッと腰を落として、そして地面を蹴って一気に距離を詰める。砂に足を取られてスピードが乗らないけど、それでもルシルさんの懐には入れた。右ストレートを打ち込むと、ルシルさんは顔を逸らして避けた後、伸びきったわたしの右腕を取って、「あわわ・・・！」わたしを後方へ放り投げた。

「っとと」

着地してたたらを踏んでたわたしに、ルシルさんの左ストレートが繰り出されるんだけど、なんか遅い気がする。上半身を後ろに少し反って半歩分だけ後退して、ルシルさんの拳を回避。わたしの鼻先ギリギリで止まったルシルさんの左腕を掻い潜って懐に入る。

「せいっ！」

右と左のコンビネーション。ルシルさんは右手の平だけでパシンパシン！と受け止める。すぐにわたしは後退して上段蹴り。そしてルシルさんは上段回し蹴り。わたしの脛とルシルさんのふくらはぎが激突。そして距離をお互いにとって、攻防を繰り返す。

（なんだろう・・・。ルシルさんの動き、どんどん速くなっていってる気がする・・・？）

最初のストレートに比べて、ルシルさんの攻撃のスピードが上がってるかもしれない。それに始めはわたしの攻撃を防御していたのに、今じゃ掠りもしなくなってきた。

「っく・・・！」

さらに言えば、わたしが攻撃に移れる頻度も少なくなってきた。そんな中、「ふむ。これが今のヴィヴィオのレベルなんだな」ってルシルさんが呟いたのが微かに聞こえた。するとルシルさんの動きの速さの上昇具合が止まった気が・・・。

「このまま引っ張っていく。付いて来い」

「え？・・・あ、はいっ！」

今のルシルさんは、わたしよりちょっと強いレベル。この動きに慣れたその時、わたしはレベルアップしてるってことになるんだ。明確に強くなったっていう実感を得られるその瞬間を迎えたい。そう強く思った。

「ふんっ！」

ルシルさんのジャブ3連打からの強烈な跳び蹴り。ギリギリで両腕のガードで防御できた。2mくらい後退させられちゃったけど、変に体勢を崩されることなく着地したところにルシルさんが突っ込んで来た。繰り出されたのは右ストレート。頬を掠ったけど避けることは出来た。間髪入れずにわたしも左のストレートを繰り出す。ルシルさんの右腕は伸びきってるし、わたしの左の一撃は魔法くらいじゃないと防御できないはず。

「ぐっ・・・！」

（浅いけど入った！）

ルシルさんの右頬にわたしの拳が当たったんだけど、ルシルさんは咄嗟に上半身を反らしたことで、威力を軽減してきた。でもわたしから逃れるように後退したから、これはきっと追撃のチャンス。一足飛びで突進した瞬間、直感的に、やっちゃった、って言葉が脳裏を過ぎった。

「はッ！」

「くふっ・・・！」

ルシルさんのカウンター、掌底がわたしのお腹にクリーンヒット。わたしは後ろに向かって吹っ飛んだけど、「おっと」アインスさんがわたしを抱き止めてくれた。

「あ、ありがとうございます、アインスさん」

「ああ」

魔法無しのスパーリングはいったん終了。本命の魔法ありの魔導格闘戦前に反省会ということに。ルシルさんから、「あの泣き虫だったヴィヴィオがよくぞここまで強く・・・」って、わたしの今現在の実力の評価が下された。

「だがまぁ、無駄な動きやミスが割と目立つな。特に最後の突進。今回のスパーリングの中で何度か見たが・・・」

ルシルさんが、わたしのよくやる間合いを詰めるためのステップをやって見せた。

「初見や格下相手には通用するが、それ以外には先ほどみたくカウンターの餌食だ。君の一足飛びのステップは確かに速いが、跳んでから着地までの僅かな時間は宙に浮いていると同義だ。その間は方向転換も急停止も出来ないからな」

「なるほど～」

ルシルさんからいろいろなアドバイスを頂いた後は、いよいよ本題の「さぁ、魔導格闘戦を始めようか」だ。

・―・―・終わり～♪・―・―・

「来たな」

ノーヴェの言葉にハッとして顔を上げる。出入り口の方からイクスと、「あの人が、アインハルトさん・・・」の２人が競技場に入って来た。

「お待たせしてすみませんでした。イクスヴェリア、到着しました」

「アインハルト・ストラトス、参りました」

碧銀の髪に青と紺の光彩異色のアインハルトさんに、「はじめまして！　高町ヴィヴィオです！　ストライクアーツをやってます！」握手のために右手を差し出すと、アインハルトさんは少しわたしの手を見た後、「今日はよろしくお願いします」って応じてくれた。それから他のみんなも自己紹介。アインハルトさんは淡々と受け答えした後、更衣室へ向かった。

「なんか、ちょっと恐いね・・・」

「うん、だね・・・」

コロナとリオが更衣室に消えて行ったアインハルトさんの指してそう言った。でもなんだろう。わたしは恐いっていうより、気を張り過ぎて余裕が無いって感じがする・・・ような。やっぱり覇王と聖王女の関係からなのかな・・・。

「お待たせしました」

トレーニングウェアに着替えたアインハルトさんが戻って来た。

「んじゃ、すでにイクスから話を聞いてると思うが、今日はアインハルトとヴィヴィオのスパーリングが主目的だ」

「ヴィヴィオ、お願いします」

「うん、イクス。よろしくお願いします、アインハルトさん！」

「はい。よろしくお願いします」

わたしとアインハルトさんだけでコートに入って対峙する。そして・・・

「スパーリング、４分１ラウンドだ。射砲撃やバインド無しでの格闘オンリーな。・・・レディ・・・ゴー！」

わたしとアインハルトさんの試合は始まった。

Ｅｐｉｃａ８－Ｄ邂逅～Ｓｃｏｕｔ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

イクスヴェリア陛下のお誘いに応じ、私は今日、オリヴィエ王女殿下のクローンとして生まれたヴィヴィオさんや、オーディンさんのクローンとして生まれたフォルセティさんと直接顔を合わせる。指定されたストライクアーツ練習場にて・・・

「はじめまして！　高町ヴィヴィオです！　ストライクアーツをやってます！」

ヴィヴィオさんに続き、コロナさん、リオさんとも自己紹介をした後、クラウスの記憶にオリヴィエ殿下とほぼ同じ頻度で登場する、魔神オーディンをそのまま幼くしたかのような「八神フォルセティです！」とも握手を交わすのですが・・・。

――あなたの握手に応じれば、あなたとの永遠の別れを受け入れることになる。オーディンさん。だから僕は――僕たちは、あなたの握手には応じられないのです。必ず生きて帰って来てください。たとえどれだけ傷を負っても必ず治します。そして再会した時、改めて握手を。僕たちはずっと待っています。何日でも、何ヵ月でも、何年でも・・・ずっと――

――また逢おう。再会の証として、その時にまた握手を――

クラウスの無念の1つとして私の胸の内を焦がす約束。やはりクローンとは言えオーディンさん本人ではないためか、あまり胸の内が晴れない。そして最後に、ヴィヴィオさん達にストライクアーツを教えているという、ノーヴェさんとも握手を交わす。

「じゃあ早速で悪いが、更衣室で着替えて来てもらえるか？」

「判りました」

「私が案内してきます。アインハルト、こちらですよ」

陛下の案内で更衣室へ。空いているロッカーに着ていた制服を仕舞い込み、トレーニングウェアへと着替える中、出入り口のドアの向こう側に居る陛下が「どうでした？」と尋ねてきました。

「どう、とは？」

「ヴィヴィオとフォルセティです。ずっと見守って来たのでしょう。どうです。直接言葉を交わした感想は・・・？」

「・・・とても小さな手で、体も脆そうで・・・。私の拳を受けられるのか不安です。それに・・・」

私の背負うものを、あの小さなヴィヴィオさんにも背負わせていいのかと改めて考えてしまう。私と自己紹介をした際、紅と翠のあの瞳で真っ直ぐ見詰められた。オリヴィエ殿下と同じ眼差し。でも彼女は違う・・・。

「ふふ。そうですか」

「何が面白いのですか？」

「あぁ、いえ。ここはひとつ後のお楽しみということで」

陛下にはぐらかされてしまったけど、着替えは済んだから戻りましょう。ロッカールームを出て、「お待たせしました」とコートへ入り、ヴィヴィオさんと向かい合う。私が構えを取ると、ヴィヴィオさんも構えを取る。

「スパーリング、4分1ラウンドだ。射砲撃やバインド無しでの格闘オンリーな。それじゃ・・・レディ・・・ゴー！」

振り下ろされるノーヴェさんの右腕。それと同時、「・・・！」ヴィヴィオさんが驚くほどの速さで間合いを詰めて来た。繰り出される右の拳打ですが、不意打ちを狙ったにしては遅い。左掌でそれを防ぐと、彼女は迷うこともなく蹴打などを織り交ぜた連撃を打ち込んでくる。

（陛下は、あとのお楽しみに、と言っていましたが・・・。やはりこの程度・・・）

独特の足運びから移行する高機動の移動法。趣味と遊びの範囲である彼女や、それに対する相手ならばそれは素晴らしい武器になるでしょうが・・・。でも私や、私の目指す戦いの場では通用しません。

（すべてが真っ直ぐ。攻撃も、その瞳も、心も・・・。だから嫌だった。この子と顔を合わせて言葉や拳を交えても、どうにもならないと解っていたから・・・）

やはり彼女に因縁を背負わせるわけにはいかない。そう結論付けられるまで少し間様子を見てきたけれど、もうこれ以上は無意味と判断。一切反撃せず、ヴィヴィオさんの攻撃を防いでは捌き、躱しましたが、ようやくこちらも攻撃に転じようと拳を強く握ったところで・・・

「えいっ！」

「っぐ・・・！？」

ヴィヴィオさんの拳を一瞬、見失ってしまった。私の左わき腹に打ち込まれる鋭い拳打に思わず、「くっ・・・！」後退してしまう。追撃の左拳打を右手の甲で払い、私も反撃の左拳打を繰り出す。

「っと！」

私の拳打を左掌で受け止めようとヴィヴィオさんでしたが、私の拳が彼女の掌に当たるかどうかという刹那に、彼女は左腕を引いた。私の拳は空を切り、腕を伸ばし切ってしまった。

「てやっ！」

ヴィヴィオさんは左腕を引いた勢いのまま反時計回りに回転し、遠心力の乗せられた裏拳を繰り出してきた。私は左腕を顔の横にまで上げ、前腕部でその一撃を防御。そして戻し終えたばかりの右拳を間髪いれずに打ち出す。

「っ！」

その瞬発力で私の拳が届く範囲より離脱したヴィヴィオさんでしたが、また同じ速度で彼女の攻撃範囲に再突入してきた。彼女は小さく構え、左右の連撃を小刻みに繰り出す。ほとんど威力が無いですが、手数と速度が厄介で反撃の機会を潰してくる。

「えいやっ！」

「（ようやく理解できた。これが陛下の言っていた、お楽しみ、ということですか・・・！）くぅ・・・！」

ヴィヴィオさんの速度に慣れたところで、さらに拳打の速度が上がった。これは完全に術中に嵌まってしまったと考えていい。最初は速度を落とし、私がそれに慣れた時、一段階速度を上げて私を翻弄する。

（前言撤回です。真っ直ぐでも、実に巧妙です・・・！）

自宅で器具を使っての練習では得られない経験に、私はダメなのに高揚感を覚えてしまった。だからすぐに自制する。その感情は覚えてはいけないものだと。私はただ、覇王流が最高の武術であり、覇

王こそが最強であることを示すのみ。

「はッ！」

こちらも全力を以て迎撃に当たる。ヴィヴィオさんの速度以上の速さで拳を繰り出し、「きゃぅ・・・・！」両前腕で防御した彼女ごと後退させた。ですが・・・。

（浅い・・・・！）

拳が当たるとほぼ同時、ヴィヴィオさんは自ら後退することで威力を半減しました。着地したばかりの彼女は即座にあの歩法で距離を詰めて来て、また一段階速度の上がった右の上段蹴打を繰り出し、それを私は腰を落として躱す。

「せーい！」

足を引き戻している最中にヴィヴィオさんは跳んで、半回転しての左の中段突き蹴りを打った。ちょうど足の裏が私の顔面に当たる軌道。両前腕で顔面を護るものの、しゃがみ込んでいた所為もあって、「ぅく！」踏ん張りきれずに後転することに。立ち上がりざまの私に向かって彼女は正拳を繰り出して来た。容赦のない追撃ですが、不安定な体勢ながらもその大ぶりな一撃は回避しきることは可能なもの。即座に後退して彼女の追撃を回避。

「すぅ・・・・っ！」

覇王流の基本は断空と呼ばれる技術にある。足先から練り上げた力を拳足に乗せて撃ち出す、というもの。ヴィヴィオさんに重傷を負わせることなく、この一撃で終わりにします。断空拳を打つ際の構えを取り、即座に力を練り上げたその時・・・

「っと・・・！」

（追撃をやめて後退・・・！？）

怒涛の攻撃を繰り返していたヴィヴィオさんが突如として私から距離を取った。せっかく練り上げた力が解放されることなく霧散したその瞬間、彼女の「やぁーっ！」攻撃が再開された。しかもさらに速さを増して・・・。

（速度は厄介ですが、威力は大きくはない。ヴィヴィオさんは威力を犠牲にして手数で攻めるスタイル・・・！）

速度が増す分だけで威力が少し下がっているような気がする。なら多少の攻撃を受けたうえでカウンターを入れるだけです。ヴィヴィオさんが繰り出した突進からの右の拳打を左頬にわざと受けつつ、再度練り上げた力を右拳に乗せる。

「はぁぁぁぁぁッ！」

――断空拳――

「かふっ・・・！？」

攻撃を仕掛けたと同時の反撃に、さすがのヴィヴィオさんも防御も回避も出来ずに私の断空を利用した掌打を受け、コート外にまで吹っ飛びました。彼女は本当に軽く、正直あれほど吹き飛ぶとは思いませんでしたが、これで一応に勝利ですね。

「す、すごーい！　今のが本物の断空なんだ！」

「本物の・・・？」

ノーヴェさんに受け止めてもらえているヴィヴィオさんから気になる言葉が出た。それを無視して立ち去るわけにはいかず、彼女たちの元へ歩み寄る。気付いたヴィヴィオさんが居住まいを直すと「ありがとうございました！」とお辞儀をした。

「あ、いえ・・。こちらこそありがとうございました」

「アインハルト。ヴィヴィオと拳を交えた感想を聞かせていただいても？」

陛下から話を振られる。顔を上げたヴィヴィオさんの瞳は期待と不安に揺れていた。彼女の師だというノーヴェさんが「遠慮のない感想でいいぞ」と言いますと、「う、うん！　お願いします！」とヴィヴィオさんも強く首肯する。

「最初は、所詮は趣味と遊び程度の実力、と思いました。ですがすぐにその考えを訂正しました。ヴィヴィオさん、あなたは強いです。

結果は私の勝利だったとはいえ・・・」

私がそこで口を噤んだことで、陛下が「どうかしました？」と聞いてきたので、首を横に振りながら「いえ。今日は良い体験をさせていただきました。ありがとうございました」と伝えた。やはり誰かと拳を交える実戦の方が、より高みへと登れるのだと認識できた良い経験だった。

「そうか。まぁそこまで言ってもらえたんなら御の字だろう。なヴィヴィオ？」

「うんっ！　負けちゃったけど、ルシルさんとの特訓が無駄にならなくて良かった♪」

「ルシルさん・・・？（ルシルさん・・・。っ、ルシリオン・セインテスト・・・一等空尉・・・！）」

オーディンさんとエリーゼ卿の間に生まれた双子の末裔はシュテルンベルク家として、現代に生きています。そしてセインテスト一尉は、セインテスト家の直系であると伺っています。

「あ、僕のお父さ――父です。ルシリオン・セインテスト。この４週間・・・というか、そのうちの１週間くらいだけど、父がアインハルトさん役としてヴィヴィオと猛特訓をしていたんです」

フォルセティさんの話に私はすべてを理解した。管理局の中でも１０本の指に入るであろう空戦ＳＳ＋の魔導騎士。そんな方と実践す

れば、あの幼さであれ程までに強くなってもおかしくない。悔しいという感情より真っ先に羨ましいと思ってしまう。私もセインテスト一尉と拳を交えれば、さらなる高みへと行けるはず。そしていつかは超えたい。

「そうですか・・・。ところで――」

そこまで言いかけた時、ノーヴェさんが「ちょい待ち。もう良い時間だ。続きは昼を食いながらにしようぜ」そう提案しました。

†††Ｓｉｄｅアインハルト⇒ヴィヴィオ†††

最初は断っていたけどイクスからの熱烈？なお昼ご飯のお誘いに、アインハルトさんもとうとう折れてお誘いに応じてくれた。というわけで、わたし達はストライクアーツ練習場内にある休憩スペースへとやって来た。空いてるテーブル席に就いて、わたしとフォルセティは「じゃーん♪」とお弁当箱を広げた。コロナ達が「わぁ！」って歓声を上げてくれた。

「なのはママと♪」

「お母さんの♪」

「「特製弁当～♪」」

なのはママとはやてさんお手製のお弁当・・・と言っても3段重ねの重箱（計6箱だ）で、アインハルトさんを入れても十分すぎるほ

どの量が入ってる。取り皿をみんなに渡して、「どうぞ、アインハルトさん♪」にも渡す。

「あ・・・ありがとうございます」

「よし。みんなに皿は渡ったな。んじゃ、いただきます！」

ノーヴェに続いて「いただきます！」ってわたし達も手を合わせて、思い思いに料理を取り皿に料理を乗せてく中、アインハルトさんが困った風にフォークを彷徨わせているのが判った。

「アインハルトさん、何か苦手なものとかありますか？」

「え・・・あ、いえ。特には・・・」

「それじゃあお勧めを♪」

なのはママの料理はどれも絶品だから迷っちゃうけど、変に凝ったものじゃない料理を選ぶ。

「どうぞ♪」

「あ、はい。いただきます。・・・っ！　美味しいです」

アインハルトさんの表情が少しだけだけど緩んだ気がする。今日顔を合わせてからずっと硬かったから。だからなのはママには最大の感謝だ。お昼ご飯が進む中、「あの・・・」ってアインハルトさん

が口を開いた。

「先ほどの話の続きなんですが。本物の覇王流とは一体、どういうことなのでしょうか・・・？」

「あ、それはですね」

「父の固有スキル・複製によって複製されていた覇王流の原型を、父がヴィヴィオとの特訓に発動していたんですよ。歴代のセインテスト当主は、過去からの複製物が継承されるようなので。まぁ僕は、クローンとして生み出されたので複製スキルも複製物も継承してないですけど・・・」

フォルセティがアインハルトさんの疑問にそう答えると、「あぁ、そういうことですか」って納得したように小さく頷いたので、「それも記憶にあるんですか？」って聞いてみた。

「はい。クラウスもオーディンさんより複製の件は伺っていましたし、　断空も見せたことがあるようです」

覇王イングヴァルトの記憶を承継してるアインハルトさんは、その記憶に苦しめられてるってイクスから聞いてるから、これ以上記憶について話をしていいのか判らない。少し沈黙が流れる中、ノーヴェが「なあ、アインハルト」て話を振った。

「はい、なんでしょう」

「お前の戦い方を見せてもらった感じ、やっぱストライクアーツ側だわ。どうだろう、お前さえ良ければヴィヴィオ達と一緒にやらねぇか、ストライクアーツ」

「え・・・？」

ノーヴェがアインハルトさんをストライクアーツに誘ってくれたから、ここで追撃だって思ってわたしも「一緒にやりましょう！」って誘うと、コロナとリオも「ぜひぜひ！」って続いた。

「私は・・・」

「アインハルト。あなたは強くなりたいのでしょう？　たった1人で鍛えるにも限界はあるはずです。それとも何か方法でもありました？」

イクスも続いた後にそう尋ねると、アインハルトさんは「格闘家の方に挑戦しようかと」って答えた。みんなで「挑戦・・・？」って小首を傾げる。

「挑戦たって一体どこで？　やっぱり所属してるジムとかにか？」

「あまり人目に付きたくはなかったので、夜間に路上で挑戦しようかと・・・」

道場破り見たくジムへ挑戦しに行くんだと思ってたから、まさかの返答にわたし達は食事の手を止めて口をあんぐり。わたしは「それ

ってまずくない・・・ですか？」ってアインハルトさんとノーヴェに視線を送ると、アインハルトさんも「まずいですか・・・？」ってノーヴェを見た。ノーヴェの家族は管理局員だって話をしたからちょっと不安そう・・・。

「んー・・・、同意の上であってもストリートファイトはあんまし良くないと思うぞ？　試合前に同意しました、って言っても負けた方が負け惜しみや逆恨みなんかで被害届を出したら、そしたらお前は晴れて犯罪者だ。覇王の威を示す前に失墜するぞ」

「それは・・・困ります」

「だろ？　だからさ、ヴィヴィオ達と一緒にやらねぇ？って話だ」

改めてノーヴェがアインハルトさんを誘ったけど、アインハルトさんは即答することなく少し黙った後、「私は強くなりたいんです」ってポツリと漏らした。そして「ノーヴェさん。あなたに師事して本当に強くなりますか？」って、若干失礼なことを聞いた。

「なら試してみるか？　あたしの実力とやらを」

「お願い出来ますか？　私はもっと強い相手と戦って戦って・・・もっと強く、強くならなくてはいけないのです」

なりたい、じゃなくて、ならなくてはいけない。イクスの言ってた強迫観念。ノーヴェが「いいだろう。魔法アリか無しか、どっちがいい？」って聞くと、「アリでお願いします」ってアインハルトさ

んが受けて立った。だからわたしは「あー！　ノーヴェずるーい！」って抗議。

「ずるい・・・？」

「わたしも魔法アリでアインハルトさんと闘いたかったし、そのために特訓してきたのに～！」

「判ってる。アインハルト、連戦になるがヴィヴィオとも闘ってもらえるか？」

「はい、もちろんです」

「ありがとうございます！」

アインハルトさんとの再試合が決まってわたしは「ばんざーい！」した。それからお昼ご飯を食べ終えて、魔法戦の出来る場所だっていうアラル港湾埠頭へとやって来た。ここは救助隊の訓練に使用される場所だってことで、結構派手にやっちゃっても良いみたい。

「魔法は使ってもいいが格闘オンリーで、射砲撃とバインド無し。いいな？」

「承知しました。・・・武装形態」

アインハルトさんの足元にベルカ魔法陣が展開されて、発せられた光に呑まれた。そして光が治まると、そこには大人の女性に変身し

た「アインハルトさん・・・・!?」が居た。わたしとコロナとリオは「大人モード!」って歓声を上げた。

「ほう。んじゃ、あたしも!　ジェットエッジ!」

ノーヴェも変身を終えて、アインハルトさんと対峙した。ノーヴェが「誰か、合図を」って、アインハルトさんを見詰めたまま促してきたから、「じゃあわたしが!」って挙手。わたし1人で1歩だけ前に出て右腕を大きく上げると、ノーヴェとアインハルトさんが構えを取った。

「レディー・・・ゴーッ!」

腕を勢いよく振り下ろした瞬間、2人がものすごい勢いで突っ込んだ。そして繰り広げられる激しい攻防。ノーヴェってホントに強いのに、アインハルトさんも負けないくらい強い。

――魔法アリでのアインハルトの闘い方を見とけ。魔力で強化されてるはずだから、さっきより何もかもが違うと思っとけ――

ノーヴェから言われた通り、アインハルトさんの一挙手一投足を見つめる。さっきわたしとスパーリングした時のものより速く、鋭く、そして強い。ノーヴェが魔力で作る路ウイングロードを空中に張り巡らせて、"ジェットエッジ"で疾走する。

「おらぁぁぁぁッ!」

――リボルバースパイク――

高速滑走したうえでウイングロードから飛び降りたノーヴェの、打ち下ろしの強烈な蹴りがアインハルトさんを頭上から強襲。それを読んでみたいなアインハルトさんは断空の構えを取った。足元から風が渦巻いて、それは腰へ、そして右腕まで上がっていった。ノーヴェの右足とアインハルトさんの右拳が当たるかどうかっていうところで・・・

――ウイングロード――

2人の間にウイングロードが走った。ノーヴェはそれに乗ってアインハルトさんの背後へ瞬時に回ったことで、アインハルトさんの断空は空振る。ノーヴェは拳を突き出した状態のアインハルトさんの背中に「スタンナックル！」を打ち込んだ。

「っ・・・！」

「「「「直撃！？」」」」

打撃の威力と感電によってアインハルトさんが仰け反った。膝がゆっくりと折れて倒れこみそうになったけど、アインハルトさんはすぐに後ろ蹴りを繰り出した。ノーヴェはすぐに反撃が来るなんて思いもしなかったようで、咄嗟に腕でガードしたけど踏ん張りきれずに蹴り飛ばされちゃった。

「断空を見破られているというのが、これほどまでに厄介だとは思

いませんでした。また良い経験をさせてもらいました」

「だろ？　自分の手の内を知られても、それを乗り越えるには独りっきりじゃダメなんだよ・・・！」

「そうですね・・・。確かに、私の立てていた予定では得られないものです」

仕切り直しっていう感じで、距離を取って対峙するノーヴェとアインハルトさんが微笑みあった。

（あぅ～。そうゆうのは、ノーヴェじゃなくてわたしがやりたかったのに～・・・）

改めて激しい攻防を繰り広げ始めたノーヴェとアインハルトさんを羨ましく眺める。２人の決着は、それからすぐついた。アインハルトさんは善戦したけど、ノーヴェの強烈な蹴りが胸に入ったことで、とうとう膝を付いた。

「はぁはぁはぁ・・・ふぅ。どうだ、アインハルト・・・？」

「っく・・・。ま、参りました・・・」

アインハルトさんの降参っていう形で、ノーヴェの勝利が決まった。ノーヴェが変身を解くと、アインハルトさんも変身魔法を解除して元の子供の姿に戻った。

「アインハルト。これから休憩を挟むが、その後にヴィヴィオとも闘えるか？」

もしこれで、ダメです、なんて言われたらショックで駄々捏ねちゃいそう。アインハルトさんはわたしをチラッと見た後、「しばらく休憩すれば、おそらくやれます」ってノーヴェに視線を戻して頷いた。

「よし。んじゃ、３０分のインターバルを挟んだ後、改めてヴィヴィオとアインハルトの試合を始める！」

わたしとアインハルトさんは顔を見合わせて、「はいっ！」ってノーヴェに応えた。

Ｅｐｉｃａ８－Ｅ邂逅～Ｔｅａｍ　Ｎａｋａｊｉｍａ～

†††Ｓｉｄｅフォルセティ†††

ヴィヴィオとアインハルトさんの試合から数日。いつも通り学院前で「ごきげんよう♪」と、リオやイクスと合流した僕とヴィヴィオとコロナ。喋りながら初等科の校舎へ向かっていると、ヴィヴィオが「あ・・・！」って声を上げた。

「アインハルトさんだ・・・！」

「挨拶しに行く？」

アインハルトさんに気付いたヴィヴィオに僕がそう聞くと、ヴィヴィオが答えるより早く「行きましょう」ってイクスが前を歩くアインハルトさんの元へ駆け出した。

「アインハルト、ごきげんよう！」

「陛――ではなく、イクスさん。ごきげんよう」

イクスの挨拶に続いて僕たちも「ごきげんよう！」って挨拶すると、アインハルトさんも「ヴィヴィオさん、フォルセティさん、コロナさん、リオさん。ごきげんよう」って挨拶をし返してくれたから、ヴィヴィオ達の表情がパァっと輝いた。

「あの、そこまで一緒して良いですか？」

「・・・ええ。どうぞ」

アインハルトさんをイクスとヴィヴィオが挟むような立ち位置で歩いて、僕とコロナとリオはその後ろを歩く。さすがに６人が横一列に歩くのは邪魔すぎるから。ヴィヴィオは何か話しかけようとしてるようで、口をパクパクさせてる。

「ヴィヴィオ、金魚みたいだね♪」

「挙動不審なのは間違いないけど・・・」

リオは楽しそうに、コロナは不安そうにヴィヴィオを見てそんな感想を抱いた。そこに助け船を出したのはイクスで、「アインハルト。次の練習日ですが・・・」って、次の合同練習日の予定について切り出した。あの試合の後、アインハルトさんも僕たちと一緒に、ノーヴェの指導を受けることになった。

・―・―・回想だよ・―・―・

ノーヴェとの試合を終えた後に休憩を３０分挟んで、「ありがとうございます、ほぼ回復しました」ってアインハルトさんが立ち上った。ノーヴェも「そうか。んじゃ、ちょいとストレッチしてから始めっか」って言って立ち上った。

「うんっ」

ヴィヴィオや僕、コロナとリオも続いて立ち上がって、ヴィヴィオとアインハルトさんがストレッチするのを見守る。そしてお互いに準備が整うと、アインハルトさんが「武装形態」の掛け声と一緒に大人の姿へ変身。

「レイジングハート、お願い♪」

ヴィヴィオは、なのはさんの愛機"レイジングハート"の力を借りて大人モードへと変身した。ヴィヴィオは時々、ああして大人モードに変身した状態でストライクアーツの練習をすることがある。大人モードは、ヴィヴィオにとってある種の思い出したくないトラウマのようなものって思ってた。

（プライソンに操られて、なのはさんやフェイトさんと戦った時の姿だから・・・）

でもヴィヴィオは、"レイジングハート"をなのはさんから借りられた時は必ずと言っていいほど、練習時間の半分を大人モードで過ごす。

――だって魔法や武術の練習って、どっちかっていうと大人モードの方が便利なんだよ。リーチとかあるし。インターミドルも、この大人モードで参加する予定だし――

どうして大人モードなんて、リソースを割いてまで使うの？っていう僕の問いに、ヴィヴィオはそう答えてくれた。ストライクアーツ

や魔法の練習している時の大人モード・ヴィヴィオは、格好良くて綺麗で・・・すごくドキドキする。

「それじゃあさっきと同じ、射砲撃・バインド無しの魔力運用アリで、だ。いいな？」

「「はいっ！」」

ヴィヴィオとアインハルトさんが向かい合って、それぞれ構えた。そしてノーヴェが高く掲げていた右腕を、「レディー・・・ゴーッ！」っていう号令と共に振り下ろした。それと同時、ヴィヴィオが一足飛びでアインハルトさんへ向かって突っ込んで行った。

「ヴィヴィオ、初めから全速だね」

「午前中のスパーリングで見せちゃったからね、ギアチェンジ」

「うん。アインハルトさんはもうヴィヴィオのハイギアの速度を知ってるし慣れてるから、スパーリングの時みたくローギアから攻めるとかえって危ない」

徐々に攻撃の速度を上げて行くギアチェンジ。ヴィヴィオにも危険な賭けのような戦術は、元はお父さんがヴィヴィオに修業を付ける際に見せた技術だ。相手の実力を測ると同時に、相手の力量を引っ張り上げる技。それを実戦に取り入れたのはヴィヴィオだ。

「やっぱりアインハルトさん、強いね・・・」

「模擬戦とはいえ実践を続けてるヴィヴィオなのに、器具でのトレーニングしかしてないっていうアインハルトさんが押してる」

午前のスパーリングじゃアインハルトさんは後半にしか攻めてこなかったけど、今回は積極的にヴィヴィオに攻撃を仕掛けていってる。これが覇王イングヴァルトの記憶とカイザーアーツを承継した、その恩恵ってわけなんだ・・・。

「うぅ〜、あたしもアインハルトさんと闘ってみた〜い！」

リオって、シグナムお姉ちゃんみたいに戦う事が結構好きだったりする。まぁシグナムお姉ちゃんほど末期症状じゃないけどさ。そんなリオが白熱するほどの闘いが僕たちの目の前で繰り広げられる。殴っては殴られて、避けては避けられて、防いでは防がれて、だ。

――フォルセティ。わたしね、大好きで大切な、守りたい人がいるの――

「ヴィヴィオ・・・」

――小さなわたしに、強さと勇気を教えてくれた――

「負けないで・・・」

――世界中の誰よりわたしを幸せにしてくれた――

「勝って・・・」

――その人たちに強くなるって約束したから。だから強くなるためにわたしは頑張るんだよ。どこまでだってずぅ～っと高みを目指す！――

「頑張れぇ～～～！」

ヴィヴィオが以前言ってた、ストライクアーツを始めた理由を思い返した。だから思わず大声で声援を送っちゃったけど、コロナとリオも「ファイトぉ～！」って続いてくれた。でもイクスはどっちかに付くってことはしないみたいで無言だった。ヴィヴィオは僕たちの声援に応えるかのように、さらに攻める頻度を上げていった。だけど・・・

「覇王・・・断空拳！！」

「っ！　きゃぁぁぁぁぁ！」

ヴィヴィオの強烈な右の一撃をガードした状態で、アインハルトさんは本気の断空、覇王断空拳を打ち込んだ。まともにお腹に受けたヴィヴィオは大きく殴り飛ばされて、倉庫に壁際に設けられていた資材置き場に突っ込んだ。

「「「ヴィヴィオ・・・！」」」

「1本！　そこまで！」

ノーヴェが勝敗が決したことを宣言した直後、アインハルトさんが「ぅあ・・・？」って前のめりに倒れ込んだ。ノーヴェが「フォルセティとイクスはヴィヴィオを！」って指示を出した後、アインハルトさんの元へと駆け寄った。

「「はいっ！」」

僕とイクス、コロナとリオも一緒にヴィヴィオの元へ駆け寄った。ヴィヴィオの大人モードは解除されちゃってて、「はぅ～」目を回してた。断空拳と資材置き場に突っ込んだ衝撃での気絶だけで、ヴィヴィオ自身にはダメージが入ってないっぽい。

「うん、大丈夫。アインハルトさんはちゃんと気を付けて打ってくれたおかげかな。防護服を貫かれてないから、ヴィヴィオに怪我は無いよ」

僕がある程度診た後にそう判断を下したら、コロナとリオ、それにイクスも「良かった」って安堵した。ノーヴェとアインハルトさんの方を見ると、「こっちも大丈夫だ！」って手を振ってくれた。アインハルトさんも大人モードを解除したうえで立ち上がって、ノーヴェに付き添われるようにこちらに歩いてきた。

「アインハルトさんも、僕・・・よりはイクスが診た方が良いかな・・・？」

「いえ、平気です、ありがとうございます」

「一応診てもらえ、アインハルト。軽度とは言え脳震盪を起こしてんだ。お前、ヴィヴィオを殴り飛ばす直前に顎にカウンターを食らってんだしな」

「あ、はい・・・では、お願いします」

イクスがアイリお姉ちゃんやシャマルお姉ちゃん（ウチに遊びに来てもらう時、シャマルお姉ちゃんからも医療を教わるようになった）から、教わった知識を用いてアインハルトさんを診察。その結果、「問題はありません。が、しばらく安静です」とのことだ。

「迎えを呼ぶので、今日は一緒に帰りましょう」

「いえ、まだ練習があ――」

「今日は、か、え、り、ま、しょう？」

イクスがアインハルトさんに顔を近付けてそう言うと、アインハルトさんはイクスの迫力に圧されたみたいで「は、はい」と小さく頷いた。するとイクスは「はい♪」って満足そうに頷くと、アインハルトさんを横に寝かせた後にルーツィアさんに迎えに来てもらえるように手配した。

「んで、だ。アインハルト、どうだ？　ヴィヴィオ達と一緒にやってみねぇか？」

ノーヴェが改めて誘うとアインハルトさんは、隣に眠るヴィヴィオを見て少し黙った後、「私は、ヴィヴィオさんやノーヴェさんとの試合を楽しんでしまったんです」って、自分を責めるような事を言った。

「もっとヴィヴィオさん達と闘いたいと・・・。いけない事なのに・・・」

「いけない事なんかではありません。アインハルト。貴女は見つけたんですよ」

「見つけた・・・？」

「ええ。貴女の闘うべき場所を見つけたんです」

イクスの言葉にアインハルトさんが「闘うべき場所」って繰り返したら、ノーヴェが「だな。お前はやっぱりこっち派だよ」って優しく微笑んだ。

「最強を示して覇王流の名を轟かすんだろ？　あたしがステージを用意してやるよ。お前はあれだろ。ベルカ戦乱時代のように、命の削り合いをする殺し合いをしたいわけじゃないんだろ」

「それは・・・。正直、これまではクラウスの悲願を果たすためには、私も命の削り合いくらいはしなければならない、と考えていました。でも今日、ノーヴェさんやヴィヴィオさんとルールの下に闘って、楽しいと思ったんです。もっと闘いたいと・・・」

「そうか。なら、それでいいじゃねぇか。イクスの言うとおり、こっちで闘え。んで頂点を目指せ。練習を重ねて自分を高めて、公正なルールの中で相手と競い合う。アスリートに向いてるよ。で、だ。ヴィヴィオ達も目指してる、インターミドルチャンピオンシップ。お前も目指してみねぇか？　今年の大会はもう終わっちまったが、来年までに地力を伸ばす期間が生まれたと考えればいい」

「インターミドルチャンピオンシップ・・・？」

格闘家に挑戦すると言ってた割に、結構大きな競技会の事は知らないんだ。インターミドルについて説明する。スポーツ競技の運営団体ＤＳＡＡが開催するの競技会の１つ。１０歳から１９歳までが参加できる、制限なしの無差別級の魔法戦競技会。ヴィヴィオやリオ、アインハルトさんのような格闘型は少ないみたい。

「まずは１つの世界で何回戦もの試合を繰り返して最強の代表を決め、そのあとに全管理世界から集まった数居る代表からさらに最強を決める。それに優勝することが出来れば・・・」

「間違いなく、世界最強の１０代、というわけです」

ノーヴェの話を遮ってそう言ったのは「ヴィヴィオ！」だった。上半身を起こしたヴィヴィオが「アインハルトさん。わたし、アインハルトさんとも一緒に頑張りたいです」って思いを伝えた。

「わたし、もっと強くなります。そしてインターミドルで、公式試

合のステージで、アインハルトさんと闘いたいです！」

僕たちの視線がアインハルトさんに集まる。アインハルトさんは少し目を伏せた後、スッと右手を自分の胸に添えた。

「ありがとうございます。ノーヴェさん、ヴィヴィオさん、そして陛下。皆さんからのお誘い、お受けしようと思います。インターミドル、私も挑戦させていただきます」

・―・―・終わりです・―・―・

ノーヴェにもいろいろと予定があるから、ノーヴェとの練習が無い日はヴィヴィオ達は貰ったトレーニングメニューの通りに練習をする。そして今日は週一の休みの日。この日だけはトレーニングを行わないように言われてる。

「あ、あの！　明日の練習なんですが！」

「はい。確か・・・」

「プールですよ、アインハルト」

「プっ、プールですか！？」

アインハルトさんのリアクションに僕たちは小首を傾げた。だってアインハルトさんにもスケジュール表が渡ってるはずなのに。コロナが「アインハルトさん。もう一度見てみてください」って促した。

アインハルトさんが携帯端末を鞄から取り出して、スケジュール表を立ち上げた。

「「「「・・・・」」」」

「確かにプールって書いてありますよね・・・？」

ポカンとしてるアインハルトさんやヴィヴィオ達に僕がそう言うと、イクスが「反応を見る限り、無意識にスルーしたのでしょうか？」ってアインハルトさんをチラリと見た。アインハルトさん、プールが苦手とかそういう感じなのかな～・・・。

「あの、私が参加する理由は練習のためであって、プールで遊ぶためではありませんので・・・」

端末を鞄の中に入れ直しながらアインハルトさんがそう言い捨てた。それに対して「それは違います。プールで体を動かすことがトレーニングなのですよ♪」ってイクスが反論した。それを聞いてもアインハルトさんは納得できない雰囲気だ。

「口で説明しても良いですけど、実際に体験するのが一番ですよ」

「それでは納得できません。説明を求めます」

そう食い下がるアインハルトさんの後ろで、「そんなにプールが嫌なのかな・・・？」ってリオ達がコソコソ話してる。それから校舎に入ってアインハルトさんと別れるまで、イクスがプールで・・・

というよりは水中で体を動かすことで柔らかくしなやか、んで持久力のある筋肉が付くなどのメリットを説明することになった。

†††Ｓｉｄｅフォルセティ⇒ヴィヴィオ†††

水の抵抗を受けるプールで遊――コホン、練習することがアスリートとしての体作りに重要なんだって話をアインハルトさんとした朝。授業も終わっての放課後、わたし、フォルセティ、コロナ、リオ、イクス、それにアインハルトさんと一緒にデパートにやってきた。

「この季節に水着なんて売っているのでしょうか・・・？」

「大丈夫ですよ、アインハルトさん。ここの水着コーナーは年中あるので」

デパートに来た理由は、アインハルトさんの水着を買うため。アインハルトさんは水着を持ってないってことだったから、一緒に買いに行こうって誘ってみたらＯＫを貰えてちょっとビックリ、そして嬉しかった。

「あのさ、女の子であるアインハルトさんの水着を買うのに、僕が一緒ってあまり意味ないような・・・」

一番後ろを歩いてついて来るフォルセティがそう漏らした。するとリオが「フォルセティも女の子っぽい外見だし変じゃないよ♪」って笑った。しーんと静まり返るわたし達。

「お父さんも、昔はそれでからかわれてたって言ってた・・・」

「あー、ルシルさんは格好いいけど、どちらかと言えば綺麗って感じがするかな～」

ルシルさんが髪を伸ばしてた時期はなのはママのアルバムでしか見たことがないけど、長い銀色の髪を靡かせて戦場を翔けるルシルさんは格好いいより綺麗だったし。だからリオの感想を真っ向から否定は出来ないんだよね。

「う～ん、もっと鍛えてみようかなぁ。ザフィーラみたいになれば、女の子みたいなんて言われないだろうし」

フォルセティはそう言いながら力こぶを作るように掲げた右腕をグイッと曲げた。ザフィーラの姿を思い浮かべて、その顔をフォルセティのものにするイメージ。次の瞬間、わたしとコロナは「本気でやめて」って懇願したし、イクスも「はい。さすがにそれは酷いです」って俯いた。

「そう？　格闘型じゃなくて魔導師型を目指してる僕だけど、ガッツリ鍛えると格好良くない？」

「「良くない！」」

「鍛えるにしても、ザフィーラほどまで鍛える必要はありません」

たとえ鍛えるにしてもルシルさんのような、細い体を維持した感じ

で筋肉を付けてほしい。さすがにザフィーラレベルはキツイよ・・・。フォルセティが「そっか。ダメか～」が残念がってる中でデパートに入って、寄り道しないで水着売り場へ向かう。

「ところで、フォルセティさんはインターミドルには参加しないのですか？　女子の部と男子の部があるのですから、フォルセティさんも参加してはどうですか？」

フォルセティが参加しない理由を知らないアインハルトさんがそう聞いた。

「ヴィヴィオ達を支えることが僕の希望なんです。あと他に、男子の部も女子の部と同時期の開催なので、みんなの応援に行けないのが嫌なんです。みんなが頑張っているのを見届けたい、応援したい。だから出場はしないんです」

「そうですか。ちゃんとした理由があったのですね」

とっても優しい微笑みを浮かべたアインハルトさんにドキッとした。話は綺麗なままで終わりそうだったのに、「大丈夫ですよ、アインハルトさん！　フォルセティも女子の部に参加しますから！」ってリオがおかしな事を言いだした。

「はい？」

「実はですね～。フォルセティって実は女の子なんですよ♪　男の子の格好をしているのは、お父さんに憧れているからなんですよ♪」

よく即興でそんなイタズラを思いつくな～、って逆に感心したよ。魔神オーディンは男の人だ。そのクローンということは自然と性別は男になる。だからアインハルトさんが、そんな嘘に引っかかるわけないよ。

「あ、そういう事なのですね。通りで可愛らしい方だと。インターミドルの会場はいくつかに分かれることもあるらしいので、確かに参加すれば皆さんの応援は難しいですね」

「「「「・・・え？」」」」

サラッと受け入れたアインハルトさんにわたし達や、嘘を吐いたリオ自身も「ん？」って小首を傾げた。アインハルトさんはそれ以上話を続けることなく歩を進める。

「ねえ、まさか本気にしちゃった・・・？」

「いや～、さすがにそれはないと思うんだけど・・・」

「もしかしてジョーク返しなのかも・・・？」

前を往くイクスとアインハルトさんの背中を眺めながら、わたしとコロナとリオでひそひそ話す。フォルセティが「どうすんの？」ってリオをジトッとした目で見たら、「うーん、ジョークで～す♪って？」ってリオが軽いノリで言った。

「仮にも先輩相手にそれは・・・。たぶん、アインハルトさんなりのジョークなんだと思う、と思いたい」

「そ、そうだよね？　アインハルトさんは優しい人だから、リオのくだらないジョークに付き合ってるんだよね？」

「く、くだらない・・・。じゃあネタばれは早い方が良いかな・・・？」

「う～ん・・・」

そうこうしている内に水着売り場に到着。イクスが「何か希望などはありますか？」って質問すると、アインハルトさんは「あまり明るい色は好みませんが、白や薄い緑などは好きです」って答えた。バリアジャケットがそういった色だし、似合いそうだけど・・・。

「アインハルトさんはクールだから、黒も似合うと思いますよ」

コロナがイクスとアインハルトさんの側に寄ってそう提案した。リオのジョークに悩むより、あっちの方が楽しそう。というわけで、「わたしも黒、良いと思います！」ってコロナの意見に賛成。後ろから「ヴィヴィオ！？」って驚くリオの声が。

「まぁどうするかはリオに任せるよ～」

「あぅ～。フォルセティ～・・・」

「僕も知らな～い。僕は女の子の水着選びには役に立たないと思うから、店の外で待ってるよ」

リオには、ジョークは良いけど相手を選んでね、っていう罰を与えておく。それからアインハルトさんの意見を元に水着を選んで、試着をお願いしてはなんか違うを繰り返す。そして「これが一番似合ってます！」と断言できる水着を発見した。

「セパレートタイプのビキニです！」

「か、掲げないでください・・・！」

「色はシックな黒ですよ！」

「高らかに言わないでいいですから・・・！」

アインハルトさんが赤面する。失礼だって思いながらも、可愛いな～、なんて思ってしまう。ともかく、「判りました。この水着に決めます」ってアインハルトさんが決めてくれて、「やった！」ってわたし達は喜び合った。

「そういえばフォルセティさんはどうしました？」

「女の子の水着を選ぶのは恥ずかしいから外で待ってるって」

「同姓なのですから恥ずかしがることはないと思うのですが」

アインハルトさんが真顔でそう言った。ずっとリオのジョークに付き合ってるだけだって考えていたから、「まさかの素！？」ってわたし達は本気で驚いた。

「あ、あの！　アインハルトさん！」

「ごめんなさい！　フォルセティが女の子というのは、ちょっとした冗談だったんです！」

リオが前屈レベルに頭を下げて、アインハルトさんをからかった事を謝った。すると「はい。知っていました。私も冗談です」ってアインハルトさんがこれまた真顔でそう言ったから、わたし達はポカンと呆けちゃった。

「リオさんが冗談を言っているのはすぐに判りましたが、そこでそれが嘘だと指摘するのはどうなのか、と思いまして、引っかかったフリをすることにしたのです。驚きましたか？」

逆にからかわれてた事に「そうだったんだ～」って安堵した。ホッとしたまま店の外へ出ようとしたところで、フォルセティが見知らぬ女の子と楽しそうにしている光景がバーンと視界に入った。

「お待たせしました、フォルセティさん」

アインハルトさんがそれに構わずフォルセティの元へと向かったから、わたし達も遅れて続く。フォルセティが「友人と話していたのであっという間でした」って返した後・・・

「ヴィヴィオ達は初めてだよね？　２週間ほど前から八神道場に通ってる、僕たちより２つ年上の・・・」

「ミウラ・リナルディです！　ヴィヴィオさん達のお話しは師匠たちから聞いてます！　ボクも来年のインターミドルに挑戦する予定なので、その時はどうぞよろしくお願いします！」

すごい元気な声で自己紹介された。女の子の正体がヴィータさん達の弟子だってことが判って一安心。わたし達も自己紹介をした後、「家族を待たせてるので、これで失礼します！」って勢いよくお辞儀した後、わたし達の元から走り去っていった。

「あの、八神道場というのは・・・？」

「僕の家族が開いてる、ストライクアーツを子供に教えるっていう教室です。基本的にヴィータお姉ちゃんとザフィーラの２人が教えるんですが、時にはお父さんやシグナムお姉ちゃんも参加します」

アインハルトさんにフォルセティがそう答えると、アインハルトさんの目が輝いた。アインハルトさんがチームナカジマに入った理由の中に、カルナージ合宿がある。引率として一緒に行ってくれるなのはママ達、高ランクの魔導師・騎士との本気の魔法戦に参加できるからだ。わたしも楽しみの反面、ちょっと恐かったりする。自分が生き残るだけで精一杯かもだし。

「なるほどです。ではミウラさんは、ヴィヴィオやリオ、そしてア

インハルトにとって将来、手強いライバルになるわけですね」

「うん」

「だね」

「はい」

わたし達は改めてインターミドルへの挑戦、そして勝利を決意した。

Ｅｐｉｃａ９－Ａザンクト・ヒルデ魔法学院・学院祭～Ｆｅｓｔｉｖａｌ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

９月も半ばに入った今日この頃。わたしの通うザンクト・ヒルデ魔法学院は、年に１度の学院祭を開催中です。開催される日は日曜日だから、一般の方も多く来てくれる。なのはママやフェイトママ、それにはやてさん達もわざわざ予定を空けて来てくれるから、もう張り切っちゃうのです。

「Ｂ組女子の皆さん。Ａ組の着替えが終わりましたので、着替えの方よろしくでーす！」

「判りました。ありがとうございます！」

Ａ組のクラス委員が知らせに来てくれて、Ｂ組のクラス委員の１人であるコロナがお礼を言った後、「じゃあ女子は更衣室に移動してください！」ってわたし達に指示を出した。

「えっと、男子は女子が全員出てから着替えてください」

「すごいわくわくするね♪」

「はい！　初めての学院祭、とっても楽しみです♪」

イクスと笑顔を浮かべ合う。1学年と2学年の時は合唱と演劇だったから、喫茶店をやるの憧れだったんだよね。それぞれ着替える衣装を手にして、わたしたち女の子だけ教室を後にしようとするんだけど・・・。教室の奥から、「はぁぁぁ～～～～」って長い溜息が聞こえてきた。

「あの、フォルセティ君・・・大丈夫？」

コロナが声をかけたのは、もう1人のクラス委員であるフォルセティだ。フォルセティも自分が担当するコスプレの衣装を手に・・・取ることなくデスクの上に置いたまま。そしてまた「はぁぁ～～～」って大きな溜息を吐いた後、「もう・・・帰っていい？」なんて言ってきた。

「始まってもいないのに帰ったらダメだよ？」

「フォルセティ。ここは男の子らしく、堂々と着ればいいのです」

「堂々って・・・。僕の衣装、女物なんだけど・・・」

「「「・・・」」」

最初はやる気を見せてたフォルセティだったけど、衣装が決まった途端にやる気が完全に消失しちゃった。

・―・―・回想♪・―・―・

「――それじゃあ・・・多数決の結果、３年Ｂ組の出し物は喫茶店ということで」

クラスメイトの意見をまとめた結果、フォルセティの言うように喫茶店になった。この学院は割と生徒の自主性を尊重していて、喫茶店の出店はわたしたち第３学年から可能になる。だからみんな、「服はどうしよう？」とか、「クッキーくらいなら作れるよ」とか、「わたしの家、喫茶店だからパフェとかいけるよ」って、わいわい騒ぎだす。

「あの、ちょっといいかな～・・・？」

「みんな、ちょっと静かに～！　シスター・カヤからお話しがあるみたいだから！」

事の成り行きをずっと見守ってくれてたシスターがここに来て話に入ってきた。しかもなんだろう、なんか困ったような顔してる。みんなは一斉に口を閉じて、教壇に立ったシスターからの話を待つ。

「あの～、本当に申し訳ないんだけど、同じ学年内で同じ内容の店は２店までなんです。すでにＡ組、Ｄ組、Ｅ組が出店を申し出ているの」

シスターから告げられたのは、わたし達の希望を潰すものだった。第３学年の全クラスが出店するものを決めるのは、このロングホームルームになってたはず。それより早く決まってるなんて、ちょっとおかしいというか・・・。

そこからは早い者勝ちだと、不公平だ、ルール違反だ、って非難が続出。シスターは「まだ確定じゃないので、これからクラス委員の話し合いで決めようと思います」ってフォルセティとコロナの肩に手を置いた。

「「え・・・？」」

「どのクラスが何を出店するのかは、全てのクラスからの申請が揃ってからです。複数被っていた場合は、申請が揃った後での話し合いで決まる事になります。自主性を重んじる校風ですので、クラス委員の話し合いで決めてもらいます」

ということで、B組の出展内容はフォルセティとコロナの肩に託された。その後のロングホームルームは、もし喫茶店がダメだった時のために代替案を考える時間になった。そしてお昼休みに、クラス委員が集まる会議が行われた。イクスと2人でお昼ご飯を摂りながら、フォルセティとコロナは頑張ってくれてるかな～、ってお話しながら待っていると・・・

「ただいま～」

「ただいまです」

2人がお弁当箱を持って帰ってきた。談笑してたみんなが一斉に2人に注目して、「どうだった！？」って聞いた。

「結論から言うと、喫茶店は・・・」

フォルセティが溜めた後、コロナが「開けます！」って言った瞬間、「やったー！」って教室に歓声が上がって、わたしとイクスも「やったー！」ってハイタッチ。

「でも！」

フォルセティのその言葉にまた教室内がシーンとなる。わたし達の視線を一手に受けたフォルセティが「Ａ～Ｅ組が共同で、１つの喫茶店を出すことになった」って妙なことを言い出して、そうなった経緯をわたし達に伝えた。他のクラスの喫茶店のコンセプトはチャリティバザー、目隠しテイスティング、ペナルティルーレット。ちなみにＢ組は何かしらのコスプレにしようかって話だった。

「コンセプトはバラバラ。でも喫茶店は同じ。それで論議しあった結果、共同で開催しようという事になったんだ」

「具体的な内容は、これからこのクラスでまとめた上で、各クラスの委員と私たちが話し合って決めます」

・―・―・終わりで～す・―・―・

他のクラス委員と話し合った結果、第３学年は教室２，５部屋分の広さを持つ特別教室を貸し切って、協同で喫茶店を切り盛りすることになった。お菓子作りが得意な子は準備室でお菓子作り。１０～１５人でフロア回し。残りは学院の全エリアを歩き回って宣伝だ。

「ねえ、フォルセティ。衣装はくじ引きで決まったんだし、嫌かもだけどやらないと・・・」

「フォルセティも頑張りましょう？」

わたしとイクスでフォルセティを勇気付けると、「そうだよね。女装は僕だけじゃないんだから・・・！」ってフォルセティは自分の両頬をパチンと叩いて気合を入れた。着替えを嫌がる理由がそれ。フォルセティは女の子の格好になるのが嫌で、あんなに落ち込んでた。

「じゃあまた後でね～」

フォルセティに手を振って、わたしとコロナとイクスは教室を後にして更衣室へ。空いてるロッカーに脱いだ制服を掛けて、わたしの担当するコスプレ衣装に袖を通す。胸から上の部分の無いビスチェワンピース。背中に半透明な羽を４枚。花冠を被って、髪型をなのはママみたくサイドポニーにする。

「よし、これＯＫ♪」

「私も着替え完了です、わんわん♪」

イクスが着替えたのは狼男ならぬ狼女。ふっさふさな狼の耳の付いたカチューシャと尻尾、それに肉球の付いた手袋とブーツ。モコモコな毛皮の着いたキャミソール、丈の短いホットパンツを履いてる所為かな、ちょっと足をもじもじしてる。

「コロナは着替え終わりましたか？」

後ろのロッカーに振り向きながら、同じように着替えてるはずのコロナに尋ねる。小さなシルクハット、長いウサギ耳、お尻の方にはふわふわな丸い尻尾。モノクルと一抱えある懐中時計っていう小道具も完備。童話の白兎をモチーフにしたコスプレだ。

「おお！　コロナも似合ってる！」

「そ、そうかな？　ありがとう♪　ヴィヴィオもイクスも可愛いよ♪」

3人でえへへ♪って笑い合いながら更衣室を出て、他のクラスメイトと一緒にお喋りしながら教室へ。男の子がまだ着替えてる中に女の子が入らないようにドアが閉められているはずだったけど、もう開いてるっていうことは男子の着替えももう終わったってことだし、何よりクラスの男の子もいろんな衣装に着替えて廊下でお喋りしてる。

「男子の着替えはもう全員が終わったの？」

「フォルセティの着替えがまだだよ。あの衣装じゃ仕方ないと思うけど・・・」

「着るにも脱ぐにも面倒くさそうな服だったよね～」

そう言って教室の中を見た2人の男子に、「だったら手伝ってほしかったよ」って呆れた風に言いながらフォルセティが出て来た。着替え終えたその姿に「可愛い！」って歓声が上がった。

「お父さんも昔は女装させられてたって言ってたけど・・・。今ならその屈辱がよく解るよ・・・」

フォルセティが着てるのはプリンセスタイプのドレス。ティアラとかお化粧もしっかりされてる。他のクラスの子たちも、「わぁ♪」って見惚れちゃってる。

「～～～っ！・・・もう・・・やったらぁぁ～～～っ！　せいぜい見世物になってくるよ、こんちくしょ～！」

若干自棄気味なフォルセティはいろいろ諦めて、「はぁ～。コホン。参りましょう。祭りの始まりです」って声色や口調まで女の子っぽくして、特別教室へと続く廊下を見据えた。外回りメンバーは、来てくれた一般の方たちに渡すポイントカードやパンフレットを取りに行かないと。先に行ってるだろうクラスメイトを追って、わたし達も特別教室へ。

「あ、ヴィヴィオ！　それにフォルセティ達も！　おっはよ～！」

「おはよう～、リオ！」

D組のリオも自分のクラスメイトと一緒に来ていた。リオの衣装はライオンの着ぐるみ。頭の部分は被り物じゃないフード。側に居る

友達らしい子たちも、頭がフードタイプの動物の着ぐるみだ。

「ヴィヴィオもイクスもコロナも可愛い～！　でも一番可愛いのフォルセティだ～！」

「・・・ええ、そうよ！　可愛いでしょ！？　もっと可愛いと敬え～！」

「おお！　可愛い、フォルセティ、可愛いぃ～～～！」

変にキャラ作ってるところ悪いけど、女装したからといって女の子になりきろうとしなくてもいいんだけど・・・。って言ったら、フォルセティどうしちゃうだろう。

「フォルセティの勇気に水を差すのは気が引けますので、あのままで良いのでは？」

「それはそれで後で怒られないかな～・・・？」

「まぁフォルセティは自分のした責任はしっかり自分で背負うから、笑って許してくれる・・・と思う」

それからわたし達は特別教室に入ってそれぞれの準備を始める。わたしとコロナとイクス、それにリオや友達は喫茶店で使うためのポイントカードやパンフレットを、そしてフォルセティは、係の子から「はい、スペシャルキャラのスタンプです！」って、小指サイズのスタンプを1個受け取った。

「それじゃ、気合を入れて頑張ってこう！」

「「「「「おおー！」」」」」

外回り組だけで校舎のエントランスへ向かおうとところで、フォルセティが「じゃあ僕も行くよ」ってわたし達に手を振ってくれたから、「お互い頑張ろうね♪」ってわたし達も手を振り返した。フォルセティを見送った後は他のクラス、他の学年の生徒たちと一緒に学院前動線の両脇に待機。そしていつもは授業の始まりと終わりを告げる鐘が、学院祭の始まりを知らせるために鳴った。

「「「「いらっしゃいませ～！」」」」

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ⇒フェイト†††

私たちチーム海鳴は、ヴィヴィオ達から招待されてＳｔ．ヒルデ魔法学院の学院祭へとやって来ていた。飾りが施された正門を潜ると、吸血鬼？のコスプレをした男の子が「パンフレットです！」って差し出してくれた。

「悪いのだけど、４冊ほど貰えるかしら？」

「あ、はい、どうぞ！」

アリサが男の子からパンフレットを受け取って、私となのはに１冊、八神家に２冊、アリさとすずかとシャルに１冊と手渡してくれた。

それにお礼を述べて受け取って、他のお客さんや生徒の子たちの邪魔にならないように気を付けながらパンフレットを見る。

「ヴィヴィオ達の出し物って、３年生全クラス協同で開く喫茶店だよね」

「うん。えっと、パンフレットに詳しく載ってるはず・・・」

３年生の協同喫茶は、ちょっとしたゲームを催してる。学園の敷地内に散開してる特別な衣装を着た生徒を見つけて、スタンプを押してもらう。押してもらった数だけ喫茶店でサービスを受けられる、とのこみたい。

「そのスタンプを押してもらうカードって、どこで貰えるのかな・・・？」

「３年生からなら貰えるんじゃね？」

なのはにヴィータがそう答えて、「ちょっと聞いてみっか」って仮装してる子に話し掛けようとした時、「あー！」って聞き覚えのある声が離れたところからした。そっちを見れば、オレンジ色のビスチェワンピース、半透明な羽、花冠といった妖精のような格好をしたヴィヴィオが「ママ～！」って駆け寄って来てくれた。

「「ヴィヴィオ～♪」」

「皆さんもいらっしゃーい♪」

笑顔全開のヴィヴィオがはやて達にお辞儀した後、「あ、ポイントカードです！」ってウェストポーチから２つ折された手の平サイズのカードを出した。ヴィヴィオの説明だと、１枚につき２人までサービスを受けられるとのこと。カップルのお客さんを考えての設定みたい。私となのは、アリサとすずか、はやてとルシル、シャルとシグナム、アインスとリイン、シャマルとヴィータ、アイリとアギトの７枚を受け取る。ちなみにザフィーラは子犬フォームだから必要ない。アルフやユーノも連れて来たかったけど、どっちも予定があって断念。

「それでは皆様、Ｓｔ・ヒルデ魔法学院学院祭を楽しんでいってください♪」

手を振ってくれるヴィヴィオに「ありがと～♪」と手を振り返して見送った後、まずはどこから行くかをみんなで話し合う。はやてが「フォルセティも今は喫茶店にはおらへんって話やし、喫茶店はお昼までお預けやな」って唸った。

「こう固まって回るより、おのおの気になったところから回るのも良いんじゃない？」

「はやてちゃん達は学院のお知り合いに挨拶に行きます？」

「そうやな～。シャマルの言うとおり先生方に挨拶でもしに行こか～」

「わたしも知り合いのシスターに顔を出しに行くよ。シグナムはどうする？　他の子に付いてく？　合流するまでカード預かろうか？　シグナム、スタンプを押してもらいに行くキャラじゃないし」

「そうだな。お前に任せる」

シグナムからカードを受け取ったシャルは、「んじゃ、また後で～♪」って手を振りながら、中等科の校舎へ走って行った。そういうわけで、私たちもそれぞれ学院祭を見て回ることになった。

「じゃあ私とフェイトちゃん、はやてちゃんとルシル君で、先生方に挨拶回りに行こうか」

「「うん！」」「ああ」

「アイリ達は出店を回るね～♪」

「フォルセティ達の喫茶店でも何か頂くですから、食べすぎはダメですよ～」

私たちもシグナム達と別れて、初等科の校舎の中へと入る。活気溢れる校舎は、私たちの学生時代の事を思い起こさせる。小学校の頃の演劇や、中学校の頃の文化祭などなど。局の仕事で参加できない時もあったけど、それでも色褪せない思い出だ。

「挨拶回りついでに特別キャラを探してみようか？」

「そうやね～。先生方も仕事で校舎を回ってるやろうし、それがええやろ」

「えっと～、特別キャラの特徴は・・・」

パンフレットの第３学年の欄を見る。舞うドール。迫り来る石像。逃げ惑うミイラ。蠢くビブリオマニア。這い寄る混沌。燃えるわんこ。滑るにゃんこ。モコモコ兵隊長などなど、２０人近くが学院の敷地内を歩き回ったり、特定の場所で待機してるみたい。

「本の虫（ビブリオマニア）っていうことは、居場所は図書館だよね」

「なんの催し物してるんだっけ？」

「作家志望の子が書いた小説の売り場があるみたい」

「へえ、面白そうだな。はやて、後で寄らせてもらっても良いか？」

「あはは、ええよ～♪」

ルシルも割と本の虫。子供の頃は仕事の合間に無限書庫に足を運んでいたし、ユーノと一緒に未整理区画の防衛機構やらトラップを潰して回っていたし。あの頃のルシルはいつも楽しそうだったな～。

「あっ！　ねえ、あの子ってもしかして・・・！」

なのはの指差す方には、うろうろと走り回ってる包帯で全身を包ん

だ男の子が、「スタンプちょうだ～い！」って小さな子供たちに追われてた。そして「わあ！　捕まっちゃった～！」ってミイラ君は足を止めて、子供たちのカードに首から提げていたスタンプを押した。子供たちと手を振って別れると、すぐに役割に戻って辺りを走り回り始めた。

「止まらせては走らせるのはちょっと可哀想だけど・・・」

「休憩も入れてるみたいだから、そこは遠慮なくってゆうことで」

そう言ってはやてがミイラ君の元に駆け出して、「スタンプくださいな～♪」って追いかけ始めた。ミイラ君もそれに気付いて、はやてから逃げるように駆け出す。しかも割りと「走るの速くなった？」から、はやてがちょっと苦戦。

「どれ。俺も参加しようかな」

ルシルもはやてと一緒にミイラ君に挑んで、挟み撃ちにすることで「逮捕であーる♪」ってミイラ君に触れることが出来た。スタンプを押してもらって「やった～♪」って喜ぶはやてを優しい眼差しで見守るルシル。シャルには悪いけど、あの２人はお似合いだし、今もなんかカップルに見える。

「なのははスタンプ押してもらわないの？」

「ん？　ん～、学院祭の売り上げっていろんなところに寄付されるっていうから、サービスもそこそこにお金を払おうかな～って」

「あ、うん、そうだね。それが良いかも」

というわけで、スタンプ集めもそこそこに、っていうことに。ヴィヴィオとフォルセティの担任であるシスター・カヤの姿を捜しつつ、校舎内を歩き回る。そんな中、「おお！」っていう歓声と一緒に盛大な拍手が耳に入った。

「あ、なのはさん、フェイトさん！　はやてさんにルシルさんも！　いらっしゃいです！」

声を掛けて来てくれたのは「リオちゃん！」だった。動物の着ぐるみを着ていて、とっても可愛らしかった。お友達も似たような着ぐるみを着ている。

「フォルセティなら、そこの３－Ｂ組の教室で踊ってますよ！」

「あ、リオちゃん！　それは言っちゃダメなやつです！」

「ハッ！　ごめんなさい、今のなしで！　スペシャルキャラなんで！」

慌てて口を両手で覆ったリオだったけど、はやてが「おおきにな～♪」ってニヤッと笑った。居場所どころかスタンプを持ってる特別なキャラクターだってことまで話しちゃったリオは「あぅ～」って肩を落とした。そんなリオやお友達と別れて、私たちはヴィヴィオやフォルセティ、コロナやリオやイクスのクラスである３年Ｂ組の教室へ入る。

「フォルセティは・・・お、発見や♪」

教室の中央で踊るドレスの衣装を着たフォルセティ。相手は同じ身長くらいある二足歩行のライオン着ぐるみ？かな。衣装もバッチリ決まってるから、その光景はまさしく美女と野獣。フォルセティと着ぐるみの両手から天井に向かって糸が伸びていて、天井付近で浮遊している十字に組まれた木の棒に繋がってる。アレでフォルセティ達が人形だっていう設定を表しているんだね。周りにも小さなぬいぐるみがペアを組んで踊っているし、人形の舞踏会って感じだ。

「操作魔法かな。上手いね」

「うん。教室の壁際に何人か衣装着た子が居るから、たぶんあの子たちが操っているんだろうね」

視線をその子たちから主役らしいフォルセティに移す。ルシルが「なるほど。だからか」って何かに納得した風に頷いた。聞けば、フォルセティは学院祭の出し物が決まった頃から"ヴァルハラ"に入り浸る事があったみたい。その理由は、ダンスを教わりたい、とのことで、ルシルもダンスが得意な"エインヘリヤル"を用意していたって。

「そうなんだ～。道理でフォルセティもダンスが上手なんだ～」

「うん。本当に舞踏会みたい」

ドレスの裾やフォルセティの綺麗な銀色の髪がふわりと舞っていて、とても綺麗なダンスを魅せてくれた。そしてダンスが終わって、フォルセティ達には教室に居た私たちや他のお客さん、教室に入りきらなかった他のお客さん達から拍手が送られた。

Ｅｐｉｃａ９－Ｂザンクト・ヒルデ魔法学院・学院祭～Ｔｉｍｅｔｏ　ｅｎｊｏｙ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

本当はもっと練習をしたいのに、ここ最近はヴィヴィオさん達と同様に学院祭の準備などで一向に練習の時間が取れない。ですがその憂いも今日の学院祭が終わるまで。私の所属する５年Ｃ組の出展物は、グランドの一角に設けられた迷路内で行うお客さんの対抗ドッジボール。

（運動になるかどうかという話になると、なるとは言えますが・・・）

このゲームはボールの投擲から捕球や回避、敵味方の判断など、やる事考える事が多いので、瞬発力や思考力などは鍛えられるのですがもっとこう・・・スパーリングや、ヴィヴィオさん達から教わったミット打ちというのをやりたい。ミット打ちは拳打の角度を調整しやすいですし。

「お疲れ様、アインハルトさん！　休憩挟んだ後に次のお客さんとの試合があるけど、辛かったらちゃんと言ってね？」

迷路から休憩所まで戻り、体作りに重要ないろいろを詰め込んだ特製ジュースを飲んで水分補給。そこに級友の委員長からお気遣いの言葉を貰いましたが、「大丈夫です。問題ありません」と答える。

普段の練習量の１／３ほどしか動いていないので、お昼頃まで通しで参加しても問題ない。

「そ、そっか。それじゃあ次の試合までゆっくりしていてね」

「ありがとうございます」

また別の級友へ「お疲れ様！」と労いの言葉を掛けていく委員長を見送って、明日から再開される練習日に思いを馳せる。そして５分という休憩時間はすぐに終わり、「ではＡチーム、準備お願いします！」と号令を掛けられた。ＡチームとＢチームの二交替制を採り、１つのチームが試合、もう１つのチームが休憩を取ることで、万全なお客さんと試合を出来るようにする。

「よし、行こう！」

Ａチームのリーダーであるアーロンさんの号令に他のチームメイトの皆さんが「おお！」と右拳を高々と突き上げた。私がそれをしなかった事に気付いたチームメイトのアナさんが、「アインハルトさんも♪　ほらほら♪」って、私の右手首を取った。

「は、はあ・・・。お、おおー」

「おおー！」

顔面への投球は違反というルールですが、故意でないにしてもあたる可能性は高い。使用されるのは軟らかいゴムボールとはいえ、投

げる際はほぼ全力なので痛みを伴う。そのために顔面を護るヘッドギアとゴーグルを装着。迷路の入り口に戻ると、ちょうど試合を終えてきたBチームと会った。リーダー同士が「お疲れ～！」と手を打ち付け合うと、他のチームメイトの皆さんも続いて打ち付けあった。

「えっと、あの、ストラトスさん、ハイタッチ、い、いいかな？」

「え？　あ、はい」

試合をした後だからでしょうか、頬を赤く染めたアドルフさんと手を打ち付け合う。彼は私の横を通り過ぎた後、「よし、よし！」とガッツポーズを繰り返した。よほど先ほどの試合で良い成績を出せたのでしょう。

『それではダンジョンドッジの3戦目を開始します！　3戦目の挑戦者は・・・え？　うそ、これホント？』

ゲームを盛り上げ、なおかつ見学者を増やすためのマイクパフォーマンスを行うベッティさんが困惑の声を発した。その様子にチームメイトが「なになに？」と小首を傾げ合っている。

『し、失礼しました！　えー、3戦目の挑戦者の発表です！　なんと現役の時空管理局員！　しかもかの有名なチーム海鳴からの参戦です！』

一瞬で騒然となる中、私の心臓はドクンと力強く跳ねた。ヴィヴィ

オさん達とともに練習する事が決まってから、ヴィヴィオさんやフォルセティさんのご家族とは未だにお会いに出来ていない。

（ですが学院祭なのですから、ご家族が招待されていると考えるのは普通・・・）

クラウスの記憶の中にある守護騎士ヴォルケンリッターの皆さん。あの方たちの事はルシリオンさんと同様、クラウスの記憶を受け入れた頃にテレビで観て知っていた。クラウスに代わってお会いしてみようかと考えた事もありましたが、クラウスを憶えていないかもしれないと思い断念した。

『ミッド首都防衛隊所属、アリサ・バニングス一等陸尉！　本局技術部所属、月村すずか技術主任！　ミッド首都航空隊所属、八神シグナム一等空尉！　本局戦技教導隊所属、八神ヴィータ二等空尉！　この４名が、我らが５－Ｃが挑戦します！』

守護騎士の騎士シグナムと騎士ヴィータのお２人が居る。その強さはクラウスの記憶の中に鮮烈に残っている。バニングス一尉や月村技術官の事もテレビで拝見したことがある。４人とも圧倒的に格上な相手。

「すごいすごい！　有名な局員さんばかりだよ！」

「５人対５人がルールだけど、４人チームになってくれてすごく助かるよね」

「現役でしかも戦闘に特化してる騎士タイプが３人でしょ？　あたし達じゃ手も足も出ないよ」

「だ、大丈夫！　こっちにはアインハルトさんが居――って！　アインハルトさん、震えてるけど大丈夫！？」

マギーさんにそう言われて、初めて自分が震えていることに気付いた。アーロンさんやハワードさんやメグさんも「大丈夫！？」と駆け寄って来てくれた。

「医務室に行く！？」

「保健委員を呼んで来ようか！？」

「アインハルトさんの代わりを探してくるよ！」

そう慌てだす皆さんに「私は大丈夫です！　嬉しいんです。名のある騎士と戦える事が・・・！」と今の気持ちを伝えた。惜しむらくは格闘技での試合でないことですが、それはカルナージ合宿まで取って置きましょう。

「そ、そっか。それは・・・頼もしいね・・・うん」

「さすがアインハルトさん」

「そうだよね。相手が有名な局員だからって、呑まれることないよ！」

「魔法戦じゃ勝てないにしても球技なら勝てるかもだし！」

私の自分勝手な言葉に鼓舞された皆さん。申し訳ない気持ちがありながらも、今回は私の気持ちを優先させてもらう。迷路の入り口付近に整列したところで・・・

『では改めてルール説明を。各選手はボールを４球まで所持します。挑戦者は赤色、Ｃ組は青色です。迷路内で相手選手に遭遇したら、相手が気付いてなくても当てて貰って結構です。当たった選手はヒット宣言をして、ゼッケンを外して迷路外へと避難してください。敵味方関係なく避難中の選手に当てた際、故意ではなくとも強制失格となりますのでご注意を。壁や床でバウンドしたボールに当たった場合、それは無効となります。ボールを使いきった際、同チームの色であれば迷路内に落ちているボールを拾って再使用も可能です。相手のボールをキャッチした場合、キャッチしたボールであれば一度限り自チーム効果を認めます。そして試合の模様はモニターで迷路外に発信されていますので、不正は出来ないのでご注意を』

挑戦者に対してのルール説明が行われる中、ウエストポーチにボールが４球入っている事を確認して、いざ戦場へ。

『各選手迷路エントランスで待機してください。・・・カウントダウンを開始します。５、４、３、２、１、ＧＯ　！！」

号令に合わせて迷路内へと突入する。入ってすぐに５つの通路に分かれる小さな空間があり、私たちは「勝ちましょう！」と頷き合ってそれぞれ別の通路へと入る。何度目かの進入のため、どこが行き

止まりかなどは憶えてしまっている。でもいつ目の前の角から挑戦者が現れるか、という緊張感は衰えない。

『あーっと！　Ｃ組から早速脱落者が出ました！　挑戦者の月村技術官、なんというアクロバットな回避からの投球！　Ｃ組ハワード君、成すすべなく撃沈！』

最初の脱落者は味方だった。さらに『続けてＣ組メグさん！　バニングス一等陸尉の前に敗れる！』と２人目の脱落者が出たことを報せるアナウンスが入った。これで３対４。人数的に逆転された状況。

「負けていられませんね・・・！」

歩く速度を落とし、目の前に続く通路の奥の気配を探りながら進む。そして「お？」と角から姿を見せたのは、「騎士ヴィータ・・・！」だった。記憶やテレビで観たとおりの小さな女の子。でもその強さは桁違い。

「おー！　碧銀のツインテールに青と紺の虹彩異色！　お前がアインハルトか！」

「え、あ、はい。はじめまして、紅の鉄騎ヴィータ。ベルカ古流武術・覇王流、アインハルト・ストラトスです」

守護騎士としての二つ名を口にすると、「あー、それはもう名乗ってねぇんだ」って苦笑いをした後、「んじゃ、こっちも自己紹介。八神ヴィータだ」って名乗っていただいた。

「っと、そうだ。いつもウチのフォルセティが世話になってんな、あんがと」

「いえ。私も大変お世話になっています」

騎士ヴィータと深々とお辞儀しあった後、「じゃあ、やるか！」と騎士ヴィータはポーチより赤いボールを両手に1球ずつ取り出した。私は青いボールを1球だけ取り出す。

「とりあえず、あたしとお前だけでやる。シグナム達が合流しても、一切手を出させないから安心して良いぞ」

「それはまるで、私の級友が全滅することが確定した、と言っているように聞こえますが？」

騎士ヴィータの言葉にそう返したところに、『おーっと！　なんとバニングス一尉が撃沈！　アーロンさんとアナさんの連携が綺麗に決まった！』とアナウンスがが入った。

「はあ！？」

『えー、ここでバニングス一尉からメッセージです』

『マジでごめん！　しくじったわ！』

「マジで何やってんだ！」

バニングス一尉のメッセージのすぐ後に、『っとここで！　C組のアーロンさんとアナさんが、月村技術官とシグナム一尉の前に敗れた！　これで残るC組はアインハルトさんのみ！』とアナウンスが入った。

『そんなアインハルトさんは今！　ヴィータ二尉と接敵中！　さぁ、どう戦うのでしょう！』

「つうわけで、これで終いだ！」

騎士ヴィータが右手に持つボールを真上に放り投げた。咄嗟にそのボールに目を向けそうになりましたが、騎士ヴィータの左手にはもう1球握られている。視線を逸らした瞬間に投げられては回避しづらい。

「おらっ！」

投げられたボールは真っ直ぐに私の元へ向かってくる。避けるのは容易いですが、そのような簡単な真似はしたくない。ならば・・・。

（覇王流の防御術で、騎士ヴィータの意表を突く・・・！）

――覇王流・旋衝破――

ボールの威力や速さを一切殺さずに受け止め、そのまま騎士ヴィータへと投げ返す。騎士ヴィータは「おおっと！」と投球した体勢を

無理やり捻って回避した。

「今のは旋衝破か・・・？　つうか、なんで持ってるボールを投げなかった？　体勢を崩してた今、当てるのはそう難しくなかったはずだが？」

「あっさり終わってしまうのは勿体無いと思ったので・・・」

これまでの挑戦者の方々は、言っては失礼ですが弱かった。でも騎士ヴィータなら、さらにこの場を凌いだ先に待ち構えているであろう騎士シグナムなら、もっと熱い戦いを出来るはず。

「あー、そういうタイプか。んじゃ悪い事しちまったな」

そう言った騎士ヴィータが「あたしの勝ちだ」と宣言した直後、私の肩にポヨンと赤いボールが当たって跳ねた。床に転がる赤いボールを見つめる。何が起こったのか解らなかった。

「油断大敵だぜ？　自分の技を過信しすぎたな。アインハルト・ストラトス」

『あああああ！　C組最後のアインハルトさん脱落ーーー！』

そのアナウンスで、私は負けたのだと理解した。私が遅れて「ヒット・・・」と右手を挙げると、『挑戦者の勝利で～～～～～すッ！！』と勝敗が決した事を確定させるアナウンスが流れた。

「負けてしまいました・・・」

「悪いな。後の客を待たせるのも悪いと思って、すぐに勝ちに行っちまった」

「あ、いえ。そうですね、時間制限があったのを失念していました・・・」

お客さんの回転率を上げるため、1ゲーム5分としていたのでした。肩を落としていると、「んじゃ、また挨拶しに行くからな」と騎士ヴィータが踵を返した。その後姿が迷路の陰に消えるまで見送った後、私も迷路を出た。そこでチームメイトと合流する。

「いやぁ～、強かったね～」

休憩所に戻って私たちの試合の映像を視聴しての反省会。私の敗因をこの目でしっかり見届ける。騎士ヴィータが真上に放り投げたボール。それは直上ではなく、私の立つ位置へと落ちるように僅かに弧を描いていた。その場から一切動かなかった私に当たるのは当然の結末だった。

（旋衝破ではなく回避行動を選択していれば、また違った結末を迎えていたのですね・・・）

†††Ｓｉｄｅアインハルト⇒イリス†††

「あっれ～？　プラダマンテってどこに居るわけ？」

みんなと別れて、学院に勤めてるプラダマンテを始めとした知人に挨拶するわたしなんだけど、どうやってもプラダマンテだけと逢えない。シャッハから、初等科と中等科の校舎を見回ってるって話なんだけど・・・。

「通信や思念通話で呼び出すのもな～・・・」

向こうは仕事なんだし、わたしの都合で邪魔するのはさすがに気が引ける。これならなのは達と回るついで、ってことにすれば良かった。ひとり寂しく賑やかな敷地内を歩いていると、「ん？　あのウサ耳女子って・・・」見覚えのある少女2人が視界に入った。1人は黒いウサ耳、黒髪は右サイドテール、黒いセーラー服。1人は白いウサ耳、白髪は左サイドテール、白いチャイナドレス。

「ルルスとフラメルじゃん」

古代ベルカ一の大国イリュリアの技術を完全に継承している科学者、ミミルさんの使い魔であるルルスとフラメルに間違いない。声を掛けようと思って後を追っていくと、「あ、プラダマンテ」が数人のシスターと何か話してた。仕事の話なんだろうけど、そこにルルス達が入る理由がない。

（う～ん・・・。気になるけど・・・）

声を掛けようか迷っていたところで、「あの・・・」と肩に手を置かれた。普段なら背後の気配くらいすぐに気付くんだけど、目の前

に集中＋気配を感じ取れないほどの達人ということもあって、「ひゃい！？」ってマジで驚いた。

「うわっ！？」

わたしが大きな声を出した所為か、向こうも驚きの声を上げた、振り返ればそこに居たのは「キュンナ・・・！？」だった。以前はショートだった灰色の髪も今や腰あたりにまで伸ばしたロングヘア。服は私服みたいだけど・・・。

「どうしたの？　キュンナも招待されたの？」

「だったら良かったんですが、残念ながらお仕事ですよ、イリス先輩。あたしのゲルブ・クリュザンテーメ隊は、私服で警備するように上から指令が下りたので」

「あー、そうなんだ」

学院には武闘派シスターが大勢居るんだけど、まぁ警備戦力は大いに越した事はないから。なるほどって頷いたついでに「ところで、プラダマンテ達って何してるんだろ？」って聞いてみた。キュンナも警備担当なら、学院警備主任の役も担ってるプラダマンテを始めとしたシスター達が集まってる理由を知ってるんじゃないかな～って・・・。

「はい？・・・あぁ、今日の警備担当のシスターの集まりですよ。あたしもこれから参加します」

「あ、そうなんだ。じゃあルルス達は・・・？」

「ご存知かと思いますけど、教会はミミル女史にデバイスなどでお世話になっています。おそらくですけど、シスターの内の誰かがデバイスを預けていて、使い魔のお嬢さん方が届けに来た、のでは？」

わたしはスカラボばかり利用していたから、教会とミミルさんの関係の事を忘れてた。だからわたしは何の疑いもなく「そっか～」って納得した。キュンナに「挨拶していきます？」って聞かれたけど、仕事してるなら「また今度」ってことにしておく。

「そうですか。ではあたしはこれで」

「うん。あ、そだ。プラダマンテに伝言お願いできる？」

「もちろんです。イリス先輩が騎士プラダマンテに挨拶をしに来ていたと伝えておきます」

「ありがとね」

キュンナと手を振り合って別れた後、なのは達との合流までどうしようか、って考える。思念通話で連絡を取ってみようか。

「お！　アインス達をはっけ～ん！」

融合騎カルテット、アインスとアイリとリインとアギトの４人の姿

を見つけた。他のみんなの姿はないみたいね。アインス達に「おーい！」って手を振りながら駆け寄る。

「シャルさん！　ご挨拶周りはもう済んだです？」

「残念ながら仕事中だったよ。あなた達はどうしてたの？」

「出店をブラブラしてた」

「食べ物の誘惑がすごすぎて、さっきからお腹が鳴りっぱなしなんだよね・・・」

アイリがお腹を押さえてガックリ肩を落とした。なのは達とは、イクス達３年生全クラスが協同で開いてる喫茶店にお昼に集合する予定なんだけど・・・。でも「さすがにそれまで飲まず食わずじゃなくてもいいんじゃない？」って思う。リインだって別れる前にそんなこと言ってたし。

「そうなんだけどね。一度食べ始めたら止まらなそうだし」

「そこはアインスに止めてもらえばいいのに。ねえ、アインス？」

「ああ。遠慮なく食べると良い。腹八分目になる前に止めてやろう」

「それは若干遅すぎるような気もするぜ」

なんて喋りながら歩いてると、「かわいい～！」って少し離れたと

ころから驚きの声が上がった。リインが「なんでしょう？」って興味を示したみたいで、そっちに行ってみると女性客がたむろしていた。

「小さいリインとアギトなら間を縫って行けるんじゃない？」

「はい！」「まぁいいか」

わたしやアインスやアイリは体が大きいからダメだろうけど、成長しているとは言えそれでも未だに子供サイズな２人なら隙間を進めると思う。２人がお客さんの中を進んですぐ、「可愛い　」って声を上げた。

『どうしたのだ２人も？』

アインスがわたし達に繋がるように思念通話でそう聞くと、『小さなモコモコなヒツジのぬいぐるみが隊列を組んで行進してる！』って興奮気味なアギトから返答があった。

『みんなイギリスの近衛兵みたいな格好で、騎兵銃を携えてます！』

モコモコ羊のぬいぐるみ、騎兵隊のような格好。ふと、アギトとリインの言葉に引っ掛かりを覚えた。

「アインス、パンフレット貸して」

「ん？　ああ」

パンフレットを借りて、第3学年の欄を見る。コスプレしてる生徒たちの中に、サービスを受けられるスタンプを持ってる特別キャラが居る。そのうちの1つにモコモコ兵隊長なるものがある。

『リイン、アギト。近くに同じ衣装を着た生徒いない？』

『はい、居ます。ヒツジの着ぐるみと近衛兵の衣装を着た男の子です。一番後ろに付いて歩いてるですよ』

『その子スタンプ持ってると思うから、声を掛けてくれない？』

『了解です』

それからちょっとして、「ただいま～」ってアギトとリインが戻ってきた。そして「スタンプ押してもらいました♪」と言ってポイントカードをわたし達に見せてくれた。

「アインスやシャルさんも押してもらいますか？」

「いや。スタンプは本当の子供たちが押してもらうのが一番良いだろう。我われ大人は、こういう時に金を払うのが良い」

「だね。一応アイリ達は高給取りだし。チャリティにいっぱいお金を使おう♪」

ヴィヴィオたち第3学年に悪いけれど、大人はお金を落とすことに

したよ。そういうわけで、わたしとアインスとアイリ、リインとアギトの5人はお腹が膨れない程度に食べ歩きをすることになった。

「パンケーキ！　クレープ！」

「ドーナツ！　コーンドッグ！」

「待て待て。どれも粉食ばかりではないか。却下だ」

「アイスクリームとかにしておこうか」

「パンフレットの地図によると、ジェラート屋は3店舗あるな～」

アインスから借りたままだったパンフレットの出展物一覧を見る。外に1店舗、中等科と初等科に1店舗ずつ。どれにしようか、って考えようとしたら、「全部回れば良いんだよ」ってアイリがサラッと言ったけど・・・。

「ま、いいか。ジェラートなら何杯いただいても満たされないっしょ。どう？　八神家長女のアインス」

「ああ。その代わり、帰った後はしっかりと歯磨きする事。いいな？」

「はいです！」「おう！」

お姉ちゃんしてるアインスの姿を微笑ましく見守った後、「じゃ行こう！」とわたしは歩き出した。

Ｅｐｉｃａ９－Ｃザンクト・ヒルデ魔法学院・学院祭～Ｃｏｎｆｅｓｓｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅイクスヴェリア†††

外回りのお仕事を終えた後の休憩を挟んで、私とヴィヴィオとコロナ、それにフォルセティは次のお仕事であるフロア係をするために、特別教室の準備室前へと戻ってきた。

「はぁ。とりあえず、次の交替までドレスとはお別れだよ・・・」

王族のような煌びやかなドレスを身に纏っていたフォルセティでしたが、さすがにあの衣装では給仕のお仕事は出来ませんからね。そういうわけで、今のフォルセティは執事の方が着る燕尾服に、獅子のたてがみと耳と長い尾を装着しています。ちなみにお髭は水性ペンで書いています。フロア係が終わっての休憩を挟んだ後には、またドレスを着て踊るお仕事が待っていますからね。

「うん。やっぱりフォルセティはちゃんと男の子の格好してる方が良いよ♪」

「ありがとう、ヴィヴィオ。ヴィヴィオ達のウェイトレス姿も可愛いよ！」

私とヴィヴィオとコロナも、先ほど更衣室でメイド服という衣装へと着替えてきた。私は先の衣装と同じイヌの耳と尻尾を、ヴィヴィ

オはキツネ、コロナはウサギの耳と尾を付けています。

「リオもお昼の1時間、フロア係になる予定らしいんだけど・・・」

「まだ戻ってきてないね」

ヴィヴィオとコロナが不安そうにしていたところに「ごめーん！お待たせ～！」と方々に謝罪をしているリオがやって来ました。彼女もメイド服へと着替え終えており、ネズミの耳と尻尾を付けています。

「お！　ヴィヴィオ達もお疲れ～！」

「お疲れ様～！」

「ほらほら。挨拶は後。早く交代しなきゃ」

フォルセティに急かされるように準備室へ入る。教室の2／3ほどの広さがあり、並べられたデスクには簡易コンロが幾つも置かれ、料理の腕に覚えのある生徒が料理を作っています。

「お疲れ様！　フロア係の交替組、到着で～す！」

「お疲れ～！　休憩入りま～す！」

先にフロア係を務めていた生徒たちと交替し、私たちは特別教室と繋がる扉を潜る。フロアにはお客様がそれなりに入っており、出さ

れた料理を頂いています。そこに「団体様で～す！」と受付から教室内に報せが入った。お客様としてお越し頂いたのは・・・

「ママ！」

「お父さん、お母さん！」

「シャル・・・！」

「アリサさんとすずかさん！」

「アインスさん達も！」

私の姉であるシャルを始めとした、チーム海鳴の皆さんだった。外回りの中、ヴィヴィオと逢った時に聞いていましたが、やはりこうして来て頂くと緊張しますね。ともかく、「いらっしゃいませ～♪」とお出迎えです。

「お席にご案内します！」

「おおきに～♪」

私とヴィヴィオとコロナでシャル達を席に案内して、フォルセティやリオと一緒に各テーブルに着いた皆さんにメニューをお渡しする。そして注文を聞き終えて準備室――厨房に報告。フロアに戻ってきたところで「お客様2名入ります～！」と新たなお客様がご来店です。

「いらっしゃ――あ、ノーヴェ！　アインハルトさんも！」

「おっす！　暇そうにぶらついてたから拾ってきたぜ」

「あの、失礼します」

とても嬉しそうに笑顔を浮かべるヴィヴィオが「はい！　いらっしゃいませ！　お席に――」と言いかけたところ、「ノーヴェ、こっち、こっち～♪」となのはさんが手招きをしました。はやてさんも「ちょうでええところに！　お話しようか！」と誘いました。

「どうもっす！　じゃあ、あたしとアインハルトの席は、なのはさんやはやてさんのテーブルの近くで頼むわ」

「かしこまりました～♪」

ヴィヴィオがノーヴェさんとアインハルトを、なのはさんとフェイトさんとアリサさんとすずかさんのテーブルと、はやてさんとルシルさんとアインスさんとリインのテーブルに近いテーブルの元へ案内しました。そしてすぐに自己紹介が行われました。その間、アインハルトの目は強敵と知り合いになれたからでしょうか、とても輝いていました。

「ではご注文を伺います！」

「う～ん・・・。じゃあピザトーストとコーヒー、ブラックで」

ノーヴェさんはすぐに注文を決めましたが、アインハルトは「えーと・・・」とても悩んでいますね。悩む事1分。ここで「体に良いスイーツをお勧めしますか？」とフォルセティが提案しますと、「お願いします」アインハルトは即座に受け入れた。

「では。パンプキンケーキとミルクティーがお勧めです」

「かぼちゃですね・・・。それではその2つをください」

「かしこまりました。ヴィヴィオ」

「はーい！　ご注文を確認します。ピザトースト、ブラックコーヒー。パンプキンケーキ、ミルクティー。ご注文承りました。少々お待ちください」

ノーヴェさんとアインハルトに小さく一礼したヴィヴィオが厨房へと向かいました。それから他のお客様の応対、シャル達への料理運びなどを行いつつ、なのはさんやはやてさん、ノーヴェさんとアインハルトの会話に聞き耳を立てる。

「――アインハルトちゃんも、ヴィヴィオ達と一緒にインターミドルに出場するんだよね？」

「あ、はい。ノーヴェさんやヴィヴィオさん達からお誘いいただいたので。恥ずかしながら、そういう大会などについては全くの無知でしたので、これまで己の力量を試せる機会がありませんでした。

ですが具体的な目標を頂けたので、まずはインターミドルに挑戦し、そして覇王流の名を轟かせたく思います」

アインハルトはやはり楽しむという目的は持たないようで・・・。それが少しばかり悲しい。なのはさん達もそれには気付いているようですが、「じゃあ出場条件については？」とそれに話を持って行くことなく、フェイトさんがそう尋ねました。

「はい。ノーヴェさんから伺っています。１０代であること、セコンドが居ること、それに・・・クラス３以上のデバイスが必要、です」

「そうや♪　でな、すずかちゃん、ノーヴェ、ルールー、この３人から相談を受けてな。私がアインハルトのデバイスを造ろう思うんよ」

「え・・・！？　あの、ですが真正古代ベルカのデバイスの開発は難しいと聞き及んでおりますが・・・」

「チッチッチ。侮ってもらっては困るよ？　私ら八神家は全員、その真正古代ベルカの魔法使いや。デバイスの１つや２つ、造ってみせるよ♪」

はやてさんが自信満々に胸を叩いて、ご家族の方々を見回した。それでアインハルトも「ぜひよろしくお願いします！」とフォークを置いた上で深々と頭を下げてお願いした。

「お願いします、はやてさん。・・・これで後は・・・ヴィヴィオとコロナのデバイスだけだな」

ノーヴェがそう言うと、なのはさんがチラリとヴィヴィオの方を見ました。ヴィヴィオはまた別のお客様に応対中で、なのはさん達の会話はおそらく聞こえていない。それを確認したなのはさんは、私に一瞥した後に人差し指をご自分の唇に当てました。何か聞いてもヴィヴィオには秘密、ということですね。コクリと首肯すると・・・

「実は、ヴィヴィオのデバイスはもう完成しているの」

なのはさんが小さなモニターを展開し、そこにぬいぐるみのようなものを表示させました。そしてそのデバイスの性能や特徴などを、アインハルトのデバイス製作の助けになるようにとはやてさんに伝えているところに、「イクス～！　注文お願い～」とフォルセティから応援要請が来たので、皆さんのテーブルより離れた。

「――ごちそうさまでした～♪」

「美味しかったよ～♪」

「んじゃイクス。初めての学院祭、精いっぱい楽しんで来てね～♪」

「はい！　ありがとうございます、シャル！」

そしてお昼のピークが過ぎた頃、シャル達が食事を終えてお帰りに

なる。シャル達が特別教室を後にするのをフロア係一同で見送ろうとしたところで、「え・・・？」とアインハルトが蹴躓いて転びそうになったのですが、「おっと」とルシルさんが抱きとめた。

「「「「アインハルトさん！？」」」」

「アインハルト！？」

ルシルさんにもたれかかっているアインハルトの側へと急いで駆け寄る。それにシャマル先生やアイリも俯いているアインハルトを診始めました。その間、私たちは心配ながらも「お騒がして申し訳ありません」と他のお客様に謝罪します。

「アインハルトちゃん。話を聞く限り寝不足が原因よ」

「躓いて転びそうになるほど注意力が散漫。ドクターストップね」

「あの、ですがこれからクラスの手伝いをしなければいけ――」

「「ダメ♪」」

そう言ってアインハルトはルシルさんの元から離れようとしますが、「シャルちゃん。クラスの担当に報告お願い。アインハルトちゃんを休ませます、って」ってシャマル先生が制止しました。

「ん。アインハルト。本局医務官からのドクターストップ、無視なんかしないよね？」

「あ・・う・・・はい」

「よし、良い子♪　ルシル、わたしが保健室に案内するからアインハルトを運んできて」

「了か――」

「あ、あの！　自分で歩けますので！　それにその・・・恥ずかしいの・・・で・・・？」

慌ててルシルさんから離れようとしたアインハルトが彼の手を取った瞬間、彼女の瞳から大粒の涙が溢れ出た。その様子に「どうした！？」とルシルさんが仰天して、はやてさんが「ルシル君？」と低い声でそう呼びました。

「いや、ちょっと待て！　俺は何もしていないぞ！」

「ほらほら、お約束はあとあと。シグナムかアインス、どっちでもいいからアインハルトを背負ってあげて。シャマル先生は保健医に事情説明。わたしは５－Ｂの担任に事情を説明するよ。で、なのは達は・・・やる事ないから自由時間ということで」

シャルがテキパキと指示を出してくれたことで、アインハルトは保健室でゆっくりと休むことが出来ました。

†††Ｓｉｄｅイクスヴェリア⇒ヴィヴィオ†††

アインハルトさんが寝不足でダウンしちゃうっていうアクシデントがあって、アインハルトさんと休憩時間が同じなら一緒に学院祭を回ろうと思ってたんだけど・・・。うーん、残念だけど、２回目の休憩は、わたしとフォルセティとコロナとイクス、それにリオのチームナカジマメンバーで過ごすことに。

「ヴィヴィオ。そう暗い顔をしないでください。アインハルトも、私に構わず楽しんで来て下さい、と言っていたでしょう」

「うん・・・」

「ここで変に気を遣って僕たちが楽しめなかったって知ったら、アインハルトさんも気に病むと思うから・・・ほら、行こうヴィヴィオ♪」

フォルセティがわたしの手を取って歩き出した。アインハルトさんには申し訳ないと思いながらも、「うんっ！」ってわたしは頷いた。そういうわけで１回目の休憩の時には回れなかった出店を目指す。

「どこから回る？」

「１時間あるし、体育系と飲食系を交互に行けばいいじゃん」

「そうですね。ではどちらかは始めます？」

イクスの質問に、「ご飯！」とわたし達は同じ意見だった。フロア

で料理を運んでる時、もう香りだけでお腹が空いちゃってた。じゃあ何を食べようかって話になるわけで。パンフレットのマップを確認。そして一斉に「じゃがバター！」を指差した。えへへ♪って笑い合ったあと、じゃがバター店へ向かう。

「いらっしゃいませ～♪」

「じゃがバター５つくださ～い！」

「味付けはバター、チーズ、生クリーム、カレー、塩の５種で！」

「ありがとうございます～♪」

人数分のじゃがバターを購入して、飲食が出来るように設けられた休憩所へ。一般のお客さんや学院の生徒がそこで食事をしてる。わたし達も空いてる席に着いて、「いただきます！」とフォークを手に取る。

「ヴィヴィオ、チーズ味ちょっとちょうだい！」

「いいよ～。リオのカレー味もちょっともらうね～」

味を別々にしたのは、みんなで色んな味を楽しむため。結構サイズが大きいから、１人分を５人で分け合える。そして「ごちそうさまでした！」って手を合わせて挨拶。お腹いっぱいじゃないけど、これから体を動かすとなればそこそこで十分だ。

「さてと。最初の食事は終わったけど、どの出店で体を動かそうか？」

「じゃあこれなんてどう？　キックスケーターレース」

リオがパンフレットをわたし達に見せて、ある出展物の項目を指差した。子供の部と大人の部の２種類があって、一度に５人までのレースみたい。最初の運動系としては悪くないと思うから、「異議な～し」だ。そのレースが行われる中等科の運動場へとやって来たわたし達は、「参加します！」と受付の先輩に申請した。

「ありがとうございます！　ではルール説明をさせてもらいます。とは言っても実に簡単。我がクラスのランナー２人に、あなた達のうち４人が先にゴールすれば勝ちとなります。難度は３種類。普通、速い、最速。君たちなら普通レベルが良いと思うけど・・・」

そう提案されたけど、わたし達は話し合いして「最速で！」と無茶とは思うけど最高難度を選択。受付の先輩も「本当に？」って心配してくれた。

「はい！」

「何事にもチャレンジ精神なので！」

「あら。うふふ♪　それではどなたが参加しますか？」

「では私が辞退を。この中では一番ひ弱なので」

イクスがそう言って挙手。コロナも手を挙げ掛けてたけど、そっと戻した。コロナもインターミドルに出場するって決めてからのトレーニングで、かなり体力を付けてるはずなんだけど・・・。とにかく、わたしとフォルセティとコロナとリオの４人で、中等科の先輩２人と競い合うことになった。コースは折り返し含めての全長１００ｍほど。上り下りの三角山、Ｓ字カーブ、細道、ジグザグ路、といった感じ。エントリーシートに名前を書いて、キックスケーターをレンタル。

「先輩として手加減できたらいいんだけど、これも出し物のルールだから手加減無用になっちゃうけど・・・」

「ごめんなさいね、勝たせてもらうわ」

「いえ。わたし達も鍛えているので」

「手加減無用、上等なのです」

わたしとフォルセティでそう返す。お互いに本気の全力全開で競ったうえで負けたなら、次は勝てるようにもっと強くなろうって思える。でも手加減されたうえでの勝ち負けには虚しさしか残らないと思う。それを解った先輩たちも「そうね。今の発言と忘れてね」と言った後、真っ直ぐコースを見つめた。

「スタンバイ！　レディ・・・ゴー！」

スタートラインに並んだわたし達は号令と同時、左足で地面を蹴っ

てキックスケーターを走らせる。このときの順位は、1位2位ともに先輩で、3位にリオ、4位にフォルセティ、次いでわたしとコロナ。単純に脚力が違うから、わたしとコロナはすごい勢いで置いて行かれちゃう。

『速い速い！　挑戦者リオちゃんとフォルセティちゃん、我らがエースに食らい付く！』

「僕、男なんですけど！？」

わたしとコロナが三角山を下りきったところで、そんなアナウンスが入った。先頭は変わらず先輩2人で、細長い足場を落ちないように進んでる。フォルセティとリオも遅れて足場を進み始めた。

『ヴィヴィオちゃんとコロナちゃんはちょっと遅れてるか！　S字カーブに突入したばかり！』

もうちょっとやれるかなって思ってたけど、思ってた以上に進まない。わたし達が細道に入ったところで、フォルセティ達がジグザグ路を抜けて折り返しの三角コーンを曲がった。曲がる際、先輩たちもさすがに減速したけど、ここでフォルセティとリオが協力プレイ。2人は手を繋ぐとリオは急停止して、フォルセティはそのまま速度を落とすことなくカーブに突入。止まったリオと手を掴んでることで、フォルセティは遠心力に逆らって速度を落とさずに曲がり切れた。

『抜いたぁぁぁーーー！！　フォルセティ君、リオちゃんと協力し

ての高速コーナリング！　これを我がエース２人が追い掛ける』

リオも遅れて再スタート。わたしとコロナがジグザグ路の途中に差し掛かったとき、フォルセティとすれ違う。わたしとコロナが「頑張って！」って応援すると、「うんっ！」頷いてくれた。で、このレースの結果はと言うと・・・

「負けちゃったね～」

「ゴール直前で追い抜かれちゃったよ」

「でも惜しかったよ、フォルセティ君」

「接戦でしたね」

「もっと鍛えないとダメだね～」

惜敗だった。たった今買ったアイスクリームを食べながら反省会。足腰も走りこみで鍛えてるはずなんだけど、元々の体のスペックが違ったみたい。反省会もそこそこに、「次は何しに行く？」と聞く。

「ボルダリングがあるよ」

「お、いいね」

そういうわけでロッククライミングの一種、ボルダリングに挑戦。やっているのは同じ中等科の運動場で、キックスケーターレースの

コースからも近い。出展しているのは中等科３年のＤ組。一般のお客さんも多く参加してる。

「子供５人、参加できますか？」

「ええ、大丈夫よ。君たちは子供だから４ｍ級の壁でお願いね。プレイ時間は最大で１０分。時間内に終了しても問題ないです」

おっとりした先輩から説明を受けた後、垂直の壁の前に移動。そして出っ張（ホールド）りに右手を掛けたところで、「あっ！　ちょっ、スカート！」ってフォルセティが慌てて顔を背けて、周囲の人からわたし達を庇う様に背を向けた。

「大丈夫だよ、フォルセティ。制服に着替えるときにスパッツ履いてきたし」

証拠としてスカートに手を伸ばしたら「うわぁ！？　いいから！見せなくていいから！」フォルセティがさらに顔を真っ赤にした。可愛いな～って思いつつ、わたし達は壁を登り始めたんだけど、４ｍ級はすぐに終わっちゃう。カルナージでもっと高い壁を登ったし。

「君たち、すごいのね～。経験者みたいだし、好きな壁を登ってもらってもいいよ～」

「いいんですか！？　ありがとうございます！」

降りたところでおっとり先輩からお許しが出たから、時間いっぱい

まで競争や人文字を作って遊んだ。自分たちが楽しむだけじゃなくて、他のお客さんも一緒に楽しんでくれた。拍手で見送られたわたし達は、次の出店へと向かった。

『中等科3年D組！　ダニエル・アルダー！　僕には、ずっと気になってる女の子がいま～す！』

中等科運動場の端に設けられてる特設ステージから、そんな宣言が聞こえてきた。告白だ。だから「おおー！」って歓声が上がる。わたしは関係ないのにすごくドキドキする。チラッとフォルセティを見ると、「こんな状況で告白ってすごいな～」って感嘆してた。

『A組のリヒャルダ・バーダーさん！　ずっと前から好きでしたー！　友達から始めて、いつか彼女になってくださ～～～～～い！』

ステージの側に居た中等科の制服を着たバーダー先輩らしい女子生徒が「お願いしま～す！」って告白をOKしたから、「おめでとう～～～！」ってお祝いの言葉がそこらじゅうから上がった。わたし達も拍手して、アルダー先輩がステージから降りていくのを見送った。

『主張、告白、なんでもOKのステージ！　さあ、他には誰か居ませんか？　飛び入り大歓迎だ～！』

「ヴィヴィオ達は何か告白したい事とかないの？」

司会の人の言葉にリオがいきなり話を振ってきて、わたしとコロナ

は「ふぇっ！？」って変な声を出しちゃった。イクスは「そうですね～。特には」って微笑んで、フォルセティは「ある！　行ってくる！」ってステージに上がるための階段へ向かった。

「おお！？　なになに、フォルセティには告白したい誰か居たの！？」

ひとり盛り上がるリオだけど、わたしは違う意味でドキドキし始めた。フォルセティが司会の人と挨拶した後にマイクを受け取って『初等科３年Ｂ組、八神フォルセティです！』そう自己紹介。問題はその後だ。告白なのか別の何かなのか、それが気になる。

『身寄りのない僕を引き取って大事に育ててくれている家族に、日頃の感謝を伝えたいです！　お父さん、お母さん、お姉ちゃん達、僕は幸せです！　これからもお願いします！　ありがと～～～～！』

女の子への告白じゃなくてホッとして、さらに「わたしも・・・！」って思いにさせてくれたフォルセティに感謝。コロナ達に「わたしも行ってくる！」って伝えてからステージに向かった。

「ヴィヴィオ・・・」

「ありがとう、フォルセティ。わたしもママ達に伝えたい事があったのを思い出した」

階段から降りて来てたフォルセティとすれ違いざまに伝えると、「うん、行っておいで」って送り出してくれた。そしてわたしも司会の人と挨拶をして、差し出してくれたマイクを受け取る。ステージ

から見る光景はまた違っていて、集まってる何十人っていう学院の生徒やお客さんの視線を一手に受けて緊張してきた。

（あ、ママ達だ・・・！）

校舎の窓からこっちを見てるなのはママ達に気付いたから、すぐに緊張は解れた。マイクを両手で握って、深呼吸を1回。

「初等科3年B組、高町ヴィヴィオです。わたしも身寄りのない孤児でした。でもある日、2人のママがわたしを迎え入れてくれました。そのおかげで今、わたしが学院に通えて、多くのお友達が出来ました。心から感謝してます。なのはママ、フェイトママ、本当にありがと～～～～！」

叫ぶように伝えた後にはフォルセティの時みたく拍手が巻き起こった。もう一度なのはママ達の居た窓へ目をやると、なのはママとフェイトママは笑顔で手を振ってくれてたから、わたしも大きく手を振り返した。そしてマイクを返してステージを降りると、「良かったよ！」ってフォルセティ達が迎えてくれた。

「ありがと♪　それじゃ次の出店へゴー♪」

「「「「「お～♪」」」」」

それから蹴ったボールで9枚の的を打ち抜くキックターゲットや巨大カットアンドダウン（なのはママ達の国でいうダルマ落とし）など体育会系、それに射撃や迷路など体を酷使しない出店に参加した。

ちなみにスイーツの出店もほとんど回れた。明日からちょっと甘いものは控えよう、うん。
そうして1時間の休憩時間も終わって、再びお仕事に戻る。わたし達は最初と同じ外回りで、フォルセティは女装してのダンス。３０分の休憩を挟んで喫茶店のフロア係。もう一度なのはママ達が来てくれて精一杯おもてなしをした。

「はふぅ～。疲れた～」

空を暗くなってきた頃、わたし達生徒はメイド服のまま校庭に集まってる。学院祭を締めくくるセレモニーに参加するためだ。キャンプファイアのように木材を組んで、生徒みんなで協力して作り出した魔法の聖火を囲んで、聖歌を斉唱する。それが終われば年に一度の学院祭は終了になる。

「でも楽しかったよね～」

「はい。生まれて初めてのお祭り、とても素晴らしいものでした」

イクスが目を閉じて今日の事を振り返る。美味しい物、楽しい事、色んな事があった。アインハルトさんも休んだおかげか、喫茶店に元気な顔を出してくれた。今年は一緒できなかったけど、来年こそはきっと・・・。

「っ・・・。ごめん、ちょっと外すね」

お手洗いに行きたくなっちゃった。フォルセティにはそう言いたく

ないから、ちょっと濁した感じでコロナ達に伝える。

「聖歌斉唱まであんまり時間ないから、急いできた方が良いよ？」

「うん。すぐ戻るよ！」

みんなと別れてひとり校舎に入る。生徒もシスター達もお客さんも校庭に集まってるから、校内は人っ子一人いなくて静か。そんな中でトイレに入って、用を済ませてスッキリ。そして個室から出たところで、わたしの視界にあってはいけないものが入った。

「え・・・？　男の人・・・？　え、あれ、ここ、女子トイレ・・・？」

女子トイレに１５歳くらいから４０歳くらいまでの男の人が、まるでわたしを待ち構えるように佇んでた。混乱する頭の中。

「きゃ――っ！？」

悲鳴を上げそうになった時、一番近かった男の人がわたしの口を押さえてきて、さらにもう1人がわたしの背後に回って羽交い絞めにしてきた。体を持ち上げられて足が宙に浮く。頭の中は混乱から恐怖へ。

（なのはママ、フェイトママ・・・フォルセティ・・・！）

「聖王」

「聖王」

「聖王を、確保せよ」

「確保せよ」

Ｅｐｉｃａｌ０今日からあなたがわたしのパートナー～Ｓａｃｒｅｄ　Ｈｅａｒｔ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

学院祭の準備によって削られた練習時間を得るため、睡眠時間を削ってしまったのがいけなかった。お昼を向かえ昼食を終えたところで、これまでの疲労が一度に押し寄せてきて体勢を崩してしまいました。そこで昼食をご一緒させてくださったフォルセティさんのご家族であり、クラウスの記憶の中にも登場した、かの守護騎士ヴォルケンリッターのお1人である湖の騎士シャマルさん、元オーディンさんの融合騎であるアイリさんからドクターストップを受け、保健室で休眠を取ることに。

（そのおかげで、今の私の体調は万全です）

とはいえ2時間も眠ってしまったので、休憩時間を返上してクラスの出展物に尽力しました。クラスメイトの方たちからは、そこまでしなくてもいいよ、と言われましたが、それでは私の気が治まらず、休憩は取らなかった。

（ヴィヴィオさん達には悪い事をしていまいました・・・）

時間が合えば一緒に学院祭を回りましょう、と誘われていたのですが・・・。それはまた来年に持越しですね。

「お疲れ様～！」

「お疲れ～！」

17時となったことで全出展物は終了し、全校生徒が校庭に集合する。そして薄暗くなった空の下に立ち上る魔法の聖火を囲み、学院祭を締めくくる聖歌斉唱を行う。その様子は教員、本日来てくださった一般のお客さんも観覧する。

「あ・・・」

手持ち無沙汰だった私が意味もなく辺りを見回していると、「ヴィヴィオさん？」達の後姿を見かけた。休眠から今までヴィヴィオさん達とは話が出来なかったので、ちょうど良い機会ですし会いに行こう。初等科と中等科の他の生徒も談笑していますし、私が彼女たちと一緒に居てもきっとおかしくはないはず。生徒たちの中を通り抜け、もう少しでたどり着くといったところでヴィヴィオさんが1人離れて行ってしまいました。

「（何かあったのでしょうか・・・？　イクスさん達にご挨拶くらいはしておこう）・・・イクスさん、フォルセティさん、コロナさん、リオさん。昼間はご迷惑をお掛けしました」

「「「アインハルトさん！」」」

「もう体の方は大丈夫なのですか？」

「はい。お蔭様で。・・・昼間はすみませんでした。せっかくお誘いしてくださったのに・・・」

ヴィヴィオさんには改めて謝罪をしよう。イクスさん達は笑って許してくれたので、私は「あの、ヴィヴィオさんはどうしたのですか？」と話題を切り替えさせてもらった。するとコロナさんがササッと側に寄って来まして、「お手洗いです」と耳打ちしてきました。男子であるフォルセティさんが居るのですから、ヴィヴィオさんに気を遣ったのでしょうが・・・。

「トイレでしょ？」

フォルセティさんがサラッとそう言ったので、「だからデリカシー！」とコロナさんとリオさんに小突かれてしまい、さらに遅れてイクスさんからも「フォルセティ。そろそろ学習しましょう」と叩かれてしまいました。

「あいたた・・・。トイレは生物なら当たり前の生理現象なのに・・・。なんで・・・？」

「普段は察しとか良いのに・・・」

コロナさんが大きく溜息を吐く中、私はここへ来た目的である「ここでセレモニーをご一緒してもいいですか？」と聞いてみた。すると「もちろんです！」と満面の笑顔で受け入れてくれた。

「ありがとうございます。・・・っ！？」

そうお礼を述べた直後・・・

――あなたはどうか良き王として国民とともに生きてください――

私の意識を持っていきそうなほどに強烈な記憶のフラッシュバックが起きた。またもフラリと倒れ込みそうになったのですが、今度はしっかりと踏み止まった。ですがそれだけでも「大丈夫ですか！？」と皆さんを不安にさせてしまうもので・・・。

「ええ、大丈夫です。ただの立ちくらみですので、問題ありません」

「でも・・・」

「シャマルお姉ちゃん達はまだ居てくれてるから、呼んでくるよ！」

そう言って駆け出そうとするフォルセティさんの右手を掴んで「大丈夫ですから・・・！　そこまで大事にしないでください」とお願いする。

――この大地がもう戦で枯れぬよう・・・青空と綺麗な花をいつでも見られるような、そんな国を作ってください。オーディン先生をはじめグラオベン・オルデンの皆さんのためにも・・・――

――待ってください！　まだ話は・・・！　ゆりかごには僕が乗り・・・オリヴィエ！　僕は・・・！――

また記憶のフラッシュバック。クラウスの記憶の中でも最も辛く悲しいオリヴィエとの永遠の別れ・・・。何故今、この記憶が・・・。クラウスの元より去るオリヴィエの背中が、先ほどのヴィヴィオさんの背中と重なってしまう。

（これは何・・・？　何かの暗示・・・？　ヴィヴィオさんの身に何か・・・？）

湧き上がる嫌な予感に私は「すいません、ちょっと・・・！」と、説明するのも省いて校舎へと駆け出す。ただの杞憂であればそれで良し。行かずに後悔しないより行っていち早く安心する方が良い。お手洗いということは一番近いトイレを選んでいるはず。そう考え廊下を駆け、そして到着したトイレの中へと入った。

「な・・・っ！？」

視界に入ったのは、複数人の男性に拘束されているヴィヴィオさんだった。布で目隠しや猿轡をされていて、背の高い男性の肩に担がれようとしていた。一瞬で頭の中が沸騰する。

「何をしているのですか！！！」

ほぼ無意識に魔法陣を展開し、魔力を練り上げる。成すべき事はヴィヴィオさんの救出、そして未遂になるとはいえ誘拐犯である男性たちの撃破。両拳をグッと握り込み、軸足に力を込めていざ突撃と言うところで、「待て、アインハルト！」と制止の声を掛けられた。

――チェーンバインド――

その言葉に床を蹴るタイミングをずらされた私がたたらを踏んだ直後、蒼い魔力で作り出された鎖状の拘束魔法が男性たちの四肢に巻きついたと同時、私の側をフォルセティさんが通り過ぎて行く。

「アインハルトさん！」

「っ！　はいっ！」

拘束魔法から逃れようと体を捩っている男性たちへと私も駆け出す。身長が２ｍ近い男性の体を駆け上がったフォルセティさんが肩に担がれていたヴィヴィオさんを抱き上げたかと思えば「アインハルトさん、お願い！」と私に向かって放り投げた。私はヴィヴィオさんを抱きとめ、すぐに目隠しと猿轡を取り払った。目を瞑ったままのヴィヴィオさんに、さらなる不安が襲い掛かってきた。

「ヴィヴィオさん！」

そう呼びかけるとヴィヴィオさんはゆっくりとですがまぶたを開けてくれた。そして始めは焦点の合っていなかった瞳でしたが、僅かな間の後しっかりと私の目を見つめ返してくれた。

「ア、アインハルト・・さん・・・？　アインハルトさん！」

「大丈夫です！　もう大丈夫です、ヴィヴィオさん！」

私に力強く抱きつくヴィヴィオさんを抱きしめ返す。　そんなヴィヴィオさんにフォルセティさんも「無事で良かったよ」と優しく肩に手を置いた。ヴィヴィオさんは「フォルセティ・・・！　ありがと～！」とフォルセティさんにも抱きついた。なんといいますか、ちょっと残念と言うか・・・。

「さてと。彼らも助けてあげないとな」

そこに私を制止した方、フォルセティさんのお父様であるルシリオンさんが、今なおもがいている男性たちに歩み寄った。

「運が悪かったな、君ら。操作されて誘拐事件を未遂とはいえ起こすとは」

「操作・・・？」

「そうだよ、アインハルト。怒りで捉えていなかったのだろうが、彼らの瞳は正気の色を灯していない。明らかに操作されている。緊急時とはいえ操作された被害者である彼らを殴り倒してはちょっと可哀想だ」

だからルシリオンさんは私を止めたのですね。改めて男性たちを、正確には目を見れば、目に光が宿っていないのが見て取れる。危うくルシリオンさんの言うとおり、被害者を殴ってしまってしまうところだった。

「確保せよ」

「聖王を」

「「「聖王を確保せよ」」」

男性たちがまるで壊れた機械のように、聖王を確保せよ、と繰り返し始めた。するとルシリオンさんが「はぁ。やっぱりあの連中の仕業か」と呆れ果てた風に溜息を吐きました。そして拘束を一旦解いた後、手錠のような拘束魔法で改めて男性たちを拘束し、それぞれを魔力の縄で繋げました。まるで複数のペットを散歩に連れ出す飼い主さんのよう。

「とりあえずみんなに連絡だな」

彼らをトイレの外へと連れ出しつつ、ルシルさんが全体通信を繋げ、ヴィヴィオさんの身に起きた事を伝えました。

『ヴィヴィオ！　ヴィヴィオに怪我とかは！？』

「フェイトママ、落ち着いて。わたしは大丈夫だから。アインハルトさんやフォルセティ、ルシルさんが助けてくれたから」

『そ、そう・・・。それなら良いんだけど・・・。ごめんね、ヴィヴィオ。ルシル達もありがとう』

『アインハルトちゃん、フォルセティ、それにルシル君も、ヴィヴィオを助けてくれてありがとう！』

ヴィヴィオさんのお母様方からの感謝に私は、「い、いえ！　当然の事をしたまでですので！」と慌てて返した。本当に偶然のことでしたし、実際に助けたのはフォルセティさんとルシリオンさんでしたし。

「それでシャル。君はシスター・プラダマンテに連絡を。彼女は学院の警備主任なのだろう？　今後のヴィヴィオの警護などについて話し合いをしておいた方が良いと思うんだが・・・？」

『了解。そっち方面はわたしが全面的に担当するから。ヴィヴィオ、安心してね』

「え、あ、その・・・はい・・・」

『それでルシル君。被疑者はどないしたん？』

「これから連行する。が、実行犯として立件するのも難しいかもしれない。操作されていたようで、操作される前後、その最中の記憶はないだろう」

『そうか。操作した犯人にはたどり着けへんね～』

「いや。目星は付いている。連中は口を揃えて、聖王を確保せよ、と言っていた。つまり・・・」

『『『『仮面持ち・・・！』』』』

緊張感がすさまじいです。それからルシリオンさん達はあれよこれよと話を進め、それを眺めていた私たちは、聖歌斉唱に間に合わずにそのまま学院祭を終えてしまった。

・―・―・―・―・―・

ザンクト・オルフェン魔法学院の学院祭が終了した後、聖王教会の最精鋭部隊である銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼの隊長にして、学院の警備主任であるプラダマンテ・トラバントは、どこにも知れぬ通路を早歩きで進んでいた。

「ちょっとそこのあなた」

「あ、これは騎士プラダマンテ。あの、どうかなさいました？」

プラダマンテに声を掛けられた白衣姿の科学者然とした男性が僅かに怯えたように応じた。それほどまでにプラダマンテのかもし出す雰囲気がまずいものだと察することが出来たからだ。いったい何を言われるのかと怯えている。

「エルフテは今、どこに居るか知らないか？」

「え？・・・あぁ、１１号ですね。ご案内します」

「どこに居るか教えてくれるだけで結構よ」

「あ、そうですか。では。１１号から１７号は現在、格納庫にて待機中です」

「そう。・・・あぁ、それともう１つ。エルフテはここ最近、外出をしたか？」

「はい。昨夜の２２時から本日１３時まで外出許可を提出。これを総長が受理しました」

「ありがとう。邪魔をした」

プラダマンテは男性より目的のエルフテというモノの居場所を聞き、通路を早足で進んだ。そうしてたどり着いたのは、両側に開くタイプのスライドドア。表面には格納庫を意味するＨＡＮＧＡＲと刻まれている。彼女が一歩踏み出すとドアは開き、長い通路が現れた。両面の壁にはいくつものスライドドアがあり、その中の１つ、１１を意味するＸＩと記されたドアの前に彼女は移動。

「エルフテ！」

ドアがスライドして完全にドアが開く前にはプラダマンテが怒気を含んだ声でそう叫んだ。が、ドアの奥に広がる光景に彼女は一瞬息を止めはしたが、「こんな悪戯！　火に油を注ぐつもりか！？」とさらに怒声を上げた。室内に広がっていたのは無数の死体の山で、そのどれもがココに勤める者に酷似しているからだ。

「そう怒らないでくれ、ちょっとした茶目っ気だ」

死体の山より少年のような老人のような特徴的な声が聞こえてきた。そして突如として死体の山が消失し、代わりに６０ｃｍほどの小さな紳士が現れた。人間の子供のようだが、大きな猫耳や長い尻尾が生えていた。服装はシルクハット、燕尾服、ジャケット、シャツ、スラックス。色は白で統一されている。右手にはステッキを携えている。そう、二足歩行の猫だ。猫が紳士服を着て、偉そうに佇んでいるのだ。

「なぜ、勝手に聖王陛下を拉致しようとした？　貴様の身勝手な行動のおかげで聖王陛下の護衛を増やす結果となった。そもそも拉致などという強硬手段を採るなど・・・！　プライソンの暴走からこっち、計画は修正を重ね続けてばかり・・・！」

「はっはっは！　そう怒っていてはしわが増えるぞ？」

「その口を私のスキルで永遠に失くそうか、幻惑の融合騎エルフテ？」

「おぉ怖い怖い。・・・我ら新生イリュリア融合騎が母の手によりこの世に生み出され早５年。私だけが、ずっとこの殺風景極まりない施設に閉じ込められてきた」

エルフテは寂しそうに室内を右に左にと歩き回る。プラダマンテはそんな彼を目だけで追いつつ、彼の独白を聴いている。

「強化の融合騎・改のツヴェルフ。盾の融合騎・改のドライツェーン。治癒の融合騎・改のフィアツェーン。風の融合騎・改のフュン

フツェーン。炎の融合騎・改のゼヒツェーン。氷の融合騎・改のズィプツェー。雷の融合騎・改のアハツェーンテ。我が弟妹はプライソン戦役時に実戦投入され、今なお外界で活躍していると言うのに。手柄を立てたいと焦るのも仕方なくないか？」

「だからと言って・・・いきなり陛下を拉致しようという考えに至るのが不思議で仕方がない」

「いずれ陛下を招くのだろう？　早ければ早いほど良いと思うが？　暴れるのであれば私が洗脳すれば良い。そのためのパートナーの居ない幻惑の融合騎なのだからな！　はっはっは！」

「はぁ・・・。とにかく、これ以上は勝手な行動を慎んでもらいたい」

「承服しよう！　しかし私の活躍の場も用意してもらいたいものだな！　退屈で退屈で仕方がないのだ！」

「その時まで待っていなさい」

そう言ってプラダマンテはエルフテの部屋より退室した。

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

学院祭の翌日。本来なら学院祭の後片付けに追われる日・・・になるはずだった。フォルセティ達はいつもどおりに登校して、今まさに片付けをしてる最中だと思う中、わたしだけは今日はお休みです。

それも昨夜、わたしが誰かに操られてた男の人たちに襲われちゃったから。

（恐怖で何も出来なかった。たぶん、普段どおりに動けたなら絶対に捕まってなかったのに・・・）

フェイトママは、それが当たり前なんだよ、って言ってくれた。経験が無い事に遭遇したら混乱するのが当たり前なんだって。なら一度経験したなら、もう二度と同じ失敗を犯さないようにしないと・・・。だからわたしは庭で日課のトレーニングをした後、シャワーを終えて自室のベッドで仰向けに横になってるんだけど・・・。

（フォルセティ達が頑張って片付けしてる中で、ってなるとちょっと罪悪感がある・・・）

とまぁ学院祭で一般のお客さんが敷地内に入ってきてたとはいえ、セキュリティが高い学院内で高町ヴィヴィオ誘拐未遂事件が起きちゃった事で、教員やシスター達どころか聖王教会自体が大慌て。未遂とはいえ誘拐事件が起きちゃって、しかもわたしが聖王家の血筋というわけですごい事になっちゃった。学院内で登下校の中でも護衛を付けようなんて話になっちゃってるみたい。

（わたしの事を心配してくれるっていうご厚意なんだけど、ちょっと息が詰まっちゃいそう・・・）

一応フォルセティとアインハルトさんが護衛として、出来る限り側に居てくれるって話になってる。そしてルシルさんとシャルさんの

所属する特騎隊は、男の人たちを操った真犯人らしい人が属してる組織を、こっちから打って出て壊滅させるって言ってた。そうすれば、もっと早く自由に外を出歩き回れることが出来るだろうって。

「ヴィヴィオ、ちょっと来て～」

新着メールが無いかな～って携帯端末の画面を見てると、なのはママがわたしを呼んだから「はーい！」って答えて部屋を出る。階段の踊り場まで来ると、「忙しい中、ありがとう♪」ってフェイトママが誰かにそう言ってるのが聞こえた。階段を下りてリビングに入って、お客さんが誰なのかを知った。

「すずかさん！　それにセッテも！」

リビングのソファに座っていたのは、ママ達の親友のすずかさんと、すずかさんが任されてる第零技術部の一員のセッテだ。２人はわたしに「こんにちは」って挨拶をしてくれたので、わたしも「こんにちは！」って返した。そしてみんなでソファに座って、なのはママが淹れてくれたお茶を頂く。

「うん、美味しい・・・。ヴィヴィオ。昨晩は大丈夫だった？　怖い夢とか見てない？」

「あ、はい、大丈夫です。思ったより引き摺ってないみたいです」

わたしやフォルセティは以前、ミッドを席巻したプライソン一派に拉致されたことがあった。そもそもプライソンの手によって生み出

されたから、取り返されたとも言えるかも。とにかく今でもその記憶は残っていて、痛い思いも苦しい思いも悲しい思いも・・・たくさんあって怖くなることもある。それに比べたら、昨夜の事は恐くはあってもトラウマになるほどじゃなかった。

「そう。それは不幸中の幸いだね・・・」

「はい。・・・ところで、あの・・・今日はどういった・・・？」

「あ、うん。実はね、なのはちゃんとフェイトちゃんからお願いされて・・・」

すずかさんが側に置いてあったバッグの中から小包を取り出して、「今日はコレをヴィヴィオに届けに来たの」ってテーブルに置いた。わたしの両隣に座るなのはママとフェイトママが、「ヴィヴィオ、開けてみて」って促した。

「うん・・・」

リボンを解いてから包装紙をそっと剥がす。そして両手で箱の蓋を外すと、「うさぎ・・・？」のぬいぐるみが中に納められてた。頭の中に？マークがぐるぐる回ってる。

「あはは。うさぎが外装なの。中身はなのはちゃんのレイジングハートのようなクリスタルだよ」

「え？・・ええ！？　じゃ、じゃあ・・・この子ってまさか・・・！

デバイス！？」

すずかさんの言葉が浸透して、わたしのテンションがぐんぐん上がってく。

「本当は、基礎が全て終わっての進級祝いに贈るつもりだったんだけど、昨日のような事がもしまた起きてしまった場合、少しでもヴィヴィオ自身の力で切り抜けられるようにって」

「なのはと相談して決めたんだ。ヴィヴィオの扱う魔法や資質などをリサーチしたデータを入れた最新式・・・なんだよね？」

「フフ。うん、そうだよ、フェイトちゃん。ヴィヴィオ。いろいろとデータは詰め込んであるけど、その子はまっさらな状態なの。名前もまだ付けてないから、付けてあげて♪」

「すずかさん・・・！　ありがと～♪　あ、あの！　わたしのデータが入ってるって事は、あの機能ももしかして・・・！」

思わずすずかさんに抱きついちゃった。すずかさんは優しく「もちろんっ！　大切にしてくれると嬉しいな♪」って言いながらわたしの頭を撫でてくれた。すると箱に納められてたうさぎがフワリと浮かび上がって、まるで挨拶するかのように右手（動物の場合は右前脚だっけ）を上げた。

「わわっ！？　飛んだ！？　というか動いた！」

「すずかちゃんにお願いした、ちょっとしたオマケ機能かな？　常に手で持って移動とか手間が掛かるでしょ？　でも飛んでくれたらそんな心配ないし」

「ママ達もすずかさんも本当にありがと！　わたしだけのデバイスか～。えへへ♪　実は名前も愛称も考えてあるんだ～♪」

チラッとなのはママを見ると、「？？？」ってなのはママも？マークを浮かべて首を傾げた。スキップしながら庭へと出て、足元にわたしの魔力光である虹色に輝くベルカ魔法陣を展開。

「マスター認証、高町ヴィヴィオ。術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリット」

わたしの元になった聖王オリヴィエは真正古代ベルカ式だけど、わたしはどちらかと言うと近代ベルカ式に近い、ベルカ式とミッドチルダ式の複合式だ。そのおかげで戦術の幅もぐぐいっと広がってくれてる。

「わたしの愛機、デバイスに固有名称を登録。マスコットネームはクリス。正式名称・・・セイクリッドハート！」

それがわたしのこれからのパートナーとなる子の名前。登録を終えたばかりだけど、すぐにあの機能を実践開始。

「セイクリッドハート！　セットアップ♪」

変身魔法を起動させて、いつもは"レイジングハート"の力を借りて行なってる大人モードへ変身。変身はなんの問題もなく完了して、「よしっ！」てグッと拳を握った。ママ達が「おお！」って拍手を送ってくれて、「どうもどうも♪」ちょっと気恥ずかしかったりする。

「えいっ、せやっ！」

それから軽くシャドーをしても何も変なところはなし。となったら「うぅ～。スパーリングがしたい～」ってなっちゃうわけで。うずうずしてるところに、「セッテ。ちょっと相手してあげて」ってすずかさんがセッテにお願いした。

「判りました。ではヴィヴィオ。これより私がお相手いたします」

「良いの！？　ありがとう！　なのはママ、フェイトママ、いい！？」

「うん、しごかれておいで♪」

「セッテ。一応はじめての起動だから、そこそこ手加減お願い」

フェイトママは本当に心配性。でもそれがわたしの事を本当に大事に思ってくれての事だから嬉しい。すずかさんも「本気は良いけど全力はダメだよ？」って付け加えた。

「了解です」

その後わたし達は徒歩圏内で行ける魔法練習場へ移動して、わたしはセッテと試合をした。結果？　コテンパンのボロ負けでした。

Ｅｐｉｃａｌ今日からあなたが私の愛機～Ａｓｔｅｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

学院祭より２週間ほど経過し、生徒の制服も冬仕様へと変わった頃。フォルセティのお母様であられる八神司れ――はやてさんより、待ちに待った私のデバイスが完成したと言う知らせを頂いたので、放課後となったこれから八神家へとお邪魔することに。

「楽しみだね～、アインハルトさんのデバイス♪」

「うんっ！　どんなのになってるのかな～？」

「クールなアインハルトさんには指輪型とか？　ルシルさんやシャルさんの指輪も綺麗で格好いいし」

「フォルセティは何か知らないの？」

「うーん、僕からアインハルトさんに伝わらないようにって秘密にされちゃってて。たとえ知っても漏らさない自信はあるんだけど。信用されて無いみたいでちょっぴり残念」

ヴィヴィオさん達が私のまだ見ぬデバイスに胸を躍らせている。そういう私も初めてのデバイスということで、連絡を頂いた朝よりずっと鼓動が高まっている。真正古代ベルカ式のデバイスを造れる技術者は限りなく少なく、開発の依頼料も高額だと聞いていましたし

・・・。それを厚意で造って頂けるとなって・・・。感謝しても仕切れませんね。

「確かアインハルトは、装備型ではなく補助型を所望していたのですよね？」

「はい。覇王流も他の格闘技の例に漏れず、徒手空拳を主とする流派ですので、武器の所持および使用はしません。この拳、この体1つで闘い抜けるためのデバイスを、はやてさんに依頼しました」

イクスにそう答える。私は未だに覇王流のすべてを扱えるわけでも思い出しているわけでもない。ただ何か武器を使っての技は無いはず。ともあれ「本当に楽しみです」と私は目を閉じた。それから皆さんでレールウェイを利用して八神邸へ。

「ただいま～！　お母さ～ん、アインハルトさんを連れて来たよ～！」

フォルセティさんが元気な声で挨拶をしながら玄関へと駆け出すと、「おかえり～！」とはやてさんが玄関より飛び出してきました。そして「いらっしゃい、アインハルト。ヴィヴィオ達も♪」と出迎えてくれました。

「「お邪魔します」」

「「「お邪魔しま～す♪」」」

「「いらっしゃ～い♪」」

はやてさんとフォルセティさんにリビングへと通されると、「やあ、いらっしゃい」かつてはシュリエルリートと呼ばれていたアインスさん、それに「です！」リインさんと、「ささ、座ってくれ」アギトさんが出迎えてくれました。案内されるままにソファへと座り、出されたお茶を頂く。

「ふぅ～。さてと。変に長引かせるのも趣味が悪いし。コホン。覇王流アインハルトの愛機の完成お披露目会ア～ンドお渡し会を開催しま～す！」

「いえ～いですぅ～！」「いぇいいぇい！」

「すまないが、主たちの余興に少しだけ付き合ってくれ。苦労した分、納得のいくデバイスの出来なのだ」

アインスさんがコソコソと囁き声でそう言いました。はやてさんがＡＩシステムの仕上げと調整を、リインさんがユニットベースを、アギトさんが外装（ということは、何か装飾が施されているのでしょうか？）を担当なさったようです。

「苦労なんてしてへんよ～。ノリノリで造らせてもろたわ～♪」

「ですね！　お任せの部分も多かったですから、それはもうあーだこーだと試行錯誤♪」

「でもすげー楽しかった！　だからアインハルトに気に入ってもら

えると嬉しいぜ♪」

「それじゃあアインハルト。あなたのデバイスや、受け取って」

はやてさんがテーブルの上に1つの箱を置きました。私は「失礼します」と断りを入れてから箱の蓋を開けた。ヴィヴィオさん達と一緒に箱の中を覗き込むと、「猫？」と首を傾げました。箱の中には1匹の猫が蹲って眠っていました。

「え？　あー・・・豹なんだけど・・・。クラウス殿下が豹を飼ってるっていうのは、あたしらがグラオベン・オルデンとしてベルカに居た頃に聞いてたから・・・」

アギトさんがそう言ったのを耳にした直後、「あ・・・！」クラウスの記憶が突如として蘇りました。シュトゥラは、豹を・・・雪原豹を兵士としても扱っていました。クラウスとオリヴィエ殿下は兵力としても、1つの命としても大切にしていました。

（そういえば・・・オリヴィエ殿下には特に気に入っていたつがいが・・・。気の早い殿下は、子が生まれる前より名前をいつも考えてくれていた・・・）

クラウスと殿下にとっても最後となるその年に、死産だった子がいた。その子に付けようとしていた名前がなんだったのかを思い出していると、「ダメか・・・？」とアギトさんが不安そうに私に尋ねました。

「え？・・・あ、いえ！　そんな事はありません！　ただ、私のような者がこんな可愛らしい子を持っていては変なのでは？と・・・」

ヴィヴィオさんのデバイスである"クリス"さんを見る。とても可愛らしいウサギの外装をしたデバイスだ。ふわふわと宙を舞い、言葉を交わせないでも手振り身振りで意思疎通が出来る。ヴィヴィオさんのような可愛らしい少女が持っていればおかしな事ではないですが、私にはあまりに似合わないような・・・。

「そうかい？　私から見ても君は魅力的な女の子だと思うけど？」

アインスさんがそう言ってくださると、ヴィヴィオさん達も「はい！　とっても綺麗です！」とか「クールで格好いいです！」とか「強いです！」とか言ってくれた。あまりそういうのは言われ慣れていないので、「あ、ありがとうございます？」と最後に疑問符を付けてしまった。

「ふふ。では改めて。アインハルト」

「「「どうぞ♪」」」

「はい。では・・・」

雪原豹をモチーフとした小さなその子を両手で抱え上げる。まるで生きているみたいに温かく、やわらかい。その子がもぞもぞと動き出し、ゆっくりと目を開けて私を見て「にゃあ」と一鳴き。ヴィヴィオさん達が「可愛い　」と黄色い声を上げました。

「その子の名前認証はまだ済んでへんから、名前を付けたってな」

「あ、はい」

「それは庭でやるですよ、アインハルト」

リインさんに続いてお庭の方へと移動。両手の平にちょこんと座るこの子は「にゃあ♪」と私の目をしっかり見つめて鳴いている。この子の名前はつい先ほどのフラッシュバックで決めた。死産した子の名前を、この子に付けようと思う。その子の代わりに私とともにこれからを一緒に生きていくために。

「（2人が好きだった物語の主人公。勇気を胸に諦めずに進む、小さな英雄の名前・・・）固体名称登録。あなたの名前はアスティオン。愛称、マスコットネームはティオ。・・・セットアップ・・・！」

"ティオ"を使っての武装形態への変身。デバイス無しと有りではやはりスムーズに変身を行える気がする。"ティオ"のサポートのおかげですね。両手を軽く開閉していると、「あ、髪型・・・」とヴィヴィオさんが漏らした。両手で両側の後ろ髪の結び目に触れると、以前までと結び方が変わっているのが判った。普段の私と同じ結び方だ。

「もしかしてアスティオンが調整したのでしょうか・・・？」

「かもな。そっちの結び方が良いって思ったんだと思う」

「そうなのですか？」

「にゃあ～♪」

私の肩に乗る"ティオ"が一鳴きして頬を摺り寄せてきた。どうやらそうらしいので、「ありがとう」とお礼を述べる。

「変身魔法は上手くいったようやね。んじゃ、ちょこちょこっと微調整をやってこか。時間は大丈夫か？」

「はい、問題ありません。お願いします！」

「うん。ヴィヴィオ達は・・・暇やったらトレーニング器具を使ってもええよ。今日は八神道場も休みやから、気兼ねなく使ってな～。フォルセティも手伝ってあげて」

「「「ありがとうございます！」」」

「うん、判った！」

それから私は、はやてさん達と一緒に"ティオ"の調整を行い、その間ヴィヴィオさん達はトレーニング器具で練習をした。その後、"ティオ"の調整をいくつも終わらしていき・・・

「では！　これより流派ストライクアーツ、高町ヴィヴィオと、流派覇王流、アインハルト・ストラトスの1ラウンド3分の試合を始

めます！」

ヴィヴィオさんと"クリス"さんを相手に私と"ティオ"の最終実践調整を行う事になった。お庭は広く、格闘戦を行っても問題ないくらいです。

「ヴィヴィオさん、クリスさん。お願いします」

「にゃあー！」

「はいっ！　精いっぱい頑張ります！」

私は前に突き出した右手の平に"ティオ"を乗せ、ヴィヴィオさんは頭上に掲げた右手の平に"クリス"を乗せ・・・

「セイクリッド・ハート！」

「アスティオン！」

「「セットアップ！」」

ともに変身しました。お互いに身構え、「レディー・・・ゴー！」というはやてさんの合図と同時に私はヴィヴィオさんへと向かって地を蹴った。

†††Ｓｉｄｅアインハルト⇒イリス†††

ヴィヴィオが仮面持ちの連中に狙われていることを改めて認識できた学院祭より1ヵ月が過ぎた。あれから仮面持ちに関わっているかもしれない事件を最優先に回してもらうよう、第零特務機動隊――特殊機動戦闘騎隊を抱える脅威対策室にわたしは進言。それはつまりプライソンの負の遺産である巨大兵器が使われている戦争に干渉するということだ。

「（実際に兵器攻略に当たったのは4件中3件。3件中2件はハズレ。残り1件は今のわたし達の任務だ）・・・ミヤビ（ナイト6）！　10時の方角、距離1000から戦車6台接近中！　迎撃をお願い！」

『了解です！』

――土鬼降臨――

モニターの1つに移るミヤビが応じて、半透明だった2本の角の色を茶色に変色させた。ミヤビは単独で指示した方面へ向かう。彼女のことを最後まで見ていてあげたいけど、「ああもう、しつこい！」敵がウザ過ぎてそんな余裕は無い。

『こちら本部（シャーリーン）！　各騎に緊急連絡！　南方、距離6000に列車砲を確認！　砲門は地上本部の建設予定地、司令部に向けられています！』

「了解！　ルシル（ナイト2）！　上空から迎撃をお願い！」

『ナイト2了解。これより砲撃の迎撃に移る。各騎、支援頻度が下

がることを留意せよ』

上空で戦場すべての戦闘に支援射攻撃を行ってたルシル。まぁ他の特騎隊メンバーの戦力からいってあんまり必要の無いものだけど。ともかく、わたしが今いる場所に砲門が向けられてる。たとえ砲撃を撃ち込まれても逃げればいいだけなんだけど、今回の任務にはこのエリアを護る、というのもあるし、逃げるわけにはいかない。

「ルミナ[ナイト3]、セレス[ナイト4]、どっちか列車砲の攻略に行ってくれない？」

『あー無理。相手は魔力を持たない、質量兵器だけの武装兵。間違って殺さないように注意しながら戦車などの兵器を相手にしないといけないこの窮屈感・・・』

『同じく。管理局もこの数年で嫌われたものだよ』

クラリスがそう言って溜息を吐いた。まぁそれだけじゃないと思うよ。わたし達が今いる世界は、管理世界に加わるかどうかって言う瀬戸際に立つヴィエルヴァキア。管理世界入りを果たせば第６９っていう世界番号を得る。けどま、管理世界入りを反対する人たちもまた出てくるわけで。それが現在進行形でわたし達が戦ってる敵の正体だ。魔力資質を持たない人たちが、魔法や魔導師によって自分たちが追い込まれるんじゃないかって不安から、このろくでもない戦争を始めたわけだ。

（この世界での魔導師の絶対数は限りなく少ない。でもそれも今の内だけで、移民してきた資質持ちと交わって、数年、十数年後には

資質持ちの人口も増えるとは思う・・・）

でも魔力資質を持って生まれるかは神のみぞ知る、だ。何せ魔力素も無い地球で、なのはやはやてっていう超絶魔導師を生むことだってある。このヴィエルヴァキアは魔力素が存在しているから、時が経てばもっと増えてくる。でも今現在の持たざる人は最期まで持たざる人。それが戦争の動機。

「・・・わたしが行く。わたしからの指示が止まるけど・・・。ルシル、上空から見て戦場の動きを各騎に報告してあげて」

『了解した。気を付けてな、ナイト1』

――真紅の両翼――

ルシルからの気遣いに「えへへ♪」にやけながらもわたしは背中から魔力で編んだ翼を展開して、「ナイト1、出ます！」と飛び立つ。空に上がることでわたしも列車砲を視認にすることが出来た。デカイけど、プライソン作の"ディアボロス"ほどは大きくもないし、砲台も2台じゃなくて1台しかない。手抜き感というか試作感というか・・・。

『あの、シャルちゃ――じゃなかった、ナイト1。私たちも出撃しようか？』

『命令をいただければ即時に出撃できます』

『私もいつでも行けますぅ～♪』

今回というか兵器が確認された任務には、すずから第零技術部のメンバーに同行してもらってる。今回は護衛としてセッテ、すずかの補佐としてクアットロが来てくれてる。申し出は嬉しいけど、すずか達は客人だから、「気持ちだけ受け取っておくよ」ってお断りをする。

『そう？　でも何か手伝える事が出来たら、遠慮なく言ってね・・・？』

「うん、ありがとう、すずか」

すずかとの通信を切った直後にドォーン！と砲撃が発射された。魔力でもエネルギーでもない、単純な物質的な砲弾。ちょうど真っ直ぐわたしの方に向かって来ているし、「初弾はわたしが潰す！」って報告を入れて・・・

「ま、砲塔を斬り落とせばそれで終わる・・・！」

――剣神モード――

わたしの固有スキル・絶対切断アプゾルーテ・フェヒターを発動。"キルシュブリューテ"の柄を両手で握りこんで「せいやっ！」と、すれ違いざまの砲弾をバッティング。砲弾は打ち返される事なく真っ二つに斬り裂かれて、わたしの後方へと十数mと滑空した後に爆散した。

（アレは冷気・・・！　砲身を冷却してる・・・！）

目に見えるほどの白い煙が列車砲から噴出した。列車砲"ディアボロス"と同じだ。連続して撃てない仕組みなんだ。ならその間に叩けばいい。

『敵航空魔導師が接近中！　高射砲・・・撃てぇーーー！』

通信でもないただの拡声器を使っての指示が発せられた。列車砲の周囲に停車している１０台近い車両の後部に設置されている高射砲から無数の弾幕が放たれてきた。

「キルシュブリューテ！」

≪カートリッジロードっ！≫

――パンツァーガイスト――

全身を魔力で覆って防御力を高めつつ、弾幕の中に突っ込む。ガンガン当たってくるけど、カートリッジをロードした上でのわたしの防御力なら、この程度の弾幕くらい完璧に防ぎきれる。まず車両１台目。機関銃を手にした民兵が「化け物め！」って怯えと怒りを宿す瞳で睨み付けてきた。

「あなた達ヴィエルヴァキア人の中にも魔導師がいるでしょ。その人たちにも化け物と言って蔑むの？」

「当たり前だ！　少数派なんだよ、魔導師は！　今まではそれで良かったんだよ！」

「便利（まどうし）な道具は、ただ使われていれば良いんだよ！」

「これまではずっとそうだった！　だというのに、政府が勝手に管理局と連絡を取り合って、魔導師を今さら保護しようなどと！」

「出て行け、化け物！」

「失せろ、余所者！」

魔導師を奴隷として扱う、か。差別はどの時代、どの世界でも存在してる。差別が消える事は無いって思う。人なんだもの、他人と違うところが気になってしょうがない。机上の戦争で解り合えればいいんだけど、コイツらを説得するにはまた随分と時間が掛かりそうだし、ここはちょろっと痛い目に遭ってもらおう。

「でもさ、そうやって邪険にし続けた末路は、ちゃんと背負った方が良いんじゃない？　魔導師の恩恵を受けていながらの恩知らず。今回は痛い目を見て反省しなさい」

"キルシュブリューテ"を振るって高射砲の砲身を切断する。民兵が「生身で、しかも単独でこんな事が出来る化け物とどう解り合えと！？」って一斉に銃口をわたしに向けた。

「風牙！」

≪烈風刃！≫

後方に飛び立ちながら"キルシュブリューテ"を薙ぎ払って、風圧の壁を民兵たちに打ち込んでやった。連中は「うわぁー！？」って吹っ飛んで地面に叩き付けられたけど、打ち身と骨折程度で済むでしょ。それから列車砲の周囲に停車されている車両と高射砲、武装した民兵を斬り伏せ続けながら、『発射！』って号令とともに発射される砲弾を・・・

「させないっつうのう！」

――光牙烈閃刃――

物理破壊設定にした剣状砲撃で蒸発させてやる。これはルシルの出番は無いかな～。んじゃ、メインディッシュの列車砲攻略といこうか。

『こちらシャーリーン。ナイト1。各戦線の戦闘が終了しました。各戦線の民兵は全員捕縛。死者0、重傷者0です』

「了解。各騎は警戒継続したままでその場で待機。列車砲攻略後、敵軍への降伏勧告を行うように、ヴィエルヴァキア政府に伝えておいて」

『了解です。お気をつけて』

シャーリーンとの通信を切ったと同時に「飛刃・一閃！」と上段に構えていた"キルシュブリューテ"を「えーい！」と連続で振り払った。放つのは絶対切断の効果を持った魔力刃で、４０ｍほどある列車砲の砲身をざく切りに処す。轟音を立てて崩落する列車砲から「退避ー！」と作業員らしき人たちがわらわらと脱出し始めた。これより政府から民兵軍に降伏勧告が伝えられる予定だ。とりあえず、その前に列車砲周りに居る民兵および作業員を拘束しておかないと・・・。

「えっと・・・――っ！？」

――幻惑の乱景――

投降するように呼びかけようとしたその時、わたしたち特騎隊とはまた別の魔力反応が発生した事に気付いた。ヴィエルヴァキアの魔導師も、今回の戦闘には参加しない手はずになってる。何せ戦闘用の魔法が無いからだ。

「・・・って！　なんか列車砲が増えてるんだけど！！」

攻略したばかりの列車砲の後方に、同型の列車砲が３台と横に並んでいた。砲台が金属の擦れ合う音を発しながら回転して、砲門を予定地へと向けた。

「各騎！　砲弾に最大警戒！　ナイト２、わたしが漏らした砲弾の迎撃用意！」

全体通信でそう指示を出した直後、各列車砲から砲弾が連続で発射された。迎撃するために"キルシュブリューテ"の柄を握り直した時、「撃て撃てぇぇぇーーー！」っていう号令と同時に発砲音が一度に何十回と聞こえた。

「あぐっ・・・！？」

砲弾に気を取られ過ぎてた。新たな民兵が放ってきた何百発っていう弾丸を全身に受けてしまった。パンツァーガイストも解除されていたし、意識も砲弾の方へと集中してたから防御も回避も疎か。骨が折れる音が頭の中に届く。目の前が真っ暗になる・・・けど、「墜ちてたまるか！」ってかぶりを振って意識を繋ぎ止める。

「撃て！　撃て！」

指揮官らしき男性の命令に応じた民兵たちが、さっきみたく容赦なく重火器でわたしを狙い撃ちしてくる。でも今度は大人しく当たってやるもんか。背中の魔力翼を何度も羽ばたかせて、宙を舞うようにして弾幕を躱し続けつつ・・・

――飛刃・一閃――

新しく現れた列車砲の砲身へ向けて絶対切断の魔力刃を放つ。向こうには、というか管理世界の中でもこの一撃を防御できる術はほぼ無い。民兵たちが魔力刃に銃弾を撃ち込みまくるけど、それすらも切断して、目標だった列車砲の砲身を真っ二つにした。

「（あーもう痛い！　左腕折れてんじゃんこれ・・・！）ナイト2！
砲弾の迎撃は！？」

『問題ない！　君こそ大丈夫か！　かなりの銃弾をもろに受けたぞ！』

「左前腕を骨折しちゃった・・・」

『判った。俺が迎撃に出る。ナイト1、君は下がれ。シャーリーン。
エイダー1を待機』

『シャーリーン了解です。ナイト1、即時帰艦をお願いします』

「・・・ごめん。ナイト1、帰艦する」

とりあえず列車砲2台を潰せたんだから、結構な仕事はしたと思う。
離脱するそんなわたしに向かって「回復してからまた来る気だ！
逃がすな！」って、無事な高射砲までも使ってわたしを狙ってきた。
改めて思うけど、それって対人兵器じゃないでしょうが。

「この・・・！」

――雷牙神葬連刃――

イラッとしたわたしは、絶対切断のスキルを解除したうえで雷撃の
斬撃を連続で放って、「ぎゃぁぁぁ！？」と連中を感電させる。そ
んな中、「アイツは・・・！」と民兵たちの中に見覚えのある格好

をした奴を視界に捉えた。

「仮面持ち・・・！　やっぱり・・・！」

逆五角形の仮面とセーラー服。マリンガーデンで、ティアナとマリアージュ事件の首謀者として逮捕されたルネッサ・マグナスの前に現れた奴で間違いない。ソイツがわたしに向かって飛んできた。

（アイツは相手の魔力を学習して無力化してくるっぽいし、倒すなら一撃で戦闘不能にしないと詰む・・・！）

さらに防御力に自信があるようだし。ここはルシルかルミナに頼るべきか。最悪、さっきまでのわたしの魔法を見られていた可能性もあるわけだし。だから「逃げるが勝ち！」ということで、変にちょっかいを掛けないようにしよう。

「って！　回り込まれた！？」

チラッと後ろを見て、次に前を見るとそこに仮面持ちが居た。ほぼ無意識に右手に握ってる"キルシュブリューテ"を仮面持ちに向かって振るった。アイツは防御でもなく迎撃でもなく、ヒラリと回避。それでもわたしの斬撃範囲内に入ってるから、「ふん！」と"キルシュブリューテ"を薙ぎ払うけど、またふわっと避けた。

（ひょっとして遊ばれてる・・・？）

何度斬り掛かろうとしてもアイツは反撃を一切せず避けてばかり。

民兵たちの銃撃や高射砲と列車砲の砲撃も止んでる。なんだろ、何かが引っ掛かる。と、意識がちょい散漫になったその時・・・

「い゛っ・・・！？」

アイツがいきなり距離を詰めてきてわたしの折れた左腕を鷲掴んできた。これがまぁ痛くて、一切の行動が一瞬とはいえ止まってしまった。次にアイツは左手でわたしの頭を鷲掴んできた。

「この・・・放せ！」

「ああもう！　いい加減にしろ！　呪われし者（コード）に、汝（ラファエル）の施しを！」

「はい・・・？」

喋ったかと思えばそれはルシルの声で、しかも術式の名前だった。視界が彼の魔力光であるサファイアブルーに満ちてく。

「ハッ・・・！」

視界が晴れて、目だけを動かして周囲を確認するとそこはシャーリーンの医務室だった。わたしはベッドに寝かされているようで、被っている布団を退けようと両手を動かそうとしたら、「いっつ・・・！」全身に痛みが走った。

「なに・・・？」

折れたはずの左腕もまぁ痛いけど、折れた割には動かせる。痛みに耐えながら上半身を起こす。それで気付いたんだけど、全身に包帯を巻かれてた。しかも服も入院の際に着る病衣だし。

「イリス・・・・！」

「ティファ・・・・」

白衣姿のティファレトが医務室に戻ってきた。わたしは彼女にどういった経緯で医務室にいるのか、そもそも任務はどうなったかを尋ねた。

「・・・本当に憶えていないのね。あなたは列車砲を無力化した直後、いきなり棒立ちになったの。それで民兵たちの集中砲火を受けた。全身のダメージはその所為。しかもその後、重傷なのに帰艦指示がルシル副隊長から出ても戻らず、誰も居ない、何も無いところをキルシュブリューテで攻撃を始めて、さらにまた集中砲火を受けた。そして回収しに赴いたルシル副隊長にまで攻撃を仕掛ける始末。強制的にイリスの意識を落として回収、私とアイリ医務官とで治療に当った」

「なにそれ・・・・。それってまるで・・・・！」

「ええ。クアットロ教官の推察では、強力な幻覚魔法なのでは？ということだよ」

「魔力反応はちゃんと捉えているのね？」

「ええ。副隊長たちが過去の魔導犯罪者の魔力パターンを調査したけれど、該当者はなしとのことだった」

「そう・・・。あ！　任務はどうなったの！？」

まずそっちを気にするべきだった。特騎隊の隊長が負傷して眠ってたなんて恥以外の何ものでもない。

「イリスが意識を失ってからすでに１０日と経過した。その間に特騎隊の任務はすべて完了となり、今現在は本局に向けて航行中よ」

「と、１０日！？　そんなに！？　ルシルってば、そんな強くわたしを落としたの？」

「というよりは、イリスが負ったダメージを回復させるため、私が強制的に眠らせていたの」

「あ・・・そう」

何はともあれ任務は果たしたってことか。なら良いか。溜息を吐きながら俯いたところで、「悪いニュースとすごく悪いニュースがあるけど、どちらから聞く？」ってティファが選択肢を出してきた。

「どっちにしろ悪い報せじゃん。・・・じゃあ悪い方から」

そう選択すると、ティファはベッドから離れてキャスター付きの全

身鏡をわたしの元へ持ってきた。そしてここで始めて気付いたわたしの体の異常。

「～～～～～～っ！！　いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

出撃前はお尻辺りまでの長さだった後ろ髪が、今じゃちょい肩に掛かるセミロングヘアになってた。大事に大事に伸ばしてケアし続けてたわたしの髪が・・・。また伸ばせば良いって話だけど、生まれてからの２３年間ずっと守ってきたのに、まさかこんな形で失うなんて・・・。

「これ以上の悪いニュースがあるっていうなら教えて・・・」

「では。聖王教会本部が、管理局法からの脱退を全管理世界に表明、これが本局に受理された」

「・・・・・・・・・はい？」

いやいや、ちょっと待って。なに言い出すの。管理局法から脱退って・・・。各地上本部に届けずに管理世界を行き来できて、行動も縛られなくなるけど、支援も協力も出来なくなって孤立するのは間違いない。確かにすごく悪いニュースだった。後ろ髪の喪失を忘れてしまうほどに・・・。

Ｅｐｉｃａｌ２新暦７８年：聖王教会騎士団独立～Ｈｉｓｔｏｒｉｃａｌ　Ｅｖｅｎｔｓ～

第一世界ミッドチルダ、北部はベルカ自治領ザンクト・オルフェン。中央区アヴァロン、北区カムラン、西区カールレオン、南区ウィンザイン、東区ナウンティスからなる広大な土地だ。そのザンクト・オルフェン中央区アヴァロンには、管理世界で最も信者の多い宗教である聖王教、その本部がある。

「あぁ、今日もこんなに書類が・・・」

本部内のとある一室。そこは教皇執務室と銘打たれた、限られた人物しか入れない特別な部屋で、両側の壁には何百冊と納められた書棚がいくつも並び、天井にはベルカ魔法陣型のステンドグラス、床にはレッドカーペットが敷き詰められ、一番奥の壁は両開き窓が複数設けられている。

「これでも結構抑えられていますよ、マリアンネ聖下」

今現在、執務室には２人の女性と１人の男性が居る。１人は聖王教の教皇にしてＳｔ・オルフェンの実質領主でもある女性、マリアンネ・ド・シャルロッテ・フライハイト。アンティーク調の執務机の置かれた書類の山を見て、ガックリと肩を落としている。

「そうは言っても、もう少し業務部のほうで処理し切れなかったの、ツィスカ？」

もう1人は教皇付きの秘書官、ツィスカ・ヴェールマン。シスターであり教会騎士団所属の騎士でもある。所属部隊は、騎士団内部の風紀を取り締まる無色花騎士隊ファルブロス・ブルーメ。かの騎士隊に所属する者は徹底的に公平にして公正であることを求めえられる。ゆえに教皇秘書官には必ず所属する者が選ばれる。

「その上での量です。今日は、４日後に控えています本局での意見陳述会に提出する書類の再確認ですので、頑張って処理してください」

「そうなのねぇ・・・。よし、やりましょうか！」

他の部署もまた多くの仕事をこなしていると知ったマリアンネは、両頬をパチンと叩いて気合を入れなおした後、黙々と書類に必要な事を書き直したり、サインを書いたりと仕事をこなしていく。それから1時間ほど経過した頃、執務室の出入り口である両開きドアがコンコンコンとノックされた。

「出ます」

ドア付近で足を肩幅に開き、両手を腰の後ろで組んで立つ休めの姿勢を取っていた男性が動き出す。ドアノブへと手を掛け、そっとドアを開けた。

「お疲れ様です、騎士パーシヴァル」

「お疲れ様です」

男性の名はパーシヴァル・フォン・シュテルンベルク。かつては教会騎士団に属する数居る槍騎士の頂点、シュペーアパラディンの称号を頂いていたが、今はフライハイト家の元女中長だったプリアムス・ゲーティアと結婚し、子供が生まれたことで称号を返上。それと同時に銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼを除隊し、教会の要人や依頼者の護衛を主任務とする桃茉莉花騎士隊ローザ・ヤスミーンへと転属していた。

「ツィスカ秘書官。業務部からのお仕事の追加です」

そう言って1人のシスターが執務室内へと通された。押しているキャスター付きワゴンの上には、山積みされたファイルが置かれている。その量を見たマリアンネは「うふふ～♪」と笑みを浮かべながら席を立ち、ワゴンの方へとすい～っと歩み寄った・・・かと思えば、「さらば！」と出入り口のドアへとダッシュ。公式の場で着る豪華絢爛な法衣は今は着ておらず、軽装ともいえるカズラのみを着用しているため動きが素早かった。

「ボイコットは許しませんよ！」

「聖下、お戻りを！」

ツィスカとパーシヴァルが立ち塞がるが、マリアンネは「とう！」と大きく跳躍。宙で前方伸身宙返り3回半ひねりを繰り出した。まさに体操選手さながらの動きだが、着地地点にはパーシヴァルがす

でに移動し終えており、「いけませんよ、聖下」と落ちてきた彼女をお姫様抱っこで受け止めた。

「あらやだ」

「聖下、仕事の続行をお願いします」

「ありがとう、確かに書類を受け取りました」

「は、はい、了解です」

ツィスカはシスターの抱える書類に受け取りサインを書き、シスターが執務室を後にするのを見送った。パーシヴァルはマリアンネを抱きかかえたまま執務机と向かい始める。その時また、ドアがノックされた。彼は「失礼します」と一言断ってから彼女を降ろし、ドアへと戻ってそっと開けると、「閣下！」とビシッと佇まいを直し、ツィスカも新たな訪問者の姿を見て同様に佇まいを直した。

「聖下、あの件について再考をと思いまして、こうして押しかけてしまいました」

「はぁ・・・。その話は先の議会で否決された事を思い出してもらいたいわ、リナルド」

やって来たのは教会騎士団の統括、リナルド・トラバント騎士団長。ザンクト・オルフェンを統治するフライハイト家に連なる六家の一角、トラバント家の現当主。マリアンネが目に見えて不機嫌になっ

た様子に、「あの・・・」パーシヴァルやツィスカが戸惑い始める。

「席を外しましょうか？」

「ああ、そうしてくれたま――」

「いいえ。元とはいえ、パラディンだったあなたにも関係があるから、このまま聴いていてちょうだい」

マリアンネは室内から出て行こうとしていたパーシヴァル達を引き止め、執務机の縁に尻を乗せるように楽な姿勢を取った。

「リナルド、あなたの言いたいことはまぁ・・・理解できないこともないわ。でもね、ザンクト・オルフェンや聖王教会騎士団を管理局法から脱退させる、なんて無理な話を通せるとでも？」

マリアンネの話にパーシヴァルはバッとリナルドへと体を向け、「本気ですか！？」と驚きや戸惑い、僅かなりの怒りを含んだ声でそう問うた。ツィスカも「そんな事になったら、孤立してしまいます・・・！」と声を震わせる。

「お前たちも今の管理局の不祥事の数々を知らないわけではないだろう？　プライソン戦役など氷山の一角だ。それなのに本当にこのままあの連中にミッドチルダの安寧を任せていいのか？　少しはマシになったとはいえ、未だに派閥や縄張り争いの止まない。しかし我われ騎士ならば、かのような不祥事は起こさんし、内部争いもない。聖王陛下の御魂の下、公正公平を成すのが当然だからだ」

「内部争いは今まさにここでやっちゃっているけれど・・・。とにかくリナルドはそう考え、先の提案を議会に提出したの。もちろん私や他の当主たちはこれを却下したのだけど・・・。まだ諦められないと？」

「当然。そのために長い間ずっと準備を進めてきたのだ。ここで拒まれてはすべてが水泡に帰す。もう一度再考を、マリアンネ聖下」

リナルドとマリアンネが鋭い目つきで互いを睨み合う。十数秒と沈黙が流れた後、マリアンネは口を開いた。ただ一言、「却下」と。次いで「２人は同じ答えで良いかしら？」とパーシヴァル達に尋ねた。

「「はい」」

「というわけで、あなたの思惑はこれにて終了。さ、私たちはまだ仕事があるから退室をお願いね」

マリアンネがリナルドへと手を振った直後・・・

――トランスファーゲート――

彼女の背後の空間が揺らぎ、そこより1人の人間が出現した。黒いセーラー服に三日月模様の仮面を着けた女性だ。手にしているのは一振りの片刃剣。すでに剣を振り上げていて攻撃態勢だ。完璧な奇襲。立ち位置的にパーシヴァル達がいち早くそれに気付きはしたも

のの、それをマリアンネに伝えるには時間が圧倒的に足りない。仮面持ちの刃が振り下ろされる。刃面がマリアンネの右肩に打ち込まれるかという瞬間・・・

「こんな迷いだらけの剣など、見る間でもなく感じ取れる・・・！」

半歩分左に移動することで斬撃を躱し、仮面持ちが次の行動に移る前に上段後ろ回し蹴りを繰り出した。出現してからの奇襲斬撃。それを回避されたその直後では未だに仮面持ちは中空だ。その蹴りを回避することは出来なかったが、「くぅ・・・！」両腕を交差させての防御には成功した。仮面持ちは蹴り飛ばされながらも宙で体勢を立て直し、書棚のちょうど木枠に一旦着地し、そして床に降り立った。

「貴様！　指名手配を受けている仮面持ちだな！　なぜ聖下を狙った！？」

パーシヴァルが自身の槍型アームドデバイス　・"ロンゴミアント"を起動させて構えを取り、いつでも突進できるように腰を僅かに落とした。そんな彼に「待ちなさい」とマリアンネが制止した。

「リナルド、あなたがまさか仮面持ちと繋がっているとはね」

マリアンネが襲撃されたにも拘らずリナルドは黙って佇んでいるだけ。仮面持ちとは仲間であると考えた方が自然である。口を噤んでいる彼から仮面持ちへと目を向けたマリアンネは「本当に馬鹿な子ね、プラダマンテ」とそうポツリと漏らした。

「「は・・・？」」

呆気に取られているパーシヴァルとツィスカの目の前で仮面持ちは仮面を外し捨て、目出し帽も脱ぎ捨てた。尻ほどまでに伸びた緋色の長髪と紫紺色の瞳。それはまさしくパーシヴァルの元上官でもあった「シスター・プラダマンテ・・・！」だった。

「なんで・・・！　なんでですか！」

「パーシヴァル。リナルドを拘束しなさい。プラダマンテはこの私が――」

≪Ａｎｆａｎｇ≫

「仕留める」

マリアンネの両手首にはめられていたブレスレットが太刀と小太刀の二刀となり、彼女の両手に握られた。太刀の銘は"キルシュヴァッサー"、小太刀の銘は"キルシュガイスト"。共に深紅の刀身を有している。

「さぁ、久しぶりの実戦よ・・・！」

先代シュベーアトパラディン・マリアンネと当代シュベーアトパラディン・プラダマンテ、騎士団長リナルドと元シュペーアパラディン・パーシヴァルの２組が対峙する。

「プラダマンテ。片付けるのは面倒だ、室内を荒らすことなく聖下を撃破しろ」

「・・・了解です、兄様」

「パーシヴァル。多少の被害は目を瞑るので、反逆者リナルドを撃破しなさい」

「ヤー！」

「ツィスカは逃げなさい。でも誰かに助けを求めないように。敵味方が判らない以上、増援は望まないわ」

「・・・・！　了解です！　御武運を！」

ツィスカがリナルドとプラダマンテの間を無事に通り過ぎ、執務室より駆け出していった直後・・・

――閃駆――

マリアンネが仕掛けた。小太刀を逆手持ちしたうえで高速移動歩法を使い、一瞬でプラダマンテの懐に入り込んだ。そして「風牙烈風刃！」と小太刀を振るって放った風圧の壁を、プラダマンテへとゼロ距離で打ち込んだ。

「くぅぅ・・・・！」

踏ん張りきれずに吹き飛ばされたプラダマンテが体勢を立て直すより先に、マリアンネはさらに閃駆を使い、彼女の直上へと移動した。

「迷いに溢れたへなへな剣で、しかもスキルを使わずに私を討とうなどとは笑わせる」

――双牙雷氷刃――

小太刀に電撃を、太刀に冷気を纏わせたマリアンネが小太刀から先に振るった。初撃をプラダマンテの右肩に打ち込むと、「がああ！？」と感電したことで彼女が悲鳴を上げた。間髪入れずに左肩へ太刀を打ち込むと彼女は「っ・・・！」強力すぎる冷気を浴びて、吹っ飛ばされた姿勢のまま氷漬けにされた。

「しばらく頭を冷やして反省なさい」

「くふふ・・・。俺も衰えたものだな・・・。まさか一撃で負けるとは」

そしてリナルドとパーシヴァルの闘いの勝敗は、静かに決していた。槍のパラディンではなくなったとしても、実力で言えば未だに教会最強の槍騎士であるパーシヴァル。鍛えてはいようとも実戦から離れて久しいリナルドに勝ち目は無かった。

「勝負あり、よ。大人しく投降なさい」

「くはは。確かに負けはした。が、所詮は本番前の遊びに過ぎん」

マリアンネの太刀とパーシヴァルの"ロンゴミアント"を突き付けられても余裕に満ちたリナルド。マリアンネは不審に思い、周囲をチラッと見る。そうして彼女の視界に入ったのは、貴族のような衣服を身に纏った二足歩行している猫。

――幻惑の乱景――

「か、か・・・可愛――」

マリアンネがそう言い掛けたが、パーシヴァル共々直立不動となった。リナルドが「良いタイミングだったぞ、エルフテ」と猫型融合騎であるエルフテを称えた。

「この私の幻惑劇に教皇聖下と元パラディンをお迎え出来るなど光栄の至りです、団長」

エルフテは幻術特化の融合騎である。特に催眠魔法はかなり強力で、ほぼ防御不可である。シルクハットを脱いで一礼するエルフテが、「しかしこれは・・・」と氷漬けにされているプラダマンテを見て慄く。

「マリアンネの魔法はどれも強力だからな。直撃を食らえばいくら我が妹でもこうなる」

横目で同志であり妹でもあるプラダマンテを見つつ、『ガリホディ

ン、トルーデ。ゼヒツェーンテと共に執務室へ来てくれ』と念話を繋げる。

――トランスファーゲート――

「ガリホディン参上しました」

するとすぐにリナルドの側の空間が歪み、そこから男1人と女2人が現れた。男の名はガリホディン・ダムマイアー。外見年齢はおおよそ40歳前後。短く刈り上げられた青い髪とギラリと輝く青い瞳はまだしも、筋骨隆々とした体つきに神父服が似合ってはいない。そんな彼は拳闘騎士の現フォアストパラディンでもある。かつては幼少のアルテルミナスに敗れパラディンの称号を奪われたが、彼女が本格的に特務零課へ参加する事になって称号を返上。不本意ながらも再びパラディンとなった経緯を持つ。

「トルーデ・ロホルト参りました」

女の1人は修道服を着たシスター・トルーデ。外見年齢は25歳ほど。綺麗な金色の後ろ髪はリボンで二房に分けられ、ドリルのような巻き髪にされている。優しい目付きの瞳は青色。そんな彼女こそが、仮面持ちを至る所へと転送させていたスキルの持ち主だ。

「ワタシが呼ばれたってことは～、炎熱魔法が必要なんだね」

ガリホディンの肩には30cmほどの小さな少女が腰かけていた。炎の如き紅の髪はショートヘア。瞳は紫色。耳はエルフのように長

い。どこか八神家の融合騎、アギトに似ている。服装はトルーデと同じ修道服。少女の名前はゼヒツェーンテ。意味は１６。そう、かつてはイリュリア製融合騎の６番、烈火の剣精ゼクスと呼ばれていたアギトの改良型だ。

「ああ。我が愚妹を捕らえているこの氷塊を解除してほしい」

「閣下。それならば融合騎の力だと使わずとも自分ひとりで可能かと」

ガリホディンは炎熱の変換資質を有しており、その火力にも自信はあったのだが、リナルドは彼だけでは足りないと判断した。それがガリホディンのプライドを僅かに傷つけた。

「お前の炎熱資質は信頼しているが、なにぶん相手が悪い。マリアンネの氷結魔法は生半可なものじゃないからな」

「あぁ、聖下の・・・でしたか。了解です。ゼヒツェーンテ」

「ヤヴォール」

「「ユニゾン・イン」」

ガリホディンとゼヒツェーンテが融合を果たすと、彼の髪は薄らと輝く真紅色へと変わり、瞳の色も燃えるような赤色だ。彼は右手の平に橙色に輝く小さなベルカ魔法陣を展開。その状態で氷塊へと近付き、「熱衝打・・・・！」と掌底を打ち込んだ。するとジュウジュ

ウと勢いよく融け始めた。

「マリアンネの無力化で準備は整った。さて、あとは・・・」

――そして、この４日後。

時空管理局本局で開催された公開意見陳述会。本局や支局、各地上本部の幹部がモニター越しだが一堂に会して様々な議題を話し合う大会議だ。数年に一度に開催され、その模様は管理世界に放映される。今回の陳述会も例に漏れず、淡々と会議映像が管理世界の一チャンネルに放映された。そして終盤。聖王教会代表のマリアンネ教皇とリナルド騎士団長が、こう提案した事で議会が揺れた。

――ザンクト・オルフェンと聖王教会騎士団を管理局法から脱退させる――

参加している幹部どころかテレビ視聴の一般人、局員、さらには騎士団員までもが聞き間違いではないかと自身の耳を、頭を疑った。幹部たちから上がるマリアンネとリナルドへの叱責。しかしそれでも構わず２人は、その理由を語った。

それはリナルドの主張と同じで、管理局への不信から、というもの。不祥事ばかり起こし、大規模な組織特有のしがらみなどで不安定が目立つ、と。しかし教会騎士団は一枚岩で、その不安定はないと。すぐには承認することも出来ず、休憩を挟むことになった会議。それは２時間と掛かり、結論が出た。

――ベルカ自治領ザンクト・オルフェンの要求を受け入れることを

決定とし、教会騎士団は独自に戦力を整え管理世界の安寧に全力を尽くす事。しかし管理局法からの脱退により、管理局からの支援は一切受けられないことを覚悟する事――

それは、新暦となってからの７８年、これまで共に戦ってきた管理局と聖王教会騎士団の決別を意味していた。

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

ティファから、シャルが目を覚ました、という連絡を受けた俺は医務室へと向かっていた。当初はみんなで見舞いに行こうと言っていたはずなんだが・・・

――いや～、やっぱり大勢で押しかけるのは・・・ね――

――ここはやっぱり副隊長が代表として行くべきと思うよ？――

――お腹空いた――

――え？・・・あ！　そ、そうですね！　ルシル副隊長、シャル隊長のお見舞い、お願いします！――

ルミナ、セレス、クラリス（は平常運転だが）、ミヤビがそう言って俺ひとりだけを送り出した。アイリも、マイスターが行ってあげればいいと思うんだけどね、と言って残った。はやてを応援し、シャルを応援し、トリシュを応援し、自分も頑張る恋する乙女だ。ホント彼女たちを幸せに出来ない俺はクズ過ぎるよな。

「・・・というか、母様は何やってるの！？　母様がこんな無謀な事を許すとは思えない！」

医務室の前にたどり着いたところで室内からシャルの怒声が漏れ聞こえてきた。と同時にドアがスライドして開く。するとシャルとティファの２人の視線が俺へと向いた。

「ルシル・・・！」

敵の銃撃の集中砲火を受けてことで髪が短くなったシャルが、さっきまでの怒気を抑えて俺の名前を呼んで、後ろ髪を気にするかのようにイジりながらもじもじとした。彼女は後ろ髪を本当に大切にしていたからな。だから「その長さでも十分可愛いぞ」とフォローしておく。お世辞でもなんでもなく、髪の短いシャルでもとても魅力的な女性だと思うから。

「・・・！　う、うぅ・・・うぅ～～」

シャルの顔が一気に真っ赤になり、体育座りのまま布団を頭から被った。珍しい。いつもならすごい喜んでくれるはずなんだが。ティファと顔を見合わせて小首を傾げていると、シャルが「ホントに？　髪、変じゃない？」と聞いてきた。

「ああ、変じゃないよ。似合ってる」

「私もそう思うよ、イリス」

「・・・ありがとう。そう言ってもらえてすっごく嬉しい」

布団から顔を出したシャルは照れくさそうにはにかんでいた。しかしすぐに「ティファ。制服ちょうだい」とベッドから降りようとして、両足を床に着けた途端シャルは「いっつ・・・！」と苦痛に顔を歪めた。

「無茶はよせ、シャル。俺とティファで君の負った傷は治したが、受けたダメージまでは完全には治せていない。あと2～3日は安静だぞ」

「ルシル副隊長の言うとおり」

ティファがわたしをお姫様抱っこすると「もうこれで最後ですから、それまでは安静にしていてちょうだい」ってベッドに横たえさせて布団を被した。

「でも母様と話をしないと・・・。それに・・・それに・・・。ねえ、最後ってなに？」

シャルが目を丸くして聞いてきて、俺とティファはもう一度顔を見合わせてどう答えようか迷った。が、誤魔化しても騙してもすぐにはバレる話だ。ティファと頷き合い、教会騎士団の独立による余波が、俺たち特務零課にまで及んでいることを伝えることに。

「聖王教会本部より、管理局に勤める騎士に通達があったの。現在

教会騎士団に所属している者、かつて所属していた者は、指定日までに管理局を休職し、騎士団に復帰するように、と」

「は？・・・はあ！？　それってわたしやルミナ、セレス、クラリス、それにティファもそうじゃん！　ちょっ、ちょっと待って！　特騎隊の前線ほぼ全滅じゃん！」

「そうだ。・・・脅威対策室・特務零課課長、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト二等陸佐。上からの指令を伝える。本件の報告書を提出後に特務零課は無期限の活動停止とする。指定された騎士は速やかに休職届けを提出し、教会騎士団に出頭せよ」

そう伝えるとシャルは「うそでしょ・・・」って文字通り頭を抱えた。無期限って聞こえはいいが、教会騎士団の独立が発端でシャルたち騎士が召還されるということは、再び管理局法に入らない以上永久に局に戻ってこられない、かもしれないという話になる。

「わたしって27歳までしか局に勤められないのに・・・。これじゃルシルとまた離れ離れになっちゃうじゃない・・・。せっかく一緒の部隊で最後まで居ようって思ってたのに・・・」

俺と一緒に居られないという理由で本気でヘコむシャルだが、俺は小さく息を吐いて彼女の前にモニターを1枚と展開させた。

「なに・・・？」

「総務部から辞令が下りた。ルシリオン・セインテスト一等空尉お

よびアイリ・セインテスト空曹長を休職扱いとし、聖王教会騎士団へと派遣する、だそうだ」

「マジで？」

「マジで」

「やったぁぁぁーーーーー！！」

さっきまでの泣きそうな顔から一転、満面の笑顔で大喜びするシャル。正直、俺は局でも騎士団でもどこでもいいと考えている。俺の残り時間は多く見積もっても５～６年だ。ガーデンベルグの居場所を唯一知るリアンシェルトと闘う条件は、あの子とガーデンベルグを除く"堕天使エグリゴリ"を救う事。

（そしてリアンシェルトに勝ちさえすれば、ガーデンベルグとの最期の闘いへ赴ける）

なら最後はどこに所属していても関係ない。仮面持ちと関わりさえすればな。ただ、これだけは言っておかないと。

「シャル」

「なぁ～にぃ～♪」

「俺を騎士団へ派遣する事を決めたのは、リアンシェルトだ。この意味が解るな？」

シャルの蕩けきった表情が真面目なキリッとしたものへと変わり、
「エグリゴリとして何か企んでるってこと？」と聞き返してきた。
「管理局が騎士団の独立を認めたことにも何か裏がありそうなんだ」
「なるほど。これはいよいよ母様を問い詰めないとダメっぽいね」
「ああ。俺たちで今回の騒動を調べるぞ、シャル」
「～～～～っ！　よぉ～っし！　やってやるぜい！」
こうして特務零課、特別機動戦闘騎隊は一時活動停止となった。

Ｅｐｉｃａｌ３－Ａ橙石楠花騎士隊～Ｏｒａｎｇｅ　Ｒｈｏｄｏｄｅｎｄｒｏｎ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「ふわぁ～、眠い。早朝４時はやっぱ眠い・・・」

どうも、元管理局特務零課・特別機動戦闘騎隊の隊長だったイリス・ド・シャルロッテ・フライヘイトです。１１月もいよいよ終わりに近付いた今日この頃。わたしは管理局を無理やり休職させられて、一度は離れた教会騎士団に復帰しています。

「イリス、参りました」

聖王教会本部内のとあるドアを３回ノックした後に名乗り、「入れ」っていう、入室を促す返答にしたがってドアを開け、カリムの執務室よりちょい広い部屋へと入る。

「おはようございます、団長」

「ああ、お早う。さて、本日の橙石楠花騎士隊《オランジェ・ロドデンドロン》の任務内容を伝える。南部はマクファーデン地区のエリアＣの警邏だ。あの辺りは南部でも有数な繁華街だから人も多い。逆に言えば犯罪が起きやすいとも言える。十二分に警戒するように」

わたしが新しく率いることになった新設部隊・オランジェ・ロドデ

ンドロンに指令を下すのは、教会騎士団の全権を任されるリナルド・トラバント騎士団長。わたしは執務机に着いてる団長に「了解です。では失礼します」って簡潔に応じて、すぐさま団長執務室を後にする。

（はぁ・・・。騎士団に復帰してからまだ2週間だっていうのに、もう心が参っちゃってるよ・・・）

教会騎士団の独立は管理世界を大いに騒がせたけど、それほど大きな混乱には至らなかった。母様や団長の語った独立理由に賛同する人が多かったからだ。これまでは管理局が本命で騎士団がオマケっぽかったけど、たった2週間で今や二分する勢いになってる。どっちにも属した事がある身としては複雑だ。

「（でも、それに乗じて犯罪を起こす馬鹿共もちょい増えた気がする・・・）ただ～いま～」

我らオランジェ・ロドデンドロンの詰め所となる、新しく建てられた聖堂へと戻り、隊員の待つ会議室に入る。室内にはわたしの部下・・・っていうよりかは仲間が、ひし形に組まれた長テーブルに着いていた。みんなからの「おかえり～」を受けながらわたしも席に着く。

「えー、本日の任務は、南部マクファーデン地区のエリアCを警邏する、で～す」

今日のお仕事内容を伝えると、真っ先に「確かエリアCは陸士03

０部隊の管轄だったな。あそこは頭の固い連中ばかりだぞ」って嘆息するのはルシル。ルシルの宿敵にして本局の総務部総部長であるリアンシェルトの指示で局を休職させられ、今や教会騎士団の一員だ。服だって制服じゃなくて神父服だし。というか、神父服が似合いすぎてビックリなんだけど。

「確か・・・勤続４０年近い幹部が多いってところでしょ？　また衝突するのは嫌だね～」

やれやれって肩を竦ませるのはセレス。時空管理局は民間からの出資でその運営を保たれてる。で、セレスの実家は六家の一角であるカローラ家で、父親のカローラ卿はミュンスター・コンツェルンの総帥で、最も管理局に出資している。んで、教会騎士団も、敬虔な信徒の方からのお布施などで運営されてる。今回の独立騒動で、局への出資を減らして教会への出資を増やした。それで局の財政はちょっとばかり悪くなっちゃって、そっち関連の部署の人たちは大慌てらしい。それもあって長年局に勤めてる人からの風当たりは厳しい。

「この前の任務だと、ハイエナ呼ばわりだった」

ドーナツを頬張りながらの発言っていう、緊張感の欠片も感じさせないのはクラリス。それは数日前、２つの陸士隊が担当するエリアを跨いでわたし達は魔導犯罪者を捕らえた。その際にその２つの隊の老齢な捜査官から、ハイエナめ、って罵られた。

「これが嫌だったんだよ。管轄区っていう縛りが無くなった分、な

おも縛られる陸士隊との確執や禍根が生まれるのは当然。いくら局が信用に足らなくなってきたとはいえ、こんな喧嘩を売るような真似、本当に信じられない」

母様と団長、さらに言えばＳｔ・オルフェンを治めるフライハイト家と六家で構成される評議会に悪態を吐くのはルミナ。特騎隊に誘った際、パラディンの称号や銀薔薇騎士隊所属っていう肩書きは邪魔だから、ってなんの未練も無しに捨てたトンデモない子。

「・・・未だに信じられない。マリアンネ聖下がこのような判断をしたとは・・・」

テーブルの上に両肘を置き、組んだ両手に額を乗せて項垂れるのはトリシュ。わたしだって信じられないよ、未だに。最初は、母様は何者かに操られていたり、誰かの変身魔法だったり、そう疑って再会した。でも、そのどれでもなかった。とても付き合いの長い父様や、そういう細工を見破るのが得意なルシルからしても、母様は本物だっていう結果が出るのみだ。

「本当にこの一件には裏があるのでしょうか・・・？」

不安そうに漏らすのはアンジェ。わたしとルシルはずっとそう考えてたし、今も考えてる。母様は本物だ。でも母様が騎士団の独立を推進するなんて絶対にありえない。団長が推進派の筆頭だって話は父様から聞いている。

（だからわたし達は団長を疑ってる。信じたいけど、反対派だった

らしい母様の意見をコロリと変えさせることが出来るなんて、やっぱり何かしらの術を使ってるって考えざるを得ない）

わたしイリス、ルシリオン、トリシュタン、クラリス、アンジェリエ、アルテルミナス、セレス、あと「それを調べるのがアイリ達だよ」って、ルシルの肩に座ってる小さなアイリ、この８人の騎士が、銀薔薇騎士隊と共に騎士団の双頭となるべく新設された橙石楠花騎士隊のメンバーだ。

「局は局でリンディ統括官やクロノといった昔なじみが調べてくれている。たった数時間の話し合いで、なぜ局が教会騎士団の独立を許すという結果に至ったのか、リンディ統括官たちも疑問に抱いている」

「・・・密約があったかもしれない、ということですねルシル様」

「ああ。そのために俺たちも騎士団内部を調査しなければならない。が、その前に目前の仕事をこなさなければな。隊長」

ルシルを始めとして他のみんなの視線がわたしに向いたから、「ん！　オランジェ・ロドデンドロン出撃！」と号令を下すと、「了解！」ってみんなが応じてくれた。聖堂を出て、騎士団の人員輸送車が停車してる駐車場へ向かう中・・・

「あ、先輩方！　これから出動ですか！？」

「あ、キュンナ。そうなの」

駐車場の方からやって来た後輩、キュンナが声を掛けてきた。彼女も今や銀薔薇騎士隊の一員で、鎌騎士ゼンゼパラディンだ。とはいえ、先代の騎士マドール・ド・ラ・ポルトが年齢を理由に引退しちゃったからの繰り上げなんだけどね。でもその実力は全鎌騎士最強のA級1位だから、どこからも文句は無い。

「私たちは警邏から戻って来たばかりなんです。いや～、ミッド全体を護らないといけないとなって、とっても忙しいですよね♪」

キュンナはそう言いつつもすごく楽しそうで、嬉しそうで。パラディンになった事もそうだろうけど、騎士が自由に事件を取り締まれる事もその一因なんだろうね。いつだったか、騎士の威光を取り戻すために戦いましょう、って誘われたし。

（まさか、キュンナも今回の独立の一枚かんでる・・・？）

なんて馬鹿な考えを一蹴する。キュンナの実家であるフリードリヒローゼンバッハ家には、言っちゃ悪いけど評議会に対する権力なんて持ち合わせていない。もし万が一にもあの子が関わってる言うなら、他の騎士たちと同様に独立に賛成しているってことくらいだ。

「でもゆくゆくは管理世界をドーンと守りたいですよね！」

「・・・ごめん、キュンナ。そろそろ行かないと」

独立賛成派とわたし達のような反対派は存在してる。キュンナのよ

うに最後には陸だけじゃなくて海の平和を守りたいと言う夢を見る賛成派。わたし達のように今なお独立など受け入れられず、海にまで手を伸ばすのは無理だっていう反対派。

（正直に言えば無謀が過ぎる。騎士団は何もここ本部だけにあるわけじゃないとしても・・・）

各管理世界には、地上本部のように教会支部がある。でも陸士隊舎のような施設は無い。あるのは信者の方々が礼拝するための教会だ。局と騎士団の差がソレ・・・数、だ。質は正直、騎士団に分があると思う。けど数が圧倒的に足りない。それはつまり管理世界の全てをフォロー出来ないということ。今の局ですら人員不足が酷いというのに。

（その最大の問題を、団長は解決できるというの・・・？）

「あ、そうですよね！　ごめんなさい、引き止めてしまいまして！　では先輩方、どうぞお気を付けて！」

キュンナは大きく手を振りながら、「お待たせしました～！」と、ある集団の元へと戻っていった。

「ええ」

1人は２０年も剣騎士の頂点に立つシュベーアトパラディン・プラダマンテ。

「ほっほ。イリス嬢ちゃん達の部隊じゃの」

1人はパラディン歴計49年にして現役最高齢69歳を記録する、弓騎士ボーゲンパラディン・ガラガース。いずれ取り主が超えるべき壁だ。

「元銀薔薇騎士嬢（アルテルミナス）ちゃんも一緒だな」

「わっはっは！　未来の教皇聖下の隊ではないか！　挨拶をしに行くか？」

騎士ガラガースと共に騎士団をずっと支えていただいている騎兵騎士レイターパラディン・ガリフッド、打撃騎士シュラーゲンパラディン・ラヴェイン。騎士ガリフッドも、クラリスが目指すパラディンの壁となる人物だ。

「騎士ラヴェイン。僕たちは団長への報告がありますので」

「今はまだ一礼くらいで良いんですよ」

「それもどうかと思いますが。あ、でも先輩たちは今から出動なので、挨拶は無用のようです」

先代のパーシヴァル君の除隊によって繰り上げ昇格した槍騎士シュペーアパラディン・ブレオベリス、同様に繰り上げ昇格した斧騎士アクストパラディン・グリフレット、拳闘騎士ファオストパラディン・ガリホディン、そして鎌騎士ゼンゼパラディン・キュンナの8

人から成る銀薔薇騎士隊だ。お互いに小さく一礼だけして別れた。

「ふと思ったんだけどね。今の青髪と赤髪、なんかいやな感じ。・・・シャル達が見下されてる感じがする。すごいムカつく」

アイリが団長の居る聖堂へと入ってくプラダマンテ達を横目でチラッと見ながら、青髪と赤髪（ブレオベリスグリフレット）を指してそう悪態を吐いた。それに対してルミナが「天狗になってるんだよアレ」って呆れた風に肩を竦めた。

「先代の事情だから仕方ないとはいえ、先代に勝って交代、っていう本来の条件を経ずにパラディンになったからね。普通ならそんな方法でパラディンになったことに胸を張らないはずのものなんだけど・・・」

「彼らもまた１０年余とＡ級１位でしたからね。パラディンになれて浮かれているのですよ」

ルミナとアンジェがそう吐き捨てた。わたしやトリシュ、クラリス、アンジェもまた１０年以上とＡ級１位の座から上に進めないから、ひょっとしたらパラディンの座が労なく転がり込んできたらはしゃいじゃう・・・ことはないかな。キュンナみたいに、ちゃんと鎌騎士のみの昇格試験を緊急開催して、改めてＡ級１位の実力を示せば良かったのに。

「ともかく、あの２人とはあまり関わらない方がいいですよ、アイリ」

「はーい」

やっぱパラディンには実力でなってこそ堂々と胸を晴れるってものでしょ。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒ルシリオン†††

俺たちの隊のシンボルである石楠花（マーク）が描かれた輸送車でやって来たのは、本日の警邏担当となるエリアＣ。ここからは２人１組でエリアＣの巡回となるわけで、ジャンケンで組み分けを行った。

「くぅ～！　ルシルとペアになりたっかのに～・・・！」

右手をチョキにしたまま項垂れているのはシャルで、彼女のペアになったセレスが「私がペアで悪ぅございました」と不貞腐れている。さらにアイリやトリシュも俺たちに背を向けて「はぁ・・・」と溜息を吐いている。

「あの～、私、変わりましょうか・・・？」

俺とペアになったアンジェがそう提案すると、シャル達３人が「いいの！？」と詰め寄ったんだが、ルミナが「私情持ち込み厳禁！ほら、出るよ！」と手を打ち、自分のペアであるトリシュの左手首を掴んだ。

「それじゃ私とトリシュは、４ｔｈ～６ｔｈアベニューの警邏に入

るよ」

「行って参ります～・・・」

そうしてルミナとトリシュは、ここに来るまでの車内で決めた担当する大通りへ歩き出した。２人に続いて、シャルとセレス、アイリとクラリス、俺とアンジェもそれぞれの担当となる大通りへと向かった。

「休日で繁華街ということもあって、かなり人が多いな」

「は、はい、ですね・・・」

俺の隣を歩くアンジェはどこかそわそわと落ち着きがなく、注意力散漫というかよく通行人や店の看板などにぶつかりそうになっている。俺が怪訝そうな表情を浮かべていることに気付いたのか、彼女は「ごめんなさい。その、緊張していまして・・・」とチラチラと俺を見る。鈍い男ならひたすら？マークを浮かべるんだろうが・・・。

「そういえば、俺と２人きりになるのは初めてだったか。こうして一緒に活動する事になってからまだ２週間とはいえ、これまであまり関わりが無かったから・・・」

「あぁ、いえ、そういう事ではなく、場所といいますか、私の未経験ゆえといいますか・・・」

「？・・・あ、ああ、そういう・・・」

俺とアンジェが担当する大通りは７ｔｈから９ｔｈの３つで、７ｔｈアベニューは通称カップルストリートと呼ばれるほど、目に見えて恋人の数が多い。そんなところに俺とアンジェが２人で歩いている。周囲には腕を組んだり手を繋いでいるカップルがいるわけで。

「なるほど。照れているのか・・・」

「ぅひ！？　あ、あああ！　これは仕方がない事なのです！　ただでさえ男性と２人きりで、しかも恋人が多いところに・・・！　もう！　今はわたしの顔を見ないでください！」

耳まで真っ赤にして俯き、両手で顔を覆い隠すアンジェ。可愛いな、と微笑ましく彼女を眺めた後に視界を前方に移したところで、「あ、前！」と警告したがすでに手遅れ。彼女はそのまま標識のポールへと突っ込み、「きゃん！？」と頭をぶつけた。

「痛い・・・です」

「おいおい、大丈夫か？　いや、まずは謝らないといけないよな。すまん、からかってしまって」

赤くなっている額を擦っているアンジェと向き合ってから謝ると、「い、いえ！　これは私個人の問題なので！　ごめんなさい！」と逆に謝られた。そんな彼女と再び８ｔｈアベニューの警邏に戻る。

「いやしかし、男と２人で出掛けたことが無いというのも珍しいんじゃないか？　君も以前は隊を率いていただろう？」

「・・・常に側に居てくれる副官は同性でしたので。学生の頃も、トリシュやクラリスといった同性の友人ばかりと一緒で・・・。恥ずかしい話なのですが、初恋すらもしたことがありません。ですからイリスやトリシュのことが本当は羨ましかったりします」

１０本の指先の腹をくっ付けた両手を口元に持ってきたアンジェが照れ笑いを浮かべる。アンジェのお嬢様然とした容姿であれば引く手数多だろうに。まぁそんな照れてばかりな彼女と７ｔｈアベニュー、それに休憩を挟んで８ｔｈの警邏を終え、最後に「９ｔｈアベニューの警邏だな」と、７ｔｈと違って子供連れの家族が多い大通りの入り口へとやって来た。

「はい。では参りましょう」

（アンジェも俺との２人きりに慣れてくれたおかげで、スムーズに見舞われて助かったよ）

大賑わいの大通りに入り、平和そのものの空間を歩いている中、それは突然起きた。

――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ　２．０――

とある２０階建てほどの複合ビルの上層階から爆発が起き、地上に居た人たちが一斉に「きゃあああ！」と悲鳴が上げ、蜘蛛の子を

散らすように建物の周囲から逃げ出す。あれだけ平和な光景が一瞬に阿鼻叫喚の巷と化した。

「アンジェ！」

――暴力防ぎし（コード）、汝の鉄壁（ピュルキエル）――

「はい！　こちら９ｔｈアベニュー担当のアンジェリエ！　商業施設にて爆発事件が発生！　至急応援をよろしくお願いします！」

アンジェにシャル達への連絡を行ってもらい、俺は崩落してくる瓦礫や窓ガラスの破片の対処に入る。街路に降って来る大小さまざまな危険物を対物シールドであるピュルキエルで防ぎつつ、「皆さん！　落ち着いて避難をしてください！」と、拡声魔法を使って誘導を行う。

「おい、あれ！　軍神ルシリオンじゃね！？」

「ねえ、あの人、セインテスト調査官じゃない！？」

俺も有名人になってしまっているから、ところどころから俺の名前が挙がってくる。だがそのおかげで、散り散りに逃げ惑っていた人たちが協調して避難し始めてくれた。こういう時には局の有名人という肩書きは助かるな。

「ルシルさん、先に参ります！」

「ああ！　俺もすぐ行く！」

シールドの下から人が居なくなったことを確認してから解除、留めていた瓦礫などが音を立てながら街路へと落ちた。それらを回り込んで、俺もビルの入り口から建物内へ突入。このビルは各階で機能が違う複合型で、1階は食事処が密集しているようだが、すでに避難を終えているのか店員や客の姿は無い。入り口付近の壁に設けられている案内図を確認すれば、爆発があったのは「事務所・・・？」のようだった。

『アンジェ、君は今どこに居る？』

『今は2階で警備員の方と一緒に避難誘導を行っています。こちらは手が足りていますので、ルシルさんは爆発した階層へ直接向かってください』

確かにこんな下層階に居ても俺に出来る事は少ない。なら爆発した階を確認し、負傷者がいれば治癒しなければ。俺は『了解した。任せる』と伝え、外へと出る。

――我を運べ、汝の蒼翼（アンビエル）――

――パンツァーガイスト――

背より剣状の魔力翼12枚を展開し、さらなる爆発を警戒して魔力で全身をコーティングした上で地を蹴って飛び上がる。目指すは爆発した階なのだが・・・

――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ　２．０――

「ぐぅ・・・！？」

突然の攻撃に反応し切れなかった俺は直撃を受け、その衝撃でビルの外壁に叩きつけられてしまった。爆発が事件か事故かは判っていなかったとはいえ直撃を受けるなど間抜けすぎる。パンツァーガイストのおかげで軽傷で済んだが・・・。

「（今のはレールガンだった。ティーダ・ランスターか・・・？）今回の爆発は仮面持ちが絡んでいる・・・？」

――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ　２．０――

――パンツァーシルト――

そんなに俺を爆発現場に行かせたくないのか、俺が上昇するのを拒むような射線で物質弾を撃ち込み続けて来る。避けるのは容易いが、俺の背後には未だに避難を終えていない人が多く居るビル。避けるわけにはいかず、シールドを展開して自身とビルを護る。

『ルシル様！　私が迎撃します！』

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

どこからともなく飛来してくるレールガンを、トリシュの高速狙撃

が正確に迎撃していく。さすがに転移スキルと合わせたコンボは打つ手無しだが、ティーダはそれをせずに律儀に普通に撃ってくる。

『助かる！』

そのおかげでトリシュは迎撃が出来、俺もすんなり現場へと上がることが出来たんだが、爆発にしては焼けているところは無い。それで、爆発ではなくやはり狙撃されたのだと察することが出来た。そのフロアに降り立ち、「これも仮面持ちの仕業か？」と、床に倒れている血まみれの死体を見る。生きている人は居ないかを確認したが、全員が殺害されたのを再確認するだけだった。

「こちらルシリオン。現場にて８体の死体を確認した。全員が心臓を一突きされている。おそらく凶器は槍だろう」

『了解。陸士隊も通報を受けてこっちに向かってるそうだから、協同捜査できるように話してみるよ』

「了解だ。シャル、誰か１人こちらに寄越してくれ。俺も陸士隊と話そう」

『うん、判った。じゃあ・・・』

『私が行こう。そっちの方が気楽そう』

シャルがうちの隊長だが、だからと言って彼女ひとりに陸士隊の連中の罵詈雑言を全部を背負わせるわけにはいかない。ルミナが来て

くれることになったし、俺は現場を荒らさないように注意しながら、破壊しつくされた外窓へと向かおうとしたその時、ガタッと物音がした。俺は「エヴェストルム」をイェソドフォルムで起動。物音がした場所、ロッカールームへと入る。

（あそこからか・・・）

あるロッカーがガタガタと小さく震えている。足音を殺し、気配を消し、そのロッカーの前へと移動し、そして勢いよく扉を開けた。

「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ロッカーの中には、顔面を涙や鼻水でグシャグシャに濡らして怯えているチンピラ風の男が1人居り、両手で握っている拳銃の銃口を俺に向け、引き金を引いた。

Ｅｐｉｃａｌ３－Ｂ橙石楠花騎士隊～Ｍｉｓｓｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

シャルが新しく率いることになった新設部隊、橙石楠花騎士隊オランジェ・ロドデンドロンの一員としてマイスターとアイリは、頼れる仲間たちと一緒に日夜活動中。んで、本日の任務は、南部はマクファーデン地方・エリアＣの警邏。

「アイリ、ルシルと合流・・・！」

「ヤー！　ありがと、クラリス！」

アイリのペアだったクラリスから、先に爆発現場に居るマイスターの元へ先に行くように言われた。アイリはお礼を言って、両腰から一対の白翼を展開。トントン、トンッて三段跳びのように舗装された歩道を蹴って、「行っくよぉ～！」一気に空へと飛び上がる。

「っ・・・！」

その瞬間、空を流れる一筋の閃光。恐ろしく速い弾丸、レールガンだね。アイリは「クラリス！　南南西、距離は判んないけど、その先に砲手が居る！」って報告しておく。

『判った。イリスに許可を貰って、捕縛に向かうよ』

クラリスとの通信の最中にもレールガンは、次々と現場に向かって撃ち込まれてく。

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

そんなレールガンの弾丸を、それ以上の速度を誇るトリシュの魔力矢が撃ち抜き始める。トリシュの弓騎士としての腕にはホント驚かされちゃうよね。トリシュの魔力矢と弾丸が空で激突して爆発の花を咲かせる中、『こちらルシリオン。現場にて8体の死体を確認した』ってマイスターから全体通信が入った。

（爆発事故じゃなくて、爆発事件ってことだよね）

死体は全員が心臓を貫かれてるって話だし。レールガンってことは、仮面持ちの仲間になっちゃってるティアナのお兄さん、ティーダ・ランスター一尉が砲手だろうし、被害者を殺したのもたぶん、他の仮面持ちの可能性があるよね。

「マイスター・・・！」

ティーダ一尉が未だに離脱しないってことは、現場にはまだ殺人を行った犯人が居るかもしれない。マイスターは1対1での闘いなら負けはしないと思うけど、仮面持ちの実力は確かなものだし、不安がアイリを襲ってくる。そうしてアイリも現場に到着して、大穴が開いてる外窓から室内へと降り立ったところで・・・

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

知らない男の人の声で悲鳴が聞こえて、続けてダァン！って銃声が聞こえた。音の出所はフロアの奥のようで、「マイスター！」って叫びながら奥へと駆ける。そこはロッカールームで、そこには右肩から血を流したマイスターと、質量兵器の1種である拳銃を握ってる若い男が居た。

「〜〜〜〜っ！！　貴様、何をやってる！」

――氷拳――

一瞬で頭に血が上った。右拳を頑強な氷でコーティングして、「ひぃ！？」って怯えてる馬鹿野郎に向かって突撃する。でも「待て、アイリ！」ってマイスターが制止してきた。そうやってマイスターが守ってくれたのに、馬鹿野郎は「俺は、そう簡単には殺されねぇ！」って半狂乱に叫びながら、また銃口をマイスターに向けた。

「しかし二度目はないぞ？」

でも引き金は引かれることはなくて、マイスターがそう言いながら"エヴェストルム"で拳銃を弾き飛ばして、リングバインドで拘束した。馬鹿野郎は「ちくしょう！　殺されてたまるか！」ってもがくけど、魔力の無い一般人じゃマイスターのバインドを破る手段は無い。

「落ち着け！　俺は教会騎士団のルシリオンという者だ！　何があったのか教えてくれ！」

「ひっ！　え？・・・ル、ルシリオン・・・！？　ルシリオン・セインテスト！？　軍神と言われてるあの！？　　た、助けてくれ！　何でも喋るから、何でも教えるから、俺をアイツから助けてくれ！」

片膝立ちしてるマイスターがそう聞くと、馬鹿野郎はそう懇願した。むぅ、図々しいにも程がある。マイスターはコイツに撃たれてるのにそれでも「判った。必ず護る」って承諾した。アイリは納得できないまま、「マイスター。まずは自分の負傷を治して！」って懇願した。

「ん？　ああ。とりあえず、ここから離れよ――」

マイスターがそこまで言いかけた時、トンっと足音がすぐ後ろから聞こえた。こんな気配を消して近付いてくるなんて、シャル達じゃ絶対にありえない。なら、考えられるのはただ1つ。

――パンツァーシルト――

マイスターとアイリは同時にシールドを背後に展開した。振り返り中、視界の端に映りこんだのは例の学生服と学生帽とマントと目出し帽、そして天狗の仮面っていう格好の仮面持ち。得物は2ｍ近い槍1本。すでに刺突攻撃に入ってる後で、完全に振り向く前に穂先がまずアイリのシールドに激突。

「っ！！」

アイリのシールドは一切の抗いを見せないで貫通させられて、貫通した箇所から全体に向かってヒビが入って割れた。次にマイスターのシールドに激突。この頃にはマイスターは振り向き終えていて、穂先の向かう先である馬鹿野郎の腕を掴んでた。遅れて穂先とシールドが激突。

「っく・・・！」

（マイスター！？　あ、右肩を撃たれてるから・・・！）

マイスターのシールドにもヒビが入るのが判った。この僅か1秒ちょいの間、アイリは思考を巡らせて、「うりゃっ！」って馬鹿野郎を蹴っ飛ばした。直後にシールドが破壊されて、穂先がアイリの脛を掠った。

「いっつ！　この・・・！」

――氷結の軛――

「逮捕する！」

――闇（コード）よ誘え、汝（カムエル）の宵手――

アイリは仮面持ちへと氷結効果のある拘束杭を、マイスターは影の触手をあらゆる影から発生させて、蹴っ飛ばされて床を転がってる馬鹿野郎へ向かって駆ける仮面持ちへ打ち込もうとしたんだけど・・・

――風刃烈火――

振るわれた槍全体に鋭い風の渦が巻きついて、アイリの拘束杭どころか、マイスターの影の触手すらも粉砕した。今の仮面持ちの魔法、どっかで見たことがある。ともかくアイリは、立ち上がり終えたマイスターと一緒に馬鹿野郎への追撃を再開しようとしてる仮面持ちの制圧に動く。

――知らしめよ（コード）、汝の力（ゼルエル）――

――護り給（コード）え、汝の万盾（ケムエル）――

マイスターが今度は自分オリジナルのシールドを展開した。小さな円い盾を何十何百と重ねて大きな盾とする多重障壁で、パンツァーシルトとは比べられないほどの防御力を誇る。マイスターが防御なら・・・

「アイリが攻撃担当だよね！」

――アイス・ランツェ――

氷の礫を宙に２０発と展開して、マイスターのシールドを破壊しようと槍を振るってる仮面持ちへと一斉に「発射！」させた。仮面持ちは一度シールドから後退することで、アイリの攻撃をすべて避けきった。

――力神（コード・マグニ）の化身――

「勘だが、お前は特別な仮面持ちだろう？」

でもその僅かな時間で、マイスターは一気に攻勢に出た。一足飛びで仮面持ちの目の前へと移動して、"エヴェストルム"を横に払った。

「ぐっ・・・！」

仮面持ちは縦に構えた槍の柄でマイスターの斬撃を受けたんだけど、その単純な攻撃に踏ん張り切れずに吹っ飛ばされた。んで叩き付けられたロッカールームの壁をぶっ壊して、さらに室外へと吹っ飛んだ。

「アイリはその男と一緒に地上へ行き、シャル達と合流だ。俺は仮面持ちを逮捕する」

「ヤー！　気を付けてね。・・・大人しく運ばれてよね」

「あ、ああ・・・！」

馬鹿野郎を肩に担いだアイリは、大穴が開いた壁から飛び出してくマイスターを見送った後、マイスターやアイリが入ってきた事務所の外窓から飛び出した。飛行魔法でゆっくりと地上へと降下して、今なお避難誘導されてエントランスから出てくるお客さんに気遣いの声を掛けてる「シャル！」の元へ向かう。

「アイリ！　ルシルは！？」

「ルシルは今、風を操る槍の仮面持ちと交戦中だよ。で、コイツは事務所で殺害されてた被害者たちの生き残り」

シャルにそう答えながら肩に担いでた馬鹿野郎を地面に降ろしたところで、ドォーン！って大きな爆発音が、あの現場のある階層付近から連続で４回と鳴った。避難をしてる最中の人たちが「きゃあ！」って悲鳴を上げて、警備員が「落ち着いてください！」って宥める。

「ルシルなら大丈夫だろうけど念のためにアイリ、もう一度ルシルの元へ向かって。その男性はこちらで保護するから」

「ヤー！・・・他のみんなは？」

「砲手にはクラリスが向かって、トリシュはレールガンの迎撃を行ってるのは知ってるよね。さらに別の仮面持ちが、近くの高層マンションを襲撃したの。そっちにはセレスとルミナに行ってもらってる」

「そっか・・・」

しばらくぶりに活動を再開した仮面持ちが付近に３人も現れた。マイスターとアイリが助けた馬鹿野郎を殺そうとし、その仲間を殺した理由って一体どんな・・・。ううん、そんな事は後で知ればいい。

「今行くからね！」

地を蹴って一気にマイスター達の居る階層へと向かう。また壊れた外窓から事務所に入って、「マイスター！？」を呼びながら駆け回ってると、またドォーン！って轟音が「下！？」から聞こえてきた。

「あそこ・・・！」

休憩所らしき部屋の床に大きな穴が開いてるのを見つけた。アイリもその穴から飛び降りて階下へ降り立うとしたけど、穴はさらに下の階、さらにさらに下の階へと続いてた。ひょっとしてさっきの４連轟音は、この穴を開けた時に出たものかも・・・。降り立った階層は、四面ある壁のうち一面が鏡張りになってる。

（ダンス教室ってところかな・・・）

床も壁もボロボロになっていて、出入り口のあるドアの壁にはこれまた大きな穴が開いていた。その奥から激しい剣戟音が聞こえてくる。マイスターと仮面持ちはこの階でまだ闘ってる。大穴を潜って廊下に出て、破裂した水道管から漏れる水でビシャビシャな廊下を走って、音の出所へと向かう。

「「おおおおおおおおおッ！！」」

２人の雄叫びが聞こえた直後、耳鳴りがするほどの剣戟音が鳴り響いた。そしたら目の前の壁が崩れて人影が吹っ飛んできた。それは「マイスター！？」だった。アイリはグッと踏ん張って、吹っ飛ば

されてきたマイスターを抱き止める。

「マイスター！？」

――カタパルトヴィンデ――

「おー、アイリ。ありがとう、助かった・・・よ！」

目にも留まらない速さで飛来した何かからアイリを護ってくれるように、マイスターはアイリをグイッとその胸に抱き寄せてた。ほぼ同時に何か――鉄パイプがアイリ達の後ろの壁を穿った。

――ラケーテン・シュペーアⅡ――

「女神（コード・リン）の護盾！」

マイスターの防御術式の中でも2番目の硬度を誇るシールドが展開されて、ホント気付けないレベルの速度で突っ込んで来た仮面持ちの持つ槍が、ガキィーン！と甲高い音を立てて激突した。

「アイリ、頼む！」

「ヤー！」

「「ユニゾン・イン！」」

マイスターとユニゾンを果たす。つまりあの仮面持ちは、ユニゾン

しないとまずいほどの実力者になる。そんな不安の中でも、頼られてるってことだから嬉しいって思っちゃうんだよね。

『氷結圏！』

アイリは氷結効果を強化する魔法を発動。マイスターのシールドに弾かれて後方に飛び退いた仮面持ちは、僅かに一切の行動を止めた。

「絡み付く泉湖（リムヴォースト）の水精・・・！」

その隙にマイスターは廊下に溜まってる水を操って、仮面持ちの全身を飲み込むように水で拘束した。首から下が球体状の水に包まれた仮面持ちは、槍を振るおうとしてるけど、水圧に負けて振るえてない。

「これで・・・」

『終わりだよ！』

――舞い振るは、汝の麗雪（シャルギエル）――

マイスターとアイリで氷の槍を３０本と展開して、「『ジャッジメント！』」って一斉に射出。仮面持ちを飲み込んでる水の檻や廊下へと撃ち込んで、一気に凍結させた。さすがにこの連携には仮面持ちも耐え切れなかったみたいで、完全に氷漬けになっちゃった。

「ありがとう、アイリ。助かったよ」

『気にしないで、マイスター。でもこれって、かなりの功績だよね？
仮面持ちを生け捕りなんて』

「ああ、お手柄だぞ。さて。素顔を見てみたいが、完全に確保してからだな」

仮面持ちの中には転移スキル保有者がいるし、ソイツが手を出せないようにするための檻が必要なんだよね。マイスターやシャル達は、シスター・プラダマンテの空間干渉スキルを利用しようって話も出してるみたいだね。マイスターがシールドを解除して、氷漬けな仮面持ちへ近付こうとした時・・・

「魔法陣・・・！」

『まだ動けるのコイツ！？』

――シュトルム・シャルフリヒター――

黄緑色のベルカ魔法陣が仮面持ちの足元に展開されて、魔法陣から竜巻が発生した。それで氷塊が粉々に砕けて、竜巻の風圧や氷の破片がマイスターを襲った。

――パンツァーシルト――

「ぅく・・・！」

展開したシールドにガツンガツンと当たり続ける砕かれた壁や床の破片の中、自由になった『仮面持ちが・・・！』逃げるのが見えた。マイスターも気付いてシールドを解除、"エヴェストルム"を二剣一対のゲブラーフォルムして、飛び散る破片を斬り捨てながら駆け抜ける。

「ここまでされて逃がすものか！」

仮面持ちが角を曲がって、その姿がマイスターの視界から一瞬消える。直後にドォーン！って轟音が鳴り響いた。続けてマイスターも角を曲がったら、廊下の床に大穴が開いてるのが見えた。これ以上、視界から仮面持ちを離すと逃げ切れられる。マイスターもそう思っちゃったんだと思う。アイリだって焦ってて、注意を怠っちゃった・・・。

――ラケーテン・シュペーアⅡ――

マイスターが穴から階下に降り立ったその直後、上から仮面持ちが刺突攻撃を繰り出してきた。完全な奇襲でもマイスターはギリで反応できたんだけど・・・。でも着地した場所の状態が悪かった。瓦礫に足を取られたマイスターは回避に移れなくて、体の前で交差させた"エヴェストルム"２本で防御した。

「ぐぅぅ・・・！」

『マイスター！？』

仮面持ちの突進力に踏ん張りきれなかったマイスターは後ろ向きに床に叩き付けられて、大きなクレーターを作った。しかもそれだけじゃ終わらなくて、床にヒビが入ったかと思えばどんどん床にめり込んで、最後には崩落した。それほどの突進力を持ってるんだ、仮面持ちは・・・。

「がはっ・・・！」

階下の床に叩き付けられたマイスターが吐血する。それでも仮面持ちの突進は収まる気配を見せなくて、床にクレーターが出来始める。

（アイリが助けないと！）

――竜氷旋――

マイスターの体を通して冷気を竜巻状に発生させて、仮面持ちを後退させてやった。その間にマイスターも立ち上がったけど・・・

――ラケーテン・シュペーアⅡ――

仮面持ちの追撃がすぐ側にまで迫ってた。"エヴェストルム"を手放したマイスターは突き出された槍を躱して、背負い投げの要領で仮面持ちの右腕を掴んで「おらぁっ！」ってぶん投げた。ジムらしいこのフロアのトレーニング器具をなぎ倒しながら、仮面持ちは「ぐふっ！？」って壁に叩き付けられた。

「もう施設への被害など気にしていられるか。やってやるよ、仮面

持ち・・・！」

マイスターは床に突き立った"エヴェストルム"２本を手に取って、めり込んだ壁から床に降り立った仮面持ちへと一足飛びで接近。

――集い纏え、汝の雷撃槍（フルグルゼルエル）――

蒼い雷撃を纏う右の"エヴェストルム"を仮面持ちに振るった。仮面持ちは横っ飛びすることで避けたけど、穂から放電されてる雷撃が掠って「ぐぁ・・・！」って感電した。そこに左の"エヴェストルム"の追撃。仮面持ちはビクビクって痙攣しながらも槍を振るって、マイスターの一撃を弾き返した。あの状態で対応できるなんて、アイツすごい。

（でもマイスターも加減はしないよ）

施設を壊さないように手加減してたマイスターだ。本気になったらもうアイツに勝ち目はないよね。そっからのマイスターは、トレーニング器具や天井や壁、床の損傷なんてお構いなしに魔法を放って、仮面持ちを確実に追い詰めていった。

『転移スキルで逃げる気配がないな・・・』

『うん。アイリもそれは気になってた。この階に落ちた時、マイスターに奇襲しないでそのまま逃げれば良かったのにね』

――天（コード）よ怒れ、汝（ジェレミエル）の酷雷――

マイスターへと突進し始めた仮面持ちの直前に現れた雷の龍。さっきからカートリッジをロードして魔力量を増やしてるから、相対的に威力もうなぎ上り。そんな魔力の塊へと仮面持ちは突っ込んで、雷龍にパクンって飲み込まれた。そして強烈な雷撃を周囲に放電しながら雷龍は消滅して、ボロボロになった仮面持ちが姿を現した。

「クソ(シャイセ)が！」

――シュトルム・シャルフリヒター――

仮面持ちの足元から竜巻が発生して、まるで蛇のようにうねりながら突っ込んで来た。この魔法を見て、アイリはすごい懐かしさを覚えた。アイリやアギトお姉ちゃんを作ったイリュリアに、同じような魔法を使う騎士がいたな～って。竜巻の蛇と化した仮面持ちがジムの中をグルグル回った後、どうしてかビルの外壁じゃなくて奥へと向かっていった。

「逃がすか！」

マイスターも仮面持ちとの追いかけっこを再開。仮面持ちはその圧倒的な破壊力でこの階層の壁という壁を粉砕していってるから、「おい、それ以上はやめろ！」ってマイスターも焦りだす。そんな時、仮面持ちがある部屋の壁を破壊した。

『ちょっ、え、なんで・・・！？』

その部屋の中には、気を失ってる水着姿の女の子が数人と横たわってた。部屋の造りからしてサウナルームだと思うんだけど・・・。なんで逃げなかったのか、って疑問が頭の中をグルグル駆け巡った。マイスターも、想定外なその光景に動きを止めざるを得なかったみたいで・・・。

――トランスファーゲート――

その間にも仮面持ちは派手な破壊音を立て続けに起こしてる。だからアイリは、マイスターだけでも先に行かせたくて、勝手だけど『ユニゾン・アウト！』をした。

――ラケーテン・シュペーアⅡ――

とそこに、超高速の突進で戻ってきた仮面持ち。携えてる槍の穂先が向いてるのはアイリでもマイスターでもなく、アイリが今抱き起こしてる女の子。マイスターがアイリ達を護るように間に入ってくれて、"エヴェストルム"で槍を上に向かって弾いた。穂先が天井に突き刺さって、仮面持ちの攻撃手段は無くなった。

――シルト・インエフェクティーフ――

「ぐぅぅ・・・・！」

「マイスター！？」

でもそうじゃなかった。仮面持ちは槍の下半分を分離させて、石突

部分でマイスターの左肩を貫いた。仮面持ちは槍を引き抜こうとしたけど、マイスターは"エヴェストルム"を手放した左手で柄を鷲掴んだ。

「逃がすものかよ」

――禍神の隷氷（コード・ベルヴェルク）――

本来は氷の甲冑を身に纏う氷雪系強化の術式だけど、マイスターは空いてる右腕だけに籠手を生成。仮面持ちをガシッと鷲掴んで、そのまま急速冷凍した。凍結効果は槍にも及んで、粉々に砕けちゃったから「おっと。やり過ぎてしまった」って反省しちゃった。

「そんな反省は後だよ、マイスター！　左肩の治療をしないと！」

「ん？　ああ、そうだな」

そんな軽い口調で言ったマイスターは床に転がってる"エヴェストルム"を拾い上げて、カートリッジを3発と連続ロードして「コード・エイル」って治癒術式を発動、一気に肩に開いた穴を塞いだ。マイスターの持つ治癒は強力だけど、ダメージを受ける事には変わりないんだから心臓に悪いんだよね・・・。

「アイリ。彼女たちの容態は？」

「あ、うん。・・・息はしてる。でも脱水症状に陥ってるみたいだね。たぶんだけど、何かしらの原因で、サウナの出入り口が開かな

くなっちゃったんだと思う」

「俺と仮面持ちの所為だな。シャルや陸士隊の連中が救急隊を呼んでいるだろう。彼らに治療を任せよう。と思うが、まずは応急処置だな。アイリ、確か自販機が近くにあったはずだ。スポーツドリンクを調達してきてくれ」

「ヤー！」

自販機を目指して駆け出す中、背中から「こちらルシリオン。シャル、仮面持ちの1人を確保した。誰か寄越してくれ。それと、脱水症状を――」って、シャルに報告する声が聞こえてきた。それから、アイリは、壊れた自販機からスポーツドリンクを購入（お金だけを投入して、近くに転がってる無傷なドリンクを取った）して、マイスター達の元へと戻る。

「ああ、ありがとう、アイリ。彼女たちに渡してあげてくれ」

マイスターの視線の先には意識を取り戻してる女の子たちが座ってた。その子たちに「どうぞ。慌てずに飲んでね」ってドリンクを差し出すと、「ありがとうございます」って、ちょっとかすれた声でお礼を言ってくれた。

「（あれ？　この子、どっかで見た気が・・・）ねえ、マイス――ルシル、この子たちって・・・」

「ん？　インターミドル出場者の、　砲撃番長ことハリー・トライ

ベッカ選手だろ。違っただろうか・・・？」

「い、いえ！　ど、どもっす！」

フォルセティ達が今年のインターミドルの試合映像を何度も繰り返し観て、来年のインターミドルで当たってもいいように研究してたっけ。仲間の子たちが、「リーダーすげぇ！」って大興奮しだした。

「あの有名な軍神ルシリオンに知られてるほどって、かなりすごいことじゃないっスか！」

「良かったっスね、リーダー！　憧れの局員さんの1人に知ってもらえていて！」

「お！？　お、おう・・・！」

「リーダー、あとでサインもらったらどうっスか？」

「え、あ、いや、オレは・・・！　迷惑になっちまうだろうし・・・」

「でも、なかなかこんな機会ないっスよ？」

コソコソと集まってそう話し合ってるハリー選手たちの様子に、マイスターは「とりえず重症にならずに済んで良かった」って安堵した。

「ねえねえ。サインなんだけどね、こっちも書くから、ハリー選手のサインもくれない？」

知り合いの子たちが来年のインターミドルに参加する予定で、ハリー選手のファンでもあることを伝えると、「喜んで、サイン書かせてもらいます！」って承諾してくれた。

「現着っと。迎えに来たよ、ルシル、アイリ」

ここで応援のシャルが来てくれて、マイスターとシャルの２人で完全凍結された仮面持ちを地上へと運び終えて、救急隊の人たちも遅れて到着して、ハリー選手たちを病院へと搬送した。

Ｅｐｉｃａｌ４最後の大隊～Ｌｅｔｚｔｅ　Ｂａｔａｉｌｌｏｎ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

今日もまた、なんの変哲も無い警邏任務だって思ってた。でも蓋を開けてみれば、仮面持ち３人との交戦っていう危険極まりないものだった。でも、みんなが頑張ってくれたおかげで、その戦果は局時代じゃ成し得られなかったものになった。

「――了解。これより被疑者２名を、教会本部へ連行します」

教会騎士団のトラバント団長への報告を終えてモニターを解除しつつ、ルシルとアイリによって凍結封印されてる仮面持ちと、ルミナとセレスによってこれまた凍結封印されてる仮面持ちを見る。ティーダ・ランスターと思しき砲手は、残念ながら逃してしまった。クラリスとトリシュの話によると、新手の敵（視認できなかったみたいだけど、まず別の仮面持ち）からの狙撃で、確保を妨害されたみたい。

（ティーダ一尉以外の狙撃使いって、ルシルの追ってるフィヨルツェンくらいよね・・・）

ティアナには悪いけど、ティーダ一尉を奪還（でいいのかな？）はまた今度だ。とにかく、仮面持ちを２人も確保できたのは上々の戦果だ。４人の交戦時の感想から、プライソン戦役にて“聖王のゆり

かご"を奇襲した2人の仮面持ちと判断した。

「ふぅ・・・お疲れ様、みんな」

「まぁこんなものでしょ、楽勝楽勝。屋内戦で馬鹿でかい斧なんて振り回そうとするから、私の拳を受けるのよ」

雷の仮面持ちをボッコボコにしたルミナ。翁の仮面も粉砕され、目出し帽も脱がされていてその素顔を露にしてる。想像していたよりフツ～な青年で、モブキャラっぽい。村人Aとか通行人Bとか、印象に残らないって感じ。

「ルミナはこう言ってるけど、実際かなり強かったけど？　ルミナだって、コイツの放電に苦労してたし」

「・・・楽勝は言い過ぎたかもしれないけど、それでも快勝とは言えるものだったはず」

セレスに氷漬けにされた彼を運んできたルミナの防護服は所々が焼け破れてたし、ルミナ自身もかなり疲れを見せてた。ルミナをあれほどまでに追い詰められる奴なんて、そうはいない。やっぱこの男、名のある魔導犯罪者なんじゃ・・・。

「ルシルもルシルで、ズタボロだし・・・」

「屋内戦で、しかも設備に被害を出さないように気を遣ってたら、思いのほかダメージを受けてしまった」

「最後はちょっとキレて、ルシルもガンガン壊しながら仮面持ちを追い詰めたよね」

「右に左にと肩に穴を開けられたら、さすがの俺もムッとはする」

そんなルシルとアイリが捕まえた仮面持ちの素顔拝見は本部に戻ってからだ。今わたし達は、仮面持ち2人を護送するための車両待ち中。アンジェが取りに行ってくれてる輸送車もそろそろ来るはず。

「サポートスタッフが欲しい・・・」

トリシュが建物の壁にもたれかかりながら愚痴ると、わたし含めて全員が「同感」って頷いた。全員が戦闘組っていうわたしの隊オランジェ・ロドデンドロン。事務仕事は、教会騎士団に勤めてれば慣れるから問題ないけど、こういう車の運転など裏方が仕事が結構メンドい。

（特騎隊でわいわいやってた頃がもはや懐かしいレベルだよ・・・）

そんな特騎隊も現在は無期限活動停止ということで、ティファを始めとしたメンバーは、レティ人事課長の力添えで今は新しい配属先で頑張ってる。特騎隊のみんなには本当に申し訳なく思ってる。出来るだけ早く騎士団独立の真相を暴いて、母様と団長に独立の解除をしてもらわないと。でないとわたしもルシルも局に戻れないよ。

「お待たせしました！」

「ありがとう、アンジェ」

アンジェが輸送車に乗って戻ってきてくれたけど、護送車がまだ到着しない。だから複合ビル前、通行止めになってガラガラな９ｔｈアベニューで待機してるんだけど、「やはり視線が痛いですね」ってアンジェがげんなりした。このエリアＣを担当する０３０陸士隊、その捜査班からはまぁ冷たい視線が。

――管理局法から脱退したのだったら、遠慮なく結界を張ればよかっただろうに・・・――

――まったく。壊すだけ壊しおって・・・――

――仮面持ちを２人も逮捕できた事は褒められるがな～――

ついさっき、老齢の捜査官たちがわたし達に掛けた言葉だ。でも言われて、あぁそうだった、って思っちゃったのも事実。次から都市部での戦闘時は、遠慮なく結界を展開させてもらおう。

――暴れるだけ暴れて、後の片付けは我われ局に任せてご帰宅か――

――さすがは戦闘特化のベルカ騎士。お片付けは出来ないと見える――

――次にこの区に来る際には、菓子折りの１つでも持ってきてもら

いたいものだ――

んで、０３０陸士隊の面々から悪態を吐かれながら待つこと１時間。本部からやって来てくれた護送車に、氷漬けにされた仮面持ち２人を積み込む。そんな中、「奪い返しに来ませんね」って、周囲警戒中のアンジェが漏らした。

「ええ。今回確保できた仮面持ちは明らかに特別。奪還に来ると踏んでいたけど・・・」

アンジェに同意したトリシュ。わたしもそう考えて、待機中に喋りつつも仮面持ち２人から一切目を離さなかったし、"キルシュブリューテ"の柄からも手を離さなかった。でも待てど暮らせど奪還の気配がない。

「来ないのなら来ないで、その方が楽が出来るから良い」

「来たら来たで、奪還しに来た連中を返り討ちにしてまとめて逮捕すれば良い」

ルシルと一緒に積み込みをしてたクラリスとルミナがそう言いながら戻ってきて、遅れて戻ってきたルシルが「積み込み完了だ、シャル」って報告してくれた。というわけで、ここで出来る事はすべて完了。

「ルミナ、セレス、アイリ。３人は護送車に搭乗して、仮面持ち２人を監視。ルシル、悪いけど護送車の屋根の上で周囲警戒」

「はい？　管理局法からは脱退しているが、交通法は無視して良い訳じゃないぞ？」

「判ってるけど、ここで奪還されたらそれこそ最悪なレベル。奪還阻止は徹底しないといけない。反論は？」

「・・・無い。了解だ」

わたしとトリシュとアンジェとクラリスは輸送車へと搭乗。ルシル達はわたしの指示通りに護送車へと搭乗した。んで教会本部へと直帰する。本部までの間、細心の注意を払っていたけど、「結局、襲撃はなしだった」ってことで安堵する。

「ご苦労、オランジェ・ロドデンドロン」

「ここから先は、私が移送するから」

本部に到着すると、団長とプラダマンテが出迎えてくれた。わざわざ団長までもが出て来てたのがちょっと驚き。２人を護送車の元へと案内して、固く閉じられた護送室のドアを開ける。

「空間固定・・・完了」

――ラウムゲフェングニス――

プラダマンテが氷漬けにされてる仮面持ち２人に向かって右手を翳

す。すると氷塊が折りたたまれるように小さくなって、完全に視界から消失した。誰も手を出せない空間の檻へと隔離する、スキルを用いた捕縛術式だ。ああなったら、いくら転移スキルでも奪還は出来ない。

「終わった・・・」

これで一息吐けるね。団長も「報告書は今日中に提出してくれれば良い。ご苦労だった」って、労ってくれた。去って行く2人を見送り終えた後は、「各騎、別命あるまで待機～」とみんなに指示を出す。

「シャワー、シャワーっと♪」

「私もお供します、ルミナ」

「待って、私も行く！」

ルミナとアンジェとトリシュは、詰め所内にあるシャワールームを目指して駆け出して・・・

「お腹空いた。食堂、食堂」

「私も～」

クラリスとセレスは大聖堂内にある食堂へ駆け出した。まったく、外出時に私服へと着替えてるんだから、大聖堂に騎士団の一員とし

て入るんだったら、まずは団服に着替え直すのが筋ってものでしょうが。注意する前にクラリスとセレスの後姿はもう見えず。

「はぁ。・・・とりあえず、団服に着替えるためにルミナ達と同じ、シャワーで汗を流すのが先かな」

見えなくなったルミナ達の背中を追うように詰め所へと視線を向けたところで、「イリス～♪」ってわたしの名前を呼びながら駆け寄ってくるのは「母様・・・」だった。騎士団独立以来、どうもわたしは母様に余所余所しくなってしまってる。

「お帰り、イリス～！　それにルシル君とアイリちゃんも！　リナルドから話は聞いたわ。仮面持ちを2人を確保したって！　お手柄じゃない！」

最初にわたしをハグした母様は、次にルシル、最後にアイリと続けた。わたしは「取調べについては何か？」って尋ねると、「な～んか他人行儀よね。お母さん、何かした？」って答えることなく、そう聞き返してきた。

「別に、なんでも・・・」

「・・・。ルシルく～ん。娘が今さら反抗期に入ったみたいなの～」

ルシルにしなだれ掛かりながら、甘ったるい声でそんなことを言い出す母様に、わたしは「もう！　いい歳したオバサンが何やってんの！」って怒りながら引き剥がしに掛かった。

「オバ・・・・!?　オバサン!?　今、この娘は私をオバサンと言った!?」

「ええ、言った、言いましたとも!　母様は、父様とラブラブしてればいいの!　ルシルとはわたしがラブラブするので!」

母様から取り戻したルシルの頭を、今度はわたしの胸に抱き寄せると「あらあら♪」って母様は微笑ましそうに笑った。わたしの知る母様の笑顔なのに、やっぱり独立の件で完全には信じられない・・・。

「母様・・・」

「ん?　な〜に、イリス?」

どうして独立なんかしたの?っていう、これまでに何度もした質問をまた口にしようとした自分を制する。

――これがひいてはミッドチルダの未来の為なのよ。今はそれだけを解ってほしいの――

返ってくるのは、ミッドの為、っていう言葉だけ。深く問い質してもそれ以外の答えは返ってこない。だからもう聞かないようにしようって諦めたんだから。だから「なんでもない」って言い放ちながら踵を返す。

「イリス・・・！」

「いろいろ疲れたから、シャワーを浴びて休憩に入るから。もちろんルシルやアイリも一緒。行くよ、２人とも」

「あ、ああ・・・」「うん」

ルシルとアイリが律儀に母様に「失礼します」って一礼して、そして母様も「これからも娘をお願いね」って、ルシル達に頭を下げてるのが判った。解ってほしい、じゃなくて、ちゃんと理由を教えてくれたら、わたしだってこんな態度を取らないでいいのに・・・。

「シャル、気持ちは判るけど・・・」

アイリが僅かに非難の色を付けてそう漏らした。でも「どこの家庭でも普通にある、母子の関係だよ」ってわたしも反論。反抗期の子供は、もっと酷い態度や言葉を両親にぶつける。ちょっと冷たい態度を取った程度、どうってことないよ。

それからシャワールームで汗を流して、私服から騎士団服へと着替えたわたしとアイリは、同じようにシャワーを浴びて私服から神父服へと着替えたルシルと合流して、食堂へと向かった。そこでは皿を何枚と空けたクラリスと、「どんだけ入るの、いつもながら？」って呆れてるセレスが居た。

「あ、イリス、ルシル、アイリ。お疲れ～」

「先に頂いてるよ」

セレスがわたし達に手を振ると、クラリスもショートケーキの乗ったお皿を掲げて見せた。わたしとルシルとアイリも、それぞれチーズ、チョコ、ストロベリーのケーキを注文して、クラリス達の側の席に着く。

「そういえば・・・ねえ、シャル。アイリが保護した、あの馬鹿野郎ってどうなったの？」

アイリにそう聞かれたわたしは、「そうそう。それの報告を忘れてた」って、フォークから一旦手を離した。んで、わたし達の着くテーブルと、セレスとクラリスの着くテーブルの上にモニターを展開させる。

「（ていうか、ルミナ達は今どこに居るわけ？）まず、アイリが保護した男は局に任せた。こっちは仮面持ちを確保できただけで十分な成果だからね。ビルに被害を出したその謝罪の意味をこめて、ね。で、アイツの正体だけど・・・」

モニターに表示させたのは、ここ最近管理世界で起きてる魔導師連続襲撃事件の記事。フリー、局、犯罪者、属する場所は違えど魔導師が質量兵器で殺害されてる事件が、確認されてるだけで３８件。

「んで、使われた質量兵器って言うのが、ビルでルシルを撃った物だったの」

記事の写真から、男から携帯端末から手に入れた質量兵器の画像へ

と切り替える。ルシルが「デザートイーグルにアウターバレル仕様か。良いな」って楽しそうに頷いたからアイリが「一応コレで撃たれたんだからね？　解ってる？」ってジト目でルシルを睨んだ。

「しかし、ただの質量兵器・・・って面倒くさいな。コレ、ただの拳銃じゃないんだろ？　正直、防護服を容易く貫通して、俺の肩に風穴を開けられた時は焦ったぞ。怯えと混乱のおかげで肩だったが、冷静だった場合は頭を撃たれて即死も有り得た」

「あー、さすがに頭を撃たれたらルシルでも無理か～」

「クラリス、君は俺を何だと思ってるんだ？」

「・・・ゾンビ？」

「おい」

「クラリスの言いたい事も解るかな。だって回復力が桁違いに高いもん」

「あくまで俺は、治癒術式を使ってるからだぞ。自己治癒力は・・・まぁ、普通の人に比べれば高い・・・か」

「ゾンビ、ゾンビ～♪」

「子供か！！」

ルシルとクラリスの言い合いに「はいはい、続けるよ～」って制止を掛けて、話を本題へと戻す。男とその仲間の組織が、犯罪組織に売り捌いていたらしい。被害者の大半は犯罪組織にそれぞれ雇われてたフリーの魔導師で、組織間の抗争での死亡が最多だ。

「局に身柄を渡す前に軽く事情聴取したけど、あの男は下っ端で、この拳銃をどこから仕入れているのかは不明。でもその威力は、ルシルが実体験したとおりSSクラス魔導師の防護服すら貫通できる危険なものね。回収した拳銃類は本局の技術部に回すって聞いたから、これからもっと詳しい話が出てくると思う」

「そうか。捜査はこのまま局持ちになるだろうが、騎士団（オレたち）も細心の注意を払って今後の任務に当たろう」

そう締めたルシルに「うん！」ってわたし達は頷き返した。それからケーキを食べ終えて、お茶をお代わりしながら談笑してると、「ちょっと、ニュース、ニュース！」ってルミナ達が慌しく食堂に入ってきた。

「どうしたの、そんなに慌てて・・・」

「今、仮面持ちの連中が電波ジャックしていて！」

「とりあえず観れば判ります！」

アンジェが大き目のモニターをわたし達の前に展開する。そこには1人の仮面持ちが映し出された。仮面というか、悪魔然としたヤギ

の被り物を頭に被っていて、服装も学ラン・マントじゃなくて軍服らしいもので、片側だけのマント――ペリースを左肩に掛けてる。右隣にも同じ軍服だけど、ペリースを掛けてない男の、太陽の仮面持ちが1人。左隣には一対の翼が円を作った仮面の女性が1人。

『――改めて宣言しよう。我われ最後の大隊（レッツト・バタリオン）は、管理世界に存在する犯罪者を根絶やしにするため、今日この日、管理・管理外世界の全犯罪者に宣戦布告する』

変声の魔法か機械か、どちらにしろ声を変えているから年齢的なことは判らない。ただ男性って言うのは、その体つきで判別できる。しっかし、犯罪者が犯罪者を根絶やしにする、なんて馬鹿な発言も中々ないよね。

『が、その前に、管理局と教会騎士団にも宣言しておこうと思う。我々の邪魔はするな。局はただでさえ人員不足だったことに加え、主力として多かった騎士の大半が無期限休職という形で、教会騎士団へと戻った。さらに言えば組織内の不祥事で、もはやいつ沈むとも知れぬ泥舟』

酷い言われ様だ。でもその発端を生み出した騎士団の一員として、教皇である母様の娘の1人として、申し訳なく思ってる。特にチーム海鳴のみんなには・・・。

『管理局法によって、犯罪者への必要以上の攻撃も許されていない。騎士団も、管理局法から脱退したとはいえ、騎士道に則り相手が犯罪者であっても非道な真似は出来ないだろう。だからこそ！　我々

が貴君らに代わり、悪として犯罪者に死の鉄槌を下す。我われ最後の大隊が！　文字通り最後の犯罪者となろう！』

仮面持ちのリーダーらしき男――山羊頭（仮）がそう宣言すると、カメラがグッと後ろに引いた。そしてモニターに映った映像に、「な・・・！？」ってわたし達は絶句した。仮面持ちがずらっと整列してるんだけど、その人数が半端ない。

「私やルシルが捕まえた翁と天狗の仮面持ちだけで、ざっと１００人はいるんだけど・・・！」

「他には、怪人、狐、恵比寿、十字架、逆五角形、上向き矢印、逆五芒星、太陽、円形などなど・・・。５００人は明らかに超えてる・・・！」

ルミナとトリシュが戦慄する中、「確かに大した数じゃないか。だが、あの中で本物の強者はどれほどだ？」ってルシルが漏らした。これまでに何回か仮面持ちとは戦ってるけど、余裕で倒せる奴もいれば、今回みたくルシルやルミナですら苦労する仮面持ちもいる。あの中には前者はどれくらい居てくれるだろう。

『恐怖せよ、犯罪者。悪には悪で、暴力には暴力で、罪には罪で、我ら犯罪者は、貴様ら犯罪者を共食いする。ではごきげんよう、時空管理局ならびに聖王教会騎士団の諸君』

山羊頭が踵を返して、そのまま暗転したところで、『そうそう。騎士団の諸君。本日君らが捕らえた我が隊員だが、彼らの忠誠心には

頭が下がる』って、暗い画面の中から山羊頭がそう言った。直後、ドォーン！って爆発音が本部内のどこかで、しかも2連続で起こった。

「今のどこから！？」

「襲撃なの！？」

「確認しに行くぞ！」

他の騎士やシスター達も行動を開始。わたし達も「行こう！」っていうことで、食堂を飛び出したわたし達は黒鉛の上がる「収容施設・・・！」へと駆け出す。

「ねえ、今の爆発ってやっぱり・・・！」

「ああ！　忠誠心と言っていた！　おそらく・・・」

「自爆・・・！」

第５２管理世界アンバーでの軌道エレベータ占拠事件を思い返す。今回捕らえた槍の騎士と同じ、エレベータでルシルと交戦していた騎士は、捕まると覚悟するや否や自爆した。ということは、最後の大隊のメンバーはアンドロイドかサイボーグってことになるはずなんだけど・・・。

（ティーダ一尉はどうなんだろ・・・？　クイント准尉みたいにサ

イボーグに改造されてる？　それともメガーヌさんみたく、人のまま何か埋め込まれてる・・・？）

とにかく、黒煙どころか火まで上がり始めた収容施設へ向かってひたすら駆けた。

・―・―・―・―・

「どいつだよ、屋内でならルシリオン・セインテストを狩れるって言ったのは？　もろに反撃されて、危うく本物の天狗である俺が捕まるところだったぞ」

「おいおい。こっちは元とはいえ、最強の拳闘騎士だったマルスヴァローグだぞ？　ギリギリ視覚外で、サブの翁と交替できたから良かったものの・・・」

そう文句を垂らしているのは、天狗の仮面を付けた男。対するのは翁の仮面を付けた男。共にルシリオンやアルテルミナスと激闘を繰り広げていた者だ。その発言から、負けると判断すると転移スキルを用いて、捕まっても問題ない同じ仮面持ちと入れ替わったようだ。

「ＳＳクラスの元管理局員を殺害した仮面持ちを、教会騎士団が撃破した。なんてマッチポンプを狙っておきながら返り討ちだからな。融合騎とシスターの転移スキルが無かったら、俺たちが捕まっていた」

「まぁ捕まっても問題なかったろ？　何せ――」

２人がスッと被っていた仮面を外す。１人は青い短髪に若干垂れた茶色い双眸。１人は茶色の短髪に糸目。今でこそ学ランを着ているが、その２人は間違いなく銀薔薇騎士隊の槍騎士ブレオベリスと斧騎士グリフレットだった。

「「大隊の幹部は教会騎士団の一員だから！」」

大きな笑い声を上げ、自らに課せられた任務の失敗を笑い飛ばした。そこに「なにやら楽しそうですね」と女性が声を掛けてきた。２人はビシッと佇まいを直して、「お疲れ様です！　フィヨルツェン殿！」と敬礼した。そう、"堕天使エグリゴリ"の１体、フィヨルツェンだ。両翼の仮面を後頭部へ回している。そのデザインの仮面を持っているのは彼女ただ１人であるため、最高幹部の地位だ。

「それで、何か面白い話でもあったのですか？　わたくしも混ぜてください」

顔は微笑んでいるが、薄く開いた目は一切笑ってはいなかった。それで２人は、自分たちが不謹慎な言動をしていたのだと自覚し、「申し訳ありません！　くだらぬ愚見です！」と勢いよく頭を下げて謝罪した。

「そうですか。・・・団長より、幹部はホールに集合するよう指令が下りました。早々に移動してください」

「「了解であります！」」

フィヨルツェンから承った指示に従うべく、2人は急いで集合場所であるホールへと駆け出した。それを見送った彼女の背後から、「いよいよね」と別の女性の声がした。フィヨルツェンは振り返ることなく、「ええ。長かった・・・」と万感の思いを乗せてそう返した。

「シュヴァリエルですら倒せてしまったお父様です。今回の一騒動の果て、わたくしをきちんと裁いてくれるでしょう」

「フィヨルツェン。あなたとこうして言葉を交わすのも、これで最後になると思う」

「そうですね。その次は、あなたとなるでしょう、リアンシェルト」

フィヨルツェンに声を掛けたのは、最後の大隊の本拠地であるココに居るのがおかしいと言える、時空管理局本局に勤める"エグリゴリ"の1体、リアンシェルトだ。リアンシェルトは「そうだね・・・」と頷き返した。

「・・・では、これにておさらばです、リアンシェルト。お先に逝かせていただきます」

「さようなら、フィヨルツェン。よい最期の闘いを」

フィヨルツェンとリアンシェルトは共に別れを告げ、そうして2体はそれぞれの路へと歩み始めた。

Ｅｐｉｃａｌ５－Ａ局員狩り～Ｓｅｃｒｅｔ　Ｍａｎｅｕｖｅｒｓ～

「はっ、はっ、はっ、はっ！　ちくしょう！　何だって言うんだ・・・！」

闇夜の中、静まり返った街の中を駆ける男が１人。彼はミッドチルダ地上本部の首都防衛隊に所属する、ＡＡＡランクのストライカー級の魔導師で、自分の隊を持つ一等陸尉の階級持ちだ。帰路の途中、彼は突如として襲撃を受けた。襲撃された理由は、自分が局員である事、とすぐに察することが出来た彼は・・・

――俺が今まで捕まえた悪党の身内か！？　逆恨みも甚だしいぞ！――

襲撃者の正体にそう見切りをつけてそう叫ぶが、返ってくるのは無言だった。彼は、襲撃者を捕らえるために通信や念話で応援を予防としたのだが、ジャミングを受けているのか両方とも使い物にならなかった。となれば、相手の人数も判らない状態での交戦は危険と判断し、離脱を図ったのだが・・・。

「姿を見せずに狙撃ばかり・・・！　腰抜けめ！」

殺傷性はないが、掠っただけで触れた場所が麻痺するスタン弾。局員は長年の直感から紙一重だが、どこからともなく撃ち込まれる狙

撃を躱していた。彼のデバイスはストレージタイプの双銃だ。ゆえに「姿を視認しだい、眉間に撃ち込んでくれる・・・！」と息巻いた。

（しかし、深夜3時とはいえ・・・人がいなさ過ぎる。結界を張られたわけでもないのに・・・。一体、俺の周りで何が起きているんだ・・・？）

明かりの点いているビル群の中、局員は数あるビルの屋上をチラチラと確認し、狙撃ポイントを探し出そうとするが、「距離がありすぎるのか・・・？」と断念した。それから彼にとっては何十分、何時間という体感時間だったが、実際には数分程度の逃走の果て・・・。

「狙撃が止んだ・・・？」

ちょうど街の1ブロックを抜けたところで、ピタッと狙撃が止んだ。それでも警戒心は一切解かず、間を置いてから狙撃が再開されるかもしれないと考え、街と街に挟まれた大川に架けられた橋へと移動を始める。月明かりに照らされた堤防を駆け下り、橋架下へとたどり着いたそのとき・・・

――トランスファーゲート――

「やれやれ。狙撃型はまだ実戦に投入できないな、これでは」

局員の背後から、そんな呆れ声がした。完全に虚を疲れた男はビク

ッと肩を跳ねさせ、振り向きざまに拳銃型デバイス2挺の銃口を「誰だ！？」と、突然現れた何者かへと向けた。そこに立っていたのは怪人の仮面を付けた男だった。服装は例によって学ランにマントに学生帽と目出し帽。その正体は、銀薔薇騎士隊のパラディンの1人、拳闘騎士ガリホディンだ。

――スタンバレット――

経験から成せる事なのだろう。局員は、何故ここに？という疑問で硬直することなく、相手を麻痺させる魔力弾を即座に連射した。

――烈火泉――

ガリホディンの足元に展開された薄紅色のベルカ魔法陣より、魔力光と同じ薄紅色の炎が噴き上がった。局員の魔力弾は炎の渦に拒まれて消失したが、局員はその場に留まることなくガリホディンの周囲を駆け回りながら「砲撃ならば！」と、射撃魔法より上位の術式であり威力を持つ砲撃魔法を撃ち込んで行く。

――炎纏人――

「もうよせ。無駄に魔力を消費するだけだ」

炎の渦より歩き出て来たガリホディンは、全身を燃やしながら局員の元へと駆け出す。

「何が目的だ、最後の大隊！　俺とお前たちとの接点はないはずだ

が！？」

「そうだな。別に隠すこともないから教えよう。我々は名のある局の魔導師を拉致しているのだ」

「なんだと・・！？」

拉致された先での処遇を考え、局員は生唾を飲んだ。何せ向こうは犯罪集団。その様子からガリホディンは「安心しろ」と小さく肩を竦めながらそう言った。

「別に取って食うわけじゃない。ただ・・・痛みも苦しみもなく、無期限に眠っていてもらうだけさ・・・！」

――獄火拳――

「それは早い話が殺すという事だろう！」

――フォトンブラスト――

炎で構築された拳を砲弾のように飛ばしたガリホディンと、２挺の銃口から直射砲撃を放った局員。２つ魔法が真っ向から衝突、大爆発を起こした。爆風に煽られて局員は腰を落として踏ん張る中・・・

「これで終わりだ」

全身に纏っていた炎を消失させていたガリホディンがそう言い放ちつつ、爆風に乗って局員へと再接近してきた。局員も迎撃のために銃口を向けようとするが、すでに懐に入られた後。ガリホディンは局員の鳩尾に肘打ちを打ち込み、さらに伸ばされていた右腕を取って背負い投げした。気を失った局員を確認したガリホディンは『任務完了』と念話で誰かに報告。

『了解です。ゲートを開放します』

――トランスファーゲート――

転移スキルを有する女性化面持ち――シスター・トルーデからの返答の後、音もなく空間に歪みが発生した。局員を肩に担いだガリホディンが空間の歪みの中へと足を踏み入れ、その瞬間には最後の大隊の本拠地へと着いていた。

（っく・・・。ここは・・・どこだ・・・？）

割と早く目を覚ました局員は、整理された人工の通路を薄めで確認。そして今、自分を担いでいるガリホディンの背後を歩く女性をギリギリで視認。顔までは見られなかったが、服装だけはハッキリと視認した。

（修道服！？　シスターだと・・・！？）

局員は混乱した。最後の大隊に拉致された先には、聖王教会のシスターと思しき女性が待ち構えていた。脳裏に過ぎる最悪の展開に、

局員は再び気を失いそうになった。意識を失ったフリをしつつ、もっと情報を探ろうとしていた矢先、「ご苦労だった、ガリホディン」と、そう労うしわがれた声がした。

（ガリホディン・・・？　パラディン・ガリホディン！？　くそっ、やはり教会騎士団と最後の大隊はグル！　いや、最後の大隊そのものが騎士団の一部なのか・・・！）

「ＡＡＡランクとはいっても所詮は魔導師。我われ騎士には遠く及びませんよ、団長」

実際に負けている事で反論できない局員だが、局には本当に強い魔導師がいることを知っているため胸の奥で、返り討ちに遭ってしまえ、とほくそ笑んだ。そして団長というのが、現騎士団のリナルド・トラバントかと考えたが、声があまりにも老けていることもあり、人違いだと判断する。

「ふむ。著名でなおかつ実力のある局員を回収するには、やはり幹部でないとな。では早速施術をしてもらおうか」

団長と呼ばれた男がそう言うと、局員を担いでいるガリホディンが移動を開始。薄目を開けながら彼は周囲を確認する。機材が多いため何かしらの研究室であること、この部屋には今、自分とガリホディンとシスター、そして団長と、さらにもう２人の６人がいることを確認。

「聞こえてはいないだろうが・・・安らかに眠れ、アル・アダムス

一等陸尉殿」

斜めに立て掛けられたようなポッドが目に入り、さらにはガリホディンからの別れを告げるかのような台詞に・・・

（これ以上は無理だ・・・！）

アルはそう判断し、即座に魔力を練り上げて両拳に付加。魔力を電気に変換しての「スタンナックル！」を、ガリホディンの無防備な腰へとダブルスレッジハンマーを打ち込んだ。

「ぅぐ・・・！？」

ガリホディンは堪らず膝から崩れ落ち、アルは彼の肩から飛び降りてすぐにデバイスを起動。捕まえた時にデバイスを取り上げなかった最後の大隊には感謝しかない、と嘲笑する。銃口を団長やシスター、他2人に向けたところでアルは「え・・・？」と一切の行動を止めてしまった。

「どういう・・・ことだ・・・？」

アルの目が見開かれる。数日前に行われた最後の大隊の演説にて、軍服にペリースというリーダー格の禿頭の大男、学者然とした白衣を着た胸の大きな女性、そして最後に彼が「俺が居る・・・？」と呻いたとおり、彼とまったく同じ顔に背格好の男が居た。

「そのとおり。今日からアレが、アル・アダムス一等陸尉となり、

オリジナルである君はいつ目覚めるとも判らぬ眠りに着く。彼らのように・・・」

スッと立ち上がって見せたガリフッドが上を仰ぎ見たことで、アルもつられて上を見た。何度目かの「え・・・！？」と絶句。円筒状の部屋の壁にはいくつものポッドが並列して設けられており、その中には聖王教の教皇であるマリアンネ、元槍騎士のパラディン・パーシヴァルといった騎士団関係者や、本局や支局、各地上本部の上層部の役員が十数人が収められていた。

「ば、馬鹿な・・・！　マクレーン防衛長官・・・！　帰宅の際に、確かに顔を合わせた・・・！」

ある1つのポッド内に、ミッドチルダ地上本部の全防衛隊の総司令官である老齢の男性局員が収められており、それを見てたアルは膝から崩れ落ちた。オリジナルを眠らせ、最後の大隊が用意した偽者を外に出す。それだけでいろいろな悪事を裏から操れるだろう。そう思い至ったアルは、管理局だけでなく教会騎士団も被害者側だと理解した。何せベルカ自治領や聖王教会のトップであるマリアンネが捕らわれている。これを異常事態といわずなんと言おう、と。

「くそ・・・！」

アルは出口へ駆け出しながら、2挺の銃口より魔力弾を連射。ガリフッドが「無駄だ」と落ち着いた声で魔力弾を握り潰し、アルを追い駆け始める中、他の者は全てをガリフッドに任せるとでも言うようにその場から動かなかった。その考えはに間違いはなく、2分と

せずにガリフッドは気絶しているアルを連れ戻してきた。そして彼もまたポッドに収められ、偽者のアルはシスター・トルーデの転移スキルによって、彼の家族の待つ自宅前に配置された。

†††Ｓｉｄｅティアナ†††

ひょっとしたら、お兄ちゃんは生きている、かもしれない。そんな曖昧な気持ちのまま、毎年同じようにお兄ちゃんの命日という理由で墓参りに来た。ミッドは西部エルセア地方、ポートフォール・メモリアルガーデン。そこに両親とお兄ちゃんの墓がある。

「というか、あんたまでついて来なくてよかったのに・・・」

「いいの、いいの♪」

あたしの墓参りに付き合ってくれるのは腐れ縁のスバル。この子の母であるクイントさんも、死んでいたとされてた間はこの墓地に墓があった。でもプライソン戦役でクイントさんは生存は確実となって、今はナカジマ家に戻り、管理局にも復帰してる。

正直な話、クイントさんが生きていて、墓地からクイントさんの墓が撤去された時、嫉妬を覚えていた。お兄ちゃんも実は生きていたらな、って・・・。そのまさかが今、現実になろうとしてる。嬉しいのは嬉しいけど、お兄ちゃんの今の状況・状態によっては、本当に空の棺にお兄ちゃんが収められることになるかもしれない。それが一番の不安・・・。

「せっかく久々に揃った休暇なんだもん。出来るだけ一緒にいよう

よ～♪」

相変わらず照れ臭くなるような台詞をサラッと口にするスバルに、「はいはい、そうね」って苦笑で返す。平日だということで墓参りに来てる人はかなり少ない。だからこそ、そこにある異様な光景にすぐに気付けた。あたしの両親の墓の前にひとり立つ男性が1人。顔はよく見えない。でもあの後姿は・・・。

「（小さい頃によく背負ってもらってたから・・・判る・・・！）お・・・お兄ちゃん・・・？」

「え？　ティア、まさかあの人が・・・！」

「お兄ちゃ――いえ、最後の大隊の仮面持ち・・・！」

変身するかどうか迷った。ここは死者が眠る墓地。こんなところで魔法戦なんて出来るわけがない。でも応援を呼んでいる暇もない。大隊には転移スキル保有者がいる。下手に応援を呼んで気付かれたりでもしたら、逃亡の際にこちらに被害が出るかもしれない。

「あたし、話しに行くわ」

「っ！・・・うん、だよね。兄妹だもんね」

そう、局員としてじゃなくて妹として逢いに行く。今日はちょうど私服だし。スバルと頷き合って、両親の墓の前で佇むお兄ちゃんの元へと歩き出す。1歩、また1歩と近付くにつれて心臓が早鐘を打

つ。モニターでしか、お兄ちゃんが生きてるかもしれないって判断が出来てなかった。だけど今、目の前に確かにお兄ちゃんが居る。近くまで来て、その横顔をしっかりと目で見る。間違いなくお兄ちゃん、ティーダ・ランスターだった。

「こ、こんにちは！」

緊張しまくって声が上ずってしまった。お兄ちゃんは周囲をキョロキョロした後、挨拶をされたのが自分だと判って、「こんにちは」って挨拶をしてくれた。この時点ですでに異常を察することが出来た。あたしを直接見ても妹だって気付いてない。いやまぁ、最後に顔を合わせたのは１０年近い昔だから、成長したあたしに気付かないのもおかしくはない、かな・・・。

「うん、こんにちは」

「あの、えっと・・・」

「・・・あの、あたしスバルっていいます！　お名前を伺ってもいいですか？」

あたしが口を噤んでいると、スバルがお兄ちゃんに名前を尋ねた。お兄ちゃんは微笑んだ後、「ティーダ。ティーダ・ランスター」って名乗った。視界が涙で滲み始める。その口からちゃんと名前を聴けた。生きてる、生きていてくれた。両手で顔を覆って、漏れそうになる嗚咽を必死に口を噤んで抑える。

「ティア・・・？」

「ど、どうかしたのかい！？　何か気に障るような事を・・・！？」

お兄ちゃんがあたしに声を掛けてくれる。次々と嬉しさが込み上げてきて、もう顔を上げられないほどに涙や嗚咽が出る。スバルがあたしを支えるように両肩に手を置いてくれた。今日、あんたが居てくれて本当に良かったわ・・・。

「ティーダさんって、ご兄弟とかっていますか？」

「え！？　この状況でそんな話！？　いやいや、この女の子はどうするの！？」

「どうにかしたいからお尋ねしているんです！」

スバルの必死さにお兄ちゃんは「妹が1人・・・ね」って答えて、スバルがさらに「お名前は！？」って聞いた。

「え？・・・ティアナ。ティアナだよ」

「～～～～っ！」

もうダメだった。あたしは「うわあああああ！」声を出してその場に泣き崩れた。もう二度とお兄ちゃんから呼んでもらえないって思ってたあたしの名前だから。

「あたしは・・・あたし、ティアナ・・・、ティアナです！」

涙やら何やらでグショグショになってるかもしれない顔を上げて、お兄ちゃんの顔をしっかり見つめながら名乗った。するとお兄ちゃんは「え？　あ、えっと、い、妹と同じ名前なんだね？　いい名前だよね？」って困惑に満ちた声でそう言った。違う、って言おうとしたけど、それより早くお兄ちゃんは悲しそうな表情を浮かべて、こう漏らした。

「いやでも、君は名前だけでなく外見も、どことなく妹を思い起こさせるよ。うちの妹って１１歳だったんだけど、妹が成長して大人になれば、たぶん君くらいの美人になっていたと思う」

（だった・・・？　なっていた・・・？　何で過去形？）

出逢えた嬉しさや不可思議な台詞などであたしが混乱する中、スバルがあたしに代わって「なんで過去形なんですか？」って聞いてくれた。そしてお兄ちゃんの口から、信じられない事が語られた。

「妹は、ティアナはね。７年前、局と魔導犯罪者の魔法戦に巻き込まれて死んだんだ・・・」

「「っ！？」」

「ミッド魔法発祥の地であり、全管理世界の地上部隊の総本部のお膝元ということで、当時の防衛長官レジアス・ゲイズは、結界を張ること即ち怠慢である、としていた。しかも管理局法自体が、結界

の無断発動を許可できないときている。その所為で！　僕の妹は！
魔導犯罪者の流れ弾に当たって！」

お兄ちゃんの表情が今まで見たこともないような怒りに歪んだ。ここまで感情を吐露するお兄ちゃんははじめて見たから、あたしは二の句が告げなかった。ここでまたスバルがあたしを助けてくれた。

「それ間違った記憶です！　ティアは、ティアナ・ランスターは生きてます！　ここにちゃんといます！」

そう言ってスバルがあたしの腕を引っ張って立ち上がらせてくれた。そして「ほら！　ティア！」ってあたしの背中をドンッと叩いて、お兄ちゃんの胸に飛び込ませた。

「えっと、あの、その・・・！」

お兄ちゃんの顔を見上げて、あたしは息を呑んだ。さっきは局や管理局法への怒りで歪んでた顔が、今はあたしやスバルへと向けられていた。そして「よしてくれ」って冷たい声で呟いた。

「確かに君は、妹と同じ名前で顔も髪の色も似てはいるが、妹（ティアナ）じゃない・・・！　見てくれ、あの子の墓を！」

お兄ちゃんが指差した方には、お兄ちゃんの墓石が立っていた。でもよく見れば墓石に刻まている名前はティーダ・ランスターじゃなくて、「あたし・・・！？」の名前へと変わっていた。前回ここへ来たのは、ルシルさんからお兄ちゃんの事を聞かされた時。その時

はいつもと変わらず、お兄ちゃんの名前が刻まれていた。

（いつの間に・・・！　というか誰があんな事を！）

決まっている。どんな手段を講じたのかは判らないけど、最後の大隊の誰かが墓石を換えたに違いない。お兄ちゃんの記憶を弄って、利用して・・・。今までにないくらいに怒りを覚えた。だから「助けるよ、お兄ちゃん」って、お兄ちゃんの胸を両手で押して離れる。

「君はまだ・・・！」

「あたしの名前は、ティアナ・ランスター！　執務官を夢見ていたお兄ちゃん――ティーダ・ランスターの妹！　その意志を継ぎ、本局次元航行部所属の執務官になった！　管理局員として、最後の大隊メンバーであるあなたを逮捕し、妹として・・・お兄ちゃんを救い出す！」

「あたしも手伝うよ、ティア！　ティアには、あたしのお母さんの解放を手伝ってもらったし！　何より親友の一大事だからね！」

「ホント心強いわ、あんたが一緒にいると」

「えへへ♪」

スバルと肩を並べて、「管理局員・・・！」って驚きを見せてるお兄ちゃんと対峙する。お兄ちゃんは「なるほど。僕を惑わせて、隙を突いて拘束するつもりだったのか」って頭を振って、あたし達を

睨み付けてきた。胸がズキッと痛むけど、今はとにかくお兄ちゃんを取り戻すことが最優先。

――トランスファーゲート――

変身と武装をされる前ならひょっとして、と考えていたその矢先、例の転移スキルが使われた証である空間の歪みがお兄ちゃんの側に生まれて、「同志アングマール。新たな指令よ」って言いながら逆五角形の女性仮面持ちが出現した。

「目の前にいる管理局員２名・・・捕獲です」

女性仮面持ちがそう言うとお兄ちゃんは「了解」って簡潔に答えて、最後の大隊の制服らしい学ラン、学生帽、マント、そして目出し帽に恵比寿の仮面っていう格好へと変身。右手にはお兄ちゃんの局員時代の頃から使ってた拳銃型デバイス・"ピースメーカー"。左脇に挟み込むように持つ銃身が３本ある２ｍくらいの砲塔型のデバイス。

「場所が最悪だけど、手加減も出来るわけもなし！　スバル！」

「うん！　やろう！」

あたしとスバルも防護服へと変身した。さて、出来るだけ墓地を荒らさないようにお兄ちゃん達を撃破して逮捕するには、いったいどうしたものか・・・。

Ｅｐｉｃａｌ５－Ｂ局員狩り～Ｂｒｏｔｈｅｒ　ａｎｄ　ｓｉｓｔｅｒ　ｓｈｏｗｄｏｗｎ～

†††Ｓｉｄｅスバル†††

話には聞いていたけど、ティアのお兄さんは確かにちゃんと生きてた。でもまさか、そのお兄さんと戦うことになるなんて。しかもプライソン戦役の頃みたくお母さんやノーヴェ達、メガーヌさんみたいに、記憶をイジられているみたい。

「出来るだけ墓地に被害を出さずに、２人を抑えないと・・・」

「う～ん、どうするティア？　結界魔法なんて張れないよ・・・？」

結界魔法って割りと難しいし、維持するのにも魔力が要る。さらに言えばあたしとティアは結界魔法が使えない。応援を呼ぼうにも到着するまでどれだけ掛かるか判らない。頭の中でぐるぐる考える中・・・

「安心してくれていい。ここは死者が安らかに眠り、遺された人たちが万感の思いに馳せる場所。そこを荒らすような真似は、僕たちはしない」

お兄さんがそう言って女性の仮面持ちをチラッと見ると、仮面持ちはポケットから小さなガラス球を取り出した。ソレを地面に落とすとガシャン！って音を立てて割れた。と同時、落とされた場所を中

心に何かが地面を這うようにブワッと放射状に広がった。昼間だった世界が灰色の世界へ早変わり。

「「結界・・・・！？」」

「そう。局や騎士団に魔力感知されず、一般人はもちろん魔導師にも見られることはない、特別な術式を持った結界魔法。これで誰にも邪魔されることはなくなる」

あたしやティアを逃さず、また応援も来られないようにするっていう、そんな特別な結界はドーム状に展開された。お兄さんは「同志テルコンタル。僕ひとりで戦います」って、女性仮面持ち・テルコンタルにそう言うと、足元に黄色に輝くミッド魔法陣を展開した。

「どうぞ。私は非戦闘員なので、元より戦うつもりはないですから」

「そうだったね。じゃあ君は見ていてくれ。・・・最後の大隊、アングマール行きます」

ＶＳ・―・―・―・―・―・―・―・―・
其は航空機動重爆撃砲台アングマール
・―・―・―・―・―・―・―・―・ＶＳ

「クロスファイア・・・！」

お兄さんの周囲に魔力スフィアが１０基と展開された。ティアが「スバル！　クロスシフトＢ！」って指示を出してくれた。Ｂは、テ

ィアがかく乱担当で、ティアが相手の動きを阻害してるうちに、あたしが突っ込んで一撃必倒で仕留めるっていう陣形だ。

「うんっ！」

「クロスファイア・・・！」

ティアもまた魔力スフィアを１０基と展開したところ、仮面や目出し帽越しでもお兄さんが息を呑んだのが判った。だからティアに「シューット！」先制を取られた。約２０発の魔力弾が発射されて、遅れてお兄さんも「シューット！」と発射させた。ティアの先行を許したお兄さんは、至近距離でティアの魔力弾幕を迎撃したことで、「くぅ・・・！」その爆風に煽られた。

「マッハキャリバー！」

クラウチングスタートからのダッシュ。ティアは間髪入れずに「シューット！」って魔力弾を放ち続けて、お兄さんも「その魔法はどこで・・・！？」って驚きながらも、左脇に挟んでる三連大砲から「ブラストディセミネーター！」って、魔力弾を何十発と放射状に一斉発射。弾幕としての厚みは圧倒的にお兄さんに軍配が上がって、ティアの弾幕が一瞬にして押し返されて、あたしも射程範囲内に突っ込んでいたから急速後退。

「スバル！」

「大丈夫！」

お兄さんの周囲を疾走しながら攻撃のチャンスを窺う。お兄さんの周囲には未だに魔力スフィアが１０基と設置されていて、うち５基から連射されてくる魔力弾を避け続ける。ティアも負けじと「シュート！」って魔力弾を撃ち続けてくれるんだけど・・・。

――ブラストディセミネーター――

お兄さんの張る弾幕の前には焼け石に水状態。とにかく、懐に飛び込まないことにはジリ貧になっちゃうよね。だから「ティア！　クロスシフトＡ！」って提案した。ＡはＢとは逆で、あたしがかく乱で、ティアが本命の一撃を撃つ陣形だ。

「馬鹿！　いくらあんたでも、あの火力の前じゃ・・・！」

「大丈夫！　防御の堅さは、なのはさんやヴィータ副隊長のお墨付きだから！」

ティアにそう返しながら、"リボルバーナックル"のカートリッジを3発ロード。魔力を全部防御に回すためだ。まずは「うおおおおおお！」地面を殴りつける。土煙を上げられるかどうか不安だったけど、ちゃんと地面としてそこに存在していてくれたおかげで、ブワッと土煙を巻き上げることが出来た。あたしはすぐにその場から離れる。せっかくの目晦ましも、その場に残ってたら何の意味もない。

――ヴェロシティレイド――

「っく・・・！」

土煙を穿って来る黄色い魔力の砲撃。あたしの横２ｍくらいを通過して行ったから、もしかして位置がバレてる？って思ったけど、今度は違う方角に砲撃が放たれたみたいだから、お兄さんもあたしを見失ってるって判った。

（お兄さんを出来るだけ傷つけずに撃破するには・・・やっぱりアレしかないよね！）

あたしのサイボーグとしてのスキル・振動破砕。全力のなのはさんのバリア系防御魔法すら一撃で破壊できるほどの威力だ。お兄さんのデバイスを破壊してしまえば、その脅威度はグッと下がるはず。

「ウイングロード！」

"リボルバーナックル"を地面に打ち込んで、ウイングロードを無軌道に展開させると、ウイングロードが宙を走るに勢いによって土煙も晴れていく。その前にあたしは砲撃の発射地点、つまりお兄さんへ向かって疾走開始。スキルを発動した右腕の"リボルバーナックル"を構えて距離をどんどん詰めてく中、一瞬晴れた土煙越しにお兄さんと目がバッチリ合った。

「そこかい！」

――ブラストディセミネーター――

「マッハキャリバー！」

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　ＥＸ≫

目の前に放たれた散弾。あたしは前面にバリアを展開して、そのまま弾幕の中に突っ込む。至近距離での爆発に「ぅく・・・！」全身が軋むけど、バリアとこの機械の体のおかげで意識を失わないで済んだ。

「うおおおおおおおおおッ！！」

さらに速度を上げて、次弾が発射される前に懐へと入り込もうとする。お兄さんは拳銃型デバイスの銃口をあたしに向けたからまたバリアを張ろうとしたけど、お兄さんは撃つことなくトンッと地面を蹴って空に上がった。

「（あ・・・！　お兄さんって空戦魔導師だったっけ・・・！）でも、逃がさない！」

ウイングロードの先端をお兄さんの背後へ来るように延ばして、蓋を閉めるように上昇を食い止める。ドンッと背中からウイングロードの裏面にぶつかったお兄さんが、少し背後をチラッと見た。あたしから視線が逸れたこのチャンスはしっかりものにしないと。グッと両膝を曲げて、疾走のスピードを利用して大ジャンプ。

「っ・・・！」

「振！　動！　拳！」

突き出てる砲塔デバイスへと右拳を打ち込もうと繰り出すと、お兄さんは前面にラウンドシールドを展開した。お兄さんの防御力がなのはさん以上だったらまずいけど・・・。ちょっと不安のまま、あたしの拳がシールドにヒット。抵抗は・・・なかった。あっさりシールドを粉砕して、そのままデバイスへと拳を伸ばした。

「デバイス破壊を狙ってきたか・・・！　悪くない考えだと思うよ」

――クロスファイアーシュート――

直後、視界の外から魔力弾３発が飛んで来て、あたしの右腕――"リボルバーナックル"を真上から連続で撃った。威力が高いというより重いって言うのかな、右腕がガクッと強制的に下に向けられちゃった。突進の勢いも無くなって落下し始める中、お兄さんが拳銃の方の銃口をあたしに向けた。

――シューティングスター――

飛来するティアの魔力弾。その速度から、アリシアさん直伝の弾速重視の精密狙撃魔法、シューティングスターだ。正確に着弾した高速弾によって、お兄さんの右手から拳銃が弾き飛ばされた。お兄さんは即座に大砲を向け直してきた。

――ウイングロード――

トリガーが引かれるより早く足元にウイングロードを発動して、お兄さんの股下を潜り抜ける。そしてすぐにウイングロードの進行を上に変えてお兄さんの背後へと回ってしまえば、まだこちらに振り返り終えてないお兄さんの隙だらけな背中を捉えられることが出来る。

「でぇぇぇぇぇい！！」

勢いをつけたままの後転蹴りをお兄さんの左肩に打ち込んで、足の甲を肩に引っ掛けたままお兄さんを地面へ向かって蹴り飛ばす。

『スバル！』

『うんっ！』

ウイングロードを駆け上がりながら、あたしとお兄さんの対角線上に移動したティアを確認。あたしはカートリッジをロードして、ある魔法をスタンバイ。前面に練り上げた魔力をスフィア状に作り出して左手の平で保つ。飛行魔法によって宙で制止したばかりのお兄さんへと・・・

「ディバイン・・・バスタァァァァーーーーッッ！！」

――クロスファイア・バーストドライブ――

スフィアを殴ることで発動したあたしの砲撃と、ティアの砲撃がほ

ぼ同時にお兄さんを前後から挟撃、そして着弾して大爆発を起こした。爆風に煽られながらもあたしは、足元にウイングロードを伸ばしてきて着地。砂煙も完全に晴れて、ティアの姿を確認。おーい、って手を振ると、「まだ気を緩めない！」って大声で怒られちゃった。

「そ、そうだよね・・・！」

白煙を引いて落下してくお兄さんを見下ろした後、もう1人の仮面持ち・テルコンタルって人に目を向ける。お兄さんが砲撃2発の直撃を受けて今まさに地面に激突しようかって言うのに、あの人は興味無さげに地面に横座りで座ったままだった。

†††Ｓｉｄｅスバル⇒ティアナ†††

あたしとスバルの同時砲撃の直撃を受けたお兄ちゃんは、力なく地面へ向かって真っ逆さまに落ちていく。助けたい衝動に駆られるけど、正直いまの砲撃だけで撃墜できたなんて甘い考えは抱いてない。案の定お兄ちゃんは制動を掛けて宙に浮いて、「いや～、強いな～」って、ボロボロのマントを脱ぎ捨てた。

「でも、もう同じ手は通じないと思ってくれ」

そう言いながらお兄ちゃんは「ラストオーダー、セットアップ」と新しいデバイスを起動させた。それもまた脇に挟み込むことで、ようやく片手だけで携えられることが出来るほどの・・・巨大なスナイパーライフルだった。セレスさんから見せていただいた戦闘映像

にも映ってたデバイスだ。

――ブラストディセミネーター――

左脇に挟みこんでる大砲から散弾から放射状に放たれる。狙いはスバルで、「うわっと！」あの子は慌ててウイングロード上を疾走して、その効果範囲内から逃れた。

――ブレイクチェンジャー――

そしてあたしにはスナイパーライフル型デバイス・"ラストオーダー"からの砲撃が1発。セレスさんの映像だと、あの砲撃は直射砲じゃなくて、砲線が曲がるっていう、ちょっとクセのあるものだったりする。グッと身構えて、どこへ逃げればいいかを僅かな時間で決める。運が悪ければ逃げた方に砲撃が曲がってくるかもしれない恐怖を飲み込んで・・・。

「下・・・！」

ウイングロード上から飛び降りて、下のウイングロードへと着地しようとしたところ、砲撃はあたしがさっきまで居た場所を通り過ぎていった。そして着地したその直後、「ティア！」ってスバルが叫んだ。何も考えることなく着地した体勢のまま、前へ向かってヘッドスライディング。落下中、頭上を砲撃が通り過ぎて行った後、霧散した。

（曲がる砲撃は1回しか軌道修正が出来ない・・・？）

たぶんそれだけでも重要な情報だと思う。でもま、お兄ちゃんは今日この場で捕まるから、この情報もすぐに役に立たなくなると思うけど。次のウイングロードへと落ちる中、あたしは「クロスファイアシューット！」と、展開した魔力スフィアから１０発と魔力弾を一斉発射。

「射砲撃戦で僕に勝とうとするのは諦めた方がいい。君らの確保を僕の任務とするが、何も撃墜してから、というわけじゃないんだ。大人しく投降してくれれば、僕としてはとても助かるんだ」

――ブラストディセミネーター――

あたしの弾幕を散弾で迎撃するお兄ちゃんは、"ラストオーダー"の砲門をスバルへと向けて・・・

――スパークジャベリン――

その砲門から「電気変換・・・！？」された直射砲が発射された。落雷のような大きな轟音を発しながら発射された電撃砲をスバルは「うわっ！？」とウイングロード上を疾走して躱すけど、ウイングロードが撃ち抜かれて、しかも「きゃうん！？」スバルがビクンと大きく痙攣した。

「スバル！？」

ぐらっと体が傾いていって、ウイングロードから落ちそうになった。

お兄ちゃんへの攻撃を中断したあたしはウイングロード上を全力で走っては下を走るウイングロードに飛び降りて、スバルの元へと向かう。あたしがスバルの元へとたどり着くより早く、デバイスの両方を手放した「お兄ちゃん・・・！？」がスバルを受け止めて、そのまま地面に降り立った。

「言ったろ。君たちを撃墜するのが目的じゃないって」

お兄ちゃんがそう言いながらスバルを地面に下ろした瞬間、スバルが「せいっ！」とブレイクダンスの技の1つ、ウィンドルだっけ？みたいな動きをして、お兄ちゃんの両足を蹴り払った。そして両手を使って跳ね起きながらスバルは「でぇーい！」と両足による突き蹴りを食らわした。

「ぐあああ！　お、お礼ではなくこの仕打ち・・・！」

「た、助けてもらったのは感謝ですけど、やっぱりあなたは敵さんなので！」

――リボルバーキャノン――

――ハイプロテクション――

「ぐぅぅ・・・！」

容赦なくお兄ちゃんに"リボルバーナックル"の一撃を打ち付けるスバル。お兄ちゃんはとっさにバリアを前方に展開して直撃は防げ

たけど、その衝撃には踏ん張りきれずに吹っ飛ばされた。

「ティア！」

「え・・・ええ！」

――クロスファイアシュート――

背中から地面に叩き付けられたお兄ちゃんへと魔力弾３０発を撃ち込んでく。今のお兄ちゃんは、確認できている４つのデバイスの内３つをそこら辺に転がしてるから無手だ。だからお兄ちゃんは半球状のバリアを張って、あたしの爆撃を防御。これがまたかなり頑強でなかなか突破できない。

『ティア、あたしがやってみる！』

『あんた、かなり強烈な電撃食らったでしょ。大丈夫なの？』

『ちょっと意識飛んだけど、もう大丈夫！』

あたしが降らせる弾幕爆撃の中を疾走するスバル。あの子に当たらないように軌道修正しつつ、お兄ちゃんが張り続けるバリアへと撃ち込み続ける。

「うおおおおおおおおおッ！！」

着弾時の爆発音を上回る大声で叫ぶスバルが右腕を振り被りながら

バリアに突っ込むのを見届けつつ、左手に持つ"クロスミラージュ"をモード3・ブレイザー形態へ変形させて、砲撃魔法をスタンバイする。

「リボルバー・・・キャノン!!」

ガキン!と派手な音が響き渡る。スバルはバリアに拳を打ち込んだまま前進を続けてながら、左手に魔力スフィアを1基生成した。そして前進を中断して僅かに後退し、スフィアを体の前に持ってきた。

「ディバイィィン・・・バスタァァァァーーーーッ!」

砲撃をバリアに撃ち込んだ。一際大きな爆発が起きて、ゼロ距離だったこともあってスバルとお兄ちゃんが爆煙に飲み込まれて見えなくなる。そのすぐ後にスバルが高速で後退してきた。

――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ１．０――

派手な爆音と一緒に何かが煙を突き破った。直感に従ったおかげかスバルは真横にヘッドスライディングすることで回避。あたしはお兄ちゃんが徐々に晴れていく煙から歩き出で来たたところで、砲撃魔法の「ファントムブレイザー!」を撃った。

「すまない、ちょっと待ってくれ。非殺傷設定の出来るデバイスをまずは取らせてくれ」

あたしの砲撃を走って避けたお兄ちゃんは、局員時代から使われて

た拳銃型デバイス・"ピースメイカー"の元へと駆け出した。スバルがそんなお兄ちゃんに接近戦を挑む。"マッハキャリバー"の機動力を活かしてのヒットアンドウェイ。頑強な体と防御力、一撃の重さと攻撃力は、スバルは正しく重戦車。お兄ちゃんは邪魔そうな"ラストオーダー"をスバルの攻撃を防ぐ盾、そして振り回しての棍棒扱い。

「（今のお兄ちゃんなら・・・！）クロスミラージュ、ツインダガーモード！」

両手の"クロスミラージュ"をダガーモードへ変えて、あたしは「足止めをお願い！」とスバルにお願いして、お兄ちゃんのデバイスを破壊するために動き出す。スバルは「判った！」と、お兄ちゃんへの攻撃を絶え間なく行ってくれる。

（まずは一番近い大砲から・・・！）

あたしの目的が何なのかを察したお兄ちゃんが「やめなさい！　それ1機でどれだけのコストが！」なんて、心配する事がちょっとズレてることを言い出した。あたしはそれに構わず展開している魔力刃を物理破壊設定へと変える。封印じゃ奪還された際のリスクがあるけど、破壊さえしてしまえば、リカバリーされない限りは使用不可だ。

「させないよ・・・！」

――クロスファイアシュート――

スバルの蹴りをレールガンで受け止め、蹴り飛ばされながらも発射してきた魔力弾、およそ５０発が、「まずい・・・！」あたしへと迫ってきた。あたしは後方に「ラウンドシールド！」を展開して、両手に持つ"クロスミラージュ"を頭上に高く放り投げる。

「借ります！」

そして大砲を拾い上げる。ものっすごい重かったんだけど、なんとか慣性コントロールで抱え上げることが出来た。あたしのシールドを回り抜けてきた残りに４０発くらいへと砲門を向ける。

「いっっっけぇぇぇぇーーーーッ！」

――ブラストディセミネーターーーー

トリガーを引いた瞬間、「っ！？」全身から魔力が根こそぎ吸い取られたような脱力感が襲い掛かってきた。しかも発射の衝撃で数ｍと後ろに吹っ飛んじゃうし。でも３つの砲門から数十発の散弾は発射されて、迫り来ていたお兄ちゃんの魔力弾を全弾迎撃できた。

「ぅく・・・。お兄ちゃん、よくこんなモンスターデバイスを連射できて・・・」

あたしは１発撃っただけでもう疲労が。尻餅をついたことで痛むお尻を他所に大砲を地面に落として、近くの地面に刺さった"クロスミラージュ"を取りに行く。ひそかに考えてた、大砲を撃った後に

落ちてきた"クロスミラージュ"を空中で掴み取り、地面に落とした大砲を突き刺して破壊、というちょっと格好つけた処理は出来なかったけど・・・。

「クロスミラージュ！」

≪Ｃｏｎｎｅｃｔ　ｃａｂｌｅ≫

"クロスミラージュ"のグリップ底から魔力ケーブルを生成して２挺を連結させる。左手に持つ"クロスミラージュ"を「せい！」と大砲へと向かって投擲。魔力刃が砲身の真ん中に突き立った。さらにあたし自身も大砲の元へ急ぎ、そして右手に持つ"クロスミラージュ"の魔力刃で直接大砲を切断して破壊した。

「あああああ！」

お兄ちゃんの悲痛な叫び声。心苦しくはあるけどこんな物騒なデバイスは必要ありません。次に狙うはスナイパーライフル型の"ラストオーダー"。あたしの視線の先に"ラストオーダー"があることに気付いたお兄ちゃんは「もうこれ以上は許さないよ！」って怒った。

「このデバイスだけは使いたくはなかったけ――」

「キャリバー・・・！」

そんなお兄ちゃんの背中に入るスバルの強烈な蹴り。お兄ちゃんは

「うごっ！？」とうめき声を上げながら反り返り、「ショット！」の掛け声と一緒に背中に打ち込まれた追撃の拳でお兄ちゃんは大きく殴り飛ばされて、ある1本の木に叩き付けられたこと止まった。

「あー・・・やりすぎた・・・？」

「・・・良いわよ。防護服を着ているし、たぶんこれくらいじゃないと止められなかったわ」

地面に倒れ伏してるお兄ちゃんの側へと歩み寄りながら、不安そうなスバルへとそう返す。お兄ちゃんまであと5ｍ少しというところで、お兄ちゃんがむくりと起き上がり始めたから、あたしやスバルも構えなおす。

「王よ。無垢なる我らを楽園へ誘いたまえ・・・！」

「きゃあ！？」「うわああ！？」

お兄ちゃんがそう言った瞬間、お兄ちゃんが自爆した。爆炎と黒煙があたしとスバルを襲った。あたしは衝撃波をまともに受けて、体が宙に浮く感覚を得た。そして視界が炎と黒煙で覆われた後、「うぐっ・・・！」地面に叩き付けられてしまった。

「ぅ・・・う・・・お、お兄ちゃ・・・ん・・・、お兄ちゃん・・・！　お兄ちゃん！」

痛みに悶えながら、「お兄ちゃん・・・！」と呼びかけ続ける。無

駄だと判っている。目の前で自爆したのだから。自爆したということは、ううん、出来たということは、お兄ちゃんはサイボーグだったってことになる・・・。

「・・・ア・・・ティ・・・ティア・・・ティア・・・！」

スバルがあたしを呼んでる。でも応えられない。お兄ちゃんの死に様を直で目にした所為で、今のあたしは本当にダメだ・・・。黒煙もようやく晴れてきて、「ティア！」スバルがあたしの姿を確認して近付いてくる。

「大丈夫、ティア！？」

「スバル・・・、あたしは・・・」

スバルに抱き起こされたあたしは、お兄ちゃんが自爆した場所へと目を向けた。お兄ちゃんを構築していた機械部品が至るところに転がっている。視界が涙で滲み始めたその時・・・

――トランスファーゲート――

例の空間の歪みが出現して、「・・・！」目を疑う光景が広がった。お兄ちゃんの使っていた大砲や"ラストオーダー"をそれぞれ脇に挟むように構え、さらに恵比寿の仮面を付けた仮面持ちが3人、歪みから歩き出て来た。

「「「これより管理局員2名を確保する」」」

３人の口から発せられたその言葉はどれも間違いなく「お兄ちゃん・・・！？」の声だった。"スキュラ"のスペアボディを真っ先に思い出す。人格を完全コピーした、性能は落ちるけど戦闘能力は高レベルっていう・・・。お兄ちゃんにもスペアボディがある・・・かも知れないし、いま自爆したのもスペアかも知れない。でもそんな事、今は・・・。

（さすがにあたしとスバルでも、仮面持ち３人を同時に相手は出来ないわ・・・）

「「「クロスファイア・・・シュート」」」

そうしてあたしとスバルは、どれが本物か偽者かも判らないお兄ちゃんの前に敗れ去った。

Ｅｐｉｃａｌ５－Ｃ局員狩り～Ｆｌａｍｅ　ｖｓ　Ｆｌａｍｅ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

「はぁ～、今日も疲れたぁ～・・・」

デスクワークに警邏に捜査にと激務を終えて帰宅の途につく。時計の針はもう深夜１２時を回ってる。あたしはミッド地上本部の首都防衛隊に所属していて、部下１５人のバニングス隊を率いている。んだけど、隊員の中には教会騎士団にかつて勤めていた人も居て、教会騎士団独立の影響で今は休職中。一応、補充要員を回してきてくれたおかげで、まぁ上手く隊が機能してくれてるわ。

（でも言っちゃ悪いけど戦力としてはガタ落ちなのよね・・・）

そんな新生バニングス隊として頑張ってるのだけど、管理局から騎士局員が何百人と一斉に抜けたのはかなり痛い。残業も増えたしさ、チーム海鳴の親友たちともスケジュールがなかなか合わないから、一緒にどこかへ遊びに行けていないわ。

「そろそろまともな休暇がほしいわね～」

なんて文句を独りで垂れながら地上本部の地下駐車場へと降りてきて、自分の車の元へと覚束ない足取りで向かう。早々に家に帰って休もう。とそんな時・・・

――トランスファーゲート――

直感が働いた。無人だった駐車場にあたし以外の誰かが居る。首から提げてる待機モードの"フレイムアイズ"を胸元から取り出す。局員なら足音がするのが普通。わざわざ足音を消して歩く必要なんてないもの。でもこの誰かは足音を消して歩いてる・・・気がする。足を止めて振り返る。シーンと静まり返る駐車場だけど・・・。

（やっぱり誰か居る。しかもかなりの手練だわ・・・！）

疲労で省エネモードになってた頭を戦闘モードへと切り替える。そして「さすがはチーム海鳴の魔導師ですね」って、変声魔法を使っているのか機械的な声色でそう言う、オペラ座の怪人のような「仮面持ち・・・！」があたしの前に姿を見せた。

「お初にお目に掛かる。私は最後の大隊（レッツト・バタリオン）が1人、ルインと申す」

「ルイン？　当然本名じゃ・・・」

「ありませんね。コードネームですよ。意味は、赤い炎、です」

ルインで赤い炎か。ミッド語じゃないのは確かかね。コイツを捕まえた後、色んな言語に詳しいルシルにでもどこの世界の言葉か教えてもらおうかしら。

「で？　あたしの前に現れた理由は何？　出頭してくれるのなら大歓迎なのだけど？」

あたしがそう聞くと、ルインは何も言わずに学ランのポケットから小さな球体を取り出して、足元へと無造作に落とした。ガラスみたく割れた後、得も言われる何かがブワッと広がって、駐車場が「結界・・・？」のようなものに覆われて灰色の世界となった。

（魔法・・・？　にしては魔力を感じなかったわね・・・）

「あなたを拉致にしきました。大人しく投降してくれるのであれば、私としては大変嬉しいのですが？」

「「・・・」」

少しの沈黙の後、あたしとルインは「あはは！」って笑い声を上げた。あたしは「今すぐその仮面を剥ぐわ」と"フレイムアイズ"を起動して、防護服へと変身する。"フレイムアイズ"はニュートラルのファルシオンフォームだ。

「とても残念です・・・と言いたいところですが、個人的にあなたとは1対1で拳を交えてみたかった。あなたを墜とした後は、騎士シグナムを墜とすつもりです。チーム海鳴の二大炎熱使いに勝利する。それが目下わたしの目標です」

――炎纏人――

そう言ってルインは足元にベルカ魔法陣を展開して、噴き上がる炎の渦に飲み込まれた。渦が消えると、ルインは全身を炎を纏った状

態で構えを取った。炎に包まれた中で怪しく光る2つの目がスッと細められた。来る。そう思った瞬間・・・

「参る！」

あたしに向かって駆け出してきたから、こちらも"フレイムアイズ"の柄を両手で握り締めて交戦に入る。繰り出される左拳に「バーニングスラッシュ！」と炎の斬撃で迎撃。ルインの燃える拳が刃面と激突。剣身と拳が纏っている炎が周囲に散らばるんだけど、結界のおかげか車への引火は防がれてるわ。

「おおおおおッ！」

「むううううう！！」

あたしは燃え続ける"フレイムアイズ"を振り続け、ルインは燃える拳や蹴りであたしの攻撃を迎撃してきた。それだけでコイツが高レベルの騎士であることが判る。まぁシャルやルシル達から、大隊のメンバーにはヤバイくらいに強い騎士が多く居る、っていう話は聴いていたけど。

「でもま、チーム海鳴内での模擬戦で鍛えたあたしにはまだ足りないわ・・・！」

――タイラントフレア――

"フレイムアイズ"の剣身に纏わせている炎の最大火力を引き上げ

させると、ルインは「っ・・・！」その衝撃に後退した。アイツが体勢を立て直すより早く接近する。繰り出される上段蹴りを身を屈めるで躱した。利き足を踏みしめ・・・

「タイラント・・・フレアッ！」

「むぐぅ・・・！」

全力の火炎斬撃をルインの横っ腹に打ち込んでやったわ。全身を炎で包んでるアイツを、今度はあたしの炎で覆ってやって、さらに爆発させてやった。吹っ飛んだアイツは誰かの車に突っ込み、他数台を巻き込みながら駐車場の壁に突っ込んで、その車の下敷きになった。やりすぎ、とは思わないわ。手応えからして今の一撃で終わったとは考えられない。

「はっはっは！　いやぁ、なるほど。確かにこれは強い」

――爆乱覇――

スクラップと化した車の山が大爆発を起こして、バラバラに吹っ飛んだ機械部品や炎の礫が全方位へ向けて飛んだ。さすがに車の残骸は受けきれないって判断したあたしは回避行動に入って、炎弾だけは"フレイムアイズ"で斬り伏せた。

――紅狼駆――

その中でルインが姿勢を低くした状態で高速突撃してきた。前に向

かって突き出され、開いた指を直角に曲げた両手は、まるで犬か狼の口を思わせるわ。でも突進攻撃ならせめて「アインスの速度を超えなさい！」って無茶なことをあたしは叫んだ。チーム海鳴において陸戦・空戦共に最速のアインス。あの子の突進だけは完全には避けられないわ、あたし。

「せぇぇぇぇい！」

"フレイムアイズ"を野球のバットに見立ててフルスイング。速度はともかくルインの突進力はかなり強くて、腕がへし折られるかと思ったけど、「とぉりゃあああああ！」とアイツをまた吹っ飛ばして、車の列に突っ込ませてやったわ。

「フレイムアイズ、バヨネットフォーム」

≪応！≫

"フレイムアイズ"を銃剣形態へと変える。刃に高熱を付加するフレアブレードを発動して、戦闘スタイルを中距離へと変更。ひしゃげた車の山の中から「素晴らしい、実に素晴らしい！」って興奮気味なそんな言葉が。車1台を両手で持ち上げながらルインが瓦礫の山から姿を見せた。

「直進的な攻撃ではカウンターの餌食ということですか・・・！」

放り投げられる車を横っ飛びすることで躱すと同時、「獄火拳！」と拳の形をした火炎弾を6発ほど撃ってきたけど、横っ飛びからの

側転でそれらも回避。負けじと「フレイムバレット！」と連射。

「ふんっ！」

ルインは足元の車を直立になるよう蹴り上ることで盾とした。火炎弾が車の腹下に着弾したことで大爆発して、ルインがまたも爆炎に飲み込まれた。ま、どうせ何ともないのでしょうけど。

「しかしながら私はご存知のとおりベルカ式の使い手。真っ直ぐが心情・・・です！」

片手でそれぞれ車を持ち上げたルインは「行きます！」と車をまた放り投げてきた。あたしは短距離高速移動魔法の「フォックスバット・ラン！」を発動して、飛んでくる車を避けながら「フレイムバレット！」を連射。

「炎奪者・・・！」

両手に炎を纏わせたルインは、防御も回避もせずにあたしの火炎弾を真っ向から受け止めた。あたしの火炎弾は爆発することなく、アイツの手の中に「吸収・・・！？」された。

「私は灼熱をも呑み込む業火の騎士。すべての炎は、我が炎の前にひれ伏す。そこに例外は無し」

「力説どうも」

対炎熱魔法の騎士というわけね。相性的には悪いのでしょうけど、吸収するのにも限界はあるはずよ。だから「フリンジングボム！」とバスケットボール大の火炎弾を3発と連射。ルインは「燃料ありがとうございます！」って燃える両手の平を火炎弾に向けた。吸収されるより早く「ファイア！」って号令を掛けて3発動時に炸裂させた。アイツが爆炎に飲み込まれたのを確認。

「フレイムアイズ、クレイモアフォーム！」

≪応よ！　一気に片を付けるんだな！≫

炎熱魔力を半実体化した大剣形態へと変形させて、上段に構えつつカートリッジを4発連続ロード。伸ばした剣身に僅かに炎を纏わせ、爆炎の中から飛び出してきたルインへと向けて・・・

「ヴォルカニック・・・スカッシャァァァァーーーーッ！！」

振り落とした。ルインは斬撃を受け止めることなく走り続けながらも半歩分横に軌道変更して、あたしの斬撃を躱した。吸収しなかった、吸収できなかった、2つの考えがあるけど、今はそんな事は横に置いておくわ。

「でぇぇぇぇいッ！」

振り下ろした"フレイムアイズ"の軌道を、ルイン目掛けて横へと切り替える。ほぼ振り下ろし終えていたこともあって、アイツの膝くらいの高さになったけど。とにかくジャンプして避けたところで

斬り上げてやるわ。というあたしの考えを、アイツは魔力刃を踏みつけるっていう方法で斬撃に対処した。

「（なら・・・）バーストアップ！」

半実体化を解除して、純粋な炎へと戻して爆破させた。足元からの爆発にルインは、炎を吸収することなく何度目かの炎塗れに。爆発の衝撃波でアイツが天井に叩き付けられたのが判った。力なく黒煙の中に落下して、少しの間の静寂の後・・・

「これは驚きましたよ。いやぁ痛い痛い」

マントや学生帽、さらには仮面すらも原型を留めてないほどのダメージを負っているようだけど、声色は未だに余裕に満ちているわね。それに目出し帽がある所為で素顔は確認できないけれど・・・。

「結構ボロボロね。吸収するには何かしらの条件があると見たわ」

「そうですね。それはあなたご自身で考えてください・・・！」

――炎纏人――

ルインがまた全身を炎で覆うモードに入った。あたしも爆破した魔力刃を再展開させて、突進してきたアイツへ向けて斬撃を繰り出す。アイツは避けることなくあたしの薙ぎ払いを両手でガキィンと受け止めて、グッと鷲掴んだ。

「ふぅん！」

「ちょっ・・・！」

そのままあたしをジャイアントスイングのように振り回した後、ルインは「あなたも一度、車に突っ込んではいかがですか？」って言って、あたしを車の列へと放り投げた。ルインは飛行魔法を使えないのかしら。ぶつかるより先に飛行魔法を発動してしまえば、宙で制動を掛けることが出来る。

――紅狼駆――

「劫火拳！」

とそこに、炎の塊となって突進してきたルインによる掌底が繰り出された。シールドを張るより早く魔力刃の腹で防御したけど、突進力も加味されてるから「重！」い一撃だった。だからあたしは宙での踏ん張りも効かず、「きゃああ！？」車の列に背中から突っ込んだ。直前に"フレイムアイズ"が背中にバリアを張ってくれたおかげで、ダメージは軽微だったけど・・・。

≪追撃くるぞ！≫

「ん！」

その警告に従って、あたしを取り囲んでる車を魔力刃の腹で薙ぎ払う中、目前までルインがすっ飛んで来ていた。振りかぶられていた

燃える右拳があたしの顔目掛けて繰り出される。ここはルシルのやり方を真似てみようかしらね。左手に魔力を分厚く纏わせて、アイツの拳を覆うように優しくキャッチしつつ、受け止めるんじゃなくて後方へと流すように引っ張る。

「とりゃぁぁぁぁぁ！！」

そして右手に持つ"フレイムアイズ"の柄尻をアイツの鳩尾に打ち込んで、ルインを宙で前転させるように放り投げた。アイツが宙で体勢を立て直して着地するより早く振り返って・・・

「ヴォルカニック・スカッシャァァーーーーッ！」

アイツの・・・その、男の人にとって大事なところ目掛けて"フレイムアイズ"を振り下ろした。アイツはまともに斬撃を受けて、車を大きく潰しながら沈んだ。手応えからして未だに、勝った、って断言できないわ。クレイモアフォームの魔力刃は、シールドやバリアなどを魔法無しで破壊できるようになってるんだけど・・・。

（コイツの防御力侮りがたし、ね）

カートリッジを3発ロードして、いつでも再攻撃が出来るようにスタンバイ。全身を覆っていた炎は完全に消え失せていて、ルインも仰向けに大の字で倒れてる。たとえ起き上がったとしても、そこで容赦なくでトドメを撃ち込ませてもらうわよ。

「く・・・う・・・ぐぅ・・・！」

「投降してもらいたいのだけど？」

呻き声を上げながら寝返りを打とうとしてるルインにそう勧告すると、アイツは「ご冗談を・・・」って断った。だから「そう。残念よ」とあたしは"フレイムアイズ"を振り上げる。

「ヴォルカニック・・・スカッシャー！」

もう一度斬撃を直接お見舞いしてあげた。ただでさえすでにスクラップ状態だった車が、今の一撃でバラバラに吹っ飛んだ。さっきまでは妙な手応えだったけど、今の一撃で"フレイムアイズ"から伝わる手応えは、勝った、と思えるものだった。"フレイムアイズ"を肩に担いで、完全に伸びてるルインを見下ろしていると、体の輪郭が崩れ始めた。

「・・・。ん？・・・ちょっ、はぁ！？」

細い体格だったルインが、それはもうゴツイ体格へと変身（というよりは戻った？）した。ザフィーラの人型モードのように筋骨隆々で、服装は信じられないことに「神父服・・・！」だった。しかもあたしは、この男に見覚えがあった。

「名前は確かそう・・・ガリホディン、・・・ガリホディン・ダムマイアー」

聖王教会騎士団の騎士であり、さらに言えば脱退したルミナの代わ

りにパラディンへと繰り上げ昇格した拳闘騎士だ。頭の中で最悪の展開が次々と浮かんでくる。仮面持ちの正体が現役のパラディン。となると、他の仮面持ちの中にも教会騎士団に関係する人間がいるかもしれない。

「早くみんなに報せないと・・・・！」

とはいえ、騎士ガリホディンが気絶してるのに結界は解除されていないのよね。どうやったら解除できるのかしら。辺りを探索してみるけど、結界解除に至る術を見つけ出すことが出来なかったわ。

「あ〜驚いた。ワタシの魔法と魔力だけしか使ってないとはいえ、ワタシのロードを倒しちゃうなんて。あまりの威力にワタシまで一時ダウンしちゃってたし。あなた、強いのね♪」

幼い女の子の声が、倒れ付したままの騎士ガリホディンから聞こえてきた。バッと振り返ると、ゆっくりとだけと起き上がってく彼の姿が。気になるのは声だけじゃなくて、髪の色が青から紅色に変化していた。もうこの段階で声の正体が何か察することが出来た。

「融合騎・・・・！」

「どうもはじめまして。最後の大隊（レッツト・バタリオン）所属の融合騎、ゼヒツェーンテです！　融合騎がいるっていうのはとっても秘密なので、誰にも口外しないでね〜！」

騎士ガリホディンの閉ざされた口から聞こえてくるゼヒツェーンテ

（意味は、１６、か・・・）の陽気な声。口外するなって言っておいてあたしに名乗るということは、「あたしを生かして帰すつもりはない？」ということになりそうね。

「殺すことはないよ。ただ捕まえて、ちょっとの間眠っていてもらうだけだよ」

「それだけで十分恐ろしい話よ。アンタも騎士ガリホディンと一緒に逮捕するから、大人しく投降しなさい！」

「ダーメ。閣下からの命令だもの。ちゃんと果たさないと怒られちゃう」

「残念よ」

――リングバインド――

本体である騎士ガリホディンの４つのバインドで簀巻きのように拘束する。防護服を着用していないし、攻撃魔法にするといくら非殺傷設定でも重傷を負うことになるもの。ゼヒツェーンテは「ほら、起きて、ロード！　捕まっちゃう！」なんて今さら言い出した。起こしてからあたしと話せばよかったのに・・・。

「とにかく、最後の大隊の一員であるあなた達を逮捕します。ので、結界の解除をすぐに行うように」

通信も念話も上手く繋がらない以上は、やっぱり現実に戻るしかな

いわけで。でもゼヒツェーンテは「おーい、おーい！」ってあたしの話を聞こうとしないし。もう壊しちゃおうかしら。"フレイムアイズ"のマガジンを交換して、カートリッジを新たに3発ロード。魔力刃に防御魔法以外の魔法破壊効果を付与させたそのとき・・・

――トランスファーゲート――

ギュィーン！と聞き覚えのある駆動音がフェードインしてきた。振り向くとほぼ同時、もうすぐそこまで来ていた新たな仮面持ちを視界に収めた。円形の仮面と目出し帽と黒のセーラー服。何より目が行くのは、両腕に装着された"リボルバーナックル"と、両足の"マッハキャリバー"。左腕にも"リボルバーナックル"が装着されているのが妙だけど、背格好からしても・・・

「スバル・・・！？」

としか思えない仮面持ちだった。だから「スバル！　スバルなんでしょ！」って呼びかけながら、スバル？の攻撃を捌き続ける。

「せぇーい！　やぁー！　とぉー！」

「変声魔法も使っていない、まんまスバルの声じゃないの！　あんた、何やってるの！」

「ス、スバルじゃないです！　最後の大隊の1人、アングです！」

「動揺してる時点でそうでしょうが！　ゼヒツェーンテ！　あんた

達、スバルに何をしたの！？」

スバルが最後（そっち）の大隊側に付くなんて絶対×１００でもありえない。まず連中に洗脳みたいなことをされたに違いないわ。ゼヒツェーンテは「ワタシは何もしてな～い」って答えた。わたしは、か。ゼヒツェーンテ個人は関わってない、って話で良いのよね。

「魔導師アリサ・・・さん！　あなたを確保します！　お覚悟を！」

「・・・はあ。もういいわ、やってあげる。その代わり痛い目に遭う覚悟はしておきなさいよ、スバル！　フレイムアイズ、ヴァラーフォーム！」

≪おいおい、後輩相手にヴァラーはやり過ぎだろ！？≫

"フレイムアイズ"がそんなことを言うけど、スバルって普通にバリア貫通の一撃を打ってくるのよね。だから防御より攻撃を優先していかないと、変なところでカウンターを食らって撃墜なんてこともある。

「だから先手必勝！」

≪しゃあねぇな！　いくぜ！≫

スナイパーライフルのような長い銃身の両側に反りの無い直刀が２つある、１ｍ半くらいの長さの実体ある大剣と、１ｍくらいのソードブレイカー状の魔力剣の二刀流というスタイルになる"ヴァラー

フォーム"。直接攻撃系魔法と射砲撃魔法を一度に行える、あたしの切り札よ。

「フレイムバレット！」

大剣にある銃口から火炎弾を連射。スバルは"マッハキャリバー"の運動性能をフルに活かして右に左にと回避しつつ、余計切れないものはシールドを張って防御。そのままあたしに向かって突っ込んでくる。けど、近接特化のあんたを懐に近づけるほどあたしは馬鹿じゃないわ。

「イジェクティブ・ファイア！」

火炎弾に混じって砲撃を発射。最初に火炎弾でスバルの軌道に制限を掛けて、左右に避けられないようにしてからの火炎砲。スバルはギリギリで「ファイアプロテクション！」を前面に展開して防御した。爆炎と黒煙に呑まれるそんなスバルへ向けて・・・

「ヴォルカニック・スカッシャー！」

２つの直刀に展開した数ｍの半実体化魔力刃による横払いの斬撃をお見舞い。でもあたしの一撃は空振り。それは何故か。その答えはすぐに見ることが出来た。あたしの斬撃によって黒煙が晴れる中・・・

――ウイングロード――

魔力で構築された道が駐車場内を走った。ソレを疾走してくるのはスバル。なるほど、あたしの斬撃をジャンプして躱すと同時にウイングロードを発動したわけね。ウイングロード上を疾走するスバルの移動速度は速く、あたしの射砲撃じゃ追いつけない。となれば、「ウイングロードを破壊するだけよ！」と、あたしは「フレイムバレット！」をウイングロードへ向けて発射。

「あわわ！」

スバルの行く手を先に破壊すると、あの子は慌てながらもジャンプして下を走るウイングロードへ着地しようとした。だから着地を狙って火炎砲「イジェクティブ・ファイア！」を撃ち込んだ。

「ちょっ、待っ、まぁぁぁぁーーーーー！？」

対炎熱魔法防御を発動することなくドォーン！と直撃。でもスバル自身の防御力も侮れないから、あの子が墜落した場所へと大剣の銃口を向ける。

「私との戦闘も再開と参りましょうか！」

スバルへと意識を集中しすぎていた。まさかの伏兵があの子だったって事もあって・・・。あたしの背後に迫ってきていた騎士ガリホディン。振り向き様に視界の端に捉えたアイツは、燃える右拳を今にも繰り出そうとしていた。

――劫火拳――

「くっ・・・！」

体を捻りながら後ろへ向かって飛びのく。目の前を通り過ぎる騎士ガリホディンと目が合った。追撃に注意しながらも、スバルの動向にも警戒する。黒煙の中から飛び出してくるあの子を視認。１対２の、若干旗色の悪い戦闘。さぁどうしようかって考えていたところで・・・

――トランスファーゲート――

「シューット！」

――クロスファイア・ツインバースト――

これまた聞き覚えのある声、そして魔力光があたしを襲った。スバル、騎士ガリホディンだけだって考えていたあたしが間抜けだった。まさか「ティアナ・・・！？」まで敵の手に落ちていたなんて・・・。ティアナの砲撃の直撃を受け、さらに騎士ガリホディンとスバルの拳打を受けたあたしは、意識を繋ぎとめることが出来なかった。

Ｅｐｉｃａｌ５－Ｄ局員狩り～Ｆｉｅｒｃｅ　Ｄｅｍｏｎ～

†††Ｓｉｄｅ？？？†††

「大手柄。教会騎士団、またも最後の大隊メンバーを逮捕・・・か」

今日も私のかつての上司や先輩方の所属する騎士団が、次元世界で暗躍している犯罪組織の一員を逮捕したという、活躍を報せるニュースがモニターから流れました。だから私は「さすがシャル隊長たちです！」と感動して、握り拳を作ります。私ミヤビ・キジョウは、シャル隊長たちに負けないように、管理局側で頑張るのだと。

――ミヤビ。わたし達は必ず、教会騎士団独立の件をどうにかして本局へ戻ってくる。だから、その・・・活動停止中の特騎隊を再開する事になったら、わたし達の隊に戻ってきてくれる・・・かな？

――

――もちろんですとも！　待っています、シャル隊長。私、ミヤビ・キジョウ陸曹。いつまででもお待ちしています。再びシャル隊長の下、そして皆さんと一緒に働ける事、私・・・ずっと待っています！

――

――ありがとう、ミヤビ！　必ず戻ってくる。待っていて――

特務零課――特殊機動戦闘騎隊は今、教会騎士団独立という大問題の影響で無期限の活動休止中なのです。何せシャル隊長を始めとし

た局に勤めていたベルカ騎士の大半が、教会騎士団からの命令で管理局員を強制的に無期限の休職扱いとされてしまったのだから。でも退職ではなくて休職なのが幸いですね。

（だからこそシャル隊長の、待っていて、を信じることが出来る）

モニターを消して、管理局の制服への着替えを終えて鏡台に映る私を見る。薄い桃色の長髪を三つ編みにして、「よし」と身嗜みの乱れのチェックも終える。私室からリビング、エントランスへと向かい、誰も居ない家の中へ「いってきます！」と挨拶した。天涯孤独の身である私を引き取ってくれた両親は、騎士団独立からほとんど家に帰れていない。共に本局の幹部的な地位にいるので、火の車状態の局の立て直しに時間を割かれているのです。

「・・・今はシャル隊長たちを信じましょう！」

渋滞を回避するための手段として選んで購入したバイク（ルシル副隊長のリバーストライクより一回り小さいですが、馬力はありますよ）に乗り、私の新しい配属先であるミッドチルダ鉄道警備隊の中央第３隊舎へ向かう。仕事内容は隊名のとおり、中央区画のレールウェイやリニアレール、そのホームで起こる犯罪を取り締まったり、重要な貨物を運搬する車両の護衛をしたり、各路線の整備班に同伴したり、いろいろあります。

（特騎隊の時ほど戦闘ばかりではないですが、お客様からありがとうとお礼を頂くと、とっても嬉しいのです）

特騎隊時代に比べて派手な戦闘の頻度はものすごく落ちましたが、充実した任務に就けています。今日はどのような仕事が待っているでしょう、と考えていたところに「通信？」を報せるコール音が鳴りました。モニターを展開せずに「はい。キジョウです」とサウンドオンリーで通信を繋げます。

『おはようございます。鉄警隊本部です。キジョウ陸曹、エマージェンシーです。東部メラン地区～中央区画・ファーストエリア間のリニアレールがトレインジャックされました』

地上本部内に在る鉄道警備隊本部から直接の連絡でした。貸切の貨物車両が数人のテロ犯にジャックされ、搭載されている貨物は数トンもある爆薬とのこと。要求が受け入れられない場合、人の多い場所で自爆テロを起こすと地上本部に宣言したようです。

（要求は数週間前に逮捕された、マフィア――アガルタファミリーのボスと幹部数名の釈放。地上本部はテロに屈することなく、これを解決するようにと鉄警隊に打診しました）

現場に近い場所に住んでいる隊員全員に通達しているそうで、私にも現場へ至急向かうように指令が下りました。オペレーターの方に「了解しました。キジョウ陸曹、現場に向かいます！」と応じ、隊舎ではなく問題の車両が走っている路線へハンドルを切る。

「あの車両ですね・・・！」

風切り音と共にトンネルから高速で飛び出してきた１３両編成のリ

ニアレール。路線、時間、編成数などから、ジャック（というよりは、元よりテロ用に用意されていたものだそうです）された車両であることをしっかり確認です。

「本部、こちらキジョウ。ターゲットを視認しました。指示を願います」

『了解。現在、各関係者の協力のおかげで、目標の車両が目的地であるファーストエリアに到達できないようレールの切り替えが操作され、人口密度の少ない郊外へと路線変更されていますが・・・』

「それ、気付かれていないのですが？」

『いえ、気付かれています。すぐに路線を元に戻さないと自爆する、と伝えてきましたが・・・。未だ行われる事なく走行中です』

「なかなか危ない選択をしますね・・・」

本当に自爆されたりでもすれば、その被害は恐ろしく甚大になるでしょうし。オペレーターさんは『上司の指示でしたので・・・』と不満そうな声で答えてくれました。ですよね、と私は小さく嘆息です。私は上司の方に恵まれていましたね。

『コホン。えー、万が一の自爆に備え沿線周囲の住民の避難を始めていますが、なにぶん出勤・通学ラッシュ時間が重なってしまい、ステーションや沿線周囲にはなおも人が多く居ります。郊外へはまだ時間が掛かりますし、この状況で自爆されてしまうとその被害は

・・・』

「計り知れませんね。要求受諾の引き伸ばしが行われる中で、自爆テロを起こされないように速やかに実行犯の確保と車両の停止、ですか・・・」

実行犯は少なくとも４人という話です。状況が状況ですし私ひとりでは荷が重過ぎますので、「他の隊員は？」と尋ねます。せめてあと１人、腕のある魔導師がいてくれれば１対２に持ち込めてるのですが。爆薬関係がなければ４人程度の魔導師であれば私ひとりで撃滅できますが・・・。

『はい。第２隊より・マイヤ・フェロー准陸尉、第３隊よりアントワネット・コレフシ三等陸尉の２名が、もうじき現着します。３名が揃い次第、車両へ突入。制圧に動いてください』

私の上司にあたるコレフシ三尉は知っていますが、フェロー准尉はよく知りませんね。三尉はＡＡ＋ランクの陸戦魔導師で、私が配属された際はとても喜んでいらっしゃいました。三尉の戦い方は知っていますから、打ち合わせをせずとも合わせられる自信があります。

「了解です。ではターゲットに接近するため、レール内への進入の許可を願います」

『少し待ってください。・・・キジョウ陸曹との位置リンクを完了。ウォルターステーションの避難がじき終わります。そこからバイクのままレール内へ進入してください』

「了解です！」

通信を一旦切り、沿線をひたすら走ります。そして目的のウォルターステーションに到着し、陸士隊やステーションの職員さんの誘導で避難を終えているお客さんの姿を視認。バイクを職員さんの前で停車させ、「お疲れ様です！　鉄警隊のキジョウです！」と敬礼します。

「あ、お疲れ様です！　本部よりお話を伺っております。構内は無人となっていますので、いつでも進入可能です」

「判りました。では、行って参ります！」

普段は決して出来ないステーション構内をバイクで進入します。改札を抜けてホームからレールへ降り、フルスロットルで車両を追いかけます。その最中、『キジョウ陸曹！』と念話が入りました。相手は『コレフシ三尉！」でした。

『三尉！　今どちらでしょうか！』

『あなたの右隣よ！』

その返答に従い右へと視線を向けると、レールと沿線を隔てる半透明のフェンスの向こう側に1台のジープが併走しており、後部座席に三尉が立っており、運転席には陸士隊服を着用している見知らぬ女性が1人。

『そちらのタンデムシートに移りたいの。ちょっとフェンス側に寄ってくれる？』

『え、あ、はい』

三尉の手招きに従ってフェンス側へバイクを寄せると、「じゃあマイヤ。後続の隊と一緒に合流ね」と、運転席の女性――フェロー准尉にそう伝えました。フェロー准尉は頷いた後、私を見て「このじゃじゃ馬、宜しく」と言ってウィンクしました。

「じゃじゃ馬て・・・」

「りょ、了解です！」

三尉が大きく跳び上がってフェンスを越え、私のバイクのシートに上手く着席しました。フェロー准尉の敬礼に私も敬礼を返し、三尉の「じゃあ乗り込むわよ！」という指示に、「了解です！」と応じて、さらに速度を上げて車両の最後尾に再接近する。その最中に・・・

「フェーニクスフェーダー、セットアップ！」

髪飾りとして側頭部に付けている赤い羽根型のアームドデバイスを起動して、薄い紫色の小袖と紫色の袴という防護服へと変身します。三尉も「パイレイトアームズ、セットアップ！」と、錨の形をしたペンダント型デバイスを起動しました。

三角帽子（トリコーン）、腹部丸出しのチューブトップ、アスコットスカーフ、ミニスカート、ジュストコール、サイハイブーツといった、物語に登場する女海賊のような防護服へと変身しました。三尉のご先祖様は、高町教導官や八神司令と同じ第９７管理外世界の出身らしく、正真正銘の海賊だったそうです。

「（オートパイロットにしまして・・・っと）コレフシ三尉、いつでも飛び移れます」

「判った。それじゃ私から先に行かせてもらうわ！」

器用にシートの上に立ち上がった三尉が「あらよっと」と身軽な動きで車両の屋根の上に飛び移りました。私が離れたら自動で減速し、運行の邪魔にならない場所で停車するよう設定したバイクの上に私も立ち、「えいっ！」と屋根の上に飛び移る。

「行きましょ！」

三尉に続いて前の車両へと私も屋根の上に飛び移り、レールの端っこに移動して減速していくバイクを見届けました。そして私と三尉は、先頭車両を目指して屋根の上を駆け抜けます。１３両編成という結構な数の車両の上、その速度もかなりあるので屋根を進むのは少々難しいですね。

「大丈夫？　車内を進む？」

「いえ、問題ありませ――あっ、三尉！」

車両と車両の合間から2人の男性が顔を出し、「くそっ、局員か！？」と怒声を上げ、ライフル型のデバイスの銃口を私たちに向けました。引き金が引かれると同時に発射される魔力弾。三尉は左太もものホルダーより40cmほどの柄を抜き放ち・・・

「スナッチウィッパー！」

柄の先端より水色の魔力で構築された鞭を展開し、迫り来る魔力弾を迎撃。魔力弾は弾かれるのではなく、魔力の鞭に吸収されました。男性たちは「自爆されたくなきゃ、とっとと失せな！」と、さらに魔力弾を連射してきましたが、三尉の鞭によって私たちには1発たりとも届きません。

「行きます・・・！」

私は屋根を蹴って男性たちの元へと接近を試みます。銃口が私ひとりだけに向けられますが、私の移動速度に合わせて振るわれる鞭のおかげで、私は防御も回避もせずに一直線で男性たちの元へと到達することが出来ました。

「没収です！」

男性たちからデバイスを引ったくり、純粋な膂力のみで潰して処理しますと、「うひっ！？　化け物！」なんて、かなりショックな言葉を投げかけられてしまいました。別にいいですもん。親しい人や仲間から理解してくれるだけで十分ですもん。

「キジョウ陸曹。連中は私が拘束しておく。先に行っていてちょうだい」

――バインディングウィップ――

「「ぅぐ・・・！」」

三尉は鞭をリングバインドとして切り離し、男性たちをしっかりと拘束しました。そして2人を拘束しているバインドを引っ掴み、男性たちが出て来た車両との合間へと向かいました。私も三尉の後に続き、車両の合間を覗き込みました。

「あのドアから入れるのね・・・。キジョウ陸尉、私は車内でこの2人からいろいろと聞くわ」

私は三尉と男性たちを一瞥した後、「了解です！」と応じて、屋根伝いに先頭車両へと再び向かい始めた中・・・

「それで？　積荷の爆薬の起動方法は何？　リモコン？　時限？」

「うるせぇ！　とっとと離しやが――ぐえっ！？」

「バインドの締め付けが強く・・・！？」

「あなた達、指名手配されている連続強姦犯と強盗犯よね？　まさかアガルタファミリーにいたなんて。・・・ともかく、そんなどう

しようもない屑なあなた達に、ちょっとでも手心を加えるとでも？
　正直に包み隠さず答えなさい」

三尉が珍しく本気で怒っていますが、男性たちの正体を聞けば当然の話です。私も1発くらい拳を打ち込んであげればよかったです。何か判れば念話で報せてくれるでしょうし、私は私の仕事をしましょう。4両ほど駆け抜けた頃・・・

『キジョウ陸曹。爆薬はどの車両にも無いそうよ。完全な嘘っぱち、虚言、脅し文句だった。本部にもすでに連絡を終えたわ。だから、キジョウ陸尉！』

三尉からの嬉しい報告に「はい！　残り2名、全力で逮捕します！』と応じ、さらに速度を上げて一気に先頭車両へと到着します。2両目との合間に降り立ち、先頭車両のドアが開くのを待ちますが、「やはりロックが掛かっていますか・・・」と一息吐き、右手に魔力を付加します。手動で開閉するための凹みに指を掛け・・・

「ミッド地上本部・鉄道警備隊、ミヤビ・キジョウです！　大人しく武装を解除し、投降してください！」

無理やりドアを開くと、事前に聴いていたとおり残りの男性2名が居り、1人は「もうここまで来やがったのかよ！」と苛立ち、ライフル型デバイスの銃口を向けてきました。そしてもう1人は、そんな彼に「待て！」と声を掛け、私をジッと見つめました。

「まさか・・・おい、まさか・・・うそだろ！　ミヤビ・キジョウ！？

あの鬼神！？　マジか！・・・ありえねぇ！　最悪すぎんだろ！」

文字通り頭を抱え、「もうダメだ・・・」と膝を屈しました。デバイスを構えていた男性も「なん・・・だと？」と力なくデバイスを降ろし、そのまま床にガシャッと落としました。

「そのまま武装を解除していてください。・・・コレフシ三尉、先頭車両の確保が完了しました。これより減速を開始します。ご注意を」

『了解。本部には連絡した？』

「あ、いえ、これからです」

『そう。減速を開始してから私も先頭車両へ向かうわ』

三尉との通信を終えたと同時、「はは！　ははは！　そうだ、俺たちにはコレがあるじゃないか！」と、私にデバイスを構えていた男性が笑い声を上げ、腰から拳銃型デバイス・・・ではなく、「質量兵器・・・！」としての拳銃を取り出し、その銃口を私に向けました。

「実弾では・・・私の素肌はもちろん、防護服ですら貫通できませんよ？」

「へへ。試してみるかい？」

「よせ！　反撃でもされたら碌な目に遭わないぞ・・・・！」

「１発で殺せばいいんだろ！」

妙な自信ですけど・・・。ふと、管理局全体に通達された、ある質量兵器を思い出しました。ルシル副隊長の防護服――フィールドすらも貫通する、特殊な実弾と拳銃が世に出回っていると。その資料に添付されていた拳銃の画像と、男性が構えている拳銃は瓜二つです。ひょっとして、今まさに私に向けられている拳銃は件の危険兵器なのでは、と考えます。

「（念のために・・・！）鬼神形態顕現・魔鬼降臨」

額より無色の半透明な角を生やします。私は神話や伝説に語られる鬼という生物の遺伝子？を基に生み出されました。普通の人より体が頑丈で、自己治癒力もすさまじい。この怪物のような体質を恨みましたが、この力だからこそ多くの人を救え、助けられる事が出来るようになる、と教わりました。あぁ、その通りだな、と目からうろこでした。否定ばかりの私に与えてくれた光明。ルシル副隊長には感謝ばかりです。

――鋼強鉄化――

魔法ではない鬼の身体資質による全身の強化を行いました。魔力防御を貫通する弾丸が万が一に着弾しても、重傷や即死は免れるはずです。

「鬼神・・・！」

「くっっっそぉぉぉぉーーーーっ！」

銃声が連続で轟き、銃口よりドリル状の弾丸が放たれたのが見えました。紙一重で回避しつつ男性の元へ駆け出します。接近すればするほど避けづらくなり、着弾を許してしまいました。弾丸は確かに私の防護服を貫通しましたが、頑強にした鬼としての肉体には傷は付きませんでしたね。

「なにっ！？」

「せいっ！」

「ごふぅ・・・っ！？」

再接近すると同時に男性の左頬に鉄拳制裁です。殴り飛ばされた彼は壁にぶつかり、ぐったりと座り込みました。手加減はしたのですが、と考えた瞬間、両腕もガチガチに鉄化していることを思い出し、「やってしまいました・・・」と深く反省です。

「こ、降伏する！　列車も今すぐに停車させる！　だから殴らないでくれ！」

顔を青褪めさせ、涙まで流して土下座する男性に「す、好きで殴っているわけではありません！」と反論します。鉄化を解除し、角も霧散させます。鬼の角は普段、魔力素として私の全身を駆け巡り、

鬼としての特異体質を発揮してくれています。

「では至急、停止させてください」

「は、はい！」

男性がコンソールを操作し始めると、車両の速度も徐々に落ちていきました。ホッと一安心し、倒れている男性に手錠を掛けるために歩み寄ろうとしたとき・・・

――トランスファーゲート――

「悪を処断します」

「「っ！？」」

それはあまりに突然に起きた殺人でした。コンソールを操作していた男性がいきなり頭部を撃ち抜かれて絶命してしまいました。声と銃声のした方へ振り向き終えるより先に、さらに2度目の銃声。人体への着弾音がいやに耳に残りました。

「誰ですか！？　このような非道な真似・・・！」

――鬼神形態顕現・魔鬼降臨――

再び角を生やし、ようやく振り向き終えて「仮面持ち・・・！」を視認しました。セーラー服と目出し帽とドクロの仮面。右手にはデ

バイスではなく質量兵器としての拳銃が1挺握られています。

「なぜ殺したのですか！」

「そこの男2人は、指名手配されている幾人もの民間人を殺害している極悪人だ。殺されたところで悲しむ者などおらず、拍手で喜ぶ者の方が遥かに多い」

「だからと言って法の裁きを受けさせずに私刑などと、そのようなこと許されるわけがないです！」

仮面持ち――最後の大隊が本格的に活動し始めてから、すでに３００人近い犯罪者が殺害されています。局や騎士団がどれだけ構成員を逮捕しようとも、構成員の数が減ることはなくて、最後の大隊の活動範囲も徐々に広がっているのが現状です。

「法を守るだけで人は護れるか？　否。法を破る者は必ずいる。そのような者が、善なる者に被害をもたらすのだ。世界は広い。局と騎士団ではすでに対処し切れていない。ならば法を破ろうと考える者がいなくなれば、強制的だが平和はつくられる。後手の対処より先手の抑止。管理局や騎士団はそんな不完全な法を遵守するあまり、犯罪の抑止が出来ていない。ゆえに我われ最後の大隊が、次元世界に変革をもたらす」

「それは・・・！」

真っ向からすべてを否定できない、次元世界の現実。仮面持ちは拳

銃を腰のホルスターに収め、右手を私に差し出してきました。

「お前も最後の大隊に入ってはどうだ？」

「はい？」

まさかのスカウトに、私は呆気にとられました。彼女は「今の管理局に未来はない。解かるだろう？」とそう語りかけてきました。

「ミヤビ・キジョウ。管理局員であるお前にも、局に対して不満はあるだろう？　そう、例えば・・・子供を管理局へ勧誘している、とか」

「・・・！」

騎士の大半の離脱という影響で、管理局の魔導師や人材不足に拍車がかかりました。そこで白羽の矢が立ったのは、魔力資質の高い子供たちです。事件や事故で保護された子供たちに教育を施し、管理局へとスカウトしているのです。もちろん強制ではないですが、局員への道を目指す子供が多いのもまた事実。

「心当たりはあるだろう。子供たちを危険な戦場へ送ってもいいのか？　過酷な現場と環境に送ってもいいのか？　たとえそれが、子供たちの意思だとしても。お前の心は、それを許すのか？」

私の不満を見事に当ててきた仮面持ちに、私は「・・・」無言となってしまいました。胸の内で渦巻く管理局への言葉に出来ない暗い

感情。

――何かを、誰かを守れる力を持っているのなら、それの力で守ってあげたいって・・・。私とエリオ君は守られてきましたし、今も遠くからですけど守られてます。ですけど守られてるだけじゃダメだって思うんです――

――力を持つ者としての覚悟と意志。それを胸に秘めて、僕たちは局員を続けていきます――

エリオ君とキャロちゃんの言葉を思い出します。とても立派な志をお持ちのお2人ですが、お2人ほどに強い心を持つ子供がどれほどいるでしょうか。事件や事故に巻き込まれてしまったトラウマを抱えつつ、局員となってそのような似た現場に関わり続け、その所為で後ろ暗い感情に飲まれてしまい、そのまま曲がった心を持つに至り、最終的に粛清されてしまうような局員になってしまったりでもしたら・・・。

（管理局の抱える問題・・・）

「答えはすぐにでも欲しいわけではない。ただ考えてみろ。今現在の管理局を許せるかどうか、を」

――トランスファーゲート――

仮面持ちはそう言い捨てて、発生した空間の歪みの中へと消えていきました。それからすぐ「キジョウ陸曹！」と三尉がここ先頭車両

へと来てくれました。仮面持ちに容疑者２名が殺害されたことなどは報告しましたが、最後の大隊へのスカウトについては・・・話せませんでした。

Ｅｐｉｃａｌ６－Ａ犯罪者狩り～Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｖｓ　Ｆｒｅｅｚｅ～

†††Ｓｉｄｅアリシア†††

執務官としてのお仕事で、執務官補佐の私、妹であり直属の上官でもあるフェイト、私と同じ執務官補佐のシャリオ（ニックネームはシャーリー）の３人は、広域指名手配を受けてる質量兵器密売組織の摘発のために、第５９管理世界サピンへとやってきていた。

「今回の一斉摘発において、最重要にして最も警戒しないといけないのは、対魔導師用特殊弾です」

出撃前に行われてる現地の陸士５０５、５０６部隊との最終ミーティングで、フェイトがモニターに拳銃と弾丸を表示した。

「すでにこの質量兵器による犠牲者は、局員・騎士・民間人・犯罪者、およそ２５０人に上ります。その威力は、ＳＳランクの防護服を貫通するほどで、魔法における防御ならびに物理防壁は一切通用しないと考えておいてください。密売品とはいえ、緊急時となれば使用してくる可能性も十分あります。くれぐれもこの質量兵器を確認したら、即座に対処に移ってください」

防御力の高さに定評にあるルシルの防護服を貫通させて傷を付けるほどだし、つい最近でもキジョウ陸曹っていう、シャルやルシルの部下だった陸戦ＳＳランクの子も１発貫ったらしいし。私やフェイ

トじゃどうやっても防ぎきれないのは確実だよ。
それから綿密な打ち合わせをして、問題の拳銃以外にも違法物品を売り買いしてるブラックマーケットのある、広大な廃棄都市区画へと移動を開始。武装捜査官のための輸送車８台、逮捕した犯罪者や押収した物品を輸送する護送車８台、計１６台の大移動。

「第２、第３先遣隊より報告。マーケットへ接近する者を監視・報告する役割を持った人間、十数名を逮捕したと」

「これまでの捜査で、監視カメラの類はなく警邏が目を役割をしていると判明しています。捕らえた連中の代わりに隊員を配置し、マーケット側に偽りの報告を続けてもらいます」

指揮車に乗り合わせてる５０５と５０６の捜査主任さんからの話にシャーリーが「失礼ですが、それってかなり危ない橋では？」って聞いた。見回り役の連中がごっそり捜査官と入れ替わって、しかも偽報告をさせるとなると、万が一に交代要員に見つかったり、変声魔法がバレたりでもしたら・・・。

「それまでに我々がマーケットに突入すれば良いことですよ」

「最悪なのは、私たちが突入を試みる前に気付かれてしまい、マーケットにいる人間に反撃や逃走の機会を与えてしまうこと。それさえ防げれば、今入れ替わっている隊員たちも突入に参加できる。これでどうだろうか、フィニーノ執務官補？」

「判りました、ありがとうございます」

若干しょんぼりしてるシャーリーに目配せで、ドンマイ、って送ると、あの子は小さく頷いた。確かにすべては時間の問題だよね。摘発に動いてる私たちの車列は、廃棄都市区画に入ってからというもの、ものすごい速さで悪路を駆け抜けてる。ガタンガタン揺れられること数十分、車列の速度が落ち始める。監視の目は潰したと入っても、十数台っていう大所帯の駆動音はどうしても響いてしまう。静寂に満ちた廃棄都市区画ならなおさらだ。

「では、予定通りマーケットが行われている施設直近まで、防護服および各種魔法を使用しないまま接近します」

「各班、突入時刻１５００時までに指定のルートを進み、指定場所にて待機せよ」

というわけで私たちは車から降りて、４人1組の班に分かれる。そして事前に決めたルートを、防護服に変身しないままで駆け抜ける。いくら監視がないとはいってもちょっと恐ろしい。万が一にも魔法・物理問わずに攻撃されたら、当たり所によっちゃ死ぬこともある状況だし。

（でもこれくらいの死地、乗り越えられなきゃ執務官仕事はやっちゃいられない・・・！）

隣を走るフェイトの表情にも緊張の色が見える。今回の摘発で、今後の質量兵器による事件の有無が関わってくる。そう思うと本当に緊張してくるよね。

「止まってください。見回りがいるそうです」

フェイトが小声で私、それに陸士隊員２人にそう伝えた。監視を潰したとはいえ見回りまで潰したわけじゃなく、武装した男たちが２人１組で施設の周囲を見て回ってる（って以前からの捜査で判明済み）。今のところ視界には居ないけど、居るってことを知らせる合図があった。敵の監視役の代わりに区画内の高いところに陣取る複数の隊員たちが、鏡による光の反射で教えてくれてる。

（原始的だけど、念話による生まれた魔力すらも探知されるかもしれないって話だからな～・・・）

魔法文化が強い管理世界の現状、日本で使ってた携帯電話みたいな電波による通信手段なんて無いし。どうしてもこんな手段を採らざるを得なくなる。まずフェイトと頷き合い、次に後ろを付いてくる陸士隊員２人と頷き合って、いつ崩れるとも判らない廃墟ビルの中に入って見回りをやり過ごす。そのまま見回りの目を掻い潜りながら、道や廃墟を抜けて目的の施設前まで行く。

「アレだね・・・」

サッカーのフィールドの大体３倍くらいの大きさを誇る、地下２階・地上３階の５階建てのビル。地下に商品が溜め込まれていて、地上の階で売買するとのこと。建物を視認できたことで、あとはココ、指定場所で突入時間まで待機すればいいだけ。

「時間まで残り5分・・・」

フェイトが時刻を確認していたところで、「あの、見回りの動きが・・・！」って陸士隊員さんが、壁に開いた穴から外を指差した。私も覗き込むように外を見ると、見回りをしていた連中が大慌てでビルへ入って行く。直後、ドォーン！と轟音と一緒にビルの2階部分から「砲線！？」が3発と上がった。

「いったい何が・・・！？」

『緊急時に付き通信制限を解除する！　潜入班！　何があった、報告せよ！』

『ごほっ、げほっ。さ、最後の大隊の襲撃です！　か、仮面持ちが・・・3人！　次々にマーケット関係者、客を殺害していま――っは！？　ま、待て！　俺は客でも関係者でもない！　管理きょ――ぶぼぉ！？』

潜入班との連絡が、嫌な声を残して途絶えた。ビル内から銃声や悲鳴が響いてくる。

『各班、防護服を着用し次第、ビルに突入せよ！』

『最優先は関係者と客の脱出と逮捕です！　仮面持ちは、フェイト執務官、アリシア執務官補、部下を何名か付けます、お願い出来ますか？』

２人の陸士隊長からご指名に私とフェイトは「了解です！」って応じて、フェイトは「バルディッシュ！」を胸ポケットから取り出して、私は後ろ髪をうなじで結んでるリボンに付けた花のフリージアの形をしたクリスタルに「フォーチュンドロップ！」って呼びかけた。

「「セーットアップ！」」

私とフェイトは防護服へと変身して、フェイトは"バルディッシュ"をアサルトフォームへ。私は、元はキャンディポッドだったけど現在は円いファンデーションケース――コンパクト型である"フォーチュンドロップ"の蓋を開けて、丸く赤い宝石と丸く白い宝石を取り出した。

「ラッキーシューター、ハリセンスマッシュ、スタートアップ！」

右手に"ハリセンシュマッシュ"を、左手に"ラッキーシューター"を携える。そして"フォーチュンドロップ"はブローチとして胸元へ。後ろに控える隊員２人も武装隊服へと変身して、フェイトの「行きます！」っていう号令で、一斉に駆け出す。他の隊員たちもビル内になだれ込んでく。

「っ・・・！　ひどい・・・・！」

支柱以外に部屋を隔てる物が無いだだっ広い空間は・・・真っ赤だった。床にはまるでカーペットのように人の死体が積み重なってる。悲鳴や血の臭い、そして視界から入ってくる地獄絵図に吐き気を催

すけど、必死に口を閉じて戻さないように勤める。

「ひぃーーーーっ！」

「助けてーーーー！」

「し、死にたくない・・・！」

「局員でもいい！　頼む、助けてくれ！」

「俺を優先して助けろ！　金ならいくらでもやる！」

「馬鹿野郎！　わしが先じゃ！　わしを助けんか！」

部屋の中央に築かれた死体の山に立つ女性の仮面持ちは、「クズ共め。死で償え」逃げ惑う人たちを見下ろしながら何かを呟いて、足元の死体を掴み上げた。右手には初老の男性、左手には若い青年。何かをしようとしてる。でも動けない。目を離せない。私、完全に仮面持ちの殺気に飲まれてる・・・。

――アオゲンブリック・フリーレン――

それはホントに一瞬。仮面持ちの足元にベルカ魔法陣が展開されると、仮面持ちもろとも2人の男性の死体が氷漬けになった。仮面持ちだけはすぐに全身を覆ってた氷を剥がしてその姿を現したけど、死体は凍ったまま。

「これ以上は・・・！」

「フェイト・・・！？」

「シュロットフリント・アイス・・・！」

フェイトが駆け出すより早く仮面持ちは死体を上に向かって放り投げて、前方に落下したところでぶん殴った。死体は体内まで凍り付いてたようでバラバラに粉砕されて、その破片が逃げ惑う人たちに直撃。これまで生きてきた中で聞いたこともないような音と一緒に当たった箇所を穿った。

「っ・・・！」

撒き散らされる血と臓物、そして声にもならない被害者たちの悲鳴。とここでフェイトが「もうやめろ！」って床を蹴って、高速で仮面持ちへ突っ込んだ。私もここで再起動。"ハリセンスマッシュ"で、こっちにも飛んできた死体の破片を仮面持ちへ打ち返して、さらに"ラッキーシューター"の銃口を仮面持ちへ向ける。

「あなた達は避難誘導を最優先で！　仮面持ちは私とフェイトで捕まえるから！」

さっきの潜入班からの通信じゃ４人いるらしいんだけど、今のところ仮面持ちはあの女ひとりだけしか居ない。なら目の前の仮面持ちをまず潰して、それから他の３人を順次捕まえよう。仮面持ちは裏拳で破片を弾き飛ばして、その仮面に隠れた顔をこちらに向けた。

「はあああああッ！」

フェイトの一振りを横に跳ぶことで回避した仮面持ちに私は高速魔力弾の「スティンガーレイ！」を連射する。威力は低いけど、その速度でアイツを足止めできればそれで十分。両腕で顔面を覆っての防御姿勢に入った仮面持ちに、高速弾が全弾ヒットして魔力爆発。

「バルディッシュ！」

≪Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ≫

"バルディッシュ"が大鎌形態に変形して、黄金に輝く雷の魔力刃を展開。フェイトが煙に向かって「ハーケンスラッシュ！」と全力の一振りを払った。それで煙が横に寸断されて晴れてくんだけど、フェイトの一撃は空を斬った。それでも私の目は仮面持ちを捉えたまま。アイツはフェイトの一撃に合わせて天井付近までジャンプしてた。

――ホーミングシューート――

「シューット！」

仮面持ちをロックオンした状態で撃ち放つ魔力弾１２発。アイツは足元に小さなベルカ魔法陣を展開して、ソレを蹴ることで空中で方向転換。でも一度ロックオンした以上、防御されるか迎撃されない限りは追い続けるよ。

「っ・・・！」

仮面持ちが宙で構えた。足元と右手首に展開される魔法陣に、フェイトも迎撃を察して追撃をいったん中止して、"バルディッシュ"の柄を両手で握り締めた。

（さあ、どんな魔法で迎撃するのか見せてよ！）

速攻で決めに行きたいけど、一発逆転のような魔法を持っていたりでもしたら一転劣勢になっちゃうかもしれない。まぁ使わせる前に瞬殺するのがいいんだけど、それが出来ないような相手には慎重にならざるを得ない。

「氷結武装」

――パンツァー・クリスタル――

両前腕部と両足に氷で出来た籠手と脚甲を装着した仮面持ちは、迫り来る私の魔力弾を殴るって形で迎撃する中で、フェイトは「ハーケンセイバー！」って"バルディッシュ"を振るって、三日月状の魔力刃を放った。完璧な直撃コース。

「ふん・・・！」

「な・・・っ！？」

「うっそ。片手で掴み取った・・・・！？」

フェイトと私は愕然とした。ハーケンセイバーの切断力はシールドやバリアだって破壊できる、ホントにすごいもの。だけど仮面持ちはその勢いまでは完全に止められず、両手の氷の籠手をガリガリ削っていってる。このままなら、籠手を切断して直撃させられるんだけど・・・。

（そう簡単にはいかないよね・・・！）

仮面持ちは受け止めきれないって判断したみたいで、軌道を逸らせるべく左手も添えようとした。でもそれより早くフェイトが「セイバーブラスト！」ってコマンドトリガーを告げ、アイツもろとも魔力刃を爆破した。

「アリシア！」

「オーケー！　ドロップ！」

≪スマッシュを待機に戻し、スナイパーを起動！≫

胸元にあるケースの蓋を"フォーチュンドロップ"のＡＩが開けて、黒い宝石をポン♪と飛び出させた。ソレを右手でキャッチして、"ハリセンスマッシュ"を待機モードである白い宝石にしてケースに戻すと蓋も閉じた。

「ブレイブスナイパー！」

――ソニックムーブ――

床を蹴って、煙の中から飛び出してきた仮面持ちへ再接近。アイツの氷の籠手は完全に砕け散ってるけど、私の接近に対して迎撃するべく右腕を引いた。

（でも長さが足らないよ！）

今の私の体格に合わせて造り直されてる"ブレイブスナイパー"を構えてしまえば、仮面持ちのパンチが届く距離の外からその銃口を突きつけられる。

「ジャベリン・メテオ！！」

それでも魔法かなんかで迎撃されても嫌だから、悠長にタイミングを計ることなく即座にトリガーを引いて、ほぼゼロ距離で威力重視の炸裂魔力弾を撃ち込むことに成功。また爆発に飲まれた仮面持ちは、私との間に生まれた煙の影響で私から見えなくなっちゃったけど・・・。

『いい感じだよ、アリシア！　２時の方向、射角２５度！　撃って！』

フェイトからの念話で、私はダメージをしっかり与えられたみたい。フェイトの指示に従って銃口を向け直して、「セクステット・バレット！」って、発射シークエンスや弾速といった速度を重視した高速魔力弾を６連射した。

†††Ｓｉｄｅアリシア⇒フェイト†††

アリシアのメテオからのバレットっていうコンボの直撃を受けた女性仮面持ちは、着弾時の魔力爆発時に生まれた煙にまた呑まれたけど、彼女は前面にシールドを張った状態で煙の中から出てきた。見たところダメージは入ってない。

（このまま屋内で戦闘を行うと、遺体の損傷や証拠品などがめちゃくちゃにされちゃう・・・）

だったら、やる事は決まっている。砲撃魔法をスタンバイしてから高速移動魔法のソニックムーブを発動。仮面持ちが体勢を立て直すより早く彼女の側面へと移動。

「このまま外に押し出す！」

――プラズマスマッシャーーーー

前面に展開した魔法陣から砲撃を発射。回避も防御もさせない速さで仮面持ちに直撃させ、壁を突き破って屋外まで吹っ飛ばした。私はアリシアに『先に外に行ってるね！』と念話で伝えて、足元にフローターフィールドを展開して、いったん着地する。死体や血や臓物が撒き散らされている床に降り立つ勇気が私には無い。

「おおおおおッ！」

――ハーケンセイバーーー――

足場を蹴って仮面持ちが開けた穴から飛び出し、魔力刃による直接斬撃を繰り出す。仮面持ちは徒手空拳の格闘スタイルだからか、私の斬撃を見切って回避してからの打撃によるカウンターを打ってくる。それを柄で受け、弾いてはもう一度"バルディッシュ"を振るうけど、彼女も裏拳で魔力刃の腹を殴って弾いてきた。強い。確かに強いけど、チーム海鳴内で行う模擬戦で培った、格闘戦の経験からすれば「ぬるい！」よ。

「っ・・・！？」

繰り出された右拳をパシン！と右手の平で受け止めて、体の一部に電撃を纏わせて触れたものに強力な電撃を流す、攻防一体の「サンダーアーム！」を発動する。

「ぐぅぅーーーーーっ！？」

アインスすらも感電させて数秒間の隙を作らせた、私の対近接タイプへのカウンターだ。仮面持ちも例に漏れず感電して、激しく痙攣した。そこに「フェイト！」ってアリシアも合流してくれた。

「ごめん！　こっちは私ひとりで大丈夫みたい！　屋内の手伝いをしてあげて！」

せっかく出て来てもらったけど、この仮面持ちならたぶんだけど私だけで倒せる。格闘術で言えばアインスより圧倒的に格下。あとは

魔法に気を付ければきっと・・・。

「・・・判った！　でもくれぐれも無茶しないように！」

――ラピッドジャンプ――

アリシアが地面から2階までジャンプして屋内に入っていったのを横目で確認しつつ、感電しながらも足元に魔法陣を展開した仮面持ちを背負い投げする。仮面持ちは隣のビルの外壁に背中から叩き付けられた。地面へと落下するけどギリギリで体勢を立て直して着地。そしてすぐ、直径5ｍほどの魔法陣を展開。

「ユーバーファル・アイスベルク・・・！」

大小様々な氷で出来た尖塔が何十本と魔法陣から突き出してきた。しかも尖塔は何かに当たると、そこを凍結させてから方向転換してくる。後方に下がりつつ「プラズマランサー、ファイア！」と電撃の槍を尖塔に撃ち込む。着弾時の炸裂で尖塔を穿つけど、新しい尖塔によって砕かれた箇所が飲まれるから焼け石に水状態。

「くっ・・・！」

尖塔に挟み込まれるより早く飛行魔法を発動して空高く上がる。本体である仮面持ちは、ウニのようになっている氷の中。あれを砕くにはハーケンフォームじゃ足りない。

「バルディッシュ、フルドライブ！」

≪Ｌｉｍｉｔ　Ｂｒｅａｋ　ｆｏｒｍ・　Ｒｉｏｔ　Ｚａｍｂｅｒ　Ｃａｌａｍｉｔｙ≫

"バルディッシュ"を大剣形態へと変形させる。３ｒｄフォームのザンバーや４ｔｈフォームのライオットブレイドより遥かに高威力を叩き出せる限界突破の"カラミティ"なら、一撃で仮面持ちを墜とせるはずだ。迫り来る尖塔を避けては着地して駆け抜けるを繰り返し、仮面持ちの居る地上へと向かいながら"カラミティ"を上段に構える。氷の中に居る仮面持ちの顔が私の方に向いた直後、真正面から尖塔が飛び出してきた。

「カラミティ・・・ザンバァァァ―――ッ！」

それに構わず全力で"カラミティ"を振り下ろした。目の前にまで来ていた尖塔を真っ向から縦にかち割って粉砕。さらに仮面持ちが閉じ篭ってるウニのような氷も真っ二つに寸断した。

「～～～～～っ！？　これが、チーム海鳴の魔導師の力・・・！」

足元の魔法陣を破壊したおかげか周囲に伸びていた氷の尖塔群が次々と崩落を始める中、仮面持ちが砕けた氷塊の上に立った。

「最後の大隊の構成員であるあなたを逮捕します。罪状は言わなくても判っていますね？」

「容疑は殺人か？　馬鹿馬鹿しい、我々は害獣を駆除しているに過

ぎん。知っているか？　我々がこのマーケットに赴いた際、商品として売られていたのは管理外世界の幼い子供たちだ」

「・・・っ！」

「管理外世界に位置づけられている世界の中には、魔力資質に優れた者、何かしらの特殊な技能を持つ者など、希少な人材が多く眠っている。それを拉致してきては、あのようなマーケットで実験素材、愛玩物、臓器摘出などなど、下種な事をさせられる売り物として扱われる」

プライソンやプロフェッサー・ヘンリーなどの犯罪者が脳裏に過ぎる。人を人とは思っていない外道。次元世界じゃ未だにそういった特別な人が犠牲になってる、なり続けてる。それは食い止めたい事だけど、だからって「殺害するなんて・・・」って握り拳をつくる。

「ならば管理局は逮捕すれば良かったのだ。我々がこのような手段を採る前に。逮捕して、裁判を行い、刑を確定させ、牢に入れる。毎日毎日食事を与えながら生かす。犠牲になった者たちが生きられなかった時間を、連中に与えている」

「それは、罪を償うために・・・」

「償うため？　刑期を終えて出てきた者がまた、罪を犯す事が多々あるのは判っているか？　犯罪組織に身を置いている者の大半が再犯となる。管理局法には極刑というものがない。捕まっても生きて外界に出られると判っているからまた罪を犯す。だから我々は、そ

ういった犯罪者に示しているのだ。罪を犯せば、相応の罰が下される、と。これくらいの事をしなければ、害獣どもは学習しない。そして必ず恐れるだろう、罪を犯す事を。犯せば最後の大隊が、その命を狩りに来ると」

仮面持ちがそこまで語った直後、３階部分のすべての窓から爆炎が噴き上がった。

「え・・・？　なっ、アリシア！？」

「これからも我われ最後の大隊は、犯罪者に死を与えていく」

――トランスファーゲート――

「しまっ――待て！」

――リングバインド――

マーケットビルから仮面持ちへ視線を戻したところで、彼女の足元に歪みが発生していたのに気付いて、逃がさないためにバインドを発動した。でも拘束するより早く仮面持ちは歪みの中へと消えていってしまった。

「くぅ・・・！　アリシア、応えて！　アリシア！　こちらハラオウン執務官！　応答願います！」

仮面持ちの逃亡を許したことに対しての自責の念は、今は後回しだ。

ビル内に居るはずのアリシアや他の陸士隊へと通信を繋げる。最初はノイズばかりだったけど、『フェイト！　屋内の陸士隊は全員無事だよ！』って応答があった。

「良かった・・・」

ブラックマーケット一斉摘発作戦は、最後の大隊による奇襲で失敗。マーケット関係者および客、死体の身元を確認できたのは４８名。実際の死者は身元不明でプラス数十名かと思われる。管理局側の死者は０で、重軽傷者が１９名だった。地上部隊の応援を呼んで、事後調査を行う中・・・

「フェイト。ちょっといい？」

「どうしたの、アリシア？」

アリシアに呼ばれてたから側に寄ると、「ちょっとこれ観て」って小さなモニターを出して、ある映像を流した。それはこのビルでの戦闘で、アリシアが他の陸士隊員と一緒に仮面持ち３人を撃破したものだ。

「すごいね、アリシア」

「そんな事ないよ。そんなに強くなかったもん。・・・問題はこの後」

バインドや手錠で拘束し終えた仮面持ち３人の仮面を外し、さらに

目出し帽も脱がせた。うち2人は女性で、もう1人は男性なんだけど、「あれ・・・？」って私は首を傾げた。どこかで見覚えのある顔のような・・・。

「・・・あ・・・ああ・・・あああ！　そんな、まさか・・・・！」

「そう。ミッドチルダ地上本部捜査部・捜査一課、バイロン・ロゴ係長だよ、どう見ても」

プライソン戦役時、"レリック"捜査を円滑に行うための合同捜査会議の際にお会いしたことがあった。というか、「これってかなりまずい事じゃ・・・」って頭を抱える。現役の管理局員が、最後の大隊の一員として殺人を犯した。ただでさえプライソン戦役でのバッシングが今なお少なからずあるなか、この事実が公にされたら・・・。

「この後、女性の仮面持ち2人が自爆したの。魔法じゃない単純な爆発だったから私の防御魔法でも防げたけど・・・」

3階で起きたあの爆発はそういう理由だったみたい。私が「ロゴ係長は？」って聞くと、「意識がないから病院に運ばれたよ。なんとか自爆から庇えたから」ってアリシアは沈んだ声で答えてくれた。

「また、管理局が叩かれる理由が出来たね・・・」

「うん。・・・これ絶対プライソンの呪いだよ、フェイト。最後の大隊って、きっとプライソン一派と繋がってたはずだし」

どうやら次元世界はプライソンが死してなお、彼にもてあそばれてしまう運命のようだ。

Ｅｐｉｃａｌ６－Ｂ犯罪者狩り～Ｈａｍｍｅｒ　ｖｓ　Ａｘｔ～

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

「どこもかしこも最後の大隊のニュースで持ちきりだな。ホントしつけぇ連中だな」

あたしは今、航空戦技教導隊の一員として、第４管理世界カルナログは首都ケラノスにある、魔導端末の研究・開発を売りにしてるメーカー、バルケッタ・インダストリーの第８開発棟へ赴いてる。教導隊の役目は、新しく開発された装備や考案された兵装や戦闘技術テストや研究、他には演習での仮想敵役、技能訓練を主してる。今日は前者なわけだ。

「最後の大隊のメンバーが連続殺人犯を殺害。その後に逃走・・・」

んで、今は休憩中。休憩室でソファに座りながらテレビのニュースを眺める。逃走中だった大隊メンバーを陸士隊員が追跡中だったんだが陸士隊の管轄区を脱したことで、追跡中だった陸士隊が大隊メンバーを逃してしまった。けど管理局法から脱したことで、局への支援・協力要請をせずに事件・事故の解決に乗り出す事が出来るようになった教会騎士団が、大隊メンバーを逮捕した・・・っていうやつだ。

（教会騎士団に籍を置いてる騎士は、冗談じゃないくらいに強い奴らばっかだしな・・・）

そんな騎士団が好き勝手に動けるんじゃ、局は後手に回るしかねぇってこった。でもだからこそ、局は世論に叩かれ、騎士団は評価はうなぎ上り。嘆息してると、「だね・・・」って、あたしの隣に座ってるなのはが頷いた。

「これまでに管理局・騎士団が捕らえた仮面持ちはおよそ１００人に上ってる。その大半は自爆して、その自爆に巻き込まれた局員・騎士からも数十名が死傷してる」

「ああ。・・・そんだけ構成員が自爆してる最後の大隊だが、なかなか潰れねぇんだよなぁ～」

それもこれも大隊のメンバー補充の早さにある。自爆してるのは人型の機械――アンドロイドばかりで、生存してるのは最後の大隊の思想に賛同したフリーの魔導師たち。重犯罪者には死罪を下すっつう大隊は、罪を犯しながらも悪を裁く義勇兵、みたいな風潮になりつつある。

（死んでも認めたかねぇけど、あたしら元パラディース・ヴェヒターみたいなっつうか・・・）

そんなわけで被害者遺族からの支持が結構あったりするわけで・・・。実際、犯罪発生率が減少した世界があるのも事実。局の不正問題や騎士団の独立のドタバタの最中に、犯罪者を殺しまくる最後の大隊の登場。完全に見計らってたろ、これ。

「出来るだけ早く、この一件を早く解決したかったんだけど・・・」

「んあ？」

「ほら、ヴィヴィオもフォルセティも明日から冬休みに入っちゃうでしょ。ヴィヴィオは大隊に狙われてる。フォルセティやアインハルト達も護衛として頑張ってくれてるけど、やっぱり冬休みくらい、子供らしく安心できる中で過ごしてほしかったな～・・・って。一応、冬休み中はイクス、シャルちゃん家にお泊りすることになってるけど・・・。やっぱり不安は完全には拭えない」

「・・・そうだな」

聖王女オリヴィエのクローンとして生み出されたヴィヴィオ。その資質を受け継いでる所為でヴィヴィオは、目的は判らねぇが最後の大隊に狙われちまってる。教会騎士団やオットーやディード達も密かに張ってくれてるから、学院祭の時みたく一方的な拉致未遂にはならないはずだ。

「・・・っと、そろそろ時間だね、ヴィータちゃん」

「あ？　ああもう休憩時間も終わりか」

先にソファから立ち上がったなのはに続いてあたしも立ち上がって、教導隊としての仕事を行うために外へ出る。あたしは５番隊２班の副班長で、なのはは５番隊５班の班長だから、「それじゃヴィータちゃん、また後で」って、それぞれの所属してる班へと分かれる。

「それでは第２班の皆さんには、彼らとの模擬戦をお願いいたします」

広大な試験場のど真ん中、白衣姿の若い女技術者（他の技術者から主任って呼ばれてる）をリーダーとする第５開発班がウィングボディ型のトレーラーへと歩み寄っていって、空中に展開したコンソールを操作してトレーラーのコンテナを開けた。

「アレらが、私たちの相手となる人型魔導デバイス・・・か。ふむ。総員、気合を入れろ。高町教導官率いる５班に恥ずかしい様は見せられんぞ」

あたしの上司である２班の班長、ヴィオラ・オデッセイ三等空佐がそう言いながら、遠くに居るなのはとその班へと視線を向けた。ヴィオラ班長は、なのはが教導隊に入ったばっかの頃に同じ班だった先輩らしい。プライソン戦役後は教導隊から離れてたんだけど、騎士団独立のあおりを受けて人手不足になったことで復帰することになった。

「では総員、防護服着装！」

ヴィオラ班長の号令に従って防護服へと変身。なのは達５班も変身を終えて、あたし達とは別の新兵装の稼動試験を行う予定だ。

（あー、そっか。ようやっと思い出した。バルケッタ・インダストリーって名前に聞き覚えがあるな～って思ってたが・・・）

１０年以上前、"夜天の書"を完成させるためにパラディース・ヴェヒターとして参加した犯罪者たちの宴、デスペラードパーティ。その大会に参加してた企業だ。目の前にズラリと並べられた成人サイズの人型デバイスを見て、ようやく思い出した。

「２班の皆さん、準備はよろしいですか？」

「はい、いつでも構いません。総員、戦闘準備！」

ヴィオラ班長が槍型デバイス・"レーヴェンゲブリュル"を構えて、あたし達もそれぞれデバイスを構えた。それを確認した技術者がまたコンソールを操作し始める。

「ＳＳ-１７スパンカー、ＳＡ－８ゲッコー、ＡＳ－１１キルター、ＡＡ－５アッシュ、ＡＡ－１３アロー、順次起動します」

デバイスを拘束してた金具が一斉に外れて、５体のデバイスが二足歩行でトレーラーのコンテナから地面に降り立った。んで、あたし達の前で整列した。トレーラーが訓練場の端へ移動していくのを横目で見てると、なのは達５班もフェンスの向こう側にある別の試験場に移動した。そこにもまたトレーラーが４台停まってる。

≪スパンカー、戦闘準備完了≫

青いデバイスが両手にガトリングガン２挺を装備。

≪ゲッコー、戦闘準備完了≫

黄色いデバイスがショットガン２挺を装備。

≪キルター、戦闘準備完了≫

赤いデバイスがデカいハンマーを装備。

≪アッシュ、戦闘準備完了≫

黒いデバイスがショートソード２本を装備。

≪アロー、戦闘準備完了≫

白いデバイスが大型の弓を装備。近接武器の剣とハンマー、中距離のショットガン、遠距離の弓とガトリングガン。武装した後に組んだ隊列から見ると、しっかりとした戦術はインプットされてるみたいだな。

「主任。スタンバイＯＫです」

「ありがとう。では・・・これより試験的実戦を行います！　レディ・・・」

主任があたし達の間に空間モニターを展開して、レースとかで見かけるスタートシグナルを表示した。んで、「ファイト！」って主任が告げ、シグナルも青になったその瞬間・・・

――ラピッドスナイプ・トリプルシフト――

「え・・・？」

主任の補佐をしてた男技術者の股間と両手が、高速で飛来した魔力弾で撃ち抜かれた。遅れて男技術者が「ぎゃあああああ！」って悲鳴を上げて、手の無い両腕で吹っ飛んだ股間を押さえつつ地面を転げ回る。

「誰だ！？」

魔力弾の射線を追って視線を向けると、結構離れた開発棟の屋上で何かがキラっと光った。あたしとヴィオラ班長が盾役として前に躍り出て、班員４人が主任と狙撃された男技術者の盾役に動く。

――トランスファーゲート――

「卑怯で卑劣な犯罪者。貴様を処断する」

そんな声が背後から聞こえてきた。振り向きざまに見えたのは、真っ黒な両刃斧２本を両手に携えた男の仮面持ち。その斧はすでに振るわれていて、男技術者の首を刎ね飛ばした。混乱によるわずかな静寂の後に主任や他の技術者の悲鳴が木霊する中、あたしとヴィオラ班長は仮面持ちへ向かって突撃。班員たちはなのは率いる５班に連絡をつけたり、主任や他の技術者の護衛と避難に移ったり、指示を出すことなく最適な動きをとってくれた。

「最後の大隊・・・！」

≪≪≪≪≪ 殺人事件を確認。殺人犯を逮捕する！≫≫≫≫≫

デバイス達が仮面持ちを敵として視認したのか一斉に攻撃を繰り出すけど、仮面持ちは「邪魔をするな、おもちゃ風情が」って、２本の斧を振るって一瞬にして頭部を斬り飛ばした。

「なんつうことを・・・！」

「くそっ！　ここで逮捕する！」

まずはヴィオラ班長がリーチを活かした"レーベンゲブリュル"による刺突攻撃を繰り出す。仮面持ちは体の向きを正面から横へ変えるだけで回避した。が、「おらぁぁぁッ！」あたしがそこに"アイゼン"を振り払った。アイツは両手の両刃斧の腹を盾代わりにして、あたしの一撃を防御したが、「むっ・・・！」踏ん張りきれずに十数ｍと吹っ飛ばされた。

『こちら高町！　狙撃手は５班が担当します！　そちらの仮面持ちはお願いします！』

なのは達が狙撃手の居た開発棟の屋上へ向かって飛んでくのを一瞬だけ見届けた後、着地し終えたばかりの仮面持ちへ向かってあたしと班長が突っ込もうとした時、仮面持ちが左手に持ってる斧を、なのは達が向かってる開発棟とは別の建物へと指した。

「なんの真似――」

――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ　２．０――

それと同時に指されてた建物から爆発が起こって、遅れて別の轟音が鳴った。こいつは「レールガン！？」に違いない。どこから撃たれたのか判らないってことは、なのは達の追ってる狙撃手とはまた別のところからだ。

「今回、我々が裁いたのは、管理外世界ばかりを狙って強姦事件を繰り返していた集団の一員だ。そこに転がっている男と、今しがた死罰を下した男の２人は、２０人に上る女性を犯した。女性の尊厳を踏みにじる、最低最悪な行為である。ちなみに、八神はやて二等陸佐、高町なのは一等空尉、アリサ・バニングス一等陸尉、月村すずか技術主任、彼女らの出身世界である地球でも悪事を働いている」

確かにそりゃ裁かれて当然なクズ共だが、「・・・っ！　だ、だからって――」殺して良いわけじゃねぇ。捕まえて、裁判して、正当な罰を与えて、償わせる。それが人間社会ってもんだろ。

「ヴィオラ班長。コイツ、あたしに任せてくれませんか？」

「・・・単独でいける？」

「問題なしです！」

班長の確認にそう応じたあたしに、班長は「では任せる！」って間髪入れずに言って別の狙撃手、レールガンを使ったことからティーダ・ランスターの元へと飛び立ってった。仮面持ちはやれやれっていう風に首を振ったかと思えば、「まぁ良い機会だ。いずれ闘うかもしれない戦力とは、一度刃を交えておこう」って、右手の両刃斧を肩に担いで、左手の両刃斧を前に突き出すような構えを取った。

「逃げないでくれて助かったぜ、仮面持ち」

「これも幹部としての勤めだ。我われ最後の大隊を壊滅すべく動く名のある局員や騎士との戦闘は、おのずと幹部となるだろう。ならば、今のうちに貴君の実力を推し量るのも悪くない、という話だ」

「ハッ！　後悔させてやんよ！」

互いに足元にベルカ魔法陣を展開。あたしは赤、奴は浅黄色。手元に魔力を付加した物質弾を5発と展開したあたしは、「ブリッツ・ギヨティーネ」って両手の斧に電撃を纏わせた仮面持ちへ向けて・・・

「シュワルベフリーゲン！」

"アイゼン"のヘッドで物質弾を打ち放った。仮面持ちは左手の斧だけで迎撃しながらこっちへ向かって駆けて来る。やっぱ騎士ってわけだ、接近戦は望むところ。"アイゼン"の柄を両手で握り直して、仮面持ちが「フンッ！」振り下ろした右の斧を、半歩分だけ横移動して回避。

「テートリヒ・・・シュラーク！」

そのまま時計回りに回転して、奴の背中に向けて"アイゼン"の一撃をお見舞いしてやったが、「マジか・・・！？」アイツを吹っ飛ばせなかった。つうか、何だ今の。妙な反発を受けたような気がする。とにかく、振り向きざまに振るわれる右の斧をしゃがみ込むことで避けて、脚に目掛けてもう一度"アイゼン"を打ち込むんだが・・・。

（踏ん張りどうこうじゃねぇだろ、これ！　ビクともしねぇじゃねぇか・・・！）

足払いの効果も無く、仮面持ちは直立不動のままだった。逆に"アイゼン"が弾かれたことであたしは地面を転がっちまった。伏せてるところに、浅黄色の魔力光がアイツの足元の魔法陣から溢れる。

「ヴルツェル・シュメルツ・・・！」

「やべ・・・！」

魔法陣を中心にして電撃が放射状に地面を走り出したのが見えたから、すぐに起き上がって空へと上がる。電撃はうねる蛇のような軌跡でコンクリートの地面を焦がしながら、３０ｍほどを突き進んで消えた。焦げ跡はまるで蜘蛛の巣みてぇ。あのまま地面に体を付けてたら、間違いなく感電していくらか隙を生んでた。

「良い判断だ、騎士ヴィータ！」

「そらどうも！」

宙を蹴って仮面持ちへ再接近して、"アイゼン"を「おらっ！」と全力で振るう。防御魔法を使った気配はねぇし、なにかカラクリがあるはずなんだ。"アイゼン"の一撃を仮面持ちは片方の斧で防いで、もう片方の斧で反撃っつう戦闘スタイルを維持して、あたしとの攻防を繰り広げる。

「チッ・・・！」

――シュワルベフリーゲン――

一旦距離を取って物質弾８発を"アイゼン"で打ち放つと同時に、あたしも一緒に仮面持ちへと突撃。アイツが両手の斧で物質弾を処理してる最中に、あたしはアイツの頭上に移動し終える。

「テートリヒ・・・シュラァァァーーーーク！」

最後の物質弾を処理し終えた仮面持ちの右肩へ向けて"アイゼン"を打ち込む。直撃直前、やっぱ何かに拒まれたかのような感触が柄から伝わってくる。以前にも経験したことのある感触。そう、あれは確か・・・。

（イプシロンの磁力スキル・・・！）

磁力を用いた防御術。この仮面持ちも似たような手段を用いてやがる。弾き返された勢いを殺さずに半回転して、今度は真横から左肩に一撃を打ち込むが、「くっそ、弾かれる！」ことで、ハンマーフォルムでの打撃は通らねぇって諦める。

「なら・・・！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．　Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ≫

仮面持ちからもう１回距離を取って、通常のハンマーフォルムから突撃力に優れたラケーテンフォルムへと変形させる。面での打撃じゃなくて一転集中の突撃を打ち込んでやるよ。ブースターを点火させて、その場で高速回転した後・・・

「ラケーテン・・・！」

また足元に魔法陣を展開した仮面持ちへと突っ込む。どんな反撃や迎撃が来るか判らねぇが、それを恐れてたら何にも出来なくなる。

「ハンマァァァァーーーーッ！」

仮面持ちも始めは斧を構えて迎撃に入ろうとしてたみてぇだが、足元の魔法陣を消して回避行動に入った。あたしの一撃は空振ったけど、ラケーテンハンマーは一度っきりじゃねぇんだよ。空振った勢いのままにその場で高速回転して、もう一度仮面持ちへと突撃する。

――ラケーテンハンマーーーー

「その技はもう見切った」

あたしの一撃に合わせて仮面持ちも左の斧を振るって柄同士が激突。火花を散らしながら互いのデバイスの柄が滑って、ヘッド同士がガキィンと噛み合った。アイツはその状態を維持したまま左の斧を地面に向かって振り下ろして、刃を深く打ち込んだ。

「んな・・・！　くそっ、離せ！」

斧の刃と柄の隙間と地面の間に"アイゼン"が挟まれちまった。そこに仮面持ちが右の斧を振りかぶる。となりゃ「アイゼン！」を待機形態に戻すしかねぇ。戻してすぐにあたしは仮面持ちから急いで離れて、振り下ろされた斧から逃れる。地面に打たれた斧は大きなクレーターを作るほどの威力。直撃だったら確実に墜とされてた。

「アイゼン、ギガントフォルム！」

「強襲型をやめて打撃特化型か。しかし、当たらなければ意味は無い」

――ユーバーファル・カッツェ――

「っ・・・！？」

仮面持ちの姿が掻き消えた。こいつは高速移動魔法か。こういう場合は後ろに回り込まれることの方が多い気がするが・・・。なんと

なく「ここだろ！」って、前方に向かってヘッド部分がデカくなった"アイゼン"を振り下ろした。

「むっ・・・！」

ビンゴ。直撃なら良かったが、残念ながら仮面持ちのギリギリ前を穿っただけだ。ま、コンクリートの破片ごとアイツを後ろに吹っ飛ばしたけどさ。石片が仮面にガンガン当たって、パキッとヒビを入れた。

「おっと」

「ヒビ割れてちゃ気になってまともに戦えねぇだろ！？　あたしが叩き割ってやんよ！」

――ギガントハンマーーーー

「余計な世話だ」

仮面持ちは両手の斧であたしの一撃を迎撃してきた。それは「いや、なんで避けねぇの？」って疑問が口に出るほどの悪手だろ。ギガントフォルムの一撃を受けたアイツは「あぁ、これは無理だ」って首を横に振りながらそう呟いた後、十数mと吹っ飛んだ。

「アイゼン、カートリッジロード！　コメートフリーゲン！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．　Ｋｏｍｅｔｆｌｉｅｇｅｎ≫

シュワルベフリーゲンのサイズより二回りほどデカい物質弾に魔力を付加して、「おらぁっ！」バレーのスパイクみたく"アイゼン"でぶっ叩いて打ち放って、あたしも続いてまた仮面持ちへと突っ込む。

「ボースハフトアクスト！」

電撃を帯びた左の斧を物質弾に投擲した仮面持ち。２つはあたしとアイツの狭間でぶつかって爆発を起こして、勢いを保ったままの斧が黒煙から飛び出してきた。あたしはソイツを躱して、そのままアイツの元へとたどり着く。

「「ギガント・・・！」」

あたしは"アイゼン"を振りかぶり、仮面持ちは右の斧の片刃にとんでもなくデカい電撃の魔力刃を付加。こりゃ気合を入れてかねぇとな。

「ハンマァァァァーーーーッ！！」

「シュピールッ！！」

ドガンと激突した"アイゼン"と電撃刃。派手な魔力爆発が起きて、目の前が真っ白になる。そんな中で「くそ・・・！」あたしは、仮面持ちの一撃に踏ん張りきれずに吹っ飛ばされちまった。宙を舞う中、風切り音がこっちに近付いてるのに気付いた。

（もう片方の斧が戻ってきたのか・・・！？）

深く考える前に飛行魔法で急上昇。直後、視界の端にブォンと通り過ぎてく斧が映った。気付けて良かったって安堵して、体勢を立て直したところで、「すまんな！」って仮面持ちがいきなり謝った。

「時間切れのようだ！　私はこれにて失礼させてもらうぞ！」

――トランスファーゲート――

「んな！？」

仮面持ちの背後の空間が歪んで、アイツは斧をキャッチしてすぐにその歪みの中に消えちまった。ここまでやって確保できなかったのは、完全にあたしの問題だ。"アイゼン"をハンマーフォルムに戻しながら「くそっ！」悪態を吐いた。

「こちら2班のヴィータ。ヴィオラ班長、班員各位、状況はどうか？」

『こちらヴィオラ。残念ながら狙撃手を逃がしてしまった』

班長からはティーダ・ランスターを取り逃したこと、班員からは避難させた主任たち、ティーダに狙撃された開発棟の居た技術者の避難の完了や、狙撃された技術者の死亡確認などの報告が入った。

「第5班。そちらはどうか？」

なのは達の班へと通信を繋げる。すると『こちら5班。狙撃手1名を確保』って、5班の班員から返答があった。班長が『お手柄です！』って称えるけど、モニター越しから漂ってくる5班の空気がなんか重い・・・。

『ありえない・・・こんなの・・・』

「なの――高町班長・・・？」

うわ言のように、ありえない、を繰り返すなのは。映ってる映像が変わって、モニターに映りこんだ仮面持ちを見たあたしは、「んだよ、これ・・・！」なのはの言葉の意味を察した。女仮面持ちの制服とも言える黒セーラー服に身を包んでたのは・・・。

「ティアナ・・・！？」

Ｅｐｉｃａｌ６－Ｃ犯罪者狩り～Ｔｒａｉｔｏｒ　？　１～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

航空戦技教導隊の任務として訪れた第４管理世界カルナログは首都ケラノス。そこで魔導端末の研究・開発を売りにしてるメーカー、バルケッタ・インダストリーからの依頼のため、１０番隊まである教導隊の内、私が率いる５班と、先輩であるヴィオラさんが率いて、ヴィータちゃんが所属する２班が赴いていた。

「こんなところにまで・・・！」

それは突然起きた。２班のところの技術者さんの１人が、最後の大隊のメンバーによって殺害された。始めは狙撃、次いで新手による斬首。斧を持った仮面持ちは２班が担当してくれることになって、私たち５班は狙撃手の確保を請け負った。

――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ　２．０――

私たちの追ってる狙撃手とはまた別の長距離狙撃が行われた。狙撃されたのはある開発棟で、爆発の後に悲鳴が建物の中から次々と上がり始めた。私が任されてる５班は、私含めた教導官が４人、事務官１人の構成になっていて・・・

「ボレル二尉、アルド事務官は狙撃された開発棟へ！　バーネー尉、アハテー二尉は、ヴィオラ班長のサポートを！　セルゲフ二尉は、

私と来てください！」

「「「「了解！」」」」

『了解です！』

そんな同僚（とはいっても、みんな私より年上だけど）に指示を出す。私とセルゲフ二尉は狙撃手の元へ向かい、その姿を視認する。女性の仮面持ちで、背中には後光のような機械の輪を背負い、両肩、両脇に位置する箇所から４本のアームが伸びていて、右肩にはスナイパーライフル、左肩には銃身の長いアサルトライフル、右脇にはガトリングガン、左脇にはレールガンが取り付けられていた。そして手には大砲のように長い、銃口が三角形状に３つあるショットガンが１挺。銃火器のフル装備だ。

「これは・・・」

「まずいっすね。狙撃手はこれまでティーダ・ランスター元一尉だけだったっすけど、あのような他の狙撃手が出てくると・・・」

「うん、これまで以上に被害が大きくなる・・・！」

これまでたった１人からの狙撃すら防ぐことは出来なかった。何せ標的は、局や騎士団から逃げ回る犯罪者。どこに居るとも知れず、護衛することも出来ない。何より最後の大隊は、転移スキルで移動する。そんな後手に回るのが当然かのようになっている現状で、さらなる狙撃手の追加は最悪としかいえない。

「ここで確実に確保します！」

「了解！」

セルゲフ二尉は、管理局に残る数少ない近代ベルカ式の騎士で、ショートソード型デバイスの"ディアローク"、長ひし形の盾型デバイスの"ヴァイガーン"っていう2つのデバイスを使う。前衛と中後衛になる私とは相性が良い。

「管理局員の接近を確認！　最後の大隊、ギル！　交戦します！」

ギルっていう名前、もしくはコードネームらしい仮面持ち。ショットガンを構えて、その銃口を私たちに向けた。セルゲフ二尉が「突撃します」って私の前に躍り出て、左手に携える盾を構えつつギルへ向かって突進。私はセルゲフ二尉の後ろに続き、"レイジングハート"をエクセリオンモードへと変形させる。

「シューット！」

――ブラストディセミネーター――

「ロイグネンシルト！」

盾と重なるように展開される大きな桜の花びらのような魔力シールドに、ギルの放った散弾が着弾して魔力爆発を起こした。本当にとてつもない威力。シールド越しに伝わる衝撃と熱波に、こんな武器

を作り、使用させる最後の大隊に恐ろしさを感じる。

「このまま行きます！」

でもセルゲフ二尉のシールドと盾は強固で、ヒビ1つとして入らない。何せセルゲフ二尉の防御力は、教導隊の中で一番を誇る。私のシールドでは防げなくても、セルゲフ二尉なら防ぎきれる。黒煙の中を突っ切って、そのままギルへと突っ込む。

「な・・・！？」

無傷で突破してくるなんて思わなかったのか、ギルは若干あわてた様子でショットガンのトリガーを引こうとしたけど、それより先にドン！と轢かれた。吹っ飛ばされて倒れ付したギルの真上を通り過ぎる中、私はカートリッジを1発ロードした"レイジングハート"を彼女へと向ける。

「エクセリオンバスター！」

そして放つ砲撃。ギルは手にするショットガンを盾にした上でミッド魔法陣のシールドを展開した。ふと、その魔力光が気になった。オレンジ色。魔力光は人それぞれとはいえ、同じ色を有する魔導師なんて数多く居る。でも・・・。

「そんなまさか・・・」

私の砲撃をシールドで防いだギルに、かつての部下だったティアナ

の姿を幻視する。でもそれはティアナに対して失礼な事だって、かぶりを振って掻き消す。とそこに、ギュイィーンと機械音が聞こえてきた。

「セルゲフ二尉！　反転急いで！」

「了か――」

セルゲフ二尉が言い終るより早く、白煙の中から真っ白な魔力弾（魔力光が２種類、か・・・）が何十発と連射されてきた。間違いない、あのガトリングガンによる攻撃だ。でも反転は間に合ったおかげで、無防備な背後に集中砲火を受けずに済んだ。

「なんていう連射！　なんていう物量！　班長！」

「一度後退を！　足を止めたら他の火器に狙い撃ちにされる！」

「了解っす！」

ガトリングガンからの猛攻でさえも防ぎきれるセルゲフ二尉の防御力に感謝しつつ、私たちは急いで後ろへ下がる。

「アクセルシューター・・・シューット！」

弾幕の中、私は誘導操作弾を１２発と一斉発射。回り込むような射線を取ることでガトリングガンの迎撃から逃れる。ギルはガトリングガンとアサルトライフルによる弾幕で迎撃を行おうとした。わず

かに途切れる彼女からの攻撃。ガトリングガンの代わりショットガンの銃口がこっちに向けられた。

「レイジングハート！」

砲撃魔法をスタンバイして、散弾が発射されてシールドに着弾した瞬間に、「セルゲフ二尉、出ます」と伝えて、彼の後ろから離脱。急上昇して、魔力弾の迎撃をし終えたばかりのギルへと向けて、砲撃と射撃の多弾攻撃「ストライクスターズ！」を放つ。砲撃は真っ直ぐギルへ向かい、魔力弾８発は一度広がってから砲撃を追うように向かう。

（迎撃に使えるのはスナイパーライフルとレールガンのみ。でもすでに迎撃できないところまで懐に入った！）

着弾。そして派手な魔力爆発が起きて、一切の攻撃がやんだ。セルゲフ二尉と一緒に反撃を警戒していたけど、白煙が晴れてギルを視認したことで警戒を解いた。背中から武装が外れていて、彼女は横向きに倒れ伏していた。

「割りと簡単に倒せたっすね・・・」

「簡単ってわけでもないよ。セルゲフ二尉の防御力があったからこその、真っ向からの撃破だから」

――レストリクトロック――

私の持つバインド系でもっとも拘束効果の高いレストリクトロックでギルを捕らえる。セルゲフ二尉がそれを確認すると、ギルの元へと歩み寄っていった。そして「どんな顔してるんすかね～」って仮面を外し、目出し帽に手を掛けた。一気に脱がされた目出し帽の中身を見て、「え・・・？」私は目を丸くした。セルゲフ二尉も「あれ？　この子・・・！」って絶句。

『第5班。そちらはどうか？』

ヴィータちゃんからの通信が入る。でも応じられない。目の前に倒れてるティアナの姿に、私の頭の中は混乱してるから。そんな私に代わってセルゲフ二尉が「こちら5班。狙撃手1名を確保」って沈んだ声で応じた。

『お手柄です！』

「ありえない・・・こんなの・・・」

ヴィオラさんからの賞賛に応えることなく私は「ありえないよ・・・」って繰り返す。そんな私の様子をいぶかしんでくれたらしいヴィータちゃんが『なの――高町班長・・・？』って不安そうに名前を呼んだ。セルゲフ二尉がモニターのカメラをティアナの元へと移すと・・・

『んだよ、これ・・・！　ティアナ・・・！？』

ヴィータちゃんもまた驚きを見せた。私の見間違いなんかじゃない

ことが証明された。かつての教え子が、犯罪集団である最後の大隊のメンバーになっていた。ううん、やっぱりありえない、こんな事。

「き、きっと洗脳とかされているんだよ、ヴィータちゃん・・・・！」

『そ、そうだよな！　でなきゃおかしいよな！』

私とヴィータちゃんは自分にそう言い聞かせるしか出来なかった。そんな私にヴィオラさんは『とにかく、彼女を連行しなさい』って指示した。そうだ、確保してしまえば後でちゃんと調べられる。

「了解です。・・・5班、こちらに合流してください。アルド事務官は、最寄の陸士隊へ連絡を」

『『『了解です！』』』

班員に指示を出しつつティアナの元へと歩み寄る。やっぱりどう見てもティアナ本人にしか見えず、私はギュッと握り拳を作りながら「必ず、助けるからね」ってあの子にそう言葉を掛けた。

――トランスファーゲート――

「「・・・！？」」

空気がガラリと変わった。視界の端にちらりと移る黒のスカートと黒のマント。私は半球状の「サークルプロテクション！」を展開して、ティアナの護りに入った。セルゲフ二尉は私を庇うように、新

たな仮面持ち2人の前に立ちはだかった。

（1人は、ティーダ・ランスター一尉か）

男の仮面持ちは銃身の長いショットガンとアサルトライフルを両脇に挟んだスタイル。もう1人の女性仮面持ちの腰にはホルスターが付けられていて、収められているのは抜き身のロングソード。デバイスで言えばベルカ騎士だと思うけど・・・。

「ブラストディセミネーター・・・！」

ティーダ一尉のショットガンから、ティアナ?が撃った散弾と同じ魔法が放たれた。狙いはセルゲフ二尉の排除らしく、至近距離からの発砲だった。目の前が黄色の魔力爆発と白煙に溢れて、視界が完全に潰されてしまった。

「レイジングハート！　シューター、バニシングシフト！」

≪Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ　Ｂａｎｉｓｈｉｎｇ　ｓｈｉｆｔ≫

視界不良だけど"レイジングハート"のロックオン機能を最大限に発揮して、仮面持ち2人をロックオン。周囲に魔力スフィアを12基展開させて、「シューット！」発射する。

「ちょうど良い機会・・・！」

――フェアナイネン・ズィーー――

魔力弾が白煙を突き破り、仮面持ち2人の元へと殺到するのを晴れ始めた煙の中から見てたんだけど、「え・・・？」魔力弾が2人に着弾する前に掻き消えた。さらには「プロテクションが！？」突然消失した。

「一体、何をした・・・！？」

セルゲフ二尉が女性仮面持ちへ向かって突っ込んだ。彼女は「雑魚は退いてなさい」って、腰の剣を抜き放って一閃。セルゲフ二尉が「うわあああ！？」悲鳴を上げて吹っ飛ばされた。純粋な力押しじゃなくて、今のはセルゲフ二尉の力を利用した上で自分の力を重ねて返す、合気道のような技術だ。

「（間違いなく剣を得意とする騎士・・・！）あなた達を逮捕します！」

――アクセルシューターー――

ティーダ一尉とティアナ？の間に割って入って、魔力スフィアを12基と展開したところで、女性仮面持ちが「無駄だ」と言いながら私に近付いてきた。たったそれだけだったのに、「なんで・・・！？」魔力スフィアが一斉に消失した。

「レイジングハート、バインド！」

≪Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ≫

２人に対してバインドを発動しても、拘束するより先に消失させられてしまう。そこに「高町班長！　援護します！」って、私の班のみんなが来てくれたけど、でも「気を付けて！　魔力が消させる！」って警告すると同時、みんなが一斉にバインドを２人に掛けた。

「え、あれ・・・？」

――リュストゥング・アップブレーヌング――

あっさりとバインドに拘束された２人だったけど、次の瞬間にはまたあっさりとバインドが砕け散った。ダメだ、女性仮面持ちには何か、魔力の結合を分断する魔法みたいなものを有してる。女性仮面持ちが居る以上、魔法での拘束も攻撃も出来なくなる。

「くっ・・・！」

"レイジングハート"を右脇に挟んだ私は、屋上に倒れたままのティアナを左肩に担ぎ上げる。ここは逃げの一手しかない。向かうは屋上の縁。そこから地上へと飛び降りる、っていう方法を選んだ。

「逃がさん！」

――ヘクセ・フェアタイディグング――

「これは・・・！」

女性仮面持ちがベルカ魔法陣のシールドを複数展開して、ソレらがドーム状に配置されたことで逃げ道を封鎖されてしまった。

「「「班長！」」」

「同志ギルは置いていってもらうぞ、高町なのは一等空尉」

――トイフェル・ベライヒ――

「ぐぅ・・・！？」

妙な衝撃を受けたと思ったら、防護服が強制的に解除されて教導隊の制服に戻された。さらに「う・・ん・・・」うめき声を上げたティアナも、セーラー服から執務官の制服へと戻った。

「あたし・・・？」

「ティアナ！」

目を覚ましたティアナを呼ぶと、あの子は両手で自分の頭を触って、仮面や目出し帽を剥がされていることに気付いた。そして「なのはさん・・・」って私の名前を呼んだ。洗脳なんてされていなかった。ティアナは、自分の意思で仮面の大隊に下った・・・。

「どうして・・・」

「くそっ、高町班長を解放しろ！」

「女の方を優先して狙え！」

班のみんなが仮面持ち２人に攻撃を仕掛けて、ティーダ一尉の銃器と女性仮面持ちの強固なシールドで反撃されてしまう中、私は「なんであなたが・・・！」ってティアナを問いただす。

「・・・お兄ちゃ――兄が、兄が生きてたんです。死んだと思っていた兄が・・・。その兄が、あたしを大隊に誘ったんです。局にはもう未来は無い、って・・・」

「だからって！　こんな犯罪者の集団に参加して！」

「それでもあたしは！　お兄ちゃんとは離れたくなかったんです！」

ティアナと睨み合っていると、「なのは！」って私を呼ぶヴィータちゃんの声と、「第２班、第５班！　ここで仮面持ち２人を討つわ！」ヴィオラさんの指示が聞こえた。まさに多勢に無勢。だけど、近接特化の騎士であるヴィータちゃんとヴィオラさんを近付けさせないようにティーダ一尉が弾幕を張り、女性仮面持ちが他のみんなの射砲撃を完璧に防ぎきる。

「お兄ちゃん！」

「ティアナ！　この・・・馬鹿！　おめぇ、後で説教かますから覚えてろ！」

「ヴィータ教導官・・・っ！」

私も戦闘に参加したいのに、未だに防護服へ変身することすら出来ない。だから私は「ティアナ。あの仮面持ちの魔法、なんなのか教えて」って、私の魔力生成や結合を阻害するこの魔法についてティアナに聞いた。

「今や大隊の一員であるあたしが、味方を売るようなことを言うと思っているんですか・・・？」

「じゃあ・・・力ずくで聞き出してみようか・・・？」

魔法は使えなくても、教導官として近接格闘戦も出来るように訓練はしてきてる。それにティアナも魔法を使えないようだし、一方的な不利というわけじゃない。ティアナも立ち上がって、「ま、負けません！」と身構えた。あの子も執務官として数多くの戦闘を経験してきた。六課時代と同じなんて思わない方がいい。

「いきます！」

ティアナが意気込んで向かってきた。繰り出される右拳を受け止めようとした時・・・

――トランスファーゲート――

「「っ！？」」

全身に悪寒が走った。ティアナもそのようで、私の目の前で足を止めた。それにヴィオラさんとヴィータちゃん達や仮面持ち2人までもが動きを止めていた。空間の歪みから歩み出てきたのは女性の仮面持ち。仮面は両翼。最後の大隊の最高幹部の1人だと考えられているあの・・・。

「皆さん、そろそろ帰還しましょう。遅刻は厳禁です」

他の仮面持ちは変声魔法か何かを使って声を変えて正体を隠してた。でも両翼の仮面持ちは変えずに生の声を出してる。だからその仮面の下にある素顔を幻視することが出来る。

「エグリゴリ、フィヨルツェン・・・さん」

ルシル君――数千年と続くセインテスト家の悲願である"エグリゴリ"の救済。その1体であるフィヨルツェンは、SSSランク超えの戦闘能力を有してる、ルシル君やシャルちゃんと言った最古の魔導師、魔術師じゃないと傷1つ付けられない怪物だ。だから・・・

（あぁ、もうここまでだ・・・）

心が折れそうになったところで、「諦めてんじゃねぇよ、なのは！」ってヴィータちゃんに怒鳴られた。ヴィータちゃんだけがフィヨルツェンと正面きって向かい合ってた。ギガントフォルムの"グラーフアイゼン"を突き付けられたフィヨルツェンは右人差し指を立てて、"アイゼン"のヘッドの片方をツンと突いた。それだけで"アイゼン"のヘッド部分は破壊されて、「うわあ！」ヴィータちゃん

が数mと吹っ飛ばされた。

「お前・・・・！」

「急ぎですので、わたくしも少々手荒に行かせてもらいますね」

フィヨルツェンがニコリと綺麗な笑顔を浮かべたと同時、「わぷ・・・！？」強烈な暴風が吹いて、思わず両腕で顔を覆い隠す。その風も3秒とせずに収まって、腕を放して目を開けると、「・・・・！」ヴィータちゃんやヴィオラさんを始めとした教導隊のみんなが、デバイスを破壊された上で倒れ伏してた。

「そんな・・・・」

「さぁ、皆さん。帰りますよ」

――トランスファーゲート――

空間の歪みが生まれて、ティーダ一尉や女性仮面持ちが歪みの中に入っていくと、私とティアナを囲っていたシールドの檻が消失した。そのとき初めて私は気付いた。すでにティアナの姿が無いことに。

「いつの間に・・・・」

「では、高町なのはさん、いずれまた」

私にお辞儀したフィヨルツェンもまた、空間の歪みの中へと消えて

いった。みんなの状態を確認している中、陸士隊の車両から発せられるサイレンがフェードインしてきた。遅れて来てくれて良かったような気もする。フィヨルツェンとの衝突は免れたのだから・・・。

「ルシル君・・・。もう、ルシル君やシャルちゃん達にしか頼れない・・・」

待機モードになってる"レイジングハート"を両手でギュッと握り締めた。

Ｅｐｉｃａ１６－Ｄ犯罪者狩り～Ｔｒａｉｔｏｒ　？　２～

†††Ｓｉｄｅすずか†††

第８観測指定世界ミラルド。そこは現代の魔法文明を支えるデバイスなどの開発に必要とされる、特殊な素材が数多く眠る無人世界で、管理局の許可なくしては入ることが出来ない特別な世界の１つだ。そんなミラルドに、私とトーレとクアットロ、それにセッテの４人で赴いていて、今後の研究・開発に必要な素材の獲得に勤しんでる最中です。

「ごめんね、ちょっとだけ我慢してね。・・・シュート！」

――バインドバレット――

私の周囲に展開した魔力スフィア１２基を誘導操作弾として一斉に発射。狙うのは湖の真ん中に陣取る超巨大な亀。全長は６０ｍ、高さは２０ｍくらいあるかも。そんな亀の４本の脚に向かって放った魔力弾は次々と着弾して、その恐ろしく太い脚をなんとか拘束した。亀が長い首をもたげさせ始めた中・・・

「トーレ、セッテ！」

「ああ、任せろ！」

――ライドインパルス――

「はい！」

――スローターアームズ――

トーレとセッテのダブルアタックを指示する。トーレの右手首から展開されてるエネルギー翼・"インパルスブレード"と、セッテが両手に携えてる巨大ブーメラン・"ブーメランブレード"２本が、希少なレアメタルや鉱石で覆われた甲羅に当たる。

「くっ、やはり硬いな・・・！」

「すずか。もう一度いきますか？」

「お願い、セッテ。トーレも！」

「了解だ！・・・む？　反撃がくるぞ！」

亀が口を大きく開いたことでトーレが警戒するように叫んだ。でもすぐにクアットロが「大丈夫ですよぉ、トーレ姉様♪」って、纏ってるクロークをバサッと翻しつつ足元にテンプレートを展開。

「シルバーカーテン♪」

クアットロがスキルを発動。シルバーカーテンは、幻影を使って相手の知覚をかく乱するもので、亀の口から勢いよく放射された高水圧の砲撃は、私たちの居るところとはまったく違うところを通って

いった。

「今です、すずか、トーレ姉様、セッテちゃん！」

「はい！」「ああ！」「判りました！」

"スノーホワイト"をグローブ型から三叉槍型の「スノートライデント！」へと変形させて、３つの穂に「コールダー・ランス！」って冷気を纏わせる魔法を付加。ルシル君やセレスちゃんの魔法を参考にして作った切断・貫通力強化魔法だ。

「せぇーーーーい！」

「おおおおおおおおッ！」

――ライドインパルス――

「はぁぁぁぁーーーーッ！」

――スローターアームズ――

甲羅の一角に剣山のように付着してるレアメタルの柱２本へと"スノートライデント"を振るって、連続斬撃と刺突を打ち込む。続いてトーレの"インパルスブレード"が、私が傷つけた痕に追撃を打ち込まれた。最後にセッテの"ブーメランブレード"２本が直撃。

「やった！」

1mくらいあるレアメタルの柱2本がバキンと折れて、他の柱に引っ掛かった。亀は未だにクアットロのスキルに惑わされていて、私たちの幻影へと水圧砲や尻尾を振り回して反撃中。それに巻き込まれないようにもう一度接近したトーレが「採った！　離脱！」ってレアメタル2本を肩に担いで、亀から急速離脱。

「みんな、第1目標達成！　第2目標へ移動開始！」

私の指示にトーレ達が「了解！」って応じてくれて、亀の居る湖から急いで離れた。もちろんバインドは解除して。亀からの攻撃が届かない安全圏まで移動したところで「お疲れ様～」って、私はみんなを労った。

「えっと、それじゃあウーノ。転送準備をお願い」

『ええ、了解よ』

本局の第零技術部に居残りのウーノに、採取したばかりのレアメタルを直通転送で受け取ってもらう。転送されたのを見届けた後は、「はふぅ」と少し休憩。用意したお茶やお弁当を食べて、次の目標の予習。特殊鉱石を護るように群生している人食い巨大植物。自然発生したものじゃないらしく、魔力障壁やツタなどによる攻撃を行う知性のある危険植物だ。

「これまでに何度か局や各研究施設が焼いたり伐採したりしたそうだが、その再生力の凄まじさによって1日で元に戻るそうだ」

「ですが鉱石採取には何ら問題はありません」

「ですねぇ～。トーレ姉様とセッテちゃんの切断力と、すずかの氷結魔法なら十分に撃破可能ですぅ～」

食人植物の撃破はそう難しくないみたい。ならもう1つの目標、下手な金属より硬度のある角を有する巨大鹿の攻略。この鹿も、この世界特有の危険生物同様に魔力運用が可能な生き物で、すでに何名かが亡くなっているらしい。

「先ほどの亀と同じように～、私が幻術で視覚を潰しますぅ～♪」

「じゃあ私がバインドで動きを止めるから、トーレとセッテが攻撃担当でお願いね」

「了解した」「了解です」

それから休憩を終えて、食人植物が群生してるエリアへと移動を開始したら、ドォーン！っていう爆発音が立て続けに3回と聞こえた。私たちは背中合わせに陣形を取って周囲を警戒。するとセッテが「あちらに火の手が上がっています」って知らせてくれて、そっちに目をやると、「黒煙が上がってる・・・！」のを確認できた。

「あの辺りに火の手が上がるような要素は何も無いはずだが・・・」

「他の渡航者でしょうか？」

「ううん、今日の渡航者は私たちだけのはずだよ」

ということは、「密猟者かもですね～♪」クアットロの言うとおりかもしれない。無許可でこの世界に降り立って、勝手に素材の奪取や希少動植物の密猟など行う犯罪者も数多くいる。とはいってもその成功率は低くて、その大半が破損の激しい死体として発見される事が多い。

「密猟者なら放っておいても良いのでは～？　死ぬのも自己責任ですしぃ～」

「う～ん、でも見殺しにするのもちょっと夢見が悪いというか・・・」

「そういうわけだ、クアットロ。気に入らずとも救援に行かなくては局員ではないぞ」

「は～い、トーレ姉様～」

黒煙が上がる方へと進路を変更して空を翔る中、トーレが「あれは仮面持ちか」って言った。未だに肉眼で視認できない私だけど、トーレや他のシスターズは機械の体だ。、視界をズームアップする機能も持ってるから、こんな遠くからでも視認できるんだ。

「仮面持ちは女２人、周囲には密猟者と思しき人間が１０人ほど。うち半数が死体です」

「あらあらぁ、最後の大隊に殺害されちゃうような下種共ということですねぇ～。どうしますぅ～？」

「決まってるよ。仮面持ちも密猟者もまとめて捕まえる！」

私がクアットロにそう答えると、トーレがフッと小さく笑って「ああ、楽しみだ」ってやる気を漲らせた。トーレの戦闘者としての意識が昂ぶってるみたい。だったら「トーレ、先行お願い！」って指示を出す。

「ああ、任された！」

――ライドインパルス――

スキルを使って超高速で現場へ向かったトーレに追翔するように「フローズンバレット！」を、オートロックオン機能を追加した上で12発と放つ。次いで「セッテも先行！」って指示を出して、私やクアットロより飛行速度の速い彼女も先へ行かせる。

「クアットロは・・・」

「とりあえずすずかの直援に入ります～」

「うん、それでお願い」

私も速度を上げて現場へ向かう中、トーレから『エンゲージ！』っ

て連絡が入ったから、私は「シューート！」って号令を掛けて、トーレの側に待機させていた魔力スフィアを魔力弾として射出させる。

≪っ！　すずか、全弾を無力化されてしまいましたわ！　相手はかなりの手練れですわ！≫

「でもぉ、トーレ姉様とセッテちゃんの前じゃ、余程の魔導師じゃない限りは勝てませぇん♪」

「だね・・・！」

そうして私とクアットロも現場に到着。トーレは両手に剣型デバイスを携える女性仮面持ちと闘っていて、セッテも徒手空拳の女性仮面持ちと闘ってるんだけど・・・。徒手空拳の仮面持ちの武装は、ローラーブーツと籠手っていう、友達に瓜二つなものだった。

（しかも戦闘スタイルがシューティングアーツ・・・！　こんな偶然が・・・！）

ううん、戦闘スタイルが似通ってたってスバルやギンガ、それにノーヴェやクイントさんなわけない。局員なクイントさん達は有名だし、そのスタイルを真似る人がいたっておかしくないから。少なからず受けたショックをかき消すために自分にそう言い聞かせて、まずはセッテと交戦してる拳闘魔導師から片付ける。

「セッテ！」

「いつでも！」

――バインドバレット・サークルシフト――

セッテが仮面持ちから一足飛びで離脱して、追撃されるより先に仮面持ちの周囲に魔力スフィア１４基を半球状に高速展開。仮面持ちが対処する前に「シュート！」って発射させる。仮面持ちはローラーブーツの機動力で、前後左右、それに上からも来るバインド弾を躱し始めた。でも・・・。

「捉えた！」

仮面持ちの隙を突いたセッテが高速接近して、"ブーメランブレード"を振るった。仮面持ちはそれを読んでいたみたいで、足元に見覚えのあるテンプレートを展開して、右腕を振りかぶった。

「はあああああッ！」

――振動拳――

「「「っ・・・！？」」」

"ブーメランブレード"の迎撃として繰り出された仮面持ちの右拳。拳が刃面を打ち、そして"ブーメランブレード"を一瞬にして破壊。さらに「きゃあああ！？」セッテの右腕を大きくひしゃげさせ、後方に十数ｍと吹っ飛ばした。

「今のは・・・・！」

「振動破砕・・・・！？」

「くぅ・・うぅ・・・・！」

振動破砕を使った影響か右の籠手が砕け散って、右腕を押さえる仮面持ちを視界外に出すことなく私は、「セッテをお願い！」ってクアットロに指示を出す。サイボーグで良かった。ダメージは大きいけど、致命には至らない。スカラボに搬送して、治療すれば回復できるレベルだ。

「判りました！　セッテちゃん！」

「待っ――まだ闘えます、すずか！」

半ばから折れた右腕を庇いながら体を起こそうとするセッテをクアットロが支えて、私たちの側から離脱する。

「問答無用！　ウーノ、セッテを転送してください！」

『了解です！』

緊急転移で即座にセッテをスカラボへと直通転送。セッテは最後まで残って闘おうとしたけど、そこは主任としてストップだ。セッテはすぐさまスカラボに転送されて、今頃はウーノとドゥーエが治療に当たってくれるはず。そして私は振動破砕を使用した仮面持ちと

対峙する。

「スバル・・・なんだよね？」

そう尋ねても返ってくるのは無言。でも構えや雰囲気でスバルなんじゃないかって思えてくる。私は"スノートライデント"の長い柄を両手で握り締め、石突側を空へ向け、穂先を前方の地面へ向けるように突撃の構えを取る。

「（トーレの方は手を貸さなくてもきっと大丈夫。だから・・・）言葉を交わさないなら、交わせるようにちょっと痛い目に遭ってもらうよ」

――チェーンバインド――

「っ・・・！」

スバル？の周囲から鎖状のバインドを４本と伸ばしたけど、彼女は急速後退することで回避。

「フローティングアイス！」

スバルの背後に氷塊を１つ発生させる。この魔法は大きな氷塊をシールドとして使うものだけど、壁や足場として別の使い方もある。

「あぅ・・・！？」

ドンッと氷塊に背中からぶつかったスバル？がハッとして背後をチラッと見た。その僅かな意識の外れを見逃さず、私は「ふっ・・・！」息を小さく吐いて一気に距離を縮める中、スバル？の視界に入らないように、私の背後にバインドバレット６発を追翔させるように発動。

「っ・・・！」

スバル？が私の接近に気付いた。仮面越しながらもその視線が"スノートライデント"の穂先に向いてる気がする。視線誘導は完璧。なら・・・。私は穂先の角度をさらに下げて、地面へと突き立てる。棒高跳びのように私は宙へと飛び上がって、彼女の視線をさらに私に誘導。ここまで来たらもう私の勝ちだ。

「え？・・・あ！！」

スバル？の頭上から彼女がバインドバレットの直撃を受けて、６本のバインドで拘束されたのを見届ける。いろいろと問い質したいことがあるけど、「ウーノ、転送お願い！」って、まずは確実に本局へと移送することを優先。最後の大隊には転移スキルを持ったメンバーがいる。せっかく捕らえたのに奪還されるような下手は打てない。

『了解です。主任、人手が足りないので他の部署の技術官を呼びました。事後報告で申し訳ありません』

「大丈夫！　あと、これから送るのは最後の大隊メンバーだから、

武装隊にも応援を！」

『了解です。では手続きに入ります！』

ウーノとの通信が切れたと同時、スバル？が転送の光に飲まれる。バインドから逃れようともがき始めて、「アンチェイン・・・ナックル！」って、私のバインドをすべて弾き飛ばしたんだけど、もう手遅れ。脱出できないままスカラボへと転送された。

「次！」

トーレが未だに撃破できていないほどの実力を有する双剣の仮面持ち。おそらく幹部クラスだ。あの仮面持ちこそ捕まえないといけない。だから「クアットロ、援護お願い！」って指示する。

「了解です！　シルバーカーテン！」

クアットロの幻影でかく乱しつつ、私とトーレで確実に墜とす、って作戦を立てる。双剣の仮面持ちはトーレの高速移動に余裕で付いて来られるような実力だ。やり過ぎなんてことはない。トーレが一旦距離を置くと同時に、私とトーレの幻が１０体ずつ出現した。

「・・・っ！」

仮面持ちが息を呑むのが判った。トーレと互角だったことから、私とクアットロの参戦で逃げの一手に踏むと考えてた私は「バインドバレット・・・！」をスタンバイ。そして仮面持ちの動きに注意を

払っていた時、彼女は双剣を地面に突き刺したうえでミッド魔法陣を展開。その魔力光の色は茜色。脳裏に過ぎるアリサちゃんの姿。

（だけど、そんなのありえない！）

――ストームフレア――

魔力光が同じ人なんて数多くいる。だからあの仮面持ちも、たまたまアリサちゃんと同じ魔力光なんだって考えてると、展開されていた魔法陣から強烈な炎が噴き上がった。飛んで来る火の粉からも魔力を感じることから、触れたらきっとダメージが入る。

「炎で障壁を張ったか・・・！」

「これだと逃げられちゃう・・・！」

自己ブーストのナイツ・ルナレガリアを発動できれば、真っ向から対処できた。でも残念ながら今は昼間。管理世界標準時なら深夜だけど、この時間帯じゃあまりに弱い。だからと言って手を拱ねいている余裕は無い。転移スキルで逃げられる可能性が完全になくならない以上は・・・。

「バインドバレットを破棄！　リフリジレイト・エア！」

≪かしこまりましたわ！≫

仮面持ちの炎の竜巻を上書きするように吹雪の竜巻を発生させる。

炎と吹雪が混じり合って周囲に火の粉やら雪やらを撒き散らす。でも炎の「勢いが収まらない・・・！」所為で、私の魔法がどんどん弱くなってく。

「いや、あそこまで弱まれば、十分突貫できる・・・！」

――ライドインパルス――

トーレが高速移動スキルを使って炎と吹雪の竜巻の中へ突っ込んだ。そのすぐにドンッと竜巻を突き破ってトーレと、トーレの右手で顔面を鷲掴まれた仮面持ちが飛び出してきた。仮面持ちは空いている左手に携えてる剣を振りかぶろうとしたから、私は咄嗟に持ってる"スノートライデント"を投擲。我ながら褒めたくなるほどの綺麗な軌跡を描いて、仮面持ちの剣を弾き飛ばした。

「ぐっ、くぅぅ・・・！」

「膂力で敵うと思うな・・・！」

トーレは仮面持ちの剣を握り潰し、さらに仮面を粉砕。続けて目出し帽までも引き千切ろうとしたけど、仮面持ちの悪あがきが始まった。トーレのお腹に魔力付加した膝蹴りを打ち込んで、かなり体重があるトーレを吹っ飛ばした。

「チェーンバインド！」

でもソレで逃げ切れるだなんて思わないで。私は即座にバインドを

発動させて、仮面持ちの四肢をバインドで拘束した。仮面持ちは必死に体をくねらせてバインドの隙間を作ろうとしてるけど、私のバインドはそんなに柔じゃないよ。

――ブレイズロード――

力ずくじゃ無理だって判断した仮面持ちは体全体を炎で覆って、私のバインド以上の魔力を以ってバインドを焼き払って自由になった。そして今度こそ離脱するためか、炎を全身に纏ったまま離脱を図った。

「逃がさない！」「逃がすか！」

――ライドインパルス――

「アイスミラー八陣の３・ウィドゥスウォール！」

ミッド魔法陣型のシールド８枚を横一列に並べるように展開して、仮面持ちの逃げ道を僅かでもいいから塞ぐ。仮面持ちは飛び越えることを選択したみたいで、グッと膝を曲げて跳躍準備に入った。でもその僅かな停止が、トーレの追撃を許す大きなミスとなった。

「はあああああッ！」

――インパルスブレード――

仮面持ちへ斬り掛かるトーレ。振り払われた右手首から展開された

"インパルスブレード"は、ギリギリで展開されたラウンドシールドを打ち、その勢いを僅かに落とした。その間に仮面持ちは改めて離脱を図ろうとするけど、私が居るってことは忘れちゃダメだよ。

「キャプチャーネット！」

魔力の縄を編んで作られた１０ｍ四方の魔力網を、仮面持ちの頭上に展開して降らせる。彼女は捕まる前に前方にヘッドスライディング、そして前転して完全にネットの範囲外へと離脱した。仮面持ちは肩で大きく息をしながら私たちを見た。

「思っていた以上にやるな・・・」

「うん。・・・本当に・・・アリサちゃんみたい・・・」

「っ！・・・あぁ、なるほど。どこかで見たことのある身のこなしだと思ったら・・・。しかし」

トーレも私の言葉に同意はしたけど、アリサちゃんなわけがないって首を横に振った。クアットロも「ですねぇ～。スバルらしき子も、何か訳ありと思いますぅ～」って微笑んだ。

「正体はどうであれ、捕まえて聞き出せば良いだけですぅ～♪」

――シルバーカーテン――

クアットロが再び幻影スキルを発動して、私とトーレとクアットロ

の幻が3桁近くまで出現した。仮面持ちは焦ることなく周囲を素早く見回して剣の位置を確認したのが判ったから、先制で対象を氷に閉じ込める拘束魔法の「アイシクルスタチュー！」を発動。剣を氷塊で覆って封印。

「はあああああああああッ！」

――ブレイジングスマッシュ――

仮面持ちが右腕に炎を付加した上で足元を殴った。起こる大爆発、生まれる黒煙、放たれる衝撃波。その所為で完全に仮面持ちを見失ってしまった。

「すずか！」

――トランスファーゲート――

「うん、すぐに晴らすよ！　リフリジレイト・エア！」

私たちに害が及ばない距離に竜巻を発生させて黒煙を晴らすんだけど、「ダメだ、逃げられた！」って悔しがるトーレの言うように、あの仮面持ちの姿はもうどこにも無かった。

・――・――・――・――・

淡い照明に照らされた鋼の通路に2つ人影の姿があった。ひとりは転移スキルを用いて、仲間を各地に飛ばし、そして回収する役目を

担うシスター、トルーデ・ロホルト。ひとりは先ほどまで月村すずか、トーレ・スカリエッティ、クアットロ・スカリエッティと交戦していた女性仮面持ち。仮面はトーレに砕かれ無いが、目出し帽は今なお着用している。

「同志ウェン。ホントに助かったわ。危うく計画外のあたしまで捕まりそうだったわ」

「構いません。これが私の任務です。それはそうと同志カラン。もう変身を解除しても問題ないですよ。ここは我われ最後の大隊の本部なのですから」

「っと、そうだったわね」

同志カランと呼ばれた変身を解除し元の姿へと戻った。その姿はやはりすずか達が危惧したとおり、時空管理局ミッドチルダ地上本部、首都防衛隊に所属するアリサ・バニングスだった。そんな彼女たちの行く手の先より、「シスター、アリサさん！」と名前を呼びながら駆け寄ってくる少女が1人。

「どうかしました、同志ギル？」

同志ギルと呼ばれた少女の姿は、どこからどう見てもティアナ・ランスターだった。ティアナはアリサの前にまで移動して、「あの、スバルは・・・？」と尋ねた。やはり先ほど確保されたのはスバル・ナカジマだったようだ。

「予定通り捕まってもらったわ。ここからが局崩しの始まりよ」

「そう・・・ですか。ですよね・・・、それが・・・計画なんですよね・・・」

アリサからの答えを聞いたティアナは、「判ってたけど・・・」と俯きながらポツリと漏らした。アリサはそんなティアナの肩をポンと叩き、「耐えなさい。今は・・・」と言って、彼女の隣を通り過ぎていった。

「同志ギルは大丈夫でしょうか？」

「兄のティーダ一尉が居るのだから、少ししたら問題なくなるわよ」

アリサもそうは言うが表情はやはり曇っていた。とぼとぼと遅い足取りで付いて来るティアナを含め、本部と呼ばれる施設の奥へと向かったアリサとトルーデの3人は、あるスライドドアの前に立った。ドア横のプレートには会議室を意味する、コンフィレンツツィマーとベルカ語で刻まれている。

「「失礼します」」

「・・・失礼します」

開いたスライドドアを潜り、円筒形の大ホールへと入ったアリサ達。床の構造は棚田のように階段状になっており、一段ごとに途轍もなく長いテーブルが床の形状に沿って置かれている。ホール内には最

後の大隊の幹部メンバーが揃っており、中央である一番低い床には、"堕天使エグリゴリ"のフィヨルツェン、パラディンのキュンナ、そして元イリュリア騎士団総長のグレゴールの最高幹部が立っていた。

「諸君。まずはご苦労だった」

労いの言葉を各メンバーに掛けたグレゴールは毛1本と無い禿頭を撫でた後、「早速だが・・・」と本題を切り出した。彼の話を引き継ぐようにフィヨルツェンが「新たな仲間を紹介します」と発した。その言葉を合図とするかのように出入り口のスライドドアが開いた。

「前所属は本局特務零課、現在はミッドチルダ鉄道警備隊に所属。ミヤビ・キジョウ陸曹です」

以前、大隊メンバーからスカウトを受けていたミヤビがそこに居た。

Ｅｐｉｃａｌ６－Ｆ犯罪者狩り～Ｅｒｏｂｅｒｕｎｇ　Ｆｌｏｔｔｅ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

とあるニュースが流れてるモニターを、私が任されてるＬＳ級艦船ヴォルフラムの艦長執務室で眺める。曰く、現役の管理局員が、最後の大隊の一員として殺人事件を起こしてる、ってゆうもんや。逮捕者の中にはミッド地上本部や本局の捜査官や結構な役職持ちが多い感じや。けど、それらよりもっと私を悩ませてるんは、かつての部下の名前が挙がってるってことや。

「スバル・・・なんでや。それにティアナも・・・」

逮捕されたんは今のところスバルだけやけど、ティアナが大隊の一員として活動してた様子がキッチリ映像に残ってて、公にはまだ出てへんけど局内部で問題になってる。なのはちゃんやヴィータからも実際に見て話もしたって話やし。

「き、きっと洗脳とか偽者とかですよ、はやてちゃん！」

そう言うて私を気遣ってくれたのは、司令補の１人であるリインや。本来の手の平サイズの姿は久しく見てへんな。そしてもう１人の司令補であるアインスが「偽者はないな」って断言。スバルに関しては私も同じ意見や。

「どうしてです、アインス？」

「ティアナは偽者でも洗脳でも説明できるが、スバルはスバルにだけしか扱えない振動破砕を使ったのだろう？　あれを再現できるとは思えないんだよ」

「そうやな。でも洗脳でなんであれ、スバルが殺人に手を貸したってことが、すごい辛いわ・・・」

「・・・です」「はい・・・」

お通夜みたく沈みきった雰囲気の執務室に鳴り響く、通信が入ったことを知らせるコール音。私は一度深呼吸をして意識を切り替え、「こちらヴォルフラム艦長執務室」って応じた。展開したモニターに映るんは1人の女性。

『こちらリュッチェンス、ハルトマンです。本作戦の再確認を、と思いまして』

海上警備部の捜査司令を若干２８歳で任されてるエリート、アルピナ・ハルトマン一等空佐や。

「了解です。艦内全域に流します。・・・ヴォルフラム艦長、八神です。これよりハルトマン捜査司令より、本件の作戦の再確認をしていただきます。傾注するように！」

『アルピナ・ハルトマンです。本局よりお借りした航空武装隊と共

に我われ海上警備部は、確認された艦船の予測針路に従い、クルーソー無人列島へと向かいます』

ヴォルフラムとリュッチェンス、２隻の艦内全体通信を用いて、ハルトマン司令が簡単に作戦を伝えてく。"プライソンの遺産"と呼ばれる巨大兵器の１つである戦艦を、ミッドへ降下中やった本局の管理局艦船が捉えたってゆう報告がミッド地上本部に入った。その連絡はすぐに海上警備部の私らに入って、すぐに動けるヴォルフラムとリュッチェンスにスクランブルが掛かったわけや。

クルーソー無人列島は、ある私企業が社員旅行の避暑地として購入したそうなんやけど、その私企業ってゆうのを調べた結果、いくつかのマフィアが共同で使うアジトやったってことが判明。すぐに捜索令状を発布してもらい、強制捜査ってことになった。

『――では、高高度からの降下による奇襲攻撃は、３０分後の１３００時からとなります。各自、準備を整え終えていてください』

各自の降下地点などの再確認なども行って通信は終了。目的の島の周囲２０ｋｍには小さな島が点在するだけで、一番小さいＬＳ級とはいえその艦艇を隠すことは出来ひんからな。奇襲するなら自然と高高度からってことになる。

「・・・そろそろですね。はやてちゃん」

「ん。行こか、リイン、アインス」

「はいです！」「はい！」

３人で執務室を出て、艦隊下部にある降下ハッチのある部屋へと向かう。そこには警備部ヴォルフラム付きの警備隊員１５名、それに本局武装隊の１５名、計３０名が整列して待っててくれてた。私ら３人は彼らの前に並んで、「では、これより降下を始める！」って号令を掛けて、全員を防護服へと変身させる。次いでブリッジに降下ハッチを開放するように指示を出そうとしたところで、けたたましく鳴り響く警報・・・レッドアラートや。

「ブリッジ、状況は！？」

『列島の方角より捕捉信号を受けています！』

見つからへんように息を殺して隠れるんやなくて先制攻撃に切り替えたか。私らの捜索から逃れられへんって観念したわけやな。それやったら大人しく投降すれば良かったのに・・・。そうすれば痛い目に遭わずに済んだのにな～。

「一応、艦船防御は働いてるゆうても、どんな攻撃が来るか判らへん。多少手荒でもええから回避行動を取ってな」

『了解で・・・、あっ！　司令、目標の艦船を確認できました！』

私らの前に大きなモニターが展開。クルーソー無人列島の映像が映し出されて、特に大きな島から1隻の戦艦が出航してる様子が見て取れた。私は「これまでに確認された艦体との照合！」を指示。

『・・・出ました！　およそ1年半前に特務零課が交戦、そして破壊した艦船と同じものです！』

シャルちゃん達がまだ特騎隊として活躍してた頃やね。データを見せてもらうとそれは以前ルシル君に教わった、ビスマルク級ってゆう戦艦であることが判った。４基ある２連装主砲の計８門がヴォルフラムとリュッチェンスに向けられたようや。

「回避後、降下ハッチを開放！　私とアインスで戦艦を押さえる！　武装隊、警備隊は島内に突入し、マフィアの逮捕！」

回避行動に若干揺れるヴォルフラム。私からの指示に各隊員は「了解！」と敬礼。とここでハッチが開いて、眼下に広がる海を臨めるようになった。

「まずは私とリインフォースⅡ司令補、リインフォース・アインス司令補の３人で降下。戦艦への攻撃を開始する。その間に両隊に降下するように！　じゃあリイン、アインス、行くよ！」

「はいです！」「はい！」

３人一緒に大空へと飛び立って、重力に従って急速降下。戦艦を視界に収められるほど降下したとことで「リイン！　ユニゾンや！」って、リインとのユニゾンを果たす。

「アインス、兵装を真っ先に潰すよ！」

「はい、主はやて！」

高高度を飛ぶヴォルフラムとリュッチェンスを狙って放たれるのは主砲レールガン。副砲や機関砲台は稼動してへん。まぁ2隻の居る高度にまで届くとは思えへんしな。とりあえず最優先は、二連装機関砲8基の制圧やね。アレの直撃は錬度の高い航空魔導師でも確実に撃墜・・・死ぬわ。

「ハウリングスフィア！」

私は大きめな魔力スフィアを周囲に6基と配置。降下を続ける中でアインスが「妙な力場を感じます」って言うて、背中から展開されてる6枚の黒翼の中から羽根を1枚、右手の親指と人差し指で摘み取ってフッと振ると、羽根は5m近い槍と化した。

「主はやて。おそらく障壁です」

『一気に貫くです？』

「そうやな～・・・。試しに私から行くわ。アインスはよう見てて」

「はい」

"シュベルトクロイツ"の先端を戦艦へと向けて、「ナイトメアハウル！」って、杖の先端と周囲のスフィア6基から直射砲を発射。左舷の機関砲台の稼動を確認。放たれてくるんは実弾やなくて「エネルギー弾・・・！」やった。1発1発の威力は低いようやけど、

さすがに何百発も撃たれたら私の砲撃も粉砕されるわ。

「さすがの私も直撃は避けたい物量です。主はやてはこの高度で待機を。ここまでは届かないようですし」

アインスの言うように主砲のレールガンの射程は尋常やないけど、エネルギー弾はそんなに長ないようや。

「次は私は仕掛けます。主はやて達は遠距離からの攻撃をお願いします」

「ん。了解や」

『判りました！』

そう言うてアインスは単独で再降下しつつ、「その身に刻め！　ビーネン・シュティッヒ！」魔力槍を投擲。エネルギー弾の弾幕が迎撃に入るけど、アインスにも魔力槍にも掠ることが出来ひん。そんで魔力槍が弾幕の中を突っ切って、もうちょいで主砲に直撃ってところで艦体全体を覆うバリアに拒まれて消失した。

「っ！　なんや、あの尋常やあらへんバリアは！」

『アインスのシュティッヒを防御したですか！？』

アインスの数ある魔法の中でも結構な貫通力を有するビーネン・シュティッヒ。アレを防ぐバリアとなると、私の魔法やとヘイムダル

や螺旋槍レベルの質量か、集束砲くらいしか突破できひんやろな。

『戦艦が移動を始めたです！』

「アインス、航行を妨害する！　巻き込まへんようにするけど、念のために気を付けてな！」

『了解です。存分にどうぞ』

"夜天の書"のページを開いて、あるページを開けたままにする。

「仄白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ・・・！」

呪文を詠唱して、私の周囲に立方体タイプの魔力スフィアを４つと展開。

「来よ、氷結の息吹（アーテム・デス・アイセス）！！」

放射するのは４本の砲撃。狙うは戦艦・・・やなくて周囲の海。この魔法は、圧縮した気化氷結魔法を撃ち込むことで、その着弾点の周囲の熱を奪って凍結させるってゆう効果を持ってる。そやからどれだけのバリアを持ってても、足元――海を凍結されてはどうすることも出来んやろ。

「戦艦の足は止めた！　リイン、今度はレールガンの迎撃や！」

『はいです！　フレースヴェルグ、スタンバイ！　精密コントロー

ル、遠距離照準、最終誘導、全部任せてください！』

また"夜天の書"のページを捲って、次に発動したい魔法のページを開きっぱなしにする。そして「来よ、白銀の風。天よりそそぐ矢羽となれ！」と詠唱へと入る。前面にベルカ魔法陣を展開。三方の円い陣から精密狙撃パターンに切り替えた砲撃、「フレースヴェルグ！」を連続発射。

（レールガンの弾速は恐ろしく速い。そやけどどこから発射されて、どこを狙ってるのかが判れば迎撃だって可能や！）

ヴォルフラムとリュッチェンスを狙って放たれ続ける（冷却時間がえらく短い・・・）レールガンを、私の狙撃砲で確実に撃ち落してく。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒アインス†††

主はやての氷結の息吹で航行を完全に阻害され、フレースヴェルグでレールガンも完封されている。ならば後は私が砲台を潰してしまえばいいだけ。魔力槍では突破できなかった戦艦の障壁だが、ならば障壁貫通専用の魔法を発動するのみだ。

「ラケーテン・ナーゲル・・・！」

私を撃墜するべく機関砲台より放たれてくる無数のエネルギー弾。その弾幕を舞うように躱しつつ、戦艦の左舷に取り付く。私の腕ほどの長さと太さを有する魔力で構築した1本の釘。対バリア効果を

有したソレを握り込んだ右拳の前に配置し、広く取った釘の頭部を殴りつけて先端部を障壁へと打ち込む。先端部が僅かに食い込んだのを確認し、即座に「はあああああッ！」魔力で打撃力を強化した膝蹴りを釘の頭部へ打ち込んだ。

（入った・・・！）

釘のおよそ半分が障壁内部へ貫通したのを確認した私は、急いでその場より離脱する。弾幕を回避しつつある一定の距離まで離れたところで「アンツュンデン！」トリガーとなる単語を口にした。直後、釘は大爆発を起こし、戦艦のバリアを内と外の両方から破砕させた。元となった魔法は、なのはのエクセリオンバスターＡ・Ｃ・Ｓ。高速突撃を敢行し、ストライクフレームという魔力刃でバリアを貫通、そして内側へと零距離砲撃を撃ち込むという、あの捨て身攻撃だ。

（さすがに捨て身は出来ないが・・・）

杭による刺突には一切のダメージはないが、バリア貫通という効果だけは最高レベルのものだ。何はともあれ、『主はやて！　バリアの破壊に成功です！』と報告を思念通話で入れる。

『了解や！』

――フレースヴェルグ――

「闇よ、響け！」

――ナイトメアハウル――

今度こそ戦艦の兵装の破壊を行うために砲撃を放つのだが、「っ！　さらにバリアだと！？」ということで、私たちの砲撃はまた防がれてしまった。だがバリアを破砕できる手段はもう既知だ。私が再び魔法を使えば、２つ目のバリアを破砕できる。

『主はやて。もう一度バリアを破砕してきます。破砕に合わせて砲撃を撃ってください！』

『判った！　爆風や破片に気を付けてな！』

もう一度接近を試みようとしたところで、『八神司令、アインス司令補！　新たな船影を確認！』とヴォルフラムより通信が入った。戦艦への接近を中止し、エネルギー弾の射程の外――主のお側まで上がる。

「嘘やろ・・・・！」

『あれではまるで・・・・』

「艦隊・・・・！」

私たちの前に現れたのは１３隻からなる艦隊だった。軍艦については私も詳しくは知らないが、ルシルから教わった知識と照らし合わせ、戦艦３隻、空母１隻、駆逐艦４隻、巡洋艦４隻、あと砲台を一切置いておらず、甲板が広々とした謎の艦が１隻という構成なのは

判る。

「ヴォルフラム！　現在の状況を本局とミッド地上本部へ送信！私らだけやと攻略は難しい！」

『りょ、了解です！』

「しかし・・・これほどの遺産を、たかがマフィアに揃えられるのか・・・？」

あの無人列島を所有しているマフィアは４つ。規模はそれなりにあるとは思うが、さすがに１３隻も所有となると、本当にマフィアなのか？と首を傾げざるを得ない。主からの「とりあず一旦帰艦するよ！」という指示に、私とリインは「了解！」と応じ、ヴォルフラムへと戻ろうとしたその時、ドォン！と轟音が何度も鳴り響いた。

「艦隊の狙いは私らやない！　戦艦と列島や！」

目の前で起こる艦隊による圧倒的な砲火。私が少々苦労した戦艦のバリアを、有無を言わさぬ強大無比な砲撃で撃ち破り、数秒足らずで撃沈せしめたその光景に私たちは息を呑んだ。さらに種別が謎だった艦の甲板からは何十発というミサイルが放たれ、他の艦からも砲弾、エネルギー弾などなどが間髪入れずに放たれ、列島を焼き尽くしていく。

「この容赦の欠片もないやり方・・・！　まさか、この艦隊を所有してるんは・・・！」

「ええ、最後の大隊でしょう・・・！」

あの苛烈さを生み出すことが出来るのは、プライソンか最後の大隊だけだろう。とここで、『八神司令！　ハルトマン捜査司令より通信です！』とブリッジより通信が入った。

『八神司令、ハルトマンです！　今、列島内からアドニーファミリー、ウバロパーティ、異端結社、星連会、この４組織の首領より投降するという旨の連絡が入りました。そちらにもモニターを寄越します！』

私たちの前にモニターが展開され、煌びやかな部屋と円卓に腰掛けた老人４人が映り込む。身なりがきっちりした紳士のようだが、管理世界にその名を轟かすマフィアのボスである。そんな彼らは、自分たちを無事にこの場から逃がして身の安全を確保してくれさえすれば、逮捕されてもかまわない、というある種の取引を持ちかけてきた。今彼らの居る場所への隠しルートなどのマップも提供され、行けなくはなくなったが・・・。海上警備部は取引を承諾するようで、『保護しに行きましょう』とハルトマン捜査司令が指示を出した。

『八神司令・・・。海上警備部より応援を出動させたとの連絡が入っています。ですが到着までもうしばらく掛かるようです』

「・・・了解。それでは私とリインとアインスの３人で・・・」

主がそう伝えようとしたところ、ハルトマン捜査司令が自分を指差し、『４人目です♪　それに・・・』と微笑んだ。さらにモニターの外へと視線をやるとカメラが引いて、艦長席の隣に佇んでいた副官を映し出した。ターコイズブルーの長髪をポニーテールにし、桃色の瞳はやる気に満ちている。

『セラティナ・ロードスター司令補を加えた、５人で向かいましょう。すぐに合流しますね♪』と微笑んだ。捜査司令たちとの通信が切れ、そう時間を経ずにリュッチェンスよりハルトマン捜査司令とセラティナが降りてきた。

「お待たせしました」

金色のショートヘアを風に靡かせ、ツリ目気味の翡翠色の瞳は、砲撃を止めた艦隊へ向けられている。漆黒のエンパイアドレス、袖の無いインバネスコート、キューバンヒールという防護服に、先端の球体に羽を畳んだ蝶が数匹と並んだような杖型（私としてはメイスと思える）ストレージデバイス・"シュメッターリング"。

「同じ空を飛べるのは何年ぶりかな・・・？」

「そうやね～。特捜課が解散してからやし、もう随分と前やね」

「そっか～。・・・はぁ、特捜隊は解散、特騎隊は無期限活動停止。行くとこ行くとこ無くなっちゃうから、海上警備隊も無くならないように頑張るよ」

「さすがに海上警備隊は無くならへんと思うよ？」

幼少の頃よりデザインの変わらないワンピースにジャケット、コルセットスカートという防護服に身を包んだセラティナと会釈。

『ハルトマン捜査司令。艦隊の砲撃が止むとほぼ同時、列島内にて多数の魔力反応が出現しました。おそらく大隊メンバーによるマフィア掃討かと思われます！』

主とハルトマン捜査司令が顔を見合わせて頷いた。砲撃の心配が無くなりさえすれば、両艦にて待機中の戦力を投入できる。そういうわけで、２人の指示の元に各隊も降下を開始。私たちはマフィアのボス４人の保護（という名目の逮捕）となり、先ほど送られてきた最初の隠しルートへと向かった。そこは崖なのだが・・・。

「ここですね。よっと！」

ハルトマン捜査司令は"シュメッターリング"で大きな石造を打撃して粉砕。うむ、やはり杖ではなく鈍器だな。開いた隠し通路の入り口から岸壁の中へと突入。単に掘り進めただけと言うような洞穴を駆け抜け、中央館、西館、東館からなる大きな屋敷の裏手へと出た。

『あちこちから戦闘音が聞こえるです』

「武装隊も我ら警備隊も信頼に足る実力者ばかりです。今は信じて任務を果たしましょう」

ハルトマン捜査司令の言葉に私たちは頷き、屋敷へと突入しようとしたところで「局員を視認！」という声が聞こえた。こちらに向かって来ていたのは仮面持ち４人。私が迎撃に動こうとすると「私が片付けます」と、セラティナが連中に右手を翳した。

――インディビジュアル・ケース――

セラティナが魔法を発動し、４人の仮面持ちはそれぞれ桃色に輝く四角柱に閉じ込められた。結界内に居る連中が何やら叫び、内側をデバイスなどで叩いているがビクともしない。当然だ。セラティナは今もなお、管理世界最高の結界術士なのだから。

捕らえた仮面持ちは後から来るであろう部下たちに託し、私たちは屋敷内へと突入した。さらなる隠し通路があるのは西館１階にあるダンスホール。そこへ向けて駆ける中、通り過ぎたばかりのドアから「どこだ！？」と叫びながら、仮面持ちが６人と飛び出してきた。

「局員！？　貴様ら！　マフィアのボスはどこだ！？」

「ちょっ、待っ、おい、うそだろ！　歩くロストロギア、八神はやてじゃねぇか！」

「ファー！　マジじゃんかよ！　逃げなきゃやべぇって！」

「ば、馬鹿野郎！　俺たちの役目を果たすんだよ！」

「こ、怖いっすぅ～・・・」

「貴様！　弱音など吐くな！」

わいわい騒ぐ仮面持ちだがその魔力量はかなり高い。武装隊隊長の平均ランクであるＡＡかそれ以上は間違いなくある。さすがにこんな狭い場所で攻撃魔法など発動しないだろうが・・・。連中を引き連れたまま隠し通路へ行くわけにはいくまい。

「セラティナ。八神司令とアインス司令補と共に先へ。私が壁役となりましょう」

ハルトマン捜査司令がそう言って私たちの前に躍り出て仮面持ち達と対峙した。主は「了解です！」と迷う素振りすら見せず、踵を返して先へ向かう。私も「御武運を」と告げ駆け出し、残るセラティナは仮面持ちが追って来られないように、「キープアウト！」と結界を発動した。

「ご無理はなさらないように」

「ええ、承知していますよ。さ、早く行きなさい」

私たちはハルトマン捜査司令と別れ、仮面持ちに尾行されていないかを注意しながらダンスホールへと入り、聞いていたとおりにいくつかの蜀台を動かして、隠し通路の入り口を床に出現させる。螺旋状の階段を降り、薄暗い通路を進む。

「ぎゃあああああ！？」

「ひ、ひぃぃーーーー！」

「た、助け――あああああ！」

「なぜだ！　あの戦艦も、元はと言えばお前た――げぼぉ・・・！？」

ようやく見えてきたドアの向こう側から、聞こえてきてはいけなかった断末魔が聞こえてきた。主が「転移スキルか！」と走る速度を上げた。主を先に行かせるわけにはいかず、私は主を追い抜いて「武装を解除しろ！」警告しつつドアを蹴破った。かなり広い部屋の中には般若の仮面を付けた女仮面持ちが1人と4つの遺体。

『ま、間に合わなかったです・・・』

「なんでこの場所が・・・」

「っ！！・・・はやて、あの仮面持ち・・・先程までの連中とは格が違う・・・！」

主は"シュベルトクロイツ"の先端を仮面持ちへ向け、セラティナは仮面持ちの雰囲気から少しばかり及び腰だ。何故この隠し部屋に仮面持ちが居るのか、考えられることはいくつかあるが今は後回しだ。

「シュヴァルツェ・ヴィルクング・・・！」

打撃力強化や様々な効果を破壊する能力を付加する魔法を発動し、一足飛びで再接近した仮面持ちへと殴りかかる。とにかく今は仮面持ちを撃破し、確実に逮捕することを優先しよう。突進からの拳打という威力を倍増させた私の右拳を、彼女はパシン！と片手で受け止めた。

「な・・・！？」

「アインスのパンチを片手で・・・！？」

僅かなりにショックを受けていた私を、仮面持ちは受け流すかのように私を後方へと放り投げた。壁に叩き付けられる前に体勢を立て直し、一旦壁に両足を付き、次いで床に着地した。

「『封縛！』」

「一方通行（サンダルフォン）の聖域！」

主とリインのバインドが仮面持ちを簀巻きのように拘束し、さらにセラティナの結界で閉じ込めた。セラティナのサンダルフォンの結界は、閉じ込めた対象の魔力生成を阻害し、一切の魔法が使えないようにする。そのため魔術クラスやスキルでようやく破壊できる魔法だ。あの仮面持ちも終わりだろう。そう思っていた。

「はあああああああッ！」

仮面持ちは機械音声のような声で雄叫びを上げ、主のバインドを引

き千切った。純粋な力のみによるバインドブレイク。あのような力技、ザフィーラですらしないぞ。呆気にとられている中、仮面持ちはそのまま結界の内側を殴り始めた。さすがにそれだけは無理だろう、そう考えていた。しかし・・・

「ありえへんやろ・・・」

「そんなまさか・・・」

たった4発で結界にヒビを入れた。完全に私たちの失態だ。新たな結界やバインドを発動するよりも早く、仮面持ちは結界を破壊して自由となった。無傷のままでの拘束は無理だ。魔力ダメージによる昏倒、そして厳重に拘束。これしかあの仮面持ちを抑える方法は無い。身構えたところで、カランと床に何かが転がる音がした。

「「「『ッ！？』」」」

ビクッと体が強張る中、私は音の出所へと視線を移した。床に転がっていたのは「手榴弾！？」という、質量兵器に数えられる爆弾だった。安全ピンは抜かれている。もはや爆発は止められない。手榴弾はカッと強烈な光と音だけを発生させた。私は「くっ・・・！」思わず目を閉じ、片腕で目を覆った。主たちが何かを叫んでいるようだが、甲高い音の所為で聞こえない。

――トランスファーゲート――

「・・・っ！」

仮面持ちの気配が消えるのを感じた。それからすぐに視界が晴れ、耳鳴りはするが主の「大丈夫か！？」という声も聞こえた。私とセラティナが「大丈夫です」と応じていたところ、「八神司令！」とハルトマン捜査司令が入ってきた。

「すみなせん。仮面持ちによる殺害、および逃走を許してしまいました」

主が申し訳なさそうに頭を下げたのを、ハルトマン捜査司令は「それは残念ですが、皆さんが無事で何よりです」と主の肩を優しく叩いた。結局、今回の一件は２４名の仮面持ちを逮捕できたが、おそらく幹部クラスであろう般若の仮面持ちや艦隊には逃げられてしまったことで、私たち管理局の敗北という形となった

Ｅｐｉｃａｌ７守られのお姫様～Ｏｎｅ　ｄａｙ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

「うぅ～、やっぱり冬だと昼間でもちょっと寒いね～」

「うん。早く体を動かして温まろうか～」

わたしの通ってるザンクト・ヒルデ魔法学院は今、今年最後の冬季休校（なのはママ達の国の言葉を借りれば冬休み）中。長い期間の休みだからこそ、来年のインターミドルチャンピオンシップに向けてトレーニングをしっかりやります。あ、もちろん宿題は済ませて、だよ。

「じゃあノーヴェが来るまで、ストレッチとランニングをやっておこうか」

「うんっ！　コロナ、ペアになって～！」

「いいよ～、リオちゃん！」

今この場、フライハイト邸の裏庭（と言っても、わたしの家の敷地より何倍も広い）に居るのはわたし、フォルセティ、コロナ、リオ、そして「ヴィヴィオさん。お願い出来ますか？」とわたしを誘ってくれた「はい、アインハルトさん♪」の子供５人と、私服姿のディード。この家の末娘なイクスは、わたし達がへとへとで疲れること

を見越して、お姉さんのオットーと一緒に色々と作ってくれてるみたい。

「ではフォルセティ様は、私とペアを組みましょうか」

「あ、うん、お願いします、ディード」

（フライハイト家にお泊りに来てから3日目。シャルさんが使う地下のプライベートジムのおかげで、体が鈍ることはないけど・・・）

精神的にみんなにごめんなさいってなっちゃう。わたしやフォルセティ達がフライハイト家にお泊りしてる理由は、全部わたしにあるからだ。わたしは聖王女オリヴィエのクローンということで、最後の大隊っていう人たちに狙われてる。

そして冬休みとなれば学院に居られないし、なのはママやフェイトママが仕事で居ない時間も独りで過ごすことに。一応はフォルセティの家、八神家にお泊りする話も出てたけど、はやてさん達が家を空けるとどうしても子供だけになっちゃう。

（その辺りを心配してくれたイクスがシャルさんに頼んでくれて、シャルさんは快諾。わたしの為だけにオットーやディードをボディーガードとして付けてくれた。それにこの家は、シャルさんの新しい部隊の騎士さん達の合宿所として使われてるから、安全度で言えばたぶん・・・管理世界の中でもトップクラスだと思う）

実際にこれからシャルさんやルシルさん、アイリ達が帰ってくるって言うし。フォルセティもアインハルトさんも、コロナやリオ、オ

ットーやディードがいてくれる、守ってくれる。不安の中でもわたしがいつも通りにいられるのは、みんなのおかげだよ。

「よろしくお願いします、アインハルトさん！」

「はい、よろしくお願いします」

アインハルトさんとペアを組んでストレッチをする。冬は筋肉が凝りやすくなるから念入りにやっておかないと。ストレッチを終えた後は、本当に広い敷地内をランニング。驚くべきことに敷地内にちゃんとしたランニングコースがあって、アインハルトさんが目を輝かせてたのを思い出す。

「オットー。これより敷地内をランニングします。用事があれば呼んでください」

『了解。敷地内とはいえ気を付けて』

ディードがオットーに連絡を入れ終えて、子供の中で一番足の速いフォルセティが先頭を走り出して、ディードがわたし達みんなを見守るように最後尾を走る。

「「「「「1、2、ファイト！」」」」」

「「「「「3、4、ファイト！」」」」」

掛け声を出しながらコースの半分３ｋｍを走る。フォルセティがペ

ースを作ってくれてるから、コロナも足を止めることなく付いてこられてる。そうして３０分間のランニングを終えて、「ではお嬢様方。ジムの方へ移動しましょう」ってディードが言って、わたし達を地下のジムへ案内するために歩き出した。

「でもホントすごいよね、イクスのお家！　ジムはあるし、プールはあるし、ランニングコースはあるし、お風呂は大きいし、ベッドは柔らかいし、あと料理は美味しいし！」

「ふふ。リオちゃん、初日でもおんなじ事を言ってたよ？」

「コロナだってそう思うでしょ？」

「う～ん、まぁ・・・それはそうだけど」

「いやぁ～。1年前まではこんな風に過ごせるなんて思いもしなかったよ。ホテルアルピーノでの合宿もうそうだしさ～。うん、ホントもう・・・ヴィヴィオ、フォルセティ様様～♪」

どこで覚えてきたのか、手を合わせてわたしとフォルセティを拝んできたリオ。するとコロナまで「ありがとうございます～♪」ってノってきた。それで終わりならまだ良かったんだけど、リオは「アインハルトさんもそう思いますよね？」なんて、変なフリまでしちゃう始末。

「え？　あ、はい、そうです、ね・・・。えっと、ありがとうございます」

「いやいやいや、そんな事しなくていいですからね、アインハルトさん！」

アインハルトさんも、若干戸惑いながらもわたし達に手を合わせてお礼を述べた。だからわたしは慌てて止めて、フォルセティは「リオ。アインハルトさんにまで変な事させるようなこと言っちゃダメ」って、リオを叱った。

「それに、お礼を言うなら冬休み期間中、ずっと僕たちを泊めてくれるようにシャルさんのお母さんやシャルさんに頼んでくれたイクスだよ。イクス様様～、ありがや～」

「だねっ。ありがたや～」

フォルセティまでリオにノっちゃって、イクスが居るであろう厨房の方に向かって拝み始めた。するとコロナまで「ありがたや～」って拝んで、アインハルトさんも少し考えてから拝もうとし始めたから、「もう！　みんなストーップ！」って止めさせた。苦笑いしてるフォルセティやリオに呆れながらも、ディードに続いて西館のエントランスホールに入る。この屋敷は◇―H―◇みたいな形をしていて、東館に地下駐車場、西館の地下にプールとジムがある。

「なんだかさ。使用人の人たち、あたし達とすれ違うたびに足を止めてお辞儀するよね」

「なんだか悪い気がしちゃうよね」

「お嬢様方は、シャルやイクスの大切なお客様ですので。申し訳ないですが、慣れていただければ幸いです」

わたしもリオやコロナと同じ思いだったけど、使用人のみなさんのプロとしてのあり方を知って、やめてもらえるようにお願いしようとしてたわたしは、そのお願いを胸の奥にしまいこんだ。

それからエレベータを使って地下に降りて、真っ直ぐに伸びた廊下に出る。右手にプールの更衣室に繋がるスライドドア、左手に目的のジムへと繋がるスライドドア、一番奥の突き当たりは休憩室へと繋がるスライドドアがある。わたし達はジムへのドアを潜って、男子・女子に分かれた更衣室へ。

「フォルセティ～、ちゃんと男の子の更衣室へ入らないとダメだからね～♪」

「っ！　う、うるさいなリオ！　最初の失敗を何度も掘り返すのはちょっとどうかと思うけど！？」

リオにからかわれたフォルセティの声が、男子更衣室と女子更衣室を隔てる壁を越えて聞こえてきた。フライハイト家にお泊りすることになっての初日、今日みたくジムを借りての練習ということになった。そのとき、最後にジムに到着したフォルセティが、着替え中だったわたし達の居る女子更衣室に入ってきちゃって。

（あの時はまだ男子・女子の札が無かったから、間違って入ってきちゃってもしょうがなかったよね・・・）

その時の事を思い出しちゃったわたしの顔が熱くなる。その、着替え中を・・・下着姿を見られちゃったわけだし。見ればコロナも顔を真っ赤にしていて、わたしの視線に気付くと「せっかく忘れようとしてたのに～！」ってリオをポコポコ殴った。

「お先に行っていますね」

そんな中、アインハルトさんは着替えを済ませて颯爽とジムへと続くドアを潜って行った。でもわたしは見逃さなかった。アインハルトさんの耳が真っ赤だったことに。アインハルトさんも見られちゃったもんね。普段はクールだけど、さすがに男の子に下着姿を見られたら・・・ね。

「わ、わたし達もすぐ行きます！」

更衣室での思い出浸りを即終わらせて、ジャージを脱いでフィットネスウェアへと着替えてからわたし達もジムへと入る。地下とは思えない広さで、格闘技の練習が出来るようにテニスコート6枚分のエリアがあって、その反対側にトレーニング器具がずらりと設けられた同じ広さくらいのエリアがある。その2つのエリアを隔てるように強化ガラスの壁がある。

「じゃあノーヴェが来るまで、それぞれ自主練ってことで」

ノーヴェを監督として活動してるチームナカジマのリーダーになったわたしが、不在のノーヴェに代わってみんなに指示を出す。初め

は最年長で一番強いアインハルトさんがリーダーでいいんじゃないかな、って考えてたんだけど、すべての始まりはわたしだって事で、満場一致でわたしがリーダーになった。

「リオ、ちょっとミット打ちに付き合って」

「ん、いいよ！　ミット借りま～す！」

コロナもインターミドルに出場することを決めて、ゴーレム創成だけじゃなくてフィジカルトレーニングもしっかり始めた。コロナはゴーレムを主力として戦うスタイルだけど、インターミドルのルールで、ゴーレムを創成し終えた状態で持ち込めないみたい。だからステージに立って、戦闘開始してから創成しないといけない。その間、コロナは無防備になる。その対処が、コロナ自身が格闘・魔法戦を出来るようになること、だ。

「しっかり鍛えて、みんなと一緒に都市本戦！」

「おー！　都市本戦！」

ミットを殴って、パシンパシン！と景気の良い打撃音を出す中、コロナが大声でチームナカジマの目標を発した。今のままだとエリートクラスの地区予選で落ちるってノーヴェに言われてるわたし達。あのアインハルトさんですら都市本戦までは進めないって言われちゃったし。

（だからこそ今よりもっと強くなって、都市本戦を目指す！）

ギュッと握り拳を作って燃えてるところに、「ヴィヴィオさん」ってアインハルトさんに呼ばれた。手にしてるのはコロナ達が使ってる両手にはめるミット。

「お相手よろしいですか？」

「はい、もちろんです！」

ミットを打つ方、持つ方は交代で行うことになって、まずはアインハルトさんが打つ方、わたしが持つ方に。アインハルトさんの打撃は本当に重いから、わたしも気合を入れないと吹っ飛ばされちゃう。静かなジムにパシン！　バシン！と打撃音だけが鳴り響く中、器具が置かれたエリアからドォン！って大きな音が。

（フォルセティだ）

天井から吊るされてるサンドバックを殴っては蹴って、それはもうぐわんぐわん揺らしてる。フォルセティもフォルセティで、以前にも増して格闘技が強くなっちゃってるんだよね。何せ、お父さんのルシルさんやお姉さんのアインスさんみたく、オールラウンダーな魔導騎士を目指すって決めたから。

（前にも言ってたけど、強くなるのはわたしを守るため・・・。嬉しいのは嬉しいんだけど、やっぱりなんだか申し訳ないって気持ちをあったりするわけで・・・）

でもだからこそ、わたしも強くなろうって思える。アインハルトさんと交代して、今度はわたしがミットを打つ。それからそう間もなく「悪い。ちょっと遅れた」ってジャージ姿のノーヴェとも合流。いつもは自信ややる気に満ちてるノーヴェなんだけど、今日は少し疲れてるみたい。その理由は・・・判ってるけど。

「「「「「お疲れ様です！」」」」」

「お疲れ様です、ノーヴェ姉様」

「お、おう。お疲れ・・・。えーっと、今日のトレーニングスケジュールは・・・」

聞いても良いのか判らない。でもわたしは「スバルさん、どうでしたか・・・？」って、意を決して聞いてみた。ディードはチラッとノーヴェを見て、ノーヴェは少し俯いた後、「いつも通りの姉貴（スバル）だった」って漏らした。

わたしを狙ってる最後の大隊、そこにスバルさんが所属していた。すずかさんやノーヴェ達のお姉さんであるトーレさん、クアットロさんと交戦して、そして逮捕されちゃったみたい。そのニュースを観た時、本当に信じられなくて何度を目をこすった。

「スバルが犯罪者になるなんて信じられっかよ。ヴィヴィオも、フォルセティも知ってるだろ。あの正義感の塊みたいなスバルを」

スバルさんは、わたしやフォルセティがお世話になった機動六課っていう部隊で、なのはママの部下だった。そしてわたしにとって最

初のコーチでもある。だからこそノーヴェと同じ気持ちだ。

「ノーヴェ姉様。スバル姉様はやはり本物だったのですね・・・？」

「母さんや父さんにギンガが本物だって言うんだ、間違いねぇよ。それに、トーレ姉の話じゃスバルが戦闘で振動破砕を使って、セッテ姉を倒したらしい」

「振動破砕を、ですか。あれはスバル姉様にしか使えない特殊なスキルですし。私やオットーのような替えの利くものではありません」

「ああ。記憶の方もしっかりとスバルのもんだったし、偽者じゃないってことは確かだ」

ノーヴェとディードの会話をちょっと離れたところで聞くわたし達。フォルセティが「じゃあ洗脳とかかな・・・」って小声で漏らしたら、「それが判らねぇんだよな」ってノーヴェが溜息を吐いた。

「魔法や何かしらの術で洗脳された奴は、必ず脳波に何かしらの異常が出るらしいんだよ。でもスバルの診断は異常なし。だから局は、スバルは自分の意思で最後の大隊に下った、って判断を下そうとしてる」

「そんな！」

わたしは堪らずそう叫んだ。最後の大隊は犯罪者を容赦なくその手にかけてる。そんな組織の一員として立件されたら、スバルさんも

人殺しの罪を一生背負わなくちゃいけなくなる。

「大丈夫だ、ヴィヴィオ。すずかさんやウーノ姉たちが何とかしてスバルが最後の大隊に入った経緯を調べて、洗脳されてる証拠っていうのを出すって言ってくれてるし。あのヴァスィリーサ中将だって、局の上層部に待ったを掛けてくれてる。大丈夫さ、きっと・・・！」

ノーヴェが自分にも言い聞かせるようにそう言ってわたし達に微笑んで見せた後、「おし！　暗い話はこれくらいだ！」って手をパンパン！と強く打った。それからはノーヴェによる直接トレーニングで午前の部は終了になった。

「お疲れ～」

ヘトヘトになりながら、わたしは同じように疲れてるみんなに労いの声を掛けると、『みなさーん！　お昼ご飯でーす！』って、ジム内にイクスの声が響いた。ガラスの壁に、可愛いエプロン姿のイクスが映るモニターが展開されてた。

『ノーヴェさん！　お昼ご飯が出来ました♪』

「おう、ありがとう、イクス！　んじゃあお前ら、風邪ひかねぇようにシャワーを浴びて、すっきりしてから食堂へ移動だ」

「「「「「はいっ！」」」」」

更衣室の中にシャワールームへ移動しようとした時、「あ・・・！」ってアインハルトさんが声を上げて足を止めると、そのまま肩膝立ちしちゃった。わたし達は「どうしたんですか？」って歩み寄る。

「シューズの底の部分が抜けてしまいました・・・」

アインハルトさんの言うように、シューズの底がペランと捲れてた。ノーヴェが「お前の断空は足を起点にするからな」って唸った後、わたしとコロナとリオの足元――シューズを見て考え込んだ。子供だけで顔を見合わせてると、ノーヴェは「よし」って頷いた。

「そろそろ帰ってくるだろうシャルさん達と相談して、午後は備品の買出しに行こう」

「ホント！？　やったー！」

お泊りに来てから外出なんて出来なかったから、わたしは万歳して喜んだんだけど、フォルセティは「ヴィヴィオを連れて行っても大丈夫なのかな・・・？」って腕を組んで首を傾げた。フライハイト邸に居る限りは間違いなく安全だけど、一歩外に出ればいつ狙われてもおかしくない。

「冬休み中、ずっと家の中って言うのも辛いかも・・・」

「ヴィヴィオさんの精神が参ってしまっては元も子もないような・・・」

「そうだよね。イクスん家は広いし、トレーニングには困らないけど、ちょっと飽きてきちゃうよね」

「それに、ヴィヴィオがお留守番だと、ヴィヴィオがコレだっていう物が買えないし・・・」

わたしの事を考えてくれるアインハルトさん達に、フォルセティも「僕もそれは理解してるけどさ」って、本当にわたしの身を案じてくれてるんだって判ることを言ってくれた。

「だからさ。シャルさんの騎士隊の誰かに護衛として付いてきてもらえねぇかな、って」

「お仕事帰りで頼むのはちょっと気が引けちゃうよ、ノーヴェ」

「そりゃそうだけどさ。さすがにあたしやオットー、ディードの3人じゃ心許ないだろ？　ま、お前が襲われたら命を懸けて護り切ってやるけどさ」

「そこまで覚悟決めてもらえるのは嬉しいけど、ちょっと重いよ・・・」

「ま、シャルさん達に一度相談してみて、ダメなら別の方法を考えよう」

というわけで、午後からのお出かけは保留ってことに。とりあえずお昼ご飯を作ってわたし達を待ってくれてるイクスの居る食堂へ向

かうために、更衣室の一角に設けられてるシャワー室で汗を流す。汗臭くなってた体を綺麗さっぱりにして、「お嬢様方の服は洗濯しておきますね」ってディードが、わたし達が脱いだ服の入った籠を手に更衣室から出て行った。

「みんなー！　僕、先に行って、いろいろ準備を手伝ってくるからー！」

フォルセティってやっぱり男の子だよね。シャワーもパパッと済ませて行っちゃった。けどわたし達女の子は、カラスの行水みたいな適当な真似は出来ないししたくない。格闘少女でも立派な乙女なのです！

「ふぅ、さっぱり～♪」

「適度な疲労なところに、お腹いっぱいご飯食べたら絶対寝ちゃうよ～」

「あー、確かに寝ちゃうかも～」

「ではお2人はお留守番していますか？」

「それは嫌！」「嫌です！」

談笑しながらの楽しいシャワータイムを終えて、アインハルトさんにからかわれるリオとコロナに笑いながら、バスタオルで体を拭きつつロッカーに向かってると、「あれ、もう上がり？」って声が後

ろから聞こえてきて、両脇の下からニュッと腕が伸びてきた。そしてわたしの胸を鷲掴んで、ムニムニ揉んできた。

「にゃぁぁぁ～～～～～～っ！？」

思わず叫んで蹲ると、「どうしました！？」アインハルトさんと、「ヴィヴィオ！？」ノーヴェが、タオルを体に巻くことなく裸でシャワールームから飛び出してきた。２人に遅れてコロナとリオも来てくれて、わたしの背後をポカンと見てる。

「うん、とっても気持ち良い揉み心地だった。大きくなったね～、ヴィヴィオ」

「あなたは馬鹿なの！？　忍び寄った挙句にいきなり背後から胸を揉むなど！」

「ヴィヴィオは一応、我らが聖王陛下なのですよ！」

「セクハラは無いわ～、さすがに無いわ～」

振り向けばそこに居たのはシャルさん、トリシュさん、アンジェさん、そしてわたしの肩にバスタオルを掛けてくれたルミナさん、それに「驚かせてごめん。ノーヴェとアインハルトは、とりあえず前を隠そうか」って言って、２人にバスタオルを渡そうとしてるセレスさん、あと後ろの方であくびしてるクラリスさんの６人。みんなが現在の管理世界内にその名を轟かせる有名な騎士だ。

「ヴィヴィオ。あなたも服を着てきなさい。イリスには後で謝らせるので」

「え、あ、はい。じゃあ・・・」

アンジェさんにそう言われたわたしやアインハルトさん達は、ロッカーにしまわれてた服に着替え終えて、正座させられてるシャルさんの前に並ぶように言われた。なんだろ、この公開処刑みたいな感じ・・・。

「イリス」

「・・・はい。えー、ヴィヴィオ。後ろからおっぱいを揉んで、本当にすいませんでした」

（ど、土下座ーーーーー！？）

おでこを床にコツンと当てて謝ったシャルさんに、わたしは居た堪れなくなって「もういいです！　気にしてないですから！」って、土下座をやめるように慌てシャルさんの両肩に手を置いた。

「許してくれる？」

「ゆ、許しますから！　もうやめてください！」

「ヴィヴィオの優しさに感謝してください、イリス」

「ありがとうございますー！」

アンジェさんって、わたしの事になると結構キツイ性格になっちゃう。聖王として敬ってくれてるんだよね。最初はヴィヴィオ陛下なんて呼ばれてたけど、なんとか呼び捨てにしてもらえるように説得、そして承諾してくれた。

『あの～。お料理冷めちゃいます・・・』

とそんな時、イクスから通信が入った。隣にはフォルセティが居て、『ちょっと遅くない？』ってジト目で見てきた。だから「ごめんね！」って謝って、シャルさん達に「失礼します！」って一礼してから、わたし達は更衣室を後にするべく駆け出した。

「あの、シャルさん。ちょっと相談が・・・」

ノーヴェがさっきの買い物の件についてシャルさんに話し出したのが聞こえて、わたしは「みんなは先に行ってて！」ってコロナ達に伝えてから逆走し始めると、「みんなでお願いしましょう」ってアインハルトさんやコロナ、リオも付いて来てくれた。

「シャルさん！　今日の午後からみんなでお買い物がしたいです！　お疲れかと思いますが、付いて来てくれると嬉しいです！」

「「「お願いします！」」」

シャルさん達に頭を下げたら、「いいよ♪　うちの隊、今日の午後

から明日の正午まで非番だし」って快諾してくれた。

Ｅｐｉｃａｌ８突撃！　隣のお宅訪問！～Ｓｕｒｐｒｉｓｅ　Ｖｉｓｉｔ～

†††Ｓｉｄｅフォルセティ†††

オットーやイクスの作ってくれたお昼ご飯を美味しくいただいて、「ごちそうさまでした！」をした後は、「今日はどこへお出かけするのです？」って尋ねたイクスと一緒に、新しいトレーニングウェアやシューズなどの備品を買いに行く店を決める話し合いだ。

「狙われてるヴィヴィオを、予定も立てずに連れ回すわけには行かないからな」

「ホントご迷惑をお掛けします。わたし１人の所為で大げさな会議まで開いていただきまして・・・」

そう言って長い食卓に額をコツンと当てるヴィヴィオ。最後の大隊っていう犯罪者の集団が、聖王女オリヴィエのクローンだっていうヴィヴィオを狙ってる。あと、ついでかもだけど魔神オーディンのクローンである僕や、古代ベルカ史で有名な冥府の炎王であるイクスも何気に狙われてたりする。

「そんなこと気にしなくて良いの。子供は子供らしく、大人に頼りなさい。んで、お店の事だけど、中央区アヴァロンのカーリオン・アインカオフス・ツェントルムがお勧めね。カーリオンっていうエリア内にあるショッピングセンターで、自治領内で最も大きく、買

えない物は無いっていうくらいに品揃えが豊富」

「あぁ、あそこは子供の頃によく通ってたよね。結構歴史があるけれど、年代や流行に合わせて品物が入れ替わってくれるし、子供が通ってもお小遣いで買える品物も多くあるし」

「近くには本格的に魔法戦が行える施設もあるから、新しく買ったシューズや服で早速トレーニングってことも出来るよ」

シャルさんとルミナさんとセレスさんが、当時の事を思い出してか笑顔を浮かべた。それを聞いたアインハルトさんが「それは楽しみです！」って目を爛々と輝かせた。

「で？　ノーヴェ。店はそこで良いかな？」

「もちろんです！　シャルさん達のお墨付きなら文句は無いですよ。それであの、護衛の件なんですけど・・・」

念には念を入れて、管理世界の中でも屈指の実力を誇るシャルさん達に、ヴィヴィオの護衛をお願いすることになってる。もちろんノーヴェや僕たちだってヴィヴィオを護りたい。でもどんな相手が来たって護り切れる、なんて自惚れてない。

「あぁ、それなんだけどね。さすがに全員ってわけにはいかないから、さっきのトレーニングの時にね、ジャンケンで決めたの～♪」

シャルさんがそう言って挙手すると、ルミナさんとトリシュさんが

手を上げた。えっと、つまりは「シャルさんとルミナさんとトリシュさんが来てくれる、と？」ってヴィヴィオが尋ねると、３人はグッと親指を立てて、それはもう誇らしげに胸を張って微笑んだ。

「私もヴィヴィオをお守りしたかったのですが。よもや私がグーの中でみんながパーだったなんて・・・」

「しかも１回目で決まったからね。そういう運命だったんだよ、アンジェ」

「これが・・・運命・・・！」

「アンジェ、さすがに大げさ過ぎるぞ？」

クラリスさんにそう言われたアンジェさんがテーブルに突っ伏すと、お父さんが呆れた。でもお父さんも負けたってことだよね、護衛として付いて来てくれないってことは。それにアイリお姉ちゃんも・・・。

「なんというか、すごい人たちが一緒ですね・・・」

「これなら安心してお買い物が出来ますね！」

「うんっ！」

アインハルトさんやコロナの言葉にヴィヴィオが同意。シャルさんとトリシュさんは管理世界屈指の剣騎士と弓騎士だし、ルミナさん

は現役を退いたけど拳闘騎士の元パラディンだし。これなら本当に安心して外出が出来るよ。

「それで、いつから出掛ける？　わたし達はいつでもＯＫだけど」

「まぁ早い方がいいですよね。お前ら、外出の用意だ。用意を終えたらエントランスに集合！」

「「「「「はいっ！」」」」」

防寒着を取りに行くため、僕たちはそれぞれ用意された個室に戻ろうと椅子から立ち上がったら、「こちらにご用意しております」って、メイドさん達が僕たちの防寒具を手に食堂に入ってきた。シャルさんが「だと思って、持って来ておいたよ」って言って、メイドさん達に「腕を通させてあげて」って指示を出した。

「フォルセティ様、どうぞ」

僕のコートを持ってきてくれたメイドさんが、腕を袖に通しやすいようにコートを持ってくれて、「ありがとうございます！」ってお礼を言いながら腕を通した。ヴィヴィオ達もメイドさんに防寒具を着させてもらって、準備は整った。

「イリスお嬢様。あの・・・」

「ん？　どうかした？」

あるメイドさんがシャルさんに耳打ちすると、シャルさんは「判った。ちょっと席を外すね。みんなは先にエントランスへ行ってて」そう言って食堂を走って出て行った。

「随分な慌てようだったけど・・・」

「重大な一件なら私たちに話すだろうから、私たちは別に知らなくても良いんじゃない？」

「・・・じゃあ私たちはエントランスホールに行っていようか」

ルミナさんに続いて僕たち、それに見送りということでお父さんやアイリお姉ちゃん、アンジェさん達も一緒に来てくれることに。オットーが「ルーツィエ姉様。車を中央館エントランスまでお願いします」って、フライハイト家の使用人を束ねる2人のメイド長の1人で、シャルさん達のお義姉さんでもあるルーツィエさんに通信を入れた。

『イリスからもさっき連絡を貰ったよ。ドライバーは私がすることになったから、安心して搭乗できます、とお客様方にお伝えしておいて』

「判りました。ではお願いします」

ルーツィエさんが車を出してくれることになったみたいで、ルミナさんが「それは嬉しい話だね」って苦笑い。トリシュさんも「戦力を運転手にするのは悪手ですし」って満足げに微笑んだんだけど・

・・・。

「え？」

「はい？」

シャルさんが運転手じゃないってことを喜んだルミナさんとトリシュさんだけど、喜んだ理由がどうやら違ったみたい。でもトリシュさんは、ルミナさんの理由をすぐに察せられたようで、「イリスの運転技術も十分問題ないから」って苦笑した。

「君らはシャルの運転技術に少し厳しすぎないか？」

「シャルの運転、抜群に上手とは行かなくても普通なんだけど？」

お父さんとアイリお姉ちゃんがそう言うと、ルミナさんは「じゃあさ、イリスの運転で熟睡できる？」って聞いた。お父さん達が少し考えに耽って、「ない・・・かな」って首を傾げた。ルミナさんは続いて、「アンジェの場合は？」って聞くと、「出来る」って即答した。

「そ。その差が結構デカいの。まぁシャルでも良いよ、移動中は寝るつもりはないし。それでもやっぱりさ、心底安心できるプロのドライバーに運転してもらった方が良いよ」

「私はシャルの運転でも眠ることが出来ますけどね」

イクスが若干頬を膨らませながら、ルミナさんたち大人に聞こえない程度の小さな声で呟いた。イクスってシャルさんが本当に大好きだから、ちょっと不機嫌だ。そんなイクスも含めて僕たちは食堂を後にして、中央館エントランスホールへと移動。エントランスの両開き扉の前にはメイドさんが2人居て、「車が到着するまで待ちください」ってお辞儀した。

「久しぶりのお出掛け、やっぱり楽しみだよ～♪」

ヴィヴィオが小躍りしてると、プップ♪って外からクラクションが聞こえてきた。するとメイドさん2人が「階段にお気を付け下さいね」って注意してくれながらドアを開けた。外は快晴だけど、風はやっぱり冷たい。

「おお！　すごい、リムジンだ！」

「なが～い！」

「リムジンなんて初めて乗る～！」

「大きいです・・・！」

リオとヴィヴィオとコロナ、それにアインハルトさんまでもが、停車してるリムジンにテンションを上げた。あ、僕も「すげー！」ってテンションが上がる。泊まり初日は、車2台での迎えだったから。あのときの期待が今日叶うなんて思わなかった。ヴィヴィオとコロナとリオが横並びで駆け出して、階段を下りようとした瞬間・・・

「「「へ？　ひゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」」」

３人が同時に悲鳴を上げて、腰を抜かしたのか尻餅をついた。一番近かった僕とアインハルトさんがその異常にすぐに駆け寄ろうとしたんだけど、僕たちの後ろに居たはずのお父さん達がすでにヴィヴィオ達を護るかのように円形に立って、周囲を警戒してた。

「急に叫んでどうし――うわっ！？　ビックリした！！」

尻餅をついたままのヴィヴィオ達にアイリお姉ちゃんが声を掛けた瞬間、アイリお姉ちゃんも叫んで階段から飛び退いた。みんなでなんだなんだ？って階段をよく見ると、一斉に「うわっ！」って声を上げた。階段の踏み面に、人の顔が３つ並んでた。これはさすがにビックリするんだけど・・・。ものっすごい見知った顔でもあった。

「何やってるんだ、お前は！」

「イリス、あなた・・・！　馬鹿！」

３人のうち１人はシャルさんだった。そしてもう２人はというと「もう！　ルールー、リヴィ！　何やってるの！？」って、ヴィヴィオが名前を叫んだ。そう、アルピーノの双子姉妹、ルーテシアとリヴィアだった。ルミナさん達も、プライソン戦役の時にアルピーノ家とは見知っているから、「はあ・・・」って安堵とも呆れとも言える溜息を吐いた。

――ケレリタース・ルーキス――

「いぇーい！　大成功～！」

「「大成功～！」」

階段からニュッと出てきたシャルさん達がハイタッチして、ヴィヴィオとコロナとリオの3人をビックリさせた事を喜び合ってた。でもそんなシャルさんの頭に、お父さんの鉄拳が振り下ろされちゃった。

「あいたっ！？　むぅ、ちょっとしたサプライズじゃんか～。ルーテシアとリヴィアが訪ねて来るって昨日、連絡を貰ってさ。だったら退屈してるヴィヴィオ達を驚かせて、買い物前にテンションをさらに上げてもらおうかな～って、計画してたんだよ」

「あの、ごめんなさい。私たち、ちょっと浮かれてて・・・」

「ヴィヴィオが狙われてるの知ってたんだけど、喜んでもらえるなら・・・って」

ルーテシアとリヴィアがしょんぼりして、大人の人たちに頭を下げた。そんな2人にヴィヴィオが「もう、驚いたな～♪　ていうか、久しぶり～♪」って笑顔でハグした。するとコロナも「久しぶり～♪」って歩み寄って、リオも続いて「今日はどうしたの～？」って駆け寄った。僕とアインハルトさんは顔を見合わせて、頷き合った後にルーテシアとリヴィアの側に駆け寄った。

†††Ｓｉｄｅフォルセティ⇒ヴィヴィオ†††

外出前にシャルさんとルーールーとリヴィからのドッキリサプライズに引っ掛かって、割りと本気で怖がらされたわたしは、親友のフォルセティとコロナとリオとアインハルトさん、それにノーヴェは今、ベルカ自治領ザンクト・オルフェンで一番品揃えがいいって言うショッピングセンターへと・・・ふふ、なんとリムジンで移動中なのです！

「ふかふか～♪」

「テレビもあるし冷蔵庫もあるよ！？」

リオはふっかふかな椅子ではしゃいで、コロナは車内をきょろきょろ見回してる。アインハルトさんは「なんか緊張しますね」ってそわそわ。フォルセティは「ここで暮らせそう！」ってニッコニコ。わたしだってリムジンに乗れるなんて思いもしなかったから、「どうしよう、すごいわくわくしてる！」って興奮気味。

「あの、私たちも一緒しても良かったの・・・かな？」

「まさか、ヴィヴィオ達も買い物だったなんて。嬉しい偶然のような、いやしい偶然のような・・・」

わたし達を驚かせた張本人のルーールーとリヴィーが、ちょっと居心地が悪そうに座ってる。２人が突然ミッドにやって来たのは、２人

ともわたし達のようにインターミドルに出場するための準備として、本格的なトレーニングウェアなどの身の回りの備品を買うためだった。

「それで、ノーヴェやヴィヴィオ達ならその辺のこと詳しいかな、って考えて・・・」

「来たんだけど、シャルさんがどうせなら、面白おかしく再会しようって・・・」

シャルさんをチラッと見るルールーとリヴィー。シャルさんは「いやぁまぁ、もういいじゃん」って苦笑。ルシルさんやアンジェさんに割りと本気で怒られたから・・・。

「そのお詫びとして、今日買った物のお代は全部わたしが持つからさ。遠慮なく、気に入った物があったら買っていいからね～♪」

「あの、良いんすか？　まだ正式なスポンサーじゃないのに」

ノーヴェの口から出たある言葉にわたしは「スポンサー？」って小首を傾げて聞いた。

「ん？　ああ、シャルさんが今後のチームナカジマのスポンサー・・・の予定」

「「「予定？」」」

「そ。チームナカジマの活動における費用の出資を、フライハイト家が賄おうと思ってね。今日みたく備品の代金や他世界への遠征費用とか、ね。でも・・・」

「あたしが保留にしてもらえるように頼んだ」

シャルさんからのお誘いをノーヴェが何かしらの理由で断った、っていうか保留したとのことで、リオが「えー？　なんで～？」って膨れっ面になった。シャルさん家はすっごいお金持ちの超有名な家柄。そんな家がスポンサーになってくれたら、それこそ貧乏活動の心配は無いんだけど・・・。

「遠征の移動費用とか結構かかると思うし、その・・・お金を出してもらえるのは嬉しい事じゃ・・・？」

「まぁヴィヴィオの言うとおり、他のスポーツ同様に格闘技も金が掛かる。が、だからと言って何の実績も積んでない中で、そんな甘い現実を受け入れていいのかって考えた。知り合いだから出してあげようじゃなく、出すに値する選手だから出そう、ってシャルさんに思ってもらえるようなあたし達になりたい」

ノーヴェの考えを聞いたわたし達は「それで良いと思います！」って賛成した。みんなももしかしたら考えてると思うけど、わたし達は正直に言ってまだ始まってもない。今はスタートラインに向かってる最中で、来年のインターミドルで本当のスタート。そこからの活動と活躍で、わたし達はノーヴェの考える実績を積み重ねて、シャルさんから出資をしてもらえるようになる。時間は掛かるけど、

たぶんそれが健全な成長だと思う、わたし達チームナカジマにとって。

「よしっ！　そういうわけでシャルさん、スポンサーの件はインターミドルの後でまたじっくりと・・・」

「ま、当事者のあなた達がそれで良いと言うなら、わたしはその条件に頷くよ。でも今日はわたしが持つ！　で、未来のスポンサーとして、今後とも合宿でお世話になるアルピーノ家の人間である、ルーテシアとリヴィアの今日の買い物の代金も、わたしが払う！　チームナカジマと同様、遠慮せずに買いなさい！」

「良いんですか！？」

「おお、太っ腹！」

「もちろん！」

それから、自分が狙われてるって事を忘れちゃうほどみんなと楽しいお喋りが出来て、「カーリオン・アインカオフス・ツェントルムに到着しました」って、運転をしてくれてるルーツィエさんから知らせが入った。

「判った。入り口前にちょこっと車停めて、先にわたし達を降ろしてくれる？」

「了解。買い物が終わる頃にまた連絡をください」

ルーツィエさんは養子だけどフライハイト家の次女（長女はルーツィアさん）だ。だから妹になるシャルさんには普段、砕けた口調で話す。でも今のように使用人としている間は、シャルさんには敬語を使う。メイドさんとしてプロだな～って、すごく感心した。

こうしてリムジンはお店の前の中央エントランス前の通りで一旦停車して、わたし達は他の車が来ないことを確認して、わたし達チームナカジマはルーツィエさんに「ありがとうございました！」ってお礼を述べてから車を降りた。

「それじゃあ案内するから付いてきてね～」

シャルさんを先頭に、わたしを囲うようにノーヴェやフォルセティ達が続いて、後ろにルミナさんとトリシュさんが付いてきてくれる。ストライクアーツはここザンクト・オルフェンでも根強い人気があって、これから行く専門店はフロアの半分を占めてるみたい。

「店は4階にあるんだけど、エレベータ？　エスカレータ？　それとも・・・」

シャルさんからの提案にわたし達は「階段！」って答えた。格闘家は日々鍛錬の積み重ねなのです。だから上り下りは楽なエレベータとか使わずに、しっかり階段を使って足腰を少しでも鍛えるのがベスト。

「だろうね～♪」

そういうわけで階段を上って４階へと向かう中、「イクス、平気？　疲れたらルミナかトリシュの護衛させるから、エレベータに変える？」ってシャルさんがイクスを気遣った。イクスもチームナカジマの一員だけど、フォルセティと一緒にサポートしてくれる側。ランニングは付き合ってくれるけど、本格的なトレーニングには参加しない。もちろん、それで良いよ。それがイクスの決めた事だから。それもあってイクスは体力が比較的ないから、お姉さんのシャルさんが気遣った。

「平気です。ありがとう、シャル。ヴィヴィオ達も、そんな顔をしないでください。何せ学院はもちろん、家でも長距離歩いて移動しますから」

イクスの言葉には納得するしかない。シャルさんのお家はすごい広いし。普通に暮らすだけでもかなりのトレーニングになるかも。みんなでそう話してたらイクスが「ですね。食堂は中央館にしかありませんし♪」って笑った。

「それに、私もプールでちょくちょく泳いで鍛えてるんですよ？　ね、シャル？」

「うんっ。５０ｍなら問題なく泳ぎきれるよね。２４秒ちょいだっけ？」

「「「すごっ！」」」

わたしとコロナとリオは口を揃えて驚いた。スタミナもそうだけど

タイムもかなり速い。イクスの隠れた努力に驚きながら目指してた４階、ストライクアーツ専門店へと到着。いろんな商品がズラッと並んでいて、ホントにもう目移りしちゃう。

「じゃあルミナはヴィヴィオに、わたしはイクス、トリシュはフォルセティに付いていて。もちろん、アインハルト達にも注意を払う事」

「「了解！」」

鳥肌が立った。シャルさんとルミナさんとトリシュさんの纏う空気がガラリと変わったから。でも、ちょっと浮くかなって失礼な事を考えてもしまう。だけどそんなのは杞憂で、すぐにさっきまでのようにフランクな空気を纏って、「ほらほら、何を買うの～？」って、わたし達をお店に招いた。

Ｅｐｉｃａｌ９少女たちのお買い物♪～Ｇｉｒｌｓ’　ｓｅｃｒｅｔ～

†††Ｓｉｄｅリヴィア†††

私とお姉ちゃんも、来年のインターミドルに参加すると決めたことで、結構今さらだけどトレーニングウェアやシューズなどの購入を決意。買い物は普段は通販などで済ませてるけど、やっぱりトレーニングに使うってなると、ちゃんと足のサイズやら何やらをキッチリ測った上で買わないと、きっとまた後悔する。

（ブラジャーだって、通販で購入して大変な目に遭ったし）

自分の大きくなってきた胸を揉んでみる。お姉ちゃんよりは大きいと思う。だからブラジャー選びとかをママに相談した上で、ママにサイズを測ってもらって通販で買った。でもしっくりこないから、今度はお店に直接赴いて測ってもらおうってことになった。それが去年の話。それから今日まで合うような合わないような微妙なブラジャーで過ごしてきた。ちょうど良い機会だし、下着の方も今日のうちに余分に買っておこうかな。

「ルールーとリヴィは、まずは何を買うの？」

「ん？　トレーニングウェアとかシューズとか、かな」

「服は手作りでもいけるけど、どうせなら全部お店の物をってお姉

ちゃんと相談して決めたよ」

「じゃあわたし達と同じだし、一緒にサイズとか測ろうよ♪」

ヴィヴィオ達も、酷使して痛んだ備品の買出しってことで今日はこのショッピングセンターに赴くことになってたみたい。私とお姉ちゃんは偶然にも、そして幸運にもその日に訪ねてきて、こうして一緒に買い物が出来、さらにシャルさんにお金を出してもらえる。

（嗚呼、神様ありがとう！）

シャルさん、そしてルミナさんやトリシュさんといった、有名かつ超実力者の護衛の元に買い物が出来るって言う安心感。シャルさんが「すいませーん。サイズの測定お願いしまーす！」って、シューズ専門コーナーのカウンターの奥で、何かしらの作業をしてる店員さんに声を掛けた。

「はい、いらっしゃいま・・・っと、おお、イリス嬢ちゃん！　それにマルスヴァローグとシュテルンベルクのお嬢さん達も一緒かい！」

「「「お久しぶりです♪」」」

初老の店員さんと知り合いのようで、シャルさんとルミナさんとトリシュさんがお辞儀した。店員さんは私たち子供組を見て、「まだ若いのに粒揃いじゃないかい。将来が楽しみな格闘家さんだ」ってしわがれた声で笑った。見ただけで判っちゃうんだって驚く。

「さっすが、おじさん♪　来年のインターミドルに向けて修行中の子たちなの。で、今日はこの子たちのトレーニングシューズを作りたいんだけど」

「個人専用でいくかい？」

「ん～。ノーヴェ。ヴィヴィオ達の今のサイズに合った、オーダーメイドのシューズを作ろうと思うのね。そのための徹底した足の測定を行いたいんだけど、いいかな？　もちろん、今日から必要になるシューズもちゃんと測ってもらった上で買うから」

シャルさんからの提案にノーヴェが「そこまでしてもらわなくても・・・！」って困惑。完全オーダーメイドなんてすごいな～。そんな風に思ってると、シャルさんは私やお姉ちゃんへと振り向いて、「2人にもプレゼントするからね～♪って言ってくれた。

「良いの！？」

「もちろんもちろん！　じゃあお願いします！」

そういうわけで、私たちは足のいろんなサイズを測ってもらって、そのデータを元に世界で1つだけのトレーニングシューズを作っていただくことになった。でも人数もそうだけど、一から作るっていうことで結構時間が掛かるみたい。

「んじゃ、次は既製品のシューズの購入ね。みんな、自分のサイズに合ったシューズを見繕っておいで～」

シャルさんに「はーい！」と返事した私たちはシューズ店の中を歩き回って、気に入ったデザインのシューズの機能性を履いて確認。シューズをバッチリ決めた後は、「次はトレーニングウェアね～」ということで、これまたデザインや通気性など、私たちの希望に沿うような服を探す。

「ねえねえ、みんな、ちょっといい？」

リオがそう呼んできて、あの子の前にみんなで集合すると、「チームでお揃いのデザインにしようよ！」って提案してきた。あ、これって私とお姉ちゃんには関係ない話だな～。私とお姉ちゃんはチームナカジマじゃないし。あー、でもアルピーノシスターズなんて名前でインターミドルデビューも悪くないかも。

「あの、じゃあ刺繍とかどうかな？　チームナカジマって背中のところに・・・」

「コロナ、それグッドアイディア！　そうだよ、チームメイトだし、同じデザインが良いな！　アインハルトさんはどうですか？」

「はい。私も、それで良いと思います」

「決まり！　あ、でも刺繍とかも、このお店でお願い出来るのかな・・・？」

「どうだったろ？　ちょっと聞いてくるよ。すいませーん！」

シャルさんが女性店員さんに駆け寄って刺繍の件の話を出すと、「出来ますよ。追加料金が発生しますけど」って返答が聞こえてきた。私はお姉ちゃんに「刺繍の料金くらいはやっぱり・・・」って小声で提案する。

「うん。こればっかりは自分で払おう」

シャルさんが店員さんとの話を終えて戻ってきたから、「刺繍の料金は払います！」って言ったんだけど、「え？　もう済ませてきたよ？」って小首を傾げた。

「というか、今日はわたしが持つって言うんだから、子供は素直に受け取ってれば良いの。お節介とか恩売りとか考えてないしさ。アルピーノ家は今後、わたしがスポンサーになるはずのチームナカジマの合宿先として活躍してもらうし。だからこれはそうね・・・先行投資。期待してるんだから♪」

あのシャルさんにそこまで言われた以上は、きっちり期待に応えないと。私とお姉ちゃん、そしてヴィヴィオ達は顔を見合わせて、「頑張ります！」ってお店であることも関係なく、大きな声でそう発した。で、もろもろの買い物を終えた後、刺繍のデザインを店先の休憩エリアで考えることになったわけだけど・・・。

「キューティシスターズ？　プリティシスターズ？　ラブリーシスターズ？　ビューティシスターズ？」

「ダサい。絶対に笑いものにされるネーミングだよ、それ。シスターズから離れたらどう？」

「キューティペア？　プリティペア？　ラブ――」

「待って、待て待て。そのキューティとかプリティとかも除外して。さすがにそれを名乗ったり、刺繍したりするのはかなり、というかすごい恥ずかしい」

「そう？　じゃあお姉ちゃんはどういう名前が良いの？」

「えぇっ？　う～～～ん・・・」

お姉ちゃんが腕を組んで唸る中、ヴィヴィオ達は「コレにする～？」とか「色はこっちが良いよ」とか「刺繍は格好良い方が・・・」とか「ううん、主役はわたし達だから可愛いのが良い！」とか「マスコットも考える？」とか、かなり楽しそうに話し合ってる。

「アルピーノ、じゃダメなわけ？」

「それじゃあつまんなーい！」

ベンチに座りながらも手足をバタつかせて抗議する私に「やめなさい、はしたない」ってお姉ちゃんが私の太ももをペシッと叩いた。

「もっとこう・・・インパクトがあるのが良いと思うんだよ。ホテルアルピーノの宣伝にもなるし」

「じゃあ刺繍は、ホテルアルピーノ、にする？」

「うーん、それもなんか違う」

「もう～。早く決めないとヴィヴィオ達も私たちも帰れないでしょ～」

「だって～」

ヴィヴィオ達も結構トレーニングウェアのデザインやら色で揉めていて、アインハルトが若干困惑してるし、ノーヴェも「お前ら、まじめに考えすぎだ」って嘆息。でも「まじめにしないと後悔するもん！」ってヴィヴィオが反論。

「チームナカジマとしての正式なロゴになるかもしれないんだし、妥協は絶対に・・・」

「「ダメ！」」「ダメです！」

ヴィヴィオとリオとコロナは、両腕を胸の前でクロスさせて×にしてそう断言。その鬼気迫る3人の様子にノーヴェは「お、おう、すまん」って謝って、アインハルトは「す、すごい気迫です！」ってたじろいで、イクスは「しっかり考えましょう！」って息巻いて、フォルセティは「納得するまで考えるといいよ」ってあくびした。

「向こうは向こうでヒートアップしてるな～」

「じゃあお姉ちゃん。お姉ちゃんはどんなのが良いと思う？」

「・・・はあ」

んで、いろいろと考えた結果、ホテルアルピーノ、って普通の刺繍を入れることになった。ヴィヴィオ達も、チームナカジマのロゴの出来に納得できるものが作れたようでみんな笑顔。目的の買い物は全て済んで、さぁ帰ろうかって話になった時に、私は「あと1件だけいいかな？」って小さく挙手。

「リヴィア。今回はヴィヴィオ達の買い物なんだから、アレの買い物はまた後日にでも・・・」

「判ってるけど、大人なシャルさん達が一緒の今じゃないと、その・・・何かあった時に困るし」

「ふんふん。何を買いに行きたいの？」

「ブラジャーを買いたいです」

ルミナさんの問いに答えると、フォルセティが「ブラ・・・！？」って顔を真っ赤にして吹き出した。お姉さん、そんな初心な真似されちゃうとからかいたくなってきちゃうな～。スッとフォルセティの肩に腕を回して、耳元で「想像しちゃった？　フォルセティのエッチ　」って呟いてみた。

「ぴっ！？」

目に見えてさらに顔を、というか耳や首まで真っ赤にしたフォルセティ。ゾクゾクと背筋に悪寒が走っちゃう。なんかフォルセティの反応から、この子へのイジワルがクセになっちゃいそう。

「リ、リヴィ！」

「「わっ！？」」

ドンッと突き飛ばされたことでフォルセティから離された私は、「ダ、ダメだよ、こんな事！」って、顔を真っ赤にしてるヴィヴィオを視界に収める。同じように顔を赤くしてるコロナもまた不機嫌っぽくて、リオはニヤニヤ、アインハルトは困惑顔、イクスは・・・うん、イクスも真っ赤だ。

「こーら！　純情な子たちで遊ばないの！」

「ぎゃん！？」

頭頂部から伝わってくる衝撃と鈍痛。お姉ちゃんの拳骨が加減なく私の頭頂部に振り下ろされたことで、「いった～い」って頭を押さえて蹲る。

「ほら、フォルセティやヴィヴィオにちゃんと謝る！」

「あぅ～。悪戯してごめんなさい」

「え、あ、いいよ！　うん、僕も気にしてないし！」

「わ、わたしも突き飛ばしてごめんね」

ヴィヴィオ達と謝り合ってると、「またシャル化の犠牲者が・・・」って、聞こえるはずのないルシルさんの呆れ声が聞こえてきて、「ル――」シルさんって名前を呼ぼうとした時、「コホン〝！」って、シャルさんがわざとらしく強めに咳払いした。その様子に小首を傾げながらも私は「？？？」周囲を見回すけど、ルシルさんの影はどこにもない。

「あー、えっと、そういうわけで、私とお姉ちゃんの・・・下着を買いたいな～と」

「ママも言ってたけど、やっぱりちゃんと自分の胸に合った下着付けないと、形が崩れちゃうって話で・・・」

大人組のシャルさんとルミナさんを見る。トリシュさんは・・・言っちゃ悪いけど、私より小さいっぽい。なんかこの話題を振った直後から、目のハイライトが消えてるような気もするし・・・。トリシュさんにはこの話題で触れない方がいいかも、死にたくないし。

「あの、僕は先に車に戻ってるよ？」

「あ、ダメだよ、フォルセティ。私たち護衛を分けるわけにはいかないから、フォルセティも付き合うようにね」

「ふぁ！？」

（あぁ、これが女子の中に男独りの問題か～）

ルシルさんも昔は、というか今現在もこんな肩身の狭い思いをしてるのかな・・・。だとしたらちょっと可哀想かも。うん、だからフォルセティをからかうのは二度としないでおこう。ヴィヴィオとコロナが怒っちゃうし♪

†††Ｓｉｄｅ⇒リヴィア⇒ルーテシア†††

トレーニングに使うトレーニングウェアやシューズやタオルなどといった備品の購入をヴィヴィオ達と一緒に購入し終えた後は、次にミッドにやって来た２つ目の目的になるランジェリーショップへとやって来たんだけど・・・。

「あの、僕、外で待ってちゃダメ・・・なのかな？」

店内に陳列された様々な色やデザインの下着に、フォルセティはずっと顔を赤くしたままで、「無理だよぉ～」って両手で目を覆ってる。あー、これはリヴィアの気持ちがちょっと解かるかも。なんか可愛い。

「とりあえず、２人のバストサイズをしっかり測らないとね～♪」

「「ひゃん！？」」

シャルさんが私とリヴィアの背後から抱きつくように胸に手を回してきて、しかも揉んできた。リヴィアとはイタズラで揉み合うことは何度かあるけど、さすがに他の人から揉まれた、というか触られたこともないから、変な声を出しちゃった。

「こら」

「あたっ？」

そんなシャルさんに拳骨を食らわせるルミナさん。そしてまた「ごめんなさい」っていう謝罪が。シャルさんはなんて言うか・・・お馬鹿だよね。美人だし、格好良いし、強いけど。

「さてと。んじゃあサイズを測ってもらって、そっからデザインを決めてこうか」

「「はいっ！」」

女性の店員さんにお願いしてもらって、私とリヴィアは個室に通されてサイズを測ってもらう。９０度に腰を曲げての測定にちょっと恥ずかしさを覚えながらも、無事にトップとアンダーのサイズ測定は終了。

「どれくらいのサイズだった～？」

フォルセティがヴィヴィオとコロナの２人から耳を塞がれてる中、

私たちのサイズがいくつだったかをシャルさんに聞かれたことで、先にリヴィアが「トップが８０で、アンダーが６４！」って答えた。普通に負けたんだけど。妹に・・・胸のサイズで・・・。ま、まぁ見た目や触った感じからして、私より大きいのは判ってたけど、実際に数字で負けるとちょっとへコむ。

「８０、６４ね・・・。マジでおっきいな～・・・。バスト差はおよそ１６ｃｍだからＣカップね」

「っ！！」

この瞬間、トリシュさんから放たれる空気がガラリと変わった気がした。俯いてるトリシュさんから「負けた？　１３歳の子に？　そんな馬鹿な」って呟きが聞こえてきた。ルミナさんが「そっとしておこう」って私の肩をポンっと叩いた。

「ルーテシアは～？」

「あ、えっと７６の６２です」

「ルーテシアは７６の６２でＢカップか～。なかなかじゃん♪」

「いや～、それほどでも～♪　ママ譲りだと思う♪　ママも大きいし♪」

みんな気付いてるのかな・・・？　顔を上げたばかりのトリシュさんの目から光が消えちゃったことに。どうしよう、超怖いんだけど

・・・。するとまたルミナさんが私の肩に手を置いて、「気にしない、気にしない♪」ってウィンクした。

「そうだ。イリス、トリシュ。私もちょっとサイズが変わったみたいだから、ついでだし測ってきてもいい？」

「そうなの？　まぁ以前からルミナもまた大きくなってきたな～って思ってたし。いいよ、ここはわたしとトリシュと・・・の２人で見てるから。ね？　トリシュ」

「そだね」

（超怖い、マジで怖い）

出来るだけトリシュさんを視界に入れないように努めながら、ルミナさんが店員さんと一緒に奥の部屋に向かうのを見届けた後、「イリス。後で私も測りに行きたいんだけど、いいかな？」って、光を反射してない暗い目でシャルさんを見た。

「お、おぅ、もちろん良いですことよ？」

あのシャルさんが本気で怯えてる。それからヴィヴィオ達が派手な下着を見て顔を真っ赤にしてるのを眺めつつ、ルミナさんが戻ってくるのを待つこと数分。ルミナさんが「お待たせ！」って戻ってきた。

「どうだった～？」

「ふっふっふ～♪　８６の６５で・・・カップサイズはＥ～　1サイズアップ～♪」

「おお！　わたしと同じくらいにまで大きくなったんだ～」

「でもちょっと邪魔かも。一応戦闘時は騎士甲冑で乳房が暴れないように固定してるけどさ」

胸の下で腕を組んだルミナさん。大きな乳房がムニッと上がった。とても柔らかそう。とそこでトリシュさんが「次は私・・・」って、店員さんと一緒に部屋の奥へと入っていった。また少し待ってると、トリシュさんが「ふんふふ～ん♪」鼻歌を歌って、スキップしながら戻ってきた。

「聞いて！　これまで７４の６５のＡカップで成長の兆しがなかったのに、今測ってきたら７８の６５のＢカップに！　やっと、やっと・・・Ｂカップに・・・！」

それはもう満面の笑みで、目の端には薄っすらと涙が。シャルさんとルミナさんが「ばんざーい、ばんざーい！」ってお祝いムードだから、私たちも倣って「ばんざーい！」って両手を何度も上げ下げ。そんな中でフォルセティだけは「え、なに、どういうこと？」って困惑してるけど、私たちに倣って「ば、ばんざーい？」をした。

「っと、そうだ。アインハルトも買っておく？　来年から中等部だし、そろそろアインハルトも必要になってくるでしょ？」

「えっ、私ですか・・・！？　あの・・・私、同級生と比べても・・・あまり成長が芳しくなくて・・・」

そう言ってアインハルトは、自分の慎ましやか胸に両手を添えた。

「ですので今は・・・」

チラチラと恥ずかしそうにフォルセティを何度も見るアインハルト。でもさっきみたくヴィヴィオとコロナの２人が手で耳や目を塞いでるから、見えも聞こえもしてないみたい。とまぁこんなやり取りをした後は、サイズに合ったブラジャーを探すために店内を回る。

「目移りしちゃうね、こうもいろんなデザインがあると」

「色も多いから余計にね～」

ここの支払いもシャルさんがしてくれるってことで、正直かなり助かったかも。大人用じゃなくてジュニアブラジャーって種類のおかげで値段は安い方だけど、それでも数を揃えたら結構な値段になっちゃう。通販の時にも思ったけど、結構お値段が張るみたい、女性の下着って。リヴィアと一緒になってアレだコレだ～ってブラジャーを手に取って、私やリヴィアの胸に当てて「迷っちゃうな～！」って笑い合う。

「あ、そうだ♪　ふんふ～ん♪」

リヴィアが何かを思いついたようで、携帯端末をポシェットから取り出してどこかに通信を繋げた。小さなモニターが展開されて、『はい。キャロです』って、私やリヴィアにとっては始めてとも言える友達、キャロが映し出された。

「やっほー、キャロ！」

『うん、やっほー！・・・今日はどうしたの、リヴィーちゃん？ひとり？』

「ううん。お姉ちゃんも居るし、ノーヴェとチームナカジマ――ヴィヴィオ達、それにシャルさん、ルミナさん、トリシュさんと一緒に買い物中」

『うえっ！？　シャルさん達も一緒なん・・・って、そっかぁ、ヴィヴィオが一緒だから・・・』

キャロもそうだけど、あの子と一緒の自然保護隊にいるエリオも、ヴィヴィオが最後の大隊に狙われてることは知ってる。だからすぐにシャルさん達が護衛だってことを察したみたい。

『・・・あ、それで今日は何だったかな？』

キャロが笑顔でそう聞いてきたことで、リヴィアは両手に持ったハンガー4つをあの子に掲げて見せた。1つはシンプルに純白のブラ。乳房を収めるカップの間にあるモチーフには小さなリボンがある。1つはオレンジ色のブラ。カップには花柄模様があって、ストラッ

プタブにはヒマワリを採用。１つは水色のブラ。カップの上の縁にはフリルがあしらわれてる。１つは大人っぽい黒。水色のブラはフリルだったけど、こっちはレース。うわぁ、我が妹ながらなんてチョイス。なんかエロい、ジュニアブラ・・・じゃない。アレだけ大人用じゃん。

「胸が大きくなってきたからさ。ブラジャーを買いに来てるんだけど、同姓の親友であるキャロに相談を～って思って♪　ねえねえ、Ｃカップだよ、Ｃカップ～　　大きくなったでしょ～♪」

『・・・』

キャロがさっきまでのおっそろしいトリシュさんみたくなった。口は笑ってるんだけど、目は一切笑ってない。

「キャロも、私たちと同じ１３歳だし、そろそろ必要になってくるでしょ？　キャロもデザインとかで悩んだろうし、どんな風に決めたのか気になって～♪」

『・・・ない・・・』

「え、なに？」

『着け・・・ない・・・』

「ごめ～ん、聞こえな～い♪」

『着けてないよ！　私、まだブラジャー着けてないよ！』

「うん、知ってるぅ～♪」

我が妹リヴィアは、ブラジャーなんて必要ないほどのキャロのぺったん胸を知っておきながらこんな真似をした。なんてゲスい、クズい。モニターの向こうでプンプン！と頬を膨らませて怒ってるキャロに、「キャロってばＡＡカップもあるかどうか判らないもんね～♪」ってさらに煽るリヴィア。

『なんですとー！　た、確かにまだ小さいけど、必ずリヴィーより大きくなってやるもん！』

「へっへ～ん、夢は寝てる間じゃないと見られないよ～♪」

『むぎゃぁぁぁぁぁぁ！』

キャロは割と本気で怒り始めたから、「あ、用はこれだけだから切るね」ってリヴィアが通信を切ろうとした。だからキャロも怒りが一瞬収まって、『ええ！？　これだけのために連絡くれたの！？』ってびっくり仰天。

「うん、そう！　またね、キャロ！　またエリオとの面白い話を聞かせて～♪」

『うぇぇぇぇぇ！？』

プツンと通信を切り、モニターを解除したリヴィアは「あー、面白かった！」って満足げ。ホントひどい妹だよ。そんなこんなで私たちは日常で着けるブラやパンツ、スポーツブラなどを数点ずつ購入し終えた。その後は、ここショッピングセンターの近くにある、魔法戦すらも行えるトレーニング施設へと立ち寄ることになった。

Ｅｐｉｃａ２０－Ａインターミドルの猛者～Ｄａｈｌｇｒｕｎ　＆
Ｂｕｓｔｅｒ　ｈｅａｄ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

いやはや、ヴィヴィオ達を連れての買い物も無事に済んで何より。ま、わたしとトリシュとルミナ、それにステルス迷彩魔法で密かに付いて来てもらってるルシルとアイリの護衛なら、どんな仮面持ちが来たとしても確実に返り討ちに出来るから、心配なんて何１つとしてないけどね。

『ていうか、ルシル。あなた、アレだけ喋っちゃダメって言ったのに、なに？　シャル化の犠牲者って・・・』

『そのままの意味だよ。セクハラの呪い、だ』

「『セクハラ？　わたしが？　はっはっは！　ぬかしおる！』・・・っと、来たね」

『『はあ・・・』』

わたし達は今、ショッピングセンターのエントランス前で車を待ってる。駐車場まで歩けることは歩けるけど、安全面を考えて店の出入り口から車までの距離を、出来るだけ縮めた方が良いに決まってる。ルシルとアイリが溜息を発したけど、その意味を問い質す前にルーツィエの運転するリムジンが、こちらに向かって来てるのが見

えた。

『んじゃ来た時と同じで、２人は助手席ね。もちろん、ヴィヴィオ達が乗った後で♪』

『了解だ』

『ヤー♪』

プップ♪とクラクションを鳴らして停車したリムジン。ルミナがドアを開けて、「はーい、どうぞ～！」ってヴィヴィオ達を招き入れる。子供たちが乗車する間、わたしとトリシュとノーヴェ、ルシルとアイリで周囲を最大警戒。子供たちの次はノーヴェ、トリシュ、ルミナ、最後にわたしが乗った後・・・

『シャル。ルシリオンとアイリ、乗車完了だ』

ルシルからの報告が入る。わたし達の居る後部と、ルシルとアイリとルーツィエが居る運転席と助手席を隔てる壁がある上ルシル達の姿はわたしにも見えないから、ちゃんと乗ったよ、っていう知らせが要るの。ルーツィエも、護衛としてルシルとアイリがこっそり付いて来てるのは知ってるから、今頃なにかお喋りしてるかも。

「全員乗車完了を確認。ルーツィエ、出して」

『かしこまりました。それでは出発します』

車内にそうアナウンスが入ってすぐ、車は静か～に動き出した。向かうのはインターミドルを始めとした、数多くの魔法戦競技会の試合に使用される会場と同じ造りをしたドーム、ツヴァイトクッペル。派手な魔法を使っても問題ないように設計されてるから、競技会への出場を決めた者、志してる者が本番前に練習するための施設となってる。・・・っていうホームページで覚えた説明を、ヴィヴィオ達にもした。

「試合を行うリングのサイズとかも公式規定どおりの広さで設計されてるから、相手との間合いの感じを掴む練習にもなるの」

「それは重要ですね。インターミドルにはリングアウトによる強制敗北はないですけど、間合いは格闘型にとってとても大事なので」

本番さながらのリングでの練習を行えるということで、アインハルトやヴィヴィオ達もちょっと興奮気味。車で移動すること数分、大きなドーム状の建物が見えてきた。ルーツィエにはまた、さっきと同じように建物の出入り口付近で停めてもらって、車から出入り口までの移動距離を少なくしてもらう。わたしとステルス状態のルシルとアイリが先に降りて周囲を警戒。

「いってらっしゃいませ～！」

ルーツィエからの見送りの言葉にヴィヴィオ達は「ありがとうございます、いってきます！」って満面の笑顔で応えた。駆け足気味でドームに入って、エントランスホールの受付で使用料（子供でも払えるお手軽料金だ）を払った後、更衣室を目指す。

『ルシルは外で待機ね♪　姿が見えないからって乙女の着替えを覗いちゃダメだよ？』

『言われなくても覗かん』

『アイリも外で待ってるね～♪』

そんなルシルの呆れ声やアイリの陽気な声を背に、わたしもロッカールームへと入る。ヴィヴィオ達はついさっき買ったばかりのジャージへと着替えてる。まぁチームナカジマ共通の服は、刺繍を入れないといけないってことでお店に預けたままだから、みんなそれぞれ好きに決めて購入したデザインの物だけど。

「シャルさん達は・・・着替えないの？」

「わたし達は一応護衛だしね～」

ヴィヴィオにそう答えたら、「そうですか・・・」ってアインハルトが目に見えて落ち込んだのが判った。ルミナが「どうしたの？」って聞くと、アインハルトは「あ、いえ・・・」って言いよどんだ。

「あの、アインハルトさんがチームナカジマに入った理由の1つに、次の合宿からやることになってる高ランク魔導師との模擬戦への参加っていうのがあって・・・」

「そう言えばそうだった。ノーヴェの提案だったね」

「あ、はい。短期間で絶大な経験値を積むには、格上との試合だと考えたので・・・。勝つばかりだけじゃなく、負けること多くを学べると・・・」

ノーヴェのそんな意見に「確かに。負けることで自分に何が足りないか判るから」ってトリシュも同意する。わたしやルミナも首肯することで、ノーヴェの考えに同意してることを示す。負けて這い上がって成長するかどうかは、それは人それぞれだけど・・・。でも折れない限り、上を目指そうって気概がある限りは成長して、さらなる高みへと行けるはず。何せ、わたし達がそうなんだしさ。

「じゃあ・・・わたしとトリシュとルミナ、この中で誰と闘り合いたい？」

さすがに護衛3人が一気に模擬戦に入るわけにはいかない。だからヴィヴィオ達と向かい合って仁王立ちで微笑んで見せると、あの子たちはバッと構えを取った。わたし達の戦意を受けての反射行動。うん、悪くない反応スピードだね。

「いいんですか、シャルさん？」

「1人だけならね。『一応、ルシルとアイリが警戒してくれてるし、問題ないっしょ♪』」

『え？　ルシルさんとアイリも一緒なんすか！？』

『うん。ステルス魔法で、ずっと付いて来てくれてるよ』

思念通話に切り替えてそう伝えると、ノーヴェは今まさに袖を通そうとしていたジャージで、ブラジャーに隠れた胸を覆い隠した。顔も赤くなってるし、ルシルが更衣室にまで付いて来てる、なんて考えちゃったのかも。

『大丈夫。ルシルは外に居るから。さっきのショッピングセンターでも、着替えが必要だった店じゃ外で待機してる・・・と思う』

『あー、いや、大丈夫です、ルシルさんの人となり・・・真面目っぷりは知ってるんで・・・。信じますし、信じられます』

そう言って照れ笑いしたノーヴェは、安心したように着替えを続けた。んで、ヴィヴィオ達は、わたし達の誰かと闘いたいのか、っていう相談を終えて、わたし達へと視線を戻した。あの子たちの視線の先に立つのは「ルミナ・・・」だった。

「はいっ！　ルミナさん、よろしくお願いします！」

「「「お願いします！」」」

ヴィヴィオ達が整列してお辞儀をした。それに対してルミナは「いいよ。じゃあ、やろうか」ってニヤリと笑みを浮かべた。脂汗を垂らしながらもヴィヴィオ達も笑みを浮かべた。着替えを終えて試合を行う会場となる大ホールへと向かう。

「おお！　なんかすごいビリビリする・・・！」

「うん・・・！　ドキドキしてくる！」

リオとコロナが、廊下の先にある大ホールから逆って来る魔力波を感じても、それを楽しみとして受け取ってることにわたしは、いい選手になれる、って微笑む。観ればヴィヴィオとアインハルトも笑顔だ。そんな彼女たちを見守りながら廊下を進み、会場へと到着する。大ホールには６つのリングがあって、内４つのリングは今まさに白熱の魔法戦が行われてる最中。ヴィヴィオ達が「わあ・・・！」って目を爛々と輝かせてる。

「空いてるリングがあるでしょ？　あそこを１時間借りたから、時間いっぱいまでルミナにしごいてもらいな～♪　んじゃルミナ、そういうことで、よろしくっ☆」

「ルミナさん。すいませんが、魔力出力をＡＡランクほどまで抑えてもらっていいっすか？」

「ＡＡランク？・・・あー、そっか。そりゃそうだよね、ＳＳランクなんて、さすがに無茶が過ぎるか～」

わたしですら全力のルミナを相手にしたくないって考えてるのに、ひよっこなヴィヴィオ達にとっちゃ正しく天災と変わらない。それほどまでの実力差がある。ルミナは腕輪型デバイス「ツァラトゥストラ！」を起動。ノーヴェに言われたとおり魔力を抑えるように魔力封印を行った。

「ねえ、あの人たちって・・・・！」

「ああ！　間違いない、騎士イリス、騎士トリシュタン、騎士アルテルミナスだ・・・・！」

「本物・・・・！？」

「うわうわ、どうしよう！　サイン欲しい！」

「うそ・・・・！　騎士アルテルミナスがリングに上がった・・・・！」

会場に入って、わたし達が予約したリングへ近付くと、他のリングで試合形式で模擬戦してた子供や、リングの周囲に居たコーチや友人、ご家族であろう人たちが口々にそう言って、わたし達の動向を注視してくる。

（いや～、有名人は辛いな～♪）

「じゃあ誰からやる？」

「ジャンケンで決めましょう」

ルミナとの試合を望んでいたアインハルトがジャンケンで試合順を決めようと提案した。当然、「良いんですか？」ってヴィヴィオが確認した。

「ヴィヴィオさんもリオさんも、ルミナさんとの試合が楽しみでしょうし。公平に公正に、です」

「あ、私も参加して良い？　最強の拳闘騎士との試合なんて、たぶん今日くらいじゃないと出来ないだろうし♪」

そういうわけで、ルミナと試合をしたいヴィヴィオ、リオ、アインハルト、リヴィアの４人でジャンケンすることになった。

・―・―・―・―・

ツヴァイトクッペルの前を走る幹線道路。中央区アヴァロン、北区カムラン、南区ウィンザインを縦断していることで交通量は多い。そんな幹線道路を走行する数ある車の中に紛れ、高級車が走行中だ。運転しているのは青年で、服装から執事かと思われる。後部座席には１人の少女。

彼女の名前は、ヴィクトーリア・ダールグリュン。古代ベルカ史に登場する名立たる騎士・王の１人、雷帝バルトローメウス・ダールグリュンの末裔なのだが、直系ではないため血は薄い。しかしそれでも雷帝の技を習得しており、その実力は本物だ。

「あら？」

ヴィクトーリアが何気なく外を眺めていると、見覚えのある少女をその視界に収めた。長い髪をポニーテルにした娘で、活発そうな顔をしている。

「ポンコツ不良娘とその取り巻き。何をそんなに慌てて・・・？」

彼女の乗る車の進行方向と同じ方角へと全力で駆けているポンコツ不良娘ことハリー・トライベッカに、ヴィクトーリアは少し興味がわいた。ヴィクトーリアとハリーは共にインターミドルチャンピオンシップに出場する選手で、都市本戦にまで進めるだけの実力を有している。

「エドガー。ちょっと歩道に寄せてもらえる？」

「かしこまりました」

執事エドガー・ラグレイトはウィンカーを点灯させて歩道側へと車を移動させ、ハザードランプを点灯した上で速度もゆっくりにした。ヴィクトーリアは窓を開けて、「ごきげんよう、ポンコツ不良娘」とハリーに声を掛けた。

「ああん！？　誰かと思えばヘンテコお嬢様じゃねぇか！　今日も優雅気ままにドライブってか？　インターミドルのトップ選手ってんなら走れ走れ！」

「わたくしはもう、今日の分のトレーニングは終えましたわ。トレーニングのやり過ぎはいけませんのよ？　これだから脳筋は・・・。必要以上に筋肉を付けて達磨になってしまいなさい」

「あ〝あ〟？」

「なんです？」

ヴィクトーリアとハリーの視線の間で火花が散る中、ハリーの妹分の1人、もっとも小柄でサングラスを掛けた少女・ルカが「リーダー！　今年の大会で負けて悔しいのは判るっすけど・・・！」と、ハリーにとっては思い出したくもない悔しい現実を突きつけてしまった。今年のインターミドルにて、ハリーはヴィクトーリアと都市本戦で激突した。結果ハリーは敗れ、都市本戦5位入賞となった。

「あ、バカ！　この急いでる中で、なんでその話を出した！？」

ルカの失言に本気で怒鳴るのはミアという名の、妹分の中で最も背が高く、髪の長い少女。さらにもう1人の妹分、風邪用マスクを着けた小柄な少女・リンダが「リ、リーダー！？　気にすることないっすよ！」と　俯き加減になり走る速度も落ちてしまったハリーにフォローを入れる。

「ぅ・・・ぐす・・・」

俯いていて見えないがハリーから鼻を啜る音が聞こえてきたため、「うわぁ、すいません！　マジすいません、リーダー！」と謝るルカに、ハリーは「な、泣いてねぇよ・・・！」と強がるが、袖で涙を拭っている。

「なにあなた、本当に泣いているの？」

「泣いてねぇよ！　ちくしょう、来年は必ずテメェを負かすからな！」

若干涙ぐんでいるハリーは、ヴィクトーリアにリベンジすることを告げながらビシッと指を差したのだが、ヴィクトーリアは車の中ということもあって、ハリーの人差し指は何も無いところを差していた。

「おい、どこ行くんだよ！」

「本当にポンコツですわね！　わたくしは車なのですから、あなたが足を止めればこうなるのは必然ですわ！」

「あーあー悪かったな、ポンコツで！　でも来年は、そんなポンコツに負かされるってこと、今のうちに覚悟しとけよな！」

赤信号で停車した車に追いつき、改めてヴィクトーリアにリベンジを誓ったハリーだったが、「まぁそんな事より」とヴィクトーリアは、彼女の宣言をさらりと流した。ハリーは「なんなら今からやっか！？　おっ？」とガンを飛ばすが・・・

「あなた達は何をそんなに急いで走っていたのかしら？」

わざわざエドガーに車を歩道側へと寄せ、走るハリー達に合わせて速度まで落とさせた本題を、ヴィクトーリアはようやく伝えた。するとハリーの妹分たちも「そうっすよ、急がないと！」と、その場で足踏みをしつつ、道路の先を指差した。

「あー！　そうだった！　こんなところでヘンテコお嬢様相手に喧

嘩売ってる場合じゃねぇんだ！　あばよ！」

「ちょっ、わたくしの質問に答えなさいな！」

「ああもう！　この先にあるツヴァイトクッペルって知ってか？」

「ええ、もちろんですわ」

ハリーからの問いに、それが何か？と首を傾げているヴィクトーリア。携帯端末を取り出していろいろと操作していたミアが「今ですね、そこに・・・」と、ヴィクトーリアにある写真を見せた。

「っ！　騎士アルテルミナス！　それにこちらはトリシュタンさんにイリスさん・・・！　いえ、それより気になるのは、騎士アルテルミナスが、誰とも知れない少女と試合を・・・？」

「だろ？　元とはいえ拳闘騎士の頂点だった人が、一般人を相手に試合をしてるってんだぜ？　こりゃ行かないわけにはいかねぇだろ！」

「なるほど。・・・エドガー」

「はい、お嬢様」

ヴィクトーリアはエドガーに車を停車させるよう言外に伝え、車は静かに停車した。助手席と後部座席のドアが自動で開き、「あなた達、早くお乗りなさい」と誘った。

「あなた達の足の速さは見て判ってますけど、それでも１０分は掛かりますわ。それではイリスさん達も帰ってしまうかもしれません。ほら、早くお乗りなさいな」

「・・・ありがと」

「お礼をしたいのなら相手の目を見てしなさい、不良娘」

「うぐ・・・！」

「リーダー。今回ばかりは・・・」

「ちゃんとお礼をした方が良いと思うっス」

「あたしもそう思うっス」

妹分たちにまでそう言われてしまうと、ハリーもさすがに「どうもありがとうございました！」と顔を赤くしながらも礼を述べた。そしてエドガーの運転する車はそう時間も掛からずツヴァイトクッペルへと到着した。ヴィクトーリアはエドガーに出入り口前で自分たちを降ろすように伝え、出入り口前のロータリーで停車すると同時・・・

「執事さん、ありがとうでした！」

「「「ありがとうでしたっス！」」」

「はい、どういたしまして」

ハリーと妹分３人が一斉に車からロケットのように飛び出し、ヴィクトーリアも「エドガー、わたくしも先に行っていますわ！」と、ハリーらを追って飛び出していった。そして遅れてツヴァイトクッペルの受付カウンターにたどり着いたのだが、ハリー達は奥へ行こうとせず立ち往生していた。

「どうしたんですの？　早く行かなければ・・・」

「ヘンテ――いや、ヴィクトーリア！」

「な、何ですの急に・・・！？　そんな改まって・・・」

ハリーがヴィクトーリアに気付くや否や９０度に腰を曲げて、ヴィクトーリアに頭を下げた。ハリーが頭を下げ、自分の名前をはっきり呼ぶことなどこれまでなかった、と考えるヴィクトーリアはたじろいだ。

「金、貸してくれ！」

「はい？」

「使用料！　使用料がないと入れないんだよ！」

「はあ？　あなた達、まさか無一文でここまで来たんですの！？」

「いや、ここへ来る予定は最初は無かったんだよ。少し離れたところにあるショッピングセンターで買い物して、さぁ後は帰るだけ～ってところたったんだけどな。残るは帰りのレールウェイ賃だけ。だからここを利用するだけの金が無いだけだ！」

「何を威張ってますの！？」

文字通り頭を抱えるヴィクトーリア。ハリーや妹分たちが「どうか！」と頭を下げ直すその光景を、他の利用者がジロ～っと眺めている。ヴィクトーリアやハリーは有名な選手であるため、周囲からのハッキリとは聞こえないがヒソヒソ話が彼女の耳に届き、このままでは自らの沽券に関わるかも知れないと判断した彼女は「判りましたわ！早く頭をお上げなさい！」と、ここの利用料人数分を払うことを決めた。

「おう、サンキューな！」

「「「あ、ありがとうございます！」」」

そう言ってハリー達は奥へと駆け出し、ヴィクトーリアはお小遣いを使って利用料を支払った。遅れて彼女も奥へと進み、大ホールへとやって来た。足を止めていたハリー達と合流し、「居ましたわ！」と、チームナカジマとイリス達が利用しているリングを指差した。そして少女たちの中に見知っている顔が3人いたことに気付いたヴィクトーリアは小さく「あぁ、そういうことでしたの」とひとり納得した様子だ。

「うおー！　マジだ、マジで居る！」

「ちょっ、お待ちなさい！　あのお三方は、ここザンクト・オルフェンのＶ・Ｉ・Ｐ・ですのよ！？　失礼があっては・・・！」

「あー、たぶん大丈夫だろ？　イリスさんとは顔見知りだし！」

「はい！？　なんであなたのような方が、イリスさんと既知なのですか！？」

「んなもん、後で教えてやんよ！　今はただ、確かめたい・・・！　勝てるなんて思い上がりはしねぇ。お前にさえも負けちまうくらいだからな。それでも・・・最強の拳闘騎士とやり合ってみてぇ。たぶん、こんなチャンスは二度とねぇと思うからな・・・！」

負けてもいいから最強に挑戦したいと語るハリーに、ヴィクトーリアも「なんとなく理解できますわ」と微笑んだ。そう、彼女たちは世界最強を目指すアスリートなのだ。目の前に本物の最強が居る以上、挑戦したみたくなるのは必然だった。

「わたくしも挑んでみたいですわね。フォアストパラディン・・・、騎士アルテルミナスに！」

闘志を漲らせたヴィクトーリアとハリーは互いにフッと笑みを浮かべ、最強の待つリングへと駆け出した。

Ｅｐｉｃａ２０－Ｂインターミドルの猛者～Ｋａｉｓｅｒ　ｖｓ　Ｆｉｇｈｔ，ｓ　Ｇｏｄ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

「はぁぁぁぁぁッ！」

――覇王断空拳――

足先から練り上げた力を拳に乗せて打つ、覇王流の基礎・断空。私はその一撃を繰り出すため、軸足を踏ん張った。私と対峙していただいているのは、聖王教会騎士団における最強の部隊、銀薔薇騎士隊にかつて勤めていらっしゃった、拳闘において最強とされていたパラディン、アルテルミナス・マルスヴァローグさん。

「覇王流とはどれほどのものか、見せてもらおうか・・・！」

ルミナさんは私の拳を受け入れるためにグッとお腹に力を入れました。私はルミナさんのお腹へ向けて、断空拳を打ち込んだ。

「ふんっ・・・！」

本気で打ち込んだにも拘らず、ルミナさんをその場から殴り飛ばすことが出来なかった。私や先ほどまでルミナさんと闘ったヴィヴィオさん達（順番を決めるジャンケンで負け続けた私は最後です・・・）は、インターミドルの規定どおりのルールで試合をしている。

（ぐぅ、硬い・・・！）

１ラウンド４分。今回はリングを１時間貸し切っていますから、休憩を挟みつつ数ラウンドを行う予定です。試合はライフ制であり、本番の１回戦と同じ１２０００ポイントから。攻撃を受けた際にダメージ数が算出され、０となった時に敗北となる。さらにクラッシュエミュレートというシステムを搭載していまして、打撲・骨折・脳震盪・火傷・感電など体へのダメージが表現されるとのこと。

（実際、先ほどのリオさんとルミナさんとの闘いで、リオさんが左腕を折られてしまいました。試合が終わると同時に、骨折をした、という表現は綺麗サッパリなくなっていましたが・・・）

ですが本当に痛そうで、試合中はリオさんも堪らず涙を浮かべていましたし。その光景が脳裏に浮かんだ私は、無意識に手加減をしてしまったのでしょうか。さすがに１ｃｍも動かせられないなんてありえないので。

「あいたた。威力はそこそこあるね。でも・・・私を吹っ飛ばすだけの力は無かったわけだ」

繰り出されるルミナさんの右拳打。私は咄嗟に首を傾げることで躱し、私はすぐさま反撃の左拳廻打を繰り出す。ルミナさんはパシン！と私の拳を右手で受け止め、私に背を向けさせるために反時計回りに回るようグイッと拳を引っ張り、そこに左裏拳打ちを顔面目掛けて繰り出してきました。私の左拳を掴んでいるルミナさんの力は凄

まじく、引き離せない以上はしゃがむことで躱すしかない。

「っ・・・！」

頭上を通り過ぎるルミナさんの拳が放つ衝撃波が私を襲う。いくら魔力出力を絞っていても最強の拳闘騎士。一撃一撃が重過ぎる。しゃがみ込んだ私はルミナさんへと足払いを掛けるのですが、「ビクともしない・・・！」所為で、私の一切の行動が止まってしまった。

「ほら、こんなあっさりと攻撃を緩めちゃダメ♪」

「ひゃっ・・・！？」

またグイっと左腕を引かれた私は、ルミナさんの頭上にまで引っ張り上げられて宙で逆さまな状態となってしまった。とここで、パッと私の手が解放され、逆さまのままリングの床へと落下することに。

「さ、巧く防御するように・・・！」

落下途中の私へと繰り出されるルミナさんの右拳正打。何もしなければ右脇への直撃を許してしまうことになる。それだけは何としても防がないと、高確率で1発撃墜・・・。ルミナさんと向き合うように腰を捻って、両腕をクロスさせて防御姿勢に入る。ほぼ同時にルミナさんの拳を受け、私は「ぐぅ・・・！」リング外にまで殴り飛ばされてしまった。

「おっと。大丈夫？」

私を抱き止めてくれたのはシャルさん。私は「大丈夫です、ありがとうございます」とお礼を述べ、ルミナさんの待つリングへと再び上がる。ルミナさんは「少し休む？」と聞いてきましたが、私は首を横に振って断った。

（今の一撃。ルミナさんは何の強化もしていなかった。なのに・・・）

まともに受けた左腕が痺れて動かしづらい。クラッシュエミュレートでは打撲判定となっているようで、『ティオ。防御に専念してください』と、私の相棒である"ティオ"にお願いする。ルミナさんは強化なしで、私を一撃で墜とせるだけの攻撃力を持っています。ならこちらも一撃で墜とせるだけ打撃力を強化すれば、と考えましたが・・・。

（短期決戦はこちらのデメリットの方が多すぎる・・・）

戦技の錬度において私は、ルミナさんにとって正しく生まれたてのひな鳥。いえ、路傍の小石程度でしょう。自分でそう評してしまうほど、ルミナさんは途轍もなくすごい方だということです。

「すぅ・・・はぁ・・・。お願いします！」

「ヤー。もっと見せてみてよ、覇王流」

「もちろんです！　覇王・・・空破断（仮）！」

空気を押し出すように掌を振るい、衝撃波を飛ばす。（仮）が付いているのは、断空拳とは違い未だに完成の域にたどり着いていない戦技だから。威力もさほど無いですが、けん制としては使える。ルミナさんは避けずに、真っ向から右拳打による打撃で完璧に迎撃しました。その間にルミナさんの右側へと移動し・・・

「覇王・・・！」

断空拳を打つべく力を練り上げようとした時、「弱点突き～♪」と私に足払いを掛けてきた。ガクッと体勢を崩される。足払いを掛けられた足を床に着こうとするより早く、軸足もまた足払いを掛けられてしまい、体が宙に浮いてしまった。

「ひゃう！？」

股下に左腕を突っ込まれたことで思わず変な声を出してしまい、右腕は私の胸倉を掴んできました。これは「投げ技・・・！？」で、担ぎ上げられたことで視界が反転して、そのまま受身も取れずに背中から床に叩き付けられた。

「かは・・・っ！　えほっ、けほっ！」

「よいしょっと。えっと、ダウン中に追撃するのは・・・」

「無し！　無しだからね、ルミナ！」

「たとえありでも、そんな事をするのなら私が止める・・・」

シャルさんが腕で×を作り、トリシュさんは指輪に触れながらそう告げました。ルミナさんとトリシュさんの闘いを観てみたい思いに駆られますが、今は私がルミナさんの相手。途中で棄権するなど、覇王流にはありえません。

（ライフは残り・・・６０４０ポイント。まだやれる・・・！）

立ち上がって試合続行の意思を伝えるためのファイティングポーズをとると、「良い目をしてる。悪くない」とルミナさんがほくそ笑みました。ルミナさんも構えを取り、右腕をグッと引いた。中距離での飛び道具か、もしくは突撃か。最大限に警戒していると・・・

「ふっ・・・！」

――ルフト・クーゲル――

「ぅぶっ！？」

わけも判らず私は吹き飛ばされていて、リングの床に倒れこんでいた。顔面に残る痛みに殴られたのだと理解はした。でもどうやって殴られたのかがまったく判っていないですが、「まだまだ・・・です！」急いで立ち上がる。

「ふっ・・・！」

――ルフト・クーゲル――

「ぐぅ・・・！」

今度はお腹に見えない拳打を受けた。見えない攻撃が飛んでくる、という心構えがあったおかげで、先とは違って吹き飛ばされずに済んだ。それでもダメージはしっかりと入り、とうとう２０００台に突入してしまっている。

「止まっちゃダメです、アインハルトさん！」

「っ！」

ヴィヴィオさんからの忠告に応じて、その場から離れた直後にバシッ！と、私が先ほどまで居た床に何かが直撃した。ですが今のでルミナさんが何をしたのかが何となくですが判りました。魔法でもスキルでもない、単純な「拳圧による中距離打撃・・・？」かと思われます。

「正解♪」

――ルフト・クーゲル――

ルミナさんが目にも留まらない速度で拳打を放ち、私の足元に拳圧を打ち込んできました。速さもさることながら目に見えず、打撃の瞬間も注意しないといけないという、実に厄介な攻撃手段です。

「へい、カモーン！」

「・・・行きます！」

床を蹴ってルミナさんへと向かう中、ルミナさんからは拳圧打撃はありませんでした。何事もなくルミナさんへと最接近できたので、「はあああああッ！」今の私の全力で拳を振るう。ルミナさんはその場から一切動くことなく、片掌だけで私の全力の拳打・蹴打を防いでは捌いてきます。

（あまりにも遠い・・・）

「じゃ、そろそろ攻守交代しようか？」

私の右上段蹴打を、掲げた左前腕で受け止めたルミナさんがポツリと漏らしました。私はすぐに足を戻して攻撃へと備える。

――鋼体の型――

防御を固めて肘で受け止めるという相手の攻撃を利用した攻性防御の「牙山！」で、繰り出される左拳を迎撃する。ルミナさんの拳をしっかりと肘で受けると、ルミナさんは「いっつ〝・・・！」と痛そうに左手首を振りながら私より距離をとりました。

「アインハルトさん！　ルミナさんのライフ、とうとう９０００台に突入です！」

「クラッシュエミュレートで、左拳の骨折も追加だよ！」

「でも時間も1分切ってます！」

「このまま逆転しちゃえ！」

「頑張ってください、アインハルトさん！」

今回ルミナさんに挑んだメンバーの中で最も強いリヴィアさんですら、ルミナさんのライフ１００００ポイントを切ることが叶いませんでした。私のみが、ルミナさんに確かなダメージを与えられた。それが誇らしいです・・・が、リヴィアさんは、私とルミナさんの試合にはない高速打撃戦が繰り広げました。互いに1歩も足を止めず、常にリング上を駆け回りながらの熾烈な攻防。思わず見惚れてしまうほどに、素晴らしい試合でした。私があのレベルに到達するには、更なる鍛錬が数年と要りそうです。

（ですが、今の私に出せる全てで、ルミナさんをさらに追い詰める・・・！）

――覇王空破断（仮）――

「やるじゃん！」

こちらに向かって来ようとしたルミナさんへ牽制の意味を込めての衝撃波を放つと同時、ルミナさんへと駆け出す。ルミナさんは左拳を使えません。なら左側に繰り出す攻撃への対応が遅れるはずです。

（案の定、左腕はダラリと下がったまま・・・！）

弱点を突く。これも必要な戦術です。少しばかり後ろめたいですが、これも真剣勝負。ルミナさんも理解してくれるはずです。ルミナさんが迫り来ていた空破断（仮）を、虫を叩くように右掌で払い落としたのを確認。その僅かな隙に私は肉薄し・・・

「覇王断く――」

「そいつはもう、私には通用しないって理解してなかったの？」

ルミナさんの恐ろしく速い足払いが繰り出される。足先から力を練り上げるという断空の基盤。練り上げる前に足へ攻撃を受ければ、断空は不発となる。それは私も、クラウスも既に知っている欠点。だから今のは・・・。

「っ・・・！　誘われた・・・！」

「空破断！」

ルミナさんの足払いが空を切る。狙われていた左足を浮かせたことで、空振りを誘ってみたのですが・・・。ほぼ賭けのような手段でしたが、上手くいって良かった。浮かせていた左足をドンッ！と床に付き直し、衝撃波を近距離で打ち込む。迎撃も回避も防御も出来ない間合いでの直撃。ルミナさんを短い距離ですが吹き飛ばす。

「おっとと・・・！」

着地をされるより早く肉薄し、着地されると同時に「覇王・・・断空拳！」を打ち込む。私の一撃はしっかりとルミナさんの左頬に入った。

「あいたーっ！」

ここで追撃を緩めるわけにはいかない。残り十数秒。倒しきれなくともライフで勝りたい。

「はあああああああッ！」

「せいや！」

右拳廻打を繰り出す。と、ルミナさんは骨折表現を受けている左拳で迎撃してきました。まさか、という思いと、指から腕、腕から肩、そして頭へと突き抜ける痛みで思考が少し止まってしまった。

「覇王・・・」

「え・・・？」

ルミナさんの口から漏れるその名と、その構えからさらに思考が乱れてしまう。

「断空拳、かっこ仮かっこ閉じッ！」

「ぐふぅ・・・っ！！？」

ルミナさんが繰り出したのは、見間違うことなく覇王流・断空拳でした。腹部を襲う痛みと衝撃に一瞬、意識が飛びそうになったのを気力で踏み止まりますが、視界が反転してリングの床に叩き付けられたことと、「惜しかった～・・・！」という、シャルさんの言葉に・・・

（あぁ・・・負けてしまった・・・）

調子が出てきた、というところでの一転敗北。これはなかなか精神的にキますね・・・。床に倒れたままの私へとルミナさんが歩み寄って来てまして、「大丈夫？　立てる？」と手を差し出してくれました。

「はい、なんとか自力で立てるほどには・・・」

ルミナさんの手を取り、立ち上がらせてもらう。するとヴィヴィオさん達から盛大な拍手が起こりました。

「アインハルトさん、すごかったです！」

「格好良かった！」

「本当に惜しかったです！」

「私も負けていられないな～」

皆さんからの賞賛に私は一礼した後、ルミナさんへと振り向き、「もっと鍛えて、また挑みます」と握っている手を強く握り締める。

「いいよ。とりあえずインターミドルで、ミッド代表になったら・・・全力で闘ってあげる♪」

「っ！　はいっ、必ず！」

†††Ｓｉｄｅアインハルト⇒アイリ†††

ヴィヴィオ達とルミナの試合を見終えて、アイリはマイスターと思念通話で『みんな強くなってたね～』って、ちょっと見ない間に格闘家として成長していたことにビックリしたことを伝える。特にアインハルト。魔力出力などの手加減があり、防御魔法を一切使わなかったとはいえ、ルミナにあそこまでダメージを入れるなんて。

『アインハルトの将来が楽しみだね♪』

『それを言うならヴィヴィオ達みんなの将来が、だな』

『ん。・・・ん？　マイスター、こっちに複数人走ってきてる』

『ああ。魔力反応は２つだが、魔力無しも３人いるな』

マイスターとアイリは、ヴィヴィオ達子ども組に知られないように、

光学迷彩魔法で姿を消した状態での護衛をしてる最中。もし最後の大隊が襲撃してきても、目に見える護衛のシャル、トリシュ、ルミナに最大警戒をするはず。そこに伏兵のアイリ達が奇襲して、連中を一網打尽っていう作戦。

『うん。・・・うん？　あれ、マイスター。あの子たちって・・・』

転移スキルでの奇襲じゃなく、わざわざ走って近寄って来るなんて・・・て思ってたけど。やって来たのは、日本でも絶滅したかと思われる古き不良スタイルの少女3人を引き連れた『ハリー・トライベッカ・・・？』と、『あの娘はヴィクトーリア・ダールグリュン・・・？』の5人だった。

『変装・・・？』

『いや、本人のようだ。一直線にこちらに向かって来ているとなると、目的は大人組か？』

そうこうしてる内にハリー達がアイリ達の元へとやって来て、ヴィヴィオとコロナとリオの目が爛々と輝きだす。ハリーと妹分のミア、リンダ、ルカが整列して、「シャルさん、ルミナさん、トリシュさん、お久しぶりです！」ってシャル達に向かって一礼した。

「その節はお世話になりました！」

「「「なりました！」」」

「ううん、気にしないで。あれも仕事だったし♪」
「インターミドルの試合、テレビでだけど観戦させてもらったよ」
「私も初めて観ましたが、あなたも含め、１０代であれだけの戦技とその錬度に驚きましたよ」
「マジっスか！？　すっげぇ嬉しいっス！」
「リ、リーダー！？」
「言葉遣いに気を付けて下さい！」
「お知り合いとは言っても大人の人なんですよ！？」
「あっ！　す、すいません！　ちょっと気安かったですか・・・？」
「ぜ～んぜん♪　気安いくらいでちょうど良いよ」
シャル達と気軽に会話してるハリー達の様子に、ヴィクトーリアは「どうして、そんな親しげに・・・！？」って困惑中。ハリーはそんな疑問に対して「以前、ちょっとお世話になったんだよ」って答えた。
「お、お世話に、ですって・・・！？　あぁ、そんな・・・。不良の格好をしただけの似非不良だと思っていましたのに、まさか騎士団に、イリスさん達にお世話になるような罪を犯していたなんて・

・・。何をしたのです？　かつあげ？　万引き？　喧嘩？」

「ば、馬鹿！　んなことするかよ！　オレ達はな・・・！」

かくかくしかじかとヴィクトーリアへ説明したハリー。ハリー達がシャル達と顔見知りだった理由を知ってヴィクトーリアは「そうでしたのね」と安堵した直後にハッとして、シャル達に体を向けた。

「ご、ご挨拶が送れて申し訳ありません。ご無沙汰しています、イリスさん、トリシュタンさん、アルテルミナスさん」

「ん。久しぶり～」

「お久しぶりです」

「ちょっとぶり～♪」

シャル達とヴィクトーリアが挨拶を交わすと、ハリーが「え？　お前も知り合いだったの？」って不満そうに漏らした。有名なシャル達と知り合いだっていうのが自慢にならなかったのが悔しいみたいだね。

「あなたね。これでも私はダールグリュン家の人間ですのよ。古代ベルカより続く血族は、教会本部で行われる社交界パーティなどで顔を合わせる機会が多いのですから、既知であってもおかしくはないでしょう？」

「ちぇー」

「そして・・・。イクスヴェリア陛下も、ご無沙汰しております」

「はい。ヴィクトーリアもお元気そうで。あ、ですが陛下は不要ですよ？　呼び捨てで構いません」

「では、これからはイクスとお呼びいたしますわ」

スカートを摘み上げての優雅な一礼を見せるヴィクトーリアに、イクスも綺麗なお辞儀で応える中、ハリー達が「陛下？」って小首を傾げる。ヴィクトーリアがイクスやシャル達に視線を送ると、イクスは「私は構いません」って微笑んだ。

「他言無用でなら、伝えることを許可するよ」

その様子を見てたハリー達がゴクリって唾を飲んだ。イクスやフォルセティ、ヴィヴィオの正体は、古代ベルカから続く王侯貴族には伝えられるようになってる。だけど、アインハルトのストラトス家のような、ベルカ社交界に出ずに一般家庭として過ごしている人たちには、そういう過去には縛られたくないっていう意思表示があるみたいで伝えないみたい。ベルカ戦乱が終わって、今は平和に過ごすべき、と掲げてるベルカ旧王侯貴族。そのバランスを崩さないことが第一で、一勢力だけに秘密が出来る事はいけない、っていうお取り計らいらしいね。

「ベルカの歴史に興味なんてないでしょうから知らないとは思いま

すけど、彼女は古代ベルカの諸王にその名を連ねる、冥府の炎王イクスヴェリア陛下ですわ」

ハリーと妹分たちは「はあ・・・」って気のない返事をした後、ようやくのその重大さが判ったのは「えええ！？」って大声を上げて驚いた。ここでイクスが「はじめまして、イクスヴェリアと申します」って自己紹介した後、簡単に今現在の自分の状況を教えた。

「ほぁ～、なんかすごいな・・・」

「っス。本物のベルカの王様とお知り合いになれるなんて・・・」

「予想も出来なかったっスね、リーダー」

「あ、ああ。いや、ヴィクトーリアみたいな末裔とかならまぁ、血筋とか関係ねぇ～、くらいしか思わねぇけど、実際に本物ってなると言葉が出ねぇな」

「皆さんもお気軽に、イクス、と呼んでください♪」

イクスから放たれるほんわかムードにみんなもほんわかしてるところで、シャルが「そうだ。この子たちの事も紹介するよ」ってヴィヴィオ達に振り向いた。

Ｅｐｉｃａ２０－Ｃインターミドルの猛者～Ｒｅｕｎｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

インターミドルで有名なヴィクトーリア選手、そしてハリー選手こと番長がどういうわけか今わたし達の前に居て、シャルさん達と楽しそうにお話してる。その様子を興奮気味に眺めてると、シャルさんが「そうだ。この子たちの事も紹介するよ」ってわたし達に振り返ると、ヴィクトーリア選手と番長たちがわたし達を見た。

「えー。来年のインターミドルに出場する予定の・・・」

「チームナカジマの監督兼コーチ、ノーヴェ・ナカジマです。で、コイツらが、来年出場する・・・」

「た、高町ヴィヴィオです！　ストライクアーツをやってます！」

「コロナ・ティミルです！　ゴーレム創成が得意です！」

「リオ・ウェズリーです！　春光拳っていう家に伝わる武術やってます！」

「真正ベルカ古流武術・覇王流（カイザーアーツ）、アインハルト・ストラトスです。お会いできて光栄です」

ドキドキしながらも自己紹介するわたしとコロナとリオ、そしてア

インハルトさん。番長は「おう！　来年はライバルってわけだな！」って豪快に笑った。

「にしても、みんな小さいっスけど・・・いくつっスか？」

「「「９歳で、来年１０歳です！」」」

「マジか！　うちのリーダーでも中等科１年・・・１２歳だったぜ！？」

「参加制限年齢１０歳に入った年に参加かよ」

「すげぇな、お前ら」

番長のお友達の方たち（聞けば妹分ってことで、背の高い人がミアさん、マスクをつけた人がリンダさん、サングラスをかけた人がルカさん）に驚かれちゃった。でもすごいって言ってもらえてるとかなり嬉しい。続いてアインハルトさんが「初等科５年の１１歳でです」って答えた後、番長が「お前だけ年上なんだな。同い年ぐらいに見えるが」って頷いた。

「んで、チームナカジマとは違うけど、初参加になる・・・」

「ルーテシア・アルピーノ、１４歳です」

「妹のリヴィア・アルピーノ。双子なので同じく１４歳！」

「おう！　よろしくな！・・・ん？　そっちは？　ルシルさんの妹

さんか？」

番長の視線がフォルセティに向いた。最初は何を言ってるのかな？って思ったけど、フォルセティが女の子に見られてるってことを察したその瞬間、「ぷふっ！」ってシャルさんとリオとリヴィアが吹きだした。

「え？　なんスか？　オレ、何か変な事――」

「言いましたわよ、お馬鹿。彼は八神フォルセティ。女の子ではなく男の子ですわ」

「「「「えええええーーーーっ！？」」」」

「そこまで驚く事ですかーーーーー！？」

番長たちとフォルセティの絶叫が木霊した。落ち着いたところで、「あー、笑った♪」って目の端に浮かんでる涙を拭ったシャルさんが、「ヴィヴィオとフォルセティは憶えてるかな～？」ってわたしとフォルセティを見た。

「実は2人とも、ヴィクトーリアとは面識があるんだよ？」

「「えっ！？」」

シャルさんからのまさかの発言に、わたしとフォルセティは何度目かの驚き。ヴィクトーリア選手の方を見ると、「ええ。あなた達が

まだこんなに小さい頃に、一度だけですが」って、腰の辺りで手の平を水平に振りました。その手の高さから見て、一番背が小さい頃だってことが判る。

「プライソン戦役の後、六課時代の頃に教会本部に招かれたことは憶えてる・・・？」

「「う～ん？」」

フォルセティと一緒に腕を組んで唸って考えるけど、六課の隊舎で過ごした思い出が大多数で思い出せない。ヴィクトーリア選手は「まぁ2人とも小さかったですし」って苦笑しました。聖王教会の上層部やヴィクトーリア選手のようなベルカから続く血統の社交界があって、そこで聖王女オリヴィエのクローンであるわたしと、魔神オーディンのクローンであるフォルセティがお披露目となってみたい。

「そこで、ヴィヴィとセティと挨拶を交わしましたわ」

「ヴィヴィ？」

「セティ？」

「ええ。かつて顔を合わせた際、ヴィヴィをヴィヴィオ陛下、セティを騎士フォルセティと呼んだならば、陛下呼びは嫌、騎士呼びは嫌とのことで、ヴィヴィとセティという呼び方にしましたわ。あなた達も喜んでいましたし」

なんだろう、ヴィヴィ、って呼ばれたことで懐かしさを思い出して、すぐに「ヴィクター・・・さん？」って呼び名がパッと思い浮かんだ。フォルセティも「あ！　ヴィクターさん！」ってポンっと手を打った。

「ええ！　では改めまして。お久しぶりですわね、ヴィヴィ、セティ♪」

「「お久しぶりです！」」

わたしとフォルセティも改めて挨拶を返した。ヴィクターさんとニコニコ微笑んでると、「あの・・・」ってアインハルトさんがヴィクターさんに歩み寄りました。

「・・・覇王の直系でしたわね、確か」

「はい。そしてあなたは、かの雷帝バルトローメウス・ダールグリュンの末裔だと伺っております」

「ええ。血筋としては薄い方だけど。インターミドルの試合映像をご覧になったかと思うけど、雷帝ダールグリュンの戦技は全て引き継いでいるわ。あなたは？」

「全てではありませんが、少しずつ思い出して、自分のものにしていっています」

「そう・・・」

アインハルトさんとヴィクターさんが見つめ合う。険悪な雰囲気じゃないみたいだけど、なんだか不安になってくる時間。その沈黙を破ったのは「世代を超えての同窓会ですね♪」って笑うイクスだった。

「私、冥王。聖王のヴィヴィオ、魔神のフォルセティ、覇王のアインハルト、雷帝のヴィクター。まさか、このような場面に居合わせることが出来るなんて考えもしませんでした♪」

「戦乱の時代ではなく平和の時代での出会いですわね」

わたしも一応当事者になるんだけど、どこか他人事のように思っちゃってる。フォルセティもちょっと困ってる顔してるし。

「ヴィクトーリアさん。私は、チームナカジマの皆さんと出会う前、覇王の名と覇王流を最強と知らしめるため、ヴィヴィオさんやフォルセティさん、イクスさんを含め、ルール無用で打倒しようと考えていました。もちろん、雷帝ダールグリュンの末裔であるあなたも・・・」

「そう・・・。それで？」

「覇王流アインハルト・ストラトス。雷帝ヴィクトーリア・ダールグリュンに、ＤＳＡＡ試合ルールに則った試合を申し込みたいです」

「ヴィクターで結構ですわ、アインハルト。その挑戦・・・お断りするわ」

アインハルトさんからの挑戦を即断ったヴィクターさんは、アインハルトさんがその理由を尋ねるより先に「勝ち上がってらっしゃい」って簡潔に、戦意をぶつけながらヴィクターさんが言い放ちました。

「来年、インターミドルに挑戦するのなら、覇王流の全てを会得し、数多のライバルを打倒した上で挑んできなさい。今のあなたでは、私には敵いませんわ・・・絶対に」

「っ・・・！　そうですね、仰るとおりです。ええ、必ず。必ず今より強くなって、雷帝ダールグリュンを下します！」

「ふふ。ええ、待っていますわ」

ヴィクターさんが右手を差し出して、アインハルトさんはその手を取って握手しました。まずい展開にならなくて良かったってホッとしたわたしは、ある事を思い出して「番長！」に向き直った。

「お、おう？　急にどうした。そんな大声出して」

「以前、番長のサインを貰ったことへのお礼がまだでした！」

「ん？　お前らにサインを書いたことあったっけか？　今日、初めて会ったはず・・・」

「えっと、知り合い伝手に書いてもらったんですけど・・・。ルシルさんとアイリから・・・」

ルシルさんとアイリから番長の名前入りサインを渡された時、すっごく嬉しかった。番長って、見た目からは想像もしえなかったサインを書くんだよね。とても可愛い絵がデカデカと描いてある中に、番長の名前が書いてあるっていうサイン。初めてそのサインを見たとき、わたしとコロナとリオは・・・

――番長、絵が可愛すぎます！――

わたしの家で総ツッコみを入れたものだよ。砲撃番長（バスターヘッド）の可愛らしさを知ってる人ってどれだけいるんだろ。わたし達のようにサインを書いてもらって知る人もやっぱりいるんだろうな～。

「あー！　ルシルさんとアイリさんの言ってた来年参加する子ってのはお前らか！　そういやサインに記した名前は、お前らの名前だったな！　今思い出したぜ！　でもま、サインくらいいくらでも書いてやるぜ？　応援してくれるファンは大事な存在だからよ。それにオレも、ルシルさんやアイリさんやシャルさんのサインも貰ったしな！」

満足そうに笑った番長は、トリシュさんとルミナさんに振り向いて「サイン、ください！」って深々と頭を下げてお願いした。ルミナさん達は「良いよ～♪」って快諾して、後で色紙に書いてプレゼントすることを番長に約束した。

「あの、出来たらですけど、ヴィクトーリアさんのサインも欲しいな～・・・と」

「ええ、構いませんわ。それと・・・コロナとリオ、それにルーとリヴィ、あなた達も私のことはヴィクターと呼んでもらって構いませんわ」

「あ、じゃあわたしもハリーやヴィクトーリアのサイン欲しいかも♪」

「なら私もついでに！」

「それなら私もください」

シャルさんとルミナさんとトリシュさんまでもが、番長とヴィクターさんのサインが欲しいってことになって、後でサイン交換会が催されることになっちゃった。

「サインっていやぁ、今日はルシルさんとアイリさんは居ないんスね・・・」

「え、あ、うん。今日はわたしの家で、他の隊員と待機中なの」

「オランジェ・ロドデンドロン隊っスよね！　アンジェリエさん、クラリスさん、セレスさんのサインも欲しかったな～」

「チームナカジマもそうだけど、うちの教会からも何人かが出場し

たいって言ってるし、だから会う機会も多くなると思うから、その時にでも直接お願いしてみる？　それとも貰ってきてあげようか？」

「いえ、大丈夫っス！　次に会った時にお願いします！」

満足そうに笑ってる番長に、やっぱりシャルさん達はすごい有名な人たちなんだって再認識できた。そんな人たちに見守られてるわたし達って本当に恵まれていて、幸せものだって思う。和やかムードの中、わたしよりちょっと小さいくらいの子どもが集団でこっちに向かって走ってきていて、「走ってはいけませ～ん！」って、引率らしいお姉さんが注意したところで・・・

「うわ！？」

そのうち1人、男の子がわたし達の前で転んじゃった。一番近かった番長が「おいおい、大丈夫かよ」って腰を屈めた直後、前を見ないで走ってきた後続の子供たちが番長や妹分さん達と激突。結構勢いがあって、しかも4人っていうこともあって「おわっ！？」って後ろ向きにで倒れこみそうになった。

「何か掴ん――」「何か触れ――」

「おわっ！？」「きゃっ！？」

番長と妹分さんの中でもっとも背の高いミアさんが仰向けに倒れこんじゃったんだけど、ほぼ同時にさっきまで居なかったはずの「ルシルさん・・・！？」が、2人に覆い被さるように四つん這いの姿

で現れて、３０ｃｍくらいの小さな元の姿になってる「アイリ・・・！？」も宙に浮かんでた。

「あ」

「え・・・？」「んぁ・・・？」

ルシルさんの両手がなんと、番長とミアさんのお胸を鷲掴んでた。そして番長とミアさんの手はルシルさんの服をギュッと握ってた。ルシルさんが倒れちゃった理由がそれだって、どう反応していいのか、考えてるような考えてないような混乱する頭の中で理解はした。

「お、お父さん・・・？　アイリお姉ちゃん・・・？」

「はっ！　ちょっ、待っ、違っ、ふ、不可抗力だ、これ！」

「「～～～～～～っ！！！！！！」」

お胸を男の人であるルシルさんに掴まれてる気付いた番長とミアさんが顔を真っ赤にし始めて、わたし達子ども組は「あわわ！」って慌てて目を両手で覆うとしたところで、「ふんっ！」シャルさんがルシルさんを思いっきり蹴っ飛ばして、ドゴンッ！って大きいな音と一緒にルシルさんは「おごっ！？」って呻き声を上げて吹っ飛んだ。

「なに女子校生を押し倒して胸を揉んでんじゃオラァ！」

「シャ、シャル！？　今のはマイス――ルシルが悪いわけじゃないから！」

「原因より結果に問題あり！　番長、ミア、大丈夫！？」

「あ、いや、オレは平気です・・・」

「あ、あたしもビックリしたっスけど・・・なんとか・・・」

番長もミアさんもそうは言うけど、やっぱり顔は赤いままだった。

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ⇒アイリ†††

マイスターがシャルに蹴っ飛ばされちゃうことになった原因、子供たちとその付き添いの人たちから誠心誠意の謝罪を受けた後、蹴っ飛ばされてドームの内壁に叩き付けられたマイスターも戻ってきて、「本当にすまなかった、２人とも」って、ハリーとミアに深々と頭を下げた。実際、マイスターはあんまり悪くないんだけどね。元はといえばハリー達がマイスターの服を、全体重を乗せて引っ張った所為で、マイスターも支えきれずに２人に覆い被さったわけだしね。

「あ、いえ！　そんな・・・！　オレ達がルシルさんを引っ張った所為でもあるんで！」

「そ、そうっス！　お、驚きはしましたけど・・・。それにキモい奴ならともかく、ルシルさんみたいな美形なら悪い気もしないっス！」

（でもおっぱいを揉むなんていうラッキースケベだけは許さない。揉んで良いのはアイリのだけなんだからね！）

あぁ、でもはやて、シグナム、シャマル、アインス、あとヴィータとリインとアギトお姉ちゃん・・・は揉むほどないし、貧乳トリオ以外の４人までなら許す。

「えっと、ところでお父さんとアイリお姉ちゃんは、どうしてここに？」

フォルセティがそう尋ねると、マイスターとシャル達大人組が顔を見合わせて、観念したかのように小さく溜息を吐いた後、マイスターとアイリがここに居る理由を教えた。アイリ達は、シャル達と同じようにヴィヴィオを護衛するために同行してた。姿を消していたのは、最後の大隊に護衛戦力がシャルとトリシュとルミナの３人だって思わせるため。３人だけって侮って仕掛けてきたとき、マイスターとアイリの追加戦力で一気に逮捕するために、だ。

「ですが驚きました。姿を隠してはいてもお２人はずっと、私たちの側に居たのですよね？　まったく気付きませんでした」

「うん、すごいすごい！」

「車も一緒に乗ってたんですか？」

「ああ、アイリと一緒に助手席に乗っていたよ。・・・あ、先に言っておくが、ショッピングセンターやココでの更衣室へは入ってい

ないからな。変に勘違いしないように」

マイスターとアイリの気配遮断のレベルの高さにアインハルト達が驚いていると、ヴィクトーリアが「ヴィヴィ達の護衛でしたのね。それなら無理は出来ませんわね」って、残念だけどしょうがないって風に苦笑い。ハリーも「やっぱダメかな～」って肩を落とした。何が無理でダメなのか、ちょっと判らないね。

「ところでヴィクターさんや番長たちは、どうしてここに？」

「まぁここはトレーニング施設でもあるわけだし、ひょっとして雷帝と砲撃番長（バスターヘッド）の非公式試合を・・・！？」

ルーテシアに続いてリヴィアがそう言うと、ヴィヴィオ達の目がまた爛々と輝き始めた。今年の都市本戦でハリーとヴィクトーリアは闘い、そしてヴィクトーリアが勝ち、ハリーが負けた。どっちが勝ってもおかしくないほどの泥仕合を繰り広げた。その再戦が今、自分たちの前で行われるかもしれない、って考えてのことだね。

「いや、違うんだ。オレは・・・アルテルミナスさん、あなたと闘えると思ってココに来たんス」

「私と？　そういえば一直線にこっちに向かって来ていたようだけど・・・。それはまたどうして？」

「実は・・・」

ハリーが別のところで買い物をしてた時、選手仲間から写真が送られてきたとのこと。どんな写真か見させてもらうと、それはルミナとリヴィアが闘ってるものだった。真正の古代ベルカ式の騎士であり、元とはいってもその実力は教会騎士団最強の拳闘騎士。そんなルミナと試合が出来るかもしれない。そう考えてハリー達は、急いで来たとのこと。

「でも護衛中っていうことなら・・・」

「ふっふっふ。ハリー・トライベッカ。君の挑戦を・・・」

「あ、はい！」

ルミナが腕を組んで仁王立ちして、不敵な笑みを浮かべながらハリーの前に立った。そして「受けません！　私と闘いたければ勝ち上がってきなさい」って、さっきヴィクトーリアがアインハルトに言った断った理由をそっくりそのまま、今度はハリーに言い放った。

「え？　勝ち上がって？　ど、どこで？」

「まずは教会騎士団に入って、見習い騎士からね。ハリーは格闘型から騎種は拳闘ね。パラディン目指して昇格試験を受ければ、間違いなく私をやれるよ？」

教会騎士団へのスカウトだったけど、ハリーは「ごめんなさい。オレ、管理局に入るのが夢なんス」って頭を下げて、今度はハリーが断った。

「こら」

「あいたっ」

とここで、シャルがルミナの頭を小突いて、「あなたはもう、パラディンにはならないんでしょうが」ってお叱りの言葉を告げた。ルミナは、特務零課が再稼動を始めたら騎士団を辞めて、局員一本でいくって決めてるから、ハリーが騎士団に入ったとしても試合をする事はきっと永遠にこない。

「もうルシルとアイリが姿を見せちゃったし、大隊への切り札にはならないからな～。ルミナ、せっかくここまで来てくれたんだし、ハリーと闘ってあげたら？」

「っ！　いいんスか！？」

ものっすごいキラキラしだしたハリー。ルミナも「ま、友人になった記念日として、いっちょヤろうか」って腕をぐるぐる回して準備運動。するとヴィクトーリアも「わ、私もよろしいでしょうか！？」って、ルミナに詰め寄った。

「いいよ。雷帝ダールグリュン、相手に不足無し。ハリーから先にやるから、準備して待っていて」

「あ、ありがとうございます！」

「よっしゃー！　やったるぜー！」

ハリーがリングに上がってストレッチを始めて、ヴィクトーリアも「更衣室に行ってきますわ」って一旦アイリ達とお別れ。そしてハリーがストレッチを終えて、起動した「レッドホーク！」っていう鎖型のデバイスを左拳に巻いて、いわゆる特攻服っていうデザインの防護服へと変身した。

「お待たせしました」

ヴィクトーリアがトレーニングウェアに着替えて戻ってきたんだけど、さっきまでは居なかった男の人が付いて来てた。

「確か、ヴィクトーリアのセコンドの・・・」

インターミドルの試合映像の中で、ヴィクトーリアのセコンドを勤めてた人だってことはすぐに思い出せた。その人がシャル達に対して「ご無沙汰しております。イリス様、トリシュタン様、アルテルミナス様」って一礼した。

「久しぶり、エドガー」

シャル達が挨拶を返し終えると、エドガーがマイスターやアイリ、ヴィヴィオ達に振り向いて「はじめまして。ダールグリュン家ヴィクトーリアお嬢様付き執事、エドガーと申します」って挨拶をくれたから、マイスター達も自己紹介で応えた。

「さて。役者も揃ったことだし、始めようか？　砲撃番長・・・バスターヘッド、ハリー・トライベッカ」

「うすっ！　よろしくお願いします！」

リング上で向かい合って、右拳同士とコツンと突き合わせたルミナとハリーが距離を取って、臨戦態勢に入った。そしてシャルが「レディ・・・ファイト！」って合図を下した。こうして闘神ルミナと砲撃番長ハリーの試合が始まった。

Ｅｐｉｃａ２０－Ｄインターミドルの猛者～ＤＵＥＬ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

買い物に出掛けるヴィヴィオ達の護衛として、ステルス魔法を使って姿を消した状態で付いて来た俺とアイリだが、ちょっとしたハプニングでバレてしまった。で、今はインターミドルの上位選手であるハリーが、ルミナとの試合を行っているという、出掛ける前には予想だにしなかった展開が繰り広げられている。

「ハリー、なかなか善戦してるね」

「ああ。試合開始の直後に、手加減無用・全力全開のハンデ無しでお願いします！とハリーが告げた時はどうしたものか、と思っていたが・・・」

――良いの？　本当に本気を出して・・・？――

ＳＳランクの魔力を放出させたルミナにハンデ無しだと言ったハリーは、その圧力に及び腰になってしまい、結局はヴィヴィオ達相手にもやっていた魔力出力の制限＋スキル使用不可に落ち着いた。

「リーダー！　防御はダメっス！　躱すっス！」

「溜めの長い魔法もやめた方がいいっスよ！」

「やっぱ最強の拳闘騎士には手も足も出ないんスか・・・？」

ハリーを姉御と慕う妹分のミア、ルカ、リンダが、1発辺り最大で50ポイントしかダメージを与えられないというルミナの防御力と、防御の上から1000ポイント強のダメージを叩き出すルミナの攻撃力に、悲嘆に暮れてしまっている。先ほどのヴィヴィオ達との試合とは全く違うルミナの動きに、ヴィヴィオ達が固唾を呑む。自分たちは本当に手を抜かれていたのだと。

「くそっ、マジで強ぇ・・・！」

ハリーのポイントがみるみる減っていく中、ルミナが「もうちょっと抑えようか？」と気遣いか、もしくは挑発か、どちらにしても今のハリーには聞きたくない言葉を発した。だから彼女も「手加減無用！」と大きく肩で息をしながら言い放った。

「おおおおッ！」

――ガンフレイム――

ハリーが突き出した右拳より放たれるのは炎熱砲撃。砲撃番長（バスターヘッド）と呼ばれる所以だ。リヴィアと同じく近接格闘戦の中に射砲撃を織り交ぜる戦闘スタイル。が、ルミナには通用しない。何せつい先ほど、ハリーの上位互換のようなリヴィアと高機動格闘戦を繰り広げたのだ。

「ノロい」

ルミナは半歩分だけ横移動して炎熱砲を躱し、放射体勢のままであるハリーの元へと一足飛びで再接近。そんなルミナへとハリーの鎖型デバイス・"レッドホーク"が蛇のように動き、彼女の足元から絡み付いた。

「お？」

放射体勢から抜けたハリーが「おらぁ！」と"レッドホーク"をグイッと引っ張ってことで、ルミナは後ろ向きに倒れこみ、「あいたっ」後頭部をリングの床に打ちつけ、「あ～」床をズリズリと引っ張られた。

「せやぁぁぁぁーーーーッ！！」

――オレ式全力ゼロ距離ガンフレイム――

床に仰向けで倒れたままのルミナへ向けて、ハリーが零距離での炎熱砲を撃ち込み、２人を爆炎と黒煙が飲み込む。少しの沈黙の後、「うわぁっ！？」という声と共にハリーが黒煙を突き破ってリングアウト。

「「「リーダー！？」」」

「来んな！」

ハリーはルミナが握る"レッドホーク"に振り回されているようで、

リング周辺を引き摺り回される。それを見てシャルが「こらこらこら！　リングアウトしてんだからやめい！」って怒声を上げた。それでルミナも「おっと、いけない。ごめんね」と"レッドホーク"より手を離し、ハリーも自由となった。

「あいてて・・・」

「大丈夫っスか、リーダー！？」

「ライフ残り１０００ポイント・・・やばかったっスね・・・」

「ルミナさんの方はまだ1万以上っスよ」

「ああ・・・だがクラッシュエミュレーターを食らってねぇのは幸いだぜ」

妹分たちがリング上で佇むルミナを見て曇った表情を浮かべる。それでもハリーは「あぁ、これが最強か」なおも目をギラギラと輝かせて、ルミナの待つリングへと再び上がって構えを取る。

「そろそろタイムアップだから、悪いけど次の一撃で終わらせてもらうよ」

「なら、その一撃を凌いでカウンターを入れさせてもらうっス！」

ハリーの右拳が炎を纏い、そこから火炎の魔力スフィアが４つと作り出される。さらに「レッドホーク！」と鎖全体の炎を纏わせて、

ルミナへと走らせた。シグナムの連結刃形態・シュランゲフォルム時の"レヴァンティン"による空間攻撃・シュランゲバイセンのような攻撃だ。

「私の動きを封じたところでその魔力球を撃ち込むって寸法？　だとしたら、けん制にすらならないと忠告しておくよ、今のうちに」

「百も承知っス！　それでもこっちからギブアップなんてぜってぇに嫌だ！」

「なるほど。そうだよね・・・うん。じゃ、行くよ！」

ダンッと床を蹴り、一気に距離を縮めようとするルミナに"レッドホーク"が襲い掛かり、彼女は避けもせずにわざと巻き付かせて、自ら身動きが出来ないようにした・・・ようだ。不確かなのは、あまりにも自然に食らったからだ。ルミナなら見ずとも躱せる程度の速度だったからだ。

「バーストバレット！！」

"レッドホーク"を引っ張ってルミナを強制的に近寄らせている中での火炎弾４連射。爆炎に呑まれたルミナだが、削れたポイントは８０ポイント。ヴィヴィオ達との試合時より、防護服へ回している魔力量が多いため、防御魔法未使用でこの防御力を発揮している。

「ブラック・・・ホォォォォーーーーークッ！！」

ハリーの利き腕である左による拳打が、「むぐぅ・・・・！」ルミナの腹部を捉えた。その一撃でようやく２００ポイントのダメージをルミナに与えられたハリーは、追撃のために殴り飛ばされたルミナをまた引っ張り込もうとしたが、ルミナは自ら"レッドホーク"を自身の上半身に巻き付かせるように回転しつつ、空中に留まったままハリーの元へと接近した。

「っ・・・！！」

――ガンフレイム――

ハリーが咄嗟に発動できたのは火炎砲。ルミナはそれをまともに受けるが、爆炎の中から回転したまま飛び出してきて、フリーな下半身――右足による打ち下ろしの蹴りを繰り出した。まともに受けても防御をしても確実に残りライフを削られるであろうハリーは、「おらぁぁぁッ！」右拳の一撃で迎撃した。

「上手い」

「うん。回避はもう出来ない距離だったし、ほぼ無意味な防御に魔力を回すくらいなら攻撃に全振りした方がダメージも軽減できる」

トリシュの言うように、ハリーは３００ポイントのダメージだけで済んだ。対するルミナは８０ポイントのダメージを受け、ハリーともどもクラッシュエミュレートを受けた。ハリーは骨折、ルミナは打撲。

「つぅ・・・！」

右手の骨折にハリーが涙を浮かべるが、戦意はなお衰えない。当然だ、それくらいで折れていたら都市本戦にまで上り詰められるわけがない。

「へへ。ルミナさんの宣言した一撃（フィニッシュブロー）、迎撃させてもらったっス・・・！」

「うん、驚いた。打撲も食らっちゃうし。残り時間は・・・５０秒弱か。それなら今度こそ、次の一撃で沈めてあげる・・・！」

何重にも硬く巻き付いている"レッドホーク"を力ずくで引き千切り、"レッドホーク"の影響で至近距離に立つハリーへと容赦ない右ストレートを繰り出すが、ハリーは直感でも働いたのかギリギリで顔を逸らせて躱した。

「おおおおおおおッ！！」

――ブラックホーク――

１歩と踏み込み、腰を捻り回転運動を加えた左ストレートを繰り出すハリー。だがその予備動作にルミナも合わせて沈み込むように腰を落としつつ、僅かに前進しての「デーモン・アプゲショッセン」と、かつて行った特騎隊メンバーでの模擬戦時にミヤビを一撃で沈めた、あのカウンターストレートを打ち込んだ。魔法ではなく純粋な技であるのが恐ろしい。

「ぶ・・・っ！？」

ハリーがものすごい勢いで殴り飛ばされ、たまたま俺の元へと吹っ飛んできたから「よっと」と抱きとめる。今の一撃でハリーは３万４千ポイントのダメージと、内臓損傷のクラッシュエミュレートを受けたため、すぐに「クラッシュエミュレートを解除！」させた。

「いってぇ・・・」

「「「リーダー！」」」

「ありがとうっス、ルシルさん。ひとりで立てます」

フラリと俺の腕の中から離れたハリーは、駆け寄ってきた妹分たちへ「負けちまった、たはは・・・」と苦笑い。そしてヴィクトーリアの視線に気付き、「お前の防御力でも防げねぇぞ、今の」とアドバイスした。

「ええ、そうでしょうね。・・・良い戦いだったわ」

「・・・へっ」

ヴィクトーリアがリングへと上がり、正しく甲冑と言える防護服へと変身してルミナと対峙した。

「かの有名な雷帝と闘えるとは、光栄の至り」

「私もそうですわ。騎士団では元とはいえフォアストパラディン、管理局では闘神と謳われる貴女と槍を交えることが出来て、本当に光栄ですわ」

「さっきも言ったけど、ハリー共々インターミドルでの試合、どれも良かった。だから私もちょっと本気出すよ」

ルミナが構えを取り、ヴィクトーリアも戦斧を構え、互いに臨戦態勢に入った。そしてシャルの「レディ・ファイト！」という号令で、2人の試合の幕が上がった。

†††ルシリオン⇒イリス†††

ハリーにも容赦ない技を繰り出して、3万以上のダメージを与えさせたルミナ。ヴィクトーリアはハリー以上の防御力を誇るってことで、初っ端から技を繰り出し始めてた。

「はあああああッ！」

――四式・瞬光――

ヴィクトーリアは戦斧型デバイス・"ブロイエ・トロンベ"による電撃を纏う刺突を繰り出し、放電されてる電撃にルミナも僅かなダメージを受けながら（それでも感電のクラッシュエミュレートは受けないのはさすが）も「そりゃ！」と長い柄を左足で踏みつけ・・・

「でやっ！」

――エーレントヴァッフェン――

「ぐぅ・・・っ！」

右足でヴィクトーリアの側頭部を蹴っ飛ばした。吹っ飛ばされたヴィクトーリアは床に叩き付けられたけど、苦悶の声を漏らしながらも立ち上がって、「まだまだですわ」って"ブロイエ・トロンベ"を構えた。

「武器による直接攻撃はやめておいた方が良いよ、って先に忠告しておくよヴィクトーリア」

「ありがとうございます。ですが我が雷帝の戦斧を、そう容易く下せると思わないでください」

――一式・纏雷――

ヴィクトーリアの籠手と脚甲と胴鎧に電撃が付加される。電撃を纏っていればルミナの打撃をどうにか出来るって考えてのことだろうけど、それだけじゃルミナの拳は止められないよ、ヴィクトーリア。

――五十四式・槍礫――

「はあああああッ！」

雷撃弾を４発と発射して、ルミナがそれを躱してる間に接近したヴィクトーリアは「九式・霞！」と、"ブロイエ・トロンベ"の斧刃による斬撃を繰り出した。ルミナは「だから無駄だって」さっきと同じようにヴィクトーリアのデバイスを踏みつけたんだけど・・・。

「外式！　天瞳・水月！」

「おっぐぅ・・・！」

"ブロイエ・トロンベ"のお尻にあった仕込み柄を、右手で本体の柄から切り離したヴィクトーリア。仕込み柄からは魔力刃が展開されて、その斬撃をルミナに左肩に叩き込んだ。受けたダメージは１１０ポイント。今ので３桁も食らうのか～。ルミナが僅かによろけたところにヴィクトーリアの刺突の追撃が迫る。

「今の一撃のお代を払っておくよ」

突き出された放電する魔力刃をルミナはガシッと鷲掴んで、ダメージを負いながら仕込み柄を握るヴィクトーリアの右手の指に「ふんっ！」左拳を打ち込んだ。

「ぐっ・・・！」

ヴィクトーリアの表情が苦悶に歪み、右手が握っている仕込み柄から離れた。仕込み柄はルミナの手に渡り、ヴィクトーリアはルミナから距離を取ろうとした。

「はい、逃がさない」

――ゲヴァルト・ツム・アインシュトルツ――

ルミナが左足でヴィクトーリアの左肩に踵落としを打ち下ろして、彼女をそのまま地面にうつ伏せで叩きつけ、間髪入れずに追撃で蹴り上げた。蹴っ飛ばされたヴィクトーリアはリングアウト。受けたダメージは２５００ポイント。ついでにルミナに殴られた右手の指４本（親指除く）の骨折、両肩打撲っていうクラッシュエミュレート。もう右手で何かを握ることは、この４分間１ラウンド中にはないと見て良い。

「お嬢さま！　・・・一撃による４桁のダメージなど、初めて見ました・・・！」

ダールグリュン家のヴィクトーリア専属執事、エドガーが顔を蒼くして呻いた。都市本戦でも、どれだけ攻撃を受けても必ず３桁ダメージに押さえていたヴィクトーリア。それがルミナの攻撃で容易く４桁ダメージだからな～。仕方がないとはいえ、ショックでしょうに。

「返すよ、コレ」

そう言ってルミナは仕込み柄を、ヴィクトーリアが立ち上がって戻ってくるであろうリングの端に放り投げた。ヴィクトーリアは立ち上がろうと動いてるけど、両肩の打撲が効いてるようですぐには立

ち上がれそうにない。

「何やってんだ、お嬢！　お前、こんな簡単に終わるようなもんじゃねぇだろうが！」

ハリーの叱咤激励が飛ぶ。ヴィヴィオ達がわたし達大人組をチラッと見てきて、その意味を察したわたしは「ヴィクトーリアを応援してあげて♪」って微笑み返した。するとヴィヴィオ達も「ヴィクターさん、頑張れー！」って応援し始めた。

「あれ！？　ここでヴィクトーリアの応援！？　私は！？」

「ルミナに応援なんて要らないっしょ～」

「今のところ、君が敵役だぞ～」

「そういうわけです、ルミナ。敵役らしく散ってください」

「酷い！」

がっくり肩を落として落ち込むルミナを余所に、ヴィヴィオ達の応援に応えるようにヴィクトーリアは立ち上がって、"ブロイエ・トロンベ"を杖代わりにしてリングへと戻ってきた。リングアウトカウントは・・・いいや。そんなつまらない勝敗の着け方はしたくない。

「ヴィクトーリア。両腕が動かしにくいなら、ルシルに治癒かけて

もらう？」

「いえ。それはルール違反ですので。このままで続行ですわ」

「そう。なら、そのプロ意識に敬意を表して、手加減はほんのり風味のままでやろう」

「・・・それで構いませんわ」

若干不満げなヴィクトーリアだけど、今の自分の状況が判っていることでルミナの申し出を素直に受けた。ヴィクトーリアは浅く呼吸を繰り返しつつ、両肩を小さく回す。そのたびに少し顔が引き攣るのは痛みを覚えてるからでしょうね。

「いつ・・・」

床に突き刺さる仕込み柄を手にして、魔力刃を解除して本体へと連結させ直すヴィクトーリア。指の骨にヒビが入ってる右手で取ったってことでルミナが「マジで大丈夫？」って心配するけど、ヴィクトーリアは「問題ありませんわ」と辛そうな表情で答えた。

「参りますわ・・・！」

左手だけで"ブロイエ・トロンベ"を携え、リング端から中央に立つルミナの元へと歩き出す。ルミナは自分から仕掛けるつもりはないようで、ヴィクトーリアの準備が整うまで仁王立ち。

「百式・・・！」

ヴィクトーリアは足元にベルカ魔法陣が展開して、"ブロイエ・トロンベ"の石突部分を突き立てた。彼女から膨大な魔力が吹き上がり、リング全体に電撃が迸る。

「神雷！」

直後にとんでもない雷撃が拡散してルミナを飲み込んだ。武装隊はもちろん、騎士団の下位騎士でも出せないような強烈な雷撃に、わたしとルシルとトリシュは「おお！」って拍手。んで、ヴィヴィオ達は呆然。ひょっとしたら来年のインターミドルでヴィクトーリアと闘うかもしれないっていう考えと、どう攻略しようかって考えでいっぱいなのかも。

「さすがのルミナさんも感電のクラッシュエミュレートくれぇは食らってんだろ・・・？」

ハリーも固唾を飲む中、収まり始めた砂塵の中に佇むルミナとヴィクトーリアの姿を視認。ルミナが「おおぅ、体が痺れて動きにくい・・・」って、ハリーの言うとおり感電のクラッシュエミュレートを受けて、全身ビクビクしてる。ライフも２５００ポイントも減ってるし。

「今が好機・・・！」

ヴィクトーリアがルミナの元へと駆け出し、左手１つで携える"ブ

ロイエ・トロンベ"を振りかぶり、「九式・霞！」と電撃を纏う斧刃による薙ぎ払いを繰り出した。ルミナは反応は出来てるんだけど、動きがのろい。やっぱ運動機能麻痺のクラッシュエミュレートはキツイか・・・。

「ぐぅ・・・！」

ギリギリで腕によるガードが間に合ったルミナだけど、踏ん張りきれずに薙ぎ払われた。受身も取れずにビタン！と床に叩き付けられて、ダウン判定になる。ライフもさらに３００ポイントも減った。まぁそれでもまだ1万以上のライフを残してるけど。

「お嬢！　時間もそんなに残ってねぇぞ！　ライフ的にはお前が負けてんだから、さっきの雷撃を連発しろ！」

「無茶を言わないでちょうだい。連発できたら苦労はしませんわ」

「ルミナさんに勝てるんなら多少の無茶くらいやれよ！」

「やかましいですわ！　無理なものは無理なのですわ！」

ハリーと言い合うヴィクトーリアの視線は、ゆっくりと立ち上がったルミナに注がれたまま。ルミナもファイティングポーズを取って、続行の意思を示した。

「さぁ、続きをやろう！」

そう意気込むルミナだけど感電は未だ解けず。それでもルミナから打って出た。ぎこちないけど駆け出しつつ・・・

「ふんっ！」

――ルフト・クーゲル――

「うぐっ！？」

目にも留まらない予備動作から繰り出される、拳圧による中遠距離技を打ち出した。魔力付加すると威力は桁違いに増えるけど、その分魔力で可視化しちゃうから、ほとんど使わない没技だったりする。ヴィクトーリアは拳圧を顔面にもろに食らってグラリとよろめいた。

「ちょっとずつ麻痺が治っていくよ・・・！」

「くっ・・・！　五十四式・槍礫！」

「射撃魔法程度で、私を止められないってことは理解してるよね・・・！」

ヴィクトーリアはグッと腰を落として、上半身を捻りつつ"ブロイエ・トロンベ"を持つ左腕を限界まで引いた。完全に刺突攻撃の構えだ。それでもルミナは構わず突進をやめず、雷撃弾の直撃を許した。

「八十八式！　閃鉾貫鎧！！」

瞬光っていう刺突技よりさらに速く、纏う雷撃も膨大な一撃。うわ、どうしよ。ルミナも冗談半分で言ってたけど、ヴィクトーリアもうちの隊に欲しくなっちゃった。対するルミナはなんとここで魔法を発動。時間的にフルじゃないけど、右拳に魔力を集束させた。

「ムート・フェアナイデン！」

ルミナの拳とヴィクトーリアの突き出した"ブロイエ・トロンベ"が真っ向から激突。拮抗は僅か。ルミナの拳は"ブロイエ・トロンベ"の頭部分を粉砕して、その衝撃でヴィクトーリアの左手から柄が吹っ飛んだ。

「あぐっ・・・！」

「お嬢様！！」

さすがのヴィクトーリアも、武器が無ければ拳闘騎士最強のルミナには何も出来ない。時間もそうないし、このままリタイアかもって思ったけど、ヴィクトーリアの目はまだ死んでなかった。

「一式・纏雷！」

籠手と脚甲と胴鎧に電撃を付加したヴィクトーリアが構えを取って、ルミナも「戦斧のない雷帝など・・・」って若干鼻で笑いながら構えを取った。そして同時に駆け出して・・・

「二式・雷殴！」

「ゲーゲン・・・」

ヴィクトーリアの繰り出した左拳を、ルミナは右足を引いて体勢を半身にして躱すと、左拳が引き戻されるより早く左手首を掴んだ。そしてヴィクトーリアを受け流し、右膝裏に蹴りを1発打ち込む。膝カックンされたようにヴィクトーリアの腰がガクッと落ち、上半身が反っていたことでがら空きのあの子の胸へと「アングリフ・・・！」拳を振り下ろした。

「ぎゃう・・・！」

よほどの威力だったのか、背中から叩き付けられたヴィクトーリアが軽くバウンド。ルミナはダウン判定を受けるより早くヴィクトーリアの首裏を掴んで宙へと放り投げ・・・

「せいやっ！」

――ゾイレ・フェアクナルト――

あの子の背中に強烈な裏拳を打ち込んだ。悲鳴すら出せなかったヴィクトーリアは吹っ飛んで、柄しか残っていない"ブロイエ・トロンベ"の元に落下した。今の攻防でヴィクトーリアのライフは残り４００ポイントまで減少。

「あれ？　今ので削りきれなかった？　大した防御力だよ、ヴィク

トーリア」

「あ・・ぐ・・・くぅ・・・ぬぅ・・・！」

それでもヴィクトーリアは諦めることなく、柄を掴んで杖代わりにして立ち上がった。

「ぐぅ・・・うあああああああッ！」

――四式・瞬光――

柄全体に電撃を付加して、ヴィクトーリアは柄だけの刺突を繰り出した。ルミナはスッと右へと半歩分移動してそれを回避。

「九式・霞！」

本来は斧刃での斬撃技だけど単なる柄の打撃になった一撃を、避けたばかりのルミナの左腕へ振るった。振るわれる柄を裏拳で弾いたルミナだけど・・・

「八式・朧！」

ヴィクトーリアは弾き返された勢いをプラスした柄尻での薙ぎ払いを、ルミナの右腕へと打ち込もうとした。ルミナは「よっ」と跳ぶことで躱した。宙に居るルミナに対しヴィクトーリアは石突部分に電撃を付加しての刺突技「十七式・穿光！」を繰り出す。

「っと！」

両腕をクロスさせての防御でその一撃を受けたルミナが吹っ飛ぶけど、危なげもなくリングに着地。と同時に両足に魔力を付加。

「　シュトゥースヴェレン・ツ・フェアブライテン・・・！」

その場で跳んで、リングを思いっきり踏み付けたルミナを中心に広がるのは衝撃波。バキバキとリング全体に亀裂が入って、ヴィクトーリアが「きゃあ！」と悲鳴を上げてよろめいた。

「よーい・・・！」

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース――

「どんっ！」

ルミナの高速移動魔法からの・・・

「シュトゥース・・・ヴェレ！」

相手のあらゆる防御魔法を無視して直接体内に衝撃波を叩き込む掌底が、「ぐふっ・・・！」ヴィクトーリアの腹に打ち込まれた。それでライフは０となって、ヴィクトーリアの敗北が確定した。

Ｅｐｉｃａ２１約束～Ｏａｔｈ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

番長やヴィクターさんとの試合を終えたルミナさんは「あー、楽しかった♪」って満面の笑顔。

「大丈夫ですか、お嬢様？」

騎士甲冑を解除して私服に戻ったヴィクターさんもリングから降りてきて、執事のエドガーさんが駆け寄った。ヴィクターさんは「ええ、平気よ」って答えた後、ルミナさんに向き直った。

「お手合わせありがとうございました」

「あ、オ、オレも！　ありがとうございました！」

ヴィクターさんが試合をしてくれたことに感謝を述べると、番長も勢いよく一礼。ルミナさんは「こちらこそ、楽しい時間をありがとう！」って頭を下げた。

「んー。こっからはどうしようか。使用時間はまだもうちょっとあるし・・・」

「ヴィクトーリア達のリングの使用時間なんて始まったばかりだろう？」

シャルさんとルシルさんがそれぞれ時間を確認。わたし達は半分の時間は消費しちゃったけど、ヴィクターさん達は１０分くらい前に入ってきたばかりだ。

「時間いっぱいまで利用しなければならない、という規約はありませんので、皆さんと同じタイミングで出ますわ」

「悪ぃな、お嬢。金払ってもらったのに、結局あんま使わなかったぜ」

「ルミナさんとの試合でお釣りが出ますわ」

ヴィクターさんと番長の話もついたみたいだし、残りの時間をどう過ごそうかって話になって、番長が「もし、なんスけど・・・」って前置き。

「もしルシルさんが参加するなら、どう戦術を組み立てるっスかね・・・？　シャルさんやトリシュさんもっスけど・・・」

番長の言葉にシャルさん達が顔を見合わせて、シャルさんが「なんならわたし達大人組で試合してみる？」って笑った。だから番長も、それにヴィクターさんも「本当ですか！？」って期待したし、わたし達子ども組も「おお！」って興奮した。シャルさんのお家でするシャルさん達の模擬戦って、危ないから見学はダメって言われちゃってて観たことがない。

「馬鹿を言え。護衛中にいっぺんに2人も抜けられるか」

「う～ん、じゃあヴィクトーリアとハリーを仮想敵にして、どういう戦術を執るか体験してみれば？」

「「え・・・？」」

「実際に試合をするんじゃなくて、シミュレーションみたいな？それなら護衛の数も減らないしさ♪」

シャルさんの提案にルシルさんは少し考えた後、「君たちはそれでも良いかい？」って尋ねると、番長は「はいっ！」って力強く頷いて、ヴィクターさんも「ぜひ！」って一礼。というわけで、ルシルさんとヴィクターさんと番長がリングに上がって、改めて防護服に変身。

「では、まずは俺がインターミドルに出場し、君たちのように高位選手とぶつかってしまった場合な」

――闇よ誘え、汝の宵手（カムエル）――

「「っ！？」」

ヴィクターさんと番長ふたりの影から薄っぺらくて長い腕が生えてきて、2人を拘束した。

――輝き流れる閃星（サビタル）――

続けて２人の周囲に１００発近い魔力スフィアがドーム状に展開されて・・・

――舞(コード)い振るは、汝の獄火(サラヒエル)――

さらに炎で構築された魔力槍が何十本と穂先を２人に向けると・・・

――轟(コード)き響け、汝の雷光(バラキエル)――

さらにさらにドーム状に放電してるベルカ魔法陣が１２枚と展開された。子供組だけじゃなくて実際に仮想敵をしてるヴィクターさんと番長も息を呑んだ。

「まず相手を拘束し、次に魔力弾と魔力槍の一斉掃射で防御を削りきり、最後に砲撃の持続放射でライフを一気に消し飛ばす。基本的に相手に何もさせずに綺麗サッパリ吹っ飛ばすのが、俺の戦術だ」

「これは・・・さすがに耐えらんねぇな・・・」

「私もですわ。魔法陣からの遠隔砲撃１２発、それが途切れることなく持続的に放射を続けられれば、さすがの雷帝の甲冑も耐え切れませんわ」

ルシルさんが指をパチンと全ての魔法が解除されて、ヴィクターさんと番長も解放された。それからヴィクターさんと番長は、ルシル

さんとシャルさんとトリシュさんが交代で試合形式じゃなく、こう攻めたらどうするか、とか、こう攻められたらどうするかっていう風にシミュレーションを行った。

「いやぁ、すっげぇ貴重な体験が出来たぜ！」

「良かったっスね、リーダー！」

「まさかあたしらまで護身術を教わることになるなんて思わなかったっスけど・・・」

「でもかなり為になったぞ。痴漢程度なら一撃で沈められそうだ」

「防御魔法の穿った使い方なども、実体験したのでとても有意義な時間でしたわね」

すっごく満足げなヴィクターさんや番長たちと一緒に、わたし達もリングを後にする。途中、わたし達子供組は更衣室に寄って、トレーニングウェアから私服へと着替える。そんな中、「そういえばヴィヴィオ達って、ルシルさんから何を貰ってたの？」ってコロナが聞いてきた。トリシュさんとのシミュレーションの最中、ルシルさんがわたしとフォルセティとイクスとアインハルトさんに・・・

「あ、うん。えっと、プロミスリング？っていうのを貰ったよ」

プロミスリングをプレゼントしてくれた。わたしの親指にはめられた紐で出来たリングを見る。アインハルトさんは左手の人差し指、

フォルセティは左手の中指、イクスは右手の人差し指にはめてる。
「発信機の役割があるみたいです」
「万が一、私やヴィヴィオさん、イクスさん、フォルセティさんが拉致されたとして・・・」
「私のリングがヴィヴィオ達のリングの座標を拾って・・・」
「僕たちがどこに拉致されたとしても、リヴィアが即座に迎え来てくれる手筈を、お父さんが整えてくれたんだ」
「私がカルナージに戻っても判るみたいだし、ヴィヴィオ達は安心して拉致られて良いよ？」
「一応お願いしますって言っておくよ・・・」
拉致されるより早く、ルシルさん達がきっと最後の大隊をどうにかしてくれると思うし、リヴィもすぐに迎えに来てくれるって言うし、だから不安はないよ。
「ヴィヴィオさんが最後の大隊に怯えないで良い日が、早く戻ってきてもらいたいですね」
「アインハルトさんも、フォルセティにイクスも・・・。みんなが安心して過ごせる日々が戻ってきますよ」

着替えを終えたわたし達は「お待たせしました～！」ってシャルさん達と合流。エントランスホールの一角にあるカフェテリアで少し休憩をすることになった。シャルさん達大人組の奢りということで、ちょっと遠慮しつつも好きな物を注文。ちなみにわたしは、疲れきったこの体にパフェというご褒美を与える事にしました♪

「にしても、お前ら羨まし過ぎるぜ」

ステーキを頬張りながら番長がそんな事を言ってきたから、わたし達は「？？？」って小首を傾げて見せた。

「いやさ。何の誇張も無く、ガチで次元世界最強クラスのすげぇ人たちと試合して鍛えてんだろ？　いろんなアドバイスも貰ってるんだろうし。チビ達、すげぇ幸せな立場に居るんだぜ？」

羨ましいってそういう意味だったんだ。でもシャルさんが「今日が特別なだけよ」って返した。そう、ルミナさんとの試合は本当に今日だけの特別なものだった。ルシルさんも「普段は仕事で忙しいからな」って続いた。

「今回はヴィヴィオ達から頼まれた事で、彼女たちが相手にと選んだルミナが試合することになっただけです」

「そ。今日、私たちの騎士隊は休暇だったこともあるから、こうして付いて来れたの。けど明日からまた仕事ってこともあるし、最後の大隊を潰したらそれこそ、シャルやルシルは別として、私とトリシュとの接点は限りなく少なくなるからね」

「ということは、オレやお嬢がルミナさんと闘えたのも・・・」

「奇跡のような幸運だったわけですわね」

本当にいろんな積み重ねがあっての現在(いま)があるってことが判って、わたし達は笑い合った。それから食事を続けているとノーヴェが「あの、お2人に相談があるのですが」って、ヴィクターさんと番長に話を切り出した。

「ヴィヴィオ達の監督兼コーチとして、あたしは日々この子たちを鍛えているんですが。身体の鍛錬は問題は無いんですけど、アインハルトの覇王流については変に口を出してスタイルを崩してしまうようなことは出来ないんです。そこで、公式試合の経験者とのスパーリングをたくさん経験させようと考えたのです。で、お2人の知り合いをまず当たらせてもらえないか、と」

「ノーヴェさん、敬語は結構ですわ」

「オレも。オレの方が年下だろうし。・・・で、その相談っていうことなら、そういう外試合的なやつが好きな連中に心当たりがあるんで、連絡先を教えておくっスよ」

「私の知り合いにも、そういった異種格闘のスパーリングを好む者を知っていますわ。こちらが連絡先ですわ」

「ありがとうござ――ありがとう、恩に着るよ！」

「ヴィクターさん、番長さん、ありがとうございます！」

ノーヴェとアインハルトさんが頭を下げてお礼を述べたけど、番長は「今回の授業の料金っつうことで♪」って笑って、ヴィクターさんも「そういうことですわ」って微笑んで見せた。ノーヴェとの連絡先の交換を終えたヴィクターさんが「そういえば・・・」ってアインハルトさんを見た。

「アインハルト。あなたは、覇王流が最強であることを世界に示したい、ということでしたわね。・・・ではジーク、ジークリンデ・エレミアとも拳を交えるつもりだったのでしょ？」

ジークリンデ・エレミア選手。出場は過去3回。そのうち1回で世界代表戦を勝ち抜いて、正真正銘、10代女子最強の地位を手にした、わたし達みんなの目標の1人だ。今年の大会は、どういうわけか途中で欠場しちゃって、別の選手が世界最強の座に就いた。

「はい、一応ですが。チームナカジマの皆さんとの目標ですので」

10年計画で世界最強を目指そうって目標を掲げてるわたし達チームナカジマ。もちろんメンバーの一員であるアインハルトさんも、チームナカジマのチームメイトとして、そしてもう1つの目的の覇王流の威を示すために頑張ってる。

「？・・・いえ、それもそうでしょうけど、あなた・・・というか、覇王イングヴァルトとしてエレミアとの関係というか・・・」

「あの、それは一体どういう・・・？」

アインハルトさんとヴィクターさんは揃って小首を傾げる。ヴィクターさんは、アインハルトさんとジークリンデ選手との間に何かしらの関係がある、みたいな感じで話してたけど・・・。

「あなた、覇王流だけでなく覇王イングヴァルトの記憶も承継していると伺ったのだけれど・・・」

「はい」

「なら、エレミアの事も憶えているのではないの？」

みんなの視線がアインハルトさんに向かって、アインハルトさんは「すみません。全てを思い出しているわけではなくて・・・」って申し訳なさそうに目を伏せた。覇王の記憶は少しずつ、状況によって浮かび上がってくるみたいで、アインハルトさんの言うように全ての記憶を見られるわけじゃないみたい。

「そうでしたの。・・・判りましたわ。なら憶えておきなさい。鉄腕ジークリンデ、黒のエレミアという名を」

「はい、判りました」

それから談笑しながら食事を終えて、「ごちそうさまでした！」ってシャルさん達にお礼を言った後、エントランスから外へと出る。

わたし達はルーツィエさんの運転するリムジンが来るのを待って、ヴィクターさんと番長たちはエドガーさんが車を取りに行ってるのを待つ。

「ではヴィヴィ、アインハルト、リオ、コロナ、ルー、リヴィ、来年のインターミドルであなた達と槍を交えることを楽しみにしていますわ」

「ああ。だからオレ達と当たる前に負けんじゃねぇぞ。これ約束だからな」

番長が突き出した右拳に、わたし達も拳を出してコツンと打ち合わせた。番長やヴィクターさんと闘えるまでのレベルアップをして、必ずリングの上で会うんだっていう約束をした。とそこにルーツィエさんの運転するリムジンがエントランス前に横付けされた。

「ヴィクターさん、番長、今日はありがとうございま――」

お別れの前に改めてお礼を言おうとした時、ＰｉＰｉＰｉ♪って通信が入ったことを知らせるコール音が鳴った。受信者はシャルさんのようで、「ほいほい、こちらシャル」ってモニターを展開して通信を繋げた。

『あ、イリス。本部よりスクランブル要請が入った。北部レムリア地区とアーグルトン地区に仮面持ちが４人ずつ出現。私とセレスとアンジェは先行して向かうけど、そっちはどうする？』

「う～ん・・・」

通信の相手はクラリスさんだった。シャルさん達はわたし達の護衛として付き合ってもらってるから、こういう緊急時にはわたしは足を引っ張る存在になっちゃうわけで。迷惑かけちゃってるな・・・って落ち込んでると、「ふわっ？　ルシルさん・・・？」がわたしの頭を優しく撫でた。

「ヴィヴィオが辛い(そんな)顔をする必要は無いよ。悪いのは君ではなく最後の大隊なのだから」

「ルシルさん・・・！」

「そうだよ、ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオは何もしてないもん！」

「はい。その通りです」

「だから気にしちゃダメだよ」

「大丈夫ですよ、ヴィヴィオ！　シャル達が必ず、最後の大隊を捕まえてくれます！」

「コロナ、リオ、アインハルトさん・・・フォルセティ、イクス。うん、ありがとう！」

わたしは本当に幸せ者だって、いつも思ってることを改めて思う。目を閉じて胸のうちにある温かな思いを感じていたところで・・・

――トランスファーゲート――

「おっと。妙なタイミングで拉致してきたわね～」

シャルさんがそう言ったから慌てて目を開けると、わたしの腕を掴もうとしている腕が空間の歪みから生えてきていて、ルシルさんがその何者かの腕を掴んでいた。目をパチクリしていると、「ヴィヴィオ、こっち！」ってアイリがわたしを抱きしめた。

『何かあった？』

「こっちにも仮面持ちが出た。完全にヴィヴィオ狙い」

『・・・判った。こっちの件は他の隊も出るみたいだし、気にしないでそっちに来た連中を潰しておいて』

「ありがと、クラリス」

「こそこそと卑怯者め！」

ルシルさんがグイッと腕を引っ張って、空間の歪みから男性の仮面持ちを引っ張り出して地面に叩き伏せた。その仮面持ちに「普通さ、煙幕焚いてとか、護衛が減ってからとかじゃない？」って言いながら、シャルさんは起動した"キルシュブリューテ"の刃先を向けた。

「でもま、煙幕が焚かれてもわたし達の視界が完全に無力化される頃には、わたし達はヴィヴィオの防衛を完全にするし、護衛が減ってもその分コレまで以上に警戒するから、どっちにしろヴィヴィオの拉致なんて不可能だろうけどね」

「・・・」

――トランスファーゲート――

「なんだテメェら！」

「最後の大隊ですわね・・・！　直接お目に掛かるのは初めてですわ！」

わたし達の周りに仮面持ちが１０人以上と現れた。この人たちみんな、わたしやイクス達を狙ってるっていう事実に身の毛がよだつ。仮面持ちの人たちが一斉にデバイスをわたし達に向けた瞬間・・・

――舞い降るは、汝の煌閃（コード　マカティエル）――

「ジャッジメント」

たった1人だけ、女性の仮面持ち以外の仮面持ちが高速で飛来した魔力槍を避けられずに貫かれた。さらに「カムエル！」って、仮面持ちの人たちの影を利用して作った影の腕で全身をグルグル巻きにした。

「今の俺たちは局員時代より優しくはないぞ」

「そういうこと♪」

「あなた達、全員を逮捕します」

「そこの角突き仮面も、抵抗せずに投降するように」

確かハンニャっていうデザインの仮面を付けた女性仮面持ちは、シャルさん達ＳＳランクの実力者と対峙をしても慌てることなく、ジッとわたしを仮面越しから見つめてきていて、そして自分を拘束してる影の腕をバキバキって引き千切って見せた。

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ⇒イリス†††

十数人の仮面持ちを一気に捕まえられたけど、般若の仮面を付けた女仮面持ちは、ルシルの奇襲の魔力槍を余裕で躱し、影の触手カムエルも力ずくで引き千切るなんて荒業を見せ付けてきた。ルシルが「おいおい、凄まじいな」って驚きを見せた。

「ルシル、ルミナ、トリシュは引き続きヴィヴィオ達の護衛に専念。こいつはわたしが倒すよ。ルシル、結界をお願い。うんと強力な奴」

「判った」

「ご武運を、イリス」

「シャル。彼女はまさか・・・」

「うん、たぶんね。じゃ、後は任せてね♪」

ヴィヴィオ達にも笑顔を向けながら手を振って、ルシルの展開した結界魔法によってわたしと仮面持ち以外の人間がパッと居なくなった。

「さてと。・・・あなた、ミヤビだよね？　あなたから連絡が途絶えたからまさかとは思っていたけど・・・。やっぱりあなたを最後の大隊へ潜入させるなんて真似させるべきじゃなかったね・・・」

・―・―・回想なのだ・―・―・

「へ？　最後の大隊からスカウトされた？」

『はい。先日のトレインジャック事件の際、仮面持ちの1人から入隊しないか、と・・・』

かつて同じ隊で頑張っていた仲間、ミヤビからそんな連絡が入った。管理局の抱える多くの問題を、正義感が強いミヤビに突き付けてその思いを砕こうとしたようだけど・・・。

「ミヤビはどうしたいの？」

『もちろん考えるに値しないものですので断ります。ただ・・・』

「ただ？」

『シャル隊長。最後の大隊の尻尾を掴む方法があるのですが・・・』

ミヤビが何を言うのかすぐに察せたわたしは「却下」って、その提案を受け入れないことを先制して伝える。ミヤビは『私が何を言うのかがお判りなのですか？』ってちょっと不満げ。

「誘いに乗った振りして大隊に潜入して、情報を集めて局に流す・・・みたいなことを考えてるんでしょ？」

『あぅ・・・。はい、仰るとおりです・・・』

「最後の大隊に潜入捜査するなんてさすがに危険が過ぎる」

多くの魔導師や騎士を集める人材掌握のすごさから、心理的な戦術が巧いと思うんだよね。そこに純真なミヤビが行っちゃうと、信じたいけど洗脳されてしまう気がする。魔法とか機械的な技術による洗脳なら、まだ解除する手段はある。だけど、ミヤビの心がそっちに傾倒してしまうような話術による洗脳になってしまうと、もう剣を交えたうえで叩き潰し、時間を掛けて解かないといけなくなる。

「ミヤビをそんな形で失いたくないの」

『シャル隊長・・・。ありがとうございます、私を心配していただいて・・・。でもやらせてください』

「ミヤビ・・・」

『シャル隊長の、局員としての残り時間が少ないのは知っていますよ。最後の大隊との戦いが長引くと、それだけ特騎隊としての活動期間が短くなるんです。私、そんなの嫌です。もっとシャル隊長、ルシル副隊長、それに先輩方と同じ現場を経験したいです』

「わたしも気持ちは一緒だけどね・・・」

ミヤビの言うように正直な話、潜入捜査でもやらないと大隊の殲滅には時間が掛かりそうとは考えてたけどさ。でもミヤビをそんな危険な任務に就かせて良いのか・・・。

「ご家族には・・・？」

『伝えるつもりはありません。絶対に止められますから。後で怒られることを覚悟して望む次第です』

今のミヤビは説得が通じるような半端な覚悟じゃないことを感じたわたしは、「ねえ、ちょっと逢えない？」って聞いてみると、「はい。今日は非番なので大丈夫です」とのことだったから、わたしは事情を話したルシルと一緒にミヤビと逢う約束をした、中央区画の喫茶店へ向かった。

「久しぶり、ミヤビ！」

「元気そうで何よりだ」

先に喫茶店に着いてたミヤビは、店の奥のテーブル席を取ってくれていた。ミヤビの元へと行ってそう挨拶したら、「あの、どちら様でしょう？」って彼女にそう言われて、わたしとルシルが今、カツラと帽子で変装していることを思い出した。

『大隊にスカウトされた以上、ミヤビが監視されてる可能性もあるし。ラフな会話をしつつ、思念通話で本題ね』

「『あ、なるほどです。判りました。えっと、じゃあ・・・』何かお食べにな～・・・るかい？」

ミヤビの変な口調に笑いそうになったけど、わたしは「とりあえずミルクティー」って決めて、ルシルは「チーズハンバーグセット」ってガッツリ系。

「お昼はまだな～・・・んかい？」

「ああ、食べる前に引っ張って来られたからな」

「ごめんごめん。だから今日は奢るから♪　あ、ミヤビの分も奢るから好きなの頼んでね～」

「あの、ありがとうございます、ごちそうになり・・・なるよ」

まだ昼食を終えてなかったルシルの"マクティーラ"に乗ってやっ

て来たからね～。その辺はおごりで許してもらう、ってことにしてもらおう。わたしのミルクティー、ルシルのハンバーグセット、ミヤビのパフェを、店員さんに注文してから『じゃあ本題』を切り出す。

『念のために魔法や機械的による洗脳を施されないよう、ルシルの魔術でミヤビに精神にプロテクトを掛けようと思う』

『魔術。魔法より上位の魔導技術でしたね。はい、よろしくお願いします！』

・―・―・終わりだよ・―・―・

「ルシルがガチで施したプロテクトだからね。エグリゴリの中で洗脳できる奴はもう居ないって話だし、話術による洗脳にも耐えるって言ってたもんね・・・」

"キルシュブリューテ"の柄を握り直して、騎士服へと変身する。

「もしあなたが大隊側に付いた場合は、洗脳されていようが偽者だろうが全力で潰すって約束だから・・・」

その約束に従って、わたしがあなたを止める。

「イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト、参ります」

Ｅｐｉｃａ２２鬼神～ＭＩＹＡＢＩ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「さ、掛かっておいで。あ、先に言っておくけどこの結界からはどんな手段を用いても脱出できないから、逃げようなんて思わないこと」

たとえわたしが負けても結界は解除されない。何せこの結界の発動者はルシルだ、わたしから連絡しない限りはミヤビは逃げられない。ミヤビと思しき般若の仮面持ちは周囲を窺った後、観念したのか構えを取った。

「何も言ってくれないんだ。それとも喋れないようにされてるの？　でも喋れるのなら降参するようにね。あなた強いし、手加減は出来ないよ・・・！」

ＶＳ・―・―・―・―・―・―・―・
其は真偽の判らぬ力の体現者ミヤビ
・―・―・―・―・―・―・ＶＳ

――閃駆――

地面を蹴って一気に仮面持ちへと突っ込みつつ、"キルシュブリューテ"の刀身に障壁・結界破壊効果を有する魔力を付加させる「光牙裂境刃！」を発動。仮面持ちは両拳を胸の前で打ち付けた。

――鉄化鬼腕――

「はぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

"キルシュブリューテ"を右薙ぎに振るう。閃駆で刀身の攻撃範囲に仮面持ちを入れたから、ここで後退したとして余裕で刃は届く。回避するにはしゃがみ込むかジャンプするかの二択。仮面持ちは曲げた左腕を掲げて盾として、わたしの斬撃を受けるとガキィーン！と甲高い音を出た。

「（防御魔法でも防護服でもない、素肌自体が硬化してる・・・！）やっぱりミヤビじゃん！」

鬼の身体資質を使う際は、鬼の角を使う必要がある。ミヤビが今付けてる般若の仮面の角は、わたしの知ってる般若の角より二回り以上大きいから、ミヤビの角が隠れてるみたいね。

「せいやっ！」

「・・・っ！」

――鋼強鉄化――

弾かれた勢いを殺すことなくその場で旋回して、今度は左薙ぎをミヤビの右上腕へと打ち付けたけど、今度は防御することなく棒立ちのまま受けて見せてきた。わたしの斬撃なんて防御する必要すらな

い、って言われてるような気がして、ちょこっとイラッってしてしまう。

（ホントにミヤビ？　なんか嫌みったらしい真似してるんだけど・・・）

繰り出される反撃の右ストレートを、首を深く横に傾げることで躱して、弾かれた"キルシュブリューテ"に電撃を付加して右手で逆手持ち。そしてミヤビの脇腹目掛け、麻痺効果を重点的に強化した「雷牙月閃刃！」を左斬り上げで振るった。刃はミヤビの脇から肩までを一閃して、あの子を吹っ飛ばした。

「物理攻撃が通用しない以上、魔力攻撃で攻めさせてもらうよ！」

――光牙十紋刃――

魔力付加してた"キルシュブリューテ"を×十字に振るって、×十字の魔力斬撃を放つ。ミヤビには麻痺が入っていないみたい。軽やかにスライディングすることで、×の下にある三角の空間に滑り込んで回避した。わざわざ次の行動に移る手間が掛かる方法を選んだのか、ちょっと気になる。

「ま、今はどうでも良いよね！」

――真紅の両翼――

両足を魔力で強化しての超ジャンプ、背中から真紅に輝く魔力の翼

を展開。上空から立ち上がり途中のミヤビへと剣状魔力砲撃の「光牙烈閃刃！」を放った。ミヤビは強烈な脚力を以って地を蹴り、すぐにわたしの砲撃の効果範囲から離脱した。

「カートリッジロード！」

刀身の峰側の付け根にあるコッキングカバーが上にスライド。装弾数５発の回転式シリンダーがガコンと回った後にカバーが閉じる。カートリッジに込められた魔力が、わたしの魔力出力を爆発的に強化してくれる。

「はあああああああッ！」

――光牙烈閃連刃――

「・・・っ！」

連続で放った砲撃は地面にクレーターを作りながら着弾し続け、ミヤビは魔力爆発や飛来する破片の中を駆けて回避し続ける。ミヤビに中遠距離攻撃が無いのが幸いよね。騎士なのに、あなたが憧れてくれてる隊長なのに、こんな汚い戦い方をしてごめんね。

――風鬼降臨――

（でも気を付けることはある。ルミナの高速移動魔法・　ゲシュヴィント・フォーアシュトゥースを教わって習得した、鉄兵風馳はかなり厄介なのよね）

――鉄兵風馳――

「っ・・・・！」

なんて考えてたら、ミヤビが早速使ってきた。その姿を一瞬見失ってしまって、すぐに１５ｍほど上空に居るわたしの元へと突っ込んできた。すぐに「烈閃刃！」を放つけど、魔法陣を足場として使って空中で方向転換するっていう、陸戦ベルカ騎士がよく使う手段をミヤビも用いて、わたしの砲撃を回避した。

――法陣結界――

わたしが以前教えた、複数の魔法陣を空中に展開することで、飛行魔法が使えなくても空中での高機動戦が行える手段・法陣結界を発動した。わたしの最大展開数３２枚よりかは少ない１２枚だけど、今のミヤビの速度を捉えきれないわたしには十分な数だ。

（ルミナ直伝だからな～。直線での加速力は、ルシルの空戦形態以上だから・・・）

――鉄兵風馳――

でも法陣結界には欠点もあるって教えたよね、ミヤビ。わたしに突っ込んできたミヤビが繰り出すのは「風牙裂千　空帝　剛嵐拳！」っていう、ドリル状に渦巻かせてる風を纏った拳打。名前から判るとおり、ルシルの複製近接魔法を基にしたものだ。そして対砲撃技

でもある。あのドリル状の風が砲撃の魔力を拡散させちゃうのだ。ホント厄介な魔法を教えたよねルシル。

「っの・・・・！」

両翼を羽ばたかせて横に移動することでミヤビの一撃を躱しきる。頭上へと通り過ぎてくミヤビがさらなる魔法陣の足場を展開するより早く、両翼を羽ばたかせて急上昇。

「おおおおおおッ！」

――風牙裂千　空帝　剛嵐脚――

「はあああああッ！」

――雷牙翔裂刃――

上昇と落下の狭間の一瞬の静止の中、ミヤビは右脚に暴風を巻き付けての蹴りを繰り出し、わたしは電撃を付加した"キルシュブリュ～テ"を振り下ろして、熊手のような魔力刃を放つ。脚力はすごいけど空中に居たことで加速力も攻撃力もないから、ミヤビは「ぎゃぅ・・・・！」わたしの攻撃に簡単に飲み込まれて、力なく落下を始める。

（助けるか？　でももし、手を出して反撃を食らったら・・・）

さすがのわたしもミヤビの一撃を直撃で食らいたくない。でもせめ

て足場くらいは、なんて考えてるところで、ミヤビは宙で体勢を立て直して足元に魔法陣を展開して着地した。ミヤビがこっちを見上げた直後、般若の仮面がガシャンと割れて、目出し帽と翠に輝く角2本を確認した。

「ミヤビ・・・・！」

「・・・すみません、シャル隊長。私、やっぱり管理局が許せないです。犯罪者が居るから犠牲者が生まれ、遺族が生まれる。それをどうにかするために人手不足という理由で優秀な子を戦場に送る。そんな管理局が許せません」

「なるほど。情に訴えた洗脳ってわけ・・・？」

角を見る限りミヤビが偽者とは思えない。ルシルの予防で魔法・魔術・機械技術による洗脳は防ぐことになってる。恐れてた事がやっぱり起きたってわけだ。ミヤビの純真を利用しやがったのね。

「わたし達と一緒に特騎隊を再開するっていう気持ちも、もう無いわけだ・・・・」

「シャル隊長たちと共に戦いたい思いは今も変わりません。だから・・・最後の大隊に入りましょう、皆さんで。そうしたらずっと一緒です♪」

目出し帽を引き裂くように脱ぎ捨てて素顔を晒したミヤビの表情は、苦悶を浮かべるものだった。演技には見えないし、どうやら本気で

最後の大隊に下り、なおかつわたし達をスカウトしてる。わたしは大きく溜息を吐いて、「ねぇ、ミヤビ」ってあの子の目を見つめる。

「わたしは、管理局員である前に騎士なの。犯罪者には屈せない」

「どうしてもですか？」

「どうしても、よ」

マジで悲しそうな目をするミヤビに心が痛むけど、ここは心を鬼にして全力で迎え撃つのみ。ミヤビも「でしたら倒した上で連れて行きます」ってやる気満々だしね。

「そのセリフ、そのまま返すよ！」

――連刃・天舞八閃――

空いてる左手の指の間に４本の魔力刀を生成。ミヤビが展開したままの魔法陣１２枚のうち４枚に投擲して、突き刺さったところで「滅！」のキーワードを発して一斉に爆破させる。魔法陣も粉々に砕けて、ミヤビの足場を減らすことに成功。

「くぅ・・・！」

「ほら、次々と魔法陣を展開しないと、落っこちるよ！」

もう一度左手の指に挟むように４本の魔力刀を生成して、また別の

魔法陣へと投擲。そして「滅！」と爆破して魔法陣を砕く中、右手に持つ"キルシュブリューテ"の刀身に魔力を付加。ミヤビ自身へと「光牙烈閃刃！」を放つ。

「私だって・・・！」

――鉄兵風馳――

「負けるわけにはいかないんです！」

横っ飛びすることで砲撃を躱したミヤビは、進行方向に魔法陣を展開。ソレを蹴ってわたしへと突っ込んで来た。だから近接戦に応じるほどわたしは優しくないってば。両翼を羽ばたかせてその場から離れつつ・・・

「風牙烈風刃！」

風圧の壁をミヤビへと放つ。体の側面への一撃だったこともあってミヤビは「ぅあ！」と吹っ飛ばされて、さっきまでわたし達の居たトレーニング施設の屋根に突っ込んだ。

――連刃・天舞八閃――

もう一度左手に魔力刀を1本だけ生成。八閃の名前を関してる魔法だけど、最大生成が8本っていうだけで1本だけの生成も出来るのだ。

――炎鬼降臨――

「うおおおおおおッ！」

――赤化旋風――

施設ごと飲み込むほどの強力な火炎旋風が巻き起こって、その熱波がわたしにも届いたことで「あっつ！」思わず距離を取る。火炎旋風が収まり、空に火の粉が舞う中で赤色の角と翠色の角を１本ずつ生やしたミヤビが姿を見せた。肌の色も熱を帯びてる所為で濃いピンク色をしてる。

「うへぇ。最も火力のある炎鬼と最も速い風鬼のダブルじゃん・・・」

器用なことに、ミヤビはどっちか片方の角を別の変換資質を有するものに出来る。今まさにやってる事がそうだ。片方を炎熱、片方を風、みたいにね。わたしが仮想的として戦う時、苦手とする組み合わせの１つだ。一番嫌いなのは電気変換資質の雷鬼と風鬼。まぁこれが速いのなんの。速いし痺れるしさ、戦いにくいんだよね。

「ば～くね～～～つ！！」

――天災烈火――

直系２０ｍほどのベルカ魔法陣を頭上に展開したミヤビは、放射面から噴火かと思えるほどの火炎砲を発射した。炎鬼と雷鬼は遠距離

と広域の攻撃を扱える形態で、特に炎鬼は恐ろしい火力で広域攻撃してくるから怖い。

「降り注げ！」

空に昇って行った火炎砲が爆発を起こした。雨のように大人サイズの火炎弾が降り注いで、雪のように火の粉が舞い落ちてくる。空戦殺しの対空魔法だ。わたしは羽ばたきに強弱を付けて火炎弾と火の粉を躱しつつ、ミヤビの動きを注視する。

「業火・・・！」

グッと背後に引いた両腕から炎が噴き上がらせたミヤビは、「拳衝！」と両腕を突き出して、拳の形をした砲撃を発射。砲撃が迫る中、わたしは回避じゃなくて、前方へ向けて魔力波を津波の如く放つ「光牙聖覇刃！」を使って迎撃。ミヤビの砲撃や降り続く火炎弾や火の粉を蹴散らす。火炎弾や火の粉が無かったら回避を選ぶけど、こうも空が狭いと下手に動いたら酷い目に遭うのは確実だ。

「おわっ・・・！？」

ガクッと体勢を崩してしまう。その理由は「ミヤビ・・・！」がわたしの足元に移動していて、両足首を掴んでいたから。

「やっと捕まえました。ふんっ！」

「きゃあああああああッ！」

ジャイアントスイングみたく振り回された後にポイっと放り投げられて、わたしは近くにそびえ建つビルに叩き付けられて、外壁をぶち抜いて中にまで吹っ飛ばされた。でも外壁に叩き付けられる前に両翼で全身を覆ったおかげで「あいたた」ってお尻を撫でる程度のダメージで済んだ。

「・・・って、ここ男子トイレじゃん！」

結界が展開中ということもあって男の人が居なかったから良かったものの、もし利用者が居たらわたし、絶対に大声で叫んで隙だらけになってた。

――業火拳衝――

「っと・・・！」

わたしが開けた外壁の穴の向こうから火炎砲が放たれてきた。室内での爆発なんて堪ったもんじゃない。仕方ない。陸戦だと邪魔になる両翼を解除して・・・

「剣神モード、スターテン」

わたしの固有スキル、絶対切断アプゾルーテ・フェヒターを発動。さらに「絶刃・斬舞一閃・新式！」を発動。本来はシャルロッテ様がわたしの体の支配権を持ってないと発動できない絶刃だけど、わたし単独でも発動できるように頑張ったのだ。

「（それに、シャルロッテ様とはここ数年、お話が出来てない。居ることは居るみたいだけど・・・。眠ってるのかな・・・？）っのぉぉぉぉーーーーーッ！！」

とにかく、絶刃の一振りで火炎砲を真っ向から掻き消して、砲撃の後ろに付いて来てたミヤビと再び対峙。突っ込んで来るミヤビは両前腕に炎を付加していて、「紅蓮拳殴！」と炎熱付加された拳による打撃攻撃を繰り出してきた。

「くぅ・・・っ！」

"キルシュブリューテ"を振るって連続で打たれる火炎拳を弾いては、魔力付加した直接斬撃、「光牙月閃刃！」による反撃を行う。ルミナの弟子っていうわけで、決定打を与えようとしても的確に反応して防いでくるし、何より鬼の身体資質による肉体の硬質化っていうのが厄介。防護服無しで魔法にすら耐えられる頑強さを誇るから。

「紅蓮蹴波！」

「おっと！」

ミヤビは炎熱拳だけでなく炎熱付加された蹴りも加えてきた。"キルシュブリューテ"で両腕を弾いた直後ということもあって、あご狙いで振り上げられた蹴りを上半身を反らすことで回避・・・してすぐに「ぎゃう！？」お腹に突き蹴りを食らって吹っ飛んだ。トイ

レの内壁に叩き付けられるわ、お腹を蹴られるわで「げほっ、えほっ！」激しく咽る。

「煉牙灼星　爆帝　双焔掌！！」

炎というより最早光のようにも見える強烈な炎を付加した、ルシル直伝の両掌底攻撃を発動して迫り来るミヤビに、「ちょっと調子乗りすぎかな？」って笑みを向ける。

――光牙針縫刃――

刀身に魔力付加した"キルシュブリューテ"を床に突き刺し、複数の魔力刃を床より突き出させる。攻撃魔法じゃなくて拘束魔法に分類されているもので、ザフィーラの鋼の軛と同じ効果を持ってる。

「ぅあ・・・！？」

拘束刃はミヤビの両腕、両足、右脇腹、左肩と貫いた。虫の標本みたく宙で拘束されたミヤビは「ぅぅぅ・・・！」って足掻くけど、完全に拘束されてしまってることで抜け出せない。直接攻撃はこれで無力化したけど、放出系の魔法はまだ残されてる。ここで追撃をやめると酷い目に遭いそう。

「（だから・・・）ごめんね？」

――雷牙月閃刃――

「謝る必要はないです、シャル隊長」

観念したのかミヤビは目を伏せ、足掻くのをやめた。振り上げていた"キルシュブリューテ"を振り下ろし始めたと同時、「だって、まだ終わってませんから」という、ミヤビが漏らした言葉を聞き取った。翠と赤の角が無色透明のものへと変わってることから、ひょっとしたら・・・。

「ミヤビぃぃぃーーーーーッ！」

「鬼身城塞！」

あー、やっぱり。放電する"キルシュブリューテ"の刃面がミヤビの体に直撃はしたけど、キィン！と甲高い音を立てて弾き返されたし、雷牙の麻痺効果も通用してないっぽい。さすが最強の防御形態。ルシルの上級砲撃やルミナの全力パンチを無傷で防ぐトンデモ防御。

「ていっ！」

わたしの拘束刃を粉々に砕いて自由になったミヤビが着地するより早く、斬りつけた箇所から凍結を行って、最終的に全身を凍結封印する捕縛斬撃、「氷牙凍封刃！」を振るった。凍結封印の発動条件は相手を斬るってことで、今のミヤビのように「無駄ですよ？」白刃取りをされたら不発に終わってしまう。

「狭い場所での戦闘はシャル隊長、苦手でしたよね？　外に戻りましょう・・・か！」

"キルシュブリューテ"の刀身を掴み取ったミヤビがわたしをまたぶん回して、ポイッと放り投げた。しかも屋内に突っ込んだ際に開けた穴からじゃなくて、また壁に叩き付けて新しい穴を開けさせるっていう鬼畜っぷり。しかも両翼で庇うことも出来なかったから、「あぐぅ・・・！」全身で衝撃をもろに受けることに。

（外・・・！　両翼を展開しないと地面に叩き付けられる・・・）

――真紅の両翼――

宙に放り投げ出されたわたしは再び両翼を展開。と同時に、「はあああああッ！」突っ込んできたミヤビに、「風牙烈風刃！」と風圧の壁を叩き付ける一撃を放った。高速移動魔法を使ってない、突進力の弱いミヤビになら烈風刃でも十分効果がある。案の定ミヤビも「ひゃあ！」烈風刃に押し戻される形で、さっきまで居たビルの別の階へ突っ込んだ。

「絶刃・斬舞一閃・新式！」

その隙に左手の指の間に魔力刀を４本生成して、ミヤビの突っ込んだビルとは別に宙に投擲する。そして「滅！」と爆破して、付近の魔力濃度を高める。

「おおおおおおおッ！」

土煙の中からミヤビの雄叫びが聞こえる。完全防御形態・鬼身城塞

は確かに破格の防御力を有するけど、持続時間は3分。発動中は他の属性の角を展開できず、さらに中遠距離・広域攻撃などの広範囲魔法も使えないという欠点がある。制限いっぱいまで逃げ回りつつ、魔力濃度を高め、集束砲撃で一撃必倒だ。

――無常迅速――

さらにもう2回、魔力刀を爆破させていると、魔鬼モードでの高速移動歩法でビルから飛び上がってきたミヤビは、空中に戦場を作るように魔法陣を円形状に複数枚と展開してそこに降り立った。

「わたしが空を飛べる以上、こんな空中に戦舞台を作る意味は無いと思うんだけど？　それともわたしが、あなたに倣って陸戦に切り替えるなんて甘い考えでもした？」

カートリッジを3発ロードした上で"キルシュブリューテ"の刀身へと魔力を集束させ始める。

「いいえ、まさか。・・・シャル隊長、もう一度お願いします。最後の大隊に入ってください。ルシル副隊長たちへの説得も一緒にしていただきたいです」

ミヤビも両手両足に魔力を付加。わたしが断ったら一転攻勢に入るんだろうね。両翼を小さく羽ばたかせてミヤビの立つ戦舞台より距離を取り始めると、ミヤビも今にも駆け出しそうな姿勢を取った。

「さっきも言ったけど、そのスカウトは受けない。というか、あな

たがこっちに戻ってきなさい。最後の大隊は殺害という方法を選んだ。その時点で正義は無い。ま、悪で悪を討つって公言してるから今さらなんだけどね。あなたも人を殺す覚悟は出来てるって考えていいわけ？」

「・・・それは・・・」

「ちょっと待って。そんな覚悟も無いのに最後の大隊に入ったわけ？」

「ち、違います！　私だって犯罪者なら殺せ・・・ます」

「そんな弱々しい声の張りで、よくそんな戯言を言えたものね。悪い事は言わないから、そんならしくない真似はやめなさい」

「いいえ、やめません！　管理局の・・・ううん、違う。次元世界の子供たちの未来のために！」

戦舞台を蹴ってわたしの居る高度にまで跳んできたミヤビは、「光牙輝星　天帝　双煌掌！」と両掌底を繰り出してきたけど、「ごめん。届かないよ、それ」わたしは急速上昇することで、ミヤビの攻撃が届かない高度へと離脱。

（ミヤビが足場を展開しての追撃へ入る前に・・・！）

ミヤビが鬼身城塞を発動してからそろそろ3分。その防御形態を解除してる中での集束砲なら、ミヤビを確実に撃墜できる。ミヤビが足元に魔法陣を展開すると同時・・・

「極光牙・・・」

魔力を集束しきった"キルシュブリューテ"を振り下ろし・・・

「煌覇閃謳刃！」

特大の剣状集束砲を放った。至近距離での直撃にミヤビは回避も出来ずに集束砲に呑まれて、共に地面へと激突。魔力爆発に呑み込まれた。爆発が収まったのを確認して地上近くまで降下する。濛々と立ち込める砂煙の中、ミヤビが倒れてるのを視認した。

「大隊のセーラー服じゃなくて小袖袴っていう本来の防護服だったら・・・ね」

セーラー服がボロボロになって、素肌や下着を晒してるミヤビの元へと歩み寄った瞬間、「甘いですよ！」ってミヤビが足払いを掛けてきた。転倒する前に展開し続けたままの両翼を羽ばたかせて体勢を立て直す中、"キルシュブリューテ"の刀身を左手で掴まれて、さらに「せいやっ！」わたしの腹部に拳打を打ち込んできた。

「かはっ・・・！」

魔力付加がされていないのにこの威力。激しく咽て、膝を折りそうになるのを懸命に耐えつつ、「雷牙・・・！」刀身に電撃を付加する。僅かでも感電させてしまえば、反撃に移れるはずだ。

「今の私には通用しません」

「はぁはぁ・・・まさか・・・！」

「はい。鬼身城塞の発動時間、３分から６分まで延びたんです。まだ効果時間中ですよ」

ミヤビが右手でわたしの胸倉を掴んできて、そのままグイッと持ち上げられて背負い投げされたわたしは「ぐふっ！」背中から地面に叩き付けられた。仰向けで倒れるわたしに、ミヤビが四つん這いで覆い被さってきた。

「シャル隊長。私と一緒に・・・行きましょう？」

なんて言いながらミヤビがわたしの首に顔を埋めて、「ひゃん！？」首にキスしてきた。わたし、女の子も好きだけど、でもそれは性的な好きじゃないから「ちょっ、待っ、うえええ！？」激しくうろたえる。とそんな時・・・

「ちょっと。何してるの？」

「ルミナ・・・！？」「ルミナさん！？」

恐ろしく低い声でそう聞いたルミナがミヤビの首根っこを引っ掴んだ後、「退きな！」ってあの子を軽々持ち上げるとふんっとブン投げて、また別のビルのエントランスドアに突っ込ませた。

「来な、ミヤビ。ここからは師匠の私が相手をしてあげる」

そう言ってルミナはちょいちょいとミヤビに向けて手招きをした。

Ｅｐｉｃａ２３とある少女の覚悟～Ｄａｎｇｅｒｏｕｓ　Ｇａｍｂｌｉｎｇ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

シャルとミヤビと思しき女性仮面持ちを結界内に閉じ込めた後、教会騎士団の本部に応援を寄越してもらうように連絡。今回のヴィヴィオ拉致未遂で確保できた仮面持ちを移送してもらうためだ。ついでに周辺を警邏中の他の騎士隊に協力してもらい、周囲１ｋｍ圏内を封鎖してもらった。さらに魔法戦の練習が出来る屋外練習公園へと移動。

「巻き込んでしまってすまないな、ヴィクトーリア、ハリー達も。いろいろと面倒な事になるだろうから、先に帰ってもらって構わないよ」

「こんなところにまで付いて来てもらった後で申し訳ないけどさ」

「ここからは私たちの仕事ですから」

俺とルミナとトリシュで、ここまで付き合ってもらったことへの「ありがとう」感謝を述べ、シャルと仮面持ちを見送った後もなお襲い掛かってくる仮面持ちとの戦闘に巻き込まないように先に帰らせようとしたんだが・・・。

「いいえ。お手伝いさせてください。友人をこのまま放って帰るな

ど、雷帝ダールグリュンの子孫の名が泣きますわ」

「そういうことっス！　管理局員を目指す身としても逃げ帰るわけにはいかないんで！」

ヴィクトーリアとハリーが防護服に変身して、仮面持ちの迎撃にやる気を漲らせている。そんな彼女たちにルミナが「忘れてない？　これはルールありの試合じゃないよ？」と現実を突き付けた。インターミドルの試合に敗北はあれど敗死はない。

「これは本当の事件。運が悪ければ死ぬ可能性もある戦闘なの。あなた達の気概は買うけど、アスリートとガチの戦闘者を一緒にしない方が身のためだと思う」

「「っ・・・！」」

ルミナが殺気をヴィクトーリアとハリーに放つと、彼女たちは目に見えて脂汗を掻いて数歩と後退した。踏み止まれず逃げてしまったわけだが・・・。トリシュが「こら。ダメですよ」とルミナの肩に手を置いた。

「あなた達の実力は知ってはいるけれど、それでも民間人には変わりないの。だから今日のところは耐えてもらって、引いてくれると嬉しいのですが・・・」

「お嬢様。アルテルミナス様やトリシュタン様の仰る通りです」

ダールグリュン家の執事、エドガーからもそう言われたことでヴィクトーリアは「判りました。今日は本当にありがとうございました」と一礼した。ハリーもヴィクトーリアが折れたことで「っス・・・」と項垂れたのか一礼したのか判らないが頭を下げた。

「お嬢様とハリー様たちは、私が責任を持って送り届けます」

「ええ、よろしくお願いします」

そうしてヴィクトーリア達は、エドガーの運転する車に乗ってこの場を後にした。さて次は「コロナ達も、先に帰っていてもらおうか」と、ヴィヴィオの側にずっと付いていてくれているコロナとリオ、ルーテシアとリヴィアへと目をやる。

「え・・・？」

「えええ？」

「私たちダメなの～？」

コロナとリオとリヴィアは不満気だが、ルーテシアだけは「うん、判りました」と素直に受け入れてくれた。

「トリシュさんもさっき言ってたでしょ。どれだけ強くても私たちは民間人。それに本当に危ない事件に首を突っ込むには・・・私たちは子供過ぎる」

ルーテシアの言葉にリヴィアも「判った、帰る」と応じてくれた。子供組で最強のリヴィアが折れたとあってはコロナとリオも折れざるを得なくなり、ルーツィエの運転する車で一足先に帰ることになった。

「ヴィヴィオ、フォルセティ君、イクス、アインハルトさん」

「気を付けて帰ってきてね」

「うん、ありがとう」

「はい。必ず」

「ありがとうございます」

別れを惜しんでいるヴィヴィオ達を見守っているところで、結界内にバラ巻いて置いたサーチャー術式・イシュリエルから、シャルがピンチに陥っている映像が送られてきた。シャルとミヤビの相性はあまり良くないからな。

「ルミナ。シャルの旗色が悪い。援護に向かってくれないか？」

「イリスが？　判った、送って」

ルミナの肩に手を置いて、結界内への進入許可を与えてポンッと背中を押した。それでルミナの姿が消えた。無事に結界に進入できたようで何より。それからルーツィエにコロナ達を託し、俺とアイリ

とトリシュは、フォルセティとヴィヴィオとイクスとアインハルトの４人の護衛を続ける。それからすぐサイレンがフェードインして来て、騎士団の護送車５台が到着。

「お疲れ様です、騎士トリシュタン、騎士ルシリオン、騎士アイリ」

「お疲れ様です。彼らが護送してもらいたい仮面持ちです」

「あー、はい、判りました」

俺が捕らえた十数人の仮面持ち達の現状を見て、騎士たちがドン引きしてしまった。連中は今、クリスタルケージの効果を有した改良版、テリトリー・オブ・スフィアケージで別々に捕らえている。さらに雷龍ジェレミエルの開けた口の中に放り込まれている。少しでも怪しい動きや他の仮面持ちが奪還しに来た際は、問答無用で雷龍の口を閉じ、円盾も解除する。それらを全て解除し終え、地面に仮面持ち達を降ろす。

「それでは、責任を持って護送します」

「はい、よろしくお願いします」

次々と護送車に連行されていく仮面持ちを見届け、護送車が騎士団本部へと向けて発進したのを見送っていると・・・

――トランスファーゲート――

あの空間の歪みが俺たちの前に現れ、そこから2人の女仮面持ちが姿を見せたことで、俺とアイリとトリシュはフォルセティ達の三方に付いて防御陣を執りつつ、フォルセティ達を二重防御結界の「デュアルクリスタルケージ」で覆う。

「ちょっと、しつこいんじゃない？　アイリ達に敵いっこないんだから、さっさと諦めてよね」

――アイツ・ランツェ――

アイリは俺たちの頭上に氷の礫13個と生成し、トリシュは"イゾルデ"を大弓形態であるシュッツェフォルムで起動して、魔力矢を魔力弦に番えた。俺は"エヴェストルム"を二剣一対のゲブラーフォルムで起動し、左の"エヴェストルム"の先を仮面持ち2人へと向けつつ、頭上に魔力スフィア2基を展開する。

「この子たちを連れて行きたいのであれば幹部クラスを連れて来なさい。あなた達では私たちには勝てませんよ」

トリシュがそう言うが、剣を持っている仮面持ちはこれまでの仮面持ちとは違い、かなり強いと思う。もう1人の無手の仮面持ちも、場数を踏んでいる者なのか雑魚ではない。トリシュも判っているだろうが、俺たち3人なら確かに負けることはないだろう。

「そういうわけだ。管理局に未来は無いと言っているが、お前たち最後の大隊にも未来は無い。大人しく武装を解除し、投降しろ」

そう促すと、仮面持ち2人は自らが付ける仮面に手を伸ばし、そっと外した。目出し帽殻覗く見える瞳を見て、俺は「あぁくそ」と悪態を吐いた。2人は仮面を地面に捨て、次に目出し帽を脱ぎ捨てた。

「うそ・・・」

「そんな・・・！」

ヴィヴィオとフォルセティから悲痛な声が漏れ、アイリも「なんで・・・」と困惑している。俺たちの前に現れた仮面持ちの正体は「アリサ、ティアナ」の2人だった。

「あんた達に話を――」

「ジャッジメント」

――轟き(コード)響け、汝の雷光(バラキエル)――

アリサが何かを言おうとしたがそれを無視して問答無用の雷撃砲を発射したんだが、アリサとティアナは「うあっ！？」と驚きはしたものの、射線上からしっかり離脱して直撃を免れた。狙いが甘かったか。やっぱり親しい者への攻撃は鈍ってしまうか・・・。

「ちょっ、急に何すんのよ！」

「話もさせないで撃つなんて酷いじゃないですか！」

「俺が今優先すべきはヴィヴィオ達の安全。たとえチーム海鳴メンバーだろうが後輩だろうが、加減は無いと知っておいてほしい」

ティアナは兄ティーダの件があるため、兄思いの彼女なら家族の情に絆されての離反はまだ考えられる。とはいえティアナがこうも簡単に大隊に付くとは思えない。彼女なら真っ先にティーダを救い出そうとするはず。となるとやはり返り討ちに遭って拉致されての・・・か。そしてアリサだが・・・。彼女が管理局を、チーム海鳴を裏切ることなど絶対にありえない。ならば拉致されて洗脳されているか、人格を投影された偽者か・・・。

「どれにしても次に君たちの確保だ。『もし大隊にスパイとして潜り込んでいるのなら、今すぐ情報を俺に教えろ。俺とアイリで乗り込んで蹂躙してくれる』」

ありえない話を振ってみる。スパイをするなら必ず、親しいチーム海鳴の誰かに相談なり、クロノやリンディ統括官といった上司に許可を取るなりするはずだ。しかしそんな話は聞いていない。親しい友人や上司以外の誰かにスパイをするなどアリサの性格からして話すわけも、自分ひとりで決めたわけでもないだろうし。

（さぁ、どう答えてくれる？　）

『・・・無理よ。今のあたしは最後の大隊のアリサ、いいえ・・・カランよ。同志を売る真似は出来ないわ』

他の仮面持ちの監視を誤魔化すために口頭で嘘を吐き、念話で真実

を語ることは出来たはずだ。しかし念話で断言したアリサはもう「敵なんだね・・・」と落ち込むアイリの言うように、彼女は捕まえるべき敵だ。

「ティアナもそれで良いんだな？」

「はい。最後の大隊のメンバー、ギルとして・・・お兄ちゃんと一緒に世界の理不尽と戦うって決めたんです」

――フルアーマメント――

ティアナの背中に機械の環が展開された。環の四方からアームが伸び、右肩上のアームには機関部・銃身・銃床が３倍ほど長くなってはいるが、ＳＩＧ　ＳＧ５５０をモデルとしたであろうアサルトライフルが装着されている。左肩上にはゾロターンＳ－１８／１００をモデルにしたであろう対戦車ライフル、右脇下にはＭ１３４をモデルにしたであろうガトリングガン、左脇下には２ｍ半ほどの細長い銃身とマガジンが挿された長方形の機関部で構成されたレールガン。そして両手には２挺の"クロスミラージュ"。銃火器の完全武装だな。

「で？　アリサ、君・・・フレイムアイズはどうした？」

アリサの持つデバイスらしき大剣は両刃で、フルドライブのクレイモアフォームと似ているがこっちは実体剣だな。あと柄が異様に長い。両手で持ってもまだ余りある。

「フレイムアイズ？　あたしの言うこと聞かないし邪魔から置いてきたわ。スペック的にはこのナーゲルリングの方が上だし、どちらを使うかは明らかでしょ」

アリサはそう言って"ナーゲルリング"を自分の胸の辺りまで持ち上げ、水平に構えると「カートリッジロード」と一言。柄頭と柄尻部分がスライドし、２つのシリンダーがその姿を見せた。２つのシリンダーによる２発のカートリッジロード。アリサの魔力が爆発的に上がった。

「そうか・・・。洗脳か偽者か、どちらにしろ相棒を見捨てた時点でお前はもうアリサじゃない」

アリサとしての自我と記憶がある以上、"フレイムアイズ"への思い入れも憶えているはず。使わないが待機形態で持っているというのならまだ良いとして、置いてきたとなると本当に大隊側に付いていることになる。

「とにかく、君ら２人はここで確実に捕まえる。話し合いはその後でだ」

「ヴィヴィオとフォルセティとイクスは貰っていくわ」

「その為ならあたし達、相手がルシルさんでも一歩も引きません！」

ティアナが俺から距離を取るべく、武装すべての銃砲口を俺に向けたまま後退し、宙に魔法陣の足場・フローターフィールドを展開し

て飛び乗った。空からの攻撃ならアリサに間違っても当てる心配はないだろうからな。

「アイリ、トリシュ。ヴィヴィオ達から目を離さないでくれ」

「ヤー！」「了解です！」

――フォックスバット・ラン――

アリサは高速移動魔法を使って俺に突撃して、"ナーゲルリンク"の剣身に炎を付加しての直接斬撃を振るってきた。俺を相手に真っ向から突っ込むことがどれだけ悪手なのか、もう忘れたのかアリサ。

――舞い降るは、汝の雷光（パシエル）――

突っ込んでくるアリサへ向けて雷槍１０本を斉射する。火炎斬撃を横薙ぎに振るって、直撃コースの雷槍だけを弾き返したアリサに対して・・・

「第二波装填（セカンドバレル・セット）」

――轟き響け、汝の雷光（バラキエル）――

「ジャッジメン――」

追加の雷槍１０本を頭上に展開し、俺のすぐ近くにまで来た彼女へと放とうとした時、「させません！」と、ティアナの"クロスミラ

ージュ"や他の兵装から物質弾や魔力弾、エネルギー弾が発射されて、雷槍が発射される前に潰しにきた。

「ナイスよ、ギル！」

――タイラントフレア――

――輝き燃えろ、汝の威容（コード）（ケルビエル）――

さらに爆発的に噴き上がる炎。俺は既に"ナーゲルリング"の攻撃範囲内に入っているが、「温いな」と俺は漏らし、「ケルビエル！」を発動。俺の足元に円陣が展開され、円陣内に炎が噴き上がる。

「ぐっ・・・くぅぅ・・・！」

アリサが一瞬にして蒼炎に飲み込まれ、"ナーゲルリング"による火炎斬撃も俺に届かなかった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒ヴィヴィオ†††

なのはママやフェイトママ達のお友達のアリサさん、そして部下だったティアナさんが、わたしを狙う最後の大隊のメンバーとして現れた。そして今、ルシルさんと交戦中。

「ファイア！」

――クロスファイアシュート――

「せぇぇぇぇい！！」

――ヴォルカニックスカッシャーー――

ティアナさんの魔力弾幕にアリサさんの巨大魔力斬撃がルシルさんに迫るけど、「イロウエル！」っていう、とんでもなく大きな銀色の両腕が、虫を追い払うかのような動きで弾幕と斬撃を薙ぎ払って、「きゃあああああ！」アリサさんとティアナさんも一緒に吹っ飛ばした。ルールの中で行う試合じゃなくて、カウンテッド・アウトやサレンダーなんていうものが無い本物の戦闘・・・。

「アリサ、ティアナ、降参してくれないか？　もう判っているだろ？　君たちでは俺には勝てないと」

――照らし召せ（コード）、汝の烈光（イオエル）――

展開された１０枚のベルカ魔法陣から蒼く光り輝く龍が１０頭出てきて、アリサさんとティアナさんに向かって大きな口を開けた。そしてルシルさんが「ジャッジメント！」って号令を下すと、光の龍が一斉に２人に向かった。

「ティアナ！」

「はいっ！　レールガン（パトリオット）からショット（ラストオーダー）カノンへと換装！」

ティアナさんの左脇下にあった銃口が１つしか無かった武器が銃口

が3つある武器へと変わった。

「ワイドマルチプルロックオン・・・！　クリアランスブレイカァァァァーーーーッ！」

ティアナさんの持つ全ての武器から一斉に、そして連続で攻撃が放たれて、雷の龍を迎撃した。耳を塞ぎたくなるほどの轟音と魔力爆発にわたし達は「きゃあ！」耳を塞いで叫んだ。ルシルさんは「ま、そんな攻撃方法もやっぱりあるよな」って驚きもしなかった。

「追加攻撃が来る前に仕留め・・・え？」

――指し示せ、汝の星図（ラティエル）（コード）――

「「きゃあああああ！？」」

砲撃よりいくらか細い光線が空から降り注いできて、アリサさんとティアナさんの至近に連続で着弾。2人はその衝撃で地面を転がった。空を見れば大きな魔力の円が展開されていて、いくつもの魔力球で星座を形作ってる。そんな魔力球が次々といろんな星座を形作りながら、地上へ向かって光線を連射する。

「俺の中級術式だけでその様だ。だからもう降参しろ。それとも上級術式で完全に撃墜されるまで足掻くか？」

「ふざけんじゃないわよ！」

「お兄ちゃんのため、お兄ちゃんのため、お兄ちゃんのため・・・！」

「そうか。なら墜とす、覚悟しろ」

ルシルさんがなんか悪役みたいな感じになっちゃってる中、アイリが「ちょこっと手伝おうかな」って足元にベルカ魔法陣を展開した。そして「ティアナを黙らせようか♪」って、腰の辺りに展開した白翼から取った羽根を両手の指に挟み込んだ。

「ラオム・ツー・ストッペン！」

アイリは羽根を空に投げ放った。軌道を目で追うと、ティアナさんからの射砲撃を妨げるために接近戦を選んだルシルさんと、「ちょっ、アンタって中遠距離が得意なんでしょうが！」って嫌がるアリサさんの上空へと弧を描いて向かってる。でもティアナさんに気付かれたっぽくて、銃口が3つある武器が空に向けられた。

「ブラストディセミネーター！」

3つの銃口から何十発っていう光弾が発射されて、アイリの羽根を一気に迎撃した。それを見たトリシュさんが「私が代わりましょう」って言って、弓形デバイス・"イゾルデ"を起動させる。右手の指5本に挟むように作った魔力矢4本を魔力の弦に番えた。

「元が1対2ですし、こちらも手を出しても構いませんよね」

「そうそう♪　ルシルがアリサから離れないようにしてるから、テ

ィアナも援護射砲撃できないし、突っ立ってるだけならもう退場しても良いよね～」

「往けっ！」

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

トリシュさんが放った４本の矢は目にも留まらない速さでティアナさんへと殺到。ガンッ！て派手な音と一緒に着弾して、魔法陣の足場から吹き飛ばされて地面に落下した。その際、背中にあった円い機械が大きな音を立ててティアナさんから外れて、ディエチの"イノーメスカノン"より長い４つの武器がビタン！って倒れた。

「フォイア！」

――コード・シャルギエル――

次にアイリが氷の槍を４本と発射して、槍を４つの武器に突き刺すと同時に炸裂させて凍結した。ティアナさんもその冷気に当てられて若干霜が掛かっちゃった。倒れ伏したまま起きないから、トリシュさんの今の一撃で気を失ったみたい。さらにガシャァン！とガラスが割れるような音と一緒に空間が割れて、そこから「ただいま～！」ってシャルさんとルミナさん、それにルミナさんに背負われたミヤビさん（意識を失ってるみたい）が飛び出してきた。

「ティアナ！　ミヤビさん！？」

「さぁ、これで残るは君だけ・・・だ！」

一際強い斬撃を振るったルシルさん。アリサさんは咄嗟に"ナーゲルリング"で受け止めたけど「きゃあ！」薙ぎ払われて地面を転がった。そんなアリサさんに「これで終わりだ、アリサ」ってルシルさんが言い放って・・・

――煌き示せ（コード）、汝の閃輝（アダメル）――

砲撃を1発発射。起き上がろうとしてたアリサさんに直撃させた。起こった魔力爆発の煙が晴れると、アリサさんがぐったりと地面に倒れ伏してた。

「アリサさん、ティアナさん・・・」

ボロボロの姿で倒れてる2人の姿を見て、わたしは胸が苦しくなった。2人はわたしが昔から知る親しい人だ。そんな2人がわたしを拉致するために現れて、また親しい人達（ルシルさん）の手によって迎撃されて・・・負けた。

「これって・・・わたしの所為・・・？」

「「え・・・？」」

「ヴィヴィオさん・・・？」

わたしが聖王女のクローンだから、アリサさんやティアナさん、そ

れにすでに捕まってるスバルさん達がこんな事に・・・。ううん、全部が全部わたしの問題じゃないかもしれない。だけど全くの無関係じゃない。わたしを狙う最後の大隊が次元世界に在り続ける限り、アリサさん達のようにいろんな人たちが拉致されて、洗脳されて、罪を犯し続ける被害者にして加害者になっちゃう。

「もう護ってもらってるだけじゃダメなんだ・・・」

「ヴィヴィオ、何を言ってるの？」

「変な事を考えていませんか、ヴィヴィオ？」

「ヴィヴィオさん、そこから先はいけません」

フォルセティ、イクス、アインハルトさんがわたしの考えを察して止めに来てくれたけど、もうこれしか方法はないと思うから・・・。わたしはまず、わたしの声がすぐに届くアイリとトリシュさんに言った。

「わたし、最後の大隊に拉致されてみます」

Ｅｐｉｃａ２４とある母親の覚悟～Ｍｏｔｈｅｒ'ｓ　ｌｏｖｅ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

仕事を終えて自宅に帰って来ると、玄関に２人分の靴が綺麗に揃えられて置かれてた。そっか、今日は・・・。私も靴を脱いだ後に揃えて、リビングへと向かう。そして「ただいま！　フェイトちゃん、アリシアちゃん！」って、キッチンでお料理をしてる２人に挨拶した。

「おかえり、なのは♪」

「おかえり～！　シチューそろそろ出来るよ～♪」

「うん、ありがと、アリシアちゃん。私も何か手伝うよ」

ジャケットを脱ぎながらそう言うとフェイトちゃんが「大丈夫だよ。先に着替えてきたら？」って気遣ってくれたし、アリシアちゃんも「うがい手洗いも忘れずに♪」ってお母さんみたいな事を言われちゃったし、「はーい♪」笑顔で応えて洗面所へ向かう。うがいと手洗いを終えて、私室で私服に着替えてからリビングに戻る。

「良い香り～♪」

「冷めないうちに食べよう、フェイト、なのは」

「「うん！」」

テーブルに着いて「いただきます！」と手を合わせて、フェイトちゃんとアリシアちゃんの作ってくれたシチュー、生春巻き、バターライス、サラダを談笑しながら美味しくいただく。

「楽しい食事中にしていい話題じゃないかもしれないけど・・・。今日、ザンクト・オルフェンで仮面持ちが出たって話を聞いたんだけど、シャル達からはなんの連絡も無いの？　フェイトママ、なのはママ？」

「うん。シャル達からの連絡はないよ。ヴィヴィオから、護衛としてシャルとルミナとトリシュの3人と一緒に、お友達のみんなとお買い物に行くっていう連絡は貰ったけど・・・」

「フェイトちゃんと同じく。メールや通信も繋がらなくて・・・」

何かがあればシャルちゃんかルシル君から連絡が来る手筈になってる。便りが無いのは良い便りなんていうことわざがあるけど・・・。まぁシャルちゃんとルミナさんとトリシュさんっていう過剰戦力とも言える護衛が側に居てくれるんだし、たとえ襲われても返り討ちにしそうだし。

（それでも不安はあるし、心配はしちゃうよ。だってママだもん）

「そっか～。じゃあ今度は私が連絡してみようか・・・？」

アリシアちゃんがファンデーションケース型へと形を変えた"フォーチュンドロップ"を、アリシアちゃんの座ってる椅子の背もたれに掛かってるハンドバッグから取り出した。

「クリスにも通信機能あったよね、なのは？」

「うん、メール機能も搭載してるよ」

「オッケー。ドロップ、セイクリッドハートに通信をお願い」

≪ほーい！≫

"フォーチュンドロップ"がヴィヴィオの"クリス"に通信を繋げていると、テレビの映るニュース番組から・・・

『本日、ミッドチルダ北部ベルカ自治領・ザンクト・オルフェンに、最後の大隊の構成員およそ１８名が現れました。偶然現場に居合わせた聖王教会教会騎士団所属、オランジェ・ロドデンドロン隊がこれを制圧しました』

テレビモニターに「あ、シャルちゃん！」達オランジェ・ロドデンドロンのメンバーの顔写真が映った。対最後の大隊となれば今はもう、管理局じゃなくて教会騎士団となってる。騎士団は、陸士隊の管轄区を無視して自由に捜査も追跡も出来るし、都市部での魔力出力制限も関係ない。局が後れを取るのは必至だった。

『聖王教会本部より、今回逮捕した最後の大隊のメンバーの身元が発表されました』

ニュースキャスターが読み上げていく名前には聞き覚えのある名前もいくつかあって、さらに『アリサ・バニングス、ミヤビ・キジョウ、ティアナ・ランスター。以上18名です』って、最後に読み上げられた名前を聞いて、私たちは持っていたスプーンを落とした。

「アリサ・・・」

「ティアナ・・・」

「ミヤビって、シャル達の局員時代の同僚の名前でしょ・・・？」

アリサちゃんやティアナ達の顔写真も映し出された。もう完全に犯罪者扱い。読み上げられた18名の内、15名がミッドチルダの局員、1名が本局、残り2人は魔導犯罪者だった。そして聖王教会騎士団団長、リカルド・トラバントのインタビューが流れた。

『我々と同じ、正義を執行する組織である時空管理局。その地上部隊の総本部であるミッドチルダ地上本部および各陸士部隊に所属する管理局員が、あろうことか殺人を前提に悪を裁くという愚考を働いているのはすでに周知の事実。最後の大隊に入り、すでに何件かの殺人事件を起こしている。到底看過できる問題ではない』

「「「・・・」」」

アリサちゃんやスバル、ティアナだって、絶対に望んで最後の大隊に下ったわけじゃない。そう大きな声で叫びたい。けど世間にはきっと届かない。最後の大隊が崩れ、アリサちゃん達が大隊に入った原因を解明しない限りは・・・。

『管理局と教会騎士団はかつて、プライソン戦役にて組織として分け隔てなく協力した。普段は管轄区を縄張りと称して醜く争っていた陸士隊もそんな問題を後回しにして、どこの部隊であろうとどの管轄区だろうと関係なく手を取り合って戦っていた。だというのに、いざ戦役が終われば元通り。以前ほどの縄張り意識は強くは無いようだが・・・。よもや犯罪者を多数も出すとは。ミッドチルダ地上部隊の歴史もそろそろ終わりが近いようだ。これまで逮捕した局員は口を揃えて言っていたよ。管理局に未来は無いと。ならば犯罪組織ではなく我々騎士団の元へ来てくれたら良かったのだが・・・。実に残念だよ。皆、素晴らしい魔導師だったのに』

トラバント団長のインタビュー映像が終わって、ニュースもそのまま終わった。さっきまでは温かかった食卓が完全に冷え切ってしまってた。このままじゃ本当にミッドの管理局組織が終わってしまう。

≪ クリスとの連絡が繋がったよ～≫

"フォーチュンドロップ"がそう言った直後、モニターが展開されて『はい、ヴィヴィオです。アリシアさん、何かありました？』ってヴィヴィオが映った。ヴィヴィオの顔を見られたことで心底ホッとした私とフェイトちゃんは「ヴィヴィオ～♪」って手を振った。

『なのはママ、フェイトママ！』

するとヴィヴィオも笑顔になって手を振り替えしてくれた。今通信していても大丈夫か聞いてみると、『うん。夜ご飯を食べた後での休憩中だから』って言って少しモニターから引いた。

『『『『こんばんはー！』』』』

『こんばんは。なのはお母様、フェイトお母様、アリシアさん』

『こんばんはです！』

モニターの外からコロナちゃんとリオちゃんとイクスちゃん、それにアインハルトちゃんとフォルセティが顔を出した。あの子たちとも「こんばんはー！」って挨拶を返す。アリシアちゃんが「フォルセティがハーレム築いてる」ってボソッと漏らした。ルシル君もチーム海鳴で唯一の男の子だったし。フォルセティも将来はいろんな子にモテて苦労するのかな・・・。

「ヴィヴィオ。その、今日はどんな調子だった？　ザンクト・オルフェンでその・・・最後の大隊が現れて・・・あの・・・」

フェイトちゃんが言いにくそうにしていると、ヴィヴィオが『わたし達、その場に居たの』って耳を疑うような言葉を言った。聞けば買い物をルーテシアやリヴィアと一緒に終え、その後に憧れのインターミドルのトップファイターであるヴィクトーリア選手とハリー選手たちと過ごした後に、先ほどニュースになっていた大隊の襲撃

があったとの事だ。

『アリサさんとティアナさんが、ルシルさんやアイリ、トリシュさんの手で倒されるのを見ちゃって・・・』

『ちょっと、というか・・・かなりショックだったよね』

ヴィヴィオとフォルセティは2人のことをよく知るからこそ、模擬戦での撃破じゃなくて本当の戦闘での撃墜でショックを受けてしまっていた。どう言って慰めようかって頭をフル回転させてるところで・・・

『でもだからこそ、わたしは強く思ったの。わたし、アリサさん達のような無理やり最後の大隊に入れられて戦わされる被害者をこれ以上出さなせない・・・』

伏せられてたヴィヴィオの瞳が私たちに向けられた。紅と翠の瞳に宿るのは断固とした意思。これから何を言うのか判らないけど、たぶん・・・ヴィヴィオを止めることは出来ない。

「待って、ヴィヴィオ。無理やり入れられたってどういうこと？アリサ達が大隊に入った原因が判ったの？」

『えっと・・・』

『捕まえたアリサさんとティアナさん、それにミヤビさんを、教会本部へ移送される前にお父さんが調べたんだけど・・・。その時に

お父さん達が、アリサさん達を取り戻す・・・って言ってたの聞いたんだ。たぶん、僕たちが見たアリサさん達は・・・偽者』

『うん・・・。あっ、あああああ！　ちが、あの、なのはママ、フェイトママ、アリシアさん！　今の、ルシルさん達からなのはママ達にも内緒って言われてたの！　だから内緒！』

『あっ、そうだった！　今の秘密！　内緒でお願い！』

ヴィヴィオとフォルセティからの懇願も頭に浸透しないほどの話の内容に、私はルシル君が示してくれたその事実に嬉し涙を流してしまう。ヴィヴィオが『なのはママ！？』って驚いたから私は「大丈夫。嬉しくて・・・」って努めて笑顔を向ける。

「でもこれ、すごいニュースだよ、なのは。はやて達にもすぐに伝えたいけど・・・」

「そのダメな理由って、私たちチーム海鳴の中にまだ偽者がいるかもしれないから、でしょ？　信じられないし信じたくないけど、警戒するのはしょうがないと思うよ、うん」

アリシアちゃんの言うことには理解も納得も出来る。アリサちゃんがいつ拉致されたのかも知れない上ひょっとしたら偽者と会って話をしていたかもしれない。それが恐ろしい。本物と偽者に気付けないなんて・・・。

『それでね、なのはママ、フェイトママ。さっきの続きなんだけど。

わたし、わざと大隊に捕まろうかなって思ってる』

「え・・・？」「はい？」

フェイトちゃんとアリシアちゃんが目を丸くするけど、私はどこかそんな気はしてたことで、そこまで驚きはしなかった。ちょっと過保護なフェイトちゃんが「ダメ！　絶対ダメ！　そんな危ない事、許さない！」って怒鳴った。

『でもフェイトママ！　アリサさん達を取り戻せるチャンスかもしれないんだよ！』

「っ！　だからって何をされるかも判らない連中に、ヴィヴィオを一時でも預けるなんて許せるはずない！」

『・・・判ってるよ。怖い事があるかもしれないって・・・。でももし、万が一にでもなのはママやフェイトママ、アリシアさん、はやてさん達の誰かが捕まって、偽者が本物のフリをするようなことがあったら・・・。それこそ絶対に嫌だもん！』

「ヴィヴィオ・・・！」

『フェイトママ・・・！』

どっちも引かないから睨み合いみたいになっちゃった。だから私とアリシアちゃんで「待って、落ち着こう！」って割って入ったら、フェイトちゃんから「なのはからもダメだって言ってあげて！」っ

てお叱りを受けた。

「えっと・・・」

「ほら、ヴィヴィオ。なのはもダメだって言うんだから、ちゃんと言う事を聞かないと・・・」

「え～っと・・・、うん。ねえ、ヴィヴィオ。ヴィヴィオが言ってることがどれだけ危険で、ママ達やお友達に辛い思いをさせるかは・・・解かってる？」

ヴィヴィオだけの問題じゃないことは理解してるのだろうか。そこだけはしっかり確認しておきたい。私の問いにヴィヴィオは『解かってるつもりだよ』って一切の揺らぎを見せない瞳を向けてきた。

『あの、私たちもヴィヴィオさんの決意には負けてしまい、ヴィヴィオさんの作戦を了承してしまいました』

『ヴィヴィオの頑固さには負けました・・・』

アインハルトちゃんとイクスが肩を落とした。コロナちゃんやリオちゃんも苦笑しちゃってるし。フォルセティはフェイトちゃんみたく、不安そうな表情をこれでもかっていうレベルで浮かべてる。うちの娘が本当にごめんなさい。

『なのはママ、フェイトママ。お願いします！』

「ヴィヴィオ。お願いだからやめ・・・」

「待ってフェイトちゃん。・・・シャルちゃん達は何か言ってる？」

『アリサさん達が倒された後に提案したんだけど・・・。すぐには答えは出せないから保留にするって、ルシルさんが・・・』

完全に却下したわけじゃないんだ、ルシル君。だからフェイトちゃんは「もう！　なんで止めないの、ルシルは！」ってお冠だ。

『それについては俺から話そう』

とそこに、ルシル君が部屋のドアを開けて入ってきたんだけど、フォルセティから『お父さん。ここ女の子の部屋なんだから、ノックしないとダメ』って怒られちゃった。

『あ、すまん。お邪魔します』

『あ、はい、どうぞ』

改めてヴィヴィオ達に入室したことへの挨拶をして一礼すると、ヴィヴィオ達も一礼で返した。そして咳払い1回したルシル君は『本題に戻そう』って私たちに向き直った。

「ルシル。ヴィヴィオの提案を保留じゃなくてキッチリ断って。危ないからダメだって」

『いや？　俺は止めないよ。ヴィヴィオの案は通すことにした。というか、実はな・・・最後の大隊の本拠地を捉えるために以前から・・・その・・・なんだ、ヴィヴィオの言うような囮作戦を立てていたんだ』

「～～～っ！」

フェイトちゃんは顔を赤くするほどまでに怒って、「ルシル！」って怒鳴った。フェイトちゃんに気圧されたヴィヴィオ達がビクッと肩を竦ませる。でもルシル君は涼しい顔をしたままで『ヴィヴィオの決意は無駄には出来ないだろ』って返した。

「許容できる我儘にも限度があるの！　もう！　ルシルの馬鹿ぁぁぁぁ！」

若干涙を浮かべてるフェイトちゃんにとうとうルシル君もたじろいで、『す、すまん・・・』って謝っちゃった。このままじゃルシル君がフェイトちゃんに押され続けて負けてしまいそうだから、「ルシル君」って私が割って入る。

「ルシル君。ヴィヴィオを危ない目に遭わせるんだから、それ相応の安全も確保してくれているんだよね？　というか、してなかったら私も全力で怒るから」

『っ！・・・ああ、もちろんだ。当然過ぎる疑問だぞ、なのは、それにフェイト。何の作戦も無いしにヴィヴィオに危ない事をさせるわけがないだろうが』

「ふーん。じゃあどんな作戦を立てたわけ？　以前からって話だし、フェイトとなのはが納得できるレベルのものなんでしょ？」

そう言って呆れるルシル君にアリシアちゃんがそう聞いたんだけど、『それは秘密だ』ってルシル君は首を横に振った。なんで？と思う前に「その作戦までに私たちが捕まったら洩れるから？」って確認してみた。

『そうだ。アリサですら捕まってしまうような状況だ。君たちの実力に疑う余地なんて無いけど、万が一がある。それを考え、本作戦は俺とシャルとアイリ、そしてヴィヴィオの４人だけが知るようにしておきたい』

ヴィヴィオの母親として知ってはおきたいけど、ルシル君の言うことにも一理あるから反論は無い。だから「判った。ヴィヴィオとルシル君たちを信じる」って、私はヴィヴィオ達の作戦を受け入れることにした。

「なのは！？」

「フェイトちゃん。信じてあげようよ。私とフェイトちゃんの娘でしょ？」

「むぅ・・・。はぁ。なのはママがそこまで言うなら私も受け入れるしかないでしょ」

ちょっと膨れっ面なフェイトちゃんの頭を「ありがと～♪」って頭を撫でる。

『なのはママ、フェイトママ。我儘を聞いてくれてありがとう！』

『ありがとう、なのは、フェイト。ヴィヴィオは責任を持って預かる。最後の大隊を潰すまで、いや潰した後でもヴィヴィオを守り抜く。完全に不安は拭えないだろうが・・・』

ヴィヴィオとルシル君が頭を下げたから、私は「はい」って微笑みながら頷き応えた。その後はヴィヴィオやみんなからの『おやすみなさーい！』の挨拶に、私たちも「おやすみなさい！」と返して通信を切った。

「ヴィヴィオ、結構な冒険をするようになったね。自分から捕まりに行って大隊の本拠地を探る、なんて・・・」

「うぅ、なんかもう今晩は眠れないかも・・・」

「フェイトちゃん。もうちょっと強くなろうか、精神的に」

フェイトちゃんの過保護は、フェイトちゃんの生い立ちにも関係してるから強くは言えない。でももう少しヴィヴィオを信じてあげても良いと思う。ヴィヴィオの側には次元世界でも指折りな実力者が揃っているんだし。ルシル君だって馬鹿じゃない。しっかりとした作戦を立てていて、ヴィヴィオもしっかり守ってくれると思う。

「どんな作戦か、いつから始めるのか、それが判ってればもう少し落ち着きを取り戻せると思うけど・・・」

「ルシル君のさっきの様子だと秘密って言われそうだよね・・・」

「もぉ～・・・」

アリシアちゃんと私の会話にフェイトちゃんがテーブルに突っ伏した。とにかく、承諾しちゃった以上はルシル君たちを信じるしかないわけで。

「ホント、お願いするよ」

天井を仰ぎ見た私は深い溜息を吐いた。

Ｅｐｉｃａ２５－Ａインターミドルの好敵手～Ｒｉｖａｌ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

最後の大隊にわざと捕まって、本拠地がどこかを確認しようっていうわたしの提案は無事に通った。フェイトママにはとっても心配をかけたり、不安にさせたりしちゃうだろうけど、わたしは守られてるだけはイヤ。わたしにしか出来ない事があって、その覚悟があるなら・・・。

・―・―・回想です・―・―・

なのはママとフェイトママから許可を貰ったわたしは、ルシルさんと一緒に部屋を出て、「入るぞ、シャル」さんの部屋へ。ルシルさんがノックしてすぐ「どうぞ～♪」シャルさんから入室の許可が入った。

「お邪魔します！」

「いらっしゃい、ルシル、ヴィヴィオ。アイリは先に来てるよ」

シャルさんの天蓋付きのベッドの上でくつろいでるアイリが「やっほ～♪」って、わたしに手を振ってくれたから、「やっほ～♪」わたしも手を振り返した。そんなわたしやルシルさんを出迎えてくれたシャルさんが「ささ、適当に座って」って床にクッションを置いてくれた。

（猫ちゃんのクッション、可愛い♪）

座るタイプの円いアニマルクッションシリーズだ。シャルさんは犬、ルシルさんは狸のクッション。フカフカで肌触りがすごく良い。お尻でフカフカを味わってると、「さて。ヴィヴィオ」って、クッションに胡坐で座ってるルシルさんがわたしを見た。

「まずは、君の勇気に感謝する」

「ホントに。ヴィヴィオ、ありがとうね」

ルシルさんとシャルさんが頭を下げたから、わたしは「あぅ、そういうのやめてください」って首を横に振った。わたしはわたしに出来る事をやるだけだから。アリサさん達のような被害者を出さないために・・・。

「本当になのはやフェイトに似てきたね、ヴィヴィオ。目の力強さはなのは譲り、優しさはフェイト譲り」

「フォローしておくが、なのはも十分優しいぞ。それと同じように厳しいがな」

ルシルさんの言うことに「うん」わたしは頷き返した。そんな優しくて強くて厳しいママ達のためにも、わたしは頑張る。みんなでにこやかにしてるところで、シャルさんが小さく溜息を吐いた。本題が始まるんだって判って、わたしは居住まいを直した。

「ヴィヴィオ。あなたは大隊から最優先で狙われてる。そこでわたしとルシルはそれを利用して、以前からヴィヴィオを送り込んで連中のアジトを探る・・・なんて、あなたの意思を聞かずにそんな作戦を立てていたの」

「君やフォルセティ、イクス、アインハルトにあげたプロミスリングを作るのに結構時間が掛かったが、準備は整ったというわけだ」

右親指にはめたプロミスリングを撫でる。ルシルさんの話だと発信機の役割を持っているようで、わたしがいつどこで拉致されても、転移先を即座に割り出せるって話だ。

「基本的に肌身離さず持っていてほしい。それが発信機としての役割としてではなく、ヴィヴィオである証ともなる」

「証・・・？」

「普段からそのリングを付けていれば、大隊の連中はそれを目印として見るだろう。連中の目をリングに向けさせてしまえば、俺の作戦は・・・」

ルシルさんから語られた作戦は、わたしに危険が及ぶ確率が限りなく低いもので、わたしの決意がちょっと空回りしちゃうようなものだった。でもルシルさんは「俺の望むタイミング外で来られたら、その時は・・・一応覚悟はしておいてくれ」って、わたしに気を引き締めるように言った。

「うんっ。・・・あの、すぐに助けは入るんだよね・・・？」

「最低でも2分は欲しい。ヴィヴィオを拉致した状態での最初の転移で、いきなり本拠地へ向かうという真似はしないだろう。追撃の足止め戦力の居る場所に一度転移しておいて、さらに何度か転移すると考えている。だから・・・」

「最低で2分・・・」

「ヴィヴィオ。連中はあなたに危害を加えることはないと思うの。拉致なんて回りくどい手を選ぶ以上、聖王女としての何かが必要なのよ。でも利用するにも拉致してすぐってわけにもいかないだろうし、ギリギリ2分がちょうどいいリミットなわけ」

捕まった先でわたしに出来る事なんてあるのか判らないけど、実際に狙われてる以上は何かさせようっていうのは判る。その何かをさせられる前に助け出されたらわたし達の勝ちになるんだ。

「そういうわけで、俺とアイリはほぼ付きっ切りでヴィヴィオ達の護衛に入る」

「ん。サポート役が居なくなるのはちょい痛いけど、今後の大勢を考えれば必要な事だし。問題ないよ」

「アイリも、ヴィヴィオのために精一杯がんばるよ！」

「じゃあヴィヴィオ。頑張ろうね」

そう言ったシャルさんがわたしの頭を撫でてくれて、わたしは「はいっ！」力強く返事した。

・―・―・終わりだよ～・―・―・

ルシルさん達との秘密作戦会議から４日。その間、最後の大隊からの襲撃もなく、さらに言えば次元世界でも一切の活動が行われなかった。シャルさん達いわく、嵐の前の静けさとして警戒した方がいい、とのこと。

「チームナカジマ、点呼！」

わたし達チームナカジマの監督兼コーチを務めるノーヴェの号令に、わたし、コロナ、リオ、アインハルトさんの順で番号を言っていく。さらにサポート隊のフォルセティが「５！」と、イクスが「６です！」って続いた。

「おしっ。全員揃ってるな。予選開始まで残り約半年というわけで、それぞれの長所をさらに伸ばすための特訓も増やしていく。ヴィヴィオ、お前の基本スタイルであるカウンターの錬度上昇プラス格闘技全体のスキルアップ」

「はいっ」

「コロナは、ゴーレムの創成・操作の精度向上だ」

「はい！」

「リオは、春光拳と炎雷魔法の徹底強化プラス武器戦闘の特訓だ」

「はいっ」

「ま、その練習は午後からになるわけだが。午前はスパーリングだけを行うぞ」

そして最後にアインハルトさんを見たノーヴェは「以前にも伝えたが、あたしには覇王流は教えられない。が・・・」って前置きした後、フライハイト家の地下にあるココ、プライベートジムの出入り口にあたる更衣室へ続くスライドドアに視線を向けた。

「オットー、ディード！」

シャルさんの妹でイクスのお姉ちゃんになる2人の名前を呼んだ。出入り口から現れたのは、この前出会ったヴィクターさんや番長と同じ、インターミドルで活躍してるトップ選手の1人、「ミカヤ・シェベル選手・・・！？」で、袴姿でオットーと一緒に更衣室から出てきた。

「来たよ、ナカジマちゃん！」

ミカヤ選手がノーヴェを、ナカジマちゃん、って呼んで、ノーヴェも「ミカヤちゃん、遠くまで悪いな」って手を挙げた。どうしてそ

こまでミカヤ選手と親しいのか判らないわたし達は、「え？　どういう関係？」って驚いた。

「おう、ちょっと待ってくれ。もうひとりゲストがいるんだよ」

「ああ、彼女はどうやら私に緊張してしまったようで、着替えるのに少し手間取っているようだよ」

「ミカヤちゃんもすごい選手だからな～。憧れてる新人選手は多い。ヴィヴィオ（コイツ）らもそうみたいだしな」

ヴィクターさんや番長に続いて、ミカヤ選手のようなすごい選手と知り合いになれてるってことに、わたしはもう興奮し続けてた。そんなところに「お、お待たせしてすいません！」謝罪の声がジムに響き渡った。

「あれ！？　ミウラ！」

「あっ！　フォルセティ君！　お久しぶりです！」

遅れてやって来たのは、トレーニングウェア姿のミウラさん、それにディード。フォルセティが大きく手を振ると、ミウラさんも緊張の面持ちから満面の笑顔になって、手を振り返しつつフォルセティのところに走ってきた。

「こらこら、ミウラ。知り合いのところへ向かう前に、まずはこっちに来てくれないか？」

「うあ！？　す、すいません、つい！」

注意されたミウラさんは慌ててノーヴェとミカヤ選手のところに駆け寄った。ノーヴェは改めてアインハルトさんを見て、「早速、スパーリングの相手を用意したぞ」って、ミカヤ選手を見た。

「君たちの反応からして私の事は既知だと思うけど一応、自己紹介をしておこうか。抜刀術天瞳流、ミカヤ・シェベルという。ナカジマちゃんやヴィクターー、番長たちから、君たちの事情は伺っているよ」

ミカヤ選手の話を聞いて、先日ノーヴェがヴィクターさん達にお願いしては話を思い出した。アインハルトさんの覇王流を崩さないための、公式試合の経験者をスパーリング相手として紹介するっていう・・・。ホント最近の話なのに、アリサさんやティアナさん、囮作戦のことなんかですっかり忘れちゃってた。

「ん。じゃあ次は・・・」

「は、はいっ！　八神道場門下生、ミウラ・リナルディです！　今日は、ヴィータ師匠とノーヴェさんのご好意で、その・・・一緒に練習することになりました！　よろしくお願いします！」

ミカヤ選手とミウラさんの自己紹介に、わたし達チームナカジマも自己紹介をした後、ノーヴェが「アインハルトは、ミカヤちゃんとのスパーリングで、斬撃技の対策を練れ」ってアインハルトさんに

言った。

「徒手格闘型、さらに言えばバリバリの近接型と聞いているよ、アインハルトちゃん。ゆえに斬撃の危険性、それに武器と素手の間合い差が持つ危険性を判ってもらえるといい」

「アインハルト。ミカヤちゃんはマジで強い。だからミカヤちゃんの言う事も理解できるはずだ」

「はい・・・！」

「その代わり、私としても君のような近接特化の徒手格闘型との試合で学ばせてもらうよ」

「何を、でしょうか・・・？」

アインハルトさんがそう尋ねると、「何もさせずに斬り伏せる術を、ね」ってミカヤ選手が微笑んだ。ゾワッと背筋が震えた。

「ほら。私の務める道場は当然ながら剣士ばかりで、格闘型はいないんだよ。だからナカジマちゃん達からの申し出は嬉しいんだ。ま、利害の一致、というやつだね」

「判りました。お役に立てるよう頑張ります」

やる気を漲らせて見詰め合うアインハルトさんとミカヤ選手に、「2人は奥の試合コートを使ってくれ」って伝えて、さらに・・・

「ヴィヴィオ。お前はミウラと試合だ。八神家道場、期待の新星にしてヴィータさん達の弟子だ。当然、来年のインターミドルでライバルになるわけだ。同じ新人でもこれくらいの実力を持ってるってことを体験しろ」

わたしとミウラさんの試合も組んでくれた。そしてコロナはオットーと、リオはディードとの試合で、それぞれの課題を行うことになった。試合場の４箇所に分かれて、わたしはミウラさんと対峙する。

「ヴィヴィオもミウラも頑張れ～！」

「はい、頑張ります！」

「うんっ、ありがとう！」

ミウラさんと一緒にフィルセティの応援に応える。フォルセティに格好悪いところは見せられないし見せたくない。だから「ミウラさん。お互い手加減無しで」って宣言しつつも、絶対に勝つって思いを強くする。

「あ、はい、もちろんです！　ヴィータ師匠やザフィーラ師匠からも、全力でぶつかって来い、って言われていますから！」

そう笑顔で言ったミウラさんが構えを取ったから、「それじゃあお願いします！」ってわたしも構えを取った。

「結界を張るぞ。一応は個人のスキルアップの練習だ。チームメイトであると同時にライバルでもあるお前らだ。あまり見せ合うようなものじゃないと判断して、個別メニューの際はこうやって互いを見れないようにする」

ノーヴェが展開した空間コンソールのキーを打って、試合コートを4分割するように結界が展開させるとコロナ達の姿が霞んじゃった。トレーニング開始の合図として判断したわたしは、「それじゃあお願いします！」って告げた。

「はい、お願いします！」

試合開始の合図は無くても、わたしとミウラさんは呼吸が合ったかのように同時に攻めに転じた。突進力のあるミウラさん。繰り出されるのは右の上段蹴り。

――ヴィヴィオ。お前の欠点は？――

――魔力量も少なくて出力も弱い。だから防御が脆くて、攻撃の出力もいまいち。全体的にパワー不足、かな――

――なら美点は？――

ノーヴェからの問いにわたしは即答できなかった。わたしは格闘技選手には向いていない資質、学者タイプだから。それでも格闘技が好きで、強くなりたかったから、わたしはこの道から逸れる方へは行かない。

「ふっ・・・！」

突っ込みの速度を落とすことなく、わたしはミウラさんの上段蹴りを屈むことで躱した。立ち上がり様にがら空きな顎へとアッパーを打ち込んだ。

――目だよ。広い視野のおかげで距離を掴むのが巧い。その目を活かせる反応と動作の速さ、そして・・・――

「（前に出る勇気！）せいっ！」

ミウラさんがよろけたところで追撃、反時計回りに回転して左裏拳を脇腹に打ち込んだ。

「かふっ！？」

わたしの連撃でミウラさんはダウン。膝から崩れ落ちて仰向けで倒れると、『ミウラ！？　初撃を必ず食らうのは何故！？』って、文字通り頭を抱えたフォルセティが映るモニターが展開された。その言葉を聞く限り、フォルセティ側からならわたし達のトレーニングを観られるみたい。良かった。今のわたしの一撃、観てもらえてた。

「あ～、世界が回ってます～」

「綺麗に顎に食らったから、ミウラもさすがにダウンしちゃったか～」

フォルセティが結界内に入ってきて（魔法攻撃だけを外に通さないためのものだからね）ミウラさんの様子を診た後、「ミウラ～、大丈夫～？」って声をかけ始める。とすぐに「ハッ！　ボクは・・・・！」ミウラさんが起き上がった。

（結構本気で打ったのに、回復が早い・・・？）

「あの、ヴィヴィオさん！　もう1戦お願いします！」

「あ、はい！　こちらこそお願いします！」

そうしてわたしとミウラさんは、フラフラになるまで試合を続けた。途中で防護服着用の魔法あり戦も行ったけど、「あぅ、また負けた・・・・！」はふぅと大きく息を吐く。ミウラさんとは5戦2勝2敗1引き分けで、勝敗は拮抗。ミウラさん、一撃一撃が重いし動作も速いし、わたしの防御じゃ容易く貫かれちゃう。カウンターを主体とする格闘スタイルだけど、捌ききれない連撃や速度で来られると直撃を貰っちゃうわけで・・・。耐え切れずによろけたところで追撃によって撃沈で2敗。

（ミウラさん・・・。ストライクアーツ歴はわたしより短いみたいだけど・・・）

ミウラさんとの試合が脳裏に流れる。本当に強かった。でも負けてない。目に映るのは打倒するべき相手だけ。それに集中していると神経が研ぎ澄まされて、どこまででも、いくらででも戦える気がし

てくる。まだまだわたしは強くなれるんだって思える感覚だった。

「おーし！　全体、一度休憩を挟むぞー！」

ノーヴェからの指示に、休憩してからの６戦目をやろうと考えてたわたしとミウラさんは「ありがとうございました！」と一礼して、結界が解除された試合場の端に居るノーヴェのところまで駆け足。ミカヤ選手とミウラさんはノーヴェの隣に立って、わたし達チーム海鳴は３人の前に整列する。

「一度休憩を挟んで、相手を変えてスパーリングを行うから、しっかり休めよ！」

「「「「はいっ！」」」」

「皆さん、スポーツドリンクとタオルです！」

「やっほー！」

「手伝いに来たよ～！」

イクスと「ルールー、リヴィ！」が、人数分のスポーツドリンクのボトルが入った籠と、折り畳まれたタオルを抱えてわたし達のところへ来てくれた。イクスからタオルを貰って、ルールーやリヴィからはボトルを受け取った。屋敷の外は寒いけど、ジムの中は比較的に温かいし、激しい運動で汗も掻く。

「ありがとう、イクス、リヴィ♪」

タオルで汗を拭いてスポーツドリンクを飲みながら、「ノーヴェ、終わったよ～」ってルールーとリヴィが報告してるのを見る。なんだかんだで2人は、わたし達の冬休みが終わるまで滞在してくれることになった。

――良かったの？　カルナージに帰らなくて・・・――

――ヴィヴィオ達が大変だって言うのに、用事が済んだらバイバイ♪なんてことは出来ないでしょ？――

――そうそう。ママも、ヴィヴィオ達の為になる事をしてあげなさい、って言ってくれたし――

――それに、ヴィヴィオ達とのトレーニングも好きだし――

――トレーニングに付き合うと、もれなく強くなれる。う～ん、私たちもコーチが欲しいね～――

持ちつ持たれつな理由だったけど、わたしを心配してくれてることは確かだったからとても嬉しかった。

「ヴィヴィオさん、改めてありがとうございました！　ボクもまだまだ鍛錬が足りてないってことを気付かされました！」

「あ、いえ。わたしも気付けなかったことを多く学ばせてもらって

・・・！」

ミウラさんの年齢って確か１１歳。年上なのに敬語なんだよね・・・。フォルセティはフォルセティでタメ口利いてるし。以前の買い物でミウラさんと初めて会った後、フォルセティから、ミウラさんはそういう子だ、っていうのは聞いてたけど・・・。

「ボク、もっと強くなりたいです。・・・ボク、昔っから不器用で、ドジばかり繰り返すダメな子だったんです。だから自分のことが本当に嫌いで・・・。自分に自信を持つことも、人に褒めて貰えるようなこともなくて。だけどザフィーラ師匠やヴィータさん、八神家の皆さんと出会って、ストライクアーツを始めて・・・。初めて充実した時間を得られたんです」

それが、ミウラさんの起源みたい。わたしも「初めはママ達との約束でした」って、自分の起源をポツリポツリと話した。強くなるっていう約束から始まったわたしも、今やチームナカジマのリーダーで、一緒に頂点を目指す仲間と鍛錬の日々。当時のわたしは思いもしなかっただろうな～。

「そうなんですか～」

「格闘技を始めた理由を教え合ってるの？　あたしは、実家が春光拳っていう拳法の道場で、格闘技が生活の一部でした！」

「えっと、わたしはヴィヴィオ達と一緒に居たくて・・・。ストライクアーツを辞めちゃったら、友達関係も終わっちゃうんじゃない

かって馬鹿な考えしてたんだけど。今は楽しく一緒に頑張ってます♪」

「・・・私は、覇王流が最強の戦技だということを世界に示すためですね」

リオとコロナがそれぞれ起源を話した後にアインハルトさんへと視線を向けたから、アインハルトさんもそう話した。最後にルールーとリヴィが、「我が家が経営してるホテルアルピーノの宣伝のため！」って力説したところで、「面白そうな話をしているね」ってミカヤ選手とノーヴェがやって来た。

「あ、ミカヤ選手は・・・」

「ミカヤで構わないよ、ヴィヴィオちゃん。私が天瞳流の門を叩いたのは、ある人に憧れたからだ。自分の身の丈ほどもある刀を振るって悪を倒すその姿が、子供心に強烈な印象を与えた。私もあの人のように刀で強くなりたいと、ね」

その思い出を懐かしむように目を伏せて微笑むミカヤさん。その憧れの人って誰なのかが気になったわたし達は、「誰なのか教えてもらってもいいですか？」って聞いてみた。

「ん？　ああ、構わないよ。その人というのは・・・」

ミカヤさんがそこまで言いかけたところで、「おっす～♪」って挨拶と一緒に、「シャルさん・・・！」がジムに入ってきた。

Ｅｐｉｃａ２５－Ｂインターミドルの好敵手～Ｒｅｓｐｅｃｔ～

†††Ｓｉｄｅイクスヴェリア†††

インターミドルで有名な選手のミカヤ・シェベルさんと、ヴィヴィオ達と同じように来年が初参加となるミウラ・リナルディさんが、チームナカジマのスパーリング相手としていらっしゃった。
午前はそんなお２人が、ヴィヴィオとアインハルトとスパーリングをしているのを私は見守っていましたが・・・。ミカヤさんとミウラさんはとてもお強く、ヴィヴィオは５戦２勝２敗１引き分け、アインハルトは３戦０勝という結果でしたね。

「おっす～♪」

休憩中ミカヤさんが天瞳流を始めたキッカケが、ある剣士に憧れたから、という話をしているところに更衣室のドアから「シャル！」が姿を見せた。

「ミカヤ選手とミウラ、もう来てるよね～・・・っと、おぉ居た居た！」

シャルが手を振りながら私たちの元へと歩み寄ってきました。するとミカヤさんがスッととても綺麗な所作で立ち上がりますと、「お会いできて光栄です、剣神殿」と一礼しました。シャルを見詰めるその瞳は、先ほどまで以上にギラギラと輝いていて・・・。

（ミカヤさんの憧れの刀剣士とはもしや・・・）

ミウラさんも慌てて立ち上がって、「きょ、今日はお招きありがとうございます！」勢いよくお辞儀しました。私たちも挨拶するために立ち上がろうとしたのですが、シャルは「休憩中でしょ？　座ったままで良いよ♪」と微笑み、ミカヤさんやミウラさんにも座り直すように促してから、私たちの側に正座しました。

「お疲れ様です、シャルさん。今日もジムを使わせてもらってます！」

「ん。この家に居る間はもちろん、今後も好きなように使ってもらっていいから。さて。ミカヤ選手、ミウラ。このような遠いところまで来てもらってありがとう」

「あ、いえ！　そんな！　近くのステーションまでの交通費は出してもらいましたし！　この屋敷まで車で送迎してもらいましたし！　それにヴィヴィオさん達との試合も組んでもらえて、こちらこそありがとうございますです！」

感謝を述べて一礼したシャルに、ミウラさんが慌ててそう言いました。フライハイト家はお客様に誠心誠意の御持て成しをするのです、えっへん。

「私も、ミウラちゃんと同じ意見ですよ、騎士イリス。ここまでの道のりは快適でしたし、私個人としても、あなたとこうしてお会い出来るためとなれば、距離など関係ありません」

「そっか。今後ともチームナカジマとのスパーリングに付き合ってくれると嬉しいな。・・・じゃ、ミカヤ選手。時間もそう無いし、早速始めようか？　魔力出力とある程度の魔法不使用は一応のハンデとして制限かけるけど、それ以外は全力で行くからそのつもりでね」

「はい、それで構いません。よろしくお願いします。・・・ヴィヴィオちゃん達、先ほどの問いの答えだ。私の憧れの剣士、それが彼女、騎士イリスだ。管理局においては最強、騎士団においてはＡ級１位という、まさしく私が追い求める剣士なんだ」

シャルとミカヤさんが立ち上がり、試合場の中央へと歩いていきました。目を白黒させているヴィヴィオ達に、ノーヴェさんが「ミカヤちゃんへの報酬がこれだ」と言い、空間コンソールを展開して結界を円形に展開しました。それは先日の買い物の際に見た、公式リングと同じ広さです。

「キルシュブリューテ、セットアップ」

シャルが長刀型のアームドデバイス・"キルシュブリューテ"を起動させ、騎士服へと変身しました。ミカヤさんもまた、刀型のデバイス・「晴嵐」を起動させて防護服へと変身完了です。"晴嵐"は長いものが１本、短いものが１本の２刀１組ですね。２刀斬撃には気を付けないといけません。

「試合ルールはインターミドル公式ＤＳＡＡルールを採用します。ライフポイントは１５０００。シャルさんがお昼休み中に帰ってき

てるということもあって、３分３ラウンドにします。クラッシュエミュレートも発生するので注意を」

ですよね。今日は１日お仕事だと聞いていたので、どうして家に居るのかちょっと疑問でしたけど。ノーヴェさんが「では、正々堂々の勝負を。レディ・・・」と右腕を上げますと、シャルとミカヤさんが共に構えを取りました。

（シャルは珍しく鞘を構築したままですね。二刀流には二刀流なのでしょうか・・・？）

右手には"キルシュブリューテ"を、左手には鞘を順手（ミカヤさんは逆手ですが）で握っています。普段のシャルは鞘を使いませんから、私のこれまでに知っている剣技とは違うものを見られるかもしれません。ドキドキしながらノーヴェさんが腕を振り下ろすその瞬間を待つ。

「ファイト！」

ノーヴェさんが腕を振り下ろし、いざ試合開始です。

†††Ｓｉｄｅイクスヴェリア⇒ヴィヴィオ†††

ヴィクターさんや番長に続いて、まさかのミカヤさんともお知り合いになれた今日この頃。八神道場のミウラさんともちゃんと知り合えた。初めてはお互いに自己紹介だけしてすぐにお別れしちゃったし。

（そんなわたしはミウラさんとスパークリング。魔法なしとはいえ、ううん、なしだからこその今の力量を思い知った）

ミカヤさんはアインハルトさんとのスパーリングをする為に、ノーヴェに依頼されて来てくれたんだけど、今後はわたしやコロナ、リオともスパーリングの相手をしていただけるってお話。ミカヤさんを紹介してくれたヴィクターさん達には感謝しかない。

（そんなミカヤさんが今、インターミドルと同じＤＳＡＡルールでシャルさんと試合することに）

ミカヤさんが剣士になったのはシャルさんに憧れたみたいで、そんなシャルさんと剣を交えることも、わたし達とのスパーリングを引き受けてくれた理由でもあった。わたし達の目の前で臨戦態勢で対峙してる２人は、ノーヴェの試合開始の合図をジッと待ってる。わたし達の方が緊張しちゃうような静寂の中・・・

「ファイト！」

ノーヴェが腕を振り下ろした。最強クラスの剣騎士のシャルさんと、インターミドルで都市本戦３位まで上り詰めたミカヤさんとの試合が始まったんだけど・・・。２人はその場から動かない。わたし達が固唾を呑んで見守っていると、２人は互いの動きに注意しつつすり足で間合いを計り始めた。

（間合いで言えば圧倒的にシャルさんが優位だけど・・・）

"キルシュブリューテ"の全体的な長さはシャルの身長くらいあるし、何より中遠距離の魔法を使える（それを制限したのか判らないけど）。対するミカヤさんの"晴嵐"は、目測で刃長６０ｃｍちょっと。シャルさんに一撃入れるには、その間合いをどうにかしないといけない。見学者であるわたし達の方が緊張している中、試合が動いた。

「ふっ・・・！」

「・・・っ！」

ダンッ！とわざとらしく大きな音を立てて一足飛びで接近を試みたシャルさん。ミカヤさんもまた抜刀のためにグッと腰を落として迎撃に入る準備。だけどシャルさんは、自分に有利なはずの"キルシュブリューテ"の間合いに入っても攻撃しない。

――天瞳流抜刀居合――

「水月！」

間合いにシャルさんが入ったことで、ミカヤさんはとてつもない速さで"晴嵐"を鞘から抜き放った。

――閃駆――

「っ・・・！？」

完全に捉えた。そう見えたけど"晴嵐"は空を切った。シャルさんは一瞬でミカヤさんの背後へと移動していて、振り上げていた"キルシュブリューテ"を振り下ろした。完全に間合いに中に居るミカヤさんは、「くっ・・・」右腕を振るった勢いのまま右側へと跳んで直撃を避けた。でも左側の袴の裾がザックリ斬られちゃいました。

「ふむふむ。この程度の速さなら避けられるわけだ」

「いえ。完全に運ですよ。唐竹、袈裟切り、逆袈裟、右薙ぎ、左薙ぎ、右切り上げ、左切り上げ、逆風、刺突。この9つの太刀筋のどれか1つが正解で、避け方もまた1つが正解でした。本当に運が良かっただけです」

そう言ったシャルさんは右肩に担いだ"キルシュブリューテ"の峰で肩をトントン叩いて、"晴嵐"を鞘に収めてもう一度抜刀の構えを取ったミカヤさんがそう返した。最初と同じようにすり足で間合いを計り始める。シャルさんはジリジリと距離を詰めてくけど、ミカヤさんは待ちの構えでその場から動こうとしない。

「シャルさん相手に先手で仕掛けることに迷ってるな、ミカヤちゃん」

「シャルは現シュベーアトパラディンのシスタープラダマンテに負け続けてはいますが、その腕はミカヤさんが仰っていた通り次元世界最強クラスです。先手の危うさを感じ取るのは正解かと思います」

ノーヴェとイクスが試合展開を見て今の攻防について話し合ってる中、「なら次は抜刀を阻止するから、対応してみて」ってシャルさんが宣言した。

「天瞳流の抜刀に不発などありえません。が、あなたならそれを可能にしてしまうかも、という恐ろしさがありますね」

シャルさんが歩き出して、少しずつ速さを上げていって最後にはダッシュ。迎撃のためにミカヤさんが抜刀の構えを取る。そして"晴嵐"の間合いに入ったシャルさんを斬るために・・・

「水げ――っ！？」

ミカヤさんは抜刀しようとした。でも抜き放たれることはなかった。シャルさんが"キルシュブリューテ"の切っ先を"晴嵐"の柄の先端に押し付けて、鞘から抜けなくしたからだ。ガキィン！と甲高い音がして、一切の動きが無くなった。と思えば、驚きで目を見開いてるミカヤさんとは違って、シャルさんは左手に持ってる鞘を振り上げて「そいっ！」と、ミカヤさんの右肩めがけて振り下ろした。

「っくぅ・・・！」

今度は避け切れなかったミカヤさんは直撃を受けて、ガクッと膝を折った。でもシャルさんのターンは終わらない。引いた鞘を今度はお腹へ向かって突き。その一撃を避けたり防いだり出来る状態じゃなかったミカヤさんは「ぐふっ！？」まともに受けて、その衝撃から足が宙に浮いた。

「風牙烈風刃！」

そこに追撃。シャルさんが"キルシュブリューテ"を振り上げて、ミカヤさんに暴風の壁を叩き付けた。宙に居るミカヤさんにはどうすることも出来ず、そのまま結界を通過して試合場の壁に突っ込んだ。

「長柄の武器の使い手の中には、こういう手段であなたの抜刀をキャンセルしてくるかもってことを、頭の片隅にでも置いておくと良いかもよ？」

「ぅく・・・。はい、しっかりと体験させてもらいました。しかし手加減された連撃で４桁も減らされるとは」

ライフが１５０００から１２８００まで減ったミカヤさんは、しっかりとした足取りでリングへと戻ってきた。クラッシュエミュレートは幸い受けてなかった。それがミカヤさんが、シャルさんに手加減されたって考えるポイントなのかも。

「鞘での打撃だからね。骨を砕くことも出来たけど、１ラウンド目の初っ端でそんなつまらない真似は出来ないでしょ？　確実に墜とすのは最終ラウンドよ」

「恐ろしい宣言です・・・ね！」

今度はミカヤさんから攻めた。タッタッタと軽い足音でシャルさん

のところへ駆け出したミカヤさんは、やはり抜刀の構えを取ったまま。対するシャルさんは、右手の〝キルシュブリューテ〟を降ろしたままで、左手の鞘を突き出した構えだ。

「ふっ！」

ミカヤさんがさらに速度を上げて一気にシャルさんへと跳び込んだ。迎撃が来る前にシャルさんの懐奥に入り込んで、〝キルシュブリューテ〟や鞘を触れないようにするためだと思う。わたしだってそうすると思うから。

「む」

――天瞳流抜刀居合い――

見事に〝キルシュブリューテ〟と鞘の間、シャルさんの懐に跳び込めたミカヤさんは「天月・霞！」って、切り上げの抜刀技を繰り出した。シャルさんは左足をスッと後ろに下げて、ミカヤさんに対して横に体を向ける半身の構えを取ることで躱した。さらにそのまま反時計回りに一回転しての「せいやっ！」鞘による打撃をミカヤさんの背中に叩き付けた。

「かはっ！？」

その一撃で再び結界の外、本番ではリングの外にあたる場所まで吹っ飛ばされて床に落下した。今のでライフは１０１５０ポイントまで減少。クラッシュエミュレートは、今回も発生してない。つまり

シャルさんの手加減が活きてる。

「すごい・・・」

「都市本戦3位まで上り詰めた実力者でも、シャルさんには届かないということですね・・・」

「ボク、シグナムさんに聞いたことありますけど、シグナムさんでもシャルさんに勝ち越すのは難しいそうです」

「教会騎士団に属する剣騎士の中で2番目の実力だしね・・・」

ミカヤさんだって弱いわけじゃない。これまで見てきた斬撃は、わたしでもなんとか見切れてるけど、シャルさんみたく避けるにはまだ難しいレベルだ。

「シャルロッテ様直伝、龍巻閃。・・・抜刀術は一撃必倒の威力を出せる、刀使いの剣士にとっては必殺技のようなもの。でも抜刀後は基本的に隙だらけ。そこを突かれたら、天瞳流の師範代であるあなたでもその様よ。でも抜刀の速度は本当に素晴らしい。将来が本当に楽しみ♪」

「はぁはぁはぁ・・・。そこまで賞賛してもらえると、心底嬉しいですよ」

結界を抜けてシャルさんのところにまで戻ってきたミカヤさんは、それでも"晴嵐"を鞘に収めての抜刀の構えを取る。するとシャル

さんも胸の前に水平に掲げた"キルシュブリューテ"を鞘に収めた。

「キルシュブリューテ、屋内戦用形態（クルツシュベーアト・フォルム）」

≪うーっす≫

"キルシュブリューテ"が短くなって、ミカヤさんの"晴嵐"ほどの長さになった。さらにシャルさんは、ミカヤさんと同じように抜刀の構えを取った。

「6千年以上と続くフライハイトの剣には、魔法はあっても天瞳流みたいな型などの技は存在しない。強大な魔法を刀に付加して、その一撃必殺を以って相手を叩き伏せるから。だから剣術を使う機会なんて早々ないけど。一応はA級の1位だからね。剣術には剣術で対抗させてもらおうか」

そう言ったシャルさんに、瞳をギラリと輝かせたミカヤさんはニッと笑って「ぜひに！」って魔力を迸らせた。でもここで、ビィー！ってブザーが鳴った。1ラウンド目の終了を知らせる合図だ。ガクッと肩を落とすミカヤさん。シャルさんも「せっかく良いところだったのに」って溜息を吐いて、空間コンソールを展開。いくらか操作して結界を解除した。

「お疲れ様です、シャル」

「ありがとう、イクス」

「お疲れ、ミカヤちゃん」

「ありがとう、ナカジマちゃん」

イクスがシャルさんに、ノーヴェがミカヤさんにタオルとスポーツドリンクを手渡した。シャルさんがスポーツドリンクを飲んでるところに、「シャル。時間はまだ大丈夫ですか？」ってイクスが尋ねた。昼休みだからずっとは居られないし、シャルさんは部隊長でもあるから。

「大丈夫、大丈夫。わたし１人が抜けたところで問題ないメンバーが揃ってるし、時間だってあと２０分も余裕があるし。それに今日の警邏担当エリアはこの付近だからね。心配してくれてありがとう、イクス♪」

「あ、はいっ♪」

シャルさんに頭を撫でられて、イクスは気持ちよさそうに目を細めたんだけど、わたし達の視線に気付いて「ハッ！　これは、その、違うです！」って顔を真っ赤にして、シャルさんの手から頭を逸らした。

「イクス。別にそんな恥ずかしがることないと思うけど？」

「そうそう♪　姉妹のスキンシップなんだから恥ずかしがることないじゃん」

シャルさんがイクスを背中側から抱きしめて、イクスの頭に顎を乗せた上で両手で頭の横を撫で始めて、イクスは「あぅ・・・」さらに顔を赤くして俯いた。

「ところで、ルールーちゃんとリヴィちゃんは、チームナカジマではなかったんだよね？」

「うん。チームホテル・アルピーノ！　チームナカジマの合宿先にして今後のカルナージの宿泊施設として名を馳せる予定の♪」

「ホテル・アルピーノの広報班兼従業員（予定）！」

ルールーとリヴィがミカヤさんの問いに、立ち上がってポーズを取りながらそう答えた。そんな2人に「君たちとはスパーリングしなくていいのかい？」っ聞くと、2人はノーヴェを見た。チームナカジマのスパーリングの相手という理由で来てくれたミカヤさんだしね・・・。

「ミカヤちゃんがＯＫなら、あたしからは何も言うことはないよ。ただ、リヴィアは都市本戦レベルの強さだと考えてる。それはシャルさん達も同意してるよ」

「膨大な魔力に強烈な打撃と射砲撃、それプラスにスキルを併用したスタイルは、割と本気でヤバイ」

ノーヴェとシャルさんがリヴィを見ながらそう評した。ルシルさんも以前、砲撃番長（バスターヘッド）ハリー・トライベッカ選手の試合映像を観た上で、

リヴィは番長の上位互換だって言ってたし。

「ほう。それはまた胸の躍る試合が出来そうだ。今日は15時まで暇がある。リヴィちゃん、午後からでも一度手合わせをお願い出来ないか？」

「おお！　もちろんです！」

ミカヤさんから直々にお願いされるなんて羨ましいな～なんて思ってると、「インターバル終了。シャルさん、ミカヤちゃん」ノーヴェがそう知らせた。シャルさんとミカヤさんが立ち上がって、試合場の中央へと進み出す。

「結界を展開します」

空間コンソールを操作して結界を再展開したノーヴェは、「それでは第2ラウンドを開始します。レディ・・・」そう言って右腕を上げた。シャルさんもミカヤさんも抜刀の構えで対峙してる。さっきまでの穏やかだった空気が張り詰めてた。

「ファイト！」

ノーヴェが腕を振り下ろしたと同時・・・

――天瞳流抜刀居合い――

「天瞳ど――ぐうっ！」

ミカヤさんの抜刀は決して遅くない。でもそれ以上にシャルさんの抜刀が速過ぎた。ミカヤさんの"晴嵐"が半分ほど抜かれる頃には、すでに"キルシュブリューテ"が抜き放たれた後だった。鞘に半分ほど収まったままの"晴嵐"で、シャルさんの斬撃を防いだミカヤさん。右腕を上に向かって大きく弾かれたミカヤさんのがら空きな右脇腹へと、「双龍閃！」左手に持つ鞘を打ち込んだ。

「づっ・・・く・・・！」

薙ぎ払われたミカヤさんだったけど、両足でしっかりと着地してダウン判定を貰わずに済ませた。そして床を蹴ってシャルさんへと突っ込む。鞘に収め直した"晴嵐"の柄を右手で握り締めるミカヤさんは、同じように鞘へ収め直した"キルシュブリューテ"の柄を握るシャルさんの間合いへと入った。

「天瞳・・・」

抜き放たれた"晴嵐"の一撃を、シャルさんは鞘に収まったままの"キルシュブリューテ"で迎撃した。お互いにデバイスを弾かれたけど、ミカヤさんはすぐに「漣月！」と斬り返しを振るった。その一撃をシャルさんは、鞘に収まったままの"キルシュブリューテ"の刃先を下にして立てて、盾のように構えて防御。

「双龍閃・雷！」

"晴嵐"を鞘で防いだと同時に"キルシュブリューテ"を抜き放っ

て、ミカヤさんの左肩目掛けて峰側での打撃を打ち込もうとしたけど、「まだまだ！」ミカヤさんは左手で、もう1本の短い刀を逆手で抜いて、シャルさんの打撃を防いだ。

「おおう！」

「ふっ・・・！！」

仕切り直しということみたいで一旦距離を取ったシャルさんとミカヤさん。

「早々打たれっぱなしになるつもりは・・・ありません！」

「そうでなくちゃ・・・ね！」

同時に駆け出して、シャルさんは"キルシュブリューテ"を、ミカヤさんは"晴嵐"を振るって激しい攻防を繰り広げる。でもやっぱりシャルさんが上手で、少しずつだけど確実にミカヤさんのライフを削っていってる。そんな舞ってるような綺麗な闘いに見惚れていると、メールの着信メロディが鳴った。

「あ、やべ！　あたしのだ・・・！」

ノーヴェが慌てて"ジェットエッジ"をポケットから取り出して、「ヴィクターからか？」着信メロディーを止めさせた。ヴィクターさんからのメールらしくて、内容は見えないけどノーヴェの表情からして何か重要な内容のメールみたい。

「アインハルト。ヴィクターが、ジークリンデ・エレミアを確保したようだ。いつ会えるか？と聞いてきたんだが、どうする？」

一昨日のインターミドルで世界最強の１０代女子の称号を得た、ジークリンデ選手との会談の予定合わせが、メールの内容だった。

Ｅｐｉｃａ２５－Ｃインターミドルの好敵手～Ｓｅｔｔｌｅｍｅｎｔ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

ジークリンデ・エレミア。私たちチームナカジマが目指すインターミドルチャンピオンシップ。その一昨年の大会にて世界代表戦を制し、実質１０代女子最強の称号を得た格闘家。そして、私の先祖クラウスと繋がりのある、黒のエレミアの子孫でもある。ヴィクターさんから、黒のエレミアについて憶えておくように、と言われたので、あの日からクラウスの記憶を探り、ジークリンデ選手の試合映像を何度も見た結果・・・。

（昨夜ようやく思い出しました）

ヴィルフリッド・エレミア。愛称はリッド。元はオリヴィエ殿下の友人として聖王家の治めるアウストラシアに招かれ、後にオリヴィエ殿下が留学と言う体でシュトゥラに訪れたことで、彼女もまたシュトラへと顔を見せるようになった流浪の民エレミアの１人。

（オリヴィエ殿下が幼い頃から、そしてゆりかごに搭乗する王として召還されるまでの数年を、共に過ごしていました）

そうは言ってもフラリと半年ほど姿を消すなんてこともあったようですが、その関係は実に良好のようでした。クラウスはリッドのことをオーディンさんにも紹介したかったようですが、終ぞ叶うこと

はなかった・・・。

「あの、明日のトレーニングの予定はどうなのでしょうか？」

「明日は、今年・・・じゃねぇな。去年のインターミドルで都市本戦８位入賞のエルス・タスミン選手に午前中お呼びして、バインドの怖さをお前らに叩き込ませる予定だ」

ヴィヴィオさん達が「おお！」と目を輝かせる。皆さんにとって上位選手は憧れの存在ですから、お会い出来ることが嬉しいようです。私としても繋がれぬ拳、アンチェインナックルという対バインドの打ち方を覚えましたが、確実に打てるような錬度ではないので、バインドを駆使する相手とのスパーリングは願ってもいない話です。午前中となれば、午後は空いているのですよね。

「あの・・・」

「あ、悪い、アインハルト。２ラウンド目が終わる」

ノーヴェさんが展開した空間コンソールを操作し、試合中断のブザーを鳴らしました。シャルさんとミカヤさんが互いに鞘へとデバイスを収め、解除された結界――試合場からこちらへと歩いてきました。

「ふぅ、私のような付け焼刃の剣術じゃ本格的な技には苦戦するな～。ミカヤちゃん、強いね～」

「何を仰る、シャルさん。あなたから1ポイントも奪えていない。正直ここまで差があるとは。心が折れそうですよ」

知らぬ間に呼び方が変わっていたお2人に、ノーヴェさんとイクスさんが先ほどのインターバル同様にタオルとスポーツドリンクを手渡しました。

「さっきちょろっと聞こえてきたんだけど、ヴィクトーリアがジークリンデを確保したんだって？」

あんな激しい剣戟の音の中で、ノーヴェさんの声を聞き取れたことに驚きです。

「ほう。まさかジークともスパーリングの約束をしていたのかい？」

「あーいや。そういうわけじゃないんだけどさ。ご先祖様関連でヴィクターが会談をセッティングしてくれることになったわけなんだが・・・。どうだ、アインハルト。エレミアの記憶について何か思い出したか？」

ノーヴェさんにそう聞かれた私は、昨夜思い出したリッドについての話をした。すると「やっぱエレミアの血族は遺伝なのかね～」とシャルさんが苦笑しました。

「と言いますと？」

「ジークリンデも、いつの間にかフラっといなくなることが多いみ

たいね。最近もまた失踪してるみたいだし。確保したって話だから、探してくれたんだろうね」

「シャルさん、何か相応しいっすね。ジークリンデ選手のこと知ってるんですか？」

「ザンクト・オルフェンの評議会、つまりフライハイト家と六家の役割には、古代ベルカより続く一族の監視というのがあるからね。エレミア一族についても昔から監視はしてるの。ジークリンデとは、あの子が幼い頃に何度か会った程度ね」

改めてシャルさんという、ベルカ関係にお強い方と出会えて良かった。ですが「私とジークリンデ選手が会ったとしても、何を話せばいいのか・・・」と私は困惑していることを伝えた。

「あー、そうですよね。アインハルトさんは覇王イングヴァルトの記憶を受け継いでいるけど、ジークリンデ選手もリッドさん？の記憶を受け継いでいるとは限りませんよね」

ヴィヴィオさんの言うとおりです。記憶を辿っての昔話というわけにもいかないですし。クラウスとリッドは友人関係ではありましたが、話に花を咲かせるほどの饒舌ではありませんでした。

「ジークリンデは、アインハルトのように記憶をそっくりそのまま受け継いではいないけど、一応は歴代・・・およそ５００年分のエレミアの戦闘の経験と記憶を受け継いでる。彼女もまた、アインハルトと同じ、先祖の記憶という鎖に縛られて過去と未来に迷いなが

ら現在を生きているの」

ジークリンデ選手も、私と同じ・・・。それを聞いて話をしてみたくなった。先祖の記憶とどう向き合って過ごしてきたのか、聞いてみたい。ギュッと両拳を握り締めていると、「ヴィヴィオさん？イクスさん？」のお2人がそれぞれ私の拳に触れました。

「アインハルトさん」「アインハルト」

「大丈夫です。ノーヴェさん、明日の午後にお会い出来ないか、ヴィクターさんにお伝えください」

「おう。判った。っと、シャルさん、ミカヤちゃん。時間です」

「ん」「ああ」

インターバルを終え、最終ラウンドのために試合場の中央へと向かうシャルさんとミカヤさん。ノーヴェさんが結界を再展開して、試合開始の号令のために「レディー・・・」右腕を掲げます。

「ファイト！」

ノーヴェさんが腕を振り下ろしましたが、互いに抜刀の構えを取っていたお2人はその場から動かず。

「最終ラウンド3分。剣神イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトの魔法で相手をするよ」

≪純戦闘形態(ヴィルクリヒ・フォルム)≫

"キルシュブリューテ"が本来の長さへと戻り、鞘ももう無用だと言うように構築を解きました。

「ここからが本領・・・というわけですか」

「ええ。そういうわけよ」

シャルさんは右手に握る"キルシュブリューテ"をダラリと下げ、ミカヤさんは天瞳流としての抜刀の構え。先ほどまではすり足での移動でしたが、シャルさんは散歩するかのように軽やかな足取りでミカヤさんの元へと間合いを詰めていきます。それだけなのに今のシャルさんが恐ろしい。拳を交えてみたいという思いと、戦いたくないという思いが半々。

「光牙・・・」

"キルシュブリューテ"の刀身に魔力付加が成される。魔力出力の制限が掛けられているとはいえ、その濃度はかなり高い。直撃を受けることは撃墜と同義と思う。

――閃駆――

シャルさんの姿が消えたかのように錯覚し、その姿を視認できたのはミカヤさんの目の前に現れてから。

「月閃刃・・・！」

シャルさんの繰り出す斬撃は縦一線の振り上げ。

「水月ッ！！」

ミカヤさんは僅かに遅れての抜刀。それでも僅差で迎撃に間に合いましたが、一切の抵抗も出来ずに"晴嵐"の刀身が真っ二つにされてしまいました。叩き折るではなく切断する。その恐ろしいほどまでの切れ味に全身が総毛立つ。ミカヤさんも目を大きく見開き、驚愕に動きを止めます。

「ほら、ぼさっとしない」

「っ！！」

振り下ろしに切り替えられたシャルさんの一撃を、ミカヤさんは刀身が半分になってしまっている"晴嵐"で受け止め、鍔迫り合いに持ち込みました。そして左手で短い方の"晴嵐"を逆手に抜き放ち、シャルさんの腹部へと横一文字に斬り払うのですが、キィン！と甲高い音を立てて弾かれた。

「バリア魔法・・・！？」

シャルさんの腹部限定に真紅に輝く魔力障壁が展開されており、ミカヤさんの一撃を完璧に防御。鍔迫り合い中で"晴嵐"より左手を

離してしまったことで、「くっ・・・！」ミカヤさんが押し負けて、肩膝立ち状態になってしまいました。押し返そうと全力で"晴嵐"を握るミカヤさんでしたが、シャルさんが突然引いたことで「ぅあ！？」前のめりに。

「炎牙月閃刃！」

「っ・・・！！」

シャルさんは炎を纏う"キルシュブリューテ"による右薙ぎを繰り出し、ミカヤさんは斬撃と爆発の両方のダメージを受け、一気にライフを0にまで減らされてしまいました。

「そこまで！　試合終了！」

コンソールを操作してクラッシュエミュレーターや結界を解除したノーヴェさん。シャルさんは大の字で倒れているミカヤさんの元へと歩み寄り、「ちょっと大人気なかったかな？」と尋ねながら右手を差し出しました。

「いえ。本物の騎士の実力を、この身に受けることが出来たのですから・・・。はあ、これが最強クラス・・・。いろいろとハンデを貰った上での敗北か・・・」

シャルさんの手を取り、立ち上がったミカヤさんは「私もまだまだだな」と一息吐きました。お2人はデバイスと防護服を解除して私たちの元へと戻り、最後の休憩へ。

「ところでシャルさん。もしジークと試合するとしたら、あなたやあなたの騎士隊は彼女に勝てますか？」

「勝てるよ。ルールありでもなしでもね。ジークリンデの試合映像を観た限り、私やルミナといった騎士は真っ向からの正攻法でも十分勝てる。まぁ魔力出力制限なしの条件付だけど。ルシルの場合は、彼に勝とうと考える時点で間違い。彼ならジークリンデを接近させることなく勝つだろうね。半径２ｋｍ圏内をその場から動かずに殲滅できるから。何百何千発の射撃・砲撃、広範囲攻撃にバインド、防御魔法を無傷に近い状態で突破、んでルシルのフィールドを貫通できるだけの攻撃を繰り出す。その条件でようやく五分五分だしね。ルシルに勝ちたいならハンデ増し増しじゃないと無理」

クラウスの記憶どおりのオーディンさんの魔法をルシリオンさんが受け継いでいるとなれば、確かに勝つことなんて不可能に近いと思います。魔神オーディンとは、それほどまでに強大な魔導騎士でしたから。

「ジークには鉄腕、エレミアの真髄とも呼ばれる一撃がありますが、それについては？」

黒のエレミア。かの一族はベルカ最古の戦場格技、人体破壊技術においての絶対者。その一撃は例外なく削り、抉り、確実な破壊をもたらす。今年のインターミドルにて、ミカヤさんはその一撃を受けて敗北しました。その映像を観ていながら思い出せなかったことに私は呆気にとられました。

「鉄腕の正体は、魔法分類で言えばイレイザーと呼ばれる純粋魔力攻撃。破壊力は凄まじいけど、それ以上の魔力による攻撃や防御でどうにか出来る。ルシルにいたっては魔力吸収で完全に無効化した後、その魔力分を追加した反撃で墜としにかかってくるから、近接戦に持ち込めてもどの道近接カウンターの手痛いしっぺ返しを食らうだけ。ルシルがジークリンデに負ける要素は無い」

「なるほどです。騎士ルシリオンとも一度剣を交えたくなりました」

「やめておいた方がいいと思うよ？　変にトラウマ刻んでくるだろうしね」

シャルさんがそう言って苦笑しているところに、「お邪魔～！」と試合場へと響く声。そちらに目を向けると、修道服を着た少女がお2人、ここ試合場へと入ってきました。

「セイン！　それにシャンテも！」

ヴィヴィオさんが大きく手を振りました。セインさんは、フライハイト家の四女でオットーさんやディードさん、イクスさんの姉であり、ルーツィアさんやルーツィエさん、シャルさんの妹にあたります。もう1人のシャンテさんという方については知りません。

「シャル！　お昼のサンドイッチ作ってきたよ～！　自信作だから食べて食べて～♪」

「おお、ありがとう、セイン！　シャンテもいらっしゃい！」

「は、はいっ！　お邪魔してます、騎士シャルロッテ！」

「あはは♪　シャンテ、すごい緊張してる～♪」

シャルさんに微笑みかけられたシャンテさんはビシッと佇まいを直して一礼したのですが、その様子がヴィヴィオさんにとってはおかしなものだったらしく、楽しそうに笑いました。そんなヴィヴィオさんに「しょうがないじゃん！」と、シャンテさんは反論しました。

「別にそんなに緊張することないのに。おいおい慣れていって、シャンテ・・・んで、今日はどうしたの？」

「シ、シスターシャッハが、いつも自分だけとの手合わせじゃマンネリになるっていう話で、チームナカジマのみんなと手合わせしてもらってきなさい、と・・・」

「なるほど。まぁいろんな種類の選手と試合した方が成長は出来るだろうね」

「そういうわけだからさ、ノーヴェ。うちのシャンテも時々でいいからスパーリングの相手に指名してやってよ」

セインさん手作りのサンドイッチを頬張るシャルさんや、ポットから湯呑みにお茶を注いでるセインさんが、腕を組んで考えているノーヴェさんを見ました。

「ヴィヴィオ、コロナ、リオ、アインハルト。お前らはそれでいいか？」

「うんっ。シャンテの魔法もすごいし、わたし達のレベルアップになるのは間違いないと思うよ」

「へえ。シャンテさんってどんな魔法使うの？」

私も気になっていたことをリオさんが代わりに聞いてくれました。ヴィヴィオさんは答える前にシャンテさんへと視線を向け、自分が話してもいいのかどうかを確認。するとシャンテさんはニッと笑みを浮かべ・・・

「重奏（アンサンブル）♪」

ベルカ魔法陣を足元に展開、魔法を発動しました。すると「おお！」リオさんが歓声を上げました。シャンテさんの姿が2人へと増えていたからです。この魔法は、「幻術・・・」ですか。確かに幻術使いとの勉強になります。

†††Ｓｉｄｅアインハルト⇒フォルセティ†††

「セイン、ごちそうさま。カツサンド、とっても美味しかったよ♪
さてと。んじゃ、わたしはそろそろ仕事に戻るよ。ミカヤちゃん、ミウラ、シャンテ、どうぞゆっくりしていってね♪」

「はい、ありがとうございます」

「「ありがとうございます！」」

「オットー。シャルをお見送りしてきます」

「判った。シャル、いってらっしゃいませ」

「ん、ありがと、オットー」

シャルさんとディードが更衣室へと向かうのを「いってらっしゃーい！」と手を振って見送った僕たち。

「よし。まずは・・・ミカヤちゃん。晴嵐はどうだろ？」

「ああ、晴嵐のリカバリー機能からしてあと2分くらい必要だ。まぁ試合用の竹刀や木刀も持ってきているから、そちらを使おう」

「判った。じゃあアインハルトは、さっきと同じようにミカヤちゃんとのスパーリング。ヴィヴィオはリヴィアと、リオはミウラと、コロナはルーテシア、シャンテは・・・フォルセティ、お前が相手をしてやってくれ。シャンテはシスターシャッハと武器戦闘のトレーニングをしてるだろうし、お前は徒手格闘で攻めてやれ」

ノーヴェからの指示に僕が静かに頷いてると、シャンテが「そういやフォルセティとは初めてだっけ？」って顔を覗き込んできた。シャンテは元は不良みたいな子で、シスターシャッハにボコられて改

心。今じゃシスターシャッハの弟子として、"ヴィンデルシャフト"と似たトンファーみたいな双剣型デバイス・"ファンタズマ"を振るう騎士見習いだ。

「うん。いつもはヴィヴィオと軽い手合わせ程度だったでしょ、シャンテ」

「まあそうだね。・・・ま、相手にとって不足なし。デバイス、魔法ありでやる？　あたし的にはその方が楽しめるんだけど」

「僕もそれでいいよ。一応ノーヴェから徒手空拳で相手するように言われてるから、こっちは素手で行くけど」

「フォルセティがそれでいいなら、それで行こう。ファンタズマ、奏でるよ！」

シャンテが"ファンタズマ"を起動させて防護服へと変身したんだけど、「シャンテって痴女なの？」って僕は聞いた。

「そんなわけないじゃん。そんな真似したらシスターシャッハ達からドきついお仕置きされるんだし」

「だったらその防護服のデザイン変えた方がいいと思う」

シャンテはシスターなのに、乳房の下半分が見えちゃってるというか見せてる感じで、ちょっと目のやり場に困る。そういえば他のインターミドル選手たちの防護服も割りと目のやり場に困るデザイン。

ジークリンデ選手とか番長とか。胸元を出してたりお腹を出してたり。恥じらいは無いんだろうか・・・。

（っと！　変なこと考えてないでしっかりしないと！）

かぶりを振って、「そうかな～？　何も言われないからな～」って自分の防護服を見るシャンテをしっかり見詰める。意識を戦闘モードへと切り替えて、お父さんとすずかさん謹製のアームドデバイス・"エマナティオ"の待機モードであるクロス・フローリー型ペンダントを胸元から取り出す。

「エマナティオ、出撃だ」

≪応！≫

ウィングカラーシャツ、ラペルドベスト、スラックス、フード付ロングコート（袖に腕を通さずに羽織るだけ）、そして首にクラバットを巻き、腰にマガジンホルダーの付いたベルトを2つ巻いたスタイルの防護服に変身する。

「フェアタイディグング・グリート」

防御魔力で両腕と両足に、不可視の籠手と脚甲を展開。これでシャンテの"ファンタズマ"を素手で防げることが出来るようになった。ノーヴェが結界を張って、展開された空間モニターにシグナルが表示される。3つのランプに赤が点っていって、3つ点いた後に青へと変わる。それが試合開始の合図だ。

「重奏（アンサンブル）・・・三重奏（トリオ）！」

シャンテが幻術を使って3分身となる。2人は幻だけど、1人はちゃんと本物だ。それを見つけて打撃を打ち込む。格闘スタイルで闘うように言われたから、こちらから仕掛けないといけないよねやっぱり。軸足に力を込めて、「行くよ！」床を蹴ってシャンテへ突っ込む。

「へっへーん！　イノシシみたいに突っ込んで来ても、あたしのすっごい疾さには及ばないよ！」

1人のシャンテ（めんどいからシャンテAでいいや）目掛けて突進して、右ストレートを打ち込もうとした。シャンテAはジャンプして躱して、BとCは僕の左右を通り過ぎて背後に回ってきた。右後方に移動したC目掛けて上段後ろ回し蹴りを繰り出す。Cは"ファンタズマ"の腹で受け止めたけど、踏ん張りきれずに蹴っ飛ばされた。左後方に移動したBと、頭上から落ちてくるAが「うりゃあああ！」と"ファンタズマ"を振るった。

「せいっ！」

頭上のAからの一撃は右前腕で受け止めて、Bからの一撃には突き蹴りによる足の裏で受け止める。両足と右腕に力を込めて、「おおう！」って驚きを見せる2人のシャンテを弾き返すけど、「分身の密度が前からさらに濃くなってる・・・！」ことに僕は驚いた。

「と～ぜん！　あたしだって日々トレーニングで強くなってるんだからね！」

３人のシャンテが僕の周りを残像を残しながら駆け回る。全周囲からの奇襲に警戒していると、１人のシャンテ（ＡかＢかＣか判らないけど）が真正面から突っ込んできた。受けても避けても他の２人からの襲撃が来るのは目に見えてる。

「でりゃあ！」

僕が選んだのは左肘打ちでの迎撃。真っ向から"ファンタズマ"の刃面に打ち込んで、お互いの体が静止してるその瞬間に、僕は右手による拳打をＡのお腹目掛けて繰り出す。それと同時にＢとＣが左右から襲撃してきた。拳はＡの腹に直撃したけど残念ながら幻術で、お腹に打ち込まれたと同時に消失。

「パンツァーシルト！」

ＢとＣの迫ってくる方向にシールドをそれぞれ展開して、２人の斬撃を防御する。それだけじゃ終わらない。僕は「フォイア！」と、トリガーとなる単語を口にして、シールドを射撃弾として射出させる。それでＢとＣはシールドに押し出されるように吹っ飛んだ。

「オリジナルは・・・！？」

「シールドを射出するなんて器用な真似するじゃん！」

声はなんと直上からしてきて、僕は前に跳んだ。直後、さっきまで立っていた場所に「４人目・・・！」のシャンテが着地した。

「実は四重奏（クヴァルテット）でした♪　さ、しっかりと捌いて見せて、フォルセティ！」

１対４っていう構図に辟易しながら、僕はシャンテにちょっとでも純粋な格闘家の恐ろしさというものを味わって欲しいと考えて、アインスお姉ちゃんの格闘スタイルをお見舞いしてやろうってほくそ笑んだ。

Ｅｐｉｃａ２６反逆の騎士隊～Ｏｒａｎｇｅ　Ｒｈｏｄｏｄｅｎｄｒｏｎ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

ミカヤちゃんとの試合を終えて、セインお手製のサンドイッチをいただいた後、オランジェ・ロドデンドロンの本日の任務である中央区アヴァロン南ベライヒの警邏に戻るべく、「いってきます！」とディード、それにルーツィアとルーツィエに挨拶。

「「「いってらっしゃいませ！」」」

３人に見送られながらフライハイト邸の正門から出て、「お待たせ、セレス」って既に外で待っていてくれたセレスと合流。今日の警邏任務はいつも通り２人１組で休憩は順番。ちなみにわたしとセレスは２番目になる。

「いやぁ、フライハイト家のご飯はいつ食べても美味しいよね！思わずお代わりしたよ！」

「そう言ってくれるとルーツィエとルーツィアも喜ぶよ」

地下のジムにセレスも誘ったんだけど、お腹ぺこぺこだから、って理由で断ったんだよね。まぁミカヤちゃんと試合する約束をしていたのはわたしだけだから、セレスが一緒に来てもやる事はないからしょうがないけど。

「各騎、こちらシャルとセレス。これより任務に復帰する」

とにかく休憩を済ませたって旨の通信を入れると、隊のみんなから『了解』返答が入って、次に休憩に入る予定の『ではこれよりアンジェリエとアイリは昼食休憩に入ります』アンジェから連絡が入る。

「ん、了解。アンジェ、アイリのペアのあとは、最後にルシルとトリシュね」

『ああ』

『ええ。休憩まで引き続き警邏を続けます』

全体通信を切って、わたしとセレスは警邏任務を再開する。といっても管理局なんて目じゃないレベルの容赦ないやり方で犯罪者共を震撼させてるから、ザンクト・オルフェンは平和そのもの。だから暇で暇でしょうがない。

（管理局はまず、投降呼び掛けとか武装解除とかの警告から入るけど、今の騎士団は見敵必倒だからな～）

管理局法に従っていた頃は騎士団もそうしていた。軽犯罪には変わらずな対処だけど重犯罪の場合、被疑者を視界に収めた瞬間に戦闘開始。相手に抵抗させる隙を与える前に武力で制圧するのが今のやり方。殺しはしないだけでやってる事はほとんど大隊と変わらない。そうは言っても世論が今のやり方を支持してるから、今後も行い続

けることだろうけど・・・。

「そういやミカヤ・シェベルとの試合はどうだった？　どうせえげつない実力差を見せつけてヘコませたんだろうけど」

「そんな大人気ない真似はしない。1ラウンド目は抜刀術の欠点やらをやんわり教えて、2ラウンド目は抜刀術対決、3ラウンド目で魔法あり。そこまで引っ張ったんだから」

「ライフの減り具合はどうだったの？」

「・・・1ポイントも減らされなかったよ、わたしはね」

ミカヤちゃんは強かった。選手としては、と付くけど。ルール無用の実戦になると普通レベルだ。質問に対してそう答えるとセレスは「変なトラウマ刻んでないでしょうね？」ってジト目で見てきた。

「いい経験が出来たって逆に喜んでたよ」

「ふ～ん。まぁ彼女が真っ直ぐに受け入れたならいいか」

騎士団への評価はうなぎ上りだけど、管理局法脱退反対派に属する一定の騎士の不満は募るばかり。今は大隊と騎士団のおかげで犯罪件数は激減中だけど、大隊が潰されたらまた増えるだろう。その時に騎士団の物量では抑えきれないのは確か。

（はあ・・・・前途多難）

そうして今日の警邏任務は、何事も起きることなく終了。教会本部で任務完了を報告して、我が屋敷へと帰宅。隊のみんなで中央館のエントランスに入って「ただいま！」って挨拶すると、ルーツィとオットーとディードの４人が「おかえりなさい！」って出迎えてくれた。

「イリス、お腹空いた、もう限界・・・」

それだけを言ってバターン！と直立のままうつ伏せにぶっ倒れたクラリス。ルミナも「暇だと余計に空腹を感じるよ」ってお腹を盛大に鳴らした。ルシルがクラリスに肩を貸すように立たせて、わたし達は「準備は出来てますからどうぞ食堂へ」って先導してくれるルーツィ達に続く。食堂の長テーブルにはいろんな料理が並べられていて・・・

「すんすん・・・ハッ！　いただきま～～～～す！」

匂いに釣られて復活したクラリスがものすごい勢いでダッシュして、席に着いてがっつき始めた。まずはテーブルの上に置かれてるおしぼりで手を拭いて、って注意しようと思っても今のクラリスに食事を中断するようなことを言ったら・・・。

（噛み付かれるかもしれない・・・！）

いろいろと諦めてみんなで苦笑して、それぞれ席に着いた。おしぼりでしっかりと手を拭いて「いただきます！」と挨拶。パスタを掃

除機のように吸って食べてるクラリスに続いてわたしもたらこパスタなどの美味しい夕食をいただいた。ルーツィ達が食器を片付け終えたそんな中、「子供たちは今どうしてる？」ってルシルがルーツィ達に尋ねた。

「すでにお休みになられています」

「今日のトレーニングはかなりハードのようでしたし」

「ミカヤさんに相当絞られたらしく、皆さんボロボロでした」

「ですが皆さん満足そうでしたよ」

時刻は21時半。寝るには早い時間だけど、1日中トレーニングをしてたら疲れて寝るわ。ルシルはその返答に「そうか」と頷いて、わたしの方を見た。

「うん。ルーツィ、オットー、ディード。ちょっと席を外してもらえる？　あと呼ぶまで食堂に誰も入れないように」

「「「「かしこまりました」」」」

4人が食堂から離れたのを確認して、わたしはチーム海鳴とアースラスタッフのみしか開けない秘匿回線を使っての通信を行う。相手は管理局本局の次元航行部、クラウディア艦長の「やっほー、クロノ」だ。

『ああ、時間通りだな。そちらは・・・君の隊のメンバーが勢ぞろいか』

クロノもまた私室に居るようで、モニターにはクロノしか映ってない。これまでに何度か行われてきた秘密会議の暗黙のルールだ。

「うん。じゃ、秘密会議開廷～」

秘密会議は、局と騎士団の内情を確認し合うためにルシルとクロノの提案の元に開かれてる。今日これまでは進展の無い話し合いばかりだったけど、今日はわたし達オランジェ・ロドデンドロンで話し合った末に生まれた推測を伝えることにした。

『ところで、これまではこの秘匿回線での会議をしていたが、この回線を開ける権利を持つアリサが大隊に下ってしまったことから、この通信が大隊も使えるんじゃないか？』

「アリサはこちらで捕まえてることから、大隊にはこの回線は使えないと見ている」

ルシルがそう答えるけど、わたし達が捕まえたのはアリサの偽者だと確定している。でもそれはまだクロノにも伝えない。何せ本物が大隊に捕まっている以上、今はまだ大隊に本物と偽者を見極める方法を見つけた事を知られてはいけない。また偽アリサを投入してきて、それが見極める方法を解決した偽アリサだとしたら、本物と区別が付けられないって話になると困る。本物にも危害が及ぶかもだし。

（ヴィヴィオ達が、なのはとフェイトとアリシアに漏らしちゃったのは痛い。あの通信を盗聴されてなければいいんだけど・・・）

『それだといいんだが・・・』

クロノの不安は解かるけど、わたし達としてはこの会議を大隊に盗聴されていようとも問題は無い。むしろ聞いていてもらった方が面倒事が少なくて助かる。そんな不安そうなクロノを他所に「で、そっちの調査の進展は何かある？」って尋ねる。

『進展というか、管理局の衰退が目に見えてきていて上層部が大慌てだよ。局の運営に必要な出資額が減ってきている。管理局、特にミッド地上本部やミッド陸士隊への批判が高まってきているな』

「その分、教会騎士団と最後の大隊の評判が上がってきている、と？」

『ええ、その通りです、騎士トリシュタン』

わたし達の推測通りだ。まぁ以前から評判云々の話は判りきっていたことだけどさ。クロノの沈痛な面持ちからして、そのヤバさ加減が伝わってくる。小さく息を吐いた後、『それと、裏切り者についても進展は無しだ』ってクロノを続けた。

『騎士団独立賛成派の局員をあれからも念入りに調べ続けているが、やはり騎士団や教会との繋がりはほぼ無い連中ばかりだった。裏金などの取引をした様子も無い。クー・ガアプ捜査部長のスキルを以

ってしても異常なしと出る。こちらの調査は完全に手詰まりだ』

元特別技能捜査課の課長だったクー・ガアプ一佐は、特捜課解散後の今では本局捜査部の部長だ。

「了解。んじゃ、わたし達オランジェ・ロドデンドロンの見解を全て伝えるよ。まず、わたし達の見解だけど、教会と大隊が繋がっている、ということを前提として聞いてね」

クロノの目が一瞬だけど大きく開いて、『根拠はあるのか？』って聞いてきたことに対して、アンジェが「トリシュの言った事がですよ、ハラオウン提督」そう答えた。管理局ばかりが損をして、同じように犯罪を取り締まる騎士団だけが得をする状況に、わたし達はずっと不思議に思っていた。不正を働く局員については自業自得だけど、大隊メンバーとしての逮捕は引っ掛かる。

「邪法には邪法で、犯罪には犯罪で・・・を旨として行動する大隊は、フリー魔導師や魔導犯罪者だけでなく、局員までメンバーに入れてた。捕まったら犯罪者の汚名を着せられるのが確定しているのに。まるで局員から犯罪者を出して、管理局だけを失墜させたいかのように・・・」

大隊のやり方に賛否両論な世論だけど、局員が大隊で活動していたと判ると、その局員と管理局を叩く。身勝手な世の中には溜息が出る・・・。

『・・・事実現状がそれだな。しかし、それだけで教会と大隊が繋

がっていると考えるのは無理があるんじゃないのか・・・？』

「大隊の中には確かに騎士が数多く在籍していましたが、それでも教会騎士が誰一人として在籍していないのはおかしいんです。独立以前から活動していた大隊は、法外の活動を良しとしていました。しがらみばかりの管理局法に、騎士団が縛られているという状況に不満を持っていた騎士は当然いたでしょうし、とても魅力的な組織だったことに違いありません」

トリシュの言うような連中こそが今の独立賛成派の連中だ。犯罪者に人権など必要ないって考える過激派。そんな聖職者と騎士なら、大隊に参加しようって考えることもある。けどそんな連中はいない。ただ捕まえきれてないだけかもしれない。でもそれにしては局員が捕まる頻度が高すぎる・・・って話をクロノにした。

『・・・それでもまだ確定とは言い切れないが、そう考えられるだけの要素は揃っているわけか』

「それに・・・アルファが生前、プライソンと教会の誰かが繋がってるような事を暗に示したの」

――父さんに協力してくれていたのは何も管理局だけじゃないわ。民間からも協力している組織や企業、フリーランス魔導師も居るの。もちろんイリーガルＯＫな、ね。それに・・・――

アルファがそう言って教会騎士だったわたしを見た。クロノは『信用できるのか？　どちらかと言えばスキュラ姉妹は大隊側だぞ？』

ってちょっと呆れた風に聞いてきたけど、「降参後だったから、たぶん信じられる」ってわたしは答えた。

『そうか。・・・それで、どうする。騎士団や教会を疑って掛かるとなると、君らはまさに敵のど真ん中だぞ』

「そうは言っても元より今の教会と騎士団は信じてないからね～」

「独立賛成派はもちろん、私たちと同じ反対派の中にもスパイが居ないとは限らないからさ」

「信じられるのは、この場に居る隊のみんなだけ」

カリムやシャッハすらも疑いに掛けてる。母様や父様ですら元は反対派だったのに今や賛成派になってしまってる以上、普段どおりとはいえカリムやシャッハも、偽者と入れ替わっていないって断言できる状況じゃない。だからわたしの隊のメンバーを全員、お互いにフォローしやすいように実家に住まわせてるし、仕事中だって常に2人1組で居さしてる。偽者と入れ替えさせる隙を与えない為にさ。

「で、クロノ。わたし達は早々に大隊を壊滅させて、教会と騎士団を正常化させたいわけ。だから大隊を釣ることにした」

『釣る？　スパイでも送り込むのか？』

ミヤビについては話せないかな。アリサと同じようにオリジナルが捕まっている限りは・・・。わたし達が沈黙したことでクロノが『

どうした？』って訝しんできたから、わたしは小さく首を横に振って、「ヴィヴィオを囮にする」って伝えた。

『っ！！　連中が狙っているヴィヴィオをか・・・！？　本人やなのはやフェイトにはどう・・・！』

「すでにヴィヴィオがなのはとフェイトを説得し終えてるし、囮になるって作戦はヴィヴィオ自身からの提案なの。わたしとルシルはその提案を基に囮作戦を練り上げただけ」

『・・・本人たちが納得済みなら僕から言うことはない』

口ではそう言ってるけを妹のフェイトや、なのはの心情を慮ってか苦い表情を浮かべてるクロノ。でも安心して欲しい。ヴィヴィオへの危険度は極力低くなるように組み立ててある。ちょこっと隠し事をした上でクロノに囮作戦の内容を伝える。ヴィヴィオやフォルセティ、イクスにアインハルトには、発信機の役目を有するルシル特製のミサンガを身に着けてもらっていて、転移で拉致されたとしても転移先の座標を知れるというもの・・・って。

「ヴィヴィオ達の誰が拉致されたとしても危害は加えられないはず。加えるつもりなら拉致なんて考えはまず出てこない。何かに利用するためと考えられるから、利用される前に助け出す」

『なるほど。他の子供たちが拉致される可能性は？　ヴィヴィオ達と交換という形を持ってくるかもしれない』

それは考えてた。コロナやリオといった友人たちを先に拉致して、ヴィヴィオ達と交換するよう脅迫してくるかもしれないって。

「大隊は今のところ、犯罪者にしか手を出してない。民間人の安全には注意を払ってるし。だから、いくらヴィヴィオ達を拉致するためだからと言って関係のない子供たちを拉致したら、それこそクズの所業。その手段を選んだ時点で奴等の正義は終わる」

万が一に大隊と騎士団の繋がりがバレた場合のことを考えて、民間人への被害を出さないように細心の注意は払ってるんだろうね。騎士団が目的のために無辜の民間人すら犠牲にするってことにならないように。ま、ヴィヴィオ達を拉致すればそんなこと意味なくなるんだけど。

『ふむ。・・・話は判った。僕たち管理局には何をしてもらいたい？』

「俺たちの推測が正しければ、大隊壊滅後の騎士団は今の局以上の低迷期に入るだろう」

「何せ大隊って言う犯罪組織を利用してか、もしくは造って管理局の評判を落とし、騎士団の評価を上げるっていうマッチポンプを仕出かしたんだから」

しばらくは後ろ指を差されるだろうね。今は素晴らしいって褒め称えてくれてる世論も、真実が伝われば一気に反転して袋叩きにしてくるかもしれない。まぁ教会と騎士団の暴走を事前に察知できなかったわたし達フライハイト家や六家が間抜けだったって話だ。非難

は甘んじて受けよう。

「その間、騎士団の機能は著しく低下すると思うの。管理局は、騎士団再興まで頑張ってもらいたいってことになるわけで・・・」

最悪、下手したらわたしはこのまま騎士団に残ることになるかも・・・。ミヤビとの約束も果たせず、ルシルと最後まで同じ部隊で頑張っていきたかったな・・・。

『ただでさえ人手不足なんだが・・・。そこで騎士団の活動が低下すると、大隊の抑止力も失っていることで犯罪率が一気に上がりそうだな・・・』

文字通り頭を抱えたクロノには何も言えない。ルシル達も俯いてるし。大隊を潰すと管理世界の秩序が崩壊しそう。ひょっとして大隊の活動を許した時点で負けてるのかも・・・。

「それでも大隊は潰さなければならない。ヴィヴィオ達が安心して生活できるように。いつまでも拉致に怯えさせて良い訳がない・・・！」

ルシルの力強いその言葉にクロノも『あ・・・ああ、その通りだ！』って力強く頷いて、もちろんわたし達も「勝つぞー！」って拳を振り上げた。ヴィヴィオ達のためにも、なのは達のためにも、拉致されて犯罪者の濡れ衣を着せられてるアリサやミヤビ、他の局員たちのためにも、最後の大隊は必ず叩き潰す。

『他には何か話は無いか？』

わたしは腕を組んで、クロノの問いに対して「う～ん」と唸った。大隊関連じゃないとは思うけど、一応は伝えておこうか。

「最近、フライハイト邸が窃視・盗聴されてる節があるの」

『大隊か！？』

「ううん、たぶんベルカ関連だと思う。何せうちにはイクス、ヴィヴィオ、アインハルト、フォルセティが居るし。彼女たちへ窃視や盗聴が目立つし」

『犯人は判っているのか、その様子だと・・・？』

「この屋敷にはルシルの魔術による加護があるの」

ルシルへと視線を移すと、「魔法やスキルによる干渉を行えないようにしてあって・・・」って前置きして、魔法・スキルを使った攻撃や転移を全て無力化できる術式が敷地全体に施してあるって説明。

「で、何故その加護の中でもそんな真似が出来るのかというと、魔法と魔術の中間に位置する魔女術によるものだったからだと判明した」

『魔女術・・・？』

クロノは聞きなれない魔法体系だったからか眉を顰めた。魔女術なんて古代ベルカ式並みに古いものだから知らないのも無理はないかも。詳しい説明は省いて、その術者についてわたしは知ってることがある。

「たぶん、ファビア・クロゼルグって子だろうね。シュトゥラ国内にあったっていう魔女の森を拠点としていたクロゼルグ一族。その子孫ね。んで、この子もアインハルトみたいに先祖の記憶を受け継いでるみたいで、魔女術も扱えることを確認してる」

『大隊との繋がりは確認できていないのか？』

「その辺は大丈夫だと思う。まぁ危害を加えようとは考えてないと思うし、昔のアインハルトみたくヴィヴィオ達とどう接すればいいか判らないんだろうね。注意はしておくけど、今は放置していても問題ないって思うよ。えっと、わたし達からは以上かな」

『判った。ベルカ関連の話については僕は何も出来ないからな。そっちは君たちに任せるよ、じゃあ何か手伝える事が遠慮なく言ってくれ。出来うる限りの事は協力するつもりだ』

「ありがと、クロノ♪　んじゃ今日の会議はこれで終了とします！」

通信を切ってクロノとの会議が終わらせて、わたし達はそれぞれ食堂を後にして浴場へと向かう。っと、その前に『ルーツィ達ももう休んで』って思念通話で伝えておく。

『『『かしこまりました。それではお休みなさいませ』』』

ルーツィアとルーツィエ、オットーとディードの４人は教会本部への出入りはしていないけど、ひょっとしたらすでに偽者かもしれないという不安はある。信じきれるのはルシル達だけというのは心強いし安心も出来るけどさ、誰も彼も信じられなくなるなんてキッツい・・・。

（今のところ拉致されて偽者に入れ替わってるのはミッドの管理局員ばかり。ティアナはたぶん、スバルと一緒に居た時についでに拉致されたって考えられる。あの２人、恋人みたく仲良いし）

「イリス。もし今の会議が大隊に洩れていた場合、大隊はどのような手段に出るでしょう？」

「う～ん、そうだな～。わたし達の反逆を事前に止めようとするだろうし、何かしらの手段で分散させての各個撃破・・・ってところかな～」

大隊の中で一番ヤバイのは、ルシルしか斃せない"エグリゴリ"の１人であるフィヨルツェンだけ。それ以外ならよほどの格上になるだろうけど、わたし達を各個撃破できるような戦力が大隊にいるかどうか・・・。

「勝てない戦力と判断した場合は逃げの一手でいいだろう。逃げるのは恥じゃない。退くべき時につまらないプライドで突っ込む方が恥で愚かだ」

「ですね」

「とりあえず、ねえルシル。私たちにもヴィヴィオ達に贈った発信機能を持ったアイテムちょうだい♪」

わたしとアンジェとルシルで大隊の今後の動きの予想をしてると、そう言いながらルミナがルシルの背中に飛びついた。強制的なおんぶ体勢で、ルミナの豊満な胸がルシルの背中に押し付けられる。それでもルシルの顔が赤くなんないのは流石としか言いようがない・・・。

「重いぞ、ルミナ」

「あれ～？　いつもの紳士っぷりはどこへいった～？」

「酔っているのか？」

「何やってんの！」「何をやってるの！？」

わたしとトリシュでルミナを引き剥がす。わたしがルミナとルシルの間に割り込んで、「ダメダメ！　これ以上ライバルなんて無用！」って両腕で×を作る。ルミナは「じゃああれはいいの？」ってわたしの後ろを指差したから振り向いてみると・・・。

「あああああ！」

今度はトリシュがルシルにおんぶしてもらってた。羨まし過ぎて嫉妬の炎がメラメラだよ。

「トリシュ！？　何やってんの！？」

「いえ、ちょっと疲れたな～と」

「ルシルだって疲れてるんだから、そんな事しないの！　てか、ルシルもルシルでしっかりトリシュを支えてるし！」

「いやだってトリシュを支えなければ、俺の首が絞められるだろ？」

なんて言いながらルシルはトリシュを背負ったまま歩き続ける。わたしはルシルの右隣に追いついて「だったら、降りて、って言えばいいじゃん！」ってトリシュを指差す。

「別に構わないよ。今日はただ警邏ルートを歩くだけの1日だったからな、大して疲れてないよ」

「だそうですよ、イリス。私はこのままルシルさんに背負われていても問題はないのです♪」

満足気にわたしを見てほくそ笑むトリシュ。うわ、やばい。わたしの隊も今日この日で終わりかもってレベルの嫉妬の渦がわたしの胸のうちに発生中。むぅーって唸ってると、「ああもう。あとで君も背負うから、そう睨むな」ってルシルが呆れた。

「いいの！？　やった！　じゃあトリシュ、交代！」

「えーもう？　もう少しルシルさんの背中を堪能させてもらいたいんだけど・・・」

ルシルの首に回してる腕をさらにギュッと絞めて密着するトリシュ。なに、この娘も酔ってんの？って思えるほど大胆になってるんだけど・・・。そんなわたし達に「少し静かに」ってクラリスが非難の声を掛けてきた。

「アイリが眠ってる」

夕食時からうつらうつらとしてたから、いつ寝落ちするかと思ってたけど・・・。アイリは本来の３０ｃｍくらいの姿に戻っていて、クラリスの頭の上にうつ伏せで眠ってた。まぁそういうわけだから、声量を落としてわたしは「じゃあ次の角で交代」って提案。

「判った。その条件を呑みましょう」

それから角を曲がるたびにわたしとトリシュは、ルシルにおんぶしてもらった。

Ｅｐｉｃａ２７次元世界最強の１０代女子～Ｓｉｅｇｌｉｎｄｅ
Ｅｒｅｍｉａｈ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

今日の午前は、ミカヤさんに続いて２人目のインターミドル都市本戦経験者、エルス・タスミン選手との試合を組んでもらってる。フライハイト邸の地下トレーニングジムで、準備運動をしていると「エルス・タスミン様がいらっしゃいました」ってルーツィエさんが更衣室のドアから出てきた。

「エルス・タスミンです、失礼します！」

ルーツィエさんの後に続いてメガネを掛けたトレーニングウェア姿の「エルス選手！」が姿を見せた。ノーヴェの「よし、お前ら整列！」の指示に「はい！」って答えて、ノーヴェの前にわたし、コロナ、リオ、アインハルトさん、そしてミウラさんが整列する。

――ミウラ（コイツ）もストライクアーツが楽しすぎてしょうがねぇってことでさ。毎日でもトレーニングしてぇって話なんだが。ほら、あたしもザフィーラも局の仕事の都合で、道場を毎日開くわけにはいかないんだよ。んで、そこでコイツを、試合の仮想相手役としてチームナカジマのトレーニングに加えてやってくれ――

ヴィータさんからのお願いということもあって、冬休み中のトレーニングにはミウラさんも参加する事になった。

「よしっ！　エルス・タスミン選手に挨拶！」

「「「「よろしくお願いします！」」」」

エルス選手はルーツィエさんの案内でノーヴェの隣に立って、わたし達は自己紹介してくれたエルス選手に一礼した後、この場に居るチームナカジマのわたし、コロナ、リオ、アインハルトさんの４人＋ミウラさんの順で自己紹介返し。フォルセティとイクスは、今日は朝から非番のアイリから治癒魔法や医学を学んでいて、ルールーとリヴィは、ルーツィアさんの運転する車でお買い物。

「で、今日はエルス選手と、魔法ありの本番と同じ形での練習試合を行ってもらう。１人につき３分１ラウンドを、休憩を挟みながら昼まで行う。エルス選手、それでいいですか？」

「はい。事前に窺っていた通りのスケジュールですので、それで構いませんよ」

「判りました。１番手はヴィヴィオ、お前だ！」

ノーヴェから呼ばれたわたしは「はいっ！」返事をして、エルスさん（敬称は選手じゃなくて、さんで良いとのこと）と向かい合って「お願いします」ってお辞儀しようとしたら、「はい、お願いします」って右手を差し出してくれたからわたしも「はい！」って握手に応じた。

「じゃあヴィヴィオとエルス選手は、防護服の着用を」

「「はい！」」

わたしは側に浮遊してる"クリス"に「さぁ行くよ！　セイクリッドハート、セットアップ！」って微笑みかけて、大人モードプラス防護服へと変身する。エルスさんも「パニッシャー、セットアップ！」手錠型のデバイスを起動しました。

「あたしが審判として同行する。えー・・・っと、ルーテシアとリヴィアが前々から組んでくれていた空間シミュレーターは・・・っと」

ノーヴェが空間モニターとコンソールを展開してタタタっとタイピング。すると試合場の中央に「リング・・・！」が構築された。この前行ったドームにあった公式リングと同じデザインだ。みんなで「すごーい！」って歓声を上げていると、エルスさんも「自宅にリングて・・・」ってポカーン。

「外にはランニングコース、地下にはジムにプール・・・。さすがベルカ自治領の領主フライハイト家ですね・・・」

「じゃあ2人はリング中央へ。あたしも審判として一緒に上がる」

3人でリングに上がって中央に立つ。そして魔法がリング外へと洩れないようにするための半透明の結界が展開される。

「ライフは１２０００、クラッシュエミュレートあり。３分１ラウンドでの練習試合を開始する」

エルスさんと右拳をコツンと合わせて、お互いに構えを取る。ノーヴェがわたし達から距離を取って「レディー・・・」右腕を高らかに掲げた。そして「ファイト！」振り下ろされたと同時、わたしは足元に魔法陣を展開して、「ソニックシューター・・・！」の発射スフィアを展開。

（エルス選手はバインド魔法の使い手だ。捕まったら一気に削られる・・・！）

「アレスティングネット！」

エルスさんの周囲に赤く輝くミッド魔法陣が複数展開されて、そこから魔力の手錠を先端にしたチェーンバインドが、わたしに向かって伸びてきた。

「ファイア！」

先端の手錠目掛けて魔力弾を発射したんだけど、「いぃ！？」魔力弾がバインドの突撃力に負けてしまって掻き消されちゃった。速度を落とすことなく迫るバインドを、わたし自慢の目の良さで動きを見切りつつエルスさんの周囲を駆け回る。

「（魔力弾でダメなら・・・砲撃で！）ディバイン・・・」

ほんのちょっとだけど引き離せたバインドに注意しながら、エルス選手の頭上へと跳んで「バスターー！」突き出した右拳から砲撃を放つ。エルスさんは「甘いですよ！」って、わたしを追わせてたバインド数本で盾を作りつつ、魔力爆発の影響範囲から逃れるために後退した。

（ここで・・・！）

宙で逆さま状態に居るわたしは足元に魔法陣を展開して、それを足場として蹴る。シャルさん達騎士がよく使う空中高速移動方法の１つだ。

「リボルバースパイク！！」

後退中のエルスさんへと打ち下ろしの右回し蹴りを繰り出すと、「ぐぅ・・・！」エルスさんは左腕を掲げての防御。タイミングは良かったのにきっちり防がれちゃった。でも即座にソニック「シューター！」の単発を至近で発射。

「きゃあ！」

エルスさんのお腹に直撃させることが出来た。エルスさんの背後に跳んで、着地と同時に魔力付加打撃「アクセルスマッシュ！」を繰り出す。単発だけとはいえシューターの直撃を受けていたエルスさんだったけど、前屈してわたしの一撃を躱した。そして床に両手を突いて前転して、左踵をわたしの下あご目掛けて振り上げてきた。

「っく・・・！」

上半身を反り返らせて回避。つま先が顎を掠めていったことにホッと安堵した。もし入れられたら脳震盪のクラッシュエミュレートを受けてたはずだし。

「ぅぐ！？」

上半身を起こす前にお腹に突き刺さる衝撃。反っていた上半身がそれで一気に戻って、エルスさんの左足の突き蹴りが入ってるのを視界に収めた。後ろ向きにたたらを踏んで、体勢を整えたエルスさんと改めて対峙する。少しの沈黙の後・・・

「アレスティングネット！」

エルスさんはまた、展開した複数の魔法陣から手錠付きのチェーンバインドを伸ばしてきた。オットーとの練習を思い出せ。気を付けるべきは全体じゃなくて先端の動き。掌底や裏拳を使って手錠を弾き飛ばしつつ、周囲に魔力スフィアを6発と展開。

「やあああああ！」

エルスさんへと突っ込む。エルスさんは去年のインターミドルでは射撃・砲撃の遠距離攻撃は一切使わず、ひたすらにバインドと体術を駆使して都市本戦8位にまで上り詰めた選手だ。今年の大会に向けて新技を生み出していたとしても、ライバルとなるわたし達との練習試合で出すことはまずないって思う。つまり使うまでもない格

下ってことになるけど、それならそれで安心して突っ込める。

「やりますね、ヴィヴィオさん・・・！」

エルスさんも真っ直ぐわたしに向かって来て、手錠型デバイス・"パニッシャー"を握る右拳を振りかぶった。同時に右拳を繰り出す。クロスカウンター気味だけど、お互いの拳は相手の頬に届く前に前腕がぶつかった。内側にあるエルスさんの腕が、わたしの腕を外に向かって弾くように払ってきた。

「（まだ左がある・・・！）はあああああ！」

「やぁぁぁぁぁッ！」

わたしとエルスさんの左拳がぶつかり合う。そして待機させてたソニックシューターを「ファイア！」一斉にエルスさんに向かって発射。わたしが弾いたあと待機させられてたエルスさんのバインドが、シューターの迎撃のために動いた。さっきは成す術なく破壊されちゃったけど、今度はシューターを構成する魔力を増やしたから、早々に壊されないはず。

（よしっ！　バインドを弾いた！）

バインドの先端の手錠に当てるのにはちょっとコントロールが必要だけど、一度弾いちゃえば再び向かってくるまでには僅かな時間が掛かる。その間にエルスさんを殴り落とすことが出来れば・・・。

「くっ、バインドが・・・！」

わたしとエルスさんの打撃の攻防の最中、わたしは順次シューターを展開してはバインドを迎撃する。エルスさんの必勝パターンは、バインドで相手を拘束してからが始まりになる。複数のバインドに捕まらなければ押し切れそう・・・。

「でぇぇぇい！」

――ソニックシューター・アサルトシフト――

「はあああ！」

――アレスティングネット――

シューターとバインドが激しくぶつかり合って互いに弾き飛ばされる中で、わたしとエルスさんは真っ直ぐ相手を見詰めて攻撃を繰り出し続けた。

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ⇒アインハルト†††

都市本戦８位の成績を収めているエルスさんとの練習試合を複数回とこなし、ノーヴェさんとチームナカジマとミウラさんはエルスさんと一緒に昼食を終え、今は食後のコーヒーブレイク中です。練習試合の私の戦跡は４戦１勝１敗２引き分けとなった。１戦目にバインドの餌食となり、２戦目と３戦目に慣れてきて、４戦目でギリギリでしたが勝てました。

（ですが繋がれぬ拳、アンチェインナックルの不発も何度かありましたし、完璧に使いこなせるようにもっと鍛錬しなければ）

「皆さん、今年が初参加だというので少々侮っていましたが、恐ろしいほどまでに個性的な戦闘スタイルで驚きました。私もまだまだ鍛練が足りないと知ることが判りました」

全体的な勝率で言えばエルスさんの勝ち越しでした。都市本戦出場経験者としての誇りもあるのでしょう、やはり全勝できると考えていらっしゃたのでしょう。ですが私たちとて日々鍛錬を行っています。都市本戦出場経験者と闘い合えるまで・・・。

「ジム通いだけでは得られなかった経験でした。また、こういった練習試合を催すつもりでしたら声を掛けていただいても？」

「ええ、その時はぜひお願いします！」

ノーヴェさんとエルスさんが握手を交わしてニッと笑みを浮かべたその時、食堂の扉が開いた。入ってきたのは「おーっす！」と挨拶をしたシャルさんと、「ノーヴェ。例の客が来たようだぞ。正門前に車が止まるのを見た」と言うルシルさん、そしてルシルさんの右腕に抱きつくようにして歩いてきたアイリさんの３人。

「ふぁ、ふあああああ！　は、は、ははは初めまして！　私、エルス・タスミンといいます！！　チーム海鳴のご活躍はかねがね、です！」

ガタッと勢いよく立ち上がったエルスさんが言葉に詰まりながらの自己紹介。シャルさん達も改めての自己紹介の後、エルスさんと握手を交わしました。エルスさんは「ほわぁ！　今日はなんて素晴らしい日！」と感動に体を震わせ、シャルさん達が「大袈裟だよ♪」と照れ笑いを浮かべました。

「シャルさん。応接室をお借りしますけど、いいでしょうか？」

「この家に居る間は遠慮は無用だって言ったはずだよ、ノーヴェ。もちろん使ってもいいから。というよりもう準備してあるから使って。あ、わたし達も同席させてもらって良い？　一応この家の人間だし、彼女に会うのも１０年ちょっとぶりくらいになるし。挨拶をちょこっとね。ルシル、アイリ。あなた達も同席をお願い」

「了解だ」「ヤー♪」

アウストラシアの聖王家とフライハイト家、シュトゥラのイングヴァルトと魔神セインテスト家の直系、ガレア王家、そしてエレミアの一族。それがあと少しで一堂に会することになる。

（エレミア・・・。ジークリンデ選手は、どう向き合っているのでしょうか・・・）

「あの、お客様がいらしたのでしたら私はもうこれで・・・」

「ありがとうございました、エルスさん。エントランスまでお見送

りさせてください」

私たちチームナカジマは、お世話になったエルスさんをお見送りする為に一同エントランスへ。エントランスではオットーさんとディードさんが控えていました。会釈していると、ゴンゴンゴンと玄関扉のノッカーが叩かれた音が。

「「はい！」」

オットーさんとディードさんが両開きの玄関扉を外へと向かって開くと、そこにはテレビで観たジークリンデ選手が居り、側にはヴィクターさんと執事のエドガーさん、それに「ミカヤさん、番長！？」とヴィヴィオさん達が驚かれたように、この場に居ないはずのお２人もご一緒でした。ルーツィアさん達が「いらっしゃいませ。どうぞお上がりください」と招き入れます。

「本日はお招きしていただきありがとうございます」

「おう、ちびっ子ども。オレはちょっとそこでミカ姉と会ってな」

「さらに言えば、ヴィクターの車がフライハイト邸へ向かって走っていくのを見て、もしやと思い来てみれば・・・」

「お嬢の車が入っていくじゃねぇか。しかも車ん中にはジークも一緒だしよ」

一礼したヴィクターさんやエドガーさんをジロリと見た番長さん。

ヴィクターさんは「本来、今日招かれたのは私とジークだけだったもの」と小さく溜息を吐きました。

「むぅ、確かに勝手に付いて来たのは申し訳なかった」

それを聞いてミカヤさんがヴィクターさん達に謝罪しました。その間、私はジークリンデ選手を見ていたのですが、インターミドルの試合映像で見た堂々とした佇まいは今では鳴りを潜め、ヴィクターさんに隠れるような姿勢です。ひょっとしたら人見知りなんでしょうか・・・。

「まぁいいじゃない、ヴィクトーリア。ミカヤちゃんと番長とは知らない仲じゃないし」

「あ、あの！　チャンピオンがどうしてここに！？　　それにダールグリュン選手とシェベル選手まで！」

「あら？　エルスさん。どうし・・・あ、チームナカジマの子たちとの練習日が今日だったのね。お疲れ様ですわ」

「やあ、エルスちゃん。去年ぶり」

「おいこら、アホでこメガネ。オレをシカトするとはどういう了見だ？　今年のインターミドル前に決着付けとくか、あ？」

エルスさんは口をわなわなと震わせ、何故か番長さん以外の方の登場に驚きを示しました。そんな態度が許せなかったようで番長さん

がエルスさんに詰め寄りますと、エルスさんもまた「居たんですか似非不良さん！　ええ、上等です！　というかアホでもデコでもありません！」と詰め寄り返しました。

「おーい。とりあえず応接室へ行こうか。外寒かったでしょ？　ルーツィエ、オットー、ディード。人数分のコーヒーと茶菓子を用意して。応接室への案内はわたしがするから」

「「「かしこまりました」」」

ルーツィエさん達に指示を出した後、シャルさんはエルスさんを見て「あなたはどうする？　一緒に来る？」と尋ねました。

「え？・・・ですが・・・」

「ミカヤちゃんや番長は同席するつもりなんでしょ？」

「許されるならば、ですが」

「ジークとは一応ダチなんで。まぁ断られたら大人しく引くっスけど・・・」

番長さんがそう言ってジークリンデ選手の肩に腕を回しました。シャルさんがジークリンデ選手に「だそうだけど？」と尋ねると、「ウチは一緒でもええですよ。その子はどうかは判らへんけど・・・」ここでようやく、ジークリンデ選手と私の視線が目線が合いました。

「私も問題ありません。聞かれて困るような話ではないですし」

「ん。じゃあ全員、応接室へ行こうか！」

というわけで本館西前にある応接室へ向かうことになったわけですが、その途中・・・

「ジーク。先ほどから一向に私を見ようとしないね。少し傷つくよ」

ミカヤさんが、ヴィクターさんを挟んで縮こまっているジークリンデ選手に向けて溜息交じりにそう言うと、ジークリンデ選手は「・・・ウチ、去年のインターミドルでミカさんを・・・」とても辛そうな面持ちでミカヤさんを見ました。

「はあ。まさかそれをずっと気にして私から距離を取っていたのかい？・・・エレミアの神髄は、君の命が危険と感じた際に、体が反射的に発動させるんだったね。君は疎ましく思っているだろうけど、それもまた君のご先祖様から頂いた大切なギフトだ。エレミアの神髄を含めた君の全力の力と技を超え、今度こそ自分が勝つという目標を掲げて君を追い駆けている。私を含め君に負けた選手みな、そう思っていると思うよ。そもそも選手である以上、怪我は付き物だ。負傷は元より覚悟は出来ている。なぁ、番長、ヴィクター、エルスちゃん？」

「応よ！　負傷が怖くてインターミドルに出れっかよ！」

「その通りですわ。怪我を負うことも、負けることも、それを含め

ての競技選手ですもの」

「そうですね。ですから勝つために頑張るんです。負けてもまた次で勝ちます、と」

「そういうわけだ、ジーク。今年は必ず君に勝つ」

「ミカさん、みんな・・・。はいっ！」

ジークリンデ選手の表情や纏う空気がガラリと変わり、ヴィクターさん達と軽い談笑を始めました。

「はい、到着！　好きなとこに座って～」

応接室は縦長で、いくつもの分厚いカーテンで仕切るタイプのもの。今は全て開かれていて１０人以上の大所帯であるにも拘らず、まだ余裕のある広さを有している。１人用のソファが楕円形に人数分並べられており、シャルさんの促しに従って、チームナカジマとヴィクターさん達大人組に分かれて、向かい合うように座った。

「さて・・・と。まずは今日、アインハルト・ストラトスとジークリンデ・エレミアを引き合わせた理由を、事情を知らない子たちに話そうか。アインハルト」

シャルさんに呼ばれた私たちは「はい」と頷き返し、最初に私の事情を説明することに。古代ベルカの諸王の一角、覇王クラウス・Ｇ・Ｓ・イングヴァルトの直系であり、その記憶をそっくりそのまま

受け継いでいる記憶継承者であること、クラウスの悲願である覇王流を最強たらしめることを目的として、誰とも深く関わらずに生きてきたこと、名のある格闘家にストリートファイトを挑もうとしていたこと、そしてイクスさんやヴィヴィオさん達、ノーヴェさんに誘われて、その考えを改めてインターミドルに挑戦することを決めたことなどなど・・・。

「・・・これが、私の簡単な経歴です。今でも思います、ルール無用の命懸けの闘いを行おうとしていた私は、まさしく世界を知らなさ過ぎた愚か者でした」

話の途中で入室したルーツィエさん達の出してくれたコーヒーを、ここで始めて口にする。チームナカジマのメンバーそれぞれの好み通りに入れられた砂糖とミルクのおかげで飲み易い。

「自分の戦闘スタイルを悩んで構築する時間を省いて、いきなり覇王流だっけか？　古代ベルカの格闘武術を自分のものとして扱えるんだから、便利なもんだと思いながら話を聞いてたが・・・。記憶に引っ張られちまうと、そんな辛い事になっちまうんだな」

「私は少し気にはなっていたんだよ、アインハルトちゃん。チームナカジマとの練習試合をしていると、君だけが鬼気迫るというか・・・」

私の話を聞き、番長さんとミカヤさんが沈痛な面持ちを浮かべました。そんな中、「どうかした、ジーク？」とヴィクターさんが、何やら考え込んでいるようなジークリンデ選手へと声を掛けました。

「あーうん。あの、この子らの練習の時の映像とかあらへんでしょうか？　ちょう気になる事があって・・・」

「ん。ノーヴェ」

「あ、はい、シャルさん。じゃあミカヤちゃん達との練習の映像を出します」

ミカヤさんやミウラさんとの練習試合の映像が、応接室の中央に展開された大きなモニターに表示される。そして映像が終わってモニターが消えると、ジークリンデ選手とヴィクターさん、番長さんにミカヤさんの４人の視線が私へと集中していることに気付いた。

「ヴィクター達はどう思う？　直接練習相手になったミカさんは・・・？」

「思ってた以上に深刻すぎんだろ・・・」

「主観的でも感じていた何かを、こうして客観的に観たことで確信できたよ」

「見ていて少し痛々しいわね・・・」

「うん・・・。アインハルトちゃん・・・やったね。ウチやヴィクター達が思うたことを、簡潔に言わせてもらうけど。ちょう気を悪くしたらごめんな」

ジークリンデ選手の目が真っ直ぐ私を捉え、そして「君、全然笑わへんね。というより楽しんでへんな、って思うてる」と、胸に痛みの走る言葉を投げかけてきました。

Ｅｐｉｃａ２８－Ａ覇王の記憶～Ｍｅｍｏｒｙ　ｏｆ　ａｎ　ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

――君、全然笑わへんね。とゆうより楽しんでへんな、って思うてる――

「なにを・・・？」

否定の言葉を口にしようとも発声することは叶わず。それに構わずジークリンデ選手は話を続けます。

「ヴィヴィオちゃんやコロナちゃん、リオちゃん、ミウラちゃん、ルーテシアちゃんやリヴィアちゃんは、負けて悔しがりはしても笑顔で楽しんでるんが判る。そやけどアインハルトちゃんは、心から楽しんでへんし、笑ってもない。考えを改めたって言うてたけど、まだご先祖様の記憶ゆう鎖からは逃れられてへん」

膝の上に乗せていた両拳をギュッと握り締める。私の右隣に座るヴィヴィオさんと、左隣に座るイクスさん、それにコロナさんとリオさんも心配そうな目で私を見ました。

「ウチも、前はアインハルトちゃんみたいなもんやったよ。とゆうか、ついさっきもそうやったな。望んでへん記憶やら力やらを受け継いで。使いこなせへんかった子供の頃は物をなんでも壊してた。

なんでウチが？なんて考える毎日。そやけどヴィクターと出会って、インターミドルを知って、今のウチがある。境遇もそっくりやと思わへん？　でも君は笑えてへんのはどうして？」

「それは・・・」

似ていない、とは否定の出来ないジークリンデ選手のこれまで。でも1つだけ違うことがある。ジークリンデ選手が言うように、笑えているか笑えていないか、だ。そんな私とは違うジークリンデ選手の問いに、「私は笑えません・・・笑ってはいけないんです」と答えた。頭の中でずっと思っていて、でもヴィヴィさん達と過ごす時間の中で薄まっていた思いを改めて思い知らされた私は、両手を胸の前でギュッと握り締めた。

「ヴィヴィオさん達との練習は良い経験になりますし、とても有意義で本当に楽しんでいます。でもやはりクラウスの願いを果たすのが、私の運命だと思うから・・・。彼の悲願を果たすまでは笑ってはいけないと思うんです・・・」

「うーん。ご先祖様へ敬意を払うことも、誇りを持つことも良いことや。けど現代のアインハルトちゃんの、君だけの人生を犠牲にしてでもやらなアカン事？　それをご先祖様が望んでると？　喜ぶと？　心も体も記憶に縛られて痛めつけて、もうどこにもあらへん国や亡くなった人のために、自分の生活を蔑ろにする君を見て、ホンマに嬉しがると？」

「わ、私はそこまで自分を犠牲にしているつもりはありません。確

かに目標はクラウスの悲願達成ですが、それは自分のためでも・・・！」

「またそれや。何かとご先祖様を話に出す。強くなりたいゆうんはまだ解かるよ？　でもそこにどうしてご先祖様の悲願なんて言葉が出てくるん？　自分のためにゆうんなら、まずそんな言葉が出てこーへんはずや。結局、君はご先祖様を優先してる、自分を犠牲にしてる。そやから心から楽しめへん、笑えへん」

「・・・・！」

「・・・ウチは記憶継承ゆうても、個人の記憶やのうて戦闘経験や鉄腕だけしか受け継いでへんから、全てを受け継いでしもうた君の苦悩を完全に推し量ることも出来へん。でも似た境遇で、イングヴァルトとエレミアの因縁もある・・・らしい。ヴィクターからその話を聞いたから今日、ウチは君に会いに来たんや」

ケーキの最後の一欠けらを口に入れ、ティーカップに口を付けてコーヒーを飲み終えた後、「ごちそうさまでした」と手を合わせたジークリンデ選手は、その視線を私から両隣に座っているヴィヴィオさん達を優しい眼差しで見ました。

「アインハルトちゃんには、君を慕ってくれる後輩ちゃんもたくさん居るし、導いてくれようとしてくれてるコーチも居る。それやのにそんな悲しい事から抜け出せてへん君を、どうにかしたいと思ったんよ。もちろんウチだけの力じゃ無理や。・・・と、因縁があるゆうても今日始めて会ったし、具体的な話は考えつかへんかった」

肩を落としたジークリンデ選手。そこにヴィクターさんが、「アインハルト。あなたの記憶の中のクラウス殿下とエレミアについて、お話してもらってもいいかしら？」と、私にお願いをしてきました。今、その2人についての話が必要なのかちょっと解からず「え・・・？」と聞き返してしまった。

「ヴィクター？」

「おい、お嬢。それがアインハルトとどう繋がるってんだ？　いま関係なくねぇか？」

「最後まで聞きなさいな。・・・アインハルト。あなたはクラウス殿下の・・・後悔や悲哀の記憶ばかり注意して見ているのではなくて？　その記憶に引っ張られている所為で、あなたは苦しんでいるのでは？　ならもっと別の記憶を探るべきと思ったの。個人的にエレミアの話も聞きたいのだけど、他の話でもいいわ。戦場でもなく、オリヴィエ殿下とクラウス殿下の別れの話でもない・・・」

ヴィクターさんの話に私は、そうでもない、と言い切れなかった。夢やフラッシュバックで脳裏に浮かぶのは常に戦場、そしてオリヴィエ殿下との別れ。それ以外の記憶なんて、記憶を見ようと思わなければ見られないのは事実。ですが、後悔や悲哀ばかりの記憶を見てばかりというのは違います。楽しい思い出があったからこその辛く悲しい後悔ばかりで苛んでくる・・・。

「判りました。まず、クラウスと当時のエレミア――ヴィルフリッ

ド・エレミア、そしてオリヴィエ殿下との出会いから話します」

私が口を開こうとした時、シャルさんが「あ、ごめん。ちょっと待って」と制止を掛けてきたので、私たちが小首を傾げていると、「どうせなら話だけじゃなく映像で見てみない？」と提案してきました。

「どういうことですか、シャル？　アインハルトの、クラウス殿下の記憶を見るというのは？」

「そのままの意味だよ、イクス。アインハルト、ルシルの魔法の中には対象の記憶を、複数の別対象に共有して視覚化するものがあるの。どう？　もちろん、あなた自身の記憶には一切触れないようにさせるし」

「何故、俺に一向に許しを乞わずに話を進めるのかがちょっと解からないんだが・・・」

腕を組んでジト目で睨むルシルさんに、ジークリンデ選手が「そんなすごい事出来るんですか？」と尋ねました。記憶を見るというのは魔法で出来るようなものなんでしょうか。レアスキルなどの類かと思うのですが・・・。

「まあな。アインハルトがそれで構わないというのなら、記憶を見ながら言葉で伝えればいい」

「そうですね・・・。はい、ぜひお願いします」

実際に見ていただいた方が話が伝わりそうですし、その魔法を使ってもらえるようにお願いいした。ルシルさんは「判った。ではみんな、目を瞑ってくれ」との指示を出し、私たちは一斉に目を瞑った。

「呼び覚ます、汝の普遍」

ゾクッと肌に感じる魔力が応接室に充満して、まぶたの裏からでも判るほどの蒼い光が溢れました。そしてフワリと一瞬の浮遊感の後でまた暗くなったところで、『目を開けていいぞ』とルシルさんの声が頭の中に聞こえてきしました。目を開けるとそこは、「ここは・・・！」夢に見たクラウスの、シュトゥラの王城、その庭園でした。

「すげぇぇぇぇ！　マジですげぇぇぇーーーー！」

「わわっ、本当に記憶の世界なんですか！？」

「正直、話半分でしたけど・・・確かにこれはすごいですわ・・・」

「一種の幻のようなものだね。何かに触れようとしてもすり抜けてしまう」

番長さん、エルスさん、ヴィクターさん、ミカヤさんが辺りをキョロキョロ見回しながら驚きを見せており、ヴィヴィオさん達も「うわー♪」と歓声を上げています。が、「ルシルさん、シャルさん、アイリさん・・・？」の姿がありません。

『この術式中、君たちの肉体は無防備だからね。俺たちは護衛として残っているんだよ。アインハルト。術式解除のキーワードは、終わりです、だ』

「あ、はい。判りました。ありがとうございます」

何も無い宙にお礼をしていると、「アインハルトちゃん。ここって時期的にクラウス殿下とオリヴィエ殿下の出会いの辺り？」とジークリンデ選手が尋ねてきましたので、「はい。その当日です」と頷き返した。そんな私たちの目の前に「クラウス・・・」と、仔雪豹のライゼが現れた。

「あれはクラウスがまだ１０歳の頃でした。クラウスとオリヴィエ殿下は、イングヴァルト家と聖王家は親交があったことで、手紙のやり取りをしていました」

――歳の近い友人として仲良く出来たら嬉しい――

クラウスが送った手紙の一文。当時、クラウスと歳の近い子供は近くに居なかったことで、同年代のオリヴィエ殿下とは、その僅かな交流のみで親交を深めた。そして留学生と言う体でシュトゥラへとやって来たオリヴィエ殿下と、あの悲劇の日が訪れるまで長く穏やかな時間を過ごした。

――はじめまして。シュトゥラ第一王子クラウス・イングヴァルトです――

――はじめまして、クラウス殿下！　アウストラシア聖王家より参りました、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと申します！――

私とヴィヴィオさんの視線が交わった。ヴィヴィオさんは「わたし達が初めて会った日を思い出しますね♪」と笑いました。その笑顔はオリヴィエ殿下と本当に似ていて。私は小さく「はい、そうですね」と返すだけ。少し素っ気無かったと思うけど、やはりヴィヴィオさんやジークリンデ選手のように笑えない・・・。

「紅と翠に煌く瞳、風に靡く金糸のような髪、太陽な笑顔がとても素敵な少女でした」

それがクラウスの第一印象だったようです。実は私も初めてヴィヴィオさんにも同じような思いを抱きました。だからこそ私の一方的な気持ちを彼女に向けないため、私は距離を取っていた。

「オリヴィエ殿下は、生まれつき両腕が巧く機能せず、腕を使う際には魔力で稼動する籠手を付けていました。そんな彼女の友人にはヴィルフリッド・・・リッドが居り、２人がシュトゥラへとやって来た頃には、彼はエレミア製の武具用籠手を彼女に贈っていました」

「籠手・・・？」

「はい。普段装着していた籠手でもオリヴィエ殿下の生活にさほど支障はなく、軽い武技の練習などもこなせていました。ですがエレミア製の頑強な籠手を装着しての彼女の武技は、リッドと共に鍛錬

していたことで、天賦の才能と合わせて素晴らしいものでした」

今目の前にあるクラウスとオリヴィエ殿下の生活。共に勉学を教わり、武技を鍛え、常に共に過ごしていた。自分の身の丈ほどある大剣や戦斧を自在に操るだけでしたが、リッドより贈られた籠手を装着すれば正確無比な無手での組み手も可能になり、さらにその強さに磨きを掛けていきました。クラウスは、彼女とともに強くなっていることの実感に震え、そして彼女の成長を喜んでいた。

――武具ということでシュトゥラへの持込が遅れてしまいましたが、ようやく本格的な組み打ちが出来ますね、クラウス！――

――あなたの友人というのは確か・・・――

――はい！　エレミア、ヴィルフリッド・エレミアです！　私に武術の基礎などを教えてくれた、大人しくて優しくて友人です！　学問を修めるためにベルカの各地を旅しているんです。クラウスとだってきっと、仲良くなれるはずです♪――

「ウチのご先祖様が、オリヴィエ殿下に武術を教えてたってこと？　それはウチも知らんかったな～・・・とゆうか、ご先祖様の事はなんも知らへんのやけど」

「エレミアはダールグリュン家とも交流がありましたけど、ジークの実家や私の家にもその辺りの資料はあまり残されていないの。ですから貴重な話ですわ」

クラウスとオリヴィエ殿下のやり取りを聞いたジークリンデ選手が何度も頷き、ヴィクターさんは満足そうに頷きました。

「・・・リッドは、クラウスにとっても良き友人となりました。シュトゥラ学術院への出向協力という名目でリッドを招きました。オリヴィエ殿下からリッドの強さを聞き及んでいたクラウスは、出会ってしばらくの後、リッドの強さを知りたいということで彼と組み手を行い、それを機にさらに仲を深めました」

クラウスとオリヴィエ殿下に迎え入れられたリッド。３人で庭園でお茶会を開いたり、雪豹と戯れたりと穏やかな時間を過ごし・・・

――リッド。オリヴィエの話だと、君も徒手の武術を嗜んでいると聞いている。エレミアと言えば、ベルカ史の中でも最古に近い武術の使い手の一族と聞く。どうだろう？　少し手合わせをお願い出来ないか？――

クラウスの好奇心を刺激したリッドは、オリヴィエ殿下からのお願いもあってその申し出を受けた。後に覇王流と語られることになる武技の基礎、断空による一撃をリッドに打ち込んだ。断空拳と名前が付けられる前の一撃です。吹き飛ばされないようにリッドは踏ん張り、断空は王城のタレットに大穴を開けた。そして手を抜かれたことに気付いたクラウスは、今度は本気での組み手を申し込み・・・

「鉄腕解放・・・！」

応じたリッドは、ジークリンデ選手も使うエレミアの武具を解放。番長さんが「おお！　鉄腕じゃねぇか！」と興奮し、「うるさいですよ、トライベッカ選手」とエルスさんが嗜めました。クラウスとリッドは今度は本気で組み手を行い、相打ちで決着しました。

「この後、クラウスはとても怒られました。王城に穴を開けるとは何事か、と」

「割りとやんちゃだったんですね～」

「やはり言葉だけではなく、こうして目で見ると印象が変わってくるね」

学問を多く修めていることでリッドが教師としてクラウスとオリヴィエ殿下に授業することが増え、さらに３人一緒に武器・徒手の鍛錬をし、いつ終わるとも知れない戦乱の中でも穏やかな時間を過ごしました。

――リッドがまた、どこへ行くとも言わずに旅立ってしまいました・・・――

――うーん。手紙に、少し出掛ける、だけじゃなくてもっとこう・・・――

リッドに宛がわれた部屋の机の上に置かれていた手紙を読み、クラウスとオリヴィエ殿下がガクッと肩を落とすのを見て、私は「こうやってフラリと数ヵ月も旅に出ることが多く、２人はほとほと困っ

ていました」と私も肩を落とした。

「放浪癖が見事に子孫にまで受け継がれているのね、ジーク？」

「あぅ・・・。そやかて同じ場所に留まるんはなんか気持ち悪いゆうか、動いてへんと落ち着かんのやもん」

ジークリンデ選手も、シャルさんが仰っていたように放浪することが多いようで、ヴィクターさんが不満を漏らしました。エレミアは旅をする一族でしたし、やはり血には逆らえないようです。

「そんな中、予てよりベルカ統一を果たすべく動いていた大国イリュリアが、シュトゥラへと無宣言戦争を仕掛けてきました。リッドはその頃からよくフラリと居なくなることが多くなり、まるで入れ替わるかのように、後のベルカ史において魔神として語り継がれる魔導騎士、オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァローードがベルカを訪れました」

シュトラはラキシュ領にイリュリアの騎士団が現れたと知り、クラウスは即座に騎士隊を率いてラキシュ領のアムルへとやってきた。そこでアムルの危機を救ったオーディンさんとの初邂逅を果たした。

――はじめまして、僕はクラウス・G・S・イングヴァルトという。まずはアムルを守ってくれたことに礼を言わせてくれ。ありがとうございます――

――オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァローードです、

クラウス殿下。それと礼など無用。礼が欲しくて戦ったわけではないのだから――

「ルシルさんやフォルセティ君にそっくり過ぎだね・・・」

「そっくりっつうか、もう本人じゃね？レベルだぞ」

「子孫ってここまで似るものなんでしょうか・・・？」

フォルセティさんがオーディンさんのクローンであることを知らない、ミカヤさんと番長さんとエルスさん、それにジークリンデ選手が「ルシルさんとは佇まいまでそっくりや。えぇ、こんなんありえるん？」と首を傾げました。私もテレビで観て、そして実際に会った時は驚いた記憶がある。

「オーディンさんはその後、自らの目的を後回しにしてもアムルを守るとクラウスに誓い、後日グラオベン・オルデンという騎士隊を創設。イリュリア戦争後までアムル、ひいてはシュトゥラ、ベルカの危機をも救ってくれました」

クラウスは王城へと戻るので、オーディンさんが騎士として直接戦闘を行う姿は見ることは叶わなかった。ここで番長さんが「そういやフォルセティは記憶とか受け継いでんのか？」と尋ねました。

「あー、ううん、僕は記憶は受け継いでないかな・・・？　でもお父さんや魔神オーディンが扱うセインテストの魔法と、ちょっと魔力に特別な力を付加できるスキルを少々・・・」

「ほう。どういったものか教えてもらってもいいかい？」

「はい。えっと、魔法が一切通用しなくなるって感じでしょうか。魔法は、個人の魔力の優劣で強弱が付いたりしますよね。えっと、Ｓランクの魔法にはＡランクの魔法が通用しないみたいな。でも僕の受け継いだ特別な力・・・魔術っていうんですけど、魔力を魔術発動用に変化させると、たとえＳランクの魔法が相手でも、Ｃランクの魔法で勝っちゃうんです。・・・お父さん、こんな説明でいい？」

番長さんとミカヤさんの質問に答えたフォルセティさんからの確認に、「ああ。魔法による干渉を一切許さず、しかし一方的に干渉できるのが魔術となる」とルシルさんが返しました。全ての魔法を無力化できる魔術。オーディンさんの強さはおそらく、そこにあったのでしょう。

「すごいっスね、それ！　そんなんでインターミドルとか他の競技会に出れば優勝間違いないっスよ！　おいおい、フォルセティ。インターミドルにゃ男子の部があんだろ。出りゃよかったじゃねぇか」

「あー、うん。でも僕はヴィヴィオ達の応援とサポートをするって決めたから。それに魔術には魔法と違って非殺傷設定がないんです」

「魔術は、魔法より古い体系でね。魔法以上に戦闘特化している所為で、対人には扱ってはいけないと、俺もフォルセティも自身にルールを課しているんだよ。魔術は殺しのためにあるからな」

「マジっスか、こえー」

番長さんが僅かに引いているところ、「コホン。話の腰を折ってしまったわね。続けて、アインハルト」とヴィクターさんに促され、ジークリンデ選手も「お願いや」と頷きました。私は「はい」と頷き返し、話を戻した。

Ｅｐｉｃａ２８－Ｂ覇王の記憶～Ｍｅｍｏｒｙ　ｏｆ　ｆａｒｅｗｅｌｌ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

リッドが居なくなってからイリュリアとの小競り合いは激化し、オリヴィエ殿下との穏やかな時間が少しずつ減っていきました。さらにオリヴィエ殿下の両腕の機能がさらに低下し始め、エレミアの籠手での補助があっても武技の洗練さも徐々に欠けていきました。

「そんな中、クラウスとオリヴィエ殿下にとって嬉しい出来事もありました。オーディンさんの治癒魔法や医学の知識がベルカには無いものばかりという話を聞いたクラウスは、オーディンさんを頼り、そして・・・」

――はじめまして。わたくし、聖王家王女オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと申します。このたびはわざわざアムルよりお越しくださって感謝いたします――

――お初にお目に掛かります、オリヴィエ王女殿下。オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロードと申します。この娘は同じく医者のシャマル。クラウス殿下やオリヴィエ王女のご期待に添えられるかは判りませんが、私の魔道が御役に立てばと思い、参上しました――

オリヴィエ殿下とオーディンさんの出会い。そんなシーンの最中、

「オーディンさんの後ろ、シャマル先生だよね？」とコロナさんが小声でポツリと漏らし、リオさんも「シグナムさん達もいたよね」と首を傾げます。

「ビックリしました。ザフィーラ師匠やヴィータさんも一緒ですし。アギトさんだって」

"夜天の魔導書"や守護騎士についてはどうやら秘匿情報のようで、転生を繰り返すあの方たちはいつの時代も姿が変わらないその真実については知られていないようです。コロナさん達の視線がフォルセティさんに向きますが・・・

「えっと、ご先祖かな～。あ、でもアギトお姉ちゃんとアイリお姉ちゃんは、このベルカ時代に生まれた融合騎だから本人だよ」

少々無茶な誤魔化しをしますが、オーディンさんとルシルさんという例もありますし、「偶然なんだ～」と納得したようです。

――オリヴィエ王女殿下。まず腕以外には問題はありませんでした、ご安心を。おそらく私の持つ魔道を使えば治す事が出来るかと思います――

「オーディンさんの魔法によりオリヴィエ殿下の腕が治ることが判ったのですが、喜んでいたのも束の間、イリュリアの大規模侵攻が確認されたと報せが入りました」

オーディンさんとシャマル先生、それに「シャルのご先祖様ですね」

とイクスさんの言うように、オリヴィエ殿下付きの護衛騎士リサが飛行魔法で先行し、クラウスも騎士団を率いての迎撃へ。

――なんと・・・！　これがオーディンさんの魔導・・・！――

白銀に輝く巨大な一対の腕が戦船を真っ二つにへし折ったり、殴って拉げさせたり、オーディンさんが戦船の艦載砲で同士討ちを誘ったりと、ほぼ単独でイリュリアの戦船を撃沈せしめた。さらに驚くのは、ラキシュ領上空に留まる巨大な像。馬の首だけのもので、額より1本の角が生え、両側に浮遊する巨腕、頭上に黄金に輝く紋様ガ浮かび、神々しさを感じる。

「なんだ、ありゃ！　デケェ！！」

「巨腕はオーディンさんの魔法で、像の方は使い魔だそうです」

「セインテストの魔法ですわね。セティは使えるのかしら？」

「あの銀色の腕はイロウエルですね。魔力の岩石を組み合わせた物で、僕も使えますけど、あんなに巨大なものを構築するだけの魔力が無いから、5分の1サイズくらいになるかと。あと像の方はよくは・・・。セインテストは魔法やスキルなどを次代へとそのまま継承していきますけど、僕はちょっと生まれが特殊で、ああいう使い魔は今のところお父さんしか使えないかと」

「いやそれでもイロウエルという魔法を使えるだけすごいと思うよ」

イリュリアの大規模侵攻は、シュトゥラの圧勝で終わった。侵攻を失敗に終わらせたイリュリアは、これまでと打って変わってシュトゥラへの侵攻を一切中止させた。オーディンさんとシャマル先生はそれから度々王城へと足を運び、オリヴィエ殿下の治療に当たってくれました。その際にささやかながらお茶会を開いたり、戦争後の復興に際しての主な方法を会議したり、楽しい時間がありました。膨大な知識をお持ちのオーディンさんからの数多くの提案に、クラウス達は本当に驚かされていました。

「そんな中、オーディンさんが王城より離れたタイミングを見計らったかのようにリッドが帰ってくる、というのが通例となっていったことで、オリヴィエ殿下が何度かその理由を尋ねた事があったのですが答えはいつも、偶然だ、と変わらず・・・」

「さすがに偶然やないやろうね～。結局その答えって聞けたん？」

「はい。オリヴィエ殿下やクラウスが何度も尋ねたことで折れてしまったのでしょう。リッドはただ、向かい合うのが恐ろしいと感じたから、と言っていました」

「恐ろしい？　これまでのオーディンさんを見る限り、そんな感想を抱かへんと思うんやけど・・・」

ジークリンデ選手の考えに「はい。とてもお優しい方でした」と同意した。先ほど皆さんに話したとおり強く優しい人だった。綺麗な銀色の長髪を靡かせ、クラウスやオリヴィエ殿下のように虹彩異色の綺麗な男性。ベルカを訪れることになった自分の目的を後回しに

してでもシュトゥラのため、オリヴィエ殿下のために、時間を割いてくれていた。クラウスもオリヴィエ殿下も、リッドがオーディンさんに恐れている理由が全く判らなかった。

「リッドがオーディンさんを恐れていた原因は、結局なんだったんだい？」

「最後まで判りませんでした。ひょっとしらエレミアの子孫であるジークリンデ選手が、何かしらの資料などを持っているかと思ったのですが。ジークリンデ選手やヴィクターさんでも判らないとなれば・・・」

「なんか気になんな。エレミアってその時代でもやっぱ強かったんだろ？　なのに恐がるってぇと、オーディンの戦いを見たくらいしかなくねぇか？」

「ですがクラウス殿下とオリヴィエ殿下は、イリュリア戦争やその前の小規模戦闘などで魔神オーディンの戦いを見たのではないですか？」

「いえ。先ほどの記憶の通りクラウスとオリヴィエ殿下は、直接オーディンさんの魔導戦を見たことがないんです。カスティタスという巨大な使い魔の召喚、当時のベルカを恐怖させた巨大兵器エテメンアンキの破壊などを、遠くから見たくらいで・・・」

エルスさんの問いにはそう答えた私は、リッドがオーディンさんを恐れた理由が、番長さんの考え通りのものなのでは？と考える。で

すがオーディンさんはシュトゥラの味方でした。敵ならいざ知らず、味方であるオーディンさんを恐れる理由・・・。やはりオーディンさんの戦いを見ただけで恐れるでしょうか。

「あの子もそういえば・・・恐がっていたような・・・」

「あの子ですか・・・？」

ポツリと無意識のうちに洩れた言葉。ヴィヴィオさんの問いに「はい？　何でしょう？」と首を傾げると、ヴィヴィオさんも「え？」と首を傾げました。そんな私たちを見てヴィクターさんが「アインハルト。今あなた、あの子も恐がっていた、と言ったのよ」と言いました。

「ひょっとして、クラウスとオリヴィエ、リッド以外にも同じ時間を過ごした誰かがおったん・・・？」

「誰かが・・・」

記憶全体にノイズが走って、今見ている記憶と先ほどまで見ていた過去の記憶が混じり始める。ジークリンデ選手の言うように誰かが、仲の良い友人がもう1人いたような気がする。思い出そうとすると記憶映像のノイズが激しくなる。

「あ、おい。子供ん頃の記憶の方になんか映ってんぞ」

「クラウス殿下とオリヴィエ殿下とリッド、それに・・・」

「小さな女の子・・・？」

森の中を散策するクラウス達の映像の中、女の子の姿が映りこんだ。ノイズで顔がハッキリ見えないですが、私はこの子を知っている。いえ、知っていて当然の少女。これはクラウスの記憶なのだから。必死に記憶の中を探り、ノイズに隠れたままの少女の顔を、名前を思い出そうとする。この少女もまた、クラウス達にとってとても大切な友人だったはず。

――クラウス、ヴィヴィさま、あとミア――

その声、その呼び方、チラリと見えたネコのような耳。そう、彼女は確か「クロ、クロゼルグ・・・？」私は少女の名前を口にした。すると靄が晴れるように記憶が鮮明に浮かび上がってきて、記憶のノイズも綺麗になった。

「思い出しました！　魔女の森のクロゼルグです！　名前はそう・・・カイラ・クロゼルグ！　どうして彼女の事も忘れていたのか。ヴィクターさんが提案してくださらなければ、私はこれからもクロゼルグの事を忘れていたかもしれません」

「いいえ。私の方もこうして多くの歴史を観られて嬉しいですわ」

クロは、魔法とはまた別の体系である魔女術を使う魔女（クロゼルグ）の一族の一員で、よくイタズラをしてきました。クラウスやオリヴィエ殿下とはとても仲が良かったのですが、どうもリッドとは折り合いが悪く

・・・

――いぃぃー！　ミアなんてきらーい！――

記憶映像のようにクロはリッドにはなかなか懐かなかった。リッドも最初はなんとかして仲良くなろうとはしていたけど、やはりクロはツーンとそっぽを向くばかり。

「このクロって子、どうしてリッドさんと仲良く出来ないんだろ？」

「リッドさんもとっても良い人なのにね～」

「でも一緒に行動してるから、心の底から嫌ってるわけじゃないみたいだけど・・・」

「本当に嫌いでしたら、無視をするなりしますでしょうし・・・」

ヴィヴィオさんとリオさんとコロナさんとイクスさんが同じように首を傾げました。そんなヴィヴィオさん達の様子に、ヴィクターさんが「まぁ気の合わないこともありますわよ」と番長さんを見て、番長さんも「そういうこった」と鼻を鳴らしました。確かにヴィクターさんと番長さんの関係に似ていますね。親しいようで反目しあっていたりと・・・。

「それにしても可愛ええな～♪　耳も尻尾もフサフサや～♪　触られへんのが惜しい～」

ジークリンデ選手は、クラウスに負ぶさっているクロの揺れる尻尾や耳に触れようと試みていますが、残念ながら幻なのでスカッと透けてしまっている。ジークリンデ選手は可愛いものがお好きなのでしょうか・・・。

「えっと、記憶を元に戻しますね」

大規模侵攻後の1ヵ月は平和でした。オーディンさんのおかげでオリヴィエ殿下の腕もこの頃には完治して、クラウスやリッドと再び鍛錬を始めました。ですが、その平和な時は終わりを迎えた。大規模侵攻の圧倒的勝利が、イリュリアの暴走を引き起こすことになってしまった。王女テウタが父王を殺害して、王座に即位。そして"聖王のゆりかご"と同じく古代の遺産である"ミナレット"を起動し、シュトゥラへと砲撃を開始した。

「さらにイリュリアは、オーディンさん達グラオベン・オルデンの不在で手薄となっていたアムルを占拠しました。クラウスはシュトゥラの戦船艦隊を率い、なおも侵攻を続けようとするイリュリアを迎撃に入りました」

その間にオーディンさん達は、アムルの奪還および"ミナレット"の制圧に動いてくれました。そして地上ではオーディンさん達の活躍によってアムルの奪還も"ミナレット"の制圧も無事に終わり、空で睨み合っていたイリュリアの艦隊も引き下がり、事なきを得た・・・と思っていました。

「イリュリアは、ミナレットに続きさらに古代の遺産エテメンアン

キを起動しました。そして・・・」

開かれた傘の骨組みのような形をした"エテメンアンキ"から放たれた８つの砲撃は、イリュリアと敵対するシュトゥラ、バルトはウラル・リヴォニア・リトヴァ、ヴィンランド、シュヴァーベン、ヘルウェティア、ガレアの８ヵ国の都市に撃ち込まれ、多大な犠牲を生みました。

「ひでぇ・・・」

「なんと惨い事を・・・」

「これが現実に起こったものだと思うと・・・」

「ええ、かなり気分が悪いです」

――ベルカに生きる全ての民よ、聴いてください。私は、イリュリアの女王にして、天地統治塔エテメンアンキを統べる天界王テウタ・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルトです――

番長さん達が、遠く離れていても視認できるほどの爆炎と黒煙を見て眉を顰め、ヴィヴィオさん達も顔を蒼くしていました。イクスさんは実体験したことの追体験となり、「はい。本当に許されざる暴挙です」と怒りを露にしました。

「イリュリアに下らなければ、エテメンアンキの砲撃によってその

国を滅ぼすと言う脅迫の元に、テウタ女王はベルカ半球に宣戦布告をしました。イリュリア戦争の開戦です」

イリュリアに対抗すべく、砲撃を撃ち込まれた８ヵ国の代表が、聖王家の治めるアウストラシアに集結しました。記憶の映像が、クラウス、オリヴィエ殿下と兄リナルド殿下、オーディンさん達グラオベン・オルデン、イクスヴェリア陛下（変身魔法で別人に見えますが）とヴィンツェンツ殿下、ドルテ王女殿下、コルネリエ王女殿下、アルフォンス殿下が円卓に集うシーンに切り替わる。

――噂に聞きし魔神とはどれほどの豪傑かと思えば、　女子（おなご）と見間違うほどの優男だな――

「ヴィクターさん。彼が雷帝、バルトロメーウス・ダールグリュン帝です」

「っ！　そう、この方が・・・！」

「お嬢とは全然似てねぇな。オーディンさんに仕掛けた技は、お嬢も使うやつだったけど」

「当たり前ですわよ。しかし本物の破軍斬滅を観られたのは大収穫ですわ」

クラウス達の会議の結果は、イリュリアに屈することなく対抗し、勝利を収めるための連合を建てるというものでした。"エテメンアンキ"内部への突入はオリヴィエ殿下率いるゼーゲブレヒト家の騎

士団が請け負い、オーディンさんが"エテメンアンキ"の砲撃防御および破壊を、その他の騎士団は、イリュリアの全周囲より侵攻して敵性戦力の撃破となりました。そして・・・

――エテメンアンキの砲撃は、魔神オーディンの加護によって完璧に無効化されている！　女王テウタもまた、オリヴィエが討ってくれるだろう！　我等はひたすらに前へ！　前へ！――

空を流れる砲撃の着弾地点からは爆炎も黒煙も上がらず、1発で都市を壊滅できる砲撃はオーディンさんの魔法によって防がれていました。さらにクラウス達がイリュリア騎士団との交戦中、オーディンさんは地上から何十ｋｍと離れた砲塔を砲撃で穿ち、さらには"エテメンアンキ"の砲撃を反射し、あっという間に無力化していきます。

「なあ、オーディンってマジで人間なんか？」

「砲撃の射程もおかしいですけど、その威力もおかしいですよ」

「ベルカ史上最強の魔導騎士と謳われるのも、クラウス殿下のこの記憶を見れば納得ですわ」

"エテメンアンキ"の最後は、女王テウタに裏切られたネウストリアの戦船の特攻によって壁に大穴を開けられ、そこをオーディンさんの強大な砲撃によってさらに破壊されて崩落というものでした。地表へ崩れていく"エテメンアンキ"の瓦礫は、オーディンさんの使い魔が細かに粉砕してくれたおかげで、イリュリアにも被害は出

なかった。

「女王テウタはエテメンアンキの崩落から逃れ、イリュリア王都の地下にて兄バルデュリス殿下の手に掛かり死亡。殿下がイリュリアの王として即位して、対イリュリア連合に参加したアウストラシアやシュトゥラなどに今後起こる戦に協力することを表明。ですが軍備の軍縮や国土の割譲などの賠償も受け、その弱体化は明らかでした」

イリュリア戦争後、各国は復興の道を進んでいました。イリュリア騎士団の戦争推進派の残党による悪事もありましたが、それも各国の協力で解決していました。が、イリュリア騎士団の総長グレゴールや一部の幹部連中が姿を晦ませたのが各国の不安でした。

「それでもイリュリア戦争で弱っていた各国でしたが、他国からの宣戦布告を受けることなく復興を順調に進めていました」

「そりゃまあ、戦争で弱まったっつっても連合組んでんだから、そう手を出せねぇだろ」

「はい。それもありますが、最大の理由がオーディンさんにありました」

私がそう言うと皆さんが「あー」と納得し、イクスさんが「あのお方だけは敵に回したくないですしね」と懐かしむように目を閉じました。まさに一騎当千の戦力であるオーディンさんが居るということが、他国への抑止力となっていました。リッドも、オーディンさ

んが王城へ訪れないことが多くなり、王城で過ごす時間も増えていったのですが・・・。

「その平和も長くは続きませんでした。・・・オーディンさん達グラオベン・オルデンの戦死です」

――私がベルカを訪れ、留まる理由だったエグリゴリからの宣戦布告。これが最後の機会でしょう。クラウス。頼みがある。エグリゴリとの戦いの後、私は間違いなく無事じゃない。そもそも無事に生き残れるような相手じゃないんだ。高確率で相討ちだろう。クラウス、オリヴィエ王女殿下、リサ。今までお世話になりました。どうかお元気で・・・――

――あなたの握手に応じれば、あなたとの永遠の別れを受け入れることになる。オーディンさん。だから僕は――僕たちは、あなたの握手には応じられないのです――

――必ず再会しましょう。その時にまたもう一度握手を――

――判った。また逢おう。再会の証として、その時にまた握手を。クラウス、オリヴィエ王女殿下、リサ――

オーディンさんがクラウス達に差し出した右手にクラウス達は応じず、"エグリゴリ"という人型魔導兵器との戦いの後に改めてお別れの握手をしようと約束をしたのですが、「その約束は果たされることがありませんでした」と私は漏らした。オーディンさん達の死が各国に伝わるのはそれから数ヵ月後。最初は噂程度だったものが

次第に事実として伝わり、ベルカは再び戦乱の時代を迎えました。

「水や大地を穢す猛毒の弾薬、人も草木も全ての命を腐らせる腐敗の兵器・・・禁忌兵器と呼ばれるそれらが投入され、ベルカの大地は死に向かい始めました。国が滅ぶだけならまだしもベルカという世界そのものが滅びかねないということで、アウストラシアは聖王のゆりかごの起動をベルカ全土に宣告しました。その時はまだ警告としての意味合いでしたが・・・」

――ゆりかごの起動？　確かにこの戦乱を終わらせるには最早その手段しかないようには思えるが・・・――

――クラウス王子。ヴィヴィ様が愚かな選択をしないように気を付けなければ・・・――

――・・・彼女は優しすぎるからね。ゆりかごの王に立候補しないとも限らない――

――こんな時にオーディンさんが居てくれたら・・・――

――おや？　君はオーディンさんのことを苦手としていただろう？――

――それは、そうだけど・・・。僕は彼の実力は認めていたんだよ。恐ろしくもありながら神々しい魔力と魔導。僕は・・・――

――でもオーディンさんはもう居ない。それにイリュリアとの戦い

で十分に助けてもらった。これ以上迷惑を掛けることは出来ない。一時とはいえ彼がくれた平和を取り戻すのが、残された僕たちの仕事だ――

クラウス達はオリヴィエ殿下をなんとしても"ゆりかご"に乗せないと考えていたのですが、ある事がきっかけとなり、それがオリヴィエ殿下の決意を確固たるものにしました。記憶の映像が、燃え盛る森のものへと変わる。

――クロー！　どこだ、クローー！――

――皆さん、どうか返事をしてください！――

――魔女猫ー！　みんなー！　どこに居るー！？――

「アウストラシアの宣言したゆりかごの起動、威嚇による圧制を許さないという一部の国が、アウストラシアの聖王血統者と、それを庇護する国や団体を標的にして攻撃を仕掛け始めたのです」

魔女の森を焼き払ったのもそんな国の者たちでした。ヴィクターさんが「ダールグリュンの治めていたバルト三国も、その標的にされていたそうですわ」と肩を震わせ、番長さんも「クソが・・・！」と吐き捨てました。

「この事件の後、オリヴィエ殿下はアウストラシアへと式典に参加する為に、リッドと共に一時帰還したのですが、彼女はそのままゆりかごの聖王となってしまいました。シュトゥラ王家やダールグリ

ュン帝が反発したのですが、それが聞き受け入れられることはなく。ですがシュトゥラ王家やダールグリュン帝の度重なる陳情のおかげか、たった1日だけシュトゥラへ戻ることが許されたのです」

――オリヴィエ！　解かっているのですか！　聖王のゆりかごの王となるということは、即ち死と同義なのですよ！――

――もちろん解かっています。もうベルカの大地を守るためにはこうするしかないのです――

――だからと言って何故あなたが！　他にはいないのですか！　ゆりかごと同調できる血統者は！――

――同調率は私は一番高かったのです、クラウス。ですからその分、ゆりかごを長く飛ばせます。少しでもベルカが平和となるための時間が続くように――

オリヴィエ殿下がシュトゥラへ戻る道中、クラウスが騎士隊を率いて敵勢力との交戦をしているのを見て共闘し、これを撃退した後、クラウスはオリヴィエ殿下と問答を繰り広げました。そしてオリヴィエ殿下の意志が固いと判ったクラウスは・・・。

――僕も、リッドも、クロも、そしてきっとオーディンさんも、あなたを死なせたくないから！　だから僕は無理やりにでもあなたを止めます！――

――クラウス。・・・ごめんなさい。それでも私はみんなの未来を

守りたいんです！！――

クラウスはオリヴィエ殿下のため、オリヴィエ殿下はベルカのために、お互いに守りたいもののために拳を交え、そして・・・。

――あなたはどうか良き王となって、国のため民のために皆と一緒に生きてください。この大地が枯れぬよう。青空と綺麗な花をいつでも見られるような、そんな国を・・・――

「こうしてクラウスはオリヴィエ殿下を止めることが出来ず、オリヴィエ殿下はシュトゥラへ戻ることなくそのままアウストラシアへと帰り、式典の後にゆりかごへ搭乗し、以降クラウス達が再会を果たすことはありませんでした」

"聖王のゆりかご"の浮上を見、"ゆりかご"の威容が戦場の空を支配しました。その後、クラウスは１０年以上に亘り戦場を駆け、その間にシュトゥラの王位を継ぎ、覇王として名を馳せました。

――オリヴィエ。あなたがゆりかごに搭乗して一体どれだけ経っただろうか。未だに夢を見る。あなたを止められなかったあの日を。僕があの時、もっと強ければあなたを救えたかもしれない。それだけが・・・――

クラウスの最期の瞬間。いつ息絶えるとも知れないほどに戦いで傷つき、足元には血溜まりが出来ている。空を仰ぎ見ればいつも変わらない曇り空。禁忌兵器が使われ始めた頃からベルカに青空なんて見ない。

――っ・・・！？――

クラウスの胸に突き刺さる一振りの長剣。ガクッと膝を突き、剣を投擲した相手を睨み付けたクラウスでしたが、逆光の所為でよくは見えなかった。ですが、禿頭と巨体という特徴で行方不明のイリュリア騎士団の元団長、グレゴール・ベッケンバウワーだということが判りました。

――オリヴィエ・・・、僕は・・・――

こうして覇王クラウスの生涯に幕が下りました。

Ｅｐｉｃａ２９－Ａ大隊の罠～Ｔａｒｇｅｔ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

ルシルさんの魔法によって見ることが出来た、アインハルトさんが受け継いだ覇王クラウスの記憶。アインハルトさんの「終わりです」の一言で記憶映像も消えて、わたし達は応接室で目を覚ました。シャルさん達からの「おかえり～」っていう挨拶に元気よく返したかったけど、クラウス殿下の記憶のこともあって「ただいま・・・」沈んだ声でしか返せなかった。

「・・・アインハルトが背負った覇王クラウスの記憶に、みんなショックを受けちゃったみたいだね。でも問題はこれから。アインハルト、あなたはこれからどうしたい？」

「私は・・・。クラウスの知らなかったオリヴィエ殿下のお考えを知りたいんです。オリヴィエ殿下と共にアウストラシアへと戻ったリッドは、彼女とどんなやり取りをしていたのか、そしてゆりかご起動後は一体何をしていたのか。クラウスは、オリヴィエ殿下とリッドを見送り、そして戦死するまでの間、一度もリッドと再会できませんでした。ですから・・・その当時の事を知りたいです」

「う～ん、ウチもお手伝いできたらええんやけど、さっきヴィクターが言うたように、当時のエレミアの資料って残ってへんからな～」

「シャルさん。聖王教会などには残されていないのですか？」

ヴィクターさんに聞かれたシャルさんだけど、「どうだったかな～？
ちょっと調べて観るよ」って腕を組んで唸った。そんな中、わたしとフォルセティとコロナとリオは、「無限書庫で見かけなかった？」ってヒソヒソ話。

「ヴィヴィオさん達は何をお話してるんですか？」

「あ、ミウラさん。えっと、これまではそんなに気にしていなかったんですけど、今のクラウス殿下の記憶やアインハルトさんのお話で、エレミアの名前をどこかで見たって思い出したんです」

ミウラさんにそう答えたわたしは、アインハルトさん達に向いて「あの、もしかしたら在るかもしれません、エレミアの資料」って伝えた。

「ホンマか！？」「本当ですの！？」

「ヴィヴィオさん、それは一体どこに！？」

ジークリンデ選手やヴィクターさん、アインハルトさんに詰め寄られてビックリしちゃったけど、わたしは「無限書庫です」って答えた。

「検索目録で見た覚えがありまーす！」

「うんっ。古代ベルカ項目の、歴史上の人物の手記欄の見出しで！」

「以前、僕たちはオリヴィエについてもっと知ろうって考えたことがあって、いつか探索してみたいねって」

「「「ね♪」」」

でもなかなか時間が取れず、今日まで実行できなかった無限書庫探検。

「無限書庫て管理局のデータベースやろ？　ウチらみたいな一般人は入れんのとちゃう？」

「ですわね。ヴィヴィ達はどうしてそんな事を知ってるのかしら？」

「社会科見学とかじゃね？」

「なるほどです。確かにそれくらいしか理由がないですね」

「しかし本局の無限書庫に社会科見学か。そういう学業イベントがある学校もあるのか。私の通っていた学校にはそんな行事はなかったから羨ましいよ」

ヴィクターさん達が首を傾げてるのを見て、わたし達子供組はちょっと嬉しくなった。ストライクアーツとか格闘技選手としてはまだまだなわたし達だけど、ちょっと特別な資格を持ってることでちょっぴり優越感を得ちゃった。

「シャルさんやルシルさんは局員だから、その辺りの許可を出してはもらえないだろうか？」

「ごめん、ミカヤちゃん。わたし達は今、ちょっと管理局施設に入れないの。局と教会のいざこざがね・・・」

「だが安心するといい。な、フォルセティ、ヴィヴィオ？」

ルシルさんの視線に倣って皆さんの視線がわたしとフォルセティに集中。わたしとフォルセティは皆さんに見えるように「わたし達！」「司書資格を持ってます！」って提示して、コロナとリオとイクスも「立ち入りパスを持ってま～す！」って提示した。ポカーンとした後の「えええええーーーー！？」皆さんの驚いてる顔に思わず噴き出しちゃいそうになっちゃった。

「いやいやお前らマジでどんな小学生だよ」

「あなた達すごいのね・・・」

「ほあ～、ビックリやわ～」

「無限書庫・・・。ヴィヴィオさん達の付き添いがあれば、パスの持っていない私たちでも入れるのですよね・・・？」

「はい。一応事前に何人見学するかの申請が必要ですけど、司書資格やパスを持った人が同行するのなら入れます」

アインハルトさんにそう説明してる中、「あった。エレミアの手記！」フォルセティが無限書庫のデータベースにアクセスして、アインハルトさん達の目的の書物を調べてくれていた。

「場所は・・・ちょっと危険な未整理区画ですね。未だにどのような危険があるか判らない区画の中です」

「今の総合司書長が開拓する以前は、迷宮が発生したり、書物防衛のゴーレムやゴーストが出たりしたそうですしぃ～」

フォルセティが前髪で目元まで隠して、声のトーンを落としてそんなことを言い始めると、パッと部屋の明かりが消えた。カーテンも閉まってるから薄暗い。そんなフォルセティの側に蒼い火の玉ががフッと出てきた。たぶんフォルセティかルシルさんの魔法だって判るわたし達子供組は、手の込んだイタズラだな～、って笑おうとしたけど・・・

「ひゃあああああーーーーーーー！」

「きゃあああああーーーーーーー！」

本気の悲鳴が応接室に響いて、火の玉も消えて部屋の明かりもパッと点いた。

「ジ、ジーク？　そんなに腕を締め付けられたら痛いわ」

「あぅあぅ、アカン、ウチ、得体の知れへんもんとかダメなんよ・

・・」

「び、びび、ビックリしました・・・」

悲鳴を上げたのは意外なことにジークリンデ選手とエルスさんだった。ミカヤさんが「ジーク、君は次元世界最強じゃないか」って苦笑いして、番長が「いつもの威勢はどうしたよ、デコメガネ！」って大笑い。

「た、ただ驚いただけです！　恐がったわけではありません！」

「あーはいはい。火の玉でビビるなんて可愛いじゃねぇかよ、ジークもお前も！」

「番長・・・言わんといて・・・」

「ですから私は怯えてはいないと・・・！」

そうわいわい騒ぐ番長たちは本当に仲が良くて、わたし達は微笑ましく眺めてたんだけど、「あ、ダメだ・・・」わたしは今の自分の状況を思い出してそう漏らした。

「どうかしたの、ヴィヴィ？」

「ヴィクターさん・・・。あのわたし、今あんまり外に出られなくて・・・」

「あ、そうか！　お前ら大隊に狙われてっから、シャルさん達に護衛してもらってんだったよな！」

この前の買い物の時だって大隊がわたし達を拉致しようと姿を見せた。しょんぼりしてると、「まあ大丈夫でしょ」ってシャルさんがわたしの頭に手を置いた。

「大隊も本局内部にまでは侵入しないだろうし、それにわたし達に負けない護衛を付けるから。行っておいで、無限書庫に♪　とはいえ、今からだと無限書庫に行って調査を始めるには時間も遅いから、本局の寄宿舎の手配をしておこっか。っとその前に・・・」

「無限書庫への調査には明日と明後日の２日間を予定とする。行くのはヴィヴィオ、フォルセティ、コロナ、リオ、イクスとアインハルト。ノーヴェ、君も引率として付き添ってもらえるか？」

「はい、判ってます。ちょうどトレーニング休みなんで問題なしっす」

これで明日明後日は本局で寝泊りすることが出来るようになった。ルシルさんは次にジークリンデ選手たちの方へと目をやって、「君たちはどうする？　２日間と時間を取らせるが」って尋ねた。

「ウチも行きます！　危ないところやったら少しでも戦力が要るやろうし、何よりウチのご先祖様に関係してるし！」

「私も行きますわ！　子供たちだけに任せるのは、雷帝ダールグリ

ュンの血統として出来ませんもの」

「オ、オレも！　無限書庫なんてそうそう行けるとこじゃねぇし、それにオレだって役に立つぜ？」

「では私もご一緒させてもらおうかな。ここまで来て置いてけぼりは勘弁してもらいたい」

「ジークリンデにヴィクトーリアにハリーにミカヤだな。・・・エルス、ミウラ、君たちはどうする？」

すぐに立候補したジークリンデ選手たちとは違って、どこか迷ってる風なエルスさんとミウラさんにルシルさんが確認した。お２人が迷ってる理由はやっぱり「一緒に行ってもいいんでしょうか？」っていうものだった。

「こればかりは自主性だからな。ここで降りようと思えばそれで構わないし、行きたいと思えば誰も拒絶はしない。むしろ喜ぶと思うが・・・」

「ミウラさん、一緒しませんか？　もしかすると修行になるかも？」

「修行・・・！」

リオがミウラさんにそう耳打ちしたのが聞こえて、ミウラさんの目が輝いた。そしてエルスさんには、「この子たちとの関係が浅いからという理由なら考え直した方がいい」ってルシルさんが言葉を掛

けた。

「確かに今はまだ出会って初日だろうけど、今年のインターミドルから数年は君のライバルとなり、いつか試合をする日が来るだろう。たまたま初日にイベントが発生しただけだ。遠慮なく参加すればいい」

「ルシルさんの言うとおりだぜ。オレもちびっ子たちとそう何度も会ってねぇし、ジークに至っちゃお前と同じで今日初めてだぜ？」

「ジークは一応関係者なのだから、あなたやエルスさんとは事情が違うのだけど・・・」

「細けぇ事言うんじゃねぇよ」

ルシルさん達にそう言われたエルスさんがわたし達の方を見て、「では私も一緒に行かせて貰いますね」ってメガネをクイッと上げた。だからわたし達は「ぜひ！」って笑顔で応じた。ミウラさんも「ボクも行きます！」って挙手した。

「この場に居るメンバー全員だな。じゃあちょっと連絡を入れてくるよ」

そう言ってルシルさんが応接室を出て行った。待ってる間にお茶をお代わりをルーツィエさん達から貰って時間を潰してると、「待たせた」ルシルさんが戻ってきて、無限書庫への立ち入り調査の許可と、宿舎の2人部屋をいくつか借りられたことを伝えてくれた。

「本局行きの航空チケットも予約しておいた。中央次元港の１番ターミナルで、出航時刻は少し早いが８時４５分発になる。チケットデータを送信するから、携帯端末を出してくれるかい？」

わたしは「クリス！」に、アインハルトさんも「ティオ」にお願いして、コロナ達もヴィクターさん達もデバイスや端末を取り出して、ルシルさんからチケットデータを送信してもらう。席は急だったこともあって纏まっては取れなかったみたい。でもわたしはフォルセティとミウラさんの横並び。アインハルトさんはイクスとジークリンデ選手。コロナとリオは番長とヴィクターさん。ノーヴェとミカヤさんとエルスさんと・・・。

「あれ？　あと４席予約してある・・・？」

「俺たちは本局へは行けないからね。その４席は本局内の付き添い兼護衛の席だよ」

「あ、そっか（ルシルさん、はやてさんに連絡したみたいだし、はやてさんと・・・アインスさんかリインかな～？）。あ、ルールーとリヴィも・・・？」

「ああ。ルーテシアとリヴィアにも同行してもらうように連絡しておいた。他の２人は次元港で合流することになる」

「ヴィクターとジークリンデは自家用車で帰れるんだよね？　ミカヤちゃんとハリーとエルス、ミウラは送って行こうか？　それとも

明日に備えて今日はうちに泊まってく？　遠慮無用で答えてね～♪」

シャルさんからの提案に、番長が真っ先に「お世話になります！」ってお辞儀して、続いてミカヤさんやエルスさんも、今日はフライハイト邸に泊まることにしたみたいで。だけどミウラさんは「えっと・・・」って迷ってる風。

「家族に聞いてみます！　許可を貰えたらボクも・・・泊まっていいですか？」

「もちろん♪　ご両親に連絡しておいで」

「はいっ！」

「あたしも引率者としてご両親に挨拶するから」

ノーヴェとミウラさんが応接室の隅っこに移動して、ミウラさんのご家族に連絡を入れ始める中、「あんなヴィクター。ウチも今日はシャルさん家に泊まってってもええ？」ってジークリンデ選手が小さな声でヴィクターさんに確認した。

「っ！　ええ、私は構わないわよ♪　あなた自身でお願いしてみなさい？　私も今日はこちらでお世話になることを決めたわ」

「あ、う、うんっ！　あの、シャルさん！　ウチも泊まってってええですか！？」

「私もお世話になりたいと思います」

「んっ♪　じゃあここに居るみんなでお泊りね！」

ミウラさんもご家族の許可を貰えたようで、ちょっと前までは想像もしなかったインターミドルのトップ選手たちと同じ屋根の下でお泊りすることになった。

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ⇒ルシリオン†††

ミウラだけでなくジークリンデを始めとした、ヴィヴィオ達の憧れの選手たちがフライハイト邸に１泊することになり、明日早く本局の無限書庫へ行く予定だ。着替えを取りに一度帰宅することになった彼女たちを見送った後・・・

「シャル。この後、トリシュ達が起きてきたら少し買い物に出掛けてくるよ」

シャルに今日の予定を伝える。昨日は夜勤シフトだったこともあって他のメンバーは今も眠ったまま。俺は、シャルがハリーたち客人を出迎えるために早く起きるということで、フォルセティの事もあって彼女に付き合うために早起きした。アイリはそんな俺に付き添うために無理に早起き。だからか全然喋らないしあくびばかりしている。

「あー、うん、判った～。車を出してあげ・・・られないか・・・」

ルーツィアはルーテシアとリヴィア、ルーツィエはミカヤとハリーとエルス、オットーとディードはヴィヴィオ達に護衛として付いている。だから「いいよ。マクティーラも少しは動かさないと」と断りを入れる。

「ん～。わたし、もう一眠りさせてもらうからぁ、気をつけてね～」

「あぅ～、アイリも～行くぅ～」

「そんなフラフラじゃダメだ。シャルと一緒にゆっくり眠っておいで」

「は～い」

フライハイト家の長子としての立場も終わってことで、フラフラと2階へ上がるための階段室へと歩き出したシャルの肩には、本来の大きさに戻ったアイリがうつ伏せで乗っている。さてと。俺も用意をして出掛けよう。食堂で水を1杯だけ貰い、地下駐車場へと向かおうとした時・・・

「ルシルさん、おはようございます」

「おはよう、トリシュ」

トリシュも起きてきたか。彼女にも一応これから出掛けることを伝えておこう。個人的な買い物にこれから出掛けるため、トリシュ達でヴィヴィオ達の護衛を任せたいと。すると彼女は人差し指をあご

に当てて何かを考えると、「私もお付き合いしていいですか？」と聞いてきた。

「問題ないけど、何か買い物があるのか？」

「えっと・・・えっと、あっはい！」

「判った。じゃあ用意してきてくれ。駐車場で待ってるから。あとマクティーラだから温かい格好で」

「はーい♪」

軽快なステップで自室へと戻るトリシュを見送り、改めて地下駐車場へ。"マクティーラ"にサイドカーを装着（魔法技術で取り外しが簡単で楽だな～）して、いつでも出られるように準備を整えたところで、「お待たせしました！」トリシュがやって来た。タートルネックニット、キャミソールワンピース、トリミングコート、ヒールの高いロングブーツという格好だ。

「（本当にエリーゼに似ているな・・・）っと、ああ。ヘルメットは被ってくれよ？」

「あ、はい・・・」

サイドカーに乗車したトリシュにヘルメットを手渡して、被っているのを見守っている中で「その服似合っているよ、可愛い」と、気合の入っていたトリシュの服を褒めてみた。

「～～～～～っ！！」

トリシュは被ったヘルメットをギュッと両手で鷲掴み、肩を震わせたかと思えば、トリシュは「そういうの本当にズルいです！」と、バイザー越しでも顔が真っ赤になっているのが判るほどの顔をこちらへ向けて叫んだ。

「ひょっとしたら褒めてくれますかね～、なんて考えていましたけど！　ヘルメットを被ってくれ、が第一声だったのでダメですか～っと思っていたところに、似合ってる？　可愛い？　落とした後で上げるなんて！」

「イヤだったか？」

「・・・イヤではないです・・・嬉しいです、ありがとうございます！　私の方が年上なのに、振り回されてばかりです・・・」

「どういたしまして」

ボソボソと何かを呟き、嬉し恥ずかしな態度を見せるトリシュに苦笑しつつ、「じゃあ行こうか」アクセルを握り、スロットルを開けて走り出す。地下駐車場、そしてフライハイト邸の敷地内から飛び出し、一路ショッピングセンターへ。

「ところでルシルさんは、今日は何を買いに行くんです？　ルーツィアさん達のお買い物の際に一緒に頼めば・・・」

「ん？　男しか使わない物だし、俺が直接買いに行った方が手っ取り早いんだ」

「お、男の方しか使わない物・・・！？」

信号待ちのために停車させたからこそ聞こえた、「まさか・・・え、えっちな物・・・？」という見当違いなトリシュの考えに俺は「そうだ」からかいのための嘘の返答をしてみた。こういうのはシャルにこそするべきだろうが、彼女にそんな返答をしたところで・・・

――えー？　じゃあわたしの体を使えばいいじゃん♪――

くらいな反撃をしてくるだろうしな～。羞恥心を発揮する場合と役立たずな場合があるから、シャルをからかうには相応の覚悟が必要だったりする。で、トリシュの反応は、俯いて肩を震わせている、というもの。

「えっと、あの、ルシルさんは、その、お、男の方ですから、そういう事をなさるのも・・・理解できます・・・。あぅぅ・・・」

ヘルメットで隠れて見えないが、おそらく顔は真っ赤だろうな～。信号が青に変わったことで再発進。膝の上に置いている両手でもじもじしているトリシュへと念話で『う、そ、だ！』からかっていたことを伝えると、彼女がギギギと擬音が聞こえてきそうな感じで俺へと顔を向けてきた。バイザー越しに見える彼女の表情は（。。。）のような感じで、次第に顔を真っ赤にし始めて、とうとう・・・

『今のは酷いセクハラです！　ビックリです、ルシルさんってそんな事を言うのですか！？』

キレた。しまった、走行中にする話題じゃなかった。ぷんすか怒るトリシュはちょっと可愛らしいが、怒声が頭の中に響いて運転に集中できない。以前にも似たような失敗をしたはずなのに、同じ轍を踏んでしまった。

『すまん！　度が過ぎたイタズラだった！　今日1日何でもするから許してくれ！』

『何でも？　いま何でもと言いましたね？』

怒りから一転ニヤニヤと満足気に笑みを浮かべるトリシュに、『演技だったか・・・？』と俺は苦笑いを浮かべて聞いてみた。

『ふふ♪　さぁ、どっちでしょう？』

イタズラっぽく笑うトリシュには『お手上げだ。出来うる限りの事はしよう！』と俺は笑い声を上げた。今日は温かく、差ほど寒さを感じない中で「ふんふふ～ん♪」トリシュのご機嫌な鼻歌をＢＧＭに"マクティーラ"を走らせていたんだが・・・。

――トランスファーゲート――

「っ！　空間の・・・！」

「歪み！」

ブレーキをかけたが既に手遅れ。歪みに飲み込まれたことで視界が一瞬閉ざされる。一瞬の浮遊感の後、「何も見えない・・・？」空間に放り出された。俺は「ちょっと待ってくれ」停車させた"マクティーラ"のライトを付ける。そこはどうやら「地下・・・？」のようで、十数ｍ間隔に支柱が並んでいる。

「埃っぽいな。廃棄された場所か・・・？」

「廃棄都市区画でしょうか・・・？」

そこはミッドの道路ではなくどこかの廃れた地下で、おそらく北部の廃棄都市区画。ここがどこかを詳しく調べるために「サピタル！」と蒼く輝く魔力球１５基を周囲に展開。そのおかげで周囲５０ｍの様子を視認できるようになった。

「随分と広い空間ですね・・・」

「こんなところ、ミッドにあったか・・・？」

辺りを見回していたところで、遠く背後からドォーン！という轟音とポー！という音。音の出所に振り向くと、カッと何か強い光が俺たちを照らしたことで右手でひさしを作る。

「アレは・・・！？」

「うそだろ、ビッグボーイ・・・！　レールが無いぞ、どこを走っているんだ！？」

俺たちの背後から現れたのは、予想だにしなかった４０００形蒸気機関車、通称ビッグボーイ。大きな汽笛を発しながら突っ込んでくる。俺は「とにかく飛ばすぞ！」と"マクティーラ"を急発進させた。

Ｅｐｉｃａ２９－Ｂ大隊の罠～Ｎｕｉｓａｎｃｅ～

†††Ｓｉｄｅトリシュタン†††

思いがけず訪れたのはルシルさんとの数年ぶりのデート。最初は、ひとりで買い物に出掛けようとするルシルさんに付いて行きたかっただけだった。ルシルさんの実力は誰もが認めている。だから大隊の奇襲があっても拉致はされないと。でも不安が過ぎったこともあって、こうして一緒させてもらった。

――すまん！　度が過ぎたイタズラだった！　今日１日何でもするから許してくれ！――

ルシルさんからのちょっとセクハラに近いイタズラに怒っていると、そんな彼からの謝罪の言葉に私はチャンスだと思い、お願いとして午後はずっと私に付き合ってもらうことに。イリスやはやてはすでにキスを交わしていると聞く。私、完っ全に出遅れてしまっている。焦りはあるけれど、雰囲気も大事にしたいというジレンマ。今日はキスまで行かずとも楽しい時間を過ごせるように考えていたのに・・・。

「許せない・・・」

「トリシュ・・・？」

ルシルさんの運転する"マクティーラ"のサイドカーに乗る私は、

後ろから迫り来る見知らぬ形状をしたビッグボーイという物を睨みつける。何で今日に限って、この時間に限って・・・。

「くそ。本格的に俺たちに標的を絞って始末しに来たか・・・・！
これまでは何かしらの事件へと介入した際に、俺たちは仮面持ちからついでみたく襲われていたが、こうも露骨に狙ってくるとはな！」

「・・・わざわざ転移させてからのビッグボーイ（アレ）ですからね。・・・あ！」

――イリス。もし今の会議が大隊に洩れていた場合、連中はどのような手段に出るでしょう？――

――大隊は・・・というより教会は、わたし達の反逆を事前に止めようとするだろうし、何かしらの手段で分散させての各個撃破・・・ってところかな～――

頭を激しく殴られたかのような衝撃が襲ってきた。大隊の母体が聖王教会だという仮定を前提にしての話。生まれる以前からシュテルンベルク家がお世話になっていた聖王教会。本音を言えば信じたくなかった、信じられなかった。ですが今の状況を鑑みれば、やはり仮定は現実のものだったということに・・・。

「どうします？・・・なんて聞くまでもないですね」

「ああ！　ボコボコに破壊して、大手を振って帰る！」

「ですね！」

先ほどまでのムカムカとしていた胸の内が、このような状況なのに少しだけど治まった。ルシルさんと2人きりでの共闘。こういうデートの仕方もまた私たちらしいといえばらしい。私は「ふふ♪」と思わず笑ってしまった。

「トリシュ・・・？」

「あ、いいえ。なんでもないです。ルシルさん、私が迎撃するので安全運転お願いします！」

廃れた地下ということもあって地面の舗装は酷い所為で車体が揺れ、さらにビッグボーイのライトが逆光となって先ほどから車体を上手く視認できない。でもライトの方はその中心を狙えば破壊できるはず。

（でもさすがにこの揺れだと直射弾は狙いが定まらない・・・）

「どこかに停車させて、降りて迎撃という手段を取ろう、トリシュ！」

「ダメです！　それだとマクティーラが壊されてしまいます！」

廃棄都市区画なんていつ崩落するか判らない場所で、動かない"マクティーラ"を放置するなんて危険すぎる。ルシルさんが"マクティーラ"を大切しているのを何度も見ている。大事に洗ったりメンテナンスしたり、本当に・・・。それをあんなわけも判らない物が

原因で壊されるなんて許せない。私とルシルさんと"マクティーラ"で一緒に帰る。ただそれだけ。

「っ！　・・・すまない、恩に着る・・・・！」

「気にしないでください！　後日、またこうしてドライブさせてくれたら嬉しいですけど！」

「そうだな！　ああ、そうしよう！」

"イゾルデ"を大弓形態シュッツェフォルムで起動させ、騎士甲冑へと変身する。シートに膝立ちして"イゾルデ"を構え、展開した魔力弦に魔力矢を番える。徐々に距離を詰めてくるビッグボーイへと狙いを定め・・・

――翔け抜けし勇猛なる光条――

「往けッ！」

魔力矢を射る。魔力矢は砲撃と化して、ビッグボーイのライトに着弾したけれどパァン！と「弾かれた！？」ことで、ビッグボーイへのダメージはほぼ無し。僅かなりのショックを受けながらも再び魔力矢を弦に番えようとすると、「トリシュ、曲がるぞ！　掴まれ！」というルシルさんの注意によって一時中断。

「いつでも！」

サイドカーのシートの背もたれにしがみ付き、ルシルさんは「行くぞ」！」と"マクティーラ"の前後輪を滑らせるようにして右折。土埃を盛大に上げてカーブを曲がっていく"マクティーラ"を追うビッグボーイは、さすがにその巨体と速度では同じ走行ラインで曲がることが出来ず、そのまま壁に突っ込んで行く。

「きゃあ！」

振動と瓦礫崩落で思わず悲鳴を上げてしまう中、それでも私はビッグボーイの全体図をルシルさんに代わって見ることに注力。

「敵の全体を視認！　１２両編成、各車両屋根に２連装砲台が２基ずつ！　６両目に一回り大きな車両！　屋根には他より大きく、砲身も長い砲台が１基！　アレは・・・レールガン！」

レールガンの全体を確認すれば、それは装甲列車だった。砲台の形状がプライソン制作の兵器に搭載されていた物に似ている。そんな各砲台の砲口に赤い光が灯り、「攻撃来ます！」私はルシルさんに警告しました。

「防御する！」

――護り給え（コード）、汝（ケムエル）の万盾――

蒼く輝く小さな円い盾が何百何千と折り重なって大きな障壁を化す。直後、発射された赤いエネルギー砲（やはり魔力は感じられない）が次々と着弾して、「ぅく・・・！」すごい熱量と衝撃を障壁越し

から私たちに叩きつけてくる。爆風に煽られながらも"マクティーラ"はどこにもぶつからずに走行を続行。

≪Ｗａｒｎｅｎ　！≫

"イゾルデ"から警告が発せられる。装甲列車がバックし始めて、レールガンの砲塔を向けたのだ。ドッと嫌な汗が出た。こんな閉鎖空間でレールガンのような砲撃なんて、砲弾の威力もそうだけど発射時の衝撃だけでもこの地下が崩れてもおかしくない。

「屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖！」

広い空間から装甲列車が通れないような狭い通路へと"マクティーラ"を走らせたルシルさんは、白銀の巨腕で通路の入り口を完全に塞いだ。直後、その奥からレールガンの発射を示す轟音と、着弾時の爆音と衝撃波が通路を駆け抜けていって、私とルシルさんは「ぅく！」呻き声を上げた。轟音と振動は壁の向こう側から続いているかと思えば、"マクティーラ"の走る通路を横切るように赤い砲撃が壁を突き破ってきた。

「くそっ！」

アクセルとブレーキで"マクティーラ"を上手く操作して、砲撃の直撃をなんとか避ける。どこか広い場所か地上へ出られる通路が無いかを探ろうにも、状況がそれを許してくれない。長い長い通路を抜けた先、そこは先ほどの広間と同じ大きさの半球状ドーム。

「地面の凹凸が酷いな・・・。オフロードでも走れるマクティーラだがさすがに・・・」

地面には数多くの瓦礫が散乱していて、サイドカーのタイヤが瓦礫に引っ掛かって速度がガクッと落ちてしまっている。瓦礫にサイドカーのタイヤが乗り上げては激しく揺れて「ひゃん！？」クッションありでもお尻が痛くなって・・・。そんな急いでいるのに急げない中、ドカーン！と派手な音を立てて装甲列車がドームの壁を突き破って来た。

「ダメだ！　トリシュ、こっちのタンデムシートに移ってくれ！サイドカーを切り離す！」

「っ！・・・判りました！」

完全な状態の"マクティーラ"と一緒に帰りたかったけれど、ここで死んでしまっては元も子もない。私は急いでサイドカーからルシルさんの後ろのシートへと移る・・・前に、私は「ごめんね、ありがとう」とサイドカーをそっと撫でた。"イゾルデ"を待機形態のイヤリングに戻して、シートに座ってルシルさんにしがみ付くと同時、"マクティーラ"が急発進。直後にその場所に砲撃が撃ち込まれた。

「「くぅ・・・！」」

衝撃と爆風に煽られつつも無事に走り出す"マクティーラ"にその大きな車体を近付けてくる装甲列車。あんなものに体当たりをされ

たら、さすがに質量に押し負けて潰される。

「イロウエル！」

そこでルシルさんは巨腕イロウエルをもう一度展開して、ビッグボーイの横っ腹をぶん殴った。私の魔力攻撃を弾いたビッグボーイだったけど、純粋魔力攻撃じゃない物理攻撃に火花を散らせて大きく弾かれた。でも同時にイロウエルも粉砕されて、「ただの障壁じゃないのか！」とルシルさんが吐き捨てた。

「でも効果はあります！」

「ああ！　進路妨害が出来ることが判っただけでも十分だ！」

ドームを突っ切って通路内に進入して、次の広間に入った瞬間、パパッと複数のライトに照らされた。ルシルさんはブレーキをかけつつ左へと曲がるようハンドル操作。後輪がスライドして、私たちは横っ腹を複数のライトへと向けることに。その中で私は目を細め、なんのライトかを視認。

「っ！！　ルシルさん、おそらく装甲車です！」

「ライトの位置からしてそんな気はしていた！」

――屈服（コード）させよ、汝（イロウエル）の恐怖――

複数台の装甲車より数え切れないほどのエネルギー弾が発射され、

ルシルさんの「薙ぎ払え！」号令によってイロウエルはエネルギー弾を防ぎ、装甲車を虫を払うかのようにペシッと薙ぎ払った。装甲車が宙を舞い、地面に墜落する中でイロウエルもやはり砕けた。それでも私たちは無傷で済み、広間を抜けてまた別の通路へと入る。僅かなりの坂道のようで少しずつ上がっていっている。

「ＡＭＦとはまた別種・・・か」

「魔術・・・？」

「いや。魔術障壁なら俺が気付ける。妙な技術で強化されたＡＭＦと仮定した方がまだいい」

「・・・こういう時に魔導至上主義は厄介ですね」

クリーンエネルギーとして魔力素運用が当たり前の管理世界。現代の文明は魔法に支えられていて、それを覆す方法が生まれると今の魔法文明が崩壊する可能性がある。以前からその危険性は提唱されてはいるけど、魔力素に変わるクリーンエネルギーを見つけることが、創ることが出来ないこともあってそのまま。だから今の装甲列車や装甲車など、魔法を弾く兵器が公に広がれば・・・。そんな未来、考えたくもない。

「仕方ない。それだけ魔法文明は優秀だということだ」

坂道を上り切ってもまだそこは地下だけど先ほどまで居た階層とは違い、割と舗装の整った４射線道路へと出た。通路のど真ん中に支

柱が等間隔で並んでいるのは邪魔ですけど、それでも走行には余裕のある広さ。そんな時にまた背後からライトがパッと照らされ、ポー！とあの音が。

「追いつかれた！？」

「というよりは、転移してきたんだろうな・・・！」

"マクティーラ"の速度を上げて逃げの一手選ぶルシルさん。装甲列車も走り出し、その速度を上げて突っ込んでくる。ルシルさんが何度目かの「イロウエル！」を発動し、ビッグボーイを真っ向から殴った。

「なに！？」「っ！？」

今度のビッグボーイはイロウエルに妨害されることなく逆に弾き飛ばした。でも速度が停車したかと思えるほど衰え、その間に私たちはビッグボーイより距離を開ける。

「（このままじゃ・・・）ルシルさん！　ちょっと失礼します！」

ルシルさんのお腹に回していた両腕を離し、ルシルさんと私の間のシートに手を付いて腰を浮かせ、さらに片足を上げてクルッと反転。両サイドにあるマフラーの上に立ち、「イゾルデ、シュッツェフォルム！」を再起動。魔法式を物理破壊設定にして、展開した魔力弦に魔力矢を番える。

――突き上がる狂乱の山脈――

魔力矢をビッグボーイの行く手の道路へと撃ち込み、展開されたベルカ魔法陣よりドリル状の岩の剣山が突出させる。ビッグボーイの下っ腹に直撃し、車体が大きく浮き上がって天井に突っ込んだ。

「やるな！」

「剣山の生成には魔力を用いましたけど、それ以外は単純な質量攻撃。破壊には至らなかったようですけど、時間稼ぎにはなるはず！」

天井に突っ込んだことで崩落に巻き込まれるビッグボーイが瓦礫や粉塵に飲み込まれて見えなくなる。そんな崩落した天井からは日の光が降り注いでいた。と同時にビッグボーイが瓦礫を吹っ飛ばしてこちらに向かって走り出した。

「トリシュ！　もう一度足を止めてくれ！　俺は脱出経路を作る！」

「判りました！」

――突き上がる狂乱の山脈――

魔力矢２本を弦に番えつつ"イゾルデ"を横に寝かせるように構え、魔力矢をビッグボーイの両側に立つ支柱２本へと向けて「往けッ！」放つ。魔力矢は支柱に着弾して魔法陣を描き、そこより支柱を形成する石材を利用した剣山を突出させた。ガガガ！とビッグボーイの両側面に突き立っていく。火花や甲高い引っ掻き音に剣山が砕かれ

る音が轟く。

――煌き(コード)示せ、汝(アダメル)の閃輝――

「ジャッジメント！」

ルシルさんが砲撃を放ち、行く手の天井を穿って大きな穴を開けた。さらに「ウイングロード！」と、ナカジマ母娘の先天性魔法と伺っている、環状魔法陣による魔力の道を大穴へと伸ばした。

「あれ？　魔力光がサファイアブルー・・・。複製したものじゃないんですね」

「チーム海鳴のみんなもそうだけど、当時の六課のフォワード４人の魔法は全て解析して、わざわざ複製を使うまでもなくなったからな。こういう緊急時にすぐに発動できるのは便利だよ」

"マクティーラ"が地上へと伸びるウイングロードを疾走し、ようやく地上へと出られた。日の光に目を細めつつ地上の様子を見てみると、そこには寂れた廃棄都市区画が広がっていた。そしてこれまで感じたことのないレベルでの「ＡＭＦ！？」が周囲に展開されていて、魔力弦が消失した。

「あーくそ、しつこい！」

バキバキ！と地面を派手に割って出現したビッグボーイは、悠々と私たちの頭上を通過していく。ソレで始めて判った。ウイングロー

ドみたいなエネルギーで形作られたレールを作り出し続けながら走行していたことに。ビッグボーイは私たちを追い抜くと、ジェットコースターのループコースのように急上昇して、各車両の砲門をこちらへと向けてきた。

「少し揺れるぞ！」

舗装がまた最悪レベルの道路なため、「はいっ！」シートに座り直す。ガタガタと大きく揺れている中、ビッグボーイより砲撃が連続で放たれる。荒れ道を右に左に動いて砲撃を躱すけれど、着弾時の影響で煽られてしまう。それでも倒れないのは"マクティーラ"自身の転倒防止機能とルシルさんの運転技術があるから。

「あまり調子に乗らないでください・・・！　ルシルさん！　どこでもいいので複数のビルの近くを通ってください！　もちろんビッグボーイを引き連れた状態で、です！」

「・・・っ！　ああ、なるほど。判った！」

"マクティーラ"は廃棄建造物を盾にすることで、ビッグボーイの砲撃に対する回避運動の回数を減らす。砲撃によっては解されて崩落する瓦礫は、砲撃の速度に比べればまだ余裕で躱すことが出来る。

「このＡＭＦの中、装甲車との挟撃は勘弁してほしいよな・・・！」

「ルシルさん、ソレ、フラグというものでは・・・？」

建物を右折した先、そこに装甲車は・・・いなかった。ホッとしたのも束の間、ビッグボーイが再び私たちを轢き殺そうと高度を下げてきた。でも「トリシュ！　５０ｍ先、２射線道路の両側にビルが４棟ずつ並んでいる！」とルシルさんからの報告。

「ありがとうございます！　イゾルデ、カートリッジロード！」

"イゾルデ"のカートリッジシステムを起動。"イゾルデ"は双剣の柄尻を連結させて弓とするデバイス。柄――持ち手と剣身の２つの繋ぎ目がスライドすると給弾口が現れ、そしてガシャンと閉じてロード完了。異常なまでの強力なＡＭＦの中で、無理やり魔法を発動させる。右手の指の間に１２本の魔力矢を作り出して、展開した魔力弦に構えつつ"イゾルデ"を水平にする。

「大盤振る舞いですよ、受け取りなさい！」

――天に矛向けし幽玄なる熾天翼――

前方に１２枚の環状魔法陣を展開して、指を開けて魔力矢を放つ。それぞれの矢は環状魔法陣を抜けるとさらに速度を上げて、道路の両側に建つビルの半ば辺りに着弾。木を伐採する際、倒れる側に切れ込みを入れるのと同じように、魔力爆発で大きく抉らせてみせた。私の策は上手くいったようで、全てのビルが道路側へとゆっくりと倒れ始め、轟音を立ててビッグボーイの上へと崩落した。ビッグボーイはこれまで以上の瓦礫に飲み込まれて、その姿を完全に消した。

「えっと、やり過ぎたでしょうか・・・？」

ブワッとこちらへ迫ってくる粉塵に小さな瓦礫。ルシルさんはそれをサイドミラーで確認しながら、"マクティーラ"を蛇行させて回避し続ける。

「廃棄都市区画だからと言ってあれだけの破壊をしたらまずそうだが、まぁこちらは命が懸かっているんだ。大目に見てもらおう」

粉塵と飛来する瓦礫から完全に逃れられた"マクティーラ"が廃屋を左折すると、その道路の先には数台の装甲車が横列で並んでおり、砲門を一斉にこちらへと向けた。ルシルさんは"マクティーラ"をドリフトさせて、装甲車の列の手前にある右への道路へと曲がった。背後から砲撃の発射音。でも当てる気がないのか、"マクティーラ"は回避行動に入らなくても着弾しない。

「誘い込まれたな・・・」

「え・・・？」

砲撃は脇道への進入口に着弾していて、"マクティーラ"が曲がれないようにしているみたい。そんな誘導まがいの結末は、「ハイウェイ・・・！」の廃棄されたゲート。後ろを見れば装甲車が追って来ていて、Uターンすることも出来ずにそのままゲートを突破して、そのままハイウェイに上がった。

「装甲車は・・・！？」

「付いて来ていないみたいだが・・・。あ、ダメだ！」

ルシルさんがハッとした直後に連続の砲撃音。砲撃がハイウェイを支える柱を撃ち抜いた影響で、ハイウェイ全体が揺れ始める。ハイウェイの舗装がビキビキ、バキバキと音を出してひび割れては崩落し始めた。私は飛行魔法使えないけれど、ルシルさんは飛べるしウイングロードという魔法もある。だけどこのＡＭＦの中ではさすがに・・・。

「ウイングロード・・・！」

前方の道路が完全に崩落したことで、ルシルさんが魔力の道を展開してくれた。でも「ぐぅ・・・！」ルシルさんが右手で心臓付近を鷲掴んで苦しみだした。

「まさか、記憶消失現象が・・・！　ルシルさん！」

魔神オーディンもそうだったと聞く、セインテスト家に付き纏う魔力運用過多による記憶障害。ルシルさんもそうで、こんな強力なＡＭＦの中での魔法発動なんて、記憶消失が起きてしまってもおかしくない。

「早く魔法を解除してください！」

「ダメ・・・だ！　今は空中を走ってる・・・！　ここで解除すると地面に・・・叩きつけ・・・ぅぐ・・・！」

グラリと"マクティーラ"が蛇行してウイングロードから落ちそうになるのを、私がルシルさんに覆い被さるようにしてハンドルを握ることで回避。バイクの運転の仕方は、ルシルさんが"マクティーラ"をメンテナンスしている際に、こっそり逢いに言った時に伺った。

（えっと、ＭＴからＡＴに切り替えるスイッチを押して・・・！）

アクセル側の付け根にあるスイッチを押して、ハンドル操作だけで"マクティーラ"を走らせるようにする。

「トリシュ・・・？」

「どうすればいいか、指示をください！　運転は私が手伝います！」

ウイングロードは未だ解除されず、現在進行形でルシルさんの記憶消失が起こっている可能性がある。だから一刻も早く魔法を解除してもらわないと。

「このままだと・・・ジリ貧だ。多少の無理は・・・しないとな・・・！」

ルシルさんから魔力が放出される。私が「ダメ！」と制止しても聞いてはくれず。こういう時ににアイリが居てくれたら・・・。あの子がユニゾンしていれば、ルシルさんの記憶消失のリスクが軽減されるのに・・・。

「トリシュ。・・・これより、魔術を発動して・・・ビッグボーイを・・破壊する。・・・魔力供給、頼めるか・・・？」

それはつまり、シュテルンベルク家の長女にのみ受け継がれる固有スキル、クス・デア・ヒルフェによる魔力供給。私にしか出来ない助け。崩落を免れたハイウェイへと"マクティーラ"が着地すると同時、ルシルさんはウイングロードを解除してヘルメットを脱ぎ捨てた。

「はぁはぁはぁ・・・。行くぞ、トリシュ・・・！」

「それしかないようですね。承りました！」

私もヘルメットを脱ぎ捨てる。方法はそれしか残されていないとはいえ、本当はイヤだ。私も魔術を使えたら良かったのに・・・。ルシルさんに覆い被さってハンドルを握ったままの体勢でハイウェイを走り、複数のビルの瓦礫に下敷きになっていたビッグボーイがこちらへ向かって走り出した。装甲車からのハイウェイの支柱や道路に対する砲撃も再開されて、ハイウェイの崩落が再び始まった。

「魔力炉（システム）を昇華。魔法を魔術へ・・・」

ルシルさんがボソボソと何かを呟くと、ルシルさんの雰囲気がガラリと変わった気がした。そして放出される魔力を感じ、「魔術に変わった・・・！」ことが判った。"マクティーラ"が通り過ぎて行った直後に道路が崩れていく中・・・

「其は大地を穿ち、遥かなる天上に絶望の天蓋を掲げる破滅の巨人」

ルシルさんが呪文を詠唱するも、「何も起きない・・・？」ことで私は首を傾げた。と思えばハイウェイの下、つまり地表のあちこちから魔力が発生しているのが判った。そして、それは起きた。どれ程あるだろうか。直径にして５０ｍ、厚さは５ｍほどの、薄っすらとサファイアブルーの魔力を纏った岩盤が９つ、ハイウェイの周囲に何の支えなく浮いていた。

（ううん、違う。岩石で出来た数本の鎖が、岩盤の裏から支えてる・・・！）

あんな細い鎖がたったの数本で、何千・何万トンとある岩盤を浮かせているのが信じられない。魔法だから、魔術だから、という理由なんだろうけど・・・。ビッグボーイや装甲車の砲撃が一斉に岩盤に移ったけれど、岩盤や鎖はビクともしない。

（魔術に干渉できるのは魔術だけ。その法則が確実である以上、ただのエネルギー攻撃に出来ることは無い！）

９つの岩盤を支えている複数の鎖が揺れて、岩盤すべてをビッグボーイの直上にまで移動させた。ついにはレールガンまで発射し始めて、岩盤砕きを試みてはいるけれどビクともしない。

「天蓋開かれる時、空翔る鳥を墜とし、地駆ける獣を潰す、無慈悲なる石雨が降り注ぐ・・・！」

ルシルさんの詠唱が終わり・・・

「女神の陸蓋（コード・ゲフィオン）！」

術式名を告げられたと同時、岩盤すべてが一斉に崩壊。薄っすらと魔力を纏った大小さまざまな瓦礫がビッグボーイに降り注ぎ、ベコベコにへコませていった。レールガンやエネルギー砲の砲身があっという間に潰され、車両の連結も解かれて瓦礫と一緒に地面へと墜落していく。ビッグボーイは後ろの車両を切り離し、最後の抵抗と言わんばかりに速度をさらに上げて突っ込んできた。

「しつこいな・・・！」

――ウイングロード――

瓦礫の影響で、無事だったハイウェイもまた崩落が始まり、ルシルさんが再びウイングロードを発動。ウイングロード上を疾走しながら瓦礫を躱し続ける中・・・

「風神の投颯（コード・ヴァーヴズ）！」

ルシルさんがハンドルから右手を離して、開いた手の平に風を集束させていき、風が纏う突撃槍を創り出した。ルシルさんが「ぐぁぁ・・・！」苦しそうに、痛そうに呻き声を出した。

「トリシュ、供給を頼む・・・！」

クス・デア・ヒルフェ用のリンカーコアを活発化させて、「はいっ！」と返事してからルシルさんの背後から左頬にキスをして、魔力を彼に送り込む。頬へのキスはクリア。次は口へのキスだけれど・・・。

「コイツを矢として射てくれ、トリシュ！」

「え、あ、はいっ！　あの、体勢を変えるので、直進を続けてください！」

もう一度後ろ向きに座り直すためにそうお願いする。

「いや、そのままでいい！　１８０度ターンでビッグボーイと相対し、トリシュがヴァーヴズを射たらもう一度ターンする！」

――闇よ誘え、汝の宵手――

"マクティーラ"の車体の至る所にある影より触手が伸び、私が落下しないように固定してくれた。結構がっしり固定してくれているから、蛇行しようともドリフトしようとも落ちないと思う。"イゾルデ"を再起動させて、なんとか魔力弦を展開。

「行くぞ！」

「いつでもどうぞ！」

"マクティーラ"の後輪が派手な音を立てて滑り、強烈な遠心力が私を襲った。そして"マクティーラ"はビッグボーイと正対。高速

でバックする"マクティーラ"のタンデムシートからお尻を浮かして立ち、突撃槍を魔力弦へと番える。

「コード・ヴァーヴズ！」

番えていた突撃槍をビッグボーイの先端へと射る。槍は一切の抵抗を受けることなくビッグボーイの内部へと貫通。そしてボコボコと車体の至る所が泡立つように膨れて、破裂音と共に内側から破裂した。やった！と喜ぼうとしたけれど、「もう一度ターンするぞ！」とのことで、喜ぶのは後回し。再度１８０度ターンを決めた"マクティーラ"は、ウイングロードの向かうままに地面へと戻ってきた。

「ビッグボーイは潰せたな・・・！」

「装甲車も何台か潰れてるようです！」

グシャッと潰れた装甲車の残骸が当たりに散っている。装甲車がここに何台投入されているか判らないけれど、かなりの被害を与えたのは間違いない。

「とりあえず、ＡＭＦを展開している誰か、もしくは何かがまだ居るはずだ。そいつを処理してから帰ろう」

「はいっ！」

ＡＭＦを発生させている何者かを捜すために、"マクティーラ"はゆっくりと走り続ける。

Ｅｐｉｃａ２９－Ｃ大隊の罠～Ｏｖｅｒｔｕｒｅ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「おはよ～」

ぐっすり眠った後、２階の共同リビングにやって来たわたしは、馬の蹄のような形をしたロングソファに腰掛けたルミナとクラリスとアンジェとアイリ、テレビのチャンネルを変えてるセレスに挨拶。するとアイリが慌てた様子で「シャル！」ってわたしの元に駆けて来た。

「どしたの？」

「出掛けたルシルとトリシュが全然帰ってこないの！」

「え、そうなの？」

窓の外は真っ暗で、時刻は２１時を回ってる。道理でお腹が空いてるわけだ。じゃなくて、「連絡は取ったの？」ってみんなに尋ねると、通信は入らずメールも届かないということで・・・。トリシュがルシルにデートの催促したんじゃないかな～って思ってたけど、これはちょっとおかしい。トリシュの真面目っぷりからして連絡は絶対に入れるだろうし。

「連絡が入らないって言うのは、コールに出ないって感じ？」

「いいえ。コール音すら鳴らない、完全に遮断されているような感じです」

アンジェからの返答に、ますますルシルとトリシュに「何かあった・・・？」と考えてしまう。これなら眠いのを我慢してでもどこへ出掛けるのか聞いておけば良かったと後悔。セレスが携帯端末を取り出して、「トリシュにもう一度連絡してみるよ」って通信を入れてくれるんだけど・・・。

「やっぱりダメっぽい」

「・・・真面目が服着てるような2人が、何の連絡もなしに帰りが遅くなるなんてありえない」

「これは・・・やられたっぽいね」

信じたくはないけど、「大隊が仕掛けてきた・・・？」と考えるのが妥当だ。その辺の雑魚犯罪者に後れを取るわけがないルシルとトリシュを、わたし達に連絡させないほどの速さでどうにか出来るのは、大隊くらいしかいない。

「アイリ！　ルシルは、ヴィヴィオ達に渡したミサンガのような、発信機能を持ったアイテムとか持ってない！？」

「うえっ！？　えっと、え～っと・・・！」

アイリが腕を組んで考えた結果、「たぶん、持ってないと思う」ってガックリ項垂れた。あちゃあ、とルミナ達が頭を抱える中でわたしは、ヴィヴィオの囮作戦の要になるルシルがそういった類の物を持たずに出掛けるのもおかしいって考えた。確かに今はまだ冬休み中で、ヴィヴィオ達も安全なフライハイト邸で過ごしているから、ルシルもちょこっと抜けてるかもだけど。でもルシルがそんなつまらないミスをするとは思えない。

「リヴィア、もう帰ってきてる？」

「ええ。今はヴィヴィオ達やチャンピオン達と入浴してると思うけど・・・・」

「ちょっと行ってくる！　みんなは準戦闘用意で待機！」

「あ、アイリも行く！」

ルミナ達の「了解！」って返事を背中に受けながら、わたしとアイリは1階の大浴場へと向かう。まずは脱衣所だ。スライドドアの取っ手に手を掛けると、「あれ？　シャル、そっち違――」アイリからの制止。それをスルーしてドアを開けると、真っ先に視界に入ったのは小さなお尻。

「ん？　～～～～～～っ！！！！？？？？　な、ななななな、何やってんのアイリお姉ちゃん、シャルさん！！　こっち男風呂！！」

今まさに下着を履こうとしてたフォルセティがわたし達の入室に気

付いて、バスタオルを手に取ると同時に体を包んで蹲った。
「うん、ごめん。ちょっと冷静になろうと思って」
「意味が解からない！　もう！　服を着るから出てって！」
腰にバスタオルを巻いたフォルセティがズンズン！と大股で近付いて来て、「ほら早く！」ってわたしとアイリを廊下まで押し出した。んで、ピシャン！とドアを閉めた。
「もう！　シャルの所為でアイリまで怒られちゃったじゃん！」
「でも焦りは消えたでしょ？」
「そうだけど、そうゆう問題でもないよね！」
プンスカ怒るアイリをスルーしつつ、今度こそ女子脱衣所へと繋がるスライドドアを勢い良く開ける。脱衣所には誰も居ないけど、浴場からはヴィヴィオ達、ジークリンデ達の喋り声が聞こえてくる。浴場と脱衣所を隔てるスライドドアへと歩み寄る。
「ちょい待って、シャル。何する気？　まぁ聞かなくても判るけどね・・・」
「焦らず冷静に。でもちょっぴり急いでゴー」
「ダメ、やっぱダメ。訴えられたら負けるよ？　いくら自分んちで

も」

アイリに手を引っ張られてドアから離されて、そのまま脱衣所からも出された。そこには「何をしてるの、アイリお姉ちゃんとシャルさんは・・・？」フォルセティが居た。どうせ後で知るだろうし、何より仮にも父親であるルシルの話だ。

「ルシルとトリシュが帰ってこないの。連絡がないし、こちらからの連絡は一切届かない。たぶん、最後の大隊が仕掛けてきたんだと思う。ニュースに出ないということは、連中の転移スキルでどこか遠い世界に飛ばされたかも」

「あ、あのね、フォルセティ！　ルシルはきっと・・・！」

「うん、判ってるよ、アイリお姉ちゃん。お父さんは、トリシュさんも、大隊なんかに絶対負けない。今もきっと戦ってる！」

「（あぁ、本当にこの子も強い）だね！」

フォルセティが先に自分の部屋へと戻るのを見送り、待つこと数分。ヴィヴィオ達も脱衣所から出てきた。

「あ、シャルさん！」

「お風呂ありがとうございましたー！」

ヴィヴィオ達と手を振り合って、あの子たちが部屋へ向かうのを見

送る中、「リヴィア、ちょっといい？」ルーテシアと一緒に戻ろうとしていたリヴィアに声を掛ける。

「ん、なーに？　あ、お姉ちゃんは先行っててていいよ」

「ううん、待ってる」

リヴィアとルーテシアに、ルシルとトリシュが大隊に拉致された可能性があることを伝える。でも一方的なものじゃなくて、２人は今もきっと抵抗しているとも。それで「リヴィア。ルシルの居る場所、判らない？」と本題を切り出す。

「私がルシルさんから貰ったプロミスリング、ヴィヴィオ達が拉致された際には自動で座標やら何やら、必要な情報を教えてくれることになってて。ルシルさんが、ヴィヴィオ達と同じリングを持ってるなら、私のリングに何か反応があると思う・・・」

リヴィアが右手の中指にはめたリングを、わたし達の前にまで掲げてくれた。どう反応するかは知らないけど、確かに何の反応を示してないっぽい。腕を組んでう～んと唸るわたしは「最後の希望が・・・」って肩を落とした。

「ねえ、リヴィア。リングって相手側からの一方通行なの？」

ルーテシアがリヴィアの右手を取って、「こっちからは調べられないの？」ってリングをつんつんと人差し指で突いた。わたしとアイリとリヴィアは顔を見合わせていると、リヴィアは「やってみる！」

ってリングに触れた。

「ルシルさんは今どこ？」

「「「「・・・・」」」」

その問いに返答はなく。リヴィアは「じゃあ・・・！」足元に藍色のベルカ魔法陣を展開。魔力を生成して、その魔力をリングに流し込んだ。すると「リングが・・・！」淡く光って、リング上に小さなモニターが展開された。

「これ、世界名と座標・・・？」

「ミッドチルダに７つ。・・・７つ？」

「フォルセティとヴィヴィオとイクスとアインハルト、それと・・・予備だね」

「じゃあ、このＳｐｒｕｃｅは・・・」

「スプールス、第５７管理世界！」

ミッドチルダ以外には、スプールスという世界名と座標のみ。間違いなくルシルとトリシュはここに居る。わたしはリヴィアに振り向いて、「お風呂上がりで悪いんだけど・・・」って声を掛けると、「問題ないっす！」ってリヴィアは胸を張った。

「それで、誰が一緒に――」

「アイリが行く！　アイリがルシルとユニゾンさえすれば、どんな相手だって勝てるんだから！」

家のセキュリティは万全とはいえ、出来るだけ護衛戦力は残しておきたい。だから「アイリ、出撃！」って指示を出した。

「ヤヴォール！　リヴィア、よろしく！」

「うんっ！　じゃあお姉ちゃん、シャルさん、いってきます！」

「行ってくる！」

――ケレリタース・ルーキス――

リヴィアとアイリが手を繋ぎ、そして音も無く瞬きの間にその姿を完全に消した。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒アイリ†††

一瞬の浮遊感の後、「っと！」アイリはリヴィアと一緒に地面に降り立った。そこは廃棄都市区画らしくて、見渡す限り廃墟だった。

「座標はここ。・・・でもかなりの速度で移動してるっぽいな～」

「ルシルとトリシュ、マクティーラに乗ってるみたいだしね・・・」

でもマイスターとトリシュがこの世界に居ることだけでも判っていれば、なんにも問題ないね。アイリは腰に一対の白翼を展開して、リヴィアの手を取って空へと上がる。まずは周囲一帯の確認からということで、一番高い廃墟ビルの屋上まで上がった。

「ルシルの魔力、かなり遠いけど感じ取れる・・・」

廃棄区画の周りはほぼ荒野で、さらに向こうはぐるりと山脈が円形に囲ってる。リヴィアに「ちょっと待ってて」って伝えて、アイリひとりでさらに空へと上がる。山脈の奥には荒野や岩石、砂漠地帯が広がっていて、街がいくつか点在してるのが判った。

「ここ・・・島なんだね」

そして海が広がってた。この島以外にも大小様々な島が列を成してることから、ここは群島水域みたい。それは置いておいて、今はマイスターとの合流を最優先にしないとね。

――曙光神（コード・デリング）の降臨――

リヴィアに方角を伝えようとした時、砂漠地帯にサファイアブルーの光球が発声した。間違いない、アレは「コード・デリング！」だ。アイリは急降下してリヴィアの元へ。

「リヴィア！　ルシルを見つけた！」

「うんっ。魔力をここまで感じた！　そこまで跳んでみよう！」

――ケレリタース・ルーキス――

アイリがリヴィアと手を繋ぐと同時、視界がスッと白くなって、浮遊感を得る。そして次の瞬間には・・・

「アイリ・・・！？　それにリヴィア！」

「どうしてここに！？」

停車してる"マクティーラ"に２人乗りしてるマイスターとトリシュの側に到着。でも２人に言葉を返すより先に「なに、このＡＭＦ！？」に驚くアイリとリヴィア。白翼が一瞬にして解除されて、体を重くて自由に動けない。

「こんなＡＭＦの中で魔法なんか使ったんですか・・・！？」

「ああ。このＡＭＦを展開している兵器を潰すためにな」

「私もなんとか魔法を使えるのだけど、件の兵器には魔術しか通用せず、しかもこの強烈なＡＭＦで碌に威力も出せず、役立たずの極み・・・」

よく見なくてもマイスターの顔色は悪いし、額には脂汗が浮かんでる。完全に記憶を失ってるって判るほどの状態。

（アイリが・・・アイリが一緒に付いていれば、マイスターが記憶を失うようなことなかったのに・・・！）

後悔ばかりでアイリ自身に怒りが湧いてきて、自然と悔し涙が溢れてくる。そんなアイリに、「アイリ。助けてくれるか？」ってマイスターが右手を差し出した。そうだ、悔やんでる場合じゃない。アイリはマイスターの融合騎。その真価はユニゾンにあり。袖で涙を拭って「うんっ！」頷いた。

「トリシュ。後は俺とアイリでやる。マクティーラでリヴィアと一緒に離れていてくれ。だが離れすぎないように。分かれたところで各個撃破なんて笑い話にもならない」

「・・・判りました。ルシルさん、アイリ、ご武運を」

「ありがとう。リヴィア。君にもありがとう、助かったよ」

「ううん。ルシルさんにもいろいろお世話になってるし、その恩返し！」

トリシュが"マクティーラ"のハンドルを握って、リヴィアがその後ろのタンデムシートに座った。トリシュがアクセルを開けて、マイスターの目が届く範囲内にだけど後方へは離脱した。これで巻き込まれず、すぐにフォローにも入れるね。

「アイリ」

「うん。アイリは、あなたといつまででもどこまででも共に・・・」

「「ユニゾン・イン」」

マイスターとのユニゾンを行い、アイリはマイスターの内へ。

『マイスター。ＡＭＦを展開してる兵器ってどんなの？　殲滅するって話だし、複数いるんだよね？』

『居ると言うか、有ると言った方がいいかもな』

マイスターの言葉に首を傾げてると、ゴゴゴって地面が揺れだした。ところどころにある砂丘が波打って崩れてく。アイリは『なに？なに！？』って、マイスターの内側から見れる外の景色を見渡す。

「来るぞ！」

ドン！と砂塵を噴き上げさせて何かが砂漠から飛び出してきた。それは機械で出来た『巨大ムカデ！？』だった。長く伸びた触角の先端には球体状のクリスタルがあって、そこから『砲撃！』が放たれてきた。マイスターは直立したまま、魔力付加した両手の甲でペシンペシン！と、上空へ向けて叩き逸らした。

『ウル、スタンバイ！』

『ヤー！』

マイスターは突っ込んで来る機械ムカデの上へと跳んだ。頭部には∴の形をした半球状のクリスタルがある。たぶん、アレも砲撃の発射体で間違いない。さらに何十個と連なる体節1つ1つの背中にも大き目の発射体が1基ずつある。発射体が次々光を点してく。発射されるより早く魔力炉（システム）への負荷を減らすべく、アイリのリンカーコアを同調させる。

（ずっと思ってた。アイリはまるで、マイスターの融合騎になるために生まれたかのようだって。魔術式や魔力炉（システム）への干渉や同調。アギトお姉ちゃんには無い、たぶんアイリだけ持ってるプログラム）

イリュリア製の融合騎は、アイリやアギトお姉ちゃん以外にも居た。けどマイスターとはユニゾンしたことがないから判らない。でも、なんとなくだけどアイリだけの能力だと思えてるアイリがいる。

『マイスター、いつでも！』

『ああ！』

マイスターが創り出した魔力弓に、同じく創り出された魔力槍が番えられた。

――弓神（コード・ウル）の狩猟――

射られた魔力槍は数百の矢となって、発射された砲撃を真っ向から撒き散らせながら発射体へと着弾して、完全に破壊した。機械ムカデは甲高い金属音を掻き鳴らしようにに蠢いていて、ちょっと気持ち

悪い。それにしても魔術のウルを受けて、その体が残ってることに驚きだよね。

『あ、なんかＡＭＦが弱くなった・・・？』

『ああ。発射体とＡＭＦ発生装置は一緒のようなんだ。ま、一石二鳥だ、嬉しい話じゃないか』

『だね♪』

金属を擦り合せるかのような不快な甲高い音を発しながら機械ムカデが砂漠へと潜行していく。着地したマイスターは機械ムカデを見送って、『つい先ほどまで、俺はアレに苦労していたんだよ』って沈んだ声でそう漏らした。

『まったく、俺も弱くなったものだ。ＡＭＦ程度に四苦八苦して、アイリが居ないとまともに魔術も使えない』

『こんな事を言ったらマイスターに怒られるかもだけど、アイリはちょっと嬉しい。頼りにしてもらえてるってことだからね』

マイスターは強い。独りでどんな相手でも勝てるくらいに。記憶消失を必要な損失だって割り切れば、"エグリゴリ"相手にだって単独で挑んじゃうって思えるくらいに。でもマイスターはそんな事はしない。記憶はマイスターを支える"力"そのものだから。

（アイリとユニゾンすれば、魔力炉（システム）への付加も減って、マイスター

を悩ます記憶消失のリスクを軽減できる）

つまり最後の最後まで、アイリはマイスターと一緒に戦えるということ。それが融合騎アイリにとっての幸せだ。あと出来ればひとりの女の子として愛してくれたら良いな～、なんて♪

『そうか。・・・頼りにしているよ、最期のその瞬間まで』

『・・・はいっ！』

最期と最後。マイスターとアイリの言う"さいご"には妙な齟齬を感じる。解かってはいるんだ、アイリも。ガーデンベルグを斃したら、マイスターも一緒にいなくなるってことは。あーあ、アイリもアースガルドに行きたいなぁ～・・・。

『アイリ、次の一撃で仕留める。ビヴリンディ、スタンバイ』

『ビヴリンディ？　わざわざ苦手な土石系？　得意な風嵐系のローターで、砂漠の砂を巻き上げさせれば・・・？』

マイスターが生まれた世界、魔導世界（または原初世界）アースガルド。その世界に生まれた魔術師は、先天的に風嵐系の属性を得る。風迅王イヴィリシリアがその筆頭。マイスターは全属性を先天的に得たけど、アースガルド生まれということもあってやっぱり風嵐系の魔術だけは、他の属性に比べて威力や効果が高い。

『ローター、か。・・・アレは直接的なダメージを与えるための術式

じゃないからな・・・。いや、アイリからの提案だ。ロータでいこう』

『え、あ、でも、アイリが言い出したことだけど、やっぱりマイスターの考えどおりでいいかな～・・・なんて♪』

『そうか。なら、ビヴリンディとロータ、両方で行こう』

マイスターはそう言って、両腕を砂漠に突っ込んでアースガルド魔法陣を展開。

――盾神（コード・ビヴリンディ）の暴虐――

砂が両腕や胸部や背中、両足にも巻き付いてく。そして砂は魔力付加されたゴツイ岩石の籠手、脚甲へと変わり、背中には岩石の腕が6本と浮遊していて、先にある手の甲には円い岩の盾が装備されてる。

「戦女神（コード）の・・・！」

籠手が装着されたマイスターの両手に風が集まってきた。両手の平の上で球体状に渦巻く2つ風を1つに合わせると、マイスターは大きく跳んだ。

「暴天（ロータ）ッ！！」

そして遠く離れた場所へと投げ捨てた。直径で1mほどの風の塊が

砂漠に着弾すると同時、天までそびえる竜巻が発生。さらに竜巻は螺旋軌道で砂漠を回りながら7つに分裂して、それぞれどんどん離れていきながらも砂漠の砂を空へと巻き上げてく。

『行くぞ、アイリ！』

隠れるための砂がどんどん空へと巻き上げられたことで、機械ムカデの姿が視認できるようになった。さらに言えば竜巻に巻き込まれて空に上がってくんだけど、巻き上げられる際の回転の力を利用して、こっちに向かって飛んで来た。

（でも・・・それはカウンターの餌食なんだよね！）

マイスターが左肘を後ろに引くと、背後に浮かぶ6つの腕も握り拳を作って機械ムカデに向いた。機械ムカデは口を大きく開いて、口の中にある大きな砲撃発射体にエネルギーを点した。

「ジャッジメントぉぉぉーーーーッ！！」

放たれる砲撃とマイスターの拳が真っ向から激突。砲撃は籠手を破壊することも出来ずに周囲に拡散して、マイスターの拳は口内の発射体に直撃。発射体は粉々に砕けて、右の拳によるアッパーで頭部を吹っ飛ばした。さらに背後の6つの腕も次々と機械ムカデの胴体に殺到して、ボッコボコに殴ってスクラップにした。機械でも頭を失ったら停止するようで、機械ムカデは完全に機能停止。

『ふぅ。お疲れ、アイリ』

『マイスターも、お疲れ様～』

お互いに労った後マイスターは「トリシュ、リヴィア、帰ろう！」って避難してた2人に声を掛けた。とりあえず、ミッドに帰るまでは念のためにユニゾンしっ放しでいることにして、マイスターとトリシュがリヴィアと手を繋いだ。

「準備はいい？」

「ああ」「ええ」

『いつでも帰れるよ！』

リヴィアに念話でそう答えながらもアイリは周囲を警戒。マイスターもトリシュもしてるけど、眼は少しでも多い方がいい。竜巻によって巻き上げられていた砂が雨のように降り注ぐ中、アイリ達は・・・

――ケレリタース・ルーキス――

リヴィアの転移スキルでミッドへと無事に帰ることが出来た。

・――・――・――・――・

ここ第57管理世界スプールスはデッドサウス群島、第3島にて行われた、航空装甲列車ベールシャメン、戦術級装甲車両オーガⅡ、

ＡＭＦ－Ｅ搭載型移動要塞エキドナの試験運用。相手は最強クラスと名高いルシリオンとトリシュタンだった。結果は見てのとおり大失敗。試験機とはいえ、大きな痛手だ。

「やはり最強格の魔術師相手では、マスターの造ったＡＭＦ－Ｅでも大して効果がありませんでしたね。試験運用の相手にルシリオン君をわざわざ選んだのですが、残念・・・」

「そうね～。まぁトリシュタンには通用するようだけど～。オランジェ・ロドデンドロン隊には魔術を発動できないアンジェリエ、クラリスもいるわ～。トリシュタンもそうだし～。それに・・・」

第３島を見下ろすことの出来るデッドサウス群島で最も標高の高い山の頂、そこに仮面持ちが３人と居た。１人は豊満な胸を持つ女性、他２人は少女で、女性を主として扱うように側に控えている。３人ともウサギの仮面を被っており、セーラー服の上に白衣を纏っていた。

「ルシリオン君の弱点も判ったわ～」

ルシリオンの名前を親しそうに呼んだ女性が展開したモニターにはアイリが映し出されている。

「ユニゾンさえさせなければ～、ＡＭＦ－Ｅの状況下限定で～・・・ルシリオン君を殺せるわね～」

間延びした口調で断言した女性仮面持ちに、「マスター。次はどう

すんの？」ともう1人の少女が尋ねた。

「次など無いわね～。大隊は失敗したもの～。ルシリオン君とトリシュタンを逃がした、つまりは反撃の機会を与えちゃったってことよ～。明日か明後日か、何かしらの手段を用いて仕掛けてくるわ～」

大隊にとっては危険な状態だが、マスターと呼ばれる女性からは危機感を感じない。その返答に対し少女は「あはは！　マスターとフィヨルツェン様の所為じゃん！」と大笑い。

「話は変わりますけど、同志グログから報告にあった、彼らが本物と偽者を区別できたというアレ。どういうことでしょう？　区別が出来るような失敗はしていませんが・・・」

「あぁ、それわね～。考えられるのはテロメアの長さね～。元より身代わり用のクローンは使い捨て前提だもの～。そこまで本物に似せるのは手間が要るもの～」

ルシリオンが本物と偽者の差が何か気付いたという話がやはり、大隊側へと流れていた。つまりあの通信に参加した者の中に、偽者が紛れ込んでいるということだった。

「まあ、どちらにしろ～。フィヨルツェン様がそろそろ大隊に見切りを付けると言っていたもの～。1週間以内に滅ぼされるわよ～」

大隊への未練など微塵もないのかそう言ったマスターは「じゃあ帰るわよ～」と踵を返し、少女2人が「かしこまりました」「う～っ

す」と返事をした。

――トランスファーゲート――

何も無い宙に歪みが生まれ、３人の仮面持ちはルシリオン達が居なくなったのを確認した後に歪みへと歩みを進めた。

Ｅｐｉｃａ３０いざ往かん無限書庫～Ｇｏ　Ｇｏ　！～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

今日は本局の無限書庫で、ジークさんのご先祖様であるヴィルフリッドの書き記したと思しき"エレミアの手記"を探しに行く。シャルさんちで朝ご飯を美味しく頂いた後、シャルさんとルーツィアさん、ヴィクターさんの執事エドガーさんの運転する車３台で中央次元港へとやって来た。

「えっと・・・お、居た居た。はやて、アインス！」

「ルシル君！　フォルセティ！」

ルシルさんが、本日わたし達の護衛兼付き添いをしてくれるはやてさんとアインスさんに手を振った。はやてさんとアインスさんがわたし達のところにまで駆け寄って来てくれて、「おお！　すごい顔触れやな～♪」ってジークさん達を見回した。

「えー、今日みんなの付き添い・・・と、本局内を案内する、八神はやてです、よろしくな♪」

「同じく、八神リインフォース・アインスだ。道中よろしく頼む」

はやてさんとアインスさんからの挨拶にわたし達も「よろしくお願いします！」って挨拶を返してお辞儀。

「チーム海鳴のメンバーにしてかつて機動六課を率いた部隊長、八神はやて海上司令・・・！　お会いできて光栄です・・・！」

「おおきにな～、エルス選手♪」

エルスさんはチーム海鳴の大ファンらしく、ルシルさんやシャルさんにサインをお願いしてた。はやてさんから「じゃあ混雑する前に搭乗手続きに行こっか～♪」そう促されて、わたし達は「はーい！　いってきます！」ルシルさんとアイリとシャルさんにって手を振った。

「うん、いってらっしゃい！」

「子供組は、しっかりはやてやアインス達の言う事を聞くんだぞ～」

「いってらっしゃ～い！」

シャルさん達も手を振り返してくれてる中、はやてさんが「アインス、先に行っててくれるか？」って、アインスさんに向かって手を合わせてお願いした。アインスさんがチラッとシャルさん達の方へ向いて、ふふ、って小さく笑った。

「判りました。まだ時間がありますので、どうぞゆっくりと」

「おおきにな♪」

はやてさんが向かったのはルシルさんのところ。シャルさんとアイリがはやてさんに何か喋った後、ルシルさんを置いて次元港の出口に向かい始めた。そっか、ルシルさんとはやてさんって、わたし達が冬休みに入ってからは直接逢えていないんだよね・・・。

（うーん、２人には申し訳なさでいっぱいだよ～）

２人きりでお喋りしてるルシルさんとはやてさんに心の底からごめんなさいして、「おい、ヴィヴィオ、行くぞ！」ノーヴェに呼ばれたわたしも、搭乗手続きをするためにカウンターへ向かった。

「身分証や財布、デバイスなどといった貴重品は各自持ち込むように。着替えなどのかさ張る大きな荷物はそのまま宿舎へと配達してもらうため、無限書庫での探索を終えるまでは手を付けられないからね」

「アインスさん。それって別料金が掛かるやつっスよね？　あたしら、料金払ってくるんで・・・」

「いや、すでにルシルが必要経費を全て支払っているからね。そのまま預けてくれていいよ。ヴィクトーリア達も、彼の厚意を受け取ってもらえると私としても嬉しい」

ジークさん達がお礼を言うべくルシルさんとはやてさんの元へ向かおうとしたけど、「お待ちなさい」ってヴィクターさんが止めた。番長が「あ？　なんでだよ？」って振り返って、ジークさんも解からないって困惑顔。

「そうだね。お礼はまた帰った後か、本局に着いてからでもいいんじゃないかな」

ミカヤさんもそう言うんだけど、番長とジークさんはやっぱり解かっていないようで。ヴィクターさんが「ジークはまだ仕方ないとはいえ・・・」って呆れた風に溜息を吐くから、「オレがなんだよ？」って番長が不機嫌そう。

「番長、ジーク。ルシルさんとはやてさんを見てどう思う？」

「えっと・・・、楽しそう・・・かな？」

「もう。私とミカヤさんとで態度が違いすぎですわよ」

ヴィクターさんが呆れて肩を落とす中、番長の答えを聞いたミカヤさんが「その通り。だから邪魔はしてはいけないよ？」って笑顔で人差し指を立てた。腕を組んで唸る番長はまた解かってないようだけど、「まぁミカねえがそう言うなら」って渋々納得。

「うん。ヴィクターの言うことは間違ってへんし、帰ってきてからお礼言うことにする！」

そういうわけで、わたし達は手荷物カウンターで着替えの入ったスポーツバッグを預けて、貴重品の入ったポシェットは検査場で危険なものが入ってないかを検査。もちろんわたし達は、そんな危ないものを持ってないということで何事もなくパス。

「アインスお姉ちゃん。今日はリインお姉ちゃんは・・・？」

「ん？　あぁ、今日はアギトの昇級試験がミッド地上本部であるからね。リインとシグナムはその付き添いだよ」

「そうだったんだ～。アギトお姉ちゃんに、今の内にメールを送っておこうっと♪」

はやてさんのパートナーであるリインが珍しくはやてさんの側に居ないと思ったら、そういうことだったんだね。フォルセティは十字架型ペンダントを待機モードとする"エマナティオ"をポケットから取り出して、「アギトお姉ちゃんにメール。音声入力」って指示。

≪応。準備完了≫

「アギトお姉ちゃん。試験があるって聞いたよ。頑張って、応援してるよ。・・・以上」

≪メール内容受諾。送信・・・完了≫

フォルセティがメールを送り終えたのを見て、なのはママとフェイトママへのメールの返事はまだかな～ってそわそわしてると、"クリス"がわたわたと四肢を振った。ママ達からの返信メールが届いたみたい。

「クリス。受信モニターを出して」

手の平サイズの小さなモニターが展開されて・・・

――はーい♪　気を付けて行ってらっしゃい。はやてちゃんとアインスさんの言う事をちゃんと聞いて、お友達のために頑張っておいで～♪――

メッセージの最後にはなのはママとフェイトママの2ショット写真が貼られてた。

・――・――・――・――・

「こちら監視班。高町ヴィヴィオ、イクスヴェリア・フライハイト、八神フォルセティが、本局往きシャトルに搭乗したのを確認」

ロビーの一角にあるソファに座るスーツ姿の男が、携帯端末を使ってそう報告していた。彼は最後の大隊の一員だが戦闘員ではなく、標的の監視を行う裏方の一員だ。報告相手は『了解。護衛戦力はどうか？』大隊本部の通信司令室。

「八神リインフォース・アインスが搭乗済み。ルシリオン・セインテストと八神はやてはロビーに2人きりで会話中。騎士イリスと融合騎アイリは外へ出ました」

『こちら駐車場。騎士イリスと融合騎アイリを視認。自家用車に乗車するようです』

別の監視役からの報告も入った。大隊は、イリスら護衛が以前のヴィヴィオ達の外出時、ルシリオンみたく姿を消して付いて来ていないかを確認する必要があった。

「あ！　ルシリオン・セインテストと八神はやてに動きあり・・・！」

ルシリオンとはやてが談笑しながらトイレへ向かっていく。その様子に監視役は「チッ。男女で連れションかよ。爆ぜろ」と不満げに吐き捨てた。彼女いない暦＝年齢の彼にとって、男女が仲良く話しているだけで嫉妬の炎を燃え滾らせるには十分なのだ。そんな彼はトイレの出口を監視し続け・・・

「両名を確認！　八神はやては受付カウンターへ、ルシリオン・セインテストはエントランスへ向かいます！」

ルシリオンとはやては別れる前に一度だけハグ。そして笑顔で手を振り合いながら別れた。監視員にとって重要なのはルシリオンの動向だ。彼がヴィヴィオ達に付いて行っていないのを確認できれば、それで任務完了だ。ルシリオンが外へ出たことを報告し、さらに駐車場からの『ルシリオンが車に乗車したのを確認！』というもう1人の監視役からの報告によって、彼らの任務は無事に完了した。

『騎士イリスと騎士ルシリオンがミッドに残ったことが確認できた。監視班は撤退せよ』

「『了解』」

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

「では、それぞれ指定席に向かってくれ」

アインスさんの指示に従って、わたしはチケットに記載された席番号を確認しながら「えっと、わたしの席・・・」を探していると、「ヴィヴィオさん、こっちです！」ミウラさんが手招きしてくれた。

「じゃあ僕はこっちだね」

「ボクはフォルセティさんの左隣で、ヴィヴィオさんはフォルセティさんの右隣ですね」

そういうわけでわたし、フォルセティ、ミウラさんの順で座るんだけど、わたしはその前に周囲をキョロキョロ。アインハルトさんとイクスとジークさん、コロナとリオは番長、ノーヴェとミカヤさんとエルスさん、ルールーとリヴィとヴィクターさん、そして「お待たせや！」はやてさんが遅れてやってきて、アインスさんの隣の席に座った。

「お母さん。お父さんと直接逢って話せて嬉しかったんだな～。とっても幸せそう♪」

そう言うフォルセティも嬉しそう。本当にルシルさんとはやてさんの事が好きなんだな～。そういうわたしも、なのはママとフェイトママの事が大好き。だからこそ強く思う。早く大隊の問題が解決したいな～と。わたしも通信じゃなくて直接なのはママとフェイトマ

マと逢ってお話したいし。

「（なのはママ達にもう一度メールしとこうっと♪）クリス、音声入力でメールをお願い」

ポシェットから頭を出した"クリス"がビシッと右手を挙手した。準備完了みたいだから、「これからみんなで本局に出発です！　いってきます！」ってメッセージを口にして、最後に「送信！」って伝えると"クリス"がわたわたと手を振った。これでメール送信完了だ。それから出発時間までの間、他のお客さんにうるさく思われないように小声でフォルセティやミウラさんとお喋りしていると、機内にアナウンスが流れる。

「いよいよやな、ハルにゃん・・・！」

「はい、ジークさん。必ずエレミアの書を見つけ出します・・・！」

ジークさんとアインハルトさんの会話が聞こえてきた。ハルにゃん。ジークさんがアインハルトさんに付けた愛称だ。

・―・―・回想で～す♪・―・―・

着替えなどを自宅に取りに行ったヴィクターさん達を待ってる間、わたし達チームナカジマは、明日はトレーニング休みということもあって2人1組になってストライクアーツの組み手をしてた。わたしはリオ、アインハルトさんはコロナの組み合わせ。

「お嬢様方、ヴィクトーリア様方がお戻りになりました」

オットーがジムにやって来てそう知らせてくれた。ノーヴェが「少し早いが上がるか？」ってわたし達に聞いた。３時間ちょっとだったけど、お客さんを待たせるわけにもいかないから頷こうかとしたら、「お邪魔でーす」って番長や、「お邪魔しますわ」ってヴィクターさん達が、メイドさんに案内されてきた。

「おお！　ミカねえに聞いてたけど、マジですげぇ設備だなおい！」

「隣にはプールがあるって話なんやけどホンマ！？」

「え、あ、はい。確かにプールもありますよ♪」

興奮気味なジークリンデ選手の問いにイクスが答えると、「おお！」って目を輝かせた。ジークリンデ選手、泳ぐのが好きなのかな～。それなら一度泳ぎで勝負してもらいたいかも。

「おいおい、お嬢。同じ古代ベルカの貴族・・・っつうか雷帝の子孫なんだから元王族なんだろ？　この家に負けてんじゃね？」

「一度も私の家に来たこともないクセに何を・・・！　わ、私の家にだってジムはありますわよ？」

「確かにあるけど、器具は数えるほどしかあらへんよ？」

「元々私しか使わないのだから当然よ、ジーク」

「そういえば以前、プールの他にもサウナもあると言っていたね」
そう言ってミカヤさんが「家にサウナとは羨ましい限りだよ」って腕を組んでうんうん頷いた。それに真っ先に反応したのはやっぱり「すげぇな！　なあイクス！　後でちょっと使わせてくれ！」って言う番長。
「ウチも！」
「それなら私もお願いしようかな」
ジークリンデ選手にミカヤさん、それに「あ、私もご一緒したいです」エルスさんも小さく挙手した。ヴィクターさんは腕を組んでそっぽを向いていたけど、「わ、私も使わせてください」って若干照れながらそう言った。
「はい、もちろんです！」
「ならついでにジムのトレマシンも使わせてもらっていいか？　お前らのトレーニングが終わるまで待ってるのも暇だからよ」
「構いませんよ。ノーヴェさん、それで大丈夫ですか？」
「あ、ああ。イクスがそれでいいなら、あたしからは何も言うことは無いぞ。じゃあヴィヴィオ、コロナ、リオ、アインハルト。もうちっとトレーニングを続けるぞ」

ノーヴェに「はい！」と応じて、ジムのトレーニングマシンに向かっていく番長たちを横目に、わたしは今度の組手相手のコロナと、リオはアインハルトさんと向かい合う。魔法や魔力強化を一切使わない純粋なストライクアーツでの組手をするんだけど・・・。

「見られてるね・・・！」

コロナの繰り出す右拳を左手の甲で外に払い除けながら、「うん。すごい緊張する・・・！」って返しながら、コロナの顎に向けてアッパーを繰り出す。コロナは紙一重で躱して、ステップを踏んで後退した。世界最強の座に一度は就いたジークリンデ選手が、わたしとコロナ、リオとアインハルトさんの組手をジッと眺めてる。

（ジークリンデ選手がじかに見てる。緊張する・・・けど、もっと見て欲しいっていう気持ちも湧いてくる・・・！）

3分間の組み手を終えて、コロナと「ありがとうございました」って一礼。休憩を挟んだ後、また相手を変えての組手になるんだけど・・・。ジークリンデ選手が「あの・・・」ってノーヴェとイクスに声を掛けた。

「何か？」「はい？」

「いろいろと、その・・・エレミアの手記とか、お世話になったからそのお礼をって思て・・・。良かったらなんやけど組手の相手とか、ウチも手伝えたらなんて・・・」

「「「「っ！？」」」」

耳を疑った。チャンピオンが、世界最強が、ジークリンデ選手が、わたし達チームナカジマの組手相手を願い出てくれた。ジークリンデ選手は「予選が始まるくらいまでって条件付きやけど・・・。どうでしょう？」って確認した。わたし達は目をキラキラさせながらノーヴェとイクスの反応を見守る。

「それは願ってもない提案です。ノーヴェさん、ご好意をお受けしては？」

「だな。ではお願いします！」

「「「やったー！」」」

「闘える？　チャンピオンと・・・現代のエレミアと・・・」

わたしとコロナとリオは万歳で喜んで、アインハルトさんは右手を胸の前でギュッと握り拳にした。記憶の中にあったクラウスとリッド、それにオリヴィエの組手はすごかった。目標としてる絶対の強者との組手なんて、そうそう経験できるものじゃない。

「そんで・・・あの、ハルにゃんとまずはやってみたいなって」

「「「「「「・・・・・・ハルにゃん？」」」」」」

わたし達とフォルセティとノーヴェとイクスが同時に首を傾げた。ジークリンデ選手の顔がボンッと一気に赤くなって「ご、ごめんな急に！　えっと、あのな！」ってあたふたと大慌て。

「ハルにゃんって呼んでええか？って聞こうって思ってたんよ！確認する前にそっちで呼んでもーた！　なんかな！　君の相方、確か豹・・・雪豹やったやん！？」

「あ、はい。アスティオン・・・ティオと、私や皆さんは呼んでいます」

「あ、うん！　そのティオって子、にゃあって鳴くし！　なんかな、アインハルト自身もなんや猫っぽいんよ！？　そやからハルにゃん、って！　ウチ、仲良ぅなりたい子や、親しい子にはこう・・・愛称を付けたなって呼びたくなってしまうんよ！　嫌やったら言うてな！」

可愛いって思えちゃうほどに大慌てなジークリンデ選手。アインハルトさんは「いえ、嫌ではないです」って首を横に振った。

「呼び方についてはご随意にどうぞ。ハルにゃんと呼ばれたら、私のことだと思うようにします」

「ホンマに！？　ほんなら君らも・・・ヴィヴィちゃん、コロちゃん、リオちゃん、イクスちゃんって呼んでええ？」

なんと、わたし達にもそんなフレンドリーな呼び方を。もちろんわたし達は「ぜひ！」って思い切り頷いた。でもすぐにわたしは「フ

ォルセティ・・・」が呼ばれなかったことが引っ掛かった。フォルセティもちょっぴり残念そうだし・・・。

「あ、君のことはヴィクターと同じように、セティ、って呼びたいんやけど・・・、そのな、ちゃん付けか君付けかで迷ってるんよ～。ウチ的にはセティちゃんなんやけど？」

背後にガーン！って擬音を幻視しちゃうほどショックを受けたフォルセティが、「僕、男なんでぜひに君付けでお願いします！　割と切実に！」って半泣きでお願いした。たぶん、フォルセティの事を知らない人が、セティちゃんって呼ばれてるのを見たら、きっと女の子だって勘違いされること間違いなしだもん。

「あ、うん。じゃあセティ君やな♪　ウチのことはジークでええよ！　家族や友達はそう呼ぶしな！」

・―・―・終わり♪・―・―・

あの後わたし達、それに途中参加のミウラさんは、ジークさんと順番に組手を行った。ジークさんは射砲撃戦、格闘打撃戦、密着状態での投げ技に関節技といった、まさにオールラウンドのファイター。組手だから魔法は使わなかったけど、その他の打撃・関節技に四苦八苦。結局、アインハルトさんを含めチームナカジマとミウラさんは、全員が成す術なく秒殺だった。

（でも楽しかったな～♪）

だけどアインハルトさんは楽しんでいるようには見えなかった。やっぱりクラウスの記憶に引っ張られているからだと思う。アインハルトさんの背負ってるものを少しでも減らしてあげたいわたしも、「よしっ」て両手を握り拳にした。

そんな中、いよいよシャトルが出発して、本局に到着するまでの間は静かに本を読んだり、小声でお喋りしたり、思い思いに時間を過ごした。ちなみにわたしとミウラさんは、フォルセティを挟んで格闘技談義に花を咲かせた。

「みんなー、荷物忘れへんように降りてな～！」

本局へは3時間ほどで到着。はやてさんの注意にみんなで「はーい！」って答えて、シャトルを降りてターミナルに降り立つ。こっちの次元港は民間航空専用のターミナルだから一般の人ばかり。管理局の艦はそれ専用のドックに入ることになってるから、残念だけど見ることは出来ない。

「おおー！　来たぜー、本局ー！　マジで街が広がってんだな～！」

「屋内なのにちゃんと空もあるんですねー！」

「ホンマやー！　雲もちゃんと動いとる～！」

「風も吹いているし、本当に地上に居るみたいだね」

「何も知らずにココを訪れたら、まず本局の中だと気付かないでしょうね～」

「本局は、局員さんやそのご家族だけでなく、一般の人も住んでいるんですよ♪」

わたし達子供組は見慣れた光景だけど、エントランスから出ると番長さん達が驚きに目を輝かせた。ヴィクターさんが「司令。ここからは・・・？」ってはやてさんに尋ねる。

「うん、ここからはバス移動やね」

「無限書庫前までの路線がありますから、それに乗りましょう！アレです！」

わたしはバスターミナルに停車中の1台のバスを指差した。無限書庫には一般解放区画もあって、そこを利用するお客さんもいるから、ちゃんと路線の中に組み込まれてる。そういうわけでバスに乗って無限書庫へ。ガラス張りの左右に開くスライドドアを潜って中へ。

「まずは一般開放区画ですね。文字通りどんな人でも利用できて、本も１０冊までで1週間レンタルすることも出来ます。で、今日のわたし達の目的地はこの奥、未整理区画になります」

ぞろぞろと大所帯でエントランスを抜けて受付カウンターへ。司書資格を持ってるわたしとフォルセティが代表として「こんにちは～！」って、カウンターに座る司書であり管理局員でもあるボニーさんとシンディさんに挨拶。

「いらっしゃい、待っていたよ！」

「今日は未整理区画での調査だよね？　えっと、セインテスト調査官から、一般人のお友達も一緒だって連絡貰ってるけど・・・。危険度は低いとは言っても完全に０じゃないから・・・」

展開した空間モニターをタップして、わたし達が（正確にはルシルさんが）予約していた調査計画を確認するシンディさん。フォルセティがボニーさんに「一般人とはちょっと違いますよ」って、後ろに控えてるジークさん達に振り返ったからボニーさんとシンディさんの目もそっちを向いた。

「インターミドルの上位選手ですから！」

「え？・・・あっ！　テレビで観たことある～！」

「妹がファンなの！　サイン貰っちゃおうかな～！」

「だってよ、ジーク」

「ウチ！？　番長たちもそうやろ！？」

わいわい騒いじゃってるボニーさんとシンディさんにはもう２人の紹介があったりする。わたしは一番後ろで見守ってくれてた「それに八神司令とアインス司令補です」って紹介する。

「こんにちは～♪」

「お疲れ様」

「「お、お疲れ様です！！」」

さっきまでのわいわい騒ぎから一転、はやてさんとアインスさんからの挨拶に、ボニーさんとシンディさんは椅子から立ち上がってビシッと挨拶を返した。そんな2人にリオが「司令たちが一緒なので、危ない事はないです！」って笑顔で言うと、「みたいね、あはは・・・」2人は椅子に座り直した。

「こほん。えっと、じゃあいつも通りに奥の転送ゲートから進んでね」

わたし達は奥へと進んで転送ゲートへ。かなりの大型ということもあって、わたし達全員が乗っても余裕の広さがある。

「ここから先の書庫は無重力空間になります！」

「その影響で、気分が悪くなってしまうこともあります！」

「あたしとコロナ、最初はそうだったよね～」

「うん。足を付けられないから目が回っちゃって・・・」

わたしも最初はくるくる回ってったっけ。フォルセティは飛行魔法使えるし空戦も出来るから、あの頃は良くお世話になってたな～。

皆さんからの「はーい！」って元気な返事にわたしは笑みを零しつつ、皆さんがゲートの上に立ったのを確認。空間コンソールを操作して、転送先を古代ベルカ区画へと設定。

「それでは。ゲート・オープン！」

転送は本当に一瞬で終わって、わたし達は無重力が支配する本来の無限書庫へと入った。

Ｅｐｉｃａ３１無限書庫の冒険～Ｑｕｅｓｔｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

一般人の立ち入りが許可制の未整理区画という、無限書庫の本当の姿とも言える区画へとやって来た。無重力空間だから体がフワリと浮く。真っ先に聞こえてきたのは「うわっ！？」とか「ひゃあ！？」とか「おおう！？」っていう戸惑いの声。見れば番長さんが後ろ向きに連続宙返り中。あれは目が回りそう。

「わわっ、あわわっ」

「大丈夫ですか、ミウラさん？」

わたしは上手く体勢を整えられてないミウラさんを横抱きで助ける。ちなみに番長は、「どうぞ私に掴って下さい」イクスに助けられてた。ヴィクターさんとミカヤさんは、体幹バランスが良いようで助けは要らないみたい。

「空を飛び慣れてない子にとって無重力での活動は、ちょうキツイかもしれへんな～」

「ですわね・・・」

「私もなんとか体勢を維持していられる状態です」

ヴィクターさんとミカヤさん、よく見れば腕や足の振りで体勢を微調整してる。そんなお2人に「私たちがフォローします！」ってルールーとリヴィが側に寄った。

「では番長さんは引き続き私が付き添いますね♪」

「おう。世話んなるぜ、イクス！」

「イクスと番長は問題なし・・・。他に慣れてない方は・・・」

エルスさんは大丈夫かな？って見てみると、「なんだよメガネ。お前は余裕そうじゃねぇか」ってつまらなさそうに番長が言ったとおり、エルスさんはヴィクターさん達に比べてとても余裕みたい。

「飛行魔法は習得済みですので！　この程度の環境なら問題ありません！」

眼鏡をクイッと上げて胸を張ったエルスさんは大丈夫そう。ならジークさんは？って思って見てみると、「大丈夫ですか？」ってアインハルトさんが助け舟を出してた。

「おおきにな～♪」

「い、いえ・・・」

アインハルトさんも無重力は初めてなはずなのに、割と普通に体勢を維持できてる、すごい。でもこれで無重力に不慣れなヴィクター

さん達のフォロー役も決まったことで、「いざ！　無限書庫、未整理区画へ！」わたしは目的のエレミアの手記があるとされる古代ベルカ区画を目指す。

「あっ！　僕が先導するから！」

「フォルセティが？　わたしが先導しても――」

「ぼ、く、が！　先に行くから！」

すいーっとわたし達の前に行くフォルセティ。はやてさんが小さく笑って、アインスさんが「すまない。先に行かせてやってくれ」って苦笑い。わたしの前を通り過ぎる際のフォルセティの顔がちょっと赤かったような・・・。

「・・・あっ！！」

無限書庫の未整理区画での絶対的なルールをここで思い出したわたしは、カッと顔が熱くなるのが判って、バシッとスカートの裾を押さえた。そんなわたしの様子を見たコロナもハッとしてスカートを押さえた。リオはちゃっかりショートパンツだから、「？？？」自分だけ助かったことに気付いてない。

「すいません、皆さん。教えておくのを忘れてました。無重力空間なので、スカートなどがフワリと捲れてしまいます。ですから・・・見放題状態です」

スカートを履いてるアインハルトさんとミウラさんとエルスさんが顔を赤くして「っ！」両手で前と後の裾を押さえる。ヴィクターさんはさほど慌ててじゃないけど軽めに押さえてた。

「あっはっは！　別に小学生にパンツ見られるくらい、どうってことねぇよ！　そりゃあまぁ、覗き見てくるっていうんなら話は別だがよ。事故みたいなもんだろ？　構わねぇよ、フォルセティ。気にすんな！」

「します！　ですので僕が先導します！　えー、こほん。今僕たちが居るのは古代ベルカ区画で、その中でも後期・・・諸王時代辺りで、ベルカが滅亡する直前までにミッドチルダに運び込まれた書物の一部が納められてます。残りは聖王教会本部の図書館ですね」

あっけらかんとしてる番長の話にフォルセティは益々顔を赤くしたけど、すぐに気持ちを切り替えてガイドし始めた。周囲の棚に納められてる何千冊っていう書物のタイトルはみんな、古代ベルカ語で書かれてる。

「あ、今回の目的、エレミアの手記があるとされる書庫の入り口が見えてきました！」

フォルセティの指差す方には、高さ１０ｍ以上もある巨大な、細かな装飾が彫られた両開き扉がある。ベルカ諸王時代のとある王族が保有していた書庫をそのまま、この無限書庫へと納めたっていうとてもダイナミックな話だったりする。

「ユーノ・スクライア統合司書たちが行った一次調査では、特に危険物などは確認されなかったそうです」

「まぁ在ったら立ち入り許可なんて出ぇへんけどな」

「そんな書庫ですけど、ご覧の通り中は迷宮型となっています」

書庫へ通ずる重厚な扉は開閉魔法で起動する仕組み。わくわくが止まらずにわたしがフォルセティより先に開扉を行った。フォルセティより下に居るからスカートの中を見られる心配はなし。

「中は広大かつ迷宮ということもあり、さらに昨夜の事前調査でエレミアの手記があるかもしれない棚は、１０箇所ほど候補があります」

「そういうわけで、手分けして探しに行こうって考えました！」

纏まって１０箇所を探すより、分散して探した方が効率がいい。一応、今日と明日の２日間の探索期間は設けられてるけど、出来ることなら早めにフライハイト邸に帰った方がいいってフォルセティ達が提案してくれた。

「チーム分けの基準は、古代ベルカ語を読めて、検索魔法も使える人が各班に１人は居るって感じで」

古代ベルカ語を割と正確に読めるのは、わたし、フォルセティ、アインハルトさん、イクス、ルールー、ヴィクターさん、ジークさん、

エルスさんの8人。古代ベルカ語を読めることと同じくらい重要になる検索魔法を使えるのはわたし、フォルセティ、コロナ、リオ、イクス、ルールー、リヴィ、エルスさん。それを踏まえて話し合った結果・・・

「ではA班は、わたしヴィヴィオ、イクス、アインハルトさん、ジークさん、ミウラさん！」

「B班！　あたしリオと、ルーちゃん、ミカヤさん、エルスさん！」

「C班。わたしコロナと、リヴィちゃん、ヴィクターさん、番長！」

「僕は男なんで、単独で調査に入りま～す。お母さん、アインスお姉ちゃん、問題ないよね？」

フォルセティ以外の女の子だけチームを3つ組んだ。はやてさんはフォルセティからの確認に「まぁしょうがないな～」って苦笑した。3つの班にはスカートを履いた人が居るし、お互いに気が休まらないだろうから、はやてさんの言うように仕方ないかな～。

「迷宮で散開する前に、それぞれ入り口の位置情報データと、通信コードの交換を済ませておくようにね」

アインスさんにそう言われたわたし達は迷宮から無事に脱出できるように、そして探索中でも通信が出来るように、デバイスに登録をしておく。これで探検の準備は完了だ。

「あたしと八神司令は念のために、この入り口前で待機してるからな」

「無限書庫内では転移魔法も転移スキルも使えへんから、大隊の奇襲はまず無いと思てる。そやけど入り口から侵入されたら大事や」

「転移不可なんスか？」

「あ、えっと、未整理区画には売れば一生暮らせるような貴重な本というのが割とあるので、その盗難防止のための処置ですね」

はやてさんに代わってわたしが説明すると、番長は「１冊でか！？　そいつはすげぇな！」って辺りをキョロキョロ。するとヴィクター さんが「やめなさい、局員志望」って呆れた。

「金目のものに目が眩んでのキョロキョロじゃねぇよ。もし何かあって、傷付けたりでもしたら、とんでもねぇ弁償金を支払わせるんじゃねぇかな・・・って、ビビっただけだ！」

何百年、何千年っていう歴史のある本もあるから、番長の不安は間違ってない。触れることにすらドキドキしちゃうし。

「それなら大丈夫です！　そういった貴重な書物が収められた区画は、空間バックアップをスクライア司書長が取ってくれているので！」

「もし万が一があった場合でも、バックアップによって修復されるので基本的には問題なしです！」

コロナとリオがパチッとお互いの手の平を合わせた。わたしも最初は、空間そのものを複製する、っていう発想に驚いたのを思い出す。ヴィクターさん達も「すごい・・・！」って驚いていたけど、番長だけ首を傾げてた。

「そうやね。シャルちゃんから聞いてる例の一件のことも含めて、何かしらの理由で戦闘が起こっても別に構わへん。みんなは自分の身を守るのを最優先してな。さすがにわざと破損させたら器物損壊などで即逮捕やけどな♪・・・んじゃ、みんな。気を付けていってきてな～♪」

「危険物は無いからと油断はしないように」

「何かあったらすぐに呼べよ？　アインスさんが駆けつけることになってっからな！」

はやてさんとアインスさんとノーヴェの見送りにわたし達は「いってきまーす！」と手を振って、書庫の扉を潜る。そしてここからは四手に分かれての探索になる。エレミアの手記のある棚の候補ポイントを表示させたマップを開いて、どのチームがどのポイントを探索するかを決める。

「それでは！　十分に気を付けて、無限書庫探検をしましょう！」

おー！とみんなで気合を入れて、それぞれの担当ポイントへ向かう。でもその前に「フォルセティ！」の右手を掴んで呼び止める。

「ん？　どうしたの、ヴィヴィオ？」

「フォルセティ、独りで本当に大丈夫？　フォルセティだって一応狙われてる側なんだよ？」

下着を見られるのは恥ずかしいけど、フォルセティを失うことに比べたらどうってことない。フォルセティは左手をわたしの右手に添えて、「僕は大丈夫。魔術師化っていう切り札もあるし」って笑った。

「ヴィヴィオの方も気を付けて。とは言っても、世界最強女子（ジークさん）が一緒だし、お母さん達が入り口を見てくれてるし、あんまり危ない事はないと思うけど・・・。ジークさん、アインハルトさん。ヴィヴィオとイクスの事よろしくお願いします。ミウラも、あまり無茶はしないように」

「ん、任せてな！」

「必ずお守りします」

「だ、大丈夫です！　ボクも結構しっかりしてきましたから！」

「お気遣いありがとうございます。フォルセティもお気を付けて」

わたしはフォルセティの手を離して、「それじゃ後で！」手を振って離れてくフォルセティを、「うん」手を振り返しながら見送った。

「ヴィヴィちゃん、行こか？」

「あ、はい！　えっと・・・こっちです！」

ここからはわたしが皆さんを先導する。ミウラさんの手を引いて無重力空間を進んで、最初の探索ポイントに到着。ジークさんが「おおう、これはまたすごいな～」って、膨大な数の本が収められてる棚を見てあんぐりと口を開けた。

「ここから1冊だけを探すんですね～・・・。よしっ、頑張りましょう！」

ミウラさんもポカーンとなっちゃったけど、すぐに「ヴィヴィオさん、どれから見ましょうか？」って聞いてくれたから、「じゃあ、この棚から見ていきましょう！」ってミウラさんと一緒に本棚に近寄る。

「では私たちも始めましょうか」

「うんっ！」「はい！」

わたし達に続いてイクス達もそれぞれ本棚に近付いて、適当に本を取り出してく。そして検索魔法で本の中に、エレミア、っていう単語が出てこないかを調べる。時間が無限にあるなら1冊1冊読んでみたいけど、残念ながらそんな猶予はない。

「ほぁ〜、すごいですね・・・」

7冊同時に検索魔法を掛けていると、検索し終わった本を棚に戻しては新しい本を持ってきてくれるミウラさんがそう感嘆した。

「ボクより小さくて年下なのにしっかりしていて、しかも強くて。その、可愛いのにそれ以上に格好いいです！」

「ええ！？　えっと、あの、ありがとうございます！　あ、もう1つありがとうございます」

ミウラさんに褒めてもらえた事へのお礼と、「本局まで付き合ってもらって」のお礼もする。

「いえ！　ボクが選んで付いて来たんですから！　それに、ずっと以前からどんな形でもいいからヴィヴィオさん、それにコロナさんやリオさん達とも仲良くなりたいって思ってたんです」

ヴィータさんとザフィーラが開いてる八神道場に通うようになってから、フォルセティからわたし達の事を聞いていたと話すミウラさん。だから本当はもっと前から交友したかったとのことで。

「ですからこんな機会をいただけたことに感謝です♪　それに・・・」

ジークさんの方をチラリと見て、「チャンピオンを始め、番長さん達のような上位選手との練習というイベントもあって、とってもラ

ッキーです！」ミウラさんは大興奮。それについてはわたしも同意だ。ヴィクターさんと番長も、魔法ありでの試合はダメだったけど、組手は付き合ってくれた。昨日はホント楽しかったな～。ジークさんとは、インターミドルが始まるまで期間、時間があるときは組手してくれるって言うし。幸せすぎる。

「あっ！　ですから、その・・・トレーニング抜きでもいいので、どんな事でもご一緒できるような事があれば、また声を掛けていただけると嬉しいです！」

「はいっ！　もちろんです！」

ミウラさんと笑顔を浮かべ合って友情を確かにした。で、問題の目的であるエレミアの手記は見つけられなかった。そういうわけで「次のポイントへ向かいましょう！」って移動を開始。ミウラさんも無重力化での移動も慣れたようで、わたしが手を繋いでなくても大丈夫みたい。

「ここもまた大きなところやね～」

「先ほどのホールとは違って、何か彫像が並んでますね。美術館みたいです」

「ここはどの国のものになるでしょうね」

「そうですね・・・。少なくともシュトゥラではないですね。華美な調度品はあまり好まない国でしたから。調度品にお金を使うくら

いなら、民に使うのを善しとしていました」

「そうなんか～。うん、戦時中ならそれが正しい事やろね」

そんな彫像が並ぶホールの外壁に沿って設けられてる本棚の探索を開始。ミウラさんと一緒に十何冊と本を取り出して、検索魔法でエレミアの名前を探す。そんな中、『冥府の炎王の魔力波を感知』って、イクス達の方からしわがれた声が聞こえてきた。

「え、なんです・・・！？」

「アカン、イクス！　その本貸して！」

イクスの検索魔法に掛けられてた本をジークさんが引っ手繰って、「なんか来るよ、みんな気を付けて！」ってイクスとアインハルトさんから離れた。直後、ジークさんの持ってる本からブワっと毒々しい紫色の煙が溢れ出してきて、それが収束していくと、鎧を纏った「巨人の上半身・・・！？」のようなものに実体化した。右手には剣、左手には盾を構えてる。

『冥府の炎王を討つべし！』

「「イクス！」」「「イクスさん！」」

狙いは冥府（イクス）の炎王らしくて、振り上げた剣をイクス目掛けて振り下ろそうとした。振り下ろされる剣をイクスは「えーい！」って横っ飛びすることで回避。

「クリス！」

「ティオ！」

「スターセイバー！」

「「「セットアップ！！」」」

「武装・・・！」

わたし達は防護服へと変身して巨人の迎撃に入ろうとしたら、後ろから『聖王オリヴィエの魔力波を感知』って、さっきまでわたしが検索魔法を掛けてた本からそんな声が発せられた。ミウラさんが「この本も・・・！？」煙を吐き出す本を閉じた上で遠くに蹴り飛ばした。そしてその本から溢れ出てた煙もまた、剣と盾を携えた上半身だけの巨人になった。

『殺せ、王を殺せ。そして我らがペルセポリス王、スレイマン陛下にベルカ統一王の座を』

まさかこんな形で戦闘体勢になっちゃうなんて、トホホ。

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ⇒フォルセティ†††

ヴィヴィオ達を始めとしたスカートを履いてる女の子と一緒に行動しないよう、僕は単独でエレミアの手記の探索をただいま実行中。

ひとりはちょっと寂しいけど、お互いにスカートの中が見えないようにいちいち注意を払うのも非効率だから、ひとりで頑張るのだ。

「でも、本を取って来ては検索して戻すをひとりで・・・。これはこれは効率が悪い気が・・・」

そんな独り言が零れてしまう。しかも静か過ぎるから余計に響いて空しさが際立つ。あぁ、早く見つけてみんなと合流したいな～、なんて考えていると・・・。

『魔神オーディンの魔力波を感知』

背後に配置して検索魔法を掛けてた本からそんな音声が発せられた。すぐさま検索魔法を中断して、その場から離れる。音声が発せられたと思しき本からは紫色の煙が溢れ出てきていた。

「これは緊急事態だよね。一次調査でも判らなかったトラップ・・・」

まさか特定の魔力反応で発動するなんて。これにはさすがのユーノ司書長でも気付けなかったんだな～。というか、オーディンのクローンでも魔力パターンは一緒なんだ。

「まさか、ヴィヴィオ達の方にも出てるかも・・・！」

ヴィヴィオ達の担当するポイントへ向かおうにも、煙は巨人の上半身という形に実体化して、『魔神オーディンを討つべし！』って携

えてる剣を横薙ぎに振るってきた。巨体の割にはかなり動きが早い。だけどシグナムお姉ちゃんの斬撃に比べればなんてことない。

「戦うにしても逃げるにしても・・・！　エマナティオ、エンゲージ！」

≪応！　防護甲冑、着装！≫

待機形態がクロス・フローリー型ペンダントの"エマナティオ"を手に取って起動させる。ウィングカラーシャツ、ラペルドベスト、スラックス、フード付ロングコート（袖に腕を通さずに羽織るだけ）、そして首にクラバットを巻き、腰にマガジンホルダーの付いたベルトを2つ巻いたスタイルの防護服に変身。

「エマナティオ！　ドッペルトフォルム！』

≪双銃形態（ドッペルトフォルム）で起動≫

両手に拳銃型デバイスを携える。"エマナティオ"は、お父さんとすずかさんの合作インテリジェンスデバイスだ。デバイスを造ってもらえることになった時、どんな物がいいかってお母さんに聞かれた僕は、アリシアさんやティアさんが使うような拳銃型がいいって話した。

――銃か～。アレは一度ハマると、とことんカスタムにのめり込めるからな。そうだ、少し待っていてくれ――

そしたらお父さんが、地球産のモデルガンやアタッチメントをわざわざ取り寄せてくれて、僕が好きなようにカスタムしたモデルを、そのままデバイスの外見にしてくれるってことになった。その結果、基礎のシグザウエルＰ２２６に、ユニット内部にレーザーサイトを組み込んである１０インチの大型ロングバレルユニットを装着。グリップも改造して、１５発＋１発のＰ２２６の装弾数を、Ｐ３２０のように１７発＋１発にしてみた。ロングマガジンって選択肢もあったけど、グリップからはみ出るのはちょっと嫌だった。

「コード・レヴォルヴァー！」

カートリッジをロードしない状態での魔力光線６連射（２挺で１２発）を放つ。巨人は左手に持つ盾を構えて、魔力弾を全弾防御した。振り下ろされる剣をまた躱すけど、本棚がバッサリ両断された。

（あー！　ごめんなさい、ユーノ司書長！）

いくらバックアップがあるといっても、貴重な本がズタズタにされるのは見ていられない。早期決着のためにも僕は「カートリッジロード！」って指示をして、"エマナティオ"が薬室内のカートリッジをロード。足元にベルカ魔法陣を展開して、ソレを足場として蹴る。そして巨人の真下を潜り抜けつつ、「コード・カノーネ！」双銃から砲撃２発を発射。巨人は大きくよろめいたけど、決定打にはなっていないみたい。

「この・・・！」

それから何度も振るわれる剣や盾の猛攻を掻い潜りながら攻撃を与えるけど、なかなか朽ちてくれない。とここで、「そうか、あの本を狙えばいいんだ」って察した。巨人の実体化の際に心臓付近に取り込まれたあの本を壊せば、きっと・・・。

「（ただの射砲撃じゃ巨人の体は撃ち抜けない・・・！）だったら！
カートリッジ全ロード！」

≪応！　カートリッジフルロード！≫

マガジン内のカートリッジを全弾で使い、攻撃を躱し切ったところで「コード・クーゲル：Ｄ！」双銃から魔力弾を１発ずつ発射。ＤはＤｕｒｃｈｂｒｕｃｈ、突破っていう意味を持つ単語の頭文字で、魔力障壁貫通弾のことを指す。ミッド式のヴァリアブルシュートと同じようなものだけど、貫通性能はこっちの方が上だ。

「これでどうだ！」

僕の放った２発の魔力弾は巨人の心臓付近を貫通していた。それでも巨人は剣を振り上げたから失敗したと思った。でもすぐに実体化を維持できなくなったのか煙状に戻っていって、そのまま完全に消失。そんな中でど真ん中に穴の開いた本が現れた。

「・・・ふぅ。よっしゃー！」

ひとりで敵を倒せたことに喜んでいたところ、「エレミアの記した書、見つかった？」って女の子の声がした。今日、無限書庫に来た

メンバーの声じゃない。バッと声のした方へと体を向けて、双銃の銃口を向ける。

――無限書庫に行く前に、みんなには伝えておきたいことがあるの――

――シャルちゃんから聞いてる例の一件のことも含めて、何かしらの理由で戦闘が起こっても別に構わへん――

「君が・・・魔女、ファビア・クロゼルグ・・・？」

今日、ここ無限書庫に訪れることになってるメンバー全員がシャルさんから聞いていた、ヴィヴィオやアインハルトさん達のことをこそこそと探っているっていう女の子が、僕の目の前に現れた。

Ｅｐｉｃａ３２とある片想いのお話～Ｓｃｒｙａ'ｓ　Ｌｏｖｅ～

†††Ｓｉｄｅユーノ†††

ミッドチルダの首都クラナガン、その南にあるホテル・アグスタで開催される考古学会の論文発表会に出席することになっている僕は、発表会のことより今日、無限書庫の未整理区画へと入るヴィヴィオ達のことを考えていた。ベルカ諸王時代のハープスブルク王家が所有していた書物庫をそのまま収めた、４年前の一次調査では特に危険性は無しと判断した場所だ。

（あれから何度か、時間に余裕がある時には調査に入っているけど、危険なものはやはり見つけられなかった）

たとえそれでも、だから安全だ、なんて言い切れないのが辛いところ。でもヴィヴィオ達と一緒に探検するのは、インターミドルチャンピオンシップっていう、１０代の少年少女が己の強さを競い合う大会の常連かつ都市本戦の上位選手、さらに言えば一昨年のチャンピオンもいるという話だ。

（それに付き添いにははやてやアインスさん、ノーヴェ、アルピーノ姉妹も一緒だ。多少の問題なら実力で解決できるはず）

とは言っても、僕だって無限書庫のの統合司書長、何か問題があったらすぐに応じられるように携帯端末に注意を払おう。携帯端末を

一度確認して、メールを受信してないかを見ておく。時間的に見てもう無限書庫の中に入っているだろうから、今のところは問題ないみたい。

「スクライア先生。そろそろお時間です、ステージの方へ移動してください」

「あ、はい、判りました」

発表中に受信音が鳴るのはさすがにまずいから電源を切っておく。よし、と気合を入れて控え室から発表のステージへと向かう。ステージ上には演台と、僕と同じように考古学会に所属してる学会員が座る長テーブルがある。僕は自分の名前が書かれた会議用席札のある席に座った。

「お久しぶりです、スクライア先生」

「先生、ご無沙汰しております」

「ええ、お久しぶりです、トゥディ先生、ギア先生」

アレク・トゥディ、サム・ギア。お2人は僕より2つ年上だけど、学会員歴としては僕の方が先輩になる。そして僕にとっては姉とも言えるセレネとエオスの彼氏さんでもある。セレネとエオスからお2人を恋人だって紹介された時、嬉しさと寂しさが半々だった。本当の姉弟でもないのにこれほどまで感情が揺れるんだから、本当の姉弟だったらどうなるんだろう。

「今日はですね、僕たちの将来の妻となる彼女たちも来てくれているんですよ」

「Ａ席の、前から3列目です」

観客席の前の辺りに見慣れた顔が2つ。レディースーツを着た、ミルクティブラウンの長髪を結うことなく流したままにしたセレネと、シュシュで一房に纏めて体の前に流したエレスが居た。化粧をしているようで、とても大人びているからすぐには判らなかった。2人が小さく手を振ってくれたから、僕も応じようとしたけど「えー、それでは――」司会者の進行が始まったことで微笑みだけを返した。

「――これにて本日の論文発表会を終了いたします！」

発表会は粛々と進んで、質疑応答などの時間も無事に終了。僕たち学会員もステージから降りて、発表会を行ったホール前のロビーで関係者の方々のお見送りと挨拶回りとなる。先ほどの質疑応答の時間内で応じられなかった方とも話していると・・・

「アレクさん！」「サムさん！」

「あ、セレネさん！」

「エオスさん！」

トゥディ先生とギア先生の声が響いた。そっちを見るとセレネとエオスが、トゥディ先生たちと合流して楽しそうにお喋りをしていた。僕も同じ考古学者の方々と話す中、セレネ達が気になってチラチラ見てしまう。

（あ・・・）

何度目かのチラ見でセレネとエオスの目とバッチリ合った。でも僕がいま応対中っていうこともあって2人はすぐに視線を外して、トゥディ先生とギア先生に寄り添うように彼らが話してる相手に目を向けた。それから挨拶回りも少しずつ落ち着いてきた時・・・

「きゃあああああ！」

どこからか悲鳴が上がって、ドドド！と雪崩のように学会員や関係者たちがこちらに戻ってきた。中には真っ赤な・・・血のようなものを浴びてる人も居て、僕は「何かあったんですか！？」って誰彼関係なく大声で聞く。

「だ、大隊だ！」

「逃げろ！」

「巻き込まれるぞ！」

「いや！　死にたくない！」

最後の大隊が犯罪者狩りをしている。大隊はあくまで、罪を逃れていていたり、再犯をしていたり、償っていても遺族から怨まれ続けていたりする犯罪者だけを殺害する。何の罪もない一般人が殺害されたことはこれまでにないって、なのは達からは聞いている。だから下手に逃げてターゲットに近づく方が危ない。

「セレネ、エオス！　トゥディ先生、ギア先生！」

人波に飲み込まれた４人の名前を呼ぶけど、僕自身も「すいません！　ちょっと・・・！」脱兎のごとく逃げ惑う人たちの所為でその場に留まることが出来ない。仕方ない。

「久しぶりの動物形態・・・！」

遺跡発掘に際して便利な小動物形態。ここ最近は遺跡に潜ることがなかったから本当に久しぶりだ。変身を終えた僕はソファの上に避難して、念話で『セレネ、エオス！』って呼び掛ける。

『ユーノ！　こっちは大丈夫！』

『今、セレネやサムさん達と逃げてるから！』

『・・・うん、判った。ターゲットが判らない以上、下手に動き回るより他の人たちから距離を取って、ジッと待ってる方がいいと思う』

『ありがとう、ユーノ』

『後で合流しようよ！　その方が安心するし！』

セレネからの提案の、騒ぎが収束したらもう一度このロビーへ集まることになったっていうことを、トゥディ先生たちにはセレス達が伝えてくれるそうだ。セレネ達との念話を終えて、大隊が今なにをしているのかが気になった僕は、ガラス張りの手すりの上に登って、そこから吹き抜けとなっている階下を覗き込む。

「っ！！」

そこは真っ赤に染まったロビーだった。死体は5体で、考古学会に所属してる学士と教授、あと見覚えのない老人と青年と女性。大隊のメンバーの証である仮面を付けた男女ペアが1組。

「残りのターゲットは？」

「同志ヴィスタが向かっているわ」

「そうか。しかし同志ヴィスタが犯罪者狩りに参加するなんて、今回のターゲットはよほどの悪なんだろうな」

「これまでに何人もの女性を騙しては捨ててきた男たちだそうよ。被害女性の中には自殺に追い込まれた人もいるって話よ」

「そりゃ殺されても文句はねぇよな」

「ええ、まったく。私が殺してやりたいほどのクズよ」

断罪のターゲットはまだ残っているようで、しかも仮面持ちがこの場から動かないとなると、ここでの合流はかえってまずい気がする。だからすぐに『セレネ、エオス！　こっちはダメだ！　合流場所を変えよう！』って念話で伝える。

『あ、今わたし達、地下駐車場へ向かってる！』

『えっと・・・Ｂの３２だって！　車で逃げるって言ってるの！』

『（避難するためとは言え車でホテルから離れるのは、あとあと管理局からの事情聴取などで手間が掛かるんじゃ・・・？）・・・判った、とりあえず僕も急いでそっちに向かうよ！』

罪のない一般人は殺されない。それを解かっていても見つからないように、慎重に動いてしまう。小動物形態になったのは正解みたいだ。仮面持ちの視界に入らないように廊下の端っこを駆け抜けて、地下の駐車場を目指す。

「学者って、頭が良くても人格に問題がある人ばかりですね」

「ああいう連中は、歴史に名前を残してナンボだからな。必死になるのさ、学者同士で潰し合ってでもな」

「だからって研究を盗んだり買ったり、果てには殺したりするんですか？　僕には解からない世界ですよ」

「ま、それも一部なんだろうけどな。どっちにしろ名声を残そうとする奴は頭がおかしいんだよ」

別の仮面持ち達がそう話しているのを聞きながら、なんとかホテルの1階まで降りてこられた。警備員や従業員はバインドで拘束されていて、眠らされたのか静かに寝息を立てている。エントランスには仮面持ちは居ない。脱出するなら今だ。外へと通じる自動ドアの前に立つけど・・・。

（あ！　人間じゃないから反応しない！）

ガーン！と自分の間抜けさにショックを受けていると、ゾクッと背筋に悪寒が走った僕はすぐさまその場から離れる。受付の陰に隠れて、ホテルから出て行く女性仮面持ちの後を追う。外に出られたら後は問題ない。

「えっと、地下駐車場の入り口は・・・！」

エントランス前のロータリーには仮面持ちが1人。ホテルから逃げ出した利用客や従業員たちを一箇所に集めて監視している彼が、自動ドアを開けてくれた女性仮面持ちに「お疲れ様です、同志ヴィスタ！」と敬礼。

（じゃあこの人が残りのターゲットを断罪するヴィスタ・・・）

ヴィスタと言うコードネーム（さすがに本名なわけがない。それに

しても、どこの世界の言語だろう）で呼ばれた女性は小さく頷くだけで応えた。ヴィスタは地下駐車場とは別の方角へと向かって歩き出したから、挨拶をした仮面持ちもそちらに目を向けた。今なら見られない。彼らを横目に僕は地下駐車場へ向かう。

『ユーノ！　アレクさん達が・・・・！』

『ユーノを置いて先に逃げるって！』

セレネとエオスからそんな念話が入ってすぐ、ブォン！と地下駐車場の入り口から1台の車が飛び出してきた。運転席に座っているのはギア先生で、助手席にはトゥディ先生。後部座席にはセレネとエオスが乗っていた。

「セレネ！　エオス！」

追い駆けようとしたところで、ガガガとエンストを起こして停車した。焦っている所為だと思うけど、それにしては焦りすぎなような。僕は変身魔法を解除して、車へと近付く。

「ギア先生！　待ってください！　エントランス前ロータリーに、従業員や他の利用客が集まっています！　彼らは断罪のターゲットではないので、そこに居れば安全です！　そっちで事が終わるまで待ちましょう！」

「ダメだ！」

「僕たちはこのままホテルから離れる！」

鬼気迫る形相で怒鳴ったトゥディ先生とギア先生に、僕とセレネとエオスはビクッと肩を跳ねさせる。何かがおかしい。２人は何かを隠している。そう考えると嫌な考えが湧き上がってきた。信じたくはない。けどまさかという考えももう・・・払拭できない。

「セレネ、エオス！　車から降りて！」

「「え、どうして・・・！？」」

「くそ、動け！」

「早くしろ！」

「いいから降りるんだ！」

後部座席のドアを開けようとしたんだけど、それより早く車が急発進したから「待て！」と走って追い駆けるんだけど、車に人が敵うわけもなく。くそ、と悪態を吐いていると・・・

「ヴィスタ・・・！？」

いつの間にか居たあの女性仮面持ちが車の前に立ちはだかった。車は急ブレーキを掛けながらハンドルを切った影響で後輪が滑って、車体の横っ腹がヴィスタと相対した。ヴィスタがサッと右腕を振り上げたかと思えば、キン！と金属音が鳴って、車が前と後ろとで真

っ二つに断ち切られた。

「セレネ、エオス！」

２人が乗っている後部は、ヴィスタがガシッと両手で捕まえることで問題なく停車したけど、トゥディ先生とギア先生の乗っている前部は、後輪の支えがなくなった車体を擦りながら暴走。その間にもヴィスタは、セレネとエオスを気遣って車から脱出させていた。

「アレクさん！」「サムさん！」

街路樹に突っ込んで止まって、エンジンルームから白煙を上げてる車へと駆け寄ろうとしたセレネとエオスだけど、ヴィスタが２人の腕を取ってそれを制止した。２人は痛がったから「その手を離せ！」僕はフープバインドを発動させて、ヴィスタを直立不動の状態で拘束した。自由になった２人は、ふらふらとドアを開けて出てきたトゥディ先生たちに駆け寄った。

「（僕には逮捕権は無いけど・・・）時空管理局、ユーノ・スクライアです！　抵抗せずにそのまま投降してください！」

ヴィスタは首を横に小さく振ると、バインドをまるで紙テープのように簡単に引き千切った。そしてセレネ達へと体を向けて、「セレネ、エオス。あなた達のためなの」と優しい声色でそう言って、仮面と目出し帽を外した。

「「「フィヨルツェンさん・・・！？」」」

「久しぶりですね、ユーノ、セレネ、エオス。わたくしのことを憶えていてくれて嬉しいですよ」

――フィヨルツェンさん。また逢える？――

――ええ。いつかまた、わたくしと遭えるでしょう――

ブラウンの髪に真っ赤な瞳、耳に優しい声。幼少時、僕たちスクライア一族に付いて回っていた、僕たちにとってお姉さんとも言える女性、フィヨルツェンさん。１０年以上ぶりの再会だ。でも・・・。

「こんな形で"逢"いたくなかったです」

「いいえ。きっとこういう形で"遭"うと思っていました。わたくしがエグリゴリであり、あなた達がセインテストの関係者である以上は」

フィヨルツェンさんは右手に美術品のような、黄金に輝く大弓を展開すると、トンッと地を蹴ってセレネ達の元へ突進した。フィヨルツェンさんが最後の大隊の一員としてここに姿を見せた以上、ターゲットがこの場に居る。さらに言えばセレネとエオスのすぐ側に。

「アレジアンス、ヴァリアンス。セットアップ！」

「グロリアス、グラヴィタス。セットアップ！」

２人はリボルバー拳銃型ストレージデバイスを両手に展開して、「止まって！」と銃口をフィヨルツェンさんへと向けた。４つの銃口を向けられたフィヨルツェンさんは急停止。"エグリゴリ"である以上、彼女に魔法は通じない。だからどれだけ２人の魔法攻撃を向けても無傷で済むはずなのに・・・。

「セレネ、エオス！　ダメだ！」

僕はセレネとエオスとヴィスタとの間に割って入って、「解かっているんだろう？　大隊が狙っているのは・・・！」２人の後ろに居るトゥディ先生とギア先生を見る。大隊に狙われて殺されるだけの罪を犯している。ホテルで聞いた罪状には僕も反吐が出るようなものだった。それをあのお２人が犯しているなんて信じられない、信じたくない。だけど・・・。

「そんなの何かの間違いよ！」

「そうだよ、大隊の方がおかしいんだよ！」

そう言ってお２人を庇うセレネとエオスが「退いてください！」銃口をフィヨルツェンさんに向けたままで言い放った。

「セレネ、エオス。これはあなた達の為でもあります。あなた達が庇っている後ろの男２人はこれまでに詐欺、窃盗、脅迫、傷害・暴行、自殺関与といった罪を犯しています。しかも親の権力や財力で罪をもみ消すその所業、許すわけにはいかない」

フィヨルツェンさんが弓を構える。その瞬間、僕は「トゥディ先生、ギア先生。その手に握ってる物、捨ててください！」と怒鳴る。先生たちの手には銀色に輝く自動拳銃。デバイスなのか質量兵器なのかは判断できないけど、人を害する武器であるのは間違いない。

「「・・・今の、本当の話なんですか？」」

肩を震わせて俯き、弱々しい声でそう尋ねる2人に、「仕方がなかったんだ！」って答えるギア先生。トゥディ先生も「この世界でのし上がるためには、金や権力だけじゃ足りない！　実績が要るんだよ！」って叫ぶように答えた。

「だが君たちも楽しかっただろ！？　俺たちと遊べてさ！　高い服、高い料理、高い・・・！」

「どれもこれも普通の女なら喜んでさあッ！　2人も楽しいって言っていただろ！」

セレネとエオスの表情は窺い知れない。でもどんな顔をしているのかは判る。僕は握り拳を作って「なんだよそれ・・・！」そう言い捨てた。セレネとエオスを使い捨ての道具にされた。これまで僕は人に対して敵意も殺意も持ったことなかった。でもその初めてを今日、持った・・・。

「なんだよそれ！　ふざけるなよ！」

「叫ぶなよ！　元はと言えばスクライア！　お前にも原因はあるん

だぞ！」

何をいきなり言い出すのかと思えば、「はあ・・・！？」わけの解からないことを。

「あんたが、エオスさんやセレネさんをフッたから、俺たちはチャンスだって思って交際を申し出たんだ」

「・・・・・・フッた？　僕が？　セレネとエオスを？」

日本には、寝耳に水、と言う言葉があったのを思い出す。今の僕がまさにそれだ。フるどころか告白だってされたことないのに。それはまぁいろいろなスキンシップをされてきたけど、それは姉としての2人だったからで。セレネとエオスを見ても2人は顔を上げないから、真偽のほどはサッパリ・・・。

「俺たちとのデートの最中でも時々出てくるんだよ、あんたの名前が・・・！」

「俺たちは結構本気だったんだぜ？　なのに、ユーノなら、ユーノがね、ユーノってば・・・。ユーノ、ユーノ、ユーノ！　ふざけんなよ、フッたなら出てくんなよ！」

「そ、そういうあなた達は、罪を犯しておきながら免れている！償いもしないあなた達に文句を言われる筋合いはない！　セレネとエオスを騙して、そしていつかは捨てる？　冗談じゃない！」

「捨てるつもりはなかった！」

「真剣に結婚だって考えていたんだ！　こんな形で大隊に狙われるまではな！」

ギアさんがフィヨルツェンさんに銃口を向けた。そんな物じゃ彼女にかすり傷１つ付けられないだろう。そんな彼女は、ルシルの家族をも殺害したセインテスト一族の敵、"エグリゴリ"。親友の敵は僕の敵でもある。でも幼少の頃にお世話になったお姉さん的な人でもあるんだ。僕はフィヨルツェンさんを庇う位置取りに移動。

「ふふ。随分と会わぬ間に紳士になりましたね、ユーノ」

「この件が片付いたら捕まえますので、覚悟しておいてください」

「まあ！　怖いです♪」

「仲良く話してんなよ！　俺たちは殺されるわけにはいかないんだ！」

「セレネさん、それにエオスさんも。俺たちのことを愛してくれているなら、このまま大人しく付いて来てくれな？」

トゥディさんがセレネの頬にキスするように顔を近付けた。カッと燃えるかのような怒りが全身が駆け巡る。

「触れるなぁッ！」

僕がそう叫び、セレネも顔を背けてキスを回避。不満そうな表情を浮かべるトゥディさんが何かを言おうと口を開いたから・・・

「僕は！・・・正直、セレネとエオスが僕をひとりの男として見ていたなんて知らなかったし、気付けなかった！　鈍いにも程があるって思うよ！」

姉弟間のちょっと過度なスキンシップだと思い込んでた。血は繋がってないけど姉弟として一緒に過ごしてきたから。でも違った。恋愛感情を持ってのスキンシップだった、って今聞くと思い当たる節がチラホラ。あーホント、鈍すぎる僕自身に嫌気が差す。

「そんな僕にも言えることがある！　僕だってセレネとエオスが大好きだ！　僕にとって大切な家族なんだ、大事な人なんだ！　あなた達のように罪も償わずにいる卑怯者には渡せない！」

「「ユーノ・・・」」

「「この・・・！」」

トゥディさんとギアさんが銃口を僕に向けたから「ここでは死なせはしない。罪を償わせてやる！」ミッド魔法陣を展開。バインドを発動する前にパァン！と発砲された。でも銃弾が当たることはなかった。セレネとエオスがトゥディさんとギアさんにタックルして、2人の体勢を崩してくれたからだ。さらに言えば、フィヨルツェンさんが僕を庇うように立ちはだかってくれたからだ。

「殺します。セレネとエオスとユーノは、わたくしにとっては妹であり弟でもある存在。ユーノを害そうとした殺人未遂、セレネとエオスへの様々な未遂。それだけでその首を刎ねる理由になるので」

「「「待ってください！」」」

フィヨルツェンさんを制止する声が重なる。僕たちだ。僕たちはフィヨルツェンさんの肩に手を置いて、グイッと引いて彼女を後ろに下がらせる。それと同時にセレネとエオスが同時に「シュート！」魔力弾を1発ずつ発射して、トゥディさんとギアさんの持つ拳銃を弾き飛ばした。

「「ぐぅ・・・！」」

「チェーンバインド！」

拳銃を弾き飛ばされた衝撃で手を傷めたのか、トゥディさんとギアさんが動きを止めたところで僕がバインドで拘束。2人は魔導師じゃないから、ここからの反撃も抵抗もないと見ていい。

「アレクさん」

「サムさん」

「「今日までお世話になりました。私たち、別れましょう」」

デバイスを解除してからの両手を前で組んでのお辞儀をして縁切り

を告げたセレネとエオス。トゥディさんとギアさんはがっくり項垂れて、「どうしてこんな事に」って漏らした。

「フィヨルツェンさん。彼らは局員に引き渡します。どうかそれで許してあげてください」

「「お願いします」」

フィヨルツェンさんに体を向けて、頭を下げてのお願いをする。確かにトゥディさん達は罪を犯しておきながら、償うことをせずに同じ事を繰り返してしまっている。許される事じゃないのは解かっているけど、ここで殺されるのは間違っている。

「アレク・トゥディ。サム・ギア。セレネとエオスとユーノからの懇願で、あなた達への断罪は・・・」

――スナイプバスター――

「苦痛なき一瞬の死で行いましょう」

「「「っ!!?」」」

バス!と着弾音と一緒にトゥディさんとギアさんの頭が吹っ飛んだ。一拍を置いてセレネとエオスが「きゃあああああ!!」顔を両手で覆って悲鳴を上げた。僕も「ぅく・・・!」吐き気を堪えて「フィヨルツェンさん!」って怒鳴る。

「あの者たちにはもう更生の機会などありません。彼らの親もすでに断罪されています。これは被害者やその遺族からの願いです。あの者たちをこの世から消し去ってくださいという、魂からの悲願です」

フィヨルツェンさんはそう言って弓を消して、脱ぎ捨てていた目出し帽と仮面を付けて素顔を隠した。それは最後の大隊の一員、ヴィスタとしての立場に戻ったということを示す行為だ。

「セレネ、エオス、ユーノ。最期にあなた達とこんな形ですが再会し、お話が出来て良かったです。おそらくもう、二度と会うことはないでしょう。だから・・・さようなら」

泣いていたセレネとエオスも顔を上げてフィヨルツェンさんを見た。僕は「待ってください！」制止の声を掛けるけど・・・

――トランスファーゲート――

現れた空間の歪みの中へと消えて行った。

「セレネ、エオス・・・その・・・」

地面に座り込んですすり泣く2人になんと言って慰めればいいのか判らず、ただ2人の頭をギュッと抱きしめた。すると2人はビクッと肩を跳ねさせると、僕にしがみ付くように腕を回してきて、「うわぁぁぁぁぁぁ！」子供のように大きな声で泣き続けた。僕は彼女たちをあやすように頭を撫でたり背中を摩ったりと、2人が泣きや

むまでずっと抱きしめた。

「えっと、ごめんね？　スーツ、涙とかでぐっしょり・・・」

「クリーニング代は出すから」

「ううん、気にしないでよ」

首を横に振っていると、涙を拭った2人が僕の前で正座をして並んだ。

「「ユーノ」」

泣いて真っ赤に腫れた目は真剣そのもので、僕も正座して相対した。

「「ずっと、ず～っとユーノのことが好きでした！　愛しています！！」」

それは愛の告白だった。2人は続けて「なのはのことが好きなのは判っているけど、言っておきたかったの　」と満面の笑顔を浮かべた。僕は確かに、なのはのことが気にはなってる。好きだと考えてもいい。だけど・・・。

（それは2人みたいな、異性として好き、という感情なのかどうか・・・）

一緒にいるのが自然すぎて、恋人とか夫婦とか、そういった関係にならなくてもいいんじゃないか？って考えることがあるんだ。なの

はにはすでにヴィヴィオっていう娘もいるし、フェイトやアリシアっていう同居人もいる。

（恋人じゃなくて、昔からみたく親友というか、パートナーとしてこれからも過ごしていきたい）

なのは達は現状で満足しているし、だから僕もそれでいいと思う。

「僕はきっと、なのはとは結婚しないし、恋人にもならないと思う。でもセレネとエオスとも、今はまだ恋人になろうとは考えられないんだ。あ、もちろん2人の気持ちは嬉しいよ。ただ・・・」

そこまで言った時、セレネは僕の左頬に、エオスは僕の右頬にキスをした。

「「今はそれでいいよ♪　いつかユーノの方から、恋人になってください、結婚してください、って言わせてあげるんだから　」」

その笑顔はドキッとするほどに綺麗で、可愛くて、魅力的なものだった。

Ｅｐｉｃａ３３襲撃～Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ～

†††アギト†††

今日はあたしの二等空士への昇進試験ということで、あたしのロードであるシグナムや、マイスターであるはやての融合騎・リインと一緒に、ここミッドチルダ地上本部へと赴いてる。試験は筆記と実技で、朝から他の三等陸士たちと一緒に臨んでいた。

「お疲れ様～、アギト♪」

「試験の出来はどうだ？　落第などするようなお前ではないとは思うが」

ロビーで待ってくれていたリインからは労いを、シグナムからはプレッシャーを貰った。八神家ははやてはもちろん、あたしの名付け親のマイスター・オーディンと同じセインテスト家のルシルは、とっても優秀なんだよな～。そんな八神家の一員である以上、あたしも頑張らないと。

「大丈夫だって。ここ最近はずっとアインスやリインにも勉強見てもらってたし。筆記試験の方は絶対良い点を取れてるよ」

実技試験はお昼ご飯を終えてからの午後だ。リインの話じゃ融合騎として魔導師として完成されてるあたし達ならそう難しくないらしい。だからと言って油断大敵だ。リインが受けた時からずいぶん年

数も経ってるから、内容だって変わってるかもしれない。

「お昼はカフェテリアで軽いものにします？」

「サンドイッチとかそういうのでいいや。重いものを食べての実技なんて、嫌な結果になっちゃいそうだし」

試験会場のあるフロアからカフェテリアのあるフロアへと向かうためにエレベーター室へと移動しながら、緊張を紛らわせるように3人で他愛ない話をする。今はシャルの家に泊まり込んでるルシルやフォルセティが帰ってきたら、家族旅行でもしようって。

「そのためには最後の大隊を潰さなければな」

「はいです。フォルセティ達がなんの不安もなく外を出歩けるように・・・」

局は今いろいろと不正問題なんかでメチャクチャになっちゃってるけど、騎士団と同じように大隊を追ってる。けど最近はそんなに事件を起こしてないんだよな～。

――なんや嵐の前の静けさって感じやな。ルシル君たちからも何の連絡ないし。ホンマ嫌な感じや・・・――

はやてもそう言ってたし、大隊が何を仕出かさないかが不安だ。エレベーターに乗って階下に降り、いい香りが漂ってくるカフェテリアに歩いてると、ざわざわと騒がしいことに気付いた。シグナム達

と顔を見合わせて、ちょっと早歩きで向かう。
「おいおい。これまずくないか？」
「これ本当の話なのか？」
「さすがにこれはハッタリでは？」
「ああ、俺もそう思う」
「チーム海鳴のメンバーは管理局の英雄だぞ？」
「でもさ、バニングス二尉が大隊の一員として・・・」
「馬鹿やろう！　俺たちのアリサ姐さんを悪く言ってんじゃねぇ！
あれはきっと偽者なんだ！」
「私もやはり偽者か、もしくは確認できないレベルですごい洗脳術で操られていると思いますわ」
「だよな！　だからセインテスト調査官だっていくらなんでも・・・ヤるわけねぇべ？」
ルシルやチーム海鳴の名前が出てきたことで、あたし達は騒ぎの中心へと向かう。あたし達、正確にはシグナムに気が付いたみんなが「お疲れ様です！」ってサッと左右に分かれて道を開けた。

「何の騒ぎだ？」

「それが・・・・」

みんなの視線の先にはテレビモニターがあって、映っていたのは「最後の大隊・・・・！」だった。流れている内容は、ルシルやシャルが所属してるオランジェ・ロドデンドロンのメンバー全員の悪評というか・・・罪状。どれもこれも根も葉もないようなものだけど・・・。

「プライソン一派のレーゼフェア、リンドヴルムのシュヴァリエル、情報屋を営んでいた民間人グランフェリアの殺害・・・！」

ルシルの罪状だけは確定しているものだった。他の局員たちが「お前らだって殺しまくってんじゃねぇか！」って大隊の放送にツッコミを入れる。けど問題は、ルシルが局員であることと、さらにグランフェリアが公には民間人であること。

「けどこれってさ、ルシルが説明すれば問題なくね？」

「そうですよ！　ルシル君が手に掛けたのは人間ではなく兵器なのですから、殺害ではなく破壊が正しいです！」

「いや。この繰り返される放送の1クール毎の始めにあったろう。確かな情報筋から入手した、と。その情報を信じて大隊はルシル達を殺害する。後になってその情報が間違っていても、おそらく連中にはダメージはないのだろう」

「なんだよ、それ。そんなヘイトを集めて何の得が・・・？」

「このような大々的な手段を用いてでも、ヘイトを集めてしまってでも成したいのだろう。ルシル達の殺害を」

あたしとリインがその話にハッとする。それほどまでの手段に打って出たってことは、大隊にとって不都合なことをルシル達に知られたみたいな、そういった状況に陥っているんだ。ルシル達が何を知ったのかは判らないけど、「これってチャンスなんじゃない？」ってあたしは考えた。

「ああ。ルシル達を殺害できるほどの戦力を投入するだろうから、大隊は幹部クラスを寄越してくるだろう。それらを迎撃して捕まえれば、大隊の事件はすぐに終結するはずだ」

シグナムがそう言った直後、携帯端末からコール音が鳴った。あたし達は人垣から離れて、シグナムがメールを確認していると、「あたしにも？」メールが入った。

「アギト。ホテル・アグスタで大隊が出現したようだ。私の２２１３航空隊と、防衛隊のグランガイツ一尉のチームにスクランブルだ」

「あたしの方にも、昇進試験は一時中断かつ実技試験は後日ってメール来た」

他の局員たちもまた騒がしくなるし、大隊出現の報は広まってるみ

たい。

「リイン。主はやて達に、大隊の放送ジャックのことを伝えてくれ。ルシルは・・・」

「今日もミッドで仕事の予定だったはずです。一応メールしておきます！」

「ああ、頼む。アギト、出るぞ！」

「おう！」

リインは本局所属だから出撃は出来ない。地上の事件は地上部隊がやんないとな。リインをカフェテリアに残して、あたしとシグナムはグラウンドへと向かう。エレベーターで地上1階に降りてる時、「リインから通信？」が入った。

「どうした？」

『本局に居るはやてちゃん達や、ルシル君たちと連絡が取れません！』

「ええ！？」

あたしは驚くけど、シグナムは別段驚くことなく「どういう状態だ？　コールは鳴るのか？　それとも妨害されているような感じか？」って冷静に聞いて、リインは『後者です！』ってハッキリ答えた。

「本局には主はやてにアインス、それになのはとフェイトとアリシアも居る。通信妨害を行っているのがたとえ大隊であっても、主たちには勝てまい。それに、エグリゴリではあるが本局への襲撃を許さないとするリアンシェルトも居る。交戦が始まれば出てくるだろう」

「エグリゴリを頼りにするなんて死ぬほど嫌だけどな」

マイスター・オーディンも当時のシグナム達も"エグリゴリ"に殺された。敵だ、アイツらみんな。あの頃に抱いた怒りや憎しみで両手をギュッと握り拳にすると、シグナムがあたしの頭を撫でてきた。

「主たちは主たちで何とかするだろう。ルシル達も問題ないはずだ。ならば、地上の事件は我らで片付けるだけだ」

「うん！」『はいです！』

リインとの通信を切って、あたし達は1階へと降り立ったところで今度は『こちらグランガイツ隊』のゼスト一尉から通信が入った。内容は、あたし達２２１３航空隊に先行して出立するっていうものだ。首都航空隊は飛行魔法での移動だけど、首都防衛隊は車両移動になるから、先に出ないと足並みが揃えられない。

「了解しました。我ら２２１３航空隊もじきに出立します」

そうしてあたし達はグラウンドに到着。あたしとシグナムも騎士服に変身して、すでに防護服に変身してる部隊のみんなに「目標、ホ

テル・アグスタ！　２２１３航空隊、出撃！」と号令を掛けて、一路ホテル・アグスタに向けて飛び立った。飛行中、グランガイツ一尉からまた通信が入る。

『シグナム一尉。先ほどの大隊の放送ジャック。セインテスト調査官たちの罪をぬかしていたが、あれらは事実なのか・・・？　いや、信じていないわけではないが・・・』

「根も葉もない、単なるブラフでしょう。しかし・・・セインテスト調査官の罪は事実です」

グランガイツ一尉や、見えてはいないけど他の防衛隊員たちも息を呑んだのが判った。

「ただし、セインテスト調査官が殺害した者が人間であれば、ですが」

シグナムは続けた。セインテスト家の先祖代々から受け継がれてきた、"エグリゴリ"の破壊という悲願。ルシルはただ、一族の役目を果たしているだけだって。グランガイツ一尉たちから安堵の溜息が漏れた。

『ゼスト隊長！　教会騎士団からの声明が放送されています！』

グランガイツ一尉の脇に居る女性隊員がそう言った。一尉は『シグナム一尉にも見えるように』って指示を出して、画面に合うようにモニターを展開させた。映っているのは教会騎士団のトップ、トラ

バントって人だ。

『わが教会騎士団より犯罪者を出してしまったこと、管理世界のすべてに謝罪したい。しかし、それが本当の事なのかがこちらではまだ確認を取れていない。オランジェ・ロドデンドロン全騎を教会本部へ召集し、事情聴取を行う予定ではある。しかし隊長の騎士イリスを始めとして彼女たちは現在、行方をくらましている。投降を呼びかけようと考えているが、受け入れられない場合は敵性勢力として認知、撃破することをここで宣言しておく』

トラバント団長の言葉に「はあ！？」あたしのびっくりレベルは天を突き抜けたよ。騎士団も最悪敵になっちゃうかもしれない。もう、なんだよそれ。

『こちら通信司令室。首都航空隊全部隊に緊急連絡。東部アクアベール海にて、最後の大隊が保有していると思われる艦隊を確認しました。海上警備部と合流し、これを拿捕してください』

ここでまた大隊が馬鹿な真似をしだした。というか、あたし達は今ホテル・アグスタへと向かってんだけど・・・。どうすりゃいいの？ってところで、グランガイツ一尉から『ホテル・アグスタへは俺たちだけで向かう』って通信が入った。近隣の陸士隊から応援を呼ぶって話で・・・。

『艦隊を出してきた以上、大規模な断罪が行われるはずだ。そちらを優先した方がいい』

「・・・了解です。ではこれより２２１３航空隊は、アクアベール海へと進路を変更。艦隊拿捕の任務へと向かいます。いくぞ、お前たち！」

あたしや他の隊員たちは「了解！」って応じた。

†††Ｓｉｄｅアギト⇒イリス†††

ヴィヴィオ達が本局へ向かうのを見送った後、わたしはザンクト・オルフェンにある自宅へと帰ってきた。エントランスホールで待っていてくれたみんなからの「おかえり～」に「ただいま～」と応える。んで、みんなで食堂へ向かう。最早そこは食べる場所であり、雑談するための溜り場であったりする。

「さてと。たぶん、今日は忙しくなるよ。各騎、いつでも戦闘できるように準備をしておいて」

ルシルとトリシュが第５７管理世界スプールスにまで飛ばされて、空飛ぶ装甲列車や機械ムカデなどといった兵器に襲われた一件。強力なＡＭＦを使って完全に殺しに来てた。それでも２人を殺す事が出来なかった今、連中は焦ってるはず。わたし達から、大隊と教会が関わってることが公に発信されるかもって。

（とはいえあくまで状況証拠だけだから言い逃れだって出来る。けどそんな事は連中も判ってるはずだけど・・・）

わたし達が生きている限りはその不安は拭い去れない。物的証拠だ

って見つけられるかもしれない。だったら口封じに拉致るか殺すかの2択を選ぶはず。ならそれを実行するタイミングはいつか？と考えたら、出来るだけ早く、すぐにでも、ってことになると思うわけ。ちょうどヴィヴィオ達も居ないし、護衛役でもあるわたし達の始末とヴィヴィオ達の拉致を同時にやっちゃおうぜ♪なんて考えるに決まってる。そのチャンスは今日この日だけになる。

「ザンクト・ヒルデ魔法学院の冬休みも残り僅か。子供たちが何の不安もなく通えるようにしておきたい。だから襲撃してきたら、全力を以って大隊を叩き潰す！」

グッと握り拳を作って力説したわたしにみんなが「ヤヴォール！」って応えてくれた。気持ちは1つ。大隊を潰し、教会を好き勝手にしてる裏切り者を牢にぶち込む。騎士団の中にも敵は居るだろうけど、今は仲間意識をすべて排除だ。

「それじゃあ各騎、今のところは解散で――」

そこまで言いかけたところで、騎士団専用回線での通信が入ったことを知らせるコール音が鳴り響いた。今や教会騎士団はわたし達にとって敵として見た方がいい組織だ。みんな顔を見合わせて、コクリと頷く。

「こちらオランジェ・ロドデンドロン、イリス」

『騎士団本部よりスクランブル要請。北部廃棄都市区画にて、最後の大隊のメンバーが確認されたとの情報が入った。逃走中の犯罪者

への断罪を行う可能性がある。確認に向かってください』

「同隊所属、アルテルミナスです。お言葉だけど、私たちより現場に近い騎士隊もいるはず。それをわざわざ離れた場所に居る、休暇中の隊にスクランブルなんて。おかしい話だと思うのですけどぉ？」

通信士が『それは・・・』言いよどんだ。その間にアンジェ達に今日の警邏シフトを確認させる。どのエリアにどの騎士隊が居るか、それでこの呼び出しがヤバイやつかどうかを調べる。アンジェが手信号で、南部警邏担当が独立賛成派のタカ派の1つだと判明。つまり大隊と繋がりがある敵である可能性あり。

『トラバントだ。オランジェ・ロドデンドロン。この私からの命令を受諾するという意思表示がないようだが？』

ここで裏切り者候補筆頭のトラバント団長のお出ましだ。よしよし、出てきたな。わたし達は目線で合図を送り合って、「失礼しました」と佇まいを直す。団長直々に、休暇中のわたし達を大隊の居る（かも知れない）廃棄都市区画へ向かわせようとしている事実を確認。もしこれで大隊だけが待ち構えていたら、狙いはわたし達になる。

（ルシルとトリシュみたく、犯罪者への断罪に巻き込んで殺しにきていたこれまでとは違う。大隊の中でも最強を揃えてくるはず）

でも大丈夫。大隊の幹部と、ＡＭＦの中でぶつかってもいいようにこっちも準備万端だ。この機を逃すな。わたしは「部下がちょっと愚痴を零しました。命令受諾しました」って応じる。

『そうか。では即時出撃をしろ。自治領内と北部の各航空関連社の飛行許可は取ってある』

プツンと通信が切れる。わたしは「んじゃ、行こうか」って踵を返してエントランスドアの前に立って、ドアノブに手を掛けようとすると、わたしが開けるより先にドアが外へと向かって開いた。入って来たのはわたしとルシルとアイリの送り迎えしてくれたルーツィアだ。

「これから出撃なの」

「休暇中なのにですか？」

「そ。休暇中なのに。というわけで、ひょっとしたら夕食時間まで戻って来られないかも。だから夕飯はさめても大丈夫なような簡単なやつでいいよ」

「出来ればハンバーガー山盛りで」

クラリスだけが注文。ルーツィアは「ふふ、かしこまりました♪いってらっしゃいませ」一礼して、わたし達を見送ってくれた。外に出て「各騎、騎士甲冑を着装！」って指示して、わたし達は騎士甲冑へと変身。

「んじゃ行きますか。各騎、飛行魔法用意」

――真紅の両翼――

「ああ」

――我を運べ、汝の蒼翼（アンビエル）――

「汝は遥かなる空を飛翔する者。地を揺るがすは羽ばたき。空に轟くは咆哮。行く手は苛烈なる戦火、過ぎ去るは打ち斃せし亡者の群れ。汝が主の命に応じ、いざ参れ！　ワイバーン！」

召喚士でもあるクラリスが飛竜ワイバーンを召喚して、飛行魔法が使えないトリシュと一緒に鞍に跨った。アイリは腰から白い翼を一対と展開して、ルミナとセレスとアンジェは自前の飛行魔法。

「オランジェ・ロドデンドロン、出撃！」

地を蹴って空へと上がる。向かうは北部・廃棄都市区画。ここからなら十数分ちょいで到着できる距離にある。それくらいなら魔力消費は少なくて済む。

「イリス。ホテル・アグスタでも大隊が出現したようです」

いつの間にやらテレビニュースの映るモニターを展開していたアンジェから報告が挙がる。そっちには首都航空隊と首都防衛隊が向かってるらしい。さすがにあっちが本命ってことはないだろうけど・・・。

「そっちは局に任せよう。わたし達は、わたし達の仕事をこなすだけ」

廃棄都市区画に到着するまでの間、大隊からの奇襲はなかった。ただ、「通信および念話系の妨害の発生を確認したよ。これはアタリね」セレスからの報告に、「やっぱり」ってみんなで苦笑い。

「ん？　イリス。こっちに向かって何かが飛んで来る。数は・・・3。見覚えがある。・・・ミサイル！」

「迎撃します。イゾルデ、セットアップ」

トリシュが"イゾルデ"を弓形態で起動して、指に挟むように生成した魔力矢3本を魔力弦に番えた。

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

「往け！」

放たれる3本の高速魔力矢は、目で追うのも難しいほどの速度で飛んで行って、わたしの肉眼では捉えられていない距離にあるミサイルを無事「迎撃完了」したみたい。トリシュとクラリスって、視力はかなり良い上に視力強化で数ｋｍ先を見通すことが出来る。

（わたしは剣騎士だから必要のない魔法だしね～）

「さらにミサイルの接近を視認！」

「同じ巡航ミサイルだな。それに・・・上からの弾道ミサイル！俺が迎撃する！」

「巡航ミサイルは引き続き私が！」

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

トリシュが魔力矢で巡航ミサイルを迎撃し始める中、ルシルをヒップアタックして吹っ飛ばしたセレスが「今のルシルはダメ。大人しくしてて」頭上にベルカ魔法陣を展開した。

「制圧せし氷狼（インバシオン・ローボ）！」

８頭の氷製狼を創り出して「Ｌｏｓ！」と号令を下した。空から落ちてくるミサイルに狼が殺到してく中で、「この俺でも、質量兵器くらい迎撃できるんだけどな～」ってルシルがぶつくさ文句。ルシルは今重要な作戦中ということもあって、扱える魔力量や戦闘時間に制限アリな戦力になってる。だからミサイル迎撃なんぞで無駄な魔力を消費してもらいたくない。

「ほらほら、囮作戦の重要ファクターの１つなんだから、今は大人しくしてて！」

「はぁ・・・了解だ」

ミサイル攻撃を凌いだ後は、廃棄都市区画の至る所に聳え立つ高層

ビルの屋上へと降り立つ。んで、周囲を警戒していると「結界・・・！」が都市区画を囲うように展開された。ミサイル攻撃に結界。そしてわたし達をここへ来るよう仕向けたトラバント団長は、やっぱり大隊側の人間だったわけだ。チッと舌打ちしているところに、「ＡＭＦの展開を確認！」された。

――真・スナイプレールガン――

――ヴァーンズィン・オルカーン――

――城砦穿ち――

――四甲――

――木枯らし――

――獄火拳――

――ボンバーユーバーファル――

それと同時に、頭上からわたし達へ向けての奇襲攻撃。防御なんて出来るような状況じゃないから、即座にその場から離れる。つまりビルの屋上から飛び降りた。両翼をなんとか保ちつつ、吹っ飛んだ屋上や階下の瓦礫を避ける。

「各騎！　臨機応変に、敵を撃破せよ！」

叫ぶように命令を出し、わたしはわたしを襲ってくる敵の撃破に動く。

Ｅｐｉｃａ３４魔女の誇りに懸けて～Ｆａｂｉａ　Ｋｒｏｓｅｒｇ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

フォルセティ達を見送ってから数分。遠くから「おーい！」ってゆう声が聞こえてきた。私たちのところに来たんは「なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん！」の３人やった。息を切らしてるなのはちゃんが「あー、間に合わなかったか～」って肩を落とした。

「なのはさん、フェイトさん、アリシアさん、どうもっす」

「あ、うん、ノーヴェ。こんにちは～」

「ごめんね、私がゆっくりしていたから・・・」

なのはちゃん達は、フォルセティ達を見送りと出迎えのために来たんやけど、アリシアちゃんが謝るように間に合わへんかった。３人がここに来ることは、ヴィヴィオには内緒やったからな。私もアインスもノーヴェも、あの子らを引き止めることは出来ひんかったんよ。

「見送りだ出来なかったけど、出迎えはみんなでしようよ」

フェイトちゃんの言葉にみんなで頷き返して、ヴィヴィオ達が来る

のを待つ。そんな中、「ねえ、なんか変な気配しない？」ってアリシアちゃんが言うた。

「そう？　私は特に何も・・・」

「私も、フェイトちゃんと同じく。はやてちゃん達はどう？」

「あたしも特には・・・」

「うーん・・・っと」

フォルセティ達が入って行った書庫の巨大扉へと意識を集中する。アインスが「確かに、何か不穏な空気を感じる」って、アリシアちゃんに同意した。私も「断言は出来ひんけど、私もちょうな・・・」って小さく頷いた。

「本当？」

「はやてやアインスまでそう言うんだから、中で何か起きてるのかもしれない」

「こら、フェイト。お姉ちゃんの言う事よりはやて達のことを信じるとは何事だ～！」

餌を頬張ったリスみたく頬をぷくーっと膨らませたアリシアちゃんが、フェイトちゃんのお尻を叩いた。フェイトちゃんは「きゃん！？」って可愛らしい悲鳴を上げて、両手でお尻を隠しつつ「急に叩くな

んてひどい！」と文句。

「お姉ちゃんを蔑ろにした罰であ～る！　っとと、そんなこと言ってる場合じゃないや。ちょっと見に行った方がいいんじゃない？いくらチャンピオンとか、上位ファイターとかが一緒だとしても中は無重力。慣れてない所為でまともに戦えないかもしれないしさ」

「そうは言うても何かがあれば連絡するって話やしな～」

「何かあったとしても大隊ではないはずだが・・・」

無限書庫内部では転移魔法も転移スキルもすべてが無力化される仕様や。そやからこれまでのような奇襲とか拉致とかの心配はあらへん。それにユーノ君ら司書のみんなが、すでにこの書庫の調査を行ってくれてるからトラップも無いはず。

「考えられるとすれば・・・ファビア・クロゼルグって子の仕業かも知れへん」

「「ファビア・クロゼルグ？」」

なのはちゃんとフェイトちゃんが首を傾げる。そっか、2人はシャルちゃんから連絡を貰ってへんのか。私は、シャルちゃん伝手に聞いたベルカ諸王時代の因縁をなのはちゃん達にも話した。

「だとすれば、いつの間に、というかどうやって無限書庫まで入り込んだんだろう？」

「未整理区画だから入室許可も居るし、受付の目もあるし、それらを掻い潜るのってかなり至難だよね」

「クロゼルグは、魔法と魔術の境界にあたる魔女術なる体系の術を扱うらしい。魔術特有の神秘はほぼ無いそうだが、魔法とはまた別であることは間違いない」

戦闘特化って言われてるセインテスト家の魔術ですらその汎用性は高い。魔女術も似たようなものかもしれへん。不安そうななのはちゃんとフェイトちゃんに、アリシアちゃんが「なら早く見に行かないと！」って私たちを急かした。

「・・・あの、ヴィヴィオ達との連絡が取れません」

「「「え・・・？」」」

「なに？」

ノーヴェから聞かされたのはまさかの音信不通という状況に、「ほらほら、言ったじゃん！　もう扉開けるよ！」ってアリシアちゃんは閉じられた扉に手を翳して、魔力による開扉を行った。開かれた扉の内部の様子に私とアインスとノーヴェは「え・・・！？」って目を丸くする。

「何やコレ・・・！」

「ヴィヴィオ達が入った時といろいろと変化してる・・・！」

ヴィヴィオ達を見送った時は、扉の長い廊下と両側の壁にずらりと並ぶ書棚って感じやったけど、廊下のど真ん中や天井、それに壁から複数の扉が生えてて、書棚もグニャリとひん曲がってる。

「書庫内の空間が歪んでいる。・・・侵入・脱出防止の本格的な結界ですね」

「うん。しかもミッド式でもベルカ式でもあらへんとなると・・・」

「魔女術・・・！」

「じゃあファビアって子が中に居ることは確定なんだね」

「で、どうするの・・・？」

アリシアちゃんが私たちにそう尋ねた。答えは決まってる。首に提げてる待機モードの"シュベルトクロイツ"を胸元から取り出して騎士服へと変身する。

「結界は無理やり突破する。中には私と・・・フェイトちゃんの2人で行く」

「私？　うん、いいよ！」

「おおきに。アインスとなのはちゃんとアリシアちゃん、それにノ

ーヴェはここで扉を閉めて待っててな」

扉を閉めるのは万が一にも大隊が攻めて来たとき、開扉に時間を掛けさせるためや。そしてアインス達を待機させる理由は迎撃戦力のため。フロントアタッカーのノーヴェとアインス、センターガードのなのはちゃん、フルバックのアリシアちゃんってゆうバランス陣形や。

「えー！　私も一緒に行きた～い！　ねえフェイト～、代わって～」

「え、でも・・・」

「アリシアちゃん。ここはフェイトちゃんにお願いしたいんよ。そやから・・・」

「むぅ。どうしてでもダメ・・・？」

なんでか今日のアリシアちゃんはちょう我が侭な感じがする。それだけ子供たちのことを案じてくれるんやろうけど、「ごめんな。私とアリシアちゃんは後衛やからな」って伝える。

「じゃあはやてが私と交代しようよ！　テスタロッサ姉妹なら阿吽の呼吸で・・・」

「もう！　アリシアはここで留守番！　はやて、行こう！」

「じゃあそうゆうわけやからアリシアちゃん。ごめんな！」

「もう！」

不満丸出しのアリシアちゃんを置いて私とフェイトちゃんは扉を潜って、閉まりゆく扉を背に「んじゃ、始めよっか！」結界の突破を試みる。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ヴィヴィオ†††

「はふぅ。なんとか撃退できましたね」

わたし、イクス、アインハルトさん、ミウラさん、ジークさんの５人は、わたしやイクスの魔力を感知して具現化したゴーレムトラップに見事引っ掛かってしまい、交戦せざるを得なくなった。巨体の割に素早い攻撃だったけど、わたし達の敵じゃなかった。正確に言えばジークさんの・・・。

「まさか、このようなトラップがあったとは思いもしませんでした」

イクスがバラバラになったゴーレム召喚トラップ本を親指と人差し指で摘むように持った。ゴーレムはどれだけ攻撃しても再生しちゃう面倒くさい仕様だったけど、心臓付近に埋め込まれていた本を吹っ飛ばせば何とかなるかも？ってことで、アインハルトさんとミウラさんとジークさんの協力の元、ゴーレムの胸に大きな穴を開けてもらったところでのディバインバスター。

「（おかげでゴーレム２体を無傷で破壊できた）これからどうしま

しょう・・・？　わたしとイクスの魔力に反応しちゃうなんて・・・」

「無闇矢鱈に検索魔法でも掛けてトラップを起動させるのも大変でしょうし・・・」

わたし達の目の前に広がるのはズタボロな書棚。出来るだけわたし達の攻撃での破壊は避けたけど、ゴーレムの攻撃はそれを無駄にするかのように手加減無用で繰り出すからもうメチャクチャ。でも幸いな事にエレミアの書があるらしい候補棚は無傷だった。

「ウチはそれでも構わへんよ？　この程度の強さなら対処できるし。ハルにゃんとミウちゃんも、それでええか？」

「はい。私もそれで問題ありません」

「ぼ、ボクもです！」

「ん。そうゆうわけやから、ヴィヴィちゃんとイクスちゃんは引き続き検索魔法でエレミアの本を探して。ウチらがゴーレムみたいなトラップの撃破を請け負うから」

アインハルトさん達からの提案ということもあって、わたしとイクスは検索魔法によるエレミアの書の捜索を再開。候補だった書棚の捜索を一通り終えて、「ここじゃなかったですね」と肩を落とす。

「まあまあ、気を落とさんでもええやん。1発目で当たるなんて思

てなかったし。ほら、行こう！」

「で、ですよね！　そんな都合のいい事なんてないですよね！」

というわけで、次の候補地へ向かうべく廊下に出るんだけど、「あれ？」ってなった。ドアが床や天井からにょきっと生えてたり、備え付けられたりしてた。ミウラさんが「変わった書庫ですね？」って言うけど、明らかに異変が起きてる。

「ヴィヴィオ。これは異常事態です」

「うん。皆さん、ドアには注意してくださ・・・」

「え？」

ミウラさんが足元にあったドアノブに手を掛け、今まさに開けようとしていた。わたし達の視線にハッとしたミウラさんはドアノブから手を離して「す、すみません！　つい！」って何度も謝ってくれた。その必死さにこっちが申し訳なくなっちゃう。ミウラさんがドアから離れようとしたとき、ドアノブが回っちゃった後なのかゆっくりとドアが開き始めた。その隙間から見えるのは、闇夜に光る動物の目のようなもの。

「「ミウラさん、離れて！」」

「っ！」

わたしはミウラさんの手を取って引っ張り込み、アインハルトさんとジークさんがわたし達を庇うように前に立ってくれた。開いたドアからは、三叉槍を携えて、背中にコウモリの羽を生やした、小さなぬいぐるみのような物がわらわらと出てきた。

「なんやコレ・・・！？」

ゲーッゲッゲーって鳴き声？のようなものを発しながら、槍持ち軍団が雪崩のようにわたし達に殺到して来た。揉みくちゃにされる中、「はあああああ！」ジークさんが槍持ち軍団を吹っ飛ばした。

「ミウラ・リナルディ、ジークリンデ・エレミア、アインハルト・ストラトス、そしてヴィヴィオ・タナマチ」

今日この無限書庫に集まったみんなの声と一致しない第三者の声に名前を呼ばれた（わたしの苗字だけ間違えられたけど）。その声は女の子のもので、たぶんこの声の主が、事前に聞いてたファビア・クロゼルグさん？だと思う。

『真名認識』

さらにもう1つ。それは機械音声のようなもので、たぶんデバイスだ。警戒するわたし達の前に、丸い体に三角耳、羽、先端が矢尻のようなものになってる尻尾を生やした、コウモリ人形が現れた。

『水晶体認識』

さらにそう発せられた直後、槍持ち達が一斉にわたし達を囲うように押し寄せてきた。イクス達とおしくらまんじゅう（なのはママの故郷の遊びだ）状態に。

――吸収（イタダキマス）――

そんなところに、小さかったコウモリっ子が一瞬にして巨大化して、大きな口を開けた。槍持ち達が壁となってる所為で回避できない。

「っ！？　ヴィヴィオさんだけでも・・・！　せぇーい！」

「きゃあ！？」

ミウラさんがわたしの手を掴むと、わたしはグイッと皆さんの頭上に引っ張り上げられた。そしてブンッと放り投げられる。無重力ということもあってあっさりと数m以上飛ばされた。直後にコウモリはミウラさんやイクス達をパクッと飲み込んで、もぐもぐと咀嚼していた。

「ミウラさん、イクス、アインハルトさん、ジークさん！」

そしてペッと何かを吐き出したんだけど、それは「服・・・！？」で、しかもイクス達の着ていたもの。

「オリヴィエの末裔は・・・逃がした？」

小さくなったコウモリの側に歩み寄るのは、トンガリ帽子に箒にマ

ントっていう物語でよく見る「魔女・・・」の格好をした女の子。側には球体の頭と三角錐の体、細い手足の人形や、さらなる槍持ちを侍らせてる。この子が「ファビア・クロゼルグ・・・さん？」だろうけど、返答は無い。

「・・・いいよ。1人じゃ何も出来ないと思うし」

コウモリの口から吐き出されたのは4つの小瓶。中身は小瓶サイズに合わせて体が小さくなってる「イクス、アインハルトさん、ジークさん、ミウラさん！」の4人。さっき吐き出された服はやっぱり皆さんのものだったようで素っ裸状態で、4人とも気を失ってるのか小瓶の底に横たわってる。でもすぐにジークさんだけがむくりと上半身を起こして、防護服へと変身。さらに鉄腕を発動。

――殲撃（ガイスト・ナーゲル）――

放たれる破壊の一撃は小瓶を壊して、ジークさんの体が元の体に戻り始める。そんな中、槍持ち達がジークさんに向かって、球体形の本体に導火線っていう古典的な爆弾を放り投げようとした。

「させない！」

――ジェットステップ――

書棚を足場として利用して、ジークさんの元へと一足飛び。そして「せいや！」槍持ち達を蹴っ飛ばす。体が元の大きさへと戻りつつあるジークさんも、殴ったり蹴ったり放り投げたりで対処。

「おおきに、ヴィヴィちゃん！」

「はい！」

ジークさんはさらに「ゲヴェイア・クーゲル！」魔力弾で槍持ち達を迎撃するんだけど、次々と槍持ち達が現れ続けて、爆弾を放り投げてくる。

「失せよ光明（ブラックカーテン）」

「「っ！？」」

視界が暗転する。そのあまりに突然な視界潰しにすぐに対処できないわたしは、まずい、と焦った。でも「ジークさん！？」がわたしをぎゅっと抱きしめたのが暗闇の中でも判った。

「いろんな人たちから、ヴィヴィちゃんのことを任されたからな～」

顔は見えなくてもジークさんは笑顔を浮かべてるような気がした。直後に派手な爆発音と衝撃、爆風がわたし達を襲った。ジークさんが庇ってくれたおかげで、それだけで済んだんだと思う。わたしの背中に回されてた腕が離れて「フッ・・・！」ジークさんの息遣いが聞こえた。

「視界が・・・！」

元に戻って、爆発による黒煙もジークさんが払ってくれていて、「派手な割にあんまりダメージあらへんな」って苦笑い。よかった。ホッとするもすぐにわたしはファビアさんと視線を交える。

「何を目的として、こんなことをするんですか・・・！？」

「エレミアの手記。私は大して興味ないけど、あなた達が手に入れるというのなら奪い取ってやる」

静かな声色の中に含まれる怒りの感情に、わたしは「どうして・・・？」からの二の句が告げなかった。

「オリヴィエとエレミア、それにイングヴァルト。あの３人への復讐は、クロゼルグの血脈に課せられた使命」

「「復讐・・・！？」」

シャルさんのお話だとファビアさんは、アインハルトさんと同じようにご先祖様の記憶を受け継いでるみたい。そして今の話からして、オリヴィエ達のお友達だったカイラ・クロゼルグの記憶承継者だ。

「待ってください！　復讐ってどういうことですか！　クラウス殿下たちと、カイラさんは友達だったんですよね！　それに魔女の森が焼かれたのは、クラウス殿下たちの非じゃなかったはずです！」

「うん！　クラウス殿下の記憶見たけど、魔女の森を焼いたんは別の国や！　確かに、原因はリッド達にあったかもしれへん！　そや

けど・・・！」

「魔女の森の件は判ってる・・・。ゆりかご起動の反対派によるもの・・・ん？　見た？　どういうこと？」

「え？　えっと・・・」

「それは・・・」

わたしとジークさんは顔を見合わせた後、クラウス殿下の記憶を見たっていう話について説明。ルシルさんの魔法の中には、対象の記憶映像を複数人に見せるものがあって、当時のクラウス殿下の記憶を見たと伝えた。

（あ、これって勝手に教えてもいいのかな・・・？　あぅ、ごめんなさいルシルさん）

「そう・・・記憶を映像で見られる特別な魔法・・・か。オーディンの末裔、フォルセティ・ヤカミを逃がしたのは痛かった」

「フォルセティを、逃がした・・・？」

「セティ君に何したんや・・・！？」

「答えて！」

ファビアさんは煩わしいって感じたのかしかめっ面になって、「末

商たちや、この邪魔者たちと同じようにしようとしただけ」複数の小瓶を首から提げた槍持ちを指差した。

「リオ、ルールー！？」

「ミカヤさん、エルスさん！？」

イクス達と同じ、素っ裸で瓶詰めされてる４人の姿を確認できた。そしてやっぱり気を失ってるみたい。今すぐに取り返したいけど本当に・・・敵対して戦って勝って・・・でいいのかな。ファビアさんは誤解してる。それを解くための説得が一番じゃないのかな・・・。

「ちょうオイタが過ぎるんちゃう？」

ジークさんの雰囲気がピリピリしたものになる。気持ちは解かるけど、ここで本当に戦うのが正しいのかっていう迷いがわたしにある。フォルセティやコロナ達のことも気になるけど・・・。でも今はきっと・・・。

「ファビアさん。ちゃんとお話をしませんか？」

「ヴィヴィちゃん？」

「ジークさん。ここは抑えましょう」

「話すことなんてない。カイラ（わたし）を見捨てた、あの王たちを許さない

・・・！」

槍っ子たちが一斉に三叉槍の先端を向けてきた。ジークさんがわたしを庇うように前に躍り出てくれた。わたしは「ファビアさん！」と呼びかけを続ける。

「うるさい。オリヴィエ達はカイラを見捨てて、今度は末裔が私の邪魔をする・・・！　魔女の誇りを傷付けた者は、未来永劫呪われよ・・・！」

敵意に満ちた瞳がわたし達を貫く。

「オリヴィエ達は、カイラさんを見捨てたわけじゃないです！」

「魔女の森が焼かれた後、クロゼルグのみんなは新たな住処を探す為にシュトゥラから離れた。カイラはそれでも森に残った。それなのにあの日以来、オリヴィエ達は逢いに来てくれなくなった。待っていたのに。ずっと・・・！」

「それは・・・」

オリヴィエが"聖王のゆりかご"に搭乗することを決めたことが理由だ。当時のカイラさんはそれを知らなかったのかな・・・。

「あなた達がクラウスの記憶で何を見たのかは知らないし、聞く気もない。だけどカイラを見捨てたのは事実！　それだけで十分！」

ファビアさんはわたし達から距離を取り・・・

「悪魔合身（デビルユナイト）」

そうポツリと漏らした。すると槍持ち1体と、丸顔人形1体がファビアさんの胸の中に吸い込まれていって、また巨大化したコウモリの子にパクッと食べられちゃった。

――姿態編成（シェイプシフト）――

コウモリの子の中から光が溢れて出て、パリィーン！と細々と割れていく。中から姿を見せたのは大人の姿へと変身したファビアさんだった。どう見ても完全な臨戦体勢。うぅ、出来れば言葉で、お話で解決したかったんだけど・・・。

「ジークさん・・・」

「ウチは、ヴィヴィちゃんが間違ってたとは思うてへんよ。ただ、あの子がオイタがちょう過ぎる聞かん坊なイタズラっ子ってだけや。ちょこっとばかりお仕置きした上で話を聞いてもらおうか・・・！」

わたしとジークさんは、ファビアさんを止めるために身構えた。

Ｅｐｉｃａ３５－Ａエレミアの手記～Ｓｈｅ'ｓ　Ｍｅｍｏｒｙｌ～

†††Ｓｉｄｅリヴィア†††

エレミアの手記を探すために本局は無限書庫へとやって来ていた。手記があると思われる書棚の候補が複数あるっていうことで、私たちはチーム分けをした。私のところのチームリーダーはコロナ、そして私と雷帝の末裔のヴィクターさん、砲撃番長バスターヘッドことハリーさんの４人。戦力としては問題なさ過ぎる・・・って思ってた。

「クソ！　なんなんだよ、コイツら！」

「リヴィ、コロナ、今ですわ！」

「了解！」

――ハーツイーズバレット――

「はい！」

――コメットブラスト――

「「シューット！」」

突如として私たちの前に現れたのは、三叉槍を携えたぬいぐるみのような集団。三叉槍での攻撃もそうだけど、他にも古典的な爆弾の投擲っていう攻撃手段を用いてくるから書庫内はもうメチャクチャ。でもヴィクターさんと番長、それに私とコロナの敵じゃない。順調でもようやく3分の1ほどにまで数を減らすことが出来たそのとき・・・

「な、なんですの！？」

「うお！？　どうなってんだ！？」

ヴィクターさんと番長が驚愕の声を上げた。向かって来るぬいぐるみ軍団を蹴っ飛ばしていた私は2人の方を見て、「うえ！？」愕然とした。体が小さく・・・というか幼くなってしまっていて、防護服がブカブカ状態。

「甲冑が・・・！」

騎士服がずれ落ちてしまわないように必死なヴィクターさん。番長さんも胸に巻いていた包帯（さらしって言うんだっけ？）が外れて、ズボンやパンツもズレ落ちそうになってるから「やべぇ！　全裸になっちまう！」右手で胸を隠して、左手でパンツとズボンのウエストを掴んで脱げないようにしてる。でもこれで2人は戦闘不能状態となったって見ていい。

「ごめんなさい、コロナ、リヴィ。この体ではブロイエ・トロンベを振るえないわ」

「わりぃ、オレもだ。さすがに全裸でのガチバトルは無理だ・・・！」

戦闘不能となったヴィクターさんと番長を最早敵として認識しないのか、ぬいぐるみ軍団が一斉に私とコロナに向かってきた。コロナはお姉ちゃんお手製の短剣型インテリジェントデバイス・"ブランゼル"をギュッと握り締めなおす。ゴーレムマイスターであるコロナにとって、閉所での戦闘はキツイ。

（ここはお姉さんとして、私が頑張ってみんなを守らないと・・・！）

お姉ちゃんお手製のガントレット型ストレージデバイス・"ヘラクレス"を装着した両拳をコツンと突き合わせる。ちょっと本気でやってみようか。書庫内部もすでに半壊状態だし、もうちょっと壊れても後で修復してもらえるだろうしね。

「行くよ！」

――ボーデンドンナーーーー

床に足を付けると同時、陸戦用高速移動魔法でホール内を駆け回りながらぬいぐるみ軍団に拳打「ラケーテンファング！」を打ち込んでく。奴らは次々と書棚に突っ込んで行って、そのまま行動不能に陥る。

「すげぇ・・・。目で追えねぇ・・・」

「これならすぐに片付きそうですわね」

「やっちゃえリヴィちゃん！」

数は多いし爆弾なんて攻撃手段に苦労させられたけど、あんまり強くないからすぐに目に見える奴らはぶっ飛ばせた。最後の1体を踏み付けて床にめり込ませたのを確認して、「ヴィヴィオ達は大丈夫かな？」って、あの子たちが向かった方へと目を向けていると、「おい、新手だ！」って番長が叫んだ。

「またですの！」

「このままじゃ魔力も体力も尽きちゃいます！」

「ああんもう！」

魔力も体力もまだまだあるけど、さすがに疲労は溜まるから勘弁してほしい。私はコロナと頷き合って、迎撃に入ろうとしたんだけど・・・・。

「みんなその場から動かないで！」

――コード・シュトルムゲヴェーア――

その声と一緒に放たれてきたサファイアブルーに輝く小型魔力弾が、「おおう！」ぬいぐるみ軍団を撃ち抜いてく。

「フォルセティ！」「フォルセティ君！？」

「うお！？　さすがに男に全裸は見せらんねぇぞ！？」

「そんな露出の高い防護服を選んだあなたの自業自得ですわ」

番長が体を隠せる場所を探すために辺りをキョロキョロ。しかし残念。隠れるのに最適な彫刻群はもう全滅なので～す。魔力弾の連射は途切れることなく、新たな援軍すらも容赦なくピンポイントで撃ち抜いていって、とうとう援軍も途切れた。

「フォルセティ君、どうしたのソレ？」

私たちの前に姿を見せたフォルセティは布で目隠ししていて、コロナの問いに「いや、見ちゃいけないものがあるから」ってヴィクター さんや番長の方を見た。

「いや見えてんじゃねぇかよ！？　パンツくらいなら気にしねぇが、全裸はダメだ！　あっち向け、あっち！」

「お待ちなさい、不良娘。あそこまで厚く巻いていたら見えるわけがありませんわよ・・・。ですが正確に着弾させていましたし・・・。まさか、魔力反応で・・・！？」

「あ、はい。視界は封じてますけど魔力探知は生きてますから、どこに誰が居るくらいは判ります。さすがに魔力を持ってない一般人は無理ですけど」

あはっ、と笑ったフォルセティに、ヴィクターさんは「もう驚きもしませんわ」苦笑して、番長は「セインテスト家ってすげぇんだな」感心した。番長の意見には全面的に賛成だ。

「にしても、コイツら一体なんなんだ？」

「あ、それなんですがファビア・クロゼルグが仕掛けてきました」

「彼女が無限書庫（ここ）に居ますの！？」

「おいおい、先回りされてたってことかよ！」

「でもフォルセティ君がここに居るっていうことは、捕まえることが出来たの？」

「ううん、逃げてきた」

まさかの発言に私たちは「え！？」驚いた。フォルセティも私たちのように包囲攻撃を受けたんだけど、さらに別固体のコウモリっぽいぬいぐるみに食べられて、小瓶に詰められちゃったんだって。

「しかも飲み込むと同時に意識を飛ばしてくるようなオマケ付で・・・。途切れる前に痛みで意識を繋ぎ止めたことが出来て、力ずくで脱出したんだ」

フォルセティが左手を見せてきた。そこにはくっきりと歯型が付い

ていて、出血もしてる。コロナが慌てて「大丈夫！？」腰のリボンを解こうとしたけど、それより早くヴィクターさんが首のスカーフを取って「とりあえず、これで止血しておきましょう」フォルセティの左手に巻いた。

「ありがとうございます、ヴィクターさん」

「参ったな～。私、一応ヴィヴィオの護衛だったんだけど・・・」チーム分けで分かれちゃったのは痛かったなって唸ってると、「確かにジークが一緒でもやべぇかもな」番長が唸った。ヴィクターさんや番長でもあっさり戦闘不能にさせられて、フォルセティも逃げの一手。

「急ごう！　ヴィクターさんと番長はここで待っていてください！　コロナ、フォルセティ、行くよ！」

「うん！」「はい！」

「わりぃな」

「後で追い駆けますわ」

ヴィクターさん、番長と分かれた私たちは、ヴィヴィオ達が担当する候補ポイントを回ることに。最初のポイントに到着すれば、そこはすでに戦闘後だって判るほどにボロボロだった。でもおかしなことに爆弾によるものじゃなくて、大きな剣で切断されたかのような

損傷が目立つ。

「たぶんこれ、王族トラップだよ」

目隠しとして利用してた布、クラバットを元に首元に戻したフォルセティから説明を受ける。諸王時代の王や強力な騎士たちの魔力に反応して実体化するゴーレムを封じた書があるって。フォルセティも検索魔法の影響で起動させたけど、「特に強くはなかったよ？」って首を傾げるだけ。

「ジークさんが一緒ならゴーレムトラップなんて問題じゃないと思う。やっぱり問題はファビア・クロゼルグさんだ」

フォルセティが移動速度を上げて、私とコロナは必死に追い駆ける。フォルセティの姿が見えなくなって数秒。奥から「ヴィヴィオ、ジークさん！？　ファビア・クロゼルグ！！」ってフォルセティの怒声が聞こえてきた。ヴィヴィオとジークさんに何かがあったんだってすぐ判る事態だ。

「え？　うぁ、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「フォルセティ君！？」「フォルセティ！？」

まさかの返り討ちに遭っちゃったの？と不安に駆られながらも、悲鳴を上げたフォルセティ達の居るホールへと入る。真っ先に視界に収めたのは、ヴィクターさんや番長と同じように小さくなったヴィヴィオとジークさん、両手で顔を覆う耳まで真っ赤にしたフォルセ

ティ。んで次に、トンガリ帽子に箒っていう典型的な魔女の格好をした美少女。

（ファビア・クロゼルグ？　１２歳の女の子ってシャルさんに聞いてたけど・・・。それにしては大きい、胸が。変身後のヴィヴィオやアインハルト並・・・）

そのスタイルの良さに、どうか変身魔法であってほしいと願う。そんなファビアの側に居る数体の槍っ子の首に提げられてる小瓶に目が行って、その中身を見た私は、フォルセティが耳まで赤くして顔を覆ってる理由を察した。

「イクス達が・・・！」

小瓶の中身は素っ裸なイクスとアインハルトとミウラ、それにリオとミカヤさんとエルスさん、「お姉ちゃん！？」の７人だった。意識はあるみたいで、みんな胸と股を手で隠してる。確かにこれはフォルセティには刺激が強すぎるよね・・・。

「あ、コロナ、リヴィ！」

ヴィヴィオとジークさんも私たちに気付いて、ファビアも「まだ邪魔者が増えた」って苛立ちを見せる。私は「コロナはヴィヴィオ達のところへ。みんなは私とフォルセティがどうにかするから」コロナにそう伝え、役に立つかどうか判らないけどフォルセティの側に近寄る。

「フォルセティ。小瓶達（おねえちゃん）の回収とファビアの相手、どっちがいい？」

「ファビアさん！」

即答だった。フォルセティの返答に、小瓶に閉じ込められてるお姉ちゃん達が心底ホッとしてる。それなら「顔を隠してないで、しっかり敵を見て！　八神家の騎士でしょ！」叱咤激励する。

「う、うん！」

「よし！　それじゃあ任せた！」

「任された！」

――ゲヴェーア・クーゲル――

フォルセティの背中に、マガジンの無いアサルトライフル状の光翼が４対８枚と展開された。ルシルさんの剣翼アルピエルを、アサルトライフル状にしたようなものだ。厚さ１ｃｍの長さ８０ｃｍほどの銃翼を僅かに動かしたフォルセティに対し、ファビアも背中からコウモリのような翼を展開した。

「かつてのカイラ（わたし）は、魔神オーディンを恐れたけど、末裔であるフォルセティ（あなた）からは何も恐れるようなものを感じ取れない。邪魔をするなら・・・排除する」

――黒煙――

「ヴィヴィオ達に手を出したその報いを受けろ」

――コード・シュロート――

ファビアの放った多弾射撃を、フォルセティは右手に携える"エマナティオ"の銃口から撃った散弾で迎撃。それを合図として本格的な戦闘に入った。

（魔神の末裔ｖｓ魔女の末裔は気になるけど、みんなを助けないと・・・！）

私が近寄ろうとすると、小瓶を首から提げた個体だけが距離を取って、それ以外が槍を構えたり爆弾を手にしたりと迎撃体勢に入った。

「マナクル・エクステンド」

ぬいぐるみ軍団の上下に展開した魔法陣から拘束条を十数本と伸ばし、１体残らず簀巻き状態にして拘束してやる。一流の魔導師や騎士ならこんな簡単に捕まえられないだろうけど、相手はとろくさいぬいぐるみっぽい奴らだ、敵じゃない。

「ほいほい、返してね～」

まずはお姉ちゃんの入ってる小瓶を取り返して、「えっと、やっぱりこうだよね・・・？」キュポンとコルク蓋を抜いてみる。するとポワン！とお姉ちゃんが全裸のままで飛び出した。

「うわわ！　アスクレピオス、セットアップ！」

慌てて防護服に変身したお姉ちゃんは、ファビアとバトってるフォルセティの方を見た。あっちはあっちで大変そうだし、お姉ちゃんの裸は見られなかった。

「フォルセティ君！？　ちょっとファビアさんにくっ付き過ぎじゃないかな！？　フォルセティ君って中遠距離タイプだったでしょ！」

「こらー、フォルセティ！　ファビアさんの防護服を破くなんて何事！？　エ、エッチなことはダメだと思うよ！」

真剣に闘ってるフォルセティに向かってヴィヴィオとコロナが野次を飛ばす。それはちょっとフォルセティが可哀想だよと思いながら、私はすべての小瓶を手にしてホールから廊下まで戻る。ここでならフォルセティがみんなの裸を見るようなことはないはず。

†††Ｓｉｄｅリヴィア⇒アインハルト†††

ファビア・クロゼルグさん。クラウス、オリヴィエ殿下、リッドの友人とも言うべきクロ――カイラ・クロゼルグの末裔である少女。彼女の術によって私や、無限書庫に訪れたヴィヴィオさん達は窮地に陥ってしまっていた。

（クロのイタズラを思い起こさせるようなものではありますが、今回はイタズラと言う限度を超えた襲撃・・・）

身包みを剥かれた上に小瓶に閉じ込められるという失態を犯した私は、始めの方は気を失っていましたが・・・。

――うるさい。オリヴィエ達は　カイラ(わたし)を見捨てて、今度は末裔が私の邪魔をする・・・！　魔女の誇りを傷付けた者は、未来永劫呪われよ・・・！――

――魔女の森が焼かれた後、クロゼルグのみんなは新たな住処を探す為にシュトゥラから離れた。カイラ(わたし)はそれでも森に残った。それなのにあの日以来、オリヴィエ達は逢いに来てくれなくなった。待っていたのに。ずっと・・・！――

そんなつもりはクラウス達にはなかった。オリヴィエ殿下は"聖王のゆりかご"に搭乗することを決意して、逃亡・拉致が出来ないように国外への外出も制限されてしまい、クラウスの引き止めも叶わずに搭乗し、そのまま・・・。クラウスは、部下より魔女の森からクロゼルグ一族が去ったとの報告を受けていて、カイラ(クロ)も一緒に去って行ったのだとばかり・・・。

（リッドはその頃・・・）

何をしていたのか判らない。それを知るために今、私たちは無限書庫へ赴いていた。

「ほら、アインハルトも防護服に変身して。素っ裸のままでフォルセティの前に出て行きたいなら止めないけど」

「っ！！　そ、それは無理、ダメです！　ティ、ティオ！」

「にゃあ！」

リヴィアさんにそう言われて、慌てて防護服へと変身。これで一安心と安堵している中、「おーい、お前ら～！」番長さんの声が廊下の奥から聞こえてきました。そちらに目をやると、ヴィヴィオさんやジークさんみたく小さくなってしまっている番長さんとヴィクターさんが、脱げ掛けてる防護服に四苦八苦しながらやって来ました。

「なあ、あのチビ魔女はどうした？」

「それに・・・ジークとヴィヴィ、セティとコロナも居ませんわね・・・」

「ファビアちゃんは今、フォルセティ君と闘っているよ」

「ヴィヴィオさんとチャンピオンは、お2人のように小さくなってしまったので、今は無事なコロナさんが見てくれています」

状況の確認をし終え、ホールに戻ろうとしているところに、「皆さ～ん、もう大丈夫ですよ～！」とコロナさんが私たちを呼びました。ルーテシアさんが「残念」と肩を竦め、番長さんも「チッ。オレがやりたかったんだがな」と小さな拳をギュッと握りました。

「ほら、行きますわよ」

ホールへと戻ると、小さいままのヴィヴィオさんとジークさん、側にはコロナさん。そしてフォルセティさんと、蒼く輝くバインドに拘束された元の姿に戻っているファビアさんが居ました。

「お父さん直伝の魔力阻害効果を持ったシーリングバインドで拘束してるんだけど、やっぱり魔女術だからかヴィヴィオやジークさん、それに・・・ヴィクターさんと番長の体は戻ってない・・・ね」

「おおう、ヴィクターと番長も小さなったんやな～。お揃いや～」

「だな！」

「嫌なお揃いですわ・・・」

私たちもファビアさんの側へと近寄り、私は「ファビアさん」と呼び掛けると彼女はプイッと顔を背けました。するとジークさんが、自分の方に顔を向けたファビアさんの額を小さな拳でコツンと小突いた。

「こーら。まったくもう、今のはオイタした罰や。もうこんな事やったらアカンよ？」

「ファビアさん。皆さんにちゃんと、ごめんなさい、しましょう」

「あ・・・」

ヴィヴィオさんとジークさんとファビアさんのこのやり取りに、私はオリヴィエ殿下とリッドとカイラの姿を幻視した。当時も、カイラのイタズラによって困らされたリッドが、よく彼女の額を拳や指で小突いたりしていました。それが懐かしく思ったのは私だけではなく、ファビアさんもそのようで・・・。目を丸くしていた瞳から大粒の涙が溢れては零れました。

「うわぁ！？　ご、ごめんな！？　痛かった！？」

「たぶん、違いますよね？　ファビアさん、当時のオリヴィエ達と知り合いだったカイラさんの記憶に反応しちゃったんだと思います・・・」

「あー、そういえばそうやったっけ」

「私もそうです。ジークさんがファビアさんを小突いたその光景は、クラウスの記憶の中にもあります。ひょっとしたらファビアさんもその記憶を思い起こしたのでは・・・？」

ファビアさんは溢れ続ける涙を拭い続けるだけで、返事らしい返事はしてくれませんでした。そんな中、「ファビアさん。一緒に確認しませんか？」とフォルセティさんが1冊の本を後ろ手から私たちに差し出しました。

「セティ、まさかソレは・・・！」

「はい、ヴィクターさん。ファビアさんとの交戦中に見つけました。

中をチラッと確認しましたけど、間違いなくエレミアの手記です」

皆さんが「おおー！」と歓声を上げる中、私とファビアさんはその手記を見詰めます。ジークさんが「そうやね。ご先祖様のわだかまりを解かなあかんよね」と受け取り、分厚い表紙を捲りました。

「あ、ちょっと待ってください。フォルセティ。ファビアさんを拘束してるバインド、解除してあげて？」

「大丈夫かそれ？　暴れだしたり、オレらみたく小さくされたり、瓶に閉じ込められたりするかもだぜ？」

「もうその心配はないと思うよ？　同じ手は私たちにはもう通じないし、それに何より・・・」

「はい。ファビアさんが気になり過ぎてそわそわしてますし・・・。大して興味ないけど、って言っていたけど・・・」

「べ、別に気になんかなってない」

またプイッと顔を逸らしますが、ファビアさんはエレミアの手記をチラチラ。皆さんはその様子に苦笑いを浮かべ、フォルセティさんは「判った」と頷き、彼女を縛っているバインドをすべて解除しました。本を開くジークさんの側に私とヴィヴィオさんと、自由になったファビアさんが集まります。

「えっと、ゼーゲブレヒト及びシュトゥラ滞在時の記録を手記に残

す。エレミア、あるいはヴィルフリッド、もしくはリッド・・・」

エレミアの手記は、オリヴィエ殿下との出会いから始まりました。夜盗に襲われていた馬車を救ったリッドは、腕が不自由でありながら石礫を蹴りで放ち、残党を撃破したことに驚いたことなどが記されていました。

「聖王家に滞在してる間は、異国の話や技術を伝えたりと、ご先祖様は重宝されてたみたいやね」

「最初のエレミア製の籠手が作られたのはこの頃なんですね」

ヴィヴィオさんの言葉に、クラウスの記憶がフラッシュバックする。リッドに籠手を作ってもらう前は、壊れやすい飾り腕や、無骨で力加減の出来ない鎧籠手を使っていて、よく物を壊して苦労したようでした。

「オーディンさんに両腕を治して頂けるまで、エレミアの籠手はオリヴィエ殿下にとってまさに腕でした」

「ジーク。クラウス殿下はいつ頃出るのかしら？」

「あ、うん。えーっと、割とすぐやね。手記の中でも序盤や。んと、オリヴィエ王女の留学から2ヵ月ちょっと後に遅れて学院への出向協力で赴いた・・・と」

「それは昨日、私たちが見たクラウス殿下の記憶どおりですわね」

「あ、魔女っ子のことが出てきたな～。魔女の森で出会った、天真爛漫を絵に描いたようなイタズラ猫、カイラ・クロゼルグ。クラウスにはよく懐いていて、彼が王様になったら魔女の力で助けてあげる、とよく言っていた・・・」

私たちの視線がファビアさんに向けられます。ファビアさんは「ミアの末裔、早く次のページ」と急かします。カイラがリッドにあまり懐かなくて、基本的に険悪だったということも記されていました。

「おい、魔女チビ。お前、このカイラってやつの記憶継いでんだろ？なんで当時のエレミアに懐かなかったんだよ？」

「クラウスやオリヴィエとは違って、ミアからはあまり好きじゃない匂いがしただけ」

ファビアさんの返答に、「匂い？」と私たちは首を傾げました。そんなカイラを交えての日常もまた多く記されていたエレミアの手記を読み進めていく。

Ｅｐｉｃａ３５－Ｂエレミアの手記～Ｓｈｅ'ｓ　Ｍｅｍｏｒｙ２～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

リッドの書き残したエレミアの手記を見つけた私たちは、リッドの子孫であるジークさんが読む形で内容を確認している。

「あ、これってオーディンのことちゃうかな。シュトゥラ国内を旅しているところに、銀の髪を靡かせる騎士が妙な集団に襲われているのを見た。遠目からでも判るほどの異常感。これまで感じ取れたことのないほどの魔力量。僕はこれまで人生の中で、人に対して恐怖を覚えたことはなかった。けど彼らは本能的な恐怖を僕に与えた。いや、あれは本当に人間だったんだろうか。この場に留まって気付かれてはいけない。早く立ち去らないと・・・か」

昨日、番長さんが言っていたとおりでした。リッドはオーディンさんの戦闘をじかに見ていたようです。フォルセティさんの方を見ると、彼と目が合いました。

「それだけ強かったってことなんだと思う。ま、僕じゃまだまだ届かない高みだろうけど、お父さんはたぶん、もう届いてると思うよ。そういえばカイラさんも、オーディンを避けてたっぽいけど・・・ヴィルフリッドさんと同じ理由？　さっきの闘いの中でも恐れがどうとかって」

「そう。戦闘は見たことないけど、城に遊びに行ったときにチラッと遠くから見た。戦船が・・・ううん、天災が人の形をした怪物だと思った」

クロゼルグの魔女、カイラの記憶を受け継いだ子孫のファビアさんがそう語りました。リッドもカイラも、オーディンさんの強さや雰囲気に恐れていたのだと。クラウスやオリヴィエ殿下は、そんな恐れは抱いていなかったのですが・・・。

「ご先祖様はそういった理由で、オーディンとは距離を取り続けたみたいやね。・・・こっから先はハルにゃんの記憶で見たとおりの流れや」

ペラペラとページを捲るジークさんに、「エレミア、ちょっと早い」とファビアさんが不満を漏らしました。

「あ、ファビアさん。エレミアの手記の閲覧用データを借りる予定ですから、後でゆっくり読みましょう」

「・・・そういうことなら、いい」

ジークさんが手記を読み進めていく中、「あ、こんな話もある」と、とある訓練後のお話をします。クラウスが湯殿へと誘うのですが、熱い湯は好まないとの理由でいつも断っていたリッド。その当時の記憶も思い出しているため、私は目を閉じて回想します。

「クラウスが、ご先祖様のことを男の人やと勘違いしてたって話や

ね・・・・」

「・・・はい？」

何を言われたのかちょっと判らない私に、「ほら、ここや」ジークさんがある一行を指でなぞりました。

「えっと、クラウス王子は、未だに僕のことを男性だと思っているようだ。性別など関係無しに武闘家として接してくれているのかと思っていたけど、ヴィヴィ様が言うには気付いていないとのこと。彼が女の子の顔を全力で殴れるわけないから、らしい。納得だ。・・・ほらな？」

「ほ、本当ですね・・・」

何百年越しの衝撃的な事実に、私は「驚きました」しか言葉に出来なかった。そんな私に「クラウスは鈍かった」とファビアさんが漏らしました。返す言葉もありません。そして手記はイリュリア戦争に差し掛かりました。とはいってもリッドも遊撃隊として参戦してくれたことは知っているので、その辺はスルーで。

「・・・オーディンさんとグラオベン・オルデンの皆さんが戦死したとの知らせを、シュテルンベルク卿より伝わってからおよそ1年。彼らの死がとうとう大陸全土に伝わり、イリュリア戦争以来の戦争が各地で勃発するようになった。僕は彼が恐ろしかった。しかしそんな彼が居てくれたからこそ、シュトゥラは平和だった」

「この辺りからですね。わたし達が知りたい事・・・」

「はい」「うん」

ヴィヴィオさんの言葉に頷くわたしとファビアさん。ジークさんも「よし」と唾を飲んで次のページを捲ります。アウストラシアの聖王家が"ゆりかご"起動の発令から半年は何事もなく過ぎて行きました。

「んと、ヴィヴィ様は自分がゆりかごの王になることを予見するかのようなことを言うようになった。僕はそんなことはありえないと返すことしか出来なかった。僕はヴィヴィ様の優しさと太陽のような温かな笑顔が好きで、彼女の泣き顔や憂い顔がすごく苦手だった。だから僕は、僕の出来ることでヴィヴィ様を支えたい。優しい王女様と情熱的な王子様、それと魔女猫と4人で、いつまでも一緒に過ごしていきたい」

「シュトゥラ南部にある魔女の森が、ゆりかご起動反対の派閥に組する者たちに焼かれてしまった。この一件がきっと、ヴィヴィ様にゆりかご搭乗の決意をさせてしまった。魔女の森襲撃後、ヴィヴィ様は式典への参加と言う名目で一時アウストラシアへ帰還。僕も一緒に戻った。だけどヴィヴィ様にはもう1つの目的があった。ゆりかごとの適合率の検査をすること・・・」

「なかなか王家から適合者が出ない中での高数値の適合率を出したヴィヴィ様を、ゆりかごの聖王と認定する計画の速さは凄まじく、半日と掛からず認定された。シュトゥラで数多くの武勲を立てたこ

となどを理由に、ヴィヴィ様付きの護衛騎士リサが元老院への反対を申し出て、僕もヴィヴィ様にやめるように何度も願い出た。でもそのたびに優しく説き伏せられて、騎士リサも更迭されてしまった」

「僕がヴィヴィ様にゆりかごに王にならないように言っていることが知られてしまい、シュトゥラへ1日だけ戻れることになったヴィヴィ様への同行が許されなかった。クラウス王子とヴィヴィ様の間に何が起きるかは判らない。けど、あの不器用でまっすぐな王子のことだから、きっとヴィヴィ様を力ずくでも止めようとするだろう」

ジークさん、ヴィヴィオさん、ファビアさん、そして私と順に回し読み、リッドの悲痛な思いを目の当たりにしていく。クラウスがオリヴィエ殿下を止めようと闘いを挑んだことを咎める考えもあったようですが、それをオリヴィエ殿下が懇願して不問にされていたこと、そして・・・。

「ヴィヴィ様は真実を知らない国民たちの歓声の中、ゆりかごへと入っていった。僕がヴィヴィ様の本心を知ったのは、彼女がもう手の届かないところへ行ってしまった後。書き掛けのまま捨てられていた手紙を見つけた。いつもそうだった。辛いこと、苦しいこと、泣きたいこと、そういった僕たちを不安にさせるような心をいつも仕舞い込んでいた」

次のページをジークさんが捲ると、カサッと折り畳まれた2枚の紙がフワリと浮きました。私が手に取り、開いてみる。ソレは「オリヴィエ殿下の手紙・・・！」であることが、最初の一文で判った。

「クラウス、リッド、カイラへ」

書き出しはクラウス達へ送るための手紙と判る名前からでした。始めはクラウス達への感謝が綴られていて、その後は決意の言葉が占められていました。

「私はこのベルカと言う世界が好きです。今は辛く、苦しく、悲しい時代ですが、みんなと一緒に過ごせたこのベルカが大切です。オーディンさんやグラオベン・オルデンの皆様に頂いた平和を無駄にしない為にも、私は私にしか出来ない事をしたい。終わらない戦乱と灰色の雲と、人々の飢えと苦しみが少しでも終わるよう、私はゆりかごの聖王になります」

1枚目は綺麗な状態でしたが、2枚目は一度はくしゃくしゃに丸められたらしく皺だらけでした。

「宝物と言っても過言ではないほどの素敵な日々を、これからも過ごして行きたかった。カイラ。あなたには結局、ちゃんとしたお別れを言えなかった。ごめんなさい。リッドともうちょっと仲良くしてあげてね。それとイタズラもほどほどにね」

「オリヴィエ・・・」

「リッド。武術も学問もいいけど、もう少し女の子らしくしてくださいね。クラウスとカイラとこれからも仲良くしてください」

「・・・」

「クラウス。あなたとは喧嘩別れのような形でお別れをしてしまいました。ごめんなさい。あなたにしか託せなかったのです。戦乱期を終えたベルカに平和をもたらす王の役目を。丸投げをする私は本当にひどいですよね。本当にごめんなさい。クラウス。あなたと出会えて本当に幸せでした。どうか、良き王となってください」

「オリヴィエ殿下・・・」

知らず私は涙していました。ファビアさんも声を押し殺して泣いています。手紙を畳んで手記に挟み直した後、オリヴィエ殿下が"ゆりかご"と共に飛び立った後のリッドが、どうしていたのかを知りました。

「ご先祖様はオリヴィエのゆりかご搭乗から10年以上も軟禁されてたようやね・・・。んで、クラウスはその間に王位を継いで、覇王としての武勇を歴史に刻んで・・・」

「平定間近にかつての敵対国、イリュリアの騎士団長だったグレゴール・ベッケンバウワーによって討たれた・・・」

リッドの書き残した手記はそこで終わりを迎えていました。リッドがその後、アウストラシアから出てどういう風に生きていたのかは判りません。ただ、どうか幸ある人生を歩んでいてほしいと願うばかりです。

「これがリッドがシュトゥラへ戻らなかった理由だったのですね・

・・」

「オリヴィエもミアも、そしてクラウスも、カイラを見捨てたわけじゃなかったんだ・・・」

こうしてエレミアの手記を探す冒険は終わりました。それぞれに思うことは多々ありますが、「壊れた書庫や脱がされた服はどうすれば・・・？」という問題が。それに加え、「ウチらの体を元に戻してほしいんやけど」とジークさんが、ファビアさんの肩に手を置いてにっこり。

「あ・・・うん」

体を小さくされているヴィヴィオさんとジークさん、それにヴィクターさんと番長さんが光に包まれ、そして治まるとその体の大きさが元に戻っていました。次の問題は書庫の修復なのですが・・・。

「一件落着みたいやね」

「みんな無事でよかった」

「お母さん！」「フェイトママ！」

このホールの入り口より女性の声が。振り向けばヴィヴィオさんのお母様のお1人であるフェイトさん、フォルセティさんのお母様であるはやてさんが、防護服姿でいらっしゃいました。さらに「あ、私たちの服ですかソレ・・・！」ミカヤさんが、フェイトさんが抱

きかかえている私たちの服を指差しました

「うん、そうだよ。でもビックリしたよ、書庫に入ったら服が辺りに浮いていたから」

「フォルセティ。女の子の着替えや、席を外してな」

「あ、うん！」

フォルセティさんがホールの外にある廊下まで移動し、服を剥ぎ取られていた私たちは防護服を解除。フェイトさんから手渡された服へと着替える。そのような中、「さてと。ファビア・クロゼルグ」と、はやてさんがエレミアの手記を読み直している彼女に近寄りました。

「私は海上警備部所属の八神はやてや。んでな、一応、あなたのした事は違法なんよ。窃視に盗聴に、今回の1件も含めてな」

「っ・・・！」

ビクッと肩を跳ねさせたファビアさん。はやてさんは肩を竦めた後、私たちをぐるりと見渡しました。

「残念やけど補導は確定でな。ちょこっと話を聞かせてもらうことになる。で、被害届を出されたら逮捕になるわけやけど・・・」

ファビアさんが「うぅ・・・」萎縮してしまったところで私は「あ

の！　被害届、出しません！」と挙手した。そんな私に続いてヴィヴィオさん達、ジークさん達も被害届を出さないと言ってくれました。

「そうゆうことみたいや。良かったな、ファビア。そやけど迷惑をかけたみんなには、ごめんなさい、ってちゃんとしておこか？」

「ご、ごめんなさい」

小さく頭を下げた上での謝罪の言葉に、私たちは「はい！」と優しく頷き返した。その後、はやてさんはバックアップデータから書庫内を完璧に修復し、エレミアの手記は元の書棚へと戻し終え、私たちは後腐れなく書庫の出口へ向かいました。

「でもフェイトママが来てくれてるなんて思いもしなかったよ」

「あー、うん。本当なら未整理区画に入る前にお見送りしようって思ってたんだけど、アリシアがちょっと遅れちゃって。今はなのはと一緒に外で待ってるよ」

「なのはママも一緒なんだ！」

「うん。まだ本局に残らないといけないけど、次元港まではお見送り出来るからね」

「うんっ！」

ヴィヴィオさんがフェイトさんと母娘らしい会話をしている中、イクスさんが「はやてさん。ファビアさんはすぐに解放されますか？」と尋ねました。

「うん。もう反省もしてるみたいやし、厳重注意だけで済む予定や」

「そうですか。なら、連絡先を交換しましょう、ファビアさん！」

「連絡先・・・？」

「それはいい考えですわ、イクス」

「じゃあウチも！」

「ジーク。あなたは携帯端末を持ってないでしょ？」

「うあ！　そうやった！」

「んじゃあよ、この機会に持てばいいんじゃね？」

「そうだね。いつもフラリと居なくなるからヴィクターも困っていたようだし、私たちとしてもプライベートでもっと仲良くなりたいからね」

「むぅ、そうしよかな～・・・」

キョロキョロと皆さんを見回すファビアさんに、私も「ぜひ」と微

笑みかけた。フェイトさんとのお話を終えたヴィヴィオさんも交えて連絡先を交換。インターミドル期間中は、互いにライバルということで無闇に連絡を取り合わないこと、しかしそれ以外は普通にメールや連絡はしましょう、などの約束を交わしました。

「お、戻ってきた！」

「おーい！」

「おかえり、みんな」

「無事で何よりだぞ」

書庫の入り口にまで戻ってくると、ノーヴェさんやアインスさんの他に、ヴィヴィオさんのお母様であるなのはさんと、フェイトさんのお姉さんであるアリシアさんがいらっしゃいました。

「なのはママー！」

「ヴィーヴィオ～♪」

ヴィヴィオさんは満面の笑みを浮かべて、勢いよくなのはさんに抱きつきました。ヴィヴィオさんは、冬期休暇に入ってからというものこうして直接なのはさんとお会い出来ませんでしたから。皆さんでその様子を温かく見守りました。その間に、私たちは書庫内で起きた事件をノーヴェさん達に伝えました。

「へぇ～。魔女術ってなかなか面白いね～」

「アリシアさん、笑い事じゃないっスよ。結果論で万事解決したとは言え、一歩間違えば楽々拉致っスからね」

「ああ、ファビア・クロゼルグが大隊側ではなくてよかったよ」

「・・・ハッ！　えっと・・・コホン。では、これにてエレミアの手記探索を終わります！　お疲れ様でした！」

なのはさんとの触れ合いを私たちに見られていたことを思い出したのか、少し顔を赤くしたヴィヴィオさん。彼女の発した締めの挨拶に「はーい！」と応えた後は、来た道を戻って転送器に乗り、未整理区画から一般開放区画へと帰還。

「んじゃ、私はファビアを連れてくから、アインスは引き続きヴィヴィオ達の護衛な。なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃんはいま昼休み中やろ？　ノーヴェとルールーとリヴィ、それにインターミドルのトップランカーも居るからそう心配はないやろうし、時間になったら戻ってええからな」

「はい、お任せを」

「「「うんっ！」」」

はやてさんがファビアさんの背中に手を添え、「行こうか、ファビア」この場から去ろうとしたので真っ先にヴィヴィオさんが「ファ

ビアさん。また連絡します。そうしたら今度はゆっくりとお話しましょう！」と大きく手を振り、ジークさんも「待っとるからな～！」と手を振りました。

「私ももっとお話をしたいです。ファビアさん」

「・・・うん」

こうしてファビアさんは、はやてさんと共に先に無限書庫を後にしました。そして私たちはと言うと・・・

「今日は本局(こっち)の寄宿舎で泊まるんだからよ。ちょっと本局内を見て回らねぇか？」

「魅力的な提案ですが・・・。本局とは言えあまりで出歩くのは・・・」

ヴィクターさんがヴィヴィオさんをチラリと見たところで、ぐぅ～～、と大きなお腹の音がしました。私たちの目が音の主、ジークさんへと一斉に向く。

「あぅぅ・・・、そんな見んでぇ～・・・」

耳まで赤くしたジークさんは俯き、お腹を両手で押さえました。さらにリオさんとミウラさんとリヴィさんも、くぅ～、とお腹を鳴らしました。

「ウチのより音が可愛ええとか・・・」

「どちらにしても恥ずかしいですよ・・・！」

どういうわけかお腹の音の差にガックリと肩を落とすジークさんとミウラさん。番長さんが「そういや昼飯はまだだったな」と苦笑して、エルスさんも「そうですね。時間的に見てもそろそろかと」と時刻を確認します。

「１２時５０分か。そろそろ食事というのも良いかもしれないね」

「ですね。お食事しに行きたいんだけどいいかな？」

ノーヴェさんやアインスさん達にそう尋ねたヴィヴィオさんに、アリシアさんが「いいんじゃない？」展開した空間モニターにマップを表示しました。

「何か料理の種類にリクエストとかある？　あーでも、ここから４～５分のところに飲食街があるから、店を見て回ってから決める？」

アリシアさんからの提案に私たちは賛成し、どの店で昼食にするかはその店を見てからということに。そのために無限書庫を出る・・・前に、「じゃあその前にエレミアの手記のデータ、借りてくるよ」とフォルセティさんが受付カウンターへと歩き出しました。

「あ、私も一緒に行くよ！」

「ううん、ヴィヴィオはなのはさん達と一緒に居ていいよ♪　借りるくらいそんなに手間要らないし」

「待って、フォルセティ君。私も行く！」

「うん、じゃあ一緒に行こうか、コロナ！」

コロナさんもフォルセティさんに続いて受付カウンターへと向かいました。ヴィヴィオさんが少しばかり落ち込んでいるように見えます。なのはさんがそんなヴィヴィオさんの頭を優しく撫で、「待つ間、自由時間にしようか」と私たちを見ました。

「で、では少し見て回ってきます！」

エルスさんが真っ先に一般開放区画に並ぶ書棚へ。続いて「では私も」とヴィクターさん、それに番長さんも「んじゃオレも、局員採用試験の本でも探すかな」離れて行きました。ルーテシアさんやリヴィアさん、ミカヤさんも思い思いに近くの書棚へと向かうのを見送っていると、ヴィヴィオさんのデバイスであるうさぎのマスコット・"セイクリッドハート"――"クリス"さんがわたわたと手を振りました。

「どうしたのクリス？　メール？」

ヴィヴィオさんがメールを確認しようとしたところ、「誰から？」とアリシアさんが尋ねました。

「え？　あ、うん、シャルさんから。エレミアの手記は見つかった～？って♪　クリス、音声入力。手記は無事に見つけることが出来ました。あと、ファビアさんとも和解できました。・・・以上」

わたわたと手足を振るってメールの送信を終えたことを示す"クリス"さんの様子にヴィヴィオさんは頷いた後、「ちょっとお手洗いに行ってきます」ヴィヴィオさんが、お手洗いの案内板を指差しました。

「ついでに私も～♪」

アリシアさんもヴィヴィオさんに続いて、「なら私も」とご一緒することにしました。お手洗いということで"ティオ"と"クリス"さんをなのはさん達へ預けますと、「私も付き合おう」アインスさんが続きました。アインスさんはヴィヴィオさんの護衛ですから。

「なのは、フェイト。フォルセティ達の方を頼む」

「あ、うん！」

「アインスも、ヴィヴィオのことお願いね！」

「ああ、任された」

私とアインスさんはヴィヴィオさんとアリシアさんに追い付き、一般開放区画の奥にあるお手洗いへと向かう。お手洗いへと続く細い通路に入ろうかというところで、「あ」と、アリシアさんとアイン

スさんが足を止めて敬礼しました。

「あら？　アリシア執務官補、アインス補佐」

「「イスズ准将！」」

同じようにお手洗いへ続く通路の入り口で鉢合わせたのは1人の女性。ヴィヴィオさんが「情報部の部長のミュー・イスズ准将です」と耳打ちで教えてくれました。イスズ准将も無限書庫の常連らしく、ヴィヴィオさん達は一般開放区画でよくお話するようです。

「今日はお友達と一緒なのね」

「はい。なのはママとフェイトママやはやてさん、それにインターミドルの上位選手たちと一緒です」

「そうなの～」

「ヴィヴィオ、アインハルト。私は外で待っているから」

アインスさんはお手洗いの入り口で待機するようです。私とヴィヴィオさんとアリシアさん、それにイスズ准将は、用を済ませるためにそれぞれ個室へと入りました。そして下着を下ろして座ろうとしたその瞬間・・・

「・・・っ！？」

嫌な予感というものが私を襲った。そう、去年の文化祭の時の拉致未遂に感じたあれ・・・。

（まさか・・・！）

アインスさんやアリシアさんがいらっしゃるとはいえ、私は直感に従ってドアを蹴破るかのごとく勢いよく開ける。個室から出たと同時、私が入っていた個室を塞ぐように半透明の壁が展開されました。それだけでなく全ての個室の扉と、お手洗いと通路を隔てる入り口にもバリアが張られた。アインスさんが入り口のバリアを壊そうと殴っていました。

「ヴィヴィオさん！？　アリシアさん！」

大隊の女性メンバーとしての共通セーラー服を着た女性が、ぐったりしているヴィヴィオさんを抱え上げて、指からプロミスリングを外しているところに遭遇。

「あら？　閉じ込めるのに失敗してしまいましたか。偶然・・・ではないのでしょうね。聖王の危機に、覇王としての直感か本能か、どちらにしろ反応したのですね」

私が閉じ込められる前に個室から出てきたことに驚く女性。私の頭は一瞬で沸騰して、愛機である「ティオ！」と呼び掛けますが、預けていたことを思い出す。

「（ですがティオが居なくても・・・！）武装け――」

「ダメ、アインハルト！　私たちじゃ相手にならない！　下手に歯向かったら殺される・・・！　あいつ、エグリゴリの1人なの・・・！」

「えっ！　この女性が・・・！」

"エグリゴリ"に銃口を向けているアリシアさんが教えてくれました。オーディンさんやグラオベン・オルデンの皆さんを殺した、あの"エグリゴリ"の1人・・・。それでも「ヴィヴィオさんが！」捕まってしまっている以上、このままではいけない。改めて「武装形態！」と成長した姿に加え防護服へと変身する。

「ヴィヴィオさんを・・・離せ！」

床を蹴って"エグリゴリ"へと向かおうとしましたが、"エグリゴリ"が空いている左手をフッと振るうと、「うぐっ・・・！」強烈な突風が吹き、私とアリシアさんは壁に叩き付けられてしまった。

――トランスファーゲート――

その隙に"エグリゴリ"は、抱きかかえていたヴィヴィオさんと共に空間の歪みの中へと消えて行ってしまった。私はただその光景を見ていることしか出来ず。クラウスがオリヴィエ殿下を止めることが出来なかった、あの記憶が強烈にフラッシュバックする。

「私は・・・私はまた・・・！　助けられなかった！」

「アインハルト・・・」

己の無力さに崩れ落ちたところで、「いいや。これでいいんだ」と、バリアが消失したことで入って来られたアインスさんがそう言いました。そして・・・

「ふんっ！」

「ぅぐ！？」

何故か「アインスさん！？」は、アリシアさんの腹部を思い切り殴り、アリシアさんを気絶させました。ヴィヴィオさんが拉致されたことに加え、アインスさんがアリシアさんを襲ったことで、私の頭の中はもう混乱の極みだった。

Ｅｐｉｃａ３６やられたらやり返す！～Ｔｒａｐ　ｏｆ　ａ　Ｒｅｖｅｎｇｅ～

†††Ｓｉｄｅシグナム†††

東部アクアベール海に出現したとされる艦隊、その鹵獲任務を請け負った首都航空隊なのだが・・・。

「助けてくれー！」

「ちくしょー！　魔法が使えない！」

「第３小隊は墜落者のフォローに回れ！」

「少しでも距離を取れ！　弾幕の中に留まり続けるな！」

私たちが居るこの空域は今、悲鳴や怒声が木霊している。１３隻からなる艦隊は確かにアクアベール海の沖を航行していた。これまでの交戦映像などからして大隊の艦隊であることは間違いなかった。ゆえに航行停止と武装解除と臨検申し込みをしたわけだが、タンカーのように甲板がだだっ広く何も設けられていない艦からミサイルが発射されたことで、我々は臨戦体勢に入った。

『シグナム一尉！　我が隊より４名が撃墜されました！』

部下から思念通話で報告を受ける。今現在、対艦隊戦に参加してい

るのは私の任されている２２１３航空隊。それに加え、他４つの航空隊だ。みなが熟練の魔導師だが、空母とミサイル艦の２隻以外の１１隻の艦載砲よりハリネズミのように放たれる弾幕に、我々は苦戦を強いられていた。

「くっ、また・・・！」

ミサイル艦の甲板に設けられているおよそ８０基のハッチのうち１基が開放され、ミサイル１発が遥か上空へと向かって飛んでいく。アレはおそらく「弾道ミサイル！」という名だったはずだ。迎撃しようにも弾幕の中を突っ切ってミサイルを追い翔けられるだけの速度を私は出せない。

「一体、どこへ向かって放たれているのだ・・・！」

この空域内での通信や思念通話は出来るのだが、地上本部や近隣の陸士隊舎への通信が遮断されてしまっている所為で、ミサイルの到達地点が判らない。ただ北部へ向かっていることだけは判るが、被害が出ているのか出ていないのか、それが判らないため不安で仕方がない。

「シグナム、どうすりゃいい！？　このままじゃ全滅しちまう！」

「判ってはいるが・・・！」

戦力が圧倒的に足りなさ過ぎる。六課クラスでなければ、あの艦隊を攻略するのは無理だ。射砲撃も完璧に迎撃され、接近を試みよう

にも弾幕が厚すぎる。シールドやバリアを展開しても、艦載砲を防ぐことが出来なかった。

「致傷・致死性が無いとはいえ、さすがにこれ以上の撃墜者を出せば・・・」

プライソン戦役に投入された各兵器に搭載されていた兵装は、どれも実弾やエネルギー弾と非殺傷などという効果を有していなかった。しかし艦隊の兵装は、着弾したらバインドで拘束されるという効果を有していた。すずかのバインドバレットのようなものだ。ただ、性能が段違いではあるが・・・。

『現場にて交戦中の各航空隊員へ。こちら海上警備部所属リュッチェンス艦長、アルピナ・ハルトマン一等空佐です。合流が遅れて申し訳ありませんでした。これより本戦闘の指揮を執らせていただきます。現在の状況は確認しています。バインド弾を受けた隊員は、開放した後方ハッチに着艦してください』

リュッチェンスへの着艦は嬉しい話だった。海上であるため、バインドを受けた隊員たちを抱きかかえる隊員たちは、バインドが解けるまで飛び回らなくてはならなかった。私はバインドを受けている隊員を抱える部下たちに「リュッチェンスへ連れていけ！」と指示を出す。

『続いて、敵艦隊に生命反応がない場合、艦載砲での撃沈も止む無しと指令を受けました。こちらで生命反応の探査を行った結果、生命反応は探知できず。それゆえに現時刻を以って艦載砲での攻撃を

開始します。加えて各航空隊員は、物理破壊設定での攻撃に移行してください』

組織に属する局員である以上、自由気ままに出来る事など限られてくる。今回の物理破壊設定への切り替えなども、上役からの許可が降りなければならない。しかしその不満もこれまでだ。

「アギト、ユニゾンだ！　一気に決めに掛かるぞ！」

「あ、おう！」

他の隊員たちのフォローに回っていたアギトを呼び戻し、「ユニゾン・イン！」を果たす。生粋の古代ベルカ騎士である私は遠距離・広範囲攻撃があまり得意ではない。しかしユニゾン状態でなら、アギトの補助によって広範囲攻撃も楽に撃てるようになる。

『リュッチェンスより各航空隊員へ。これより艦載砲を発射します。巻き込まれないよう注意して下さい』

ハルトマン一佐からの全体通信が切れ、我々が艦隊より大きく距離を取った直後、リュッチェンスより魔力砲が3発と発射された。その全てがミサイル艦へと向かって行く。

――へーラーーー

「バリア！？」

『デケェ！！』

並列する空母とミサイル艦を護るための円の陣形を組んでいる艦、その全てを覆うかのように発生したのは半球上のバリア。艦載砲を完全に防ぎきったことで航空隊員たちよりどよめくが沸く。

『艦載砲の次弾発射までの間、航空隊は攻撃を続けてください。強力なバリアとて永久に使い続けるわけではないはずです。見たところ、バリア発生時は艦隊からの攻撃はないようです。協力してバリアを叩き割って差し上げましょう！』

とのことで、我々は一切の攻撃を止めた艦隊への攻撃を再開。バリア展開中はバインド弾による迎撃を行えないようだ。完全に沈黙している。

「アギト、最大火力で行くぞ！」

『おう！　炎熱加速！』

流れ星のように様々な魔力光に輝く射砲撃がバリアに着弾して行く中、私は左手に炎剣を作り出す。そして「こちら２２１３航空隊、シグナム。高火力斬撃を放つ。注意されたし」と全体通信で警告。

「『火龍・・・一閃！』」

効果範囲から隊員たちが離脱したのを確認。炎剣を伸張させながら振り下ろし、バリアの天辺に直撃させる。

「くぅ・・・・！」

『かてぇ！　何だ、このバリア！　火龍一閃でもビクともしねぇって・・・・！』

炎剣を持続させるのだが、それでもバリアを破壊できる兆しは見えない。さらに全隊員からの射砲撃が次々とバリアに着弾していくのだが一向に消えない。

『シグナム、火龍の維持が限界だ！』

「判った。爆発させる・・・・！」

隊員たちが爆発に飲まれないほどの距離を開けているのを確認。固定されていた炎を解き、炎剣を爆破する。各所から「すげぇ！」歓声や、「うお！？」驚きの声が上がる。が、黒煙の中からはやはり、まったくの無傷なバリアが現れた。

「むぅ、硬いな・・・・！」

『・・・ん？　シグナム、空母見ろ！』

アギトに言われるままに空母へと目をやると、先程までは何も無かった甲板に「ガジェットⅡ型！？」のような航空機が何十機と列を成し、今まさにカタパルトから打ち出されようとしていた。

『へっ！　ガジェットを離艦させることになるなら、バリアも解除されるはず！』

「ああ。その間に全力で叩きこむ！」

そう思っていたのだが、甲板より離艦したガジェットはバリアに弾かれることなく、音も無くスッと通過して来た。

†††Ｓｉｄｅシグナム⇒アルテルミナス†††

最後の大隊の罠っぽい事にわざと引っ掛かって、ここミッド北部の廃棄都市区画へとやって来た私たちオランジェ・ロドデンドロンは、私たちを殺害するためだけに投入されたらしい主力との交戦に入った。

「獄火拳！」

私が相手をするのは、炎熱変換資質持ちと思われる拳闘を主とする騎士っぽい、ルインと名乗った男。コイツも変声機か変声魔法を使っているみたいで、声だけで個人を特定するのは難しい。

「よっと！」

ルインが打ち放ってきた拳状の火炎弾を、ビルの外壁を蹴って移動することで躱す。炎拳が着弾した壁は大きく抉られて、爆炎と爆風、そして破片を撒き散らす。どんな仕掛けか、この強烈なＡＭＦの中でも一切魔力が減衰せずに、魔力攻撃を繰り出し続けてきてる。ま、

そんなちゃちな単発射撃なんて、飛行魔法が使えない今でも十分に回避できるレベルだから問題ない。

（とはいっても騎士甲冑の維持や身体強化するだけで精一杯だし、防御系や遠距離系の魔法は使いづらい今、いろいろと面倒くさい）

ビルとビルの間を壁を蹴って跳び回りつつ、悠々と空を翔け回りながら私を狙い撃ちしてくるルインを睨み付ける。

（イリス達と共闘しようにも、私たちを隔離するように面倒な結界が張られてる）

半透明だから向こうの状況がまったく判らないということはない。それ以前に私とルインの居る空間の至る所にモニターが展開されていて、イリス達がそれぞれの仮面持ちと闘う様子が映し出されている。

「みんなの苦戦する様を見せつけて、私を焦らせようって？　っざけんなコラぁぁぁぁッ！！」

このＡＭＦの中で持続させないと意味がないような魔法はほぼ使えないと思っていい。そんな中で鬱陶しい存在がもう１つ。それはどこからともなく出現する弾道ミサイル。私が隔離されてる区画だけ出なく、イリス達の区画の方にも撃ちこまれていく。そして今来たミサイルは、私の居る区画に向かって落ちてきていた。

「紅狼駆！」

広さが十分にある屋上に陣取った私へと全身に炎を纏っての突進攻撃が、ミサイルと同じく空から突っ込んでくる。ミサイル着弾時の被害がどれだけのものかは判らないけど、結界内を爆炎で覆うようなものなら非常にまずい。こっちは耐え切れるだけの防御魔法が使えないし、騎士甲冑だけの防御力じゃ心もとない。

「（さらに言えば連中は転移スキルで逃げ切れる。だからこそこんなギリギリまで私たちを追い詰められる・・・！）ああもう！　本当に鬱陶しい！」

ルインの突進攻撃を一か八かの「フェアシュテルケン！」打撃強化魔法を発動して、ルインを真っ向から蹴っ飛ばしてやった。

「うごお！？」

「ぅぐ・・・！」

ルインを蹴っ飛ばした右足に酷い痛みと熱さが襲ってきた。直撃時は魔法効果は出ていたようだけど、次の瞬間には効果は消失していた。その反動ダメージが襲ったわけだ。でも蹲って痛がってる暇はない。アイツが再攻撃してくる前に、ミサイルの迎撃を行わないとゲームオーバーだ。火傷している右足に構わずグッと力を込め・・・

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース――

「てやっ！」

高速移動魔法を発動して、ミサイルへと突っ込む。そしてスキルのエクスィステンツ・ツェアレーゲンを発動。触れた物を問答無用で分解する、凶悪だって恐れられるそのスキルによる打撃技、「ツェアラーゲン・シュラーク！」による拳打をミサイルの先端に打ち込んで、問答無用で分解させてやる。

「貰ったぁぁぁぁーーーーっ！！」

――轟爆花――

そんな声と一緒に私へ飛来するのは大きめな火炎弾６発。アリサのフリンジングボムを思い起こさせるもので、「どうせ炸裂するんでしょ？」というわけで、一番近い火炎弾から人差し指で突いて分解させる。３発目を分解させたところで、残り３発が一斉に爆発した。スキルを今度は全身を覆うように展開して、爆炎のすべてを私の肌に到達する前に分解する。

（管理局法に縛られない今、スキルを対人に使ったらダメだっていう制限はもうない。けど・・・）

チラリと見るのはルシルとアイリが映っているモニター。あっちも仮面持ちの猛攻をなんとか凌いでるけど、いつ敗れてもおかしくない、かなり危なっかしい状況だ。さすがにこのＡＭＦの中、今のルシルとアイリじゃ負けてもおかしくない。ただ、問題はそのタイミングだ。あの２人からの合図が出るまでは私たちは負けてはダメで、

むろん勝ってもダメだ。負けた連中が何を仕出かすか判らない。だからルインを速攻で倒すわけにもいかない。

（はぁ、もう・・・！　早く合図が欲しい！）

――炎纏人――

飛行魔法を発動していないから重力に従って落下する中、屋上に立つルインが「いい加減に墜ちたまえ！」と叫びながら全身に炎を纏わせた。遠距離系の攻撃は、私のスキルで無力化されるってことくらいはもう承知のはず。そんなアイツはその炎すべてを両手と両足に集束させていく。

「熱衝打・真式・・・！」

「へえ、そんな魔法も使えるんだ～」

いい考えだ。アレだけの火力と魔力を受け止められるだけのシールドは張れないし、ご丁寧に物理破壊設定での魔法だ。スキルがなければ私はもう何回も死んでいる。

「（熱の所為で屋上の床が溶け始めてる。アレは受けたらダメだな～）ホント、あんた勿体無いよ・・・！」

ルインという仮面持ちの正体はもう気付いてる。そっち方面で攻めて、ちょっと時間稼ぎをして見ようか。私が別の建物の屋上へと足が付くかどうかってところで、「燃え尽きよ！」左掌底を繰り出し

てきた。両足裏にスキル効果を付加して、床の素材をすべて分解。そのまま階下へと降りるつもりだけど、ルインの掌底が顔面直撃コースで迫ってきていた。

「（ああもう、暑いし熱い！）あらよ！」

両腕で顔面をガードしながら宙で上体逸らしをして掌底を避け、階下へと落下。スキル効果を持続発動させたまま1階まで降りようと考えていたけど、頭上からカッと強い光が降り注いできたから、今居る階層の床に大きな穴を開けて、私はその穴から階下に降りずに今居る階の奥へと向かう。

――火龍炮――

次の瞬間、恐ろしいほどの火力を有した砲撃が穴を通過して行った。数mと穴から離れていたのに「あっつい！」顔を背けるほどの熱波が襲ってきた。私は次に起こり得るだろう事を察知して、ガラスのはまっていない窓から外へと脱出。隣のビルの窓へと突っ込んだ直後に、さっきまで居たビル全体が炎に飲まれて、さらにドロドロに融け始めた。

「本気で殺しにかかってきてるな～」

融け続けるビルの屋上から飛び立つルインを視界に収める。アイツはすぐに私を視認して、私の居るところに突っ込んで来た。４０ｍ四方の一室でルインと改めて対峙する。

「なに？　何か言いに来た？」

「あなたの分解スキルは対人には使用できない以上、私に勝つ術は無いはず。ゆえに提案します。大隊に下るか、ここで死ぬか、どちらかを選んでください」

――炎纏人――

全身を炎で覆い、私に熱波と火の粉を浴びせかける。私は「はあ・・・」と大きく溜息を吐いて、ルインをビシッと指差す。

「あのさ、あなた・・・ガリホディンでしょ。ガリホディン・ダムマイアー」

「っ！！」

「気付かないとでも思った？　顔を隠そうが、声、魔法、技、魔力パターンを変えようが、あなたの身のこなしは変わらない。何度あなたと拳を交えたと思ってるわけ？　私は仮にも拳闘の元パラディン。拳闘騎士全員の身のこなしくらいは記憶してる。というか口調も変えなよ、詰めが甘々すぎて驚きだって」

トントンとこめかみを右人差し指で突いて見せる。するとルインは観念したのか、頭部を覆っていた炎だけを解除して、「さすがですね」仮面を外して目出し帽も脱いだ。

「ん。じゃあお話といこうか？」

「いいえ。もうあなたと、あなた方と話すことはありませんよ。投降か死か、その二択だけです。さぁ、選んでください」

――熱衝打・真式――

全身の炎が両手と両足に集束。私がこれまで見てきた炎熱魔法の中でも一、二を争う火力を有してる。脅しとしては効果的だ。私は足元に転がっている拳大の瓦礫をガリホディン目掛けて蹴っ飛ばす。

「猪口才な真似を・・・！」

飛んできた瓦礫を左手で鷲掴んで止めたガリホディンの隙を突き、私は窓から外へと一足飛びで脱出する。背後から「逃しませんよ！」という声と一緒に・・・

――獄火拳――

拳の形をした火炎弾が何発と飛んで来るけど、スキルを全身に付加して着弾前に分解させる。二車線道路を挟んだ向かいの廃屋の屋根へと向かって落下途中、ルシルとアイリの映るモニターへと目をやる。

（ルシルとアイリをユニゾンさせないための攻撃かぁ。向こうも向こうで考えてるな～）

ルシル単独でも魔導師としてなら強いけど、魔術師になって戦うな

らアイリとユニゾンしないといけない。そうしないと記憶消失を起こしやすくなるからだ。その辺りの調べはしているというわけだ。

「あ・・・」

ルシルに砲撃が直撃して、彼はビルの屋上に突っ込んだ。原型を留めているのは非殺傷設定だからだと思う。ルシルとアイリを相手にしている仮面持ちにも、ルシル殺害命令が下されているだろうに。ルシルとアイリに縁のある誰かかな・・・。屋上でぐったりしているルシルにアイリが飛びついて、追撃から身を賭して護ろうとしていた。とその時、私が、私たちが待ち望んでいた合図が。

（ルシルとアイリの消滅を確認！）

砲撃着弾とほぼ同時、まるで幻だったかのようにルシルとアイリが光となって消滅した。もうこれで手加減することなく、大隊を潰せることになったわけだ。

「何だ今のは？・・・ルシリオンとアイリが消えた・・・？」

ガリホディンもさっきの様子を視界の端に捉えていたようで、その不思議な光景に疑問を抱いた。

「どういうことか教えてあげる。やられたらやり返す。あなた達が散々利用してきた偽者。ならこっちも偽者を掴ませてやる、とね。ここまで言えば、私たちが仕掛けた罠がどういったものかが理解できるでしょ？」

「っ！」

ハッとするガリホディンへと私は突っ込み、両手の平にスキル効果を付加。

「おのれ・・・！」

――烈火泉――

足元に展開されたベルカ魔法陣から噴き出す炎の渦。ルシルのケルビエルと同種の攻防一体の魔法だ。私はソレに構わず両手を突っ込んで炎を分解。渦の中には全身を覆っていた炎を今まさに右手だけに集束していたガリホディンが居た。

「私が、最強の拳闘騎士なのだぁぁぁぁ――――――ッ！」

――熱衝打・真式――

「だったらこんな姑息な状況無しで真っ向から挑んだうえで・・・すぅ・・・私に勝てって話なの！」

――エクスィステンツ・ツェアレーゲン――

繰り出されるガリホディンの右拳を左手で受け止めて、炎を分解すると同時にスキルを解除。間髪入れずに「シュトゥースヴェレ！」と、防御魔法や防護服を貫通して体内に衝撃を打ち込む一撃を放つ。

「ごぶっ！？」

「てや！」

――ゲヴァルト・ツム・アインシュトルツ――

ガリホディンの右肩に踵落としを打ち込んで、彼を顔面から床に打ち付ける。同時にバウンドして跳ねた顎を爪先で蹴り上げて、宙に浮いたところで・・・

「ほいよ！」

――ゾイレ・フェアクナルト――

旋回して遠心力を加えた裏拳を背中に打ち込んだ。空に吹っ飛んだガリホディンから視線を逸らすことなく、「オクスタン・・・」クラウチングスタートの姿勢を取る。

「ズィーガァァァァーーーーーッ！！」

床を蹴って一直線にガリホディンの元へ向かい、本来はデバイス破壊の初撃を彼の顔面に打ち込み、鼻の骨やら前歯やらを折る。続けて2発目を腹に打ち込んだ。彼は直下のビルの屋上に叩き付けられて、そのまま1階まで床をぶち抜いて行った。

「死んでても恨まないでよ？　それだけの事をあなた達は仕出かし

たんだからさ」

とりあえず、戦闘不能になっているかを確認するためにガリホディンの元へ。彼が開けた穴を降りて1階へ到着。大の字でぶっ倒れているのを確認して、ゲシッと軽く蹴っ飛ばす。

「おっと」

ガリホディンがすくっと立ち上がった。結構全治1年レベルの加減で攻撃を加えたんだけど、ここまでタフだったっけ。というか「髪と瞳の色が・・・！」変わっていることに気付いた。ユニゾンの同調率が良かった所為かユニゾン中、彼の髪の色に変化も無かったから今ようやく気付けた。

「あー、なるほど。道理で魔力パターンが違うわけだ。・・・融合騎とユニゾンしていたなんて・・・！」

「アリサ・バニングスって子もそうだったけど、ワタシとロードが全力を出す前に、ロードを倒すんだから嫌になっちゃう」

「ふ～ん。お前がアリサを拉致った犯人というわけか」

胸の内が怒りで渦巻く。私は構えを取って、「ガリホディンから引っぺがした後、お仕置きしてあげる」と笑って見せた。

Ｅｐｉｃａ３７－Ａ大隊壊奏曲～Ｃｏｕｎｔｅｒｂｌｏｗ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

大隊の一員となっていた"エグリゴリ"の1人の手によって、ヴィヴィオさんが拉致されてしまった。それだけでも私の感情はグチャグチャなのに、さらにアインスさんがアリシアさんを殴って気絶させたことで、もう限界を迎えそう。

「な、なにが・・・、一体なにが・・・起きて・・・」

アインスさんが「アインハルト」と私の名前を呼びながら歩み寄ってきました。どうしていいか判らず、でもこのまま呆けて良いとも思えず、勢いよく立ち上がって構えを取る。今は何を信じて言いのか判らないから・・・。

「警戒しなくて良い。これもルシル達オランジェ・ロドデンドロンの計画の内だ」

「ルシルさん達の・・・？」

アインスさんは４つある個室の内、未だに扉の閉まっている個室へと向かって、ノックを3回と打ちました。ギッと扉がゆっくりと開いていき、そこには信じられない光景があった。個室から出てきたのは金色の髪に紅と翠の虹彩異色の少女。

「ヴィヴィオさん・・・！？」

「えっと、はい、アインハルトさん」

私はフラリとヴィヴィオさんの元へと行き、彼女の頬に手を添えて幻ではないことを確認した。柔らかく、温かく、まさしく本物の・・・。

「本当に・・・ヴィヴィオさん・・・？」

「はい、本物ですよ、アインハルトさん」

私の手に自身の手を添えて微笑んで見せたヴィヴィオさん。ヴィヴィオさんが無事で安心したのか腰が抜けそうになったのを、「わわっ！？　大丈夫ですか！？」とヴィヴィオさんが支えてくれました。

「え、ええ、大丈夫で・・・、いえ、待ってください！　エグリゴリは確かにヴィヴィオさんを連れて消えました！」

ヴィヴィオさんとアインスさんが少し俯き加減になり、私も気付いたことがあって辺りを見回す。一緒にお手洗いに入ったはずの「イスズ准将はいずこへ？」と聞いたと同時、頭の中で一気に組み上がる今回の拉致の真実。

「まさか・・・拉致されたのはイスズ准将なのですか・・・？」

「はい。正確にはイスズ准将の姿に変身していたルシルさんです」

「ヴィヴィオを大隊にわざと拉致され、プロミスリングで連中の本拠地を割り出す。それがお前たちに告げられた囮作戦の全容だが、それは本来の作戦を隠すための嘘だ」

「はい。実は――」

ヴィヴィオさんが教えてくれました。元よりヴィヴィオさんを拉致させるわけではなく、ヴィヴィオさんに変身したルシルさんを拉致させる作戦だったと。ですがその入れ替わりの機会が難しく、冬季休校明けは常にルシルさんがヴィヴィオさんの護衛に当たるつもりだったそうですが・・・。

「しかし昨日、ルシルとトリシュが大隊に拉致され、異世界にて殺害されそうになったという。だが大隊は2人の殺害に失敗。詳しい話は省くが、それはルシル達が大隊の正体を確たるものにする証拠となった一件となったらしい。その日の内に私と主はやてに連絡をくれたのだ。今日か明日、ミッドを離れるヴィヴィオの拉致や、口封じのためにオランジェ・ロドデンドロンへの襲撃があるはずだと」

ルシルさんはそのための準備を行ったそうです。その結果が今、私の目の前で起きた拉致。大隊は見事にルシルさん達の罠に嵌り、ヴィヴィオさんの姿に変身していたルシルさん、それにユニゾンしたままのアイリさんの2人を拉致してしまった。

「ヴィヴィオ達が指にはめているプロミスリングが発信機だというのを知っているのは、ルシル達オランジェ・ロドデンドロン、お前

たちチームナカジマ、私と主はやてとなのは達、そしてハラオウン提督だけ」

「ルシルさんを拉致した人、エグリゴリの1人だそうですけど・・・」

ヴィヴィオさんが床に落ちているプロミスリングを拾い上げました。そして「どうして知ってるんでしょうか？」と私に向き直りました。考えられるのはやはり「内通者がいる・・・！」ということになります。

「ではアリシアさんが・・・！？」

「今日はずっとヴィヴィオの元へと何としても向かおうとしていたからな。怪しさを隠そうともしないのは、真っ直ぐな性格のアリシアらしいが。それに、エグリゴリ――フィヨルツェンがヴィヴィオに扮したルシルを個室から引き出したのと同時、彼女は用を足すことなく個室より飛び出し、デバイスを起動させた。申し合わせたかのように完璧なタイミングだった」

そう言ったアインスさんがアリシアさんを背負ったところで、通信を知らせるコール音が鳴った。アインスさんが「はい」と応じますと、『アインスか？　海上警備部にスクランブルや！』とはやてさんからそんなお話が。

『ミッド海上にて大隊の艦隊が出現したそうや！　現在、リュッチェンスや首都防衛隊が頑張ってくれてる！　あと未確認やけど、シ

ャルちゃんらオランジェ・ロドデンドロン隊は行方不明らしい』

大隊がシャルさん達を犯罪者扱いをして、これまでの犯罪者と同様に殺害することを公にしたうえ教会騎士団も、行方を晦ませているシャルさん達をこのまま出頭しなければ敵性と認め、撃破する対象にすると。

『おそらく、シャルちゃん達は今、艦隊がミサイルを放ってる方角に居ると思う。連絡がつかへんのはきっと、大隊構成員との戦闘中＋妨害されてるからや。ミサイルの軌道も途中で消失するらしいし、転移か結界の所為やろうな』

「主はやて。ヴィヴィオに扮したルシルが、計画通り大隊に拉致されました」

『っ！　そうか、ならこっちも遠慮なく仕掛けようか。アインス、今すぐ艦船ドックへ来て。たぶんやけどなのはちゃん達にも出撃要請が入るかもしれへんし・・・』

「・・・アリシアを大隊側の一員である疑いのもとに拘束しました」

アインスさんがそう報告しますと、はやてさんは少し俯き加減に『・・・そうか』残念そうに漏らしました。が、すぐに顔を上げて、『判った。あんま頼りたないけど、最強の戦力にヴィヴィオ達を託そうと思う』そう提案しました。

「・・・ですが彼女は受けてくれるでしょうか？」

『あの人のスケジュールはルシル君から聞いてる。今日は1日休暇らしいからな。本局に居る内は助けになってくれるはずや。連絡はこっちでしとくから、アインスはなのはちゃん達にヴィヴィオ達を預けた後、ヴォルフラムまで戻ってな』

「判りました。・・・ヴィヴィオ、お前たちをこれからリアンシェルトに預ける」

はやてさんとの通信が切れ、アインスさんがそう言いました。名前に聞き覚えがある。リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサ少将。先のプライソン戦役の際、ミッド全体を巨大なシールドを複数枚で覆って、宇宙より降り注ぐ隕石群を凍らせて防御するという、圧倒的な力を管理世界中に見せつけた方だ。そう、管理局のトップエース、次元世界最強の魔導師、と謳われるあの・・・。

「しかし、頼りたくないというのは・・・？」

「リアンシェルトもまた、エグリゴリなのだ。いつかはルシルの手によって救済されることになるだろうが、局員としての誇りを持っている現状、本局内での事件にはうるさい。護衛を任せれば、新たに大隊が拉致しに来ようが必ずお前たちを護るだろう」

「で、ですが、大隊には同じエグリゴリの・・・えっと、フィヨルツェン？が居るのですよね？　もしまた、彼女が来た時、ヴィヴィオさんを引き渡すかもしれません・・・！」

オーディンさん達を殺害できるだけの強さと、世界丸ごと1つを覆えるような魔法を使える魔力量の多さを持つ"エグリゴリ"2人を相手となれば、いくらジークさん達が居ても勝てるはずがない。そんな私の心配にアインスさんは「問題ないだろう」と断言しました。

「奴は確かにエグリゴリではあるが、先ほども言ったように局員としての誇りを大事にしている。腹立たしいことにそこだけは信じられる。エグリゴリとして活動するのは、ルシルと交戦する時だけだ。フィヨルツェンと闘うことにはならないだろうが、局員としてヴィヴィオを護るだろう」

とのことらしいです。これ以上、私が何を言ってもどうにもならないことは確かなので、「判りました」頷いた。

†††Ｓｉｄｅアインハルト⇒アイリ†††

マイスターの狙い通り大隊がヴィヴィオの拉致を強行してきた。驚いたのは拉致しに来たのがフィヨルツェンだったってこと。マイスターのことを知り尽くしてるはずの"エグリゴリ"ってこともあって、アイリもマイスターもすごい焦ったけど・・・。

（特にバレることなく転移スキルで拉致られたね・・・）

マイスターは今ヴィヴィオの姿に変身していて、フィヨルツェンの肩に担がれてる状態。自分の意思で意識を遮断してるマイスターに代わって、アイリがマイスターの体の支配権を得てる。本拠地と思しき場所に着いたら、アイリがマイスターの意識を起こす。意識を

保っていると、どうしても体が条件反射とかで動いちゃうからね。

（事前に話してたとおり、一度で本拠地へ向かわずに何箇所か経由してるな～）

フィヨルツェンが発信機の役割を持つプロミスリングを外したのは確認してる。やっぱりチーム海鳴の専用回線を使った秘密会議は筒抜けだったわけだね。ま、それを前提に話してたわけだけど。

――トランスファーゲート――

マイスターの中から外界の様子を見る。何度目かの空間の歪みが発生して、フィヨルツェンはスッと歪みへと歩みを進める。視界が一瞬だけ閉じて、次の瞬間にはこれまでの荒野や平原、どっかのビルの屋上とか地下駐車場とかを経由しての・・・。

（今までの雰囲気と違う・・・）

そこは半球上のドーム。照明らしい照明は無いけど、直径２０ｍ近い床に大きく描かれたベルカ魔法陣が青白く光ってくれてるおかげで、何も見えないってことはない。そんなドームには女の人が１人、フィヨルツェンの帰りを待ってたかのように佇んでた。

（うわぁ、知ってるこの人。名前はえっと・・・シスター・トルーデ）

シャル達とも面識があったはず。そんなシスター・トルーデがフィ

ヨルツェンに向かって「同志ヴィスタ、おかえりなさいませ」恭しく一礼した。フィヨルツェンのコードネームがヴィスタなんだね。どこの言語なんだろ。

「出迎えありがとう、同志テルコンタル。それにフィアツェーン」

（フィアツェーン？）

よく見れば、トルーデのドリルみたいな巻き毛に包まってる何かが・・・。アイリやアギトお姉ちゃん、リインのような小さな子供が居た。番号を名前とした小さな人。そのことから正体にすぐ行きついた。

（融合騎・・・！　一体誰が・・・！）

ベルカの融合騎を一から作れる技術持ちなんて指で数えられるほどしかいない。アイリが真っ先に思い浮かべたのは、イリュリア技術者の末裔だっていうミミルだ。仮にミミルが大隊側だとして、いつから？　メリットは？　あと何体作った？って疑問浮かんでくる。

「ヴィヴィオを技術室へ連れて行ってくださいますか？」

フィヨルツェンが肩に担いでいたマイスターをトルーデへと預けた。トルーデはマイスターを大事そうにお姫様抱っこして、「同志ヴィスタは？」って尋ねた。

「現在、オランジェ・ロドデンドロンと交戦中の同志たちの元への

ゲートを繋いでください。わたくしも出撃し、ルシリオンを討ってきます」

（シャル達と大隊が戦ってる！？）

こっちはこっちでのんびりしてる暇なんてないみたいだね。フィヨルツェンの参戦はラッキーかもしれない。"エグリゴリ"はどうもマイスター以外の人間を殺すことだけはしないようだし。何せシュヴァリエルのような戦闘狂（アイリ個人の感想だけど）ですら、怪我は負わせても致命傷だけは絶対に負わせなかったもんね。

「判りました。いってらっしゃいませ」

――トランスファーゲート――

トルーデが転移スキルの持ち主かぁ。ここで倒せればいいんだけど、本物のアリサ達がどこでどうしているのか判らない以上はまだ仕掛けられない。フィヨルツェンが歪みの中へと消えていったのを確認したトルーデは歪みを消して、技術室とやらに向かって歩き出した。

「技術室。こちらテルコンタル。同志ヴィスタがヴィヴィオ陛下を連れてきました。これよりそちらに向かいます」

『同志ヴィスタが？　彼女は陛下の拉致には参加しない話だったのでは？・・・まぁ同志ヴィスタも最高幹部の1人でいらっしゃいますから問題ないとは思いますが。・・・判りました。同志メルに伝えて準備しておきます』

ヴィヴィオを拉致した理由を知れそうな予感。だからそろそろマイスターの意識を起こしておこうかな。準備って言うし、その前に身体検査とか行われるかもしれない。そうなったらアイリじゃどうしようも出来ないからね。

『マイスター、起きて。大隊の本拠地に着いたよ』

何度かマイスターの意識に呼び掛けると、『ああ、判った』意識が元に戻ったのを確認して、ここに来てからの事情を説明。マイスターも『フィヨルツェンには焦ったな』って思ってて、アイリは『ね～』同意した。

『ヴィヴィオの姿に変身しているとは言え俺だからな。気付かれるかと不安だったが・・・。俺を置いて、シャル達の元に居る俺の偽者を斃すという話からしてバレてはいないはず・・・』

そう言うマイスターだけど、心の中は不安でいっぱいだってことが判る。ユニゾンしてると感情の機微も判っちゃうから。

『とりあえず、このまま技術室とやらに連れて行ってもらおう』

それからトルーデは、見覚えのある教会関係者や指名手配犯などとすれ違いながら技術室に到着。両側にスライドするドアを抜けて、両壁にいくつものスライドドアがある直線通路に入る。通路の一番奥にあるスライドドアの向こうは、大小さまざまな機材が壁に沿って設けられたホールだった。

「いらっしゃ～い。待っていたわ～」

トルーデを出迎えた人物にマイスターとアイリは目を見開いた。それと同時に、あーやっぱり、っていう感情に至る。トルーデに「はい。同志メル」と呼ばれた女の人は、はやてやアインスと一緒にリインを開発してくれたイリュリア技術者の末裔・・・。

『『ミミル・・・！』』

ミミルの後ろにはウサギ耳を揺らす双子のフラメルとルルスも居る。トルーデが双子にマイスターを預けようとした。するとマイスターは『アリサ達がまだ見つかってないが、仕方ない』って嘆息。

「えいっ！」

「ぐふっ！？」

トルーデの顎に掌底を打って、彼女が大きく反り返った。当然マイスターを手放したことで自由の身に。マイスターは顎を押さえてフラつくトルーデに「てやっ！」追撃の突き蹴りを彼女の腹に打ち込んだ。

「ここはどこですか！　それに・・・シスター・トルーデ！？　どうして・・・！？」

教会の出入りをしてるヴィヴィオは、トルーデとも会ったことがあ

るはずだ。ここで彼女の名前を出したところでおかしくない。ただ、ミミル達と会ったことがあるのかどうかはちょっと判らないから、マイスターも名前を呼ばなかったね。

「我が手に携えしは確かなる幻想」

マイスターは誰にも聞こえないほどの小さな声で詠唱。そして足元に虹色に光り輝くベルカ魔法陣を展開した。

「「虹色(カイゼル・ファルベ)の魔力光・・・！」

「間違いなくヴィヴィオちゃんの魔力光ね～」

血液検査なんてされて気付かれる前に、ヴィヴィオしか放つことしか出来ない色の魔力を見せることで疑いを晴らさせる作戦だ。マイスターは魔力を放つと同時、それを隠れ蓑にするように「ステガノグラフィア」を発動した。

『この拠点を丸裸にしろ。最優先は捕らわれているアリサ達の居場所と救出方法だ。行け』

電子戦用術式ステガノグラフィアにそう指示したマイスターに、天使５人がそれぞれ返事してネットワークに潜って行った。

「げほっ、げほっ。ヴィヴィオさん、ここは我ら最後の大隊の本部ですよ」

「大隊の・・・・！　そんな気はしてましたけど・・・。どうしてわたしを拉致したんですか？」

マイスターはヴィヴィオを演じて、ステガノグラフィアからの報告が入るまでの時間稼ぎをするためにそう聞いた。ミミルは「そうね～」豊満なおっぱいを持ち上げるかのように腕を組んで、マイスターとの間にモニターを展開して、「アレに乗せるつもりなのよ、大隊は～」映ったものを指差した。

「聖王のゆりかご・・・！？」

『うそ！　だってあの艦はもう宇宙の塵になったはず！』

どっかのドック内に鎮座してたのは、プライソン戦役時に起動した"聖王のゆりかご"とまったく同じ艦。でも「なんか小さい・・・？」マイスターの言うように一回りも二回りも小さい気がするね。

「ええ、そうよ～。およそ半分のサイズに変更して～、小回りを効きやすく、速度も４割り増しなのよ～」

「その言い方だと、あなたがゆりかごを造ったみたい・・・」

「万が一、オリジナルのゆりかごが使えなくなるような事態に陥った時のために造っておいたの～」

満足そうに笑顔を浮かべるミミルにマイスターは「でもわたしにはもう、聖王核は無いです！」そう言った。"ゆりかご"を動かすに

は必要な物は、すでにヴィヴィオから失われてる。拉致したところで意味は無い気がする。

「それをどうにかするのが私たち技術部の仕事なのよ～」

「ごめんなさい、ヴィヴィオさん。これもまたミッドの平和の為なの」

トルーデ、それにフラメルとルルスがマイスターを囲うように陣取ったその時、「おや？　これはこれは、ヴィヴィオ聖王陛下ではないですか！」入り口とはまた別のスライドドアから渋い男の人の声が。マイスターがそっちを見ると、そこには紳士然とした服装の二足歩行ネコが居た。

『ジ○リ映画の男爵みたいだね』

『男爵の方が遥かにイケメンだがな』

『うん。それはアイリも思う』

身長は６０ｃｍほどで、おそらくネコ男爵も融合騎の１人。フラメルが「エルフテ」そう名前を呼んだ。ベルカ語で１１って意味だし、融合騎で間違いないね。そんなエルフテがマイスターの元へと歩み寄ってきた。

「な、なんですか・・・？」

「いやいや。こうしてお会いすることが出来て、光栄の至り」

エルフテはマイスターの右手を取ってその甲にキスした。マイスターの胸に渦巻く感情は、本物のヴィヴィオにしたらぶっ殺す、だった。

『マスター！　この施設の全体図を発見です（＊。▽。）ノ』

『監視カメラをすべて管理下に治めたよ　（￣∀￣）』

『最優先事項はココ（≧∇≦）』

『ついでに開放方法も調査済みなの～＼（^ o^）／』

『魔導装置で生命維持を行いつつ、幻術特化の融合騎が、対象の意識を幻術世界に閉じ込めて目を覚まさせないにしてるそうです。ですので倒しましょう∠（^ ―^）』

ステガノグラフィアが施設の全体マップと、その融合騎とやらの画像がマイスターの脳内と、アイリの居る空間に表示された。本拠地は地下7層構造で、技術室があるのは地下1階。で、アリサ達が居るのも技術室みたい。フロアのおよそ半分が技術室区画のようで、格納庫も含まれてるためかなり大きい。

『マイスター。このエルフテっていうのが、その融合騎のようだけど・・・どうする？』

『当然叩きのめす！　ステガノグラフィア、解放準備！』

指示すると同時にマイスターがエルフテの手を握った。エルフテは「おお、握手ですね！　嬉しい限りです！」なんて言って、握手したマイスターの右手を上下に振った。

――纏い流るるは紫電の防具（シャンディプリア）――

マイスターは下級雷撃系防性術式を、ヴィヴィオの魔力光のままで発動。雷撃系魔術や電気変換魔法によくある雷撃を体に付加するっていう効果の攻防一体術式だ。魔術としての雷撃を直で流されたエルフテは、声を上げることなく真っ黒焦げになった。死んではいないと思うけど、あれだと何日かは行動不能だと思う。

「「「「っ！！」」」」

エルフテを潰したマイスターは、『ステガノグラフィア、今だやれ！』アリサ達を捕らえてる装置の解除を指示した。同時にこの中で一番厄介な転移スキル持ちのトルーデを、マイスターは次の標的にした。

Ｅｐｉｃａ３７－Ｂ大隊壊奏曲～Ｈｕｎｔｉｎｇ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

まさかのフィヨルツェンの手による拉致で、俺とアイリは最後の大隊の本拠地へと連れて来られた。その時にはすでに俺は魔術師化していたこともあって、一発で気付かれるんじゃないかと焦ったが・・・。

（何の反応も起こさずに拉致した・・・。気付かれなかったのか、もしくは気付いていながら連れて来たか・・・）

前者だったら嬉しい話だが、後者だった場合は俺が罠に嵌められたかも知れないという話になってくる。俺を待ち構えているのはなんだ。ここに来てフィヨルツェンが、"エグリゴリ"が真っ向勝負ではなく搦め手で攻めてくるのか。

（そうでないことを祈るしかない）

その事はまた後で考えよう。今の俺はここ本拠地で、八神家の恩人であるミミルと、その使い魔であるフラメルとルルス、教会シスターのトルーデも、大隊側であることを知った。さらに言えば、ヴィヴィオを拉致しようとしていた理由も判明。

（まさか、聖王のゆりかごを造り直すなど誰が予想できるか・・・！）

「う、うわああ！」

「エルフテが・・・！」

「なんてことだ・・・！」

幻術特化の融合騎というエルフテを、殺さない程度に感電させて機能不全にすると、白衣姿の技術者たちが慌てだす。連中からは魔力を感じないことから魔導師ではないはずだ。なら次は、局や騎士団をあざ笑うかのような転移スキルを持つシスター・トルーデをターゲットにする。ヴィヴィオの魔力光と技と魔法で、ヴィヴィオの変装とは気付かせないようにすれば、下手に俺を攻撃することは出来ないはずだ。

「っく！　ヴィヴィオさん、今すぐ戦闘体勢を解除しなさい！」

「悪い人に言われても聞けません！」

「ロード・トルーデ！」

トルーデの後ろ髪――ドリル巻き毛の中に包まっていた融合騎が飛び出す。トルーデとお揃いのドリル巻き毛を二房揺らし、シールドを展開した。トルーデは戦闘力の低い治癒魔法専門のシスターのはずだが、このフィアツェーンという融合騎はサポートとして戦闘特化かもしれない。

「レストリクトロック！」

魔術としてのバインドを発動して、トルーデとフィアツェーンを拘束する。これで完全に身動きを封じた。魔術によるバインドは、バインドブレイクのような魔法では破壊できない。転移スキルを発動したとしても、必ず人が自ら歪みの中に入るという工程を踏まなければいけないようだし、あの場から動けないようにするだけで十分だろう。

「ソニック！」

――ソニックシューター・アサルト――

応援を呼ぶためか機材に触れようとした技術者がいたから、魔力弾で機材を粉砕してやる。その際の爆発で技術者が吹っ飛び、意識を失ったのが全員がぐったりとした。

「さて次は・・・（俺のエインヘリヤルを解除して、シャル達に、俺が無事に本拠地に潜入したことを教えないと）」

シャル達は今、大隊の主力と交戦中だという。そういう状況に陥った際、俺が潜入できるまでは時間を稼いでくれ、と伝えていた。そしてそれまでの間は、一緒に居る俺が偽者だと気付かれないように、とも。上手くいっているかどうかは、ここからだと判らないが・・・。

（信じているぞ、みんな）

"エインヘリヤル"の解除を行えば、シャル達も自分たちの思い通りの動きを取れるはずだ。解除を行いつつ、残る戦力をチラッと見る。ウサギの耳を揺らしたフラメルとルルスは、フラメルとルルスは共にＡＡＡ＋ランクだったはず。魔術師化しているとは言え戦いたくはないな。

『アイリ、サポートよろしく！』

『ヤヴォール！』

「あーそうだ！　シスター・トルーデ、それにフィアツェーン？　ちょっとごめんなさい！」

――メタスターゼン・トーア――

一種の転移魔法を発動。"闇の書"事件と称される一件の際、魔導犯罪者からリンカーコアを引き抜くために創り出した術式だ。トルーデの胸に左手を突っ込み、リンカーコアを手中に収める。

「っあ・・・！？」

「ロード・トルーデ！？」

――女神（コード・イドゥン）の救済――

リンカーコアを体外に出さずにそのままの状態で魔力を吸収してやる。その時に痛みがあるからかトルーデが「うあああ！」悲鳴を

上げるが、それに構わずギリギリまで魔力を吸収・・・完了だ。意識を失ったトルーデはぐったりとし、フィアツェーンは「ロード・トルーデ！」と叫ぶように何度も名前を呼ぶ。

――深淵（ラフェルニオン）へ誘いたる微睡の水霧――

そんな彼女の顔の周りに、対象を強制的に眠らせる霧を発生させて眠らせ、トルーデの巻き毛に収め直してやる。

（さすがに融合騎から魔力は奪えないよな・・・）

『マイスター！　使い魔姉妹が！』

アイリからの警告。ここまで傍観してくれていたフラメルとルルスが、白衣を脱ぎ捨てて突っ込んで来た。魔術師化を解いての迎撃をするべきだろうが、また魔術師化するのも魔力炉（システム）に負担が掛かる。避けるべきだ。

「なら！」

防御特化で攻撃は魔力付加無しで行うしかない。防御魔力を全身に纏う「パンツァーガイスト」を発動。これで魔力・物理両方の攻撃や捕縛系は完全に無効化できる。

「ヴィヴィオ、大人しく投降してください」

「オリジナルのゆりかごと違って、死ぬまで玉座に座らせることは

しないって」

「途中で玉座を離れることが出来ますし、自宅にも帰れます」

「そうそう。アルバイト感覚で問題ないって？」

フラメルとルルスが繰り出す高速の拳打を躱しつつ、こちらも拳打や掌底で反撃を行う。幸いなのはこの２人が魔法を使わず、純粋な肉体と格闘能力で攻撃してくるということだ。ヴィヴィオに合わせてくれているのだろうか。

「せいっ！」

ルルスのストレートパンチを躱すと同時に腕を手に取り、フラメル目掛けて背負い投げ。２人は俺を前後で挟む挟撃陣形だった。後ろに投げれば、打撃体勢に入っていたフラメルに直撃させることが出来る。案の定ルルスの尻がフラメルの顔面に直撃して「きゃあ！」「のわ！？」悲鳴を上げながら２人揃って吹っ飛んだ。

「レストリクトロック！」

「しまった！」「やられた！」

床に倒れたままのフラメルとルルスをバインドで地面に縫い付ける。魔術師でない限り自力では破壊できない。残るはミミルのみ。彼女はその豊満な胸を揺らしながら俺の元へと歩み寄ってくる。

「止まってください！　止まらないと撃ちますよ！？」

――ソニックシューター――

周囲に魔力スフィアを６基と展開してもミミルは歩みを止めず、しかし俺ではなく自身の使い魔であるフラメルとルルスへと軌道変更した。何をするのか判らない以上、「あなたも拘束します！」と、レストリクトロックでミミルを拘束した。

「縛られるのは苦手なのよ～」

あの間延びした口調でそう言いながら、バインドで絡まっている右足を前に出した。そんなことすら出来ない状態のはずなのに、さらにブチブチとバインドを引き千切りながら左足も出した。

『マイスター！　ひょっとして・・・！』

『ああ、信じられないがそれしか考えられない・・・！』

魔術の効果に抗えるのは神秘を含む魔力、つまり同じ魔術だけだ。信じられなかった。しかし目の前で起きている現実から逃避するわけにはいかない。ミミルは自分に絡み付いているバインドを両手で引き千切り、さらにフラメルとルルスを拘束しているバインドも軽々と引き千切った。

『ステガノグラフィア。施設内のシステム掌握率は？』

『現在９６％だよ！～（＿△＿～）（～＿△＿）～』

『よし。なら俺がこの部屋を出た瞬間にドアを閉じ、ロックを掛けろ』

『了解です！∠（＾－＾）』

『ついでに監視カメラとＡＭＦも解除しておくよ！（（ｏ（∨▽∧）ｏ））』

『それじゃわたしは、通信や念話の遮断をやる～！ｏ（＾＾ｏ）（ｏ＾＾）ｏ』

俺はジリジリと出口へ向かい始める。ミミルが魔術師である以上、ここで闘えばフィヨルツェンとの連戦になりかねない。トルーデから奪った魔力で足りれば問題はないだろうが、そうでなかった場合のリスクが大きすぎる。

「ヴィヴィオちゃんの姿でありながらフラメルとルルスの猛攻を凌いだのは大したものだわ～、ルシリオン君」

「・・・あなたはどこの魔術師か？」

イリュリアの技術を継承した魔術師の一族には心当たりがない。フライハイト家等のような大戦時から続く家柄なのだろうか。俺の問いにミミルはいつもの微笑ではなく、真顔へと変えて「フラメル、ルルス～」を見た。

「はい、マスター」「うん、マスター」

――高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）――

「な・・・！？」『うそ・・・！？』

ミミルとフラメルとルルスの背から展開されたのは、後光のように放射状に広がる孔雀の尾羽。ミミルは紅碧、フラメルは紅緋、ルルスは紅藤の魔力光。感じ取れる神秘だが、ミミルはかなりまずいレベル。連戦どころか戦闘すら避けなければ・・・。フラメルとルルスからも神秘を感じ取れるが、ゼフォンクラスだろうから苦労はしないだろう。

「いや、それより・・・驚いたよ、あなたも・・・お前たちもエグリゴリだったとはな・・・！」

『もしかしてイリュリア戦争の頃には造られていたの？』

「これはアイリちゃんの声ね～。ええ、そうよ～。ミュールやゼフォンの妹にあたるけど～」

『妹・・・アレで・・・』

アイリの視線がミミルの胸に向かったのがなんとなくだが判った。

「私が起動したのは戦争が終わった後よ～。バルデュリス陛下の命

の下、戦場には出ることなかったの～。私は戦闘兵器じゃなく、イリュリアやベルカの技術を未来へ残すことを存在意義として過ごすように命令されたのよ～」

終結直後に"エグリゴリ"の技術室へと向かったが、ミミルを見た覚えはない。当時の技術者も技術室が破壊されていたことにショックを受けて呆けていたしな。あの部屋とは別のところで造られていたのか・・・。

「ベルカ崩壊後からはリアンシェルト様と共に行動していて～、管理局設立の1人として技術部を立ち上げたのよ～。フラメルとルルスは、その頃に生み出したの～。私やゼフォン達が第2世代とすれば～、この子たちは第3世代ね～」

ミミルがフラメルとルルスの頭を撫でると、2人は気持ち良さそうに目を細めた。このまま彼女の思い出話に付き合っていていいのだろうか。応援が来るまでの時間を稼がれても困る。だから「あなたは敵か？」そう問い質した。

「敵か～、味方か～」

左右に頭を傾けるミミルから返答を貰う前に、けたたましい警報と共に『緊急事態発生、緊急事態発生！』アナウンスが流れる。

『贄が解放された！　技術室および融合騎エルフテに何かしらの異常が起きた模様！　警邏隊は技術室へ急行し、他戦闘員は贄を確保せよ！　繰り返す――』

「贄とは、本拠地に捕まっているアリサ達オリジナルのことか？」

「ええ、そうよ～。今現在ここにはニアＳランク、シングルＳランク、オーバーＳランクのＳクラス騎士が何人も居るから～、早く合流した方が良いわよ～？」

グッと拳を握り締め、踵を返して出口へ向かおうとすると、「先ほどの答えだけど～」ミミルが言葉を掛けてきた。俺は足を止め、振り返ることなくその答えとやらを待つ。

「私の真名はパイモン・エグリゴリ～。エグリゴリの味方であって大隊の味方ではないわ～。そして、あなたを殺害せよ、との命令も受けてないし、これからも発令されないから～。ここでお別れよ～」

ドサッと音がして振り返って見ると、ミミル達が床に倒れ伏していた。何をしているのかと思ったが、ミミルが「ほら、早く行きなさいな～」シッシッと手を払ったのを見て、俺にやられたフリをしているのだと判った。

『マイスター、早く！』

「あ、ああ・・・！」

アリサ達が捕らわれていると言う区画は、ステガノグラフィアから送られた映像を見る限りこのスライドドアを潜り、紅葉の葉のようなフロアに７つあるドアの内、右から２番目のドアから入った先に

あるらしい。

「ステガノグラフィア！　隔壁やドアのロックを閉じて敵戦力を隔離しろ！」

『『『『了解！ノ（^ー^）』』』』』

今潜ったばかりのスライドドアがピピッとロックされた。これで外から応援は入ってこられないだろう。目的地までの廊下を駆ける中、「ヴィヴィオ陛下！？」警邏隊かは判らないが、神父やシスターと鉢合わせ。

「どうしてここに！？　誰だ、お連れしたのは！　お連れしたのなら、こちらに連絡くらい寄越せ！」

「いや、そんなことより保護だ、保護！」

「出来るだけ傷付けないようにな！」

「は、はい！　ヴィヴィオさん、大人しくしてくださいね？」

にじり寄って来る４人に「ごめんなさい！」大きく頭を下げた俺は、「ジェットステップ！」ダンッと床を蹴って、４人の間を通り抜けつつ・・・

「はっ！」

高速で鳩尾に拳を打ち込む。魔力強化もしていない単純な一撃だが、無防備だった４人にはそれで十分だった。激しく咽ている彼等の合間をテクテク歩て通り過ぎたところで「レストリクトロック」で拘束。やはりヴィヴィオの姿は楽だな。今のように傷付けないように注意してくれる。

『アイリ！』

『ヤヴォール！　イドゥン、スタンバイ！』

トルーデと同じように、順番に４人の胸元に左手を突っ込み、リンカーコアを確認。そして「コード・イデゥン」を発動して魔力を吸収。それを体内で合成して、創世結界・"神々の宝庫ブレイザブリク"に収納しておく。

「ふふ」

『どうしたの、マイスター？』

「いや。魔力が取り放題とは嬉しい話じゃないかって」

『あー、そうだね。この際この施設内に居る連中みんなから魔力を貰っちゃおうよ！』

「それも良いかもしれないな。ああ、そうしよう！」

そこからいくつものドアや部屋を通り抜けると、奥の方から派手な

爆発音や振動がこちらにまで届いて来た。アイリの『交戦中だね』に頷き返し、音の出所へと走る。廊下の壁がガラス張りになったところで、ガラス壁の向こうへと目をやると、デバイスを起動し防護服姿に変身している「スバル、ティアナ！」が、狐の女仮面持ちと対峙していた。

「それに・・・ティーダ一尉！」

スバルとティアナの2人に肩を借りているのはティーダ・ランスター。様子からして自力で歩行できないようだ。視認できるのは今のところあの3人のみ。アリサやミヤビの姿はない。別行動中かもしれない。

「いくぞ、アイリ！」

『ヤー！』

――アクセルスマッシュ――

魔力付加した右拳をガラス壁に打ち付けて粉砕し、「スバル、ティアナ！」達の元へと飛び降りる。

「えっ！？　ヴィヴィオ！？　何でここに！？」

「ていうか呼び捨て・・・」

ヴィヴィオの姿に変身している俺の登場に驚いたのはスバルとティ

アナだけでなく、「ヴィヴィオ様！？」女仮面持ちもだ。ヴィヴィオを拉致するのは判ってはいたが、この場に居るのが信じられないといった風だ。

「ここは俺が受け持つから、スバル達は先に逃げろ！」

「俺？」

「その口調、まさか・・・ルシルさん！？」

「なに！？　ルシリオン・セインテスト・・・！？」

仮面持ちにも俺のことが知られてしまうが、カメラも通信系もこちらが掌握しているから他のメンバーには知られまい。俺自身の声で「ああ。助けに来たぞ！」スバル達にそう伝え、仮面持ちにはこれまで舐めさせられた辛酸を思い返し、皮肉たっぷりに「どうもお招きありがとう！」満面の笑顔でそう言い放ってやった。

「おのれ・・・！」

『アイリも一緒だよ！』

「「アイリ！」」

怒りに肩を震わす仮面持ちを無視しながら俺は「アメナディエル、スバル達に脱出ルートの案内を」と、５基１組のステガノグラフィアの内、長女に当たるアメナディエルを名指ししてそう指示を出す。

『はい！　請け負いました！（≧∇≦）ｂ』

スバル達の側に小さなモニターが展開され、アメナディエルが彼女たちに『ルート案内をしますね！』お辞儀した。それと同時にこの部屋にいくつかあるドアの内の１つが開き、矢印マークを持つアメナディエルが『さあ、こちらです！』スバル達に伝える。

「ルシルさん！　アリサさんやアリシアさん達が・・・！」

「マリアンネ教皇たちともバラバラになっちゃって・・・！」

「逃がさない！　ズィプツェーン！」

――フリーレンドルヒ・ツヴァイ――

『アイリと同じ魔法！？』

アイリの射撃魔法と同じ形状に、ズィプツェーンという名前。ズィ（アイリ）ーベンの後継機で間違いないだろうな。ミミル（真名はパイモンらしいが、こちらが馴染みすぎている）製の融合騎はどれだけいるのか。聞いておけば良かったな・・・。

「判った！　アリサ達にもステガノグラフィアを送る！　君たちは先に行け！」

――天地（コード）に架かれ、汝（ルシフェル）の明星――

スバル達を隔てるように火炎砲８発を横一列に床から発射させて壁とし、仮面持ちから放たれた氷の短剣１３発を防がせる。スバル達が潜ったドアが閉じて、ピピッとロックが掛けられたのを確認してから砲撃壁を解除。

「一体誰がヴィヴィオちゃんをあなたと間違えて連れて来たのか・・・！」

「そもそも、誰だろうが失敗していたよ。今朝からお前たちの行動はお粗末だったからな」

「なに・・・？」

「これまでにも監視の目はあった。が、今朝は特に増えていた。何故か。ヴィヴィオ達と俺たちオランジェ・ロドデンドロンが今日と明日、別行動を取るからだ。以前みたく俺やシャル達が姿を消して密かに護衛に付かないか不安だったんだろう？　だから監視を増やした」

仮面持ちは無言を貫く。その反応は肯定だと取ろう。

「俺とシャルはそれをチャンスだと思った。あぁ、お前たちは今日ヴィヴィオを拉致するんだな、と判ったからな。だから俺は次元港で、監視の目を騙してやった。お前は知らないだろうが、シャル達と帰った俺は偽者だよ」

「偽者・・・！？」

「俺ははやてと話しながらそれぞれトイレに入った。で、そこで俺は自分の分身エインヘリヤルをトイレから出した。お前たちはそれを俺と認め、後からトイレから出てきた変身魔法で変装していた俺をスルーした。ヴィヴィオ達からは一便遅れて本局に着き、そこからは別の局員やヴィヴィオへと変身して・・・このとおりだ。ザマァ見ろ。偽者に振り回されてきた俺たちが、偽者でお前たち大隊を振り回してやった！」

わざとらしく大笑いしてやったら、仮面持ちが「小賢しい真似を！」怒鳴り声を上げた。そっくりそのまま返したやりたい。お前たちもその小賢しい真似で、アリサ達は汚名を着せられた。その償いはさせる必ず。

「来いよ。お前たちが教会騎士団だろうがなんだろうが関係ない」

変身魔法を解除して本来の俺の姿へと戻る。身長だって見栄を張った１８０オーバーじゃなく、成長の止まったままの１５５。だから仮面持ちが「・・・え？」と抜けた声を漏らした。

「これが今の俺の本当の姿だよ。なんだ？　自分より小さくなったから闘いにくいとか言わないだろうな」

『マイスター？　ちょっと煽りすぎじゃ・・・？』

「こっちはこっちで鬱憤が溜まっているんだ。まずはこの女に吐き

出す」

「ほざけ！　最後の大隊、氷結の騎士ウルと・・・」

『その融合騎ズィプツェーン！』

――パンツァー・クリスタル――

「『参ります！』」

両手と両足に氷の籠手と脚甲を装備したウルと名乗った仮面持ちは、床を滑るように向かって来た。重そうな右腕を振りかぶり、「砕っ！」ストレートで繰り出してきた。俺はグッと身構え、真っ向から「鉄拳制裁！」左拳を繰り出した。互いの拳がぶつかり、ウルの氷の籠手が大きな音を立てて砕け散った。

「なに・・・！？」『そんな！？』

ウルは痛そうに右手を振りつつも間髪入れずに左上段蹴りを繰り出してきた。それに対して払い除けるように右手を振るって、手の甲で脚甲を砕く。

「チェーンバインド」

――フリーレンドルヒ・ツヴァイ――

俺自身の魔力光サファイアブルーに輝く８本の鎖がウルに絡みつい

たところで、あの氷の短剣が１８本と俺の周囲に展開された。ウルは脅しなど言わず「撃て！」と発射を指示した。短剣は俺の全身に刺さろうかと向かって来たが、パンツァーガイストの効果で突き刺さることなく全弾が砕け散った。

「魔導師と魔術師の違いくらいは聞いてないか？　端からお前じゃ俺には勝てなかったんだよ」

――メタスターゼン・トーア――

「うぐっ！？」

ウルの胸元へと左手を突っ込んでリンカーコアを手中に収める。

「どんな理由かは知らないが、友人や同僚に手を出したことを後悔させてやる」

――女神（コード・イドゥン）の救済――

「う〝っ？　ず・・・うあああああああああああああ！？」

『ふあああああああ！？』

ユニゾンしている影響か、ウルだけでなくズィプツェーンからも悲鳴が上がった。魔力を根こそぎ奪ってやると、２人のユニゾンは強制解除され、共にドサッと床に倒れ伏した。まだ意識を保てていられるのかウルがうわ言のように「な、なんで・・・こんな・・・」

そう漏らした。

「・・・。ソレウイエル、マカリエル、メナディエルは、オリジナル達の脱出サポートを」

『ウィ！∠（^ ー^ ）』

『ヤー！∠（^ ー^ ）』

『シン！∠（^ ー^ ）』

アリサやスバル達のように、捕らわれていた局員がバラバラになって逃げているかもしれない。脱出ルートを探しているはずだからサポートが必要だろう。で、最後に「ライシエル」の名前を呼ぶ。

「施設内に居る全敵戦力を、順次こちらへ誘導してくれ」

『イエス！∠（^ ー^ ）』

フィヨルツェンとの決闘の前に下準備をしておこう。

「ふふ・・・はははは！　さあ、コア狩りだ！」

敵性戦力のリンカーコアを狩りに狩ってやる。

Ｅｐｉｃａ３８いざ自由へ～Ｅｓｃａｐｅ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

気が付けばあたしは妙なポッドの中で横になっていた。意識も混濁してるみたいで、どうしてここに居るのかを思いだすまでに時間が掛かる。そんな中で「ここ、どこ・・・？」聞き覚えのある声が。

「スバル、ティアナ・・・！」

「アリサさん！？」

「あの、ここは一体・・・！」

３人でそう話し合ってると、ここに居るのはあたし達だけじゃないことに気付いた。ぐるりと辺りを見回せば、円形状のこの部屋の内壁に沿ってポッドが１００基以上並んでる。そんなポッド内には管理局の制服を着た人たちや、騎士団服や神父服、修道服を着た人たちも居て・・・。

「お兄ちゃん・・・？」

ティアナがそう漏らしたから、あの子の視線の先に目をやればティーダ・ランスター一尉がポッドに横たわってた。ティアナとスバルがティーダ一尉の元へ駆け出すのを見届けていると、「あれ？」ある人に目が留まった。

「マリアンネさん・・・！？　それに騎士パーシヴァルも！」

シャルの母親と、トリシュの兄、さらに言えばシャルの父親のリヒャルト司祭もポッドに収められていた。そんな3人だけじゃなくて知り合いの局員や騎士も結構な数が居て、そのうちの1人が「あ・・・れ・・・？」ゆっくりと目を開けた。あたしはその人、「ミヤビ陸曹！」の元へと駆け寄る。元はシャルやルシル達の特務零課・特殊機動戦闘騎隊の一員で、シャル達が局から抜けた今はミッドの鉄道警備隊。だから任務で一緒になったことが何度かある。

「え？・・・バニングス二尉・・・？　バニングス二尉！」

パチッとしっかりと目を開いてあたしを確認した。ガバッと体を起こして辺りをキョロキョロしたかと思えば「ああ！　私としたことが！　馬鹿馬鹿、馬鹿者！」頭を抱えて、自分を罵り始めた。あたしはそんな彼女の肩に両手を置いて「とりあえず知ってることの説明！」を求めた。

「あ、はい！　実は私は――」

ミヤビ陸曹から語られたのは、大隊からスカウトされた自分を囮として使い、内部から大隊の情報を流すための潜入捜査を、シャルやルシルと相談して決めて実行したとのこと。だけど気付いたら今まさにこの状況。・・・って、ここが大隊の本拠地ってことになるんじゃないの。

（あー思い出した。あたし、ガリホディンとの闘いの後、スバルとティアナの奇襲を受けたんだったわ）

「まさか潜入捜査だって気付かれていたなんて。いえそもそも、大隊からスカウトしておいてこんな・・・。うぅ、ごめんなさいシャル隊長～」

ガックリ項垂れるミヤビ陸曹に「落ち込む前に、ここの脱出を最優先！」注意して、ティーダを抱き起こそうとしてるスバルとティアナに「脱出するわよ！」と伝える。あの様子からあたしを撃墜したことは覚えていないみたい。そもそも襲ってきたあの2人が本物だって証拠もない。ううん、今はそんなことは後回しよ。

「あの、でもお兄ちゃんが！」

「待ってください、今お兄さんを連れて行きますんで！」

スバルがティーダ一尉を背負おうとしていた。気を失った人は重心の問題で余計に重く感じるようになる。スバルはサイボーグだからその程度の重さなんて気にならないだろうけど、敵地からの脱出となれば話が違ってくる。

「そ、それに他の人たちはどうするんですか！」

「申し訳ないけど置いていくわ。ミヤビ陸曹の話だとここは大隊の本拠地らしいし、まずはあたし達が脱出。それから助けを求める。彼らの脱出、というか救出はそれからよ」

「極力発見されやすくなるような行動は慎んだ方が良いと思います。背負っていては閉所で隠れることも難しくなるでしょうし・・・」

あたしにミヤビ陸曹も賛同してくれた。そんなミヤビの視線の先には、彼女の上司であるアントワネット・コレフシ三尉の姿。ミヤビは「すいません、三尉。必ず迎えに来ます」って悔しそうに漏らした。

「ですが・・・」「でも・・・」

スバルとティアナは少し渋っていたけど、「はい。判りました」ってティーダ一尉を元のポッドに戻そうとしたその時、「大丈夫。僕たちが護衛しよう」そんな声が掛けられた。

「騎士パーシヴァル、マリアンネさん！」

いつの間にかポッドから確かな足取りで出て来ていた2人に、「あの、大丈夫ですか？」尋ねる。すると2人は頷いて、マリアンネさんは「すこぶる快調なの、不思議ね♪」両肩をぐるぐる回して見せ、騎士パーシヴァルも「僕も問題ないよ」と微笑んだ。

「それもありますが、護衛と言うからにはその・・・」

改めて尋ねると、騎士パーシヴァルは銀色の魔力で創り出した槍を肩に担ぎ、マリアンネさんも苺色に輝く魔力の太刀と小太刀を両手で握った。

「あ、私もデバイスが無くても戦えます！」

――鬼神形態顕現――

ミヤビ陸曹の額から無色の、クリスタルのような角が２本と生えた。あたしも射砲撃くらいならデバイス無しでも扱える。雑魚ならここに居るメンバーだけで倒せるはずよ。

「僕が先行します。えっと・・・」

「ミヤビ、ミヤビ・キジョウです！」

円滑にコミュニケーションをとるために自己紹介をみんなでした後、改めてこの大ホールからの脱出を試みようとした時、出口となるスライドドアがパシュッと開いた。だからあたし達は一斉に身構えて、入ってきた何者かにいつでも攻撃が出来るようにしてたんだけど・・・。

「あー！　やっと起きた～！」

「マリアンネ聖下、騎士パーシヴァル、お体の調子はいかがでしょう？」

入って来たのは予想外すぎの「アリシア！？」と「フィレスさん！？」の２人だった。アリシアを知るあたしとスバルとティアナは目を見開いて驚いたし、フィレスさんを知るあたしとマリアンネさんと騎

士パーシヴァルも驚いた。

「アリシアさん、一体どうして・・・！」

「フィレス、あなたも！？」

ティアナとマリアンネさんの問いにアリシアとフィレスさんは、あたし達より早く目が覚めたことで、一足早く周囲を探っていたと話してくれた。そんな2人がポケットから取り出したのは「デバイス！」だった。あたしの"フレイムアイズ"やスバルの"マッハキャリバー"、ティアナの"クロスミラージュ"はもちろん・・・。

「フェーニクスフェーダー！　よかったです～！」

「僕のロンゴミアント！」

「私のキルシュヴァッサーとキルシュガイスト！」

それぞれ自分の相棒を手に取って、「セットアップ！」して防護服へと変身。アリシアとフィレスさんの話だと、出口の先は一本道の通路で、その左右の壁にはいくつかのドアがあって、そのうちの1つの部屋にデバイスが置かれていたみたい。随分と無用心というか雑というか。

「でもさらに奥の出口はロックされていて出られなくてさ」

「他の部屋でもロックの解除が出来ないか調べてみましたが、専用

の開錠コードを持っている関係者でないとダメみたいです」

「なら方法は2つに絞られるわ。破壊するか、向こうから開けてもらうか」

マリアンネさんの案はどちらも接敵を意味してるわ。危険度はかなり高いけど、もうそんな事でしか出来ないのも確か。あたし達は頷き合って、出口の奥の通路へと移動を始めようとしたら、「うぅ・・・」呻き声が聞こえた。

「誰！？」

一斉に声の出所を見ると、ティーダ一尉がポッドから出ようとしていて、「うあ！」ドサッと倒れこんだ。ティアナがすぐに「お兄ちゃん！」駆け出して、彼を抱き起こした。

「？？・・・お兄ちゃんって・・・。まさか、そんな・・・君は・・・！」

「うん、うん・・・！　私だよ、お兄ちゃん・・・！」

「ティア・・・ナ・・・？　そんな・・・！　まさか・・・！　あぁ、どれだけ僕は夢を見ていたんだろう。妹がこんなに大きくなって、綺麗になったなんて・・・」

伸ばされた手を握り返したティアナはボロボロ涙を流して、何度も「お兄ちゃん！」呼び続けた。感動の再会に水は差したくないけど、

あたしは「スバル！」を呼んで、あの子がさっき言っていたことを実行させる。

「はい、アリサさん！　あたしが背負います！　お兄さん、あたしに負ぶさってください！」

スバルが目の前で片膝立ちして待つけど、ティーダ一尉はあの子に負ぶさろうとはせず、「僕はここに残るよ。自力で歩けないどころか立つことも出来ない。足手まといにはなりたくない」微笑んだ。ティアナが泣きそうな表情を浮かべる。

「足手纏い、か・・・。アリシアさん。彼のデバイスはあるかな？」

「え？　えっと、どんな物かが判れば・・・」

「ティーダさん。君のデバイスはどんなのだい？」

「・・・僕のデバイスは拳銃型のピースメーカーで、その待機形態は腕時計型ですが・・・」

「腕時計は・・・コレかな？」

アリシアが制服のポケットから腕時計を取り出してティーダ一尉に差し出すと、「ああ、ソレだ」受け取って左手首に巻いた。そしてみんなの視線が騎士パーシヴァルに戻る。

「動けずとも戦う術があるのなら連れて行こう。射撃タイプなら問

題ないはずだよ」

「お兄さん。あたしが背負いますから、今度はちゃんと負ぶさってくださいね？」

「いやしかし・・・。僕より小さな女の子に背負わせるのも・・・」

「あ、大丈夫です！　あたしサイボーグなんで！　普通の男の人よりかは力強いですよ！」

「そういう意味では・・・」

女の子に背負われるっていうのが気になるみたいね。でもティアナが「お兄ちゃん、急いで！」急かすものだから渋々スバルに背負われた。スバルは戦えなくなるけど、その分ティーダ一尉の射砲撃って言う火力は維持される。うん、悪くないわね。

「それじゃあ出口に一番近い部屋で待機しておこうかしら。・・・必ず迎えに来るわ、あなた。待っていて」

「あ、こっちです！」

マリアンネさんは夫である眠ったままのリヒャルト司祭にキスをしてから、この部屋の出口へと向かい、あたし達も続く。そしてアリシアを先頭に通路へと出たんだけど、そこで白衣姿の男女３組とバッタリ遭遇。あたし達の姿を見て少し呆けた後、ハッとして・・・

「んな！？」

「贄が解放されてる・・・！？」

「通報！　今すぐ！」

「は、はい！」

「警備隊にも連絡を！」

「了解っす！」

――閃駆――

一斉に慌しくなった。通報されると厄介すぎるから口封じのために動こうとしたんだけど、あたしなんかより早く動いていたマリアンネさんが「はい、ごめんね～」一瞬にして５人を無力化して、残る１人の女性を組み敷いた。

「あら、あなた。それに他の子も、教会技術室の・・・」

「聖下・・・」

女性技術者が居心地悪そうに顔を逸らしたけど、悪びれてはいない様子。その態度に騎士パーシヴァルが「貴様、何だその態度は！栄えある聖王教会の裏切者め！」ガチギレ。ビクッと肩を跳ねさせた彼女が「うるさい」ポツリと漏らしてキッと睨んだ。

「管理局も騎士団も、恋人(カレ)を助けてくれなかったくせに！」

「彼？」

「パーシヴァル、この子の話は後で聞くわ。さあここがどこで、脱出経路を教えなさい」

「っ！？・・・ここは・・・北部ノーサンヴァラント海・オークニー諸島、ナウンティス島・・・です」

マリアンネさんの有無を言わさない凄みに女性技術者の怒りが収まり、ここがどこなのかを話した。その返答に騎士パーシヴァルが「自治領内・・・！」歯噛みした。

「大隊の施設がベルカ自治領内にあるだなんて・・・」

「これではまるで・・・」

「そうよ。最後の大隊は、教会騎士団と繋がっているの。首謀者は騎士団団長リナルド・トラバント。敵には現剣騎士最強のプラダマンテ・トラバントも付いているわ」

あたしとティアナでそこまで言いかけたとき、マリアンネさんの口からその最悪の答えが発せられた。目を見開くフィレスさんやあたし達に騎士パーシヴァルも「事実だ。僕と聖下はその2人の襲撃を受けた」怒りに任せて拳を壁に打ち込んだ。

「そういえばあたしも、ガリホディンと闘った後に・・・スバルとティアナの奇襲に遭ったわ」

あたしの言葉にスバルとティアナ、そしてマリアンネさんと騎士パーシヴァルとフィレスさんが驚きに目を見張った。マリアンネさん達は「ガリホディンも、か」また別の騎士の裏切りに怒りを震えた。

「あたしと・・・」

「私の・・・」

「「偽者・・・！」」

スバルとティアナは、自分たちの偽者が外の世界で好き勝手に活動してることに顔を青褪めさせた。アリシアが「うへぇ。私の偽者もいるかもってことでしょ～。やだな～」って肩をガックリ。

『緊急事態発生、緊急事態発生！　贄が解放された！　技術室および融合騎エルフテに何かしらの異常が起きた模様！　警備隊は技術室へ急行し、贄を確保せよ！　繰り返す――』

「私は技術者であると同時に魔導師でもあります。思念通話くらい出来ます」

アナウンスが流れた原因が自分であると自白した彼女は「騎士団も教会も温いんですよ」とだけ言い捨てて、あとはずっとあたし達を

シカト。だからもう彼女は、ミヤビ陸曹の絞め技で夢の世界へ。

「気付かれたからには隠密行動は必要ないわ。向かって来る者はみな敵性存在としてこれを排除します」

マリアンネさんが閉じたドアを太刀・"キルシュヴァッサー"で斬り裂いて開扉。左右へと伸びる通路へと出る。スバルが「今の技術者に道案内させれば良かったですね」残念そうに漏らした。

「だけどあそこまで非協力的では、かえって嘘のルートを教えられる可能性がある。こうなれば聖下の仰るとおり、向かってくる敵勢力を迎え撃って大手を振って脱出した方が早い」

「言われてみれば確かに。案内されたとしてもその先に待ち伏せをされるのも嫌ですし」

「では右か左か、どちらを行くか。二手に分かれるのは避けたいんだが・・・」

緩やかなカーブを描いているから通路の先は見えない。どっちが正解なのか、それともどっちもハズレなのか、それを確かめようにも騎士パーシヴァルの言うように戦力を分散していい状況じゃない。

「一蓮托生でいいのでは？　みんな一緒であれば恐れるものはないでしょう」

フィレスさんの言葉にあたし達は頷いた。元シュベーアパラディン

の騎士パーシヴァル、同じく元シュベーアトパラディンのマリアンネさん、そしてフィレスさん。シャルやルシル達と同格とも呼べるミヤビ陸曹。あとあたし達。これならよほどの格上じゃなければ負けないはず。

「パーシヴァル。ロンゴミアントを」

「？・・・はい、どうぞ」

騎士パーシヴァルから"ロンゴミアント"を受け取ったマリアンネさんは、「よし」と床に"ロンゴミアント"を立たせ、パッと手を放した。支えがなくなったことで派手な音を立てて床に転がった"ロンゴミアント"。

「なああ！？　何してるのですか聖下！　いくら頑丈とは言えデバイスですよ！　酷いですよ！」

慌てて"ロンゴミアント"を拾う騎士パーシヴァルを余所に、マリアンネさんは穂先の向いた方に指を差し、「あちらへ行きましょう」歩き出した。スタスタ歩いてくマリアンネさんにあたし達も付いて、最後尾に付いてくる騎士パーシヴァルが「キルシュヴァッサーでやれば良かったでしょうに」愚痴をこぼした。

「そういやアンタはどういった経緯で拉致られたの？」

「私？　私は、フェイトと第５９管理世界サピンでのブラックマーケットの摘発の時ね。大隊がマーケットの関係者や客を殺しまくる

のを止めようとしてたんだけど、不意打ちを食らったんだよね～。いやぁ、参った参った」

陽気な声と態度だけど、アリシアの纏う雰囲気は悔しさやら怒りやらがにじみ出てるわね。続くフィレスさんは、仕事終わりのシャワータイム中に拉致。ミヤビ陸曹はさっき聞いたとおり潜入捜査に失敗。

「私とスバルは、おにい――コホン、兄の偽者軍団との戦闘に敗れ、気が付いたらここに・・・といった感じです」

「ま、待ってくれ、ティアナ！　僕の偽者、しかも軍団！？」

「うん。クローンからのサイボーグ化と言った感じだった・・・」

「はは・・・。何もかもが夢であってほしいと願うばかりだよ。ティアナはいつの間にか大きくなっていて、外じゃ僕のクローン？が悪行を働いているなんて。これならまだ眠っていた方が良かったかもしれない・・・」

ティーダ一尉の言葉に、「そんなこと言わないで！」ティアナが悲鳴のような怒鳴り声を上げた。彼の今の言い方は、死んでいれば良かった、とも取れるものだったし、ティアナが怒るのも仕方ないわよね。

「またこうして生きて逢えたのに・・・」

「ティアナ、すまない。そういう意味で言ったわけじゃないんだ。ただ寂しいだ、僕だけが時間に置いてけぼりを食らったみたいで。ティアナの成長をしっかり見たかったし、僕自身も局員としてもっと頑張りたかった。・・・ティアナ。僕は今、公ではどういう扱いになってる？」

「密輸されたロストロギアの運び屋と一緒に、暴走したロストロギアの爆発に巻き込まれて・・・殉職、と。あ、でもこうして生きていたんだから、復職できるはず！」

「だと嬉しいな・・・」

ティーダ一尉はこれから苦労するかもしれないけど、兄のために管理局に入って、執務官まで上り詰めたティアナが一緒ならきっと大丈夫でしょ。

「ところで、この中で今の管理世界情勢を知ってる子っているかしら？　私、大隊と呼ばれる組織について知らないのよ」

マリアンネさんのその話題に、やっぱり騎士団の独立を宣言したマリアンネさんが偽者だってことが判った。その辺りの事はまだ知ってるあたしが、あたしが拉致されるまでの間に何が起きたのか話そうとした時・・・

「見つけたぞ！」

「聖下と騎士パーシヴァルと騎士フィレスは強敵だぞ！」

「心して掛かれ！」

いくつもあるドアから神父服や修道服、大隊の制服である学ランやらセーラー服を身に纏った男女がわらわらと出てきた。迎撃に入るためにあたし達はデバイスを構えたんだけど・・・。

「あーらあらあらあら♪　いけない子たちね。仮にも騎士団に属しているのなら、顔を合わせたらまずは挨拶からでしょう？」

マリアンネさんは"キルシュヴァッサー"と"キルシュガイスト"の刀身に風を纏わせ、こちらに向かってくる大隊のメンバーへと向かって・・・

「風牙・・・真空烈風刃！」

風の刃を複数巻き込んだ風の壁が通路いっぱいに広がって、「うあああああ！？」あたし達を捕まえに来た連中を1人残らずふっ飛ばしながら防護服やら防御魔法を切り裂いた。たったの一撃で連中は全滅して、僅かに呻き声を上げて床に倒れ伏した。

「すご・・・」

「さ、さすがシャルさんのお母さん、だね・・・」

「パーシヴァル。一番手前の彼だけ意識を保っているわ。嘘を教えられるのを前提で話を聞きましょう」

「了解です」

呻き続けてる学ランを着た男の襟首を引っ掴んでズルズル引き摺って来た騎士パーシヴァル。そして「貴様。外へ通じるルートを教えろ」髪を引っ張って顔を無理やり上げさせた。結構容赦ないのね・・・。

「別に嘘でも構いませんよ？　嘘であったと知ったその時になれば、あなたを酷い目に遭わせますが♪」

すごい魅せられる笑顔だけど、口にしてる内容はかなり危ない。男は「へっ。どうせ雇われの身。これ以上粘るのも馬鹿らしい」なんて言って、倒れたままで降参ポーズ。

「つうか、そろそろ手を離せよ。ハゲたらどうすんだ」

騎士パーシヴァルが男の髪から手を離した。ふぅ、と一息吐いた男が胡坐をかいて「マップを出せばいいんだろ」空中に両手を翳してモニターを展開した。確かにマップのようなものが表示されたんだけど・・・。

「王よ。無垢なる我らを楽園へ誘いたまえ・・・！」

男がなんかボソボソ呟いたのが聞こえた。するとティアナが「自爆します！　離れて防御！」叫んだ。頭で考えるより先に体が反応して、あたしは一足飛びで後退しつつ半球状のバリア・サークルプロ

テクションを発動すると同時、ティアナの言ったように男が自爆した。

「くぅぅ・・・！」

爆炎と黒煙で視界は完全に潰されて、衝撃波でバリアが軋みを上げる。衝撃波と炎をなんとか耐えて、残るは煙だけとなった時、あたしの魔法陣以上の広さを持つ赤いミッド魔法陣が展開された。

「え、なに！？　うそ、転送トラップ！？」

浮遊感と一緒に視界が真っ白に染まって、気が付いたら「バニングス二尉！」ってあたしを呼ぶ「ミヤビ陸曹！」の２人っきり。結構広い部屋のどこにもスバル達の姿はないわね。

「分散されてしまいましたね・・・」

「ええ。誘い込まれたかもしれないわ」

そんな話をしていると案の定ドアが開いて、「贄を確認。確保に移ります」学ラン姿の男が数人入ってきた。でもこっちに陸戦ＳＳランクのミヤビ陸曹が居るわ。

「バニングス二尉はサポートをお願いします。私はフロントアタッカーで・・・潰します」

ミヤビ陸曹がズンッと1歩足を踏み出すと、それだけで鉄の床が足

型に沈んだ。その光景に男たちも「うっ・・・」たじろいで、彼女が1歩近付くたびに連中も1歩と後退してく。

「何ですか？　私たちを捕まえるのですよね？　来ないのなら、こちらから行きますよ！」

迫力満点なミヤビ陸曹が魔力を全身から放出。床にヒビが入るほどの出力と濃度に、とうとう男たちがドアの奥へと引き返して行って、ドアも閉まった。

「や、やるわね・・・」

「はふぅ、緊張しました～」

ホッと胸を撫で下ろすミヤビ陸曹。そういえば緊張しいだったわね。さて、追い払ったのはいいけど、ここからどうしようかって考えてたところで、『も～しも～し！』どこからか女の子の声が聞こえてきた。

「あ、あなたは！」

「あれ！？　あんた、確かルシルの・・・ステガノグラフィア！」

いつの間にか側に展開されてたモニターには、ルシルの電子戦術式ステガノグラフィアを構成するプログラムの1体が、『見つけました～♪』小さな手を振ってた。

『ステガノグラフィア、マカリエル！　マスターの指示で、みなさんを安全ルートでここから脱出するためのお手伝いをします！ノ（^ー^）』

そう言ってマカリエルが笑顔で敬礼した。

Ｅｐｉｃａ３９－Ａ堕ちた騎士～Ｓｃｈｌａｇｅｎ　Ｐａｌａｄｉｎ～

†††Ｓｉｄｅアンジェリエ†††

聖王教会と教会騎士団はやはり・・・最後の大隊と繋がっていた。その結論は前々より出されていたにも拘らず、心はズキズキとショックで痛む。そして今、私は・・・私たちオランジェ・ロドデンドロンは、私たちを殺害するべく投入された大隊の主力級との交戦に入っています。

「ほっほっほ！　どうしたのだ、アンジェリエよ！　普段のお主なら余裕で捌けよう！」

「ぅく・・・！」

フレイル型アームドデバイス・"アグリガット"は、両刃や片刃の短剣、ドリル、斧刃、槍の穂先、杭、金槌等といった、斬撃と打撃と刺突が一度に行える武器が、直径６０ｃｍの鉄球に幾つも付いている。太いワイヤーと繋がるそんな鉄球を振り回しつつ、親しげに私の名前を呼ぶ仮面持ちを睨み付ける。

「どうして・・・何故あなたまで大隊に組しているのですか・・・！？」

高層ビルの屋上で対峙する獅子の仮面を被った男性を問い質す。彼は「ほっほっほ！」と聞き慣れた笑い声を上げるだけです。デバイ

スが"アグリガット"であり、魔力光も黄緑色で、何より口調も声も変えていません。もう正体を隠す気もないようです。

「なんで、だと？」

――城砦穿ち――

黄緑色の魔力を纏った鉄球がこちらへ向かって飛んで来きました。シールド、バリア、フィールド、結界等、防御系魔法を問答無用で穿つ必殺の一撃です。あれを防いではいけない。私は"ジークファーネ"の石突を床に勢いよく突きつつ、床を蹴って宙へと上がる。直後に鉄球は私の居た場所を通過していき、そして私は今だ伸び続けるワイヤーに降り立つ。

「おおおおおおおおッ！」

ワイヤーの上を駆けながら、「シュラーゲンファーネ！」"ジークファーネ"の魔力幕を竿に巻き付けて、上段に振り上げる。

「シュテルケン・・・シュラァァァァクッ！！」

ただ全力で、私の打撃攻撃の1つを繰り出した。振り下ろす"ジークファーネ"を、この方は上半身を反らしてからの「ふんっ！」魔力付加頭突きで迎撃しました。"ジークファーネ"を持つ両手が上に弾かれて、私自身もその場から跳び立って距離を取る中、すごい勢いで戻ってくる鉄球に注意しながら着地する。

「おーおー。仮面を付けていたのを忘れていた」

バキバキと仮面が砕けていき、目出し帽が顕になる。彼は「ええい、もうやめだ」と目出し帽を脱ぎ捨て、その素顔を晒しました。白髪交じりの黒髪はボサボサに乱れておりましたが、彼は"アグリガット"を床に突き立て、両手でかき上げてオールバックにしました。

「シュラーゲンパラディン、ラヴェイン・ビッケンバーグ卿・・・！」

ＶＳ・―・―・―

「応とも！　騎士とは主君に仕え、主君の覇道を切り開く剣！　犯罪者などつまらん小物共の逮捕などつまらん！」

卿が蒼銀に輝く騎士甲冑姿（フルプレートアーマー）へと変身しました。あの姿の前に私は一体どれだけ膝を折ったことか。

「俺たちはそのようなオママゴトに嫌気が差したのだ！」

「な！？　何が嫌気ですか！　それが役目ではないですか！」

「歳若く、本当の決死戦を知らぬからそう言える。知らんだろう？　平定前の次元世界の混沌を。あの時代は良かった。非殺傷設定などという、つまらんモノもなかったからな。俺ももう歳だ。最期くらいは騎士らしく、命を懸けた戦いをし、そして死にたいのだ」

私の憧れで、いつか追い付きたいと思っていた卿の、どうしようもなくくだらない動機。犯罪者に落ちぶれても尚、卿に抱いていた尊敬の念も今ので完全に消え失せてしまった。卿はもう騎士ではなく犯罪者と割り切ってしまおう。

「ランツェファーネ・・・！」

"ジークファーネ"を槍のように構え、円錐状に巻いた幕を竿頭に固定して槍の穂と成す。

「カートリッジロード！」

石突と竿の連結部分が上下にスライドして、３連装回転シリンダーシステムが起動。カートリッジを１発だけロード。

「ほっほっほ！　打撃騎士にして槍騎士、そして鎌騎士。器用なものだが、それら一切合財が俺に通じないことは承知だろう！」

「（このような小細工を使わなければ、ラヴェイン卿に届かない・・・）そう思いますか？　あなたを打ち倒しパラディンになるべく、日々鍛錬をして――」

――ゼクンデアングリフ――

高速移動魔法発動の手順となる強い踏み込みを行い、一足飛びで卿へと突進。狙うは卿の脇下。そこだけが装甲に覆われていない唯一の弱点。周囲の景色がスローになるほどの高速移動からの、「います！！」刺突を繰り出す。

「ほっほっほ！　その手はこれまでに何十、何百と見せつけられているぞ！」

卿が脇下を庇うように体をずらしたことで、穂先がちょうど心臓直撃コースになるけれど、分厚い胸部装甲の前に"ジークファーネ"が弾かれてしまう。でもそれで終わらない。"ジークファーネ"を反転させ、石突の両刃を切り上げますがそれも躱される。

「っと、危ない危ない！　それ、お返しだ！」

横薙ぎに振るわれる"アグリガット"による打撃を、「っ・・・！」深く伸脚することで躱す。頭上を通り過ぎた"アグリガット"の風圧に髪が乱れる中、"ジークファーネ"を卿の股下に通し、肩に竿を乗せる。

「せぇぇぇーーーーい！！」

「むお！？」

てこの原理を利用して卿を後ろ向きに転倒させる。ものすごい重さだったけれど、そこはベルカ式自慢の自己強化による膂力を限界まで引き上げるという技術で、卿をひっくり返すことに成功した。卿が置き上がるより先に立ち上がった私は「卑怯と言わないでくださいね！」と、ズンッと両前腕を両足で踏み付けた。

（ルシルさんからは、合図が来るまでは、私たちがどのような状況に陥っていようと偽者のルシルさんを守りながら時間を稼いでほしいと言われていますが・・・！）

卿との闘いとなってしまった現状、私は打撃騎士の1人として卿との闘いを望んでしまった。この戦いが終わったら、素直にお叱りを受けよう。穂先を卿の左脇へと向け、いざ突き刺そうとするも卿は「ふんぬ！」全身より魔力を放出した上で両腕を振って力ずくで私を振り落としてとしてきました。

「む・・・！」

足を乗せていたのが腕ということもあって私が体勢を崩してよろけたところに、卿は私の右足首を掴んで、「それ！」放り投げてきました。屋上の外にまで投げ飛ばされた私の身は宙に投げ出される。飛行魔法を使えない私は、足元に魔法陣の足場を展開して着地。

「まだです！」

――ゼクンデアングリフ――

魔法陣を蹴って、再度卿への突進を敢行。卿は鈍重なフルプレートを騎士甲冑としているため、一度倒れると起き上がるまでに時間が掛かります。今だに上半身のみが起き上がっている状態。立ち上がる前になんとしてもダメージを与えておかないと、こちらが圧倒的に不利になる。

「でぇぇーーーい！」

「無駄だ！」

迎撃のために振るわれた"アグリガット"の鉄球と穂先が激突し、激しい火花を散らす。互いのデバイスが大きく弾かれますけど、卿が自由に出来るのは空いている左手のみ。対する私は体が宙にありながらも全身を使える。

「レームング・ツーフューゲン！」

その空いている左手首を改めて踏み付けつつ、穂と化している幕の魔力を電気変換。弾かれたばかりで伸びきっている右腕によって隙だらけな脇目掛けて、二度目の刺突を繰り出す。確かな手応えに「入った・・・！」と確信できた。

「むぐぉ！？　・・・ほっほ、容赦ない一撃だな、アンジェリエ嬢ちゃん！　惜しむらくは非殺傷設定だということだ！」

今の一撃は、刺した対象の筋肉に微電流を流して強制的に麻痺を引き起こさせるもの。それゆえに卿の右腕がビクンビクンと跳ねています。さらに左脇にも今の一撃を、と欲張ってしまった。

――城砦砕き――

「っ！？」

いつの間に伸ばしていたのか、鉄球が私の真横から飛来するのを視界の端で捉えた。攻撃を中断することは出来ても、防御魔法を発動するにはすでに手遅れなほどの接近を許してしまった。"ジークファーネ"の竿を盾代わりにしつつ卿の上から退こうとした直後に、「うぐぅ・・・！」衝突。

「きゃあああああ！」

踏ん張りきれなかった私は殴り飛ばされてしまった。屋上を飛び出し宙に放り出されるどころか今度は隣のビルの外壁を突き破り、1フロアの床を何度もバウンドしながらガラスの外された窓からまた

外へ。目が回り、バウンドしたことで全身が痛み、地面へと墜落している中・・・。

――城砦砕き――

私が通って来させられたビルの外壁を鉄球が突き破ってきた。私は「解除（アウフヘーブング）！」というキーワードを口にして、円錐状の穂となっていた幕を本来のヒラヒラの幕へと戻す。

「レフレクスィオーンファーネ！」

幕を一回り大きく広げ、「ここ！」ベストなタイミングで鉄球を幕で包むけれど、たださえ破壊効果に特化した鉄球、３秒とせずに幕を砕いた。ですがその僅かな猶予内に軌道を逸らすことが出来、鉄球は明後日の方へと飛んでいった。

「ジークファーネ！」

改めて幕をバサッと展開しつつ、街灯のポールに幕を巻き付けて勢いを殺してから地面に着地。鉄球が卿の元へと戻っていくのを見送りつつ、私と卿を閉じ込めている結界内の至る所に展開されているモニターを見る。イリス達がそれぞれの大隊メンバーと決闘している様子が映し出されています。

（ルシルさん、アイリさん・・・）

お２人は、大隊を罠に掛けるべくルシルさんが仕掛けた使い魔（フェイク）、〝

エインヘリヤル"です。性格や魔力パターンなどを反映している為、撃破されない限りは本物との区別が付きません。その代わり実力は半分あるかどうか、らしいです。

（・・・イリス達の様子がおかしいですね）

今のルシルさんは除くとして、イリスとルミナとセレスは飛行魔法を使わずに空より飛来する弾道ミサイルを、スキルや魔術のみで迎撃しています。

「他の嬢ちゃん達が気になるか？」

ヒュー！と何かが落下してくる風切り音と共に降って来たのは「ラヴェイン卿！」です。麻痺が未だに残ってくれているようで、腕がビクビクッと痙攣しているのを確認できる。

「まったく。仮にもパラディンなのだから、ＡＭＦやミサイルなんぞに頼るとはな」

「ＡＭＦ・・・！」

まさか、ルシルさんが仰っていた魔術にすら干渉できるという特別なものでしょうか。卿は特にルミナと闘っている翁の仮面持ちに苛立ちを覚えているようでした。卿がパラディンと言っていることから、現拳闘騎士最強のファオストパラディンのガリホディンだと思う。

「・・・つまり言いかえれば、私を相手にするのにＡＭＦもミサイルも必要ないと言うことですか？」

「そうは言ってないぞ。あのようなズルをせずに闘いを楽しみたい、というのが俺の信条だ。ＡＭＦで相手を弱らせ、ミサイルで注意を逸らす、などという姑息な手段は嫌いだ。だから提案されても断った」

そうでした。卿は・・・いえ、卿だけでなく古参のパラディンはみな、騎士であることを誇りとしていました。愚直なまでに、竹を割ったような、一本槍な性格。だからこそ私たち下の騎士は、あなた達に憧れていた。黙っていた私を見て、卿が「信じられんか？」と聞いてきました。

「いいえ。それでこそ挑み甲斐があるというものです！」

"ジークファーネ"を振り回した後、地面に石突きを突き立てて「シュラーゲンファーネ」もう一度幕を竿全体に巻き付けての完全打撃仕様と成す。

「橙石楠花騎士隊（オランジェ・ロドデンドロン）所属、アンジェリエ・グリート・アルファリオ」

「っ！　ほっほっほ！　銀薔薇騎士隊（ズィルバーン・ローゼ）所属、打撃騎士（シュラーゲンパラディン）、ラヴェイン・ビッケンバーグ」

「「いざ参る！」」

同時に地を蹴って突撃しつつ、デバイスを大きく振りかぶる。卿は左手だけで"アグリガット"を振るい、私は出来るだけ回避に注力しつつ「でぇい！」２ｍ近い巨体のあらゆる箇所に打撃を加えていく。

「なるほど、確かに腕を上げたな！　俺の攻撃を完全に見切っている！　始めからこうして近接戦を仕掛ければ良かったろうに！」

その近接戦に持ち込めないほどにあなたの隙が無かっただけのこと。あぁ、もっと早く名乗りを上げての決闘に持ち込めていれば良かった。

「ええ！　日々、私より強い騎士（しんゆう）たちと鍛錬を積んでおりますゆえ！」

オランジェ・ロドデンドロン内での模擬戦は、私だけでなく隊のみんなを強くしました。ルシルさんには本当に感謝を。彼が卿の戦闘を完全に模倣してくれたおかげで、こうして卿の攻撃をギリギリとは言え回避できている。

「おおおおお！」

何度目かの脇腹への直撃。分厚い装甲に加え、付加されている防御魔力の影響で決定打にならない。避けられているのに、当てられているのに、まさかここまでビクともしないなんて。

「しかし惜しい！　アンジェリエ嬢ちゃんも理解しているだろう！　お前の魔力では、攻撃力では、俺の甲冑に傷を付けられない！」

振るわれる"アグリガット"を躱すことにも限界がいずれ来る。それまでに、どうしても防御膜くらいは破っておかないと勝てない。

「（ラヴェイン卿は防御に魔力を全振りしていますから、一度でもその防御を破ってしまえば再展開は出来ない・・・！）だから！！」

――シュテルケンシュラーク――

顔面に向かって突き出された鉄球を「くぅ・・・！」上半身を右横に傾けることで躱して、傾いた勢いのままに両手持ちした"ジークファーネ"を卿の右脇腹に打ち込んだ。でもまた、バチッと私の攻撃魔力と卿の防御魔力が弾かれ合った。このままではこちらの魔力と体力が尽きてしまう。

（ルシルさんが・・・！）

ようやく私たちに課せられていた時間稼ぎを終えていいという合図である、"エインヘリヤル"のルシルさんが消失したのをモニター越しに確認できました。

「ここまで、ですね・・・」

「なに？」

一切の攻撃を中断して卿より数mと距離を取る。卿は怪訝そうな目を向けてきますが、私は無言で"ジークファーネ"の石突を地面に

突き刺して、空いている左手を胸元に持って来る。

「我が遠きご先祖、チェルシー・グリート・アルファリオ様。そのお力を今お借りします」

――昇華――

魔力に神秘を載せての魔術師化を行う。

・――・――・回想です・――・――・

「しっかし、大隊に、ルシルクラスの魔術に干渉しうる装甲を造れる技術力があるなんて」

「それに加えて、これまで以上に強力なＡＭＦもあるので・・・。ルシルさんが一緒でなければ私は確実に殺されていました・・・」

トリシュとルシルさんが異世界にて大隊の兵器に襲撃された内容を伺いました。イリスとトリシュが頭を抱えるのも解かります。現在、この次元世界で頂点に立てるのは魔術師でしょう。ですが、その魔術師や、一般的な魔導師を両方弱体化できる兵器が投入されるとなると・・・。

「ただでさえイリスやセレスのような魔術師化や、ルミナのようなスキルを持っていない私たちは・・・」

私とトリシュとクラリスは、スキルも無ければ魔術師化も出来ない。

今後の戦いで私たちは足手纏いになるのでは？という不安が湧き上がってくる。私の言葉にトリシュも同じように不安そうな顔を浮かべ、クラリスはいつもどおり黙々とリンゴを齧るだけでした。

「魔術師状態で魔力を込めたカートリッジを渡せば良いと思うけど？」

「だけど明日にも襲われるかもしれない中で、トリシュ達分のカートリッジに割ける魔力ってある？」

「むぅ。それはそうだけど・・・」

私たちが不甲斐ないばかりにイリス達が悩んでいる。悔しさに項垂れている中、「最後の手段を取らざるを得ない、か」とルシルさんが漏らしました。私たちの視線が一斉にルシルさんへと向きます。

「ルシル、何か手段があるの？」

「魔術師オーディンの血を受け継ぐシュテルンベルク家の一員であるトリシュ、そしてセインテスト家やフライハイト家にカローラ家と同じ、魔術時代より続く血族であるアルファリオ家とヴィルシュテッター家の一員であるアンジェとクラリス。君ら3人とも、魔術師化できる才はあるんだよ」

ルシルさんのその言葉に私とトリシュは「本当ですか！？」と前のめりになり、クラリスはやはり落ち着いたまま、バナナを頬張っていました。

「ただ、先ほども言ったように最後の手段とも言える。魂に刻まれた魔術師だった頃の記憶を呼び起こすことになるため、それが魂に何かしらの影響を及ぼす可能性があるんだ。俺やセレスは幼少より扱っていることもあって問題ないし、シャルも前世の記憶と共生していたから負担は無いが・・・」

「「「前世の記憶・・・？」」」

何故、ルシルさんが私たちの前世を知っているのかが判りませんけど、今はそんな疑問など捨て置くだけ。私とトリシュは「それでもお願いします！」と頭を下げてお願いをし、遅れてクラリスが「じゃあ私も。これ代金」と食べ掛けのバナナを差し出すと、「間接キスなど許さーん！」イリスが代わりにバナナを一気食いしました。

「いや、やっぱりやめよう。魂に干渉するのはさすがに危険が過ぎる。シャル、セレス。今からカートリッジを作るぞ」

提案したルシルさんが却下を下しましたが、それはイリス達の負担になるもの。私たちだけ甘えるわけにはいかない。だから「ルシルさん！」と改めて頭を下げる。

「ルシル、やってあげたら？　自分が役立たず、足手纏いみたいなことになるのって、結構つらいものでさ」

「それはそうかも知れないが・・・」

イリスからもフォローが入り、ルシルさんはしばらく悩んだ後に「

判った。３人の意思も変わらないようだし」と言い、まず私とクラリスを横並びに立たせました。そしてアイリとの「ユニゾン・イン」を果たし、魔術師化します。

「背中に触れるぞ」

トンッと私の背中に触れるルシルさんは「胸部の痛みは覚悟しておいてくれ」と告げた後、ズンッと魔力を私たちの体内に打ち込みました。物理的な衝撃は無かったのですが、全身が押し潰されそうな衝撃が体内を駆け巡った。

「リンカーコアに神秘付加された魔力を打ち込んだ。さらに、我が手に携えしは確かなる幻想」

複製したものを扱う際の呪文を唱えたルシルさん。直後、ふわっと浮遊感が襲ってきて、眠りにつくような感じです。フッと閉じていたまぶたの裏まで光が差し込んだのが判り、少しずつまぶたを開けてみる。

「っ！？」

そこはフライハイト邸ではなく戦場でした。血に濡れた大地には夥しいほどの死体が無残に転がっています。その光景に思わず吐き気を催すけれど、臭いもないため実際に吐くことはなかった。音も何もないですが、目だけはしっかり機能しているおかげで、私がここに連れて来られた理由が判った。

「エメラルドグリーンの髪に桃色の瞳。私にそっくり・・・というよりは、私がそっくりなのでしょうね」

私の学生時代と変わらない姿をした少女が、イリスやクラリスと瓜二つの女性と話をしていました。おそらくここは魔術師時代。そしてあの女性たちが私たちの先祖であり前世。私の前世と思しき少女は、様々な武器を手に襲い掛かってくる者たちへ向かって「種・・・？」らしき物をばら撒きました。

「指揮棒？のようなものが武器なのでしょうか・・・」

少女が指揮棒・・・というよりは杖（タクト）のようなものを振りますと、地面に落ちた種が血溜まりを勢いよく吸収し、ものすごい勢いで極太の赤黒い蔦や、巨大なハエトリソウ、蔦の付いたサボテンなど、見たこともない植物が生えてきました。そこから先は一方的な蹂躙です。蔦で薙ぎ払われ、ハエトリソウに丸呑みにされ、サボテンで全身に穴を開けられ、それはもう酷い光景でした。

「これがアルファリオの魔術・・・」

攻撃の魔術は殺すことを前提とした効果ばかりだと伺ってはいたけれど、こうして実際に目の当たりにすれば想像以上に凄惨なものでした。少女はイリス達の前世と分かれ、複数人を引き連れて戦場を駆け巡りました。私もそれに付いて回ったのですが、ある時ふと、「あれ？」と違和感に気付いた。

「解かる・・・。少女の魔術の術式が・・・！」

どうすれば発動できるかなどの知識が頭の中に入り込んできた。その日の戦闘は終わりを向かえたようで、少女はイリス達の前世と合流を果たして、共に無事だったことを確認できたのを喜び合うようにハグしました。

「こんな昔から、私たちは繋がりがあったのですね」

そんなことを思っていると、フワリと浮遊感が襲ってきました。そして視界がぼやけ始め、完全に閉ざされた。

「・・・ジェ、アン・・・、アンジェ、アンジェ！」

「っ！」

ハッとして目を開ければそこはフライハイト邸でした。私とトリシュとクラリスははロングソファの上に寝かされており、２人は未だに眠っているようです。私は名前を呼んでくれていたイリス達に応えるべく上半身を起こそうとしましたが「ぅあ・・・？」倦怠感で上手く起こせなかった。

「今しばらくはそのまま休んでいた方が良い。・・・アンジェ、アルファリオ家の魔術は理解できたか？」

ルシルさんの問いに「はい」と答えると、ルシルさんは私が魔術師化できるようになったことを教えてくれました。確かに先ほどまでとは体内で渦巻く魔力の質が変わったような気がする。あとは魔術

師化のＯＮとＯＦＦの切り替えの練習をしようとのことです。

「アンジェ。念のためにコレを渡して置くよ」

ルシルさんが私に手渡してくれたのは１粒の種でした。

・―・―・終わりです・―・―・

今朝早くより練習していた切り替えを行い、魔力に神秘を付加することに成功。"ジークファーネ"の幕を一旦解除し、魔術効果の載った幕を再展開。

「ほ、ほっほっほ！　ガラリと雰囲気が変わったな。一体、何をしたのだ？」

「・・・正直に言いますと、このような形であなたに勝つことは大いに不満で、自分の弱さに悔しさがあります。が、今はそんな甘いことは言っていられません。ラヴェイン卿、これで終わりです」

――シュラーゲンファーネ――

幕を竿全体に巻き付ける。卿は僅かに伸ばした鉄球をブンブン振り回しつつ、「勝利宣言か！　いいぞ！　俺に勝って見せろ！」と鉄球に魔力を付加しました。

「そーれ！　ゆくぞ！」

――城砦穿ち――

高速で鉄球が突っ込んで来ますが、私は"ジークファーネ"を軽く振るって迎撃。鉄球が竿に巻き付いている幕に衝突すると同時、鉄球だけが轟音と共に砕け散りました。卿は目を丸くして呆けています。現状の処理が追い付かないのでしょう。

「はあああああああ！」

「っむ・・・！」

両手持ちしている"ジークファーネ"を、卿の左肩目掛けて振り下ろした。先程までは弾かれてばかりでしたが・・・

「うごおおおおおお！？」

卿の防御魔力膜や甲冑を容易く粉砕し、卿自身を地面に沈めました。クレーターの底で呻き声を上げている卿は掠れた声でいつもの笑い声を上げ、「合格だ、アンジェリエ嬢ちゃん」と言いました。

「念のためにあなたを拘束します」

コンクリートの地面へと種をポトッと落とし、"ジークファーネ"の石突きでツンと突く。そして魔力を種に通しながら「絡み蔦」と術式名を口にする。種がパカッと割れ、そこより勢いよく伸びる細い蔦6本が卿を拘束しました。

Ｅｐｉｃａ３９－Ｂ堕ちた騎士～Ｒｅｉｔｅｒ　Ｐａｌａｄｉｎ～

†††Ｓｉｄｅクラリス†††

面倒くさいことに最後の大隊が仕掛けてきた。しかも今回はガチで私たちを殺しに来てる。私たちオランジェ・ロドデンドロンのメンバーを、大隊の一員とサシで闘い合えるように結界で閉じ込めた。

（私に宛がわれた相手は・・・）

空を見上げれば、純白の鱗を頂く全長２ｋｍ近い龍がグルグルと回っている。最早その正体を隠す気もないみたい。

「騎乗騎士の頂点・・・レイターパラディン、ガリフット・ラッヘンマン・・・！」

ＶＳ・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・ＶＳ

其は誇りを捨て堕ちた騎乗騎士ガリフット

私が目指し、打倒を夢見ていたパラディン、ラッヘンマン卿だ。教会と騎士団が大隊と繋がっているのはもう判ってたし、ラッヘンマン卿のような幹部級の騎士が敵に回ってるかもしれないということも判ってた。

（だからショックじゃない。それどころか、ここで打ち倒すことが出来るっていうチャンスが巡ってきたことに感謝だ）

龍の額に仁王立ちしているラッヘンマン卿を見上げる。獅子の仮面や目出し帽を脱ぎ捨て、黒服じゃなくて本来の漆黒のフルプレートアーマーに身を包み、両刃ナイフ型デバイス・"シュレッケン"を掲げて、オーケストラの指揮者のように振るってる。

「砲撃が来る・・・！　ワイバーン！」

『僕に任せておけ！　何が公爵だ！　今度こそ一泡吹かせてやる！』

脳内に響くワイバーンの声。やんちゃ坊主みたいな性格で、声も本当に男の子のよう。もう８００歳くらいなのに。

「クラリス！　君とこうして闘うのも今日この限りだと思うと、僕も少し寂しいよ！」

還暦をとうに越えてるのに声色と声量の若さは３０代後半。肉体だって普通に若いし、一体どんな手を使って若返ってんのか判らない。騎士団内じゃ吸血鬼なんじゃない？って噂が飛び交ってる。

「でも安心するといい！　君との思い出はすべて、僕の心の中で芸術品となって永遠に生き続ける！」

「ラッヘンマン卿！　私、あなたのそんな芸術家気取りが・・・昔から大っ嫌いだった！」

『年寄りが無理に若作りして馬っっっ鹿みたいだよ！』

「そうかい！　芸術の何たるかを知らない小娘に教え込ませてあげよう！　ブネよ！」

ラッヘンマン卿の数いる召喚獣（ドラゴン）の中でも最高位、公爵級龍ブネの口から純白の魔力砲が放たれた。私が跨ってる「ワイバーン！」に呼び掛けて、砲撃を躱しながら接近するように言外に指示を出す。連発されてくる砲撃の合間を翔け抜けて、ブネとラッヘンマン卿よりさらに上に行く。

「ワイバーン！　プロミネンスカノーネ！」

『おーっし！』

火炎を細く圧縮させた熱線をワイバーンに吐かせる。胴回りが１００ｍ以上ある巨体を誇るブネは、回避を選択せずに直撃を受け入れた。ワイバーンのブレスは強固な鱗に弾かれるけど、その衝撃はラッヘンマン卿にも届いて・・・はいる。

「やっぱり鎧の重さもあって吹っ飛ばせないか・・・！」

『何が公爵級だよ！　爵位なんか・・・爵位なんか・・・飾りだってことを、僕が教えてやるんだからな！』

「そうだね。じゃあ、少しだけ独りで頑張って」

『ほえ？』

ワイバーンの頭をポンポン優しく叩いた後、私はラッヘンマン卿と同じ舞台――ブネの背中へと飛び降りる。頭上のワイバーンから『どえええ！？　主！？　主ー！』驚きの声が届く。

「好きなように闘って！　こっちはこっちで、あなたとブネの闘いに合わせて動くから！」

『ああもう！　リっちゃんの馬鹿ぁぁー！　いいよ、じゃあ僕の雄姿をしっかりと見ていてよ！』

ワイバーンはフンッて鼻を鳴らしながらブネから距離を取って、その機動力を活かして周囲を翔け回りながら・・・

『でぇぇぇーーーーい！！』

――ブラオ・インフェルノ――

青い炎の拡散砲を吐いて、ブネの胴体に攻撃を加えてく。けどほとんど鱗で弾かれてる。ブネは何度も炎を吐かれながらもその偉容を崩さず、結界内上空をただ円を描くように翔け続ける。

「クラリス。君の下僕に、僕の芸術品（ブネ）に攻撃するのを止めるよう言ってくれないか？　あの程度の火力ではブネには傷1つ付かないだろうが、鱗に万一焦げついてしまっては笑えない」

「わざわざ私たちをここに来るように仕向けて、こうして襲撃してきたお前の、そんな甘い言葉に私が頷くと思う？」

「言ってみただけさ」

方天戟型アームドデバイス・"シュトルムシュタール"の柄を両手で握って、ラッヘンマン卿と向かい合う。そしたら彼・・・ううん、アイツは"シュレッケン"を突き出してきた。決闘前の挨拶のようなもので、私は"シュトルムシュタール"の2つある三日月形の刃――月牙の片方を"シュレッケン"にカツンと当てる。

「今さら騎士面？　騎士として振舞うなら自首してどうぞ」

「受けておきながらその言い草。僕は自分に正直なだけだよ・・・！」

名乗り合いをすっ飛ばしてのいきなりの刺突攻撃。魔力付加も無く魔法でもない単純な物理攻撃だけど、懐に入られてるのがまずい。首を右に逸らしながら"シュトルムシュタール"を左へ向かって払う。そうすることでラッヘンマンの"シュレッケン"を持つ右腕が外側に向かって弾くことが出来る。

「っつ・・・！」

油断はしてなかったつもりだけど、反応に一拍遅れたことで"シュレッケン"の刃先が私の頬を浅く斬り裂くのを許した。本当にもう、騎士としての誇りを捨てたなら、これまでの特訓の成果を全部吐き

出してぶっ倒す。

「おおおおおお！」

"シュトルムシュタール"は方天戟の前部と、金砕棒の後部を連結させたアームドデバイスだ。柄の中心を持って振り回すだけで、斬撃と打撃の両方を交互に繰り出される。ラッヘンマンの"シュレッケン"なんてへし折ってやる。

「騎乗騎士としては雅に欠けるが、僕としても君が勝つ可能性を提示しなければならないね・・・！　いいだろう。互いに下僕の力を借りずに、己の力だけで勝敗を決しようじゃないか！」

小さなナイフ型の"シュレッケン"で、私の連撃を捌き続けるアイツがそんなことを言った。騎乗騎士の昇格試験は、乗れる使い魔を使役している場合は乗ったまま闘うことがルール。

「斬り断て！」

――フェアシュテルケン・クリンゲ――

方天戟の２つの月牙と先端の穂に魔力付加しての斬撃魔法を繰り出す。鈍重なフルプレートアーマーを着込んでるにも拘らず、華麗なステップと"シュレッケン"で完璧に防いでくる。

「それなら・・・！」

「むっ・・・！」

"シュトルムシュタール"の一撃を防がれたその瞬間に、私はラッヘンマンの腹に突き蹴りを繰り出した。そして肩と頭を駆け上がって上空へ跳ぶ。頭上に魔法陣を展開して、宙でくるっと反転して魔法陣に着地。

「フェアシュテルケン・シュラーゲン！！」

今度は金砕棒に方に魔力を付加しての一撃を、突進からのフルスイングでお見舞いしてやる。ラッヘンマンは"シュレッケン"での防御を行わずに、「はっは！」笑い声を上げながら後退することで躱した。それで終わりだと思わないで。私は空振った勢いのまま体を旋回させつつ、"シュトルムシュタール"の柄を分離させる。

「もういっちょーーーー！」

――フェアシュテルケン・クリンゲ――

後退したラッヘンマンに届くよう、方天戟を持つ右腕を伸ばす。ギリギリだけど側頭部に月牙を叩き込むことが出来た。甲高い音が響く中、宙に寝そべってるような体勢の私の腹に「ぐふっ！？」アッパーが打ち込まれた。私は吹っ飛ばされて、アイツはよろける程度。

『リっちゃん！』

ブネから落ちた私を助けるためにワイバーンが急降下してきてくれ

て、「ありがと！」鞍の上に着地すると、『ごめん、リっちゃん。僕の攻撃、全然効かない』って泣き言を言ってきた。

『もう魔術師化して、一気に決めちゃおうよ！　リっちゃんが傷つくのあんまり見たくないし！』

「・・・それは・・・」

・―・―・回想だったりする・―・―・

大隊の投入してきた新兵器に苦戦を強いられたトリシュは、魔術師化できない自分と私とアンジェが足手纏いになるかも、なんて危惧した。私は使い魔がいるから、私に足りない分はあの子たちで補おうと思ってたけど・・・。

――君ら3人とも、実は魔術師化できる才があるんだよ――

その言葉を聞いて私はバナナを頬張りながら、ゴメンみんな、って使い魔たちに謝った。だって魔術師化なんて魅力的な話、受けないわけにはいかないよ。

（ここは・・・）

私はどっかの戦場のど真ん中に居る。ルシルが私の前世の記憶を見せるために、何かしらの魔術を使ったのは間違いないけど・・・。

「（まぁいいや。魔術師化するために必要なら、私の前世とやらを

見てみよう）えっと、あそこに居るのはイリスと瓜二つの女性・・・、それに・・・」

２０代始めくらいのイリスのそっくりさんと、１０代半ばか後半くらいの私のそっくりさんが、何十人っていう、いろんな武器や甲冑を身に纏った騎士部隊を率いてた。たぶん、あの人がイリスの前世のシャルロッテ・フライハイト。で、その側に控えてるのが私の前世だっていう・・・。

「騎士シャルロッテの右腕、初代グレーテル・ヴィルシュテッター・・・」

今の私と違って初代グレーテルは両刃の大剣を主武装にしてる。そんなご先祖たちの移動方法は歩きみたい。他の騎士隊は馬とか狼、見たこともない珍獣なんかに跨ってる。だから他の隊に置いていかれる・・・と思えば、「速・・・！？」ビックリするくらいに走るスピードが速かった。

「え、あれ？　私どうすれば・・・！？」

置いてけぼりを食らった私は辺りをキョロキョロしてると、勝手に私の体がふわりと浮いて、ご先祖に付いて行くように動き出す。そしてご先祖たちの部隊が、敵部隊と交戦を開始。

「お、おおう・・・」

そこからは魔法・・・じゃない、魔術の応酬。炎やら氷やら雷やら、

イリスやルシルが使う光や闇といった攻撃が戦場を駆け巡る。ご先祖の隊も敵陣に高速で突っ込んで、懐に侵入して武器で切り払っていく。

「すごい・・・」

騎士シャルロッテの繰り出す斬撃の軌道がほとんど見えない。まさに一撃必殺。長刀（アレが本物のキルシュブリューテ・・・）が閃くと、一度に複数人が地に伏せてく。で、肝心の私のご先祖は、白い雷を纏った大剣をブンブン振り回して敵をふっ飛ばしてた。まるでサイクロンのようだけど、敵の中にその一撃を食い止める奴がいた。

「子供・・・？」

１３０ｃｍ程度の小さな女の子が、ご先祖の大剣の一撃をカードのような物で受け止めて、さらに弾き飛ばした。数ｍと飛ばされたご先祖が着地したところで、別の敵が斧を振り下ろす。着地したばかりのご先祖は大剣を盾にして受け止めたけど、さらに別の敵が槍を突き出そうとしてた。

「危ない・・・！」

他の味方はそれぞれ敵との交戦中だし、騎士シャルロッテも十数人に囲まれてる。助けは望めない。これが過去の事だって判ってるけど、ご先祖の元へ駆け出そうとしたその時、大剣が縦に真っ二つに分離した。片方を斧の防御のままに、分離したもう片方で槍を弾き

返した。

「おお！　なんか異様に剣の幅が広いと思ったら、片刃剣２本を連結してたのか・・・！」

二刀流となったご先祖は、「電気変換！」の魔法・・・じゃないか、雷撃系魔術で敵を薙ぎ払い始めた。ご先祖は片刃二刀流で連撃したり、大剣で薙ぎ払ったり、雷撃を放ったり、いろんな戦術で敵を打ち倒していった。

「・・・あれ？　ご先祖の魔術の構築式が、理解できる・・・？」

ご先祖の使う魔術がどうすれば発動できるかが頭の中でパズルみたいに組み上がってく。ご先祖の動きを注視しつつ、使われる魔術を１つも見逃さないように努める。そうして戦闘は終了して、騎士シャルロッテと一緒にご先祖が隊と合流。戦闘前は６０人くらいいたのに、今は３０ちょっと。約半分、帰って来られていなかった・・・。

「泣いてる・・・」

ご先祖が悔し泣きしていて、騎士シャルロッテが優しく背中を撫でて慰めた。そんな光景が蜃気楼みたいに揺れ始めたから、夢から覚めるんだと判った。

・―・―・終わり・―・―・

「魔術師化はまだ早い」

結界内の至る所に展開されてるモニターの内、ルシルが映ってるものを見る。ヴィヴィオの代わりに自分を拉致させて、大隊の本拠地に潜入するっていうルシルの作戦。無事に潜入したら、偽者のルシルが消滅する手筈。それまでは下手に大隊を刺激しないように言われてるからね。

「もうしばらく、私たちの時間稼ぎに付き合ってもらおう」

『向こうは僕たちが追い詰められてる風に思ってるだろうけど、その実は向こうが追い詰められてるんだよね。そう考えると、ザマァ見ろ、って感じ！』

「そうだね・・・！」

ワイバーンをもう一度ブネの上空へと向かわせる。時間稼ぎなら闘わずにどこかに隠れていれば良い気もするけど、その所為でラッヘンマンが他の結界にちょっかい出す可能性もあるし、何より私自身がぶっ倒したい。

「それじゃあワイバーン。もうしばらくブネと遊んでて」

『うん！　リっちゃんも、頑張って！』

分離させたままの方天戟と金砕棒を振り上げて魔力付加。狙うのはこちらを仁王立ちで見上げてるラッヘンマン。ワイバーンから飛び

降りて一直線にアイツの頭上へと落下。

「シュベーア・・・ボンバルディーレン！」

付加させていた魔力を大きく爆ぜさせながらの打撃をラッヘンマンへと打ち込もうとしたけど、アイツは回避を選んだ。私の攻撃はブネの首の付け根に直撃して、パキィーン！と鱗を何枚か砕いた。

「オオオオッ！」

「むっ・・・！」

「おわっと！？」

ブネが唸り声を上げながら大きく体をうねらせた。ブネにダメージを与えられたのって何気に初めてかも・・・。あー、でも砕いた鱗がまた新しく生えてきた。

「何をした、クラリス！　君の魔力量で、ブネの鱗を砕くことなど不可能なはずだよ！」

「え？　いや・・・んん～？」

心の内に意識を傾けて、「あ・・・」魔術師化に半歩分踏み込んでたことに気付いた。魔術師化の練習は、昨夜から2時間ほどしかやってない。アンジェやトリシュは上手く切り替えが出来てたけど、私はどうも下手で・・・。今みたく勝手に魔術師化してしまう。

「わっとと」

リンカーコアを抑えて、魔力から神秘を取り除いて魔術から魔法へと切り替える。ラッヘンマンは「なんだ、君の雰囲気が変わった・・・？」割と鋭いことを言った。

「別になんでもない。さぁ、第2ラウンド。始めよう・・・！」

ダンッ！とブネの背中を蹴ってラッヘンマンへ突っ込むと、アイツは「まあいい！　無謀なことだと教えてあげるよ！」連続刺突を繰り出してきた。確かに速いけど、イリスの雷牙閃衝刃連発やルシルの光槍連射に比べれば、この程度どうってことはない。

「でぇぇぇーーーい！」

月牙の接着部分の合間に"シュレッケン"を刺し込ませて方天戟を下に降ろしてやれば、ラッヘンマンの右腕も下へ降ろせる。その隙に金砕棒をアイツの頭目掛けて振り下ろしたけど、アイツは左足を引くことで半身になって回避した。そして金砕棒はブネの鱗を叩いたけど、「あぅ・・・！」手が痺れるほどの衝撃と一緒に弾かれた。

「今ので運は使い果たしたかぁ！？」

その言葉と一緒に私のお腹に突き刺さる蹴り。蹴っ飛ばされた私はブネの背中でゴロゴロ連続後転。ブネの背中が広いおかげで落ちることはなかったけど、立ち上がり途中の私へとラッヘンマンが突っ

込んで来て、「ぐふっ！？」まともにタックルを食らった。

「敗死の覚悟は出来ているだろう！？」

今度は落ちた。だけど「ワイバーン！」を呼んで、ブネの尻尾の先端に噛み付いていたあの子が『リっちゃん！』急いで戻って来てくれた。あの子の背に降り立って、「カートリッジロード」をする。そしてもう一度ラッヘンマンの元へと上昇させる。

「あなたこそ、敗北の覚悟は出来てるでしょう？　汝は天衝く巨いなる者。その歩みで地を蹂躙し、振る尾は空を薙ぎ払う。行く手は苛烈なる戦火、過ぎ去るは打ち斃せし亡者の群れ。汝が主の命に応じ、いざ参れ！」

このままじゃ先に体力が尽きるって思った私は一か八かの賭けに出ることにした。私の胸の前に１ｍくらいの召喚魔法陣を展開して、そこからニュッと顔を出したのは「狐・・・？」首を傾げるラッヘンマンの言うように、金色の毛並みをした小さな狐だ。

「次はどんな下僕を召喚するかと思えば、そのような仔狐とはね！」

大笑いするラッヘンマンだけど、この姿が本来のものじゃないって気付けていない時点でダメだ。抱きしめてるこの子の背中を撫でていると、「む？　なんじゃクラリス。お主、少し見ぬ間にわし好みの魔力になっておるではないか！」フサフサな尻尾を揺らした。

「人語？　狐・・・、まさか！」

「そう。この子はブネと同じ、第1観測指定世界ギガースィリアの支配者の一角」

あの子の尻尾が揺れるたびに1房、2房と増えていって、最終的に9房になった。その様子にラッヘンマンは「そんな馬鹿な！」って大混乱。

「久しいの、ガリフット。わしを召喚獣にしようと会いに来たのが彼此40年前かの？　顔は兜で見えぬが、やはり老けたの～」

「ナデシコ・・・！　何故、君が・・・！　どうしてこんな小娘の下僕なんぞに・・・！　君を下僕にするべくやって来た幾人もの騎兵との契約を断ってきた君が！」

ギガスィーリアは、ナデシコを始めとした私の召喚獣や、ラッヘンマンのドラゴン軍、その他の騎兵たちの召喚獣――魔法獣たちが棲み処としている世界だ。騎兵を目指す騎士はギガスィーリアを訪れて、気に入った魔法獣と契約を結べるよう努力し、そして互いに納得できたなら主従関係や盟友関係の契約を結ぶ。

「君に会いに来た僕や他の騎士たちに言ったな、お前たちは違う、と！」

「うむ、確かにそう言うたな。言葉通り、お前たちは違うのじゃ」

「それならクラリスはそうだと言うのか！」

「んん？　唯一、此奴だけには可能性があると思っただけじゃ。わしと契約する為の条件はただ1つ、わしを惚れさせるような魔力を提供する、じゃ。お前たちは生まれや血統からして既に失格しておった、クラリスとは違っての。そんなクラリスも、今日までわしの期待になかなか応えなかったのじゃが・・・。今日晴れてわしの条件を満たした」

その条件というのはついさっきまで本当に判らなかった。惚れさせる魔力なんて意味不明だったし。それでもこの闘いに勝ちたいために、たとえナデシコが私の言うことを聞かなくても、ラッヘンマンやブネを惑わせられたらって理由で召喚した。

「クラリス！　今日よりわし、九尾のナデシコが、お主の召喚獣として力を揮おうぞ！」

ナデシコがワイバーンの額から飛び出して宙へと身を投げた。落下していくナデシコを見守っていると、『リっちゃん！　上昇するよ！』ワイバーンがさらに１０ｍほど急上昇。直後、眼下が蒼い炎でいっぱいになった。そんな蒼炎の塊から巨大な狐、ナデシコが姿を見せた。９房の尻尾を揺らして、僅かに開いた口からは蒼い火の粉が噴き出てる。

「ナデシコ！　ブネをお願い！」

「よかろう！　ブネよ、数百年ぶりに戯れようかの！」

「オオオオオ！！」

ブネが咆哮を上げてナデシコに向かって行く。ブネが急転回したことでラッヘンマンが「なに！？」振り落とされた。空中に投げ出されたアイツを追うように「ワイバーン！」に指示を出して急降下。

「助けてほしいですか～？」

「～～～～っ！　無用だ！　僕の騎士甲冑（げいじゅっ）の防御力を舐めないでもらおう！」

高さ６０ｍ以上の空から地上へ向かっての墜落。いくら防御力が高くても無傷とはいかない高さ。さすがに殺してしまうのはダメだから、私は「舐める。だから助けるよ！」ワイバーンから飛び降りた。

「何をするつもりだ！？」

「こうするの！」

方天戟と金砕棒のカートリッジを全ロードして魔力付加。そして私の両足裏をワイバーンの翼で打ってもらって、「せやぁぁぁぁぁぁ！」高速で突進。一瞬でラッヘンマンの元へと追い付く。

「ツェアシュテールングス・・・！」

左手に持つ金砕棒を上段からの全力振り下ろし。ラッヘンマンはシールド＋"シュレッケン"を盾にする防御姿勢を取ったけど、金砕

棒の一撃でシールドを粉砕。さらに"シュレッケン"も弾き飛ばしてやった。振り下ろした勢いのまま前転して・・・

「ショック！！」

逆手に握っていた方天戟を、ラッヘンマンのお腹に向けて全力投擲。直撃を受けたアイツは落下軌道を変えて、近くのビルの屋上へと墜落した。土煙でその姿が見えなくなる中、私は金砕棒の柄尻を屋上へと向けて魔力ケーブルを伸ばす。ケーブルは土煙の中へと突っ込んで、方天戟の柄尻と繋がったのを報せるようにピンッと突っ張ったから縮めて、戻ってきたことで連結させる。

『リっちゃん、乗って！』

落下する私の足元にワイバーンが移動して、その背中に着地してから鞍に跨る。ラッヘンマンの動きがないから、ひょとしたら勝ったかも。ナデシコの方も、地面に墜落したブネの頭を前足で踏ん付けているし。

『そう言えばリっちゃん。ルシルって奴が消滅したの見たんだけど。あれってもう、時間稼ぎは要らないってことじゃないの？』

「え、本当！？」

モニターを確認しようとしたら、土煙が召喚魔法陣展開と同時に吹っ飛んで、ラッヘンマンがその健在な姿を見せ付けてきた。うん、あんまり堪えてないみたい。もう少し魔導の騎士として闘いたかっ

たけど、ここからは魔術の騎士としてさっさと勝たないと。ワイバーンに屋上まで近付くように指示。

「ご先祖様。どうかそのお力を貸してください」

――昇華――

今度は自分の意思で魔術師化して、別の龍を召喚しようとしてるラッヘンマンの居る屋上へと降り立つ。

「楽しくなってきたじゃないか、クラリス！　僕は君を最高の作品だと賞賛するよ！」

「・・・あ、そうです・・・か！」

"シュトルムシュタール"をそっと床に置くと同時に一足飛びでラッヘンマンへと再接近して、神秘を有する微弱魔力を両手に付加。アイツは「どういうつもりだい！　無手で挑むなんて！」って言ってるけど、もうアンタに勝ち目はない。

「さようなら！」

フルスイングでのビンタをお見舞いしてやると、兜が難無く壊れた。ラッヘンマンは歯を何本か吹き飛ばし、鼻血を盛大に噴きながら吹っ飛んだ。

「殺っちゃった？」

『どうだろう・・・』

大の字で倒れたままのラッヘンマンを不安げに見る中、ナデシコの勝利の鳴き声が結界内に響き渡った。

Ｅｐｉｃａ３９－Ｃ堕ちた騎士～Ｂｏｇｅｎ　Ｐａｌａｄｉｎ～

†††Ｓｉｄｅトリシュタン†††

私たちオランジェ・ロドデンドロンを殺害するべく投入された大隊の主力の中に、私が乗り越えたいと１０年以上願っていた相手が居た。弓騎士の頂点たるボーゲンパラディン、ガラガース・バイエルン卿・・・。潜伏や狙撃移動変更が大事な弓騎士であるにも拘らず、その騎士甲冑は迷彩色のフルプレートアーマー。さらにひし形状の盾、カイトシールド４つが側に浮いている。

ＶＳ・―・―・―・―・―・―・―・―・
其は誇りを捨て堕ちた弓騎士ガラガース
・―・―・―・―・―・―・―・―・ＶＳ

「はっはっは！　まさか、このような形で嬢ちゃんと顔を合わせることになるとはな！」

盛大に笑い声を上げて白髪交じりのボサボサ髪を掻いた。でも私は一切笑えない。現騎士団の最古参＝幹部であるガラガース卿が敵として目の前に居る。事前に幹部クラスの騎士が大隊と繋がっているであろうことは、トラバント団長の件で考えうる話だったし、みんなで話し合って覚悟もしていた。

（でも・・・あなただけは、大隊側であってほしくなかった・・・）

尊敬する人であり、師匠であり、越えるべき壁であり、一言では表せない大切な人だった。私が睨んでいることに気付いたガラガース卿は真剣な表情になって、「すまぬな～。このような事になってしまってな～」申し訳なさそうに謝った。

「しゃ、謝罪ということはつ、つまり・・・自ら進んで大隊に下ってはいないということですよね・・・！？」

そうだと思った。ガラガース卿が進んで犯罪者になどになるわけない。きっと私たちのように大隊を探るために、大隊の味方のフリしていたに違いない。なんて、安堵していたところで・・・。

「いいや、そうではない。嬢ちゃんと殺し合いという形で決着を付けねばならないということだ！」

ガラガース卿は足元に赤錆色に光り輝くベルカ魔法陣を展開。右手に持つ弩型デバイス・"エクスターゼ"を私に向けた。弓床で１ｍ、弓で８０ｃｍもある大きさで、本来は魔力矢（というか杭）を装填して撃ち出すものだけど・・・。

「対人では決して使用しないスタウロスまで持ち出して・・・！」

対物破壊杭（スタウロス）での攻撃に非殺傷設定なんて優しいものはない。私の防御魔法で防ぐのもまず無理。だからこそ「本気で、本気で殺し合いをするつもりですか・・・？」と問う。

「無論。わしも、ラヴェインも、ガリフットも、ここには居らんが

大隊に組することを良しとせずに引退したライオネルやマドールといった、俗に言う最古参――幹部と呼ばれるわしらは、管理局という組織がまだ絶対の法の管理者ではなかった頃、教会に弓引く者たちと命を懸けた死闘を経験してきた」

ガラガース卿が小さく上げた左足で魔法陣をズンッ！と力強く踏み付けた。魔法陣から強烈な閃光が発せられ、「ぅく！」私は右腕で目を覆いつつ顔を逸らした。光が治まって、なおもチカチカとする目で彼の姿を探すけど、もうどこにも見当たらない。

「我々はその高揚感を忘れられなかった！」

「っ！」

――スタウロス――

敵意を超えた殺意を感じた私はその場から急いで離れた。その直後に風切り音と共に飛来して、先ほどまで私が立っていた車道に突き立ったのは1本の白銀に輝く杭、スタウロス。完全に私の頭を狙う軌道だったことにゾワっと悪寒が走った。

「しかし組織として安定した管理局が混沌を平定し、秩序が保たれるようになると、それまでの命懸けの戦が・・・今ではまるでお遊戯会だ」

「お遊戯会・・・？」

その言葉に私の全身が拒否反応を示す。新暦になってからも起き続けてる犯罪で、局員や騎士にも犠牲者が出ている。現代でも命懸けで犯罪に立ち向かっている人たちの頑張りをお遊戯会と言ったガラガース卿。

「認めない・・・認められない・・・取り消してください！！」

"イゾルデ"を大弓形態シュッツェフォルムで起動。私とガラガース卿の戦闘フィールドはコンクリートジャングル。狙撃ポイントや身を隠す場所には事欠かない廃棄された建造物ばかりの場所。先に隠れられたのが痛い。

（ガラガース卿の騎士甲冑、フェアシュテック・シュピールは、自在にその色を周囲の景色と同化させることが出来るカモフラージュ機能に優れている。だから周囲に潜んでいても判りづらい・・・）

片側3車線の計6車線というこの大通りを挟むように並ぶビル群の各階層、各窓枠を速読するように見る中、ガシャン、ガシャン、と甲冑の足音が聞こえてきた。けれど反響の魔法を使われている所為で音の出所がまったく判らない。

「とりあえず私も身を隠さないと・・・！」

ガラガース卿の足音が途絶えた。今まさに狙撃ポイントに着いて私を狙っているに違いない。ほとんど意味はないけど、全身を魔力で覆う防御魔法の「パンツァーガイスト・・・！」を発動した。直後、バキン！と、スタウロスが足元に突き刺さった。

（今の軌跡、それに突き刺さってる射角と射線からして・・・向こう！）

飛び散る破片の中、私の目はなんとか狙撃先を割り出すことが出来た。そちらに目を向ければ、２階建ての建物、その２階の窓の前に居るガラガース卿の姿を視認。彼は側に浮いているカイトシールドの１枚の裏からスタウロス１本を引き抜き、"エクスターゼ"に番えていた。

（スタウロスは魔力矢とは違い、装填時間がある！　今の内に・・・！）

その場から駆け出しながら"イゾルデ"の魔力弦を張る。そして非殺傷設定から物理破壊設定に切り替えた魔力矢を番える。

「いっっけぇぇぇーーーーッ！」

――翔け抜けし勇猛なる光条――

「ん？　はっはっは！　どこを狙ってい――」

砲撃と化した魔力矢が一直線にガラガース卿・・・ではなく、その階下の窓の中へと突入。階下の天井に着弾したことによる魔力爆発が起きて、撃ち込まれた階の全ての窓枠から噴煙が上がる。それだけでなくガラガース卿の居る階の床がその爆発の衝撃で崩れるのを確認。

「はっはぁ！　良い所を突いたな、嬢ちゃん！　さすがに崩落に巻き込まれるのは勘弁だ！」

崩落する建物からガラガース卿が飛び出してきた。弧を描くように宙を舞う彼に向けて、新たに生成した魔力矢を番えた"イゾルデ"を向ける。もちろん誤って殺害してしまわないように非殺傷設定に再変更したうえでだ。

「嬢ちゃん！　非殺傷設定なんぞに変更していないだろうな！」

「いいえ、しました！　現代の騎士は殺しはしません！」

――滅び運ぶは群れ成す狩り鳥――

放った矢は３０本の矢に分裂して、４本は４枚のカイトシールドを、残り２６本はガラガース卿を全方位から襲撃。ガラガース卿のカイトシールドは基本的に自動で防御する機能を持っていて、今まさに多弾攻撃に釣られて、本体である彼はがら空き状態。だから面白いように全弾が着弾していき、そのまま道路へと派手な音を立てながら墜落した。

（この程度でダメージが入らないのは百も承知。だから今は・・・！）

普段生成している４０ｃｍ級の魔力矢ではなく１ｍ級の魔力杭を生成して、魔力弦に番える。

――とぐろ巻く連環の拘束蛇――

未だに濛々と立ち上っている砂煙へ向けて魔力杭を撃ち込み、カキィーン！と着弾音が響くと同時に砂煙が一瞬で吹き飛び、杭から変化したチェーンバインドに絡みつかれているガラガース卿と４枚のカイトシールドを確認できた。

「デバイスとシールドを破壊させていただきます！」

カートリッジを４発ロードして右手の指の間に２本ずつ、計８本を挟むように物理破壊設定の魔力矢を生成。魔力矢を魔力弦に番えた"イゾルデ"を、「ふんぬ！」ただの膂力のみでバインドを引き千切り始めたガラガース卿に向ける。

――スタウロス――

「づっ！？・・・ぅあ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝・・・！！」

右太ももに走る激痛に私は悲鳴を上げてその場で蹲った。自然と溢れてくる涙で歪む視界の中に、右太ももを貫いているスタウロスが入った。そんな馬鹿なとガラガース卿を見る。右手には確かに"エクスターゼ"のグリップを握られている。

「なんだ、知らなかったか？」

私のバインドを引き千切って自由の身になったガラガース卿がくいっと動かした顎で、「ほれ」とある場所を指した。そこには「え・

・・？」目を疑うものがあった・・・というか居た。

「わしは元々騎乗騎士だ。今もなお召喚獣との契約を続けている。其奴はその召喚獣の子供でな。本気で戦う際には助けてもらっておるのだ」

ザフィーラさんほどの大きな狼が1頭、そこ居た。ルビーのような瞳は4つあり、先端が目の無い蛇の頭になっている尻尾が5本、ただの狼ではないことは明らか。その狼は、ザフィーラさんのように両脚に装甲を着けていて、背中には旋回台付きの装甲が装着されていて、台にはもう1挺の"エクスターゼ"が備え付けられていた。

（ああいう魔法獣に詳しいクラリスなら種族名を知っていそうだけれど・・・）

尻尾の先端にある蛇頭が銜えているスタウロスに目が行っていたところに、内1つの蛇頭が"エクスターゼ"にスタウロスを番え始めた。さらに「さぁ、次は避けれるか？」ガラガース卿も、スタウロスを番え終えている"エクスターゼ"を私に向けた。

「ぐっ・・・くぅ・・・！」

右太ももにスタウロスを貫かれたまま私は行動を開始。2本のスタウロスに狙われていて、ソレは防御魔法を難無く撃ち抜ける威力。なら身を隠すことを優先しないと。痛みを気合で押し殺し、右手に魔力付加。

「でぇぇぇーーーーい！」

足元を殴って道路を大きく抉り、瓦礫やら砂煙やらを巻き上げて隠れ蓑にする。ガラガース卿は「いいだろう、仕切り直しと行こうじゃないか！」と、私が一時離脱することを笑って許可した。何とか立ち上がって、血の跡が残らないように注意しつつ右足を引き摺って道路を横断し、１０階建てのビルのエントランスへと入る。

「抜いたら・・・さすがにダメですよね・・・？」

そもそも触れることすら出来そうにない。今でさえ痛みで泣きそうなのを堪えているのに、自力で抜くことになったらどんな醜態を晒すかも判らない。滲み出る涙を袖で拭いつつ階段を上がって、たどり着いたのは最上階。屋上の方が見晴らしはいいけれど、その分隠れ場所が少ないから却下だ。

（ガラガース卿はどこに移動したか・・・）

上着として着ているショートジャケットの右袖を千切って、ソレで右太ももをキツく縛り上げながら窓枠から頭上半分だけを出して、先ほどまで私たちの居た道路をチラッと見下ろす。ガラガース卿はその場から1歩も動かずに、暢気に狼の頭を撫でていた。

「カイトシールドを解除した・・・？」

スタウロスも左手の指に挟んでいる４本と、"エクスターゼ"に装填済み1本の計５本、そして狼の５本のみ。計１０本のスタウロス

の猛攻を凌いだうえで確保なり撃破しなければ、私は・・・死ぬ。

（悔しい気持ちはあるけれど、今は生き残りつつ勝つ。それだけを考える！）

カイトシールド1枚につき４０本のスタウロスが内蔵されている。それが今は１０本だけなら、まだなんとかなるはず。床に落ちている鉄パイプを手にとって"イゾルデ"の魔力弦に番える。狙うのは向かいの３階建ての建物。音で相手の注意を逸らす術の１つだ。鉄パイプから指を離し、直進ではなく弧を描いて落下するように射る。狙い通り鉄パイプは弧を描きつつ向かいの建物の屋根へと吸い込まれ、カラーン！と甲高い音を立てた。

――スタウロス――

狼の背部装甲にある"エクスターゼ"が鉄パイプの落ちた屋根に向けてスタウロスを即時発射。スタウロスは軒先を大きく抉り、空の彼方へと消えていったのが見えた。

「場所を移動しないと・・・」

同じ場所に留まってさらに狙撃するような間抜けな真似は出来ない。右手を壁について体を支え、左足だけでピョンピョンと移動して３つ横の部屋へ。窓枠から顔だけを出してガラガース卿の様子を窺えば、やはりその場から1歩とて動いていないけれど・・・。

「狼が居ない・・・？　ハッ！」

――スタウロス――

空の方でチカッと光ったのが判った私は慌てて窓間壁に身を隠す。その直後に耳に届く金属音。そして衝撃と痛みが右肩に奔って「づっ！？」苦悶した。スタウロスは壁を貫通していて、よりによって太ももを縛るために千切った右袖の無い肩を撃ってきた。ただ、幸いなことに直撃ではなく掠った程度・・・とは言っても痛いものは痛い。

「迎撃しないと・・・！」

壁から離れて、痛みを堪えて生成した魔力杭４本を魔力弦に番えて襲撃に備えていると、「オオオン！」鳴き声と共に窓から突入して来た狼。各個撃破の機会を与えてくれたことに感謝しつつ・・・

「捕らえよ！」

――とぐろ巻く連環の拘束蛇・紡ぎ檻――

４本を一斉に射た。狼は瞬発力を以って直撃を避けたけれど、屋内戦でこの魔法から逃れられるのはそうはいない。４本の杭は床、壁、天井を突き刺さり、螺旋状に解けるようにチェーンバインドと化して、部屋を縦横無尽に蹂躙する。

「グォ！？」

「もう逃がさない！」

バインドに絡まった狼がもがく中、私は"イゾルデ"を双剣形態「フェヒターフォルム！」へと瞬時に切り替え、「グォォォ！」咆哮を上げる狼へと突っ込む。噛み付こうと大きな口を開けている狼の鼻っ面に柄を「でぇい！」振り下ろした。きゃいん、と苦悶の声を漏らす狼に僅かなりの罪悪感が生まれはしたけれど、今は押し殺す。

「紫電・・・一閃！」

――皆伝・紫電一閃：焔（ほむら）――

右手の"イゾルデ"の剣身に炎を纏わせての斬撃を繰り出して、背部装甲の旋回台に取り付けられている"エクスターゼ"を真っ二つに斬り断つ。

――皆伝・紫電一閃：電（いなずま）――

左手の"イゾルデ"の剣身には電撃を纏わせ、「ごめんね！」狼の額に峰打ち。感電したことで狼は泡を吹いてぐったりと動かなくなった。非殺傷設定ということでお腹は動いているし、死んではいない。

「スタウロス・・・」

デバイス・"エクスターゼ"と違ってスタウロスには傷1つとして付いていない。ガラガース卿から以前聞いた話では、何かしらの動

物の爪を加工した物らしい・・・。"イゾルデ"を再びシュッツェフォルムへと戻して「お借りしますね」スタウロス3本を回収してオーバースカートのベルトに挟み込んで、ガラガース卿との闘いに備える。

「もうしばらくそのままでいなさい」

狼をそのまま拘束しておいて、私はその部屋から移動を開始。狼が私を襲撃したにも拘らず帰還しないことにガラガース卿もすぐに気付くだろうから、どういった行動に移るかは判らない。でもこの場に留まることだけはやめた方が良いというのは判る。

「次はここ・・・」

この階の角部屋へと入ったところで・・・

――五乙――

「っ！　魔力はんの――きゃあああああ！？」

この部屋にある窓間壁3枚が赤錆色の魔力爆発で粉砕された。その衝撃で私は部屋の奥へと吹き飛ばされて壁に叩き付けられ、床に落ちた瞬間に奔る右太ももから全身へ拡散する激痛に「～～～～～っ！！」声にならない悲鳴を上げた。

（スタウロスが・・・！）

傷口を抉ったことで出血量が多くなって、床に血溜まりを作っていた。このままでは出血によって意識を失ってしまう。それどころか失血死の可能性も。だけどそんなことを考えている余裕がない状況に。ゴゴゴと地響きが起こって、上の階が道路側へ向かって傾き始めた。今の攻撃でこの階の道路側の支柱を全て撃ち抜いたんだ。このままだと崩落に巻き込まれる。そう判ってはいても「足が・・・！」動かせない。

（死ぬ？・・・こんなところで、こんな形で・・・？）

まだ何も成していないのに。たった独りで死ぬなんて嫌だ。だから最後まで諦めずに足掻こう。ルシルさんからは、大隊の本拠地へ潜入するまでは大隊を刺激しないでほしい、と言われていたけれど・・・。

「命が懸かっていれば問題ないはず！　ルシルさんと結ばれぬまま死ぬなど真っ平です！」

――昇華――

魔術師化。それが私やアンジェ、クラリスに新たな境地を開かせた切り札。２人は魔術師化するための儀式の際、前世の記憶を見たと言っていたのに、私はそんなことなくアッサリと魔力に神秘を付加させることが出来た。

――トリシュは別にオーディンやその子孫の転生者というわけではないしな。とはいえ魔術師の血を受け継いでいるのも確か。それで

いいんだよ。前世の記憶を覗いてもきっと、良い事なんてないはずだ――

ルシルさんはそう言ってました。でもアンジェとクラリスはその前世の記憶のおかげで、前世の魔術を扱えるようになった。対する私はサッパリで。魔術師化を扱いこなせるようになるための修行をイリスとセレスから受けたアンジェとクラリスとは別に、私は苦手とするサポート系の魔法をルシルさんから2人きりで教わった。

（魔法でも魔術として発動すれば、どういうわけか効果がグッと上昇する）

だからルシルさんから教わった魔法はきっと、私を勝利に導いてくれる。

――パンツァーガイスト――

「おおおおおおおおッ！！」

魔術として発動した全身魔力防御に加え、無事な左足に魔力を付加して、崩れる側の逆――上下にパックリと割れていく壁へと向かって跳んで、崩壊するビルから脱出。地上へと向かって落下する中、魔法陣の足場を階段状に創り出して降りていく。

――四甲――

崩壊中のビルを撃ち抜いて迫り来るのは1発の砲撃。本来なら全力

シールドでようやく防げるような威力。

（大丈夫！　今の私は・・・魔術師だ！）

パンツァーガイストの効果は持続している。それを信じて迫る砲撃に右手の平を翳した直後、砲撃が右手の平に着弾した。でも私に一切のダメージを与えることなく拡散したことで「勝てる・・・！」と確信。魔力攻撃は無力化できることが判り、私は1枚の足場に座り込んで、右太ももを貫いたままのスタウロスを両手で握る。

「イゾルデ、コード・ラファエルを！」

≪Ｊａ　！≫

"イゾルデ"のＡＩにルシルさんから教わった魔法プログラムをすべて積み込んである。それを魔術として発動すればいい。

――六丙――

完全に崩壊したビルから立ち上り続ける砂煙を穿って来るのは魔力矢の連射。射角や射線からして、やはり場所は変えているよう。向こうからは見えていないはずなのに矢は的確に私に着弾していく。だけど、パンツァーガイストの前では効果を発揮できずに消滅し続ける。

「すぅぅ・・・はぁぁぁ・・・。よしっ。ぐっ・・・くぅぅぅぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そんな中で私は太ももに巻いていた袖をキツく縛り直して、スタウロスを抜き始めた。そして"イゾルデ"に「コード・ラファエル！」を発動させてからスタウロスを完全に引き抜く。血が噴水のように噴き出すけれど、ラファエルの効果は絶大で、右太ももと右肩の傷口がみるみるうちに塞がっていく。

（失血した分、体に力が入り辛い・・・。でもこれで死ぬことはなくなった）

側に置いておいた"イゾルデ"を手に取って、私の血で真っ赤に染まっているスタウロスを魔力弦へと番える。ガラガース卿の魔力矢は今も尚こちらに向かって射られ続けている。場所はそのままだ。

「空から狙い撃ちしてくれる・・・！」

足場を今度は空に向かって階段状に展開。それをまだ痛む右足も使った駆け上がり、「居た！」ガラガース卿の頭上を取った。彼もこちらに気付き、スタウロスを番えた"エクスターゼ"をこちらに向けた。

――スタウロス――

ほぼ同時に射たスタウロスは、私とガラガース卿の間――約６ｍの狭間で激突して互いに砕け散った。ベルトに挟んでいたスタウロスを引き抜いて"イゾルデ"に番え、彼もまた番え直した。限界まで引き絞り・・・

――スタウロス――

先に射られたガラガース卿のスタウロスを体を捩ることで躱し、新たなスタウロスを番えようとしていた彼に「お返しです！」とスタウロスを射る。

「むおっと！」

私の射たスタウロスを後退することで躱したガラガース卿の声が聞こえるまで降下した私は、連射の利かないスタウロスではなく、自動で生成・装填できる魔力矢へと切り替えた彼へと「まだです！」2本目のスタウロスを射る。

「他人の武装を無断で使うとはな～！」

――参梅――

ガラガース卿はスタウロスを半歩分横に移動して躱すと同時、弾速重視の魔力矢1本を射た。彼の6種類ある射撃魔法＋砲撃は、射られる前はどのような効果か判別できないから面倒。しかも矢を射った直後だったこともあって直撃。でも・・・。

「なに・・・！？」

「もう通用しませんよ！」

衝撃はあったけれど痛みは一切ない。驚愕しているガラガース卿は、「威力が足りなかったか！」見当違いなことを言って、"エクスターゼ"の銃床に設けられているカートリッジシステムを起動。カートリッジを何発かロードした模様。

「最後のスタウロスです！」

ガラガース卿から数mと離れた場所に着地すると同時に、「少しは痛い目に遭ってはどうです！」番えていたスタウロスを射た。

「よかろう！　痛みは死闘の証だからな！」

回避行動に移ってはいたけれど、ガラガース卿は完全に避けきれずにスタウロスを左肩に受けた。さすがスタウロス。圧倒的防御力を誇る彼の騎士甲冑を貫通して、腕の装甲の隙間から血を流させた。

「フェヒターフォルム！」

ガラガース卿へと突進すると同時、"イゾルデ"を双剣形態にする。スタウロスが左肩を貫通して痛いはずなのに、彼は流れるような動きで魔力矢を装填した"エクスターゼ"を私に向けた。

「次の一撃は強いぞ！」

――壱松――

「紫電・・・十字閃！」

魔力付加した左の"イゾルデ"で射られた魔力矢を斬り捨てて、右の"イゾルデ"で"エクスターゼ"の弓を真っ二つに斬り断ち、ガラガース卿の攻撃手段を完全に失わせた。

「せぇぇぇーーーい！！」

間髪入れずに両"イゾルデ"による峰打ちで甲冑を砕こうとしたけれど、ガラガース卿は左肩を貫くスタウロスを瞬時に引き抜いて、ソレで私の一撃を防御した。魔術としての一撃にも拘らずスタウロスを切断できなかった。

（でも、敗北を先延ばしにしただけ・・・！）

両"イゾルデ"で追撃しようとしたその時、「あぐっ！？」何かが私にぶつかってきた。完全な不意打ちに私はよろけてしまい、さらに「惜しかったな嬢ちゃん！」ガラガース卿は、私の左肩にスタウロスを突き立てた。

「あっっっぐっ、ぐぅぅ・・・あああああああああああ！！」

ただ突き立てただけじゃなく、グリッと動かされて痛みは何倍にもなった。痛みに悶えている私はまた、何者かがぶつかって来た所為で地面に仰向けで倒れ込んでしまった。それで私に2度もぶつかって来た者の正体が判った。

「狼・・・！」

ビルの崩壊から姿を見せていなかった狼がそこに居て、ギラリと鈍く光る牙を私に見せ付けてきた。

「ぐぁ！？」

狼から離れるべく動こうとした私のお腹を、ガラガース卿はズンッと踏み付けてきた。そして私の左肩に突き刺さったスタウロスを引き抜いた。声にならない悲鳴を上げる私。肩は激しく痛み、お腹も踏まれて苦しいし重いし、痛い。

「あぁ、本当に惜しかった。久々に楽しい戦闘だったぞ、嬢ちゃん」

私の血を滴り落とすスタウロスが振り上げられた。

「ど、退いて・・・退け・・・退けぇぇ・・・！」

私のお腹を踏み付けているガラガース卿の脚甲を"イゾルデ"の峰で打って破壊し、素足を切り落とさない程度に浅く斬って退かそうとするも・・・

「さらばだ！」

無常にも私の心臓目掛けて振り下ろされた。

Ｅｐｉｃａ４０目指す場所～Ｐｕｒｐｏｓｅ～

†††Ｓｉｄｅセレス†††

トラバント団長の指令でミッド北部の廃棄都市区画へとやって来た私たちオランジェ・ロドデンドロンを出迎えたのは、そんな事だろうと思っていたとおり最後の大隊だった。連中は結界で私たちを個別に閉じ込め、各個撃破を狙ってきた。

「ＡＭＦも弾道ミサイルも鬱陶しいし・・・、それにさっきからチマチマと・・・」

――クリンゲ・フリーゲン――

浅黄色に輝く魔力刃が４発と飛んで来た。切断力と凍結効果を発揮する冷気の付加術式、氷奏閃を発動して、私の大剣型アームドデバイス・"シュリュッセル"を強化。そして迫る魔力刃を連続で斬り払い、私を殺すとのたまう大隊のメンバーを睨み付ける。

「ちきしょう！　ＡＭＦの中でどうしてここまでやれるんだ！」

教会騎士団の現斧騎士最強の座、アクストパラディンであるグリフレット・ビエナート。パラディンとなって数週間はチャラチャラしていたけど、今では青い髪を短髪にして好青年風になった。立派になったかと思っていたらこれだ。大隊の一員として犯罪に手を染め、こうして邪魔者になった私たちを殺しにきた。

「うるっさいな・・・。分散させて、ＡＭＦで弱体化させて、弾道ミサイルの迎撃で隙を作らせて・・・。そこまでしないと私を殺せないの？　それに、この魔法と魔力パターンと魔力光からして融合騎とユニゾンしてるよね？　よくもまあ・・・」

それだけの事をしておいてよくアクストパラディンと名乗れるよね、と言外に伝えた。始めからグリフレットにはパラディンの称号は荷が重過ぎたということだ。私の考えを察したアイツは「僕がパラディンだ！」魔力流を放出して、その魔力量を見せつけてきた。

（グリフレットの紫色と、おそらく融合騎の浅黄色が混ざってる・・・）

変な色と化した魔力が、ガリフレットの大斧型デバイス・"リューールング"の刃に集束していく。

――ギガント・シュピール――

そして魔力は放電する電撃の巨大刃と成った。グリフレットは「パラディンを目指しすらしないお前なんぞに！」なんて、変な方向で怒り始めた。騎士は全員パラディンを目指さないといけないような言い草に私は「フンッ」鼻で笑ってしまった。

「おのれぇぇぇぇぇぇ！！」

巨大な魔力刃を有する"リューールング"を横に大きく振り被りなが

らの突進をしてくるグリフレットに、私は「あ、今のはマジでごめん」って謝りつつ、"シュリュッセル"を上に振りかぶる。

「おらぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「速攻で終わらす！」

魔力刃の攻撃範囲に入ったことでグリフレットは振り被っていた"リュールング"を横一線に振るってきた。アイツは私や"シュリュッセル"にしか警戒してない。だからこの一撃を決着の連撃1発目にしよう。

――女神の鉄拳（ディオサ・プーニョ）――

私とグリフレットの合間の地面から氷の鉄拳を突き出させて、「ぐごぉ！？」アイツの腹に強烈な一撃をお見舞いしてやった。

「涙する皇剣（エスパーダ・デ・ラグリマ）からの・・・！」

左手に氷の剣を創り出し、"シュリュッセル"と一緒に冷気を放出させて、空に吹っ飛ぶグリフレットの元へと「てい！」跳び上がる。吐血しながらも私を睨み付けてきたアイツへと・・・

「双刃十字星（クルス・エル・シエロ）！」

"シュリュッセル"と氷剣の刃が直撃しないように十字に振り払う。十字状に広がる冷気がグリフレットに直撃して、そのままアイツを

氷の十字架に閉じ込めた。そして十字架は地上へと落下して、大きな音を立ててコンクリートに突き立った。

「あ、また来た」

弾道ミサイルが私たちの居る結界内へと落ちて来る。ルシルの話だと、第９７管理外世界では弾道ミサイルの迎撃は技術的に難しいらしいけど、魔導師にとっては範囲攻撃を行えば十分可能だ。持ってる氷剣を上空へと全力投擲。

「爆ぜる凍煙（エクスプロシオン・デ・スパーダ）・穿つ氷刃！」

氷剣は爆発して、ウニのように全方位へと大剣状の氷柱を生やした。ミサイルはその爆発に巻き込まれて一瞬で完全凍結、そして氷塊と一緒に地面に落下して粉々に砕け散った。

「ルシルからは本拠地潜入を終えた合図があるまでは大隊を刺激しないでほしい、って言われてたけど・・・」

グリフレットが弱すぎる所為だから私に問題はないはず。氷のウニに閉じ込められているアイツを横目に、空に展開されてる複数のモニターへと目をやる。アンジェとクラリスとトリシュは苦戦してる。イリスとルミナも苦戦してるように見えるけど、ルシルの言いつけを守って時間稼ぎしながら闘ってるみたい。私やルミナのようにミサイルの迎撃をしながらの戦闘。空戦をすればいいのにしないのは、おそらくあっちもＡＭＦも展開されてるから。

「アンジェ達の相手は・・・最古参のパラディン、ガラガース卿とガリフット卿とラヴェイン卿か・・・。アンジェ達にとっては乗り越えないといけない壁。頑張って！」

ルシルの方は別に気にしない。本物のルシルとアイリは、ヴィヴィオ達に付いて本局に向かって、大隊の拉致を待ってる。

「魔法に頼らない手段を持ってる私たちだけ特別待遇というわけか」

だとすれば大隊は大失敗。アンジェ達も今では魔術師化が出来る。そうなれば卿たちも一方的に倒される側になる。アンジェ達はそんな勝ち方で納得は出来ないかもだけど、綺麗な勝ち方に拘っていい状況じゃない。

「ん？」

パキッと氷塊から音がした。そちらに目をやると、グリフレットの赤い髪がオレンジ色に変色し始めていて、浅黄色の魔力を放出し続けてる。融合騎が体の支配権を借りてるみたい。

「魔術じゃないにしても私の凍結封印を、融合騎が破るなんて思わなかったよ」

私やセレス（おねえちゃん）の魔術師化と魔導師化の切り替えは、ルシルからも賞賛されるほどに早い。だからグリフレットへの攻撃時にだけ魔導師化して、それ以外は魔術師化することでＡＭＦ対策やミサイルの迎撃を簡単にしてる。

「どれだけ足掻いたって無駄だってこと、そんなに痛みで知りたいかな～？」

ガシャァン！と氷塊が砕けて、グリフレットが地面に跪いた。魔力から神秘を抜いて魔法とした氷槍、「レフィナド・ランサ！」を８本生成して、「往け！」一斉に射出。それと同時に再び魔術師化して、ミサイル襲来に備える。

『ユーバーファル・カッツェ！』

女の子の声がしたと思えばグリフレットの姿が掻き消えた。視界の端に"リューールング"を振り上げた状態のアイツの姿を収める。

――守護宣言（デフェンデル・デクララシオン）――

私とグリフレットの間に氷の壁を１枚創り出した。半透明の氷壁の向こうに居るアイツは回り込むこともせず、振り上げてた"リューールング"の刃に『ブリッツ・ギヨティーネ！』電撃を付加。

『ヴルツェル・シュメルツ！』

そして地面に目掛けて"リューールング"を振り下ろした。穿った地面に魔法陣が描かれて、蜘蛛の巣みたく電撃が地面を伝って伸びた。私の氷壁も回り込んで来たことで、「よいしょ」通過するのに合わせてジャンプして、氷壁の上に着地する。

「『ラオフェン・・・・！』」

融合騎の声にグリフレットの声が重なった。髪の色も、アイツの赤でも融合騎のオレンジでもない、薄紫色へと戻った。アイツは全身から放電して電撃を全身に纏い、「『ドナー！』」突っ込んで来た。速度はなかなか。威力も見た限りじゃすごいものだって思う。でもさ・・・。

「私の氷を溶かすにはまだまだ温い！」

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

足元の氷壁を踏みつけて砕き、大小さまざまな破片を杭へと変化させてグリフレット目掛けて一斉射出。弾幕となってる氷杭を全身に浴びてもなお勢いは止まることなかった。これは逃げないとダメかな？ってちょっと弱気になったけど、急に勢いが収まって・・・ただ走ってるような速度に。

『それでも！』

「俺は諦めない！」

――ボースハフトアクスト――

斧刃に電撃の刃を付加した"リュールング"をバトンのようにグルグル回して、遠心力を加えた斬撃を繰り出してきた。

「無駄！」

――氷奏閃（イエロ・コラソン）――

下から掬い上げるように"シュリュッセル"を振り上げて、グリフレットの両腕ごと大きく頭上に掲げさせた。がら空きになったアイツの腹へと突き蹴りを繰り出し、「ごふっ！」十数mと蹴っ飛ばした。

「グリフレット。意識を飛ばす前に聞いておきたいんだけど。あなたたち最後の大隊・・・というか教会騎士団は、一体何を目的としているの」

最後の大隊なんて汚れ部隊をわざわざ創ってまで管理局を陥れた。大隊としては管理局の腐敗や、管理局法の甘さに嫌気が差したから、らしい。大隊の母体である騎士団にもその目的が通用するけど、それだけとは思えないってみんなで話していた。

「ぐふっ、げほっ、ごほっ。決まっているじゃないか。俺たちはベルカ人だ！　ベルカ人は誇り高き騎士の末裔だ！　それをあんな不正だらけの組織より下に見られていることが我慢できない！　だから――」

「不正を暴いたうえで殺して、さらに要らぬ濡れ衣を着せてまで陥れた、と？」

どうしよう。ここまで愚かな組織だったなんて思いもしなかった。

だから大きく溜息を吐いて、「どの口で誇り高いとかほざきやがる！」ちょろっと汚い言葉遣いになったけど、それだけ私の心に渦巻く怒りは、ベルカ自治領ザンクト・オルフェンの北部に在る、ミッドで一番高いキララウス山を軽がる突破するレベルで湧き上がった。

「騎士の在り方を語りたいなら犯罪者なんぞに身を堕とすな！」

「歴史の転換点には犠牲も、汚い役目を負う覚悟も必要だ！」

足元と体の前面にベルカ魔法陣を展開したグリフレットは、"リュールング"の刃に魔力付加。そして前面の魔法陣へ向けて"リュールング"を振るった。発動までのアクションが多い魔法ほど強力だと思うけど、その僅かな手順の間でこちらもいろいろと準備が出来る。

「『ゲレヒティヒカイト・ツェアシュトーラー！』」

前面の魔法陣から離れたのは砲撃。でも発射される頃には射線軸から数歩分横移動して、グリフレットへと突っ込んでいた。"シュリュッセル"をアイツの頭上へと放り投げ、両手に冷気を纏わせる。魔法を放った直後ということもあって"リュールング"を振り払った体勢からすぐには動けないアイツの懐へと入り込み・・・

「ルシル直伝！　凍牙雹冷　氷帝　双雪掌！」

「がはっ・・・！」

ミヤビと一緒に教わった技を打ち込んだ。打撃と同時に冷気が爆ぜて、人ひとり容易く飲み込めるほどの氷塊と化してグリフレットを閉じ込めた。これも魔法として発動したから、さっきみたいに破砕されそうだけど・・・。

「・・・・。後で迎えに来るよ」

白目を剥いて完全に活動停止してるグリフレットの頭を覆ってる箇所をコツンと小突き、万が一に私がこの場から離れた際に起きてしまった時のことを考えて、ある魔法を発動しておく。

「立ち込める氷結の濃霧域（コンヘラド・テリトリオ）・・・！」

今いる結界内みたいな密閉空間では絶大な凍結効果を発揮して、たとえ広大な空間でも効果をあまり落とさない冷気の霧を充満させる補助魔法だ。急激に対象を凍結するんじゃなくてじわじわと凍結させることで、霧への対処を遅らせられる。

「さてと・・・！」

最小魔力で脚力強化を行って、霧の範囲外に出るために近くのビルの外壁を駆け上がる。屋上へとたどり着いて、みんなの交戦映像を見る。

†††Ｓｉｄｅセレス⇒イリス†††

私を襲ってきたのは風を扱う天狗の仮面持ち。得物は２ｍほどの槍。

コイツとの因縁はプライソン戦役時からだ。

「カタパルトヴィンデ！」

風で浮かせていた鉄パイプを始めとした鉄片を槍で弾いて超高速で打ち放ってきた。それらを"キルシュブリューテ"の腹で打って、その全てを仮面持ちへと返す。

「なっ・・・！？」

『風刃烈火！』

女の子の声と共に槍全体に黄緑色の風が纏わり付き、天狗の仮面持ちが槍を振るって返って来た鉄片などを全て弾き返した。そのちょっと前にわたしは高速移動歩法・閃駆で突進していて、放射状に広がる鉄片の中を掻い潜り、「でぇい！」バットのフルスイングの如く"キルシュブリューテ"を仮面持ちのお腹目掛けて振った。

「ぐぅぅ！？」

「ホームラン！」

魔力付加も魔法も無しな状態での一撃ってこともあってダメージは入ってない手応え。そもそも結界内に充満してるＡＭＦ効果が邪魔して、まともに魔法が扱えない。カートリッジを使い続ければ問題ないけど、ここで使い切っていいのかどうかも判らない。

「ま、ルシルから合図が来るまで粘って、合図を確認したら魔術とスキルを使って叩きのめせばいいか♪」

宙に魔法陣の足場を創って着地して、「ヴォルフ・クラオエ！」槍の穂に風を纏わせた仮面持ちが性懲りもなく突っ込んで来た。一直線限定での速度はなかなかのもの。なら対処はしやすい。

（前々から思ってるんだけど、どうして自分より速い相手にスピード勝負を挑むかな～？）

あの仮面持ちより速い相手と常に模擬戦をしてるんだ。ただの突進に反応できないようなわたしじゃないよ。"キルシュブリューテ"を顔面に向かって繰り出される刺突を見切って、「ほっ！」首を傾げて回避。んで、槍の柄を左手で鷲掴んで突進を食い止めた。

「え・・・！？」『うそ・・・！？』

「驚くようなことじゃないと思うけ・・・ど！！」

――風牙烈風刃――

本来は風圧の壁を横に向けて放つ魔法を、刀身の振り下ろしと同時に直下に居る仮面持ちへと叩き付けてやった。ルシルが時折使う複製魔法・重力操作みたく、「ぐぉ！？」仮面持ちを地面に落とし、深さ１ｍくらいのクレーターの底に沈めた。

「おーい、大丈夫～？　わたしを殺しに来たんでしょ～？　なのに

この体たらくってまずくな～い？」

"キルシュブリューテ"の切っ先でお尻をツンツン突く。すでにマントも学生服も学生帽も目出し帽も、そして仮面も粉々に砕けている。

「くそ・・・！　僕はパラディンだぞ・・・！」

「そうだね。現槍騎士の頂点、シュペーアパラディン。ブレオベリス・アドリオン」

フライハイト家の前女中長プリアムスとの結婚を機にパーシヴァル君が除隊したことで繰り上げ昇格してパラディンになった騎士だ。Ａ級１位の座に１０年以上留まれるだけの実力を持ってるはずなんだけど、どうもそれが十全に発揮できてないっぽい。

（気になることと言えばもう１つ。このふざけたレベルのＡＭＦの中で、ブレオベリス・・・じゃないな、たぶん融合騎・・・、なんで魔法を容易く扱えるのか・・・）

ブレオベリスの魔力は確か緑色。けどさっきから使われてるのは黄緑色。髪の色だって青じゃなくて・・・アイスグリーン？みたいだし。ユニゾンしてるって考えた方が自然だ。でもそれで弱体化するのはおかしな話。

「ひょっとして・・・」

ブレオベリスが槍――"ゼーンズフト"を支えに立ち上がって、神父服から騎士甲冑へと変身し直した。篭手、脚甲、胸当て、それ以外は普通の衣服のような軽鎧姿。

「騎士イリス！　あなたには恨みは無いが、僕とこのゼーンズフトと・・・フュンフツェーンで、討たせてもらう！」

『風刃烈火！』

"ゼーンズフト"全体に風が纏わり付いた。穂先を下げるように構えて、足を前後に開いて僅かに腰を落とした。突進の構えだ。わたしは左手に鞘を具現して「カートリッジ、3発ロード」させて、突進からの連撃に備える。

――風纏走破――

両足に風がフワッと纏わり付いたかと思えば、さっきまでとは比べられないほどの速度で突っ込んで来た。

「でもまだ遅いよ。・・・双牙！」

鞘には電撃を、"キルシュブリューテ"には炎を付加しての「炎雷刃！」で迎撃。"ゼーンズフト"の刺突を鞘で外側へと向かって弾いて、燃える"キルシュブリューテ"でブレオベリスを袈裟切りで切り伏せる。

「ぐあああああ！」

またクレーターの底に落っこちた。消費した分のカートリッジを給弾してると、ブレオベリスが「もういい。もうダメだ」なんて弱音を吐き出した。これにはドン引きしたけど、その直後に結界内に充満してたＡＭＦが消失した。

「ＡＭＦなんて役立たずじゃないか。・・・でもこれで、僕も全力を出せる」

ブレオベリスが自身の魔力を放出した。でもこれで弱体化の理由がハッキリした。彼自身もＡＭＦの影響を受けてた。だから融合騎が魔法を発動していた。ＡＭＦを受け付けない特別な融合騎か。便利なんだか不便なんだか。

『風刃烈火！』

「シュニット・ヴンデ！」

"ゼーンズフト"を振り回すと同時に、風の刃を何十発と放ってきた。それに対して「双牙烈風刃！」で迎撃。"キルシュブリューテ"と鞘による烈風刃の同時発動だ。巨大な暴風の壁を、迫る風の刃に叩き付けて相殺させた。

「相殺か。威力はさっきまでとは段違いね！」

「当然だ！　僕と、　フュンフツェーンのサポートさえあれば、あなたにさえ勝てる！」

『風纏走破！』

ブレオベリスの姿が掻き消えて、周囲の建物の外壁や地面にダン！と着地音が続く。わたしの法陣のような感じ。でも足場間の距離が距離だから、移動中の彼は無防備とも言える。

「判るよ。わたしも使う手だからさ」

どれだけ速くても魔力反応は完全には消せないし、暴風が迫って来てるのが風の流れでなんとなく察知できる。ビルの外壁からダン！と踏み付ける着地音と、踏み切った際の外壁の破裂。これまでとは違う感じに、「来る・・・！」ことが判る。カートリッジを1発ロード。

「ハイリヒ・フライハイト！」

わたしの持つ、フライハイト家に代々伝わってきた最高の防御魔法を発動。ブレオベリスが来る方角にシールドを張った直後、雷が落ちたような大きな音が轟いて、彼の"ゼーンズフト"の穂先が直撃していた。

「突破できない・・・！？」

「当然でしょ！」

――拘束の連鎖――

着地前のブレオベリスを、彼の四方に展開したベルカ魔法陣から伸びるチェーンバインドで拘束する。続いてトドメの一撃を準備しようとしたけど、「まだだ！」彼が叫んだ。

『グレンツェ・ゲヴィッターー！』

球体状の暴風をブレオベリスを中心に発動されて、バインドが砕け散った。竜巻の風圧に吹き飛ばされそうになったわたしが距離をとろうとした瞬間、『グラナーテン・ヴィント・ツヴァイ！』魔力弾の弾幕が張られた。

「ちょっ・・・！」

直撃コースの魔力弾だけを"キルシュブリューテ"と鞘で弾きながら後退中、「ヴィントホーゼ・フェッセルン！」両腕を蛇のような風のバインドで拘束されちゃった。

――真紅の両翼――

魔力翼を即座に展開して、包まるように防御体勢。ギリギリだったけど魔力弾幕の防御に成功。ガツンガツンと翼に魔力弾の着弾音が続く中で、「ヴォルフ・クラオエ！」ドスッ！と翼を貫通してきたのは"ゼーンズフト"の穂。

「あっぶな・・・！」

翼を勢いよく開くことでブレオベリスを引き剥がそうとしたけど、思いのほかグッサリ刺さってるから抜けない。だから翼を解除して、彼が地面に足を付くまでの1秒の間に「氷牙凍封刃！」で捕縛に入る。凍封刃は、斬り付けた箇所から全身に広がるように凍結させて、相手を氷漬けにする一撃だ。

「っく！」

ブレオベリスは"ゼーンズフト"を縦に構えて防御はしたけど、空中に居たこともあって吹っ飛ばされた。

「『シュトゥルム・シャルフリヒター！！』」

そして空中を滑空する間にも魔法を発動。竜巻の龍と化してわたしに向かって突っ込んで来るから「光牙烈閃刃！」剣状砲撃で真っ向から迎撃するんだけど、パァン！と掻き消された。大した威力だ。地面を大きく抉りながら突っ込んで来るから、急いでその場から閃駆で離れる。

「砲撃でダメなら・・・！」

カートリッジを1発ロードして、防御・結界系魔法を寸断する魔法を発動して、迫り来るブレオベリスを対峙する。失敗すれば大ダメージ。ルシルの治癒魔法が無いと本事件はリタイアだ。

「自分とフライハイト家の技を信じないとね！　光牙・・・裂境刃！！」

振り上げていた"キルシュブリューテ"を全力で振り下ろして、竜巻の先端に一撃を打ち込んだ。竜巻を真っ二つに切断して、わたしを貫くために構えられていた"ゼーンズフト"を地面に叩き伏せた。

「な・・・！？」

穂先が地面を抉り、ブレオベリスの背中がわたしに向いた。カートリッジをさらにロードした"キルシュブリューテ"、それと鞘に魔力を付加。

「光牙・・・双月刃！」

「ぐごぉ！！」

問答無用でブレオベリスの背中に"キルシュブリューテ"と鞘を打ち込んで、彼を地面に叩き伏せた。

――剣神モード――

手から離れた"ゼーンズフト"を、絶対切断スキルを発動した上での斬撃で破壊。続けて完全に気絶してる彼を「拘束の連鎖」で捕縛。融合騎もブラックアウトで気を失ってるようで、沈黙したままだ。

「ふぅ・・・。他のみんなは・・・」

モニターに映るみんなの交戦映像へと目をやって、偽ルシルがすでに消滅してることに気付いた。それに「トリシュ！？」がかなりま

ずい状況だってことにも。トリシュとガラガース卿の結界は、運が良いことにわたしの隣だ。

「トリシュ、気付いて！」

偽ルシルが消滅した今、トリシュも魔術師化すれば陥ってる危機から逃れられる。でもそんな余裕が無いのも確か。1対1を邪魔したことで恨まれてもいい。だから今は助けるよ。

「せぇぇぇぇぇい！」

――絶刃・斬舞一閃・新式――

絶対切断効果を有する魔力を付加した"キルシュブリューテ"で結界を斬り裂き、モニターに映る場所へと閃駆で向かう。割と近いところで助かった。廃ビルの角を曲がってすぐ、トリシュとガラガース卿、それに大きな狼が視界に入った。

「雷牙閃衝刃！」

雷撃を纏わせた"キルシュブリューテ"の刺突動作で放てる雷槍を、ガラガース卿の持つスタウロスへと放つ。最速の一撃は狙い通りスタウロスに直撃して、ガラガース卿の手から跳ね飛ばし、さらに彼を「むぉぉぉ！？」感電させた。

「イ・・・リス・・・嬢ちゃ・・・ん・・・！」

閃駆で接近しつつガラガース卿に「裏切り者め・・・！」と言い放ち・・・

「滅牙・・・！」

炎牙、氷牙、風牙、雷牙、光牙、凶牙、６属性の魔力を纏わせた"キルシュブリューテ"と鞘による直接斬撃を１４連撃と叩き込んだ。

「暴破螺旋刃！」

鎧も粉々に砕け、全身をボコボコにされたガラガース卿へと烈風刃をぶつけ、彼を建物の瓦礫へと吹っ飛ばした。遅れてわたしに攻撃を仕掛けてきた狼には、炎を纏わせた"キルシュブリューテ"と鞘での２連撃「炎牙双月刃！」を打ち込んで・・・制圧完了。

「イリス・・・」

「ごめん、トリシュ。水差した」

トリシュの手をとって立ち上がらせながら謝ると、トリシュは首を横に振って、瓦礫に埋もれたガラガース卿へと目をやった。

「ありがとう」

「・・・うん」

モニターを見る限り、残る敵は偽ルシルを倒した奴だけだ。

Ｅｐｉｃａ４１－Ａモルゲンデメルング艦隊攻略戦～Ｈｅｒｒｓｃｈｅｒ　ｄｅｓ　Ｏｚｅａｎ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

ミッド東部アクアベール海に、最後の大隊所有の艦隊が出現した。その一報を受けた私とアインスは、搭乗艦であるヴォルフラムでミッドへと降下。すでに現場に到着している海上警備部捜査指令であるハルトマン一佐のリュッチェンスと合流を果たすべく、全速にてミッドの空を航行中や。

「こちらヴォルフラム艦長、はやてです！　ハルトマン捜査指令、あと５分ほどで現着します！」

『了解しました。おそらく交戦映像をご覧かと思いますが、艦隊には魔法やスキルとは別の防御機構が備えられており、艦載砲や大火力魔法が通じません』

ハルトマン司令の言うように、ミッドへの降下中にも戦闘区域の映像を観てた。リュッチェンスの艦載砲も、シグナムとアギトの大火力攻撃も通じず、しかもバリアは何重にも張られてる所為で本体までは届かへん。それにガジェットⅡ型の発展型らしき機影もある。

『教会騎士団にも協力を要請しようか迷いましたが、現在の両組織の隔たりを考えてやめました。八神司令には、その・・・騎士団のご友人がいましたよね？　その方たちとは連絡を取れませんか？』

私とアインスは顔を見合わせて、ルシル君たちが今なにをしてるかを伝えるかどうかを目線だけで会話。そして「今、セインテスト一尉が大隊の拠点に潜入中です」と隠すことなく伝えた。ハルトマン司令が大隊に拉致されて偽者と入れ替わってるかも知れへんってゆう心配もあったけど、この現場で部隊を指揮して、大隊と戦ってる以上は味方やと思ってええはずや。

「そしてもう1つ。これは推測ですが、艦隊が発射しているミサイルの行き先は、オランジェ・ロドデンドロンの元でしょう。騎士イリス達を殺害すると公表とした大隊との戦場へ飛んでいると思われます・・・」

「なんと・・・・！」

私やアインスの言葉に驚くハルトマン司令。私の部下のスタッフ(みんな)も息を飲んだんが判った。主力との交戦に加えてミサイルの襲撃。シャルちゃん達は苦戦してるかも知れへん。けど信じるしか出来ひんのが辛いところや。

「詳しい事情を話している時間はありませんが、最後の大隊との決戦はすでに始まってます。セインテスト一尉は必ず敵拠点を陥落させ、騎士イリス達は自分たちを殺害しに来た大隊の主力級を返り討ちにします。なら私たちは、大隊の兵器を叩くのみです！」

管理局(わたしたち)の仕事は、今後も脅威になる可能性が高い艦隊の撃沈。それだけでルシル君たちの助けになるはずや。そのために今はこれから

始まる艦隊戦の用意や。

『判りました。そういうことでしたら管理局の一員としての勤めを果たしましょう。シグナム一尉への指揮権はこれより八神司令に委譲します。では、ヴォルフラムの合流をお待ちしています』

ハルトマン司令との通信が切れ、モニターにはまた戦闘区域の映像が流れる。ミサイル艦からの弾道ミサイルの発射も途切れ始めた。ミサイル発射にはバリアを一旦解除せなアカンみたいやからな。その隙を突かれて艦隊に致命ダメージを受けるような真似は出来ひんわけや。

「ルシルやフィレスにセレス、シャルやルミナのような魔術やスキルでないと難しそうですね」

「そうやね。アインスはどうや？　以前遭遇した戦艦のバリアのように砕けへん？」

マフィアが所有してた戦艦のトドメまでいけへんかったけど、あともうちょいまでは追い詰めることは出来てた。あの戦い方と同じようにすればなんとか出来そうな気もする。

「不可能ではないと思いますが私はバリアの破壊に手一杯になり、本体への攻撃は疎かになってしまいます」

「バリアを砕いたところで本体を叩けへんかったら意味はない、か」

「はい。ミサイル発射時にバリアが解除される際、シグナム達が艦体に攻撃を加えても致命ダメージを与えられないところを見れば火力不足かと」

「むぅ・・・。やっぱり私たち以外にも援軍が必要かぁ～。新しい援軍が来るまでは、私たちだけで頑張るしかないな」

「はい」

そうしてヴォルフラムは現着して、降下ハッチで待機してるアインスから『ヴォルフラム警備隊、出撃します！』連絡が入る。アインスと、ヴォルフラム付きの警備隊員１５名が、開ききったハッチから飛び降りた。

「八神司令！　リインフォースⅡ司令補を乗せたヘリから通信です！」

「繋いで！」

『八神司令！　これより八神リインフォースⅡ司令補、それと・・・』

『八神シャマル医務官、八神ザフィーラが合流します！』

「ええ！？　シャマル、ザフィーラ！？」

展開されたモニターに映ったリインの隣に姿を見せたのは、休暇中のシャマル、それにザフィーラやった。

『医務官として本戦闘への参加を本局が募っていたので、ザフィーラ共々参加しました。私はリュッチェンスで医療に従事し、ザフィーラは遊撃戦力として出撃します』

そう話してくれたシャマルに「おおきに！　負傷者は任せた！　リイン、ザフィーラ、空で逢おう！」敬礼返し。艦長席から立った私はブリッジスタッフのみんなに「魔導砲アウグストをスタンバイ。中央の艦をターゲット」指示を出して、騎士服に変身しながら艦長席の後ろに設けられてる1人用のトランスポートへと向かう。

「ではいってきます！」

「「「「「お気を付けて！」」」」」

トランスポートを使ってヴォルフラムの外へと一瞬で移動すると同時に飛行魔法スレイプニールを発動して、同じようにヘリから飛び出してた「リイン！　ザフィーラ！」の元へ向かう。

「はやてちゃん！」

リインと頷き合って「ユニゾン・イン！」を果たす。アインス達もすでにガジェットⅡ型と交戦に入ってるから、「行くよ、リイン！」のんびりも出来ひん。

『はいです！』

「ザフィーラも頼むわ！」

「承知！」

あらゆる艦の艦載砲から魔力弾幕や魔力砲撃が発射されて、航空隊員の接近を拒み続けるその様はまるで海上の要塞。そんな戦場へと私たちも入った。全体通信で「こちら八神はやて二等陸佐！　これより参戦します！」と伝えると、『はいっ！』力強い返答をくれた。

「まずは邪魔なガジェットの掃除からやな。リイン！　フレースヴェルグいくよ！」

『はいです！』

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ・・・！」

選択した魔法は、超長距離砲撃フレースヴェルグ。"夜天の書"６６６ページの内、フレースヴェルグの術式が書き記されたページを開けて、呪文の詠唱を終える。出力を絞れば周囲の隊員たちを巻き込まずにガジェットだけを撃墜する精密狙撃が出来る、現状で一番使える魔法や。

『射線上およびガジェット周辺に味方無し！　いけます！』

足元と前面にベルカ魔法陣を展開して、ガジェットの撃墜に動いてる全隊員たちに、「ガジェットの側から離脱お願いします！」全体通信で通達。了解、との返答と同時にガジェットから離れてく隊員

たちをしっかり確認して・・・

「フレースヴェルグ！」

砲撃の連射を開始。狙うのは直径８ｋｍのこの空域を悠々と飛んでるガジェット。砲撃はガジェットを１機、また１機と撃墜してく。そやけど空母からは新しいガジェットが次々と離陸してくる。空母は地球で見慣れたデザインやけど、一回りほど大きい。ガジェットを何十機と収めててもおかしない。

「にしても、また厄介な兵装やな・・・！」

ガジェットの機首両側に設けられてる銃身からの魔力弾。戦艦１１隻からの艦載砲と同じ、直撃を受けるとバインドで拘束される。

『はい。肉体的なダメージは無いにしても、何十ｍって空から海に落ちれば確実に激突死です』

バインド弾を受けた隊員は、無事な隊員のフォローでリュッチェンスに着艦することで墜落は免れてる。そやけど復帰までがかなり掛かってるようや。シグナムの２２１３航空隊の他に４つの航空隊が、最初から艦隊と交戦してるって話は受けてる。１部隊１５名の航空隊が５つ。総勢７５名が空に居らなおかしいのに、見えるだけで３０名ばかりしか居らへん。リュッチェンスの警備隊員も８人くらいしか確認できひん。

「ヴォルフラム警備隊は、私の撃ち漏らしたガジェットの追撃を！」

ガジェットの飛行能力は、プライソン戦役に投入されたものと比べるまでもなく進化してる。砲撃を躱したガジェットを部下に任せて、新しいガジェットの撃墜に集中する。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒なのは†††

「フェイトちゃん、大丈夫？」

「うん・・・大丈夫」

偽アリシアちゃんの身柄を本局捜査部に、そしてヴィヴィオ達をリアンシェルト少将に預け終えた私とフェイトちゃんは、ミッドに降りるためのトランスポートホールへと向かっていた。その最中、アリシアちゃんが偽者と入れ替わり、大隊に情報を流していたことにショックを受けてるフェイトちゃんを気遣った。

「気を失っていて会話も出来なかったけど・・・入れ替わってたことに全然気付けなかった」

一番近くで一緒に過ごしていた妹のフェイトちゃんですら気付けなかった。それほど完璧な偽者を用意できる大隊には恐怖しかない。

「フェイトちゃんもやっぱり残った方が・・・」

「ううん。行くよ。はやてが言ってたでしょ。ルシルが今、大隊の拠点に潜入しているって。拉致されたアリシア、それにアリサ達が

居るはずだって」

はやてちゃんとアインスさんから聞いたヴィヴィオ囮作戦の真実。私やフェイトちゃん、それに偽アリシアちゃんは、ヴィヴィオを囮にしてわざと拉致させて、ヴィヴィオが身に付けていた発信機能付きミサンガから拠点の場所を割り出す・・・ってことを聞かされてた。

（でもまさか、ルシル君がヴィヴィオに変装して自分を拉致させる、なんて・・・）

だけどそのおかげでルシル君は、大隊の一員だったフィヨルツェンさんの手によって拉致されて、今頃は拠点で大暴れ中かも知れないし、アリサちゃん達を救出してるかも知れない。ルシル君の強さと凄さを知ってるからこそフェイトちゃんは「ルシルを信じているから」不安そうな表情を消して、いつものキリッとした格好いい仕事顔を浮かべた。

「・・・そうだね。ルシル君ならきっと、みんなを助けてくれるよね！」

「うんっ！」

フェイトちゃんと笑顔で頷き合ってると、『高町なのは教導官、フェイト・T・ハラオウン執務官。リアンシェルト』です』って通信が入った。モニターに映ってるのはリアンシェルト少将だけど、ヴィヴィオ達の姿は無い。だからヴィヴィオ達に何かあったんじゃな

いか、って一気に不安になったけど・・・。

『第零技術部に協力を要請しました。彼女たちと合流し、第零技術部保有のＬＳ級艦ベルリネッタでミッドへ降下。大隊艦隊との交戦に入ってください』

有無を言わさないようなリアンシェルト少将の指示に私とフェイトちゃんは「了解です」と応じるしかなく。トランスポートホールへと進んでいた私たちは、すずかちゃんたち第零技術部――スカラボ（この愛称はチーム海鳴の間で今でも使われてる）の艦ベルリネッタが停泊している艦船ドックへと進路変更。

「はやてちゃんのヴォルフラムはすでに発ってるみたいだし、早くしないと」

艦船ドックへ続く通路を駆け抜け、各艦船への搭乗トランスポートが集まるホールに到着するとそこには「すずかちゃん！」や、シスターズのトーレさんとクアットロさんとセッテさんの４人が居た。

「なのはちゃん、フェイトちゃん！　いらっしゃい、待ってたよ」

「後はお前たちだけだぞ」

「「あ、はい！」」

「ウーノ姉様ぁ、出撃メンバーが揃いましたぁ～。これより搭乗しますのでベルリネッタの操作お願いしますぅ～」

『ええ、判ったわ。それではトランスポートで艦内に転送します』

クアットロさんがモニターを展開して、ウーノさんにそうお願いした。その様子に私はすずかちゃんに「ウーノさんやドゥーエさんはもう中に？」って聞いてみた。

「うん。２人はベルリネッタのブリッジスタッフなんだ」

すずかちゃんが言うには、ベルリネッタは武装を積んでないから火気管制スタッフは必要なくて操艦もほとんど自動だから、ウーノさんとドゥーエさんの２人だけでも十分に運用できるとのこと。

「ウーノ。全メンバー搭乗完了。管制室からの出航許可が下りたら、全速でミッドへと向かって」

『了解です。・・・すずか、管制室より出航許可が下りました。これよりベルリネッタは、ミッドチルダ東部アクアベール海へと向かいます』

ウーノさんからの報告も終わり、私たちはトランスポート室から少し離れた、空戦の練習が出来そうなほどに広く大きな部屋に通された。アースラのようなＬ級くらいの広さなら判るけど、ＬＳ級には設けられないはずだけど・・・。

「ベルリネッタは移動開発室であり試験場でもあるからね。長期航行もないし部隊運用もないから、食堂なんかの生活区画も限界まで

小さく出来たの。その分こういう試験場や、開発室や資材倉庫なんかに割けれたんだ～」

そう言って笑うすずかちゃんが手元に操作盤モニターを展開して、何かの操作を始めたところで「よう、なのは、フェイト」声を掛けられた。振り返れば「ヴィータちゃん！」が、よっ、て手を挙げて別のドアから出て来てた。

「ヴィータも、リアンシェルト少将に？」

「おう。リアンシェルトからっつうのが気に入らねぇけど、はやてとリインとアインス、それにシグナムやアギト、今日は非番だったシャマルやザフィーラまで出張ってるって聞かされたら行くっきゃねぇだろ」

ルシル君とアイリを除くチーム八神が揃ってるんだ。家族が待ってるんだからヴィータちゃんだって居ても立ってもいられないよね。私が微笑ましくヴィータちゃんを眺めてると、「んだよ？」ってジト目で睨んできた。

「ううん、なんでも！　ところでどこに居たの？」

「んあ？　あー、出航まで暇だったからちょっと見学をな」

ＬＳ級艦は私も今日初めて乗艦したし、ちょっと内装とか設備とか気になってたりする。はやてちゃんのヴォルフラムもＬＳ級だけど乗艦できる理由が無いし。

「ところで、すずか。第零技術部がどうして出撃を？」

「あ、うん。フェイトちゃん達、それに私たちは、この武装端末を装備して艦隊の撃沈をすることになる」

すずかちゃんが最後にキーを打つと、訓練場の奥にある両側に開くスライドドアが開いた。ドアから出て来たのは大きな立てかけ台が５台と、ソレを押すドラム缶・・・じゃない、２本のアームとキャスター付きの自動お掃除メカ・弐式が５機。

「「あ・・・！」」

立てかけ台に掛けられている物を見て私とヴィータちゃんが声を出した。私とヴィータちゃん・・・というか教導隊は、武装端末というものを知っていた。というより使ったこともある。

「？　なのはとヴィータはコレのこと知っているの？」

「あ、うん」「まあな」

「３ヵ月前くらい前に教導隊の人たちにテストしてもらったの。対ＡＭＦ兵装、Ａｎｔｉ－Ｉｎｔｅｒｆｅｒｅｎｃｅ　Ａｒｍａｍｅｎｔ、ＡＩＦＡシリーズ。元はドクターが、プライソンの造った兵器の装甲やＡＭＦに対抗するために設計していたものを、私たちで発掘して急ピッチで開発したものだよ」

「今世間を騒がせている大隊の艦隊も、プライソンが遺した負の遺産のようだからな」

「はい。ドクターの遺志のためにも完成させて、今度こそ遺産すべてをこの世から消し去ります」

すずかちゃん達が遠い目をした。ドクター、ジェイル・スカリエッティ少将のことを思い起こしてるんだって察したから、私たちは口を噤んだ。今声を掛けるのは待った方がいいと思って・・・。

「あ、でね。フェイトちゃんとトーレは、このストライクカノンを装備してもらうね」

大剣のような長大な砲身を持つ"ストライクカノン"。砲身が閉じてる間は突撃槍や大剣として扱えるから、接近戦を挑まれても対処が出来る。開いてる時はレールガンみたく物質弾の加速レールとして使えるし、魔力じゃないエネルギー砲も放てる優れもの。

「フェイト。ストライクカノンのシステムを説明しておく。来てくれ」

「あ、はい！」

トーレさんが"ストライクカノン"1基を軽々持ち上げると、フェイトちゃんも1基を手に取って持ち上げようとしたけど「重っ・・・！？」って驚きを見せた。

「あ、フェイトちゃん気を付けてね。デバイスと違って内部機構がいろいろと詰め込んであるからかなり重いよ。トーレ、慣性コントロールシステムの立ち上げを」

トーレさんの教え通りに慣性コントロールシステムを立ち上げることで"ストライクカノン"を持ち上げることが出来て、トーレさんはフェイトちゃんを伴って少し離れたところへ移動した。

「ヴィータちゃんは、このウォーハンマーね」

「おお！　ハンマー型じゃねぇかよ！　さっきから気になってたんだよな！」

「あはは！　セッテもこのウォーハンマーでの出撃だから、ヴィータちゃんにいろいろと教えてあげて」

「判りました。ヴィータ教導官、ウォーハンマーを持ってこちらへ」

「おうよ！」

セッテさんとヴィータちゃんも"ウォーハンマー"の慣性コントロールシステムを立ち上げてから軽々持ち上げた。そしてフェイトちゃん達とはまた別の方へと向かった。

「そして私となのはちゃんはコレ、フォートレスを装備した上でのストライクカノンになるけど・・・」

背中から膝裏にかけて背負うようなメインユニットに、両腰の飛行制御ユニット、そして3枚の多目的盾という兵装一式の"フォートレス"。以前のテストの時は盾は2枚だったけど、1枚増えたんだね。

「大丈夫だよ、すずかちゃん。さ、今回のフォートレスの仕様を教えて」

「あ、うん！」

私はすずかちゃんから、フェイトちゃんはトーレさんから、ヴィータちゃんはセッテさんから、それぞれ武装端末の仕様や使用方法を細かく教わった。

「作戦なんだけど、あ・・・作戦と呼べるほどのものじゃないけど、私となのはちゃんは固定砲台としてフォートレスとストライクカノンで砲撃。フェイトちゃんとトーレは遊撃砲台として、私となのはちゃんの砲撃の着弾点を追撃。ヴィータちゃんとセッテは、砲撃の合間の繋ぎとしての打撃要因・・・。教導官のなのはちゃんとヴィータちゃん、執務官のフェイトちゃん、何か異見はあるかな？」

「私は無いよ」

「あたしもだ」

「うん、私も同じく無し。現場にははやてちゃん達が居るし、戦力は十分だと思う」

「私もシルバーカーテンでサポートしますよぉ♪」

シャルちゃん達もどこかで大隊と戦ってる。ここが踏ん張りどころだ。

「最後に。ＡＩＦＡシリーズはその仕様上バッテリー駆動で、消費も激しい。だから降下ハッチ室に換えのバッテリーを用意しておくから、バッテリー切れを起こしたら帰艦してね。あと、未だに試作段階ということもあって連続使用による弊害が起きないとも限らない。その時は帰還せずにそのまま兵装を廃棄してもいいからね。兵装はまた造れるけど、みんなの命に代えは無いんだから」

すずかちゃん達が頑張って造ってきた物だからそんな真似はしたくないけど、すずかちゃんの気持ちを無視するわけにはいかない。だから私たちは「うんっ！」力強く頷いた。そして私たちは、ミッドに到着するまでの間に出来る事を全てやっておくため、何度もバッテリー交換などの練習を行った。

『こちらブリッジ。ミッド大気圏外への突入を開始します』

『降下ハッチ室に移動してちょうだい』

ブリッジのウーノさんとドゥーエさんからの報告に私たちは頷き合って、出撃に備えるために試験場を後にした。

Ｅｐｉｃａ４１－Ｂモルゲンデメルング艦隊攻略戦～Ｂａｔｔｌｅ
ｏｆ　Ａｑｕａｖｅｉｌ～

†††Ｓｉｄｅアインス†††

以前遭遇した時は逃してしまった大隊の艦隊を、今度こそが撃沈するべく交戦を開始したのだが・・・。

「なんだ、この硬さは・・・！」

私は主はやての指示の下、シグナムやザフィーラ、数居る航空隊員たちと共に艦隊全てを覆えるほどの巨大なバリアを破壊しようと試みているが、なかなか突破できない。

（以前遭遇した戦艦には通じていた防御魔法貫通の魔力杭では歯が立たない）

バリアの質が変化している。魔法とはプログラムであり、貫通や破壊効果の魔法は、プラグラムにプログラムを割り込ませて破綻させるというものだ。前回の戦艦のバリアもそれで無理やり突破させたわけだが、今回はプログラムを割り込ませる前に分散させられている感じがする。そう、これはバリアではなく、目に見えるレベルのＡＭＦだ。

「（ただ、単純なＡＭＦであれば、艦載砲も無力化されてもおかしくないが、艦載砲はバリアを突破してくる。何かカラクリがあるは

ずだ。ミサイル発射時にはわざわざ解除するくらいだ）・・・シグナム、純粋魔力攻撃ではおそらく無理だ！　魔力付加も含めた物理攻撃に切り替えてくれ！」

「了解だ！」

そして私も物理攻撃を選択して、発動の準備に移る。ＡＭＦの最大の弱点は完全物理攻撃に弱いと言うことだ。が、艦隊の装甲も対物効果くらいは有しているだろう。ならばこちらは物量で攻めるだけだ。足元にベルカ魔法陣を展開。

「水精、天へと翔け集え。高き処にて舞う息吹にて剣と成り、天壌を撃ち貫け！」

艦隊の周囲１２箇所より水柱が螺旋を描くように空高くまで伸び、空で合流すると巨大な剣の形へと固定され、さらに氷結させることで、質量で相手を貫く物理攻撃である全長３００ｍの「ベリサルダ！」となる。

「ザフィーラは破城の戦杭を！」

「む？　戦杭は質量を持っているとはいえ純粋魔力攻撃だぞ？」

「ああ、構わない！」

物理攻撃で攻めるが、魔力攻撃による揺らぎも無駄にはならないだろう。さすがにザフィーラに、素手で殴りにいけ、とは言えない。

準備は整い、私は艦隊のバリアに攻撃を加えていた全隊に避難するように呼びかけ、避難が完了したのを確認。

「翔けよ隼！」

『シュツルムファルケン！』

「破城の戦杭！」

ボーゲンフォルムとなっている"レヴァンティン"より射られた矢と、空から落ちて来る巨大な杭がバリアに打ち付けられた。バリアは僅かに軋みを上げるがそれだけだ。

「往け！」

巨大氷剣ベリサルダが戦杭に続いてバリアに激突したが、先端から砕け始める。

「まだだ！」

――グラーシーザ――

バリアの面に沿って海上へと落ちていく氷塊を環状魔法陣で取り巻いて止め、「放て！」号令を下す。環状魔法陣は加速発射プログラムを有している。ゆえに超高速で氷塊を撃ち出すことが出来る。

「ビクともしないな・・・！」

「アインス！」

「攻撃の手を緩めるな！」

崩落していく氷剣の破片すべてに環状魔法陣を展開させ、バリアへと次々発射していく。ザフィーラも再度戦杭による攻撃を行う中、「アインス！」シグナムが私の元へと来て、ガジェットより放たれたバインド弾をシールドで防御してくれた。私はシグナムに「ありがとう！」と礼を言い、次の魔法を準備に入ろうと考えたのだが・・・。

（主はやてをガジェットの殲滅担当にするのが間違っているのか・・・？）

ガジェットは現状の航空隊や警備隊だけでも十分攻略できている。ならば、と結論付けたところで、『こちらハルトマンです。全隊はガジェットの撃墜に従事。八神司令、チーム八神として艦隊への攻撃を！』との指令が入った。主はやてを始めとした全隊が『了解！』と応じた。

「そうゆうわけや！　チーム八神、全力全開でいくよ！」

「「「『『はい！』』」」」

主はやてが合流してくださるだけで流れは変わるだろう。彼女の騎士として私たちの戦意も高揚するというものだ。

「ザフィーラは、私の護衛をしながら戦杭を打ち続けて！　シグナムは引き続きファルケンを！　アインスはグラーシーザで波状攻撃や！」

「「了解です！」「承知！」

「アギト、サポートを任せるぞ！」

『おうよ！』

シグナムは足元に展開した魔法陣に着地し、ボーゲンフォルムの"レヴァンティン"を構える。ザフィーラは主はやての側に控え、ガジェットの動向に注意を払いつつも「破城の戦杭！」を発動。そして私も、バリアの周辺６０箇所の水柱を噴き上げさせ、水飛沫を凍結して槍の穂と成す。何百発という穂を環状魔法陣で宙に固定。

「リイン、螺旋槍いくよ！」

『了解です！』

主はやての側に浮く"夜天の書"のページが勢いよく捲れ、あるページで止まった。

「我が呼びかけに応じ参ぜよ。深淵奈落を支配する冥府の女王の槍。空穿つ螺旋の唸りは破滅与える喜びの咆哮。突き進む道妨げる壁を無残に穿ち、其に純然たる破壊を齎す！」

バリア上空に巨大な螺旋槍を召喚。全隊から「おお！」と歓声が上がった。そして主はやてが「ヴルフシュペーア・デア・ウンターヴェルト！」術式名を唱え、螺旋槍がゆっくりと回転を始めて降下。

「いっけぇぇぇぇぇーーーー！」

「艦載砲の攻撃の種類が変化！　バインド弾から砲撃！」

「螺旋槍を迎撃し始めた・・・！」

圧倒的な質量を誇り、貫通力に優れた螺旋槍に、さすがに艦隊も危機感を抱いたようだ。空母とミサイル艦を除く戦艦１１隻からの砲撃による迎撃は、螺旋槍を徐々にだが削っていく。

「シグナム！」

「ああ！」

『翔けよ、隼！』

「シュツルムファルケン！」

「奔れ、グラーシーザ！」

私とシグナムでバリアへと攻撃を加えていき、ザフィーラはバリア上空に描いた２０枚の魔法陣より「鋼の軛！」を突き出させ、砲撃

の行く手を防ぎ続ける。ザフィーラのその機転で螺旋槍のダメージは減り、ようやく切っ先がバリアと激突。轟音と共にバリアがグッと沈み、海面も大きく波立った。

「このまま撃ち貫く！」

螺旋槍の回転速度が徐々に上がっていき、螺旋槍を破壊しようと艦載砲も放たれ続ける。私たちもバリアに攻撃を加え続ける中、「ガジェットが・・・！」螺旋槍に特攻を仕掛け始めた。全隊を無力化するより螺旋槍を潰すことを優先したようだ。

「それほどまでの脅威というのなら、私たちは螺旋槍（ソレ）を守ろう！刃以て血に染めよ。ブルーティガードルヒ！」

血色の短剣型高速射撃魔法を発動。私の周囲に５０発と展開し、「穿て！」一斉射出。ガジェットの速度をダガーは超えており、自動誘導型でもあるため逃げても着弾まで追い続ける。それもあって次々とガジェットの推進器に着弾して炸裂、続々と撃墜していく。

「アインス！　ヘイムダルの単独発動、確か出来たよな！？　念のためにスタンバイしておいて！」

「ヘイムダルをですか？　ですがアレの発動には申請や許可が必要なはず・・・」

ヘイムダルは、ベリサルダと同じく多量の水を空中にて凍結させて氷塊と成し、その質量で以て対象を押し潰す物理攻撃だ。しかし純

粋物理攻撃であり、なおかつ直撃後の影響などを考慮してその発動にはいろいと手続きが必要になってくるはずなのだが・・・。

「心配あらへんよ。本局でアインスと合流する前にすでに申請を出してたし、ついさっき許可が下りたからな」

「そ、そうですか、それはまた・・・」

用意周到、見事です主はやて。局から許可が下りているのなら遠慮は要らない。螺旋槍が徐々に崩れ始めていくのを視界に収めながら、足元にベルカ魔法陣を展開。元"夜天の書"の管制人格である私は、今の2代目"夜天の書"に納められている魔法を全て、この身1つで発動できるようになっている。

「（ルシルから授かったSSSランクの魔力量の使い時と言うわけだ）・・・海より集え、水神の槍」

ヘイムダルの詠唱を開始。バリアの周囲8箇所の海面より空へと向かって海水が勢いよく立ち昇る。螺旋槍の石突の上空で1箇所に集まって巨大な塊となる。

「彼方より来たれ銀雪の吐息。逆巻き連なり天に座せ・・・！」

その巨大な水の塊が凍り付いていき氷塊へと姿を変える。今は魔力で宙に浮かせているが、その魔法を解除すれば後は落下して、下に在るもの全てを押し潰す一撃、ヘイムダルの完成だ。

「アインス、もうちょいそのままで待機お願いや！」

「了解です！」

螺旋槍の回転が徐々に鈍くなっていき、至る所からボロボロと崩れていく。穂先もバリアに若干食い込んでいるかどうかと言ったところで、バリアの強度が尋常ではないことを改めて確認できたわけだが・・・。

「アカン、崩れる！」

とうとう回転が止まり、螺旋槍はその役目を果たすことなく瓦解を始めた。大小様々な岩塊がバリアに直撃していくがビクともしない。そして砲撃は、今度は氷塊を狙い始めた。

「アインス！」

「はい！　落ちよ、ヘイムダル！」

氷塊を取り巻いていた環状魔法陣を消失させると、浮力を失った氷塊が落下し始める。螺旋槍の瓦礫と共にバリアへと激突・・・するかどうかというところで・・・

――空対地（アンビプテラ）レールガン――

氷塊が複数発の砲撃によって破砕されてしまった。魔力でもエネルギーでもなく、さらにこの高威力ということで、瞬時にレールガン

によるものだと判った。

『艦隊の上空に熱源反応！』

『モニターに出します！』

側にモニターが展開されたのだが、「何も映ってない・・・？」ようだ。熱源反応というのは、レールガン発射時のものだろうから、上空に何か居るのは間違いないはずだ。

「アインス！」

「はい！　槍陣を成せ　白銀の破槌！　ヘイムダル・ファランクスシフト！」

砕かれて海面へと向かって崩落していた氷塊を再集結させ、さらに複数の小型氷塊でバリアを包囲。そして「落ちろ！」と号令を下すと同時・・・

――空対地（アンビプテラ）レールガン――

レールガンがやはり上空から発射されたのが判った。氷塊がまた破砕される中、主はやてが「ハルトマン司令！　熱源はどこからでしょう！」と尋ね、『少し時間を！　・・・高度１２ｋｍ！？　成層圏からの狙撃です！』という報告を受けた。

『記録映像をモニターに出します！』

モニターに映るのは広大な空だけだったのだが、いきなり何も無い宙で強烈な爆発が起きた。レールガン発射時のマズルフラッシュだろう。間違いなく成層圏に何かが居る、もしくは在る。そんな正体不明のことを、アンノウン、と呼称することになり、その呼称が呼ばれたら最大警戒だ。

「アインス、ちょう辛いかも知れへんけど・・・」

「問題ありません。正体を掴めるまでヘイムダルを生成し続けます！」

再び海水を巻き上げさせ、崩落する氷塊を巻き込んでバリア上空で再結集。そこをまたレールガンで破砕される。主はやて達の総攻撃を受けても揺るがないバリアを展開したままの艦隊が徐々に戦闘区域から離脱していく。

「しかし何故だ？　転移で逃げないのは・・・？」

『こちら第零技術部所属艦ベルリネッタ、ウーノ・スカリエッティ一尉です。これより月村すずか技術主任、トーレ・スカリエッティ一尉、クアットロ教官、セッテ・スカリエッティ二尉、高町なのは教導官、八神ヴィータ教導官、フェイト・T・ハラオウン執務官の、対ＡＭＦ武装隊が参戦します。指揮権は八神はやて二佐、あなたに委譲します』

艦隊の不自然な離脱方法に疑念を抱いているところにウーノ・スカリエッティからの全隊通信が入った。空を見上げればＬＳ級の艦船

が、ヴォルフラムやリュッチェンスの側へと向かって来ていた。

†††Ｓｉｄｅアインス⇒すずか†††

武装端末を装備した私たちはベルリネッタからの降下ハッチから空へと飛び立って、すでに艦隊と交戦中だったはやてちゃん達と合流して、はやてちゃんの指揮下へと入った。

「――なるほど。すずかちゃん達が今武装してるのが、スカラボ特製の対ＡＭＦ武装ってわけか。とりあえず遠距離系の武装で撃ってもらえるか？　その効果を確かめて見たい」

「了解！　なのはちゃん、フェイトちゃん、トーレ。砲撃戦モードを！」

近接用の"ウォーハンマー"を装備してるヴィータちゃんとセッテ、かく乱担当のクアットロ以外の私たちは魔法陣やテンプレートの足場に着地して、それぞれ装備してる武装の先端を巨大なバリアで身を護ってる艦隊へと向けた。

「「「「バレルオープン！」」」」

"ストライクカノン"の砲身を展開して、バッテリー駆動によるエネルギーをチャージ。

「「Ｓ１、Ｓ２、バレル展開！」」

さらに私となのはちゃんは、自身の両サイドに浮遊してる"フォートレス"を構成してるシールド3基の内の2基、大型のS1、中型のS2シールドの砲門も向ける。S1は砲撃戦用の粒子砲で、S2は中距離戦用のプラズマ砲。ちなみに新しく採用したS3には、近接戦用の実体剣を内蔵させてある。

「みんな、すずかちゃん達の邪魔になるような敵の動きに注意！いつでも対処できるように！」

「ヘイムダルを囮にします！」

「ガジェットの増援やミサイルの発射は途切れているが、空に何か居るのも確かだ！　各員、最大警戒！」

バリア上空に造りだされる巨大な氷の塊が、何か居るらしい空から私たちの姿を覆い隠してくれた。

『注意！　アンノウンに熱源反応！』

――空対地（アンビプテラ）レールガン――

その直後に氷塊が撃ち砕かれて、いろいろな大きさの氷塊がバリアに向かって降り注いで直撃してく。そのうち、私たちの射線上を邪魔するように落ちてきていた氷塊が、深紫色の環状魔法陣でフワリと浮いた。

「射線クリア！　今や！」

「「ストライクカノン！」」

「「エクサランスカノン・ヴァリアブルレイド！」」

「「「「シューット！！」」」」

トリガーを引いて一斉に砲撃を放った。バリアは艦載砲やはやてちゃん、アインスさんの特大魔法、シグナムさん達航空隊の攻撃を何度受けてもビクともしなかったことは、ここに来るまでに送られてきた交戦記録映像で判ってた。それでも私は、ドクターが考え、それを形にしたスカラボのみんなの努力を信じたい。きっとプライソンの遺産に勝てるって・・・。

「当たれぇぇぇぇぇーーーーっ！」

私たちの砲撃はバリアに到達して、そのまま弾かれることなくスッと通過。そして13隻ある戦艦の内、2隻の戦艦の側面に着弾して爆発、黒煙を上げた。

「バリアを難なく貫いた！？」

「というよりは素通りした！？」

はやてちゃんの驚きの声の後、「おおおおお！」って歓声が周囲から上がった。その最中でも氷塊がいくつもバリアに当たっていくけど突破できずに弾かれて、バリアの側面をすぅーっと滑っていく。

『八神司令！』

「はいっ！　対ＡＭＦ隊は艦隊への攻撃を続行！　それ以外が護衛！　大気圏外に何かしらの兵器、あるいは大隊メンバーが居る可能性が大きい！　最大警戒で、対ＡＭＦ隊を護りきるんや！」

はやてちゃんの指示が全隊に伝わって「了解！」の大合唱。直後に『注意！　艦載砲が稼動！』とリュッチェンスから知らせが入った。砲撃を受けた２隻と空母、そしてミサイル発射艦以外の９隻の主砲や副砲などの砲門が、私たちの居る高度に合わせてきた。

「全隊ブレイク！　ザフィーラ、アインス！　すずかちゃん達を護って！」

「「はいっ！」」

砲撃体勢を一旦解除して、艦載砲より放たれる魔力弾の回避行動に入る中、私は「クアットロ！」に、シルバーカーテンによるかく乱をお願いする。１３隻の艦は無人らしいし、幻術や電子系で攻めれば艦隊の動きを抑えることが出来るかも。

「ベルリネッタ、リュッチェンス、ヴォルフラム。これより幻術でデコイを多数生み出します。識別信号を送りますので、全隊にも送信してください」

『『『了解です』』』

「信号の送信・・・完了。クアットロ、いいよ！」

「は～い！　シルバーカーテンいっきま～すぅ！」

クアットロが発動したシルバーカーテン。私たち全員の幻影が何十体と空を覆った。艦載砲からの攻撃がピタリと止んだことではやてちゃんから対ＡＭＦ（わたしたち）武装隊に「攻撃続行！」指示を出た。私たちも「了解！」と応じて、トリガーを引いて一斉に砲撃を発射。砲撃はまたバリアを完全にスルーして、指示どおりに砲台を破壊していく。

『注意！　アンノウンから魔力反応！　数２！』

『魔力反応増大！　ターゲット１の魔法発動を確認！　魔力値測定・・・Ｓ＋相当！』

――氷柱弾雨（セリオン・エクサラシオン）――

空から落ちてたのは魔導師じゃなくて巨大な氷の六角柱９本。直径５ｍ、全長３０ｍほどもあろうかっていう氷柱が何十本と渦巻き状に落下して来た。本物の隊員たちは避け切れているけど、幻術の方は躱しきれずに押し潰されちゃってる。

「まだまだ行きますぅ～！」

――シルバーカーテン――

「今の魔法はまさか・・・！」

「シグナム、それを考えるんは後や！　私たちがすずかちゃん達を必ず護りきる！　どんどん攻撃して！」

「了解！」

「ヴィータちゃん、セッテ！　プラズマパイルでの攻撃を許可します！　あ、でももし、ここに来るまでの仮説どおりだった場合は・・・」

「そん時は、トーレのストライクカノンと端末交換だな。判ってる。よっしゃ！　んじゃはやて、いってくる！」

「了解。ウォーハンマー、プラズマパイルでの攻撃を開始します」

「気ぃ付けてな、ヴィータ！　セッテさんも！」

艦隊への射線が通る位置を探りながら、近接武装の"ウォーハンマー"を持つ2人に指示を出すと、2人はほぼ無差別に発射され続ける艦載砲の弾幕の中を突っ切ってく。

『注意！　ターゲット2の魔法発動を確認！』

「来るぞ！」

空から落雷のような轟音と稲光がしたかと思えば、今なお落ち続け

てる氷柱に沿うようにして雷が私たちの居る高度にまで降りて来た。そしてある1本の氷柱の天辺に降り立ったことで雷撃の正体を確認できた。紫色の雷を全身に身に纏った、大隊の制服を着た男性だ。

――ブリッツ・セッテ――

全身に纏う電撃から鎖が１０本と伸びて来た。その先端が私たち対ＡＭＦ武装隊に向かってるのが直感で判った。

「迎撃！　ブラッディダガー！」

「ブルーティガードルヒ！」

「「シュート！」」

はやてちゃんとアインスさんが血色の短剣型射撃魔法を発動。２人合わせて５０本の短剣が高速で放たれて、電撃の鎖を全て迎撃して弾いた。残りの短剣は本体の仮面持ちへ向かうけど、氷柱から飛び降りた彼が氷柱の側面を蹴って、私に向かって突進してきた。

「なのはちゃん達は攻撃続行！」

私の指示で私の側から離れたなのはちゃん達は、それぞれ自分で射線を確保して艦隊への攻撃を続ける。私は仮面持ちへの攻撃に備えて"フォートレス"を本来の役割――盾として使う。

「前面展開！」

3つのシールドを前方に逆三角形に展開して、中央の隙間へと"スノーホワイト"をはめた右手の平を翳して「バスターラッシュ、スタンバイ！」する。"ストライクカノン"の出力を絞れば非殺傷設定と同じような効果を発揮できるけど、あくまで似たようなだから基本的に魔法が通用する相手への発砲は管理局法上禁止だ。だからここは私の魔法の出番。

「紫電・・・一閃！」

私を護るように立ちはだかってくれたシグナムさんの紫電一閃が仮面持ちに向かって振り下ろされるけど、その一撃が彼に当たることはなかった。何故なら仮面持ちが直角に急上昇したから。凄い機動力だって驚く暇もなく私たちの視線が上に向くと、仮面持ちはシグナムさんの頭上から改めて私に向かって来ようとしていた。

「させん！」

――牙獣走破！――

ザフィーラさんの飛び蹴りが仮面持ちを襲う。だけどその一撃すらも彼は身を捩って回避。でも「シュヴァルツェ・ヴィルクング！」アインスさんの奇襲のような鋭い一撃は直撃。大きくよろけたところに、「紫電一閃！」シグナムさんの炎の斬撃を今度は食らって、バリアの方へと墜落。

「ダメだ！　あたしじゃバリアを突破できねぇ！　すずかの言って

た通りだ！」

仮面持ちの方へと視線を向けたところにヴィータちゃんが戻ってきた。ただのバリアじゃないと思ってたけど、やっぱり結界だったんだ。純粋魔力を一切通さず、全てのプロセス内で少しでも魔力を使った物理攻撃すらも防ぐ。だから魔力の防護服に身を包んだヴィータちゃんは結界に弾かれて、一切の魔力を使用しないセッテや"ウォーハンマー"は結界をスルー出来た。

「判った！　トーレ、ヴィータちゃんと端末交換！　ヴィータちゃん、ストライクカノンの使用法は・・・」

「問題ねぇ、知ってる！」

――制圧せし氷狼（インバシオン・ローボ）――

『注意！　ターゲット1が魔法発動！』

トーレとヴィータちゃんが端末の交換をしている中で報告が入った。遅れて空から氷で出来た狼が２０頭と駆けて来た。完全にカローラ姉妹の魔法だけど、それを口にすることはなかった。セレスちゃんは今、大隊と戦ってるそうだからきっと・・・フィレス元一尉だ・・・。

――ブリッツ・クーゲル――

さらにバリアの表面に立ってる男性仮面持ちが電撃弾を３０発と放

ってきた。それらは私たち対ＡＭＦ隊に標的が絞られていて、艦載砲も本物と偽者との区別がつき始めたのか、かなり側を通っていくようになってきてる。

「端末の交換完了！　すずか、私はセッテと合流してバリア内部から攻撃を開始する！」

「あたしはフェイトと一緒にストライクカノンで砲撃担当だな！」

「カノンの反動結構きついから気を付けてねヴィータ！」

「私とすずかちゃんは、このままフォートレスとストライクカノンによる爆撃だね！」

「トーレとセッテを誤射しないように注意しながらだけど、端末には互いの位置や射線を知らせる安全装置もあるから、派手にいこう！」

「安心して。みんなは私らが全力で護衛する！」

はやてちゃん達が電撃弾や氷の狼を迎撃してくれるから、私たちも安心して攻撃を続けられる。そしてとうとう「戦艦の１隻を撃沈！」することが出来た。黒煙を上げて転覆した１隻の戦艦が少しずつ海の中に沈んでいく。

『注意！　アンノウンから魔力反応！　数・・・２０！　敵性魔導師部隊です！』

歓声が上がって、さぁ次の戦艦を沈めるために動こうとしていた中での増援の報告。武装隊や警備隊の人たちが、自分たちが請け負います、と高度を上げていく。そして交戦に入った。

――雪花飛刃（ペタロ・アニリョ）――

――ブリッツ・クーゲル――

氷の花弁型カッターと電撃弾が襲い掛かってくるけど、それらをはやてちゃん達が迎撃してくれる。そして私たちが艦隊への攻撃をする。それを繰り返して、さらに空母とミサイル艦を撃沈して何十分か経過したとき・・・

『時空管理局、そして聖王教会の皆さん、聞こえますか。本局内務調査部、聖王教会騎士団オランジェ・ロドデンドロン所属、ルシリオン・セインテストです。私は今、最後の大隊の拠点に潜入しています』

ルシル君からの通信が入った。

Ｅｐｉｃａ４２暴かれる真実～Ｉ　ｒｅｖｅａｌ　ａ　ｓｅｃｒｅｔ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

拠点に居た魔導師や騎士を片っ端から相手にしたことで疲労が溜まってきたが、その分リンカーコアから魔力を吸収してドーピング用の魔力結晶を創ることが出来た。

『大量だね、マイスター♪』

「ああ。この結晶でフィヨルツェンとの戦闘は乗り越えられるだろうな」

"ジュエルシード"を温存できるのは嬉しい話だ。思わぬ儲けに上機嫌になっていると、俺の側にモニターが展開され、三頭身の少女が映し出された。

『マスター。施設内の防衛戦力、残り１２人。１人ずつ誘い出す？指示プリーズ ш（。д。ш）』

アリサ達を安全に脱出させるため、拠点内に居る戦力を俺の居る部屋へと誘うように指示を出していたステガノグラフィア、そのの１体で拠点のクラッキングを担当しているライシエルから報告が入る。

「３人ずつで頼む。１２人はさすがに面倒くさい」

『イエス！　３人ずつそちらのお部屋に誘い出します！∠（＾ー＾）』

ライシエルは再び拠点の電子の海に潜り、隔壁などの操作を始めた。この部屋に敵戦力が誘導されるまで時間もあるだろうし、休憩がてら他のステガノグラフィアに連絡を取ってみる。まずはメナディエル。

「メナディエル。お前は今、どうしている？」

『あ、マスター！　わたしは今、この２人の案内中です！∠（＾ー＾）』

メナディエルの姿がモニター端に消えて映像が切り替わる。モニターに姿を見せたのは「マリアンネさん、パーシヴァル」の２人だった。これまでの交戦の最中に、拉致されて偽者と入れ替わられたメンバーの一覧データを閲覧させてもらった。その中に２人の名前を見つけていたし、先ほどスバル達から名前も聞いていたから驚きはしない。

『ルシル君♪　メナディエルって子から事情は聞いているわ♪』

『ヴィヴィオ陛下に変装してわざと拉致されるなんて、すごい事を考えるものだよ君は。でもそのおかげで今、僕たちはこうして脱出するために動ける。感謝しているよ』

「いえ。ところでお２人の健康状態は？」

俺の心配にマリアンネさんが『すこぶる快調よ。どれだけ眠らされていたか判らないけど、休暇としてはまあまあだったわね！』と笑い声を上げた。半年近く偽者と入れ替わられ、好き勝手されたんだが、マリアンネさんは余裕そうだ・・・なんて思っていたが・・・。

『ルシル君。今の教会と騎士団、管理世界の現状を教えてもらえる？
アリサちゃん達から伺おうとしたのだけど、直後に転送トラップを受けたの。ホント苛立たしい』

声には怒りが篭っていた。そんなマリアンネさんやパーシヴァルに管理世界の現状を伝える。管理局法脱退による騎士団の暴走。最後の大隊を率いているのはリナルド・トラバント騎士団長。協力者に古参パラディンが複数名、現パラディン複数名、教会技術部、フリーランス魔導師に魔導犯罪者、あと拉致した者のクローンにプライソンの遺産などなどが居り、クローンを使って管理局を貶め、大隊を使って騎士団の評判を上げるマッチポンプが行われていると。

『なんてこと・・・！』

『想像以上に最悪な展開だ・・・』

文字通り頭を抱えて苦悩の表情を浮かべていたマリアンネさんだったが、『リナルドがどこに居るか判る？』とギラッと力強い光を灯した瞳を俺に向けた。

「入手できたオペレーションデータを見る限り、おそらく教会本部

に詰めているはずです」

現在行われている大規模作戦は1つ。大隊主力級戦力と、アクアベール海に展開中であるモルゲンデメルング艦隊、その巡航・弾道ミサイルの波状攻撃による、俺たちオランジェ・ロドデンドロン殺害作戦。それ以外の幹部は教会本部か、もしくはこの拠点のどこかに居るはずだが・・・。トラバント騎士団長が本部を離れることはそうはないだろう、と伝えた。

『そう・・・。確かにルシル君の言うとおりだわ。・・・ルシル君、本部まで直行できる手段は無いかしら？　聖王教会教皇として、ベルカ自治領ザンクト・オルフェンの領主として、私は責任を負わないといけないの』

『ルシル。僕からも頼む』

「・・・判りました。少し待ってください。ルートを検索させます。ライシエル、聞いていたな」

『イエス！　トランスポートホールがあります！　隔壁操作・・・完了！　メナディエルにルート転送！　あとの誘導はそっちに任せたよ！（人ﾛ、＊）』

『シン！　任務引継ぎ完了！ノ（^ ―^）』

仕事が速くて大助かりだ。モニター内で敬礼をし合うライシエルとメナディエルに「よくやった」と労いの言葉を掛け、「というわけ

ですので、メナディエルの指示に従って進んでください」とマリアンネさん達に伝える。

『ありがとう、ルシル君！　地上でまた逢いましょう！』

『ルシル。気を付けて任務を続けてくれ』

マリアンネさんとパーシヴァルと頷き合って通信を切り、「ライシエル。アメナディエルとマカリエルに、トランスポートホールへのルートを送信」アリサ達の誘導を行っているであろうマカリエルと、スバル達の誘導を行っているアメナディエルは、地上への歩行ルートで誘導している。

『イエス！ノ（^ ―^）』

（転移スキル持ちの仮面持ち、シスター・トルーデの力で外界との移動を行っていたと思い込んだのがそもそもの俺のミス。彼女に何かあれば移動手段が無くなる。それを当然としてちゃんと別の転送手段を持っているはずなんだ）

大隊＝転移スキルでの移動、というのが当たり前になりすぎていた。

『マスター。最初の３人をそっちに誘導するよｄ（ｉε－＊）』

猛省しているとライシエルから報告が入り、プシュッとスライドドアが開いた。

「ルシリオン・セインテスト・・・・！」

「部屋の端を見ろ！　同志たちが・・・・！」

「たった1人になんて様だ・・・！」

大隊の制服を着た男2人と女1人のトリオだ。四芒星と六芒星の仮面を被る杖持ちの男2人は初見だが、剣持ちの逆五角形の仮面を被る女は、マリンガーデンでの一件でセレスとティアナから報告を受けている。少々特殊な騎士なようだ。

『マイスター！』

『ああ。あまり時間は掛けたくない。早々に終わらせるぞ』

――煌（コード）き示せ、汝（アダメル）の閃輝――

――ノート・ヴェーア――

俺の周囲に展開した光球6基から一斉に魔法砲撃を発射すると、女仮面持ちが「もらった！」と嬉しげに声を上げ、3人を護れるほどの広い魔力バリアを発生させた。砲撃はバリアに着弾するが、僅かな拮抗の後にバリアを粉砕。しかし仮面持ち3人に直撃はせず、砲撃の軌道が逸らされてしまったことで彼らの背後の壁に着弾。

「「うわあああああ！」」「くぅ・・・！」

まぁそれでもその際の魔力爆発に巻き込まれてしまったが。直撃ではないことから、これで終わったと油断するような間抜けは犯さない。

「シーリングバインド、スタンバイ」

魔力生成阻害効果のバインドの発動を準備。そして白煙から飛び出して来た、剣を鞘から抜き放っている女仮面持ちへ向けて「拘束！」バインドを発動する。女仮面持ちを拘束するべく、彼女を包囲するようにバインド６つが収束。

――フェアナイネン・ズィーーー

「ん・・・？」『あれ？』

あと少しで女仮面持ちを拘束できるというところで、バインドが全て消失した。彼女はそれが当然だとでもいうように怯みもせず、剣を居合いのように構えたまま突っ込んで来る。

『マイスター、やっぱりアイツの魔法って・・・・！』

「『ああ、だろうな』・・・舞い振るは、汝の麗雪！」

天井近くに展開した氷槍５０本を、「ジャッジメント！」雨のように降らせる。男２人は回避や防御を行うなどの対処に入ったが・・・

――フェアナイネン・ズィーーー

女仮面持ちだけ直進し、彼女への直撃間近に氷槍が全て消滅した。ＡＭＦではない別種の対魔法防御。セレスとティアナの報告どおり。セレスの魔法すら完全無力化できる魔導師などそうはいない。ならそのカラクリを探り当てるのが俺の仕事だ。

「おお！　同志ソールなら、ルシリオンに勝てるぞ！」

「ああ！　俺たちだって負けてられないな！」

鋭い斬撃を繰り出す女仮面持ち――ソールと、その斬撃を躱し続ける俺の姿に男２人が息巻いた。やる気を見せるのは大いに結構だが、ソールとお前たちとでは難易度が違う。

――パンツァーシルト――

試しに俺とソールの間にシールドを展開しつつ、杖の先端を向けて魔力弾を放ってくる邪魔な男２人に「うっとおしい！」と魔法を発動。まずは下級魔力弾の「サピタル！」で、連中の魔力弾を全弾迎撃。次の攻撃が来るまでにもう１つの魔法を発動準備する。

「せいや！」

――シルト・エントゥクラフテン――

その中でのソールの斬撃は俺のシールドを容易く斬り裂き、振り上

げと同時に刺突を繰り出してきた。急いで後退することで攻撃圏内より離脱。

――輝き燃えろ、汝の威容（ケルビエル）――

「「のわあああああああああ！？」」

そしてケルビエルを発動。２人の足元に円陣を描き、陣内に蒼炎を噴き上げさせる。魔法であるため焼き死ぬことはないが、それなりの窒息と火傷くらいは負ってもらおう。

「やはり私ひとりだけで来れば良かった・・・！」

「その言い草だと俺に勝てると言っているように聞こえるが？」

袈裟切りを躱し、"エヴェストルム"を起動してソールの剣を受け止める。デバイスはやはり断ち切れないようだな。俺は「うぉぉぉぉ！」強引に彼女を弾き飛ばして、「アイリ！」の名を呼ぶ。

『ヤヴォール！　フリーレン・ドルヒ！』

俺の魔法ではなくアイリの魔法を放ってみると、ソールは剣を正眼に構えて「ノート・ヴェーア」何かポツリと漏らした。と同時にバリアが発生して、着弾したアイリの氷の短剣が砕かれた。

『アイリ、もう一度だ！』

『ヤヴォール！　今度は・・・アイツ・ランツェ！』

氷の礫を９発と発射したアイリ。ソールは剣を居合いのように構え、アイリの攻撃に対して何ら対応することなく受け入れた。

――フェアナイネン・ズィーーー

すると俺の魔法と同じように氷の礫は弾かれるのではなく消滅した。これは決まりだな。一足飛びで突っ込んで来たソールの振るう剣を"エヴェストルム"で受け止め、「もう終わりだよ、ソール」と言い放ってやる。

「なに？」

「お前の魔法の正体は知れた！」

またソールを力ずくで弾き飛ばし、「我が手に携え師は確かなる幻想」と呪文を詠唱。起動するのは、複製された術式やスキルなどを複製して貯蔵している"英知の書庫アルヴィト"。俺やアイリの魔法でなければ何でもいい。

「さぁどれだけでも魔力パターンを覚えてみるがいい！」

――スパークヴェスパーーー

「魔力光が・・・っ！？」

水色に輝く雷撃のリングを発射する射撃魔法を連射。オリジナルの使い手はレヴィ・ザ・スラッシャーだ。

「くっ！」

――ノート・ヴェーア――

ソールは前面にバリアを展開してリングを防御したのを確認し、レヴィの高速移動魔法である「スプライトムーブ！」を使って、彼女の背後へと瞬間的に移動する。さらに大きな雷球を叩きつける「雷神爆光破！」で直接ソールを狙う。

「フェアナイネン・ズィー！」

ソールに直撃する直前に雷球が消滅する。なら次は、シュテル・ザ・デストラクターの「ディザスターヒート！」火炎砲撃の3連射。1発ごとに射程が短くなる欠点があるが、砲撃の威力を保った状態での3連射は凄まじい火力を叩きだす。

「くぅぅ・・・！　ノート・ヴェーア！」

ソールは1発目と2発目をギリギリ躱しきり、3発目はバリアを展開して防御に成功。おそらくこれでシュテルの魔法は通用しなくなった。よし、じゃあ次の検証に移るとしようか。

「ほら、休んでいる暇はないぞ」

――アゲマント――

今度はフラム・ザ・リベンジャーの火炎砲撃。ソールは「また魔力光が変わった・・・！？」と肩で息をしながら、「ノート・ヴェーア！」バリアを展開した。火炎砲はバリアに着弾して大爆発。黒煙から彼女が飛び出してきたところで、もう1発フラムの魔法を叩きこんでやる。

「ウィル・オ・ウィスプ！」

「他者の魔法など・・・卑怯者め！」

――フェアナイネン・ズィーーー

（今だ！）

火炎弾16発を放つと同時に、アイル・ザ・フィアブリンガーの冷気弾である「イガリマ！」16発を追従するように発射。火炎弾はソールに直撃することなく消滅したが、「きゃあああああ！」冷気弾は全弾命中。

『あの仮面持ち凄いねマイスター。相手の魔力パターンを学習して、そのパターンでの魔法を完全無力化するなんて』

「ああ。あとはどれだけの魔力パターンを覚え無力化できるか、だが・・・。その心配ももうないな」

ノート・ヴェーアで防いだ魔法から術者の魔力パターンを覚え、フェアナイネン・ズィーという魔法でＡＭＦのような効果を発揮して魔法を無力化しているんだろう。面白い魔法だが、ネタが割れてしまえば俺の敵じゃない。ほら、冷気弾の着弾時に発生した白煙が晴れていき始め、体の至るところが凍っているソールの姿を視認できた。

「ま、まだよ・・・まだ、終わっていない！」

――トイフェル・ベライヒ――

ソールを中心に結界が張られたかと思えば、「なに！？」俺の防護服が強制的に解除され、さらに「にゃ！？」アイリとのユニゾンも強制解除されてしまった。あらゆる魔法、スキルに対して完全な無防備状態。物理破壊設定であればちゃちな魔力弾１発で死ぬ状態だ。

「下がってマイスター！」

アイリが俺を庇うように躍り出た。剣を持つ右腕が自由であるソールが「その首、もらった！」と、巨大な魔力剣を剣身に付加した。確かにそんなものを受けたら俺もアイリも即座に死ぬが、俺がいくつもの魔力パターンを扱えることを忘れていないだろうな。

――リーゼン・シュベーアト――

「獲った！」

――魄翼――

ユーリ・エーベルヴァインの圧倒的な戦力の象徴だった魄翼を展開。ソールの斬撃を右の翼で受け止め、「ドゥームプレッシャー！」左の翼を怪物の腕へと変化させて彼女をガシッと鷲掴む。

「うぐぅぅぅ・・・！」

「これで終わりだ。ナパームブレス！」

ソールを鷲掴んでいた翼を魔力と火炎が渦巻く球体へと変えて彼女を閉じ込め、重力によって球体ごと押し潰す。強力な魔力爆発が起き、吹っ飛んだソールが床に叩き付けられた。それと同時に結界が解除されたことで、俺とアイリは防護服へと変身し直した。

「終わったかな・・・？」

「俺ですら撃墜寸前に陥った一撃だ。彼女に耐えられるわけがない」

ぐったりとしているソールの元へと歩み寄っていると、彼女の胸から青緑色の光球が飛び出してきて、ソレが人型へと変わった。青い長髪のツインテール、服装は修道服、３０ｃｍほどの身長をした小さな少女。融合騎で間違いない。

「こ、これ以上のロードへの攻撃は許さないから！」

「・・・アイリはね、アイリっていうの。あなたと同じイリュリア

の技術で造られた融合騎。元の名前はズィーベン・・・、氷結の融合騎ズィーベン。あなたの名前は？」

アイリもまた本来の３０ｃｍほどの姿へと戻り、ソールを護ろうと必死な融合騎に語りかけた。融合騎が俺をチラッと見たから、「俺たちの勝ちだ。もう闘わない」と"エヴェストルム"を解除して見せた。

「・・・わたし、ドライツェーン。盾の融合騎改・・・」

１３か。イリュリア大戦の時には確か１のアインスから７のアイリまでが稼動していた。現在は幻惑の融合騎、１１のエルフテから、雷の融合騎改の１８、アハツェーンが稼働中らしい。その内エルフテ、強化の１２ツヴェルフ、そして目の前に居る盾のドライツェーンを無力化した。残りはおそらくシャル達を襲いに行った連中の中に居るだろう。

「これから俺とアイリは、残りの防衛戦力を討つ。邪魔をするなら容赦はしないが、大人しく捕まるのなら手厚く保護する。どちらがいい？」

「・・・ロードが負けた時点で、わたしの仕事も終わったし・・・。大人しく捕まるよ」

ドライツェーンが両手を差し出してきた。手錠をはめて、と言っているんだろうが融合騎用の手錠なんてものは存在しない。だからバインドのサイズを調整して彼女の腕を拘束した。

『マスター。次の3人、送ってもいい？』

そう聞いてきたライシエルに「ああ。いいぞ」と答えた。それから相手した残りは全員ザコだった。これで拠点内の戦力は全て潰したことになったわけだ。

「さてと。俺も俺の仕事を始めようか。ライシエル。管理局と聖王教会の全ての施設と、あとはやて達とシャル達への通信回線を開いてくれ」

『イエス！　ちょこっとだけ待ってて！ノ（^ ー^）』

回線が繋がるまで、ライシエルがデータベースからくすねてきた大隊に関するデータの整理をしていると、『ルシル、聞こえる！？』通信が入った。

「聞こえるぞ、アリサ。どうした？」

『あんたには感謝とかいろいろと言いたいことがたくさんあるけど、今は名誉挽回の機会を与えてほしいの！』

『ルシル副隊長、ミヤビです！　私たちに大隊と戦わせてほしいんです！』

通信を入れてきたのはアリサとミヤビだった。大隊に拉致され、偽者と入れ替わられ、要らぬ罪を被せられたそのミスを、大隊と戦う

ことで少しでも晴らしたいのだと言う。

（聖王教会にはマリアンネさんやパーシヴァル、シャル達を向かわせたいから・・・）

ふと、現在稼働中のプライソンの遺産＋ミミルの造った兵器の対処を今、はやて達が行っているはずだと思い出し、そちらに向かってもらうことにしようと判断。俺は「マカリエル。アリサをアクアベール海に、ミヤビをザンクト・オルフェンに転送してくれ」と指示を出す。

『正確な座標をください、マスター。トランスポートを使って飛ばしますから！（　　）』

「ああ、少し待っていろ」

ライシエルがセキュリティを丸裸にしてくれたから、あの子の助けがなくてもデータベースの深いところまで探れる。今現在、アクアベール海でのリアルタイム交戦データを引っ張り出し、そこから座標を確認して、それをマカリエルに伝える。

『座標確認です！　転送準備完了！（^▽^）／』

『マスター。スバルさんとティアナさんが、病院もしくは管理局施設への転送を望んでいます。どうしましょう？（・―・？）』

病院への緊急転送は原則許されていない。ティーダの様子からして、

局施設からの搬送でも問題なさそうだった気もする。だから「病院は無理だ。陸士１０８部隊に転送してくれ」と指示を出す。１０８にはナカジマ三佐をはじめ、クイントさんとギンガとチンクが所属している。スバルのことを心配していたし、早めに再会させるのがいいだろう。

『はい！　１０８部隊の座標設定完了です！　これより彼女たちを転送します！∠（＾－＾）』

『あ、あの、ルシルさん！　本当にありがとうございます！』

『ルシルさん、ありがとうございます！　お礼はまた後ほど！』

スバルとティアナからの礼に頷くことで応え、最後に「アリシア、フィレスさん。２人は――」と言い掛けたら、『もちろん戦場に！』との即答。

「ソレウイエル、マカリエル。アリサと一緒に彼女たちもアクアベール海へ転送を」

『ウィ！∠（＾－＾）』『ヤー！∠（＾－＾）』

とここで、ライシエルから『マスター。準備完了！＼（｜－＼）（／｜）／』と報告。モニターを展開して通信を各組織に入れる。

「時空管理局、そして聖王教会の皆さん、聞こえますか。本局内務調査部、聖王教会騎士団オランジェ・ロドデンドロン所属、ルシリ

オン・セインテストです。私は今、最後の大隊の拠点に潜入しています」

質問などで時間を潰されるわけにもいかないため、こちらからの一方通行の通信だ。

「ここはベルカ自治領内、ノーサンヴァラント海・オークニー諸島はナウンティス島です。私はアイリ・セインテストと共に拠点に潜入しており、そしてデーターベースを調査した結果、大隊の首謀者を確認しました。首謀者の名はリナルド・トラバント。聖王教会騎士団の現団長です。最後の大隊は、教会にクーデターを企てたトラバントと、その協力者たちによって設立された部隊です。連中は、教皇マリアンネを始めとしたザンクト・オルフェンの評議会メンバーを拉致。自分たちの言う事を聞き、大隊の味方と言う記憶を植えつけたクローンと入れ替えた」

さらに無実な局員を拉致し、クローンと入れ替えて悪事を働かせたり、局の情報を盗んだりさせた。騎士団のクーデター軍が管理局の評判を落とし、大隊を使って自分たち騎士団の評判を上げる。そう伝えながら、オリジナルが捕らわれている部屋をモニターに映し出した。ポッドに収められた幾人もの局員や教会関係者たち。

「捕らわれている方たちの名簿を各組織に送信します。大隊を良しとしない局員、騎士の皆さん。どうか名簿に記された偽者が側に居るのなら逮捕してください。本物はこの拠点に居ます」

そこまで伝えたところで「あ、マリアンネ・フライハイト聖下、騎

士パーシヴァル・フォン・シュテルンベルク、騎士フィレス・カローラ、アリサ・バニングス、アリシア・Ｔ・ハラオウン、ミヤビ・キジョウ、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、ティーダ・ランスターの９名は、すでに意識を取り戻し、教会本部、アクアベール海、１０８部隊とに別れて戻りましたので、９名は除外してください」と付け加えておく。

（本物を誤って逮捕なんて笑い話にもならないしな）

アリサ達がそれぞれの場所に転送されたのを別のモニターで確認。あと伝えておかないといけない事は、大隊が俺たちオランジェ・ロドデンドロンを陥れようと放送した会見だな。リンカーコア狩りの最中に見せてもらったが、嘘塗れで鼻笑すら出なかった。

（ただ、俺の罪は間違いなかった）

グランフェリア達の殺害。それについても語ろう、セインテストとしての俺の役割を・・・。

Ｅｐｉｃａ４３ザンクト・オルフェン決戦～Ｎｅｕｅ　Ｂｅｌｋａｎ　Ｒｉｔｔｅｒｏｒｄｅｎ～

†††Ｓｉｄｅスバル†††

ルシルさんのおかげで、あたしとティアと、ティアのお兄さんのティーダさんは、お父さんが部隊長を務めてる１０８部隊の隊舎前に転送された。背負ってたティーダさんを地面に降ろして、「ティア、待ってて！　誰か呼んでくる！」って伝える。

「ごめん、スバル。お兄ちゃん、大丈夫？」

「さすがに１０年以上も眠らされていた所為で、足の筋肉が弱りきってる。情けない話だけどね」

立ち上がることは辛うじて出来るけど歩くのが無理なティーダさん。病院に向かうのに車も必要だから、そのためにも人を呼ばないと。もう日が沈みかけて薄暗くなり始めた空の下、「スバル！」あたしの名前が呼ばれた。

「っ！　あ・・・ギン姉、ギン姉！」

「「「スバル！」」」

隊舎のエントランスからあたしを呼んだのはギン姉だった。それに「お母さん、お父さん、チンク！」も一緒に来てくれた。大隊に拉

致されてから目覚めるまでの間の記憶は無いから、久しぶりに逢ったって感じもしないけど、涙が溢れてきた。

「スバルー！」

「ギン姉！」

ギン姉があたしを抱きしめてくれて、遅れてお母さんも「おかえり！　ルシル君の通信を観たわ！」ってギン姉と一緒に抱きしめてくれた。あたしも「ただいま！」って返したんだけど、すぐにハッとして「お父さん、車！」ってお願いする。

「お、おう。ランスターー尉を病院へだな。アメナディエルって子から聞いてる。クイント、頼んだぜ」

「ええ！　車を回してくるから少し待ってて！」

少し離れたところに駐車してある車のところに駆け出したお母さんを見てると、「お前とティアナ嬢ちゃんはどうなんだ？」ってお父さんに聞かれた。

「あたしは大丈夫。あたしの体が頑丈なのはお父さんも知ってるでしょ」

「私も問題ないです。でも、病院へ付き添おうと思います」

「そうかい。そうしてやるといい」

「お待たせ！　さ、乗って！」

あたしとティアの２人でティーダさんを車の後部座席に乗せて、「じゃあスバル。ありがとう、いろいろと」そう言ってティーダさんの隣に座るティアに、「ううん、気にしないで！」って笑顔で返した。

「じゃあ出発するわね」

お母さんの運転する車は隊舎のロータリーから車道へと出て、一路病院に向けて走っていった。車を見送った後、あたしは「ルシルさんの通信から何か変わった事ってある？」ってお父さん達に尋ねた。

「ルシリオン（ボウズ）が局や教会の施設に送ってきた名簿に記された名前を騙る偽者を捕まえるために、偽者が所属している部隊なんかが動き出してるって話だが・・・。俺の１０８部隊にはいねぇから特にって感じか」

「そっか・・・。あたしに出来る事はもう無いんだ・・・」

アクアベール海の方へと体を向けて、そこで艦隊と戦ってる八神司令たちの無事を祈った。

†††Ｓｉｄｅスバル⇒イリス†††

大隊の主力というか、銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼのパラデ（うらぎりもの）

ィンや、"エインヘリヤル"・ルシルを倒した偽ティーダ一尉を廃棄都市区画で返り討ちにしてやったわたし達は、ブレオベリスとグリフレットとガリホディンの新米パラディン3人にちょろっと話を聞いて、リナルド・トラバント討伐のためにベルカ自治領ザンクト・オルフェンの聖王教会本部へ向けて飛行中。

『――ということもあり、セインテスト家に代々受け継がれてきたエグリゴリの破壊を成しただけに過ぎません。グランフェリア、シュヴァリエル、レーゼフェア。そして今日、最後の大隊のフィヨルツェンを破壊します。彼女が人型兵器エグリゴリである事を証明するため、交戦映像を内務調査部に提出しましょう。それではこれより拠点の全データを両組織の捜査部、無色花騎士隊ファルブロス・ブルーメに送信します。その後、私はセインテストの役目と平行し、拠点を完全制圧します。以上通信終了』

大隊の拠点から配信されてるルシルの全体通信に耳を傾ける。わたし達が聖王教会本部に向けて飛んでる最中に始まったルシルの全隊通信。母様が偽者と入れ替わっていたことに心底安堵した。

「まさかお姉ちゃんも偽者と入れ替わっていたなんて・・・」

通信でルシルの口からフィレスの名前が出た時・・・

――（　д　）　。　。ｑあｗせｄｒｆｇｔｈｙじゅいｋぉｐ；@：

「」――

セレスは本気で大混乱した。何を言ってるのかも聞き取れないレベ

ルで発狂してたし。しかもそれが空の上ってこともあって墜落寸前にまで急降下した。ルミナが抱き止めなかったら、山肌に激突してたからね。

「絶対に不意打ちだろうね、フィレスの場合。真っ向から戦って負けるなんて想像つかないし」

フィレスの強さは、ここに居るみんなが理解してる。だから拉致された経緯はフィレスが抵抗できないような、卑怯なものだって考えてる。セレスが「そう！　間違いなくそう！　お姉ちゃんが正攻法で攻略されるなんてありえない！」って力説。

「セレス、少しは落ち着いてはどうですか？　母であるマリアンネ聖下を拉致されたイリスと、兄である騎士パーシヴァルを拉致されたトリシュはこんなに落ち着いているというのに」

ぎゃあぎゃあうるさいセレスを注意するアンジェ。私の場合は、母様が偽者だって前提でこれまで活動してきたから、本物の母様が無事に見つかったってだけで心底安堵だ。

「私も驚きはしたけど、兄様も私も騎士である以上、常に最悪な事態に陥ることは覚悟しているから。でも・・・無事でいてくれて良かった」

「トリシュは大人だ。そしてセレスはシスコンだ、しかも末期の」

空を飛べないトリシュと一緒にワイバーンの鞍に跨るクラリスがそ

う言うと、セレスは「お姉ちゃん大好きで何が悪い！」って拳をグッと握った。ああもう、ホントお姉ちゃん愛が強すぎてちょっと引くわ～・・・。

「ほら、お喋りはそろそろ中止。ザンクト・オルフェン領内に入るよ」

ルミナがパンパンと手を叩いた。あと３ｋｍほどで領空内へ入る距離まで飛んできたわたし達の元に、ＰｉＰｉＰｉと通信が入ったことを知らせるコール音が鳴った。このタイミングでの通信に嫌な予感しかしないけど・・・。みんなで顔を一旦見合わせて「出よう」って頷き合う。

「はい。こちらオランジェ・ロドデンドロン、イリス」

通信を繋げるとモニターが展開され、白髪交じりの黒髪をオールバックにした、鳶色の瞳で睨みつけてくる中年の男性が映し出される。彼こそがルシルから名指しで大隊の設立者にしてクーデター軍の首謀者、「リナルド・トラバント・・・！」だ。

『団長を付けたまえ、騎士イリス。・・・お前たち、騎士ルシリオンの通信を観たな？　彼が本物であるという確証はあるのか？　この私が、大隊やクーデターの首謀者だと？　とんだ言いがかりだ。もし彼が本物であるのなら、彼こそが裏切り者だ。どうせ管理局の回し者だろう。まったく、汚い手段を使うものだ、管理局も』

そんな事をのたまうトラバントに、「ありえない・・・」わたし達

は一斉に重い溜息を吐いた。

「ふざけんな、裏切り者が。母様たちを拉致して、自分たちの都合の好い様に教会も騎士団も好き勝手操って・・・！　その上自分の身を危険に晒してまで大隊の拠点に拉致されたルシルを偽者呼ばわり、裏切り者呼ばわり？　お前はもう、騎士団の団長じゃない。裁かれるべき犯罪者だ！」

『言葉遣いに気を付けろ、小娘。私が首謀者などと決め付けるな。これは罠だ、私を陥れようとする管理局のな。それも判らんとは経験が足りんぞ、騎士イリス。それとも知らせてきた騎士ルシリオンが想い慕う相手だからか？　ゆえに無条件で信じているとでも？　まったく。マリアンネ聖下もそうなら娘もそうか。私情で決め付けなど。愚の骨頂だな』

「～～～～っ！！」

どうしよう、超ぶん殴りたい。でもここからは手が届かないってことで、「バーカ、バーカ！　禿げろバーカ！」中指を立てて悪言を吐いてると、「子供みたいなこと言わないでください」アンジェがわたしを窘めてきた。

「トラバント団長。ルシルさんは私たちの仲間で、信頼に足る男性です。彼の強さも、その万能さも、私たちの助けとなってくれています」

『騎士アンジェリエ。騎士団の団長歴２５年の私と、同隊に所属し

て半年ばかりの騎士ルシリオン、どちらを信じるのか？』

「現状、あなたを信じるに足る長とは思えません。休暇中の私たちを、わざわざ裏切りの騎士たちが待ち構えていた廃棄都市区画に行くように指示を出したのはトラバント団長、あなたです」

『あれは仕様の無い事だった。あの時は言わなかったが、近隣の騎士隊の方にも大隊の対処に当たらせていたのだ。交戦記録を見せても構わない』

「大隊と、騎士団の裏切り者を操れる以上はそんなの意味無いじゃん」

『騎士クラリス。まずは疑うことから止めたまえ』

もう何を話しても平行線だってことは理解できたから、「もう結構。そこで踏ん反り返ってなさい。今すぐ捕まえに行くから」そこまで言って通信を切ろうとした時、モニター越しに居るトラバントの部屋を勢いよくノックする音がした。

『トラバント団長。無色花騎士隊（ファルブロス・ブルーメ）です。先ほどの騎士ルシリオンの通信についてお話をお伺いさせていただきます。扉を開けてください』

聞こえてきたのは、騎士団内部の風紀を取り締まる専門部隊ファルブロス・ブルーメの隊員の声。ルシルが彼らに大隊のデータを送信するとかって言ってたし、そのデータの精査を終えてきたのかも。

『下らん情報に惑わされるとは情け無い。私などよりオランジェ・ロドデンドロン隊を調査したまえ。あの者たちこそ教会騎士団の膿となるやも知れんぞ？』

ルシルに続いてわたし達までも裏切り者呼ばわり。また罵声でも口にしようとしたところで、『見苦しいわよ、リナルド！　あなたの罪はしっかりと憶えているわよ！』久しく聞かない声がした。

「母様の声だ・・・！」

遅れてバーン！とモニターから破壊音がして、トラバントに向かって何かが高速で飛んで来て『ぐはあ！？』派手な音を立ててぶつかると、モニターの外に吹っ飛んだ。

『リナルド・トラバント。ザンクト・オルフェン領主、聖王教会教皇、マリアンネ・ド・シャルロッテ・フライハイトに名において、騎士団団長の役職を剥奪し除隊処分とし、六家からトラバント家を除外。古くよりお世話になっているシュテルンベルク家を候補とする』

モニター内に入ってきた「母様！」がすごい事を言い出した。トラバント家は古代ベルカよりフライハイト家を支えてくれてた名家だ。確かに許されないことをしたけど、そこまでやる？ってちょこっと思った。

『妹のプラダマンテも同様に騎士団からの除隊、シュベーアトパラ

ディンの称号の剥奪。リナルドとプラダマンテのどちらかに子がいれば、六家からの除外などという懲罰を下さないわ。残念よ、２人ともが大隊の中核メンバーと判って・・・』

覚悟はしてた。プラダマンテも敵だってことは・・・。だからわたしは喚かず、ただ「母様。イリスだけど・・・」って声を掛ける。母様がモニターに気付いて、『あら、イリス。それにみんなも！迷惑を掛けたわね』って手を振ってくれた。

「いえ。わたし達は今、自治領に向けて飛行中で、もう少しで教会本部に到着します。指示をください、かあ――こほん、聖下」

今は騎士として勤務中というのを思い出して、母様じゃなくて聖下と呼ぶ。

『私の偽者は今さっき殴ってやって、リナルドと一緒にそこで伸びてるけど・・・。プラダマンテが見つからないの。あと偽パーシヴァルもね。ルシル君から、偽フィレスはアクアベール海でチーム海鳴の子たちと交戦中だっていう連絡は貰ってるからいいとして。あと現銀薔薇のメンバーも行方が判らないし・・・』

困った風に溜息を吐く母様に、現ズィルバーン・ローゼの内、ラヴェイン、ガリフット、ガラガース、ガリホディン、グリフレット、ブレオベリスの７人は、すでにわたし達の方で返り討ちにして北部の廃棄都市区画に放置してきたって話した。

『すごい！　ラヴェイン達を倒せたの！？』

魔術師化っていう裏技を使っちゃってるからか、クラリスとアンジェは静かに「はい」って答えて、負けちゃったトリシュに関しては無言だった。話題を変えるためにわたしは「キュンナも敵として考えた方がいいでしょうか？」って尋ねる。

『おそらく。とにかく今は、大隊側の騎士たちの制圧よ。管理局法独立派って連中が怪しいそうだけど、向かって来る者は敵性と判断して行動してちょうだい。私も久しぶりに現場に出るわ。ではオランジェ・ロドデンドロン、健闘を祈るわね』

母様との通信が切れてすぐ、わたしは大きく溜息を吐いた。みんなも同じ考えみたいで小さく頷いた。だけどもう、わたし達も裏切り者たちも引き返せないところにまで来てる。覚悟は決めてきた、決意もしてきた。

「残念な知らせが・・・。距離８００、２時の方角。南部アヴィリオ教会の鐘楼の屋根に３人。武装は、三連装ショットガン、あとスナイパーライフルにガトリング砲。どれも私たちを狙っているみたい」

もうじき日が暮れそうだっていう中でのトリシュの視覚強化と、元から持つ目の良さに改めて舌を巻く。

（というか誰が今のクーデター軍を指揮してるんだろ？　プラダマンテ？　それともフィヨルツェン？）

「見覚えのある顔。確か・・・黄菊騎士隊（ゲルブ・クリュザンテーメ）にいた顔だと思う」

「キュンナが以前隊長を務めてた部隊ですね。・・・だからと言ってキュンナが敵である証拠にはならないけど・・・」

――ミッドチルダの地上本部と地上部隊は、プライドばかりが高く他世界の地上部隊に比べて排他的で縄張り争いも強く、本局やあたしたち聖王教会とも折り合いが悪い。他世界と同じように協力関係をもっと強めないから、今回の議題で上がるアインヘリヤルなどという兵器を運用しようなどと考えるのです――

――地上部隊に代わり聖王教会騎士団がミッドチルダを護る剣となりましょう。そう、今こそ亡国ベルカを"再誕"させましょう！あたし、イリス先輩、トリシュタン先輩、クラリス先輩、アンジェリエ先輩、ガリホディン先輩、グリフレット先輩、ブレオベリス先輩。ＡＡＡ＋からＳ＋ばかりの次期パラディン候補ですし、まさに一騎当千です。他の騎士隊も続けば、今の地上本部が抱える戦力など取るに足りません――

プライソン戦役時に、地上本部の警備に当たっていたキュンナからの話が頭の中を駆け巡る。それに前にも、キュンナのことを怪しんだことがある。もしあの時にキュンナとちゃんと話をしていたら、もっと違う今になっていたのかもしれない・・・。

「魔力反応！　イリス！」

「っ！！　オランジェ・ロドデンドロン、散開！」

"キルシュブリューテ"を鞘から抜き放って告げると、みんなから「了解！」の返答。それぞれデバイスを起動させた直後、「来る！」トリシュの声に合わせて、一斉にその場から離れる。

――スナイプバスターーーー

――バーストブリンガーーーー

遅れて砲撃と、何百発っていう弾幕が空を奔った。夕暮れ時だからよく見えるけど、トリシュほどの目は無いから攻撃主の姿は視認できない中、散開してるわたし達に向かってさらに砲撃と弾幕が容赦なく飛んでくる。

「近付きたいけど、ショットガン持ちには接近したくないな～」

「そもそも建物の屋根に陣取ってるというのが厭らしい。非殺傷設定でも威力によっては建物を壊しちゃうし」

「ですがそうも言っていられない状況かもしれないですよ！　11時の方角！　発光確認！」

――スナイプバスターーーー

――バーストブリンガーーーー

アンジェの警告の直後、左前からも砲撃と弾幕が飛来。さらに「1

2時の方角！　来るよ！」ルミナの言うように同じ攻撃が向かってきた。砲撃が連発されて、数千発の弾幕がわたし達の領内進入の文字通り壁になってる。

「イリス！　トリシュの狙撃で潰していった方がいいんじゃない！？」

「指示を、イリス！」

クラリスとトリシュからそう挙がるけど、万が一に回避されて施設や住居が壊れて、領民から被害者が出るようなことがあっては・・・。アイツらは、わたし達がその所為で攻撃できないことを承知で、その場を陣取ってるんだ。

「裏切りだけじゃ飽き足らずに・・・卑怯者共め・・・！」

"キルシュブリューテ"の柄を掴む右手に力が入る。トリシュの狙撃の命中率は信頼できるけど、少なからず建物に被害が出るはず。潰すなら「接近して叩く」しかない。わたしの言葉にルミナが「判った。私が右前の奴らを潰す」って言ってくれた。

「それなら私が左を貰おうかな。お姉ちゃんを利用とした裏切り者をこの手で叩きのめしたい」

「じゃあ私は真ん中のを」

セレスとクラリスもそう言ってくれたし、あのふざけた弾幕の中に突っ込む危険を冒すことを了承してくれた。

「ありがとう。クラリスとトリシュは中央、ルミナとアンジェは右、セレスとわたしは左を潰す！」

２人１組で攻略するためにＶ字編隊シェブロンから横一列編隊アブレストへと変え、「エンゲージ！」した。わたしはセレスと一緒に、左の１組を倒すためにガトリングによる弾幕の中を突っ切る。でも近付いた分、弾幕の密度を厚くなるし・・・

――ブラストディセミネーターー――

――スナイプバスターー――

――バーストブリンガーー――

ショットガンの散弾も追加されて、さらに厄介な壁になった。使う気はないけど中遠距離系の魔法を放っても、蜂の巣にされて掻き消されると思う。

「イリス。私が前を飛んで防御に徹するから、あなたが斬り伏せて」

わたしのシールドの防御力は、セレスのものより数段劣る。だからここは「ん、任せた！」セレスを頼ろう。縦一列の編隊トレイルを組んで、セレスの「行くよ、イリス！」合図に合わせて、"キルシュブリューテ"の「カートリッジロード！」する。

――凍て付く氷壊の蒼盾（コンヘラル・イ・デストゥルイール）――

セレスが前面に冷気を放つ氷の盾を展開して、一気に接近する。連中の攻撃が盾に当たる直前に冷気で凍ってく。セレス、魔術師化してるな～。でもそんなセレスのおかげで数ｍほどまで接近することが出来た。

「固定開放（リベラシオン）！」

セレスの口にしたキーワードによってシールドがボフッと音を立てて、冷気や雪となって裏切り者３人へと殺到した。

「セレス！？　魔術でしょ今の！」

「魔術師化はギリで解除したから大丈夫！　ほら、早く！」

「それなら良いんだけど！」

――雷牙神葬刃――

刀身に纏わせた雷撃を、"キルシュブリューテ"を横一線に振るって飛ばす。雷撃は冷気と雪を斬り裂き、警戒のためか背中を向けあって三方に武器を構えていた裏切り者３人に直撃。聞くに堪えない悲鳴を上げた後、感電によって硬直したままドサッと屋根の上に倒れこんだ。

「ルミナ達の方は・・・！？」

『イリス！　右ターゲット撃破完了！』

『中央ターゲットも撃破！』

ルミナとトリシュからの報告が入って、わたしも「左ターゲットの撃破確認！」って返したんだけど、『まずいです！　新手を確認！』って、なんとなくそう来るだろうなって考えてた報告が入った。

「了解。んじゃみんな。年始めの大掃除と行きますか！」

徹底的にぶっ潰すって意気込んでいると、通信を知らせるコール音が鳴ったから「はい。こちらオランジェ・ロドデンドロン。これより掃除を始めます」って、向こうが喋る前にさっさと応じる。

『そうだね。だからとりあえずイリス達は、大隊側の騎士たち――ノイエ・ベルカン・リッターオルデンを釣るための餌になってくれ』

わたし達に通信を入れたのは、母様と一緒に拉致されていたパーシヴァル君だった。

「餌？　ていうか、新生ベルカ騎士団（ノイエ・ベルカン・リッターオルデン）ってなに・・・？」

『今しがた捕らえた裏切り者がそう名乗った』

餌って言うのがどういうわけか聞いてみたら、今まさにわたし達が陥ってる状況のことだってさ。わたし達を倒すために武装を手にして襲い掛かってくる連中を、パーシヴァル君を始めとした味方が奇

襲してくれるって話だった。

「だそうだけど、みんなはどう？　わたしは賛成しようって思うけど・・・」

パーシヴァル君からの提案についてはわたし達全員『異議無し』ってことで、本格的な騎士団内戦・・・ううん、敵性組織ノイエ・ベルカン・リッターオルデンの討伐が始まった。

Ｅｐｉｃａ４４雷光の天精～Ｄｅｒ　Ａｎｆａｎｇ　Ｆｕｓｉｏｎ
Ｒｉｔｔｅｒ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

艦隊のバリア、艦体に対してダメージを与えられる唯一の武装端末。その特別仕様の武器を使うすずかちゃん、ヴィータ、なのはちゃん、フェイトちゃん、それにドクターの娘さんであるトーレさんとセッテさん、サポート役のクアットロさんが安心して攻撃に専念できるように・・・

――氷柱弾雨（セリオン・エクサラシオン）――

――ブリッツ・クーゲル――

私たちは戦闘区域から離脱しようと試みてる艦隊の直掩戦力として参戦した、偽フィレスさん（偽者だって言うのは、さっきのルシル君の通信で判明してる）と、電気変換資質持ちの雷騎士の２人と交戦中。他にも多数の仮面持ちが、武装隊や警備隊のみんなと交戦中や。

「リイン！」

『はいです！』

偽フィレスさんの氷柱や雷騎士の電撃弾を回避して、ユニゾン中の

リインのサポートを受けて、設置型魔力スフィアのハウリングスフィアを発動。地雷としても使えるけど、もう1つの使い方で使用するために発動した。

『間違いねぇ！　アインスだ、アイツ！』

シグナムとユニゾン中のアギトからの突然の思念通話に、アインスが血色の短剣型射撃・ブラッディダガーを発射しながら「私がどうかしたか？」って聞いた。

『いやちげぇ！　あたしやアイリと同じイリュリア製融合騎で、その長男（いちばんめ）だ！　騎士団総長グレゴールや、殺戮王テウタ派の騎士や政治家と一緒に行方を晦ませてって話だったけど・・・！』

古代ベルカの歴史は、局入りしてすぐに勉強したからテウタって名前も知ってる。そやけどこれまで行方知れずやったアインスって融合騎が、大隊の一員として何百年の時を経て姿を見せたってゆうのは偶然やあらへんはずや・・・。

「とにかく今は、すずかちゃん達を護ることに専念や！　あと、向こうのアインスの呼称は雷騎士で固定ってことで！」

私たちにとってのアインスは、リインフォース・アインスだけや。みんなも同意してくれたし、雷騎士の妹やってゆうアギトも、『アイ――じゃない、雷騎士のことは嫌いだし、アイツとかコイツとかソイツで十分だよ』ってことで、雷騎士で固定や。

「『ナイトメアハウル！』」

私とリインの標的は偽フィレスさんや。雷騎士は速過ぎて、私たちの攻撃やと当たらへんからな。広域攻撃でアインス達を巻き込む危険性もあるし、雷騎士はシグナムとアインスに任せることになってる。

「ザフィーラ、偽フィレスさんと雷騎士を引き離すよ！」

「承知！」

偽フィレスさんは本物のフィレスさんと同じ魔法を使うんやけど、フィレスさんの記憶を持ってくれてるおかげか、えぐい魔法は使ってきてへん。そやから説得できるかもなんて考えたみた。

「フィレスさん！　止まってください！　局員として、そして騎士としての誇りを何より大事にしていたあなたなら！　大隊のしてることが間違ってると思ってくれてるはずです！」

攻撃を一旦中断して、「だから投降してください！　もう大隊は終わりですから、これ以上抵抗しても無駄です！」偽フィレスさんに語りかける。大隊の拠点に潜入したルシル君の通信によって、局と騎士団に大隊の情報が送られてるはず。そやから大隊はもう終わったようなもんや。

「・・・私がオリジナルのクローンであることも、大隊が悪であることも承知・・・」

――爆ぜる凍煙（エクスプロシオン・デ・スパーダ）・穿つ氷刃――

偽フィレスさんの両手の指の間に氷の剣が８本と生成された。説得は失敗って判断するには十分なリアクションや。ううん、まだや。戦いの中でも説得を続けてみせる。

「リイン！」

『はいです！　迎撃します！』

フィレスさんの魔法は全て見たわけやないけど、あの魔法は見覚えがある。あの剣を至近で迎撃したり防御したりするわけにはいかん。そやから「ザフィーラ、軛を準備！」って指示しておく。

「承知！」

"夜天の書"を開いて、あるページで止める。ルシル君のエネディエルやなのはちゃんのセイクリッド・クラスターのようや炸裂効果のある魔法を準備。偽フィレスさんが氷剣を投擲するべく腕を振りかぶった。私とザフィーラは偽フィレスさんから２０ｍほどの距離を取る。

『氷剣８本すべてをロックオン！』

前面にミッド式魔法陣を１枚と展開して、"シュベルトクロイツ"を向けて魔力スフィアを１基生成。そして偽フィレスさんが氷剣を

投擲すると同時。

「『クルージーン！』」

８発の魔力弾を連射。手で投擲された氷剣より私の射撃魔法の方が弾速に分がある。私たちと偽フィレスさんの距離はおよそ２０ｍ。１０ｍ圏内に進入されるより早く迎撃する。私の放った魔力弾が氷剣と衝突すると同時に炸裂して、氷剣はウニのように四方八方に氷の柱を魔力爆発の中から生やした。近くで氷剣が炸裂してたら、私たちはあの氷塊に飲み込まれて拘束されてた。

「封縛！」

偽フィレスさんが次の魔法を発動する前に、『いきます！』バインド魔法を発動。偽フィレスさんを取り巻くように展開されたバインドが急速に狭まり、彼女を直立不動の体勢で拘束できた。

「ザフィーラ！」

「承知！　鋼の軛！」

さらに偽フィレスさんの周囲に展開された魔法陣４枚から拘束杭が突き出して、偽フィレスさんを「くぅ・・・！」刺し貫いて拘束した。かと思えば、アインスが「主！」って私を呼んだ。

――ブリッツ・シュランゲ――

と同時、偽フィレスさんに殺到するのは電撃の蛇８匹で、器用に私とザフィーラのバインドに噛み付いて、あっという間に砕いた。雷騎士は、アインスとシグナムの猛攻を凌ぎながらも偽フィレスさんのフォローに入ったようや。

「余計な真似を」

――涙する皇剣（エスパーダ・デ・ラグリマ）――

バインドから逃れた偽フィレスさんがそう吐き捨てて、２本の氷の剣を創り出した。掠るだけで防護服どころか素肌まで凍結されるってゆう魔法や。あれで接近戦に持ち込まれたら、私やと一気に勝ち目が無くなる。

「正直、ミッド地上本部はもう・・・一から改革しないといけないと思うのね」

――神速獣歩（ゲパルド・ラファガ）――

「まずい！　リイン、プリトウェン！　ザフィーラ、私の側に！」

『はいです！』

「はい！」

偽フィレスさんが高速移動魔法を使って姿を消したことで、奇襲に備えて防御に全力を注ぐ。私が持つ防御魔法で一番の硬度を誇る「

プリトウェン！」を発動。私を中心に八方に展開されるんは四層の対魔力・対物理の多層バリア。

（バリア間に隙間は無いから直撃は防げるはず・・・！）

「はあああああああ！」

――氷奏閃（イエロ・コラソン）――

直後、気合の入った叫びと一緒に偽フィレスさんが左の氷剣でバリアを攻撃。その1発目でバリアが二層も砕かれた。振りかぶられる右の氷剣に目が吸い込まれる。1撃で二層を砕くんなら、2撃目もまた同じように二層を砕いてくるはず。それで私の防御魔法は終了や。

（急いで次の魔法を・・・！）

『はやてちゃん！』

――シューティングスターー――

――ヴォルカニックスカッシャーー――

とその時、空から高速で飛来した魔力弾4発が、偽フィレスさんの氷剣2本を弾き飛ばした。さらに炎の剣状砲撃が偽フィレスさんを襲うけど、「この程度の奇襲で私を討とうなどと！」あっさり躱した。そやけど・・・。

「なら、もっと広い視野を持ってくれる？　私の偽者さん？」

「あぐっ！？」

偽フィレスさんの胸から刃が生えて、血飛沫を上げさせた。その背後には、本物の「フィレスさん！」が居て、デバイス・"シュロス"で偽フィレスさんを貫いてた。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒アリサ†††

ルシルのおかげで解放された私やアリシア、それに騎士フィレスは、大隊の拠点からアクアベール海へと転送されてきた。転送直後、「はやて・・・！」とザフィーラがまずい状況に陥ってるのが見て取れた。

「私の偽者・・・！　忌々しい！」

「アリサ、足場お願い！」

「オッケー！」

あたしが抱きかかえるアリシアのためにフローターフィールドを展開。アリシアが魔法陣に降り立つとすぐに"フォーチュンドロップ"の内の１つ、スナイパーライフルの「ブレイブスナイパー！」を構えなおした。

「フレイムアイズ！」

≪クレイモアフォーム！≫

振り上げた"フレイムアイズ"を大剣形態に変化させて、半物質化してる火炎魔力剣を大きく伸張させる。そして「騎士フィレス！」に、偽騎士フィレスの対応を任せる。

「ターゲッティングシステム・オン！・・・シューティング・・・スタァァァァーーーー！」

「ヴォルカニック・・・スカッシャーーーー！」

――神速獣歩（ゲバルド・ラファガ）――

アリシアが魔力弾を連射したのと同時、あたしも"フレイムアイズ"を偽騎士フィレス目掛けて振り下ろしたけど、あたし達の一撃は残念ながら躱された。

「あ、決まった」

「よしっ！」

あたしとアリシアの魔法を囮にした騎士フィレスは高速移動魔法で偽騎士フィレスの背後に回り込んで、"シュロス"で偽騎士フィレスを貫いた。

――凍てつく氷葬棺（ハウラ・コンヘラル）――

『こちら教会騎士、フィレス・カローラ！　アリサ・バニングス二尉とアリシア・T・ハラオウン執務官補と共に、これより敵艦隊攻略戦に参加します！』

さらに凍結魔法で偽騎士フィレスを氷漬けにした騎士フィレスが、全体通信であたし達の参加を知らせてくれた。すると『こちらリュッチェンス艦長、ハルトマンです』って通信が入った。

『バニングス二尉とハラオウン執務官補は、八神二佐の指揮下へ。騎士カローラ、あなたの魔法の腕を見込んで、私の指揮下に入っていただけませんか？』

『了解。フィレス・カローラはこれよりハルトマン一佐の指揮下に入ります』

ハルトマン一佐にそう応じた騎士フィレスは、氷漬けになってる偽騎士フィレスから"シュロス"を引き抜いて、そのまま海面へと落下させた。クローンとはいえ自分自身を躊躇無く斬り捨てることの出来る騎士フィレスには少し恐れを抱いたわ。

「それじゃあ私はこれで。あなた達も頑張って」

元先輩局員として敬礼をしてくれた騎士フィレスを、敬礼返しで見送った。騎士フィレスがさらに空へと上がる中で聞こえてきたのは、成層圏に何かが居る、っていう通信だった。

「アリシアちゃん！」

「はやて！」

「アリサ、無事なようで何よりだ」

「ありがと、シグナム。事情はルシルから聞いてる。あたし達の仕事は、なのは達の艦隊攻撃をフォローすることなんでしょ」

見たことのない装備を携えたなのはとすずかとフェイトとヴィータ、それにスカラボのトーレとセッテ、あと手ぶらなクアットロ。なのは達が攻撃の合間に手を振ってくれたから、あたしとアリシアも手を振り返す。

「んじゃはやて。指揮よろしく！」

"フレイムアイズ"をフルドライブ・ヴァラーフォームへと変形させる。スナイパーライフルのような長い銃身の両側に反りの無い直刀が2つある、1m半くらいの長さの大剣ガンブレイドと、1mくらいのソードブレイカーの二剣。この形態なら近中遠の3距離に対応できるわ。

「ねえねえ、はやて。ザフィーラ借りていい？」

「ザフィーラを？」

「そ。狼形態のザフィーラ。移動手段が欲しくて・・・。ダメ？」

アリシアは飛行魔法を使えないから、必然的に空戦もダメになるわけで。空戦Ｓ＋のフェイトの補佐っていうこともあって、空戦できるように練習はしてるはずなんだけど・・・。未だに完成の域には至ってないわ。

「ザフィーラ、ええか？」

「主の命令とあれば」

「おおきになザフィーラ。アリシアちゃん、振り落とされへんようにな」

「うん、ありがとう！　ザフィーラもありがとね！」

「構わん。その分働いてもらうぞ」

狼の姿に変身したザフィーラにアリシアが跨った。まぁ酷いアンバランス感。大人の女になってるアリシアとザフィーラのサイズがなんか合ってない。子供の頃なら様になってたでしょうけど。

「何はともあれ、シグナム達と合流や！」

「ええ！」

「ハイヨー、ザフィーラ～！」

人の姿をした雷を相手に戦ってるシグナムとアインスを見るはやて。アインスの速度でやっと追いつけるレベルって感じで、それだけでも十分脅威だわ。

「敵の呼称は雷騎士や、一応憶えておいてな。で、すずかちゃん達のことは対艦班と呼称。武装のバッテリー交換時にベルリネッタに一時帰艦するから、その際のサポートも仕事や」

「「了解！」」

そうしてあたし達も、そんな雷騎士と戦うべく空を翔けて、戦闘空域に進入するとはやてが「アインス！　広域攻撃仕掛けるよ！」って指示を出した。

『承知しました！　エミッションをスタンバイします！』

「そうゆうわけや！　みんな、追撃の準備をよろしく！」

「じゃあ私たちは、遠距離で雷騎士の引き離しと足止めに徹しようか！　ザフィーラよろしく！」

アリシアは"ブレイブスナイパー"を黒い宝石に戻して、胸元のブローチを開けて収容。そして代わり赤い宝石を取り出して、2挺の短銃型デバイスの「ラッキーシューター！」として起動させた。

「あたしも負けてらんないわね！　行くわよ、フレイムアイズ！」

≪おう！≫

右手に持つガンブレイドの銃口を、シグナムの斬撃を躱した直後の雷騎士へと向ける。にしても、シグナムの猛攻を至近で躱し続けられる雷騎士が凄過ぎるわね。

『シグナム！　あたしとアリシアで弾幕を張るわ！』

『一応注意ね！』

『判った。タイミングはお前たちに任せよう』

『間違ってあたし達を撃つなよ～？』

アギトの本気半分からかい半分の言葉にあたしとアリシアは『要らぬ心配よ！』と返して、位置が激しく入れ替わるシグナムと雷騎士の動きを注視。そして雷騎士が腕を振り払うことで生み出した電撃の鞭を防ぐことなく躱したシグナムが、そのままアイツから距離を取った。

「ホーミングシューット！」

「プロミネンスウィップ！」

アリシアは、防御か迎撃されない限りは追い続ける誘導操作弾８発を連射。あたしはヴァラーフォームでのみ発動できる砲撃を発射。

この魔法はフレイムウィップの強化版で、本来は同じように鞭として攻撃範囲内を薙ぎ払うものだけど、熱線砲としても利用できる。砲速もかなりあるし、何より魔力消費も他の大火力魔法より少ないから連射も出来る。

「カートリッジロード！」

≪応よ！≫

カートリッジが続く限りは撃ち続けられるわ。アリシアの誘導弾を移動速度にものを言わせて引き離し、あたしの砲撃を軽やかに回避し続ける雷騎士。

――ブリッツ・ケッテ――

そんな回避中にも電撃の鎖９本をあたし達に向けて高速で伸ばしてきた。誘導機能を持っているのか回避しても追ってくるから、左のソードブレイカーに炎を纏わせる。

「タイラントフレア！」

爆炎の斬撃で鎖を焼き滅ぼし、右のガンブレイドで雷騎士への攻撃を続行。アリシアも、ザフィーラが鋼の軛によって鎖を迎撃してくれたから無事で、高速射撃の「スティンガーレイ！」を連射しまくる。

「よしっ！　アインス！」

『はい！』

あたし達からある程度引き離して孤立させ、雷騎士をその場に押し留めたことで、はやてとアインスの広域攻撃の条件が整った。

「『遠き地にて、闇に沈め！　デアボリック・エミッション！』」

雷騎士を挟み込むように発生した広域空間攻撃。雷騎士はあたし達の足止めによって回避できず、強力なバリア発生阻害効果のある魔力爆発に飲み込まれた。はやてとアインスの強力な魔法の直撃ってこともあって、これで決まったでしょって一息。

『油断しちゃだめだ！　アイツは、雷騎士は、あたし達イリュリア製融合騎の中でも特に頑丈で強いんだよ！　最初にロールアウトされた試作騎のクセに！　だからまだ、終わってないかもしんない！』

アギトからの念話で、相手にしてるのが融合騎で、アギトやアイリの兄に当たることを、いま初めて知ったんだけど・・・。でもアギトは完全に敵として見ているみたいだし、このまま容赦せずに攻撃を続ければいいのね。

『雷騎士を確認！　海へ向かって墜落中！』

大隊の男メンバーの制服である学生帽やマントがボロボロ崩れて、力なく海面へと向かってく。それを見過ごすわけにはいかないのが局員よ。対象を浮かせる魔法、フローターを発動しようかと言うと

き、雷騎士は宙を蹴って勢いよく海の中に飛び込んだ。

『警戒！　何を仕出かすか判らへんよ！』

――ユニゾン・イン――

はやての言葉の直後、雷騎士が落ちた箇所から光の柱が立った。そしてその光の中から「騎士フィレス！？」が姿を現したんだけど、背中からはバチバチと放電する電撃の翼を６枚と展開としていて・・・。

「ユニゾンした・・・！？」

「うそ、致命傷だったはずだよ！？」

あたしとアリシアが驚きの声を上げて、はやてが「魔力量が跳ね上がってる！　手強いよ！」って注意した。肌にビリビリ感じる魔力の圧からよく判るわ。

「命令を受諾。これより当該空域の敵性戦力を殲滅します」

――ゼンゼンマンフォルム――

偽騎士フィレスとユニゾンした雷騎士は、彼女の全身を電撃のローブで覆い、電撃の大鎌を生成した。するとアギトから『アイツの全力だ！　気を付けろ！』っていう切羽詰った警告。

――ブリッツ・トラバント――

雷騎士の周囲に放電する魔力スフィア9基が展開されて、彼は「脅威レベル高の撃破を最優先する」って言って、あたし達だけじゃなくて艦隊への攻撃を行ってるなのは達、それに上空（きっと騎士フィレスね）にも1条の「レーザーサイト！」を照射。

「全隊、砲撃注意！」

『撃たれる前に墜とします！』

――ブラッディダガー――

「おおおおおおーーーーーーーっ！」

――ナイトメア――

「撃たせない！」

――ブルーバレット――

「火力でゴリ押すわよ！」

はやてとリインは高速多弾射撃、アインスは砲撃、アリシアは射撃連射、そしてあたしはガンブレードの剣身に炎を渦巻かせ、「ストームフレア！」火炎竜巻状の砲撃として発射させた。

――雪風（ベンティスカ・パレドゥ）の鉄壁――

雷騎士が球体状の猛吹雪に覆われて、あたし達の攻撃がどれも防がれてしまったわ。本体は吹雪の中、魔力スフィアはあたし達の攻撃をヒラリと躱して無事だ。となれば・・・。

――ブリッツ・シュレッケン――

攻撃を許してしまった。スフィア1基から砲撃1発が発射されて、レーザーサイトどおりの射線を通った。砲速は恐ろしく速く、射線が判っていても躱せたのはかなり運が良かったわ。

「騎士フィレス！　そちらは平気ですか！？」

『ええ、大丈夫！　ただ、そちらと私の居る高度の狭間で戦う他の航空隊員には危険な攻撃だから、次は撃たせないように！』

騎士フィレスの言葉にはやては「了解です！」と返して、今なお続く吹雪へと目をやった。なのは達も安否を確認するまでもなく無事な姿で飛んでいるのは肉眼で確認できるし、たった今5隻目の戦艦を撃沈させた。

「砲撃を発射した時点でスフィアは消失したわね！」

「再発動か、アレ以上の魔法が使われる前に捕まえるよ！」

「アギト。雷騎士（ヤツ）の大魔法は今のか？」

『確かそう・・・だったはず。あれから何百年って経ってるし、別の魔法を使えるかもしれない』

断言できないことに『悪い』って謝るアギトだけど、何百年って年月から考えれば仕方ないことだわ。シグナムだって「気にするな」ってフォロー入れてるし。

「とにかく今は雷騎士を墜とすことに専念や！」

はやての言葉に応じるようにあたし達は吹雪へと向かって攻撃を開始。いろんな角度からの射砲撃を放ち、アインスの多弾砲撃ナイトメア・ハウルでとうとう吹雪を突破。吹雪の内部で魔力爆発が起きて、中から雷騎士が飛び出してきた。

『ハルトマンです。セインテスト調査官より、現在この戦闘に投入されている兵器の詳細が送信されてきました。対艦班、騎士カローラ、チーム海鳴にデータを送ります』

ハルトマン一佐からの通信と、兵器データが送られてきたけどゆっくり眺めてる暇はないわ。何せ今相手にしてる雷騎士は大鎌を振るって、「ブリッツ・フリーゲンデ・シュナイデン」大鎌の刃の部分を飛ばしてきたから。フェイトのハーケンセイバーのように高速回転するものや、シグナムの空牙のように回転しないで飛ぶ斬撃の２種があるけど、どちらとも段違いに速い。

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

大鎌を振るい終わった後すぐ、螺旋状の氷の杭を５０発ほど展開して、雷騎士は「墜ちたまえ」と一斉発射。はやてやアインスのブラッディダガーレベルの高速射撃が、あたし達を襲う。あたし達はそれぞれの方法で杭の迎撃を行いつつ・・・

「「『ナイトメアハウル！』」」

はやての５発、アインスの１０発の計１５発の砲撃が、雷騎士の全方位から襲い掛かる。

――ブリッツ・シュネリヒカイト――

電撃を纏っての超高速移動で砲撃を回避した雷騎士は、さらにシグナムの連結刃による「シュランゲバイセン・アングリフ！」による包囲攻撃も回避。とそこで高速移動魔法の効果切れか、身に纏ってた電撃が消失。

「フリンジングボム！」

雷騎士との距離が近くなっていたあたしは、ガンブレイドの銃口前で生成したバスケットボール大の火炎弾を４発と発射。本来は着弾時や至近で爆破して対象にダメージを与える魔法だけど、躱された後もあたしは爆破することなく維持。何故なら・・・

「ハリセ～～～ン・・・スマァァァァァッシュ！！」

アリシアがあたし達のフォローに入ろうとしていたのを、視界の端で捉えていたから。右手の"ラッキーシューター"を、魔力攻撃を跳ね返せる"ハリセンスマッシュ"に変えていたあの子の姿に、あたしはどうすればいいか判っていた。

「なに・・・！？」

振るわれた"ハリセンスマッシュ"によって跳ね返された火炎弾４発は、雷騎士の至近距離まで飛んだ。距離を取られる前に「バースト！」トリガーを口にすると同時、火炎弾は一斉に大爆発を起こして、雷騎士を飲み込んだ。

Ｅｐｉｃａ４５旗艦ネレイデス攻略戦～Ｔｒｄｅｎｅｎ　ｉｎ　ｄｅｒ　Ｔｉｅｆｓｅｅ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

「８隻目の撃沈を確認！」

１３隻から構成されていた艦隊もかなり少なくなった。ひとえにすずかちゃん達が開発してくれた武装端末のおかげだ。でも逆を言えば、この端末が無かったら私たちは一方的に蹂躙されてたってことになる。

（ルシル君が送ってきてくれたデータを、攻撃中にサッと見たけど・・・）

大隊の艦隊・・・正式名称モルゲンデメリング征服艦隊は、１３隻から成ってるんじゃないことが判った。旗艦がもう１隻、存在していたんだ。私たちの足元、遥か海の底に・・・。

（戦略級ミサイルプラットフォーム潜水艦ネレイデス・・・か）

ネレイデスっていう潜水艦を旗艦とするこの艦隊を手っ取り早く停止させるには、旗艦を制圧した方がいいって、データを見る限りだと判るんだけど・・・。海底への攻撃なんて出来ないし、艦載砲が邪魔してくるから、どの道艦隊の相手をしないといけない。

「残る5隻も、この調子でぶっ叩く！」

ヴィータちゃんが"ストライクカノン"の砲門を次のターゲットに向けて、「食らいやがれ！」トリガーを引いたけど、砲撃の代わりに機関部から黒煙と火が上がった。それを見てすずかちゃんが「ヴィータちゃん、破棄！　早く！」って声を上げた。

「っ・・・！　わりぃ！」

ヴィータちゃんが"ストライクカノン"を捨てて、海面へと向かってくソレをすずかちゃんが「カノン！」砲撃で完全に破壊した。万が一に技術が盗まれちゃいけないから、現場で破棄した場合はその場で破壊するって聞いてたけど・・・。ここまで頑張ってくれた"ストライクカノン"には愛着も沸くわけで・・・。ヴィータちゃんもそうみたいで辛そうな顔をした。

「ヴィータちゃん、新しいストライクカノンを取りに戻って！」

「お、おう！」

「こちら月村！　メンバー1人がベルリネッタに一度帰還しますので注意しておいてください！」

すずかちゃんが全体通信でそう伝えて、ヴィータちゃんが「すぐ戻る！」って私たちから離脱した。最後まで見送ることなく私たちは攻撃を再開。武装端末はバッテリー駆動だから、好き勝手は撃てないけど、十二分に艦隊へダメージを与えられてる。

「あ！　バリアが・・・！」

「解除された！」

艦隊を覆っていた半球状の巨大バリア（へーラーっていう名前らしい）がとうとう消失した。武装端末の攻撃を防げない以上、展開し続けることの無駄って判断したのかも。でもこれで「接近できる！」わけだ。

「すずか！」

「うん、フェイトちゃん！　一気に決めに掛かろう！　旗艦については端末を交換してから考える！」

すずかちゃんの指示に「了解！」って応えて、私たちは艦隊への接近を試みる。バリア発生に回していたエネルギーか魔力を艦載砲に回した影響か、「弾幕が・・・！」厚くなった。

「なのはちゃん！　ヴィータちゃんが戻ってきたら、シールドを壊しても良いって気概で突っ込もう！」

「すずかちゃん・・・。ん、了解だよ！」

「みんな、バッテリーの残量は？」

艦載砲を回避しながらバッテリー残量を確認。私の"ストライクカ

ノン"と"フォートレス"はついさっき交換してきたから大丈夫。すずかちゃんとフェイトちゃんは私のちょっと前に交換済み。トーレさんとセッテさんの"ウォーハンマー"は、"ストライクカノン"に比べればバッテリーの消費は少ないし、機人である2人は自身の駆動器官からバッテリーにエネルギーを供給できるから、交換に行く頻度は少ない。

『こちらカローラ。月村主任。ストライクカノンの交換の許可を』

成層圏からレールガンを撃っていた兵器は、戦術級武装飛空艦カラドリウス。巨大な硬式飛行船らしく、大隊メンバーの運搬を主任務としているみたい。偽フィレスさんや雷騎士やその他大勢の大隊メンバーが空から現れたのはそういうわけだった。

「はい、どうぞ！　そちらはお1人で大丈夫ですか？」

『ええ。成層圏内で空戦が出来るのが私ひとりだから。けれど艦隊に比べて攻撃の厚さはさほど無いおかげで、単独で十分渡り合えるわ』

遥か空を見れば、フィレスさんの魔力光アイスグリーンと、幾条もの白い閃光が縦横無尽に翔け回ってるのが判る。ただ、カラドリウスの機影は視認できない。エアリアルとかっていうステルス機能を搭載してるからってデータにあった。そんなカラドリウスの撃墜を担当することになったフィレスさんは、艦隊と同じバリアと装甲を積んでることで武装端末を借りて交戦を開始した。

「ではそのままカラドリウスの攻略をお願いします！」

『了解。そちらもご武運を』

すずかちゃんとフィレスさんの通信が終わって、「わりぃ、待たせた！」ヴィータちゃんも新しい"ストライクかノン"を手に戻って来たんだけど、ヴィータちゃんが「なあ。攻撃の頻度が落ちてね？」って首を傾げた。さっきまでは足を止めると直撃ないし掠るような弾幕だったけど、今はゆっくり話せるほどに落ち着いてる。

「クアットロ、お前か？」

「いいえ、トーレ姉様。すでに私のシルバーカーテンは通用していないです。完全に解析されてしまったみたいで・・・」

「・・・とにかくチャンスなのは間違いないから、このまま押し切ろう！」

――炸裂魚雷（アイアタル）――

攻撃頻度の落ちた残りの戦艦を撃沈するべく突っ込もうとした時、「えっ、なに・・・！？」残り5隻の側面がいきなり爆発。黒煙を上げる艦体が徐々に傾斜していって、次々と海に沈み始めた。私たちは顔を見合わせて、「事故？」って首を傾げる。

『警告！　海中にて巨大質量の移動を確認！　これは・・・浮上している！？　おそらく旗艦ネレイデスです、ご注意を！』

リュッチェンスからの通信に遅れること数秒。大きな影が海面に現れて、沈没中の戦艦５隻にぶつかりながら船首が海面から飛び出してきた。データには全長４００ｍってあったけど、実際に浮上して私たちに見せ付けるその姿（シロナガスクジラみたいな形だ）はもっと大きく見えた。

『こちらリュッチェンス。ネレイデスより通信が入っています。対艦班の皆さんにも繋げます』

『・・・こち・・・イデス・・・管制・・・ンマ・・・』

私たちにもネレイデスからの通信を繋げてもらい、ノイズ交じりの言葉に耳を傾けようとした。若い女性の声で、リュッチェンスからは『生命反応１！　有人です！』との報告が入る。ルシル君からのデータには無かった情報だ。

『対空（キリム）エネルギー砲、１番から６番起動』

≪マスター！　ロックオンされています！≫

待機モードの"レイジングハート"から警告が出る。甲板の下部（尾ヒレの付け根部分）辺りにある三連装砲台２４基のうち６基の砲門が私たちに向いて、ノイズ交じりの通信相手とはまた別の女性の声で『発射』の指示が出た。

「おいおい、そっちから声かけといて攻撃かよ！」

「クアットロ！　シルバーカーテンが通用しなくなった今、お前は下がれ！」

「っ！・・・口惜しいですがトーレ姉様の言うとおり・・・。すずか、私はベルリネッタに帰還します」

「うん！　ありがとう、ゆっくり休んで！」

６基の三連装砲から放たれる何百発のエネルギー弾を躱しつつ、"ストライクカノン"をネレイデスの巨大な艦体へと向ける。潜水艦が浮上すればいい的だってことくらいは、管制も解かってるはず。それを証明するために攻撃あるのみ。そして制圧して、管制を確保する。

「シュート！」

トリガーを引いて砲撃を発射。私に続いてすずかちゃんとフェイトちゃんとヴィータちゃんも「シュート！」砲撃を放った。装甲に穴が開けば潜航は出来ないはずだから、砲台の破壊より艦体へのダメージを狙ったんだけど・・・。

「砲撃が・・・」

「「「弾かれた・・・！？」」」

戦艦や空母の装甲も撃ち抜けた"ストライクカノン"の一撃が、バ

リアなんて張っていないただの装甲に弾かれた。でも呆けていられない。再びエネルギー弾が私たちを襲う。威力はすごいだろうけど誘導操作弾じゃなく直射弾だから、恐れることなく難なく回避。

「もう1度！　今度は全員、同じ場所に攻撃を！　トーレとセッテは少し待機で！」

すずかちゃんの指示に従って私たち砲台組は、第2波攻撃のために射線確保に動く。そんな中、またノイズ交じりの通信が入った。

『・・・現ざ・・・・闘中の・・・う空戦りょ・・・・お願・・・・ウチを・・・・沈め・・・・』

『発射管1番から4番開放。散弾（ズラトロク）ミサイルＴｙｐｅ　Ｂ・・・発射』

鼻孔に当たる箇所はミサイル発射管の集まりで、少なくとも１００基くらいのハッチがある。そのうち4基からミサイルが発射されて、垂直に空へと上がっていった。弾道ミサイルだ。

「ネレイデスへの攻撃を中断して、弾道ミサイルの迎撃を最優先に！　ウーノ、はやてちゃん、ハルトマン一佐！　それに各航空隊へ！　警戒してください！」

「あのミサイル、プライソン戦役ん時と同じなら魔法で破壊できんじゃねぇか？」

「巡航ミサイルに比べて迎撃は難しいと思うけど、広域攻撃が出来

るならたぶん・・・！」

広域攻撃が出来るのは、はやてちゃん、アインスさん、アギトとユニゾン中のシグナムさん、それにフィレスさんだけだ。でもはやてちゃん達は今、敵戦力と交戦中。頼るわけにはいかない。と思いながらもチラッとはやてちゃん達の方を見る。ここから５００ｍくらい離れてるけど、魔力光のおかげで大体の状況は判る。

（あれ？　あの桃色の魔力光って・・・）

開戦時には無かった色。そしてその持ち主も姿を見せてなかった。セラティナさんのものだ。

「ボサっとすんな、なのは！」

「あ、ごめん、ヴィータちゃん！」

エネルギー弾の弾幕も続く中、リュッチェンスから『全隊！　高度５０ｍ以下まで降下してください！　急いで！』切羽詰った通信が入った。

『騎士カローラはそのままの高度で結構です！　ズラトロクは、高度５０ｍ～１０ｋｍ圏内の一定空間内を任意で爆撃するミサイルだそうです！』

『ハルトマンです！　リュッチェンスとヴォルフラム２隻の艦載砲による迎撃を行います！　八神一佐、よろしいですか！？』

『もちろんです！　そちらの指示はお願いします！　こちらはロードスター一尉のおかげで、直掩戦力をもう少しで撃破できそうですので、雷騎士を逮捕した後にネレイデス攻略に参加します！』

弾幕の中を掻い潜って５０ｍ以下まで降下しないといけなくなった私たちは、この機会にネレイデスに再接近して、至近距離での砲撃を撃とうかと考えるわけだけど・・・。

『弾道ミサイルが降下してきました！　未だに指定高度内に居る隊員は、至急５０ｍ以下まで降下してください！』

攻撃中にミサイルの衝撃で体勢を崩されて、ネレイデスの弾幕を受ける危険は避けないと。みんなで顔を見合わせて、今は回避を最優先することに。

『申し訳ありません、１発の迎撃に失敗しました！　皆さん注意を！』

ハルトマン一佐からの通信の直後、空がカッと明るくなった。１発のミサイルが途中で複数の小型ミサイルへとバラけて、ソレらが一斉に爆発。ドォーン！と耳を貫くほどの大きな爆発音に続き、「くぅぅ・・・！」押し潰されそうな衝撃波が頭上から襲ってきた。

（あんなのが複数発、同時に爆発なんかしたら直撃じゃなくても墜とされそう・・・！）

「まずい！　潜航されるぞ！」

耳鳴りがする中で聞こえたトーレさんの声で、ネレイデスの艦体が沈み始めてるのが判った。潜航寸前はエネルギー砲は撃てないのか、私たちへの攻撃が止んだ。

「照準！」

すずかちゃんが魔力でレーザーポインターを放って着弾点を指定。エネルギーをチャージして、私とすずかちゃんは"ストライクカノン"と"フォートレス"を、フェイトちゃんとヴィータちゃんは"ストライクカノン"を、スクリューがあるはずのネレイデスの尾びれへと向ける。

「「エクサランスカノン・ヴァリアブルレイド！」」

「「ストライクカノン！」」

「「「「シュート！！」」」」

潜航されるかギリギリのところで全弾直撃・・・したけど、着弾と同時にバチン！と音がして、すべての砲撃が弾かれて消滅した。そしてネレイデスは悠々と海中へと潜航した。

「バリアじゃない。装甲に何かしらの仕掛けがあるんだ。それが判らないと・・・。持久戦だと武装端末の分が悪い」

≪警告！　ロックオンされましたわ！≫

すずかちゃんが悔しげに呟いてすぐ、"スノーホワイト"が警告を発して、遅れて"レイジングハート"と"バルディッシュ"と"グラーフアイゼン"からも、ロックオンされた、っていう警告が出た。

『発射管８０番から９２番開放。艦対空（ウェンディゴ）ミサイル・・・発射』

ネレイデスの管制と通信が繋がったままのおかげで、ミサイルが発射されることをすぐに察することが出来た。海面から飛び出してきたのは１２発のミサイル。１人につき２発が私たちに向かってきた。

「散開して回避！」

ミサイルが最高速に届く前なら空戦魔導師でも回避できる。それに速度では負けても機動力なら空戦魔導師の方に分がある。一直線に向かってくるミサイルを急上昇して回避。すずかちゃん達も回避に成功してる。

「誘導弾、注意！」

セッテさんの言うとおり、ミサイルが弧を描いて戻って来そうだった。

――フレースヴェルグ――

そこに飛来するのは白い砲撃で、旋回中によって速度が落ちていたミサイルを狙い撃ちして撃破してくれた。今の砲撃は「はやてちゃ

ん！」のものだ。見ればはやてちゃん達がこちらに向かって飛んできていた。

『これより雷騎士討伐隊は、艦隊旗艦ネレイデス攻略に参加します！　月村主任、指示を願います！』

『了解！　ネレイデスはバリアを展開しなくても、その装甲の防御力で武装端末の砲撃も防ぐの！　それでも攻撃を続ければきっと装甲は疲弊する！　だからはやてちゃん、浮上したら好きなように攻撃してくれると助かる！』

『なるほど！　そうゆうわけなら一丁暴れようか！』

『あ、ただ、ネレイデスは有人兵器で、管制官が居るみたいなの。とりあえず装甲に穴を開けて潜行出できないようにするのを最優先でお願い』

『了解や！』

はやてちゃん達と合流を果たして、お互いのこれまでの健闘を称えるように力強く頷き合った。

「アリシア！」

「フェイト！　ただいま！」

「うん、うん、おかえり！」

フェイトちゃんとアリシアちゃんがハグして再会を喜び合うのを温かく見守ってると、リュッチェンスから『ネレイデスから流されていた通信のノイズ除去に成功しました』との連絡が入った。そしてこれまでに届いた通信を再生してくれた。

『こちら旗艦ネレイデスの管制機、ガンマ。現在戦闘中の航空戦力にお願いする。ウチを沈めてほしい』

「ガンマって・・・！」

「行方不明になってたスキュラの次女！」

拉致もしくは死亡扱いにされていた、プライソン・スカリエッティの生み出した兵器管制用サイボーグ・スキュラの内の1人、ガンマ。こんな形で彼女の安否を確認することになるなんて。

『フィレス・レプリカ、同志アインス（ランコ）の撃墜、敵戦力の増加を確認。全兵装システム立ち上げ・・・完了。システムオールグリーン』

ガンマとは違う女性の声が、管制機のガンマを差し置いてネレイデスのシステムを掌握をしているかのようなことを言う。

「とりあえず管制機（ガンマ）を確保しよう！　話はそれからや！」

『遠隔無線操作飛行砲台（ビクシー）・・・ドライブ』

はやてちゃんの言葉に「了解！」と応えていたところに、海面からピクシーっていう名前らしき何かが複数飛び出してきた。ミサイルかと思ったけど違う。全部で１０基のピクシー（形状は、成人大サイズのプラスドライバー）は宙で滞空して、先端を私たちに向けた。それだけでピクシーが攻撃用の兵装だってことが判って、私や他のみんなもその場から即離脱。直後に先端から砲撃が発射された。

「なのはのブラスタービットみたいだね！」

――スティンガーレイ――

狼形態のザフィーラに跨るアリシアちゃんがそう言いつつ、"ラッキーシューター"から魔力弾を連射。砲撃中のピクシーに着弾するけど、大きく揺さぶるだけで破壊には至らなかった。すると別のピクシーがフォローに入って来て、先端をアリシアちゃんに向けた。

「ああんもう！　私の魔法じゃ火力不足っぽい！？」

――ストームフレア――

「ならこれでどう！」

アリサちゃんが炎の竜巻を砲撃として発射して、砲撃発射前のピクシーに直撃させた。でも「うそ！　あたしのもダメ！？」って、着弾時に発生した爆炎からピクシーが飛び出してきたことでアリサちゃんが驚きを見せた。

「すずかちゃん！　武装端末なら・・・！」

「う・・・ん。出来ればネレイデスだけに使いたいけど、そうも言ってられないよね・・・。判った。私とヴィータちゃんでピクシーを武装端末で攻撃。なのはちゃんとフェイトちゃんは魔法で攻撃を続行。トーレとセッテは引き続きネレイデスへの攻撃を最優先で、潜航中は待機！」

すずかちゃんの指示に頷き返して、私は誘導操作弾の「アクセルシューター！　シュート！」を１８発と一斉発射。ピクシーは回避行動に入ったけど、そこは阿吽の呼吸で「ファイア！」フェイトちゃんのプラズマランサーが回避直後のピクシーに着弾。

「まだ壊れない・・・！」

「ならば、これでどうだ！」

――紫電一閃――

シグナムさんの燃える"レヴァンティン"がピクシーを捉えた。ヒット時、炎の勢いが弱まったけど鋭い金属音の後、ピクシーが真っ二つに切断された。

「純粋物理攻撃だ！　おそらくそれでなら破壊できる！」

実際に見ていたから、シグナムさんの言うとおりだと思う。でも物理攻撃が出来るのってこのメンバーだと限られてくる。アリサちゃ

んとヴィータちゃん、あとセッテさんの"ブーメランブレード"、そして"ウォーハンマー"の通常打撃だけ。

『機動六課の面々、聞こえる？　魔力パターンからして当時の六課メンバーと見るけど、合っているよね？　まぁ合って無くてもいい』

『ガンマ。貴方は我ら大隊の庇護を受けていながら、裏切ると言うのか』

『はーっ！　笑い話にもならないことを言わないでくれる？　誘致するでなく勝手に拉致して、言うことを聞かないからってネレイデスの管制機として無理やり接続するためにウチの体を改造して、管制機のサブパーツと言いながらただのＡＩであるオメガ、お前の支配下に置かれているこの状況下で、庇護を受けている？　ふざけるな！』

ガンマと、オメガって言う名前のＡＩの言い争いが始まると、ピクシーの攻撃がピタリと止んだ。シグナムさんが「好機！」って次々とピクシーに斬りかかって、アリサちゃんも熱することで切断力を高めた「フレアブレード！」でピクシーを斬り裂いた。

「スローターアームズ！」

セッテさんは空いてる右手に巨大ブーメラン・"スローターアームズ"４つを起動させ、ふわふわと滞空したままのピクシーに投擲して、ピクシー４基を破壊した。

『六課、見える？』

さらにノイズ交じりのモニターが展開されて、ガンマの姿が映し出された。その姿に私たちは「ひどい・・・！」思わず目を逸らしそうになった。衣類を一切身に付けず裸で、腰から下と両肩から先が無くて、いろんな色や太さのケーブルが何十本と繋がっていた。目は薄っすらと開いているけど焦点は合ってない。

『六課（おまえたち）はウチを確保しようとしてるだろうから、今のうちに断っておく。ウチはもうネレイデスと一体化していて、離れることは出来ない。ケーブルを1本でも外すと死ぬ、そういう風に改造されたから。だからネレイデスもろとも沈めてほしい。お前たちが艦隊を削ってくれたおかげで、ウチの拘束力も解けてくれた。今はまだ、オメガに分があるけど、必ずネレイデスを掌握してみせる。それまで耐えて』

『愚かな事を。今の貴方は私を掌握できるほどのリソースを持っていない。大人しく私の管理下に留まれ』

『うるっさい、ＡＩの分際で！　ウチと一緒にお前も深海に沈め！』

モニターと通信がブツッと切れて、その僅か数秒後にガンマから『緊急浮上！　六課、注意！』との通信が入った。船影が海面にまで上がって、派手な水柱を上げながら船首が飛び出してきた。

『汎用対衝撃装甲（スプリガン）レベル最大。発射管２０番～２４番開放。散弾（ズラトロク）ミサイルＴｙｐｅ　Ｂを――』

『させない！　スプリガンを緊急解除！　六課！　装甲の色が鉄色になったら即攻撃！』

ネレイデスはこれまで水色だったけど、今は濃紺色で、さらにガンマの言う鉄色になった。だからすずかちゃんとはやてちゃんからの「総員、攻撃！」という指示に従って、対艦班の私たちは武装端末で、はやてちゃん達は魔法で、ネレイデスへと攻撃を放った。

「入った！」

「ネレイデスの装甲に損傷を確認！」

さっきまではどんな攻撃も弾いてた装甲が、色が変わっただけで脆くなった。炎と黒煙を上げるネレイデスだけど、『第２層装甲稼動。スプリガンを最大レベルで再起動。ダメージコントロール・・・クリア』オメガの言葉と共に開いていた穴が塞がって、色も濃紺に戻った。

『発射管６０番～７０番開放。炸裂（ボナコン）ミサイルＴｙｐｅ　Ｂ・・・発射』

「弾道ミサイル！」

『六課はネレイデス最優先！　落下軌道のデータを管理局艦に送信した！　迎撃は管理（そっち）局艦でやって！　まったく！』

弾道ミサイルが発射管から発射されたから、私たちは自分の身を護るため最高速度に達するまでに撃墜しようってしたんだけど、ガンマはこちらの様子をモニターし始めたのか怒鳴り声を上げた。私たちは顔を見合わせて、リュッチェンスとヴォルフラムに迎撃をお願いする旨を伝えた。

『もう少し・・・あとちょっと・・・！』

『っ！　潜航を開始。全発射管を開ほ――』

『メインシステム掌握率５２・１％！　このまま完全に乗っ取ってやる！　スプリガンへの電力供給を全カット！　ミサイル発射システムに干渉！　発射シークエンスを一斉破棄！』

ネレイデスが再び鉄色になったのを見て、私たちはもう一度攻撃態勢に入る。それぞれ武装端末やデバイスを向けた時・・・

『防衛用圧力波伝播弾（エアレー）・・・発射』

艦体後部のハッチ１基から成人大サイズの球体が４基射出された。それらはネレイデスの頭から尾――背骨に沿うように一直線に並んで、ふわっと浮遊した。

『まずい！　六課、急いで防御！　全力で！』

ガンマの切羽詰った声に、私は考えるより早く"フォートレス"３基を前面に逆三角形に配置して、さらにエネルギーシールドを展開

しようとしたんだけど、オメガの『ドライブ』という一言の直後、４基の球体から強烈な衝撃波が発生して、「～～～～っ！」私たちは上空に吹き飛ばされた。

「ぅ・・・あ・・・？」

視界が点滅して、空と海がぐるぐると交互に映り込んでくる。錐もみ状態で宙を舞い、そして落下し始めてることを混濁する意識の中で理解した。

（あ・・・ストライクカノンとフォートレスが・・・）

今しがたまで装備してた武装端末が、見るも無残に粉々になってるのが見て取れた。

「・・・大丈・・・な・・・は・・・！」

落下していた体が止まる。首の後ろと膝の裏に腕が回されてるみたいで、誰かが私をお姫様抱っこして受け止めてくれたんだと判る。ありがとう、とお礼を口にしたんだけど巧く呂律が回らなかった。

（なんか・・・顔が熱い・・・？）

"ストライクカノン"も"フォートレス"も失って空いた両手で顔を触って、霞む視界の中で手の平を見ると真っ赤に濡れていた。それで頭から出血してるんだって判った。あと、私を抱き止めてくれたのは、シグナムさんっぽい。

――パワーブースト・スペルフォース――

――癒しの風――

そんな中で私を包むのは温かな青磁色の魔力。シャマル先生の治癒魔法だ。その強力な魔法のおかげで負っていたダメージがほぼ完治して、消費していた魔力も回復した。視界もバッチリ晴れて、シグナムさんの顔がはっきり見えるようになった。

「すまない、なのは。お前とフォートレスのおかげで、私とアギト、ヴィータは重傷を負わずに済んだ」

『ありがとう、なのは！　助かったよ！』

「わりぃ、なのは。平気か？」

「うん、大丈夫だよ、ヴィータちゃん。シグナムさんとアギトも無事に何より」

「なのはちゃん！」

「すずかちゃん！　みんな！」

名前を呼ばれて振り向けば、シャマル先生と一緒に居るすずかちゃん、アリサちゃん達も無事そう。ただ、すずかちゃんとフェイトちゃんとトーレさんとセッテさんの手には、私と同じように武装端末

の姿は無かった。

「あー死ぬかと思った～。ザフィーラが咄嗟に護ってくれなかったら絶対死んでたね私」

「やめてよ、アリシア。そんな縁起でもないこと・・・」

「だけど実際、あたしもやばかったわ。あたしとフェイトは、すずかのフォートレスのおかげもあって撃墜には至らなかったけど、意識飛ばされてたし」

「うん。ありがとう、すずか」

「ううん。フォートレスをきちんと使えれば良かったんだけど・・・」

そう言ってボロボロなメインユニットを撫でたすずかちゃん。武装端末は全滅みたい。ベルリネッタには予備の端末があるし、現在進行形で艦内の開発室にて開発用オートマタが別機を製造中だ。それでもここまで運用できた端末の破壊は気落ちを生む。

「みんな無事で何よりや。ううん、すずかちゃんのブースト魔法と、合流してくれたシャマルの治癒魔法のおかげで、私たちはこうしてまた言葉を交わすことが出来てる。ホンマにおおきにな、シャマル、すずかちゃん」

「はい」「うん」

「そやけどここで終わりやない」

はやてちゃんの視線が海面へと向く。ネレイデスは潜航中のようだけど、ガンマとオメガのシステム掌握戦が拮抗してるのか、一切攻撃を行ってこない。

「レイジングハート、セットアップ！」

武装端末を失った私は、"レイジングハート"をエクセリオンモードで起動させる。同じようにすずかちゃんとフェイトちゃんとヴィータちゃんも「セットアップ！」デバイスを起動させた。

『無事に体勢を立て直したようね。それぞれ自分が持つ最強の魔法を用意しておいて。ちゃちな射砲撃じゃ、装甲を撃ち抜けても撃沈までは至らない。ネレイデスはそれほどまでに頑強に造られた』

『無駄なことを言う。この僅かな拮抗に勝利するのは私だ。ガンマ、貴方の脳を焼き切ります』

『やってみなよ、脳無し。返り討ちだ。あぁでも、ちょっと拮抗を崩すキッカケが欲しいかも』

ブツっと通信が切れた後、『こちらフィレス。対艦チーム、射線データを送信するから、至急その場から離れて』って、フィレスさんから通信が入った。遅れて射線データってものがモニター越しに送られてきた。

「え、待って。射線って成層圏から伸びてきてる・・・！」

「まさか・・・！」

一応データに従って射線上より退避しつつ、遥か空の上を仰ぎ見る。そんな中でモニターから『発射5秒前・・・』ってカウントダウンが始まった。

『4、3、2、1、フォイア！』

――空対地（アンビプテラ）レールガン――

遥か空から海中のネレイデスへと向けて放たれて来たのは、目にも止まらない速さの4発の閃光。ソレらが派手に水柱を上げて海面に突入した。

『馬鹿な。バラストタンクに破損だと？　このままでは・・・』

『カラドリウスの艦載砲（レールガン）、徹甲榴弾を使って撃ったのか。いいアイディアよ、どこかの誰か。さぁ、緊急浮上する。もう潜航は出来ない。スプリガン・・・装甲の方もウチが何とかする。ほら、最強の魔法の準備は出来た？』

ガンマの優しい声が私たちの間に流れる。ネレイデスの撃沈は即ちガンマの死を意味する。局員としてそれだけは出来ない。けれどガンマはネレイデスと一体化していて、離れることでも死ぬって言っ

てた・・・。

『はっはー！　オメガ、バラストタンクの修復にリソースを割いた所為で、ウチへの干渉を僅かに解いた！　ほらほら！　掌握率で７０％越え！　ウチはガンマ！　スキュラ最高の管制機を舐めるなよ！』

『～～～～～っ！！　ガンマぁぁぁぁぁーーーーーっ！』

『スプリガンを解除。各兵装システムを完全デリート。・・・管制ＡＩガンマ・・・消滅。勝った』

『ガン・・・マ・・・ガ・・・マ・・・』

ネレイデスの装甲が鉄色になる。この状態でなら魔法でも十分に損傷を与えることが出来る。でもやっぱり・・・。私たちが迷いを見せていると、『対艦チーム。あなた達は下がっていて。ネレイデスは、レールガンで沈める』フィレスさんがそう言った。

「フィレスさん！？」

『あなた達に人殺しはさせられない。そういうのは大人の仕事よ。さぁ、射線上から退避を』

『それはいい考え！　それじゃあ・・・六課、迷惑をかけた。でももう大丈夫。ありがとう』

フィレスさんとガンマだけで話を進めてしまった。でもガンマを救

う方法は無い。シグナムさんが「なのは、下がろう」って私の肩に手を置いた。

「主はやて。それに皆も。近くに居ては巻き込まれるかもしれません、下がりましょう」

アインスさんもそう言って、殿を務めるためかネレイデスに一番近い私のところに来た。私は一度ネレイデスを一瞥して、「ごめんなさい」そう謝って、シグナムさんやヴィータちゃんと一緒にその場から離れる。

『5、4、3、2、1、フォイア！』

――空対地（アンビプテラ）レールガン――

空から飛来する閃光4発がネレイデスに着弾、そして貫通して空いた穴から爆炎が噴き上がる。炎と黒煙を上げながら艦体が3つに割れて、それぞれがゆっくりと海中へと沈み始めた。

・――・――・――・――・

（あー、これでようやく休むことが出来る・・・）

ネレイデスの管制室に海水が流れ込む中、ポッド内に収められているガンマの瞳が閉じられる。まぶたに裏に浮かぶのは、父として慕っていたプライソンや、他の姉妹と過ごした日々。

（一度は海に行って、泳ごうかって話してたけど、こんな形で海に入るなんて思わなかったな・・・）

管制室内が海水に満ちる。すでに肺呼吸も必要ないガンマにとっては、全身が海水に浸かってもどうということはない。それに温度すらも感じず、ただ何かに包まれたという感覚しか判らない。

（海の中ってこんなに静かなんだ・・・。だからかな、オメガももう居ないしちょっと・・・寂しい）

管制室の明かりも消失し、そこはもう真っ暗な世界。さらに無音でもあるため、ガンマは久しく感じなかった孤独を思い出した。しかし、まぶたの裏に浮かぶプライソンやスキュラの笑顔、それに・・・

――ガンマ――

という、自身の名前を呼ぶ幻聴にガンマは口端を僅かに吊り上げて笑みを作る。

（うん、父さん、アルファ、ベータ、デルタ、イプシロン、ゼータ。今行くよ・・・ただいま）

ガンマの閉じられた瞳から涙が溢れる。死への恐怖ではなく、父や姉妹と再会できるという感動のその涙は、暗く深い海の中に溶けていく。

こうしてスキュラ三女ガンマは、安らかな眠りにつくように父と姉

妹たちの待つ天へと旅立って逝った。

Ｅｐｉｃａ４６頂点～Ｓｃｈｗｅａｔ　Ｐａｌａｄｉｎ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

トラバント元団長率いる大隊、彼の側に付いた裏切り者たち新生ベルカ騎士団を炙り出すため、もう夜空へと変わった大空を飛び回るわたし達オランジェ・ロドデンドロンは、何度目かの『敵性騎士の撃破！』っていう報告を聞く。

「うーん、順調、順調♪　自治領全体を結界で覆ってくれてるおかげで、民間人や建物にも被害が出ないし♪」

「それに、強敵がいないのも助かってる」

「パラディン連中はもう、私たちが片付けたから・・・」

「だから割と早く殲滅できそう」

「残るパラディンは、プラダマンテとキュンナだけですね」

母様やパーシヴァル君を始めとした教会騎士団が、わたし達を撃つために姿を見せたベルカ騎士団を制圧していくのを空から見届け続けてた。

「ミヤビ、そっちは大丈夫？　怪我とかしてない？　一応わたしの元部下だから、心配は無いと思うけど・・・」

『はい、シャル隊長！　皆さん良くしてくれていますので、安心して背中を任せられます！』

母様やパーシヴァル君と一緒にザンクト・オルフェンへと来てくれたミヤビは、かつてわたしが率いてた朱朝顔騎士隊ロート・ヴィンテと一緒に、ベルカ騎士団と交戦してくれてる。

――シャル隊長！　私の偽者がご迷惑をお掛けしました！　不肖ミヤビ・キジョウ！　少しでもお助けになれば、と参上しました！――

それはそれは綺麗な敬礼だった。そんなミヤビを、わたし達と一緒に戦いたいって言ってくれてた彼女を、わたしの古巣に預けて裏切り者掃除をさせてる。餌役であるわたし達は空を翔け回らないといかない。でもミヤビは飛行魔法を使えず、当然空戦も出来ない。だからミヤビには、地上での裏切り者掃除をお願いした。

――ごめんね、ミヤビ。せっかく来てくれたのに――

――いえ！　ご一緒できないのは少し寂しいですが、私に出来る事があり、それでシャル隊長たちの助けになるのであればそれだけで嬉しいです！――

それでもミヤビは、わたし達の力になれるなら、って喜んで引き受けてくれた。だからルミナが「あんな良い子を失望させられないね！」って言ったから、わたしは「うん、本当に！」頷き返した。

『止まってください！・・・あの路地裏に人影が見えました。数はおそらく1人、チラッとスカートが見えたので・・・大隊の女性制服です』

繋いだままのミヤビからの報告に耳を傾け、モニターを横目で確認。その間もスナイパーライフルやらガトリング砲やらで狙われるけど、それらを華麗に回避していれば後は『敵戦力確認！　交戦します！』って、騎士隊が駆けつけてくれる。

『ダメです、ミヤビさん！　その人は！』

かつての部下であり、今はロート・ヴィンデの隊長、セバスチャンの切羽詰った声でモニターへと視線を戻すと、探していた人物が映ってた。毛先に向かうほど外に跳ねる緋色の髪と、見惚れるほどに綺麗な紫紺色の瞳、手には斬首剣としての形状である剣先が四角いエクスキューショナーズソード・"シャルフリヒター"。

「プラダマンテ・・・！」

教会騎士団においても、剣騎士においても最強であるプラダマンテが、大隊の女性制服姿でミヤビ達の前に姿を見せた。

「そこはどこ！？」

『あ、はい！　中央区（アヴァロン）はログレス地区・エリアＢです！』

セバスチャンからの報告に、「近い！　すぐ側！　急いで向かうから交戦は避けて！」って伝えて、「プラダマンテ！　そこで待ってろ！」聞こえるように叫んだ。

『イリス・・・。ええ、待っているわ』

プラダマンテはそう言ってその場に留まったのを確認して、「急いで向かうよ！」後ろを飛ぶみんなに指示を出す。

「居た！」

ミヤビとプラダマンテが向かい合ってる。わたし達は「お待たせ、ミヤビ！」の側に降り立つと、彼女は「シャル隊長！　先輩方！」って嬉しそうに笑顔を浮かべてくれた。そんなミヤビに「手を貸してくれる？」って聞いてみる。

「っ！　は、はいっ！　誠心誠意、全力全開でお供させてもらいます！」

――風雷鬼降臨――

額から黄色と翠色の角を生やすミヤビに続いて、わたし達も臨戦態勢に入る。交戦に入る前に「セバスチャン。ここはわたし達が請け負うから」って伝えて、この場から離れるように伝える。プラダマンテとの殺し合いに1歩踏み込むような戦いとなれば、巻き込まない自信は無い。

「了解しました！　御武運を！」

慌しく離れてくセバスチャン達の足音を背に、わたしは"キルシュブリューテ"の剣先をプラダマンテに向ける。

「昇格試合じゃないし、何よりわたし独りで勝てないのはこれまでの試合で理解してる。だからここに居る全員で潰す。文句は無いよね？　元シュベーアトパラディン」

「結構。纏めてかかって来い」

歳からしてキツい黒のセーラー服（スカートはさすがにロング）から、上下真っ白なジャケットとスラックスっていう騎士甲冑に変身し直した。袖に腕を通さずに羽織るコートを構築しないってことは、今のプラダマンテは本気ってことだ。

「最後の大隊（レッツト・バタリオン）が剣士長メギル、そして新生ベルカ騎士団（ノイエ・ベルカン・リッターオルデン）が剣帝プラダマンテ、参る」

ＶＳ・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・ＶＳ

其は堕ちてなお頂点に立つ騎士プラダマンテ

「一気に畳み掛ける！　ルミナ！」

――剣神モード――

対人では使ってはいけないって、管理局員時代に厳命されてたスキル・絶対切断アプゾルーテ・フェヒターを発動。プラダマンテのスキル・空間干渉に対抗するにはそんな事を言ってられないもんね。

「よしっ！　エクスィステンツ・ツェアレーゲン！」

ルミナも対人使用厳禁のスキル、終極の支配者　エクスィステンツ・ツェアレーゲンを発動。

「「おおおおおおおおっ！！」」

――絶刃一閃――

――ツェアラーゲン・シュラーク――

わたしとルミナ、互いに当たれば相手に致命傷を負わせられる一撃を、割と全力でプラダマンテに仕掛ける。後ろからはセレス達が魔術師化した気配を感じる。プラダマンテの実力を知ってるからこその全力だ。

「それでいい。私を殺すつもりで来い」

プラダマンテが"シャルフリヒター"を持つ右腕を水平に伸ばした。

――ラウムファレ――

「「っ！？」」

ガツンと何かに蹴躓いて前のめりになる。そんなわたしとルミナの首に向かって振るわれる"シャルフリヒター"。食らったらまさに斬首の一撃、即死だ。

「でぇぇぇぇぇい！」

――風塵蹴波――

頭上から一直線に突っ込んで来たのはミヤビ。両足に暴風を纏わせての踏み蹴りを繰り出した。プラダマンテはミヤビの蹴りを、わたし達の首へと払っていた"シャルフリヒター"の軌道を変えることで受け止め、ミヤビを遠くに弾き飛ばした。

「ありがとミヤビ！」

「助かった！」

身を低くしたままプラダマンテの左右へと分かれて・・・

「「改めて！」」

――絶刃一閃――

――ツェアラーゲン・シュラーク――

「「でぇぇぇぇぇい！！」」

――ラウムヴァント――

「くぅ・・・！」「ちぃ・・・・！」

斬撃と拳撃を繰り出して挟撃。でにわたしとルミナの攻撃は、空間の歪みによって生じた力場によって完全に停止させられた。絶対切断と絶対分解のスキルすら、空間干渉の前だと無力になることを改めて思い知る。

「そのまま！」

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

「隙間を狙います・・・」

――ハルトファーネ・ゼーデルヒープ――

プラダマンテの頭上へ跳んだトリシュとアンジェの放った高速矢と魔力刃化した幕がアイツを急襲。そんな魔法じゃなく神秘満載の魔術による一撃を、プラダマンテは小さな動きで紙一重で躱した。一度周囲に力場の壁を創ったことで、頭上ががら空きになってた所為での回避行動。

（自分を閉じ込めるドーム状に展開するのは、自身への危険度が跳ね上がるから嫌だ、とは言ってたけど・・・。この状況でも貫くなんて・・・）

「ナデシコ！」

クラリスが召喚獣の名前を呼ぶと、あの子の背後に金色の毛並みをした巨大な九尾の狐が突如として現れた。

「おかえりミヤビ、手を取って！」

――真紅の両翼――

「え、はい！」

わたしはダッシュで戻ってきていたミヤビの手を取り、プラダマンテの側から離れるためにみんなと一緒に空に上がった直後、クラリスが「狐火！」そう大声を上げた。狐――ナデシコの口からチロチロと蒼い火の粉が漏れてたけど、クラリスの言葉を合図にそれは冗談じゃないレベルの火炎砲となって、プラダマンテを襲う。

「くぅぅ・・・！」

「あつ・・・！」

これまでに見たことのある火炎魔法のどれよりも強大で、極悪な火力。結界外じゃ絶対に使っちゃいけないレベルの爆発が起きた。

「あの、これって亡くなってませんか・・・！？」

「ミヤビ。今のうちに伝えとく。プラダマンテのスキル・空間干渉について」

あのルシルが、最強、と断言するようなものだ。プラダマンテがスキルで出来ることを大まかに説明してると、「イリス、ミヤビ！注意！」セレスの声で一旦中断。とは言ってもほとんど伝えられた。

――シュヴァルツェス・ロッホ――

「来るよ、気を付けて」

「はいっ！」

爆炎が急激に一箇所へ収束していって、直径８００ｍ圏内にあった建物の瓦礫すら残らない焼け野原の中心に、若干すす汚れたプラダマンテの姿を視認できた。けど「まったく通用しないってわけじゃないんだ」ってことが、この２０年で初めて判った。すす汚れたということは、完全に無力化できなかったわけだから。

（大威力の空間包囲攻撃・・・か。わたし持ってないな～。それに、攻撃範囲が広かったりすると迎撃させ易くなるし・・・難しいな）

「シャルフリヒターを掲げた！」

「攻撃来るよ！」

――ラウムシュナイデン――

プラダマンテが"シャルフリヒター"を振り下ろそうとした瞬間に・・・

――神速獣歩（ゲバルド・ラファガ）――

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース――

――ゼクンデアングリフ――

セレスとルミナとアンジェが、高速移動魔法で一気にプラダマンテに接近すると同時、"シャルフリヒター"は完全に振り下ろされた。剣先の延長線上の空間がバックリ割れて、さらには地面を何十mと斬り裂いて、クレバスのようなものを生み出した。

「な・・・！？」

「これが空間干渉による攻撃よ、ミヤビ」

直撃は即死。ただ、プラダマンテの空間干渉にはある欠点がある。空間に何らかの干渉したら、その干渉を解除してからじゃないと次の干渉が発動できない、というもの。同時に空間をいじり続ければ最悪世界が崩壊するらしいし、連続や同時使用は脳に負担が掛かり過ぎるって聞いたことがある。ま、それが判ってはいても勝ててないのがわたしなんだけど・・・。というわけで1対1で勝てないなら、1対多で押し切る戦法を執る。

「行くよミヤビ！　トリシュはこのまま狙撃で！　クラリスはナデシコの指示に注力！」

「了解です！」「「了解！」」

展開してた自前のフローターフィールドに立つミヤビの手を取って、プラダマンテの元へと向かう。

――ファルコンメン・ツェアシュティーレン――

――シュテルケンシュラーク――

――氷奏閃（イエロ・コラソン）――

欠点どおり、干渉した空間を元に戻さないと次の干渉が出来ない。その隙を突いた接近済みのルミナとアンジェとセレスの「でぇぇぇい！」三方向からの挟撃。

「まだぬるい！」

――ラウムヴァント――

「ラウムヴァント・・・！？」

「「うそ・・・！？」」

「同時使用・・・！？」

アンジェの打撃、セレスの斬撃、ルミナの拳撃を、三方向に創り出した力場で防御。攻撃を防がれた3人は「きゃああ！」衝撃を返されて弾き飛ばされた。

――極致モード――

ミヤビと一緒に地面に降り立つと同時、シャルロッテ様やルシルのキスで行えた魔術師化。それをわたし自身のスイッチで切り替えられる極致モードを発動。

「雷牙月閃刃！」

スキルを解除すると同時に両手持ちした"キルシュブリューテ"に、魔術化してる雷撃を付加して振り下ろした。スキル同時使用って言う脳への負担が掛かり過ぎた影響か鼻から血を流しながらも、プラダマンテが「さぁ、来なさい」"シャルフリヒター"を振るった。

――ラウムシュナイデン――

「っあ・・・！」

辛うじて見えた"シャルフリヒター"の剣閃。スキルも強力だけど、剣騎士としての技量もわたしの上を行く。だからわたしの魔術と"キルシュブリューテ"は、プラダマンテの光速とも言えるような速さと技によって粉砕された・・・。

「～～～～っ！」

視界に映る桜色をした刀身の破片。柄から先を失った"キルシュブリューテ"だけど、プラダマンテに砕かれたのは何もこの1度だけってわけじゃない。10年以上の昇格試験の中で何度も砕かれてる。だからそのショックをねじ伏せることが出来る。

「このぉぉぉぉぉーーーーーーっ！！」

――風陣電旺拳――

わたしと入れ替わるように突っ込んできたミヤビが、プラダマンテの顔面へと風と電撃を纏う右拳を繰り出した。普段なら避けられる速度だったけど・・・

「ぶふっ！」

「おおおおおおおおおおおッ！！」

ミヤビの拳はプラダマンテの左頬をがっちり捉えて、プラダマンテは思いっきり殴り飛ばされて地面に激突した。

「クラリス！」

斬り裂かれてた空間はもう元に戻ってる。でもミヤビの全力の一撃を受けて地面に高速で叩き付けられたことで、脳を酷使するスキルを発動する余裕はないはず。

「ナデシコ！　火産霊（ホムスビ）！」

「承知した。皆の者、巻き込まれぬようにな」

ナデシコの口から放射されるのは一条のレーザー。ソニックブームを発生させながら放たれたレーザーは、プラダマンテが倒れてる場所より手前に着弾したけど、大地を穿ちながらプラダマンテの方へ向かってく。

――ラウムゲフェングニス――

「素通りした・・・！？」

「回避されたっぽい！」

穿たれた地面の亀裂からシャレにならない爆炎が噴き上がる、あんなヤバイ場所に留まってるとは考えにくい。わたしが知ってるプラダマンテの空間干渉の技で、当てはまるものに瞬時に思い至る。

「（ひょっとして、異空間檻（ゲフェングニス）・・・？）なら、クラリス！　火炎砲もう1発！　持続させてくれると助かる！」

ナデシコにレーザーじゃなくて火炎砲を用意してもらって、「今！」合図をすると、クラリスが「撃て！」指示を出した。ナデシコが「狐遣いが荒いのぉ～」なんて愚痴をこぼした後で火炎砲をぶっ放し

た。

（来た！）

何も、誰も居なかった空間にプラダマンテが現れた。ゲフェングニスは本来、バインドや手錠では拘束できないような相手を、別の空間に閉じ込めるというものだ。ただ、長時間の拘束は対象の健康に害を及ぼすらしい。だから出るタイミングを見計らって攻撃を行えばいい。

「っ！　攻撃来るよ！」

迎撃のために"シャルフリヒター"を構えたプラダマンテに、わたしはみんなに聞こえるように叫ぶ。

――ラウムシュナイデン・ナーゲル――

さっきは1発だった空間切断を、今度は同時に6発と放って火炎砲を真っ向から斬り裂いた。さらにはナデシコにも直接当てようとした。危ない。そう伝えるまでもなくナデシコは一瞬にして小さいサイズへと変身して、空間切断の合間に身を置いて無事に回避。

「全騎、とにかくプラダマンテに攻撃を！」

この場に居る全員が魔術師化できたとしても、それが圧倒的なメリットってわけじゃないのは理解した。剣技にしたって向こうが圧倒的だけど、全員で掛かればなんとかなる・・・と思いたい。

「（空間干渉が魔術すらも凌駕するなんて・・・）だったら！　全騎、魔術師化を解除！　手加減なしの魔法で決めに掛かるよ！」

――ゲシュウィンディヒカイト・アオフシュティーク――

両翼を羽ばたかせて突っ込みつつ、「絶刃！」を発動。柄しか残されてない"キルシュブリューテ"に、絶対切断効果を持つ魔力刀を展開。

――鉄兵風馳――

「風塵蹴波！」

ミヤビが高速移動で先に突っ込んで、右足に暴風を纏わせての蹴りを繰り出す。プラダマンテは半身の構えで躱して、"シャルフリヒター"の柄尻による打撃をミヤビのこめかみに打とうとするけど・・・

「ハルトファーネ・ゼーデルヒープ！」

アンジェの伸長された魔力幕による斬撃が2人の合間に伸びて来て、"シャルフリヒター"を上に向かって弾いた。

「骨の1本や2本は覚悟！」

――ファルコンメン・ツェアシュティーレン――

「電閃・・・拳殴！！」

その隙にルミナとミヤビの拳がプラダマンテを前後から襲う。どんな対応を取られようとも、わたしとトリシュとセレスはいつでも中遠距離攻撃を放てる用意は済ませてある。

「はあああああああ！」

魔力を放出したプラダマンテは弾かれた"シャルフリヒター"を手放して、空いた右手でルミナのスキル効果の及んでない前腕を掴み、左手の平でミヤビの放電する拳を受け止めた。同時にわたしとセレスは同時にプラマンテへと突っ込む。

「トリシュ、上！」

「っ！　はい！」

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

トリシュが超高速射撃を射た。狙わせたのは、ルミナの頭に向かって回転しながら落ちてくる"シャルフリヒター"。トリシュの一撃は"シャルフリヒター"を遠くへ弾き飛ばし、ルミナとミヤビは「えい！」それぞれプラダマンテの腕を腕ひしぎで拘束。

「プラダマンテぇぇぇぇーーーーーッ！！」

「イリス・・・・！」

プラダマンテの瞳には怒りも焦りも無く、僅かな迷いを見せてた。母様の言うとおり、プラダマンテはこの事件に対して迷いを捨てきれてないっぽい。迷うくらいなら出頭してほしかった、話してほしかった。

「絶刃・斬舞一閃・新式！」「氷奏閃（イエロ・コラソン）！」

「ぐうぅぅぅ・・・・！」

深く、でも今後歩行や戦闘に支障が出ることがないよう注意して、太ももを斬り裂く。プラダマンテはガクッと膝を折って、ルミナとミヤビが腕から離れたことで四つん這いになった。そんなアイツにわたしとセレスは剣先を向けて、「投降してくれるよね？」そう促す。

「迷ったままで戦うの辛いでしょ？　大人しく捕まってくれると思ってるよ・・・？」

「騎士プラダマンテ、手錠を付けさせて頂きます」

アンジェがプラダマンテの手を取って、魔力生成を遮断する対魔導師用手錠を掛ける。その様子を眺めながら「こちらオランジェ・ロドデンドロン。医療班を願います」プラダマンテの怪我を治すための医療班を手配。

「とりあえず止血を・・・」

トリシュが出血してる太ももに布を巻き付けようとした時、『何をしている！』怒声が響き渡った。拡声魔法によるもので、声の出所を探す。

「主ら、あそこじゃ」

再び巨大な姿に戻っていたナデシコの鼻先が向かう先、家屋の屋根には逮捕されたはずの「リナルド・トラバント！」が、この場に居てほしくない女と一緒に居た。

「フィヨルツェン・・・！」

"エグリゴリ"の1体であるフィヨルツェン。アレとの戦闘だけは絶対に避けないといけない。

『何をしているプラダマンテ！　貴様が全力を出せば、その小娘共を容易く蹴散らせるだろうが！　さっさと片付けて、ヴィヴィオ陛下をお迎えに上がるぞ！』

リナルドのその言葉にプラダマンテは「お兄様・・・」少し怯えたような声色で呼び返した。

『さぁ立て！　今この時が、ベルカを立て直せる最後の機会なんだぞ！　お前にはもっと働いてもらわなければならないんだ！　判ったならすぐに小娘共を討て！』

悲しそうに目を伏せるプラダマンテに、わたしは「うるさい、黙れ馬鹿野郎！」口汚く怒声を上げた。クラリスも「それ以上喋ると焼き払う」って、ナデシコの口をリナルドの方へと向けさせた。

『ふんっ。同志フィヨルツェン（ヴィスタ）、貴方も是非参戦を』

ヴィスタっていうコードネームらしいフィヨルツェンにそう声を掛けたから、わたしの心臓はバクバクだ。だけどフィヨルツェンは『わたくしには関係ないです』とだけ言って、踵を返して北へ向かって飛んで行った。もしかするとルシルに遭いに行ったかも知れないけど、今は彼を信じよう。元より"エグリゴリ"の相手はルシルだけだから。

『・・・あの女の考えはいつまで経っても解からん。・・・まあいい、プラダマンテ、判っているな？』

「・・・判りました、お兄様」

――ラウムアウスグラブング――

パキンと音を立てて手錠が２つに割れた。プラダマンテは両手を地面に付いた勢いで空高く跳ね上がって、わたし達から離れたところに着地。どうして、という言葉を投げかけようとするも、「え、どこ行くの！？」プラダマンテが踵を返して走り去っていく。

「あ、シャルフリヒター！　取らせちゃダメ！」

弾き飛ばされた"シャルフリヒター"が突き刺さってる場所へと向かうプラダマンテ。トリシュが「止めます！」って、魔力矢を４本と射た。

――とぐろ巻く連環の拘束蛇――

――閃駆――

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース――

――神速獣歩（ゲバルド・ラファガ）――

――ゼクンデアングリフ――

魔力矢に続くようにわたし達も一斉にプラダマンテを追う。矢はプラダマンテの至近に着弾して、ソレらが一斉にバインドとなって彼女を拘束しようと伸びる。

「グラヴィタツィオーン・デッケル」

ギンッと鈍い音が耳に届く。プラマンテの頭上、周囲１５ｍ圏内に球体状の空間の歪みが発生したから、わたしは「全騎とまれ！　離れて！」指示を出した。わたし達は急停止して、慌ててバックステップ。直後に強力な重力場が発生して、プラダマンテを拘束し始めてたバインドが地面に叩き付けられた。

「さすがに重力の壁の中を突っ切る勇気は無いね・・・」

その間にも石畳が剥がれて土がむき出しになった地面に突き刺さってた"シャルフリヒター"を回収したプラダマンテは素振りを数回。そして重力場が解除されて、わたし達は改めて対峙した。

「プラダマンテ！」

「迷いを抱えたままでお前たちと戦っていたことについては申し訳なかった」

「いやいや待ってってば！　せっかく投降の空気出してたのに、あんなリナルドの言いなりになるわけ！？」

「私は妹で、あの人は兄だ。幼い頃に両親を亡くした私を育ててくれた恩には報わなければならない。騎士である前に家族なんだ。兄の願いを叶えられる力が私にあるのなら・・・私は！」

一足飛びで突っ込んでくるプラダマンテに、わたし達は一斉に身構える。

「援護します！」

――翔け抜けし勇猛なる光条――

「斬！」

トリシュの砲撃をただの魔力付加の一撃で斬り裂くけど、その一動作の隙にわたし達は中距離戦を挑むことにした。初撃はセレスからだ。

『跳んで！』

思念通話での合図と同時にわたし達は跳び上がって、セレスは冷気を纏う"シュリュッセル"を地面に突き刺した。

――愚かしき者に美しき粛清を（センテンシア・コンデナトリア）――

セレスを中心として地面がすごい勢いで凍結されていった。プラダマンテは前方の地面を「ラウムシュナイデン！」で大きく斬り裂いてクレバスを造り、凍結効果を食い止めることに成功すると同時に、「狐火！」ナデシコの火炎砲が発射される。

「おおおおおお！！」

――ラウムシュナイデン・ナーゲル――

左手の五指にスキル効果を付加して、引っ掻くようにして空間に亀裂を生み出して火炎砲を真っ向から散らした。そして炎の壁となったそこから血涙と鼻血を流すプラダマンテが飛び出してきて、追撃を行おうとしていたアンジェと肉薄。

「っくぅ・・・！！」

――グリッツェンフェッセルン――

"ジークファーネ"の魔力幕が伸びて、プラダマンテを簀巻き拘束。わたしもバインドの「拘束の連鎖！」を発動して、さらにプラダマンテを拘束。アンジェが魔力幕を"ジークファーネ"から切り離して離脱すると・・・

「もう1発！　行くよ！」

――愚かしき者に美しき粛清（センテンシア・コンデナトリア）を――

対地凍結をもう1度行って、凍結のバインドから逃れられていないプラダマンテを一瞬にして凍結させた。でもすぐにパキパキとヒビが入って、崩れ始めていく。

「ルミナ、ミヤビ！」

――雷鬼降臨――

「うん！」「はい！」

わたし達3人で決めに掛かる。ルミナがストレートを打ち込んで、「シュトゥースヴェレ！」防御系貫通効果のある魔法を発動。殴った前面の氷が粉砕されるより早く、プラダマンテが後面を突き破って吹っ飛ばされた。

「ぐぅぅ・・・！」

わたしと、黄色に変色した角を有するミヤビが、着地したばかりのプラダマンテに肉薄。そしてミヤビは「雷牙轟鳴　霆帝　双霆掌！！」放電する両掌底を繰り出した。

「鬼と戦うのは初めてゆえ、加減が出来るかどうか怪しいが・・・」

閃く"シャルフリヒター"がミヤビを捉え、「かは・・・？」あの子の両腕や上半身から派手な出血が起きた。

「ミヤビ！？」

『だ、大丈夫・・・です。私・・・頑丈ですし、自己治癒力もすごいんで・・・。戦いに集中を・・・』

両膝から崩れ落ちたミヤビを一瞥することなく、プラダマンテがこっちに向かって駆け出した。

「よくも！」

――滅び運ぶは群れ成す狩り鳥――

「本当に迷いを断ち切ったわけね！」

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

トリシュの魔力矢が分散して何百本とレーザーとなってプラダマン

テに殺到。さらにセレスの氷の杭が何十発と続いた。そのどれもが直撃コースであるにもかかわらず、目にも止まらぬ速度で"シャルフリヒター"を振るって、着弾寸前で迎撃しつつ突っ込んで来る。

「私たちがプラダマンテを疲労させるから、イリスはトドメを担当して！　セレス、アンジェ！」

「よし！」「はい！」

「任せて！」

ルミナとセレスとアンジェが迎撃に入るのを見届けながら、わたしは抜刀の構えを取る。

――女神（ディオサ・プーニョ）の鉄拳――

「吹っ飛べ！」

「むっ・・・」

セレスの発動した地面から突き上がる氷の鉄拳によって、プラダマンテが宙に殴り飛ばされた。その間にルミナが両手に魔力を集束。ルミナをフォローするようにアンジェが、プラダマンテの斬撃で砕かれて崩壊する氷の鉄拳目掛け、「ハルトファーネ・ゼーデルヒープ！」魔力刃化させた魔力幕を伸ばした。魔力幕は、崩壊する氷塊に紛れて落下してるプラダマンテをしっかり捉えてる。

――ラウムシュナイデン――

とここで空間切断の一撃が振るわれて、魔力幕を寸断し、その剣閃はアンジェやルミナ、セレスにまで伸びて来ていた。その一撃を躱してる3人の元に、氷塊を足場として蹴ったプラダマンテが突っ込んできた。

――翔け抜けし勇猛なる光条――

トリシュが砲撃を放って迎撃。回避行動から体勢を立て直すまでの僅かな時間の合間に放った砲撃は、プラダマンテに着弾して魔力爆発。その一撃で体勢を立て直し終えたばかりのルミナ達に・・・

――ラウムシュナイデン・ナーゲル――

爆煙を消し飛ばした１０本の空間切断が襲い、その奥から"シャルフリヒター"を水平に構えたプラダマンテが飛び出してきた。口端から結構な量な血を流してもプラダマンテは、「ラウムシュナイデン・ナーゲル！」"シャルフリヒター"を横薙ぎに振るって、さらに１０本の空間切断を放った。

「ダメ、空に逃げて！」

格子柄のようになった空間切断が迫り来る。わたし達は隙間を潜って回避するんじゃなくて、余裕を持って空へと上がって逃げるんだけど、ルミナだけが「このチャンスは逃せない！」隙間を潜って、吐血で苦しそうにして"シャルフリヒター"を杖代わりにしてるプ

ラダマンテに接近。

「ムート・・・フェアナイデン！！」

空間切断に触れたことで肩の長さにまで後ろ髪を失ったルミナが、「終わりだ！」集束拳を繰り出した。でもその一撃がプラダマンテに当たることはなく、代わりにルミナが逆風に斬られて、前のめりに倒れこんだ。その様子にわたし達は「ルミナ！」叫ぶように呼んでも返答は無い。

「・・・降りて来い」

大きく肩で息をするプラダマンテが"シャルフリヒター"の剣先をわたし達に向けた直後、頭上からギンッ！と鈍い音がした。

――シュヴァルツェス・ロッホ――

押し付けられるような重力が「ぐぅぅ・・・！」わたし達を襲う。なんとか逃げ出そうとしてもその場から横移動できないような重力が掛かって、とうとう地面に叩き付けられた。視界の端にこちらへ向かってくるプラダマンテの姿があった。

「今すぐ重力を解除して！」

「死にたくなければな！」

そんなプラダマンテの頭上からクラリスの乗ったナデシコが跳びか

かった。デカイ前足でプラダマンテを踏み潰そうとするも、プラダマンテの空間干渉の前にはただの大きな的だった。

――ラウムゲフェングニス――

「む！？」

ナデシコの中央に空間の歪みが生まれると急速に拡大して、ナデシコを包み込むと収縮。クラリスを残して異空間の檻に閉じ込められ、その巨体がこの世界から消失した。

「プラダマンテ・・・！」

――フェアシュテルケン・ガンツ――

"シュトルムシュタール"全体に魔力付加して攻撃力を高めたクラリスが「今すぐ解放しろ！」自分を軸にして"シュトルムシュタール"をぶんぶん振り回しながらプラダマンテに仕掛ける。

「今は眠れ、クラリス」

「・・・っ！？　ぅあ・・・？」

"シャルフリヒター"が高速で振るわれ、クラリスは袈裟切りに斬られた。倒れこみそうになるもクラリスは「まだまだ・・・！」"シュトルムシュタール"を振るったけど、マリアンネは"シャルフリヒター"で受け止め、左拳をクラリスの鳩尾に一撃。

「かは・・・・！」

「クラ・・・リス・・・・！」

クラリスも墜とされた。両手を付いて上半身を起こそうとするも、重力は変わらずわたしとアンジェとトリシュとセレスを押し潰してくる。そんなわたし達に体を向けたプラダマンテは"シャルフリヒター"を頭上に掲げ、剣身にトパーズ色の魔力を付加。

「飛蓮！」

振り下ろされた"シャルフリヒター"から放たれるのは、ドラゴンの背びれのような形状の魔力刃3発。魔力刃は地を走って来て、重力で動けないアンジェとトリシュとセレスへと迫り、重力が解除された瞬間・・・

「やめて！」

わたしの懇願むなしく魔力刃は3人に直撃した。その衝撃に3人は宙を舞い、ドサッと勢いよく地面に叩き付けられた。

「・・・。これでお前と私だけだな、イリス。最期にお前と1対1で闘っておきたかった」

わたしはフラフラと立ち上がって、もう言葉を紡ぐことなく鞘に収まったままの"キルシュブリューテ"を手に取り、抜刀の構えを取

る。

「カートリッジロード」

カートリッジシステムは無事だから、全弾をロードして魔力を爆発的に上昇させて魔力刀の攻撃力を引き上げる。

「もう言葉は要らない、か。・・・そうだな、最期の決着に相応しい静けさだ」

"シャルフリヒター"の剣身に魔力を纏わせ、バットのように振りかぶったプラダマンテ。

（医療班は呼んだけど、プラダマンテと交戦してる限りは近付けないはず）

だから早々に決着を付けないと。深呼吸を1回して、グッと地面を踏み込んで・・・

「真技」

――閃駆――

プラダマンテに突っ込む。柄を握り、わたしの間合いにプラダマンテを入れると同時、彼女は全力フルスイング。

「牢刃・弧舞八閃！」

そしてわたしは、密かに長年練習していたシャルロッテ様の真技を繰り出した。鞘から"キルシュブリューテ"を抜き放ち、魔力刀を構築していた魔力を分解して８本に再構築。そしてプラダマンテを牢に閉じ込めるかのような８方から同時斬撃を繰り出した。

「っ！！」

同時８撃だったけど、プラダマンテは半数の４撃を捌いてきた。でも残り４撃は左肩と左頬、右腰と右脚を裂いてやった。片方だけとはいえ腕と脚にダメージを与えることが出来たから、少しは真っ向からやり合えるはず。

「うおおおおおおお！」

魔力変換は行わず、ただひたすらに身体強化と魔力刀維持に魔力を注ぎ、"キルシュブリューテ"を振るう。プラダマンテは動かしにくいのか左腕は一切使わず、右手だけで"シャルフリヒター"を振るって、わたしの斬撃を防いでくる。

「っつ・・・！」

時には体のどこかを浅くだけど斬られる。脳への負担、かなりの出血、左腕と右脚のダメージ。これだけのハンデを背負ってなお、プラダマンテはしっかりと立ち、戦闘を行ってる。

「（ホント化け物すぎでしょ・・・！）ぅぅらッ！！」

柄を両手持ちしての渾身の振り下ろしを、プラダマンテは立てた"シャルフリヒター"の腹に沿わせるようにして受け流し、わたしが返す刃で振り上げるより先に懐に入られた。"シャルフリヒター"の刃が首に向かって伸びてくる。

「チィ・・・！」

――閃駆――

一度立て直しを図るために距離を取ろうとしたんだけど・・・

――ラウムファレ――

（は！？）

左踵が何かに引っ掛かって後ろ向きに倒れてしまいそうになる。慌てて右足を付いて踏ん張ることで尻餅をつく無様は晒さなかったけど、プラダマンテの接近は許した。すでに左薙ぎの一撃が迫る中、わたしはブリッジすることで刃をやり過ごし、「てや！」ネックスプリングを行ってプラダマンテの腹に両足での突き蹴りをぶちかます。

「ぐ・・・！」

蹴っ飛ばされたことでわたしから距離を空けたプラダマンテ。もう一度ネックスプリングで起き上がると同時、「風牙烈風刃！」をぶ

っ放す。

「ふんっ・・・・！」

風圧の壁をただの膂力に頼った斬撃で消し飛ばした。その間にわたしのターンに移らせてもらう。

「滅牙・・・・！」

炎牙月閃、氷牙月閃、風牙月閃、雷牙月閃、光牙月閃、凶牙月影の、６属性の直接斬撃を、様々な角度から１４連撃（１４回は、シャルロッテ様が出来る短時間連続属性変化の限界数らしい）と放つ。

「あああああああ！」

「暴破・・・・」

プラダマンテは魔力付加した"シャルフリヒター"で、わたしの連撃をすべて捌いた。連撃の後に"キルシュブリューテ"を振るって放たれるゼロ距離烈風刃も"シャルフリヒター"で受け止められたけど、魔法はすでに発動してることで暴風が放たれた。

「うぐ・・・・！」

風圧は本来に比べれば弱かったけど、まともに受けたことでプラダマンテの体が宙に浮く。わたしは即座に"キルシュブリューテ"を鞘に収め、プラダマンテへ向かって跳んだ。

「（これがトドメの・・・！）螺旋刃！！」

滅牙暴破螺旋刃は、１４連撃からの烈風刃で相手の体勢を崩し、その隙に高威力魔法や剣技に繋げる連撃技だ。わたしがトドメに選んだのは・・・。

「でやぁぁぁぁぁ！！」

――牢刃・弧舞八閃――

ドン！と踏み込み、鞘から"キルシュブリューテ"を抜き放った。柄から枝分かれして８本となった魔力刀がプラダマンテを包囲して、アイツを８方から斬った。でも・・・

「うそ・・・でしょ・・・？」

わたしもまた、袈裟切りに斬られた。プラダマンテは防御も迎撃もせず、相討ち覚悟でわたしを斬った。結構ガチに斬られてしまい、わたしは膝を折って・・・うつ伏せに倒れた。頭上から大きく、そして早い呼吸が聞こえて、頭だけを動かして揺れて霞む視界にプラダマンテを収める。

「私の、はぁはぁ、勝ちだ、はぁはぁ・・・惜しかったな、はぁはぁ、イリス・・・！　そして、残念だ・・・」

勝ったはずプラダマンテの表情が残念そうに歪む。

「おい、プラダマンテ。イリスもそうだが、他の奴らも死んでいないぞ。なぜトドメを刺さない？　今後の作戦如何によっては邪魔になる。殺せ」

そんなところにリナルドがやって来て、わたしの頭を踏み付けてきた。抵抗しようにも体に力が入らず、「どけ・・・ろ」としか言えなかった。わたしの様子に鼻で笑うリナルドが、現役時代の大鎌型デバイスを起動して、わたしの首に添えてきた。

（誰か・・・！）

助けが来ることを願いつつ、でも次の瞬間に訪れる死を恐れてギュッと目を強く瞑った。だけど大鎌の刃がわたしの首を刈ることはなかった。

「ぶごぉ！？」

目を開けて見れば、リナルドの腹から突き出した"シャルフリヒター"が視界に入った。プラダマンテが、実の兄のリナルドを貫いたんだ。わたしは混乱して、その様子を見開いた目で見る。

「お兄様、私たち新生ベルカ騎士団はもう・・・負けているのです。・・・大人しく舞台を降りましょう」

「ごぼっ！　ごふっ、プラダ・・・マン・・・」

ドサッと倒れたリナルドの目は驚愕に大きく見開かれて、死んだことを知らせるように瞳孔が開いてた。

「イリス・・・。最期はお前の手で討たれたかった、剣騎士として・・・。すまない、こんな勝ち逃げのような形で、お前との長年の闘いを終えることを・・・許してくれ」

「待って・・・ダメ・・・ダメ、プラダマンテ・・・」

プラダマンテは自らの腹に"シャルフリヒター"を突き刺して自害しようとした。

「させない！」

「ぶぐ！？」

でもその前に"シャルフリヒター"が蹴り上げられて吹っ飛び、さらにプラダマンテをぶん殴ったのは「ミヤビ・・・！」だった。

「死に逃げるなんて許さない！　生きて、みんなにごめんなさいをしないとダメです！」

今の一撃で気を失ったのかプラダマンテは倒れたまま。その様子を一瞥した後、わたしはミヤビに「ありがとう」お礼を言った。

Ｅｐｉｃａ４７イリュリアが悲願の為～Ｗｉｒ　ｓｉｎｄ　ｉｎ　Ｂｅｒｌｋａ　ｇｅｂｏｒｅｎ～

ベルカ人の末裔や、ベルカを発端とする聖王教の信者が多く住んでいるベルカ自治領ザンクト・オルフェン。現在、領内全体に結界が張られ、その内部では教会騎士団と、新生ベルカ騎士団と名乗るクーデター軍が交戦していた。

『こちら水色扶桑花騎士隊（ヘルブラウ・ヒビスクス）３班。橙石楠花騎士隊（オランジェ・ロドデンドロン）と、騎士プラダマンテの治療に入ります』

『同じく３班。逃走していたリナルド・トラバント卿の死亡を確認。騎士プラダマンテが殺害を自供しました』

『こちら白雪中花騎士隊（ヴァイス・タツェッテ）２班です。キャメロット地区にて交戦した敵戦力を確保しました』

『金水仙騎士隊（ゴルト・アマリュリス）１班！　ワンデスボロー地区の敵戦力が説得に応じ、投降しました！』

『黒篝火花騎士隊（シュヴァルツェ・ツュクラーメン）１班と２班です。カンベネット地区での交戦に勝利。敵戦力の確保に成功』

『灰芍薬騎士隊（グラオ・ペオーニエ）３班から本部へ。ストランゴール地区にて簡易陣地を構築していた敵戦力を撃破、確保に移ります』

『蒼薊騎士隊（ブラウ・ディステル）４班です。コーンウォール地区での戦闘を終了。３班と共にティンダジェル地区へ移動します』

『朱朝顔騎士隊（ロート・ヴィンテ）３班と４班は、これよりカーリオン地区に入り、敵戦力の捜索に移ります』

『こちら翠梔子騎士隊（グリューン・ガルデーニエ）１班！　寝返っていた黄菊騎士隊（ゲルブ・クリュザンテーメ）の確保が完了！』

『紫唐菖蒲騎士隊（ブルプァ・グラディオーレ）１班は、これよりパヤルネ地区にて敵戦力との交戦に入ります！』

中央区アヴァロンはログレス地区に在る聖王教会本部。その広大な敷地内の１画にある黄菊騎士隊ゲルブ・クリュザンテーメ隊舎の隊長室にて、続々と入る通信を盗聴している女性が１人いた。灰色のショートヘア、翠色の瞳、そして女用の騎士団服を身に纏ったその女性は、長年影ながら築いてきた組織の崩壊を知らせる通信の内容に、「どうして・・・！」と歯噛みした。

「こんなにも容易く瓦解するのですか我々は・・・！」

彼女の名はキュンナ・フリーディッヒローゼンバッハ。教会騎士団では銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼに所属する騎士であり、最後の大隊レッツト・バタリオンでは"王"という意味を持つアランのコードネームを頂く仮面持ちであり、新生ベルカ騎士団ノイエ・ベルカン・リッターオルデンでは団長位に就く予定であった。

「プライソン・・・！　アイツがそもそも計画に従ってさえいれば！」

壁を全力で殴って怒りをぶつける。死してなおプライソンは、キュンナを始めとしたベルカ再誕計画の中心人物の予定を狂わせ続ける、トリックスターとしてあり続けていた。

（騎士プラダマンテもまさか敗れるなんて・・・。同志フィヨルツェンはあまり頼りにならない。・・・負けを、大人しく認めろと・・・？　そんなの嫌だ）

キュンナはここからどう立て直そうかと必死に思考を巡らせる。新生ベルカ騎士団は壊滅と言っても差し支えないレベル。同じように最後の大隊も似たようなものだ。ここからの立て直しは不可能に近いが、技術者のミミルが居れば再起は出来る、と可能性を見出す。

（セインテストの待つ本部へ向かうために地下へ行かないと）

ゲルブ・クリュザンテーメの隊舎は他の隊舎とは違い、秘密裏に地下室が造られ、転送装置を設けられている。何故それが教会に気付かれなかったと言うと、ゲルブ・クリュザンテーメは始めから新生ベルカ騎士団の構成員となるべく育てられた騎士を纏めておくために、リナルド・トラバントによって設立された部隊だからだ。

（なんとしてもベルカを、レーベンヴェルトを再興させなければ）

自分が生まれた理由、そして存在意義を胸に隊長室を出たキュンナは、「っ！」直感のままにその場から飛び退いた。

――コード・パディエル――

銀色に光り輝く電撃の槍１本が、キュンナが今しがた立っていた場所に突き立った。その槍が放たれてきた方へと目をやったキュンナは、２ｍとある槍を携えた騎士を視界に収めた。

「騎士パーシヴァル・・・！」

「やあ、キュンナ。部下を連れずに独りで何をやっている？」

パーシヴァル・フォン・シュテルンベルク。結婚や子供が出来たのを機に称号を返上した、元槍騎士最強のシュペーアパラディン。昇格試験でＡ級１位に敗れて降格したわけではないゆえ、その実力は今なお最強。

「部下・・・ですか？」

「ゲルブ・クリュザンテーメだよ。かつてお前が率いていた部隊だ。彼らは必死に抵抗していたぞ？　ベルカのため、イリュリアのため、とね。イリュリア。お前の先祖の国の名だ。まだ諦めていなかったんだな」

古代ベルカに繁栄した技術大国イリュリア。ベルカ統一という名目で、かつての名前だったレーベンヴェルトの再興を目的としていたが、対イリュリア連合との１日戦争に敗れてからはその目的は失われた。

「・・・断言された以上はもう誤魔化しはきかないんでしょうね。そうですよ、ベルカ・・・レーベンヴェルトの再興が、私の存在意義ですから」

キュンナは思い返す。自分が生まれた理由を、そして遥か過去の記憶を。キュンナは、イリュリア大戦の発端となった女王テウタの遺伝子とリンカーコアを基にして、プライソンの手によって生み出された記憶転写型クローンだ。それゆえに敗戦の原因とも言えるオーディンもとといルシリオンのそっくりさんであるパーシヴァルやトリシュタンのことは苦手としている。

「過去に囚われるのはあまりにも辛いだろう？　もうやめないか？　これ以上の戦闘は無意味だ」

「いいえ。私がそうであれ、と生み出されました。その事実が存在し、私自身がそれを叶えようという意志を持つ限り・・・！」

「投降はしない、か。残念だよ、キュンナ。お前は一角の騎士だったのに」

パーシヴァルは穂先をキュンナへと向くように槍型アームドデバイス・"ロンゴミアント"を構え、「コード・フロガゼルエル」穂に銀色の炎を付加させた。

「デバイスの起動を待っていてくれるんですね・・・？」

キュンナは応じるように首から提げていた逆五芒星ペンダントを手に取った。

「ここで闘わずして捕まると、お前も納得は出来ないだろ？　だからお前の本気の全力を真っ向から打ち砕いて、これ以上の戦いを諦めさせるだけだ」

「・・・ありがとうございます。ペンドラゴン、セットアップ」

キュンナの言葉で"ペンドラゴン"は起動し、大鎌へと変形する。２ｍ近い柄のヘッド部分には５０ｃｍ幅の歯車があり、片側からは弧を描く刃体１ｍの金属刃が伸び、もう反対側からは金属刃と同じ形状の銀色に輝く魔力刃が展開されている。石突にも歯車が有るが、金属刃は無い。こちらの歯車は魔力刃展開用だ。

（こんな狭い場所での戦闘は、点での攻撃を得意とする槍の騎士パーシヴァルに軍配が上がる。外に出るべきなんだろうけど、地下室から離れてしまう。どうすれば・・・？）

チラリと窓の外を見れば、もう日も落ちて暗くなっている中で、複数の騎士が隊舎を包囲しているのが判った。パラディン級ではない相手であれば、たとえ複数人であってもキュンナの実力なら包囲の突破は可能だろう。

「（でも外に出たら意味が無い。地下に降りるまでに騎士パーシヴァルを撒くようにして、気付かれる前に本部へ転送。これが一番か・・・）ごめんなさい！」

謝罪の言葉と同時にキュンナは踵を返して、脱兎の如く逃げ出した。パーシヴァルは驚きも焦りもなく、軸足に力を込め、「逃がさない」の声と共に床を蹴った。一足飛びで一気にキュンナへと迫るが・・・

「夢影！」

キュンナを護るかのように、彼女と瓜二つの女性が3体と出現。まず1体がパーシヴァルの繰り出した炎の刺突を体を張って受け止め、消滅する前に両手で"ロンゴミアント"の柄を握り締め、残り2人がパーシヴァルに飛びつこうとした。

「コード・シャルギエル！」

宙に生成された氷の槍2本が迫り来る偽キュンナ2人の胸目掛けて射出され、ドスッと鈍い音を立てて貫き、全身に広がるように凍結が始まった。

「キュンナ！　これ以上罪を重ねるな！」

3人の偽キュンナの消滅を待たずにパーシヴァルはキュンナの追跡を開始。廊下を駆け、角を曲がったところで「またか！」と悪態を吐く。廊下を塞ぐように偽キュンナが2体と立っていた。面倒くさそうに溜息を吐いたパーシヴァルは、"ロンゴミアント"を構えた。

「コード・シャルギエル・・・フォイア！」

初手は氷槍による中距離射撃。偽キュンナはパーシヴァルへ駆け出し、迫り来る氷槍を紙一重で躱した。が、「エクスプロジィオーン！」というキーワードによって氷槍が炸裂。躱したと思い込んでいたらしい偽キュンナ達は、一切の表情や声を出さずに凍結された。

「分身を創る魔法・・・、いや、スキルか。発動に何かしらデメリットは無いのか・・・？　だとすればなんて厄介な・・・！」

消滅していく偽キュンナを尻目に、逃げ回っている本物のキュンナを後を追うパーシヴァルは、礼拝堂へと続く両開き扉の前に立った。トラップや奇襲などを警戒しつつ開けようとしたところで、外から悲鳴が聞こえてきていることに気付いた。

「新生ベルカ騎士団の残党か・・・？」

礼拝堂へと続く扉の正反対に位置する隊舎入り口の扉へと目をやるが、外で交戦している他部隊の騎士たちを信じて、礼拝堂の扉を開けようとした時、ガァーン！と大きな玄関扉が音を立てて開けられた。

「っ！？　あ、おい！」

２人の騎士が扉を突き破ってきたのだ。うう、と呻いて体を起こせずにいる騎士２人に声を掛けるパーシヴァル。騎士たちは「気を付けて・・・ください」と声を振り絞って、パーシヴァルに注意を促した。

「おお！　そこに見えるのは、シュテルンベルクの末裔だな！　エリーゼ卿と魔神オーディンの面影を残している！　遺伝子とは実に不思議よな！」

２ｍを超える巨体を誇る禿頭の老騎士の言葉に、幼少時より読んでいた先祖エリーゼの手記からその正体にすぐに行き着き、パーシヴァルは「グレゴール・ベッケンバウワー・・・？」と、確認を取るようにその名を口にした。

「応とも！　元イリュリア騎士団総長、グレゴール・ベッケンバウワー！　そして我が長年の相棒のシュチェルビェツ！　今や新生ベルカ騎士団の参謀、最後の大隊では大隊長ロクエンとは、我のことだ！」

グレゴールは自身と同じ位の長さを持つソードブレイカー状の大剣、"シュチェルビェツ"の剣先をパーシヴァルへと向けて名乗りを上げた。

「イリュリアもしつこいな！　ベルカもイリュリアも、疾うの昔に滅んでいるんだ！　大人しく現実を見て、今の時代を生きろ！」

「いいや！　ベルカは、レーベンヴェルトは蘇る！　そのために最後の大隊、そして新生ベルカ騎士団を作ったのだ！　ベルカ再誕こそが我らの最終目標なのだ！」

第２世界ベルカは、長く続いた戦争の末期頃に使用された禁忌兵器

によって大地は死に絶え、生命が実らない死の世界へと成っていた。それはベルカが滅んでから何百年と経過している今も変わらずだ。そのベルカが蘇る、そのための組織というグレゴール。

「無理だ。これまでに何度かベルカの環境を再生しようという働きはあった。しかし魔法文明がここまで発達していながら悉く失敗。ベルカの再生は不可能と断じられた」

「それが出来るのだ。どうだ、シュテルンベルクよ。我らはベルカに地に生まれた子同士だ。母なるベルカに帰りたくはないか？」

"シュチェルビェツ"を降ろすと空いている左手に握り替えて、空けた右手を差し出した。それは握手を求めているもので、パーシヴァルの視線が右手に向き、次いで何か考え事をするように天井へ向けられた。

「何も聖王教会を潰そうとは思ってはおらん。聖王教の信者もまた、ベルカの子。ベルカ人は等しくベルカの地で生きて――」

「ふざけるな！　何が等しく、だ！　ここまでザンクト・オルフェンを滅茶苦茶にしておいて！　始めから話に乗るつもりはなかったが、今ので解かったよ。お前たちはやはりベルカの面汚しだと！」

――コード・フロガゼルエル――

パーシヴァルは"ロンゴミアント"の穂に銀色の炎を付加し、臨戦体勢に入った。その様にグレゴールは差し出していた右手を戻し、

"シュチェルビェツ"の柄を握り直した。

「グレゴール・ベッケンバウワー。お前は、このパーシヴァル・フォン・シュテルンベルクが・・・獲る！」

「ふむ。仕方ないな。ではシュテルンベルクの首、我が獲ってやろう！」

パーシヴァルとグレゴールが交戦を開始した中、キュンナはひとり地下室の転送装置を起動していた。1階から伝わってくる激しい交戦音と振動に、「グレゴールが間に合ったのね」と安堵。

「騎士パーシヴァルの実力は確かですけど、グレゴールの不死性の前には実力なんて意味はない・・・」

古代ベルカ時代より生き永らえているグレゴールの秘密である不死性。当時のイリュリアで研究されていた、不死の騎士を生み出すという生体兵器化研究。その披検体として、グレゴールは見事にその成果を現した。ゆえに外見６０歳を保ったままで死ぬこともなく、現代にまで生き延びていた。

『（本部の転送装置とのリンク・・・完了）・・・グレゴール。先に本部へ行きます』

『承知しました、陛下！　こちらはもうすぐで方が付くゆえ！　しかしご注意を、キュンナ陛下！　向こうには我らが宿敵、オーディン・セインテスト・フォン・シュゼルヴァロード。いやルシリオン

が居ります。十二分にお気を付けを』

念話でそのようなやり取りを終えたキュンナが転送装置によって隊舎から本部へと移動した。転送室の守衛や出迎えの同志は姿を見せず、ただ静寂だけがキュンナを迎えた。

（やはりもう、ルシリオンによって制圧されてしまった・・・？）

大鎌"ペンドラゴン"の柄を握り直し、警戒しながら転送室を出る。声は出さず、気配を殺し、慎重に廊下を進んでいると、目の前の自動ドアが急に閉まり、脇に在る別のドアが開いた。それだけで「誘導されている・・・？」と察することが出来たキュンナは、グレゴールと合流することを選んだ。

「陛下。お待たせして申し訳ありませんでした」

待つこと十数分。白銀の甲冑で全身を覆ったグレゴールがやって来た。それが意味するのはパーシヴァルの敗北。甲冑は傷だらけだが、体の損傷は無い。グレゴールの不死性という体質の前には、どれだけ傷を付けてもすぐさま再生し続け、最終的には相手の魔力や体力が尽きてしまうのだ。

「騎士パーシヴァルはどうしました？」

「ぬるま湯に浸かりきった現代の騎士としては合格ですな。いずれ心変わりさせて見ませしょう」

「生かしたのですね」

「ええ。クローンとは比べられぬ程の実力を亡くすには惜しすぎますゆえ」

誘導されるままに廊下を突き進むキュンナとグレゴール。２人を誘い込むように何度もドアが閉まり、ドアが開き、エレベーターで降り、そしてとうとうゴールへと到着した。そこは本部地下７階、トレーニングルーム。空戦すらも行えるような広大な部屋だ。

「来たな、待っていたぞ」

キュンナとグレゴールの耳に声が届く範囲内に、銀色の髪と、融合騎のアイリとユニゾンしていることで僅かに発光している蒼と紅の光彩異色、黒の長衣を身に纏った女性と見間違う外見をした男、「ルシリオン・・・セインテスト・・・！」がそこに居た。

「キュンナ・フリーディッヒローゼンバッハと・・・グレゴール・ベッケンバウワーだな・・・？　この施設内に居たお前たちの同志とやらは、俺とアイリで片付けさせてもらった。残るはお前たち２人、そしてフィヨルツェンだけだ」

ルシリオンは左手に携えている双槍型デバイス・"エヴェストルム"を構えて、臨戦体勢に入った。キュンナとグレゴールは、横目で互いを見た後・・・

「骨が折れそうですが、私たちが同時であればなんとか・・・」

「いけるでしょうな。我が盾役になりますゆえ、陛下は夢影による包囲攻撃を」

――夢影――

出現したキュンナの分身体3体とグレゴールが前に出て、キュンナを護るかのようにルシリオンの前に立ちはだかった。

「圧戒（ルイン・トリガー）」

直後、ギンッと鈍い音がし、キュンナとグレゴールは聞き慣れたその音にハッとして、その場から離れようとしたがすでに手遅れ。

「うっぐぅぅ・・・！」「むぉぉぉ・・・！」

あらゆる物質を押し潰すように発生した重力場により、キュンナとグレゴールは強制的に床に伏せることになった。その格好はまるで許しを請うために土下座しているかのよう。

「キュンナ。お前の出生の秘密から言えば、お前もまた被害者だ。しかしグレゴール、お前はダメだ。お前を生かしておいては、このような事件がいつか繰り返されるだろうな」

「殺すのか・・・？　管理局員が、教会騎士が・・・！」

グレゴールは重力に抗うように両手を付いて上半身を起こし、ルシ

リオンを睨み付ける。

「まさか。お前を殺せば、その様子を見ていたキュンナも口封じのために殺さないといけなくなる。今お前が言ったように、俺は局員で教会騎士だ。殺害ではなく逮捕で、お前たちの野望を打ち砕く」

――シーリングバインド――

重力場を解除すると同時、ルシリオンが発動したのは、拘束した相手のリンカーコアの活動を弱らせ、魔力生成を阻害させるバインド。キュンナとグレゴールは四肢を拘束された。

「お前たちは知っているかな？　俺の持つ魔術の中には、コード・エイルというものがある。こいつは対象の身体の異常を完治させる効果を持つんだが、対象によってはある副次効果を発揮する」

ルシリオンは"エヴェストルム"の穂先をグレゴールへと向け、サファイアブルーに光輝く魔力スフィアを1基と生成。そして「コード・ゲルセミ！」と術式名を告げ、上級閃光系砲撃を1発と発射した。魔術ではない魔法としての一撃だったが、上級であり、グレゴールの防御力が著しく低下していた状態での直撃。

「ぐおおわあああああ！」

着弾時に発生した強烈な閃光爆発にキュンナも「きゃあああああ！」と悲鳴を上げた。爆煙で姿の見えないグレゴールを前に、ルシリオンは"エヴェストルム"を横に凪いだ。

――風音（シルフィード）よ広きに渡れ――

それと同時に放たれるのは強烈な爆風。下級風嵐系術式シルフィードによるもので、グレゴールを覆っていた煙は一瞬で吹き飛んだ。

「グレゴール。お前の不死性は後天的なものだろう？　エイルは遺伝子レベルでの治癒を可能とする。・・・お前の不死性という異常も、綺麗サッパリ治してくれるだろう」

「ふん！　不死性だけが我の全てと思ってもらっては困るな！　たとえ不死を失ったとしても、この肉体1つでベルカを、レーベンヴェルトを再興しよう！」

直撃によって負っていたダメージも、不死性によって回復していくグレゴールは、自信に満ち足りている瞳をルシリオンに向け、「やってみるがいい！」と促した。今の発言が嘘ではないことは理解したルシリオンは「なら遠慮なく」と、コード・エイルの術式をスタンバイした。

「グレゴール！」

「ご心配なく陛下。再び人の身に戻るだけのことゆえ。命尽きるまでの時間で、必ずや我らが故郷を取り戻しましょうぞ！」

――女神の祝福（コード・エイル）――

ルシリオンはグレゴールの肩に右手を置き、コード・エイルを発動。グレゴールの全身がサファイアブルーの魔力に覆われ、そして彼は低い唸り声を発し続けた後、「我の体が・・・」と漏らした。

「・・・これで不死性は消失したはずだ。試してみたいが誤って殺してしまっては意味が無い。このままで教会に引き渡す。キュンナ、お前もクーデターの中心メンバーとして逮捕する」

魔力も生成できず、身動きが取れないようにバインドで拘束され、一切の抵抗が出来ないキュンナは「またセインテストに邪魔をされるなんて・・・」と、悔しさに涙した。

「お前たちは喧嘩を売る相手を間違えたんだよ。それに、手段も間違えた。ベルカを蘇らせるだけなら、ミッド地上本部を貶める必要はなかったんじゃないか？」

「いいや、必要ではあったよ。確かに我々の目的は、ベルカの再誕だ。しかし、それは第1段階。計画には第2段階もあった。かつてミッドガルドと呼ばれていた複合世界は、本星とレーベンヴェルトで成り立っていたという。そのためにはミッドチルダも掌握しなければならないのだ」

だからミッドチルダ地上本部を貶めたのだ、グレゴールは言う。全てはベルカという世界名に変わる前のレーベンヴェルトと、ミッドチルダという名前に変わる前の本星を再現し、複合世界ミッドガルドに戻すため。

「俺が言えた義理じゃないが、過去に囚われすぎだろう？　現代の世界に生きているお前たちは、未来を見据えて生きるべきだった」

そう言ってルシリオンは手錠を用意し、キュンナとグレゴールを捕まえるために、２人の側へと近付いて行った。

――瞬神（ソニック・エア）の風矢――

「っ！」「「っ！？」」

ルシリオンと、キュンナとグレゴールの間に向かって飛来したのは風の矢８本。床に突き刺さると同時にブワッと爆ぜ、風圧でルシリオンを僅かに後退させた。３人の視線が同じ方へと向く。

そこに居たのは、チェスナットブラウンのセミロング、ブロンズレッドの柔和な瞳。赤紫のブラウスに黒のベスト、黒ネクタイ、黒のプリーツスカート姿の・・・

「フィヨルツェン・・・！」

「「同志ヴィスタ！」」

"堕天使エグリゴリ"の１機で、最後の大隊最高幹部の１人、フィヨルツェンが、美術品のような大弓を構えていた。

ＡＮＳＵＲ　Ｖ其は苛烈なる疾風の化身なる者～Ｆｊｏｒｔｓｅｎｇ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

今回の事件の中核であろうキュンナとグレゴールの逮捕まであと１歩というところで、"堕天使エグリゴリ"のフィヨルツェンが姿を現した。

「邪魔をするのか？　フィヨルツェン」

「わたくしも最後の大隊の幹部ですので。王と大隊長を守護するのも役目の１つゆえ」

グレゴールの不死性は消失させたため、実力は削れなくても撃破可能にはなった。なら、俺は両手を上げて手を出さないことを示し、フィヨルツェンは天弓"ハガウル"の先端で、キュンナとグレゴールを拘束していた俺のバインドを裂き、２人を解放した。

「同志ヴィスタ。計画通りに頼みましたぞ」

「承知しています」

グレゴールはキュンナを伴ってトレーニングルームから出て行ったため、ステガノグラフィアに『誰でもいい。転送装置を完全に停止させろ』と指示を出す。この場では見逃すが、この施設から逃がし

はしない。

「さぁ、始めようか。これだけ広い場所なら十分だろ？」

『マイスター！　頑張って！　アイリも頑張るから、遠慮せずに魔術を使ってね！』

『ありがとう、アイリ。頼りにしている！』

アイリの言葉に応え、２つある"エヴェストルム"のシリンダーよりカートリッジを２発ずつ、計４発とロード。柄に埋め込まれた魔力増幅の魔石はまだ使わない。フィヨルツェンによって討たれたステアの神器と真技のために残しておかなければ。

「いいえ。わたくしと貴方の闘いの場はここではありません」

フィヨルツェンはベストのポケットから1枚のカードを取り出し、「転送魔法のカードです。場所を変えましょう」と、俺の足元へと向けて投げ捨てた。

『マイスター！　フィヨルツェンの得意なフィールドに移動させられちゃうかも！』

フィヨルツェンは正面からの真っ向勝負より、身を隠せる場所からの遠距離狙撃を得意とする機体だ。このような隠れる場所がない、だだっ広いフィールドではあの子の持ち味は活きない。

（アイリの言うように、俺にとって有利な場所を選ばせて貰う！）

カードが足元に到達する前に魔力弾で弾こうとしたが、足を退けたフィヨルツェンの足元にはすでに別のカードが置かれていて、カードを中心にミッド魔法陣が広がったのが見えた。

（ここでフィヨルツェンと離れるのはまずい・・・！）

瞬時にカードの迎撃をやめ、俺の足元に飛ばされて来て、キンッと刺さったカードを見下ろす。直後、魔法陣が展開されて転移魔法が発動する。すでに転移魔法の光に飲まれていたフィヨルツェンが「では、わたくしのフィールドでお待ちしております」と言い、その姿を消した。

『マイスター・・・』

『大丈夫だ。俺とアイリのコンビにならフィヨルツェンに遅れを取りはしない』

フィヨルツェンも他の"エグリゴリ"のように何かしらの強化をしているかもしれないが、それすらも跳ね除けてやる。

そして俺も転移魔法の効果で、大隊の拠点からどこかの廃墟と化した街へと転送されてきたんだが・・・。そこはどこかの廃墟と化した街で、廃棄されてからもう永い年月が経過したような風化具合。

「ミッドじゃないな・・・。またどこかの管理世界か・・・？」

ミッドは今は夜だが、こちらは曇天で太陽が一切に見えないが真っ暗と言う程でもない。というか「フィヨルツェン・・・？」はどこに行ったんだ。

（一先ず戦闘を始める前に、カメラを放っておくか）

フィヨルツェンを始めとした"エグリゴリ"を殺害したという件で、あの子たちは人間ではなく兵器であり、殺人ではなく破壊という事実を、俺は内務調査部に示さないといけない。そのためにリアルタイムでフィヨルツェンとの闘いを流さなければ・・・。

「ルシリオンです。これより最後の大隊メンバー、ヴィスタもといエグリゴリのフィヨルツェンの討伐を開始します」

カメラを放ち、内務調査部へと報告を終え、周囲を警戒しつつボロボロな石畳の街路を歩いていると、『マイスター、ここ、見覚えある・・・』アイリが信じられないといった風に漏らした。

『どうしたアイリ？』

『そんなまさか・・・！　だってここは・・・！　マイスターも知ってるはずだよ！』

『ふむ。・・・っ！　いやまさか、しかし・・・！』

記憶の中から引っ張り出してきた景色と、目の前に広がる景色に一致するところが多々あり、それでここがどこなのかが判った。

「お待たせしました。どうです、驚いたでしょうか？　ここは亡失世界ベルカはアウストラシア、ザンクト・オルフェンです。見えますか？　あの数々の聖騎殿が。ここはかつて、対イリュリア連合が生まれた場所ですよ」

フィヨルツェンが教会跡からゆっくりと歩み出てきた。そんなあの子に「フィヨルツェン。ベルカの地を戦場に選んだ理由は何だ？」と尋ねる。

「はて、グレゴールかキュンナからか聞きませんでしたか？　ベルカの再生ですよ。膨大な魔力を使ってテラフォーミングをするのです。およそＸＸランクの魔力で、ここを中心として約４１万平方ｋｍの大地を再生できることが出来るのです」

アイリの代わりに尋ねてみればそんな答えが返ってきた。４１万ということは、日本よりさらに大きい範囲になる。魔力でテラフォーミングをするなんて考えたことはなかったが、魔力の全てを治癒系に変化すれば可能とは思う。

『でもなんで、アウストラシア？　大隊の目的からしてイリュリアがいいんじゃない？』

「確かに」

アイリの疑問はもっともだったが、フィヨルツェンは「イリュリアでしょうがアウストラシアでしょうが、再生すればいいんです」と

言った。グレゴール達がそれに納得しているとは思えないが、俺には関係のない話だ。スルーの方向でいこう。

「まあいい。ベルカの大地を蘇らせるための魔力源にするために、俺をここで殺そうとしている。それがお前たちの計画なんだな？」

「ええ。それが、ベルカ再誕計画の要です。わたくしが身を置く最後の組織。役目を全うして見せましょう！」

"ハガウル"にアップルグリーン色の魔力弦を張り、同色の魔力矢を番えた。

「エヴェストルム。ゲブラー、イドフォルム」

二剣一対形態ゲブラーフォルムに変形させた"エヴェストルム"。そして両方の穂に刻まれたルーン文字に神秘の含まれた魔力を流して神器化イドフォルムへと昇華させる。

VS・・・

――食い散らせ汝の嵐顎（コード・ルヒエル）――

射られた矢は９匹の風の蛇と化し、あらゆる方向から俺に襲い掛かってきた。俺は瞬時に後退し、前面に展開した円３枚より竜巻の龍を９頭と放った。蛇を噛み砕くべく雄叫びを上げて口を開ける龍。

「一気に畳み掛ける！」

『ヤヴォール！』

――力神の化身（コード・マグニ）――

上級自己強化術式を発動し、さらに雷撃系装備術式の「崇高神の威（コード・フィムブルチュール）厳！」を発動する。"エヴェストルム"ごと肩まで覆う魔力刃付き篭手、竜の脚状の脚甲、胴鎧の背部から妖精羽６枚を展開した。

――女神の疾翔（コード・グナー）――

「うおおおおおおおお！」

空戦形態ヘルモーズ、閃光系装備術式フィムブルチュール、風嵐系装備術式アトリーズ、雷撃系装備術式スルーズ、この４つのどれかの形態時でのみ発動できる突進技グナーで、新たに矢を番えようとしているフィヨルツェンへと突っ込む。

「やはり接近戦を挑んできますか。わたくしのスペックからすれば

正しい判断です」

"エヴェストルム"を持つ右腕を引き絞り、突きの構えを取る。フィヨルツェンは魔力矢を番えることなく逆手持ちして、刺突として繰り出した右の"エヴェストルム"の先端に打ち付けた。俺とフィヨルツェンの間で強烈な衝撃波が発生して、互いに「っく・・・！」後退させられた。

「輝き流れる閃星（サピタル）！」

俺とフィヨルツェンの周囲に下級魔力弾２千発を展開し、空へと上がると同時に「ジャッジメント！」一斉にあの子へと発射。サファイアブルーの魔力爆発が連続で起こり、その衝撃と閃光に思わず目を細めた。

――嵐槍百花（クライシス・エア）――

そんな時に飛来するのは、ドリル状の風矢８本。それは別にいいとして『あんな場所から！？』と驚くアイリの言うように、先ほどまでフィヨルツェンが居た場所とはおよそ１ｋｍと離れた側防塔からの狙撃だった。

『フィヨルツェンって、あんなに早く移動できる魔術とか技とかあるの？』

『・・・フィヨルツェンを始めとした風嵐系機体は、シュヴァリエルを除いて高機動タイプばかりだが、あの距離を瞬時に移動できる

ような術は持っていなかった』

フィヨルツェンもまた独自の進化をしていると考えた方がいいな。

「とにかく、フィヨルツェン相手には接近戦を挑むのが1番だ。回避に全力を注ぎつつ突っ込むぞ」

宙を蹴り、数ある聖騎殿を囲っている城壁の要所に建てられている側防塔、その天辺に立つフィヨルツェンへと突撃する。

――連翔せし荒鷲（チェインズ・ガスト）――

そんな俺を迎撃するべく放たれてきた風矢。バレルロールで躱して視認できた矢は、鎖のように何十本と連なっていた。ここで回避したことが正解だと判る。防御していたら2本目からの連続追撃を許していたからな。

――瞬神の風矢（ソニック・エア）――

さらに超高速の矢が矢継ぎ早に射られてきたが紙一重で回避。目の前にまで側防塔が近付いたところで、攻撃がピタリと止んだ。と思った直後に、頭上から迫る風切り音が微かに聞こえた。

――スタウロス――

「っく・・・！」

頭上から飛来したのは風矢ではなく、白銀に輝く「杭・・・！？」のような物・・・に見えた。目で追おうにもアイリから『マイスター、次来る！』という警告に、俺はその場から離れることに注力する。

――スタウロス――

白銀の杭からは魔力を感じないが、それを別として神秘を感じる。何かしらの神器かもしれないと判断し、防御や迎撃ではなく回避を最優先することにした。

「ええい、鬱陶しい！」

――舞い降るは汝の煌閃（コード・マカティエル）――

乱れ撃ちされてくる杭を回避しつつ、上空のフィヨルツェンへ向けて「ジャッジメント！」の号令の下、２千本の光槍を射出する。光槍はあの子に着弾しなかったようで、魔力爆発が起きることなく空を覆う雲を穿ち、無数の穴を空けた。

『空、やっぱり汚いままだね。禁忌兵器の影響で・・・。ん？　ちょっ、マイスター！　なんかヤバイ！』

「ん？・・・んな！？」

目を疑った。上空に居るはずのフィヨルツェンだが、先ほどの側防塔や、至る所で朽ちている聖騎殿の屋根にあの子が居た。その数４

機。上空のと合わせると5機だ。

『え、なに！？　分身の術！？』

――瞬神（ソニック・エア）の風矢――

「くそ！！」

４方向からの超高速風矢。しかも乱れ撃ちということもあって、忙しなく回避行動に入った直後、最後の1機からはあの杭による攻撃。タイミングがバッチリ過ぎて思わず「チッ！」舌打ち。回避も防御も手遅れな直撃コースということもあり、咄嗟に動いていた右の篭手で弾き逸らそうとしたんだが・・・。

「づっ！？　っぐぅぅ・・・！」

『マイスター！？　痛覚遮断！　コード・エイルをスタンバイ！』

杭は篭手を貫通し、俺の右前腕を貫いた。魔術として展開している篭手を貫ける物など1つしかない。やはりこの杭は「神器・・・！」ということになる。が、神器王としての俺の知識には存在しない。

――粉砕せし風爆（マーシレス・フラワー）――

「とりあえず身を隠すぞ！」

『ヤヴォール！』

アイリのおかげで痛みは無いが、治療するにはまず抜かなければならない。そのための時間が要る。俺へと射られた矢は、俺の周囲に展開されたアースガルド魔法陣に着弾し、俺を包囲するように爆風を発生させた。

「ぐあああああああ！」『きゃうううう！』

まるで重力の如き風圧で全身を押し潰されそうになるが、「装甲解除（パージ）！」フィムブルチュールの装甲を外方向へと向けて炸裂させて解除。それで暴風の檻を無理やり吹き飛ばし、地上まで一気に降下。

――連翔せし荒鷲（チェインズ・ガスト）――

――スタウロス――

空から降り注いでくる何十本という風矢と数本の杭。着弾時に暴風として炸裂する風矢に煽られ、杭は掠め、それでも俺は何とか逃げ切ることに成功した。今なお右前腕を貫いている杭の処置のため、廃屋に身を隠す。

「くそっ。いったい何なんだ、この杭は・・・！」

杭に触れて、複製スキルを以ってその正体を探る。そして「おいおい、嘘だろ・・・！」杭がどういった物かが判った俺は、自身の複製スキルに疑いを持つほど驚愕した。

『マイスター？』

「スタウロス。・・・コイツは、スマウグ竜の爪を加工した物だ」

『・・・え、スマウグ！？　リンドヴルム首領だったあの・・・！』

魔界最下層にてあらゆる宝物を抱く火炎竜スマウグ。その圧倒的な神秘と力強さに、奴を倒すべく集まった俺たちは敗れた。結果、リアンシェルトが単独で斃すという光景を見ることになってしまった。

「道理で俺の魔術を貫通するわけだ。加工品とはいえスマウグの爪、神秘では圧倒的に上だ」

死に難い体とはいえ心臓や脳を穿たれるとさすがにまずい。ったく、こんな兵装を用意してくるなんて卑怯すぎる。とにかく今は治療だ。連結させた"エヴェストルム"を床に突き立て、空いた左手で杭を握り締め、「すぅ・・・はぁ・・・すぅ、ふっ！」深呼吸のあとに一気に引き抜く。痛覚遮断のおかげで痛みは無いが、刺さった異物を抜く感触はあるため、妙な気持ち悪さが生まれる。

「『女神の祝福（コード・エイル）』」

杭を引き抜いたことで激しくなる出血を止めるために急いでコード・エイルを発動。アイリのサポートのおかげで素早く傷を癒すことが出来た。

「ありがとう、アイリ」

『どういたしまして！　で、どうするマイスター？　スタウロスに複数のフィヨルツェン。どれも想定外だよ』

ちゃんと傷が完治したか確認するために手の平の開閉を行いつつ、不安そうなアイリに「問題ないさ」と答える。フィヨルツェンが討ったのは、ステア・ヴィエルジェ・ムスペルヘイム。大戦末期においては最強の炎熱系魔術師だった。アイツの真技や創世結界を使えば、必ず勝てる。そのためにリンカーコア狩りをしたのだからな。

――舞い降る落葉（リーフ・サーチャー）――

「『っ！』」

ここ廃屋の付近一帯に魔力反応が一気に増えた。廃屋の隙間から外を覗き見れば、「隠れようとしても無駄です」というフィヨルツェンの拡声による宣告。それを示すようにアップルグリーン色の葉っぱが無数に舞っていた。

『何アレ・・・！？』

「ある種の広域攻撃だ。1枚1枚が攻撃用であり探査用だ。触れたらダメージを負うし、捜索対象に近付くと一斉に殺到して、居場所をフィヨルツェンに知らせる」

『厄介だね・・・』

「ま、対処は難しくないからいいんだがな。アイリ、ちょっと無茶をさせる」

『お？　なんにも心配しないでマイスター！　真技にだってちゃんとサポートして見せるんだから！』

アイリの意気込みに改めて感謝し、「汝は導き、光の寵愛を受けし者。その御名の下、其に刃突き立てし者へ輝ける聖裁を与えよ」詠唱を開始。

『あ、マイスター！　見つかったぽい！』

魔力葉の向きが一斉にこちらに向いたのが見えた。そしてこの場に最も近い数百枚が一気に飛来してくる。

「アイリ！　迎撃か防御に移ってくれ！」

『ヤ、ヤヴォール！』

――竜氷旋――

俺を覆うようにして発生するのは、とぐろを巻く冷気。アイリの攻防一体の魔法で、魔術師化している俺とユニゾン中であれば、この子の魔法も魔術となる。

――瞬神の飛翔（コード・ヘルモーズ）――

剣翼１２枚、薄く長いひし形状の蒼翼１０枚、計２２枚の魔力翼を展開。迫り来る魔力葉の襲撃から逃げるため、そしてこれから発動する魔術で自滅しないため、廃屋の屋根を突き破って一気に空へと上がる。

『来た来た、来たよー！』

「哀れな者らは泣き叫ぶだろう。しかし許しは乞わぬだろう。自らの罪と過ちを認めることを赦さず恥とするゆえに。汝よ。迷うことなかれ、憐れむことなかれ、悔やむことなかれ。汝は希望を司り、光に愛されし王。厳粛たれ、堂々たれ、そして公平たれ」

――スタウロス――

――瞬神（ソニック・エア）の風矢――

全方位から迫る杭や風矢の乱れ撃ち。魔力葉を全力で回避しつつ、詠唱によって空に生成された巨大な魔力スフィアを見る。天球儀のようにスフィアを中心に３つの円環が回り、魔力の集束率が上がれば上がるほど回転が速くなる。

「汝は左手に希望を携え、右手には閃光を携える。全ての者に、その御名を轟かせ！」

詠唱を終るとスフィアが一際強く発光した。臨界点に到達したことを知らせるものだ。

「光神の調停（コード・バルドル）！！」

術式名を唱えると同時、スフィアから全方位へ向けて集束砲撃が断続的に発射された。何かに着弾すると巨大な魔力爆発を起こし、付近一帯を吹っ飛ばす。全方位無差別多弾砲バルドル。この辺りは有形文化財クラスだろうが、こっちも命が懸かっている。恨むならここを戦場に選んだフィヨルツェンにしてほしい。

『葉っぱ、一気に減ったね！』

「フィヨルツェン達は健在で、スタウロスもあと何本あるかも判らないがな」

――スタウロス――

言った矢先から杭が砲撃を穿って消滅させて、そのまま俺へと向かってきた。しっかりと軌道を見据え、右手でバシッと掴み取る。

「我が手に携えしは確かなる幻想」

オリジナルのフィヨルツェン、偽フィヨルツェン４機の違いはある程度察することが出来た。偽フィヨルツェンからも神秘を感じるが、オリジナルに比べて弱い。おそらくミミルが造りだしたんだろう。ルルスとフラメルという新"エグリゴリ"を生み出せるような技術力だ。不可能じゃないはず。

（フィヨルツェンの魔力炉（システム）のコピーを基にしたんだろうな。俺のか

らフォルセティを生み出したように・・・）

現代で"エグリゴリ"を造り出せるミミルも、秘密裏に暗殺した方がいいかもしれないな。

「スタウロス！」

複製した杭・"スタウロス"を１２本と展開し、射出と加速を行う環状魔法陣で待機させる。標的は偽フィヨルツェン４機。バルドルの効果ももってあと数発。オリジナルと偽者も回避行動を緩やかにし・・・

――貫砕せし飄風（ディクライン・ブラスト）――

――嵐槍百花（クライシス・エア）――

ドリル状と突撃槍状の竜巻を十数発と射た。こちらも射出体勢のフィヨルツェン達へと「往け！」"スタウロス"を発射する。加速効果も有している環状魔法陣からの一撃は、フィヨルツェンが射た時より速く、偽フィヨルツェン４機すべての腹部を貫いた。

『よぉーっし！』

「オリジナルの方は掠っただけか・・・」

俺の"スタウロス"を"ハガウル"でギリギリで弾き逸らしたフィヨルツェンだったが、僅かに反応が遅れたことで脇腹を掠る程度だ

がダメージを負った。

「やはり貴方の複製スキルは厄介極まりないです！　しかし、これでわたくしの真技の１つの条件が整いました！　さぁ、見せて差し上げましょう！　わたくしの新たな真技を！」

『新たな・・・』

「真技、だと・・・！？」

俺の知るフィヨルツェンの真技は、何万発の爆撃という広域殲滅術式だ。それとはまた別となると想像も付かない。

「アイリ。こちらも決めに掛かるぞ。創世結界の準備だ」

『ヤヴォール！　マイスターの魔力炉（システム）への負荷を最小限になるよう深層同調開始！』

ステアの創世結界を発動するべく準備を始めようとした時、それは起こった。"スタウロス"に貫かれたままの偽フィヨルツェン４機から爆発的な魔力が膨れ上がり、思わずそちらに目をやった。

「真技。創世結界・天覆う風靡の蓋・地茂る吸血の森（ルーイナス・ブラッディフォレスト）」

耳を疑った、目を疑った。フィヨルツェンが上空から地面へ向かって射た長い魔力矢が着弾とすると同時、偽フィヨルツェン達が魔力に分解されて、ソレら全てが地面を覆い、ドーム状に爆ぜた。その

速度に逃げることも出来ずに飲まれた俺が次に目が開けた時、そこはもう異世界だった。

『森・・・・！？　ていうか、なんか森全体が血管みたいで気持ち悪い・・・・！』

縦横無尽にそびえたつ木々はすべて数ｋｍの高さを誇り、天辺が見えない。胴回りも１００ｍ以上あり、水分通導の役割を持つ道管が幹の表面にまで光って浮かび上がり、ドクドクと上に下にと何かを流している。

「む・・・？」

『マイスター？』

この創世結界に入ってからというもの、魔力が少しずつ消費しているのに気付いた。

「気付きましたか？　この結界の効果の１つに、結界内に居る生命の魔力や生命力を吸収する、というものがあります。さらに言えば・・・」

『マイスター！　枝とかツタが伸びてきた！』

アイリの言うように木々の枝やツタが、俺を捕らえようと勢いよく伸びてきた。ただでさえ居るだけで魔力を吸収されているんだ。捕まったら根こそぎ一気に吸収されるだろう。

（炎熱（スルト）最強術式で消し飛ばしてやりたいが、ＰＴ事件の際にテスタメントの姿で使っているんだよな・・・）

そこから俺とテスタメントが同一人物だと気付かれてはこれまでの苦労が水の泡。ならさっき考えたとおり「アイツの術式を使うだけだ」と、俺は"エヴェストルム"の柄に埋め込まれている魔石に魔力を流す。

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」

数倍となって戻ってきた魔力を即使用。"アンスール"メンバーの魔術や神器などを行使するための呪文の詠唱を終え、三つ又の穂を有する黄金の槍、「劫火顕槍シンマラ！」を"神々の宝庫ブレイザブリク"から取り出した。

「さぁ行きますよ！」

フィヨルツェンが遥か上空へ向けて何十本という風矢を射た。真技発動の前準備に違いない。

――熱波震断刃（アセッソ・グーミ）――

迫り来る枝やツタを排除するべく、ムスペルヘイム式の魔術を発動。"シンマラ"の三つ又を数千度の高熱で熱して、攻撃力を上げる。そして迫り来る枝などを「ふん！」"シンマラ"の一薙ぎで焼き払った。

「真技！　荒々しく無慈悲な暴雨の如く！！」（クリアランス・ディザスター）

フィヨルツェンが真技名を口にした直後、遥か空から様々な種類の風矢が何百、何千、何万と降り注いできた。

「炎熱波神断刃！」（リベラサオン・プレーザ）

三つ又に白焔を纏わせた"シンマラ"を頭上へ向けて振るい、強大な火炎刃を複数放って迎撃する。その間にも『マイスター！』新たな枝やツタが伸びてくる。迎撃や回避をしている間にも魔力を吸われ続けるわけで・・・。

『アイリ。創世結界、開くぞ』

『ヤヴォール！』

大隊の拠点で狩りまくったリンカーコアで生成した、ドーピング用の魔力結晶を魔力炉（システム）とリンクさせて、足りない分の魔力を補填させる。

「さらに強化した2発目、行きますよ！」

――真技・荒々しく無慈悲な暴雨の如く――（クリアランス・ディザスター）

今なお続いている風矢の雨。さらに威力、速度、大きさ、そのどれもが強化された第2波が降り注いできた。

『マイスター！　魔力の消費率が大きくなってる！　気を付けて！』

「『ああ！』・・・我が内に在るは原初より途絶えぬ紅蓮の劫火、天地焼き払いし神性の浄火！」

創世結界を発動するための呪文の詠唱を開始。その途端、ドクン！と心臓が跳ね、ざわざわと胸の内が騒ぐ。度の超えた魔力使用や魔力枯渇が原因で起きる記憶消失現象。それが起きる理由は、その２つの原因によって俺の体が消滅することにある。魔力で出来ているこの体の消滅を防ぐため、創世結界に存在する複製品を構築する魔力を消費して、俺の体の維持させようというフェイルセーフ。しかし、複製物は言わば記憶でもある。

（界律（テスタメント）の守護神時代で得た経験は、本体の脳の海馬に記憶として残るのではなく、複製物の使用者のコピーであるエインヘリヤルが保存媒体として、俺に記憶を残してくれている）

だから"エインヘリヤル"を消費すると、その契約で複製したものは当然、出会った人たちとの思い出も全て消滅する。アイリとの深層同調という、さらなるユニゾン段階のおかげで、記憶消失の頻度を少なく出来るようになった。だが、ソレで完璧に記憶消失から逃れられたわけじゃない。

『マイスター！？　ごめん、アイリだとこれ以上は・・・！』

"シンマラ"で迫る枝を焼き払い、風矢を回避している中で、アイ

リは涙声でそう謝ってきた。さすがに真技や創世結界という最高位の魔術となれば、記憶消失の代償からは逃れられないものだ。

「『大丈夫、大丈夫だから。このまま行くぞ！』・・・現世を侵すは、燃え盛りし炎神の息吹、響き渡るは炎魔の咆哮。其の心に刻み込め、我が心は、全てを焼き尽くし燃え滾らせる火炎の楽園！」

詠唱を無事に終え、迫る枝やツタ、降り注ぐ風矢の雨に掠りながらも回避。

「劫火が支配せし煉界（ムスペルヘイム）！」

創世結界の術式名を告げると同時、フィヨルツェンの創世結界を上書きするように新たな世界が創り出される。そして「ぐぅぅ！」俺の創世結界から、どれだけか判らないが複製物が消失し、それと同時に記憶も失った。だが、どの記憶や複製物を失ったのか判らない。残るは喪失感だけだ。

『マイスター！　しっかり！　高度落ちてる！』

意識が一瞬飛んでいた。慌てて高度を保ち、現況を確認する。ムスペルヘイムは、空全体が炎の川で覆われ、地面は数少ない岩の足場以外は全て溶岩であり、至る所から噴き上がる炎柱は空にまで届き、空の炎の川に合流している、という世界だ。

「フィヨルツェンの結界は・・・」

6割ほどがムスペルヘイムに侵食され、ムスペルヘイムから流れてくる熱波や火の粉によって、木々も燃え始めていた。こうなっては維持も出来ず、完全にムスペルヘイムの炎に飲み込まれてしまうだろう。

「フィヨルツェン！　これ以上の戦闘は無意味だ！　俺に、お前を救わせてくれ！」

記憶喪失が起きる前兆の頭痛と胸痛の痛みは続くため、魔力結晶で記憶消失が起きる前に魔力を補充する。結晶が尽きるより早く、フィヨルツェンとの闘いを終えなければ・・・。

――瞬神（ソニック・エア）の風矢――

どこからともなく飛来する超高速の風矢1本。すぐ側にそびえ立つ炎柱に"シンマラ"を突っ込んで、大きく振るって炎柱から炎をかき出し、風矢と俺を隔てる壁とする。

「無意味？　無意味となんですか？　わたくしはエグリゴリのフィヨルツェン。セインテスト最後の王である貴方を討伐することこそ、わたくし達の宿命。すでに敗れたバンヘルド、グランフェリア、シュヴァリエル、レーゼフェア、彼らの為にもわたくしが、貴方を討つ！」

――群れ成し追従する竜牙（ドラゴン・チェイサー）――

1度の射出で鏃だけの風矢が何百発と放たれた。地を覆う溶岩や天

を流れる炎の川を利用して、炎の雨や溶岩弾を発射。フィヨルツェンの攻撃を全て遮断する。

『アイリ。これで最後だ』

『ヤヴォール！』

２４個目の結晶を魔力炉（システム）と同調させ、枯渇寸前の魔力を回復させる。

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想」

ステアの真技をスタンバイ。ただ、アイツの真技は近接距離で発動できるものだ。もう１度フィヨルツェンに接近しないといけない。

――瞬神の飛翔（コード・ヘルモーズ）――

（ステアの創世結界は、この世界全ての炎を自在に扱えることが出来る反面、それだけで魔力消費が大きい。ま、それに見合うだけのことが出来るわけだが）

宙に立つフィヨルツェンの足元に広がる溶岩を操り、噴水の如く噴き上げさせてあの子を攻撃するも、風嵐系機体として通常機能である短距離高速移動を用いて溶岩の噴水の効果範囲から離脱した。

（さぁ行こうか、ステア！）

――よぉーっし！　最大火力で、最大全速で、フィヨルツェンを救

ってあげようじゃん！――

――轟煉甲冑（アルマメント・ヴウカオン）――

炎の川から滴り落ちてくる炎塊を捕まえて、膜状にして俺を覆わせる。そして宙を蹴り、フィヨルツェンと真っ向から対峙する。

「おのれ！！」

――結断する鴉刃（ディスアセンブル・フェザー）――

"ハガウル"から鳥の羽根をした魔力矢が同時に6発と射られた。アレは対魔力攻撃で、魔力を分断する効果を有している。今発動している炎の防御膜も、意味を成さずに貫通されるだろうが・・・。

（回避している時間が勿体無い）

すでにムスペルヘイムの端の方が揺らぎ始め、ベルカの大地が見え隠れしている。完全に解除されたら、身を隠しての狙撃をしてくるだろう。さすがに持久戦に持ち込まれたら負ける。

『アイリ。ダメージ覚悟で突っ込む。エイルを準備していてくれ』

『ヤヴォール！』

1発目が炎膜に着弾。膜に拒まれたのは一瞬で、矢は俺の右頬を浅く裂いて行った。さらに全身を掠ったり、グサッと太ももや肩や胴

体と突き刺さったりとダメージを負うが、それに構わず突っ込む。命に関わる頭部や胸部に当たりそうになった時は、空いている右腕を盾として使って防御。

「っ！！」

「おおおおおおおおおおおおッ！！」

"シンマラ"の攻撃範囲にフィヨルツェンを収め、右肩から左わき腹の軌道で振るう。

「瞬神（ソニック・エア）の風矢！」

俺のそんな一撃を急速後退することで躱し、指に挟み込まれていた風矢４本を射た。至近距離ということもあって、空戦形態の機動力を以ってしても２本の直撃を許した。腹と左太もも。痛覚は今もなお遮断されているため、なりふり構わず逃げたフィヨルツェンを追撃。

「真技！」

ステアの真技を発動し、龍の腕のような形状の白焔で"シンマラ"全体を覆う。フィヨルツェンが高速で後退しつつ、「お往きなさい！」蛇状の風矢、ミュート・スレイヤー１２発を射た。直線での移動であれば、空戦形態の俺の方が速い。蛇矢に噛み付かれる前に間をスルー。

「少し痛むが許してくれ」

新たな風矢を番えられる前に、"ハガウル"を握っているフィヨルツェンの左指に右拳を打ち込む。ボキボキと骨が折れる音が耳に届き、「い〝っ・・・！」フィヨルツェンが"ハガウル"を手放した。これであの子の攻撃の術は無くなった。

「咬み殺(ドラガオン)す・・・！」

「くっ・・・う〝っ」

"シンマラ"を斜めに振り下ろし、白焔の爪でフィヨルツェンに3つの引っ掻き傷を付ける。傷口からは白焔、そして黒煙が上がるが、あの子はそれでも右手の指に風矢を4本と生成した。

「粉砕せし風爆(マーシレス・フラワー)！！」

風矢を指に挟んだまま殴りかかってきた。トドメのために白焔の爪から龍の口へと変化した"シンマラ"を持つ左腕を後方に引いていたことで、空いている右手に炎を渦巻かせての掌底で迎撃。風矢4本と炎が激突し、お互いを消し飛ばした。

「あ・・・！」

フィヨルツェンの右拳をそっと掴み取り、俺は「すまない」と謝り・・・

「神焔（ブルガトーリオ）！！」

"シンマラ"をあの子の腹に目掛けて突き出した。三つ又の中央がフィヨルツェンの腹に突き刺さると同時、大きく開いていた白焔の龍の口があの子を飲み込んだ。白焔の龍はフィヨルツェンを飲み込んだまま砲撃と化し、溶岩から廃れたベルカへと戻っていた大地に着弾、クレーターが出来るほどの爆発が起きた。

（フィヨルツェン・・・）

・―・―・回想だ・―・―・

中遠距離用狙撃の実験機1号であるフィヨルツェンと、その完成機である第五世代ヘルフィヨトル隊の隊長、レンマーツォ。チョコレートブラウンのショートヘア、シルバーグレーの瞳は少女のようにマルっとしていて、白の長衣に黒のハーフパンツという、体格から見ても子供のような可愛らしさを持つ男子だ。

「自主練習とはとてもいい考えです。わたしもご一緒しますね」

フィヨルツェンとレンマーツォの自主練の監督を請け負った私の元にカノンがやって来た。私の射砲撃の技術を叩き込んだ弟子だ。11歳という若さながらも創世結界を扱え、砲撃に関しては最早私より精度が高い。

「では、ここから5km離れたヒューガルの森の中に的を用意したから、ここから狙撃してくれ。ちなみに的も動くからそのつもりで

な」

ここヴァルハラ宮殿の裏庭から臨むウルザー川、その向こう岸に広がるヒューガルの森。木々を傷付けずに標的だけを狙撃する練習は、俺もカノンもやった。

「かしこまりました。ハガウル」

フィヨルツェンが神器、"天弓ハガウル"を携えた。

「負けませんよ、フィヨル姉さん！　冥弓シルカルデ！」

レンマーツォは両腕に装着した篭手と一体化している小型のクロスボウ型神器、"シルカルデ"を携えた。

「この練習も久しぶりですね、ルシル様」

私が作成してプレゼントした、"星填銃オルトリンデ"と"星填銃グリムゲルテ"と"星填砲シュベルトラウテ"の内、２ｍほどの大砲"シュベルトラウテ"を、カノンは脇に抱えるようにして構えた。

「瞬神の風矢（ソニック・エア）！」

「最果て穿つ一矢（スナイプアロー）！」

フィヨルツェンは最速の風矢を射て、レンマーツォは自動装填される魔力矢を両腕の"シルカルデ"より射出。

「疾光砲弾（シュネル・アングリフシャルフシュッツェ）・狙撃せし者！」

カノンは発射シークエンスが早い上に砲速も速く、さらに出力をそのままに光線状に細めた砲撃を発射。彼女たちは５ｋｍと離れた標的を狙って撃っているのだが、生憎と私の肉眼では標的が見えない。

「どれどれ」

視力を魔力で強化して、「おお、百発百中だな～」と感心する。フィヨルツェンとレンマーツォは、私とシェフィの２人で生み出した完全自律稼動人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"であり、狙撃を主体とする戦術を担う機体であるため、戦場の環境にもよるが最大で１５ｋｍ圏内を狙撃できる。それでも小さく動き続ける標的を、狙い外すことなく撃ち抜ける技量は２体の技術だ。

「カノンも、人の身でよくあそこまで確実に狙い撃てるな」

「それもこれもルシル様のおかげですから♪」

射砲撃の才能がずば抜けていたカノン。スポンジの如く教えた技術を瞬く間に吸収したため、教えている私の方が嬉しく、そして楽しかった。そんな彼女たちの自主練（最後の方は互いの狙撃を迎撃する、という危なっかしい練習になっていた）を見守り終えた頃・・・。

「お父様。実験機であるわたくしの・・・弓兵としての技術は、や

はり劣っているのでしょうか？」

フィヨルツェンが私の側に来て、重ねた両手を自身の胸に添えて聞いてきた。成績で言えばフィヨルツェンは最下位だった。1位はカノン、次いでレンマーツォ、そしてフィヨルツェン。最下位とは言っても1発も外さなかった。ただ、当たりはしたがど真ん中ではなかった、という話だ。

「1発も外さなかったじゃないか。大事なのはそこだぞ、フィヨルツェン」

「それは承知していますけど・・・。仮にも狙撃を主体とする機体の長子ですから、完成機とはいえ弟であるレンマーツォに負けるのは悔しいといいますか悲しいといいますか・・・」

「う～ん、実験機と完成機と言っても、魔力量が違うだけで性能的にはさほど差はないんだ。お前もレンマーツォも、それだけでなくヴァルキリーみんな、日々アップロードして強化しているんだ。また後日、レンマーツォと競ってみろ。今日とは違う結果になるだろう」

フィヨルツェンの実戦経験を反映して生み出した後の狙撃主体機。その経験をフィヨルツェンに返してさらに強化。それを繰り返して"ヴァルキリー"は強くなる。

「本当ですか？」

「本当だとも。私とシェフィの自慢の娘であるお前に、嘘を吐くわけないだろ？」

でもカノンには負けそうだよな。あの子は別格だからな。

「あ、はい！　よーし！　次は負けません！」

グッと握り拳を握って意気込むフィヨルツェンの頭をそっと撫で、私は「えいえい、おー！」と拳を振り上げるこの子を微笑ましく眺めた。

・―・―・終わりだ・―・―・

『白焔の花嫁ステアの全術式を解除！　マイスター！　体の方は！？　大丈夫！？』

『ああ、大丈夫、問題ないよ』

創世結界ムスペルヘイムと神器・"シンマラ"の具現化を解除したことで、頭痛と胸痛も治まった。ふぅ、と一息吐いて、クレーターの底に降りる。そこにはフィヨルツェンが仰向けに倒れていた。

「・・・おやすみ、フィヨルツェン」

フィヨルツェンの側に寄って、内務調査部に観られているのにも構わず俺は片膝立ちして、虚ろな瞳を俺へ向けているあの子の頭を撫でてやる。すると俺との思い出なんて残っていないだろうにフィヨ

ルツェンは安心した子供のように安らかな顔を浮かべ、そしてその体を構築している魔力を一気に爆ぜさせた。

「ぅく・・・（これが、テラ・・・フォーミング・・・）」

ベルカの地を覆っていくフィヨルツェンの膨大な魔力。フィヨルツェンは死してベルカの地を再生させるのだろう・・・。

Ｅｐｉｃａ４８とても長い１日の終わり～Ｐｒｅｖｅｎｔｉｏｎ
ｏｆ　ａ　Ｒｅｂｅｌｌｉｏｎ～

最後の大隊レッツト・バタリオン、そして新生ベルカ騎士団ノイエ・ベルカン・リッターオルデンの主要人物たるキュンナ・フリーディッヒローゼンバッハ、そしてグレゴール・ベッケンバウワーは、転送装置が使えなくなってしまっていることで本拠地内を徒歩で移動し、今はほとんど使われていない、外界へと繋がる搬入口を目指していた。

「また、このような逃走劇を行うことになるなんて・・・！」

キュンナは唇を強く噛み締めて悔しさを滲ませていた。キュンナは、かつてのイリュリアの女王テウタのクローンだ。そして記憶転写型もあるため、テウタの人生の追体験も済ませている。テウタも対イリュリア連合に敗れた後、地下通路で逃避行した。しかしそこで、兄バルデュリスの手によって殺害された。

「ええ、まったくですな！」

緊張感を見せずに笑いながらそう返すグレゴール。地下でテウタの遺体からリンカーコアと遺伝情報を抜き出したのは他ならぬ彼だ。共に逃げ遂せていたイリュリアの技術者に預け、プライソンの手によって誕生し、人知れず鍛えていた。

「同志ヴィスタはどうなりましょうか？」

「あの者の話では、勝算は五分五分と言っておりました。魔神オーディンと比べれば魔力出力や使用できるスキルに違いがあるものの、ドーピングを行うことでその差を埋めている、と。あの者自身もまた、魔力タンクとして自分のクローンを同志ミミル（メル）に造らせていましたからな。我としては、よくて相討ちで済ませてもらいたいものです」

大隊も新生ベルカ騎士団もすでに壊滅状態。そしてフィヨルツェンの目的が、ルシリオンの命であることは承知していることで、グレゴールは彼女がたとえ勝ったとしても組織から抜けると考えていた。それゆえに勝敗にはあまり興味を持っていなかった。

「そうですね。ルシリオン・セインテストが死亡するだけでも、今後の私たちの活動が楽になりそうです」

地下から地上へと向かう巨大リフトに乗り、今後の計画を軽く話し合うキュンナとグレゴール。当初の計画では、ベルカに誘き寄せたルシリオンに魔力を限界以上使わせ、交戦したフィヨルツェンの魔力と共にテラフォーミングに利用するつもりだった。

そして今、フィヨルツェンはルシリオンをベルカに連れ出し、死闘を繰り広げているだろう。万が一に自分が敗れた場合は、自分の魔力でイリュリアをテラフォーミングを行うと言っていたフィヨルツェンの言葉を思い返す。

「ただ、いずれ居なくなるからと言って、同志ヴィスタを蔑ろにするわけにはいきません。もしあの方が敗れたのなら、あの方がベル

カを、イリュリアを再生してくれるのです。後の歴史にあの方の名を残すべきです」

ルシリオンに勝利したフィヨルツェンと合流できればイリュリアへ移動し、もしどこかでルシリオンの生存を確認したとしても、フィヨルツェンが代わりにテラフォーミングを行っているだろうからイリュリアへ行けばいい。そんなわけで今はただ、逃げて身を隠すことを優先する、という話になってくる。

「ではまずは、ミッド東部はバース地区の隠れ家へ向かい、そこの転送装置より第2無人世界セラタプラの兵器実験施設へ向かいましょう、陛下」

グレゴールがそう提案した直後、地下から地上へと向けて2人の間を強大な魔力が通り過ぎていった。敵意も害意もなく、ただの魔力流だった。

「陛下〜、総長〜！」

語尾を伸ばす特徴的な話し方でキュンナとグレゴールを呼んだのは、ミミル・テオフラストゥス・アグリッパ。真の名を、パイモン・エグリゴリ。コードネームはメル。ルシリオンとシェフィリスの生み出した"戦天使ヴァルキリー"が、ヴァナヘイムに洗脳されたことで生まれた第1世代の"堕天使エグリゴリ"の協力の下、イリュリア技術部が開発した第2世代の"エグリゴリ"の1機だ。

「連絡が取れなんだから、エグリゴリとして破壊されたのかと思っ

たぞ、パイモン」

「はい、破壊されずには済みましたわ～。陛下と総長もご無事なようで何よりです～」

2人の乗るリフトにミミルと、そんな彼女の使い魔であり、ミミルの造りだした第3世代の"エグリゴリ"でもある、ウサギ耳とモコモコの丸い尻尾を生やしたフラメルとルルスが降り立った。
残るまともな戦力はグレゴールと合わせて2人だけと諦めていたキュンナは、ミミルという戦力が無事だったことにホッと安堵した。

「まあよい。パイモン、フラメル、ルルス。我らはこれより東部へと逃れる。我と共に陛下を護衛するぞ」

「お願いしますね」

ようやくリフトが地上へと到達し、両側にスライドして開く仕組みの巨大な鉄扉の前に立つ。グレゴールが空間コンソールを展開して、鉄扉を開くためのコードを打ち込み、大きな音と共に鉄扉が左右にスライドし始めたそのとき・・・

「ぐおう！？」

グレゴールが前のめりに倒れこんだ。その様子にキュンナが目を見開き、グレゴールが倒れた原因へと目をやった。ミミルの手には、槍のように長い柄の先端に三日月状の剣身を持つグレイブ――神器・魔造兵装番外位"勝殺槍コスクラハ"が握られていた。

「パイモン・・・！？　これは一体どういうこと！？」

「傷が再生しないのですね～。ルシリオン君に何かされました～？」

たった今自分が繰り出した斬撃で絶ち斬られた甲冑の隙間から覗くグレゴールの背中を見て、ミミルはそう尋ねた。不死性を有していたころであれば、致命傷を受けようとも瞬時に再生してみせたグレゴールだったが、今はもう再生する気配がない。

「パイモン・・・！　おぬし、なんの・・・！？」

片膝立ちでミミルに向き直るグレゴールが、自分へ攻撃した理由を問い質した。

「申し訳ありません、総長～。リアンシェルト様が、もうあなた達のことは用済みになったので処分しておいてください、と仰っていたのですよ～。私はエグリゴリのパイモンなんです～。リアンシェルト様の命令は絶対なので、陛下と総長にはここで果ててもらいますね～」

イリュリアの人間によって造り出されたミミルだが、従う相手は同じ"エグリゴリ"だけと決めていた。これまで命令という形で指示を出していたグレゴールの言葉を、命令ではなくお願いとして聞いてきていた。従うかどうかの選択権はミミルの気分次第。これまではただ運が良かっただけに過ぎなかったのだ。

「用済みとはどういうことです・・・！？」

「ヴィヴィオとフォルセティの将来にとって害となるそうだから、だそうです～。前回のプライソン戦役、そして今回の一件で受けた苦難からの自尊心、２人の事情を知る得がたい友人、そういったものを与えるのがそもそもの目的だそうで～。目的を果たした今、陛下と総長は邪魔だそうです～」

イリュリアの人間であるキュンナとグレゴールは、始めからリアンシェルトの手の平の上で踊られていたことを知る。イリュリアと初めて接触したのも、"エグリゴリ"の技術を提供したのも、イリュリア戦争後にグレゴール達を匿っていたのも、最後の大隊のメンバーとなった魔導犯罪者たちの潜伏先などを教えたのも、すべてリアンシェルトだ。

「お覚悟を、総長、陛下」

紅碧色の魔力を全身より噴き上げさせ、"コスクラハ"をグレゴールに向けたミミル。その様子にキュンナは「ならば！」と、大鎌型デバイス・"ペンドラゴン"を起動した。対峙するキュンナとミミル。ミミルの使い魔であるフラメルとルルスは、黙って主人であるミミルを見守っている。

「陛下、総長閣下！」

――幻惑の乱景――

とそんな時、第三者の声が。それと同時にミミルとフラメルとルルスは「っ！」自身の目に映る光景に身構えた。先ほどまでは殺風景極まりない鉄だけの搬入口だったが、３機には広大な花畑に見えていた。

「ここはわたくしめにお任せを！」

きょろきょろと周囲を見回しているミミル達と、キュンナとグレゴールの間に割って入ったのは幻惑の融合騎エルフテだった。ルシリオンによって行動不能に陥っていたが、技術者たちがすぐさま修復していたのだ。

「・・・お願い出来る、エルフテ？」

「もちろんでございます、陛下。私は陛下と総長に忠誠を誓った身。身命を賭しましょう！」

いつもは二足歩行の燕尾服姿のエルフテだが、今は猫らしく何も身に着けずに四足歩行だ。グレゴールはそんなエルフテに「礼を言う、我が素晴らしき配下」と賞賛を送り、キュンナと共に出口を潜り、そして鉄扉を閉めてロックした。

「我が母にして同志メルよ！　事情は知らないが、私の武勇伝のためにここで死んでもらおう！」

そうしてエルフテは、その鋭い牙と爪を閃かせてミミルに突進した。

†††Ｓｉｄｅなのは†††

アクアベール海での対艦戦闘を終えた私たちチーム海鳴は、事後処理を後続の応援部隊に任せて、付近の陸士隊舎で休ませてもらうことになった。仮眠室を2部屋も借りて、私、アリサちゃん、すずかちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃんで一部屋、はやてちゃんたち八神家がもう一部屋を使用中。

「でも本当に無事で良かったよ、アリシア」

「アリサちゃんも良かった、本当に・・・」

ベッドに入って眠ろうかと思ったんだけどなかなか寝付けない。そんな時、私と同じように寝付けないのかフェイトちゃんが、拉致されていたアリシアちゃんの無事に改めて安堵すると、すずかちゃんも続いた。

「無事って言っても、拉致された瞬間からルシルのステガノグラフィアに救出されるまでの間、ずっと眠らされてたんだし」

「クローンが即座に活動してたところを見ると、あたしやアリシア、他のオリジナルはずっと前から遺伝子とかの材料を盗られてたんでしょうね。だから眠らされてる間はたぶん、なんにもされてないと思うわよ？」

「そうかもしれないけど・・・」

「自分の体のことだもん。自分が一番判ってるよ。それに、さっき医療班の診察を受けたけど正常だって言われたし」

戦闘を終えた私たちも念のための診察を受けたときに、その結果を一緒に聞いてた。後々に発動するような洗脳も催眠もされてないってことだった。

「あたし達のことはもういいじゃない。シャル達のことは何か聞いてないの？」

「私たちの無事と艦隊撃破の知らせはしたんでしょ？」

ここ陸士隊舎に来る途中、はやてちゃんが代表して教会騎士団に連絡を入れてたけど、まだ戦闘中なのか繋がることはなかった。でも、アリサちゃんとアリシアちゃんの診断中に連絡が繋がった。

「うん。最初は繋がらなかったけど、時間を置いたら騎士パーシヴァルと連絡が取れたんだ。それでなんだけど、最後の大隊の本拠地はルシル君とアイリでほぼ壊滅して、騎士団内の裏切り者の制圧を終えたみたい。ただ、シャルちゃん達オランジェ・ロドデンドロンが、シスター・プラダマンテとの戦いで全滅したって・・・」

「「はあ！？」」

アリシアちゃんとアリサちゃんがベッドから跳ね起きた。その知らせを騎士パーシヴァルから聞いた時の私たちと同じくらい驚きようだった。

「シャルの隊って、ルミナ、セレス、トリシュ、クラリス、アンジェっていうＳクラス揃いじゃん！　それがたったひとり相手に全滅！？　シスター・プラダマンテって確か、２０年以上も最強の剣騎士っていう・・・。でもだから負けるなんてありえなくない！？」

「それほど強かったんだと思う。シスターはオランジェ・ロドデンドロンを返り討ちにした後、シャルちゃんとの一騎討ちで重傷を負うも、シャルちゃんを戦闘不能にしたって。そして騎士団の反乱を企てた主導者の実兄リナルド・トラバント騎士団長を殺害。その後、自害を図ったところでミヤビ陸曹が止めて、そのまま逮捕されたみたい」

「そういうわけでザンクト・オルフェンでの戦闘も終了したって」

最後の大隊が壊滅したことで、もうヴィヴィオ達が狙われなくなるねって、フェイトちゃん達と話をしてた。冬休みももう終わるし、休みが開けたら学院までの道中と授業中すべて、ルシル君が護衛してくれることになってたけど、それはそれで申し訳ないな～って思ってた。だから休みが開けるまでに決着がついて本当に良かった。

「この事件の事後処理が片付いたら、チーム海鳴とヴィヴィオのお友達とで旅行に行きたいね」

「ホテルアルピーノで合宿旅行もいいかも♪」

「ここのところチーム海鳴内での模擬戦やってないし」

「湖で遊ぶのもいいし、温泉でゆっくりするのもいいよね♪」

「トレーニング用のアスレチックも、前回からかなり進化したって話をルーテシアがしてたよね」

ヴィヴィオ達の成長も見てみたいし、強くなるための手伝いもしてあげたい。そして何よりみんなとの力比べも楽しみだったりする。そんな楽しみイベントのためにも、私たちに出来ることをきちんとやり遂げて、休暇のスケジュールも合わせないと。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒イリス†††

「ぅ・・・ん・・・？」

薄っすらとまぶたを開けて、ベッドの上に寝かされていることに気付いてバッと上半身を起こすと、「いっつ・・・！」全身から痛みが奔って蹲る。見れば今のわたしは入院患者用の病衣に着替えさせられてた。

「あ、そっか。プラダマンテに負わされた傷・・・」

一気に思い出されるプラダマンテとの戦いの顛末。元団長リナルドは、妹のプラダマンテの手によって殺害されて、プラダマンテ自身も自害しようとしたところで、ミヤビに止められた。それで安心して、そのまま意識を手放したんだっけ・・・。

「お、やっと起きた」

隣から声を掛けられて振り向いてみれば、同じように病衣姿の「ルミナ」がベッドの上で胡坐をかいてた。よく見ればわたしの居る病室には、ルミナの他にもトリシュ、アンジェ、クラリス、セレスと、ミヤビを除くあの場に居たみんなが病衣姿で揃ってた。

「みんな・・・！　無事で良かった！」

みんな所々に包帯やらガーゼやらで体を覆ってるけど、血色も良くてすぐにでも任務に入れそうな感じ。って、「あの後どうなったの！？　というか今何時！？」わたしはみんなに聞いたんだけど「しぃー！」って怒られちゃった。

「ここ病院ですから大声は厳禁です！」

「ご、ごめん、アンジェ・・・」

「イリスのそんな疑問には私が教えてあげよう」

アンジェに謝ってるところにルミナがそう言って、わたしが気を失ってからの話をしてくれることになった。

「まず、今の時刻は午前0時ちょっとすぎ。で、今回のクーデターはもう鎮圧された。さっきまでミヤビが外との連絡係をしてくれていてね。プラダマンテの逮捕と、トラバント団長の死は憶えてる？　あの後、あなたが呼んでいてくれたヘルブラウ・ヒビスクスの医

療班がすぐに駆けつけてくれて、治療を施してくれたの」

その時には完全に意識を失ってたわ。リナルドの死亡は確定されて、プラダマンテは応援に来てくれた他の騎士隊の手によって逮捕されて、今は本部内の牢に入れられてるとのこと。

「イリス。アクアベール海での対艦戦の結果も判明してます。全艦を無事に撃沈できたというはやてから連絡が入ったと、先ほど報告を受けました」

「おお！　そっか！　良かった、うん、良かった！」

そっちの方も気になってたから、みんなが無事で心底安心できた。胸を撫で下ろしてたわたしに、「ルシルからも連絡があったと、ミヤビから伺ってます」トリシュがそう言った。

「ホント！？」

「はい。北海ノーサンヴァラント海はオークニー諸島・ナウンティス島に存在していた大隊の本拠地での戦闘は終結。今現在、手の空いている騎士隊が管理局と共に、拉致されていた方々の保護、そして大隊メンバーの逮捕と連行、施設内の調査を行っています」

「あと、エグリゴリのフィヨルツェンの破壊も成し遂げたみたい。ただ・・・」

わたしにとっても嬉しい知らせを伝えてくれたセレスが言い淀んだ。

みんなも俯き加減だったから、わたしは「ルシルかアイリに何かあったの！？」大声にならないように気を付けて問い質した。

「あ、２人は全然平気みたい。仮眠を取った後に調査のために本拠地に戻ったって、ミヤビが言ってたし」

「それならいいんだけど・・・。じゃあ何か他に問題が？」

「・・・大隊、そして新生ベルカ騎士団の中核メンバーと思われる、キュンナと・・・」

ルミナがモニターを展開して、キュンナともう1人、スキンヘッドの男の老人の画像を表示させた。老人についてはアインハルトの記憶の中で見た。だから「うそ・・・」絶句した。

「ええ。元イリュリア国騎士団総長、グレゴール・ベッケンバウワーです」

「本当に生きてたんだ、コイツ」

イリュリアのグレゴールが生きてる。この話は聖王教会内では有名な話だ。で、そんなグレゴールがどうかしたのかって話で。視線で話の先を促すと、キュンナとグレゴールが逃亡して完全に姿を晦ませたという内容だった。

「あちゃあ・・・」

「他のメンバーはほぼ逮捕して、騎士団と局の両方に連行した」

さっきもアンジェが言ってたけど、「局と協力してるの？」ってことは、騎士団の独立の話も解消に進んでるってことでいいのかな？って首を傾げる。

「マリアンネ聖下と本局の上層部が、少し前に通信で会談を行ったという話も、ミヤビから伺っていますが、詳細は不明です」

「でもさ。いくら反乱を企てたトラバント元団長のやった事だとしても、騎士団が独立をしたのは事実で、それをすぐに撤回することって出来るの？」

クラリスが割と核心を突くことを言ってきた。そうなのだ。管理局上層部内に大隊が用意した幹部クラスのクローンが居て、騎士団独立を後押ししたとはいえ、一度は騎士団の独立を許した。真実がどうであれ、好き勝手に独立や加盟をしていいわけじゃない。

「この日のために頑張ってきたけど、いざとなると気が重くなる・・・」

わたしが溜息を吐くとみんなが「同感」って同じように溜息を吐いた。

「だけどそれを叶えるのが、残された私たちの役目だと思う」

「うん。現パラディン勢が壊滅したから、教会や騎士団が落ち着い

たら昇格試験を臨時で開いて、次のパラディンを決めないと」

「ま、ここに居るみんなでパラディンになるとは思うけど」

クラリスの言うように、この場に居るみんなは１０年以上とＡ級１位だから、試験を開けばきっと頂点に立てると思う。トリシュもクラリスもアンジェも、そしてわたしも、パラディンを目指して鍛えてきた。最大の問題は、当時のパラディンが強すぎたってこと。プラダマンテを始めとした強すぎた騎士は全員居なくなったから、まずパラディンになれる。

「イリスはどうするの？　銀薔薇騎士隊（ズィルバーン・ローゼ）の隊長、つまりシュベーアトパラディンは騎士団の象徴でもあるから、局と騎士団の二足の草鞋は通用しないけど・・・」

「うん・・・。そうだよね・・・」

これもまた、いざなれるとなって尻込みする話だった。ずっと目標で夢だった、シュベーアトパラディン。その称号をたぶんだけど手に出来るというのにわたしの胸に去来するのは、どうしよう、っていう困惑だ。理由はセレスが言ったこと。所属部署は違えどなのは達、それにルシルと一緒に局員として働き続けたいからって頼み込んだ、２０代のうちは局員として働きたい、っていう母様と父様との約束。

「反乱に加わった騎士の全員を懲戒免職することにはならないと思うけど、それでも著しく弱体化するのは間違いない。イリスが騎士

団に戻ってくれると助かる・・・とは思う」

「まぁイリスが納得できる判断をすればいいよ」

「ありがとう、ルミナ」

わたしはベッドにうつ伏せで横になって、枕を抱きしめて顔を埋める。決断は早い方がいい。我儘を押し通すか、局を辞めるか・・・。頭の中で選択肢がグルグル回って、気が付けば眠りに付いていた。

Ｅｐｉｃａ４９王、集う～Ｂｅｌｋａｎ　Ｋｏｎｉｇ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

リアンシェルト少将のところで保護してもらったわたし達は、そこでルシルさんと、"エグリゴリ"っていう人――フィヨルツェンさんの戦闘を、リアンシェルト少将と一緒に見え終えた。
わたしもコロナもリオもアインハルトさんもイクスもミウラさんも、それに無限書庫探検をご一緒してくれてたヴィクターさん、番長、ミカヤさん、エルスさん、ジークさん、そしてノーヴェとルールーとリヴィも、その次元の高さに本当に驚いていた。

――なんやアレ！　魔力弾！？　弾数が恐ろしい！――

――アレはサピタルっていう下級術式ですね――

――下級・・・ですか？――

――はい。セインテストの魔法は、初代セインテストが生み出したんですけど、幼少時に作り、後の中級や上級の基礎となった下級。さらに１対多数戦を念頭において下級術式を強化した中級。そして自己強化と１対大多数戦のための上級の３種類があるんです。あともう１つ上に、一撃必殺の真技というのがあります――

――フィヨルツェンって人が言っていたようなやつだね――

――創世結界でしたっけ？　魔法ってあんなことまで出来ましたっけ？――

――厳密に言いますと、魔法体系が生まれる前に次元世界に存在していた魔術という体系にある術式ですね――

――魔術ってあれだろ？　非殺傷設定が無いガチの殺し用っていう・・・・――

――1歩間違えば死に繋がる、そんな攻防を繰り広げてますのね、ルシルさんは・・・。道理でお強いはずですわ――

（ルシルさんの全力を初めて見たわたしは、黙ってルシルさんの闘いを見届けてたリアンシェルト少将をチラッと見てみたんだけど・・・）

あんなにすごかったルシルさんを見ても、まったく表情を変えなかった。リアンシェルト少将も、フィヨルツェンと同じ"エグリゴリ"っていう人の形をした魔術の兵器で、いつかはルシルさんと殺し合いすることになる・・・。

「そのような目で私を見ても、これからの事に変わりは無いですよ、ヴィヴィオ、フォルセティ」

フォルセティもわたしと同じ気持ちだったみたいで、リアンシェルト少将を睨んでた。歴代のセインテストの人たちや、ルシルさんの家族も殺害したっていう"エグリゴリ"の1人。フォルセティにと

っても、お祖父さんやお祖母さんや伯母さん達の仇でもあるから、顔を合わせるなり警戒してた。

「お父さんは絶対に負けない」

「フォルセティ。希望を持つことは悪くはないですが、常に最悪の結果というものも覚悟していなさい。いざという時、絶望で自分を見失わないように、大切な人の手を離さないように」

リアンシェルト少将はそう言ってフォルセティの頭を撫でてると、通信が入ったことを知らせるコール音が部屋に鳴り響いた。リアンシェルト少将が「少し席を外します」わたし達に一言断ってから部屋を出て行った。

「ふわぁ。さすがにもう眠くなりますね・・・」

「もう0時過ぎてっからな～」

「それに昼間も大変だったからね」

「ファビアやね。いろいろあったけど、ウチとしてはええ日やったよ？　ご先祖様の事をたくさん知れたからな～」

「あの子の魔女術はもう懲り懲りですわ」

あくびをするエルスさん達に「リアンシェルト少将に、もう休むと伝えましょうか・・・？」わたしは聞いてみた。宿舎の寝室は3人

1部屋なんだけど、リアンシェルト少将の護衛の下でここに居るから、複数の部屋に分かれるなんていう護衛がし辛くなるようなことを相談なしでしていいわけない。

（狙われてるのがわたしとフォルセティとイクスの3人としても、どこの部屋にわたし達が居るか判らない以上、他の部屋に誰か侵入してくるかもしれない。それはきっと危ない事だ）

そう判断しての提案をしたところで、「お待たせしました」リアンシェルト少将が戻ってきたから、「あの・・・」そろそろ休みますってことを伝えようとした。

「朗報です。最後の大隊の壊滅に成功したと連絡が地上部隊、聖王教会のマリアンネ聖下より入ったそうです。大隊の中核メンバーである騎士団員キュンナ・フリーディッヒローゼンバッハ、そしてグレゴール・ベッケンバウワーの両名は逃走中ですが、ルシリオン調査官とミヤビ・キジョウ陸曹の2人が、逃走先と思われる場所に先回りするとのことです」

リアンシェルト少将の口から聞かされた最後の大隊のメンバーの名前に、わたし達みんなが「っ！」ハッとした。

「フリーディッヒローゼンバッハってさ、イリュリアの王族の名前だろ？」

「テウタって女王と、キュンナって騎士もそっくりだったし」

「グレゴール・ベッケンバウワーも、クラウスを斃したイリュリアの騎士団長だね・・・」

「いやでも、古代ベルカから何百年って経ってるやろ？　そこまで長生き出来るん？」

「グレゴールに関しては出来ると思うわ。彼は当時から不老不死の体を持ち、イリュリア戦争後は行方を晦ませていたそうなの。今日まで生き残っていても不思議ではないわ」

みんなの視線がアインハルトさんに向かう。イクスの家で見せてもらったアインハルトさんが受け継いだクラウス殿下の記憶の中で、クラウス殿下がグレゴールに討たれたシーンを見た。顔を青くしたアインハルトさんは深呼吸をして、「あの・・・！」リアンシェルト少将に向き直った。

「私を、その逃走先という場所に連れて行ってくださいませんか・・・！？」

アインハルトさんのまさかのお願いに「えっ！？」わたし達は耳を疑った。

「危険ですよ？　それでも行きますか？」

「見届ける義務があると思うんです。古代ベルカより続く、この血統の末裔として・・・。イリュリアの最後をちゃんと・・・！　ですからお願いします！　何かあっても自分の身は自分で守りますの

で・・・・！」

胸の前でギュッと握り拳を作ったアインハルトさんの懇願に、リアンシェルト少将は何も言わずにどこかに通信を繋げた。モニターを展開しないままでの通信だから、相手の人の声は判らない。

「・・・少し本局を空けるから車を手配してくれる？・・・・ええ・・・。大きさ？　少し待って。行くのはアインハルトだけでいいのですか？　最大で5人連れて行けますが・・・」

そう聞かれたけど、ちょっと迷いがあった。アインハルトさんが抱いてる因縁を、オリヴィエの記憶を受け継いでないわたしは持ち難くて、それに危ないって言われた。なのはママやフェイトママのことを思うと、わたしも行くって即決できなかった。でもアインハルトさんだけを見送れるほど薄情でいたくない。

「（ごめんなさい、ママ）あの、わたしも一緒に行きます！」

「私もお願い出来ますか？　雷帝ダールグリュンの末裔として、アインハルトと同じく見届けたいのです」

「私もお願いします！　すでに王としての私はいませんが、それでも冥府の炎王イクスヴェリアの最後の勤めを果たしたいです！」

「ならウチも！　イリュリア関連はご先祖様の因縁でもあるし、ウチ自身にはそこまで強い気持ちもあらへんけど、ヴィヴィちゃん達を護るって約束をしたからな」

アインハルトさん、わたし、ヴィクターさん、イクス、ジークさんが名乗りを上げた。

「ま、いいんじゃねぇか？　ベルカに関係してんのお前らだけだし」

「フォルセティ君は一緒に行かなくていいんですか？」

「お父さんが向こうに居るんなら、僕がいなくても良いような気がして。それに、あなたも一緒なんですよね、リアンシェルト少将？」

「ええ。私がこの子たちの側に付いています」

「ならいいです。ヴィヴィオ達のことお願いします」

リアンシェルト少将への敵意を潜めて、フォルセティが頭を下げた。リアンシェルト少将は頷き返して、通信相手に車の種類を伝えてから通信を切った。そして「では外で車を待ちましょう。近くのトランスポートから向かいます」って部屋の出口に向かった。

「じゃあちょっといってきます！」

「気を付けてね、ヴィヴィオ」

「うん！」

そうしてわたしとアインハルトさんとイクス、それにヴィクターさ

んとジークさんは、リアンシェルト少将と一緒に宿舎を発った。

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ⇒ルシリオン†††

フィヨルツェンとの闘いを優先したことで逃したキュンナとグレゴール。連中は追っ手もなく逃げ切れたと考えているかもしれないが、あの時の本拠地の全システムは俺が掌握していた。フィヨルツェンとの闘いに手一杯で、自分たちの会話など聞かれていない、と高を括ったのがミスだったな。

――ミッド東部はバース地区の隠れ家へ向かい、そこの転送装置より第２無人世界セラタプラの兵器実験施設へ向かいましょう――

（俺を侮ったな、グレゴール）

ステガノグラフィアからもたらされた情報の確認、つまりキュンナとグレゴールを逮捕するため、俺は施設内の調査を行うために派遣されてきた局と騎士団の混成部隊に、今持ちうる情報すべてを渡し・・・

「本当に良いのか、ミヤビ？　君とて疲れているだろ？」

「いいえ、ルシル副隊長！　今は体を動かしたいのです！　それに、私の回復力はご存知でしょう？　騎士プラダマンテとの戦闘で負ったダメージもすでに全快です！」

派遣されてきた騎士団の調査隊の中にミヤビが居たのには驚いた。

そんなミヤビが、キュンナとグレゴールの逮捕に同行することになった。

『じゃあミヤビ。よろしくね！』

「はい。アイリ先輩！」

で、このミッド北部の、さらに北の北に位置する島から東部へ向かう手段だが・・・。

「ミヤビ、背をこっちに向けてくれ。君を抱きかかえて空を飛ぶ」

「ふえ！？　え、いや、その・・・私、重いですから・・・あの・・・」

顔を赤くしてもじもじするミヤビ。変身魔法を解いて１５５ｃｍの身長に戻っている俺を見下ろす１７５ｃｍという高身長の彼女に、「じゃあ背負おうか？」と提案する。

「あの、それでは胸が・・・」

巨乳と言うほどではないが、しっかりと大きな膨らみを持つミヤビの胸に視線を向けると、アイリから『マイスターのエッチ』という怒りの含まれた言葉が。

「『怒られるほどいやらしい目つきで見てないだろ・・・』じゃあリクエストはあるか？」

「っ！・・・あの、へ、変な意味はないですけど！　お、お姫様抱っこ・・・とか！　ご、ごめんなさい！　私、こんな大きい体ですから、憧れはしても現実では叶いっこないって！　こ、この機会に一度でいいですから、お姫様抱っこというのを経験してみたく！　あ、あくまで個人的なお願いですから！　こ、断っていただいて結構です！」

顔を真っ赤にして涙目になっているミヤビの様子に、俺は変身魔法を発動して１８０ｃｍオーバーの身長になり、「じゃあちょっと失礼するよ？」ミヤビの肩と膝裏に手を回して、横抱きに抱え上げてやる。

「ひゃわ！？」

『初めてのお姫様抱っこ、どんな感じ？』

「えっ！？　えっと・・・嬉しいやら気恥ずかしいやら、です。でも・・・やっぱり嬉しいです。私のような巨女を恋人にしようなんていう男性もいないでしょうし、お姫様抱っこをしようという考えも出ないでしょうし・・・。あっ、重くないですか！？」

「軽い軽い。女の子ひとり横抱きに抱え上げられないほど弱くはないよ。それじゃあ行くか」

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

剣翼１２枚と菱翼１０枚を展開して空戦形態になり、地面を蹴って空へと上がる。目指すは東部バース地区の隠れ家とやら。そこで逮捕してもいいが、第２無人世界セラタプラの兵器実験施設というのも気にかかる。そこまで案内してもらってからでも遅くはないか。

「ライシエル。きっちりキュンナのデバイスを追っているな？」

『イエス！ノ（^ ー^ ）』

キュンナのデバイスに潜り込ませておいたライシエルのおかげで、あの２人が今どこに居るのか判る。空を移動しているようで、その速度はかなりのもの。すでに東部に入っているため、急がないとな。

「いい子だ。いくぞ、アイリ、ミヤビ！」

『ヤヴォール！』「はい！」

宙を蹴って満天の星空の下を全力で飛ぶ。１分としないうちにライシエルから報告が入る。

『マスター。彼我の距離が５ｋｍとなったよ。これ以上は気付かれるかも（ノ，□、）』

「判った。えー・・・この先にあるのは・・・」

『バース地区教会だね、マイスター』

この辺りのマップを頭の中で思い浮かべようとしたら、今度はアイリから教えてもらった。それが正解であることを示すようにライシエルから、キュンナとグレゴールが教会に入っていったと報告が入る。

「ミヤビ。近場で降りて、あらゆる魔法を解除した上で突入する」

「了解です！」

キュンナとグレゴールが教会に入ってから数分の時間を置いて１００ｍほど離れた場所に降り、変身魔法などをすべて解除してからダッシュで教会に突入する。

「ライシエル。キュンナは居て、こちらに気付いているか？」

『地下に下がってる。たぶんマスター達には気付いてないかな（^◇^）』

「よし。行こう」

入り口の両開きドアを開け、グレゴールや伏兵といった存在が居ないとも言えないためクリアリングを行いつつ、祭壇までたどり着く。隠し通路といえば祭壇の真下というセオリーに従って、どこかにスイッチなどが無いかを調べる。ライシエルの話だと魔力や電力を感じないとのことで、古きカラクリなのかもしれない。だとすれば尚のことスイッチなど、カラクリを稼動させるための何かがあるはず。ミヤビと探していたそんな時、カタッと入り口の方から音がした。

「なに・・・・！」

『なんで・・・・！？』

ミヤビと一緒に振り返り、そして教会に入ってきた人物を見て、気配を感じ取れなかったことを含めて二重の意味で驚いた。

「リアンシェルト・・・・！？　それに、ヴィヴィオ、アインハルト、イクス。ヴィクター、ジークまで・・・・！」

この場に居るわけがない面子がそこに立っていた。俺は驚きから怒りへと変化した感情のままにリアンシェルトの元へと向かい、「どういうつもりだ、貴様！」あの子の胸倉を掴み上げる。

「ま、待ってください！　ごめんなさい！　私がお願いしました！　クラウスの記憶を受け継ぐ者として！　グレゴールに殺害されたクラウスの子孫として！　イリュリアの最後を見届けたいと！」

「ルシルさん、ごめんなさい！」

「決して邪魔にはなりません！」

「離れたところからでいいんです！　見させてください！」

リアンシェルトの胸倉を掴んでいる俺の右手にアインハルトが手を添え、ここへ来た理由を語った。よく考えれば、オリヴィエのクロ

ーンであるヴィヴィオ、ガリアが冥王イクスヴェリア、バルトの皇帝ダールグリュンの末裔のヴィクトーリア、そして鉄腕ヴィルフリッドの末裔のジークリンデ。全員が古代ベルカ、イリュリア戦争に関わっていた人間の関係者だ。

「ルシル副隊長。どうしますか・・・？」

「・・・リアンシェルト。何があっても命に代えてこの子たちを護りきると誓え」

リアンシェルトの胸倉から手を離し、俺の手に添えられているアインハルトの手をそっと離してそう言い放つ。不死性を失ったグレゴールなど敵ではないだろうし、キュンナもテウタのクローンであったとしても勝てない相手じゃない。

「無論です。軍神と畏れられているあなたを容易く斃せるほどの私ですよ？　次元世界で私を斃せる者など存在しません。護ると誓った者は必ず護りきります」

俺に掴まれたことでクシャクシャになったブラウスを元に戻しながら、リアンシェルトはヴィヴィオ達を見て微笑んだ。今の俺ではリアンシェルトには勝てないという、反論できない内容であるため奥歯をかみ締めて耐える。

「（しかしフィヨルツェンを救い、残るはリアンシェルトとガーデンベルグの２機のみ。どの道、次はお前を相手にしなければならない）・・・ならいい。リアンシェルトの側から離れないようにな」

ヴィヴィオ達に注意すると、あの子たちは「はい！」力強く頷き返してくれた。

「では参りましょうか。キュンナとグレゴールの元へ」

「「『・・・』」」

リアンシェルトにそう促されて、俺とアイリとミヤビは無言で目を逸らした。あの子に「どうしました？」と問われ、俺たちがここで何をしていたのかを答える。キュンナとグレゴールは地下へ向かったのだが、その入り口を見つけられていないということを。

「無理やり床に穴を開けてはどうです？」

「それでトランスポートが破壊されては元も子もないだろう。それに気付かれるような真似もしたくない」

床を破壊してしまえ、というリアンシェルトに呆れの溜息1発のあとにそう答えてやっていると、ヴィヴィオ達が分かれて調べ始めた。リアンシェルトとの会話を打ち切り、「罠には気を付けてくれよ？」注意はしておく。あの子たちの「はーい！」という返事を背に聞く。

「リアンシェルト。お前との闘いは・・・」

いつがいいだろう。早い方がいいのだが、それははやて達との永遠の別れを意味する。2万年近く待ち望んでいた"界律の守護神テス

タメント"から、"神意の玉座"からの解放。しかしいざとなって、こうして躊躇してしまっている。

「死にたいのであればいつでもどうぞ」

「っ！・・・くっ」

『マイスター・・・』

リアンシェルトがヴィヴィオの側に控えるように付き、一緒に仕掛けがないかを探し始めた。そして俺も改めてスイッチを探す。

『あ、マスター。キュンナがミッドから居なくなったよ！（。Д。）』

ライシエルから時間切れを知らせる報告が上がったとほぼ同時、「あった、見つけた！」ジークが声を上げた。バッとそちらへ振り向けば、祭壇ではなくその奥、聖王のステンドグラスにジークが腕を突っ込んでいた。

「ステンドグラスではないのね・・・！」

「立体映像で、隠し通路を隠していたんですね・・・」

『マイスター。祭壇じゃなかったね』

「・・・そうだな」

俺を先頭にミヤビ、子供たち、そしてリアンシェルトの順でステンドグラスの映像を潜り、隠し通路へと入る。一切の魔法技術が使われておらず、三つ又の燭台に立てられた蝋燭に灯る火が唯一の光源だ。通路の先には螺旋階段があり、縦穴で吹き抜けということもあり、踏み外せば奈落のそこへ真っ逆さまだ。

「フローターで降ります？」

「ライシエル」

『トラップなどは感知できず。魔法を使っても問題ないよ！（≧ω≦）b』

リアンシェルトからの提案に、俺はまず魔力使用による仕掛けが有無をライシエルに確認し、無いと判ったことで「フローター」を人数分発動しようとしたんだが・・・

「あなたは魔力を温存しておいて下さい。フローターは私が発動します」

リアンシェルトがそう言って、人数分のフローターを発動。ヴィヴィオ達やミヤビからの「ありがとうございます」に「どういたしまして」と微笑み返すあの子は、ヴァナヘイムに洗脳される前のあの子を思い起こさせる。

「行くぞ」

飛び降りる順番はこれまでのとおり俺からだ。ゆっくりと降下して、５０ｍほどで最下層に降りられた。石製廊下を進み、両側にスライドする鉄扉を手動で開けると、そこはよく知る機械の部屋。中央にはトランスポートが１基だけ設けられていた。

「ライシエル」

『イエス！　転送履歴と転送先座標の割り出しを開始するよ！（（ｏ（＼▽／）ｏ））』

トランスポートのシステムにライシエルを潜り込ませ、キュンナとグレゴールの転送履歴を探らせる。

『第２無人世界セラタプラの兵器実験施設の転送室に座標固定！ｏ（＾＾ｏ）（ｏ＾＾）ｏ』

１０秒としないうちにライシエルは座標設定を行ってくれた。俺たちはトランスポートの上に集まり、第２無人世界へと飛んだ。

「ライシエル。この施設を丸裸にして来い」

『イエス！∠（＾－＾）』

近代的な造りのホールへと着いてすぐに施設内のマップの構築、カメラやトラップの制圧をライシエルに指示する。そして今度は３０秒くらい経過して、『できた～！』戻ってきた。この施設もかなりの大きさを誇り、地上１階、地下４階建てだ。

「キュンナとグレゴールは・・・ここか」

マップ上にピンが立てられている。しかしカメラがその部屋には無いのか姿は確認できないが、生命反応がこの2つだけという報告を受けたため、俺たちは中央ホールと表示された部屋へと目指す。

「リアンシェルト。ホールに入ると同時に俺とミヤビで速攻を仕掛ける。中まで付いて来ても構わないが、ヴィヴィオ達を必ず護れ」

「ええ、判っています。結界を展開すれば問題ないでしょう」

ようやくホールの入り口にたどり着き、ライシエルにドアを開けさせて突入する。ホール内の中央にある円卓にキュンナとグレゴールが着いて、何かを話し合っていた。そんな3人が俺たちに気付いて、

「な・・・!?」驚愕に目を見開いた。

「ルシリオン！　それにヴィヴィオ様・・・！」

「リアンシェルト・・・！」

ガタッと椅子を蹴倒す勢いで立ち上がった2人は、それぞれデバイスを起動した。

Ｅｐｉｃａ５０野望潰える時・・・？～Ｅｎｄｅ　ｄｅｒ　Ｉｌｌｙｒｉｅｎ　？～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

初めてキュンナを見たとき、アイリはすぐにテウタ女王を思い出した。パーシヴァルやトリシュみたいな例もあるし、マイスターそっくりな子孫がいてもおかしな話じゃないって。でもまさか、テウタ女王の記憶やら何やらを受け継いだクローンだったなんて。

（総長・・・）

アイリやアギトお姉ちゃん、あの当時生み出された他５騎の融合騎開発を推し進めたグレゴール総長。マイスターの魔術の影響で不死性を失ったとしても、長年イリュリア騎士団の長を務めてた実力は衰えてないはず。

「リアンシェルト。ヴィヴィオ達に攻撃が届かないように結界を」

イリュリアの最期を見届けたいっていうアインハルト。そんなあの子に同行してきたヴィヴィオとイクスと、ヴィクターとジークは、護衛にとはやてが頼んでたはずのリアンシェルトが連れてきた。マイスターもそれでブチ切れしたし。

「ええ」

――天地に架かり靡く氷幕（アヴレァ・ピュッロン）――

リアンシェルトとヴィヴィオ達、そしてマイスター達を隔てるように発生するのは無数の氷の花びらで出来たオーロラだった。マイスターの心のうちに安心感が広がったのが判った。まぁ魔術だし？　キュンナと総長の魔法なんて通らないだろうけど。

「ミヤビ。さくっと済ませたい。キュンナを任せてもいいか？」

「もちろんです！」

――鬼神形態顕現・土鬼降臨――

ミヤビの額から茶色い宝石のような角が２本生えた。あの色だと地を操る、攻撃と防御に全振りした形態、土鬼。ズシン、ズシン、って鋼の床に足跡を付けながらキュンナの元に歩いてく。

「ここが最期の地となるかどうか、か」

総長が頭部を護る兜を被って、完全な臨戦態勢に入った。

『マイスター。アイリは何をすればいい？』

『グレゴールはあくまで魔導師だろ？　こちらも魔法で闘う。さすがにフィヨルツェンとの闘いの後で魔術師化はきつい』

フィヨルツェンはレーゼフェアより弱い。そう聞かされてたけど、

マイスターも想定外だった創世結界を使われたことで、魔力の消費や記憶の消失をレーゼフェアの時以上に被った。あの戦闘から2時間も経ってない今、マイスターも結構ぎりぎりだ。

『ヤー。魔力炉(システム)への負荷が掛かり過ぎないように注意しておくね』

『ああ、それで頼む。・・・いくぞ！』

マイスターは総長と、ミヤビはキュンナと闘うため、相手の元へと突っ込む。

「魔神への恨みを、セインテストの直系である貴様にぶつけさせてもらおう！」

グレゴールの武器はソードブレイカーの大剣・"シュチェルビェツ"。マイスターはそれを警戒して、"エヴェストルム"を起動させないみたいだね。

「それは八つ当たりというものだろう？」

――知らしめよ汝の忠誠(コード・アブディエル)――

マイスターは両手に片刃剣を創り出して、振るわれる"シュチェルビェツ"を右の魔力剣で受け止めて、すかさず左の魔力剣で総長を狙いにいく。

「ふんぬ！」

――我が鎧は城塞の如し――

魔力剣の一撃をバチン！と弾く総長の光を帯びた甲冑。あぁ、そうだった。総長の甲冑ウェズンは、魔力を通せば対物・対魔力効果を高めることの出来るものだった。マイスターも今の攻防で理解したみたいだね。

「不死性などにかまけて己自身を鍛えてないとでも思ったか！」

柄を握ってない左手を伸ばしてきた総長は、マイスターの首を狙ってた。あんな大きくて太い指に掴まれたら、マイスターの首もへし折られちゃう。それを察知したマイスターは後ろに下がりながら右の魔力剣で、総長の左腕を上に向かって弾いた。

「ふんっ！」「せいっ！」

振るわれた魔力剣と"シュチェルビェツ"のジグザグな刃がガギィンと噛み合って、マイスターは即座に総長の左腕を弾いた右の魔力剣を、総長の顔の前に差し出した。

「ジャッジメント」

「むぐぅ・・・！？」

剣の形にしてた魔力の固定を解除して、一気に爆発させた。ダメージは甲冑や兜の軽減してくれるだろうけど、閃光だけはどうにもな

らないはずだ。案の定、「目が・・・！」ってふらついた。

『マイスター！　シーリングバインドをスタンバイ！』

『おお！　ナイスだ、アイリ！　発動を！』

『ヤヴォール！　シーリングバインド！』

拘束した相手の魔力の生成を阻害させる、対魔導師用の反則級の捕縛魔法。総長の腰と四肢にバインドが掛けられて、甲冑が発してた光が弱まってく。このまま完全に落とせるって、マイスターもアイリも考えてた。

「我が肉体は巨神の身躯の如しぃぃぃーーーーー！」

甲冑が解除されると同時、総長の体が一回りほど大きくなった。その際にバインドが弾け飛んで、自由になった総長が一足飛びで数ｍと後退。そしてまた甲冑を装着した。

「ふんぬ！」

振り上げてた"シュチェルビェツ"を思いっきり振り下ろした総長。剣身から放たれた剣圧はホールの床を断ち斬り、マイスターに襲い掛った。マイスターは横に飛ぶことで躱そうとしたんだけど・・・。

「ルシル副隊長！」

ミヤビに呼ばれたマイスターは、視界の端にミヤビと、ミヤビと戦っていたキュンナの姿を収めた。キュンナは分身体を４人と創り出して、ミヤビと５対１の戦闘を行ってるんだけど、その内１人がマイスターに飛び掛ってきて、腰にしがみ付いてきた。それでマイスターの回避行動がキャンセルされちゃったわけで。

「下らない真似を・・・！」

マイスターは腰にしがみ付いてる偽キュンナを、全身から魔力を放出することで引き剥がす。そして宙に浮いた偽キュンナの首根っこを引っ掴んで、迫る剣圧へと投げ飛ばすと同時に改めて回避行動に入った。

「分身体とはいえ、防御魔法ですら斬り裂く純粋物理攻撃に陛下を投げ飛ばすとは。礼節を弁えておらんようだな」

「人のことは言えないが、過去の亡霊がいつまでも現代に関わるな、という話だよグレゴール・ベッケンバウワー」

――舞い降るは汝の煌閃（コード・マカティエル）――

剣圧を回避したマイスターは光槍を２００本と天井付近に展開して、「ミヤビ！」に注意するように言った後、「ジャッジメント！」号令を下した。そして一斉に降り注ぐ光槍。総長は自慢の防御力で槍の雨の中を駆け、マイスターに接近を試みた。だけど足元ばかりに光槍が連続で突き刺さるから、「むお！」すっ転んだ。

「おおおおおお！」

――鎧地拳殴――

ミヤビも土鬼の防御力を以って回避を行いながら、岩石みたくゴツゴツになった両腕による打撃で、キュンナを追い詰めてく。一時とは言え鎌騎士の頂点、ゼンゼパラディンだったキュンナを倒しそう。

「ミヤビ・キジョウ！　プライソンが余計な真似をしなければ、お前も我が親衛隊の1人として迎え入れていたものを！」

――夢影――

「それはまた最悪な冗談ですね！」

キュンナは分身体を盾にして槍の雨をやり過ごしながら、ミヤビからの一撃必倒級の攻撃を躱しては反撃。ミヤビの体に分身体は何十発と拳や蹴りを打ち込んで、キュンナもデバイスの大鎌の魔力刃で斬撃を繰り出してるけど、ミヤビは斬撃に対しては多少の出血はしてるけど、打撃に関してはほぼノーダメージっぽい。

「何もかもプライソンによって滅茶苦茶だわい！　しかし元はと言えば、セインテスト！　貴様らがベルカの地を訪れなければ！　このような事態には陥らなかった！」

魔力を纏わせて剣身を巨大化させた"シュツェルビェツ"のぶん回し攻撃。魔力が僅かに含まれた剣圧が放たれる。床に突き立ったま

ま残ってる光槍を両手に2本と手に取ったマイスターは、剣圧を両手の光槍で弾きながら総長に突っ込む。

『ミヤビ。光槍（マカティエル）を爆破する。リアンシェルト。その結界にミヤビを入れてやってくれ。あと、ついでに俺も』

『ええ、判りました。キジョウ陸曹、こちらへ』

『了解です！』

ミヤビがキュンナの振るった大鎌の刃を右手で白刃取りして、左拳で「せいや！」殴りかかったけど、キュンナに届く前に分身体2人が拳を受け止めたり手首を掴んだりして、ミヤビの拳を防御。でも踏ん張りきれず、「きゃああ！」キュンナと分身体2人が吹っ飛んだ。

「ルシル副隊長！　避難完了です！」

リアンシェルトの結界にミヤビが飛び込んだのを確認して、マイスターも一足飛びで結界内に入った。そして「ジャッジメント！」パチンと指を鳴らして、床に突き立つ光槍を一斉に爆破させた。

「すごいですわ・・・！」

「あの、ルシルさん。この魔法は上級なん・・・ですか？」

「いや。中級の基本魔法の1つだ。が・・・少しばかり威力が足り

なかったようだな」

ジークの質問に答えたマイスターの視線の先、白煙の中に大きな影が浮かび上がった。仁王立ちする総長と、あと・・・山？みたいなシルエットだ。

「ルシル副隊長」

「ああ。グレゴールの防御力が厄介だ。中級でチマチマ削り合っていては埒が明かない。上級で決める。ミヤビはこのまま待機。グレゴールが倒れ、キュンナが無事だった場合は、すまないが交代してくれ」

「了解しました。ミヤビ・キジョウ、待機しています」

マイスターだけがリアンシェルトの結界から歩き出て、『行くぞ、アイリ』そう言ってくれたから、『ヤヴォール！』全力で応えた。

『総長は甲冑の防御力で防ぎきって、キュンナも分身体で自分を囲って乗り切ってんだね・・・』

山のようなシルエットの正体は、分身体の山だった。分身体が消滅して無傷なキュンナが姿を見せた。総長も1度甲冑を解除して、改めて無傷な甲冑を装着。確かにこれは一撃で仕留めないと持久戦になっちゃいそう。

「其の燃ゆる眼は、罪人捕らえて裁く灼熱の牢。罪より逃れること

叶わず、咎人よ、抗うことなく熾烈なる視線に穿たれ、浄化の炎に呑まれよ。それこそが汝に塗れた大罪を洗う唯一の償いゆえに！」

炎で出来た目が何十個とホール一面に展開されて、その角膜部分がギョロっと動いた。視線の先にはキュンナと総長が居て、瞳孔部分からレーザーサイトのような光線が2人に向かって放たれた。

「陛下、回避を！」

「夢影！」

分身体が十数人と創り出されて、レーザーサイトに突っ込んでった。でもレーザーサイトに当たっても何にも起こらない。そう、この術式はまだ完成されてない。今はまだ当たった箇所に小さな火の目が刻まれただけ。

「ルシリオン！　今すぐこの魔法を解除しなさい！」

「断る。ところでキュンナ。分身体はそれで足りるのか？」

天井や壁、床にまで展開されてるいくつもの火の目から放たれるレーザーサイトが1つ、また1つとキュンナと総長に当てられていって、体中に火の目が刻まれていく。そんな2人はマイスターに向かって走って来た。マイスターの側なら安全圏だって考えてのことだろうけど・・・。

「炎神の牢眼（コード・バーレイグ）」

マイスターが術式名を告げたと同時、キュンナと総長は足を止めた・・・というより、止められた。レーザーサイトはある意味バインドとしての効果もあるから、レーザーサイトの長さ以上の移動は出来ない。

「ジャッジメント」

そんな号令の下、ホール内の目が一斉に輝きだした。壁面側のレーザーサイトの端っこに火が点いて、導火線みたいにキュンナと総長に迫る。キュンナは「この！」キュンナから大鎌を受け取った分身体がレーザーサイトを斬ろうとするけど弾かれてる。

「おのれ！」

――我が肉体よ、内に宿りし獣を目覚めさせよ――

総長が甲冑を解除すると「うっそ・・・」目を疑う姿に変身、そして無理やりレーザーサイトを引き千切ることで迫り来てた火から逃れた。マイスターも「おい、聞いてないぞ」って仰ぎ見た。黄金の毛並みを持つ巨大な狼が居て、額には総長の顔がある。イリュリアが行ってた生体兵器研究の1つ、キメラ製造によって生み出されたキメラとおんなじだ（サイズは別格だけど）。

『不死性は消せてもキメラ化は治せなかったってこと！？　ていうかアイリも、総長がキメラ化できるなんて知らなかったんだけどさ！』

『ああくそ！　俺としたことが！』

「陛下！」

火がもうすぐたどり着きそうになってたキュンナをパクッと口に咥えて、総長は思い切り首を振った。それでレーザーサイトを引き千切ることが出来たんだけど・・・ね。

「ま、もう手遅れなんだけどな」

甲冑を解除してキメラに変身したことで総長の体中に付けられた火の目は消えたけど、ドォーン！と大きな口の中で爆発が起きて、爆炎が牙を吹き飛ばした。声にならない叫び声を上げて、口から黒煙を吐きながら総長は倒れ込んだ。

「導火線（レーザーサイト）を千切れば大丈夫だと思ったか？　残念。レーザーサイト――バーレイグの視線を浴びた時点で術式は完成した。まぁ甲冑を解除して、バーレイグを躱したのは良い機転だったが、爆弾と化したキュンナを口に含んでくれたのは嬉しい誤算だったよ、グレゴール」

――第二波装填（セカンドバレル・セット）――

マイスターがスッと右腕を小さく上げると、ホール内の壁面に展開されてる炎の目が再び開いて、瞳孔からレーザーサイトを照射。巨体な総長は未だに口内爆発のダメージの所為か動けず、全身に浴びて火の目マークを刻まれた。

「これで終わりだ」

「セインテストぉぉぉーーーーーっ！」

キメラの額にある総長の顔が怒りに叫ぶとキメラの口がグッと閉じて、さらに前足で口を押さえた。キュンナが今もなお口の中に居るから、キュンナだけでも護るためにそうしたんだね。

「ジャッジメント」

マイスターの号令が下されると、導火線の役割を持つレーザーサイトが燃え始めて、その火は総長に刻まれた火の目に向かう。そしてマイスターがリアンシェルトの結界に飛び込んだ直後、レーザーサイトの火が火の目に到達して大爆発。ホール内を覆い尽くすほどの蒼い炎が発生した。

「ルシルさん、これ・・・亡くなってませんか・・・？」

「非殺傷設定ではあるし、本来の威力の1／3程度しか出していないから、軽めの火傷で済むはずだ」

「これで火傷・・・？　ホンマですか・・・？」

「・・・あと人によってはトラウマもあるかもな」

バーレイグの効果時間も終わったみたいで、蒼炎が音もなくスゥ～

って消えてく。総長はさっき伏せてた場所から移動してなくて、四肢を投げ出してぐったりと倒れ込んでるし、額の総長の顔も白目を向いてる。

「グレゴール・ベッケンバウワー・・・。クラウスの仇・・・」

「アインハルトさん・・・」

「・・・アインハルト、君にグレゴールを討たせてやるべきだったかもしれないが、奴と君の戦力差を考えれば・・・」

「はい、解かっています。おそらく今の私の拳では、グレゴールの甲冑に傷1つ付けられず、追い詰められていたでしょう」

「そうだな。・・・本音を言えば競技選手を目指す君に、こんなル－ル無用の血生臭い戦闘をさせたくなかった。こういうのは局員や騎士の役目だ。・・・さて、ミヤビ。キュンナの回収も行うから手を貸してくれ」

「了解です！」

マイスターとミヤビの2人だけで結界から出て、黒煙を吐き出し続けてる総長の口へと近付いてく。そして万が一に口が閉じられることがないようにミヤビが下顎を、マイスターが上顎を右腕で支えて、左手を口の中に翳した。

――闇よ誘え汝の宵手（コード・カムエル）――

口内の影を利用して作られた触手が数本、喉の奥へと向かって行った。数秒とせずに「捉えた！」マイスターがグッと左拳を後ろに引いた。それに倣って触手も戻ってきて、触手に包まれたキュンナを引っ張り出した。

「意識を失ってるようですね。ちょっと心配でしたけど・・・」

『軽く診た程度だけど、心拍数が若干弱いけど命に別状はないみたい。総長は・・・』

総長の巨体が急速に崩れ落ち始めて、骨となった頭蓋骨の額部分から半裸な総長がドサッと床に落ちた。胸が上下してるから息はしてる。破けた上着から覗く肌は若干だけど軽い火傷気味。

『マイスター。ユニゾン・アウトを。念のためにしっかり診ておきたいの』

『判った。ユニゾン・アウト』

マイスターとのユニゾンを解除して、並べて横にされたキュンナと総長を診察。マイスターはこれまでに何度も殺人を行ってる。でもヴィヴィオ達の前で犯させられない。愛するマイスターの心を少しでも守れるように。

「・・・とりあえず応急処置は完了。これで間違っても死ぬことはないよ」

「ルシル副隊長。念のために手錠を掛けておきますね」

「ああ、頼む」

キュンナと総長を確保。それを確認したリアンシェルトの結界を解除して、ヴィヴィオ達を伴ってこっちにまでやって来た。

「イリュリアも・・・これで本当に終わりですのね・・・」

イリュリアと、シュトゥラを始めとした近隣諸国との因縁も、ヴィクターの言うように終わったんだね。キュンナと総長をジッと見てたアインハルトが「はい。永い因縁でした・・・」ポツリと呟いた。

（アギトお姉ちゃんやアイリがマイスターと出会うきっかけもイリュリアだった。今もちゃんと憶えてる。マイスターと出会った時のこと・・・）

イリュリアの融合騎として生まれ、道具のように扱われてきて、でもそこに悲しみなんてなかった。知らなかったもん。アイリ達は道具って教えられてきたんだから。でもアギトお姉ちゃんが裏切った。アイリを置いていったって恨んだ。

（そしてマイスター達と出会って、アギトお姉ちゃんがイリュリアを裏切った気持ちがよく解かった。アイリ達がどれだけひどい扱いを受けてきたのか・・・。だけどその分、マイスター達と過ごせた時間に幸せを感じることが出来た）

総長を見る。融合騎開発を進めたのは総長だから、アイリが生まれたのも総長のおかげでもある。だから誰にも聞かれないように小さな声で「ありがとう。さようなら」感謝と、もう会うこともないことからお別れを告げた。

「・・・ええ、ええ。そうです。座標は先ほど送信したとおり。・・・騎士団の方とも協力しての調査を。・・・では任せました・・・ルシリオン。こちらの施設にも調査隊を派遣するよう申請しておきました。キュンナとグレゴールの連行は・・・？」

「俺とアイリとミヤビで行う。お前の仕事はあくまでヴィヴィオ達の護衛だ」

マイスターの視線が総長たちからリアンシェルトに向いたから、アイリも倣ってヴィヴィオ達へと振り返る。

「判りました。それでは私たちは、お先に帰らせていただきます」

ヴィヴィオ達を伴ってホールの出口へ向かうリアンシェルトをを見守った。そしてドアを潜ってその姿が完全に見えなくなったのを見計らって、「はぁぁぁ・・・」マイスターが床に大の字で倒れ込んだ。

「マイスター！？」「ルシル副隊長！？」

「あー大丈夫だ。少し疲れただけだ。・・・しかし、こんなに体が

気だるいのって初めてかもな・・・。起き上がる気力も湧いてこない・・・。すまない、調査隊が来たら起こしてくれ」

そう言ってゆっくりと目を閉じたマイスターを見守った。

そして局と騎士団の混成調査隊がやって来たから起こそうとしたんだけど・・・。結局、それから3日間も昏睡状態に陥って、目を覚まさなかった。

Ｅｐｉｃａ５１わたしが選ぶ道～Ｈｅｒ　ｃｈｏｉｃｅ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

ミヤビとアイリ、そして今なお本局医療部で入院中のルシルが逮捕したキュンナとグレゴール。あの２人も１日と意識不明だったけど、昨日意識を回復したってことで１日休ませてからの今日から騎士団による事情聴取が行われてる。そんな中、わたし達オランジェ・ロドデンドロンは、プラダマンテの聴取を任されていた。

「――両親を早くに亡くした私を育ててくれた兄に報いたかっただけ。兄の頼みは何だって聞いてきた。剣の腕を磨き、シュベーアトパラディンとして君臨してきた」

取調室でプラダマンテは遠い目をした。リナルド元団長は、子供の頃に存命していた父に連れられてグレゴールと出会い、その思想に染まってからはベルカ再誕を目指していたそうだ。そしてミッドチルダ地上部隊に何かしら思う騎士を仲間に引き込んでいって、最後の大隊を設立した。それが２５年前。そんな昔から大隊が存在していたなんて・・・。

「だが・・・兄が、大隊が他者の命を軽んじるような事態が多くなってきたことで、私の中にずっと渦巻いていた疑念が強くなった。確かに悪には相応の罰が必要だ。殺されても仕方のない連中には死を。それについては私も同意した。この手で殺した者も何人もいる。しかし殺すに値しない者を殺害することには疑念があった。果てに

はクローンを使って無実の人間に罪を被せ始めた」

その所為で汚名を着せられた人は数多い。でも昨日の本局と聖王教会の幹部による合同会見のおかげで、汚名を着せられた局員や騎士の無実が管理世界全体に知られることになった。元通りとはすぐにはいかないだろうけど、職務に復帰しやすいはずだ。

「そして最終的には、騎士団同士での戦闘を行うように指示を出してきた。ベルカ人を尊重し守るための戦いであったにも限らずだ。だから・・・」

「殺した。騎士団やベルカ人が総崩れになる前に・・・」

正直、今となっては最悪な結果だった。リナルド元団長を裏で操っていたグレゴールも、ベルカ再誕によってイリュリアを、レーベンヴェルトを再興させて女王とするべく生み出されたキュンナも、数時間後にルシルにボコられて、今や檻の中だ。

「イリス。私に自害の機会をくれないか？　どれだけの間、牢に繋がれるか判らない今、早々に天へと旅立ちたい。もう・・・疲れた。兄を殺し、パラディンどころか騎士としても生きていけないのなら、私という意味はどこにも無い」

「～～～～っ！！」

フルスイングのビンタをプラダマンテにお見舞いして、胸倉を掴んで「ふざけんな！」怒鳴る。同席してくれてるルミナとアンジェが

「ダメ！」羽交い絞めにして止めにきた。

「好き勝手やっておきながら、やる事ないから死にますぅ～ってか！　人生馬鹿にすんのもいい加減にしろ！　死に逃がさないから！　生きて最期まで罪を償ってもらう！　パラディンじゃなくなっても、騎士じゃなくなっても！　しっかり償って、戻ってきてよ！　剣の先生でもいいからさ・・・。そしていつかまた、剣を交えよう？　今度こそわたしが勝って見せるから」

「イリス・・・」

溢れてくる涙を袖で拭って、「ああもう。いったん休みましょ。わたしも頭冷やしてくる」わたしが席を立ったところで、ガチャっと聴取室の入り口のドアが開いた。

「お疲れ様、イリス、ルミナ、アンジェ。あとは私が引き継ぐわ」

「母様！」

「「聖下！？」」

入ってきたのは母様と、第一聖下秘書官のシスター・ツィスカだった。

「キュンナとグレゴールの聴取は終わったのですか？」

「ええ。先ほど、管理局に預けたわ」

騎士団での取調べの後は、局での取調べを行うことが決まってた。何せキュンナとグレゴールは管理局にも絶大なダメージを与えた犯罪者だ。向こうでもこってり絞られるはずだ。

「そういうわけだから、あなた達はもう休みなさい。いいわね？」

「「「はい・・・。失礼します」」」

母様に一礼をしてから退室して、3人揃って「はぁ」溜息を吐いてから廊下を歩き出した。とりあえず一昨日と昨日と今日の3日は休みで明日から仕事だから、このまま自宅へ戻ることになった。

「ルミナ、アンジェ。もうちょっとフライハイト邸に居てくれる？オランジェ・ロドデンドロンはまだ解散してないから、しばらくは、ね」

「ん、判った」

「ええ、判りました。ところで、今後の予定はどうするんですか？2人とも」

「「予定？」」

「一昨日の会見で、聖下は局にも籍を置く騎士に対し、自由に局に戻ってもいい、そう仰っていました」

局と騎士団の両方に所属している騎士は、騎士団の管理局法からの脱退会見と同時に強制的に休職するよう言われ、活動を騎士団1本に絞るようにされてた。でも管理局の人事などを管理する総務部のトップであるリアンシェルトが、合同会見にて騎士の休職命令を取り消すことに同意した。これでわたしもルミナもセレスも、局員として仕事が出来るようになった。

「私はイリスの決めたとおりに動くよ。局員に戻って特騎隊を再始動させてもいいし、このまま騎士団に残ってズィルバーン・ローゼになるため動くか、オランジェ・ロドデンドロンとして第2の精鋭部隊としてやっていくか。どっちでもいい」

ルミナはわたしに付いていくって言ってくれた。わたしが特務零課――特別機動戦闘騎隊に誘ったとき、ファオストパラディンの称号を返上して、騎士団からも除隊してくれた。その恩は一生忘れない。だけど騎士団がこんなボロボロな今、わたしは・・・。

「アンジェ。アンジェはどうしてほしい？」

「私ですか？・・・騎士団のアンジェリエとしてなら、騎士団に留まるべきだと断言します。大隊側に付いた騎士たちについての処遇は、減俸と半年間の謹慎などなど。騎士団の弱体化は目に見えています。それに加え局に戻る騎士もいるでしょう。任務に赴けることの出来る団員の数が著しく少なくなるのです」

その事もあって騎士団はしばらくの間、以前のようにロストロギアの捜査と回収に専念することになった。あと自治領内の事件・事故

の捜査とか。

「幼馴染のアンジェとしてなら、留まってくれたら嬉しいです、と思います。オランジェ・ロドデンドロンとしての活動期間は短いものでしたが、幼馴染と、それにルシルさんやアイリと共に過ごせた時間はとても楽しかったですから」

「うん。私も楽しかった。私たち幼馴染が揃って同じ部隊に属するなんてことなかったからね」

「わたしも楽しかったよ。一緒に事件を追って、帰る場所はフライハイト邸で、共通の時間を過ごしてさ」

オランジェ・ロドデンドロンとして過ごしてきた時間は、チーム海鳴と同じくらい面白くて楽しかった。でも・・・。

「結局は、イリスの思うがままに、ですよ。あなたがどんな決断をしても受け入れます。トリシュ達だってきっとそう言うと思います」

アンジェの優しい声と言葉にわたしは「ありがとう」小さく頭を下げて感謝した。

「あ、戻ってきた。お疲れ様、イリス、アンジェ、ルミナ」

「お疲れ～」「お疲れ様」

事前に決めていた集合場所だった教会本部の中庭で待っていてくれ

たクラリス、セレス、トリシュと合流。あの３人も、大隊に付いてた騎士や聖職者の事情聴取を行うことになってたけど、どうやら先に終わってたみたいで、わたし達も「お疲れ様」労いの言葉を返した。

「トリシュ、クラリス、セレス、次の聴取は？」

「今日はもうお終い」

「聖下の使いって人が来て、今日はもう帰って休んでいいって」

「私の元には兄様が来て、同じようなことを言われたの。明日からはオランジェ・ロドデンドロンも通常業務が始まるから、と・・・」

「通常業務と言っても、自治領内の秩序管理だけど」

あと、局からの応援要請が入れば、そっちに協力することにもなる。昨日、管理局法への再加入を果たした騎士団だけど、いくらクーデターによるものといえ管理局と敵対して、さらには迷惑を掛けまくった影響は甚大で、仲の良い局員が治めてる部隊（ナカジマ三佐の１０８部隊とか）じゃないと、たぶん応援要請は入ってこないって思う。

「そんなわけだから、今日はうちで休んでって。車で迎えに来るように連絡はしておいたから」

駐車場へと向かう道すがらトリシュ達にも、ルミナとアンジェにし

たような今後についての質問をした。

「局に戻るか騎士団に留まるか、か・・・。ミヤビとの約束を思えば局に戻るのがいいと思うけど・・・」

「アンジェの意見もまた一理あり、ね。弱体化した騎士団もそうだけど、騎士団の象徴であるズィルバーン・ローゼの隊長、シュベーアトパラディンの不在もまた問題かと」

騎士の武器＝剣というセオリーに従って、剣騎士こそ騎士の中の騎士ってことになってる。だから剣騎士最強のシュベーアトパラディンが一番偉いのだ。

「イリスはどうするの？　シュベーアトパラディンは目標でしょ？」

「でも1度シュベーアトパラディンになったら、局員にはもう戻れないよ？」

「だから悩んでるんだよね～。正直、大隊側に付いていた騎士の大半が、練度の高い３０歳より上の連中ばかり。剣騎士に至ってはＡ級の大半が裏切り者だった」

Ｂ級の中からシュベーアトパラディンを選出するわけにはいかない。なら残るＡ級のわたしがなるしかないわけで。でもそうしたらミヤビとの約束を破っちゃうし・・・。そう頭を抱えてると・・・

「ならミヤビを騎士団に誘ってみれば？　彼女強いし、ズィルバー

ン・ローゼに入隊にするには十分な実力だって思うけど？」

「そうしたらルミナの騎種と被るのでは？　彼女も拳闘主体の戦術だし」

「ルミナのツァラトゥストラって、腕輪の他にも十字架型に変形するでしょ？　アレに刃を付けて斧とか鎌にすれば・・・。私が騎乗騎士、イリスが剣騎士、トリシュが弓騎士、アンジェが打撃騎士、ルミナが斧か鎌、ミヤビが拳闘騎士、槍騎士は・・・セレス？」

「私のデバイスの形状を言ってみてよクラリス」

「あと、いつ私が斧か鎌に騎種変更するって言ったよ」

あーだこーだとみんなが騒ぎ出す。そんな中、トリシュがわたしを肘で小突いて、『ルシルさんはどうするの？』って聞いてきた。そうなのだ。ルシル、それとアイリはきっと局に戻る。リアンシェルトの命令で、あくまで一時的に騎士団に出向していたに過ぎない。彼は内務調査部のエースで重宝されてる。だから・・・。

『ルシルは残ってくれないよ。前々から騎士団と局の両方に籍を置いてくれるように頼んでたけど、結局イエスは貰えなかったし』

『やはりみんなが揃って同じ部隊というわけにはいかない、と・・・』

ルシルが好きっていう同士にしてライバルであるトリシュも、ルシ

ルとは離れたくないだろうけど、これればかりはどうしようもないと思う。

『うん。さすがにもう何かを諦めないとダメだね～』

さらに言えば、ルシルは局を辞めそうな気がする。"エグリゴリ"は残り2体。未だ行方の知れないガーデンベルグって奴、そしてリアンシェルトだ。本局の最高幹部入りを果たしたリアンシェルトの救済となれば、知らない人にとっては殺人と同義だ。

（ルシルの、セインテストとしての存在意義は、今や局と教会に知れ渡ってるとはいえ、リアンシェルトをエグリゴリだって言っても信じてもらえるかどうかも判らない）

となれば、ルシルは局を辞めて、わたし達の元から離れてくかもしれない。わたしにも至れる考えだ。フィヨルツェンがいなくなった今、はやても至っていてもおかしくない。だからと言ってどうすることも出来ないけど・・・。

「まぁとにかく。みんなは自分の思うがままに、往きたい道を進んでほしい。一緒の部隊にならなくても、心はいつも一緒だから」

わたしは答えを出せないまま、そう締めに入った。トリシュ達はパラディンになるって夢を持ったままでいてほしいし、ルミナとセレスは局と騎士団、どっちに付いてもいいし両方でもいい。

「イリスの言うとおりですね」

「うん」

「いま焦らなくても、イリスも３０歳になれば騎士団に戻って来るんだし」

「それまでは・・・それまでは？」

「結局、シュベーアトパラディンの問題の解決にはなってない」

「誰がシュベーアトパラディンに相応しいか。難しいところね」

そんな話をしながら駐車場に到着したところで、「お疲れ様。面白い話をしてるわね」って声を掛けられた。声のした方に振り向けば、駐車場に隣接してる休憩所のベンチに座ってる「フィレス！」が居た。

「お姉ちゃん！」

母犬を見つけて駆け寄る子犬のようなセレスに続いて歩き寄りながら「お疲れ様でーす」って返す。そして今まで話してたシュベーアトパラディン問題についてを、フィレスにも話してみた。

「なるほど。確かにＢ級の剣騎士をシュベーアトパラディンに据えるのは、ちょっとまずいかもね。イリスは嫌・・・と言うより、まだ、って感じなんだよね？」

「うん、まあ・・・。騎士団が今大変なのは理解してるけど、もう少しだけチーム海鳴と一緒に働いていたいんだ」

部署も違うし、同じ任務に就けるわけでもないし、局を辞めても変わらないんじゃないかって思う。だけど局員として一緒っていう気持ちを味わってたい。そんな風に考えてしょんぼりしてると、フィレスが「よし、判った」ベンチから立ち上がった。

「イリスが戻ってくるまでの間、私がシュベーアトパラディンとして、騎士団のリーダーに立つわ」

ニコって満面の笑顔を浮かべたフィレスがそう言った。驚きはしたけど、それしかない、とも思ってしまったわたしは無言になっちゃった。

「た、確かにフィレスさんなら、名実共にパラディンには相応しいと思いますけど・・・」

「私のお姉ちゃんだもん、パラディンになったっておかしくないよ！」

えっへん！て胸を張ってるシスコン（セレス）は放っておいて、アンジェの言うようにフィレスならシュベーアトパラディンに相応しい。部隊を率いた経験も抱負だし、何より強い。

「ただ、イリス。あなたが騎士団に戻ってきて、シュベーアトパラディンになりたいと言っても昇格試験の時、私は本気であなたを潰しにいく。それ位の覚悟は出来てるわよね？」

「もちろん。八百長で譲ってもらおうなんて始めから考えてないよ。あと7年だけ、わたしに時間をちょうだい」

フィレスがシュベーアトパラディンになってくれる。それでわたしの気持ちも固まった。局に戻ろう。残りの時間を局員として過ごし、30歳の誕生日に合わせて騎士団に移る。それがわたしの人生設計だ。

「ま、しょうがないんじゃない？」

「ですね。親友の意思を尊重しましょう」

「それでは私たちは先にパラディンになっているから・・・」

「あとで追い付いておいで、イリス」

「じゃあ私も局に戻るよ。ミヤビとの約束を優先する」

「セレス。あなたも局の特騎隊に戻って。騎士団の活動は縮小されるから、多少の人材減衰でもやっていけるわ」

「・・・判った。お姉ちゃんがそう言うなら」

あとは父様の説得だけど・・・。これが一番苦労しそうだよ。溜息を吐いてると、フィレスは「ところで、ルシルの容態は？　彼、大丈夫なの？」って話題を変えた。みんなが一斉に口を噤んで、わた

しへと目をやった。

「昏睡状態で本局医務局に搬送されてから3日経つけど、付きっ切りのアイリからは朝と昼と夜の3回、連絡があるけど・・・」

アイリの話だと、第2無人世界セラタプラの兵器実験施設にてキュンナとグレゴールを撃破したあと、眠るように意識を失ったみたい。そこから起こそうとしても目を覚まさず、アイリとミヤビはすずかとシャマルに連絡して、スカラボのトランスポートによる直通転送でルシルを本局の医務局に搬送した。

「ルシルが目を覚ましたという連絡はまだない、と・・・」

「うん。だから今後の彼についての話はまだ出来なくて」

「でもイリスは局に戻ることを決めたし、ルシルが騎士団を辞めても問題ないでしょ？」

「トリシュは置いてけぼり食らうけどね」

「・・・・・はぁ」

セレスの言葉にわたし達がトリシュに振り向くと、思いっきり深い溜息を吐いた。トリシュにとっては最悪な展開だよね、これ。恨めしそうにわたしを見るトリシュから顔を逸らす。

「おほん！　まぁ私のことはいいとして。離れるのは辛いけれど、

ルシルさんが選んだことを尊重するだけ。それに戦闘後に昏睡状態に陥ったということは、それだけルシルさんの体に負担が掛かったということだと思う。ルシルさんと同じ隊で戦いたいと願うより、もう無理も無茶もしないでほしいって願うよ」

神さまに祈るように指を組んで目を伏せるトリシュ。その姿はとても綺麗で、思わず見惚れちゃった。そして自分自身には嫌悪した。ルシルと一緒に働くことを優先して、彼の体のことを心配するだけで気遣いもしなかった。

「トリシュの言うとおりかもね。しばらく休職くらいはした方がいいかも・・・？」

「それも含めて、ルシルの選択の尊重、か」

シュベーアトパラディンの問題が解決した後で起きた、ルシルに関する新しい問題。

「それで、どうすんのイリス？　本当にルシルが局を辞めるようなことになったら・・・」

「変わらないよ。確かにルシルと一緒って言うのも大事だけど、元よりわたしは、なのは達チーム海鳴のみんなと一緒が一番だった。そして大事な後輩、ミヤビとの約束。それが、わたしを局に戻ろうとさせる理由なんだ」

「そう。・・・よし。シュベーアトパラディンなんて面倒くさい、

騎士団の象徴なんて柄じゃないって思いでずっと知らん顔していたけど、妹分たちが自分の夢のために頑張っているんだもの。私も頑張るわ」

フィレスはそう言ってわたしやみんなの頭を優しくポンっと触って、「それじゃそろそろ行くわ」って、さっきまでわたし達の居た本部へ去っていった。セレスは最後までその背中に「頑張ってねー！」って声を掛け続けた。

それからフィレスの座ってたベンチに座って、迎えの車が来るまで待ってると・・・

「お、来た来た」

リムジンが1台、駐車場に入ってきた。運転席にはフライハイト家の女中長の1人にして、わたしの義理の姉になる双子姉妹の姉、ルーツィアの姿がある。そんな彼女が運転するリムジンが、わたし達の側に停車した。

「お待たせしました！」

ルーツィアが降りて、後部ドアを開けてくれた。みんなが「ありがとうございまーす！」お礼を言って乗り込んでく中、最後のわたしが「ありがとね、ルーツィア」礼を言って乗り込んだ。そして一路フライハイト邸へと走り出す車の中で、みんなと談笑してるとコール音が鳴り響いた。

「あ、わたしだ。はい。フライハイトです」

通信に出て名乗っても、無言が返ってくるだけ。みんなと一緒に小首を傾げてると、『アイリだけど・・・』ようやく相手が、アイリが声を発した。でもなんか元気がないし、なんだろう、涙声っぽい・・・。

「アイリ、どうしたの？　何かあった・・・？」

胸がざわつき始める。涙声で元気のないアイリ。そんなアイリからの連絡と言うことはルシル関連というわけで・・・。みんなの顔も不安一色になる。

『マイス――ルシルが、ちょっと前に目を覚ましたの』

「うん、良かった、良かったね」

1度はマイスターと言いかけたアイリが名前に訂正しながら、わたし達にとっての朗報を口にした。うん、ルシルがその・・・死んだ、とかじゃなくて良かった。みんなもホッとしてるけど、でも完全に安堵した顔じゃない。

「ルシルさんに、何かあったの・・・？」

『・・・うん。・・・ルシルが・・・歩けなくなった・・・』

アイリの言葉に、わたし達は耳を疑った。

Ｅｐｉｃａ５２事件後の顛末～Ｅｘ　ｐｏｓｔ　ｆａｃｔ　ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

最後の大隊との戦いが終わって、そして意識不明に陥ったルシル君が医務局に搬送されてから３日目の今日。私にある知らせが入った。

（ルシル君が、目を覚ました！）

シャマルから連絡を貰った私は、アインスとリインを伴って医務局へと向かっていた。診察区画から入院病棟区画に入って、ルシル君の病室へと向かう。搬送初日は集中治療区画の病室へ入れられてたルシル君やったけど命に別状はないってゆうことで、一般の個人病室に移されたのは昨日のことや。

「はやてちゃん、ここです！」

「３０２号室です」

「うん」

ドアの側に設けられてるタッチパネルに触れて、「お邪魔しま～す」とドアを開ける。

（ルシル君に抱きつこうか？　あーでもシャマルやアイリが居るや

ろうしな～）

アインスとリインも居るし、あんま過剰なスキンシップは控えよう。そう考えながら室内を見て、「え・・・？」私は呆けた声を漏らした。シャマルとアイリが床に伏せてるルシル君を抱き起こそうとしてた。

「ルシル君！？」「ルシル！」

私とアインスが真っ先に駆け寄って、遅れて「どうしたですか！？」リインが側に来た。

「ああ、はやて、それにアインスとリインも来てくれたのか？　ははは、3日ぶりらしいなじゃいか」

なんて笑うルシル君にシャマルが「笑ってる場合じゃないわよ！」涙を浮かべながら叱った。その様子にリインがビクッてなって、私とアインスも呆気にとられた。

「な、なに？　ルシル君に何かあったん・・・？」

「それが・・・」

シャマルがルシル君を見つつ言いよどんだから、代わりにルシル君が「膝から下の感覚がね、無いんだ」なんて、そんな苦笑いをしながら言うような内容じゃないことを口にして、私は「はい？」聞き返した。

「そ、それって、足が動かないってことですか・・・！？」

リインのその確認の言葉で、ルシル君の言葉がようやく頭に浸透した。口が震え始めて、「うそ・・・」そんなことしか言えへんかった。そんな私とは違い、アインスが「掴まれ、ルシル」ルシル君を仰向けにしたうえでお姫様抱っこして、ベッドの上に戻した。

「すまないな、ありがとうアインス。アイリも、布団ありがとう」

「うん・・・」

「ああ、気にしないでくれ。しかし・・・本当なのか？　その、足の感覚が無いというのは」

アイリが掛け直した布団の高さをお腹の方にまで調整したルシル君は「本当だ。その所為でベッドから落ちたからな」肩を竦めてやれやれって首を横に振ると、シャマルが「本当に驚いたわよ、もう」小さく溜息を吐いた。

「すまん。・・・あ、そうだ。俺が目を覚ましたこと、もうみんなにも伝わっているのか？」

「あ、ううん。真っ先にはやてちゃんに連絡を入れたから、シグナム達にもなのはちゃん達にもまだ伝わってないわ」

「じゃあ、アイリがシャル達に連絡してくる」

「リインはシグナム達に連絡するです」
「では私がなのは達に連絡しておきます」

元気のないアイリはぐすっと鼻を鳴らして、袖で目を拭いながらトボトボと病室から出ていった。アインスとリインもそんなアイリに付き添って病室を出た。アイリの様子が私を冷静にさせてくれた。アイリ達からルシル君へと視線を戻して、「原因は判るんか？」聞いてみた。

「あー・・・そうだな、フィヨルツェンとの闘いで少しばかり魔力を消費し過ぎたようだ。アイツ、想定外の魔術を使ってきたんだよ。こちらも相応の魔術を使ったんだが・・・。おそらくソレが原因だろう」

「そう・・・か。シャマル。ルシル君の足、治るんか？」

魔力の消費が原因ってゆうなら、魔力が回復すればきっと治るとは思うんやけど・・・。ルシル君がまた歩けるようになるんかをシャマルに聞いてみる。

「精密検査をしないことにはなんとも・・・。ルシル君。コード・エイルで治すとか出来ないの？」

「待て、シャマル。おそらくとは言え原因は魔力の過剰消費だぞ？エイルの魔力でさらに悪化しそうだ」

「アインスの言うとおりかもしれない。とりあえず俺の魔力の回復を待ちつつ様子見がいいだろう」

「ご、ごめんなさい！　そうよね！　・・・精密検査を行うための手続きを済ませてくるわ。はやてちゃん、アインス、リイン。少しの間、ルシル君の見ていて上げてください」

シャマルが病室を後にするのと入れ替わるように「シャルに連絡して来た」アイリが戻ってきた。アイリの話やと、シャルちゃんやトリシュたち騎士組は今から本局へ向かうと明日の仕事に間に合わへんってことで、お見舞いは次の休みになるってこと。なのはちゃん達は勤務中ってゆうこともあって、メールだけを送ったみたいや。

「みんな、心配してたか？」

「当たり前だよ。シャル達、ルシルが歩けなくなったって知ってすごくうろたえてた。すぐにでも飛んできたいって言ってたよ。ルシルからみんなに連絡して、安心させてあげると良いと思う」

「シグナム達は仕事が終わり次第、お見舞いに来てくれるそうですよ、ルシル君」

「私の記憶が正しければ、なのは達は今日みな勤務日のはずだったからメールで連絡しておいた。返信がないところを見ると、やはり今は勤務中のようだ」

「判った。ありがとう、アイリ、リイン、アインス。じゃあ早速シャル達に連絡して見みるか・・・」

ルシル君がシャルちゃんに通信を繋げる間、私とアインスとリインは室内のソファに腰掛けて、シャマルとアイリはベッド側にあった４脚のパイプ椅子に座った。

「よう、シャル。今、大丈夫か？」

『ルシル！　良かった、元気そうで！』

『ルシルさん！　アイリから、足が不自由になったと聞きました！　大丈夫なんですか！？』

シャルちゃんにトリシュ、そしてルミナ、セレス、クラリス、アンジェと順繰りにルシル君を心配する声を掛けていった。ルシル君もシャルちゃん達の気遣いにお礼を言い続けた。

『それで、実際のとこどうなの？　まさか、車椅子生活になるわけじゃないよね？』

「とりあえずは魔力が回復してからだな。で、エイルで治療してみる。それでダメなら車椅子だ。ま、アイリやザフィーラが居てくれるから、そんなに不便はないと思うが・・・」

そこまで言うたルシル君が私を見たから、「？？」小首を傾げてると、ルシル君が少し寂しそうに「一緒に食事を作れなくなるが」っ

て苦笑い。うちのキッチンは広めやけど、確かに車椅子が入るといろいろと動きが制限されそうや。

「あ・・・うん、それは残念や、ホンマに・・・」

ルシル君がシャルちゃんのお家にご厄介になる前は、よくルシル君と一緒に料理してた。当番制でもあるから毎日とはいかへんかったけど、それでも楽しくて、幸せな時間やった。そんな時間がもう2度とないと想像すると鼻の奥がツンとなった。

『モニター越しとはいえライバル2人の居る前で惚気とかやめーい！』

『イリスの言うとおり！　はやて、ルシルさん！　割と悔しいから中断を！』

「ははは。まぁそんなことより。俺が倒れた後、局と騎士団がどうなったのか教えてくれ」

『そんなことて。まぁいいや。確かに3日も寝てたんだから気になるでしょ』

そんなわけでシャルちゃん達は、騎士団が管理局法にもう1度加入したこと、強制休職を強いられてた騎士たちが各自自由に局の仕事に戻ることが出来たことを伝えた。局と騎士団が再び以前みたいに協力関係に戻ったことになるんやけど・・・。

『クーデターが原因でもやった事はベルカ人だからね。風当たりが

ちょっと厳しいかも。最後の大隊に付いた騎士には、最大で除隊や罰金に懲役。これが適用されるのは、プラダマンテを始めとしたパラディンや各隊長といった団内幹部級ね。そっから下の騎士や技術室メンバーは期限付きの減給、もしくは禁固刑とか、まぁ他にもいろいろと処罰を食らってる』

『そういうこともあり、かなりの団員を失った騎士団は今、活動を縮小しています。自治領内の平和維持、そしてロストロギアの捜査と管理。領外での任務は基本せず、局より要請があれば協力しますけど・・・』

「先ほどの風当たり問題か。なるほど、騎士団の現況は判った」

ベルカ関連の話が一段落したことで「じゃあ次は、管理曲関連の話やから私やね」って話に参加。

「とは言うても、騎士団ほどの変化はあらへんけど。そやから騎士団との共同で行った各施設での捜査結果を報告するわ」

まずは大隊本部での捜査結果からを伝えた。クローンと挿げ替えるために捕らえられてた人たちはみんな無事に保護。それぞれ職場に復帰したり、今なおリハビリのために入院中やったりや。

「首謀者やったグレゴールとキュンナはさすがに局の方でも聴取することになって、すでに本局に移送済みや」

「そうか。リナルド・トラバントは？」

ルシル君の問いに私はすぐに答えずモニターに映るシャルちゃんを見ると、頷いたシャルちゃんが『殺された。プラダマンテにね』代わりに答えてくれた。それを聞いたルシル君は「大丈夫か？」シャルちゃんに気遣いの言葉を掛けた。

『っ！』

シスター・プラダマンテは、シャルちゃんにとって師匠で友人で、かけがえのない人やった。それが敵やっただけではなく、殺人を行ったってことになるとそのショックは測りしれへん。シャルちゃんは少し俯いた後、『大丈夫。大丈夫だよ。ありがとう』顔を上げて笑顔を浮かべた。

「・・・そんで、えっと、大隊に下ってた魔導犯罪者、あとフリーランス魔導師派遣会社エモーションサービスカンパニーの代表取締役、エーアスト・ルター。本名、雷光の天精アインス、以下派遣魔導師の逮捕も終わってる」

『大隊の構成員はほぼ逮捕できて冬休みも終わったから、ヴィヴィオ達、それにルーテシアとリヴィアも家に帰したよ』

「フォルセティが帰ってきて、ヴィータがホンマに嬉しそうやったわ」

私としてもフォルセティになかなか逢えへんかったから、思わず抱きしめて迎えたくらいや。

「で、本部内で見つかった聖王のゆりかご2番艦の処遇やけど・・・」

「・・・ん？」

モニターに表示された逮捕者名簿の一覧を穴が開くほど見つめてたルシル君がページを何度も切り替えてるから、誰かの名前を探してるってゆうことは察することが出来たから「どうしたん？」って聞いてみた。

「待ってくれ。1つ聞いておきたい。ミミルと、その使い魔のフラメルとルルスは捕まえられたのか？」

ルシル君からの確認に、私たちは首を横に振って否定を示した。騎士団が技術室メンバーへの聴取で得た捜査情報は、"イリュリア・クーデター事件"と呼称されることになった今回の事件の捜査に関わった部署へと寄越され始めてる。それもマリアンネさんとリアンシェルト総部長の連携によるものや。本局の最高幹部と聖王教会のトップが協力してくれるから、下も協力しやすくなってる。その情報の中にはミミルさん達が捕まったってものはなかった。

「ううん、捕まってへん・・・」

リインの誕生に力を貸してくれたあの優しいミミルさん達が、まさかガンマにあんな酷い仕打ちをしたと思いたくなかった。それだけやない。クローンを生み出したのも、自爆用のアンドロイドを造っ

たのもミミルさん達・・・。

『うん。ミミルさんが大隊の技術主任として迎えられていたって話は、技術者たちの聴取で明らかになったけど・・・。でも大丈夫じゃない？　技術者として放置するのは確かに危ないけど、ミミルさんの家はすでに家宅捜査されてるし、騎士団が常駐してくれてる。それに新しく見つかった施設にも騎士や局員が居てくれてる。ミミルさんが行くところなんてもう・・・』

「いやダメだ。リアンシェルトの言葉ひとつで何を仕出かすのか判らない」

「リアンシェルト総部長？」

『アイツとミミルさんが何の繋がり？』

シャルちゃんと一緒に小首を傾げる中、胸の内では、まさか、って言葉が浮かんできてた。大隊には"エグリゴリ"のフィヨルツェンがおった。なら、リアンシェルト総部長も何かしらの協力をしてたかもしれへん。

「ミミル、それにフラメルとルルスは・・・エグリゴリだった」

「『はい？』」

「なん・・・だと・・・！」

「エグリゴリ、ですか・・・・！？」

予想だにしない言葉がルシル君から発せられた。モニターの向こうに居るトリシュ達も驚きで息を呑んだのが判ったくらいや。若干フリーズしてる私たちにアイリが「間違いないよ」って言うた。

「エグリゴリの翼、エラトマ・エギエネスを発動してたし。何よりミミルが言ったんだ。本当の名前は、パイモン・エグリゴリ。イリュリア戦争時にはすでに誕生していて、戦後に起動。そしてイリュリアやベルカの技術を後世に残すために、戦場には出なかったって」

「使い魔のフラメルとルルスは、ミミルが造り出したエグリゴリだ。ベルカ崩壊時からリアンシェルトと共に行動し、管理局設立にも一役買い、技術部の最初の部長だそうだ」

次々とルシル君から発せられる情報に頭がくらくらしてきた。

「ミミルは強いのか？　フラメルとルルスは・・・？」

「フラメルとルルスは、ゼフォンクラスらしい」

ルシル君の口から聞き慣れない名前が出て、心当たりのない私やリイン、シャルちゃん達が「誰？」って聞いた。答えてくれたのはルシル君（オーディンさんの記憶は受け継いでないからしょうがないけど）でもなくアイリでもない、「イリュリア製のエグリゴリです」アインスやった。

『イリュリアのエグリゴリ！？』

『あ、エリーゼ様の日記に載ってました。確か・・・ミュールとゼフォン』

「ああ。イリュリアの技術部とエグリゴリが協力して造ったものだが、ゼフォンはオリヴィエ殿下に斃され、ミュールはマイスター・オーディンと私とザフィーラで斃した。神秘カートリッジや、ルシルのドラウプニルが有れば、勝てるような相手だが・・・」

当時のことを思い返すためか目を伏せたアインスを見たリインが、同じ時代を生きた「アイリはゼフォンを知ってます？」って聞いた。

「知ってるよ。模擬戦したことだってある。当時は魔術師とか神秘とか知らなかったからね。当時のロード・ゲルトとのユニゾン中での模擬戦でボコボコにされちゃったよ」

対"エグリゴリ"の領分はやっぱり魔術師なんやって解かった。ただ、アインスの言うように魔術師が魔力を込めた神秘カートリッジ、それにオーディンさんが造ったってゆう"ドラウプニル"（以前、スマウグ戦のときに使わせてもらった）であれば、勝てるレベルなのは嬉しい情報や。

「ではミミルはどうなのだ、ルシル？」

「実際に闘ってはないから確実とは言えないが。ミミルの言葉を借りれば、ガーデンベルグ達は第1世代、自分やミュール、ゼフォン

は第2世代、フラメルとルルスは第3世代だそうだ。で、ミミルの神秘は第1世代と同格と思っていいだろう」

そやからルシル君は、フィヨルツェンとの連戦を避けるためにミミルさん達を見逃したらしい。

「ミミルはお前を狙ってくるのか？」

「判らない。ただ、俺を殺害せよ、との命令を受けてはいないし、これからも発令されない、とは言っていた。だがリアンシェルトの心変わりでいくらでも覆る」

「ああなるほど。それでさっきの言葉か」

リアンシェルトの言葉ひとつで、ってゆう話。ルシル君が自分を倒しに来る前にミミルさんに命じて、ルシル君を殺害させることだって考えられる。やっと、リアンシェルト総部長との激突までルシル君も心休まるって思ってた。それやのにこれじゃあ・・・。

『とにかく、捕まってないのはミミルとフラメルとルルスの3人だけで、3人とも広域指名手配されたから、とりあえず情報待ちってことで我慢して？』

「ああ、ありがとうシャル。で、はやて。途中で切ってすまなかったが、さっきのゆりかご2番艦の話を頼む」

「うん。あ、でもこれはシャルちゃんの方がいいかな？」

『そう？　資料はほとんど共有してるから、はやてからでも問題ないと思うけど。でも、じゃあお言葉に甘えて。そっちに資料を送るね』

ルシル君の前に展開してるモニターに、今度は"ゆりかご２番艦"の調査結果が表示された。２番艦は、オリジナルの"聖王のゆりかご"より半分くらいの大きさやけど、その分小回りとか機動性が上がってるそうや。さらにはオリジナルには無かった、後方防衛のためのエネルギー砲台やレールガンが備え付けられていて、さらに無人戦闘機用の格納庫、レールガン用の砲弾やミサイルなどの生産施設も網羅。

「あと、オリジナルの駆動結晶と思しきものが発見されたんよ」

『プライソン戦役時にプラダマンテがキュンナを伴ってゆりかごに突入した際、彼女がスキルを使って強奪したってことが、技術部メンバーへの聴取で判明したの。んで、全兵装の解除、魔導駆動炉の封印を条件にあの諸島に置いておくことが、局と教会の合意の下に許可されたの。ま、完全な置物としてだけどね』

『大隊技術者の聴取や残された数多くのデータから、２番艦はオリジナルに比べてサイズが小さいとは言え造りは完全に模倣されているそうで、歴史家諸氏が大騒ぎです』

シャルちゃんとトリシュの話にルシル君は「兵器として終わっているなら、もうヴィヴィオの拉致の心配はないな」って安堵した。ヴ

ィヴィオが狙われてた理由は、２番艦の核にするためやって聴取で判明したし、２番艦の再起動が出来へん以上はもう安全やろうね。

「ゆりかごを始めとした各兵器もようやく全てが無力化か・・・」

地上本部やミッドチルダを乗っ取った後の、正義と平和と秩序の象徴として"聖王のゆりかご"を配置しようとしてた。今回沈めたモルゲンデメリング艦隊も、戦役時に潰した航空空母や列車砲などの兵器群もすべて、ベルカを再誕させたあとの抑止力。兵器工場などで眠ってた投入前の兵器は順次解体される予定や。

『キュンナも、グレゴールがプライソンに依頼したことで生み出されたようだし。古代ベルカから続くイリュリアとの因縁も、これで終わりだと思うと嬉しい限りだよ』

それから、今のところ判明してる捜査資料や、融合騎や生き残ったクローンをどうするか教会と協議してることをルシル君に話し終えた後、ルシル君が「ベルカの地は、本当にテラフォーミングされているのか？」って聞いてきた。

聴取内容の中には、フィヨルツェンがルシル君をベルカの地で殺害し、戦域に溜まった魔力や、消失する前のリンカーコアから魔力を取り出して、それをテラフォーミング用に組んだ術式の発動に利用する、って記されてた。その逆も然りで、フィヨルツェンが負けたときは、彼女の魔力を使うことになってたようや。

『ベルカの調査は何が起きるか判らないから、まずは騎士団が行うことになったんだけど・・・。昨日行われた第1次調査で、確かに

死んでいた大地に生が蘇ったって言う報告を貰ったよ。アウストラシアは王都ザンクト・ボニファティウスの土壌は完全に再生していて、再生範囲は少しずつ拡大していってるみたい』

『これは本当にベルカの再誕が叶うかも知れないと、教会では大騒ぎですよ』

『もしベルカが再生すれば、そちらに本部を移すしてもいいのでは？って話も出てきてるしね』

『でもあと何年掛かるか判らないけどね。試算だとベルカ全体が再生にするまでに２００年は必要って話だし』

『私たちはもうお婆ちゃんを通り越して骨だよ、骨』

クラリスちゃんが肩を竦めると、『死ぬまでには1度行ってみたいよね』って言うたシャルちゃんに、『うん』トリシュ達が首肯した。私としても、アインス達の生まれ故郷には行ってみたいって思うてる。

『とまあ、今ルシルに伝えられる情報っていうのはこれくらいかな』

「うん。そやから今日はもうゆっくり休んでな」

「最後にもう1つだけ。これはアイリにだが・・・」

ルシル君に名指しされたアイリが「あ、うん、なに？」ベッドに寄

り添った。

「俺の今後の所属はどうなるか、リアンシェルトから何か聞いているか？」

リアンシェルト総部長の独断によって局員を休職させられて、騎士団に派遣されてたルシル君とアイリ。大隊が壊滅した今、ルシル君とアイリが騎士団に留まる理由はもうあらへん。アイリがチラッとシャルちゃんの映るモニターを見やった。

（正直、私たちも知らへんから気にはなってた）

「リアンシェルトからは特に何も。強制休職させられてた騎士への休職指示は解除されてるけど、戻るかどうかは個人の意思を尊重するって話だから・・・」

「俺が局に戻るかどうかは俺次第か」

私とシャルちゃんとトリシュは、ごくっ、と唾を呑んで、ルシル君が選択する未来を待つ。座ってたルシル君は上半身をベッドに預けて、「とりあえず回復が先だな」って、局か騎士団かの選択をこの場で決めへんかった。

「ごめんな、はやて、シャル、トリシュ。アイリも、すまん。今は自分の状態を整えることを優先したいんだ」

「あ、ううん！　気にせんでルシル君！」

『うん、全然大丈夫！』

『はい！　どうぞご自愛を！』

「アイリは、ルシルの選択した路を一緒に進むだけ。それが局員でも、騎士でも、ただの一般人でも変わらないよ」

ルシル君が騎士団どころか局を辞める可能性があるってことは、なんとなく気付いてた。それは寂しいけど、ルシル君の狙う"エグリゴリ"はあの2人や。1人は居場所の知れるリアンシェルト総部長。そしてもう1人は未だ行方知らずなガーデンベルク。となれば、ルシル君はもう休んでもいいとも思う。

（万全の状態で、戦って、そして勝って欲しいから・・・）

すべてが終わったら、私とシャルちゃんとトリシュで決着を付けるのもいいかもしれへんな。

この後、みんなで談笑してるところに、シャマルが検査室を確保したってゆうことで戻ってきた。車椅子に乗せられたルシル君と、付き添いとしてアイリが病室を離れたことで、私たちも解散ってことになった。

Ｅｐｉｃａ５３再始動～Ｔｈｅｉｒ　ｄｒｅａｍｓ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

ようやく戻ってこられた本局に、嬉しさいっぱいのわたしはスキップで廊下を進んでいた。そんなわたしの後ろから「タイトスカートだってこと、忘れてない？」って、同じように局の青制服を着てるルミナの呆れ声が聞こえた。

「ギリで見えないから大丈夫っしょ♪　それより早く行こうよ！　みんな、もう待ってるかもしれないしさ！」

わたし、ルミナ、セレス、クラリスの４人は今、特務零課――特殊機動戦闘騎隊（こっちの方が通称ね）のオフィスに移動中だ。そんなウキウキ気分でスキップするわたしの様子に、わたしを知る局員たちが微笑ましく眺めてくる。

「ティファ先生、クララ、セラティナも、本局勤めだしね」

セレスの言うように、名前の挙がった３人は特騎隊の強制活動休止に伴って、本局内の部署に異動した。ティファ――ティファレトは以前から務めてる医務局、クララは転移スキルを買われて護送官、セラティナは海上警備部。ちなみにミヤビは地上勤務の鉄道警備隊。

「でも大丈夫なの？　ティファ先生、医務局の副局長になってるし・・・」

「大丈夫だよ、クラリス。ティファも、特騎隊への復帰を望んでたから」

脅威対策室から特騎隊の再始動許可のお達しがわたし達メンバーに送られてきて、それぞれ異動願いを出してる。でも、さすがに「ティファも立場的に長期遠征任務はダメみたい」って付いちゃう。そりゃ医務局のナンバー2になったわけだから、あんまり本局を空けるわけにはいかないんだよね。

「医療スタッフの人員は足りているけど、補充はどうするの？」

「・・・うーん。要る？」

わたしがそう聞き返すと、3人は「要らない」首を横に振った。自分で言うのもなんだけど、特騎隊は管理局内に存在する全ての部隊の中で最強だって思ってる。全員がマイナス、ニア、プラスを含めたSクラスだ。余程のことがない限りは、医務官が必要なほどのダメージは受けない。

「（次元世界の中でも最高クラスのティファの治癒魔法だって、特騎隊としての活動中は1度も使わずに済んでたし）だよね～」

「そうそう。それにアイリも居てくれるしさ」

「だけどルシルはもう頼れないよね？　前線復帰できるか判らないんでしょ？」

「んー、たぶん・・・。でもルシルも特騎隊に復帰するつもりだって言ってくれてたし」

「事務方、サポート班としてでしょ？　まぁ、ルシルが抜けたくらいで特騎隊が弱体化するわけじゃないけど」

「でも空戦や対多、対兵器戦とかは、ルシルの魔法の方が効率いいからな～」

「そこは、わたし達がきっちり役割分担して頑張ろうじゃん」

そうしてわたし達は、捜査部フロアの一画に用意された特騎隊オフィスの前に到着。特騎隊オフィスと廊下を隔てるスライドドアの横には、Ｔｈｅ　０ｔｈ　Ｅｘｔｒａ　Ｆｏｒｃｅって刻印されたプレートがある。この隊を設立することを決め、脅威対策室からプレートのデザインをどうするか聞かれて、日本で好きになった桜の花を背景に彫ってもらった。

（わたしのキルシュブリューテも、桜の花って意味だし）

わたし達はドアの前に立って、「さぁ、行こう！」１歩踏み出す。ドアがスライドして開いて、私たちを迎え入れてくれた。久しぶりのオフィスの中に入ると、「おかえりなさい！」出迎えの挨拶が掛けられた。

すでに待ってくれていたスタッフみんなの敬礼に、わたし達も「ただいま！」って敬礼を返した。部隊長デスクへ続く動線の両側に立

つみんなの顔をちゃんと見ながら歩みを進めてると、今この場に居るのがおかしい髪色が目に入った。

「・・・って、ルシル！？　何やってんの！？　まだ退院できてないでしょ！」

右側の列の1番奥、わたしのデスクに近い場所に、車椅子に座ってるルシルが居た。ビックリしてるわたしに向かって、「いやだって、俺も特騎隊だし」なんて小首を傾げた。

「特騎隊の再始動日だと言うのに、俺ひとり医務局のベッドで寝ていられるか。ティファ先生に少し無理を言って連れてきてもらったんだ」

ルシルの向かい側に立つティファをジロッと見ると、ティファは「主治医のシャマル先生にも許可貰ってる」ってポツリと言った。ルシルの後ろに控えてるアイリに目をやると、「間違いなく♪」ウィンクしてきた。

「なら、いいか。でも体調が悪くなったらすぐに戻ってよ？」

「了解だ。ま、足が動かないだけだから問題ないさ」

それだけでも十分な大問題なんだけど。ひとつ嘆息した後にわたしは、「ミヤビ。お待たせ」嬉しそうにしてるミヤビに声を掛ける。

「はいっ、シャル隊長！　約束を守っていただいてありがとうござ

いました！　ミヤビ・キジョウ、この日をずっと夢に見ていました！」

涙目になってるミヤビが愛おしくて、わたしは「ごめん、ありがとう！」彼女をハグした。この子もハグし返してくれて、喜びを分かち合った。そして、わたし1人で部隊長デスクの前に立って、ルミナとセレスとクラリスはそれぞれ自分のデスク前に立つ。

「コホン。えー、みんな久しぶり！　本日より特務零課・・・特殊機動戦闘騎隊の活動を再開します。わたしたち特騎隊は、臨時任務に即応するための部隊です。身内の恥ですが、最後の大隊によって引き起こされた今回のイリュリア・クーデター事件によって管理世界に起こされた混乱は、今なお影響があります」

特騎隊の半数はザンクト・オルフェン出身者だ。全員が騎士でもないし魔導師でもないけど、今回の事件で知り合いが大隊関係者だったってスタッフも何人か居る。だからわたしの言葉に俯くスタッフが何人もいた。

「最後の大隊が壊滅したことで、抑圧されていた犯罪組織や犯罪者が再び悪事に手を染め始めた。わたしたち特騎隊は、中でも脅威レベルの高い連中を相手にすることになる」

特騎隊の仕事は、普通の武装隊などじゃその事件を解決できないと判断された際、その事件専門の他特務隊が設立までの期間、被害の拡大を食い止めることだ。ま、わたし達が強すぎて、そしてスタッフが有能なおかげで、専門部隊の設立までに解決しちゃうんだけど。

「たぶん、これから忙しくなると思う。だから・・・だから、みんなで力を合わせて、管理世界、ううん、次元世界の平和を守っていこう！」

わたしが高々と右拳を突き上げると、みんなも「おおー！」拳を天井に向かって突き上げた。スタッフの士気も上々で、溜まってた仕事をし始めたみんなの様子を一通り眺め終えた後・・・。

「ねえ、ルシル。あなた、本当に医務局に戻らなくても大丈夫なの？」

隊長であるわたしの補佐官を務めるルシルも、隊長デスクの近くにある副官デスクに着いて、滞ってた特騎隊の書類整理をし始めたから、もう1度聞いてみた。さっきも大丈夫みたいなことを言ってたけどさ、やっぱり不安は完全に拭えない。

「心配するな、シャル。何せこのオフィスには今、ティファ先生とアイリが居るのだからな。容態が急変してもすぐに診てもらえる」

ルシルが信じてるティファとアイリは他の医療スタッフと、特騎隊の遠征任務用の母艦となるＬＳ級艦船シャーリーンに積み込む医薬品を確認してる。

「・・・えっと、しつこいのは、わたしがあなたを心底心配してるってことで、その、そこは解かってほしい」

「当たり前だろ。ありがとう、シャル。でもこれは、俺が特騎隊の一員として意地だ。再始動日の初日くらいはしっかり務めを果たし

たい。ま、明日からもうしばらく入院生活を満喫させてもらうよ」

「ん。それでいいんだよ」

ルシルに抱き付きたい衝動を抑えて、わたしも仕事を開始。モニターとキーボードを立ち上げて、活動休止前から溜まってる仕事の片付けに入る。

（明日のパラディン昇格試験、応援に行けたらいいんだけど・・・）

トリシュ、アンジェ、それにフィレスとパーシヴァル君は明日、メンバーが総入れ替えになる銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼの入隊資格であるパラディンになるため、同じ騎種の騎士やシスター達と総当り戦を行う。

トリシュは弓騎士、アンジェは打撃騎士、フィレスは剣騎士、パーシヴァル君は槍騎士の騎種別で試験だ。応援には行けたら行くって話をちょっと前にしてたんだけど、特騎隊の再始動と被っちゃうなんて。

（ごめーん！）

心の中で土下座しながら、わたしはカタカタとキーボードのキーを打ち続けた。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒トリシュタン†††

子供の頃から夢だったパラディン。その夢が叶うかどうかのパラデ

ィン昇格試験。私は弓騎士の頂点であるボーゲンパラディンの座を懸けて、他の弓騎士と総当り戦を行っている。
例年どおりなら昇格試験は１４日間と時間を掛けて、常に万全の状態で平等に試合に臨めるようになっていた。でも、大隊の一件で騎士の大半が試験に臨めるような状態ではなくなったことから、今日１日で全試合が終わる予定。

『トリシュ。アンジェリエですが、そちらの様子はどうですか？こちらは、やはりＢ級の騎士が多く、それに開会式で見て知ったとおり参加人数が少ないことで、もう試合が終わりそうです』

３試合を全勝で終わらせて控え室で休憩している私に、アンジェから思念通話が入った。

『弓騎士の方も似たようなもの。私たちオランジェ・ロドデンドロンのメンバーが、先のパラディンを打ち破ったって話もあって、相手の士気が少し下がってきてる』

ただでさえＢ級の騎士が多い中、私たちがそんな戦績を出してしまったことがかなり影響を出していた。けれど実際、私はボーゲンパラディンだったガラガース卿には勝てなかったし、アンジェとクラリスも魔術師化という、現代においては反則級のアドバンテージがあったこそ勝てた。それは２人も認めている。そう、厳密には私たちは勝ってはいない。

『けれど、長年Ａ級の１位を競い合ってたエクトルがいるの』

『エルネスタ・エクトルですね。騎士としての英才教育を受けていたあなたを、何度か打ち破った・・・』

先のザンクト・オルフェン決戦でも彼女は、自身の隊である黒篝火花騎士隊シュヴァルツェ・ツュクラーメンを率いて、裏切りの騎士たちを何十人と確保した。実績も実力も十分すぎる。

『相手にとって不足なし』

エクトルも3勝で休憩を迎えている。そして次の相手が彼女だ。今回の最大の試練とも言える彼女にさえ勝てれば・・・。拳をギュッと握って、これまでの彼女との闘いを反芻して、勝つイメージを思い浮かべていると、ズズゥーン！と足元が揺れた。

「っ！？」

聖王教会本部から少し離れた場所に建てられているここ騎士団訓練施設。五角形状に並ぶ5棟のドームが渡り廊下で繋がっている巨大施設で、そのうちの弓騎士試験が行われている第3クッペル内に・・・

『今の振動は、第2クッペルで行われているフィレス・カローラ、ボニファーツ・ド・バトラーの試合によるものです。安心して試験を続行してください』

そんなアナウンスが入った。セレスの姉の騎士フィレスと、イリスとA級1位を長年競い合っていたけど、2年前に除隊した騎士バト

ラーの試合。今回のイリュリア・クーデター事件で人手不足になったことで再入隊を果たした。そんなイリスと互角な騎士バトラーと、騎士フィレスの闘いなら、今の振動も納得できる。２人ともＳクラスの魔力を有する騎士なのだから。

『トリシュタン・フォン・シュテルンベルク、エルネスタ・エクトル両名、試合会場へ』

アナウンスで名前を呼ばれ、私は深呼吸を１回してから椅子より立ち上がり、控え室から出る。クッペルの中央にある試合会場とも呼んでいる訓練場へと向かう。

「シュテルンベルク・・・」

「エクトル・・・」

２つ隣の控え室から出てきたエクトルとバッタリ。アリシアさんとフェイトさんのハラオウン姉妹には劣るけれど綺麗な金の髪をフォーテール（一般的なツインテールのように頭の上の他に、耳の下辺りにもう２つテールを結んでいる）、深い青い瞳の右側にはモノクルを付けて、わたしと同じ女性用の騎士団服を身に纏っている。

「ボーゲンパラディンとなるための最大の障害だったガラガース卿が失脚した今、貴女を倒しさえすれば確実にパラディンとなれる」

別段会話する気がなかったけれど、隣に並ばれてしまえば仕方ない。私は「パラディンの切符は私が頂く」と告げると、エクトルは「そ

っくり返すわ」と小さく笑った。

「それにしても、シスタープラダマンテの失脚、リナルド元団長の死という形でトラバント家が没落したことで空席となった六家の座を狙おうとしていたら、まさかシュテルンベルク家がすぐに収まるなんて。一体どうやってマリアンネ聖下を篭絡したの？」

「特には。まぁシュテルンベルク家は、古くはシュトゥラから続く家柄であり、聖王家とも繋がりがあったから、それが理由では？」

挑発を受け流し、チラッと横目でエクトルを見てフッと鼻で笑って挑発返し。エクトル家も古い家柄ではあるけれど、シュテルンベルク家に比べればまだ新しいし、聖王家との繋がりはまったくない。

「・・・六家の座は奪われたけど、パラディンの称号だけは必ず、エクトル家が貰い受ける」

「はいはい頑張ってください」

「この・・・！　貧乳」

エクトルがボソッと呟いた単語を、私の耳はしっかりと聞いた。けれど、そんな安い挑発を受けるわけにはいかない。しかし彼女は調子に乗って、「２４歳でその小ささ。可哀想」なんて哀れんできた。うん、もうそろそろキレそう。

「ま、弓騎士であるなら小さい方がいいでしょうけど。でも小さい

と女性としては・・・ね。ふふ、小学生みたい♪」

プチ。

「貧乳がそんなに悪いの！？　大きかったらそんなに偉いの！？
というかそこまで小さくないわ！」

我ながら安い挑発に乗ってしまったと、怒鳴る最中に思っていたけれど、同姓とはいえ身体的特徴を馬鹿にするのは許せなかった。

「ひゃあん！？　な、何をするの！？」

エクトルの胸を両手で鷲掴んで、「それに、私と対して変わらないでしょうが！」女である私の小さな手に収まるほどの大きさの胸を揉みしだく。触れた限り、悔しいけど私より少し大きい。

「この、ちょっ、もう・・・ダメ・・・！」

「足腰立たなくしてやる！」

「ハッ！　は、な、れ、て！」

ドンッと突き飛ばされた私は、顔を真っ赤に肩で息をしているエクトルを見る。乱れた団服を調えて、私に指を差すと「胸のサイズと同じく絶対に負けないから！」それだけを言い放って、ひとり会場へ走り去って行った。そんな彼女を見送った後、私は自分の胸に手を添えて軽く揉んだ。

「・・・。いいもん。小さくたって、赤ちゃんにミルクあげられるもん・・・」

くすん。しょんぼりしながら私も会場へ向かう。スタジアムとも言える観客席のあるフィールドの出入り口は東西のゲート２つで、私は東から入った。そこで「少し遅刻ですよ、騎士トリシュタン」審判員に注意されてしまった。

「あ、はい。申し訳ありません」

早足でフィールドの中央に立つ。私と向き合う形で佇んでいるエクトルは目を閉じて瞑想中。向かい合う私たちに「それではこれより、騎士トリシュタンと騎士エルネスタの試合を行います」審判員が告げた。

「フィールド設定は森林。フィールド展開後、３０秒間の移動時間を設けます。そして合図と同時に試合開始です」

審判員が離れていき、「騎士甲冑と武装の用意を」と告げた。右耳に付けている十字架型の待機形態である「イゾルデ！」と呼び、起動させる。反りのある二振りの短剣の柄頭を連結させた弓へと変形させる。

「ブランジァン、起きなさい」

エクトルも団服の袖を捲り、ブレスレットを露にした。起動した〝

ブランジァン"は左前腕を覆う籠手となり、手首の両側からリムが伸び、ダークブルーの魔力弦が張られた。
騎士甲冑は、立て襟のブラウス、ペプラムジャケット、レギンス、前開きのオーバースカート、ハーネスブーツ。腰には物質矢を収める矢筒。そしてモノクルにレティクルが浮かび上がった。

『では、フィールド展開』

アナウンスが流れると同時、建造物シミュレータによって木々が投影された。私とエクトルの間に巨木がそびえ立ち、お互いの姿が見えなくなる。これから３０秒の間は移動時間。その間に狙撃ポイントを探すために動く。

（思ったより木々が多い。直線距離での狙撃は難しいかも）

そうこうしている内に『試合を開始まで５秒』そうアナウンスが流れた。４、３、２、１とカウントをして、『試合開始！』のアナウンスと共にブザーが鳴った。私は即座に木の頂上へと上り、探査用の魔力矢を１本と魔力弦に番える。

――這いずるは不明なる発信者――

魔力矢の先端、鏃だけを不可視化させたところで・・・

――弐竹――

森の中から魔力矢が１本と飛来。私は横っ飛びしながら弦を引き、

「往け！」不可視の魔力矢を射た。軸のところが消滅し、透明になっている鏃だけが飛ぶ。
エクトルはガラガース卿の弟子でもあり、使用する魔法は彼のものと同じ名前、同じ効果。けれどガラガース卿の下位互換とも言える魔法ということもあり、対処はしやすい。

（それに、彼女には兄様やはやてのような遠隔発生資質は無いから、矢の射出場所に必ず居る！）

今射た鏃――発信者は、直前に私に向かってきた魔力に反応して、その出所の近くで待機、そして私にだけ判る魔力波を放ち続けて、対象の居所を教えるというものだ。これでどこに隠れていようとも相手の居場所が判る。

「よっと」

木の枝に降り立ち、発信者より反応が来るのを待ちつつ、新たに生成した魔力矢を指の間に４本と挟みこむ。そして自前の目の良さを魔力で強化することで機能するようになる千里眼を使って、発信者と一緒にエクトルの姿を探す。

（見つけた！）

魔力矢を"ブランジァン"に番えていたエクトルと目が合った。彼女のモノクルも特別製で、私の千里眼と似たような機能を持つ。考えることは同じだ。でも勝つのは・・・

――滅び運ぶは群れ成す狩り鳥――

「私だ！」

――五乙――

共に放った魔力矢は、お互いの間で何十本という光線となって激突した。空に数え切れないほどの魔力爆発が起きて、視界を潰すほどの光を生み出して視界は潰した。けれど私には発信者の効果があるから、エクトルの居場所はもう掴んでいる。

「一気に決めにいく！」

新しい魔力矢を番え、私は勝利のために手加減無用の攻撃を行い始めた。

・――・――・――・――・

聖王教会騎士団の最精鋭部隊である銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼ。その隊に所属するための条件は各騎種、剣騎士、騎乗騎士、鎌騎士、斧騎士、弓騎士、槍騎士、打撃騎士の頂点、パラディンの称号を得ること。

最後の大隊の一件にて壊滅状態だったが、今日、パラディンを選定するために行われた試験によって、新しいパラディンが誕生した。

「聖王教会教皇兼教会騎士団団長、マリアンネ・ド・シャルロッテ・フライハイト。そして六家当主は、あなた達を新たなるズィルバ

ーン・ローゼに属するパラディンとして認めます」

パラディン昇格試験が行われていた5つのドームから成る訓練施設、その第1クッペルにて、ベルカ自治領ザンクト・オルフェンを治めるフライハイト家と、それに連なる六家の当主たちが、フィールドの中央に設けられたステージ上に居た。マリアンネを始めとした自治領の長たちの前には、新しいパラディンとなった騎士たちが横に並んでいた。

「では、騎種・剣騎士、シュベーアトパラディン、フィレス・カローラ」

「はい！」

教皇マリアンネの秘書官を務めるツィスカ・ヴェールマンが、ステージ脇から名前を呼んだ。呼ばれたフィレスが短い移動階段でステージに上がり、マリアンネの前で肩膝立ちをして頭を下げた。

「フィレス・カローラ。第8代シュベーアトパラディンに任命します」

マリアンネは隣に立つカリム・グラシアの持つクッションの敷かれた薄く長い箱から、1つの薔薇を象った記章を手に取り、フィレスの団服の襟に付けた。

「フィレス・カローラ、謹んで拝命いたします」

一礼をした後、フィレスがステージを降りて元の列に戻ると、ツィスカが「騎手・弓騎士、ボーゲンパラディン、トリシュタン・フォン・シュテルンベルク」と次の名前を呼んだ。トリシュタンも、フィレスと同じようにマリアンネの前で肩膝立ち。

「トリシュタン・フォン・シュテルンベルク。第12代ボーゲンパラディンに任命します」

「トリシュタン・フォン・シュテルンベルク、謹んで拝命いたします」

「騎種、打撃騎士、シュラーゲンパラディン、アンジェリエ・グリート・アルファリオ」

「アンジェリエ・グリート・アルファリオ。第14代シュラーゲンパラディンに任命します」

「アンジェリエ・グリート・アルファリオ、謹んで拝命いたします」

「騎種、槍騎士、シュペーアパラディン、パーシヴァル・フォン・シュテルンベルク」

「パーシヴァル・フォン・シュテルンベルク。第11代シュペーアパラディンに任命します」

「パーシヴァル・フォン・シュテルンベルク、謹んで拝命いたします」

幼少の頃よりパラディンを夢見ていたトリシュタンとアンジェリエは、見事にその夢を叶えた。フィレスも、イリスが戻ってくるまで、そして自分に勝ってシュベーアトパラディンの座を奪うその時まで、パラディンとして居続けることを決意していた。再びシュペーアパラディンとしての座に就いたパーシヴァルは、妻や子に恥じぬ騎士であり続けると誓った。

こうして銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼは、新たにパラディンを迎えて再始動した。

Ｅｐｉｃａ５４俺が選ぶ道～Ｏｃｃｕｒｒｅｎｃｅ　ｉｎ　ａ　Ｔｉｍｅ　ｌｉｍｉｔ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

「ただいま！」

数ヵ月ぶりの八神邸に、俺は声を高らかに帰宅したことを示す挨拶を上げた。そして俺の座る車椅子を押してくれているアイリも「ただいまー！」と挨拶した。しかし残念ながら家には誰も居ない。学院より帰るフォルセティを独りにしないために嘱託魔導師として登録しているが、現在局は多忙ということもあって、アインスも今日は出勤している。

（大隊の壊滅と騎士団の管理局法への再加入によって、犯罪発生件数がグッと多くなったからな）

そういうこともあって世論は、騎士団の管理局法再脱退を望んでいるようだ。犯罪者への問答無用な対応は、被害者や遺族にとって心の晴れる思いなのだそうだ。脱退が叶わないのなら、大隊のような法外部隊を作ってほしいという要望が多く寄せられていると、見舞いに来てくれていたシャルがそんなの無理じゃん、と何度も愚痴を漏らしていた。

「おかえりなさい、ルシル君、アイリちゃん」

俺とアイリを八神邸まで送ってくれたシャマルが挨拶を返してくれた。シャマルが玄関ドアを開けてくれて、アイリが車椅子を押してくれることで俺は家の中へと入ることが出来た。久しぶりの八神邸の匂いに、帰ってきた、という実感できた。

「んじゃホイールカバー外すね～」

「ああ、頼む」

外出用の車椅子のホイールカバーをアイリが外してくれるのを待ち、「外したよ～」の言葉に「ありがとう」と返し、ハンドリムを握って漕ぎ出す。アイリに続いて靴を脱いで上がったシャマルが「ルシル君の部屋は1階に移したからね」と案内してくれた場所は、元はなのは達が泊まりに来た際に使ってもらう客室の1つだ。

「わざわざすまない」

「気にしないで。家族でしょ♪」

魔力が回復しても、俺の膝下から先が動くことはなかった。この1週間で自分なりに原因を調べた結果、"神意の玉座"に座するオリジナル・ルシリオンに問題が発生していた。すでに限界を迎えていると言うのに、よもや別の契約へ他のルシリオンが召喚されているなんて思いもしなかった。

（他の界律（テスタメント）の守護神とは違い、俺はオリジナルとは創世結界でも繋がっている。魔力の消費速度が笑えないレベルで早くなってしまっ

た）

もう1人のルシリオン（おれ）の契約先はどうやら激しい戦火に満ちた世界ではないようだが、それでも魔力を消費していることには変わりない。本体に負担が掛かる仕様がここまで俺を追い詰めるとは。本当に最悪なんだが・・・。思っていた以上に俺に残された時間は少ないようだ。

「でもアイリとのユニゾン中で足が自由になるというのは、アイリとしては嬉しいんだけどね」

「そこが不思議なのよね。リインちゃんやアギトちゃんとのユニゾンだと変わらないのに、アイリちゃんとのユニゾンだけは効果が有るのよね～」

そうなのだ。入院中にいろいろ試した結果、まず魔力を開放して魔導師化すれば自力で立ち、歩け、走ることが出来た。おそらく魔術師化でも可能だろう。そして今後の"堕天使エグリゴリ"との闘いに備え、アイリからの提案でユニゾンも試すことになったわけだが・・・。

「ふっふ～ん♪　まるでアイリが、ルシルのために生まれたみたいだよね～♥」

「本当にそう思えるほどの相性抜群だものね～。オーディンさんとの相性も良かったし」

それは俺自身も驚く話だ。だからイリュリア終戦当時、完全に破壊されていた"エグリゴリ"のデータとは違って無事だった融合騎の開発データを漁ってみたが、アイリは特に変わった経緯で生み出されたわけじゃなかった。それにしてはアイリは、俺と共に戦ってくれるために生み出されたような性能を有している。偶然と片付けるにはあまりにも・・・。

「えっへへ♪　やっぱりアイリとルシルは、赤い糸で結ばれてるんだよ！」

シャマルから俺の着替えなどが入ったスポーツバッグを受け取ったアイリが俺の背中に覆い被さるようにハグしてきて、さらに俺の頬に頬ずり。

「それじゃあアイリ、お茶の用意するから、ルシルは先にリビングで待ってて」

「私は洗濯してから行くわ」

アイリはキッチンへ、シャマルはバッグから俺の着替えや洗濯物を取り出し始めた。

「ありがとう。お言葉に甘えてリビングで待たせてもらうよ」

手伝おうにもかえって邪魔になると判っているため、車椅子を旋回させてリビングへ向かう。歩き慣れた廊下だが、目線が低くなると結構雰囲気が変わるな、と思いながらリビングに入り、「よっと」

ソファへと移る。

（メール確認でもしておくか）

入院中、はやて達チーム海鳴だけでなくユーノやクロノにリンディさん、内務調査部の面々、そしてティアナ、さらにわざわざナカジマ家やエリオとキャロまで見舞いに来てくれた。俺が車椅子生活になってしまったことにかなりショックを受けていたな。

『『ルシルさん！　退院おめでとうございます！』』

エリオとキャロからの動画付きメールを開くと、もう俺の身長を追い越したエリオと、機動六課時代からさほど成長していないキャロから祝いの言葉を頂いた。２人は自然保護隊所属で、ミッドからかなり遠く離れていて、フェイトやアリシアとも長く顔を合わせていないにも関わらず、以前の見舞いのときはフェイト達と逢うより俺を優先してくれた。

『またお休みが出来たら、顔を出しますね！』

『それまでお元気で！』

２人のビデオメールに返信メールを打ち終えたところで、「こんにちはー！」外から元気な挨拶が。車椅子に移って出迎えようとしたんだが、「はぁ～い！」シャマルが先に出てくれたようだ。

「あら、いらっしゃい！　上がってちょうだい！」

「「お邪魔しま～す！」」「お邪魔します」

聞き憶えるのある声が3人分。スリッパの足音を立ててリビングに入って来た、「いらっしゃい、ギンガ、スバル、トーマ」を笑顔で招いた。3人がチラッと俺の脚と車椅子を見て、「こんにちは！」元気のいい挨拶をくれた。

「ああ、こんにちは、3人とも」

「ルシル君。ギンガ達からフルーツの詰め合わせを貰ったわ♪」

シャマルが胸に抱えるバスケットに入ったフルーツを見せてくれた。だから見舞い品を持って来てくれたギンガ達に「ありがとう、家族で頂くよ」礼を言う。

「いえ。いろいろと迷ったんですけど、やっぱりフルーツの詰め合わせしか考えられず」

「ルシルさん、飽きてない？　入院中にも貰ってたでしょ？」

「そんなことないさ、スバル。果物には種類によってはミネラル、食物繊維、カロテン、ビタミンC、ビタミンB群、ビタミンE、カリウム、カルシウム、鉄などなど、野菜と同じくらいに栄養がある。それに美味いし、飽きもしないし。素直に嬉しいよ」

うそ偽りなくそう答えると、目に見えてギンガとスバルがホッとし

たのが見て取れた。確かに入院中に何度か詰め合わせを貰ったが、俺は飽きなかったし、ヴィータやアイリ、リインにアギトも俺以上に食べたし、だから俺としては足りないという感じだった。

「アイリ、ギンガ達の分のお茶も追加だ」

「ヤー！」

「えっと、お茶菓子あったかしら」

シャマルもキッチンへと向かう。そんなシャマルにギンガが「お構いなくです、シャマル先生」と言うが、シャマルはテキパキと手際よく茶菓子の用意を整えつつ「お客様へのもてなしは全力で♪」と、八神家家訓の1つを笑顔で言った。それでギンガももてなしを受け入れた。

「それにしてもトーマ、久しぶりだな。また背が伸びたんじゃないか？」

「はい！　順調に成長期っす！　ルシルさんの背を追い越すのも時間の問題っすよ！　あーでも体の節々が痛いっす」

トーマは、フッケバインと自称する犯罪者集団の手によって、生まれ故郷どころか家族、町の住民を皆殺しにされた経緯を持つ。ただ、フッケバインのこれまでの手口やら事後状況とは違いがいくつか出ているんだよな。

フッケバインは基本的に管理外世界でしか活動せず、そしてひと度

襲撃を掛ければ、１人も生き残りを出さない。だがトーマの一件では、トーマは生き残っているし、ヴァイゼンという管理世界で起きたものだ。

（その辺りはギンガやチンクも調べている。まぁどの道フッケバインであろうがなかろうが、トーマの人生を狂わせたことには変わりなく、実際に何十件と殺人を犯している。処理する必要があるだろう）

「トーマ。ほら、先に渡して置かないと」

「え、あーうん。ルシルさん、コレ・・・」

トーマが足元に隣に置いていたリュックを漁りだし、ビニール袋の口にリボンが結ばれている物を取り出した。中身は「クッキー？」のようで、１０枚以上入っている。

「俺が世話になってる養護施設で、子供たちと一緒に焼いてみたんです。あんま豪華なお土産は買えないって思って・・・。ので、良かったらどうぞ！」

「俺のためにわざわざ？　いやありがとう、嬉しいよ！　シャマル。俺の茶菓子は要らないから用意しないでくれ」

「はーい♪」

「なんかごめんなさい。手作りなんて・・・」

何故かそんな理由で謝るトーマ。だから「俺のための作ってくれたんだろ？　ならそれは、どんな高価な物より価値があり、嬉しいものだよ」と、トーマの頭をわしゃわしゃ撫でてやる。すると不安そうだった顔が晴れやかになり、「は、はい！」嬉しそうに笑ってくれた。

「良かったね、トーマ♪」

「ね？　ルシルさんは好い人なんだから、手作りでも喜んでくれるって言ったでしょ？」

「うん！」

「友人からの贈り物は嬉しいよ」

出来は確かに不恰好だが、それ以上に心に来る嬉しさ。それが数少ない男友達からというのがさらに嬉しい。そういうわけで"友人"と称したんだが、トーマが「友人？　俺と、ルシルさんがですか？」不思議そうに呆けた。

「いやか？」

「いえそんな！　逆に俺でいいんですか！？　俺、ルシルさんに何も出来ませんよ？」

「待て待て。友人ってそんな打算的なものじゃないだろ。それこそ

年の差だって関係ない」

男友達と言ったらユーノとクロノを筆頭に、指で数えるくらいしかいない。あとは知り合いとか同僚とか。ドクターが生きていれば、おそらく友人になれたかもしれないな。

「なになに？　なんの話してるの？」

シャマルにお茶の用意を任せたアイリがソファの背もたれを飛び越え、俺の左隣にドサッと座った。俺は「はしたない。見えてたぞ」アイリの頭を軽く小突く。ミニスカートだったため、ピンク色の下着が見えていて、トーマが真っ赤にした顔を背けている。

「ごめーん。トーマも、お見苦しいもの見せちゃったね～」

「気にしてないから！　あっ、見てません！　見えてません！」

「あはは！　トーマ必死すぎ♪」

トーマのリアクションにスバルは笑顔、ギンガは苦笑、アイリはいたずらっ子のように含み笑い。女の子に挟まれてからかわれるトーマには親近感が湧く。そんなトーマと俺は友人だ、という話をしていたとアイリに伝えると、「良かったね♪　ルシル、男の友達少ないから」と言って笑った。事実なだけに文句は言えない。

「えっと、俺うれしいっす。ルシルさんみたいなすごい人と友達になれるなんて」

「じゃあさ、連絡先の交換とかしておけば？　トーマ、ナカジマ家の養子になるって話だし。ギンガ、チンク、ディエチ、スバル、ノーヴェ、ウェンディの女だらけ姉妹の中で唯一の男の子、長男になるんでしょ？」

「あ、それは・・・」

ナカジマ三佐やクイントさんからも、トーマを養子として迎え入れたいって話を伺っている。しかしトーマは少し悩んでいるようだ。ギンガとスバルも若干困惑顔だ。

「スゥちゃん達と出逢えて、そしてナカジマ家の子供にならないかって誘われたとき、俺、すごく嬉しかったんです。でも・・・幸せすぎて忘れちゃうんじゃないかって不安になるんです」

トーマは故郷の事件を過去にするのが怖いのだと言った。亡くなった家族は、自分の幸せを願っているとは思うが、自分がそれを享受できないと。だから自分が納得できるまでは時間が欲しい、ということだった。

「トーマの人生だもの。トーマの意思を尊重する。父さんも母さんもそう言ってくれるはず」

「ギン姉」

「うん。急がなくていいから。たとえナカジマの一員になれなくて

も。トーマは変わらず大切な家族のような子だからね」

「スゥちゃん・・・。うん、ありがとう」

ギンガ達が笑顔を向け合っている中、シャマルが「お待たせ～♪」俺を除く人数分のケーキ、そしてミルクティが載せられたトレイを持ってきた。アイリがトレイから取ったケーキとティーカップをそれぞれの目の前に置いていき、トーマが「おお！」歓声を上げた。

「いいんですか？　こんな高そうなケーキを頂いて・・・」

「気にしないでギンガ。コレ、私が作ったものだから♪」

「ええ！？　シャマル先生の手作りなんですか！？」

「ふふ、そうよ。なかなかの自信作だから、きっと気に入ってくれると思うわ。どうぞ召し上がれ♪」

シャマルもソファに座り、みんなで「いただきます！」をしてから、俺はクッキーを、シャマル達はケーキを頂く。袋を開け、クッキーを1枚手に取って口に運んだ。そんな俺の様子をチラッと見ていたトーマに「うん。美味い。上出来だよ」と感想を伝える。

「よかった～。何度も作り直した甲斐があったっす。さすがに焦げ焦げを、お見舞い品として出すわけにかいかないんで」

「形は確かに拙いが、それがまた手作り感を出して愛らしい」

それから俺たちは世間話に興じ、そろそろフォルセティが学院から戻ってくるとなったところで、「そういえばルシルさんはどうするんですか？」おかわりのケーキを頬張りながらスバルが聞いてきた。

「どう、とは？」

「ルシルさんの足がその・・・だから、局を辞めちゃうのかなって・・・」

「ああ、うん。魔導師化やアイリとのユニゾンという、特定の条件化でなら足の機能も回復することが判っているからな。これまでのように派手な戦闘には参加しないが、特騎隊では後衛でサポートに回ればいいし、調査部はあまり魔力を使用しないから、今のところは局を辞めるつもりはないよ」

そう答えると、シャマルが不安そうな表情を浮かべて俺を見た。

・―・―・回想だ・―・―・

意識が無かった3日間を合わせて9日目の今日。毎日朝と夕の検査を行っているわけだが、日に日に主治医となってくれているシャマルの表情が曇っていくことは察していた。

「あ、シャマル。ルシルの検査の話？」

「待たせてしまったな、すまない」

トイレを済ませて戻ってきたら、白衣姿のシャマルが病室のソファに腰掛けていた。車椅子に乗る俺とアイリが戻ってきたことで立ち上がり、「ううん。今来たところだから」首を横に振った。そんなシャマルの前を通り過ぎて「ちょっと待ってくれ」一言断って、ベッドに移るためにベッドに手を付く。

「大丈夫・・・？」

アイリが心配そうに声を掛けてきたから、「ああ、これくらい・・・」ひとりで出来ないと今後苦労するため、そう返す。腕力だけで車椅子から尻を浮かしたその時・・・

「ぅぐ・・・！？」

強烈な頭痛と胸痛が襲ってきた。これはあれだ、記憶消失の際に起こる・・・。直後に去来する言いようのない喪失感。痛みと喪失感という、ここで起こるなんて予想だにしないものにバランスを崩した俺は、床に倒れこんでしまった。

「マイスター！？」「ルシル君！？」

咄嗟のことだったからかアイリが俺をマイスターと呼んだ。アイリは俺を抱き起こしてくれて、シャマルも「どこか怪我してない？」診てくれた。痛みの所為で転倒時に頭を庇えなかったこともあり、頭を打ってしまった。

「ちょっと赤くなってるわね。この程度なら・・・」

シャマルの手がそっと俺の頭に触れ、「癒しの風よ」治癒魔法を掛けてくれた。よし、と頷くシャマルに「ありがとう」礼を言っていると、シャマルとアイリが「え・・・？」目を見開いた。視線を追えば俺の右手であることは判るため、俺も右手を見たんだが別に変わったことはなかった。

「どうしたんだ2人とも。顔を蒼くして・・・」

「今、マイス――ルシルの右手、透けてた・・・」

「え、ええ。確かに手の甲が薄っすらと透けていて、向こう側が見えていたわ」

「っ！」

改めて右手を見るがやはり透けてはいないようだが、2人が同時に見たと言うのだから気のせいというわけにはいかないだろう。

「ルシル君。ちょっといい？　話があるのだけど・・・。以前あなたは私たちに、自分やオーディンさん、それに歴代のセインテストは、初代のクローンであると話してくれたわよね」

随分と懐かしい話だが、守護騎士がはやての誕生日に起動したその日、俺が語った偽りの経歴の内容だ。ガーデンベルグの撃破＝セインテストの死という普通の人間ではありえない話を、ベルカ時代に

語っていたからな。その辻褄合わせに吐いた嘘だ。

「（あぁシャマルが何を聞きたいのか判った）・・・体が透けたっていう話だが、俺がクローンであることにも関係あるかもな。クローンと言っても、その実は守護騎士に近い。魔力で構築されているんだよ。だから魔力を消費し過ぎると、体を維持できなくなる。だから創世結界に保管してあるものを消費して、体を維持している」

「じゃあ、あなたの成長が止まってしまったのも、やっぱり魔力の消費によるもの・・・？」

「まぁそうだな。体が大きければ大きいほど構築する魔力量が増え、維持するのも大変になる。俺一代でエグリゴリを全滅させようと言うんだ。少しずつ命を削っていたとしてもおかしくない」

ほとんどが嘘だが、守護騎士と同じような擬似生命体であり、記憶（いのち）を削っていっているのは事実だ。

「どうしましょう。ルシル君、あなた、３日ごとに平均魔力数値が毎日０・０５％ずつ減ってきてるの。今はまだ足の不自由だけで済んでいるけれど、あなたの話が本当なら命に関わる状況よ・・・！」

僅かに涙を浮かべているシャマル、そして「ルシル・・・」と俺の名を震えた声で呼ぶアイリ。アイリはすでに俺の真実を知っているが、やはり俺の消滅の期限が迫っているという現実に、ショックを受けているようだ。改めてベッドの上に移り、背上げ機能で背もたれを上げて、座り体勢になる。

「それがセインテストの宿命だよ、シャマル」

「でもそんなの・・・本当にエグリゴリを斃すためだけの兵器みたいじゃない・・・」

――俺は対エグリゴリ用の生体戦闘兵器なんだ。生まれからして特別。生まれつき圧倒的な魔力を有し、様々な戦闘技術を持ち、幾多もの魔法を覚え、特殊な能力を与えられた。ちなみに歴代セインテスト、もちろんオーディンも自分と同じ、対エグリゴリ用の兵器だよ――

かつてシャマル達にそう言ったのを思い返す。人間だった頃も両親から大戦を終結させるための兵器として育てられた。兵器。それがルシリオン・セインテスト・アースガルドの運命なんだろう。

「まぁ仕方ないさ。俺は受け入れてるよ、このセインテストの悲願を」

「ルシル・・・。アイリ、アイリは・・・」

アイリが俺にしな垂れ掛かり、心臓付近に頭を置いた。そんなアイリの真っ白な長い髪を撫でていると、「あなたを愛する家族の1人として、本局医務官として・・・進言するわ」シャマルがそう言って、小さく深呼吸。

「・・・ルシル君。長く生きたかったらもうこれ以上戦っちゃダメ。

だから・・・配置換えなんて温い話じゃない。管理局を辞めて隠居なさい」

「シャマル・・・」

「何か対策が生まれないのなら、私は今の提案を挙げ続けるわ。もっと長く一緒にいたいもの。八神家のみんなで、チーム海鳴のみんなで、出来るだけ長く・・・」

「・・・対策はなんとしても立てるよ。それに、リアンシェルトだって総部長という肩書きの所為で、後任への引継ぎなどを終えない限り局を辞められないだろう。それまでに潰れるわけにはいかないからな」

だが、おそらく・・・3年は保たないだろうが。それでもアイリやシャマル、はやて達を泣かせないため、もう少し頑張って生きないとな。

・―・―・終わりだ・―・―・

「それじゃあ私たちはそろそろお暇します。シャマル先生。ケーキとミルクティ、ごちそうさまでした」

「「ごちそうさまでした！」」

「はい、お粗末さま♪」

ギンガ達がそろそろ帰るということで、俺たちは玄関まで見送りに来た。車椅子でなければ外まで出て、最後まで見送るんだが。そんな考えが顔に出ていたのか、「ルシルさん。ご無理はなさらないでください。ここで大丈夫ですよ」ギンガは気遣ってくれた。

「すまないな。ギンガ、スバル、それにトーマ。気を付けて帰ってくれ」

「「「はいっ！」」」

「じゃあ私がお見送りしてくるから、ルシル君はこのまま中で、アイリちゃんはルシル君をお願いね」

「「「お邪魔しました！」」」

ギンガ達が玄関ドアを潜って、最後にシャマルが潜ってからドアを閉めた。４人の姿が見えなくなり、アイリが車椅子のグリップを握って、「じゃあリビングに戻ろうか」車椅子を１８０度旋回させた。

「・・・ねえマイスター。はやて達には伝えるの？　ガーデンベルグの撃破はマイスターの消滅に繋がっていて、嘘だけどクローンであり、寿命も残り僅かだって・・・」

「そうだな・・・。黙ったまま勝手に逝くのは、彼女たちへの裏切りだと思う。だから伝えるよ」

「・・・そっか。・・・泣かせちゃうね、きっと・・・」

「それもまた、俺の宿命だろうさ」

何度も、何人もの涙を見てきた俺だ。最後の最後で目を背けるわけにはいかない。全ての十字架を背負って、俺は逝こう。

Ｅｐｉｃａ５５トリシュタンとルシリオン

†††Ｓｉｄｅトリシュタン†††

左手首に巻いた腕時計を見、待ち合わせ時間の９時まであと４０分近くあることを確認。平日であり、８時２０分という朝早いということもあるため、ここ自治領南区ウィンザインは最南区マクファーデンのヴェラーステーション前には、これから通勤・通学する人たちが出入りをしている。

（さすがに早く来すぎた・・・）

今日はさほど寒くはなく、風もそう強くない。だけれど肩に提げたポシェットから手鏡を出して、髪型が乱れていないかを改めてチェック。タートルネックニット、プリーツジャンパースカートにコート、サイドゴアブーツと、服装もバッチリ。

「この音・・・！」

そうして待ち合わせ時間まであと２０分となったとき、本日の待ち合わせ相手である「ルシルさん」の愛車、リバーストライク・〝マクティーラ〟のエンジン音が遠くから聞こえてきたのが判った。顔を上げ、ロータリーへと目を向ける。

「トリシュ！？」

以前失ったサイドカーを新調した"マクティーラ"を、私の前で停車させたルシルさんが「おはよう、トリシュ。すまない、待たせてしまったよな・・・？」と、ヘルメットをわざわざ外して頭を下げた。

「いいえ。私が早く来すぎたんですから、気にしないでください。あの、今日はデートのお誘いをしていただいてありがとうございます」

そう。私は今日、ルシルさんとデートする約束をし、こうして待ち合わせをしていた。オランジェ・ロドデンドロンとして活動していた頃はもちろん、それ以前にも何度かルシルさんと2人きりで出掛けることはままあった。だけれどそれは、私からの誘いばかり。だからこうしてルシルさんから誘われるのは初めてだ。

「こちらこそ、受けてくれてありがとう。じゃあ行こうか」

１８０ｃｍオーバーの身長に変身しているルシルさんが"マクティーラ"より降り、私の前にまで来てくれた。ただ、ルシルさんの様子に「足は大丈夫ですか？」と尋ねる。ルシルさんは、膝から下の機能を失ってしまっている。自力で歩行できるようになるには、アイリとユニゾンするか、もしくは魔導師化するかのどちらか。だから今のように自力で歩き、"マクティーラ"を運転するとなると、そのどちらかを行っていることになる。

「ああ。魔導師化しているよ。今日はトリシュとのデートだから、アイリはちゃんと家に置いてきた」

「そ、そうですか。それは・・・」

良かった、と心底安堵する。アイリのことは好きだけれど、ルシルさんとのデートの間には入ってほしくない、というのが本音だから。そんな私を見て、ルシルさんは小さく笑った後に「じゃあ改めて、行こうか」

「はい♪」

ルシルさんの手を取り、そのエスコートで私はサイドカーへと乗り込んで、ヘルメットを被る。大人っぽさと色っぽさを出すために盛り髪にしようかと悩んだ、朝４時からの３時間。耳の下でのツインテールにして良かった。

「それで今日は、どこに連れて行ってもらえるのでしょう・・・？」

「昔に約束した、いつか２人で芸術強化月間に出掛けよう、と。だから自治領を回ってみようと思う」

ザンクト・オルフェンは年に１度、全区を上げて芸術強化月間を開催する。各区で最も大きな広場を貸し切って、演劇、演奏、歌劇、絵画の展覧会、フラワーデコレーション、ファッションショー、自作映画の上映などなどが１ヵ月間と出展される。

大隊問題でごたごたしている騎士団だけれど、自治領に住まう人たちにはそれは関係のない話。だけど今回の一件で、どうしても気落ちした空気が領内に出ている。信頼厚き騎士団の幹部級騎士が揃い

も揃って現騎士団を裏切った。その所為で、聖王教の信者や住民の方々には不安が溢れている。それを少しでも払拭するため、少しでも明るい話題を領内に入れるための、少しばかり早い時期に開催することになっていた。

「憶えていてくれたんですか・・・！」

「もちろん。これまでに何度か行ったことがあるが、２人きりじゃなくて集団で行ってばかりだったからな。芸術強化月間が開かれるって知って、トリシュを誘おうとすぐに思っていたんだ」

「それはとても嬉しい話です！」

胸の内が温かくなる。１０年以上も前の約束を憶えていてくれたこともそうだけれど、はやてやシャルではなく、真っ先に私を誘おうとしてくれたことが何よりも嬉しい。

「というわけで、マクティーラを駐車場に停めて、移動は公共交通機関を利用しよう」

「あ、はい、そうですね。自家用車などでの移動は交通規制に掛かって不自由ですしね」

ルシルさんの提案を受け入れ、"マクティーラ"を1番近い地下駐車場に停めることに。そして停めた後に地上を出て、イベントの女性係員からパンフレットを1冊いただく。私とルシルを知っているのか少し驚いた顔をしたけれど、すぐに営業スマイルで「どうぞ楽

しんでいってください！」と見送ってくれた。

「すまない。君の嗜好を元にして事前にどこを回るか決めておけば、少しは格好がついたんだが・・・」

「いいえ。こうして2人で決めるだけでも十分楽しいです♪」

他の人たちの通行を邪魔しないように端に寄り、ルシルさんと顔を寄せ合ってパンフレットを眺める。今年は古書店が開催されているようで、私とルシルさんは顔を見合わせて、「ここは確定で♪」微笑み合った。

「――では、今日1日はお付き合いして貰えると言うことで、まずはカッツェ大広場で開かれる古書店へ赴き、その後はルートを決めずにその都度に行きたい場所を決めましょう」

「判った。それでいこう」

パンフレットをコートの内ポケットへしまい込んだルシルさんが、「さ、トリシュ」右手を差し出してくれたから、「はい！」その手を取った。ちゃんと自分が車道側になるような立ち位置なルシルさんに感嘆しつつ、私たちは歩き出した。

「そういえば、オランジェ・ロドデンドロンの解体とパラディンの昇格試験が来週に行われると、シャルから聞いたけど・・・」

「はい。私とアンジェと騎士フィレスが、弓、打撃、剣のパラディ

ンを目指します。槍、拳闘、鎌、斧、騎乗ですが、まず兄が再びシュペーアパラディンになることを決めました」

元フライハイト家の女中長を勤めていましたプリアムス義姉様との結婚、そして子供（私から見て甥っ子で、エメラウスという名だ）が生まれたことで、パラディンの称号の返上と同時にズィルバーン・ローゼから除隊をした兄様。

「パーシヴァルが？　プリアムスさんは、それを許したのか？」

「義姉様が提案したみたいで。今は少しでも騎士団のために頑張って、と」

「残りは・・・？」

「他は、ルシルさんの知らない人ばかりですね」

「そうか。応援に行ければいいんだが・・・」

「大丈夫です。そのお気持ちだけで――」

そこまで言いかけたところで、きゅぅ～、と私のお腹が盛大に鳴った。耳まで赤くなるのを自覚できる。お腹を両手で押さえ、恥ずかしさのあまりに俯く。

「朝、何も食べていないのか・・・？」

「えっと・・・はい。恥ずかしながら服装や髪型を決めるのに思った以上に時間が掛かり、軽めに済ませたんです」

今晩、ルシルさんを自宅の夕食に誘うため、下ごしらえをしていた料理の味見だけでの朝食だった。クラリスほどではないけれど、割と食べる私には少々物足りない朝食だった。こんな恥ずかしい思いをするなら早く家を出ずに、もっと何かお腹に入れて置けば良かったと後悔。

「露店もあるから、そこで何か食べよう」

「うぅ、ごめんなさい」

手軽に頂ける露店を巡り、「あ、シュニッツェルがありますよ！」と、ルシルさんの手を引いて露店の前へ。家族、恋人、友人、いろいろなお客さんが数多くの露店の前に並び、割とすぐに買えそうな露店、シュニッツェル屋さんへ並ぶ。

「ルシルさんはいくつ食べます？」

「んー、朝食は済ませているんだが。ここで食べないのもなんかもったいない。ソース味を1つ貰うよ」

「判りました。あ、ここは私が出します。個人的な食事なので」

財布を取り出そうとしていたルシルさんをそう制し、「あ、シュニッツェルサンドを、塩コショウ、チリパウダー、ソースの3つくだ

さいな」指を3本立てる。そして「まいどありー！」店主さんから紙袋に包まれたシュニッツェルサンドを、代金と交換して受け取る。

「どうぞ」

「ありがとう。いただきます。・・・うん、美味い」

「いただきます」

邪魔にならないところに移動して、私も2種類のシュニッツェルサンドを頂いた。2つも食べれば空きっ腹も膨れて、お昼まではもちそう。

軽食も済ませて、古書店が開かれている中央区アヴァロンはキャメロット地区へと向かうために改めて歩き出す。徒歩で向かえば開催時間前にたどり着く時間だ。道中に飲み物を購入（こちらは割り勘ということに）して、毎回芸術家を目指す卵たちが修行目的で集まる街路、通称キュンストラー・シュトラーセ・アーに入る。

「そこの美男美女のお2方。ちょっと絵のモデルになってくれませんか？」

「「モデル？」」

声を掛けてきたのは、画材道具一式を用意している青年。彼の後ろにはイーゼルに掛けられたスケッチブックに向かっているお猿さんが1頭。私がお猿さんを見ていると、「すぐに済みますから。どうでしょう？」改めて尋ねられた。

「その日最初のお客さんには、無料で提供しています。もちろん、描かせてもらった絵はお持ち帰りも出来ますし、携帯端末に撮ってデータだけでも持ち帰れます。その際、残る絵はしばらく飾らせてもらいますが、責任を持って処分します」

「きっきーっ！」

人間の6才くらいの大きさなお猿さんがスケッチブックにペンを走らせて、「うきー！」描き終えたのかスケッチブックを反転させて絵を見せてきた。お世辞にも上手とは言えず、幼児が描いたような拙いものだった。

「（でも・・・）ふふ。何か味のある絵ね」

「ああ。・・・トリシュ、ちょっと付き合っていかないか？」

「そうですね。ルシルさんとのデート記念に、お願い出来ますか？」

私が微笑みながら店主さんにそう返すと、「ありがとうございます！」と店主さんは嬉しそうにお礼を言ってきて、私とルシルさん2人一緒か、もしくは別々に描くかどうかと尋ねられたことで、「一緒にお願いします♪」ルシルさんの腕に抱きついて肩に頭を乗せた。

「では、始めます！」

店主がイーゼルに掛けられた大きなスケッチブックに筆を走らせ始

め、後ろのお猿さんもスケッチを始めた。その間、私たちは身じろぎせずに、「今さらですけど、このポーズで良かったですか？」と尋ねる。

「もちろん。デートっぽいしな」

ルシルさんの口から、デート、という単語が出るだけでキュン♥となる。私の早鐘を討つ鼓動が、ルシルさんの腕から伝わったら嬉しいな。そんな幸せを感じた数十分ほど経過したところで、「う、腕が・・・」痺れてきてしまった。幸せから一転つらいものになったこの体勢。

「よし、出来ました！」

「うきー！」

店主さんがスケッチブックを反転して描いた絵を見せてくれた。パステルで描かれていて、「すごい・・・」その美しさに目を奪われた。見ているだけで幸せになりそうな温かいタッチで、胸がホッとする。

「ほらヴァーリン。お前もお見せしろ」

「うっきっきー！」

「お猿さんも描いてくれ・・・って！　可愛い！」

「へぇー、カートゥーン調の絵か。巧いしすごいな！」

ヴァーリンという名前のお猿さんもスケッチブックを反転。そこに描かれていたのは、色鉛筆で描かれた、デフォルメされたカラフルな私とルシルさん。ルシルさんが私をお姫様抱っこをしていて、太陽がハートの形になっている。店主さんとはまた別に心が温まる絵だった。

「（これは欲しい！）あの、両方の絵を頂けますか？　もちろんお金は支払います」

「いえ、ですが・・・！」

「無料で頂くには惜しい作品ですから。どうか支払わせてください」

「でも・・・」

立てられた看板には絵1枚の値段が書かれている。私が財布を取り出して、2枚分の料金を取り出したことで店主さんは、「判りました。お代頂きます」と折れてくれた。そのやり取りの間に、お猿さんが器用に絵を額縁に入れてくれている。本当に人の子供みたい。

「あの、18時までは居るので、これから回るのであればお邪魔でしょうし、また取りに来てください。それか、近くに郵送業者が居ますので・・・」

店主さんは先ほど、書いた絵は店先に飾ると言っていた。おそらく

それが宣伝になる。だったら、「また取りに戻ってきます」と伝える。少しでも店主さんとお猿さんの絵の巧さを知って貰いたいための提案だ。

「ルシルさんもよろしいですか？」

「ああ。じゃあ俺はデータだけ貰うよ。店主、いいかい？」

「もちろんです！　撮影だけはサービスさせていただきます！」

ルシルさんがお猿さんが掲げてる額に向かって携帯端末を向け、パシャリと撮影。そして「ありがとう店主」ルシルさんが端末をしまい、店主とお猿さんに見送られながら、私たちは改めて古書店の開かれるカッツェ大広場へ向かう。

「わあ！」「おお・・・！」

円形の大広場の中央には噴水があり、複数の大きな４脚テント――タープテント下に書架が置かれている。そんな多数の書架にはズラリと書物が収められていて、読書家としては夢のような場所だ。

「管理世界中にいるコレクター達からの提供だと言うが。今回も素晴らしい古書揃いだな～」

「ですね～」

私たち以外は年上であろうお客さん達が立ち読みをし、どれを購入

しているかを決めている。貴重本や面白い本を先に取られてしまわないよう、「ルシルさん！　急ぎましょう！」ダッシュで1番近いテントへ向かう。

「少し寂しいですが、ここは別行動としませんか？　その方がお互いに選べると思うので」

「あ、ああ、判った」

私とルシルさんは、好きな本のタイプは似通っているけれど、細分化すれば違ってくる。一緒に回るのを楽しみにしていたけれど、いざ目の前にしたら読書家としての血が騒いでしまった。ポカーンとしているルシルさんを置いて、私はひとり本探し。

「あ、コレ絶版本！　それにこっちは初版本！？　天国を見つけたり！」

至る所に収まっている貴重な書物がごろごろ。お目当ての書物を籠の中に丁寧に重ねていき、収まり切らなくなったらもう1つ籠を用意して、魔力で腕力を少しばかり強化することで重くなった籠を軽々と腕に掛ける。

「ん～～～！」

棚の最上段にて見つけた古書に手を伸ばすけれど、残念すこし届かない。近くに脚立がないかを確認。

（むぅ。使われているか・・・）

私の居る棚には他に誰も居らず、急いで脚立を持ってくることも出来そう。でもそれは今だけかも知れず、離れたところで誰か来るかも。そんな不安が過ぎって離れられない。だからジャンプで取ろうと試みていたら、「あ・・・！」後ろから伸びてきた手が狙っていた本を取った。

「（それは私が・・・！）あっ、ルシルさん！？」

私の後ろにはルシルさんが居て、取った本を「コレで良かったか？」と差し出してくれた。私は籠を足元に置いてからそれを両手で受け取り、「ありがとうございます！」胸に抱いてお礼した。

「俺の方は決まったが、トリシュの方はどうだ？」

ルシルさんの足元にはある籠は1つで、収められている書物は10冊程度。私と同じくらいの読書家であるルシルさんにしては少し足らないような。そんな考えが顔に出てしまっていたのか、「買いすぎると、はやて達に怒られそうで」ルシルさんが苦笑い。

「そう・・・ですね」

チクッと胸が痛む。その台詞は、はやてと同棲しているからこそ出てくる言葉。出逢い方が違えば、と運命を呪いそうになる。でもだからと言ってここで腐っている場合じゃない。

「で、では私が預かります！　ルシルさんが購入した書物、家に預かりますから、必要でしたら寄ってください！　連絡を貰えば、私が書物を持って待ち合わせ場所に行きます！」

ルシルさんと逢う口実を作ってしまおう。私が必死にそう提案すると、ルシルさんは最初は呆けて、一拍遅れて小さく笑い声を上げて、

「そうだな。じゃあお願いしようかな」綺麗な微笑を浮かべた。

「そうとなれば、もう少し選んでこよう！」

「わ、私ももう少し！」

もう1度散開して書物探し。そして「またお腹が・・・」鳴ったことで時刻を確認すれば、「１３時過ぎ！？」になっていた。気付けば籠も3つに増えていて、書物もどっさり。裏カバーに張られたシールの値段を総計すれば４０万オーバー。一瞬血の気が引いたけれど、「まぁいいか」気にしないことにした。

「トリシュ。そろそろ昼食にしようか。さすがに腹が減った」

「あ、はい。お会計しますから、少し待っていてください！」

ルシルさんはすでに会計を済ませているようで、両手に厚い紙袋を４つと携えていた。私もお会計を済まし、すぐ近くの配送業者の元へ。ルシルさんは、数冊を八神邸の住所に、残り二十数冊をシュテルンベルク邸の住所に指定した。私も一緒に自宅への配送を依頼。自分の書物もシュテルンベルク邸に配送されるからと、配送料はル

シルさん持ちということになった。

「本当に良かったんですか？　サービス増し増しでかなり配送量が高くなりましたけど・・・」

「さすがに４０万オーバーの会計を見た後、君にさらにお金を払わせたくなかった。・・・騎士団の運営が少し厳しいという話はシャルから聞いているよ。大隊が拉致して利用した局員やご家族への報償などで、騎士への給料が何割かカットされていると」

「あ・・・はい」

「だからその書物の支払いも、俺に変更し――」

「それだけはダメです！　額が大き過ぎるし、何より自分自身のための買い物ですから」

そこだけは譲れない。小さく「そうか」と頷くルシルさんの手を取り、「お昼にしましょう！」手を引っ張ってカッツェ大広場より出て、お昼ご飯を頂ける店を探す。

「ルシルさんは何かリクエストとかあります？」

「思った以上に空腹になってしまったからな」

「ですね。私も空いちゃいました」

ルシルさんの開いたパンフレットを顔を寄せ合って見る。食べ物の露店も数多く出店されていて、プロ級から修行に来ているアマチュアの料理人が、キッチンカーで赴いて腕を振るっている。

「ではコッヘン大広場へ行きましょう。あそこは料理（コッヘン）の名前のとおりの料理店が並ぶ激戦区です。連なるコッヘン・シュトラーセには、外部から来た料理人の露店があります」

「むぅ、どこも美味しそうな料理を出しているな～」

「迷いますね～」

パンフレットに載っている露店の紹介欄を眺めつつ、どうせなら普段はここで食べられない外部からの露店を、という結論に達し、美味しいお肉が頂けるお店を目指した。

店に着いてみれば、すでにお昼時を過ぎていたことでお客さんも疎らで、すんなりと注文順が回ってきた。

「俺は、シュヴァイネブラーテン、付け合わせはクヌーデル。あとはカートッフェルズッペを」

ルシルさんは豚肉をローストした肉料理と、ジャガイモを団子状に丸めたクヌーデル、そしてジャガイモのスープ。

「それじゃあ私は、リンダールーラーデンとクヌーデル。ケーゼシュペッツレに、あとグラーシュを」

薄切り牛肉にベーコンと玉ねぎを乗せて巻き、煮込んだ肉料理と、細長く伸ばしたパスタにチーズをかけて焼いた麺料理、それに柔らかお肉と野菜のスープ。

まずはガッツリ食べずに、胃に空きを開けておく。足りなければまた別のお店で、ということはここに来るまでの道中で決めておいたこと。

「お待たせしましたー！」

店員さん達が料理を運んできてくれた。お礼を言い、「いただきます！」と早速いただく。一口目が共にお肉で、ナイフで切り分けた一切れを口に入れる。

「美味しい！」「美味い！」

さすが自治領内でも指折りのお店、すごく美味しい。美味しい料理に舌鼓を打ちつつ、パンフレットを広げて次の行き先を決める中、ふと、「ルシルさん。あーん」してみたくなり、フォークに刺したお肉一切れを差し出した。

「とても美味しいですよ？　一口どうぞ♪」

「え？　あ、いや、皿を少しこちらに寄越してもらえば、自分のフォークで――」

「あーん♪」

フォークを突き出したままで居ると、ルシルさんは観念して「あーん」食べてくれた。ちょっと無理やりな間接キスに、少しのごめんなさいと、多分の嬉しさ。ルシルさんからのあーんは期待できないから食事を続けようとしたら、「ほら、トリシュ」と、お肉を刺したフォークを私の前に差し出してくれた。

「え、あ、え？」

「どうした？　ほら、あーん」

まさかのお返しに顔が熱くなる。ドキドキしながら「あーん」口を開けて、お肉を食べようとしたけれど、ルシルさんはサッとフォークを引いた。だから私の閉じた口の中にお肉は入らなかった。

「もう、ルシルさん！」

「あはははは！　てっきりトリシュがしてくると思っていたんだが、こちらから仕掛けさせてもらったよ。じゃあ改めて、あーん」

少し警戒しつつ、差し出されたお肉を「あーん」パクッと頂く。ルシルさんが頼んだ料理もとっても美味しく、「ん～～～♪」頬が緩んでしまう。それから談笑しながらの食事を終えた私とルシルさんは「ごちそうさまでした」お店を出て、次の目的地である演劇舞台のあるシュピール大広場へバスで向かう。

「また私の行きたいところで良かったんですか？　ルシルさんの行きたい場所にも行ってみたいです」

「トリシュと2人で同じ時間を過ごすのに意味があると思うし、何よりすでに古書店という目的も済んでいるから。トリシュの行きたいところに付き合うよ」

「ルシルさん・・・」

ほらまた、キュン♥ときた。えへへ、とご機嫌になった私と、窓から外を眺めるルシルさんは、目的のシュピール大広場へとやって来た。ここはCのような形をした広場で、段々畑のような観客席があり、中央に円形の舞台。自治領の各地にある学院や企業の演劇部もたびたび使用している。

「今週の演目は、管理世界屈指の劇団メビウスリングの演じる一大恋愛劇、恋人達の旅路。私、1度でいいので生で観たかったんです」

「へぇ。どれどれ。複数組の恋人たちの群像劇か」

「書籍化はもちろん、ドラマや映画にもなった演目で、その原題がこの劇なんです」

そんな大好きな劇を、ルシルさんと一緒に観られるなんて幸せすぎる。隣に座るルシルさんと手を重ね、私は舞台上で繰り広げられる恋愛劇に、「ぐすっ、ぇぐ・・・」感情移入してしまって思わず涙。1人の男性を巡って争う3人の少女。境遇などが今の私、イリス、はやて、そしてルシルさんみたいで、私に似た、最後に彼と出会う少女の敗北が演じられた。

「はぅ〜」

ハンカチがもう涙でぐしょぐしょに。するとルシルさんが、「ほら」自分のハンカチを差し出してくれたから、「あ〝り〝がとう〝〜！」お礼を言って受け取り、涙を拭いつつポケットティッシュで鼻をかむ。

結局、舞台の2時間半の後半はずっと泣きっぱなしだった私は、ルシルさんに肩を抱かれながらシュピール大広場を出る。ちなみに他の女性のお客さんも目を赤く晴らしている。それほどまでに胸に来る恋愛劇だった。

「すみ〝ません〝、ルシルさん」

「気にしないでくれ」

「ちょっとお手洗いでお化粧を直してきますね」

「ああ。じゃあそこのベンチで待ってるよ」

ルシルさんを待たせ、お手洗いの鏡で化粧直し。ついでに用を足して、ルシルさんの元へと戻る。ベンチに足を組んで座って、パンフレットを眺めているルシルさんの格好良さにまた、きゅん♥となった。

「お待たせしました」

「全然待っていないよ。ところでトリシュ。次の行き先なんだが、ヒュムネ教会に行ってみないか？」

「ヒュムネ教会・・・、あっ、はい！　行きましょう！」

ルシルさんの提案にパンフレットの内容を脳裏に浮かべて、ヒュムネ教会での催し内容を思い出す。ルシルさんの手を取って、ヒュムネ教会へと向かう。

「あ、間に合ったようですね」

「ああ。ザンクト・ヒルデ魔法学院生徒による賛美歌斉唱。チャリティーだから寄付も出来るから、期間中に寄って行こうと思っていたんだ」

シスターの弾くパイプオルガンの伴奏に合わせて、祭壇前に並んで聖王教の賛美歌を歌う生徒たちを、長椅子に座って眺める。

「さすがにフォルセティやヴィヴィオ達は居ませんね」

「各地の教会で行われているからな～」

斉唱が終わり、私とルシルさん、他のお客さんは、教会を出る際に募金箱に財布から取り出したお金を入れてから出る。

「回れるのもあと1ヵ所くらいか。どこに行こうか」

「えっと、じゃあ・・・。今日の思い出として、1つ買って頂きたい物が・・・」

「そうか、判った。行こう」

ショッピングの際に服や小物などを決めて貰おうかと企んではいたけれど、今日はある物だけをプレゼントしてほしい。物をねだるというのにルシルさんは快諾してくれて、「店はどこ？」パンフレットを開いた。

「はい。えっと・・・この宝玉工房というお店です。そこを最後にするので、マクティーラに乗って行きましょう」

「ん？　夕食は・・・？」

「実は夕食は、私の家で食べようかと。その、ルシルさんに食べてもらうために下ごしらえは済んでいるんです」

「そうなのか！？　わざわざありがとう、トリシュ。そういうことなら急いでマクティーラの停めてある駐車場へ向かおう」

ルシルさんに手を引かれ、私たちはまずはバスに乗って駐車場付近へ移動。そして"マクティーラ"で、宝玉工房へと向かう。宝玉工房は、高価な宝石だけでなく、宝石などを使わずとも普通だけど美しい石を加工して、アクセサリーを作る職人さんのいる店だ。

「「「「いらっしゃいませー！」」」」

扉を開けるとベルが鳴って、店番の女性店員さん達に迎えられた。店員さん達は他のお客さんに応対しているため、私たちは店内を自由に回ってお目当ての物を探す。

「あ、ルシルさん！　コレ、コレにします！」

指輪のコーナーにて発見した、蒼い石がはめ込まれた指輪を手に取って、「いいですか？」とルシルさんに見せる。

「１０００クレジット？　安くないか・・・？　もう少し高いものでもいいぞ」

「いいえ。これでいいんです。蒼琳鉱と呼ばれる石で、サファイアやアクアマリンなどの青い宝石に比べて採取しやすいため安価で、お守りとしての意味合いの強いものなんです」

そして石言葉は、永久の親愛。ルシルさんから贈られるもので、現状でたぶん1番のものだ。中指に入るかどうかをまず確認して、合わなかったら調整してもらうのだけれど、「うん、ぴったり」だったこともあり、そのままルシルさんに買っていただくことに。

「それとですね・・・。私からルシルさんへ贈りたいものもあるんです。えっと、佼紫玉という石を使ったアクセサリーで、指輪、イヤリング、ピアス、ネックレス、ブレスレットなどなどありますが・・・」

「え？　あーじゃあ・・・イヤリングで」

「イヤリングですね。なら、あちらのコーナーです、行きましょう」

いろんな形のイヤリングをルシルさんは耳に付けて、私の感想でまた別のを選んでいった。そうして「よし。これにしよう！」ルシルさんは、六面体に研磨された佼紫玉のイヤリングを選んだ。

「佼紫玉の石言葉は、揺るがぬ勝利、です。リアンシェルト、そしてガーデンベルグとの闘いを控えているルシルさんに、贈っておきたかったんです」

「っ！　ありがとう、トリシュ。大事にするよ」

「はい♪　私も、この指輪を大事にします♪」

買い物を終えた私たちは、ルシルさんの"マクティーラ"でまずは絵描きさんのところで絵を取りに行き、そしてシュテルンベルク邸へと向かう。

「ただいまー！」

「お邪魔します！」

「お兄様と義姉様は今日は出掛けていて、使用人も今日は休みを出したので居ません。私とルシルさんだけですよ？」

２人きりになるように事前に仕組んでいた我が家にルシルさんを招き入れた。私と２人きりという事実にルシルさんは「そうか。じゃあ夕食の仕上げは、俺と２人でやるんだよな？」焦る仕草もなく、キッチンのある方へと歩き出した。

「（判ってはいても、少しショックです・・・）あとは温めるだけなので、ルシルさんはダイニングで待っていただいても・・・」

「ん？　一緒にやった方が早く済むだろ？　それにその方が楽しい」

ルシルさんとの共同作業と言う甘美な言葉に「ぜひ手伝ってください！」何度も頷いた。洗面台でうがい手洗いを入念に行い、キッチンへと入る。クラムチャウダーや野菜スティック、そして主食の「ピザを焼きます」と、後は焼くだけなピザ２枚をオーブンに入れる。

「結構本格的なピザだったな。一から作ったのか？」

「もちろん！　イリスの影響で料理に目覚めてからというもの、かなりのレパートリーを増やしたんですよ♪」

ピザは５分ほどで焼け、ダイニングテーブルに皿を並べて「いただきます」をする。ルシルさんが料理を口に運ぶのをチラチラと見る。パクッと口に含んで味わったルシルさんは「うん、美味い！」パァッと表情を輝かせてくれた。

「本当ですか・・・？」

「ああ、本当だよ！　ピザもクラムチャウダーも、店で出されてもおかしくないレベルだよ！」

本当に美味しそうに食べてくれるルシルさんに心底ホッとした。私も遅れて自作の料理を口に運んで、「うん、我ながら悪くない」うんうん頷く。自分の料理に舌鼓を打ちながらルシルさんと談笑して、「ごちそうさま」手を合わせた。そして片付けも2人で済ませて、食後のお茶で一服。

「ふぅ。・・・ルシルさん」

「ん～？」

「今日のデート、私に何か言うためにしてくれたんですよね・・・？」

先日、私たちはルシルさんから"セインテストの秘密"を教えられた。歴代セインテストは、初代のクローンであり、"エグリゴリ"の全滅はセインテストの終わりを示す、と。つまりはルシルさんに残された時間は、多く見積もっても3年も無いということを・・・。

（私やイリス、はやてからの告白の返事をするための、最後のデート・・・じゃないかと考えていた）

「・・・ああ」

ルシルさんの表情が一気に曇った。だから「判りました！　ルシルさんへの愛の告白を撤回します！」先手を打つ。振られるんじゃな

くて、なかったことにする。決意はしていたのに涙が溢れてくる。でも零れないように必死に頑張るけど、次第に涙は頬を伝い、嗚咽が漏れ出してしまう。

「～～～～っ！　ごめん、ありがとう、トリシュ。こんな俺のために、ありがとう・・・」

私の側にまで来て、頭を撫でてくるルシルさん。あぁ、やっぱり好きだなぁ。

こうして私の初恋は、終わりを告げた。

Ｅｐｉｃａ５６イリスとルシリオン

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「ふんふふ～ん♪」

今日はルシルとのデートなのだ。気合を入れてお化粧も頑張ったし、服装もいつもの可愛い系じゃなくて大人っぽさを出すものを選んでみた。タートルネックニットにミモレ丈のタイトスカート、ポンチョにストール、ブーツと、色もシックに決めてみた。

「今日はご機嫌ですね。御粧しもしてますし」

学院の制服姿でトーストを頬張ってるイクスがそう声を掛けてきた。

「そ♪　今日は、ルシルとのデートなのだ♪」

「っ！　それは羨ましい限りですね」

イクスって、どうもルシルのことを特別視してるっぽい。どうやらオーディンに惚れてたみたいで、その感情をそのままルシルにも向けてるよう。実年齢が１０００年単位なため、ルシルとイクスが付き合っても犯罪にはならない・・・はず。ま、もうライバルの枠はないので諦めてもらうしかない。

「そういうわけだから、オットー、ディード、セイン。夕食は外で

食べてくるから、父様や母様にもそう伝えておいて」

「「判りました」」「オッケー♪」

フライハイト家の養子として迎えた3人は今メイドモードで、父様と母様を教会本部へ送っていったルーツィアとルーツィエに代わって、わたしとイクスの朝食の準備をしてくれた。

「――っと、そろそろ出るよ。いってきます！」

「いってらっしゃい。楽しんできてくださいね」

「「いってらっしゃいませ」」

「あたしがお見送りするよ！」

イクス達に見送られながらわたしとセインはエントランスに向かい、「んじゃシャル。いってら～♪」ドアを開けてくれたセインに、「ん、あんがと～♪」手を振って応えて、スキップで正門まで向かった。

「ふふ、まだかな～？」

正門を潜って外で待つこと数分。ルシルの愛車"マクティーラ"のエンジン音が遠くから聞こえてきた。音のする方へ体を向けると、サイドカーを取り付けた"マクティーラ"が近付いて来てた。

「おはようルシル～♪」

「おはよう。今日は珍しく大人っぽい私服だな。似合っているし、可愛いよ」

「きゅーん♥　顔を合わせて最初に服装を褒める！　素晴らしい！」

"マクティーラ"から降りてきたルシルに抱きついて、「褒めて遣わす！　ありがと♪」体を離してから、笑顔でお礼を言った。今のルシルは魔導師化によって１８３ｃｍ（だっけ？）の身長に変身してるから、わたしの頭がルシルの胸の位置に来る。鼓動は・・・変化なし。むぅ、やはり強敵だ。

「どういたしまして。じゃあ行こうか」

「ん！　この前お願いしたルートを周ってくれる？」

サイドカーのシートの上に置かれたヘルメットを被って、ルシルが差し出してくれた右手を支えにサイドカーに乗り込む。ルシルと頷き合い、"マクティーラ"が走り出したころで口頭から思念通話へ変える。

『カメロード地区のスケートリンクでスケート、教会巡り、あと温泉だったか』

『そっ♪　クヴェル大広場って、大きな池を囲んだ広場なんだけど、この時期は魔法で凍らせてリンクにする。昔はよくトリシュ達と滑

ってたんだけど、日本に移り住んでからは何年かに1回くらいしか滑ってないんだよね。こっちに戻ってきてからも休暇が合わなかったりでさ。独りで滑るには寂しすぎるし』

『なるほど。しかしシューズが無いが？　レンタル出来るのか？』

『そうだよ。マイシューズは一応持ってるけど、持って行くと荷物になるから置いてきちゃった』

そうしてわたし達は、北区カムランはカメロード地区のクヴェル大広場へ移動。近くの駐車場に"マクティーラ"を停めて、思い思いに滑る家族連れやカップルを視界に収める。

「ところでシャル。君、ふくらはぎ丈のタイトスカートを履いているだろ？　それでスケートなんて出来るのか？」

「もち！　こう・・・スリットを開けて・・・っと」

タイトスカートの右足側のスリットを、４つの蝶結びしたリボンを解くことで開放する。そしたらルシルが「見えるぞ下着が」ってわたしから目を逸らした。

「そこまで派手に動くつもりはないし、黒ストッキングを履いてるから、見られてもハッキリとは見えないはず」

下着が見えないギリギリまでスカートの裾を何度も捲りながら、ルシルに「どう？　見る？」右太ももを近付けた。

「アホ」

「あいた」

ペチンと太ももを叩かれた。裾を元に戻して、シューズをレンタル出来る店に入る。店員さんからの「いらっしゃいませー！」を受けて、わたし達はカウンターへ。そこでシューズと鍵を借りて、裏口から外へと出る。

「ルシル。そこに靴入れて、シューズに履き変えるの」

裏口から出ると、すのこを敷いて出来てる通路と大きな靴箱が視界に入る。靴箱が鍵付き扉なため、そこに脱いだブーツを入れて、一緒に借りた鍵で閉める。

「んじゃ滑りますか。今日はルシルとのデートだから、３０分くらいであがろうっか」

「判った。よし、行こう」

ルシルと一緒にリンクへと入る。最初は慣らしということで、外周をゆっくりと２人で滑る。手を繋いで滑ったり、追いかけっこをしたり、それだけで十分楽しいんだけど・・・。

「むぅ・・・」

「どうした？」

「ルシルと仲良く滑るのも悪くないけど、こう・・・バビュン！と全力で滑りたい」

後ろ向きに滑ってルシルと向き合い、引いていた右腕を前に向かって突き出す。

「とは言ってもな。割と混んでいるぞ？　ほら、今はこれで我慢してくれ」

突き出したわたしの右手を取ったルシルは、もう片方の手で覆ってくれた。確かにこれだけでわたしの心は満たされたから、わたしも左手でルシルの手を覆って「ん。我慢する」頷いた。

『本日お越しくださったお客様方。これより本日午前の部のスケートレースを行います。奮ってご参加ください』

「レース？　へぇ、今はそんなイベントがあるんだ～」

クヴェル大広場の池は直径１４０ｍくらいある。だから拡声器を使ってされたそのアナウンスに反応すると、ルシルが「出てくるか？」って聞いてきた。

「・・・ルシルが応援してくれたら絶対に勝てる。だから・・・」

「ああ、もちろん応援するよ。シャル、行って来い！　そして優勝

を掻っ攫って来い！」

「うんっ！　いってきます！」

参加者を募ってるカウンターへ戻って、レースに「参加します！」と手続きに入る。参加費は無料だけど、ある誓約書にサインを書かされた。曰く、治癒魔法を扱える救護員はいるけど、それでも治せない怪我を負っても責任は負えない、と。

「ではこちらのビブスを服の上から着てください。そしてヘルメットを装着してください」

識別用のナンバーやプリントが施された薄いベスト、ビブスを受け取って、ポンチョとストールを外してから着る。若干胸のところが窮屈だけど、まぁそこは辛抱しようじゃないか。

「ルシル。ポンチョとストール預かっておいてくれる？　待ってる間、匂いを嗅いでいてもいいよ♪」

「どうしてお前は、俺を変態にしたいんだよ・・・。馬鹿なことを言ってないで行った行った」

「はーい♪」

レースのルールは至極単純。１００ｍの直線コースを、１レース５人で速さを競い、それを繰り返す。で、各レースの１位による決勝っていう予定らしい。そして第１レースに参加するわたしは、他の

４人をチラッと見る。

（全員男の人か。ふふ、これでもあのセレスに、氷上の妖精、とまで呼ばれたのだ！　負けはせんよ！）

優勝商品は、今年の芸術強化月間内に限定開店してるお店で使える３割引クーポン。３割というのが安っぽいけど、何か美味しい物を食べるのに使わせてもらおう。

「オン・ユア・マーク。ゲットセット」

レンタル屋の店員さんが右腕を高々に上げた。スピードスケーターのようなスタートの構えを取り、「ゴー！」腕が振り下ろされると同時に駆け出す。この時点でわたしと、もう１人の青年でトップ争いだ。

（ちょっ・・・！　このフォームにスピード、ひょっとしてプロスケーター・・・！？）

すごい綺麗なフォームを見せる青年から徐々に引き離され始めて、「こんのぉぉぉーーーー！」全力で追いかけた。少しだけ距離が縮まったってところで、自慢の動体視力が捉えたのは、空から降ってきた白い・・・白い鳥のフン。それが胸元に落ちそうになった。

「ぴぎゃっほーう！」

変な悲鳴が出た。普通に陸戦状態ならこんな無様な悲鳴も出さずに

余裕で避けれたんだろうけど、残念なことにスケートシューズに滑る氷の舞台の上ってこともあって、「きゃうん！？」お尻を突き出す形でうつ伏せに倒れ込んじゃった。

「もう！　いった～～い！」

「おい、シャル！　シャル！　見えている！　スカートが捲れて、下着が丸見えだ！」

「ほえ？・・・ハッ！」

慌てて姿勢を直してスカートの裾を押さえた。だけどすでに多くの観客に、ストッキング越しとはいえ下着を見られた。それを理解した瞬間、全身が恥ずかしさでカッと熱くなった。

「（ルシル以外の男の人に見られた・・・！）にゃあああああああああああ！！！」

スケートで負けるわ、大衆の前で大恥をかくわ、酷い目に遭った、なんてぶつくさ言いながらクヴェル大広場を後にしたわたしと、「まぁその、なんだ・・・」言いよどむルシルは、"マクティーラ"の停められてる駐車場にまで戻ってきた。

「はぁ。・・・よし、気持ちを切り替えよう！　さっきの事件は、ルシルと1日一緒に居られるための試練だったんだとしよう！」

せっかくのデートを嫌なものにしたくない。だからさっさと切り替

えだ。わたしの機嫌が直ったからかルシルはホッとしたのを見て、「ごめんね」謝ってからその手を取る。

「ルシル！　次！　教会巡り行こう！」

「あ、ああ！」

ルシルのエスコートでサイドカーに乗り込み、シートに跨ってヘルメットを被ろうとしている彼に、「ネルケ大聖堂に行こうよ！」提案した。

「構わないが、いきなりそんな大物でいいのか・・・？」

「いいのいいの♪　ほら、しゅっぱ～つ♪」

そんでわたし達は、中央区アヴァロンはログレス地区にあるネルケ大聖堂へと向かう。芸術強化月間だから、大きな街路は交通規制が行われてる。でも小さな道は速度制限ありだけど、バイク系なら通行できるようになってるはず。

「ルシル。そこのグレイス・ガッセ・ツェーを右折～。エンテ・シュトラーセをしばらく直進。んで～――・・・」

ルシルが事前に用意してくれてた芸術強化月間のイベントパンフレットを使ってナビする。毎年露店が並ぶ主要なシュトラーセはやっぱり通行禁止だけど、バスなんかの運行もあるから全てのシュトラーセが通行止めを食らってはいない。

「ルシル、こっち！」

「あ、おいおい。あまり急ぐと、さっきみたいにすっ転ぶぞ？」

「へーき♪　ルシルが手を繋いでいてくれるもん♪」

"マクティーラ"を地下駐車場へと置いたわたしとルシルは、ネルケ大聖堂へと続く大通りグレイス・シュトラーセ・アーを手を繋いで歩く。この通りはどこを見てもカップルだらけで、割と周囲の目を気にせずにイチャイチャしてる。さすがは結婚情報誌のアンケートでミッドチルダ内で結婚式を挙げたい場所6年連続1位、ネルケ大聖堂前の大通りだ。

「おお！　結婚式してる！」

ネルケ大聖堂の建つグリュック大広場に着くと、多数の参列者と、聖堂の入り口に立つ新郎と新婦の姿があった。

「本当だ。こんな日に寒くないのか・・・？」

「・・・ルシル、その感想はないわ・・・」

「え、いや。綺麗だと思うぞ？　ただ、心配をしているだけで」

ジト目で見るとルシルが慌てて訂正し始めた。まぁ確かにカラッと晴れているとはいえ1月も後半で、布地の薄いウエディングドレス

だから見た目は寒いけどさ。でも結婚式っていうテンション爆上がりだろうし、幸せいっぱいで寒さなんて感じてないんじゃないかな。

「でもさ。寒さを吹っ飛ばすほどに幸せそうな笑顔だよ、新郎さんも新婦さんも、参列者の人たちも」

「ああ、だな。・・・幸せな人を見ると、頑張って平和な世の中にしたいと強く思えてくる。そのための力を持っているし、職に就いているからな」

「だね。・・・でもこれじゃあ聖堂には入れないな～」

芸術強化月間中はかなりの人が集まるから、その1ヵ月間を狙って結婚式を挙げて、その集まってきた人たちにも祝ってもらおうっていう考えをする新郎・新婦もいたりする。まぁ盛大に祝ってもらいたいって気持ちは解かる。わたしもそうだしね。

「しょうがない。次行こう、次！」

「あ、ああ、判った。すぐにマクティーラを持ってき――」

「ううん、このまま歩いてこ～！　徒歩でも十分行けるしね～」

ルシルの腕に抱きついたまま次の目的地、カーリオン地区のオーデム大広場のクローネ教会へ向かう。そこもまた結婚式を挙げたい場所ランキングで毎年上位に入るところだ。さっき歩いたグレイス・シュトラーセ・アーもそうだけど、今歩いてるグレイス・シュトラ

ーセ・ベーも、ドレス専門店が並んでる。

「ねえねえ、ルシル！　このドレス、可愛くない？」

あるドレスショップの前を通りかかった時、ショーウィンドウに飾られたプリンセスラインのウェディングドレスを発見。ルシルの腕を引いてショーウィンドウの前に立って、「いいな～」自分が着た時のイメージをする。

「わたしはあの水色かな。はやては純白も似合いそうだけど、あの薄い黄色も合いそう。トリシュは割と薄桃色が似合いそう。ルシルはどう思う？　わたしかはやてかトリシュ、この３人と結婚するかもしれないんだし、今の内にこういうのを決めておこうよ」

「え？　あ、いや・・・そうだな。シャルはプリンセスラインよりか・・・スレンダーラインで大人っぽさを出せる方が合うかもな。はやては・・・って、待て、待ってくれ」

ルシルからの思わぬ提案に驚いてると、彼はハッとして「俺は、結婚しない・・・」ポツリと漏らした。

「シャル、君とも・・・はやてとも、トリシュとも、俺は結婚しない。出来ない、してはならない。解かるだろ？　というか話したろ？

俺は――」

「もうすぐ死ぬから、ってか・・・」

わたしがデートに誘われた理由を、連絡を貰ってからの1週間の間にずっと考えてた。普通なら自宅でお誘いを祝うパーティを開くレベルだけど、その前にルシルから、セインテストの秘密を語られたことで、素直には喜ぶことが出来なかった。

「ねえ、ルシル。こんな話を知ってる？　余命幾ばくもない女性と結婚した男性。幸せな時間を過ごしていた2人を突如襲ったのは、もう治る見込みのない病を患った女性の時間が後僅かというもの」

「・・・」

「病を患った女性は、男性に別れるように言ったの。男性の家族も、もうじき死ぬ女性と別れるように伝えた。だけど男性は、女性と別れることなく甲斐甲斐しくお見舞いに行き続けた。女性はそのおかげか1年以上も生き長らえた。だけど、その幸運は長く続かなかった。病状が悪化して、残り半年しか生きられないと診断された。いよいよ男性家族は、男性と女性を別れさせようとしたけど・・・」

「男は、恋人にプロポーズした。当然、男の両親は反対したが、男は恋人を説得し続け、恋人も実はずっと結婚を望んでいたため、2人は結婚式を挙げることにした」

「そ。女性は結局退院できないまま、それに夫婦としての時間は半年と短いものだったけど、男性も女性も幸せだってっていう話」

ショーウィンドウから離れたわたしは、ルシルの腕からも離れて一足先に歩き出すと、ルシルも遅れて付いて来てくれて、「それが・

・・なんだって言うんだ」って聞いてきた。聡いルシルならもう察してるだろうけど・・・。

「あなたがこの前話してくれた、セインテストの秘密。信じたくないけど事実だろうから、それを踏まえて言うよ」

セインテストの秘密。それはオーディンもルシルも、加えて歴代のセインテストはみんな、初代セインテストのクローンだったというものだ。たとえルシルがクローンであってもなんとも思わない。それを言ったらフェイトもヴィヴィオもフォルセティもそうだから。何よりショックだったのは、ルシルに残された時間があまりにも少ないということ。何の対処もせず、魔力を消費せずにのうのうと暮らして3年。"エグリゴリ"の全滅とリンクして命を落とすなんて言う、クソみたいなクローン設定によっては、リアンシェルトとガーデンベルグを斃したら、ルシルもそのまま死ぬ。場合によったら1年も生きられないってことになる・・・。

「ルシルは、自分に残された時間が無いから、わたし達の告白を断ろうとしてるんでしょ？　どうせこのデートだって、わたし達に最後の思い出を、みたいな理由でしょ？　正直大きなお世話なわけ」

「っ！・・・すまん」

「ん。ねぇ、ルシル。さっきの例え話でもそうだけど、本当に好きな人となら短い期間でも結婚できたら嬉しいし、幸せなんだよ。ルシルはさ、もう少し自分の思いに素直になった方が良いと思う。わたし達の為だって言ってるけど、わたしからして見れば逃げてるよ

うに感じるの」

「逃げているわけじゃ・・・。俺はただ、君たちを未亡人にするわけには、と・・・」

「だ～か～ら～。それが余計なお世話だって言ってんの。どんだけ短い間でも結婚できたら嬉しいの。あなたが、わたし達の幸せを決めないで」

「あ、ああ・・・」

目を丸くしながら小さく3度ほど頷くルシル。そんなルシルに振り向いて、「今返事したね？　したよね？」彼の胸をツンツンつついた。

「もうこれで、わたし達のため、なんていう言い訳は通用しないからね？　ちゃんとわたし達3人から選んで結婚すること！　オーケー？」

握り拳を作った右手で胸をコツンと打つと、ルシルは「それでも結婚するつもりはないが？」小首を傾げた。わたしとルシルの間で沈黙が流れる。

「はい？」

「ん？　いやだって、理由は別に未亡人（ソレ）にしたくないとか、もうじき死ぬからだけじゃないから」

「はあ！？　何ソレ初耳なんですけど！？」

ルシルがもう1歩踏み込んできてくれない理由は絶対に、わたし達のため、って考えてたから、さらに理由が追加されたことにビックリだ。

「結婚したくないから結婚しない。それだけでも十分な理由だろ？」

「うっわ、ありえなくない？　自分で言うのもなんだけど、わたしって結構可愛いと思うの。はやてとトリシュも可愛いでしょ？　それでも食指が動かないってわけ？」

「そういうわけじゃないが。ただ、しない！」

「なんだそれは～～～～！」

ルシルの頭を両手で鷲掴んでぐわんぐわん揺らしまくる。ルシルは「こらこら、やめんか」されるがまま。結局わたしが疲れるまでルシルの頭を揺らし続けた。

「あ～、視界が揺れる～」

「わたしが言うことじゃないけど、なんで抵抗しなかったの？」

「君を不快にさせたことは事実だから、その罰みたいな・・・」

わたしは呆れて大きく溜息を吐いて、わたしの所為でくしゃくしゃになったルシルの綺麗な銀髪を手櫛で梳きながら「ばか」って、ルシルの頭にこつんと額を当てた。

「結婚したくない、か。なら、わたしはその考えを改めさせるように頑張ればいいわけだ」

「は？」

ルシルから数歩後ろに下がって、「覚悟してね、ルシル！　そっちから結婚してください、って言わせてやるんだから！」びしっと指を差して宣言すると、ルシルが小さく鼻で笑ったから「なに？」ジト目で睨む。

「あーいや。お手柔らかに頼むよ」

微笑みを浮かべてくれたルシルに、「いや♥」って即答したわたしは、改めてルシルの腕に抱きついて「次！　次の教会！」へ向かうために引っ張ってく。歴史と由緒のある数多い教会は、ザンクト・オルフェンの自慢であり誇りである。でもだからって・・・。

「どこもかしこも結婚式て・・・。1月に結婚式て・・・。もう少し温かくなるのを待ってからやればいいのに・・・。目的だった教会に入れないなんて」

「今のザンクト・オルフェンを思えば、ああいう幸せの具現とも言うべき結婚式を開いてくれることは助けになるんじゃないか？　教

会騎士団・・・と言うより、最後の大隊を擁護する世論の声が今尚強いとはいえ、管理局派からは手痛いお言葉を貰っているからな。少しでもザンクト・オルフェンを擁護しようという人たちからの応援かもしれない」

最後の大隊構成員の中でも幹部クラスは全員重罰を与えたけど、末端の騎士やシスター、それに技術者に聖職者には、罰金・減給・降格などなどの処罰が下された。管理局派はそれだけじゃ足りないから組織全体にもっと重罰を科せ、と言っている人たちだ。

「それはそうかもだけど・・・。むぅ」

「どうする？　もう昼食の頃合だし、近くの店で何か食べるか？」

教会巡りは徒歩にしたことでお腹が、くぅくぅ、鳴り続けてる。すんごい恥ずかしいけど、付き合ったり結婚したりしたら、これ以上の恥ずかしいことも数あるだろうし、赤面してるのを自覚しつつ、「ううん。もう次の目的地に行く」ことにした。

「次、というか今日最後の目的地は、北部カムランはベンウィック地区にあるから、マクティーラで行こう」

「ベンウィック地区の温泉というと、有名処で言えばザンクト・アメリア温泉街か・・・？」

「当たり（ゲナウ）！　ミッドでも五指に入る温泉街で、お昼は温泉街で食べようと思うんだけど、どうかな？」

デートに誘われてからの1週間で、わたしはいろいろと手回しをしてきたのだ。ふっふっふ、と笑っていると、ルシルが「シャル。その不気味な笑み、何か企んでるだろ？」ジト目を向けてきた。

「え？　ううん、何も？　マジで何も？　な～んにも企んでないよ？　あそこの温泉たまご、すんごい美味しいの！　それをルシルと一緒に食べられるっていうのが幸せすぎて！」

割と本音だから嘘にはなってないから、ルシルも疑わずに「そっか。温泉たまご、美味いからな～」ってニコニコした。

「じゃ、そういうわけで！　ザンクト・アメリア温泉街へ出発しんこ～！」

「よし！　行くか！」

湯冷めしないようにバスで行こうって提案してくれたルシルだけど、それじゃあわたしの計画が水の泡になるから、"マクティーラ"で行くことを押し通した。それでまたちょっと不振がられたけど、「とうちゃ～く！」なんとか到着。

「おお、湯気がすごいな。真っ白だ」

「ルシル。アメリアツヴァイトホテルの第2駐車場が開放されてるから、そっちに停めて」

「了解。案内板に従えばいいんだな」

ザンクト・アメリア温泉街。ぐるりと丘に囲まれた約１２０平方Ｋｍの巨大温泉。当時の教皇アメリア聖下（わたしの高祖母だね）が、ミッドに移住したベルカ人と一緒に、ミッド人に何かお返しが出来ないかということで、温泉の周囲に街を造り始めたのが始まりだ。

「おお！　ホテルって話だったが、日本の旅館みたいじゃないか！」

「そう！　アメリアツヴァイトホテルは、今は亡きお祖母様が、わたしが留学していた日本とはどのような場所なのかって聞いてきてね。話の中で特に旅館を気に入ってくれたの。そこからはとんとん拍子にこのツヴァイトホテルをお造りになったの。チーム海鳴のみんなも招待したかったんだけど、いろいろと都合が合わなくてさ」

「なるほど。内装もひょっとして和風か？」

「もちろん！（ふっふっふ。自然とアメリアホテルに誘導してやったぜ）」

「それは楽しみだ！」

ここまで来れば残りの計画も上手く行きそうだ。ルシルの後ろだから気付かれないだろうけど、ニヤニヤが止まらない。

「まずは腹ごしらえだな。もうそろそろ限界だ」

「だ、だね～」

急に振り向かれたからちょっぴり焦ったけど、にやけ顔から微笑み顔に出来た。

「こほん。ザンクト・アメリア温泉街に来たからにはまずは温泉たまご！　美味しいお店知ってるから！」

とうとうルシルのお腹も鳴り始めた。ルシルの手を引いて温泉たまごを売ってるお店にたどり着く。ドアを開けるとチリンと鈴が鳴って、「いらっしゃいませー！」キッチンに立つ老夫婦や、テーブル席のお客さんに料理を運んだり、空いた皿を片付けてる他の若い店員さんから挨拶が掛かった。

「こんにちは～」

「あらイリスちゃんじゃない！　それに色男も！」

「久しぶり、おじさん、おばさん！」

元気に挨拶するわたしと、調理中なおじさんとおばさんの様子にルシルは1歩引いたところで見てたけど、「あ、いつかのカリーヴルストの・・・！」思いだしたみたいで、わたしの側に寄った。

「おっ、憶えていてくれたかい！」

「局と騎士団の英雄様に憶えていてもらえると嬉しいさね！」

以前、リンドヴルムとの戦いの最中、わたしとルシルの2人で芸術強化月間内でデートした際、露店でカリーヴルストを売ってたおじさんとおばさんだ。だからルシルも「ご無沙汰しています」って小さくお辞儀した。

「注文いいですか？」

「ええ、もちろん！」

「メニューです、どうぞ」

テーブル席に付いたわたしとルシルにメニューを届けてくれた店員の女の子に、「ありがとう」ルシルがお礼を言うと、女の子は顔を赤くして「はい！」目をハートにして頷き返した。ルシルは女の子を見送ってからメニューを開いた。

「ねえ、ルシル」

「んー？」

「笑顔1つくださいな♪」

「ああ・・・、はい？」

ルシルと一緒になったら、こういうモヤモヤとも付き合っていかないといけない。嫉妬で愚痴ったり拳を振るったりしてたら、確実に

終わる。だから落ち着くために笑顔をリクエストしたら、最初は呆けてたルシルも、「ほら、これでいいか？」陰りがあるけど、でも綺麗な笑顔を向けてくれた。

「ん！　余は満足じゃ！」

「勝手に満足していないで注文だ。どれどれ・・・」

「わたしはもう決まってるし。まず温泉たまごを２つ。１つは味付けなしで、１つはシンプルに塩。カルボナーラに温泉たまご乗せ。あとイワシのフリットとコンソメスープ、それにシーフードサラダ」

「かなり食べるんだな」

「あんだけ歩いたんだもん。お腹空き空きだよ～。ほら、ルシルも頼んで」

「確かにな。じゃあ俺も温泉たまご２つ、味付けも無しと塩で。カレーピラフに温泉たまご乗せ。
サイコロステーキとコーンポタージュ、あとポテトサラダ」

「かしこまりました！　少々お待ちください！」

わたし達の注文を受けた女の子を見送って、料理が来るまで食事後の予定を確認する。真っ先に名物である大温泉だ。約１２０平方Ｋｍっていう馬鹿でかい温泉にゆったり浸かるのがいい。丘の向こうにある海とは地下トンネルで繋がってるから、そっち辺りで茹った

体を冷やして、また熱い温泉で温まる、を繰り返すことも出来る。

「お待たせしましたー！」

どこで水着をレンタルするかの話をしていたところで料理が到着。ルシルと一緒に「いただきます！」手を合わせて、早速エッグカップに収められた「温泉たまごー！」を手にとって、スプーンで掬ってパクッと一口。

「ん～～～～♥」

「これは美味い！　温泉たまごって、なんでこんなに美味いんだろうな」

「うんうん！」

他の料理ももちろん美味しくて、ルシルが頼んだ料理も食べたくなってきたから、「ルシル。サイコロステーキ、ちょっとちょうだい」お願いしてみると、「ああ、どうぞ」お皿をスッと差し出してくれた。けどさ・・・。

「やっぱりここは、あーん、でしょ？」

口を開けて待ってると、ルシルが「ぷふ」小さく吹き出した。

「え、なに？　何で急に笑い出すの？」

「いや、なんでもない。そうだよな。くふふ、それでこそシャルだよ」

「もう！　なんなの！？」

口の端や歯に何か付いてるのかって思って、手鏡をポシェットから取り出して口の回り、ありえないと思いながらも鼻毛もチェック。特にまずいことはないように見えるけど、ルシルは声には出さないけど笑い続けてる。

「いやいや。くふ。シャル、さっ、どうぞ。あーん、だ」

「わけわかんない。・・・あーん」

モヤモヤしつつもルシルが差し出してくれた、フォークに刺したサイコロステーキを「あむ」パクッと食べた。うん、これも美味しい。ほわぁ、って幸せビームを出せそう。

「じゃあイワシのフリットを半分あげる！　あーん！」

「あーん」

間接キスになるあーんを、割とあっさり受け入れてくれたことにちょっとビックリしたけど、フォークに刺した切り分けたフリットをパクッと食べてくれた。

「あぁ、これも美味い」

「なんか今日、ルシル優しい・・・」

「はあ？　俺はいつも優しいはずだぞ？　それに今日はデートをしているんだ。相手の女の子に厳しく当たるわけないだろ」

「っ！　えへへ♪」

幸せいっぱいな食事も終え、大温泉の周囲を囲う温泉街道を軽く散歩してから、わたしとルシルは温泉に入るための水着をレンタルしてくれるお店に移動。大温泉は公共施設ってこともあって裸での入浴は厳禁で、水着着用が義務付けられてる。

「いらっしゃいませ」

「大人2人でお願いします」

レンタル屋さんへ入ったわたし達は、水着レンタル料を含めた温泉への入湯料を支払い終わり・・・。

「じゃあルシル。わたしの水着姿を楽しみにしててね～♪」

「ああ、期待しているぞ。あ、1つリクエスト。一緒に歩いていても恥ずかしくならないようなやつでな」

「ほーい♥」

ルシルと一旦別れると、女性マークの描かれたカウンターの右隣の廊下を進んで、まずは女性専用のウォークインクローゼットで水着を選択する。５０人くらいが１度に入ってもまだ余裕のある広さだから、水着の数も膨大だ。

（私服は大人っぽさを出してみたし、今度は可愛い感じでいってもようか）

白のホルターネックのビキニを選択した。胸元には大きめのリボンをあしらっていて可愛いし、ホルターネックならわたしの胸の大きさを強調できるし、ちょうどいい。胸のサイズばっかりは、はやてやトリシュに絶対勝ってる。ちなみにボトムは膝丈のフレアスカートの付いたものを選んだ。

「よしっ！　さ、着替えに行こう！」

鍵付きロッカーの前で水着に着替えて、姿見の前でクルッと１回転。バッチリ決まってることを確認してから、ウォールインクローゼットから出て、カウンターへ伸びる方向とは別の、大温泉へと繋がる廊下を進む。そしてスライドドアを潜れば「おお！」湯気の立ち込める大温泉が目の前に広がる。

「お？　来たな」

「ん、お待たせ♪・・・ルシルは、普通のハーフパンツスタイルだね」

大温泉まで続くすのこロードをルシルと2人で歩く中、ふっと頭に湧いた「ブーメランとかで良かっ――」なんて、冗談をかましてみようとしたんだけど・・・。

「絶対に嫌、死んでも嫌。金を出されても嫌」

「お、おう・・・。冗談だから、睨まないで睨まないで」

割と本気な拒絶に腰が引けちゃった。ビクッとしたわたしを見てルシルは「ごめん」謝ってくれた後、「シャル。水着、とても似合っているよ」そう褒めてくれた。

「～～～～～っ！！　ありがと！」

「のわっ！？」

もうそこまで来ていた大温泉へと、抱きついたルシルと一緒にドッバーン！と入湯。深さは３ｍほどあるから間違っても体を底に強打することはない。

「「ぷはっ！」」

「気持ちいい～！」

「たわけ！　いきなり危ないだろうが！」

「今日は厳しく当たらないって言ったのにぃ～」

「限度があることを憶えておこうか？　ん？」

ルシルが両手でわたしの頬を挟んでムニムニ捏ねてくるから、「ふぁい」変な返事になった。ルシルはわたしの変顔を「温泉に入ったからかスベスベだしモチモチだな～」なんて言いながら堪能してるけど・・・。

「ちょい待ち。入らなくてもスベスベだしモチモチだったもん」

とりあえずそう反論しておく。お肌の手入れは手間を惜しまずしているから、温泉だけのおかげとは思ってほしくない。ぷくっと頬を膨らませえると、ルシルは小さく吹き出して、「判ってる。どれだけの付き合いだと思っているんだ？」笑顔を見せた。

「むぅ。ルシルばっかり、わたしをキュン♥ってさせる。ずるーい！」

「そんなこと言われても困る。ほら、今は温泉を楽しもう」

ルシルはそう言ってわたしから離れると、「あー、これはいい～」全身から力を抜いてお湯に身を任せてプカッと浮いた。心底気を抜いて楽しんでるみたいだから、ここはちょっかいを掛けずにわたしも「おおう」お湯に身を任せて浮いてみた。

「あ、これ気持ちいい～」

それから2人で大温泉を堪能した。時折5つある浮島に上がって、

美味しいジュースやアイスクリームで体をちょっと冷やしてはまた浸かって繰り返した後は、レンタル屋さんに戻って私服に着替えた。

「思った以上に長居したな。皮膚がふやけてしまった」

「だね～。あ、ルシル。夕ご飯なんだけど、マクティーラを停めてるホテルで摂らない？」

さぁ計画を実行に移す時だ。妙な笑い声を出さないように気を付けながら提案すると、「構わないよ」即断してくれた。心の中でガッツポーズをして、ルシルの腕に抱きついてホテルへと向かう。エントランスに入ると暖房が効いてるようで温かい。

「レストランは・・・」

ルシルが案内板を確認しようとした。そんなルシルから離れたわたしはカウンターへ。スタッフがわたしに気付いて「いらっしゃいませ」お辞儀した。

「今日予約した、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトです」

「少々お待ちください。・・・はい、夕食・朝食付きで1泊のご予約をしていただいたフライハイト様ですね。確認いたしました。こちらが００３号室のカードキーと、届いたお荷物となります」

ルシルが今なお案内板の地図を確認中なのをチラッと確認しつつ、「どうも」カードキーと、すでにホテルに配送していたわたしと、

前日に買っておいたルシルの着替えを入れたキャリーケースを受け取る

「シャル。レストランはこっちだそうだ。って、そのキャリーケースはなんだ？」

「あ、これ？　わたしとルシルの明日の着替えや下着が入ってるの。それは何故かって？　ふっふっふ。とルシルは今日、このホテルで1泊するからです！」

「・・・は？　いや何言っているんだ？　初耳なんだが」

「うん、今初めて言ったから！」

「・・・帰る」

出口に向かって歩いて行こうとするルシルを「ダメ～」腕を取って引き留めた。

「いいじゃんか～！　1拍くらい～！　知ってるんだからね、トリシュの家に泊まったの！　それなのにわたしとは泊まれないって？　あんまりだ～～～～」

「ちょっ、しず――くぅ・・・、判った。判ったから。・・・ただ、1つだけ言っておく。トリシュとは何も無かったからな！」

「知ってる知ってる♪」

ルシルの手を引いて、わたしが予約しておいた００３号室へと向かう。１ケタ台の部屋はかなり高い。何故なら、なんと部屋に露天風呂が付いているのだ。

「えっと・・・ここだ、ルシルここ！」

「はいはい。って、格子戸だ。本格的だな～」

格子戸をガラッとスライドして開けて入り、身近な通路の先にあるドアをカードキーでロックを開示してドアを開けると、「和室だ。畳の香りも素晴らしい！」ルシルのテンションがうなぎ上り。踏込で靴を脱いで室内に入って行った。

「障子を開けると景色を見られるんだな。しかも露天風呂付き。この部屋高かっただろ、シャル？　宿泊代、俺も出すから」

「（ふふ、子供みたいで可愛い♪）・・・宿泊代に関しては全てわたしに持たせて。ここに泊まるって決めたのも予約したのもわたしの一存だから、絶対にわたしが払う」

「・・・そこまで言ってくれるんだ、お言葉に甘えさせてもらうよ。ありがとう」

「どういたしまして。あ、それはそうとルシル。食事はこっちに運んで来てもらうことになってるから部屋の外に出なくてもいいし、そろそろ魔導師化解いたら？　ただでさえ魔力を使うのは体に負担

が掛かるし、寿命も減っちゃう・・・んでしょ？」

ルシルはコートをハンガーに掛けてから座椅子に座って・・・

「・・・エグリゴリのような強敵と全力戦闘しないならさほど問題じゃないが。そうだな、少しだけ休ませて貰おうかな」

変身魔法も解除したことで、一気にわたしより背が低くなった。わたしもポンチョとストールをハンガーに掛けてから、脚の短いテーブルを挟んだ座椅子に座る。

「お茶でも淹れようか？」

「ん？　あー、じゃあお願いしようかな」

「うん。ちょこっと待っててね～」

ルシルと一緒にお茶を飲んで「ふぅ～」ホッと一息吐く、この夫婦みたいな雰囲気で幸せいっぱいになってた。そんな雰囲気の中で運ばれてきた料理――しゃぶしゃぶに天ぷらに鶏肉の炊き込みご飯などなどを、「いただきます！」美味しく頂く。

「おいふぃ～！」

「うん、美味い！　シャル、今回はあーんしないのか？」

「え？　全部ひとりで食べたいからやめとく～♪　ルシルは～？」

「俺も、全部自分で食べる」

「だよね～」

1人前でも十二分な量だった料理には満足のみ。食べ終えた後は「ごちそうさまでした！」手を合わせて、調理してくれた人や食材に感謝。空いたお皿などを従業員さんが回収してからは数十分とルシルと談笑。露天風呂に入るための休息だ。

「そろそろ入ろう～っと」

キャリーケースを開けて下着を取り出す。タオルは備え付けのものを使っていいし浴衣もあるしね。用意を終えたわたしにルシルが「ちょっと待て。部屋を出るから」なんて言い出した。

「え？　いいよ、ここに居て。外に出るなら魔導師化しないとダメじゃん」

「いやだって、露天風呂に入るんだろ？　襖などで隔たれているとはいえ、男がこんな近くに居たら気になるだろ、さすがの君でも・・・？」

わたしを気遣ってくれたのは嬉しいけど、ここは攻めよう。そのためにこのホテルを選んだんだから。お茶のお代わりを注いでるルシルに「一緒に入ってもいいんだよ？」ってしなを作ってそう提案する。

「・・・いい。ひとりでゆっくり入る派だからな」

その割りにはアイリと一緒に入ってたみたいだけどね、本局の寮に住んでた頃は。やれやれって肩を竦めたわたしは、備え付けのタオルと下着を手に開けっぱなしの障子を閉めて、さらに磨りガラスの面積が広い格子戸を閉める。これでルシルからは見えなくなった。

「脱衣所は・・・こっちか」

横に伸びる縁側の右側に3人くらいが入れる脱衣所があって、ドアを閉めて着ている服と下着を脱いで裸になる。これからやることに心臓がバックバク。バスタオルで体を覆って、本来は外へ出るためのガラス戸を開けず、ルシルの待つ部屋へと戻る。ルシルはクッキーとコーヒーを嗜んでいて、「何か忘れ物か？」って、わたしの方に振り向いた。

「ぶぅぅぅーーー！！　げほっ、ごほっ、えほっ、ぐふっ、ちょっ、おま、何をやって・・・！」

コーヒーが気管に入っちゃったのか激しく咽るルシルの元に歩み寄って、「ルシル」を床に押し倒して馬乗りになる

「待っ！　見える！　タオルの裾から股(ナカ)が見えるから！　退けマジで！　なあ！」

「わたしは本気だよ。本気でルシルを誘惑してる。でも恥ずかしい

わけじゃないんだよ？　ほら、すごくドキドキしてる」

ルシルの右手を取って私の胸に押し付ける。全身がカッと熱くなって、鼓動が跳ね上がる。本当は、体に巻いてるタオルを剥いで生まれたままの姿で馬乗りになる予定だったけど、ちょっとそこまでの度胸が無かった。今でさえいっぱいいっぱいなのに。

「シャル！　な？　変なイタズラはもうやめよう？」

「や。ルシルも一緒に露天風呂に入ってくれたら考えても・・・」

わたしを見ないように顔を逸らしてるルシルの両頬に手を添えて、グイッとわたしに向かせる。

「いいよ？」

「むぐっ！？」

文句が出るより先にルシルの唇を塞いであげた。さぁ、夜は長いよルシル。わたしの本気、見せてあげる。

Ｅｐｉｃａ５７はやてとルシリオン

†††Ｓｉｄｅはやて†††

ある理由で魔法戦を行うことが難しくなったルシル君。そやからシャルちゃんが部隊長を務める特務零課――特殊機動戦闘騎隊では事務方に就いてる。もう１つの内務調査部でも、可能な限り移動が多くならへん仕事を請けるようにしてる。

「おはよう、はやて。少し遅れたかな？」

「おはよう、ルシル君。全然や。きっちり１０分前。私が早く来すぎただけやよ。アイリも、おはよう」

「ん。おはよう、はやて。じゃあルシル。アイリ、特騎隊（シャル）たちと合流しないといけないからもう行くね～」

「ありがとう、アイリ」

「おおきにな！」

車椅子に乗って、私との待ち合わせ場所にやって来たのはルシル君、それに車椅子を押すアイリの２人。私たちが今おるんは本局やから、私もルシル君もアイリも局の制服姿や。

「さてと。今日のデート、はやてが行き先を決めてくれるという話

だったけど・・・」

ルシル君からデートのお誘いを受けた私は、すぐにルシル君が抱えてる問題が根底にあるって察した。ルシル君に残された時間は、魔法戦を一切行わずにいて3年、局の仕事によっては半年、"エグリゴリ"との闘いになれば1週間もあらへんってこと。

ルシル君は前々から、いつ死ぬか判らないから、ってゆう理由で、わたしやシャルちゃんやトリシュのアプローチをのらりくらりと躱してきた。確かに"エグリゴリ"は強敵やし、ルシル君も命懸けで戦ってきてた。そやけど、私はどこかでルシル君は勝ち続けて、"エグリゴリ"を全員救えるって思うてた。

（それやのに、まさかエグリゴリの全滅が・・・ルシル君の死に繋がるなんて・・・）

勝っても負けてもルシル君は死ぬ。その事実をルシル君から語られた後、家に帰った私は部屋でたくさん泣いた。ルシル君の抱えてること、何ひとつとして察してあげられへんかった。死ぬと解かっていながらも戦い続けてたルシル君は、それがセインテストの宿命だから死ぬことは怖くない、って言うてた。そやけど勘違いかもしれへんけどルシル君の目は・・・。

「あ、うん。今日は・・・あ、着いてからのお楽しみってことで！」

「そうか。ああ、判った」

そうゆうわけで、私はルシル君の乗る車椅子を押して、最初の目的

地である「スカラボ・・・？」に到着。小首を傾げるルシル君は「トランスポートか」ここを訪れた理由をすぐに察してくれた。

「うん。お、ちゃんと私服も持って来てくれたんやね」

車椅子を押すためのグリップに掛けられてるバッグの中にはルシル君の着替えが入ってる。ルシル君は「そういう約束だったからな」私に振り向いて微笑んでくれたから、「おおきにな♪」私も微笑み返した。

「あ、はやてちゃん、ルシル君。約束の時間通りだね。いらっしゃい」

スカラボに入るためにスライドドアの側のタッチパネルに触れようとしたら、ドアの方が先に開いてすずかちゃんが出迎えてくれた。

「今日はトランスポート使わせてもらっておおきにな、すずかちゃん」

「ううん、気にしないで。技術を使わずに埋もれさせるより、どんどん使った方がいいんだから。えっと、まずは着替えからだよね。ロッカーまでちょっと遠いから、はやてちゃんはトランスポート室で、ルシル君はここで着替えてもらおうかな」

そう言いながらすずかちゃんは入り口のドアをロックし直して誰も入れないようにした。わたしにトランスポート室を宛がったのは、ルシル君は自分で着替えるやろうから脱いだ服などを置く場所が近

くに必要やからかな。

「ルシル君、着替え手伝おうか？」

「ありがとう、はやて。でも大丈夫だよ」

わたしから受け取ったバックを膝の上に置いたルシル君はジャケットを脱いで、シャツのボタンを外し始めた。その様子をまじまじ見てると、「はやて、すずか。男の着替えを見て楽しいか？」ってルシル君がニヤニヤ。

「「ご、ごめん！」」

ルシル君にからかわれてるって判ってたけど、私とすずかちゃんは慌てて隣のトランスポート室に入った。鼓動が早くなってる胸を両手で押さえ、「わ、私も着替えんとな」こほんと咳払い。

「う、うん。あ、昨日預かった服持ってくるね」

キャスター付きのハンガーラックを近くにまで持ってきてくれたすずかちゃんにお礼を言う。今日のために選んだのは、ボウタイブラウスにキュロットにストッキング、あとPコートとブーツとベレー帽や。

「脱いだ服は貸してね。責任を持って預かっておくから」

「おおきにな、すずかちゃん」

脱いだジャケット、タイトスカート、ブラウス、タイをすずかちゃんに預け、ハンガーラックから服を取って着てく。

「・・・はやてちゃん」

「ん？　なに、すずかちゃん？」

「あ、えっと・・・頑張って！・・・って、そんなことしか言えないけど。私も、ルシル君をこのまま亡くしたくないって思う。エグリゴリを斃すためだけに生み出され続けるセインテストシリーズ。でも勝ったら勝ったで、今度は世界に影響を及ぼさないために自壊するなんて。こんなの惨すぎる・・・。だってそれじゃルシル君は・・・」

「死ぬために生まれてきた・・・」

生命である以上、人もいずれ死ぬ。寿命、病気、事故、事件。どんな理由であれ必ずや。私たちもいずれ死ぬ。そやけどそれは生きるために一生懸命生きて、その結果ってことや。ルシル君のは特別すぎる。自分の死を自分の手で起こす。しかもそれが他人に定められたものやって自覚しながら。

「私も、ルシル君がこのままでええとは思わへん。せめて幸せの中でルシル君を・・・。『ルシル君。着替え終わった？』」

ハンガーラックと一緒に用意してもらったスタンドミラーの前に立

って、服装に乱れがないことを確認してから念話でそう尋ねると、
『ああ、終わったよ』着替え終わったことを伝えてくれた。
『ん。じゃあ迎えに――』
『あーいいよ。こっちに来てまたそっちに戻るのも二度手間だろ。俺が行くよ』
ハンガーラックに残るトートバッグを肩に掛けたところで、応接室とトランスポート室を隔てるスライドドアが開いて、ハンドリムを回して車椅子を進めるルシル君が入って来た。ロング丈のTシャツにニット、ウールチェスターコート、スキニーパンツ、スニーカーってゆうコーデや。
「すずか。応接室に俺の制服を残してきたんだが・・・」
「うん。ちゃんとお預かりします♪　だから安心してね」
「じゃあすずかちゃん。転送よろしく」
「うんっ、任せて！」
車椅子の後ろに回ってグリップを握って、ルシル君と一緒にトランスポートに入ると、すずかちゃんがキーボードモニターを展開してキーを打ち始める。その間に私は靴を脱いで、左手の人差し指と中指に引っ掛けて持つ。これから向かう場所は土足厳禁やからね。ルシル君の靴ははまぁ車椅子のフットサポートに乗ってるし、ええか

な。

「よし。はやてちゃん、ルシル君。いってらっしゃい♪」

「「いってきます！」」

すずかちゃんが最後のキーを打つと同時、転送が始まった。そうして私たちは、私の決めたデートスポットの「ただいま、海鳴市！」に到着した。とは言うても、ここは「ハラオウン家・・・？」ルシル君の言うとおりの場所やけどな。

「おお！　はやて、ルシル、いっらっしゃ～い！」

「こんにちは～、アルフ！」

「久しぶりだな、アルフ」

私たちを出迎えてくれたんは狼の耳と尻尾を生やした女の子、アルフ。フェイトちゃんの使い魔で、今はクロノ君とエイミィさんのお子さんであるカレルとリエラの面倒を看てる。お子さん達が小さな頃は、背格好も合わせて小さかったけど、今は私くらいの大きさに姿を戻してる。

「おう！　フェイトやアリシア達から聞いてたけど・・・マジで車椅子なんだなルシル。ルシルって言えばさ、チーム海鳴の最強だったわけじゃん？　だから割かしショックを受けてるあたしがいる・・・」

「すまないな。しばらくはこんな情けない俺のままでいさせてもらうよ」

「ご、ごめんルシル！　あたし、馬鹿なこと言った！　ごめん！」

「気にしない、気にしない。ところでアルフ。子供たちは居ないのか？」

しょんぼりしてるアルフの頭を撫でるルシル君がそう聞くと、アルフは「今日は友達んち行ってる。だから今はちょっと暇してんだ！」ニッと笑顔になった。

「そっか～。今日はお世話になるから挨拶をって思うてたんやけど」

帰りもこちらのトランスポートを使う予定やからな。でも居らんのやったらしょうがない。とゆうわけで、「じゃあアルフ。また夜にお世話になるな」ハラオウン邸から発つことにした。シャルちゃんやトリシュのデートの時、ルシル君は泊まりやったけど、私とのデートは日帰りや。

「そうか？　じゃあそこまで見送るよ」

アルフを先頭に玄関まで来た私とルシル君は、「いってきます！」見送ってくれるアルフに手を振って、地上に降りるためのエレベーターへ乗り込む。

「しかしはやて。まさか海鳴市に来るとは思わなかったよ」
「そうか？　割と判りやすいと思うけど。シャルちゃんやトリシュとのデートはミッドやったろ？　なら私は、私の生まれ故郷・海鳴市を推すよ」
「そうだな、ああ、はやてらしい選択だよ。それで、まずはどこへ？」
「ひ・み・つ、や♪」
マンションから出た後は、私の考えたデートコースの第1目的地に向かって車椅子を押してく。
「まずはバスに乗って移動やね。ちょう買い物に付き添ってもらうけどええかな？」
「もちろん。でもそれなら魔導師化して歩けるようにすればよかった。しかし・・・」
「私が頼んだからな。ルシル君は車椅子で来るように、って」
少しでもルシル君の寿命を延ばすには魔導師化の回数を減らす必要がある。魔導師化しても戦闘を行わへんかったら問題ないってゆう話やけど、蓄積することは間違いないはず。そやから少しでも気を付けたい。
それから私とルシル君は、停留所からバスに乗り込んで、最初の目的地である「スーパー・・・？」に到着や。

「買い物って、服や装飾品と思っていたんだけど・・・」

「あ、うん。今日はデートとゆうか、散歩みたいなことをしようって思うててな。ルシル君と思い出のある場所を回ろうって」

「それで、最初はこのスーパー・・・」

ルシル君は憶えてるやろか。ここは私とルシル君が初めて会った、私にとってとても深い思い出の場所や。スーパーの中に入ると、ルシル君が買い物カゴを膝の上に置いた。

「ルシル君。結構買う物があるから重くなるよ・・・？」

「大丈夫だよ。2リットルボトルの複数購入とかなら考えるが」

「んー。そこまでは重くなることもない・・・はず」

真っ先に向かうんは果物売り場。そこでリンゴやミカン。また別の売り場でお酒とジュースとお饅頭、お供え用のお水。さらに懐紙とロウソクとお線香をルシル君に手渡すと、カゴに綺麗に収めていってくれる。

「はやてのご両親の墓参りだな」

「うん。ちょう付き合ってな」

「去年は行けなかったからな。いい機会だよ。娘さんにはお世話になっていることも合わせて挨拶しておかないと」

「おおきにな」

お供え物の買い物を終えて外に出ようとしたところで、「はやてと初めて会ったときのことを思い出すよ」ルシル君が私に振り向いた。

「憶えててくれたんやね」

「忘れるわけがないさ。俺にとっても大切な思い出だよ」

そんなこと言われたら、きゅんってなる。そやから「ルシル君。後ろからでええから抱きしめてええ？」って聞いてみる。

「とりあえず人目があるからやめようか」

「とゆうことは、人目がなかったらええんやな？」

「・・・まぁそれなら」

「っ！　じゃあ約束な」

まさかのＯＫに頬が緩んでまう。さて、スーパーでの買い物も終わって、次はお花屋さんに行くことに。目的のお花屋さんは、ルシル君の探し物（今思えばエグリゴリやったんやね。探し物やなくて探し者やったわけや）に初めて付いて行ったときに訪れたお店。会話

の内容までは憶えてへんけど妖精とか膨大な花びらとかは、今でも憶えてる。

「（あと、そう言えば・・・）ルシル君の防護服も、今とデザイン違うよな？　昔のはもっとこう・・・怪しい雰囲気満載って感じやったけど・・・」

確か、フード付きのマントに仮面ってゆうものやったな。ルシル君は「消費魔力が大きいからな。だからあの日1回限りにしたんだ」って言うた後、「お、見えてきたぞ」お花屋さんを指差した。店内は車椅子で入るにはちょう狭いから、「俺は外で待ってるよ」と言うてくれたルシル君を置いて、私は「すぐ戻るな」ひとり店に入った。

（ガーベラとフリージアとミニバラ、他にミニ胡蝶蘭やベリーも見栄えで追加してっと）

お墓に供える花束を一対購入して、「お待たせや」ルシル君と合流。トートバッグにはさっき買ったものが入ってるから、花束はルシル君が持ってくれることになった。
そんで次の目的地である、父さんと母さんが眠る墓のある霊園へとバスで向かう。海鳴市の郊外ってゆうことで時間が掛かったけど、なんとか午前中に到着することが出来た。

「はやて。俺も掃除を手伝うよ」

「え？　車椅子やといろいろと難し・・・あ！」

ルシル君が魔導師化してまで車椅子から立ち上がったから、私は急いで「ルシル君は座って見てて！」駆け寄った。

「いいやダメだ、こればかりは譲れないよ。１０年以上とはやての世話になっているんだ。はやてのご両親の墓の掃除を、そんな俺がしないわけにはいかない。・・・手桶と柄杓と雑巾を借りてくるよ。すまないが車椅子を持って行ってくれ」

「ちょっ、ルシル君！？　もう！　嬉しい話やけど、あんま無茶せんでほしいわ・・・」

自由にレンタル出来る掃除用具一式を借りに走って行ったルシル君の背中を見送った後、私は車椅子を押して父さんと母さんの眠るお墓の前に向かう。

「久しぶり、父さん、母さん。はやてです」

霊園の管理人さん達が善意で草むしりをしてくれてるおかげで、うちだけやなくて他のお墓の周辺も綺麗なもんや。お墓を眺めてると

「待たせたな」ルシル君が戻ってきた。

「おおきに！　じゃあお言葉に甘えて、一緒に父さんと母さんを綺麗にしてくれるか？」

「当然！　お父さん、お母さん、失礼しますね」

ルシル君が父さんと母さんのことをそう呼ぶから、私とルシル君が結婚したみたいや。なんて考えたら、ルシル君との結婚生活イメージがぽわぽわ～と脳裏に浮かぶ。そやけど「今とあんま変わらへんな～」苦笑した。一緒に暮らしてるし、脚が不自由になる前はご飯も一緒に作ってたし。さすがにお風呂や寝室は一緒せぇへんけど、家族として過ごしてた。あの当たり前が幸せやったんや。

「何が変わらないって？」

「ふえ！？　あ、いや！　なんでもあらへんよ！」

ルシル君と一緒に屈んで、お墓に手を合わせる。そんで掃除開始とお墓参りや。墓石を綺麗し終えた後は、花立てには花束を、お供え物は懐紙を敷いてから供え、線香に火を点ける。

「なんや不思議やね」

「ん？」

「ルシル君との出会いは、かなり奇跡的やなって思うたんよ。もし父さんと母さんが事故で亡くならずに元気でおった場合、私とルシル君があのスーパーで会うこともなかったはずやろうし、家に誘わへんかったと思う。シグナム達――夜天の書は、父さん達が生きてた頃にはあったから、きっと会えた。すると自然になのはちゃん達とも会えたはず。そやけどルシル君は・・・」

「おそらく会ったとしてもすれ違うレベルで、知人にすらならない

と思う」

「うん。だから父さんと母さんがひょっとして、私とルシル君を引き合わせてくれたんかな？って・・・。まぁ男の子やったのは、当時のルシル君は完全に女の子みたいやったから、かな？」

最初はルシリオンちゃんって、私も呼んだしな。あの当時のルシル君の性別を初見で当てることなんて出来ひんよ。私のその話にルシル君も「否定はしないよ。長髪だったし、体も幼かったしな！」笑い声を上げた。

「父さんと母さんが亡くなったのは悲しいし寂しいけど、ルシル君やシグナム達が私の孤独を埋めてくれた。ホンマに感謝してるんよ」

「俺も、はやてには感謝しているし、今もし続けている。あの時、俺を誘ってくれて、家族にしてくれて・・・ありがとう」

「・・・さっきの約束・・・」

私はルシル君の後ろに回ってギュッと抱きしめた。ルシル君は静かに受け入れてくれた。

「あぁ、ちくしょう、死にたくないな・・・」

「ルシル君・・・？」

顔を近付けてたのにルシル君の呟きが聞こえへんかったから、「い

ま何て言うたん？」聞いてみた。すると「まるで母親に抱き締められているようだな、って」小さく笑った。

「おっと。私はルシル君のような大きな子供を産んでるような歳やないよ～？」

ルシル君の体の前に伸ばしてた両手で、ルシル君の頬を両側からムニムニして抗議を示す。

「あはは、すまんすまん。取り消すよ。それにしても、はやての手は温かいな。安心できる」

「そう？　ルシル君も温かいよ？　幸せなぬくもりや♪」

「そうだな・・・。幸せ、だな」

それからしばらくそうした後は、お供え物などの回収や掃除用具の返却などを済ませて、「また来るな」お墓にそう挨拶して、私とルシル君は海鳴霊園を後にした。

「もうすぐ13時だけど、昼食はどうする？」

「海鳴市に帰ってきたら行くとこは1つしかあらへんやろ？」

「っ、喫茶翠屋だな！」

「そうゆうこと！」

再びバスに揺られて向かうのは、なのはちゃんのご両親が経営してる喫茶店、翠屋。

「いらっしゃいま――おお！　はやてちゃんと・・・って、ルシル君！？」

翠屋に到着すると、空いたお皿を片付けてた美由希さん（なのはちゃんのお姉さんや）が、車椅子に座ってるルシル君を見て驚いた。

「ご無沙汰してます～！」

「お久しぶりです」

「う、うん！　久しぶり！じゃなくて、どうしたの！？　怪我！？」

「あ－いえ。魔力消費を抑えるための処置なんですよ。魔力を使えば立てますし、歩けますけどね。今はちょっと体を労わって魔力を使わないようにしているんです」

お昼時を過ぎたおかげか今は店内に他のお客さんも居らんから、美由希さんも思わず大声を出してしまったみたいやね。そんな大声に、「美由希、うるさいわよ～」と、店の奥からなのはちゃんのお母さんである桃子さんがやって来た。

「あら。はやてちゃんとルシル君じゃない！　ようこそいらっしゃい、翠屋へ！　さ、こちらにどうぞ！」

桃子さんが案内してくれたテーブル席に、まずルシル君が自力で車椅子からイスに移動したのを見届けてから、私も向かい側のイスに座る。

「ほら、美由希。メニューを」

「あ、うん！」

「それじゃあ2人とも、ごゆっくり！」

満面の笑顔を向けて桃子さんがそう言うと、美由希さんと入れ違いに厨房の方へと戻って行った。美由希さんはニヤニヤとほくそ笑みながら「こちらメニューです！」メニューを私たちに差し出した。

「いやはや～。ルシル君、はやてちゃんとデートとはやりますな～。シャルちゃんと、えーと何て言ったかな。トリシュタンさんだっけ？とは決着したの？」

「違いますよ、美由希さん。ルシル君は、シャルちゃんやトリシュともデートしたんで、順番で私なんですよ」

メニューを捲る手を止めてそう言うと、美由希さんが「ルシル君。三股はダメだよ。うん、さすがに」冷たい目でルシル君をジロっと見た。

「えっ？　ち、違いますよ。俺は・・・」

「ルシル君はまだ誰とも付き合ってないので、たぶん三股にはならへんと思います。それに、私とシャルちゃんとトリシュは了承済みですし・・・」

「それでもな～」

美由希さんがルシル君に顔を近付けたところで、「こーら、美由希。はやてちゃん達が決められないだろ？」と士郎さん（なのはちゃんのお父さんで、翠屋の店長さんや）がやって来た。

「久しぶり、はやてちゃん、ルシル君。先月、シャマルさんとアインスさんがケーキを買って行ってくれたよ」

「あ、俺のバースデーケーキです。いつも美味しく頂いてます！」

「いつもご贔屓にしてもらってありがとう♪」

「士郎さんの料理も、桃子さんのお菓子も、八神家みんな大好きです」

「かつての同僚にも桃子さんのケーキを差し入れたことがありますけど、とても好評でしたよ」

「あら嬉しい！」

リンディさん達にもそうやけど、桃子さんのお菓子はミッド人にも

喜ばれる味を誇ってる。

「桃子さん。そろそろ話を切り上げないと、はやてちゃん達が料理を選べないよ」

「あ、ごめんなさい！」

「「いえいえ！」」

とまぁ、ちょう時間が掛かったけど私は「明太子パスタとコンソメスープと生野菜サラダ」にして、ルシル君は「ホワイトソースのオムライス、パンプキンポタージュ、クスクスサラダを」注文した。

「ご注文承りました。少々お待ちを」

「あと食後にスフレチーズケーキとミルクティーを」

「あ、それなら私もザッハトルテと、ルシル君と同じミルクティーをください」

「あ、はーい♪」

桃子さんが嬉しそうに厨房の方へと向かった。そして美由希さんも「ごゆっくりどうぞ～」厨房に入って行ったことで、ホールには私とルシル君だけになった。

「あのさ、はやて。午後からの予定だが、俺、車椅子を降りて歩こ

うと思う」

「え？　そやけど・・・」

「魔導師化は確かにするが、見栄を張って変身魔法で身長は伸ばさないから消費量もごく僅かだ。俺は・・・はやてと歩きたい。デートなら尚更だ」

「っ！！　そんなん言われたら、アカンってもう言えへんやんか・・・」

本音を言えばシャルちゃんやトリシュが羨ましかった。ルシル君と一緒に歩いていろいろとデートして。デートをしようって誘ってくれたんはルシル君の方やった。そやからルシル君は、シャルちゃん達としたような、いろんなところを歩いて回るデートを考えてくれてたはずや。そやけど負担を掛けることはしたくないって思う自分もおって。

「ホンマにええの？」

「俺に車椅子に乗ってくるように言ったのは、俺の体を気遣ってのことだろ？　そんな優しいはやてに我慢を強いてしまっていることが、俺は情けなくて悔しい。だから一緒に歩きたい。いいかな？」

右手を差し出してくれたルシル君。私は「お願いします」その手を右手で握って握手した。となれば、行き先を追加できるかもしれへんな。当初は臨海公園と元八神邸の２つを回って帰る予定やったか

ら。ルシル君と次の行き先を話し合ってると、「お待たせしました！」桃子さんと美由希さんが料理を運んできてくれた。

「「いただきます！」」

「はい！　ごゆっくりどうぞ！」

「話は聞いてたよ2人とも！　美由希お姉ちゃんから、君たちにプレゼント！」

士郎さんお手製の料理を口にしてると、エプロンのポケットから美由希さんが取り出したのは2枚のチケット。1枚は「映画のペアチケット」で、もう1枚は「水族館のペアチケット」だった。

「ご飯を食べてすぐに向かえばいいと思うけど・・・。今日は泊まり？」

「日帰りのつもりですけど・・・」

「ふむふむ。ルシル君。シャルちゃんやトリシュタンさんのデートじゃどうしたの？　日帰り？」

「シャルとは温泉街の旅館で1泊、トリシュとは彼女の自宅で1泊しました」

「ほうほう。じゃあ、はやてちゃんとも2人きりで1泊するのが筋ってものでしょうが」

美由希さんが顔をグイッとルシル君に近付けさせた。黙るルシル君から今度は私に目を向けた美由希さんは「はやてちゃんはどうなの？」そう聞いてきた。それに関しては私は、シャルちゃんやトリシュより先に行ってると自負してる。９歳の頃から同じ屋根の下で暮らしてきたんやから。

「いいんです。私とルシル君が２人きりで１泊せぇへんのは、余裕の表れとゆうことで♪」

ポカンと呆けた顔のルシル君と美由希さん。そして一拍遅れて美由希さんが吹き出して、「はやてちゃん、最高！」笑い出す。

「そっかそっか！　そりゃはやてちゃんとルシル君は、子供の頃からずっと一緒だったもんね！」

「そうゆうわけです♪　ところで美由希さん。チケットなんですけど、映画の方を貰っていいですか？」

水族館も魅力的やけど、今から楽しむには時間が足りひん。映画ならなんとか予定の合間に入れても問題ない。

「うん、映画だね。水族館のチケットはどうする？　今月末まで大丈夫だけど・・・」

「ペアチケットでしたからね～。今月はもう私とルシル君の休暇が揃うことあらへんので、遠慮しておきます」

「了解！　そんじゃごゆっくり～」

美由希さんもテーブルを離れて行って、私とルシル君は食事を再開。士郎さんの料理がホンマに美味しいことを改めて実感しながら「ごちそうさまでした！」挨拶する。

「お皿をお下げしますね～」

「そして、ご注文のスフレチーズケーキとザッハトルテ、ミルクティーになります♪」

美由希さんが空いたお皿を片付ける中、桃子さんがケーキを私とルシル君の前に置いてくれた。このために料理数を減らしたんやからな。フォークを手にとって、もう1度「いただきます」した。フォークで一切れ取ってパクッと口に含む。

「ん～～～～♪」

「ケーキと言えばやはり翠屋だな」

「まあ嬉しいわ～♪　今日1日だけで私、とっても幸せになっちゃった♪」

ご機嫌な桃子さんは軽い足取りで、「ごゆっくり～♪」と声を掛けてくれた美由希さんと一緒に厨房に戻った。ケーキを一切れ、また一切れと口に運んでく中、チラッとルシル君の食べてるケーキに目

が行く。

「ん？　一口食べるか？」

「ええの？　じゃあお言葉に甘えて・・・」

ルシル君のケーキにフォークを伸ばそうとしたら、ルシル君が一切れのケーキを刺したフォークを、「さ、あーん」私へと差し出した。

「え・・・！？」

「ほら」

まさかのあーん攻撃に私はしどろもどろ。別段特別な行為やないけど、ルシル君から率先してやったってゆうのがミソや。目の前には間接キスになるフォークに刺されたケーキ一切れ。ふと、別の方に視線を向けると、桃子さんと美由希さんがこちらを覗きこんでた。私の視線に気付くとサッと頭を引っ込めた。

「～～～～！　あ、あーん！」

嬉し恥ずかしイベントを私は「パクッ」と攻略。ルシル君の口に触れてるフォークが、私の唇が触れながら離れてく。

「わ、私のも食べさせてあげるな。あーん」

一切れに分けたケーキを突き刺したフォークをルシル君に差し出す

と、ルシル君は躊躇いなく「あーん。うん、美味しいなソレも」食べた。ルシル君の口に触れたフォークで自分のケーキを切り分けて、パクッと食べる。

（ルシル君とキスしたこともあるのに、ものすごい照れくさい）

その後はドキドキしながらケーキを食べ終え、レジでのお会計を済ませる。そして士郎さん達のご厚意で、車椅子やお供え物が入ったままのトートバッグを預かってもらい、帰り際に高町邸に取りに行くことになった。

「はやてちゃん、ルシル君、ありがとうございましたー！」

「ありがとー！」

「またのご来店をお待ちしています！」

士郎さん達に見送られながら私とルシル君は翠屋を後にして、次の目的である元八神邸へと向かう。幼少の頃にみんなで歩いた道を通り、「久しぶりやね」ミッドに家を移すまで過ごした八神邸が視界に入った。

「ルシル君やシグナム達と過ごした生家。今はもう他の人の手に渡ってるけど、私たちの始まりやと今も思うてる」

表札が"八神"やなくなってる元私たちの家。この家をルシル君と見ておきたかった。シグナム達が目覚める前は、ルシル君と2人で

過ごしてた。そんでルシル君が来る前は、父さんと母さんと過ごしてた、私の始まりの家。

「ミッドに引っ越す前にも1度聞いたが、本当に良かったのか？この家を手放して。維持費くらい俺たちの稼ぎなら余裕で賄えたはずだ」

「そうやね。そやけどミッドに居る時間の方が多くなるのは決まってたからな。前は言わへんかったけど、人の住まん家の劣化速度は速なるって話や。それなら寂しいけど、他の人に住んでもらって少しでも長生きしてほしいって思うたんよ」

「そうか」

元八神邸から幼い兄妹が出て来て、「こんにちは～！」挨拶してくれたから、私とルシル君も「こんにちは！」笑顔で挨拶返し。車に気を付けることを注意して、その背中が見えなくなるまで見送った。

「帰る家は変わったけど、ルシル君が帰ってくる場所は・・・私、私たちってゆうことを伝えたかったんよ。ごめんな、ここまで付き合ってもらって」

「いや。帰る場所を認識できると言うのは幸せなことだよ。精神的な路頭に迷わずに済む」

「っ！」

ルシル君が私の右手を握った。しかも指を絡める恋人繋ぎ。顔も全身もカッと熱くなって、私もキュッと握り返した。そんな状態で次に向かうんは海鳴臨海公園。バスに乗って近くまで来て、人も疎らな公園内に入った。

「桜見の季節になったら、またチーム海鳴のみんなで来たいな～」

「・・・その時まで――いや、そうだな。一緒に来ような」

「うん！」

公園内を歩いてると、「あ、ここ！」ある場所で私は立ち止まった。海を一望できる展望台を指差して、ルシル君の手を引いてそこへ向かう。

「ルシル君。ここは憶えてる？」

「ああ。はやてと2度目に出会った場所だ。俺が釣りをしていて・・・」

「うんうん。私と顔を合わせたとき、ルシル君驚いたやろ？　あれ、ちょうショックやったんよ？　しかもここに何度も訪れてるのか聞いてきて。まるで私に会うのが嫌やったみたいや～って」

「それについてはその場で違うと言ったはずだ・・・よな？」

「うん。会いたくないなんて思ってない、やったね。んで、その後

にルシル君が森林公園の木の上で寝泊りするサバイバーって知って驚いたわ～」

ルシル君の手を引いて森林公園の方に向かう。春になったら桜が咲き誇る桜見スポットになる。今はまだ3月の始まりってこともあって蕾もない。

「たった4日くらいだから、それほどでもなかったよ。海上の夜空がすごかったしな」

「そっか～。なら夏になったら月見ならぬ星見でもしよか～」

思い出がいっぱい詰まった臨海公園の散策を終えて、「じゃあそろそろ映画を観に行こうか～」バス停へと向かった。

さほど待たずに乗ることの出来たバスに揺られて着いた商業区画。その一画にある映画館は休日とあって大賑わいや。美由希さんがくれたダイでハードなアクション映画最新作の上映時間は、もうすぐってタイミングやった。

「ルシル君。なんか買ってく？」

「そうだな・・・。翠屋で満腹だし、オレンジジュースを買っていくよ。はやては？」

「じゃありんごジュースで。食べ物は確かにもう入らへんな」

そうゆうわけでお店で、ルシル君はLサイズ、私はMサイズのジュ

ースを購入。ジューースを手に第８スクリーンへ入場する。指定席チケットでもあったソレが導いた席は「お、おお、カップルシート」やった。噂には聞いてたけど初めて見たし、初めて座る。

「ほら、ルシル君も♪」

私の右隣をポンポンと叩いてルシル君も座るように促すと、「カップルシートなんて初めてだな」苦笑いしながら座ってくれた。２人で顔を合わせて小さく笑った後、映画が始まるまで他愛無い会話をした。そんな何気ない時間が私の心を満たしてくれる。

「お、始まったぞ」

「うん」

派手なカーアクションやガンアクションや格闘シーンに会場から歓声が上がる中、私とルシル君も「おお！」歓声を上げた。魔導師である私たちは映画以上の戦闘を行えるけど、それでもＣＧなどの手間をかけて作られた映画に惹かれてしまう。

「あ・・・」

洋画に付き物のベッドシーンが流れ始めた。普段ならドキドキやけど、ルシル君とデート中とゆうこともあってバクバクや。

（うぅ、ルシル君の顔をまともに見られへん・・・）

チラッと横目で見ると、ルシル君はジュースを音もなく飲んでた。うん、完全に素面やね。そのおかげでバクバクからドキドキになった。

（やっぱラストスパートはドキドキハラハラやね！）

今まで以上にド派手なアクション満載や。興奮冷め止まぬまま、映画はエンディングを迎えてスタッフロールが流れ出した。私は「ほぉ」一息吐いた。ルシル君が「面白かったな～」ってゆう感想に、「そやね。あそこで――」私も感想を述べて、ルシル君と感想を言い合う。

「スタッフロールも終わったし、そろそろ行こうか」

「うん」

ルシル君と手を繋いで、映画館を出ると「もう夕方やね～」夕日に染まる空を仰ぐ。夕食は家族みんなで摂る予定やから「そろそろ帰ろうか、私たちの家に」ルシル君にそう伝える。

「ああ、腹を空かせて待たせるのも申し訳ないしな」

ハラオウン邸より先に高町邸に寄って、車椅子やトートバッグを受け取りに行かなあかんね。高町邸の近所までバスで行くため、バス停の待合所で待つ。

「（誰も居らへんな。よし）ルシル君！」

「ん？」

同じベンチに座るルシル君を呼んで、「どうした、はやーーぅむ？」私の方に振り向いたその瞬間にキスをした。完全な不意打ちやったこともあってルシル君は大きく目を見開いた。その驚き顔を見られただけでも十分な報償や。

「今日はデート誘ってくれておおきにな♪　大好きや♪」

精一杯の愛情を示すように私は、ルシル君を全力で抱きしめた。するとルシル君も私の背中に手を回してくれたから、ひょっとしてこれは・・・なんて思うてたところで、ルシル君の携帯端末からコール音が。

「誰からやろうね？」

邪魔にならへんようにルシル君から離れて、携帯端末を操作してメール画面を表示させたルシル君が「っ！」大きく目を見開いた。尋常やあらへんその様子に「どないしたん？」そう尋ねた。

「ごめん、はやて。花見の約束、もしかするとダメかも・・・」

そんなことを言いながらルシル君がメール画面を見せてくれた。差出人は「リアンシェルト・・・！？」で、その内容は・・・。

「こちらの準備は整いました。いつでもあなたの挑戦を待っていま

す・・・・！」

「ああ。エグリゴリ最強のリアンシェルトとの決着を、これ以上の弱体化する前につける」

それは、私と・・・私たちとルシル君の別れがまた1歩と近付くことを意味してた。

・―・―・―・―・

ミッドチルダ北部、ベルカ自治領ザンクト・オルフェン。その北部カムランに在るミミル・テオフラストゥス・アグリッパの館、エンシェントベルカ技術宮。最後の大隊の一員だったとしてミミルと、彼女の使い魔であるフラメルとルルスは、時空管理局より広域指名手配を受けている。

そんなミミル達の拠点だった館は、管理局と教会騎士団の協力体制の下に管理下に置かれている。しかしそんな館の地下深くの秘密研究所に、逃げ果せているはずの彼女たち3人の姿があった。

「やっぱり隔絶された施設を造っておいて良かったね」

「この施設への出入りは転移魔法のみ。上の屋敷を乗っ取った局員や騎士には絶対にバレません」

フラメルとルルスがクスッとほくそ笑み、2人のマスターであるミミルも「そのとおりね～」と間延びした口調で微笑んだ。

「パイモン。例のモノが完成したと、そこの２人から連絡を貰ったのだけど」

ミミルの本名である"パイモン"と口にしたのは、転移魔法によって突如として研究室に現れた"堕天使エグリゴリ"の１機であるリアンシェルトだった。リアンシェルトは研究室の一角に設けられている４基の生体ポッドへと歩み寄り、ミミルは「はい～。完璧な出来ですわ～」と１００ｃｍを超える豊満な胸を張った。

「ですが本当に必要なんですか～？」

ミミルもリアンシェルトの側に寄って、４基の生体ポッドの中に漂う人影を見た。

「おそらくとしか言えない。でもきっと・・・」

リアンシェルトの最後の計画が今、動き出す。

Ｅｐｉｃａ５８いざ挑まん。最強の堕天使～Ｄａｙ　Ｂｅｆｏｒｅ　Ａ　Ｗａｒ～

時空管理局本局、総務部のオフィスにて日々変わらぬ事務仕事を行っていたリンディ・ハラオウン統括官の元に、「リンディ居る！？」ひとりの女性が飛び込んできた。リンディは声の主の名前、「レティ？」と口にした。フルネームをレティ・ロウラン。運用部人事課の課長であり、艦隊の指揮資格を有する提督の肩書きも持っている。

「ちょっと聞いた？　リアンシェルト先輩、管理局を辞めるって話！　本局も支局も大騒ぎよ！　私を次期総部長にするって言う事例も下ったの！　しかも昨日！　それと、ルシル君も辞表を出してきたんだけど！　どういうことなの！？」

レティの話にリンディはキーボートを打つ手を止め、「そう。いよいよなのね」と悲しそうに目を伏せた。

「何よリンディ。リアンシェルト先輩やルシル君が辞めるってこと知ってたの？」

「知っていたというより判っていた、かしら」

リンディは一旦仕事の手を止め、レティを伴ってオフィスを出て休憩室へと向かった。休憩室は幸いにも他に人は居らず、「ここでなら話せるわね」と言ってリンディがベンチに座った。レティは、自販機からコーヒーを２人分と購入し、１つはリンディに差し出した。

「ありがとう、レティ」

「どういたしまして。それで、何か知ってるんでしょ？」

コーヒーを一口含んだレティがそう尋ねると、リンディも「ええ」と頷いてコーヒーを口にした。

「ルシル君が大隊の拠点制圧中、局と聖王教会に通信で語った内容、憶えてる？」

「ええ、もちろん。セインテストの宿命ってやつよね。セインテスト家が造り出した人型魔導兵器ヴァルキリー。それを当時の敵国に洗脳されてエグリゴリとなった。セインテストの人間は、洗脳されたエグリゴリを救済という名目で破壊することを存在意義としている、だったわね」

「そう。その存在意義というものだけどね、まだ隠されていた真実があったのよ」

そう言ったリンディの表情を見てレティは、何か良くない話だということは察することが出来た。かつて八神家の保護観察者だった自分だけが蚊帳の外というわけにはいかないと考えたレティは、「聞かせて」と先を促した。

「2ヵ月ちょっと前に、ルシル君から呼び出しを受けたのよ。まぁ私は海鳴市に帰っていたからモニター越しだったけど。まず、ルシ

ル君の目的であるエグリゴリの救済。これが先輩が局を辞める理由よ」

「どういうこと？」

「先輩・・・リアンシェルト・キオン・ヴァスィリーサは、エグリゴリなのよ」

「・・・え、嘘でしょ！？　ということは人間じゃないってこと！？」

驚きのあまり紙コップを落としそうになったレティ。リンディはベンチに座るように促し、レティも頷いてリンディの隣に腰掛けた。

「先輩が年老いたように見える？　私たちが先輩と出会ってからかれこれ３０年以上も経っているのに」

「言われて見ればそうだけど。でも、そんな・・・」

「私もそれを知った時はショックだったわ。だけど、先輩から直に聞かされて納得せざるを得なかった」

「いつ知ったの？　その、先輩がエグリゴリだったって」

「リンドヴルムの首領スマウグが、本局に攻め込んできたときね。うちのクロノや娘たちが頑張ったのだけど、勝てなかったのよね。そこに先輩が現れて、たった1人でスマウグを殺したのよ。ルシル君からまず聞いて、その後に先輩に確認したの」

「それでエグリゴリだって知ったのね」

僅かな沈黙の後、レティはコーヒーを呷って「それで、ルシル君が辞める理由は？」と話を切り替えた。

「・・・セインテストは、ルシル君は・・・エグリゴリを救済することを宿命としている。だから先輩や残る最後の1体を救えば、ルシル君はその宿命から解放されて、はやてさんかイリスか騎士トリシュタンか、誰かと結ばれて幸せに過ごしていけるんだと思っていた。だけど・・・」

リンディの口からセインテストの真実を語られる中、レティの顔が徐々に青くなっていく。そして語られ終えた後、レティは「何よそれ・・・！」と怒りで強く歯噛みした。

「そういうわけで、先輩もルシル君も局を辞めようとしたのよ」

「でもルシル君が先輩に勝って、すぐにその・・・ダメになるってわけじゃないのよね？　だったら辞表はまだ受理しないわ。あの子が生き続けている限り、あの子の場所は残しておく」

レティのその言葉にリンディは「そうね」と嬉しそうに頷き返した。

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

俺に残された時間はもうあまりない。このまま黙ってガーデンベル

グを救うか、せめてもの礼儀として死期が近いことを伝えるか。俺は後者を選んだ。
本局医務局の入院病棟の1室で今なおベッドの上から動けない俺は、ユーノとセレネとエオスを含むチーム海鳴フルメンバーとクロノとリンディさん、それにトリシュたち騎士にもお願いして時間を作ってもらった。まぁ場所が場所だけに、トリシュ達とリンディさんとクロノはモニター越しでの参加だが。

「それで、ルシル。今日はどんな用事なの？　正直、僕とセレネとエオスまで呼ばれるなんて思いもしなかったから驚いているけど」

「チーム海鳴のメンバーって話だったけど、私とかエオスとかユーノとか、一応籍は置いてるけど・・・」

「正規メンバーっていうより準レギュラーって感じだし、なんか気が引けたよね。私たちも一緒でいいのかな？って」

無限書庫でデートしていたらしいユーノ達がそう言うが、"ＰＴ事件"ではれっきとしたチーム海鳴だった。"闇の書事件"では確かにセレネとエオスは居なかったが、1度紡いだチーム海鳴の絆はそう容易く解けはしないだろう。

「そんなことないよ。セレネちゃんもエオスちゃんも、もちろんユーノ君だって、これまでもこれからもチーム海鳴だよ」

「うん。だからそんな寂しいこと言わないで」

「そうそう。なのはとすずかが言ったように、あんた達はチーム海鳴よ」

なのはとアリサとすずか、ユーノとセレネとエオスは、チーム海鳴の1期メンバーのようなものだ。アイドルグループのように卒業なんてものはないからな、解散しない限りずっと仲間だ。

『ところで、私たちはどういう理由で誘われたの？　チーム海鳴じゃないけど・・・』

ルミナがそう言って首を傾げたため、「シャルを通してチーム海鳴と仲が良く、俺自身も短いながらも同じ部隊に所属した仲間で、友人だと思ったから、通信という形で集ってもらった」と答えた。するとルミナは満足そうに『ん！』頷いて、トリシュも『誘ってくれて良かったです』と微笑んだ。

「忙しい中、みんなを呼び出した理由。それはみんなにどうしても伝えておきたいことがあったからなんだ。今の俺の状態と、今後の俺について。そして、俺が今まで隠してきたセインテストの真実を伝えようと思う」

そう言うと、思い思いに喋っていたみんなが一斉に口を噤んで話を聞く姿勢を取った。

「まず、第12管理世界フェティギアはサンクト・アヴィリオスの出身というのは、嘘なんだ」

『なに！？』『ええ！？』

クロノとリンディさんが真っ先に驚愕の声を上げた。俺がそう言ったからといって何もせずに信じる愚は起こさないだろうから、リーゼアリアとリーゼロッテのように俺の身の上をちゃんと調査しただろう。そして裏を取れた。だが、俺本人から嘘だと言われた。驚くのも無理はない。

「うそ？　うそってどうゆうことや？」

「それを説明するには、俺・・・セインテスト家の、セインテストシリーズの真実を伝える必要がある」

「「『セインテストシリーズ・・・？』」」

「俺は、厳密に言えば人間じゃない。初代セインテストのリンカーコアと遺伝子を基に生み出されたクローンだ。が、実際には魔力で体を構築しているから、シグナム達やエグリゴリに近い擬似生命体だ。ちなみにオーディンを含めた歴代のセインテストもそうだ」

俺の話に理解が追いつかないのかはやて達は呆け、すでに事情を知るシグナムとヴィータとシャマルとザフィーラは目を伏せ、緘口令を強いているアインスは「え？　え？」と混乱しているはやてを悲しげに見、アイリは俺の側に寄り添い、「マイスターも・・・？」と目を丸くしているアギトを心配そうに見ている。

『ま、待ってくれルシル。君は成長していたじゃないか。まさか、

あれも変身魔法で誤魔化していたのか？』

「いや。この体は魔力で形作られているとはいえ、肉体であることには変わりない。シグナム達には成長が必要なかったから成長しない。俺は人と関わりを持ちながらエグリゴリと闘いをしなければならないから、不自然に思われないよう成長するように設定されて造られた」

『造られたってそんな・・・』

「事実なので、リンディさん。セインテストは、エグリゴリを救済するためだけの生体兵器。俺も、オーディンも、歴代のセインテストはみんなクローンで、両親なんてものは存在しない、対エグリゴリ用の道具としてこの世に生を受けた。フェティギア生まれも嘘。両親や姉や妹がエグリゴリに殺されたと言うのは俺の話ではなく、初代セインテストの記憶を語ったに過ぎないんですよ」

『わ、悪い冗談だよ、ルシル。兵器？　道具？　だってルシル・・・生きてる。普通の人みたいじゃん・・・』

シャルが顔を真っ青にして振り絞った言葉に、「人間社会に溶け込めるような処置だよ。単独捜査じゃ限界があるからな」と徹底的に嘘と真実を交えた話を続ける。

『待て、ルシル。君がクローンだというのなら、君らを生み出す施設や協力者が居るはずだ。戸籍や財産などを用意する仲間が・・・』

この中で1番冷静を装っているクロノからの問い。すぐにそこに考え至るのはさすがとしか言い様がない。

「協力者の名前はマリアで、戸籍や財産などは彼女が用意してくれる。施設はどこに在るかは判らない。自我が目覚めた瞬間、自分に与えられた名前、成すべき事、その時代での常識などといった様々な情報が頭に浮かぶ。造られたときには初代の魔術などを会得しているからな。すぐに戦闘行動には入れるんだ」

『マリア・・・。苗字は？』

"界律の守護神テスタメント"となる人間だった頃のものなら、マリア・フリストス・ヨハネ・ステファノス。だが今は「無い。俺と同じで人じゃないからだ。アレは何千年もの間、ずっとセインテストの守だからな」とあながち嘘でもない答えを返した。マリアは俺のために、生きたまま神とも言える"テスタメント"にまで上り詰めたし、今回の契約だって彼女が召喚してくれたからだ。

「まぁこれが、セインテストの真実の1段目、出生の秘密だ。次はセインテストシリーズの魔力構築体について。成長する肉体と言っても魔力で出来ている以上、今みたく歩けないような弊害を負ったり、成長が止まったりする」

これは俺自身もビックリだった。何千回という契約の中で、成長するようなことがあっても必ず人間だった頃の体格まで成長できた。それがまさか１５５ｃｍでストップなんて・・・泣いたぞ。

「で、入院中に毎日検査を受けていたんだが、約1週間おきに魔力総量が減ってきているんだ。それで計算した結果、魔力消費を限界まで抑えた上で何の対処もしなければ、およそ3年で俺は死ぬことになる。特騎隊として前線に出て魔法戦を繰り返せば、およそ半年から1年。エグリゴリとの闘いとなれば・・・リアンシェルト戦後の状況によるが、1週間から1ヵ月が俺の寿命になる」

『3年・・・？』

『半年から1年・・・？』

「たったの・・・1週間から1ヵ月・・・？」

シャルとトリシュとはやてがうわ言のように呟いた。なのは達も「寿命ってそんな・・・」顔を青くしていた。

『待ってルシル！　ま、魔力が減るからその、寿命が短くなってるって言うんならトリシュなら！』

『っ！　そうか！　トリシュのスキルなら・・・！』

『毎日魔力を補給できる』

セレスとルミナとクラリスが期待に満ちた瞳をトリシュに向け、トリシュも『は、はい！　毎日に通います！』と強く頷いた。

「じ、じゃあ！　私たちも協力するよ！」

「うん！　ルシル、相手の魔力を吸収する魔法、というか魔術持ってるし！」

「ルシルにはさんざんお世話になってるし！　そろそろ借りを返しておかないとね！」

「そうね！　さすがに限界まで吸収されたら仕事に支障出るから無理だけど」

「私は技術職だから、限界まででも大丈夫だよ、ルシル君！」

『僕も！　魔力量は少ないけど、少しでも足しにしてもらえるなら！』

『『私たちも！』』

なのは、フェイト、アリシア、アリサ、すずか、ユーノとセレネとエオスが嬉しいことを言ってくれた。さらにシャルが『わたしも！　身も心も捧げるって決めたもん！　わたしの全部をあげる！』涙を袖でグイッと拭った。

『私たちも、毎日とはいかないですけど魔力を提供します。ね、みんな？』

アンジェがぐるりと見回し、ルミナとクラリスとセレスに確認すると、彼女たちも『もちろん！』と快諾してくれた。

『ルシリオン君。私も提督職を退いて内勤組になって久しいし、魔力ももう必要ないし、私で良ければ使って』

リンディさんやクロノも『僕のも少しくらいは分けられるぞ』とそう言ってくれる。

「ルシル君。全部とは言えへんけど、私の魔力もあげる。そやから・・・私の前から居らんくならないで・・・」

はやてがベッドの側まで来て、その震える手を俺の手の甲に触れた。

『あー！　はやてズルい！　私だって本局医務局に居れば、手を触るだけじゃなくて抱きしめるのに！』

『私も、口付けだってします！』

『落ち着きな、２人とも』

モニター画面に顔を寄せて、俺たちにどＵＰ顔を見せるシャルとトリシュの襟首を掴んで引き離すルミナ。俺はそんな彼女たちに、「本当にありがとう。本当に・・・！」ベッドの上だが手を付いて深々と頭を下げた。

「みんなの協力があれば、確かに俺は長生き出来る。ただ、セインテストシリーズにはある機能がある。・・・エグリゴリの全滅がセインテストシリーズの機能停止に直結する、というものだ」

はやて達が「機能停止・・・？」と呟く。シグナムたち騎士には、"エグリゴリ"の全滅と俺の死が同義であるとオーディンの頃に伝えているため、彼女たちは辛そうに目を伏せるだけだ。

「エグリゴリを全機救済すると、俺は・・・死ぬ。セインテストシリーズはあくまでエグリゴリを救済するためだけの装置だ。エグリゴリの全滅が合図となり、俺の生命活動は停止し、以後新たなセインテストが誕生することはなくなる。エグリゴリとの闘い如何によっては1週間から1ヵ月と言ったのは、最後に救うガーデンベルグとのタイミングによって変動するからだ」

俺の死がすぐそこに来ているというショックで誰も口を開かない中、「それで、1つ注意しておきたいことがある」と前置き。

――・・・スター・・・・――

「リアンシェルトとの闘いの後、俺はもしかしたら・・・みんなとの思い出を失っているかもしれない。オーディンの世代よりセインテストシリーズが壊れ始めていたんだ。記憶消失という欠陥だ。歴代のセインテストが複製したきたものは、俺たちにとっては記憶に当たるんだ。行き過ぎた魔力行使は体を構築している魔力までも消費し、体が消滅しないために複製したきたもの、つまり記憶を消費して体の維持を図る。それが記憶消失の原因」

「つまり、わたし達とルシルが一緒に過ごした思い出も複製物として貯蔵されているから・・・」

――・・・マイ・・・ター・・・起き・・・――

「・・・私たちと過ごした記憶を失う・・・」

「・・・ああ。みんなとの思い出を失った場合、俺はきっとリアンシェルトとの闘いで消費したドーピング用の魔力を手にするため、局を敵に回してでも行動を起こすと思う。みんなのことを忘れている俺は君たちに酷い言葉を使い、行動をするだろう。もしそんな状況になってしまったら、そんな俺を止めてくれても構わない。一応、謝っておく」

みんなにもう1度深く頭を下げた。ここからは本当にどうなるか予想が付かない。リアンシェルトとの闘いで俺がどこまで壊れるか、その想定すら出来ない今、俺はみんなに謝るしかなかった。

『マイスター！　起きてってば！　こんなところで寝てたら風邪ひく！』

頭の中に響く大音声。

「んぁ？　アイリ・・・？」

眠りから覚める感覚を得、ゆっくりと視界が晴れていく。目の前には頬を膨らませて、怒ってますよアピールをしているアイリの顔があった。そんなアイリに見つめられる俺は今、八神邸リビングのソファに横たわっており、アイリに膝枕されている状態。

（いつの間にか眠っていたようだな）

背もたれに手を伸ばして体を起こそうとすると、「待って。アイリが起こすから」と、俺の肩に腕を回して起こしてくれた。俺が「ありがとう」を言い終えたところで、アイリは「なんか、夢見てた？」と聞きながら俺の背中に覆い被さってきた。

「ああ。はやて達に、俺の死が間近だという話をした時のものだ」

「あー3ヵ月前の、医務局でのことだね・・・」

「何か寝言でも言っていたか？」

「うん。謝ってた。誰にかは判らないけど・・・」

「そうか・・・」

リアンシェルトに勝ったとしても、あの子の戦闘能力からして複製物の大半を失うことになるだろう。当契約の記憶と、先の次元世界での記憶を最優先で守ってくれるとゼフィ姉様は言っていたが、それにも限界がある。覚悟だけはしておかないと・・・。

「アイリが守るから。何があっても、マイスターがアイリのことを忘れちゃっても、ずっと最後まで一緒にいるからね」

そう言ってくれるアイリにはベルカ時代からずっと感謝しかない。俺の胸に回されているアイリの腕に触れ、最大限の「ありがとう」を伝える。

「んっ♪」

ソファに座り直してのんびりしていると、「あ、ルシル君、起きたのね。４月になったとは言っても湯冷めしちゃうわよ？」パジャマ姿のシャマルがリビングに入って来た。

「アイリお姉ちゃん、お父さんのこと起こしてベッドに行かせるって言ってたのに。結局そのまま放置したんだね～」

続いて入って来たのは、俺の幼少時と変わらぬ姿のフォルセティ。向かったダイニングでミネラルウォーターを飲むあの子に、アイリは「だって～。膝枕できる絶好のチャンスだったんだもん」ぷくっと頬を膨らませた。

「あ、そうだ。フォルセティ。ちょっと大切な話があるんだ。時間をくれるか？」

「うん、いいけど。明日休みだし・・・」

フォルセティがアイリとは反対側に座り、話を聞く姿勢をとった。
俺の雰囲気に何かを察したらしいシャマルもソファに座った。

「今晩、俺はセインテストの使命を果たすため、エグリゴリ・リアンシェルトと闘いに行く」

リアンシェルトはレティ提督に総部長の座を任せ、管理局を辞めた。それはニュースになるほどの大騒ぎだったが、リアンシェルトはすでに手続きを済ませて本局を後にし、今や行方不明だ。そして俺も、レティ提督に辞表を出した。それが2週間前。受理されていれば、俺も規則に乗っ取って辞めることが出来たんだが・・・。

――あなたがリアンシェルト先輩との闘いで確実に記憶を失うというわけでもないのなら、局員としての籍は残しておくわ。局員という肩書きが何か役に立つかも知れないし――

レティ提督のご厚意で、今でも俺は局員だ。

「ちょっ！　ルシル君！　はやてちゃん達が出張から帰ってくる明日まで待つって約束だったじゃない！」

「それはすまないと思っている。だけど、なんとなくだが判るんだ。おそらく今日じゃないと、俺はまた弱くなる・・・」

すごい形相でソファから立ち上がったシャマルに、右手の平を差し出す。今は透けてはいないが、時折体の一部が霧散しそうになることが何度かあった。本当に限界が近い。

「でも・・・だけど！」

「・・・フォルセティ。お父さんはこの闘いで、もしかするとこの家に帰って来られない体になるかも知れない。だからこそ、お前にはお願いしたい。はやてを、お母さんを支え、守ってあげてくれ。父さんとの約束だ」

「っ！　う、うん！」

俺が帰って来られないかも、という言葉に目を見開いてショックを受けていたフォルセティだったが、俺が差し出した小指に自分の小指を絡めてゆびきりを交わした。

「でも！　お父さん、それにアイリお姉ちゃんにはやっぱり帰ってきてほしい・・・！」

「大丈夫！　アイリがルシルをちゃんと守るから！　２人で帰ってくるよ。そして、ただいま、って言うからね」

「アイリお姉ちゃん・・・」

フォルセティを抱き締めるアイリと、それを見守る俺を見るシャマルが「約束よ？　ちゃんと帰ってきて。このままお別れなんて、私が許さないわ」涙を浮かべて、そう脅し・・・じゃないな、願いを口にした。

「俺も、はやてとこのまま顔を合わせずに全てを忘れるなんて嫌だからな。何とかして記憶をそのままに帰ってくるよ。・・・じゃあ行ってくる」

「いってきま～す！」

車椅子に乗り移り、アイリが押して俺たちは家の外へと出る。あとはリアンシェルトから送られてきた手紙に記されていた指定された戦場へと転移するだけだ。

「ルシル君！　せめて通信、メールでもいいから、はやてちゃん達に何か言ってあげて・・・！」

「勝って帰ってくるつもりなんだ。余計なことを言って不安にさせる必要は無いだろ？」

「そうそう！　大丈夫だって、シャマル♪　ルシルとアイリは必ず帰ってくるんだから」

アイリがリアンシェルトの手紙と一緒に送られてきた転送カードの準備を終え、「フォルセティ、シャマル。いってきます！」可愛く敬礼。続けて俺も「いってきます！」手を振った。

「お父さん！　アイリお姉ちゃん！」

「ルシル君、アイリ！」

不安いっぱいの表情で俺たちを見送るシャマルとフォルセティ。記憶を失うかもという覚悟はした。そして記憶を失わず、勝って帰ってくるという決意も出来た。さぁ行こう。リアンシェルトの待つベルカへ。

（はやて。いってきます）

光に飲まれ、俺とアイリはミッドからベルカへと転移した。

「ようこそ、神器王ルシリオン。その融合騎アイリ」

辺りを見回していた俺とアイリの名を呼んだ声の主へと向き直る。

「「リアンシェルト・・・！」」

そこには氷で出来たロッキングチェアに座ったリアンシェルト。さらにあの子の側に控えている「ミミル・・・！？」とフラメルとルルスの４機が居た。

Ｅｐｉｃａ５９其は世界をも凍結させる冬の化身なる者～Ｒｉａｎｇｓｃｅｌｔｏ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

今どきメールではなく手紙で決闘場所を指定してきたリアンシェルト。フィヨルツェンの時はアウストラシアだったが、今回指定されたのはシュトゥラの座標だった。荒野だが、山の形などから魔女の森があった場所辺りだろう。そう、近くには俺やシグナム達グラオベン・オルデンが拠点としていたアムルがあることになる。

「リアンシェルト・・・」

そんな場所にあの子は居た。フリルの付いたハイネックの純白のロングワンピース。胸元にはサファイアのブローチ。その上から青のクロークを羽織っている。完全な戦闘モードのリアンシェルトだ。

「卑怯だ、と言ってもいいか？」

手紙と一緒に送られてきた封筒に同封されていたカード。フィヨルツェンも使っていたが、転送魔法を発動できるカードだ。ソレを使ってここまで飛ばされてきたわけだが、そこで俺たちを待ち構えていたのはリアンシェルトだけじゃなかった。

「卑怯、ですか？　何を持ってそんな言いがかりを言うのですか？」

自前の氷で出来たロッキングチェアに揺られながら、「おかしな人ですね」と口元に手を添えて笑ったため、車椅子のグリップを握っているアイリが「すごいイラッと来た」ポツリと呟いた。

「ミミルとフラメルとルルス。そいつらと共闘でもしようというのか？　確かにエグリゴリだが・・・。出来れば戦闘は分けてほしいんだが・・・」

『ただでさえリアンシェルト1機でも勝てるかどうかなのに・・・！』

予想としてもミミル1機でオリジナルの"エグリゴリ"と同等の神秘を有している。そんな奴とリアンシェルトを同時に相手にしろって？　冗談じゃない。情けない話だがそう提案するしかなかった。

「まさか。今の私とあなたとの間にある差を考えれば、私単独ですら勝てると言うのに、そこに別の戦力、パイモンを参戦させるなんて申し訳なくなります」

挑発のつもりだろうが、事実なだけに今さら怒りも湧いてこない。怒りの代わりにミミルが戦闘に参加しないと判ったことで安心した。今はただ、リアンシェルトに先制で攻撃を加えて、少しでも有利な立場に立つことを最優先する。

「で？　そいつらは何のためにここに居る？　まさか見学とか言うんじゃないだろうな？」

「まぁあながち間違ってはいませんね。あなたが勝っても、私が勝

っても、ミッドへ帰るための手段が必要ですから。あなたに勝てるとは言ってもミッドへ帰るまでの余裕があるかどうか判らないので」

『マイスターに勝てるって言ってるようなのが腹立つ』

『その余裕をねじ伏せてやるさ』

アイリは、リアンシェルトに並々ならぬ対抗心というか敵愾心を抱いている。アイリよりずっと格上の氷雪系のリアンシェルト。それについても負けたくないと言っていたが・・・

――女としてアイツに負けたくない！――

という理由もあるそうだが、ちょっと俺には解からない理由だった。比べる必要も無いとは思うんだがな。

「さて。長話もこれにて終わりにし、あなたと私の最後の戦と参りましょう」

リアンシェルトが立ち上がると同時、ロッキングチェアがガシャン！と大きな音を立てて砕け散った。

「そうだな。もう言葉は要らないか・・・」

――昇華――

魔力炉（システム）の稼働率を上げて魔術師化し、車椅子から立ち上がる。さら

に"エヴェストルム"を起動。そして穂に刻まれたルーンに魔力を流し込むことでルーンを発動して神器化させる。

「車椅子、離れたところに置いてくるね」

「すまん」

アイリが腰から白翼を展開し、折りたたんだ車椅子を手に離れた場所へと飛んだ。こんなことなら車椅子を置いてくれれば良かった。

「魔道を交え、数千年に亘るこの戦に決着を」

そんな俺とアイリに攻撃を加えることなく、こちらの準備が終わるまで待っていてくれるリアンシェルトがスッと右手を上げると、ミミルとフラメルとルルスが離れていく。入れ替わるようにアイリが戻り、手を繋いで「ユニゾン・イン」を果たす。

『アイリ。始めから全開で行くぞ』

『ヤヴォール！　深層同調を開始。神々の宝庫（ブレイザブリク）より魔力結晶を起動、魔力炉（システム）と融合開始・・・、完了。マイスターのリミッターを第二級まで解放。マイスター』

アイリが俺の命と体を支える大事な柱として頑張ってくれるから、俺も無茶を通すことが出来る。

「第二級粛清執行権限、解凍」

５１％～７５％の魔力を制限するリミッターを解除。"界律の守護神テスタメント"となってからアレを発動するのは何百年ぶりだろうか。

――高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）――

こちらが臨戦態勢に入ると、リアンシェルトも背中より２０枚の羽を放射状に展開し、魔力量をぐんぐんと上げ始めた。あぁくそ。俺の魔力量と神秘を一瞬で追い抜いて行きやがった。

「（それでも！）我が手に携えしは確かなる幻想。目醒めよ、我が心（うち）なる世界が一つ。其は美しき黄金に輝きたる館。五百四十の扉、槍の壁、楯の屋根、鎧に覆われた長椅子、彷徨いたるは狼に鷲」

「その詠唱は・・・。なるほど、１対１では敵わないなら、軍勢を以って私を押し潰そうと言うのですね。ですが、私を追い詰められるほどの英雄は残っていますか？」

残っていようがいまいがリアンシェルトに対抗するにはこれしかない。今日この日、リアンシェルトとの闘いのために取っておいた"ジュエルシード"などのロストロギアや、この３ヵ月の間にトリシュのスキルで貰った魔力を結晶化させた物、なのは達の協力の元に彼女たちから吸収した魔力を結晶化させた物を解放するつもりだ。

「（ここまでやるんだ、負けてたまるか！）館に住まうは我が　心（うち）に在りし神秘の幾多の主。今高らかに告げる。いざ開かれよ、ヴォ

ルグリンド。契約の下、拒みし者を蹂躙せよ、罪ある者を断罪せよ、助け求める者を救済せよ。いざ出でよ英雄の軍勢」

"エヴェストルム"を空に向かってに突き出し、遥か空にアースガルド魔法陣を展開。"エヴェストルム"の先端より放たれる光が魔法陣に当たると、魔法陣を中心に全長数ｋｍの巨大な門扉が描かれる。アレがヴォルグリンド、"ヴァルハラ"の正門だ。

「英雄（ヴァルハラ）の居館・・・開錠」

鍵を開けるように回す。音も無くヴォルグリンドが開いていき、膨大な光が溢れ出す。その光はシャワーのように俺たちに降り注いで、視界がサファイアブルーの光に満ちる。

（今の俺ではヴァルハラを維持できるのは精々数分。その間に決める！）

視界が晴れた時、そこはもう俺の世界、創世結界・"英雄の居館ヴァルハラ"。１３万平方ｋｍの巨大な一室。英雄全軍を召喚してもまだ余裕があるこの広い世界で、リアンシェルトを迎え撃つ。

――瞬神の飛翔（コード・ヘルモーズ）――

１２枚の剣翼と１０枚の菱翼を展開。そして、その２２枚の蒼翼を背部より切り離し、遠隔操作飛行砲台「コード・ミカエル！」として利用する。

「さらに！」

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

「ヘルモーズの同時二重発動・・・！？」

驚きに目を見張るリアンシェルト。空戦形態ヘルモーズの発動中にさらにヘルモーズを発動するなんて、長年存在している俺としても初めての試みだ。俺は『アイリ！　ミカエルの操作を任せる！』と頼み、俺は他の魔術のコントロールに注力する。

「さあ！　行こうか！」

背後に控える"異界英雄エインヘリヤル"にチラッと目をやって、そう声を掛ける。

「了解です、父上。ヴァルキリー第2隊アルヴィト隊隊長クルックス・アルヴィト・ヴァルキュリア、いざ参る」

ライオンのたてがみのように逆立っているココアブラウンの髪。切れ長のダークブルーの瞳。黒のハイネックタンクトップ・レザーパンツ・白のロングコート姿。そして右手には槍型神器・"戊ノ鑓（つちのえ）"を携えた、土石系最強のクルックス。

「よーっし！　決着つけたろうじゃない、リアンシェルト！　ヴァルキリー第3隊ヒルド隊長ティーナ・ヒルド・ヴァルキュリア、行くよ！」

足元まで伸びるスカーレット色の髪、アクアブルーの鋭い瞳。前後燕尾な赤色がかったセーラー服。上から制服の黒のロングコート。彼女独自の黒のハーフズボン姿。炎熱系最強のティーナ。

「氷雪系の最強機として、あなたを止めるよ、リアンシェルト。ヴァルキリー第４隊ラーズグリーズ隊長氷月・ラーズグリーズ・ヴァルキュリア、行く」

前髪を分けて額を少し出したマドンナブルーのショートヘア、ホライズンブルーの瞳は少し釣り目。制服の長衣は白。上から制服である青いロングコート姿。そして釵型神器・"災牙コキュートス"を両手に持つ氷雪系最強の氷月。

「僕らが必ず止めるよ。操られて、父さんを殺そうとするなんて悲しい事が起きないように。・・・ヴァルキリー第５隊ヘルフィヨトル隊長レンマーツォ、行くよ！」

まだあどけない少年で、チョコレートブラウンのショートヘア、少女のようにマルっとしているシルバーグレーの瞳。白の長衣に黒のハーフパンツ姿。両腕に装着した籠手と同化しているクロスボウ型神器・"冥弓シルカルデ"に魔力矢を自動装填する、狙撃系最強のレンマーツォ。

「リアンシェルト。お父様に弓引くなど言語道断！　操られたというのなら、拳でその目を覚まさせてあげる！　ヴァルキリー第７隊ランドグリーズ隊隊長プリメーラ！　参ります！」

金の長髪を赤いリボンで結ってハーフアップにし、角度によって色の変わる瞳を持つ。同盟軍の制服とも言えるハイネック・前後の裾が燕尾の黒い（色は個人で違う）長衣、ロングコートを着て、彼女独自の黒のハーフパンツ姿。雷撃系最強のプリメーラ。

「見たところ魔力量が凄まじいですね。とはいえ、各隊長が集まった上、父上も一緒なのであれば勝てる戦です。気合を入れましょう。ヴァルキリー第８隊ゲイルスケルグ隊隊長クリスト、出撃する」

ポニーテールにしたガーネットの長髪、切れ長なブラウンの瞳。白の長衣にスラックス姿。両腕にバックラーと剣の付いた籠手――ランタン・シールド型の神器・"アヴァリティア"を装着した、闇黒系最強にして最硬の防性術式を有するクリスト。

第一陣は"ヴァルキリー"の隊長陣との共闘だ。これでリアンシェルトの魔力を少しでも削る。どれだけ膨大な魔力があろうとも無尽蔵じゃない。あの子にドーピングのような回復する術が無い以上は必ず限界があるはずだ。

「確かにこれは、私もさすがに骨が折れそうです。ただ、アンスールを召喚しなかったことだけは後悔させましょう、神器王！」

――天壌に靡（アヴレア・ピュッロン）くは輝ける氷幕――

氷で出来た無数の薔薇の花弁が幾枚ものカーテン状として展開され、俺たちとリアンシェルトを隔てた。下手に時間を与えて創世結界を発動されでもしたら厄介だ。

「エンゲージ！」

「「「「「「了解！」」」」」」

俺がカーテンを越えるために宙へ上がると、アイリが操作してくれているミカエルも追従。

「護衛はお任せを！　」

「私たちが父上を護りますゆえ」

氷結系の頂点にして対氷雪系でもある氷月、そしてクリストが俺に付いてくれた。おそらくとしか言えないが、リアンシェルトの攻撃の大半を防いでくれるだろう。

「ティーナ！」

――捻じ伏せる破壊角（ブレイク・スティンガー）――

「ういす！！」

――火葬砲拳（フレイム・カノン）――

両籠手の"シルカルデ"より魔力矢を連射し、カーテンに射ち込んだ鏃を爆破したレンマーツォ。その爆発によってカーテンに穴が開き、そこに通すように炎を纏わせた拳を突き出して火炎砲を放った

ティーナ。ティーナの火炎砲がリアンシェルトを直接狙う。

「っ！　くっ・・・！」

迫る火炎砲に対して防御ではなく回避行動を取ったリアンシェルト。そこにレンマーツォの鏃弾幕。リアンシェルトはさらに回避行動を取ったが・・・

――疾閃雷翔駆――

目にも映らない超高速移動で接近していたプリメーラの雷撃を纏った右脚による薙ぎ払うような蹴り技、「蹴破斬雷舞！」を、リアンシェルトは「クリュスタッロス・アントス！」と雪の結晶の形をしたシールドで防御。しかしプリメーラが振り払った脚の軌道に沿って雷撃が残り、雷鳴と同時に炸裂してシールドを破砕。

「きゃぅぅ・・・！」

放電する衝撃波にリアンシェルトが体勢を崩し、そんなあの子の背後にクルックスが回り込んだ。

「晶槍・穿突！」

"戊ノ鑓"を床に突き刺し、リアンシェルトの周囲の床から水晶の六角錘柱を８本と突き出させ、あの子を穿とうと迫る。

「ぅく、この程度で・・・！　氷刃舞う砕嵐（テュエッラ・クスィフォス）！」

リアンシェルトの足元より無数の氷の花弁が舞い上がり、その攻撃によって水晶柱が一斉に砕かれる。

「アイリ！　ミカエル用意！」

『ヤヴォール！』

――崇め讃（コード・ミカエル）えよ汝の其の御名を――

アイリが操作する蒼翼２２枚と、俺の背中に展開されている蒼翼２２枚を切り離し、計４４枚の蒼翼の先端を花弁に覆われたリアンシェルトへと向けた。

――召喚（ペークシス）・雪皇鯨（パライナ）――

「「父上！」」

氷月とクリストに呼ばれると同時、氷で出来た全長５００ｍサイズの鯨が９頭と出現した。５頭が地上に向かって突進し始め、残り４頭がこちらへ向かって大口を開けて突っ込んで来た。

「父上は攻撃に専念を！」

「ここは私と氷月で止めましょう！」

「ああ！　アイリ！」

『ジャッジメント！』

最初にアイリの蒼翼から２２発の砲撃が発射される。アイリのミカエルは、花弁が薄くなってその体を視認できるようになり始めたリアンシェルトへ真っ直ぐ進む。

――天花護盾（クリュスタッロス・アントス）――

最初の２２発はシールドに防がれたが、破砕音と共に氷の破片を散らせた。シールドが薄くなったのを見計らって俺は別角度からミカエル２２発を発射。

「ハガルイズ！」

――拒絶し反射するのは煌く鏡面（アダナクラスィ・エネルゲイア）――

その掛け声に呼び出されたのは、円鏡型の神器・"零鏡ハガルイズ"。鏡面からスノーホワイトに輝く円形の魔力バリアが発生し、俺のミカエルを全て反射して防いだ。無差別に跳ね返された砲撃は掠ることなく遠方へと消え去った。

「『まだまだ！』」

俺に迫る鯨の迎撃を氷月とクリストに任せ、アイリと２人で蒼翼を操作。シールドやリフレクターで防がれない位置を模索しつつリア

ンシェルトへ砲撃を連射した。

（最後の切り札を切る前に、少しでも多く・・・・！）

リアンシェルトを削ってみせる。そして必ず勝つ。その果てに待つのは、最後の"エグリゴリ"・ガーデンベルグの居場所。そして、４ｔｈテスタメント・ルシリオンの終末への道だ。

「この程度で、私を抑えきれると思わないでください・・・・！」

――真技――

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒はやて†††

ルシル君が別れも言わずにリアンシェルトとの闘いに向かって２日目の深夜。自宅のリビングのソファに座って、ルシル君の帰りをひたすら待つ。

「はやてちゃん。ちょっとくらい寝ないと・・・・」

「シャマルの言うとおりですよ。本局から帰ってきてから一睡もしてないですし」

シャマルとリインが不安そうに声を掛けてくれるけど、私は首を横に振って「ううん。もうちょい待つ」そう返した。体はもう寝ろって警告を出してるけど、心がそれを許さへん。

「仮眠でもいいので少しは休んでください。主が倒れてしまっては、ルシルも気を揉むでしょう」

「はやてが寝ない最大の原因が、そのルシルだけどな」

そう気遣ってくれるシグナムに、ヴィーターが肩を竦めて溜息を吐いた。私は心のうちで、まったくや、ってヴィーターに同意する。ルシル君とは、私たちが家に居るときにリアンシェルトとの闘いへ向かうようにって約束してた。一緒には戦えへんけど、せめて見送りはしたいからって。

（それやのに、ルシル君はなんにも言わずにアイリを連れて、リアンシェルトに指定された戦場へ向かった）

重大な約束違反、裏切りや。シャマルから、ルシル君とアイリがリアンシェルトとの闘いに出るのを止められへんかった、って涙声で連絡を受けたとき、私も泣きそうになったし、辛かった。そんで遅れて怒りがふつふつと湧いてきた。

（でも、こうして待ってる間に怒りは消えて、やっぱり心配が一気に増した・・・）

もはや祈るしか出来ひん。ルシル君とアイリが無事に帰ってきますようにって。額を指を組んだ手に乗せて、もう1度ルシル君たちの無事の帰還を祈ろうとしたら、アインスが「失礼します」私の首後ろと膝裏で腕を通して、私をお姫様抱っこした。

「アインス！？」

「我らの今の主は主はやて、あなたであり、セインテストではありません。あなたの健康を最優先させていただきます」

医務局でルシル君が語った真実の中に、これまでは歴代のセインテストの記憶は継承してないって話やったけど、実はシリーズが複製したものが記憶として継承されてる、ってものがあった。つまりオーディンさんの記憶もルシル君は持ってるってことになる。それでもアインスは、ルシル君より私を選んだ。

「降ろしてアインス。私、ルシル君とアイリを待たな・・・」

「いいえ、ダメです。今はしっかり眠ってもらいます。大丈夫です。ルシルとアイリが帰ってきたら起こしますので」

「そ、そうだぜ、はやて！　あたし達がちゃんと起きて待ってるから、今は休んでくれ！」

「です！　はやてちゃん、そんな隈だらけの目でルシル君たちを迎えちゃダメですよ」

そこまで言われたらもう休むしかあらへん。私は抵抗をやめて、大人しくなしく寝室に運ばれようとしたとき、ずっと外を眺めてたザフィーラが「転送魔法だ！」って声を上げた。

「アインス！」

「あ、はい！」

アインスに降ろしてもらって、玄関からやなくて掃き出し窓から素足で外へ出て、転送魔法の証である光の柱へと駆け寄る。アインス達も合流して、光の柱が治まるのを待つ。そんでようやく光が治まると同時・・・私たちは絶望を知った。

「リアンシェルト・・・！？」

「それに、ミミル！」

転移して来たんは右腕と右足を失い、ボロボロになったクロークとロングワンピースの所為で穴だらけな素肌を多く露出したリアンシェルト。そんで、そんなリアンシェルトに肩を貸す、指名手配されてるミミルさんやった。

「まぁここまで損傷してしまいましたが、勝負は私の勝ちということで」

ミミルさんが空いてる左手をこっちに向かって振り上げた。その手から投げ捨てられたんはルシル君のデバイス、「エヴェ・・・ストルム・・・」やった。とは言うても原型を留めへんくらいに損壊してる。それを見て私はその場にへたり込んで、足元に転がってきた"エヴェストルム"に手を伸ばした。

「ルシル君は・・・？　アイリは・・・？」

「・・・ふ」

リアンシェルトが鼻で笑った。一瞬にして血の気が引いて、私の目からドッと涙が溢れ出してだしてきた。

「貴様ぁぁぁぁぁぁ！！」「てんめぇぇぇぇぇ！！」

「許さねぇ！」

シグナムとヴィータがデバイスを起動して騎士服に変身すると、アギトも騎士服に変身した。

「許せない・・・！　オーディンさんだけじゃなくてルシル君までも、私たちから奪うなんて！」

「このまま帰してなるものか！」

続けてシャマルとザフィーラも変身して、アインスが「待てお前たち！　ミミルも居るのだぞ！」警告した。ルシル君は以前、ミミルさんのことをオリジナルの"エグリゴリ"と同等くらいって言うてた。ならその実力はとんでもないもんや。

「お父様は本当に愛されているのですね・・・良かった」

リアンシェルトがなんか呟いた直後、新たに転送魔法の光が生まれた。姿を現したんはミミルさんの使い魔で、実は"エグリゴリ"や

ったってゆうフラメルとルルス。それに・・・

「ルシル君！」

「アイリ！」

フラメルがルシル君を肩に担ぎ、ルルスはアイリの襟首を持ってぶら下げてた。２人はテクテクと普段どおりの足取りでこっちに近付いて来て、ルシル君とアイリを私たちの前に寝かせた。私たちは一斉に２人の前に跪いて、体の状態を確認する。

「シャマル！」

「はい！　アイリは見たところ無傷ですね。ブラックアウトによる一時的な意識障害かと思います。ですがルシル君は・・・」

私でも見て判る。凍傷、擦過傷、骨折、打撲などなど、怪我のオンパレードや。シャマルは「癒しの風で少しでも治して、本局の医務局に移送します！」って、魔法発動と同時進行で医務局に連絡し始めた。

「あ、てめぇら待ちやがれ！」

ヴィータが声を荒げたから、私はルシル君たちからリアンシェルト達へ目を向ける。ルシル君とアイリをここに連れてきたことが目的やったんか、シグナム達の敵意をスルーしてるリアンシェルト達が踵を返して立ち去ろうとしてるのを見た。

「ルシリオンに1つ言伝を。次の挑戦、かの場所で何年でも変わらず待っています、と。パイモン」

「はい～」

リアンシェルト達はそれだけを言い残して、転送魔法でこの場から姿を消した。

Ｅｐｉｃａ６０せめて別れのその日までは～Ｗｅ　ｌｉｖｅ　ｈａｐｐｉｌｙ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

はやてちゃん達から、リアンシェルトさんに挑みに行ったルシル君とアイリが退院したって連絡を受けた私とフェイトちゃんとアリシアちゃんは、スケジュールを合わせて数日後の平日のお昼に八神邸へとやって来たんだけど・・・。

「あ、来たわね」

「なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、こんにちは～♪」

すでにアリサちゃんとすずかちゃんも来ていて、私たちも２人に「こんにちはー！」を返したんだけど、うーん、そんな２人にツッコミを入れていいのかな？って少し悩む。

「アリサ、すずか。法廷みたいにテーブルをビーチに並べてどうしたの？」

悩んでる中でアリシアちゃんが先にツッコんだ。そう、八神家のプライベートビーチに日本の裁判員裁判の法廷と同じ位置でテーブルが並べられていた。アリサちゃんは裁判官のテーブルに着いて、すずかちゃんは書記官のテーブルに着いている。

「おー、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、こんにちは～！」

家からはやてちゃんを始めとした八神家の面々が出て来て、私たちも「こんにちはー！」を返した。そんなはやてちゃん達も自然に法廷へ向かい始める。はやてちゃんとアインスさんとシャマル先生とリインが検察官側へ、シグナムさんとヴィータちゃんとザフィーラとアギトが裁判員側に移動。

「なのは達はどこ座る？　裁判員はどれだけ居てもいいし」

「アリサちゃん。まずは、いったい何をしようとしてるのかを聞きたいんだけど・・・」

「あ、そうね。えー、こほん。今日は、被告をルシリオン・セインテストとアイリ・セインテストとし、無断でリアンシェルトとの闘いに赴き、あたし達を悲しませ苦しめた罪で、出廷してもらうわ」

アリサちゃんがそう答えてくれたところで、遠くから「おーい！」って呼びかけられたから、声のする方へと体を向ける。海沿いの道路に停車しているリムジンから、「シャルちゃん！　トリシュちゃん！」の２人が出て、大きく手を振っていた。そんな２人を置いてリムジンは出発して、２人はこっちに向かって駆け出す。

「これで面子は揃ったわね。で、なのは達はどの立場にするわけ？　裁判員、検察官、弁護人、あと傍聴人。どれでもいいわよ」

ルシル君とアイリの罪状からして、私は「うーん、じゃあ検察側」に立とう。私だってすごく辛かったんだもん。ルシル君のことが好きなはやてちゃんやシャルちゃんやトリシュちゃん達はもっと悲しんだに違いない。そのことをルシル君はもう少し考えてほしい。

「弁護人は誰が務めるの？」

「今のところ０だけど。アリシアちゃん、やってみる？」

「そうだな～。誰も居ないんじゃ可哀想だし、私がやってあげるよ！」

「じゃあ私も、アリシアと一緒に弁護人を。ほぼ、負け戦っぽいけど」

そういうわけで、フェイトちゃんとアリシアちゃんとは分かれることに。

「こんちゃー！　なになに、裁判でも開くの？　すっごい面白そうなんだけど！」

「こんにちは。これは何かしらのイベントですか？」

シャルちゃんとトリシュちゃんも合流して、挨拶を交わした後で私たちがこれから何をするかと説明した。途中からニヤニヤし始めたシャルちゃんは、説明が終わると同時に「よし、決めた！」って強く頷いた。

「私も、決めました。裁判員です！」

トリシュちゃんが選んだのはそれ。で、シャルちゃんはと言うと・・・。

「処刑執行人がいい！」

元気いっぱい、笑顔満開に大きく挙手したシャルちゃんの様子に私たちは呆気に取られた。でも「まぁそうね。1人くらい必要ね」アリサちゃんは納得した。この瞬間に私は理解した。始めからルシル君たちに勝ち目がないようにされるんだな～って。

「じゃああんた達もそれぞれ席に着いて。被告人を呼ぶわよ。はやて」

「は～い♪　ルシルく～ん！　アイリ～！　しゅって～～！」

はやてちゃんが家に向かって声を掛けると、どこからともなくチャイコフスキーの弦楽セレナーデ第一章が流れ来た。トリシュちゃんは「良い音楽ですね」って感嘆してるけど、日本生まれで日本育ちな私たちは「ぷふっ！」思わず吹き出してしまった。

（あのコマーシャルが一瞬で頭に浮かんだ・・・！）

これから被告として出廷するルシル君とアイリが部下役で、私たちが上司役になるわけだ。はやてちゃんも思わずって感じで笑ってる

のを見ると、このＢＧＭを流してるのはルシル君かもしれない。そんなルシル君と、腕に抱きついてるアイリが家からこっちに向かって歩いて来る。ＢＧＭと合わせて笑っていた私たちだけど、「え？」その様子に今さら目を疑った。

「ルシル君が歩いてる！？」

「魔導師化してるの！？」

「ダメじゃない、あんた！」

「アイリ、車椅子！」

「私が抱えますから、今すぐ魔導師化を解除してください！」

魔力の消費はルシル君の寿命を減らす行為だって知ってる私たちは、急いで駆け寄ってルシル君に魔導師化をやめるように言ったんだけど、「大丈夫。もう大丈夫だから」そう優しく微笑みを返された。どういうことかと首を傾げてると、はやてちゃんがやって来た。

「ルシル君な。どうやらリアンシェルトに魔力を貰ったらしいんよ」

「ったく。忌々しい。完全に俺を舐めている」

「でもそのおかげで、こうして歩けるようになったし、何より寿命問題が解決したんだよね♪」

アイリがルシル君の胸に頬ずりしながらそう言った。そんな驚きと嬉しさで溢れる報告にわあ！って湧いてるとき、シャルちゃんとトリシュちゃんが「ちょっと離れなさい」アイリを引き剥がしに掛かった。

「にゃあー」

アイリが手をバタバタさせてルシル君から引き剥がされた後は、「あの、本当に大丈夫なの？」すずかちゃんが心配そうに聞いた。私たちも頷いて同意して見せる。

「ああ。アイリの言ったように、身体機能と寿命関係の問題は解決した。リアンシェルトはどういうわけか、俺のリンカーコアの機能不全を修復し、オマケに大魔力量を勝手に寄越した」

ルシル君は怒っているけど、でもそのおかげでルシル君が寿命で死ぬことはなくなった。"エグリゴリ"の全滅＝ルシル君の死は変わらずだけど、それでもそれまでの余裕が生まれたのは確かだ。

「すぐにでもリアンシェルトを救いに行くの・・・？」

「そうしたいのは山々だが・・・。みんなの協力で得たドーピング用の魔力結晶、その全てを消費しきってしまったんだ。万全の状態以上の魔力量で挑んだ結果が引き分けだ。いや、生かしてもらったんだから敗北だよ・・・。くそっ。あそこまで追い詰められたのに、最後に魔力が尽きた。だから・・・」

ルシル君がそこまで言い掛けて、私たちをぐるりと見回した後「みんなの記憶を消費しようとした」俯いてそう言った。

「だけど、出来なかった。ふと脳裏を過ぎったんだ。みんなの事を忘れた後の自分の姿が。恐ろしかったよ。だから躊躇した。そして手痛い反撃を食らって・・・負けた」

負けたことによる悔しさに満ちた声色だったけど、そこに後悔の色は無いような気がした。顔を上げたルシル君も苦笑いで、「さ。俺の失敗談はもういいだろ？」手をヒラヒラ振りながらアイリと一緒に被告人席に当たるテーブルに向かった。

「・・・でもルシル、アイリ。良い報告の後だけどこっちは手加減しないから。では開廷するわね～。こほん。被告ルシリオン・セインテスト、アイリ・セインテストの裁判始めるわ。なんちゃって裁判だから事細かな挨拶とか抜きね」

「アリサ。小槌（ガベル）なんてどこから持って来た・・・？」

裁判長やオークションの司会者が使うようなハンマーをテーブルの上に置いたアリサちゃんに、ルシル君が首を傾げた。アリサちゃんは「通販で買ったのよ♪」サウンディングブロックにコンコンとガベルを打ちつけた。

「えー、検察。被告両名の罪状を」

「はい！　ルシル君と私たち八神家の約束である、リアンシェルト

との闘いに赴くときは必ずその場に家族が揃ってること、を破ったものである」

「そして、私たちみんなに悲しみを与えた罪、です！」

はやてちゃんと私とでそう告げると、アリサちゃんは満足そうに頷いてガベルを2回打って、「判決。有罪！」きっぱり下した。

「待たんか、こら！　なんちゃって裁判だとしても、もうちょっとあるだろ！？」

ルシル君が私たちを見回したから、私たちは練習したわけじゃないけど一斉に「ハテナ？」首を傾げた。その様子にアイリが「おお！」拍手した。

「冗談よ、冗談。じゃあ被告、間違いないかしら？」

「あー、うん、間違いない」

「間違いないで～す！」

「ん。それじゃあ弁護人、何か言うことは？」

弁護人役のフェイトちゃんがチラッとアリシアちゃんを見ると、アリシアちゃんは強く頷いて「ありません！」力強くそう言った。

「いや、だから！　もうちょっとあるだろ！　被告人（おれたち）にこう・・・

弁明とか釈明とか！　というか弁護人！　何しにそこに居るんだよ！」

「「ハテナ？」」

「双子か！」

「ルシルがそんな激しいツッコミするなんて、珍しいわね。ちょっとビックリだわ」

「自分でも驚くほどにテンションが上がっているよ。なんだかんだ言って、俺はこうして記憶を保ったまま生きて帰ってこられて、みんなと再会できたことが嬉しいらしい」

ドキッとするくらいに綺麗な笑みを浮かべたルシル君。見惚れてたアリサちゃんは咳払いを1回した後、「んじゃ、弁護人。改めて何か言うことは？」って尋ねた。

「え、えっと・・・」

「フェイト。耳を貸してくれ」

ルシル君にそう言われたフェイトちゃんがそっと耳を差し出した。そしてルシル君が顔を近付けて耳打ちしようとしたんだけど、フェイトちゃんが「ひゃあん！？」変な声を上げて、顔を赤くして耳を押さえた。

「裁判長！　被告人が弁護人にセクハラしました！」

「これでは無罪は無理です！　有罪、これは有罪です！」

「異議なーし！」

「認めるわ！　罪状セクハラも追加！」

「ちょっと待ってくれ！　シャル、トリシュ、はやて！　不可抗力だ！　な？　フェイト！　そう言ってくれ！」

「・・・えっと」

「ルシル。私（あね）の前でフェイト（いもうと）に対してセクハラとか。ないわ～・・・」

ルシル君、圧倒的アウェイ。弁護人すら敵に回しちゃった以上、このなんちゃって裁判は当初の結末どおりにルシル君とアイリの敗訴一直線。だけどフェイトちゃんが「だ、大丈夫！　平気だから！」挙手した。

「ルシル。耳打ちじゃなくて念話でお願い。また変な声出すの恥ずかしいから」

「あ、ああ、すまん。じゃあ・・・」

「ふんふん・・・そのまま伝えればいいね。えーでは。被告が、私たちに無断でリアンシェルトの元へ向かったのは、決心が鈍りそう

だったからです。医務局で語ったように、下手をすれば自分を失くしてしまうような闘いに挑むんです。私たちと顔を合わせれば、どうしても出撃できないと思ったんです。・・・ルシル」

それからルシル君に代わってその思いを語るフェイトちゃん。ルシル君は迷いを振り切るために、そして自分の弱体化がその日に起こるのを予見したため、メールも通信もせずにそのまま向かったそうだ。

「どれもこれも俺自身の問題で、みんなは何も悪くない。ただ、これだけは解かってほしい。兵器だ道具だと自称している俺も、感情を持った生き物なんだと・・・。以上だ」

ルシル君が頭を下げる頃には、私の中ではなんちゃって裁判なんてものはお開きになってた。みんなの空気もそんなだし、私たちは頷き合ってこのまま閉廷の流れに行こう、そう思ったんだけど・・・。

「シャルちゃん・・・？」

シャルちゃんが裁判長席、アリサちゃんのところに向かった。そしてガベルを手に取るとコンコンと打って「判決を言い渡す！」そう告げてガベルを置いてから、ルシル君の側に立った。

「有罪！　フライハイト家次期当主、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトの婿になる刑に処す！」

「「「「はい？」」」」

ルシル君とはやてちゃんとトリシュちゃんとアイリが抜けた声で聞き返すと、シャルちゃんが「いただきまーす！」ルシル君を肩に担いで・・・

――閃駆――

「ひゃっほーい！！

高速移動歩法でビーチから飛び出した。まさかの行動に呆然としてると、はやてちゃんが「アインス確保！」そう指示を出して、アインスさんが「承知しました！」ダッと駆け出した。何の魔力強化を行わない、素の状態でのあの恐ろしい初速ダッシュ。あれに対処するの難しいんだよね～。

「イリス、逃がさない！」

――とぐろ巻く連環の拘束蛇――

トリシュちゃんは"イゾルデ"を起動することなく、人差し指と親指の間に張った魔力弦を利用して、小さな魔力矢を同時に3本と射た。

「どーれどれ♪　パラライズバレット・スナイプシュート・・・！」

「ちょっ、アリシア！？　まだデバイス無しでの精密狙撃は練習段階でしょ！？」

フェイトちゃんの口から恐ろしい言葉が飛び出た。アリシアちゃんは左手で指鉄砲を作って、右手で左手首を押さえてブレ防止。左人差し指の先に環状魔法陣を展開。そして「ファイア！」空色に輝く魔力弾を高速射出した。

アインスさん、アリシアちゃんの魔力弾、トリシュちゃんの魔力矢に追われるシャルちゃん。まずトリシュちゃんの矢をサッと躱した。でも側に着弾した矢が複数本のロープ状のバインドへと変化して、シャルちゃんを拘束しようと伸びた。

「ほいさ！」

「むが！？」

シャルちゃんはなんとルシル君を盾にしてバインドを防御。さらにアリシアちゃんの魔力弾も、グルグル巻きになったルシル君を使って防いだから、「あばばばばば！？」直撃を受けたルシル君が感電してぐったり。私たちはその光景に「うわぁ」どん引きした。

「ごめんねー！　ルシルを弱らせてくれてあんがとー！」

「ルシル君！」「ルシルさん！」

「遊びだとしてもあったま来た！　返せぇー！」

はやてちゃんとトリシュちゃんが駆け出し、アイリも腰から一対の白翼を展開して、ルシル君の元へ向かう。

「うわっ、ごめん、ルシル！　でもルシルですら直撃で即行動不能か～。良い魔法を組んだな～私♪」

「アリシア・・・。もうやめてね？」

とここでアインスさんがシャルちゃんに追い付いた。片や男性（ルシルくん）を担ぐシャルちゃん、片や完全フリーにして素手での格闘戦最強なアインスさん。さらにアイリが到着しそうだし、1対2になっちゃうね。しかもはやてちゃんとトリシュちゃんも居るし、一気に不利になるよ。

「あ、ルシル君を空に放ったです・・・」

「へえ。アインス相手にシャルもやるじゃねぇか」

「ああ。よほど鍛えたようだな」

「でもうちのアインスの方が押してるわ」

「だけどシャルさんの方もすげぇ！　落ちてきたルシルを掴んですぐにまた空に投げた！」

「あー、でもアインスの投げ技を食らったわね」

「柔道の内股だね～」

「陸戦中に柔道や合気道とかの技を掛けてくるから、アインスはホント厄介だよ」

「アリシア、模擬戦の時にいつも投げられてるもんね・・・」

思い思いにアインスさんの強さについて話すみんなに続いて私も「本当に強いよね～」同意した。

――アイスマン――

「あ、ルシルをキャッチすると同時に」

「シャルちゃんを凍らせちゃった」

「決まったわね」

落下を始めていたルシル君をギリギリで抱きとめたアイリは、そのまま相手を雪だるま型の氷に閉じ込めるバインドでシャルちゃんを拘束した。

「いやさ？　ちょっとした冗談じゃない？　鬼ごっこ的な遊びみたいな？」

頭の部分の氷だけを切り取られた状態のシャルちゃんが私たちのところまで引き摺られて来て、そう弁明を始めたんだけど・・・。はやてちゃんとトリシュちゃん、特にアイリは腕を組んで仁王立ちして、ジト目でシャルちゃんを睨んでる。

「シャル。アイリはね、ルシルを拉致したことは怒ってない。盾にしたことを怒ってるの。はやてとトリシュもきっとそう」

「もちろん、お婿さんにするって言うのは受け入れられへんけどな」

「ええ、そうです」

「あれ？　トリシュ、ルシルのこと諦めるんじゃなかったの？」

「っ！　そ、それは、なかったことに。あなたやはやては諦めず、ルシルさんを想い続ける選択をした。私は、ルシルさんの足かせになるのが嫌で諦めると伝えたけれど・・・」

シャマル先生に介抱してもらってるルシル君に顔を向けたトリシュちゃんは「慕い続けます」綺麗な笑みを浮かべた。

「でも、遊びだとしてもどうしていきなり・・・？」

「リアンシェルトとの闘いで、記憶とか失くすかもって話してたでしょ？　たとえそれでも生きていてくれたら、また仲良くなれば良い。これまでの思い出が無いから少しの間は寂しいだろうけど。でも今回、いきなりルシルが闘いに行ったって聞いて怖くなった。事前に教えてくれると思ってたからね。場所も知らないから迎えにも行けないし。そして記憶を失くして人知れず別の世界を彷徨って・・・。私たちの知らないところで死ぬかもしれない。それにルシルの死期が近いことには変わらない。ルシルとの間に何も残せない恐

怖が・・・さ、生まれちゃったわけ」

シャルちゃんの話は、私たちが抱いたものと同じだった。ううん、ルシル君を1人の男性として好きなシャルちゃん、はやてちゃん、トリシュちゃんからすればもっと強い恐怖だったはず。

「アイリも、私たちに連絡しないし」

今度はアイリが、はやてちゃんとシャルちゃんとトリシュちゃんにジト目で睨まれた。

「あ、うぅ、ごめん。急いでたから」

責める責められるの立場がごちゃ混ぜになったところで、「いや、参った参った」ルシル君が復活。だから責められる役がルシル君に移動しちゃって、はやてちゃん達に迫られ始めた。さらにシャマル先生やリインにアギト達も加わって、ルシル君はお叱りの大合唱を受けることに。

「こんな何気ない時間が、ずっと続けばいいね」

「うん、フェイトちゃん。ずっと、ずっと・・・」

「「ごめんなさ～～～～～～い！！」」

全力で謝るルシル君とアイリの大変な様子に、私とフェイトちゃんが思わず失笑した。

・―・―・―・―・―・

第３管理世界ヴァイゼンはノルトラント地方の外れに在る廃墟となっている工場跡。そこは今や不良や犯罪者の溜まり場となっていた。今夜も今夜で大音量で音楽を鳴らし大騒ぎし、犯罪の自慢話や違法薬物で盛り上がっていた。

ある区画はバーとダンスホールのナイトクラブに改造されており、老若男女が思い思いに酒を飲み、踊り、痴漢まがいの行為を笑いながら行っていた。

「ん？　おい、アレ見ろよ。偉そうな猫の人形が二足歩行してんぜ！」

「ぎゃはは！　酔ってんだろ、お前！」

入口付近で立ち飲みしている男２人が馬鹿笑いしている。彼らの視線の先、６０㎝ほどの猫が後ろ足でのみ立ち、真黒なスーツ一式で身を包み、人間たちの足元を軽やかに闊歩していた。周辺に居る者たちもその猫に気付き、ヒソヒソと話し出す。

「どうしたの～？　猫ちゃんが来ちゃダメなところだよ～？」

べろんべろんに酔っている若い女性が猫を抱き上げた。すると猫は「どうも御忠告痛み入ります。しかし、これが私の仕事ゆえ」と頭をペコリと下げた。その様子に飲んだくれ連中は大笑い。もはや二足歩行や喋ることに対してなんら気にも留めない。

「我が名はエルフテ。我が主より、当施設に居る君らの掃除を任された。今は酔っているため、正確な判断は出来ないだろう。それを幸運と思って、逝くといい」

――幻惑の乱景――

最後の大隊の融合騎であったエルフテ。今や従うべき主を変え、その幻術特化の融合騎としての力を揮っていた。そんなエルフテの幻術によりナイトクラブに集っていた犯罪者たちは酔いから醒め、「ひあああああ！？」一斉に悲鳴を上げた。

「どうなってんだ！？」

「いやぁぁぁぁ！！」

「おえええ！」

彼らは自分以外の人間が化け物に見えていた。それだけなら冷静になれば幻術の可能性を見出し、この混乱を収まっていたかもしれない。しかし、ここで決定打となる事態が起こる。バン！とドアを勢いよく開けたのは、銃火器などの質量兵器の密輸を主としている犯罪者たちで、商品である銃火器を武装している。

「殺される前に殺せ！」

「撃て撃て撃て！」

「1匹も逃がすなー！」

そこからは惨劇だ。あっという間に死体の山ができ始めた。だが、中には「おい、どうしたんだよ！　なんで仲間同士で殺し合ってるんだよ！」と、幻術の影響を受けていない者たちも居た。しかも幻術を受けている者たちからは視認されていないようだ。

「ねぇ！　一体どうなってるの！？」

「俺に聞くなよ！」

「僕たちも殺されるんだ・・・！」

「泣き言を言ってんじゃねぇよ！」

「とにかく、防御魔法であたし達の周囲を！」

「ですね！　質量兵器くらいなら防げます！」

彼らは魔法で犯罪を働く魔導犯罪者だ。それぞれがシールドやバリアを展開して、銃弾や刃物、グラスに酒瓶に椅子などの武器から身を守っていた。しかし突然そんな彼らの立つ床が崩落し、彼らは驚きに声も出せずに崩落に巻き込まれ、階下に落ちた。

「いって～」

「なんなんだよ急に！」

「この工場、相当古いからな。ドンパチで一気に崩れたんだろ」
「それにしても暗いな。なんも見えねぇ。天井が塞がれてやがる。どうなってんだ？」
「ねぇ、この臭いなに？」
「下の階ももう駄目のようだな。血の臭いだ。しかも1人2人じゃない。10人以上だ・・・」
「そんな！　どうしてこんなことになっちゃったんですか・・・！？」
瓦礫の上でへたり込んだ彼らの耳に、「どうして？　お前らが犯罪者だからだろ？」と若い男の声が届いた。ハッとした彼らは周囲を見回すが、未だ暗闇に目が慣れない所為で視認できない。
「なあ。お前たちの魔力、俺にくれよ」
廊下に明かりが点り、彼らは自分たちの周囲が死体と血の海だと判ると、気を失う者、吐く者、泣き叫ぶ者、そして「大人しく殺されるかよ！」と魔法を使おうとする者が出る。声の主の姿はどこにもなく、男は射撃魔法を無差別に周囲に撃ち続け、廊下の内壁が次々と崩れていく。
「あまり魔力を使ってくれるなよ？　リンカーコアが弱って使い物にならなくなってしまうだろうが」

「うるっせぇぇぇーーーー！」

男は声のする方、前方のドアの中へと魔力弾を何発も撃ち込んだ。物理破壊設定だったのか派手に爆発が起きて、廊下に転がっていた死体や血溜まりが吹き飛ぶ。モクモクと黒煙が噴き出す中、ドアの向こうの部屋より1人の青年が出てきた。

銀色の短い髪、アップルグリーンの瞳、黒の長衣・スラックスに灰色のロングコート姿といった、２０代前半くらいの男。

「なんだ、テメェは！！」

「俺か？　俺はガーデンベルグ。ガーデンベルグ・エグリゴリ。ま、どうせ聞いてもすぐにしょうがなくなる」

ガーデンベルグと名乗った"堕天使エグリゴリ"がスッと右手を振るうと、この場に居る魔導師たちの胸から飛び出てきたのは人の手。その手の平にはリンカーコアの光輝いている。

「お、おれの・・・リンカー・・・コア・・・・！？」

「悪いな。お前たちのリンカーコアを貰う」

ガーデンベルグは男の側に歩み寄り、手の平の上で輝くリンカーコアに触れると引き千切るかのように奪い取った。その時の激痛によって男は意識を失いそうなったが、ガーデンベルグへの怒りで意識を保ち続けた。そして、他の魔導犯罪者からもリンカーコアを奪っ

たガーデンベルグに、「絶対に許さない」と呪いの言葉を掛けた。

「その憎しみすら、どうせ無くなる。安心しろ」

ガーデンベルグがそう言うと、廊下の奥から銃器を携えた者たちが駆け寄ってきた。その銃口は魔導犯罪者たちに向けられている。

「ここにも化け物が居るぞ！」

「殺せ！」

自分に向けられた銃口に男は、「ま、待て！　俺は人間だ！　撃つな！」と掠れた声を出すが、武装している連中には聞こえていない。それが判ると今度はガーデンベルグに「たすけてくれ」と懇願するが、ガーデンベルグの姿はもうどこにもなかった。

「撃て！」

「や、やめろぉぉぉーーーー！」

男の懇願も空しく銃口が火を噴いた。男や他の魔導犯罪者たちは何十発という弾丸の雨をその身に受けた。

「おい、エルフテ。もういいぞ」

魔導犯罪者たちのすぐ側の壁に背を預けていたガーデンベルグの指示に、エルフテが「承知」と応じ、すべての幻術魔法を解除した。

たった今まで廊下に転がっていた死体や血溜まりが綺麗さっぱり無くなっており、魔導犯罪者たちも傷一つとしてない綺麗な体になっていた。そして武装していた連中の姿もどこにもない。そう。ナイトクラブでの銃撃も、この廊下への落下も、すべて幻術――夢だった。ただ1つの現実は、リンカーコアをガーデンベルグに奪われたこと。

「コイツらを含めて68人分のリンカーコアか。魔力量は少ないが、塵も積もれば山となるだな。・・・よし。エルフテ、次の狩場に移動だ」

「承知した。我らT・C・。王の御身のために」

「王の御身のために。・・・ごめんな、みんな」

何もない空を見上げてポツリと謝罪したガーデンベルグは、エルフテを伴って声ひとつとしてしなくなった工場跡を後にした。

後日、この工場跡で意識不明者230名が発見され、病院に搬送された。1週間以上目を覚まさなかったが、ある日を境に続々と意識を取り戻したものの全員が何かしらの障害を発症しており、幼児退行、記憶消失、解離性同一性障害、植物状態などとなっていた。しかし死者数は0だった。

この日より管理世界、管理外世界問わず、似たような事例が数多く発生。時空管理局は、何かしらの事件性があると判断し、これの捜査を開始した。

ＥｐｉｓｏｄｅＶ：Ｓｅｒａ，ｔａｍｅｎ ｔａｃｉｔｉｓ Ｐｏｅｎａ ｖｅｎｉｔ ｐｅｄｉｂｕｓ・・・Ｆｉｎ

・―・―・次章予告・―・―・

はじまりはいつだったか・・・。

「ヨツンヘイム連合の圧倒的な軍隊に対抗するため、私はここに"アンスール計画"を立案します！」

何十という数の惑星を巻き込んでの１０００年と続いていた戦争を終わらせるため、軍人になった時か・・・。

「おはよう、ロヴァル。お前の父であるルシリオンで、母のシェフィリスだ」

「おはようございます、父上、母上」

ガーデンベルグより先に生まれた"戦天使ヴァルキリー"の試作０号機、ロヴァル・セインテスト・ヴァルキュリアを生み出した時か・・・。

「アースガルドは、アースガルドに味方してくれる世界を決して陥落させることはない。憶えておけ、ヨツンヘイム連合。我らアンスールが存在し続ける限り、お前たちの敗北は絶対に揺らがない」

初めて軍人として、"アンスール"として戦場に立った時か・・・。

「ふざけるな・・・。ラグナロクなんて、本当にすべてを無に帰すつもりか・・・」

大戦には勝利したが、連合の敗残兵が"ラグナロク"を発動し、膨大な被害をもたらした時か・・・。

「そんな馬鹿な。私とシェフィのヴァルキリー達が！」

ヴァナヘイムによって"ヴァルキリー"の大半が洗脳され、"堕天使エグリゴリ"になってしまい、無事だった他の"ヴァルキリー"を、洗脳された"エグリゴリ"を救うため、"エグリゴリ"との戦争を決めた時か・・・。

「・・・ごめ・・・ん・・・。シェ・・・フィ・・・。約束・・・・守れ・・・なか・・・た・・・」

仲間を、親友を、弟子を、妹を、恋人を、"エグリゴリ"によって奪われ、生き延びたい一心で"神意の玉座"と契約し、"界律の守護神テスタメント"となった時か・・・。

「ん？・・・な！？　そ、そんな、シェフィ・・・！？」

"テスタメント"として訪れた契約先世界で、シェフィリスとそっくりだったフェイトと出会い、彼女たちと心を通わせ、共に過ごした時か・・・。

「・・・幸先が良いな。降臨直後で、お前たちを破壊出来るとは。アンスールが神器王ルシリオン・セインテスト・アースガルド、行くぞっ」

５ｔｈテスタメント・マリアの協力によって召喚されたこの世界で、堕天使戦争が再開された時か・・・。

「いってらっしゃい」

「いってきます。・・・・・・・・・・さようなら」

俺は・・・私は、ルシリオン・セインテスト・アースガルド。これまで出会ってきた人たちの想いを置き去りに、アースガルドの地へと必ず帰る。それが・・・。

Ｎｅｘｔ　Ｅｐｉｓｏｄｅ・・・Ｌａｓｔ　Ｅｐｉｓｏｄｅ：Ｆｉｎｉｓ　ａｕｔｅｍ　ｓｏｍｎｉｍ

番外コーナー：う・ら・ば・な～～～～ファイブ！

シャル
「番外コーナーも、今回合わせてあと２～３回かな？　あ、こんちゃー！　みんなのアイドルぅ～～～・・・シャ～～ル～～だ～～～～Ｙｏ　！」

ルシル
「とうとう俺の旅路も終わると知り感無量。ルシリオンだ・・・Ｚｅ！」

シャル
「ＡＮＳＵＲシリーズは、作者が中学２年の頃から始めた作品だから、ここまでえらく時間が掛かったね～。ＡＮＳＵＲシリーズの歴史はこんなもんかな～」

２００１年：大戦編開始

２００４年：堕天使戦争編開始

２００６年：界律の守護神編・魔界の章開始・・・未完・全シリーズ削除

２００９年：界律の守護神編・魔法少女リリカルなのはの章Ｃｒｏｓｓｆｉｒｅ開始

２０１１年：堕天使戦争終結編・魔法少女リリカルなのはの章Ｌａｓｔｃｏｄｅ開始

ルシル
「本来は前作で打ち止めのはずだったが、やはり俺のアースガルドへの帰還、つまりＡＮＳＵＲシリーズの完結を目指そうと考えたわけだ」

シャル
「ま、当然だよね。私だけが救われちゃーね。ルシルもそうだけど、マリアだって解放してあげたいし」

ルシル
「だな。マリアはこんな俺のためにテスタメントに選ばれるまで自分を高めた。しかしそれは、人としての幸せを捨てたと言っても過言じゃない。彼女も救ってやりたい」

シャル
「そうだね。んじゃ、ルシルの旅路の果てへ行くため、このコーナーもサクッと終わらせちゃおう！」

――ミヤビ・キジョウ
脅威対策室直属特殊機動隊・特務零課、通称：特殊機動戦闘騎隊に所属している陸戦魔導師。階級は陸曹。１８歳。デバイスは赤い羽根を待機形態とする"フェーニクス・フェーダー"。
１７５ｃｍという長身を誇り、管理局に入る際の魔導師ランク試験で陸戦ＳＳに一発合格。

その正体は、プライソン・スカリエッティによって生み出された生体兵器。しかし稼動する前にプライソン戦役は終わり、プライソン自身も死亡したことで、そのまま放置されていた。
基となった遺伝子保有者は故人であり、すでに滅亡した世界の特殊な一族の者ということもあって、天涯孤独の身だった。後に家族全員が局員というキジョウ家に引き取られた。
名の由来：鬼城　雅。小学校の文芸クラブに所属していた作者の処女作「だからぼくは悪魔になる」のメインヒロイン。

ルシル
「体内を巡る魔力を角という形で発現させると、魔力を魔法（どちらかというと魔術寄り）として外界に影響を及ぼせるようになる。そうなると、俺がスペックを強化したアインスと並ぶ火力を発揮する」

シャル
「いやホントに強いよね～ミヤビ。優秀な仲間を迎えることが出来て良かったよ」

――アントワネット・コレフシ
ミッドチルダ地上本部・鉄道警備部に所属する三等陸尉。デバイスは４０ｃｍほどの柄型ストレージデバイス、パイレイトアームズ。鞭モードのパイレイト・サーペント、刀剣モードのパイレイト・ブレイド、　中折れ式上下二連銃デリンジャー型デバイス、パイレイト・ピストルの３形態。
特騎隊の活動停止に伴ってミヤビは鉄道警備隊に配置換えになり、アントワネットはそんな彼女の上司となる。

先祖は地球出身者で海賊だったということもあり、アントワネットのバリアジャケットも海賊風のデザインとなっている。
名の由来：プエルトリコに実在した海賊、ロベルト・コレフシ。

使用魔法
パイレイトサーペント
――スナッチウィッパー――
魔力を吸収する効果を持った魔力の鞭を展開する
――バインディングウィップ――
鞭で1度拘束し、リングバインドとして切り離す。

――マイヤ・フェロー
ミッドチルダ地上本部・鉄道警備部に所属する准陸尉。魔導師ではなく事務員。アントワネットとは同期で幼馴染。

――アルピナ・ハルトマン
海上警備部の捜査司令を務める艦隊提督。使用デバイスは、先端の球体に羽を畳んだ蝶が数匹と並んだような杖型ストレージデバイス、シュメッターリング。

――ツィスカ・ヴェールマン
聖王教会騎士団、無色花騎士隊ファルブロス・ブルーメ所属のシスターであり騎士。ファルブロス・ブルーメは戦闘部隊ではなく、騎士団内の風紀を取り締まる自浄組織。

――ライオネル・ブンテンバッハ
聖王教会騎士団がズィルバーン・ローゼに所属する、最強の斧騎士
アクストパラディン。デバイスはバトルアックス型アームドデバイス・"ギガンテス"。
老いを理由に称号の返上、騎士団を除隊し、同じ理由で除隊したマドールと共に余生を満喫するため、放浪の旅と称して管理世界を渡り歩く。
そんな中、とある旅先で同輩だった他のパラディン、ガラガース、ラヴェイン、ガリフットと遭遇。３人からベルカ再誕計画と、最後の大隊へのスカウトを受けるもこれを拒否。お互いに説得を行うが無駄に終わり、交戦する。結果、ライオネルとマドールは死亡。人知れず火葬され、遺灰は海に撒かれた。
名の由来：アーサー王の重臣の１人で、気性の激しさが悲運をもたらすこともあったが、数々の戦で武勲を立てた騎士、ライオネル。

――マドール・ド・ラ・ポルト
聖王教会騎士団がズィルバーン・ローゼに所属する、最強の鎌騎士
ゼンゼパラディン。デバイスはＴ字大鎌型アームドデバイス・"ヘルサイズ"。
ライオネルと同文。
名の由来：聖杯探求に向かった騎士の１人、マドール・ド・ラ・ポルト。

イリス
「こんな形で、教会騎士団を永く支えて来てくれた、偉大な騎士を２人も喪うなんて。その原因を生み出したグレゴールやリナルドを、わたし達は絶対に許さない」

――パイモン・エグリゴリ
古代ベルカは技術大国イリュリアの技術を継承した女性、ミミル・テオフラトゥス・アグリッパの真の名前。イリュリア製の"堕天使エグリゴリ"の1機で、ゼフォン、ミュールの妹にあたる。
イリュリア製でありながら、ルシリオンとシェフィリスが開発したオリジナル・"戦天使ヴァルキリー"の隊長クラスの神秘と魔力を有する。
名の由来：ソロモン72柱序列9の悪魔であるパイモン。

――フラメル
パイモンの製作した"エグリゴリ"の1機。公にはウサギを素体にした使い魔としていた。
真っ白なウサギ耳、髪形は右側でのサイドテール。目は真紅。服装は白色のチャイナドレス。胸元にはウサギの顔の形をした穴が開いていて、スカートのスリットは腰の近くまであるため、露出が多い。
名の由来：賢者の石を製造したという逸話を持つ錬金術師、ニコラ・フラメル。

――ルルス
パイモンの製作した"エグリゴリ"の1機。公にはウサギを素体にした使い魔としていた。
真っ黒なウサギ耳、髪形は左側でのサイドテール。目は瑠璃色。服装は黒色のセーラー服。スカートの下にはスパッツを着用している。
フラメルの妹にあたる。
名の由来：錬金術によって22トンの卑金属を黄金に変えたという逸話を持つ錬金術師、ライムンドゥス・ルルス。

ルシル
「まだエグリゴリが居たことに驚くしかなったよ。しかもエグリゴリ自身がエグリゴリを新たな生み出すなど、なんの冗談かと思った」

イリス
「ミミルさんがエグリゴリだなんて驚いたよ。そりゃまぁ、全然歳を取らないな～って思ってたけど、まさかね～」

ルシル
「まだ他にもエグリゴリを造っていないだろうな・・・」

――グレゴール・ベッケンバウワー
今は滅びた第2世界ベルカは技術大国イリュリアの騎士団総長だった老騎士。
当時の生体兵器実験によって不老不死となり、現代まで生き延びていた。その何百年、騎士の騎士による騎士のための世界ベルカの復活を、共に生き延びていた融合騎アインス、当時の騎士団員や政治家と共に目指してきていた。
騎士や政治家の子孫が数多く現代の聖王教会組織に入り込み、その連中が最後の大隊に協力していた。
最後の大隊メンバーとして、コードネーム・ロクエンを頂く。そんな彼の長年の野望は、イリス率いるオランジェ・ロドデンドロンを始めとした騎士隊、管理局によって打ち砕かれた。

――アインス
技術大国イリュリアが製造した融合騎シリーズ、1号機。汎用性の

ある電気変換資質、高戦闘力、ロードやマイスターに依存しない自律性などを第一に考えられ、成人男性の姿を与えられた。
後に必要となる最後の大隊の構成員を増やすため、エーアスト・ルターという偽りの名前や戸籍を用いて魔導師派遣会社を設立。違法魔導師などを秘密裏に雇い、スキルアップを図っていた。
最後の大隊メンバーとして、コードネーム・ランコを頂く。海洋兵器モルゲンデメリング征服艦隊の護衛の任に就いていたが、管理局魔導師部隊と交戦、敗れ去った。

使用魔法

――ゼンゼンマンフォルム――
意：死神形態／雷撃の鎌と雷撃のコートを身に纏う、融合騎アインスとしての真価。

――ブリッツ・シュナイデン――
意：電撃の斬撃／雷鎌による斬撃。

――ブリッツ・フリーゲンデ・シュナイデン――
意：飛翔する電撃の斬撃／雷撃の刃を飛ばす。

――ブリッツ・ケッテ――
意；電撃の鎖／電撃の鎖による刺突、打撃、拘束、感電などの動作の総称。

――ブリッツ・クーゲル――
意：電撃の弾丸／電撃の魔力弾を放つ。

――ブリッツ・カノーネ――
意：電撃の砲撃／直径１ｍの電撃球を高速発射する。

――ブリッツ・シュネリヒカイト――
意：稲妻の速度／電撃を纏っての超高速移動。

――ブリッツ・シュランゲ――
意：電撃の蛇／電撃の蛇型射撃魔法。

――ブリッツ・トラバント――
意：電撃の衛星／複数の電撃スフィアを自身の周囲で回転させる攻防一体魔法。

――ブリッツ・シュレッケン――
意：電撃の恐怖／展開しているブリッツ・トラバントより多方向への同時砲撃を発射する

――キュンナ・フリーディッヒローゼンバッハ・レーベンヴェルト
聖王教会騎士団がズィルバーン・ローゼに所属する、最強の鎌騎士ゼンゼパラディン。デバイスは大鎌型アームドデバイス・"ペンドラゴン"。
かつてのイリュリア女王テウタの記憶や魔導資質などを受け継いだ記憶転写型クローン。
最後の大隊の幹部の１人としてコードネーム・アランを頂く。
公には実の家族とされていた両親はイリュリア騎士の末裔で、グレゴール発案のベルカ再誕計画にも遠い先祖の頃から賛同していた。

後の女王となる予定だったテウタのクローンであるキュンナの育成を任されたとき、大変名誉であり光栄だと考えていた。
キュンナ自身もテウタの記憶に影響され、ベルカの再誕に注力していた。
しかし計画発動後、テウタの時と同じようにセインテストの名を持つルシリオンの前に敗れ去った。

イリス
「キュンナがクローンであったことも、家族が偽者だったことも、わたしは・・・六家は、なんにも知らなかった。それほどまでにロ－ゼンバッハ家は普通に見えて、聖王教会を支えてくれていたから」

――プラダマンテ・トラバント
聖王教会のシスター－にして銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ロ－ゼの隊長を務める最強の剣騎士シュベ－アト・パラディン。教会内でも騎士団内でも、ベルカ自治領ザンクト・オルフェンに住まう人から慕われていた女性。
しかし不祥事ばかり起こす管理局に代わって騎士団が管理世界を守りたい、という兄の願いの下に自らも犯罪者となってしまい、イリスらと衝突。結果、あらゆる権限と称号を剥奪され、管理局に逮捕された。
最後の大隊の幹部であり、剣士長の称号と、コ－ドネ－ム・メギルを頂いていた。

使用スキル・魔法
――ラウムシュナイデン・ナ－ゲル――
意：空間切断・爪／空間干渉によって対象の居る空間に亀裂を入れ

て切断する。空間への干渉のため、一切の防御を無視する必殺の一撃となる。

――ラウムゲフェングニス――

意：空間の檻／対象を歪曲した空間内に閉じ込める。

――ラウムアウスグラブング――

意：空間掘削／空間にあるモノを押し退けて穴を開ける。

――グラヴィタツィオーン・デッケル――

意：重力の蓋／対象の頭上に重力を発生させ、地べたにひれ伏せさせる。

――ラウムファレ――

意：空間罠／空間を操作して任意の場所に発生させた力場で、対象の機動力を制限させる。

――ラウムヴァント――

意：空間壁／空間の位相をズラして防壁を発生させる。

――シュヴァルツェス・ロッホ――

意：ブラックホール／ブラックホールを発生させる。

――飛蓮――

魔力斬撃を飛ばす、射撃魔法。

イリス
「バカだよホント。確かに管理局には不祥事が多かったけど、それが全てじゃなかった。それを力ずくで叩き潰そうとしたから、私たちに叩き潰されることになったんだ」

――リナルド・トラバント
聖王教会騎士団の団長を務め、ザンクト・オルフェンを管理・統治する六家の一角、トラバント家の当主。イリュリアの騎士団総長だったグレゴールと共謀して最後の大隊を設立し、ミッドを乗っ取る計画を立てていたが、これまで言うことを聞いてきていた妹プラダマンテの裏切りによって殺害された。

――ガラガース・バイエルン
聖王教会騎士団がズィルバーン・ローゼに所属する、最強の弓騎士ボーゲンパラディン。デバイスは弩型アームドデバイス・"エクスターゼ"。
パラディン歴はのべ４９年、現役最高齢６９歳の騎士。騎士団の中でも最古参ということもあり、幹部の１人と称されている。
以前は騎乗騎士として活躍し、最強の騎乗騎士レイターパラディンだったこともある。ルビーのような４つの瞳、先端が目の無い蛇の頭になっている尻尾が５本とある狼のような使い魔ヘルハウンド属の狼アビスを従えている。
最後の大隊の一員としてコードネーム・ルフーンを頂き、ベルカ再誕計画に従事するも失敗。管理局に逮捕された。
名の由来：ガウェインやグリフレットらと共に円卓に指名された騎士ガラガース。

使用魔法
――壱松――
威力を重視した魔力矢を放つ。

――弐竹――
射程を重視した魔力矢を放つ。

――参梅――
速度を重視した魔力矢を放つ。

――四甲――
魔力の砲撃を放つ。

――五乙――
１度に数多くの魔力矢を放つ。

――六丙――
複数の魔力矢を連射する。

――ガリフット・ラッヘンマン
聖王教会騎士団がズィルバーン・ローゼに所属する、最強の騎乗騎士レイターパラディン。デバイスは両刃ナイフ型アームドデバイス・"シュレッケン"。
６７歳でありながら声も外見も３０代と言われてもおかしくない若々しさを保つ。そのため騎士団内では吸血鬼では？という噂が流れている。

公爵龍ブネ、　侯爵龍レラジェ、伯爵龍ビフロンスという、３頭の召喚獣と契約している。
最後の大隊の一員としてコードネーム・ニムを頂き、ベルカ再誕計画に従事するも失敗。管理局に逮捕された。
名の由来：スルルース国王。ブリテンに侵攻しアーサーと戦った後に和解し、円卓に加入した騎士ガリフット。

――ラヴェイン・ビッケンバーグ
聖王教会騎士団がズィルバーン・ローゼに所属する、最強の打撃騎士シュラーゲンパラディン。デバイスはフレイル型アームドデバイス・"アグリガット"。
新暦となってからの対犯罪者戦闘をオママゴトと称し、それが窮屈で仕方がないと考えている。そのため、管理世界が安定する以前の混沌とした戦乱時代が蘇るかもしれないという、ベルカ再誕計画に賛同。最後の大隊の一員として、何度か殺人を行っている。
最後の大隊の一員としてコードネーム・ガレンを頂き、ベルカ再誕計画に従事するも失敗。管理局に逮捕された。
名の由来：アストラットの乙女エレインの兄であり騎士のラヴェイン。

使用魔法
――城砦穿ち――
鉄球と柄を繋ぐ魔力ロープを伸長させ、遠く離れた対象にぶつける。
――城砦砕き――
柄と連結している状態の鉄球による直接打撃。

――カヤ・ペリノア
治癒魔法や、自身や他者への強化魔法を得意とする衛生隊、水色扶桑花騎士隊ヘルブラウ・ヒビスクス所属の騎士でありシスター。
金髪のボブカット、少し垂れた翡翠色の瞳。教員を務めるザンクト・ヒルデ魔法学院の生徒たちからも、担当生徒のヴィヴィオ達からも慕われていた。
最後の大隊の一員としてコードネーム・ウェンを頂き、学院でのヴィヴィオ達の監視や、本部での負傷者の治療に当たっていた。
名の由来：泉の騎士と呼ばれた、"咆哮する獣"を追い続ける騎士ペリノア。

――ツヴェルフ
ミミルによって製作されたイリュリア融合騎新シリーズの1人。12という開発ナンバーを名前とする。
見た目はオコジョ♀。口頭での会話は出来ず、念話による意思疎通を行う。普段からロードであるカヤの側に居り、学院での仕事中も敷地内を見回り（という名目の散歩）をしている。
ミミルが開発した新型ＡＭＦ内でも魔力運用を可能とする特別機能を、新シリーズ共通で有する。
旧シリーズの強化系融合騎の試作機、ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・ツヴァイの後継機。

シャル
「作者〜？　もうちょっと日常編とかでシスターとツヴェルフを出しておくべきじゃなかった？」

ルシル
「急いで執筆していたのは判るが、さすがに出番が少なすぎるな。ヴィヴィオ達との繋がりが薄すぎて、共に可哀想だ」
修正巡りの時に何話か挟みますので許してください・・・

――アネシア・ベイリン
金水仙騎士隊ゴルト・アマリュリス所属の剣騎士。
レモン色のセミロングヘアはシニヨン、鋭い水色の瞳。
かつての隊長トリシュタンの右腕として、隊を纏めていた。
対象の魔力パターンを学習し、対象の魔法を例外なく無力化する特殊魔法、ノート・ヴェーアとフェアナイネン・ズィーを有する。
最後の大隊の一員としてコードネーム・ソールを頂き、大隊本部防衛の任に就いていた。
名の由来：ボールス王の教え子であり、高貴な騎士アネシアンス。

――ドライツェーン――
ミミルによって製作されたイリュリア融合騎新シリーズの1人。13という開発ナンバーを名前とする。
青い長髪のツインテール、修道服を身に纏う。ロードであるアネシアンスを言動を真似ている。
旧シリーズの防御系融合騎の試作機、ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・ドライの後継機。

使用魔法
――シルト・デア・イージス――

意：イージスの盾／球状の完全防御領域。

――ノート・ヴェーア――

意：正当防衛／魔力バリアを生成して魔法を防御し、相手の魔力パターンを解析、記録する。

――リュストゥング・アッブレーヌング――

意：拒絶する甲冑／バインド系魔法の即時解除。

――フェアナイネン・ズィー

意：あなたを否定する／覚えた魔力パターンの魔法を霧散させる。

――ハント・フェッセル――

意：手錠／対象の手首に魔力で出来た手錠を掛ける、古代・近代ベルカ式の一般的な拘束魔法。

――ヘクセ・フェアタイディグング――

意：防御の魔女／複数のシールドでドームを作る。囲った者を護ったり、逃走者を閉じ込めたりする。

――トイフェル・ベライヒ――

意：悪魔の領域／魔力パターンを覚えた対象の防護服を構築している魔力を消失させる。

――シルト・エントゥクラフテン――

意：盾の無効化／相手の防御魔法を無力化する。

――リーゼン・シュベーアト――
意：巨人の剣／デバイスに巨大な魔力剣を付加して、全てをなぎ払う。

――トルーデ・ロホルト
治癒魔法や、自身や他者への強化魔法を得意とする衛生隊、水色扶桑花騎士隊ヘルブラウ・ヒビスクス所属の騎士でありシスター。
金色の後ろ髪はリボンで二房に分けられ、ドリルのような巻き髪にされている。優しい目付きの青い瞳をしている女性。
最後の大隊の一員としてコードネーム・テルコンタルを頂き、固有スキル・トランスファーゲートによって、メンバーや大型兵器を転送させていた。
名の由来：アーサー王の息子であるロホルト。

――フィアツェーン
ミミルによって製作されたイリュリア融合騎新シリーズの1人。14という開発ナンバーを名前とする。
ロードであるトルーデとお揃いにするため、浅緋色のドリル巻き毛を二房にして、服装も修道服のみ。
旧シリーズの治癒系融合騎の試作機、ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・フィーアの後継機。

――ブレオベリス・アドリオン
聖王教会騎士団のズィルバーン・ローゼ所属、槍騎士の頂点シュペーアパラディン。デバイスは槍型アームドデバイス・"ゼーンズフト"。

先代のパラディンであるパーシヴァルが、子供が生まれることをキッカケとして称号返上をしたことによって空席となったシュペーアパラディンの席に就いた、長年Ａ級１位に付いていたブレオベリスが繰り上げ昇格となった。
使用魔法の大半は、かつてのイリュリア騎士ファルコ・アイブリンガーの相棒を務めた融合騎フュンフの後継機、フュンフツェーンから学んだもの。
リナルド団長の意志に賛同して、最後の大隊の一員としてコードネーム・アエウを頂き、　ベルカ再誕計画に参加するも、イリス率いるオランジェ・ロドデンドロンの前に敗れた。
名の由来：最後までラーンスロットに付き従った騎士ブレオベリス。

――フュンフツェーン
ミミルによって製作されたイリュリア融合騎新シリーズの１人。１５という開発ナンバーを名前とする。
旧シリーズの風の融合騎フュンフをリスペクトし、髪は翡翠色に染めて髪型はボブカット、肩紐の無い迷彩柄のタンクトップにホットパンツ、ブーツという格好を受け継いでいる。瞳は残念ながら青色で、カラーコンタクトを発注はしたが届く前に事件は終結した。
旧シリーズの風の融合騎の試作機、ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・ヌル・フュンフの後継機。

使用魔法
――ギガンティッシュ・シュニット・ヴンデ――
意：巨大な切り傷／巨大な真空の刃を放つ。

――カタパルトヴィンデ――

意：風の発射台／風を纏わせた物体を、風力を利用して高速で射出する。

――ヴォルフ・クラオエ――
意：狼の鉤爪／風を纏わせた攻撃の総称。

――グレンツェ・ゲヴィッター――
意：大嵐の境界／球状の嵐を纏う攻防一体の魔法。

――シュニット・ヴンデ――
意：／風の刃を放つ射撃魔法。

――ラケーテン・シュペーア――
意：槍ロケット／石突のブースターを点火させて、デバイスを投擲する中距離攻撃。

――ラケーテン・シュペーアⅡ――
デバイスを手にしたままブースターを点火し、直接刺突攻撃を行う。

――風刃烈火――
槍全体に風を纏わせ、直接攻撃系魔法の威力を増大させる。

――風纏走破――
両脚に風を纏わせ、空戦機動力を上げる。

――シルト・インエフェクティーフ――
シールドブレイク魔法。

――ガリホディン・ダムマイアー
聖王教会騎士団のズィルバーン・ローゼ所属、拳闘騎士の頂点ファオストパラディン。炎熱変換資質を所有。
以前もパラディンの座に就いていたが、幼少のアルテルミナスに敗れ格落ち。しかし活動を特騎隊一本に絞るためにアルテルミナスがパラディンの称号を返上、騎士団を除隊したことで、再びパラディンとなった。
リナルドに賛同し、最後の大隊の一員としてコードネーム・ルインを頂き、ベルカ再誕計画に参加するも、イリス率いる橙石楠花騎士隊オランジェ・ロドデンドロンの前に敗れた。
名の由来：ガリフットのいとこで、スルルースの副国王ガリホディン。

――ゼヒツェーン
ミミルによって製作されたイリュリア融合騎新シリーズの1人。16という開発ナンバーを名前とする。炎の如き紅の髪はショートヘア。瞳は紫色。耳はエルフのように長い。修道服を好み、それ以外を着ようとしない。
旧シリーズの炎熱系融合騎の試作機、ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・ゼクス――アギトの後継機。
使用魔法
――熱衝打――
高温に熱せられた打撃の総称。

――熱衝打・真式――
炎を纏った打撃の総称。

――烈火泉――
足元のベルカ魔法陣より炎を噴出させる攻防一体の魔法。

――炎纏人――
全身を炎で覆う攻防一体の防御魔法。

――獄火拳――
拳型の火炎弾を放つ。

――爆乱覇――
炎纏人によって纏っていた炎を、全方位へ向けて発射する射撃魔法。

――紅狼駆――
炎を纏っての突進攻撃。

――炎奪者――
他者の炎熱魔法を吸収し、自身の火力を底上げする補助魔法。

――轟爆花――
炸裂弾を発射する。

――火龍炮――
炎熱砲撃を発射する。

――ウル・フィアス・デーレンダール
聖王教会騎士団・桃茉莉花騎士隊ローザ・ヤスミーンに所属する騎士。氷結変換資質を保有。
要人警護を主とするローザ・ヤスミーンの中で指折りの実力を誇る拳闘の騎士。杜若色のショートヘア、オレンジ色の鋭い瞳をした女性。
最後の大隊の一員としてコードネーム・ロスを頂き、大隊本部の警備に就いていたが、ルシリオンとアイリに敗れた。
名の由来：アーサー王に使えた騎士ウルフィアス。

――ズィプツェーン
ミミルによって製作されたイリュリア融合騎新シリーズの1人。17という開発ナンバーを名前とする。
アイスグリーン色のロングヘア、アイスブルーの瞳、年中変わらずのロングワンピースにケープという姿。
旧シリーズの炎熱系融合騎の試作機、ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・ズィーベン――アイリの後継機。

使用魔法
――フリーレンドルヒ・ツヴァイ――
意：凍る短剣／氷雪の融合騎シリーズの射撃魔法、その強化版。

――ハント・フェッセル――
意：手錠／魔力による手錠で相手を拘束する。

――シュロットフリント・アイス――

意：氷の散弾銃／物を凍結させた上で砕き、その破片を無差別に撃ち放つ。

――アオゲンブリック・フリーレン――
意：瞬間冷凍／触れているものを一瞬で凍結させる、非殺傷設定の出来ない魔法。

――パンツァー・クリスタル――
意：水晶の鎧／両腕と両足に氷で出来た籠手と脚甲を装備する。

――ユーバーファル・アイスベルク――
意：襲撃する氷山／大小様々な氷で出来た尖塔を複数本と魔法陣から出現させ、触れた物を凍結させながら、また別方向へと尖塔を伸ばす広域氷結封印魔法。

――グリフレット・ビエナート
聖王教会騎士団のズィルバーン・ローゼ所属、斧騎士の頂点アクストパラディン。電気変換資質を所有。デバイスは大斧型アームドデバイス・リューールング。
若いながらも斧騎士のA級1位だったということもあり、先代ライオネルの除隊と称号返上を機に繰り上げ昇格となる。
リナルドに賛同し、最後の大隊の一員としてコードネーム・トゥアを頂き、ベルカ再誕計画に参加するも、イリス率いるオランジェ・ロドデンドロンの前に敗れた。
名の由来：アーサーと同い年で、神の血を引いているという伝説もある騎士グリフレット。

――アハツェーン
ミミルによって製作されたイリュリア融合騎新シリーズの１人。１８という開発ナンバーを名前とする。
オレンジ色のセミロングヘアはポニーテール、常に閉じられている瞳は黄色色。他の融合騎と違い、常時形態は１３０ｃｍほどの少女となる。
旧シリーズの電撃系融合騎の試作機、ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・アインスの後継機ではあるが、基本スペック的には下位互換となっている。

使用魔法
――ユーバーファル・カッツェ――
意：猫の奇襲／高速移動魔法。

――クリンゲ・フリーゲン――
意：飛翔する刃／魔力刃を飛ばす。

――ブリッツ・ギヨティーネ
意：電撃の断頭台／電撃付加魔法。

――ヴルツェル・シュメルツ――
意：痛みの根／地面を走る電撃を放つ。

――ゲレヒティヒカイト・ツェアシュトーラー――
意：破壊者の正義／短距離砲撃。

――ボースハフトアクスト――
意；意地悪な斧／電撃の魔力刃を生成する。

――ギガント・シュピール――
意：巨人の遊戯／巨大な電撃刃の付加する。

――ラオフェンドナー――
意：走る雷／電撃を纏っての突進。

――ボンバーユーバーファル――
意：爆撃機の襲撃／魔力を圧縮して創り出した斧を投擲する。

――エルフテ
ミミルによって製作されたイリュリア融合騎新シリーズ、最初の1人。11という開発ナンバーを名前とする。イリュリア製とは一線を画すという意味を込めて、数字2桁から始まった。
人型ではなく二足歩行の猫という姿。シルクハット、燕尾服、ジャケット、シャツ、スラックスという、色は白で統一された貴族風の格好で、右手にはステッキを携えている。
幻術魔法に特化しており、他の融合騎と違って前線に出ることなく裏方に回ってばかりだった。
計画発動後、ヴィヴィオに変身したルシリオンによって一時機能停止に陥るが、技術者の賢明な処置で再起動。ミミルとフラメルとルルスの手によって殺害されそうだったキュンナとグレゴールを護るため、独りミミル達に戦いを挑んだのだが・・・。

使用魔法
――幻惑の乱景――
強力な幻術・催眠魔法。

――ティーダ・クローンシリーズ
元時空管理局員、ティーダ・ランスターのクローン。オリジナルのティーダが逃走犯の追跡中にロストロギアの暴走爆発に巻き込まれた際、フィヨルツェンによって救出、そのまま拉致された。
なぜ彼が選ばれたのか。それは"エグリゴリ"と繋がるテスタメント・マリアがそう指示したからで、最期の契約となるルシリオンを思っての行為であると思われる。
局員最初の拉致被害者となり、そのクローンが生み出され始める。
そして最後の大隊のメンバーとしてコードネーム・アングマールを頂き、個人携帯兵装の実戦試験運用兵力となった。

使用デバイス・使用魔法
・銃型ストレージデバイス・ピースメーカー（モデル・デザートイーグル）
――クロスファイアシュート――
複数の誘導弾によって空間制圧を行う中距離誘導射撃魔法。

――クロスファイア・アサルトドライブ――
魔力弾クロスファイアを集束させて砲撃化させる。

――クロスファイア・スプレッド――
広域空間制圧の遠距離誘導射撃魔法。

――インパルスストライカー――
砲撃魔法。

――ヴェロシティレイド――
砲速や発射シークエンスの早めた高速砲。

――ヴァリアブルシュート――
攻撃魔法の弾を、外殻の膜状バリアで包んだ多重弾殻射撃。

――シュートバレット――
基礎中の基礎の魔力弾。

・無反動砲型レールガン・パトリオット（モデル・Ｍ４０　１０６ｍｍ無反動砲
――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ１．０――
通常のレールガン。

――スナイプレールガンＶｅｒｓｉｏｎ　２．０――
兵装の各部強化によって速射性が向上したｖｅｒ１．０の発展型。

――真・スナイプレールガン――
魔力を付加して強化したレールガン。

・ショットガン型カートリッジシステム搭載ストレージデバイス・サンダーボルト（モデル・Ｃｈｉａｐｐａ　Ｆｉｒｅａｒｍｓのトリプルスレッド）

――ブラストディセミネーター――
エネルギー弾による散弾攻撃。

――クラッシュクリアランス――
魔力付加された実弾攻撃。

・対戦車ライフル型ストレージデバイス・ラストオーダー（モデル・ゾロターンＳ－１８／１００）
――スナイプバスター――
長距離高速砲。

――ブレイクチェンジャー――
曲線軌道砲撃。

――スパークジャベリン――
電気変換された魔力砲。

・ガトリングガン型デバイス・バグラチオン（モデル・ＧＳｈ－６－２３）
――バーストブリンガー――
エネルギー弾を発射する。

・アサルトライフル型デバイス・バルバロッサ（モデル・ＳｔＧ４５）
――デッドリーファイア――
エネルギー弾を発射する。

――ワイドマルチプルロックオン――
完全武装形態時、全兵装のロックオン機能で複数対象をロックオンする。

――クリアランスブレイカー――
完全武装形態時、展開している銃火器を斉射する。

――フィヨルツェン・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア
ＡＮＳＵＲ第一章・大戦編にて登場した、完全自律稼働人型魔道兵器、"戦天使ヴァルキリー"の１体。第一世代・ブリュンヒルデのシリアルナンバー０６。響嵐の弓の二つ名を持つ。中遠距離狙撃用機体の実験機として開発された。
実験機としての誇りが高く、後にシリーズ化され、弟や妹となる狙撃用機体に遅れを取ることを苦手とするため、時間があればいつも自主練習を行っていた。
しっかり者であるため、開発順では姉に当たるレーゼフェアとよくペアを組まされるが、近距離に優れたレーゼフェアとの相性は良く、"エグリゴリ"となった後でもその関係は続いていた。
最後の大隊のメンバーとしてコードネーム・ヴィスタを頂き、最期はルシリオンに敗れ、自身を構築していた魔力や創世結界で蓄えた魔力を用いて、ベルカの地を再生させた。

使用魔術
――真技・天覆う風靡の蓋（ルーイナス・ブラッディフォレスト）・地茂る吸血の森――
フィヨルツェンが新たに習得した真技であり創世結界。樹高が数ｋｍの木々が生い茂り、狙撃用機体としてのフィヨルツェンの隠れ場

所を生み出す。さらに結界内に居る対象から魔力や生命力を吸収し、それらを術者のフィヨルツェンへと供給する効果を持ち、結界維持時間を増やすだけでなく彼女自身の強化にも繋がる。

――真技・荒々しく無慈悲な暴雨の如く（クリアランス・ディザスター）――

フィヨルツェンが元より有していた真技。風嵐系魔力で生成した1～2mの矢を複数本と空高く打ち上げ、1mmほどの小さな鏃へと分裂させて空の大気を吸収。空気を圧縮して矢と成し、一斉に降らせる広域空対地攻撃。

――掃討猟蛇（ミュート・スレイヤー）――

風で構成された蛇型の矢を放つ。

――粉砕せし風爆（マーシレス・フラワー）――

圧縮された風の矢を放つ。着弾時には爆発的な突風を発生させる。

――嵐槍百花（クライシス・エア）――

ドリル状の暴風の矢を放つ。

――瞬神の風矢（ソニック・エア）――

最速の風の矢を放つ。

――連翔せし荒鷲（チェインズ・ガスト）――

鎖のように連なっている風の矢。着弾時に連鎖的に矢が爆風と化すため、砲撃を真っ向から掻き消すことも可能。

――結断する鴉刃（ディスアセンブル・フェザー）――

魔力素の繋がりを砕いて魔力効果に穴を開け、無力化する矢を放つ。

――貫砕せし飄風（ディクライン・ブラスト）――

突撃槍状の風を放つ。

――舞い振る落葉（リーフ・サーチャー）――

何百枚という魔力の葉を広域に舞わせ、ターゲットの位置を探る攻撃、防御・探査の汎用術式。

――群れ成し追従する竜牙（ドラゴン・チェイサー）――

鏃だけの追尾性多弾範囲攻撃。

ルシル

「エグリゴリであるフィヨルツェンが、なぜ最後の大隊のためにベルカの地を再生させようとしたのか、それだけが今も理解できない。あの子はヴァルキリーの頃から真面目でしっかりしていて、上の者への忠誠は確かなものだったが・・・。どうも腑に落ちない」

――Ｔｈｅ　ｓｔｒａｔｅｇｙ　ｏｒｄｅｒ　ｗｅａｐｏｎ　Ｍｉｓｓｉｌｅ　Ｐｌａｔｆｏｒｍ　Ｓｕｂｍａｒｉｎｅ：Ｎｅｒｅｉｄｅｓ

戦略級ミサイルプラットフォーム潜水艦ネレイデス。管制機は、ミミルによって改造されたガンマ。元々はゼータの予定だったが、彼女はプライソン戦役開始前にフォルセティに殺害されてしまっている。

シロナガスクジラの形状をした４００ｍ級潜水艦で、あらゆる兵装を備えている。プライソンにとって必要性のない兵器としていたが、その完成度は列車砲や航空空母などの後発兵器に比べて高い。
後述の戦艦１３隻を従えたモルゲンデメリング征服艦隊の旗艦を務める。管制機にガンマを据えているが、彼女が最後の大隊への協力を拒んでいるため、彼女を支配下に置くＡＩオメガが実質の管制機となっている。
名の由来：ギリシア神話に登場する海に棲む女神たちの総称ネーレーイデス。

使用兵装
――炸裂魚雷・アイアタル
海上航海中の艦船に対する攻撃手段として開発された魚雷。
名の由来：フィンランドに伝わる民間伝承に登場する森の精霊アイアタル。

――炸裂ミサイル・ボナコン
通常のミサイルで、巡航のタイプＣ、弾道のタイプＢの２種類がある。
名の由来：アジアの砂漠や低木地に棲む、牛のような伝説上の動物ボナコン。

――散弾ミサイル・ズラトロク
弾道ミサイル内部に内包されている小型爆弾が着弾前に空中散布され、高度５０ｍ～１０ｋｍ圏内の一定空間内を任意で爆撃する。
名の由来：スロベニアはトリグラウ山の高地一帯を支配し、山頂の楽園で乙女たち暮らしていたとされている、金の角を持った伝説上

の白い雄シャモア、ズラトロク。

――艦対空ミサイル・ウェンディゴ
敵空戦魔導師や航空艦船の迎撃用ミサイル。
名の由来：インディアンたちに伝わる精霊の呼び名ウェンディゴ。

――防衛用圧力波伝播弾・エアレー
対空戦魔導師用の兵装で、成人大サイズの球体より強烈な衝撃波を全方位に発生させ、対象を昏倒させる。至近での直撃は死に繋がるため、エアレーの使用には細心の注意が払われる。
名の由来：ヨーロッパの伝説に登場する、牡ウシに似た生物エアレー。

――対空エネルギー砲・キリム
強力なＡＭＦの中でも戦闘可能にするため、魔力ではなくエネルギー系砲台を搭載している。その数、三連装砲２４基。非殺傷効果を有していないため、基本は威嚇用。
名の由来：コンゴ民主共和国の一部族に伝わる森の怪物キリム。

――遠隔無線操作飛行砲台・ピクシー
空中を自由自在に飛び回ることの出来る、無線式の独立機動砲台。外見は成人大サイズのプラスドライバー。魔力によって稼動する兵装のため、ＡＭＦ内での使用は出来ない。
名の由来：イングランドのコーンウォールなどに伝わる民間伝承に登場する妖精の一種ピクシー。

――汎用対衝撃装甲・スプリガン

旗艦という重大な存在であるネレイデスを護る四重装甲。艦へ向けられる攻撃の種類や効果、射線を瞬時に見極め、予測着弾箇所にエネルギーを回して装甲強度を跳ね上げさせるシステム。
名の由来：コーンウォール地方に伝わる妖精の一種スプリガン。

――特殊バリア・ヘーラー
海底に在るネレイデスが、海上に在る艦隊１３隻を護るために発生させているバリア。対象の魔力パターンを学習し、その対象が扱う魔法の一切合切を無力化することが出来る。魔導師や魔法兵器には圧倒的に強いが、純粋物理攻撃は防げないという欠点がある。
名の由来：ギリシア神話に登場する最高位の女神ヘーラー。

――迷彩障壁・エアリアル
艦体を透明化させる特殊バリア。バリアとは言うが防御力は無いに等しく、迷彩効果しかない。
名の由来：欧州に伝わる妖精エアリアル。

モルゲンデメルング征服艦隊・構成艦
――Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ：Ａｐｓａｒａｓ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する駆逐艦の１つ。外見はズムウォルト級ミサイル駆逐艦。
名の由来：インド神話に登場する水の精アプサラス。

――Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ：Ｋｅｌｐｉｅ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する駆逐艦の１つ。外見はインパヴィド級駆逐艦。

名の由来：イギリスはスコットランド地方に伝えられる水辺の幻獣ケルピー。

――Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ：Ｓｅｉｒｅｎ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する駆逐艦の１つ。外見はスプルーアンス級駆逐艦。
名の由来：ギリシア神話に登場する海の怪物セイレーン。

――Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ：Ｕｎｄｉｎｅ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する駆逐艦の１つ。外見はレーベレヒト・マース駆逐艦。
名の由来：四大精霊のうち、水を司る精霊ウンディーネ。

――Ｃｒｕｉｓｅｒ：Ｒａｈａｂ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する軽巡洋艦の１つ。外見はトロンプ級軽巡洋艦。
名の由来：ユダヤの伝説上の海の魔物ラハブ。

――Ｃｒｕｉｓｅｒ：Ｖｏｄｊａｎｏｊ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する軽巡洋艦の１つ。外見はキーロフ級軽巡洋艦。
名の由来：東欧に伝わる妖精ヴォジャノーイ。

――Ｈｅａｖｙ　ｃｒｕｉｓｅｒ：Ｒｅｍｏｒａ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する重巡洋艦の１つ。外見はカナリアス級重巡洋艦。
名の由来：古代ギリシャやローマの海に棲息していたとされる怪魚

の一種レモラ。

――Ｈｅａｖｙ　ｃｒｕｉｓｅｒ：Ｈｙｄｒａ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する重巡洋艦の１つ。外見はデモイン級重巡洋艦。
名の由来：ギリシア神話に登場する怪物ヒュドラー。

――Ｂａｔｔｌｅｓｈｉｐ：Ｃｈａｒｙｂｄｉｓ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する戦艦の１つ。外見はドイツ・ビスマルク級戦艦。
名の由来：ギリシア神話に登場する海の魔物カリュブディス。

――Ｂａｔｔｌｅｓｈｉｐ：Ｋｒａｋｅｎ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する戦艦の１つ。外見はフランス・アルザス級戦艦。
名の由来：北欧圏に伝わる海の魔物クラーケン。

――Ｂａｔｔｌｅｓｈｉｐ：Ｓｅａ　ｓｅｒｐｅｎｔ
モルゲンデメリング征服艦隊を構成する戦艦の１つ。外見は大日本帝国・天城型巡洋戦艦。
名の由来：海で目撃されたりするＵＭＡの１つ、シーサーペント。

――Ａｉｒｃｒａｆｔ　ｃａｒｒｉｅｒ：Ｇｕｒａｎｇａｔｃｈ
飛行型ガジェットドローンⅡ型を艦載、運用するための空母。外見はアドミラル・クズネツォフ。
名の由来：アボリジニの伝説に登場する川や海の精霊の一種グランガチ。

――Ｍｉｓｓｉｌｅ　Ｐｌａｔｆｏｒｍ：Ｎｕｃｋｅｌａｖｅｅ
ミハイル限定運用艦。船橋以外なにも無いだだっ広い甲板のタンカーのような外見で、ところ狭しとミサイル発射管となっている。
名の由来：スコットランドの民話やケルト神話にも登場する水妖の一種ナックルヴィー。

――Ａｒｍｅｄ　Ｔｒａｎｓｐｏｒｔａｔｉｏｎ　Ａｉｒｓｈｉｐ：Ｃｈａｒａｄｒｉｕｓ
戦術級武装飛空艦カラドリウス。
全長２５０ｍの巨大な装甲飛行船で、大隊メンバーや武装の運搬を主任務としている。他にも２番艦ガルーダ、３番艦ペリュトンが建造中だったが、事件終結後に１番艦とともに廃棄された。
空対地狙撃用レールガン・アンピプテラ、迎撃砲キリムを主武装とし、迷彩障壁エアリアルで常に艦体を透明化させている。
名の由来：キリストの化身とも、神の使いとも言われている神鳥カラドリウス。

シャル
「というわけで、エピソード５も無事？に終わったわけだけど・・・。ルシル、あなた、どうするの？」

ルシル
「どうする、とは？」

シャル
「フィヨルツェンは救えた。寿命の問題も一応の解決を見た。ガーデンベルグの救い＝ルシルの消滅は・・・これぱっかりはどうしようもないけど・・・。それよりリアンシェルトよ。どうするの？創世結界のヴァルハラを使ってまで挑んだのに、まさかの返り討ちって・・・」

ルシル
「今思い出しただけで泣きそうだ・・・。今回の俺とリアンシェルトの闘いの詳しい内容は、次のエピソードでまた描かれることになるが、エグリゴリ最強は伊達じゃなかった」

シャル
「まぁ世界丸ごと1つの気候を冬にしたり、ミッド全体を結界で覆えたりする化け物だから、簡単には勝てないって思ってたけどさ」

ルシル
「ああ。だから次の闘いに備えて、ドーピング用の魔力結晶を集め直さないといけない。俺から寿命という問題を無くしたこと、俺に膨大な魔力を与えたこと、リアンシェルトを後悔させてやる」

シャル
「ルシル。私の手が必要になったら遠慮なく言って。私はこうしてイリスへと転生できたけど、あなたは今もテスタメントに囚われてる。今度は私が、あなたを救う番よ」

ルシル

「ありがとう、シャル。その時はどうなるか判らないが、手伝ってほしいときには声を掛けるよ」

シャル
「ん♪　さて。今後の流れだけど、日常編は全部、このエピソード5に集約するって話だったけど、あっという間に終わっちゃってない？」

ルシル
「ああ、それについては、作者がいろいろと変更したようだ。このエピソード5に集約させると、何時まで経ってもＥｐ5が終らないということで、話数が少なる予定のラストエピソードに移すことにしたそうだ」

シャル
「そうなんだ～。あ、そういえば、もう1つエピソードあったでしょ？　以前から番外編で出してるけど・・・」

ルシル
「以前から何度か話しているエピソード6の血の紅月編だろ？　ロストロギア、運命を捻じ曲げ征服する者フェイツ・コンクエスター、通称・征服剣を巡る、連続双子殺人事件」

シャル
「うん。どうせお蔵入りになるなら、ネタバレでもやっておかない？」

ルシル

「ネタバレしてもしなくても、もうどうでもいいとは思うが・・・。むぅ、じゃあコホン。犯人は、セレネとエオスのスクライア姉妹。姉のセレスが、スマウグとの決戦の際にスマウグの呪いに掛かってしまうという問題が事の発端になる」

シャル
「最下層の、しかも竜種の呪いなんて。ルシルのエイルでも治せないんじゃない？・・・あ、だからか」

ルシル
「そう。運命を操る征服剣を使って、エオスがセレネを救おうとしたんだ。征服剣で人命を奪い、その命――運命の力を蓄えていった。特に魔導師や、命を分け合いそれぞれの命を育てた双子などは、とてつもないエネルギーとなる」

シャル
「だから連続双子殺人事件・・・。それで、結末は・・・？」

ルシル
「フィヨルツェンの口車に乗って殺人を繰り返したエオスは、征服剣の力でセレネを助けることが出来た。しかし過去より力を蓄えていた征服剣が暴走し、その力に飲まれたエオスがモンスター化。俺たちチーム海鳴やユーノは、見つけ出していた征服剣と対を成すロストロギア、運命を解き正し解放する剣フェイツ・リベレーターを用い、最後の戦いに臨んだ」

シャル

「・・・それで」

ルシル
「解放剣は、征服剣の使用者と、その肉親の命を使って発動するというものだった。それ以外にエオスを救える手があるかもとなのは達は説得したが、これまでの事件の責任を負うということで、セレネは解放剣を使うことを決断。俺たちはモンスター化したエオスの外殻を砕いて、彼女の体を露出させて・・・」

シャル
「解放剣で征服剣を破壊して、これまで運命を捻じ曲げていた反動が力となって、セレネとエオスの命を奪い、ユーノ達は2人の最期を看取った、と・・・」

ルシル
「ああ。このＥｐ６は、作者が愛するＰＳソフトの１つ、エコーナイトシリーズを基に生み出した、男を見せるユーノを軸に彼の葛藤を描くものだった。セレネとエオスも、Ｅｐ６のために創り出したキャラクターだったしな。ま、そんなＥｐ６もお蔵入りになったため、ユーノの格好いいシーンも無くなり、セレネとエオスも死ななくて済んだわけだが」

シャル
「ユーノには悪いけど、あの姉妹が生きてくれてる方が大事だよ」

ルシル
「ああ。さて、幻のＥｐ６の大まかな流れも話したし、残るはラス

トエピソードだけとなったわけだが」

シャル
「いよいよ、ルシルの旅の終わりが見えてきたね。というわけで、ＡＮＳＵＲシリーズも残り１章。このまま最後まで頑張っていこう！」

ルシル
「ああ！」

Ｓａｇａｌインターミドルへ向けて～Ａｌｐｉｎｅ’ｓ　ｏｂｓｔａｃｌｅ　ｃｏｕｒｓｅ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

わたし達チームナカジマの目標、インターミドル・チャンピオンシップ。その予選が2ヵ月後の7月から開始される。というわけで、わたし達は今、５月の連休を利用してチームナカジマの合宿所でもあるホテルアルピーノにやって来てます！

「今日から3日、お世話になります！」

コーチ兼セコンドのノーヴェに続いて「お世話になります！」って、メガーヌさんとルーテシアとリヴィにお辞儀すると、メガーヌさん達も「いらっしゃいませー♪」お辞儀で出迎えてくれた。そんなメガーヌさん達の後ろから「いらっしゃい」新入りさんが顔を出した。

「こんにちは、ファビアさん！　ちょっとぶりです！」

「お久しぶりです、クロ」

ファビア・クロゼルグさん。わたしのオリジナルである聖王オリヴィエや、アインハルトさんのご先祖様の覇王クラウスと同じ時代を生きた魔女、カイラの記憶を受け継いでる。そのことで一悶着あったけど、今はメールや通信のやり取りを週一でするくらいに仲が良い。

「ん。ヴィヴィとアインハルト、それにセティ達も、いらっしゃい」
すっかり定着したフォルセティの愛称を言って、フォルセティとコロナとリオとイクスに向き直って小さくお辞儀。フォルセティ達も「久しぶり～！」ってファビアさんにお辞儀返し。
「よしっ。そんじゃお前ら、荷物をそれぞれの部屋に置いて、トレーニングウェアに着替えろ。軽くストレッチをした後、午前はアスレチックでフィジカルトレーニング、午後からは自由時間。それでいいな？」
「「「「はいっ！」」」」
「フォルセティとイクスは、サポートで頼むぞ。とはいえ、午前は特にやる事もないだろうが。手が空いているうちはメガーヌさん達の手伝いでもしてくれ」
「「はい！」」
「よし。行動開始！」
ノーヴェの号令に従って、以前もお世話になったコテージの1番館へとみんなで向かう。
「少し見ないうちにまた増えたね～」

「この前来た時、コテージは1棟だけだったし」

アルピーノ邸と宿泊用コテージの2棟だけたったのに、今はロッジ2棟、コテージ2棟と増えてた。しかも、かなり本格的な造りで、ルシルさん達の手伝い無しでこの完成度。みんなで「本当にすごいね～」って感嘆してると、ルールーとリヴィが「でしょ～♪」って胸を張った。

「ルシルさんにはタダでアドバイス貰ったし、ミッドでも指折りの建築会社の大工（カーペンター）さん達を派遣してもらったし！」

「さすがに力仕事がガリューだけじゃね。お姉ちゃんの他の召喚獣も、資材運搬は出来るけど建築は出来ないから」

「おかげで、こうして4棟も格安で建ててもらっちゃったわ～♪ ルシル君様様よ♪」

最後にメガーヌさんが右手を頬に添えて嬉しそうにそう言ったら、フォルセティも「お父さん、結構そういう伝手があるみたい」自慢げに胸を張った。どうやらその建築会社はセレスさんの実家のミュンスター・コンツェルン系列だったみたいで、知り合い価格で建ててもらったとのこと。

「ルーちゃん。奥に建設途中の物があるけど、アレも宿泊施設？」

ロッジやコテージの奥には、宿泊施設にしては長方形すぎる骨組みが建てられてた。そんなコロナの疑問にルールーは「アレ？　アレ

は体育館だね。屋内用のトレーニング施設にする予定」って答えた。
「ジムに在るようなトレーニング器具を少しずつ揃えてくつもり。雨の日とかはアスレチックを使うのは危ないから」
「なんか、本格的に合宿所みたいなことになってきたね～」
「そうだよ、フォルセティ。チームナカジマはもちろん、その他の競技者たちを招くのも良いと思うんだよね。ママも賛成してくれてるし♪」
「ええ。一応ホテルアルピーノとしての運営をするから。・・・っと、それじゃあルーテシア、リヴィア、ファビア。みんなの応対をお願いね。お母さんはお昼の準備をしておくから」
「「はーい！」」「うん」
「じゃあ私とリヴィアもトレーニングウェアに着替えてくるよ」
「ファビアはどうする？　ヴィヴィオ達のトレーニングを見学する？」
「うん。それでいい」
メガーヌさん達がアルピーノ邸に戻っていったのを見送って、わたし達は改めてロッジへ歩を進める。２階建てのロッジは、１階には子供なら６人まで寝られる特大サイズのベッドのある大部屋１部屋と、３人用寝室が１部屋。２階には２人用寝室が６部屋。あと屋根

裏。

「今回も大部屋にしようよ！」

「さんせー！」

「携帯端末やデバイスが無くても、ベッドで寝落ちするまでお喋り出来るからね！」

「はい！　限界までお話しましょう！」

わたしが大部屋を目指すと、リオ、コロナ、イクスって続いてくれて、アインハルトさんも「は、はい！」慌てて追いかけてくれた。大部屋に入って、着替えなどが入ったボストンバッグを部屋の隅に置く。

「僕は2階の部屋に行くから～」

廊下からこっちを見てたフォルセティがそう手を振るから、わたしは「えー」って不満を漏らす。隣にもう1部屋空いてるんだから、そっちで寝ればいいのに～って。

「隣はノーヴェが泊まると思うし・・・」

「あ？　なんだ、フォルセティ。あたしと一緒で1階の部屋で良いじゃねぇか。あたしは別に気にしねぇぞ？」

ノーヴェがそう言うと、フォルセティはビシッと右手の平をノーヴェに向かって突き出して「男女七歳にして席を同じゅうせず、だよ」うんうんって頷いた。みんなで首を傾げてると、「お父さんから教わったんだ」フォルセティが胸を張った。

「あーつまり、7歳以上の男女は同じ部屋で泊まっちゃダメってことか？」

「そう！　だから僕は1人で寝るから」

「ルシルさんも結構厳しいんだな～。ま、そういうことならあたしが2階に行くから、フォルセティ、お前はヴィヴィオ達の隣の部屋で寝ろ。隣なら別に構わねぇだろ？　前回の合宿や、シャルさん家でもそうだったしな」

「ま、まぁそれなら・・・」

「決まりだな。あ、そうそう。話しやすいからってあんまし夜更かしすんなよ？　明日には八神家の皆さんが来るからな」

なのはママ達は仕事のスケジュール都合が合わなくて不参加だけど、八神家の皆さんはちょうど都合が良くて、明日に合流することになってる。それになのはママ達は今回ダメだったけど、来月の合宿にはスケジュールを合わせてもらえることになってるから、練習会で鍛えてもらおう。

「それじゃあフォルセティ。着替えるからまた後でね」

「うん」

ドアを閉めて、念のために鍵をかけた。フォルセティはさっきのやり取りのとおり、ルシルさん譲りの紳士さんだから覗きなんて絶対にしないだろうけど。うん、念ため、万が一、だ。

「アインハルトさん、なんかそわそわしてるみたいですけど、どうしました？」

わたしの隣で脱いだ服を畳んでるアインハルトさんの様子がそんな感じだったから、ちょっと尋ねてみた。

「あ、いえ。すいません。練習会というものが今から待ち遠しく」

「なるほどです！　実は言うとわたしも今からドキドキしてますよ！」

「あたしもー！」

「大人の人たちとの練習会は私たちも初めてだから、私は期待半分恐怖半分だったり」

コロナの考えも解かる。大人たちを交えてのチーム戦って、わたし達は全然経験がない。シャルさんのお家でお世話になっていた頃も、わたしを狙う最後の大隊っていう組織への対応であんまりシャルさん達と試合できなかった。

（八神家の皆さんは、古代ベルカ式の騎士。つまり近接戦闘のプロだ）

インターミドルに参加する競技者の大半は魔法戦に自信のある魔導師で、わたし達チームナカジマのように近接格闘戦技者は少ない。でも、はやてさんとルシルさんとアインスさんは、魔法戦に優れた騎士でもあるから、すごく為になる練習になりそう。

「とりあえず魔力量には制限掛けてもらえるから、魔力量の差で負けちゃうことはないと思う」

下着姿になってたわたしがそう言った直後、バンッと！勢いよく窓が開いて、外から「技と技のぶつかり合い！」ルールーが叫んで、さらに「相手は正真正銘のベルカ騎士！」リヴィが続いた。２人はすでにトレーニングウェアに着替え終えていて、驚いてるわたし達を見て「まだ着替えてないの？」って聞かれた。

「あ、ごめん！　すぐに着替えるから！・・・って、ルールー、リヴィ。窓閉めて」

「誰も居ないから大丈夫」

「ルールー達が居るでしょ！」

「女の子同士じゃない。前も一緒に着替えてたし」

「同じ部屋で着替えるのと、外から覗かれるのとじゃ、なんかちが

ーう！」

どうしてかその2つの差が、わたしに羞恥心を与えちゃってた。コロナとリオもそうみたいだし、アインハルトさんも困ってる。だから窓に1番近かったイクスが「閉めますね～」窓を閉めて、鍵も掛けてからカーテンも閉めた。その時のルールーとリヴィの呆け顔がちょっと笑えた。

「合い鍵とかでドアが開けられる前にさっさと着替えちゃおう」

バッグからトレーニングウェアを取り出して、ささっと着終えた。みんなもトレーニングウェアに着替え終えて、わたし達は部屋を出て外へ向かう。集合場所のアスレチックエリアにはノーヴェ、フォルセティ、あとルールーとリヴィ、服はそのままなファビアさんが待ってた。

「すいません、遅れました！」

「いや。別に時間指定してないから気にすんな。じゃあ2人1組に分かれてストレッチ」

わたしはアインハルトさん、コロナとリオ、ルールーとリヴィの3組に分かれてストレッチを開始。最初は1人で出来るストレッチで、最後は背筋伸ばしや座ったままの前屈などをアインハルトさんと3セット。

「アスレチックと聞いていましたが、どれも見知らぬ物ばかりです

ね」

「あ、はい。なのはママの生まれた国の番組に、アスレチックコースを攻略するサスケというものがあるんですけど、そのアスレチックを参考に建てたんです。ね、ルールー、レヴィ？」

「そうだよ～。アイリからのリクエストなんだけどね。魔法や魔力運用を一切しないで、純粋な身体能力での攻略は本当に難しいんだよ」

「アインハルトもやってみたら？　もちろんヴィヴィオ達も。１人用から２人用の対決形式のやつもあるからさ」

リヴィが口にした"対決"っていう言葉にアインハルトさんが「ほう」興味を持ったみたい。さらにそわそわしだすアインハルトさんとのストレッチを終えて、「アスレチックへＧｏ！」だ。

「こほん。では僭越ながら私ルーテシアが、各アスレチックの説明をします。まず――」

前回訪れた際にルシルさん達と一緒に造ったアスレチックは、跳び木、斜辺上り、壁上り、網上り。ロープで繋がれた木の足場や吊り輪などの空中回廊、平均台、ロープスライダー（コレは高い場所からの降下用だね）、匍匐全身用コース。

「んで、最近造ったのがこちら！　まずはパワーフォース！　このゴムロープの付いた専用ベストを着て・・・」

「こっちの専用ステージの中央に背中合わせで立つ」

ルールーとリヴィがゴムロープで繋がれたベストを着ると、３０ｍくらいの直線ステージの真ん中に背中合わせで立って、そして走る体勢を取った。

「レディー・・・ゴー！」

ファビアさんが号令すると同時、ルールーとリヴィが正反対に向かってダッシュ。２人の着てるベストを繋ぐゴムロープがピンッ！と張って、２人のダッシュが止まった。そこからはステージの両端の在る半球状のクリスタルを目指して、ルールーは四つん這いで、リヴィは重心を落として前に倒れこむように進む。

「くぅぅ・・・！　力じゃ妹（リヴィア）に勝てないぃ～・・・！」

ルールーが踏ん張りきれずに引っ張られてく。そしてリヴィがクリスタルに手を付くと、クリスタルから光の花火が打ち上がった。

「対戦相手によりますけど、足腰を鍛えるのに良いみたいですね」

アインハルトさんが目をキラキラさせてる。うーん、わたしで相手になるかな～。

「このパワーフォースの同タイプとして、１つの壁を押し合って相手を端っこまで追い詰めるパワーウォールがあるよ」

「コレだね」

「やってみようか、コロナ？」

「え？　うーん、負けちゃうかもだけど、やってみようかな」

１５ｍのレールの中央に１枚の壁があって、コロナとリオが壁を隔てて押す体勢になった。そしてルールーの「レディ・ゴー！」の号令で、２人は「っ！」壁を押し合い始めた。コロナも鍛えて足腰が強くなってるから、一方的な試合じゃないけど、「むぅ、ダメぇ・・・」スタミナじゃリオの方が圧倒的で上。だからリオの押す壁に押されたコロナが負けちゃった。

「コロナ、良い試合だったよ！」

「ありがとう、フォルセティ君！」

「うん、惜しかったっ。あとはスタミナだね。あーでも、コロナはゴーレムマイスターだから、そっちを優先で鍛えるのか～」

「うーん。一応は格闘戦の練習もするんだけど、パワーフォースで勝てる未来は見えないかも」

「これならあたしでもアインハルトさんに勝てそう！」

リオがそう言って笑うものだからアインハルトさんが「その挑戦、

受けて立ちます」燃え始めた。リオが困ってる顔を浮かべる。冗談のつもりだったんだろうけど、アインハルトさんは割りとトレーニングとか試合とかにすぐ燃えるから、気を付けた方がいいって・・・うん。

「じゃあさ。2人でうちの自慢(リヴィア)の妹のタイムに挑んでみてよ。試作機具タイムアタック。大人モードまでは許すけど、強化を始めとした魔法は使用不可ね？」

ルールーは胸を張って挑発的な目でわたし達を見た。わたし達は顔を見合わせて、「やります！」強く頷き返した。そしてわたしとリオとアインハルトさんは、インターミドルでは大人モードで参加するから・・・。

「クリス！」

「ティオ！」

「ソル！」

わたしはうさぎのぬいぐるみの外装をした"セイクリッド・ハート"を、アインハルトさんは仔猫の外装をした"アスティオン"を、リオはベルカ魔法陣が刻印された六角形のアミュレット、"ソルフェージュ"を起動させて、トレーニングウェアのまま大人モードに変身。

「あ、ファビアさんもご一緒しませんか？」

「ムリ。私、格闘系じゃないし。インターミドルにも出ないし。見てるだけでいい」

「そ、そうですか、判りました」

聞くまでもないことを聞いちゃった。ファビアさんは今の時代には珍しい魔女で、魔女術っていう魔法体系を扱う。自分のミスなのにしゅんとするわたしに「応援してる。頑張って」ファビアさんが声援をくれた。

「っ！　はいっ！」

沈みかけてたテンションがグッと上がって、「わたしから行きます！」って挙手。タイムで競うならこういうのは後の方がいい。攻略法を見てから挑む方が。でもわたしは、真っ先に挑戦してみたかった。

「オッケー♪　じゃあコースの説明をするね」

ルールーからのアスレチックの説明を受けて、スタート位置に着く。そしてリヴィの「レディ・・・ゴー！」っていう号令と同時、わたしは「ヴィヴィオ、行きます！」駆け出した。

（最初のアスレチックは、ロープクライミング！）

ロープを伝って木の板で作られた壁を登って、「次！」の木と木の間に張られたロープから何本も垂れる足を掛けるためのリング付き

ロープの橋を渡った。ロープを伝って地上に降りて、「次！」の三角形に組まれた坂を４つ連続で駆け上がる傾斜登りを攻略。

（次は・・・！）

さらに平均台４つを進んで、容量２０リットルのボトルが５つ乗せられたキャスター付きの板をロープで１５ｍ先のストッパーまで引っ張る、プルズドライブっていう名前らしいアスレチックも攻略。

「次はパンチングクラッシュ！　ミットを打つ打撃力と連動して、垂直レールを駆け上がるウェイトの高さを競うアスレチック！　さぁ、ヴィヴィオは５ｍまで上げられるか！？」

ルールーの解説を聞きつつ、Ｌ字型の台の前に立つ。そして目の前にあるミット目掛けて「せーい！！」全力と拳を打ちこんだ。わたしの１発を受けたミットの傾きに連動してウェイトが垂直レールを勢いよく上った。

「ギリギリだけど５ｍを突破！　次へゴーゴー！」

「次は派生のキッキングクラッシュ！　名前のとおり蹴りの威力でウェイトを上げるもの！　パンチよりかは威力があるから、今回は２ｍ＋の７ｍ！　さぁ、どうぞ！」

パンチングクラッシュの隣に設けられてるキッキングクラッシュの前に立つ。小さくトントンとジャンプしてから蹴りの体勢に入る。そして「はぁぁぁぁぁ！！」全力の蹴りをミットに打ち込んだ。

「おっとおおおお！　これは届いてない！」

「「「ヴィヴィオー、頑張れー！」」」

「ヴィヴィオさん！」

「ヴィヴィオ、あともう少しです！」

みんなの声援に応えないわけにはいかないよね。わたしは力強く頷き応えて、「どりゃぁぁぁぁ！」もう１度全力の蹴りを打ち込む。すると今度は「いった！　７ｍ到達！」ってルールーが言ってくれた。

「次はネットアップダウン！　高さ５ｍのネットの壁を越えて、高さ５０ｃｍに張られたネットを匍匐前進で進むコースの複合アスレチック！」

「ネットの壁から降りるときは飛び降り禁止ね～」

リヴィの言葉に内心がっくり。飛び降りればタイム短縮が出来るのにって。しょうがないからネットの壁の頂上を跨いで乗り越えて、足元を確認しながら地面まで急ぎつつも慌てて落下しないように気を付けて降りきる。そして匍匐前進でネットの下を潜れば攻略完了だ。次は小川の両岸を繋ぐ飛び木を渡る。

「さぁ、次はウォールタックル！　レーンに置かれた３ｋｇ、５ｋ

ｇ、７ｋｇの壁の順々に押して行って、最終的に１４ｋｇとなる３つの壁をストッパーまでも押すアスレチック！」

「ヴィヴィオ、もうちょっと！　頑張れ！」

１５ｍのレーンのスタート位置に着いて、最初の３ｋｇの壁を押す。そしてゴツンと２つ目の５ｋｇの壁にぶつかって、８ｋｇになった２枚の壁を押す。最後は７ｋｇの壁とぶつかって計１４ｋｇの３つの壁を「う～ん、う～ん！」頑張って押し続ける。

（中腰になるから結構キツイぃ～～！）

でもなんとかクリアして、「次！」のアスレチックへ。ルールーが「はい！　次はウォールリフト！」って紹介。さっきの３つの壁を押すウォールタックルに似て、今度は持ち上げて進んで行くっていうもの。

「ふんっ・・・むぅ～～～！」

最初の６ｋｇ、次の８ｋｇ、最後の１０ｋｇの壁を「でぇーーーい！」なんとか持ち上げてクリア。肩で大きく息をしながら「あと２つ！」のアスレチックを見据える。

「次は射撃訓練用アスレチック・ストラックアウト！　指定のパネルを魔力弾１発で撃ち抜くアスレチック！　ちなみに誘導操作系は禁止だから直射系でね！」

「じゃあ、まずは1番から行ってみようか！」

何も無い中に空間パネルが１２枚と展開された。これまでの木製・鉄製のアスレチックとは違って、ストラックアウトは魔法科学によるものだった。とりあえず地面に描かれた白線の前に立って、「ソニックシューター！」を1発だけ生成。

「（1って書かれたパネルを狙って・・・）ファイア！」

空間パネルは小さい上に一定間隔で上下左右のどれかに移動するから、それを念頭に狙いを付けて撃たないと。わたしの放ったシューターは1番パネルを撃ち抜いて砕いた。さらに2番から１２番のパネルを、何度か外しながらも粉砕。

「よしっ！　あとは・・・！」

「最後はそり立つ壁！　球状にくり貫いたかのように湾曲してる壁を駆け上がって、てっぺんに手を引っ掛けて腕力でよじ登る！　駆け上がるための脚力、てっぺんに手を掛けるための跳躍力、体を支える握力、体を持ち上げる腕力を総動員するラストアスレチック！」

「今後とも増やしていく予定♪」

とのことで、小さな階段からそり立つ壁っていうアスレチックに上がる。助走のための真っ直ぐなコースが１０ｍほどあって、その先からガクンと曲線の凹みから壁に繋がってるっていう感じ。これまでのアスレチックで割りと疲労というか腕や足腰がガクガクで、何

度も挑戦できない。

「（大人モードだからこそクリア出来そうだけど、子供のままだったら絶対にムリだよね）いきます！」

助走からのジャンプ。踏み切り場所をしっかり見極めれば、きっと1発でクリア出来る。

（ここだ！）

助走の勢いを殺すことなく湾曲する壁を駆け上って、これ以上は無理っていうところで「えーい！」跳んだ。伸ばした右手がてっぺんの縁を掴んだ。自重で右腕がグッと伸び切る。ここから左腕を伸ばして、左手も縁に掛ける。

「ん～～～～！」

腕が震えちゃう。でもなんとか上半身をてっぺんにまで持ち上げることが出来て、上げた足を引っ掛けてそのまま上りきる。

「ゴォォォーーーールっっ！」

ルールーがそう言うと、みんなが拍手でわたしを称えてくれた。そり立つ壁の裏にある螺旋滑り台で地上に降りて、出迎えてくれたフォルセティ達とハイタッチ。

「えー、ただいまのヴィヴィオの記録は・・・11分58秒！」

「おお！　って、わたしが1番手だから速いか遅いか判らないけど・・・」

それからリオ、アインハルトさん、そして急遽参加することになった大人モードのフォルセティ（まんまルシルさんで、綺麗で格好いい）と続いた。

「では結果発表！　1位！　フォルセティ！　2位！　アインハルト！　3位！　ヴィヴィオ！　4位！　リオ！」

という結果で、リオはそり立つ壁までは好タイムだったけど、大人モードといってもわたしやフォルセティやアインハルトさんほどの身長は無かったから苦戦しちゃったんだよね。

そうして午前中はアスレチックでのタイムアタックで過ぎていって、メガーヌさんの美味しいお昼ご飯で満足して、午後からは近くの湖で遊ぶことになった。

Ｓａｇａ２セインテストと融合騎～Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｉｔｈ　ｔｈｅｍ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

今年のインターミドルチャンピオンシップに臨むため、監督兼コーチを務めるノーヴェに師事するヴィヴィオ、コロナ、リオ、アインハルト、サポートメンバーであるフォルセティとイクスヴェリアのチームナカジマは、メガーヌさんとその娘であるルーテシアとリヴィアの住む無人世界カルナージに発った。

「みんな。はやてちゃんとアインスとリインちゃん、もうちょっと遅れるってメールが来たわ」

「そうか、ありがとう、シャマル」

そんなチームナカジマの合宿の保護責任者として俺たち八神家も、あの子たちに遅れてカルナージ往きの臨行次元船に乗るため、俺とアイリ、シグナムとヴィータとシャマルとザフィーラとアギトは、待ち合いロビーでを待っているわけだが。

「まぁ出向時刻まで時間あるし、気長に待とうじゃないか」

「んじゃさ、レストラン街で何か食わね？　朝飯少ししか食えなかったから腹減った」

「お前が寝坊するからだろう？」

「うっせぇな。あたしだって早く起きたかったんだっつうの。しゃあねぇだろ、寝んの遅かったんだから」

「そうか。それはすまなかったな」

素直に謝るシグナムだが、彼女も昨晩は遅くまで書類の制作をしていた。遅くにホットミルクの差し入れをした時刻にはヴィータは眠っていたはずだ。だから睡眠時間で言えばシグナムの方が短い。それを言ってヴィータと言い合いにならないように気を遣ったのはさすがの将だな。

「そうね。カルナージに着いてからすぐに食事というわけにもいかないし、何か食べてく？」

「ミッドからカルナージまで４時間だったよね。向こうに着くのは１５時だし、ちょっと早いけどお昼にする？　機内食は出なかったはずだし」

シャマルとアイリの言葉にヴィータが「マジか～。でもはやて達もきっと食べてねぇよな・・・？」と気遣った。今こちらに向かっているはやて達もおそらく食べていないだろうから、その考えも解からないわけじゃないが。

「はやてに連絡して、先に食事を摂ることを伝えよう」

俺は携帯端末をポケットから取り出し、はやての端末にメールを送る。すると返事はすぐに来たんだが、その内容に思うことがあって俺は口に出すことにした。

「私、八神はやて。今、次元港のエントランスに居るの」

「・・・それアレだろ？　メリーさんの電話。はやて達、もう着いてたんだな」

ヴィータがキョロキョロ周辺を見回すが、ロビーからエントランスを見るには少し遠い。とここでまたメールが届き、「私、八神はやて。今、ロビーに向かっているの」通信端末のメールモニターをみんなに見せながら読み上げ、一緒に送られてきた写真を見せる。次元港の外で撮影したと思しき写真には、はやてとアインスとリインは、それぞれ人差し指を合わせて２つのピースサインを作っているものだった。

「ふふ、楽しそう♪」

みんなの視線が写真データに釘付けになっているところで、俺の視界にそろそろと静かに歩いて来るはやて達が入った。
ヴィータ達は横に６脚と並べられた椅子の列に座り、俺とアイリは１つ前の列の椅子に座っている。通信端末を見せるためにみんなに振り向いているからこそ、俺とアイリははやて達の姿をいち早く見つけることが出来た。
俺とアイリの視線に気付いたはやてが自分の唇に人差し指を置いて、しー、と口を動かした。その仕草がまた可愛らしい。そしてアイン

スやリインと一緒に、ヴィータ達の座る椅子の後ろで屈んだ。

「お、またメールが来たな。私、八神はやて。今、あなた達の後ろに居るの」

ヴィータとシャマルとアギトがバッと勢いよく振り返り、シグナムとザフィーラは察しているのか振り向くことなく小さく笑みを浮かべていた。

「わっ！」

「ですっ♪」

「・・・」

そう言って勢いよく立ち上がるはやてとリイン、そして気恥ずかしそうに頬を染めるアインス。３人の体は背もたれに完全に隠れていたため、「うわっ！？」とヴィータ達は割りと本気で驚きを見せていた。そんなサプライズを終えて満足そうなはやて達と「お疲れ様」と労い合う。

「みんな、遅くなってごめんな～。ちょう渋滞に捕まってしもうてな」

「お待たせです～」

「すまなかった」

はやて達が謝ることじゃないことで彼女たちが頭を下げたから、「気にしないでください」と言うシャマルに俺たちは同意を示すために頷いた。

「おおきにな。さてと、出港時間までもうちょいやから、今のうちに軽くお腹に入れとこうか」

そういうわけで、ミッドを発つ前にレストラン街で早めの昼食を摂ることになった。それぞれの着替えなどが入ったスポーツバッグを手に取り、ロビーから移動開始。

「なのはちゃん達が一緒に来られへんかったのは寂しいけど、八神家揃って出掛けられるのは嬉しいな～♪」

「そうですね。なかなか休暇が揃いませんでしたし」

「必ずと言っていいほど、ルシルとアイリの休暇が合わなかったな」

アインスにそう言われた俺とアイリは顔を見合わせて「確かに」と苦笑い。俺とアイリは、シャルを部隊長とする特務零課――特別機動戦闘騎隊と、管理局組織の自浄部署である内務調査部に所属しているわけだが、まぁ割と忙しい。

（ドーピング用の魔力結晶すべて、リアンシェルト戦で失ったことが痛かった）

特騎隊として交戦した魔導犯罪者の魔力を奪ったり、チーム海鳴やトリシュを始めとした元オランジェ・ロドデンドロンのメンバーからも日々少しずつ魔力を貰ったりと、いろんな手段で魔力結晶を作っているがまったくと言っていいほどに足りない。

（リアンシェルトとの再戦まで何年掛かることやら・・・）

まぁその分、はやて達と過ごせる時間が増えるわけだが。リアンシェルトに敗れてからと言うもの俺は、"界律の守護神テスタメント"の終わりが確実に見えたことで恐れるようになってきた。そう、はやて達と永遠に別れることが・・・。。

でもそれは願ってはいけないこと。俺はこの時代の人間じゃないし、俺の本体に眠る妹のシエル、弟子のカノン、そして恋人のシェフィリスの魂を解放して、転生の輪に戻さなければいけない。それが"アンスール"の生き残りとしての最後の仕事だ。

「そやけど、そんなルシル君とアイリも今日は一緒や♪　楽しい合宿にしたいな♪」

ニコニコと明るく温かな笑顔を見せるはやてに、「ああ、そうだな」俺も楽しみだと笑顔を向けた。それから俺たちは楽しく喋りながらレストラン街を歩き、提供される料理の種類が多いレストランへと入ろうとしたんだが、ふと俺の視界に知人の姿が入った。

「すまない、先に入っていてくれ。あ、注文はカルボナーラで頼む。アイリも先に行っていてくれ」

俺に付いて来ようとしたしたアイリの頭をポンポンと優しく触れて、「じゃあ、先に行ってるな」と店に入っていくはやて達を見送り、俺は知人の元へと早足で向かった。

「メルセデス三佐！」

「ん？　お！　ルシルじゃねぇか！　おいおい、いつ以来だ！？」

メルセデス・シュトゥットガルト三等空佐。俺の正体をも知っているアイリにすら教えていない、３つ目の所属先、局の暗部である暗殺部隊１１１１航空隊の同僚だ。そんなメルセデスが、久しぶりに会えたことでか嬉しそうに俺の背中をバシバシ叩いてくる。

「もう３年近いんじゃないでしょうか？　俺がリアンシェルト少将の脅しで権威の円卓の正式メンバーに入れられて、その後に１回だけ任務を一緒してからです」

「あぁ、もうそんなか。つうか、無理やり入れられてたのかよ、お前。まぁだから、と言うか・・・」

メルセデスが意味深なことを漏らしたのを聞き取り、「何か？」と尋ねてみた。すると、「実はな。あれからも俺たちは暗殺任務に従事していた」と、耳を疑うようなことを言ってきた。

「え？　俺、呼ばれてないんですが・・・」

「それなんだが、１１１１部隊の隊長サブナック准将と捜査本部長

のガアプ准将が、お前の参加を止めてたんだよ。お前、正式とは言えなくても家庭を持ったろ？　八神二佐とフォルセティ。１１１１部隊は基本独り身だからな。子供のいる奴にはもう任せられねぇんだよ。ま、お前には１回手を汚させちまったが・・・」

「いえ。正直、今さらでしたし」

人殺しなんて人間だった頃から犯してきている。本当に今さらな気遣いだ。

「はっはっは！　違いない！　とまぁ、そういうわけでお前は、お前の知らないところでクビになったわけだ」

「そうでしたか。なら三佐たちは今も１１１１部隊として活動中なんですか？」

「あー、それも言っておかないとな。もう１１１１部隊は存在してねぇよ」

「え・・・！？」

「リアンシェルト少将、いや元少将が局を辞めると一緒に権威の円卓は解散した」

まさかの内容に俺は絶句した。俺を無理やり円卓に入れておきながら、解散したことも伝えなかった。リアンシェルトめ、本当に自由すぎるだろ。振り回されていることに怒りが沸々と沸いてくる。

「でな。今は１１１部隊じゃなく、元少将の私設部隊が暗殺部隊として活動してるそうだ」

「リアンシェルトの私設部隊・・・！？」

「とんでもなく強いって話だぜ？　ま、次元世界最強と謳われる元少将の私設部隊っていうんだ、当然だろうけどな」

それだけで嫌な予感しかない。バンヘルドのイリュリア騎士団、グランフェリアのプレシア・テスタロッサ、シュヴァリエルのリンドヴルム、レーゼフェアのプライソンファミリー、フィヨルツェンの最後の大隊。で、リアンシェルトの私設部隊ってか。

（ガーデンベルグは一体、どんな組織に居て、次元世界にどんな嵐を巻き起こすことやら・・・）

「殺されてもしょうがないクズ共をさんざん殺してきたが、やっぱりどんな大義名分を持ってたとしても誇れる仕事じゃなかったからな。ようやく終わったって感じだ。・・・っと、もう行かねぇと便に乗り遅れるな。またな、ルシル。良い旅を」

「あ、はい。三佐も、良い旅を」

挨拶を交わして見送ったメルセデスは１人の女性と合流して、出発ロビーへとその彼女と腕を組んで歩いていった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒アギト†††

メガーヌとルールーとリヴィ、それにフォルセティとヴィヴィオ達の待つカルナージに向かう前にお昼ご飯を食べることになって、あたし達はあるレストランに入店。２人掛け椅子を向かい合わせたテーブル席を３卓使って座る。１卓目にははやてとアインスとヴィータとリイン、２卓目はシグナムとシャマルとザフィーラ。

「しっかし珍しいな、アギト。お前、いつもはシグナムの隣だろ？　最近、ルシルにベッタリじゃね？」

「です。ひょっとして、アギトもルシル君争奪戦に参入ですか？」

そう言ってあたしをからかってくるのはヴィータとリインだ。あたしが３卓目のルシルとアイリのところに座ったから。ルシル争奪戦は、ルシルを恋人にしたい、結婚相手にしたいって考えてる女の人たちがやってることで、はやてとシャルとトリシュが主メンバー。あと、あたしの妹のアイリも何気に参加してるっぽい。

「え？　アギトお姉ちゃんも実はルシルを狙ってるの？　やだよ？　アイリ、アギトお姉ちゃんを凍結封印したくないよ？」

「怖ぇこと言うなよ・・・。あたしより何倍も強くなったお前と争うなんて絶対にやだ。・・・ヴィータなら解かるだろ？　あたしにとって、マイスター・・・オーディンは本当に大切な存在なんだ」

「まぁ解かるっちゃ解かるが、ルシルも言ってたとおり、オーディ

ンとアイツは記憶で繋がっててもオーディン自身じゃねぇんだぞ」

セインテストの存在意義だっていう"エグリゴリ"の救済。戸籍や財産を用意する協力者の手によって、オーディンやルシル達クローンは、その存在意義を果たすために世界に解き放たれる。そんな話を、リアンシェルトに負けたルシルからしてもらったのはもう数ヵ月前。

（複製スキルや複製されたもの、それに魔術しか受け継いでこないって話だったけど、本当は歴代のセインテストシリーズの記憶も受け継いできたってことを知った）

「ルシルがオーディンの、それまでのセインテストシリーズの記憶を持っていることを黙っていたのは、ルシルとオーディンを混在させないため。アギト、今のお前がまさにそうだ」

「でもさ。でも、オーディンの記憶なんだ。あたしの名前がまだ開発番号だった頃、ガラクタって呼ばれてた頃、あたしにアギトって名前をくれた・・・」

――私はこの地で独りでね。よかったら私の友達になってくれないか？――

――自壊する必要なんてないよ。それにわざわざ辛い場所に戻る必要もない――

――あそこに戻らなくて、いい？・・・じゃあもうガラクタ（クラム）って呼

ばれない？――

――ああ、呼ばれないとも。呼ばせもしない――

――・・・もうクラムって殴られない？――

――っ・・・ああ、殴られないとも。君を傷つけようとする奴が居たら、私が守るよ――

――・・・もう、クラムは死んで役立て、って言われない？――

――当たり前だ。君はクラムじゃない。何せ私を捕らえたのだからな。君は、すごい子だよ――

――戻りたくない・・・死にたくない・・・――

――じゃあ決まりだな。・・・アギト――

――？？　アギト・・・？――

――そう、アギト。君の新しい名前だよ、アギト――

――アギト・・・・あたしは、アギト！――

――これからよろしく頼む、アギト――

――うんっ、マイスター！――

あの日、オーディンと交わした話は今でも鮮明に思い出せる。それほどまでにあたしにとってオーディンは世界の全てだった。その後で"闇の書"だった頃の"夜天の書"がオーディンの元に転生して、シュリエルリート（今はリインフォース・アインス）やシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラとグラオベン・オルデンって騎士隊を作ったりもした。

（戦いばかりだったけど、それでもそれ以上に幸せな時間を過ごせた）

グラオベン・オルデンの最期は本当に悲しくて辛かったけど、またこうしてシグナム達と出逢えた。だけど、そこにはオーディンは居なかった。オーディンとエリーゼの間に生まれた子供の子孫のパーシヴァルとトリシュは居るけど、オーディン自身じゃない。シグナム達は居るけどオーディンが居ないのは寂しかった。

「それはまぁ、私たち守護騎士はオーディンさんに多大な恩があるから、オーディンさんの記憶を持ってるルシル君に対して、私にも特別な思いが生まれたわ」

「私とて、何も思わないわけではなかったぞ、アギト。我々に道具ではなく普通の家族として扱ってくれたのは、オーディンが初めてだった」

「だな。地下牢じゃなくて地上で、温かな家で、新しい服を着させてもらって、美味しいご飯をいっぱい食べさせてもらって、ふかふ

かなベッドで寝ることも出来て、領民たちを弟子にして騎士教室とか開いて、エリーゼとかと一緒に同じ時間を過ごせた」

シャマルもシグナムもヴィータも、あの当時のことを思い返すためか目を閉じた。アインスも「確かに、オーディン達と出逢えたことは二大幸福の1つだ」って遠い目をした。

「二大？　もう1つはなんなん？」

「もちろん主はやて、あなたの元に転生できたことです」

アインスの言葉にシグナム達も頷いて同意を示した。本当にこれは奇跡だって思う。オーディンは、今の時代のあたし達を予言してたみたいに思えることが多い。いや実際、"夜天の書"の呪いを解ける主と出会えるって言ってたし、その主だったはやての故郷の料理を何百年も前のベルカ時代で作ってた。偶然と言うには一致し過ぎてる。

「嬉しい話やな～♪　ところで、騎士教室を開いてたなんて初耳やな～。みんな、私に気遣ってオーディンさんを主としてた頃の話、全然せえへんやんか？　ならええ機会や。その話、ちょう聞かせてもらってもええか？」

シグナム達は、さっきも言ってたように今の主であるはやてを思って、オーディンとの思い出はあんまし話さない。はやてもシグナム達の気遣いを察して聞いてなかったっぽいけど、オーディンの記憶を持ってるってみんなに伝えたルシルが居る以上、もう遠慮しない

みたいだ。

「んじゃあ、シグナムの失敗談からいってみっか！」

「ヴィータの失敗談でも構いませんか、我が主」

シグナムとヴィータがお互いの恥ずかしい話をしようと睨み合い。はやては手をポンと叩くと、「じゃあ2人の失敗談は順に聞こか♪」ニッコリした。こうなったら後に引けないシグナムとヴィータは、それぞれの失敗談を自分の口で話すことに。

「――ということがあり、私はよくシャマルに叱られていました」

「そうなんや～」

「彼らは筋が良かったですから、私も自然と手加減を忘れることが多く。恥ずかしいばかりです」

「すまない、みんな。お待たせ」

「あ、ルシル君、おかえり～！」

「おかえり！　ルシルはこっち～！」

ヴィータやザフィーラが鍛えたアムル住民を相手に、仮想敵の役を買って出たシグナムが試合でその住民たちをボコボコにし過ぎたって話をしていると、用事が済んだみたいなルシルが入店。はやてと

アイリはパアッ！と満面の笑顔をルシルに向けて、アイリが手招きした。

「ルシル君。もう用事は済んだの？」

「ああ。ちょっと知人に挨拶をな」

「「ルシル、こっちに座って！」」

シャマルの問いに答えたルシルがあたし達の席に来たんだけど、あたしとアイリの声が重なった。あたし達の隣に空いてる席にルシルを座らせたいがため。

「ちょっとアギトお姉ちゃん？」

「アイリはいつもルシルと一緒だろ？　今日くらい譲ってくれてもいいだろ」

向かい合うアイリと顔を近付けて睨み合う。ルシルと一緒に過ごせてるのは断トツでアイリだ。なら、この昼ご飯の時くらいルシルを借りてもいいじゃんか。そんなあたし達を見てルシルは「姉妹喧嘩とは珍しいな」ってあたしとアイリの頭を優しく撫でてくれた。

（初めて会った日にもこうして撫でてくれたっけ）

オーディンの記憶をルシルが持ってるって知ったその日から、オーディンと過ごした思い出ばかりが溢れてきてた。だからその思い出

に浸ってしまった。その隙を突いてアイリが、「ほら、こっち！」ルシルの腕を引いて自分の隣に座らせようとした。

「あっ、こら！　そんな抜け駆けみたいな真似すんな！」

「チッ」

あたしは慌ててルシルの反対側の腕に抱きついて引っ張り込む。ちくしょう、アイリのやつ、体格がはやてみたいな大人だから、子供みたいな体格のあたしの力じゃ勝てねぇ・・・。

「こら、アギトちゃん、アイリちゃん。騒がないの」

「騒ぐようならどこの席に座るか、私が決めるぞ」

シャマルとシグナムに注意されたけど、アイリがルシルの腕を離さないからあたしも離さないでいると、「んー。じゃあ、こうしよう。2人とも、まず離してくれ」ルシルがそう言った。だからあたし達は素直にルシルの腕から手を離した。

「アイリとアギトはそっち、俺はこっち。これでどうだ？」

「「・・・・」」

あたしとアイリが隣同士で、向かい側にルシルが1人で座る形になった。それでアイリと揃ってしょんぼりするんだけど、食事中にルシルがあーんしてくれたのは嬉しかった。

「ええな～、羨ましいな～」

はやての恨めしいそうな声は聞こえないフリした。

Ｓａｇａ３－Ａアインハルトの苦悩～Ｐａｉｎ　ｏｆ　ａ　ｍｅｍｏｒｙ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

チームナカジマの合宿として無人世界カルナージのホテルアルピーノに、私はヴィヴィオさんア達と共にやって来た。
昨日は、ルーテシアさんとリヴィアさんが建設したアスレチックで汗を流し、午後は湖でもっぱら水泳に勤しんだ。以前、水中では水中の筋肉の使い方というものがあり、柔らかく持久力のある筋肉が出来るとノーヴェコーチから教わりましたが、確かによいトレーニングでした。

（そして今日は・・・）

「メガーヌさん、ルールー、リヴィ、本日より３日間お世話になります！」

クラウスの記憶にも登場する方が多く居らっしゃる八神家の皆さんが、この合宿に合流します。

「ええ、ゆっくりしていってね。・・・えっと、みんなのコテージは２番館、右から３番目ね♪　ルーテシア、リヴィア。案内してあげて」

「あ、ええですよ。２人とも、今はトレーニング・・・ってゆうか、

ストレッチ中やろ？　宿泊先は教えてもらったし、２人もそうやけどヴィヴィオ達も気にせんで続けててな」

はやてさんからのお気遣いに、ルーテシアさんとリヴィアさん、それにヴィヴィオさん達は「はいっ！」と元気いっぱいの返事をしました。私も遅れて「ありがとうございます」と小さくですが一礼した。

「・・・お父さん？　アインハルトさんがどうかしたの？」

「ん？　いや・・・。なんでもないよ、フォルセティ」

八神家の皆さんがコテージに向かって歩いていく中、ルシルさんだけはその場に留まったまま、私を見ていました。ルシルさんの目は、まるで私の胸の内を見透かしているような鋭さで、居心地の悪さを感じました。今なお過去の過去の記憶に悩んでいる私の気持ちは、ルシルさんなら解かってくれるかもしれません。

「おーい、ルシル君。早く荷物を置いてしっかりストレッチせえへんと、ヴィヴィオ達に一杯食わされるかもしれへんよ♪」

「ああ、すぐに行くよ。・・・ヴィヴィオ、コロナ、リオ、アインハルト、それにルーテシアとリヴィア。今日の練習会を楽しみにしているよ。お互いに頑張ろうな」

そう言ってルシリオンさんは、八神家の皆さんやメガーヌさんと共に宿泊用コテージへ歩いて行きました。私はその背中に向かって「

あ・・・」手を伸ばそうとしたのですが、すぐに思い留まる。私のこの悩みを相談してもいいのか迷ってしまったから。

「あの、アインハルトさん・・・」

おずおずと私を呼んだのはヴィヴィオさんでした。いつもは明るい表情で声を掛けてくださるのですが、今のヴィヴィオさんの表情は曇っていて。普段通り接し方をしているつもりでしたが、ヴィヴィオさんには気付かれているのかもしれません。私の胸の内に渦巻くある感情が、ヴィヴィオさん達との間に壁を作ってしまっていることに。

「はい、どうしましたか？　ヴィヴィオさん」

「えっと、ストレッチの続きをお願い出来ますか？」

「あ、はい、そうでしたね」

2人1組で行うストレッチの最中に、八神家の皆さんがホテルアルピーノにご到着したので中断していたのでした。私はヴィヴィオさんと背中を向かい合わせて両腕を組み、ヴィヴィオさんが「いきますね！」と深くお辞儀。すると私の体が大きく反れました。次は私の番で、ヴィヴィオさんを背負うように体を曲げる。

「アインハルトさん」

「はい、なんでしょうか」

「アインハルトさんが抱えてる悩み、わたし達じゃ解決できませんか？」

２人１組でしか出来ないストレッチも終わりに差し掛かった頃、ヴィヴィオさんがそう聞いてきました。周りに居るコロナさんとリオさん、フォルセティさんとイクスさん、ルーテシアさんとリヴィアさんも、私とヴィヴィオさんの話に聞き耳を立てているようです。

「昨日、アスレチックコースのタイムアタックや午後からの水泳の時、アインハルトさんの纏ってた、その・・・拒絶というものが薄かったんですけど、今日はまた・・・」

アスレチックのタイムアタックやバトルは確かに楽しかったですし、水中トレーニングもいい具合に筋肉を鍛えられました。その時の私は悩みを忘れてしまうほどに熱中していたので、それがヴィヴィオさんの言う薄さになったのでしょう。

「よし、集合！」

ストレッチが終わり、空間モニターを睨んでいたコーチが号令をかけました。私は「ヴィヴィオさん、集合です」とコーチの元へと歩き出した。背後の気配からヴィヴィオさんが私を呼び止めようとしているのが判りますが、私は振り返ることなくコーチの前に立ちました。

「・・・はぁ」

コーチは私やヴィヴィオさん達を見て溜息を吐きました。ヴィヴィオさん達でさえ私の今の様子を察しているのですから、コーチもおそらく・・・。

「・・・今日の練習会だが、前々からチーム分けにえらく悩んだがなんとか決めた。相手はガチの戦闘特化なベルカ騎士だ。戦力が均等に分散するように気を付けたんだが、ちょっと難しくてな。だから・・・」

そこで区切ったコーチにヴィヴィオさんが「だから・・・？」と小首を傾げます。コーチがどんなことを続けるのか固唾を飲んで待ちます。

「とにかく、本物に扱かれて来い。チーム分けは以下の通り。チームナカジマ＋ルーテシアとリヴィアＶＳ八神家だ」

コーチから告げられたチーム分けの内容に私は身震いしました。守護騎士の皆さんは、クラウスの記憶の中でもその強さは圧倒的でした。八神家の皆さんと出会ってから結構経ちますが、拳を交えることはクラウスの頃からありませんでしたから、これから闘えるとなって興奮してしまう。

「ノーヴェ。ちょうストレッチするから待っててな」

「あ、はい！　大丈夫です！」

「ん。ヴィヴィオ、コロナ、リオ、アインハルト、ルールー、リヴィ。楽しい練習会にしような♪」

はやてさんに私たちは「はい！」力強く頷き返しました。八神家の皆さんがストレッチを始めたのを確認したコーチは、「んじゃ、はやてさん達のストレッチが終わるまでにこっちのポジションを伝えるぞ」と、私たちの前にモニターを展開しました。私たち赤組と、八神家の皆さんの青組の参加メンバーと、ポジションが表示されました。

「「「「「え・・・！？」」」」」

青組の参加メンバーとポジションを見て、私たちは驚きました。そんな私たちに「午後からはメガーヌさんの手伝いがあるそうでな。午前の練習会にしてほしいってリクエスト貰ったんだ」とコーチが苦笑しました。

「まず、リオ、アインハルトはフロントアタッカー」

「はい！」「はい」

フロントアタッカーは最前線で防衛ラインを維持することが役目のポジション。相手はなんとルシルさん、それにザフィーラさん。あのルシルさんと闘える。そう考えるだけでモヤモヤが少し晴れた気がします。

「ヴィヴィオはガードウィング」

「はい！」

「コロナはウィングバック」

「はい！」

「ルーテシアはフルバック」

「ん！」

「リヴィアはセンターガード」

「うん！」

ヴィヴィオさんと対となる相手はアイリさんですね。コロナさんはウィングバック――中後衛で、対となる相手はいません。ルーテシアさんの対ははやてさんとシャマル先生。リヴィアさんの対はアインス補佐官となります。

「ルールは昨日話した通り、チームナカジマを赤組、八神家を青組としての、どちらかのチームが全滅するまでのフィールドマッチ。ライフポイントはＤＳＡＡ公式試合用タグで管理する」

コーチから渡されたタグをトレーニングウェアに付けたところで、ルーテシアさんが「そんじゃ、青組攻略について話そうか♪」」と、私たちに集合をかけました。今日のコーチは私たちの試合を見る側

で指示を出すことはしません。そのため、最後衛のフルバックであるルーテシアさんが指揮を執ってくれます。

「相手は騎士の中でも屈指の実力を誇る八神家。魔力出力に制限があるといっても、その戦闘技術はとんでもない。だから射砲撃でフロントアタッカーのルシルさんとザフィーラさんを追い込みたいんだけど・・・」

まさかの作戦内容に知らず拳をぎゅっと握り締めていると、「アインハルトは不服なわけね」とルーテシアさんが苦笑しました。私は「あ、いえ」と首を横に振ります。

「あたしは不服かも。こんな機会なんてそんなにないと思うし、真っ向から闘ってみたい！」

「わたしもリオと同じ考えだよ、ルールー。最初の1戦は相手チームの戦いを直に感じてみて、2戦目から勝ちに行こうよ」

「お姉ちゃん。私もそれでいいと思う」

「コロナはどう？　負ける確率が１０割近いけど、それでも真っ向からやってみたい？」

「うん。みたい」

「・・・判った。ノーヴェの言うように一遍しごかれてこよう。マッチアップの相手を1対1で抑え込んで。で、少しでも青組のライ

フを削ったら・・・」

ルーテシアさんがリヴィアさんを見たので、私たちも自然とリヴィアさんの方へと顔を向けました。私たち赤組で最も魔力と火力を有するのはリヴィアさんです。

「私の集束砲で、青組のライフをさらに削る。そうしたらこっちの生き残りで攻勢に打って出る」

1回目の試合で勝つのは無茶というのは、いくらなんでも私も理解できる。ただ、その経験を活かして次は勝ってみせる。

「変に搦め手を使わずに個々の実力勝負で勝敗を決しようってか。いいぜ、やってみな。あぁ、そうだ、ルシルさんは今回、広域攻撃は使わないって話だ。フロントアタッカーとしての役割を果たすそうだ」

広域攻撃はしないとのことですが、射砲撃は使ってくるようです。オーディンさんもそうでしたが、ルシルさんも1対多数戦を得意とする魔導騎士です。全力のルシルさんと闘えないのは少し残念ですが、今は本気で闘い合えることに感謝です。

「お待たせ。八神家一同――青組の準備は万端や。ヴィヴィオ達の体が冷めへんうちに始めようか」

八神家の皆さんもストレッチを終え、ルーテシアさんがバトルフィールドとなるシミュレーターを起動し、高さや大きさがまちまちな

建造物群が出現しました。これは高低差を利用しての戦闘も視野に入れないといけない。

「おし。チームナカジマ一同、リストバンドを外せ」

コーチの指示に従って左手首にはめていたリストバンドを外す。コレは、月村技術官が私たちのために開発してくれた特別なもので、魔力に負荷をかけるというもの。負荷と開放を繰り返すことで、成長期である私たちの魔力量を通常よりさらに伸ばすことが出来ると言っていました。

（現に私の魔力量の伸びはかなりのものと思います）

「アインハルトさん。あの・・・」

リストバンドをコーチに預け、そしてデバイスを起動して防護服への変身を終えて、それぞれのポジション位置に付こうというところでヴィヴィオさんに声を掛けられました。私は何を言おうかと迷っているようなヴィヴィオさんに振り向いて、「頑張りましょう、ヴィヴィオさん」と伝えました。

「っ！　は、はい！　頑張りましょう！」

そうして赤組と青組はフィールドの端と端に分かれ、ルーテシアさんが全体に聞こえるように『ママー！　試合開始の合図をおねがーい！』と通信を開きました。

『はーい♪』

私の側にもモニターが展開され、ルーテシアさんとリヴィアさんのお母様であるメガーヌさん、そしてコーチ、午前の練習会には不参加のシグナム一尉とヴィータ教導官、アギトさん、リインさん、それにフォルセティさんとイクスさんとファビアさんが映し出されました。

『では、ノーヴェコーチから試合前に一言♪』

『え、あ、こほん。えー、怪我の無いように正々堂々と頑張りましょう！』

『『それでは試合開始ぃーー！！』』

リインさんとアギトさんが一緒に持っている撥でコーチ達の後ろにある銅鑼を打ちました。それが合図となり、前線を押し込められないように私とリオさんは即座に前進します。

「リオさん。ザフィーラさんのお相手をお願いしていいですか？」

「はい！　任せてください！」

同じようにこちらに向かって来ている狼の姿をしたザフィーラさんと、ザフィーラさんの背に跨っているルシルさんと目が合う。

――ブルーティガー・ドルヒ――

――ハーツイーズマルチファイア――

そこにリヴィアさんとアインスさんが放った数十発という射撃魔法が、最前線の私とリオさん、ルシルさんとザフィーラさんの元に降り注いできました。２つの射撃魔法は私たちの頭上で相殺され、爆風が地上を走る私やリオさんの髪を揺らしました。

「ルシルさん！　一槍お願いいたします！」

「ああ！　来い、アインハルト・ストラトス！！」

ルシルさんは「リオの方を任せる」とザフィーラさんに言い、その背中から飛び降りました。そしてザフィーラさんはリオさんの元へと突進し、激突直前に跳躍。空中で人の姿へと変身して、落下しながらリオさんに殴りかかりました。

「そちらから誘っておいて余所見かい？」

「っ・・・！」

ハッとして視線を前に戻せば、すぐそこにまでルシルさんが接近していました。左手に携える双槍"エヴェストルム"による薙ぎ払いが繰り出され、私はグッと腰を落として回避。"エヴェストルム"は柄の左右に穂を有する槍、初撃を躱しても即座に反対側の穂による２撃目が来る。

「（その前に！）はあああああ！」

地面に両手を付いて片足を伸ばし、そのままルシルさんに足払いを仕掛けます。足払いは成功し、ルシルさんは後ろ向きに倒れこみそうになりましたが、"エヴェストルム"を地面に突き刺して支えにすることで転倒を免れました。

（こちらが体勢を立て直すまでの猶予が生まれただけで十分です！）

ルシルさんより離れ、改めて構えを取る。ルシルさんも体勢を直して私と向き合いました。ピンっと張り詰めた空気の中、私たちの周囲では戦闘音が鳴り続けています。私は息を吸い、止めた瞬間に地を蹴る。

（セインテストに、覇王の拳を届けてみせます！）

これまでに学んできた技術や、ジークリンデさん達との練習で得た経験を総動員して、完封負けだけは避けたい。

「はっ！　せいっ！　たあっ！」

「くぅ・・・！」

ルシルさんの横薙ぎと刺突の連続攻撃を紙一重に躱しつつ、攻撃の機会を伺います。ですが、断空に必要な力を練り上げるための起点となる足をこうも狙われては・・・。

「断空。その威力は素晴らしく、これからまだまだ伸びていく強力な武器だ。が、今のように君の動きを制限すれば、断空による攻撃は基本的に防げる。上位競技者なら、その弱点をすぐに見破るだろう」

「ならば！」

ルシルさんへの接近を中断し、私は一足飛びで距離を開ける。ルシルさんの追撃が来る前に、覇王流の数少ない中距離攻撃、衝撃波を飛ばす「覇王空破断・改！」を打ち放つ。

（刺突によって伸びきった腕で空破断を迎撃できるだけの威力を持つ斬撃は振るえない。ならばシールドか回避かを選ぶはず！）

その僅かな猶予の内に一撃を打ち込むために私は突進。ルシルさんは迫る空破断を前面に展開したシールドで防御しました。そんなルシルさんの右側へと回り込んだ私は、「はっ！」攻勢に出る。"エヴェストルム"は２ｍ以上もある槍です。懐に入ってしまえば薙ぎ払われることはありません。

「ところで、アインハルト。君、何か最近、ヴィヴィオ達に壁を作っているそうだな」

――ゲブラーフォルム――

「っ！？」

ルシルさんの言葉と同時に"エヴェストルム"が柄の中央で分離し、双槍から双剣となりました。右の剣の腹で私の拳を受け、左の剣で攻撃を仕掛けてきました。

「試合中なので！　今は！」

大振りな振り下ろしだったので僅かに横にズレることで回避。私の拳を受けた右の剣を外側に弾くように腕を外に払うルシルさん。地面を穿った左の剣が私に向かって振り上げられようとするのを片足で踏みつけて阻止すると同時、「おっと」とルシルさんが剣を手放しました。

「でぇぇぇぇい！」

残る右の剣による攻撃が出来ないようルシルさんにインファイトを仕掛ける。射砲撃による強制的な間合い取りも行えるはずなのですが、ルシルさんは射砲撃を使わず、足捌きのみで間合いを開けようとしています。甘く見られているのか、少しばかりムッとしてしまう。

「先ほどの続きだが、無限書庫でヴィルフリッド・エレミアの手記を読んでからだそうだな」

「い、今は・・・今は！」

なぜ、このタイミングでその話をしてくるのでしょうか。私は今、ルシルさんとの手合わせだけに集中したいのに。私を苛む悩みを忘

れて闘えると思ったのに。ふつふつと湧き上がる怒りのような、悔しさのような、嫌な気持ち。

「私との手合わせに集中してください！」

そんな嫌な気持ちを拳に乗せて繰り出す。ルシルさんは空いている左手で私の拳を受け止めるとギュッと鷲掴んで、「集中しているとも。ただね・・・」私を放り投げました。真上に投げ飛ばされたことで足を付けられる建物が遠い。ゆえに地面に着地するまでの間は何も出来ない・・・。

（いえ！　あの手がありました！）

騎士の方々がよく使う、シールドを宙に展開して足場とするという手段で、空中での体勢を整える。ルシルさんの方を見れば、両方の剣を再連結した"エヴェストルム"を待機形態に戻し終え、周囲に蒼く輝く魔力槍を6本と展開していました。

『アインハルト！』

『逃げてください！』

――コード・シャルギエル――

ルーテシアさんとヴィヴィオさんからの通信で、今まさに私に向かって飛来した氷の槍に気付いた。私は回避を最優先に魔法陣を蹴り、迫る氷槍を紙一重でしたが回避。しかし私に迫る危機はそれだけで

はありませんでした。

――舞い降るは汝の煌閃（コード・マカティエル）――

ルシルさんより射出される魔力槍６本が、私を穿とうと迫ってきます。私の防御魔法で防げるようなものではないと即断し、地上に向かって建物の外壁を駆け出す。私が通り過ぎた場所に次々と魔力槍が突き刺さり、爆発していく。爆風に煽られながらも地上に着地した私は、こちらに向かって突進してくるルシルさんの迎撃に入る。

「先ほどの続きだけど。あとで聞こうにも、はぐらかされそうだったからね。試合中なら逃げられることはないから、話が出来ると思ったんだ。君の悩みはやはり、シャルの家でみんなに語った、クラウスの記憶に起因しているものだろ？」

「それは・・・！」

二の句を継げない。大事な試合の中で、今は忘れておきたい話で、私の悩みの核心を突いてきたから。それでも今はこの試合の集中したいため、かぶりを振って構えを取った。

Ｓａｇａ３－Ｂアインハルトの苦悩～Ｓｌｉｇｈｔ　ａｄｖａｎｃｅ～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

ルシルさんからの精神攻撃を振り払うかのように構えを取った私は、"エヴェストルム"を指環という待機形態に戻し、徒手空拳の構えを取ったルシルさんを見つめる。私にとってもルシルさんにとっても有利となっていた"エヴェストルム"の間合いがなくなったことで、懐に入ってルシルさんの攻撃に制限を掛けるという手はもう使えない。

（初めて見る構えですが、それを警戒するばかりでは勝てない・・・！）

右腕は下ろしてはいますが僅かに前に出して、左腕は脇を締めるという構え。その場に留まっているときは小さく跳ね続け、移動するときは必ず右足から出し、足をクロスするかのように前進後退をする歩法。

とにかく一足飛びでルシルさんへと突撃し、渾身の右拳直打を繰り出す。ストライクアーツの用語でいうヘッドスリップ（上半身を捻って頭部を左右に揺らして回避する防御術）で拳打を回避したルシルさんは、即座に私に向かって左拳直打を繰り出しました。

「くっ・・・！」

体の前にまで上げてグッと曲げた左前腕で受け止め、左腕を外に払ってルシルさんの左拳を弾き、戻したばかりの右拳による直打を繰り出す。ルシルさんはサイドステップで私の右側へと移動し、「せいや！」即座に中段の後背蹴打を放ちました。

「ぐぅ！」

私の攻撃と同時に繰り出された蹴打。攻撃に入った瞬間を狙われて直撃を許してしまった。蹴り飛ばされた私は前のめりに転倒する前に両手を地面に付いて跳ね、勢いを殺してから体勢を立て直して着地。すぐにルシルさんへと顔を向ける。

「アインハルト。逃げない、はぐらかさないと約束してくれるなら、俺も話を中断する・・・よっ！」

そう言って小さく跳ねていたルシルさんが突撃してきた。やはりあの跳ねは、突撃のタイミングを相手に見切らせないためのもの。ルシルさんが最接近すると同時に繰り出した右拳昇打を、上半身を反らして回避する防御法スウェーで躱し、直後の打ち下ろしの左拳降打をサイドステップでさらに躱し、即座にルシルさんの顔を狙って右拳廻打を打ち込む。

「おぶっ」

ルシルさんの左頬に直撃させることには成功しましたが、殴られた勢いのまま旋回しての後背蹴打をまた「あぐっ！」私の背中に打ち込んできました。前に向かって蹴り飛ばされてしまうけど、受け身

を取ってすぐに立ち上がれば、ルシルさんはもうすぐ目の前にまで来ていました。

「せいっ、はあ！」

「っ！（重い・・・！）」

繰り出された容赦のない二段蹴打を、胸の前で十字に構えた両腕で防御。二段蹴打は初撃を軽いフェイント、２撃目を本命として相手を打つものですが、ルシルさんのフェイントの右脚蹴打だけで両腕が痺れてしまい、本命の左脚蹴打で完全に防御を崩されてしまった。追撃が来る前にバックステップで間合いを取る。

「で、どうだろう？　何度も言われているだろうけど、君は独りじゃないんだ。友達がたくさんいる。頼ったっていいんだ」

ルシルさんの優しい表情にオーディンさんの姿が重なり、思わず私は素直に「はい」と頷いてしまっていた。するとルシルさんはホッとして、「よかった」と微笑みました。

「じゃあ、こほん。こちらルシリオン。アインハルトと話がついた。全力で始めよう」

『『『『了解！』』』』

「え・・・？」

ルシルさんの周囲に一斉に展開されたモニターに映るはやてさん達がそう応じた直後、至る所から魔力爆発が起きた。空を流れるのは射撃に砲撃。それは青組が本格的に私たちを撃破するために動き出したことを示すものでした。

「さぁ、行くぞ、アインハルト！！」

――ソニックムーブ――

「っ！　消え・・・！」

ザっと背後より砂利を踏む音がして、私は振り返る動作を切り捨て前方に跳ぶことを選択。距離を開けたところで振り向けば、そこにはルシルさんの姿があった。

――蠢け孤高の大地（ノーム）――

私とルシルさんの間の地面が爆ぜ、無数の石礫と石柱が私に向かってきた。旋衝破では投げ返せないサイズの石礫。石柱も多すぎて迎撃は困難。ここは逃げの一手。攻撃範囲から逃れ、ルシルさんの姿を確認するために周囲を見回す。

――風神よ苛烈（エクスクロン）に奔れ――

「な・・・！？」

それは突然でした。私の目の前に何かが飛来して地面に激突し、そ

の衝撃波で私は「くぁ・・・あうう！」その場に踏ん張り切れずに吹き飛ばされてしまう。地面をゴロゴロと転がる中で、ルシルさんを視認。その周囲には８発の魔力球が展開されていた。

「輝き流れる閃星（サビタル）」

その言葉を合図に私に向かって発射された魔力弾。急いで立ち上がって構えを取り、迫る魔力弾１発１発を注視。そして、手を伸ばせば届くほどの距離に入ったところで、魔力弾を反射でもなく吸収放射でもない、受け止めて投げ返す覇王流・「旋衝破！」で触れようとしたその時・・・。

「ジャッジメント」

ルシルさんのその号令と共に魔力弾が一斉に爆発。その衝撃に私は声にもならない悲鳴を上げ、魔力爆発による閃光に視界を潰されてしまう。余程のダメージを受けてしまったようで、全身が重くて立っているがやっとです。

「大人げなくてごめんな」

濛々と立ち込める砂塵の中から謝罪の声がしたと同時、首の後ろにトンっと衝撃が入り、私の意識はそこで途絶えました。

†††Ｓｉｄｅアインハルト⇒ヴィヴィオ†††

「はぅ～～～」

青組八神家の人たちと赤組チームナカジマｗｉｔｈルールーとリヴィの練習会は、赤組全滅で終了。そして青組からは撃墜者は出なかった。わたしはアイリを結構いいところまで追い詰めたんだけど、アインス補佐官の容赦のない広域爆撃で一瞬で撃墜された。
アインハルトさんはルシルさんに負けて、リオはザフィーラに、コロナはゴーレムを爆撃で破壊された後にルシルさんとアイリに。フロントアタッカーとガードウィングとウィングガードっていう前中後衛がいなくなったら、あとはもう簡単。リヴィもルールーも青組の総攻撃を受けて撃墜された。

「強かったね～。でも楽しかった～！」

「私はこ、こわかった・・・」

「コロナはまだいいじゃない。私とリヴィアは、はやてさんにルシルさんにアイリにアインス補佐官にザフィーラの総攻撃を受けたんだから」

「チビるかと思った」

コロナ達がズーンと暗い影を落としちゃってる。そして赤組のもう1人、アインハルトさんはずっと黙ったままで、ノーヴェやはやてさん達とお話してるルシルさんを見てる。アインハルトさんがルシルさんとの交戦中に何かお話してたのは判ってたけど、どんな内容なのかは知らない。

「1時間のおやつ休憩とフィールドの再構築の後に再戦だからね。さて、みんな。青組攻略に役立つ情報とか得てない？」

ルールーがそう聞いてくるけど、私たちは誰ひとりとして口を開かなかった。魔力出力の制限なんてあんまり意味ないくらいに強かった。でも「2対1なら、なんとかなると思う」ってわたしは小さく挙手。

「ヴィヴィオはアイリさんといい勝負してたもんね」

「うん、まあ。ただ、問題は・・・」

集まってるはやてさん達に目を移して、タオルで汗を拭ってるアインス補佐官を見る。フィールド全体を精密狙撃できる射砲撃能力、格闘戦でも圧倒的。やっぱりチーム海鳴最強なんだ。

「次に問題ははやてさんね。アインス補佐官とシャマル先生が護衛してるから、はやてさんを倒すには2人を引き離さないと」

「やっぱり1対1はキツイかもだね」

「でもそうなると、青組の誰かをフリーにする必要あるのよね」

「ルシルさんは2対1に持ち込まないと勝てないだろうし、ザフィーラさんもたぶんそう」

「アイリとアインス補佐官はどうしようか？」

「あの２人は私が抑えるよ」

リヴィが力強い声でそう言ったから、わたし達は「無茶だよ！」って止める。この中で１番強いのはリヴィだけど、アイリだけならまだしもアインス補佐官と１対２で戦うなんて無茶だよ。でもルールーは「任せるよ？」って確認。

「うんっ！　よっしゃ！　この練習会にスキル使用不可なんてルールはないからね。私の転移スキルで、アイリとアインス補佐官を翻弄しつつはやてさんとシャマル先生のポイントを削って時間を稼ぐから、その間にルシルさんとザフィーラとアイリを削って」

そういうわけで、ザフィーラはコロナとリオが、アイリとアインス補佐官はリヴィが、はやてさんとシャマル先生はルールーが。そして、わたしとアインハルトさんでルシルさんを撃破する作戦を立てたんだけど、「アインハルトさん・・・？」から返事はなく。

「アインハルト？　おーい、聞いてる～？」

「え？　あ、はい、なんでしょうか？　ルーテシアさん」

ハッとしてわたし達に振り返ったアインハルトさんに、ルールーがさっき決めた作戦を伝えた。するとアインハルトさんは「そうですか。・・・判りました」と少し残念がってるような表情で頷きました。アインハルトさんは、やっぱり１対１で闘いんですよね・・・。

「ごめんなさい」

「？　なぜ、ヴィヴィオさんが謝るのですか？」

「えっと、なんでもないです」

もし、わたしは邪魔ですよね？なんて聞いて、アインハルトさんが困ったらそれが事実だって言われてるような気がして、ちょっと踏み込めなかった。きっと、アインハルトさんはそんなこと考えもしてないと思うけど、やっぱり少しだけ怖かった。

「よし、決まり！　それじゃあ私は、フィールドの再構築をしてくるよ。リヴィアも手伝って」

「オッケーイ！」

ルールーとリヴィが離れていくのを見送った後、ルシルさんが「アインハルト。いいか？」とわたし達のところにやって来て、アインハルトさんも「はい。皆さん、少し席を外します」とわたし達に一礼して、ルシルさんと一緒に誰からも離れた場所に移動した。

「アインハルトさんとルシルさん、どうしたんだろ？」

「アインハルトさん、ずっと上の空だったし」

「ルシルとお話があるそうですよ」

リオとコロナ、それにわたしの疑問に答えたのはイクスだった。次いでフォルセティが「お父さんが、アインハルトさんの悩みについて相談に乗りたいって言ってたんだ」って教えてくれた。

「アインハルトさんの記憶・・・」

「やっぱり無限書庫での、ヴィルフリッド・エレミアの手記に触れたからでしょうね。あの日からアインハルトは、それまで以上に表情に陰りを生み、少し私たちの壁を作ってますよね」

イクスの言葉にわたし達は俯いた。それはわたしだけじゃなくてコロナやリオ達も感じてたことだからだ。さっきもアインハルトさんの力になりたいって伝えたけど、やんわり拒絶されたっぽくて・・・。しょんぼりしてると、「あ、お父さんから念話だ」ってフォルセティがそう言って、Ｓｏｕｎｄ　ｏｎｌｙって表示された小さなモニターを展開させた。

『――れじゃあ少し、整理しておこうか』

モニターからはルシルさんの声が聞こえてきて、『はい』とアインハルトさんの声も聞こえた。フォルセティを見ると、「アインハルトさんには内緒で、アインハルトさんの悩みを僕たちにも聞かせておきたいって。だから通信を繋げるって」って教えてくれた。でもルシルさん側からの一方通行で、こっちの声は向こうには届かないみたい。

『君の悩みは、クラウスの記憶に起因している、でいいんだよな・

・・？』

『・・・はい』

『前世の記憶か。・・・ファビアという子も、ジークリンデも、受け継いだ記憶や魔法で苦しんでいた。解かるよ。俺もそうだからな』

ルシルさんの言葉に、お菓子とジュースの載ったトレイを持ってきてくれたファビアさんが「あ・・・」小さく声を漏らした。ファビアさんも、カイラ・クロゼルグさんの記憶を持っていたことで、わたしやアインハルトさんに敵意を持って近付いてきた。だけど今はもうお友達だ。

『・・・フォルセティさんから伺っています。ルシルさんもその、歴代すべてのセインテストの記憶を持った・・・クローンであると』

ルシルさんから許可を貰ったフォルセティから聞かされたその話に、わたし達は驚いた。魔術やそれまで複製されてきたものや記憶、それが数千年分。それだけ受け継いできた記憶もすごい数になる。それを聞いてアインハルトさんは顔を蒼くしてた。

『ああ。・・・アインハルト。シャルの家でジークリンデに言っていた、クラウスの悲願を果たすまでは笑ってはいけない、という考えは今もそうなのか？』

『・・・無限書庫でエレミアの手記を読むことでクラウス達の過去に触れて、怖ろしくなり始めたんです。今の温もりや心強さに甘え

て、そのまま沈み込んでしまいそうになるのが、過去のことは忘れて今を生きていいと言われるのが・・・。守れなかった人を、解かり合えないまま終ってしまった人を、今度こそこの手で必ず守り抜くと誓い、果たせるほどに強くなるという願いを、私は果たしたいんです』

『・・・クラウスの無念。ジークリンデも言っていたが、それは君が自分の人生を懸けてまで晴らす必要があるのか？　君は、自分を犠牲にしているつもりはなく、クラウスの悲願達成は自分のためでもある言っていた。俺の持つ記憶の中にはオーディンのものもある。クラウス本人の記憶を持つアインハルトよりは遠い存在だが、第三者だからこそ言えることもある。クラウスは子孫の君に、彼自身の苦悩を背負ってもらいたいとは思わないはずだ。彼に見た優しさを思えば、君が苦しむのを良しとしない。君なら理解できるだろう？』

『それは、そうですが・・・。本当は自分でも解かってはいるんです。クラウスの記憶に引っ張られているのだと。彼の性格から今の私のようなことを望んでいないのも・・・。ですが彼の抱いた無念や痛みを無かったことにしたくないんです。だから・・・』

『ヴィヴィオ達との関わりを捨てるか？　笑ってはいけない、楽しんではいけない。あの子たちと共に過ごすことは、その２つと付き合うことになるだろうからね』

声しか聞こえないモニター越しでもアインハルトさんの、今の表情が思い浮かんだ。驚いてるような、悲しそうな、そんな表情をしてるような気がする。そしてそれはわたしも同じ。アインハルトさん

が抱えてる悩みをこうしてハッキリ聞いて、泣きそうになっちゃってる。

『それは・・・出来ません。・・・離れたく、ありません。でも・・・』

『迷うか？　まぁよかったよ、ヴィヴィオ達から離れると即答されたらどうしようかと思っていたからな。・・・今すぐに答えを見つけろとは言わない。ただ、アインハルトは独りじゃないと、独りで抱え込む必要もないと、それだけは解かっていてほしい』

『・・・はい。ところであの、ルシルさんに伺いたいことがあるんです。歴代のセインテストの方々の記憶とはどう向き合っているのでしょうか？　数千年分ともなればその人数もかなりのものはず。常人であれば・・・』

『精神が壊れる、か。そうだな。守りたい人を守れなかった、救いたい人を救えなかった。自身すらも喪い続けている。俺たちはそんな悲劇を繰り返してきているよ。そして、そんな何千年分の悪夢を見続ける』

『辛くはない・・・なんてことはないんですよね・・・？』

『当然。あの時はああすれば、この時はこうすれば、そんなＩＦを夢見ることは何度だってある。しかし、それはすでに過去の話。変えることは出来ない。だから現在を生きる俺は、その経験を活かすことしか出来ない。・・・さて、ここまで聞いてアインハルトは、

俺に対して偉そうなことを言えないんじゃないか？とか思っているかもしれない』

『え・・・？』

『セインテストの悲願を果たす。それが俺たち対エグリゴリ兵器、初代のクローン・セインテストシリーズの宿命。俺はそれに人生を懸けている。それは過去に縛られていると言っても過言じゃない。ルシルさんも私と同じじゃないか、と思われても仕方ない。ただ、君とは決定的に違うものもある』

『同じではないんですか？　私はクラウスの、ルシルさんは歴代のセインテストの記憶、悲願を果たそうとしてます』

『いいや、違う。・・・俺たちは死んでも悲願を果たすように決められて生み出されている。そこに自身の意思というものがない。俺もエグリゴリを救済するためには何だってやるし、この命も懸ける。セインテストはそういうシステムなんだ。だが、アインハルトは自分の意思で決定しようとしている。だからこうして悩みも生まれるし、考え直すことも出来る。アインハルト。独りで抱え込むな。それだけは伝えておきたい』

『・・・はい』

ルシルさんは『時間を取らせたね。俺からは以上だよ』ってアインハルトさんに告げたら、『失礼します』と言ってルシルさんから離れていくアインハルトさんの足音が聞こえ始めた。

『みんな、聞いていたな？　アインハルトの悩みは、シャルの家で語っていた悲願の成就という想いが、エレミアの手記の影響でさらに強くなったことで生まれたものだ。これは俺が解決することじゃないと思う。チームナカジマのみんなで、アインハルトの悩みを解決してやってくれ。もちろん、俺に出来ることがあれば手を貸そう。じゃあまた後でな』

通信はそれで切れた。わたし達は顔を見合わせて、アインハルトさんをどうやって助けようか話し合い始めた。アインハルトさんが戻ってくるまで2分もない。そう、そんな短い時間だから、良い案はまったく出てこなかった。

「ただいま戻りました」

「あ、はい！　おかえりなさい！」

「「おかえりなさい！」」

「アインハルトさん、おかえりなさい！」

さっきまで以上に陰りのある表情なアインハルトさんに、イクスが「おかえりなさい。あなたもどうですか？」クッキーの載ったお皿を差し出した。

「いえ、結構です。お水の方をいただけますか？」

「あ、はい！」

クーラーボックスに1番近かったわたしは1本のボトルを取り出して、「どうぞ」って手渡した。アインハルトさんは「ありがとうございます」とお水を受け取って一気飲み。半分くらいまで空けた後、「すいません。少しアスレチックで体を動かしてきます」と去ろうとしました。

「あの！　今は休憩時間なので、その・・・体を休ませた方が・・・」

「大丈夫です。少し考えたいことがあるだけですので」

ルシルさんとお話したことについて考えたいんだって判って、わたし達はそんなアインハルトさんを見送った。

「ヴィヴィオ、コロナ、リオ、フォルセティ、ファビアさん、今のうちに考えましょう」

「「「「うんっ！」」」」

「うん」

イクスの提案にわたし達は頷いて、アインハルトさんのためにわたし達が出来ることを考え合った。

Ｓａｇａ４－Ａ届け！～Ｏｎｅ　ｆｏｒ　Ａｌｌ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

アインハルトさんが抱えてる悩みをどうにか解決できないか、その方法を休憩時間いっぱい使って考えに考えた。そしてわたし達は、ある１つの解決策を見出した。答えはすでにアインハルトさんが言っていたお話の中で出てきていて、あとはそれをどうにかして伝えられたらきっと・・・。

（そのためには・・・）

練習会第２戦が始まるまでにルシルさん達に伝えておくことが出来た。だから今、ノーヴェから伝えられた第２戦の青組の参加メンバーの変更を聞いたアインハルトさんが「え・・・？」と驚きました。

「ん？　聞こえなかったか？　お前たち赤組はそのままだが、青組は戦力過多というわけで変更してもらった。フルバックははやてさんとシャマル先生のまま。アインス補佐官とアイリとザフィーラは離脱。で、ルシルさんがフロントアタッカーとガードウィングを兼ねる」

「あの、コーチ。それでは人数的にこちらが有利になります。１戦目は確かに私たち赤組は手も足も出ずに負けはしましたが、だからと言ってさらにハンデを貰うのは少し・・・」

「まぁ待て、アインハルト。青組の人数は減るが、その分ルシルさんには魔力出力の制限を緩くしてもらうし、射砲撃だけじゃなくていろいろと魔法を使ってもらうから、ハンデがどうとか言ってると、速攻で撃墜されちまうぞ？」

「っ！・・・判りました」

アインハルトさんがブルっと体を震わせました。さらに強くなるルシルさんと闘えることが本当に嬉しいみたい。でもこれで第一段階はクリア。アインハルトさんに青組の参加メンバーが減ることを納得してもらうことだったけど、ルシルさんの強化で上手くいった。

「よし。じゃあはやてさん、ルシルさん、シャマル先生。よろしくお願いします」

「うん！」「ええ！」

「判った」

はやてさん達が自分たちのポジションに着くために移動し始めたのを見てると、ピタッと足を止めたルシルさんが振り向いて、「割と本気でいくから、すぐに墜ちてくれるなよ？」戦意をぶつけてきた。反射的にわたし達は身構えて、深呼吸で鼓動がすごくなってる心臓を落ち着かせる。

「ルシル君。あんまイジめたらアカンよ？」

「そうよ、ルシル君。同じ女の子ならいざ知らず、男で大人なんだから」

「あと、セクハラまがいのことは絶対にアカンよ。少しでもそんな技を見かけたら、集束砲（ラグナロク）を撃ち込むからな♪」

「き、気を付けます」

ルシルさんどころかフォルセティまで怯えるはやてさんの笑顔。はやてさんとシャマル先生が先に行ったのを見送った後、「ジークリンデの関節技なども盛り込もうと思ったが、俺も命が惜しいからやめておくよ」ルシルさんはそう言って苦笑い。

「さぁ、楽しい練習会しようじゃないか。ヴィヴィオ、コロナ、リオ、ルーテシア、リヴィア・・・アインハルト」

そうしてルシルさんもポジションに着くために去って行って、わたし達も「それじゃあ私たちも移動しよっか」ルールーの言葉に頷いて、それぞれのポジションに着いた。そこで防護服に変身して、準備完了だ。

『では、午前最後の第2戦目。開始5秒前！』

『4！』

『3！』

『2！』

『1！』

『『『『試合開始～♪』』』』

メガーヌさんとアイリとアギトとリインがカウントして、開始の合図としてアインス補佐官が銅鑼を鳴らしました。

――舞い振るは汝の獄火（コード・サラヒエル）――

それと同時、わたし達に向かって蒼く燃える炎の槍の雨が降ってきて、ルールーが「散開！」って指示を出した。ルシルさんの魔力出力の制限が緩くなってるから、その威力も高くなってる。だからわたしとコロナとリオとアインハルトさんはその場からすぐに離れる。

『私とリヴィアは、ここで待機しておく！　ヴィヴィオ達４人でルシルさんを撃墜して！』

『少しでも温存して、はやてさんとシャマル先生を叩くからね！』

それが作戦の１つでもあるからわたし達は「了解！」って応じて、さらに追加される炎槍の雨を躱し続けながら、「おおおおお！」ルシルさんの元にダッシュ。

――ケレリタース・ルーキス――

『支援攻撃行くよ！』

――ハーツイーズクロスファイア――

転送スキルによってルシルさんのすぐ側にリヴィの射砲撃が転送された。リヴィも出力制限が掛かってるから魔力弾も砲撃も本来に比べてその数が少ないけど、それでも至近距離に転送されるのは変わらずな所為で防御も回避も難しいいやらしいコンボだ。

「コロナ、リオ、お願い！」

「「うん！」」

ルシルさんが菫色の魔力爆発に飲まれたのを視認。ルシルさんヘリヴィの追撃が続く中、コロナが召喚魔法陣を展開して、クリスタルのコアを足元に落とした。コアは地面の中に吸い込まれていって、「創主コロナと魔導器ブランゼルの名のもとに！」って詠唱。すると地面が盛り上がって、コロナの後ろに大きなゴーレムが出来上がった。

「叩いて砕け、ゴライアス！」

コロナの準備が整ったのを見て、今度はリオが「次はあたしの番！」って地面を思いっきり踏みつけた。そして地面に走った亀裂に両手を突っ込んで、「うおおおおおお！」大きな岩盤を持ち上げた。

「コロナ！　お願い！」

「うん！　ゴライアス！」

リオの持ち上げた岩盤をゴライアスがひょいっと持ち上げて、リオはさらに岩盤を持ち上げた。

「「龍王破山墜！！」」

リオとゴライアスが岩盤をルシルさんに向かって放り投げると同時、リヴィの追撃が止まった。魔力爆発によって発生した煙の中に２つの岩盤が吸い込まれていって、ドォーン！と轟音と振動が起こった。

『ルシルさんがこれで終わるわけない！　追撃用意！』

ルールーの指示にわたし達は「了解！」って応じて、ルシルさんに接近戦を挑むために突っ込む。ルシルさんは１対１でアインハルトさんを撃墜できるような格闘戦技を持ってる。でも離れたら射砲撃の的にされるし、広域攻撃で一網打尽にされる可能性がある。

「リオ、アインハルトさん！　わたし達３人で、ルシルさんを抑え込みます！」

「うん！」「はい！」

まずはルシルさんの状態を知る必要があるから、わたしの射撃魔法「アクセルシューター！」を４発と発射。シューターは煙を穿って少し晴らしたんだけど、そこにルシルさんが「居ない！」ことが判

った。一体どこに行ったのかな？って、リオとアインハルトさんと背中合わせで三方を警戒。

『コロナ！　上！』

「「「「っ！！」」」」

ゴライアスの肩に立ち乗りしてるコロナの頭上、ビルの窓を割って飛び出してきたルシルさん。"エヴェストルム"も待機中の魔力槍や魔力スフィアもない、純粋な徒手空拳。でもコロナはゴーレム創成を基盤としたスタイルだから、ルシルさんに格闘戦を仕掛けられたら危ない。

「ジェットステップ！」

地を蹴ってゴライアスに向かって突撃。そして大きな体を駆け上がって、落下してくるルシルさんの迎撃に入る。と、その前に「コロナ。ルシルさんの着地と同時にアレお願い！」って立てた人差し指をくるくる回す。コロナはそれだけで「うん！」解かってくれたみたいで、ゴライアスの両腕を開いてくれた。

「ほう、速いなヴィヴィオ！」

「ルシルさんこそ！　あそこからあの建物までどうやって移動したんですか？」

「普通に高速移動魔法で逃げただけさ」

宙で振りかぶられたルシルさんの左腕を注視しながら、わたしは周囲に魔力スフィアを待機させる。ルシルさんの突き出された拳を両腕でガードして、「てぇい！」腕を左右に開いて弾き飛ばした。ルシルさんがゴライアスの右腕に乗った瞬間。

「トルネードラリアット！」

ゴライアスの上半身だけが高速回転。わたしは回転が始まると同時にゴライアスのラリアットの攻撃範囲から離れるように後退。ルシルさんは急に右腕――足場が動いたことでグラリと体勢を崩した。体勢を立て直されるより早くアクセル「シューター！」４発を発射。

「っと・・・！」

――パンツァーガイスト――

全弾が直撃したけど、ギリギリで全身を魔力で覆う防御魔法を発動したのが見えたからダメージは入ってないはず。だけど、ルシルさんはゴライアスの体勢を立て直せずにラリアットを受けて、遠くのビルにまで吹っ飛んだ。

「あぅ～～。やっぱり乗ってる時にこの攻撃はダメだね～～」

「大丈夫コロナ？」

「なんとか～」

目を回してるコロナを心配しながらルシルさんの動きを見ていると、ルシルさんは外壁に叩き付けられる前にクルッと反転して外壁に着地した。魔法か何かで壁に対して垂直に立ってるのがギリギリ確認できた。

「ヴィヴィオさん！」「コロナ！」

アインハルトさんとリオがわたしの両側に並び立ったと同時、「っ！！」ルシルさんが魔力を全身から放出してその存在感を叩き付けてきた。コロナが「え、目が合った・・・？」そう呟いたところで・・・

――屈服（コード・イロウエル）させよ汝の恐怖――

わたし達の左右１０ｍくらい先に蒼い円陣が展開された。ルシルさんの魔法を知るわたしは、とにかくこの場からの離脱を提案しようとしたけど、それより早くに銀色に輝くレンガで組まれた巨大な拳がその２つの円陣から飛び出してきた。あんなのに潰されたら一溜りもない。

「片方は私が止めます！」

「じゃあもう片方はゴライアスで！」

アインハルトさんとコロナが迎撃に入ってくれた。アインハルトさんは構えを取ると右拳に魔力付加。ゴライアスは右腕をドリルみたいに高速回転させた。

「覇王流・・・破城槌！！」

「スパイラルフィンガー！」

アインハルトさんの拳とゴライアスの貫き手が、イロウエルに向かって突き出されて衝突。その際の衝撃波がすごくて、破片から顔を護るために両腕でガードして耐えていると、『来るよ！』リヴィから通信が入った。

「リオ！」

「うん！」

アインハルトさんはイロウエルを砕いた右拳をブルブル振るっていて、ゴライアスは相打ちになって砕けた腕を再生中。なら、今まさにこっちに向かって跳んできてたルシルさんの迎撃は、わたしとリオでしないと。

「双龍円舞！」

リオは炎熱と電気の変換資質を持ってて、炎熱と電撃の魔法を同時に使うことが出来る。だから今、リオの側には炎と電撃の龍がいる。

――懲罰せよ汝の憤怒（コード・マキエル）――

対するルシルさんは途中のビルの屋上に炎と電撃、さらに閃光の龍

を召喚。そんなルシルさんに向かってリオが「双龍砕！」龍を向かわせた。ルシルさんは飛び降りながら指を鳴らす仕草をした。すると待機してた3つの龍がリオの龍に突っ込んだ。炎の龍は炎の龍と、電撃の龍は電撃の龍と、そして閃光の龍はそのままわたし達のところにまで到達。

「ディバインバスターー！」

大きな口を開けてる閃光の龍に向かって高速砲を撃ち込んで、少し怯んだところに「ロケットパァーンチ！」ゴライアスの拳を飛んできて、龍の頭を吹っ飛ばした。すぐそこまで落下してきてたルシルさんは「すまないな」と謝りながらコロナを標的にしたから、わたしとリオとアインハルトさんは、コロナのフォローに入るために跳んだ。

「やっぱり私を先に狙いますよね！　でも！　ゴライアス！」

ゴライアスのアッパーがルシルさんを捉え・・・られなかった。ルシルさんはギリギリで宙を蹴って方向転換。ルシルさんの表情は、狙い通り、といった感じで、狙いが「アインハルトさん！？」に変わった。ルシルさんは宙で高速前転してからの踵落としをアインハルトさんに放った。

「ぐっ！　うあああああ！」

両腕でガードしたけど空中だったからアインハルトさんは地上に向かって墜落。その様子に気を取られたわたしは、ルシルさんからの

「余所見注意だぞ」という警告と一緒に、「きゃう！」回し蹴りを受けちゃった。さらに回し蹴りの勢いの乗った裏拳を「きゃああ！」リオに打ち込んだ。アインハルトさんに続いてわたしもリオも地面に叩き付けられた。

「ヴィヴィオ、リオ、アインハルトさん！？　大丈夫！？」

「だ、大丈夫・・・！」

「問題ありません！」

「平気！」

地面に軽やかに着地したルシルさんからの追撃を警戒して、慌てて立ち上がって構えを取ると、ルシルさんは「ダウン中に攻撃はルール違反、だろ？」そう言って構えを取った。

「さぁ、再開だ。準備はいいかい？」

わたし達は小さく頷いて、トントンと小さくジャンプを繰り返すルシルさんの動きを注視。ルシルさんの前にはわたしとリオとアインハルトさん、ルシルさんの背後にはコロナとゴライアス。コロナがゴライアスを指差して下段蹴りの仕草をした。それだけで察したわたし達は、ジリジリと後退。

「どうした？　掛かってこないのか？」

ルシルさんが妙な足運びで近付いて来ようとしたとき、リオが片足だけ地面を強く踏みしめてバインド魔法の「雷光縄！」を発動。足元から伸びてきた放電するバインドに捕らわれたルシルさんを確認すると同時、わたしとリオとアインハルトさんは一足飛びで後退。

「グランドゲイザー！！」

身動きが取れないルシルさんに、地面を穿ちながら進むゴライアスの蹴りが襲い掛かろうとした。

「俺にもバインドはあるんだぞ？」

――闇よ誘え（コード・カムエル）汝の宵手――

ゴライアスの影から薄くて長い人の手がいくつも伸びてきて、ゴライアスの両足を拘束した。でもルシルさんもまだ拘束されたまま。このチャンスは逃せない。

「行きます！」

――ジェットステップ――

一気にルシルさんの元へ突撃して、わたしは「やあああ！」右フックを繰り出した。狙うのはルシルさんのあご。予定とはちょっと違うけど、まずは少しでもダメージを入れておきたい。でもわたしの拳は、リオのバインドを瞬時に破壊して自由になったルシルさんの右手の平に受け止められた。そしてわたしの拳を空に向かって跳ね

上げたことで、わたしの右脇腹ががら空きになった。

（でも！）

ルシルさんの左フックが脇腹に入る前に、リオのスタン効果がある電撃の拳「雷光拳！」がルシルさんを襲うけど、ルシルさんは「っと！」後退することで回避。

「覇王断空拳！」

だけどその先に居たアインハルトさんの拳が繰り出された。確実にルシルさんに直撃する、そう思った。ルシルさんは前屈してアインハルトさんの一撃を空振りさせて、体を折った勢いのまま左足を後ろに蹴り上げて、アインハルトさんのお腹目掛けての踵蹴りを繰り出した。

「お？　今のをガードしたか。しかし！」

「ぐぅ・・・！」

アインハルトさんは左腕でガードしたにも関わらず数mと宙に蹴り飛ばされた。ルシルさんはすぐに体勢を戻して左拳に放電する魔力を付加した。落下し始めるアインハルトさんへの追撃だ。

「「させない！」」

「ディバインバスター！」「紅蓮拳！」

わたしとリオで砲撃による挟撃をする。ルシルさんが一足飛びでその場から離れて回避すると同時、コロナの「ロックバインド！」がルシルさんを捕らえた。地面が隆起して両足を飲み込んで、上半身は普通のロープバインドだ。

「「「はあああああ！！」」」

アインハルトさんは空中での打ち下ろし蹴り、わたしはルシルさんのお腹目掛けて、リオはルシルさんの腰を狙っての中断蹴りを繰り出す。

「っぐ！」

入った。アインハルトさんの蹴りは左肩に、わたしとリオの蹴りは狙い通りお腹と腰に。そして最後にゴライアスの「ギガントナックル！」が直撃して、ルシルさんが巨大な拳に押し潰された。

『ライフがあんまり減ってない！　防御された！』

リヴィから通信が入るけど、今はダウン中だから手は出せない。ゴライアスの腕が退けられたことでルシルさんはゆっくりと立ち上がった。

「第2ラウンドだな」

――四方に集え汝の戦宝（コード・オファニエル）――

ルシルさんの右腕には真っ白い冷気が、左腕には蒼い閃光が、右脚には蒼い炎が、左脚には蒼い電撃が付加された。

「君たちを相手にするために新しく組んだ術式だ。楽しんでもらえると嬉しいよ」

とても光栄な話でありながらも迷惑でもあったりするよ・・・。ルシルさんは構えを取って、小さくジャンプを始めた。あれは突撃のタイミングをわたし達に計られないためのものらしい。ルシルさんの四方に位置取ってるわたし達の誰が最初のターゲットになるか。

（やっぱり・・・）

チラッとアインハルトさんを見た瞬間、ルシルさんが動いた。狙いはやっぱりアインハルトさんだった。アインハルトさんの意識を変革させる。それがわたし達の目標だ。そのためには強敵であるルシルさんを、みんなで協力して倒す必要がある。だから申し訳ないけどアインハルトさんには、ちょっと苦戦してもらわないといけなくて・・・。

「破っ！」

強く光る左ストレートを繰り出すルシルさん。アインハルトさんは掲げた両腕でしっかりガード。反撃に出るアインハルトさんのフォローをするためにわたし達は駆け出した。アインハルトさんの右ストレートを時計回りに1回転することで捌いたルシルさんは、アイ

ンハルトさんの軸足の膝裏を軽く踏んで体勢を崩させて、上半身が反ってる中でお腹に左拳を振り下ろすと同時、直撃と同時に魔力を爆発させた。

「「「アインハルトさん！」」」

地面に叩き付けられたアインハルトさんが起き上がろうとしてるのを見てホッとする。でも、ダウン中のアインハルトさんへの攻撃は出来ないから、ルシルさんがわたし達の方に体を向けた。そして両肘がグッと後ろに引かれると、両腕に付加されてる冷気と閃光がひと際強くなった。

「砲撃が来る！」

――凍て砕け汝の氷槍（コード・サルヴィエル）――

――煌き示せ汝の閃輝（コード・アダメル）――

「ゴライアス！　お願い！」

――ダブルロケットパンチ――

突き出された両拳から放たれた直射砲。コロナの指示でゴライアスは両腕を砲撃に向かって発射。両腕と2発の砲撃は激突して、右腕は氷漬けに、左腕はバラバラに吹き飛んだ。どっちを受けても戦闘不能になりそう。とにかく、さっきみたいに挟撃するためリオと一緒に駆け出す。ルシルさんはわたしとリオを交互に見た後、リオに

向かって突撃。

「あわわ！　お、お願いします！」

「こちらこそ！」

リオの元に行こうとしたんだけど、アインハルトさんの様子がおかしいことに気付いて足を止めた。上半身を起こして両手を地面に付いてるけど、フラフラしてる。

『こちらルーテシア。ヴィヴィオ、アインハルトをリヴィアのところにまで連れてきて。さっきの一撃でライフが危険域ギリギリ』

「わ、判った！」

『リオ、コロナ。ヴィヴィオが戻ってくるまで2人でルシルさんを抑えて』

「な、なんとかやってみる！」

「でも、出来るだけ早く！」

リオがルシルさんと直接殴り合って、コロナとゴライアスがサポートすることで、ルシルさんを抑えてる。そんな2人に「待ってて！」って伝えてからアインハルトさんの元へ。

「アインハルトさん、いったん下がります！」

「だ、ダメです、ヴィヴィオさん。・・・まだ、戦えます・・・」

「いいえ。今は下がってください。ここで脱落しちゃうのはもったいないです」

アインハルトさんに肩を貸して、そのままルールーの居るところまで一緒に向かう。その間、ルールーがリオ達の交戦映像を観せてくれる。わたしとアインハルトさんはモニターから目を離さずに、ルシルさんの動きをしっかり観察。

「下げた右腕はジャブやアッパー、曲げた左腕はストレートとフック・・・」

「コロナさんとリオさんには感謝してもしきれません・・・」

ルシルさんの格闘を遠くからじっくり見ることで、その技や間合い学べる。ギアチェンジをされるとその速度は変わるけど、間合いだけは変わらない。今のわたしならカウンターを打ち込めるかも。

「ヴィヴィオ、アインハルトをこっちに！　私が回復する！」

途中ではやてさんとシャマル先生を警戒してるフリ（アインハルトさん以外は仕掛け人だから）をしてるリヴィと合流して、「お願い！」アインハルトさんを託す。アインハルトさんが復帰するまではルシルさんも力を抑えてくれるはず。

「まずは！　クーア・アオゲンブリック！」

リヴィが治癒魔法を発動して、わたしとアインハルトさんのライフが一気に回復。さらに「クーア・アウスダウアー！」もう1つの治癒魔法を発動。それは一定で回復魔法が発動される優れモノ。

「アインハルト、いける？」

「・・・はいっ、いけます！」

さっきまではフラフラだったけど、万全の状態にまで回復できたアインハルトさんは軽く動かした後でリヴィに力強く頷きました。

「行きましょう、ヴィヴィオさん。コロナさんとリオさんが待ってます」

「はい！」

コロナ達と合流するために、わたしとアインハルトさんは駆け出した。

Ｓａｇａ４－Ｂ届け！～Ａｌｌ　ｆｏｒ　Ｏｎｅ～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

ルシルさんと戦ってるコロナとリオの居るところに戻ってきて、その後姿を視界に収めた。ゴライアスを串刺しにしてる６本の炎の槍が爆発して、ゴライアスが粉々に吹き飛んだ。すでに地面に降りてたコロナは無事で、リオと一緒に爆発範囲外に居るんだけど、２人の背後には放電する魔力槍が待機してた。わたしとアインハルトさんはスピードを上げてジャンプ。そして発射されるより早く、「はぁぁぁぁぁ！」槍を蹴っ飛ばした。

「ヴィヴィオ！」「アインハルトさん！」

「ただいま！」「ご迷惑をおかけしました！」

４人で力強く頷き合って、静かに待ってくれてるルシルさんに体を向けると、「コロナとリオを下がらせなくていいのか？」と聞かれた。２人のライフはもうほんとギリギリ。クリーンヒットを貰ったら一撃撃墜レベル。だからルールは『下がって２人とも。回復するから』っていう撤退指示を出して、２人は「うん、了解」って応じた。

「ヴィヴィオ、アインハルトさん、気を付けてね！」

「頑張って！」

リヴィのところへ向かうコロナとリオを見送って、改めてルシルさんに対して構えを取る。

「少しギアを上げるぞ」

――ソニックムーブ――

ルシルさんの姿が掻き消えた。高速移動での奇襲のセオリーは、相手の背後から。でもルシルさんはちょっとイジワルだから、たぶん「ここ！」って、わたしはアインハルトさんの居る反対側の左側面に向けて中段回し蹴りを打った。同時、「むお！」掲げた両腕でガードされたけどルシルさんにヒット。足を下ろしてすぐに下段蹴りを打つけど、ルシルさんは小さなシールドを張って防御してた。

「はぁぁぁぁ！」

そこにわたしを掠めつつルシルさんの顔を狙うアインハルトさんの右フック。ガードを保ったままだったからルシルさんの両腕に防がれたけど、ガードを弾いたうえで数ｍと後退させた。

「「せぇぇぇい！！」」

ここで追撃。わたしは左拳、アインハルトさんは右拳でのストレートを打った。ガードし直される前に胸に入ったことでルシルさんは殴り飛ばされた。ダウンなら追撃は出来ないけど、ルシルさんは受け身を取って後転と同時にネックスプリングで立ち上がった。

「まだまだ！　来い！」

「「はい！！」」

わたしとアインハルトさんとルシルさんは同時にダッシュ。と、ルシルさんがジャンプをして宙で前転、わたしとアインハルトさんに同時に踵落としを繰り出してきた。

「（ルシルさんって意外とアクロバットな動きを・・・！）ぐっ！」

「ぅく！」

両腕を頭上に掲げてガードして、「はっ！」ルシルさんを弾き返した。ルシルさんは着地するまでの間に「我が手に携えしは――」って詠唱を始めたけど、「あぁ、そうか、複製は使用するなと命令を受けていたんだったな」と中断して着地。

「まぁいい・・・さ！」

高速の跳び膝蹴り。狙いはわたしだったけど、上半身を捻りながら反らすことで回避。そしてすぐ後ろに着地したばかりのルシルさんへお返しとして打ち下ろしの蹴り「リボルバー・スパイク！」を打った。ルシルさんの左肩に直撃だけど、よろめかせることが出来ずに、さらに肩に乗ったままの足を掴まれて、「わわっ！」アインハルトさんのところに投げ飛ばされた。

「大丈夫ですか？　ヴィヴィオさん！」

「はい、ありがとうございます！」

――ソニックムーブ――

抱き留めてくれたアインハルトさんにお礼を言いつつ、姿の消えたルシルさんの奇襲に備えようとしたとき・・・

――燃え焼け汝（コード・セラティエル）の火拳――

まさかの「炎熱砲！？」が４発、近くの３階建ての建物の屋上から放たれた。アレは防御できない。それが解かったからこそ、わたしとアインハルトさんは回避に専念。遅れて次々と地面に着弾して蒼い爆炎が拡がった。

「あ・・・！（黒煙の所為で視界が最悪！）」

無警戒なのは解かってるけど、「　アインハルトさん！」の名前を呼んだ。

「ぅぐ！」

「アインハルトさん！？」

アインハルトさんの苦悶の声と打撃音が聞こえたかと思えば、黒煙の中から突然ルシルさんが目の前に現れた。繰り出されるのは右フック。いきなりの奇襲だったけど、右腕による攻撃のリーチはすで

に見切ってる。左脇に向かってくるフックを紙一重で避けて、あご狙いでお返しの右フックを打つ。

「せい！」

「っ！」

そんなわたしの右フックを、左腕を跳ね上げさせることで上に向かって弾いた。がら空きになった右脇にルシルさんの左回し蹴りが飛んでくるけど、左膝をグッと上げて足の側面でガード。それでいったん仕切り直し。お互いに後退して、「アインハルトさんはどうしたんですか？」って聞いた。

「ん？　まぁこんな感じだ」

――風音（シルフィード）よ広きに渡れ――

「うく・・・！」

ルシルさんが左手を横に振るうとすごい風が吹いて、わたし達を覆ってた黒煙を吹き飛ばした。それでわたしは「アインハルトさん！」の姿を視認できた。アインハルトさんは、ルシルさんのバインドで雁字搦めになってた。そでもほとんど完成形になってるアンチェインナックルで弾き飛ばしすんだけど、その都度新しいバインドで拘束し続けてた。あれじゃ逃げられない・・・。

「ヴィヴィオさん・・・！」

「どれ、少し話をしながら闘おうか、アインハルト」

「「え・・・？」」

アインハルトさんは動けず、コロナとリオがまだ戻ってこない今、わたしとルシルさんの一騎打ちだ。ルシルさんはこれまで通りの構えでゆっくりと近付いて来た。ルシルさんは、わたしがカウンタースタイルだってことを尊重してくれるみたいで、必ず先手で仕掛けてきてくれる。ただ、攻撃スピードが「速く・・・！」なってる。

「どうだろう、アインハルト？　自分の人生を懸けてまで成そうとしている、その手で必ず守り抜くと誓い、果たせるほどに強くなる、という願いが目の前で瓦解する様を、身動きが取れない中で見ていることしか出来ない今の気持ちは」

「「っ！」」

右拳の高速ジャブをガードして、左拳の裏拳打ち下ろしを後ろに下がって回避。追撃の二段蹴りを、ルシルさんの右側へと回り込んで回避。そして反撃として拳速を加速させる打撃、「アクセルスマッ――」を打とうとしたけど、それより早くルシルさんは左回りに旋回しての左エルボーで妨害してきた。

「ぅぐ！」

遠心力、それにたぶん身体強化も加えての一撃だったから衝撃はす

ごかったけど、顔の左側面にまで掲げた左腕でしっかりガード出来た。ルシルさんは今、わたしに後ろを取られてる状態だ。だから急いで電撃を纏わせた右ストレート、「スパークスプラッシュ！」を打った。

「蹴りでなくストレート（そっち）で良かったよ！」

ルシルさんは腰を落とすことで躱した後、腰を上げながらの背面体当たりをしてきた。全力の踏み込みでのストレートを打った直後だったから、何も出来ずにまともに食らっちゃった。吹っ飛ばされたけど転倒はしなかった。でもそれはダウン判定がないことを意味していて、すぐにルシルさんの追撃が襲ってきた。

「おおおお！」

左ストレートが来る。狙いは右頬。脚の屈伸を利用して上半身をU字に屈めて避けるウィーピングで回避、そしてカウンターにアッパーで軽く昏倒を狙おう。そうすればアインハルトさんを捕らえ続ける連続バインドも解除されるかも。

（ここだ！）

腰を落とそうとしたところで、すぐ側まで迫ってた左拳がピタッと止まった。この瞬間、フェイントに引っ掛かったってことに気付いたけどもう手遅れ。

「うぐっ！？」

お腹に突き刺さる衝撃。次いであごにもう1発。アッパー2連撃を受けたって、なんとなくだけど判った。足が浮いた感覚を得て、まずいって思うけど空中だから何も出来ない。さらに追撃の上段回し蹴りが迫るけど、それは両腕を胸の前で構えてガード。

「どうした、アインハルト！　君が守ろうとしている大切な人が、今まさに墜とされそうになっているぞ！」

「っ！　く、あああああああ！」

ルシルさんの挑発めいた言葉に、アインハルトさんは叫びながらさらにもがき始めました。わたしはと言うと、手加減はされてるみたいで、さっきまでのコンボを受けてもライフは２００ちょっとしか減ってない。しかもリヴィの治癒魔法が効いてるから、すぐにＭＡＸまで回復する。

「さぁ行くぞ、ヴィヴィオ？」

「ルシルさん、どうして・・・？」

ルシルさんと攻撃の応酬を行いながら、アインハルトさんに聞かれないように話す。

「作戦に少しアレンジを加えるぞ。アインハルトを限界まで追い詰める。すべてはそこからだ。だから、もうちょっとダメージを与え――おぶっ？」

ルシルさんがそこまで言いかけたところで、わたしの左フックを右頬に受けちゃった。

「う～ん、タダでは受けないですよ？」

後ろに下がったルシルさんにウィンクしてそう言うと、「ああ。少しでも俺との戦いを糧にしてほしい」って嬉しそうに笑った。

「いきます・・・！」

「おう！」

お互いに突撃。ルシルさんの高速中段回し蹴りをスライディングで避けて、すぐに上半身を捻ってうつ伏せになるかどうかで両手を地面に付いてブレーキ。そしてクラウチングスタートでの再突撃。まだ完全に振り向き終わってないルシルさんに「てやっ！」右ストレートを打ち込む。

「ぅむ！」

「入った！（このまま畳み掛ける！！）」

ルシルさんの左わき腹に直撃。僅かに後退したルシルさんに右ジャブ、左アッパー、右打ち下ろし、左フック、右ストレートのコンビネーションを打ち込むけど、ルシルさんはすべてをガードして耐えきった。やっぱりちょっとでもわたしより魔力量が多いと決定打に

なってくれないかな。

「次はこちらのターンだ」

また攻撃スピードが速くなった。左ストレートを顔を横に反らして避けて、右の連続ジャブを胸の前に掲げた両腕でガード。左の裏拳振り下ろしを受けないように上半身を反らすスウェイで避けて、弧を描いて垂直に打ち下ろされる右拳を、振り上げた左腕を外へと振り払うようにして弾いた。

「せぇぇーーーーい！」

――アクセルスマッシュ――

ここで反撃の加速アッパー。ガキンと防御魔法に止められた感覚が手に伝わった。と、「ぅぐ！？」あごから頭のてっぺんにまで突き抜ける衝撃が襲ってきた。カウンターのアッパーを貰った。でも脳震盪が起こるほどのものじゃない。手加減されたんだ。

「アインハルト！　どうした！　まだ助けに来られないか！？」

それでも体勢が乱れたことには変わらない。でも追撃は来なくて、ルシルさんはアインハルトさんに声掛け、挑発するだけ。でもアインハルトさんは、いまだにバインド地獄から抜け出せられてない。

「ルシルさん・・・！」

アインハルトさんの表情は悔しさや怒りでいっぱいだ。少し追い込みすぎなような気もするけど、ルシルさんはあとで恨まれないかな。それが心配だよ。

「（大丈夫。頭はスッキリしてる。休まなくても続行できる！）ルシルさん！」

「・・・リヴィア。コロナとリオをここへ。最終段階だ」

『りょ、了解』

アインハルトさんからは見えない角度でモニターを展開したルシルさんが、アインハルトさんには聞こえない小さな声でそう指示した。

「さぁ、ヴィヴィオ。君とコロナとリオを撃墜寸前まで追い詰める」

「っ！　全力の抵抗は許されますか？」

「もちろん。そうでないと意味がない」

ルシルさんが走って来た。その途中、両足に炎みたいに揺らめく魔力を付加した。撃墜寸前なんて脅されてるから、どんな攻撃が来るのかいろんな意味で心臓がバクバクだ。

「（とりあえず！）アクセルシューター！」

誘導弾5発をけん制として発射。ルシルさんは足を止めることなく

突っ込んだかと思えば、「トライデントアーツ！」流れるような動きで左上段回し蹴りを繰り出した。と同時に付加されてた魔力が弧を描く巨大な魔力流になってシューターを迎撃。さらに５ｍくらい離れてるわたしのところにまで届いた。

「ぐぅぅ！（魔力流なのに本当に蹴られたみたいな衝撃・・・！）」

逃げられる距離じゃなかったから右腕を顔の横にまで掲げてガード。受けたのは魔力流だったこともあって直撃と同時に魔力は薄くなった。例えるなら鈍器から強風みたいな感じ。

（普通の蹴りと違って、振り切られてそのまま蹴り飛ばされなかったのは助かった）

でも威力は確かで、１発で体勢がぐらついた。立て直そうにも即座に２撃目、同じ左上段回し蹴りが繰り出されて、慌てて同じようにガード。これで完全に体勢を崩しちゃって、３撃目の内から外への上段回し蹴りによる魔力流をガード出来なくて、「うあ！」蹴り飛ばされた。

「いったた・・・！」

なんとか受け身を取ってダメージを軽減。立ち上がって構え直した時、「ヴィヴィオ！」コロナとリオが合流。

「揃ったな。よし、じゃあ続きだ」

――舞い降るは汝の煌閃（コード・マカティエル）――

蒼く光輝く槍が・・・えっと、１００本近く空に展開された。ポカーンとしてると、ルシルさんが「ジャッジメント」と号令をかけた。一斉にじゃなくて連続で降って来る槍を「うわぁぁぁ！」声を上げて逃げ回る。回避の最中なのに「ルシルさん！？」が接近してくる。

「来たばかりですまないが、コロナ」

「わ、私ですか！？　あぅ～！」

ここに来るまでにゴライアスの創成は済んでたみたいだけど、この槍の雨の中だとその大きな体は的にしかならない。それが解かってるからコロナもゴライアスから降りてるけど・・・。

「「コロナ！」」

わたしとリオは、コロナのフォローに入るためにルシルさんに突撃。ルシルさんは両腕に揺らめく魔力を付加。アレはもう中距離系の攻撃に使うんだって判ってるから、槍の雨に気を付けながら、３人一緒に纏まってルシルさんから距離を取ろうとした。

――天地に架かれ暗がる汝の明星（コード・ルシフェル）――

地面から濃紺色の砲撃が何十発って地面から放射されて、わたし達の逃げ道を塞ぐ壁になった。砲撃の壁は∩な形で、来た道を戻るしかないけどそこにはルシルさんが陣取ってる。うん、袋小路に迷い

込んだ、逃げ場なし！

「アインハルト！　見ておけ、そして知るんだ！　所詮、独りの力など高が知れていると！　それは違うと言うのなら！　俺を止めて見せろ」

そう言ってルシルさんは両拳を胸の前で打ち合わせて、右腕の魔力を左腕に移した。さらに強力になった魔力を付加してる左腕をグッと後ろに引いて、「コード・アダメル！」突き出すと同時に砲撃を発射。

「コロナ、リオ！」

「「うん！」」

回避は出来ない。防御するにはわたし達の魔力で出来るか判らない。なら、ルシルさんも抵抗していいって言ってくれてるし、全力で迎撃するのみ。

「ディバインバスターー！」「紅蓮拳！」

わたしとリオの直射砲を、ルシルさんの砲撃にぶつける。魔力爆発が起きて、迎撃に成功したかな？って考える間もなく、その閃光の中から勢いが衰えた蒼い砲撃が飛び出してきた。

「ケイジングスピアーズ！」

さらにコロナの魔法。先の尖った石の柱が壁のように並んで突き立った。そして砲撃が着弾した音が石の壁の向こうから聞こえて、壁が大きな音を立てて崩れてく。砲撃の迎撃は「うまくいった！」みたいで、３人で喜び合った。

「あー、すまん」

――公正たれ汝の正義（コード・ザドキエル）――

「「「っ！？」」」

グッと体を上に引っ張られたかと思ったら、十字架に磔にされたような体勢にさせられた。両隣のコロナとリオを見ると、ルシルさんの魔力槍２本で十字架が形作られてて、わたし達はバインドで拘束されてないにも関わらず拘束されてた。さらにわたし達の前には１人につき４本の魔力槍。

「さて。そろそろバインド地獄を解除してやろうか」

パチンと指を鳴らしたルシルさんの視線の先、ようやくバインドから解放されたアインハルトさんは、何回も何回もバインドをアンチェインナックルで弾き飛ばし続けたことで大きく肩で息をしてる。

「今すぐ、ヴィヴィオさん達を解放してください！」

「バインド中での攻撃は許されている。だから・・・ジャッジメント」

「「「っ！？」」」

ルシルさんが号令を掛けた瞬間、わたしとコロナとリオのお腹に槍が突き刺さった。お腹から出てる柄の長さからして貫通してるっぽいんだけど、ダメージを負った感じがしない。むしろ力が湧いてくる。ルシルさんはアインハルトさんに背を向けて、小さな声で「演技、演技」と指示。

「あ、えっと、うあああ！」

「わぁぁぁ！」「きゃあああ！」

「ヴィヴィオさん、コロナさん、リオさん！」

アインハルトさんは大きく目を見開いて、「あああああああ！」怒声を上げてルシルさんに突撃した。

「悔しいか？　強くなって、守りたい人を守りぬきたい。それは誰もが抱く想いだろう」

ルシルさんは、アインハルトさんの拳のコンビネーションを的確な前腕でのガードをしつつ、「楽しんではいけない、笑ってはいけない。それは孤独を意味する」と、右ストレートを振り向きながらしゃがみ込んで避けて、右肩の上にあるアインハルトさんの右腕を両腕で掴み取ってそのまま背負い投げ。しかも地面に叩き付けるんじゃなくて、空中に放り投げるようなもの。

「独りでたどり着ける強さなんて脆いものだ。そして、その成長もまた遅くなるだろう」

ルシルさんの左脚に揺らめく魔力が付加されて、落下途中のアインハルトさんに踵落とし。魔力流は大きく伸びて、アインハルトさんに打ち付けられた。

「「「アインハルトさん！！」」」

地面に叩き付けられたアインハルトさんに、ルシルさんは「すぐに立てるだろ？　威力は限界まで落としていたぞ」と言って、右拳にだけ魔力を付加して構えを取った。ゆっくりとだけどアインハルトさんは立ち上がって、わたし達を見て「すぐにお助けします」と言ってくれた。

「そうか。だが残念だったな、アインハルト」

ルシルさんが指を鳴らすと、２本目の槍がまたわたし達のお腹を貫いた。直撃時の衝撃も何もないし、また力が溢れるから、たぶんコレは治癒系の魔法を槍の形にしてあるのかも。でもアインハルトさんはそんなこと知らないし、ショックを受けるような光景だから・・・。

「どうして・・・！」

アインハルトさんは今にも泣いてしまいそうな表情を浮かべながら

も、ルシルさんに立ち向かいました。対するルシルさんは涼しい顔で、アインハルトさんの断空を含めた猛攻を捌き切ってる。

「ルシルさん、左目見えてないんだよね・・・？」

「うん。アイリとユニゾンしない限りは右目しか見えないはずだけど・・・」

明らかに死角からの攻撃も完璧に対応してる。やっぱり6千年以上と続く歴代セインテストの経験のおかげなのかも。

アインハルトさんはそんなルシルさんに決定打を入れられないことで、徐々に息を切らし始めた。それを待ってたかのようにルシルさんは本格的に攻勢に出た。高速連続の右ジャブでアインハルトさんをガードしっぱなしにしたところで、左の大振りなフックが繰り出された。

（あ、隙が・・・）

ジャブも止まって大振りな一撃ということもあって、アインハルトさんはその一瞬を突いて「覇王断空拳！」を繰り出した。ルシルさんはアインハルトさんの右側に滑るように回り込んで、アインハルトさんの首の後ろに両手の指を組んでの打ち下ろし技、ダブルスレッジハンマー、お腹には膝蹴りと、逃げられないように同時に打ち込んだ。

「かはっ・・・！？」

アインハルトさんは前屈みになってフラついた。ルシルさんは間髪入れずにアインハルトさんのあごを掌底で打ち上げて、体が宙に浮いたところで連続ボディブロー。そして最後は後ろ回し蹴りでアインハルトさんを蹴っ飛ばした。

「ルシルさん！もうこれ以上は・・・！」

「立て、アインハルト。まだライフは半分も減っていないはずだ。右手には治癒術式を付加している。ダメージを与えた分、それ以上に回復した。守るのだろう？　助けるのだろう？　なら寝ている暇はないはずだ」

「げほっ、ごほっ・・・！　も・・・もちろん、です・・・」

「アインハルトさん・・・！　ルシルさん！！」

作戦とかもうどうでもいい。今はアインハルトさんの元へ行って、支えたい。一緒に戦いたい。だから「ごめんなさい、アインハルトさん！」って謝って、闘いが再開される前に「実は――」この練習会の真実を伝えた。

アインハルトさんとルシルさんの会話を実は聞いていたこと。アインハルトさんの抱える悩みから助けてあげたかったこと。ルシルさん達にお願いして、アインハルトさんの意識改革をしてもらおうと考えたこと。あと、今はルシルさんがアレンジした追い詰め方だってこと。

「（ごめんなさい、ルシルさん。今の追い詰め方もわたし達の作戦

って言えないです）・・・アインハルトさんに、今のわたし達を見てほしかったんです」

「アインハルトさんは、私たちにとって大切で・・・」

「大好きな先輩なんです」

コロナとリオの"大切で大好きな先輩"の言葉に強く頷いたわたしは、「アインハルトさんは、自分ひとりが強くなって、自分の力だけで誰かを守りたいって考えてるんですよね・・・？」って続く。

「わたし達はそれが寂しいんです。一緒に強くなりたいんです。ただ守られる側でありたくないんです。わたし達だってアインハルトさんを守りたい、支えたい！」

「あたし達、アインハルトさんに比べたらまだまだ弱いけど、本当はもっと頼ってほしいです！」

「悲しいことも辛いことも分かち合っていきたい、嬉しいことはみんなで一緒に喜びたい。同じ視線で感じたい。・・・えっと、以上です」

なのはママ達のチーム海鳴みたいに、これまでの十何年も、そしてこれからの何十年も仲良く過ごしていけるような関係を目指したい。そんな想いを全部、アインハルトさんに伝えた。これでダメでも諦めるつもりはないけど、少しの間はヘコんじゃいそう。

「「「アインハルトさん、本当にごめんなさい」」」

感極まって泣いちゃってるわたしは、同じように泣いちゃったコロナとリオと一緒に磔状態のまま頭を下げてもう1度謝った。アインハルトさんはわたし達の話を黙って聞いてくれて、そして「ごめんなさい」とわたし達に謝りました。3人で「え？」って聞き返す。

「私はこれまで一体なにを見てきたのでしょうか・・・。皆さんは、出会ってからずっと私なんかに笑いかけてくれていたのに、一生懸命に踏み込んできてくれていたのに。皆さんの笑顔に、元気さに癒されていたのに。それなのに私は心を開こうとせず・・・。本当にジークさんやルシルさんの言う通りでした」

俯いたアインハルトさんは両手でパァーン！と両頬を叩きました。

「独りの限界。・・・何も見ようとせず、聞こうとせず、そして勝手に諦めて、すべてを失う愚を犯すところでした」

顔を上げたアインハルトさんの頬は赤くなっていたけど、それ以上に表情は晴れやかで目も輝きを取り戻してました。そして「ありがとうございます、ヴィヴィオさん、コロナさん、リオさん」今まで見たことのないほどに綺麗な笑顔を見せてくれた。

「「「アインハルトさん・・・！」」」

また泣いちゃいそうになってたところで、「あ・・・」わたしとコロナとリオを拘束してた十字架が解除されて、トンっと地面に降り

立つことが出来た。さらにお腹を貫通してた2本の槍もすぅっと消えていった。

「あの、ヴィヴィオさん達は平気なのですか？　お腹に槍が・・・」

「あ、平気です、大丈夫です！」

「治癒魔法の一種のようでダメージを受けるどころか・・・」

「ライフが満タンです！」

「そうですか。良かったです。完全に私を追い込むための演出だったのですね」

アインハルトさんの元に集まって、ルシルさんをチラッと見る。そして「ちょっとイジわるです」ってみんなで小さく頷いた。

「このまま俺が負けるのが綺麗なエンディングなんだろうが・・・。どうする？」

わたし達の視線を受けたばつが悪そうに頬を掻いてるルシルさんにそう聞かれてわたし達は顔を見合わせる。うん、考えるまでもないよね。みんなの表情はやる気に満ちてる。ここでルシルさんに手を抜いてもらって勝っちゃうより、全力で戦って負けた方がまだ気持ちいい。

「コロナ」

「うん！」
「リオ」
「うん！」
「アインハルトさん」
「はい！」
わたし達は横一列に並んでルシルさんと相対する。ルシルさんは変わらず強敵なのに、「なんでだろう。今のわたし達なら、ルシルさんに勝てそう！」って妙な自信が湧き上がってくる。
「あ、うん、私も！」
「あたしも！　なんとなくだけど！」
「私もです。初めてです。こんなに気持ちの良い、胸の高鳴りは」
「ですよね！」
「良い目になったじゃないか、アインハルト。それでこそクラウスも喜ぶというもの！　さぁ！　来い！」
自然と笑い合ったわたし達は、両手両足に揺らめく魔力を付加して、

さらに周囲に炎の槍十数本を展開したルシルさんへと「はい！」突撃した。

・・・で、結果としてわたし達は負けちゃった。一切の手加減なしだったけど、絶好調なアインハルトさんが一緒だったおかげで、ルシルさんのライフを３００以下にまで減らせたし。うん、良いことばかりだったよ。

「アインハルトさん」

「はい？」

「これからもよろしくお願いします」

「はい。こちらこそ、お願いします」

Ｓａｇａ５トーマとナカジマ家とデバイスと・・・～Ｍｅｅｔ～

†††Ｓｉｄｅトーマ†††

俺は月に１度、普段過ごしてる養護施設からスバルさん――スゥちゃんの家族が住むナカジマ家に遊びに行って、元気な姿を見せに行くようにしてる。それがナカジマ家のみんなとの約束だからだ。俺としてもモニター越しでみんなと話すだけじゃなくて、直接逢いたいって気持ちもあるから嬉しいけど、ちょっと遠いんだよな。

「ふぅ。到着っと」

レールウェイの車両からホームに降り立って、「スゥちゃんに連絡しとかないと」携帯端末をポケットから取り出してメール画面を開く。そして「ステーションのホームに到着、っと」メッセージを書いて送信。するとすぐに受信メロディが鳴った。

――わかったー！　ロータリーで待ってて。もう少しで着くから――

返信内容はそんな感じ。端末をポケットに戻して、リュックを背負ってからロータリーに向かう。一般車が次々と流れていくのを見送っていると、パッパッ！と軽いクラクションが鳴った。そっちに向けば、ある１台のワゴンタイプの車が俺の前にゆっくりと停車した。

「お待たせ、トーマ！」

「ほら、乗って乗って！」

「行くっスよ！」

助手席の窓と後部のスライドドアが開いて、助手席に座る「ギン姉！」と、２列目座席に座る「スゥちゃん！」と、３列目座席から顔を覗かせてる「ウェンディ姉！」が声を掛けてくれた。俺は「あ、うん！」頷いて、スゥちゃんとチンク姉が座る２列目座席に乗車する。

「はーい、それじゃあ出発しまーす！」

運転席に座るのはナカジマ家のお母さんであるクイントさん。助手席のギン姉が車の周りの安全を確認して、ゆっくりと車を走らせ始めた。その間にみんなと「久しぶり！」って挨拶を交わすんだけど・・・。

「あれ？　クイントさん、どこに向かってます？」

ナカジマ邸は東部にあるから、今通り過ぎた道を右折してハイウェイに乗らないとダメなんだけど・・・。そんな疑問を口にしたら、「そういや言ってなかったか？」って首を傾げる俺の頭をわしわし撫でたのは、３列目座席に座るノーヴェ姉だ。

「今日はちょっと特別」

「そうっスよ！　少し遠出するっスよ♪」

背もたれからぴょこっと顔を出して微笑むのはディエチ姉、満面の笑顔なのはウェンディ姉。俺が後ろに振り向いて、「え？　そうなの？　どこに？」って新しく生まれた疑問を口にした。

「それは着いてからのお楽しみだ、トーマ」

「あ、秘密にしておくの？　えっと、じゃあ秘密で♪」

スゥちゃんを挟んだところに座るチンク姉がそう言うと、助手席のギン姉が2列目座席に振り向いてそう言った。遠出することは俺としても問題ないけど、「ゲンヤさんは・・・？」って、ナカジマ家のお父さんのゲンヤさんはどうするのか聞いてみた。

「地上本部から直接向かうことになってるから、ゲンヤさんとは現地集合ね♪」

「だから安心して、トーマ。ちゃんとみんな揃うから」

「あ、うん、判った」

普通の家族のように接してくれるスゥちゃん達ナカジマ家のみんなには本当に感謝してる。以前、ナカジマ家の養子にならないか？って提案されて、返答はまだ待ってもらってるんだけど、でもすごく嬉しかった。そんなわけで、まだ正式な家族ってわけじゃないけど、家族のように一緒に過ごせることを大切に思ってる俺は、一緒に過ごすときに誰かが欠けてるとヘコむ。

「トーマ、トーマ！　次げ――えふん、目的地に着くまでお腹空くっスからね！　お菓子をいっぱい買ってきたんスよ！」

「どれ食べる？　あたしのおすすめは――」

ウェンディ姉とディエチ姉にいろいろとお菓子を勧められて、みんなで美味しく食べながら談笑。でもさすがに、あーん、は恥ずかしいからやめてほしかったなぁスゥちゃん。ウェンディ姉も真似しだすからさ。

「見えてきたぞ、トーマ」

「最初の目的地はあそこね」

チンク姉とギン姉に促されるままに窓から指が差されてる方を見てみれば、「次元港！？」だった。遠出だから他地区に行くのかな？って軽い気持ちだったけど、まさかの世界跨ぎに心底驚いた。

「行く先は搭乗手続きの時まで秘密ってことで」

そうして車は次元港の立体駐車場内へ。長期停車する用の有料ロックのあるスペースで停めた後、スゥちゃん達は車最後部のラゲッジスペースからスポーツバッグやショルダーバッグやリュックサックなどを持ち出した。

「トーマ、お前のリュックだ」

「ありがとう、ノーヴェ姉」

ノーヴェ姉から俺のリュックを受け取って背負って、「はーい。搭乗時間まで余裕はあるけど、ささっと受付に向かうよ～！」そう言って歩き出すクイントさんに俺やスゥちゃん達は「はーい！」って返事して続く。

「お！　来たな、待ってたぜ」

ターミナルの搭乗受付カウンターのところに到着すると、ゲンヤさんが小さく手を挙げて出迎えてくれた。クイントさんが真っ先にゲンヤさんの元に向かって、「お待たせ、ゲンヤさん」笑顔で応えた。続いてスゥちゃん達も挨拶。

「トーマもよく来てくれたな」

「はいっ、お久しぶりです！」

わしゃわしゃと頭を撫でてくれるゲンヤさんに、もう朧げになり始めた父さんの面影を重ねる。それがなんか気恥ずかしいけど、胸が温かくなる。そんなゲンヤさんと一緒に受付カウンターへ。クイントさんが代表して搭乗手続きをしてくれてるんだけど・・・。

「え？　本局行き！？」

クイントさんと受付さんの会話を、スゥちゃん達と話しながら聞い

ていたんだけど、まさかの行き先が本局。驚いてる俺の様子にみんながニヤニヤ。確かに驚いたよ、本局なんてまず行く理由もないから。

「そうなんだよぉ、トーマ。というわけで、今日から3日間は本局で遊びます！」

「本局は管理局の本部だが、局とは関係ない一般人の住む住居区画があるし、生活に必要な商業区画はもちろんのこと、遊園地・動物園・博物館と言った娯楽施設も完備しているから、普通に楽しめる場所でもある」

スゥちゃんとチンク姉が胸を張ってそう言った。チンク姉は元は本局で働いていたって話だし、とても詳しそうだ。俺も一度は本局に行ってみたいって思ってたし、その夢が叶うってことでちょっと・・・というか、かなり興奮してる。

「その前に、ちょっと本局の技術部に寄り道することになるけど」

「半日だけ時間をもらうことになるっス。その間、トーマはパパりんとどっかで時間を潰しておいてくださいっス」

「そういうわけだ、坊主。こんなおっさんと2人で悪いが付き合ってくれ」

「や、そんな！　全然！　了解っす！」

搭乗手続きを終えて、俺たちは無事に本局往きの船に搭乗することが出来た。局員とその家族っていうことで料金はかなり割安になって、俺が払ったわけじゃないけどすげぇ得だな～って思った。

「それじゃあまずは私たちの用事を済ませてからね。トーマはナカジマ家の一員として扱うようにしてもらってるから、安心して付いて来てね」

「はいっ」

本局に着いてすぐ、クイントさん達に付いてバスを使って訪れたのは大きなビル。エントランスからは局員の青制服を着た人たちが出入りしてる。ということはまさか「ここが本部！」ってことになるんだ。

「そ。さ、入ろう。早く用事を済ますことが出来れば、それだけ早く遊びに行けるし」

俺はみんなの後に付いてビルに入って、クイントさん達がカウンターに座る局員さんに軽い挨拶をするのを見て、俺もなんかしないとって思ってお辞儀した。すると受付さんもお辞儀してくれて、なんか嬉しくなった。

それからエレベーターに乗って、長い廊下を突き進んで突き当りに到着。ドアの側にはＺｅｒｏｔｈ　Ｅｎｇｉｎｅｅｒｉｎｇ　Ｄｅｐａｒｔｍｅｎｔ――第零技術部って彫られた、翼を広げた鳥型のプレートがある。

「クイントです。ナカジマ家一同、来ました」

クイントさんがドア横の操作キーのようなパネルに手を振れてって告げると、『はーい、お待ちしてましたー！』って元気な女性の声でそんな返答が。遅れてスライドドアが両側に開いて、ドアの向こうで出迎えてくれていた女性が「いらっしゃい♪」って、すごく綺麗な笑顔を向けてくれた。

「お待たせ、すずかちゃん。今日もよろしくお願いします！」

そう言ってクイントさんが小さく頭を下げると、スゥちゃん達も「お願いします！」って頭を下げた。するとゲンヤさんも「よろしく頼むぜ、月村嬢ちゃん」って頭を下げたから、俺は「えーっと・・・」若干おろおろ。

「はい、お任せを。君はトーマ君だよね？　本局第零技術部主任、月村すずかです」

「あ、トーマ・アヴェニールです！」

「うん。みんなからトーマ君のことは聞いてるよ。みんなからは月村技術官とか主任とかって呼ばれてるけど、親しい人だったり仲良くしたいな～って思う人には、すずか、すずかさん、って呼んでもらってるの。よかったらトーマ君もそう呼んでね。えっと、それで少しの間、クイントさん達を預かるから、ナカジマ三佐と一緒に待っていてくれるかな？」

「あ、はい、えっと・・・すずかさん」

「うん♪」

すずかさんのことはスゥちゃん達から何度か話を聞いてる。すごい技術者さんで、あのルシルさんのデバイスを造ったって話だ。そんなすずかさんは「それじゃあクイントさん達はこちらへ。三佐とトーマ君はここで待っていてください」って部屋の奥に向かって行って、クイントさん達も「いってきます！」って俺とゲンヤさんに言ってから続いた。

「悪いな、トーマ。クイント達は定期的に検診を受けなきゃならなくてな」

「あ、いえ。・・・あれですよね、スゥちゃん達は・・・その・・・」

「ああ。アイツらはみんなサイボーグでな。機械の体なんだよ。だからって普通の人とは何ら変わらねぇ」

スゥちゃん達は何年か前にミッドチルダを襲った大事件の首謀者によって生み出されたって、スゥちゃんたち本人から聞いた。それにクイントさんも、その事件でサイボーグに改造されたって。俺も俺で奇妙な人生を歩んでるけど、スゥちゃん達も大概だ。

「失礼します」

そんな声と一緒に置くのスライドドアが開くと、1人の女性がキャスター付きのワゴンを押して入ってきた。ゲンヤさんはその人に「おう。セッテ、邪魔してるぜ」って軽く手を挙げて挨拶した。

「お久しぶりです、ナカジマ三佐。待ち時間の間、私が接待することになりました。大したことは出来ませんが、寛いでいってください」

セッテさんって人がワゴンからガラスのコップを2つ、俺とゲンヤさんの前に置いた。さらに俺のコップには色と匂いでオレンジジュース、ゲンヤさんのコップは麦茶っぽいのが注がれた。

「ありがとな」

「ありがとうございます」

「いえ。ケーキもすずかが用意してくれていますので、どうぞ召し上がってください」

続いて出されたのはショートケーキ。配膳を終えたセッテさんに俺とゲンヤさんは「いただきます」そう挨拶してからフォークを手に取っていただくんだけど・・・。

（み、見られてる・・・）

ワゴンの側で無言で佇んでるセッテさんの視線をひしひしと感じて、美味しいはずのケーキの味があんまりしない。何か喋った方が良い

のかな？って考えた俺は、「俺、トーマ・アヴェニールっていいます」

「はい。・・・あ、自己紹介はまだでしたか。すみません、チンク姉様やウェンディから写真を見せてもらっていたので、自己紹介をした気になっていました。では改めて。第零技術部所属、セッテ・スカリエッティ一等空尉です」

「じゃあ俺も改めて。トーマ・アヴェニールです」

それからジュースのお代わりを貰いながら待つこと３０分くらい。奥のスライドドアが開いて「お待たせー！」元気な声でスゥちゃんと、「父さん、トーマ。ただいま」落ち着いた声でギン姉が戻ってきた。

「ただいま戻りました」

「ただいまです」

「ただいまー」

「ただいまっス～！」

「お待たせ～。母子ともに健康体で異常なし♪」

続けてチンク姉、ディエチ姉、ノーヴェ姉、ウェンディ姉、クイントさんも戻ってきた。検査で異常なしって聞いたゲンヤさんは「そ

うかい。そいつは良い知らせだ」って安堵して、俺も「良かったです！」って声を掛けた。俺とゲンヤさんはソファの隅っこに寄って、空いたところにみんなが座った。

「クイント二尉、ギンガ姉様、チンク姉様、スバル、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ。あなた達はどうしますか？」」

セッテさんにそう聞かれたみんなはケーキ食べるしジュース飲むしと返事をして、それを聞いたセッテさんは「判りました。少し待っていてください」ワゴンを押して奥のドアの中に戻っていった。

「トーマ。セッテとは何か話した？」

「それが特に何も・・・。あ、自己紹介はしました。それ以降はまったく」

「許してやってくれ、トーマ。セッテは我われ姉妹の中で一番物静かだからな。こうして接待するだけでも大きな成長だ」

チンク姉がそこまで言ったところで、「みんな、お疲れさまでした～！」すずかさんがやって来た。側には紫色のロングヘアの女の人と、ちょっと暗い金色のロングヘアの女の人が居る。俺の視線に気付いたのか、その2人は俺の方を見た。

「はじめまして、トーマさん。シスターズ長女、ウーノです」

「私は二女のドゥーエ。ウーノ姉様と一緒に、主任の補佐をしてい

るわ」

「あ、はい、はじめまして！　トーマ・アヴェニールです！」

ソファから立ち上がって一礼すると、ドゥーエさんが「ふーん。良い子じゃない。ルシル君には無い男の子特有のヤンチャっぽさを感じるわ」って小さく笑った。

「いつも妹たち、特にウェンディが迷惑をかけると思うけど、この子はこの子で根は良い子だから、これからも仲良くしてあげてね」

「あ、いえ。いつも遊んでくれて、俺としては楽しい姉さんって感じで・・・」

ウェンディ姉の底なしの元気にはいつも助けられてる。なんかもう姉というか仲のいい親友みたいな感じかも。俺がそう言うとセッテさんは「そうですか。今後とも妹たちをよろしくお願いします」って微笑んだ。

「ケーキとジュース、持ってきました」

「ありがとう、セッテさん。ウーノさん、ドゥーエさん、配膳を手伝ってくれる？」

「はい」「ええ」

「トーマ。ジュースのお代わりはどうですか？」

「あ、いただきます。ありがとうございます、セッテさん」

セッテさんにジュースを注いでもらって、さっそくケーキを美味しそうに食べるスゥちゃん達を眺める。養子縁組を受け入れて本当の家族になったら、きっとすごく楽しいんだろうな。俺も、もうあんまし意地張ることなく受け入れてもいいかも、とは思ってるんだけど・・・。朧げになり始めてるヴァイゼンの鉱山の街の暮らし、家族や友達の記憶がフッと脳裏に浮かんだ。

（以前、ルシルさんにも相談したけど、幸せを受け入れて過去を忘れるのは正しいのか、今でも迷ってる・・・）

やっぱ何かしらのキッカケが欲しいかも。あの街を襲ったのはおそらくフッケバイン一家って呼ばれる組織だって、ギン姉伝手で聞いたルシルさんからの情報だ。いろんな世界を渡り歩いて人殺しや強盗、たくさんの犯罪を起こしてるっていう。あの街を襲った理由とか、問い質したいことは山ほどあって。でもそのあとは？　そいつらが捕まった後、裁かれた後、俺はそれでも過去を忘れるのが怖いって思うのかな・・・。

「あ、そうだ、スバル。例のアレ、もう完成してるけどどうする？」

「本当ですか！？　あーどうしよう！」

すずかさんにそう聞かれたスゥちゃんが文字通り頭を抱えて悩みだした。事情を知らない俺は「どうしたの、スゥちゃん？」って聞い

てみた。するとノーヴェ姉が「いいじゃねぇか。トーマだってもうガキじゃねぇんだし」って、まさかの俺関係を示すことを言った。

「そうだな。別に戦闘用というわけじゃないんだ」

「せっかくすずかっちが作ってくれたんスから、埋もれさせておくのはもったいないっスよ」

「いつまでも携帯端末っていうのもね。別に悪いってわけじゃないけど」

「私も、もうこの場で渡しちゃってもいいと思うわよ、スバル」

「うーん、ギン姉たちがそう言うなら・・・。すずかさん、お願い出来ますか？」

「うんっ。すぐに持ってくるから！」

スゥちゃんにお願いされたすずかさんが奥へと引っ込んでいった。戻ってくるまでの間、俺は「あの、なんか俺にくれるの？」って、話の流れからしてそうなんじゃないかって思ったからストレートに聞いてみた。

「えっと、うん。ちょっとね」

歯切れが悪いスゥちゃん。なら俺は変に追撃せずに、すずかさんが戻ってくるのを待った。すずかさんは2分としないで戻ってきて、

両手でしっかりと持つリボンが掛けられた小さな箱をスゥちゃんに「はい、スバル」って渡した。

「ありがとうございます。それじゃあ・・・こほん。トーマに、あたし達からプレゼント」

スゥちゃんは"あたし達"って言ってギン姉たちを見たから、俺は「ありがとう！」ギン姉たちを順繰りに見回しながらお礼を言ったから、「開けてもいい？」と聞く。スゥちゃん達が「どうぞ！」って言ってくれたから、そっとテーブルに置いて、リボンを解いてから蓋を開ける。

「コレってもしかして、デバイス・・・？」

ネックレスタイプのようなソレを手に取ってみようとしたら、「うわっ！？」いきなりソレがふわっと浮かび上がって、首を掛ける紐にあたるところを俺に向かって伸ばしてきた。

≪はじめまして。私は、あなたのデバイスとして生み出されました≫

「トーマ。その子に名前を付けてあげて」

「えっ、名前？　名前かぁ～～・・・うーん・・・」

俺だけのデバイスだってことだし、個人的な考えの名前でもいいわけだ。と言ってもすぐには思い浮かんでこないけど。

「トーマ。悩んでいるならそうね・・・、たとえば好きな本の登場キャラクターとかにしてみれば？」

「本のキャラクター・・・」

クイントさんから貰ったヒントで、すぐに思い浮かんだのは「スティード・・・」だった。養護施設でよく読んだり、他の小さな子に読み聞かせたりしたある物語。悪いことばかりする動物たちを、主人公と相棒犬スティードで懲らしめて改心させるっていうやつだ。

「スティードでお願いします、すずかさん」

「スティードね、すごくいい名前だと思う。それじゃあ設定を始めようか」

すずかさんから名前とかの設定の仕方を聞いた俺は、「マスター認証」と告げた。

「トーマ・アヴェニール。デバイスに固有名称を登録。・・・お前の名前は、スティード、だ」

≪マスター登録、トーマ・アヴェニール・・・完了。デバイス名称登録、スティード・・・完了。こんにちは、トーマ。私はスティード。トーマ、あなたのデバイスです≫

「おう！　これからよろしくな、スティード！」

≪はい。よろしくお願いします≫

本局へ来られただけでもすごいことなのに、まさか俺だけのデバイスまで貰えるなんて思わなかった。俺は胸の内に広がる最大限の「ありがとう！」をみんなに伝えた。

Ｓａｇａ６－Ａ遭遇～Ｔ．Ｃ．～

†††Ｓｉｄｅエリオ†††

最後の大隊による"イリュリア・クーデター事件"も終わって、管理世界も事件前に戻った。それと同時に犯罪発生率も元に戻っちゃったけど。

僕やキャロの親代わりとなってくれたフェイトさんやアリシアさんも執務官として管理世界の海を渡ってるけど、明らかに忙しくなったってぼやいてた。でも、そんな中でも休みを取ってくれて、僕たちの仕事先である第６１管理世界スプールスにまで来てくれる。

「せいっ、やぁっ、たぁっ！」

日課の早朝練習、イメージの中の仮想敵との交戦。槍型のアームドデバイス"ストラーダ"を振るって、仮想敵に一撃、また一撃を与えていくけど、僕もそれ以上に一撃を貰っていく。

（やっぱりまだ、フェイトさんには勝てないな～）

早朝練習の仮想敵は基本的にフェイトさん、そしてシグナム副隊ち――じゃなくて一尉。六課時代によく相手をしてもらっていたからイメージがしやすいんだけど、なかなかイメージの中でも勝てない。もっと精進あるのみだ。

「エリオくーん！」

一息吐いてたところで僕の名前を呼んだのはキャロだった。キャロも、フェイトさんとアリシアさんが親代わりとなってくれていて、初めて顔を合わせたのは機動六課時代。解散後は、ここスプールスで管理局の外部組織の1つ、自然保護隊で保護官としてキャロと一緒に働いてる。

「エリオ君。タントさんとミラさんが、待ち合わせの街まで車を出してくれるって」

キャロの周りを飛ぶ小さな飛竜フリードの首を撫でて、「え、そうなの？」って聞き返した。スプールスに常駐してる保護隊は12組あって、タントさんとミラさんは僕とキャロの上司で、第4班になる。

「うん。フェイトさんとアリシアさんにも挨拶しておきたいからって」

「そっか。うん、判った。ありがとう、キャロ、フリード」

「うんっ！」「きゅくるー！」

"ストラーダ"を待機モードの腕時計に戻していると、キャロが「はい。エリオ君」と近くの切り株テーブルに置いてあったタオルを手渡してくれた。それにお礼を言いながらタオルを受け取って、汗を拭い去る。

キャロやフリードと一緒に事務所兼住宅へ戻ると、「おかえり～！」

と迎えてくれたのは「ただいま、タントさん、ミラさん」だ。朝ご飯の用意をしてくれている最中で、僕とキャロは「手伝いますね！」とキッチンカウンターからダイニングテーブルにお皿を運ぶ。

「「「「いただきます！」」」」

食事前の挨拶をして、ミラさんの美味しいご飯をいただく。食事の間、フェイトさん達と今日はどこに遊びに行くかとか、キャロと数日前から考えてた予定を楽しく話し合う。そして朝ご飯とその片付けが済んだ後は、外出の準備だ。

「何か手伝おうか、キャロ？」

「あ、大丈夫。あとはランチボックスに詰めるだけだから」

シャワーできっちり汗を流した後、キッチンでは自分で作った料理をランチボックスに詰める作業をしてるキャロにそう声を掛けた。テーブルの上にはサンドイッチの他に「美味しそう」なおかずがたくさん。そんな無意識に口にした僕の言葉に、キャロは「１つ味見してみる？」って、短い竹串に刺さってる軽く焼かれたハムを巻いた卵焼きを差し出してくれた。

「あ、ありが――」

「あーん」

串を受け取ろうとしたら、キャロが僕の口に向かってハム巻を向け

てきたからさぁ大変。ドギマギして口を開けない僕の様子に、「エリオ君？」って首を傾げるキャロ。変に意識するのも失礼かと思って、いざ口を開けて食べようとしたら、「あぅ。やっぱりダメ、恥ずかしいぃ～」キャロは顔を真っ赤にした。

「えっと、ごめんね？　はい、どうぞ」

「あ、うん、いただきます」

何度か深呼吸した後のキャロから串を受け取って、パクっと一口で食べる。少し冷めてるけど、それでも十分美味しい。だから「美味しいよ、キャロ」って素直な感想を伝えた。キャロはさっきほどじゃないけど顔を少し赤くして「よかった～」って安堵。キャロは六課が解散して原隊である自然保護隊に戻ってから、ミラさんに料理を習い始めた。それも、今日みたいにフェイトさん達に喜んでもらいたいから。

「よしっ。完成！　なんとか間に合った～」

キャロがいくつものランチボックスをバスケットの中に収めて、最後にハンカチを被せたところでホッと一息。フェイトさん達と決めた待ち合わせの時刻は１０時３０分に次元港で、だ。今は９時４０分。ここから車で３０分くらいだから、時間的にはまだ余裕がある。

「車を出してもらえることになって、公共交通機関（バス）を利用しなくていいからってちょっと遅めにお弁当作り始めたんだけど、結構ギリギリだったね。・・・えっと、じゃあ着替えてくるね」

「あ、うん」

そう言って自分の部屋に向かうキャロを見送って、僕も自分の準備の最終チェックに入る。今着ている服は、以前フェイトさんとアリシアさんに選んでもらった、Ｔシャツにパーカとカーゴパンツ。髪型とかは別に普段通りで、後ろ髪をゴムで結うだけ。それに水筒とレジャーシートを収めたリュック。あとは、財布の中身も確認。１４才とはいえ管理局に籍を置いてる公務員だ。無駄遣いは出来ないけど、普通の生活は送れるだけの給金は貰ってる。

（今日こそ、フェイトさんとアリシアさんからのお小遣いを貰わないようにしないと）

知らない間に口座にお小遣いが振り込まれてた時は、当時は嬉しかったけど今はちょっと・・・ってなる。フェイトさんとアリシアさんの子どもであるという誇りはあるし、恥ずかしくないように胸を張って生きていきたい。でも、やっぱり昔から変わらない子ども扱いはそろそろやめてほしい。

「エリオ君、お待たせ～！」

軽い足取りで戻ってきたキャロ。Ｔシャツにロングフレアスカートにショートジャケット、そしてスラウチハットという服装だ。

「どうかな？」

「うん、とっても可愛いと思う！」

「えへへ、ありがと～♪」

キャロと笑顔を交わしていると、「エリオ君、キャロちゃん。そろそろ出ようか」と声を掛けてくれたタントさんに「はい！」頷いて、タントさん達と一緒に街、タンシ区へと向かう。スプールスは自然が多く、この辺りは1番近い街に着くまではのどかな風景が続く。

「今春も、フラワークラウンバードもやって来たね」

「例年通りのルートで、B2エリアに向かってます」

「元気な雛が生まれるといいですね」

「うん」

スプールス固有種のフラワークラウンバードは渡り鳥で、春頃になると北部から南部のこの辺りにまで飛んで来て、卵を産む。そこで秋に入るまで雛を育てて、また北部に戻っていくを繰り返す。その綺麗な花弁のような冠羽や羽根はもちろん、その肉や卵も貴重ということで密猟や違法売買の被害に遭ってる。僕たちは保護官はそう言った動物たちを守るためにいる。

「あ、見えてきた・・・！」

フェイトさん達との待ち合わせをしてる街、タンシ区が見えてきた。

フェイトさん達は次元港のあるアーカンサス区でレンタカーをレンタルして、待ち合わせのタンシ区にまで来てくれることになってる。タントさんの運転するもタンシ区に入って、待ち合わせ場所の公園の駐車場に入る。

「「フェイトさん、アリシアさん！」」

駐車場と公園を繋ぐ石畳の道の両サイドに設けられてるベンチに座る2人を見つけた。窓を開けずにだけど手を振ると、笑顔で手を振り返してくれた。そして、僕たちの車も空いてるスペースに駐車して、タントさん達と車を降りる。

「「エリオ、キャロ！」」

「「フェイトさん、アリシアさん！」」

僕とキャロはフェイトさんとアリシアさんの元に駆け出して、「スプールスにいらっしゃい！」と挨拶した。2人がスプールスを訪れるのは今回で2回目。1回目は、僕とキャロが保護隊に入るとき、タントさんとミラさんに挨拶するために。

「フェイト執務官、アリシア執務官補、ご無沙汰しております」

「お久しぶりです」

「お久しぶりです、タント保護官、ミラ保護官」

「うちのエリオとキャロがお世話になってます！」

大人な挨拶と軽い談笑をするフェイトさん達の側で待つこと少し。タントさんとミラさんは、「目一杯楽しんでおいで」と僕たちに笑顔を向けて、車に乗って巡回に入った。僕とキャロは車が見えなくなるまで手を振った。

†††Ｓｉｄｅエリオ⇒キャロ†††

タントさんとミラさんを見送った後、ふとアリシアさんがニヤニヤしてるのに気が付いた。こうして直接逢うのはかなり久しぶりだし、それを嬉しがってくれてるのかな？って思ったんだけど・・・。

「さ、車はこっちだよ」

「車は私が運転するからね～♪」

「「え？・・え？・・・あれ？」」

ベンチに置かれたままのスポーツバッグに、私とエリオ君はフェイトさん達とバッグを交互に見て混乱。するともう1つのスポーツバッグを肩に提げてるアリシアさんが「あ、ごめん！　持ってきてー！」って言ったから、エリオ君が返事をしてバッグに近付いた。と、その時、バッグが小さく動いたと思ったら・・・

「どぉーん！！」

「「っ！！？」」

バッグから突然なにかが飛び出してきた。私は思わずエリオ君の背中に隠れて、ソレが何かを確認する・・・までもなく、「アルフ！？」だってことが判った。オレンジ色の長い髪に狼耳にしっぽ。私やエリオ君にとってはお姉ちゃんのような存在。それがアルフだ。

「久しぶりだな、エリオ、キャロ！　しばらく逢わない間にまた大きくなった・・・のは、エリオだけか。キャロは全然伸びないな～。ちゃんとご飯食べってか？」

バッグから飛び出した時の身長は5歳くらいだったけど、地面に降り立った時にはニョキニョキと身長が伸び始めて、なのはさん位の身長になった。そんなアルフに「ちゃんと食べてるんだけど・・・」って嘆息。エリオ君はぐんぐん伸びるし、ルールーもリヴィも・・・。

（ルーちゃんも女の子らしいスタイルになってるし、リヴィちゃんなんてモデルさんみたいなってるし・・・）

同じ歳でこの差はいかがなものか、ってずっと悩んでる。エリオ君たちに背を向けて、自分の貧相な胸をペタッと触って、「なんでかな～？」って落ち込む。そんな私の肩に手を置いたアルフが「ま、そんなに落ち込むことないって。エリオだって、そんなの気にしないだろうし」そう耳打ちしてきた。

「えっ！？」

脳裏にチラッと浮かんでたのがエリオ君だって言い当てられたみたいで驚いた。アルフに振り向くと、アリシアさんと同じくらいにニヤニヤしていて、フェイトさんだけが「どうしたの？」って首を傾げた。

「いやさ？　キャロがスタイ――」

「あああああああああ！！」

エリオ君が居る中でそれだけは。必死に大きな声を出しながらアルフの口を押える。という、出だしから疲れちゃうことばかりだったけど、なんとかアリシアさんの運転するレンタカーに乗り込んで、ピクニックする場所のプレアの丘を目指す。

「そう言えばさ。ルーテシアとリヴィア、7月にミッドに来るんだよね？」

「あの子たちもインターミドルに出るって話だったっけ」

ハンドルを握るアリシアさんがそう言うと、後部座席に座る私とエリオ君の間に座るフェイトさんも続いた。

「うん。ちょっと前に、セコンドをお願いされて・・・。私はルーちゃんのセコンドを」

「僕はリヴィのセコンドをすることになってます」

インターミドル期間中はシャルさんのお家で寝泊りするみたいで、今から楽しみだって言ってたのを思い返してると、アルフが「エリオとキャロは出ないのかい？　２人なら結構いいとこまで行くんじゃないかい？」って聞いてきた。私とエリオ君は顔を見合わせて、小さく頷き合った。

「フォルセティが出たらちょっと考えたけど・・・。知り合いがいないとやる気が・・・」

「私はそもそもあんまり興味なくて。下手するとヴィヴィオにも負けちゃいそうだし」

この前、ヴィヴィオ達チームナカジマの練習映像がルーちゃんから送られてきたけど、その強さにビックリしちゃった。詰められたら何も出来ずにＫＯされるイメージしかない。でもエリオ君とフォルセティの全力試合はちょっと見てみたいかもって思う。

そんなインターミドルの話や、他にもお互いの近況報告をしてると、「お、見えてきたぞ！」アルフが窓から身を乗り出してそう言った。私たちが今日ピクニックするプレアの丘は、なだらかな丘が続く場所で、近くには山もあるからハイキングに移行できるし、加えて川もあるから釣りも出来る、休日を過ごすには１番のロケーションだ。

「アルフ。アレは持ってくれた？」

「おう、バッチリ！」

アルフが隠れてたスポーツバッグとは別、アリシアさんが初めから持ってたスポーツバッグをトランクから出した。アルフは自分の肩に提げて、「ほら、行くぞー」って私とエリオ君の背中を押した。

「よし。行こうか！」

「「「「おおー！」」」」

フェイトさんの言葉の私たちは拳を空に向かって突き上げた。他にもピクニックに来てる人たちが居て、「こんにちは～」挨拶を交わしながら人気の少ない場所を歩く。そしてたどり着いた小高い丘の大きな樹の下で、エリオ君のリュックから取り出したレジャーシートを広げる。

「アリシア。シートが飛ばないように重石になる石を拾うの手伝って」

「オッケー♪」

「キャロはバスケット、エリオは水筒を置いておこうか。アルフはバッグから色々出しておいて」

「「はい！」」「あいよー！」

シートを押さえるための石を探しに行くフェイトさんとアリシアさんを見送りながら私は持ってたバスケットをシートの上に置いて、エリオ君も水筒３本を置いた。アルフもバッグを降ろして、そこか

らラケットと羽根、それにボールを取り出した。

「キャロが作ってくれた昼ご飯を美味しく食べるために、スポーツで腹ごしらえだ」

そう言ってアルフは私とエリオ君にラケットを手渡して、アルフもラケットを軽く素振り。

「ただいまー」

「あ、最初はバドミントンからなんだね。よし。私もラケット～っと！」

フェイトさんとアリシアさんは拾ってきた拳大の石をシートの四隅を置いて、残り2つのラケットを手にした。私たちは少し離れたところで円になるように並んで、「いっくよー！」最初はアリシアさんで、パシン！と羽根を打った。

「あ、私いきます！　えーい！」

私が打った羽根はフェイトさんのところへ向かって、「さ、エリオ！」君のところに打った。エリオ君は「はい！　アルフ！」のところに打って、アルフからアリシアさん、そして私の順が3周くらいした後、アリシアさんは「おらぁ！」突然フルスイングで羽根を打った。

「うわぁ！？」

それでも反応できたエリオ君は、高速で飛んできた羽根を打ち返した。打ち上げられた羽根はアルフのところに向かって落下。そんなアルフもニヤニヤとラケットを振りかぶった。私だけじゃなくてフェイトさんもエリオ君も察したはず。アルフも全力で打ってくるって。

「いくよ！」

「うえええ！？　私！？　来なくていいよ！」

アルフが私を見たからラケットを両手持ちして震えながら待っていると、アルフは落ちてきた羽根を「エリオ！」君に打ち込んだ。でも今度は心構えがしっかりしてたから「お返しです！」フルスイングで、アリシアさんに向かって打った。

「ひゃうわっ！？」

「おわふ！」

アリシアさんが適当に振ったラケットは羽根をアルフの方に打ち返して、アルフはしゃがむことで避けた。フェイトさんが「はーい。はしゃぎ過ぎはダメだよ～」パンパンと手を叩いて、アリシアさんとアルフにニッコリ。

「「はい」」

それからは普通にバドミントン（フェイトさん達が子供の暮らして

た国だとそんな名前みたい）などでお腹を減らして・・・。

「どうぞ召し上がれ！」

「「おお！」」

「わぁ、美味しそう！　頑張ってくれたんだね、キャロ！　ありがとう！」

ちょうどお昼時になったことで、バスケットからランチボックスを取り出して蓋を開ける。アリシアさんとアルフはランチボックスに顔を近付けて歓声を、フェイトさんは私の頭を撫でて褒めてくれた。

「えへへ♪　喜んでもらいたくて張り切っちゃいました！」

みんなで手を合わせて「いただきます！」をして、フェイトさん達が思い思いに料理を手に取ったり割り箸で掴み上げたりして食べるのを緊張しながら見守る。

「「美味しいぃぃぃ～～～～～！！」」

「うん、本当に美味しい！」

わざわざ立ち上がってから叫ぶアリシアさんとアルフに驚いちゃったけど、続いたフェイトさんからの感想で緊張がようやく解けて、エリオ君からも改めて「キャロ、すごく美味しいよ！」そんな感想を貰って、心底ホッとした。私も割り箸を手に卵焼きから食べ始め

た。

「「「「ごちそうさまでした！」」」」

「お粗末様でした♪」

楽しいお喋りをしながらのお昼ご飯を終えて、休憩を兼ねてゴロゴロする。私はフェイトさんの膝枕で横になって、エリオ君はアリシアさんの、アルフはフェイトさんの肩を揉んだり、交代でアリシアさんがエリオ君の肩を揉んだり、私とフェイトさんでアルフをブラッシングしたり、穏やかな時間を過ごした。

「さて。次の予定はどうだったっけ？」

「あ、ちょっと辺りをぐるっと見て歩こうかと」

アリシアさんにそう答えて、車に水筒以外の荷物を置いてから散歩コースに入る。春から夏へ移る間に吹く風や、レンガで舗装された道の両側に咲く花の香りが心地いい。

「良いところだね、プレアの丘って」

「うん。家族でゆったり過ごすにはうってつけかも」

「でも狼のあたしにとっちゃ、ちょいと花の香りが強すぎだな。いや良いところなのは同感だけど」

「あ、ごめんね、アルフ。マスクとかあればいいんだけど・・・」

嗅覚が鋭いアルフにはちょっと辛いかも。エリオ君と一緒にしょんぼりしてると、アルフは豪快に笑いながら「あ、いやいや。サプライズのために黙ってたのはこっちだしな！」って私とエリオ君の頭を撫でた。それでホッとした私たちは、軽やかな足取りで沢の方に向かったんだけど・・・。

「「「「「っ！！？」」」」」

川のせせらぎと風で揺れる葉音だけの沢。その川辺に目を疑うような、この場で居ないはずの人が居たから、反射的に木の幹の裏に隠れちゃった。

「族長さん・・・！？」「僕のオリジナル・・・！？」

エリオ君と声が重なって、「え？」って顔を見合わせる。私の目にはル・ルシエ一族の族長さんが映ってる。でもエリオ君は今、僕のオリジナルって漏らした。エリオ君は、フェイトさんやヴィヴィオ、フォルセティと同じ、"プロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅ"で生み出されたクローンだって聞いてるけど・・・。

「エリオ、キャロ。２人それぞれ別の人が見えてるんだよね・・・？」

フェイトさんの震える声での確認に、私たちは同じように震える声で「はい」頷き返した。フェイトさんとアリシアさんとアルフも顔を見合わせてから、自分たちがどのように見えてるかを口にした。

「リニス」「プレシア」「酢鯖寿司」

「「「「「・・・え？」」」」」

フェイトさんとアルフからは、以前聞いたことのある名前が出てきたけど、アリシアさんは今なんて言ったんだろう。アリシアさんが「だって、日本で食べた時、あまりの酸っぱさで戻しちゃったじゃん！　あれ、結構トラウマだったの！」って大きな声を出した。

「ちょっ、アリシア！」

「声がデカいよ！」

「もがもが！」

フェイトさんとアルフがアリシアさんの口を押えて上で私たちは正体不明の人を見る。と、「目が合った！」ことで、フェイトさんとアリシアさんとアルフがバッと飛び出した。

「時空管理局執務官、フェイト・Ｔ・ハラオウンです」

「同じく、執務官補のアリシア・Ｔ・ハラオウンです」

「「少しお話を伺ってもいいですか？」」

名前と管理局員を示す局員ＩＤをモニターに展開して見せたフェイ

トさん達。私とエリオ君はアルフと一緒に２人の側へ移動して、同じように局員ＩＤを提示しようとしたとき、正体不明の人が「結界！？」を展開した。正体不明の人を覆うかなり大きな四角柱のものと、私たちを覆う半球のものだ。

「すまないけど、今仕事中でね。局員さん達には申し訳ないけど少しその場に居てほしい」

「今すぐ結界を解除してください！　公務執行妨害ですよ！」

「あと、変な魔法も解除するように！　私たちがあなたを上手く認識できていないのは、幻術か特別な変身魔法を使っているからでしょ！」

フェイトさんとアリシアさんの言葉を聞き流してる正体不明の人は、「まあまあ。危害は加えないので、大人しくしていてください」って言いながら、両腕に炎のような真っ赤な魔力を付加した。そして「とりゃあああああ！」叫びながら地面に両拳を打ち込んだ。結界のおかげで爆発音や地面に破片が外に漏れないけど、土煙の所為で正体不明の人の姿が見えなくなった。

「アルフ！　バリアブレイク！」

「あいよ！　ひっさびさの魔法！　いくよ！」

アルフはブレイク系魔法が得意ということで、魔法を発動した両拳で結界を「おらおらおらぁっ！」って殴り続けるけど、かなり強固

みたいでヒビ1つ入らない。

「なんだいこの結界！　全くと言っていいほど魔法の効果が生まれないじゃないかい！」

「待って、アルフ。ありがと。フェイト」

「うんっ。アルフ、エリオ、キャロ、防護服を着用した後、ちょっと地面に伏せてて。私とアリシアでこじ開けてみる」

「バルディッシュ！　ザンバーフォーム！」

「フォーチュンドロップ、ハリセンスマッシュでいくよ！」

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「「「「セーットアーップ！」」」」

デバイスを起動して防護服を着用すれば、アリシアさんとフェイトさんの魔法を受けても重傷にはならない。準備が整ったところで、アリシアさんが"ハリセンスマッシュ"を振りかぶった。

「私が少しでも穴を空けるから、フェイトのザンバーで一気に斬り開いて！」

「判った！」

「いくよ！　スマァァーーーッシュ！！」

"ハリセンスマッシュ"が結界の内面にヒット。ガキン！と甲高い音を立てて、結界に穴が・・・開かなかった。それどころか「うぁ！」アリシアさんが弾き飛ばされた。アルフとエリオ君が抱き留めたから転倒することはなかったけど・・・。

「待って、フェイト。コレ、かなりヤバいやつだ。下手に攻撃しない方が良いと思う・・・悔しいけど」

「・・・判った」

アリシアさんとフェイトさんがデバイスを待機モードに戻した直後、正体不明の人の結界内がボッと炎に包まれた。そして炎が消えると、そこにはやっぱり族長の姿をしたままのあの人が立っていた。

「何を持っているんですか？」

正体不明の人の手には剣と斧があって、それから「魔力が・・・」溢れ出してる。フェイトさんの問い掛けにその人は「すごい魔力を感じるでしょ？　コレが欲しかったんだ」って答えた。

「・・・なんのために？」

「んー・・・。我らT・C・。王の御身のために、ってやつ」

「Ｔ・Ｃ・？　それは誰かの名前？　それとも組織の名前？」

「あー、それは答えてもいいって言われてるから答えるよ。それは組織名。ちょーっとの間、この次元世界で活動するから、出来ればあんまり関わらないで」

正体不明の人はフェイトさんとアリシアさんの質問にそこまで答えると自分だけの結界を解除して、「そっちの結界は１０秒くらいで消えるから安心してね。そんじゃ！」と告げてから音もなくすぅっと消えた。

後日。プレアの丘の地下深くに広大な遺跡があったことが調査で判明。年代は数千年前のものらしくて、犯罪者に襲撃されたこと、未発見だった文明が見つかったことの、２つの意味で管理世界を賑わせた。

Ｓａｇａ６－Ｂ遭遇～Ｈｕｃｋｅｂｅｉｎ　１～

自称フッケバイン一家（ファミリー）。その存在は１０年も前から確認されており、数々の殺人や強盗などの罪を犯し続ける非道な犯罪集団として広域指名手配されている。管理局が現在確認しているフッケバイン関連での情報は以下の通りとなっている。

・フッケバインのメンバーは体のどこかに羽のような刺青をしており、ｓのことからメンバーの凶暴・凶悪性などから通称"凶鳥"とも称されている。

・次元間航行も可能とする航空艦船、飛翔戦艇"フッケバイン"を本拠地として移動し続けているため、その足取りを掴むことが困難である。さらに管理世界間の政治的理由や条約、フッケバインと取引をしている管理外世界との軋轢などの事情、フッケバインの戦力などが理由となり逮捕を難しくしている。

・飛翔戦艇"フッケバイン"は、現行の最新鋭管理局艦船をも凌駕する性能を誇り、管理局艦船に搭載される兵装の中でも屈指の殲滅力を有する"アルカンシェル"すらも防ぐことが可能な防御力を有する。

・古代ベルカ戦乱時代にて存在していたエクリプスウイルスなるものに、フッケバインのメンバーは感染している。

・エクリプスウイルスの感染者は、感染→発症→適合→病化という

プロセスを辿る。病化とはすなわち肉体の兵器化を指す。

・ディバイダーと呼ばれる質量兵器を所有している。ディバイダーが稼働中、感染者の周囲にはＡＭＦに似たような領域が出来、魔力結合分断によって魔法効果を無力化することが出来る。それゆえに魔導殺しと称される。

・適合以降の感染者は、個人差はあるが肉体が損傷・欠損したとしても元通りに修復・再生されるという症状が出る。ウイルスが感染者――宿主を何としても生き残らせるために肉体を変異、兵器化させた副次効果とされる。

・感染者は高速再生や硬質化など、それぞれの病化特性を有する。

・病化の傾向によっては感染者は一般的な攻撃に対しては不死身となる。

・感染者を殺害する手段は現状では判明しておらず、脳か心臓を物理的に破壊すればいいのでは？という仮説しかない

・現状では感染者を治す術はない。

そんなフッケバインは今、"フッケバイン"で第７管理外世界ダーハへとやって来ていた。ダーハの文明レベルはさほど高くなく、農業・林業・漁業、牧畜などで暮らす人々の世界である。魔法の文化はあるが、第１世界ミッドチルダを始めとした先進世界には格段に後れを取っている。そんなダーハやって来たのには理由があった。

少し時間を遡って半日前。
"フッケバイン"の居住区の一画、壺や絵画などの調度品が飾られたリビングルームに、1人の幼女がトテトテと入ってきた。フッケバインのメンバーの証である羽根の刺青は、エプロンのポケットに刺繍として描かれている。

「おや、そんなに慌ててどうしました、ステラ？」

幼女をステラと呼んだ青年に、ステラは手振り身振りで何かを伝えようとする。相槌を打っていた青年は「そうですか」と1つ頷いた後、リビングのソファで寛いでいる少女の方を見て、「アル、アルナージ、ちょっと・・・」と呆れた声色で名前を口にした。

「んぁ？　んだよ、フォルティス。この肉はあたしんだ、やんねぇぞ」

少女アルナージは2つの骨付き肉を両手に持って交互に食べていた。彼女は青年フォルティスとステラの視線を受けて、持っていた肉や脚の短いテーブルの上に載っている料理を両腕で囲おうとした。

「それです、アル。ステラが言うには残りの食料が心許なく、そろそろ補給が必要そうだと」

「お前が食い過ぎなんだよアホ」

「ヴェイロン、あなたもお酒を飲み過ぎです」

「ほらー！　ヴェイ兄だって飲みっぱなしじゃん！　あたしだけが悪いわけじゃねぇ！」

「お前よりかはマシだ」

テーブルを挟んだもう1脚のソファに座って缶酒を呷るガラの悪い男ヴェイロンに、アルナージも言い返した。そんな彼らの様子を部屋の片隅でのんびりワインを嗜んでいた褐色肌の女性が「近くに補給できる世界はあるのか？」と尋ねた。

「ええ。第7管理外世界ダーハが近くにあります。魔法文化はありますが文明レベルは高くないので、こちらに損害はまず出ないでしょう。が、最も文明が栄えているネツァッハ首長国は人語を解すドラゴンが統治しているそうですよ。その強さもなかなかのものだとか。何年か前に管理局が管理世界入りを進言したそうですが、それを断ったことで今なお管理外世界の1つですね」

「ドラゴン？　そいつはまた殺し甲斐がありそうじゃねぇか。最近は雑魚ばかりしか殺ってねぇからな、そろそろ楽しめる殺しがしたかったんだ」

「よせ、ヴェイ。わざわざケンカを売る必要はない」

「サイファーの言う通りですよ。僕らが殺しをするのは依頼や報酬があるとき、武器を向けられたとき、僕らの目的の障害となるとき、僕ら感染者が生きるのに必要なとき、そうでしたよね？　まぁ強奪

の邪魔をする住民くらいなら殺しても構いませんが」

女性サイファーとフォルティスから窘められたヴェイロンは舌打ちし、「わぁってる。で？　誰が奪いに行くんだ？」と新しい缶のプルタブを開け、ぐいっと酒を呷った。

「そうですね～。最近、殺戮衝動が辛いという人はいますか？　エクリプスウイルスに感染している以上、殺戮衝動からは逃れられませんからね」

フォルティスの口から出た殺戮衝動。それは管理局もまだ掴んでいない情報の1つだ。エクリプスウイルスに感染すると、感染者は肉体的・精神的な苦痛を伴うようになる。まともな精神と生命を正気に保つためには、人を殺し続けるしかないという副作用がある。フッケバインが殺人を行っている理由がソレだった。

「俺はこの前、ケンカを売ってきた馬鹿どもを殺った」

「あたしもナンパ達が鬱陶しかったからシメた」

「僕もこの前の食料調達で結構殺しましたしね」

「私もフォルティスと共に斬った」

ヴェイロン、アルナージ、フォルティス、サイファーと続き、フッケバイン最年少のステラは手振りで殺戮衝動に陥っていないことを伝えた。今すぐにでも殺人を行わないといけないレベルのメンバー

は居らず、誰が強奪に行くかを決める方法は話し合いへ・・・・。

「そういやさ、ビル兄は？　いつもの筋トレ中？」

アルナージが誰にとも言わずに聞くと、「ええ、確か。ドゥビルはそう言えば最近、艦を降りていないですし、少しお願いしてみましょう」とフォルティスが通信を開く。

『どうした？』

空間モニターに映し出されたのは筋骨隆々とした半裸の男ドゥビル。フォルティスは彼に殺戮衝動が起きていないかを尋ねると、『今のところは問題はない』とドゥビルは答え、そして突然の問い掛けに疑問を持ち、何故そんな質問をしたのかと聞き返した。

「アルとヴェイロンが食料やお酒を消費しすぎたので、その補給を誰に頼もうかという話で」

『そうか。なら俺が行こう』

「助かります。・・・ヴェイロン、サイファー。君たち2人もお願いします」

「別に文句はねぇけど、なんで原因のアルが残るんだよ」

「アルのディバイダーは派手ですからね。下手に暴れて増援を呼ばれ、時間を掛けるのもバカバカしいですから」

「そういうわけで！　ヴェイ兄、ビル兄、サイ姉！　よろしく！」

アルナージの陽気な態度にヴェイロンは「チッ、しゃあねぇ」と頭をガシガシ掻いて、サイファーは「フッ」と小さく笑い、ドゥビルは無言のままで小さく頷いた。

「では僕はこの事をカレンに伝えておきますので、３人は準備を済ませておいでください。ステラは艦をダーハへ進ませてください。カレンも、食料調達となれば艦の移動も許してくれるでしょう」

フォルティスに敬礼してリビングを飛び出していくステラに続いて、ヴェイロンとサイファーもリビングを後にし、ドゥビルも通信を切った。残されたアルナージは食事を続け、その様子に苦笑いするフォルティスは、今は別行動中のカレンというメンバーに通信を繋げ始めた。

『はいはーい！　一家（みんな）のお姉ちゃん、フッケバイン一家首領カレン・フッケバインです！』

モニターに映るのは露出の激しい若い女性カレン・フッケバイン。彼女が言っているようにフッケバイン一家のリーダーである。カレンの背後にはさらに４人が居り、何やら話し合っている様子だ。

「おお！　ライ兄、カイ兄、グラン兄、ロン姉も一緒なのか！　おーい！」

アルナージがカレンの後ろの４人に手を振ると、４人が反応するより先にカレンが『あれー？　アル～？　お姉ちゃんへの挨拶は～？』と、ニコニコと笑顔を浮かべた。

「お、おう・・・。カレン姉、ちょっとぶり！」

『はい、よく出来ました♪　ライカン、カイロン、ロンシャン、グランダム！　挨拶！』

『『カレン姉さん。そんな昨日今日会ったばかりの関係じゃないんだから、きっちりとした挨拶なんて要らないんじゃないか？』』

声がシンクロしたのはライカン、カイロンの２０代後半くらいの双子兄弟。兄ライカンは金髪ロングヘア、真っ白なシャツとスーツ姿。フッケバインの刺青は右手の甲。弟カイロンはロングの金髪をポニーテールにしていて、サメの歯が描かれた防塵マスク、真っ赤なシャツとスーツ姿。刺青は左手の甲。

『まあまあ。ちょっとぶり、アル。相変わらず暴飲暴食な生活してるの？　女の子なんだからちょっとは気を付けなさいよ？』

妹扱いしているアルナージにそう注意したのは、２０代前半くらいの女性ロンシャン。キャミソール、ショール、ロングスカートという格好をし、刺青は胸元にある。アルナージはロンシャンの言葉に対して『いいじゃねぇか、あたしゃ太らないんだしさ！』と細い腹をパンパンと叩いた。

『・・・帰ったらその腹を摘まむ』

普段からスタイルに気を付けているロンシャンにとっては許せないセリフだったことで、こめかみを若干ひくつかせた。

『おい！　そこにヴェイロンは居るか！？　あの野郎、俺の部屋から盗んで勝手に飲んだ秘蔵の酒をちゃんと調達し直しただろうな！　カレン達と一緒にこれから帰るから、調達してなかったらぶっ殺すって伝えとけ！』

挨拶ではなくヴェイロンへの怒りを爆発させるのは、ドゥビルと同じくらいに筋骨隆々とした３０代前半くらいの男グランダム。フッケバインの刺青が彫られたスキンヘッドにサングラス、インナーは着ずに龍が刺繍されたＴシャツ、虎が刺繍されたハーフパンツにサンダルというラフな恰好だ。

「お、おう・・・グラン兄、ヴェイ兄は今ちょっと出かける用意してんだけど・・・」

『かぁー！　出かけるってどこだよ！』

『グラン、ちょっと待って。出かけるってなに？　そもそも今回の通信はどういった理由？』

「それは僕から話します。実は・・・――」

食料の備蓄が少なくなってきたことで、最寄の管理外世界に赴いて

調達するために"フッケバイン"の移動および行動の許可をもらおうとしたことを伝えたフォルティス。カレンは『あはは！　そろそろそんな頃になると思ってたよ！』と大笑いした後、食料調達の許可を出した。

『私たちもダーハに向かうから、そっちで合流しようか！』

「判りました。ヴェイ達に伝えておきます」

『あぁ、あとネツァッハ首長のドラゴンが出張ってくるような面倒を起こさないように言っておいて。管理外世界だからね。いずれ取引相手になるかもしれないしね』

通信はそれで終わり、フォルティスは「さて。僕はステラの側に付きます。アルは食べかけを処理してください」とだけ告げ、リビングより出ていった。

・―・―・―・―・

第7管理外世界ダーハの地へと降り立ったヴェイロン、サイファー、ドゥビルは、"フッケバイン"から持ち出した移動用のバイクを駆り、首都アガダーの側の平原にやって来た。城壁都市であるが、ヴェイロン達であれば守衛を殺して無理やり入ることが出来、城壁に穴を空けることも飛び越えることも可能だ。

「で？　どうする？　適当に殺し回って奪うか？」

「いや。この文明レベルならば、馬車で移動する隊商が街と街の間を移動するだろう。街に入る前に潰してしまえばいい」

「馬はどうする？　俺は乗れんぞ」

「馬肉はアルが喜ぶだろう。殺して持って帰ろう」

「かったりぃな。・・・ま、姉貴が面倒を起こすなって言ってんだから従うけどよ」

バイクのシートに跨ったまま、首都と他の街を繋げる街道を双眼鏡で見張る。そう時間も空けずに大きな荷台を持つ馬車３台が、首都に向かって駆けているのを見つけ、バイクを走らせた。

馬車の御者台に座って馬の手綱を握っている男は、見えてきた首都にホッと一息ついた。

守銭奴であるため護衛を雇う出費を嫌がり、自分が護衛を兼任すればいいと騎士に弟子入りしたこともある彼だったが、実戦の経験がないため緊張しっぱなしだった。しかし盗賊に襲われることなく無事に首都の目の前にまでやって来られたことで、気が緩んだ。

「ん？・・・おい、誰だ、道の真ん中で突っ立って。文句言ってやらねぇとな」

手綱を引いて馬の足を止めると、子飼いの弟子が操る後ろの馬車も止まった。弟子たちが「どうしました！？」と男に駆け寄ってきた。

男は剣を携えると弟子たちも剣を携えて、道の真ん中に突っ立っている３人、ヴェイロン、サイファー、ドゥビルの元に「おい、邪魔

だ！　さっさと退け！　さもなくば斬るぞ」と文句を言いに行った。

「はっ！　やってみろクソカス！」

ヴェイロンの右手に、"９２８"と刻印された刃の付いた上下二連の散弾銃が出現した。それこそが魔導師に対する絶対的なアドバンテージとなる"ディバイダー"と呼ばれる武装だ。

突然出現した武器に驚く男と弟子たちだったが、銃という物を見たことがないため刃にだけ注意を向けて、「へ、へへ！　そんな変な剣で戦えると？」と剣を構えた。

「言ってろ」

――バードショット・シェル――

ヴェイロンは銃口を男たちに向けて"ディバイダー９２８"のトリガーを引くと、銃身部の周囲に生み出したエネルギー弾を散弾として発射。男たちは自分たちがどんな攻撃を受けたかも理解できず、バラバラに吹っ飛んで絶命した。それと同時、銃声と爆発音と衝撃によって馬たちが興奮状態になって一斉に走り出した。

「チッ！」

「待て、ヴェイ。お前のディバイダーでは食べる部分も粉々になる。私が処理しよう」

サイファーが携えているのは一振りの刀。鞘から解き放たれた刀に

は"９４４"という刻印が刻まれていることから、ソレも"ディバイダー"であることが判る。サイファーは突進してくる荒れ狂う馬を真っすぐ見据え、"ディバイダー９４４"を一閃。馬は一瞬で４本の脚と首を切り落とされ、馬車はこの中で最も力のあるドゥビルが押し止めた。サイファーはさらに他の２頭も同じように処理し、２台の馬車もドゥビルが止めた。

「中身は・・・ほう、肉と野菜と魚介類か。わざわざ氷結魔法で鮮度を保つようにしているな。ヴェイ、ディバイダー起動中に触れるなよ」

「わぁってる。・・・だがこれだけじゃ足んねぇな。もうちょい殺るか」

男たちの死体はヴェイロンの散弾で消し飛ばして処理。馬の死骸は食用として荷台の御者台に乗せられた。ヴェイロン達はバイクで馬車を牽引して一度現場を離れた。そして"フッケバイン"から転送された森の中に荷台を置き・・・

『では馬車をこちらに転送します。引き続き食糧調達に励んでください』

荷台の転送を見届けたことで再び街道の見張りに戻ったヴェイロン達は、そこからさらに２つの隊商を襲撃し、計４８人を殺害。奪った馬車は１７台。食料も十分調達できたことで、ヴェイロン達も「次で最後にするか」と考えていた。その最後の標的となる３台の馬車が首都に向かっているのを発見。早速バイクを走らせ、隊商の行

く手に停車させた。

「な、何者だ貴様ら！」

「賊だ！　客人と荷を護れ！」

ヴェイロン達を轢かないように停車した先頭の馬車の御者台に座るのは男２人。身形の良い男はヴェイロン達の素性を問い質し、手綱を握っているもう１人は革製の鎧を着た男は、荷台の幕に向かって叫んだ。すると荷台から武装した男たちがわらわらと降りてきて、ヴェイロン達と相対した。

「わけのわかんねぇ格好しやがって！」

「どこの国のモンだ、あ〝あ〝っ！？」

「痛い目に遭う前に道を開けろ！」

「聞いてんのかコラ！」

血の気の多い隊商の護衛を務める傭兵たちは、涼しい顔で無視をしているヴェイロン達の態度に「もういい！　殺せ！」と武器を構えた。対するヴェイロンも〝ディバイダー９２８〟を、サイファーも〝ディバイダー９４４〟を、そしてドゥビルも片手斧の〝ディバイダー６９５〟を構えた。

「待ってください！」

ヴェイロンが今まさにトリガーを引くかどうかというところで、女性の声で静止が掛かった。声の出どころは2台目の荷台の中。3台の御者台に座る馬車の持ち主たちや傭兵たちがそちらに目を向け、ヴェイロン達も攻撃することなくその様子を見ている。

「いけません、神官様方！　あの者ども、妙な服装や武器を持っております！」

「問題ありません」

「我らヴァラール教の主、それに・・・」

「ネツァッハ首長国の竜王様のご加護が守ってくれます」

荷台の後ろから聞こえてくる女性神官2人、男性神官1人の"主"や"竜王"という単語に、ヴェイロンは「能天気すぎんだろ」と鼻で笑い、サイファーは呆れの溜息、ドゥビルは「くだらん」と断じた。

「私たちが彼らを抑え込みますので、皆さんは先に首都へ向かってください」

「しかし！　我々傭兵は、積み荷だけでなく神官様たちの護衛も仕事として・・・！」

「私たちは、相乗りをお願いした身。どうかお気になさらず」

「傭兵団の皆さんは本来のお仕事に戻ってください。首都はもう目と鼻の先なので、ここからは歩いていきます」

「ですが！　神官様方を置き去りにするなんて！　傭兵である前にヴァラール教の信者としても出来ません！」

そんな問答にとうとうしびれを切らしたヴェイロンは「おい！」と怒鳴った。それで相対している傭兵たちはバッと武器を構えなおした。再び一触即発になるが、「ごめんなさい。わたし達３人の方が、皆さんより強いので」と、傭兵団にとっては身も蓋もないことを言った女性神官の言葉を詰まらせる傭兵のリーダー。

「高神官様の神の御業ですね。・・・判りました。首都でまたお会いしましょう。お前ら、荷台に乗れ！　馬車の護衛に戻るぞ」

リーダーにそう言われては傭兵たちも黙って従うしかなく、武器を下ろして踵を返した。もちろん、それを黙って見逃すほど優しくはないヴェイロンは「積み荷と命は置いてけ」と"ディバイダー９２８"のトリガーを引こうとした。

――閃駆――

その瞬間、ヴェイロンの目の前に祭服を身に纏った女性神官が現れた。そして鞘に収められたままの刀を振り上げ、"ディバイダー９２８"を空に向かって弾き飛ばした。

「んだあ！？」

「でりゃあああ！」

女性神官は振り上げていた鞘をヴェイロンに向かって全力で降り下ろし、「ぐごぉ！？」地面に叩き伏せた。とここで、サイファーとドゥビルも女性神官へ"ディバイダー"を振るおうとしたが・・・。

――鉄兵風馳――

額から翠色に輝く結晶角を生やした女性がドゥビルの前に出現し、暴風を纏わせた拳による拳打、「風塵拳殴！！」を彼の腹に打ち込んで「ぐはっ！？」十数mと殴り飛ばした。

――屈服させよ汝の恐怖（コード・イロウエル）――

「な〝っ！？」

遠くに離れたままの男性神官がサイファーに左の人差し指を向けた直後、彼女の足元にサファイアブルーの円陣が描かれた。円から白銀のレンガで組まれた拳が突き出してきて、サイファーを空高くにまで殴り飛ばした。

「さあ！　今のうちに！」

男性神官の合図を受けて3台の馬車は駆け出し、御者台の男たちや傭兵団が「首都で待っています！　ご武運を！」と、片方の手の甲

に十字を切ってから祈るように指を組んだ。馬車を見送った神官たちは、咳き込みながらも立ち上がろうとしているヴェイロン、空から落ちてきてはいたがしっかり着地したサイファー、こちらに向かって歩いて戻って来ているドゥビルをそれぞれ一瞥。

「数字が刻印された武器・・・。あなた達、フッケバイン一家ってことでいいんだよね？」

鞘の先端をヴェイロンに突き付けた女性神官がそう尋ねると、ヴェイロンは「てめぇ、この世界の人間じゃねぇな・・・！」と睨みつけた。その問いに女性神官が答えるより早く、サイファーが「その顔、見覚えがあるぞ」と言い、ドゥビルも「俺もだ。・・・管理局の人間だな」と続いた。

「時空管理局本局、脅威対策室直属特務零課――特騎隊隊長、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト」

「同じく、副隊長ルシリオン・セインテスト」

「同じく！　ミヤビ・キジョウ！」

祭服から騎士甲冑へと変身した神官、イリスとルシリオンとミヤビ。管理局最強とされる剣士イリスと相見えたサイファーは嬉しそうに「ほう！」とほくそ笑み、ヴェイロンは「おもしれぇ！」と歓喜の声を上げ、ドゥビルは「ここは管理外世界だぞ」と疑問を口にし、それぞれ"ディバイダー"を構えた。

Ｓａｇａ６－Ｃ遭遇～Ｈｕｃｋｅｂｅｉｎ　２～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

・―・―・初っ端から回想な～のだ・―・―・

「はーい！　みんな注目～！」

特務零課のオフィスに居る部下、というより仲間たちにわたしは大声で伝える。部隊長デスクの前で立つわたしは、「脅威対策室より新しい指令が下ったので伝えまーす！」と告げ、それぞれのデスクにモニターを展開させる。

「Ｔ・Ｃ・か」

「そう。最近、管理・管理外問わずに出現するようになった盗賊集団」

モニターに表示させているのは、部隊長デスクの側に置かれてる副隊長デスクに着くルシルの言うように"Ｔ・Ｃ・"と名乗ってる組織のメンバーの静止画。仲間たちは口々に「誰に見える？」って聞き合ってる。

「もう判ってると思うけど、Ｔ・Ｃ・は妙な幻術魔法か変身魔法、もしくはスキルを駆使して、視覚やカメラを騙してる」

連中が身バレしないように発動してる魔法かスキルは、見てる人がトラウマを抱いてる人や物の姿に見せるというもの。今モニターに映ってるメンバーの姿は、わたしから見ればプラダマンテの姿をしてる。ルシルやルミナ達みんなはどんな風に見えてるんだろう・・・。

「連中が盗んでいるのは基本的に高魔力を宿した物品で、中にはロストロギアも含まれてる。さらに、魔導犯罪者のリンカーコアもついでと言わんばかりに奪い取って、魔導師としては再起不能にして、中には精神を破壊して傷害を負わせることもある。あと、高魔力を保有する動物も標的になってるようで、保護指定を受けてる動物が被害に遭ってることで本局にクレームが入ってるみたい」

「魔導犯罪者については因果応報って感じでザマァだけど・・・」

「ロストロギアの奪取はいただけないですね」

「あと動物たちも。私は召喚騎士だから、そういう子たちがひどい目に遭うのは許せない」

ルミナとセラティナとクラリスの思いを聞き終えて、「で、連中の戦力だけど・・・」ニターの映像を切り替える。映し出すのはこれまでの"T・C・"と局員の交戦記録。

「これ、防御魔法？　それにしては魔法を弾いてる感じ」

「ＡＭＦのような魔力結合に干渉するような物には見えないですね」

セレスとミヤビがそこまで言ったところで、「魔術、神秘による無力化だな」って言ったルシルが大きく溜息を吐いた。魔術のアドバンテージを実体験してるルミナ達は「あぁ、それだ」って頷いた。

「そ。つまりT・C・を潰すことが出来るのは、次元世界広しといえどわたしたち特騎隊のみ。だから脅威対策室からお呼びがかかったわけ」

魔術は管理局の上層部や脅威対策室にしか出回ってない情報だ。神秘だとかそういう詳しいのは端折って、魔法や物理を基本的に完全に無力化できる特別な魔力を扱う、みたいな感じだ。

「えっと、T・C・の動向なんだけど、局をナメてるのか判りやすい動向で世界を渡り歩いてる」

次に表示するのは"T・C・"の出現した世界順。連中は第3管理世界ヴァイゼンから第68管理世界ヴィエルヴァキアまでのミッドを除く全管理世界で強奪行為をした後、第1管理外世界アラゴルンから第6管理外世界バルベラムにまで強奪を行ってる。

「うわ、ホント綺麗に順番通り」

「じゃあ次は第7管理外世界ダーハになるわけだな」

「いやいや。それより全管理世界で強奪食らったことにツッコミを入れないと！」

「うん。そうなる前に、特騎隊に対応するように指令を出せばいいのに」

「うーん、まぁそうだけど。ロストロギアも狙われてるっことで、機動四課がＴ・Ｃ・を追ってたんだけど、さっき観せたように全然相手にならなかったってことで、とうとうこっちに回ってきたの。それにＴ・Ｃ・は盗みもするし保護動物からリンカーコアも奪うけど、民間人や局員には危害を加えてないからね」

相手が悪すぎたってこともあるけど局の不甲斐なさも理由にあるから、セレスとルミナが嘆息した。わたしはそんな２人に対してそうフォローするけど、すぐに特騎隊に対応要請を出さなかったことには少しばかり不満がある。

「ダーハには測定不能量の魔力を宿す竜玉っていう物があるから、間違いなくＴ・Ｃ・は狙ってくる。ダーハが管理外世界で、何年か前に管理世界入りを断った経緯を持つ世界なのはみんなも知ってると思う。でも今回の一件で局に不干渉を伝えたダーハで一番の文明国ネツァッハ首長国のイツァムナ首長に、本局も何度か力を貸したいと打診し続けた結果・・・」

「ようやく叶ってダーハに入ることを許された、と。それで、何か条件を出されたか？　その浮かない顔を見れば判るぞ」

ルシルのその言葉にニヤニヤしながら、「えっと、国教の神官に変装して、首長国の国民に紛れて首都に入ってほしいみたい」って伝

える。次元世界を知るのは首長とその側近だけで、政府内にも国民にも知られてない話。だからいきなり首都や政府中枢に出現するような真似は出来ない。

「あ、それでね。ダーハにはわたしとルシルとミヤビの３人で向かうつもり。ルミナとセレスとクラリスは、次の第１０管理外世界コン・フォルツァに先行していてほしいの」

「１０？　８と９はいいの？」

「８と９の管理外世界には高魔力物品や動物なんかは無いから、たぶん現れないと思うの。でもコン・フォルツァには高魔力を有する動物が数種類確認されてるからね。それじゃ！　特務零課、出動！」

わたしの号令にみんなは一斉に立ち上がって「了解！」って敬礼した。

・―・―・お～わり・―・―・

イツァムナ首長の条件に沿ってダーハに来て、用意されてた神官の祭服に着替えて首都往きの隊商の馬車に相乗りさせてもらい、およそ半日ちょっと掛けて首都近くにまでやって来てみれば、"Ｔ・Ｃ・"以上にヤバい連中だって指名手配を受けてるフッケバイン一家と遭遇したわけだけど・・・。

「この濃い血の臭い。お前たち、この世界でどれだけの人を殺した？」

こっちの体が震えそうなほどに冷たい声色で問い質したルシルに向かって、ガラの悪そうな男が、ぺっ、と唾を吐いた。唾はルシルに届くことなく宙でボっと燃えた。

――舞い振るは汝の獄火（コード・サラヒエル）――

「ぐぼぁ！？」

「「っ！？」」

知覚する暇すら与えないようにガラの悪い男の背後に炎槍３本を展開して、反応される前に即座に発射。炎槍は男の心臓を避けるようにお腹を貫通して、地面に縫い留めた。魔術である以上は非殺傷なんて優しいものはなく、「ぐがあああああ！？」体内を焼かれる痛みで男は絶叫。

「ルシル。生命維持活動に必要そうな心臓や肺は燃やさないようにね」

「ヴェイ！」「ヴェイロン！」

男の名前はヴェイロンっていうらしくて、女剣士と半裸男がルシルに攻撃しようとしたから、わたしとミヤビも交戦開始。わたしも魔術師化して、"キルシュブリューテ"に炎を纏わせての直接斬撃、「炎牙月閃刃！」で女剣士の右腕を斬り飛ばして、ついでに半裸男の左脚を斬り飛ばす。

「「っ！？」」

「ミヤビ！」

「はいっ！　一応手加減はします！」

――風塵蹴波――

ミヤビは両脚に風を纏わせると、ゴツイ片手斧を支えにして倒れるのを避けた半裸男へと左脚での連続蹴りを打ち込んで、最後に右脚での回し蹴りで放った暴風で半裸男と女剣士を吹っ飛ばし、２人は地面に墜落した。

「て、てめぇら・・・！　こんなことしてタダで済むとおも――がっ！？」

ヴェイロンが何かを喋ろうとしたけど、ルシルが起動した"エヴェストルム"で彼の下あごを斬り飛ばしたから続けることは出来なかった。

「以後の言葉と態度には気を付けろ、フッケバイン。殺さないように気を付けてはいるが、何か間違って殺してしまうかもしれないからな」

「そ、それが公僕のセリフとは思えんな」

わたしが腕を斬り飛ばした女剣士と、ミヤビと一緒にボロボロにし

てやった半裸男は、その欠損した腕や脚、裂傷もすべて綺麗に再生させていた。

「（病化による肉体再生能力ね・・・）公僕ってね、あなた。公僕も人間なのよ。局員(みうち)だけでなく、何の罪もない民間人を殺されまくって怒らないわけないでしょうが」

「そうです！　仕事に私情を持ち込むのは厳禁ですけど、あなた達の度が過ぎた犯罪行為にはさすがに抑えられません！」

「そういうわけだ。俺個人としてはあまり偉そうなことは言えないが、お前たちを許すわけにはいかない。大人しく投降するよう促しはしない。これまで殺されてきた人の無念を晴らすため、最後まで抵抗してくれよ？」

珍しく殺気立ってるルシルと、怒りで拳を震わせてるミヤビ。わたしはかえって冷静にいられる。本来の任務である首長や"竜玉"の護衛も大事だけど、フッケバインの壊滅もまた重要だ。だから「そういうわけで、フッケバイン。今日で潰れてもらう」って"キルシュブリューテ"の剣先をヴェイロン達に向けた。

・―・―・―・―・

フッケバイン、特務零課、ともに管理外世界で遭遇することなど考えもしなかった。そしてそれは、イリスら零課にとっては僥倖でもあった。同じ局員という身内や、民間人を殺害している犯罪者集団を潰せる機会を得たことは。

「フッケバインを潰す、か。それは我々の本質を見た後でも同じことを言えるか？」

サイファーは右手に持つ刀を地面に突き刺し、左手に持つ鞘を放り投げて両手をフリーにすると、ベルカ語でケーニッヒと刻印された小さなナイフを手にし、左手の平に突き刺した。

≪Ｒｅａｃｔ≫

左手に飲み込まれていくナイフよりそんな音声が発せられると同時、サイファーを飲み込むようなエネルギーの奔流が空にまで噴き上がった。その奔流が治まると、サイファーの両手には黒い刀が握られていた。右手の刀には銃のシリンダーとトリガーがあるが、左手の短い刀にはそれはない。しかしともに複数本の両刃短剣が外に向かって伸びたナックルガードを有している。

「これがディバイダーの真の姿、リアクト形態。ディバイダー９４４ケーニッヒ・リアクテッド」

続いてドゥビルも、銃床とトリガー、グレネードランチャーサイズのシリンダーを有した両刃の片手斧型の"ディバイダー"を持ち上げ、その刃で左腕を斬った。

≪Ｒｅａｃｔ≫

彼もまた空へと昇り立つエネルギーの奔流に飲まれた。そして治ま

ると、半裸だったドゥビルの姿は一変していた。肌が青く変色し、髪は無造作に伸び、腕と上半身は頑強な鎧を纏い、片手斧は両手でなければ持てないほどに大きな戦斧へと変形していた。

「ディバイダー695ランゲ・リアクテッド」

サイファーの"ディバイダー"が二刀一対になったことにも、ドゥビルが変身したことにも大して驚きを見せないイリス達。最初に口を開いたのはルシリオンで、「ヴェイロン。お前にもリアクトの機会をやろう」と炎槍を解除した。

「・・・」

下あごがまだ再生し切っていない所為で睨むことしか出来ないヴェイロンに代わりサイファーが「それは無理だ。リアクターがない」と言った。イリス達の視線を受けたサイファーは、感染者がその真価を発揮するには"ディバイダー"と"リアクター"が必要であることを伝えた。

「割と重要そうな情報だけど、ここで話したってことはわたし達を生かして帰さないってことかな？」

「そういうことだ」

――短距離瞬間移動（ショートジャンプ）――

イリスの問いに答えると同時、その巨体や戦斧など何でもないとで

も言うようにドゥビルの姿が掻き消える。しかしそれでも慌てないイリス達。ドゥビルは一瞬でミヤビの背後を取り、戦斧を横薙ぎに払う。標的となったミヤビは振り向きざまに掲げた両腕で戦斧の刃をガードしたが、「ぅぐ！」その威力には踏ん張り切れず、今度は彼女が数十mと吹っ飛ばされた。

「あの女は俺に任せてもらおう」

一足飛びで追撃に入るドゥビルを、サイファーとヴェイロン、イリスとルシリオンは黙って見送った。サイファーは「余裕そうだな」とヴェイロンの側から少しずつ距離を取っていく。対するイリスも逆手持ちになるように鞘を具現化させて「だって余裕だし」とルシリオンから離れていく。剣士は剣士で勝敗を決する。言葉にせずともイリスとサイファーは決めていた。

「フッ。管理局最強の剣士の実力、見せてもらおうか！」

「魔導殺しの真価とやら、見せてもらおうか！」

ある程度ヴェイロンとルシリオンから距離を取った瞬間、2人は同時に攻撃に出た。高速に振るわれる互いの必傷の剣戟。さらに別の方角からは、ミヤビとドゥビルの攻防による激突音が聞こえてきた。ルシリオンはその様子を黙って見守っている。

「どうなってんだ・・・！？　ディバイダーは稼働してんだぞ！分断だって機能してるはずだ！　なのにどうして、公僕にいいようにやられてんだ！」

ヴェイロンは混乱していた。エクリプスウイルスの感染によって得られた対魔導師へのアドバンテージ。そのおかげでこれまで楽に人を殺してこられた。何せ魔法もその他の攻撃も通用しない体、そして魔導師の防御魔法すら無意味と化す攻撃手段を手に入れたのだ。それだからこそ今、その魔導師を相手に防戦一方で、ただひたすら傷付けられているサイファーとドゥビルの姿に、ヴェイロンは初めて恐怖に似た感情を抱いた。

「ん？　ようやく喋られるようになったのか。ならば・・・」

――闇よ誘え汝の宵手（コード・カムエル）――

「あ゛っ！？　何してんだテメェ！」

「いちいち吠えるな、鬱陶しい。聴取は連行してからにするつもりだから、それまで大人しくしていろ」

自分の影から伸びてきたペラペラに薄い触手に拘束されたヴェイロンが怒鳴るが、触手は彼の口も塞ぐようにぐるぐる巻きにされたことで「むーむー！」と唸ることしか出来なくなった。

「そろそろうちの隊長と頼れる部下が、お前たちの仲間を完全に撃墜するぞ」

挑発するようにルシリオンはそう伝え、幼馴染であり所属する部隊の長、イリスを見た。サイファーはこれまで感じたこともないほど

の焦りを抱いていた。手にする二刀一対の黒刀は今日まで何十人という魔導師や騎士、何の力もない民間人を斬り殺してきた。そしてそれはイリスを相手にしても変わらずの結果だと信じて疑わなかった。

「（なんだんだ、この女の魔法は・・・・！）うおおおおお！」

すべての攻撃魔法を防ぐ障壁に、すべての防御魔法を無力化する"ディバイダー"。この2つがあれば負けはないと信じていたサイファーは、懸命にイリスの首を刎ねようと黒刀を振るう。イリスは左手に持つ鞘や小さなシールドを連続展開して防御して、サイファーの見せる一瞬の隙を狙って「ていや！」と"キルシュブリューテ"を一閃。

「なっ！？　ぐぅぅ・・・・！」

サイファーの右腕が斬り飛ばされて宙を舞うが、彼女はそれで動きを止めることなく左の黒刀を横に払ってイリスの胸を斬ろうとするが、振り上げられた鞘の一撃で空に向かって弾かれ、「砕けろ！」の声と共に繰り出された後ろ回し蹴りを受けたサイファーは、自分の内臓がいくつも潰れた感覚を得ながら蹴り飛ばされた。

「がはっ・・・・！（ディバイダーは稼働している。分断だって機能しているはず・・・・！　なのに！）なんなんだ・・・あの女は・・・・！？」

ドボドボと多量の血を吐くサイファーが苛立ちを吐き捨てている中

でも、斬り飛ばされた右腕や内臓が再生していく。それを間近で見たイリスは「すごいな～。事故や事件で体のどこかを欠損した人たちの力になればいいんだけど」と唸った。

「っく、くく、無理だな。我々のように選ばれなければ、ウィルスによる肉体の強制強化に耐え切れずに死ぬだけだ」

「そうらしいね。ま、あなた達のような人殺しを量産するわけにもいかないから、それは諦めよう。・・・さて、もうわたしには敵わないって理解したろうから、ちょっと話をしようか」

「ふざけるな。まだ私を殺してはいないぞ、公僕」

サイファーは地面に転がっている右腕に歩み寄ると、その手から黒刀を取り上げた。そして「これが全力だ」と再びエネルギーの奔流に飲まれた。わずかな時間で奔流は治まり、禍々しい籠手と上半身だけの鎧を装着したサイファーが姿を見せた。

「ソレは？」

「鎧装と呼ばれる完全戦闘形態だ。スピードはまぁ落ちるが、お前とスピード勝負をしても負けるだけだと解かっているからな。防御を固めてお前を斬る」

「そう・・・。あ、そうだ。最後の1つ聞いておきたいんだけど、あなた達って失血死ってする？　もしするなら気を付けて攻撃しないといけないし」

イリスがそう尋ねながら"キルシュブリューテ"を鞘に納める。サイファーは「判らん。経験がないからな」と鼻で笑った。これまで致死ダメージを受けた経験がないため、本当に判らなかった。

「そっか。じゃ、脳と心臓を潰さないようにだけ気を付けるよ」

――剣神モード――

固有スキル・絶対切断アプゾルーテ・フェヒターを発動したイリスは、"キルシュブリューテ"を持つ右手を横に向かって水平に上げ、そして反対の左側へと右腕を曲げた。右の肘窩が口の前にまで来たことで「飛刃」と漏らした口を見られず、その声も聞こえなかったサイファーは、「絶つ！！」と無防備に突っ込んだ。

「一閃」

イリスが横薙ぎに振るった"キルシュブリューテ"より放たれる剣閃。サイファーは念のためにとダラリと下げていた両腕の内、左腕を振り上げた。振り上げた短い黒刀が剣閃に触れると、スパッと何の抵抗できずに斬られた。

「は・・・？」

まずい。避けなければ。そう脳が判断する頃にはすでに手遅れ。絶対の自信を持っていた鎧装と一緒に腰が切断され、上半身と下半身が切り離された。

「所詮はエウリプスウィルスとディバイダーで強くなったと錯覚しただけか。よっわ」

フッケバイン一家に殺害された局員の中にはイリスの知人も居た。特別親しいわけではないが同じ剣を使う同僚ということで、何度か話をする程度の仲だった。その同僚を殺害されてイリスもまた怒りに燃えていた。だからこそ最後にせめてもの怒りの発散として、剣の腕を自負するサイファーに対して、弱い、と言い放った。

ミヤビとドゥビルの闘いもすでに決着がつきそうだった。鎧化によって圧倒的な防御力を得たドゥビルも、ヴェイロンやサイファーと同じように混乱を微かにだが抱いていた。

（この細い体に、どこにこんな力があるというのだ）

高速に振るわれる巨大な戦斧を軽やかに躱し、懐に入って右ローキックを打つミヤビ。その一撃でドゥビルの左脚がひしゃげ、彼の攻撃を中断させる。しかしその損傷も5秒とせずに再生され、ミヤビは「む。いい加減にしてほしいものです」と溜息を吐いた。

「俺の病化特性は高速再生。即死しない限り俺が負けることはない。うおおおおおおお！」

「遅すぎて退屈ですよ？」

「なに・・・っ！？」

戦斧を振り回すドゥビルと、その大きな刃を両手で白刃取りするミヤビ。ミヤビはその戦斧ごととドゥビルを持ち上げると、「でぇぇぇぇい！！」と彼を背中から地面に叩き付けた。僅かに呻くドゥビルだが、その防御力のおかげで痛みすら感じない。ミヤビは戦斧の先端を踏みつけ、「この刃で殺めた方たちに謝罪なさい」と言い放った。

――地顎挟刃――

ドゥビルの右腕を挟み込むようにして地面がワニの口状に隆起し、装甲に覆われた右腕をガギンと挟み、そのままブチッと噛み千切った。それでもドゥビルは涼しい表情を崩さずスッと立ち上がって、一瞬でミヤビより距離を取った。

「これ以上はいたずらに傷付くだけですよ？　投降してください」

「つまらん冗談だ。俺からディバイダーを離したからと言って勝ったつもりか？」

そうは言うドゥビルだが、自慢の甲冑が役に立たず、"ディバイダー"と魔力結合を分断するディバイド能力を以てしてもミヤビに確実なダメージを与えられない今、どうやってこの場を切り抜けようかと考えるばかりだ。

「勘違いをしているようですね。あなた達は初めから私たちを殺そうとしていました。ですが私たちは違います」

――風炎鬼降臨――

ミヤビの額から生える2つの水晶角の色が茶色から翠色と赤色の二色へと変化した。すると彼女は大地の束縛から解放されたと言わんばかりに軽やかにその場で小さくジャンプを始めた。先程までミヤビは地鬼という力を使っていた。機動力が恐ろしく落ちるが圧倒的な打撃力と防御力を得ることが出来る形態だ。その地鬼から純粋な攻撃力を底上げさせる炎鬼、圧倒的な機動力を得る風鬼の2つの形態へと変化した。

――鉄兵風馳――

ジャンプからの一直線の高速移動でドゥビルへと肉薄し、右手に炎を付加しての拳打、「紅蓮拳殴！」を彼の心臓付近に打ち込んだ。炎の拳は胸部装甲を一撃で穿ち、強靭な筋肉すらも穿った。その瞬間には炎は消えたがミヤビの手は心臓付近にまで突き入れられ、その気になれば体内を燃やし尽くすことも出来るだろう。

「あなた達を簡単に殺せる術を持っていながらも、私たちは殺さないように注意していたんです。殺す気でいながらも殺せないあなた達と、殺せるのに殺さないでいる私たち。どちらが上か、理解できませんか？」

あと数cm突き入れればドィビルの心臓に触れられるであろうミヤビ

は、「これで最後です。投降してください」と告げる。それでもドゥビルは「聞けんな」と瞬時に右腕を再生させ、その大きな両手でミヤビを握り潰そうとした。

「そうですか、残念です」

ミヤビは手を引き抜いて一足飛びで数mと後退すると、「ルシル副隊長に代わります」と言った。ドィビルが「なに？」と聞き返すと、ミヤビは「私は手加減が下手なので」と返した。その時。

「おぉぉぉらぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

空から少女の叫び声が響いてきた。ドゥビルはその声の主が誰であるか判っているため、地面になおも転がる千切れた右腕から戦斧を取るため動き出し、ミヤビは「新手！？」と空を見上げた。

Ｓａｇａ６－Ｄ遭遇～Ｈｕｃｋｅｂｅｉｎ　３～

フッケバイン一家の本拠地である"飛翔戦艇フッケバイン"は普段自動で航行していて、その本来の能力も機能していない。しかし"フッケバイン"の操舵手兼管制責任者のステラが管制室でエンゲージワイヤーを用いて機能中枢と接続――リアクトすることで、その機能を十全に扱えるようになる。

「どうしよう、フォルティス、アル！　このままじゃみんなが！」

管制室の中央にある円いステージ上で浮き、ステージから伸びる何本ものエンゲージワイヤーと繋がっているステラは、自分の周囲に展開しているモニターを見て焦りを見せている。"フッケバイン"とリアクトしていない普段の彼女は、思考能力や計算機能の大半を犠牲にして自動操縦を行っているため、言葉を発せず身振り手振りでコミュニケーションを取っているが、リアクトすることで彼女本来の地の部分が復活する。フォルティスと言葉を交わせているのもそのおかげだ。

「管理局の奴らがこんなに強ぇなんて知らねぇぞ！　どうすりゃいい！？」

「ええ、判っています、考えています！　ですが・・・！」

リアクト中は身動きの取れないステラの側に付いてフォローする役目を任されているフォルティスは、ステラと管制室に呼び出したア

ルナージにそう問われながらもモニターに映るヴェイロン達を助けるべく必死に作戦を考える。
管理局など所詮は組織のしがらみや界境線に縛られ、戦う術を魔法に頼っているため、分断という力を持っている自分たちには触れることすら出来ない弱い存在と決めつけていた。だがその根底を覆す局員が現れたことで混乱中だ。

「カレン達はもうダーハに着いたでしょうか・・・？」

現状を打破できるのはカレン達だけと理解しているフォルティスは、ダーハに到着していることを願いながらカレン達に連絡を入れようとした時・・・

『もしもーし。フォルティス～？　ダーハに着いたから、ヴェイ達の居る座標送ってもらえる～？』

ここでカレンより通信が入り、フォルティスは「カレン！」と声を弾ませた。フォルティスのそんな声を今まで聞いたことのないカレンはすぐに何かを察し、『何があったの？』と聞いた。そして語られるのは、ヴェイロン達が管理局の特務零課と遭遇して交戦したのはいいが劣勢な状態という、にわかには信じられない内容だった。

『『特務零課ってアレだよな？』』

『Ｓクラス以上の騎士を前線に置いた、荒事専門の精鋭部隊だったはず』

『何やってんだ。ヴェイロンのようにリアクターの無い雑魚ならまだしも、サイファーとドゥビルが一緒なんだろうが』

『ちょっと静かに。フォルティス、座標を教えて。すぐそっちに向かうから』

大して深刻に考えていない４人とは違い、カレンはエクリプスウィルス感染者である自分たちが劣勢に立たされているという状況がすでに危ないと考えていた。フォルティスから座標を伝えられたカレン達はすぐに飛翔術で現場へ向かった。その間、フォルティスはカレン達に交戦映像を見せた。それで深刻に考えていなかった４人も顔色を悪くした。

「見てくれたかよ、カイ兄たち！　局の奴ら絶対におかしいんだって！」

「ディバイダーの攻撃を防ぐし、分断で魔法を無力化できないし！」

『大丈夫だから泣かないのステラ。ちゃんとみんなで帰ってくるから。・・・フォルティスはそのままステラに付いてて。アル、いつでも出撃できるように準備。最悪フッケバインの主砲を撃ち込むことも視野に入れておいて』

「う、うん」

「判りました」

「オーライ！」

エンゲージケーブルが絡んでいるため自分の手で涙を拭えないステラに代わりフォルティスがハンカチで彼女の涙を拭い、アルナージはビシッと敬礼して管制室から飛び出していった。

ヴェイロンとサイファーとドゥビルの危機を知り、首領のカレン、ライカンとカイエンの双子兄弟、スキンヘッドのグランダム、清楚な装いの女性ロンシャンは、ダーハの広い空を飛んでいた。

「しっかしよぉ。局の連中、どういう手品を使っているんだ？」

「「普通のデバイスと魔法にしか見えなかったが・・・」」

「局員のデータバンクでも覗ければいいんだけど。その手のハッキングが出来るアイツは今バカンス中だし・・・」

「・・・」

戦闘は避けられないと判断していることでライカン達はイリス達が感染者である自分たちにどうやってダメージを与えているか、その方法を考えているが答えは出ない。感染者である自分たちとそれ以外。そんな物差しでしか計ってこなかった弊害もあるが、イリス達があまりにも特殊過ぎた。

（さてさて。一体どうしたものか・・・）

それはカレンも同じで、ヴェイロン達と一緒に帰るとステラに約束はしたが、内心では焦りが生まれていた。ヴェイロン達も抱いていた、エクリプスウィルス感染によって得た能力が全く通用しないイリス達を相手にどう動けばいいか迷っていた。

「何かいい案出た？」

「「カレン姉さん。俺らが時間を稼ぐから、その間にヴェイ達を救出してくれ」」

あーだこーだと話し合っていた４人の話し声が途切れたことで、カレンが４人の方へと目をやって尋ねると、カイエンとライカンがそう提案した。さらにグランダムも「ケンカ仲間が居なくなるのも寂しいしな」と、ルシリオンの魔法で拘束されているヴェイロンを見、ロンシャンも「酒飲み仲間は大事だものね」とサイファーを見た。

「・・・そうね。相手は何度も殺せるチャンスはあったのに、それでも殺さないのはやっぱり管理局員だからね。ま、殺されないにしても逮捕されるわけにはいかない。戦わずして救出して見せるわ。そのために、あなた達の力を貸してもらうわよ」

「「了解！」」「おう！」「ええ！」

カレンの言葉にメンバーは頷いた。そうして始まるヴェイロン、サイファー、ドゥビルの救出作戦。ヴェイロンとサイファーはルシリオンの磔刑術式ザドキエルに拘束され、腹と両手首と両足首に魔力

槍を穿たれて行動不能で、ドゥビルはまだ捕まってはいないが多勢に無勢という状況で、いつ倒れてもおかしくないほどのダメージを負い続けている。

「おぉぉぉらぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

まずは"フッケバイン"より飛び降りたアルナージが、リアクトを行った"ディバイダー718"による空からの爆撃。彼女の"ディバイダー"は二挺一対のガングリップナイフ型で、"リアクター"とは同一化している。リアクトした"ディバイダー"はその都度グリップ下部にいろいろな銃火器を接続でき、今は両方とも六連装の筒型ミサイルランチャーが接続されている。

「お前ら！　ヴェイ兄とサイ姉とビル兄に何してんだぁぁぁぁぁ！！」

アルナージが両方のトリガーを引くとミサイルが一斉に発射されて、イリス達へ目掛けて飛んでいく。それを確認した彼女は「次ぃ！」と、ミサイルランチャーを解除すると二連装のガトリングガンを接続した。

――凍て砕け汝の氷槍（コード・サルヴィエル）――

ルシリオンの放った冷気砲3発によって計12発のミサイルが凍結。宙で粉々になった自慢のミサイルにアルナージは「くそっ！」と悪態を吐きながらもトリガーを引いて、無数の弾丸を撃ち放つ。

――ハルトリーゲル・シルト――

その弾幕にはイリスが防御を担当し、四重の六角形シールドが展開されて弾幕を防御する。その様子に「マジかよ、ちくしょう！」と苛立つが、囮としては十分な動きをしているからと冷静を努める。

「姉貴、みんな、任せるぜ！」

ドゥビルは拘束されたヴェイロンとサイファーを救出しようと試みているが、ミヤビとルシリオンの連携で近付くこともままならずボロボロにされ続けている。そんな様子を見るアルナージは別動隊のカレン達が動くのを待った。

カレン達は、アルナージの空からの奇襲を合図に行動を開始した。

「ディバイダー９６４ハーム・リアクテッド」

ライカンは左手に持つ十字杭の形をした"リアクター"を右手の平に突き刺した。そして起こるエネルギーの奔流。それが治まると、彼の両手にはＬ９６Ａ１をベースにした、銃身が上下二連、スコープの代わりにギザギザした刃が付けられたスナイパーライフルが握られていた。

「ディバイダー９５７カイエン・リアクテッドぉ！！」

弟のカイロンは兄ライカンとは逆で、右手に持つ十字杭の"リアクター"を左手の平に突き刺した。リアクトした彼の両手にはコルト

・パイソンをベースに、銃身先端からグリップ下部へと繋がる刃のあるナックルガードが付けられている。

「行くぞ、カイロン」

「行こう、ライカン」

――アクセラレートフォース――

２人は手を繋ぎ、共にグッと腰を落としたかと思えば同時に地を蹴った。すると地面が大きく抉れ、ライカンとカイロンの姿が消えた。それはライカンの病化特性・加速によるもの。思考や身体の機動力を常時加速させることが出来る。２人は先にヴェイロン達の救出に向かっているカレンの元へと急いだ。

「ディバイダー９１８スパイダー・リアクテッドだオラ！！」

グランダムは様々な形状の刃を有する十徳ナイフ型の"ディバイダー"で左前腕を斬った。"リアクター"と一体化しているため、その動作でリアクト出来た彼の姿は変容していた。元よりあった２本の腕の他に、両肩から１本ずつ、肩甲骨から１本ずつ、脇腹から１本ずつ、太もも横から１本ずつ、計１０本の腕を生やした蜘蛛のような姿。そして手に持つ１０本の様々な形をした凶器は、十徳ナイフに納められたものを巨大化させたものだ。

彼の病化特性は増殖。脳のある頭部以外の体の部位をいくらでも増やすことが出来る。それゆえに彼は自分の"ディバイダー"をフルに活用するために腕を増殖することが多く、心臓も４つほど増やし

ている。

「ディバイダー５５０グルックナー・リアクテッド！」

ロンシャンは何かしらの巨大生物の牙のようなもので額を引っ掻いた。ロンシャンを飲み込むエネルギーの奔流。治まるとその姿は人のものではなく、後ろ足で立つ３ｍ級の翼竜へと変容していた。太く長い尻尾をビターン！と地面に打ち付け、大きな翼を羽ばたかせ、「オオオオオ！」と咆哮した。

彼女の病化特性は変態。攻防速すべてに優れたドラゴン形態を始め、狼や鳥や人魚といった様々な姿に変身できる。

「今行くぜ！」「行くわよ！」

グランダムとロンシャンは、その姿を大きく晒しながらイリス達の元へと駆け出した。

「ごふっ・・・！　あ・・・あのドラゴンは、ロンシャンか・・・！」

イリスの刺突を左腕で受け、ミヤビの上段蹴りを右腕で受け、ルシリオンの地面から生やした石槍で腹部を貫かれたドゥビルが、遠くに現れたドラゴンを見てすぐに救援が来たのだと察した。残念ながらヴェイロンとサイファーは度重なるダメージで意識を手放しているため、援軍が来たことは判っていない。

「お前たちを助けに来た援軍と言ったところか」

「わたし達、今日は運が良いかも♪　このまま纏めて逮捕ね」

「はいっ！　頑張ります！」

イリスとミヤビは援軍の方へ向き直り、ルシリオンも迎撃に入るためにドゥビルを拘束しようと磔刑ザドキエルを発動しかけたその時。

――茨姫――

どこからともなく出現したのは金属質の太く長い十数本の茨。それらがイリス達とドゥビル達を隔てるように伸びてきた。イリスは「逃げられる！　ルシル！」と指示を出して、再開されたアルナージの銃撃を「鬱陶しい！」と、風圧の壁を叩き付ける「風牙烈風刃！」を放ち、跳ね返し始めた。

「ミヤビ、援軍に注意だ！」

「了解です！」

ミヤビはこちらに向かってくる援軍にのみ意識を向け、そしてルシリオンは茨を排除するために魔術を発動させる。

――邪神（コード・ロキ）の狂炎――

四肢に２～３ｍの炎の腕と脚を装着したルシリオンは、轟々と燃える炎の手で茨を鷲掴んでドロドロに溶かし始める。その様子に茨の

頂上に立つカレンは小さく「うっわ。マジ？　結構な魔力遮断能力なのに」と漏らした。しかしその姿をルシリオン達は認識できていないため、カレンの独り言も聞こえなかった。

（攻撃や防御、結界系は通用しないようだけど、今使ってる千匹皮の効果は見破れてないみたいね）

千匹皮というカレンの扱う技は、書物型の"ディバイダー"から切り離した複数枚のページで体を覆って、他者の認識力を阻害するというもの。全身にページを張り付けなければならないため、激しい動きが出来ないのが欠点。

（まっ、勝てなくても負けなければいいんだし。もうちょっとお姉さんに付き合ってね、特務のお嬢さん達♪）

閉じられていた"ディバイダー"を開くと、カレンを覆っていたページが全て剥がれて、"ディバイダー"の中へと戻っていった。が、すぐに再びバサバサとページが数十枚と飛び出し、イリス達に殺到していく。

「へ？」

「いつの間に・・・！？」

「小賢しい真似を！　シャル、ミヤビ、俺の側へ！」

イリスとミヤビがルシリオンの元に集い、それを確認した彼は炎の

両腕を地面に付いた。すると彼らを中心に炎の渦が地面を這い、ルシリオンが「コード・プシエル！」と術式名を唱えた。

――無慈悲たれ汝の聖火（コード・プシエル）――

炎の渦の至る所から炎の龍が何十頭と出現し、カレンがばら撒いたページを喰らっていく。すべてのページが食われる前にカレンが「灰被り！」と告げると、舞っていたページが一斉に爆破された。だがルシリオンの炎龍によってその数が少なくなり、その威力は3割にも満たない。

「（追加の目くらましは成功ね）もう1回、茨姫！」

黒煙で視界不良になるとカレンは新たに茨を召喚し、黒煙とイリス達、ヴェイロン達を隔てる壁とした。カレンはルシリオンによって溶かされ崩れゆく茨から飛び降り、磔にされているヴェイロンとサイファーの救出を行っているライカンとカイロンに「どう？　どうにかなりそう？」と尋ねる。

「分断の効果が発揮できないから、解放は難しそうだ。腹や手足に刺さっている槍も抜けない」

「でも持ち運びは・・・よっと。出来る」

人ひとりが磔にされた十字架を軽々持ち上げるライカンとカイロン。カレンは「じゃあドゥビル。2人をお願い」と言うと、2人は再び十字架を地面に下ろした。

「ドゥビルはサイファーとヴェイロンを連れて一足先にフッケバインに帰艦ね。特務の連中は私たちでしっかり抑えておくから」

「待て。ならば俺も共に・・・！」

「私たちの体はあくまで死に難いだけで不死身じゃないの。それを、再生できると言ってもあれだけ連続で致命傷を負ってるのに、さらに攻撃を受け続けたらどんな弊害が出るか判らないわ」

自分たちだけ先に逃げろ、と言われたドゥビルはそう言うが、カレンは"ディバイダー"の背表紙で彼の胸をトンっと優しく打ってそう注意した。茨の壁の向こうから聞こえてくるグランダムとロンシャンがイリス達と交戦を開始した音に聞き耳を立てながらカレンは「だから今は引いて」と有無を言わさぬ声色で告げた。

「・・・判った。あとは任せよう」

それでドゥビルは頷き、リアクトを解いた。"ディバイダー"の片手斧の柄を腰のベルトに挟み込み、右手でサイファーの十字架を、左手でヴェイロンの十字架を持ち上げて肩に担いだ。その直後、茨の壁が一気に燃え上がって崩落し始めた。

「退散の相談か？　ダメだぞ、フッケバイン一家。お前たちは逃がさない」

ルシリオンの冷たい声と共にカレン達の目の前に放り投げられてき

たのは、「アル、グラン、ロンシャン！」の３人だった。アルナージ、グランダムはすべての腕と両をもぎ取られ、再生できないように傷口が凍結されている。ロンシャンも人間の姿に戻っており、グランダムやアルナージと同じように四肢を斬り落とされ、傷口も凍結済み。

「本物のドラゴンならいざ知らず、エクリプスウィルスの影響で変化できるだけの紛いものに負けるはずがないだろう？」

「一応ガチなドラゴンと戦ったことがあるからさ、わたしとうちの副隊長。だからデカいだけのドラゴン程度なら勝てるわけ」

「特騎隊を少しばかり侮りましたね」

全くの無傷なイリス達の姿にカレンは「十二猟師！」と、"ディバイダー"を開いた。開かれたページより光の玉が１２個と飛び出し、イリス達を包囲するかのような位置で停止。そして光はカレンと同じ姿へと変化した。

「「ドゥビル、行け！！」」

ドゥビルが駆け出すのを見送ることもせずにライカンとカイロンは"ディバイダー"の銃口をイリス達に向け、即座に発砲。しかしその銃弾はルシルが自分たちの周囲に１４枚と横列に並べて展開したシールド、「ラケーテン・パンツァーシルト」によって防がれた。同時にカレンの分身体がシールドの隙間から突っ込もうとしたが、シールドがスッと位置を調整して砲弾みたく射出された。

「むお！？」

直撃を受けたカレンの全分身体とカイロンは後方に十数ｍと弾き飛ばされたが、カレンはライカンの加速によってギリギリだが回避できていた。

「ドゥビル、ヴェイロン、サイファー。お前たちも逃がしはしない」

――天地に架かれ荒れる汝の明星（コード・ルシフェル）――

直径１００ｍの円を描くように何百発という暴風の砲撃が地面から空へと向かって持続放射され、十字架を抱えたドゥビルの行く手を遮った。ヴェイロンの十字架を下ろしたドゥビルはそっと砲撃の壁に手を伸ばした。

「ぅぐ・・・」

中指の第一関節が一瞬で削り取られたが、ドゥビルの病化特性である高速再生によって瞬時に再生した。無理やり通り抜けようとも考えていたが、問答無用な攻撃力を前に無理な考えだと切り捨てる。なら、と空を見上げれば曇天が拡がってはいるが脱出は可能だと判断。

「闇よ誘え汝の宵手（コード・カムエル）」

ルシリオンの詠唱によって発動したカムエル。カレンたち自身の影

より伸びる触手によって、彼女たちは「なによ、これ！？」一切身動きが取れないように拘束された。しかもカレンの"ディバイダー"も、開けないようにグルグル巻きにされた。

「魔導書型のディバイダー。いろいろと召喚できるようじゃないか。観させてもらうぞ」

「ここまで私たちを追い詰めたお礼に1つ良いことを教えてあげる。エクリプスウィルスに感染する原因にはリアクターとの接触というものがあるの。基本的にディバイダーとリアクターは別だけど、稀に同一化しているものがあって、間違って触れたらさぁ大変、感染しちゃうわ。さて。その書はどちらかな？」

そう言ってウィンクするカレンにルシリオンは「心配ない」と答えてから、カノンの左手が持っている"ディバイダー"を手に取るため、まずフッケバイン一家によって殺害された局員や民間人の復讐として彼女の左肘を拘束している触手を操る。ギリギリと締める力が強くなり、カレンの腕の骨をへし折った。

「っぐ・・・！」

ルシリオンはさらに触手に力を入れさせて、カレンの左腕を引き千切らせた。悲鳴を上げないように懸命に唇を噛み締めるカレンの様子に、ライカンは「カレン姉さん！！」と叫んだ。ルシリオンは地面に落ちたカレンの左腕を拾い上げて、「さすがに感染者の肌に触れての感染はないだろ？」と問うた。

「はぁ、はぁ、はぁ、まあね。・・・それにしても綺麗な顔をしてやることがえげつないわ、君」

「君こそ、綺麗な顔をしながらフッケバイン一家のリーダーで、これまでに何人もの人を殺しているんだろ。お互い様だ」

「あら、ありがと」

「リーダーであることは否定しないんだな」

「事実だしね。・・・あのさ、私の容姿を褒めたついでに逃がしてくれない？　もちろんタダとは言わないわ。全部とは言わないけど私たちが独占してる情報をいくつか話すわ」

「いや結構。どうせ当局で取り調べをする。そのときに包み隠さず教え――」

「待って、ルシル。じゃあ1つだけ。7年前、ヴァイゼンはユヴェーレン地区の遺跡鉱山で、あなた達フッケバイン一家の特徴である刺青を彫った男女2人組によって街の民間人が殺戮されるという事件があったの。それについて簡単に教えてもらえる？」

イリスの問いにカレンを始めとして意識のあるメンバーが僅かに反応を示した。アタリだ、と確信するイリスとルシリオン。

「・・・信じてもらえるか判らないけど、私たちの名前を騙ったり、刺青を真似たりして、半端な殺しをしてる偽者がいるのよ。私たち

もそいつらを追ってるの。そういうわけで、私たち、協力しない？
私たちは放っておいて、偽者を捕まえることだけに集中――」
「しない♪　あなた達が殺しや盗みをしているのは事実だし」
「そろそろ首長の元へ参上しないとまずいぞ」
「判ってる。・・・ルシル、ミヤビ、行こう」
「ああ」「はい！」
――我を運べ汝の蒼翼（コード・アンビエル）――
――真紅の両翼――
ルシリオンは背中より１２枚の剣の形をした翼を、イリスは一対の翼を展開。イリスはミヤビを抱きしめ、ルシリオンと一緒に空へと徐々に上がっていく。カレンが「どこ行くの？」と尋ねると、イリスが「いや～、巻き込まれたくないし」と答えたことで、これから行われることが危険なものだと彼女は察した。
――撒き散らせ汝の疫病（コード・ハダルニエル）――
「その明らかに体に悪そうな色をした煙はなに？」
「こいつはコード・ハダルニエル。病原体の集合霧で、この霧を吸い込んだ者に致死性はないがキツ目の病気を感染させる。こいつの

良いところは人から人に感染しないことなんだ。だから感染後に潰れたお前たちを本局に連行しようが問題ないわけだ」

ルシリオンが霧をカレン達に撒くために腕を払おうとしたその時・・・

――エンシェントドラゴンブレス――

ネツァッハ首長国の首都より放たれてきた一条の閃光。古代より生き続ける正真正銘のドラゴンより放たれた砲撃は、イリス達のすぐ側に着弾して大爆発。誰も声を上げることも出来ずに方々に吹き飛ばされた。

・―・―・―・―・

"飛翔戦艇フッケバイン"のリビングは今、全員帰艦したことを祝うパーティが開かれていた。首領であるカレンをはじめ、ヴェイロン、サイファー、ドゥビル、アルナージ、ライカン、カイロン、グランダム、ロンシャン、そしてステラとフォルティスが思い思いに料理を食べ、酒を飲んでいる。

「いや～、まさかネツァッハのドラゴンに助けられるとわね～」

「助かった要因はそれですが、ただ運が良かったということだけはしっかり覚えていてくださいね、カレン」

ステラから差し出された料理をひょいひょいと食べるカレンがそう

言って笑うと、フォルティスが頭を抱えて注意した。カレン達は、ドラゴン・イツァムナ首長のブレス攻撃のおかげでイリス達から辛くも逃げ果せることが出来ていた。それは本当に偶然で、フォルティスの言うように運が良かっただけ。何かが違えばブレス攻撃によって塵も残らず消滅させられていたかもしれなかった。それをモニターで見ていたフォルティスの心労は計り知れない。

「まあまあ良いじゃない。こうして誰ひとり欠けることなく帰ってこれたのだから」

ロンシャンはフォルティスの空いたコップに酒を注ぎながら笑う。

「しかしよ姉貴。特務のあの3人、殺しといた方が良かったんじゃね？　あたしらよかダメージ受けてたし、いいチャンスだったじゃねぇか」

「「俺もそう思ったぞ、カレン姉さん」」

アルナージに続いてライカンとカイロンもイリス達を殺しておけばよかったと言うが、カレンより先にサイファーが「無理だな」と一蹴した。あのヴェイロンでさえ「俺もこんなこと言いたかねぇが、アイツらにゃ勝てねぇよ」と言って、コップの酒を一気に呷った。

「そうね。確かにあのドラゴンの攻撃で、特務のお嬢さん達は私たちよりダメージを受けていて、簡単に殺せそうだった。でも、3人とも意識はあった。そこに変に手を出して、シャレにならない反撃とかされたくなかったの」

カレンとてイリス達を見逃すことに葛藤していた。しかし殺しきれるのかどうかが判らず、あの場に居なかった他のメンバーが増援として来るかもしれないという状況の中、下手に留まることを良しと思えなかった。

「ま、生きているんだからいいじゃないの。ほらほら、みんな飲んで食べて！」

こうして特務零課・特殊機動戦闘騎隊とフッケバイン一家の初遭遇事件は終わった。

Ｓａｇａ６－Ｅ遭遇～Ｔ．Ｃ．　２～

†††Ｓｉｄｅアルテルミナス†††

私が所属する特務零課の課長であり特騎隊の部隊長でもあるイリスからの指示で、ここ第１０管理外世界コン・フォルツァを訪れている。管理世界の秩序の守護者な私たち局員が、わざわざ管理外世界に訪れた理由。それはある盗賊団を捕らえるため。

『イリスからまだ連絡来ないの～？』

『開館からずっと博物館をうろうろしてる所為で、警備の人たちの視線が結構つらい』

クラリスとセレスの文句を思念通話で聞く。盗賊団――"Ｔ．Ｃ．"が次に狙うであろう高魔力を宿した物品がある博物館の地下２階で、私たちは待機中なんだけど、今日来るか明日来るか、そもそもイリス達が第７管理外世界ダーハで"Ｔ．Ｃ．"を捕まえてたら・・・。

『（でも連中は組織で動いてるんだし、ダーハで捕まえても別の強奪犯がこっちに出るとも考えられるから、こうして待機しているのは無駄じゃない・・・でも）もう少し待って。定時連絡がちゃんと来るから』

セレスの感じる警備員の視線には私だってうんざりしている。でも魔法文明の有り無しに関わらず彼らには"Ｔ．Ｃ．"を撃退できる

術が何もないから、私たちが護ってあげないとダメ。だから痛い視線にも耐えないと。
そんなわけで私たちは博物館の中を行ったり来たりの巡回を続け、定時連絡まであと十数分といったところで、「え、今？」と首を傾げるタイミングで携帯端末にコール音。この世界にも携帯電話があるから怪しまれないけど、通信に出るには1階ロビーまで行かないといけない。

「2人はこのまま待機してて」

「ういー」「判った」

さっきからお腹を鳴らして、しかも眠気にも襲われているのかクラリスからはやる気のない返事が・・・。セレスと一緒に苦笑した後は私だけロビーに移動して、携帯端末を耳に当てて「もしもし」とコールに出る。

『ルミナ！　ルシル達が墜とされたの！』

通信の相手はアイリだった。私たちやイリス達の出撃時に、特騎隊の移動本部"シャーリーン"で居残り指示を食らって不貞腐れてたアイリとは思えないほどに切羽詰まった声。

「は？　イリス達がダウンした？」

何を言われたのかすぐには理解できなかった。でも「誰に！？　え、というか達ってことは、イリスやミヤビもなの！？」って思わず声

を張り上げてしまった。客の非難の視線が一斉に突き刺さるけどそれどころじゃない。イリスは魔術とスキルを持っているし、ミヤビも対魔術に通用する鬼化があるし、ルシルだって魔術を扱えるし、リアンシェルト戦後はアイリとユニゾンしなくても問題ないようになっていた。それを負かす奴が居るってことが信じられない。

「さ、3人は大丈夫なの？　重傷？　それとも・・・」

『ついさっきシャーリーンに搬送して、ティファが治療してる。みんな、そこまで酷くないけど意識は失ってる』

「・・・そう。状況を教えて、アイリ。T・C・が一筋縄でいかないとは思っていたけど、まさかイリス達をも倒せる連中なんて・・・」

『あ、いや、実はT・C・が相手じゃなくて・・・』

アイリから語られたのは、ダーハで偶然遭遇したフッケバイン一家との戦闘。魔術を使うことで魔導殺しを完封して、全滅までもう少しというところでダーハの実質的な支配者の古竜イツァムナ首長からの流れ弾。

「流れ弾・・・？」

『うん。イツァムナ首長の居る首長公邸に現れたT・C・を追い払うために放ったドラゴンブレスが、運悪くルシル達の至近に着弾したの。それでルシル達は意識を失って、フッケバイン一家には逃げ

られて・・・』

「T・C・と首長の安否、竜玉は守られたか奪われたか、教えてもらえる？」

『T・C・は逃走。首長は無事だけど、竜玉は盗られちゃった・・・』

頭痛がしてきた。局がイツァムナ首長にお願いしてどうにか護衛戦力として招かれたのに、任務に就く前に寄り道の如くフッケバイン一家と戦闘。そして、その間にイツァムナ首長は"T・C・"と交戦して追い払うことは出来たけど竜玉は奪われた。

「上層部からめちゃくちゃ文句を言われそう」

『だ、だよね・・・？　もう！　やっぱりアイリも一緒に行っていれば良かったんだよ！』

この不手際は始末書で済めばいいけど・・・。とにかく、ダーハでの任務は失敗したってことになるから、今すぐにでもこっちに"T・C・"が出現するかもしれない。

「報告ありがとう、アイリ。私たちはさらに警戒を強めて、迎え撃つ準備をしておく」

『うん。ルミナ達も気を付けて』

通信を切って、携帯端末をポケットの中にしまい込もうとしたとき、「あの、お客様」と声を掛けられた。まさか、と思いつつも振り返れば、女性職員が1人と男性警備員が2人。私は努めて冷静に「なんでしょうか？」と愛想笑いで応えた。

「申し訳ございません。お客様とお連れのお2人は、当館の開館時間より4時間と滞在なさっております。しかも何かを探っているかのように館内を歩き回っておいでですので、失礼かと存じますがお声掛けさせていただきました」

「ですわよね～。私も、自分たちを客観的に見れば怪しいな～と思いますもの。おほほ～」

「「「・・・」」」

沈黙が辛い。私は大きく溜息を吐いて、どう言い訳をしようかと考えていたら『ルミナ、来た！』とセレスから思念通話が入って、さらにジリリリ！とけたたましく警報ベルが鳴り響いた。職員と警備員の3人はベルで一瞬身を竦ませて、私から意識を完全に逸らした。視線も別の方に向いたから、「ごめんなさい！」と謝って、地下へ降りるための階段がある方へとダッシュ。

「おきゃ――捕まえて！　警備室！　カメラで状況を確認して、警備員の増員を！」

職員がてきぱきと指示している声を背中で聞きながら、慌てふためく他の客の間をすり抜けて階段室へ。そして階下に降りようと足を

出したその時・・・。

「待ちなさい！　これは君たちの仕業か！？　事務所にまで来てもらうぞ！」

さっきの警備員だけでなく他の所を巡回してた別の警備員たちも集まってきた。管理外世界で申請無くして魔法を使った場合は管理局法でアウトな所業だけど、これはもう緊急事態だ。だから結界魔法を発動しようとしたんだけど・・・。

――ゲフェングニス・デア・マギー――

クラリスの魔法であることを示す薔薇色の魔力光での結界が展開されて、私と警備員たちは隔絶されてお別れ。もうその姿が見えない警備員たちから階下へと視線を戻して、「いくか！」と気合を入れてから階段を駆け下りる。

「セレス、クラリス！」

「あー、やっと来た」

「一応結界で閉じ込めてみた」

「ナイス、クラリス。この広さなら戦闘も問題ないか」

およそ1万4千平方mの地下だ。支柱や壁や仕切りがあるけど、支柱はまずいけど壁や仕切りくらい破壊しても問題ない。

「む。新手か」

2人が対峙しているのは間違いなく"T・C・"だ。何故なら私の姿を取っているから。見る人によって姿を変わる幻術か変身の魔法、もしくはスキルを使うのが"T・C・"らしく、外見は見る人が抱くトラウマの人物になるそうだ。

（でもなんで私は自分自身なわけ？　自分に対してトラウマなんてありえる？）

とにかく、すでにデバイスと騎士甲冑に変身しているセレスとクラリスをフォローしないと。私も腕輪型デバイスの「ツァラトゥストラ」を起動して、騎士甲冑にも変身する。その間にも私の姿をした敵は「ふん、新手か。面倒だが仕方あるまい」と小さく溜息を吐いた。

「（声だけは違うんだよね～。変声の魔法かな？）・・・もうすでに同僚2人に言われてるかもしれないけど、改めて伝える。時空管理局です。武装を解除して投降してください」

敵の右手にはモザイクの掛かった棒状の物が1本。構えからして槍じゃなくて杖と思われる。あと、敵の左側にもモザイクが掛かった物体が1個浮遊している。独立系のデバイスかもしれないから要注意。

「投降はせぬ。我らの主が困っておるからな。まったく、面倒なこ

とを押し付けられたものだ」

喋り方が偉そうなのは素なのか演技なのか判らないけど、かなり特徴がある。それが身元判明に繋がるかも、なんて考えていたら敵も「喋り過ぎたか。いかんな」と首を横に小さく降った後、杖の先端を私たちに向けた。

「させない！」

魔法か魔術か、どっちかは判らないけど発動はさせちゃいけない。そういうわけで一足飛びで敵に突っ込む。私はセレスやクラリスのように魔術は使えないけど、デバイスくらいならスキルを使わなくても破壊くらいは出来る。

「「ハント・フェッセル！」」

セレスとクラリスが同時にバインド魔法を発動。セレスは敵の両手を、クラリスは両脚を瞬時に拘束したけど、すぐにブチブチと音を立てて千切れそうになる。だけどその僅かな拘束時間だけで十分。私は右腕を振りかぶり、分解スキルの「エクスィステンツ・ツェアレーゲン！」を発動した状態で右拳を突き出す。

――ツェアラーゲン・シュラーク――

敵の杖と私の拳が衝突する。普通ならそれだけで分解することが出来るんだけど、「きゃあ！？」バチッと弾かれてしまった。体勢を崩した私に向かって敵は一歩前進しつつ、刺すように杖を突き出し

てきた。

――■ン■■■シ■ラ■■――

「ぐっ！？」

ただの一突きが恐ろしい威力で、私は後方に数mと飛ばされた。そんな私を抱き留めてくれたセレスとクラリスに「ありがとう！」と礼を言って、今まさに杖を横薙ぎに振るおうとしていた敵を妨害するため・・・

――女神（ディオサ・プーニョ）の鉄拳――

「飛んでけーい！」

敵の足元から氷の鉄拳を突き出させたセレス。敵は「むお！？」と驚きの声を上げて天井にまで殴り飛ばされたけどクルッと空中で前転して、天井に両足を付けて着地・・・するか否かの瞬間に、私とクラリスは床を蹴って最接近。

「はあああああああ！！」

――ファルコンメン・ツェアシュティーレン――

対人戦に分解スキルを使用するために組んだ、スキル半使用した打撃技を発動。これで間違って生身を殴っても即死には至らない。管理局に入ってから日が浅いうちに、凶悪犯罪者に何度も試している

から加減の仕方は判っている。

「でぇぇぇぇぇぇい！！」

――フェアシュテルケン・ガンツ――

"シュトルムシュタール"全体に魔力を付加することで攻撃力強化する魔法を発動したクラリスと一緒に敵を攻撃。一撃目はクラリスの"シュトルムシュタール"によるフルスイング。敵は咄嗟に杖を両手持ちして盾として、クラリスの一撃を受けた。

「むお！！？」

敵は天井に強かに背中を強打したけど、雰囲気的にダメージは入っていない。でもそれでいい。身動きが取れなくなった敵の腹に目掛けて「おらぁぁぁぁ！！」右拳を打った。私の一撃に天井は耐え切れずに敵を飲み込んだ。そのまま地下1階にまで殴り飛ばすことも出来たけど、敵の服を引っ掴み、瓦礫が崩落する中で「セレス！」の方へと投げ飛ばす。

「よし、来い！」

――氷星の大賛歌（カンシオン・デ・コンヘラシオン）――

渦巻く吹雪く竜巻を纏わせた大剣型デバイス・"シュリュッセル"を振るって、吹雪を砲撃として放ったセレス。砲撃は敵を飲み込んで、そのまま支柱の1つに叩き付けた。その様子に私は「自分がボ

コられる様はあんまり気持ちのいいものじゃないね」と嘆息。

「あー、そうらしいね。というか、自分がトラウマっていうのが笑る」

「うっせ」

クラリスにそう言い返しているところで、「これで解かったか？貴様らの魔法など我には通じんぞ」と、本来なら氷漬けになっているはずの敵は服に付いた雪を払う仕草をしながらそう言った。

「やっぱり魔術か」

「しかもデバイスも何か細工してあるね」

「魔力付加してない中でルミナのスキルを受けて破壊されなかった。つまり・・・」

「「「神器」」」

魔術と同時代に活躍していた魔術師用の武装や道具の総称らしい。かつてリンドヴルムというロストロギア専門の蒐集組織との戦いで、そのヤバさは嫌と言うほど理解している。それと同時に、私はこの中で最も役立たずであることも理解した。私のスキルは魔術効果を打ち破れないし、神器にも一切効果がない。

「ルミナは下がって」

「ここからは私とセレスで戦う」

私の前に躍り出る2人の背中が大きく見えて頼もしく感じる反面、胸の内にはやっぱり悔しさもあって・・・。

「貴様ら、特騎隊であろう？　確か魔術も扱えるという。本来であれば局員や騎士団、民間人に危害を加えるような真似はするなと厳命されておるが、ある条件下であれば戦闘も止む無しとも言われておる」

――ド■■ムブ■■ガ■――

2mほどの魔力剣が敵の頭上に十数本と展開された。そして敵は「目当ての物を奪う際、自分の身に逮捕の危機が迫った時には逃亡のために反撃してもよいと、な！」そう言って杖を振るうと同時に射出された。射線を見る限り当てるつもりはないらしく、ソレらは私たちの前方に横一線に着弾して壁となった。

「しばらく大人しくしておれ。変に痛い目に遭いたくなければな」

「「昇華！！」」

敵の自信満々な言葉に反発するかのようにセレスとクラリスがリンカーコアに神秘を乗せて魔術師化した。まずクラリスが"シュトルムシュタール"の全体に魔力を付加する「フェアシュテルケン・ガンツ」を発動してからの薙ぎ払いで、魔力剣を薙ぎ払った。

「洗練（レフィナド・ランサ）されし氷牙！」

そこにセレスが氷の槍１８本の斉射。だけど魔術である所為で非殺傷効果は発揮できないから、直撃だけは避けてある。ただ、着弾からの冷気炸裂による凍結捕縛は死ににくいはず。セレスもそれを解かっているからこそ、敵を囲うように着弾させようとした。

「大人しく受けるとでも思うか？」

――■■ディ■■レイ■――

敵もまた１８本の魔力剣を展開、即射出。空中で氷槍と魔力剣がガツンガツン！と衝突して、お互いを撃ち落としていく中、クラリスが"シュトルムシュタール"を振りかぶった状態で突っ込む。

「む。貴様は来るでない！」

クラリスの接近を嫌がるように後退した。クラリスから距離を取ろうとしたところを見ると、敵はイリスやルシルのような複数の魔術を同時に扱うという、冗談みたいな真似は出来ないのかも・・・。

（なら、少しでも気を逸らさせてやれば！）

――ルフト・クーゲル――

魔法じゃない純粋な拳圧を放つ物理攻撃（もちろん魔力付加バージ

ョンもアリ）。左右1発ずつのジャブを打つと同時に放った。魔法じゃないから魔力で気付かれることはない。拳圧はクラリスの脇を通過。一直線に敵へ向かっていって直撃すると、「むお！？　なんだ！？」大きくよろけた。

魔術師は物理攻撃も完全防御できるけど、その衝撃を受け流せるかどうかは術者の身体能力や体幹による、とルシルに聞いている。実際、魔術師化しているルシルに拳圧をぶつけたらよろけもせず、だけどイリスにぶつけたら尻餅ついた。

――体重が軽いとよろけたりするかもな――

――それってつまりはわたしは軽いってことね！――

そんなルシルとイリスの会話が思い起こさせる。まぁとにかく、私の一撃で敵はよろけ、クラリスの「でりゃあああああ！」フルスイングが放たれた。敵はよろけたことを利用してそのまま尻餅をつくことでギリギリ回避した。

「その回避法、悪手だよＴ・Ｃ・」

初撃の月牙による斬撃は躱されたけど、反対側の金棒はなお健在。敵は迫る金棒の範囲外に急いで出るため、お尻を床に付けたまま両脚で床を蹴って一気に後退。そんな大きな隙を放っておくほど優しくないセレス。

――神速獣歩（ゲパルド・ラファガ）――

立ち上がり途中の敵の背後へと高速移動術式で移動したセレスは、敵の持つ杖を"シュリュッセル"で弾き飛ばして、さらに左腕を背中へと捻り上げて「確保！」と、敵を地面に組み伏せた。

「いたたたた！　貴様！　我は仮にもお――」

――ア■■トマ■■ス――

「「セレス！」」

離れていたからこそ、新手の出現にすぐに気付けた。新たな敵の姿も私の姿をしていて、ちょっとうんざり。それはともかく新手も杖のような物を持っていて、先端が燃えている。単純な魔力攻撃より属性アリでの攻撃の方が破壊力があると聞いている。新手がセレスを攻撃するとは限らないけど、何かしらのダメージは受けると思う。

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース――

そうさせないためにも高速移動魔法でセレスの背後へ割り込んで、「はっ！！」横蹴りで新手の攻撃を迎撃。さすがに燃えるヘッド部分に蹴りを入れず、その下の柄の部分を右足の裏で止める。

「っづ！」

足裏から股、そして腹から頭のてっぺんにまで奔る衝撃。それに必死に耐えて蹴り上げた右足を右へと反らしながながら下ろした勢いで、「せいや！」地を蹴って振り上げた左足で新手の顔側面を蹴り

飛ばす。

「っく・・・！」

吹っ飛ばせなかったのは悔しいけど、セレスへの奇襲を防げただけで十分だ。ただ、新手の顔側面を蹴った左足もビリビリと痺れて、左足を使った攻撃はたぶん出来ない。

「ありがと、ルミナ。クラリス、誰かが結界を抜けてきたら教えてって言ったでしょ」

「ダメ、全然わからなかった。新しく来た奴は結界に干渉しないで侵入してきた。アイツ、たぶんだけど・・・」

セレスを護るため、そして新手と対峙するためにクラリスも私の隣に立って、セレスにそう言い返した。となれば、「転移系スキルか」ってことになる。それはまたとんでもなく厄介な奴が出てきた。先の事件では転移系スキル持ちのシスター・トルーデに良いように翻弄された。

「■■。あまり我々の素性が知られてしまうような事は仰らないでください。我らの主にご迷惑が掛かります」

「わ、判っておる！　いやそれより早く助けんか！　関節を極められて動けんのだ！」

「少し手間取りそうなので、もうしばらくお待ちください」

敵と新手の会話を黙って見守る。何かしらのミスで身バレするような情報が出てくるかもと思っていたけど、新手は慎重派のようだしボロは出さないかも。チラッとクラリスを横目で見ると、あの子も同じ意見みたいで"シュトルムシュタール"の柄をグッと両手で握り締めて迎撃準備に入った。

「ルミナ、代わってくれる？　人体の仕組みに詳しい元ファオスト（ルミナ）パラディンなら安心できるし、念のために私も魔術でのバインドで拘そ――」

「あの、その手を離してもらえますか？」

「「「っ！？」」」

それは本当に突然で、一切の前兆すらない中での出現。敵を腕を捻ったうえで背中に左膝を乗せているセレスの背後に現れた、やっぱり私の姿をしている新手2。そいつが右手をセレスへと向けて、グッと握るように拳を締める仕草をした。

――■■ーム■レッシ■■――

「ぐあ！？」

「「セレス！？」」

何かに全身を締め付けられているかのように体を細くするセレスが

宙に浮く。ダメだ、見えない、不可視の攻撃。最初の敵は自由になり、新手1は臨戦態勢、新手2はセレスを拘束中。

「ふん。特騎隊よ。こやつが参戦する以上、貴様らに勝ち目はない。大人しく去れ」

敵が新手2の頭を撫でているのをこの危機を脱する方法を考えながら見る。

『セレス。大丈夫？・・・セレス？・・・セレス！』

思念通話でセレスに呼び掛けるけど返事がない。セレスは完全に意識を手放していた。さあいよいよどうしようかと途方に暮れそうになっていると、新手2が私に向かって開いた左手を向けてきた。ハッとして急いで後退しようとしたけど、「え？」ドンっと何かに拒まれて後退できなかった。

「ごめんなさい！　ちょっとの間、眠っていてください」

「んぐ！？」

「ルミナ！」

ガシッと全身が手のようなものに握り締められる感覚。なんとか逃れようとするけど、これはもう無理っぽい。だから「ああもう。ホント最悪」と悪態を吐いたところで、新手2が左手をキュッと締めた。

そこで私の意識は途絶えた。

Ｓａｇａ７特務六課～Ｔｈｅ　６ｔｈ　Ｅｘｔｒａ　Ｆｏｒｃｅ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

わたしたち特騎隊のオフィスは、これまでにないほどの重い空気が充満してる。それもこれも５日前の大失態の所為だ。第７管理外世界ダーハと第１０管理外世界コン・フォルツァでの任務失敗。わたしとルシルとミヤビが訪れたダーハでは、フッケバイン一家が何十人という民間人を殺害し、物資を強奪していた。わたし達がダーハに訪れる前に行われた犯行だとしても、連中と遭遇して交戦までしたのに逃がしてしまった失態。

さらにダーハで一番の文明国ネツァッハのドラゴン首長イツァムナ氏の護衛として管理外であるダーハを訪れることを許していただいたのに、肝心な時に側に居られなかった。しかも"Ｔ・Ｃ・"の目的だった"竜玉"も奪われてしまった。

（でもルミナ達まで失敗するなんて思いもしなかったよ・・・）

コン・フォルツァでの"Ｔ・Ｃ・"待ち伏せ作戦は、遭遇から交戦までは上手くいっていたけど・・・まかさの敗北。クララ先輩の転移スキルのおかげでルミナ達を救出できたけど、"Ｔ・Ｃ・"には目的の物品は盗まれちゃったし、ルミナとクラリスとセレスは件の国で指名手配食らっちゃったし。

（脅威対策室からのお達しが今日、送られてくる。Ｔ・Ｃ・とまと

もに戦えるのは魔術師化できるわたし達だけって思ってたけど、セレスとクラリスが負けちゃってる以上、他のメンバーでも勝てないって思われて、いろんな文句を言われたり罰が下されたりするかも）

ビクビクしながら自分の隊長席に座って待っていると、「失礼するよ」って特騎隊付の特務監査官がオフィスに入ってきた。まぁ古くからの知人だからめちゃくちゃな緊張はしないけど、沙汰を下す権限を持ってるから恐ろしいことには変わりない。

「お、お疲れ様です、ヴェロッサ・アコース特務監査官」

「お疲れ様です、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイト特務二等陸佐」

リアンシェルトが局を辞めてから特騎隊の監査役を引き継いだのは、幼少の頃からの知人であるヴェロッサ――ロッサだ。長かった髪も今は肩までの長さに切ってる。

「今回のダーハおよびコン・フォルツァでの件、監査官として決定した沙汰を下します。まず、ダーハでの件。フッケバイン一家と交戦したにも関わらず逃亡を許し、T・C・から護るべき竜玉を護れなかった失態」

わたしとルシルとミヤビは負けたわけじゃないし、フッケバイン一家を逃がしたのも、言いたくはないけどイツァムナ首長の所為だ。でも逃がしたことも奪われたことも事実だから文句は言えない。フッケバイン一家をもっと早く潰していればよかったし、流れ弾の余

波で意識を失わずに済んだ。

「その件についてはイツァムナ首長直々に、特務零課に責は無く、すべては私自身の失態が原因である。特務零課を処罰しないことを切に願う、というメッセージが届きました。対策室は氏の恩情を無下にしないため、零課への処罰は見送ることにしました」

ロッサからの第1の知らせにわたし達は「ほぅ・・・」思いっきり安堵の息を吐いた。イツァムナ首長は、フッケバイン一家が首都の近くで犯罪を起こしていたことに気付かなかったのは自身の油断と怠慢で、連中を逃したのはわたし達の邪魔をしたことが原因で、竜玉を奪われたのは"T・C・"に後れを取ったから。イツァムナ首長は本当に自分に責を集中させてた。

「で、コン・フォルツァでの件。マルスヴァローグ一等空尉、カローラ一等空尉、ヴィルシュテッター一等陸尉は、アヴァスト大博物館でT・C・と交戦するも敗北。護衛対象だった物品は奪われた失態。さらに真犯人であるT・C・ではなく、あなた達3人が強盗犯として指名手配された失態」

ルミナとセレスとクラリスは可哀想になるくらいにしょんぼりしてる。ロッサはルミナ達を一瞥した後、「T・C・に感謝する日が来ようとはね」って嘆息。どういう意味？ってわたし達が小首を傾げていると、「まずはコレを見てくれ」って言うと、わたしたち全員のデスク上にモニターが展開された。

「コン・フォルツァに潜入していた査察官からデータで、新聞だね。

内容は、アヴァスト大博物館より盗まれた天恵の首飾りが、監視を掻い潜り元に戻されていた、と」

「鑑定した結果、偽物じゃなくて本物と断定・・・」

「さらに、コン・フォルツァの古代遺跡にて、遺跡が崩落したことで失われたとされる宝物、杖、王冠、鎧が置かれていた」

「急いで遺跡を調査した結果、崩落していた遺跡が掘り起こされているが判明。現代の技術では遺跡を傷つけずに掘削することは不可能とされていたが、どういう方法か遺跡は綺麗に掘り起こされており、宝物も難なく持ち出されたものと断定。考古学者や鑑定士などが3つの宝物の調査に入った」

「天恵の首飾りを奪い、そして3つの宝物と共にアヴァスト大博物館に返却した女性3人に対し警察は指名手配を取り下げ、国は遺跡を無傷で掘り起こした技術について尋ね、技術提供をお願いしたい、か」

モニターに表示される新聞の記事の内容を口々に読み上げるみんな。記事を見る限りロッサの言うように"T・C・"のおかげで、ルミナ達は奇跡的に犯罪者じゃなくなったけど・・・。わたしの不安そうな視線を受けてることに気付いたロッサは、「ただし」って付け加えた。

「あのさ、ロッサ」

「ん？　なにかな、フライハイト二佐？」

「あ・・・うぅ・・・なんでもありません、続けてくださいアコース監査官」

良い知らせから悪い知らせにするのをやめて、って言おうとしたけどやめた。溜息を吐くわたしから視線を逸らしたロッサは、「天恵の首飾りに込められていた魔力は、完全に消失していたと査察官から報告された」って嘆息。

「T・C・には負けて、標的は奪われて、犯人に間違われて、指名手配を受けて・・・」

「それをフォローするかのようにT・C・は首飾りをオマケと一緒に返却した・・・」

「完全に私たち負け」

「しかし、これはかなりマズイ問題だぞ。セレスの魔術でも勝てないとなるとかなり厄介だ。

ルミナとセレスとクラリスのテンションが最底辺にまで急落しているところに、ルシルがそう言った。魔術の強弱は神秘って呼ばれるレベルによって変わってくる。真正の魔術師であるルシルからして、その神秘の強い序列はユニゾンルシル＞ルシル≧セレス＝わたし＞クラリスになるみたい。

「ルシル、どうする？　Ｔ・Ｃ・がここまでヤバい連中だったなんて想定外なんだけど。・・・あ、ねぇ、ルシル。ベッキー先輩が居てくれたらどうだろう？」

ベッキー・ペイロード。元特別技能捜査課に所属してた先輩だった人だ。超がいくつも付くくらいに強い召喚獣（ルシルや先輩やシャルロッテ様が言うには精霊）を何体も従えていた。

ベッキー先輩が局員となったのは、故郷を滅ぼした連中に罪を償わせたい、復興費用を稼ぐため、という理由から。犯人はロストロギア蒐集組織リンドヴルムで、自分たちの手で壊滅させたことでベッキー先輩が局に残る理由もなくなったけど、それでも局員を続けながら復興活動を続けていた。で、３年前に復興隊の男性局員とめでたく結婚して、そのまま寿退職した。

「それはまぁ、途轍もなく心強いが・・・。でも確かベッキー先輩は臨月間近だろ？　妊婦を危険な前線に出すわけにもいかない。それに彼女の精霊は確かに強大だが、その世界に適応させる時間が必要だ。その時間でＴ・Ｃ・は事を済ませるだろう」

「そうだったね・・・」

「とりあえずチームを分けるのは悪手だってことは確かだ。特騎隊総出で次の標的が在る世界でＴ・Ｃ・を迎え撃つ。アイリ、次はお前も参戦だ。俺とユニゾンして、確実に連中を潰す」

「ヤー！　くぅー！　前回は留守番くらってたからね！　今度こそルシルやみんなのため、融合騎として頑張るよ！」

こういう時は本当にルシルとアイリのペアが心強い。完全武装のルシルに加えて、わたし達が全員で事に当たってしまえば、"Ｔ・Ｃ・"なんて一網打尽だよ。

「よしっ！　アコース監査官。次にＴ・Ｃ・の出現する世界はどこか、その情報をください！　今すぐにでも出撃します！」

「この４日の間、本局で確認できたのは第１１管理外世界ジュエリアから第１５管理外世界ゴールドウルでの活動です。民間人への危害、警察組織との衝突はないようです。で、Ｔ・Ｃ・の移動と行動の早さからして１５番から２２番までは捨てます。万全の状態で待ち伏せするために、次の護衛対象は第２５管理外世界ヴォルキスの魔力結晶にします」

ロッサがコン・フォルツァの新聞記事からヴォルキスの魔力結晶の画像を表示させた。虹色に輝く８面体の巨大宝石。危険性は無いからロストロギア専門の古代遺物管理部も回収はしてないみたい。ちなみにヴォルキスには魔法文化は無いからコン・フォルツァと同じく、すごい魔力を有した結晶もただの宝石と判断されてる。

「了解。では、特務零課！　出撃！」

わたしの号令にみんなは椅子から立ち上がって「了解！」敬礼して、"シャーリーン"の停泊するドックに向かい始めた。わたしもルシルとアイリ、ルミナとセレスとクラリスとミヤビを伴ってオフィスを出ようとしたとき、ロッサが「あぁそうだ、イリス」って、ファ

ーストネームでわたしを呼び止めた。

「なに、ロッサ？」

「1週間ほど前になるけど、対策室がはやてに特務の6番を与えて部隊編成の指令を出していたよ。今日あたり部隊メンバーの顔合わせがあるって聞いてる」

ロッサの話を聞いたルシル達が立ち止まって、アイリが「なんのために？」って聞くと、ロッサは「フッケバイン一家の逮捕のためさ」って答えた。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒はやて†††

脅威対策室から私に届いた指令は、管理外世界で好き勝手してる犯罪組織フッケバイン一家の逮捕。与えられた部隊番号は何の縁か6番。特務六課や。かつての機動六課を思い起こさせて、嬉しいやらなんやらやな。ただ問題は、設立の理由であるフッケバイン一家や。連中は民間人も局員も平気で殺害する。その危険性はとんでもない。

「八神二佐。来ましたよ」

「おおきにな、アインス」

特務機動隊用の空きオフィスを特務六課の専用オフィスとして借りたこの1室で、私とアインスとリインの3人は待ってた。特務六課へのスカウトメールを受けて、原隊から六課への出向をしてくれた

メンバーが来るのを。

「アリシア・テスタロッサ・ハラオウン」

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン」

「「入ります！」」

最初に来てくれたのはアリシアちゃんとフェイトちゃんの２人で、私は椅子から立ち上って「よく来てくれました」と敬礼すると、２人も敬礼してくれた。リインが「お２人のデスクはこちらです」って案内。２人がリインにお礼を言いながら座ってるところで・・・

「八神ヴィータ」

「八神シグナム」

「八神アギト」

「八神ザフィーラ」

「「「「入ります！」」」」

我が八神家の家族がやって来てくれた。シャマルは六課の医療班となる他の医務官と一緒に来るって言うてたから、ちょう遅れるかな。ヴィータ達もリインの案内でそれぞれデスクに着いて、他のメンバーが来るのを待つ。

「エリオ・モンディアル」

「キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「「入ります！」」「きゅくるー！」

次はもうすっかり男の子らしく成長したエリオと、どうゆうわけか機動六課の頃からあんま成長してへんキャロ、そのパートナーの飛竜フリードリヒがやって来てくれた。顔を合わせるたびに大きくなってくエリオには驚きやし、キャロの成長の無さにも驚きや。

「ティアナ・ランスター」

「ウェンディ・ナカジマ！」

「入ります！」「入るっス！」

次にやって来てくれたのは執務官のティアナと、驚くべきことにティアナの補佐を務める執務官補佐になったウェンディや。一昨年までは局関連でバイトをしてたらしいんやけど、今や立派な執務官補佐。判らんもんやね～、って家族みんなで驚いたもんや。

「ギンガ・ナカジマ」

「スバル・ナカジマ」

「チンク・ナカジマ」

「ディエチ・ナカジマ」

「「「「入ります！」」」」

ティアナとウェンディが入ってきてすぐやって来たのは、ナカジマ家姉妹。ノーヴェ以外の姉妹が局員になったんやね。ちなみにノーヴェはナカジマジムってゆうスポーツジムの会長を務めてる。去年になるけど、フォルセティやヴィヴィオ達に、フーカ、リンネってゆう新しい友達が出来たのも、ナカジマジムのおかげみたいやね。

「アリサ・バニングス」

「月村すずか」

「ウーノ・スカリエッティ」

「ドゥーエ・スカリエッティ」

「トーレ・スカリエッティ」

「クアットロ・スカリエッティ」

「「「「「入ります！」」」」」

次は首都防衛隊のバニングス隊の隊長を努めるアリサちゃん、本局

第零技術部――スカラボのすずかちゃんとスカリエッティ姉妹。機動六課の時はアリサちゃんもすずかちゃんも途中参加やったけど、今回は始めから参加してもらう。少しでも戦力は欲しいし、対フッケバインとゆうかエクリプスウィルス感染者用の兵装開発を行ってくれてるすずかちゃん達も常に一緒なら心強い。

「高町なのは、入ります！」

次にやって来てくれたのは我らチーム海鳴のリーダーのなのはちゃん。なのはちゃんは自分よりもっとリーダーに相応しい子がおるって言うけど、なのはちゃんはチーム最古参やし、海鳴市最初の魔導師やし、同じ最古参のすずかちゃんとアリサちゃんからも、なのはちゃんがリーダーで決定、って話やからな。

「お待たせしてすみません！　八神シャマル、以下医療チーム入ります！」

「大丈夫や、シャマル医務官、それに他の医務官の皆さんも」

「医療班のデスク区画はこちらです」

シャマルを始めとした医療チームに続いて、ヴォルフラム操舵手のルキノを始めとしたヴォルフラムスタッフ、ヘリパイロットのヴァイスとアルトを始めとした外部から出向してもらってるスタッフが続々と到着。

「八神二佐。特務六課、総員揃いました」

アインスの報告に「了解」って答えた私は部隊長デスクの前にまで移動。アインスは「起立」とみんなに促して、私はビシッと佇むみんなを見回した。

「今回、私たちは脅威対策室から、管理外世界で無法を働いてるフッケバイン一家の逮捕を任命されました。相手は民間人、局員と関係なく殺害するような連中で、脅すような事は言いたくありませんが危険な任務になると思います。そんな任務であってもスカウトを受けてくれたみんなには感謝しかありません」

この前も、無人世界での開墾地区で住人と局員が殺害された。皆殺しやった。シグナムとアギトが何度か訪れてたし、殺害された局員の中にはシグナムの部下もおった。あれほど殺気立ったシグナムを見たのは初めやった・・・。

「管理世界だけでなく管理外世界の平和のためにも、ここに居る仲間が誰ひとりとして欠けることなく、必ずフッケバイン一家を逮捕しましょう！　よろしくお願いします！」

そう挨拶してから敬礼をして、みんなも「お願いします！」と敬礼。部隊設立の挨拶はこれまでにして、早速フッケバイン一家についての情報を共有するために会議や。リインが各自のデスク上に展開されてるモニターに、判明してる情報を表示させる。

判明してるのは、古代ベルカの戦乱時代には確認されてたエクリプスウィルスなるものに感染してること。これは当時を何百年と生きたアインス達から提供された情報や。まぁ"夜天の書"関連は今な

お秘匿情報やから、今ここで提供者はアインス達やと言えへんけどな。

それからフッケバイン一家の情報を確認し終えて、アインスが「続いて、これで最後になります」って手元のモニターを操作。

「先日、特務零課がフッケバイン一家と交戦したとのことで、対策室からその戦闘映像が提供されました。フッケバイン一家の構成員の名前や武装、病化によって得たと思われる能力が映っています」

対策室からフッケバイン一家の逮捕を任命された時、ルシル君とシャルちゃんとミヤビがフッケバイン一家と戦ってたことを知ってホンマに驚いた。日々の習慣である、おはよう・おやすみの通信で毎日顔は見てるけど、仕事の話は基本的にせぇへんからなぁ。

（今朝もルシル君やアイリと通信で、おはよう、今日も頑張ろう、って挨拶しただけや）

「うひゃ。シャルりんもルシルっチもミャーも容赦ないっスね。火の槍で地面に縫い付けたり、下あごや腕や足を斬り飛ばしたり、いろいろとおっそろしいっス」

「ウェンディ、しーっ。あと、シャルりんとかルシルっチとか失礼すぎ。絶対に本人の前で使わないでよ？　あとミャーってミヤビ三尉のこと？　面識ないのに何考えてんの」

ウェンディの言うようにルシル君たちの容赦のなさに背筋がゾッとする。とはいえ、女剣士と半裸の男はダメージを瞬時に再生させて

て、その様にアリシアちゃんが「病化による肉体高速再生」って引いた。たとえ運よくダメージを与えても瞬時に再生できる。ただでさえ魔力結合を分断されて魔法が通用せぇへんのに、あの再生能力もあって局は被害を被る一向や。

「ディバイダーの真の姿、リアクト状態か。通常でも面倒くせぇのにさらに強化されんのかよ」

「半裸の斧持ちはショートジャンプの使い手か。おそらく私かフェイト執務官でないと対処できないな」

「そうですね。トーレ一尉のライドインパルスや私の高速移動魔法で押し切った方が確実かもです」

半裸の斧持ちはリアクトするとゴツイ甲冑を身に纏って、片手斧も両手でやっとって大きさの戦斧に変わってる。それやのにあの鈍重そうな姿でも高速移動を行ってる。フェイトちゃんかトーレ一尉が相手するのが一番やろ。

「あの女剣士、結構な腕をしてるじゃない。魔力分断っていう能力を得たってだけで粋がってる連中って思ってたけど」

「ああ。だが、シャルの相手にはならなかったな。それも仕方がない気もするが」

「あたしの見たところアンタでも勝てるわよ、あの女剣士」

フッケバイン一家とルシル君たちの戦いは、ルシル君たちの一方的有利で進んでた。けど、ここで新手の登場や。ガトリングやロケットなどの重火器を使う女の子、双子っぽい兄弟、ドラゴン、腕をたくさん生やした男性、そして、銀十字の書物を持った女性。
これまであんまし名前も顔も武装も詳しくは判らへんかったけど、この映像でいろいろと判明したことは六課にとって最大の収穫や。

『待って、ルシル。じゃあ1つだけ。7年前、ヴァイゼンはユヴェーレン地区の遺跡鉱山で、あなた達フッケバイン一家の特徴である刺青を彫った男女2人組によって街の民間人が殺戮されるという事件があったの。それについて簡単に教えてもらえる？』

「「シャルさん・・・」」

「これ、トーマの故郷のことだよね」

「っス」

『・・・信じてもらえるか判らないけど、私たちの名前を騙ったり、刺青を真似たりして、半端な殺しをしてる偽者がいるのよ。私たちもそいつらを追ってるの』

リーダーと認めたカレンってゆう女性が口にした、フッケバイン一家の偽者がおるって話。カレンがルシル君に対して色目を使ってることに若干苛立ちながらも私は「とりあえず、偽者についても捜査が必要やな」って独り言つ。
そんで映像は、どこからともなく飛んできた砲撃が着弾した際に起

きた爆発で、ルシル君たちとフッケバイン一家が吹き飛ばされたのを最後として終了した。オフィス内が一斉にざわつき始める中、アインスが「予め言っておきます」って言うてから、ルシル君たちが無事であることをみんなに伝えた。

「今朝、私はセインテスト一尉と通信で話してるので、無事なのは確かです」

私もそう伝えておく。みんながホッと安堵したのを見てから、「各自、フッケバイン一家メンバーの名前と顔、武装、戦い方をしっかり頭に入れたな？」って確認すると、みんなは「はい！」って力強く応えてくれた。

「よしっ！　では本日よりフッケバイン一家の捜査を始めます！」

特務六課、フッケバイン一家の逮捕に向けて活動開始や。

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

失態を重ねている俺たち特務零課は、次の護衛目的である魔力結晶を"Ｔ・Ｃ・"から護るために行動を開始。第２５管理外世界ヴォルキスへと向かうために零課の専用艦船"シャーリーン"に乗り込んだ。

「ヴォルキスまで３日かぁ。この移動が面倒なんだよね～」

「さすがに３日もあれば、Ｔ・Ｃ・も１５番から２２番の管理外世界で好き勝手できるよな」

「だよね。サクサクっとトランスポートで移動できればいいんだけど、あっちは管理外世界だから無理だし」

ブリッジの艦長席に座るシャルが頬杖をついて嘆息。標的がある場所が管理外世界に移っただけで"Ｔ・Ｃ・"に後れを取る可能性が非常に高くなる現状は、圧倒的な不利を俺たちにもたらしていた。

「転送魔法や転移スキルでの異世界間移動は基本的に違法だから、俺たちが使うわけにはいかないしな。始末書を処理するだけで何ヵ月かかることやら」

「あはは。こういう時は融通の利く上司が居てくれるといいんだけどね～」

シャルと他愛無い話をした後は、スタッフそれぞれに用意されている自室に戻る。ブリッジから出る際にシャルから、もっと一緒に居ようよ～、と袖を引かれたが、副官補佐のルミナとの交代時間が来たからジャケットを脱いで脱出してきた。

「あ、お疲れ様、ルシル」

「お疲れ様、セラティナ」

自室に続く通路を歩いていると、零課の後衛の1人であるセラティナとバッタリ。セラティナとは特別技能捜査課からの付き合いだが、彼女の魂である前世アリスとの付き合いはさらに長く、この世界で言えば6千年以上前、俺の時間感覚から言えば2万年近い。イリスのように前世の記憶を持っているわけじゃないが、それでも魔術師としての才は健在で、アリスの術式を魔法として扱えている。覚醒すれば普通に魔術師化できるだろう。

「珍しい。ジャケットはどうしたの？」

「シャルに取られた。今頃は俺のジャケットを羽織ってるかもしれない」

「ふふ♪　シャルって本当にルシルのことが好きなんだね。はやてのことや騎士トリシュタンのこともあって大変だと思うけど、泣か

すようなことはしちゃだめだよ、男の子？」

「これでも努力はしているよ。ただ、それが上手くいくとは断言できないけど」

「そっか～。私はちょっと恋愛は判らないから相談には乗れないけど、そこは頑張ってとだけ言っておこう」

「ああ、頑張らせてもらうよ。最後の最後までね。・・・じゃあ俺はそろそろ行くよ」

「うん。ごめんね、引き止めちゃって」

「いや。こういう何気ないやり取りが、俺には宝物のようなものだから」

あとは失っていくしかない俺には、日々の生活が本当に眩しい思い出となる。リアンシェルトとの再戦でどれだけ失うのか、ガーデンベルグとの戦いですべてを失うか、それはその時になってからじゃないと判らない。今は願うしかない。少しでも思い出が残った状態で終戦を迎えたい、と。

「嬉しいことを言ってくれるね♪」

本当に嬉しそうに満面の笑顔を浮かべてくれたセラティナに、じゃ、と軽く手を挙げて去ろうとしたんだが、「ごめん。ちょっと時間くれない？」と呼び止められた。迷いが見える声色だったため、俺は

「ん？」振り返った。

「えっと、笑わないで聞いてほしいんだけど。夢・・・の話で」

「流石の俺も夢占いは門外漢だぞ」

「ちーがーう。・・・アリスという名前に心当たりは？ある」

セラティナの口からその名前が出てドキッとした。俺の様子から知っているのだと判断したらしい彼女は「知ってるということは、ただの夢じゃないということか」と唸った。

「なら、シエルとカノンという名前にも・・・心当たりはあるみたいだね」

当たり前だ。シエルは俺の実妹の名前だし、カノンは愛弟子の名前だ。アリスという名前がセラティナの口から出て動揺したところにあの2人の名前を出されたら、いくら俺でも何も言えなくなってしまう。無言は肯定とよく聞くが、まさに今の俺の状況だった。

「夢の中だということもあって顔の輪郭は朧げだったけど、シエルの特徴はハッキリ思い出せる。銀髪に紅と蒼の虹彩異色。明らかにルシルの縁者でしょ？　カノンは金色の髪がとても綺麗だったのは覚えてる」

（アリスの記憶を与えるのはさすがに・・・）

結界魔術の天才と噂されていたアリスは、その噂を耳にしたヨツンヘイム連合に拉致された。そして薬漬けにされて、俺たちアースガルド同盟との戦いを強いられていた。それだけでも十分辛い記憶だ。さらにアリスの記憶には"アンスール"との時間という思い出もある。彼女が"アンスール"を脱退した理由は、メンバーが続々と戦死したことで精神をすり減らしたことにある。無理に笑顔でいようと振舞っているのが見ていられなくなり、生き残りの俺たちが相談して、アリスの記憶を消去してミッドガルドの騎士団に預けた。彼女とはそれっきりだ。だからセラティナという子孫が存在することに驚きもあったし、アリスが普通に女性として幸せを掴んでいたことに嬉しさもあった。そんなアリスの記憶を、セラティナに与えてもいいのだろうか・・・。

「・・・ルシル。もしこれが夢じゃなくて前世の記憶というものなら・・・教えてほしい。アリスは、私と関係のある人間なの？」

真剣な表情のセラティナに俺は「判った」と頷くしかなかった。とりあえず通路のど真ん中でするような話じゃないため、「場所を移そう」と提案して、俺の部屋へと向かう。徐々に俺の部屋に近付くにつれて後ろを付いてくるセラティナがソワソワしだすのが判った。そしてとうとう目の前に来た時・・・。

「シャルやはやて、それに騎士トリシュタンから際どいアプローチを受けても手を出さないルシルだからこそ・・・変な気を起こさないって信じるからね？」

「ソワソワしていた理由それか！？　信じるからね？と確認してい

る時点で疑っていると思うんだが！　・・・俺に襲われるかもしれないと疑われていたと知ってショックなんだが・・・」

いくらこの世界では俺よりセラティナの方が年上だと言ってもアリスと瓜二つである以上、彼女に欲情することなんて世界が滅んでもあり得ない。なんというか妹みたいな感じだ、うん。そう思っていたからこそ、そんな風に少しでも思われていたのはショックだった。

「あ、ごめん、なんかいろいろと緊張しちゃってて。自分に対して冗談を言って、気持ちを落ち着かせようって考えだったんだけど。別の冗談にしておくべきだってね・・・」

「あー、いいよ。あと、もし今の冗談に少しでも本音が混ざっていたなら、俺はこう返す。安心してくれ」

ドア横のパネルに触れて開けると、「おかえりー！」とアイリが元気な声で出迎えてくれた。元よりセラティナとは2人きりになることはないわけだ。俺が言った、安心してくれ、という言葉がどういう意味だったのかを察したセラティナは「確かに！」と笑った。

「――で、問題のアリスという名前についてだが」

アイリが淹れてくれたお茶で喉を潤してから、お茶を注いでくれたアイリに「ありがとう♪」と礼を言っているセラティナを見る。

「アリス・ロードスターという魔術師は、確かに実在した。俺のオリジナルである初代、シャルの前世であるシャルロッテ・フライハ

イトと同時代を生きていた。そして初代とは同じ組織に身を置く仲間だった」

「やっぱり」

「シエルは初代の妹で、カノンは同組織の仲間の名前だな。結論。セラティナが見たのはタダの夢じゃなく前世の記憶だ。・・・いつからアリスの記憶を見るようになったんだ？」

「確か・・・2年ほど前から妙な夢を見るな～程度で、名前と声がハッキリと判るようになったのは半年かな。最初は自分の目線は誰なのか、遊んでいる2人は誰なのか判らなかったし、口は動いてるけど声は無くて、顔の輪郭もモヤモヤしていて全然判らなくて、自分の体も勝手に動くから気味悪いし怖かった。だけど私目線の子と2人が一緒に過ごす時間が本当に楽しくて。いつの間にか夜寝るのが楽しみで仕方なくなってた」

「そうか・・・」

ヨツンヘイム連合との1000年に亙る戦争は、"ラグナロク"という災害で勝者なんてものは無い形で終結した。それから堕天使戦争が始まるまでの数年は、復興で忙しかったが平和で楽しかった。セラティナが見た記憶はおそらくその時期だろう。フノスが病死した時は沈んだ時期が少しあったが、フノスが自分の死で空気が悪くなるのは望まないと生前に話していたから、俺たちはいつまでも悲しみに沈まないようにしていた。

「で、顔や姿はつい最近。嬉しかったよ。ようやく全体像が判って、3人の掛け合いとかいろいろが面白くて、毎晩の楽しみになってる」

「（毎晩・・・頻度が高いな）そうか。もし・・・嫌な記憶を見るようになったら言ってくれ。どうにかして処置する」

「うーん、たとえば？」

「記憶を消す術式を持っている。複製術式の中にあ――」

――■■■■――

「なんだ・・・？」

「「ルシル？」」

アイリとセラティナが俺の顔を覗き込んできた。俺は「いや。なにか声がしたような・・・」と左手で頭を触れる。

――お前■■■■■■■■■だ――

（なんだ、この声は・・・）

判らない。判らないが、「なんでもない。複製は使えないんだったよ。別の方法で対処する」と伝える。セラティナは「そうなの？使えないって、不調？」と聞いてきたため、「そんなところだ」と首肯した。

（そうだ、俺は複製術式を使えないんだった・・・）

「ふーん。・・・でも、記憶は消さないでほしい。とても大事なものだと解かるから・・・」

「そうか」

「あのね、よかったらアリスのこと、もっと教えてくれない？　もちろん記憶のこととかじゃなくてアリス自身のことを」

期待に満ちるセラティナの瞳に、俺は「じゃあ――」と、アリスの基本的な情報を伝えた。当時は珍しかった結界術式に優れた魔術師であったこと。それゆえに結界王と称されていたこと。シエルとカノン、さらに"戦天使ヴァルキリー"の年少組とはとても仲が良かったこと等々。

「・・・今日はありがとう、ルシル。おかげでスッキリ出来たんだけど・・・。ルシルは初代の記憶も持ってるということは、アリスと過ごした記憶もあるんだよね？」

セラティナの言葉に、俺の脳裏に次々と浮かんでくるアリスと思い出。セラティナは椅子から立ち上がろうとしていたが再び座り直した。

「嫌な思い出って、やっぱり辛かったり悲しかったりするやつ・・・？」

「ああ。俺でも思い返しただけで胸が張り裂けそうだ。アリスが組織を辞めたのは彼女の精神が仲間の死ですり減っていたからだ。アリスの憔悴しきった様子に、初代たちが彼女を可哀相に思って記憶を消したくらいだ」

「えっ、消したの！？　アリスの記憶を！？」

「ああ。ヨツンヘイム連合に拉致された頃からアンスール壊滅までの記憶すべてを。もちろん、失った分の期間の記憶を補填することも忘れていない」

そこまで言ったところで俺とセラティナは「え？」と漏らした。自然と話していたが今のセラティナが消えているはずのアリスの記憶を見ることなど、俺が与えない限りは不可能だ。ドッと嫌な汗が全身から噴き出すのを自覚する。あり得ないことが今セラティナの身に起きている。

「ルシル、大丈夫？　顔色が悪いよ・・・」

「大丈夫、大丈夫だ。・・・セラティナ、なにか、何か他に見ていないか？　夢の中で気になったことは？」

「え？　え？　えー・・・うーん・・・、もう1人、子供が一緒に居るんだけど、顔も声も服装とかも判らないんだよ。アリス達と同じ背丈くらいだから十代半ばから後半くらい？」

「（となると、ヴァルキリー年少組は除外か。シエル達と年少組は特に仲が良かったが、年少組は１０代前半以下の身体だからな）それ以外には？」

「それ以外は・・・思い当たるものは見てない・・・はず？」

「むぅ、そうか。・・・ところで、前々から気になっていたことを、この機会に聞きたいんだが・・・いつからサンダルフォンの聖域を始めとした術式名と術式効果を知ったんだ？　いつ頃？　どこで？　記憶を見始めたのは2年前だと言うし・・・」

「うーん、そうだな～・・・物心ついた頃には頭の中に魔法式が頭があって、名前も深く考えることなく浮かび上がってきたから、迷うことなくそのまま採用したの」

「その頃から兆しはあったんだな」

そもそも初めてセラティナと出会った時、彼女が一方通行（サンダルフォン）の聖域を使った時点で気付くべきだったんだが、アリスの生まれ変わりという状況にそこまで気が回らなかった。その後もセラティナの存在が嬉しくて、疑問が頭から吹っ飛んでいた。いやまぁ、アリスの生まれ変わりなのだから記憶は無くても覚えているものはある、かもしれない・・・。

（なんかもう、混乱してきた）・・・じゃあ今後、なにか妙な記憶を見たら教えてほしい」

普通ならあり得ない事が起きている以上、何かしらの前兆かも知れない。堕天使戦争も終盤だというのに"アンスール"時代の問題がここで発生なんて、勘弁してほしい大問題だぞ。セラティナとアリスの記憶の問題を解決しないまま、堕天使戦争を勝ち抜いて"界律の守護神テスタメント"から解放されていいわけがない。

「わ、判った、うん」

そうしてセラティナは俺の部屋を後にした。残された俺はアイリに「お代わり貰えるか？」とコップを軽く持ち上げる。アイリは「ヤー♪」と嬉しそうに返事をして、手に取ったティーポットを傾けてお茶を注いでくれた。そのお茶を飲み、「勘弁してほしいな、本当に・・・」と嘆息した。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒セラティナ†††

２年ほど前から何度か見ていた夢の正体も、ルシルのおかげで無事に解決。夢の中での私の体は、私のご先祖様であり前世でもあるアリス・ロードスター。彼女は結界王と謳われていたみたいで、私は知らない間にアリスの結界術式と同じ効果の魔法と名前を使っていたみたい。それがなんだか嬉しい。

（シエルとカノンと一緒にいる４人目、今日こそ顔や名前、あと声もハッキリさせたいな～）

食堂で夕ご飯を食べて、大浴場でシャル達と、目的地まで遠いね～、って愚痴り大会を開いた後は、丸１日待機指示の明日に備えて就寝。

ベッドに入って、「今日も良い夢を見られますように」習慣化した言葉を口にしてから目を閉じる。意識が眠りに沈み込んでいく感覚を得た。

「・・・ス・・・・」

「ア・・・」

真っ暗闇の中、女の子2人の声が聞こえ始めた。もうこれが夢――記憶の中だってことを察する。いつも通りのことだ。アリスの記憶の中で、セラティナっていう自分を自覚できる。明晰夢って言うのかな。思い通りには動けないけど、シエルとカノン達とのやり取りは好きだから問題ない。しかも寝てから起きるまでの間、ずっと記憶を見ていたのにキッチリ休眠は取れて気分爽快。

「ほら、アリス。ソールスネスの街まで遠出するから、今日は早く出るよ」

「あ、うんっ」

「それではこれより、カノン、シエル、アリスの戦場の妖精隊（フロント・フェアリー）は、本日の任務であるソールスネスの街の警備に入ります」

カノンがルシリオン（さすがオリジナル。身長以外が現代のルシルと全く同じ）にそう言った。ルシリオンは「ああ。気を付けて任務にあたってほしい」と返すと、彼の背後に控えていた大きな8本脚の馬の首筋を撫でた。

「兄様、スレイプニルを借りても本当にいいの？」

「もちろんだ。ソールスネスはグラズヘイムの極南だからな。飛翔術式でも半日以上かかるが、スレイプニルなら1時間もしないで到着するだろう。そんな場所にお前たちを送るのは気が引けるが・・・。すまないな、私たちも手が足りなくてな」

「いいえ。頼りにしてもらって嬉しいです」

「アリスの言う通りですよ、ルシル様」

「そうそう♪」

アリス達の居るこの世界は戦争で大きな被害を受けたらしく、今は復興の最中みたい。ルシリオンたち大人はライフラインの再生や建造物の再建を受け持ち、私たちは凶暴化して人や家畜を襲い、田畑を荒らす動物の駆除を受け持っていた。

「・・・ありがとう、シエル、カノン、アリス」

ルシリオンが見守ってくれている中でアリス達は「よろしくね」ってスレイプニルの首筋を撫でる。そしてスレイプニルに繋がれた4輪馬車に乗り込んで、クッションの敷かれたソファに座る。

「あれ？　兄様、コレらはまさか・・・」

「ああ、そっちの箱は今日の昼の弁当。そっちは夜の弁当。そっちは明日の朝の弁当。腐らないように封印処理してあるから、食べる時までフタは開けないように。一度フタを開けると解除されるからな」

「ありがとー、兄様！」

「「ありがとうございます！」」

魔法・・・じゃなくて魔術でわざわざ弁当箱の中身が悪くならないようにするなんて。すごい贅沢な使い方だな～って思った。

「じゃあ、いってらっしゃい」

「「「いってきます！」」」

窓から手を振りながら挨拶をしたと同時、スレイプニルが一鳴き。最初はゆっくりと、次第にスピードが上がって、最後はとんでもない速度を出して、窓の外の景色がものすごい勢いで流れてく。それなのに馬車は全く揺れないから快適さは保たれたまま。

（私の飛行魔法のスピード程度じゃ見られない次元だ・・・）

私がそんなどうでもいいようなことを考えていると、シエルがジャケットのポケットから幾重にも折られた紙を取り出して、「じゃあ、おさらいしておこうっか」って広げた。それは地図だった。

「ソールスネスの街から届いた支援要請状には、猪と狼が凶暴化しているから助けてほしい、って書いてあったわけだけど。ソールスネス近くの森グリパルンドに棲息してる狼も猪も繁殖期じゃないから、家畜や田畑を襲うような真似がまずしないはずだし、人を襲うなんて聞いたこともないの」

「やはりラグナロクの影響でしょうね。生態系の変化が顕著のようですし」

右手であごに触れて唸るカノンに続いてアリスが「魔族も変異したようだし、普通の動物なら猶更だよね」って背もたれに体重を預けて溜息。"ラグナロク"っていうのは何なのか判らないけど、生態系が変異する災害なんて考えたくもないかも・・・。

「ラグナロクの所為でグラズヘイムもギムレーも野生動物が全滅寸前まで行ってるから、出来るだけ殺さずに済ませたいの」

「ではシエルの重力とアリスの結界の連携ですか」

「そっ。第1作戦はそのつもり！　頑張ろうね、アリス！」

「が、頑張るっ！」

それから目的に着くまで作戦を話し合うアリス達の声を聴いた私は、アリスの結界魔術を見ることが出来るかもしれないって興奮した。

「くぅー！　1時間ちょっとと言っても、さすがに座りっぱなしは

辛いな～」

「クッションがあっても、ですね」

「伸びをするとあちこちから音がする」

馬車から降りると同時に伸びをしてパキパキと体を鳴らして、３人で笑い合う様子にホッコリする。ソールスネスの街の代表に挨拶しに行こうとしたところ、獣の遠吠えがどこからともなく聞こえてきた。

「挨拶は後みたいだね」

「ええ、そのようです」

シエルとカノンの表情がキリッと凛々しくなった。シエルは両腕に籠手を装着して、カノンは黄金の拳銃を２挺と携えた。アリスは特に装備は無いみたい。

「アリス、念のためにアレお願い！」

「判った！」

シエルのお願いの内容を察したアリスは、「無間防衛（リドワン）の聖域！」って結界魔術を展開した。決して狭くないソールスネスの街や田畑や放牧場、そのすべてを覆うほどの超広域結界。初めて見たのに、どうすれば魔法として発動できるかの構築式が頭の中に浮かんだ。や

っぱり私はアリスの生まれ変わりで間違いないみたい。

「圧戒（ルイン・トリガー）！」

ギンッと鈍い音がすると、森から飛び出してきた数十頭の狼の内、半数ほどが強制的に伏せさせられた。あれがシエルの重力魔術なんだ。

「ああ！！　半分も逃しちゃった！」

「わたしがフォローします！」

両手の銃から魔力弾を連射して、なおも突っ込んで来る残りの狼の行く手に着弾させた。それで狼たちは僅かに後退。でも重力の領域には入らなかった。

「陣取り城塞（ウォール・インベーダー）！」

横に長い壁のような結界を展開して、狼たちの進行を止めさせたアリス。その壁は少しずつ前に進み始めて、壁に向かって吠えたり引っ掻いたりしてる狼たちを徐々に重力の領域に押し返した。シエルが「重力を解除するから、警戒そのまま！」って指示を出す。

「「了解！」」

重力によって伏せられていた狼たちも壁に向かって体当たりをし始めたけど、壁は破られることなく森の入り口にまで進んで、狼たち

を完全に森の中に閉じ込めた。

「今だ！　無間防衛（リドワン）の聖域！」

アリスは今度は森全体を覆う結界を展開して狼を隔離。一先ずは狼の進行は止めることが出来たみたいだ。でもこれで終わりじゃない。結界をこのまま維持するなんて、アリスでも出来ないはずだし。そんなことを考えてると、いつもの顔も声も姿をハッキリしない４人目が現れていたことに気付いた。

（あれ？　何だろう、今回は・・・服がなんとなく判る。・・・桃色の外套と神父服・・・？）

ということは、女の子なんだと思う。神父服は女性が着るものじゃないけど、さすがに桃色ばかりとなれば男性じゃない・・・はず。その子はアリス達の元に近寄ってきて、アリスに向かってこう言った。

「彼の力になってあげて。新たなる結界王、セラティナ・ロードスター」

Ｓａｇａ９－Ａ語り継がれざる狂気～Ｋｉｎｇ　ｏｆ　ｐｌａｎｔ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

３日間の長旅も無事に終わって、わたしたち特騎隊は第２５管理外世界ヴォルキスに降り立った。護衛対象となる魔力結晶は、街の中や近くじゃなくて遠く離れた遺跡に安置してあるとのこと。戦闘になるから距離があってくれるのは本当に助かる。ま、結界は念のために張るけどさ。

「文明レベルの低いヴォルキスは宗教最優先の世界だ。件の遺跡も宗教に関するものらしく、信者でも出入りは少ない。が、生体による防衛機構があるそうだ。そっちの方が問題だな」

「かなり大きなカモシカ（アンティロープ）だね。神の使いって言われるほどで、人とコミュニケーション取れるくらいの知能は持ってるってさ」

「話を聞いてくれたらいいんだけど」

「さすがに神様って崇められてる奴と争うのはアウトよね」

「そのアンティロープ、名前なんだっけ？」

「オバラトル」

局は新しい世界を発見したらその世界に一度は訪れていろいろと調査する。その際、局は魔力結晶の守り神みたいなアンティロープを発見。んで、信者の会話から名前が判明。結局オバラトル氏とは接触しなかったけど、この世界の住人と意思疎通しているのは確認した、って調査報告にあった。

「あ、そうそう。呼ぶときはちゃんと氏って敬称を付けるようにね」

わたし達はこれから魔力結晶の護衛を買って出るという旨をオバラトル氏に伝え、了承を得ないといけない。勝手に近付いて敵判定を食らって戦闘なんて、そんな間抜けは犯せないからね。今回の任務できっちり汚名返上しないと。

『こちらシャーリーン。ナイト1。本部より、第22管理外世界ミルマーナで魔力保有生物が襲撃されたとの報告が入りました』

遺跡を目指して深い森の中を走っていたところで入った報告は、"T・C・"がすぐにでもこの世界に訪れるかもしれない、そう考えさせられるような内容だった。わたしは背後に続くルシル達に「各騎、最大警戒！」って指示を出しておく。"T・C・"は転移系スキルか魔法で移動してるから、オバラトル氏と交渉する暇もなく出現する可能性が高い。

「シャーリーン。遺跡周囲を最大警戒。何か妙な事があったら即報告で！」

『了解です！　お気を付けて！』

"シャーリーン"との通信を切り、森を抜けて、眼前に広がる何十本っていう１０ｍ級の石柱群と、直径２００ｍはあろうっていう石畳のステージを視界に入れる。で、その中心にソレはあった。４本の石柱に護られてるかのように鎮座している、虹色に輝く８面体の巨大宝石。伏せていながらも石柱より大きなアンティロープ――オバラトル氏が、４本の石柱に寄り添ってた。

「でっか・・・」

「こわ・・・」

アイリとクララ先輩がそんなオバラトル氏を見てポツリと漏らした。いや確かにその巨体さに気後れしちゃうけど、きっと優しい人？だよ。だって神様だって敬われているんだし。

「ルシル」

「ああ」

まずはわたしとルシルの２人で森から出て、遅れてアイリ、ルミナ、クラリス、セレス、セラティナとクララ先輩と続く。ステージを囲うように並んで立つ何十本の石柱を境界としてるみたいで、わたし達が森から出てきてもオバラトル氏は伏せたまま。

「結界のようなものは感じられない。が、妙な気配はある」

「ルシル。ユニゾンしておく？」

「いや。戦闘行為と受け取られたら厄介だ」

緊張しながらも石柱の間を通過する。オバラトル氏は伏せていた顔を上げてこちらを真っすぐ見てきた。武器を持っていないことを示すために両腕を挙げて、そのまま歩み寄っていく。そしてステージにあと1歩踏み出せば乗れるっていう距離に近付いたころ。

『ようこそ、異国の者たち』

頭の中に聞こえてきたのは、こちらを見据えたままのオバラトル氏からの思念通話。わたし達はその場で立ち止まって、同じように思念通話で『お初にお目にかかります』と挨拶から入る。

『へえ。私と同じ、頭の中で会話が出来るのかい。私を神と敬う者たちにも出来ないことだよ。気に入ったよ。もっと私に近寄ってくれないかな、よく顔を見て話がしたいんだ』

オバラトル氏がその大きな頭をもたげた。彼から１５０ｍほど離れてるけど、うん、遠近感がおかしくなるほどデカい。でもお招きしてもらったのは嬉しい。ゆっくりと腕を下ろして、わたし達は彼の元へと歩いていく。

『魔力結晶を囲う４本の石柱、アレ・・・結界、と言いうより防御魔法だよね』

『というか、魔術だな。ステージに上がってからハッキリと判るようになった』

『マジで？　・・・そんな古くから在る結界ってわけね』

ユーノに頼んで、無限書庫の蔵書の中から第２５管理外世界ヴォルキスのことを調べてもらってある。ヴォルキスはおよそ１０００年前に文明崩壊したって話だ。それと同時に魔法文化も失ったことも。それ以前の情報は残ってないって話だったけど、魔術が存在してた時代から続く世界なのね。

とりあえずオバラトル氏の側まで近寄り、『イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトと申します』と自己紹介して、ルシル達も続いて自己紹介。

『それで、君らはここへは何をしに来たんだい？　異国の者と言ったが纏う空気――妙な力を感じる。君ら、異国ではなく異界から来たのかい？　あぁ、隠さなくていいよ。じいちゃんから聞いたことがあるんだ。昔の人間は、星と星の間を行き来できる技術を持ってたって。この星は一度文明が滅んでいるからね。もうその技術も、そんなことが出来たっていう記録も残っちゃいない』

『そこまでご存じであれば、こちらも正直にお話しします』

オバラトル氏に伝えるのは、わたし達が他の世界から来たこと、管理局という組織の人間であること。そして悪い奴らが魔力結晶、オバラトル氏が言うに"アポローの輝石"を狙っていること、わたし達がそれを阻止しに来たことなど。

『なるほど。・・・そういうことなら護衛を任せようか。私は人に神と崇められているけど、戦なんてやったことがないから強くはないと思う。ただの話せる大きいだけの動物だからね。だから君たちがこの場に留まることを許可するよ。信者たちにも伝えて――ひょっとして、アレが悪者かい？』

オバラトル氏の視線の先を追えば、ステージを囲う石柱群のところに人が立ってるのが判った。ただ、"T・C・"メンバーの特徴である「トラウマの人物・・・に見えない」から、"T・C・"だって断言できない。でも「侵入者を視認。各騎、交戦用意！」って指示を出す。オバラトル氏は、あの人物を信者と即判断しなかったことから、初めて会う人物と考えられるからね。

（シャーリーンから連絡が来なかったなぁ）

『おお！　どこからともなく武器を出した！　すごいね、異界の者たち！』

『わたし達が戦闘を担当しますので、あなたはここで待っていてください。セラティナ、この付近一帯に念のために結界を。ルミナとクララ先輩は、アポローの輝石を防衛！』

『了解！』

――多層封獄結界（パーガトリー・アークケイジ）――

セラティナは即座に五重の強装結界を展開。魔術じゃなくて普通の魔法による結界だけど、層を重ねるごとに魔術でも1発で破壊できない強度を保つことはすでに実験で確認済だ。それでもダメなら、クラリスに結界を任せよう。

『・・・了解』

『近付く奴は全員、私のスキルでどこかに飛ばす！』

戦力外として少し落ち込むルミナ、それにクララ先輩とセラティナを残し、わたし達はさらに侵入者に近付いていく。その最中、侵入者が右手に持つ杖の石突でステージをコツンと打った。

――モレスタル――

それを合図としたかのようにステージ外周の至る所から巨木が次々と生えてきた。それに驚く間もなく「魔力結晶をお借りしたく参上しました！」って侵入者が叫ぶと、ステージからミシミシ、バキバキって音が鳴り始めた。さらに盛り上がってきたと思えば、極太の「根っこ！？」が何百本とステージを割って持ち上がった。

「管理局員の皆さん！　僕に戦闘の意思はありません！　ただ、そこに在る魔力結晶を借りに来たんです！　安心してください！　T・C・は、借りたものはあとでちゃんと返す組織ですから！」

「まぁ返すんだろうけど、魔力を奪ってからでしょ？　それじゃあ意味がないんだよ？」

「T・C・メンバーであると自供したのを確認！　特騎隊、交戦開始！」

魔術師化できるわたし達は魔力に神秘を乗せて、「待ってください！　本当に僕は戦うつもりできたわけじゃ・・・・！」って慌てて"T・C・"に接近。徐々にその姿をハッキリと視認できるようになった。

（トラウマの姿じゃないけど、素顔が判らないように目出し帽を被ってるんだよね・・・）

今はもう壊滅した最後の大隊と同じだ。ただ、仮面は無いし学ランでもない。銀色のモーニングコートとスラックス、アスコットタイ、革靴って格好だ。ダークブルーの瞳や、若干帽子の隙間から飛び出てる緑色の髪が、あの男の特徴ね。

「アイリ！」

「ヤヴォール！」

「「ユニゾン・イン！」

「もう！　局員って、どうしてこう攻撃的なんですか！？」

――アタケ・デ・ライス――

頭を抱えるアイツがまた杖でステージを打つと、持ち上がってた何

十本っていう根っこが侵入者とわたし達を隔てる壁となった。先日のフッケバイン一家のカレンとかっていう女が使ってた茨の壁みたい。

「T・C・がこれまでにしてきたことを思えば、先手必勝を選ぶのは必至だろう！」

――女神（コード・ソール）の陽光――

アイリとのユニゾンを済ませ、両腕に蒼炎を纏わせたルシルが根の壁に両掌底を打つと同時に火炎砲を発射。その2発の火炎砲で根に大穴が開く。穴の縁から全体へと燃焼して灰になって崩れてく中、「まぁ、そう言われたら・・・」って腕を組んで唸ってる侵入者の姿を再視認。

「攻撃をやめてほしいなら答えなさい！　T・C・は何のために魔力を集めてるのか！　メンバー構成に、何で魔術が使えるのか、そしてボスの名前、あとは・・・そのほか全部！」

"キルシュブリューテ"の剣先をアイツに向けて問い詰める。クラリスとセレスとミヤビも、わたしの意思を酌んで構えを解かないままだけど待機してくれた。問題のアイツは「ははは、いやだなぁ。言うわけないじゃん！」って笑った。

――フィエスタ・デ・バイレ――

さらに杖を打ったら、侵入者の背後に生えていた木々がバキバキと

音を立てて割れ初めて、その破片が２ｍ近いマネキン人形、１００体くらいになった。昔、アリサの家で遊んだ格ゲーに登場した木人を思い出す。またあの格ゲーでチーム海鳴トーナメントをしたいな～。

「大人しく渡してくれたら良かったのに・・・」

――オハ・ベネノーサ――

そう言って侵入者は、後ろにズラリと並ぶ木人に向かって小さな何かをバラ撒いた。そしてまた杖を打つと、バラ撒かれた物のところから毒々しい色をしたＤＮＡ状の木蔓がニョキニョキと勢いよく育ってく。最後に木蔓のてっぺんに、アロエの葉のようなものが８枚、ピンっと真っすぐ生えた。

「やはり・・・そうなのか・・・！」

――邪神（コード・ロキ）の狂炎――

目を大きく見開いてたルシルが呻いて、両腕に再び蒼炎を纏わせた。両腕の炎は全身を覆って、２ｍの籠手と脚甲、そして胸甲と４対の細い炎翼へと変化させた。

「何故だぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ちょっ、ルシル！？」

そう叫んで侵入者に突撃するルシルにわたし達は驚いたけど、すぐに「交戦！」って指示を出して、わたしは"キルシュブリューテ"の刀身に炎を纏わせ、ミヤビは炎熱の鬼形態・炎鬼モード。セレスは"シュリュッセル"に冷気を、クラリスは"シュトルムシュターール"の槍と棍の両方に魔力を付加。

「おおおおお！！」

炎の両腕で振るって侵入者を攻撃しようとしたルシルだったけど、木人が地面から引き千切った木蔓を槍のように構えて、ルシルに殺到し始めた。その間に侵入者は後退を始めて、「あなた達が悪いんだよ？」って嘆息した。

「ルシル、突っ込みすぎ！」

――氷奏閃（イエロ・コラソン）――

「ルシル副隊長、一度下がってください！」

――紅蓮拳殴――

「らしくない」

――フェアシュテルケン・ガンツ――

「ていうか！　何をそんなに感情爆発させてんの！？」

――炎牙月閃刃――

セレスとミヤビとクラリスに続いてわたしも木人軍団を攻撃するんだけど、「ただの人形が割と強い！」ことにビックリだ。木で出来た体だからか人間じゃ出来ない動きをしてくるし、表情や目線なんてものがないから攻撃の先読みが難しいのなんの。しかも魔術によって作り出されてるから神秘も強いのか、攻撃を当てても一撃で仕留めきれない。だから時間がかかってしょうがない。

『ルシルから注意！　人形が持ってる槍は毒を持ってるから、穂先の葉には触れないようにって！』

アイリからの思念通話にわたし達は『了解！』って応える。正直、見ただけで８枚の葉を穂とする槍のヤバさは判ってた。なんか葉から紫色の液体が滴り落ちてるし。アレにも触れないようにしないと。

「さてと、今のうちに結晶を借りに行こう」

わたし達が木人軍団に苦戦していると、いつの間にか侵入者から"輝石"まで一直線と道が生まれてた。知らずに誘導されちゃってたみたい。焦りが生まれる中でルシルから『各騎、一時人形たちより離脱！』って思念通話。広域攻撃が得意なルシルのことだ、纏めて焼却するのかもしれない。そう考えたわたしとセレスとクラリスとミヤビは、最後に１発だけ近くの木人に攻撃を入れてから、その場からダッシュで離脱。

「おい、Ｔ・Ｃ・。貴様が何故その魔術を扱えるのか教えてもらう

ぞ！」

――輝き燃えろ汝の威容（コード・ケルビエル）　――

炎の円陣がいくつもステージや地面に描かれて、木人たちをその範囲内に捉えた。直後、円陣内が炎に包まれた。円陣の外に漏れた木人は残り・・・９体。そいつらへの追撃もルシルがやってくれるみたい。

――無慈悲たれ汝の聖火（コード・プシエル）――

ルシルの両籠手から炎龍が１０頭と出現すると、９頭は木人９体へ向かって、残り１頭は侵入者へ突撃。わたし達も続いて侵入者へと駆け出す。木人たちが炎龍にパクっと食べられている様を横目に、「おっかしいな～」ってぼやきながら回避行動を取る侵入者と、炎の籠手を振るって炎弾を量産して攻撃するルシルの姿を見る。

「貴様は何者だ！！」

「僕の正体なんて、どうでもいいじゃないですか」

――モレスタル――

杖を地面に打ち付けた侵入者は、自分とわたし達を隔てるように新たな木々を生やした。炎弾が次々と着弾して木々に穴を空けていく。ルシルは怒りに任せたかのように木々に攻撃を加えて、徐々に侵入者に近付いてく。

「イリス。下手に接近したら巻き込まれそう」

「だからと言って援護をしようとすると、ルシルに誤射しそう」

「どうしましょうか、シャル隊長」

ルシルらしくない連携を考えない独り善がりな力押し戦術に、わたし達は棒立ちになるしかなかった。とりあえず、『アイリ。ルシル、どうしたの？』を聞く。ユニオン中でもアイリ個人への思念通話は通せるから、ルシルの集中を邪魔しないようには出来る。

『え？　あ、えっとぉ・・・。今、T・C・メンバーの使ってる魔術は、オリジナルの生きてた時代、敵性勢力に属してた悪い王様のものらしいんだよね。オリジナルの記憶も持ってるルシルだからさ、かつての敵の魔術師が使ってた魔術を見て、感情がそっちに引っ張られちゃってるみたい』

ルシルのオリジナルが生きてた時代というと、シャルロッテ様や、クラリスの前世の騎士グレーテル、アンジェの前世の騎士チェルシーも生きてた時代だ。そしてシャルロッテ様たちと同じ勢力の魔術師だった。でもなんだろう。かつての味方が使う魔術だっていうのに、胸の内に渦巻くのは怒りや憎しみと言った負の感情だ。

『アイリ。敵の、そいつの名前は？』

『・・・葬柩王フォード・テルスター・スリュムヘイム』

その名前を聞いた時、ゾワッと背筋が震えた。これはあれだ、わたしじゃなくてシャルロッテ様の感情だ。

（シャルロッテ様、ルシルとのデートの時に代わったきり応えてくれなくなったんだよね・・・）

旅館での1泊した時に、一度だけシャルロッテ様と話がしたいってルシルにお願いされて、時間にして1時間ちょっとくらいシャルロッテ様にこの体を貸したんだけど。わたしの体の支配権が戻った後に、ルシルとナニしたのか、ナニ話したのか聞いてみたら・・・

――あなたの承諾なしに勝手にナニとかするわけないでしょうが！

って、そうじゃなくて・・・えっとぉ、ほら、ルシルってオリジナルの記憶も持ってるでしょ？　つまり私の知ってる奴でもあるの。だからその・・・あれだ、世間話を少々・・・ね――

はぐらされたのは判るけど、シャルロッテ様がルシルのオリジナルと知己だってことは事実だから、わたしもそれ以上の追求はやめた。その翌日からシャルロッテ様がわたしとのコミュニケーションを一方的に一切取らない不干渉期に入ったことで、わたしの体を貸していた間の出来事は知らないまま。ルシルに聞いても教えてくれないしさ。

『（不干渉期でも感情がわたしにまで伝わるくらいに、シャルロッテ様はフォードとかって奴が嫌いなんだな～）あのさ、アイリ。ルシルを冷静に出来ない？』

『無理。鎮めるにはＴ・Ｃ・を倒すしかない』

『だよね～』

ルシルの様子からして無茶なお願いだっていうのは解かってた。今も侵入者を焼き払おうと頬の籠手を振り回して、炎弾や火炎砲をこれでもかってくらいに放ち続けてる。対する侵入者も、新しい木々を生やしては盾にして防御。

「さすがにしつこいな。知ってるかもしれないけど、王から僕のような実行部隊にはある決まり事があるんだ。現場で逃げられない、捕まってしまうような場合は・・・攻性術式で反撃してもいいって。もちろん、誤って殺さないように手加減はするけどね」

――アタケ・デ・ライス――

「先ほどの樹木人形と毒槍の時点で殺す気満々だっただろうが！」

――害神の投焔（コード・ボルヴェルク）――

木々の根っこが地面から飛び出すと、ルシルを打とうと鞭のように襲い掛かった。対するルシルは四肢に装着してる炎の籠手と脚甲を一纏めにして、４ｍくらいある長大な炎の突撃槍に変化させた。

「あつ！　ちょっ、熱波で近付けないんだけど！」

炎というか、太陽の光みたいに真っ白な槍を振り回して木々や根っこを焼き払ってくルシルだけど、その所為でまた援護が出来なくなってる。だから「セレスとクラリスは輝石の護衛に回って。わたしとミヤビはこのまま待機」って指示を出す。

「侵入者がわたし達を引き付けて、本命が奪いに来るってことも考えられるし。実際、ルミナ達がその手で奪われちゃってるからね」

経験者のセレスとクラリスは苦い表情を浮かべて「了解」この場から離脱した。残るわたしとミヤビは、ルシルのフォローにいつでも移れるように注意するんだけど、熱波から少しでも逃れたくて２人から距離を取った。

「さっさと答えろ！　貴様は何者で、何故その魔術を扱える！？」

「・・・はぁ。うっせえ、うっせえ、うっせえなぁ！　下手に出てりゃぎゃあぎゃあと！」

――エル・ディアブロ・デ・ラ・プランタ――

「俺様に言われた通り、大人しく魔力結晶を差し出しゃいいんだよおぉぉ――――――！！」

「その口調！　フォードォォォォォォ――――――！！」

言葉遣いががらりと変わった侵入者の背後に、草木などで組まれた巨人の上半身が出現した。内臓の見えない筋肉の人体模型のような

感じで、上半身だけなのに３０ｍくらいある。侵入者は巨人が差し出した左手の平に乗って、「鬱陶しいんだよぉ！」って杖を横に払った。それを合図としたように草木の巨人は空いてる右手を握り拳にして、ルシルへと振るった。

「炎熱系に植物など！　通用するものか！！」

感情を剥き出しにするルシルが炎槍の柄を両手で握り締め、迫る拳に向かって突きを繰り出したそうとしたんだけど・・・

――レプロチェ――

「っ！？」「「あ・・・！」」

ルシルの足元から伸びてきた蔓が体を拘束した。そして、巨人の拳はルシルに直撃して、ルシルは何百ｍと殴り飛ばされた。

Ｓａｇａ９－Ｂ語り継がれざる狂気～Ｔｈｅ　Ｅｎｄ～

†††Ｓｉｄｅアルテルミナス†††

魔術も神秘も無い私は戦力外として後衛に回された。触れられるものであれば例外なく分解する私のスキル、エクスィステンツ・ツェアレーゲンが無くたって、自慢の格闘技だけでも最強だって自負してた。それが今じゃ護るべき魔力結晶の側で、イリス達の戦いをモニター越しで見ているしか出来ない。

（あのルシルが、あそこまで感情を爆発させて戦うの初めて見た・・・）

"Ｔ・Ｃ・"が私たちに披露した植物を操る魔術を見たルシルは半ば暴走状態に陥って、たった独りで炎の魔術を使って戦闘。まぁルシル単独でも十分やれてると思う。コード・ロキっていう炎を装備する術式で、木々を焼き払っていくし。

『彼、すごいね。まるで炎そのものだ。しかもなんて綺麗な蒼色。魅了されちゃうよ』

魔力結晶"アポローの輝石"を護る、この第２５管理外世界ヴォルキスの住人から神と敬われるアンティロープ――オバラトル氏が、わざわざ思念通話を使ってルシルをそう称した。独り言だと思うけど、『ですね』と同意しておいた。

「あれ？　セレスとクラリスが戻ってくるね」

「どうしたのかな・・・？」

クララとセラティナが首を傾げて、私も「本当だ」って頷く。ルシルと"T・C・"は今もなお交戦中で、イリスとミヤビは少し離れたところでそれを見守って、セレスとクラリスはこちらに向かって走って来ていた。

『どうしたの？』

『ルシルの暴走を止められないなら、もうそのまま相手させるみたい。で、輝石奪取の本命が来るかもってことで、私とクラリスも輝石の護衛に回ることになったの』

『あのT・C・は派手に暴れすぎ。まるで陽動してるみたい』

『確かにね』

――エル・ディアブロ・デ・ラ・プランタ――

ここで"T・C・"は新しい魔術を発動した。草木で組み上げられた巨人の上半身という魔術だ。ここまで離れていてもビリビリと感じる、その巨人のヤバさ。とは言ってもルシルはこれまでにアイツの生やす植物をすべて焼き払ってる。だからアイツがどれだけヤバい魔術を使っても、あのルシルなら、って考えていた。

「「「あ・・・・！」」」

――レプロチェ――

私とセラティナとクララは、ルシルが蔓に拘束されたのを見た。でも、ここからじゃ何もフォロー出来ない。イリスとミヤビだって、ルシルの暴走の所為で完全に出遅れた。だからルシルが巨人の拳の直撃を受けるその様を、ただ見ているしか出来なかった。

「そんな・・・・！」

「クララ！」

「判ってる！」

転移スキルを持つクララに、遠くにまで殴り飛ばされたルシルを助けに行ってもらう。魔術に非殺傷設定なんてものはなくて、死ぬときは本当に死ぬ。モニターで見た限りルシルは防御術式を使ってなかったみたいだし、下手したら重傷を負ってる可能性もある。

――青々と広がるは果てに死地なる定めが草原――

『イリス、ミヤビ！　ルシルはこっちで対応するから、そっちはそっちで出来ることをして！』

『判った！　そっちも気を付けて！』

『ルシル副隊長のこと、お願いします！』

イリスとミヤビが戦闘に入ったのを確認して、「クララ、そっちの様子は！？」と通信で連絡を入れると、『今はアイリが、ルシルの内から治癒魔法を掛けてる』と返ってきた。

『こちらアイリ。ルシルの意識が戻れば戦線復帰できるけど、今すぐは無理みたい！』

『・・・セレスとクラリスはごめん、戻ってきて。ルミナ達はそのまま輝石の護衛を！』

――草は茂り、花は咲き、樹は満つ――

イリスの指示に従ってセレスとクラリスは来た道を戻り、ルシルに代わって戦い始めたイリスとミヤビの元へ。それをまた見送る私は「はぁぁぁ・・・」大きな溜息を吐いた。そんな私の様子にセラティナが「不満？」って聞いてきたから、「割とね。魔術師じゃないからしょうがないけど」って零す。

――蔓蔦はうねり、花弁は舞い、地気根は蠢く――

「分解スキルは魔術には通用しない、か。ルミナのスキルに神秘が乗れば魔術にも通用するって話だけど」

「その方法が無い以上は、T・C・との戦いのときは常に後衛組ってこと。特騎隊は私の力を存分に発揮できる居心地の良い場所なの

に、戦力外通告食らってヘコむのもしょうがない。あー、しょうがないが口癖になりそう」

『人の一生は私から見れば本当に短い。でもだからこそ、たくさんのイベントが凝縮されてると思うんだよ。楽しいこと、悲しいこと、ごちゃ混ぜの人生は山あり谷ありだよ、お嬢さん』

『えっと、どうもです』

――其は絶望なりや。否、希望なり。恐れることなかれ――

まさかオバラトル氏からフォローが入るとは思わなかった。私は氏にお礼を言いつつ、モニターに視線を戻す。イリスの神秘を乗せられる絶対切断スキルがあれば、炎じゃなくたって植物くらい簡単に料理できると考えていた。イリスの攻撃は植物の巨人に当たってはいるけど、どれも決定打になっていないように見える。

「シャルの攻撃、ひょっとして効いてない？」

『イリス、魔術とスキルはちゃんと使っているの？』

セラティナの疑問は私も抱いたから、集中の邪魔になるのを解かっていながらも思念通話でイリスにそう尋ねると、『当たり前でしょ！なのにコイツ、全然効いてない！』と焦りに満ちた返事が来た。

――其は醜悪なりや。否、美麗なり。蔑むことなかれ――

『あり得ません！　シャル隊長の魔術は、ルシル副隊長の魔術にも通用していたんですよ！？　それを、このような犯罪者の魔術に後れを取るなんて・・・！』

ミヤビが巨人の攻撃を受け止めて、その隙にイリスが攻撃を加えるという戦術で、巨人を構築している草木は斬れてはいる。けど、絶対切断という名に相応しい切れ味は発揮できていない。あれだとただの魔術の斬撃だ。

「というか！　イリス！　ルシルから預かってたでしょ！　対魔術用の武装！」

"T・C・"が魔術を扱える集団だと仮定した際、ルシルがイリスに渡した武装ならきっと・・・。私のその言葉にイリスは『あっ！！　しまった、普段使わないから忘れてた！』なんて言うから、うっかり過ぎて呆れた。

――愚かしき者に美しき粛清（センテンシア・コンデナトリア）を――

ここでイリス達と合流したセレスの氷結魔術が発動。イリスとミヤビが同時にジャンプした瞬間に地面が一瞬で凍り付いて、植物の巨人も腰の部分が地面に接しているから凍っていく。

――フェアシュテルケン・ガンツ――

――煉牙灼熔　爆帝　双焔掌――

そこに"シュトルムシュタール"全体に魔力を付加したクラリスと、両腕に炎の竜巻を渦巻かせているミヤビが接近。クラリスは金棒の方でぶん殴り、ミヤビは両掌底を打ち込んだ。外側だけじゃなく内側も完全に凍結されたため、巨人は轟音を立てて崩壊した。

――其は悪性なりや。否、良性なり。危ぶむなかれ――

「炎で燃やすんじゃなくて、凍結すれば良かったみたい。ルシルも、植物には火なんてセオリーに縛られなかったらきっと・・・」

「責められないでしょ、そこは。私だって炎熱を使えたら使っていたし、何より過去の記憶の影響もあるみたいだし」

クララやアイリからの連絡はまだない。今もルシルの治療を行ってるんだろう。モニターにはイリス達に包囲された"T・C・"が肩を竦めてる様が映し出されてる。イリスは前から"キルシュブリューテ"を、クラリスは後ろから"シュトルムシュタール"を突き付け、ミヤビが最大警戒で"T・C・"の手から杖を取り上げて、セレスは凍結封印のために全身から冷気を放出しながら手を伸ばした。

――我は植物の神に愛されし申し子。我が言の葉に今こそ応じよ――

――創世結界フィエスタ・デ・デスペディダ――

その時、私たちの視界に広がる世界が一変した。深い森に囲まれた石畳のステージや多数の石柱は消え、オバラトル氏と４本の石柱結

界に護られた魔力結晶、"アポローの輝石"はそのままに地平線まで広がる平原。

「創世結界・・・！？」

名前の通り世界を創るという魔術。イリスやルシルも発動できる、最高位の術式だ。ルシルの言だと創世結界を発動できる魔術師は、魔術師が跋扈していた当時ですらほんの一握りだって話だ。

『世界が変わった！？　すごい！　これも異世界の魔法かい！？』

オバラトル氏は大興奮しているけど、魔術を知る私は心穏やかにはいられない。すぐアイリに『ルシルは起きた！？』って確認をするけど、返ってきたのは『ルシルとクララと逸れた！』という焦り。

『こちらイリス！　侵入者の姿をロスト！　それに、ミヤビ、セレス、クラリス！　どこに居るの！？』

創世結界内でもモニターは使えるようで、イリスがモニターを用いて全体通信を掛けた。すぐさま『セレス健在』『クラリス健在』『ミヤビ健在です』と返答があり、『セラティナ、オバラトル氏、健在！』『アイリ健在！　ルシルの行方は不明で、現在捜索中！』『クララ健在！　アイリとルシルを捜索中』と入り、私も『アルテルミナス健在！』と報告。

『了解。アイリとクララ先輩はルシルの捜索をそのまま続けて。他のみんなは、オバラトル氏を目印に集ご――』

――真技ディオス・デ・ラ・プランター――

イリスがそこまで言いかけたところで、周囲からドンッと轟音と共に強烈な魔力反応が発生した。バッと後ろに振り向けば、「うそ・・・」と思わず漏らしてしまうほどに信じられない光景があった。

「植物の巨人・・・！」

私の視線の先では、草木で組まれた１０体の巨人が今まさに構築されている途中だった。まずい、と思った。でも私だと魔術で作り出されたモノは破壊できない。モニターを見れば、イリス達の所でも巨人が組み上げられ始めているのが判る。それでもイリス達が戻ってくるのを待つ？　あり得ない。イリス達の応援を待つことは出来ない。だからここは私が出ないと。

「エクスィステンツ・ツェアレーゲン！」

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース――

分解スキルを限界まで発動する。付加するのは両腕と両膝。足の先はダメだ。地面を分解して、文字通り墓穴を掘ることになるから。続けて高速移動魔法を使って、太ももまで組まれた先頭の巨人に向かって突っ込む。先頭の巨人が最も早く造り出されているから、後ろ向きに転倒させてドミノ倒しにしてやる。

「ツェアラーゲン・・・」

先頭の巨人まであと1回地面を蹴れば到達できる距離にまで近付いたところで、右腕を振りかぶる。そして地面を蹴って巨人の額に向かって跳んだ。

「シュラァァァーーーーク！！」

振りかぶっていた右拳を額に向かって繰り出す。拳から伝わってくるのは植物特有の硬軟じゃなくて、鋼鉄を殴ったような手応え。転倒させるどころかこちらが弾き返されそう。

「上等！」

続けて左拳を打ち込んで、その反動で後ろへ向かってバク転。足元に魔法陣の足場、シュヴァーベン・マギークライスを発動して着地。

「倒れろぉぉぉーーーーー！」

――ルフト・クーゲル――

空気を殴ることで生まれる拳圧攻撃を連続で放つ。神秘は無いからダメージはほぼ0だろうけど、魔術だろうと衝撃だけはきちんと通る。でもまぁ、こんなちゃちな攻撃だとよろけもしないか。

「ならば！」

両拳に魔力を集束させつつ、足場を階段状に展開してさらに上空へ

と駆け上がる。その間にも巨人はくるぶし辺りまで出来上がっていく。くるぶし辺りですでに３０ｍ近い身長。巨体ゆえに動きは鈍いだろうけど、それでもあんなのが暴れだしたら厄介だ。
巨人の高さを超えたところで最上段の足場から飛び立ち、落下しながら高速連続前転。遠心力に加えて全力の分解スキルによる右踵落としを、「おらぁぁぁぁぁぁぁ！！」打ち込んだ。弾き返された反動でバク転して、巨人の顔面側へと落下。

「ムート・フェアナイデン！！」

魔力集束拳撃を、最初は左、続けて右と額に打ち込む。強烈な魔力爆発で私は後方へ吹っ飛ばされた。で、巨人はというと「くそっ、よろけもしない！」ことで、いよいよ私は役立たず確定へ。

（上がダメなら下を攻めるしかないか）

諦めの悪さは尋常じゃないよ、私は。落下しながらも巨人の首に蹴り、胸に肘内、腹に正拳突き、局部に後ろ回し蹴りを打ち込んでいく。そうして地面に激突する前に浮遊魔法を使ってゆっくり着地。その頃には巨人の足は完全に出来上がっていて、今まさに歩き出そうとしていた。

「せいやぁぁぁぁぁぁ！！」

――ツェアラーゲン・シュラーク――

分解スキルを右脚に付加して、そのまま地面へ突っ込む。私のスキ

ルによって大地は大きく分解されて、深さ２０ｍ、直径４０ｍの大穴を開けてやる。そこは巨人の１歩目である右足の着地地点。すでに足が下ろされ始めていて、今さら穴を避けられないはず。案の定、巨人の右足は大穴にすっぽりと収まってそのままバランスを崩した。問題は後ろ向きじゃなくて、前に向かって倒れようとしたこと。ま、時間を稼ぐことは出来るから前向きに倒れても結果オーライ。そう考えたけど、先頭の巨人の背後で造られ終えた２体の巨人が、先頭の巨人の肩を掴んで転倒を阻止。

「はあ！？」

転倒を免れた巨人は、眼球なんてものがないポッカリ空いた目と口を私へと向けた。何か仕掛けてくるって、直感が働いた私はすぐにその場から離れる。

――アレグレ・バイレ――

直後に巨人目と口から、私くらいの大きさをした何かが何百発と連射されてきた。地面に着弾したソレをよく見てみれば、「種？」のような物だった。種からも神秘を感じる。私のスキルじゃ破壊できない。

――カニョン・デ・ヒラソル――

「向日葵（ゾネン・ブルーメ）・・・？」

何百個の種から生えてきたのは巨大な向日葵。一体なにをするのか

と思えば、花の中央が灯りだした。何かが来ると判断したから、グッと足に力を込めたその時、その灯りは砲撃として発射されてきた。

「っとと！」

一気に何百発ならまずかったけど、前列の数十本からの同時発射ということもあって回避は容易かった。

――クテル――

次々と造り終えられる巨人の体の至る所から、遠距離斬撃の如く鋭い葉が何百枚と放たれた。さらに巨人たちは円陣を組むかのように移動を開始。包囲されるような状況は回避しないと。

――アグッハ・ヴェネノーサ――

葉っぱカッターに向日葵の種弾丸に加えて、毒々しい色の棘が連射されてきた。さらに巨人たちによる直接攻撃も追加。３０ｍ以上の巨体のくせして割と俊敏に動いて、私を踏み潰そうとしたり蹴ろうとしたり、捕まえようと手を伸ばしたりと、私を害すための行動に移った。

「（結界内だからと言ってどこまで削っていいのか判らないけど、もうこれしか・・・！）あんまり使いたくないけど・・・。ドゥルヒブレッヒェン・デア・グレンツェ。・・・ぅぐ、あぐぅ・・・！」

それらの攻撃を掠りながらも回避して、分解スキルのリミッターを

解除。全身が軋みを上げ始める。

――クスクスクスクス――

頭の中にフェードインしてくる笑い声。子供の頃は私もそんな笑い声を出していたけど、ある事件を機に改めた。大鎌型の神器を持つリンドヴルム兵との戦いの最中に私の胸に去来した、人類に対しての強烈な負の感情。私にも前世の記憶とかがあるのかは判らないけど、もしあの負の感情が記憶の中から溢れ出したものなら、私の前世は何て恐ろしい人間だったんだろう。

（あー、やっぱりキツイな～）

スキルの限界突破はその頃から身に付いたものだ。分解効果の範囲がとんでもなく広がった分、自分の体にもダメージが入るようになったばかりか、負の感情が苛むようになった。だから時間を掛ければ掛けた分、私はきっと私じゃなくなる。

「だからと言って、イリス達を待って全丸投げなんてしたく・・・ない！！」

物心つく前から私が持っていた漆黒に輝く六角形型の腕輪、"ツァラトゥストラ"。どこで作られたのか、どういう材質なのか、どういう機構なのか、そう言った正体も未だに不明。魔力の集束量の上昇、出力・運用力の向上、分解スキルを円滑に発動できるように作られているため、デバイス登録してある。

――殺せ。壊せ。滅ぼせ。亡くせ。人類を。自然の毒を。動植物の害を。亡くせ、滅ぼせ、壊せ、殺せ――

「う、うる・・・さい・・・うるさい！」

両腕にはめている"ツァラトゥストラ"の６つの側面、計十二面に刻印されている十字架が黒く光りだす。そして"ツァラトゥストラ"は、はやての"シュベルトクロイツ"のような円のある十字架へと変化。この状態が私のスキルの限界突破形態だ。

「おおおおおおおおおおおお！！」

――グローセス・クラーター――

横棒の片方で地面を穿つと、その地点を中心に直径５００ｍ、深さ１００ｍの大穴を瞬時に開ける。１０体の巨人は足場を失ったことで落下を開始。自我が無い所為か何の反応もなく落ちていく。そんな中、私に最も近かった巨人が手を伸ばしてきた。

「触るな！」

"ツァラトゥストラ"を振るって、私を握ろうとする巨人の手の平に打ち付けた。魔術である創世結界によって造られた大地をも穿てるようになっている私の分解スキル。それゆえに、巨人の手も一撃で粉砕してやることが出来た。

――手だけで満足？　違うよね？　全部、全部潰すの。足を、腹を、

胸を、首を、頭を。潰せ潰せ潰せ――

どんどんハッキリしてくる声と憎悪。かぶりを振って、決して憎悪に支配されないように「黙れ・・・！」声を出す。

そうして巨人たちは穴の底へと落ちた。埋められたら良いんだけど、残念ながらそんな魔法もスキルも持っていない。念のために穴の縁から底を見てみると、巨人たちは腕を伸ばしたり、よじ登ろうとしたりとしていた。でも無駄な足掻きだ。穴の側面は何のコーティングもされていないから、よじ登ろうとすれば崩落する。自分で自分の墓を埋めるようなものだ。

――トドメを刺さないの？　馬鹿なの？　潰せ。徹底的に。完璧に。完全に。一切合切の容赦なく――

「ふ・・・ふ・・・クス・・・クスクス」

口が自然と歪み、そんな笑い声が零れてくる。すぐにハッとして左手で口を押える。限界突破形態の持続時間、つまり負の感情に支配されるまでのおおよその時間を、リンドヴルム事件からたびたび計ってきていた。結果、スキルの限界突破時間は徐々に長くなり、逆に感情に支配される時間が短くなっていく、と判明した。

「り、リミッター解じ――・・・！」

最後まで言い切ることが出来なかった。何故なら大穴からカンコンカンコンと木と木がぶつかり合う音がフェードインしてきたからだ。早鐘を打つ心臓を抑えるかのように胸を押さえ、「来る！」と"ッ

ァラトゥストラ"を構える。

――エクスペクタクロ・デ・コミコ――

「木人形・・・・！」

何十体という木で出来た人形が、ゴキブリみたくワラワラと大穴から這い出てきていた。

――クスクス。壊し甲斐のある木偶人形じゃない。振るえ、私の第四偽典で薙ぎ払え――

「っ・・・・！？　手が、勝手に・・・・！？」

右腕だけが私の意思とは無関係に動き、"ツァラトゥストラ"を振るい始めた。そして迫りくる木人形たちを次々と粉砕していく。

――そろそろ体、私にちょうだい？――

全身が総毛立つ。このままだと確実に乗っ取られる。それが判った私は、敵の軍勢に包囲されつつあるというのに「リミッター解除・・・・！」を行った。"ツァラトゥストラ"は十字架から腕輪へと戻り、魔術にも通用していたスキルもその効果を失った。待っているのは、木人形に対して何も抵抗手段を持たない私の・・・・敗北。

「私はどうして・・・・魔術師じゃないの・・・・？」

泣き言は言いたくないけど、「出ちゃうんだから、しょうがないじゃない！」って叫んで、私は効かないと解かりながらも木人形たちに殴りかかった。

Ｓａｇａ１０覚醒～Ｃａｌｌｓ　ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｐａｓｔ～

†††Ｓｉｄｅセラティナ†††

"Ｔ・Ｃ・"の魔術師が発動した創世結界。私たち特騎隊は結界展開時にバラバラにされてしまったようで、さっきまで一緒だったオバラトル氏や"アポローの輝石"の姿はどこにもない。敵魔術師は植物を操ることを得意にしてるようで、草木で組み上げられた３０ｍ以上の大きさを誇る巨人を何十体と造り出した。

『セラティナは、オバラトル氏の護衛を最優先！　輝石は・・・最悪Ｔ・Ｃ・に渡しても仕方ない！　局員や民間人への攻撃は不許可っていうアレも、今の状況じゃ守られていないも同然だし！』

『了解！』

モニター越しのシャルからの指示。シャルはルシルから預かった対魔術用デバイス、水色の投信を持つ長刀"トロイメライ"を振るって、植物の巨人の足を寸断して転倒させる、を繰り返してる。巨人はうつ伏せのままでも腕を払ったり、ぽっかり空いた大きな口で飲み込もうとしたり、体の至る所から伸ばした根や蔓などで攻撃したり、立っていても倒れていても厄介な存在だった。

（シャルには二つ返事で応じたけど、シャル達の魔術どころかルミナのスキルのようなものさえ、私は持ってない。そんな私に護衛なんて大役を果たせるのか・・・）

結界魔法だけなら全魔導師の中でも五指に入るっていう自負はある。でもそれが通用するのは魔法と一部のスキルのみ。練度の高い結界破壊系のスキルや魔術が相手となれば一気に脆くなる。しかも今回は特に不利になる魔術が相手。私に敵う道理はないけど、それでも全うするだけだ。

「氏よ。私が必ずあなたを護り抜きますが、輝石は最悪見捨てることになるかもしれないことを今この場で、我が隊の長イリスに代わり陳謝します。本当に申し訳ありません」

『かまわないよ。信者たちに必要なのはアポローの輝石という偶像で、中身は必要ないんだ。あの植物を操る彼は、借りに来たと言っていたからね。いずれは返してくれるんだろう。まぁ数日ほどであれば嬉しいけどね』

オバラトル氏はそう言って頭を揺らした。笑ってるんだろうけど、"輝石"を盗られた時点で特騎隊の負けが確定する。シャルはそれでもしょうがいないって言ってたけど、可能なら完全勝利でこの戦いを終えたいに決まってる。

「オバラトル氏。戦闘の協力を申し出てもよろしいでしょうか？」

『・・・それは何故か』

「こちらの勝手な理由です。負けたくないんです、あの犯罪者集団に。私たちの組織は、連中の有する特殊な力の所為で一方的に負け

続けています。体面を気にしているのか？と問われたら、否定はしません。でもそれだけではないんです。悪事を止めたい、世界を護りたい、と。・・・これは氏を危険な目に遭わせるとことになるので、もちろん断ってくださっても――」

『いいや、その言葉を待っていたよ。隊長さんが、私を護れ、と言っていただろう？　護られるべき対象は、進んで戦闘に参加するわけにはいかないからね。護ってくれる者が困るだろうから。でもいいのかい？　隊長さん、怒るんじゃない？』

「みっちり怒られてきます」

命令無視に護衛対象を戦闘に参加させるなんて、減給どころか停職くらい貰いそうだ。それでもこれ以上の好き勝手を許すわけにはいかない。そんな覚悟をしてると、『私が隊長さんに言っておくよ。私が勝手に戦い始めたとね』オバラトル氏がそう言った。

「え、でも・・・」

『連中の狙いは輝石。なら関係者の私が戦わなくてどうする。・・・さぁ、こちらにも来たぞ』

地響きと共に近付いてくるのは植物の巨人３体。巨体の割に歩くスピードが速い巨人たちに向かってオバラトル氏が「オオオオオオオオ！！」雄叫びをあげた。そして迫り来る巨人たちへ突進。巨人たちはグッと腰を落として、オバラトル氏の突進を受け止めようと両腕を伸ばした。

『はっはっは！　私の突進を受け止められるとは思わないことだね！』

オバラトル氏と巨人たちが激突。すると巨人たちは面白いほどに吹っ飛ばされて、地上へ激突。普通の人間が相手なら、地上へ激突（氏のタックルだけですでに死んでいるかも）した時点で終わっていただろうけど、相手は草木で組み上げられた植物の巨人。痛みなんてもちろんなく、ゆっくりとだけど起き上がろうとしていた。

『させないよ』

反転したオバラトル氏は起き上がり途中の巨人たちに再びタックル。巨大な2つの角で巨人たちを掬い上げるようにして上空に吹っ飛ばした。

『（ここで少し試してみよう！）オバラトル氏！　結界で一度拘束してみます！』

『どうぞ！』

――一方通行（サンダルフォン）の聖域・多層封印（マルチレイヤー）――

地面に激突したと同時に巨人たちを1体ずつ拘束。サンダルフォンは閉じ込めた対象の魔力行使のすべてを強制的に不能にする結界だ。対魔術にはほとんど効果はないのは確認済みだけど、巨人たちの拘束は今のところ出来てる。

（手足を動かせないようにキッチリ囲ったから、打撃で破壊できないっていう狙いは上手くいったかな）

身動きを封じてしまえば結界は破壊できないと考えていたところで、巨人たちはボロボロと崩れ始めた。魔法のサンダルフォンで魔術効果を潰すことは出来ない以上、その崩壊は"T・C・"メンバーの意図するものだってことは判った。

「オバラトル氏！　結界が破られる可能性大です！」

『そうみたいだね。判るかい？　巨人を構成していた草木が小さな人型の群れと成っていく』

「まずい！　結界が壊される！」

1体の巨人から何十体の木人形が再構築されて、一斉に結界を内部から攻撃を始めた。魔術による攻撃なため結界はすぐにヒビ割れ、そのままガシャァン！と破壊された。結界から解放された木人形たちは波のように広がり始めた。

『お嬢さん、私の背に乗って！　飲み込まれるよ！』

這い回る木人形を踏み潰しながら迎えに来てくれたオバラトル氏の背中へと飛行魔法を使って飛び乗る。そうすることで周辺の状況をモニター越しじゃなくて、肉眼で確認することが出来た。最も状況が悪いのは、「オバラトル氏！　あちらへ！」って、魔力スフィアを複数展開して矢印を作る。

『おお！　矢印なんていうのも作れるのかい！？　すごいな！』

オバラトル氏はそう感嘆しながらも、私が示した方角で独り戦っている「ルミナ！」の元へ急いで駆け出してくれた。

「とにかく今は少しでも・・・！『ルミナ、跳んで！』」

――多牢結界（インディジュアル・ケース）――

ルミナのフォローをするために、ルミナが数mとジャンプしたのを確認してから複数の結界を同時に展開、木人形たちを一斉に隔離する。破壊されるまでの短い間にオバラトル氏の頭の上で合流したルミナが「助かったよ、セラティナ！」ちょっとやつれた笑顔を向けてくれた。まともに対抗手段がない中で何十体っていう木人形に包囲されて、それでも撃墜されないように頑張っていたんだから仕方ないよね。

「うん！　このままみんなのフォローに回ろう！　オバラトル氏、お願い出来ますか？」

『もちろんだとも！　いやぁ、戦闘なんて生まれて初めてだけど、敵を薙ぎ払う快感は素晴らしいね！　あ、だからと言ってそれに狂うことはしないよ？』

群がる木人形をバキバキと踏み潰し、蹴り飛ばし、迫る巨人はその角で突き刺し、そして振り回したり、薙ぎ払ったり、オバラトル氏

の攻撃は圧倒的だった。次に助けるべきは、意識を失っていながら行方不明なルシルなんだけど・・・。

『こちらアイリ。ルシルを発見して、クララと一緒にシャーリーンへ帰艦。治療はアイリとティファレトの2人がかりで、クララもこのまま残ってもらうことになったけど・・・。それでいいシャル？』

『ええ、問題ないわ。ルシルのことお願い。出来ればサッサと叩き起こしてきて。な、ぜ、か、オバラトル氏が戦闘に参加していただけていることで戦力は申し分なしだから。自ら進んで戦ってくれているようなので、今は不問にしておく。というわけで、各騎、輝石の元に一度集合。侵入者の居所がまだ掴めてないの。わたし達を分散させておいて本命ってことだろうから』

そういうわけで"輝石"の元へ向かう私たちは、なおも健在な4本の柱と結界、そして"輝石"の姿を視認。するとルミナが「アイツ、私たちで遊んでるんだ・・・！」って苛立たし気に呻いた。

「どういうこと？」

「これまでのT・C・は、目的の物を奪うために迅速に行動して即逃亡していたでしょ？　なのにアイツはさっさと奪って逃げればいいのに、奪うより私たちを攻撃することを優先している。だから――」

「遊んでる、か」

――ディアブロ・デ・ラ・プランタ――

私も確かにって唸っているところでオバラトル氏の『おわっ！？』って驚きの声と一緒に激しい振動が私たちを襲った。

「どうしました！？」

『例の巨人が四肢にしがみ付いた！　少し待ってくれ、引きはがす！』

オバラトル氏が地団駄を踏むように暴れだした。流石に乗り続けられるような暴れっぷりじゃないし、何より私たちが何もしないわけにはいかない。私とルミナは氏から飛び降りて、四肢に抱き付いてる上半身だけの巨人を確認した。

――連刃・天舞八閃――

とそこに、真紅色の魔力刀８本が右後ろ脚にしがみ付いてる巨人の両肩に突き刺さり、「滅！」のキーワードですべての魔力刀が爆破されて、巨人の両肩を吹っ飛ばした。オバラトル氏はその機を逃さず右後ろ脚を蹴り上げて、両肩を失った巨人を吹っ飛ばした。

――制圧せし氷狼（インバシオン・ローボ）――

反対の左後ろ脚にも巨人がしがみ付いてるけど、５０頭を超える氷の狼が襲撃。ガブッと噛み付いたところから凍結が始まって、最終的に両腕も凍り付いて崩壊。オバラトル氏は左後ろ脚を振るって巨人を完全粉砕した。

「お待たせ！」

「ルミナ先輩、セラティナ先輩、大丈夫ですか！？」

シャルと一緒にセレス、クラリス、ミヤビが合流。もうこれで一安心だ。

『前脚も片方だけでいいから解放してもらえると助かるよ』

「お任せを！　クラリス先輩！」

「よし」

ミヤビの角は氷と水を操る蒼色で、全身から冷気を迸らせてる。巨人の背中を駆け上がって行って、「氷牙冷雹　雪帝　双凍掌！！」全身から両手の平に移した冷気を、掌底と同時に巨人の右腕に打ち込んだ。

「フェアシュテルケン・シュラーゲン！」

クラリスは魔力付加した金砕棒による打撃攻撃で、凍り付いた右腕を打った。それで右腕は完全崩壊して、オバラトル氏は自由になった右前脚を振るって巨人を吹っ飛ばす。残るは左前脚にしがみ付いてる巨人だけど、『もう私を捕らえることは出来ないよ』って、オバラトル氏は最後の巨人も蹴っ飛ばした。

「輝石も無事みたいね」

「今のところは、だけどね」

"輝石"の在るステージのところにまで戻って来て、４本の柱を繋ぐように張られた結界の中に今なお綺麗に輝いてる"輝石"を確認。ホッとしたのも束の間、「ようやく揃ったか！　いつまで俺様を待たせんだよぉ！？」"Ｔ・Ｃ・"の声が響き渡った。

声の出どころは"輝石"を挟んで向こう側、植物で作られた玉座に座ってる"Ｔ・Ｃ・"からだ。特騎隊は"輝石"の盾となるような位置で並んで、"Ｔ・Ｃ・"と相対する。ちなみにオバラトル氏は私たちの後ろで待機だ。

「俺様たちの王からよ、局員への攻撃も可能な限り行うことなかれ。しかしターゲットを入手し、撤退の行く手を妨害する者には反撃を許す・・・って言われてんだよ」

「あなた、その命令をめちゃくちゃ違反してるじゃない。王って言うのがどんな奴かは知らないけど、臣下であるあなたが命令無視をしてると知ればどう思うかな？」

「知ったことかよ。俺様は協力してやってるんだ。ターゲットを持ち帰ってやっただけでも感謝してもらいたいもんだぜ。だからよ、憂さ晴らしさせてくれよ。アイツにこき使われている俺様のためによ！」

"Ｔ・Ｃ・"はチラッとシャルを見た後、ひじ掛けにもたれさせて

いた杖を握り、石突で地面を打った。

――真技サタナス・デ・ラ・プランタ――

玉座がブワッと膨れ上がると"Ｔ・Ｃ・"を飲み込んで巨人化していく。続けて地面を穿って飛び出してきた毒々しい色の植物群が高速で何かを形作り始めた。植物は巨人へと組み込まれていくけど、これまでの巨人とは違う特徴がチラホラ。まずは色。そして妙な樹液を垂れ流してるトゲや、ラフレシアみたいな大きな花が数えきれないほどに咲いてる。あっという間に組まれた頭部の目の部分は、そんな大きな花の集合体。中央の穴からは紫色のようなピンク色のような、どちらとも断言できない妙な色のガスを発してる。

（アレ絶対に触れたらダメなやつだ）

シャルの「全騎！　総攻撃！」っていう指示が飛ぶ。一斉に攻撃態勢に入ったところで、植物に完全に飲み込まれて姿の見えなくなった"Ｔ・Ｃ・"が「死にてぇ間抜けだけ来やがれ！」そう叫んだ。

――ニエブラ・ベネノーサ――

胸の辺りまで造られた巨人の至る所に咲いてる花からブワッとガスが放出された。そのガスがこちらに向かって流れてくるから、シャルが「ルミナ、ミヤビ！」と一緒に一歩前に躍り出た。

「よし！」

――ルフト・クーゲル――

目にも留まらぬ速さで連続で拳を突き出したルミナが放ったのは拳状の空気の砲弾。

「いきます！」

――風雅拳衝――

角の色が蒼から翠へと変化させたミヤビは両腕に竜巻を纏わせて、ルミナと同じように左右の拳を突き出して拳上の砲撃を２連射。

「風牙烈風刃・乱れ打ちぃぃ――――！！」

神器"トロイメライ"を振り回しながら風圧の壁を連射。３人の風の攻撃でガスが押し返され始めたから私は、「サンダルフォンで隔離する！」ってみんなに告げた。

「了解！　各騎、セラティナが結界を展開する！　展開と同時に総攻撃！」

シャルの指示にみんなは「了解！」って応えて、攻撃の準備に入った。それを確認した私は、上腕の辺りまで造られた巨人を閉じ込めるために結界魔法を発動。

――一方通行（サンダルフォン）の聖域・多層封印（マルチレイヤー）――

サンダルフォンの１４層の多層結界で巨人を閉じ込める。ガスは気体だからこそ魔法でも封じ込めることが出来るんだ。巨人本体に攻撃されたらダメだけど・・・。反撃が始まる前にシャル達の総攻撃が始まった。

「飛刃・翔舞十閃！！」

「永遠なる凍土（スパーダ・デ・フリオサタナス）を生ずる王剣！！」

シャルの放った１０個の刃は結界をすり抜けて巨人へ到達して、首から下を寸断。そこにセレスの巨大な冷気の剣が崩壊し始めた巨人を貫いて、瞬時に凍結を始める。

「シュトゥースヴェレン・ツ・フェアブライテン！！」

ルミナが右足で思いっきり地面を踏んづけた。あの技は指向性衝撃波を放つというものだ。衝撃波は巨人に向かって地面を割りながら走って、到達すると崩落中の破片がさらに細かく砕けた。そして胴体を失ったことで無事な頭部も落下して、胴体の破片にぶつかると派手な音を立てて崩れた。

「攻撃中止！　次の一手を最大警戒！　結界内で新たな魔術を発動するはず！　侵入者に攻撃を当てないよう注意しながら、次の魔術を即座に破壊する！」

――違うよ。彼は、そんな真っ当な考えをするわけがない――

「え・・・？」

シャルの指示に交じって別の誰かの声が頭の中で聞こえた。周囲を見回すけど、その声の主はどこにもいない。そもそも念話でも通信でも口頭でもない。

――セラティナ。今こそあなたは、魔術師――結界王としての真価を発揮しないとダメなの――

（気の所為なんかじゃ、幻聴なんかじゃない。結界王の真価ってなに？　私のことを言ってるの？　でも私は魔術師じゃない・・・）

だけどクラリス、それに騎士トリシュタンや騎士アンジェリエも、ルシルの力で後天的に魔術師になることが出来た。前世の記憶と魔術を見て知るって方法だったはず。もしかして、これがそうなのかも・・・。

――いい？　彼の性根はどうしようもないほどに腐っている。そして敵で弄ぶのが大好きな気質な、正真正銘の狂人。もう結界の中には居ないと思った方が良いから、今の結界は解除しても大丈夫――

「あ、あのっ、あなたは一体何者なんですか？」

「び、びっくりした・・・。セラティナ、急に声を出してどうしたの？」

一方通行の言葉なのか、それとも私との会話が成り立つものなのか、

どちらか判らないから声に出してそう尋ねてた。私の側に居たクラリスが目を丸くして私を見た。私は「ごめん、なんでもない」って謝ったところで・・・

――混乱は尤も。でも今は私の声に集中して。大丈夫。混乱なんてすることない。だってあなたは、私の声を知ってるはずだよ――

また声が頭の中でした。ううん、頭の中というより胸の奥から響いてくるような。でもうん、落ち着いてみればこの声を・・・私は知ってる。確かに大丈夫だ。あなたは私の・・・前世なのだから。

（あなたなんだね、アリス・ロードスター）

――うんっ！　ようこそ、セラティナ。魔導より過去にして強大な魔道のステージへ。いろいろと伝えたいことはあるけど、今はあなたに私の魔道を託すことを優先する。少しの間だけ辛いかもしれないけど、なんとか耐えて――

（わ、判った！）

夢の中でしか会えず、何より会話なんてすることも出来なかった私の前世であるアリスが、私と会話してる。それだけで興奮気味なのに魔術を扱えるかもしれないと解かった今、うずうずが最高潮になった。

――モレスタル＆フィエスタ・デ・コミダ――

とその時、私たちを取り囲むように何百本っていう木々が生えた。さらに樹木の側面から、ハエトリグサのようなギザギザの口を持った植物が、これまた何百本と生えてきた。ガキンガキン！って金属音のような口の開閉を繰り返すその植物が姿の見えない"T・C・"の「喰らいな！」っていう号令の下に一斉に襲い掛かってきた。アリスの言うようにもう結界の外に居るみたいだから、発動中の結界を解除した。

「全騎、食べられないように！　反撃開始！」

完全な魔術である以上、私とルミナは戦力外。だから"輝石"の周りでオバラトル氏と一緒に待機。シャル達が迫る植物を迎撃してるのを見守る中・・・

――セラティナ、よく聞いて。対魔術戦の拘束力において結界王（わたしたち）は最強である――

（はいっ！）

――今必要なのは、魔法じゃなくて魔術としての一方通行（サンダルフォン）の聖域。この術式で彼を拘束して、気絶するような攻撃を加えさえすれば勝利確定――

「っぐ・・・？」

リンカーコアが心臓みたいな鼓動をし始めた・・・気がする。

――私の生まれ変わりであるあなたは、先天的な魔術師として生まれていたの。でも今の時代、魔術は過去の遺物としてあまり世界の意思に認められてない。だから自然に発現することはないの。だけどこうして外部からリミッターを解除してあげれば・・・ほら、あなたもこれで・・・魔術師だよ――

「くぅぅぅ・・・あああ・・・あああああ・・・！」

――昇華――

胸を押さえて痛みに耐える。そんな私にルミナが「ちょっと、大丈夫！？」両肩に手を置いて支えてくれた。私は「必要な痛みだから、大丈夫だよ・・・」笑顔を努めて作ってルミナに向けた。私の言葉に首を傾げるルミナだったけど・・・。

「え？・・・うそ、待って。この魔力の感じって・・・！　セラティナ。まさか、あなた・・・！」

「・・・うん」

胸の痛みも落ち着いて、額に噴き出た汗を袖で拭い去りながら私を支えてくれてたルミナに「ありがとう、もう大丈夫」ってお礼を言って、私たちを食べようとする植物たちを睨みつける。

――魔術としての結界術式、ちゃんと理解できてる？　リンカーコアの魔力炉化（システム）と一緒に私の結界術式のすべてを送ったんだけど・・・――

（問題ないと思います。頭の中がスッキリして、今ならなんだって出来るような気がするので）

――オーケー。じゃあ、２代目結界王セラティナ・ロードスターの初陣といこうか！――

「（はいっ！）・・・セラティナ・ロードスター、いきます！」

Ｓａｇａｌｌ－Ａ勝敗の行方～Ｆｉｒｓｔ　ｖｉｃｔｏｒｙ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

私たちを包囲する木々から伸びてくる巨大ハエトリグサを迎撃してるところに、「セラティナ・ロードスター、いきます！」後方に控えさせてたセラティナがいきなり名乗りを上げた。その突拍子の無さに呆けてると、セラティナが放出し始めた魔力がこれまでの質とは違うことに気が付いた。

「うそでしょ、神秘を含んだ魔力・・・！」

セラティナがいつの間にか魔術師として覚醒してたことに驚愕した。でもそれ以上に、心強い援軍として立ってくれてることに感謝や嬉しさがあった。セラティナはゆっくりとわたし達の側までやって来ると、「初めての大魔術なので、出来れば大目に見てくれると嬉しい」って苦笑い。でも目はそう言ってないね～。

「まずは周囲の木々を潰す。アリス、お願い！」

またも突然そう叫ぶものだから「はいっ！　はい？」って返事しちゃった。側に立つセレスが「あなたじゃないでしょ。名前似てるけど」って嘆息。ブワッとさらに魔力を放出したセラティナがパンッと手を打った。

「残酷審判（イスラフィル）の聖域！！」

それを合図としたかのように何百個っていうハエトリグサが、同数の正四角形の結界に閉じ込められた。

「墓殺（グレイブ）！」

両手をキュッと握り拳にしたセラティナの声に反応して、何百個の結界は急速収縮。そのまま手の平サイズにまで収縮して、ハエトリグサもろとも消滅した。

「閉塞円環結界（リング・ケイジ）！！」

なおも健在な木々がドーナツのようなチューブ状の巨大結界の内部に閉じ込められた。その様子にわたし達が「おお！」って感嘆してると、「今のうちに攻撃を！」ってセラティナに言われたから、わたしは「セレス、強烈なのを1発！」と指示を出す。

「任された！　セラティナ！　私はどうすればいいの！？」

「結界に向かって攻撃！　出来れば砲撃系！」

「楽勝！　氷星の大賛歌（カンシオン・デ・コンヘラシオ）・大合唱（コーロ）！」

セレスは自身の四方に魔法陣を展開して、クルッとその場で一回転しつつ冷気を纏う"シュリュッセル"で魔法陣を引っ掻いた。それがトリガーとなって魔法陣から氷結砲撃が四方に発射された。４発の砲撃を迎え入れるかのように結界の４か所に穴が開いて、砲撃が

結界内に入ったところで穴が塞がった。そして結界内壁に着弾した砲撃は、膨大な冷気となって結界内を満ちた。全ての木が完全凍結されて崩壊するのを確認したセラティナが「よしっ、上手くできた！」結界を解除した。

「シャル。アリスが言うには、この創世結界ももう解除されるって」

「あー、うん。了解。・・・ていうかさ、さっきから出てくるアリスってどちら様？」

「結界王アリス・ロードスター。私の前世のお方！　シャルと騎士シャルロッテと似たような感じって言えば解かってくれるかな」

わたしの問いに対して即答したセラティナにいろいろと聞きたいことはあるけど、アリスが何者なのか判った今は後回しにして、「反撃の起点は任せるから、好きに動いて！」って指示をしておく。

「了解！　対創世結界用の結界術式をスタンバイする！」

そう言ってセラティナは足元に楕円十字、その中央に十芒星っていう魔法陣を展開した。魔法陣から噴き上がる魔力はすさまじくて、創世結界用って言われてもおかしくない。ただ、もう少しで解除されるって言うのにわざわざ発動する意味は・・・。

『みんな、T・C・を釣るから攻撃の準備を！』

創世結界を長く維持したい侵入者を誘き出すためのハッタリ。セラ

ティナのハッタリは、「ふざけんなぁ！　話が違うじゃねぇかよぉ！」侵入者の怒鳴り声がある地点から聞こえたことで、上手くいったことを示してた。

「何で結界王が魔術師化してんだよぉ！？　誰の差し金だぁ！？」

――ドラゴーン・デ・アルボル――

（さっきからうるっさいなぁ、アイツ。セラティナの魔術師化は予定になかったって言ってんの？）

侵入者の姿を視認。龍のように地面を進む樹木に立ったまま、こっちに向かって来てた。セラティナが魔術師になれることを知っている奴が敵の中に居る。もしくはセラティナが裏切ってる・・・なわけない。でも、だとすればそんな特級レベルの機密を知る人間なんて、一体どんな奴なのかってなる。

――アタケ・デ・ライス――

「俺様を始末したいのかぁ！？　命令違反で邪魔になったってかぁ！？
やってみろやぁぁぁぁ！！」

もう勝手に怒鳴りまくる侵入者の周囲の地面が盛り上がって、複数の極太の根っこが蛇みたいに先端をもたげると、一斉に突っ込んできた。わたし達はデバイスを構えて迎撃態勢に入ったんだけど・・・。

――守護聖定（メタトロン）の聖域――

わたし達どころかオバラトル氏のような巨体をも収めるほどの円柱型の巨大な結界が展開された。直後、侵入者の乗る龍と蛇のような根っこが激突した。でもセラティナの結界はビクともしなかった。

「このメタトロンの聖域は、サンダルフォンの聖域と逆の効果を持ってるの！」

「ということは・・・」

「こっち側からあっち側への攻撃はフリー？」

「うわぁ。これまた反則級」

「でも、すごくいい」

セラティナから教わった結界の効果に戦慄しながらも、結界を包囲して体当たりを繰り返す木の龍と蛇に迎撃を開始。

「トロイメライ、行くよ！」

≪Ｊａｗｏｈｌ≫

"Ｔ・Ｃ・"が魔術師の集団かもしれないって判った際、ディードに頼んでフライハイト邸のわたしの部屋から持ってきてもらった、アームドデバイスであり神器でもある"トロイメライ"。シャルロ

ッテ様の"断刀キルシュブリューテ"を持っていきたかったけど、デバイスのような待機形態がないから持ち歩き・使用に少しばかり面倒な手続きが必要だったから、何の手続きも必要ない（上層部に神器と知れたら手続きが発生するかも）"トロイメライ"を選んだ。

「炎牙崩爆刃・連刃！」

炎を纏わせてた水色の刀身を持つ長刀"トロイメライ"を振るって、炎の斬撃を連続で放つ。斬撃は結界をすり抜けて、体当たりから締め付け攻撃に変更した複数の蛇に直撃して、寸断すると同時に燃焼して炭化させてく。

「（威力が増大した・・・？）セラティナ！　この結界、まさか・・・！」

「うんっ！　結界を通過するとき、魔術効果が強化されるみたい！」

「へぇ、それはすごい・・・ね！」

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

螺旋状の氷の杭を数えきれないほど発射したセレス。杭はわたしが撃ち漏らした蛇に撃ち込まれて、着弾個所から凍結させてく。

「ルフト・クーゲル！」

「業火拳衝！！」

ルミナは不可視の拳圧を、ミヤビは拳状の炎熱砲撃を侵入者の立つ龍に放った。ルミナの攻撃は龍を大きく弾き飛ばして、ミヤビの砲撃は龍から落ちた侵入者に直撃。爆発に飲み込まれながら黒煙から飛び出してきた侵入者は「許さねぇ」って空中で杖を振るって・・・

「くそがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

――ディアブロ・デ・ラ・プランター――

そう叫んで杖を地面に投擲。杖が地面に突き刺さることで魔術が発動。結界を包囲してた蛇を再利用して再び造り出される巨人上半身バージョン、その数２０体。もちろん黙って見守ってやるほど優しくないわたし達が一斉に攻撃しようとしたとき、創世結界が揺らぎ始めた。かと思えばそのまま完全に解除されて、森の中に在る石畳のステージへと戻ってきた。

「時間切れかよ！　遊び過ぎたぜ！」

創世結界の解除と同時に上半身だけの巨人も完成する前に消失。創世結界の発動中にわたし達を倒せなかったことに苛立ってる侵入者だけがポツンと立ってた。

「セラティナ！」

「一方通行（サンダルフォン）の聖域！」

侵入者は高速移動系の魔術で後退して結界から逃れようとしたけど、セラティナの結界はそれ以上の広範囲だったことでアイツはギリギリ結界の効果範囲に入った。魔法ならいざ知らず魔術としての結界であり、効果が閉じ込められた対象の魔術行使を一切封じるっていうものだから、アイツはもう逃げられない。

「さあ！　素顔を晒して素性も明かしてもらおうか！」

人が5人ほど入れるかどうかってくらいのサイズにまで小さくなった結界の元へ向かい、杖や拳や足で結界を叩く侵入者にそう告げてやった。"T・C・"メンバーの初めての確保だ。今すぐ連行したいけど、侵入者を救出、"輝石"の奪取を行うべく送り込まれるかもしれない新手に警戒しないといけないから、このままで聴取することに。メンバーを逮捕し、護衛対象を護り切るのがベストだけど、今後の展開によってはどっちかを切り捨てないと。

「なんならわたしが優しく取ってあげようか？」

まずは目出し帽を脱いで顔を見せてもらおうって考えてそう言うと、「うっせぇ、ブス！」って中指を立ててきた。イラっとはしたけど、これまでの事件でブスだブサイクだって挑発してきた間抜けは数知れずだから、「脱げ、早く」スルーしてもう一度通告する。

「言うことなんか何もねぇよ。他のメンバーが来る前に俺様を解放して、とっとと消えな」

「さっきさ、あなた言ってたでしょ？　俺様を始末したいのか、邪魔になったってかって。それってつまり、あなたも危ういってことじゃないの？」

シューシューと"シュリュッセル"の剣身から冷気を放出させてるセレスがそう聞くと、侵入者は「命令違反ならまだ注意されるだけだが、T・C・について話したらそれは裏切りだ。どちらかを選ぶか、判るだろうが。あ？」って肩を竦めた。

「何が来ても、誰が来ても、わたしたち特騎隊があなたを護り切る。だから安心してくれてもいいよ？」

「冗談だろ？」

「冗談なわけないでしょ。T・C・は必ず潰す。構成員から王って呼ばれるリーダーも、もれなく全員逮捕する」

「くはっ！　くくく、ははは、あはははははは！！」

手放された杖が地面に転がるのも気にせずに侵入者はお腹を抱えて大笑い。クラリスが「何がおかしいの？」って苛立たし気に問い質す。クラリスもクラリスで"T・C・"に苦汁を舐めさせられてるからね、苛立つのも仕方ない。

「俺様ひとりにここまで苦戦していたお前らが、認めたくねぇが俺様より強い奴がまだ居るのに、そいつらが束で来るかもしれねぇってぇのに、よくそんな馬鹿な断言が出来るよなって話だよ！」

ツボに入ったのか笑い続ける侵入者。ルミナが1歩2歩と結界に向かって歩いて、すぅっと結界内部に進入した。そんな突拍子もない行動に他のわたし達は「は？」目を丸くした。侵入者はルミナの接近に「なんだよ、怒ってるのか？」って厭らしい笑みを浮かべた。

「自分で取るの嫌なんでしょ？　私が取ってあげる」

「はっはっ！　やってみろや小娘！」

ルミナはそう言って侵入者の目出し帽に向かって手を出した。侵入者は体を逸らしてルミナの手から逃れたけど、徒手格闘でルミナに勝てる奴なんてそうそういない。結界の効果で魔法が使えないルミナは純粋な身体能力で、「チッ！」舌打ちしながらも必死に躱す侵入者を追い詰める。

「ねえ、結界に入る前にバインドを使えばよかったんじゃない？」

「ルミナがそれを判ってないわけないでしょ？　バインドじゃなくて直接手で捕まえて、そして身元を明かしたいんだよ。バインドで済ませるつもりはないって判断するほど、ルミナの怒りも大きいわけだ」

蹴り上げてキャッチした杖を振るってルミナを攻撃しようとする侵入者だったけど、あんな遅い振りでの攻撃なんてルミナには止まって見えるだろうね。ルミナは杖を左手でパシッとキャッチして、後ろに流すように引っ張った。

「むお！？」

無理やり引っ張り込まれたことでつんのめる侵入者は、体を引き起こすより前転受け身を選択した。だけどアイツが前転をする前に、ルミナは「おらぁぁぁぁ！！」杖をグイっと持ち上げた。杖を持ってる左腕が持ち上げられたことで上手く前転が出来なかった侵入者に、「ふんっ！」ルミナは蹴りを打ち込んだ。

「ごはっ・・・！」

蹴っ飛ばされて結界の内壁に激突した侵入者は何度か咽た後、杖を支えに激しい呼吸を繰り返して、「これが女の蹴りかよ。このっ、馬鹿力が！！」って中指を立てた。ルミナは「男ならもっと力付ければ？　軽すぎ」って立てた右親指を下に向けた。

「ルミナ。サポートは？」

「要らない。素手で屈服させてやりたいから」

ルミナは首をコキコキ鳴らして、「くそがよぉ・・・！」って吐き捨てる侵入者に歩み寄ってく。ルミナがアイツの意識を刈り取る前に、わたしは「じゃあさ。あなた自身のこと教えてよ」って聞いた。

「はあ！？　この状況で！　俺様に！　自分のことを話せって！？
っざけんな！　そんな暇も余裕もねぇよ！　見て判んねぇのかよ！
このクソ女にボコされてんだよ！　つうか、いつ助けが来んだよ！

見てんだろ！　さっさと助けろよ！」

でも他の"Ｔ・Ｃ・"の助けはやって来ない。結界っていう狭い空間の中で、お互いに魔法も魔術も使えない状況で、身体能力のみで互いを打ちのめそうと拳や足を振るい続ける。ルミナは掠らせることすら許さず侵入者をボコボコにして、侵入者は杖っていうリーチで勝ってるのに防戦一方。

「おーい。そろそろわたしの質問に答えてくれる～？　あなたのお名前は～？」

「本当にさぁ、お前らさぁ、マジでぶっ殺――へぶっ！？」

とうとうルミナの右ストレートを顔面に受けた侵入者はガクッと膝を折って、うつ伏せに倒れ込みそうになるのをルミナがガシッと頭を鷲掴んで止めた。そしてルミナは「さわんな」って呻く侵入者を無視して目出し帽を剥ぎ取った。

「声からも判ってたけど若いね」

「２０代なのは間違いと思うよ」

緑色の髪は肩にかかるくらいのセミロング。顔立ちは整ってるけど、ルミナに殴られ過ぎてちょっと酷いことになってるね。チラッとルミナを見れば満足そうに「むふー」って鼻息を漏らした。

「これまでに局が舐めてきた辛酸の分も返せたから満足♪　もうバ

インド掛けていいよ」

そう言ってルミナが結界から出ようとしたけど「あたっ？」額と鼻を内壁にぶつけてフラリと後退、そんで蹲った。セラティナが「サンダルフォンだから、解除するまで出られないよ」って苦笑い。割と強くぶつかってたし、痛いだろうな～。

「返せ・・・見るんじゃねぇ・・・」

ルミナの持つ目出し帽に手を伸ばす侵入者に、わたしとクラリスはリングバインドを発動。アイツを直立不動で拘束した。とりあえず素顔は判ったから、その写真データから前歴や身元を調査できる。そこから"T・C・"の尻尾を捕まえてやる。

「さてと。残る問題は、輝石なんだけど・・・」

「コイツを捕まえたからと言って、二度輝石がもう二度とT・C・に狙われなくなるってわけでもないし」

チラリと"輝石"とオバラトル氏を見る。オバラトル氏が魔術師相手でも戦り合えるほどの戦力なら、このまま帰ってもいいと思うけど・・・。

『私と輝石が、君らの悩みの種になっているようだね。輝石の力をどうにかしない限りまた別の盗人が来るというのなら、君らに預けるのが一番なんだと考えたんだ。輝石を残したまま、中身だけを持って行ってもらいたい』

"T・C・"の目的である"輝石"に宿る膨大な魔力だけ、わたし達が貰い受ければもう狙われない。そんなわたしが考えてた解決法を、オバラトル氏から提示してくれた。だから「ありがとうございます」って深々と頭を下げた。

「さてと、問題は・・・。こちらイリス。ルシルの調子はどう？」

『すまない。今目を覚ましたばかりだ』

"シャーリーン"に通信を繋げれば、展開したモニターにしょんぼり肩を落としてるルシルが出た。わたしは腕を組んで嘆息1回。そして「セインテスト一尉。本事件解決後、何らかの処分があることを覚悟してください」って部隊長としての態度と口調を以て告げた。

『了解です。フライハイト部隊長。ご迷惑をお掛けしました』

「んっ。じゃあ今すぐ出られる？　輝石の魔力を吸収してほしいんだけど」

『あ、ああ。やはりその結論か。了解した、すぐに出る』

「待ってる」

通信を切って、待つこと数秒。クララ先輩の転移スキルによって"シャーリーン"から飛ばされてきた「ルシル！」が合流。ルシルはわたし達を順繰りに見て、改めて「迷惑を掛けた。すまなかった」

って頭を下げた。

「過去の記憶に引っ張られたとはいえ、連携を崩すような真似はペケ。次は気を付けてね」

「結果オーライ」

「クラリスの言った通り、ああしてＴ・Ｃ・を捕まえられたしね」

ルシルの謝罪に笑顔で応えてくセレス達。わたしもルシルの背中をバシバシ叩きながら「ま、次から頑張ってこ♪」そう笑顔を向けた。

「ありがとう。・・・緑色の髪にダークブルーの瞳。髪型や服装は違うが、オリジナルの記憶通りの顔だな」

侵入者の腫れた顔を見たルシルは、「ま、追及はあとだな」って"輝石"の側へ。そして「氏よ。結界を解除してもらっていいだろうか」ってオバラトル氏にお願いした。オバラトル氏は『どうやって？』って首を傾げた。まさかの返しにわたし達は「へ？」目を丸くした。

「この結界、氏のものでは・・・？」

『いいや。ひい爺さんの頃からって聞いてる。大体６０００ちょっと前くらいから、この結界は在るんだよ。私にも触れないんだ。すまないね』

みんなして呆けてる中、ルシルだけは「なるほど。ではこちらで解

除させてもらいます」って、ひとり"輝石"を護る結界に近付くと左手を翳した。

「女神の救済（コード・イドゥン）」

発動するのは魔力を吸収するコード・イドゥン。ルシルは結界を構築してる魔力を吸収するようだ。ルシルの手が結界に触れた瞬間、バチッ！て大きな音が。ルシルが「くっ・・・！」眉をしかめるけど、「いくぞ！」結界の魔力の吸収を開始。ルシルの右手に透明に近い小さな魔力結晶ができ始めた。結界の魔力は３０秒くらいですべて結晶に変換された。

「ふぅ」

「大丈夫？　休む？」

汗を掻いて肩で息をしてるルシルを心配すると、ルシルは「いや、すぐにでも取り掛かる」って答えて、さらに『アイリがしっかりフォローしてるから大丈夫』っていうアイリからの思念通話が。ユニゾンしてたのか～。

「アイリ」

『ヤヴォール！』

――女神の救済（コード・イドゥン）――

"輝石"に左手を触れたルシルがイドゥンを再発動。"輝石"からルシルの体を通して、右手の平の上に輝く魔力結晶に流れてくのが目に見えて判る。何せ透明だった結晶が、"輝石"と同じ虹色に輝きだして、なおかつ巨大化してくから。今度は1分くらい掛けて"輝石"の魔力を全吸収したルシルは「シャル。この魔力結晶、どうする？」って聞いてきた。

「ん？　んん～・・・とりあえず上に報告。保管するなら保管だし、こっちで処理してって言うんなら・・・ルシルが貰っておけば？リアンシェルトやガーデンベルグとの戦いで必要でしょ？」

「それは助かるが・・・。まぁ期待しないでおくよ」

でもま、これで"輝石"の問題はクリアした。あとは侵入者を連行するだけだ。未だにアイツを助けに来るような援軍も来ないし、ささっと連行するに限る。と、その前に・・・。

「オバラトル氏。ご協力誠にありがとうございました」

わたしの敬礼に続いてみんなも「ありがとうございました！」って敬礼。オバラトル氏は『良いものを見せてもらえたし、輝石も悪者に奪われなかった。こちらこそありがとう』と頭を下げてくれた。そうしてわたし達は、ヴォルキスでの任務を勝利で終えた。ルシルの魔術によって強制睡眠にされた"T・C・"メンバーと一緒に"シャーリーン"に帰艦。他のメンバーには申し訳ないけど本局に戻るまで交代制で"T・C・"の監視を任せた。そして部隊の隊長のわたしと副隊長のルシルは、監査官のロッサに報告するために執務

室へ。

「――以上が、第２５管理外世界ヴォルキスでの"Ｔ・Ｃ・"メンバーとの戦闘および護衛対象・アポローの輝石の処置です」

詳細は後で書く報告書に記すとして、まずは簡単にさっきまでの事を報告だ。するとモニターの向こうで聞いてたロッサは『良い報告が聞けて良かった！』って笑顔を浮かべた。これまで局は"Ｔ・Ｃ・"に負けっぱなしだったからね。一勝とはいえすごいのだ。

『本局までの道中、どうか気を付けてくれ』

ロッサへの報告も無事に済んでから、監視の順番が回ってくるまでに少し休もう。執務室を出て「お疲れ様、ルシル」ってウィンク。ルシルの「お疲れ様」の声を聴いて、わたしとルシルはそれぞれの目的地に向かうために通路を歩きだした。

Ｓａｇａｌｌ－Ｂ勝敗の行方～ｖｉｃｔｏｒｙ　ｏｒ　ｄｅｆｅａｔ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

シャルと分かれ、俺は"Ｔ・Ｃ・"メンバーの１人が拘禁されている居房区画へと向かう。目的はもちろん事情聴取だ。公的ではなく私的なものだが、それでも答えてもらおう。"シャーリー"の後部に位置する居房区画に着き、メンバーが拘禁されている独房の前に置かれているベンチに座るセラティナとアイリを視認。

「あ、ルシル！　報告は終わったの？」

「ああ。お疲れ、セラティナ。監視は俺が引き継ぐよ」

「え？　でも、術者である私が結界からあんまり離れるのは・・・」

「それについては問題ないよ。魔術でのシーリングバインドで拘束するから」

魔力生成阻害を行うという点では一方通行（サンダルフォン）の聖域と同じだし、消費魔力や維持に必要な魔力も少ないとなれば、今はセラティナを休ませることを第一に俺が監視を担当するのがベストのはず。セラティナは少し悩んだ末、「じゃあ、お願い。実はもうヘトヘトで・・・」と苦笑いを浮かべた。

「任せてくれ。アイリ、ユニゾンだ」

「ヤー！」

「「ユニゾン・イン」」

アイリとのユニゾンを済ませ、"魔力炉《システム》"を活性化させて魔術師化する。そしてシーリングバインドをチェーンモードで発動準備。連行前に下級水流系術式の1つ、眠りの霧ラフェルニオンによって眠らされた"T・C・"メンバーを睨む。

「アイリ」

『いつでも！』

「『シーリングバインド！』」

ベッドに横たわる"T・C・"を鎖状のバインドでグルグル巻きにして拘束。それを確認したセラティナはようやく結界を解除することが出来て、「ふぅ」と安堵の一息を吐いた。

「ルシル。例のデバイス、この人にまだ使ってないから、ルシルがやっておいて」

「了解」

「ふわぁ、眠い。おやすみ～」

『おやすみ～♪』

「お疲れ様」

セラティナが居房区画より出ていったのを確認した俺は、近くのデスクの引き出しからＰＳＳ拳銃をモデルとした特殊デバイスと、弾丸が収められている頑強なケースを取り出す。ケースから取り出してデバイスに装填するのは注射器のような弾丸。中身はナノマシンを含んだ液体で、注入された箇所の表皮内にナノチップを形成。それが発信機となる。

表皮の細胞が生まれ変わる機能ターンオーバーは、およそ４５日サイクル。その間であれば発信機は機能しているが、４５日以上は垢と一緒に排出されるため、もう追跡できない。自然と排出されるとはいえ体内に異物を入れるという方法であるため、使用にはいろいろと申請・手続きが必要だ。しかし俺たち特騎隊はその任務上、逃亡を許せないような相手が多い。それゆえに申請も手続きも必要なく、事前に使用許可を取っていればいつでも使えるようなっている。

（最後の大隊のような、転移スキルで移動する犯罪者のために開発された技術だな）

そんな新技術を最初に使えるというのは光栄な事じゃないか。牢の中に入り、今なおスヤスヤと眠っている"Ｔ・Ｃ・"の太腿に銃口を向け、しっかりと狙ってからトリガーを引く。放たれた注射弾はプスッと奴の太腿に突き刺さった。注入からチップ生成までの時間は３０秒から６０秒。その時間が経過するまで待ってから注射弾を

抜く。

「呪われし者（コード・ラファエル）に汝の施しを」

次は治癒ではなく状態異常術式の解除効果のラファエルを発動。俺の魔力光サファイアブルーの魔力が"T・C・"の全身を包んで、数秒とせずに消失する。奴は「ん・・・むぅ・・・」呻き声を少しあげた後、「んあ？」目を覚ました。目元を擦りたいのか腕を動かそうとしたが、拘束されていることでそれは叶わず。

「気分はどうだ？　T・C・」

「はっ。最悪に決まってんだろ。T・C・最初の敗北だけでなく逮捕って？　最大級のクソっぷりだっつうんだよ！」

この男が使っていた魔術は、"アンスール"時代にて何度も交戦したヨツンヘイム連合、その指導者である四王の一角、葬柩王フォード・テルスター・スリュムヘイムと同じものだった。ただ、スリュムヘイムの植物操作系は基本的なものでもあるため、その練度で術者のレベルを計るしかない。

（少しの間しか見られなかったが、フォードに比べれば圧倒的に格下だった。ただ、顔立ちがそっくりで、あの頭の悪い喋り方も同じだ）

――あの侵入者も、わたしやクラリス達みたいに前世の記憶を持ってるんじゃない？　もしくは生まれ変わり。フォードって言ったっ

け？　何千年も前の人間が生きてるわけがない。例え魔術師であっても。違う？――

連行中にシャルに言われたことを思い返す。シャルの記憶を持ち、外見が全く同じのイリス。グレーテルの記憶を持ち、外見がそっくりなクラリス。同様にチェルシーに似たアンジェリエ。そして、まさかのアリスの記憶と魔術を受け継いでいたセラティナ。それに、魔術関連じゃないがアインハルトやジークリンデやファビアも似たようなものだ。これだけ生まれ変わりや前世の記憶持ちが居るのだから、目の前のこの男もきっと・・・。

「そうか。まぁお前が最悪だろうが知ったことじゃない。答えろ。お前が何者なのか。どれだけ時間を掛けても構わない。待とう」

「判んねぇかなぁ。T・C・について話すことはなんもねぇんだよぉ」

「ならおまえ自身の話だ。お前の使っている魔術は、スリュムヘイムの植物操作系。現在に存在しているはずのないものだ。どこで教わった？」

スリュムヘイムは"ラグナロク"によって完全崩壊した世界で、子孫が生き延びたはずもなく。フォードだって妃を向かえないまま、ステアとアリスのコンビネーションによって戦死した。となれば、やはり生まれ変わりか。クローンを疑ったが、当時にクローン技術は無かった。

「フォード・テルスター・スリュムヘイム。お前なのか？」

「・・・。知らねぇな、そんな奴」

「（コイツ、知っているな。さて、どうやって引き出すか・・・）フォードよ、憶えているか？　お前の父、先代スリュムヘイム王が大兵力を率いてアールヴヘイムに侵攻した戦闘。無謀にも当時すでに若いながらも炎熱系最強と謳われていたステアに挑み、無様に返り討ちに遭って炭にされた愚か者のこと」

「・・・」

目の前の男がフォードの生まれ変わりで記憶を受け継いでいるのなら、自分の父親の死を侮辱した俺に怒りを覚えるだろう。気持ちの良いものじゃないが、この男のことを少しでも知らないといけない。コイツを出発点に"Ｔ・Ｃ・"を探っていこう。

「さっきから何言ってんだ、あんた。スリュムヘイムとか王とかステアとか、どれもこれも知らないっつうの」

「そうか。なら、少し俺の話に付き合ってくれ。互いに沈黙だと苦痛だろ？」

何の返事もしないコイツに向かって、俺は「まずはそうだな。さっき話したフォードという男がだな」と話し始めた。最初にフォードを確認したのはムスペルヘイム侵略戦。そこでフォードは、父の仇であるステアに一目惚れして、気持ちの悪いストーカーになった。

「笑わせるだろ？　その時は父親の仇と知らなかったとはいえ敵軍の幹部に婚姻を迫るとか！」

「・・・別に普通じゃね？　知らなかったんだしさ」

「いやいや。敵だぞ？　しかも戦闘の真っただ中。さらに言えば一方的にやられ、まさに殺されそうになっていた時にだぞ？　あり得ない」

やれやれと肩を竦めて嘆息すれば、コイツは舌打ちをしてそっぽを向いた。それから俺は、ステアの参加する戦闘にのみに限りフォードが前線に出るようになったこと、仲間と共闘してステアを追い詰めたにも関わらずトトメではなく求婚し、そして俺たち"アンスール"の反撃を受けて敗走をしたこと、ステアに執心していることでスリュムヘイムの部下から呆れられていたこと、スリュムヘイムを見限って優良な魔術師がヨツンヘイム・ヴァナヘイム・ウトガルドに流れたこと、四王内で馬鹿にされていたこと、などを伝えていく。

「なぁ、あんた。俺様と全く無関係な話をずっとしてて飽きねぇのか？　俺様は眠くなってきたぜ？」

「そうか？　俺が話すたびにお前の背中から感じるぞ？　顔を見えずともお前の感情が揺れ動いているのが」

「言ってろ、間抜け」

続けて俺が知るフォードという王の失敗談を話し続ける。フォードは大戦時、特に前線に出現することが多い王として有名だった。何せステアが戦場に立てば１００％現れるんだからな。他に重要な作戦時などにもよく顔を出していたし、四王で最も言葉を交わした男だった。

「――で、だ。そんな気持ちの悪いフォードとの戦いもいよいよ終盤だ。聖域ヴィーズグリーズでの大決戦」

「・・・言うな」

「１週間と続くことになった決戦の６日目。そう。フォードが戦死した日だ」

「うっせぇよ」

「顔を合わせるたびにステアに求婚していたフォードは、決戦ということもあってとうとう殺す気でステアと衝突した。彼女が他の誰かに殺される前に、自分が彼女より強いことを証明するために、彼女のすべてを手に入れるために、あの男は全身全霊を以て戦った」

「黙れ」

「偶然にも俺・・・のオリジナルは、２人の闘いを見守れる位置で雑魚狩りをしていたからな」

炎熱系と植物操作系の相性は火を見るより明らか。これまでと同じ、

ステアの苛烈な魔術に対して不利な属性でも真っ向から挑み、互角にやり合っていた。そして同時に展開される創世結界。炎と植物という2つ世界が侵食し合おうと衝突する様は、本当に見ごたえのあるものだった。何せ創世結界同士の衝突なんて簡単に見られるものじゃないからな。

「フォードは確かに強かった。他の王や臣下に馬鹿にされようが、ストーカーで気持ち悪かろうが、魔術師としての腕は超一流。植物操作系の魔術においてはまさに最強。敵ではあるが一応は敬意を持っていたんだぞ？」

「・・・」

「嬉しいか？　神器王からのお褒めの言葉は？」

「っざけんな！　誰が嬉しがるかよ、ボケ！　ステアと仲良くやってる様を見せつけられて大っ嫌いなんだよ！　禿げろ、捥げろ、女になれ、つうか死ね！」

もう誤魔化すつもりはないのだろうか。俺の方を向き、すごい剣幕で罵ってきた。俺の内に居るアイリが『禿げはいいけど、捥げるのだけはダメ絶対！』と怒り返した。禿げるのも嫌だな～。

「お前さ、やっぱりフォードの記憶持ってるだろ？　いやフォード本人か？　前世のお前が、生まれ変わりの体を使って話したり動いたり、戦ったりしているんだろ？」

「・・・」

「もう観念して白状したらどうだ？　フォード。生まれ変わってもこんな馬鹿な真似をして。お前が借りているだろう体の持ち主を犯罪者にして、心は痛まないのか？　お前と同じように生まれ変わった者たちは、犯罪に走るようなことはしなかったぞ」

「ぷはっ！　くはははははは！！　面白いな、面白いぞ、面白すぎる！」

「そうか。何が面白いかは判らないが、機嫌が良くなって何よりだ。良くなったついでにいろいろ話してもらおうか」

「ダメだ、笑うの止められねぇ！　はははは！！　こ、ここまでぷくくく、やべぇ、最高だぁ！」

笑い続ける奴の様子にアイリが『マイスター。ちょっと黙らせよ？　不愉快すぎ』と苛立ちを見せる。俺としてもあまり気持ちの良いものじゃないし、何よりさっさと認めさせてやりたい。そして可能ならフォードの記憶と魔術を封印しておきたい。魔術を悪用されないために、フォードの転生体である彼の人生をめちゃくちゃにさせないために。

「滑稽だなぁ！　哀れだなぁ！　知っている側が、知らない側を見るのがこんなにも楽しくて、面白いものだなんて知らなったぜ！」

「いったい何を・・・？」

「お前は俺様を追い詰めていると考えているようだがそいつは違うぜ。お前をどん底に突き落せる手段が俺様にある」

その眼を見れば嘘ではないと思うが、俺が何を知らないって？　お前が俺の何を知っていると？　ならばそれを含めて教えてもらおうじゃないか。だから「言ってみろ。本当に俺をどん底に落とせると思うならな」と笑ってやる。

「いいぜぇ。お前の顔が曇るのを見届けてやんよぉ！　お前はなぁ！
k――」

「っ！？」『え・・・？』

奴が何かを言いかけたその時、奴の口にポンっと穴が開いた。向こう側が見えない、まるでブラックホールのような真っ黒な穴だ。俺とアイリが驚いているその僅かな間に、口に空いた穴へと奴の体が吸い込まれ始めた。

「アイリ！」

『ヤヴォール！　ロートス・アンカー！』

何をしろ、と指示しなくても俺の意を汲み、アイリは俺の前面にベルカ魔法陣を展開し、先端が蓮の形をした氷のアンカー８本を射出。穴に吸い込まれそうになっている奴の両脚にグルグルと魔力縄が絡みつき、先端のアンカー８つが腰の辺りで重なり合ってガキン！と

ロック。

「チェーンバインド！」

俺も続けて鎖状のデバイスで奴の体を拘束するが、そんなもの無駄だと言うように奴の体がグニャリと歪んで、俺とアイリのバインドから逃れた。奴の体が渦を巻くようにして穴に吸い込まれていくのを、俺とアイリは黙って見届けるしか出来なかった。奴の体が完全に穴の中に消え失せ、穴も収縮を始めた。

「せめて・・・！」

――発見せよ汝の聖眼（コード・イシュリエル）――

カメラ効果を持つ魔力スフィア――イシュリエルを1基、ねじ込むように撃ち込んだと同時に穴は閉じた。結局逃げられてしまった。だが、これで終わりなんかじゃない。

「全艦に緊急連絡。T・C・メンバーが転移スキルによって艦内より脱走。発信機チップを撃ち込んであるため、追跡は可能であると判断。零課副長権限を行使し、シャーリーンの針路変更を指示。ブリッジ！」

『ブリッジ了解！　針路指示願います！』

発信機からの信号を展開したモニターで確認する。現在シャーリーンは第２５管理外世界ヴォルキスの衛星軌道上で停泊している。そ

こから発信機の信号をたどり、「第５２無人世界トライキスへ！」と指示を出す。

『了解！』

「特騎隊全騎。エントランストランスポートへ集合。シャル、起きているか？」

ルミナ達からの『了解！』に遅れて、シャルの『もちろん！　ちょうどドライヤー掛け終わったから！』と、サウンドオンリーと表示されたモニターからバタバタ慌ただしい音が続く。彼女たちとの通信を切り、俺もトランスポートへ向かう。

（座標は変わっていないな。皮膚の下に発信機があるとは思わないだろう）

万が一察知されたとしても皮膚の上から見えないため外科手術で取り除けないし、有機質であるから魔法や金属探知にも引っ掛からない。撃ち込めたその瞬間、俺たちの勝利は確定した。ただ問題があるとすれば、それは効果範囲。スカラボ特製とは言っても限界がある。その範囲から出ないことを祈るしかない。

「みんな揃ってるね」

俺とアイリがエントランストランスポートに着いてから1分とせずにシャル達が揃った。シャル

と俺の前に整列しているアイリ達を見る。短すぎてちゃんと休息で

きたか不安だったが、疲労などおくびにも出さない。本当に頼りになる騎士たちだ。

「ルシル」

「ああ。発信機の信号は相変わらず第５２無人世界トライキスからだ。１ヵ所に留まっているようなら不安しかないが、世界内で移動しているのを確認できた」

「そういうわけだから、これからトライキスに降下。Ｔ・Ｃ・をもう一度捕まえる。転移スキル持ちの別のメンバーが居ると思うから、降下後にＴ・Ｃ・を確認したらセラティナ、結界をお願い」

「了解！」

『トライキスへの転送準備が整いました。セインテスト副隊長、座標をお願いします』

ブリッジからの通信に俺は座標を伝え、１０秒後に一斉転送を行うことになった。俺たちは魔術師化、騎士服への変身、デバイスの起動と、戦闘準備をすべて終えた。そうして俺たちはトライキスへと転送。

今でこそ局はこの世界にトライキスと名を付けたが、かつては別の名前だった。スパリンスヘイズ。土石系魔術を得意とする魔術師を多く輩出した、"アンスール"の地帝カーネルや雷帝ジークヘルグの治めてた世界ニダヴェリールの同盟国だ。

（今となっては無人の、荒野と岩石地帯しかない、寂しい世界となっているな・・・）

さて、問題の"T・C・"だが・・・。見回しただけでは視認できない。発信機の信号を確認するため手元にモニターを展開し、「こっちだ！」と信号を目指して駆け出す。たどり着いたのは山を削って造り出された宮殿跡。所々が崩壊しており、かつての荘厳さは失われている。

「信号はこの中からだ」

「・・・かなり風化が酷い。下手に戦闘をしたら崩壊するかも」

「そこは私の結界で抑えるよ」

「なら大丈夫か。んじゃ、行こうか」

シャルを先頭に宮殿跡に進入する。人間だった頃にジーク達と共に訪れたことがあるが、当時の面影は本当に残っていないな。

「（確か地下への階段が向こうに・・・）みんな、こっちだ」

記憶の中の宮殿――ログステインの内部を思い起こす。ログステイン宮殿はスパリンスヘイズ軍の本部として使用されていた。"T・C・"の反応がある地下は確か・・・武器庫のはずだ。大戦後に子（ヴァルキリー）ども達と見て回って、神器や危険物などはすべて回収し終えた記憶がある。

（なら連中は何を狙ってここへ来た・・・？）

階段を降り、真っ暗な地下に足を踏み入れる。信号は地下の奥からだな。灯りなんてものがないため、それぞれ暗視魔法を発動している。魔力反応を探知される可能性は高いが、火を起こしては明かりで気付かれるだろうし、何も対策しなければ何も見えずまともに移動も出来ないだろう。

『ねえ。進むにつれて、割とヤバい魔力を感じるようになったんだけど・・・』

『私も。絶対に何かある』

『きっとソレがT・C・の狙いなんだろうね』

『なら奪われるわけにはいかない。せっかくの1勝をチャラになんて・・・』

『私の結界で逃亡なんて絶対にさせない』

『メンバーだって捕まえちゃうんだから！』

シャル達の意気込みを念話を通じて聞く。俺も感じている神器特有の魔力に全身がピリピリと痺れる感覚を得ていた。ここまで感じ取れる魔力となれば高位の神器だろうが、どうやって？　いつの間に？という疑問が生まれる。少なくとも"アンスール"全滅以降だ。

（とにかく、こんなまずい魔力を放つ神器を奪われるわけにはいかない）

Ｓａｇａ１２幼い狂気～Ｑｕｅｅｎ　ｏｆ　ｉｌｌｕｓｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

わたし達（シャーリーン）の城から逃げてくれやがった"Ｔ・Ｃ・"のメンバーを追ってたどり着いた第５２無人世界トライキス。無人世界の１つと現在は定められてるけど、ルシルが"Ｔ・Ｃ・"に打った発信機の信号をたどった先に在ったのは山を削って造られた宮殿跡。何があったのかは知らないけど、かつては人が住んでいた世界なんだ。

『近いぞ。直線距離にして１００ｍもない』

そんな宮殿跡の地下へと降りたわたし達は、ルシルのナビに従って真っ暗闇なフロアをコソコソと移動中。１００ｍも十分遠いと思うけど、魔導師や魔術師となればその距離は近いも遠いもなくなる。魔力反応はどうしても発しちゃうし感知されちゃうしね。

『その角を曲がればさほど大きくない部屋に出る。その奥だ』

『全騎、交戦準備。セラティナは全力で結界を』

わたしの指示に『了解！』って応じてくれたみんなの顔を一度見てから、角からバッと飛び出した。短い廊下の先に、ルシルの言った小さな部屋があったんだけど・・・。真正面の壁には大きな穴が開いてた。

「馬鹿な・・・！　そんなところに隠し通路なんて・・・！」

思念通話じゃなくて口で驚きの声をあげたルシルに、『ちょっ、ちょっ、静かに！』わたしは慌ててルシルの口を手で塞いだ。

『す、すまん。いやしかし・・・こんなもの俺の――オリジナルの記憶にないぞ』

『ん？　オリジナルの記憶ってことは、ここは魔術時代の遺跡みたいな感じなの？』

『あ、ああ。騎士シャルロッテや、アリスも訪れたことがある世界だ』

セラティナの疑問への返答に、わたしとセラティナは『へぇ～！』って感嘆。シャルロッテ様も訪れてるのか～。長い休みを取れるようになったらまた来てみようっと。

『とにかく、オリジナルの記憶にこんな隠し通路は無かったから、その先がどうなっているかは俺にも判らない。気を付けて行こう』

そう言ってルシルは率先して先頭に立ってくれた。クリアリングを行いながら隠し通路を進み、『あれが最後の角だ』いよいよ目的の場所の前に到着。それぞれデバイスを握り直し、『行くぞ！』の掛け声で同時に角から飛び出す。

「居た！・・・けど」

破壊された鉄扉の奥に拡がる部屋の中心に、わたし達が捕らえてた緑髪のアイツは確かに居た。だけど様子がおかしい。うーうー呻いてるし、アイツの足元には、わたしのトラウマである「プラダマンテ・・・！」の姿をした連中が何人も倒れ伏してるし・・・。つまり"T・C・"のメンバーだ。誰があんな真似を？　決まってる。理容剃刀のような長方形の刃と、ドリルみたいなスパイクを有する槍斧を持つアイツだ。

「あ、ありえない・・・なんで、その神器がこんなところにある・・・！？」

「ルシル・・・？」

アイツの持つ槍斧を見て顔を真っ青にしたルシル。それだけでヤバい物だってことは察することが出来た。アイツがこっちに振り向こうとしたからわたし達は角に隠れてやり過ごす。ルシルは"エヴェストルム"を待機携帯の指環に戻して、『俺が奴を墜とす。みんなは他を頼む』って言った。

『他って・・・』

『他のT・C・は気を失ってるっぽいけど・・・』

『もしかしてフリ？　実は起きてるとか・・・！』

『さすが犯罪者、汚い』

『いや違う。奴が持っている神器は、族化傀軍ターイラッハ・イーンアブトゥの親器であるティシュミホールと言うんだが・・・』

『神器・・・！　ていうか親器？　じゃあ子器もある・・・？』

『ああ、ある。ターイラッハ・イーンアブトゥは、親器ティシュミホールよって子器ポースツァを生み出すという能力を持った魔造兵装８位だ』

『子器を生み出す？　具体的にどうやって？』

『神器としての能力発動中にティシュミホールに傷を付けられたら、傷を負わされた人間、あらゆる生物の意識が、ティシュミホールと所有者の支配下に置かれる。神器ターイラッハ・イーンアブトゥ、家族感染という銘の通りだな。切ってしまえば、あの神器の神秘以下のものであれば例外なく操り、家族を作る。・・・正直、こんな高位の神器が残っているなんて想定外だった。セラティナの結界もあまり役に立たないかもしれない』

『そんな、アリス（わたし）の結界が・・・』

『そんなヤバい神器とどう戦えって？　ルシルがビビるくらいだから、あの神器の持つ神秘は私たちより上なんでしょ？』

『親器のティッシュ？はすごいのは判ったけど、子器のピッツァ？はどれだけすごいの？』

『ティシュミホールとポースツァな、クラリス。親器については俺が何とかする。俺の神秘と神器なら対抗できる。子器のランクは、ただの武器であれば番外位クラスの神器になり、元が神器であれば神秘が格落ちする。実はそんなに高いわけじゃないから、みんなの魔術と神秘で対抗できるはずだ』

『ルシル副隊長が戦ってる間、私たちはどうすれば・・・？』

『ここからは見えないだけで、支配下に置かれている子器を持った敵が居るかもしれない。そいつらの対処を頼む』

ルシルからの大まかな役割分担を聞いたことで、今度こそ"Ｔ・Ｃ・"を捕まえるために行動開始。クリスタルのような両刃の剣身を持つ大剣２本を柄頭で連結したような槍、"グングニル"を左手に携えたルシルが『行くぞ！』って部屋の中央に立つアイツに向かって駆け出した。わたし達も続いて部屋に突入。

「結界行きます！　多層封獄結界（パーガトリー・アークケイジ）！」

直径で８０ｍはあろう円ホールで、壁面に沿って棺桶が立て掛けられてた。何千年も前なのに今なお綺麗な床にはいろんな種類の魔法陣が描かれてる。"Ｔ・Ｃ・"が最初に立っていたところには台座。あそこに突き立ってたんだね神器。セラティナはそんなホールを結界で覆ってくれた。

「っ！　に、に、にくぅぅ・・・肉ぅぅぅ・・・斬らせろぉぉぉぉ

ぉ！！」

"Ｔ・Ｃ・"が血走った眼でルシルを睨んで、よだれを垂れ流しながら"ティシュミホール"を横薙ぎに振り払った。対するルシルは「哀れだな。邪心に呑まれているじゃないか！」"グングニル"を振り上げて、"ティシュミホール"を上方に向かって弾き返した。

（きも・・・！）

「イリス！　余所見しない！」

「あ、ごめん！」

ルミナに叱られた。部屋の中には"Ｔ・Ｃ・"だけじゃなくて、柩から出てきた７体の骸骨が剣やら槍やら斧やら槌やらを持ってわたし達に襲い掛かってきた。わたしは振るわれる槌の一撃を受けずに回避して、「ごめんルシル！　この人？たちの武器ってヤバい！？」って聞いた。

「ソレらは・・・大丈夫だ、君らでもイケる！」

神器に最も詳しいルシルからのお墨付きを確認したわたしは、「蹴散らせ！」ってみんなに指示を出して、一斉に攻勢に出る。わたしが相手にするのは、骨格だけで生前は屈強な戦士だったことを察せられる骸骨剣士１体。

「っく！　骸骨なのに強いんだけど！？」

神器"トロイメライ"を双刀形態にして、手数で骸骨剣士を眠らせてあげようと思ったんだけど、剣筋を完全に見切られてるから掠る程度のダメージしか与えられない。

「武器にさえ注意すればいいだけだし、私としては楽で助かるんだけけど？」

ルミナは戦斧を振り回す高身長の骸骨兵士と戦闘・・・というか戯れ中。高速で振るわれる戦斧を避けたり、腹をアッパーで上方に弾くことで逸らしたり、いろいろな手段でルミナは防御。

「あ、私も割と楽に勝てそうですよ」

ミヤビは防御力が最もある地鬼形態で、槌持ちの骸骨戦士と真っ向からのド突き合い。ミヤビは拳で槌を殴り弾いては本体に攻撃を加えてた。あの子、本当にかったいな～。番外位らしいけど神器であることに変わりないのに・・・。

「イリスだけハズレを引いたんじゃない？」

クラリスは"シュトルムシュタール"を槍と根に分離させて、独楽みたいに回転攻撃。相手の短槍2槍流の骸骨を防戦一方にしてた。

「私はもうこれ以上の結界は張れないよ！」

セラティナは小さなキューブ状の結界で、残り2体の骸骨戦士の四

肢を捕らえて動けないようにしてくれてた。

「対して強くはないけどタフすぎる！　骸骨が崩れることなく動き回ってるのもムカつく！　魔術師じゃないっぽいし、私が一斉凍結封印を行う！」

『全騎！　セレスが凍結魔術を放つ！　セレスの合図を待て！』

セレスはわたしが思念通話で指示を出して、発案者のセレス、あと余裕がないのかルシルを除いた、他のみんなからの『了解！』を確認。

『すまん、了解だ！』

刺突を行うために突進してきた"Ｔ・Ｃ・"の懐に潜り込み、そのまま担ぎ上げてからの床に叩き付けたルシルも遅れて返事をくれた。起き上がろうとしてたアイツを床に縫い付けるように、ルシルは両腕と腰と両脚にバインドを発動。

「斬らせろぉ！　肉ぅ、生きた肉ぅ！　骨も筋肉も内臓も斬って斬って斬ってぇ！　血のシャワーを浴びたいんだよぉぉぉ！！」

「後でキッチリ解放してやるから、今は眠れ」

『跳んで！』

――愚かしき者に美しき粛清（センテンシア・コンデナトリア）を――

ルシルが"T・C・"を封じた後、それを確認したセレスの合図と同時にジャンプしたわたし達は、一瞬にして床が凍り付く様を見届けた。着地の際に転ばないように注意しながら床に降り立って、骸骨兵士たちを確認する。セレスの凍結魔術によって骸骨兵士たちは完全に凍結されていて、"T・C・"も胸から下が凍り付いてた。

「あ・・・が・・・」

「よう。意識は取り戻せたか？」

「がぁぁぁぁぁぁ！！」

"T・C・"は叫び声を上げて足掻き始めた。凍り付いてる"ティシュミホール"から魔力が放出されて、氷にヒビを入れた。"ティシュミホール"を持つアイツの手に向かってセレスが螺旋状の杭「ディアブロ・クエルノ！」を放って、手首を貫いた。

それでも魔力の放出は収まらず、まずい、とわたし達が思った瞬間にはルシルが動いてた。ルシルは振り上げた"グングニル"を"ティシュミホール"目掛けて勢いよく振り下ろした。"グングニル"の穂先は氷を割り、さらに"ティシュミホール"の柄を叩き折った。その衝撃は床を、わたし達を揺らした。

「び、ビックリしました・・・」

物理的な振動もそうだけど、"グングニル"から放たれた魔力波もまた凄まじくて、わたし達はペタリと床に座り込んだ。特にミヤビ

は初めての衝撃だったみたいで目を丸くしてる。ルシルはそんなわたし達に「すまんすまん」って謝った。

「神器、破壊したの？」

「いや柄を折って一時的に機能不全に陥らせただけだ。それに、ランクが1ケタ台の神器はそう簡単に破壊できない上に再生能力も保有している。一時しのぎに過ぎないよ」

ルシルは"T・C・"の手から折れた柄を奪い取り、"ティシュミホール"のヘッド部分も氷の破片を取り除いて持ち上げた。

「あの、大丈夫なのですかルシル副隊長？　T・C・の様子から見るに、その神器を持つと性格がその・・・」

「ん？　あぁ、自画自賛はあまりしたくないけど高位の魔術師であれば、なんとか耐えられるよ。ま、機能不全に陥っている今だからこそ大丈夫、と言った感じだ。ランク1ケタ台の魔造兵装は本来、人間が使うような神器じゃない。コイツの変貌ぶりを見たら解ると思うが、狂気に飲まれることが普通だ。が・・・」

チラッとわたしを見たルシルに、「え、なに？　わたしが何？」ってたじろく。熱い視線なら大歓迎だけど、なんか微妙な感じであんまし嬉しくないよ。

「騎士シャルロッテは魔造兵装最後の1桁の神器、断刀キルシュブリューテを使いこなしていたって呆れているんだ。オリジナルは、

人間がキルシュブリューテを使いこなしていた騎士シャルロッテに恐怖を抱いたそうだぞ」

「そうなの？　わたしも使ったことあるけど、なんにもなかったよ？」

「君の場合はやはり、騎士シャルロッテの生まれ変わりだというのが一番だろうな。キルシュブリューテに認められた騎士シャルロッテの魂と魔力だ。抵抗力がＭＡＸでもおかしくない」

「なるほど」

そう言えば、母様や御祖母様は、"キルシュブリューテ"を長い時間持っていられなかったみたいだった。シャルロッテ様の意識が"キルシュブリューテ"に宿っていても、魔造兵装としての狂気は完全に除けないんだね。

「とにかく、任務は果たした。骸骨の人たちもティシュミホールの機能が落ちたことで再び物言わぬ死体となっているはずだ。セレス」

「ん」

セレスが魔術を解除すると、氷が急速に解凍され始めた。ルシルは改めて"Ｔ・Ｃ・"を、リングタイプのシーリングバインドで拘束した。それを見届けた後にルミナが「私が運ぶよ。ルシルは神器をお願い」って提案して、アイツを肩に担ごうとした。

「あ、ルミナ先輩。私が担ぎます」

「ミヤビは魔術師と真っ向から戦えるからダメ。ここは私がやるから、ミヤビはイリス達と臨戦態勢を維持でお願い」

「了解です！」

ルミナが"T・C・"を担ぎ、ルシルが神器を回収。骸骨たちの持つ武器は、"ティシュミホール"の能力によって一時的に神器化したただの武器であることも確認して、このままここに放置することを決めた。

「よしっ。特騎隊、任務完了。外に出て、シャーリーンに転送帰艦。本局へ戻る」

ルミナとルシルを真ん中に、わたしとクラリスが先頭、セレスとミヤビが後尾で通路を進んだ。途中でシャーリーンと通信して、宮殿から出た直後に転送するように指示を出しておいた。地下は何事もなく終わり、次は地上1階を移動。宮殿の奥からエントランスまで緊張しながら進んだけど、結局なにも起きなかった。

「これから外に出る。T・C・をシャーリーンから逃がした新手が再び逃亡を手助けする可能性がある。警戒せよ」

緊張化が高まる中でエントランスより飛び出ようとしたその時・・・

「おーほっほっほっほ！！」

そんな高笑いがどこからともなく聞こえてきた。ルミナとルシルを護るように2人に背を向けるようにして円陣を組んで、全方位への警戒を行う。

「愚かな愚かな木偶人形使い！　せっかく逃がしてあげたのに、新しい任務も与えたのに、神器の狂気に呑まれて、神器も回収できず、派遣された下僕を打ち倒し、また敵に敗北して、また無様に捕まって！」

エントランスの真正面に1人の女の子が空からふわりと降り立って、「やはり貴方は使えないですわね！」って言って、両手を腰に当てて仁王立ち。レモン色の髪はワンサイドアップ。オレンジ色の瞳はツリ目でくりっとしてる。格好はお嬢様、お姫様と言った感じのドレス。武器の類は無いっぽい。

（っ！　まただ、シャルロッテ様から怒りの感情が流れてくる・・・）

「お初にお目にかかりますわ！　わたくしは――」

「ヨツンヘイム連合主導4界、夢幻世界ウトガルドの歴代最年少の女王、夢幻王プリムス・バラクーダ・ウトガルド・・・の生まれ変わりか」

「夢げ――って、ちょっと！　そこの貴方！　これからわたくしが名乗ろうとしていたことを先に言わないでくださる！？」

１０歳そこらくらいの女の子が、キィー！と悔しそうに地団太を踏んでる。その様子にわたし達はどうしようかと困惑してたけど、ルシルとセラティナはそうじゃなかった。

「シーリングバインド！」

「一方通行（サンダルフォン）の聖域！」

ルシルが魔力生成阻害のバインドを鎖状で発動して、セラティナも同様の効果を持つ結界を発動。ルシルが言うプリムスの生まれ変わりっていう女の子が、呆気なくバインドに拘束されて、結界にも閉じ込められた・・・かと思えば、女の子の姿が消失した・

「残念ですわね！　大ハズレですわ！」

声は信じられないことに背後から聞こえてきた。バッと振り返ってみれば、支柱に背を預けて立つあの子が居た。ミヤビが「転移！？」って驚くけど、ルシルが「いや違う。アレは幻術だ」首を横に振った。

「正解ですわ！　わたくしはむ――」

「夢幻王は、幻術魔術に特化した彼女の二つ名だ。気を付けろ、彼女は強い」

「幻王・・・って！　また！　また、わたくしの言葉を遮りました

わね！　なんて無礼な！　いいですわ！　そこの役立たずと神器の回収だけに留めておこうと思いましたけど、少し遊んで差し上げますわ！」

――破滅（アタケ・デ・ベスティア）の猛獣――

女の子の側に現れたのは山羊と馬の３つの頭を持ち、胴体はたぶん狼、尻尾というかそっちには鰐と獅子の頭があった。胴体もよく見れば、後ろ足じゃなくて全部前足だ。２頭のキメラが背中合わせに融合してるような奴だった。

「ルシル！」

「幻術だ！　実際にそこには存在していないが、夢幻王の生み出す幻影は精神干渉力がすさまじい！　肉体は無傷でも精神が死ねば、肉体の方も死ぬ！　俺とセラティナで抑える！　その間にみんなはシャーリーンへ！」

「りょ、了解！」

少し顔の蒼いセラティナが気丈に返事して、ルシルの側に付いた。わたしは「シャーリーン！　至急転送を！　ルシルとセラティナ、わたしは留まる！」って指示。

「おーほっほっほっほ！　我らの王より局員も民間人も殺さないように厳命されているので、殺しはしませんわよ♪」

女の子が右手をサッと振り払うと、幻影だっていうキメラが雄叫びを上げて突進してきた。わたし達は急いで外へと飛び出して、固まって突進を食らう間抜けを起こさないために散開した。キメラは誰をターゲットにするかキョロキョロと見回してるんだけど、本当に幻なわけ？　存在感がすごくて、実際に触れそう。

「ですがまぁ、骨折くらいは覚悟してくださいましね♪」

『転送準備が完了しました！　ポイント指定を願います！』

「ルミナを中心に転送準備！　セレス、クラリス、ミヤビ！　ルミナの元に集まって！」

キメラはルシルをターゲットにしたようで、獅子と鰐の口から熱線が放たれた。ルシルに回避された熱線は数十mと離れた地面に着弾したけど、爆発することなく消失した。なるほど。本当に幻なんだ。

『ナイト3、ナイト4、ナイト5、ナイト6を転送します！』

「逃がしませんわよ！　殲滅の凶獣園（パルケ・ソオロヒコ・デ・デストルクシオン）♪」

ルミナ達を包囲するように出現したのは、いろんな外見をした数十体のキメラ達。転送はまだ始まってないのに、ルミナ達に突進した。わたしは「転移中止！」の指示を出す。

「ルシル、セラティナ！　わたしとセラティナでキメラの幻をどうにかするから、ルシルは術者をお願い」

「ダメなんだ！　幻である以上、セラティナの結界も意味をなさない！　ただ、見えているだけなんだから！　存在しないものは結界で弾けないし、君の攻撃も意味はない！」

「それなのに攻撃を受けたと錯覚すれば精神、そして肉体にダメージが入るみたい！」

「うわ、もうホントに最悪じゃん」

「うふふ～♪　その表情、素敵ですわ～♪　わたくしの楽しみは、わたくしの幻術を目の当たりにして絶望する敵を見ることですわ！」

「相変わらず性格が悪いと、アリスが怒ってるよ！」

――一方通行（サンダルフォン）の聖域――

――清楚（インテルカンビオ）なる私よ彼方へ――

セラティナが高速かつ連続で展開する結界から女の子は回避できずに捕獲された。と思えば、すでに別のところに居る。そんなことを繰り返しながら女の子は「あら、アリスと意思疎通できるのね！」って満面の笑みを浮かべた。

「お久しぶりですわ、結界王アリス！　わたくしのことを覚えていてくださって嬉しいですわ！　あの頃のようにお茶をしましょ？　クレマ・カタラナを一緒にいただきながら♪」

「冗談じゃない！ってアリスは言ってる。アリスは、あなた達の命令で故郷から拉致されて、薬で洗脳されてたみたいじゃない！　よくもまぁいけしゃあしゃあと！」

――多殻結界（マルチプル・シェル）――

「だって貴女が言うことを聞いてくださらないんですもの。仕方のないことですわ」

何十個っていう３０㎝四方のキューブが女の子の体のあちこちに出現。あのキューブに触れた対象をその場に拘束するっていう結界だ。女の子の姿がすぅっと陽炎のように揺らめいて消えた。キメラもそうだけど、女の子自身も幻に見えないレベルの存在感だ。

（正直、ティアナのフェイク・シルエットがお遊戯に見えちゃう。あの子に超失礼だけど・・・）

とにかく、キメラ達に対しては逃げ惑うことしか対処法はなくて、どうにかするには術者のあの子を止めるしかない。それは判った。でも、「ああんもう！　鬱陶しい！！」ってわたしの怒り爆発。女の子をひたすら追い駆け回して、それが実は幻だった。なんてことを繰り返してると・・・。

「あら、もう時間ですわ。戯れはここまでにして、本格的に撤退させてもらいますわね」

――尽滅の蹂躙軍（フェルサス・デ・オクパシオン）――

それは本当に一瞬だった。瞬きの間にわたしの目の前に何百人っていうわたしたち特騎隊とフォード（仮）が出現。わたしの幻だけでも４０人は居そう。

「さらに行きますわよ！」

――可憐なる私（セグンド・プリムス）よ此処に――

女の子の幻も何十人と生み出された。幻たちが一斉に動き出して、「のわわ！？」その人波に呑まれてしまった。それでどれが本物か判らなくなった。

「やられた！　ごめん！　Ｔ・Ｃ・を奪われた！」

「どれが本物か判んな～い！」

ルミナの報告にわたしは頭を抱えた。やろうと思えばいつでもフォード（仮）を奪い返すことが出来たわけだ。舌打ちしたいのを我慢して「ルシル！　神器は！？」って確認する。神器だけでも回収できれば負けじゃない。

「大丈夫だ！　絶対に奪わせない！」

――瞬神の飛翔（コード・ヘルモーズ）――

ルシルが空戦形態になって空へと上がったのを、ルシルの幻に囲まれながら確認した。ルシルに揉みくちゃにされて、妙な気分になり始めたとことで幻たちが一斉に消えた。この場に居るのはわたしたち特騎隊だけで、女の子とフォード（仮）はどこにも居なかった。

Ｓａｇａ１３戦導の武神～Ｋｉｎｇ　ｏｆ　ａｒｍｅｄ　ｆｏｒｃｅ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

第５２無人世界トライキスでの一件から２ヵ月。あれからも管理外世界で"Ｔ・Ｃ・"のメンバーと交戦しながらも、魔力を持った物品や動物の防衛に果たした。回収、または預かった物品は魔法もスキルも通用しない（対魔術もマイスター達が施した）本局の保管庫に預けてるから、裏切り者が出ない限りは安全だ。
でも動物たちはなかなか護りきることが出来ない。アイリたち特騎隊が居なくなった後で現場に戻ってきたメンバーや新手によって魔力を奪われるってパターンばっかり。その世界の固有種が多い所為で本局や管理局施設に保護も出来ないから、どうしても特騎隊がその世界を離れたらやられるわけだね。

（この戦いもいつになったら終わるのやら・・・）

いまだに"Ｔ・Ｃ・"の全容は見えてないし、メンバーの中には魔導師じゃ絶対に勝てない魔術師がいるし、マイスターが人間だった頃に生きてた魔術師が使ってた魔術の使用者が在籍してるのも厄介だよね。葬柩王フォード。夢幻王プリムス。マイスター達"アンスール"と同じ、王族の魔術師だ。ただ、あの２人が生まれ変わりかクローンか、そのあたりはまでハッキリしてないけど、マイスターはシャル達みたいな生まれ変わりって考えてる。

（もう1つ、考えられることがある。１００％ありえないって解ってるけどね・・・）

マイスターの創成結界の1つ、"英雄の居館ヴァルハラ"に登録されてる"異界英雄エインヘリヤル"だ。でもマイスターがそんなことする必要性は全くないし、何よりマイスターが判らないわけないよね。"エインヘリヤル"を召喚する際にはいろいろと魔術を行使しないといけないもん。もしマイスターが知らないうちに操られたりして"エインヘリヤル"を召喚したとしても、マイスターなら"エインヘリヤル"だって気付く。

（マイスターが操られるなんてことも絶対にない。アイリが毎日付いてるんだから）

それが判ってるからこそマイスターも、生まれ変わりっていう結論を受け入れた。それはそれで奇跡的なんだよね。人間だった頃のマイスターと関わりの深い人間の生まれ変わりがこんなに多いなんて。誰かが仕組んでるって思えちゃうよね。

「アイリ。次の仕事のミーティングだ、行くぞ」

「ヤー！」

特騎隊のオフィス近くの休憩室で休んでたところ、マイスターが呼びに来てくれた。空になった紙コップをゴミ箱に入れて、マイスターの右腕にギュッと抱き付いた。ここがアイリの特等席なのだ。マイスターはそんなアイリを振り払うことなく、2人一緒にオフィス

へ向かう。

「マイスター。トーマがフッケバイン一家に拉致されて、現場に居合わせたシグナムとアギトお姉ちゃん、アリサが傷を負ったって話だけど、大丈夫かな・・・？」

はやてを部隊長とした特務の６番、特務六課はフッケバイン一家の逮捕を任務にしてる部隊だ。そんな六課に所属してるシグナム達が第２３管理世界ルヴェラで捜査中、連中と遭遇したみたい。魔導師なシグナム達にとって連中のエクリプスウィルスによる魔力分断は毒のようなものだけど、すずかたち第零技術部が開発してた魔力を使わない装備のおかげで渡り合えたようだ。

「スバル達が少し心配だな。ロッサの話だと、トーマがエクリプスウィルスに感染したそうだ。だからフッケバインに拉致されてしまったわけだ。手を貸してやりたいが、こちらはこちらで手一杯だからな」

トーマ、トーマ・アヴェニールは、スバル達ナカジマ家と懇意にしてる男の子で、フッケバイン一家（連中は偽者の手によるものだって言ってたけど）によって故郷を滅ぼされた過去を持ってる。マイスターの数少ない同性の友達だ。２ヵ月くらい前から始めた、デバイスの"スティード"との旅は楽しいみたいで、旅先の写真をよく送ってくれてるんだよね。そんなトーマが感染、そして拉致なんて。マイスターも内心穏やかじゃないと思う。

「（それでもアイリ達に出来ることはほとんどない。トーマやフッ

ケバイン一家のことは、はやて達を信じて任せるしかない）・・・
うん。物は護れてるけど、生き物はその場では護れても最後には魔力盗られちゃうしね」

「その辺りは上の方も大目に見てくれている。あとはメンバーを1人でも多く逮捕して、そこから本拠地やリーダーを割り出して、そして逮捕しないとな」

「うん、だね」

オフィスに着いて、マイスターは副隊長デスクに、アイリは自分のデスクに移動。近くのルミナ達とお喋りしながら待つこと数分。シャルが「はーい。全員着席～」ってオフィスに入ってきた。自分の部隊長デスクの前にまで来て、「次の任務先が決定した」ってみんなのデスクにモニターを展開。

「今回の目的は、こちら！　クリスタルスカル！」

モニターに表示されたのは、水晶を頭部の骨の形に形成した物だった。他のスタッフから「綺麗！」とか「なぜ骸骨？」とか「高そう・・・」とか、いろんな感想が挙がった。で、マイスターは「まさか、次の任務先は・・・地球か！」ってシャルに振り向いた。

「残念ハズレ！　地球のクリスタルスカルも有名だけど、魔力の欠片も無いことは子どもの頃から知ってる。でしょ？」

「それはまぁそうだが・・・。つまらんなぁ」

「はいはい、不貞腐れない。みんなにはまだ伝えてなかったけど、現在本局、各支局、各地上本部の観測室が改めて無人世界を精査して、強大な魔力を保有してる物品の有無を再調査してるの。第５２無人世界トライキスも以前に調査されたけど、神器を確認できてなかった。つまり調査が足りなかったってこと。それを踏まえて微弱な魔力反応でも感知できるように頑張ってくれてる。で、そのおかげで第１無人世界ファーストから魔力反応を出来た」

ファースト。名前の通り１番目に指定された無人世界だ。本局とミッドの間に位置してる世界で、シャーリーンで出なくても本局のトランスポートで移動できる距離だ。ただ、「いきなり無人世界？管理外世界はまだたくさんあるけど？」ってセレスが言うように、昨日まで行ってたのは第５８管理外世界アーガスなんだけど、管理外世界は現在８６番まである。その中に魔力保有物や生物は居るはず・・・。

「管理外世界の５０番台後半からは本局との距離がありすぎる。その管理外世界に近い局施設を利用することは出来るけど、最終的にはシャーリーンで移動して、トランスポートで入界することになる。その時間が無駄すぎるってわけ」

「残る管理外世界に行くための航程はどれも１週間以上のものばかりだな。往復を考えれば、確かにＴ・Ｃ・を自由にさせてしまう時間を多くしてしまう。それだけは避けないとな」

「そういうわけで、上はこう考えた。犠牲もやむなしと。近い距離

にある無人世界での決戦を、上は望んでる。わたし達はその期待に応えないといけない。その初戦が第1無人世界ファーストで新たに確認されたクリスタルスカルの確保」

シャルの話にアイリもそうだけど、マイスターやルミナ達も「確保？」って聞き返した。モニターにクリスタルスカルが映し出されてるってことはソレを撮影した局員が居て、実物の前に立ったってことだ。その局員が確保すればよかったのにって話になってくる。

「触れなかったそうよ。魔法を駆使して触れようとしてもダメ。スキルでどうにかしようとしてもダメ。魔導師でもスキル保有者でもない、魔力非保有の局員でも触れなかったみたい。つまりは触ることの出来る対象じゃなかった。じゃあ誰が触れる？」

「魔術師・・・！」

「そういうことよ、ミヤビ。このクリスタルスカルは魔術によって作られたと見ていい。で、神秘に反応して触れるようになる・・・と考えられる」

「ねえ、ルシル。魔術によって作られたんなら神器よねコレ？」

「うーん・・・。俺の知識の中には無いし、パッと見だと何とも言えないな。ただ、さほど驚異のある物じゃないと思うぞ。ま、実物を見て感じてからだな」

クラリスにそう答えたマイスターは手元のキーボードを操作して、

「では本任務の内容を確認する」って、みんなのモニターにスケジュールを表示させた。スケジュールによれば、これからマイスターたち前線組と、後衛組の内アイリとセラティナがトランスポートを使ってファーストへ移動。そこでクリスタルスカルを回収、そして帰還だ。順調に進めば３０分も掛からない。

「ではこれより特騎隊は、第１無人世界ファーストにて任務を遂行する。オフィスに残るスタッフは、各自の仕事を片しておくように」

シャルの指示にアイリ達は立ち上がって「了解！」って敬礼した。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒ルシリオン†††

本局のトランスポートからここ第１無人世界ファーストへとやって来た俺たち特騎隊。俺が人間だった頃はこの世界は防衛衛星だったな。当時は次元航行船なんて便利な技術は無く、転移門での世界間移動しかなかった。だから自世界と多世界の間に侵略阻止用の衛星を置くことは常識だった。

（今思えば、魔術（ひと）の力で他所から衛星を軌道上に引っ張ってくるなんてふざけた話だな）

「「お疲れ様です！　お待ちしておりました！」」

そんな俺たちを出迎えたのは本局武装隊。部隊番号は確か３３９１。挨拶をくれた隊長と副隊長に俺たちも「お疲れ様です！」と敬礼を返した。クリスタルスカルの監視部隊として派遣されており、俺た

ちが回収することで任務を完了とする隊だ。

「ではご案内いたします。こちらへ」

隊員2名がクリスタルスカルへの案内をしてくれるようだ。彼らの視線の先には人ひとり入れるかどうかの小さな穴。穴の周囲には砕かれた岩の破片が散らばっている。どうやら岩が入り口を防いでいたようだ。

「ナイト2、ナイト6、エイダー2、エイダー4。4人に回収の任を命じる。残りはわたしと共に周囲を警戒」

俺とミヤビとアイリとセラティナが回収班、シャル達が入り口の防衛班になるようだ。俺たちはシャルに「了解！」と応じ、回収班である俺たちは、案内役の2人に付いて穴の中に進入する。縄梯子で深い深い穴を降り、人の手によるものではない天然の地下道へと到着した。案内役の2人が魔法で明かりを作ってくれていることで、真っ暗になることはなかった。

「ルシル副隊長・・・」

「ああ。地上に居た時にも僅かに感じ取れていた魔力反応が、地下道に降り立ったらさらに強く感じられるようになった。大物だぞ」

「こちらです。上と下、両方に注意しながら付いて来てください」

地下道を進むこと3分ほど。ようやくたどり着いたのは何らかの儀

式場。最初の調査に設置された物か、魔力灯が壁面に沿って数基とあった。

「動物の骨だけじゃなくて人骨まで・・・」

「無造作に積み重ねられてるってことは、生け贄とされたのかもしれませんね」

セラティナとミヤビが眉をひそめた。それほどまでに数えきれないほどの骨が四方に山となっていた。生け贄に捧げられた人たちとすればとんでもない悪行だ。俺が人間だった頃は生け贄儀式は普通にあったから、2人ほど怒りを覚えない。

「こちらが回収目的のクリスタルスカルです」

「私たちではやはり・・・触れません」

もうボロボロな祭壇の上に鎮座しているクリスタルスカル。隊員の1人が触れようとすると、見えない力場で手が押し返される。セラティナがその様子に「触れないようにするための結界だね」と、魔術師化したうえでクリスタルスカルに手を伸ばした。すると隊員とは違い、彼女は何の抵抗も受けずに触ることが出来た。

「おお！」

「さすが特務零課の魔導師！　こんなにもあっさりと！」

「セラティナ。とりあえず結界で護っておいてくれ」

「了解」

――小型運搬領域（スモール・キャリアー）――

桃色のキューブ状の結界に覆われたクリスタルスカルが、手の平サイズにまで圧縮された。セラティナは「ルシルが持っておいて」と俺にキューブを差し出してきたから、「判った」と受け取る。防護服のポケットにしまい込み、「さぁ戻ろう」と告げた。

「呆気なかったですね。T・C・の妨害などがあると思っていましたが・・・」

「ああ。しかし油断はしないように。待ち伏せは考えられるからな」

「了解です」

儀式場を出、来た道を歩いて戻っていたそんなとき、ドォーン！と頭上――地上から響く轟音と衝撃が三度、俺たちを襲った。俺はすぐに「こちらナイト2！　ナイト1、状況は！？」と通信を繋いだ。明らかに異常事態、敵襲だ。やはり待ち伏せ、もしくは遅刻。どちらにせよ"T・C・"がやって来たのだろう。

『こちらナイト1！　T・C・の幹部と思しき魔術師が出現！』

幹部。それは特騎隊内部で決めた事柄で、フォード（仮）、プリウ

ス（仮）の2人のように、幻術魔法などで個々人のトラウマの姿に見えない、特別なメンバーのことを指す。つまり今、地上でシャル達と交戦している"T・C・"メンバーも、大戦当時に活躍した魔術師の生まれ変わりかもしれない、ということだ。

『こいつ、マジで強い！　出来るだけ早く戻ってきて！』

「わ、判った！　すぐに向かう！」

シャルとの通信を切り、俺はアイリと「ユニゾン・イン！」を果たし、ミヤビも火力と速度を両立するべく炎鬼の赤い角と風鬼の翠の角を額から生やした。セラティナも魔術師化を保ち、いつでも戦闘できるようにしている。

「すまない。私たちは先行する」

「「はっ！　ご武運を！」」

敬礼で見送ってくれる2人の隊員にこちらも敬礼で返し、俺たちは地下道を走り、地上へ通じる穴を梯子ではなく飛行魔法で一気に通過する。そのまま上空へと上がり、戦場の状況を確認。武装隊は避難し、シャル達がたった1人の魔術師を相手に戦闘中。

「おいおい。やっぱりお前の生まれ変わりもいるのか・・・！」

『マイスター？　あの人、知ってるの？』

シャル達と交戦している魔術師の外見が、俺の知る男のものと完全に一致。使っている魔術も判る。四王のうち3人目の確認だ。ワックスで固めたきっちりとした七三分けの黒髪、柔和な赤い瞳。首の下から膝上までを覆う黒いタイツの上にキトンを纏っている。何も履かない素足。やはり間違いない。

――闇よ誘え汝の宵手（コード・カムエル）――

とにかく、シャル達が一方的な防戦に追い込まれている戦況を一度リセットする必要がある。そのために発動したのは、対象の影を利用して作る平たい影の手カムエル。利用する影はもちろんあの男のもの。自分の足元にある影から伸びる触手に拘束されたあの男は、「むお！？　この魔術は・・・！」と声を上げ、魔力反応を探知して空に居る俺を見た。

「前世の記憶が表面に現れているのなら、貴様と俺の相性の悪さは理解できるだろう！　レオン・レイ・ヴァナヘイム！」

あの男、レオン目掛けて急降下しつつ起動した"エヴェストルム"を神器化させ、腹で叩きのめそうと振りかぶる。レオン（仮）は「ああ、解っているとも！　ただし！」と全身から赤褐色の魔力を放出してカムエルを消し飛ばした。

――エヘクトル――

魔力波に煽られて体勢が崩されたところで、右腕全体に魔力付加した状態での正拳突きを繰り出してきたレオン（仮）。"エヴェスト

ルム"と奴の拳が激突して、「くぁ・・・・！」突進からの一撃であったにもかかわらず俺が弾き飛ばされてしまった。

――ピオネロ――

――コード・ケムエル――

空中で体勢を立て直すより早く奴の突進が俺を襲うが、アイリが『させない！』といくつもの円いシールドを複数並べた防性術式を展開。レオン（仮）の肩が激突。アイリのシールドは一瞬で粉砕されて、盾として構えた"エヴェストルム"とも激突。そして砕かれた。

「ぅぐ！」

『マイスターー！！』

一切の防御を無視して突き進んできたレオン（仮）の突進。ギリギリで全身を魔力で覆うパンツァーガイストを発動できたから直撃は免れたがトラックに撥ねられたかのように弾き飛ばされ、さらに地面をゴロゴロと転がる。そんな俺を「ちょっ、大丈夫！？」とルミナが抱き止めてくれたことでようやく止まった。

「あ、ああ、なんとか。あぁくそ。たった一撃で全身が軋む」

「アイツのこと知ってる風だったけど、アイツのこと教えて」

ミヤビとセラティナも戦闘に参加し始めたが、レオン（仮）はミヤ

ビの一撃を受けてもよろけもせず、セラティナの結界を膂力のみで粉砕している。シャルの"トロイメライ"も素手で殴り返し、セレスの凍結すらも通用せず、クラリスの召喚獣・黒馬アレクサンドロスを片手で投げ飛ばす。フォード（仮）と違って本当にオリジナルと戦っているような感じだ。

「レオン・レイ・ヴァナヘイム。自己バフで完結する戦闘スタイルの武闘家だ」

『あの筋肉、まるでドラゴ〇ボールの変身後のブ〇リーだよね』

「ぶふっ。コホン。中遠距離の攻撃手段を一切持たず、己の肉体のみで戦う魔術師だ。高位の神器クラスの硬度と神秘レベルにまで鍛えられた鋼の肉体、バフによる自己強化。今は持っていないが高位神器による徹底防御。その強さからして戦導の武神、武勇王と称された、人類最強の肉体と畏怖されていた。生半可な魔術も神器も通用しない、まさしく怪物だった男だ」

アイリの例えに噴き出してしまったが咳払いして仕切り直し。武勇王レオンは、四王の中で最強と言っても過言じゃなかった。真っ向から戦えるのは俺たち"アンスール"の中でも俺、ステア、ジークのみだったからな。

「そこまで言う？　あなたのオリジナルやその仲間は、どうやって倒し――」

「休憩中申し訳ないが、行かせてもらうぞ！」

振るわれる大きな右拳から逃れるために俺とルミナは別方向に後退し、ただの魔力付加パンチで強大な魔力爆発を起こし、巨大なクレーターを作るレオン（仮）よりさらに距離を開ける。その様にアイリが『はあ！？』と驚きの声を上げた。

「くそが・・・！　記憶・体格・魔術だけでなく、その火力まで受け継いでいるとはな！！」

降り注ぐ瓦礫や砂塵で視界が悪くなる中、奴が「リターンマッチだ、神器王！」と再度俺に向かって突っ込んできた。

「おい！　Ｔ・Ｃ・は局員を襲ってはいけないんじゃないのか！」

――屈服させよ汝の恐怖（コード・イロウエル）――

「しかしお前は持っているのだろう？　我らの目的を！　それをいただこうと思うのだ！」

レオン（仮）の両側から出現させた巨拳イロウエルで挟撃するが、奴はデコピン１発でイロウエルを粉砕。両手が左右に開いた今、「シーリングバインド！」を同時に１３個と発動して奴を拘束する。だがすぐにバインドが引き千切られ始めた。

「今のお前と我との相性など在って無いようなもの！　かつてこの身を貫いた神器の雨！　それを使わぬお前なんぞに負けはしない！」

「当たり前だ！　神器を使う上級術式はどれも殺害用のものばかり！　使えるものか！」

――深淵（ラフェルニオン）へ誘いたる微睡の水霧――

レオンはかつての大戦で、俺が殺した相手だ。戦争じゃないんだ。殺す必要もないし、殺すわけにもいかない。目の前の男はあくまで前世の記憶に体を使われているに過ぎない。捕えてもまた逃げられるだろうが、今は無力化さえすれば俺たちの勝ちだ。というわけで、選んだ術式は下級水流系の対象を強制的に眠らせる霧を発生させるラフェルニオン。

「セラティナ！」

「うんっ！」

――一方通行（サンダルフォン）の聖域――

残るバインドも４つまで減っていたところでセラティナが結界を展開してくれた。即効性のある眠りの霧と共に結界に閉じ込められたレオン（仮）は、「おのれ・・・」とウトウトし始めた。さすがの奴も眠気と魔力生成阻害の結界の中では堪らないだろう。

「大戦時（かつて）は実行する必要もなかった、神器王（おれ）と結界王（セラティナ）による生け捕りコンボだ」

――撒き散らせ汝の疫病（コード・ハダルニエル）――

さらに対象を病気に罹らせる霧を発生させるハダルニエルを結界の中に充満させる。とりあえず、しばらくの間は戦闘不能になってもらおう。今回は上手くいったが、次はもっと警戒してくるだろうからこのコンボが通用するとは思えない。なら少しでも前線に出る機会を減らしてやりたい。

「あらあら。あの木偶人形使いとは違って、レオン陛下がこんな間抜けを晒すとは思いもしませんでしたわ」

「来たな、逃がし屋（プリムス）！」

レオン（仮）にボロボロにされてへたり込んでいるシャル達の間を優雅に歩いてくる少女、"T・C・"の幹部と認定しているプリムス（仮）だ。これまでに俺たちは"T・C・"メンバーを捕獲し、連行できるところまで行ってはプリムス（仮）の幻影術式で逃げられている。

「し、心配ご無用、プリムス陛下・・・。この程度で、わ、我は墜ちんよ・・・」

ボギッと自らの指をへし折るレオン（仮）はそれで眠気を吹き飛ばしたのだろうが、すでにいくつかの病気に罹っている。どんな病状化はランダムであるため判らないが、先程までのような圧倒差はないはずだ。

「それは頼もしいですわ！　では少々見学をば」

「ああ、見ていたまえ。必ずやターゲットを持ち帰ろうぞ！」

筋肉を膨張させて俺の仕掛けたバインドを粉砕し、新たにバインドを発動するより早く奴は結界を殴って破壊、再び自由の身になった。

――パトリオタ――

「うおおおおおおおおおおおおおお！！」

全身から冗談じゃないレベルの魔力を放出するレオン（仮）に、俺たちは固唾を呑んだ。みるみるうちに奴の顔色が良くなり、放出されていた魔力が抑えられていく。そして魔力は薄っすらと奴を覆った。

「仕切り直しか・・・」

『だね』

骨折すらも治したレオン（仮）と、俺は改めて対峙した。

Ｓａｇａ１４現代によみがえる伝説～Ｆｉｓｔ　ｏｆ　ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

フォード（仮）もプリムス（仮）もヤバかったけど、レオン（仮）って奴もとんでもなかった。ＤＢのブ〇リーのような体格のクセに、攻防力や機動力も似たような反則級。ルシルの様子からして（仮）組と同じ、大昔の魔術師の生まれ変わりであると見ていい。

――女神の祝福（コード・エイル）――

『すまない、力を貸してくれ！』

レオン（仮）にボッコボコにされてダウンしてたわたし達を覆うサファイアブルーの魔力。ルシルの治癒魔術だ。そのおかげでダメージが一瞬で回復。すぐに立ち上がって、ルシルとルミナとミヤビの猛攻を受けてもビクともしないアイツの元へ駆け出す。

（ていうか、何を食べたらあんな体型になるわけ？　リアルでＤＢのキャラクターみたいな人、初めて見た）

"トロイメライ"の柄を両手で握りしめ、ルミナとミヤビをガードの上から１０ｍ以上殴り飛ばしたレオン（仮）に、「でぇぇぇぇぇい！」斬りかかった。もちろん刃を返しての峰打ちだ。

「峰打ちなど言語道断！　貴様、確かフライハイトだったな！　それでも名高きレーベンヴェルトの騎士か！！」

骨折くらいは許してね♪って感じで打撃力を全力強化したのに、肌どころか体を覆ってるうっすい魔力膜にすらダメージが入らない。わたしの攻撃を受けた太い（わたしの腰回りより太いな～）左腕を払って、わたしは数mと飛ばされた。

「召喚を行う！　サポートをお願い！　汝は果て無き天を衝く巨いなる者！」

「召喚とな！？　面白そうだが、今は止めさせてもらうぞ！」

「後でちゃんと治癒魔導師に治療させるから！」

――制圧せし氷狼（インバシオン・ローボ）――

セレスの手加減なしの氷狼群を生成。それらがレオン（仮）に殺到していく。全身を噛まれているのにアイツは構わず、召喚魔法を発動しようとしてたクラリスへ戦車のごとく突っ込んでいく。それを黙って見守るわたし達じゃないよ。

「その歩みで地を蹂躙し、振る手は空を薙ぎ払う！」

「ああ、こちらもお前を止めさせてもらおう！」

――天地に架かれ痺れる汝の明星（コード・ルシフェル）――

クラリスとアイツとの間の地面から３０発の雷撃系砲撃を空へ向かって持続照射して、砲撃の防壁を作った。その間にミヤビがクラリスの前に移動し、両腕に竜巻を纏わせた。

「痺れもせんわ、神器王！」

「一方通行（サンダルフォン）の聖域！！」

砲撃の防壁を突破してきたレオン（仮）を閉じ込めるセラティナ。魔力による強化が一瞬で強制解除されて、ビタン！と結界の内壁にぶつかりヒビを入れたその瞬間、ミヤビが結界に向かって突進。

――風牙裂千　空帝　双嵐掌――

「ええええええええい！！」

竜巻を纏う両掌底が結界の外壁をすり抜け、レオン（仮）のお腹に直撃した。奴は「むぐぅ！」と声を上げ、反対側の内壁に背中から打ち付けられた。防御魔力膜を結界で失い、内壁にぶつかって体勢は悪かった。そこでミヤビのほぼ全力の一撃。普通の魔導師なら絶対に死ぬレベルだけど、「うむ！　まだこの娘の方が痛いぞ！」ってルシルを見て鼻で笑った。そして背後の内壁に向かって肘打ちして、一撃で粉砕して自由の身になった。

――パトリオタ――

そしてまた全身を魔力膜で覆った。本当に薄いのにとんでもなく堅いアレをどうにかしないと、わたし達に勝機は無い。ルシルとミヤビの横に並ぶようにわたしとルミナも立ちはだかったところで・・・

「行く手は苛烈なる戦火、過ぎ去るは打ち斃せし亡者の群れ。汝が主の命に応じ、いざ参れ！」

クラリスの詠唱が完了して、あの子の腕の中に小さな狐が1匹と召喚された。レオン（仮）の目が丸くなって、すぐに「これはまた愛らしい動物だが・・・。我を舐めているのか？」って柔和だった瞳がキッと鋭くなった。3mはある巨体に真正面から見下ろされるとかなり怖い。

「それは確かめてみるといい。ナデシコ！」

「わしを投げるがよい、クラリス！」

「人語を解す動物！　なるほど！　魔族か！　考えを改めよう！来るがいい！」

――グアルディア――

そう言って楽しそうに笑うレオン（仮）へ向かってクラリスは狐――ナデシコをポイッと放り投げた。わたし達は巻き込まれないようにその場からダッシュで離脱。ナデシコは宙を舞う中で徐々に巨大化を始めて、「殺すなと言われておるでな。加減はしよう」ってフ

カフカそうなお腹によるボディプレスでレオン（仮）を圧し潰した。

「・・・で？　ルシル、今ので倒せたと思う？」

「ナデシコの体重がどれだけあるか判らないから断言は出来ないが、おそらくダメだろうな」

ルシルにそう聞いていたところで、ナデシコが「む？　こ奴・・・！」って唸って、徐々に体が持ち上がってく。ナデシコは伏せたままでいようって踏ん張ってるけど、とうとうほんの僅かだけど投げ飛ばされた。レオン（仮）はボディプレスを受ける前と変わらず立ったまま。唯一の違いは足が地面にめり込んでることだけど、脚からの魔力放出によって地面にクレーターを作って自由にさせた。

「なかなかやるではないか！」

ナデシコが前足でレオン（仮）に殴り掛かったけど、アイツは片手で巨大な前足を受け止めた。そしてもう片方の手でも前足を掴むと、「わーはっはっはっは！」大笑いしながらナデシコをジャイアントスイングのように振り回し始めた。

「わわっ！」

とっさにしゃがみ込まなかったら直撃食らってホームランされてたよ。みんなも同じように伏せてて、どう近付こうか思案してたらナデシコが召喚されたときの小さな姿に変身した。突然振り回してたナデシコが小さくなって手からすっぽ抜けて、居なくなったことで

アイツは体勢を崩した。

――閃駆――

――神速獣歩（ゲバルド・ラファガ）――

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース――

――ラケーテ――

――鉄兵風馳――

わたしとセレスとルミナとクラリスとミヤビはそれぞれ高速移動でレオン（仮）へと突っ込んだ。包囲するような位置取りに着いて、わたしは"トロイメライ"に魔力を付加、セレスは"シュリュッセル"に冷気を付加、ルミナは防壁・結界貫通の一撃を、クラリスは"シュトルムシュタール"全体に魔力付加、ミヤビは右拳に炎の竜巻を付加。

「光牙月閃刃！」

「氷奏閃（イエロ・コラソン）！」

「シュトゥースヴェレ！」

「フェアシュテルケン・ガンツ・・・！」

「風陣炎旺拳！」

――サビオ――

一斉に攻撃を胴体に打ち込んだ・・・んだけど、「むふぅ。効かんなぁ！」ってレオン（仮）は両腕を振り払ってわたし達を弾き飛ばした。殺す気とまではいかないけど、数ヵ月の入院レベルの魔力と神秘を込めたのに全くと言っていいほどに効果が無い。

「わたし達の攻撃でも通用しないなんて・・・」

――槍神（コード・スヴィズリル）の投擲――

空から飛来したのはサファイアブルーの巨大な魔力槍。レオン（仮）は両手で槍の先端を鷲掴んで止めて見せた。ニヤリって笑うアイツだけど、空高くから空戦形態のルシルが急降下してきて、「おらぁぁぁぁぁぁ！」槍の石突を踏みつけた。その一撃で槍を掴んでたレオン（仮）の手は滑って、穂先がアイツのお腹の魔力膜に激突。ルシルはさらに石突を連続で踏みつけて、魔力膜を突破させようとする。

「はっはっは！　よせよせ、神器王！　この程度の魔術で我の防壁は貫けんよ！　先ほどの娘たちの同時攻撃の方がまだよかった！」

「だろうな」

今度はルシルがニヤリと笑った。直後、槍を消失させた。踏ん張っ

ていたところでの消失っていうこともあって、レオン（仮）はまた体勢を崩した。上半身の筋肉がすごすぎて体幹バランスが悪いのかな・・・。

「アリス、いくよ」

セラティナの声でボソッと聞こえた言葉。同時に膨大な魔力が離れたところ――セラティナから発せられた。わたし達だけじゃなくてレオン（仮）もセラティナの方に振り向いた。

――小型運搬領域（スモール・キャリアー）――

「むっ・・・！？」

「さらに！」

――一方通行（サンダルフォン）の聖域――

レオン（仮）を囲う桃色の四角い結界が収縮を始めて、３ｍの巨体だったアイツが１ｍ５０㎝程まで小さくされた。そんなアイツをさらに結界が覆った。さすがは結界王。まぁポンポンと結界が張られてく。

「真技」

そんなレオン（仮）を閉じ込めた結界をさらに三角錐の結界が囲って、さらに逆さ三角錐、正三角錐、逆三角錐、正三角錐って次々と

結界が結界を囲う形になって、最終的に十二重の結界になった。そして最初にアイツを捕らえた縮小する結界が解除された。

「無限結界牢（イセリアル・ケイジ）」

セラティナが術式名を告げた瞬間、最初の正三角錐の結界が爆破。さらに2層目、3層目、4層目と連続して爆破されていって、最後の12層目の爆破を封じ込める13層目が無いことから一番派手で大きく、砲撃みたいに空へと昇って行った。

「恐神の投雷（コード・ユッグ）・・・！」

砂塵やら何やらがもうもうと立ち込める中、「ルシル・・・！？」が放電する大きな雷槍を1本と作り出すとすぐに投擲体勢に入った。セラティナの真技でもう倒しちゃったって考えだったわたしは「さすがにソレまずくない？」って雷槍を指差した。いつも作ってる魔力槍なんて目じゃないほどに強大な力を誇る魔力槍は、触れただけで致命傷になるような危険性をひしひしと感じる。

「念のためだよ、シャル」

――ピオネロ――

そう言ってルシルがわたしをチラッと見た瞬間、レオン（仮）が砂塵を突き破って突進してきた。奇襲のような速度だけど、ルシルはきっちり対応して雷槍をアイツに向かって投擲。

――マゴ――

「ふはははははは！！」

右拳を覆う魔力がさらに強大なものにしたレオン（仮）は真っ向から雷槍をぶん殴った。サファイアブルーの雷光とアイツの赤い魔力が周囲に拡散する。掠るだけでもわたし達には大ダメージって判るから「おわわ！」わたしやルミナ達は逃げ惑う。

「ようやく全力を出してくれるようになったか神器王！」

「まさか！　間違ってお前が支配している、今を生きる民間人を殺すわけにはいかないからな！　殺さないように必死に手加減をしつつ勝たねばならない俺たちの気苦労を知れ武勇王！」

そっからはルシルの雷槍とレオン（仮）の両拳による攻防の始まり。恐ろしいほどの放電をかますルシルと、地面の至る所に大小さまざまなクレーターを掘りやがるアイツ。いくら無人世界だからってボロボロにして良いってわけじゃないんだけどね。

「冥府に帰れ、武勇王！」

――一方通行（サンダルフォン）の聖域――

そこにセラティナのサポートが入った。結界に閉じ込められてたことで何度目かの魔術強制解除だ。それでもレオン（仮）は迫る雷槍を胸の高さにまで掲げた両腕でガードした。でも魔術が使えないこと

で踏ん張りも効かずに内壁に叩き付けられて、さらに雷槍が炸裂して結界内が蒼い雷撃で満ちた。

「ルシル！？　ちょっ、やり過ぎよ！」

「しかし、これくらいでないとレオンには勝てない！」

「待って待って！　彼はあくまでレオンの記憶やら何やらを受け継いで現代人でしょ！？」

「っ！！・・・それは、そうだが・・・！」

「レイ・デ・ラ・ゲラ」

結界が割られた音とともに聞こえた術式名。今まで感じたことのないレベルの圧倒的な魔力が生まれた。判る、理解した。これは勝てない。魔術で防御できない状態でセラティナとルシルの魔術を受けたにもかかわらず、防護服は局部を守る箇所以外が消し飛んだだけのダメージ。あとちょっぴりの火傷。フォード（仮）やプリムス（仮）なんてまだ全然マシだ。

「ルシル、ダメ、逃げよう？　アレと戦っちゃだめだよ・・・」

「どうすんの！？　ねえどうすんの！？　逃げるの！？　戦うの！？」

「わしは召喚主（クラリス）の命を最優先にしたいのでな。逃げることを推奨する」

「ナデシコ・・・」

「シャル隊長、ルシル副隊長、これは無理です！　撤退を！」

「魔術の使えない私もいることをお忘れなく」

レオン（仮）が歩くたびに地面に小さなクレーターを作ってく様を見ながら逃げる算段を考えてると、「ダメですわよ？　逃がしませんわ」って、居ることを忘れてたプリムス（仮）がそう言った。

――殲滅（パルケ・ソオロヒコ・デ・デストルクシオン）の凶獣園――

わたし達を包囲するように出現した魔物、およそ数百体の幻。鳥型も居るから空を飛んで逃げるのも難しい。最悪過ぎて吐きそう。

「プリムス陛下！　手出し無用に願いたい！」

「手は出しませんわレオン陛下。ただ、逃げ道を塞いでいるのです。それもいけませんか？」

「ならば結構！　さぁ、神器王！　決着をつけよう！」

膨大な魔力を身に纏ったレオン（仮）の突進。わたし達みたいな一足飛びじゃなく普通に走ってなんだけど、スピードがとんでもない。アイツの狙いはもうルシルひとりだけになっていて、わたし達のことは無視。なら、「レオン（仮）はルシルに任せて、わたし達は・

・・」って、足を組んで岩山に座るプリムス（仮）を見た。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒ルシリオン†††

オリジナルのレオンと同等の魔力量と神秘を誇る転生者。冗談だと思いたいがイリスとシャルという前例がある以上は認めるしかない。

「ルシル！　レオン（仮）は任せた！　あ、セラティナは借りるよ！」

「ごめんね、ルシル！」

シャルがセラティナやルミナ達を引き連れて、プリムス（仮）に戦闘を仕掛けた。それをレオン（仮）の突進を躱しながら見届け、「いいだろう、武勇王。お互い現代に紛れ込んだ迷子だ。さっさと帰ろうじゃないか」と受けて立つ。

「アイリ！　全力で行くぞ！」

『ヤヴォール！』

"魔力炉（システム）"の稼働率をさらに引き上げ、魔術師にとって最も重要な神秘を増大させて、「降参するなら今のうちだぞ」と告げる。死亡しない限りは治癒できるコード・エイルを使えばギリギリまで攻めることが出来る。

「ふんぬぅぅぅ！！」

かくっ、かくっ、と直角に曲がって俺にに単純な突進を行い続けるレオン（仮）に「憶えているか？」と尋ねながら空へと上がる。かつての決着の時と同じ構図だ。俺の足元を通り過ぎて行った奴は「無論だとも！」と反転しながらも左拳でアッパーを繰り出した。彼我の距離は１３ｍそこそこ。その距離での動作だ。何か来ると警戒することが出来る。案の定ヤツの左腕の魔力がブワッと伸び、地面を大きく抉りながら迫ってきた。

「あの頃の俺とは違うぞ・・・！」

――女神（コード・イドゥン）の救済――

右手の平を突き出し、レオン（仮）の放った魔力流に触れる。するとヤツの強大すぎる魔力が瞬時に俺に吸収され、俺の"魔力炉（システム）"内の創成結界・"神々の宝庫ブレイザブリク"にて結晶化される。レオン（仮）、お前がくれた魔力は、リアンシェルトやガーデンベルクとの闘いにちゃんと活用してやるからな。

「なんだと！？　我の魔力が・・・！」

「ふ、くふ、ふふふ、ふは、ふはははは、はーはっはっはっはっはっはっは！！！　すまないな、レオン（仮）！　この瞬間、お前は俺の敵ではなくなったぞ！」

初めからイドゥンを使えばよかったと自嘲する俺は、「其は殲滅と蹂躙を支配する破壊の王」と詠唱を開始しつつ地上へと降りる。そして『蒼翼の操作を任せる』と、背に展開する剣翼１２枚と菱翼１

０枚を切り離し、そのコントロールをアイリに託す。

――疾駆せし汝の瞬風（コード・ヤエル）――

新たに背より３０㎝ほどの剣翼を６枚と展開。純陸戦形態、その完成形で、常時高速移動魔法、魔術が扱えるようにしたものだ。

「汝の眼前には群れ成す哀れな子羊。振るわれる幾多の拳は滅びの形」

「魔力を吸収されはしたが、貴様は得意の空戦から陸戦へと戦術を変えた。舐められているのだろうが・・・くはははは！　面白い！　ではこちらも全力で往くぞ！　真技！！」

――サタナス・デ・ラ・ゲラ――

「むおおお

っ！」ヤツの姿が掻き消え、フッと後ろ髪が風で靡いた。

「むぅ・・・！」

トンと宙を蹴ってその場から１０ｍと離脱。その際にチラッと横目で見れば、レオン（仮）が拳を振り抜いていた。その衝撃で地面が大きく抉れ、無数の瓦礫が宙を舞う。それに構わず「恐怖を生み出す暴風は滅びへの冥府の息吹」と詠唱を続けつつ・・・

「突神（コード・フニクズル）の投洌！！」

またその姿を消したレオン（仮）を迎撃するために創り出した氷の槍を俺の足元へと向けて突き刺すと、俺の周囲に数十本という氷の尖塔が放射状に突き出る。ガシャァン！と氷が割れた音がした方を見れば、そこには無傷だが氷の尖塔に動きを一時的にだが封じられたヤツの姿。

『いっけぇぇぇぇ！！』

２２発の砲撃の同時直撃がレオン（仮）を襲う。強烈な魔力爆発の衝撃波に乗るように俺は後退。

――勝神（コード・ガングラーズ）の投閃――

閃光系の魔力槍を創り出して即座に「おらぁ！」投擲する中でも「八拳に込められるは創造にして破壊、正義にして不義、神聖にして俗悪、真実にして虚偽」と詠唱を続ける。

「殺す気で来い！」

掴み取った光槍を握り潰したレオン（仮）へと俺は指を差し、「生を奪い死を与える覇王の拳、その身に受けよ」と最後の節の詠唱を終える。

「魔神の極拳（コード・シグフェズル）」

中級の巨腕イロウエルの最上位術式シグフェズルを発動。炎熱、氷雪、風嵐、雷撃、閃光、闇黒、土石、無属性魔力の８つの巨腕を、「ジャッジメント！」の号令の下にレオン（仮）へと殺到させる。奴はその機動力を以て回避すればいいのに律義に真っ向から殴って迎撃。だが、これまでの魔術のように即座には破壊されない。

（詠唱から発動した俺の上級術式は無詠唱発動時とは違って、神秘はもちろん効果も上昇する！）

「おのれぇ・・・！」

「神器王だからと言って扱える神器だけがすごいわけじゃないぞ！」

かつての俺は、レオンと魔術戦を繰り広げることなく神器の雨、軍（コード・チュール）神の戦禍で部下ともども蹂躙して勝利した。奴は己の肉体と自己強化魔術に絶対の自信を持ち、戦場では中遠距離系の魔術相手でも接近戦を挑み、勝利を収めてきたことは調査で判っていた。

だから俺は奴が潰してきたその他大勢の遠距離術師と同じと思わせ

るよう動き、油断させたところで魔術とは比べられないほどの神秘を有した高位神器による掃討、コード・チュールを紛れ込ませて放った。勝敗はアッサリついた。いくら奴でも防げない神秘は存在するのだ。

（当時は高位神器に頼るほかなかった俺しか見せられなかったが、神器に頼らない魔術師としての俺を今日見せてやろう！）

『マイスター！』

『ああ！　一気に決めるぞ！』

レオン（仮）がシグフェズルの八拳を損壊させ始めた。完全に潰される前に戦闘不能にしてやる。アイリがまず蒼翼による包囲砲撃を行う。力を込めて炎拳を迎撃しようとしたところでの数発の同時砲撃を受け、奴はわずかによろめいた。そこに炎拳に加えて光拳での一撃もお見舞いしてやる。

「むぐぅ！！」

炎拳を左手で、光拳を右手で受け止めたレオン（仮）だが、そこにまたアイリの連続砲撃、そして雷拳を打ち込む。砲撃を受ける直前から肌の色が元に戻り始めていた奴は「ぐあ！」ようやくまともなダメージを受けた。

「沈め！！　ジャッジメント！」

雷拳から放電させ、スタン効果を狙ったのだが・・・

「なんだ・・・！？」

突如空から強大な魔力と神秘を有した魔力刃が飛来し、炎拳、光拳、雷拳が一撃で斬り裂かれて無力化された。

Ｓａｇａ１５望まざる再会～Ｆｒｕｓｔｒａｔｉｎｇ　ｔｉｍｉｎｇ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

プリムス（仮）の創り出した幻影を相手に四苦八苦してたところに、空から斬撃が降ってきたのを視界の端に収めたから、幻影に注意しながら行き先を見てみれば今まさにレオン（仮）を倒そうとしてた巨拳を狙ってた。斬撃は３つの巨拳を一撃の下に切断して、一瞬にして消滅させた。

「まあ大変！　レオン陛下！　陛下のミスですわよ、アレが来てしまったのは！」

「むむ！　確かにあと１歩で我は討たれていたかもしれんが・・・！」

プリムス（仮）とレオン（仮）が隙だらけで空を見上げた。ここで最低１人、プリムス（仮）だけでも脱落させたい。わたしのその考えはセラティナも同じだったみたいで、プリムス（仮）に向かって手の平を突き出した。

――一方通行（サンダルフォン）の聖域・多層封印（マルチレイヤー）――

「あ、あら？」

プリムス（仮）が六重の結界に閉じ込められて困惑した。いつもみ

たく自分の幻影と位置変更をして逃走しない、というか出来ないみたいで、「陛下の所為ですわよ！」って自分が捕まった原因がレオン（仮）にあるって責任転嫁。

「いやそれはプリムス陛下の責任でし――むごぉ！？」

そう言い返したレオン（仮）は最後まで口に出来ず、ルシルの無事だった影拳でぶん殴られた。さらに追撃として蒼翼２２枚からの砲撃がプリムス（仮）と、地面を転がるレオン（仮）に１２発ずつ放たれた。

――光瑳・斬烈閃――

また空から斬撃が降ってきて、着弾しようとしてた砲撃と相殺、プリムス（仮）を封じる結界を破壊したのを見てると、「なんで今なんだ・・・」ってルシルが泣きそうな表情で、声色でそう言って空を見上げた。わたしもルシルの視線を追って目をやれば、そこには１つの人影。

「まさか・・・！」

その人物の姿形を視認したわたしは言葉を失った。ルシルの防護服と同じでデザインの長衣、銀色の髪、瞳はアップルグリーンの青年。背には色は白だけど剣翼アンピエルが８枚。偶然ルシルと同じ・・・なわけがない。きっとアイツが"エグリゴリ"最後の１機・・・。

「「ガーデンベルグ・・・！」」

ルシルの声と重なる。やっぱりそうなんだ。つまりアイツを倒したら、ルシルも死ぬっていう・・・。ゾクッと背筋が凍った。ルシルの死がすぐ側に居る。そう考えるだけで胸が苦しい、泣きそうになる。だから戦わせちゃダメだ。

「ルシル！　アイツの目的を聞いて、話だけで済ませよう！？　絶対に戦っちゃダメ！　いい！？　戦わないこと！」

ルシルの側に駆け寄ったわたしがそう叫んでると、ガーデンベルグが急降下してきてルシルの前に立った。もう一触即発の雰囲気で、力ずくでルシルを止めて撤退しようって考える。まずはルシルをガーデンベルグから引き剝がさないと。ルシルの腕に手を伸ばして、ギュッと袖を掴む。

「随分と久しぶりじゃないかガーデンベルグ。なかなか姿を見せないから、俺のことを忘れているんじゃないかと思っていたぞ？」

「まさか。神器王は俺たちエグリゴリが必ず殺す。エグリゴリのリーダーとして部下に手柄を譲ろうと考えてただけさ。その結果は俺以が――いや俺とリアンシェルト以外が負けたわけだが・・・。弱かったから負けたんだ、恨みはしないよ」

今のルシルははやてくらいの身長だから、１８０㎝くらいのガーデンベルグとの対峙はまるで不良といじめられっ子。ルシルは１歩も引かず・・・っていうか、引いてほしいんだけど、「ユルソーンはどうした？　そんなちゃちな剣――神器で、俺に勝つと？　笑わせ

る」って挑発。

「俺たちの王は、民間人やあんたら局員に対しても無益な傷害は望んでないんだよ。それなのに傷付けた対象にランダムで呪いを掛けて、果てには殺す神器なんて使えるわけない。解っているだろ神器王」

「ああ、そうだな。嫌と言うほど理解しているよ・・・ガーデンベルグ！」

カッと目を見開いたルシルが左拳に魔力を付加して、そのまま右頬掛けてフック。ガーデンベルグも右拳に魔力を付加して、ルシルの左頬目掛けてフック。

「「おおおおおおおおおおおお！！！」」

２人の拳が同時に互いの頬に直撃。その衝撃は首から先が吹っ飛びそうなほど。だけど２人の足は１歩も後退することなく、そのまま容赦ない拳の応酬を始めた。神器でのやり合いに比べれば命の危険性は無いとは思うけど、何がきっかけでガーデンベルグを斃すか判らない。

「「ぐぁ！！」」

とうとうお互いを数ｍと殴り飛ばした２人。ルシルが追撃を行う前にわたしは「ダメ！」って呼び止めた。ガーデンベルグの方も、プリムス（仮）が「あなたが戦うんですの！？」って驚き、レオン（

仮）は「貴様の役割は戦闘ではないだろうに」って首を横に振って、ガーデンベルグの戦闘行動をやんわり非難。

「ルシルも！　なにか1つ間違って、ルシルが死ぬようなことになったら・・・！」

ルシルにはもちろん死んでほしくないし、"T・C・"との戦いでもルシルの戦力は必要だ。いろんな意味でルシルを喪うわけにはいかない。しかもはやてやトリシュの居ないこの場所でなんて・・・。

「だからお願い、もうやめて・・・！　わたし達には、わたしには・・・ルシルがまだ必要なの！　それに、リアンシェルトだってまだ救ってない！」

ルシルの左袖をギュッと握り締めて止めるわたしの元にルミナ達も集まって、わたしとルシルの前に立ってガーデンベルグ達と対峙。向こうはレオン（仮）がプリムス（仮）とガーデンベルグ達の前に躍り出て、構えを取った。

「・・・言っていなかったが、俺の死はガーデンベルグの救済とは直結していないんだ。俺が死ぬのは、アイツが持っている神器ユルソーンを破壊した時なんだよ」

「・・・それ、もっと早く言ってくれない？」

つまりガーデンベルグをこの場で斃しても、"ユルソーン"さえ破壊させなければルシルはまだ生き続けることが出来るわけだ。ガー

デンベルとリアンシェルトを斃した後でも、"ユルソーン"が無事なら・・・。ルシルとずっと過ごせるってわけになるんじゃない？って考えが一瞬ではじき出された。

――其は神域にて永く眠りし天災の王――

「向こうは貴様を狩る気のようだが、それは見過ごせん。プリムス陛下。ガーデンベルグを連れて先に戻ってくれ。ここは我ひとりで十分だ」

――我らの願いの元、王に盾突く者共を屠るがため、いざ天にて目覚め、地に向け高らかに謳え――

「それはそれで不安ですわね。レオン陛下は良い意味でも悪い意味でも真っ直ぐ過ぎますわ。それに、真技の発動で魔力も残り少ないでしょうに。わたくしが残りますわ。魔力はまだまだ十分ですし、何より勝つ必要のない戦闘は得意ですもの。レオン陛下こそガーデンベルグを連れて先にお戻りくださいませ」

――忠義なる炎熱。至純なる氷結――

「何でお前たちは俺を真っ先に帰らせようとする？　こうなったら意地だ。俺が残る！」

――不屈なる風嵐。正義なる雷霆――

「だから！　貴様は本来こうして前線に出る者ではないだろうに！」

――希望なる閃光。無情なる闇黒。苛烈なる土石――

「いいからとっととお帰りなさいな！　兵は将の言うことを聞くものですわ！」

――其の威光を示す七つの聖杖を突き、破滅の音を打ち鳴らせ――

何だか知らないけど口喧嘩を始めたガーデンベルグ達。この隙に攻撃しちゃおうかなって考えてると、「元よりお前ら全員逃がさない」ってルシルがポツリと言った。

「確実に、ここで仕留める！！『全騎、即時離脱！』」

――一方通行（サンダルフォン）の聖域――

――サビオ――

ルシルからの思念通話でわたし達は何を考えるより早くその場から離れる中、高速移動系の魔法を持ってないセラティナはミヤビに抱きかかえ上げられながら結界を発動、ガーデンベルグ達を閉じ込めた。わたし達が行動に移ってからのガーデンベルグ達の反応も早かった。ガーデンベルグがプリムス（仮）を抱え上げて、レオン（仮）が2人を護るように後ろから抱きしめて、全身を弱々しい魔力で覆った。

――万物神（コード・アルフォズル）の粛清――

７方の空から飛来するのは３０ｍ近い長さを誇る７属性の螺旋状の槍。ソレらは一直線に結界内に居るガーデンベルグ達の元へ突き進んで、ズンッ！と突き刺さった。７属性の魔力爆発が起き、さらに槍が竜巻と化して周囲に魔力弾やら砲撃やらをまき散らし始めた。

「・・・やっぱやり過ぎだと思うの、わたしだけ？」

わたしがポツリと漏らすと、「みんな同じ思いだって」ってルミナが肩を竦めた。セレスやクラリス、あのミヤビですらも頷いたんだから、ルシルのキレっぷりがヤバい。当のルシルはと言うと着弾点をジッと見詰めたまま。

「大丈夫なの？　その、ガーデンベルグを今ので間違って斃したとかない？」

「ない。あの程度で勝てるなら、俺はもうとっくにセインテストの悲願を果たし、この世には居ない」

「そ、そ・・・っか」

――尽滅の蹂躙軍（フェルサス・デ・オクパシオン）――

ぶわっと周囲に出現したのはわたし達やガーデンベルグ達の幻影。これは逃げられるって嘆息してると、『全騎、合図とともにしゃがめ』ってルシルからの指示。徹底抗戦する気だよこれ・・・。とりあえず従わないとわたし達も被害を受けそうだし『了解！』って返

事はしておく。

『今！』

ルシルは胸の前に掲げてた両手の平に発生させてた球状の竜巻を握りしめてに剣状にしたところで合図を出してきた。それに従ってわたし達が一斉にしゃがみ込むと、バッと左右に勢いよく開いた。

――凶鳥（コード・フレスヴェルグ）の殺翼――

フッと頭上を通過したのは、大気というか空間すらも歪ませるほどに強烈な風の刃。その数不明、数えきれない。ルシルの前方２００度に拡がる風の刃は無数の幻影を斬り飛ばし、７本の槍によって巻き起こった粉塵を斬り裂いて、倒れ伏してるレオン（仮）を庇うような位置取りなガーデンベルグに迫る。

「おらぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

――風雅・斬烈閃――

ガーデンベルグが片手剣を振るって連続で放ったのは風の刃。初撃は掻き消されて、２撃目も消されて、最後は剣を捨てて両手で風の刃を鷲掴んだ。

――勝神（コード・ガングラーズ）の投閃――

ルシルはさらに追撃のための大きな光槍を作り出して、「ユルソー

ンを出せ！」って声を荒げながら投擲。ガーデンベルグは風の刃を握りつぶし、迫る光槍を右脇に挟み込むようにして受け止め、軌道をレオン（仮）から外してから解き放った。

「ユルソーンを使えって？　冗談。それはつまり、お前らを殺すってことだぜ？　どんな呪いにかかって死ぬのが望みだ？　1年間苦しみ抜いて死ぬ呪い？　1年間ハッピーになるが死に際に全身から血を噴き出して死ぬ呪い？　いろいろあるが・・・、俺がユルソーンを抜く相手はお前じゃない」

ガーデンベルグの"いろいろあるけど"の先はよく聞き取れなかくて、ルシルが「なに？」って聞き返すけど、アイツはそれに答えずに「あぁ、時間切れだ」って肩を竦めた。

――創世結界フィエスタ・デ・デスペディダ――

その時、世界が一変する。岩石地帯だったのに足元が草原になっていく。これはフォード（仮）の「創世結界！」だ。問題はそれだけじゃなくて「ガーデンベルグ達が・・・！」居なくなった。結界内に入れられたのはわたし達だけなんだ。

「やられた・・・！　くそ、くそっ、くそぉぉぉぉぉ！！」

――害神（コード・ボルヴェルク）の投焔――

怒声を上げながら光の如き輝く炎槍を振るって、辺りの草木を一瞬で炭化させてく。そんなルシルの様子を離れたところで見守ってる

と結界が揺らぎ始めて、フッと音もなく完全解除された。ぐるりと周辺を見回してもガーデンベルグ達の姿はやっぱりない。

「ルシル副隊長・・・」

「ルシル」

「・・・大丈夫だ。予想外の再会だったから、自身のコントロールが乱れた。目的だったクリスタルスカルは無事に回収できたんだ、さぁ帰ろう」

ルシルの言うようにとりあえずは任務完了だ。そういうわけで、わたしたち特騎隊と遠くに避難してくれてた武装隊と一緒に本局へと帰還した。トランスポートホールで武装隊と別れ、ひとまず「お疲れ様。各騎オフィスにて待機」ってみんなに指示を出しておく。みんなは「お疲れ～」って労い合いながらオフィスへ向かうのを見届けて、隣に立つルシルとアイリを見る。

「ルシル、アイリ。クリスタルスカル、わたしが預かるよ。このまま保管庫に向かうし」

「あ、ああ。付き合うよ」

「ルシルが行くならアイリも行くぅ～♪」

「そう？　じゃあお願いしようかな」

ルシルとアイリの２人を連れて保管室へ向かう。まず監視室で手続きを済ませる。そして厳重なゲートを潜って長い廊下を進む。３０ｍの廊下の合間には、魔力の壁が５枚と展開されてる。そこを通過することで監視室では探られなかった隠し持った異物を発見できたり、変身魔法を見破ったり、保管室から無許可持ち出しを確認したり、不正局員や偽者を確認するためのものだ。もちろんわたし達にはやましいことはないから、堂々と５枚の壁を通過した。

「「お疲れ様です」」

保管室へ繋がるトランスポート。その前には２人の武装局員が立ってる。その２人にわたし達も「お疲れ様です」と労い、トランスポートに入る。一瞬で転送が済んだ。目の前に広がるのはありとあらゆるロストロギアが保管されている巨大なホール。無限書庫の未整理区画みたいに無重力になっていて、壁面から天井まで厳重な特殊金属のロッカーが設けられてる。

「俺が持っていくよ」

「え、でも・・・」

「君もアイリもタイトスカートだろ？　俺に下着が見られてもいいなら任せるが」

「あ・・・！」

「じゃあアイリ行くぅ～♪」

こういう時のアイリはホント強い。というか、女の子としての恥じらいが決定的に足らない。ルシルはそういう子は好みじゃないらしいし、そもそもアイリは娘みたいな扱いだ。ほら、ルシルが「却下。お前も留守番だ」ってアイリの頭を優しくポンポンした。

（あれいいな～、羨ましいな～）

正直アイリの立ち位置は羨ましい。いや恋人という関係には発展しないだろうけど、本当に親しい関係って感じだもん。アイリの「はーい」って残念そうだけど嬉しそうでもある返事を聞きながら、ルシルがクリスタルスカルをしまいに行くのを見守る。"T・C・"が狙う物品は特に重要度が高く、用意されたロッカーはわたしたち魔術師の魔力によって硬化・封印されていて、魔術師の神秘に反応して開錠できる仕様だ。

「待たせたな」

ルシルが戻ってきたことで保管室での用事も終わって、わたし達もオフィスに向かおうとしたその時、今ここに居ないはずの後ろ姿が視界の端に入った。ルシルが「すまん、ちょっと行ってくる！」って、その後ろ姿を追い駆けた。

「「ルシル！」」

わたしとアイリもルシルを追って、ルシルと向かい合ってる「すずか！」の名前を呼んだ。わたし達に気付いたすずかは「あ、シャル

ちゃん、アイリも！　ちょっとぶり～！」って手を振ってくれたから、わたしは「あ、うん、ちょっとぶり」って手を振り返した。

「六課はミッドに本部を置いてるんでしょ？　どうして本局に・・・？」

「えっと、六課の守秘義務もあるから詳しくは話せないけど、私はこの子たちの最終メンテをするために少し・・・」

そう言ってすずかは展開したモニターにある映像を表示させた。映ってるのは狼形態時のザフィーラほどの大きさの金属で出来た白銀色の狼、その数１２体。一般家庭用に普及させた動物型インテリジェントデバイスとは一線を画す格好良さ。無骨だけど洗練とされたデザインで、小さな子どもに人気が出そう。

「戦闘用か？」

「うん。対フッケバイン用・・・というか、対魔力無効化戦力用の特殊デバイスだね。これはスカラボのことだから話せるんだけどね。なのはちゃん達みんなの兵装は完成してるし、今日のフッケバイン一家との戦闘でも十分活躍できたんだけど、どうしても戦力が足りなくて。そこで以前から開発してた、自立型戦闘用デバイスを魔力駆動じゃないモデルに改修したんだ。なのはちゃん達の兵装でも換装できるようにしていて――」

狼型デバイスの名前らしい型式がモニター端に表示されてて、早口でいろいろと話し始めた興奮気味なすずかの言葉を若干スルーしな

がら「ＳＬ－ＦＢ：Ｔｙｐｅ－Ｗ・・・？」ってポツリと口にすると、すずかは「あ、うんっ。スカリエッティラボ・ファイティングビースト、タイプウルフっていうのが正式名だね」って教えてくれた。

「タイプウルフって、他にもバリエーションみたいなの在るの？」

「そうだよアイリ。陸戦用のタイプウルフ、空戦用のタイプイーグルの２種だね。海戦用のタイプシャークとか考えたけど、あんまり実用性が無いような気がして断念。ウルフの兵装は尻尾はマニピュレーターで、各種兵装と接続することで換装できるんだ。ストライクカノンとかグラディエーターとか、さらにチェーンソーブレード・エクスキューター、高周波ブレード・グリムリーパー、パイルバンカー・スコーピオンといったもの。遠距離攻撃用には背面のレールガン１門！　タイプイーグルの兵装は――」

目を輝かせて説明を始めるすずかにルシルが「ちょっ、ちょっと待ってくれ、すずか！」って止めに入った。ピタッと話を止めたすずかはカッと顔を赤くして、「ごめんね！　つい夢中になっちゃって！」って平謝り。

「いやいいんだ。すずか、本当に暇な時でいい。エヴェストルムの修理を頼めるか？」

「え？　う、うん、もちろんだけど・・・。ちょっと時間を貰うかも」

「構わないよ。おそらくＴ・Ｃ・との戦闘ではエヴェストルムはもう使わない」

「そうなの？　なら何を・・・あ、まさか、グングニル？」

「ご明察。敵の幹部級は神器でないと傷付けられないからな。相応の武器が要る」

ルシルからそう聞いたすずかがわたしの方を見て「大丈夫？」って聞いてきた。これまでは魔術でなんとかなってきたけど、神器が必要になるようなことはなかった。神器でようやく戦える相手が出てきた。それは神器無し状態のルシルの強さを知ってるなら誰もが抱く危機感だ。

「なんとかして勝つよ。でないと、何のための特務零課か判らないもの」

「・・・うん。じゃあ預かっておくよ。・・・あ、これは伝えておかないと。ルシル君。トーマの救出、無事に成功したよ。六課預かりの嘱託待遇になるみたい」

「そうか！　それは良かった！　今日の任務で気の滅入る事があったからな。嬉しい知らせだよ。・・・じゃあ、すずか。よろしく頼むよ」

「うん、任せて！　しっかり直しておくから！」

「それじゃ、わたしも行くよ。またね、すずか」

「うん。またね、シャルちゃん」

「バイバーイ」

「バイバイ、アイリ」

すずかと手を振り合ってから別れて、トーマが無事に戻ってきて良かったねって話をしながらわたし達はオフィスへ向かった。

Ｓａｇａ１６束の間のひと時～　ｉｘｅｄ　ｆｅｅｌｉｎｇｓ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

空間キーボードのキーを打つこと早４時間。本日の終業時間をオーバーしての書類作成。最後のキーを打って、「くぁー！」と椅子の背もたれに体重を掛けながら背伸びをする。そんな俺に「お疲れ様～♪」と声を掛けてくれたのはシャルとアイリだ。オフィスに残っているのは俺とシャルとアイリのみ。

「ああ、ありがと。シャルとアイリもお疲れ様。別に俺が終わるのを待っていなくても良かったのに」

「アイリはどっちみちマイスターと同じ部屋に帰るし」

「わたしは部隊長として部下をしっかり帰宅するのを見届けるのも仕事だもん。・・・って、嘘。ルシルと長く一緒に居たいから♡

そう言って少し頬を赤らめて笑顔を浮かべるシャルを見て、アイリが「むぅ。いい笑顔だね・・・」と悔しそうに呻く。ガーデンベルグとの邂逅以降、シャルはそれまで以上に俺と一緒に居ようとするようになった。ガーデンベルグという俺の消滅の要因となる存在と邂逅したことで、いよいよ実感し始めたのだろう。

（シャルから連絡を貰ったはやてトリシュも、よく顔を出しに来るようになったしな～）

――こんにちはルシルさん！　なかなかミッドに降りてきてくれないので遊びに来ました！――

ミッド北部にあるベルカ自治領ザンクト・オルフェンの聖王教会騎士団に所属しているトリシュも、休みの日になると本局にやって来ては俺たち特騎隊と昼食を一緒にするようになった。

――あ、ルシル君。毎日お疲れ様や♪　お弁当作ってきたから、一緒に食べよ♪――

この半年の間ではやてたち特務六課はフッケバイン事件を解決したし、エクリプスウィルスの完全治療もシャマルたち医療班が成し遂げ、フッケバイン一家は殺人衝動から解放された。今は一家揃って仲良く軌道拘置所にぶち込まれている。

トーマはというと、今はリリィと共にナカジマ家に正式に引き取られ、学校へ通うための手続きを行っているそうだ。

「はは、嬉しいことを言ってくれる。しっかし、局の最大戦力と言われている俺たちが日々書類仕事とはな。肩こりや腰痛はまだしも、無事な右目の眼精疲労がとんでもない」

レーゼフェアによって奪われた左目の視力は今なお戻らず。日常生活では不便していないし、戦闘行為中もアイリがユニゾンしてくれている間はあの子の視界を借りることで間に合っている。ただ、細かい文字を見続けるデスクワークにはかなりキツい。いったいどうすれば元に戻せるのだか。

「ここ最近はずっとデスクワークだからやっぱり辛いよね。辛かったらアイリとのユニゾンも許可するよ？」

「アイリは大歓迎！」

目を輝かせているアイリには悪いが「やめておくよ。アイリにも仕事があるしな」とやんわり断る。俺のオマケなんかじゃなく、あの子も立派な管理局員。俺の都合でその仕事を邪魔するわけにはいかないだろう。残念そうに「ちぇー」と口をすぼめるアイリに、「自分のことを疎かにしないように」と苦笑いしながらアイリの頭を撫でた。

「でもまぁ、戦闘続きじゃないのは助かるけど、全くないのも考え物よね」

「だな。・・・最後に戦闘行動を行ったのは、第１０１無人世界リーグだったか」

「しかもＴ・Ｃ・じゃなくて、現場の防衛機構ね。Ｔ・Ｃ・と戦ったのって、半年前の第１無人世界ファーストで最後だよ」

「・・・もう半年か。グングニルどころか、すずかに修理してもらったエヴェストルムも埃を被りそうだ」

ガーデンベルグとの再会を果たしてから半年、正確には８ヵ月と少し。あれ以来、"Ｔ・Ｃ・"とは一切遭遇していない。ファースト

以降の数ある無人世界にも回収任務で訪れたが、回収目標が安置されていた遺跡や廃施設の生きていた防衛機構と戯れただけだ。

「ルミナ達も、体がなまるのが嫌だからって毎日トレーニングルームで模擬戦してるしね～」

「君も後で参加するんだろ？」

「うん。ちょこっと体重が増えてきてさ。やっぱ動かないとダメだね～。ルシルは？」

「俺は遠慮しておくよ。太ってないからな♪」

「わ、わたしだって太ってないよ！　体重が増えただけでお腹周りのお肉は増えてないし、スタイルだって変わってないし！」

「誰も君が太ったなんて言ってないだろ」

ジャケットを脱いでブラウスまで捲し上げ、引き締まった白い肌の腹を見せつけてきたシャルは、「触ってみてよ！」と言ってきた。だから俺は「見れば判るからしまえ」とブラウスを下ろそうとするんだが、「や！　ちゃんと確かめて！」と俺の右手を掴んできて、自分の腹に当てさせた。

「ほ、ほら！　太ってないでしょ！？」

「あ、ああ、普通に柔らかいが、このくらいの肉がないと逆に不健

康だからな。うん、太っていないぞ」

ほんのりプニプニしているシャルの腹肉。摘まめる肉も無かったら病気を疑うが、シャルのプニさは健康体そのもの。俺がそう言うと「えっへん！　でっしょ～♪」と胸る張るシャルを見てアイリも「アイリも見て！」とブラウスのボタンをすでに最後の1個まで外していたから、「こらこらこら！」と制止。

「そうやってすぐに肌を晒そうとするのは本当にやめなさい。もう心配だぞ？　俺が居なくなってからもこんな感じじゃ、はやて達が慌てふためくぞ」

アイリがボタンを掛け直そうとしないから、代わりに下のボタンから掛け直していた俺が何気なしに口にした言葉に2人は「っ！！」ビクッと体を震わせた。そしてず～んという擬音を幻視してしまうほどにガックリと肩を落とした。

「思い出したくなかったのに・・・」

「むぅぅ～～～～。やーだー！　やっぱりやーだー！　ルシルと離れ離れになるなんて耐えられないぃ～～～！！　アイリも一緒に帰――逝くぅぅ～～～～～！！」

アイリは俺が死ぬのではなく、アースガルドへ帰るということを知っているから言い間違えそうになっていたが、すぐに死ぬと訂正。感情を爆発させたように見えても割と冷静だな、アイリ。さて、どうやって2人を宥めるかを考えようとした時・・・

「どないしたん！？　アイリの泣き声が廊下まで聞こえてたで！？・・・って、ルシル君？　何してるん？」

「は、はやて・・・！？」

オフィスの入り口には目の笑っていない笑顔を浮かべているはやて。彼女の後ろにはアインスとリインも居て、アインスは呆れたような表情。リインは顔を真っ赤にしていて、恥ずかしがっているのか、もしくは怒っているのか、どちらにせよあまりいい顔じゃない。いやまぁ仕方ないよな。はやて達から見れば、泣いているアイリのブラウスを無理やり脱がせているような形（実際はボタンを掛け直しているだけなのに・・・）だし、それで泣かせているようだし。シャルはシャルでいつまでもブラウスを捲し上げているし。まるで俺が命じて捲し上げさせているみたいじゃないか。

「ルシル君はエッチです」

「待ってくれリイン！　誤解だ！」

「ルシルよ。同意であればそういうプレイもいいだろうが、無理矢理は許せんな」

「アインスも！　違うんだ！」

「ルシル君」

はやてからの圧に思わず「はい」と敬語になってしまう。はやては笑顔を浮かべたまま、自分の胸、腹、尻と順に触った後、顔を赤くして「二の腕なら触ってええよ！」なんて言ってきたから、俺はガックリ肩を落として「勘弁してくれ」と嘆いた。

「そうか～。シャルちゃんとアイリが沈んでた理由は・・・」

「ルシルとの別れが現実味を帯びてきたことを改めて理解したことでの落ち込みか」

「リインにも理解できますよ。ルシル君が居なくなっちゃうの、悲しいです・・・」

なんとか誤解を解いたんだが（はやては、初めから解ってたよ？♪と言っていたが・・・）、シャルとアイリがヘコんでいた理由を知り、リインは今にも泣きそうな感じだし、はやてもシャル達みたく影を落とした。アインスは特段様子は変わらない。まぁ俺の正体、死ではなく帰還だということを知っているからな。

「ルシル君。本当にもうすぐ居なくなっちゃうのですか？」

「もうすぐ・・・とはいかないよ。ガーデンベルグとは半年以上前に1回遭遇しただけだし、リアンシェルトもまだ救えていない。ガーデンベルグを救い、神器ユルソーンを破壊せずに回収さえすればリアンシェルトを最後に回してもいいが・・・」

ガーデンベルグの居場所を知るために先にリアンシェルトを救うと

いう話だったが、どういうわけかガーデンベルグの方から姿を見せた。いやまぁ嬉しい話なんだが。リアンシェルトが言うには、ガーデンベルグより今現在の自分の方が強いらしいし、先にガーデンベルグを救ってからリアンシェルトを救い、そして最後に"ユルソーン"を破壊・・・。これが大まかな流れになるか。

（界律（テスタメント）の守護神から解放され、アースガルドへ帰還し、シエルとシェフィリスとカノンの魂を解放する・・・か）

リアンシェルトは今もなおベルカで俺が来るのを待っている。あの子の居場所が判明しているなら、コンタクトしてきたガーデンベルグから先に救う方が早道だろう。

「シャルちゃんやトリシュとも話してたんやけど、ユルソーンを破壊させずに私たちが管理すればルシル君の死は回避できるってゆうのはどうなん？」

「すごい事を考えるな君ら」

ここに居る分身としての俺がオリジナルだった場合はそれで良いかもしれないが、問題があるのは"神意の玉座"に在る俺のオリジナルだ。そちらが先に潰れれば、おそらく俺も消滅する。だから「無理だ。ユルソーンを破壊しなくても、どのみち俺は３０歳を迎えるまでには死ぬ」と断言した。

「「「っ！！」」」

俺の真実を知らないはやてとシャルとリインが辛そうに目を伏せた。そんな彼女たちに「花瓶を俺とすると・・・」と例えを交えて、今の俺の状態を伝える。今の俺はいつ割れてもおかしくない程にひび割れた花瓶で、注がれた水は魔力であると。常時ヒビから水が漏れ続けていて、底を尽いたらそれが死ぬときだと。今はリアンシェルトのおかげで水漏れが酷かったヒビは塞がっているが、ひび割れが完全に直ったわけじゃなく少しずつ元に戻っていると。それはもう二度と修復されないものだと。

「ユルソーンは花瓶を綺麗さっぱり砕くハンマーのようなものだな。いつまでもボロボロな姿を無様に晒す壊れかけの花瓶の幕を降ろすための・・・。こちらからハンマーを使って早々に壊すか、壊れるまでずっと見届けるか、そのどちらかしかなく、壊れること――死ぬことは確定している。すまないな」

「ううん。・・・30歳まで、か・・・」

「もう5年もあらへんのやね・・・」

「5年なんてあっという間ですよ」

「そうだな。だからさ、こんな俺だけど、その最期の時まで仲良くしてあげてくれ」

俺がそう言って頭を下げると、はやては「当たり前や」と右人差し指で涙を拭う仕草をし、シャルは「あったりまえでしょ！」と両手を腰に当てて胸を張り、リインは「ずっと、ずぅーっと仲良しです

よ」と泣き笑い。

「ありがとうな」

はやて達が落ち着くのを待ってから、「ところで、零課のオフィスへ何しに？」と聞くと、アインスは「お前とアイリを迎えに来たのだ」と答えてくれた。聞けば今日は月に一度あるかどうかの八神家が勢ぞろい出来る日で、それなら俺とアイリも呼ぼうとなったらしい。

（本局勤めの昼休みは共通だから時間を合わせやすいが、夕食となると途端に合わなくなるからな）

「そうゆうわけで誘いに来たんやけど、ルシル君とアイリのこれからの予定は？　ひょっとしてまだ何かあったりするんか？」

「いやもう終わっているよ。これから帰ろうとしていたところだ」

「うん」

「そっかぁ、それは良かった。・・・あ、シャルちゃんはどないや？」

「あ、ごめん。これからルミナ達とトレーニングなんだ。それに、八神家の集いにお邪魔するのも悪いし・・・」

シャルがはやての側まで近寄り、「零課（わたし）が独り占めしてるからね。はやてにもルシルとの時間を過ごしてもらわないと公平じゃないよ」

と、俺に聞こえないようにするためなのかどうかは判らないがそう耳打ちしたのが薄っすら聞こえた。するとはやてもシャルの耳に顔を近付けて「おおきにな♪」と礼を言った。

「それじゃわたしはお先に失礼♪　お疲れでした～♪」

ウィンクしながら敬礼してオフィスから去っていくシャルに「お疲れさまでした」と俺たちも敬礼して、その後姿が見えなくなるまで見送った。

「私らも行こか」

そうして俺たちもレストラン街へ向かう。その道中にはやてが「なぁ、ルシル君」と呼んできたため、隣を歩く彼女を軽く見ながら「ん？」と応えた。

「ルシル君たちセインテストシリーズは、先代が死ぬと新しい個体が製造されるって言うてたやんか」

「ああ」

「その、ルシル君が・・・万が一にも負けて亡くなった後、新しいセインテストの子が生まれるんよね？　私らはその新しい子のこと、どうすればええんかな？　も、もちろんルシル君がそんな事になるなんて思うてへんよ！　それは信じてる！」

「そんなに焦らなくてもいいって。解っているよ。職業柄常に最悪

の事態は想定しておくものだ」

「うん、おおきに。でな、保護した方がええんやろかって話なんよ。ルシル君の記憶も持ってるんよね？　戸籍や財産などはマリアってゆう協力者が用意してくれるようやけど、住む場所とかはどうすればええんかな？　ルシル君だって臨海公園で野宿してたし、その子も孤独に野宿なんてことにはしたないんよ」

はやてと出会ったあの日が、俺の起動日だという話をしたのを思い出した。あながち嘘ではないからぼろを出す心配もない。何せベルカ時代からずっと眠っていた俺が目覚めたのがあの日だったからな。体が子ども化していたことにも驚いたが、いきなり何百年も経過していたことにも驚いたものだ。

「そうだったな。随分と昔の話なのに、今でも鮮明に思い出せるよ」

「ふふ、私もや♪」

「で、質問の答えだが、向こうから助けを求められたらでいいんじゃないか？　俺の記憶もあるし、金も用意してもらっているからホテル住まいでもするだろう。今の俺が負けるとなれば、相手はおそらくリアンシェルトだ。ガーデンベルグは今回のＴ・Ｃ・事件で確実に救うからな。リアンシェルトはベルカに居る。だからはやて達がわざわざ手を貸すことはないと思うぞ」

「うーん、そうなんか？　でも起動直後って、９歳くらいの子どもの姿なんやろ？　いくらセインテストのファミリーネームでも通報

されかねへんよ？　てゆうか、起動時の背格好や年齢設定は共通なん？」

「オーディンの時は大人の姿だったな。世代を経るごとに低年齢化が進み、俺の時は９歳。次代はひょっとすると５歳？　最悪赤ん坊かもしれないな」

もう平然と嘘を重ねる俺の言葉に、「赤ん坊・・・。ルシル君が赤ちゃんに・・・」と、はやてがうんうん唸りながら何かを考え始めたからアインスが「主・・・？」と声を掛けた。

「ええな。ルシル君の記憶を持った赤ちゃんをお世話するの、なんかそそられるな」

そう言ってニヤっと笑うはやてに俺はゾッとした。そんな未来は１００％来ないが、もしそれが実現したとすると、赤ん坊の所為でお世話・子育てという名目でいろいろとされてしまうことになる。食事も風呂もそうだが、トイレが最大の恥辱だ。はやて達にオムツを変えられるなど自殺ものだ。

「と、とりあえず俺とは別人だからと言ってあんまり無茶はしないでくれよ？　あと、ショタコンを拗らせないようにな？」

「ショタ・・・！？　も、もう！　そんなん拗らせへんよ！・・・・たぶん」

「たぶんて・・・。ま、そんなことにならないよう、俺の代でセイ

ンテストの使命を終えるつもりだ。心配してくれてありがとう、はやて」

「・・・うん」

頭を撫でようかと思ったがはやてももういい歳をした大人の女性、それは失礼になるんじゃないかとふと思ってやめた。後ろからそんな俺の手の動きを見ていたリインが「あれ？　ルシル君、はやてちゃんを撫でないですか？」と聞いてきた。

「え、あ、いや・・・」

「ルシル君、私のこと撫でようとしてくれてたん？」

「そうしようとは思ったんだが、はやても２５と大人の女性だ。幼少の頃ならまだしも・・・」

「私はいつになっても撫でてほしいなぁ。好きな人に触れられるのは幸せや♪　とゆうわけで、ほらほら、撫でて～♪」

頭を俺に向けて差し出してきたはやて。彼女にそこまで言われたら断れないだろ。そっと彼女の頭に左手を置き、その柔らかな髪を乱さないようにゆっくりと撫で始めると、「うん。大人とか子どもとか関係あらへん」と小さく笑い声をはやてはあげた。

「気持ちええよ、ルシル君」

「そうか。それは良かったが、続きはあとにしよう。他の局員の目がある」

俺たちが歩いていたのは他の局員も利用する廊下。微笑ましそうに俺たちを眺めながら通り過ぎていく彼らの視線に、居心地がちょっと悪くなってきた。はやては「あとでもしてくれるん？　それは嬉しいお誘いやな♪」と満面の笑みを浮かべて頭を上げた。

「はやてばっかりずるい。アイリも撫でてほしい！」

「リインもです！　ルシル君、リインも久しぶりに撫でてください！」

「わ、判った。判ったからあとでな」

シグナム達が待っているというレストランへ向かう中、俺は前を歩くアイリとリインの頭を撫でていた。ちなみにリインの発案で、これなら移動中でも撫でられるですよ、とのことで、歩きながら頭を撫で続けることに。まぁそれはいいんだが、時折ふたりが「ふぁ」とか「はふぅ」とか、妙に色っぽい声を漏らす。

（俺、事情を知らない人からセクハラとかで通報されないかな・・・？）

リインはまだ子どもだが、アイリは俺やはやてより身長が高く、はやてよりスタイルが良い。あの子に変な声を出させているのだから、通報されるのも仕方ないかもしれない。そんなわけで「はい、おしまい」と早々に切り上げる。

「「ええー」」

「不満は受け付けんぞ。これ以上続けたら俺はきっと捕まる」

「はーい！」「はーいです～！」

アイリとリインが笑い合い、リインが「アインス、行きますよ！」とアインスの手を取って引っ張った。アインスは「なに？　あ、こら、リイン！」と困惑したが、少し無言が続いた後、「主はやて。お先に行っていますので、ルシルとゆっくりと」とはやてに小さく頭を下げた。

「別に気を遣わへんでもええのに」

「はやてちゃんとルシル君、なかなか2人きりになれてなかったですから。ルシル君。はやてちゃんをお願いです！」

リインからの真剣なお願いに「ああ。判ったよ」と頷き返して、はやての右手を握った。それでリインは満足そうに笑みを浮かべ、アイリとアインスを連れて駆け出した。それを見送った俺とはやては顔を見合わせ、「家族に恵まれたな」と笑い合った。

「じゃあルシル君。エスコートよろしくな♪」

「お任せを」

はやてに店の名前を聞き、キュッと俺の手を握り返してくれたはやてと一緒に歩き出した。会話はないけど、その時間が心地よかった。だから少し迷ったが、「なぁ、はやて」と俺は話を切り出した。

「ん？」

「はやてだけじゃなく、シャルやトリシュもそうだが、俺が居なくなった後は新しい恋を――」

「せえへんよ？　私はもちろん、シャルちゃんもトリシュも、きっと・・・。ルシル君以外と恋をするなんてもう考えられへん。もし結ばれへんくても、もう私に家族がおる。そこに今更別の人を入れるつもりはあらへん。・・・って、前にも似たような話したで？はっ。ルシル君、もしかしてボケ――」

「てない。俺もさ、ガーデンベルグと会って思い知ったんだと思う。はやて達との別れが本当に近付いているのを。だからその時が来るまでに身辺整理というか、再確認というか・・・」

「そっか～。・・・私らの想いはずっと、ルシル君だけのものや。そやから新しい恋人なんて作らへんよ～♪　ふふふ～♪　私らが恋人を作るかどうか不安になってるルシル君。ええ感じに惹かれてくれてるな～」

はやてが俺の頬を人差し指でツンツンと突いてきたから、「不安になんてなってないが？」と甘んじて指を受け入れながらそう返したら、「うっそや～。不安そうな顔してたよ。正直になったらどうや

～？」と今度はわき腹を肘で小突いてきた。

「してない」

「してた～」

「してない」

「してた～」

「「・・・」」

俺が居なくなった後、はやて達の隣に俺の知らない男の姿。本当はそんなこと考えても仕方ないし、何より祝福すべきことなのに受け入れたくなかった。本当に俺はこの世界が、この生活が恋しいんだな。やっぱり別れたくないな・・・。

「ルシル君・・・？」

「してました。・・・したよ。不安になったよ」

「っ！　それは、嬉しい話やな♪」

ギュッと俺の腕に抱き着いてきたはやてに俺は「ありがとう」と礼を言った。きっと俺はリアンシェルトとの再戦ですべてを出し切り、はやて達のことを忘れてしまうだろう。それが申し訳ないのに、俺のことを覚えてくれている人が、想ってくれている人がいる。それ

が俺の心の支えになっていることを改めて実感できた。勝手な話だがな、それが嬉しいんだ。

（だからどうか、はやて達みんなに幸せが１つでも多く訪れますように）

Ｓａｇａ１７－Ａ侵撃のＴ・Ｃ・～１ｓｔ　Ｗａｖｅ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

"Ｔ・Ｃ・"が姿を見せず、魔力保有物や動物に手を出さなくなって１０ヵ月が過ぎようとしていた。ただ、最初期の頃にはやっていたけどいつからかやらなくなっていた犯罪者狩りを再開。魔導犯罪者ばかりを狙うから、かつての八神家パラディース・ヴェヒターや最後の大隊の再来だって言われて始めた。そんなわけでいつ以来かの魔導犯罪激減期間に突入中だ。

「みんな、おはよう。今日も１日よろしく」

いつもと変わらない挨拶や朝礼を開始して、「では副隊長。業務連絡を」ってルシルに仕事を任せる。これもいつも通りで、ルシルは「了解です」って椅子から立ち上がって、スタッフ全員を見回してから口を開く。

「我われ特務零課は、犯罪組織Ｔ・Ｃ・の逮捕を最優先として脅威対策室より命じられている。しかし、現在Ｔ・Ｃ・は魔導犯罪者を相手にリンカーコアの強奪という、こちらが後手に回ざるを得ない手段をとっている。そのことからデスクワークのみの仕事となり、それが少々上で問題になっているようでな。しばらくは以前と同じように暴動・戦争の鎮圧任務になる。魔導犯罪は鳴りを潜めているが、質量兵器問題は別だからな」

「お。やっと体を動かせる仕事が始まるんだね」
「助かる。毎日トレーニングや模擬戦だと飽きがくるし」
「だよね」
「先輩方、不謹慎ですよ」
「ミヤビ。本音を言えば？」
「・・・私も実はそう思っていました、すみません」
「素直でよろしい」
ルミナ達が戦闘任務の再開について喜び合った。うん、その気持ち解るよ。ホントずっとトレーニング場とオフィスと寮を往復する毎日だったからね。わたしとしてもガッツリ動ける任務は大歓迎なのだ。
「続けるぞ。第6管理世界ストラスブール地上本部より脅威対策室に救援要請があった。通常の魔導師では駆除できない生物が首都で発生しているそうだ」
「なにそれ。まるで魔術師みたいじゃない」
「まぁそんな感じだ。で、ストラスブール地上本部から送られてきたデータがこれだ」

ルシルが各デスクの上に展開させたモニターに表示されたものを見て「猫・・・？」ってみんなの口から洩れた。まさしく猫。大きさは普通の成猫サイズで、色は全身黒。ただ額と体の両側に目のような白い模様が５つ。あと目が金色の複眼。数は全部で６匹だね。

「次元世界動物百科事典にも載っていない生物で、人為的に遺伝子操作によって生み出されたものと推測されている」

「気を付けることは？」

「舌で舐められたら魔力を根こそぎ奪われるそうだ。しかも純粋魔力攻撃にも適応され、食われるらしい」

モニターの映像が切り替わってストラスブール首都防衛隊の戦闘が流れる。練度は悪くないけど、猫ちゃん達に面白いほど玩具にされちゃってる。小さいしすばしっこいし、魔法は食べるし舐められると魔力を全部持っていかれる。

「なら直接攻撃・・・が、ダメなのか」

「ああ。中遠距離でダメだから近接戦に移行した途端に群がれて、一瞬で魔力を奪われた。命までは奪われないようだが、数週間の間は魔力運用が出来なくなるという」

「ルシルから見てどう？　魔術師にも通用するようなやつ？」

「何とも言えないな。ただ、魔術師とはいえ魔力吸収系には弱い。この猫たちがどういう原理で魔力を吸収しているか判らないが・・・。うーん、どっかで見たような気がするんだよな」

ルシルが腕を組んでそう唸るものだから、「セインテストの記憶？」ってことになる。でもルシルは「いや～、思い出せん。気の所為かもしれないし、あまり重く考えないでくれていい」って苦笑い。ルシルの勘違いならいいんだけど、実際に歴代セインテストの記憶の中にあるのなら最大警戒だ。どの時代かによって危険性が跳ね上がる。もしオリジナルの時代、魔術の時代だったらとんでもないことになる。

「まぁとにかくだ。これより俺たち零課は、第6管理世界ストラスブールへと出撃する。任務内容、正体不明の猫6匹の捕獲」

「捕獲？　殺すんじゃないの？」

「やめてセレス。猫ちゃん殺さないで」

「セレス。そんなことしたら許さない」

「あくまで魔力を奪うだけで、危険性は低いという話だ。それに人為的に生み出された生命ではなかった場合は新種の発見ということで、いろいろと調べたいそうだ」

セラティナやクラリスの気持ちも解るな～。猫の見た目の動物は殺したくない。ルシルも以前言ってたけど、猫ってこの世界で至高の

動物じゃない？　犬派か猫派で言えば、わたしは猫派だし。

「隊長」

「あ、うん、はい！　では、特務零課、シャーリーンへ搭乗準備！
準備が完了次第、第６管理世界ストラスブールへ向けて出撃する！」

というわけで、本局からストラスブールは次元航行船で約２日間の旅。わたし達が到着するまでにストラスブールの首都防衛隊が仕留めればそれでよし。ま、ルミナ達から不満は出るだろうけど、デスクワークから解放されただけでも十分だよね。

「・・・２日間でも長かったな～・・・」

部隊長室の椅子に座りながらモニターに映るカレンダーを眺めながらボソッと呟いた。本局を発ってから２日が経過。本部からは何も言ってこないのを考えるに事態はどっちにも転んでいないみたいね。コーヒーを一口飲んで、「こういう時のデバイス部隊はどうしたんだろ？」って独り言つ。

すずかの第零技術部が開発した自立動物型戦闘デバイスは、家庭用の自立動物型と同じように量産に入っていて、少しずつだけで各地上本部にも配備され始めてる。ただ、一部からは人が機械に仕事を取られるって不満などが出てるみたい。万年人手不足なのに何を言ってるんだか。

「そっちの情報も寄こしてくれたらいいのに・・・っと、通信か」

室内に響きコール音。この回線は本局からのものを受信するためのものだから、「はい。シャーリーン艦長フライハイトです」と受けた。モニターに映ったのはヴェロッサ・アコース監察官。

『フライハイト零課長。突然で申し訳ないが、針路の変更を指示する』

まさかの指示にわたしは「針路変更・・・ですか？」って聞き返した。ロッサは1回頷いて、『ストラスブールから第5管理世界ファストラウムに移動しているのを確認した』って言ってきた。

「移動？　ということはストラスブールの固有種の新種じゃなくて、やっぱり人為的な生物ということ？」

『それについては不明としか言いようがない。ストラスブールで猛威を振るっていた正体不明が突然パタリと姿を見せなくなった。それがストラスブール時間での深夜。で、ファストラウム時間での早朝、今より3時間前だ。ファストラウムはすぐに本局に連絡を入れてくれたよ。おかげで、こうしてすぐに零課に指示を出すことが出来た』

「ストラスブールとファストラウムの距離は近いので問題ありません。すぐに針路を変更します」

ブリッジに通信を入れようとしてると、『しかし嫌なタイミングだ』ってロッサが独り言ちる。わたしは「何がありました？」って聞きながら、ブリッジの操舵手に「針路変更。目標、第5管理世界ファ

ストラウム」って指示を出す。

『りょ、了解です。艦内のアナウンスはどうしますか？』

「わたしがする」

『了解しました。針路、第５管理世界ファストラウムに変更します』

通信を切ったところで、ロッサが『高町教導官率いる５班がファストラウムを離れた途端にこれだったんだ』って頭を抱えながらも教えてくれた。なるほど、確かになのは達エース級の魔導師が居たなら、わたし達の出番もなかったかもしれない。その時はルミナ達が不貞腐れるかもだけどさ。わたしとしては本局の景色に飽き飽きしていたから、こうして離れることが出来ただけでも嬉しい。

「普通ならそれは偶然、嫌なタイミングでしたね、と考えるでしょうけど・・・」

『こうも考えられる』

「『猫は教導隊が離れるのを待っていた・・・？』」

でも気になることがある。猫たちを操ってるだろう奴の狙いだ。この２日の間にロッサから貰い続けてた情報によると、猫たちは首都にだけ出現するようで、珍しい猫が居るっていう通報でまずは警邏隊が捕獲に乗り出し、それが無理だと判ると魔力保有局員が出張る。そこで魔力が吸収されると知り、陸士部隊や武装隊が出動。それで

もダメだって判って初めてエマージェンシー。そこからは本局に応援要請するか、あちらで自分で解決できるように頑張るか、そのどちらか。

「猫を操っているのがT・C・と仮定して、猫を使って局員の魔力を奪っているとする。だったらどうして、なのはのような高魔力保有者が居なくなるのを待ってから世界移動をしたかなんだけど・・・」

『猫が捕まってしまうのを危惧したのだろう。いくら魔力を吸収できたとしても練度の高い魔導師を相手にすれば撃破ないし捕獲されると考えたのでは？』

「むぅ・・・」

『納得は出来ないだろうけど、今は猫の捕獲を最優先に考えてくれ。考えにくいけど魔力吸収や世界移動が猫の生態であろうとなかろうと、これ以上の局員の無力化は避けたいからね』

「了解です。ではこれより特務零課は、ファストラウムへ針路を変更し、入界次第ターゲットの・・・捕獲のままでいいんですね？」

『ああ。どちらにしろ生態を調査しないことには対策が立てられないからね』

行き先は変更になったけどやる事は変わらない。ロッサとの通信を切り、艦内アナウンスで行き先がファストラウムに変わったことを

伝え、椅子の背もたれに体重を預けて「ふぅ」と一息ついた。このまま何事も起きなければ今日中にはファストラウムで猫ちゃん相手に奮闘しないといけない。到着までちょーっと休もう。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒ミヤビ†††

「そっちに行ったよ！」

「こんの・・・！　にゃあ！　逃げられた！」

「うそでしょ！？　特騎隊総出で猫１匹捕まえられないなんて！」

ファストラウムに到着して３日目。私たち特務零課――特騎隊はファストラウムに訪れた理由である、魔力を吸収する謎の猫の捕獲の任務をようやく開始しました。

なぜ２日も待機していたのかというと、動物保護団体からの抗議が原因です。人為的に生み出されたかもしれず、魔力を吸収するような動物でも生命であることには変わらず、寄って集って武力で捕まえようなど認められません、とのことでした。局も説得を続け、３日目でようやく出撃許可が下りたのでした。ただ、攻撃はしないようにと言われました。手で捕まえるか、たも網や投げ網で捕まえるか、結界で捕まえるか、バインドで捕まえるか、この４つだけでないといけないそうです。

「ミヤビ！」

「はい！」

出撃したのは良いのですが、私たちは明らかに猫とは全く違うその機動力に翻弄されていました。ジグザグに駆けて来た猫の筋肉の動きを注視して、その動きの先を読む。ルミナ先輩ですら捕まえられないほどの速さだけど、だからと言って無理だなんて考えていられないです。

「今！　ふぎゃ！？」

真正面から突っ込んできた猫を抱き止めようとしたら後頭部に衝撃が来て、前傾姿勢になったところで猫の体当たりを顔面に受けてしまいました。フカフカで気持ち良かったです。でも痛いことには変わらず、「いたた」と顔を摩ります。

「２匹目確認！」

「大丈夫かミヤビ？」

「は、はい。大丈夫ですルシル副隊長」

気遣ってくれたルシル副隊長にそう答え、私の後頭部を襲った２匹目の猫を視認します。２匹の猫は鼻を軽くくっ付けるという挨拶をしています。とても可愛らしい行動ですけどね。チラッと私たちを見と思えば「フッ」と鼻で笑ったように見えました。

「ねえ。今、あの猫たち笑わなかった？」

「私もそう思った」

「ものすごい馬鹿にされた気分。いや気の所為なんだろうけども」

ルミナ先輩、クラリス先輩、セレス先輩も同じように感じたみたいです。私たちの視線をいっぺんに受けても猫たちは動じることなく、それどころか立ち向かおうと体勢を低くしました。

「うぅ。まさか結界の魔力すらも吸収するなんて。今日の私、役立たず・・・」

「落ち込んでる暇はないよ、セラティナ！　ほら来るよ！」

「もうー！！」

セラティナ先輩の結界魔術ですらも猫たちは吸収し、先ほどまで私たちが使っていたたも網や投げ網は鋭い牙や爪でズタズタにされ、バインド魔法はその機動力に追いつけず、最終的に素手での捕獲という選択になっていました。

「分かれた！」

「逃げちゃうよ！」

２匹の猫は左右に分かれると、撤退するつもりなのか猛ダッシュで私たちから離れて行きます。シャル隊長が「二手に分かれて！」と指示を出しました。先輩たちは言葉を交わさずに目線だけでパパッ

とチームを分けました。シャル隊長とセレス先輩とセラティナ先輩、ルシル副隊長とアイリ先輩とクラリス先輩とルミナ先輩の2チームです。

「ミヤビはこっち！」

「了解です！」

私はシャル隊長のチームとなり、隊長たちと一緒に駆け出します。首都ということもあって喧噪なこの街で、猫1匹の捕獲は困難極まりない。時間からして人の出歩きが多くなる今、人込みの中に紛れ込まれるより早く捕まえないと。

――閃駆――

――神速獣歩（ゲパルド・ラファガ）――

――無常迅速――

――スピーディラン――

「セラティナ！」

「うんっ、付いて行ける！」

私、シャル隊長、セレス先輩と同じようにセラティナ先輩も、この数ヵ月で習得した高速移動魔法を使用しました。セラティナ先輩の

弱点は以前から足の遅さと先輩方に言われていましたから、戦闘任務が落ち着いていた期間で習得したのです。

「よし！　ファストラウム地上本部からは飛行許可が下りなかったから、このまま足で追い詰めるよ！」

飛行魔法は使用できないことでガードレールの上や建物の壁を走ったり、通行人の頭上をジャンプで飛び越えたりと、後でいろいろと怒られそうな手段で猫を追い駆け続けました。

「猫を捕まえるのがこんなに難しいなんて・・・」

「しかも人の出入りを制限した封鎖区画じゃなくて、ふっつうに人や車が行きかう街での捕り物だし！」

「こんな連続で高速移動魔法なんて使ったことないんだけど・・・！」

「あ、その時は私が背負いますので安心してください、セラティナ先輩！」

１歩で数ｍから十数ｍを移動する魔法の連続発動は慣れていないと辛いですし、セラティナ先輩にはちょっと早かったのかもしれませんね。それでもセラティナ先輩は「大丈夫！」と首を縦には降りませんでした。ここでさらに言っては失礼でしょうし、「判りました！」と引き下がる。それから追いかけっこが１０分ほど続いたところで、『こちらルシリオン』と通信が入りました。

『そちらの状況はどうか？』

「心が折れそう」

ルシル副隊長からの通信にシャル隊長がそう答えました。追いかけっこの最中、民間人からサインを求められたり、写真を一緒に撮ってほしいと言われたり、商店街ではコロッケなどを差し出されたり、いろいろありましたもんね。クラリス先輩なら遠慮なくいただいたでしょうが、生憎と任務中でしたので私たちは丁重にお断りをしました。

「命の危険はないんだし、魔力くらい吸収されてもいいんじゃない？って思えてきた」

『冗談だろうが、セレス、それはダメだぞ？』

「判ってるって」

「そっちはどうなの？」

『あー、うん、まぁ、捕まえたぞ』

セラティナ先輩の問いにルシル副隊長がそう答えたので、私たちは「えええ！？」と驚きの声を上げました。

「どうやって！？　ねえ、どうやって！？　教えてプリーズ！　至急ご教授を！　もうやなの！　走って避けて探して逃げられて！

こんなのがまだ４匹も居るなんて信じられない、信じたくない！」

シャル隊長は２回ほど猫タックルを顔面に受けて、１回は男性の胸に突っ込み、２回目は排水溝に落下未遂。次は車の前か女性のスカートの中かゴミ捨て場か、とシャル隊長は不安に駆られていました。そこにルシル副隊長からの朗報です。縋ってしまっても仕方ないかと。

『いや、その・・・野良の仔猫がカラスに襲われていてさ。猫がカラスを追い払った後、仔猫と鼻ちょん挨拶をしていたところで眠りの霧、ラフェルニオンで奇襲したらすんなり片が付いた』

「状態異常系か。でもラフェルニオンって魔力を含んだ霧でしょ？」

『さすがに霧の一部を舐めただけじゃすべての魔力を吸収できるわけじゃないようだ』

「じゃあさ、こっちもお願い！　これ以上はわたし、泣いちゃう！」

『すまん。３匹目を確認したから、今追っている最中だ。そうだな、そっちにはセレスが居るだろ。民間人や車などに迷惑を掛けないように地面を凍らせたらいいんじゃないか？　っと、こちらもまぁまぁ苦戦している。互いに健闘を』

ルシル副隊長からの通信が切れたところでセレス先輩が「地面氷結は確かに攻撃じゃないから、団体にも訴えられないか」と何度も頷きました。シャル隊長も「それでいこう！　そうしよう！　肯定、

確定、大決定！」とさらに激しく何度も首を縦に振りました。

「では場所ですね。マップを思い出します」

任務前に頭に叩き込んだ首都のマップを脳内に思い浮かべる。今私たちが走っているのは９ｔｈアベニュー、方角は北。このアベニューには横道は無く、建物間に小さな小道はありますがどれも先は行き止まり。アベニューの最北は四つ又の交差点から伸びるストリートになっていて、左から２番目のストリートの先に公園があったはず。そのことを皆さんに伝えます。

「ナイス、ミヤビ！　セレスは先行して待ち構えて！　わたし達は猫を公園へ誘導に注力！」

「「「了解！」」」

セレス先輩がさらに速度を上げて猫を追い抜きました。猫は追い抜かれたことで動きに迷いが生じましたが、後ろから私たちが迫ってきていることで逃走を再開。そして四つ又の交差点に到着したところで「散開！」の指示の下、猫を目的のストリートに誘導するために包囲。猫はチラチラと逃げるための道を探し、私たちの狙い通りにストリートへと進みました。

『第１関門突破！　セレス、そっちの状況は！？』

『準備万端だよ。こういう時は自分が有名人だったことに感謝するよ。公園で遊んでた人たちを楽に避難させることが出来た。ま、公

園の外でギャラリーになっちゃってるけど、観られるぐらいならどうってことないでしょ』

「『了解。もう少しで着くからよろしく！』セラティナ、ミヤビ！
最後まで気を抜かずに！」

「「了解！」」

このストリートは横道がたくさんなので、ちょっと油断するとそちらに逃げ込まれる可能性がありますから。ですので緊張しっぱなしでしたが、猫をちゃんと公園まで誘導できました。

――愚かしき者に美しき粛清（センテンシア・コンデナトリア）を――

猫をジャンプさせるように追い込んだ私たちの努力のおかげで、猫は凍り付いた地面に着地してツルッとスリップしました。シャル隊長も「獲ったりぃーーー！」と氷の地面に足を踏み入れ、「ふんぎゃっ！？」と盛大に転んでしまいました。あれは痛そうですね・・・。

「馬鹿なのイリス！？　私に任せておいてってば！」

セレス先輩は滑ることなく氷の地面を駆け抜け、滑らないように踏ん張っている猫を抱き上げました。暴れる猫に「ごめんね」と一言謝ったセレス先輩は、猫をバインドで全身を拘束しました。ちゃんと首も固定して、首から下のバインドを舐められないようにしてあります。

「ちょっとシャル、大丈夫？」

「顔から行きましたからね。歯や鼻は問題ないですか？」

「だ、大丈夫。鼻血吹いてないし、歯も折れてないし。でも額が痛い」

私とセラティナ先輩が差し出した手を取り、立ち上がったシャル隊長が苦笑しました。確かに赤くなってますね。シャル隊長は額を摩りながら「セレス」と先輩に振り向き、セレス先輩は「ゲットだぜ！」と拘束されながらも暴れる猫の頭を撫でました。

「とりあえず2匹目確保。あと4匹、同じような手で捕まえよう」

そう言ったシャル隊長に、了解、と応じようとした時、猫が「みぃー、みぃー！」と大きな声で鳴き始めました。それはまるで助けを求めるかのような悲痛なもので、残りの猫を呼んでいるのかと思いましたが・・・。

「うっそ・・・」

「お、親猫・・・？」

「大きい・・・」

「でもフカフカそうですね～・・・」

鳴き声によって姿を現したとんでもなく大きな猫を、私たちはポカーンと見上げました。

Ｓａｇａ１７－Ｂ侵撃のＴ・Ｃ・～２ｎｄ　ｗａｖｅ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

局員の魔力を吸収するっていう特殊な猫の捕獲任務でファストラウムを訪れたわたし達は、成猫だって思っていた猫が実は仔猫で、そんな仔猫６匹の親らしき巨大猫と対峙していた。２階建ての一軒家と同じくらいの大きさな親猫（オスかメスかは判らない）はシャァ～！って威嚇して、わたし達を見学してた民間人が悲鳴を上げながら蜘蛛の子を散らすように逃げ始めた。

「ねえ。これ、戦っていいんだよね・・・？」

「いやぁ、どうだろ～」

「とりあえず閉じ込める！　一方通行（サンダルフォン）の聖域！」

セラティナが桃色に輝く結界で親猫を閉じ込めた。親猫は苛立たし気に結界の内壁をチラッと見て、目にも止まらない猫パンチを１発。結界はそれで破壊されてしまった。強固な結界を力ずくで粉砕する猫パンチ。普通サイズなら受けてもいいけど、あのサイズは無理、うん死ぬね。

「にゃあああああ！！」

親猫が大きな声で鳴くと、仔猫を解放するためにわたし達に向かっ

て飛び掛かって来た。すぐにその場からバラバラに散開して回避。

「セラティナ、とにかく公園全体に結界を張って民間人の進入封じ！　セレスは凍結封印を！　わたしとミヤビで引き付ける！」

「「「了解！」」」

――多層封獄結界（パーガトリー・アークケイジ）――

公園全体を結界で覆って、民間人への被害を抑える。わたしは"キルシュブリューテ"を起動して、ミヤビは「地鬼形態顕現！」って、機動力を犠牲に膂力と防御力が最高の地鬼へとモードチェンジ。そして大きな口を開けて迫ってきた親猫の口の両端を「ふんっ！」と両手で受け止めた。

「仔猫たちを巻き込まないように・・・！」

――雪風の凍牢（ベンティスカ・セリャド）――

親猫を閉じ込めるように球状の吹雪が発生。地鬼モードのミヤビはその発生速度から逃れられないだろうから、閃駆を使ったわたしがミヤビを肩に担ぐようにして離脱した。

「あ、ダメっぽい」

吹雪に呑まれた親猫だったけど、セレスの言う通り親猫は吹雪を食い破って「シャー！」怒りの声を上げながらセレスに襲い掛かった。

わたしとミヤビでセレスと親猫の間に割り込み、盾としての役割を果たすべく、「ごめんね！」と謝ってからの・・・

「風牙烈風刃！」

風圧の壁をアッパーのように放って、親猫の顎を打ち上げた。親猫は宙で一回転してうつ伏せで地面に落下。顔を上げる前にミヤビは親猫の鼻を両手で掴んで、「ふんっ！」全力で押さえ付けた。親猫の巨体と力強さを持ってすれば普通の魔導師や騎士なら力ずくで吹っ飛ばせるだろうけど、ミヤビは普通じゃない。

「そのまま押さえておいて！」

――小型運搬領域（スモール・キャリアー）――

親猫が四角い結界に閉じ込められると、結界がゆっくり収縮を開始。そして一抱えほどの大きさにまで小さくなった。セラティナの腕に抱かれてる仔猫が暴れるけど、セラティナの方が力が強いから脱出は出来そうにない。

「さすがにここまで圧縮されたら力ずくでの結界破壊は無理でしょ」

親猫が抵抗できないよう腕1本動かせないほどの狭さの結界。しかも舌で舐められないように顔をお腹に来るように蹲らせてる。あとは仔猫たちが一斉に群がって来ないことを祈るしかない。

「こちらイリス。ルシル班、そっちの状況は？」

『３匹目が突然方向転換した。場所は――』

親猫の確保を知らせるためにルシルに通信を入れた。そんなルシルから伝えられた場所っていうのが「ここ？」だってことが判った。この猫たちは普通の動物じゃない。親猫の危機を察知したとすれば、助けるために集まるのも道理。だから「ルシル！　急いで合流して！」って、親猫が現れたこと、その親猫を捕まえたこと、仔猫たちが親猫を助けるためにこの公園に集まっているかもしれないことを大急ぎで伝えた。

『了解した！　すぐに向かう！』

ルシルとの通信を切って、わたし達は親猫を閉じ込める結界の四方に立って周囲を警戒。仔猫の足の速さは魔導師の高速移動魔法と遜色ないレベルだ。どこに他の仔猫が居るか判らないけど、場所を定めればすぐにでも到着するはず。

「・・・来た！」

わたしとは正反対の方角を警戒してるセレスが叫んで、ミヤビも「来ました！」と教えてくれた。さらにセラティナ、わたしの真正面からも仔猫が「来た！」のを確認した。でもすでに地面はセレスの魔法で凍結されてるから、「おお、氷上のダンスだ」ってわたしはツルツル滑る仔猫を見る。体勢を立て直されるよりも早く「バインド！」を発動。体を曲げられないようにピンっとした体勢になるように捕縛した。これでバインドを舐めて消される心配はない。

「割とあっさり片付いたね」

「えっと、1匹、2匹、3、4、5。うん、5匹」

「ルシル副隊長のチームが捕まえた仔猫を合わせれば6匹ですね」

「親猫も捕獲できたし、任務は完了だね」

あとはこの猫たちを研究機関まで無事に連れて行けば本当に任務完了だ。とりあえず仔猫たちを1ヵ所に集めて、でも互いのバインドを舐めないように距離も開けて、ルシル達を待とう。それから3分としないうちに『これより結界に入る。撃つなよ？』ってルシルから通信が入ったから、「いつでもどうぞ！」って迎え入れる。ルシルとアイリとルミナとクラリスの4人が結界の中ににゅっと入ってきた。そんな4人に手を振ろうとしたら・・・

「イリス！」

「上だ！！」

ルミナとルシルの叫びにわたし達は考えるより早く前に向かって跳んだ。同時に頭上からゾッとするような気配がして、一直線に何か落ちてきたのが背中越しに判った。着地からすぐさま反転して、何が落ちてきたのかを確認した。

「首無し騎士・・・！？」

「デ、デュラハン！？」

「すごい！　初めて見た！！」

「本当に首ないんだ！　断面図、首の断面図見たい！」

そこに居たのは、物語などでよく見られる首の無い騎士デュラハンだった。全身鎧を纏った体は３ｍくらいあって、右手の剣もそれくらいの長さ、左手の円い盾はその半分くらいの大きさ。そんなデュラハンの剣は、親猫を閉じ込めていた結界の上面に突き刺さっていて、よく見ればその刃は親猫をも貫いてた。

「な・・・！？」

「何してんの！？」

「ルシル！　治癒術式を！」

結界が音を立てて割れ始めて、親猫から剣が引き抜かれると噴水のように血が噴き出した。６匹の仔猫たちが一斉に悲痛な鳴き声を上げた。今にも死にそうな親猫の元にルシルが駆けだそうとした時、「案ずるな。死ぬわけではない」って渋い声が聞こえた。周囲を警戒する前にわたしはその声の主が誰か判った。

「デュラハンの声・・・！」

「あ、顔！　顔がある！」

アイリがそう言って指を差した。デュラハンは物語だと自分の頭を脇に抱えるようにして持ってる。でも目の前のデュラハンは頭を持ってないから、そういうタイプなんだって思ってたけど違った。このデュラハンはなんと「剣の柄にある！」タイプだった。顔まで完全に覆うフルフェイスの兜を装着してるから素顔は判らないけど、声からしてきっとイケメンだ。

「どういうこと！？」

「それは、我の頭がなぜ剣に埋め込まれているか、という問いか？」

「ふざけるなぁぁぁぁーーーーー！！」

怒声を上げて真っ先に突っ込んで行ったのは「クラリス！」だった。クラリスは召喚士だから動物への愛情は人一倍深い。でもだからって、あんな正体不明な存在を相手に怒りで突っ込むなんて自殺行為だ。ルシルがすぐに「魔術でフォローー！」って指示を出した。

「また・・・私は・・・」

駆け出そうとしてたルミナが踏みとどまった。この中で魔術を使えないのはルミナ（アイリもそうだけど、ルシルとのユニゾンすれば扱えるようになる）だけだから、魔術師が相手となると途端に戦力外になっちゃう。悔しそうにしてるルミナに声を掛けたいけど、今はクラリスをなんとかしないと。

「フェアシュテルケン・ガンツ！」

「なんと無謀な突進か！」

"シュトルムシュタール"全体に魔力付加しての攻撃力上昇の魔術を発動したクラリスに、デュラハンは頭のある大剣を持つ右腕を水平に振り上げて、クラリスが間合いに入ったことで一気に薙ぎ払った。でも大剣はクラリスに当たることなく空振り。クラリスはというと「遅すぎるんだけど」って嘆息。あの子は大剣の腹に立っていて、デュラハンが行動に入る前に腹を駆け抜けた。

「せぇぇぇぇい！！」

振り下ろした"シュトルムシュタール"の金棒がデュラハンの顔面に直撃。派手な金属音が轟いたけど、「怒りに任せたにしては随分と軽い！」ってデュラハンは高笑いしながら大剣を振るって、クラリスを引き離した。

「制圧せし氷狼（インバシオン・ローボ）！」

セレスが氷の狼を２０頭と作り出してデュラハンへと殺到させる。デュラハンは大剣と大盾で斬ったり殴ったりして狼を粉砕。

「無詠唱で威力は落ちるが、飽和攻撃で攻めればどうとでもなる。宝竜の抱擁（コード・ファフニール）！」

ルシルの炎、氷、雷、風、光×2、影、岩、水の龍が襲い掛かり、デュラハンは回避行動に移った。水の龍は酸で出来てるみたいで、飛び散らせてる水滴が地面に落ちるとジュッと音を立てる。デュラハンは特に酸の龍を警戒していて、必死に回避してる。

「多殻結界（マルチプル・シェル）！」

そこにセラティナの結界だ。小さなキューブ状の結界が連続でデュラハンの体の至る所に発生して、触れた部位をその場に固定してく。だけどデュラハンは「ふん！　ふん！　ふん！」って力ずくで結界から逃れてく。

「猫が・・・・！」

その最中、親猫や仔猫たちがすぅっと音もなく消滅した。これは「召喚獣・・・！」が召喚解除された際の現象だ。

「ようやくか。死ぬわけではないという我の言葉に対しての、なぜ、の答えはそれだ。我とは違って仕事も満足に果たせない役立たずの畜生の正体は召喚獣。貴様らに捕獲されるわけにはいかんのでな。我が召喚主が召喚を解除する前に、任務失敗の責を問うための意味を含めての始末だ」

「よーく解った。つまりお前の任務を失敗させれば、あの親猫のように串刺しにされても文句はないわけだ」

クラリスが余計に殺気立っちゃった。デュラハンの言葉を信じるな

らアイツも同じ召喚主によって召喚された召喚獣。うーん、同じ召喚獣でもこの違い。まぁ猫と首無し騎士のどちらが可愛いか問われたら、猫だって即答するけどね。

「待てクラリス！　君はナデシコの召喚を！　嫌な予感がする。セレス、セラティナは俺と飽和攻撃を続行！　シャルとミヤビも適度に攻撃に参加！　新手が現れる可能性があるため、周囲警戒を優先！　アイリ、ユニゾンだ！　ルミナは俺のところに来てくれ！」

「・・・むぅ。了解」

「「「了解！」」」

「ヤヴォール！」

「？　了解」

そこからはセレスの氷狼、ルシルの龍群、セラティナの結界と順番に発動されて、わたしも絶対切断効果を持った魔力の刃、「飛刃・一閃！」を放ったり、ミヤビも炎鬼モードになって、拳の形をした炎の砲弾「業火拳衝！」を両手から連続発射したりして、もうリンチみたいになっちゃってる。

「ええい！　チマチマとタチの悪い攻撃をしおって！　持っている武器を見る限り、貴様らも騎士であろう！　」

キレ気味なデュラハンはそう叫ぶけど、わたし達はそれを無視して

攻撃を続ける。ルシルもルミナと何かを話しながらも攻撃を続行。おっと、デュラハンが体勢を崩したよ。ほんのわずかな隙だったけど、セラティナの多数結界で体勢が崩れた状態でその場で固定された。このままトドメを差してやろうとしたとき・・・。

「オクスタン・・・ズィィィィガァァァァ―――――!!」

自分の体を固定してるセラティナの結界を身を捩るだけで破壊するデュラハンの元に、ルミナがひとり突っ込んで行った。わたし達の飽和攻撃が途切れてる今、結界からも自由になったら面倒・・・でもないか。上半身だけ自由になったデュラハンは「来るがいい！」って、突っ込んでくるルミナに向かってまずは盾パンチ。

「せい！」

ルミナの左拳が盾と激突して、バキッと盾から音が。続けて右拳が盾に打ち付けられて、それで盾が真っ二つに割られた。デュラハンが「貴様！」って大剣を振るったけど、ルミナのアッパーによって大剣は空に弾き飛ばされた。

「しまった・・・！」

「もう私は戦力外じゃ、役立たずじゃない！」

デュラハンの懐に入り込んだルミナは、ジャンプしてからの上段後ろ回し蹴りをアイツの腹に打ち込んだ。今までならルミナが弾かれて終わりだったけど、今回はデュラハンの方が「むごぉ！」って地

面に轍を作りながら蹴っ飛ばされた。

「内容は知らないけど、お前の任務は失敗したみたいね」

宙を舞う大剣に向かってそう言ったクラリスは今、召喚した九尾の狐ナデシコの頭に上に立っていて、「串刺しじゃないけどいいよね？」って、振り上げてた"シュトルムシュタール"を振り下ろした。それを合図にナデシコも振り上げた右前脚を勢いよく振り下ろし、バチン！と大剣を叩き落とした。ナデシコの前脚はそのまま落下する大剣を地面に叩き付けた。さらに前脚から炎が噴き出して追撃。

「あ、倒れた」

デュラハンの体が膝をつき、ドォーンと大きな音を立ててうつ伏せで倒れた。かと思えば、そのまま猫たちと同じように音もなくスゥっと消えていった。偉そうなことを言いながらも猫に比べれば雑魚も雑魚だったデュラハンの消滅を確認して、わたし達はホッと一息。

「ルシルぅ～～～♪」

満面の笑みを浮かべながらルシルの元に駆け寄ってくルミナ。そしてそのままの勢いで「ありがと～～！」ってルシルにハグして、ルシルの頭を胸に抱えながらクルクル回る。ハグくらいならまだ許そう。だけどルシルの顔を自分の胸に抱えることは許さん。それが許されてるのは、わたしかトリシュかはやて、あとアイリだけだ。

「これ以上のライバル増加は許さ～～～ん！！」

ルミナとルシルを引き剝がすために突撃。そんなわたしの様子にルミナは「ごめん、ごめん♪」って謝って、ルシルをようやく解放した。

「いやだって嬉しかったんだよ。私の分解スキルは魔術に対して何の意味も無い力だったから、イリス達が魔術でT・C・と戦っているのを見守ることしか出来ないことがどれだけ悔しくて、辛かったか。そんな嫌な気持からようやく解放された！　ルシルが解放してくれた！　ならそのお礼に、私の胸に顔を埋めさせてもよく――」

「ない！　よくない！　その発想はない！」

「ダメ？　私に出来るお礼って体しかないんだけど」

「そんなわけないでしょうが！　もっとこう、手料理とか肩を揉んであげるとか、健全なお礼の仕方があるでしょ！・・・って、これも体か。じゃなくて！　ルミナはお礼しなくていいの！　わたしが代わりにしてあげるから！」

ルミナは自分の胸を触りながらそんなことを言い出すものだから、わたしは首を横に振って反論。そうだ、部隊長であり幼馴染でもあるわたしが代わりにお礼してもいいんじゃん。

そんなわたしとルミナの会話を余所に、クラリスがルシルに「ルミナの胸、どうだった？」なんて聞いてるし。ルシルもまさかそんな質問されるなんて思いもしなかっただろうから、「はい？」って目を丸くしてる。ちなみにミヤビは顔を真っ赤にして明後日の方を向

いてる。

（ごめんね、馬鹿な先輩たちで・・・）

大切な後輩であるミヤビのことを考えたら一気に冷静になれた。まったく、まだ仕事中なのにわたし達は何をやってるんだか。

「でもさ、イリス。これ見て。ルシルがくれた神器」

ルミナが首に掛けた紐に繋がれた蒼い指輪を胸元から取り出した。一目で判る。神器だ。わたし達の視線が指輪からルシルに移る。ルシルは「デスクワークの日々の中で鍛えに鍛えた、俺の作る最後の神器、ヒミンバルだ」って苦笑い。

「「「「最後・・・？」」」」

「レーゼフェアには左目の視力を奪われ、リアンシェルトには複製能力の発動を封じられた」

ルシルは前々から複製スキルが使えない原因に頭を悩ませてたけど、レーゼフェアの前例があるからスキル使用不能もリアンシェルトが原因だって結論を出したみたい。それはともかく最後っていうのが判らないから、ミヤビを除くわたし達は首を傾げた。

「複製能力があればこの程度の神器、１週間も掛からず作成できるんだがな。こんな簡単な物ですら１０ヵ月も掛かった。他の神器なんて作ろうとしたら何年かかるか。さすがに俺もそんなに長くは生

きていないだろうしな。だから最後の作品だ」

それからルシルは、指輪型神器"ヒミンバル"はまだ未完成で、本来ならどれだけ能力を使用してもルミナの魔力に神秘を付加できるはずだったみたい。だけど自分は役立たずだってへコんでるルミナを可哀相に思って、未完成の状態で神器として起動したそうだ。

「じゃあルミナ。ヒミンバルの欠点のおさらいだ。デメリットをきちんと理解していれば、よほどのことがない限りは君の力になり続ける」

「あ、うん。未完成であるヒミンバルの神秘付加時間は、最大で４３２０時間――４ヵ月。そこから先は魔術師に神秘の含まれた魔力を充填してもらう必要がある」

「そう。４ヵ月でＴ・Ｃ・との戦いが終われば必要なくなるだろうが、それ以上の期間になるなら俺たちの誰かに頼んでくれ」

「ん。ありがと、ルシル。大切に使わせてもらうよ」

向かい合って笑みを浮かべるルシルとルミナ。羨ましいな～なんて思ってると、通信が入ったことを知らせるコール音が鳴り響いた。すぐに「こちらイリス」と応じた。

『部隊長。アコース監察官から通信が入りました』

「繋げて」

『フライハイト二佐。そちらの状況はモニターしていたから、こちらでファストラウム地上本部に連絡しておいた。だから今すぐ第４管理世界カルナログへ向かってほしい。あちらの首都にも猫たちが出現した』

ロッサの話に「な・・・？」って驚いたわたし達。いやだって猫たちの召喚が解除されてからまだ３０分も経ってない。世界を隔ててての遠距離召喚が出来るのか、それとも召喚してすぐにアラントスに渡ったのか。どちらにしてもここファストラウムでの猫騒動は完全に終わったんだ。

「了解。すぐに向かいます。全騎、シャーリーンに帰艦する！」

セラティナに結界を解除してもらって、すぐに軌道上に停泊してるシャーリーンへ転送してもらった。ファストラウムからカルナログなら転送できる距離。"Ｔ・Ｃ・"の召喚主がどういう理由でこんな騒ぎを起こしてるのか判らないけど、少なくとも１時間で猫たちの召喚を解くことはないはず。ファストラウムでも数日間と騒動を起こしていたし。

『部隊長。カルナログに出現した猫たちの映像が本部より送られてきました』

「こっちのモニターに映して」

エントランスに待機したままでその映像を見ることに。展開された

巨大モニターにはファストラウムで追いかけっこをした猫たちはもちろん、親猫の健在も確認できた。すでに本局から各地上本部に猫騒動の情報が回ってるみたいで、カルナログの首都防衛隊も頑張ってる。

「ん？　ブリッジ。３０秒ほど巻き戻してスロー再生を頼む」

『了解です』

ルシルが指示を出すと、映像が指示通りに巻き戻ってスローで再生スタート。モニターを注視してたルシルが、「止めてくれ！」ってある場面になったところで指示。そこは普通のストリートで、首都防衛隊員と猫の追いかけっこを何事か？って見てる民間人たちが映ってる。

「コイツも転生していたのか・・・」

「コイツ？　この茶髪の男の人？」

「転生っていうことは、ルシルのオリジナルやシャルロッテ様たちと関わりがある・・・？」

「ああ。オリジナルからすれば敵で、騎士シャルロッテからすれば味方だった男。当時の召喚魔術師の頂点に立っていた大魔術師、召喚王アーサー・ブラック・セダンだ」

Ｓａｇａ１７－Ｃ侵撃のＴ・Ｃ・～３ｒｄ　ｗａｖｅ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

夢幻王プリムス、葬柩王フォード、武勇王レオンに続き、元ヨツンヘイム連合の魔術師が、召喚王アーサーが現れた。まるで同窓会だなという感想が出てきたが、そんな笑っていられる状況でもない。アーサーの外見そのままだが、奴もまた転生した人間の意識を乗っ取っているんだろう。どれだけ現代の人間を不幸にすれば気が済むんだ、俺たち過去の異物は・・・。

『フライハイト部隊長。カルナログ地上本部より転送入界の許可が下りました』

「了解。指定された座標への転送を開始して」

これより俺たちは、アーサー（仮）の召喚した召喚獣の捕獲へ向かう。神秘を失った現代で召喚できる魔族など、戦闘力という点においてはさほど驚異ではないだろう。人型の魔族は基本的に強大だが、デュラハンのような弱い種族も存在する。猫型の魔獣も、素早く魔力を舐めとるという厄介さはあるが強くはない。

「では全騎、これよりカルナログ首都に降下し猫たちの捕獲、そして召喚者であるこの男、アーサー（仮）の逮捕を行う。ルシル、コイツのことについて何かある？」

「ああ。アーサー（仮）は召喚に優れた魔術師だった。だが個人の戦闘能力も高い。プリムス（仮）、フォード（仮）、レオン（仮）のようにオリジナルに比べれば弱いが、それでも強大だという前例がある。アーサーは雷撃系――電気変換の魔術を扱う。幹部３人に比べれば弱いだろうが、魔術師であることは間違いない。要警戒だ」

シャルに話を振られたことで、アーサー（仮）についてアドバイス。大戦時は厄介な魔族を召喚し、そいつらを盾として、奥から弓での遠距離狙撃を基本戦術としていた。遠距離や広域戦に優れた俺やカノンやシェフィリス、"戦天使ヴァルキリー"の敵ではなかったな。そういうわけで、俺たちはカルナログへと降下。首都防衛隊と共に街中を駆け回る猫たちの捕獲を始めた。各チームに分けた数少ない氷結魔法の使い手によって地面を凍結させて、猫たちが脚を滑らせている間に網で捕獲を繰り返す。すでにファストラウムで猫の捕獲方法を確立したことで、今回も今後も捕獲はすんなり済みそうだ。

「深淵（ラフェルニオン）へ誘いたる微睡の水霧」

ボフッと発生させた眠りの霧によって４匹の猫が深い眠りの中に落ちた。霧が効果が拡散する前に風を起こし、完全に霧散させる。くてっと地面に倒れこむ猫を「お疲れ様です、セインテスト一尉」と網に入れつつ労いの言葉をくれた防衛隊員たちに、「お疲れ様です」と俺も頷き返した。

「これで３２匹目っすね」

「いったいどれだけ召喚しているんだ？」

「こちら第４班。猫４匹を捕獲しました」

しかし首都防衛隊は首都防衛隊で、特騎隊は特騎隊で動けばいいのに、何故か俺たちはバラバラにされて各班に1人ずつ組み込まれた。戦技教導隊と間違われていないだろうか・・・。隊員同士の連携を考えるなら俺たちの存在は邪魔だろうに。

「それにしても、動物保護団体の人たちにも困ったもんすよね」

「あー、魔導犯罪者の召喚獣による管理局への攻撃だって言っても、召喚獣でも動物だから傷付けるな、って言われたらしいですね」

「バインドは良いらしいが、猫のような素早いターゲットを捕獲するなんて不可能だろ？」

「これだから現場を知らない連中は。声だけ挙げて自分たちは何もしない」

隊員たちの愚痴を聞きながら、続々と召喚されていく猫たちとの追いかけっこはまだ続く。捕まえた猫４匹を回収部隊に預け、本部から入る報告に従って場所を移動し、そこで猫を捕獲。そしてまた回収部隊に預け、移動、捕獲を繰り返す。

「セインテスト一尉。捕獲した猫を集めていた回収班からですが、集積ポイントに集めていた猫たちが一斉に消失したそうです」

「まぁそうなるよな・・・。捕まえても召喚解除して助け出し、また別のところで再召喚。完全にイタチごっこだな」

「やはり召喚者を押さえないといけないというですね」

「こちら４班。召喚者の行方はまだ判明しないか？」

『こちら本部。全監視カメラからの映像を洗っていますが、今なお発見には至らず』

アーサー（仮）を発見できるまでは、理解していながらもイタチごっこを続けるしかなさそうだ。隊員たちと苦笑いで肩を竦め合い、「次のポイントへ向かう」と猫たちの捕獲を再開した。で、最終的に「街から一斉に猫が消失・・・？」したことで、カルナログでのアーサー（仮）との決戦はお預けになった。

第６管理世界ストラスブール、第５管理世界ファストラウム、第４管理世界カルナログと続けて出現しているとなれば、次は第３管理世界ヴァイゼンの首都が襲われることは確定だ。というわけで、俺たち特騎隊はすぐさまシャーリーンに帰艦し、ヴァイゼンへと向かう準備を始める。

『フライハイト二佐。ヴァイゼンへ向かう準備は整っているだろうか？』

「ええ。全騎シャーリーンに帰艦し、待機中です」

『よし。カルナログ地上本部への連絡はこちらで済ませておいたか

ら、そのままヴァイゼンに向かってほしい』

「了解しました」

帰還したとほぼ同時にヴェロッサからの通信が入った。シャルはブリッジの操舵手に第３管理世界ヴァイゼンへ針路を取るよう指示。ヴァイゼンへは半日もあれば到着する。その間に気になっていることを考える必要がある。

「アコース監査官。Ｔ・Ｃ・は何故か魔力を集めている。魔力保有の物品の奪取、魔力保有動物や魔導犯罪者からのリンカーコア強奪。そこに今回の猫騒動による局員からの魔力奪取。俺たちが確認したのはストラスブールからだが、猫たち、召喚者は順々に世界を渡っているようだ。もしかするとそれより前から確認できていなかったのだろうか・・・？」

『・・・調べてみたんだが、セインテスト一尉の考え通り、猫たちは第８０管理世界マリアノースで確認できたのが最初だ』

「マリアノース・・・。去年管理世界入りを果たしたばかりの新顔よね」

「それはいつからなの？」

『およそ半年前に確認されたそうだ。各地上本部にも確認したところ、第８０管理世界マリアノースから第７管理世界アーソナまで順々に出現していることが判明した。魔力を吸収された被害者は首都

防衛隊員だけのようだ。ただ、全員というわけじゃないようで、あくまで猫の捕獲時に携わった隊員だけだ』

「首都防衛隊を無力化して、首都を手薄にさせて何かをしようと企んでる？」

「そこはまだ判らないけど、完全に敵対行為だよねこれ。連中の狙いはたぶんだけど、召喚獣を新種の猫として管理世界に誤認させて、局員の魔力吸収は捕獲時の事故に見せかける、だと思うのよね。そうすればＴ・Ｃ・へのヘイトや捜査の手は伸びなかったはずだろうし」

シャルの推理は的を射ているだろう。"Ｔ・Ｃ・"とは何度か交戦しているが、向こうから仕掛けられたのはフォード（仮）の時だけで、レオン（仮）や他のメンバーは俺たちの攻撃に対する反撃からの交戦だった。フォード（仮）以外は進んで局への攻撃は仕掛けてこなかったのに、「今になって敵対行動を取るようになったのは何故だ？」という話になってくる。

「回収できる魔力が少なくなってきたから・・・？」

「管理世界だけならまだしも管理外や無人世界は文字通り星の数あるのに？」

「調査するにも時間が掛かるだろうから、手っ取り早く局員を狙ったと考えられない？」

「時間があまり無く、しかし魔力が欲しい。一体なにをやろうとしてるんだろ。それが判れば対抗策とか考えられるのにね」

そう言ってアイリが腕を組んで首を傾げた。それが判れば本当に楽になるんだが、とりあえず「首都にだけ出現させるのは何故か？」を考えよう。

「首都防衛隊の皆さんの魔力量が、地上部隊員の中でも特に高いからでしょうか？」

「まぁ首都防衛隊は精鋭ぞろいだしね～」

「アイツら各地の局員からは吸収しないんだ。どうせ魔導犯罪者はT・C・が狩りまくってる所為で、魔法による犯罪発生率は今じゃ1％もないんだし、地方の局員を襲っても大丈夫だと思うんだけど」

「さすがにそこまで行くと普通の犯罪者に対処しきれなくなるでしょ」

「T・C・は局と敵対したくないって言っていたし、壊滅的な被害だけは出さないつもりじゃない？」

「どういう理由でもアウトなんだけどね」

シャル達の会話を聞きながら"T・C・"が首都だけを襲撃する理由を考える。ミヤビの首都防衛隊員の方が魔力量があるから、という考えは悪くないと思う。だがそれだけじゃないはずだ。ヴェロッ

サからたった今送られてきた新しいデータに目を通す。

（首都で暴れる期間はバラバラだな。最長は第４１管理世界ユークトバニアの４日間。最短は第７８管理世界コンベルクの１２分）

時間からでは目的を察することは難しいか。なら次は首都のどこに出現しているのかを見よう。少しでもヒントがあれば助かるんだが。とりあえず１０世界ごとのマップを展開させ、猫の出現ポイントを表示させる。シャル達もいったん口を閉ざしてモニターを見た。

「どれもこれも、いきなり地上本部周辺の街中に出現したんだね」

「いろいろな軽犯罪で街を混乱させ、捕獲を依頼された警ら隊をもてあそび、首都防衛隊を引きずり出して魔力を吸収か～」

「召喚されてからの猫たちの動きは・・・っと」

猫を示す赤点が移動を開始する。その軌跡からして「地上本部から離れようとしてる」というのは明らかなものだった。これで１つの疑問は解決した。ルミナの言った、首都防衛隊を無力化して、首都を手薄にさせて何かをしようと企んでる？というのは正解だった。

「アコース監査官！　連中の狙いは首都ではなく地上本部だ！」

「大至急各地上本部に、本部内で何か異変がないかの確認を！」

猫の、アーサー（仮）の、"Ｔ・Ｃ・"の狙いは、首都防衛隊を地

上本部周辺から引き剝がし、その間に地上本部で何かを成すこと。それが何かはまだ考えつかないが、"T・C・"にとって必ず利益になる事に違いない。

『わ、判った！　ヴァイゼン地上本部、ミッドチルダ地上本部にもこの情報を伝えておく！　君たちに地上本部内の警備を任せられないかも確認してみよう！』

仕事時の口調が崩れ、いつもの口調でそう言ったヴェロッサから通信を切った。それからヴァイゼンへの入界許可が下りるまで"T・C・"の狙いが何なのかを考えようと思ったんだが、答えは自然と1つに絞られていた。

「T・C・は魔力を集めてる。それを踏まえて地上本部でいったい何をしてたのか。おそらく回収されてる魔力を保有したロストロギアの奪取」

「そんなの1発でバレない？　確かに連中は転移で世界間を移動しているけど、ロストロギアを保管してる場所は厳重なセキュリティで護られてるだろうし。それに、魔導師に対して圧倒的なアドバテージがある魔術師とはいえ、一切気取られることなく奪取するなんて不可能じゃ・・・」

「ルミナの考えも解るが、向こうにはプリムス（仮）が居る。彼女の幻術がオリジナルに匹敵するようなら、それを見破るなんて俺でも無理だ。真技クラスの幻術は視界だけでなく五感すらも惑わしてくるぞ」

大戦時、奴の幻術で何度敵兵をみすみす逃してしまったか。もし奴が戦場に出ずっぱりだったら、もしかする俺たちアースガルド同盟軍は敗北していたかもしれない。それほどまでに夢幻王プリムス・バラクーダ・ウトガルドは脅威だった。奴の転生者もそこまでの脅威にならないことを祈るしかない。

「とにかくT・C・が狙ってるのは、地上本部内に保管されているロストロギアを始めとした魔力保有物品の奪取と考えていい」

「それについては同意するけど、私たち本局の人間が他世界の地上本部の防衛には就けないよね」

「・・・うん。それはわたしも思う」

シャルに続いて俺たちもクラリスの言葉に頷いた。首都防衛くらいは任せてもらえるだろうが、地上本部はヴァイゼン陸士部隊の本拠地。さすがに体面もあるだろうから無理だろうな。ヴァイゼンで決着を付けられなければ、ミッド地上本部での戦いになる。

今もなお懲役刑を受けて服役しているレジアス・ゲイズ元中将の後輩が総司令に就いているため、ミッド地上本部上層部の本局嫌いは直ってはいないが以前よりはマシなレベルになっている。とは言っても嫌いなことには変わりないから、俺たちが本部周辺で活躍することにはあまり良い思いはしないだろう。

「あ、ロッサから通信だ。みんな、シーね」

立てた右人差し指を唇に当ててそう言ったシャルに頷き返すと、シャル「はい。こちらシャーリーン」と通信を繋げた。ヴェロッサは俺たちを見回した後、『ヴァイゼン地上本部から協力要請を断られてしまった』と、耳を疑うような話をした。目を丸くしている俺たちに続けてこう言った。

『特務零課は、本局の護りに専念されたし。当地上本部は魔力保有物は少ないため、多量の物品を保管している本局にこそ貴隊の活躍の場があると思われる、だそうだよ』

「「「「本局・・・」」」」

「やっぱり狙われてしまいますよね・・・」

「本局はアイツらにとって宝の山だろうしね」

『ちなみに、ミッド地上本部にも要請してみたんだが同じような断られてしまった。ヴァイゼンに関しては受け入れるよう脅威対策室から通達を受けたため、ヴァイゼンへの協力は見送る。だけどミッドについては要請を送り続けるそうだよ』

ヴェロッサはそう言ったが、俺たちが本局に到着する頃になってもミッドからは良い返事はなかった。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒アリサ†††

"Ｔ・Ｃ・"とかいう管理局にケンカを売ってきた犯罪組織。そい

つらが今度狙ってるのは、あたしの背後にそびえるミッドの地上本部、その中に在るロストロギアを始めとしたいろいろな貴重品が納められた保管庫。連中は魔力を優先的に狙って奪ってくようで、ミッド以外の管理世界の地上本部はすべてやられたみたいね。

「アリサ」

あたしに声を掛けてきたのは「シグナム」とアギトの2人だった。互いに「お疲れ様」って労いの言葉を掛けた後、目の前に広がるエントランス前の中庭に視線を戻して、防護服を着用した隊員たちが巡回してるのを見る。全地上本部の本部でもあるミッド地上本部全体がピリピリしてるのよね。あたしやシグナム達が所属してる首都防衛隊が今、"T・C・"の襲撃に備えて最大警戒中っていうから仕方がないけど。

「あんま気にしたくないんだけど、ルシル達でも1年以上かかっても潰せないT・C・を相手に、あたしら魔導師は勝てんのかな・・・？」

アギトが不安そうに漏らした。シャルたち特騎隊が"T・C・"の本格的な逮捕に踏み出したのは、すでに解散したはやて率いる特務六課とフッケバイン一家の戦いが始まる前だった。初めの頃はシャル達がささっと事件を解決させて、特務六課と協同でフッケバイン一家の逮捕に動くと思ってたのよね。それがまさか、こうも"T・C・"壊滅が長引くなんて誰も思いもしなかったわよ。

「とりあえずあたしやシグナム、あと応援の教会騎士団には、シャ

ルやルシル、それにセレスの神秘魔力が内包されたカートリッジが回されたし、召喚者のアーサーの転生者だっけ？　そいつのことだけを集中すればなんとかなるんじゃない？」

"T・C・"の幹部はどうやら魔術が当たり前だった時代、シャルの前世やルシルのオリジナルが生きてた頃の魔術師、その生まれ変わりばかりらしい。そんな幹部はシャル達が真っ向から戦っても決着が付かない強さらしいけど、召喚者に関しては神秘カートリッジを使うあたし達でも勝てるって、シャルからメールが来たわ。

「魔力を吸収する猫たちは他の隊員たちに任せ、神秘カートリッジを扱う我々が召喚者を討てば勝利だ。だからそう不安になるなアギト」

「うーん、まぁそうなんだろうけどさ。なーんか嫌な予感つうかさ、良くないことが起きそうっつうかさ・・・」

「アギト。そういうのはフラグが立つっていうのよ。あまりそういう後ろ向きな発言は控えた方がいいわよ」

よく漫画やゲームなんかで見るフラグ。この戦いが終わったら結婚するとか、後で必ず合流するからとか、敵を倒した後のやったか？とかね。まぁ現実にはそんなフラグっぽいことを言っても何も起きなかったり、言わなくてもアウトなことが起きたりするんだし、そこまで気にすることじゃないけど。

「何やら楽しそうなお話をしていますね。少しご一緒させてもらっ

てもいいでしょうか？」

「お疲れ様です、騎士シグナム、アリサさん」

「トリシュ」

「アンジェリエ」

声を掛けてきたのは今や教会騎士団最強の精鋭部隊、銀薔薇騎士隊ズィルバーン・ローゼのパラディンとなった弓騎士のトリシュタンと、打撃騎士のアンジェリエの２人だった。騎士団からトリシュとアンジェを始めとした騎士が２０名ほど応援に来てくれたわ。トリシュとアンジェとも「お疲れ様」って労い合って、あたしはアギトが嫌な予感がするって言いだして、そういうことを言ってると本当になっちゃうわよ？っていう話をしてたことを話す。

「あー、なるほど。確かにそういうのは戦闘前で言うのはまずいですね」

「でしょ？　シャル達が苦戦してるからそう考えちゃうのよきっと」

「アギトさん。こう考えればいいのですよ。イリス達でも手古摺っている相手を・・・」

アンジェは最後まで言い切らずに「来ました！」って、旗型デバイス・"ジークファーネ・ヘルト"を起動させて、魔力幕も展開。トリシュも弓型デバイス・"イゾルデ・ツヴァイト"を起動して、右

手の指の間に４本の魔力矢を生成。

「アギト、構えろ！」

「お、おう！」

「レヴァンティン！」

シグナムは"レヴァンティンを"起動して、ユニゾンはしないのかアギトと一緒に構えを取った。あたしも「フレイムアイズ！」を銃剣形態バヨネットフォームで起動。銃口を向けるのは、こちらに向かって来てる猫の大群。ううん、猫だけじゃないわね。ゴリラ、キリン、サイ、カラス、鷲、アナコンダ、カブトムシ、クワガタなどなどが巨大化しての登場よ。

「バニングス隊！　第１小隊は召喚獣を１匹たりとも通さないように！　第２小隊は非戦闘員の避難の護衛を！」

「八神隊はバニングス隊の援護！」

周囲を巡回してるあたしの部下たちに通信で指示を出して、シグナムは自分の部下にそう指示した。敵の襲撃は必ず来る。でもいつかは判らない。そんな曖昧さで地上本部への出入りを長期間封鎖できるわけもなく、非戦闘局員はもちろん、本部に用事のある民間人も普通に居た。そんな人たちを巻き込まないように気を付けながら魔術関連の召喚獣の打破。今日は忙しくなりそうだわ。

Ｓａｇａ１７－Ｄ侵撃のＴ・Ｃ・～４ｔｈ　ｗａｖｅ～

†††Ｓｉｄｅシグナム†††

"Ｔ・Ｃ・"のメンバーの１人とされる召喚者による召喚獣の襲撃。これまでの地上本部はすべてその被害に遇い、保管されていたロストロギアなどが奪われてしまった。そしてとうとうミッド地上本部にまで手を伸ばしてきた。

「猫は魔力を食うぞ！　射砲撃は使うな！」

「氷結魔法が使える者は、地面を凍らせるんだ！」

「猫以外は初遭遇だ！　様子を見つつ攻撃続行！」

各首都防衛隊の隊長たちが部下に指示を飛ばし、巨大なクワガタと交戦を開始。私の部下たちも非戦闘員や民間人の避難誘導を行いつつも攻撃を行っている。小隊５人で巨大アナコンダと交戦中で、残り５人の小隊はアリサの小隊と共に避難誘導を行っている。

「紫電一閃！」

"レヴァンティン"の刀身に纏わせた炎は、ルシルのカートリッジによって蒼が混じっている。それが私の魔力に神秘が付加され、魔術化していることを示しているわけだ。そんな私の一撃を受けるのは巨大ゴリラ。普通のゴリラの３倍はあろう巨体で、その太い腕で

私の一撃を受けた。

「む・・・！」

刃は肌を裂き、炎も体毛や皮膚を焼いているのは確かなのだが、筋肉で止められているようだ。腕が振るわれたことで私は後方に投げ飛ばされたが、地面に着地するより前に空中に魔法陣の足場を展開して足を付き、"レヴァンティン"を鞘に納める。そしてカートリッジを1発ロードし、居合の構えのまま足場を蹴って再突撃。

「紫電・・・」

鞘内の魔力を爆発させ・・・

「清霜！」

その衝撃によって超高速の抜刀を行う一撃を放った。先は筋肉によって拒まれたが、この一撃は筋肉すらも容易く寸断し、ゴリラの左腕を斬り飛ばすことに成功した。しかし「本当に攻撃してよかったのか？」と疑わざるを得ないほどに、斬られた箇所より多量の出血をし、大きく鳴くゴリラの様子は痛々しかった。

「斬り飛ばされた腕は・・・消失するのだな」

地面に転がっていた腕の先が魔力となって霧散したのを確認。ルシル達から受けた報告通り純粋な生物でないのは確かのようだ。腕の消失を確認していた私にゴリラは怒りの咆哮を上げ、轟音と共に突

進してきた。普通のゴリラでさえ容易く人を殺めるほどの力を持っているという。その３倍はある召喚されたゴリラに捕まれば、さすがの私も無事では済むまい。"レヴァンティン"をもう一度鞘に納め、「カートリッジロード！」を行った。

「レヴァンティン！」

≪Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ　！≫

迫りながら無事な右腕を伸ばしてきたゴリラの懐に一足飛びで入り込み、さらに股下をスライディングで潜り背後へ回り込む。

「煌竜！」

ゴリラの背後を取った私は連結刃形態となった"レヴァンティン"を抜き放ち、炎を纏う連結刃でゴリラを拘束。斬撃と火炎の二重攻撃でゴリラの全身を斬り、そして焼いた。連結刃の拘束から逃れるだけの力も失ったようで、仰向けに倒れこんだかと思えばゴリラは魔力となって霧散した。過度のダメージを負っての強制召喚解除だったようだな。

「最後の避難者グループです！」

私やアリサの隊とは別の隊の５人が、局員や民間人合わせて８名を護衛してやって来た。彼らに召喚獣が向わないように次の相手、誰とも戦っていない巨大なサイと対峙しようとしたのだが、ふっと違和感を覚えたことで通り過ぎようとしていた避難者グループを二度

見した。民間人ではなくとある局員を注視し、そして「待て！」と呼び止めた。

「シグナム一尉・・・？」

「トミー三佐は残っていただけますか？」

避難する局員の中に居た初老の男性、トミー三等陸佐が違和感の原因だ。名指しで呼び止められたことで困惑していらっしゃる彼には「少しお時間を頂きたく」と伝え、他の避難者には「他の皆さんはお早く」と促した。他の避難者が本部に駆け込むのを横目で確認しつつ、意識は彼に集中する。

「八神一尉。どういうつもりだね？　こんな戦場の中で魔導師ではない私を呼び止めるなど正気かね？」

「申し訳なくは思っております。しかしトミー三佐は一昨日から明後日まで、ザンクト・オルフェンにて甥御さん、アレックスさんの結婚式にご列席なさっているはずと思った次第でして」

「あ、ああ。魔法を使えず戦えなくとも三佐の階級を頂く身。アレックスには申し訳なかったが栄えあるミッドチルダ地上本部の危機である。ザンクト・オルフェンでの休暇を切り上げて参上したのだが、危険だからと避難者の仲間入りに――」

最後まで言い切らせるより先に"レヴァンティン"の峰で斬りかかると、目の前の奴は咄嗟に掲げた左前腕部で受けることで私の一撃

を防いだ。騎士にあるまじき不意打ちだったのだが、こうも容易く反応されるとはな。しかも手応えからして骨を折るどころか肌にすらも傷付けていないだろう。

（ああ、間違いない。神秘の有る魔力で防がれた際の手応えだ）

「何をする！？　上官である私への攻撃など馬鹿げている！！」

「馬鹿なのは貴様だ。私はトミー三佐とは呼ばん。ファミリーネームのブラック三佐と呼ぶ。そしてブラック三佐は、私のことをシグナム一尉と呼ぶ。八神という姓持ちは我ら八神家のみだが、八神と呼ばれるのは我らが主、八神はやてのみ。さらに言えば！　ブラック三佐の休暇は４日前からであり、行き先はザンクト・オルフェンではなく第１３管理世界リムヴァユニオン！　甥御さんの結婚式ではなく姪御さんの結婚式だ！」

――紫電一閃――

先ほどの峰打ちには大して魔力を込めていなかったが、今度は本気で討ちにいく。半身になることで私の一撃を躱した奴の姿が揺らぎ、管理外世界などでよく見かけた軍服に身を包んだ、指名手配犯アーサー（仮）となった。

『こちらシグナム。指名手配犯、Ｔ・Ｃ・構成員を視認！　交戦に入ります！』

『こちら本部。了解しましたシグナム一尉。ご武運を』

本部との通信が切れる。召喚者アーサー（仮）は「なるほど。少しばかり調査が足りなかったようだ」と嘆息し、整えられた金色の髪を掻きながら周囲をチラリと見回した。我々の周囲では召喚獣を相手に善戦する首都防衛隊員や騎士の姿。アーサー（仮）は魔術師らしいが、召喚獣には神秘の無い魔法でも通用するようだ。

「召喚獣の召喚を解除し、大人しく縛に就け」

「断る。貴様とて投降を促したところで俺が素直に聞くとは思っていないだろうに」

――震天弓――

稲光、轟音と共に奴の左手に創り出されたのは雷光の大弓。奴が弓を構える前に再度「カートリッジロード！」をし、"レヴァンティン"の刀身に蒼炎の混じる炎を纏わせる。すかさず「紫電一閃！」と一足飛びで接近しつつ振り払う。

「面白い。来るがいい！」

奴が私との間の渦を発生させたため地面を蹴って跳躍。背後に降り立つ前に空中で"レヴァンティン"を振るった。奴は雷弓を盾にすることで刃を防いだが、炎はしっかりと当たっている。右肩を燃やす炎をはたいて消そうとしている奴の背後に立ち、「二連！」もう二撃目を振るうのだが、奴は渦の中へと飛び降りることで回避した。

『アギト、来てくれ。ユニゾンで一気に決めたい』

『おう！　指揮を引き継がせてから行くぜ！』

アギトには私の代わりに隊の指揮を任せていたからな。アギトも頼もしくなったものだ。そう感動していると、「新手の召喚獣が召喚され始めました！」と至る所からそんな声が上がる。召喚魔法陣ではなく、奴が飛び込んだ渦と同じようなものが地面に複数出現し、そこから漏れなく巨大な狼、バッファロー、白熊、象、それに何十羽というペンギンが飛び出してきた。

「なんだ・・・！？」

急速に渦が５０ｍほどにまで拡がった。渦に呑まれないように飛行魔法で体を浮かしたところで、「さぁ行くぞ！」と渦の中より奴の声がした。渦から翠色の魔力が噴き出すと共に巨大なハサミが現れ、さらにその全体も這い出てきた。

「サソリ・・・！」

見た目は４５ｍほどの巨大なサソリだが生物とは違うというのは判る。サソリの形をした鎧とでも言うのか、明らかに金属質。いやそれよりも「私はコイツを知っている・・・？」と既視感を覚えたことに胸がざわつく。見たことはないはずなのだが、このサソリが何をするのかがなんとなく判る。

「黒鎧の毒精フォヴニス。そこらで暴れている下等な召喚獣とはわ

けが違うぞ？」

「ああ。そうだろうな」

フォヴニスという名のサソリから放たれている本能的な恐怖感は、ただの召喚獣と両断するには異質過ぎた。"レヴァンティン"の柄をギュッと力強く握りしめ、深呼吸を二度。神秘カートリッジの効果が切れるより前に「討つ！」と、２つのハサミをパカパカと開閉しているフォヴニスに接近を試みる。

「フォヴニス！」

頭部の上に立つ奴が高らかに名を叫ぶと、フォヴニスは両ハサミを伸ばしてきた。あれほど大きなハサミを受けるわけにはいかん。ジグザグに躱しながら接近を続け、フォヴニスの腹の下に潜り込む。隙だらけの腹を裂いてしまえば・・・。と考えたところで頭の中で、ダメだ、という強烈な直感が働いたため、立ち止まることなくそのまま通り抜けようとした。

――卑怯者への断罪の雨――

金属音を立ててフォヴニスの腹の装甲が観音開きで開いていく。装甲の中は空洞で、詰まっているのは翠色の膨大な魔力のみ。炎のように揺らめくその魔力から地面に向かって放たれるのは無数の魔力の針――いや槍だ。槍の雨が、私を貫こうと降り注いできた。

（直感に従って通り抜けて正解だったな。足を止めていれば無事で

は済まなかっただろう）

胴体だけでおよそ４５ｍ、尾を含めればその倍以上の全長を誇るフォヴニス。通り抜けるまでに数発が至近弾として地面に着弾したが、無傷で通り抜けることが出来た。そんな私に頭上から「ほう。大した幸運だな。どんなまじないをしたんだ？」と声を掛けられた。

「まじない？　違うのだろう？　お前は私に当てようとしなかった」

「・・・」

潜り抜ける際、直撃を受ける、と覚悟した射線のものあったのだが結局は外れた。殺すなと連中のリーダー（王と呼んでいるそうだが）から指示を受けている以上、魔術の直撃は狙わないのだろう。だからと言って回避行動を取らずに1発も掠ることなく済むというのもおかしな話だ。まぁ私の速度ゆえに狙いが定まらなかったというのなら仕方がないが。

『シグナムお待たせ！』

本来の小さな姿となっているアギトが私の元へと飛んできた。押し黙ったままの奴はフォヴニスへの指示も出さず、私とアギトの「ユニゾン・イン！」の妨害をしなかった。さらに「シグナム一尉！私たちも手伝います！」と、トリシュとアンジェリエが合流してくれた。

「おっと。少し考え事をしていたら気付かないうちに増えているじ

ゃないか」

「見たところ我々3人を相手に、お前とフォヴニスで勝てると思うか？」

私はルシルの神秘と魔力が装填されたカートリッジを使用している。借り物とはいえ神秘を使っているからこそ判る奴らの神秘の濃度。奴とフォヴニスよりこちらの方が上だと判る。それは奴も同じのようで「確かに。残り1人にも合流されると厄介だな」とアリサの方を見た。アリサもルシルのカートリッジを使っているからな、気にはなるだろう。

――ゼクンデアングリフ――

奴の視線が我々から逸れたその瞬間、アンジェリエが高速移動魔法で奴の元へと跳び、私も続いて宙を蹴って突っ込む。アンジェリエと奴を飛び越え、アンジェリエが「グリッツェンフェッセルン！」と伸長させた"ジークファーネ"の魔力幕で奴を簀巻きように拘束したのを確認。

「紫電一閃！」

そこに私の一撃をお見舞いする。奴は防御も回避もしようとせずに受け入れ、フォヴニスの頭部の上に叩き付けられた。私とアンジェリエもフォヴニスの反撃を警戒しながら頭部に降り立ち、私は"レヴァンティン"の刃先を、アンジェリエは新たに生成した魔力幕をピンッと張って刃化させたハルトファーネを突き付けた。

「はっはっはっは！　面白い、面白いぞ！　久しぶりの戦闘だ！　陽動ばかりでいつも退屈していたんだ！　今日もつまらん陽動役だったんだが、やはり俺・・・私は前線で戦うのが好きだ！　何せ軍人だからな！　フォヴニス！！」

奴に名を呼ばれたフォヴニスが金切声のような不快な音の咆哮を上げ、私とアンジェリエを振り落とすようにその巨体を振るい始めた。振るい落とされる前にアンジェリエと共に空へと上がり、ごろごろと転がり落ちていく奴を見送る中・・・

――天に矛向けし幽玄なる熾天翼――

トリシュの射た１２発の砲撃がフォヴニスに着弾して爆発を起こす。落ちた奴の姿が煙で見えなくなったところで、フォヴニスが翠色の光となって霧散。霧散した光が煙の中へと流れていき、爆発したかのような強烈な発光が起こった。煙はそれで吹き飛び、宙に佇む奴の姿があらわになる。

「翡翠色の甲冑・・・？」

「フォヴニスが甲冑に変身したのか・・・！」

肩甲骨の辺りからはハサミの付いた腕が、腰の辺りからは毒針の尾が生えているという甲冑を着込んだ奴は「さぁもう少し付き合ってもらおうか！」と、開いたハサミを私とアンジェリエに、尾の先端をトリシュに向けた。何をするのかはこれまでの交戦で判っている

ため、すぐに回避行動に移る。

――穿たれし風雅なる翠砲――

案の定放たれたのは砲撃。すでに回避に移っていたため容易く躱せたのだが、それは空に居るからこその容易さ。地上のトリシュは防御を選択しており、シールドを張って砲撃に耐えていた。何故か。周囲への被害をもたらさない為だ。魔術には非殺傷設定などなく、直撃は致死の可能性もある。いくら周囲に防衛隊員が居ないにしても奴の攻撃は"T・C・"のルールに抵触しているだろう。久々の戦闘ということでルールを忘れたのか・・・。

「空牙！」

持続放射していた奴に攻撃をやめさせるため、私はすかさず"レヴァンティン"を振るって魔力刃を放った。奴は尾を振り上げることで魔力刃を迎撃、上空へ弾き飛ばして対処。だがそのおかげで砲撃を止めさせることは出来た。

「陸戦では地上への被害が増えてしまいますね。射線を地上ではなく空へ向けなければ」

防護服の両腕の袖が消し飛んでいるトリシュは地面に突き立てていた"イゾルデ"を手に取り、階段状の足場を展開して空へと駆け上がってきた。奴はそんなトリシュの動きを妨害するような真似をせず、「ハンデがある中での一対多数戦。フッ、燃える」と、笑ったのか肩を揺らした奴の周囲にさらに渦が2つと出現した。

「させん！」「「させない！」」

別の召喚獣を召喚するのだと判る。渦から漏れ出る魔力には神秘を感じるため、すぐに阻止に移る。私は"レヴァンティン"を振るい、奴ではなく渦に向けて「火竜爪！」と炎の斬撃を飛ばす。

「アンジェは召喚者を！」

――翔け抜けし勇猛なる光条――

「了解！」

――シュラーゲンファーネ――

トリシュはもう1つの渦へと砲撃を放った。アンジェリエはデバイス全体を魔力幕で覆った"ジークファーネ"で、召喚が終わるまで佇んだままでいるつもりなのか判らない奴へと殴り掛かった。奴は頭上に掲げた2つのハサミで"ジークファーネ"を受け止め、アンジェリエの腹を殴ろうと両腕を引いたがそれより早く、「でぇい！」と彼女の両足による踏み蹴りが奴の胸を打った。

「む？」

「グリッツェンフェッセルン！」

蹴り飛ばされた奴に向かって、アンジェリエは再び魔力幕を伸長さ

せて相手を拘束するバインドを発動。だが魔力幕は振り回された尾によって粉砕された。私とトリシュの攻撃は渦に直撃し、渦を霧散させることに成功していた。召喚は阻止できた、そう考えていたのだが・・・。

「「「っ！？」」」

この近くではない、離れたところに出現した神秘の魔力を感じた。そちらへと目を向ければ馬の形をした放電する電撃の塊と、その雷馬に追従するように蛇のごとく空中を這う、フォヴニス以上に既視感を覚える黒い炎も向かって来ていた。

『な、なぁシグナム。気の所為かな？　あたし、なんか、あの黒い炎知ってる気がするんだけど・・・』

『偶然だな。私もだ』

フォヴニス以上に見知った感を覚える黒い炎に、私とアギトは気持ちを同じにしていた。

「純雷の皇馬アルトワルドと業火の眷属ゼルファーダ。神秘を失って久しいこの下位次元で召喚できるギリギリのレベルだ。ま、貴様ら相手には十分だ。来い！」

雷馬アルトワルドの背に跨る奴の右手に黒炎ゼルファーダが纏わり付き、漆黒の炎が揺らめく大剣フランベルジュへと変化した。召喚獣を武装化させて装備する召喚魔導師、いや召喚魔術師など聞いた

ことがない。いやまぁ相手は魔術全盛時代の子孫なのだから、それより生まれの遅い私が聞いたことがないのは当たり前なのだが。

「＜Πⅲ３　＃＞！」

アルトワルドが生物とは思えない異質な鳴き声を発すると同時に駆け出した。狙いは魔法陣を足場として佇んでいるトリシュ。空戦の出来ないトリシュに向かわせるわけにはいかん。助けに入るために私とアンジェリエは宙を蹴り、トリシュと奴の間に割り込もうとする。

『アギト！』

『おう！　炎熱加速！！』

「この・・・！」

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

それより早くトリシュは"イゾルデ"を構え、高速魔力矢を射た。高速で奔る魔力矢とアルトワルドを駆る奴が真正面から激突。奴はフランベルジュの腹を盾とすることで矢を防ぎ、そして私とアンジェリエが立ち塞がるとアルトワルドの背から飛び立った。奴は我々の頭上を飛び越え、アルトワルドだけがそのまま突っ込んできた。

「逃がさん！」

――紫電一閃――

「止まりなさい！」

――シュテルケンシュラーク――

私は奴へ、アンジェリエはアルトワルドへとデバイスを振るった。私の一撃は奴の尾針で止められたが、力ずくで弾き飛ばすことで奴の体勢を崩すことには成功した。アルトワルドは馬の形を破棄して雷撃となることで、アンジェリエの攻撃を回避。さらに私の横を素通り。狙いはやはりトリシュのままだった。トリシュは自ら魔法陣から後ろ向きに飛び降り、雷撃となっているアルトワルドの突進を回避。通り過ぎたアルトワルドは奴の元に戻ってから再び馬の姿へと成った。

「私が空戦が出来ないと考えてのターゲットですか？」

地面に激突する前に新たな足場を展開して降り立ったトリシュが右手の指に４本の魔力矢を挟み込み、"イゾルデ"の魔力弦に番えながら奴に問う。アルトワルドに跨り直した奴は「カノンという魔術師を知っているか？」と聞いてきた。当然知らない我々は無言だ。

「魔術師にとって恐ろしいのは遠距離特化、固定砲台の魔術師なのだ。カノンという小娘は数km先、十数km先、果てには転移能力を使って砲撃を他世界にまで放ってくる悪魔のような魔術師だった。そこまでの恐ろしい砲台はなかなか居ないが厄介であることには変わりない。それゆえに狙えるのならば真っ先に墜とすのが常識だ」

――フォックスバット・ラン――

「そう。なら、今度はあたしも狙ってみなさい」

「・・・」

まばたきの間で奴の背後にまで跳んで来たアリサは、奇襲など無意味とでも言うように焦ることなくハサミで迎撃に入る奴へと"フレイムアイズ"を振るう。"フレイムアイズ"の現形態はヴァラーフォームで、長い銃身の両側に反りの無い直刀が2つと付く1m半ほどの大剣と、1mほどのソードブレイカーというもので、柄頭から伸びる魔力ケーブルが二剣を繋いでいる。

「バーニングスラッシュ！」

迎撃として迫る2つのハサミを受けて捌いたのは右手に持つ大剣で、左手の炎を纏うソードブレイカーで奴に斬りかかる。それを迎撃するのはアルトワルドの後ろ脚による蹴りだ。アリサは攻撃を中断し、ソードブレイカーを盾として使い防いだが、「っとと！」大きく蹴り飛ばされてしまった。

「いいだろう！　徹底的に戦おうではな――・・・なに？」

フランベルジュを振り上げ、今まさにアルトワルドを走らせようとしていた奴の様子が変わる。そう、まるで思念通話でも入ったかのような・・・。それが正しいことを示すかのように奴の戦意がみる

みるうちに薄くなっていくのが判り、私は「逃がすな！　退くつもりだぞ！」と声を上げ、"レヴァンティン"を振り上げつつ突進する。

「やってくれたな騎士！　私たちが狙っていた標的が保管庫に無いと知らせが入ったぞ！」

「やっぱり別働隊が居たのね！」

「召喚獣だけでなく召喚者であるあなたも陽動に参加する、というのが証明されたわけですね！」

『へっ！　ミッド地上本部をあんましなめんなよ！』

「首都防衛隊として、地上本部に混乱をもたらしたあんたを逮捕するわ！」

ミッドまでの地上本部すべてが奴の陽動に嵌り、ロストロギアなどの物品の奪取を許している。陽動の手段が一切変わらないのなら、対抗策も立てやすいというもの。我々の陽動に成功し、奪取を容易く行えると奴らは笑っていたのだろうが、それが失敗して今はどんな気持ちなのだろうな。

「対策を立てられ易いというのは判っていたとも。悔しくなんかないぞ。・・・さて、私の本心に従うのならまだ戦っていたいが、これで退散させてもらう！」

「逃がさないってば！」

――イジェクティブ・ファイア――

「せめて召喚者だけでも・・・！」

――翔け抜けし勇猛なる光条――

アリサとトリシュが砲撃を放ったが、アルトワルドの高機動には対応できずに掠ることもなかった。召喚者である奴が逃走したことで、周囲の召喚獣の姿も薄くなり、そして消滅した。

Ｓａｇａ１８本局決戦前～Ｉｎｔｅｒｖａｌ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「ごめんね、ホントにごめんね」

「ううん、気にしないでシャルちゃん」

「そうやよ。困ったときは助け合いや」

「うん。私たちはチーム海鳴でしょ？　大切な親友が困ってるんだもん」

「力を貸すのは当然だよ」

"Ｔ・Ｃ・"の襲撃に備えて集まってくれたなのは達に頭を下げてお礼を言った。わたしたち特務零課の専属任務である"Ｔ・Ｃ・"の逮捕は、依然として成しえてない。その不甲斐なさと、ミッドの地上本部まで襲撃されたことを許した無力さと、なのは達の温かい言葉でもう泣いちゃいそう。

「アリサとシグナムも。有給取ってまで応援に来てくれて本当に感謝だよ」

「あんた達が困ってるからっていうのもあるけど、あたし個人でも逃がした獲物を捕まえなきゃ気が済まないのよ」

「ああ。召喚者、召喚王アーサーの生まれ変わりだったか？　奴との決着はまだついていない」

「リベンジの機会があるってんなら有給だって取ってやるわよ」

すべての地上本部の陽動を行ったアーサー（仮）に対して敵意をむき出しにするアリサとシグナム。トリシュとアンジェがこの場に来られないのは残念だけど、あの２人のためにもここ本局で決着をつけてやる。

「早速チーム分けをします！　わたしたち特騎隊が６人に分かれて、なのは達も分かれてそれぞれの騎士に付いてもらう。なのは達の魔導師としての質から見て分けさせてもらった。まず、なのは。わたしとペアを組んでもらう」

「うんっ、喜んで！」

近接特化のわたしと射砲撃特化のなのは。こんな大事な時だって言うのになのはと組めるってことが楽しくてしょうがない。ＰＴ事件で、フェイトとステアを相手になのはと２人で戦ったことを思い返す。あとでアリサとすずかも加入して、ユーノとセレネとエオスの５人で初代チーム海鳴を作ったんだ。懐かしいな～。

「で、ルシルとアイリとはやてとアインスの４人。はやて、アインス。うちのルシルとアイリをどうぞよろしく」

「あはは！　うん、任された！　ルシル君、アインス、アイリ、頑張ろな！」

「はい！」「うん！」

「ああ。よろしく頼むよ」

はやてがルシルと組めると判って満面の笑みを浮かべた。フッケバイン事件末期、"Ｔ・Ｃ・"の活動が著しく低下して暇してたわたしたち特騎隊が、はやてたち特務六課と共闘して連中を追い詰めたことがあった。その時もわたしはルシルをはやての直掩に回して、少しでも一緒に過ごせるようにフォローした。長い間っていうか、今もだけどわたしの不甲斐なさでルシルを独り占めしてるしね。公私混同してるけど許してほしい。恋する乙女はいろいろと大変なのだ。

「次は、セレスとミヤビとヴィータとリイン」

「あたしらはお前らとか。よろしくな」

「よろしくお願いします、セレスさん！」

「２人とも、よろしく～♪」

「はい！　よろしくお願いします！」

ヴィータとリインのユニゾン形態とミヤビは近接特化で、セレスは

中遠距離はもちろん広域攻撃もこなせるオールラウンダー。セレスとミヤビとヴィータ、お互いをしっかりフォロー出来る布陣だし、幹部だってきっと目じゃないはずだ。

「次はルミナとフェイトとアリシアとすずか。人数が他より多いのは、レオンを相手にしてもらいたいからなの」

「私の相手はアイツか。いいよ、望むところ。フェイト、アリシア、すずか。レオンは正直言って強すぎるけど、それでも私は、私たちは・・・」

「勝たないとね」

「うん。負けるつもりはないよ」

「私も全力でサポートするから、大丈夫だよルミナ」

「ありがとう、みんな」

ルミナはルシルお手製神器のおかげでカートリッジが使えなくても魔術を扱えるようになってるから戦力になるし、近接戦だとアインスより強い。そこに高機動力のフェイトと、中遠距離に優れたアリシアと、ブースト魔法も扱えるすずかの布陣だ。

「次はクラリスとアリサとシグナムとアギト」

「騎士3人か。うん、やりやすい」

「厳密に言えばあたしは魔導師だけど、でもこの3人で負けることはないでしょうね」

「あとは相手がアーサーであることを祈るのみだ」

クラリスは自前の魔術、アリサとシグナムはわたしやルシルのカートリッジ。3人とも近接特化だけど、アリサはミッド式だから中遠距離系にも強い。クラリスにはナデシコもいるし、シグナムもアギトとのユニゾンで強化されるし、問題なし。

「以上が各チームの組み合わせね。現在確認されている幹部は、エグリゴリのガーデンベルグ。シャルロッテ様やルシルのオリジナル、さらにはアンジェやクラリスの前世が生きてた時代の魔術師の生まれ変わり、レオン、プリムス、フォード、アーサーの5人」

「レオンとプリムスとフォードは、当時では四王と呼ばれていた。残る王の名はアグスティン・プレリュード・マラス・ウルダンガリン・デ・ヨツンヘイム。騎士フィレスやセレスの先祖だな。おそらくこの男の生まれ変わりもいるだろう。強大な氷雪系――氷結の魔術を使う。アリサとシグナムは、アーサーではなくアグスティンを相手にしてもらいたいんだが・・・」

ルシルがそう言うと、アリサは「まっ、仕方ないわね」って肩を竦めて、シグナムは「私情を優先するつもりはない。気にするな」ってルシルに微笑みかけた。ルシルが「感謝する」って小さく頭を下げたのを見届けてから、どのチームがどの幹部とぶつかるかを伝え

た。
"T・C・"が本局の保管室を目標に襲撃してくるのは確実だ。その時、どういった誘導をするのか、誰が保管室に現れるのかはまだ判らない。ただ、ミッドでは召喚者であるアーサー（仮）が召喚獣を武装化させて直接戦闘を仕掛けて来たって話だし、もう"T・C・"もなりふり構わってないみたいだから、本局襲撃には幹部や他のメンバーが直接やって来るはず。

「シャル。私は？　私だけ単独？」

「セラティナは今回は不参加ね。セラティナには各戦場の結界を担当してもらう。幹部やメンバー連中を本局内の各トレーニングルームに転送させて、そこで待ち構えてるわたし達で迎え撃つ」

「T・C・の幹部をまとめて相手にするようなことだけは絶対にしてはいけない。俺たちと奴らが1つの戦場で総力戦となれば、俺たちが不利になる」

特騎隊のわたしたち以外のみんながルシルの言葉に息を呑んだ。人数的には圧倒的に上のわたし達が揃っていても"T・C・"の幹部には勝てないっていう事実に。向こうには創世結界っていうものがあるし、プリムス（仮）の幻術は恐ろしい。レオン（仮）だってわたしたち特騎隊が束になっても勝てなかった。

「（信じよう。ルミナ達を。それに、他の幹部たちをサクッと倒して合流すればきっと好転するんだから）んで、ルシルとはやてとアインスにはプリムスをお願いしたい。はやてとルシルとアインスは

いろんな効果を持った数多くの魔法・魔術を使えるから、プリムス相手にも断然不利なんてことにはならないと、ルシルと一緒に考えて決めた」

「そういうわけだ。はやて、アインス。力を貸してくれ」

「さっきシャルちゃんにも言うたように困ったときはお互い様や、ルシル君」

「全力を以てお前たちの力になるよ」

「セレスとミヤビとヴィータとリインには、フォードの相手をしてもらう」

「フォードの創世結界に関してはセレスの氷結があればなんとかなるだろうし、あとは破壊力に優れたヴィータとミヤビで本体を討てばいい」

「おっしゃ！　以前お前らに見せてもらった戦闘データ、待機してる間にもう1回観させてもらうわ！」

「リインも、しっかり予習してヴィータちゃんのサポートをするですよ！」

「わ、私も精いっぱい頑張って、絶対に勝ちます！」

「今度こそ徹底的に潰してやる」

ルシルの炎熱系の魔術でも耐えたフォード（仮）の植物生成・操作も、セレスの凍結なら通用してた。フォード（仮）にとっての天敵はルシルじゃなくて、きっとセレスの方だ。

「そして最後に、わたしとなのはでアーサーを討つ」

「あれ？　ガーデンベルグはどうするの？」

「ガーデンベルグと初遭遇した際、レオンが、ガーデンベルグには戦闘の役割はない、ようなことを言っていた。ガーデンベルグがＴ・Ｃ・内でどういった役割なのかは不明だが、前線に出てくるのは想定外のことらしい。だからと言って今回も出てこないという確証はないが、とりあえず度外視でいい。もし現れたら俺が何とかする。もちろんはやてとアインスに迷惑を掛けないようにする」

「そこはまぁええんやけど・・・。ルシル君、ユルソーンとかゆう神器は破壊したらアカンよ？　ユルソーンが壊れるとルシル君は死んでしまうんやろ？」

はやての言葉になのは達もルシルに視線を移した。ルシルがセインテストの宿命を追える条件はすでにチーム海鳴内に知れ渡ってる。心配そうなみんなの視線に「大丈夫だよ、はやて。ユルソーンは破壊せずに保管。リアンシェルトを救ったら、ちゃんとみんなに挨拶をしてから逝くよ」って微笑んだ。

（ほらぁ、なのは達の表情が曇ったぁ）

ルシルの死がもうすぐそこまで迫って来てるって判ると、どうしたって気分が落ち込むんだよ。ルシルも「あ」って声を出して、困ったようにわたしに視線を送ってきた。ここで振られてもわたしたって困るんだけど、「はいはい。落ち込むのは後！」って無理やり空気を換える。

「アインス。わたし達とＴ・Ｃ・の交戦データは観てもらってる？」

「もちろんだ。プリムスという幻術使いについてもしっかり観ておいた。ルシルが居なくとも私と主はやてのユニゾン形態で何とかなるだろう。あの娘に隠し玉が無ければ、だが」

「プリムスの真技は創世結界テアートロ・エンガニョソ。結界内に取り込んだ対象者の記憶を取り込み、対象者が大切にしている人たちの幻影を展開し、惨たらしい目に遭わせる光景を見せつけ続けて精神を崩壊させる、というものだ」

「えげつねぇ真似しやがるなソイツ・・・」

「ルシル。当時はどうやって攻略していたのだ？」

「手っ取り早いのは創世結界をぶつけることだな。かつてのプリムスは、カノンという魔術師の創世結界で自身の創世結界を上書きされて戦死した。アーサーにも創世結界があるが、あれはシェフィリスという魔術師の広域凍結によって結界内を永久凍土にされたことで崩壊した」

ルシルが答えると、質問者のシグナムが「カノン・・・」って唸って、アリサも「そう言えばアーサーが悪魔のような固定砲台って言ってたわね」って頷いた。聞けばミッドでアーサー（仮）と交戦した時に、ソイツからカノンの名前が出たみたい。まぁ生まれ変わりってことで前世の記憶を持ってるっていうのはもう割と珍しくないような気がしてスルーだ。

「プリムスの創世結界は確かに強大な魔術だが、発動は即ち対象の死だからまず使用されない。アーサーの創世結界は獣界。召喚獣の軍勢を一斉召喚する結界だな。これも広域系で殲滅する方が早い。はやてとアインスのユニゾン状態ならそれほど難しくない相手だと思う」

「ん。頑張ろなアインス」

「はい。我が主！」

「アーサーって人も創世結界を使うんだねシャルちゃん」

「うん。でも大丈夫。わたしはなのはの盾役としての前衛だから、なのはには指1本として触れさせない。なのはは気持ちの良い射砲撃をぶっ放してね」

わたしもデスクワークの日々の中でシャルロッテ様の創世結界、剣（ヘルシャー・シュロス）神の星天城を単独で発動できるようにはしておいた。まぁルシルがリアンシェルトやガーデンベルグのために貯めてる魔力結晶を1個

貰うことになっちゃったけど。シャルロッテ様が表に出てきてくれたら、もっと楽に発動できると思うんだけど・・・。

（ヘルシャー・シュロスの術式なんかは夢の中で教えてくれたけど・・・。シャルロッテ様、もう表に出てきださらないのかな・・・？）

夢で教えてくれた時は言葉じゃなくて、ドーン！と一気に答えを見せつけてきたような感じだったし。それで理解できるわたしもどうかしてると思うけどさ。ちょっとはお顔を合わせたいし、お話もしたい。もうこのままコミュニケーションを取ることがないのかな・・・。

「で、最後にシャマルとザフィーラ、それにクララ先輩は、襲撃の間出入りが規制される保管室へ続く通路で待機を。規制中の通路に入ってくるのは敵確定だから、問答無用で拘束魔法の発動および転移スキルの使用を許可する」

シャマル達には、今回の本局襲撃における最初の戦場になる保管室前通路で待機してもらい、わたし達が待ち構えてる各戦場へと"T・C・"メンバーや幹部を転送する役目を務めてもらうことになる。

「かなり危険な仕事だから特騎隊の中から誰かを入れたかったんだけど・・・」

プリムス（仮）、レオン（仮）、フォード（仮）、アーサー（仮）に加えて他メンバーが一気に勢ぞろいで押しかけてくる可能性があることくらい判ってる。加えて幹部だってわざわざ1対多数戦闘に

強制移行なんてされたくないだろうから、戦場へ送る役のクララ先輩の転移スキルから逃れようとするはず。

「（そのための捕縛担当のシャマルと護衛担当のザフィーラっていう配置なんだけど、やっぱり無茶だよね・・・）あのさ」

「シャルちゃん。私たちは大丈夫よ。だから不安にならないでほしいの」

「シャマル先生の言う通り。信じなさいって」

シャマルとクララ先輩にそう言われてはわたしもうじうじしてられない。だから「任せたよ！」って全幅の信頼を載せて伝えた。

「了解！」

「了解した」

「オッケー！」

「大体こんなところかな。T・C・がいつ襲撃を仕掛けて来るかは判らないけど、そう遠くはないと思う。ミッド地上本部から1日は経過してるからね。そういうわけで、各チームは指定したトレーニングルームで待機を」

わたしの指示に特騎隊となのは達が「了解！」って応じた。

・―・―・―・―・―・

石造りの大きな屋敷のある一室。そこに彼ら"T・C・"の幹部と称されているメンバーが揃っていた。

「で、次はいよいよ本局か？」

セミロングの緑色の髪はオールバック。ダークブルーの瞳。月桂冠を被り、銀色のモーニングコートとスラックス、アスコットタイ、革靴といった姿の青年フォード・テルスター・スリュムヘイム。

「現代の魔導組織の中枢への襲撃。心が躍りますわね」

レモン色の長い髪はワンサイドアップ。オレンジ色の瞳はツリ目。ボール・ガウン・ドレス、オペラグローブ、ストラップシューズといった姿の少女プリムス・バラクーダ・ウトガルド。

「うむ。それゆえに防衛戦力も整っておるだろう。早く特騎隊と拳を交えたいものだ」

きっちりとした七三分けの黒髪、柔和な赤い瞳。首の下から膝上までを覆う黒いタイツの上にキトン、何も履かない素足といった格好の老齢男性レオン・レオ・ヴァナヘイム。

「自分も、シグナム、アリサ、トリシュタン、アンジェリエという騎士と再戦したいですね」

整えられた金色の短髪、キツ目の青い瞳。赤いジャケット、乗馬ズボンの軍服スタイルの壮年の男性アーサー・ブラック・セダン。

「トリシュタンとアンジェリエは別組織の騎士だ。再戦は諦めた方がいいぞ」

銀色の短髪、アップルグリーン色の瞳。立て襟の膝丈の長衣、スラックス、ブーツといった格好の青年ガーデンベルグ。

そして、幹部たちの前に鎮座する玉座に腰掛ける人影。マントを頭から被って全身をすっぽり覆っていることで性別も外見も不明。ただ、ガーデンベルグ達が立っている中で玉座に腰掛けているところを考えれば、この者が"T・C・"のリーダーであることは間違いないだろう。

さらに明かりの弱い部屋の隅には7つの人影がある。1本の足長の丸テーブルを囲んでわいわいと楽しそうにお茶をしている。最も小さいのは10歳に満たないほどの幼女で、他は10代後半ほどの少女が1人、残り5人は20代半ばの女性だ。

「さて。王に代わり、俺からお前たちに渡すものがある」

ガーデンベルグがスッと左手を上げると、カラカラと音を立ててキャスター付きの長テーブルがひとりでにやって来た。いや背が低くて見えなかったが、二足歩行の猫が押していた。猫の名前はエルフテ。元最後の大隊の融合騎だ。

「「「これは・・・！」」」

テーブルの上に置かれた物を見たフォード、プリムス、レオンが驚きを見せた。その様子にガーデンベルグは「お前たちが使っていた神器だ」と笑みを漏らした。フォードは２ｍほどのポールを手に取り、「はは。俺の神器だ。ネメストリヌスだ」と目を輝かせた。彼はガーデンベルグ達から少し離れ、扱い方を思い出すように"ネメストリヌス"をバトンのようにクルクルと回し始めた。

「美しさはあの頃のままですわね。こうして再び手に取ることが出来てわたくしは幸せですわ。我が神器、パウォル・シュンボルム」

プリムスが手に取ったのは美しい細工の施されたティアラ、"パウォル・シュンボルム"。彼女はソレを自らの頭に乗せ、「この重み。とても懐かしいですわ♪」と満面の笑みを浮かべた。

「おお！　やはり我が神器、ユーピテル・アーラ！」

レオンはテーブルから１つの輪を手に取り、一般的な女性の腰以上に太い右上腕に装着。

「メフィーティス・アニマ！」

さらにもう１つの輪を同じように右上腕に装着。

「パウェンティア・ダートゥム！」

さらにもう１つの輪を、今度は左上腕に装着。

「アクィロー・ペッリス！」

さらにもう1つの輪を同じように左上腕に装着。

「ヘルクレース・コル！」

さらに輪を今度は額に装着。

「セークーリタース・ノードゥス！」

残る最後の輪を首に装着したレオンは、「はっはっは！　武勇王レオン！　正真正銘の復活だ！」と大きく肩を揺らして大笑いした。ただでさえ強力な実力者だったレオンが、神器による完全武装を済ませた。

「さて。これで準備は万端だな。ではこれより時空管理局本局への襲撃作戦を開始する」

自分たちの手元に戻って来た神器に喜んでいたレオン、フォード、プリムスは、ガーデンベルグのその言葉で彼に向き直り、「了解」と返事をした。部屋の隅でお茶をしていた複数人の女性たちがそんな彼らの様子を眺めていた。

「あーあ。ボクも早く戦いたいな～」

「私もすぐにでも戦いたいでありますな～」

「私もです」

「揃いも揃って戦闘狂。私は嫌ですわよ？」

「今回は諦めよ。我らの出番は今ではなく次だ」

「・・・私は戦うことなくすぐにお話がしたいです。けど、ダメですよね・・・」

「あ、う、うむ。残念だが諦めるがよい」

「そう・・・ですよね。ごめんなさい。戦ってからじゃないと、お話しちゃダメなんですよね」

「別にいいんじゃない？　足止めって仕事をきちんとやってさえいれば～」

「そうですね～。私も、戦うよりはお話したいですよ」

幹部たちに聞こえないよう、彼女たちは今後の自分たちの任務に思いを馳せていた。

Ｓａｇａ１９－Ａ本局襲撃～５ｔｈ　ｗａｖｅ～

†††Ｓｉｄｅシャマル†††

対"Ｔ・Ｃ・"に備えてシャルちゃんが組んだ作戦を実行した私たちチーム海鳴と特騎隊。私とザフィーラ、それに特騎隊のクララちゃんは、"Ｔ・Ｃ・"の目的である保管室へ続く通路にて待機中。

「ザフィーラ。今日のヴォルフ・ヤークトの調子はどう？」

「ああ。さすが第零技術部のデバイスだ。試作型とは言えぬほどきちんと機能している。おそらくアインスのナハト・リヒトも問題なく稼働しているだろう」

「そう。・・・間に合って良かったわね。そのデバイスがあれば、あなたやアインスも魔法に神秘を付加することが出来るもの」

ザフィーラの両腕にはいつものガントレットじゃなくて、カートリッジシステムが搭載されたガントレット、"ヴォルフ・ヤークト"を装着されている。スバルやギンガのリボルバーナックルからスピナーを取り除いたようなデザインで、純粋な格闘戦を行うために余計な機能は付けられていない。

「ああ。役立たずでは終わりたくはないからな」

「そうね。ルシル君の宿敵が居る組織だもの。家族として協力して

あげたかったわずっと」

オーディンさんも、ルシル君もずっと追いかけてきていた"エグリゴリ"のガーデンベルグ。リアンシェルトを救い、ガーデンベルグを救い、最後に"ユルソーン"っていう神器を破壊すればルシル君は、セインテストの宿願から解放される。けどそれはルシル君の死を意味する。はやてちゃんの恋を応援はしたい。家族としてルシル君を喪いたくない。それは確か。だけどルシル君の死という運命を変えられないのなら、私は最後まで関わりたい。私たちの知らないところで旅立つことだけはさせないし、させたくなかった。

「そうだな。エグリゴリの救済は主オーディンの願いでもある。主オーディンと共に果たせなかったが、今度こそは必ず・・・」

ザフィーラとそんなことを話していると、「っ！？」ゾクッと背筋が震えた。クララちゃんも「ヤバい！　来るよ！」と身構えた。ザフィーラが私とクララちゃんを庇うように前に躍り出て、「カートリッジロード！」を行った。私も"クラールヴィント"からペンデュラムを伸ばして待機。

――シャマル。旅の鏡で連中に奇襲を掛けてみてほしいの。通用するなら一気に戦力削れると思う。あ、でもダメだったとして大丈夫！

わたし達は勝つから！――

シャルちゃんの期待に応えたい。はやてちゃん達の負担が少しでも減らすことが出来れば、その分"T・C・"の壊滅が容易になる。私だって夜天の守護騎士の1人。役立たずではいたくないもの。決

意を新たにグッと身構えて、プシュッとスライドドアが左右に分かれた。

『こちら保管室前通路のシャマル！　幹部を視認！　レオン！　フォード！　アーサー！　以上！』

本作戦に参加してるみんなに全体思念通話で報告する。ガーデンベルグが現れないかもしれないというのは想定内。ただ、プリムスが居ないのは気になるわ。

『了解！　クララ先輩、手はず通りに！』

『了解！』

思念通話を切り、私たちの前に立つレオンと、その巨体ゆえに横に並べず彼の後ろに立つフォードとアーサーを睨みつける。3人は少し周囲を見回した後、フォードが「お前らだけか？」と不機嫌そうに言った。

「そう委縮させるでないわ、フォード陛下。主力はどこかに控えていると見える。そうだな。我々を分散させて各個撃破と言ったところか」

「手段は転送の魔法でしょうね。レオン陛下、フォード陛下。どうします？」

「決まってんだろアーサー」

「うむ。決まっておる！」

「案内せよ！」「案内しやがれ！」

レオンとフォードは両手をだらりと下げて無抵抗を装う。続いてアーサーも「誰が俺たちを転送するんだ？　早くしてくれ」なんて言ってくる始末。力を抜いて突っ立っているその様から本当に交戦する気はないみたいだけど、『どうする？』って聞かざるを得ないほどに私は困惑している。

『罠とも限らんが・・・。我とクララで接近する。シャマルは隙を見て旅の鏡を使え』

『『了解』』

ザフィーラはクララちゃんの盾となるように位置取りで、警戒しながらレオン達に接近する。ザフィーラも人間形態時の身長は高い方だけど、レオンはさらに高い。だからザフィーラの陰で魔法なんて発動できない。でも視線がザフィーラとクララちゃんに向いているのは確か。あとはタイミングね。

「私があなた達を主力の待つ場所に転送する」

「うむ。では早速転送してもらおうか。フォード陛下、アーサー。誰が相手になろうが恨みっこはなしだ」

「ああ」「はい」

「なら目を閉じてくれる？　あ、攻撃魔法も捕縛系の魔法も使わないから安心していい」

クララちゃんの言葉は嘘じゃないわ。私の旅の鏡は転送系だから、攻撃にも捕縛にも該当しない。でもそんなことを言われて疑うなっていうのも無理があるわよね。チラッと様子を見ると彼らは疑うこともなく、ううん、疑う必要すらなく仕掛けられても問題ないって風に堂々としていた。

「別に構わんぞ？　戦争に正々堂々などというルールは無いからな」

「ただし覚悟はしろよ？　そっちが仕掛けないから俺たちも仕掛けない。攻撃だろうが捕縛だろうが、その他の魔法も敵対行為として認識し、反撃する」

フォードの放つ殺気に私とクララちゃんは「ぅく・・・！」思わず身を引いてしまった。そんな私たちを見てレオンが「よさないかフォード陛下」と諌め、フォードは小さく嘆息してから殺気を収めた。そんな2人にクララちゃんが「転送もダメなわけ？」ってフォードを睨みつけた。

「は？」

「もうよいフォード陛下。このようのなつまらん問答は無用。構わんよ、攻撃だろうと捕縛だろうと、他の種類のものであろうと。そ

のすべてを真っ向から跳ね返すのみ。ではフォード陛下。貴公が先に飛ばされよ」

「はあ！？　高説垂れておいて尻込みですかレオン陛下！？」

「違うわい！　我らの転移とはどこが違うのか見てみたいだけだ」

「・・・、まぁいいや。お前が俺たちを飛ばすんだろ？　ならさっさとしろ、のろま」

急かされて少しムッとしているクララちゃんは「ぶっ倒れされてくれば？」とフォードに吐き捨てて、そっと右手で触れた。転移スキルの発動されてフォードの姿が一瞬で消失。レオンは「普通だな」と目に見えてしょんぼり。

「それで？　次は誰が死地に行くの？」

「アーサー」

「判りました。次は俺だ。頼む」

アーサーがクララちゃんの前にまで来て、目を閉じて軽く俯いた。それを確認してクララちゃんがアーサーに触れるかどうかというところで、私は転送魔法・旅の鏡を発動。狙いは幹部の中で最強らしいレオン。彼の注意は今はアーサーに向けられているわ。

「む？」

アーサーが転送された瞬間を狙っての奇襲。レオンは自身の胸から伸びる私の手を見て、ほんの一瞬だけ目を見開いたけどすぐに穏やかなものに戻って、「面白いな。だが、なんのための魔法だ？」と首を傾げた。

「鋼の軛！」

そこにザフィーラの拘束杭が床、左右の壁、天井の４面から十数本と一斉に突き出された。普段の使い方である突き刺しての拘束ではなく、掠るようなギリギリの軌道でレオンの体のすぐ側を通過させ、お一人様の牢屋とした。どれだけ時間が稼げるか判らないけど、この隙にリンカーコアを見つけないと。レオンのリンカーコアを手に入れるべく右手を旅の鏡に出し入れを繰り返す。

（無い・・・無い！　どこにも無い！　うそ・・・！　リンカーコアがどこにも無い！？）

レオンは恐ろしいほどに巨体だから、手の平サイズのリンカーコアを探し出すのは難しいと思っていたわ。でも違う。どこにも無い。リンカーコアがレオンの体内に存在していない。それまで大人しく拘束され、私の旅の鏡を受け入れていたレオンが「もうよいか？痛みは無いとはいえ腹を探られるのはあまり気分が良くはない」と言って、軽く身じろぎをした。たったそれだけで魔術化しているザフィーラの鋼の軛が折れた。

「おのれ・・・！」

――狼王の鋼鎧・剛――

「鉄破震砕打！」

ザフィーラの全身を覆う薄い魔力膜。さらに両腕を覆う魔力が膨れ上がって、その状態での拳打を繰り出した。初撃の右拳はレオンの鳩尾付近に直撃したけど、デバイスと肉がぶつかった音とは思えない音――金属の衝突音が通路に響く。レオンは直立不動のまま、「ふん」と鼻を鳴らした。

「っ！　おおおおおおおおおおおおおお！！！！」

ザフィーラが連続拳打を繰り出し始める。そのどれもが普通の魔導師相手なら必倒の一撃にも拘わらず、レオンはその場から1歩も後退することなく、ザフィーラの猛攻を涼しい顔で受け続けた。その間にも私はリンカーコアを探すために右手を忙しなく動かし続けるのだけど・・・。

「ダメ！　やっぱりリンカーコアがどこにも無いわ！　ごめんなさい！」

どうやっても探し当てることが出来ず、私はそう叫んでしまった。レオンが「当然であろう」なんて言いながら私の体より太い右腕を、虫を払うように高速で振るった。ザフィーラは咄嗟に両腕を掲げて防御したけど、「ぅぐ！」弾き飛ばされてしまった。

「牙獣・・・！」

でもザフィーラは壁に叩き付けられる前にくるりと体の向きを変えて、保管室へ続くドアに着地。

「走破！！」

そしてドアを蹴って、レオンへと跳び蹴り姿勢での突進を繰り出した。レオンはザフィーラの蹴りの直撃を受けた瞬間、「むんっ！」大きく胸を張って、ザフィーラを弾き返した。魔法を魔術化できるのはこの場だとザフィーラだけ。私とクララちゃんは戦力にならないし、私に限っては旅の鏡も不発で終わったことで一番の役立たずだわ。

「もうよいだろう？　早く我を主力の元に転送するがよい。そこの男では我に傷1つ付けることも出来ぬ」

「それは試してみなくては判らんぞ！」

ザフィーラが神秘カートリッジを3発連続ロード。床を蹴って、「崩牙！」と突進してから繰り出すのは、爪で薙ぐかのような魔力を発生させる左フック。レオンは右手の甲でその一撃を受けた。ザフィーラはすかさず右フックを繰り出すけど、レオンは左手の甲でそれを防御。

「おおおおおおお！！」

共に両腕が塞がれている中、ザフィーラはレオンの腹と胸と顔面を順に蹴って駆け上がり、爪状の魔力を纏う両手を振り下ろした。さすがに鼻を踏まれたことでよろめいていたレオンはその一撃を受けて「むごっ！？」と呻き声を上げて、どすん！と両膝を突いた。

「そのまま沈め！！」

――龍牙――

内から外へと左腕を振るい、腕に纏う巨大な魔力の爪でレオンを薙ぎ払ったザフィーラ。直撃を受けたレオンが殴り飛ばされて、入り口の監視室へ続くドアに叩き付けられた。そこにザフィーラの飛び蹴りである「牙獣走破！」が、ドアにもたれかかったままのレオンへ迫る。

――パトリオタ――

とここで、レオンの全身が赤い魔力で覆われたかと思えば、「ぐおっ！？」と呻き声を上げてザフィーラが吹き飛ばされて、「きゃあ！」悲鳴を上げる私とクララちゃんの間を通り過ぎ、保管室に続くドアと激突。勢いはそれで収まらずドアを破壊して、トランスポートを通り過ぎて奥の壁に激突した。

「む？　殺さぬように精いっぱい手加減をしたのだが思いのほか吹っ飛んだな」

「ザフィーラ！」

壁にもたれかかって座り込んでいるザフィーラの元へ駆け出そうとした私だったけど、「我はともかく、貴様らは殺す気で来んと勝てんぞ？」とレオンが首をコキコキ鳴らした。私はその言葉を背に受けながら「ザフィーラ！」の元へ。意識はあるようで、「シャマル。回復を頼む」と言ったから、私は頷き返して「癒しの風よ！」と治癒魔法を発動した。

「殺す気でって。私たち管理局員は公務員なんだから、人は殺せない。そもそも、いくら相手が凶悪犯でも殺すわけないでしょ？　あなたも、大人しく捕まってしっかり罪を償いなよ。それが人ってものでしょうが」

「あぁ、なるほど。そこから認識の齟齬が起きているのか。・・・お前たちは我らの正体についてどういう風に考えているのだ？」

「・・・大昔の魔術師の生まれ変わりでしょ？　前世や先祖の記憶と魔術を受け継いだ現代に生きる人の人格を、過去の記憶であるあなた達が奥底に追いやっている。で、こうして悪さをしている。違う？」

「そういうことになっていたのか。我らを普通の人間として見ているのだな。ふむふむ。ならば・・・」

クララちゃんの話を聞いたレオンは、自分たちが人間じゃないっていう風なことを言い出した。少し考えに耽った後、何を思ったのか全身を覆っていた魔力膜を解除。さらにいきなり壁を殴って大きく

破損させた。どんな質量兵器でも魔法でも破損できないほどに強固に作られた壁を、ただの力のみで破壊したことに戦慄する。

「うそでしょ・・・。純粋な腕力のみで破壊した・・・」

その異常にクララちゃんも後ろに下がった。そんなドン引きしている私たちの様子なんて気に留めることもなく、レオンはナイフのように鋭く剥がれた壁の破片の1つを引き千切ると、「まぁ実際に見てみるがいい」と言って、その破片で自分の太い腕を掻き捌いた。

「「っ！！？」」

「見えるだろう？　生物であることを示す赤い血は流れん。溢れるのは、我を形作る魔力だ」

傷口から漏れるのは確かに赤い血じゃなくて魔力。しかも治癒魔法を使っていないにも拘わらず傷口がすぐに閉じた。

「我らは生まれ変わりではない。お前たちも薄々は感付いていたのだろう？　我らの戸籍が無いことに」

レオンは破片をポイッと投げ捨てて薄く笑った。当然そんなことを知らない私は、"T・C・"捜査の専門部隊となっている特騎隊の一員であるクララちゃんを見た。

「確かに。私たちはずぅーーーーっと、あなた達の身元を調べていたけど終ぞ判明しなかった。じゃあ生まれ変わりじゃないとするな

ら、あなた達の本当の正体が気になるんだけど？」

「そこまで教えてやる義理は無い。さぁ、そろそろ無駄な問答をやめ、我を転送するがよい」

ザフィーラの治癒を終えた私は、「クララちゃん・・・」の方を見て首を小さく縦に振った。ザフィーラの負傷は治せたけど、万全な状態でレオンと戦えるかとなれば無茶、無理と断じるしかない。ザフィーラも理解してくれているようで黙ったまま。クララちゃんも小さく頷いて、「とっととくたばれ」と言い捨てながらレオンに触れ、転移スキルで彼を飛ばした。

「人間じゃない、か・・・。魔力で体が構築されているなんて、まるでルシル君やエグリゴリのような・・・」

「あながち見当外れではないかも知れんぞシャマル。ミミル――いやパイモンか。あの女が健在であれば、新たなエグリゴリを開発できたとしてもおかしくはない」

「でも、レオンを始めとした幹部たちは過去に実在した魔術師なんでしょ？　ルシル君も、幹部たちは人格から魔術、神秘などなど何から何まで同一だっていう話だったじゃない。さすがに当時を生きていないパイモンには造れないんじゃない？」

「じゃあクローンとか？　あーでもクローンなら人としての肉体があるか～。クローンを生み出したうえでエグリゴリに改造なんて無駄な工程を踏むわけもないし・・・」

"エグリゴリ"のように魔力で体を構築している。本物と言われてもおかしくないほどに当時のレオン達と同一の幹部たち。クローンの可能性は低い。となれば、信じたくないけどありえないと捨てきれない可能性が出て来たわ。

「作戦も最終段階に入ったとはいえ、レオン陛下のお喋りには困ったものですわ」

「「「っ！」」」

監視室側のドアが大きな音を立てて倒れると、呆れた風に首を小さく横に振るプリムスが姿を現した。ううん、それだけじゃないわ。彼女の後ろにはフードを目深に被って素顔を隠している男性が1人。特騎隊からもたらされているデータには無い人物。幹部たちは素顔を晒しているようだし、アグスティンではないと思う。

「この方が気になります？　ではご紹介しますわ。我らT・C・が主――王ですわ。あ、名前は伏せさせてもらいますわね」

「「「っ！！」」」

私の考えをプリムスが察したみたいで、フード男の正体を明かした。まさかここでいきなり"T・C・"のリーダーと遭遇するなんて。ザフィーラは「ならば貴様を捕らえればよいのだな」と言って立ち上がって、リーダーに向かって行こうとした。

「「ザフィーラ！」」

「お止しになった方が宜しいのでは？　わたくしと王、２人を相手に勝てるおつもりですか？　いえ・・・」

――破滅の猛獣（アタケ・デ・ベスティア）――

「わたくしの幻術も在るので３対多ですわね」

「出たー！　幻獣！」

クララちゃんが叫んだ。リーダーとプリムスの前に現れたのは２つの顔を持つ大きな狼。アレは幻で、実際にそこに居るわけじゃない。けれどプリムスの幻術はあまりにも強大すぎて、幻術の攻撃を受ければ脳が勝手に実際に受けたと誤認してダメージを受けるそう。しかも幻術だからこちらかの干渉は一切できないという、魔導師どころか魔術師でも勝てない相手・・・。

「あ、あなた達の目的は・・・？」

「わたくしもあなた達の各個撃破作戦に乗せられようかと思いまして。王は、後ろの転送機から保管室へ向かいますわ。狙いは・・・判りますわよね？」

王は素性を少しでも隠すためか一言も喋らず、プリムスが代わりにそんなことを言った。これはまずい。幹部２人を相手にまともな戦闘なんて出来ない以上、応援が必要だわ。そういうわけで、『こち

ら保管室前通路！』と全体思念通話。

『Ｔ・Ｃ・のリーダーがプリムスと共に出現！　プリムスは各個撃破作戦を受け入れ、リーダーは保管室への進入を目論んでいるわ！　指示を乞う！』

『了解！　クララ先輩！　リーダーを優先的にわたしとなのはの元へ転送して！　シャマル、ザフィーラ！　少しあなた達に危険を強いるけど、少しの間プリムスを引き付けておいて！』

『『了解！』』『了解した！』

思念通話が切れるとほぼ同時、私とザフィーラは「鋼の軛！」とプリムスとリーダーを隔てるように拘束杭の壁を作り出す。クララちゃんが「プリムス！　あなたを転送する！」と駆け出した。

「ええ。よしなに」

幻獣を消失させたプリムスは無抵抗を示すように直立不動となった。そんな彼女に駆け寄るクララちゃんの右手が伸ばされる。そして触れるかどうかと言ったところでクララちゃんの姿が消えた。目の前で突如クララちゃんが消えたことでプリムスも「あら？」と目を丸くした。

「先にリーダーを転送させてもらったから」

クララちゃんはプリムスの直前で転移して、リーダーの背後に出現。

その奇襲に反応しきれなかったリーダーに触れ、クララちゃんはシャルちゃんとなのはちゃんの元に転送させた。プリムスもそれに気付き、「あらあら」と苦笑い。

「まぁこちらの仕事はほぼ終えていましたし、問題ありませんわ」

プリムスの言葉に「仕事？」と聞き返した私に、彼女は「少しばかり捜査資料を拝見させてもらいましたわ」と素直に答えてくれた。まさか答えてくれるなんて思わなかったから、今度はこちらが目を丸くした。

「罪状に本局データベースへの不正アクセスを追加。なら、どの捜査資料を見たのか答え――」

『緊急事態発生！　緊急事態発生！　第1から第3拘置所にて脱獄が発生！　繰り返します！　第1から第3拘置所にて脱獄が発生！　手の空いている魔導局員は、脱獄囚の確保を願います！』

言い切る前にそんなアナウンスが流れた。"T・C・"の襲撃の最中に複数の拘置所で脱獄。これが偶然とは思えないわ。私たちの視線を受けたプリムスは「陽動ですわね。わたくし達お得意の」と微笑んで見せた。

「さぁ。わたくしも転送してくださいな。わたくし達を待つ主力を、脱獄させた犯罪者の確保などに回したくありませんので」

プリムスはそう言って両手を広げながらクララちゃんへと歩み寄っ

ていった。

Ｓａｇａ１９－Ｂ本局襲撃～６ｔｈ　ｗａｖｅ～

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

"Ｔ・Ｃ・"の幹部、フォードってぇのがあたし達の待つ第３トレーニングルームに転送されてきた。長いポール状の武器――杖を手に、「俺たちの移動時と変わらないじゃないか」なんて言って肩を竦めた。なんの話か判らねぇけど、「行くぜ！」あたしはユニゾン中のリイン、それに特騎隊のセレスとミヤビに告げた。

「うん！」「はい！」『はいです！』

"アイゼン"の神秘カートリッジをロード。物質弾を目の前に８発と展開。

「ミヤビ、先行お願い！」

――穿ち止める氷杭（エスタカ・クエルソ）――

セレスは自身の周りに氷の槍を１２本と展開。

「了解です！」

トレーニングルームをぐるりと見回して、「まぁこんだけ広ければやれんだろ」とか言ってバッと左腕を振るって何かを蒔いてるフォード。そんなアイツに向かって突撃するミヤビは水や氷を操れる水

鬼形態だ。アイツはミヤビの接近に対して何ら気負うことなく、「そう慌てるなよ」って杖で床を突いた。

――ナシオン・デ・ラ・プラデラ――

「なんだ！？」『わわっ！？』

蒔かれてた何かから太い蔓やら蔦やらがブワッと溢れ出して、床を覆うつもりか四方八方に這い出した。セレスが「早速フィールド構築ね。作戦開始！」って声を上げたから、あたしとセレスは飛行魔法で宙に上がって、ミヤビは急停止してから冷気を解除。

「始めます！」

――水征戦域――

「ヴィータはアイツを狙って！」

「おう！」

ミヤビが生み出すのは多量の水で、トレーニングルームがすげぇ勢いでプール化されてく。そんな中で、フォードは蛇が首をもたげたように動く蔓の先端に立って水から逃れた。

「水流系？　人間だと神器王か蒼雪姫しか扱えない属性のはずだが・・・。いや、あの角は・・・なるほど」

「シュワルベフリーゲン・クレイモア！」

ぶつぶつと呟いてる所為でなに言ってるか判んねぇけど、あたしはフォードに向けてまずは４発だけ発射した。ほぼ同時にセレスも氷槍を床に向けて発射。

「そう決着を焦るなよ。もっとのんびり行こうぜ？」

――レプロチェ――

フォードを護るために蔓が蠢いて壁となって、あたしの攻撃を防御した。が、甘いな。シュワルベフリーゲン・クレイモアは、爆風と熱波、爆散した物質弾の破片によるダメージを与える炸裂弾だ。普段は対人じゃ使わねぇけど相手は魔術師で、ルシル達ですら苦戦するようなヤバい奴らだ、手加減はしねぇ。

そんなあたしの一撃で壁になってた蔓に大穴が開いて、奴の姿を再確認できた。残りの４発を打つ前に、床に突き刺さった氷槍がミヤビの張った水のフィールドを瞬時に凍結させてく。水浸しになっちまってた蔦や蔓も一緒に凍結されて、脚が濡れてるフォードは「だから嫌なんだよ、氷雪系と水流系の使い手は！」ってキレながら飛び上がって、壁に向かってまた何かを蒔いた。

「させっかよ！」

「一気に決めます！」

――水瀧拳殴――

空中に居るフォードへ突っ込むミヤビ。アイツが最初に生み出した植物は今も凍ったまんまだし、壁に蒔いた何か（間違いなく植物の種）が成長する前に「いけっ！」残る４発の物質弾を打ち放った。壁に着弾するまでの間にミヤビはアイツに最接近して、水を纏わり付かせた右拳で殴り掛かった。アイツは武器を振り回して迎撃したんだが、ミヤビは武器を殴らねぇでガシッと掴み取った。

「むおっ？」

「先輩！　ヴィータ教導官！」

「いつでも！」「よっしゃ！」

「貴様！　放しやがれ！」

壁に着弾した物質弾が壁面にくっ付いてる種を焼き払ったのを確認したあたし、そしてセレスは、ミヤビの頭上でぶんぶん振り回されてるフォードへ突っ込む。あたしは"アイゼン"の柄をギュッと握り直して振りかぶって、セレスも冷気を纏う大剣"シュリュッセル"を上段に振り上げた。

「ああもう面倒くせぇ！　時間稼ぎなんてやってられっか！」

ミヤビの握る武器から手を離したフォードが吹っ飛んだ。武器は手放したが、アイツは植物の武器を生み出せることはもう知ってる。実際アイツはジャケットの懐から何かを取り出す仕草をした。

『時間稼ぎって話だし、時間は掛けてられない！　フォードに魔術を発動させる隙を与えないように波状攻撃で攻める！　タイミングは各自で計って！』

『おう！』『了解です！』

フォードが懐から取り出して蒔いた種が、氷漬けになった床に落ちるかどうかの一瞬、「インバシオン・ローボ！」を発動したセレス。氷の床から狼の頭だけが作られて、蒔かれたばかりの種をパクッと食べた。その様にアイツは「はあ！？」って声を出した。ざまぁみろ。次はあたしの番だ。

「くそが！」

フォードは乱暴に脱いだジャケットを、アイツの神器を持つミヤビに向かってバサッと払った。ミヤビはジャケットから飛び散った「種・・・！」って一瞬驚いたが、すぐに「冷填外装！」を発動した。全身から冷気を放出したことで、ミヤビに引っ付いた種が凍って砕け散った。

「おらぁぁぁぁぁ！」

あたしはそんなフォードへと　"アイゼン"を振り被った状態で突撃。んで、ハンマーフォルムの通常攻撃「テートリヒ・シュラーク！」をお見舞いしてやる。

――エキポ・プロテクトル――

「甘ぇんだよ！」

一瞬で右腕を飲み込んだ植物は籠手になって、あたしの一撃を完全に防御。しかも殴り飛ばされることなく、逆に腕を振るってあたしを弾き返しやがった。あたしの内に居るリインが『ヴィータちゃん気を付けてください！』って忠告する。空中でのあの踏ん張り、シャレにならない反撃が来る可能性がある。厄介だな。

「地面や壁からしか植物を生やせないとでも思ったか？　残念！　種さえあればこういう風に植物兵装を発動できる！　ムカつく我らがボス様が仕事を終えるまでは引き付けろって話だが、倒したとしても問題ねぇよなぁ！！」

――アルマ・デ・エスピナス――

右腕だけじゃなくて全身を覆う植物の鎧。さらに右手には棘が生えまくる茨で作られた棍を作り出して、軽く一振り。それだけでフォードの周囲の氷の床が粉砕された。

「出来るだけ壊さないで済ましてやるよ」

「上等だよ。鉄槌の騎士の破壊力を受けてみやがれ！　アイゼン！」

≪Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ　！！≫

"アイゼン"をラケーテンフォルムに変形させて、突貫力を引き上げてやる。次のターンはミヤビだからそっちをチラッと見やると、ミヤビは開けた口から真っ白な冷気を放出してた。んで、アイススケートみたいに床を滑り出して、そのままフォードに突っ込んでく。

「食らいやがれ！」

――レプロチェ――

「「「っ！」」」

フォードの纏う植物鎧から蔦が伸びて、突っ込んで来たミヤビを飲み込もうとぐるぐる巻きしてく。ミヤビは「こちらで何とかしますので、先輩たちはフォードを！」っつったから、あたしとセレスはアイツの左右から突っ込む。

「アレグレ・バイレ！」

フォードの両腕を覆う植物籠手からパック〇フラワーのようなやつがいくつも生えてきて、口から弾丸・・・じゃなくて種をマシンガンのように吐いてきた。

「鬱陶しい！」

――雪風（ベンティスカ・パレドゥ）の鉄壁――

「リイン！」

『はいです！』

「『ラケーテン・・・ハンマァァァァァ！！』」

吹雪を纏ったセレスがそのまま突っ込んでくと同時にあたしは"アイゼン"のブースターを点火、大回りでフォードに突っ込んだ。

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒アリシア†††

映像で見て知ってたけど、"Ｔ・Ｃ・"の幹部レオンは確かにドラゴンボ〇ルの変身後ブ〇リーみたな体格してるし、戦い方もそっくりだった。レオンはシャルたち特騎隊が束になっても倒せなかったヤバい奴で、そんなヤバい奴と戦うため、ここ第２トレーニングルームで待ち構えてるのは私、妹のフェイト、サポートのすずか、特騎隊のルミナの４人。

「ねぇ、レオン。あなた、少し見ない間にこれでもかってくらいにアクセサリーを付けてるけど？　どっかで盗んできた？」

「はっはっは！　仮にも世界丸ごと１つを統治した王だった我が、盗みなどちっぽけな罪など犯すものか！　これらは我が自慢の神器たちだ！　先の戦闘では我は神器を何ひとつとして持っていなかったからな！　真技を使わざるを得なくなり、お前たちに敗北しそうだったが、今回は違うぞ！　完全武装となった我を止められるものなら止めてみるがいい！！」

重そうな金属製の輪っかを頭や首、両腕にこれでもかってくらいに装着したレオンがそう言って大笑い。ルミナが「何で今回に限って完全武装？　ありえないんですけど・・・」って大きな溜息を吐いた後、両拳に魔力集束を始めながらチラッとすずかの方を見た。すずかもその視線に気付いて、「全力でサポートします！」"スノーホワイト"のフルドライブ、ブリザードクロウのシリンダーカートリッジを機能させて、相性の良いセレスの氷結系魔力が込められたカートリッジをロード。一気に魔力量を跳ね上げさせた。

「すずか！　私とアリシアにもお願い！」

「うんっ！　パワーブースト・オールフォース！」

"スノーホワイト"にカートリッジシステムを搭載してから組み上げた、すずかの最強のブースト魔法。斬撃・打撃・射砲撃をひっくるめた攻撃力、シールド・バリア・フィールドをひっくるめた防御力、さらに身体機能や魔法効果も同時に強化するもので、カートリッジの魔力で発動できるようになったトンデモ魔法。

「準備が整い次第そちらから攻めてくるがいい」

「その余裕、すぐに消し飛ばしてあげる。フェイト、アリシア、すずか。準備は？」

「「「いつでも！」」」

私は射砲撃のサポートに専念するために"ブレイブスナイパー"を

武装して、サポートのすずかと一緒にトレーニングルームの端の方に移動・・・っとその前に、"バルディッシュ"を二刀一対のライオットザンバーⅡで起動してるフェイトに「頑張って」って声を掛けると、フェイトも「アリシアも。頼りにしてる」って言ってくれた。

「ふむ。もう戦闘準備は済ませたのか？」

「ええ」

ルミナとフェイトが顔を見合わせて頷き合うと、レオンが「よい！　では楽しませてもらおう！」ゆっくりと2人の元へ歩き始めた。わたしは加速と弾道安定効果を持つ環状魔法陣を展開した"ブレイブスナイパー"の銃口をレオンに向けて、アイツの一挙手一投足を注視。

『アリシア。弾種は任せる。私に続いて何か撃ってみて。ルミナ、いい？』

『異議なし。私もあの神器の効果を知っておきたいし、まずは中遠距離で攻めて行こう』

――プラズマランサーーーー

フェイトの周囲に雷槍が8本と展開して、ルミナはグッと構えを取った。それでもレオンは堂々と歩いて来ていて、完全に受けのご様子。戦闘映像でも特騎隊の攻撃を避けるでもなく防ぐでもなく、ま

ともに食らって通用しないことを見せつけてきてた。アレ本当に趣味が悪い。

「ファイア！」

レオンに向かって放たれた雷槍が次々に着弾して、放電する魔力爆発が起きる。だけどやっぱり「本当に効かないんだ～」ってフェイトが言うように、アイツはよろけもせず、破れた服から覗く素肌にも傷どころか火傷すらない。

「（威力が足りないなら、徹底的な威力重視で撃ち抜く！）ファイア！」

――ジャベリン・メテオ――

トリガーを引いて発射したのは威力重視の炸裂弾４発。狙うのは致命傷にならないように胴体から離れた前腕。腕を撃ち抜かれたら少しは大人しくなると思うから。問題は、私の魔法がレオンなんていう怪物に通用するかどうかだけど・・・。

（私の魔力量はチーム海鳴の中で一番少ないけど、魔術戦で重要なのは魔力量じゃなくて神秘の濃度。私がもらったカートリッジはシャルの神秘が封じられてる）

レオン戦の映像じゃシャル達はまともにダメージを与えられてなかったけど、非殺傷設定なんて優しいものが魔術には無いからこその手加減の結果。今回の本局決戦は今までと違って、本局に保管され

てるロストロギアなどを護ることにもなる。負けたり逃がしたりしたら、それは特騎隊だけじゃなくて時空管理局っていう組織全体の負けにも繋がる。だから・・・。

（病院直行コースくらい平気でやるからね！）

私の魔力弾がレオンの両腕に着弾、そして炸裂。レオンの表情を見てみると、表情も顔色もまったく変えてなかった。さらにフェイトの雷槍と、私の炸裂弾を「ファイア！」と連射する。アイツは私たちの猛攻を受けながらも「はっはっは！　温い温い！」って大笑いしてたけど・・・。

『そのまま撃ち続けて！』

ルミナが念話で指示を出しながらレオンに突っ込んでく。ルミナは私たちの射線を邪魔しないように走って、「その余裕を打ち砕く！」って集束した魔力を纏う右腕をグッと引いた。ルミナは対レオンのために、待機時間の合間にここトレーニングルームを魔力で満たしてた。だから今から放つ集束打撃の威力は、なのはのブレイカーの数倍はありそう。

「ほっほう！　大した魔力量！　それに神秘も申し分ない！　これは我も気合を入れねばな！！」

――グアルディア――

「うわぁ・・・」

「す、すごい・・・」

レオンの筋肉が膨張したことで体が一回りほど大きくなったし、薄っすらと魔力も全身を覆ってる。そんなレオンに最接近したルミナは、床が割れるほど力強く軸足を踏みしめて、強大な魔力を纏った右拳を繰り出した。

「ムート・フェアナイデン！！」

「受けて立つ！！」

同じように振りかぶった右拳を繰り出したレオン。ルミナとレオンの拳の大きさは、ピンポン玉とバスケットボールみたいな差があって、腕の太さなんて比べるまでもない。そんな２人の拳が真っ向からぶつかるとルミナの魔力が大爆発して、青緑色の魔力がトレーニングルームを染め上げた。

†††Ｓｉｄｅアリシア⇒なのは†††

私とシャルちゃんが待ち構えていた第１０トレーニングルームに、なんと想定外の"Ｔ・Ｃ・"のリーダーが転送されてきた。足首丈のローブを身に纏い、フードで素顔を完全に覆い隠している男性。身長はそれほど高くないと思うけど、１７０㎝はありそう。

「あなたがＴ・Ｃ・のリーダーであることは確かなの？」

シャルちゃんがそう問い質すと、リーダーという人はコクリと小さく頷いた。そんな彼にシャルちゃんは「結構。なら大人しく投降しなさい。まずはフードを外して素顔を見せなさい」と言ったけど、リーダーは無言で佇んだままで、従おうとはしなかった。

「指示に従いなさい」

右腰の鞘から"トロイメライ"を抜き、左腰の鞘から"キルシュブリューテ"を抜いたシャルちゃんは、「今すぐに武装解除しなさい。これが3度目の警告」と言いながら二刀もカートリッジをロードした。私も"レイジングハート"をエクセリオンモードで起動しているし、ブラスタービットも最大の4基を展開中で、リーダーを包囲させている。

「高町なのは一等空尉です。お願いです。投降してください。あなた達は確かに悪事を働いていますが、根っからの悪者とは思えないんです。何か事情があるんですよね？　もし悪事以外で手助けがあることがあれば教えてください」

『え？　なのは・・・？』

『ごめん、シャルちゃん。T・C・のやっている事が、あの事件と重なっちゃうんだ。闇の書事件の八神家と、PT事件のテスタメント――ステアちゃんと・・・』

はやてちゃんを"闇の書"の呪いから救うために、魔導犯罪者をこれでもかというくらいに襲撃したヴィータちゃんたち守護騎士。死

にゆく自分を救うために"ジュエルシード"を求めて、管理局と敵対したステアちゃん。どちらも誰かの命のための悪事だった。"T・C・"も似たような事件を起こしているから、もしかするとって思うんだ。

『でもだからって情を移さないようにね。魔術師はエクリプスウィルス以上に危険な存在なんだから』

『うん、判ってる。ちょっとだけお話させて？』

『判った。でもまずは拘束してか――』

『緊急事態発生！　緊急事態発生！　第1から第3拘置所にて脱獄が発生！　繰り返します！　第1から第3拘置所にて脱獄が発生！　手の空いている魔導局員は至急確保を願います！』

「「えっ・・・！？」」

シャルちゃんとの念話でそんなことを話していたら、トレーニングルーム内にそんな内容のアナウンスがこだました。本局で脱獄なんて私の知る限り前代未聞だ。驚いてた私とシャルちゃんの視線は自然とリーダーの方へ向かった。

「これ、あなた達の仕業・・・よね？」

「・・・」

「沈黙は肯定と取るよ？　いいね？」

シャルちゃんの最後通牒を受けたリーダーは小さく首を縦に振った後、両手に白銀色のオートマチックピストル（短い銃身下から垂直にフォアグリップは伸びてる）を携えた。いきなり出現したことでアレは間違いなく「デバイス！」だ。

「武装確認！　なのは！」

「っ！　あなたを逮捕します！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ≫

シャルちゃんから貰ったカートリッジをロードして、「レストリクトロック！」を発動。ブラスタービットが後部から魔力ロープを生成しながらリーダーの周りをぐるぐる回って、魔力ロープを巻き付けていく。

「何を目的に拘置所の犯罪者を解き放った！！？」

――炎牙双月刃――

二刀の刀身に真紅色の炎を纏わせての斬撃二連を繰り出すシャルちゃん。リーダーは私のバインドで拘束されていたけど、膂力がすごいのか体を動かすだけでブチブチと引き千切り始めた。魔術化しているバインドでの拘束で、あの容易に千切る様はリーダーもやっぱり魔術師だってことを証明していた。

「おおおおおお！」

「・・・！」

――ガードブレード――

"キルシュブリューテ"の一撃を、右銃のフォアグリップから展開された魔力刃で防御したリーダーだったけど、シャルちゃんは即座に"トロイメライ"の一撃を打ち込んだ。リーダーの左腕はまだバインドから逃れてないから、その直撃を受けた。

「っ！？」

「シャルちゃん・・・？」

ガキィン！と甲高い音を立てて"トロイメライ"の刃を受けたリーダーはよろめくこともなく、自由な右銃をシャルちゃんに向けようとした。だから「レストリクトロック！」をもう一度発動して、さっきよりさらに頑強にリーダーを拘束する。

「ありがと、なのは！」

「うん！」

シャルちゃんが一足飛びで後退してリーダーから距離を取り、二刀を上段に振り上げたところで『緊急、緊急！』とまたアナウンスが

入った。大まかな内容は、"Ｔ・Ｃ・"幹部の１人である召喚者アーサーやその他のメンバーが魔力を吸収する猫の軍団を率いて脱獄犯の魔力を奪っていて、シャルちゃんたち特騎隊――特務零課の応援を要請する、というものだった。

「シャルちゃん！」

『～～～～～っ！　こちらイリス！　クラリス、アリサ、シグナム！　応援に向かって！』

『『『了解！』』』

『ルシル、はやて、アインス！　そっちは！？』

『こちらはやて！　現在プリムスと交戦中！　ルシル君だけでも向かわせよか！？』

『んー・・・いやいい！　きっちりプリムスを倒しておいて！』

『了解や！』

アーサーを相手にするために第１１トレーニングルームで待機してるアリサちゃん達は、すぐにアーサーの逮捕に動いてくれた。はやてちゃん達は残念ながら幹部の１人であるプリムスと交戦中。なら少しでも早くリーダーを捕まえて、他のメンバーも逮捕に向かわないと。

「なのは！」

「う、うん！」

「光牙烈閃双刃！！」

「エクセリオンバスタァァァァーーーーー！！」

シャルちゃんが振り下ろした二刀から放たれる2発の剣状砲撃と、私の放った5発の砲撃がバインドから逃れようともがくリーダーに直撃して、大爆発を起こした。

「このまま短期決戦で仕留める。覚悟は良い？」

「・・・大丈夫。戦いながらでもきっとお話し出来るから」

もうもうと立ち上る煙から無傷で現れたリーダーに、私とシャルちゃんは身構えた。

Ｓａｇａ１９－Ｃ本局襲撃～７ｔｈ　ｗａｖｅ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

第１１トレーニングルームでアーサーを待ち構えてたあたしとシグナムとアギト、そしてクラリスの４人は、クラリスが召喚したグリフォン（名前はグリーちゃん）の背に乗って、アーサーが現れた場所、拘置所エリアに向かってオフィス街を突っ切ってる最中。翼があるグリーちゃんの移動速度はあたしやシグナムの飛行速度より速いから、そんなに時間は掛からないはずよ。

「まさか保管室じゃなくて拘置所に現れるなんて・・・！」

「ああ。しかも狙いが魔導犯罪者の魔力とはな」

「だけどわざわざ脱獄させなくても良いじゃんかよ」

「地上本部でこれまでやってきたように、今度は脱獄犯も交えての陽動なんだろうね。魔導犯罪者はＴ・Ｃ・が狩って、魔力未保有の一般犯罪者は局員に丸投げ。ムカつく」

「そうね。現にあたし達はみんなの居る場所から離れて行ってる。アーサーも個人で転移できるみたいだし、あたし達を引き離したところで保管室ってなったらシャレになんないわよ」

「だからと言って行かないわけにはいくまい」

「ジレンマ」

クラリスのその一言があたし達の今の状況を的確に表してるわね。でも動かないことには何も変わらない。だからこうして罠に飛び込む覚悟で拘置所エリアへ向かっている。数分とせずに目的地に近付いたところで、グリーちゃんの行く手の先で騒ぎが起こっているのが見えた。

「あ、猫だぜ！　囚人服着た何人かに群がってる！」

「でも魔導局員には1匹も向かって行ってないわね」

局員からの魔法は吸収してるけど、直接触れて吸収するような真似はしてないっぽいわね。あたし達も参戦するかどうか迷ってると、「皆さんは幹部をお願いします！」って、あたし達の接近に気付いた局員の1人がある方角に向かって指を差した。その局員に続いて「猫と脱獄犯は、我々で対処します！」とか「ここはお任せを！」とか、みんなが同じ方を指差した。

「クラリス！　このまま向かうわよ！」

「いいの？」

「問題ない。局員の実力ならお前も知っているだろう、クラリス」

「確かに。それじゃあこのまま行こう」

グリーちゃんの上からだけど局員たちに敬礼をしながらあたし達は通り過ぎ、指が差された方へと向かう。クラリスの指示でグリーちゃんを空に上げさせれば、あちこちで似たような騒ぎが起きてるのが判るようになった。それに「居た！　アーサー！」の姿もバッチリ視認できた。

「グリーちゃん。あそこで1人で突っ立ってる奴に突撃」

クラリスがそう指示を出すと、グリーちゃんは一鳴きして、翼を羽ばたかせて突撃を開始。クラリスが「降りるよ」って言って背中から飛び立ったから、あたし、アギトと「ユニゾン・イン！」を果たしたシグナムも続いて背中から飛び立つ。グリーちゃんはその大きな嘴を開けて、アーサーへの突撃を続行。

「あぁ来たな。待っていたぞ。とりあえず、グリフォンを墜とすところからか」

アーサーの全身からバチバチと放電。グリーちゃんが迎撃されるわけにはいかない。ヴァラーフォームで起動してある"フレイムアイズ"の、銃身の有る二刃の大剣レフトブレードをアーサーへと向けて、「プロミネンスウィップ！」を発射。本来の使い方は鞭のように薙ぎ払っての広域斬撃なんだけど、レーザーのような砲撃として発射することも出来る。

「雷放陣！」

放電量をさらに増加させたアーサーに着弾しようかというところで、「砲撃が・・・！」掻き消された。それを見てクラリスが「突撃中止！　逃げて！」ってグリーちゃんに叫んでの指示。グリーちゃんは大きく羽ばたいて直角に急上昇することで、アーサーの放電から逃れた。そんなグリーちゃんの巨体を隠れ蓑にしてアーサーに接近を試みていたシグナムは、"レヴァンティン"のカートリッジをロードして刀身に炎を纏わせた。

「『紫電一閃！』」

グリーちゃんが回避行動に入ったのがアーサーの直前だってこともあって、シグナムはそれほど難しくなくアーサーの目の前にまで近付けた。すでに攻撃態勢に入ってるシグナムと、後退するために膝を曲げようとしてるアーサーが最接近。

「来い、トテック！」

「新たな召喚獣か・・・！」

「何アレ・・・！」

アーサーの背後からスゥっと音もなく現れたのは、丈が２ｍくらいはある大きな襟を立てたマントと、本来顔があるべき箇所に浮かぶ羅針盤（針の部分が目のマークになってるわね）っていう妙な何か。開かれたマントの裏地に描かれた、発光してる幾何学模様からは半透明の両腕が伸びていて、"レヴァンティン"の一撃を右の手の甲で受け止めて、左拳でのストレートでシグナムを迎撃。

「っく・・・！」

しゃがみ込むことで躱したシグナムへの追撃は両手のチョップ。もちろんそれを黙って見てるつもりのないあたしとクラリスは、地面を蹴って突っ込む。あたしは左腕に向かってソードブレイカー状の大剣ライトブレードを振るい、クラリスは右腕に向かって方天戟を振るった。

（うわっ、なにこの手応え・・・）

お餅のような柔らかさと堅さのある半透明な腕。純粋物理じゃきっと斬り落とせないわね。なら「火炎砲で吹っ飛ばす！」レフトブレードの銃口を向けようとしたら、トテック（っていう名前らしいわね）は両腕を消失させた上でマントでアーサーを包んで空高く舞い上がった。

「「逃がさない！」」「逃がさん！」

あたしはレフトブレードの銃口を向け、シグナムとクラリスは直接攻撃するために一気に距離を詰めてく。２人の動きを先読みして、トリガーに指を掛ける。

「もうすでに察していると思うが、俺の仕事は犯罪者から魔力を吸収すること、犯罪者を脱獄させて陽動役に利用すること。そして、お前たちを俺に引き付けることだ！」

――獣界――

「「「っ！？」」」

アーサーから発せられた強烈な閃光に思わず顔を背けて目を閉じる。まぶたの裏から光が収まったことが判って目を開けてみれば、本局のオフィス街とはかけ離れたサバンナが広がっていて、辺りを見回せば丘や山脈に火山、ジャングル、湖などなどが遠くの方にあるのが判る。

「やられた、創世結界だわ」

「アーサーはどこへ・・・？」

「完全に見失ってしまったな」

とりあえずアーサーを探すために空に上がって、どこから探そうかって周囲を飛び回ってると、いきなり火山が噴火。さらに黒い噴煙の中から真っ赤に燃える超巨大なトカゲが這い出てきた。空に居るあたし達に顔を向けるとパカッと口を開けて、ふざけた大きさの火炎球をポンポンポンと吐き出してきた。

「とにかく今は・・・」

「あのトカゲを倒すのが先決か」

「異議なし」

そういうわけで、あたし達はトカゲ（燃えてるしひょっとしてあの有名なサラマンダー？）に向かって飛んだ。

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒はやて†††

「「ユニゾン・イン！」」

これから転送されてくるプリムスとの戦いのために、私とアインスはユニゾンを果たした。

「主はやて。ご気分はどうですか？」

『全然平気やよ。この感じ、懐かしいな～。闇の書事件以来やね、この逆転ユニゾン』

すずかちゃんがアインスやザフィーラのために用意してくれたガントレットタイプのＡＩ非搭載型アームドデバイスの1基、アインスの"ナハト・リヒト"の効果を十全に発揮させるために、ユニゾンの裏技である主従逆転ユニゾンを行った。

「当時はアウグスタとナハトヴァールの影響で強制でしたが。・・・今は大丈夫なようですが、悪いようでしたら即座にユニゾンを解除しましょう」

『了解や』

"闇の書"事件で実際にやった（とゆうか自然にそうなってしもた）私の体にアインスがユニゾンするんやなくて、アインスの体に私がユニゾンするってゆうあれ。ちょう私に負担があるけど、私もちゃんと内側からいろいろサポートするから、アインス一人分やなくてちゃんと2人分の強さを発揮できる。

『こちらクララ。ルシル、アイリ、はやて、アインス。今から送るよ！』

「はやて、アインス」

「少し待て。カートリッジロード」

アインスの左腕に装着されてる"ナハト・リヒト"のリボルバーシリンダーが機能して、ルシル君の神秘カートリッジを1発ロード。ユニゾンしてアインスの内の居る私にも、魔力が神秘を有したのが判った。

「こちらの準備は整った」

「よし。では作戦通りにいくぞ。・・・クララ。こちらの準備は済んだ。いつでもいい」

『了解！　送るよ！』

アインスの足元にベルカ魔法陣が展開される。そしてアインスと私の2人で「遠き地にて、闇に沈め」って詠唱。ルシル君も"エヴェ

ストルム"のカートリッジをロードして準備ＯＫ。そして私たちの前に、プリムスが出現した。映像で見て知ってはおったけど、幻術に優れた魔術師プリムスはホンマに幼い女の子やった。ただ漂う雰囲気は気品に溢れた女性って感じや。

「『デアボリック・エミッション！！』」

転送完了とほぼ同時に発動したのはバリア発生阻害能力のある球形の純粋魔力攻撃。非殺傷設定の無い魔術やから手加減はしたいんやけど、ルシル君から手加減無用って念押しで頼まれたからな、減給・降格などなどを覚悟しての本気の一撃をお見舞いした。

「ルシル。そろそろ効果が切れるぞ」

「了解」

デアボリック・エミッションが薄くなってきたところで、「曙光神（コード・デリング）の降臨！」をルシル君が発動。眩い蒼の光が球状に大きく爆ぜて、デアボリック・エミッションもろともプリムスを飲み込んだ。

――壊滅（アタケ・デ・ソルダド）の幻人――

「「ぐっ！？」」『ふあ！？』

突如として襲ってきたのは、背中を何か硬い物で殴られたかのような衝撃。視界が大きく揺れて、アインスとルシル君が殴り飛ばされたことが見て取れた。そやけど２人は倒れ伏すことなく受け身を取

って、床を1回転がった後で片手を突いて跳ね起きた。

『アレが幻術・・・・！』

アインス達の後ろに居ったんは見知らぬ男性2人で、手にはハンマーが握られてる。アインス達が立ち上がる中、「いきなりの奇襲とは酷いですわね」なんて言いながら、治まりつつある蒼光から優雅な足取りで出てきたプリムスが嘆息した。

「傷ひとつ負っていないだと・・・・！？　まさかもう幻術と入れ替わって――」

「いませんわよ。なぜ無傷なのか？　幼子でも解る答えですわ。わたくしの防御力の方が上だからですわ」

肩を竦めて微笑むプリムスを見て、ルシル君は「馬鹿な・・・・」って零した。アインスの視界に映るルシル君は顔を青くさせて「ありえない。ありえない！」って頭をガシガシ掻き始めた。明らかに尋常やないその様子に『ルシル君、落ち着いて！』って思念通話を繋げて言葉を掛ける。

「貴様がソレを持っているわけがない！　そのオリジナルはもう存在しないはずなんだ！　いやアレか、形が同じだけの偽物に違いない！」

「冷静になれルシル！　一体なんの話をしているのだ！」

「ぎゃいぎゃいと騒がしいですわね。まぁ所詮は神器王の紛い物にして劣化物。仕様がないことですわね」

『好き放題言うてくれるな、プリムス。確かにルシル君は、オリジナルの神器王のクローンかもしれへん。そやけどな、あなたもプリムス本人とはちゃうんやろ？　それならあなたも紛い物で劣化物や』

ルシル君に対してめちゃくちゃ言うてくれたプリムスにも思念通話を繋げて、そっくりそのまま返してやった。若干プリムスの顔が苛立たしげに歪んだのが見えて、どやぁってなる。ルシル君も少しは今ので気が晴れてくれたらええなって思う。私の気持ちを察してくれたアインスがルシル君の方に振り向いてくれた。

「ルシル・・・？」『ルシル君・・・・』

ルシル君の顔色は変わらずに真っ青で、目を大きく見開いたまま顔を俯かせてた。戦闘の最中で臨戦態勢を解いてしもうてる私たちに何も言うことなくプリムスは踵を返して、トレーニングルームの壁際に設けられてるベンチに向かい始めた。

「まさか、とは思っていたんだ。・・・やはり、そう・・・だったんだな。俺は・・・」

「あら？　察しの良さは及第点ですわね。あなたの考えていることが事実だった場合、あなたは何をするべきなのかしら？」

顔を上げたルシル君と見つめ合うプリムスは、「どうぞお好きにし

なさい。どのような結末であれわたくしは付き合いますわよ」と言うと・・・

――殲滅(パルケ・ソオロヒコ・デ・デストルクシオン)の凶獣園――

プリムスを護るかのようにいろんな動物の部位を切って貼って組み立てた感満載の生物、キメラの幻が出現した。かぶりを振ったルシル君は「ハッキリさせてやるさ！」って"エヴェストルム"のカートリッジをさらに3発とロード。アインスも続いて"ナハト・リヒト"のカートリッジをロード。

『アインス！　後ろ！』

ハンマーを持ってる幻術がルシル君に襲い掛かろうとしたのが微かに見えて、アインスも「承知！」ってルシル君に飛びついてその場から移動させた。直後、振り下ろされたハンマーはセラティナの結界で護られてるトレーニングルームの床にクレーターを作った。

『これホンマに幻なんか！？』

「そのはずなんだが・・・！　昼神(コード・ダグ)の閃爆！」

アインスの胸に顔を埋めてる、少しは落ち着いてくれたルシル君が魔術を発動。天井から降り注いできたのは蒼く輝く逆さの尖塔(オベリスク)。狙いは幻兵とプリムス。プリムスは焦ることなく回避行動に移った。あと、どうゆうわけか幻兵も回避行動を取った。床に突き刺さったオベリスクが無数の魔力弾となって幻兵やキメラに殺到。キメラも

幻兵も回避や迎撃行動を取って、魔力弾から逃げ切った。

「っ！　アインス！　もう一度デアボリック・エミッションを！」

「りょ、了解した」

アインスとルシル君がカートリッジをさらに1発ロード。そして「デアボリック・エミッション・ヘクサ！」を発動した。アインスの発動したものは中心に、そんでルシル君が発動した6つ、計7つがトレーニングルーム全体を飲み込んだ。

「くっそ。おかしいと思ったんだ」

ルシル君の視線の先には幻兵が居るんやけど、胴体はやっぱり幻のようで何の抵抗も受けてへん。そやけどハンマーと、柄を握る右腕のみがデアボリック・エミッションの効果を受けてるように見える。つまり『幻やなくて本物か！』ってことになる。

「割と早く気付かれましたわね。その腕と槌はアーサーから借り受けた召喚獣ですわ。名前は興味ないので聞いてませんけど、腕だけこちらの世界に召喚しているそうですわ」

プリムスの言葉に彼女の方に振り向いてみれば、この強烈な魔力流の中でも平気そうに佇んでた。腕のように効果は受けてるようやけどダメージは入ってないみたいや。そう、全身を覆ってる魔力で完全防御してる感じ。デアボリック・エミッションの効果が切れて、改めて無傷のプリムスと対峙。

「お前が生前使っていた神器、パウォル・シュンボルムとセークーリタース・エストレリャ。信じたくはなかったが、やはりまさかの本物か・・・！」

「ええ、もちろんですわ。形が同じだけの紛い物など、このわたくしが身に着けるはずないでしょう？」

プリムスがティアラとネックレスを見せびらかすようにポーズを取ったことで、「ちくしょう！　いや、まだだ・・・！　まだそうと決まったわけじゃない！」ってルシル君が声を荒げた。

「ルシル・・・」『ルシル君・・・』

私たちとルシル君の間で何やら齟齬が発生してる模様。そやけどルシル君の様子からして聞いてもええのか憚れる。そやからアインスは冷ややかに「作戦変更だ。次はどうすればいい。プリムスを知っているのはお前だけだ」って、すぐに次の攻略法を聞いた。

私たちはプリムスを相手に広域攻撃を仕掛けることで勝とうとしてた。プリムスの幻術は強力で、こちらからの魔術は一切受け付けへん。そやから本体であり幻術に隠れてるプリムスを、ターゲッティングの必要性がない広域攻撃で幻術もろとも倒そうって作戦やった。

（たぶん、神器の効果とは思うんやけど・・・）

「・・・すまん。パウォル・シュンボルムは、相手の恐怖心を魔力に変換するというものだ。幻術でさんざん相手を恐怖させるからな。

当時のプリムスは実質的に魔力が無限だった。セークーリタース・エストレリャは、俺たちみたいに広域攻撃でプリムスを斃そうとしていた者に対する効果、対広域攻撃魔力の防御と吸収だ」

（ホンマにピンポイントな効果やね・・・）

「当時から広域攻撃でないと倒せないと考えられていたのだな、プリムスという魔術師は。それで？　広域攻撃以外で勝つには創世結界だったか？」

「いや。奴の防御力を上回る攻撃なら普通に通用する。ただ、ターゲッティングをしないといけないから本物に当てられる確率も下がり、じり貧になって敗北という可能性が高いがな」

「もう作戦会議はよろしいかしら？　わたくしはもういつでも帰還してもいいんですのよ？　あなた達と戯れているのは気まぐれに過ぎません。これ以上の退屈は、眠ってしまいそうですわ」

プリムスがわざとらしく大きなあくびをした。それがますますルシル君の機嫌を損ねるってゆうんを理解してるみたいやな。オリジナルの記憶を受け継いでるルシル君の表情がまた険しくなってしもうた。ルシル君に冷静になってもらいたいから『アインス』に、それとなく私が落ち着くように言うてるってことを伝えるように言う。

「『はい。主はやて』・・・ルシル。主はやてからの声援だ、よく聞け。これ以上怒りに任せて意味不明なことを言うようなら後で私がぶっ飛ばす、だそうだ」

「え？」

『そんなこと言うてへんよ！！？　それに声援やなくて脅しやソレ！　ちょっ、ルシル君！　ちゃうから！　そんなこと言うてへんからな！』

慌ててルシル君に思念通話を繋げて弁明すると、アインスが「はて？」なんて首を傾げた。ここでまさかのアインスの素っ恍け。そやから私が直接伝えることになった。うーん、最初から私が言うとけばよかったんやな～。

『えっとな、ルシル君。思うところがあるんはよう理解してる。そやけどルシル君はルシル君や。過去の記憶に引っ張られて、現代のルシル君が苦しむのは――』

「おかしな話、か。・・・すまん、大丈夫だ。気持ちを切り替えて、プリムスを倒そう。俺とアイリ、はやてとアインスで」

『うん！』「ああ！」『ヤー！』

深呼吸を1回したルシル君の表情からは焦りは消えて、これまで黙ってたアイリの元気いっぱいの返事も聞けた。うん、これなら大丈夫やろ。

「時間が押しますので、次のそちらのターンが過ぎれば帰らせていただきますわ」

――尽滅の蹂躙軍（フェルサス・デ・オクパシオン）――

――殲滅の凶獣園（パルケ・ソオロヒコ・デ・デストルクシオン）――

次の瞬間、何十体ものキメラに跨る何十人ものプリムスが出現した。

Ｓａｇａ２０－Ａ夢の終わり～Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

何十体のキメラと、それに跨る何十人のプリムス。本物もどこかに紛れてるはずなんやけど、幻の所為で視認は難しそうや。

「では参りますわよ！」

プリムスの声がどこからともなく聞こえてきたと思えば、幻獣たちが一斉に襲い掛かって来た。さらにハンマーを持った右腕２本も一緒や。まずはルシル君と一緒に天井付近にまで上がる。大人数で空戦が出来るトレーニングルームを貸し切ってるから、安心して室内を飛び回れる。

「主はやて、フラベルム参ります！」

『いつでもＯＫや！』

「『「九界の頂に立つ熾天の翼。燃ゆる扇を揮い、断罪の炎を彼の地に降らせ！　フラベルム！！」』

詠唱を終えて発動するのは、背後に大きな火炎の扇を展開するとゆう炎熱変換砲撃。石化砲のミストルティン、氷結砲のアーテム・デス・アイセス、電撃砲のヒムリッシャー・ツォルンに連なる多弾砲撃や。幅９ｍ、高さ３ｍの炎の扇からアインスの「シュス！」って

ゆう号令の下に何発もの砲撃が発射され始めた。

「ルシル！」

「ああ！　宝竜の抱擁（コード・ファフニール）！」

ルシル君が魔術を発動。いろんな属性の龍が床から現れて、その大きな口で幻たちをパクッと食べようとするけどすり抜けてばかり。アインスの火炎砲も床に着弾して爆炎を起こし続けてるけど、どれもすり抜けられてる。

『どこや？・・・いったいどこに・・・？』

アインスの視界を間借りすることで私も外界の様子を知れるんやけど、ちょう不便やな。ううん、泣き言なんて言ってられへん。アインスが注視してる方と別の方に意識を集中して、プリムスの姿を探す。

『（アカン。全然判らへん・・・）ルシル君！　集束砲はプリムスに通用するか！？』

『ああ、問題ない！　セークーリタース・エストレリャはオートで広域術式かどうかを判定し、即座に障壁を展開するものだ。集束砲は広域術式に含まれない。これは魔術でも魔法でも適用される！』

『了解や！　アインス！』

『はいっ、主はやて！　ルシル、時間を稼げ！』

『判った！』

背面に展開してる炎の扇を頭上で球状に集束させながら、周囲の魔力も一緒に集めてく。アインスが魔力を集束し始めたことで、幻プリムス達の乗る幻獣が猛攻を仕掛けてくると思うたけど私たちに向かって吠えるだけになってしもた。なんやよう判らんけど、安心して集束に注力できそうや。集束率も１００％になったことで、「いくぞ！」ってアインスが開いた右手をバッと前に突き出した。

「ラハト・ケレブ！！」

アインスの頭上の大火球が一瞬だけ収縮、そんで特大の火炎砲撃となって発射された。狙いはアインスに任せてて、トレーニングルームの中心点に砲撃が撃ち込まれると巨大な炎となって、すべてを焼き払ってく・・・のが本来の効果なんやけど、プリムスや幻獣の幻影は揺らぐことなくその場に留まったまま。

「これはひょっとして、やられたか・・・？」

『逃げられたんか・・・？』

「おそらくですが・・・」

爆炎が消失して、床や壁に燻ぶる炎が揺らめく中、幻影たちがフッと吹き消されたかのように消滅した。そやけど本物のプリムスの姿

はもうどこにもなかった。

「とりあえず、確認だな」

――氷神（コード・ウズ）の波涛――

ルシル君の周囲に１２基の大き目の魔力スフィアが展開されて、そこから真っ直ぐ氷結砲撃が発射された。砲撃はスフィアから持続放射されて、着弾した箇所から床、天井と凍らせてく。私たちはきょろきょろ周りを見回すんやけど、『アカン。やっぱ逃げられてしもうてる』ってことが確定しただけやった。

「主はやて。ユニゾンの解除を」

『あ、うん。ルシル君、ええかな？』

「完全に逃げられたようだし、問題ないと思うよ。アイリ」

『ヤー』

「「『『ユニゾン・アウト』』」」

ユニゾンの解除によって私とアイリは自分の足で床に降り立った。凍ってるのを失念してたから私は素っ転びそうになったけど、「おっと」ってルシル君が抱き止めてくれたことで事なきを得た。ルシル君にもたれかかりながら「おおきにな」ってお礼を言う。

「すまん、解除するのを忘れていた」

トンと小さく床を爪先で打つと、床に張ってた氷が粉々に砕け散ってダイアモンドダストのようになった。その美しさにアイリと一緒に「ほわぁ・・・！」目を輝かせる。っとと、見惚れてる場合やなかった。戦闘が終われば特騎隊の本部に連絡を入れへんと。

「こちら対プリムス班。戦闘終了だ。他チームの状況はどうか」

『お疲れさまでした、セインテスト副隊長。各幹部もほぼ同じタイミングで撤退しています』

「保管室前通路のクララ、シャマル、ザフィーラの3人は？」

『プリムスの転送後以降は新たな幹部や構成員が現れず、通路内で待機状態となっています。あ、フライハイト部隊長からの通信です』

サウンドオンリーと表示されてたモニターにシャルちゃん、それになのはちゃんの姿が表示された。2人とも疲労困憊って感じや。よく見ればシャルちゃんの"キルシュブリューテ"やなのはちゃんの"レイジングハート"とブラスタービットが大きく破損してる。

『えー、こちらイリスとなのはです。本部からみんなの状況は今聞いた。幹部および構成員の逮捕には至らなかったけど、保管室から他の場所に移していた魔力保有物は奪われなかった。そこだけは勝利としておこうと思う。そしてもう1つの問題。T・C・によって脱獄することが出来た囚人について』

"T・C・"の陽動作戦のために利用された脱獄犯はみんな、"T・C・"が本格的に活動を始める前に捕まった人たちや。そやから魔力を狙われてもおかしくはない。そやけどまさか、魔力保有物やなくて囚人を狙ってくるなんて思いもせえへんかった。シャルちゃんも似たようなことを言うた後、『完全に裏をかかれた。ごめんなさい』って頭を下げた。

『気にしないで、シャル。これは責められないよ』

『そうよ。これまでずっと地上本部の保管室を狙われていたんだし』

『各地上本部より多大な魔力保有物を保管してる本局への襲撃となれば、誰だって保管室を狙うって思うよ』

『シャルちゃん。反省は大事だけど、今は・・・』

『う、うん。ありがとう、みんな。まず本局の状況をこれから確認する。続々と本部に情報が集まって来るから、その情報を元に今からの方針を決める』

シャルちゃんとなのはちゃんの映るモニターの映像がパッと変わって、本局内で起きた"T・C・"関連の騒動の報告内容が羅列表示された。召喚獣の猫に集られて魔力を限界まで吸収された囚人の名前、確保された場所などなど。

『T・Cは完全に撤退したようだし、未だ確保されてない囚人を捕

まえに動こうと思う』

『いやいや。シャルとなのははデバイス壊れてるし、疲労困憊って感じじゃん。少し休みなよ』

『そうだな。他にもダメージを負っている者は遠慮することなく休め』

『なのはちゃん、シャルちゃん。今すぐスカラボで修理するから一旦合流しよう』

『ありがとう、すずかちゃん』

『お言葉に甘えて少し休ませてもらうよ。でもただ休んでるのはちょっと・・・』

シャルちゃんが苦笑いしてると、『あ、ちょっと気になることがあるの』ってシャマルが小さく手を上げた。その気になることとは、シャマルの言によると"T・C・"のリーダーとプリムスが『本局の捜査資料のデータバンクに・・・？』不正アクセスを試みたらしいとのことやった。

『判った。休憩しながらそっちの調査をしてみるよ』

「決まりだな。今すぐ動ける者は囚人の確保。休憩が必要な者は遠慮することなく休むこと。以上だ。何か意見がある者は？・・・よし、行動開始だ！」

ルシル君がそう締めると、モニターの向こうに居るみんなが『了解！』って応じた。全体通信が切れたことで、トレーニングルームを後にしようとするルシル君に「あの、大丈夫か？」って声を掛けた。プリムスとのやり取りが普通やなかったこと、その時のルシル君の反応もおかしかったこと、それらが気になってた。

「大丈夫だよ、はやて。いろいろと考えることがあるけど、それはどれも俺、セインテストに通ずる問題だ。すまん、詳しくは話せないが・・・」

「ううん。でも何か手伝えることがあるんなら遠慮なく言うてな？」

「ありがとう」

ルシル君と微笑み合った後、私はアインス達と一緒にトレーニングルームを出る。そんですぐに本部から入った通信に従って拘置所エリア近辺に移動して、なおも確保されてへん囚人の捜索の手伝いを始めた。私はアインスと、ルシル君はアイリとってゆう風に二手に分かれての捜索や。

「現在も逃亡している囚人ですが、一部を除いて低ランク魔導師ばかりのようです。T・Cからも吸収するに値しないと見切られたのか、もしくは吸収されながらも逃亡を続けているかのどちらかでしょうが・・・」

「気になるんは最後の大隊の幹部がまだ見つかってへんことやね」

元聖王教会騎士団の一員でもあった最後の大隊の幹部はみんな、本局の留置所で捕らわれてる。普通なら聖王教会本部の留置所で拘束されるべきなんやろうけど、罪を償い終えた元大隊の下位メンバーが騎士団の職務に復帰していることもあって、もし万が一にも幹部たちに絆されて脱獄させるようなことにならへんようにってことで、幹部は本局に収容されることになった。

（地続きのミッドやと逃げきられる可能性があるけど、本局やと局員専用のトランスポートか、民間とはいえ警備の厳しい次元港しか外界へ出られん本局なら、たとえ脱獄しても逃げきれへんからな）

「はい。またヴィヴィオ達が狙われるということにならないように、確実に本局内で捕まえなければいけませんね」

「そうやね。大隊の活動中はヴィヴィオ達に窮屈な思いをさせてたからな。今度は絶対に防がなアカン」

『こちら本部。八神二佐、アインス補佐、応答願います』

「はい。こちら八神」

『現在八神二佐たちのいらっしゃるC区画にて、元教会騎士ラヴェイン・ビッケンバーグの姿がカメラにで確認されました。お2人が最も近いので向かってください』

「「了解！」」

早速幹部やった元騎士ビッケンバーグの確保を任された。指定された場所に向かってみれば、「ほっほっほ。これはまた局の有名人がお迎えか」と私を見て笑うビッケンバーグさんが、苦しそうに体を震わせながら胸を押さえて座り込んでいた。

「T・C・に魔力を吸収されたんですね。その様子では余程の苦痛だったのでしょう。それでもここまで逃げ、隠れている。あなたをそこまで突き動かすのは、やはりベルカを再誕させたいからですか？」

「ベルカの再誕など、俺の目的のための足掛かりに過ぎんよ。事情聴取の内容、お前さん達も見ているんだろう？」

「闘争。管理局発足前では当たり前だった、魔導師の非殺傷などを完全撤廃しての殺し合いがしたい・・・でしたね」

「応とも。命を懸けない闘争などごっこ遊びに過ぎん」

「くだらない。本当に命のやり取りを知れば、そんなことを言えるわけがない」

ギュッと握り拳を作り、歯噛みしながらアインスが忌々し気にそう言うと、ビッケンバーグさんは「戦乱を生きた騎士とは思えない発言だな、闇の書の騎士」って言うて鼻で笑った。アインスの纏う空気が嫌な方に向かってるのが判ったから、「あなたを逮捕します」と用意してた手錠を、ビッケンバーグさんの両手首に掛けた。そんで近くにまで来てくれた魔導局員チームに身柄を預けて、再び大隊

幹部の捜索に戻る。

『こちら本部。対Ｔ・Ｃ・各班に連絡します。脱走した囚人、総勢１８５名の内１８２名が確保されました。残る囚人はキュンナ・フリーディッヒローゼンバッハ・レーベンヴェルト、グレゴール・ベッケンバウワー、エーアスト・ルターの３名のみとなりました。武装隊及び魔導局員による緊急配備も完了していますので、各班は一度休憩を取ってくださいとのフライハイト隊長からの指示です』

そんなところに本部から入る全体通信。大隊の最高幹部の２人＋融合騎エーアストが今なお確認できひんとのことで、騎士であるルミナ達が『それを聞いて休んでなんかいられない！』って、指示を出したシャルちゃんに反論した。

『気持ちは解るけど落ち着いて。幹部たちと戦ってから休憩せずに動きっぱでしょ？　確保された元騎士連中も、他の囚人たちと同様に魔力を吸収されていたから、キュンナ達も吸収されているはずだから脅威度は低い。脱獄が始まってからすぐに他エリアへの移動が出来ないように緊急配備も実行されてた。それに、転移スキルを持つトルーデは、衛星軌道拘置所だしね。袋のネズミと言ってもいい。だから今は休むこと。わたし達の仕事とはあくまでＴ・Ｃ・の壊滅なんだから』

説得を受けたルミナ達が渋々頷いたのを確認したシャルちゃんは、『最後に。今日は手伝ってくれて本当にありがとう』って、特騎隊やない私たちに深々と頭を下げた。素直にシャルちゃんからのお礼を言われるほど力にはなれへんかったこともあって、私たちは苦い

表情を浮かべた。

『ところで、シャルちゃん。Ｔ・Ｃ・リーダーとプリムスが不正にアクセスしたデータって、結局は何だったのかしら？』

『え？　あー、捜査資料っていうのは確かだったよね、なのは』

『うん。被疑者死亡のまま書類送検されたものや、未解決事件なんかも閲覧されてた。中でも特に気になったのは、私たちチーム海鳴が関わった事件を念入りに調べられていたこと。古くはＰＴ事件からフッケバイン事件ま――』

『そうか。判った。Ｔ・Ｃ・が何を考えているのかは判らないが、チーム海鳴の何かを探ろうとしたんだな。それは俺が調べておこう』

なのはちゃんがまだ喋ってるのにルシル君がピシっとそう締めた。ルシル君の様子がおかしいって、私どころかみんなも思うような強引さ。モニターに映るルシル君も頭をガシガシ掻いた後、『すまん。何かいろいろと・・・』って大きな溜息を吐いてその場に座り込んだ。

『ルシルもなんか疲れてるみたいだし、特騎隊は一度オフィスに戻って。なのはたち協力組はそのまま解散してくれていいよ。重ね重ねありがとうね。以上、通信終わり』

シャルちゃんとの通信が切れて、残る他のモニターに映るみんなは少し黙った後、『こほん』ってセレスが咳払い。そんで『私からも

お礼を言わせて。手伝ってくれてありがとう！』って微笑んで見せて、続けてクラリス、ルミナ、ミヤビが『ありがとう！』ってお辞儀した。

『あんまり役に立てなかったし、お礼を言われるとかえって悪い気がするわね』

『そんなことないよ。アリサ達が居てくれたおかげで一方的に負けることがなかったわけだし』

『そうそう。特騎隊だけじゃ人数不足で、連中を抑えきれなかったはずだしね』

『再び先輩方と一緒に戦えて光栄でした』

それから私たち協力組もこの後一度集まろうって話になったことで、ルミナ達との通信も切った。この場には私とアインスだけになって、私は「アインス。ちょう待っててな」って一言断ってから手元に空間キーボードを展開して、パパッとキーを打って目当てのデータへと向かう。

（T・C・がわざわざ本局に乗り込んでまで見た捜査資料。ルシル君が無理やり話を終わらせようとした何か。・・・このまま調べたら、何かが起こるってゆう気はしてる。そやけど私は・・・管理局員や）

管理局設立からの捜査資料が納められてるデータバンクにアクセス

したその時、「主はやて」ってアインスに呼びかけられた。キーを打つ手を止めて「どうしたん？」って振り向いた。

「あ・・・いえ。すいません、何でもありません」

「・・・？」

アインスもアインスでなんや様子がおかしいけど、私はまずＰＴ事件の捜査資料を閲覧。と、「あ、なのはちゃん達も見てる」ってことを示す、現在アクセスしてる局員ＩＤが表示されてた。考えることはみんな同じやね。ルシル君は自分が調べるって話を締めてたけど、やっぱり気になるんよ。

「ＰＴ事件。フェイトちゃんとアリシアちゃんのお母さんであるプレシア・テスタロッサによる、ロストロギア・ジュエルシードをめぐる事件。２人の被疑者は死亡のまま書類送検・・・」

亡くなった被疑者の１人、ステアちゃん。私は闇の書の欠片としてのステアちゃんしか知らへん。なのはちゃん達にとっては敵やったけど、友達でもあったってゆう女の子や。そんなステアちゃんの、ＰＴ事件での姿の写真データがあった。

「え・・・？」

自称黒の４ｔｈテスタメント。１１人おるテスタメント部隊とゆう犯罪組織の実行部隊の一員と自供。そんな文字と一緒に映ってたのは、真っ黒なフード付きのマントに神父服に仮面ってゆう格好をし

た子ども。それを見て真っ先に思い浮かんだんは紅髪の女の子ステアやなくて、「ルシル君・・・？」やった。かつてルシル君は、この写真と全く同じ格好を私に見せてくれた。それはちょうどＰＴ事件が始まる直前の時期・・・。

「あ・・・ああ・・・あああああ・・・」

――私はね、この世界に探し物を見つけに来たんだ――

――探し物？　異世界から地球にまで来るほどのもんなん？――

――まあね。セインテスト家にとって大事なことなんだ――

――エグリゴリか・・・。ルシル君が地球に訪れた本当の理由は、探し物やなくて探し者やったんやね――

――巧い。まぁそういうことかな。・・・エグリゴリを救うことこそが、セインテスト家の宿願なんだ。俺にとってそれが全てなんだ――

脳裏に駆け巡る当時のやり取り。子どもの頃はなんでかそれで納得してた。そやけど初めて見ることになった魔法戦では、相手は"エグリゴリ"やなくて花屋の妖精やった。今思い起こせば妖精が花屋から姿を見せた時にルシル君は、まずいな。願いが叶った後か、って言うてた。願いを叶えるロストロギア・"ジュエルシード"を知ってへんと口に出せへん言葉や。

（あくまで状況証拠に過ぎひん。黒のテスタメントが実はステアちゃんとルシル君の2人組やってことも考えられる。もしかしたら、ひょっとすると、あるいは・・・）

ルシル君とステアちゃんは別人であってほしい。そんな思いを胸にしながらもきちんと確かめたくなった私はアクセスを解除して、特騎隊のオフィスへと駆け出した。そんな私に「どうしました！？」って混乱しながらも続いてくれたアインスに、「特騎隊のオフィスに向かう！」って伝える。

「っ！　そ、そうですか・・・」

「アインス！　ルシル君と逢いに行くからちょう付き合って！」

とにかく今は特騎隊のオフィスへ向かうことを最優先。相手がプリムスやったから身体的な疲労はさほどないおかげで、割と長く走ってられた。そのおかげで「ルシル君！」の姿を本部ビルの敷地内に入る前に見つけることが出来た。私は肩で大きく息をして、両手を膝について深呼吸を繰り返して呼吸を整える。その間、ルシル君とアイリは何も言わずに私を見てた。

「はぁ、ふぅ、はぁ、ふぅ・・・。ルシル君」

「はやて」

「あのな・・・！」

そこから先が声にならへんかった。これまでの当たり前の日常を失うかもしれへん、そんな恐怖が今の私を襲ってた。そんな俯いたまま何も言わへん私にルシル君が「ごめんな」って謝った。顔を上げるとルシル君は寂しそうに微笑んでた。

「見たんだろ？　ＰＴ事件の捜査資料。そして気付いた。死亡した被疑者ステアの服と、かつて俺が一度だけはやてに見せた服が同じだということに・・・」

「・・・うん」

私は今日までＰＴ事件に関することはすべてシャットアウトしてた。何せフェイトちゃんとアリシアちゃんにとっても、リンディ統括官やクロノ君にとっても、なのはちゃん達にとってもデリケートな問題やったからな。まさかそれが今になってこんな問題となって顔を出すやなんて・・・。

「これも計画の内というわけか・・・」

ボソボソと何か呟いたルシル君は大きな溜息を吐いた後、蒼い魔力の光で全身を覆った。そんで光が晴れると、そこにはフード付きのマントに神父服、視界穴の無い仮面ってゆう格好の子ども、「ルシル君・・・？」が佇んでた。

「この格好ではやての前に立つのは十年以上も前なんだな」

「声が・・・！」

ルシル君の声が大人バージョン、子どもバージョン、そして「ステアちゃんの声・・・」へと順番に変わっていった。左手で外されるフードと仮面の下からは銀色の髪やなくて紅色の髪が垂れ出て、顔はもちろんステアちゃんのものへと変化してた。

「では改めてご挨拶を。この姿はステア・ヴィエルジェ。ルシリオン・セインテストが、管理局に素性を知られないように、ジュエルシードを回収するための――」

ステアちゃんの顔から幼いルシル君の顔へとスゥっと変わって、「偽りの姿だよ」って言うて、変身魔法を解除して元の大人の姿に戻った。わずかな希望はルシル君によって打ち砕かれた。その場にへたり込んだ私の両肩を掴んで支えてくれたアインスが「ルシル・・・！」って怒気をはらんだ声を出した。

「アインス。・・・結局これが結末なんだよ。もう、後には引けない。はやて。このような形での別れは俺にとっても辛いが・・・さようならだ」

「よせ、ルシル！」

「え・・・？」

――深淵（ラフェルニオン）へ誘いたる微睡の水霧――

爆発したかのように周囲に発生した霧で視界が真っ白になる中・・・

・

「ルシル君？　ルシル君！？　ルシル君！　ルシル君！！」

強烈な眠気に襲われながらも見えへんくなったルシル君の名前を、意識を手放すまで叫び続けた。

Ｓａｇａ２０－Ｂ夢の終わり～Ｗｏｒｓｔ　ｅｎｄｉｎｇ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

はやてちゃんとアインスさんがいつまで経っても集合場所に来なかったから、通信や念話を試みながらいろいろと探し回った。しかもシャルちゃんからは、ルシル君とアイリがいつまでもオフィスに来ないって通信も入った。ルシル君とアイリの捜索も請け負って、本部ビルの近くの公園にやって来たら・・・。

「あ、居た！　はやてちゃんとアインスさんを発見！　本部ビル外周公園！」

全体通信でみんなに伝えて、ベンチに寝かされているはやてちゃんとアインスさんの元に駆け寄る。気絶じゃなくて眠ってるだけみたいなんだけど、「微かに魔力を感じる。誰かに眠らされた？」ってことになる。だから念のためにみんなが揃うまで起こさずにしておこう。

「はやて！　おーい！　」

「アインス、起きるですよ！」

みんなと合流してすぐにヴィータちゃんとリインが、「起ーきーてー！」ってはやてちゃんとアインスさんを起こそうと体を揺さぶり始めた。よっぽど深い眠りなのかなかなか起きないことで、「本当

に大丈夫なの？」ってアリシアちゃんが言うように、少し不安になってきた。

みんなの視線がシャマル先生に向かう中、ヴィータちゃんがはやてちゃんに顔を近付けて、「なぁ、起きてよはやて！」って強く揺さぶった。シグナムさんがそれを止めようとした時、パチッとはやてちゃんの目が開いた。

「はや――」

「ルシル君！」

はやてちゃんが目を覚ましたことでパァッと顔を輝かせたヴィータちゃんと、目を覚ましてすぐにルシル君の名前を叫んで体を起き上がらせたはやてちゃん。２人の額が勢いよく激突して、「い〝っ！？」揃って額を押さえて蹲った。

「アインスさん！？　アインスさんも目を覚ましたよ！」

側のベンチで同じように眠ってたアインスさんも、上半身をザフィーラに支えられながら体を起こしていた。２人が無事に目を覚ましたことに安心してると、「ルシル君！　ルシル君は！？　ルシル君は居らんの！？」って混乱気味なはやてちゃんの異常な様子に息を呑む。

「どうしたんだよ、はやて！」

「はやてちゃん、落ち着いてください！」

はやてちゃんがベンチから飛び降りて「ルシル君！　ルシル君！」って周囲に呼びかけ続ける。ヴィータちゃんとシャマル先生とリインがはやてちゃんの側に付いて落ち着くように説得。残っている私たちはアインスさんに「何があったんですか？」って事情を聞いた。

「ルシルとアイリは、我々と完全に袂を分かつつもりのようだ」

「袂を分かつだと？　どういうことだ？」

「実際に見てもらった方がいい。ナハト・リヒト」

アインスさんは自分の首に掛けられている白銀の剣十字を胸の前に掲げた。展開されたモニターにルシル君とアイリ、はやてちゃんの後ろ姿が映し出された。

『見たんだろ？　ＰＴ事件の捜査資料。そして気付いた。死亡した被疑者ステアの服と、かつて俺が一度だけはやてに見せた服が同じだということに・・・』

ルシル君の言葉にＰＴ事件に関わっていた私たちは「え？」と耳を疑った。モニターに映るルシル君はサファイアブルーの魔力に呑まれた。治まった光の中から現れたルシル君の姿に私とアリサちゃんとすずかちゃん、それにフェイトちゃんは「うそ・・・」と零した。

「ステアちゃん・・・？」

神父服にフード付きのマントに仮面。一瞬でよみがえる記憶。そう、ステアちゃんと初めて会ったのは"ジュエルシード"によって暴走した無人オープンカーの攻略時。全身黒づくめだったこともあって怖かったけど、声が女の子のものだったからちょっと安心したのを覚えてる。

『この格好ではやての前に立つのは１０年以上も前なんだな。では改めてご挨拶を。この姿はステア・ヴィエルジェ。ルシリオン・セインテストが、管理局に素性を知られないようにジュエルシードを回収するための偽りの姿だよ』

大人、子ども、そしてステアちゃんの声へと変化していって、脱いだフードや外した仮面の中から出てきたのは、紅色の長髪に蒼い瞳をした女の子ステアちゃんの顔だった。けどすぐに元の大人の姿に戻ったルシル君は悲し気な微笑みを浮かべていた。

『結局これが結末なんだよ。もう、後には引けない。はやて。このような形での別れは俺にとっても辛いが・・・さようならだ』

画面内が真っ白な霧に包まれて、はやてちゃんの悲痛な叫び声が続いた。そしてドサッとはやてちゃんとアインスさんが倒れた音が聞こえた。

『マイスター。はやてとアインスが完全に眠ってるの確認したよ。とりあえずベンチに寝かせておくね』

霧が晴れてきたことで、アイリがはやてちゃんとアインスさんをお

姫様抱っこしてベンチに寝かせていく様が映し出される。その間ルシル君は『くそっ、くそっ！　ちくしょう！』って地団太を踏んでいた。近くの石畳が大きく抉れているのはそういう理由だったんだ。

『これからどうするの？　もうチーム海鳴どころか局にも帰れないんでしょ？　ＰＴ事件の犯人の１人が実は生きてて、それがマイスターだって自供しちゃったんだから』

『はぁはぁはぁ・・・。被疑者死亡として処理されてから１７年。１５年経過したことでもう俺が罪に問われることはない。今後の予定だが、ガーデンベルグを救いユルソーンを回収後、リアンシェルトを救いに行く。そしてユルソーンを破壊し、俺の消滅を以てセインテストの宿願の完遂とする。が、その前にＴ・Ｃ・を潰す。これまで世話になったみんなに、局に出来る恩返しだ』

『シグナム達やなのは達へお別れの挨拶とかしなくても大丈夫？』

『ずっとチーム海鳴のみんなを騙していたんだ。形としては最悪なパターンだが、悪党の俺に相応しい結末だよ。今さら見送ってもらおうなんて思っていない。アイリは？』

『アイリは・・・ちょっと寂しいけど、アイリの全てをマイスターに捧げたから。だから大丈夫なの』

『すまないな』

『アイリが決めたことだから』

『ありがとう』

『ん。どういたしまして♪』

ルシル君とアイリの会話がフェードアウトしていって、残るははやてちゃんとアインスさんの寝息だけになったことで、アインスさんがモニターを解除した。ルシル君の思わぬ告白に私たちは沈黙したまま、ショックの所為で動けずにいた。

「探さないと！」「探さなきゃ・・・！」

そう言って真っ先に動き出したのは、フェイトちゃんとアリシアちゃんだった。２人の必至な言葉を皮切りに私たちは再起動して、すぐにルシル君とアイリの捜索に入る。まずはシャルちゃんの個人回線に今の映像を送信してもらって、チーム海鳴のリーダーな私が「手早く伝えるよ！」って通信を入れた。そして、死んだって思われていたステアちゃんは実は生きていて、しかもルシル君の変身した姿だったってことを伝えた。

『え？　は？　ちょっ、ちょっと待って。ステアがルシルだった？　マジで何言ってるのか理解できないんだけど？』

「その辺りはさっき送った映像観てもらえれば判るから！　とにかく私たちはこれからルシル君とアイリを探しに行くね！」

『ちょっ、えええええ――』

シャルちゃんとの通信を切る。探すといっても広すぎる本局を闇雲に探してもまず見つけられない。繋がらないと思うけどルシル君やアイリに通信を掛けながら、アインスさんが本局内の全監視カメラを統括管理する監視室に連絡を取って、ここ本部付近のカメラからルシル君たちの移動先を確認してもらう。どこに映っているのか判明するまでは動けないから。

「私、ルシルにお礼しないと」

「礼？　そうね。ここに居るみんなで1発ビンタね」

「違ーう。まぁずっと嘘つかれてたのはムカつく・・・っていうより悲しいけどさ。でも、本当にルシルがステアだったんなら、私とフェイトにとっては命の恩人だから。虚数空間に落ちた私たちを助けてくれたから、ステアが死んだことになったんだもん」

「うん。あと、プレシア母さんの恩人でもあるんだ。ステアがプレシア母さんの遺体を一緒に引き上げてくれたから、プレシア母さんを生まれ故郷の地に埋葬することが出来た」

フェイトちゃんとアリシアちゃんは特にステアちゃんに感謝していたから。あのステアちゃんがルシル君なら、あの当時言えなかったお礼を改めて言えることになるんだ。そして私、アリサちゃん、すずかちゃんはずっと、フェイトちゃんみたいに最初は敵同士だったけど今みたいに仲の良い友達として、ステアちゃんとも一緒に過ごしたかったっていう願いと後悔があった。まさか知らず知らずのう

ちに果たされていたなんてね・・・。

「あ、シャルちゃんからだ」

『なのは！　ルシルは！？　ていうか、今どこ！？』

「今は監視室にカメラに映ったルシル君とアイリを探してもらってる。あと、本部ビルの外周公園で待っているところ」

『なるほど、やみくもに探さない作戦ね。私もこれから捜索に参加するから、もうちょっと待ってて』

「うん、待ってる」

シャルちゃんとの通信が切れて、監視室からの連絡を待った。その間にシャルちゃんとも合流して、泣きそうになっているはやてちゃんの元へ。

「はやて」

「シャルちゃん。私・・・私が、ルシル君を追い詰めた所為で・・・」

「違う、そうじゃないよ、はやて。はやての所為じゃない。ルシルが悪い、完っっ全に悪い。だから自分を責めちゃダメ。捜し出した後は罵倒なりキツイの1発なりお見舞いしてあげよう。それくらい許されるでしょ？」

「・・・うん」

ハグし合うシャルちゃんとはやてちゃんを見て、絶対にルシル君たちを見つけ出さないとって決意。そんな時に、「監視室から連絡が入りました！」ってアインスさんがはやてちゃんに知らせた。話していたみんなが一斉に口を閉じて、監視室からの報告に耳を傾けた。

†††Ｓｉｄｅなのは⇒フェイト†††

プレシア母さんに頼まれて探していた"ジュエルシード"。ステアは、私とアルフが初めて遭遇した、"ジュエルシード"をめぐって敵対、交戦した魔導師だった。何度も衝突していたけどなんだかんだあって協力して、なのは達と衝突を繰り返した。そして、プレシア母さんが亡くなり、プレシアが蘇ったあの日、ステアは死んだ・・・はずだった。

（その正体がルシルだった・・・！）

素性を隠すためにステアという存在しない女の子に変身していたって告白したルシル。ずっと死んだと思っていたから苦しかった。でもルシルとして生きていたことを今知って、嬉しいと思う反面悲しかった。ルシルは、ステアの死で悲しんでいた私たちをずっと嘘を吐きながら見ていたことになるんだし。でも嬉しさの方が上だったりする。そして今こそ伝えたいんだ、あの時の感謝を。

『セインテスト一尉、アイリ二尉の足取りを確認できました。第２

次元港・第８ターミナルにて、民間船に搭乗している姿が確認されています』

この情報を聞いたと同時に私たちはバス停へと駆け出した。本部ビルの側には１０分に一便が到着する高速バス乗り場がある。ルシル達が居る第２次元港にももちろん到着するから、多分２人も乗っていったんだと思う。

「船の行き先はいずこか？」

『第１２管理世界フェティギアは中央次元港です』

「出発時刻は？」

『８分後に出発します』

アリサが「８分後！？　間に合わないわよ！」って声を荒げた。今すぐバスに乗って向かったとしても１０分以上かかるし、何より視界に入ったバス停からバスが発車したのが見えたから、また数分と到着するのを待たないといけない。これはもう確実に追いつけない。

「どうすりゃいい！？」

「完全に行方を晦まされたら、ルシル君たちをこの広い次元世界の中から探すなんて無理になる」

「本局からフェティギアまで、民間船なら９時間になる。その間に

先回りするのが一番じゃない？」

「さすがに管理局艦は動かせないし・・・」

「本部のトランスポートホールか・・・」

「スカラボの直通トランスポートだね。問題は転送先が許可してくれるかどうかだけど・・・」

「現実的な話、スカラボのトランスポートを使うのがベストだと思う」

「決まり。すずか、貸してもらえる？」

「もちろん！　ウーノが居るから、すぐにフェティギアに飛べるように連絡を入れておくよ！」

そういうわけで、私たちは本部ビルに入ってスカラボのある技術部エリアに向かった。その間にシャルとはやてがフェティギアの地上本部に連絡を入れる。ルシルが言っていたけど、ルシルをＰＴ事件関連での罪ではもう逮捕できない。だから被疑者扱いも出来ないことで、フェティギア地上本部への緊急転送の理由には使えない。

「――ですから、Ｔ・Ｃ・の構成員がそちらに向かったのかもしれないんです」

「未確認ではありますが、可能性がある以上は見過ごすわけにはい

きません」

だから"T・C・"のメンバーがフェティギアに向かったっていう話にした。始末書で済めばいいんだけど・・・。そんなことを考えながら2人とフェティギア地上本部のやり取りを眺めていると、「了解しました。ありがとうございます」って2人がお礼を言った。

「転送の許可が下りた！」

「これで先回りが出来る！」

「監視室からの続報です。ルシルとアイリは下船することなく、フェティギア往きの便が出発したそうです」

「乗ったと見せかけて実は・・・って、ちょう考えてたけど良かった」

「9時間の猶予が出来たね」

「スカラボでちょっと休もうか？　なのはちゃんのレイジングハートやシャルちゃんのキルシュブリューテの修理もまだ終わってないし」

「うーん。さすがにT・C・を出汁にして取り付けた転送許可だからね、今すぐ行かないと怒られるから・・・」

シャルがガックリ肩を落として、「ま、トロイメライを使うからい

いけどさ」って苦笑い。なのはとシャルが相手にしていた"Ｔ・Ｃ・"のリーダーは、他の私たちが相手にした幹部とは違って時間稼ぎに徹することなく２人と戦ったようで、２人のデバイスを破損させた。でも今からすることはルシルを連れ戻すこと。交戦にはならないだろうということで、デバイスを修復することなく向かうことに。

「ただいま！」

「「おかえりなさい、すずか。いらっしゃい、みなさん」」

スカラボに到着すると、ウーノとドゥーエが出迎えてくれた。シャルやはやてはすぐにでもフェティギアに向かおうとしたけど、ずっと動きっぱなしということで小休憩を挟むことに。応接室のテーブルには飲み物各種が取り揃えてあって、それぞれの好きな飲み物（私は麦茶にしておいた）を頂いた。ソファに座って飲み物で喉を潤すだけで割と休まる。

「食事を摂っていないと思ったので、軽食を購入しておきました。お暇があるときにどうぞ」

「サンドイッチですので、コーヒーやカフェオレを揃えていますが、お茶もあるから好きなペットボトルをどうぞ」

大きなバッグを２つと差し出してくれたウーノとドゥーエに「ありがとうございます」と礼を言って受け取った。あくまでルシルとアイリの確保だからまず交戦にはならないだろうし、たくさん食べても大丈夫だ。

休憩後すぐにトランスポートを利用して、人数を分けてフェティギアへと転送開始。ルシルとアイリがフェティギアに発ってまだ1時間も経過してない。向こうに到着して7～8時間は中央次元港で待機になる。

「全員が乗れる輸送車を用意してもらったみたいだから、それに乗って中央次元港へ向かおう」

フェティギア地上本部に到着してすぐ、シャルの運転する輸送車で中央次元港に向かう。次元港に着くまでの間に食事だ。普段は楽しい話をしながらの食事だけど、今はちょっと空気が思い。ただ運転してるシャルに、助手席に座るなのはが「あーん」しているんだけど、「ありがと～♪」って楽しそうな雰囲気だ。

「あ、メールだ」

私の携帯端末からメールの着信音が鳴ったかと思えば、他のみんなの端末からも一斉にメールの着信音が鳴って、車内で突然の大合奏状態。慌てて端末を操作して、メール画面を開いた。そして私たちは同時に「え？」って零した。

「ルシルからのメールだ・・・」

「あたしもよ」

「私も」

「みんなの端末に、ルシル君からのメール・・・？」

「ごめん、ちょっと車停めるね！」

車を近くのショッピングセンターの駐車場に停めて、私たちは思い思いにメールの内容を確認した。

――フェイト・テスタロッサ・ハラオウンへ。

初めて君と出会ったのは、海鳴市の一画にある噴水公園だったな。時間を戻す懐中時計に宿るジュエルシードをめぐっての戦いだった――

そんな出だしと共に綴られる文章は、捜査資料を見ただけじゃ判らない、実際に体験した当事者（わたしたち）だけしか知らない内容ばかりだった。ステアを死んだと見せかけたことや、それで苦しんでいる私たちへの謝罪などなどだ。そしてメールはこう締めくくられていた。

――短い間だったがステアとして共に戦えたこと、チーム海鳴として共に過ごせたこと、そのどれもが俺にはもったいなさすぎる、十分すぎる思い出だった。これから俺とアイリは、T・C・を潰しに行く。それがせめてもの俺の恩返しだと思ってほしい。最後に、これまで友としていてくれたことに深い感謝を。どうか新たな時代を生きる君たちに、幸が多くあらんことを。ルシリオン・セインテスト――

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒ルシリオン†††

「マイスター。さっきから着信数がシャレにならないんだけど。リンディ統括官にクロノ提督、エイミィやアルフ、トリシュたち騎士・・・。一番多いのはシャルなんだけど・・・」

「絶対に出るなよ？　特にシャルのは。めっちゃくちゃ怒られるぞ」

「だよね。開口一番で呪詛ってきそう」

俺と自分の端末をいじっていたアイリは苦笑して、「出なくてごめんね」と謝りながら2台の端末をジャケットのポケットにしまい込んだ。

「アイリ達が本当はミッドに居ること、後で知ったら余計怒るだろうね」

「ああ。しかもフェティギア往きの船に乗った俺たちが、実はプリムスの幻術と知ったらな」

はやてとアインスを眠らせた後、俺とアイリに接触を図ってきたのは撤退したと思われていたプリムスだった。奴から"T・C・"のリーダーが俺に用があるという旨を聞き、リアンシェルトが持っていた転送カードを持たされた。俺たちの幻ではやて達を翻弄させたのは、俺とリーダーの邂逅を邪魔させない為らしい。

「どうせならリーダーの元へ直接転移できるカードを渡せって話だ。融通の利かない奴らめ」

「アイリは、最期にマイスターとツーリングが出来て満足だけどね♪」

「・・・そうか。俺もそうだな」

俺とアイリは今、ミッドは西部エルセア地方を訪れていた。八神邸から盗んできたのか俺の愛車・"マクティーラ"が、俺たちが転送されたレールウェイステーションの駐車場に置かれていた。最後の最後で乗る機会をくれた連中に少しくらいは感謝も生まれるというものか。

「あれ！？　ルシルさん！？」

「それにアイリも！？」

「どうしたんですか、こんなところで？」

「フェイトさんやアリシアさんとも連絡が取れないので、本局でＴ・Ｃ・の襲撃に備えているかと」

「きゅくるー」

駐車場で俺たちに声を掛けたのは、「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ」の４人と、「久しぶりフリード」とアイリが頭を撫でたフリードリヒだった。４人とも私服姿だ。今日はミッドで遊ぶ約束をしている、という話を確かアリシアがしていたな。

「地上にはまだ連絡行ってないんだろうけど、本局の襲撃はなんとかチーム海鳴と特騎隊で食い止めたよ」

アイリが胸を張ってそう伝えると、４人は「さすがです！」と俺たちをキラキラとした目で見た。嘘ではないが実際は負けているようなものだから、アイリのように俺は胸を張れない。まぁアイリも、４人を不安にさせないようにしたいんだろう。

「それで今、俺とアイリははやて達と別行動で、Ｔ・Ｃ・を追跡中だ」

「別行動・・・ですか？　ルシルさん達の強さは知ってますけど、大丈夫なんですか？」

「・・・あの、あたし達に何か手伝えることは無いですか？」

「僕たちじゃ頼りないかもしれないですが、攪乱程度には・・・」

ティアナ、スバル、エリオ、最後に力強く何度も頷くキャロ。俺は「大丈夫さ。心配してくれてありがとうな」と笑顔を浮かべた。フッケバイン事件を経る前からその実力は頼れるもので、普段なら協力を受け入れたかもしれないが今この時だけは断らざるを得ない。

「ルシルの言う通り♪　何も連中を一度に相手にするわけじゃないし、アイリとルシルのユニゾンなら勝てるよ！」

アイリの言葉に４人は渋々だが納得してくれて、「何か手が必要な

らすぐ呼んでください」と、今後果たされることのない約束を交わしてから別れた。４人の姿が見えなくなるまで見送った後、俺とアイリは"マクティーラ"に乗り、一路エルセア郊外の無人区画へと向かった。

「お待ちしていましたわ」

「ようやく来たか」

「さっさと案内しろ」

廃墟と化して長い無人区画の入り口にはプリムスとレオンの２人が佇んでいた。互いに世間話に興じるつもりはないため、言葉を交わしたのはそれっきり。２人に付いて数分と廃墟を歩いたところで、元はレストランと思しき廃屋にフォードとアーサー、そしてフードを目深に被ったリーダーが待っていた。

「くだらない話をするつもりはない。フードを取れ」

プリムス達が王と呼んでいるリーダーに対する俺の態度は挑発的だが、奴らは咎めることなく無言で俺たちの側に控えるまま。リーダーは大人しくフードを外して素顔を晒した。俺とアイリはすでに話し合っていたためリアクションは特にせず、俺は続けて「それが素顔じゃないんだろ？」と睨みつける。俺にヒントを与えたプリムスは微笑を浮かべ、レオン、フォード、アーサーは俺をジッと見、リーダーは今晒している顔の変身を解き、もう１つの顔を俺たちに見せた。

「・・・確定だな」

「だね」

「推察した貴様らＴ・Ｃ・のシナリオからして、この瞬間に正偽は決したんだろうが・・・」

――ユニゾン・イン――

「大人しく従ってやるつもりはない！　時空管理局本局、特務零課特殊機動戦闘騎隊、ルシリオン・セインテストとして！　最期の意地を押し通す！」

『覚悟！！』

――凶鳥（コード・フレスヴェルグ）の殺翼――

前方１５０度圏内に真空の刃を無数に放つと、奴らはそれぞれの方法で回避を行った。

「ならば、意地を張ったまま旅立ちなさい！」

――尽滅（フェルサス・デ・オクパシオン）の蹂躙軍――

「はーっはっはっは！　派手に逝くがいい！」

――レイ・デ・ラ・ゲラ――

「俺が、お前の首を獲る！」

――ディアブロ・デ・ラ・プランター――

「さらばだ！」

――震天弓――

そうして、俺とアイリは"Ｔ・Ｃ・"の幹部を一度に相手に戦闘を開始した。

『おはようございます。１月１８日、ＭＢＣニュースの時間です。まずはこのニュース。悲報です。時空管理局本局、内務調査部および特務零課に所属していたルシリオン・セインテスト一等空尉、アイリ・セインテスト二尉が昨日未明、西部エルセア地方の無人区画にて遺体で発見されました』

『遺体を発見したのはゲンヤ・ナカジマ三等陸佐率いる陸士１０８

部隊。遺体発見現場では激しい魔導戦が行われたのか、すさまじい破壊の跡が残されていた模様です』

『セインテスト一尉、二尉は、特務零課として現在、魔導犯罪組織T・C・の捜査を行っていました。魔導戦が行われていたということでお2人の殺害にはT・C・が関わっていると見られ、本局は殺人の罪状を加え捜査を続けると声明を出しました』

『ルシリオン・セインテスト一尉は、本局のみならず管理局全体で実力のある魔導騎士・軍神として有名であり、その一尉が戦闘による殉職をしたということで、管理局全体に激震が走っている模様です』

Ｓａｇａ２０－Ｃ夢の終わり～Ｇｒｉｅｆ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

ルシル君とアイリが亡くなった。この知らせを聞いたのは、２人が搭乗したはずの船がフェティギアの中央次元港で到着したのに、いつまで経っても２人が船から降りてこないことに不安になっていた頃。本局のクロノ君から、２人の遺体がミッドは西部エルセアで発見されたっていう連絡が入った。

・―・―・回想です・・・・―・―・

ルシル君とアイリが登場している船が到着して、お客さんが続々と降りてくるのを見届けていたんだけど、「あれ？」ってなった。最後と思しきご家族のお客さんが降りて、添乗員の女性が船のハッチを閉めた。だから「え？　え？」ってみんなが混乱しだした。

「ちょ、ちょう聞いてくる！」

「私も！」

はやてちゃんとシャルちゃんが駆け出して、添乗員さんにルシル君とアイリが降りていないことを聞きに行った。会話は聞こえないけど、添乗員さんがモニターを展開してからの首の横振りで、ルシル君たちが乗っていないかったことを察するには十分だった。

「ルシルとアイリ乗ってなかった！」
「そもそも本局の時から乗せてへんって話や！」
「はあ！？　それどういう意味よ！」
「監視室は、ルシル君とアイリはこの便に乗ってるって・・・」
「しかし監視室も添乗員も嘘を言うわけがない。となれば・・・」
「ルシルがあたしらを騙したってことか・・・！？」
「そんな！　どうして！？」
顔を青くして戻って来たシャルちゃんとはやてちゃん。ルシル君たちが船に乗ったと思っていたからフェティギアにまでやって来たのに、それが全部無駄なことだったってことが判ったことで私たちは意気消沈。その現状を生み出したのがルシル君じゃないかって話になって、さらに悲嘆に暮れることに。
「と、とにかく今は、ルシル達の所在を明らかにしないと！」
「まずは一旦輸送車に戻らへん？　さすがに私たちが一堂に集まってたら・・・」
周辺のお客さん達が何事かとザワザワしだした。自分で言うのもなんだけど私たちはかなりの有名人。主に戦闘力としてだから、何か

重大な事件が起きているのかって不安にさせているみたい。はやてちゃんの提案によって私たちは輸送車に戻った。
改めて本局監視室やルシル君とアイリの端末に通信を繋げる作業に入る。相変わらずルシル君たちの端末には繋がらないけど、監視室は当然だけど普通に繋がった。でも監視室からは、ルシル君たちはフェティギア往きの船に乗ったことは確実だっていう返答のみ。

「あ、クロノから通信だ」

「多分、ルシル君はクロノ君にもメールを送ってるだろうし、それ関連だと思うよ」

「うん。みんな、ちょっと静かにして。はい。フェイト。・・・え？
　ううん。ずっと端末の電源は入れていたから、今みたいに普通に通信は繋がると思うんだけど・・・。うん、うん。なのは達の端末にも電話やメールを？」

みんなが静まったのを確認してからフェイトちゃんが通信に出た。内容からクロノ君が私たちに何度も連絡を入れたんだけど、どういうわけか繋がらなかったみたい。フェイトちゃんが私たちをチラッと見たから、端末を使っていなかったみんなが一斉に自分の端末を確認して、首を横に振った。私も一度アイリへのコールを中断してからクロノ君からの受信履歴を調べてみたけど、そんな履歴はどこにもなかった。

「なのは達の履歴にもクロノからのものは無かったみたい。・・・じゃあ何時間も私たちと連絡が取れなくなっていたってことだね。

ごめん、原因が判らないけど連絡しなくて・・・。それで、何の用だったのかな？　私たちは今、姿を消したルシルとアイリを探しているんだけど、まだ見つけられなくて・・・。だからちょっと忙しいというか・・・ん？　みんなも一緒に居るよ？　チーム海鳴全員。・・・え？　今いる場所？　えっと・・・、あ、うん、判った」

フェイトちゃんが端末を操作すると空間モニターモードになって、私たちの前にモニターが展開された。映るのはもちろんクロノ君なんだけど、目を赤く腫らしているし顔もやつれてる。明らかについさっきまで泣いていたって感じだ。そんなクロノ君を見るのは初めで、家族として一緒に暮らしていたフェイトちゃんとアリシアちゃんも「クロノ・・・！？」って目を見開いて驚いてた。

『で？　君たちは今どこに居るんだ？　見たところ車内・・・輸送車の中か』

私たちの驚きの表情はクロノ君も見て判っていると思うけど、泣き腫らした目を隠すこともなく気丈に振舞っているから私たちも言葉を呑んで、クロノ君にこれまでの私たち行動を伝えた。ルシル君が実はＰＴ事件の際に亡くなったステアちゃんの正体だってことが判って、ルシル君とアイリを追ってフェティギアの中央次元港にまでやって来ていることなどなど。

『そうか。実は僕や母さん、ユーノらスクライア姉弟にも、ルシルからの別れのメールが届いていたんだ。当然君たちにも届いているということは判っていた。・・・フェティギアまで許可なく勝手に出撃していたことには驚いたが、今はそんな無理を通したことに対

する責は問わない』

やれやれっていう風に首を横に振って呆れる様は、私たちが知るいつものクロノ君だった。でもすぐに右手で両目を覆って、『そうか。それが君の・・・』って声を震わせた。そして深呼吸を1回。

『ルシルとアイリは居所はこちらで掴んだ。あの2人は君たちの居るフェティギアじゃない、ミット西部エルセア地方で見つかった』

フェティギアじゃなくてミッドに居ることに私たちは「えっ！？」って驚いたけど、シャルちゃんの「一体どうやって！？」って疑問にも同意だ。監視室は隅々まで本局内のカメラの映像を観てもらって、それでやっと探し出した行き先がフェティギア往きの船が停泊している次元港だった。どうやってミッドに行けるっていうんだろう？って疑問が出るのは当たり前だった。

『それについては君たちとこちらのメール内容の差異なんだろうな。僕や母さんのメールの内容に、T・C・のリーダーから呼び出しを受け、プリムスの幻術で行き先を惑わした。転送用のカード型デバイスを受け取り、呼び出し場所のエルセア地方へ向かう、という旨が記されていた』

「T・C・リーダーからの呼び出し？　そんなの罠に決まってるじゃねぇかよ！」

「いくらステアの正体云々でみんなから逃げたとしても、アイリと2人きりで会いに行くなんて危険すぎるわ！」

「アイリも融合騎なら、マイスター（ルシル）の無謀をやめさせなきゃダメだろ！」

「見つけたって言ってたけど、まさか大怪我しているのを見つかったってこと！？」

「びょ、病院は！？　ケガの程度はどうなの！？」

「待って待って！　あれでしょ！　実は、ルシルが勝ったんでしょ！？」

「うん、そうだよね！　辛くも勝利して、倒れているところを発見とか！」

クロノ君の泣き腫らした目、やつれた顔、弱々しい声。ルシル君たちが"T・C・"のリーダーに呼び出されたこと、捕まえたじゃなくて見つかったという言葉。そこまで聞いて、私たちの脳裏に浮かぶのだ不吉な漢字一文字。みんなもその一文字が思い浮かんでいるから、大きな声でそう言って誤魔化すしかないんだきっと・・・。

「それとも姿を確認できただけで逃げられちゃったとか！」

だから私だってそう言った。だけどクロノ君はみんなの言葉に対して小さく首を横に振るだけ。

「ねえ、お願い・・・。お願いだから、そうだって言って・・・。ルシルは、ルシル達はケガだけで済んだって・・・無事だって言っ

て！」

「シャルちゃん・・・」

「・・・ルシルとアイリは、エルセアの無人区画で・・・遺体で発見された」

一瞬シンと静まる車内だけど、次の瞬間には「あああああああああああああああああああああ！！」シャルちゃんの叫び声と、意識を失った「はやて！」ちゃんの名前を呼ぶヴィータちゃん達の叫び声が響いた。頭の中にルシル君との思い出が走馬灯のように駆け巡って、涙が溢れ出した私は声を上げて泣いた。

・―・―・終わり・―・―・

あの後、本局医務局の遺体安置所を訪れたけど、損傷が酷すぎて見ない方がいいってリンディさんとクロノ君に言われて、私たちはルシル君とアイリの遺体を見ることはなく、翌日には葬儀も済ませた。ルシル君とアイリの死を聞かされてから1週間。私たちチーム海鳴は、局員最強の一角と謳われるルシル君の殉職という緊急事態を重く見た脅威対策室からの要請で特騎隊に参加することになって、今日も一切動きを見せなくなった"T・C・"を壊滅すべく動いていた。

「残る幹部はガーデンベルグ、そしてリーダーの2人・・・」

ルシル君とアイリの遺体と一緒に、"T・C・"幹部のレオン、プ

リムス、フォード、アーサーの遺体も発見されていた。遺伝子検査の結果、幹部の４人は現代人じゃなくて過去の人物のクローンであると局は断定した。ルシル君のオリジナルと因縁もあったということも後押しした結果だ。

（ルシル君、アイリ。私たちが必ず、２人の無念を晴らすからね・・・）

†††Ｓｉｄｅなのは⇒フォルセティ†††

父さんとアイリお姉ちゃんが亡くなって２週間。父さんとアイリお姉ちゃんの殺害を機に一気に世論で叩かれ始めた"Ｔ・Ｃ・"のニュースが毎日放映されてる。学院だとクラスメイトやシスター達が僕を気遣ってくれる。そんな中でヴィヴィオ達は普段通りに接してくれるから気が楽だ。

「フォルセティ、一緒に帰ろう！」

「今日もお母様が美味しい夕食を作って待ってくれていますよ」

中等部３年となった僕のクラスメイト、ヴィヴィオとイクスヴェリア――イクスが、僕に声を掛けてくれた。コロナとリオは残念ながら別クラスで、アインハルトさんも卒業してもう学院には居ない。けど２人が同じクラスだったから、僕は救われてる。

「うん、帰ろう！」

鞄を手に取ってヴィヴィオとイクスの元へ。クラスメイトと挨拶を交わしながら教室を出て、「おーい！」って僕たちに手を振る「コロナ、リオ！」と合流。学舎から出ると、視界の端にスッと気配も無く現れる私服姿の大人が2人。ヴィヴィオ達も気付いているけど、目を向けることなくいつも通りにお喋りだ。

（早く捕まればいいのな、キュンナとグレゴールと融合騎・・・）

ヴィヴィオを狙っていた最後の大隊っていう犯罪組織の元幹部の3人が本局から脱走したって話を、教会騎士団幹部のカリムさんに聞いた。そんなわけで3人が逮捕されるまで、ヴィヴィオを陰ながら護衛する騎士が手配された。僕たちを遠巻きに見ている今の大人たちが、その護衛だ。学院に居る間はもちろん、行き帰り、そして自宅を護衛する3チームが存在していて、僕とヴィヴィオは以前みたいにフライハイト邸でお世話になってるから、交代で護衛してくれてる。

「アインハルトさんは、イクスんちで合流だっけ？」

「うん。ノーヴェやミウラさん、ユミナさんと一緒に来てくれるって」

「アインハルトさん、練習試合が近いけどいいのかな・・・？」

「ルーティンを変えると余計に調子が狂うって言ってたもんね、アインハルトさん」

「あー、それ判るかも。いつも通りに過ごした方が力が出るっていうの」

ＤＳＡＡ格闘競技・Ｕ１９で、ジークさんや番長と今も競い合ってるアインハルトさん。ヴィクターさんやエルスさんはもう２０歳以上だからもう別の階級だし、ジークさんも来年で２０歳だからＵ１９で戦えるのは今年しかないって焦ってたみたいだけど・・・。でもナカジマジムの仲間として一緒に鍛えることが出来て、アインハルトさんもヴィヴィオ達も嬉しそうだし楽しそうだから、まぁいいか。

「フーカさんは今日・・・」

「リンネさんとお出かけですね」

フーカさんは2年くらい前にナカジマジムの仲間になった選手で、リンネさんはライバルジムの選手だ。フーカさんとリンネさん、それにヴィヴィオ達との間で、ちょっと問題というか事件というか騒ぎがあったけど、今は練習試合や遊べるほど仲が良くなってる。

「おかえり、イクス。ヴィヴィオ、フォルセティ、コロナ、リオも、おかえり」

「「「「ただいま、ルーツィアさん！」」」」

お客用の駐車場で僕たちを出迎えてくれたのはフライハイト家の女中長の1人、ルーツィアさん。双子の妹でもう1人の女中長である

ルーツィエは、養子としてフライハイト家に引き取られたから、シャルさんや、同じように養子として迎えられたイクス、セイン、オットー、ディードのお姉さんでもある。

「あれ？　オットーとディードではなかったのです？」

首を傾げたイクスにルーツィアさんは「イリスから迎えに来るように言われてね」って苦笑いで答えた。朝起きてご飯を頂いていた時、オットーとディードが今日の送り迎え兼護衛って挨拶してたっけ。シャルさんからの指示ならしょうがないかな～。

「シャルさん・・・。ルシルさんのお葬式以来逢って――ご、ごめんフォルセティ！」

コロナがそこまで言うと、ハッとして僕に謝った。コロナも普段通りに過ごそうとしてくれてるけど、やっぱり父さんの話題になるとハッとして謝るってことがある。だから僕はいつも通りに「大丈夫、大丈夫だよ」ってコロナに微笑みかけた。

「父さんが亡くなったと聞いたあの日、僕はいっぱい泣いた。悲しむのはそれだけで十分だったんだ。セインテストの宿願。父さんが近い内に亡くなるのは判っていたし、だから覚悟もしていたし・・・――」

父さんとアイリお姉ちゃんが亡くなったその日、２人からメールを貰ってた。

――フォルセティ。突然で本当に申し訳ないが、父さんとアイリはこれから、セインテストの宿願を果たすべく最後の戦いに臨むことになった。勝敗にかかわらず父さんは生きては戻って来られない。アイリは可能な限り帰らせるつもりだが・・・。いつも仕事で家を空けてばかりで、父としてお前には何もしてやれなかったと思う。ごめんな、フォルセティ。そんなダメな俺から頼み事なんてとは思うだろうし、家族想いな優しいお前なら頼むまでもないだろうが、母さんを、はやてを支えてあげてほしい。最後に。セインテストの宿願は必ず俺の代で終わらせる。だから安心して、お前はお前の人生を歩み、幸せになってほしい。それが、ダメな父親の俺の願いだ。これまでありがとう、愛している、フォルセティ――

――やっほー、フォルセティ♪　うーん、お別れになるかもしれないし、帰れるかもしれないし、どう言えばいいのかな～？　アイリお姉ちゃんはこれから、マイスターと一緒にバトってきます！　相手はめっちゃ強いから、アイリお姉ちゃんもどうなるか判らないの。フォルセティが大きくなるのを見守っていきたいけど、ごめんね？　アイリお姉ちゃんは、女としての幸せを、融合騎としての存在意義を選びました。もし生きて帰ってきたらフォルセティに、アイリお姉ちゃんを叱る権利を贈呈します！　えっと、それまでバイバイ。大好きだよ、フォルセティ――

父さんもアイリお姉ちゃんも帰ってこなかった。メールだったけど僕のことを想ってくれてるってことを伝えてくれたから、もう・・・。

「お葬式の時、ヴィヴィオとコロナが僕を抱きしめて一緒に泣いてくれたから」

「「フォルセティ・・・」」

父さんとアイリお姉ちゃんが納められた柩が埋められるとき、父さんとアイリお姉ちゃんを心配させたくなくて泣かないように耐えてた。でもそんな僕に気付いたヴィヴィオとコロナが両側から、泣いていいんだよ、男の子だからって我慢しなくていいんだよ、って言って僕を抱きしめてくれた。だから僕は耐え切れなくなって、ヴィヴィオ達と一緒に大きな声で泣いた。

「だから大丈夫なんだ」

そう言って普通に笑って見せると、ヴィヴィオ達も安心して笑い返してくれた。そんな僕の頭をルーツィアさんが撫でて、「えらいえらい。格好いいね」って褒めてくれた。

それから僕たちはルーツィアさんの運転する車でフライハイト邸まで帰った。家の地下には広い駐車場があって、ある車を見たルーツィアさんが「イリス達はもう帰って来てるみたい」って言った。みんなと一緒に屋敷に入ったところで、なんか怒鳴り声のようなものが応接室から聞こえてきた。

「キルシュブリューテを持ち出して何をする気なの！？」

「決まってるでしょ！　ルシルとアイリを殺した連中の首を刎ね飛ばす！」

「何を馬鹿なことを！　公務員が堂々と殺人宣言など！」

「だって！」

「ルシル君とアイリちゃんも、あなたに殺人を犯させてまで敵を討てなんて絶対に思わないわ！」

「けどアイツら！　ルシルとアイリを、わたし達に見せられないほどにしたってクロノは言ってた！　あのクロノですら2人の遺体を見て後悔したって！　そんなに酷く損傷させたんだよ！　許せるわけない！　ルシル達が望まなくても、わたしは許さない！　必ず見つけ出してころ――」

「いい加減にしなさい！　犯罪者に命で償わせようとしない！　逮捕して、裁判にかけて、そしてしっかりと罪を償わせなさい！　それが嫌だと言うなら知りません、この家から出て行きなさい！」

「～～～～～～っ！！」

シャルさんとマリアンネさんの言い争いがピタっと止まったかと思えば、ルーツィアさんが別の部屋に入るように無言で手招きしたから、僕たちは慌ててその部屋に入った。ほぼ同時にシャルさんの涙声な「わからず屋！」っていう怒鳴り声が聞こえて、応接室のドアが勢いよく開いた音がした。

「「シャルお嬢様！」」

「放っておきなさい、オットー、ディード。・・・はぁ。気持ちは解らないわけではないの。私だってルシル君のこと好きだったし、イリスのお婿さんになってほしいなって思っていた。それが惨たらしく殺されたと言うんだもの。ショックだったわ。でも、愛娘を殺人者にするわけにはいかないのよ。いくら相手が犯罪者で殺人犯だったとしても・・・」

「「お気持ちお察しします」」

「今は私の娘として接してほしいわ」

「「はい。お母様」」

ルーティアさんが部屋のドアを開けて、「行きましょう」って促したから僕たちは部屋の外に出て、応接室のマリアンネさん達に挨拶するべく向かった。ドアが開いていたからすぐに僕たちに気付いたマリアンネさんが「あら！　おかえりなさい、イクス、ヴィヴィオちゃん、フォルセティ君、コロナちゃん、リオちゃん！」って笑顔で出迎えてくれた。

「ただいま、母様」

「「「「ただいま、マリアンネさん！」」」」

「「おかえりなさい、お嬢様方」」

オットーとディードにも「ただいま！」って挨拶を返して、マリアンネさんの指示でお茶を淹れに行った2人を見送った僕たちは、促されるままにソファに座った。ちなみにルーツィアさんは、後で合流するアインハルトさんやミウラと一緒に食べられるようにお菓子を作りに行ってる。

「フォルセティ君。はやてちゃ――お母様のご様子はどう？　お仕事は休んでいると聞いているけど・・・」

「お葬式の後からずっと寝込んでます」

「そう・・・。うちの娘よりルシル君との付き合いが長く深いものね」

シャマルお姉ちゃんの話だと、母さんは心を病んでしまった、ということだ。父さんとアイリお姉ちゃんが亡くなってしまう原因を生み出したのは自分だって責め続けてるって。

（ごめん、父さん。僕じゃ母さんを支えきれないかも・・・）

母さんは僕を見ると、何度も泣きながら謝るし、僕を父さんと見間違えて押し倒されたこともあった。その時はアインスお姉ちゃんやリインお姉ちゃんに助けられて大丈夫だったけど・・・。僕は僕だって父さんは言ってくれたけど、母さんを支えるにはやっぱり・・・。

それからアインハルトさんとミウラが合流するまで、僕は母さんを元気づける方法を考えていた。

Ｓａｇａ２１再起～Ｏｎｅ　ｓｔｅｐ　ｏｆ　ｒｅｔｕｒｎ～

†††Ｓｉｄｅヴィータ†††

ルシルとアイリが殺されて、"Ｔ・Ｃ・"の幹部だったレオン、フォード、プリムス、アーサーも一緒に遺体で見つかった。そんでルシルとアイリを殺したと思しき"Ｔ・Ｃ・"のリーダーと、ひょっとしたら同じ場所に居たかもしれないガーデンベルグの行方は未だ知れず。

幹部はほぼ全滅。さらにルシルとアイリを殺したことで世論は一気に反"Ｔ・Ｃ・"に傾いた。そんなわけで"Ｔ・Ｃ・"は完全に雲隠れしちまったから、特務零課の協力することになったあたしらチーム海鳴はかなり暇をしてた。

「じゃあシフト通り八神家は本日午後から明後日午後まで休暇ね。・・・悪いね、せっかく協力してもらってるのに何もやる事なくて」

特務零課の副隊長だったルシルが死んじまって、代わりにルミナが部隊員のシフトを調整することになったわけだ。零課の正式メンバーは基本的に本局からは出られねぇけど、あくまで臨時部隊員なチーム海鳴は自宅に帰ることが許されてる。

「気にしなくていい。我々としても力を貸したいからここにいる」

「ええ。ルシル君とアイリちゃんを殺した、リーダーとガーデンベルグを捕まえるために私たちは参加したんだもの」

「そういうこった。今の退屈な時間は、リーダーとガーデンベルグ、それに構成員が活動を再開した時のための充電期間だって考えてんだからな」

オリジナルセインテストのクローンだったルシルやオーディン。現行のクローンが死んだ場合、それまでの歴代クローンの記憶や魔術、複製したものを引き継いだ新しいクローンが作られるって言ってたルシル。ソイツがガーデンベルグやリアンシェルトを斃せるかどうかは判んねぇし、いつ姿を見せるかも判んねぇんだから、あたし達が先にぶっ倒してもいいはずだ。つうか、殺る。あたしらの家族を殺し、はやての心を壊した奴らは絶対に許さねぇ・・・。

「問題はリーダーだよな。きっと、他の幹部たちと同じように古代の魔術師のクローンだろうけどさ」

「管理世界人の遺伝子データバンクと照合して、レオン達の遺伝子情報がどこの管理世界の遺伝子特徴にも当てはまらないらしいからな」

「管理外世界人である可能性は捨てきれないけど、ルシルやフォルセティ、ヴィヴィオっていう古い時代の人間のクローンは実在するからね。生まれ変わりよりクローンであると言った方がまだ信頼性があんだねこれが」

ルミナの言う通りだな。いくら生まれ変わりでもオリジナルと全部がそっくりなんて（シャルは例外中の例外だな）まずありえねぇか

らな。クローンって言われた方が納得しやすいってわけだ。

「まぁとにかく、頼りにしているからね。んじゃお疲れ」

ルミナやセレス達と「お疲れ～」って挨拶を交わしながらオフィスを出る。本部ビルから出るためにエスカレーターホールへ向かう途中、「あ、今から帰り？」って声を掛けてきたフェイトと、「お疲れさま～」って手を振るアリシアとバッタリ会ったから、あたしらも「お疲れさん」と返した。

「そういやさ。エリオとキャロ、どんな感じだ？」

「あー、うん。やっぱり落ち込んだままだよ」

「ルシルやアイリと最後に会ったのが、エリオとキャロ、スバルとティアナだからね」

「これからT・C・の追撃を行うって言っていたルシルとアイリに、無理にでも付いて行けばよかったって後悔してる」

「無理もないわね・・・。最後に逢って、そして話したのだから、余計に責任を感じちゃうわよね」

ルシルはセインテストの宿願のため近い内に死ぬ。それはみんな知ってて覚悟もしてた。けどさ、ルシルは"エグリゴリ"との最期の戦いに挑むときはちゃんと挨拶してからって言ってたのに、それを果たすことなく死んじまった。だから今のイレギュラーな状況はあ

たしらはもちろん、管理局を混乱させるには十分だった。

「エリオ達には、気にするな、としか言えんが・・・」

「うん、大丈夫。２人もそうだし、スバルとティアナももう子ども
じゃないから、必ず立ち直ってくれるよ」

「ていうか、立ち直ってもらわないと困る。私たちだって立ち直っ
たんだから・・・。それよりも問題はそっちの方が大きいでしょ？
はやて、もう２週間以上も家から出ないって話だし」

アリシアにそう言われたあたしら八神家は顔を見合わせて、シャマ
ルが「どうすればいいかしら？」って溜息を吐いた。はやてはルシ
ルの死で精神を病んで、今は休職中だ。葬式の時も車椅子でしか動
けなくなっちまってたし、今は自分の部屋に引き籠ってる。

「主はやてが自力で立ち直るのを待つしかないのだろうが・・・」

「何か力になれないかな～・・・？」

「アインスとリインも、いつまでも休ませておくのもね」

「ルシルのバカが、逃げるような真似をしなけりゃまだ・・・」

あたしはルシルへの怒りで自分の左手の平に右拳を打ち付けた。誰
も口にはしねぇけど、ルシルが招いた現状に怒りを覚えてる奴もい
るはずだ。

「はやてを立ち直らせるにはやっぱり・・・目的が要ると思う」

「「「目的・・・」」」

あたしとシャマルとアギトが繰り返し、シグナムが「やはりか。しかし・・・」って唸ってからオフィスを見ると、あたし達もフェイトとアリシアもオフィスに振り向いた。

「シャルと、ミッドに居るトリシュは復讐の鬼として。私たちは・・・管理局員としての義務や、ルシルとアイリの無念を晴らすため」

「それは理解しているが、主はやてには・・・」

「難しいわ。はやてちゃんの人生そのものだった目的は、ルシル君と正式に結ばれて夫婦になること。それがいきなり根底から崩れて・・・」

「我らが主に復讐は不可能だ。お優しすぎる。ゆえに今、シャルやトリシュタンのように怒り狂ってはおらず、ご自身を責め続けていらっしゃるのだ」

「だけど、はやてにも何か目標を持ってもらわなきゃ・・・」

「本当に心が壊れちゃうぜ？」

（はやて・・・）

重い空気が流れたまま、休憩が終わるってことでフェイトとアリシアはオフィスに戻っていった。２人を見送った後は改めて本部ビルを出て、ミッド首都次元港往きの次元航行船に乗った。んで、首都次元港からはレールウェイで八神邸のある南部のステーションへ。そっからは全員が乗れるバンタイプのタクシーを拾って家まで直行だ。

「フォルセティはもう帰ってる頃かしら」

仕事であたしら家族が全員いないとき、フォルセティは基本シャルんちで世話になるよう頼んである。まぁフォルセティももう１４歳だ、１人で留守番も出来るだろうけど今は難しい。理由は腹立つことに、最後の大隊の幹部のキュンナ、グレゴール、エーアスト（本名はアインスだが、うちのと被るから奴の使った偽名を使ってる）の３人が本局から完全に脱走したかもしれないってことで、再び狙われないかと局と聖王教会がピリついてるからだ。

「おそらくな。・・・フォルセティのためにも、酷だろうが主はやてに立ち直ってもらわなければ」

「だな」

タクシーの運転手への料金の支払いを済ませたシャマルの「お待たせ。さ、早く入りましょ」って言葉に頷いて、玄関のドアノブに手を掛けたあたしは１回だけ深呼吸。リインやアインスからは、はやてに関してのメールは来てねぇ。つまり現状変わらずってこった。

だから元気な声か静かな声かで迷ったんだが・・・。

「よし。たっ、ただいま～・・・」

元気な声で挨拶をしようとしたけど気付けば静か～に声を出して、ドアもゆっくりと開けちまってた。そんなあたしに「何をしている。早く入れ」ってシグナムが急かしてきやがった。あたしの代わりにドアを開けたシグナムがあたしの体を押しながら玄関に入ろうとした。

「ちょっ、押すなよ！　シグナ――え？」

シグナムに文句を言おうとしたけど、今まさにリビングに入ろうとしてる人物を見てあたしは目を見開いた。

「おかえり、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、アギト」

「ルシル・・・！？」

†††Ｓｉｄｅヴィータ⇒はやて†††

布団を頭まで被って、深い闇の中で小さなモニターを見続ける。映るってるのはルシルや私たちで、自宅の庭でバーベキューをやってる様子の映像や。

『ほらルシル、あーん♡』

『あ、あーん』

『わ、私も！　ルシル君、あーん！』

『あーん』

『『美味しい？』』

『美味い』

私が考えてたあーんを、真っ先にアイリが実行したから負けじと私も実行したんやったな。そっからは私とアイリであーんを繰り返して、ルシル君を困らせて・・・。楽しそうやなぁ、ルシル君も、アイリも、私も、みんなも。モニターの中のみんなは笑顔で、ホンマに楽しそうや。

――T・C・がわざわざ本局に乗り込んでまで見た捜査資料。ルシル君が無理やり話を終わらせようとした何か。・・・このまま調べたら、何かが起こるってゆう気はしてる。そやけど私は・・・管理局員や――

そんで次は、機動六課の同窓会。当時の構成メンバーを集めはしたけどあんまり遠出は出来ひんってことで、ミッドと本局からも近い第5管理世界ファストラウムのリゾート諸島で開いた。いくつもある小さな島の1つを貸し切って、いくつもあるコテージで寝泊まりするってゆう内容や。

豪華なホテルで優雅に寝泊まりってゆうのも考えられたんやけど、

料理の出来る子がたくさん居ったし、魚釣りや森の中で獲れる食べ物、それに食料持ち込みもＯＫやったから、思い出も多く残せるってことで、ホテル泊りは却下になったんやったな。

『ほら、フォルセティ。もうちょいやよ！』

『その調子だ。バタ足を続けるんだ』

水着姿の私とルシル君で、初めての海水浴とゆうことで泳げへんかったフォルセティに泳ぎ方を教える特訓の様子が映される。モニターに映る私の視線がこちら――撮影係を買って出たアインスに向いて笑顔を浮かべた。

少しカメラが私から外れて、沖の方に向けられた。水上バイクを運転するヴァイス陸曹と、牽引されてるバナナボートに乗るヴィータ、アイリ、アリサちゃん、アリシアちゃんが映った。

次は近くのなのはちゃんとフェイトちゃん。２人は私やルシル君と同様、泳げへんヴィヴィオに泳ぎの練習をさせてる。私の視線とアインスのカメラがそっちにも向いて、なのはちゃん達が笑顔を向けてくれた。

機動六課の同窓会ってゆうことで恋敵のシャルちゃんとトリシュは居らへんし、アイリも遊びに夢中。ルシル君と夫婦っぽいことが出来て大満足やったな。

――あくまで状況証拠に過ぎひん。黒のテスタメントが実はステアちゃんとルシル君の２人組やってことも考えられる。もしかしたら、ひょっとすると、あるいは・・・――

毎日毎日、私は思い出の中に閉じこもる。解ってる、こんな生活を続けてたらアカンてことくらいは。そやけど・・・。

――これまでの当たり前の日常を失うかもしれへん、そんな恐怖が今の私を襲ってた――

「なん・・・で・・・」

あの時、どうして私は踏み止まらへんかったんや。予感はしてたんや、何かが終わるって。それやのに私はルシル君が隠そうとしてた秘密を暴いた。ルシル君がかつて神父服を着てたって事実を知ってたのは私だけで、それを黙ってればルシル君は局から逃げず、"T・C・"からの呼び出しにもアイリとの2人だけで向かおうとせえへんかったかもしれへん。

――はやて。このような形での別れは俺にとっても辛いが・・・さようならだ――

モニターに映る私とルシル君は幸せそうに笑ってる。それはもう二度と叶わぬ夢。また目から涙が溢れ出てきて、「う・・ぅ・・うぅ・・・」嗚咽も漏れだす。胸の内に渦巻くのは悲嘆と後悔。私の選択の所為でルシル君とアイリは殺された。2人の遺体は最後まで見られへんかったけど、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、アインス達の様子から酷いものやったってことは判った。

「ごめ・・・さい・・・」

視覚や聴覚を封じるかのように布団の中で丸まって、両膝の間に顔を埋める。このまま深い眠りに着きたい、そう思うた時、コンコンコンとドアをノックする音が聞こえてきた。アインスかリインがいつも通りに食事を持って来たんやろうけど、今は食べたない・・・。

「アイン――」

「はやて」

「っ！！？」

私を呼ぶ声に目を見開く。そんなわけあらへん。だって「ルシル君・・・？」は死んだんや。そう、思い出に引き籠り過ぎて幻聴が聞こえただけ。そう思うてるのに私はベッドから降りて、よろよろとドアの方へと向かう。

「はやて。開けるよ？」

「っ！」

ガチャッとドアノブが回って、ゆっくりと開いてくドアの向こうには、「ルシル君・・・」が立ってた。夢か幻か判らへんけど、部屋に入って来たルシル君に歩み寄ろうとした。

「ぁ・・・！」

「か――はやて！」

床のカーペットの盛り上がりに躓いて転びそうになった時、ルシル君が「ほら、足元注意だぞ」って抱き止めてくれた。私は「ご、ごめんな！」って謝りながらも胸から顔を離すことなくピッタリと頬を当てて、その優しい鼓動、温もり、香りを実感する。

「ごめんな、ごめんな・・・」

「それは何に対しての、謝罪なんだ？」

ルシル君が私の背中に両腕を回してきてくれたから、私も腕をルシル君の背中に回してギュッと抱きしめた。

「私は・・・私が、余計なことをしたから・・・！　ルシル君とアイリは・・・！」

「大丈夫、大丈夫だから。はやてが気にすることじゃない。それに、俺はここに居る」

そう言ってルシル君は私の頭を撫でてくれた。いつもの気持ちの良い撫で方や。私は嬉しさの反面辛くなってきて、「ごめんな・・・ごめん・・・ごめん」って謝り続ける。今わたしが抱きしめてるルシル君は夢でも幻でもあらへん。そやからホンマは解ってる・・・。ルシル君やないってことは・・・。

――こんな形ではやてと別れないといけないことに本当に申し訳なく思っている。はやて、もし俺が居なくなったことで、そして死ん

だしまったことで責任を感じるようであれば、それは違う、絶対に違うと言うよ。別れは突然だったが必然なんだ。確かに形としては最悪かもしれないが、自白したのは俺で、逃げたのも俺自身。責任はすべて俺にある。だからはやて、自分を責めないでほしい――

ごめんな、ルシル君。無理やった・・・。やっぱり自分を責めてまうよ。

――はやて。こんな俺に好意を抱いてくれてありがとう。みんなを騙して、嘘を吐き続けた俺には勿体なさすぎる女性だった。今でも君と初めて出会った日を鮮明に思い出せる。初めて会った俺を家族として招き入れてくれたことはもちろん、２０年近く一緒に過ごせたことは、俺にとって最大の幸福だった――

私もや。ルシル君との出会ってあの日は、今でも宝物みたいに大事な思い出。そんで一緒に過ごしせたことも幸せやった。

――俺への想いを断ち切れ、新しい恋を見つけろ、なんて言わない。ただ、幸せになってほしい。歩くロストロギアなんて言われているが、君はどこにでもいる普通の女性だ。俺が死んだことでしばらくは立ち直れないかもしれない・・・かな？　でも大丈夫だと信じている。シグナム達がいるし、成長してさらに強く優しくなったフォルセティもいるからな。きっと君を支えてくれる。

最後に。はやて。君に最大限の感謝を。今まで俺に幸せをくれて、ありがとう――

「ホンマにごめんな・・・」

「いいんだよ、はやて。俺はずっと一緒だから。泣かなくたっていい」

自分に対する情けなさと、この子の優しさにまた涙が溢れ出てくる。ルシル君の肩越しをチラリと見れば、不安そうに私たちを見てるアインス達の姿が。これはアインス達の考えたことやろか、それともこの子の考えたことやろか・・・。もしそうなら母親失格過ぎや。いやもう手遅れレベルか・・・。

「こんな情けない母親でごめんな、フォルセティ」

ルシル君の、ううんフォルセティの頭を胸に抱いてギュッと抱きしめる。フォルセティはハッとしたけどすぐに「何のことか判らないが・・・」って、ルシル君のフリをし続けようとした。今のフォルセティは、ルシル君の服を着たり香水も使ってたり、変身魔法なんか身長もルシル君の１５７㎝に合わせてる。フォルセティ、成長期に入って今は１６５㎝はあるからな。あっという間に追い越されてしもた。

「もうええんよ、フォルセティ。ルシル君の真似をせえへんでも。私のこと、支えようとしてくれたんやね？」

「・・・母さん」

「うん。ごめんな。息子にこんな真似をさせて、ホンマに母親失格や」

「そんなことないよ。・・・母さんが、どれだけ父さんを大切に想っていたか知ってるから。だから落ち込んでも仕方ないよ」

「それでも、子どもにこんな父親の真似をさせるような醜態を晒した。変身魔法も解除してええよ」

私がそう言うとフォルセティは「ちょっと待ってて。父さんの服破けちゃうから着替えてくる」って涙声でそう言って、私の部屋から出て行った。その間、私は「みんなも、ごめんな。心配、迷惑をかけた」って頭を下げて謝った。

「「はやてちゃん！」」

「「はやてー！」」

シャマルとリインとヴィータとアギトが勢いよくハグしてきてくれたから、「ホンマにごめん！」って抱き止めた。シグナムは「おかえりなさい、主はやて」って、そんでアインスも「復帰お待ちしていました」って微笑んでくれた。狼形態のザフィーラは私の側で伏せたから、「ザフィーラもごめんな」って頭を撫でる。

「情けない主でごめんやった。そやけど、私はもう立ち上がらなアカンよな。これ以上引き籠ってたらルシル君、それにアイリにも笑われてまう」

ホンマはまだ引きずってるルシル君とアイリの死。それでももう夢

から覚めへんと。辛くても悲しくても、ルシル君とアイリの果たせへんかった使命を果たす。それを私の務めとしたい。私をハグしたまま離れへんヴィータ達をよしよしって撫でてると、「母さん」ってフォルセティが戻って来た。

「おいで、フォルセティ。無理をさせてごめんやったな」

「ううん。無理じゃないよ。これは僕にとっての一か八かの賭けだったんだ。僕が父さんのフリをして母さんがどんな反応をするか。父さんとして母さんが受け入れた時、僕は一生フォルセティとしてじゃなくて父さん――ルシリオンとして生きていこうって思ってた。だけど母さんはやっぱり強いよ。ちゃんと立ち直ってくれた！」

そう言うて袖で涙を拭うフォルセティが愛おしく抱きしめたくなったから「ほら、おいで」って呼ぶんやけど、「僕、もう小さな子どもじゃないからもう1回は無理」って首を横に振った。

「シグナム、アインス」

「「はい、主はやて」」

「ちょっ！？　シグナムお姉ちゃん、アインスお姉ちゃん！？」

フォルセティの腕をそれぞれシグナムとアインスが抱き止めて、私のところに連行してきてくれた。ヴィータ達がニヤニヤしながら離れて、「母さんずるい！」ってフォルセティは抵抗する。そやけどシグナムが「腰が入っていないぞ。それでは簡単に移動させられる」

ってお説教。

「お姉ちゃん達2人がかりでどのみち無理！」

「はい、フォルセティ～♪」

腕を広げてフォルセティを迎えようとしてたら、私たちの携帯端末がメールを受信したことを知らせるコール音を一斉に流した。収まると同時に今度は通信コールが入ったから、「はい。八神です」って応じた。

『え、はやて！？　もう大丈夫なの！？』

「うん、アリサちゃん。ご心配とご迷惑をおかけして申しわ――」

『待って、はやて！　今すぐに出れる！？　T・C・が活動を再開したわ！』

活動を再開ってゆうことに引っ掛かりを覚えたけど、私が夢に閉じ籠ってる間は活動してへんかったんやろか。とにかく、"T・C・"が動き出したんなら「了解！　八神家、出撃します！」や。

Ｓａｇａ２２－Ａ最終侵攻～Ｂａｔｔｌｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｎｏｒｔｈ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

来た来た来た来た来た。ようやく"Ｔ・Ｃ・"が活動を再開してくれた。リーダーかガーデンベルグか、どっちがルシルとアイリを殺したのか判らないけど、ガーデンベルグは必殺確定。リーダーも、事故に見せかけてでもこの手で殺す。わたし達から、わたしからルシルを奪った奴はこの世界に生きていていいわけがない。

「シャル！　はやても復活したみたいよ！　八神家総員も参加できるって！」

「そう、やっとなのね、はやて。・・・了解」

特騎隊の臨時スタッフとして働いてくれてるアリサからの報告にそう答えて、「ルミナ、Ｔ・Ｃ・からの挑戦状（メッセージ）を全員に送信」って指示を出す。腹立たしいことに"Ｔ・Ｃ・"はわたし達に直接メッセージを送りつけてきた。日時と場所を明記したうえで襲撃するという挑戦状だ。

（ルシルとアイリを誤って殺害したことに対するお詫びとして、こちらの今後の行動を伝えよう？　ふざけんな・・・！）

わたし達に防衛準備をするよう仕向けたうえで襲撃しに行きますっ

ていう宣戦布告。ただでさえルシルとアイリっていう身内を無残に殺害されたことで、本局の"T・C・"に対するヘイトはとんでもないのになってる中で、こんな、捕まえられるものなら捕まえてみろ、みたいな挑発的なメッセージを送り付けられたりなんかすれば、さらに高まるのは必至だ。

「それで？　チーム分けはどうする？」

「幹部はガーデンベルグを除いて壊滅したことで残るは雑魚だろうから・・・」

襲撃を予告されたのはミッドの各地にある名の有るロストロギアの研究施設で、6ヵ所中5ヵ所は局の研究施設だけど、残り1ヵ所は聖王教会本部をターゲットにしてる。あそこにも魔術を使える騎士が居るし、そっちへの派遣はしないつもりだから、特騎隊は残る5ヵ所の防衛をすることになる。

「はやて、アインス、シグナム、アギト、ザフィーラを中央区アンダリアへ。すずかとシスターズを同じく中央区のダァムシアンへ。なのは、ヴィータ、リイン、クラリスを東部メランへ。フェイト、アリシア、エリオ、キャロを南部マクファーデン地区へ。アリサ、スバル、ティアナ、ミヤビを西部ネオンノード地区へ」

「他は？」

「わたし、ルミナ、セレスはスカラボで待機。6ヵ所のどれかでリーダーを確認次第、ミッドへ直通転送で出撃よ」

「徹底的にリーダー狙いか。・・・ところで襲撃は1週間後の正午みたいだけど、それまでに各施設からロストロギアを移動させないの？」

ロストロギアなどの魔力保有物の移動、それは先日の本局襲撃の時に実行した手段だ。だけど「今回はやめた方がいいと思う」って首を横に振った。襲撃場所を指定した以上、すでに施設を見張ってる可能性がある。今さら変更したところで襲撃場所が変わるだけ。本局に集めて、招き入れた"T・C・"の残党と総力戦をやってもいいけど、本局はあくまで次元航行部の本部であって戦場じゃない。さらに上層部からは前回みたいに囚人を脱獄させてほしくはないから余計に戦場にするなってに釘を刺されてる。まぁ前回は囚人たちの魔力を吸収するのが目的だったから、今回もやるって可能性は低いと思うけど・・・。

「とまぁ、そんな理由で本局に招くような真似はアウトなの。だから地上で潰すわ、徹底的に、確実に」

部隊長席の背もたれに体重を預け、静かに魔力と殺意を研ぎ澄ませてると、「イリス、堕ちちゃダメだからね？」って、わたしの肩に手を置いたルミナに「判ってる」って言っておく。チラッと見たデスクの引き出しの中には退職届と、フライハイト家への離縁状が入ってる。これからわたしは人を殺す。管理局員どころか人として許されない私情による身勝手な殺人だ。フライハイトやシャルロッテを名乗る資格すら無いし、局員であり続けるのも不可能だ。だから、そのための意思表示・・・。

「もし、イリスが暴走するようだったら、私が、私たちが力ずくで止めるから」

「・・・肝に銘じておくよ」

襲撃は1週間後の正午。局員としての、騎士としての、フライハイト家長女としてのイリス・ド・シャルロッテ・フライハイトの人生もきっと1週間後で終わるだろうけど、"T・C・"も一緒に終わらせてやる。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒トリシュタン†††

「全騎傾注！」

「先日すでに伝えましたが本日正午、聖王教会本部に保管されているロストロギアを犯罪組織T・C・が奪いに来るという情報が、本局特務零課課長、イリス・ド・シャルロッテ・フライハイトより送られてきました。T・C・は我ら教会騎士団の恩人であるルシリオン・セインテスト、アイリ・セインテストを惨殺しました。同じ秩序を守っていた者としても、私個人の知人としても、彼らの死は辛く悲しく、そして許せない」

教会騎士団総会というこの場で、聖王教教皇であり教会騎士団団長であるマリアンネ聖下が壇上で告げた。聖下はイリスの母親でもあるためルシルさんとは個人的な付き合いもあった。私だって、ルシルさんを想い慕っていて、アイリはご先祖エリーゼ卿の時代よりシ

ュテルンベルク家の家族だった。私にとって２人とも大切な存在だった。

「２人の命を奪った犯罪組織Ｔ・Ｃ・が、今度は私たちの城に盗みのために攻め入ろうと言う！　騎士の総本山に攻め入らんとするあの愚かな者たちに思い知らせてあげましょう！　私たち騎士に敗北の二文字など無いことを！」

聖下の言葉に私たち教会騎士は雄叫びで応じた。ルシルさんやアイリと関わりのある騎士は、聖下と同じように２人の仇を討たんとするため。関わりの弱い騎士は、自分たちの本部への襲撃に対する怒りで以て。そこからはすぐに行動を開始。

全１３隊ある騎士隊の中で戦闘の出来る騎士隊１１隊の内、銀薔薇騎士隊、白雪中花騎士隊、朱朝顔騎士隊の４隊が、対"Ｔ・Ｃ・"の戦力として聖王教会本部の正門、北門、西門、東門で待ち構えることになっている。そして全騎、対魔術仕様の神秘カートリッジを渡されていることで、魔術師が来ても一方的に不利にはならない。

「トリシュ」

「兄様」

教会本部を囲う壁の正門を護ることになった銀薔薇騎士隊の一員であるパーシヴァル――兄様が、槍型アームドデバイス・"ロンゴミアント"を手に私に声を掛けました。

「知っているか？　先日、イリスがフライハイト邸よりキルシュブ

リューテを持ち出そうとして、聖下にかなりきつく叱られたそうだ」

「イリスがキルシュブリューテを？」

フライハイトの"キルシュブリューテ"となれば、イリスのデバイスのことではなくフライハイト家に受け継がれてきた神器のことを指すはず。神器は強大な武器ではあるけど非殺傷設定なんてものが無いため、魔術と共に危険なものだ。それを持ち出そうとしたということは、ルシルさんとアイリを殺害したと思われる"T・C・"のリーダーと、"エグリゴリ"のガーデンベルグを殺害するための手段にしようとしたのだと思う。

「魔術師であろうリーダーと、エグリゴリのガーデンベルグを斃すには必要な物かと思いますが」

「キルシュブリューテでリーダーとガーデンベルグの首を刎ねる、と言っていたそうだ」

「そうですか・・・（ハッキリ言いすぎ！！！）」

ルシルさんとアイリの葬儀の後、私とイリスは誓った。２人の仇は絶対に殺ると。そのための"キルシュブリューテ"は解るけれど、正直に言って持ち出せるなんて考えたイリスの頭の弱さに驚くほかない。ううん、そこまで感情的になっているということは、それだけ本気だということ。責めるわけにはいかない。

「ところでトリシュ」

「はい、なんでしょうか？」

「その楽器ケースはなんだい？　お前は歌も楽器もダメな、音楽の成績E判定だったろ。なのに、なんでここにそんなケースがあるんだ？」

兄様が指を差したのは薄い長方形をした黒のケース。音楽の成績に関しては忘れていたい思い出だったのに、まさかこんな形で思い出すことになるなんて。兄様をじとーっと見ながら「これから練習を少々」と答えた。嘘だけれど。

「嘘だな」

即バレた。兄様はケースに一瞬で近付いて、私が止める間もなくガチャッと開けました。中に収められているのは楽器ではなく、「スタウロスか」と兄様の言うように、元ボーゲン・パラディンのガラガースが所有していた、ルシルさん曰く、神器に分類される杭、それが12本だ。

「やっぱりお前だったか。スタウロスは聖王教会に危機が迫った際、貸し出しが許されることになってはいるが、それはロストロギアなどの特異事象にのみ適用される。受付はお前がパラディンの1人だったから申請を通したわけだが・・・。トリシュ。スタウロスを何に向けて射ろうとしているのか解っているのか？」

「・・・イリスと私は同じ考えなのですよ、兄様。ルシルさんとア

イリを殺害した者を絶対に許さない」

「殺すと言うのか？　それでは奴らと同じ殺人犯だぞ」

「理解しています。騎士であろうと何だろうと他者の命を奪うのは大罪です」

「解っているようで何よりだ。じゃあコレはもう必要な――」

ケースの持ち手に手を伸ばそうとした兄様の右腕をパシッと掴み取り、「ソレ、まだ使いますので」と制した。睨み上げてきた兄様を睨み返し、空いている右手でケースの持ち手を掴もうとしたところで、『西門、東門にてＴ・Ｃ・構成員と思しき人物を確認！』と、全体通信で"Ｔ・Ｃ・"の襲撃が始まったことが通達された。

「トリシュ、騎士パーシヴァル！　こちらも来ました！」

同じ正門を護るアンジェの言葉に、私と兄様はバッと離れて臨戦態勢に移った。正門を護るのは私たち３人のみで、フィレスさんや他の銀薔薇騎士隊のメンバーは他の門の応援として散っている。魔術師化できる弓騎士最強の私と打撃騎士最強のアンジェに加え、神秘カートリッジを持つ槍騎士最強の兄様の３人であれば、銀薔薇騎士隊全騎が揃っていなくても問題ないとされたからだ。

「了解。こちら正門のトリシュタン。こちらでもＴ・Ｃ・構成員と思しき人物を視認、数２」

「同じくこちら正門防衛隊、パーシヴァル。警戒体制に移行する。T・C・構成員と確認後、即時戦闘を開始する」

『了解。ご武運を、騎士パーシヴァル、騎士トリシュタン、騎士アンジェリエ』

通信が切れる。私たちはこちらに向かって普通に歩いてくる、フード付きローブを身に纏う2人を睨む。1人は背の高い女性で、170cmはあるかもしれない。もう1人は150cmくらいで、歩き方からして性別は女。リーダーでもガーデンベルグでもない以上、スタウロスを使う必要はない。

「止まってください！　現在、聖王教会本部は封鎖中です！　これは1週間前より通達されていた事です！　礼拝などは明日まで受け付けておりません！　今すぐ来た道を戻ってください！」

"T・C・"の襲撃に備えて今日1日だけ一般人の教会本部立ち入りは出来ないようになっていた。それは観光案内にも乗せられている知らせで、ミッドの聖王教信者はもちろんツアー客なども知っているはず。それにもし知らずに来たとしても本部に続くすべての道には案内モニターが置かれているため、必ず目にする。それでもなお本部に来たということは、ほぼ間違いなく"T・C・"のメンバーになる。

「聖王教会本部に保管されている魔力保有物の回収に来たぜ！　黙って道を開けやがれ！　痛い目に遭いたくねぇだろう！」

「ご、ごめんなさい！　ボクの妹は口が悪くて！　あの！　魔力保有物ください！　じ、じゃなくてお貸しください！　すぐに返しますから！」

口の悪い男勝りな妹と、おどおどしている姉という凸凹な姉妹を見て兄様が「Ｔ・Ｃ・構成員と断定。交戦の意思あり。撃破する」と冷たい声で告げると同時、この付近一帯を隔絶するために結界が張られた。結界担当の騎士が遠くで私たちを見てくれていて、兄様の今の言葉を合図に結界を展開してくれた。

「「了解」」

私は弓形態シュッツェフォルムの"イゾルデ"を構え、アンジェは２ｍのポール・"ジークファーネ"の先部より朱色の魔力幕を展開。兄様は槍型デバイス・"ロンゴミアント"を構えた。

「パーシヴァル・フォン・シュテルンベルク」

「トリシュタン・フォン・シュテルンベルク」

「アンジェリエ・グリート・アルファリオ」

「参る」「「参ります」」

――とぐろ巻く連環の拘束蛇――

兄様とアンジェが同時に石畳を蹴って姉妹へと突進。そして私は"

イゾルデ"の魔力弦に番えた魔力杭４本を射る。狙うは足元の地面。ダメージを与えることより今は拘束を選択だ。兄様とアンジェを追い越した杭は姉妹の足元に刺さり、１本につき４本の帯となって姉に８本、妹に８本と絡みつこうとした。

「オレぁリッタっつうんだ！」

「ボ、僕はエッタっていいます、ごめんなさい」

リッタは瞬時に自分を拘束しようとした帯４枚を右手で掴み取り、続けて左手でエッタに巻き付く寸前の帯４枚を掴み取って、そのまま握り潰した。

「コード・フロガゼルエル！」

「ハルトファーネ・ゼーデルヒープ！」

兄様は穂先に炎熱付加をしての刺突を、アンジェは魔力幕をピンッと張って魔力刃へと変化させてからの斬撃を繰り出した。２人もまだ魔術に変化させていないため、全力の一撃を振るっている。リッタは紙一重で２人の攻撃を躱したけれど、ローブはズタズタにされたことで素顔を晒した。

綺麗な黒髪と瞳。ノースリーブのロングコートにホットパンツ、両手には手の甲に鋼のプレートをあしらった指ぬきグローブ。それがリッタという女性の出で立ちだ。

「リッタ！　ダメじゃないですか！　そんな簡単に素顔を晒しちゃ！

後で一緒におと――王にごめんなさいですよ！」

「いいんじゃんかよ姉貴。どうせオレ達の素性なんて判んねぇんだし。にしても、お兄さんとお嬢さん、良い腕してんな。完璧に避けたつもりだったんだが。いろいろと制限されてるとしてもこりゃ凄いぜ」

女性の顔に声に身体なのに口調が男性過ぎて頭が少し混乱しそう。そんなリッタの後ろでおどおどしているエッタも「ごめんなさい、お兄さん達。お仕事なので」なんて言いながら袖口から武装を出した。右手に携えるのはライフルで、マガジン式ではなく回転式シリンダー。左手には拳銃で、グリップの長さをはるかに超えるロングマガジン。顔が未だにフードで隠れているけれど、ローブの隙間から見える服装はリッタと同じ。違いと言えば、カートリッジベルトを両太腿と腰に巻いていることくらい。

「銃使い・・・。ならば」

私たちは目線だけで誰を相手にするかを決める。兄様は「俺と闘ってもらうぞ、エッタ！」と、銃使いを相手にするべく突進。私とアンジェは近接特化と思しきリッタを標的にする。

「オレぁそっちの槍使いのお兄さんとやり合いたかったが、しょうがねぇ！　相手してやるよ！」

右と左の拳を打ち付け合うことで生まれた火花が、まるで意思を持っているかのようにパチパチと連続で弾けながら、私とアンジェの

顔に向かって襲い掛かってきた。単なる目くらまし効果だろうけど、魔術特有の気配、魔力を薄っすらと感じることで後退しつつ・・・

――昇華――

私とアンジェは魔術師化を果たし、「開戦だぜ！」と突っ込んでくるリッタに、アンジェは「はい。そしてすぐに終戦です」と告げ、"ジークファーネ"を振るって迎撃を行った。

「おらおらおらおらおあらぁ！！」

「っ・・・！」

リーチは短いけれど攻撃速度が速い徒手空拳のリッタと、間合いは広いけど懐に入られたら不利になる長柄武器を使うアンジェ。アンジェは"ジークファーネ"を振るってリッタの猛攻を完璧に防いでいるけれど、リッタは思いのほか強く徐々に押され始めて行っている。

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

リッタのアッパーで"ジークファーネ"が弾かれたことでアンジェの懐がから空きになった。その僅かな隙にリッタがアンジェに肉薄しようとしたところで私は高速矢を射る。アンジェの顎目がけての右フックを振るおうとしていたリッタの右腕に着弾して弾いた。リッタをアンジェから引き離すために、２人の間に高速矢を射続ける。リッタは「懐かしいなおい！」と楽しそうに言いながら私に視

線を移し、「アンタからやっちうまうか！？」と体も向けてこちらに向かってきた。そんな彼女の背後にアンジェがいるのにもかかわらずに・・・。

――シュラーゲンファーネ――

「シュテルケンシュラーク！」

魔力幕をポール全体に巻き付けさせて、完全打撃仕様と成す魔術からの打撃術式。アンジェが"ジークファーネ"を振り被り、私はまた高速矢を４本と同時に番えて、リッタがどのような行動に移ろうとも即座に射られるよう狙いを定める。先手はアンジェの薙ぎ払い。"ジークファーネ"がリッタの背中に打ち付けられた。リッタは防御系の魔術も使っていないのは確か。その状態での直撃を受けてもよろけもせずにリッタは普通に歩いてきた。

「「カートリッジロード！」」

リッタは普通の魔術師なんかではない。だから私たちはすかさず自分の魔力を内包した神秘カートリッジをロードして、自身の魔力量と神秘を増加させる。番えていた矢を破棄して、再度高速矢４本を生成して番え直す。

「お？　なんだよ。まだ上があるんじゃねぇかよ。いいぜ、ならオレももうちょっと本気を出すぜ」

――イグニッション――

「「っ・・・！」」

リッタの全身から微かに漏れていた魔力が爆発的に増大して、溢れ出し始めた。アンジェとは目線だけで会話できるほどに一緒に戦ってきたから、私の対角線上に居るアンジェはその場から飛び退いた。

――天翔けし俊敏なる啄木鳥――

「往けっ！」

私が矢を射るかどうかの一瞬。リッタは右腕を引き、私が矢羽根を離した瞬間に彼女は拳を突き出した。たったその一動作で４本の矢は私とリッタの合間で粉砕された。それと同時に私に向かって突っ込んできたから、私は後退しながら新たに生成した魔力矢を弦に番える。

「私に背を向けていていいのですか！」

――ランツェファーネ――

先端にて魔力幕を円錐状に固定することで槍となった"ジークファーネ"による鋭い刺突攻撃を繰り出すアンジェ。リッタは真っ直ぐに私だけを見据え、左腕を思いっきり引くために半身になりながら上半身を捩じった。その動きでアンジェの一撃を躱した。

「おらぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

――翔け抜けし勇猛なる光条――

攻撃が空振りになったことでアンジェはすかさず射線上から離れ、真っ向から私を殴るために左拳を突き出そうとしているリッタだけが私の前に居る。だから遠慮なく砲撃と化す矢を射た。零距離とはいかなかったけれどリッタは砲撃に、そして着弾時に発生した魔力爆発に呑まれた。

（この程度で終わる防御力ではないだろうし・・・！）

追撃の砲撃矢を生成しようとしたところで、「効かねぇな！！」と無傷のリッタが煙の中から飛び出してきた。私が未だ矢を番えていないことにリッタはニヤッと笑顔を浮かべ、引いていた右拳を高速で繰り出してきた。

「させませんよ」

しかし残念。リッタは私を注視しすぎて、低い体勢で同じように突っ込んできていた隣のアンジェに気付かなかった。繰り出された右拳はアンジェの振り上げた"ジークファーネ"によって上に向かって弾かれた。その僅かな間で私は砲撃矢を番え終え、「少し痛いですよ」と伝えてから射た。今度はほぼ零距離だったから私とアンジェも魔力爆発の衝撃をまともに受け、数mと後退を強いられた。

「だから効かねぇって言ってんじゃねぇか！」

神秘カートリッジで強化したうえでの零距離直撃。それでも無傷という異常性に驚きはしたけれど、「私たちもまだ全力ではないから」とだけ言い放ってみた。するとリッタは「そいつは楽しそうだ！」と肩を揺らした大笑いした後、構えを取った。異常な防御力と徒手空拳。これは・・・。

「あなたの戦い方、幹部レオンと似ていますね。師弟だったりします？」

映像の中でしか見たことのない幹部レオンの戦い方。リッタも戦い方だけでなく戦うことに喜びを見出しているし、絶対に仲の良い関係かと思えば、「はあ？」とものすごく睨まれた。

「あんなクソと師弟関係？　ねぇよ。レオン、プリムス、フォード、アーサー。なんであんな奴らを幹部なんかに・・・！　始めっからオレ達を使ってくれたらよかったんだ、おや――王はよ！」

リッタが地団太を踏むたびに地面に亀裂が入り、クレーターを拡げていく。そんな彼女に私は「卑怯とは言わないでくださいね」と伝えてから・・・

――滅び運ぶは群れ成す狩り鳥――

１本の魔力矢を射る。矢はリッタに着弾する前に２００本の光線となり、「むぉ！？」と驚く彼女に次々に着弾して連続で魔力爆発を発生させた。質量ではなく物量で防御を削る。リッタにダメージを与えるのはもうそれしかない。

「アンジェ！」

「ええ！　このまま押し切りましょう！」

Ｓａｇａ２２－Ｂ最終侵攻～Ｂａｔｔｌｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｓｏｕｔｈ～

†††Ｓｉｄｅアリシア†††

南部マクファーデン地区の研究所にやって来た私とフェイト、それに今回から"Ｔ・Ｃ・"事件に協力することになったエリオとキャロ、それにフリード。目的はここの研究所に保管されてるロストロギアを奪取するために襲撃してくるって予告してきた"Ｔ・Ｃ・"の迎撃、そして逮捕だ。

（ルシルとアイリがすごく厄介だった幹部を道連れにしてくれたから、残るメンバーは雑魚ばっかっていうのがシャルの考えだ）

とは言っても、幹部以外でも魔術や神器を持ってるメンバーもいるようだし楽観視は出来ないけどさ。でもだからって引くわけにはいかない。ルシルとアイリを殺した組織なんて、絶対に許さないし残しておくわけにはいかないもん。

「エリオ、キャロ。そろそろ襲撃予定時刻だけど、準備は済んでる？」

「あ、うん、アリシアさん。すずかさん達スカラボの皆さんのおかげで、わたしとフリード用装備もフッケバイン事件の時よりいろいろと使い勝手が良くなってるので、装着も簡単です」

フリードの胴には"ヴァンガード・ドラグーン"専用のメインやカ

ートリッジユニットが装着されていて、"フォートレス"で一番大きなＳ１よりさらに大きなドラグーンシールド――ＤＳが２機、活躍を待ち望んで側で待機中。ちなみに体が小さなキャロは"フォートレス"ユニットを装着できないから、フリードのユニットがキャロの扱う３種のシールドの分のカートリッジユニットを積んでる。

「残念ながらブースト魔法はフェイトさん達の神秘魔力と反発することで使えなくなっちゃいますけど、その分フォートレスで支援します！」

「魔法によるバフは、魔術師には効果が無いんだよね」

魔術は魔法に干渉できるけど、その逆が出来ないって言うのはちょっと面倒なんだよね。でもま、キャロの支援砲撃の正確さはフッケバイン事件の時に判ってるし、ブーストを受けなくてもフェイトもエリオもすごく強いし、なんとかなるでしょ。

「エリオもカートリッジをちゃんと持った？　アレが無いと戦いにならないからね？」

「大丈夫です、フェイトさん」

「エリオだってもう１８歳。子どもじゃないんだし、そんな心配しないで大丈夫だって。実際、フェイトも最近エリオに負け越してるんだよ？　まぁ魔力の出力制限付きって条件があるけどさ。あまり心配性だとエリオだって煩わしく・・・って、こんな話、前にもやったっけ？」

フェイトの心配性は本当に治りそうにない。私の言葉にフェイトは「エリオ。私、面倒くさい？　ごめんね？」ってしょんぼりしてエリオに謝るから、エリオも困って「全然そんなこと思ってません！」ってすごい勢いで首を横に振りまくる。

「ほらほら、フェイトもちゃんと確認しておいてよ。頼りになるアタッカーはフェイトとエリオなんだから、どっちかが機能しないと必然的に私とキャロも危なくなっちゃうんだから」

私は手を叩いてしゅんとしてるフェイトを鼓舞。私も神秘カートリッジを唯一使えるデバイス、"ブレイブスナイパー"の神秘カートリッジが収められたマガジンの再確認。予備は5個。すでに装弾されてる5発と、カートリッジ25発の計30発。フェイトとエリオも似たようなものだ。

みんなで最終確認を済ませ、研究所で待機してる周囲監視班や結界班、念のための武装隊などと連絡を取り合いながら待機を続けて、いよいよ襲撃時刻になったわけだけど・・・。

「来ないね」

「うん」

「監視班からも、周囲1km圏内に敵影は見られないようです」

『こちらキャロ。規制線の内側へ侵入する人もいないみたいです』

監視班は研究所の屋上から散布してあるサーチャーや望遠魔法での見張りで、キャロフリードに乗って上空からの広域監視だ。その2組から異常なしっていうことは、「まさか」って私は地面を見た。研究所の真下、地下にも施設が広がってる。近くの川には排水トンネルが通っているし、そこからってちょっと考えたけど、そこにも監視サーチャーが設置されてるから違うかぁって首を横に振った。

「ほら、何をしているのですか」

「ん？」

どこからか声がした。続けて「待ちなさい。心の準備が」って別の人の声がしたんだけど、この2つの声、ものすごく聞き覚えのあるものだった。でもありえない。だって2人はもうこの世にはいないんだから。それでも「今さら何を言っているんですか。もう4分も経っているんですよ？」っていう呆れ声も、「仕方ないでしょう」っていう困惑の声も、やっぱり聞き覚えのある声・・・。

「フェイト！！」

「っ！？　ど、どうしたのアリシア！」

「アリシアさん！？」

フェイトとエリオが慌てて駆け寄ってきてくれて、「声！　声がする！」って伝える。2人はそれぞれデバイスを構えて、聞き耳を立てた。と、ほぼ同時に「もうしょうがないなぁ～。ボクが開戦の花

火を打ち上げるよ！」って、３人目の声がした。

「「「魔力反応！！」」」

私たちを囲うように大きな環状魔法陣が１つと展開された。魔力光の色は水色で、今の声。ううん、とりあえず環状魔法陣の外に脱出だ。私たちは高速移動魔法の「ソニック・ムーブ！」で一斉に飛び出したところで・・・

「天破・雷神槌！」

環状魔法陣外の前後左右、それに上に発生した魔力スフィア５基から中心に向かって雷撃砲が発射されて、激突し合って放電する魔力爆発を発生させた。フェイトにも声が聞こえ、さらに魔力光と魔法を見て「そんな、うそ・・・！」って困惑した。

「フェイト。アイツだけじゃないの。たぶん・・・」

「え？」

「フェイトさん、アリシアさん、エリオ君！　大丈夫ですか！？」

突然の攻撃に、キャロとフリードが降下してきた。ギリギリだったけど回避が出来ていたから、心配そうなキャロに「大丈夫！」って答えた。そんな私たちに監視班や結界班からも連絡が入って、監視班からは魔力発生ポイントがどこか教えてくれて、結界班からは結界の展開をこれから行うってことになった。

研究所を中心に1㎞が結界で覆われた。結界班の中には近代ベルカ式でカートリッジシステムを有するデバイス持ちで、結界を張れて、さらに神秘カートリッジに適用も出来る隊員が何人もいてくれる。だから相手が魔術師でもそう簡単には破られないって話だ。

「結界も展開されたじゃないですか。覚悟を決めて姿を見せましょう」

「・・・わ、判ったわ」

「こ、声がしました！」

「女性2人！　けどさっきの電撃魔法を放った女性とはまた別だ！」

またした声にキャロとエリオが周囲を警戒して、フェイトはさっきの私みたいに「この声・・・！」の主に気付いて目を大きく見開いた。そしてすぐ、その声の主が私たちの目の前に現れた。ステルス状態を解除したって感じだけど、なんかこうその場で人の形に実体化した？みたいな。うん、自分でも何言ってるか判らないけど、その表現がしっくりする出現の仕方だった。

「「フェイトさんとアリシアさんのそっくりさん・・・？」」

毛先だけが紺色をした水色の長い髪を、以前と変わらずツインテールにした女性、「レヴィ・・・！」を見て目を丸くするエリオとキャロ。私とフェイトの、レヴィ、って言葉に反応した2人が「お知り合いですか？」って聞いてきた。

「レヴィ・ザ・スラッシャー。詳しく話すと長くなるから省くけど、一種のフェイトのクローンみたいな存在だよ」

「「クローン・・・！？」」

「オーッス！　久しぶりだな、オリジナル、姉っ子！　レヴィ・ザ・スラッシャー、ここに見参！」

特撮のライダーみたいなポーズを決めたレヴィに一応「うん、久しぶり」と返しておく。問題はレヴィじゃなくて、その後ろに居るフード付きのローブを身に纏った女性２人。

「プレシア母さん・・・」「プレシアママ・・・」

「「でしょ？」」

うち１人の女性にフェイトと一緒に呼びかけた。エリオとキャロが「え？」って私たちを交互に見る。ごめんね、さっきから混乱させてばっかだよね。私たちに名前を呼ばれた女性がゆっくりとフードを外して素顔を晒した。

「プレシア母さん・・・！」「プレシアママ・・・！」

見た目も声も確かにプレシアママだ。もう１人は「リニス」だよね。プレシアママのおかげで蘇るまでの間、魂の状態で私はフェイトとアルフとリニスのことを見てた。聞き間違えるわけない。私たちの

呼びかけにフードを外して素顔を晒したもう1人はやっぱり「リニス！」だった。

「ま、待ってアリシア！　エリオ、キャロ。レヴィの後ろに居る2人のこと、どう見えているか教えて」

「フェイト？　何を言って・・・あっ、T・C・のメンバーは相手のトラウマの姿を取るんだった！」

レヴィは魔力光や魔法からして本物っぽいけど、プレシアママとリニスはひょっとしたら別人がそう騙ってるだけかもしれないわけだ。だけど私とフェイトを騙す理由が無くない？　いや違う。私たちを精神的に追い詰めて反撃しづらいようにするためって可能性もある。

「あの、以前フェイトさんとアリシアさんに見せてもらった家族写真の女性2人に見えます」

「砕け得ぬ闇事件で、亡くなった本当のお母さんや使い魔さんと奇跡的に再会できたっていうアレです」

砕け得ぬ闇事件で私たちテスタロッサ家は再会して、その様子をルシルがひっそりと写真に収めてくれてた。その時の写真をデータとして持ち歩いていたから、まだ管理局に入る前の幼いエリオやキャロに2人のことを話したんだよね。覚えていてくれたことに嬉しさもあるし驚きもあった。

「アリシア・・・！」

「うん・・・！　トラウマは人それぞれだから、エリオとキャロがプレシアママとリニスの姿を見るわけがない。本当にプレシアママとリニスなの・・・？」

「はい。そうですよ。お久しぶりですね」

「アリシア、フェイト。大きくなったわね」

私もフェイトも知らず知らずのうちに涙がポロポロと溢れ出す。そう言って微笑んでくれたプレシアママとリニスに私は駆け寄ろうとしたけど、フェイトが「気持ちは解るけどダメだよ、アリシア」ってまた私を制止してきた。私は「本物なんだよ？　だったらそれでいいじゃん！」って反論する。

「プレシア母さん、リニス。また逢えてすごく嬉しいです。だけど、T・C・として現れたことだけは見過ごせません。そもそも母さん達はどうやって存在しているんですか？　２人はもう亡くなっていますし、亡霊というにはエリオとキャロに見えてますし、クローンなんてありえないですし・・・。あと１つは、もうそれが出来る人が亡くなっているので、これまたありえない」

もう１つっていうのはルシルの"エインヘリヤル"だ。フェイトの言うようにルシルももういないから、ママ達が"エインヘリヤル"っていうのはおかしな話だ。なら、２人は一体何者だっていう疑問は出て当然だと思う。だけど今はそんなことどうだっていいじゃん。

「まぁそう思うわよね。だけど、それについては教えられないわ。T・C・の王との契約なのよ。ちなみに王の正体も言えないわよ」

「そういうわけです。ところで、エリオさんとキャロさん。アリシアとフェイトの同僚の方ですよね？　いつもお世話になっています。こちらはアリシアとフェイトの実母のプレシア。そして私はプレシアの使い魔で、フェイトとアルフの先生をしていましたリニスと申します」

「え？　あ、はい。・・・あ！　僕はエリオ・モンディアルと言います！　はじめまして！」

「はじめまして！　キャロ・ル・ルシエと言います！」

恭しくお辞儀するリニスに、エリオ達が緊張いっぱいのお辞儀で自己紹介を返した。腕を組んでるプレシアママがエリオをチラッと見て、「あなた。アリシアかフェイトのどちらかと恋仲だったりするのかしら？」なんて突拍子もないことを聞いたから、私とフェイトが「へ？」って呆けて、エリオとキャロは「えええええ！？」って絶叫。

「ぼ、僕がフェイトさんやアリシアさんの恋人！？　そ、そんな恐れ多いです！　僕なんて身長だけ大きな子どもなので！　そんなそんな！」

「まぁ１０歳近く離れてるし、手を出したら犯罪だよね」

「あのね、母さん。エリオとキャロはその、私やアリシアにとっては息子や娘のようなもので、恋人っていうわけじゃ・・・」

フェイトがそこまで言ってからエリオとキャロを見たから、２人は自分たちの出生や私たちに引き取られた理由を包み隠さずママ達に伝えた。聞き終えたリニスは「そうでしたか。苦労したのですね。ごめんなさい、辛いことを話させました」って申し訳なさそうに謝った。

「いえ。僕たちは今、幸せですから。ね？　キャロ」

「うんっ！　あの頃は辛かったですけど、フェイトさん達と出会って、現在を一緒に過ごすことが出来て幸せです！」

「「エリオ、キャロ・・・」」

改めてそう言われちゃうと嬉し恥ずかしで、フェイトと一緒に「えへへ♪」って笑っちゃう。そんな私たちにプレシアママが「偉いわね、アリシア、フェイト。あなた達は私とリニスの自慢の娘よ」って褒めて、２人一緒にハグしてくれた。私が一度死んじゃう前と、砕け得ぬ闇事件の時と変わらず、プレシアママからは良い匂いがする。フェイトだって安心しきった顔でハグを受け入れてる。

「なぁなぁ、オリジナルぅ、姉っ子ぉ。ボクはぁ？　ボクとは逢えても嬉しくないのか～？　全然かまってくれなくて寂しいぞ～？」

ちょっと蚊帳の外になってたレヴィがしょんぼりしながら聞いてき

た。ちょっと今は空気を読んでほしいと思ったけど、私とフェイトは「そんなことないよ！　嬉しい！　うん、嬉しい！」って力強く何度も頷いた。

「わっはっは！　そうだろ、そうだろー！　よぉーし！　ママさん、せんせー！　挨拶終わったし始めよう！　バルフィニカス！　リベレイターフォーム！」

レヴィが"バルフィニカス"にカートリッジをロードさせて、私たちが見たことのない形態に変化させた。"バルディッシュ"で言う通常形態アサルトフォームが原型かな。左右対称の大きな斧頭が２つ、先端にスパイク、柄が長く伸びてる、まさしく戦斧って感じの形態だ。

「ボクの最強の破壊力を持つリベレイターフォーム！　さらに！　スプライトフォームぅぅ・・・セカ～～～ンド！！」

レヴィの防護服が換装される。格好はフェイトで言う子ども時代のソニックフォームなんだけど、両手首、両くるぶしからは小さな片翼が、そして背中からは形を保ってない電撃の羽が３対と展開された。そんなレヴィが臨戦態勢に入ったことで、エリオが「何のつもりだ！？」って私とフェイトの前に躍り出た。レヴィが何かを返す前に、プレシアママとリニスもそれぞれ見覚えのある杖を手にした。

「アリシア、フェイト。あなた達があの日、お別れしたあの時からどれだけ成長したのか、見させてもらいます」

「・・・やっぱりいやだわ、リニス。どうして私たちが、娘たちやその家族と戦わないといけないの？」

「言わないでください。それが私たちの仕事、時間稼ぎです。・・・あ」

「「「「時間稼ぎ！？」」」」

口を滑らせたってハッとしてるリニスが「いえ。違います」って慌てて首を横に振ったり空いてる左手をヒラヒラ振ったりするけど、レヴィが「合ってるぞ？　せんせー、ウソはダメだぞ」って首を傾げた。

「オリジナル達をなるだけ足止めして、時間が来たらリンカーコアを抜いて魔力を回収。んで、撤退だぞ！」

「あの、レヴィさん。そういうのは基本的に相手に喋っちゃったらダメなんですよ？」

えっへんって、私やフェイトと同じくらいに育った大きな胸を張ったレヴィに、リニスが溜息交じりにそう言った。だけど、これで私たちがしないといけないことは判った。足止めされているんだから、突破するだけでいい。あとは何のための足止めかを知っておきたいんだけど、ママ達は話してくれないだろうし・・・。

「レヴィ！　私たちを足止してる間、他の襲撃犯はなにをするつもりなの！？」

「それはな！」

「待ってくださいレヴィさん！」

「もがもが！」

「アリシア。弱点から攻めるのはおかしくはないけれど、今はちょっと勘弁してほしいわ」

「プレシアの言う通りです！　レヴィさんはちょっと天然というか純粋過ぎるというか、素直な子なので聞かれたことには答えてしまうんですから！　アリシアとフェイトも知ってい――」

「プレシアさん、リニスさん。・・・自分の娘たちのリンカーコアを奪うなんていう仕事、本気でなさるつもりですか・・・！？　フェイトさん達の実母であり師匠である人であろうと、僕は・・・！」

レヴィの口を後ろから手で押さえてるリニスの言葉を遮るようにエリオが怒気を含ませた声で言い放った。続いてキャロも「そんなの私たちが許しません。止めさせていただきます！」って怒ってくれた。そんな2人にママ達は目を丸くしたけど、すぐにどこか嬉しそうに表情を和らげた。

「・・・私とプレシアがあなた達とお別れした砕(あのころ)け得ぬ闇事件からもう15、6年ちょっとですか。変わらず優しく、立派な子たちで安心しました。ね？　プレシア」

「そうね。２人とも私のように酷く歪むことなく、真っ直ぐに、そして綺麗な一人前の女性になってくれていたわ。それをこうして目で見て確認できただけで、今回の召喚には大きな意味があったわね」

「そうですね。私たちの願いと、彼の最後の恩返しが一致したことによる今回の奇跡」

「・・・リニス。リンカーコアの回収は絶対ではないのだし、せめて足止めくらいはしないと彼に申し訳立たないわ」

「はい。エリオさん、キャロさん。ちょっとだけ胸を貸してくださいね」

プレシアママがクロークを脱ぎ捨てると、ＰＴ事件の時のような露出度の有るドレスじゃなくてシックな赤いドレスを一瞬で装着した。リニスもクロークを脱ぎ捨てて、いつも着ていたあのピッチリした服を露わにした。そして２人は一瞬で私たちから距離を取った。高速移動魔法でもスキルでもなく、どういった原理か判らない瞬間移動だ。

「よーっし！　ママさんとせんせーもやる気になったし、カレンが合流するまで目一杯遊ぶぞー！」

（カレン？　知らない名前だ。女性名だし、いったいどんな・・・）

――スプライトムーブ――

レヴィの姿が掻き消えた。次の瞬間にはエリオを通り過ぎて、フェイトの左横にまで移動してきた。リベレイターフォームっていう大戦斧の"バルフィニカス"はすでに振りかぶられていて、「閃破雷光斬！」って、左右両方の斧頭の刃部分に魔力刃を生成させた。剃刀のような薄いものだけど、その分魔力が圧縮されていて、たぶんめっちゃ強い。

――ソニックムーブ――

私とフェイトとエリオが一斉に高速移動魔法でその場から離脱して、レヴィの一撃の効果範囲から逃れた。キャロもフリードと一緒に空に戻って旋回しつつ、ママ達の動きを警戒。スナイパーである私はさらに距離を取るべくもう一度ソニックムーブをスタンバイして、エリオは"ストラーダ"のカートリッジをロード。

「真ソニックフォーム！」

フェイトは機動力を上昇させる防護服に換装。さらに"バルディッシュ"を二剣一対のライオットブレードⅡにして、ルシルの"エヴェストルム"みたく柄頭を連結させた。

「にひひ！　ボクの知らない形態だ！　すごいおもしろ――」

「「フェイト！！」」

とここで、プレシアママとリニスが声を荒げて、さっきみたくスッ

とフェイトの近くに現れた。ママは「なんて格好をしているの！」って、いつの間に拾ったのかローブでフェイトのお尻が覆い隠した。

「レディがそんな格好で戦場に立つなんて！　可愛らしいお尻のお肉が半分見えちゃっていますよ！」

「え？　え？　ええ？　で、でもこの方が動きやすし、空気抵抗も・・・――」

「そんなことはどうだっていいんです！　フェイトは可愛いうえに美人だから、そんな格好をしていたら男性（オオカミ）からHな目で見られたりするでしょ！」

「お、狼・・・？　そんな、私のお尻なんかをHな目で見るような人なんていないよ」

「いいえ、そんなことはないわ！　こんな魅力的なお尻が目の前にあったら、世の男どもは鼻息荒くして血走った目で見つめてくること間違いないわ！」

「恥ずかしいとは思わないのですか！？　ちっとも！？」

「フェイト！　母さんは、大事な娘がそんな格好をしていてちょっと恥ずかしいわ！」

ママ達の説教めいたことをあわあわと困惑しながら聞いてたフェイトが、2人からの恥ずかしい発言に「むっ」となった。そして「母

さんだって、ＰＴ事件の時は恥ずかしい格好だったじゃないですか」って反論した。

「胸元も大きく広げて、おへそも出して、両腰もパックリ開いて素肌が見えてました。母さんだっていい歳して痴女みたいな格好で恥ずかしくなかったんですか？　私は割と恥ずかしかったです」

「な、な、ななな、ななな・・・！　なんてことを言うのこの子ったら！　言うに事欠いて痴女ですって！？」

「ちょっと歩くたびに上も下も大事な部分が見えそうになっていたじゃないですか。武装隊が突入した際、ひょっとしたら見えていたかもしれませんね」

「～～～～～～っ！！　リニス！　フェイトが酷いことを言ってくるわ！　これはきっと反抗期よ！」

「リニス！　母さんがしつこくてうるさい！」

ぎゃあぎゃあ口喧嘩を始めるフェイトとプレシアママ。ママが生きていた頃に合って普通な出来事なんだけど、今みたいな奇跡が起きてないと出来ないことだ。だから私とエリオとキャロはちょっと困りながらもその様子を眺めて、レヴィは「ねぇ、まだ～？　早くやろうよ～」って不貞腐れて、ママとフェイトに挟まれたリニスは「２人が仲良くて嬉しいですけど、ちょっと面倒くさいです」って苦笑い。

「おやおや。わしがひとり寂しく一仕事を終えてきたというに。おぬしらは全く仕事をせず、お喋りに興じておったのか？　それは少しばかり怠慢だと思うのじゃが？」

そこに別の、女の子の声が聞こえた。ハッとして後ろを振り向けば、どこかルシルの防護服を思わせるようなデザインのジャケットを着た小さな女の子がひとり佇んでいた。

Ｓａｇａ２２－Ｃ最終侵攻～Ｂａｔｔｌｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｅａｓｔ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

「襲撃予定時刻まで、あと３分・・・」

手元に展開した小さなモニターには１１：５７の数字が表示されてる。私たちの居る東部メラン地区の研究所や他の研究所の襲撃予告時間は１２時ちょうど。会議の中でも戦力を分散させられているみたいって話が出て来たけど、おそらく合ってる。その割にはロストロギアなどの物品を研究する施設はまだ他にも在るのに、５ヵ所に絞った意味が解らない。もっと研究所を指定して、私たちをさらに分散させてしまえばよかったのに。

「いよいよだな、なのは」

「うん。ヴィータちゃん」

この研究所に派遣されたのは私の他にヴィータちゃんとリイン、そしてクラリスちゃんの４人だ。自力で魔術師化できる強力なクラリスちゃんと、神秘を扱える九尾の狐のナデシコっていう召喚獣を主力としたチームだ。そんなクラリスちゃんは、持ち込んだクッキーを自分や小さなナデシコと一緒に食べてる。うん、いつも通りのほんわか具合だね。

「・・・あ、ごめん。なのは達も食べる？　もう一袋あるし」

「なに？　待つが良いクラリス。わしはもっとクッキーを食べたいぞ」

小さな前脚でクッキーの入った袋を覆い隠すナデシコが可愛い～って思いながら、「もう襲撃予定時刻だから、そろそろ準備を済ませておこうか」って苦笑いで答えた。するとクラリスは「そっか。ん。ナデシコ、口開けて」って袋を開けて、上を向いたナデシコの大きく開けた口にドザーと流し込んだ。リスやハムスターみたいに頬を大きく膨らませてボリボリ食べるナデシコに、リインが「可愛いですね～♪」って笑顔になる。

「リイン。あたしらもユニゾンしておくぞ。どうせ投降を促しても聞き入れねぇはずだかんな。つうか、あたしがそれを許さねぇ。ルシルとアイリの仇討だ。リーダーとガーデンベルグの居所を力ずくでも聞き出す」

「ヴィータちゃん。ルシル君とアイリは、リイン達が復讐することを望んでるでしょうか・・・？　リインはそうは思わないです・・・」

「だろうな。復讐してぇってのはあたし個人の意思だ。けど、どっちにしたってリーダーとガーデンベルグ、T・C・を捕まえるのは決定してんだ。あたしらに黙って勝手に突っ込んで返り討ちに遭ったルシルとアイリへの怒りとか、一緒に連れて行ってくれなかったことへの恨みやら悲しさやらを、今回やって来るメンバーに八つ当

たりさせてもらう。ほら、もう時間がねぇ。ユニゾンすんぞ」

「はいです」

「「ユニゾン・イン！」」

ヴィータちゃんとリインのユニゾンが済んで、ナデシコも「うむっ。満足じゃ！　いつでも戦えるぞ」って前脚で自分のお腹をポンポン叩いた。クラリスちゃんもすでに騎士甲冑を装着して、"シュトルムシュタール"を肩に担いでる。私も"レイジングハート"をエクセリオンモードで起動し終えていて、ブラスタービットも最大展開数の４基を待機させてある。

「時間だ・・・！」

研究所から１２時になったことを知らせるチャイムが鳴り始めた。３０秒間なり続けるチャイムの音を耳に、全周囲を警戒する。"Ｔ・Ｃ・"のメンバーは転移を使うから、予想外な出現の仕方をされてもおかしくない。それに動揺せずにすぐに行動できるかが大事になってくる。

――マルソ・カヴァリエーレ――

「む。おい、クラリス達よ。天から来るぞ。数は・・・多いぞ！８、９、１０・・・１２の魔力反応じゃ！」

「「『１２人！？』」」

ナデシコがそう知らせてくれたとほぼ同時、ようやく私たちもはるか上空から魔力を感じた。空が真っ黒な雷雲に覆われて、ゴロゴロと雷の音がし始める。そしてソレらは現れた。雷撃の轍を残しながら空を駆けるのは、まず私の知ってるサイズよりはるかに大きな１０頭の黒いチーター？。その先頭のチーターに跨るのはフード付きローブを身に纏ってる２人。彼らは空をクルクルと旋回しながら高度を落としてくる。１２人じゃなくて２人と１０頭・・・。ううん、魔力量が半端じゃない。

「監視班！　周囲に他の敵影が無いか確認を！」

『了解！・・・・・・周囲３km圏内に不審な影無し！』

「では結界班！　結界の展開をお願いします！」

『了解！』

研究所の屋上で待機している結界班が、私たちと"Ｔ・Ｃ・"を閉じ込めるために結界を展開してくれた。雷雲が結界の外に弾き飛ばされたことで稲光も雷鳴もピタッと止んで静かになったかと思えば、チーターの群れが駆けることで小さな雷鳴が鳴り続けてた。

「なのは、クラリス」

「うん。強いよね。特にあの大きなランスを持ってる人・・・」

「騎士か？　クラリスと同タイプって感じだな。騎乗騎士だ」

『騎士が相手のようですし、誰が相手をしますか？』

「ナデシコ。私たちの相手は決まったみたい。なのは、ヴィータ、リイン。槍持ちは私がもらうよ」

「良かろう。おそらく強敵だろうが、私とお主なら勝てよう」

決まりだ。私とヴィータちゃんとリインでもう1人を素早く叩いて、クラリスちゃんとナデシコに合流して騎士を倒す。もしくはその逆だ。私たちが相手にするメンバーもそう簡単にはいかないだろうし、とりあえず出来るだけ早く相手を負かして、残りのメンバーをみんなで倒せばいいはず。

「降りてきやがったな」

"グラーフアイゼン"の柄をギュッと両手で握りしめるヴィータちゃんとクラリスちゃんの間を通り過ぎた私は先頭に立って「武装を解除して投降してください」って伝えた。ヴィータちゃんの言うように聞き入れてくれないだろうけど、公務員としての責務でもあるからね。

そんな私の促しに対して、ドリル状の穂を持つランスを持っている人とは別、私とヴィータちゃんが相手しようと考えていた人がチーター（よく見たら黒い雷で創られてる）から降りて、「お断りします」って言いながらフードを取った。

「「『！！？』」」

フードから現れたのは見知った顔だった。あの頃に比べて眼鏡を掛けているし、髪も私ほどではないにしても結構伸ばしているけど、顔立ちは本当に私とそっくり。そう、"Ｔ・Ｃ・"のメンバーとなってしまっていたのは間違いなく「シュテル・・・！」だった。

「お久しぶりですね、なのは。それに鉄槌の騎士と融合騎リイン」

「ど、どういうことです？　なぜフードを脱いだのですか？」

「そう怖い声を出さないでください。ご存じでしょうが、私と彼女たちは友人という間柄なので交戦すれば正体はすぐに気付かれます」

「それなら、交戦中に明かした方が相手の意表を突けたでしょうに。生まれたその隙を突けば、任務も素早く果たせたのではないです？」

「そんな卑怯な手を使いたくないですね」

「っ！！」

近くで見たから判ったけど身長はかなり低くて、声色からして１０代前半くらいだと思う女の子とシュテルの間で、味方らしからぬ嫌な空気が発せられ始めた。ピリピリした雰囲気をまず破ったのはヴィータちゃんで、「おい、こら。喧嘩は後にしやがれ。てめぇら投降を拒否ったよな？　んじゃ、ぶっ倒すかんな」って"グラーフアイゼン"を２人に突き付けた。

「・・・ふむ。紅の鉄騎の言う通りですね。投降を断った以上は武力で解決するほかありません。ソアラ、早速始めましょう」

「ちょっ！？　実名を出すなんて馬鹿なんですか！？」

「私も実名ですし、問題ありませんよ」

「な、ななな・・・ありえない！　あなたたち紫天一家は揃いも揃って馬鹿なのではないですか！？　いえきっと馬鹿なのです！　自らの正体を明かすような真似をするなど！」

「名前を知られたからと言ってもどうせ身元までは判りませんよ、私も貴方も」

「それはそうでしょうけど、気持ちの問題です」

「では、切り替えていきましょう」

「つ、疲れます・・・」

シュテルと女の子――ソアラの口喧嘩のような会話の中には気になることがたくさんあったけど、それを問う前に２人が臨戦態勢に入った。

「昇華殲滅服（ヒートスーツ・セカンド）、着装。・・・ルシフェリオン、デストロイヤーヘッドを起動。シタデルユニット解放」

シュテルがこちらに身体を向けたまま後退して、防護服姿に変身した。大体は砕け得ぬ闇事件の頃とデザインは変わらないんだけど、長くなった髪は首の後ろで一束に結ぶようにしてある。それに籠手と脚甲が追加されてる。

そしてシュテルの杖、"ルシフェリオン"がカートリッジを2発とロードして、その形状を変化させた。私の"レイジングハート"のエクセリオンモードと似通ったデザインなのは変わらずだけど、今の私の"レイジングハート"とは違くてヘッド部分が少し細長くなってる。あと、両手に1本ずつ。杖と言うより槍。ソレが2本あるんだ。

「二槍流って感じか。それにシュテルの側に浮いてるアレら、なんかフォートレスみてぇだな」

「うん。シタデル・・・、意味は城塞だよね」

私のブラスタービットよりちょっと大きな遠隔操作機が4機、シュテルの四方を護るように宙に浮いてる。あとすごい気になるのが、両手に持ってる2本の"ルシフェリオン"の給弾口から伸びてる弾帯。1本につきおよそ100発、計200発のカートリッジを使えることになるわけだ。シュテルを速攻で負かすのは無理かも。

「名を勝手に暴かれ、暴いたチームメイトは自ら名乗り、素顔を晒したのです。片意地を張っていても馬鹿馬鹿しいだけです」

ソアラって子もローブを脱ぎ捨てて素顔を晒した。真っ先に目に付

いたのは銀色の長いおさげ。前髪はルーテシアやメガーヌさんのような額を大きく出すＭ字。蒼い瞳はどこまでも澄んでいて、犯罪者なんて思えない綺麗さ。膝下まである白のセーラーワンピース・黒リボン。そして蒼いワンピースと同じ長さのエプロンっていう格好だけど、神秘を含んだ魔力で構築されてる防護服だってことが判る。

「ではしばらく私やシュテルと戯れていただきましょうか」

ソアラの持つランスからバチバチと黒い放電が起こって、「参ります！」の一言を合図に黒雷チーター９頭を引き連れて突撃してきた。さっきの作戦通りにソアラとチーターはクラリスちゃんとナデシコに任せて、私とヴィータちゃんとリインは「シュテル！」を止めるために行動開始。ヴィータちゃんと一緒に空に上がって、足元を通り過ぎてナデシコに突撃していくソアラ達を見送った。

「ルシフェリオン。ダブルカートリッジロード」

シュテルがそう言うと、２本の"ルシフェリオン"が同時にカートリッジをロードして、両方の石突に環状魔法陣を１つ展開。あと穂先にも環状魔法陣を２つと展開した。もう言葉では止まらない。だから私とヴィータちゃんは「カートリッジロード！」を行った。

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ≫≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫

『なのは。シュテルのシールドを引き付けてくれ。あたしがシュテル本体を狙う』

『了解。やり過ぎないようにね』

「『そりゃアイツ次第だな』リイン、アイゼン！」

『はいです！』

≪Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ≫

"アイゼン"のヘッド部分を大きくしたヴィータちゃんに続いて、私はブラスタービット４基をシュテルの四方に配置させて砲撃をスタンバイ。そんな私たちにシュテルは「まぁそう来ると思いました」って"ルシフェリオン"の穂先を私とヴィータちゃんに向けた。

「エラガバルスキャノン！」

そして放たれる火炎砲撃。私たちはそれぞれの回避行動で躱すんだけど、今放たれたのは「連射タイプ！？」の砲撃のようで、避けた先にも火炎砲が放たれてきていた。慌てて急制動を掛けて火炎砲に突っ込むのを阻止。すぐに「アクセルフィン！」を発動して急上昇することで追撃を回避した。

「なんからしくないね、今のシュテルは！」

――エクセリオンバスター・マルチレイド――

砲撃を撃ち続けるシュテルの四方で高速移動させていたブラスタービットから同時に４発と砲撃を発射。シュテルは私とヴィータちゃ

んだけを狙って撃ってきていたけど、突然考えを変えてブラスタービットを撃ち落としにこられても嫌だし。

「（会話で少しでも気を散らせることが出来れば・・・）以前のシュテルはもっとこう・・・激しく動いて相手を倒しにかかってくるような子だったのに！」

――フレイムプレート――

シュテルのシタデルユニット４基から赤い魔力シールドが生成されて、私の砲撃を完全に防いだ。けど、シールドは砲撃を防いでる最中。そこに本命の"レイジングハート"からの１発を発射する。

「必要性に駆られたからですよ。エルトリアは現在、死触現象とは別の問題を抱えています」

――メテオーア・フリーゲン――

そう言いながら私の砲撃を火炎砲で迎撃したシュテルの頭上、ヴィータちゃんの放った燃える大物質弾が３発と急襲。その攻撃をシュテルはミッド魔法陣のシールドを展開することで防御。着弾時に発生した爆炎と黒煙がシュテルの姿を覆い隠した。

「ギガントハンマァァァァーーーーー！！」

ユニット４基と迎撃砲は私で釣って、シュテル自身のシールドはヴィータちゃんの射撃で釣った。最後はヴィータちゃん自身による直

接攻撃でシュテルへのダメージを狙う。"アイゼン"を振り被りながら黒煙に突っ込んだヴィータちゃんの姿は、振るわれた"アイゼン"が黒煙を晴らすことで視認することが出来た。

「「籠手・・・！？」」

ヴィータちゃんの強大な一撃は、シュテルの左籠手で完璧に防がれていた。しかもシュテルはその場から一歩も動いてない。いくら防いだとしてもその衝撃は強烈で、普通は衝撃に耐えきれずに吹っ飛ばされる。しかも今の"アイゼン"はギガントフォルム。それをシールド越しとはいえ受けたのに立ったままだった。

「ヘリオポーズ・ランパート」

「っ！　ヴィータちゃん、シュテルから離れて！」

「っく！」

シタデルユニット４基がシュテルの前後左右の位置に着くと同時、４基が同時に放射状の炎の膜を発生させた。４つの炎の膜は合流して、シュテルを覆い隠す半球状のバリアとなった。

「死触現象を兵器利用しようと考えた異世界人による侵攻です。紫天の盟主ユーリ、我らが王ディアーチェ、レヴィ、フラム、アイル、そして私の王下四騎士、それにアミタやキリエで迎撃しています。なぜ私らしからぬ固定砲台役になっているのか。切り込み役にはレヴィとフラムとアミタとキリエがいるからです」

――バーストクロモスフィア――

炎のバリアから放たれ来たのは炎の砲弾で、直径が２ｍくらいあるから回避には気を付けないといけない。砲速も割とあるし、さっきまでの砲撃連射と組み合わせられると厄介かもしれない。

「私は盾としてディアーチェとアイルとユーリを護ることを選択しました。まぁなの(あなた)は譲りの防御力の恩恵もあり、盾役として大いに役立っています」

まさかの内容に逆にこっちの気が散るというか、「大丈夫なの！？　こんなところに居て！」って不安、そして心配になった。炎のバリアを解除したシュテルが「大丈夫です。私は違うので」って言いながら2本の"ルシフェリオン"のカートリッジを3発ずつ、計6発とロードした。大技が来るって判る数だ。

「違うってどう意味！？」

――アクセルシューター・バニシングシフト――

エクセリオンモードのロックオン機能を利用した精密狙撃バージョンのアクセルシューターを発動して、１８発の魔力スフィアを周囲に待機させる。ボッ、ボッ、と火を噴くシタデルユニット４基はシュテルの周囲をゆっくりと回って、私たちの攻撃に備えてる。

『なのは。あたしがデケェので一気に片を付ける。シュテルを引き

付けててくれ』

『大きいのって・・・。まさか、ツェアシュテールングス！？　待って、アレは――』

『アホか。さすがに対人では使わねぇよ。ギガントシュラークで盾4つを破壊してやる。シュテルだって盾が壊れそうになったら回避行動くらい入るだろ』

『ま、まぁさすがのシュテルも逃げるとは思うけど・・・』

「そのままの意味ですよ。私は違うので、異世界（こちら）に居ても問題ないのです」

――カタストロフィノヴァ――

どんな魔法でも余裕をもって回避できるようにシュテルから距離を取っていた私たちに向かって放たれたのは、ピンポン玉みたいな小さな火炎弾。高速弾でも誘導弾でもないようだけど、避けないと「まず・・・！」いことくらいは理解できる魔力が込められ、圧縮されてる。

「ヴィータちゃん！」「なのは！」

2人同時に一気に急上昇する。その途中、私たちを巻き込まないように遠く離れたところで戦ってるクラリスちゃん達が視界に入った。大きくなったナデシコが十数頭にまで増えた雷チーターを相手にし

て、クラリスちゃんは巨馬アレクサンドロスを駆って、ソアラもいつ召喚したのかキラキラと輝くたてがみを有する巨馬を駆って、お互いの武器でドックファイトを繰り広げていた。

「「～～～～～っ！！」」

足元で火炎弾が大爆発を起こした。巨大な炎の球から発せられる熱波に私たちは声にもならない悲鳴を上げて、爆風に吹き飛ばされた。なんとか姿勢制御が出来るほどの距離まで飛ばされた私は、キーンと耳鳴りがする耳と、爆炎でチカチカする目を使って周囲の様子を探る。

『なのは、大丈夫か！？』

『なんとか！　ヴィータちゃんは！？』

『あたしもリインも問題ねぇ！』

『でも目がグルグルします～・・・』

無事なようで良かったって安堵していると視覚も聴力も回復して、シュテルの姿を視認。２本の"ルシフェリオン"が派手に排熱していて、一切の攻撃が中断されてる。攻めるなら今と判断して、今の爆炎攻撃でも無事だったアクセルシューターを「シューット！」一斉に発射した。狙いはシタデルユニット４基と"ルシフェリオン"２本。攻撃も防御もすべて私が引き付ける。

「ヴィータちゃん！」

「おう！」

ヴィータちゃんはシュテルの頭上に向かって飛んで、私は単独でシュテルの真正面に向かいながら高速砲の「ショートバスター・マルチレイド！」を"レイジングハート"とブラスタービット4基から連射する。威力と射程を犠牲にしているけど移動しながらの連射が可能ということで、シュテルの攻撃を躱しながらこっちは撃ち込み続けられるっていうメリットが生まれる。

（シタデルユニットが動いた・・・！）

先発のシューターを防御するためにユニット4基の縁から魔力シールドが発生して、シューターを次々と防いでいく。そこに5方向からの砲撃。ユニットが展開してるシールドはかなり堅いけど、低威力とはいえ砲撃を何発も受けたらヒビが入るのは必然だった。

「轟天爆砕！」

冷却が終わったのか"ルシフェリオン"のカートリッジをロードさせて、シュテルは1本を私に、もう1本を超巨大化させた"アイゼン"を振りかぶってるヴィータちゃんへと向けた。ユニットはすべてシュテルの頭上に配置されて、「ヘリオポーズランパート」っていう、さっきと同じように炎のドーム状バリアを展開した。

「レイジングハート！　カートリッジロード！」

ヴィータちゃんの一撃に巻き込まれないようにブラスタービット４基を撤退させつつ、砲撃魔法をスタンバイ。

「ギガントシュラァァァァーーーーーク！！」

「ディバイン・・・バスタァァァァーーーーー！！」

「プロミネンスホーン！！」

放つ砲撃、振り下ろされる圧倒的質量と、放たれた火炎砲が真っ向から激突。シュテルの砲撃は私の砲撃を貫通してきて、「わっ！？」と私は慌てて砲撃を解除して、横移動することで砲撃の直撃を回避。そして"アイゼン"に向かって放たれた火炎砲は、「アイゼン・・・」のヘッド部分を撃ち貫いて、ヘッド部分を内側から大きく破壊していた。

Ｓａｇａ２２－Ｄ最終侵攻～Ｂａｔｔｌｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗｅｓｔ～

†††Ｓｉｄｅアリサ†††

あたしとスバルとティアナ、そして特騎隊のミヤビの４人は、数週間ぶりに活動を再開した"Ｔ・Ｃ・"を今度こそ壊滅するために、西部ネオンノード地区の研究所を訪れた。連中の目的は、研究所に保管・研究されている魔力を持つ物品の強奪だ。

「襲撃予定時刻まで５分を切りましたね、アリサ先輩」

「そうね。・・・スバル、ティアナ。もう一度言っておくけど、怒りに任せての行動は厳禁よ」

「「はい。解っています」」

スバルとティアナはピリピリとした空気を出しながら返事をした。ルシルとアイリが殺害される前、２人と最後に逢い、言葉を交わしたのがスバルとティアナと、今は別行動中のエリオとキャロだったのよね。協力すると提案したけど、ルシルがそれを拒否したことでスバル達は渋々ながらも従った。４人はそれに後悔してる。無理にでも付いていけばよかったって。そうすればルシルとアイリが死なずに済んだのかもしれないって。

（ルシル。あたしはをアンタを恨むわよ）

だから"Ｔ・Ｃ・"が活動を再開するという話を聞きつけたスバル達は、自ら今回の防衛戦に参加するために名乗りを上げた。フッケバイン事件で死線を何度だって潜ってきているし、神秘カートリッジにも適応できたし、問題なく参加ＯＫになったのよね。

「それじゃあ再確認よ。あたし達の仕事は？」

「侵入を試みるＴ・Ｃ・構成員に投降を呼びかけ、応じたら即座に逮捕」

「応じずに戦闘態勢に移行した場合は応戦、これを撃破して逮捕です」

「会敵したからと言って感情に任せて仕掛けないようにね。もちろん、あたしもミヤビも耐えるわ」

「はい。本音を言えば即座に殴り飛ばしてやりたいです。・・・彼らは投降にはまず応じないと思いますが、局員である以上はルールを守って投降を促さないといけませんからね、全力で耐えようと思います」

あたしだってホントはルシルとアイリの敵討ちをしたいし、感情に任せて"Ｔ・Ｃ・"を滅茶苦茶にしてやりたいわよ。けど法の番人として何よりルールを守らないといけないわ。スバルとティアナがあたしとミヤビを見て頷き返した。あたしとミヤビも感情で動きたいのを我慢してるっていうことが判ってくれたからなのか、スバル

とティアナからピリピリとした空気が無くなったわね。

「一応施設内にも控えの局員が待機してくれてはいるけど、可能な限りあたし達でＴ・Ｃ・"を潰すわよ」

「「「はいっ！」」」

それから襲撃時間までの短い間に自分たちのデバイスの最終調整を行い、とうとう残り２０秒といったところで『こちら監視班！　施設に接近中の人影を視認！』って、施設の屋上から周囲を監視してくれてる局員から連絡が入った。

『人数は視認している限りでは１名！　フード付きのローブを羽織り、顔は見えず！』

「了解です。結界の準備をお願いします」

現在、研究所への出入りが出来ないよう道路などは封鎖されているし、今日は"Ｔ・Ｃ・"の襲撃があるということで、研究員なども誰ひとりとして出勤しないようにされている。だから今ここにやって来るのは間違いなく敵よ。そんなあたし達の倒すべき敵が来るのを待つことちょっと。研究所を囲う壁で唯一開けた場所――ここ正門にやっと姿を見せた。

「「「「子ども・・・？」」」」

１５０㎝あるかどうかの身長。ローブの裾から除くロングブーツの

デザインや歩き方からして女の子ね。けど「子どもだからって油断しないように」って、あたし自身も含めてスバル達に注意しておく。子どもだろうが強い魔導師はいるし、魔術師となればそれこそ一気に最強になる。ま、こちら側も魔術が使えればそのアドバンテージの差は小さくなるけど。

「時空管理局、アリサ・バニングス一等陸尉よ」

「同じくミヤビ・キジョウ三尉です」

「スバル・ナカジマ」

「ティアナ・ランスター」

「あ、はじめまして。あたし、ラスティアって言うの。えっと、魔力保有物？を貸してください！」

本名か偽名かを名乗りつつ頭を下げたラスティアに、あたしは「大人しく捕まれ」って投降を促した。聞く耳を持たないあたしにラスティアは「そっか。うん、まぁ判ってたし。無視は少し傷ついたけど」って嘆息した後、俯かせていた顔を上げてあたし達を見た。

「しょうがない、うん、しょうがない。じゃあ戦う？　もうこっちから仕掛けてもいいって言われてるから、遠慮はしないよ？」

「上等よ！」

「覚悟してください！」

「「絶対に捕まえる！！」」

ローブを脱ぎ捨てて素顔を晒したラスティア。緑がかった黄色の髪、エメラルド色のおっとりした瞳、額には留め具の無いアクセサリー・ラリエット。ノースリーブのロングコートにミニスカート、太腿までのサイハイブーツっていう格好ね。

――鬼神形態顕現――

ミヤビは額から無色の角を生やして臨戦態勢に移行。あたしも"フレイムアイズ"をフルドライブ・ヴァラーフォームで起動。スバルは機動六課時代から変わらない（外見とは違って性能は段違いに強化されてるけど）"リボルバーナックル"と"マッハキャリバー"を。ティアナも見た目は変わらずとも性能は強化されてる"クロスミラージュ"を2挺持ちで起動。

「剣士と銃持ちと徒手空拳2人。しかも1人は魔人の末裔、1人は機械？かぁ。まぁ大丈夫かな」

ラスティアが何か引っ掛かることを言いながら野球ボール大の虹色に輝く宝石を12個と展開すると、自身の周囲をくるくると飛び回らせ始めた。この気配、間違いなく神器だわ。だから「スバル、ティアナ！　神秘カートリッジをロード！」と指示を出して、"フレイムアイズ"のカートリッジをロード。

「すんすん。この匂い・・・フライハイトの神秘。あたしを相手にフライハイト？」

――アムブリオン・ブレイド――

「まぁ頑張ってみてよ」

宝石1個を右手に握ると同時、風の剣が生成された。向こうも剣士タイプのようだけど、宝石がどうも気になるのよね。だから「スバル、ミヤビが前衛。あたしとティアナで中後衛よ」って陣形を伝えると、3人は「了解！」って応じてくれた。一応この班のリーダーは、特騎隊の一員であるミヤビなんだけど、ついついあたしの隊みたいに指示しちゃうわ。

「アリサさん！　撃ちます！」

――クロスファイアシュート――

「ええ！　スバル、ミヤビ、よく見ておいて！」

――フレイムバレット――

あたしとティアナの放つ射撃弾幕にラスティアは大きく回避行動を取って躱すけど、ティアナのクロスファイアは誘導操作弾で、避けた先から魔力弾は追い縋ったり、発射された魔力弾も射線を曲げて迫っていく。さらにあたしも火炎弾を直射から誘導操作に切り替えて、ラスティアの魔術の種類を少しでも引き出すために連射する。

「ちょっと面倒くさいなぁ。なら・・・！　アムブリオン・セイバー！」

ラスティアが両手に持つ風の剣を左右に開くように振るって放ったのは、暴風の剣状砲撃。砲撃はあたしとティアナの弾幕を真っ向から消し飛ばして、そのままあたしとティアナ、スバルとミヤビに襲い掛かった。

「うわっと！」

「アリサ先輩！　ラスティアにも遠距離攻撃があると判りました！　私とスバル先輩もそろそろ攻撃に加わろうと思いますが！」

「そうね！　お願い！」

ミヤビの提案を受け入れる。近距離だけしか攻撃方法が無いならあたしとティアナで遠くから攻撃し続けて、疲労させてやればいい。だけどそうでないなら近距離・遠距離のコンビネーションで一気に畳みかけるのが上策よね。

「スバル先輩！」

「うん、お願いします、ミヤビさん！」

あたしとティアナの魔力弾連射の合間を縫うようにスバルとミヤビが突っ込んでく。ラスティアは「今度はこっちのターン！」って風

の剣を消し、持っていた宝石を宙にポイッと放り投げた。と思えば、別の宝石をパシッと手に取った。

「テッラ・スクード！」

あたし達とラスティアを隔てるように地面から隆起したのは岩と土の混合防壁。魔力弾幕がガンガン当たってくけど、表面を少し削るだけで破壊するには至らなかった。これはちょっと苦労しそうね。

「時間的にちょうどいいし、全力全開よフレイムアイズ！」

≪応よ！　スリーズサンズ・レガリア、起動だぜ！≫

†††Ｓｉｄｅアリサ⇒ミヤビ†††

ラスティアと名乗る少女を打ち倒すべく、私はアリサ先輩、スバル先輩、ティアナ先輩の３人と共に交戦を開始しました。小さな女の子を殴ることには多少なり抵抗を覚えますけど、ルシル副隊長とアイリ先輩を亡き者にした"Ｔ・Ｃ・"の一員ということで、私は半ば八つ当たりのように拳を振るい続けました。

（この防御力と防壁連続発生。決定打は先輩方に任せた方がいいですね）

――地鬼形態顕現――

「・・・あ」

私の魔力に地を操る属性を付加します。私の角の色が無色から茶色へと変化したことにラスティアが少し目を見張りました。その一瞬の隙にスバル先輩が「リボルバーキャノン！」と、衝撃波を伴っての右拳を繰り出しました。

――ペルセヴェランス――

スバル先輩の一撃が向かうラスティアの左頬が一瞬で黒い何かに覆われ、ガキンと甲高い音を立てて拳を受け入れました。スバル先輩の右腕が弾かれましたが、拳を受けた衝撃だけはどうにもならなかったのかラスティアも体が浮くほどに飛ばされました。

「地殻壊拳！！」

――テッラ・スクード――

私は瞬時に右腕に岩石の籠手を作り出し、地面に着地する前のラスティアへと殴り掛かります。が、私と彼女の前に岩石の壁が勢いよく立ち、私の拳を受けました。壁の表面を大きく抉りましたが破壊には至らず。だけど「おおおおおお！」と気合を入れ、もう一撃を加えたことで完全に破壊です。

「魔人の末裔の分際で・・・！」

私が壁を破壊する頃にはラスティアはもう遠くに離れており、アリサ先輩の熱線砲やティアナ先輩の多弾連射の対処に忙しそうでした

が、私が壁を破壊したことに対してわざわざ怒りを覚えているようです。私の一撃を受け止め、自分が逃げられる時間を稼げた時点で彼女の勝利なのになぜ怒るのでしょうか。

「やっぱり先にあなたを黙らせないといけないみたい！」

ラスティアは自分の周囲を飛び回る丸い宝石を新たに手に取り、「ポラール・リヒト！」と、私たち４人に向かって黄金色に輝く砲撃を一斉発射しました。受けたら負ける。見ただけでそう察することが出来ましたから、私たちはそれぞれの方法で全力回避です。

「ルイン・トリガー！」

また別の宝石を手に取ったラスティアが声を発すると同時、ギンッと鈍い音が聞こえたかと思えば「むぁ！？」と私は声を漏らし、その場に強制的に跪かされました。

「ミヤビ！？」「「ミヤビさん！？」」

「き、来ては・・・ダメ・・・です・・・！　重力・・・です！」

私を心配して駆け寄ろうとしてくれました先輩方を制します。騎士プラダマンテの空間操作能力と同じ、周囲の重力を操作する魔術。けれど騎士プラダマンテの重力よりはまだ軽い重圧です。ですから「宝石を・・・お願いします！」と重力を発生させていると思われるラスティアの持つ宝石を狙うようにお願いします。いえ、本当は先ほどから宝石への攻撃を私たちは続けていますが、何分小さいう

えに動き回ることで失敗続きです。

「判ったわ！　もう少しだけ耐えて！　スバル、ティアナ！」

「「はい！」」

地鬼形態だからこそ耐えられる重力ですが、そう長くは持ちませんね。そういうわけで先輩方がラスティアへの猛攻を開始しました。私を重力に閉じ込めるための魔術を発動しているらしい宝石を右手に集中砲火するのですが、左手に持つ宝石は影の魔術を扱えるらしく・・・。

――復讐者（エノルム・ヴィオランス）の黒腕――

ラスティアの左右を護るように出現した黒い影の両前腕が、先輩方の攻撃を完全に防ぎ切りました。さらに影の腕は虫を払うかのようにブンブンと左右に振るわれ、「きゃあああ！」先輩方を薙ぎ払いました。防御が間に合わずに直撃を受けたことで高速で飛ばされた先輩方の先には何もなく、このままではどこまでも飛ばされて行きそうです。

（重力に捕らわれていても・・・！）

――砂泥緩衝壁――

「遠隔発生・・・！？　聞いてたのと違うじゃん！　もう！　面倒くさいなぁ！」

たった今この瞬間に新しく組んだ術式を発動。殴り飛ばされた先輩方の後方に砂、粘土、土の三層クッションを急速生成。先輩方がクッションに突っ込むのを見ていることしか出来ない自身の無力さにいら立ちを覚えつつも、次の一手を必死に考えます。

『（初めてでしたけど遠隔発生も上手く出来ました！！）先輩方！大丈夫でしょうか！』

『あたしは何とか大丈夫よ！』

『あたしもです！　頑丈だけが取り柄なんで！』

『私も打撲だけで済みました！』

先輩方の無事は確認できました。あとは私が重力から逃れるだけなのですが・・・。そんな時、ティアナ先輩から『ちょっと試したいことがあるのですが、あの――』と提案された手段は、確かに現状を打破するにはいい方法だと思います。

「こちらからの戦闘行動は許可されてるけど、前と変わらず殺害の許可は下りてないから安心してよ！」

『それでいきましょ！』

『異議なし！』

『ミヤビさん、もう少し待っていてください！』

『了解です！』

確実に戦闘不能にするためにラスティアが私に向かって来ました。重力に捕らわれていてもなお私には遠隔発生なんていう、突発的に発動した割には上手く出来た術式の所為で警戒を強めてしまったようです。

魔法とは、自然摂理や物理法則をプログラム化して、任意に書き換え・書き加え、削除を行って、変化と移動と幻惑のどれかの作用を起こさせる技術のことです。一般的な魔導師は望む効果の魔法を発動するためにプログラムを組みます。そして詠唱や集中、トリガーなどでプログラムを起動、魔法として発動するのですが、私はそういったものを意識せずに魔法を発動できています。

（ルシル副隊長からは、私は魔術師寄りだと言われましたね）

魔術にも術式と呼ばれるものがありますが、ほとんど感覚的なものらしいです。先ほどの私のようにイメージがそのまま形になって発動するようです。が、今わたしの頭の中には砂泥緩衝壁の術式が朧気に浮かんでいます。この朧気をハッキリさせて、確実に発動することが出来るようになれば魔術は完成するそうです。

（であれば、シャル隊長の魔法をお借りしましょう）

さすがの最硬の地鬼形態とはいえ全身に軋みが上げ始めてきたので、そろそろ脱出しないとまずいです。そういうわけで地面に付いてい

る両手を僅かに離し、両手の平に魔力を付加。そんな私にラスティアな「悪あがきを！」と言い放ち、左手に持つ宝石をこちらに向けました。

「復讐者（ブレスィオン）の――」

私が何かをする仕草をしたため完全に私に意識を向けたラスティア。それが意識の誘導だということに気付いたとしてももう手遅れですよ。

――フリンジングボム乱れ撃ち――

――ダストブロウ――

――クロスファイアシュート――

先輩方が一斉に攻撃を再開しました。そのすべてはラスティアへの直撃コースではなく、彼女の周囲の地面。ラスティアの意識が私から先輩方に移りましたが、「ぶわっ！？　め、目くらまし！？」と驚く彼女の姿は、先輩方の攻撃によって巻き起こった砂塵で見えなくなってしまいました。私の方へと流れてくる砂塵は、そのすべてが重力によって地面に叩き付けられてますね。

（重力の檻の大きさは・・・私を中心に直径４ｍほど・・・。這って出られるでしょうか・・・？）

いえ。ティアナ先輩がせっかく作戦を立ててくれたんです。無理に

脱出を図らずとも問題ありません。

「ぺっぺ！　砂が口に・・・・！」

――風陣――

重力の檻の中に居ても判る暴風が発生して、砂塵が晴れていきます。このタイミングで私は「岩槍貫山・・・・！」と両手をもう一度地面に突き、先輩方が今なお居られるはずの緩衝壁の周囲に無数の剣山を突き出させます。

「口の中ジャリジャリ・・・・って、何のつもり？　他の３人を護るためだったり？」

「ぐぅぅ・・・・！」

重力の負荷がさらに強くなり、私は四つん這いからうつ伏せに倒れ伏しました。ですがそんな時、「え？　えええ？」とラスティアが困惑の声が、骨が軋む音の中で耳に届きました。なんとか視線を向け、ティアナ先輩の作戦が機能していることを確認しました。

「幻術・・・・！　ティアナって子の魔法だよね！」

何十人という先輩方の幻が所せましと駆け回り、ラスティアへと突貫を始めました。幻が手を伸ばすのは、重力を発生させいてる宝石を持つ彼女の右手。幻であったとしてもわらわらと集まってくることでラスティアは「もう！　ホント邪魔だよ！」と左腕を振り回し

つつ、風を起こして幻を揺らしました。

「いったん退避！」

地面を蹴って空へと上がったラスティアを追うために顔を上げようとしましたが無理でした。姿を見れず、声も聴けず、様子を確認することが叶わないのが歯がゆいです。ならば、仰向けに体勢を変えるのみです。うつ伏せはうつ伏せで胸が潰されて呼吸がし辛かったので、少しは楽になりそうですよね。

・・・で、なんとか仰向けになるんですが、「こ、これは・・・これで、きつい・・・です」とちょっと後悔です。頬の肉や胸も圧し潰されそうになります。私の今の顔、誰にも見せられないほどに潰されちゃってますよ。

――振動拳――

空高くで行われた一瞬の攻防を少しだけ見ることが出来ました。ラスティアは地上に居る幻や、本物の先輩方を風の魔術でどうにかしようとしたのでしょうが、彼女よりさらに上空にて待ち構えていたスバル先輩が降下の速度を合わせた拳を繰り出しました。頭上からの奇襲ということでしたがラスティアは反応し、風の魔術で横合いからスバル先輩を吹き飛ばしましたが、スバル先輩のすぐ背後にはティアナ先輩の幻術で姿を隠していたらしいアリサ先輩がいました。

――アドラヌスセイバー――

両手の剣から噴き上がる炎はフランベルジュのごとく揺らめく大剣

と成り、アリサ先輩はラスティアへ向けて十字に振り下ろしました。と、ここで私を捕らえている重力がパッと消滅しました。その代わりラスティアが異常な速さで急降下して、アリサ先輩の攻撃を躱しました。

（自分に重力をかけて無理やり回避したんですね・・・！）

ただ、私を解放したことは悪手ですね。ここから先は速度重視で戦わせていただきます。

――風雷鬼形態顕現――

膂力と防御力重視の地鬼から、速度重視の風鬼、加えて雷鬼の能力を同時に発言させます。

――鉄兵風馳――

風鬼形態での高速移動で、落下速度が落ち着き始めたラスティアの直下まで移動します。そして雷鬼形態での攻防一体技を発動しようとした時・・・

「そうはさせないでありますよ！」

――アウラール――

そんな声と共に私に向かってきたのは、炎の突撃槍型の射撃魔法？11発。私は発動を見送って回避に専念し、私に攻撃を加えてきた

敵の姿を視認したのですが・・・。私の知る人にそっくりでした。
いえ髪の色は金ではなく薄い紫色ですし、瞳も緑色ではなく金色。
ですが手にしている武装――デバイスも、顔立ちも声も・・・同じなんです。

「あなた・・・何者ですか・・・・！？」

「フラム・ザ・リベンジャーと名乗るでありますよ」

Ｓａｇａ２２－Ｅ最終侵攻～Ｂａｔｔｌｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｃｅｎｔｒａｌ　１～

†††Ｓｉｄｅすずか†††

ミッド中央区ダームシァンの研究所の防衛を任された私たちとシスターズ。周囲２㎞圏内は無人になるように規制されていて、研究施設内には武装隊、屋上には監視班や結界魔導師隊が待機しているだけに留まってる。

「みんな。襲撃予定時間まであと少しだから、今のうちに魔力を付加しておくね」

"スノーホワイト"をフルドライブのブリザードクロウで起動させる。右腕には熊手のような巨大な冷気を帯びた４本爪が付いた籠手を。左腕には神秘カートリッジを使用するために新しく改造し直した、上面に六角形の盾、下面に６連シリンダーを組み込んだ籠手を装着。ブリザードクロウは私の魔法効果を増大させてくれる形態だから、これから行う魔法も強化してくれる。

「スノーホワイト。神秘カートリッジ、ロード」

≪ロードしますわ≫

セレスちゃんの氷結属性の神秘魔力を２発とロードして、「トーレ、クアットロ、チンク、セッテ、ディエチ、ウェンディ。私の前に並

んで」って、固有武装を持ってる6人に言う。それぞれ返事をして私の前に並んだ6人に両手をかざした。

「アディション」

神秘カートリッジをロードしたことで一時的に魔術師化している私は、神秘を有した私の魔力をトーレ達の武装に付加する。シスターズは魔導師じゃないから、魔力じゃなくて別種のエネルギーを運用する。そのエネルギーに私の魔力をコーティングすることで、私たちのような疑似魔術師になれる。さらに、みんなが着用してる戦闘服にも同じように神秘魔力を付加しておく。

「あとは、クアットロのフォートレスもだね」

「お願いしますぅ～」

クアットロはかく乱要員だけど、自分の身を護られるように"フォートレス"を装備させてある。盾にもなるし砲台にもなるから、最悪クアットロが視認されて攻撃されることになってもすぐ撃墜にはならないはずだ。クアットロの"フォートレス"にも神秘魔力を付加して、さぁ準備万端だ。

「ウェンディ、ごめんね。ティアナの補佐官なのにこっちに回ってもらって」

「あー、全然問題ないっスよ♪　ティアナんところにはアリサとミヤビ、それにスバルが居るっスから。確かにあたしはティアナの補

佐官だしナカジマ家でもあるっスけど、シスターズの一員でもあるっスからね。シスターズが集まってバトルって言うんスから、あたしもこっちでやり合いたいっス。それにティアナからも、アンタはこっちで戦って姉妹の手助けになりなさい、って言われたっス」

４年くらい前までは局の仕事に就くことなく、いろんなお店などでアルバイトをして過ごしていたウェンディ。だけどティアナのスカウトで局入りを果たして、勉強を頑張ってそのまま執務管補佐にまで上り詰めた、すごい努力家さんだ。

『月村技術主任。当施設の正門に接近している正体不明、２名を確認しました。臨戦体制に移行してください』

「了解しました。結界の展開のタイミングはお任せします。・・・みんな、聞いた？　トーレとセッテは前衛。チンク、ウェンディは中衛。私とクアットロとディエチは後衛でみんなをサポート」

「「「了解」」」「了解っス！」「了解ですぅ～」

みんなに指示を出したところで、私も"フォートレス"を起動させた。"フォートレス"は魔力を別エネルギーに変換して動かす機構だけど、今回の事件に合わせて私やはやてちゃんの使う"フォートレス"を完全魔力運用機へと改造した。シスターズの武装への神秘付加なんてちょっと面倒なことをしなくても、ダイレクトに神秘魔力を扱えるようになってる。

「クアットロは屋上で姿を隠してみんなのサポートを。私は姿を見

せてる状態でサポートするから」

領き返してくれたクアットロは、ＩＳのシルバーカーテンの効果でステルス状態になった。クアットロ自身だけじゃなくて"フォートレス"も見えなくなったから、よっぽどの索敵能力持ちじゃないなら奇襲攻撃も可能だ。

さぁ準備万端。あとは接近している２人を捕まえるだけ。私たちの意識が正門に向いていたところで、私はフッと空に何かを感じた。直後、『直上！　３人目を確認！』って監視班からの報告が入った。

『私が出る！　残りは正門に注意しろ！』

『お願いトーレ！　援護が必要ならまた連絡を！』

『了解だ！　ライドインパルス！』

ＩＳを発動したトーレが目にも止まらない速さで空へと上がっていったのを最後まで見届けることなく、私も続いて空に上がったところで・・・

――サウザンドブレス――

「「「「「うぐっ・・・！」」」」」

とんでもない暴風が吹いて、普通の人より体重が重いチンク、ディエチ、セッテ、ウェンディが吹っ飛んだ。４人の身体能力なら研究所の外壁に叩き付けられるようなことにはならないだろうけど、念

のために魔力の網、「キャプチャーネット！」を発動して、４人を受け止めさせる。

「すまない、すずか。助かった」

「ありがとうっスよ！」

「感謝」

「ありがとうございます」

――強装結界――

チンク達を受け止めてる魔力ネットを解除して、地面に降り立った４人と一緒に残る２人の敵と会敵した。それと同時に複数の魔導師が協力して効果をグッと上昇させた強装結界が展開された。メンバーの結界担当班の中には近代ベルカの騎士も居て、神秘カートリッジを扱える人も居るから結界は魔術と化している。

（あの服装と扇。信じたくないけど・・・）

２人ともフード付きのローブを羽織っているけど、胸の辺りの膨らみや立ち方などで女の子だっていうのは判るし、１人は無手だけど、もう１人の両手には見慣れた扇が。それに何よりローブの隙間から女子生徒の制服のようなものがチラチラと見える。

――ライドインパルス――

――ショックブレイカー――

さらに上空から大きな金属音、そして爆発がした。そんな空から地上に向かって落下していく人物の顔を、持ってる武器を見て、私は「やっぱり・・・」って確信した。遅れて降下してきたトーレに「今回の敵の正体は・・・」って声を掛ける。

「ああ。考えたくはないが、連中のスペア機体だろう。まだ残っていたとはな。今度こそ徹底的に潰すぞ」

地面にクレーターを作りながらも着地したあの子は、「やっぱり速いな〜」って手にしている武器――ハンマーを肩に担いだ。チンク達も相手が誰なのかを察しているみたいで、チンクが「また、お前たちと戦わなければならないのか」って悲しげに零した。プライソンの味方だったサイボーグ姉妹"スキュラ"の死は、シスターズにも辛いものだった。味方・敵と別れていたけど元はプライソンの手によって生み出されたサイボーグで、シスターズもスキュラも一纏めで姉妹のようなものだから。

「デルタ、ゼータ。それに・・・その身長から言ってアルファ・・・？」

私がそう言うと、「ま、バレちゃうよね！」ってハンマーを持つ子がローブを脱ぎ捨てた。オレンジ色をしたロングヘアはポニーテール、瞳は銀。間違いなくデルタだった。続けて扇を持つ子もローブを脱いで、ストレートの艶やかな黒髪と銀色の瞳をあらわにした。

そして最後にローブを脱いだのは、ウェーブのかかった金色のロングヘアのアルファ。

「久しぶりね、月村すずか」

「どうして、あなたが、あなた達が・・・・」

「スペアなのだろうお前たちは。プライソン戦役後に奴の研究施設はすべて潰したはずだが、まだ残っていたようだな」

「ベーダとガンマ、それにイプシロンの姿が見えないようだが？別行動中か？」

"スキュラ"は6人姉妹で、目の前に居るのは3人だけ。残りの3人はどこに居るのかっていう話だけど、これはひょっとして・・・。私の視線が研究所に向いた瞬間、アルファが「メタルダイナスト！」って叫んだ。私たちと研究所を隔てるように鋼鉄の壁がせり上がった。アルファのスキルは鋼鉄を操るというもので、元の形を保たせたままだったり、再構成したりと汎用性が高い。

「（地下にも研究施設が広がってるから、その建材の鉄を壁状に変形させたんだ・・・！）トーレ、ウェンディ、クアットロ！　研究所の方をお願い！」

私たちの居る結界内と研究所内はすでに隔絶されていて、一度結界を抜けないといけない。少し手間だけど、アルファ達が足止役としてここに居るんだとしたら、研究所は危険にさらされることになる。

所内の武装隊や騎士を信じてないわけじゃないけど、少しでも防衛戦力を増やした方がいい。

「了解だ。チンク、セッテ、ディエチ。すずかを任せたぞ」

「了解だ」「了解です」「了解！」

――ランブルデトネイター・マルチロックオン――

「私は盾なのよ、チンク」

――メタルダイナスト――

チンクは周囲に展開した投げナイフ２４本をアルファ、デルタ、ゼータへ一斉射出。アルファがジャケットのポケットから取り出して、放り投げたいくつかの鉄片が巨大化すると、アルファとデルタとゼータを護る盾となって投げナイフを防御。

「ならば私は盾すらも断つ剣だ」

――スローターアームズ・セクステットダンス――

セッテが間髪入れずに"ブーメランブレード"を６本と展開して、次々とアルファ達の盾に投擲。"ブーメランブレード"はただでさえ切断力の高い武器で、しかも今は神秘が付加されている。どういうわけか"スキュラ"も神秘を扱ってるみたいだけど、"ブーメランブレード"の切断力とこちらの神秘の方が上回っているようで、

盾が甲高い金属音を立てて切断された。

「ヘヴィバレル。バレットイメージ・スタンシェル！」

防御が崩れたアルファ達に向かって放たれたのは、ディエチの持つ大砲"イノーメスカノン"からのエネルギー砲。バレットイメージは砲撃の種類を変更するスキルで、〇〇シェルが変更された種類のエネルギーの名前になる。今回ディエチが放ったのは、スタン効果のエネルギー砲だ。ダメージを与えつつ対象の筋肉を麻痺させるというもの。相手はサイボーグでも人工筋肉を用いているから効果はあるはず。

着弾時に発生した放電が治まると、片膝を付いているアルファ達の姿が目に入った。その間にトーレ達は外の結界担当班と連絡を取り合って、結界の外へと出ていく。

「アルファ、デルタ、ゼータ。お前たちを逮捕する」

チンクが手錠を手にアルファ達に近付こうとした時、「なんちゃってー！」ってデルタがバッと立ち上がって、手にしているハンマー・"ケラウノス"を振り上げようとした。私はそれより早く「アイシクルアイヴィ！」を発動。氷と冷気の茨状バインドを遠隔発生させて、デルタの両腕を拘束した。

「あー！　やったな！」

"ケラウノス"を振り上げることが出来なくなってデルタは悔し気にそう言うけど、すでに腕を拘束する茨にはヒビが入り始めてる。

それより早くチンクは"ケラウノス"を片手で上から押さえ付けた。

「フローティングアイス！」

アルファとゼータも立ち上がったから、私は３人の頭上に氷塊を生成。巨大な氷塊を支える魔法陣を消失させて、氷塊を落下させる。"スキュラ"の鋼骨格はシスターズのものより強固だというのはデータから知っている。それはスペアでも変わらないのも戦役時に回収したスペアのスペックからも知っているから、氷塊の重量に押し潰されても破壊されることはない。

「サウザンドブレス！」

立ち上がることより迎撃を優先したゼータは中腰の体勢のまま、扇を頭上に向かって大きく振るった。起こした突風で氷塊を砕き、破片を遠くに吹き飛ばした。その間にチンクがアルファ達から距離を取ったから、私は"フォートレス"を構成する３つの盾の２番機、Ｓ２シールドの砲門を向ける。

（本来は中距離戦用プラズマ砲を搭載しているＳ２だけど、今は純粋な魔力砲、しかも神秘保有だから確実なダメージが入る・・・！）

「バレットイメージ・エクスプロードシェル！」

「「シューット！」」

私とディエチは同時に砲撃を発射。アルファ達が回避行動に入ると

同時、チンクが指をパチンと鳴らした。それを合図としてデルタの持つ"ケラウノス"が爆発した。チンクのスキル、ランブルデトネイターは、一定時間触れた金属を爆発物に変化させるというものだ。あんまり大きな物は難しいけど"ケラウノス"くらいのサイズなら、全体を爆発物に変更するのも容易い。

「デルタのケラウノスがぁぁぁぁぁぁ！！」

「馬鹿！　立ち止まってないで回避しなさい！」

「間に合いません！　デルタ姉様！」

「あ」

私たちの砲撃がデルタの至近に着弾。着弾時に発生した私の魔力爆発に続いて、ディエチの火炎爆破に呑まれたデルタ。ゼータが「サウザンドブレス！」って扇を振るって爆風を起こし、炎を吹き飛ばした。その僅かな間に私は"スノーホワイト"のカートリッジを2発とロードして神秘を補充。そして「バインドバレット！」を30発とアルファ達の周囲に展開。

「シュート！」

「うぐっ・・・！　月村・・・すずかぁぁぁぁぁぁ！！」

「きゃぁぁぁぁぁぁん！」

それぞれに１０発ずつを着弾させて十重のロープバインドでアルファ達を拘束。直接ダメージは無い魔法だけど、着弾時の衝撃は魔術化していることもあって強いみたいで、拘束されながら呻いてるアルファとゼータが私を睨んできていた。

「デルタは戦闘不能のようだな。アルファとゼータの意識も刈り取っておくか？」

チンクは真っ裸で目を回してるデルタを見た後、もがくアルファとゼータを一瞥。ただのバインドだからスキル発動は止められない。ゼータのように扇を振るうっていう手間が無いアルファの鉄操作なら、今すぐにでもバインド破壊くらいしそう。

「ううん。待って、チンク。・・・アルファ、投降してくれないかな？　あんまり傷つけたくないし」

「もう勝利宣言？　相変わらずムカつく女ね」

「うん。ごめんね。でもアルファ達とは戦いたくないんだ。あなた達のオリジナルの死が、私たちに少なからず心の傷を負わせたの」

アルファ達のオリジナルがもう亡くなっているのは、プライソン戦役後に回収された身体に脳が搭載されていたことで確定している。脳死判定は本局医務局が出したし、死亡は確かなものだ。だから今目の前に居るのは人格データを積まれたＡＩ搭載のスペアということになる。でも、だからって破壊してもいいわけじゃない。

「・・・だから、ね？　お願い！」

手を合わせてお願いしてみる。アルファは目を瞑って何か考える仕草をした後、「いやよ。もう少し遊んでもらうわ」って微笑みを浮かべた。

「退くんだ、すずか！　ディエチ、撃て！」

――メタルダイナスト――

――ヘヴィバレル・バレットイメージ・ペネトレイトシェル――

チンクの言葉に従って一足飛びで後退しつつＳ１とＳ２を前面に置いて、エネルギーシールドを展開。そこに地面から勢いよく突き出てきた１本の鉄柱がシールドと激突した。シールド２機が空に打ち上げられる中で私はさらに後退して、Ｓ３シールドを前面に持ってきてエネルギーシールドを展開。直後に鉄柱に着弾したエネルギー砲弾の爆発から身を護る。

（うーん。やっぱり投降は受け入れてくれないか。凍結させても意識が残っていたらスキルを使われちゃうし・・・）

とりあえずゼータから墜とそう。空中のＳ１とＳ２を手元に呼び戻して、多少の損傷はあるけど使用には問題ないことを確認。

「セッテ、ディエチは、アルファの足止めをお願い。ディエチはイノーメスカノンから高速攻撃砲（リレントスカノン）に兵装変更で、チンクは私と一緒に

ゼータを墜とすよ」

「「「了解！」」」

気を失ったままのデルタを肩に担いだアルファと、扇を振るう動作に入ったゼータがバインドから逃れて散開。ディエチは指示通りに、長身の６連装砲身が三角形に並んだガトリング砲・"リレントスカノン"を装備。

「アディション！」

"スノーホワイト"のカートリッジをロードして、"リレントスカノン"に神秘魔力を付加。そしてすぐにディエチはゼータへ向けて何百発っていうエネルギー弾、「ロールバレル・バレットイメージ・インパルスバレット！」を発射開始。

「これは・・・！　受けては一気に墜とされてしまいますね・・・！」

――サウザンドブレス――

対するゼータは足元に突風を打ち付けて、砂煙を巻き起こして煙幕とした。だけどシスターズには熱源感知システムが標準装備されているから、砂煙での目くらましは通用しない。

「（たぶん・・・この辺り！）フローティングアイス！」

熱源感知なんて真似は出来ない私はゼータの行く手を予想して、そ

の先に氷塊の壁を作り出した。行き止まり作戦は上手くいって、ゼータは氷塊を飛び越えるべく砂煙から飛び出してきた。そこにディエチのエネルギー弾幕が襲い掛かるけど、扇を真下に振るって起こした風によってゼータは急上昇。

「逃がさないよ！」

――アイシクルアイヴィ・ケージ――

氷の茨を球状に編んでゼータを閉じ込める檻とする。ハッとしたゼータだったけどもう手遅れで、茨に触れたところから体を凍結され始めた。扇でどうにかしようとしているけど、両腕が真っ先に凍っていてもう動かせない。・・・勝った。

「ランブルデトネイター・リピーティングレイン！」

チラリとチンクとセッテとアルファの戦闘に視線を移す。チンクはアルファから一定距離を保ちながら空に投げナイフを１０本と展開して、アルファに向けて射出。そしてすぐに新しく１０本と展開。リピーティングの名前の通り解除するまでは設定した本数を自動展開できる。ロックオンも事前設定だから、チンクは爆破のタイミングを考えるだけ。

――メタルダイナスト――

アルファは足元から鉄壁を次々に生やしてチンクの攻撃を防御。そこにセッテが「スローターアームズ・カルテットダンス」って、４

つの"ブーメランブレード"を投擲して鉄壁を斬り飛ばして、さらに両手に持つ"ブーメランブレード"で直接アルファに攻撃を加えようとした。

「もう！　馬鹿デルタ！　重いし邪魔！」

――メタルダイナスト――

デルタを空に放り投げたアルファは、ジャケットの左右のポケットから鉄の剣を生やして、セッテの斬撃を僅かに防いだ。その間にアルファはさらに後退しつつ、ポケットから小さな鉄片をばら撒いた。セッテは追撃は危険だって判断したみたいで、後退じゃなくて空に上がった。その判断は正しかった。鉄片はウニのように放射状に針を生やした。

「ディエチ！　私たちも援護に入るよ！」

「うん！」

ゼータが全身を凍結されて封印状態になったのを確認したし、宙に放り投げられたデルタは私の「キャプチャーネット！」で受け止めた。アルファは元から私にそうさせるつもりだったようで、悔しむような表情を見せることなく私に一瞥だけした。４対１になったことでアルファには勝算はもう無い。そう思っていたらアルファは「これはもう交代ね」って嘆息して立ち止まった。

「デルタとゼータが・・・！」

２人の姿がなんの兆候もなく一瞬で消えた。転移スキルでもなく転移魔法でもない、まったく未知の技術・・・って普通は考えるだろうけど、"スキュラ"の中でこんなことが出来る女の子がいるのは知っている。驚いているチンク達に「熱源感知！　たぶんガンマのスキルで隠されてるから！」って指示を出す。

「・・・いやダメだ！　ステルスではないぞ、すずか！」

「あたしの探知でも引っ掛からない！」

「こちらでも探知できません」

「そんな・・・」

予想が外れた。それならどうやってデルタとゼータはこの場から離れたって言うんだろう。その答えを知っているアルファはニヤニヤと満足気で、そこら中にある鉄壁や鉄柱などの破片を大剣状に変化させ始めた。

「第２ラウンドよ！」

――マグネティックドミニオン――

いくつもの大剣が宙に浮いた。アルファのスキルじゃ出来ないことだ。居る。鉄を浮かせられることの出来る子、「イプシロンが近くに居る・・・！」のは間違いない。

「気付かれているようなのでイプシロンは姿を見せようと思います」

「そう？　なら私も出よう」

アルファの両隣からイプシロンとベータがスッと出てきた。やっぱりスキルでも魔法でもない、ステルスでもないなら一体どうやって・・・。

「アルファ、ベータ、イプシロン」

「３人とも、止まりなさい」

「「「「っ！！？」」」」

聞き間違えるはずがない、とても懐かしい声が聞こえた。声のした方へゆっくりと目をやれば、もう二度と逢えないと思っていた人がそこに佇んでいた。あのいつも着ていた白衣を風で揺らし、蛇のようにちょっと怖いけど優しい金色の瞳。

「「「ドクター・・・」」」

「アイル・・・！？」

ドクターことジェイル・スカリエッティ、それに最後にお別れした頃より大人に成長した、私の色違いの女性、アイルが居た。

Ｓａｇａ２２－Ｆ最終侵攻～Ｂａｔｔｌｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｃｅｎｔｒａｌ　２～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

ルシル君とアイリの死を受け入れられずに２週間近くも引き籠ってた私は、その分の時間を取り戻すために今日の任務は必ず完遂するって意気込んでる。大切な息子フォルセティに、父親のルシル君の真似までさせたダメな母親や。少しでも頑張らなアカン。
そうゆうわけで、私とアインス、シグナムとアギト、ザフィーラの５人は、ミッド中央区アンダリアのロストロギア研究所に赴いて、研究所に保管されてるロストロギアを狙って襲撃を仕掛けてくる"Ｔ・Ｃ・"を迎撃するべく待機中や。

「みんな、神秘カートリッジはしっかり持っとるな？　アレがあらへんとＴ・Ｃ・相手には戦えへんやろうからな」

襲撃予定時刻までもうちょいあるから、自分たちの武装の再確認を行う。私は完全魔力運用機として改造された"ストライクカノン"１門と"フォートレス"を最終チェック。
私のデバイスである"シュベルトクロイツ"と"夜天の書"はどちらもストレージデバイスとゆうことで、神秘カートリッジを機能させるのに必要なカートリッジシステムを持ってへん。それなら神秘魔力を打ち出せるように改造されてるこの２つに武装を使った方が戦力となる。
シグナム達もカートリッジの本数をしっかりと再確認。いつでも戦

闘が出来るように準備を整えたところで、空に魔力反応が生まれた。
まさかのフライングに「戦闘用意！」って指示を出した。

「「「『了解！』」」」

――広域剣兵召喚レギオン・オブ・ドゥームブリンガー――

空から降ってきたのは大量の魔力剣。それぞれ回避行動に移る中、
「結界班！　接敵と同時に結界！」と、研究所の屋上に待機してる班に指示を出す。私たちと"Ｔ・Ｃ・"を結界内に隔離することで安全を保つってゆう作戦や。"Ｔ・Ｃ・"も幹部がガーデンベルグ以外おらんくなったことで弱体化してるってゆうのがシャルちゃんの推測で、魔術全盛期の魔術師クローンもそんなにいないはずだって話やな。

（そやけど、今の攻撃には神秘が付加されてた。実はまだまだ居ったんか、もしくは残り少ない魔術師が偶々こっちに来たか。どちらにしろいきなりの攻撃や。執行妨害で引っ張れる）

『こちら監視班！　申し訳ありません、敵の接近に気付けませんでした！　本当に突如として出現したのです！』

「了解です！　こればかりは仕方がないので気になさらず！」

――アルゴス・ハンドレットレイ――

――ガストラフェテス――

「監視班、そちらから敵影を確認できますか！？」

続いて空から降ってきたのは、赤黒い砲撃の雨。それらが地面に着弾してコンクリートの破片や土などをまき散らした。さらに、すっごく大きくした釘のような紫色の魔力砲弾も、回避したばかりの私たちを正確に狙撃してくる。肉眼では捉えられへんからよっぽどの高高度からの攻撃なんやろうけど、砲撃でここまで精密狙撃なんて・・・。

（この魔法、この魔力光・・・。まさか、な・・・）

『魔力発生ポイントを発見しました！　ステルス系の何かしらを使用しているのか姿を視認できませんが、高度およそ1万2千にて魔力反応を2つ確認できます！　移動を確認次第、その都度報告します！』

「了解です！・・・とゆうか、さっきから私ばっか狙うようになってへん！？」

――バレットダムネーション――

――ガストラフェテス――

魔力弾が何百発と降る中で砲弾がこれでもかってくらいに私にだけ集中して降ってくる。普通の砲撃や高速砲より砲速が早いし、明らかに貫通効果を持ってますって判るくらいの鋭利な砲撃や。回避す

るのもしんどい。

（こうゆう場合のフォートレス！）

胴体に装着してる"フォートレス"のメインユニット、その両腰のカートリッジユニットを起動させる。シャルちゃんが込めてくれた"フォートレス"専用カートリッジをロード。背部のエネルギー翼生成機から一対の翼を展開して、機動力を活かして回避を続行する。その最中でも反撃のタイミングを計るんやけど、なかなか"ストライクカノン"や砲門持ちのＳ１やＳ２を向けられへん。意地の悪い集中砲火やな。きっと性格悪いわ、この砲撃手。

「我が主。我が盾役を引き受けます」

「ザフィーラ・・・。うんっ！　盾の守護獣の真価、連中に見せたって！」

「承知！」

――狼王の鋼鎧・発――

ザフィーラは両腕に装着してるガントレット型デバイス・"ヴォルフ・ヤークト"のカートリッジをロードして、全身から魔力フィールドを発生させた。本来の鋼鎧はピッタリと体を覆って攻防力を増大させるものやけど、このバリエーションは防御力増特化で、しかも範囲を拡げて複数人を護れる城塞のようなものや。

「来るがいい！！」

両手を空に突き出して砲弾の着弾に備えるザフィーラ。すぐに１発目の砲弾がフィールドに直撃したんやけど、砲弾は僅かに突き刺さっただけで貫通はせえへんかった。さらに爆発してもザフィーラのフィールドを貫けへん。

『こちら監視班！　魔力発生ポイントの座標を送ります！』

「（反撃するなら今や！）エクサランスカノン・フルバースト！」

監視班から送られてきた砲撃手の座標をモニターで確認しつつ、砲門の先端だけをフィールドの外に出して、"ストライクカノン"とＳ１とＳ２の三射砲撃を放った。

「アギト！　こちらも狙撃で対応するぞ！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ・　Ｂｏｇｅｎｆｏｒｍ≫

"レヴァンティン"を狙撃用のボーゲンフォルムにしたシグナムは矢を番えつつ、魔力弾の雨の中を二対の炎の翼を翻しながら回避を続けて、アインスも「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ」って詠唱を終えた。そんなアインスの頭上に大きなベルカ魔法陣が展開されて、三方の陣から超長距離狙撃を行える砲撃が次々と発射され始めた。

「シュツルムファルケン！」

続いてシグナムも矢を射た。矢は一直線に空へと走って、ある一定の高度で爆発を起こした。アインスの砲撃連射のおかげもあるんか攻撃がピタッとやんだ。少し待っても攻撃が続行が再開がされへんから、ザフィーラがフィールドを解除した。
それでも攻撃が再開されへんな～って考えてたら、『こちら監視班。空から何か、アレは・・・あ、紙が降ってきました。注意してください』って連絡が入って、確かに数十枚とヒラヒラ振ってきた。左手に持つ"シュベルトクロイツ"を脇に挟んで、開けた左手で目の前に振ってきた紙を手に取った。

「これ・・・！　魔導書のページ・・・！？」

記されてたのは魔法のプログラムやった。そう、私の"夜天の書"やリインの"蒼天の書"のような魔導書型のストレージや。しかも「コレ、私のクラウ・ソラス・・・？」の発動プログラムに酷似してた。他にも私の扱う魔法と似たようなものが記されてる。

（とゆうことは、やっぱり今の攻撃の主は・・・！）

「フンッ。2週間もめそめそ、じめじめと醜態を晒して引き籠っておった貴様には随分とイライラしておったが、元気になったらなったで当たらなかったとはいえ反撃してきたことにもイライラするわ！」

「「「「っ！！」」」」

『え？　なに？　シグナム？　はやて達も、なに驚いてんの？　て

いうか、はやての声っぽくね？』

ものっすごい聞き覚えのある口調に喋り方。私だけやなくてアインス、シグナムもザフィーラも驚いてる中、アギトだけが状況を判ってへんみたいや。いやまぁ、あの時・・・"闇の書"の欠片事件の時にはまだアギトはおらへんかったからな。

――セーレマイグレーション――

「「主はやて！」」「我が主！」『はやて！』

――アンサラーシュラーク――

アインス達に名前を呼ばれると同時、背後から魔力反応が急に生まれたことでＳ３を瞬時に操作して防御態勢に入る。まず金属同士が激突した音が轟いて、遅れて振り向いた私は攻撃してきた相手を視界に収めた。驚きの中に再会できたことへの嬉しさも混じる感情が沸き上がってきた。

「チッ。生意気にも防ぎおって」

「やっぱりや！　あの、イジメのような、私だけを狙って来る意地の悪い攻撃！　王様くらいしか思いつかへんもん！」

Ｓ３と激突してるんは"王杖エルシニアクロイツ"。杖を握ってるんは私と瓜二つな王様、ロード・ディアーチェが、そこに居た。王様も少し見ぃひん間に大人に成長してる。髪は私と違くてあんま伸

ばしてへんけど、王様はショートの方が似合うてるな。あと、ちょう気に入らへんところが1つ。オリジナルの私より・・・おっぱいが大きい。

『結界班。あと1人いるはずです。その姿が確認でき次第すぐに結界をお願いします』

『了解しました』

「何を嬉しそうに笑っておるか戯け・・・って、おい。子鴉、貴様さっきからどこを見ておる？」

「・・・本物なんかこれ？」

摘まんでる紙片をそっと離した左手で王様の胸をムギュッと鷲掴み、そんで一揉み。アカン、本物や。この弾力、偽物のわけない。二揉み、三揉みとしたところで、「このうつけ者が！　誰の許しを得て人の胸を揉んでおるか！」って顔を真っ赤にした王様が怒鳴りながら"エルシニアクロイツ"で殴り掛かってきたから、「おわっと！」"ストライクカノン"の砲身で受け止めた。

「あー！　王様、よう見たら私より身長がちょう高い！　胸のサイズだけやなくて身長までオリジナル超えなんて許されれんよ！」

「許してもらおうなど思っておらんわ！　ええい！　ユーリ！　引き籠りニートを断罪するぞ！」

「引きこも・・・！？　ちゃうもん！　もうちゃんもん！　てゆうか、やっぱりユーリも一緒なんやな！」

王様が"紫天の書"を開けてページの回収を始めると、「ディアーチェ。ちょっと落ち着きましょう」って声と一緒に音もなく王様の背後からスゥっと姿を見せたのは紫天の盟主、「ユーリ！」やった。さっきまで私たちに向けて放たれてたえげつない弾幕の発動主がユーリやって考えは正しかったな。

「お久しぶりです、はやて、アインス、シグナム、ザフィーラ。それと・・・」

『ん？　あたしのことが判んのか？って、シグナムの外見が変わってんだからユニゾン中ってことくらいは判んのか。あたしはアギト、八神アギト。そっちのはやてのそっくりさんの正体とか、シグナムから聞いた』

「はじめまして、ユーリ・エーベルヴァインです」

ユニゾンして姿の見えへんアギトを見るかのようにシグナムの胸の辺りをニコニコと注視するユーリ（あの頃から全然変わってへんな～。可愛らしい子どもの姿のまんまや）に、アギトは思念通話で自己紹介を返した。とここで結界が展開されたんやけど、王様もユーリも対して反応せぇへん。そやから私たちも変にアクションは起こさへんようにする。

『あのさ。シグナムに聞いた話だと、アンタら、お手軽に行き来で

きないほど遠くの管理外世界に住んでんだろ？　だったらなんでＴ・Ｃ・なんて犯罪組織にいるんだ？　わざわざ遠路はるばるやって来て犯罪者って・・・。わけ解んねぇんだけど』

「アギトの言うとおりやな。王様、ユーリ。２人・・・だけやないんやろ？　シュテル、レヴィ、フラム、アイルも一緒に、Ｔ・Ｃ・に協力してるんか？」

「・・・Ｔ・Ｃ・の首領、連中の言葉を借りれば王には借りがあってな。それに・・・同情しておるのだ、あ奴の境遇にな」

「なんや王様らしないな。マテリアルやアミタさんとキリエさんにしか優しくせぇへん唯我独尊キャラやったのに」

「言ったであろうが、あ奴には借りがあると。我らは借りも返さぬ阿呆ではないわ。まぁそう言うわけだ、子鴉ども。我らはあ奴の最期に付き合うため、この力を貸すことを決めた」

「ごめんなさい。敵対しちゃうことになってしまって。あ、でも全力は出さないので安心してください」

心底申し訳なさそうに頭を下げたユーリの背後に浮かぶ赤い靄――魄翼がバサッと翼を広げたような形状に変化した。王様も足元に魔法を発動するためのベルカ魔法陣を展開。こんな至近距離での魔法スタンバイに、シグナムとザフィーラが王様に、アインスがユーリに攻撃を仕掛けた。私は３人に比べて近接戦能力が致命的に悪いから、その場からすぐに後退しつつＳ１とＳ２、あと王様の一撃によ

ってヒビが入ったＳ３を私の元にいったん集める。

「鋼の軛！」

ザフィーラが発動した拘束杭を王様は後退しながら"エルシニアクロイツ"を横なぎに振るって粉砕。そこに燃える"レヴァンティン"による斬撃「紫電一閃！」をシグナムが繰り出した。それに対してユーリが「させませんよ！　ヘカトンケイルフィスト！」って右の魄翼を怪物の腕のようなものに変えて射出。

「っ・・・！」

王様からその怪物の腕に対象を変えて"レヴァンティン"を振るって迎撃したシグナム。間髪入れずにザフィーラが飛び蹴り、「牙獣走破！」で王様を狙う。

「この程度で墜ちてくれるなよ！」

――インフェルノ・アドラメレク――

そやけどそれより早く、王様の頭上に直径２ｍほどのトゲ付き魔力スフィアが４基と生成されて、それらが一斉に降ってきた。インフェルノって魔法に似てることからバリエーションの１つやろうな。トゲが付いたり大きくなってたりと大幅に強化されてるけど弾速は遅い。

攻撃を中断してその場から離脱したシグナムと、逆に王様と肉薄することで効果範囲から逃れたザフィーラを確認。そんで私は、攻撃

を撃ち終えたばかりの王様に向かって"ストライクカノン"での砲撃を「シュート！」の掛け声とともに発射。王様は「ふんっ」と鼻を鳴らして余裕で回避。

（避けられはしたけど、王様の追撃を邪魔しただけで十分や！）

王様への警戒をそのままに、アインスへと魄翼の放射面を向けたユーリへとＳ１の砲門を向けて、「ちょーっと邪魔するよ！」と砲撃を発射。

「ドゥームプレッシャー！」

左の魄翼を腕の形状に変化させて、迫る砲撃を大きな手の平で受け止めて握り潰したユーリは、右の魄翼を「ジャベリンバッシュ！」とゆう槍に変化させて、アインスに向かって射出。アインスは右腕に魔力を纏わせて、腕を横合いから裏拳で殴って明後日の方に殴り飛ばした。魄翼が次の魔法として変化するまでの僅かな間、アインスが右手をユーリに突き出した。

「闇に沈め！　デアボリック・エミッション！」

「ア、アキレウスシールド！」

至近距離での広域空間攻撃と、ミッドチルダ式とベルカ式の魔法陣を二重にしたシールドタイプの防御が激突。アインスとユーリが魔力の爆発に飲み込まれた。ユーリの防御の堅さはチーム海鳴の誰もが身に染みてる。そやからアインスの強烈な一撃にも完璧に耐えき

るやろ。

（フォートレスやストライクカノンの神秘カートリッジの効果が、私自身の魔法にも乗ればええんやけどな・・・）

無い物ねだりしててもしゃあない。ユーリに"ストライクカノン"の砲門を、Ｓ１とＳ２の砲門を王様へと向けて待機。王様はシグナムとザフィーラの猛攻を"エルシニアクロイツ"や「エヴァラック・シールド！」ってゆう、オートで連続展開されるらしい小型のシールドで防御し続けてる。驚くべきことはシグナムとザフィーラってゆう優秀な近接騎士を２人同時に相手してながら、王様の防御がなかなか崩れへんってことや。しばらく見ぃひんうちに近接戦にも強くなってる。

「悔しいな・・・」

ふつふつと湧き上がってくる嫌な気持ちを振り払うかのように、私はシグナムとザフィーラから距離を開けた王様に「シュート！」砲撃を発射。まずＳ１の砲撃が王様に着弾・・・はせぇへんかった。シールドが完璧に防いだからな。続いてＳ２の砲撃が２つの目のシールドに阻まれた。

「紫電清霜！」

追撃に繰り出されたシグナムの居合が、王様の"エルシニアクロイツ"に拒まれた。そやけどその一瞬の間にザフィーラが王様に肉薄して、「滅牙！」って右拳をお腹に打ち込んだ。王様は「ぐぅぅ！」

って苦悶の声を零して殴り飛ばされた。

「うあああああ！！」

そんな時に「アインス！？」の悲鳴が聞こえた。そっちに目を向けると、怪物の腕に捕まったアインスが、その腕ごと研究所を囲う塀に突っ込まされた。さらにユーリは「あなたは強いので、このまま足止めに徹しさせていただきます」って魄翼を大きく広げた。

「カノン！」

瓦礫の中で立ち上がろうとしてるアインスの元にＳ３を向かわせ、さらに追撃を止めさせるために"ストライクカノン"のトリガーを引いて砲撃を発射。ユーリは攻撃態勢に入ってたことで回避も防御も出来ず、砲撃の直撃を受けた。火力も防御力もとんでもないユーリやけど、攻撃発動時は動けへんって弱点がある。そこを狙えば今みたいに攻撃を当てられるんやけど・・・。

「目がチカチカします～。お返しですよ～！」

――アルゴス・ハンドレットレイ――

まったくダメージが入ってへん。そんで魄翼の放射面から発射される何十発ってゆう砲撃。私や復帰した直後のアインスだけやなくて、シグナムとザフィーラも攻撃範囲に入ってたから回避に移った。

「そう言えば貴様らには初お披露目か？」

王様が"エルシニアクロイツ"の柄を両手で握りしめて、その先端を私たちに向けると、先端の剣十字に環状魔法陣を４つ、杖先にベルカ魔法陣を１枚と展開した。

「せいぜい当たらぬように踊るがよい！」

――ゲイアサイルＬＭＧ――

魔法陣の放射面から放たれたのは高速砲の連射やった。王様がよく使ってた直射砲アロンダイトより魔力が圧縮されてて、その威力はすさまじいと思う。しかも魔力の増大に収束、安定に加速ってゆう効果を持つ環状魔法陣が展開されてることで、威力が減衰しやすい高速砲が威力を維持したままで連射されてる。

「シグナム、ザフィーラ！　２人はアインスと一緒にユーリをお願いや！　王様は私ひとりでなんとかする！」

「「「しかし・・・！」」」

「心配してくれるんはありがたいけど、今はごめん、受け入れて！」

「はっはっは！　よいぞ、子鴉！　この王が手ずから遊んでくれるわ！　ユーリ！　残りは任せるぞ！」

「はい！　頑張ります！」

王様も受けてくれるようで砲撃をやめて、近くに居るシグナムとザフィーラを完全をスルーして私の居る高度まで上がってきてくれた。その様子からアインス達も私からのお願いを受け入れてくれたようや。王様からの指示にユーリも「ふんす！」って意気込んでる。

「王様と1対1で闘うのっていつ以来やっけ？　闇の欠片事件やったかな？」

「憶えておらん。が、そのような些末な事、今さら思い出すまでもあるまい？　何せ現状においては我の方が強いのは確かなのだ。そのような兵装を身に着けねば魔力に神秘を載せられん貴様に、我が負ける道理など無いのだからな」

「そう、それや。さっきからずっと気になってたんやけど、どうして王様もユーリも魔術が使えてるん？　カートリッジシステムのデバイスも持ってへんみたいやし、私みたいな兵装も無し。すずかちゃんのように他の人に神秘を付加させてるわけでもなし」

「知りたければ、まずは我に一撃を入れてみよ子鴉！」

――アンサラーシュラーク――

"エルシニアクロイツ"での直接打撃を、"フォートレス"の機動力を活かして回避した私は「ええよ！　一撃やな！　覚悟してな王様！」って返しながらS3を盾として構え、"ストライクカノン"の砲撃を準備した。

Ｓａｇａ２２－Ｇ最終侵攻～Ｂａｔｔｌｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｎｏｒｔｈ．　ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ　１～

†††Ｓｉｄｅヴィヴィオ†††

今日は週で１回訪れるトレーニング休みの日。今なお捕まってない最後の大隊のメンバー、キュンナさんとグレゴール、真正ベルカ融合騎のエーアストに狙われてるわたしは、わたしを預かってくれているフライハイト邸で大人しく過ごすべきなんだろうけど・・・。

――皆さん、せっかくの学院やトレーニングが休みなのですし、外出しても構いませんよ？――

――護衛は私とオットー、セイン姉様が請け負います――

――カリムとシスターシャッハから、今日１日ヴィヴィオ達に付いてるように言われてるし、どこでもお供するよ？　天気も良いし勿体ないじゃん？――

オットーとディードとセインがそう言ってくれたから、わたしとコロナとリオとアインハルトさんとイクスは、トレーニングウェアを新調するべく専門店にバスで向かってる途中。で、護衛のオットー達は、バスの後方から車で付いて来てくれてる。護衛だからと言って四六時中一緒だとわたし達が大変だろうからってことと、無関係なお客さんが乗る公共交通機関を襲うわけがないっていう理由からだ。

「なんか思っていた以上に物々しいね、教会本部への封鎖線」

「改修工事だっけ？」

「業者さんじゃなくて教会の人が立っているんだね」

今日1日だけ聖王教会本部に続く道路をすべて封鎖されるみたいなんだけど、道路を塞ぐ魔導バリケードの前に立ってるのは、本部内で何度も見かけたことのある神父さんだったりシスターさんだったりする。服装は神父服や修道服じゃなくて作業服だけど。格好を偽ってまで封鎖するなんて、ただの工事じゃないことはわたしでも判る。

「イクスさんは何か聞いてはいないのですか？」

「はい、特には。母様や父様からも伺っていません。ただ、近寄ってはいけないとだけ釘を刺されました」

そんな封鎖線を眺めながら、不思議だね～ってお喋り。次の話題は「フォルセティ、やっぱり来なかった」ってわたしがしょんぼりしながら零したことから始まった。

「フォルセティ、最近はわたし達の買い物に付き合わなくなった・・・」

「うん。中等部に入ってからだっけ」

「でも付き合ってくれなくなったのって、服の買い物の時だけだよ」

「買い物に行くって話をしたら、僕も付いていくよって言ってたけど、トレーニングウェアを新しく買いに行くって言った瞬間にいってらっしゃいだったもんね」

「・・・やっぱり、毎年の学院祭で女装させてたのがダメだったんじゃないかな・・・？」

コロナがポツリと零した言葉に、実行犯たるわたしとコロナとリオはだんまり。毎年ある学院祭の出し物には、そのクラスだからこその目玉っていうものが必要だ。すごい有名人なルシルさんやはやてさんの子どもで、ルシルさんと同じ美人ってことになれば女装が一番だって結論に毎度至っちゃうわけで・・・。

なのはママ達が学生だった頃のアルバム写真の中に、ルシルさんが何度か女装させられてるものがあったけど、今ならママ達の気持ちも理解できちゃうわけで。男の子を女の子の格好にさせるっていう、ドキドキ感と言いますか背徳感と言いますか。顔を赤くして嫌がってはいるけど受け入れてくれるフォルセティが可愛いんです、うん。

「「それですね」」

アインハルトさんとイクスが同時に頷いた。イクスも割とノリノリだったと思うんだけど・・・。とりあえず「今後はフォルセティの女装は禁止ということで」ってことにしよう。でもな～、クラスの女の子からの評判が良いんだよね、あと男の子からも。学院祭後に

は頭がバグるって悲嘆に暮れる子ばかりだったけど。

「あと、そうですね。フォルセティも男の子ですし、女の子の服の買い物に付いて行くのは少し抵抗があるんだと思いますよ。みんな可愛いですし♪」

そう言って微笑むイクス。アインハルトさんとイクスを除くわたしとコロナとリオは顔を見合わせて「えへへ～♪」と笑い合う。友達に可愛いって言われたことは素直に嬉しい。それと同時にフォルセティがちょっとでもわたしを意識してくれてるのかもって思えてだ。わたし達（アインハルトさん除く）は１３歳になったんだけど、成長期のおかげか身長も伸びてるし、服の上からでもハッキリ大きくなってきたって判る程度に胸も成長し始めてくれてる。大人モードは１８歳のわたしを仮想した姿だから、あと５年。

（大人モード無しで、普通の成長で大人モードと同じ姿に必ずなって見せる！）

そんな人知れずに決意を固めていると、コロナが「護衛とか関係なくフォルセティと一緒に買い物行けないのは寂しいね」って儚げな笑みを見せた。フォルセティは基本的にわたし達と行動を一緒にしてくれる。それが嬉しくて、その厚意に甘えちゃってるのは判る。フォルセティだって男友達との付き合いもあるはずなのに。でもだからこそ、わたし達が原因（フォルセティの女装を率先して言い出すのは他の子だけど、最終的に頼むのはわたし達）ということもあって、フォルセティがわたし達の服の買い物の時でも付いて来てくれるように安心させてあげないと。

「・・・ヒュギエイア。セインに通信を繋げてください」

イクスがルールー制作のデバイス・"ヒュギエイア"の待機モード、人差し指にはめた指輪にそう指示を出して手の平サイズのモニターを展開。他のお客さんの迷惑にならないように音量設定を最小一歩手前まで下げた。どうしてセインに通信を？なんて考えてると、『ほいほーい。どうしたの？』っセインが通信に出た。セインは護衛車の助手席に座っていて、運転手はディードだ。後部座席に居るはずのオットーは、前と後ろを隔てる壁の所為で見えない。

「少しお聞きしたいんですけど、護衛はセインとオットーとディードの３人でいいんでしょうか？」

『え？　えー、うん、３人だけ』

「では、フォルセティは一緒ですか？」

『ん？　んー・・・っと、う、ううん、一緒じゃない』

（セイン・・・、うそが下手すぎ）

セインがチラリとほんの一瞬だけど後部座席を見て、しかも変に間を開けた。正直なセインが可愛いと思いながら、フォルセティが付いて来てくれてるって判って胸の内がポカポカする。イクスは「判りました。引き続きお願いします」って小さく頭を下げてから通信を切った。

「フォルセティさん、いますね」

「「「ですね～」」」

苦笑いしてるアインハルトさんにわたし達も苦笑いで答えた。でも、みんなはきっと同じことを思ってるはず。なんだかんだ言いながらフォルセティはわたし達のために付いて来てくれていて嬉しいって。まぁ今後はこんな一喜一憂をしないで済むように、フォルセティの女装は禁止することを仲間内だけで決定。なら、今年の学院祭の出し物はどうしようか？になってくる。

「学院祭ですか・・・。私はもう参加できないのですよね・・・」

「そう、ですね。アインハルトさん、卒業しちゃいましたし」

「高等部への進学をやめ、格闘技一本に縛りましたね」

イクスの言うようにアインハルトさんは義務過程である中等部を卒業すると、格闘技選手に専念するために高等部への進学をしなかった。元よりザンクト・ヒルデ魔法学院は初等部と中等部は校舎が隣り合ってるけど、高等部から上は少し離れた場所にあるから気軽には逢えなくて、ちょっぴり寂しいのは確かで。ナカジマジムに行けば逢えるとは言ってもね・・・。

「ヴィヴィオさん達はどうするんですか？　進学か選手か」

「えっと・・・」

「私はまだその辺りは考えてないです。でも、たぶん進学することになるかと」

「あたしは選手の方に進もうっかな～って。まぁ家がどういうか判らないけど」

わたしが答えを言いよどんでると、コロナとリオがササッと答えた。コロナは進学予定で、リオは卒業予定。わたしがどっちを選んでも、2人の内どちらかとは一緒に居られる時間がかなり減るということに。そしてイクスは「私は医学科に進学ですね。将来は医者になりたいので」って進学することと、以前から語ってくれていた夢を改めて宣言。

（イクスとも一緒に居られる時間が少なくなっちゃうんだ・・・）

友達の夢だからもちろん応援するけど、寂しさだけはどうしようもない。しょんぼりしてるわたしに、アインハルトさんは「大丈夫です。ジムでなら逢えますし、たとえ離れていても心はずっと一緒です」と微笑みかけてくれました。コロナとリオとイクスもわたしを見て、アインハルトさんに同意することを示す笑顔を浮かべた。

「はいっ！」

みんなで今後も揺らぐことのない絆、友情に微笑み合ってるとコロナが「進路と言えば、リヴィちゃん、もったいなかったよね・・・」

って言って、話題がリヴィの選手引退に変わった。アルピーノ姉妹の妹リヴィは、管理局嘱託魔導師とホテルアルピーノ従業員に専念するため、わたし達が初めて参加したインターミドルチャンピオンシップに1回出場しただけで辞めた。ルールーは今も選手登録はしてるけど、ホテル経営を優先してるから大会にはあんまり出てない。

「リヴィ、都市本選４位まで行ったのにね」

「あと1歩でミッド代表3人のうちの1人に入れたんだけど」

「ヴィクターさんは強かったよね。魔力を防御力に特化させての打ち合いでリヴィのポイントと魔力を削り切ったんだし」

初参加で都市本選3位っていうことでリヴィは有名になったんだけど、リヴィはそのまま選手っていう路を自らの手で終わらせた。リヴィ曰く、面白かったけど家のことがやっぱ大事だし、とのことだ。それからはルールーのセコンドとして、ホテルアルピーノの宣伝と称して大会に参加してる。

「非公式ではありますが、結局わたしはリヴィさんに一勝することが叶いませんでした」

「ＤＳＡＡ格闘競技・Ｕ１５では無敗にして全試合をＫＯ勝利で収めたアインハルトでも、リヴィには勝つことは難しかったですね」

アインハルトさんは１５歳以下でのＵ１５大会においては一敗もすることなく勝ち続けて、今は１５歳以上１９歳以下のＵ１９を舞台

に闘い続けてる。そんなアインハルトさんは合宿でリヴィとＤＳＡＡ試合ルールを用いての試合を何度かやってるけど一勝も出来てない。ちなみにリヴィはヴィクターさんとも非公式だけど試合して、３戦３勝と全勝を収めてる。だからリヴィを知る先輩たちは口をそろえて勿体ないって言ってる。

「合宿に行けば喜んで相手をしてくれるし楽しいって言ってくれるから、リヴィもきっと機会があれば大会に出ると思うんだけど・・・」

「だよね～。ルールーとリヴィとメガーヌさんだけで切り盛りしてるんだし」

「アルファさん達がいてくれたら・・・」

わたしとリオとコロナは、もう二度と逢えない"スキュラ"姉妹のことを思い返した。ルシルさんが合宿に行けない時でもアルファ達"スキュラ"を召喚してくれて、その・・・雑用と言うかお手伝いさんとして、ホテルアルピーノの仕事を手伝わせてた。その間はルールーもリヴィも自由に練習できてたから。

「あの、フォルセティさんは、ルシルさんのエインヘリヤルを引き継いではいないのですよね・・・？」

「はい。エインヘリヤルを始めとして複製のすべてを継承して生まれるセインテストの対"エグリゴリ"用クローンは、そのクローンを生み出してるらしい専用施設からで、なおかつ先代が亡くなって

いないとダメなようなんです。フォルセティは、オーディンっていう過去のクローンから生み出されたクローンなので継承していません」

シャルさんから聞いたことをそのまま伝える。自分で言ってて気分が悪くなった。役目に殉じて亡くなったルシルさんには本当に申し訳ないけど、フォルセティが対"エグリゴリ"用のクローンでなくて良かったって思う。もしフォルセティが知らないどこかで独り戦って死んじゃうなんてことになったら、わたしははやてさん達のように前を向いて立ち直ることなんて出来ないと思う。

「・・・そうですか」

重い空気になっちゃって、次に明るい話題がないかをぐるぐる考えてると、「あ、着きましたよ！」ってイクスが努めて明るい声色で窓の外を指差した。変えるにはこのタイミングしかないってことで「良い服あるかな！」とか「あるある！」とか元気よく声を出す。そして停車したバスから降りて、オットー達の乗る車が駐車場に入って空いてる場所を探すために一度わたし達の視界から消えたのを見送り、いざ店の入り口に向かって歩き出したその時・・・

「「「え・・・！？」」」

それは起きた。わたし達の側からコロナとリオが突然消えた。そう、これは「結界・・・！」だ。アインハルトさんとイクスで背中合わせで周囲を警戒してるわたし達に「防護服着用！」って大声で呼びかけながら駆け寄って来てくれたのは、ウィングカラーシャツ、ラ

ペルドベスト、スラックス、フード付ロングコート、そして首にクラバットを巻き、腰にマガジンホルダーの付いたベルトを2つ巻いたスタイルの防護服に変身し終えていた「フォルセティ！」だった。

「やっぱり付いて来てくれ――」

「ヴィヴィオ、アインハルトさんとイクスも今は話はあと！　きっと狙いはヴィヴィオだから、すぐに臨戦態勢に入ろう！」

「あ、う、うん！」

「「はいっ！」」

「クリス！」

「ティオ！」

「ヒュギエイア！」

「「「セットアップ！」」」

フォルセティに言われた通りにすぐに大人モード＋防護服に変身。わたしとアインハルトさんは前から変わらないデザイン。イクスは、シャマル先生のようなナースキャップに、詰襟ブラウスにショートジャケット、フィッシュテールスカートにベールのように半透明なオーバースカートっていうデザインの防護服を着用。起動した"ヒュギエイア"は、両手の人差し指と中指と薬指に指輪として6個あ

る。

「どうすればいい？」

変身を終えたわたしはフォルセティに尋ねる。フォルセティははやてさん達からよく荒事の対処法などを教わってるらしくて、考え方がわたし達のような競技者じゃなくてはやてさんたち局員に近い。

「とりあえず外部との連絡・・・は、今してる。・・・この結界はおそらく閉じ込めた相手を逃がさないようにするためのものだと思う。コロナとリオ、オットー達が外に弾かれて、僕とヴィヴィオとイクスとアインハルトさんだけが閉じ込められた」

「なるほど。古代ベルカに関係している私たちが捕らわれたのですから・・・」

「結界を張ったのはキュンナとグレゴールと融合騎である、と」

「じゃあ、わたしの所為なんだね。ごめんなさい」

特に狙われてるのは聖王オリヴィエのクローンのわたしだから、状況的にフォルセティ達は巻き込まれた形になっちゃうわけで。だから申し訳なくて謝ったら、「いいえ。悪いのは向こうです」って、イクスがわたしの両頬に手を添えて頭を優しく上げてくれた。

「元は私も狙われていた身。いえ今なお狙われているんでしょう。だからヴィヴィオだけの責任ではないですし、いつまで経ってもべ

ルカは、レーベンヴェルトが滅んだという現実を受け入れられない彼女たちが悪いんです」

「そうですよ、ヴィヴィオさん。ですからそんな悲しい顔をしないでください」

「うん、うん。いい加減ヴィヴィオを窮屈な思いから解放したいし、僕たちで打ち負かそう。そうすればキュンナ達も思い知るよ。ヴィヴィオを狙ったところで自分たちの望みは叶わないって・・・くそ、ダメか、結界外と繋がらない。通信妨害もされてるみたいだ」

フォルセティが悔し気に唸った後、「目上の人には敬称を付けるものだと思いますが？」って、拡声魔法を使ってるのか大きな声でそう言われた。みんなで辺りを警戒してると、「上！」とアインハルトさんが声を上げました。フォルセティがわたし達を庇うように前に躍り出て、両手に持つ拳銃型デバイス・"エマナティオ"の銃口を空へと向けた。

「すぐに撃たないのは賢明ね、八神フォルセティ」

「わーっはっはっは！　小生意気なルシリオンが死んだと思えば、同じ顔をしたフォルセティがまた我らの前に立ちはだかりおる。が、しかし・・・。魔力も気迫もまったく足りておらん。消え失せよ、八神フォルセティ！」

「っ！！」

「「ぅ・・・！！？」」

頭がツルツルとした大きな男性、騎士グレゴールがフォルセティを見下ろす。睨まれてるのはフォルセティなのに、まるでわたしが襲われて、その大きな手で頭を握り潰されたかのような幻視を見た。はっ、はっ、はっと呼吸が荒く、そして早くなる。騎士グレゴールから目が離せない。体も強張って動かせない。

「ヴィヴィオ、アインハルト！　気をしっかり持ってください！大丈夫です、あなた達なら！」

≪Ｃｏｎｆｒｏｎｔ　ｂｒａｖｅｌｙ≫

「「っ！」」

バシッと背中を思いっきりイクスに叩かれて、茜色の魔力がわたしとアインハルトさんを包み込んだ。色もそうだけど、優しい暖かさに包まれてる感じがして、恐怖でいっぱいになっていた心と体が楽になった。

「ほう。小童と思いきや、フォルセティ、我の殺気をもろに受けて怯みもしないとはな。評価を改める必要がありそうだな」

試合で受けるのは気迫だから、ビリビリはするけど楽しくなっちゃうものだ。生まれて初めて受けた殺気は、当然だけど頭の中を恐怖だけにするものだった。流れ弾を受けたようなわたしでも怯んでどうすることも出来なかったのに、殺気を向けられたのはフォルセテ

ィは「そうだね。改めておいてよ。いつかは父さんを超える男ってさ」って軽口を叩けるほど余裕だ。

「はっはっは！　判っているぞ。勇ましいが、貴様のそれはそうプログラムされているからだろう？　聖王オリヴィエがクローン、プリンツェッスィン・ヴィヴィオを護るためだけに用意された騎士、プフェルトナー・フォルセティ！　聖王のゆりかごを止めるためにやって来た侵入者を迎撃するため、殺気などに耐性があって然るべき！」

そう言って大笑いするグレゴールにフォルセティは「違うよ。そんな耐性、刷り込まれてるわけないだろ」って言ってから、わたしの方をチラッと見た。そしてもう一度グレゴールの方を見て、２挺の"エマナティオ"のカートリッジをロード。

「ほう？　では、我の殺意を受けても平気な理由はなんだ？」

「恥ずかしい話だけど、あんたの殺気に僕は怯えてるよ、ちゃんとね。だけどさ、それでも退けないんだよ。・・・そうプログラムされているからなんかじゃない！　僕の、僕が育んできた感情で立っているんだ！」

「フォルセティ・・・？」

「好きな女の子のためなら！　その子が苦しんでいるなら！　僕はどんな困難にでも立ち向かう！」

頭の中が真っ白になった、思考がピタッと止まった。フォルセティは何を言ってくれたんだろう。そんな一瞬の思考停止の果て、フォルセティがわたしのことをハッキリと好きだって言ってくれたって理解して、「～～～～っ！！」顔どころか全身がカッと熱くなった。

「まあ♪」

「ふぉ、フォルセティさん、今それどころでは・・・！」

わたし達の後ろに居るイクスは嬉しそうな声を出して、隣に居るアインハルトさんは顔を赤くして狼狽えてる。でも、なんだろう、今のわたしなら、教会騎士団で一時はゼンゼ・パラディンにまでなったキュンナさんや、覇王クラウスを討ったグレゴールと戦っても勝ちそうな気がする。

「フォルセティ！　わたしも大好き！」

ハイになってる今だからこそって考えて、すぐに告白返しをした。さらに顔が熱くなるのを自覚してると、フォルセティは「うん、知ってる！」って、満面の笑みを浮かべた。

Ｓａｇａ２２－Ｈ最終侵攻～Ｂａｔｔｌｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｎｏｒｔｈ．　ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ　２～

†††Ｓｉｄｅアインハルト†††

今ではもう見ることのなくなったクラウスの記憶の中で、卑怯にも背後からの奇襲でクラウスを殺害した元イリュリアの騎士団総長グレゴールと、元女王テウタのクローンであるキュンナさんが襲撃してきました。が、なんと言いますか、ヴィヴィオさんとフォルセティさんが告白をし合うという、聞いているこちらが恥ずかしくなるような状況が起きまして・・・。私にとって大切な友であり好敵手でもあるヴィヴィオさんが、同じように大切なフォルセティさんのことを想っていたのは以前より聞いていたので、２人が結ばれるのは嬉しいです。

（ですが、なんでしょう、この胸の内に生まれたモヤモヤは・・・？）

胸の奥がチクリと痛む妙な感覚に戸惑う。頭の中に浮かぶクエスチョンマークに戸惑っていると、コロナさんもフォルセティさんのことが好きだったということを思い出し、この胸の痛みは友人の失恋を知ったことで生まれたのでしょうか？と、結論に至る・・・。

「聖王と魔神の色恋など、虫唾が走る・・・！　それと覇王！　お前たちの幸せなど認めない！　お前たちが邪魔さえしなければ、イリュリアは勝利し、レーベンヴェルトの再興は叶っていた！」

ヴィヴィオさんとフォルセティさんの間で桃色な空気が満ちて、それをどこか妙な気持ちで見ている私に向かって、そう怒鳴ったキュンナさんが苛立たし気に歯噛みし、銀色に光り輝くベルカ魔法陣を足元に展開しました。

「もう捕らえるつもりはないぞ？　お前たちは今日ここで、確実に仕留める。イリュリア騎士団総長、グレゴール・ベッケンバウワー」

「・・・イリュリア王家第３８代女王、キュンナ・フリーディッヒローゼンバッハ・フォン・レーベンヴェルト」

騎士らしく名乗りを上げ、赤紫色の魔力を四肢に付加したグレゴールを呆れたように横目で見るキュンナさんも名乗りを上げました。

「では私から。元ガレア国女王にしてフライハイト家末子、イクスヴェリア・フライハイト」

「セインテストが一にして八神家末子、八神フォルセティ」

「元シュトゥラ・イングヴァルト王家の末裔、アインハルト・ストラトス」

「え、えっと、高町ヴィヴィオ！　えー・・・っと、聖王オリヴィエの・・・聖王家の・・・ううん、エースオブエース高町なのはと、執務管フェイト・Ｔ・テスタロッサの娘！　です！」

「はっはっは！　戦の前の名乗りはやはり心が躍る！　よい！　イ

リュリアと対イリュリア連合の最終戦といこうではないか！」

そう言って先に仕掛けてきたのはグレゴールでした。２ｍほどの巨体から繰り出される大きな拳は、私とヴィヴィオさんを護るように立つフォルセティさんに向かって繰り出されました。直接狙われたのは私ではないというのに、その迫力は凄まじいです。

（大きな手。それに乗せられている魔力は私以上。そして何より、私たちを害そうとする殺意が込められている・・・！）

イクスさんの強心魔法が無ければ、足が竦んでしまって動きを鈍らせていたかもしれません。ですが、私は独りではありませんし、フォルセティさんの言っていたように、ヴィヴィオさんを自由にするための戦いとなれば否応なく戦意が満ちます。

「ヴィヴィオとアインハルトさんは一旦下がって！」

――コード・レフレクスィオーン――

フォルセティさんの２挺の"エマナティオ"の銃口より放たれた魔力弾が、グレゴールの右直打を迎撃しました。すると、グレゴールの拳は大きく弾かれ、拳を纏っていた魔力が吹き飛び、太い五指の節々から出血しました。

「むっ・・・！？　ふんっ！」

次は魔力を付加することなく普通の膂力に任せた左廻打を繰り出し

たグレゴールでしたが、フォルセティさんの放った魔力弾の迎撃を受けると同時、先ほどと同じように出血しながら弾かれました。

「イクス！」

「はいっ！　猛撃の鎖牢！」

イクスさんの両手の人差し指、中指、薬指にはめられた計６つの指輪の小さなクリスタルが輝き、グレゴールの周囲に茜色のベルカ魔法陣が６枚と展開され、ミッドチルダ式におけるチェーンバインドが１枚の魔法陣より５本と出現。計３０本の鎖がグレゴールを滅多打ちにし始めました。

『ヴィヴィオ、アインハルトさん！　まずはキュンナから墜とそう！　グレゴールはそれまで僕とイクスで足止する！』

『キュンナには夢影というスキルがありますから、本体を拘束しても分身体がどうにかするでしょう。ならば、拘束しやすいグレゴールを押さえつつキュンナを止める方が、難易度は優しいかと』

『判った！』『判りました！』

フォルセティさんとイクスさんの提案を受け入れ、私とヴィヴィオさんは即座にキュンナさんへと向かいます。キュンナさんは「今度こそ、私たちが勝つ！」と声を上げ、銀色の魔力で大鎌を生成しました。幾多の試合の中でも長柄デバイスを武器とする競技者は何人もいましたから、対応は難しくはないです。が、魔力ですべてが生

成されているというところが厄介です。

（どんな効果が付与されているか判らないのがまた・・・）

ルシルさんの魔力槍などがその最たるものでした。拳を交えているところに爆破されたり、形を変えられて空振りを誘発させられたりと、その他にもいやらしい効果を発揮してこちらを翻弄してきたので、キュンナさんの鎌も似たようなことをしてくる、と考えておかないと足元を掬われそうです。

「かつてのテウタ（わたし）が果たせなかった宿願を今日！　キュンナ（わたし）が果たします！！」

『イクスは拘束のみに注力を。ヴィヴィオ、アインハルトさん。2人にはブースト魔法でかける！』

――フェアシュタルクング・クーゲル――

振りかぶられる鎌を紙一重で回避するようなことをせず、余裕のある回避行動を取った私とヴィヴィオさんの背中に撃ち込まれたフォルセティさんの魔力弾。私の魔力量が一時的に増大されます。実際に使ったことはないですが、カートリッジシステムと同様の効果ですね。

（こういう襲撃される日が来るかもしれないと、ルシルさんが亡くなる以前にフォルセティさんと一緒に鍛錬を積んでいてよかった）

自分の魔力に他者の魔力が付与されることで魔法発動時に効果に加減を間違えてしまうことは、練習の時ならいざ知らず実戦、しかも今のように命をやり取りしてしまうような状況では致命的です。そうならないよう私とヴィヴィオさんとイクスさんは、フォルセティさんから受けることの出来るいくつもの強化魔法を受け、なおかつ自身の戦技が狂うことなく安定して出せる鍛錬を積んできた。

（自分ひとりでは至れない極地。ですが、いずれは・・・！）

羽根のように軽くなったこの体でなら、キュンナさんの振るわれ続ける大鎌を躱すことが余裕で出来る。同様に大鎌を躱し続け、攻勢に出る機会を図るヴィヴィオさんと目配せをし、ヴィヴィオさんより防御力のある私から仕掛けることを、口頭でもなく念話でもない目線のみで伝える。ヴィヴィオさんはスッと僅かに後退してくれました。

（言葉を交わさずとも意思疎通が出来る。やはりヴィヴィオさんはすごいです！）

先ほどまであった胸の内で渦巻いていたモヤモヤは綺麗さっぱりと無くなり、それ以上に温かさが生まれました。その温かさを力に乗せ、「覇王・・・！」の技を繰り出すために、振り払われた大鎌を身を屈めることで躱しつつ上半身を前に傾倒。その際に踏み出した左足より回転の力を生み出し、上半身を跳ね上げさせつつ練り上げた力を拳に乗せて繰り出すのは・・・

「断っ、空っ、拳！！」

――夢影――

覇王流の基礎、断空拳による右拳廻打。狙うはキュンナさんの下あご。衝撃を加えての昏倒を狙う。私の一撃は見事キュンナさんの下あごを横から打ち抜き、大きくよろけさせることが出来たのですが、体勢を崩したキュンナさんの背後には別のキュンナさんが立っていました。私が殴り飛ばしたキュンナさんは大鎌を持っていないので分身体でしょう。後方に現れた大鎌を持つキュンナさんはすでに攻撃を、銀色の魔力を纏った人差し指と中指を私の目に向かって突き出してきていました。

――コード・レフレクスィオーン――

私が防御に入るより早く間に割って入ったのは1発の蒼い魔力弾。キュンナさんの目潰し攻撃の威力が、フォルセティさんの放った魔力弾によって完全に反射され、爪を割り、指を折りました。キュンナさんは「忌々しいですね・・・！」と、折れた指を庇いながら片手で大鎌を大振りに振り払って来ました。

――噴流の鎖槌――

（懐に入っている覇王流を相手に大振り・・・）

私が先ほど殴り飛ばした分身体はイクスさんの魔法の1つ、対象の足元に展開された魔法陣より噴出する複数本の魔力鎖の直撃を受けて空に打ち上げられています。彼女からの攻撃はとりあえず心配は

ないはず。ただ、分身体は最大で１０体と伺っていますから、キュンナさんの反撃には注意しなければ。

「せぇぇぇい！」

――アクセルスマッシュ――

大鎌の柄に向かってヴィヴィオさんの右拳昇打が繰り出され、大鎌を持っている右腕が強制的に打ち上げられました。ほぼ同時に私は左肘による直打をキュンナさんの鳩尾に打ち込み、そこから繋げる右拳昇打を打ち込む覇王流、「昇月！」で追撃します。

「っぐ！」

「（入った！　このまま追撃を・・・！）崩天輪！」

昇打を受けて体を浮かせたキュンナさんへと背面での体当たりを行う。咄嗟に立てた柄を大鎌を盾にすることで直撃を免れたキュンナさんでしたが、大鎌は思いのほか容易く砕かれ、衝撃を殺せずにその体を遠くに弾き飛ばされました。そんなキュンナさんの後方にはヴィヴィオさんが先回りをしており、彼女の背中へとバチバチと放電する拳打、「スパークスプラッシュ！」を繰り出しました。

――夢影――

「っ！」

キュンナさんの分身体が生み出されるその瞬間を見た。ヴィヴィオさんのお宅で観た映画に登場した幽体離脱というものにそっくりで、キュンナさんの背中から引き剥がされるような形で出現した分身体が、ヴィヴィオさんの一撃を背中で受けました。そして私が弾き飛ばしたキュンナさんの背中を押し、技後で構え直していない私に彼女を最接近させました。

「お返し、です！」

――夢影・玖の打ち方・額壊――

狂気に満ちた表情を浮かべるキュンナさんが、体勢を立て直せないよう私の左肩を力強く掴んできました。そして首から上だけの分身頭部を出現させ、勢いよく頭突きをしてきました。ですが、この悪い体勢の中でも首だけは動かせる。

「フッ・・・！」

――鋼体の型・顕山――

分身頭部による頭突きに対してこちらも頭突きで対応する。衝撃は凄まじいですが、その威力は確実に軽減できた。私と頭突きを打ち合った分身頭部が消失すると同時、２発目の頭突きが迫る。鋼体の型は基本的に間を置かずに二連続では使えないので、掴まれている左肩を軸に右回りに旋回しつつ腰を下げ、キュンナさんの頭突きや右手から逃れる。

「はあああああ！」

「ぬ〝ぅ・・・・！」

旋回の勢いを載せた右肘打をキュンナさんの右わき腹へと打ち込む。体勢をしっかりと整えるために追撃はせずに距離を取る。ヴィヴィオさんも同様にキュンナさんから距離を開けるのを見、私は状況を確認する。キュンナさんと分身体が1体。イクスさんの攻撃を受けていた分身体はすでに消失しており、フォルセティさんとイクスさんはグレゴールの拘束を続けています。

「思っていた以上に強くなって・・・。グレゴール！　いつまで遊ばれているのですか！？　さっさと拘束から逃れてください！」

「申し訳ありませぬ陛下。フォルセティのバインド弾が、イクスヴェリア王のものとは違うものらしく。魔法の使えなくなった我の膂力では引き千切るのは難しいようです」

「セインテスト・・・！　やはりあなたから討つべきなのですね！」

私とヴィヴィオさんをそっちのけで2人のキュンナさんがフォルセティさんへと向かって駆け出したので、ヴィヴィオさんが「ジェットステップ！」で追従します。ヴィヴィオさんに追い付かれそうになったところで、1人のキュンナさんが急停止からの後背右脚直打を繰り出しました。円を描く脚廻打とは違い直線的に突き出される直打ですから、その速度は恐ろしく速い。ですがヴィヴィオさんの全てを見切る神眼と、卓逸したカウンタースタイルの前では意味を

成さない。

「でぇぇぇぇい！！」

――アクセルスマッシュW――

キュンナさんの蹴打を半身になることで躱したヴィヴィオさんが繰り出すのは、高速で打ち込む拳打2連撃で、キュンナさんの右わき腹と右頬を正確に打ち抜きました。苦悶の声すらも上げることが出来ず、キュンナさんが前にも後ろにも倒れず、すとんと真っ直ぐに膝から崩れ落ちて消失。本物のキュンナさんですが、すでにフォルセティさんと対峙しています。

――夢影・参の打ち方・墜拳――

キュンナさんが両腕を振り上げると同時に肘を軸に前腕部だけの分身腕が現れ、小指側の面による打撃――指曲槌打を繰り出しました。それを拒むのはフォルセティさんの周囲をくるくると回っていた4つの魔力球の内の1つで、キュンナさんの接近と同時に彼女の方へと向かい、攻撃される直前に小型シールドを張りました。シールドに分身腕による指曲槌打が打ち込まれるとすぐに分身腕は消失するのですが、打ち込まれる直前には新たな分身腕が出現していて、即座に指曲槌打を打ち込み、そして消失。それを高速で繰り返されること5回。最後はキュンナさん自身の本腕での指曲槌打でしたが、シールドは一切弱まることなく防ぎ切りました。

（コード・シュッツァークーゲル。固定砲台に徹する際のフォルセ

ティさんを護る４つの鉄壁）

他者からは害されず、自身は一方的に相手を撃ち、そして負かす、フォルセティさんの必勝法。反射球とは違い防御するだけのものなので相手にダメージは入りませんが、フォルセティさんが攻勢に出る時間は稼げます。右手に持つ"エマナティオ"の銃口をキュンナさんに向け、「フォイア！」と引き金を引きました。

――コード・カノーネ――

――夢影――

発射されるのは直射砲撃。キュンナさんは体の前から分身体を出現させて砲撃の盾とし、自身は横に跳ぶことで砲撃と、砲撃に呑まれた分身体から逃れました。そんなキュンナさんに私とヴィヴィオさんは攻撃を仕掛けます。

「リボルバー・スパイク！」

「Ｔ・Ｃ・に弱体化させられていなければ、こんな・・・！」

――夢影・弐の打ち方・連拳――

ヴィヴィオさんの打ち下ろしの右脚廻打を、何かを呟いたキュンナさんは左の分身腕と本腕による裏拳の連打によって迎撃をし、ヴィヴィオさんを弾き返しました。しかし体勢は崩れたので、私も間髪入れずに「覇王流・・・！」の追撃を始める。

「空旋迅！」

キュンナさんに向かって跳び上がりながらの後背右脚廻打を打ち込む。キュンナさんは掲げた右腕で防御しましたが、落下に回転力を加えた踵落としを完全には防ぐことは出来ず、右腕は私の蹴打の威力に負け打ち下ろされました。そこに足の甲を側頭部に打ち込む左脚廻打による追撃。分身体を出すよりも先にキュンナさんを捉えました。

「かはっ・・・！」

蹴り飛ばされたキュンナさんは地面をゴロゴロと転がり、四肢を突いてその勢いを抑えました。意識を完全に刈り取れるほどの力を込めたのですがキュンナさんは今なお意識を保ち、立とうとしています。試合であれば相手がダウンしたら止められますし、相手が続行可能を示すファイティングポーズを取るまでは追撃は出来ません。ですがキュンナさんは競技者ではなく、子どもである私たちに殺意を向け、襲ってくる犯罪者です。

（完全に意識を飛ばすしかありません！）

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

――我が肉体よ、内に宿りし獣を目覚めさせよ――

そのためにキュンナさんへ接近しようとしたところで、グレゴール

が雄叫びを上げ、フォルセティさんのバインドから逃れようともがき始めました。さらにその体が変異を開始。黄金の毛並みを有する巨大な狼と変わっていくのですが、「むぉぉ・・・！」と苦悶の声を漏らします。何故ならフォルセティさんのバインドを引き千切ることが出来ず、巨体化することによってバインドが自身の肉体を傷つけるからです。

「今すぐキメラ化をやめるんだ！　そのバインドを生み出してるのは、父さんが今日の日のために遺してくれたカートリッジの魔力だ！　ただの魔法じゃない、魔術によるバインド！　そのまま大きくなればバインドで体が断ち切れるよ！？」

グレゴールを殺害してしまうかもしれないという焦りからフォルセティさんが叫びますが、狼の額に出現したグレゴールの顔は脂汗を掻き、苦悶の表情を浮かべながらもキメラ化をやめません。バインドがさらに体を締め上げることで肉が裂けた場所より出血して、私は「・・・！」吐き気を催してしまう。

『ヴィヴィオ、イクス、アインハルトさん！　バインドを一旦解除するから、グレゴールの動きに注意して！』

『判りました！』『うん！』『はい！』

フォルセティさんの判断には賛成なので、私たちは即座に答えました。バインドが解除されたことでグレゴールは完全なキメラへと変貌しました。フォルセティさんは左手に持つ"エマナティオ"のみカートリッジをロードし、「捕まえ直す！」と、銃口をグレゴール

に向け直そうとしました。

「次はないぞ、フォルセティ！」

巨体の割にグレゴールの瞬発力はすさまじく、地を駆け、建物の外壁を足場とした三角飛びなのでフォルセティさんの照準から逃れます。フォルセティさんは「コード・レフレクスィオーン！」と、右手の"エマナティオ"も使用しての魔力弾を数発と明後日の方へと発射し続けます。

「コード・ファンゲン！」

そして左手の"エマナティオ"からも魔力弾を発射。後発の魔力弾が先発の魔力弾へと撃ち込まれると、キィンと甲高い音を立てて反射されてグレゴールへと一斉に向かい始めました。それでもグレゴールは回避をし、フォルセティさんに攻勢を掛けようとしています。

『こっちは大丈夫だから、ヴィヴィオ達はキュンナを！』

『判りました、お願いします！』

『フォルセティ、無茶はダメだからね！』

私とヴィヴィオさんを巻き込まないようにグレゴールを引き離しにかかるフォルセティさんを横目に、私とヴィヴィオさんは復帰したキュンナさんを見つめる。

「いくら1対2だとしてもルールの中でしか戦ったことのない子どもを相手に、私がここまで苦戦させられるなんて思いもしなかったです。アインハルト、本当に強くなりましたね。ヴィヴィオ達と出逢う前のあなたであれば、苦労せずに討てたのでしょうが・・・」

クラウスの記憶に侵されてまともに人付き合いをしていなかった私を、よく病院に付き添っていただいたキュンナさん。まさか、こうして敵対することになるなんて思いもしませんでした。

「2人がここまで強くなる前に殺しておくべきでした。無念・・・です！」

――夢影――

キュンナさんが一足飛びで距離を詰めてきました。私たちとの距離が縮まる中、キュンナさんから分身体が出現し、私とヴィヴィオさんとイクスさんの3人に向かって来ました。真っ直ぐ私とイクスさんに向かって来るのはおそらく分身体。

「イクス！」

「大丈夫です、ヴィヴィオ！　私ひとりでも持ちこたえて見せます！
私は、シャマル先生の弟子ですから！」

――降流の鎖槌――

複数本の魔力鎖を雪崩のように降らせ、分身体を迎撃するイクスさ

んのフォローに入るためにも、私に仕掛けてきた分身体をすぐに片付けないと。

「初めから1対1をしていればよかったのですよ！」

分身体も口が利けることに少し驚きながらも、彼女の繰り出してきた右拳直打を、鋼体の構えの1つで肘で相手の拳を受ける「牙山！」で迎撃。相手の打撃の威力をそのまま返すため、普通であれば何かしらの反応を示すのですが痛覚が無いのか、即座に右拳廻打を繰り出してきました。肘を曲げた左腕で防御して、そのまま左槌打をキュンナさんの右肩に打ち下ろし、同時に右拳廻打を左わき腹に打ち込む。

「覇王流・・・！」

そこから跳躍左脚膝打でキュンナさんの下あごを真下から打ち上げて、最後に左拳指伸槌打へと繋げる技、「落陽！」を右肩へと打ち下ろした。ガクッと膝を折ったキュンナさんは私の腰へとしがみ付き、「少し付き合ってもらいますよ！」と、私を押し倒してきました。

（ジークさんのタックルや押さえ込みに比べれば・・・！）

しがみ付きから逃れるために攻撃を加えようとした時、「きゃああああ！」とヴィヴィオさんの悲鳴が聞こえたのでそちらに目を向ければ、ヴィヴィオさんは3人のキュンナさんに襲われていました。ヴィヴィオさんから墜とすのだと判り、背筋が凍る。

「次はあなたですよ、アインハルト！」

「キュンナさん！！」

分身体の頭や腕や背中を殴り、なんとか引き剥がそうとしますが、痛覚が無いということで全くと言っていいほどに通用していません。早くヴィヴィオさんを助けに行かなければ、ヴィヴィオさんは・・・。

「そこまでです、キュンナ」

――砲煙弾雨――

空から降ってきたのは、虹色に輝く魔力弾８発。それらはヴィヴィオさんを襲っていたキュンナさんと分身体を狙っていて、キュンナさん達は一斉に攻撃を中断してヴィヴィオさんから距離を取りました。

「グレゴール。あなたもだ」

――覇王断空拳――

「ぐおおおおおおおお！」

側に墜落してきたのはグレゴール。狼の巨体が地面に大きなクレーターを生み出しました。私にしがみついていた分身体やイクスさん

と交戦していた分身体も消失したことで、「ヴィヴィオさん！」の元へと駆け寄ります。

「ヴィヴィオさん、大丈夫ですか！？」

「あ、はい、なんとか」

「すぐに治癒魔法を！」

――癒しの風――

「ありがとう、イクス」

イクスさんの発動した魔法はヴィヴィオさんだけでなく私にも効果が及びました。暖かな光に包まれていると、「ヴィヴィオ、イクス、アインハルト！」とフォルセティさんが駆け寄って来てくれました。そんな彼の背後にはフードを目深に被った外套の男性が居たのですが、外套の隙間から覗くその服装に私は目を見張った。

「時間切れだ。これ以上の戦闘は認められない」

「ごめんなさい。わたし達の仕事も終わったので」

次いで空から降りてきた女性の顔もまたフードで隠れているので見えませんが、服装からその正体を察するのは容易です。ヴィヴィオさんも「あれ？　あれ！？」と困惑し、イクスさんも「うそ・・・ですよね？」と声を震わせています。

「クラウス、オリヴィエ・・・！？」

私の声に反応したのか、フードの２人は自ら素顔を晒しました。私たちの考えの通り、２人はこの時代に存在するはずのない聖王オリヴィエと覇王クラウスでした。

Ｓａｇａ２２－Ｉ最終侵攻～Ｂａｔｔｌｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　４ｔｈ
Ｂｒａｎｃｈ　ｏｆｆｉｃｅ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「はあ！？　ドクターにスキュラ、プレシアにリニス、ディアーチェ達、それに覇王クラウスとオリヴィエ様！？」

いつでも襲撃予定地点に転移移動できるようスカラボで待機していたわたしは、あの場に存在するはずのない人たちが居ることに大混乱中。ディアーチェ達は、行き来は難しいけど出来なくはないってことは判ってるから、居てもまぁあり得るんじゃない？って至れる。ドクター、それにアルファ達"スキュラ"は、ドクターは元々ミミルによってプライソンと共に生み出された人造人間。遺伝子やデータが残っていれば、改めて生み出せるかも？だし、"スキュラ"はスペアボディがどっか、局が発見できなかったプライソンの研究所に残っていたとすれば説明がつく。ミミルだって今なお行方知らずだ。製造は出来る。問題は・・・。

（プレシアと、その使い魔のリニス。それにオリヴィエ様とクラウス・・・）

プレシアが自身のクローンを実は生前に生み出していて、それが何かしらの理由で活動を開始したっていうならまだ判る。でもリニスはおかしいでしょ。フェイトやアリシアやアルフからリニスの最期は聞いてる。役目を終えたからもう不要と断じられたリニスのクロ

ーンを、プレシアは生み出すだろうか。
そしてオリヴィエ様と覇王イングヴァルト。オリヴィエ様のクローンはヴィヴィオだ。すでにヴィヴィオが居る以上、改めてクローンを生み出す意味はないはずだし、プライソン一派に盗まれた聖遺物に遺されてた遺伝子情報だけだと完全なオリヴィエ様のクローンは生み出せないって話。クラウスは、直系の末裔であるアインハルトが居る。そもそもクラウスの遺伝子が付着してる聖遺物は存在しないから、完全なクローンは不可能。

（クローンじゃないなら何！？　過去からタイムスリップしてきたとか！？　それとも変身魔法！？　ううん、使用魔法も魔力光も本人のそれだ！　姿形は似せることは出来ても魔力光を真似るなんて出来ない！　なら・・・なら・・・）

ここでふと、ある人の顔が脳裏に浮かんだ。彼なら過去の人物や死者を、現代に存在させることが出来る。けれど、彼――ルシルはもうこの世にはいない。オーディンの記憶や複製したものも扱えるルシルなら、当時オーディンが知り合っていたオリヴィエ様やクラウスを"エインヘリヤル"として召喚することは可能だろうけど・・・。ルシルが"Ｔ・Ｃ"の関係者ってことになる。

（ありえない。Ｔ・Ｃ・の活動は、ルシルが存命中からだ。ルシルがわたし達に隠れて活動していた？　いやいや。基本的に特騎隊の誰かと行動を共にしていたし、エインヘリヤルを召喚する暇もなければわたし達もさすがに気付く）

それに、ルシルは"Ｔ・Ｃ・"によって殺害されてる。遺体はちゃ

んと確認できてるし、アイリも一緒に殺害された。もしルシルが黒なら、絶対にアイリも一緒に連れていく。２人の遺体が見つかってる以上はルシルは白だ。ああもう。あれこれ考えていても仕方ない。捕まえた後で当人に聞こう。そう開き直ってしまえば、さっきまでの大混乱は落ち着いた。

「とりあえず、今のところは襲撃予告した研究所以外への襲撃はないみたいね」

「うん。オフィスや本部からも連絡入ってない」

「このまま出てこない可能性もあるわけか。楽は楽だけど、出来れば現れてほしいな～」

リーダーやガーデンベルグが予告していない場所を襲撃しないとも限らないから、わたしとルミナとセレスは直通転送が出来る特別なトランスポートのあるスカラボの応接室で、予告襲撃地点の様子を複数展開したモニターで監視してる。

「皆さん、お茶のお代わりはいかがですか？」

そこに、シスターズの長女ウーノがワゴンを押して奥のトランスポート室から入ってきた。確かに緊張しっぱなしだったから、ぜひお代わり！って言いそうになるけど、「ウーノ！　ドゥーエを呼んで！」って伝えた。わたしの大きな声に少し驚きを見せたウーノだったけど、「判りました」と言った後、少し黙った。シスターズには専用回線の通信機能があるし、それで呼び出してるのかも。

「はいはーい。何か用かしら？」

妹たちが命がけの戦闘をしてるって言うのに、ドゥーエは化粧途中なのかメイク道具一式を持ってやって来た。妹たちは大丈夫だって信頼してるんだろうけどさ。まぁいいや。わたしはウーノとドゥーエに、ドクターが"スキュラ"と一緒に居る映像が映るモニターを向けた。

「「ど、ドクター！？」」

ウーノとドゥーエがモニターにへばり付くように顔を近付けて、嬉し涙を溢れさせた。でもすぐにドゥーエは「に、偽者では！？」って疑った。映像だけで音声は入らないから、絶対に違うとは言い切れない。けどわたしが何かを言う前にウーノが「本物よ。ドクターの仕草、間違いないわ」と両手で口を覆いながら告げた。

「身振り手振り、クセがドクターそのものよ。何者かの変身ではああはいかないわ」

「確かに。だ、だけどドクターがどうしてあそこに居るの？　すずか達と相対しているということは、ドクターやスキュラはＴ・Ｃ・側ということでしょ？」

「それについては、すずか達に任せるつもり。ドクターとアイルとスキュラは交戦するつもりはないようだし、トーレ達が相手にしてるだろうＴ・Ｃ・を黙らせてくれたら聴取も楽に――」

わたしがそこまで言いかけてたところで、エマージェンシーコールが携帯端末から鳴り響いた。このコールが鳴る際の設定は、予告襲撃地点以外に"T・C・"が出現した時のみ。応接室内の空気が一気に張りつめて、「はい。フライハイト」って通信に出る。

『フライハイト部隊長。第5支局にT・Cと思しき者たちが現れたと本部より緊急連絡が入りました。応援並びに出撃要請は未だ出てきませんが、アコース監査官よりスクランブルに注意とのことです』

「了解。防護服着用で待機する」

零課オペレーターの1人、ナノ・ユーフラジーとの通信を切り、ソファから立ち上がったわたしとルミナとセレスは「セットアップ」と、デバイスは起動せずに防護服へと変身する。その間にウーノは、ドクターのことを見ていたいだろうに隣室のトランスポートの転送先を5つある支局のどれでもすぐに飛べるように設定してくれてる。そこでまたエマージェンシーコールが鳴って、オフィスと通信を繋げるとナノ通信士がモニターに映る・・・。

『フライハイト部隊長、スクランブル要請です。至急第4支局へ向かってください。第5支局の保管庫前にて交戦があり、その際に支局員がT・C・メンバーの会話を聞いたそうです。このまま次に向かう、と。本部は、T・C・は支局すべてを襲撃すると考えています』

「だから第4で食い止めようってことか。了解、すぐに向かう。ル

ミナ、セレス、行くよ」

「「了解！」」

「第４支局のトランスポートホールへの座標は設定済みですのですぐに行けます」

「ありがとう、ウーノ」

ウーノとディードと一緒にトランスポート室に移動して、わたし達はトランスポートに入る。ウーノは「それではお気を付けて」と空間キーボードをキーを打った。それで転送は始まって、わたし達は中継点ポイントを入れることなく第４支局に到着することが出来た。

「お疲れ様です！　第４支局警備隊のミディ三佐です。お待ちしておりました」

「特務零課課長、フライハイト特務二佐です。早速、保管室へ案内してください」

「了解です。ではこちらへ」

わたし達を出迎えてくれた女性隊長ミディ三佐。彼女の案内で保管室へと通じる廊下を進む。支局の保管室も本局と同じ造りになっていて、保管室前通路、監視室、トランスポート前通路、トランスポート、そっから保管室に転送っていう。大型のロストロギアや一度にたくさん運び入れる用に広く作ってある廊下には、他の警備隊員

が武装状態で待機していて、ミディ三佐やわたし達に敬礼をしてくれてる。

「監視室から先の通路への転移魔法やスキルは出来ないようにされていますので、保管室前通路での迎撃になります」

「通路の幅は両手を広げた大人でおよそ４人分くらいか・・・」

ルミナとセレスが両手を広げた状態で横に並んで、廊下の幅を計ってる。まぁまぁ広いから戦闘になっても大丈夫だろうけど、「転送トラップなどは使わないんですか？」って尋ねる。支局にも空戦が余裕で出来るトレーニングルームくらいあるし。

「それも考えましたが、第２波の襲撃があっては対応できませんから。魔術なる魔法体系を扱える局員がここには居ませんから、フライハイト三佐たちがここを離れている間に別のＴ・Ｃ・が現れてはどうしようも出来ません」

「あ、そっか。襲撃予告地に配置されてる武装隊員たち以外には神秘カートリッジは配給されてないんだっけ」

魔力に神秘を乗せられる局員は数が少ないから、どうしても襲撃予告地以外への配給は出来なかった。まぁ敵が魔術師なんてことが起きるのはきっと"Ｔ・Ｃ・"で最後だろうから、そこまで気にするようなことも無いようなだけど・・・。

「それでなのですが、結界展開をお願い出来ますでしょうか？」

「結界は私に任せてもらうよ、イリス。魔力量で言えば私の方が多いし」

「ん。じゃあ任せるよ、セレス。っと、零課オフィスから通信だ。少し失礼します。・・・ナノ、どうかした？」

『第５支局よりＴ・Ｃ・構成員の画像データが送られてきました』

ミディ三佐に一言断りを入れてから通信を繋げて、ナノがモニターにその画像を表示してもらう。目深に被ったフードで素顔が見えないけど、「うっそ・・・」ってわたしは絶句した。ローブでほぼ全身が覆い隠されてるけど、袖から除く武装で誰か判っちゃった。

「アミタ、キリエ・・・！？」

砕け得ぬ闇事件で知り合って友人になった、アミティエ・フローリアンとキリエ・フローリアンの姉妹が居た。いやまぁディアーチェ達が居るんだから２人も居るんだろうなって思ってはいたけど、ディアーチェ達と違ってガチで局と敵対するなんて思わなかった。

「知り合い？」

「ちょっとね。友達なんだけど、局と敵対するわけないし、何よりＴ・Ｃ・のメンバーだってことに違和感があり過ぎて驚いてる」

それを言ったらディアーチェ達もそうなんだけどね。とにかく、あ

りえないって状況を生み出してくる"T・C・"には驚きや苛立ちを覚えてばかりだ。そんなアミタとキリエの他にも女の子がひとり居るんだけど、たぶん知らない子だ。というか、他の襲撃予告地点にも初顔見せのメンバーが何人かいた。魔術師っぽいし、ああもう、本当に面倒くさい。

「あ、もしかして私の出迎えですか？　ごめんなさい、出来れば誰も居なかった方が助かったのですが。T・C・の一員として、魔力保有物を頂戴しに参上しました」

それはあまりに突然。背後からそんな声がしたから振り向いてみれば、そこにはフード付きローブを身に纏った女性がひとり佇んでいた。廊下にずらっと並んでいた警備隊も、そしてわたし達もその出現にまったく気付かなかった。

「バインド！」

ミディ三佐がそう叫ぶと、警備隊員たちが一斉にバインド魔法を発動。フープやらリングやらチェーンやら、いろんな種類のバインドで"T・C・"メンバーを拘束した。だけど「傷付けたくはないので、お願いします」と言いながら軽く身じろぎするだけで、すべてのバインドを弾き飛ばした。

「セレス！」

「うんっ！」

「「拘輪環！」」

セレスと同時にデバイスを起動して、即座に古代ベルカ式の通常バインドを神秘を載せた状態で発動。"T・C・"の両足、胴、両腕と計6つのリングバインドで拘束する。そこにルミナが彼女の背後に回り込み、「ごめんね！」と謝りながら両腕でガシッと腰にしがみ付いた。

「どっせい！！」

そしてバックドロップ。ルミナの強烈な投げ技によって"T・C・"は後頭部を強かに打った。コンクリートの床にバックドロップなんてマジかって思ったよ。でも後頭部を打ち付けながらも"T・C・"は「改めてお願いをします」と、わたしとセレスのバインドを弾き飛ばす。体が自由になった"T・C・"はバックドロップを受けた状態からネックスプリングで垂直に飛び上がって、ルミナの腕から逃れた。そして天井を蹴ってわたし達から距離を開けて着地。

「ミディ三佐。結界を展開し、わたし達3人で交戦します。新手が現れたら通信をお願いします」

「了解しました。ご武運を」

「セレス」

「よっし！」

――ゲフェングニス・デア・マギー――

セレスの結界によって警備隊員たちの姿が消える。結界内にはわたしとセレスとルミナと"T・C・"の4人のみ。"キルシュブリューテ"を屋内専用の「クルツシュベーアト・フォルム」に変形させて、「再々度のお願いです」と言う"T・C・"に「却下です」って首を横に振る。

「・・・そうですか。そちらも仕事なので、断られるのは判っていました。では仕方ありませんね。力ずくで頂戴します」

そう宣言した"T・C・"の両手に、フェイトのような金色の雷撃が発生。そして両手の親指の爪のところにビー玉サイズの雷球として圧縮すると「雷閃指弾」と、雷球を親指で弾いて超高速で撃ってきた。わたしとセレスがその一撃を回避したのを合図に「エンゲージ！」だ。

「氷奏閃（イエロ・コラソンアギラス）・翔閃！」

「氷牙飛月刃！」

「「十字（クロイツ）撃ち！」」

「冷気の刃・・・ですが温い」

わたしとセレスの放った十字の冷気の刃は、そう言い捨てた"T・C・"が突き出した右手の平で受け止められて、そのまま握り潰さ

れた。そんな"T・C・"の背後に回り込んだルミナは、加減なしって言うのが見て判るほどの速度で上段回し蹴りを打ったんだけど・・・・。

――疾閃雷翔駆――

「「「！？」」」

ルミナの右脚が"T・C・"の体をすぅっと通過した。そんなのアリ！？なんて思っていたら、"T・C・"だったソレは「残像！？」で、わたしとセレスの背後から「速過ぎましたか？」なんて馬鹿にしたような声が。振り返るより先に"T・C・"はわたしとセレスの間を通り過ぎ、ルミナに肉薄した。

――震破・拳槍――

「貴女は確か、拳闘における最強の騎士さんでしたよね」

――デーモン・アプゲショッセン――

「そうだ・・・よ！」

"T・C・"が雷撃を纏う拳打を繰り出すと同時、ルミナのカウンターの拳が彼女の鳩尾に突き刺さったように見えた。だけど"T・C・"はそこからお返しとばかりにルミナの鳩尾に膝蹴りを入れて、浮かせたところで襟首を掴んでこっちに放り投げてきた。

「「わわっ！」」

ルミナをセレスと一緒に抱き止めて、激しく咽るルミナをゆっくりと下す。咳が収まったところで言ってくれた「ありがとう」に、「どういたしまして」って答えて、仁王立ちしてる"Ｔ・Ｃ・"に視線を戻す。

「すでに察していると思いますが、私は魔術師です。神秘の無い魔法などでダメージを与えられるとは思いませんように」

「「「だろうね・・・」」」

わたしとセレスは「カートリッジロード！」をして、ルミナはルシルの遺品とも言える、指輪に紐を通した首飾り型神器、"ヒミンバル"の効果を発動させた。

「後悔させてあげるよ」

「ルミナ。骨折程度ならいいけど、間違っても後遺症が残るようなダメージは与えないように」

「大丈夫。ちゃんと手加減はするから」

「感情に任せて突っ込み過ぎてカウンター食らわないようにね」

「了解。んじゃ、私が先に仕掛ける。・・・サポートお願い」

「任せておいて」「任せて」

相手が徒手空拳でさらに強いとなれば、ルミナはすこ〜し意固地になるというか猪突猛進になるというか。なんだかんだ言っても拳闘最強っていうプライドはあるらしく、徒手空拳でダメージを与えられたときはヤバい。でも大変な仕事と私情はきちんと分けてくれるから、今のように強敵を複数人で倒すっていう状況でも受け入れてくれるから助かる。

「作戦会議は終わりましたか？　では、そちらからどうぞ」

「お言葉に甘えて・・・！　フェアシュテルケン！」

――ゲシュヴィント・フォーアシュトゥース――

「光牙月閃刃・・・！」

――閃駆――

「氷奏閃（イエロ・コラソン）！」

――神速獣歩（ゲパルド・ラファガ）――

四肢に青緑色の魔力を付加したルミナが高速移動魔法で突っ込むのに続いて、わたしは"キルシュブリューテ"の刀身に魔力を付加して、セレスは"シュリュッセル"に冷気を纏わせてから突っ込んだ。三方向から"T・C・"を挟撃する。ルミナの拳打やわたしとセレ

スの斬撃を、"T・C・"は躱したり裏拳で弾いたりと完璧すぎる動きで捌いてくる。

（嘘でしょ！？）

攻撃時のタイミングは狙ってずらしてるのに、まるで予知してるかのように防いでくる。だから『ルミナ、セレス。戦術変更！』って提案すると、２人からは『了解！』との返事が。悔しいけど近接だけじゃ勝てない。

「距離を開けるつもりですか？　手伝いましょう」

――円噴地雷陣――

「「「きゃうん！？」」」

"T・C・"が床を踏みしめると同時、彼女を中心として放電する衝撃波放射状に放たれた。離脱しきれなかったわたし達はもろに直撃して感電、加えて吹っ飛ばされた。ただの衝撃波なら体勢を立て直して着地するのは簡単だけど、感電したことで受け身を取ることも出来ずに床に叩き付けられた。

「あ、すいません。電圧は抑えたのですが、まだ強かったですか？」

「この・・・」

わたしは痺れる体を押してなんとか立ち上がりながら『まずはアイ

ツの手札を暴くよ』って、同じように辛そうに立ち上がる2人に伝える。合図なんて無くてもタイミングくらいは図れるほど同じ時間を過ごし、戦ってきた。自由に動いても連携は取れる。

「行くよ！」

――風牙烈風刃――

初撃はわたしの風圧の壁。"T・C・"はフードが飛ばされないように左手で押さえる。そこに"T・C・"の左側に突っ込むルミナ。ルミナの動きを警戒したところで、セレスは大きな氷の拳を任意の場所から突き出させる魔術、「ディオサ・プーニョ！」を発動。自分の左側を通り過ぎるルミナを見送った"T・C・"の右側の壁から氷の掌底が突き出てきた。

「なんの！」

"T・C・"は掌底の中心に右拳打を一撃お見舞いして、氷の手を粉砕。大小様々な氷の破片が"T・C・"を襲う中で、わたしは彼女をその場に留めるために"キルシュブリューテ"を床に突き刺して、「光牙針縫刃！」を発動した。"T・C・"の足元から複数本と突き出た魔力刃は体を掠るように天井に突き刺さって、身動きを完全に封じる檻と化した。

「シュトゥースヴェレ！」

僅かになるだろうけど"T・C・"の動きが完全に停止したことで、

ルミナは防御を貫通する衝撃波を打ち込む拳打を繰り出した。その一撃は"T・C・"の左わき腹を正確に打ち抜き、追撃に下あごへの掌底を打った。"T・C・"の首がガクッと力なく垂れたけど、拘束は解かずに警戒しながら近付いてく。そしてそれは正しいことだったってことがすぐに判った。

「なるほど。正確無比な意識を刈り取る一撃。並みの術師であれば今ので終わっていたでしょうが、殺さないように手加減しすぎたことが災いしましたね」

「なら加減なしでいくよ！」

"T・C・"は軽く身じろぎすることでわたしの檻を砕き、ルミナの魔力付加された右上段蹴りを顔側面に受けながらも左足に足払いを掛けて、ルミナの体勢を崩させる。そして床に仰向けに倒れ込みそうになったルミナを踏みつけようとしたから、わたしは最速の魔力槍射撃、「光牙閃衝刃！」を連射。ソレに続いてセレスが突っ込む。

「まだ加減をするんですね」

ルミナへの踏みつけを中断した"T・C・"は放電する魔力を付加した両手でわたしの放った魔力槍をパシッと掴み取り、セレスに向かって投げ返した。解除するには遅すぎて、セレスは"シュリュッセル"で弾き飛ばした。

「破っ！」

――震破・肘槍――

力強い踏み込みからの雷撃纏う右肘による打撃がセレスに迫って、防御のために盾とした"シュリュッセル"が砕かれた。雷撃はさらにセレスを貫通してあの子を吹っ飛ばし、それを見届けた"Ｔ・Ｃ・"はそのままわたしに向かって突っ込んできた。神秘魔力が付加された"シュリュッセル"すら容易く砕く打撃力。直撃はまずい。"Ｔ・Ｃ・"から逃げるように奪取して、床に倒れたセレスの元へ。

「セレス！？　セレス、しっかり！」

「あぅ～～、全身がビリビリするぅ～」

痙攣するセレスを抱き起こすと、セレスは「クセになりそう～」なんて言った。戦闘不能にされちゃったかと思ったけど、セレスは割と元気そうだった。ただ、感電してる所為でうまく体を動かせないみたい。こんな状態のセレスを床に置いていていいのか迷う。と、そんなわたしに"Ｔ・Ｃ・"は容赦なく向かって来ていた。

――震破・指槍――

雷撃を纏う両貫手による連撃を、セレスに当たらないように出来るだけ余裕を以て気を付けながら回避。そこにルミナが"Ｔ・Ｃ・"の背後から迫って来て、「マジで墜とすよお前！」と怒りを一切隠さずに、分解スキルを半分だけ解放しての打撃、「ファルコンメン・ツェアシュティーレン」を発動。

――震破・掌槍――

ルミナの一撃を左掌底で迎撃した"Ｔ・Ｃ・"は、雷撃が僅かに散らされたのを見て「あぁ、これが分解の・・・」と納得しながらルミナの拳を掴み取り、あの子の腕を上に向かって引っ張ってそのまま宙に放り投げた。

「体が・・・痺れていても・・・」

――制圧せし氷狼（インバシオン・ローボ）――

セレスが氷の狼を１０頭ほど作り出して、９頭をルミナのフォローに、残り１頭の背中に「乗せて」ってことだから、わたしはセレスを氷狼の背にうつ伏せで寝かせた。冷たくないの？って疑問は、セレスの耐寒力を知ってることですぐに消えた。

（キルシュブリューテを取りに行かないと・・・！）

氷狼９頭に全身を噛まれながらも"Ｔ・Ｃ・"は怯まない。天井を蹴って勢いをつけたルミナの踵落としを、右腕に噛みついてる氷狼を盾にしてダメージを抑えた"Ｔ・Ｃ・"は、左脚に噛みついてる氷狼を振り払って、偶然か否か"キルシュブリューテ"にぶつけてわたしの方に飛ばしてきた。

（どっちでもいい！　手元に来たんなら攻撃あるのみ！）

――閃駆――

「光牙裂境刃！」

氷狼を全身からの放電で消し飛ばし、ルミナの猛攻を左手だけで捌く"T・C・"へと突っ込む。障壁破壊効果を持った魔力を付加しての全力峰打ちで"T・C・"の右肩を打ったんだけど、「やっぱ硬っ！」くて、まるで鉄を叩いたかのような手応えで、柄を握る両手が痺れた。その僅かな隙に女性は"キルシュブリューテ"の刀身を右腕の肘窩で挟み込んで、パキンッとへし折った。

「きゃあああああ！」

アッサリと折られた"キルシュブリューテ"から流れ込んできた雷撃にわたしは悲鳴を上げて、意識が朦朧として倒れ込みそうになるけど、それより早く魔力刀を生成する術式、「絶、刃・・・！」を発動して、それを支えに転倒を阻止・・・はしたけど、壁にもたれかかってしまう。

（早く・・・復帰しないと・・・）

セレスのサポート攻撃があるとはいえルミナは"T・C・"と1対1で殴り合ってる。早く加勢して、少しでもルミナを楽にさせないと。そう考えて必死に体を動かして、徐々に痺れが薄れてきたとき、「シャルさん！」って呼ばれた・・・かと思えば、ドンッと押されたわたしは「のわっ！？」とうつ伏せに倒れた。

――スティールハンド――

「「っ・・・あ！？」」

「いてて。一体何が・・・って！　ルミナ、セレス！」

２人の胸からは半透明な腕が突き出していて、手の平には強く輝いてるリンカーコアがあった。その光景はまさしく"闇の書"事件でシャマルが行っていた、転移魔法・旅の鏡によるリンカーコア奪取を思い起こさせるものだった。

「すいません、シャルさん。あなたしか護ることが出来ませんでした」

「さ、立って。レイルは待ってくれないわよー？」

わたしを抱き起してくれたのは、ローブを羽織った「アミタ、キリエ・・・！」の２人だった。

Ｓａｇａ２２－Ａ真実への扉～Ｔｈｅ　ｌａｓｔ　４　ｓｔｅｐｓ～

†††Ｓｉｄｅフィレス†††

教会本部内での"Ｔ・Ｃ・"迎撃という任を受けた私は、聖王教会の教皇であり、教会騎士団の団長でもあるマリアンネ聖下と共に、"Ｔ・Ｃ・"の狙う魔力保有物が数多く収められた地下保管庫へと通じる床扉を護るため、ここに来るまでに騎士たちを単独で撃破してきたらしい敵戦力と交戦していた。

「聖下！」

「ええ！」

――穿ち止める氷杭（エスタカ・クエルソ）――

"Ｔ・Ｃ・"の一員であるローブを身に纏った女性が生み出したのは、炎の左右一組の巨腕。炎の両腕に向けて私が放ったのは魔術化している氷の槍。炎と氷という、相性から見ればこちらが不利だろうけど、僅かでもその動きを止めさえ出来ればいい。槍は巨腕の手首を貫通し、バインドとして手首を締め上げた。

――閃駆――

その隙に聖下が、炎のロッキングチェアに座り、膝上に乗せた分厚

い魔導書に手を載せた"T・C・"へと高速移動で向かう。

――光牙双月刃――

聖下のデバイスは太刀"キルシュヴァッサー"と小太刀"キルシュガイスト"の二刀で、深紅の刀身には緋色の魔力が付加されている。"T・C・"は立てた右人差し指と中指で前方の空間を撫でるように横に振り、「エンシェント・ロジック」と、模様のような文章のような不思議なシールドを展開。聖下による二刀直接斬撃を完全に防いだ。

「っつ・・・！？」

「猛れ、炎の巨人。汝の炎腕にて敵を燃やし尽くせ」

――炎人之焚腕――

その盾は聖下を弾き飛ばし、追撃として"T・C・"は再び炎の一対の巨腕を創り出した。ルシルの白銀の巨腕を思い起こさせるその炎の腕が、虫を払うかのように振り払われた。大広間ゆえにこちらも回避できるけど、狭所だったら確実に回避しきれずに食らっていた。聖下も床に着地すると同時に大きく跳び、巨腕の一撃を回避。

『（魔術効果の結界が本部全体に展開されているから、こちらも多少の無茶も押し通せるはず！）聖下！　広域攻撃を撃ちます』

『判ったわ。彼女に隙が生まれ次第こちらも動くから、私のことは

気にせずに派手にやっちゃいなさい！』

「『了解です』シュロス、カートリッジロード！　氷牢の刺突杭（コンヘラドル・セリオン）！」

自前で発現できる神秘魔力に、以前から蓄えていた自分の神秘カートリッジで魔力と神秘を増大させる。そして、ここ大ホールの天井・床・壁全体に展開した魔法陣より無数の氷柱（本来は先端の尖った杭だけど、非殺傷設定の無い魔術である以上は平たくしてある）を突き出させ、"Ｔ・Ｃ・"や炎腕に打ち付けさせようとした。

「っと・・・！」

座っていた炎のロッキングチェアが氷柱に狙われたことで飛び退きつつ、"Ｔ・Ｃ・"は着地するまでの間に迫る氷柱を魔導書の角で叩いて砕き続ける。炎腕も氷柱を溶かしてはいるけど、打ち付けられていることは変わらないからボコボコに潰されている。その中で聖下が氷柱の上を跳び回りながら、１本の氷柱に着地した"Ｔ・Ｃ・"へと接近。

「奔れ、紅蓮の砲光。敵に向かいて燃え穿て」

――轟火之砲光――

「雷牙双月刃！」

"Ｔ・Ｃ・"の周囲に発生した火炎スフィア４基より聖下に向けて放たれたのは火炎砲撃４発。聖下は"キルシュヴァッサー"と"キ

ルシュガイスト"の刀身に電撃を纏わせ、迫る火炎砲を真っ向から斬り払いながら距離を縮めていく。それを黙って見守っているつもりのない私は、"T・C・"を挟撃するために今なお突き出させている氷柱に乗って、一気に"T・C・"の元へと向かう。

「はあああああああ！！」

「エンシェント・ロジック！」

聖下の激しい双刀連撃に対してシールドを展開して弾き返し続ける"T・C・"。私はそんな彼女の背後に回り込むことに成功し、古代ベルカ式の拘束魔法である「拘輪環！」を発動。彼女の両腕をその空間に固定して、宙を指でなぞって発動させるらしいシールドを封じた・・・はず。

「っ・・・！」

「（魔導書は手から離れても落ちずに宙に浮いている。はやて二佐の夜天の魔導書のような、特別な物であることは間違いないわね）ならば・・・！」

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

５０基の氷の螺旋杭を展開し、魔導書に目がけて一斉発射。螺旋杭は四方八方から超高速で魔導書に殺到し、次々と着弾しては炸裂してボフッと真っ白な冷気を発生させていく。

「双牙・・・！」

そして聖下は、身動きを封じられた"T・C・"へと小太刀"キルシュガイスト"の峰側での袈裟斬りを繰り出す。聖下の一撃は"T・C・"の左肩を強打。けれど彼女は膝を突かなかったどころか左肩に乗っている"キルシュガイスト"を左腕で掴もうとした。

――神速獣歩（ゲパルド・ラファガ）――

「光雷刃！」

聖下が一歩分後退しながら繰り出した太刀"キルシュヴァッサー"の電撃纏う峰打ちが、"T・C・"の腹部に打ち付けられた。それと同時に私は背後から魔力で覆った"シュロス"の腹で彼女の背中をフルスイングで打ち付ける。

（この手応え・・・、肉を叩いたものじゃないわ。シールドを叩いた感じ。ダメージは入ってないみたいね）

――リベレーション・フォース――

「「ぅく・・・！？」」

私の螺旋杭の猛襲を受けた魔導書から無数のページがブワッと宙に舞い、火の粉を周囲に撒き散らし始めた。小さな火の粉をこの身に受けるだけで、すごい衝撃と熱さが全身を痛めつけてくる。さらにページの勢いに抗えなかった私と聖下は、"T・C・"から大きく

距離を開けられてしまった。

「あ、もうこちらの用は済んだようね」

"T・C・"がそのようなことを言って、地下保管室へと通じる床扉の方をチラリと見た。それにつられて私も今は遠くに見える床扉へと視線を移し、「うそ・・・」と目を見開いた。床扉がゆっくりと開いていき、保管室より出てきたのが「聖王オリヴィエ、覇王インングヴァルト・・・!?」と瓜二つの男女だったからだ。

「いったい、これはどういう・・・!?」

聖下の混乱も理解できる。おそらく偽者だとは思うけど、伝説に語られるオリヴィエ様やインングヴァルトがいきなり現れたら驚愕するのも仕方がない。しかも、聖下以外が開閉できないように封印処理されていた床扉が開いたのだからなおさら。

「オリヴィエ様・・・?」

「あ、はい。オリヴィエ・ぜーゲブレヒトです。私が歴代の聖王に交じって崇拝されているなんて、何やら気恥ずかしいものですね」

絵画などでしか見たことのなかったオリヴィエ様は頬を少し赤らめて微苦笑。私はオリヴィエ様も気になるけど、インングヴァルトの方も警戒。よくよく見てみれば佇まいが達人のそれ。偽者だとすればそれはそれで恐ろしい敵ということになる。

「保管室から出て来たけれど、いったい何をしていたの？」

「あたし達が答えずとも察してはいるはず。保管庫内にあった魔力保有物はもう回収済みであると。あとは・・・」

――スティールハンド――

「「ぁが・・・！？」」

"T・C・"が左足で床をトンッと軽く突いた瞬間、私と聖下は同時に体が反り返った。私たちの胸から突き出たのは半透明な人の腕のようなもので、手の平には光り輝くリンカーコアがあった。

「我らがT・C・の王は、少しでも多くの魔力を求めているの。あなた達2人の魔力量は魅力的だから、いただいていくわね」

リンカーコアの光量が次第に弱くなるのと同時に痛みが襲って来る。胸から生えている腕を攻撃していいのか、それともダメなのかも判らず、私は黙って魔力を奪われていく様を見ることしか出来なかった。"シュロス"を杖替わりにしても立っていられなくて、片膝を突き、両膝を突き、そして最後には床に倒れ伏してしまう。

（聖下・・・）

――影渡り（シュルブリーズ）――

私と違い聖下は倒れることなく、"キルシュヴァッサー"で"T・

C・"に斬りかかろうとしたけど、"T・C・"の影からズズズと這い出てきたローブを着た10歳くらいの子どもが立ちはだかった。

「コゼット。こちらはもういいわ。計画通りにオリヴィエとクラウスを連れて移動を」

「判った。2人とも、わたしの側に来て」

「判りました」「判った」

――影渡(シュルブリーズ)り――

コゼットと呼ばれた少女（名前や声からして性別は女のはず）と共にオリヴィエ様とイングヴァルトが、コゼットの影の中へと沈んでいった。そして"T・C・"も「ではあたしもこれで失礼するわ。魔力、ありがとう」と一礼して、すぅっと消失した。それを見送ってすぐ、聖下は力なく倒れ伏して、私も意識を失った。

†††Sideフィレス⇒トリシュタン†††

「ようよう。トリシュタン、アンジェリエ。オレぁ、もうちょっと粘ってくれるって思ってたんだけどな」

息も絶え絶えな私とアンジェを見て、リッタはそう言って残念がった。聖王教会本部の正門の防衛を任された私とアンジェと兄様パーシヴァルは、リッタ、エッタと名乗る姉妹と交戦。激闘を繰り広げたのだけど、相手の方が一枚上手だった。

「ゴリラめ・・・！」

私は片膝を突き、仁王立ちでこちらを見下ろしてくるリッタを睨み上げ返す。アンジェも私と同じように疲労困憊のようで両膝を突いて、"ジークファーネ"を杖代わりにすることで倒れないようにしている。私とアンジェの2対1で戦ったにもかかわらず、リッタは笑えないレベルの防御力と、こちらのデバイスを文字通り削ってくる攻撃力の所為でピンチに陥っていた。

（兄様・・・）

銃器を扱うエッタの防御力もまたすさまじく、兄様の攻撃のすべてを無力化。ただ、エッタの攻撃も兄様の機動力に追いつけず、効かず当たらずで今なお少し離れた場所で交戦中。

「ゴリラで結構だぜ。自慢の拳を褒めてもらってるようなもんだからな！　で、どうすんだ？　もう足腰も立たねぇんなら、オレも姉貴に合流して、あのお兄さんをぶっ倒さないといけねぇからな」

「させ・・・ない・・・！」

「ええ・・・私たちが必ずあなたを止めます・・・！」

力を振り絞って立ち上がり、「よっしゃ！　よく言ったぜ、お嬢さん達！」と嬉しそうに笑うリッタは構えを取った。私は弓形態の"イゾルデ"に魔力矢を番え、アンジェは"ジークファーネ"の魔力

幕をピンと張った状態で魔力刃化させての大鎌形態へ。

「アンジェ」

「トリシュ」

――滅び運ぶは群れ成す狩り鳥――

小さく呼吸を繰り返して、私たちの攻撃を律義に待ってくれているリッタへと放つのは、射た矢が数百本の魔力光線として相手を襲撃する射撃魔法。もちろん神秘カートリッジの恩恵で魔術師としてさらに強化されているから、正真正銘の魔術師であるらしいリッタにもダメージは与えられる・・・はずだった。けれど、どうも彼女の防御を貫けない。

魔術にとって重要なのは、魔力量ではなく神秘という不思議なパラメータ。濃ければ少ない魔力でも強力になるけれど、薄ければどんなに魔力量があっても弱くなる。理想は神秘が濃く、そして魔力量も多いこと。その魔術のルールから見れば、私とアンジェや兄様の利用している神秘が、リッタやエッタの神秘より弱いということ。

（それでも退くわけにはいかない！）

「はあああああ！！」

殺到する光線をその身に受けながらも私に向かって駆け寄って来るリッタに、アンジェが斬りかかった。リッタは足を止め、迫りくる魔力刃に向かって後ろ回し蹴りを繰り出した。刃面と足の裏が激突

し、互いが弾かれた。

（この隙を逃さない、畳みかける！）

――凍て付かせし青銀の雪草――

ダメージを与えるのではなくて動きを制限させる魔術に切り替える。放つは着弾時に冷気を炸裂させ、相手を凍結封印するというもの。セレスの凍結魔法を基に組んだ矢、その数最大展開数の８本。アンジェが離れたところで、リッタは「面白れぇ！」と、これまた避けるような真似をせずに真っ向から連続拳打で迎撃。そして冷気に呑まれて姿が見えなくなった。

「やったと思いますか？」

「だといいけれど。おそらくは・・・」

「はっはー！　冷てぇ、冷てぇ！　体のあちこちに氷が張ってんぜ！」

リッタが歩くたびにパキパキと体の表面を覆っている氷片が剥がれ落ちていく。氷が張り、なおかつ動きづらそうになっていることから、私の選択は間違っていないことが判った。ならば、「このまま！」氷矢でリッタの身動きを封じることに専念する。右手の指の間に８本と生成し、「往け！」と一斉に放ち、即座に新たな氷矢８本を生成する。

「オレが状態異常系に弱いのは認めてやんよ！　だがな！」

次々と着弾していくもリッタは気にも留めず、こちらに向かって来る。アンジェは「グリッツェンフェッセルン！」と、勢いよく伸長させた魔力幕でリッタの利き腕であろう左腕を拘束した。そこに私は間髪入れずに彼女へ氷矢を撃ち込んでいく。

「むお！　ぬわ！　うへ！　おうふ！　ちょっ！　待っ！　のわーーーーー！！」

氷矢をどれだけ受けても馬鹿みたいに直進していたリッタだったけれど、とうとう足は止まったことで氷矢の直撃を受け始めた。いける。このまま誤って殺害しないように注意しながら、凍結させ続けてしまおう。そう考えて、計２０本ほど射ったところでアンジェに「中断する！」と伝える。頷いたアンジェは、今もリッタの左腕を拘束している魔力幕を切り離す。そしてすぐに新しい魔力幕を展開して、リッタの動向を警戒。冷気が晴れ始めことで、私たちはいつでも攻撃を撃ち込めるように構えを取る。

「・・・リッタの凍結封印を視認。・・・アンジェ。念のために強めのバインドを」

――スティールハンド――

「了か――」

「「っ・・・！？」」

私とアンジェの胸から、半透明の人の腕が突き出した。そんな腕の先、手の平にはリンカーコアがある。アンジェのリンカーコアは1つ。私は自分の魔法発動用とスキル――クス・デア・ヒルフェ用の2つがあるけれど、そのうちの魔法発動用のリンカーコアだけが手の平の上で輝いている。まずい。サッと血の気が引いた。

「「ぅあああああああ・・・！」」

リンカーコアの光量が弱まるにつれて胸痛が激しくなり、体中から魔力が失われていく感覚が生まれる。痛みに耐えきれずにその場に蹲ると、「あーあ。時間切れかよ。遊び過ぎたか」と、リッタは自分を閉じ込めていた氷の檻を砕きながら残念そうに言った。

「悪ぃな、お嬢さん達。きっちり勝敗をつけたかったけどさ、オレ達の姉貴たちが仕事を終わらせたみてぇなんだよ。その合図が、お前たちの魔力収集だ。まぁなんだ。もう二度と会うことはねぇから、恨み言は聞けねぇが・・・じゃあな」

私たちの胸から生えた腕が消失すると同時に、リッタもまた音もなくその姿を消した。それを見届けることしか出来なかった私は、無念にも意識を失った。

†††Ｓｉｄｅトリシュタン⇒ヴィヴィオ†††

キュンナさんと騎士グレゴールの襲撃を受けて結界に取り込まれちゃったわたしとフォルセティとイクスとアインハルトさんは、わたし達を殺害しようとする2人の交戦。分身体を駆使してくるキュン

ナさんに押されてたわたし達を助けてくれたのは、信じられない人たちだった。

「オリヴィエさんとクラウスさん・・・！？」

騎士グレゴールをわたしとイクスとアインハルトさんから引き離すために動いてくれてたフォルセティが連れてきたのは、アインハルトさんのご先祖様のクラウスさん。続いて空からふわっと舞い降りてきたのは、わたしのオリジナルのオリヴィエさんだった。

「もう一度言おう。僕たちの仕事は終わったため、今すぐ戦闘行為を中断して管理局に出頭せよ」

「嫌だと言えばどうするつもりだ、覇王クラウス・・・」

横たわってた巨狼姿の騎士グレゴールに聞かれたクラウスさんは「次は僕たちが相手になろう」と答えて、オリヴィエさんも「命令に従ってあなた達を逃がした責任です」と、キュンナさんと騎士グレゴールに向き直った。

「あなた達が・・・逃がした・・・？」

「待ってください、オリヴィエ殿下、クラウス殿下！　この際、貴方たちがどうして生きているのか、どうしてＴ・Ｃ・に居るのかなどの疑問は横に置いておきます！　問題は、ヴィヴィオ達がこうして襲撃されることを前提に、キュンナ女王たちの脱走を手助けしたということですよね！？　いったい何を考えているのです！」

「それは・・・、いえ申し開きはありません。上からの指示であったとはいえ従ったのは事実ですから」

「僕も言い訳はしないよ。ただ、あの子たちを死なせるようなことだけは絶対にしないと考え、行動していたことだけは信じてほしい」

怒りの感情を爆発させてオリヴィエさんとクラウスさんに詰め寄ったイクス。オリヴィエさんとクラウスさんは悲しそうにそう答えた後、わたしとアインハルトさんに向いて「ごめんなさい」と大きく頭を下げた。伝説の王２人に頭を下げられてるっていう現状もそうだけど、イクスが横に置いておくって言ってたことが原因で、わたしとアインハルトさんは未だに思考が少し停止中。

「わ、わたしは、その・・・大丈夫です、ので、あの、頭を上げてください、お願いします」

とりあえず王様に頭を下げられてるのは心地が良いことは言わないから、手をわたわた振りながらお願いした。そんな困惑してるわたしと違って、アインハルトさんはジッとオリヴィエさんとクラウスさんを見つめます。

「君が、僕の子孫のアインハルトだね。不思議な感じがするよ。遠い未来の子孫と顔を合わせ、言葉を交わせるなんて」

「私も・・・私もです。あなたから受け継いだ記憶の中で、あなたのことをいつも見ていましたが、あなた個人と会話が出来るのは不

思議です」

「・・・僕が遺してしまった強い未練で君には大変な苦労を、君の幼少時代を犠牲にさせてしまった。今はもう、僕の記憶から解放されているそうだが、それでも君が辛い日々を送っていた事実は消えない。だから君にずっと謝りたかったんだ」

「ずっと、ですか？　その口ぶりですと私があなたの記憶を受け継いでいることも知っていたようですし、あなたは、あなた方はいつからこの世界？　いえ現代？　そもそもあなた方は本物ですか？」

「ん～～っと、いろいろと順番を間違えたような気もしますが、このまま私たちの目的を果たしましょう。まず、私たちやＴ・Ｃ・の正体などは話せませんが、私とクラウスの目的は話します」

「とはいえ、先ほど果たしてね。アインハルト、君に謝る事が僕の目的だった」

「私も、あなたに謝りたかったのヴィヴィオ。聖王のゆりかごを起動させるために私のクローンとして生み出されたあなたに、そしてあなた達が古い時代の人間たちの思惑や業に振り回されたこと、ベルカの因縁を背負わせてしまったことを、私は謝りたかった・・・」

「謝りたいという目的のために、僕たちが必ず助けるつもりであっても君たちを危険な目に遭わせたのも事実。どのような罵詈雑言や攻撃も受けるつもりだ。個人的な目的を果たせた以上、あとはＴ・Ｃ・の一員としての仕事、キュンナとグレゴールを出頭させるだけ

だからね」

「はい。さぁ、どうぞ」

目を伏せてわたし達の前に立つオリヴィエさんとクラウスさん。わたしはイクスやアインハルトさんに顔を見合わせて、「判りました」って頷いた。もちろん罵詈雑言も攻撃もしない。３人で「顔を上げてください」って言って、お２人が顔を上げるのを待つ。

「お２人からの謝罪は確かに受け取りました」

「ですから、わたし達から言うことは何もありません」

「ヴィヴィオとアインハルトが納得するのであれば、私からも言うことはないです。・・・あなた達が何者でもまた逢えて嬉しかったですよ」

オリヴィエさん達とも笑顔を向け合う中、「本当に惨めな気分です」とキュンナさんがポツリと零した。そして騎士グレゴールと一緒に一足飛びで遠くまで距離を開け、「オリヴィエ、クラウス！　あなた達が消滅するまで逃げきればいいだけのこと！」と、騎士グレゴールの背中に飛び乗ろうとしたけど・・・。

――電光石火――

「「「「っ・・・！？」」」」

オリヴィエさんの姿が掻き消えたかと思えばフワッと風が流れた。オリヴィエさんは一瞬でキュンナさんの頭上へと跳んでいて、「逃がしません」と振りかぶった右拳を、キュンナさんに向けて繰り出した。

――夢影――

キュンナさんは分身体を出現させて、オリヴィエさんの一撃から身を護るための盾として利用。騎士グレゴールの背中でオリヴィエさんとキュンナさんが相対する。と、そこにクラウスさんが足元に魔法陣を展開して、二足飛びで騎士グレゴールさんに突っ込んで・・・

「覇王流・・・壊牙！」

突進からの正拳突きを打った。背中でオリヴィエさんとキュンナさんが闘ってることで騎士グレゴールはその場から動けず、クラウスさんの拳を右前脚の肉球部分で受け止めた。

「むおっ！？」

クラウスさんの一撃を受け止めきれなかった前脚が変な方向にボキッと曲がって、その影響で体が大きく揺れて伏せの状態になった。その瞬間、オリヴィエさんはキュンナさんに肉薄して、「旭日昇天！」と、右手の平に生成した小さな魔力スフィアをキュンナさんの腹部に掌底と一緒に打ち込んだ。キュンナさんがその一撃を受けて数mと空中に吹き飛ばされて、オリヴィエさんが騎士グレゴールから飛

び降りた。

「覇王・・・断空拳！」

「がああああああああ！！」

そこにクラウスさんの断空拳が騎士グレゴールの上あごを打ち抜いて、その衝撃で狼の口、鼻、目、それだけじゃなくて騎士グレゴールの顔からも出血して、ドスン！と頭が完全に横を向いて倒れた。遅れて着地したオリヴィエさんは、空から落下してきたキュンナさんをお姫様抱っこで受け止めて、意識を失ってるキュンナさんを地面に横たえさせた。

「あ！」

「結界が・・・！」

「解除されていきます・・・！」

「僕たちの仲間が、結界を展開していたエーアストと言う融合騎を打ち倒したんだ」

「あ、あの子です」

オリヴィエさんが振り向いた先に、わたしと同じくらいの身長で、フード付きのローブを身に纏った子が居た。その子はアインハルトさんの記憶の中で観た男性、エーアストさんの髪を引っ掴んで引き

摺ってきて、キュンナさんの側にポイってした。見た目と違って力持ちみたい。

「ではフォルセティ。君の拘束魔法で彼女たちを捕えてくれ。魔術化しているのなら、魔術師ではないキュンナとグレゴールは逃げられないだろう」

「判りました。エマナティオ、カートリッジロード。コード・ファンゲン」

フォルセティが左手に持つ"エマナティオ"のカートリッジを1発ロードして、キュンナさんと騎士グレゴールとエーアストさんに向けて魔力弾を1発ずつ発射。着弾すると同時にリングバインドとなって、2人を拘束した。そしてフォルセティは続けてオリヴィエさんとクラウスさんにも銃口を向けて、「フォイア！」って発射した。直撃を受けたオリヴィエさんとクラウスさんもバインドを受けちゃった。

「フォルセティ！？」「フォルセティさん！？」

「僕は八神家の人間だ。相手が伝説の王であっても、T・C・に与する犯罪者であることには変わらない。あなた達も一緒に拘束させてもらいます」

「私もフォルセティと同意見です。オリヴィエ殿下、クラウス殿下、悪く思わないでください」

「いや。当然の措置だと思うよ」

「ですが、ごめんなさい。・・・私たちはもう役目を終えたので・・・」

オリヴィエさんとクラウスさんの姿が少しずつ薄くなり始めた。それを見てフォルセティは「信じたくなかったけど、やっぱり・・・」って悲しそうに零した。

「最後に改めて。ヴィヴィオ、アインハルト。ベルカの因縁に押し潰されることなく、健全に育ってくれて嬉しかったです。ありがとう」

「これからも君たちに幸福があらんことを祈っている」

そう言い残して、オリヴィエさんとクラウスさんは完全に消失。さらにエーアストさんを倒して連れてきた子も、いつの間にか去っていた。

Ｓａｇａ２２－Ｂ真実への扉～Ｔｈｅ　ｌａｓｔ　３　ｓｔｅｐｓ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

故人であるプレシア母さんとリニス、楽に行き来できないほどの遠い世界に住んでいるレヴィが現れたことに、私は驚きながらもやっぱり嬉しかった。プレシア母さんとリニスがどうして居るのか不思議、というか疑問はあるけど、それでもまたこうして話が出来て嬉しいんだ。

そんなプレシア母さん達は"Ｔ・Ｃ・"の一員であるようで、私たちが防衛任務にあたっていた研究施設に襲撃を仕掛けてきて、私たちと戦う意思を示していたんだけど・・・。

そこにまた新しく子どもの"Ｔ・Ｃ・"が現れたかと思えば、プレシア母さん達は剣呑な雰囲気になった。それもこれも、その子が私たちから魔力を奪うって話になったからだ。

「なんじゃ、プレシア、リニス。そやつ等を庇うのか？　高魔力量を保有する魔導師からも魔力を回収せよ、との命令があったはずじゃが？」

「けれど、それは絶対ではないわ」

「はい。あくまで最優先は魔力保有物の回収。局魔導師からの魔力奪取は絶対の指示ではなく無理に遂行せずともよい、とのことでした」

「無理ではなかろう？　わしとお主等２人とレヴィ。この４人であれば、そこの娘から魔力を奪うことは容易いこと」

「いいえ。仕事はこれで終わりよ、カレン」

「お主等、王に歯向かうつもりか？」

「その王からも許可は貰っているわ。最優先任務であるこの子たちの足止めを果たした後、私たちは自由時間を与えられているのだから、どう過ごそうが勝手だわ。そう。彼の娘であるあなた達とは違ってね」

「それでも王のご厚意によって存在できている以上、王のために働くのは必定であろうが」

「確かに、彼には恩はありますが、それとこれとでは話が違います。カレン。私たちはここで下ります」

プレシア母さんとリニス、そしてカレンとのやり取りを見ていることしか出来なかった私たちは、リニスが最後にそう締めたところでカレンの雰囲気がガラリと変わったのを察知。すると母さんとリニスが、私とアリシア、エリオとキャロとフリードを護るように前に躍り出た。

「何のつもりじゃ」

「カレン。あなたが私の大切な娘たち、友人たちを傷つけるようなことをするつもりなら・・・」

「私とプレシア、あと・・・」

「ボク？　ボクはどっちでもいいけど、この中で一番強いのカレンでしょ？　ボク、強い奴と戦うの好きなんだ～。それに、ディアー（おうさま）チェからお願いされてるんだよね。オリジナルと姉っ子を無事に連れてこいってさ。だから、ボクはこっち側に付くよ、カレン」

レヴィも気になる事を言いながら私たちの先頭に立った。カレンは「よかろう。ならば、わしがお主等全員を始末すればよいだけのこと！」と、赤褐色の魔力を全身から放出させた。その勢いでフードか外れて、黒ショートヘアでツーサイドアップの髪、それが素なのか判らないけど蒼い半目な顔があらわになった。

「アリシア、フェイト。それに、エリオ君とキャロさん。あなた達は――」

「逃げないよ！　私たちも戦う！」

「そうそう！　私とフェイト、エリオとキャロとフリードだって強いんだから！」

「「お手伝いします！」」

「きゅくるー！」

「ボクひとりでも十分だけどね！」

――エルヴスムーブ――

レヴィに連携なんて望めないことは判っていたけど、背中の三対の電撃の羽と、両手首と両くるぶしの片翼４枚がバチッと音を出すと同時、電撃の塊となって超高速でカレンに突っ込んで行った。

「光雷斬、連続斬り！」

戦斧形態の"バルフィニカス"の斧頭から展開されている電撃の斧刃による直接斬撃を、カレンの足元以外の方向から高速かつ連続で繰り出す。

「雷撃がわしに通用するとは思わんことだ！」

――セグワーチェ・ファンタズマ――

電撃の斧刃を躱すカレンの周辺の地面が一斉に抉れた。ブワッと多量の砂が巻き上がって５つの柱となるとローブ姿の人型へと変化して、レヴィの攻撃を受ける盾となった。レヴィの"バルフィニカス"の斧刃は砂人形を斬り裂いてはいるけど、相手は砂。斬り裂かれても元に戻って、カレンの盾になり続けてる。

「レヴィ！　砲撃で吹っ飛ばす！　離れて！」

そう言ってアリシアはスナイパーライフル型デバイスの"ブレイブスナイパー"を起動させた。私もライオットブレードⅡ形態の"バルディッシュ"を構えると、プレシア母さんが「リニス、私たちも砲撃で押すわよ」と足元に魔法陣を展開した。

「キャロとフリードは待機。エリオは、私やレヴィと一緒に近接で攻める」

「「了解です！」」

――マルテッロ・ソルプレーサ――

「下がってください！」

リニスが然叫んだ直後に私たちの足元の地面が隆起して、石畳に使われていたレンガを含めた土や岩で構築された大きな壁が突き出た。私とリニスとエリオ、空に上がったばかりだったキャロとフリードは反応できて回避したけど、逃げ遅れたアリシアとプレシア母さんが空に突き飛ばされた。

「倒れてくる！　逃げて！」

高さ５ｍ、幅２ｍくらいの岩の壁が私たちに向かって倒れてきた。魔術で作られたものだ、押し潰されたら確実に死ぬ。慌てて範囲内から離脱したところで「ミーナ」と、カレンが地面を蹴った。ゾクッと悪寒が走る。原因は足元の地面すべて。直感に従って「急上昇！」ってみんなに伝えながら空へと上がる。直後、地面の至る所が爆発

を起こして、瓦礫やら砂塵やらがまき散らされる。

「アリシア、プレシア母さん！」

「私もプレシアママも大丈夫！」

「カレンは土石系の魔術師よ。空に上がって全力で爆撃すれば、あの子の防御力も突破できるはずだわ」

――トッレ・トンバ――

イタリアのマンジャの塔のようなデザインをした岩石で出来た塔が、私たちの居る高度までいくつも勢いよく突き出てきた。それを回避していると、単独でカレンに攻撃を仕掛けていたレヴィが「カレンがいなくなった！」って知らせてくれた。

「撤退した？」

「ありえません。必ずいます！　警戒を！」

私たちよりカレンを知っているリニスの言葉に従って警戒していたら、ある1つの塔の鐘楼部（鐘は無いけど）に隠れていたカレンが「スパーダ・グランデ・ディ・アンジェロ！」と、塔を構築している岩を使ってゴツゴツした大剣を生成。そして床を蹴って、私たちに突っ込んできた。

「エクスディフェンダー！」

プレシア母さんが発動したのは六角形のシールド７枚を繋ぎ合わせて作った大きなシールドで、カレンの岩の大剣を防御。大剣がシールドに触れた瞬間に発動したカウンターの巨大な雷スフィア、「ヴァリアントスフィア！」がカレンを襲った。放電する魔力爆発に呑まれたカレンだったけど、ほぼ無傷のままもう一度大剣を振るおうとしていた。

――ファストステップ――

「ジェットスマッシャー！」

そんなカレンの頭上に高速移動魔法で移動したリニスは直射砲撃を発射。叩き付けられるように真上から砲撃を受けたカレンは、その勢いに抗えずに砲撃もろとも落下していく。

「リニス！」

「はい！　プレシア！」

――ライトニングバレット・スタンピード――

――フォトンランサー・ファランクスシフト――

「「ファイア！」」

プレシア母さんの数十発の電撃弾と、リニスの周囲に展開されたス

フィア２０基から電撃槍が数十発、そのすべてがカレンに殺到していく。プレシア母さんとリニスも魔術を使っているのは感じ取っている。だからこそ「何しているの！？　カレンが死んじゃう！」ってアリシアが慌てふためいた。もちろん私だって「やり過ぎだよ！」って叱責した。

「問題ないわ。彼女は魔術を使えはするけど厳密には魔術師ではないし、何より人間でもないわ。それに、フェイト、あなたも察しているのでしょう？　私とリニスの正体についても」

「答えをそのまま伝えることは出来ませんが、ヒントくらい与えてもいいでしょうし。私とアリシア、それにレヴィは、カレンと同様に生物ではありません」

「「「「え・・・？」」」」

それを聞いた私の頭にはまた、ありえないと断じた可能性が浮かび上がった。生物と言うカテゴリーにはクローン、生まれ変わり、時間渡航者も入るだろうから、それ以外となればやっぱり・・・。

「そういうわけですから、カレンへの攻撃に手加減は必要ありません。いきますよ！」

――ジェットスマッシャーーーー

リニスの直射砲撃を皮切りに、私たちはカートリッジをロードして攻撃開始。レヴィの電撃砲「雷豪戦衝覇！」、アリシアの砲撃効果

を有する大砲弾連射「ストリームコメット！」、エリオの中距離電撃刃「ブリッツメッサー！」、プレシア母さんの雷を落とす「サンダーレイジ！」が一斉にカレンを襲う。そして私も、電撃砲「プラズマスマッシャー！」を発射して、カレンはそのすべてを受けて魔力爆発に呑まれた。

――テンペスタ・ディ・サッピア――

私たちを包囲するかのように巨大な砂の竜巻が四方に発生して、中心に居る私たちに向かって同時に向かってきた。でも速度は遅いからすぐにその場から散開することで逃れる。

「きゃあああああ！」「うわあああああ！」

「エリオ！？」「キャロ！？」

竜巻から飛来してきた小さな石や大きな岩が、フリードの翼に直撃した。やっぱり魔術効果があるようで、フリードの装備である"ヴァンガード・ドラグーン"がガラスみたいに簡単に破壊されて、さらに墜落し始めた。助けに行こうとソニックムーブを発動しようとしたけど、「まずは2人と1匹じゃの？」と竜巻の中から多量の砂で出来た足場に乗ったカレンが飛び出してきた。

「まだ墜ちてないよ！」

「私が助けに行きます！　プレシア達はそのまま交戦を！」

――ファストステップ――

羽ばたこうと頑張っているフリードの元にリニスが高速移動魔法で向かったのを横目で確認しつつ、「サッピアスパーダ」と足場の砂を剣に作り直したカレンを、"バルディッシュ"の斬撃で迎撃する。

「っ・・・！？」

「砂を高速振動させておるからの。切れ味は抜群じゃ！」

"バルディッシュ"の魔力刃と衝突した砂の刃がガリガリガリ！と、まるでチェーンソーのように魔力刃を削り取っていく。そしてバキッと魔力刃にヒビが入ったことで、"バルディッシュ"を持つ右腕を引こうとしたんだけど、「砂が・・・！」魔力刃に絡みついてきて、私を逃がさないようにした。

「安心するがよい。その身を刻むつもりはないからの。傷つけてはわしが王に怒られる」

「うちの娘を放しなさい！」

プレシア母さんが杖の先端のクリスタルから生成した魔力鞭でカレンを打とうとしたけど、竜巻から放たれてきた石礫が正確に鞭を撃ち抜いて破壊。とここで、"バルディッシュ"の魔力刃がバキン！とへし折られた。

「わしが生き物ではないと裏切り者より聞いた途端、情け無用に攻

撃してくるとはな。お主等、誠にこーむいん？という者か？　たとえ大罪人でも殺害はせんと聞いておったが、それはどうやらウソであったようじゃの。こんな十にも満たぬ幼子を害そうとするとはのぉ」

「ちが・・・！」

"バルディッシュ"の魔力刃が折られたことで解放された際、カレンの侮蔑の眼差しが私を射抜く。そうだ、確かに相手は子どもだ。いくらプレシア母さんとリニスが、カレンは生物じゃないと言っていても、非殺傷設定の無い魔術で、手加減なしで攻撃していいわけが・・・。

「ぼさっとしない！」

「っ・・・！」

――バインドバレット――

アリシアの怒声にハッとして、カレンの剣から槌へと変えた砂による殴打攻撃を、急降下することで回避。そこにアリシアの撃った魔力弾がカレンに着弾して、魔力弾はリングバインドとなってあの子を拘束したけど、「ふむ。ならば、ともに砂の暴力に呑まれようか」とニタリと笑った。そう、砂の竜巻は今なお迫って来ているし、石ら岩やらをまき散らして、竜巻の間や空などの逃げ道を完全に封鎖している。遅くても2分くらいで呑まれると思う。

「よく言うわ、カレン。見た目はそうでも、何百人といる兄弟の中で上から数えた方が早いほどの歳でしょ？　フェイト、アリシア、レヴィ。少しの間、カレンを引き付けておいて」

まるで空に蓋をしているかのように飛び交う岩石流のギリギリ下まで高度を上げたプレシア母さんが足元に魔法陣を展開した。私とアリシアとレヴィは頷き合って、アリシアが「私がプレシアママをフォローする！」って、"ブレイブスナイパー"から短銃の"ラッキーシューター"に換装してプレシア母さんの元へ。

「レヴィ！」

「おーっし！　下の連中も無事のようだし、ボクとオリジナルでカレンをぶっ飛ばーす！」

「あと、エリオもね」

墜落していたフリードは、リニスの魔力網ホールディングネットで地面への激突は免れているし、エリオはフローターフィールドの連続展開で足場を作って、私たちに合流するために駆け上げって来ている。そんなエリオを見てカレンは「大人しくしておれば、痛い目に遭わずに済んだものを」と首を横に振った。

「そうはならない。私たちが勝つから」

私はそう宣言して、"バルディッシュ"を大剣形態のライオットザンバーに変形させた。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒クラリス†††

なのはとヴィータとリインには、どうやら知り合いらしいシュテルっていう魔導師（なのはと顔立ちがそっくりで驚いた）を任せて、私はソアラっていう子と交戦中。

「アレクサンドロス、次！」

「グルファクシ！　再度突っ込みますよ！」

私が今駆っている黒の巨馬アレクサンドロス。ソアラが駆るのは同程度の大きさを誇る、キラキラと金色に輝く綺麗なたてがみを有する白の巨馬グルファクシ。得物は、私は方天戟と金砕棒の柄頭を連結させた"シュトルムシュタール"。ソアラはドリル状の大きな穂を有する突撃槍。

私たちは馬で駆け、接近しては互いの得物で攻撃を行うっていう、古代の騎馬戦のようなことをしてる。そしてこの瞬間にも、馬を反転させてからの突撃をして・・・

「フェアシュテルケン・ガンツ！」

「インヴィタ・ディストルツィオーネ！」

薔薇色の魔力を全体に帯びた"シュトルムシュタール"と黒い雷を帯びた突撃槍が、私たちが真っ向から交差する際に激突する。"シュトルムシュタール"から伝わってくる衝撃がすごくて、ソアラが

見た目通りの子どもじゃないことを否応なしに理解させられる。後ろに通り過ぎていくソアラに警戒しながら、離れたところで黒雷で作り出されたチーターの群れと戦ってる私の召喚獣、九尾の狐ナデシコをチラッと見る。

（魔術で作られてるからか、ナデシコでも簡単には処理できないんだ・・・）

さらに言えば雷で出来ているから超高速で動き回れるチーターは、ナデシコの口から放たれる炎の直射砲や範囲攻撃を余裕で回避できいて、回避すると同時にナデシコに突撃を繰り返している。体当たりと同時に放電しているようで、ナデシコが時折苦しそうな声を漏らす。

（急いで片を付けないと、ナデシコの召喚を解かざるを得なくなる）

私の魔力と神秘が込められた"シュトルムシュタール"のカートリッジを3発ロードして、方天戟のオーベンフォルム、金砕棒のウンテンフォルムの2つに切り離した。そして跨っていた鞍の上に片膝立ちすると、向かって来るソアラが同じように鞍の上に片膝立ちした。

「アレクサンドロス！　ちょっとだけ我慢して！」

「グルファクシ。すれ違わず、全力でぶつかってください。大丈夫です、あなたなら打ち勝てます」

私の考えに乗ってくれたソアラがグルファクシの首筋を撫でた。それでやる気が増したのか、グルファクシは一鳴きして速度を速めた。私とアレクサンドロスだって負けない。ただ一言、「勝つのは私たちだよ」って伝える。徐々に距離が縮まっていって、そしてアレクサンドロスとグルファクシが真っ向から頭突きで激突。

「ツェアシュテールングス――」

激突と同時、私とソアラはそれぞれ鞍を蹴って最接近。私はまず振りかぶっていた金砕棒を左薙ぎで振るった。私が"シュトルムシュタール"を2つに分けた意味を察しているらしいソアラは、突撃槍での攻撃じゃなくて、「スクード・シニストラ！」って左腕に魔力の六角シールドを展開した。

（シールドで防いでも、その細腕が耐えられるとでも！？）

見た目は１０代前半くらいでも魔術師である以上、下手な手加減はこっちの負けに繋がる。だから腕の骨の1本くらいは我慢してほしい。そう考えて容赦なく金砕棒を振り下ろした。棍棒の表面にびっしりとある鋲をシールドに打ち付ければ、一瞬でヒビを入れ、そして砕いた。だけど・・・。

（硬・・・！？）

ソアラの細腕に拒まれた。人の体を殴った感覚じゃなくて鋼鉄を打ったような感覚が手に伝わった。ソアラが左腕を払うことで、金砕棒を持つ私の右腕も釣られて外へ向かって払われる。

「ショック！」

――インヴィタ・ディストルツィオーネ――

驚愕を振り払い、即座に方天戟による振り下ろしを繰り出して、左腕を払った勢いで旋回したソアラの突撃槍による薙ぎ払いが激突。私の魔力とソアラの黒雷は周囲にまき散らされる。それにしても、やっぱり魔導師や魔術師は見た目でどうこう考えるのはダメだって言うのを再認識。

「「っ・・・！」」

互いに得物が弾かれて後方に吹っ飛ぶ。空中で体勢を整えて、すでに距離を取っていたアレクサンドロスとグルファクシの鞍にそれぞれ跨り直した。これでいったんの仕切り直しだ。

「魔力盾を一撃で粉砕されるとは。想定より神秘が、破壊力が高くて驚きました」

「でも、あなたの肉体には掠り傷さえ付けられなかった」

「いえいえ。外からでは見て判らないでしょうが割とダメージ入っていますよ。・・・んー、クラリス。クラリス・ド・グレーテル・ヴィルシュテッターー」

「え、なに・・・？」

いきなりフルネームで呼ばれて困惑してると、「風雷グレーテルの雷撃系魔術は使わないのです？」って聞かれた。ソアラが口にした名前は、ヴィルシュテッター家の長子が名乗ることが出来るものであり、ヴィルシュテッター家で一番有名な当主の名前。けど問題はそこじゃない。特騎隊のみんなしか知らない、グレーテルが雷撃の魔術を扱え、なおかつ私もその気になれば使えることを、ソアラが知っているっていう事実。

「まさかと思うけど、あなたもレオンとかプリムスとか、あの幹部連中と同じ時代の魔術師のクローンだったりする？」

「クローンとは違いますが、同じ時代に存在していたことは確かですよ？」

最悪。現代の魔術師ならまだやりようはあると思ってたんだけど、魔術全盛期の時代の魔術師となってくるとレオン達の強さを思い起こさせる。戦慄してる私にソアラは「悔しい話ですが、私はそこまで強くはないのですよ」って目を伏せた。

「よく言う。私の本気の一撃を受けてダメージが入ってるって言いながらのその余裕さ」

「もう、文句ばかりですね。ならば、風雷グレーテルの魔術を使ってみては？　彼女の雷撃系術式は、あなたの魔法との相性はいいはず」

「・・・私自身の魔法で勝ちたかったんだけど・・・」

ナデシコは少しずつだけど雷チーターの数を減らしてる。なのはとヴィータは、ヴィータはデバイスを破壊されて戦闘不能に陥ってるみたい。なのはとシュテルの射砲撃戦が繰り広げられてる。変な意地は敗北・・・か。しょうがない。深呼吸を1回して、グレーテルの術式をスタンバイする。

「風填顕雷・・・！」

"シュトルムシュタール"の全体に風が渦巻き、バチバチと放電し始める。風雷っていう二つ名の通り、グレーテルは風と雷を操る魔術師だ。ここからの闘いはアレクサンドロスにもダメージが入りそうだから、私は鞍から地面に飛び降りた。

「ありがとう、今日はもういいよ」

アレクサンドロスの頭を撫でてから召喚を解除。展開した召喚魔法陣に沈んでいくあの子を見届けてから、私を待ってくれてるソアラに向き直る。そんなソアラもグルファクシから降りていて、グルファクシの召喚を解除してた。

「今度は何を召喚します？　私、あと大きな鳥を召喚できますよ」

「私も、ステュムパリデスっていう召喚鳥がいるけど・・・、このままでいい」

グレーテルの魔術は召喚獣との相性がちょっと悪い。騎乗しながら魔術を発動したら巻き込みかねないからね。だから「この身ひとつで、あなたを倒す」って宣言した。

「いいでしょう。その方がしっかりと実力差が判るというものです」

――インヴィタ・ディストルツィオーネ――

突撃槍に黒雷を纏わせたソアラと、間合い８ｍほどを開けて対峙する。ジリジリと足を滑らせるように互いに間合いを図る。雷撃系は機動力に優れた属性だ。そして攻撃力も高い。雷撃系術師同士の戦闘は、ほぼ一撃で終わることが多いそうだ。

「（早くなのは達のフォローに行ってあげたいし、この一撃で沈めてあげるよ）シュトルムシュタール、カートリッジロード」

さらに魔力と神秘を増加させて準備万端。ソアラが突撃槍を持つ右腕をグッと後ろに引き、開いた左手の平をまっすぐ前に突き出す構えを取った。私も同じ構えを取って、グッと軸足に力を込める。そして地面を蹴って、ソアラへと突っ込んだ。

「ジャヴェッロット・トゥオーノ！！」

――パンツァーガイスト――

突撃槍を突き出すと同時に黒雷の槍を射出してきた。私は全身を魔力で覆って防御力を上げて、顔が地面スレスレになるまで前傾姿勢

になって雷槍を躱す。

「威風・・・疾雷！！」

ソアラの懐に入りこめたその瞬間に、"シュトルムシュタール"全体を覆う風を爆風として石突側から放ち、その推進力で以て無理やり体を引き起こし、突き出されたままの突撃槍に雷撃付加の刺突攻撃を打ち込んだ。

「あ・・・！　うぐっ！」

私の一撃で突撃槍が空高くにまで弾き飛ばされた。勢いの止まらぬ"シュトルムシュタール"を無理に制止するような真似はせず、引き上げられた体を捻ってソアラのお腹に後ろ回し蹴りを打ち込んだ。小さな体だから面白いほど蹴り飛ばされたソアラだけど、普通に着地してるところを見ればやっぱりダメージは低いみたい。

「ようやく雷獣どもを処理し終えたぞクラリス！」

そんなソアラの頭上から小さな姿になってるナデシコが降って来て、直前で本来の巨大な体に変身。両前脚でソアラをドォーン！と潰した。何やってんの！？って怒りそうになったけど、ソアラの防御力からして効いていないんだろうな～って、すぐに冷静になった。

「ナデシコ。チーターとの戦い、大丈夫だった？」

「ふんす！　速さは厄介じゃったが、ビリビリは肩こりに効いたぞ」

肩ってどこだろう?とは思ったけどツッコまず、とりあえず「ソアラはどんな感じ?」ってナデシコの大きな前脚の下に居るあの子のことを聞く。ナデシコは「うむ。逃れようと足掻いておるな」ってニシシって歯を剥いて笑った。

「防御力はあっても、レオンほどの膂力はないのか。じゃあバインドを用意するから、私の合図で手をどけて」

「承知した」

念のためにカートリッジをさらにロードして、捕獲輪(バインド)を準備・・・完了。そして、いざっていうところで、「ぇぐ・・・!?」と私は苦悶の声を出した。私の胸から生える半透明の腕と、手の平に浮かぶ薔薇色に輝くリンカーコアが目に入った。

「クラリ――むおぅ!?」

「な、ナデシコ・・・!?」

ナデシコの胸のところからは、ナデシコのサイズに合わせたのか巨大な半透明な腕が飛び出して、白く輝くリンカーコアを取り出していた。

「「あぐぅぅぅぅ!!」」

強烈な胸痛が襲ってきて、私とナデシコはその場で蹲った。私のリ

ンカーコアの輝きが徐々に失われていくにつれ、私の体からも魔力が無くなっていく感覚を得る。

「ごめんなさい、クラリス、それに召喚獣ナデシコ。あなた達の魔力、頂戴します」

ソアラのそんな謝罪を耳にしてすぐ、私の意識は途切れた。

Ｓａｇａ２２－Ｃ真実への扉～Ｔｈｅ　ｌａｓｔ　２　ｓｔｅｐｓ～

†††Ｓｉｄｅスバル†††

アリサさんのそっくりさん、名前をフラム・ザ・リベンジャーさんとの戦闘を任されたあたしとティアは、ラスティアって名乗った"Ｔ・Ｃ・"メンバーの女の子と戦ってるアリサさんとミヤビさんの邪魔にならなように、少し離れた場所で交戦中だ。

「ミラージュシュート！」

ティアナが両手に持つ"クロスミラージュ"２挺と、周辺に展開してる魔力スフィアから魔力弾が２０発以上と発射された。アリサさんの"フレイムアイズ"と同じ形をした片刃剣や小型のシールドを展開して、フラムさんはティアの弾幕を迎撃する。

「む？　放たれてくる魔力弾の中には幻術が紛れているでありますな」

片刃剣で１発の魔力弾を斬り払おうとしたフラムさんは、斬り裂いたはずの魔力弾がすぅっと消滅したことに少し驚きを見せたけど、すぐに「ただ、魔力の密度を見ればいいだけであります」って、本物の魔力弾に対しては小型シールドの連続展開で防御しながら、あたし達の元へ駆けて来る。

「スバル！」

「うんっ！」

右腕に装着した"リボルバーナックル"に装弾されてる神秘カートリッジを1発ロードして、あたしの魔力にシャルさんの神秘を載せる。練習の時も感じていたけど、リンカーコアが暴走してるような感じがちょっと苦しいんだけど、それ以上に何でも出来そうってあたしを昂らせてくれる。

『かく乱するわ！』

――ダンシングバレット――

「シューット！」

新しく生成した魔力スフィアから発射される9発の魔力弾。フラムさんは足を止めることなく「無駄であります」って迫りくる魔力弾をまた連続シールドで防御しようとしたけど、魔力弾はシールドに着弾する直前に軌道を変更。ほぼ直角に曲がって、シールドを回り込んでフラムさんに着弾した。

「のわっ！？　のわわっ！」

「今よ！」

≪Ｍａｃｈ　ｃｈａｒｇｅ≫

"マッハキャリバー"のローラーが勢いよく空転してからのダッシュ。フラムさんは「鬱陶しいであります！」って片刃剣やシールドで魔力弾を迎撃しようとするけど、魔力弾はそれを軽やかに躱してフラムさんに着弾していく。

「リボルバーキャノン！」

「おぶっ！？」

高速回転させたナックルスピナーが生み出した衝撃波を拳に乗せて打ち込む一撃を、フラムさんのお腹に打ち込んだ。外見が色違いなアリサさんだからちょっと抵抗があったけど、交戦前にアリサさんから、手加減しなくていいわよ、って言われたから・・・うん、全力で打ち込んでみた。殴り飛ばされたフラムさんは空中で体勢を立て直してから着地。片刃剣を石畳に突き刺して制動をかけて止まった。

「あいたた。むぅ、やはり・・・」

「・・・あの、さっきからフラムさん、別のところ・・・アリサさんとミヤビさんに気を向けてますよね・・・？」

割と気になってた。フラムさん、あたしとティアと交戦開始する前からチラチラとアリサさん達の方を気にしてるな～って。

「・・・少し、手合わせをこのままお願いするであります。話はそ

の最中にするであります」

フラムさんはそう言って、あたしに向かってきた。そして振りかぶってた片刃剣を振り下ろしてきたんだけど・・・。

『（遅いし単純な剣筋。やっぱ全力じゃないよね・・・）ティア』

『ええ。聞こえていたわ。罠の可能性もあるけど、とりあえず付き合いましょう』

そういうわけで、フラムさんと全力じゃないけど、それなりに本気での戦闘を行うことに。振り下ろされた片刃剣を半身で躱して、即座に"リボルバーナックル"でカウンターを狙う。フラムさんはあたしの懐にグイッと体を潜り込ませることで、あたしのカウンターを回避。

「おぬしの言う通り、私の意識はアリサ達に向いているであります」

「うわっ！」

懐に入ってきたフラムさんはそのままショルダータックルして、踏ん張り切れずにあたしは後退させられた。そこに追撃の横薙ぎの斬撃。魔力も付加されてないものだけど、念のために防がずに回避を選択してしゃがみ込む。頭上を通り過ぎたことを確認してから曲げてた膝を勢いよく伸ばして、フラムさんのお腹に頭突きをかます。

「おふっ。けほっ。我らの任務は研究所から魔力保有物の回収の他

に、高位魔導師からリンカーコアの奪取というものがあります。・・・っと、ほらほら、怪しまれないように攻防でありますよ」

「なるほど。だからアリサさんとミヤビさんを見て、いつ奪えるかのタイミングを計っていたと・・・？」

――ガンブレイズアサルト――

「というか、監視されてるの私たち？」

「正確にはおぬしらではなく、我われ近衛以外の兵の仕事ぶりを、であります」

ティアの誘導操作弾１８発がフラムさんに向かって来る。あたしは邪魔にならないように一旦距離を取った。フラムさんはステップを踏むように回避していくからその隙を突けないかなって考えて、なおも続く弾幕の中を突っ切る。

「でぇぇぇぇい！」

「おっと、甘いであります」

あたしはフラムさんに最接近して中段蹴りを繰り出す。あたしの蹴りを片刃剣の腹で受け止めて弾き返したフラムさんは即座に反撃の振り下ろしをしてきたけど、あたしは左裏拳で弾き返した。

「話を戻すでありますよ。前者は王と参謀からの厳命であります。

しかし後者のリンカーコア奪取は、参謀より承った命令であります。が、王はその命令に対して、あくまで無理せず可能であればと、消極的な指示でありました。しかし、ラスティアを始めとした姉妹たちは王の子らということもあって、親である王が魔力を望まれていることで、何としてでも奪取しようと執拗に狙ってくるはず。それを阻止したいのであります。あ、魔法も混ぜてほしいであります」

――アトロポンカ――

――ミスティックスナイプ――

アリサさんのバーニングスラッシュと同系統魔法、デバイスに炎を纏わせての斬撃を繰り出したフラムさん。あたしが何かをするより先にティアの精密狙撃が片刃剣を弾いた。

「阻止って、どうしてですか？　Ｔ・Ｃ・のリーダーが消極的なのも変だし、それに・・・！」

――ディバインバスター――

「それに、参謀のリンカーコア奪取命令を、リーダーがちゃんと却下しないとダメじゃないの？　それだけで済む話じゃないの？」

――クロスファイアシュート――

「王には王で、途轍もない苦悩があるのでありますよ。まぁその話はまた後程、みなが合流してからにするであります」

――エレンスゲ――

――ウイングロード――

あたしの近接砲撃を躱した後、フラムさんは全身に炎を纏わせて鳥になると、追撃としてティアの放った魔力弾幕を真っ向から突破することで対処した。フラムさんはそのままあたしに向かって来たから、帯状魔法陣の道を展開して空に上がる。

「むっ！　ワイヴァーン！！」

あたしの足元を通り過ぎたフラムさんは、炎の鳥に利用していた炎を片刃剣だけに纏わせる。そしてあたし達に向けてじゃなくて、ラスティアと交戦中のアリサさん達に向かって三連斬撃として放った。高速で迫ってきた炎の斬撃３つをアリサさんとミヤビさんが躱すと同時、アリサさん達がたった今まで居た空間から半透明の腕が２本と伸びてきた。

「な、何アレ・・・！？」

「腕！？」

「スバル、ティアナ！　手伝ってほしいであります！　ラスティアと、あの腕の使い手のレイルからアリサを護るであります！」

「え？　あ、はい！・・・って、ミヤビさんは？」

「ディアーチェ陛下からは、チーム海鳴メンバーを最優先に守れ、と指示を受けている故。ミヤビはついでであります」

そう言ってアリサさん達の方へ駆け出すフラムさんに、あたしとティアは「ディアーチェって誰？」って首を傾げた。えっと、とにかく、レイルって人がアリサさんとミヤビさんの魔力を奪おうとしてるってことは何となく判ったから、あたしとティアもフラムさんに続いて駆けだした。

「奇襲とは上等じゃないフラム！　まとめて相手してやるわ！」

「アリサ先輩、それは少し大変です。私と先輩はラスティアひとりに苦戦しているので・・・」

「少し待つでありますよアリサ！　あと、動き続けるであります、狙われるでありますよ！」

「はあ！？」

「おそらくアレですよ、アリサ先輩」

「何よ、あの腕？」

何もない空中から半透明の腕が生えてるのを見て、怒り心頭だったアリサさんも冷静に。腕が消失すると、フラムさんが「いいから動くであります！」って、アリサさんを勢いよく突き飛ばした。直後

に今いたところに、さっきみたいに半透明の腕が生えた。それでアリサさんも「新手ね！」って納得して、立ち止まらないように動き始めた。

「ちょっと！　さっきから何なのフラム！　敵を庇ってばかりじゃない！」

「レイルが仕掛けてきたということは、研究所から魔力保有物を回収する任務が完了したことを示すであります。その瞬間、おぬしらとの協力関係は終わったのであります。これより紫天一家特攻が一、フラム・ザ・リベンジャーは、管理局側に付くであります！」

≪Ｆｌａｍｂｅｒｇ　ｆｏｒｍ≫

"Ｔ・Ｃ・"のラスティアに敵対宣言したフラムさんは、片刃剣を半実体化した炎が波打つ剣身の大剣（フランベルクフォームって聞こえた）に変形させた。フラムさんのその宣言の間にあたしとティアは、アリサさんとミヤビさんにフラムさんの目的を簡潔に伝えた。

『――なるほど。とりあえず、フラムたち紫天一家は期間限定の敵で、今は仲間なわけね』

『信じてもいいのでしょうか？　私は紫天一家の人たちのことを知らないので・・・』

『まぁね。詳しいことはまた後で話すけど、あの子たちはあたし達チーム海鳴の友達で戦友なのよ。だからＴ・Ｃ・にいることが本当

に不思議で、信じられなかった。・・・詳しい話を聞かないといけないのだけど、今は信じて協力するわ』

『・・・アリサ先輩がそう仰るのであれば、私も信じましょう』

『ありがと。しっかし、んー・・・つうか、これはもう、いよいよT・C・の王が誰だか判ったかも』

『『『え・・・！？』』』

フラムさんとラスティアが戦闘開始したのを横目に、止まない半透明の腕の襲撃を回避をし続けてるアリサさんとミヤビさんの念話に耳を傾けていたら、アリサさんが突然"T・C・"のリーダーの正体が判ったって言った。

『あくまで推測よ。だから本部に帰ってからみんなの前で話すわ。今はラスティアと、レイルとかいう姿隠してあたしやミヤビの胸に腕を転送してくる変態をぶっ飛ばすわよ』

『『『了解！』』』

気にはなるけど、確かに長々と戦場で話を続けるわけにもいかない。まずはレイルって人を探すため、アリサさんの指示で　"クロスミラージュ"のカートリッジをロードしたティアは「フェイクシルエット・インクレース！」を発動した。神秘カートリッジで大幅に強化された幻術魔法によって、アリサさんとミヤビさん、あたしとティア、そしてフラムさんの幻がブワッと何十人と現れた。

「また幻術によるかく乱・・・！　」

「お、おお！？」

一度見てることでラスティアは驚くことなく、広域攻撃が出来る宝石を手元に取り寄せた。驚きを見せたのはフラムさんと、たぶん腕攻撃を中断した術者のレイル。アリサさんとミヤビさんとフラムさんの幻はラスティアに向かって、あたしとティアは自分の幻に紛れて散開した。

『スバル。レイルって人を発見してもすぐに交戦しないように。アリサさん達に指示を仰いでから対処よ？』

『うんっ！』

ティアは幻術の維持と再発動のために身を隠さないといけないから、あたしは単独でラスティアからの流れ弾に注意しながら幻と一緒に結界内を駆け回った。結界は直径３㎞だ、そんなに広くない。ただ、さすがに幻に紛れていてもあたしの動きはレイルから見て怪しいって思われたらしくて・・・

――フィストカノン――

「腕・・・！？」

複数の半透明の腕が砲弾みたく降り注いできた。スピードを落とす

ことなくジグザグに駆け抜けつつ、「一瞬、魔力反応が・・・・！」
した方へ向かう。

――ハンマーアーム――

「わっとと！」

ルシルさんの銀の巨腕イロウエルみたいな半透明の腕が出現。あたしを薙ぎ払うかのように振るわれてきたから、「ウイングロード！」を発動して空へと上がる。そんなあたしを叩き潰そうと新しい腕が生み出されては振るわれてくるけど、ウイングロードの軌道を変えて回避。

「居た！」

４つある研究棟の屋上、給水タンクの上に立ってる男の人を発見。見た限り２０代半ばで、円い眼鏡を掛けた優しそうな男の人だ。胸の前には、八神司令の"夜天の書"のような宙に浮く分厚い本が１冊。

「あ、見つかってしまったか。まぁ始めから隠れるつもりもなかったけどね」

「あなたがレイル・・・さんですね？　管理局です！　執行妨害などいろいろな罪状で現行犯逮捕します！『レイルを発見しました！第３研究棟屋上の給水タンクです！』」

「面白いことを言う子だね。君の魔力量はそれほど多くないようだけど、ついでに貰ってあげようか？」

――エレンスゲ――

アリサさん達にそう報告すると、「私が戦うでありますよ～～～～！」っていうフラムさんの声がフェードインしてきた。炎の鳥化してるフラムさんが、「フィストカノン」って腕を飛ばすレイルに突っ込んでく。フラムさんは体を傾けて腕を躱し、レイルにそのまま突撃しようとしたけど・・・。

――パームシールド――

レイルを護るように大きな右手の平が創り出されて、炎の鳥のくちばし――大剣の先端を受け止めた。そしてフラムさんを握り潰そうと指を曲げ始めたから、あたしはフォローになればいいと考えて衝撃波、「リボルバーシュート！」を放って、中指が完全に曲がるのを遅らせる。

――ミスティックスナイプ――

続けてティアの狙撃が人差し指と親指に着弾して、ガツン！と大きな音を立てて弾いた。その間にフラムさんは「感謝するでありますよ！」って親指側の方から離脱。レイルから距離を取りつつフラムさんは大剣の剣身である炎の半実体化を解除して・・・

「アンフィスバエナ！！」

炎の剣状砲撃としてレイルに放った。

†††Ｓｉｄｅスバル⇒シグナム†††

砕け得ぬ闇事件の頃に理解はしていたが、やはり紫天の盟主ユーリ・エーベルヴァインは・・・強い。アギトとユニゾンし、戦闘力を引き上げた私、ルシル亡き今チーム海鳴の単独最強であるアインス、そしてザフィーラを相手にしながらも全くと言っていいほど、ユーリが沈む気配はない。

「エターナルセイバー！」

ユーリの背後に浮かぶ２つの靄――魄翼を長大な炎の直剣と化し、右剣を私、左剣をアインスに向かって振るってきた。私とアインスはそれぞれの回避機動で躱し、ザフィーラが「牙獣走破！」と、魔力を纏わせた状態での突進蹴りでユーリへと突撃。

「あぶっ！　でも効きませんよー！」

ザフィーラの強烈な蹴りを腹に受け、踏ん張り切れずに蹴り飛ばされながらもすぐに体勢を立て直したユーリ。その凄まじい魔力量と戦闘能力で、かつて我々を苦戦させたあの子だが、その分弱点も存在している。魔法発動中および直後はその場から動けずないというものだ。

素の防御力が高いため苦労はするが、回避に専念し、あの子の攻撃を躱すと同時に反撃すれば、ほぼ間違いなく攻撃は入る。あとは持

久戦だ。かなりの綱渡りだが、撃墜まで持ちこたえることが出来れば我々の勝ちだ。

『なぁシグナム！　コイツ、以前はどうやって勝ったんだよ！？　マジで強すぎんだろ！』

私の内に居るアギトがそう声を荒げた。当時はまだアギトはプライソン一派に居たからな、知らないのも当然の話だ。私はそんなアギトに『ああ、強い。何せルシルを一撃で撃墜寸前に陥らせたことがある』と、あの頃に驚いたことを教えた。

――アルゴス・ハンドレッドレイ――

『マジか！？　子どもの頃とは言え、それをたった一撃！？　ルシルは単独でエグリゴリのグランフェリア？を倒したんだろ！？　ありえねぇ！』

『言いたいことは解るが、とにかく今は戦闘に集中だ』

拡げられた魄翼の面より何十発と言う魔力弾幕が放射状に発射された。我々は弾幕の中を翔け、回避に専念。その中で私は"レヴァンティン"のカートリッジをロード。右手に"レヴァンティン"を、左腕に炎の剣を纏わせ、徐々にユーリへと近付いていく。

『多弾砲撃を放つ！　ザフィーラは注意！　シグナムは合わせてくれ』

『『了解！』』

「ナイトメアハウル！」

アインスが空に翔け回りながら設置していたのは大き目の魔力球、その数８基。そして最後にアインス自身から１発の砲撃が放たれ、それに連動して８基の魔力球も砲撃としてユーリに向かった。攻撃直後だったあの子は、狙い通りに回避も防御魔法も出来ずに８発全弾の直撃を受け、魔力爆発に呑まれた。

「『火龍一閃！』」

間髪入れずに左腕より伸びる炎剣を大きく伸長させてから振り下ろした。私の斬撃を受け、魔力爆発が収まる前に火炎爆発にユーリが呑まれる。直撃した手応えはあったが、通用したかどうかは判らん。

『やはり近接ではなく中遠距離からの攻撃の方が、通用しているかどうかは別として通るな』

『私とザフィーラが合流するまで、お前は直接殴りに行っていたのか・・・？　無謀が過ぎるぞ』

『私の有する防御貫通系は、近接の方が効果を高いからな。・・・当時に比べて私の地力ははるかに強化されているから、何とかなると判断したのだが・・・。甘い考えだった』

そう言って悔しがるアインスや私たちの視線の先、無傷でその幼い

姿を再び見せつけてきたユーリは「いきますよぉー！」と、気合を入れた。

――ヴェスパーレッドモード――

ユーリの防護服が赤色に染まり、体の一部に紋様が浮かび上がった。その形態を知る私とアインスとザフィーラは「な・・・！」と絶句する。事情を知らないアギトが『え、なに？　なんかヤバいの！？』と困惑した。

「ヴェスパーレッドモード。早い話が魔力出力を上昇させた形態だ」

『・・・って、ことは、だ。ただでさえ強ぇのに、さらに強くなるって！？　冗談だろ！？』

「シグナム、来るぞ！」

――アルゴスハンドレッド・ファイア――

ユーリの魔力が膨れ上がり、足元にベルカ魔法陣を展開した。そして大きく拡げた魄翼より火炎砲撃が何十発と発射された。この多弾砲撃の欠点はロックオン機能はなく、ランダムに放射状に発射されるというもの。ゆえに避けやすい。

「いっきまーーす！」

――クリムゾンダイブ――

全身だけでなく大きく拡げた魄翼もすべて炎に呑まれ、巨大な炎の鳥となって突撃してくるユーリ。突撃速度も十分であり、その巨体から周囲へまき散らされる炎の羽根もまた危険だ。紙一重ではなく大きく距離を開けるようにして我々は回避した。

「遠き地にて、闇に沈め！　デアボリック・エミッション・ドッペルト！」

消失していく炎の中から姿を見せたユーリを左右から挟み込むように発生した巨大な魔力球。バリア発生阻害効果を持つ空間攻撃だが、「む。やはりダメか」と残念がるアインスの言葉通り、ユーリは1つとなった魔力球の直上より飛び出してきた。我々は次の攻撃に備え、反撃用の魔法を準備したところで・・・。

「っ！　ディアーチェ！！」

ユーリが声を荒げ、ディアーチェの方を見た。つい先ほど見た限りでは、主はやては"フォートレス"を失い、"ストライクカノン"一基を手に単独でディアーチェと闘っておられた。が、ユーリの強化形態の発動の影響で私は少し意識を外してしまっていた。その僅かな間に主はやてとディアーチェの戦闘に何かあったのかと、私も視線をそちらに向けた。

「どういう状況だ・・・？」

「ディアーチェが、我らが主の手を引いて逃げている・・・？」

『なぁ。はやての背中に向かって何か出てきてね？』

「あの半透明の腕は・・・！」

何も無い空中に突如として出現するのは、空の色に紛れてよく見えないがアインスの言う通りなら腕なのだろう。その腕は主はやてを狙うかのように、動き回る主はやての背後を狙って出現している。

「皆さん！　これより私とディアーチェはＴ・Ｃ・より完全に離脱し、Ｔ・Ｃ・近衛兵レイルからはやてを護ります！　ご協力を！」

そう言ってユーリは、主はやてとディアーチェの元へ向かう。私とアインスとザフィーラは顔を見合わせ、事情は判らないがその真剣さから「行こう！」と、ユーリに続いた。そして「主はやて！」と合流を果たすのだが、ディアーチェが「止まるな子鴉！」と叫び、自分の胸にグイッと抱き寄せた。直後、主はやてが先ほどまで居た空間に半透明の腕が出現、すぐに消失した。

「レイルは、貴様の膨大な魔力を狙っておるのだ！　立ち止まった瞬間、リンカーコアを背後から抜き取られるぞ！」

「どうゆうことなん！？　急にこんな・・・！」

「詳細は後だ！　今はこれだけを聞いておけ！　我らの仕事は、Ｔ・Ｃ・の近衛が研究所から魔力保有物を回収するまで、貴様らを足止すること！　もう１人の近衛が子鴉のリンカーコアを狙ってきたと

いうことは、回収担当の近衛が任務を終わらせたことを意味する！」

時間稼ぎをされていることは察していた。かつてのユーリの実力を思えば、あの子が全力を出していれば我々が今なお無傷でいられるはずがない。当初の我々の作戦では、時間稼ぎ要員を早々に打ち倒して本命を叩くというものだったが、ユーリという厄介な要塞戦力の登場で見事に失敗してしまったようだ。

「ディアーチェ！　私がレイルを探してきます！　皆さんのことはお任せです！」

「ああ、任せるぞ！　そのまま倒してしまえ！」

「りょーかいです！」

ユーリが主はやてのリンカーコアを狙う近衛、レイルという者の捜すために急上昇しつつ研究棟の方へと向かった。我々も手伝うべきかどうか迷ったのだが、主はやてが狙われている以上は離れるべきではないと判断する。

「・・・よいか？　我らは貴様を始めとしたチーム海鳴を近衛から護るためにやって来た。それがきっと、T・C・の王の為になると思うのだ。自ら絆を切り捨てておきながら未練からか、いざ参謀が立てたリンカーコア奪取案について許可も却下も下さず曖昧にし、近衛出撃後に我らだけに無理に奪わなくていいと言った、迷ってばかりのあの哀れな男の心を救うのだ、と・・・」

「・・・魔力保有物、リンカーコアなどの魔力がたくさん要る。それやのに狙われてるのは人間の私だけで、魔力生命体のアインス達はターゲット外。そんで、私らに関係はあったけど今はもう別れてて、私らチーム海鳴を傷つけたくはないと考えてはいる・・・。王の正体は、信じたくないようで、そやけどそうであってほしいような、複雑な気持ちやな・・・。まぁ推測があってればの話やけど」

あの傲岸不遜を地で行くディアーチェが、"T・C・"の王のためにそこまで考え、行動していることに驚いた。ディアーチェがそこまで思い入れる"T・C・"の王とは一体・・・。その疑問は、主はやての言葉が晴らしてくれた。私の頭の中ではもう、"T・C・"の王の顔がハッキリと浮かび上がっていた。

「ディアーチェ。回収担当の近衛とは誰だ？」

「ナーティアだ」

「あの子か・・・」

「アインスはT・C・の近衛のことを知ってるんやな？　やっぱり、アインスは元エインヘ――」

――真技・瀑波大帝国（フラッド・エンパイア）――

主はやてがそこまで言いかけたところで、突如として空気が振動した。すると至る所から激しい水柱が立ち始めた。間欠泉のごとく噴き出す水柱からはシャワーのように水が降り注ぎ、その水飛沫に触

れた個所がズキズキと痛みだす。間違いなく、これも攻撃の一種だ。

「始まったな！　おい貴様ら！　近衛のナーティアは水を操る魔術の使い手だ！　子鴉は、立ち止まらぬように常に動き続けろ！　立ち止まったが最後、リンカーコアを抜かれるぞ！」

「わ、判った！　てゆうか、もうさっきからうろうろ動き続けてるけどな！」

今は収まっているが腕による奇襲を警戒して空中を右往左往しておられる主はやてのためにも、早々にレイル、ナーティアという新手を撃破しなければ。そう考え、周囲警戒を任せていたザフィーラに続いて私も周囲警戒を行おうとしたとき、１つの研究棟の４階部分が爆炎で吹っ飛んだ。

「ユーリがレイルを見つけたようだな。対レイルのためにヴェスパーレッドモードになったのだ、このままあやつが引き受けてくれよう。我らはナーティアを討つ。アレは転移するかの如く水の中を高速で移動する。結界内はすでに湖のようになっておるから、どこから奇襲を受けるか判らん。注意せよ」

――蠢縄洗辱手（ヒュミリエーション・バインド）――

「皆、攻撃来るぞ！」

ディアーチェがそう言った直後に、足元に広がる湖より我々に向かって水の縄が何十本と伸びてきた。アインスが主はやてを横抱きに

抱え上げ、「捕まるな！　魔力を吸収されるぞ！」と我らに警告した。やはりアインスはナーティアのことを知っているようだ。その理由についても、"Ｔ・Ｃ・"の王の正体が奴だとすれば説明が付く。

「防御ではなく迎撃せよ！　捕まったら最後！　防護服を構築している魔力をも吸収され、素っ裸にされるぞ！　子鴉！　貴様は氷結系の魔導があったろう！？　アレを使え！」

「アカンよ！　さっきの戦闘中にも言うたけど、私はアームドデバイス持ちやないから魔術師化できひん！　そやからストライクカノンを使ってたんやし！　火力を底上げしてくれたフォートレスは王様に壊されるし！」

「ならばユニゾンしろ！　ほら、あれだ！　逆ユニゾンとかいう！　あれであれば、貴様をレイルの腕から隠せるうえ、戦力として役に立たんポンコツである貴様を親鴉の戦力強化として活かせる！」

「あーん！　事実やけど王様ひどいー！」

「あ、あの、今は言い争いをしている余裕は・・・」

言い争う主はやてとディアーチェにアインスがオロオロする中で、私とザフィーラは迫りくる水縄を中遠距離魔法で迎撃する。流動する水であるため、当たるかどうかがかなり際どい。

「我らで時間を稼いでやる！　早々にユニゾンを果たせ！」

――広域剣兵召喚レギオン・オブ・ドゥームブリンガー――

ディアーチェの剣状の広域多弾射撃が水縄を撃ち抜いていくが、魔力で構築されていることで撃ち抜いたはずの水縄に吸収されていく。これは本体を叩かねば追い込まれるな。とにかく主はやてとアインスに近付けさせないように「空牙！」と魔力刃を飛ばして斬り捨てていく。

「どっぱーん！」

そんな時、付近に巨大な水柱が立ち上り、そこから1人の少女が飛び出してきた。10歳くらいの小柄な体格で、飛び出した際に離れたボーラーハットを掴み取り、「魔力、頂戴するよ！」と長い水色の髪を払ってからかぶり直した。

「ナーティア！」

「ディアーチェ。・・・ま、裏切っちゃったんだからユーリともども消えてね♪」

――九頭海龍神（ディセント・ミソロジー）――

「大丈夫！　あなた達を構築している魔力はきちんと回収して、王のために活かすから！」

――飛翔瀑水珠（スプラッシュボム）――

――流海水撃砲（アクア・ストリーム）――

ナーティアの周囲に7つの水龍が湖から伸びてきて、その大きな口を開けた。ナーティアの前に居る4つの龍の口からは水の砲弾が何十発と放たれ、後ろに居る残りの3つの龍の口からは砲撃が放たれてきた。

「『氷結の息吹（アーテム・デス・アイセス）！』」

その攻撃に対して放たれたのは、主はやてがユニゾンした状態のアインスの氷結砲撃。氷結砲撃を受けた水の砲弾と砲撃は凍りついた。しかし砲弾は完全に凍結することに成功したが、氷結効果は砲撃の水圧には負けてしまい、氷結砲撃は押しのけられた。だが、その一瞬の間に我らは回避することが出来た。

「やるじゃん」

そうは言うもののニヤリと楽しそうに笑うナーティアに、我々は攻撃を開始した。

Ｓａｇａ２２－Ｄ真実への扉～Ｔｈｅ　ｌａｓｔ　１　ｓｔｅｐｓ～

†††Ｓｉｄｅすずか†††

"Ｔ・Ｃ・"のメンバーとして再会することになった"スキュラ"姉妹と交戦していたら、プライソンの手によって殺害されたはずの「ドクター！？」と、闇の欠片事件で初めて出会って、砕け得ぬ闇事件で友達になれた私のそっくりさんの「アイル！」が、私とチンクとセッテとディエチの前に現れた。

「ドクター！　本当にドクターなの！？」

「待て、ディエチ！・・・ドクターは亡くなったのだ！　遺体も確認した、葬儀もあげた！　みなで泣いた！　ドクターは、自らのクローンを造るような方ではない！　あなたは一体だれか！？　私たちの愛するドクターに扮し、娘である私たちの前に現れるなど言語道断！」

怒りに任せて声を荒げるチンクは８本の短剣を両手の指に挟み込んで、いつでも投擲できるように構えた。チンクが感情を爆発させてるから私たちは逆に冷静になれてる。私はチンクの前に躍り出て、「まず、アイル。久しぶりだね」って、浮遊してる大剣に背中を預け、腕と足を組んでるアイルに声をかけた。

「（ドクター？も、アルファ達も臨戦態勢を解除しているし・・・）

マテリアルって成長するんだね。ちょっと驚いちゃった」

「そうですわね。私たち自身も驚いたものですわ。けれど、こうして成長できたおかげで私たち紫天一家は全員強くなれましたわ。ご覧になって。このスラリと伸びた手と足、異性・同姓問わず魅了するスタイル。我ながら見惚れてしまいますわね」

（髪や瞳が色違いで、もう今の私とは髪形や防護服が違う。それでもやっぱり顔立ちは同じだから自分がナルシシズムに浸っているように見えて、ちょっと複雑だよ・・・）

セミロングヘアで結んでもいない私の髪と違って、アイルの真っ白な髪は太腿まで伸びるロングヘアで、髪形はハーフアップ。防護服は、昔は同じミニ丈のスカートだったけど、現在の私のものは膝が隠れるミディ丈で、アイルはものはふくらはぎより下でくるぶしよりは上の長さのロング丈。あと、ロングコートを着用したままの私と違い、アイルは完全に無くしている。代わりに頭に付けたウェディングベールのような魔力膜が、ショールのような形でアイルの両腕を覆っている。

「だけど、胸のサイズは私の方が上だね。基が私の身体なのに」

「・・・」

ほんの少しアイルのこめかみが引きつくのが見て取れた。そして小さく、ふぅ、と息を吐いて「そういうすずかは、少し太りましたわね。運動してますの？」ってニッコリ笑ってきた。今度は私が無言

になった。図星だった。研究・開発の仕事をしていると、どうしても運動が疎かになっちゃうから・・・。

「で、でも、肥満じゃなくて平均だし！」

「わ、私だってそんなに小さくありませんわ！」

私はお腹を、アイルは胸を隠すように両腕を持っていく。と、そんな私たちのやり取りにチンクが「すずか。遊んでいる暇はないんだが？」って、怒りを含ませた声で注意してきた。私は「ごめん」とチンクに振り向いて一言謝ってから、アイルに向き直った。

「アイルが偽者じゃないのは間違いない。私にとってアイルはトラウマじゃないし、何より防護服がオリジナル仕様に変わり過ぎているし、受け答えが完全にアイルだもん」

「彼女、アイルという女性がすずかにそっくりなのはこの際は後回しだ。私が、私たちが知りたいのは、ドクターの姿をした奴が何者かということだ」

チンクの言葉にセッテとディエチが首肯した。そんな3人にドクターと思しき人は「少し待ってくれたまえ。トーレ達を置いて来てしまったからね」と研究所の方を見た。戦意がないことは察しているから私も倣って研究所の方を見た直後、4棟ある内の1棟の2階の一部の窓が割れて、そこからトーレ、ライティングボードに乗ったウェンディとクアットロが飛び出してきた。

「あー、あとは、ウーノとドゥーエ、セインとオットーとディード、ノーヴェも居ないのだね。確か、セイン達はフライハイト家の皆さん、ノーヴェはチンク達と一緒にナカジマ家のお世話になっているのだったね」

そう言ってドクターは3つのモニターとキーボードを展開してキーを打ち始める。私たちに合流したトーレとクアットロとウェンディが、ドクターの姿に目を見開いて「ドクター・・・！？」と絶句。ドクターは微笑みながら「久しぶりだね。少し待ってくれたまえ」と片手で制して、通信を繋げた。通信先はもちろん・・・。

『『ドクター！』』

まず本局スカラボでお留守番のウーノとドゥーエの2人。モニターに被り付いているかのような2人の顔のドアップが1つのモニターに表示された。続けて別のモニターに映ったセインが『えーーー！？』って絶叫。側に居るオットーとディードも目を丸くして驚いてたんだけど・・・。

（ヴィヴィオ達も一緒なんだ。まぁ護衛だから当然だけど・・・）

モニターの端っこには私服姿のヴィヴィオやフォルセティ、そのお友達の姿があった。トレーニング用品店の前みたいだし、お買い物に来たんだね。最後のモニターに映ったのは、ナカジマジムの経営者であり会長として引き続きヴィヴィオ達を指導しているノーヴェで、『うえ！？　ドクター！？』って驚きを見せた。

セイン以下のセッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、

ディードは、プライソンに捕らわれていた時期が長かった。だけどその中で、僅かの間でもドクター達と過ごした時間を大切な思い出として持っているから、こうしてドクター？との再会には驚きや嬉しさを見せている。

「一先ず私が本人か偽者かで、目の前に居るトーレ達が混乱しているから、その説明からさせてもらうよ。簡単に言うと、本人ではない。本当の私はプライソンの手によって殺害されてしまったからね」

『で、では！　あなたは一体・・・！？　ドクターの仕草、口調！　偽者と断ずるにはあまりにも・・・』

「待ってくれ、ウーノ。それを話す。・・・あくまでこの体は本物ではないということさ。意識・人格・記憶、すべてはジェイル・スカリエッティそのものと言える」

「ということは～、クローンですかぁ？」

「それも違う。変装した偽者でも、クローンでもない、ゾンビでもない、もちろん亡霊でもない。だが私だ、ジェイル・スカリエッティだ。ここまで言ったら、すずか君であればたどり着けるのではないかね？」

ここで私に話が振られて、シスターズみんなの視線を一斉に私に向いた。ドクター？の言葉を反復しようとしたんだけど、アルファがドクター？に対して「レイルに気付かれたわ。すぐにでも来るわよ」って報告したことで、私の意識は逸れた。

「そうか。すまないが娘たち、そしてすずか君。私だけではなくスキュラのことも気にはなるだろうが事情が変わった。Ｔ・Ｃ・のリーダー、王と呼ばれる彼の子ども達、近衛兵がやって来る。狙いは・・・・――」

――ガーネットバインド――

「へ・・・・？」

ドクター？の右手に装着されてるグローブ型デバイス（名前は確か、アナンシだったはず）の五指の先端に装着されてる鉄爪から伸びてきた赤いエネルギーの絃がぐるぐると私の腰に巻き付いてきたかと思えば、グイッと引っ張られてその場から離れさせられた。

「すずか君、君のリンカーコアだ！」

――スティールハンド――

「腕・・・・！？」

私が今立っていた空間には半透明な人の腕がニョキッと生えていた。シャマル先生の転送魔法・旅の鏡を思い起こすまほ――魔術だ。そんな私のリンカーコアを狙ってきている腕に、トーレが一足飛びで接近して、右手首から展開されているエネルギー翼、「インパルスブレード！」で斬撃を仕掛けた。だけど、それより早く腕は消失した。

「っぐ！？」

かと思えば、すぐに出現してトーレの左脇腹に裏拳を打ち込んだ。よっぽどの威力だったみたいで、「トーレ！！」が何十ｍと殴り飛ばされた。

「すずか君！　君は立ち止まることなく動き続けるんだ！」

私を拘束していたバインドを解除したドクター？は、「シスターズ、スキュラ！　レイルを迎撃する！」と声を上げて、続けてこの場に居ないオットー達に「また後で話そう」と優しく微笑みかけてからモニターを閉じた。

「クアットロ、チンク、セッテ、ディエチ、ウェンディ、それにトーレ！　私のことを信じてほしいとは言わない。しかし、すずか君は護ってほしい！　彼女はスカラボにいなくてはいけない大事な女性なのだ！」

――フィストカノン――

ドクター？の頭上に出現したのは３０個くらいの半透明な腕。それらは握り拳をしていて、槍の穂のごとく下に向けて降り注ぎ始めた。

――メタルダイナスト――

――ローールバレル・バレットイメージ・インパルスバレット――

降り注ぐ腕からドクター?を護るように鉄のドームが作られて、さらにディエチの三連装ガトリング・"リレントスカノン"から放たれる何百発っていうエネルギー弾が、鉄のドームに着弾してヘコませていく腕を蹂躙していく。

「ほらっ！　あなたもボサッとせずに動き続けなさいな！」

「アイル！」

グイッと左腕をアイルに引っ張られたとほぼ同時、ドクター?の言った通り半透明の腕が私の立っていた場所に出現していた。アイルに手を引かれながら空を翔け続ける私は、「フォートレス！」の3つのシールドを背後に移動させた。これでリンカーコアを狙ってくる腕から自分を護ろうとしたんだけど、アイルは「無駄ですわよ」って言ってきた。

――スクイーズマターーーー

≪全シールドに異常発生≫

「え・・・？」

メインユニットからの警告音で気付いた。後ろを振り向いてみれば、3つのシールドが大きな半透明な手に捕まっていて、今まさにグシャグシャと握り潰されていた。アイルが「生物以外には容赦ありませんわよ、彼ら近衛兵は」って嘆息した。

「そう。つまりは裏切り者の君にも、僕は容赦しないということだよ」

「っ！」

「すずか！！」

直近から聞こえてきた若い男の人の声。アイルは私の手を離すと同時に肩を蹴っ飛ばしてきて、私とアイルは大きく距離を開けた。蹴られた理由はすぐに判った。私の背後を狙って現れた腕から助けてくれるため。だけど、肩を蹴った「アイル！」の左脚が私の代わりに腕に掴まれて、バキバキッと引き千切られた。

「問題ありませんわ！　この程度の損壊であれば、すぐに修復されますわ！」

引き千切られた箇所から漏れるのは真っ赤な血じゃなくて魔力だった。しかも新しく足が生成された。アイル達マテリアルは、シグナムさん達みたいな魔法生命体で肉体を得ていたはず。なのに今のアイルだと、まるで"闇の書"の闇の残滓、それか"エグリゴリ"のような純粋な魔力の塊・・・。あと・・・。

――変装した偽者でも、クローンでもない、ゾンビでもない、もちろん亡霊でもない。だが私だ、ジェイル・スカリエッティだ――

「（私ならすぐにたどり着ける、ドクター達の正体・・・）純粋魔

力の塊でありながら生命の形をした存在・・・。まさか！」

ある1つの可能性に思い至ったけど、それはありえないと切り捨てようとした。でも、もし遺体を用意できていたなら・・・。可能性は0じゃない。

「考え事は後にしなさい！」

「あ、うん！　ごめんね！　庇ってくれてありがとう！」

アイルの言う通り今はレイルさんを倒すため、私はメインユニット背面部のエネルギー翼展開機構を起動。一対のエネルギー翼を展開して、高速機動戦へと入った。

†††Ｓｉｄｅすずか⇒アルテルミナス†††

私の胸から生える半透明な人の腕。手の平には、私の魔力光である青緑色に輝くリンカーコア。"Ｔ・Ｃ・"の奇襲を受けて私、そしてセレスはリンカーコアを抜き出されていた。薄れゆく意識の中で、イリスを護るように現れた2人の少女を見る。イリスの話だと、赤い髪の子がアミタ、桃色の髪の子はキリエっていう名前で、昔に離れ離れになった友人らしい。

（Ｔ・Ｃ・の一員だって話だけど、イリスを護ってくれてるなら大丈夫か・・・）

でも、だからってこのまま寝てるわけにはいかない。リンカーコア

の光が弱まる中で生まれる激痛に耐えながらも私は両手を床について上半身を起こす。全身から魔力が消失していく感覚に怖気立つけど、必死に耐えて壁に肩を預け、ゆっくりと足を伸ばして起立していく。

「・・・っく」

ガクッと膝が折れ、その場にへたり込んでしまう。イリス達は半透明な腕だけじゃなくて、私たちが最初から相手にしてた雷撃女からも追い駆けられてる。セレスは完全に意識を失ってるようだし、私だけでも参戦しないと・・・。

――クスクス。ほらほら、私に体を預けてしまいなよ。今のあなたじゃ、あの女には勝てないんだから――

（また・・・あなた・・・！）

ホントに時々だけど、私の中のもう1人が自己主張してくる。殺せだとか滅ぼせだとか、物騒な意識を私に叩き込んできたり、私の体を乗っ取ってこようとしたり、かなり危険な存在。そんな彼女の名前はテルミナス。"T・C・"の幹部の1人だったフォードとの戦いの後、夢に出てきて初めて言葉を交わした。

「（まさか、本当に私の前世だったなんて・・・。絶対に明け渡すわけにはいかない。でも・・・）嫌、だけど・・・。力だけ貸して・・・」

――クスクス。私に体を預けるのは嫌。でも、力だけは貸してほしい。そんな都合のいいことが許されるって思う？――

（じゃあ要らないから、もう黙ってて）

再度足に力を込めて立ち上がる。いつの間にか腕も消えていて、リンカーコアが自然に胸の内へと戻っていくのを確認。小さな痛みはまだ続いてるけど、さっきまでの激痛に比べればマシになってる。だから少しずつ壁から体を離して、支えなく自力のみで立った。

（あとは、あの雷撃女をイリス達から引き離すだけ・・・！）

ゆっくり、ゆっくりと足を進める。イリス達は何も無い空間から出現する腕を掻いくぐって雷撃女に肉薄しようとする。アミタって子が必死に2挺の銃を盾にして、雷撃女の雷撃纏う打撃を防いでイリスをサポート。でも感電はしっかりしてるみたいで、受けるとビクッと体を跳ねさせてる。

――どうする？　あの様子だと、もって後2発。次は桃髪の人間が盾になるのね。ううん、ひょっとして真っ先にシャルロッテから潰されるかも♪――

（そんなことさせな――・・・その呼び方・・・！）

何故か引っ掛かったテルミナスのシャルロッテ呼び。イリスのことをシャルロッテって呼ぶ人は、新旧の間柄関係なくまずいない。古くからの知り合いや家族はイリスって呼ぶし、たとえシャルロッテ

の呼称を使うにしても、フルで言わずにシャルっていう愛称が使われる。シャル呼びをするのは、イリスが局入りしてから親しくなった子だけ。そこに私の前世、テルミナスは関係ない。だからテルミナスも私に倣ってイリスって呼ぶはずだ。それなのにテルミナスはサラッとシャルロッテって呼んだ。まさか、って気持ちが強くなる。

――あれ？　言ってなかったっけ？　クスクス。私、イリスっていう子の前世、シャルロッテ、それにルシリオンとも殺し合いをしたほどの仲なんだよ♪　クスクスクス――

（マジ・・・？）

私の考えを察したテルミナスがそう言ってきた。イリスの周りには、騎士シャルロッテと同じ魔術全盛時代を生きてた生まれ変わりが多く集まってるけど、まさか自分もそうだったなんて思いもしなかった。だったらなんで、私は魔術師化できないわけ？って沸々と怒りが・・・。

――魔術師？　この私を人間と一緒にしないでほしいね。この身はかつて、あらゆる摂理をも従えた世界救済のかｍ――

「「「きゃあああああ！」」」

イリス達の悲鳴に、私の意識はテルミナスからあの３人に向いた。３人は雷撃女と腕の攻撃に苦戦を強いられてる。その様子に焦りが募るけど、体が自由に動かせないから苛立ちが最高潮に。

――じゃあ、こうしようか？　一時的に私に体を預ける。その後、あなたの意志で体の支配権を取り戻す。出来なかったら、そのまま私が成り代わり続ける。まぁその場合は、アルテルミナスっていう人間の死を意味するけど――

（そんなの、承服できるわけない・・・！）

だから自力で、テルミナスに頼らないように戦わないと。だけど魔法を使えない今はスキル頼りになるわけで。微量な魔力で、一歩間違えば人を簡単に殺せる分解スキルを扱いきれるかが不安になった。ＡＭＦ程度なら問題ないけど、リンカーコアから魔力を直接奪われてすっからかんになってる今、私自身もスキルで死ぬ可能性が・・・。

――判る、感じる、察せられる。あなた、死を感じてる。ほら、紛い物の干渉能力を使っているから、いざという時にこんなことになるんだよ――

（紛い物・・・？）

――あなたが分解スキルって呼んでる力は、私が霊長（ユースティティア）の審判者だった頃に使用してた干渉能力の劣化版。魔力で体の部位を覆わないと使えないなんていう、欠陥品に非ず――

（ユースティティア？　干渉能力？）

――まぁ見ていてよ。私の可愛（アルテルミナス）い欠陥品・・・クスクスクスクス―

―

ドクンと心臓が跳ね、ズキンと頭が痛み、意識がスゥっと遠のき始めた。そして視界が暗転したかと思えば、目の前には１６歳くらいの体格をした私が居た。解る。この子が「テルミナス・・・！」だ。血の気が失せるのを自覚した私は、ニヤリと笑うテルミナスに手を伸ばそうとしたけど・・・。

「あなたの体、すこ～し借りるから！」

「ふざけるな！」

私の意識は沈んでいき、テルミナスの意識が昇っていく。これが体の支配権の交代だってことはすぐに察することが出来た。私の手はテルミナスを止めることが出来ず、また視界が暗転。視界が開けた時、妙な感覚に襲われた。自分の目で見ているのに、勝手に視線が変わるっていう。

（なにこれ、気持ち悪い・・・）

私の意思を無視して動く私の体。テルミナスは、私の体の支配権を奪い、なおかつ雷撃女と交戦を始めた。雷撃を纏う拳を避けも防ぎもせず、テルミナスは受け入れた。だけど、雷撃女の拳は私の体に当たることはなく直前でピタッと止まったし、何より雷撃が消し飛んだ。

「これは・・・！　レイル！」

――フィストカノン――

雷撃女は後退しながら誰かの名前を呼ぶと、イリスだけを執拗に襲ってた腕が消えて、新しい腕８本が砲弾のように高速で飛来した。テルミナスは人差し指でツンッと突くように腕に触れ、一瞬で消し飛ばした。

「よく見て、アルテルミナス。今のは実数干渉。物質世界に手を加える術。あと、魂や精神、幽体などの概念的存在への虚数干渉もあるけど、この世界には不要ね。で、実数干渉には、こんな使い方もある」

――Ｆａｃｔａ　ｎｏｎ　ｖｅｒｂａ――

テルミナスが目の前の空間に向かって勢いよく右手を突き出すと、肘から先は宙に生まれた波紋の中に消失した。

（ほら、レヴィヤタンが使ってたでしょ）

（レヴィヤタン・・・？）

（あぁ、今は生まれ変わってリヴィ・アルピーノだったっけ。まぁ、位相空間経由で転移するっていうもので、魔法や魔法技術での転移なんかより優れたものね。っと、捕まえた！）

リヴィ・アルピーノのことは知ってるし、あの子が妙な転移スキル

を持っていることも知ってる。テルミナスの口ぶりからするとあの子もまた、騎士シャルロッテと同じ時代に生きた魔術師の生まれ変わりということか。

「なに・・・・！？」

宙の波紋から腕を引き抜いたテルミナスは「コイツが、腕を出現させてた奴ね」って、波紋から1人の男性レイルを引っ張り出して、床に仰向けに倒れさせた。雷撃女がその様子に「どうやってレイルの居場所を・・・！？」って驚愕してるのがちょっとスカッとした。

「君は一体・・・・！？」

「終極テルミナス。別に憶えなくてもいい。さ、遺言はそれで済んだ？」

――Ｍｅｍｅｎｔｏ　ｍｏｒｉ――

（待て、殺すな！）

――疾閃雷翔駆――

テルミナスがレイルの顔を踏み潰すために足を上げたから声を荒げる私だけど、体が完全に乗っ取られてるからどうしようもない。最悪の事態になるって顔を背けそうになったけど、テルミナスの足がレイルの顔に到達するより早く雷撃女が超高速移動でレイルを救出してくれた。

――Ｎｅｍｏ　ｅｎｉｍ　ｐｏｔｅｓｔ　ｏｍｎｉａ　ｓｃｉｒｅ――

「速い。一種の転移と見ていいかな。でも、それが通用するのは人間クラスだけ」

そう言って笑うテルミナスの手には、雷撃女の着ていたローブが握られてた。テルミナスの視線が雷撃女に向いて、ようやくその素顔を拝めることが出来た。綺麗な金色の長い髪、瞳はなんて形容すればいいのか判らない、見る角度で薄っすら色が変わってる。

（っていうか！　テルミナス！　今、レイルを殺そうとしたでしょ！　私の体で人殺しとかやめろ！　いや私の体じゃなくても却下！）

（何を言って・・・？　あぁ、気付いてない？　コレもアレも人間じゃない、魔力で組まれた木偶人形ね。ほら、あれよ。ルシリオンのエインヘリヤルとかいうアレ。あの金髪、見たことがある。眼鏡も間違いなく同類ね。だから殺すじゃなくて壊すが正しい）

（・・・は？）

テルミナスの言葉に頭が混乱する。"エインヘリヤル"って、ルシルの使い魔生成スキルでしょ。いやいや待って。ルシルやアイリは、目の前に居る雷撃女を含めた"Ｔ・Ｃ・"によって殺害された。その"Ｔ・Ｃ・"の中にルシルの"エインヘリヤル"が居て、今こう

して襲撃してきてるって？　そんな馬鹿な・・・。信じられないって思っていると、頭の中に見知らぬ記憶、テルミナスの記憶？が流れ込んできた。
真っ黒な神父服と外套を着て、大きな十字架を携えるルシル。側には雷撃女や、他にも若い男女、子どもも居る。対するのは、見ることが出来ないけどテルミナスなんだろう。そして始まる戦闘。テルミナスは単独で、ルシルは雷撃女たちと一緒に戦った。

（あ、まだ途中なのに・・・）

記憶映像がピタッと止まった。もう少し見ていたかったって気持ちが少なからず生まれたことに困惑。かぶりを振って、外界へと意識を向け直した。するとテルミナスの前には雷撃女とレイルじゃなくてイリス達3人が立ってた。でも様子がおかしい。イリスが魔力刀の切っ先をこっちに向けて、アミタとキリエの2人も短銃の銃口をこちらに向けて、警戒心むき出しで睨んできてた。

（テルミナス！　イリス達に何をした！！）

（エインヘリヤルが撤退したから、シャルロッテを殺そうとしたの。おかしい？）

（当たり前だ！　どうして！？）

（どうして？　私がシャルロッテとルシリオンに殺されたから）

また記憶が流れる。今度はイリス（というよりは騎士シャルロッテ）

も真っ白な神父服を身に纏い、黒の神父服のルシルの持つ十字架とは別のデザインの十字架を携えてる。そうしてテルミナスＶＳ騎士シャルロッテ＆ルシリオンが始まったんだけど・・・。

（こんなの見ていたくない！　早く私の体を返せ！）

私がそう叫ぶとテルミナスの記憶映像が消し飛んで、アイツが見てる視界がパァッと広がった。テルミナスはイリス達と本格的な戦闘に入ってたから、私は全力でやめろって叫んだ。

（クスクス。だったら体の支配権を無理やり取り戻せばいいと思うの。この体の持ち主はあなたなんだから、前世の意識である私に負けるはずがないもの。ほらほら、どうしたの？）

（お前えええええええ・・・！）

なんとかして自分の体を取り戻すため、テルミナスを引っ込ませられるように強く念じる。その間にもテルミナスはイリス達へと攻撃を仕掛け、イリス達は反撃することなく避けて、防いで、私を傷つけないようにしてくれてた。でも、とうとうテルミナスの右手がキリエの左腕を掴んだ。まずいと思ったけど、もうどうしようもなく。

（コレもさっきの２人と同じ、エインヘリヤルで間違いない。なら、シャルロッテ殺しには邪魔だし、壊してもいいよね）

キリエの左腕がガシャァン！とガラスみたいに砕け散った。外界の音声が届かないから聞こえないけど、アミタの上げる悲痛の叫びは

聞こえずともしっかりと私の心に届いた。私の胸の内に渦巻くテルミナスへの怒りと、自分への不甲斐なさ。

（いい加減にしろ・・・馬鹿野郎ぉぉぉぉーーーーーーーーーー！！）

視界が暗転する。次に視界が晴れた時、私は自分の体を取り戻したんだって判った。自分の意思で視線を操れる。真っ先にすることは、「ごめん！　大丈夫！？」って、キリエの心配だ。だけどすぐに駆け寄らず、警戒を続けるイリス達を安心させることからだ。

「ルミナ！　本当にルミナなの！？」

「うんっ！　本当にごめん！　けどもう大丈夫！　体は取り返したから！」

体を９０度曲げて深く謝罪する。するとイリスは「もう！　馬鹿！　怖かったんだから！」って涙声で叱責。でもすぐに私に駆け寄ってハグしてくれた。私をイリスの背中に両腕を回してハグのお返し。

「あ！　えっと、キリエ！　腕は大丈夫！？　すぐに治すから！」

「え？　あー、このくらいへっちゃらよー♪」

そう言ってキリエは肘から先の無い腕を振るうと、テルミナスに砕かれた左腕を一瞬で再生して見せた。そして「アミタも、そんなに泣くほどじゃないでしょ？　あたし達は"違う"んだから」って、キリエに寄り添って泣いてたアミタに呆れ顔を見せた。

「わ、判ってはいますが、それでも大切な妹が傷つけば動揺はします！」

「はいはい、もう泣かない泣かない」

そんな2人を見守ってるとイリスが、「ねえ、ルミナ。一体あなたに何が起きたの？」って聞いてきた。私は「前世の私が悪さをしてきたんだ」って答えながら、分解スキルを・・・ううん、干渉能力を発動させる。発動のやり方はなんとなくだけど、テルミナスが発動させていたからか解るようになってる。

――魂や精神、幽体などの概念的存在への虚数干渉もある――

発動するのはもちろん虚数干渉。私の大切な友人を傷つけるようなヤバい前世の意識は今日ここで、確実に消し去ってやる。イリスが「だ、大丈夫？　また人格変わってない？」って不安そうに聞いてきたから、「大丈夫。私だよ」って目を伏せながらだけど微笑んで見せた。

――虚数干渉――

上手くいったと判る。そっと右手を胸へと突き入れると、イリスやアミタ達が息を呑んだのが判った。まぶたの裏、心の海の中で「テルミナス」と最後の邂逅を果たす。

（あなたには消えてもらう。文句は言わせない）

（別に。私は・・・人間が嫌いだった、ううん、今でも嫌い。くだらない理由の元に平気で家族を、友人を、他人を殺し、自然を破壊し、戦争を起こして星を汚すクズども。けど、私との最期の戦いの折、シャルロッテとルシリオンは私に言った。それでも人間を信じてるって。馬鹿馬鹿しい。だから力ずくで否定してやろうと思ったら・・・フッ、返り討ちになって殺された）

（そんなあなたが人間としてまた生まれたことに対して、やっぱり・・・）

（苦痛だったね。私の人間嫌いは結局変わらず、いつあなたの体を乗っ取ってやろうかと考えていたけど・・・。まぁ、こういう終わりっていうのも私らしいかな。いいよ、アルテルミナス。私を消し去るといい。恨みはしないし、今度こそ人の世から消えることへの安堵感の方が強い）

（そう・・・。あのさ、知っていたら教えてほしいんだけど、あなたの自我っていつくらいから芽生えてた？）

（？・・・生まれた瞬間から意識はあったけど。まぁ表に出られないように封印されていたけど。それがなに？）

（私の本当の親のことについて何か知ってたら・・・。っていうか、封印？　誰に？）

（誰って。あなたをこの世界に産み落とした奴に決まってるでしょ）

私は孤児で、５歳まで聖王教会系列の孤児院で育てられ、そこの院長に"アルテルミナス"の名を貰い、そしてマルスヴァローグ家に養子として引き取られた。だから実の両親のことを知らない。けど今、私の親のことを知る存在が目の前に・・・。

（教えてって言ったら、怒る？）

（別に。私の魂からあなたを生み出し、私の人格を封印したのが、あなたの母親・・・マリアよ）

（マリア・・・。それが母さんの名前）

（そう。５ｔｈテスタメント・マリア・フリストス・ヨハネ・ステファノス）

（え？　え？　なんて？）

なんかすごいおかしな名前をスラスラと言ってきたテルミナス。テスタメントって言葉、どっかで聞いた気がする。なんだっけ。母さんのことを名前だけでも知ることが出来た興奮で、テスタメントのことをすぐに思い出せない。

（マリアって名前だけを憶えておけば？　ほら、早く私を消滅させて。もう疲れた）

（ち、父親は！？）

（・・・いない。言ったでしょ。マリアは、私の魂からあなたを生み出した。マリアは一から人間を造ったのよ。人間嫌いの私に、人間の素晴らしさを実体験してもらうためにわざわざ・・・。ハッ。それなのに干渉能力どころか私の人格を封印したんだから、余計に腹立った）

（そ・・・っか。私、父さんと母さんの愛の結晶ってわけじゃなかったのか）

まぁ赤ん坊の時に孤児院に預けられたって時点で、私は要らない子だって子どもの頃から考えてたから、滅茶苦茶ショックって感じでもなかった。俯く私の頬にテルミナスがそっと手を添えてきた。

（マリアのことが気になるなら、ルシリオンに聞いてみたら。彼も界律（テスタメント）の守護神なのだし）

（なに言ってんの？　ルシルはもう・・・）

（気付かないふりしてるの？　もう察しているんでしょう？　ルシリオンは・・・）

（生きている・・・？）

（クスクス。マリアはルシリオンのサポートとしてこの世界に来ている。ひょっとしたら会えるかもね）

私の頬から手を離して、すぅっと離れて行くテルミナスは両手を大きく広げ、私の虚数干渉で消滅されることを待った。

（・・・あのさ、もし良かったらこのまま・・・）

（一緒に生きていこうって？　冗談じゃない。私は消えたいの）

（・・・判った。さようなら、テルミナス）

（ええ。さようなら、アルテルミナス）

そうして私は、虚数干渉によってもう1人の私を、テルミナスの人格を完全に消滅させた。

Ｓａｇａ２３開かれた真実の扉～Ｇｏｄ　ｏｎｌｙ　ｋｎｏｗｓ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

"Ｔ・Ｃ・"の襲撃からおよそ９０分ちょい。わたし達は今、特務零課名義で貸し切ったミーティングホールに集合していた。メンバーはわたし、ルミナ、セレス、クラリス、ミヤビの特騎隊前線組。なのは、フェイト、アリシア、すずか、アリサ、はやて、アインス、リイン、アギト、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラのチーム海鳴。スバルとティアナとエリオとキャロの協力組。イクス、ヴィヴィオ、フォルセティ、アインハルト、コロナ、リオの子ども組は別室にて、ルーテシアとリヴィアに護衛されて待機。あと、スカラボシスターズがこっちで勢揃いしてるんだけど・・・。

「すぅーはぁー。あぁ、ドクターの香り・・・」

「ドクターの体温・・・」

「あーん！　ウーノ姉様とドゥーエ姉様だけずるーい！」

「こらこら娘たち。感動の再会はもう済ませたろう？　そろそろ離れてもらってもいいかい？　シャルロッテ君たちの視線が少しばかり冷たく感じるのだがね」

「このままで話が出来ます」

「よね～」

「代わってくださーい！」

ドクターにピッタリ張り付いてるウーノとドゥーエ、それを羨むクアットロ。そんな3人の姉を苦笑交じりに見守る下の姉妹たち。そんなスカリエッティ家を冷めた目で見てるのは、"スキュラ"姉妹のアルファとベータとガンマ。そんな姉組の3人とは違い、スバル達と楽しく喋ってるのはデルタとイプシロンとゼータの妹組。

「・・・ドクター達は取り込み中のようだし、ディアーチェ達に話を聞こうか」

「遅いわ！　しかも茶すら出さんとは！　我らはＶＩＰであろう！」

ミーティングホールに集まってからというもの、椅子の背もたれに背を預け、腕を足を組んで座ってるディアーチェに言葉を掛けた途端、めっちゃ美人に成長してる（元がはやてなんだから当然だけど）あの子が怒声を上げた。お茶については申し訳ないから、通信で人数用のお茶を用意してもらえるようオフィスに連絡。でもＶＩＰ扱いはしない。理由はどうあれ公務執行妨害などを犯した犯罪者でもあるからね。

「落ち着いてくださいディアーチェ。我々も、近衛との激闘で少し前までダウンしていました」

「ボクも、カレンにボッコボコにされたからさっきまで寝てたしね～」

「私もラスティアに何度も体のどこかを吹っ飛ばされ続けた所為で、つい先程でようやくフル回復でありますよ」

「私もそうですわ」

「私もディアーチェも、ナーティアとレイルに叩きのめされて、消滅寸前にまで追い込まれたんですよ？　シャル達だって大変だったんですから、そんなことを言ってはダメです」

「でもお茶は欲しいわね～」

「キリエ・・・」

「・・・ふんっ、続けるがよい」

他のマテリアル達からの具申に、ディアーチェも大人しくなってくれた。そう、ディアーチェ、シュテル、レヴィ、フラム、アイル、ユーリ、それにアミタとキリエもこの場に居る。気楽に行き来できないほど遠い異世界に引っ越してたはずのフローリアン家が。さらに・・・。

「もう。アルフはいつまで経っても甘えん坊ですね～」

「だって、またリニスと逢えるなんて思ってなかったんだからさ！」

椅子に座るリニスの太ももに乗っかってるのは子どもフォームのアルフだ。リニスと、フェイトとアリシアの母親であるプレシアが居るって話をエイミィから受けたアルフは、ついさっき本局に到着。そして面会許可が下りたリニスとプレシアと再会を果たした。

一応一般人なアルフが、今から機密会議を行うミーティングホールに入るのはよろしくないけど、プレシアとリニスは重要参考人であり"T・C・"のメンバーということもあって別室に置いておくわけにはいかないから、アルフは特別に入れてあげた。

（ま、アルフはフェイトとアリシアに付いて局の仕事に従事してたし、プレシアとリニスも協力的だから、端から問題ないんだけどね）

フェイトとアリシアも混ざりたいようでソワソワしてるけど、それは後にしてほしいと願うばかり。わたしは一度深呼吸をして、手元に展開した空間キーボードのキーを打った。そして、ここ円形ホールに設けられた円形テーブル上、みんなの前にそれぞれモニターを展開させた。それでお喋りしてたみんなが一斉に黙る。

「娘たち、大切な話が始まる。静粛にしたまえ」

最後までうるさかったウーノとドゥーエとクアットロにドクターが一言。すると3人は「はい」って彼から離れて席に着いた。わたしはそれを確認して、「単刀直入に聞かせてもらう」って尋ねながらモニターに"T・C・"の近衛っていうメンバーと、リーダーとガーデンベルグを表示させた。

「Ｔ・Ｃ・のメンバーが王と呼んでるリーダーの正体は？」

「我らが答えるまでもなかろう？　うぬらはもう察しておるはずだ」

わたしは隣に座るルミナをチラッと見る。前世テルミナスの意識から自分の体を取り戻し、２人一緒に医療部の治療を受けてる最中に聞いた、シャルロッテ様や当時のセインテスト王（偶然にもルシルと同じ名前だったみたい）と知り合いだったらしい前世の記憶の内容。それに、私とルミナとクラリスが戦った金髪の女性に、わたしは・・・すべてを察した。

「・・・Ｔ・Ｃ・のリーダーは、セインテストシリーズ・・・ううん、もう遠回しな言い方はよそう。ルシルなんでしょ？　ルシルは死んでいない。今もどこかで生きている」

「「「「え・・・！？」」」」

わたしの言葉に、スバルたち協力組が息を呑んだ。なのは達はなのは達でディアーチェ達からヒントを貰ったのか、ルシルが"Ｔ・Ｃ・"のリーダーとして生きてるかもしれないってことにもうたどり着いてたみたい。あ、でもシスターズも驚いてるみたいね。ドクターからのヒントは無かったのかも。

「まず、彼女について。そこに居るなのは達のそっくりさん達と関わった事件の際に見たことがあるの。直接会うことはなかったんだけど、ルシルと仲が良さそうだったから誰か尋ねてみれば、ルシルのオリジナルであるセインテスト王の時代より仕えてるヴァルキリ

ーの1体であると教えられたわ。名前はそう――」

テルミナスのスキルによってローブを失い、素顔を晒された金髪の女性の顔をズームアップして、さらに砕け得ぬ闇事件の際にユーリと互角以上に戦った残滓、「プリメーラ」の画像も出した。見て判る通り完全に同一人物だ。雷撃の魔術も使うところも同じだしね。

「くっくっく。あやつの生存を確信したな？　よい！　現時刻を以て、T・C・リーダーより我らに掛けられた緘口の呪縛は消失した。親鴉、貴様もそうであろう？」

「え？・・・っ！　確かに、私に課せられていた緘口指令が解除されている・・・！」

「アインス。みんなに判るように」

「はい。私が元々ルシルの使い魔生成スキル・エインヘリヤルによって召喚された偽者ということは、スキュラを除く皆が知っていることだと思います。新たなリインフォース・アインスとして私を召喚した際にエインヘリヤルから完全に独立されましたが、その時に私は彼からある命令を受けました」

「今後、私の取る言動全てについて逆らわず、私自身の真実・情報を一切他言するな、だな。我らも、というよりは、すべてのエインヘリヤルは似たような命令を受けておる」

「ああ。だからこそ、私はこの瞬間まで主はやて達に話せませんで

した。ようやく話せる・・・。ルシルは、それにアイリも生きています。そうだな？　ディアーチェ」

「うむ。うぬらがルシリオンの存命を確信した瞬間、あやつの計画は崩れ、我らへの緘口令も解除されたのだ。では、嘘偽りなく告げよう。あやつと、その融合騎アイリは生きておる。我、ユーリ、シュテル、レヴィ、フラム、アイル、アミタ、キリエも、あやつの手によって召喚されたエインヘリヤルということを、改めて断言しよう」

「言うまでも無いだろうけど、私とスキュラ姉妹もエインヘリヤルさ」

「私とリニスもそうよ」

「ちなみに、すでに消滅していますが、聖王女オリヴィエ殿下、覇王イングヴァルト陛下も、エインヘリヤルとして召喚されていました」

自身の胸に両手を添え、心底安堵したかのような表情を浮かべたアインス、それにディアーチェは、ルシルとアイリが生存してることを断言。それに加えディアーチェ達はルシルの"エインヘリヤル"だってことを告白してくれたし、シュテルがオリヴィエ様とイングヴァルトのことも教えてくれた。

「そっか・・・。ルシル君とアイリが生きててくれたことは嬉しい・・・ホンマに嬉しい・・・」

はやての言葉、想いが、わたし達チーム海鳴みんなが抱く最初の感情だった。ルシルとアイリが殺されたってことで、わたし達は怒りと悲しみに暮れてた。今回の襲撃に対しても、復讐心に燃えてたのはわたしだけじゃないはず。だけど、「嘘を吐かれたのは、やっぱり悲しいね」ってわたしが言うと、みんなが俯いた。

「・・・あのさ。ルシルが生きてるってのは判ったけど、ルシルが自分の死を偽る前からＴ・Ｃ・は活動してたわけじゃない？　そこのところはどうなわけ？　シャル達は気付かなかったの？　ルシルがエインヘリヤルを召喚したり、レオンたち幹部と連絡を取り合ったりしてたことにさ」

「さすがにお手洗いや入浴時は判らないけど、ルシルが密かにどこかと連絡を取って様子はなかったし、何よりＴ・Ｃ・の幹部たちに対する憎悪のような感情爆発を見た限りじゃ、ルシルがＴ・Ｃ・のリーダーだって言われてもちょっとって考えられる感じなんだけど」

「私たちも、シャルちゃん達が幹部フォードと初遭遇した時の映像を見せてもらったけど、あの時のルシル君の取り乱しっぷり、暴走っぷりは、演技じゃ済まされないほどだったよね・・・」

アリサの疑問に答えたわたしに続き、なのはも腕を組んで唸った。ＰＴ事件の被疑者の１人であるステア本人だったことを、１０年以上にも亘ってわたし達に隠し通したっていう演技派だったルシル。だからって、あの時ルシルが見せた暴走も演技だったとはどうしても思えない。

「あの、皆さんが先に戦っていた幹部、レオン、プリムス、フォード、アーサーも、私たちと同じエインヘリヤルですよ？　もちろん召喚したのはルシリオン君です」

「リニス、それ本当？」

「え、ええ、もちろんですよ、アリシア。T・C・とは、ルシリオン君とアイリさん、そしてエインヘリヤルのみで構成された組織ですから」

「それを聞くと、いよいよルシルが主演男優賞を受賞できるレベルの演技派ってことになるね・・・」

自分が召喚した憎き旧敵の"エインヘリヤル"を相手にブチギレて、めちゃくちゃに暴走したあの行為が全て演技だとしたら、これからはルシルの言動すべてを疑ってかからないといけなくなる。

「その辺りはまた事情があるのだが・・・。プレシア君」

「私？　まぁいいけれど・・・。あなた達、彼が2人いるということを失念していないかしら？　遺体として発見された彼と、今なお身を隠している彼がいるということを」

プレシアにそう言われて、ようやく「あっ！」てなった。そうだ、ルシルが生きてたって話に夢中になりすぎてて、"T・C・"に殺害されて、埋葬されたルシルとアイリの遺体のことが頭から抜けて

た。となれば少なくともルシルの体が2つあるということ。遺体が偽者になるわけだから、それはきっと「クローン・・・？」ってことになる・・・。

「はい、ご明察です。遺体として発見されたルシリオンさんとアイリさんはクローンでした。1人がT・C・と共に活動し、もう1人が皆さんの行動するという形ですね」

「遺体のルシル君とアイリがクローンなのは判ったんやけど、それやったらレオン達エインヘリヤルに肉体があるのはどうゆうことなんやろ」

「そうだよね。魔力の塊なんだから死亡イコール消滅だろうし・・・」

「ドクター、プレシアさん達も。私たちにはあまり時間が無いと思うので、回りくどいことは無しで情報の開示をお願いします」

すずかがキッパリと告げた。わたし達には時間が無いっていうのはあくまで推測だけど、"T・C・"の活動はまだ終わってない。わたしとルミナとセレスが戦った第4支局以降の襲撃がピタリと止んだからだ。いつ襲撃が再開されるか判らない中でわたし達がこうしてミーティングを行えてるのはひとえに・・・降伏状態だからだ。

（聖王教会本部でT・C・を迎撃した母様や多くの騎士たちは全滅して、さらに魔力を奪われた。そしてわたしたち特騎隊も、ルミナ、セレス、クラリス、ミヤビと魔力を奪われて、魔導師として復帰で

きるのは早くて明後日。ルミナはなんか、分解スキルをさらに昇華させた干渉スキルってものを発現できたみたいだけど、そればかりを頼れない）

なのは達の協力もあることはあるけど、ミーティング前に見せてもらった各交戦映像を観た限りじゃ勝てないと判断するしかない。それほどまでに連中とわたし達の実力差は明らかだった。

「ふむ。まぁ、すずか君の言う通り時間もそう掛けられないだろうしね。レオンたち幹部の遺体は姿形を似せて作られた人形に過ぎないものだね。６千年以上も昔の人物であるレオン達の遺伝子など遺されてはいないし、魔力の塊であるエインヘリヤルから採取も出来ないからね」

「待ってください。一から遺伝子を作り、レオン達の姿になるように調整してクローンを生み出したってことですか？」

「それを可能にするだけの技法と頭脳の持ち主がいるのよ。あなた達も知っているでしょ？」

どこから用意したのか、アルファは爪やすりで自分の爪を磨きながらそう言った。それを言われるより先に脳裏に浮かんだ顔、「ミミル・・・！」の名前をわたしは口にした。だけど、「あり得ないでしょ」ってアリサが首を横に振ってきた。そう、アリサの言う通り普通はあり得ない。ミミル、真の名前をパイモン・エグリゴリ。ルシル達セインテストシリーズと敵対する戦力"エグリゴリ"の１体だ。

「エグリゴリがルシル君に協力するなんて、確かにあり得ないよね・・・？」

「でも、他にそんなことが出来る技術者なんている？」

「広い次元世界を探せば・・・」

「人ひとりを造るって、何と言うか・・・管理世界の技術を使えば割と簡単に出来るような気がするんだけど・・・」

「まぁ融合騎や魔法生物を生み出せる技術があるくらいだし・・・」

「待って、みんな。今はそんなことよりアルファが言った、私たちが知る技術者が関わってるっていうことが大事だよ。・・・話を戻すよ。えっと、ルシル君たちのクローンをミミルさんが造ったということを前提として考えよう」

「そうだね。そこから生まれる疑問は2つになると思う。ルシル君がエグリゴリのミミルさんと協力関係になったのはどうして、そしていつから？」

ルシルにとって"エグリゴリ"は、救済という大義の元に破壊すべき敵だ。協力関係になることはないはず。しかもミミルは、オリジナルの"エグリゴリ"じゃなくてイリュリア製の贋作機。純粋に破壊したいだろう敵・・・だけど。

「いつから、どうやってってのは判らないけど、ミミルの持つ技術力に目を付けて利用した、とは考えられるよね」

「撃破して、破壊する代わりに協力するよう取引を持ちかけたってこと？」

「問題は、それがいつ起きた話か、ね。少なくともＴ・Ｃ・活動後じゃないことは、わたしたち特騎隊が証人になる。ね？　ルミナ、セレス、クラリス、ミヤビ」

「「「うん」」」「はい」

「あの、クローンってどれくらいの期間で作れるものなのかな？」

なのはの疑問にプレシアとドクターがお互いを見て、少しの沈黙の後にプレシアが「作るものによるけれど、およそ３週間から数ヵ月ね」って答えた。それに補足するようにドクターが「レオンは１０ヵ月、ルシリオン君は１年近く掛かっているそうだよ」って言った。

「その情報はどこから？」

「作った本人、ミミル――パイモンからさ。彼女とは生前からの知人、いや私とプライソンにとっては母親であり技術者の師だからね。直接聞いたのだよ。しかし、私の学習意欲はエインヘリヤルになった今でも留まることを知らないね。やはり彼女には驚かされるよ。肉体を造るには必ず遺伝子が必要になってくる。遺伝子を使わず、優秀な本局医務局の検死にも引っ掛からない偽りの肉体を造るなど、

さすがの私にも無理だからね」

「ルシルだけそこまで時間が掛かった理由は？」

「それに答える前に問わせてもらおう。うぬらと一緒に過ごしていたあやつ、本人かクローンか、どちらか判るか？」

ディアーチェの言葉が脳に浸透して、ゾッと背筋が凍った。本人だと思いたい。でも、もしクローンの方だったら、わたし達は・・・ううん、わたしはルシルの何を見てたんだろうってなる。違和感はなかったし、きっと「本人だよ」ってわたしは願った。

「・・・ハズレだ。うぬらと過ごしていたのがクローンの方だ。本物のあやつはずっとT・C・の本拠地に居た。判らなかったであろう？　それが制作に1年近く掛かったあやつのクローンの成果だ。うぬらの言う、あやつが幹部たちに対して怒りを露わにしたのは演技ではなく、自分がクローンであることを知らぬからだ。よもや自分がオリジナルの駒として利用されておるとは思いもしなかったであろうな」

わたしはもう、ルシルについて何も聞きたくなくなってきて、両手で顔を覆って俯いた。そんなわたしの肩を優しく叩いたルミナが「で？　いつから入れ替わってたわけ？」って聞いた。少なくとも1年前には協力関係が築かれてたっぽいし、もう何が何だか判らない。

「これは子鴉らの方が知っておるだろうな。あやつとクローンが入れ替わったのがいつか・・・な。明確な時期があったはずだ」

「え？・・・えっと・・・、いやまさか、そんなわけ・・・。ひょっとして、ルシル君がリアンシェルトと戦いに行く言うて、アイリと一緒に姿を消した数日間・・・か？」

「ちょっ、それって3年以上も前になるじゃない！」

あまりに過去の話になったから、驚いたわたしは思わず顔を上げてディアーチェを見た。チーム海鳴で裁判ごっこをした記憶がフッと脳裏に浮ぶ。リアンシェルトに戦いを挑む前は、いつ死ぬとも知れぬほどに弱り、車いす生活を余儀なくされてたルシル。けれど敗戦後、そして退院後には自力で歩けるほどに回復してた。それは何故か・・・。

「リアンシェルトに・・・魔力を貰ったから・・・」

「そうや！　それでルシル君の寿命問題は解決したんやった・・・！」

「ミミルどころかリアンシェルトも味方につけてたってこと！？」

わたしの言葉にみんなが大混乱。当時のことははやてから聞いてる。重体のルシルと意識不明のアイリを連れてきたリアンシェルトとミミル、その使い魔のフラメルとルルス。リアンシェルトはボロボロになりながらもルシルとアイリを負かした。"エグリゴリ"はルシル達セインテストシリーズを殺すことを目的に動いてる兵器だ。それなのにリアンシェルト達はルシルを殺すことなく、あまつさえ命を救った。

（リアンシェルト達の気まぐれだろうってルシルは言ってたけど、よく考えてみればやっぱりおかしな話だ）

そうか。その時のルシルはもうクローンで、寿命問題なんて関係ない体だ。それに、おそらく本物のルシルによって記憶などがいじられてるんだから、気まぐれだなんて曖昧なことで片付けることが出来たんだ。だからって、それでルシルがクローンだとか偽者だとかという考えに至れるわけもなく。との道わたし達はルシルの手の平の上だったわけだ。

「リアンシェルトはもうおらぬ。アレはすでに破壊、救われておる。残るエグリゴリは、ガーデンベルグ、そして倒す必要のないパイモンとフラメルとルルスの４機のみだ」

そう言ってティーカップに口を付けて、「美味いな」って若干悔し気なディアーチェに、わたし達は「えええええ！？」って驚いた。最強の"エグリゴリ"っていうリアンシェルトがもういないなら、ルシルが本当に死ぬまでの期間が短いことを示す。ガーデンベルグを救い、ソイツが持ってる神器を破壊すれば、ルシルは任務完了ということで死ぬように設定されてるんだから・・・。

「ルシル君を負かして、私たちの家に連れて来たリアンシェルトは本人？　それとも・・・」

「あれがルシル本人です、主はやて。ルシルがリアンシェルトの姿に変身していたのです。・・・主はやて、皆も。当時からルシルと

アイリが偽者だということが判っていましたが、例の緘口令によってお話できませんでした、申し訳ありません」

「マジかよ・・・」

「待て。ルシルのクローンを造るのに1年なのだろう？　3年前の時点で完成していたとすれば、4年前にはルシルとエグリゴリの間で協力関係にあったということではないのか・・・！？」

「いえ、違います。自分のクローンが造られていたと知ったのは、ルシルがリアンシェルトに勝った後だったそうですから、その頃はまだ協力関係にはなかったですよ」

「え、待ってちょうだい。・・・ユーリの言うことが事実なら、エグリゴリは密かにルシル君の味方をしていたということになるわ」

「まさしく。ルシリオン君さえ知らなかった真実だよ。実はエグリゴリの洗脳はとうの昔に解けていたんだ」

「その辺りの話はパイモンからの又聞きだけどね。洗脳されたことでヴァルキリーからエグリゴリとなったあの連中は、ルシリオンの家族や友人を多く殺害した。エグリゴリにとっても家族のようなもので、洗脳されていたとはいえ殺害したことには変わらない」

「だから洗脳が解け、自我を取り戻した後は苦しんだそうよ。しかも自害は出来ないから余計に」

「ゆえにエグリゴリはせめての罪滅ぼしとして、洗脳が解けていないように偽り、一片の同情もされぬように敵として振る舞い、あやつの手によって殺される、という計画を企てた。それが６千年以上も前、ルシリオンに生み出された子ども達ヴァルキリー、いやエグリゴリ全体の目的だ」

ディアーチェがそう締めた。わたし達は黙り込んで、わたしはディアーチェ達から聞かされた真実を何度も反芻する。

「・・・セインテスト王から続いてたエグリゴリとの戦いの真実が、そんな悲しいものだったなんて・・・」

「そうだね。ルシリオン君の行う救いは、暴走しているエグリゴリを苦しませることなく破壊――解放すること。エグリゴリの望む救いは、開発者であるルシリオン君に殺され、自分たちの死によって、長年続く呪縛から彼を解放すること。どちらにも救いはあるが、その結末は悲しいものだよ」

ドクターが悲痛な面持ちでそう告げた。なんだろう、さっきからドクター達の言葉には何か引っ掛かりを覚える。パッと考えが纏まらないけど、思ったことをそのまま口にしていけばたどり着けると思って、わたしは「あのさ・・・」って切り出そうとしたとき・・・。

「さっきから聞いてるとドクター達って、ルシル君と、セインテストシリーズのオリジナル――セインテスト王を同じ存在として扱ってへん？　その辺がちょう気になったんやけど・・・」

「あ、うん、わたしもそれ気になった・・・と思う」

はやてに同意を示すように首を何度も頷いた。いくら記憶などが受け継がれてもオリジナルとクローンは別人である。それを同一存在扱いするのはちょっとおかしい。ドクター達はまた顔を見合わせて、「そうか。そこからだったな」ってディアーチェが深く頷いた。

「まず、その認識を潰さなければならぬな。セインテスト王のクローン、セインテストシリーズ。そもそもそのようなモノは存在しておらん。オーディンも、おぬしらの言うルシリオンも、等しくセインテスト王、ルシリオン・セインテスト・アースガルド本人だ」

ディアーチェの言葉に、わたし達は何度目かも判らない驚愕。古代ベルカで戦った魔神オーディンが、わたし達が一緒に過ごしてきたルシルが、6千年以上も前の魔術師セインテスト王本人・・・。ダメだ、情報過多すぎてもう頭がパンクしそう。

「その辺りの話については、私たちエインヘリヤルより詳しい人物がいるわ」

プレシアがそう言って、ミーティングホールの出入り口の方を見た。それにつられてわたし達も視線を移せば、「っ・・・！」そこには怪しい人物が1人。桃色の神父服とフード付き外套を身に纏い、目や鼻や口といった穴が1つもないツルツルな仮面を付けた、おそらく10代前半の子ども。その格好にわたし達チーム海鳴は一言、「テスタメント・・・！」って口にした。PT事件の折、ステアとして活動してたルシルが名乗っていたコードネームだ。色違いだけど

神父服などなど同じデザインだし、間違いない。

「ここからは私、５ｔｈテスタメント・マリア・・・。いえ、マリア・フリストス・ヨハネ・ステファノスがお話します。４ｔｈテスタメント・ルシリオン、ルシリオン・セインテスト・アースガルド様が、どこでどのようにして生まれ、育ち、そしてテスタメントとして存在してきたのか、そのすべてを私からあなた達に語りましょう」

マリア。ルシルがかつて語った、協力者の名前。そんな彼女が手をポンッと叩いたかと思えば、わたしの意識は一瞬で落ちた。

ＡＮＳＵＲ６戦天使リアンシェルト～Ｓｎｏｗ　ｔｈａｗ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

ＶＳ・―・―・―・―・―・―・―・―・

其は己の最期を願う者リアンシェルト

・―・―・―・―・―・―・―・―・ＶＳ

「「ユニゾン・イン！」」

とうとうこの日が来た、ガーデンベルグへ至る道を唯一知るリアンシェルトを救う日が。俺はアイリとユニゾンを果たし、『アイリ。始めから全開で行くぞ』と気を引き締める。

『ヤヴォール！　深層同調を開始。神々の宝庫（ブレイザブリク）より魔力結晶を起動、魔力炉（システム）と融合開始・・・、完了。マイスターのリミッターを第二級まで解放。マイスター』

アイリが俺の命と体を支える大事な柱として頑張ってくれるから、俺も無茶を通すことが出来る。だから「第二級粛清執行権限、解凍」と、５１％～７５％の魔力を制限するリミッターを解除。発動するのは何百年ぶりだろうか。

――高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）――

こちらが臨戦態勢に入ると、リアンシェルトも背中より２０枚の羽

を放射状に展開し、魔力量をぐんぐんと上げ始めた。あぁくそ。俺の魔力量と神秘を一瞬で追い抜いて行きやがった。

「（それでも！）我が手に携えしは確かなる幻想。目醒めよ、我が心（うち）なる世界が一つ。其は美しき黄金に輝きたる館。五百四十の扉、槍の壁、楯の屋根、鎧に覆われた長椅子、彷徨いたるは狼に鷲」

「その詠唱は・・・。なるほど、1対1では敵わないなら、軍勢を以って私を押し潰そうと言うのですね。ですが、私を追い詰められるほどの英雄は残っていますか？」

残っていようがいまいがリアンシェルトに対抗するにはこれしかない。今日この日、リアンシェルトとの闘いのために取っておいた"ジュエルシード"などのロストロギアや、トリシュのスキルで貰った魔力、なのは達の協力の元に彼女たちから吸収した魔力を結晶化させた物を解放するつもりだ。

「館に住まうは我が　心（うち）に在りし神秘の幾多の主。今高らかに告げる。いざ開かれよ、ヴォルグリンド。契約の下、拒みし者を蹂躙せよ、罪ある者を断罪せよ、助け求める者を救済せよ。いざ出でよ英雄の軍勢」

遥か空にアースガルド魔法陣を展開。空に向かって突き上げた"エヴェストルム"の先端より放たれる光が魔法陣に当たると、魔法陣を中心に全長数ｋｍの巨大な門扉が描かれる。アレがヴォルグリンド、"ヴァルハラ"の正門だ。

「英雄（ヴァルハラ）の居館・・・開錠」

鍵を開けるように"エヴェストルム"を捻る。音も無くヴォルグリンドが開いていき、膨大な光が溢れ出す。その光はシャワーのように俺たちに降り注いで、視界がサファイアブルーの光に満ちた。

（今の俺がヴァルハラを維持できるのは精々数分。その間に決める！）

視界が晴れた時、そこはもう俺の世界、創世結界・"英雄の居館ヴァルハラ"。13万平方kmの巨大な一室。英雄全軍を召喚してもまだ余裕があるこの広い世界で、リアンシェルトを迎え撃つ。

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

12枚の剣翼と10枚の菱翼を展開。そして、その22枚の蒼翼を背部より切り離し、遠隔操作飛行砲台「コード・ミカエル！」として利用する。

「さらに！」

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

「ヘルモーズの同時二重発動・・・！？」

驚きに目を見張るリアンシェルト。空戦形態ヘルモーズの発動中にさらにヘルモーズを発動するなんて、長年存在している俺としても初めての試みだ。俺は『アイリ！　ミカエルの操作を任せる！』と

頼み、俺は他の魔術のコントロールに注力する。

「さあ！　行こうか！」

「了解です、父上。ヴァルキリー第２隊アルヴィト隊隊長クルックス・アルヴィト・ヴァルキュリア、いざ参る」

ライオンのたてがみのように逆立っているココアブラウンの髪。切れ長のダークブルーの瞳。黒のハイネックタンクトップ・レザーパンツ・白のロングコート姿。そして右手には槍型神器・"戊ノ鑓（つちのえ）"を携えた、土石系最強のクルックス。

「よーっし！　決着つけたろうじゃない、リアンシェルト！　ヴァルキリー第３隊ヒルド隊長ティーナ・ヒルド・ヴァルキュリア、行くよ！」

足元まで伸びるスカーレット色の髪、アクアブルーの鋭い瞳。前後燕尾な赤色がかったセーラー服。上から制服の黒のロングコート。彼女独自の黒のハーフズボン姿。炎熱系最強のティーナ。

「氷雪系の最強機として、あなたを止めるよ。ヴァルキリー第４隊ラーズグリーズ隊長、氷月（ひづき）・ラーズグリーズ・ヴァルキュリア、行く」

前髪を分けて額を少し出したマドンナブルーのショートヘア、ホライズンブルーの瞳は少し釣り目。制服の長衣は白。上から制服である青いロングコート姿。そして釵型神器・"災牙コキュートス"を

両手に持つ氷雪系最強の氷月。

「僕らが必ず止めるよ。操られて、父さんを殺そうとするなんて悲しい事が起きないように。・・・ヴァルキリー第５隊ヘルフィヨトル隊長レンマーツォ、行くよ！」

まだあどけない少年で、チョコレートブラウンのショートヘア、少女のようにマルっとしているシルバーグレーの瞳。白の長衣に黒のハーフパンツ姿。両腕に装着した籠手と同化しているクロスボウ型神器・"冥弓シルカルデ"に魔力矢を自動装填する、狙撃系最強のレンマーツォ。

「リアンシェルト。お父様に弓引くなど言語道断！　操られたというのなら、拳でその目を覚まさせてあげる！　ヴァルキリー第７隊ランドグリーズ隊隊長プリメーラ！　参ります！」

金の長髪を赤いリボンで結ってハーフアップにし、角度によって色の変わる瞳を持つ。同盟軍の制服とも言えるハイネック・前後の裾が燕尾の黒い（色は個人で違う）長衣、ロングコートを着て、彼女独自の黒のハーフパンツ姿。雷撃系最強のプリメーラ。

「見たところ魔力量が凄まじいですね。とはいえ、各隊長が集まった上、父上も一緒なのであれば勝てる戦です。気合を入れましょう。ヴァルキリー第８隊ゲイルスケルグ隊隊長クリスト、出撃する」

ポニーテールにしたガーネットの長髪、切れ長なブラウンの瞳。白の長衣にスラックス姿。両腕にバックラーと剣の付いた籠手――ラ

ンタン・シールド型の神器・"アヴァリティア"を装着した、闇黒系最強にして最硬の防性術式を有するクリスト。
第一陣は"ヴァルキリー"の隊長陣との共闘だ。これでリアンシェルトの魔力を少しでも削る。どれだけ膨大な魔力があろうとも無尽蔵じゃない。あの子にドーピングのような回復する術が無い以上は必ず限界があるはずだ。

「確かにこれは私もさすがに骨が折れそうです。ただ、アンスールを召喚しなかったことだけは後悔させましょう、神器王！」

――天壌（アヴレア・ピュッロン）に靡くは輝ける氷幕――

無数の氷で出来た薔薇の花弁が幾枚ものカーテン状として展開され、俺たちとリアンシェルトを隔てた。下手に時間を与えて創世結界を発動されでもしたら厄介だ。

「エンゲージ！」

「「「「「「了解！」」」」」」

俺がカーテンを越えるために宙へ上がると、アイリが操作してくれているミカエルも追従。

「護衛はお任せを！　」

「私たちが父上を護りますゆえ」

氷結系の頂点にして対氷雪系でもある氷月、それにクリストが俺に付いてくれた。おそらくとしか言えないが、リアンシェルトの攻撃の大半を防いでくれるだろう。

「ティーナ！」

――捻じ伏せる破壊角（ブレイク・スティンガー）――

「ういす！！」

――火葬砲拳（フレイム・カノン）――

両籠手の"シルカルデ"より魔力矢を連射し、カーテンに射ち込んだ鏃を爆破したレンマーツォ。その爆発によってカーテンに穴が開き、そこに通すように炎を纏わせた拳を突き出して火炎砲を放ったティーナ。ティーナの火炎砲がリアンシェルトを直接狙う。

「っ！　くっ・・・！」

迫る火炎砲に対して防御ではなく回避行動を取ったリアンシェルト。そこにレンマーツォの鏃弾幕。リアンシェルトはさらに回避行動を取ったが・・・

――疾閃雷翔駆――

プリムが目にも映らない超高速移動で接近していた。雷撃を纏った右脚による薙ぎ払うような蹴り技、「蹴破斬雷舞！」を、リアンシ

ェルトは「クリュスタッロス・アントス！」と雪の結晶の形をしたシールドで防御。しかしプリメーラが振り払った脚の軌道に沿って雷撃が残り、雷鳴と同時に炸裂してシールドを破砕。

「きゃぅぅ・・・！」

放電する衝撃波にリアンシェルトが体勢を崩し、そんなあの子の背後にクルックスが回り込んだ。

「晶槍・穿突！」

"戊ノ鑓"を床に突き刺し、リアンシェルトの周囲の床から水晶の六角錘柱を８本と突き出させ、あの子を穿とうと迫る。

「ぅく、この程度で・・・！　氷刃舞う砕嵐（テュエッラ・クスィフォス）！」

リアンシェルトの足元より無数の氷の花弁が舞い上がり、その攻撃によって水晶柱が一斉に砕かれる。

「アイリ！　ミカエル用意！」

『ヤヴォール！』

――崇め讃（コード・ミカエル）えよ汝の其の御名を――

アイリが操作する蒼翼２２枚と、俺の背中に展開されている蒼翼２２枚を切り離し、計４４枚の蒼翼の先端を花弁に覆われたリアンシ

ェルトへと向けた。

――召喚（ペークシス・パライナ）・雪皇鯨――

「お父さん！」「父上！」

氷月とクリストに呼ばれると同時、氷で出来た全長５００ｍサイズの鯨が９頭と出現した。５頭が地上に向かって突進し始め、残り４頭がこちらへ向かって大口を開けて突っ込んで来た。

「お父さんは攻撃に専念を！」

「ここは私と氷月で止めましょう！」

「任せた！　アイリ！」

『ヤー！　ジャッジメント！』

最初にアイリの蒼翼から２２発の砲撃が発射される。アイリのミカエルは、花弁が薄くなってその体を視認できるようになり始めたリアンシェルトへ真っ直ぐ進む。

――天花護盾（クリュスタッロス・アントス）――

最初の２２発はシールドに防がれたが、破砕音と共に氷の破片を散らせた。シールドが薄くなったのを見計らって俺は別角度から「ジャッジメント！」と号令をかけ、ミカエル２２発を発射。

「ハガルイズ！」

――拒絶し反射するのは煌く鏡面（アダナクラスィ・エネルゲイア）――

その掛け声に呼び出されたのは、円鏡型の神器・"零鏡ハガルイズ"。鏡面からスノーホワイトに輝く円形の魔力バリアが発生し、俺のミカエルを全て反射して防いだ。無差別に跳ね返された砲撃は掠ることなく遠方へと消え去った。

「『まだまだ！』」

俺に迫る鯨の迎撃を氷月とクリストに任せ、アイリと2人で蒼翼を操作。シールドやリフレクターで防がれない位置を模索しつつリアンシェルトへ砲撃を連射した。

（最後の切り札を切る前に、少しでも多く・・・！）

リアンシェルトを削ってみせる。そして必ず勝つ。その果てに待つのは、最後の"エグリゴリ"・ガーデンベルグの居場所。そして、4thテスタメント・ルシリオンの終末への道だ。

「この程度で、私を抑えきれると思わないでください・・・！」

――真技――

「無間景氷河界（コキュートス・エオニオティタ）」

リアンシェルトの旧真技が発動され、あの子を中心に広がる超広域凍結術式が"ヴァルハラ"の床を一瞬にして氷漬けにしつつ、無数の氷の剣山を生み出していく。俺たちはそれぞれの回避機動で突き上げられてくる氷山を躱し、姿を見失ったリアンシェルトを探す。

「父上！」

「合流する！」

俺の護衛に付いてくれている氷月とクリストが、何よりも先に俺の側に戻って来てくれた。子ども達が相手にしていた氷鯨９頭も、氷山によって砕かれてその一部と化している。しかしそれで終わりというわけじゃない。５００ｍの巨体を誇る氷鯨の表面よりさらに細長い氷針が無数に生やされていく。

「クリスト、お父さんの防御を！」

「承知している！　父上、その場から動かぬようお願いします！」

――アシエ・キャラパス――

両腕の"アヴァリティア"の円盾部より影の渦が生まれる。弾くでも逸らすでもなく、削り取って攻撃を無力化させるシールドだ。純粋魔力攻撃すら粉砕できるんだ、氷などさらに容易く破砕できる。ま、氷針の軌道はランダムらしく、俺たちに直撃するようなものはなかった。

「対氷雪系機としての真価を、今こそ！」

――砕氷牙――

氷月は氷針の中を急降下し、逆手に持った"コキュートス"に対氷雪系術式の魔力を付加して、「砕けろ！」と氷鯨の1つに突き立てた。あの子の術式が機能し、氷で繋がっている9頭の氷鯨と無数の氷針が砕け散った。ただ、床を覆っている氷や無数の剣山は真技の効果であるため、氷月の通常術式の神秘では勝てなかったことで砕けなかった。

「やっぱり真技じゃないとダメか、残念」

「十分、十分！　ステア様直伝のぉぉぉ・・・この一撃！」

剣山の所為でリアンシェルトの姿は視認できないが、ティーナはお構いなしに真技を発動させるようだ。一気に膨れ上がる魔力と神秘だったが、あの子が真技を発動する前にパァン！と手を叩く音が響いた。

――其は散り様(カタレフスィ)は儚く美しく――

それを合図としたかのように無数の剣山が一斉に崩落を始めた。先端より大小さまざまな氷の破片――花弁となっていく。これは「まずい・・・！」状況だということはすぐに察せられた。リアンシェルトの戦い方を知っている我が子たちもすぐに行動に入った。

「氷花を焼き飛ばす！　巻き込まれないように注意！」

ティーナは全身から放出していた炎を空へと向かって伸ばし、長大な火柱とした。

――万華運ぶ惨酷の氷流禍（ディミオス・エカト・エカトミリオ）――

対する無数の花弁は４頭の龍と化し、俺たちに向かって突撃してきた。触れれば最後、凍結＋斬撃効果でバラバラに刻まれながら凍結される。真技時よりは神秘は落ちているが、どちらにしろ強力な攻撃だ。

「吹っっっ飛べぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーー！！」

――真技・大火葬殲滅爆火（スキャタリング・ファイアワークス）――

火柱より周囲に撒き散らされ始める何百発という火球が一斉に炸裂し、龍にならなかった他の氷の花弁を飲み込んでいく。だが、４頭の氷龍は爆発効果範囲から逃れるように空を翔け、なおも俺に向かって来るため、「『ジャッジメント！』」と蒼翼４４枚より砲撃を発射。着弾によって鼻っ面を砕いてやるが、再生が速すぎてあまり効果が無いように思える。

『お父様は回避に専念を！　私たちの勝利条件はお父様がご無事であり、そしてリアンシェルトを停止させること！』

『氷月、クリスト。お前たちの機動力ではかえって父上のお邪魔になる。お前たちもリアンシェルトの捜索に移れ。プリメーラ、お前が援護に入れ。この中で父上に付いて行けるのは唯一お前だ』

プリムとクルックスの指示には俺も何も言うことは無いため、『頼む』と念話で告げた。クルックス、レンマーツォ、氷月、クリストが、姿の見えないリアンシェルトを捜索するために四方に散開、ティーナも真技を解除すると「アイツはどこだ！」と駆け出し、プリムが俺の援護をするために空に上がってきた。

――天墜翔雷拳――

その途中で拳状の雷撃を放ち、氷龍の胴体部分を粉砕。しかし、分断された方もまた龍と化して計８頭となった。それで合流したプリムが「申し訳ありません」と謝ったが、「俺が先にやっていたかもしれない。気にするな」とフォローする。

『こちらクルックス！　リアンシェルトを発見！　交戦に入る！』

『氷月、合流！　２対１で追い詰める！』

――砂槍・一閃――

――針通勁――

――雪人降臨祭（キオナンソロポス）――

クルックスに続いて氷月もリアンシェルトと接敵したようで、３人の魔力と神秘が急激に爆ぜた。それはここから１kmほど離れた場所からで、その上空に巨大な雪だるまが無数に生成され、一気に落下を開始。圧倒的質量による圧殺攻撃だ。

――火葬爆砲（エクスプロージョン・コメット）――

――捻じ伏せる破壊角（ブレイク・スティンガー）――

――ヴォラール・ショーヴル・スリ――

雪だるま群を最初に迎撃するのは、ティーナの放った火炎砲弾。最初は手の平サイズの火球だが、任意で炸裂させることが出来る。今回は直径１００ｍの大炎球となり、落下してくる雪だるま群を飲み込んだ。完全に焼却されなかった雪だるま群を次に迎撃するのは、高速連射される何十発と言う鏃。着弾と同時に鏃が破裂し、雪だるま群をさらに細かく破砕する。最後はクリストの影コウモリの群れ。純粋魔力攻撃はもちろん、魔力で作られた物質などを喰い、術者であるクリストに供給できる効果を持つ術式だ。

『マイスター！　ヴァルハラの展開限界まで３０秒！』

『維持を！』

『ヤヴォール！　神々の宝庫（ブレイザブリク）から魔力結晶を選択・・・魔力炉（システム）と連結！　供給開始！』

砲撃４４発を放ち続けながらの回避を行う中、"ヴァルハラ"を維持するためのドーピング用の魔力結晶を消費させる。体内に漲っていく新しい魔力を用いて"ヴァルハラ"の展開時間を引き延ばしたことで、リアンシェルトとまともに戦い続けることが出来る。

――氷刃舞う砕嵐（テュエッラ・クスィフォス）――

『マイスター！』「お父様！」

「ああ！」

８頭の氷龍が一斉に小さな氷の薔薇の花弁に分散して、雪崩のようにブワッと襲い掛かってきた。さすがに速度は落ちたが、高さも幅も数kmはある。両端が俺たちの背後に回り込むように走り、包囲しようとしてきている。

「少し失礼します、お父様！」

「おっと」

プリムが俺を横抱きに抱えると「酔わないようには気を付けます」と言って、宙を蹴った。一瞬で景色が流れ、俺たちはシャンデリアがずらりと並ぶ天井付近まで上昇した。遥か眼下には、こちらへ方向転換しようとしている花弁の絨毯。

「お父様。シャンデリアを落としても？」

「あ、ああ、問題ない。窓(ステンドグラス)からの光量でも十分なはずだ」

「ありがとうございます」

――紫電轟鞭天――

プリムの右手に長さ１ｍほどの雷撃の鞭が生成された。一振り、二振り、三振りと鞭を振るって長さを伸長させてから、空間を薙ぎ払うように鞭を振るった。長さが数百ｍとなった鞭はシャンデリアを吊るす極太の鎖を断ち切り、４０基のシャンデリアを落下させた。

『リアンシェルトの場所を教えて』

『えっと、ここ！』

――火葬円壁(ファイアウォール)――

ある地点にて発生する炎の円い城塞。確かにそこから様々な魔術が方々に流れていく。

「『了解。巻き込まれないよう注意を』お父様、少し離れます」

シャンデリアと花弁の絨毯が衝突し、シャンデリアから強烈な放電が発生。俺の「ああ。遠慮なくやれ。クルックス達は俺が退避させる」という返事を聞くと同時に宙を蹴って急降下したプリムは、シャンデリアの１基に蹴りを打ち込み、「通天晃雷落！」を発動させた。本来は雷雲を利用して放つ空対地雷撃砲だが、シャンデリアを

機能させている雷撃系魔力を利用しての一撃だ。

「召喚解除！」

リアンシェルトと炎の城壁の内側で戦っていたクルックス達の召喚をいったん解除。リアンシェルトも突然あの子たちが消失したことに一瞬だけだろうが驚き、動きを止めるだろう。そこに頭上からの超高速の雷撃砲だ。避け切れまい。強烈な稲光と轟音が〝ヴァルハラ〟内に広がる。

「再召喚！」

クルックス達を改めて召喚し、『リアンシェルトは？』と確認させる。シャンデリアと激突した花弁はすべて、コントロールを失ったかのようにパラパラと床に向かって舞い降っている。俺はその花弁を注視する。リアンシェルトが健在で、何かを仕出かすようならまず、その花弁の操作から入るだろうからだ。

『マイスター、なんか変な音がする』

『音・・・？』

ピキピキという音が確かにした、しかも頭上から。さらにヒヤリとした空気が俺を撫でた。俺は宙を蹴り急降下しつつ、「アイリ！」と一緒に周囲に待機させていた蒼翼を操作し、全砲門を天井へ向けさせた。そして天井を確認しないまま「『ジャッジメント！』」の号令の下に４４発の砲撃を斉射。

『お父様！？』

『おそらくだが、リアンシェルトに回り込まれた！』

『すぐ向かいます！』

推測を確かなものにするために降下しながら振り向こうとしたが、すぐ後ろから「逃がしません」というリアンシェルトの声が聞こえてきた。

『全力防御！　多層甲冑（ゴスペル）を発動！』

アイリが即座に俺の有する防性術式2位、ゴスペルを発動してくれた。何重もの不可視の対物対魔力障壁で全身を包む術式で、戦闘において展開できる防御としてはこれが最高だ。しかし、「ぅぐ！」その代償も大きい。

「ゴスペルと私の凍結、どちらが上でしょうか？　試してみましょう」

――この手で触れたものは等しく眠りへ――（ズィアヴロスィ・プロセフヒ）

視界の端に捉えたのは、リアンシェルトが俺に両手を伸ばして抱きしめようとしている様だった。対処したいが、バカみたいに魔力を消費してしまうゴスペルの発動によって、いつもの記憶消失時における胸痛と頭痛に襲われてしまい、一拍遅れてしまう。そうこうし

ている内にリアンシェルトが俺の背に腕を回し、俺の凍結を開始した。

『マイスター！』

『ゴスペルを信じろ！』

俺を覆っている魔力甲冑の表面を凍結していくリアンシェルトの術式。その間になんとか回復し、反撃を行わなければ。と、考えていたところに「何をしている！！」と怒声を上げて突っ込んで来たのはプリムで、リアンシェルトの後頭部を右手で鷲掴みにして、右腕からバチバチと放電させる。

『目を瞑れ、アイリ！』

――掌掴雷凄劾――

目を閉じた直後に黄金色の雷撃がプリムの手から放たれた。ゴスペルを発動していて良かったな。零距離攻撃であるためその一撃は強烈で、さすがのリアンシェルトも無事では済むまい。俺の背中に回されていたリアンシェルトの腕が離れ、氷漬けにされた俺は重力に従って落下し始める。

「私が氷を砕く！」

――砕氷牙――

地表から飛び上がってきた氷月が、俺とすれ違いざまに"コキュートス"による対氷雪の一撃を入れ、俺を閉じ込めていた氷塊を砕き、同じく上がってきたティーナが「私があっためる！」と抱き止めてくれた。たった今解除したゴスペルのおかげで体は冷えていないんだが、とりあえず受け入れよう。あと、頬に頬擦りするな、熱いだろ。

「地も空もリアンシェルトのステージかぁ。父さん、どうする？」

「私が防御を貫いたら、父さん、私もろとも撃って」

プリムの零距離雷撃を受けながらも健在なリアンシェルトを見て、氷月がそう提案した。"ヴァルハラ"を展開中であれば、"エインヘリヤル"の召喚、召喚解除はそう時間を掛けずに出来る。ただし、召喚解除ではなく破壊されて消失した場合、"ヴァルハラ"を一度解除してからでないと再召喚できない。つまり氷月の提案通りにした場合、氷月を戦力として当てに出来なくなるというわけだ。

「却下だ。お前の対氷雪は頼りになる。ここで消費は出来ない」

「だけど・・・」

――晶槍・穿突――

勢いよく突き上がってきたルビーの尖塔が、プリムに足止めを食らっていたリアンシェルトに直撃し、あの子は体右側面からシャンデリア、そして天井に激突したのが見えた。僅かな静寂の後、天井を

穿っていた尖塔が先端から崩落し始め・・・

――蒼天(ニバス・ウラノス)に座して曇る氷精四冠――

天井付近に直径数kmのニヴルヘイム魔法陣が４枚と展開され、下面から吹雪が発生した。視界は即座に真っ白な雪に覆われ、その暴風によって俺たちはその場に留まることすら出来ずに吹き飛ばされてしまう。

『氷月は魔法陣の破壊を。ティーナはその直掩だ。クルックス、レンマーツォ、クリストは吹雪から脱出後、氷月とティーナの援護。プリムは引き続き俺の直掩に入ってくれ』

『『『『『了解！』』』』』

念話でそう指示を出した俺は、いったん剣翼１２枚のみを背中に戻す。この吹雪の中を突破するには最低でも必要なものだ。

『アイリ。魔力結晶の連結を。想定以上にヴァルハラの消費魔力が大きい』

『ヤヴォール！』

別の契約を執行している、また別の界律(オレ)の守護神の影響が出ているのか、俺という存在を確固なものにしている魔力がどんどん失っていく。リアンシェルトのトドメ用に魔力を温存しておきたいがための戦力増強、"ヴァルハラ"だったが、あの子が割と粘ってくれれて

いる所為で短期決戦も諦めるほかない。

『お父様。先に吹雪の効果範囲より離脱しました。リアンシェルトはティーナと氷月と交戦中なので、脱出時の奇襲の心配はありません』

『判った。砲撃を放つから、それで俺の居場所を探ってくれ。・・・アイリ』

『ヤー！・・・ジャッジメント！』

剣翼1枚より放たれた砲撃は吹雪を中を突き進んでいき、そして『確認しました。同じ方角に居てよかったです』と、プリムから知らせが入った。確かにそれは運が良かったな。安心して俺は吹雪の中を突き進んでいく中、プリムからクルックス達も交戦を開始したことを伝えてくれた。

『もうか？　早いな』

『クルックスの尖塔に乗って、3人とも脱出してきましたね。3人が固まっていたからこそ速さですよ』

『なるほど。鉱石だから吹雪の風圧で曲がることがないからだな。・・・すまん、プリム。もう1発砲撃を放つ。方角を確認してくれ』

『了解です。・・・どうぞ』

アイリにもう一度砲撃を撃ってもらうと、プリムから『先ほどより４０度ほどズレていますが、そのまま直進でも問題ありません』との返答が。やはり視界が悪い中で猛吹雪の中となれば、まっすぐ進んでいる気でも方角がズレていくのだろう。だが、直進ＯＫということならこのまま突き進むのみ。

――猛威振るう雪墜打（キオノスティヴァス・スフィリ）――

「っ！？」

『なんか来る！』

『お父様！？　これ、なだ――』

上空からの強烈な神秘と魔力反応を感じ取り、プリムとの念話がブツッと切れたかと思えば、俺の行く手を塞ぐように圧倒的質量の雪崩が落ちてきた。突っ込んでいれば押し潰され、それで終わっていたな。

『吹雪の勢いが弱くなってく・・・？』

――私の両手は、大切な存在（ひと）達の血に塗れて――

「氷月が魔法陣を破壊してくれたのか・・・？」

――かつて抱いた想いは今、私の存在を大きく軋ませる――

天井を仰いで見てみれば、薄っすらとだがリアンシェルトの魔力光であるスノーホワイト色の魔法陣が輝いているのが判る。そして、「雪の壁でぐるっと包囲されたな」ということも判明。弱まりつつあるが吹雪はなおも続いている中で、その威容を見せつけてくる雪の壁の包囲網。

――この身には、もう貴方への想いはあってはいけない――

「とりあえず、突破か上からの脱出になるわけだが・・・」

――そんな私に許されるのは、その存在(ひと)達を傷つけた罪に苛まれ、己を罰する時間のみ――

『魔力を無駄に使わないなら上からだよね。ま、なんらかのトラップとかありそうだけど』

――あれから幾星霜。己を許せずにいられない私は、苦しさから逃れたくて心が凍てつくことを願う――

「プリム達が何とかしてくれるのを待つのも手だが・・・」

雪壁にはジャミング効果があるようで、念話が繋がらない。雪崩を発生させる術式、キオノスティヴァス・スフィリを受けたことが無いから初めて知った。リアンシェルトのオリジナル術式だからな～。

――だけど懸命に消し失わせようとした想いへの未練に泣き、いつか貴方の手で滅ぼされる日を待ち望み続けながら涙する――

『あ、待って、マイスター。ヴァルハラの維持限界が近い。魔力結晶を魔力炉（システム）に連結させるね』

「ああ。頼む」

周囲を警戒しながらアイリの仕事が終わるのを待っていると、「なぜ、短期決戦を行わなかったのですか？」と、目の前の雪壁から「リアンシェルト・・・！」の声がした。ハッとした時には、リアンシェルトの顔だけの巨大な雪像が雪壁に４つと盛り上がって現れた。

『こわっ！　不気味！』

「どうしてヴァルハラなんて、無駄に魔力を消費するような策を選んだのですか？」

「戦闘開始直後に、真技の連撃を発動すれば・・・」

「ヴァルハラを維持するための魔力より安く済んだはず」

「戦力増強？　安易なその考え・・・が、戦闘時間を・・・引き伸ばし・・・あなたを・・・私を・・・苦しめる・・・」

最後の声は苦しそうなもので、思わず「リアンシェルト・・・？」を慮った。リアンシェルトの雪像に大きな亀裂が入り、崩落を始めた。

――この庭園に咲き誇る薔薇と共に散り逝くその時を、いつか必ず迎えられますように――

「・・・もう・・・ダメ・・・抑え・・・きれ・・・ない・・・・」

――真技――

雪像どころか雪壁までが崩落を始め、その中から自分の体を抱いて必死に何かを堪えようとしているリアンシェルトの姿が見えた。あの子の全身から魔力が溢れ出している。抑えようとしていながらのあの量だと、暴発する臨界点はもう近いはず。

「・・・おね・・・い・・・アイ・・・おと・・・まも・・・って・・・」

――創世結界・極寒薔薇園（ロドン・パラディソス）――

世界が変わり始める。真っ白な満月が浮かぶ夜天。そして地平線の彼方まで続く、無限とも言える数の氷の薔薇の園。雲は無いがさんさんと雪が降っている世界。リアンシェルトの創世結界。だが、問題はそこじゃない。

「くぅぅあああああああああああ！」

俺の精神世界、"魔力炉（システム）"と繋がっている"ヴァルハラ"が侵食されていくことで、強烈な胸痛が生まれた。

†††Ｓｉｄｅルシリオン⇒アイリ†††

『マイスター！』

リアンシェルトの創世角界の術式が、"ヴァルハラ"の術式や"魔力炉"を侵食してく。だから『ヴァルハラを緊急解除！』を実行。プリム達が居なくなっちゃうけど、マイスターの"魔力炉"が壊される問題に比べたら些細なことだよね。

『ブレイザブリクから魔力結晶を――ええい！　いろいろと面倒だから、一気にドーン！』

ユニゾンしてマイスターの内に居るアイリだけど、マイスターの体が今どうなってるのかは手に取るように判る。体を構築されてる魔力にも影響が出ていて、所々が崩れてるっぽい。とにかく魔力結晶で体の再生を最優先。

（意識が戻らない、思ったよりダメージが大きい！　リアンシェルトの創世結界の術式、対創世結界が含まれてる！）

普通の創世結界同士の激突でなら、術者へのダメージなんてものはない。だけど、複製スキルを活用するためだけに創られたマイスターの創世結界は特別で、"魔力炉"と直で繋がってる所為で創世結界が侵食されると術者のマイスターにダメージが行く。マイスターが人間だった頃も"界律の守護神"の今も、マイスターの創世結界にダメージを入れることが出来る存在はいなかった。だから・・・油断した。

（マイスター、ちょっと体の支配権を借りるね！）

リアンシェルトは氷で出来た薔薇の庭園で、苦しそうに蹲ってる。でも暴走してるっぽい魔力放出は収まる気配も無く、あの人の周囲の空気を凍結させて氷の破片を生み出し続けてる。それはこっちにも流れてきてるし、ここに居たらマイスターが氷漬けになっちゃう。そういうわけで、マイスターの体を使ってこの場から離れる。

（どうしよう、リアンシェルトの結界じゃ逃げ場がないよ・・・）

アイリが担当してた蒼翼２２枚と、マイスターの菱翼１０枚も破棄。剣翼１２枚を使って空を翔ける。地平線の彼方まで咲き誇ってる氷の薔薇は無数にあって、その１輪１輪、花弁１枚１枚が必殺の威力を誇る魔術だ。マイスターが目を覚ますまではアイリが護らないと。

（たとえ、この命に代えることになっても・・・）

出来るだけ遠く、端なんてものは無いだろうけど結界の奥へと向かった。でも、やっぱり隠れる場所なんてものは無くて、ベルカ魔法陣の足場を展開するフローターフィールドを発動して、そこにマイスターを横たえさせる。もちろんユニゾンは解除せずに。いつリアンシェルトが襲い掛かってくるか判らないからね。

（マイスター・・・）

マイスターの内で両膝を抱える三角座りをして、アイリは周囲に気

を張りながらマイスターの回復を待つ。その間、リアンシェルトが創世結界を暴走展開させる直前に何を言おうとしてたのかを考えた。リアンシェルトは、マイスターが真技を速攻で使っていればよかった、とか、それをしなかったからマイスターやリアンシェルト自身を苦しめた、とか、悲しそうに言ってた。

（マイスターを殺そうとしてる奴が言うセリフじゃないよね・・・）

そして、途切れ途切れの最後の言葉の中には、アイリの名前が呼ばれたような気がした。リアンシェルトは何を伝えたかったんだろう。"エグリゴリ"にしてはおかしな言動が多いんだよね。まるで、マイスターを殺したくないような・・・。

――ズィーベン。あなたは・・・――

『え・・・？』

――この私を斃すための力・・・あの人に与える剣として生み出したの――

脳裏にフッと現れた声。なんか、アイリの昔の記憶データのフラッシュバックっぽい。どうしてか判らないけど、気の所為じゃなくてフラッシュバックだって一瞬でそう思い至った。直感だけど、このフラッシュバックは大事なことだってことを理解したアイリは、必死に記憶を探り始める。アイリのことを、ズィーベン、って呼ぶってことはイリュリア時代の記憶だ。

（思い出せ。たぶん、思い出さないといけない記憶なんだ・・・！）

――さすがは最終機。いい数値をたたき出してくれる――

――1つ上の炎熱の試作機はどうも使えんからな――

――6番機でしたっけ？　廃棄ですかね？――

――戦場で使って、限界までデータを搾り取った後に廃棄すればいい――

――ですね。次代の炎熱の融合騎のための肥やしになってもらいましょう――

ノイズ交じりの記憶映像が脳裏を過る。氷結の融合騎の試作機として開発されたアイリは、イリュリアの開発局でいろんな事をされたり、させられた。だけど、それがアイリの役目で、そうするように造られたんだってことは理解してたから、別にどうでもよかった。

（違う。もっと昔、過去だ）

いよいよ苦しくなってきたけど、アイリにとって原初の記憶、つまり開発されて人格データを入力されるまでの間、まだ何も知らない赤ちゃんの頃の記憶を探る。だけど、ノイズが酷くてハッキリと見ることが出来ない。でも、消失はしてないはず。だってアイリは、人間じゃないもん。

（記憶データ修復開始）

――美麗散華（エレオス・ソヴァロ）――

『ああもう！　来た・・・！』

ノイズを取り払う処置を開始し始めたところで、地表の方からシャァーン！と綺麗な破砕音が聞こえた。マイスターの体を操って下を見れば、薔薇の花弁が無数に宙を舞って、竜巻のようになってこっちに向かって来た。だから、『マイスター、早く起きて！』って叫びながら、マイスターの体を飛ばして回避機動に入らせる。

『リアンシェルト！』

アイツも空を飛んで、竜巻と一緒に向かって来る。前髪に隠れてよく表情が見えないけど、唇を強く噛んで何かに耐えてるような口だけは見える。

――氷刃舞う砕嵐（テュエッラ・クスィフォス）――

（包囲される・・・！）

マイスターの逃げ道を通せんぼするように花弁のカーテンが完成されてく。反撃はマイスターが起きないと出来ない。だからと言って、何もしないわけにはいかない。マイスターとのユニゾン時に扱える仮初の神秘じゃ焼け石に水だろうけど・・・。

――コード・シャルギエル――

氷槍２０本を展開して、行く手に向かって『ジャッジメント！』の号令の下に射出。解り切ってたけどアイリの氷槍は、リアンシェルトの花弁カーテンを穿つことなく弾かれ、粉々に砕かれた。うん、迎撃は無理だね。

『（なら・・・ごめん、マイスター）ユニゾン・アウト！』

融合騎側からの緊急融合解除でアイリはマイスターの胸から飛び出して、本来の３０cmくらいの姿から大人形態、「ヴァクストゥームフォルム！」で、１６０cmの姿に変身。そして、自由落下を始めるマイスターをお姫様抱っこで受け止める。

「コード・アンピエル！」

アイリ製の氷の菱翼８枚を背中に展開してから宙を蹴る。急加速で一気に高度を上げて、花弁の包囲から脱出を試みる。

――蒼天に座して射る氷王八冠（アペルピスィア・アペレフセロスィ）――

「アレは・・・！」

空に描かれた大きな８枚の魔法陣が発光を開始。世界丸ごと１つ覆えるほどの超巨大魔法陣１２枚を展開する防性結界の氷神十二冠、吹雪や雪崩を発生させる魔法陣４枚を展開する氷精四冠に続く、空対空地多弾連続凍結砲撃を放つ大魔法陣８枚を展開する氷王八冠だ。

（マイスターを殺す気が無い！？　違った！　殺しに来てるやっぱり！）

――星を墜とす――

ひときわ強い一瞬だけの発光と同時に発射される、凍結効果のある砲撃。それが雨のように降ってきた。万が一に備えてマイスターを下にして、背中を盾とする形で飛び回って回避を続ける。だけど、「しま・・・っ！」避けることに専念しすぎて、「リアンシェルト！」の近くに来てた。

（え、泣いてる・・・！？）

虚ろな目をしてるリアンシェルトは泣いてた。そんなアイツの白く綺麗な右手がアイリに伸ばされるけど、首を大きく逸らすことで紙一重で回避できた。

「おと・・・う・・・さま・・・」

「今・・・？」

すれ違いざまにリアンシェルトは確かに、お父様、って口にした。マイスターを救うような言動、自分の魔力を抑えつける様子、そして"エグリゴリ"じゃなくて"ヴァルキリー"だった頃のマイスターの呼び方。もしかしての疑念は、まさかの確信に変わってく。

「リアンシェルト・・・、ひょっとして、洗脳解けてる？」

ううん、それなら今こうして戦闘になるわけない。でも、それだけであり得ないって断じるには無視できない選択肢だよね。いや、待って。最初のフラッシュバックの声って、リアンシェルトのものっぽかった。

――あなたは、この私を斃すための力・・・あの人に与える剣として生み出したの――

『あった・・・！』

本音を言えばちょっと不安だったけど、ちゃんと残ってくれてたアイリの中で最も古い記憶データに行きついた。さっきのフラッシュバック、この最古のデータから流れたものだ。ノイズは酷いけど、なんとかすぐに見られそう。

――彼女がそうなの？――

――はい。リアンシェルト様。７機の内の最終機、氷結の融合騎。開発コード、白雪の氷精。ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・ズィーベンです。リアンシェルト様のおかげで、完成度は高いですよ――

まだ自我というものを確立してない、生体ポットの中で漂ってた頃のものだね。アイリの開発責任者が、すぅっと音もなく現れたリアンシェルトに伝えた。小難しい話を一通り済ませた後、ポットのアイリとリアンシェルトだけになった。アイツはポットに寄り添って、

コツンと額を当ててきた。

――今から言うことは、私たちエグリゴリの真実に繋がる情報だから、このデータは私と交戦する時までは時限封鎖しておく――

（時限封鎖って、全然機能してないんだけど！？　かなり苦労して探し出したよ！）

――ズィーベン。もう1人の私。この世界で唯一、私の術式を完全無力化できる存在。あなたは、私を斃すための力・・・あの人に与える剣として生み出したの。この仕様はイリュリアの技術者には知らせていない、私がこっそり付け加えた。

あなたの真の役目は、お父様、ルシリオン・セインテスト・アースガルドの融合騎として、私との戦闘で彼をサポートすること。ヴァナヘイムの手によって追加された私の自己強化プログラムは、もう私のコントロールを受け付けずに勝手に機能し続けている。お父様お一人ではもう、私には勝てない――

（それなら、さっさとアイリをマイスターに預けて、真っ先に倒されに来たらよかったのに。そうすれば、マイスターがこんなに苦しむことはなかった・・・！）

――だから、あなたにお願いする。いつかの未来で、お父様と一緒にあなたが現れ、私を破壊してくれるのを。ズィーベン。・・・イリュリアの融合騎ではなく、創造主（おとうさま）を支える新たにして最後の戦天使ヴァルキリー、ノイエーラ・スルーズル・ヴァルキュリア。それがあなたの、真の開発コード――

（アイリが・・・戦天使（ヴァルキリー）？　ノイエーラ・スルーズル・ヴァルキュリア？）

アイリの正体に加えてアイリがマイスターとの相性が良い理由も判った。最初っからマイスターのための融合騎として開発されたんだから、アギトお姉ちゃんよりシンクロ率が高くて当たり前。

――まぁ、お父様はきっと、あなたに新しい名前を送るだろうから、コードネームのことは気にせずに頂いた名前を大切にしてちょうだい。・・・他にもいろいろと伝えておきたいけど、堕天使の私に自分の気持ちを残す資格はない。・・・さて、ズィーベン。最後に伝えることがある。対リアンシェルトプログラムの起動方法。ただ、口にして、開発コードを。それであなたは・・・変わる。それじゃあ、また未來で。さようなら――

それが、アイリに残されてた最初の記憶データだった。リアンシェルトはその当時から洗脳が解けてたんだ。他にも気になることはたくさんあるけど、今はアイツの願いを果たすだけだ。

「ノイエーラ・スルーズル・ヴァルキュリア！」

≪起動キーを確認。氷天墜としを起動、アップロードを開始≫

リアンシェルトの声でそんなアナウンスが脳内に流れると、ドクンとリンカーコアが跳ねた。リンカーコアが暴れまわる感覚に、回避機動がガクッと崩れた。迫りくる薔薇の花弁の塊と、リアンシェル

ト自身からの襲撃を安全に回避できないレベルのやらかし。

（ダメ、やられる・・・！）

ギュッと目を瞑りたい衝動に駆られるけど、最後までマイスターだけでも守れるように目をグッと開けて、迫るリアンシェルトが伸ばしてくる冷気を放つ右手を見つめる。

「ありがとう、アイリ。俺はもう、大丈夫だ」

――圧戒（ルイン・トリガー）――

意識を取り戻した『マイスター！』が発動したのは、妹のシエルさんの重力操作魔術。ギンッ！と鈍い音がしたかと思えば、薔薇の花弁が一斉に墜落して、リアンシェルトも「ぐぅぅ・・・！」呻き声を上げながら落下していった。

「アイリが俺を護ってくれていたおかげで、リアンシェルトに殺されずに済んだ。しっかり休ませてくれたおかげで、シエルの重力操作を発動することが出来たよ。ありがとう」

「マイスター！　あのね、リアンシェルトがね！」

「話は後だ、アイリ。もう一度ユニゾンして、一気に叩くぞ！」

「え、あ・・・うん・・・ヤヴォール」

「「ユニゾン・イン！」」

ユニゾンを果たすと、マイスターが『アイリ、魔術師化しているのか・・・？』って聞いてきた。まぁ、すぐに気付くよね、ユニゾンして一体化してるんだし。

『マイスター、あのね。マイスターが気を失ってる間にね、アイリ、思い出したんだ』

「あああああああああああああああ！！」

リアンシェルトの苦痛に満ちた絶叫が創世結界内に響くと、なおも空に展開されてる魔法陣８枚から凍結砲が降ってくる。マイスターは空戦形態の「コード・ヘルモーズ！」を発動して、剣翼１２枚、菱翼１０を再展開。

（リアンシェルト・・・苦しいんだね）

アイツの真実を知った今、その悲鳴はあまりにも辛くて、悲しくて・・・。"エグリゴリ"は洗脳が解けてないように演技して、あくまで敵としてマイスターに殺されることを選んだ。でも、それはそれでマイスターを苦しめる。

（だからって、アイリがリアンシェルト達の覚悟をふいにしていいの？）

教えたら教えたでマイスターはさらに苦しむ・・・と、自分に言い

聞かせるしかない。だから、"エグリゴリ"の真実については話すことなく、『アイリ、特別な融合騎だったってことを、ね！』って、あとでツッコまれそうなことだけを伝えることにした。

『それが魔術師化の理由か？　あとで教えてくれ』

『うん。・・・じゃあ、早速！』

氷天墜としっていうプログラムがアップデートされたと同時に、アイリの術式一覧に追加された魔術をスタンバイ。

『創世反転結界（テロス・オフサルマバティ）！』

リアンシェルトの対極寒薔薇園に特化した破壊術式を発動すると、その効果はすぐに発揮された。夜天に無数のヒビが入って、崩落を始まった。結界内に展開されてた魔法陣８枚も一緒に崩壊。それでようやくアイリ達はベルカの大地に戻ってきた。その様にマイスターは「うそだろ・・・！」って心底驚いてるね。んで、リアンシェルトは動きを止めてた。

『マイスター！　アイリが、リアンシェルトの術式をすべて潰すから、マイスターは攻撃だけに専念してね！』

『あ、ああ！　任せたぞ！　我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想！』

"ヴァルハラ"はしばらく使い物にならないと思うけど、創世結界

・"神々の宝庫ブレイザブリク"は起動してくれた。そんな"ブレイザブリク"より取り出したのは、"煉星剣レーヴァテイン"。炎帝セシリスさんの神器。それと、セシリスさんの炎熱術式と、シエルさんの重力術式。ともにリアンシェルトに殺害された人だ。

「召喚（ベークシス）・雪皇鯨（パライナ）！」

リアンシェルトが術式名を叫んだ。暴走状態が収まって、自我を取り戻したのかも。

『アイリ！』

『ヤヴォール！　氷神裁く絶対なる術法（エグリマティアス・エクテレスィ）！』

突っ込んで来る１０ｍサイズの氷の鯨の群れに向かって、アイリの魔力で作られた魔力波を放射。それで鯨の群れは、かき氷みたいに粉々になってく。その様子にマイスターは『すさまじいな』って苦笑い。

『マイスター。リアンシェルト、苦しませないで逝かせてあげて』

『ん？・・・ああ、当たり前だ。・・・さぁ、行こう、アイリ、シエル、セシリス！』

『ヤー！』

――うんっ！――

――ええ！――

――美麗散華（エレオス・ソヴァロ）――

無数の氷の花弁が竜巻砲撃となって突っ込んで来るけど、『そのまま突っ込んで！』ってマイスターに伝えた。マイスターはアイリを信頼してくれて、何も言わずに真っ向から突撃してくれた。砲撃の先端部がマイスターの目前、１ｍ圏内に入ると同時に無力なただの氷の破片に変わってく。

――反重力（ニクス・フォース）――

「しまっ・・・！」

――重力監獄（グラヴィティ・ケージ）――

リアンシェルトの体がフワリと浮いて、すぐにその場の空間に固定された。３６０度からの重力による檻だ。すぐには突破できない。

「これで、終わりだ！」

――天壌滅（レーヴァテイン）する原初の劫火―

"レーヴァテイン"の剣身に生まれる莫大な炎は、本来なら砲撃として発射されるけど、マイスターは"レーヴァテイン"に纏わせたまま振りかぶった。対するリアンシェルトは、重力で指一本動かす

のも辛いだろうに、左手の平をマイスターに向かって突き出した。

「まだ、終わりでは・・・ありません・・・よ！　我が氷雪（ニバス・ブロクス）に炎熱に届かない！」

（そうだよね、最後まで敵として、だよね）

炎熱術式の完全無効化って言うリアンシェルトの術式は、アイリの術式で効果を発揮できない。そして"レーヴァテイン"は、アイリの術式で一切の防性術式も発動できなかったリアンシェルトの胸を貫いた。

Ｓａｇａ２４－Ａ真実を越えた先にて待つもの～Ｂｅｆｏｒｅ　ｔｈｅ　ｆｉｎａｌ　ｓｔａｇｅ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

リアンシェルトの胸を貫く"レーヴァテイン"を引き抜き、あの子を閉じ込めている重力の檻を解除。地表に落下する前に抱き止め、そっと横たえさせた。楽に逝かせるならトドメを刺すべきなんだろうが、もう弱々しい呼吸をしているこの子への攻撃は・・・出来ない。このまま、完全に機能停止するまで寄り添おう。

「リアンシェルト。お前には、本当に感謝していたよ」

"戦天使ヴァルキリー"だった頃のリアンシェルトと過ごした日々を思い起こす。

・―・―・回想だ・―・―・

「お父様！」

私をそう呼んで駆け寄って来るのは、つい先日にロールアウトした完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の３機目、リアンシェルト。共に開発しているシェフィ、それにフノス達と相談して、"ヴァルキリー"だけの軍隊を造ることになった。

第１隊ブリュンヒルデ。第２隊アルヴィト。第３隊ヒルド。第４隊ラーズグリーズ。第５隊ヘルフィヨトル。第６隊ヘルヴォル。第７

隊ランドグリーズ。第８隊ゲイルスケルグの、予定総数５００体。ヨツンヘイム連合に負けている要素である数を埋め合わせるための計画だ。

「（未だに試作０番機ロヴァル、完成１番機ガーデンベルグ、２番機リアンシェルトの３体しか出来ていない・・・。先はまだまだ長いな）どうした、リアンシェルト」

「これからお母様のところに向かわれるのですよね？　ご一緒してもいいですか？」

「もちろんだとも」

「やった♪」

リアンシェルトは、いやガーデンベルグや今後の"ヴァルキリー"は、私とシェフィのことを、父・母として慕ってくれるようになっている。当初はマスターという敬称を付けて、マスター・ルシル、マスター・シェフィと呼ばせようと考えていたが・・・。

――どうせなら、両親として扱ってほしいかも。生みの親であることは変わりないのだし、それに・・・――

――それに？――

――この大戦は私たちの代で必ず終わらせるつもりだけど、それがいつになるか判らないでしょ？　つまりは、その・・・あなたとの

子どももいつ作れるか判らないって話で・・・。最悪、終戦時にはおばさんになってるかもで・・・――

（あの時の、顔を真っ赤にしているシェフィは可愛かった）

恋人の可愛らしいお願いに受け入れ、"ヴァルキリー"は私とシェフィの子どもという設定になった。いやしかし、父と呼ばれるのも新鮮で悪い気はしないな。

「何かあったのか？　機嫌が良さそうだが」

「あ、判りますか？　ロヴァルとの模擬戦闘で、ようやく決定打を与えることが出来ました♪　ガーデンベルグより早い記録ですよ」

「ほう。それは大したものだ。偉いぞ」

「えへへ♪　褒めてもらうと嬉しいです！　お母様にも、褒めてもらいたいです！」

「大丈夫、褒めてもらえるとも」

ロヴァルは試作機ということもあり、いろいろ詰め込み過ぎて戦場には投入できない不安定さがある。そのため、あの子には弟妹たちとの模擬戦闘機としての役割を任せた。戦場投入されないと知ったあの子は少し悲しそうだったが、弟妹たちのためならば、と承諾してくれた。

「お父様」

「ん？」

「私たちヴァルキリーが、お父様たちに必ず勝利をもたらします」

「・・・ああ、期待しているよ」

・―・―・終わりだ・―・―・

「かふっ、こほっ、こほっ」

急に咽だしたリアンシェルトに、俺は"エヴェストルム"を起動した。考えたくはないが反撃の可能性があるからだ。現状のリアンシェルトがまともに戦えるとは思えないが、死に際の決死の反撃なんぞ食らったら・・・。

「大丈夫だよ、マイスター。大丈夫」

「あ、ああ、そうだな。お前の対氷雪術式があれば」

いつの間にか魔術師化が出来るようになっていたアイリが側に居てくれれば、リアンシェルトの反撃も怖くはない。深呼吸を1回して、体の崩壊が始まったあの子の最期を見守る。

「わた・・・私の・・・負け、です・・・神器王・・・」

「ああ。俺の勝ちだ。・・・教えてもらうぞ、ガーデンベルグの居場所を」

最後の"堕天使エグリゴリ"の居場所を知るには、リアンシェルトを救わなければならないという、この子との約束だ。

「そう、でしたね・・・。ガーデンベルグは・・・ヴィーグリーズはエイルトゥーン城塞・・・にて、神器王、あなたを・・・待っています・・・」

大戦の終結地にして"アンスール"最後の地、ヴィーグリーズ。エイルトゥーン城塞は、アースガルドの保有していた対ヨツンヘイム連合のための砦の1つだ。あそこにガーデンベルグが居るのか。あの子の居場所は判った。問題は・・・。

「どうやってヴィーグリーズまで行けばいい？　あそこは、俺たちが今いる下位次元世界とは違う領域だぞ。ヴィーグリーズのある上位次元世界を隔てる次元の境界はどうすればいい？」

俺の"界律の守護神テスタメント"としての干渉能力でも突破できないほどの境界だ。リアンシェルト達はどうやって上位と下位の境界を行き来しているんだ？と疑念が渦巻く。

「定期的に開くのですよ、境界に穴が・・・。次は４年後ですね」

リアンシェルトの崩壊が収まり、霧散していた魔力が元に戻ろうとし始める。"魔力炉(システム)"を破壊した以上、いくら"エグリゴリ"でも

修復されるなどありえない・・・はずなのだが、リアンシェルトは何やら特別な進化をしていようだから、おかしくはない・・・のか。チラッと側に控えているアイリに目をやると、あの子は力強く頷いて見せた。判った、信じよう。

「また随分と長く待たされる。・・・4年、4年・・・ちくしょう。4年も俺の体がもつとは思えない・・・」

すでに崩壊が始まりかけているこの魔力で出来た肉体は、もう1年後には完全に朽ちているに違いない。だから「他に方法は？」と問うと、「・・・ありません。4年は待ってもらいます」という、無慈悲な返答が。片膝立ちだった俺は尻を地に付き、胡坐をかいてガクッと項垂れた。ここまで来て、俺は・・・終わりなのか。

「その辺りの問題は、彼女が解決してくれます」

仰向けのまま、俺たちから視線を変更したリアンシェルトにつられ、俺もそちらへと目を向ける。そこに居たのは、存在を忘れていた「パイモン、フラメル、ルルス」の新世代"エグリゴリ"3機だ。パイモン達は小さく一礼してから、こちらに歩み寄ってきた。

『アイリ。あの3機の魔術は無力化できるか？』

『ううん、出来ない。アイリの魔術は・・・対氷雪系限定みたいだから。だけどね、マイスター。もう、戦いは終わってるの。だから安心してね』

「『・・・そうか・・・』随分と親切にしてくれるんだな、エグリゴリのリアンシェルト」

「当然です。敗北を自認した以上、あなたに再び襲い掛かる気はありません。それに、約束ですから。私に勝ったら、教える、と」

体の修復がほぼ終わりかけているリアンシェルト。敗北を認めたとは言っているが、完全修復したらまた襲い掛かってくるのではないか？という不安が僅かに生まれる。パイモン達も、リアンシェルトの一声で態度を改めて参戦してくる可能性も捨てきれない。

――原因はもう変えられない。ならば過程と結果をより良いものにするのが人というものでしょう？――

「ん・・・？（なんだ、今のノイズ・・・）」

脳裏にノイズ交じりの、何かしらの記憶が流れた。別の契約先での記憶じゃない。今の声は、リアンシェルトのものだったが、俺が人間だった頃の記憶じゃない。人間だった頃の記憶であればノイズなんてものが出ず、ハッキリと綺麗に思い浮かべることが出来るからだ。

「・・・パイモン。今後、いかなる理由においても神器王と、その周囲の者たちに危害を加えることは一切不可。境界門の次回の開門時には、神器王を案内するように」

「了解です～」

――私たちはこれまでもこれからも敵同士なのです――

――リアンシェルトはヴァルキリーとして記憶が戻っているという――

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・！」

「ま、マイスター？　どうしたの・・・？」

――僕はヴァルキリーなんて知らないもん！　僕はレーゼフェア！　エグリゴリのレーゼフェアだもん！――

（なんだ、この記憶は！？）

――戻れるわけない。僕は、僕たちは、大好きな人たちをこの手で殺した。洗脳されてた？　そんなの言い訳だよ――

（いつの――いや本当に実体験したものか！？　知らないぞ、俺は！）

「これであなたの不安は取り除かれたはず。あとは・・・私にトドメを刺すだけです、神器王。さぁ、その槍で、もう一度わたしを貫いてください。今度は貫くだけではなく魔術で確実に体を破壊してください。でないと、異常に進化しすぎた私の自己再生プログラムは機能し続けます」

"レーヴァテイン"によって胸に開けられた穴が修復され、リアン

シェルトは仰向けに倒れたまま両腕を大きく広げて、まるで十字架のような姿をとった。

――自分自身を許せないんだよ！　記憶が戻って、自分たちが犯した罪を思い出した時、僕たちは決めたんだ！　せめて敵として父さんと戦って、その手で眠りにつこうって！――

――私たちはこれまでもこれからも敵同士なのです。あなたの腕に抱かれ、この優しい温かさも永遠の中の一瞬。離れたらそこから元の関係に戻りましょう。あなたは神器王として、私はエグリゴリとして、あなたの手でこの身に死を齎されるその日まで――

――最初はね、自壊しようとしたんだよ。でも僕たちには、当時のヴァナヘイム王から自壊も自傷も出来ないように、アンスールのみんなを殺すように、特別なプログラムが組み込まれた。だから記憶が戻っても、そのプログラムがある以上は嫌でも父さんと戦わないといけなかった。だからこうして父さんに敵意を持たせるような行動して、僕たちエグリゴリを斃し易いように仕向けてた――

――お父様の手で、罪深い私たちの旅路に終止符を打ってください。それがバンヘルドも、グランフェリアも、シュヴァリエルも、レーゼフェアも、そして私も、フィヨルツェンも、ガーデンベルグも、皆が抱くたった1つの・・・一生のお願い、というやつです♪――

（なんて・・・ことだ）

ノイズ交じりだった記憶が徐々にハッキリと見えてきた。レーゼフ

ェアとの闘い、その後のリアンシェルトとの真実の会話の記憶。妄想なんかじゃない。俺が忘れていた、絶対に忘れてはいけない記憶だった。何故、こんなに大切なモノを忘れていたのか。

――彼女らエグリゴリと偶然出会ったのは事実です。ルシリオン様より伺っていた特徴と一致し、私からルシリオン様のお名前を出し、コミュニケーションをとりました。そこで彼女たちの記憶が戻り、ルシリオン様の行方を探していたことを知りました――

（マリア・・・）

――お父様。この真実はいたずらにお父様を苦しめ、悲しませるもの。忘れた方がお父様の為なんです――

俺とアイリの記憶を消した（正確には封印した）のはマリアだが、それを考えて依頼していたのはリアンシェルトだ、責めるわけにはいかない。"エヴェストルム"を握る左手に力を込めるが、すぐに緩めた。マリアの記憶封印が今になって突然解除された理由は判らないが、リアンシェルトの最期というタイミングには感謝だ。

「（この子たちの決意をふいにしたくはないが・・・）リアンシェルト」

「なにか？」

「思い出したよ。お前たちエグリゴリが、すでに記憶を取り戻していることを」

「っ！！」

大きく目を見開いたリアンシェルトの様子からして、俺がマリアに封印された記憶を取り戻すことは予定になかったようだ。さらに「そんな・・・！　どうしてお父様の記憶が元に・・・！？」と、誤魔化すことはせずにサラッと演技をやめてくれた。嬉しい話だ。そうだの違うだのと押し問答はしたくないからな。

「推測になるが、お前の創世結界がヴァルハラを侵食した際、そのダメージが俺の体を構築している魔力にまで影響を及ぼした。その際、封印に綻びが生まれたんだろうな。アイリの機転で体の崩壊は免れたわけだが、封印までは元に戻らなかった、と言ったところだろう」

何の根拠もない推測だが、理由なんてどうだっていい。今はただ、リアンシェルトを敵としてではなく、娘として送ることが大事だ。"エヴェストルム"の柄を握っていた左手で、あの子の右手を握った。

「・・・お父様？」

「すまない。俺は親だというのに、お前たちを苦しめてばかりだ。今もこうして・・・」

リアンシェルトの瞳から溢れ流れる涙を右手で拭い去ると、あの子は「あぅ」と顔を真っ赤にして、左袖で目をゴシゴシと拭った。そ

して「泣いてるところ、見ないでください」と顔を逸らした。そんな恥ずかしがることないだろうに。

「馬鹿だな・・・」

そう言いながらリアンシェルトの頭をそっと優しく撫でる。ますますあの子の頬や耳が赤くなっていく。あの子は「も、もう結構ですから・・・」と困り気味に言うものだから、俺は仕方なく頭から手を離した。

「コホン！　えっと、お父様。今後のことですが、私に考えがあります。本当なら私が破壊された後で、パイモンから伝えるように計画していたのですが、こうなっては少しでもお父様とお話がしたいので私がお伝えします」

リアンシェルトが語ってくれた話は、本当に昔から俺のために考え、行動していてくれたことが判る内容だった。今回の闘いで、俺の体に致命レベルの異常が発生する可能性があったとして俺の影武者――クローンを生み出していたこともそうだが、アイリが始めから俺専用の、ユニゾン可能な新世代"ヴァルキリー"として開発されていたこと。次に境界門が開くまでの約４年間、俺の体を保持や、ガーデンベルグとの闘いに必要な魔力を次元世界のあらゆる場所から回収する組織、"Ｔ・Ｃ・"（Ｔｅｓｔａｍｅｎｔ　Ｃａｎｃｅｌｌｅｒの略とのことだ）の考案などなど・・・。

（そんな頑張り続けてくれていたこの子を、このまま本当に破壊していいのだろうか？　否、そんなのは許されない、許したくない。

しかし、リアンシェルトをこの手で救わなければ、あの子はこの先どうなる。自壊も自傷も出来ず、俺がこの世界からいなくなった後も独りで存在し続けるのか・・・。

「（そうか。結局、結末は変わらないのか・・・）なぁ、リアンシェルト」

「はい」

「俺は・・・やはり、お前を破壊しなければならないのか？」

「はい。それは絶対です。堕天使戦争において、お父様の勝利条件はただ1つ。私たちエグリゴリを殲滅することです。正直な話、お父様はガーデンベルグと神器ユルソーンを破壊すればいいだけです。ですが、そうなったら私はどうしたらいいのです？　お父様がテスタメント、神意の玉座から解放されたとき、お父様がいつの時代で復活するか判りません。そうしたら私は、お父様のいない何百、何千という時間を独りで過ごさなければなりません」

それは前々から俺も考えてはいた。ガーデンベルグの"ユルソーン"に貫かれ、不死と不治の呪いを受け、フェンリルによって時間凍結封印を受けた6千年以上前のアースガルドに戻るのか。それとも、この時代のアースガルドで復活するのか。可能性としては、"テスタメント"になった時点まで戻る――前者だ。過去に戻ったら、記憶、堕天使戦争などなど、俺自身どうなるのかも判らない。不確定要素が多すぎるため、リアンシェルトを生き残らせる選択肢は始めから・・・無かったんだ。

「判った。先に逝ったバンヘルド、グランフェリア、シュヴァリエル、レーゼフェア、フィヨルツェン達に・・・よろしくな、リアンシェルト」

「お父様、ありがとうございます」

そう言ってリアンシェルトは十字架の姿勢に戻り、静かに目を閉じた。俺は「アイリ、ユニゾンを」と伝え、アイリと再びユニゾンを果たす。

「アイリ。氷神裁く絶対なる術法（エグリマティアス・エクテレスィ）の発動を。アレには私の術式の無力化はもちろん、魔力炉（システム）の出力や神秘の強制低下という効果があるの。これなら弱体化なさっているお父様でも、私にトドメを刺すことが可能。・・・ですが、パイモン。念のために私を抑えつけておいて。お父様の攻撃に反応して迎撃してしまうから」

「了解です～。・・・リアンシェルト様、長い間お疲れさまでした～」

――フェアボート・ヴィーダーシュタント――

紅碧色の魔力で作られた5本のリボンがリアンシェルトの四肢と腰に巻き付き、地面に拘束した。俺ではなくミミルからの魔術なためか、あの子は迎撃行動に出ることはなかった。

「アイリ、頼む」

『ヤヴォール。氷神裁く絶対なる術法（エグリマティアス・エクテレスィ）』

対リアンシェルトという術式が発動されると、リアンシェルトから魔力や神秘が急速に失われていくのが判る。確かに、これなら今の俺でも問題なくあの子にトドメを刺すことが出来る。地面に置いていた"エヴェストルム"の柄を握り直し、神秘カートリッジをロード。穂に刻印されたルーン文字に魔力を流し、デバイスから神器へと変化させたイドフォルムとする。

「おやすみ、リアンシェルト。・・・良い夢を」

「おやすみなさい、お父様。私を生んでくれてありがとうございました」

リアンシェルトの額にキスをし、俺は立ち上がった。"エヴェストルム"の穂先をあの子の胸に突き付けた。あの子は自分の死がすぐ側にあっても呼吸を乱すことなく、「さぁ、どうぞ」と一言。

――集い纏え汝の閃光槍（コード・ポースゼルエル）――

穂に閃光系魔力を付加し、その威力を高める。そして・・・

「っ！！」

「うく・・・」

リアンシェルトの胸、"魔力炉(システム)"のある心臓付近を確実に貫いた。"レーヴァテイン"で貫いたときとは違い余裕をもって正確に狙えたことで、"魔力炉(システム)"を破壊できたことを示す証明――あの子の呼吸が止まった。四肢の末端よりあの子の体の崩壊が始まったかと思えば、フィヨルツェンの時と同じようにあの子の体を構築していた魔力が爆ぜた。

「リアンシェルト様もまた～、フィヨルツェン様と同じようにベルカの地を再生されるのですよ～」

「なぜだ？」

「アンスールが全滅した後も、レーベンヴェルトの騎士団がエグリゴリに戦いを挑んだんです～。アンスールの敵討ちという理由ですね～。神器王たちの敵討ちという理由に、リアンシェルト様たちは感謝していたみたいですね～」

「だから、レーベンヴェルト――ベルカの地を再生するのが恩返しになると？」

「だと思いますよ～」

１００㎝を超える大きな胸を揺らしながらミミルは「では～、これより案内しますね～」と歩き出した。リアンシェルトの死という、感傷に浸る間も与えてくれない。彼女に何も答えずに、あの子が横たわっていた地面を眺めていると、グイッと両腕の袖が引っ張られた。

「フラメル、ルルス・・・」

「マスターに付いて行ってください、ルシリオン陛下」

「ほらほら早く早く！」

揃って頬を膨らませている2人に引っ張られるまま、今後の"T・C・"の本拠地となる場所へと案内された。

・―・―・終わりだ・―・―・

「そろそろ時間だよ」

椅子に座っている俺の顔を覗き込んでいるアイリに「ああ、そうか」と応じながら、背もたれに預けていた上半身を前へと起こす。

「報告するね。ミッドの各襲撃地からプリム達は帰ってきて、回収した魔力を預けた後に顕現時間の限界によって消滅。・・・で、やっぱりと言うか、ディアーチェ達は帰ってこなかったよ」

「魔力保有物の回収任務完了後の行動に縛りは付けていないからな。全エインヘリヤルに施してある緘口令も、もう切れていると見ていいだろうし・・・」

「これでマイスターの真実が、はやて達みんなに伝わっちゃうね。良かったの？　死を偽ってまではやて達と縁を切ろうとしてたのに」

アイリにそう言われた俺は、自分がクズだってことを嫌でも思い知る。ディアーチェ達を召喚したのは、ルシリオンの最期が近いということもあり、はやて達と最後の再会をさせるつもりなだけだった。それがはやて達にもディアーチェ達にも恩返しになる、と考えたからだ。しかし、俺の真実を伝える機会を与えた上で放った以上は、それは・・・。

「卑怯者だな、俺は・・・」

俺は死んだと思わせてはやて達を悲しませておきながら、実は生きていました、俺のことを忘れないでください、それをディアーチェ達から伝えさせる。最低すぎる・・・。

「大丈夫！　アイリ、そんなマイスターでも大好きだから♡」

「ありがと（卑怯者だっていうのは否定しないんだな。事実だから構わないけど）」

眠気も完全に吹っ飛んだ俺は椅子から立ち上がり、最終フェイズのための出撃準備に入る。アイリを伴って部屋を出よう・・・とする前に、首だけ振り返る。視線の先、部屋の奥の椅子に座る、頭からすっぽりと布を被る"王"に向かってアイリと一緒に「いってきます！」と告げた。

部屋から出、廊下で待機していた猫、「エルフテ」の名前を呼ぶ。元は二足歩行で貴族服を身に纏っていたが、シュテルの指示で素っ裸で四足歩行を徹底するようになった。

「最後の仕事だ。いくぞ」

「了解です」

「アイリが抱っこしたげるね！」

アイリの胸に抱きかかえられたエルフテを伴い、俺とアイリは本局へと向かった。

Ｓａｇａ２４－Ｂ真実を越えた先にて待つもの～Ｈｉｓｔｏｒｙ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

"界律の守護神テスタメント"という神様のような存在の１人であるという女の子、マリアさんから、ルシルの真実を追体験するような形で教えられたのは、ルシリオン・セインテスト・アースガルドという、１人の男性の激動の半生だった。

「――以上が、皆さんがルシルと慕う、ルシリオン様の真実です」

マリアさんがそう言って締めると、ここミーティングホール全体に投影されていたルシルの半生映像が消えて、ミーティングホールの元の景色へと戻った。ハンカチを涙でビショビショにしている私もそうだけど、静かになったホール内では嗚咽、鼻をすする音が響いて、空気は重いまま。当然だ。ルシルが歩んできたおよそ２万年という気が遠くなりそうな時間、その内容があまりにも救いの少ない酷いものばかりだったから。

（あれだけの地獄を経験して、それでも今なお笑っていられるのは・・・強いけど、悲しいよ、ルシル・・・）

"アンスール"の魔術師、神器王ルシリオンとして戦った再誕戦争。"戦天使ヴァルキリー"が洗脳されて"堕天使エグリゴリ"となったガーデンベルグ達と戦い、今なお続いている堕天使戦争。さらに、

"テスタメント"として数多の世界に召喚され、造り壊し、殺し殺されの循環の強制。まるで奴隷のような扱いだ。
そんな数あった契約の中盤の方で、私たちとは違う歴史を歩んだ次元世界での契約の映像があった。

「私、あっちの世界じゃ蘇ること出来なかったんだ・・・。フェイトもアルフも、プレシアママと解り合えなかったみたいだし・・・」

その世界では、アリシアは蘇ることはなく・・・

「私とアリサちゃん、魔導師になれなかったんだね」

「みたいね。セレネとエオスが居なかったし、ジュエルシードの数も、あたし達の時に比べれ１０個近く少なかったわ」

アリサとすずかは、セレネとエオスと出会わなかったことで魔導師にならなくて・・・

「あっちの世界のルシルは、八神家に世話になったんじゃなかったんだね・・・」

アルフの言うように、こっちの世界でもそうだったけど、私とアルフはルシルと一緒に"ジュエルシード"を集めていた。でもはやての家族にはなってなかった。

「シャルちゃんは、私やユーノ君と一緒だったんだね」

そう言ってなのはがシャルを見た。私とアルフとルシル、なのはとユーノとシャル（というよりシャルロッテさん）、それにクロノたち管理局の対立だ。

「なぁ。ベルカ時代の話はないの・・・ですか？　イリュリアの融合騎の話とかさ。あたしとシグナム達が出会ってた、みたいな・・・」

「その辺りについては何も。ただ、この世界でルシリオン様の元に夜天の書を転生させたのは私で、アギトさんをルシリオン様付きの融合騎となるよう企てたのはリアンシェルトです。私たちの介入が無かったあちらでのベルカにおいて、アギトさんがシグナムさん達と知り合っていたかどうかは判り兼ねます」

「そ・・・っか」

マリアさんとリアンシェルトは、ルシルのために色々と都合のいいようにこの世界で暗躍して、実行してきた。アイリも初めからルシル専用融合騎として開発されたらしいし、たった今言っていたように"闇の書"をルシルの元に転生させた。あっちの世界でのアギトの出生は知れず。それを聞いて悲し気に俯くアギトを抱きしめるのはリインだった。

「闇の書事件・・・。ルシルが居ねぇ所為か、あたしら普通に局員を襲ってんな」

「なりふり構わずだったわね、私たち・・・」

「挙句、リーゼ姉妹と言ったか、あの2人にしてやられていたな」

あっちの"闇の書"事件はグレアム元提督とその使い魔リーゼ姉妹の暗躍で進んだ。元"闇の書"の所有者アウグスタや"ナハトヴァール"というプログラムも存在しなかったことで、そこまで大きな戦いにはならなかった。

さらに言えばシャルの前世――シャルロッテさんの真技で"闇の書"の闇はバラバラに刻まれて消滅。それで闇の書"事件は終結・・・したんだけど、あっちの世界のアインスは生き残ることなく、すぐに旅立った。

「こちらの世界線での私は幸運だったのですよ。マリアの干渉があったからこそ、事件後も8ヵ月もこの世に留まれたのですから。ありがとう、マリア」

「いいえ。皆さんにとっての幸運などはすべて、私たちのルシリオン様のためという、独善的・打算的な計画の副次的な結果ですから、お礼を言われるようなものではありません」

"闇の書"の欠片事件や砕け得ぬ闇事件が起こらなかったあっちの世界は、「まさか、私がマッドサイエンティストだったとはね」と、ドクターが苦笑いを浮かべるような事件に突入した。プライソンや"スキュラ"は存在としておらず、ドクターとシスターズ（あちらではナンバーズ）と、シャルロッテさんやルシル達"テスタメント"が敵対する"アポリュオン"の一角、"大罪ペッカートゥム"を敵として歩んだ歴史。

「ドゥーエ姉様が亡くなっちゃいましたね～」

「解せぬ」

「お母さんは殉職したままなんだ」

「お兄ちゃん・・・」

ゲイズ中将やグランガイツ一尉、ドゥーエ、事件以前にクイント准尉とティーダ一尉は死亡。ＪＳ事件と名付けられた一件後、ドクター、ウーノ、トーレ、クアットロ、セッテは投獄。でも、チンク、セイン、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、ディードは、こっちの世界と同じようにナカジマ家、聖王教会に迎えられた。

「父さんや私たちスキュラが居ないおかげで、まぁ割と平和だったんじゃない？　自分が存在しない世界があるというのは、不思議な感じで不満でもあるけどね」

こっちとあっちの歴史は、ＪＳ事件から大きく変わってきた。

「私の前世――テルミナスが私に見せた記憶が、テスタメントの騎士シャルロッテとルシルとの戦いだったなんて・・・」

ルシルとシャルロッテさんがあちらの世界に召喚されるよう暗躍していたテルミナスによる、機動六課襲撃、そして決戦。この戦いで、ルシルとシャルロッテさんはあっちらの世界から離れた。その辺り

の映像の最中、私はずっと悲しいやら照れ臭いやらで大変だった。

（私、ルシルのことが好き・・・だったんだ）

ところどころで、はやてやシャルから視線を受けてた自覚はあった。あっちとこっちでは違うとしても、ルシルに恋をして、射止めようとした私はライバルだ。でも、世界が違うという違いをしっかり認識しているから、2人からは何のアクションも無かった。あったらあったで困るんだけど。

ルシルが次にあっちの世界に召喚されたのは3千年後、あちらの時系列で言えば4年後。セレスを首謀者として起こったテスタメント事件。セレスは、魔術全盛期の魔導書を使って、殉職した局員を亡霊として召喚して、彼らと魔族を戦力とした組織テスタメントを設立。そして、殉職者遺族と殉職者の意思として、局への抗議を理由とした事件を起こした。

「お姉ちゃんが死んだとしたら私もたぶん・・・向こうの私と同じように狂ってたと思う」

「でも、そうはならなかった。・・・それでいいよ、セレス」

テスタメント事件はセレスの死亡、彼女を操っていたルシル達"アンスール"のかつての敵、ヨツンヘイム皇帝アグスティンの消滅によって終結。それと同時に、シャルロッテさんが"テスタメント"から解放される日でもあった。シャルロッテさんは"神意の玉座"から解放されて、そして、イリスとして生まれ変わった。

「わたしが、なのは達を見て感情バランスを崩してた理由がこれなんだね」

「そうなりますね。ただ、シャルさんが記憶や人格を保持したまま転生したのは、私としても驚くべきことでした。ベルカはアウストラシアにてフライハイト家が存続し、シャルさんの神器キルシュブリューテの絶対切断効果をスキルとして継承していた子孫を発見したことで、すぐに私は歴史に介入を始めました。存続、存在はしてはいましたが、表舞台に立っていなかった家柄を、裏から操作してに表に立つように仕向けました」

ベルカに逃れていたヨツンヘイム皇室分家のカローラ家、将来ルシルやシャルと出会う予定になるだろうからという理由での騎士カリムの先祖であるグラシア家、再誕戦争時から存続していたヴィルシュテッター家、ヴァルトブルク家、アルファリオ家などを、アウストラシアの味方として起用。大戦時は味方だったシュプリンガー家、ヴォルクステッド家、ブラッディア家は、元から敵国イリュリア側であっても表舞台に上がっていたこともあって、そのまま放置したとのこと。

「この次元世界は、ルシル君のために歴史を改変されて歩んできた世界・・・そうゆうわけなんやな」

「そうです。すべて、私が勝手に進ませてきました。酷いことをしているという自覚はあります。恨まれて当然だとも・・・」

「・・・でもさ、結果的に言えば私たち、幸せだよね？　私はプレ

シアママのおかげで蘇った、スバルのお母さんもティアのお兄さんも、グランガイツ一尉、ゲイズ元中将、ドゥーエは死ななかった。ウーノ達も投獄されなかった」

「私たちスキュラや父さん、ジェイル・スカリエッティは死んだけどね」

頬杖を突いたアルファがジロリとアリシアを見たから、アリシアは「あ・・・」って表情を曇らせた。だからアルフが牙をむいてアルファを威嚇するんだけど、「やめなさい」ってリニスが窘めた。

「気にすることはないさ、アリシア君。私としては、あちらの私も死ねばよかったと思えるほどだ」

「ドクター。そのようなこと仰らないでください」

「そうですよ。娘として、それは聞きたくありません」

「あちらのマッドなドクターも魅力的でしたけどぉ～」

「私たちのドクターは、あちらのドクターとは違ってとても素晴らしい方です」

「ああ。世のため、人のためと、頭脳と技術力を以て貢献していました」

「うん、うん！　だから、死ねばよかった、なんて言ったらダメだ

と思う」

シスターズの面々が、ドクターを窘めるようなことを言っていった。娘たちからの言葉にドクターも「そうだね。馬鹿なことを言った、すまない」と、シスターズに体を向けて頭を下げた。そんなドクターに向かって、「そんなんだから、復活の機会を棒に振るんじゃないの？」と、デルタが椅子でくるくる回りながら失笑した。

「復活の機会って・・・？」

「え、なになに？　スバル聞きたいの？」

「あ、うん、まぁ」

「教えてちょうだい、デルタ」

「ティアナもそう言うんなら、しょうがないな～。デルタ達はね、エインヘリヤルとしての召喚直後に神器王からある提案を受けたんだよ。神器王はガーデンベルグと闘いの後、確実にこの世界が消滅するから・・・えっと・・・」

「この世界線の住人であり、すでに亡くなっている私たちを、エインヘリヤルから解放すると言ったのよ・・・」

「つまりは、そこのリインフォース・アインスと同じように、神器王の創世結界ヴァルハラから独立した存在になるということね」

「と、いうことは・・・ある種の蘇りってこと・・・！？」

デルタ、ベータ、アルファと続けて教えてくれて、なのはの確認に「そういうこと！」とデルタが満足気に頷き返した。私とアリシアとアルフは、バッとプレシア母さんとリニスを見た。アリシアが震える声で「プレシアママも、リニスも、蘇るの・・・？」と聞いた。私も同じ思いで、「そうなんだよね？」って聞く。

「私とリニスは、彼の提案を断ったわ」

「はい。私たちは、このままルシリオン君を共に消えることを選びました」

「「「え・・・？」」」

まさかの蘇り拒否に、私とアリシアとアルフは絶句した。２人になぜ？と問い質す前に、ウーノが「ドクターは受けましたよね！？」とドクターに聞いた。ドクターはシスターズの視線を一手に受けながらも首を横に振って、「私も同様にルシリオン君と共に消えることを選んだよ」と寂しげに笑った。だからシスターズや私たちは席を立って、蘇りのチャンスを拒否したプレシア母さん達に詰め寄った。するとプレシア母さんとドクターが何度目かの顔見合わせ。

「娘たちが噛みついてきそうだから私から話そうか。私はね、人であることに誇りを持っていたいのだよ。特別に長い寿命を設定されてはいるが、プライソンのように不老不死ではなく、不死に苦しむこともなかった。ただ、長命なだけの人間だった。しかし、エイン

ヘリヤルからの解放となれば、私は真に人間ではなくなる。定期的な魔力の供給を受けねば生き続けられないという枷は、私の誇りを傷つける。私は、人間として生き、そして死んだ。私はそれで満足している。・・・それにもう、スカラボにはすずか君が居てくれるからね。安心して、再び旅立てるよ」

「・・・ドクター、ジェイル・スカリエッティという、ひとりの人間の尊厳を守る・・・ですね。とても寂しいですけど、悲しいですけど・・・。尊重しないといけないですよね」

「ありがとう、すずか君。ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、ディード。私を父と慕い、想ってくれるのであれば、私の死を受け入れてほしい」

ドクターの強い意思を聞いたシスターズからの反論はもう出なかった。なら、プレシア母さんとリニスはどうなんだろう？ということで、私たちは2人に視線を戻した。2人も私たちの視線を受けて、プレシア母さんが「そうね・・・」と話し出してくれた。

「私も、スカリエッティ博士と似たような意見かしらね。あなた達のこれからの成長を見守っていきたい気持ちもあるわ。けれど、私はもう死んでいるのよ。その事実から逃げるつもりはないわ。それに、あなた達はもう、親が面倒を見る必要のないほどの立派な大人に成長しているもの。すぐ側で見守る必要はないと思うわ」

「私はプレシアの使い魔ですから、主と運命を共にするだけです。

それに・・・私たちが居なくても、あなた達は大丈夫でしょうから」

「待ってよ！　私、プレシアママやリニスとまだ一緒に居たい！」

「そうだよ！　あたし、リニスからまだまだ教わりたいことあるぞ！　プレシアも・・・まぁ、なんだ、フェイトをイジめてた頃とは違うから、別に一緒でもいいけどさ！」

それがプレシア母さんとリニスの意思だった。でも、シスターズとは違って、アリシアとアルフはすぐに受け入れなかった。もちろん私だって「プレシア母さん、リニス・・・」と、ルシルの提案を受け入れてほしいって、縋るような声色で名前を呼んだ。

「いい？　まず、エインヘリヤルからの解放、そして独立ということとについてハッキリさせましょう。独立後の在り方は基本的に使い魔と同じよ。魔力供給を受けて命を繋ぎながら、見た目は老いることなく生き続ける。・・・確かに私は愛娘２人の成長を見守っていきたいわ。でもね、子が自分の年齢を追い越し、そして老いて死ぬのを、親が見たいと思う？」

もし、もし私の成長が止まって、エリオとキャロが私を追い越して歳を取って、おじいさん・おばあさんになって、私より先に亡くなるようなことを見ているしか出来ないとなってくると・・・。

（いやだ、辛い・・・！　しかもこれ、エリオとキャロが私を存命させるために魔力供給を行うとなれば・・・）

私の生死を、あの子たちに任せることになる。つまり、私があの子たちの老いを見たくないと、だから先に逝きたいと言えば、あの子たちは魔力供給をやめるだろうか。ううん、やめたとしてもそれは・・・私を死なせるという行為。それをあの子たちに強いる？　無理、ダメ。血の気が引いた。

「フェイトは察してくれたみたいね。親として、子に自分を死なせるような真似をさせたいと思うかしら？」

「「あ・・・！」」

アリシアとアルフも、"エインヘリヤル"からの解放・独立の欠点に気付いたみたい。親しい間柄な分、辛い選択を迫られるということに、元"エインヘリヤル"の生死という選択を・・・しなければならないと。

「私たちに復活の機会を与えたとは言っても、そういう心情的な欠点を残していて・・・。ルシリオン（かれ）の善意は無意識の悪意とも言えるわ。でもまぁ、こうして最後にまた愛娘たちと会話が出来るのだもの。それは感謝しているわ。・・・それで、アリシア、フェイト、アルフ。私をまだ蘇らせたいかしら？」

「「「・・・」」」

「それでいいのよ。・・・リニス。あなたは残ってもいいのよ？この際、アリシアの使い魔になってしまいなさい」

「えええ！？　ここでそう言いますか！？　私はプレシアの使い魔として共に逝こうと・・・！」

「リニス！　私の使い魔になってよ！　私、魔力総量もたくさんになったし、リニスひとりなら余裕だよ！」

「え、ですが・・・！」

「私たちが消えるまでに決めておきなさい、リニス。・・・私たちからは以上よ」

アリシアとアルフにしがみ付かれたままのリニスは困惑顔を浮かべて、私に助けを求めるかのように見てきた。プレシア母さんの復活は、プレシア母さんの意思を尊重して諦めたけど、リニスだけでも残ってほしいという思いは私も当然持っているわけで。

「私も、リニスには残ってほしい」

私はリニスの背後に回って、ギュッと後ろから抱きしめた。リニスに残ってもらいたいっていう、私とアリシアとアルフとプレシア母さんの４票に、プレシア母さんと一緒に消えるというリニスの１票。多数決であれば残留決定だけど、やっぱりリニスの意思も大事だ。いつまで居てくれるかは判らないけど、それまでに説得できたらいいな・・・。

「デルタ達はどうすんの？」

「もっちろん、残る！　ね？　アルファ」

「せっかく生き返らせようとしてくれているんだし、受けない考えはないわね。神器王のヴァルハラからエインヘリヤルの９割が消滅したから、割と寂しいのよ・・・」

「そうなのね。で、誰のお世話になろうって言うの？」

「ホテルアルピーノで雇ってもらおうか？って、デルタ達は考えてるね」

「あー、ルールー達と仲良いもんね」

「メガーヌさんも、スキュラのみんなを正式に従業員に迎えたいって言ってたし、ちょうどいいかも」

「ならさ。お休みの日とかミッドにおいでよ。また一緒にゲーセン巡りしようよ、デルタ」

「行くぅー！」

"スキュラ"の子たちは残留の意思があるみたいで、魔力供給をしてもらう予定はアルピーノ家と考えているようだ。

「シュテル達はどうするの？」

「我々は残るつもりはありません」

「当然であろう。我らのオリジナルは、遥かに遠いとはいえ今も異世界で生きておるのだ。偽者の我らが残る必要性は感じられん」

ディアーチェ達フローリアン家は残るつもりはないみたい。言っていることは正しいけど、ちょっぴり寂しい。オリジナルのレヴィ達とはもう１０年以上逢えていないし。もう会えなくなるという事実に、私たちは最後になるだろうお喋りタイムに入った。

「ご歓談中申し訳ありませんが、皆さん、傾注をお願いします」

「うぬらは我らの消滅まで談笑と洒落込みたかったであろうが、そうも言っておれん。Ｔ・Ｃ・の最終フェイズがそろそろ開始される」

１０分くらいお喋りした後、シュテルがそう告げると、私たちの視線は自然とディアーチェへ向いた。私たちの前にモニターが展開されて、表示されたのはルシルとアイリ、そしてミミル、ルルス、フラメルの"エグリゴリ"だ。

「Ｔ・Ｃ・の王ルシリオンと、その融合騎アイリ、それに加えパイモン、ルルス、フラメルが、ここ本局に攻め込んでくる」

「なんで・・・！？」

「保管庫にある魔力保有物ね。ルシルがＴ・Ｃ・のリーダーだっていう考えに至った瞬間、ルシルは改めて本局を襲撃するだろうな～って思ったよ。だからセラティナとクララを、保管室前に待機させ

たんだし。ただ、ミミルとルルスとフラメルがあっち側だって言うのは想定外だったけど」

「では、パイモンについて教えてやろう。感謝するがよい」

そう言った後にディアーチェが、ミミルとルルスとフラメルの戦闘スタイルや使用する魔術などを私たちに教えてくれた。リアンシェルト達が絡んでいるとはいえイリュリア製の"エグリゴリ"でありながら、ルシルと・・・シェフィリスさんが生み出したオリジナル"エグリゴリ"と同等スペックという脅威力。

そんなまずい人を伴って、ルシルが戻ってくる。きっと、私たちを倒してでも・・・奪いに来る。

Ｓａｇａ２５再臨～Ｆｉｎａｌ　ｐｈａｓｅ～

†††Ｓｉｄｅなのは†††

ルシル君のとんでもない真実が、マリアさん（見た目は十代前半だけど、１万年以上生きる神様だから、さん付けだ。様付けはＮＯ食らったし）から語られた。信じられないような内容ばかりだったけど、もう１つの世界線で別の私たちと過ごしたシャルちゃんの前世シャルロッテさんが表に出てきて、事実だと断言した。

（あの仮定は正しかったことが証明された。シャルちゃんが私たちと初めて会った時に感情を乱していたのは、シャルロッテさんの記憶に引っ張られてるから・・・っていう）

こっちの世界線の私たちが歩んできた歴史は、マリアさんやリアンシェルト達の意思が介入して、本来歩む歴史とは大きく変わっているらしい。あっちの世界線の歴史を見れば、その変わりようはハッキリと判る。思うところはたくさんある。だけど、今は気持ちを切り替えないといけない。

「クロノ、ユーノ。・・・観てたよね？」

『ああ。モニター越しだったが、神器王ルシリオンの生涯の映像はきちんと観ていた』

『うん。・・・パラレルワールド。数多くあるフィクション作品の

中での割とポピュラーな題材だけど、ルシルは一度、この次元世界を経験していたんだね』

別室で会議内容をモニターしていたクロノ君とユーノ君に声を掛けたシャルちゃん。モニターに映る2人の表情も声も重い。

『ルシルが背負っているものは判った。約2万年の戦いの果て、最後のチャンスがこの次元世界での堕天使戦争。この機会を逃せば、神意の玉座に在るルシルの精神は消滅し、アースガルドという故郷に封印されているアイツの本体も死ぬことになる』

『そのために、これまで必死にこの世界で戦ってきたんだね。生き続けるために、ルシルの心の中に居る妹さんやお弟子さん、それに・・・』

「シェフィリスさん。恋人の魂も解放するために、ずっと・・・」

はやてちゃんは息を長く吐きながら、デスクの上で組んだ手の甲に額を載せた。"エグリゴリ"を救うだけがルシル君の目的じゃなかった。ユーノ君やはやてちゃんの言ったように"アンスール"の戦友であり、妹であるシエルさん、弟子であるカノンさん、恋人であるシェフィリスさんの魂を内包した創世結界を、ルシル君の故郷アースガルドで展開して魂を解放すること。そっちが最重要な目的なんだろうね。

『ルシルの置かれている状況は同情できる。出来るが、それでもアイツのやっていることは犯罪だ。見過ごすわけにはいかない』

「これだから頭の固い管理局は・・・」

「プレシア母さん」「プレシアママ」

『・・ルシルが自分の真実を僕たちに語ったとしても、僕たちもすぐには信じられなかっただろう。今こうしてテスタメント・マリアより見せてもらっても、受け入れるにはもう少し時間が欲しいくらいだ』

クロノ君はそう言うけど、私たちはもう完全に受け入れてる。だから、ルシル君が悪い事をしていると理解していても、どうしても何とかしてあげたい、って気持ちが生まれてくる。"アンスール"時代、つまり人だった頃から戦場で過ごしたルシル君は、家族も友達も恋人も喪って、最後は"エグリゴリ"によって自分すらも喪いそうになったし、その危機からはまだ脱してない。

"テスタメント"になってからも、神様なんていう肩書より奴隷の方がふさわしいような形でいろんな世界に呼び出されて、作ったり壊したり、生んだり殺したり、さらには殺されることが前提だった契約も何度かあった。それを約2万年も続けて、ルシル君の心が壊れなかったことは奇跡に近い。

『じゃあ、クロノはどうするつもりなの？　僕、ルシルをどうにかしたいとは思わない。出来ることなら、保管室にあるすべての魔力保有物を差し出したいくらいだ』

『馬鹿を言うな、ユーノ』

「じゃあなに？　ルシルを徹底的に敵として処理するってこと？
わたしは賛同できない。わたしも、シャルロッテ様も、ルシルに感謝してる。ルシルがいてくれたから、今ここにわたしが在る。その恩を返したい」

「私も、シャルに賛成。私が蘇ったのって、間接的に言えばルシルがこの世界に居てくれたからだしね」

「あたしやすずかが魔導師になれたのって、マリアさんが介入してくれたからなんでしょ？」

「向こうの世界の私とアリサちゃん、魔導師じゃないからなのはちゃん達となかなか逢えなかったみたいだし。そう考えると、ルシル君のおかげだよね」

「あたしのお母さんや、ティアナのお兄さんが死なずに済んだのも、ルシルさんが関係してるんだよね？」

「ええ」

シャルちゃん達がルシル君を敵とする考えを持ってるクロノ君に反論しだした。もちろん私だって、友達のルシル君とは敵対したくないし、事情を知ってしまった今は積極的に協力したいとは思う。だけど、局員としての私の葛藤もあるわけで。シャルちゃん達だって理解はしてるはず。感情と理性で、感情が勝ってる状況だ。

『僕だって力になりたいさ。だから、ルシルに魔力保有物を力ずくで奪われるのではなく、こちらからの許可を出したうえで魔力だけを持って行ってもらうようにする』

『それには賛成するけど、魔力を保有しているからこそ貴重な物もあるんだけど、どうする？』

『・・・その辺りは、ルシルに頼み込んで除外してもらうほかないだろう。だが、これにはえらく時間が掛かる。ディアーチェ。最終フェイズの開始まではあとどれくらいなんだ？』

「もうさほどは残っておらん。３０分もせずに攻めくるぞ」

「たった３０分・・・！　クロノ、間に合う？」

『・・・君たちで時間を稼いでくれ。申請はこの会話と並列して行っている。必ず許可を出させる。だから、許可が下りるまで、ルシルにこれ以上の罪を重ねさせるな』

クロノ君の映るモニターからはキーを打つ音が忙しなく聞こえてきてる。今はクロノ君のコネクションを信じるしかない。だけど、そんなクロノ君の頑張りに水を差すような、私たちに最後の絶望を与えるような言葉が、ディアーチェとマリアさんから告げられた。

「急ぐがよいぞ。ルシリオンの最終目標たるエグリゴリ、ガーデンベルグ。アレの居る世界はヴィーグリーズと呼ばれるところでな。今我らが居るここ下位次元世界とは違い、アースガルドやアールヴ

ヘイムと言った魔術が復活している上位次元世界に在るのだが・・・・」

「下位次元世界と上位次元世界を隔てる境界線ですが、２０年に一度だけトンネルが開きます。次を逃せばまた２０年後。ルシリオン様には到底待つことの出来る時間ではありません。そして、そのトンネルが次に開くのは今日、今より３時間後になります」

「それって、つまり・・・ルシル君がこの世界に居られる時間も、残り３時間ってこと・・・なん？」

「はい。開くのは３時間後。開いている時間は、私が干渉能力で安定させるとは言っても最大で１時間。よって、ルシリオン様がこの世界に留まることが出来るのは、残り４時間前後となります。あなた方にとっては残念なことでしょうが、不変の事実です」

マリアさんの言葉に私たちは「そんな・・・」と頭を抱えた。ルシル君との本当の、永遠の別れまで残り４時間。たったの・・・４時間。

シャルちゃんがどこかにメールを送るためか手元に小さなキーボードを展開して、静かにキーを打ち始めた。

「４時間フルで君たちと話し、別れを惜しむことが出来ればいいのだが、ルシリオン君は４時間の間に、妨害してくる君たちを相手にて勝利し、本局の魔力保有物を奪取し、ヴィーグリーズに発ち、ガーデンベルグを斃さないといけないと、大忙しだからね。納得のいく別れが出来るとは限らないと思っていた方がいいかもしれないね」

「許可がどうとか考えず、戦闘なんて無駄な時間を過ごさず彼にサッと魔力保有物を提供して、戦闘に割くはずの時間を別れの挨拶に使った方がいいんじゃないの？」

「アルファの言う通りだわ。私としても、消える前に娘たちと話していたいわ」

ドクター、アルファ、プレシアさんと、クロノ君の案を否定。ルシル君との最後の時間が、ルシル君たちとの戦闘というのも悲しいものだよ。それでもクロノ君は『ダメだ。僕は感情で正義を歪めることは出来ない』と、あくまで規律と秩序を優先することを決めた。

「・・・ならば、子鴉以下うぬらは、ルシリオンとパイモンを瞬殺し、戦闘時間を可能な限り短くするほかない。・・・ルシリオンとパイモンとの戦闘は魔術戦となる。魔術を使えん者、エインヘリヤルはここに残る。おっても邪魔になるだけであろうからな」

「え？　エインヘリヤルっていうことは、あんた達は一緒に戦ってくれないわけ？　ユーリが居てくれたら割とルシルを足止め出来るって思ったんだけど」

「あ、私たちフローリアン家はちゃんと出ますよ？　ただ・・・戦力として頼らない方がいいかと」

「アリサ。私たちはルシリオンに召喚されたエインヘリヤルでありますよ」

「敵対行為を取った以上、私たちはすぐに召喚を解除されるでしょうから・・・」

「だからボク達は、接敵と同時に本気の一撃で蒼羽を襲うつもり」

「それだけで墜とせるとは思えないですが、少しくらいは有利になると思います」

「おそらく、私たちが出来るのはそこまでと思うわ」

「ま、私たちは偽者だから消えるのは怖くはないし、問題無しよん♪」

余裕に満ちた笑顔を見せるフローリアン家のみんなが、消されることを覚悟のうえで味方してくれることを知って、アリサちゃん、それに私たちは、「ありがとう！」とお礼を言った。

「となると、今戦えるのってチーム海鳴とフローリアン家だよね？特騎隊はほぼ壊滅でしょ？」

遠慮なく言ったアリシアちゃんだったけど、特騎隊のみんなからの反論も文句も出てこなかった。シャルちゃんを除く特騎隊のみんなは、"エインヘリヤル・ヴァルキリー"に魔力を奪取されてる。魔術発動には魔法と同じくどうしても魔力が必要だから、戦力外にならざるを得ない状況だ。

「私の干渉能力なら・・・？」

「やめなさい、アルテルミナス。先のテルミナスの人格に対して上手く効果を発揮できたのは、彼女があなたのサポートをしたからです。あなた単独での干渉能力の使用は、もう少し練習を経てからです」

「っ・・・。判りました」

ルミナちゃんも戦力外通告を受けた。暗い雰囲気になる中、「あたし達は戦えます！」って、スバルがビシッと右手を上げた。でも、「やめておいた方がいい。ルシリオン君との戦いでは君たちは足手纏いになる」ってドクターがキッパリ告げた。魔術戦で重要なのは神秘の濃度だけど、神秘が拮抗した場合に次に重要なのは魔力量だって聞いてる。スバル達もいろいろと死線を潜り抜けて来たけど、私たちに比べれば魔力量は十分とは言い難い。

「・・・え？　ルシルさんとの戦いでは・・・？」

しょんぼりするスバル達だったけど、すぐにティアナが顔を上げてドクターに聞き返すと、ドクターに代わってディアーチェが「うぬらはパイモン戦に参加せよ」と告げた。スバル達の表情も明るくなって、元気な「はい！」を上げた。

「うむ。さて、今のうちに決めておかなければならぬことがある。ルシリオンと戦う者、パイモンと戦う者、それを決めねばならん」

ディアーチェから、今のうちに誰がルシル君かミミルさんと戦うかのチーム分けをするように言われたことで、相談した結果・・・

「わたしと八神家で、ルシルを押さえる」

「シャルちゃん達以外の私たちでミミルさんを押さえる、だね」

この世界で特にルシル君と関係の強かったはやてちゃんたち八神家とシャルちゃんは、戦闘の最中でもルシル君に伝えたいことがあるだろうということで、そんなチーム分けになった。もちろん私たちも、ルシル君とはいろいろなことをお話したいけど、ここはシャルちゃんとはやてちゃんに任せようと思う。

「・・・さてと。みんな。これから起こる戦いはいろいろと辛いだろうけど、実際クロノが言うように、これ以上ルシルに罪を犯させるわけにはいかない。ルシルにとって、私たちの迎撃は邪魔以外の何物でもないだろうけど、それでも止める。・・・そういうわけで、出撃します！」

シャルちゃんの号令に「了解！」と応じ、迎撃戦に参加する私たちは席を立ち、ミーティングホールの出口へ向かう。

「フェイト、アリシア。頑張っておくれよ。ルシルの奴を助けてやってくれ」

「判ってるよ、アルフ。あっちの世界じゃ妹（フェイト）のお婿さんだったんだしね」

「ちょっ、やめて、アリシア！　思い出しただけで恥ずかしくなる！」

顔を真っ赤にして恥ずかしがるフェイトちゃん、可愛い。アリシアちゃんはさらに追撃として、「そう言えばさ、フェイトとルシルの結婚後、２人ってどうなったの？」って聞いた。フェイトちゃんはさらに顔を赤くして俯いて、シャルちゃんとはやてちゃんは聞き耳を立てた。

「のちに女の子の双子、男の子ひとりが生まれましたね。そして、子どもや孫に看取られて、享年８９歳の幸せな人生を終えました。ルシリオン様も、契約したフェイトさんの命と同一化していたので同時刻、同じベッドの上で静かに息を引き取りました」

「そうなんだ～。幸せに過ごせたんならいいや、うんうん。ちなみに、なのはとはやては――」

「それは聞かなくてもいいよ！」「聞かんでええ！」

アリシアちゃんが今度は私とはやてちゃんに攻撃を仕掛けてこようとしたから、２人は慌てて止めに入った。フェイトちゃんとルシル君の結婚式で、２人の投げたブーケを私とユーノ君が受け取ったことで、シャルロッテさんにからかわれた。そこから先の未来を聞く勇気は、違う世界線だからといっても私には違いないから無い。ユーノ君も苦笑いしてるし。

「「もう！　アリシアちゃん！」」

「ごめん、ごめん！　・・・よしっ！　緊張は解けた！　行こう！　リニス、私の使い魔になるっていう話、私たちが戻ってくるまでに決めておいてね！　プレシアママも、また後で！」

「プレシア母さん、リニス、アルフ。いってきます！」

「ええ。いってらっしゃい。気を付けるのよ」

「しっかり考えておきます」

「フェイト、アリシア。それにエリオとキャロもフリードも。気を付けるんだぞ！」

「「はい！　いってきます！」」「きゅくるー！」

フェイトちゃん達は、プレシアさんとリニスさんとアルフと手を振り合ってから、ここミーティングホールの出口を潜った。

「すずか君、アリサ君。戦闘許可が下りた今のパイモンは強い。気を付けて行ってきたまえ」

「無様な戦闘を見せないようにね、月村すずか」

「もちろんだよ、アルファ！　ドクター、みんな。いってきます！」

「いってくるわ！」

すずかちゃんとアリサちゃんも、ドクターやシスターズ、個人的に因縁があるアルファに見送られながら出口を潜った。

「スバル、ティアナ、帰ったらゲーセン巡り！　約束だよ！」

「うん！」「判ってるわ」

見送りのデルタとハイタッチを交わしてからスバルとティアナも出口を潜った。

「はやて。コレ、持って行って。ルシルから貰った、魔術師化できる神器。きっと必要になる」

「ルミナ・・・。おおきに。ありがたく使わせてもらうな」

ルミナちゃんから指輪に紐を通した神器、"ヒミンバル"を受け取ったはやてちゃんは、一度胸に抱いた後で首に掛けた。そして「八神家、行くよ！」って、アインスさん達を伴って出口を潜った。

「マリアさん。個人的な話、いいですか？」

「はい。構いませんよ。どこでしましょう？」

「こちらでお願いします」

ルミナちゃんとマリアさんも出口を潜って、フェイトちゃん達とは

反対方向に歩いて行ったのが見えた。そんなルミナちゃん達を目で追っていたら、『なのは』って、「ユーノ君」に呼ばれた。

『その、頑張って。応援してる』

「ありがとう、ユーノ君。いってきます」

『いってらっしゃい。・・・じゃあ、僕も僕でやれることをやってみるよ』

「うん。ユーノ君も頑張ってね」

『ありがとう。それじゃ、また』

ユーノ君の映るモニターが消えて、さぁ私も出ようと歩き出したところで、「なのは」って呼ばれたから、「シュテル。どうしたの？」って振り返った。

「・・・いずれまた、試合いましょう。きっと、我々はまた再会できます」

「うん。そうだね。またいつか・・・」

私もシュテル、ディアーチェ達と一緒に出口を潜り、特騎隊のみんなと何か話し合ってから最後に出てきたシャルちゃんと合流。先に外に出て廊下で待っていてくれていたフェイトちゃん達とも合流して、本局保管室へと向かう。

保管室へ向かうまでの間、私たちはほぼ無言だった。何せ、これから戦うのは親友であり戦友でもあるルシル君だ。模擬戦なんかじゃなくて、本気の撃墜のし合いになるかもしれない。

（ステアちゃんっていう女の子に変装してたルシル君とも戦ったけど、あの時のルシル君は本気ではあっても全力じゃなかった。・・・なりふり構わず来るだろう今回の戦い、シャルちゃんも言ってたけど辛いものになるだろうな・・・）

そんな緊張感が私たちの間に漂っている中、「なんか、さっきから他の局員と誰ひとりとしてすれ違わないんだけど・・・」って、シャルちゃんがそわそわと周囲を見渡した。ルシル君との激突が待ってるっていうことで気付くのが遅れたけど、確かに全然すれ違わない。今の時刻は普通に就業時間中だから、こんな無人のようなことにはならないはず。そんなことを考えてると・・・

「ルシル君・・・！？」「ルシル・・・！？」

"テスタメント"の正装とも言える格好――神父服、フード付きマント、目出し穴の無い仮面を身に着けたルシル君と、大人姿な「アイリ！」と、「ミミル、ルルス、フラメル！」の５人が、目の前の角から現れた。

「・・・パイモン、ルルス、フラメル」

「はい～」「ん」「あいよー！」

ルシル君は私たちに一瞥もくれることなく、この場をミミルさん達に任せてアイリと一緒に保管室へと通じる廊下を進もうとする。

「子鴉どもはルシリオンを追え！」

「うん！　シャルちゃんも早く！」

すぐにデバイスを起動した私たちは、歩き去ろうとしてるルシル君とアイリを護るように立ちはだかるミミルさんとルルスとフラメルと対峙して、シャルちゃんとはやてちゃんたち八神家がミミルさん達の側を通り抜けられるよう援護するために即行動。

――ソニックムーブ――

――スプライトムーブ――

まず、フェイトちゃんとエリオとレヴィが高速移動でミミルさん達に突撃して、シャルちゃん達の行く手を確保しようとする。私も"レイジングハート"をエクセリオンモードにして、「アクセルシューター！」をスタンバイ。

――跳ね返す（ブークライム）揺ぎ無き水塊――

私たちとルシル君とを隔てるように発生したのは水の壁。全力で走り抜けようとしてたシャルちゃん達は止まることが出来ずに水の壁に激突。普通なら入り込むんだろうけど、「きゃあ！」と、ボヨンと勢いよく跳ね飛ばされて尻もちをついた。

「あいたた・・・。ミミル！」

「ここから先は通行止めよ～。ルシリオン陛下の仕事が終わるまで、私と踊ってもらうわね～」

――高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）――

雄クジャクの尾羽のような綺麗な翼が２０枚と放射状と展開されると、ミミルさんの存在感が圧倒的なものになった。

「ルルス～、フラメル～。いくわよ～」

「はい！」「ほーい！」

――ユニゾン・イン――

ルルスとフラメルが光の粒子になったかと思えば、ミミルさんの胸に吸い込まれて行った。それは、さらなるミミルさんの強化が行われてしまったことを意味する。セミロングの白い髪が真っ赤になって、全身から漏れ出てる魔力の濃度が一気に濃くなった。瞬時に理解した。これは勝てないって。

――封鎖防壁――

水の壁が消失すると同時に展開されたのは魔力防壁。展開された瞬間にチラッと見えたけど四重の壁になってるみたいで、あれを突破

するだけでもとんでもない労力が掛かりそう。

「狼狽えるではないわ！　ルシリオンめ。我らを敵とすら見ず、召喚を解かったことを後悔させてやるわ！　呆ける暇はないぞ、貴様ら！」

「です！　私たちが壁を壊します！」

「私たちだって負けてられない！　シャルちゃん達はいつでも追い駆けられるように準備を！」

ミミルさんに妨害されないように引き付けながら防壁を破壊する。やる事は単純、でも難度ＭＡＸの作戦。そう考えていたんだけど・・・。

「行って！」

――実数干渉――

背後からルミナちゃんの声が聞こえたと同時、魔力障壁すべてが一瞬で消滅した。何が起きたのか判らない。だけど、シャルちゃん達は振り返ることなく駆け出した。ミミルさんが慌てたようにシャルちゃん達に振り向こうとしたから・・・

「シュート！」

「プラズマランサー！　ファイア！」

「ジャベリン・メテオ！」

「フローティングアイス！」

「イジェクティブファイア！」

「クロスファイアシュート！」

「ディバインバスター！」

「ルフトメッサー！」

フローリアン家を除く私たちは一斉攻撃をして、シャルちゃん達の離脱をサポート。私たちの攻撃を受けながらもほぼ無傷なミミルさんは、シャルちゃん達の背後を護るためにすずかちゃんの創った氷塊へと攻撃・・・するより早く、今度はフローリアン家の一斉攻撃を受けた。

Ｓａｇａ２６二人の王～Ｒｕｓｙｌｉｏｎ　＆　Ａｌｉｃｅ～

†††Ｓｉｄｅリインフォース・アインス†††

私にとってルシルは主はやてと同等以上の恩人だ。それは、この世界線とは違う次元世界でもそうだった。テスタメント事件の折、私を"エインヘリヤル"から独立させ、再び主はやて達と共に過ごせるようにしてくれた。それがどれだけ私の心を救ってくれたことか。今回もそうだ。オーディンとして活動していたルシルは、私やシグナム達に大きな幸せをくれた。道具ではなく家族として接してくれて、シュリエルリートという名を貰い、私たちに恋を、愛を教えてくれた。そして私を再び"エインヘリヤル"から独立させてくれて、みなと共に過ごせている。私の全てを差し出しても返せないほどの恩。しかし私は今、恩を仇で返そうとしている。

（心情的に言えば、私はルシルの味方をしてやりたかったが・・・）

"アンスール"の魔術師としての２９年、"界律の守護神テスタメント"としてのおよそ２万年。その最果てが今日、これから起きる戦闘だ。誰だって同情し、手を貸したいと思うだろう。それを最も強く思っているのはおそらく私だろう。しかし、主はやて達を傷つけたこと、彼にこれ以上の罪を重ねさせたくないことを天秤に、私は敵として立ちはだかることを決めた。

（最初から手伝ってほしいと言ってくれていれば、こうはならなかったはずだぞ、ルシル、アイリ・・・）

ルシル達の方から敵対した事実は変わらない。だから、私たちは救いたいという思いを胸に抱いたままでルシルを止める。そして真っ当な形で協力しよう。

「あのさ、さっきからルシルとアイリの背中は見えてんのに追い付かねぇのはなんでだ？」

「確かに。我々が全力で走っているのに対し、ルシルとアイリは歩いているように見える」

ヴィータとシグナムの指摘に、先頭を走るシャルが「そもそもここの廊下、こんな長かったっけ？」と首を傾げた。本局内にあるここ管理局の本部ビルは確かに広いが、すでに８００ｍほどを真っ直ぐ走っている。ルシルの背中に集中していた所為か、それを疑問にすら思わなかった。

「これはアカンな・・・。トラップに引っ掛かってるかもしれへん」

――幻惑の乱景――

主はやてがそう漏らした直後、「魔力反応！」を感知した。直後、目の前に"Ｔ・Ｃ・"の幹部――ヨツンヘイム連合の王たち、レオン、フォード、プリムスが現れた。私たちは急制動を掛け、主はやてとシャルの「エンゲージ！」の言葉を受け、臨戦態勢に入った。

「ここに来てレオン達エインヘリヤルの召喚なんて、シャレになん

ねぇんだけど！」

『です！』

「最悪、主はやて、アインス、シャルだけでも先に行かせるぞ」

『おうよ！』

「魔術は使えないけど、私だって・・・！」

「ヴォルフ・ヤークト！」

「ナハト・リヒト！」

「「カートリッジロード！」」

リインとユニゾンしているヴィータは"グラーフアイゼン"をラケーテンフォルムにして構え、アギトとユニゾンしているシグナムは"レヴァンティン"を正眼に構え、私とザフィーラは籠手型デバイスの神秘カートリッジをロードし、シャマルは魔術を使えないながらにサポートするために後方へ移動。

「ヒミンバル、力を貸して」

「キルシュブリューテ！」

主はやては、ルミナより預かった神器の力を発動させ、シャルは"

キルシュブリューテ"を屋内専用のクルツシュベーアト・フォルムへと変形させた。前衛はシグナムとヴィータとザフィーラとシャル、中衛は私、後衛は主はやてとシャマルいう陣形。
私たちの敵意を一身に受けながらも、レオンとフォードは腕を組んで堂々と仁王立ちのままで、プリムスは廊下の壁に背中を預け、こちらを横目で見ながら含み笑いをしている。連中の強さを知っているからこそ、その余裕に満ちた態度には不快さはない。

「ちょっと。戦う気が無いなら退いてくれない？」

「こっちは急いでるんや」

シャルと主はやてがそう言うと、レオンが組んでいた腕を解いてこちらに向かって歩いてきた。グッと身構えたのだが、シャルが「やられた・・・！」と苛立たしげに床を一回踏みつけた。続けてシグナムやヴィータも「そういうことか！」と、ザフィーラと共にレオン達へ駆け出した。

「ちょっ・・・！」

「待て、お前たち！」

私の制止より先に突撃したシグナム達に、レオンは無慈悲な拳打を振り落とした。そこで私も、シャル達が悔しがった理由が判った。まず、威圧感が全くと言っていい程足りない。以前遭遇した際に、連中の攻撃態勢を見て体が強張った。だが、今回は何も感じない、存在が軽い。次に連中には影が無い。何故もっと早くに気が付かな

かったのか、と自分に呆れ果てる。

「やっぱり幻術じゃん！」

シャルの言うようにレオンの拳はシグナムの体をすり抜けた。フォードもプリムスも幻術で確定だ。レオン達が陽炎のように揺らめき、そして完全に消え去った後・・・

「ようこそ！　神器王陛下の救済を邪魔する悪鬼の皆様！　私の名はエルフテ！　これより幻惑の融合騎、最後の幻想劇場を開演する！」

――幻惑の乱景――

元最後の大隊所属の融合騎で、現在は行方不明とされていたエルフテの声。屋内の装いが見慣れたものではなく「ジャングル・・・！」へと変わった。視界はジャングルなのに、空気は屋内という感覚を狂わせるような状況だ。

「まずい。セラティナにエルフテが居たことも伝えないと・・・！
　ああもう！　ジャミング食らってる！」

状況は刻一刻と悪い方へと向かってしまっていた。主はやても「アカン。なのはちゃん達との思念通話も通信も繋がらへん！」と残念そうに首を横に振った。

「・・・行こう。本部ビル内はわたし達の庭のようなもの。ＭＡＰは頭の中に入ってるし、目を閉じてても歩けるって――あいたっ！？」

シャルがそう言いながら駆け出したが、廊下の壁に突っ込んだようで盛大に尻もちをついた。ヴィータが「しっかりしろよな」と呆れながらも右手を差し出し、手を取ったシャルを立ち上がらせた。シャルはヴィータに礼を言いつつ尻をはたいた後、「早歩きで行けば大丈夫！なはず！」と左手を前に突き出しながら進みだした。

「ちょ、ちょう待って、シャルちゃん！　アインス！」

「はい。この幻術結界は魔術ではないので、通常の魔法でも容易く破れるかと。・・・ルシルとの決戦の前にあまり魔力を消費するのは好手ではありませんが、時間稼ぎを受けていると考えればそうも言ってられません。都合がいいことに魔力量で言えば私が最強です」

私は足元にベルカ魔法陣を展開し、私の保有する魔法の中から1つを選択して準備。エルフテの展開したこの幻術結界の中心を探るように魔力の流れを読む。ベルカ式というのが幸いし、この結界を支える核は4つあることが判った。

「（ルシル・・・。私を強化しすぎたことが、お前の唯一の失策だろう）レーア・ヴェルト」

私を中心に全方位へ広がる対結界用結界魔法。広がりゆく結界の縁に押し返されるようにして、エルフテの幻術結界が解除されていく。このまま4つの核をも飲み込み、完全に結界を破壊してくれる。

†††Ｓｉｄｅリインフォース・アインス⇒セラティナ†††

保管室へ通ずる廊下手前にある監視室で待機していた私とクララは、みんなの居るミーティングホールで行われたルシルの真実っていう、とんでもない映像をモニター越しで観ていた。クララはお茶の注がれた紙コップを落とすほどに、ルシルの真実に感情を乱されて泣きまくってた。

「セラティナ。・・・アリスっていうアンスールの結界魔術師、あれってあなたの・・・」

「うん。私の前世・・・」

"アンスール"の終焉については、以前ルシルに前世の記憶を夢として見るって言う相談をした際に聞いていたし、アリスが脱退した理由も知ってる。ただ、あくまで口頭で聞いただけだから、実際に映像として見ると私の感情も大きく乱れて泣きっぱなしだった。

（夢の中に出てきた、アンスールには居なかった桃色の神父服を着た女の子・・・。あの、マリアっていう子だったんだ）

神器王（ルシリオン）――ううん、ルシルがアリスの記憶を消したのに、私がアリスの記憶を見ることが出来るようになったのは、マリアの干渉によるものだったってことを理解した。でも、私にとっては悪い事じゃないと思える。前世の人格との共存は、結構大変なのかもしれない。アリスの記憶だって辛いものも多かった。けれど、得られるものも多かった。

『セラティナ、クララ！』

『シャル？　どうしたの？』

シャルからの念話が入ったんだけど、かなり切羽詰まってる様子だ。私より先にクララが『なんかあった？』って聞くと、『ルシル達が現れた！　そっちに向かってる！』とのこと。しかもどんな手を使ったのか、本局員の活動が停止させられてるみたい。だからルシル達は堂々と進入してきたようだ。そんな緊急事態な内容を受け、私とクララはすぐに防護服へと変身して、ルシルの襲撃に備える。

『状況は！？』

『今、わたしと八神家でルシルとアイリを追ってる！　他のみんなは、ミミルと交戦中！』

『了解！（モニターで観てたけど、ミミルさん以外は想定内だね）私はルシルを保管室へ入れないように結界を張って待機しておく！』

『早く来てよ！』

『うん！　ダッシュで向かってるから！　んじゃ、またあとで！』

――昇華――

シャルとの念話が切れ、私はすぐに魔術師化する。魔導師と魔術師の切り替えは簡単で、スイッチレバーをカチャッと下すようなイメ

ージ。魔術師化すると、私の内に眠るアリスの人格が目を覚まして、普通の話とか魔術に関係するアドバイスなどなどをしてくれる。

『アリス。これから私たちは・・・』

――判ってる。ルシル様が最後の決戦に挑むために、この施設に保管されてる魔力を奪いに来る、でしょ――

『ごめん・・・』

――どうしてあなたが謝るの？・・・。個人的に言えば、ルシル様と敵対することは嫌だけど、それは現在(いま)を生きるあなたの意思を否定する思い。それに、ルシル様にこれ以上の罪を重ねてほしくないという思いもある。だから・・・あなたの正義を、仕事を全うしてほしい――

『そう言ってもらえると助かるよ』

アリスにとってルシルは、ヨツンヘイム連合から受けた洗脳を解いてもらい、連合への復讐を否定することをせず、"アンスール"のメンバーとして迎え入れてくれた命の恩人。おかげで魔術師としての能力を高める修行をしてもらい、シエルとカノンという親友も出来て、連合の魔術師と真っ向から戦えるほどさらに強くなった。

（アリスの思いが流れてくる・・・）

ルシルの味方をしてあげたい、"テスタメント"の苦痛から解放し

てあげたい、シエルとカノン、それにシェフィリスの魂を解放してあげたい。アリスの、してあげたい、っていう気持ちが、私の胸をキュッと苦しめる。

「セラティナ。私はどうした方がいい？」

「え？　あ、あー・・・うん、ルシルとアイリがユニゾンしていなかった場合、アイリをどっか遠くに転送して。それだけでルシルの戦力はがた落ちになると思う。もし、ユニゾンしていた場合は、シャル達の指示に従って」

「りょーかい！　それじゃあ、少し姿を隠しておくね」

クララの転移スキルによる奇襲なら、ルシルもすぐには対応できないはず。そこを突いてルシルを負かす。クララが消えたのを見届けてから結界術式をスタンバイ。入りは容易く、出は難しい結界、となれば・・・。

「拘束禁書（アズラーイール）の聖域・多層封印（マルチレイヤー）！」

保管室付近は、巨大なロストロギアなんかを余裕を以て運び入れることが出来るように広めに設計されてるから、必然ここを戦場とするほかない。一先ず、この中心に半径３００ｍを結界で覆う。それと同時に手元にＡ６判サイズの魔力の薄い板が出現。

「あ、セラティナだ」

「っ！！」

魔力ボードにルシルの名前を記そうと意識をそっちに向けた瞬間、「アイリ・・・！？」に名前を呼ばれた。視線を通路へ向けると、そこには映像で見た黒の神父服にマントに仮面っていう、怪しげな格好をした「ルシル！」と、彼の左斜め後ろに控えているアイリが居た。

『（ユニゾンしてない！　引き離すなら今！）クララ！』

『りょーかい！』

アイリの真後ろから音もなくクララが現れて、アイリの肩をガシッと鷲掴み。同時に転移スキルで、今度はアイリと一緒に姿を消した。作戦通り、ルシルとアイリを引き離したことに成功。それを内心で喜んでたんだけど・・・。

「え？」

ルシルの右斜め後ろにアイリが立ってた。ゾワッと全身に悪寒が走った。確かにクララはアイリと一緒に転移した。それなのに、気付けばアイリがルシルの側に控えてた。夢でも見てたのかな？って、頭の中で警報が鳴り響いてる。

「あっぶなー。マイスターの言う通りだったね、クララによる転移奇襲攻撃。エルフテが幻術でアイリの姿を隠して、変身魔法でアイリの姿に変身してなかったらヤバかったね」

「エルフテ・・・？　あっ、幻術の融合騎！？」

最後の大隊の捜査資料の中で何度も目にしてた名前だ。幻術に特化した融合騎で、ずっと行方不明だった。まさか"Ｔ・Ｃ・"に在籍してたなんて。シャル、こういう大事な情報も欲しかったよ。念話で文句を言いたかったけど、そんなことより今は魔力ボードにルシルとアイリの名前を書くことを最優先にしないと。

「ソレは、アズラーイールの聖域発動時に創り出される・・・！させないぞ！」

「邪魔しないでよ、セラティナぁぁぁぁーーーーー！」

――アイス・ランツェ――

アイリが腰から展開してる一対の白翼を羽ばたかせて、氷の礫型射撃を放ちながら突っ込んで来た。この魔法は誘導操作のない直射攻撃だ。射線を読みさえすれば防ぐまでもなく回避できる。脚に魔力を付加して、ステップを踏みながら氷の礫の隙間を縫うように回避しつつ、距離をとるために後退する。

（あ、でもアイリは魔術師じゃないから、こうして回避しなくてもいいんだった）

アイリの放った氷の礫からは神秘を感じられない。だから仁王立ちしていても問題なかったはず。

――その考えは油断！　ルシル様が側に居る以上は常に最悪を考えて！　ほら、私がサポートするから早く名前を書いて！――

『あ、う、うん！』

――守護聖定（メタトロン）の聖域――

私を閉じ込めるように展開された六角錐の結界。効果は外からの魔術・魔法・スキルを無力化し、内からの効果をスルー出来るというもの。私の神秘はルシルに劣っているから、全力で来られると砕かれる。でも、それまでに名前を書けばいいだけ。

――舞い降るは汝の煌閃（コード・マカティエル）――

「ジャッジメント！」

ルシルの発動した蒼い魔力槍２０本がアイリの側を通り過ぎて、アリスの展開してくれた結界に着弾。起こる魔力爆発は綺麗なサファイアブルーなんだけど、光量が強すぎて思わず目を閉じる。それでもページに指でルシルの名前を記していく。

（ルシリオン・・・セインテスト・・・アースガルド、っと。書けた！）

「むぅ・・・！」

まぶたの裏からでも判る蒼い光の中、結界の効果が発動されたことが判った。魔力ボードに名前を書かれた者は、ある種の封印状態になる。結界の外への脱出付加に加え、神秘濃度の強制低下という効果付き。格上の魔術師をも弱体化させるっていうトンデモ効果と引き換えに、結界を維持する魔力の消費はおそろしく激しいというデメリット付き。だけど、シャル達が来てくれるまで持ちこたえることが出来ればいい。

（次はアイリの名前を・・・！）

「アイリは魔術師になれないって話、もう古すぎる情報だよね」

――氷神裁く絶対なる術法（エグリマティアス・エクテレスィ）――

新しいボードを生成して、アイリ・セインテストの名前を指で記そうとしたところで、アイリがそう言って笑みを浮かべた。それと同時、あの子の魔力に神秘が発生し始めた。今なおチカチカする目を開けて、私を護る結界に向かって拳を打ち付けようとしてる「アイリ！」と視線が交わった。

「セラティナ～？　そこから出ておいでよ～！」

――氷拳――

冷気を放出する両拳による鋭い拳が、何度も結界の外壁に打ち込まれる。結界の効果もそうだけど神秘では私の方がまだ濃いらしく、アイリの連撃を完全に防ぎきってくれてる。アイリも無駄なことを

してるって感じたようで、「やっぱ結界王の生まれ変わりは伊達じゃないね」って下がった。

「マイスター、どうする？」

「あまり時間を掛けたくはない。仕方ない」

――突神（コード・フニクズル）の投冽――

普段複数本展開して射出する魔力槍とは違い、もっと精工に出来た長大な突撃槍を氷で作り出した。神秘が強制低下させられるといっても、なおもその脅威度は変わらない。そう思えるほどの魔力の圧縮度だ。

――セラティナ、体を貸して！　私が、戦友だった私が話してみる！

――

『あ、う、うん！　任せる！　どうすればいい！？』

――ただ、私の声に身をゆだねて！　拒絶しないでくれるといい！

――

シャルもシャルロッテさんに体を貸して、その強さを体現させていたことも知ってる。どうやら前世の方に強さが引っ張られるみたいだし、きっと私よりアリスの方がうまく切り抜けてくれると思う。

（アリスのことは夢の中で何度も見て、今ではもう1人の私だって

思ってる。だから拒絶なんて・・・しない！）

フッと意識が遠のくのを感じて、気が付けば・・・

「ルシル様！　少しだけで構いません！　時間をください！」

「っ！？　まさか、アリスか・・・！？　お前も、シャルのように表に出られるのか！」

私の口から、私の意思じゃない言葉が出てた。視界も体も私の意思に関係なく好き勝手動くし、それをカメラのレンズ越しで覗いてる感じ。だけど不安は一切感じない。逆に安心してアリスにこの体を預けられてる。アリスの、ルシルを救いたいっていう気持ちが強いからかな。

「はい！　セラティナに頼んで、体を貸してもらっています！　それであの！　どうかこれ以上の犯罪行為をやめてください！　セラティナとその友人たちが、あなたに罪を重ねさせないよう頑張っています！」

「もう遅いさ。私の存在自体がもはや罪だ。今更罪状が増えたところでどうということはない。どの道この世界とはあと数時間で永遠にさようならだ。だから、関係はない」

「投げ遣りですね。私の知るルシル様は、王として誇りのあるお方でしたが・・・今はとても格好悪いです」

――多殻結界（マルチプル・シェル）・多層封印（マルチレイヤー）――

「アイリ！」「マイスター！」

アリスが魔術を発動した。ルシルとアイリの周囲にキューブ状の結界が何十個と現れては消えるを繰り返し始めた。ルシルとアイリは慌てて回避するけど、避けた先でも関係ない場所でも結界が発生して、どんどん追い込まれてく。

（おかしい。どうしてルシルとアイリはユニゾンしないんだろ？）

２人がユニゾンすればさらに強化できるのに、今は協力してアリスの攻撃をしのいでる。ユニゾンしない理由は何？　しないのか、もしくは出来ないのか。その辺りも突っつけば、割と簡単に止めることが出来そう。

「アリス！　これ以上抵抗すれば、私も本気で潰しに行くぞ！」

「八神はやて達やフォルセティを苦しめると知りながら、なおもその格好悪さをどうともしないのであれば！　あなたに任されたアンスールの１３人目！　結界王アリス・ロードスターが、あなたを止めます！」

「ならば、神器王ルシリオン・セインテスト・アースガルドとして、お前を撃破する！　アイリ！」

「ヤヴォール！　マイスターの元同僚とは言え、アイリは手加減し

ないからね！」

――一方通行（サンダルフォン）の聖域・高速発動（シンプリシティ）――

ルシルとアイリを閉じ込めようと、四角錐の結界が高速で展開されては消えてく。サンダルフォンはその効果が強烈過ぎて、一度に1つしか展開できない。でも高速かつ連続発動すれば、いつかは逃げる相手を捕えることが出来る。これでシャル達が来るまでの時間稼ぎは出来そうだ。

Ｓａｇａ２７其は王を支える最後の使徒～Ｐａｙｍｏｎ～

†††Ｓｉｄｅフェイト†††

ルシルとアイリが"Ｔ・Ｃ・"最後の襲撃犯として本局に襲来。死んだと思われていたルシルが実は生きていて、しかも"Ｔ・Ｃ・"を設立した犯罪者だったということにももちろんショックがあったけど、彼がこれまで歩んできた半生にはそれ以上のショックだった。

（別の次元世界じゃ、私とルシルは結婚してたとか・・・）

思うことはいろいろとあるけど、今は目の前の敵に集中しないと。ルシルとアイリが保管室にしまわれている魔力包有物から魔力を奪取するまでの時間稼ぎとして残った、ベルカ自治領ザンクト・オルフェンの技術者ミミル女史――本当の名前をパイモン・エグリゴリ、彼女を手早く倒さないといけない。

「貴様ら、手を止めるな！　あやつを！　ルシリオンを止めたいのであろう！？　であれば、こやつに構っておる暇など無い！」

――アロンダイト――

"Ｔ・Ｃ・"のメンバーは、ルシルのスキルである"エインヘリヤル"っていう使い魔で構成されているようで、ディアーチェやレヴィ達もその１人だ。でも今は、私たちの味方として、パイモン、それに彼女の使い魔であり融合騎であり、そして"エグリゴリ"でも

あったルルスとフラメルとの戦闘に協力してくれている。
私たちの邪魔をしてくるパイモンは今、ルルスとフラメルと融合していて、本来の白い髪は海のように青く、橙色の瞳は澄んだ空色に変わっている。服装はレディースーツに白衣姿。槍のように長い柄の先端に三日月状の剣身を持つグレイブを手に、背中からは孔雀の尾羽のような翼を展開している。

「私はあくまであなた達の足止めなのよ～？　大人しくしていてくれたら～、痛い目に遭わずに済むわよ～？」

――深淵（ラフェルニオン）へ誘いたる微睡の水霧――

パイモンの足元からボフッと音を立てて発生したのは、薄紫色の霧。それを見てユーリが「眠りの霧です！　吸ってはいけません！」と警告してくれた。パイモンから距離を取りつつ霧を晴らすための魔法を発動しようとしたら・・・

「アイル！」「すずか！」

――コールドエミッション――

――エディンム――

誰よりも早く動いたのはすずかとアイルの２人で、通路いっぱいに拡がりながら向かって来る霧に対して冷気の波を放出。眠りの霧と冷気の波が激突して、即座にユーリが「ヴェスパーリング！」と、背後に浮かぶ魄翼から魔力の輪を十数発と斉射。ダイヤモンドダス

トみたいになった霧を粉砕しながらリングは突き進み、パイモンに次々と着弾して魔力爆発を起こす。

「こうも狭いと、味方の攻撃の余波だけでこちらが参っちゃうね」

「照準もブレるし、あんまりよくないよね今の状況」

私の言葉にアリシアも同意してくれた。こちらの人数は多く、頼りになる実力者ばかりだけど、人数が多すぎて逆にそれぞれの持ち味を活かせない状態だ。みんなもそれが判っているから、近接系の私やシグナム達は攻めあぐねている。

「良いことを思いついたわ～。あなた達を閉じ込めてしまえばいいのよ～。・・・真技～」

――創世結界：偉大なる蒼（ミールキアーステール）に染まる水星――

パイモンから発せられていた魔力が急激に増大したかと思った瞬間、彼女の足元から大量の水が生成された。逃げ場の無い私たちはそのままどうすることもなく飲み込まれた。私は息を止め、廊下を押し流されながらみんなの姿を確認する。みんなも同じように息を止めていて、この水から逃れる術を探すために辺りを見回しているけど、残念ながら私たちの居る廊下に窓もドアも無い。

（このままじゃ・・・溺死しちゃう・・・！）

私はまだ余裕はあるけど、キャロとフリードがまずそう。と、ここ

で視界が真っ白に染まって何も見えなくなる。閉じたまぶたの裏からでも判るほどの光量だったけど、すぐに収まったことで目を開ける。場所は変わらず水の中だけど、本局の廊下とは違って明るくなっているし、水面があることも確認できた。

（キャロを助けないと！）

私たちの誰よりも底に近いキャロとフリードを助けるために潜行しようとした私の脇を通って行ったのはエリオ。エリオはキャロを抱き止めて、特別救助隊でもあるスバルの引率で水面へと上がっていくのをしっかりと見届けてから「ぷはっ！」と水面に顔を出すと、雲ひとつとして無い青空が目の前に広がった。辺りを見回せばなのは達も水面に顔を出して、呼吸を整えている。

「あぁ、よかったわ～。ごめんなさいね～。私の創世結界って発動時に大量の水が出るのを失念していたわ～。さぁ出ていらっしゃいな～」

――瓦解せる喰飲の龍咆（アルティフォドス）――

足元から全身を持ち上げられる感覚。何が起きるのかと思えば、海水の龍の舌の上に乗せられるようにして海面から脱出。その代わり海水の龍の開かれた口の中という、さらなる危険の中に移ってしまうことにはなったけど・・・。

「さぁもうこれで戦況は行き詰まりよ～。そこで大人しくしているといいわ～」

弾力のある水で出来た玉座に座るパイモンがそう告げた。確かに下手に動くと龍は口を閉じ、私たちを飲み込むだろう。そのまま口に含まれたままか、もしくはまた海の中に引っ張り込まれるか、どちらにしろタダじゃ済まないはず。

「そんなこと言ってもムダだよ！」

――雷神大輪斬――

左右対称の大きな斧頭が２つ、先端にスパイクという大戦斧形態の"バルフィニカス"の斧頭が水色の電撃刃を纏い、レヴィが舌の上で時計回りに一回転して海水の龍の首を刎ね飛ばした。

「そういうことですわね！」

――アサグ――

アイルの居る海水の龍の周囲にミッド魔法陣が１０枚と展開されて、放射面から氷で出来た槍（パルチザン）が８本ずつ、計８０本が出現して龍を貫き、さらに凍結した。

「私たちは知っていますよ」

――エラガバルスキャノン――

槍のように変形している"ルシフェリオン"２本の穂先を上顎裏と

舌に向けて火炎砲撃を連射するシュテル。龍を構成していた海水が一瞬で弾き飛び、蒸発した。

「リアンシェルトから厳命されているはずであります！」

――アンフィスバエナ――

大剣形態の"タラスクス"の半実体化している炎剣を純粋な炎へと変化させ、喉奥への刺突とともに剣状砲撃として発射。砲撃は龍の胴体を縦に真っ二つに裂き、蒸発させた。

「私たちへの攻撃は許されてるかもですけど・・・！」

――サイズディカピテイション――

ユーリは側に浮遊している2つの魄翼を大鎌へと変化させて、龍をバラバラに斬り裂いた。さらに大鎌の刃を大きく伸長させて、私たちを捉えている龍の上顎を一閃。頭部が斬り飛ばされたことで私たちが龍に丸呑みされる危険性が無くなり、私たちはそれぞれの方法で舌の上から飛び立った。

「ふん。なら消えるまでの間に暴れてやるまでよ」

――広域剣兵召喚レギオン・オブ・ドゥームブリンガー――

「ですね！」「そうね～♪」

――アクセラレイターーーー

「バルカンレイド！」「ラピッドトリガー！」

ディアーチェの４０基にもなる剣状射撃と、アミタとキリエの高速移動をしながらの弾幕が、水の椅子に腰かけたままのパイモンに次々と着弾して爆発を起こしていく。

「（ここで続かないと・・・！）バルディッシュ！」

第５世代として完成の域に達した"バルディッシュ"を、ライオットザンバー・カラミティの進化系であるライオットザンバーⅡへと変形させ、魔力刃を伸長させての直接斬撃、「ジェット・ザンバー！」でパイモンを狙う。魔力爆発で起こった煙を裂き、その姿を見せたパイモンは一切ダメージを負っていない様子で、私の一撃に対して何のアクションも取らずに右肩に受け入れた。

「フェイト！　そのまま押して！」

銃身の有る二刃の大剣レフトブレード、ソードブレイカー状の大剣ライトブレードという、二刀流形態ヴァラーフォームにした"フレイムアイズ"を振りかぶったアリサは、その両剣から長身の炎の刃を展開。

「アドラヌスセイバァァァァーーーーー！！」

ジェットザンバーの上から二剣の炎熱斬撃を打ち付けたアリサ。パ

イモンの肩に乗っていたジェットザンバーが僅かに沈んだけど、パイモンの様子を見るにダメージが入った感じはしない。だからアリサと私はすぐにデバイスを引いて・・・

「「シュート！」」「ファイア！」

――エクセリオンバスター・マルチレイド――

――ガンブレイズアサルト――

――ストリームコメット――

なのはの"レイジングハート"と"ブラスタービット"４基からの砲撃５発、ティアナの強化魔力弾１４発、アリシアの"ブレイブスナイパー"からの砲撃１発の邪魔をしないようにする。３人の攻撃もパイモンは水の玉座に腰掛けたままの状態で受け入れた。

「それなら！」

――コールダーランス――

「直接、物理攻撃を・・・！」

――神聖・振動拳――

「加えるだけだ！」

――エヒト・スペーアアングリフ――

すずかはスノートライデントフォームの"スノーホワイト"による斬撃を、スバルは神秘の乗った水色の魔力を螺旋状に噴き上げている"リボルバーナックル"でのパンチを、エリオはウンヴェッターフォルムにした"ストラーダ"による刺突突撃を、パイモンに最接近して打ち込もうとしたんだけど・・・。

「これはちょっと受けたくないわね～」

パイモンはそう言って、自身が腰かける水の玉座を蹴ってその場から離脱し、3人の直接攻撃から逃れた。魔力攻撃じゃなくて物理攻撃なら通用するのかも?という考えが生まれる。なら次は実証だ。私は"バルディッシュ"をアサルトフォームⅡに変形させて、「ソニックムーブ!」で接近を試みる。

「はあああああああ!!」

――アサルトアックス――

打撃・斬撃効果を高めた状態での一撃をパイモンに向かって振り下ろせば、彼女はやっぱり回避を行って直撃を免れる。さらに追撃を、と宙を蹴って追い縋りながら連続で振っていく。

――ウイングロード――

「神聖・振動拳!」

――フォックスバット・ラン――

「フレアブレード！」

――ソニックムーブ――

「エヒト・スピーアシュナイデン！」

――フェルニゲシュ――

「リンドヴルム！」

――エルヴスムーブ――

「電神・・・！　斬　鉄　斬！！」

スバルが正円・楕円を交えた螺旋をウイングロードで描き、その上をアリサとすずかとエリオ、それにフラムとレヴィが高速移動で駆け、パイモンの上下左右からそれぞれのデバイスによる直接物理攻撃を繰り出す。

「ストラグルバインド！」「ルベライト！」

回避に移ろうとしていたパイモンを捉えたのは、なのはとシュテルのバインドだ。ほんの僅かでもいい。パイモンの動きが封じこめられた今、回避することが出来ないから、すべての攻撃をその身で受

けた。手応えとしてはやっぱり魔術師を相手にしていると実感できるもので、鋼鉄を叩いているかのような感じが伝わってきた。

「くぅ・・・」

それでもパイモンは小さく呻き声を上げて、なのは達のバインドを力ずくで引き千切りつつ「痛いわ～」と周囲に水の球を１２基と展開した。パイモンからは神秘を感じるけど、水からは神秘を感じない。たぶんだけど、攻撃は魔法、防御は魔術と、器用なことをしているのかも。私たちを傷つけないようにしないといけないっぽいし。

「させんぞ！」「させません！」

――ゲイアサイルＬＭＧ――

――ジャベリンバッシュ――

ディアーチェの高速砲連射と、ユーリの魔力槍一斉射出に巻き込まれないように私たちは一斉に離脱。２人の攻撃は水スフィアを破壊し、パイモンへの直撃弾はグレイブで迎撃されたことで当たっていない。

「ヴァルキリーが水流系完全機、ナーティアに比べれば私は遥かに弱いけど～、すこ～し本気を出せば傷付けずにあなた達を無力化できる術だってたくさんあるのよ～？」

――千変万化（ゼーユンブラーチ）の水纏鎧――

眠たそうに蕩けていた瞳がキリッとつり上がったかと思えば、私たちの足元に広がる海から巨大な水柱が噴き上がってパイモンを飲み込むと、水柱は巨大な人魚のような姿へと変化した。

『さぁ、行くわよ～』

心臓付近に居るパイモンの腕の動きに合わせて人魚の両腕も動き、私たちに向かって手の平をかざした。

†††Ｓｉｄｅフェイト⇒なのは†††

『どうかしら～？　有言実行をしてあげたわ～』

――飛翔（リターフェラ）する衝撃の飛沫――

ミミルさんが巨大な人魚の形をした鎧を纏って以降、私たちは５秒と同じところに留まることが出来なくなった。人魚の表面から全方位へと発射される水弾の分厚い弾幕は、魔術師化している私たちにはダメージを与えないけど、着弾時の衝撃は関係なく襲ってくるから吹っ飛ばされる。

『さぁ捕まえるわよ～』

――捕え縛（コムモトコス）る水霊の愛手――

水弾の弾幕から水の手による突撃へと変化。大きく開かれた手の平

は、私たちが避けると同時にキュッと握り拳になるから、あの水の手は対象を鷲掴んで捕えるバインド系の類。ルシル君の影の触手カムエルと同系列だね。

「シュテル！」

――ディバインバスター・マルチレイド――

エクセリオンバスターに比べれば溜めが必要だけど威力は折り紙付きな、幼少の頃からお世話になってきた砲撃を５発とミミルさんに向けて発射。ミミルさんの鎧は攻撃とは違って魔術で発動されてることで簡単には穿てないけど・・・。

「ええ！　一気に焼き払いましょう！」

――カタストロフィノヴァ――

私の砲撃が僅かに空けた穴に、シュテルが両手に持つ"ルシフェリオン"の穂先から放たれたピンポン玉サイズの火球２発が撃ち込まれた。火球はすぐに大爆発を起こして、鎧を爆炎と黒煙で覆った。

「無駄よ～」

――逆巻く激流（アベルドール）の暴威――

「逃げて！」

「下手に動くと危険ですわ！　そこに居なさいな！　詠唱省略！」

――パピルサグ――

黒煙を薙いてきたのは水の渦。それは鎧の首と腰から発生していて、同じ高度に居るスバル、ティアナ、エリオ、キャロとフリードがターゲットだ。スバル達を飲み込むために高速で拡がりつつある渦。アイルが即座に展開した9枚の魔法陣上に召喚した大弓から射られたのは長大な螺旋矢9本で、矢は渦を穿ち、さらに急速凍結させた。

『これはまずいわね～』

凍結は渦だけに留まらず根元の鎧にまで拡がって行こうとしたけど、ミミルさんは鎧を解除することで凍結から逃れた。そこにフェイトちゃんとレヴィが高速移動で最接近して、"バルディッシュ"の直接打撃の「アサルトアックス！」と、"バルフィニカス"の直接斬撃「電神斬鉄斬！」を振るう。

「レヴィ（あなた）への傷害は自由なのよ～？」

バインドで押さえる暇もなくミミルさんはグレイブを一閃。フェイトちゃんの一撃は受け入れて、レヴィの一撃は迎撃して"バルフィニカス"を砕いた。グレイブはそのままレヴィを寸断しようと走ったけど、フェイトちゃんが抱えてその場から急速離脱することで真っ二つから免れることが出来た。

ミミルさんは空いてる左手をフェイトちゃん達にかざして、追撃を行おうとしたから・・・

「させない！」「させません！」「させないわ！」

――アクセルシューターー――

――バルカンレイド――

――ラピッドトリガー――

「仕方ないわね～」

「私も援護しま――む？」

私とアミタさんとキリエさんの援護射撃で、フェイトちゃん達への追撃を阻止することが出来た。シュテルはそこからさらに本命の一撃を放とうとしたけど、「シュテル！？」の体に異常が発生した。パキッという音とともにシュテルの頬、それに"ルシフェリオン"にヒビが入った。

「あぁ、ヒビが入ってしまいましたね」

「そんな冷静に言える状況なの？」

「ええ。私たちはエインヘリヤルです。どの道、先の長くない幻ですから」

落ち着き払った声で自分の顔にヒビが入ったことを確認したシュテ

ルは、「王！」ってディアーチェを呼んだ。ディアーチェはユーリやアミタさん、キリエさんと一緒に、ミミルさんが攻撃に移らないように弾幕を張り続けてる。

『うむ。皆の者、聞け。我らの身体の構築限界も近い。ゆえに・・・』

『集束系を使える人に、私たちの体を作ってる魔力を利用してほしいんです』

集束系の魔法は確かに強力だけど、ミミルさんが集束を待ってくれるかどうかになる。そんな私やみんなの不安や、シュテルの顔から察することが出来たのかミミルさんは「どんな作戦でもお好きにどうぞ～」と、一切の攻撃をやめてくれた。集束砲の集中砲火を受けても無事である自信があるんだ。

「ふんっ。後悔するなよ、パイモン。貴様の喋り方や目障りな乳にはうんざりしておったのだ。・・・ユーリ。お前の魔力は我が使わせてもらう」

「はいっ、ディアーチェ！　それでは皆さん！　お先に失礼しますね！」

満面の笑みを浮かべて私たちに手を振るユーリの小さな体がゆっくりと輪郭を崩していく。そしてユーリを構築していた魔力はディアーチェの周囲を踊るように回って、彼女の上下左右に展開されたベルカ魔法陣４枚と、その放射面から伸びる４つの環状魔法陣の間で

集束を始めた４つの魔力球に吸い込まれた。
「それでは私の魔力はなのは、あなたに託します」
「シュテル・・・」
「悲しむ必要はありません。いずれオリジナルの私たちとの再会が待っているはずです」
「ボクはオリジナルにだな！　姉っ子はどうせ集束系とか覚えてないだろ？」
「事実なだけに言い返せないのが割と悔しいかも」
「・・・レヴィ」
「私の魔力はアリサにあげるであります！　しっかり役立てるでありますよ！」
「任せておきなさい。アンタの分までパイモンをシメてやるわ」
「・・・すずか。あなたは集束系は持っていませんでしたわよね？」
「だけど、アイルの魔力を無駄にはしないよ。私が必ず活かす」
「えっと・・・他に集束系を扱える方はいらっしゃいますか？」

「ディアーチェ達に比べればスズメの涙ほどしかない私とアミタの魔力を使ってくれる子は居るかしら～？」

「あ、ティアが集束砲使えますよ！　ね？　ティア」

「え、ええ。・・・私が責任を持ってお２人の魔力を使わせていただきます」

ディアーチェはユーリ、私はシュテル、フェイトちゃんはレヴィ、アリサちゃんはフラム、すずかちゃんはアイル、そしてティアナはアミタさんとキリエさん。みんなの体を構築している魔力を利用しての最大の一撃で、ミミルさんを墜とす。

（はやてちゃん達がルシル君とアイリを追ってからかなり時間が経ってる。・・・手遅れかもしれないけど、それでも早く追い駆けないと）

ミミルさんを包囲するかのように私たちは移動して、膨大な魔力に満ちたこの創世結界中を、そしてシュテル達の魔力を活かして、私たちは魔力の集束を開始した。シュテルは別れの言葉を口にすることなく私を一瞥した後、小さく笑って・・・その体を崩して魔力となった。

「シュテル。・・・またね」

「逃げんだろうな？　パイモン！」

「逃げないわよ～？　その代わり全力で防御させてもらうわ～。そして思い知りなさいな～。私が時間稼ぎに徹している以上～・・・あなた達は逃げられないということをね～」

ミミルさんの背中に展開されてる２０枚の翼に魔力が集束され始める。集束量に関しては私たちの方が圧倒的に上だし、集束率ももう最高値だ。防御に入られる前に・・・先に撃つ。

「パワーブースト・ガンファイアフォース！！」

「「スターライト・・・！」」

「プラズマザンバー・・・！」

「ガラティーン・・・！」

「我の魔力をも喰らってゆけ！　煌き爆ぜよ、紫天の極光！！」

すずかちゃんの射砲撃強化効果が私たちの集束砲に乗った瞬間・・・

「「「「「ブレイカァァァァァァーーーーーーーーーーー！！！」」」」」

――スターライトブレイカーｅｘ－ｆｂ――

――プラズマザンバーブレイカー――

――ガラティーンブレイカーーーー

――スターライトブレイカー・ブレイズストライク――

――エクス・カルス・リベレア――

私、フェイトちゃん、アリサちゃん、ティアナ、ディアーチェは同時に砲撃を発射。魔力膜で全身を覆ったミミルさんへ向かって突き進み、そして・・・。

「これほどの膨大な魔力の提供・・・とても感謝するわ～」

――奪い盗る大食らいの渦流――

再びミミルさんを中心に発生した渦。だけど今回は私たちへの攻撃としてじゃなくて、私たちの攻撃を薙ぎ払う防御として。しかもただ防御するんじゃなく「吸収！？」してるように見える。圧倒的な水量の前に一斉集束砲の威力はどんどん減衰していって、結果ミミルさんに到達する前に完全に消失した。

「そんな・・・」

「あれだけの魔力を込めた集束砲を・・・」

「完全に無力化した・・・？」

渦の勢いが徐々に収まり、ミミルさんの姿を視認することが出来た。

渦を構成していた水流がミミルさんの手元に集まるといくつかの結晶と化した。私の桜色、フェイトちゃんの金色、アリサちゃんの茜色、ティアナのオレンジ色、そしてディアーチェの紫色の５つ。

「おのれ・・・。我の一撃すら防ぎきるとは・・・。なんと心残りよ・・・」

自分の体を構成してる魔力をも使って集束砲を撃ったディアーチェも消えてしまった。だけど私たちはまだ戦える。集束砲に使った魔力の大半がシュテルや創世結界の魔力だからだ。でも消費したことには変わらない。そこがネックになってくる。

「これ以上は無駄よ～。見て判るようにあなた達の魔力を水で吸収し続けてしまえるのだから～。それに～・・・あちらの戦闘も終わったようだから私たちも撤退するわ～」

ミミルさんがそう言うと同時、創世結界が解除された。元の本局の廊下に戻って来た私たちは「逃がさない！」とバインドを用意しようよしたんだけど・・・

――跳ね返す（ブークライム）揺ぎ無き水塊――

私たちとミミルさんを隔てるように発生した水の塊。即座にスバルが「神聖・振動拳！」を、エリオが「エヒト・スピーアシュナイデン！」を、すずかちゃんが「コールダーランス！」を、アリシアちゃんが「ジャベリン・メテオ！」を水の塊に打ち込んだ。それでも波打つ程度で破壊できず、結局ミミルさんを逃してしまった。

†††Ｓｉｄｅイリス†††

「あのくそ猫！　見つけたらヒゲを引っこ抜く！」

「あんまり酷いことしたらアカンよ？」

アインスの対結界用結界のおかげで、幻術特化の融合騎エルフテの幻術結界は攻略できてたんだけど、解除したら解除したですぐに別の幻術結界が展開されるっていう面倒くさい状況に陥ってた。だけど・・・。

「急に結界が解除されたのよね。罠かしら？」

「アインスの結界に勝てねぇって踏んで諦めたんじゃね？」

「だといいのだがな」

シャマルの言うようにエルフテの幻術結界が突然ピタッとやんだ。ヴィータの説であれば嬉しいけど、シグナムとシャマルの懸念もまた理解できる。本当に突然だったからね。でも、それで足を止められるほどの余裕はわたし達にはなく、疑いを持ちながらひたすら前へ進むのみ。

「あ、アレって、セラティナの結界やね！」

目の前には桃色の魔力の壁があった。アギトがソレを見て『通れんのか？』って心配したけど、アインスが「セラティナは私たちを待っているから問題ない」って足を止めずに突っ込む。もちろん言われるまでもないってわたし達も結界の外壁に突っ込み、そのまま結界内へ侵入した。

「ホンット邪魔！」

――氷結の軛――

「アイリ、先行しすぎるな！　カウンターが来るぞ！」

――風霊（ドロフォボム）よ密かに爆ぜよ――

「ぅくぅぅ・・・！」

保管室前の広い通路で、「ルシル君！　アイリ！」が、「セラティナ！」とガチバトルしていた。はやてに名前を呼ばれたルシル（格好は界律の守護神の聖衣、ステアと偽ってた頃に着てたやつだ）とアイリがこっちに向いた。

「はやて！　それにみんなも・・・！」

「・・・やはり、お前たちも私を邪魔しに来たのだな」

ルシルの口調が神器王だった頃のものに変わっていた。きっと意図的に戻してるんだろう。わたし達との決別の意味を込めて。そんなルシルやアイリの奥には、息も絶え絶えでへたり込みそうになってる「セラティナ！？」の姿が。

「何をしたの・・・！？」

「勝手に魔力を消費しすぎてフラついているに過ぎない。いわば自滅だ。私の所為にしてもらっては困るな」

「まぁ、マイスターとアイリを相手にして、ここまで保ったのはすごいと思うよ？」

「ルシル君、アイリ・・・」

「はやて・・・。・・・私はもう堕ちるところまで堕ちる覚悟だ。だから、邪魔をしないでもらおうか！！」

ＶＳ・・・

――コード・アンピエル・ツヴァイフォルム――

アイリの背後に大きな樹枝六花――雪の結晶のようなものが展開された。しかもアイリから神秘を含んだ魔力を感じる。アイリは魔術師化できないはずだったのに・・・。ううん、そんなことより『セラティナ！　結界を解除して少し休んで！』って、シグナムとヴィータとザフィーラがルシル達に突っ込んで行くのを見ながら思念通話を繋げた。

「なあ、ルシル！　お前、オーディン本人なんだよな！？」

――ラケーテンシュラーク――

「ディアーチェ達から聞いているのだろう？　それが真実だ、今さら私から語ることはない」

「アイリはずっと前から知ってたけどね～！」

『アイリ、てめぇ・・・！』

――コード・シャルギエル――

ヴィータの突撃からの強打を、アイリは生成した氷槍で受けてルシルを護り・・・

「お前がオーディンの記憶を持っていると知ったとき、実はあなたがオーディン本人だと知ったとき、そこには嬉しさがあった。初め

て我々を人として、戦友として、家族として迎え入れてくれた恩人と、再び会うことが出来たからだ。だからこそ、今こうして敵対していることが悲しい・・・」

「ならば退け、シグナム！」

――集い纏え汝の閃光槍（コード・ポースゼルエル）――

――紫電一閃――

「そうはいかん。今の私は局員であり、家族がこれ以上道を踏み外す真似を見過ごせん」

シグナムの"レヴァンティン"とルシルが"エヴェストルム"が何度も激突して、炎や魔力を周囲に散らす。というか、アイリが知らぬ間にヴィータと真っ向から殴り合えるほどの近接能力を手に入れてることにも驚きがあるんだけど・・・。

『ダメです。ルシル様とアイリを逃がさないためだけではなく弱体化させている結界でもあるので、解除すれば元の強さに戻り、逃げられる可能性が！』

「家族への愛と局員としての正義を天秤にかけ、選んだのは後者か！」

――闇よ誘え汝の宵手（コード・カムエル）――

「その家族を先に切り捨てたのは誰だ！」

――鋼の軛――

「切り捨てる前に、相談は出来たはずよ！」

――戒めの糸――

「相談したところで私の真実など、誰が信じるものか！」

ザフィーラの拘束杭と、シャマルの魔術じゃない魔力ワイヤーによるバインドが、ルシルとアイリを襲う。ルシルは影の触手でシグナム達の猛攻を捌き、適度な距離が開いたところで、空いてる右手を手団扇として振り払って、「シルフィード！」って爆風を放った。一足飛びからの居合抜き体勢に入ってたシグナムは、避けることが出来ずに吹っ飛んだ。

「ならば、私に緘口の呪縛を施さなければ良かったのではないのか！
　エインヘリヤルの私からも皆に伝えれば、受け入れてもらえたかもしれない！」

――シュヴァルツェ・ヴィルクング――

アインスの打撃強化・効果破壊が付加された拳を受けることなく回避したルシルは、「かもしれない。だが、それは私の我儘だ」と言い放った。

『（ルシル様・・・？）だ、大丈夫！　創世結界の詠唱はもう終え

ているし、何よりわたし達は負けない！』

エルフテの結界に玩ばれながらも頑張って詠唱を済ませ、発動するのを耐えてきた。魔力も術式も今か今かと暴れ出しそうだし、そろそろ気持ちよく発動したい。

『創世結界・・・！？　な、なるほど！』

『（ルシルもアイリもシグナム達の迎撃に入ったし、タイミングは今しかない）っと、その前に。セラティナ。エルフテ知らない？　近くに居るはずなんだけど』

『・・・・・ただいまっと。あ、うん。実は・・・――』

セラティナと組ませてたはずのクララが居ない理由は判った。本局のどっかでクララはエルフテと戦ってるんだろう。幻術がいきなり解除された理由も、罠じゃなくて結界から遠くに飛ばされたから、だ。クララはいい仕事をしてくれたよ。

『なるほど。了解だよ。はやて達も聞いてたね？　セラティナが結界を解除すると、ルシルとアイリが本来の強さを取り戻す。けど、すぐにわたしの創世結界でまた弱体化させる。その僅かな隙で全滅させられないよう注意！』

はやてとリインとアギトを除くシグナム達から『了解！』を受け、セラティナとタイミングを計って、『今！』と結界の切り替えを行った。セラティナの結界が消えると同時、ルシルとアイリから発せ

られてた魔力と神秘がグンッと高まった。

「剣神の星天城（ヘルシャー・シュロス）！」

創世結界を発動。本部ビルが桜の花弁が舞う広大な闘技場へと変化する。味方を強化し、敵を弱化させる効果を持つ結界で、ルシルとアイリの魔力も神秘が再び低下したことを確認できた。暴発しそうだった創世結界も無事に展開できたし、わたしもようやく参戦できる。

――舞い降るは汝の無矛（コード・パディエル）――

無属性の魔力槍が１００本近く展開されて、ルシルの「ジャッジメント！」の号令に下にわたし達全員に向かって射出された。

――真紅の両翼――

屋内戦闘用に刀身を短くしてた"キルシュブリューテ"を、本来のわたしの身長に合わせた長さに戻しつつ、背中から魔力翼を一対と展開。攻撃を中断してはやての側に馳せ参じたアインスに護られてる『はやて』に思念通話を繋げる。

『シャルちゃん・・・』

『辛かったら戦わなくてもいいんだよ？　はやてがこの場に居るだけでルシルに十分な精神ダメージを与えられそうだし・・・』

シグナム達との交戦の最中でも、こちらを警戒してチラチラと視線を向けてきてるルシル。はやての一撃一撃が重いから、一発形勢逆転っていう可能性を考えるのは当然だ。うん、ルシルの集中力を散漫させるってだけでもいい働きだよ。

『主はやて。誰も責めません』

『・・・アインス。はやてをお願い。わたし行かないと』

――閃駆――

一足飛びでルシルへと突撃する直前に『あ、シャルちゃん・・・！』って呼ばれた。すでに攻撃態勢に入ってたからすぐには答えられず、そのまま続行。"キルシュブリューテ"の刀身に纏わせた炎を斬撃として飛ばす「炎牙崩爆刃！」をルシルに向かって放ってから、『どうしたの？』ってはやてに優しく応える。

ルシルはその炎刃を警戒して、大きく後退しての回避を選んだ。内心で手の内がバレてることに溜息。とにかく、炎刃を爆破して爆炎と爆風をルシルに叩き付けようとするけど、彼はもう効果範囲からは逃れてたから不発に終わった。シグナムとザフィーラが回避直後のルシルに追撃するのを見ながら、はやての言葉を待つ。

『シャルちゃんは・・・ルシル君の妨害して、大丈夫なん・・・？』

『ルシルの過去、そして今置かれてる状況を知って、わたしはルシルのために協力したい。その思いは変わらず強いよ』

『・・・私もそうや』

『でもさ。もし、わたし達がルシルとアイリを素通りさせたら、その先どうなるか判る？』

『戦闘に割かれる時間が無くなって、ルシル君たちと長く話が・・・ん？　ひょっとして、出来ひんか？』

はやても察することが出来たみたい。ルシルはきっと『魔力保有物を奪ったら即座に姿を晦ませる。そして、わたし達の知らないうちにガーデンベルグを救い、そして消える』っていう路を選ぶ。あっちからわたし達を切り捨てるような真似をした以上、いろいろと引っ掛かることがあれどルシルは実行するだろう。

『ルシルとちゃんとお別れを済ませるためには・・・』

『ルシル君を力ずくで止めるしかない。それがルシル君にとって最悪なものでも・・・』

『そういうこと。わたし達の納得のために、わたし達の勝手を貫く。永遠の別れになるかもしれないなら、嫌われることを厭わずわたしは・・・戦う！』

――閃駆――

わたしの考えをはやてに伝え終わり、わたしもシグナム達に合流して戦闘再開。シグナムの高速居合抜きである「紫電清霜！」を紙一

重で躱し、ザフィーラの三爪で引き裂くような形の魔力流攻撃である「龍牙！」を、魔力付加された"エヴェストルム"で斬り裂くことで潰したルシルの背後へ回り込む。

――シュヴェーベン・マギークライス――

宙に魔法陣の足場を立てるように展開して、そこに着地。ルシルとの距離は"キルシュブリューテ"の斬撃範囲ピッタリ。ルシルの防御を貫きつつ、体を斬り飛ばさないように刃を返して峰打ち狙いへ。

「光牙月閃刃！」

――女神（コード・シヴ）の金衣――

ルシルの神父服の上から黄金に輝くロングコートと羽衣が展開されて、わたしの一撃を弾いた。ならば、と、左手に鞘を具現させて、"キルシュブリューテ"と鞘両方に魔力を載せる。そして、わたしと同じように"レヴァンティン"と鞘を手にしてるシグナムと一緒に、自身の周囲に光槍６本を展開したルシルを挟撃できる位置を探る。

『ルシルは私とシャルで何とかする。ザフィーラ、お前はヴィータとシャマルと共にアイリを押さえろ。アインスは主はやての護衛だ』

『承知した』

アイリの相手は、神秘カートリッジのおかげで疑似的に魔術師化で

きてるヴィータとザフィーラの２人。共に近接戦に強い騎士で、いくら魔術師化できるようになったとはいえ、アイリもそう容易く２人を撃破できないはず。さらに魔術は使えないけど後衛のシャマルが居る。

「第二波装填（セカンドバレル・セット）！・・・ジャッジメント！」

――第三波装填（サードバレル・セット）――

わたしもシグナムも放たれる魔力槍を最小限のバレルロールで回避。そこに、新たに展開されたばかりの１２本の槍を「ジャッジメント！」の号令の下に発射したルシルへと、わたしは両翼を羽ばたかせ、シグナムは４枚ある炎翼のうち下２枚をロケットのように噴射させて、魔力槍を回避しながら一緒に追い縋る。

「ダメ、追いつけない！」

「やはり、空戦形態のルシルとの速度比べは負け戦か」

速度を落としたところで、はやてからの『シグナム、シャルちゃん。離れて』の指示。ルシルから距離を取るべく急速後退した直後に「デアボリック・エミッション・・・！」が発動された。わたし達が離れた瞬間、詠唱は聞こえずとも何かしらがあると踏んだルシルもその場から離れようとしたようだけど、完璧に呑まれた。魔力鎧の黄金のコートと羽衣が消失したタイミングでの直撃、少しでも魔力と神秘が削れたらいいんだけど・・・。

「ごめん。・・・ごめんな、ルシル君！　私、ちゃんとルシル君とお話して、そんでお別れしたい！　そやから・・・戦ってでも止めさせてもらう！」

――曙光神（コード・デリング）の降臨――

デアボリック・エミッションが、サファイアブルーの魔力爆発に内側から呑まれて消失。そして、光の中から現れたルシルは外套を脱ぎ捨て、仮面と神父服はそのままに"エヴェストルム"を待機モードの指輪に戻してた。

「そうか。・・・ならば、はやて、イリス。シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リインフォース・アインス、リインフォース・ツヴァイ、アギト。お前たちを完全に私と敵と認識し、本気で潰す。後悔するなよ？　アイリ！！」

「ヤヴォール！」

2人は全力を出すということで、創世結界の弱化効果の中でさらに魔力出力を上げたかと思えば、2人の魔力から神秘が消えた。それはつまり「魔術師化を解いた・・・！？」ことになる。わたし達が魔術師化してる中での魔導師化なんて、降伏に近い行為だ。

「魔導師となっている私とアイリに対し、非殺傷設定の無い魔術で攻撃なんてしないよな？」

「そこは信じてるよ～」

――戦女神（コード・ロータ）の暴天――

闘技場外縁の八方に巨大な竜巻が発生して、わたし達の居る中央に向かってゆっくりと進んできた。魔法として発動された以上、結界内の建造物どころかシャマルを除く魔術師化してるわたし達にダメージが入らない。それを踏まえたうえでルシルは魔術師化を解除、止めたければ掛かってこい、って勝負を挑んできた。

――其は戦場を駆け抜ける戦乙女の将。その美は全てを魅了し、その愛に果てはなく、愛おしむ実りの生誕と成長を見守る――

ルシルと、ヴィータやザフィーラと交戦してたアイリが高度を上げ始めたのを目で追いながら、わたしも魔術師化を解除することにした。

「ふっ、フフフ、上等よね。魔術の撃ち合いで互いの命の心配って、気持ちよく撃てないから結構ストレス溜まるのよね・・・」

「しゃ、シャルちゃん・・・？」

「行くよ、はやて、みんな！　せっかくアイツが舞台を整えてくれたんだから、乗ってやろうじゃん！　そんで、わたし達を相手にしても勝てるって自惚れてるアイツを後悔させてやる！」

――豊穣に転じて死と戦をも其は司らん。金色の光を纏いたるその苛烈にして華麗な威容。極光の天幕が靡く時、戦士を従え、希望と

絶望を戦場へ運び往かん――

わたしの言葉にはやて達は目を丸くした後、ニッと笑みを浮かべて「了解！」と応じてくれた。魔術である以上はどうやっても手加減しちゃうから、この戦いは正直、不毛なものになるって考えてた。その危惧は、ルシルの方から晴らしてくれた。

「来るよ！！」

――女神（コード・フレイヤ）の大戦火――

遥か空に描かれた巨大な魔法陣１８枚より放たれてくるのは、閃光系・闇黒系・炎熱系・氷雪系・風嵐系・雷撃系、６属性の特大砲撃。わたし達はそれぞれの回避機動に入り、わたしもシグナムもヴィータもザフィーラもシャマルも、制空権を取り戻すべく空へと向かう。

――ユニゾン・イン――

はやても、アインスとユニゾンを果たして急上昇。そんなわたし達を待ち構えていたのは、「アイリ・・・！」だった。アイリはわたし達を見下ろしたまま「いらっしゃい。だけど、ここから先は行き止まりだよ」って小さく笑った。

――リーズィヒ・デッケル――

ルシルの砲撃が止む直前、わたし達とアイリの間に展開されたのは１kmレベルの巨大なベルカ魔法陣。まるで、わたし達の行く手を塞

ぐ蓋。魔法陣越しにアイリがバイバイと手を振ったことで、『アイリぃぃぃぃーーーー！！』ってリインとアギトは怒りや悲しみに満ちた叫び声を上げた。

「アカン！　ルシル君の追撃が来る！」

魔法陣下に居るわたし達の周囲に複数の魔力反応が出現。どの魔法が来るのか判らないけど、逃げ道を間違えたら全滅する可能性がある。

「みん――」

「シグナムとヴィーータは横、シャマルとザフィーラは下、わたしとシャルちゃんは上、三方へ退避！　シャルちゃん、絶対切断いけるか！？」

「も、もちろん！」

――宝竜（コード・ファフニール）の抱擁――

いろんな属性の龍が雄叫びを上げながら出現して、わたし達を包囲するように周囲を旋回し始めた。シグナム達の退避ルートが潰されたことを示す。残るは下か、アイリが蓋する上か。とにかく、わたしは絶対切断スキルを解放して、"キルシュブリューテ"の刀身に効果を乗せる。

「はやてさ。自分の適性ポジションを忘れた？」

「アイリ・・・！」

「後衛は後衛らしく、下がっていた方が良かったと思うんだよね。だから、こんな一網打尽みたくされちゃうんだよ」

アイリが呆れた口調でそう言うと、わたし達を隔てる魔法陣が発光し始めた。シグナムとヴィータがはやてを自分たちの背後に追いやり、はやての目の前にシャマル、シグナムとヴィータの前にザフィーラが。で、わたしがさらに前に立つ。

「絶刃――」

「アドヴェント・ラヴィーネ！」

魔法陣下面からドッと膨大な量の雪――雪崩が降ってきた。背後に居るはやて達を護るため、"キルシュブリューテ"による乱撃、「斬舞無尽閃！」で、前方の雪崩を斬りとばしていく。

『シャルちゃん。私が魔法陣を壊すから、もうちょい耐えて』

『問題ないけど、ルシルの攻撃にも警戒しておいて。周囲を包囲してる龍が仕掛けてくる可能性が――』

『複数の魔力反応が急速接近！　ルシル君のファフニールです！』

『一網打尽ってそっちかよ！』

『アギト！　薙ぎ払うぞ！』

『お、おう！　間違えて神秘カートリッジ使うなよ！』

『判っている！』

――火龍一閃――

『防御は私とザフィーラでするわ！』

なおも続く雪崩攻撃でわたしの背後で行われるシグナム達の迎撃。さらに「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ」っていう詠唱が聞こえて、強大な魔力がはやてから発せられた。そして、多弾砲撃「フレースヴェルグ！」は空に向かって放たれて、雪崩を貫いてく。その効果はあったようで、砲撃は蓋に穴を空けて、雪崩の落ちない個所を増やし始めた。

「さすがだね。八神家とシャルを相手じゃ、快勝とはいかないよね。ねえ。なんで、マイスターを大人しく素通りさせてくれなかったの？」

雪崩がピタッと止むと同時、蓋も完全に消失した。雪崩の真っ白から、わたしの創世結界の景色に戻ってきた。アイリは雪崩発動時から変わらずわたし達を見下ろしていて、そんな質問をぶつけてきた。そんなアイリの近くにルシルの姿はなく、創世結界の術者であるわたしでもルシルの位置を確認できない。

「もし、ルシル君とアイリを素通りさせてたら、２人は魔力保有物を手に入れてそのまま、私たちに挨拶ひとつもくれずに去るんやろ？」

「・・・マイスター、どう思う？」

「そうだな。初めの方に言ったが、私は・・・俺は堕ちるところまで堕ちた。もう、君たちと交わせる心（ことば）は無い」

（通信でも思念通話でもなく、拡声魔法での肉声。ルシルはまだ、創世結界から逃げてない！）

「確かに、ルシル君は数多くの罪を犯してしもうた。多くの人にたくさん迷惑をかけた。自分の死すら偽装した。私たちをものすごく悲しませた、裏切った。・・・そやけど！　それでも私の、ルシル君を想う気持ちは変わらへん！　これで最後やって言うんなら、ちゃんと言葉を交わしてお別れしたい！」

「ならば、別れをきちんと済ませると約束すれば、退いてくれるか？」

「それは・・・」

「即答できなかった時点で、この話は終わりだ。・・・挨拶と言うのなら、今まさに行われている戦闘こそが、俺からの、そして私からの別れの挨拶だ」

「ルシル君！」

ルシルが結界内のどこに居るか、改めて注意して探る。でも、なんかの魔法を使ってるのか、なかなか探知できない。魔術だったら即発見できるのに。ルシルはこれも見越して魔術師化を解除したとしか思えない。

「さようなら」

――女神（コード・イドゥン）の救済――

拡声された声じゃなくて、すぐ側からルシルの声が聞こえた。声のした方へ振り返ってみれば、「シグナム、ヴィータ！」の背後に立つルシルは２人の肩に腕を回して、ヴィータの薄い胸と、シグナムの豊満な胸に手を置いて、両手から魔力を吸収していた。

「「『『うあああああああああああ！！』』」」

「シグナム、ヴィータ、リイン、アギト！」

「ルシル君、あなた・・・！」

「シグナム達を離せ！！」

――狼王の鋼鎧・剛――

ザフィーラは全身から放出した魔力を鎧のように纏い、宙を蹴ってルシルに突っ込んだ。わたしも黙って見てることはせず、閃駆を使ってルシルの背後に回り、ザフィーラと挟撃してやろうとしたんだ

けど、「ザックガッセ！」ってアイリが魔法を発動。

「ぎゃん！？」

「シャルちゃん！？」

目の前に透明な魔力壁が展開されてたようで・・・。わたしは閃駆によって高速移動してたから、魔力壁への衝突の衝撃はとんでもなく・・・。ふがぁ、と鼻血を噴きながら仰向けに倒れ込みそうになる。

――女神（コード・イドゥン）の救済――

「むごぉぉぉあああああああ！」

「「ザフィーラ！」」

鼻の骨が折れたんじゃないか？ってレベルの激痛に思わず俯いて、袖口で鼻血を拭ってると、ザフィーラの苦痛に満ちた叫びと、はやてとシャマルのザフィーラを呼ぶ声が。ハッとして顔を上げれば、ルシルはザフィーラの拳を受けた左手から魔力を吸収してた。シグナムとヴィータ、それにユニゾン中のリインとアギトは気を失ってるのか、魔力の球体に大人しく閉じ込められてる。

「コード・イドゥンは、右手からでないと吸収できなかったはずじゃ・・・！」

「シャマル。それはいつの話だ。ガーデンベルグとの闘いに備え、イドゥンはその完成形にたどり着いた」

――優しき泡沫(アバロレッツァ)の揺り籠――

魔力を吸収し終えたのか、ぐったりしてるザフィーラも同様に魔力球に閉じ込められた。仮面を取ってないからハッキリとは判らないけど、ルシルの視線がシャマルに向いたような気がした。はやても察したみたいで、「これ以上は家族を傷つけさせへん！」って"シュベルトクロイツ"をルシルに向け、"夜天の書"を開いた。

『加減はしないぞ！』

「そうだ、それでいい。私はもう、八神家の一員ではない」

「っ！！」

「我が手に携えしは確かなる幻想」

「複製スキルの詠唱！？　はやて！」

『シャマル、離れろ！』

クローンのルシルが使えなかった複製スキルを使えるってことは、今戦ってるのはオリジナルのルシルで間違いない・・・んだろうけど、魔力減少によって体の崩壊が始まってるはず。それなのに、よくわたし達を相手によくここまで戦えてるとしか・・・。

「逃がさないよ、はやて！」

「（っと、そんなこと考えてる場合じゃない！）それはこっちのセリフ！」

――光牙烈閃双刃――

はやての背後から襲い掛かろうとしてたアイリに向け、魔力付加してた"キルシュブリューテ"と鞘を振るって剣状砲撃二連を放った。はやては、ルシルから距離を取り始めてたシャマルに当たらないように注意しながらの10発の炸裂弾「クルージーン！」を、"シュベルトクロイツ"の先端から発射。

「おわっと！」

アイリに上手く回避されたけど、はやてへの襲撃を阻止できたことだけで十分。で、はやての炸裂弾はルシルの至近で一斉爆破されて、ルシルを飲み込んだ。

――尽滅の蹂躙軍（フェルサス・デ・オクパシオン）――

それと同時、迫って来てた8つの竜巻は消失して、「プリムスの幻術！？」が発動。わたし達の周囲にシャマルとルシルとアイリの幻が何十人と出現した。まさかの夢幻王の幻術発動に、わたし達は行動を完全に止めてしまった。

「シャマル！」

――女神（コード・イドゥン）の救済――

「はい！　私はここで――っ！　きゃあああああああ！」

「『シャマル！？』」

「やられた！？」

全方位に所せましとシャマルとルシルの幻がいるから、どれが本物から全然判らない。と、思ってた矢先に幻術が解除されて、シグナム達と同じように魔力球に捕らわれたシャマルと、側に立って魔力球を優しく撫でるルシルを視認。これで残る戦力はわたしとはやてと、ユニゾン中のアインス。ルシルが複製スキルを使えると判った今、絶対に勝てるっていう確証は消えた。

『イリス。現着したよ。どうすればいい？』

『おお！　良いところに！　保管室前まで来て。そこで今、わたしの創世結界内でルシルとアイリと交戦中なの』

『交戦・・・。ルシルさんの真実という映像、約束通り私ひとりで観させてもらったけれど・・・。ルシルさんとオーディン様が同一人物どころか、界律の守護神だとか、何万年も生きているとか、すぐには信じられないことばかりの情報と量に未だに混乱している。・・・だけど、ルシルさんとのお別れが近いのは事実だから・・・』

『うん。今はそれでいいよ。でね、今ちょっと苦戦していて。だからさ・・・――』

思念通話を送ってきたのは、ミーティングホールに居た時にメールを出して、ルシルとのお別れの挨拶を一緒にしようと誘った、わたしとはやてにとって恋のライバルの1人・・・。

『――と、そんな感じでお願いしたいんだけど。いいかな？　トリシュ』

トリシュだ。トリシュも母様や他の騎士たちと同様に、"T・C・"メンバーとして召喚された"ヴァルキリー"に魔力を奪われた。だけど、トリシュにはリンカーコアが2つある。自身の魔法用とスキル用だ。スキル用の魔力を自分で使えることを知ってたわたしは、メールでそっちが無事だってことが判って、すぐにトリシュを呼び出した。

『了解』

『トリシュ。準備が出来たらもう1回連絡して。創世結界に招き入れるから』

『・・・ルシルさんを撃つのかぁ。嫌だなぁ・・・』

『れ・ん・ら・く、お願いね！』

思念通話を切ったわたしやはやてに、シャマルを閉じ込める魔力球をポンッと押してシグナム達を閉じ込める魔力球の側へ移動させたルシルは「さぁ、次はどっちがいい？」って、わたしとはやてに向かって両手を伸ばした。わたしは警戒したんだけど、はやては両手で自分の体を抱いて、「ルシル君のエッチ」って一言。

「へ？」

「だって、ルシル君。ヴィータとシグナムのおっぱい触った」

「んな・・・！」

「あー！　そうだよ、マイスターー！　リンカーコアに近い場所だからって乳房に触る必要ないじゃん！　背中だっていいし、胸骨柄の辺りでもいいし！」

「そう言えばそうじゃん！　ルシルのエッチーー！　へんたーい！」

『変態。どうせシャマルの胸も揉みしだいたのだろ？』

「揉んでいない！　ええい！　どこに触れようと、魔力を吸収できれば私には関係ない！」

「マイスターー！　揉むならアイリので！　いつでもどこでもウェルカムだからね！」

「やめんか！」

アイリはわざわざルシルの目の前にまで行って、ルシルの目の前に自分の胸を突き出した。ルシルがそんなアイリをグイッと横に移動させ、はやてが「セクハラ容疑も追加やね、ルシル君？」って目の笑ってない笑顔を浮かべ、ルシルがブルッと体を震わせたところで・・・・

『ブルータル・シャオム！』

「「あ・・・・！」」

アインスが魔法を発動した。ルシルとアイリを閉じ込めたのは、ルシルがシグナム達を閉じ込めてる魔力球と似通った魔力球。違いは、球内に何十個って言う小さな魔力球が一緒って言うくらい。

『イリス。私の最大魔法の準備完了。いつでもどうぞ』

『了解！　すぐに召喚するから、もうちょい待って！』

『爆ぜろ（デトナッィオン）！』

「マイスター！」

「させん！」

――女神の救済（コード・イドゥン）――

ルシルは自分たちを閉じ込めてる魔力球に触れて、その魔力を吸収することで自由の身にはなった。だけど、何十個の魔力球は完全に吸収できず、全方位からの何十回もの魔力爆発に呑まれた。

『ルシル。この魔法は、お前の闇黒系最強の女神の夜宴（コード・ノート）を基に組んだ魔法だ。ノートに比べれば威力は微々たるものだろうが、それでも効いたろう？　主はやて、シャル。これで終わったとは思えません。追撃の用意を』

『え、あ、う・・・うん』

「だね」

"キルシュブリューテ"の通常カートリッジをロードして、刀身に防御貫通系の魔法を付加していると、爆発と同時に発生した煙からルシルがボフッと出てきた。ルシルもアイリも無事っぽい。まぁ、ルシルの蒼翼もアイリの結晶翼も完全に砕けてるけどね。

「やってくれるな、アインス・・・」

「けほっ、けほっ。本気で撃墜しに掛かってきたよね。まぁ、ガチ戦闘なんだからしょうがないけど」

ルシルの機動力が落ちてる今がチャンスなんだろうけど、まだ確実じゃない。だから『はやて、アインス。ルシルだけでも足止して。わたしが近接で押さえるから、わたし諸共って感じでＯＫよ』って、割と今更な指示を出す。

『了解や』『了解した』

――閃駆――

宙を蹴って、一足飛びでルシルに突っ込む。アイリが「コード・シャルギエル！」って氷槍を1本生成して、わたしの前に立ちはだかった。そして後衛としての役目を果たすためか、ルシルは後退した。

「アインス！」

『はい！』

「『来よ、白銀の風！』」

「其は天と大気を司りし偉大にして至高の女帝。鷹の羽衣の纏いて空を翔け、遥かなる世界の空に煌幕を張り揺らめかせる」

「『天よりそそぐ矢羽となれ！』」

「かの女帝が従えしは12柱のいと美しき従士。其は巫女、其は医者、其は後見人、其は使者、其は従者、其は鋤、其は恋愛、其は縁結び、其は誓い、其は詮索、其は扉、其は礼儀」

「『フレースヴェルグ！』」

「従えし女中と共に、かの女帝は天にて舞い踊る」

アイリと切り結ぶ中、はやてから放たれた砲撃がわたしとアイリの側を通り過ぎ、ルシルへと殺到してく。連射される砲撃を、ルシルはイドゥンで吸収して、「魔力をありがとう！」ってお礼を言う。うん、やっぱ砲撃はダメかぁ。

「やるじゃん、アイリ！　近接戦力、すごく強化されてる！『はやて。1発だけわたしの直撃コースでお願い！』

――炎牙月閃刃――

「まあね！　元々持ってたみたいなんだよね。もうちょっと早くに起動してくれてたら、これまでのエグリゴリ戦争、もっと楽に戦えたと思うんだけどね！」

炎の斬撃で氷槍を切断しても、アイリはすぐに新しい氷槍を作り出してくるから厄介だ。

『えええ！？　大丈夫なん！？』

『問題無し！』

『じゃあ・・・行くよ！』

背後に向かって高速で砲撃が迫る中、アイリを射線に誘導して、さらに鍔迫り合いで足止め＋ベルカ式バインド魔法の「拘輪環！」で、あの子の腰を拘束してやれば・・・。

「ぅあ！　ちょっ、待っ、マイス――にゃあああああ！」

――至高女神（コード・フリッグ）の聖極光――

砲撃を直撃させることに成功。その直後に、ルシル、わたし、はやてを隔てるようにバチバチと放電するオーロラが発生。わたしとはやてを隔てるオーロラに砲撃が次々と着弾するけど、1発たりとも通さない。攻防一体の雷撃系広域対空攻撃フリッグだ。

「アイリが墜ちたか」

「そ！　あとはルシルだけ！　わたしとはやてを相手に、どれだけもつかな！？『喚ぶよ、トリシュ！』」

『いつでも！』

――剣神モード――

アイリをバインドで宙に拘束すると同時に絶対切断スキルを発動して、ルシルの意識をわたしに集中させる。魔術ならいざ知らず、魔法は容易く斬り裂ける絶対切断に、ルシルも警戒心をあらわにした。

「召喚（フォーアラードゥング）！」

と、ここでわたしはトリシュを結界内に呼び寄せるキーワードを詠唱。臨界を超えそうなほど集束した魔力矢を"イゾルデ"に番えた

トリシュを、ルシルの真後ろに出現させた。

「っ！？」

「お久しぶりです、ルシルさん！　あなたを愛するトリシュタン、参りました！」

――果て無き深淵を穿つは天壌の至宝――

「トリシ――」

――女神（コード・イド）の救・・・――

集束砲をほぼ零距離で受けたルシルは、そのまま砲撃と一緒に闘技場の中央に着弾して、起こった強大な魔力爆発に呑まれた。

「イリス！　魔力を使い切ったので助力を！」

「あ、うん！」

――シュヴァーベン・マギークライス――

騎士甲冑は維持できてるけど、それ以外の魔力行使は出来ないみたいだから、トリシュの直下に魔法陣の足場を展開して、あの子を着地させた。ホッと一息ついてるトリシュから、濛々と立ち上る煙を起こしてる眼下、闘技場に目を移す。

『はやて、アインス。各個撃破されたくないから、追撃を用意しながらわたしに付いて来て』

最大警戒しながら高度を下げ、地上から１０ｍほどまで降りる。ルシルを視認するために、風圧の壁を放つ「風牙烈風刃！」で煙を吹き飛ばす。地表に出来た巨大なクレーターの底、ルシルがよろよろと立ち上がろうとしてた。神父服もボロボロで、仮面も完全に砕けてる。俯いてることで前髪が垂れて表情は見えないけど、ダメージが深刻なのはなんとなく判る。

『さて。バインドで捕らえるか、追撃で撃墜するか、だね』

『シャルちゃん。もうええんやない？　これ以上は、ルシル君の体が心配や。クローンやないやろうし、寿命問題を抱えてるはずや』

『それはまぁ・・・そうだろうけど。・・・じゃあ、バインドで――』

「――の御名の下、其に刃突き立てし者へ輝ける聖裁を与えよ・・・」

ルシルが「詠唱！」してるのが聞こえて、わたしは「もう止まって！」って叫びながら、クレーターを駆け降りる。

『シャル！　高速射撃を撃ち込む！　注意してくれ！』

『了解！』

――ブルーティガー・ドルヒ――

わたしに先行して放たれた血色の短剣型射撃魔法。その数２０発がルシルに殺到する。

――暴力防ぎし汝の鉄壁（コード・ビュルキエル）――

だけど、ルシルの頭上に展開されたシールドが全弾を防御。その中でも「哀れな者らは泣き叫ぶだろう。しかし許しは乞わぬだろう」って詠唱を続けるから、直接攻撃で無理やり止めるしかないと判断。

「（この詠唱は、全方位無差別多弾集束砲撃バルドル・・・！）撃たせない！　光牙双月刃！」

――盾神の暴虐（コード・ビヴリンディ）――

"キルシュブリューテ"と鞘に魔力付加しての斬撃と打撃の二連撃を打ち込もうとしたら、ルシルの足元から伸びてきた砂や岩石が両腕、両足、胸部や背中に巻き付いてく。そしてソレらは魔力付加されたゴツイ岩石の籠手、脚甲、胴鎧へと変わる。さらに、背中には浮遊する岩石の腕が６本と造られて、手の甲には円い岩の盾が装備された。

「堅い・・・！」

ルシルを護るように展開される浮遊する岩腕が盾となって、わたし

の攻撃を的確に防いでくる。

「自らの罪と過ちを認めることを赦さず恥とするゆえに。汝よ。迷うことなかれ、憐れむことなかれ、悔やむことなかれ」

『ビーネン・シュティッヒ！』

『シャルちゃん！　離れて！』

はやての言葉に従って後退すると、螺旋状の大きな穂を持つ魔力槍が高速で飛来。腕の１つが槍を防ぐべく盾となって、手の甲の盾が槍の直撃を受けた。槍は盾に突き刺さるどころか手の甲を貫通した。

「（アインスに続け！）凶牙・・・奈落刃！」

闇黒系魔力を乗せた"キルシュブリューテ"を振り上げ、シールド・バリア・結界などの貫通効果を有する７つの影刃を放った。５つの浮遊腕や、ルシルの両腕に装着されてる岩籠手が防御に動いた。奈落刃はわたしの闇黒系最強の魔法。同じ魔法なら・・・負けない。影剣は浮遊腕や籠手を貫通して、ルシルの防御を一時的に不能にした。

「ゲイ・ボルグ！！」

そこに、全体に魔力付加された"シュベルトクロイツ"を突き出してるはやてが、超高速で真上から突撃してきた。ゲイ・ボルグは、なのは直伝の突撃魔法マニューバＡ・Ｃ・Ｓの完全版で、はやての

有する数少ない近接魔法だ。
ずっと俯いてたルシルがバッと顔を上げて、はやてを見上げたんだけど・・・。その途中で見えたルシルの表情に、わたしは「なによ、それ。ふざけんな・・・！」って怒りが湧いてきた。

――護り給え（コード・ケムエル）汝の万盾――

流星のごとく突撃してきたはやての攻撃を防ぐべく展開されたのは、無数の小さな円い盾を広く重ね合わせて作る大シールド。

『なんだ、その表情は！　卑怯者め！』

「泣きたいのは・・・こっちや！　ルシル君！！」

そう。一瞬だけ見えたルシルの表情は、泣くのを我慢してるようなものだった。はやてもアインスも怒声を上げ、突撃の勢いを弱めることなくシールドに"シュベルトクロイツ"を突き立てた。剣十字の先端がシールドを貫き、ルシルの目の前で止まった。そして・・・

「『クリューサーオール！！』」

砲撃6連射がルシルを襲った。わたしでもその場に留まれないほどの魔力爆発が6回。両翼を羽ばたかせて、その衝撃と爆風を利用してわたしは空へと上がった。再び煙にルシル、それにはやての姿が覆い隠される。

『はやて！　アインス！』

『・・・シャルちゃん。ルシル君の撃墜を・・・確認。勝ったよ・・・』

『・・・了解』

はやてからの報告にそう答えた後、「泣くくらいなら、初めからこんな事しないでよ！」って、姿の見えないルシルに向かって吐き捨てた。

Ｓａｇａ２８最後に至るとき～Ｆａｒｅｗｅｌｌ　ｄａｙ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

"Ｔ・Ｃ・"のリーダーやったルシル君、その融合騎アイリとの戦いを勝利で終えた私たち八神家とシャルちゃんとトリシュ、ミミルさんと交戦したなのはちゃん達は、誰ひとりとして欠けることなくミーティングホールに戻ってきた。
ルシル君の魔力吸収術式で意識を失ってたシグナム達も今はしっかり目を覚ましてるし、ミミルさんとフラメルとルルスと戦ったなのはちゃん達も大した負傷をせぇへんかった。聞いたところによるとミミルさんは、最後の最後までなのはちゃん達の足止めに徹して、魔術を1発たりとも直撃させへんかったとのこと。ただ、王様たちは例外やったらしく、交戦の最中に召喚が解除されたそうや。

（オリジナルやないとしても王様たちは王様たちやった。ちゃんとお別れしたかったな・・・）

「さて。ルシル、アイリ。みんなから1発貰う覚悟は出来てるよね？」

椅子に座らされて、アインスのシーリングバインド（元はルシル君の魔法やね）で拘束されてるルシル君とアイリも、意識を回復してる。私がルシル君を撃墜する直前に見た、ルシル君の泣くのを我慢してる表情はもう鳴りを潜めていて、目と口をキツく閉ざしてる。

「父さん、アイリお姉ちゃん・・・？」

そこに、フォルセティ、そしてヴィヴィオ達チームナカジマ、ルールーとリヴィの面々が姿を見せた。これはシャルちゃんの提案で、いくらルシル君でも子どもには冷たい態度はとらへんやろって希望的観測。その結果やけど、ルシル君の表情は変わらず、アイリは・・・動揺してた。

「フォルセティ・・・」

「・・・父さんも、アイリお姉ちゃんも生きていてくれて、本当に嬉しかったよ。死んだって知ったとき、覚悟はしていたけど僕は・・・たくさん泣いた」

「ごめん・・・ね。ごめんなさい」

アイリは本当に申し訳なさそうに謝ったんやけど、ルシル君の表情はピクリとも変わらへん。そんなルシル君を見てフォルセティは「父さん。どうして、僕を見ず、口を開かないの？」って僅かに怒気を帯びた声で聞いた。

「いや僕だけじゃない。母さんにも、友達のなのはさん達に対しても！　死を偽って、犯罪組織を作って、みんなに迷惑をかけて！　戻ってきたら戻ってきたで、母さん達を傷つけて！　負けたら負けたでだんまりとか！　格好悪いって思わないの！？　僕は、そんな父さんは嫌いだ！」

「あ、あのね、フォルセティ。マイスターは・・・」

「知ってるよ、アイリお姉ちゃん。父さんが実は2万年近く存在してる人で、テスタメントっていう神様の一柱で、今は最後の契約の最中、そしてこのチャンスを逃すともう人として蘇ることが出来ないことも。・・・父さんの真実はショックだったし、その大変さはとんでもないものだって解っ・・・た風なことは言わない」

フォルセティにもルシル君とアイリが生きてるって情報を教えておきたくて、ミーティングホール内の映像を回してた結果、ルシル君の半生を見てしまうことに。口や握り拳を震わせたフォルセティは、なおも表情を変えへんルシル君の真ん前に立って、「でもさ！」って両肩を掴んで、顔を近付けた。

「それは母さんを泣かす理由にはならない！！　母さんはずっと泣いてた！　父さんがいなくなったのは自分の所為だって！　父さんが昔の被疑者と同一人物と気付かなければ、父さんがアイリお姉ちゃんだけを連れて死にに行くことはなかったって！　ずっと自分を責め続けた！！」

「っ！　フォルセ・・・！」

その言葉に、私は感極まって泣き出してしもうた。フォルセティも涙を流しながら「母さんだけじゃない！　シグナムお姉ちゃんも、ヴィータお姉ちゃんも、シャマルお姉ちゃんも、リインお姉ちゃんも、アギトお姉ちゃんも！　アインスお姉ちゃん、ザフィーラだって！」ってルシル君の体を激しく揺さぶる。

「父さんにも理由はあるんだろうさ！　エグリゴリとの戦争が終わったら、父さんはいなくなる！　どんな結果でも父さんと母さん達は別れることになる！　でもだからって、死を偽るなんて酷いじゃないか！」

「ふぉ、フォルセティ？　マイスターだってホントは――」

「アイリお姉ちゃんは今は黙ってて！」

「・・・はい」

「結局は父さんが逃げただけだ！　逃げて引っ掻き回した！　逃げたこと、それが父さんの罪だ！」

フォルセティがそこまで言ったところで、フラッとよろめいた。普段の冷静なフォルセティなら、全力戦闘でも２０分は息切れせずに戦えるように鍛えられてる。そんなフォルセティも、感情任せに叫んだことによる酸欠に陥ったようや。

「「フォルセティ！」」

真っ先に駆け出したんはヴィヴィオやった。膝から崩れ落ちそうになったフォルセティを抱き止めてくれたんやけど、ヴィヴィオも成長して大きなってるとはいえ、フォルセティも大きなって身長も体重もそれなりのもんや。そやからヴィヴィオも咄嗟に抱き止めたことで踏ん張り切れず、一緒に倒れ込みそうになったのを、「よっと！」と私が抱き止めた。正直な話、私の身体能力はヴィヴィオよりすご

く劣ってる。それでも愛する息子と、その親友の娘を支えるられる。

「ちょっ、アカン、思った以上に重・・・！」

うん、思いだけでは無理やった。そやけど私が一瞬でも2人を支えることが出来たことで、ヴィヴィオが重心をしっかり整えてくれて、倒れ込む結果にはならへんかった。

「はやてさん、ありがとうございます」

「いやいや。恥ずかしい話、ヴィヴィオが復帰してくれへんかったら倒れてた」

みんなも続々と私たちの元に集まって、呼吸の安定を見せるフォルセティに心配する声を掛ける。そんな中でアイリも「フォルセティは無事なの！？」って大きな声で心配してくれた。そやけどルシル君だけは無言を貫いてた。

「「あんたねぇ！」」

殺気立ったアリサちゃんがルシル君の胸倉を掴んで、アルフが後ろからルシル君の頭を掴んで、フォルセティに向けさせた。そこまでされてもルシル君は、まるで眠ってるかのように一切表情を変えへん。この辺りで私の中であれ？ってなった。

「ありがとう、ヴィヴィオ、母さん・・・。すぅ・・・ふぅ・・・。ねぇ、父さん。父さんは確かに悪い事をしたよ。それでも、協力を

申し出るべきだったと思う。母さん達なら、父さんの真実を伝えなくても助けになってくれてたはずだよ。それでさ。母さん達に怒られても、責められても、父さんにとっては辛いかもだけど、一緒に力を合わせればよかったんだよ。母さんも、お姉ちゃん達も、なのはさん達もみんな、優しいんだから」

「・・・フォルセティ。・・・ルシル君。せめてフォルセティに何か・・・何か一言だけでも話したって。お願いや」

それでもルシル君は一言も発さへん。これはいよいよルシル君がただ無視してるだけやないって気がしてきた。それは他のみんなもそうで、「様子がおかしくない？」ってざわざわしだす。アリサちゃんやヴィータに続いてアリシアちゃんもルシル君に詰め寄って、両頬をぎゅーっとつねったり引っ張たり。シャマルが脈を計るために腕を取ったり、アギトが胸に耳を当てて心音を聞こうとしたりする。

「・・・え？　え？　ちょっと待って！　脈が無いわ！」

「し、心臓も止まってる！」

「あ・・・それは・・・」

シャマルとアギトの言葉に私たちは絶句した。シャルちゃんはすぐに「バインド解除！」して、ルシルを床に横たえさせた。そして医務官であるシャマルが心臓マッサージや人工呼吸を始めたのを私は見ながら、「私が・・・殺した？」って考えに恐怖した。

「待ってください、主はやて！　アイリ。お前は今さっき、あ、それは、と何かを言いかけたな？　何を言おうとした？」

アインスの問いに、私たちの視線はアインスとアイリの2人に向けられた。何かを話そうと一度は口を開いたアイリやったけど、何か迷ってるようでまた口を閉ざした。そんなアイリにフォルセティが「アイリお姉ちゃん・・・」縋るような目を向けた。

「・・・ごめん、マイスター。アイリは・・・」

「アイリ。お願いや」

「はやて、みんなも。今すぐにベルカに向かって。そこに、本物のマイスターが居る。そのマイスターはね、エインヘリヤルなの。だから、死んでるんじゃなくて機能が停止してる感じ。・・・見て。シグナム達の魔力を奪ってなんとか保ってたけど、もう構築維持の限界で消滅する」

アイリのその言葉に私たちは「え？」って、シャマルが心臓マッサージしてるルシル君に視線を向けた。アイリの言うようにルシル君の体が霧散し始めた。"エインヘリヤル"ってことを知らずにこの状況になったら絶対に取り乱してたな。

ルシル君が"エインヘリヤル"としたら、目の前に居るアイリは？って疑問が浮かぶ。シグナムが「アイリ。お前もエインヘリヤルなのか？」って問うと、アイリは「違う。本物だよ」って首を横に振った。アイリはずっとルシル君と一緒やった。それこそ一緒に死を偽るほどに。それがここに来てルシル君と別行動。ホンマに異常事

態や。

「本物のマイスターは、今頃はマリアがもう持って行った魔力を手にして、境界門が開くのを待ってると思う」

「もう持って行ったって・・・、え！？　マリアさんが奪う役だったわけ！？　そう言えば、いつの間にかいなくなってる！　ルミナ！　最後に話をしてたのはルミナだよね！？」

「え、あ、うん。境界門を安定させるために、先に戻るって聞いたんだけど・・・。うぁー、ようやく会えた母親が神様だったことにも驚いてるのに、最後の最後で嘘を吐かれるなんてショックすぎる！」

ルミナちゃんの母親発言も気になるところやけど、マリアさんは盗みを働いたうえで戻った。作戦の全貌を知ってるアイリがそう言うんなら、もういろいろと手遅れなんやろう。シャルちゃんが「じゃあ、アイリとエインヘリヤルのルシルの役割って・・・」って項垂れる。

「うん。シャルの考え通り、マリアが保管室から魔力を奪うまでの時間稼ぎ。だから勝つ必要なんてなかったし、負けてもこうして時間稼ぎすれば問題なしってことになってる」

「プレシア母さんとリニスは、そのことを・・・？」

「いいえ。知らないわ」

「私たちに与えられた作戦以外の作戦については何も聞いていませんでしたから」

「じゃあ、ドクターやアルファ達も？」

「ああ。知らなかったよ」

「ただ、神器王がエインヘリヤルだってことは知っていたわ」

「アルファ。どうして教えてくれなかったの？」

「聞かれなかったからよ」

「とことんわたし達を逆撫でするような真似を・・・！　クロノ！　ルシルがやってくれた！　実は――」

シャルちゃんがクロノ君に通信を繋げて報告するのを横目に、私は「アイリ、大丈夫？」って目線を合わせてそう声を掛けた。するとアイリの目が潤み始めて、「ごめんなさい」って謝った。私はアイリを胸に抱いて、よしよしと背中を撫で擦る。

「ルシル君もひどいなぁ。ずぅっと一緒やったアイリを、最後の最後に置いてけぼりにするんやもんな」

「違うの・・・。マイスター、もうボロボロなの・・・。残ってる記憶も、最初の次元世界、今の次元世界、マリアと出会った世界の３つだけ。マイスターが魔力を欲してるのは、ガーデンベルグに勝

つためじゃなくて、はやて達の記憶を保ったまま、アースガルドに帰るため。はやて達との思い出を魔力として消費しないために、魔力を欲してる」

アイリがそこまで言うてから私から離れると、なおも零れる手の甲で涙を拭ってから床に正座した。そんで私たちを順繰りに見た後・・・

「フォルセティの言う通りだよ。マイスターが逃げさえしなければ、こんな滅茶苦茶な状況にはならなかった。責められるのは当然のことだよ。そんなマイスターを諌めず、止めなかったアイリも同罪。どんな罰だって受ける。・・・虫のいい話だってことは理解してるつもり。でも、お願いするしかないの。マイスターを、ルシルを助けてください。これが本当の本当に最後だから。マイスターを独りぼっちのままで行かせないであげてください」

土下座して、そうお願いした。私はフォルセティをヴィヴィオに預けて、「そんなことせえへんでええ！」って、すぐに駆け寄ってアイリの頭を上げさせた。それでも「アイリにはこんなことしか出来ない」って頭を下げようとした時、リインとアギトがアイリを両側から抱きしめた。

「バカやろう。妹の必死な願いを聞き入れねぇ姉が、この世のどこにいるってんだ」

「一応、八神家の一員としてはリインの方がお姉ちゃんなので、妹をしっかり助けるですよ」

「アギトお姉ちゃん、リイン・・・。ありがとう」

姉妹が抱き合って泣いてるのを、私も泣きながら見守ってると、シャルちゃんが「・・・クロノ。聞いてた？」ってモニターに映るクロノ君、それにユーノ君を横目で見た。

『ああ。保管室の調査はこちらに任せてくれ。・・・しかし許可を取るべく奔走していたが、全部無駄になったと思うと泣きたくなるな』

『ルシルの方が一枚上手だったね。まさか自分のエインヘリヤルを寄こすなんて想像もしなかったよ』

「で、これからわたし達、ベルカに向かおうと思うんだけど」

『特騎隊と元特務六課に関しては、君とはやてに決定権がある。元六課組は現在、特騎隊の補助戦力として合併されているからな。出撃することに関しては何も問題はないよ。ロッサとも情報を共有しているため、スムーズの事が進むはずだ』

「了解。感謝するよ、クロノ。ロッサにはあとでキッチリ連絡するよ。・・・はやて、アイリからベルカのどこに行けばいいか聞いておいて。ベルカと言っても世界1つだからすごい広いんだし」

そう言って私たちから離れてアコース監査官に通信を入れるシャルちゃんに「了解や」って答えて、改めてアイリに向き直る。アイリ

は私からの言葉を待たずに「シュトゥラはアムル領、領主館。そこがアイリ達T・C・の本拠地だよ」と教えてくれた。真っ先に反応したんは、「シュトゥラ・・・！」の王族イングヴァルト家の直系、アインハルトと、「シュテルンベルク始まりの地・・・！？」と驚くトリシュやった。

「うん。元はリアンシェルトが用意してくれてたところでね。４年前、リアンシェルトに勝った後、パイモンが案内してくれて、それからはそこでT・C・の活動をしてた。ごめん、アインハルト、トリシュ。アイリ達、クラウス達やエリーゼ達の思い出の場所を、悪い事に使ってた」

「え、あ、い、いえ。・・・お役に立てているのなら大丈夫です？」

「どうして疑問形？」

「あと、実はここ怒るところ」

アイリが頭を下げるとアインハルトはお辞儀して、ルールーとリヴィがツッコみを入れた。陰鬱な雰囲気なミーティングホールやったけど、アインハルトの天然のおかげでちょう晴れたかも。ただ、トリシュやシャルちゃん達ベルカ組が顔を見合わせてるのが気になった。

「えっと、ひとまず、アイリ。私たちをアムル領に案内してくれるか？　アイリ、転移魔法とかで来たんやろ？」

「う、うん。ベルカに航行船の便なんてないしね。えっと、座標はね・・・――」

シュテルンベルク邸の中庭の座標を教えてくれたアイリ。本局からシュテルンベルク邸へはスカラボのトランスポートで行けるとのことで、私たちはすぐに行動を開始。シュトゥラに降り立ってみたいってゆうアインハルトや、フォルセティらチームナカジマにルール、リヴィも一緒することになったんやけど・・・。

「プレシア母さん・・・？」「プレシアママ・・・？」

「私はここまでよ、アリシア、フェイト、アルフ」

「そうだね。私も、これで失礼させてもらうよ」

プレシアさんとドクターがそう言うと、2人は脚から霧散し始めた。それにリニスさんも。ウーノさん達が一斉にドクターの元に集まって、「やっぱり消えちゃいやです！」と涙ながらに吐露する。ドクターは人間として死ねたことに誇りがあるって言うて、歳を取らへん使い魔のような存在にはなりたないって考えや。ウーノさん達も渋々やけどそれに納得してたようやけど、いざお別れが来たら・・・って、ことなんやろうな。ゆっくりと消え始めたドクターは「ほら、笑って送り出してくれたまえ」と苦笑いを浮かべて、ウーノさん達の頭を順に撫でる。

「アイリさん。私は、アリシアの使い魔として残ることにしました。・・・お願い出来ますか？」

「あ、うん。じゃあ・・・コレ、飲んでくれる？　で、飲んだ後はそちらの魔法での使い魔契約をすれば大丈夫、ってマイスターが言ってた」

アイリは身に着けてる局の青制服のジャケットのポケットから、ビー玉サイズの虹色に輝く宝石を取り出して、手の平に乗せた宝石をリニスさんに向かって差し出した。そやけどリニスさんの脚はもうふくらはぎ辺りまで消失してるから、アリシアちゃんが代わりに受け取って、「リニス。あーん」って口に運んだ。

「アリシア。そこまでしてもらわずとも・・・」

「あーん」

「あ、あーん・・・」

笑顔を崩さずに宝石を差し出し続けたアリシアちゃんに、リニスさんも諦めて大人しく宝石を飲み込んだ。そしてアリシアちゃんとリニスさんは、使い魔契約を果たした。リニスさんの消えていた脚も元に戻り、その存在感もハッキリしたものになった。

「「「リニス！」」」

「わわっ！？　もう。フェイト、アリシア、アルフ、いきなり全力の抱き付きなんて危ないですよ」

「ご、ごめんね、リニス。でも・・・！」

「うん、嬉しいだもん！」

「そうだよ！　嬉しさを止めらんないよ！」

そんなフェイトちゃん達を優しい目で見守ってるプレシアさんが「これでもう、思い残すことはないわ」と安堵の息を吐いた。プレシアさんは今にも消えそうなほど体が薄くなってる。

「プレシア母さん！」「プレシアママ！」「「プレシア！」」

「アリシア、フェイト、どうか幸せに。アルフ、リニス。私の愛娘たちを、お願いするわね」

「はい！」「うん・・・！」

「子ども達に見送られて逝けるのは・・・やはり親として幸せなことだわ」

それがプレシアさんの最期の言葉やった。泣き笑いを浮かべるフェイトちゃん達に見送られながら、プレシアさんは消滅した。プレシアさんの消滅を見届けたことで、フェイトちゃんとアリシアちゃんは泣き崩れた。

「プレシア女史の言う通りだね。家族、それに友人たちに見送られて、ジェイル・スカリエッティという人間の生を終える。その様を、

意識のハッキリした状況で迎えることが出来る。ふふ。私は最期の最期までいい体験をさせてもらい、幸せだったよ。・・・では、私の娘たち、友人たち！　敵か味方か判らないが、別の世界線の次元世界でまた会おう！」

もう音もせえへん白衣をバサッと払ったドクターは、最期までドクターらしいニヤリとした笑みを浮かべて消滅した。残る"エインヘリヤル"は、アリシアちゃんの使い魔となったリニスさんを除いて"スキュラ"のみとなったんやけど、消える兆しはあらへん。

「ところで、デルタ達は大丈夫なの？　早く使い魔の契約をした方がいいんじゃ・・・？」

「そこはもう大丈夫だよ、スバル。デルタ達、スバル達がパイモンに苦戦してるのを見ながら、ルーテシア達と契約を済ませたんだよ♪」

「お姉ちゃんがイプシロン、ゼータと、私がアルファ、ベータ、ガンマ、デルタと契約したんだよ」

「４人も！？　大丈夫なのリヴィ！？」

「ものすごい魔力消費じゃない！？」

「心配してくれてありがと、エリオ、キャロ。４人まとめて一緒に戦闘みたいなことは多分無理だけど、日常生活を送る程度なら問題ないと思う」

「アルファ達には今後、アルピーノ姓を名乗ってもらう。私やリヴィアの姉妹として、ホテルアルピーノに働く同僚として、一緒に過ごしていこうって考えてる」

"スキュラ"の問題はいつの間にか解決してたようね。あとは、私たちがベルカはシュテルンベルク邸に赴いて、ルシル君と・・・ルシル君と、永遠のお別れをするだけや。

Ｓａｇａ２９アイリ・セインテスト～Ｗｏｍａｎ　ｌｉｖｉｎｇ　ｉｎ　ｌｏｖｅ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

マイスター、ルシリオン・セインテスト・アースガルドの融合騎として、"戦天使ヴァルキリー"のノイエーラ・スルーズル・ヴァルキュリアとして、リアンシェルトの思惑を知らずにイリュリア技術部の手によって試作七番騎・白雪の氷精ズィーベンという記号でこの世に生を受けた。

――生まれながらにしてアイリという存在は、そのすべてがマイスターの為に在る――

リアンシェルトの真の目的を最後まで知らせられることがなかったイリュリア技術者たちは、アイリのことを本来の目的通りにイリュリア騎士の強化パーツとなる融合騎の試作シリーズの一騎としか見てなかったから、その扱いは実験動物と同じような嫌なものだった。今思い返すだけでも腹が立つ。

しかも最後は、イリュリアに反する考えを持ってるアイリを処分するっていう名目で、イリュリア製"エグリゴリ"・ゼフォンの試験運用の標的にするっていうクズさを見せてきたからね。イリュリアに対する好感度は最低から最悪になった。だから、そんなイリュリアの為じゃなくて別の、マイスターの為に生まれたって言うのは嬉しいものだった。

――戦場で再会したアギトお姉ちゃんから、マイスターのところに来ればいい、って誘われたときは嬉しかった――

アギトお姉ちゃんやアイリのイリュリアに対する裏切りに端を発するマイスター達との出会いがリアンシェルト達の計画通りだとしても、アイリをイリュリアっていう牢獄から解き放ってくれるものだったから、喜びこそすれ恨むなんてことはない。

――じゃあ名前を贈らせてもらうよ。君の新しい名前は、アイリ、だ――

アイリっていう新しい名前をくれて、道具じゃなくて家族として迎え入れてくれた。グラオベン・オルデンとしての活動はそんなに長くはなかったけど、その短いながらも濃い日常がアイリにいっぱいの幸せを教えてくれて、ある感情を芽生えさせてくれた。

――アイリはマイスターを愛してる――

アイリがマイスターを裏切らないよう、リアンシェルトがそう設計したかもしれない。それでもマイスターに対するその想いは、プログラムなんかじゃないって、一緒に過ごして育んできた感情だって、胸を張って言いたい。

「だからごめんなさい、マイスター・・・」

マイスターの為だけの融合騎。マイスターの考え、思い、そのすべてを受け入れて、一緒に果たしてくのが正しいことなんだと思う。

だけど、アイリはそれを裏切るよ。やっぱり間違ってることは間違ってるって言わないと、それこそ道具になっちゃうから。

・―・―・回想だね・―・―・

"T・C・"最後の作戦である本局襲撃のために、マイスターの"エインヘリヤル"と一緒に執務室を出たアイリは、廊下で待機してた幻術の融合騎エルフテを抱きかかえた。エルフテは本局に陣取るはやて達をかく乱するために必要な戦力だ。抱きかかえる必要性は無いけど、その抱き心地を堪能する時間はここを出たらもう無いかもしれないからね。今のうちに抱っこしておこないと。

「ねぇ、マイスター。ちょっと提案してもいい？」

アイリの前を歩く"エインヘリヤル"は執務室に残るマイスターと意識が繋がっていて、マイスターの思考が"エインヘリヤル"の言葉として発せられるし、視覚も聴覚も共有してる。だからアイリは、マイスター本人に話しかけるつもりで"エインヘリヤル"に声を掛けた。

「なんだ？」

「マイスター。これで最後になるんだから、はやて達とちゃんとお別れをした方がいいと思うんだ」

「そのことか・・・。俺は、自分の死を偽ってはやて達と決別を図った。今さらどんな顔をして話せと？」

"エインヘリヤル"の今の恰好は、"界律の守護神テスタメント"の証である神父服、フード付き外套、仮面っていう聖衣。マイスターの言うように、はやて達に素顔を見せるつもりはないって意思表示だ。そんなマイスターの考えに意見するためにアイリが「うん」って頷くと、胸に抱くエルフテが信じられないって目でアイリを見上げてきた。

「アイリはマイスターのための融合騎だから、マイスターに従うべきなんだろうけど、ただ従うだけじゃダメなんだって思うの。マイスターのことが大切だから、大好きだから、マイスターが自ら辛い道に進むのを黙って見ていられないの」

「辛い道・・・か。自業自得、因果応報だな。その辛い道とやらを進まなければならないほど、俺は罪深い存在だ」

「そんなこと・・・！」

「あるさ。マリア達は俺ひとりのために、本来進むべき歴史を大きく変えた」

「でも、そのおかげでアイリは生まれた。闇の書もはやてに出会う前にマイスターと出会って、一時でも幸せになれた。アリシア、クイント、ティーダが死ななかった」

「その分、ドクターや無関係な一般市民が大勢亡くなったり、大きく人生を歪まされた人も多くいる」

リンドヴルムが首都クラナガンで"Ａ・Ｍ・Ｔ・Ｉ・Ｓ・"を起動させた事件や、プライソン事件、イリュリア・クーデター事件、この３つの大きな事件だけで被害者・犠牲者はとんでもない数だ。

「でも！　マリアが言ってたでしょ。マイスターがこの世界に居なくても起こり得た可能性がある事件だったって。マイスターが関わってない次元世界で、こっちの次元世界で起きた事件以上に悲惨な事件・事故などが起きてることも確認してるって。あくまでこの次元世界で大事件が起きそうだったから、リアンシェルト達エグリゴリが利用したに過ぎないって。マイスターが全部悪いわけじゃない」

無限に在る世界線、無限の可能性、無限の悲劇。リンドヴルムはシュヴァリエルが居なくても他の世界線でも登場するらしいし、プライソンだってミミルが生み出さなくても誕生する世界線があり、クーデター事件も起きる世界線だっていくつもあったって、マリアが言ってた。

マリアは　"エグリゴリ"を探し当てるために、最初の次元世界での契約後からずっとマイスターに黙って次元世界を巡ったそうだ。最弱の"テスタメント"ゆえの好き勝手。マイスターも知らない、アイリだけが教えてもらった話だ。だからその信ぴょう性は確かなもの。

「そうかもしれないが・・・」

「ああもう！　マイスターにちょーっとイライラし始めたから、もうハッキリ言わせてもらうよ。いい？」

「あ、ああ、言ってくれ」

「マイスターに悪い事があるとすればそれは、逃げたこと、だよ。マイスターは悪い事してきたよ。後ろ暗い、後ろめたい、やましいことばっかだよ。でも、それでも逃げちゃダメだった。はやて達に、いろんな人にごめんなさいをして、協力してもらうべきだった。死を偽って、みんなに辛い思いをさせて泣かせて・・・。最低最悪の選択肢を選んだ。マイスターは、自分が傷つくのが嫌で台無しにした」

アイリの言葉に"エインヘリヤル"は俯いて、じっと耐えるように聞いてくれてる。ごめんね、でもこれは言っておかないと、マイスターはとことん自分を責め続けてダメになる気がする。そんな気持ちのまま、マイスターをアースガルドに帰すことなんて出来ない。

「だからさ、マイスター。今からでも遅くないよ。はやて達と顔を合わせて、ちゃんとごめんなさいして、そして協力してもらおう？　でないと・・・独りぼっちのままで、帰ることになっちゃう」

本当ならアイリも、マイスターと一緒にアースガルドに行きたい。でも、行けない。アイリは現代に生きる融合騎。マイスターは過去に生きる人間。きっと、6千年以上も過去に戻っちゃうマイスターとはもう二度と逢えない。信じたくないし、認めたくないし、受け止めたくないけど、それがマイスターとマリアの見解だ。

「ありがとう、アイリ。俺を想って言ってくれたのは伝わったよ。

だが、それを受け入れるわけにはいかない」

「どうして・・・？」

「俺が、最後まで俺であるため」

そう言ってアイリから目を逸らす"エインヘリヤル"を、「格好いいこと言ってるけど、それって逃げるつもりだよね？」ってジト目で睨みつける。つまりは逃げたりしたダメな自分を貫いて、格好悪いままで終わらせるって意味だ。"エインヘリヤル"は「容赦ないな。まぁ、仕方ないが」って苦笑した。ここで説得してもダメなら、向こうに着いた後でアイリから何かアクションするしか・・・。

「アイリ」

「ん？」

「お前のマイスターとして命令する。アイリ。エインヘリヤルである俺と本局へ赴き、作戦を完遂した後、ここベルカに戻ってくるな」

「・・・・・は？」

何を言われたのかすぐには理解できなかった。その意味は徐々に頭に浸透して、「なんで！？」って"エインヘリヤル"にしがみ付いて、「アイリとユニゾンしないと、マイスター、きっとガーデンベルグに勝てない！　解ってるでしょ！？」って、掴んでる外套の前立て部分を激しく揺らす。

「もう自力で歩けないじゃん！　ううん、歩くどころか自分で立つことも出来ない！　少し動かすだけで体が崩れそうになる！　アイリがユニゾンして安定化させることで、マイスターは自力で動けて戦える！」

「無茶をすればお前とユニゾンしなくとも戦える」

「無茶じゃなくて無理！　そんな馬鹿な命令受け入れられない！　絶対に承諾しないからね！」

「・・・聞いてくれ、アイリ。俺が魔力を集める理由、知っているだろう」

「当たり前！　これ以上の記憶を失わないため、マイスターの体を維持し、ガーデンベルグに勝つため！」

マイスターの崩壊寸前の体を支えてるのは、これまでの契約先で得た複製を消費して得られる魔力や、犯罪者や魔力保有物から奪ってきた魔力。前者をこれ以上犠牲にしないために、これまでずっと魔力を奪ってきた。

「そうだ。俺に残された記憶もとうとう、マリアと出会った世界、先の次元世界、そしてこの次元世界の３つだけになってしまった。俺はそのどれも失わずにアースガルドへ帰りたい。そのためにはアイリ、お前とのユニゾンは必須だろう」

「だったら・・・！」

「でもな、その所為でお前を犠牲にするかもしれない。・・・アイリ。お前の設計からして、その体や命を魔力に変換することも可能となっている」

パイモンの頭の中にはイリュリアの技術や、イリュリアが手に入れていた色んな国、世界の技術が入ってる。もちろんその中には、アイリやアギトお姉ちゃんといった試作型融合騎の設計図も。試作型融合騎は全騎、命や体を魔力に変換してロードに捧げることの出来る設計だった。本音を言えば、アイリにだけある機能なら良かったのに、って考えちゃう。

「いいよ。マイスターの為にこの体、この命を使えるのなら本望だよ。それにね、マイスターが居ない世界に未練は無いの。はやて達みんなと生きてくことは楽しそうだけどね、それでも・・・やっぱり嫌なの。マイスターの存在しない人せ――融合騎生？なんて、アイリには寂しすぎるの」

だから、マイスターにアイリの全部を捧げられるなら、それでいいと思う。だけど「ダメだ。たとえ俺が居なくなっても、アイリには生き続けてほしい」って言われた。そう言われるのは解ってた。"エインヘリヤル"はアイリをギュッとハグして「生きてくれ。頼むよ」って耳元で囁いた。

「・・・でも、ガーデンベルグとの闘いにはユニゾンして参戦するからね。それだけは譲らない」

「すまない。それも諦めてくれ」

「っ！！・・・アイリの融合騎としての存在意義を奪うつもり？」

「いたっ？　いたたた！　アイリ、折れる！　背骨が折れる・・・！」

記憶を守りたいって言うのに、その条件を満たすために必要なユニゾンをしないっていう矛盾に、アイリの怒りゲージはＭＡＸに。"エインヘリヤル"の背中に回してる両腕に力を込めて、その体を締め上げてやる。アイリの背中をタップする"エインヘリヤル"に、少しだけ力を緩めて主張する余裕を与える。

「けほっ、けほっ。・・・違う、違うんだ。本当に真面目な、真剣な話だ」

その目、声、表情には真剣さしかなくて、アイリはバッと"エインヘリヤル"から離れて、直立不動で待機した。

「アイリとのユニゾンは確かに俺の目的のためには必要だ。しかし、２つある危険性は無視できない。１つはさっきも言ったように、アイリの命を使うかもしれないという問題。設計からしてロードの発動許可があって実行される機能だ」

「ロードからの一方的な許可による発動。試作型融合騎の尊厳を無視したクソみたいな機能だよね。マイスターの為なら喜んで差し出すけど、当時のロードが実行しなくて良かったよ」

アイリの当時のロードになったのは、イリュリア騎士団の一員のゲルト・ヴォルクステット。戦場投入前に行われてたユニゾン試験じゃアイリが適当に同調率を合わせてたから、技術部はゲルトとアイリを組ませた。本当に馬鹿な連中だったね。アイリの本気を調査しなかったんだから。だからアイリに体を乗っ取られて、シグナムに討たれたんだ。

「・・・そんなクソ機能を、窮地に陥った俺は思わず実行してしまうかもしれない。それが恐ろしくて仕方ない。今日まで命を懸けて一緒に戦ってくれた相棒を犠牲にする選択を取ってしまうのではないか？と・・・」

「別にいいのに」

「ダメだ。そしてもう1つ。アイリとユニゾンした状態で、この次元世界での記憶を失った場合。俺は確実に混乱するだろう。テスタメント時代の記憶をすべて失うと、俺の意識はフェンリルに封印される直前にまで戻るはずだ。・・・そんな状況でいきなりガーデンベルグとの闘いの中に放り出されるのは、リアンシェルトより弱いとはいえ十分に脅威なあの子の前で、あ、ミスしてしまった、なんて冗談では済まされない隙だ」

「・・・うん」

「さらに、自分の中にアイリという、見知らぬ少女が居る。記憶の無い俺にとってそれは、どんなレベルでの混乱になるか想像もつか

ない異常事態だ。前者の混乱は、救うべきエグリゴリであるガーデンベルグとの闘いということで、すぐに冷静さを取り戻せると思うんだ。しかし後者の混乱はそうはいかない。生まれる隙もどれほどのものか。間違いなく致命的になる」

「マイスターの言い分は理解したよ」

アイリとのユニゾンは恩恵もあるし損害もあるということだね。マイスターの最優先目標である記憶を失わずにアースガルドへ帰還するために必要なこと。それはやっぱり「アイリを使って」ってことだから改めて伝える。

「アイリ」

「でねでね！　記憶が残ったままアースガルドに帰れたら、アイリをエインヘリヤルとして召喚して、それからアインスみたいに独立させてほしいの！　そうしたらアイリは生き残っても死んでもマイスターと一緒に居られる！　うわ、すごっ！　アイリ天才！　ねえねえ！　それでいこう、そうしよう！」

「アイリ」

"エインヘリヤル"の目は、マイスターの声は、アイリのそんな天才的な発想すら受け入れないと物語ってた。アイリはまた震えだす声で「どうして！！」って叫んだ。

「受け入れてよ！　みんなを忘れたくない、アイリを死なせたくな

い！　今の状況じゃどっちかを諦めるしかないじゃん！　両方取ろうとするからマイスターは苦しんでる！　アイリだったらいいよ！　いいんだよ！　確かにオリジナルのアイリは死んじゃうかもしれない！　でも、それで少しでもガーデンベルグを救うことに繋がるならいいよ！」

そもそもアイリの命を使う"かもしれない"、だ。マイスターは使うって、失うって前提で考えてる。最後の決戦だもん。最悪のパターンを考えるのは当たり前。だけどそれらは確定した事案じゃない。アイリを喪わず、記憶を失わずに勝つかもしれない。ユニゾンしても結局は問題なかったね～ってなるかもしれない。と、"かもしれない"に雁字搦めになって、弱気になってるマイスターに最後の具申した。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ！」

「アイリの言いたいことは解る。俺は度が過ぎて臆病になっている。悪い事ばかりを考えていることくらい・・・。でもな、最後なんだ、これで本当に最後なんだよ。２万年と存在して、何度も心が折れかけ、いや折れたこともある。そんな地獄からようやく自由になれる。帰還か消滅かの瀬戸際だ」

「それは解ってるよ。でも恐れてるだけじゃ前に進めないってことはマイスターは知ってるでしょ。ねえ、怖がらないで、恐れないで。信じようよ。全部上手くいって、ハッピーエンドでマイスターの長い旅路が終わるって！」

「・・・・・・」

長い沈黙の後・・・

「・・・本局でマリアが魔力を奪取するまでの時間稼ぎが、俺、アイリ、エルフテの任務だ。そしてついさっき、アイリとエルフテはここベルカに戻らず、出頭するよう命じた。それは変わらない。ガーデンベルグとは俺ひとりで闘う。アイリ、エルフテは帰還不許可とする。もちろん、はやて達を連れて来るのもダメだ」

アイリの思いを全部聞いたうえでマイスターが出した答え。もう何を言ってもダメだってなんだって理解して、アイリは「ヤヴォール」って、ギュッと握り拳を作って歯噛みしつつ頷いた。

「そして、お前たちが本局での任務を終えた瞬間、俺とアイリのマイスター・融合騎という主従契約を解除。今後はアイリ・セインテストではなく、八神アイリと名乗ってくれ」

「〜〜〜〜〜っ!!」

追い打ちの酷い命令に対して何も答えることが出来ない程に泣いて、溢れ出る涙を何度も手で拭うアイリに、"エインヘリヤル"は「今までありがとうな」って言ってハグした。

・―・―・終わりだね・―・―

マイスターの命令を無視して、アイリははやて達を"T・C・"の

本部であるアムル領主館――シュテルベルク邸に戻ってきた。怒られるかな？　呆れられるかな？　それとも・・・。それでもアイリは、マイスターを孤独のまま旅路の終焉に向かわせるわけにはいかないから。

Ｓａｇａ３０－Ａ遥かに永き旅路の果てへ～Ｌａｎｄ　ｏｆ　Ｓｔｅｒｎｂｅｒｇ～

†††Ｓｉｄｅトリシュタン†††

ルシルさんと本当の別れを済ませるため、アイリからの懇願かつ彼を思い慕う私たち願いの下、シュテルンベルク家発祥の地、ベルカ・シュトゥラ国はアムルへとやってきたのだけれど、「うそ・・・ここは本当にベルカなの・・・？」と、自分の目に映る光景に私は目を疑った。

「ちょっ、待って！　ベルカの大地がめっちゃ再生してる！」

「いつの間にこんな・・・！」

「ありえないよ、これ！」

「でも幻じゃない。この緑の香り、本物だ」

澄み渡る青い空、白い雲、優しい風、温かな日差しが、アムル領主館の中庭へと転送された私たちを出迎えたことで、私やイリス、ルミナ、セレス、クラリス達ベルカ組は驚きを見せた。

「えっと、どうしたの？」

「えっとね。ルシルとフィヨルツェンの闘い以降、ベルカの地が再

生し始めたって話あったでしょ？　だから教会はたびたびベルカに調査隊を派遣してたんだけど、こんなに再生しているなんて調査結果は無かったから・・・」

「イリスたち局勤めとは違い、私やアンジェのような教会騎士は調査隊に何度か同行して、実際にこの目でベルカが徐々に再生していることを確認してきた。けれど、半月前に訪れた時にはこんなに自然豊かな大地では決してなかった・・・」

「そうそう。この前貰った資料には、再生が頭打ちにあるって・・・」

だから驚いた。屋敷の周辺は、アムル領本都の街並みが遺跡として広がっていて、青々とした自然に覆われていた。以前ここを訪れたのは1年前。その時は草木も生えておらず、屋敷も無かった。それなのにこの変わり様は一体・・・。私たちベルカ組が混乱している中、「アイリは何か知っているのですか？」と、イクスがアイリに尋ねました。

「うん。ベルカは今、マリアの干渉能力で2つあるの。アイリ達が今いるところが本当のベルカ。トリシュたち教会が訪れてたのは、この真のベルカの姿を隠すための結界。マイスター達の最期を邪魔しないようにマリアが張ったもので、屋敷中庭の座標に転送で来た場合は本来のベルカに、次元航行艦などで来た場合は偽りのベルカに立つことになるの」

「そういうこと。で、その結界はちゃんと・・・」

「解除されるよ。マイスターとマリアが帰るときにね。・・・それよりほら、ヴィータ達はこの屋敷を見て何も思わない？」

「は？・・・おいおい、マジか・・・。あの日のまんまじゃねぇか」

「イリュリアに破壊される前のシュテルンベルク邸と全く同じだな」

「ええ！　屋敷も、庭も、全然変わってないわ！　懐かしい・・・！」

「オーディ――いや、ルシルやエリーゼ達と過ごした当時のことが蘇るな」

「帰って、きたんだな・・・あたしら」

ヴィータさん、シグナムさん、シャマル先生、アインスさん、アギトがそう言って感慨深げに屋敷を見上げました。無言のままのザフィーラも、目では懐かしがっていると判ります。そういう私も、知るはずのない屋敷や庭などの景色を見て、どこか懐かしい気持ちになっていた。

――おかえりなさい――

（え・・・？）

耳元で囁かれたようなか細い声ながらハッキリと耳に残る声。自然と庭の片隅に生えている大木へと目を向ける。幻視していると理解

できる。それでも単純な幻とも言えない存在が、幹の寄り添っていた。

（エリーゼ卿・・・）

シュテルンベルク家の家宝である、エリーゼ卿やオーディン様――ルシルさん達が描かれた絵画の通りのお姿であるエリーゼ卿が、私を見て微笑んでいました。今の、おかえりなさいは、ひょっとしたらエリーゼ卿の・・・。まばたきの一瞬、視界が閉ざされた後、エリーゼ卿の方を見ると、そこにはもうそのお姿はなかった。

「トリシュ？　大丈夫？」

「イリス・・・？　あぁ、うん、大丈夫。行こう」

アイリを先頭にみんなが屋敷の玄関扉に向かって歩き始めていて、樹を見つめたまま足を動かさなかった私を心配して、イリスが声を掛けてくれたみたい。イリスを安心させるために笑顔で答えた後、玄関扉を開けて待っていてくれているはやてにも、笑みを浮かべて頷いて見せた。イリスと一緒に駆け足ではやての元へ行き、一緒に玄関を潜った。

「内装も昔のまま・・・」

廊下に敷かれたレッドカーペット、壁に設けられた魔力燈、それに「おいトリシュ、コレ見てみろよ」と、ヴィータさんが壁に掛けられている額を見て言いました。そこには「コレ、失われていたはず

の・・・」絵画がずらりと並んでいた。

「ルシル君がオーディンって名乗っていた頃の絵・・・？」

「わぁ♪　シグナムがドレスを着てるですよ！」

「シグナムお姉ちゃん、可愛い！」

「む！？　み、見るな。それは無理やり着せられたもので・・・！」

「何よ。案外似合うじゃない」

「うん。シグナム、綺麗だよ」

「よしてくれ」

真っ赤なドレスで身を包み、キリッとした表情のシグナムさんのソロモデルの絵画。シャマル先生やアインスさん、ヴィータさんもそれぞれのドレス姿の絵画が飾られている。アイリの話によれば、マリアさんは当時のベルカを、ルシルさんをずっと見守っていたとのことで、一度は失われたこの屋敷や絵画などを一から元の姿に再生させることも出来たとのこと。

「あ！　なぁ、アイリ！　この絵ってさ！　ルルとベディの描いたやつじゃね！？　うっわー！　懐かしいな！」

「ルルとベディって、ルシル君とエリーゼちゃんの子どもよね？」

「ルシル君の・・・」

「子ども・・・」

「ルシルさん、私や兄様にとっては高祖父母・・・よりもっと昔の親族になるのかな」

――ママ～♪――

――ママとお姉ちゃんたちの絵かけた～！――

また幻視＋幻聴だ。廊下の奥から駆けてくる小さな女の子と男の子。２人の手には、額縁に収められている拙い似顔。２人は私たちをすり抜けて、玄関の方へ。そちらに振り向くと、エリーゼ卿とアイリとアギトの３人の姿が。エリーゼ卿たちに絵を見せる子ども達の姿が微笑ましくて、私の胸の内がポッと温かくなる。

当時のシグナムさん達の絵画や、子ども達の描いた絵を見て思い思いに感想を言いながら、私たちは廊下を進み、「この部屋にマイスターが居る」と、アイリさんが執務室の両開き扉の前で一度足を止め、私たちに振り向いた。

「アイリからみんなに忠告しとく。マイスターの姿を見てショックを受けると思う。だけど、取り乱さないでほしい。お願い」

アイリの今にも泣きそうな表情と震えた声は、ルシルさんが今置かれている状況が酷いものだと理解するには十分すぎるものだった。

私たちは息を呑み、アイリが２つのドアノブを捻るのを見守る。

――お願い。オーディンさんを、ルシルさんを・・・救ってあげて――

エリーゼ卿がまた姿を見せ、ゆっくりとこちらに向かって歩いてきました。そして、ご自身の胸に両手を添え、何かを抜き取るような仕草をします。蕾のような形にした両手を私に向けて差し出してきたので、私は手を伸ばした。

――シュテルンベルク家の最後の目標、ルシルさんを故郷に送り出す。その務めを、あなたに託す――

幻にしては現代の私と意思疎通が出来ているような気がしてならない。もしかすると、エリーゼ卿の亡霊・・・。ルシルさんの最期を見届けるために現代まで・・・なんて、そんな馬鹿な話があるわけ・・・。でも、エリーゼ卿の想いはしっかりと受け止めます。あなたと同じ人を好きになった者として。

「っ！？（魔力が・・・全快した・・・！？）」

エリーゼ卿の開かれた両手の中には何もなかった。けれど、その何もない空間に伸ばしていた右手から流れ込んだ来る温かな魔力が、空っぽになっていた私の魔法用のリンカーコアを満たした。自分の身に起きた奇跡とでもいうような状況に驚く私の耳に「お願いね」という、エリーゼ卿の声がハッキリと聞こえた。

「トリシュさん。大丈夫ですか？」

「あまり顔色が優れないようですが・・・」

「休める部屋、探してきましょうか？」

「ありがとうございます。ですが大丈夫です。・・・私たちも入りましょう」

イクスとフォルセティとヴィヴィオ、それに心配そうに私を見るアインハルトとコロナとリオに微笑みを返し、アイリが両開き扉を内側に向かって開くのを見つめる。部屋はカーテンが閉められていることで薄暗いけれど、そこに居た人物が誰かは判った。

「あら～？　どうしてアイリが居るのかしら～？　それに、管理局の連中も～？」

部屋の中央に立って私たちを出迎えたのは、「ミミル！」と、側に控えるフラメルとルルスの３人。ルシルさんに魔力を吸収されたシグナムさん達、ルシルさんやミミルと交戦し魔力を限界まで消費しているはやて達みんなを護るため、私は"イゾルデ"を双剣形態フェヒターフォルムで起動した。

「待って、みんな。ソイツはもう大丈夫」

そう言ってアイリはミミル達の前に移動して、彼女たちの奥、布が被せられた何かを見て、「マイスターの様子は？」と尋ねた。その

言葉からして布の中にルシルさんが居ることが判ったのだけれど、どうして布を頭から被っているのか？という疑問が生まれた。

「ダメね～。もう陛下自身の機能でコミュニケーションは取れなくなっているわ～」

「そう。じゃあ、計画通りに・・・」

「ええ。私たちの最後の役目を果たすわ～」

アイリが執務室の奥へと移動するとルシルさんを覆っている布に手をかけ、「みんな。いくよ」と一言断りを入れたのち、布をゆっくりと外した。そこに居たのは、車椅子に座ったルシルさんでしたが、私たちはその姿に絶句した。ルシルさんの体の至る所が崩れ、霧散し、体の向こう側が見えるほどに薄くなっていた。

†††Ｓｉｄｅトリシュタン⇒イリス†††

アイリが取っ払った布に隠されてたのは、車椅子に座るルシル。でも、もはや人として活動できるような体じゃなかった。両脚はもう膝から下が無くて、右わき腹が崩れて、右腕は半透明、左手の指先は無く、左肩も崩れては元に戻ろうとしたり・・・。顔は、右目辺りが半透明で、左下顎が少し崩れて、額が陽炎のようにゆらゆらと揺れてる。

ルシルのそんな無残な姿にわたし達は絶句して、何一つ言葉を発することも、その場から動くことも出来なかった。ただひとり、アイリだけが「ごめんね、マイスター」って謝った後、ルシルの左手に

自分の両手を重ねた。

「マイスターのこと、裏切っちゃった。アイリ、帰ってきちゃダメだったのに、はやて達を連れてきちゃダメだったのに・・・。でもね、マイスターを孤独のまま帰らせることが我慢できなかったの。許してくれなくたっていい。・・・これが最後だもん。だから、少しでもいいから話をしてあげて」

「アイリ～？　そろそろ始めるわ～」

ミミルがフラメルとルルスを連れてルシルの側へと行き、アイリと入れ替わるように立ち位置を変えた。何をするのか？っていうわたし達の疑問は、アイリの説明で解決した。

「パイモン達の役目だよ。マイスターの糧となるため、自身を魔力化させて魔力炉（システム）と融合するっていう・・・ね」

「私は初めからそういうコンセプトで造られたのよ～。もちろん、私の造ったフラメルとルルスもね～」

ルシルの糧となることを前提に造られたミミルや、彼女に造られたフラメルとルルスだけど、その表情から不服はなさそう。ううん、そもそも不服っていう感情すらないのかも。ミミルはチラリとわたしを見た後、すぐにルシルへと視線を戻した。

「では、これにてさようならよ～」

ルシルの足元に展開されるベルカ魔法陣。三方の小さな円の中にミミル達は立ち、ルシルに体の正面を向けた状態で片膝立ち。そして「ルーイヒ・エンデ」とミミルが呟くと、彼女たちの輪郭が一斉に崩れて、崩れた体は魔力素となってルシルの胸へと吸い込まれてく。小さな体のフラメルとルルスはすぐに消滅して、残るはミミルだけとなった。

「ミミル・・・」「ミミル、さん・・・」

「何を悲しむのかしらぁ、イリス、はやて～？　私たちは敵同士なのだから～、喜びこそすれ、悲しむのは違うんじゃない～？」

「・・・そうね。でも、敵だったけど、子どもの頃からの知人には違いないでしょ？」

「リインの誕生にお世話になったこと、忘れてへんよ。あなたがおってくれたから、リインを生み出せた」

「です。とっても感謝してるですよ。ですから・・・ありがとうございました！」

リインの礼儀正しすぎるお辞儀を見たミミルは嬉し気にフッと笑って、「懸命に生きるといいわ～」とリインに声を掛けて、そして完全に消滅した。３人分の"エグリゴリ"の魔力を吸収したことで、ルシルが普通の体にまで再生した。血の気が失せて真っ白になってた肌も赤みを帯びて、生きてるって思えるようになった。

「マイスター。アイリだよ。判る？」

「・・・イリ・・・」

「うん。そうだよ、マイスター。ごめんね、来ちゃった。アイリ、命令無視した」

「・・・来るんじゃないかって、そんな気はしていたよ。お前が本局に発つ前、ものすごい剣幕で俺を説教してくれたし、それに・・・。主従契約の解除してしまった以上、俺の命令を聞く必要はないと開き直るんじゃないかってね」

「あ～、そんな言い訳もあるか。それは考えつかなかったな～♪」

「本当か？」

「ホントホント～♪」

「・・・みんな」

ルシルの視線がようやくわたし達に向いたけど、すぐに気まずそうに目を逸らした。アイリは「はやて達も一緒に連れて来た」って、ルシルの座ってる車椅子の後ろに回るとグリップを握って、ルシルの体をわたし達に向けさせた。でも、いろいろと言いたいこと、怒りたいことがあったのに、さっきのボロボロなルシルの姿を見て、わたし達は掛ける言葉が見つからず沈黙しちゃった。

「ルシル君」

そんな中ではやてがルシルの目の前まで歩み寄って、ルシルの頬に両手を添えて顔を近付けた。完全にキスの流れ。わたしとトリシュは慌てて駆け寄り、後ろからなのは達は「ヴィヴィオ達にはまだ早い！」って声が。ヴィヴィオら子ども達の目を手で防いでるんだろうな～。

「む、むぎゅ～～～！？」

キスをするかと思われたはやては、ルシルの頬を全力で引っ張った。しかもただ引っ張るだけじゃなくて、抓ったり捏ねたりと痛みを増加させる。

「ルシル君の抱えてる問題は教えてもらったから知ってる。そやけど、ルシル君のしてきたことは同情できひん。フォルセティが言うてたんやけどな、ルシル君が逃げへんかったらこんな大事にならへんかった。これは、そんな混乱を招いたルシル君への罰や」

そう言ってからルシルの頬から両手を離したはやてがスッと後ろに引いた。その視線からはやてが考えてることが判ったわたしは、「これは、わたしからの罰ね～♪」って、ルシルの顔を両手で挟んでギューッと力強く挟み込んだ。

「はい、次～」

「では、私が・・・」

わたしが離れると、今度はトリシュがルシルの前に立った。はやては頬抓り、わたしが顔挟み、トリシュは何をするのかな？って見てると、あの子はルシルの側頭部を両手でガシッと掴んだ。まさかの頭突き、もしくは膝蹴りか！？と思ってたら、なんてことはない、その決して大きくもない薄い胸にルシルの顔を埋めるという、蛮行を働いてくれやがった。

「「トリシュ！？」」

「むぐぐっ・・・！」

「いやイリスとはやてが痛みを与えるなら、せめて私くらいは優しくしておこうか、と」

「そうは言ってもトリシュの胸は小さいんだから、ルシルに肋骨や胸骨を押し付けてゴリゴリして痛くしてるんじゃないの？」

「はは。イリスは面白いことを言う」

ハイライトの消えた目でわたしを見るトリシュは、ルシルから離れて「ふふふ」って一切喜楽の感情が無い笑い声をあげて近付いてきた。わたしがトリシュから逃げる間、アリサが「じゃあ、次はあたしね」ってルシルに近寄って、「あちょー！」と派手な音を立てるほどに強烈なビンタを食らわせた。

「いっっって！　アリサ！　おま――君、全力で打ってくれたな！？」

「そりゃそうよ。アンタは知らないだろうけどね、本局でのフォルセティやアイリの姿があまりにも・・・！　ダメだわ、思い出したらまたアンタに腹が立ってきた」

往復ビンタをかまそうとするアリサに「ダメだよ、アリサ」って止めたのはアリシア。目に見えてルシルがホッと安堵したのが判ったんだけど、アリシアの「だって、次は私の番だし♪」の言葉に、ルシルはふるふると首を横に振った。

「しょうがないよね～。これは罰だもんね～」

ビンタの練習なのかアリシアが右手の素振りを始めた。ルシルの左頬はさっきのアリサの一撃で真っ赤になってるから、そこに追撃のフルビンタはきっついだろうな～って、トリシュに捕まってヘッドロックを受けてるわたしは思う。

「どう？　私の胸がクッションになって、そんなに痛くないでしょう？」

「確かに柔らかい胸だけど、やっぱ骨が当たって痛いかも」

「まだ言いますか？」

「痛い、痛い、痛い」

わたしの頭をロックしてるトリシュの左腕をタップする。そんなわ

たしとトリシュを余所に、アリシアは慈悲のつもりかルシルの右頬に手の甲でのビンタを食らわせた。あれはもはや裏拳とも言える。

「いっっ・・・・！　つぅ・・・・！　待って、ちょっと待ってくれ。まさかと思うが、もしや全員から罰を受けるのか・・・・！？」

アリシアの背後でシャドーボクシングをしながら待機してるアルフを見て、ルシルは顔を青くした。真っ先になのはが「いやいや、私はやらないよ！？」って前に突き出した両手を慌ただしく振るって、さらにフェイトにすずか、スバル達も、ヴィヴィオ達も首を横に振った。

「父さん。僕は遠慮なくやらせてもらうよ」

「いって！・・・あ、ああ、フォルセティ。馬鹿な父親だと嗤ってくれ」

結局パンチじゃなくてデコピンを食らわせたアルフが離れ、涙目のルシルが次に目の前に立ったフォルセティを優しい眼差しで見て、そして自嘲した。フォルセティは「嗤わないよ」って、ルシルの真正面から両肩に手を置いた。そして深呼吸を何度か繰り返した後・・・

「これが、母さん達を悲しませ、泣かせた罰だよ！　父さん！　ふんっ！！」

それは見事な頭突きを食らわせた。その勢い、衝突音にわたし達は

絶句した。ルシルもガックリ項垂れて、「くく、効いたぁ・・・ふふふ」って、痛すぎたのか小さく笑い始める。フォルセティも額を真っ赤にして、痛みで涙目だ。

「「大丈夫？　フォルセティ」」

「額、真っ赤ですね。加減なしが過ぎますよ」

「すっごい音したもんね。無茶しすぎだよ」

「私のヒーリングで治しましょう」

「だ、大丈夫だよ、ヴィヴィオ、コロナ。ごめんなさい、アインハルトさん、リオ。ありがとう、イクス」

フォルセティの元に集まるヴィヴィオ達の様子が微笑ましい。あの子たちを優しく見てると、『僕も、そっちに居ればグーパンくらいするんだけどね』って、こちらと通信を繋げたユーノが、モニター越しにそう言って苦笑いを浮かべた。

『そうだな。ルシル、君が本局で巻き起こした混乱の後始末が無ければ、俺も行って、一発はぶちかましていたぞ』

『ステアの正体が実はルシルだったなんてね～』

『私たちが知らない間に、ルシルは実は生きてて、しかも敵でなんたらかんたらで、ビックリしすぎてハゲるかと思ったんだけど～？』

「いつつ。ユーノ、クロノ。あと・・・」

今気づいたけどルシルは首から下が動かないのか自分の手を使わずに、アイリが代わりに赤く腫れた額や頬をそっと撫でて、「ヒーリング」の魔法を発動してそのダメージを回復させる。

『セレネ！』

『エオス！』

『『1年ちょっと会わなかったからって、忘れないでよ！って、ちょっと待って、ガチで忘れてる！？』』

「冗談だよ、セレネ、エオス」

『『だよね！？　そうだよね！　焦った、マジで焦った！　やめてよね！』』

ユーノの両肩から覗き込むようにモニターに映ってたセレネとエオスはルシルの冗談に乗せられて、ユーノを圧し潰すかのように覆い被さるようにしてモニターに張り付いた。ユーノがそんな2人に『重いから早く退いて』って言うものだから、2人は体を起こしながら『失礼』って、ちょっと理不尽なチョップをユーノの後頭部に打ち込んだ。

「ユーノとセレネとエオスは、相変わらず仲が良いな」

『まぁ大事な人たちだから。・・・ルシル。今度こそ、本当のお別れになるんだよね・・・？』

「ああ。今度こそ、偽りなく」

『そっか・・・。とても残念だよ、ルシル。もう二度と逢えないなんて』

『私も残念。でもさ、あなたの事情は重々承知してるけど、やっぱ死の偽装だけじゃやっちゃダメなやつだったよ？』

『死んだと見せかけて実は生きてて、しかもＴ・Ｃ・のリーダーでしたって聞いて、すっごく腹が立ったんだから』

『『でも・・・。寂しいよ、ルシル』』

「ありがとう。ユーノ、セレネ、エオス」

『局員としても優秀だった君を亡くすのは惜しい。もちろん友人としても辛い。なんだかんだ言って、君は頼りになる友人だった。そんな君にはとんでもない貧乏くじを引かされたよ、まったく』

「ははは。クロノはチーム海鳴の兄貴分だからな。頼りにしているし、されているんだよ」

『ったく、調子のいいことを。・・・実年齢で言えば君の方が圧倒

的に兄だろうに』

「こんな身勝手で自己中な兄などいるものかよ」

『そうだな。・・・本当なら俺も、君の旅路の果てを見届けるべきで、俺もそうしたかったのだが、どうしても抜けられない仕事が残っているんだ』

「クロノらしいよ。それに、俺の仕出かした暴走の後始末なんだろ？　迷惑を掛けるな。・・・俺の見送りが出来ないことなんて気にするな。元より俺は誰に見送られることなく行こうとしていたのだしな。・・・エイミィやお子さん達、リンディさんにもよろしく伝えておいてくれ」

『ああ。・・・良い旅を、ルシル』

クロノが通信を切り、彼が映るモニターが消えた。ルシルはモニターがあった場所を少しの間見続けた後、「ありがとう」って、もう届くことはないクロノへ感謝の言葉を口にした。

Ｓａｇａ３０－Ｂ遥かに永き旅路の果てへ～Ｈａｖｅ　ａ　ｇｏｏｄ　ｊｏｕｒｎｅｙ～

†††Ｓｉｄｅイリス†††

マリアさんがルシルの座る車椅子の後ろに回って、グリップを握ったところで・・・

「待ってください！」

なのはが制止の声を上げた。そしてルシルの前にまで移動すると「私の魔力、持って行って」って右手を差し出したから、ルシルは驚きの表情を浮かべてなのはを見た。

「これが最後って言うのなら、私に出来ることは全部やっておきたいんだ。事件解決後には休みをとるつもりだったし、２～３日分くらいは魔法使えなくても大丈夫だから」

「しかし・・・」

「しかしも何もないよ。ほら、早く。時間、ないんだよね？」

「ありがとう。本当にありがとう、なのは」

女神のごとき笑顔を浮かべるなのはに、ルシルは泣くのを堪えるように目をギュッと瞑って礼をした。動かし難そうにしてるルシルの

左手を取って、「いつでもいいよ」って笑ったなのはは目を伏せて、魔力を吸収されるのを待つ。

「絶対に無駄にはしない。女神（コード・イドゥン）の祝福」

「ぅく。ん・・・ぅん。ルシル君。今日までありがとう。ルシル君と一緒に過ごせたことは、私の誇りだよ」

「なのは・・・。俺もだよ。君と出会えたこと、共に戦えたこと、光栄だったよ」

魔力の吸収が終わったのか、なのはは手に取っていたルシルの左手を、そっとルシルの膝の上に戻した。なのはがルシルから離れると、今度はフェイトが「じゃあ、次は私」ってルシルの前に立った。わたし達の考えはもう同じだ。なのはの言うようにこれが最後になるのなら、これから旅立つルシルの役に立ちたい、だ。

そんなわたし達の思いを察してくれたみたいで、マリアさんは車椅子のグリップから手を離して、「もう少しだけ、お別れの時間を設けます」って言って、その姿を消した。

「えっと、私からもありがとう、かな？　前の世界線でもお世話になったみたいだし、恋人だったし、け、けっこ・・・結婚、もっ、したみたいだし！　この世界線でも！　ルシルには何度も助けられた！　だから、その！　いろいろとありがとう！の気持ち！」

顔を真っ赤にしてフェイトはルシルの左手を両手で握りしめた。ルシルの目は懐かしいものを見るかのように優しくて、「こちらこそ。

フェイトのおかげで、今の俺があると言ってもいいくらいだ。ありがとう」って儚げに笑って、フェイトの魔力を吸収した。

「次は私、私！」

フェイトがルシルの手を戻すより早くアリシアがルシルの手を取って、フェイトみたいに両手でルシルの手を包み込んだ。さらにアリシアは、ルシルの手を愛おしそうに自分の額に寄せた。

「私もね、ルシルに目一杯のお礼を言いたいんだよ！　フェイトがさっき言ったけど、前の世界線じゃフェイトとアルフが、この世界線じゃ同じように2人、それに私がお世話になったから。私が蘇ることが出来たのは、リニスが蘇ることが出来たのは、間接・直接問わずにルシルのおかげだもんね。本当にありがとうだよ！」

「そうか。リニスは残留を決めたんだな。あぁ、確かに創世結界からリニスが消えている。プレシアは・・・残っている。そうか、それが彼女の選択か。・・・アリシア。こちらこそありがとう。君のいる日常は楽しかったよ」

「えへへ♪　私も、すごく楽しかった！」

「ルシル。あたしゃ、アンタにあげられるほどの魔力は無いから、感謝だけになるけど・・・」

「いいよ、アルフ。君にも世話になったな」

「そりゃこっちのセリフさ。アンタのおかげで、アリシアとリニスが居る、一緒に生きていけるんだ。アンタと一緒に過ごせた時間、その恩、絶対に忘れないからな」

アリシアの魔力も吸収し、アルフと握手を交わし終えたルシルに、今度はアリサが「なら、今度はあたしの魔力を上げるわ」って言ってルシルの前に立った。そんなアリサの隣に「時間がないようだし、私も一緒にお願い」って言ってすずかが並んだ。

「アンタへの怒りはさっきのでチャラよ。・・・なのはもフェイトもアリシアも、アンタの左手ばかりに触れてたけど、魔力吸収って左手しか出来ないの？」

「いや。右手でも出来るようにしてあるから、どちらでも構わないよ」

「そ。じゃあ、あたしが右手で・・・」

「私が左手だね」

「あのさ。あたしも、アンタにいろいろとお礼を言いたいのよ。前の世界線じゃあたし、魔導師にならずに実家を継いだらしいじゃない？　それを知って、あぁ、この世界線のあたしは幸せだわぁ、って思ったわけ。そうなった理由が間接的とはいえアンタにあるのだから、感謝したいのよ」

「私も、アリサちゃんとおんなじだよ、ルシル君。ルシル君の与り

知らぬところでの私やアリサちゃんの魔導師化だけど、おかげで私たちはなのはちゃん達と同じ魔法の世界で、一緒することが出来てる。それに私に魔法技術者っていう道に進む機会をくれた。すっごく感謝してる」

「ありがとう、ルシル」

「ありがとうね、ルシル君」

「こちらこそだ、アリサ、すずか。すずかにはエヴェストルムを造ってもらったし、アリサにもいろんな事件はもちろん、日常でも世話になった。ありがとう」

アリサとすずかはルシルの手と握手をして、ルシルの魔力吸収を受けた。チーム海鳴で残るはわたしとはやてだけとなった。ルミナ、セレス、クラリス、ミヤビは魔力はほぼ空で、セラティナも"エインヘリヤル"・ルシルとの闘いで空っぽだ。

「魔力はあげられないけど、握手でお別れはしてくれる？」

「もちろんだよ、セレス」

「というか、私たちの魔力はすでに貰ってるはずだよね・・・？」

「あ、ああ・・・まぁ。すまん。プリム達ヴァルキリーに奪われた君たちの魔力は、俺の魔力炉（システム）の中、創世結界ブレイザブリクに魔力結晶として貯蔵されている」

「なら、いい。奪ったんだから、ちゃんと役立ててほしい」

「ありがとう、セレス、ルミナ、クラリス。絶対に無駄にはしないよ、君たちの魔力も」

「・・・あの、私の魔力は少し回復したので、ルシル副隊長、よろしければ貰ってください。鬼神形態顕現」

ルミナ、セレス、クラリスの順で握手を交わした後、ミヤビの額に魔力の塊である角が2本と生成してから、「どうぞ、角に触れてください」って片膝立ちになって、ルシルの手を取って自らの角に触れさせる。

「いいのか？　ミヤビ。回復したばかりだろう？」

「いいのです。これまでお世話になったことへのお礼として、感謝の言葉と共にどうか受け取ってください。今日までありがとうございました」

「こちらこそ世話になったよ、ありがとう、ミヤビ」

そうしてミヤビからの魔力を貰い終えたルシルに、スバル、ティアナ、エリオ、キャロの集まった。４人もミミルとの戦いで魔力が空に近いことで、ルシルもそれを察しているから、手を差し出そうとしてる４人に向けて首を小さく横に振った。

「「「「ルシルさん・・・」」」」

「君たちにも本当に世話になったな。・・・スバル。クイントさん、ナカジマ三佐、ギンガに、よろしくと、それにご迷惑をお掛けして申し訳なかったと伝えておいてくれないか？　クローンとはいえ惨たらしく壊した俺の遺体を発見させてしまったからな」

「はい・・・！　必ず伝えます・・・！　ルシルさん！　ありがとうございました！」

「ティアナ。ティーダ執務官のこと、すまなかった。俺たちとエグリゴリの問題に巻き込んでしまって申し訳なかったと、君とティーダ執務官に謝らせてくれ」

「そんな！　頭を上げてください！　その問題のおかげで、兄は殉職しなかったんです！　確かに何年も兄は死んだと思い続けましたけど、ちゃんと再会できました！　そこには感謝しかありません！　ですから・・・ルシルさんが謝る必要はありませんよ。どうか、自分を責めないでください。なので、私から口にする言葉はこれだけです。ルシルさん、ありがとうございました」

「・・・。エリオ。同じ男として、大人として、恥ずかしくない姿を見せるべきだというのに、最後の最後で格好悪いところを見せた。以前、俺みたいに強く、格好いい大人になりたいと言ってくれたのにな」

「ルシルさんは十分に格好いいままですよ。むしろ、人らしいとこ

ろを見ることが出来て嬉しかったりします。ルシルさんにだって怖いことがあって、泣くことだってあるって。・・・弱い部分も含めて、改めてルシルさんのような強く、優しく、格好いい男になりたいって思います」

「面と向かってそう言われるとさすがに照れ臭いな・・・。キャロ、フリードも、ありがとう。いろいろと迷惑を掛けてしまったことには、すまなかったと謝らせてほしい」

「いいえ、迷惑だなんて。私、ルシルさんに、それにルミナさん、アイリにも本当に感謝しているんです。ルシルさん達と出会ったあの任務、第５１管理世界ワイエルバキアの内戦鎮圧作戦。あの日、ルシルさん達と出会えたから、今の私がいると思うんです。前の世界線で私のことを知ってくれていたからってこともあると思うんですけど、それでも気に掛けてくれたから・・・。早いうちにフェイトさんやアリシアさんと出会うことも出来ました。ルシルさん、本当にありがとうございました」

スバル達との握手を終えると、今度はヴィヴィオ達がルシルの元に集まった。

「ルシルさん！　これまでいろいろとありがとうございました！」

「ルシルさんは私にとって、もう１人のコーチでした！」

「私、ルシルさんのこと絶対に忘れません！」

「ルシルさん。クラウスに代わり、お礼を申し上げます。シュトゥラに平和を齎してくれたこと、ありがとうございました。そして、アインハルト・ストラトスとしても、長くお世話になったことに感謝を」

「それでは私も、アインハルトに倣って元ガリアのイクスヴェリアとして、あなたに感謝いたします。初めて出会った時のこと、頭を撫でていただけたこと、さようならではなく、またお逢いしましょうと約束してくれたこと、そのどれもが世間知らずだった私には新鮮で、とても嬉しかったです。そして現代でも、機能不全を起こしていつ目覚めるともしれない私を救ってくれました。感謝してもしきれない大変なご恩、決して忘れません」

「ルシルさん。ホテルアルピーノ、そしてアルピーノ家を代表してお礼を言わせてください。ルシルさん、それにアイリのおかげで、ホテルアルピーノは管理世界紙でも紹介されるほどに有名、大繁盛しました。感謝してもしきれません！」

「私も、いろいろとありがとう！　前の次元世界はもちろん、今回でも私がここの居られるのは、ルシルさん達のおかげって判ったから！　この恩は絶対に忘れないよ！」

「父さん。僕と父さんとの間ではもう長い挨拶は要らないと思うんだ。だから・・・だからさ、アースガルドに帰ってもどうか元気で。これまでありがとう、さようなら、父さん」

「・・・リオ、コロナ、ヴィヴィオ、アインハルト、イクスヴェリ

ア、ルーテシア、リヴィア。ありがとうな。君たちも来たことには驚いたけど、俺に最後の挨拶するためにわざわざ来てくれたことは、純粋に嬉しかったよ。フォルセティも、父さんの最後、見届けてくれ」

最後の挨拶も残るはわたし、トリシュ、セラティナ、はやてら八神家のみとなった。チラッとけん制するかのようにわたしとはやてとトリシュは視線を交えた。こんな事してる暇なんてないのに、ほんの少しだけルシルの記憶の残るお別れの挨拶の仕方、その順番を争おうとした。ルシルだけでじゃなくて首を傾げてるセラティナにも申し訳ないよ。

『イリス。ちょっとだけ時間を私にくれないかな・・・？』

『シャルロッテ様！』

マリアさんと一緒にルシルの真実を語ってくれたシャルロッテ様は、"テスタメント"になる前からルシルと因縁があって、なってからも最初はいがみ合い、けど徐々に親しくなって、最後の方では恋をしてたお方だ。この中の誰よりもお別れの挨拶をしたいに違いない。

『どうかな？　あ、ダメだったら・・・』

『いいえ！　今すぐにでも！　あ、でも、わたしの分も時間を残していただければ・・・』

『もちろんだよ。軽く挨拶するだけだから、時間は掛からないよ』

『了解です。では、どうぞ』

目を閉じて、わたしの意識を水の中に沈めるようなイメージ。沈んでく中で、もう1人のわたし――シャルロッテ様と入れ替わる感じで、次の瞬間にはわたしは自分の中から外界を認識するようになる。

「私が先に挨拶をさせてもらうわね」

「っ！　シャ――イリスと意識を代わったのか、シャル」

「うん。久しぶり、ルシル。あなたがアースガルドに帰る日がいよいよ来たのだから、1万年の相棒が挨拶しておかないと、ね」

シャルロッテ様の最初の一言で、わたしからシャルロッテ様に人格が代わったことに気付いたルシル。ウィンクしながら答えたシャルロッテ様がルシルの側に寄ると、彼の左頬に右手を添えた。

「過去の私が口を奪うわけにはいかないからね。私はこっちに愛と、これまでの感謝と、万感の思いを込めて伝えるよ」

そう言ってシャルロッテ様は、ルシルの右頬にキスをした。ルシルは一切抵抗せずにシャルロッテ様のキスを受け入れて、「ははは」って小さく笑い声をあげた。

「・・・正直、テスタメントとしての俺の最後を、君に見届けられることになろうとは思わなかったよ」

「そうだね。私も、人格を保ったまま、そしてルシルの居る次元世界に転生できるなんて思いもしなかった。さらに言えば、堕天使戦争の決戦を見ることも。だけど、嬉しくもあるの。私の最後を見届けてくれたあなたを、今度は私が見届けることが出来る今が、ここにあることを」

「始まりは敵同士で、テスタメントで戦友となり、そして今があると思うと、なんとも数奇な運命だろうか」

「本当にね～♪・・・さてと。これ以上はイリスに申し訳ないから、私は下がることにするよ。ルシル。またどこかで逢えるといいね」

「・・・そうだな」

「さようならは言わない。またね、私（ルシル）の初恋」

「ああ。またな、俺（シャル）の憧憬」

最後にルシルは握手を交わしたシャルロッテ様の『ありがとう。交代するわ』という感謝と同時に意識を交代した。もうこのままわたしが行こう。そう考えたから、「次はわたしからね」って声を掛けると、ルシルが目を丸くした。

「なに？」

「いや。君のことだから最後に挨拶して、少しでも印象付けようと

するんじゃないかと・・・」

「あはは。そう考えてたけど、順番如きで印象に残る残らないようなルシルじゃないでしょ。きっちりわたし達のことを憶えたままでアースガルドに帰って、思い出として振り返ってよ。わたし達もずっと憶えてるから。ていうか、忘れるわけがない。・・・こんなに人を好きになったことないし、これからもずっと、わたしはあなたを想い続けるから」

そっとルシルの両頬に手を添えて、わたしは「愛してる。永遠に」って、シャルロッテ様が空けてくれていたルシルの唇にキスをした。

†††Ｓｉｄｅイリス⇒はやて†††

シャルちゃんとシャルロッテさんの挨拶が済むと、セラティナが「なら、次は私が」とルシル君の前に立った。

「ルシル。初めて会った時のこと憶えてる？」

「あ、ああ、憶えてる。ランサーと名乗って犯罪者狩りをし終えて帰ってきた際にリーゼ姉妹と遭遇した，あの時だな」

「そう！　リーゼ教官たちが頼ってくれたから、いざ意気込んでみればあなたみたいな規格外に結界を粉砕されて！　あれ、すごいショックだったんだから！　でも、結界魔法の天才だと持て囃されて思い上がっていた私にはいい薬だった。早いうちに挫折を知って、今となってはよかったな～と。それについての感謝もあるし、捜査

課で一緒に働けたことなどなど、多くの恩がある。極めつけは、私の前世、アリスと引き合わせてくれるきっかけをくれたこと。アリスともども感謝してる」

「そうですね。私の人格を覚醒させたのは厳密に言えばマリア様でしたが、きっかけはルシル様がこの次元世界なる場所を訪れたこと」

セラティナの口調、声色がさらに大人びたものに変わった。マリアさんが私たちに見せたルシル君の真実の中で登場した結界王アリス、その人の人格が変わったようや。アリスさんは動かへんらしいルシル君の右手に自分の手を重ねると、涙をポロポロと流し始めた。

「アリス・・・・!?」

「ルシル様の創世結界に、シエルとカノン、シェフィリス様がいらっしゃるのですよね。・・・また、お逢いしたいです。なのでルシル様。どうか、アースガルドへ無事にご帰還なさり、シエル達の魂を解放なさってください・・・」

「もちろんだとも。必ずシエル達を解放し、輪廻の輪に戻すよ。ありがとう、アリス。元気でな・・・って、おかしいか?」

「いいえ。これからもセラティナと共に生きていく所存ですので、元気に生きていきますよ」

ルシルさんとアリスさんが握手を交わすと、「では、セラティナに戻します」と言って目を伏せた。セラティナに代わったのが、纏う

雰囲気から感じ取ることが出来た。そんでセラティナも「ありがとう」と、ルシル君と握手してる右手をキュッと握り締めた。

「・・・トリシュ」

「っ！・・・やっぱり、ですか・・・」

ルシル君に名前を呼ばれたトリシュが、ホンマに小さな声で呟いたのが聞こえた。寂し気に私をチラッと見た後、「はい。ここに」とルシル君の前に移動した。セラティナと入れ替わるように立ったトリシュにルシル君は「本当に助けられてばかりで、感謝の念しかないよ」と微笑んだ。

「いいえ。当然のことをしてきたままでです。シュテルンベルク家の大恩人、セインテスト家。その子孫であるあなたに助力することは、シュテルンベルク家の使命でした。が、それ以上に私個人があなたに恋をしていたから、少しでも力になりたかった。ですが、まさかオーディン様本人とは。本当に数奇な運命としか言いようのない・・・」

「本当に・・・。エリーゼの願うままに行為に至ってしまったわけだが、俺も彼女との間に子が生まれると思わなかった。ただな、トリシュ。これだけは信じてほしい。確かに最初はエリーゼの強引さに当てられていたが、彼女もまた長い旅路の中で出逢えた愛おしい女性だった。ちゃんとそこには愛があったと思う。だから、シュテルンベルク家は俺にとって宝だよ。もちろん君もだ」

「・・・そう言ってもらえて、エリーゼ卿も、歴代の当主様たちも、兄様も、光栄に、誇りに、幸せに思うでしょう。もちろん私も、とても嬉しいですよ。・・・ルシルさん。お疲れさまでした。良い旅路を」

――乙女（クス・デア・ヒルフェ）の祝福――

シャルちゃんと同じようにルシル君の唇にキスをするかと思うてたトリシュは、ルシル君の左頬にキスをした。ルシル君も少し驚いてるみたいやけど、すぐに「魔力、ありがとう。助かるよ」とトリシュに微笑んだ。なんとなくやけど察することは出来た。トリシュは、ルシル君への想いを完全に絶ったってことが。

「ルシル君！」「ルシル！」

トリシュがルシル君から離れると同時、リインとアギトがルシル君に駆け寄ってしがみ付いた。とうとう私たち八神家が、お別れを済ませる番になってしもうたわけや・・・。２人だけやなくてザフィーラ、シャマル、ヴィータ、シグナムと続いてルシル君の側へ。

「リイン、アギト。今日まで本当にありがとうな。アギトにはベルカ時代より世話になった」

「ルシル君！　リインも、ありがとうですよ～！　いっぱい、いっぱい、ありがとうですよ～！」

「あたしを救ってくれて、アギトって名前をくれて、家族をくれて、

ありがとう！　オーディンに、ルシルに逢えてマジで良かった！」

「ルシル君。私からもお礼を言わせて。あなたがオーディンとして私たち守護騎士を家族として迎え入れてくれたこと、今でも大切な思い出よ。それに料理も教えてくれたおかげで、前の世界線では料理下手だった私とは違い、今回の転生ではちゃんと料理のお手伝いも出来たもの。本当にありがとう」

「私は他の者たちのように口が達者ではないから、長々とした挨拶は出来ん。ゆえに、この万感の思いを込めて礼を言わせてほしい。ルシル。お前と出逢えて私は・・・とても幸福だったよ」

「あたしもあんまし小っ恥ずかしいことを人前で言いたかねぇから、簡単に挨拶させてもらうぞ。・・・あんがとな、ルシル。アンタと一緒に過ごした時間は、何よりの宝物だったよ」

恥ずかしいことは言いたないって言うてたヴィータは、顔を真っ赤にしながらもルシル君を背後からぎゅうっと抱きしめた。そんで耳元でなにか――きっと、感謝の言葉を口にした。

「ルシル」

「「アインス・・・」」

私の側に居ってくれてたアインスがひとりルシル君の側に歩み寄って、その前で王に忠誠を誓う騎士のように片膝立ちになって頭を下げた。

「神器王ルシリオン・セインテスト・アースガルド陛下。シュリエルリートとして、リインフォース・アインスとして、私の持てる最大限の敬意と謝意を貴方に。先の次元世界でもそうですが、今回の次元世界でも、貴方に救っていただきました。こうして夜天の主たる八神はやて、守護騎士４騎、融合騎２騎と同じ時間を過ごせるのも、ひとえに貴方のおかげです。家族としての挨拶の前に、貴方の融合騎であった者としての謝辞を述べさせていただきたい」

「アインス・・・。ああ、確かに受け取った」

「では、家族として。ルシル、改めてありがとう。最後はお前の勝手に振り回されて怒り心頭だったが、怒りの感情など一瞬でしかない。お前には言葉だけでは足りないほどの感謝の念しかない。だから・・・ありがとう、と送らせてくれ」

「こちらこそ、ありがとう」

ルシル君とアインスが握手を交わすと、アインスだけやなくてみんなの視線が私に向いた。最後やからな、私が。私の挨拶が終われば、ルシル君はもう・・・。私は俯いて、小さく呼吸を繰り返す。そんで最後に深呼吸をして、「ルシル君」と、退いてくれたアインスに代わってルシル君の前に立つ。

「世話になったな、はやて。この次元世界での俺の居場所をくれたから、俺は孤独の十数年を過ごさずに済んだ」

「・・・うん」

「死を偽って大いに悲しませたこと、本当に申し訳なかった」

「うん・・・」

「ありがとう。楽しかったよ、はやての家族として過ごせたこの十数年は・・・」

「・・・うん・・・」

相槌だけで何も言えへんくなってる。ルシル君が死を偽ったときは、あまりに突然なお別れ過ぎて何も考えられへんくなった。そやけど今回は、ちゃんと挨拶を出来るお別れや。挨拶がきちんと出来るのは嬉しいのに、お別れが近付いてることを思い知らされるようで、それを拒絶しようと頭の中がぐちゃぐちゃになる。

「はやて」

「っ・・・！」

左手をぎこちなく動かして、私の右手にそっと触れてくれた。私の知る力強いルシル君の手とは思えへんほど弱々しい。精いっぱい伸ばして、触れてくれたその手を私は握り返して、お互いの指を絡ませる、俗に言う恋人繋ぎをする。

「体温、低いな・・・」

「あぁ、すまない。もう心臓も血管もない体になっているから、温かみを失ってしまって・・・」

「ううん。体温が無くてもルシル君の大きな手や。こうして触れられることが出来て、私は嬉しいよ」

温かみは無いけどゴツゴツとした男性特有の大きな手は確かに今、私の手の中にある。きゅっきゅっと握る力を強めたり弱めたりしてるとパキンと音が鳴って、「ルシル君！」の指にヒビが入ってしもうてた。血の気が引いて手を離そうとするんやけど、思い止まって「私の魔力、持ってって！」って提案した。"エインヘリヤル"のルシル君との戦いで消費したというてもまだまだ残ってるし、少しでもルシル君に使ってもらいたい。

「早く！」

「あ、ああ！　すまない！　女神の祝福（コード・イドゥン）！」

「ぅん！・・・っはぁ・・・ふぁ・・・！」

魔力をこんな風に吸収されるなんて初めてな体験で、なんやぞわぞわする。変な声が出ぇへんように口をキツく結んで、吸収が終わるまで耐えた。で、魔力の吸収が終わってもルシル君のヒビの入った指は元に戻ってへんかった。

「ありがとう、はやて。助かったよ」

「どういたしまして・・・って、ルシル君。指・・・」

「あぁ、ガーデンベルグとの闘いに備えて蓄えたんだ。体の修復はその時までお預けだ」

「そ、そうか・・・」

そうゆうことならこれ以上触れ合っててルシル君の体を壊すわけにはいかへんから、手を離そうとしたんやけど、この手を離したらそれこそホンマにお別れになるって思うて離し辛くなった。ルシル君もそれを察してくれたんか、今にも崩れそうな指を曲げてもう一度握ってくれた。

「ルシル君・・・！　・・・いやや・・・」

「はやて・・・？」

「やっぱり、いやや。解ってる、ルシル君を引き留めることは、ルシル君を本当に殺すこと繋がるとゆうことくらい・・・！　それでも！　ルシル君と離れたくない！　明日からホンマにルシル君が居らん世界になるなんて・・・悲しい、寂しい・・・！」

感情の決壊。涙が止め処なく溢れてきて、ルシル君の決心を鈍らせるようなことを口走ってしもうたから「ごめん、なさい・・・ごめんな」と、空いてる手で口を押えながら謝る。

「はやて・・・。俺もはやて達と一緒に居られなくなるのは悲しいし寂しいよ。だけど大丈夫だ。はやてには家族や友人、仲間が大勢居る。一時は寂しくなるだろうが、すぐに思い出となっていくよ。何せ君たちの人生はまだ半分も行っていないからな。やがていつかは俺という存在が、あー居たな～と思える日がくるはずだ。それはそれで俺も寂しいが、それは自然なことだ。これから先、いろんな出会いがある。楽しい事、嬉しい事があるだろうし、悲しい事、辛い事もあるだろう。その積み重ねが、俺を思い出にしていく」

「そうかもしれへんけど、ルシル君と過ごした十数年はあまりにも濃くて、大切で愛おしい時間やった。思い出になるにはあまりにも長い・・・と思う。その間、ずっと寂しい思いをせなアカン・・・」

「それはほら・・・あー・・・」

「ごめんな。困らせて・・・。私ばかり我がまま言うてごめんな・・・」

涙を袖で拭い去って、ルシル君の手を両手でそっと外して、ルシル君の膝の上に戻した。ルシル君は首を横に振って、「我儘なものか。困ってもいない。再確認できたよ。君たちのことを忘れるものか、とね」と微笑んだ。

「・・・はやて。これまでありがとう。どうか幸せに、元気で」

「っ！・・・ルシル君も、これまでホンマにおおきにな。ルシル君と出会えて、恋をして、好きになって良かったって心から思う。・

・・どうかお元気で」

そんで最後に私は、ルシル君の唇にキスをした。唇を離して、閉じてた目を開ける。ほぼ同時にルシル君も目を開けて、『俺もはやてに出会えて幸せだったよ。ありがとう』と、誰にも聞こえへんようにするためか、口頭やなくて思念通話でそう言うてくれた。キュッと胸を締め付けられる。鼻の奥がまたツンとなって泣きそうになるのを必死に耐える。せめて最後は、笑顔でルシル君を見送る。それが私に出来る手向けやと考えて・・・。

「ルシリオン様」

「・・・ああ。頼む」

マリアさんが車椅子の後ろに音もなく現れて、グリップを握った。今度こそルシル君が旅立つとき。私たちは「ルシル君！」「ルシル！」『ルシル！』と名前を呼んだ。ルシル君は力強く頷き返して、左手の親指を立てて見せた。そんなルシル君に「マイスター！」と駆け寄ったのは、ずっと黙って見届けてくれたアイリやった。

「アイリ。・・・すまん！　やはり一緒に来てくれ！　俺を・・・助けてくれ！」

「～～～～～っ！　ヤヴォール！」

涙を流しながら満面の笑顔を浮かべるアイリは本来の３０㎝程の身長に戻って、ルシル君の膝の上に着地した。アイリが一緒ならきっ

と、ルシル君も大丈夫のはずや。

「ルシル君、アイリ。いってらっしゃい」

私のその挨拶にみんなも「いってらっしゃい！」と手を振り始めてくれて・・・

「「いってきます！」」

ルシル君とアイリも同様に私たちに手を振り返してくれた。ルシル君も、私たちも、涙が零れるのを拭うことなく、懸命に笑顔を浮かべて、ルシル君たちの姿が消えるその瞬間まで手を振り続けた。

そして、ルシル君たちが消えたその瞬間、私はその場に泣き崩れた。

ＡＮＳＵＲ８其は戦天使にして堕天使の頂点なる者～Ｇｕａｒｄｉａｎｂｅｌｌｇ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

一瞬の浮遊感の後、俺が感じたのは「神秘の魔力・・・！」だった。先程まで居たベルカ、ミッドチルダや他多数の世界では一切感じとることの出来なかった神秘が、俺を出迎えてくれた。ゆっくりと目を開けると、そこは遺跡群のような場所だった。

「エイルトゥーン城塞の裏庭・・・」

ところどころ崩落している石造りの建造物には見覚えがある。しかし境界門というからにはもっと目に見えるもので、通過するところを視認できるかと思っていたが、まさかこんなにあっさりと上位次元世界に来られるとは。車いすを押すマリアが進むたびに干渉能力によって修復されていく石畳の路を進んでいくと・・・。

「センギル正門・・・懐かしいな。しかもなんだ、堀が生きているじゃないか。こんなに水が・・・」

エイルトゥーン城塞を囲う城壁に４つある門のうち、北門にあたるセンギル正門。門に続く架けられたままの跳ね橋を渡る最中、城塞を囲うように掘られた深さ５ｍほどの堀をちらりと見てみれば、堀には水が張り、しかも綺麗なせせらぎを見せてくれている。逃走用として利用されている地下洞穴の水が涸れていない証拠だ。

当時は空戦の出来る魔術師がとても少なかったため出来たことだが、ここに敵を落として、炎熱系で茹で殺したり、雷撃系で感電死させたりしたな。懐かしい・・・。

センギル正門を潜り、崩落していたり、なおも健在だったりする建物の合間を突き進んでいけば、城塞本部のエイルトゥーン城が見えてくる。

「マイスター・・・！　この感じ・・・！」

「ああ。居る」

ここからでもハッキリと判るガーデンベルグの異常に膨れ上がった魔力。リアンシェルトより弱いと言われていたが、確かにリアンシェルとに比べれば神秘も魔力も弱い。しかしそれでもシュヴァリエルよりはるかに上の魔力と神秘だ。

「アイリに付いて来てもらって良かったと、心底思っている。許してくれ」

「ううん。言ったと思うけどアイリはマイスターの為に生きてる。これが正しいんだよ」

俺の膝の上にちょこんと座るアイリがニコニコと笑みを浮かべてくれている。俺にとっては妹、いや娘のような愛おしい存在。この子を死なせることなくガーデンベルグを救って見せる。決意を新たに俺たちはエイルトゥーン城の正面扉へ。傾いているドアの隙間から見えるのは、玉座の間へと続く鉄扉。あそこからガーデンベルグの

魔力が漏れ出ている。

「マイスター。アイリ、魔術師化するから、そしたらユニゾンをしようよ」

「ああ。頼む」

――氷神裁く絶対なる術法（エグリマティアス・エクテレスィ）――

本来は対リアンシェルト用の補助術式だが、魔術師化できることには変わりないことから強力な恩恵だ。

――ユニゾン・イン――

アイリとのユニゾンを済ませることで、俺の体が安定されていく。崩壊も収まり、自力で動けるようになる。俺は車椅子から立ち上がり、「マリア。世話になった。これまでずっと守ってくれてありがとう」と深く頭を下げて感謝の言葉を口にした。

「いいえ。ルシリオン様はガブリエラ姉様にとって大切なお人で、私にとっても兄と慕うに相応しいお方でした。ガブリエラ姉さまが守りたかった貴方を、私も守りたかった。貴方と同じ、テスタメントになるくらいに」

「・・・それのことなんだが、マリア、君は先に神意の玉座から降りるんだ」

マリアはおそらく今後誰ひとりとして成し得ない、自力で"界律の守護神テスタメント"になったという天才魔法士。その分、最弱の烙印を押されることになったのだが、人の身で玉座に昇ったのは奇跡なんて言葉では足りない。

「なぜですか？」

「この闘いで、君やリエラと過ごした記憶、先の次元世界での記憶は確実に失うと考えているからだ。ガーデンベルグを救い、玉座に還り、そこでマリアに対して、誰だ？と問いたくないからだ。君のことを憶えているうちに別れを済ませておきたい。すまない。残酷なことを言っているな」

「お気になさらないでください。私もガブリエラ姉様も、貴方を神意の玉座から解放することが目的なのです。たとえ記憶の中から消え去ってしまっても、貴方が解放されることが私たちの勝利なのですから。・・・ですが、アイリを八神はやて達の元へ帰さないといけないので、まだ降りるわけにはいきません」

「あー、そうか、そうだった。すまん、何から何まで・・・」

「もう。すぐに頭を下げようとしないでください。私がやりたいからやっているのですよ。だからルシリオン様は、ひたすらにガーデンベルグを救うことだけを考えてください。いいですね？」

マリアがぷくぅっと頬を膨らませる。俺は昔と同じように彼女の頭を撫で、「ありがとう。行ってくる」と笑いかける。するとマリア

も「はい。いってらっしゃいませ。ご武運を」と笑みを浮かべ、正面扉を引きはがした。

「行こう、アイリ」

『ヤヴォール！』

マリアと車椅子を残し、風化しているカーペットを踏みしめて歩き、鉄扉の前へ。そこで足を一度止めて深呼吸。４ｔｈテスタメント・ルシリオンとしての長い旅路、そのゴールが目の前にある。両開きであるため２つのドアに両手を付き、グッと内側に向かって開く。

「『ガーデンベルグ・・・！』」

何千年経とうと色褪せない黄金の玉座。肘掛けに両手を置き、眠っているかのように俯いているガーデンベルグを視認した。そしてあの子も、俺を認識したのか顔を上げ、「・・・この魔力、ようやく来たな、神器王」と、下手くそな棒読みでそう言ってきた。

『ガーデンベルグって、ひょっとして大根？』

「『演技が必要な場面などなかったしな。ヴァルキリーは搦め手無用の力押しで十分だったから』・・・ガーデンベルグ」

「リアンシェルトを始めとした俺の部下どもに随分と手こずったようだな。それに、吹けば消えそうなほどに存在感が薄い。そんなのでこの俺に勝てるとでも思っているのか？」

「ガーデンベルグ・・・！」

「まぁいいさ。それでもなお挑んでくるのなら、返り討ちにしてやろう！」

「ガーデンベルグ！・・・もういい、つまらん演技を今すぐにやめろ！　エグリゴリはもう記憶を取り戻していることは承知しているし、どうせお前は、俺とリアンシェルトの闘いも観ていたんだろう？　ならば、俺の望みも判るな？」

「・・・・・判ったよ。最期まで演技を貫けることが出来たシュヴァリエル達に義理立てしたいんだけど、こうまで言われたら仕方ないよな・・・」

そう言って睨みつけると、ガーデンベルグは小さく俯いて自嘲しつつゆっくりと立ち上がり、数歩分だけこちらに近付いて来た。そして彼我の距離およそ15mほどで止まり、「父さんから始めてくれ」と言って、ガーデンベルグは隙だらけに仁王立ちする。

「ガーデベンルグ。待たせたな。今、眠らせてあげるからな。『アイリ』」

『ヤヴォール！　深層同調を開始。神々の宝庫（ブレイザブリク）より魔力結晶を起動、魔力炉（システム）と融合開始・・・、完了。マイスターのリミッターを第二級まで解放！』

リアンシェルト戦後の４年で貯めに貯め、消費に消費を重ねながらここまでもったドーピング用の魔力結晶を使用し、リミッターを解除する。

ＶＳ・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・

其は最果てにて待ち続けた者ガーデンベルグ

・―・―・―・―・―・―・―・―・―・ＶＳ

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想！」

"アンスール"メンバーの神器や詠唱し、プレンセレリウス――レンの神器である葬槍"ミスティルテイン"を具現化させて、逆手で握りしめる。

「初撃は任す！」

――ここ一番で使ってほしいが、まぁよしっ！　さぁ行こうか！！

オレの力を見せてやれ！――

「真技！」

"ミスティルテイン"全体にレンのミッドナイトブルー色の魔力が付加され、その場での旋回からの投擲を行った。"アンスール"の最後の王である俺からの敵対――攻撃を認識したことで、ガーデンベルグが「あぁクソ。やっぱ反撃機能がオンに・・・！」と悔し気に、そして苦し気に呻いた。

「ダメ・・・だ・・・もう・・・抑え・・・きれない・・・！」

「構わない！　来い！　受け止めてやる！！」

「父さん・・・！　ぅぅぅあああああああああああああ！！」

"ミスティルテイン"は彗星のごとくガーデンベルグへと突き進む。対するあの子は回避せず、両手を突き出して防御姿勢に入った。あの子は最初回避しようとしていたが、直前に変に踏ん張ったのが見えた。勝手に回避行動を取ろうとした自身を無理やり抑えたのかもしれない・・・。

「（その強い意志、見事だぞ）彷徨(アム・ネガシオン)える魂に怒涛たる制裁を！」

死を司る"ミスティルテイン"には物質透過という能力がある。物理的な防御を無視し、精神・魂に直接ダメージを与える。抵抗するにはそれに相応しい神器が必要になってくる。素手であるガーデンベルグにはこの真技を防ぐことは不可能だ。

「うぐぅ・・・！」

"ミスティルテイン"はガーデンベルグの腹を貫き、体内から体外へと魔力で出来た"ミスティルテイン"を何十本と突き出させ、あの子をウニのような姿へと変えた。続けて魔力槍が一斉に炸裂すると天を衝く魔力の柱となり、ガーデンベルグを呑みこんだ。

（グングニルは・・・いけるか？）

魔力も神秘も馬鹿みたいに喰う"グングニル"の解放のタイミングを間違えるわけにはいかない。"ミスティルテイン"の具現化と真技の解放だけでかなりの魔力を消費した。少しはダメージが入っていることを願うばかりだったのだが・・・。

――光瑳・斬烈閃――

なおも立ち上っている光の柱の中から強烈な発光が見え、俺はその場で深い伸脚をして体を沈ませる。その直後に頭上を通過したのは銀色の魔力斬撃。その一撃は光の柱を斬り裂き、ほぼ無傷なガーデンベルグの姿が現れた。

――マジかぁ～、おいマジか～。神器と真技の合わせ技だぞ？　あれを耐えるなんてありえね～――

「レン、お前の真技、つかえねー」

――うっせぇよ！　絶対おまえが弱体化してる所為だって！　オレの所為じゃねぇよ！――

ガーデンベルグの右手には、俺が"テスタメント"になることになった最大の要因である神器、"呪神剣ユルソーン"が握られている。"ユルソーン"を杖のように突き、全身から魔力を迸らせている。左手にはあの子を貫いていたはずの"ミスティルテイン"が握られており、ゆっくりと持ち上げて投擲体勢に入ろうとしたため、具現化を解除する。

――瞬神（コード・ヘルモーズ）の飛翔――

剣翼１２枚、菱翼１０枚からなる完全空戦形態へ移行。手にするのは「エヴェストルム！」で、穂に刻まれたルーン文字に神秘のある魔力を流すことで、デバイスから神器へと変化させる。さらに、連結されている２つの柄にはめ込まれている魔石に魔力を流し、その効果で何倍にも増加されて戻ってきた魔力を"魔力炉（システム）"に蓄える。

「父さん！　遠慮なんて一切せずに俺をぶっ飛ばしてくれ！」

――高貴なる堕天翼（エラトマ・エギエネス）――

「ああ！　行くぞ！」

雄孔雀の尾羽のような羽が２０枚と放射状に広がり、ガーデンベルグの魔力と神秘がさらに増加していく。あの子がグッと軸足を踏ん張ったのが見えた。壊されないように"エヴェストルム"を元の指輪形態に戻し、こちらも術式を準備する。

「輝ける命を夜明けの竈にくべ燃やし、魔を成す贄とする」

――最速神駆（ヘルモーズ）――

八双の構えのまま、高速移動術式による突撃を行ったガーデベンルグ。それより早く俺は上昇し、突進からの一撃を回避。止まることなく足元を通過していったあの子は、そのまま玉座の間の出入り口

から飛び出していった。

「天へと昇るは封を解き放つ至高の浄煙。其は棺に眠りし炎王を呼び覚ます烽火」

『ちょっ、えええ！？　どこまで行くの！？　逃げた！？』

「『いや。気を付けろ。すぐに戻ってくるぞ』封じられし棺は鳴動し、その振えは夕暮より宵闇へと進めるが為の虚無の鐘を鎮かに鳴らす」

――風雅・斬烈閃――

瞬間的な魔力の増大を城の外から感じ取り、その場から右へと３ｍほど移動した直後に巨大な真空の刃が飛来して、城を縦に真っ二つに斬り裂いた。遅れて斬り裂かれた箇所が風圧で崩れ、大小さまざまな破片が散弾銃のように襲い掛かってきた。

『コード・ケムエル！』

アイリが俺の体が収まる程度に広い氷の盾を前方に展開してくれたおかげで、破片の雨を食らうことにはならなかった。

『マイスターは詠唱に集中してね！　防御はアイリがやるから！』

「『ああ、任せる！』かくして王の眠りし棺の蓋は開き、溢れ出す烈火は天を燃やし、地を焼き、世界を浄化する」

入り口側の壁に無数の切り口が一瞬で刻まれ粉砕されると同時、ガーデンベルグが"ユルソーン"を上段に構えた状態で、瓦礫に紛れて突っ込んで来た。あれは防御するしないの問題ではない。全力で避けろ。瓦礫の防御はアイリに任せ、あの子の一撃に細心の注意を払いながら詠唱を続けつつ、宙を蹴ってこちらから突っ込む。

「王よ醒めよ。今こそ主の神火を奮う時。世の滅びの果てに待つ、再誕を担うがために！」

「なんで突っ込んで来たんだ！？　ああもう！　避けてくれよ！」

――浄火・斬烈閃――

直撃は防御無視の死。その一撃をバレルロールで躱す。振り下ろされた"ユルソーン"の剣身から放たれた火炎斬撃は城をさらに損壊させ、城全体の崩壊を招いた。それに構わず俺はガーデンベルグの襟首を掴んだ。

「ぁが・・・！？」

「おらあああああああああああ！」

襟で首を絞められて苦悶の声を漏らしたガーデンベルグをそのまま背負い投げし、崩れた瓦礫の山に向かって放り投げる。

――女神の疾翔（コード・グナー）――

全身を魔力で覆い、宙を蹴って超高速突進でガーデンベルグを追撃。先ほど首が閉まったことですぐに反応できなかったあの子は、顔の前で腕を交差して突進体勢に入っている俺へのカウンターが出来ず、「ぐお！」と直撃を受けた。あの子を伴って眼下の瓦礫の山に突っ込み、全身を覆っていた魔力を爆発させての攻撃第二波をお見舞いしてやる。

『マイスター！』

『問題ない！　離脱後、さらに追撃をする。フォローを！』

『ヤヴォール！』

轟音と共に無事だった残りの城の壁や天井が崩れ始めたことで、俺は瓦礫を回避しながら広大で自由な空へと昇る。

「大炎帝の劫火（コード・スルト）！！」

空に描かれる直径１０ｍ程の魔法陣１枚、その周囲に１３枚の５ｍ級魔法陣が展開された。それぞれの放射面下に発生するのは同じ数の巨大な炎球１４個。太陽のごとく燦燦と輝き、今か今かと砲撃命令が下るのを待っている。

『ガーデンベルグをロックオン！　いつでもどうぞ！』

「ジャッジメント！！」

「炎熱系（スルト）最強術式・・・！？」

――火装甲冑（サラマンダー）――

俺の号令の下に１４の太陽から火炎砲撃が発射され始め、瓦礫から這い出て来たばかりのガーデンベルグに降り注ぎ、着弾と同時に火炎爆発が連続で発生していく。それを眺めながら『アイリ、次だ』と、次の上級術式を準備する。下級・中級などの小手先な術式に意味はない。上級で押し切る。

――雷霆・斬烈閃――

１０４発の爆撃が続く中、濛々と立ち上る爆炎と黒煙を斬り裂いて向かって来るのは放電する雷撃の刃。バチバチと放電されている雷撃系魔力も致命傷になりかねない威力を誇るが、屋内ならいざ知らずこの制限のない大空であれば回避するのは難しくない。

（炎熱系魔力で全身を覆って対炎熱系状態になっているな）

切り裂かれた黒煙の隙間から見えたガーデンベルグは、赤味がかった銀の魔力膜と轟々と燃える炎で全身を覆っていた。ガーデンベルグは使用する属性で魔力光が僅かに変色する特異性を持っている。魔術戦では欠点、"ヴァルキリー"として欠陥だが、あの子自身がその方が格好いいからと、改修を拒んだ。結局、あの子が強かったおかげでデメリットにすらならなかったな。

「母なる水よ、突き上げよ！」

――女神の昇滝（コード・ヘヴリング）――

「水・・・！？」

スルトの効果が終わると同時、城塞深くを流れる地下水を遠隔操作して、ガーデンベルグの足元から強烈な水流砲撃として放った。直後、超高音の炎と高水圧の水が振れたことによる水蒸気爆発が発生した。

『アイリ、二重詠唱を！』

『ヤ、ヤヴォール！　やってみる！』

「其は天と大気を司りし偉大にして至高の女帝。鷹の羽衣の纏いて空を翔け、遥かなる世界の空に煌幕を張り揺らめかせる」

『其は殲滅と蹂躙を支配する破壊の王。汝の眼前には群れ成す哀れな子羊！』

「かの女帝が従えしは１２柱のいと美しき従士。其は巫女、其は医者、其は後見人、其は使者、其は従者、其は鋤、其は恋愛、其は縁結び、其は誓い、其は詮索、其は扉、其は礼儀」

『振るわれる幾多の拳は滅びの形。恐怖を生み出す暴風は滅びへの冥府の息吹。八拳に込められるは創造にして破壊、正義にして不義、

神聖にして俗悪、真実にして虚偽！』

「従えし女中と共に、かの女帝は天にて舞い踊る」

『生を奪い死を与える覇王の拳、その身に受けよ！』

以前から練習していたアイリとの二重詠唱を行う。消費する魔力がおそろしく多いが、記憶を失わずに勝利する方法を実行すれば問題はないはずだ。

『アイリ、先に頼む！」

『ヤー！　魔神の極拳（コード・シグフェズル）！」

アイリが俺の"魔力炉（システム）"から引っ張り出した魔力で術式を発動。閃光系、闇黒系、炎熱系、氷雪系、風嵐系、雷撃系、土石系、無属性８種の魔力で組まれた巨腕が出現し、水蒸気爆発の白煙から飛び出してきたガーデンベルグに向かって岩石の腕以外が振り下ろされる。

（迎撃はしないだろ？　ガーデンベルグ・・・！」

人間では指先で触れることすらかなわない魔造兵装第２位の"ユルソーン"、そのレプリカを持つガーデンベルグ。レプリカとはいえ最高クラスの神器。魔術を使わなくとも一撃必殺の神秘と呪いを内包し、俺の魔術や真技すらも斬り裂けるだろう。

（後悔、か・・・。ユルソーンレプリカをガーデンベルグに持たせ

てしまったことが、俺が犯した罪の1つだ・・・）

魔造兵装使用にはあるリスクがある。本来の担い手である魔族以外が使用すると様々なリスクを背負うという。特に1桁台の使用は常に致命的なリスクが発生する。それゆえに俺は、人間ではなく"ヴァルキリー"であるガーデンベルグに持たせることにした。人間に比べれば軽微なリスクとなることが判明したからだ。それでも"ユルソーン"を振るうたびに魔力を消費していき、無駄な攻撃も迎撃も出来ないというリスクは発生しているが。

「ダメだ、父さん！　上級でも、今の俺にはあんま効かねえ！」

そんな俺の考え通り、ガーデンベルグは迫る巨腕を切り捨てるようなことをせずに、足場として利用して俺の居る高度まで駆け上がってきた。なら、俺もスタンバイさせている術式を発動させるだけだ。

「至高女神（コード・フリッグ）の聖極光！」

雷撃系広域対空術式フリッグ。雷撃系8割・閃光系2割の魔力で出来たいくつもの強大なオーロラを発生させる。ガーデンベルグは目を見張ったが、すでに効果範囲に侵入している。オーロラから放電されている魔力が一斉にあの子に襲い掛かる。

「くそっ！　また勝手に防性術式が発動して・・・！」

――雷装甲冑（ヴォルト）――

雷撃を受ける直前、ガーデンベルグの全身を覆った魔力膜。雷撃が魔力膜に触れると飲み込まれるかのように消滅してしまうが、そこに「アイリ！」の操る岩石の一対の巨腕による挟撃を行わせる。２つの拳をガーデンベルグは左右から受けて押し潰された。

「次だ！」

『ヤヴォール！』

勢いよく減っていくドーピング用の魔力結晶の数を把握しながら、追撃の術式を準備する。フリッグに使っている雷撃系魔力を利用して・・・・

『恐神（コード・ユッグ）の投雷をスタンバイ！』

「天鳥（コード）の・・・・」

アイリに雷の突撃槍を３８本と生成してもらい、発射待機状態のまま待ってもらう。その間に俺も大気を操作しながら、「うおおおおおおおお！」と雄叫びを上げて、巨腕を粉砕したガーデンベルグの姿を確認した。

「襲猟（ヴェズルフェルニル）！」

遥か空から地上のガーデンベルグを狙って放つのは、すべてを圧殺する下降気流という名の風圧砲撃。

『逃がさないよ！』

――女神の紅流（コード・ブローズグハッダ）――

本来は戦場に転がっている敵兵や、その遺体から零れ落ちている血液を収束させて龍状砲撃として放つ水流系術式だが、アイリは地下水を利用して発動したようだ。ガーデンベルグの周囲の地面から４頭の水龍を突き出させ、あの子の逃げ道を塞いだ。その直後にあの子に着弾した砲撃は強大な爆風へと変貌し、水龍もろとも周辺の建造物を一気に倒壊させ、その瓦礫を吹き飛ばし更地にしていく。

『マイスター、よかったの？　ここの城塞。アースガルド同盟の物でしょ？　思い出とか・・・』

『思い出は思い出でも戦争のものだからな。あまり残しておきたい思いではないよ』

――高き者にして強き者（バリエンテ・ディオス）――

「『っ！？』」

濛々と立ち上る砂塵で姿が見えないながらも、ちゃんと感じ取れていたガーデンベルグの魔力反応や神秘が忽然と消失した。"ユルソーン"の放つ禍々しい神秘も完全に消失したことを考えると、具現化を解いたということだろう。ガーデンベルグの反応消失も、フィヨルツェンをはじめとした長距離狙撃機体なら標準搭載されている隠密機能を習得していればおかしくない話だ。

（エグリゴリは常に何かしらの新しい技能を自己進化で獲得していた。ガーデンベルグも例に漏れず、ということだろうな）

――多層甲冑（ゴスペル）――

とにかく姿を視認しなければ。アイリとともに索敵を行いつつ、奇襲を警戒して魔力結晶を十分に消費しての戦闘用における最高の防性術式を発動しようとしたところで、これまた本当に突然に"ユルソーン"の神秘が至近距離に発生した。

「な・・・！？『え・・・？』

「避けろ父さん！！」

視界の端に映る"ユルソーン"の血色の剣身。それと同時に耳に届くガーデンベルグの警告。考えるより早く本能が俺の体を動かし、その場から急上昇することで回避しようと試みたんだが、鋭く奔る紅い剣閃が俺の右脹脛を深く斬り裂いた。

『マイスターー！！』

「ぐぅぅ・・・くそっ！」

ガーデンベルグの追撃を後退することで回避。多層甲冑を緊急解除し、さらにアイリが待機させてくれている雷槍で右太腿を穿ってグリグリと回して右足を引き千切る。その様子にアイリが『マイスタ

ー！』と悲鳴を上げた。

『大丈夫だ！　すぐに再生させる・・・！』

"ユルソーン"の一撃を受けて呪われた俺の右足は本体から切り離され、形を保てずに崩壊していくんだが、それよりも早くボッと勢いよく燃え始め、一瞬で消滅した。

『焼殺の呪いとでも言うか、胴体じゃなくてよかったな。胴だったら終わっていた』

『安堵は後だよマイスターー！　魔力結晶ですぐに治してあげるから！』

涙声のアイリに右足の再生を任せつつ、今にも泣きそうな表情を浮かべるガーデンベルグを見て、「馬鹿者。俺とシェフィの子が、そんな情けない顔をするな」と叱責する。

「父さん・・・ごめん・・・。俺――」

ガーデンベルグが宙を軽く蹴って後退したかと思えば、やはり姿どころか魔力・神秘や気配が一瞬で消えた。どういう理屈でそんなことが出来ているのかが判らない。

「おい、ガーデンベルグ！　聞こえているのなら、お前に今起きていることを教えてくれ！」

しかし返る言葉はなく、俺は奇襲を恐れて動き回り続けるしかない。

ガーデンベルグの姿を探しつつ「アイリ、雷槍を俺の周囲に配置してくれ」と、せっかく展開されているのなら盾として使うのが有用だと考え、指示を出す。

『ヤヴォール！』

俺が手放した1本を含めた38本の雷槍が俺の全周囲に配置され、さらに先ほど緊急中断した「多層甲冑（ゴスペル）！」を再発動して、奇襲に備える。そんな俺にアイリが『マイスター注意。魔力結晶、残り半分だよ！』と、忠告を入れてくれた。

『了か――』

「下に避けてくれ！」

姿の見えないガーデンベルグからの警告が耳に届き、直角に急降下。と同時、頭上に配置していた雷槍3本が一閃の下に斬り捨てられた。降下からさらに直角に水平へと軌道を変えて、あの子を視界に入れつつ、さらに距離を取ろうとしたのだが・・・

『また消えた！？　一体どうやってやってるの！？』

消える寸前の予兆は何となくだが見えた。ただ佇んだまま消えるのではなく、予備動作なのか宙を蹴る仕草をしているのだ。いくつかの仮定が生まれるが単純に考えれば、「目にも留まらない速さで動いている、か」となる。

『そんな簡単なこと！？　じゃあ、魔力や神秘の消失は！？』

『それは、まだ判らないが・・・。とにかく、近付けさせないようにするだけだ』

――凶蛇（コード・オヴニル）の環獄――

９発の蛇型暴風砲撃を相手に放つことなく、俺を中心に円を描くように高速で飛び回らせることで攻防一体の結界とする術式を発動。同じ軌道ではなく常に変化をつけるため、狙って隙間を突破することは出来ない。ガーデンベルグが突破する方法は、"ユルソーン"による直接斬撃か、ダメージ覚悟で突っ込むか、の２つ。

（風嵐系を得意とするアースガルド魔術師である俺の風嵐系なら、今のガーデンベルグの魔術でもそう簡単には突破されないはずだ）

結界のどこを攻撃されたかは風の流れで判るため、そこから反撃に移るのみだ。ここで雷槍の維持を破棄させる。俺の魔力どころかアイリの魔力も使っているからな。これ以上はただの負担にしかならない。

『アイリ。全力で挑む。魔力結晶の制限解除を頼む』

『体や戦闘の維持、真技の分もあるから、これ以上の消費はまずいと思う・・・』

『大丈夫。その辺りの対処法はある。もちろん、俺の記憶やアイリ

の命を使わないものだから安心してくれ』

『・・・そういうことなら。・・・ホントのホントに大丈夫？』

『信じてほしい』

『・・・ごめんなさい、マイスター。あなたを信じるのがアイリの仕事。ヤヴォール、魔力結晶の使用制限を解除する！』

ドクンと心臓が、"魔力炉（システム）"が跳ねる。膨大な魔力と神秘を元に「コード・フレイ！」を発動。本来は無属性魔力で創り出すものだが、今回だけは風嵐系の魔力で両手に創り出す。

「『来た！』」

直後、結界に穴が開いたのが風の振動で判った。ガーデンベルグの姿が見えないながらもフレイの効果によって、攻撃可能範囲内に入った対象に対して最適な斬撃を自動で行うべく体が勝手に動き出す。術者である俺の身体能力を無視しての自動攻撃であるため、俺の体が軋みを上げる。それでも、一撃だけでもガーデンベルグに与え、反撃の切っ掛けを掴み取りたい。

「父さん・・・！」

すれ違いざまでの攻撃ではなくピタッと至近距離で止まり、脇構えからの切り上げ攻撃を繰り出そうとしている姿で現れたガーデンベルグと目が合った。振り上げに入っているあの子の両腕の前腕部に、

右手の魔力剣での内から外への水平斬りを打ち込んだ。

「っ！」『っ！？』

魔力剣が呆気なく破壊された。それでもと左の魔力剣を逆手に変えて、魔力剣を持つ左手や左足が勝手に動く。足で"ユルソーン"の柄頭を踏みつけ、魔力剣による刺突でガーデンベルグの首を直接狙った。剣先が防御で覆われていない素肌に直撃するが、やはり一瞬で破壊された。

（防性術式無しで、俺の魔術を完全に防いだ・・・？　ガーデンベルグは一体なにを・・・？）

フレイの剣が破壊されたことで自動攻撃が停止し、体にドッと疲労が押し寄せてきた。俺の蹴りで振りが一旦は止まっていたあの子の腕が力ずくで動き出す。俺を跳ね飛ばし、そのまま振り上げられた"ユルソーン"の一撃を俺は避けようとしたが、一歩動き出すのが遅かったようで右膝から下を斬り飛ばされてしまった。

「ぐぅ・・・！」

『パ、パージするね！』

――リヒテンファーデン――

アイリの細い絃状のバインドが右太腿の付け根付近を縛り、そのままバツン！と断ち切った。

――影夜・斬烈閃――

闇黒系魔力を纏う斬り返しの一撃をその場で前方宙返りすることで回避し、ガーデンベルグの顔面を両足で踏み蹴り。ふごっ、と漏らすあの子を地上に向かって蹴り飛ばした、

『リヒテンファーデン』

「ジャッジメント！」

待機から攻撃実行を示す号令を下す。俺たちの周囲を飛び回る風蛇の軌道を変更させ、僅かに体勢を崩し、アイリのバインドに拘束されたガーデンベルグへと突撃させる。アイリのバインドはすぐに千切られていくが、その僅かな拘束時間が俺の攻撃が直撃するまでの時間を稼いでくれた。９発の風蛇があの子を全方位から襲撃し、迎撃も防御も回避もさせる暇もなく続々と着弾していった。

――風雅・斬烈閃――

「おっと」

球状に拡がる暴風爆発を水平に真っ二つに斬り裂き、そのままこちらに飛来する大きな真空の刃。戦闘甲冑は所々が破けているが素肌は無傷なガーデンベルグ自身も、刃を急上昇して回避した俺へ突っ込んで来た。間違いない。ガーデンベルグは素の状態でありながら俺の上級術式を完全無効化しているようだ。

『マイスター！』

『これはひょっとして・・・！』

空戦形態の高機動力をフルに活かしてガーデンベルグの追撃から逃れる。その場に1秒たりとも留まらないようにしながら、「ガーデンベルグ！　お前、神器化しているな！？」と問い質した。

『神器化！？』

――最速神駆（ヘルモーズ）――

「避けてくれ！」

水平飛行の最中で背後から聞こえた警告。どう避ければいいのかと一瞬の逡巡が招いたのは、ガーデンベルグに「右脚・・・！」を掴まれて急制動を掛けられてしまったこと。掴まれている右足首を基点に体を捻り、振り上げられていた"ユルソーン"が今まさに降り下ろされようとしているのを視認。

「くっそ・・・！」

それより早く左の踵蹴りで"ユルソーン"の腹を蹴り、斬撃を逸らさせてやる。

――マルバド・サルド――

「これは・・・・！」『は・・・・！？』

直後、俺の右脚が吹っ飛んだ。俺とガーデンベルグが触れ合っているところから馬鹿みたいに強大な神秘を流し込まれた。そんな判りやすい攻撃であったため混乱はアイリだけ。

『マイスター！』「父さん！」

『再生だアイリ！』

"ユルソーン"の攻撃よりはマシなダメージ。すぐに数少なくなってきている魔力結晶を使って右脚を再生させる。

「ガーデンベルグ！　先ほどの質問の答えは！？」

「合ってる！　今の俺は、カトラスの固有スキルによって、全身が神器化されているんだ！」

――雷霆・斬烈閃――

"ユルソーン"の剣身に付加されていた雷撃が伸長されたことで巨剣となり、俺を両断しようと振り回される。ひらりひらりと回避して剣の長さの外へと逃げるが、ガーデンベルグは追ってくるし、剣もどんどん伸びてきているため、すぐに斬撃範囲に戻されてしまう。

『神器ならともかく魔術になら通用するでしょ！』

――コード・フニクズル――

アイリ自身の魔力と神秘で創り出されたのは８本の氷の突撃槍。突撃槍は展開されると同時に雷剣に向かって射出された。１発１発では圧倒的に負けているが、８本連続で直撃したことで雷剣は霧散した。

「カトラス・・・！」

カトラス・シューープリーム・ヴァナヘイム。戦導世界ヴァナヘイムが最後の王。そして、ガーデンベルグ達を"エグリゴリ"へと変貌させた首謀者。奴の所為で"ヴァルキリー"が洗脳され、堕天使戦争が起こり、"アンスール"が壊滅し、俺が"界律の守護神テスタメント"になり、約２万年も地獄を見ることになった。カトラスは、俺の人生で最大の敵だ。

「奴のスキルか・・・」

「最初はアイツの人格データも一緒で、俺やシュヴァリエル、バンヘルドにもあったんだ。まぁ３００年くらい前に俺たち揃ってデリートしてやってけどさ。だけど、俺にだけプログラムされたスキルだけは消せなかった」

「体を神器化させるスキル。厄介にもほどがあるな・・・。あのくそ野郎、死んでもなお俺の神経を逆なでしてくる・・・！」

「どうすりゃいい？　父さん。今の俺は、父さんの魔術くらいじゃビクともしない。そして俺のユルソーンとスキルは、父さんを着実に追い詰めていく・・・！　ほら、もう抑えていられない・・・！」

――皇魔・斬烈閃――

「（属性無しの術式！）女神の救済（コード・イドゥン）！」

"ユルソーン"より伸びる魔力刃を左手で触れ、その魔力を一気に吸収する。さらに突っ込んで来たガーデンベルグの、"ユルソーン"を握る右手首を掴み取り、もう一度イドゥンを発動するのだが・・・。

「（吸収できない。神器化しているから通用しないのか・・・。いよいよもって、だな）・・・ガーデンベルグ。もう無理に体を動かして全力で来い。その方がお前の動きも読みやすいし、何よりお前の全力を受け止めたい。そのうえでキッチリ討ってやる。父と子、命を懸けた最後の模擬戦だ」

「父さん・・・！？」

セインテスト王家の、ひいてはアースガルドの至宝、神器「グングニル！」を具現化させると、アイリから『マイスター！　魔力の減りがすごいことに・・・！　魔力結晶、残り２２個！』という、焦り一色の知らせが入る。２００個ほどあった魔力結晶もたったそれだけになってしまったわけか。本当にあっという間だった。

「迷うな！　来い！　ガーデンベルグ！」

「・・・おう！」

――天空翔駆（グリンブルスティ）――

"ユルソーン"の柄を両手で握りしめ、俺の剣翼アンピエルと同デザインをした剣翼８枚を背中に展開したガーデンベルグの目には、先ほどまであった迷いは無くなっていた。俺とガーデンベルグは同時に宙を蹴り、一気に距離を詰める。だらりと下げた左手に持つ"グングニル"の柄をギュッと強く握りしめ、ガーデンベルグは"ユルソーン"を持つ右手を水平に伸ばして振りかぶり、共に攻撃範囲に入った瞬間・・・。

「「おおおおおおおおおおおおおお！！」」

俺は振り上げ、ガーデンベルグは上半身を左に捻るようにして水平に振り払った。そして激しい火花を散らして激突した。神造兵装の頂点である"グングニル"と、魔造兵装２位の　"ユルソーン"のレプリカの打ち合いは初めてだが・・・。

（グングニルでも一撃では砕けないのか・・・）

いや焦る必要はない。大丈夫、"グングニル"の真価を発揮すれば破壊できるはずだ。それに今は、"ユルソーン"よりガーデンベルグの体に未開放状態の"グングニル"でもダメージが入るかどうか

が重要だ。連続で振るわれる"ユルソーン"の斬撃を、"グングニル"を回転させて2つある穂で弾き返し続ける。

（ここだ！）

激しい火花が散る中で見えた力の入れ方が甘い袈裟斬りの一撃を見極め、"ユルソーン"を強めに弾いてガーデンベルグの右わき腹をがら空きにしてやる。柄の左右に穂がある"グングニル"は切り返しという工程が省け、他の武器に比べて手数が多くなるため、相手の切り返しより早く次の一撃を撃ち込められる。そのメリットを活かしてカウンターを狙う。

「父さん、忘れている！」

ガーデンベルグの空いている左手が俺に向かってくる。カトラスのスキルによる身体神器化で、触れた個所から神秘を流し込んで攻撃するというものらしいが、「グングニルを超える神秘になるわけがない！」と、腰を支点にして"グングニル"をぐるりと回し、あの子の左肘を狙って振るった。

「っ・・・！」

『入った！』

"グングニル"の1mという穂が、一切の抵抗を受けずにガーデンベルグの左上腕から先を斬り飛ばした。スキル如きが神造兵装1位の神秘を超えるなどあるわけがない。という希望だったが、正解で

何よりだ。

「今の攻撃で神器化が解けた・・・・！？　父さん！」

「我が手に携えしは友が誇りし至高の幻想！」

『ちょっ、マイスターー！？』

「シエル！」

――最後に派手なのやっちゃおーか！――

――真技・圧戒・歪曲空間（ルイン・トリガーシレス・ドライヴ）――

シエルの２つある真技の内の１つ、超重力を発生させて対象を押し潰す重力操作術式。ガーデンベルグは重力の蓋に潰され、超高速で地面に向かって墜落し、そして激突した。

『マイスターー！　魔力結晶、残り１個！　ううん、無くなる！　どうするの！？』

『神々の宝庫（ブレイザブリク）に貯蔵されている神器を利用する！』

人間だった頃に複製したモノは、"テスタメント"時に複製したモノとは違って記憶と同一ではない。記憶は記憶として脳に刻まれているため、当時の複製物を消費したとしても記憶は残り続ける。ただし、もう二度と神器も魔術も"エインヘリヤル"も具現化は出来

なくなる、という最大のデメリットがあるが・・・。
アースガルドに帰還後、単なる魔術師になるか、それとも魔術も扱えなくなる一般人になるか判らないが、神器王の称号だけは返上確定だな。

「『ブレイザブリクの神器1つで魔力結晶の数十、百数個分にはなるはずだ。残る神器はアンスールやヴァルキリー、アースガルド同盟軍人、ヨツンヘイム連合軍人たちのものばかり。先に連合の神器から消費していき、次に同盟軍、ヴァルキリー、最後にアンスールの神器を使う』・・・カノン！」

――はい！　全力でお見舞いします！――

――殲滅爆撃（ルフト・アングリフ）――

黄金色の魔力弾数千発を展開し、「フォイア！」の号令の下に発射。重力の蓋を解除すると同時に魔力弾はガーデンベルグの至近に続々と着弾し、黄金色の魔力爆発が地面を覆い隠す。

――高き者にして強き者（バリエンテ・ディオス）――

「おおおおおおおお！！」

魔力爆発を突っ切って来たガーデンベルグになおも射出され続けている魔力弾が着弾しても、あの子はフラつきもせずにそのまま突っ込んで来た。左腕も再生され、再び神器化しているようだ。

「フノス！」

――止めてあげましょう！　アンスール（わたしたち）の全力で！――

右手に神造兵装2位の"神剣グラム"を具現化させ、振るわれる"ユルソーン"を真っ向から迎撃する。"グングニル"と同じ水晶のような剣身を持つ"グラム"が無限の呪いを含んだ"ユルソーン"と激突し、シャァーン！と綺麗な音を響かせて弾き返した。共に神器を持つ腕が後方に弾かれ体勢が崩れるが、俺は立て直しより優先してあの子の腹に蹴っ飛ばす。

「くぅぅ・・・！」

「でやあああああ！」

即座に"グングニル"を投擲した。腰を捻って回避しようとしていたガーデンベルグの左わき腹をごっそりと抉った"グングニル"は、その真価を解放していないため、手元に戻ってくることなく地面に向かって突き進んでいく。

――奥義・熾天聖（セラフィック・セイバー）の剣閃――

フノスの真技は魔力消費どころか今の壊れかけの俺の体では負担が大きすぎて使えないため、真技に次ぐ威力を誇る奥義の1つを発動。

――女神（コード・グナー）の疾翔――

轟々と燃え盛る"グラム"の柄を両手持ちし、両腕を伸ばして"グラム"を突き出した構えで発動するのは超高速突進術式。脇腹を再生させつつ距離を取ろうとしているガーデンベルグに突撃。あの子は"ユルソーン"の腹をこちらに向け盾とする構えを取った。"グラム"の剣先が"ユルソーン"の腹と激突。

「「おおおおおおおお！！」」

脇腹の再生がまだ済んでいないガーデンベルグは宙ということもあって踏ん張り切れず、俺と共に地上へと突っ込み、そして背中から何度目かの激突となった。あの子の体の前に今なお盾として構えられている"ユルソーン"の腹を足場として俺は着地した。柄を握る右手、腹を支えている左手、その両方を封じてやった。"グラム"の具現化を解除し、次の術式を発動する。

「フォルテ！」

――ん。行こう、ルシル――

――復讐者の縛刺槍（ブリュタル・クルウ）――

フォルテシアの神器、神造兵装13位の"宵鎌レギンレイヴ"を具現化して、フォルテの攻撃性能の無い対人拘束術式を発動する。ガーデンベルグが背中を付けている地面から生えるのは細長い円錐状の影槍13本。それらが両腕両足や胴を貫き、この空間に固定した。それを視認して、俺は"レギンレイヴ"で"ユルソーン"を二度三度と斬りつける。

『マイスター！　神器およそ１０００本を消費！　大台に突入！』
『了解。このままアイリは俺の体の維持に注力してくれ』
『ヤヴォール！』
「イヴ姉様！」
――ええ！　存分に使いなさい！――
――高き者（バリエンテ・ズルード）にして強き者――
"ユルソーン"の神秘に負けた"レギンレイヴ"が砕け、ガーデンベルグを貫いて拘束していた影槍も、再び神器化されたことで一瞬にして粉砕されたが、すでにイヴィリシリア姉様の神器、神造兵装４位である"神剣ホヴズ"の具現化は済んだ。"ホヴズ"で"ユルソーン"を１回だけ斬りつけてからあの子の腹に突き刺して、もう一度地面に縫い付ける。
「ジーク！」
――判りました。我が雷霆、奮ってください――
力帯"メギンギョルズ"を腰に巻き、籠手"ヤールングレイプル"を左腕に装着し、それでようやく操れることが出来る神造兵装３位の"天槌ミョルニル"。ガーデンベルグの腹に突き立っている"ホ

ヴズ"の柄頭に狙いを定めて"ミョルニル"を振り上げる。

「いい加減に降りてくれよ父さん！」

「むっ・・・！」

ガーデンベルグは俺が足場にしていた"ユルソーン"を力ずくで振り払い、俺を宙に吹っ飛ばした。あの子はすぐに自分の腹を貫く"ホヴズ"の処理を行おうと"ユルソーン"の柄から手を離し、両手で剣身を掴んで抜こうとした。

「ミョルニル！」

抜かれるよりも早く、放電する"ミョルニル"を"ホヴズ"へと投擲する。ガーデンベルグは右手で"ユルソーン"の柄を再び手に取り、振りかぶって勢いをつけてからブーメランのように回転させて投擲。レプリカであり、なおかつ"ユルソーン"より1つ格が落ちる"ミョルニル"は、壊されはせずとも"ユルソーン"に迎撃されて大きく弾き返された。

「まだだ！」

弾き返された"ミョルニル"を掴み取り、もう一度投擲するためにガーデンベルグに視界を戻してみれば、"ホヴズ"がすぐそこにまで迫って来ていた。今から具現化を解除しても遅いと判断。"ミョルニル"を咄嗟に構えて盾とすることで、"ホヴズ"が俺を貫くという最悪なことにはならなかった。が、"ミョルニル"は砕け、"

ホヴズ"も半ばから折れた。

「っく・・・！」

――最速神駆（ヘルモーズ）――

しかし砕けた剣先の欠片や、無事な本体部分はなおも突き進んできたことで、"ホヴズ"の具現化解除を行いつつ両腕を十字に構えて顔面を護るために右腕で顔面を覆った。いくつもの破片は霧散したが、折れた剣先が折れの右腕を貫き、直後に霧散した。

「皇魔・斬烈爪！」

腕1本の貫通くらいならすぐに再生できる。そう考えていたところに高速移動で接近してきていたガーデンベルグが繰り出したのは、素手に爪状の魔力を付加しての攻撃。狙われたのは左腕で、イドゥンによる吸収も間に合わず、掴まれると同時に引き千切られてしまった。

『マイスター！　こっの！　調子に乗んなよガーデンベルグ！』

両腕の再生を瞬時に終わらせてくれたアイリに感謝の念を送りながら「ステア、セシリス！」の名を叫ぶ。

――よっしゃー！　派手に爆殺☆――

――焦熱地獄、どこまで耐えられる？――

――炎帝形態顕現（カパスィダーチ・フォルタレスィメント）――

――波炎転流陣（ボルティセ・パヴォール）――

――火装甲冑（サラマンダー）――

強大な熱エネルギーを纏って身体・術式強化という、補助術式でありながら攻防一体でもある自己強化術式と、術者の周囲へと拡がる炎の渦を発生させた。ガーデンベルグも炎の渦に呑まれたが、対炎熱魔力で全身を覆うことでダメージは入っていない。

「レーヴァテイン、シンマラ！」

セシリスの神器である神造兵装5位の"煉星剣レーヴァテイン"、同じく6位のステアの神器である"劫火顕槍シンマラ"を両手に携え・・・

――原初煉界の炎王絶技（サクラメント・ヂ・ムスッペル）――

炎や炎熱系魔力を吸収し、自身や武装を強化する補助術式を発動。敵味方の炎熱術式はもちろん、自然な炎熱、自身の炎熱すらも吸収して自己強化できる優れものだ。その術式を使って、"レーヴァテイン"と"シンマラ"に炎熱を集束させる。

「「おおおおおおおおお！！」」

"ユルソーン"を八相の構えて突っ込んで来ているガーデンベルグに、まずは"シンマラ"による突きを繰り出した。"シンマラ"はおよそ２ｍ半の長さで、"ユルソーン"の剣身は１ｍ半の長さだ。リーチで有利な俺の刺突を、あの子は"シンマラ"を叩き落とすように全力の振り下ろしで迎撃し、穂先が地面を穿ったところで柄を踏みつけた。

「光瑳・斬烈閃！」

「熱波震断刃（アセッソ・グーミ）！」

銀光纏う"ユルソーン"と、発熱して真っ赤になっている"レーヴァテイン"が激突。強烈な火花が俺とガーデンベルグの間で激しく散り、互いの体に一撃を打ち込もうと鍔迫り合いになる。互いに大剣であるため、至近距離での連撃は出来ない。力で押し負けた方が斬られる。

「アリス！」

――はい！　捕えて見せます！――

――一方通行（サンダルフォン）の聖域――

「あ・・・！」

「カーネル！」

――おう！　母なる大地の一撃、受けてみな！――

――巨人の拳打（ジガンテ・プーニョ）――

ガーデンベルグを桃色の三角錐状の結界に閉じ込め、神器化スキルで突破されるより早くカーネルの術式、岩石で構築された一対の拳で檻を挟み潰した。

「シェフィ！」

――うんっ！　行こう、ルシル！――

一足飛びで十数ｍと後退した俺は、"レーヴァテイン"と"シンマラ"を解除し、すべてが魔石（クリスタル）で出来たシェフィリスの神器、神造兵装１０位である神杖"ガンバンテイン"を具現化。急上昇して空に上がり、"ガンバンテイン"の先端にある球状の魔石に魔力を込める。

――真技！――

「氷葬大結界・真百花繚乱（プスィフロス・エヴィエニ　ロョノスィエラ・カタストロフィ）！」

魔石よりガーデンベルグの周囲八方に放たれる冷凍砲撃８発。地面に着弾すると同時にその地点に巨大な氷の尖塔が発生。尖塔からあの子が閉じ込められている結界へと氷結の魔力流が地面を凍結させながら駆け抜け、そして結界に着弾。結界を飲み込むほどの巨大な尖塔が天を衝くように生み出され、その周囲にも大小様々な尖塔が

放射状に発生し、最終的に氷の要塞と化した。

「グングニル！」

"ガンバンテイン"の具現化も解き、左手を空に伸ばした。するとどこからともなく"グングニル"が飛来し、俺の左手に収まった。

『マイスター！　連合魔術師たちの神器を全消費！　同盟魔術師の神器の消費を開始するね！』

『ああ！』

レオン達の記憶は残っているが、"エインヘリヤル"や術式、神器などが創世結界内から完全に消失したのが判る。まぁ、元より今後必要になることはないから問題ないが、同盟軍の神器の消費は少し寂しいな。

「（もうそろそろと思うが、さらにダメージを与えておくか）軍神（コード・チュール）の戦禍！」

アースガルド同盟軍に所属している全魔術師の神器、残るおよそ３８００本を空に一斉展開。待機させている中でも神器が勢いよく消失し始める。もう少しだけもってくれ、と願いながらガーデンベルグが出てくるのを待つ。

――浄火・斬烈閃――

氷の要塞の中央にそびえ立つ尖塔から火炎斬撃が四方八方に放たれ、要塞が轟音を立てて崩壊していく。場所は変わらないようだ。要塞内を力ずくで移動したり、穴を掘って地下を移動したりするかもしれないと考えていたのだが・・・。

――最速神駆（ヘルモーズ）――

「うおおお

「呪刻・斬烈閃！」

真っ向からの振り下ろしの一閃だが、再度下す「ジャッジメント！」の号令によって上位神器を射出。上位神器の集中砲火を受けたことで、"ユルソーン"の一閃は俺から大きく逸れた。それでもなおガーデンベルグは俺との距離を詰めようとしてくる。

「確かにお前の全力を見せてもらった！　では、こちらも全力で行くぞ！」

――最高神の神槍（コード・オーディン）――

今手にしているオリジナルの"グングニル"に加え、複製"グングニル"を4本と展開。投擲すれば必中するという能力を発動させて、「往け！」とオリジナル"グングニル"を投擲すると同時、俺の周囲に待機していた複製"グングニル"もガーデンベルグに向かって放たれた。

「っく・・・！」

――高き者にして強き者（バリエンテ・ディオス）――

ガーデベンルグの体を穿とうと5本の"グングニル"は空を翔け、あの子は"ユルソーン"での迎撃や回避を余儀なくされる。俺への接近も攻撃も出来ず、掠り傷もどんどん増やしていくあの子に申し訳なさを感じながら・・・

『アイリ』

『なに？』

『今日までずっと、ありがとう・・・』

『っ！！・・・うん、うんっ！』

『魔力を振り絞れぇぇぇぇぇーーーーーーーー！！』

『ヤヴォォォォーーール！！』

間髪入れずに放ち続けた神器や魔術で、ガーデンベルグも"ユルソーン"もそろそろ限界だろう。さらに複製"グングニル"を2本追加し、攻撃頻度を上げた。すべての神器を失っても構わない。このコード・オーディンで、"ユルソーン"を確実に砕く。

「まだだ！」

――真技――

「呪神・断界閃！」

"ユルソーン"の剣身から伸びる1本の長大な魔力刃が無数に枝分かれし、全方位に向けて斬撃を伸ばした。ガーデンベルグの真技はどれも"ユルソーン"頼りのもの（ユルソーンを与える前は、ちゃ

んと自前の魔力を用いた真技があったが）で、"ユルソーン"が無ければ発動できない。

「戻れ！」

オリジナルを左手に取り、複製６本を盾とするように俺の前面に配置し、"ユルソーン"から放たれた無数の刃を防御した。しかし神造兵装１位とはいえ所詮は複製品。一撃受けるたびにバキン！と砕かれる音が聞こえ、"ユルソーン"による直接斬撃で複製６本が一気に斬り捨てられた。

「グングニル！」「ユルソーン！」

膨大な魔力を消費して神造兵装としての神秘を引き出す俺に対し、ガーデンベルグは"ユルソーン"を通常形態に戻した。俺の全てを消費して本来の力を引き出されている"グングニル"と、本来の力を再封印された"ユルソーン"の打ち合う。

「さぁ、ガーデンベルグ。そろそろ終幕だ。覚悟はいいな？」

「ああ。・・・いつでもいいぜ！」

一歩も引かずに俺は"グングニル"を回転させてあの子の体に傷をつけ、あの子の振るう"ユルソーン"を終始防御に徹しさせる。

「父さん、本当に近接戦スキルが強くなったよな。昔なら最初の数手で俺が勝ってた！」

――高き者（バリエンテ・ディオス）にして強き者――

何を思ったのがガーデンベルグは"ユルソーン"を空に向かって放り投げるという手段をとった。何をするのかと思えば"グングニル"の穂先を右手で鷲掴んできた。ほんの一瞬だが抵抗を受けたことから神器化しているのだろう。すぐに神器化は解除されたようだが、その一瞬の抵抗がまずかった。

――浄火・斬烈爪――

火炎の爪を纏う左手で"グングニル"を持つ俺の左手首を鷲掴み、そして爆破してきた。手首周辺が吹っ飛んだことで"グングニル"がガーデンベルグの手に移ったんだが、あの子は振るうことなくポイッと放り捨てた。

「でえい！」

「ぐっ・・・！」

俺の腹に打ち込まれるガーデンベルグの右脚による踏み蹴り。だが、ただでは蹴り飛ばされんぞ。蹴り飛ばされる前に無事な右手であの子の右足首を掴み取り、グッとその場に留まることに成功。そして落下している「グングニル！」を呼び戻すが、手元に戻ってくるより先に、あの子の左手に"ユルソーン"が戻って来た。

「マジで殺しに行くからな、父さん！」

「上等だ！」

キャッチした"ユルソーン"を振り下ろしてきたが、俺の脳天に打ち込まれる直前に足元からすっ飛んで来た"グングニル"がそれを迎撃。左腕が真上に弾かれたことでがら空きになったガーデンベルグの左脇腹に、シエルの重力術式の1つである重力を拳に纏う「フェアリー・バイト！」を打ち込んだ。

「おぐっ！？」

「もう1発ぅ！！」

再生されたばかりの左手にも重力を纏わせ、ガーデンベルグの顔面に打ち下ろしの一撃をお見舞いしてやる。全力で振り抜いて、あの子を地上へ向けて殴り飛ばした。側に待機していた"グングニル"を左手で取り、地面に激突したあの子へと突進術式「コード・グナー！」で突撃する。

「いてて・・・」

「おらあああああああああああああああ！！」

「っと！　あぶねぇ！」

自分を埋めていた岩石などを退かし終えていたガーデンベルグは、俺の突撃から逃れるために地を蹴ってゴロゴロと転がって離脱。突

き出していた"グングニル"があの子がたった今いたところを穿ち、大きなクレーターを造り出した。

――凍波・斬烈閃――

複数の氷結の魔力刃が飛来したが、"グングニル"を高速回転させて盾とすることで防御する。ガーデンベルグはその間に俺の背後へと回り込み、「影夜・斬烈閃！」と"ユルソーン"を振るってきた。その一撃を再具現化した"グングニル"レプリカ1本を盾として防ぎ、振り向きざまに左手に持つオリジナルの"グングニル"を振り払い、"ユルソーン"に一撃を入れた。

「「『っ！』」」

ハッキリと聞こえたバキン！という破砕音。"ユルソーン"の半ば辺りにしっかりと視認できるほどのヒビが入った。俺は「目覚めよ！神槍グングニル！」と叫び、その場でくるっと一回転して遠心力を上乗せた上で投擲した。完全解放された"グングニル"は光のごとき速さで"ユルソーン"目掛けて飛び、激突した。

『ユルソーンが・・・・！』

「砕けた・・・・！？」

「～～～～～～～っ！！『アイリ！』」

『ヤヴォール！』

"ユルソーン"が破壊された。この瞬間、アースガルドにてフェンリルに封印されている俺の本体は不死と不治の呪いから解放され、同時に"テスタメント"で在り続ける契約も完了したことを告げた。鼻の奥がツンとなり、目頭が熱くなる。今すぐ泣き叫びたいほどのいろいろな感情が渦巻く。

（今は感情に流される時じゃない！　きっちりガーデンベルグを救い、旅路を終わらせる！）

手元に戻した"グングニル"の柄を力強く握り締め、「コード・オーディン！」を再発動。先に盾として利用した1本に加え、3本を具現化。ガーデンベルグへと射出した。

「ユルソーンが砕けようとも！」

――真技――

炎熱、氷雪、風嵐、雷撃、閃光、闇黒、無属性の魔力で構築された2mの大剣7本がガーデンベルグの周囲に翼のように展開され、さらに7属性の魔力を一纏めにして創られた大剣1本が右手に収まった。そして迫りくる複製"グングニル"4本に向けて、「ジャッジメント！」の号令の下に大剣7本を射出。"グングニル"レプリカの迎撃を試みるが、魔術と神器とでは神秘の差がありすぎて逆に返り討ちに遭って消滅していく。

「顕召（プロヴィデンス・セイバー）・界支七聖剣！！」

ガーデンベルグは傷つきながらも"グングニル"レプリカの猛攻の中を突破してきて、手にする大剣による直接斬撃という真技で挑んできたが、「終わりだよ、ガーデンベルグ」と俺は告げ、オリジナルの"グングニル"を一閃して大剣を砕いた。

「・・・あぁ、俺の負けかやっぱ」

"グングニル"レプリカがガーデンベルグの両上腕・両太腿を貫いて、空中に固定した。俺はそんなあの子から１０ｍほど離れてから「真技！」を発動する。

――ルシリオン様。この想いは同情ではないことだけは解っていてほしいです。恥ずかしいので聞き逃さないでくださいませね。・・・わたくしガブリエラは、貴方様のことをお慕いしております。この先ずっと、永遠に・・・――

――私も一緒に背負うよ、ルシルが背負ってる十字架を。私ひとりじゃ頼りないかもしれないし、ううん、私じゃ全然力になれない。それでも一緒に背負うよ。これからはずっと、私がルシルを独りになんてしないから――

――わたし、諦めませんから！　いつか必ず好きにさせて見せます！　しつこいって思われても、わたし、オーディンさんのことが大好きだから！――

――独りはやっぱり寂しい。・・・それにわたし、ルシリオン君と

友達になりたいんや。出来ればもっと会いたいし、お話ししたいし。そやから一緒に住めれば、その２つがいっぺんに解決できるな～なんて――

――好き、ううん、それ以上。愛してる。あなたを愛してる、愛してます。わたしの全てをあげたい、捧げたい、受け取ってほしい、貰ってほしい。わたしは運命を信じてる。その運命が告げてる。ルシル。あなたはわたしと結ばれるべきなのよ！――

――ルシル様！　私と結婚してください！――

胸の内を駆け巡るのは、彼女たちの俺へ伝える想いの言葉。次々と浮かんでは沈んでいく、みんなと過ごした思い出の数々。楽しかったこと、嬉しかったこと、辛かったこと、悲しかったこと、本当にいろいろな時間を俺にくれた。不幸か幸福かを問われれば、幸福だったと答えられるどの時間だった。

『（あぁ、もっと一緒にいたかったな・・・）アイリ。ユニゾン・アウトだ』

『っ！　ま、まだ！　最後の最後まで・・・！』

『アイリ。いつ俺が消滅するか判らない。ならせめて・・・真技を放った瞬間にユニゾン・アウトを』

『・・・うん、あ、ヤヴォール』

歯切れの悪い返事をするアイリに改めて『世話になった。ありがとう』と伝える。そしてアースガルド、ムスペルヘイム、ニヴルヘイム、アールヴヘイム、スヴァルトアールヴヘイム、ニダヴェリールという、同盟世界の魔法陣を横一列に並ぶように展開した。魔法における環状魔法陣と同じ役割であり、魔法陣を通過するときに神秘・魔力・属性を付加し、魔法陣を通過するたびに速度を跳ね上げさせて、最後は光速に至らせる。

「眠れ！　神断福音（グロリアス・エヴァンジェル）！！」

その場で反時計回りに回転して遠心力を乗せてから、最初のニダヴェリール魔法陣へ向かって"グングニル"を投擲。"グングニル"が通過した魔法陣は収縮して、"グングニル"へと吸収される。スヴァルト魔法陣を通過して吸収し、アールヴ、ニヴル、ムスペル、そしてアースガルドの魔法陣を吸収して、閃光となってガーデンベルグへと向かい・・・

「ぁぐ・・・！」

胸部を貫いて大きな穴を空けた。あの子を空中に固定していた"グングニル"レプリカを解除すると、あの子はドサッと地面に仰向けに落下した。完璧に"魔力炉（システム）"を貫いたことで勝利を確信し、すべての"グングニル"の具現化を解除した。

――ユニゾン・アウト――

アイリとのユニゾンを解除すると全身から体が抜けて倒れ込みそう

になったが、アイリが「マイスターー！」と俺を抱き止めてくれた。

「マイスターー！　記憶は！？　ちゃんとアイリ達のこと、憶えてる！？」

「大丈夫。記憶は失っていない。・・・ガーデンベルグのところにまで連れて行ってくれ」

「あ、うん！」

肩を貸してくれるだけで良かったんだが、アイリは俺をお姫様抱っこした。ガーデンベルグの元にまで連れて行ってくれるなら文句は・・・まぁない。アイリに運ばれてあの子の側まで来た俺は地面に降ろしてもらい、胡坐をかいた俺は「俺の勝ちだったな」と告げた。

「やっぱグングニルは強いや。・・・父さん。いろいろとごめん」

「謝るのは俺の方だよ。俺がしっかりセキュリティプログラムを組んでおけば、お前たちが洗脳なんか受けず、堕天使戦争など起きず、6千年以上も苦しまなかったはずだ」

「それを言ったら父さんに限っちゃ2万年だろ？　俺らなんかよりずっと苦しい時間を過ごしたんだろ。見知らぬ世界に呼び出され、死んだり殺されたりを繰り返してさ」

「お前たちを、それに俺の創世結界で眠るシエル、シェフィ、カノンの魂を解放するためなら、どんな苦も耐えられた。そして今日、この瞬間に報われた。それでいいんだよ」

「父さん・・・」

体の消滅が始まったガーデンベルグが弱々しく手を上げたことで、俺はその手を掴み取った。するとあの子は「あぁ、落ち着く。これなら機能停止も怖くない」と、安心したかのように微笑んだ。

「おやすみ。ガーデンベルグ・・・。よい夢を」

「うん・・・。おやすみ、父さん・・・。生んでくれて、ありがとう・・・。俺も、リアンシェルト達も、幸せだった・・・。父さん、母さん達に出逢えて・・・本当に・・・幸せだった・・・」

それがガーデンベルグの最期の言葉だった。あの子の体は完全に消滅し、永きに亘る"堕天使戦争"が今ここに終結した。

Ｓａｇａ３１王の帰還～Ｒｅｔｕｒｎ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

何もかもが終わった。"堕天使エグリゴリ"の最後の１機、ガーデンベルグがたった今、マイスターとアイリの目の前で消滅した。さらに言えばオリジナルのマイスターの肉体に掛けられていた不死と不治の呪いも解除する手段、"呪神剣ユルソーン"の破壊も完了した。いよいよもってマイスターとの永遠のお別れが、すぐそこにまで訪れたことを意味した。

「ま、マイスター・・・」

「・・・ユルソーンを破壊し、ガーデンベルグを救ったらすぐにでも俺も消滅すると思っていたが、割と余裕があるんだな。よかった、アイリと最後の挨拶が出来る」

そう言ってマイスターは座ったまま体の正面をアイリの方に向けて、「今日まで本当にありがとう」って頭を下げたから、アイリは「頭なんて下げなくていいよ！」ってマイスターの頬に両手を添えて顔を上げさせた。

「お礼の言葉なら素直に受け取るけど、頭を下げる真似だけは受け取れないよ。ていうか、お礼って言うなら・・・ギュっってして。あ、腕上がる・・・？」

「上がるけど、もう立てないから近寄ってくれ」

「んっ！」

マイスターの体の前に女の子座りすると、マイスターがアイリをハグしてくれた。もう体温も匂いも感じない。触れられてるのに、まるで布か何かに包まっているかのようで、人とハグしてるって感じじゃない。たとえそれでもすごく嬉しいんだけどね。

「マイスター。最後にもう1つお願い、聞いてもらっていい？」

「ハグの次のお願いとくれば・・・」

「キス！」「頭を撫でる！」

・・・。と黙ったマイスターに「いっつもアイリからだもん。最後くらい、マイスターからしてほしい」って言って、アイリはぷくぅっと頬を膨らませて見せた。ま、そんなことしたってマイスターはあーだこーだ言ってはぐらかすんだろうけど・・・。

「いいぞ」

「ふあ！？」

まさかのＯＫにさすがのアイリもビックリ仰天。マイスターがアイリの頬に両手を添えて、目を閉じながら顔を近付けてきたから、アイリもギュッと目を瞑って待ち構える。今までに経験したことのな

いほどの鼓動の高まりはマイスターに聞こえちゃんじゃないかって思えちゃうほど。

「んぁ・・・」

とても優しく唇が触れ合った。本当に軽めのキスで、マイスターの唇が離れそうになったから「まだダメ！」ってアイリはマイスターを押し倒し、こちらからキスをする。マイスターがアイリを引きはがそうとするけど、もう弱々しい力しか出せないマイスターの抵抗なんて赤ちゃんみたい。

「ぷはっ。アイリ！　舌を入れ――むぐぅ！」

（アースガルドに帰ってもアイリのことを忘れないように、アイリの愛を徹底的に刻んでおかなくちゃ）

あとで叱られるかもだけど、舌を入れてハードでディープなキスを続ける。マイスターがやめるように肩をタップしてくるけど知ったことか。んで、息継ぎのためにアイリが口を離した瞬間、「ストップ！　待て！　これ以上は！」って叫んだマイスター。アイリをトンッと押しのけると、マイスターは這って逃げようとした。

「逃がさないよ、マイスター」

「界律（テスタメント）の守護神としての時間、最後の最後でトラウマを植え付けられたくないんだが！？」

「トラウマなんて酷いよ？　あーあ。アイリも人間だったらな～。そしたらマイスターの子どもを生めたのに～」

シグナム達やアイリやアギトお姉ちゃん達は、エッチなことは出来るけど妊娠までは出来ない。人間に見えても、どうしてもその一線は越えられない生命がアイリ達だ。ほぼ永遠の若さと衰えない強さは確約されてるけど、愛する人と結ばれないのは悲劇だよね・・・。

「でもま、出来ないことはないんだし、マイスターが消えちゃうまでヤろうか？」

「待てアイリ！　それは以上は犯罪だぞ！　犯罪者である俺が言うのもなんだが、人の尊厳を傷つけるようなことはしてはいけない！　な？　頼む！」

マイスターの戦闘甲冑と同じデザインだけど色は白な騎士服を解除して、局員の青ジャケットのボタンを外して、パサッと脱ぐ。次にブラウスのボタンを外そうとしたその時・・・

「なんや面白いことしてるな？　アイリ」

「「っ！！？」」

今この場で絶対に聞こえないはずの声に、アイリとマイスターはビクッと体を震わせた。声がしたのはアイリの背後で、バッと振り返ってみればそこには騎士服に変身した「はやて！？」が腕を組んで仁王立ちしてた。口はニッと笑ってるんだけど、細められた目の奥

は全く笑ってなかった。すごくコワい。

「はやて！　助けてくれ！」

――封縛――

「アイリ？　無理やりはアカンよ？　それはもう愛やなくて悪やからな」

「はい。ごめんなさい」

はやてのバインド魔法で拘束されたアイリは直立不動のままで２人に謝った。はやては「よしっ」て頷いたけどバインドは解除せず、アイリをスルーしてマイスターの頭の方に回った。そしてぺたりと女の子座りをすると、「ルシル君。お疲れさまでした」って笑顔を浮かべて、マイスターの両脇に手を挟んで体を軽々と持ち上げた。

「うわっ、軽い！？　あ、おかげでこう・・・」

はやてはマイスターを仰向けに寝かし直して、自分の太ももの上に頭を乗せた。それは膝枕ってやつで、はやてはマイスターの頭を優しく撫で始めた。マイスターは何も言わずに受け入れて、体から力を抜いた。

「なぁ、はやて。君はどうしてここに・・・？」

「今さらやね～。・・・マリアさんがちょこちょこっとな」

ふっと遠い方を見たはやての視線につられてそっちを見てみるけど、誰もいない。けど、そっちの方からマリアと一緒に来たってことは判る。マリアも今は姿を消して、アイリ達のことを見守ってくれてるんだろうね。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒はやて†††

・―・―・回想やね・―・―・

「終わったようですね」

魔法技術とはまた違う能力か何かによって展開されてる空間モニターのようなものに映る、ルシル君とガーデンベルグの決戦が決着したのを見て、マリアさんがそう言った。それと同時にノイズが最後の最後まで収まらなかったモニターが消えた。

マリアさんが言うには、ルシル君の"グングニル"とガーデンベルグの"ユルソーン"ってゆう、神器の中でも最高位がぶつかることで、時空振動（私たちの世界で言う次元震やな）が発生しやすいそうや。実際に映像は終始ノイズが走って観辛かったし、音声も届いてへんかった。

「ルシル君と・・・もう一度挨拶しておきたかったな・・・」

私がポツリと漏らすと、みんなも声にはせえへんけど小さく頷いて同じ気持ちであることを示した。今こうしてる間にもルシル君はアースガルドへ帰ろうとしてる。アイリが一緒やから、１人でもお見

送りが居るのは幸いやけど・・・。

「1人くらいであれば、私の干渉能力でヴィーグリーズに連れていけますが？　アイリさんを迎えに行かなければならないので、どなたかご一緒しますか？」

ハッとして顔を上げてマリアさんを見る。でもすぐに私はシャルちゃんやトリシュの方に向いた。シャルちゃん達だってルシル君と逢えるなら逢いたいって思うはず。シャルちゃんもそう思い至ったみたいで、私と視線がぶつかった。そやけどトリシュは目を伏せて、小さく俯いたままや。

「私はルシルさんへの想いを完全に絶ち切ったので結構です。イリスかはやてか、もしくは他の方で構いません」

強がりでもなんでもなくトリシュは本気でそう言うてることが、まぶたを開けて見せた瞳の強さから判った。こればかりは私やシャルちゃんの問題やないから、なのはちゃん達とも相談する必要がある。とゆうわけで話し合おうとしら、しっかりとお別れの挨拶は済ませたからとゆうことで、なのはちゃん達も辞退。

「僕も大丈夫。父さんとのお別れは、母さんかシャルさんのどちらかでいいよ」

フォルセティも辞退したことで、改めて私かシャルちゃんのどちらかになったんやけど、「わたしもいいや。はやて、ルシルを見送って来て」ってシャルちゃんは小さくお手上げポーズ。あまりに呆気

なさ過ぎな引き際に、私だけやなくて他のみんなも「え？」ってなる。

「シャルちゃん？　なんか遠慮してる・・・？」

「ううん。ただ、わたしよりはやての方が、ルシルにとっても嬉しいんじゃないかな？って思っただけ。・・・シャルロッテ様含めてルシルと過ごした時間は長大で、だからこそルシルのことも解ってくるんだ。わたしじゃないって。だからはやてに託す」

シャルちゃんが私の両肩に手を置いて、「行っておいで」って微笑んでくれた。目頭が熱くなったけど涙を堪えて「おおきにな。いってきます」って微笑み返した。

・―・―・終わりや・―・―・

「そうか。シャルが・・・」

「まぁ確かに、アイリ達の中じゃシャル、というかシャルロッテが最もマイスターと同じ時間を過ごしたんだもんね。それ含めて、はやてに譲ったって感じなのかな？」

「あのな、ルシル君。・・・私で良かった？　私で嬉しかった？」

シャルちゃんは、ルシル君は私を待ってる、みたいなことを言うてくれた。そやけどそれは、あくまでシャルちゃんの考えでもあるわけや。実際にルシル君がどう思うてくれたんか気になったから、ど

んな答えが返って来てもええようにグッと覚悟する。

「嬉しかったよ、もちろん。・・・もう一度、はやてに逢いたかったと思っていた」

「ホンマ？」

「本当だとも。・・・はやて。君のことが好きだと言ったら困るだろうか？」

私の太ももに頭を乗せてるルシル君が、少し不安そうな瞳で私を見上げながらそう聞いてきた。私は小さく嘆息してから「あのなぁ、ルシル君」とおでこをペチンと優しく叩いた。

「子どもの頃から私はルシル君に好き好きオーラ出してたんよ？しかもこっちからキスだって何度もした。さらに言えばついさっきも愛の告白にキスもやった。これでルシル君から好きだって言われて、私が迷惑すると思うか？　ん？」

「お、思わないと思います、すいません」

「よろしい。・・・えっと、つまりルシル君は、シャルちゃんやトリシュよりも私のことが好きやってことでええんやな？」

「ああ。好きだ。帰りたくないと本気で思えてしまうほどに、この世界ではやて達と一緒に過ごす時間が愛おしく、はやて自身にも恋をしている」

「〜〜〜〜〜っ！」

顔どころか全身がカッと熱くなった。子どもの頃から待ち望んでたルシル君からの告白を聞けて、ホンマに嬉しくて涙が溢れてくる。そやけど、「ごめんな。やっぱりもっと早くに聞きたかった」って考えてしまう。

「返す言葉もないよ。消える直前、最後の最後まで覚悟を決められなかった俺の問題だ」

存在感がホンマに薄かったルシル君やったけど、そこまで言うたところでグッと存在感が濃くなって、ピリピリと魔力が強くなった。それでアイリが「マイスター！　何を犠牲にしたの！？」って問い質した。犠牲ってゆう言葉に私は「ルシル君・・・！？」を見つめた。

「大したことじゃない。堕天使（エグリゴリ）にならなかった戦天使（ヴァルキリー）の神器を消費しただけだ。アースガルドに帰ればオリジナルの神器があるし、大丈夫だよ」

そう言ってルシル君は自力で起き上がって、私の前で立ち上がった。そんで私に右手を差し出したから、その手を取って私も引っ張られるようにして立ち上がった。手を取り合ったまま見つめ合ってると、ルシル君の方から抱きしめてくれたから、私も抱きしめ返す。

「はやて。君はまだ若い。今後、新しい恋を――」

「せえへん・・・って、前言わへんかったっけ？　私はこれまでもこれからもルシル君だけを想い続ける。それは決して曲げへん私の心や」

「そうか・・・。なら、遠慮なく。我が手に携えしは確かなる幻想」

複製したものを発動・具現化する際の呪文を詠唱して、左手に具現化させた「指輪・・・？」を見せてくれた。ルシル君は「神器でも魔道具でもない簡素なものですまないが、婚約指輪ということで貰ってくれ」って差し出した。

「婚約指輪・・・！　ちょっ、ちょう待って！」

防護服を解除して局の青制服に戻ると、首から提げた紐に通した指輪を取り出す。紐の端と端を繋いでる留め具を切り離して、指輪を外す。

「それは・・・」

「うん。子どもの頃、ルシル君が縁日で買うてくれた指輪や。男の人からの指輪だけやったら婚約やけど、２人同時なら結婚指輪やって思うんよ。まぁルシル君からのもらい物やからカッコつかへんけどな」

「はやて・・・。いいや、嬉しいよ」

「マリアさん。神父さん役をお願い出来ますか？」

このヴィーグリーズに来てからは私たちに遠慮してるのか姿を消してるマリアさんを呼ぶと、一切の予兆も無しに桃色の神父服を身に纏うマリアさんが現れて、「構いませんよ。ただ、こういう経験はなく、言葉は適当になりますけど」って受け入れてくれた。

「ありがとうございます、マリアさん」

「あのー、はやて？　アイリもそろそろバインドから解放してほしいな～って思うわけで・・・」

「あ、ごめん。忘れてた」

「ひどい」

アイリを拘束してるバインドを解除。自由になったアイリは「ま、マイスターの相手がはやてならいいか」って納得してくれた。シャルちゃんやトリシュはどうなんやろうか。聞きたいような聞きたくないような・・・。

「ルシル君。私とけっ――」

「待ってくれ、はやて。俺から言わせてほしい。・・・俺と結婚してください」

「はいっ！」

ルシル君はもういつ消えてもおかしない状態や。本当は雰囲気とかいろいろ気にしたいけど、今はただ、ルシル君と正式やないけど結婚したってゆう事実が欲しい。ルシル君も同じことを考えてくれてるようで、私が差し出した指輪を受け取って、私と向かい合ってくれた。

「あとは・・・。はやて、少し目を瞑ってくれ」

ルシル君は空いてる右手を私の上に持ってきた。なんやろ？って思いながらも目を閉じると、ふぁさっと頭に何かを被せられた。ルシル君から「もういいよ」って言われて、目を開けてみると・・・。

「コレ、ひょっとしてウェディングベール・・・？」

「ああ。ブレイザブリクから引っ張ってきた。コレも指輪と同じでただのベールだから安心してくれ」

「おお！　これは嬉しいな～！」

とても綺麗で、普通に高級そうな出来のベールを被ることが出来てテンションが上がった。そんな私の様子にルシル君は「ドレスも用意できればよかったんだが、強制変身術式を喪失してしまってな」ってガックリ肩を落とした。確かディゾルディネ・カンビャメントってゆうやつやったか。指をパチンと鳴らして、対象の服装を一瞬で変える・・・。そうか、あの魔術はもう使えへんのやな。

「ううん。ベールだけでも十分や。おおきにな」

お互いに照れ笑いを浮かべてると、マリアさんが「では、そろそろ始めますね」と言うて咳払い。私とルシル君は頷いて、改めて向かい合った。

「汝ルシリオンは、この女はやてを妻とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

「誓います」

「汝はやては、この男ルシリオンを夫とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

「誓います」

「それでは指輪の交換を」

まずはルシル君からやね。私が差し出した左手の薬指に、さっき私が渡した指輪をはめてくれた。次は私。ルシル君の左手の薬指に、ルシル君から渡された指輪をはめた。その直後、ルシル君がガクッと膝を折って崩れ落ちそうになった。

「ルシル君！？」「マイスター！」

「ルシリオン様！」

一番近かった私がルシル君を抱き止めて、続いて駆け寄って来てくれたアイリがルシル君の両肩に手を添えて体を支えた。軽い。それに顔色もひどく悪いし、存在感が薄らいだ。

「大丈夫、大丈夫だ。ありがとう、はやて、アイリ。手を離してもらっても問題ない」

ルシル君の微笑みと言葉を信じて私とアイリは手を離した。その瞬間はよろっとフラついたルシル君やったけど、ちゃんと1人で立つことが出来た。浅い呼吸を繰り返してたけど、深呼吸を1回したところで血色や存在感も戻った。また何かしらの神器を消費したようや。

「もう限界ですね。急ぎましょう。・・・それでは誓いの口づけを。新郎、新婦のベールをめくってください」

私の顔を覆い隠すベールがルシル君の手によって上げられる。そんで顔を近付けて、唇が触れ合うかどうかとゆうところで、ルシル君が「今日までありがとう。愛しているよ、はやて」と言うてから、私も愛してるって答える前に唇が触れ合って、誓いのキスをした。胸の内に溢れる幸せ。唇が離れるのが名残惜しいな～って考えてると・・・。

「マイスターー！」

アイリの悲鳴が聞こえて、ハッと目を開けてみれば・・・

「ルシル君・・・？　ルシル君！」

もうどこにもルシル君の姿は無くて、ルシル君がさっきまで立ってたところには私が貸した指輪と、"エヴェストルム"の待機形態の指輪、その２つが地面にポツンと転がってた。全身から力が抜けてその場にへたり込んだ私は、その２つの指輪を震える手で拾い上げて、止め処なく溢れ出てくる涙も構わずに「ルシル君・・・」の名前を呼び続けながら胸に抱いた。

・―・―・―・―・―・

全てが白に染まる広さも何も判らない空間。その空間に在るのは、直径が５ｍ近い淡く碧く輝いている光球。そして、その光球を囲むようにして存在している１１脚の玉座。玉座１つ１つで色が違い、半透明、白銀、黄金、純白、漆黒、桃花、翡翠、真紅、橙黄、蒼穹、銀灰の１１色。

背もたれの上にそびえ立っている十字架の形も様々で、聖アンデレ、マルタ、ロレーヌ、葡萄、ケルト、ラテン、聖ペトロ、カンタベリー、ギリシャ、アンセイタ、ロシアとある。

その玉座に座っている１１の人影も、玉座に対応した色の外套を羽織っている。

ここは"神意の玉座"、またの名を"遥かに貴き至高の座"と呼ばれる最高位次元。あらゆる世界の意思、"界律"が交差する、全て

が在って、全てを識る究極の根源。
その玉座の１つ、桃花の玉座に座する者、名を５ｔｈテスタメント・マリア。彼女は飛び起きるかのようにバッと玉座より立ち上がり、漆黒の玉座に向かって歩き出した。

「ルシリオン様！」

漆黒の玉座に座するは４ｔｈテスタメント・ルシリオン。今にも玉座から滑り落ちそうなほど力のない座り方をしている彼に、マリアは「しっかりしてください！」と言い、両脇に腕を差し込んで座り直させた。

「マリア・・・か。・・・あ・・・そうだ、はやてとアイリは・・・？」

「ご安心を。私が責任を持ってミッドチルダへお連れしました」

「そうか。少し待ってくれ、頭がぼうっとしている」

「大丈夫ですか？」

「強制的に眠りに着かされそうというか・・・。あぁ、治りそうにないな。が、これで最後だ。きっちり終わらせないとな」

ルシリオンとマリアの視線が神意の玉座の中央に浮かぶ光球へと向けられ、２人は近付いていく。そしておよそ１ｍまで接近したところで、光球より一際強い発光が１回。

「玉座の界律よ。私が界律（テスタメント）の守護神となった経緯である堕天使（エグリゴリ）との戦争は終わりを告げた。これにより貴殿との契約は完遂となった」

ルシリオンの魔術師としての実力を欲した神意の玉座の"界律"は、彼の身が受けた不死と不治の呪いが解除されるまでの間、"テスタメント"として活動するよう契約を提案し、彼も"堕天使戦争"を終わらせるためには人の身では不可能と判断して、その契約を受け入れた。それが新４ｔｈテスタメントの誕生であった。

「同時に、マリアの契約も完遂された。彼女がテスタメントとして活動する期間は、私がテスタメントから解放されるまで。相違はないはずだ」

――確かに。４ｔｈテスタメント、５ｔｈテスタメント、貴方たちとの契約は見事果たされました。長きに亘ってご苦労様でした。貴方たちは死後の魂ではなく、存命中に精神との契約でしたね。では、貴方たちは元の世界へとおかえりなさい――

"界律"からの契約完了を認めてくれた言葉にルシリオンとマリアは安堵して、険しかった表情を和らげた。しかし、その表情はすぐに凍り付くことになる。

――界律（テスタメント）の守護神として活動していた間の記憶を消去し、得た知識や情報などを削除します。そして改めて、神意の玉座やテスタメントの事など知らぬ只の人として、残りの人生を完遂しなさい――

「・・・。は？　ま、待ってくれ！　記憶を消す！？　何故だ！何か不都合でもあるのか！？」

真っ先に声を荒げたのはルシリオン。当然だ。八神はやて達と共に過ごしてきた時間を、記憶を守るため、"テスタメント"期間中に得た数ある記憶を、人間時に獲得した神器などを犠牲にしながらも戦い、そして勝利した。その努力のすべてが無駄になるという。

――無論です。神意の玉座は神域、テスタメントは万能の奇跡。霊（ユースティティア）長の審判者は悪神。それを人の身で知り得ているのは禁忌なのです。人の身でありながら５ｔｈテスタメントへと精神を昇華させたマリアという一例や、さらには過去にもテスタメントとユースティティアの戦いを知り、忌々しいユースティティアと成った人間もいます。テスタメントや玉座を知らなければ、成り得なかったものを――

「わ、私の・・・所為でもあるのですか・・・？」

まさしくマリアの行った、人間の精神神格化も記憶抹消が成される原因でもあり、彼女はショックを受けてその場に崩れ落ち、「ごめんなさい、ルシリオン様」と絞り出すかのように謝罪の言葉を口にした。

「それは違うぞ、マリア」

「ですが・・・！」

「界律よ。私もマリアも人生を賭けた願いを無事に果たした。故に

玉座やテスタメントのことを憶えていようとも、自らテスタメントやユースティティアになろうとは今後一切考えることなどない。それでもダメなのだろうか？」

――ええ。駄目です。貴方たちの記憶抹消は確定事項です。諦めてください――

残酷な結末に、冷静を装っていたルシリオンもとうとう「ふざけるな・・・ふざけるな！」と声を荒げ、思いの丈をぶつけた。

「私がどれだけ苦心に苦心を重ねたか！　貴殿なら見て知っているだろう！　私のささやかな幸せを奪うというのか！」

――テスタメントで得た思いも記憶も、人に戻れば淡くは叶い夢物語に過ぎません。二度と逢えない者たちの記憶を持ち、再会するための術を探さないと断言できますか？　探し当てた術が界律に反するものだったとして、愛した者たちとの再会を諦めて用いないと断言できますか？――

「それは・・・」

ルシリオンは即答できずに言い淀んでしまった。はやて達との思い出さえあれば大丈夫だと言ってはいても、再会できる術を全く探さないと確約は出来ず、見つけても試さないと断言も出来ない。その僅かな迷いが決定打となり、"界律"は決を下した。

――ルシリオン・セインテスト・アースガルド、マリア・フリスト

ス・ヨハネ・ステファノス。貴方たちとの契約は今ここに完遂されたことを認め、これより貴方たちの精神を本来の肉体に戻します。ご苦労様でした――

「待ってくれ！」「待ってください！」

「「せめて、いつの時代に戻るこ――」」

ルシリオンとマリアの言葉は最後まで発せられることはなく、２人の精神体は神意の玉座から消失した。その一連の様子を見守っていた他の"テスタメント"の何柱かは「寂しくなるな」と、２人の居なくなった玉座を見て漏らした。が、その僅か数秒後には最強の漆黒の玉座、最弱の桃花の玉座に新たな"テスタメント"が出現した。こうしてルシリオンとマリアの、２万年近い"テスタメント"時代に幕が下りた。

Ｓａｇａ３２彼の今～Ｓｉｄｅ　Ａｓｇａｒｄ～

魔道世界、またを原初世界アースガルド。６千年以上も前に起こった時空間の流れを大きく破壊した大災害、対時空間殲滅級攻性魔術"ラグナロク"の影響によって分断されたことで生まれた、上位次元世界の中心に位置する世界。

"アースガルド"は地表唯一の陸地、"聖域イザヴェル"以外がすべて海となっている世界だ。"イザヴェル"よりそびえ立つは、全高２万ｍという超が幾つも付く高層建築物、"支柱塔ユグドラシル"。その塔の半ば辺りには２つの大陸、およそ２０００の島が浮遊している。

元々は４つの大陸で、"神聖なるものセインテスト王家"の治める"グラズヘイム"。"清廉なるものレアーナ王家"の治める"ヴィーズブラーイン"。"教誨なるものグローリス王家"の治める"アンドラング"。"絶対なるものクルセイド王家"の治める"ギムレー"からなっていたが、"ラグナロク"によって"ヴィーズブラーイン"と"アンドラング"は大海に沈んだ。

しかし千年の時を経て上位次元世界に神秘が戻ったことで、落ちた２つの大陸は大小さまざまな島となって再浮遊していた。

"ラグナロク"の影響を受けながらも沈まなかった"グラズヘイム"大陸。大陸と同じ名を冠するグラズヘイム城は、セインテスト王家の居城だ。６千年以上経過しようとも豪華絢爛の外観や内装は変わらず、その威容を見せつけていた。

「本当にルシリオン様は近い内に帰って来られるのか？」

「ヨルムンガンド、しつこい」

グラズヘイム城の長い廊下を早足で進む集団が向うのは、ルシリオンの肉体が封印されている玉座の間。白い髪、白い肌、灰色の瞳、白のタキシード姿の４０代ほどの男ヨルムンガンドが、先頭を歩く黒い女性に問う。

「おそらくとしか言えないけど、確かに私は見たの」

「ルシリオン（グローイ）がガーデンベルグを討ったという映像か？」

先頭を往くはフェンリル。ルシリオンの使い魔にして、彼の肉体を封印した神獣である。くるぶしまで伸びる黒髪、蒼い瞳、黒いホルターネックのプリンセスラインのロングドレス姿で、頭から生えた耳をピコピコ動かしながら「信じていいと思うよ、フレースヴェルグ」と答えた。

「マリアという少女の言葉と、その彼女から貰った例のモノ、そしてヨルムンガンドがアールヴヘイムで逢ったというグローイ。それらを考えれば真実と考えるべきだろうが、そんな奇跡のようなものが本当にあると？」

フェンリルにフレースヴェルグと呼ばれた２０代後半ほどの女性。赤茶色の髪はシニヨンにし、金色の瞳は視力が良すぎることで常に閉じられたまぶたに隠れている。服装は白いマーメイドラインドレ

ス。彼女の白い肩にはヴェズルフェルニルという名の鷹が1羽留まっている。
フェンリル、ヨルムンガンド、フレースヴェルグ、この場には居ないラタトスクは、アースガルドの守護神獣である。大戦が始まるずっと昔から今日までアースガルドを見守り、最後の王族であるルシリオン・セインテスト・アースガルドの復活を待ち続けていた。
「実際に界律は在られるし、我ら神獣の存在がすでに奇跡のようなものだがな」
「しかし神意の玉座やテスタメントというものなどは知らんぞ？」
「私たちにすら隠されるべき情報だったのかも。とにかくその玉座にマスターの精神やマリアっていう子がいて、向こうの時間で2万年近くテスタメントをしていて、こっちでは今時代まで下位次元世界のミッドガルド――じゃなかった、ミッドチルダで活動していたみたいってこと」
フェンリルが豊満な胸の間からピンポン玉サイズの球体を取り出した。愛おしそうに両手で掬うように持ち、「信じようよ。マスターは絶対に帰ってくるって・・・」と祈るように言った。
「待つ他なし、か」
「何年でも待とうではないか。我らに寿命はないのだから、幾年でも待ち続けることが出来る」

フレースヴェルグがフッと儚げに笑うと、フェンリルも「だね」と頷き、ヨルムンガンドも「ああ」と同意した。そんな3人は改めて玉座の間へと歩みを進め、入り口の両開き扉の前に立った。そして室内へ向けて開こうとフェンリルが扉に触れた瞬間・・・

「「「っ！？」」」

扉越しからでも伝わる強大な魔力反応に呆けるフェンリルに代わって、フレースヴェルグとヨルムンガンドが蹴破る勢いで扉を開けた。半径４０ｍの円形ホールである玉座の間。出入口の扉の反対側の奥、本来は玉座が置かれている三段の檀上に、時間凍結封印されたルシリオンの肉体が収められている結晶体が安置されている。

「この魔力・・・！　マスターの！」

「ほ、本当にルシリオン様がお戻りになるのか！」

「間違いない！　見よ！　ガーデンベルグのユルソーンによって開けられた腹の穴が再生してゆくぞ！」

時間凍結封印とは名の通り結晶内の対象の時間を、封印時から1秒たりとも進ませないというもの。ルシリオンの場合は、ガーデベンルグの神器・"呪神剣ユルソーン"に貫かれて不死と不治の呪いを掛けられた後、瀕死のままに上級術式でガーデンベルグら"堕天使エグリゴリ"を撤退させ、フェンリルにここグラズヘイム城まで回収されてからだ。
本来の効果であれば封印を解除してから再生が始まるものだが、神

意の玉座からの干渉ということで、解除されずともルシリオンの受けた損傷が逆再生されているかのように回復していく。

「タイミングを間違えるなよ、フェンリル」

「わ、判ってる！　傷が完全に修復されてから封印を解く！」

「そろそろではないか？」

「体表面だけが治ったように見えて内臓がまだだったりしたらまずいし、もうちょっと様子を見よう」

そうしてじっくりとルシリオンの体の修復を見届けたフェンリル達は、そろそろいいだろうと判断して封印解除に移る。封印解除は術者であるフェンリルが行い、万が一に備えてバイタルの安定を担うフレースヴェルグ、ルシリオンの体を支えるヨルムンガンドの２人が結晶体の側に着いた。

「いくよ！」

「「うむ！」」

フェンリルの周囲に魔力で出来た小さなルーン文字が何十個と出現し、風に舞う花弁のように彼女の周囲を浮遊する。檀上の台座に置かれている結晶体を取り囲むようにルーンで描かれた陣が四方に出現。

「封印解放（リリース）」

その一言で結晶体が砂の城のようにサラサラと崩れ始め、ルシリオンの体がフラリと倒れそうになったのをヨルムンガンドが抱き止め、フレースヴェルグがすぐに脈や呼吸を計り、問題ないことを知らせるためにフェンリルとヨルムンガンドに笑顔を向けた。彼女の笑顔に2人も安堵の笑みを浮かべ、眠っているかのようなルシリオンの顔を見た。

「顔色も悪くないし・・・」

「ルーンで体内を精査した結果、体内の臓器や神経、筋肉なども完璧に修復されているのを確認した。じきに目を覚ますだろう」

「そうか。・・・ルシリオン様がようやく原初世界（アースガルド）に戻られたのだな」

「うん。・・・さ、ほら。私がマスターを寝室に運ぶから退いてよヨルムンガンド」

「否。我が運ぶ」

「あなたとは違って私はマスターの正式な使い魔なの！　従者が主を運ぶのにおかしなことってある！？」

「・・・ない」

「でしょー？　ほらほら、どいて、どいて」

心底残念そうに譲るヨルムンガンドとは対照的にフェンリルは幸せ一色の笑顔満面で、ルシリオンの体を横抱きで抱え上げ、彼が使用していた寝室へと歩き出そうとしたとき、それは起きた。

「・・・ん・・・ぅ・・・ぁ・・・」

ルシリオンが声を漏らし、身じろぎをしたのだ。ハッとしたフェンリルとヨルムンガンドとフレースヴェルグはルシリオンの顔を覗き込み、それぞれ彼を声を掛けていく。

「・・・フェンリル・・・ヨルムンガンド・・・フレースヴェルグ・・・？」

「マスター！」「ルシリオン様！」「グローイ！」

まぶたがゆっくりと開き、初めは合わなかった焦点が徐々に合っていってフェンリル達を認めると、ルシリオンが彼女たちの名前を呼んだ。６千年など彼女たちにとってはうたた寝のような時間だが、それでも久しぶりに名前を呼ばれた彼女たちは感極まって涙を流した。

「私はいったい・・・？　確か・・・私とシエルとシェフィとカノンの４人で、ガーデンベルグ達とヴィーグリーズで・・・」

"ユルソーン"で貫かれ瀕死になったことで記憶の混濁が起きてい

るらしいルシリオンを、フェンリルは混乱による暴走を懸念して床に降ろす。胡坐をかいたルシリオンの頭の中の霞が徐々に晴れていき、そして自分に起きたことを完全に思い出した彼は目を見開き、顔を青褪めさせた。

「あ・・・あああ・・・・あああああああああああああああああああああああ！！」

「マスター！」

シェフィリス、シエル、カノンの死を思い出したことでルシリオンが絶叫した。フェンリル達はもちろん知らないが、彼にはもう"界律の守護神テスタメント"時代の記憶が無い。ゆえに自身がガーデンベルグに負けて、上級術式で苦し紛れの反撃をしたところで記憶と意識が途切れており、再開はたった今。錯乱するのもおかしくはなかった。

「マスター！　お願い！　落ち着いて！」

「守れなかった！　救えなかった！　あまつさえ自分自身さえも！　シエル達は私の目の前で殺され、ガーデンベルグ達の行方も判らない！」

「ルシリオン様！　どうか冷静に！」

「グローイ！　貴方はすでにガーデベンルグ、リアンシェルト、グランフェリア、バンヘルド、レーゼフェア、フィヨルツェン、シュ

ヴァリエルのエグリゴリ残党を破壊したぞ！」

フレースヴェルグはフェンリルから聞いていた"堕天使戦争"の結末を簡潔に伝えたのだが、ルシリオンは「何を馬鹿なことを！」と一蹴した。ヨルムンガンドも「信じられぬかもしれませんが事実なのです！」と伝えた。

「そんなわけがないだろう！　ガーデンベルグのユルソーンで、私は腹を貫かれたのだ！　そんな体でどうやってあの子たちを！・・・あの子たちを・・・ん？」

ルシリオンは自身の腹をペタペタと触り、さらには戦闘甲冑と同じデザインのアースガルド軍服の前を勢いよく開け、素肌をしっかりと確認した。これまでの人生の中で追ってきた古傷は多数あるものの"ユルソーン"によって付けられたはずの刺し傷は無かった。

「治って・・・？　いや、え？」

混乱は続いているが覚醒直後よりは冷静さを取り戻したルシリオンは、「ユルソーンを破壊した覚えはないぞ」と、フェンリル達を見た。その言葉を聞いてフェンリルは疑問符を浮かべ、「ねえ、マスター。ひょっとして、テスタメントだったことを忘れてたりする・・・？」と問う。

「テスタメント？　遺言や契約という意味の言葉だが・・・。それが私と何の関係があるというのだ？」

その返答でフェンリル達は顔を見合わせ、約2万年の"テスタメント"時代の記憶を失っているのだと判断。フェンリルは、マリアという"テスタメント"から聞いていた、奴隷のような時間のことを話していいのか迷いはしたが、せめて堕天使戦争決戦が行われた世界のことを伝えようと考えた。

「マスター。八神はやてという女の子について、何か憶えてる？」

「ヤガミハヤテ？　どこの世界人の名だ？　これまで生きてきた中で、そのような変わった名前の女性と知り合いになった覚えはないぞ」

「そう・・・。聞いて、マスター」

フェンリルは"ユルソーン"で貫かれた後、"テスタメント"となったこと、"堕天使戦争"決戦が行われた世界にて、八神はやてを始めとした女性たちと過ごした時間を、懇切丁寧にルシリオンに伝えた。しかしルシリオンは聞かされた話を「あり得ない」と一蹴した。

「神意の玉座？　テスタメント？　2万年、6千年？　私がシェフィ以外の女性を好きになる？　フェンリルよ。それはおかしい。お前たちが私の代わりにガーデンベルグ達を救ってくれたのだろう？　そんな変な作り話なんて考えなくていい」

そう言ってルシリオンは、自分の顔を覗き込んでいたフェンリルの頭を優しく撫でてから、「しまった！」と勢いよく立ち上がって、

玉座の間の出入り口に向かって駆け出した。その行動にフェンリル達は呆けたがすぐに「どこへ！？」と行き先を尋ねた。

「決まっている！　堕天使戦争が終結したのなら、私の創世結界に囚われているシエル、シェフィ、カノンの遺体と魂を解放しなければ！」

ヴィーグリーズでの戦いでリアンシェルトに殺害されたシエル、ガーデンベルグに殺害されたシェフィリス、シュヴァリエルに殺害されたカノン、３人の肉体と魂は、ルシリオンと"エグリゴリ"の戦闘に巻き込まれないようにという配慮の下、彼の創世結界に封印されていた。

「ということは、行き先は霊廟か。あ、マスター。霊廟なんだけど、この数千年でちょっと変わって――」

「まだ言っているのか。どれだけ時間が掛かっても数年程度だろう？」

フェンリルの話を聞こうともせずにルシリオンはグラズヘイム城のメインエントランスホールを目指して一気に駆け抜けた。その間、城内で誰ひとりとして会わないことを怪訝に思ったルシリオンは、後ろを付いて来るフェンリル達に「他の民はどうした？」と尋ねた。

「ラグナロクの影響でアースガルド民の犠牲者はおよそ５００万人にも達した。だが全滅したわけではない。俺とシエルとシェフィとカノンがヴィーグリーズに出撃した時、２８０万もの民が居た。グラズヘイム城にも避難民がたくさん過ごしていたはずだ。そんな彼

らはどこに居る？」

「グローイ。先ほども言ったが、貴方が封印されてから６千――正確には、６千と８百と２４の年月が経過している。無論その間にアースガルドは復興を遂げたのだ。城外に出て、今のアースガルドを見るといい」

「・・・」

フレースヴェルグにそう言われたルシリオンはゴクッと唾を飲み、巨大な両開き扉を外に向かって押し開いた。

セインテスト王領グラズヘイム大陸。その南部に王都グラズヘイムはある。３１，２００㎢という広大なドローースヴァーガル湖内の島にグラズヘイム城と、王都である城下町が建てられており、湖を囲うように湖岸都市がある。

"ラグナロク"直後からルシリオン封印までの１０年の間、他大陸墜落時に起きた地震などによって城下町も湖岸都市も被害はあったが、復興は順調に進んでいたため万全とは言えないが綺麗なものだった。その当時の景色を思い浮かべながらルシリオンは庭へと出た。

「あー！　ルシリオン様だー！」

「おはよーございまーす！」

「お寝坊さんですねー！」

「妖精（エルフ）・・・！」

玄関から城塞正門へと続く石畳の路の両側にある花壇や果樹の世話をしていたのは、手の平サイズや子ども・大人サイズと様々な体格を持つ妖精エルフ、またをアールヴ。光煌世界アールヴヘイムにて最も生まれやすいためにそう呼ばれる種族。手の平サイズは小エルフ、人間の子ども・大人サイズは大エルフと呼ばれる。実体はあるが霊的存在でもあるため不老不死ということもあり、ルシリオンと面識のあるエルフも多数いた。

「6千？　7千年くらいぶりですか？　長き眠りからの目覚め、お待ちしておりました」

執事服を着用した老齢男性姿のエルフがルシリオンの元へと駆け寄り、彼の前で片膝立ちになって一礼した。ルシリオンは「スマル。お前までそう言うのか？」と嘆息した。スマルと呼ばれた老人エルフがフェンリル達をチラリと見、フェンリル達は肩を竦めて首を横に振った。

「なるほど。それではルシリオン陛下。言葉で足りぬのであれば是非ご覧ください。生まれ変わったグラズヘイムを、アースガルドを」

スマルらエルフと共に正門へと近づくルシリオン一行。そしてスマルと、別の大人サイズの女性エルフが門扉の両端に立ち、壁から突き出ているレバーを握った。重く背の高い門扉の向こう側からがやがやと人の声が聞こえることで、ルシリオンは早く外に出たいとそわそわしだす。

「マスター。ちょっと失礼するね～」

「む？　ローブを着せてどうするんだ？」

フード付きのローブをルシリオンに羽織らせ、フードを目深に被らせたフェンリル。ヨルムンガンドが彼女に代わり「ルシリオン様の復活は、民を混乱させますので」と答えた。彼が言うにはルシリオンの存在はアースガルドのみならず今なお関係が続く同盟世界でも伝説・神話となっている。人間でありながら再誕戦争や"ラグナロク"の体験者。いずれ覚醒する神話の王として、その復活は待ち望まれている、とのことだった。

「グローイの復活は、アースガルド民および各世界へ連絡をした後、公式に復活を称える儀を行うつもりだ。それほどまでに今の貴方は有名人なのだ。これが冗談で言っていることではないと、我の目を見てくれれば判ろう？」

「っ・・・本当に何千年も経過しているのか・・・？」

「やっと解ってくれた？って言っても、普通は信じられないよね。・・・あ、そうだ。スマル、スヴァリ。やっぱり門は開けなくていい。フレースヴェルグ、ちょっと元の姿に戻って」

「なに？」

「今のアースガルドなら空から見てもらった方が早いし、ユグドラシルの霊廟に行くにもその方が早い」

フェンリルの提案にルシリオンは少し残念そうな表情を浮かべたが、「今はシエル達の解放が先だ。それでいこう」と、彼女の提案を飲んだ。それでフレースヴェルグも「仕方あるまい。乗るがよい」と小さく嘆息して、その姿を人が１０人乗ってもまだ余裕のある大きな鷲へと変化させた。

本来の姿に戻ったフレースヴェルグは、１０ｍはあろうグラズヘイム城の城塞の高さより身長があるため、門扉の向こう側が騒然となる。その騒ぎを治めるためにヨルムンガンドはこの場に残ることとなり、ルシリオンとフェンリルの２人だけがフレースヴェルグの背に乗った。

「いってらっしゃいませ、ルシリオン様」

「ああ、行ってくる」

『往くぞ。落ちぬようしっかりと掴まっていてくれ』

口頭ではなく念話でそう伝えてきたフレースヴェルグに、ルシリオンとフェンリルは頷きながら体毛とギュッと掴んだ。羽ばたきを２回行い、３回目で空へと上がったフレースヴェルグは一気に高度を上げ、"ユグドラシル"へ向けて飛ぶ。

「どう？　マスター。マスターの記憶の中のアースガルドとは違うでしょ？」

「あ、ああ・・・全然違う。この光景を見せられたら信じるしかな

いだろう」

２つの大陸はそのままに、墜落した残り２つの大陸が幾多の島となって"ユグドラシル"の周辺に浮いている様は、ルシリオンの記憶の中にはないものだった。さらに当時には無かった、レトロなデザインの自動車や路面電車が専用レーンを走っていた。さらには大陸・島間を繋ぐ鉄道も走っている。

「あれ？　マスター、鉄道などを見て驚かないの？　テスタメントの頃の記憶を失ってるみたいなのに」

「幼少の頃に両親の指示で、転移門を使っていろいろな世界に飛ばされていたからな。転送先の異世界でああいった移動道具を見たことがある。まぁこのアースガルドで見ることになったのは驚いたが・・・・」

「あー、そうだったっけ・・・・。アノルとイシルも、悪い子じゃなかったんだけどね・・・・。マスターにしたことを考えれば、親としては失格だと思う」

「父様と母様も、千年と続く大戦を終結させようと必死だったんだろう。アースガルド四王族として、その責を果たそうとしたんだと思う。ま、フェンリルの言うように親失格で、今でも嫌いだがな」

グラズヘイム大陸を一通り空から見て回ったルシリオン達は、いよいよ本命の"ユグドラシル"へ。１００ｍ間隔に設けられている公園のように広いバルコニーに降り立った。その場で羽ばたき続けて

浮遊しているフレースヴェルグは『ラタトスクにグローイが目覚めたことを伝えておく。帰る際は呼んでくれ』と伝え、飛び去って行った。

「まずは棺を取りに行かなければいけないんだが・・・。霊廟のある階層にバルコニーが無いのは問題だな。ここまで運んでこなければならない」

己の創世結界に封印されているシエル、シェフィリス、カノンの魂を解放するには屋外で彼女たちの肉体を出す必要がある。そして数千年も創世結界に封印し、ようやく外に出られた彼女たちを再び閉じ込めるわけにはいかないと考えていたルシリオンは、どうしてもこの広く青い空の下で彼女たちを棺に納めたかった。

「あ、待ってマスター。実はね、この6千年の間に霊廟の勝手がちょっと変わったんだ」

「というと？」

「改築したの。ほら、いくらユグドラシルが広いからと言って霊廟ばかり増築するわけにもいかないでしょ？　だから空間干渉能力を持って生まれた子に、霊廟階層をいじってもらったわけ。まぁ見てもらった方が早いから、霊廟の管理者を呼ぶね。・・・シグルリン！　棺を3つ持って、私のところにちょっと来て！」

フェンリルが塔内に向けて声を掛けると、「はい。ただいま！」と女性の声でそう返ってきた。ルシリオンとフェンリルの側に現れた

揺らめく空間より歩き出てきたのは、大人びた声に対して外見が１０歳ほどの少女。美しい金色の髪はボブカット、翡翠色の瞳、黒を基調としたエプロンドレス姿。彼女の背後には３つの棺が浮遊している。

「マスター。この子が現在の霊廟の一括管理者、シグルリン。シグルリン。見て判ると思うけど、彼が私のマスター、そしてセインテスト王家の王、ルシリオンよ。ご挨拶を」

「はい。フェンリル様。お会い出来て光栄です、ルシリオン陛下。わたくし、エルフのシグルリンと申します。どうぞ以後お見知りおきを」

恭しく礼をするシグルリンにルシリオンは「こちらこそ」と右手を差し出して握手を求め、彼女は嬉しそうにその手を取って応えた。

「早速だがシグルリン。棺を開けてもらえるか。シエル達を早くゆっくり眠らせてやりたい」

「かしこまりました」

シグルリンが軽く手を振るうと３つの棺は芝生の上にそっと置かれ、さらに振るうと分厚い蓋がフワリと浮き上がった。ルシリオンはそれを確認すると棺の側に近寄り、「我が手に携えしは確かなる幻想」と、創世結界起動の呪文を詠唱。

「長く待たせてしまってすまなかった。・・・シエル、シェフィ、

カノン」

ルシリオンが名前を告げると、彼の胸からアメジスト色、アイスグリーン色、黄金色の魔力流が溢れ出てそれぞれの棺に収まっていく。そして魔力は人の形へと変化していき、セインテスト王家第２王女シエル、ニヴルヘイム王家第２王女シェフィリス、アールヴヘイム第８王女カノンの肉体となった。

「シエル、カノン、シェフィリス・・・」

３人の遺体を見たフェンリルは声を震わせて名前を呼び、冷たくなっている頬を順に撫でて行った。３人の遺体は創世結界に封印されている間に、ルシリオンやシエルの姉ゼフィランサスの"異界英雄エインヘリヤル"によって完全修復され、封印された当時とは違って綺麗なものだ。

「人の身では魂は知覚できないが、きっと天に昇ってくれているのだと思う」

そう言って涙する目を拭うことなくルシリオンは「どうか安らかに」と３人の遺体から空へと視線を移した。もし魂が見えていれば、棺に納められた瞬間に遺体から３人の魂が浮かび上がり、ルシリオンに感謝を示すかのように、彼の手にそっと触れたのが判ったかもしれない。

――兄様――

――ルシル――

――ルシル様――

そうしてシエル、シェフィリス、カノンの魂は、次の人生を歩むために昇天を果たした。それからルシリオンとフェンリルは、シグルリンが"ユグドラシル"内で常時展開している無限の広さを持つ天空廟、"ユグドラシル・マウソレウム"へと移動。雲ひとつとして無い青空の中に無数の柩が螺旋状に列を成して並んでいる空間で、特定の柩を参るための浮島があり、そこが外の空間との出入口となる。

「マスター。シェフィリスとカノンの柩なんだけど、ニヴルヘイムとアールヴヘイムの現政権が引き取りたいと言ったら・・・」

「その際は引き渡そう。・・・なあ、フェンリル。先ほどフレースヴェルグが同盟世界云々と言っていたが、当時の各同盟世界も復興を果たしているんだな？」

「もちろん。ムスペルヘイムとニダヴェリールは星そのものが崩壊したからダメだったけど、アールヴヘイム、ニヴルヘイムは復興を果たしたよ」

「スヴァルトアールヴヘイムはどうなった？」

「一度は魔族によって滅亡させられはしたけど世界は残っていたからね。アースガルドに避難していたスヴァルト民は、ラグナロクの

影響が収まった後で帰ったよ。ちなみに柩はアースガルドに残していったね。アンスールのメンバーと共に在った方がいい手はなしで」

「そうか。なら、シェフィとカノンの遺体も、ひょっとしたらここに安置したままでいいかもしれないということか」

「その辺りは現政権に確認してみないと判らないけど、たぶんね」

「政権・・・。そう言えばアースガルドの政権はどうなっている？」

「アースガルドが王政を廃止してもう５千年近くなるかな。セインテスト王家の国王だったマスターは封印、クルセイド王家とレアーナ王家はフノスとイヴィリシリアの死で滅亡。生まれたばかりの幼子ということで大戦や堕天使戦争に参加できなかったグローリス王家のルドー殿下とその子孫が、マスター封印後１０００年はアースガルドを支えてくれてたけど、世継ぎを生む前に当時のミリア女王が急逝したことで滅亡。そこからは私が全権を握って、今は元首が私、民間から選出した首相を始めとした政府で運営って感じ」

アースガルド四王族の一角たるグローリス王家の結末を聞き、ルシリオンは寂しそうに「そうか」と頷いた。そんな彼にフェンリルは「グラズヘイムだけでも王政に戻す？」と尋ねる。

「・・・いや。王政廃止から５千年なのだろ？　今さら戻す必要は無いだろう。それに、私に政治家の才能があるとは思えない。大戦時は政務官たちに任せきりだったからな」

「じゃあ、そう伝えとく。あ、でも頼まれたら？」

「断るよ。現代のアースガルドと、私の知るアースガルドではいろいろと考え方も違うだろうし、その差を埋める時間で政治を疎かにするわけにいかない」

シグルリンが手振りでシエル達の遺体が収められた柩を操り、王侯貴族の柩が並ぶ最上列へと移動させた。柩が空高くにまで運ばれていくのを見届けた後、フェンリルは「次はどうする？」と問うた。

「シエル達の魂を解放し、遺体も霊廟に安置できた。なら残るは・・・ノルニル・システムと戦天使（ヴァルキリー）を再起動させるだけだ」

「うん、まぁそうだよね。・・・でも、それもちょっと待ってくれるかな？　ヴァルキリーって軍事力に当たるんだよね。そういうわけで、同盟世界の協議が必要なの」

「・・・・・・。本当に時代が変わったんだな。判った。その辺りは任せる」

「んっ！　じゃあさ、食事を用意するから少し休もうよ。時間凍結と言っても長時間の封印には変わらないから」

「そうさせてもらおうか。シグルリン、ありがとう。今後も霊廟の管理を任せる」

「かしこまりました。全身全霊を以て任を果たしましょう」

最後にルシリオンは「また来るよ」と空に並ぶ柩に告げ、フェンリル達と共に"ユグドラシル・マウソレウム"を後にした。先ほどのバルコニーからグラズヘイム城に戻るために呼び戻したフレースヴェルグの背に乗ったところで、フェンリルは自分の胸の間に右手を突っ込み入れた。

「そうそう。マスターに渡さないといけない物があるんだった」

「フェンリルよ。以前から言っているが、胸の間に物をしまう癖は直せ」

「えー。便利なのに・・・って、そんなことより、はいどうぞ！」

フェンリルが胸元から取り出したのは、ルシリオンが目覚める前にも触れていた小さな球体。それを彼に向かって差し出した。ソレを受け取ったルシリオンは「なんだコレは・・・？　ん？　待て、おい！　コレ、眼球じゃないのか！？」と驚愕の声を上げた。

「テスタメントのマリアって子が私に預けた物なのね。・・・ちなみにソレ、テスタメントだった頃のマスターの眼球、その魔力体って話」

「私の眼球！？　確かに光彩は私の左目と同じルビーレッド色だが・・・」

怖ず怖ずと自分の眼球だと聞かされたソレを眺めるルシリオンの目

と、眼球の黒目がパチッと合った。その瞬間、眼球は光粒子となって彼の左目に吸い込まれ、頭の中に見知らぬ青年や女性の姿が順々に浮かび上がっていく。

――とても残念だよ、ルシル。もう二度と逢えないなんて――

――寂しいよ、ルシル――

――良い旅を、ルシル――

――ルシル君。今日までありがとう。ルシル君と一緒に過ごせたことは、私の誇りだよ――

――ルシルには何度も助けられた！　だから、その！　いろいろとありがとう！の気持ち！――

――私もね、ルシルに目一杯のお礼を言いたいんだよ！――

――あたしも、アンタにいろいろとお礼を言いたいのよ――

――私も、〇〇〇ちゃんとおんなじだよ、ルシル君――

――こんなに人を好きになったことないし、これからもずっと、わたしはあなたを想い続けるから――

――ルシルさん。お疲れさまでした。良い旅路を――

――体温が無くてもルシル君の大きな手や。こうして触れられることが出来て、私は嬉しいよ――

（なんだこれは・・・？　記憶？　だが、こんな連中、私は知らないぞ・・・）

――ルシル君と離れたくない！　明日からホンマにルシル君が居らん世界なんて・・・悲しい、寂しい・・・！――

――俺も○○○達と一緒に居られなくなるのは悲しいし寂しいよ――

ルシリオンはある1人の女性の感情に特に引き摺られ、彼自身も涙をボロボロと流し始めた。フェンリルがその様子に驚き、心配する声を掛けているようだが、ルシリオンは頭の中に浮かび上がる女性の顔、声に集中していて気付いていない。

――ルシル君と過ごした十数年はあまりにも濃くて、大切で愛おしい時間やった――

――ごめんな。困らせて・・・。私ばかり我がまま言うてごめんな・・・――

――我儘なものか。困ってもいない。再確認できたよ。君たちのことを忘れるものか、とね――

――・・・○○○。これまでありがとう。どうか幸せに、元気で――

―

――ルシル君も、これまでホンマにおおきにな。ルシル君と出会えて、恋をして、好きになって良かったって心から思う。・・・どうかお元気で――

（お前の・・・君の・・・名前は・・・！？）

――俺もはやてに出会えて幸せだったよ。ありがとう――

「ハヤテ・・・？　はやて！！」

その瞬間、八神はやて達と過ごした時間だけだが、ルシリオンは"テスタメント"時代の記憶を思い出した。

ゼスト・グランガイツの隊と共にプライソンの秘密研究所へと乗り込み、"エグリゴリ"のレーゼフェアとフィヨルツェンに敗れた際、ルシリオンは左目の視力を失った。その理由がこれだった。

マリアは予想していたのだ。人間に戻る際、もしかすると記憶が消されるのかもしれないと。そのためにルシリオンから独立しながらも彼の記憶を録り、なおかつ貯めておく器として眼球型の精神体を用意した。それはフェンリルに託した後もしっかりと機能し続けていた。

万が一に備えてマリアは、この策を考え実行したことについて自身の記憶から消している。神意の玉座から解放される際、感付かれる危険を排除するためだ。そんなマリアの覚悟のおかげで、ルシリオンの記憶は一部とはいえ戻ったのだ。

「マスター？　大丈夫？」

「・・・・・・大丈夫だ。・・・・俺、いや私は・・・・あぁ、問題ないよ・・・・」

ルシリオンにとって大切な思い出だが、思い出したら思い出したで寂寥感に苛まれてしまった。それでも彼は、その記憶と共に生きていくことを改めて心に決め、真っ直ぐに前を見据えて歩き出した。

Ｓａｇａ３３彼女たちの今～Ｓｉｄｅ　Ｍｉｄｃｈｉｌｄａ～

†††Ｓｉｄｅはやて†††

ルシル君が故郷アースガルドに戻ったあの日からおよそ１年。私はあれからも変わらず管理局員として仕事に勤しんでる。そんな当たり前を過ごしてる日々の中、珍しくチーム海鳴メンバーの休暇が揃ったことで、２泊３日の小旅行を催すことになった。
行き先はすっかりチーム海鳴やチームナカジマの合宿先となってるカルナージのホテルアルピーノ。今や無人世界やなくて行楽世界とも呼ばれるようになるほどの人や物資の往来がある。さらに言えば私たちチーム海鳴、ナカジマジムのメンバーであるヴィヴィオ達が利用するってゆうことで、格闘技選手やファンの人たちが多く利用するようになった。

「あー、もうずっと休んでいたい～。仕事行きたくないな～」

私やシグナム、アインスと同じようにビーチチェアに横になって、湖に入って遊んでるなのはちゃん達を眺めるシャルちゃんが嘆息した。温暖な気候のカルナージの今の季節は夏。水着に着替えて湖で水遊びの最中で、私はヴィータやリイン、アギトに付き合って遊んでたんやけど、今はちょう休憩中。

「やはり教会騎士団の方も忙しいのか？」

「そうなんだよシグナム。そっちもそうだろうけど、管理世界は相

も変わらず犯罪者で大騒ぎ。Ｔ・Ｃ・の壊滅が報道されたらすぐに犯罪件数が上がったよまったく」

シャルちゃんはルシル君が帰ったその日の内に局に辞表を出した。数週間かけて仕事の引継ぎから特務零課の解散をサクサクッと行うと、構成メンバーで聖王教会騎士団にも籍を置いてたルミナ、セレス、クラリスも同時に局を辞めて、シャルちゃんと一緒に聖王教会騎士団へ再入団。さらにミヤビも局を辞めて教会騎士団に入団したことで、管理局の主力が一気に喪失した。

「お前が騎士団内に新設した騎士隊、白金桜騎士隊（プラティーン・キルシュブリューテ）は、特騎隊と同じ即応遊撃部隊だったな」

「そっ。特騎隊の本籍を管理局から騎士団に移したようなものね。基本的に教会依頼の仕事を遂行するけど、局から要請があれば受けて出張する。設立から半年だけど、もう４回も出張食らってる。ま、その仕事を選んだんだから文句なんて言えない立場だけど、こうしてみんなと遊んでいるとやっぱり愚痴がね・・・」

ビーチチェアの合間に置かれてる丸テーブルから自分のトロピカルジュースを取ると、「仕事の話になっちゃうところだった、やめやめ。泳いで頭を冷やしてくるよ」って言いながら飲み切って、シャルちゃんはパレオを取って湖の方へ駆けて行った。

「なのはとフェイトにドーン！」

「待っ――シャルちゃん！　にゃあああ！」

「ちょっ、シャル！？　急に突撃とかされると水着が脱げるから！　脱げちゃうからーーーー！」

シャマルやすずかちゃん、アリサちゃんやアリシアちゃんと一緒にビーチボールをしてた２人に突撃をかましたシャルちゃん。派手に水飛沫を上げて３人はすっ転んだ。

「母さーん！　シグナム姉！　アインス姉！　まだ休憩中～？」

そんななのはちゃん達から少し離れたところで、トレーニングと遊びを兼ねての水泳をしてる子ども達、ヴィヴィオ、コロナ、リオ、アインハルト、イクス、ミウラ、ファビアと、そんな女の子ばかりの中で遊んでる唯一の男の子、八神家長男のフォルセティが、私たちに笑顔を向けて手を振ってくれた。

「そろそろ戻るな～♪」

Ｓｔ・ヒルデ魔法学院での義務過程を卒業後、そのまま高等部に進学したヴィヴィオ達とは離れて（イクスは一緒やけどなぁ）聖王教会系列の医学部の在る別の学院へ進学したフォルセティも、この１年でぐんぐんと身長が伸びて今やシグナムよりも高い。

女の子ばかりのチームの中に男の子ひとり。その構図は今でも変わらずに昔のチーム海鳴を思い起こさせる。ま、私たちとの違いは、フォルセティとヴィヴィオとコロナの恋愛戦はもうきっちり決着してるってことやな～。

（インターミドル男子の部の世界代表戦で勝利したことで世界最強の男子となったフォルセティがまさかの・・・優勝インタビューでヴィヴィオに公開告白とは・・・）

――優勝おめでとうございます、フォルセティ選手！　短い間で構わないので、今のお気持ちを教えてください！――

――優勝できたことが今でも夢みたいで、とても嬉しいです！　この日のために鍛錬を積んできたので、結果を残せたことが誇らしいです！――

――ありがとうございます。やはりその気持ちを真っ先に伝えたいのは、ご家族の方ですか？――

――そうですね。・・・僕を支え続けてくれた家族、仲間たち。世界最強の１０代男子の座に僕が今立てているのは、そんな大切な人たちが居てくれたからです。僕独りでは決して立てなかったです。家族に仲間たち、それに亡くなっている父にも伝えたいです。父とは違う形だけど最強になったよ、と伝えたいです――

――ルシリオン・セインテスト調査官ですね。とても立派な方でした。きっと天国の御父上に届くと思いますよ――

――はい！　ありがとうございます！　あの、最後に僕からもう１つ、ある人に伝えたいことがあるんですけど、いいですか？――

――ええぜひ！――

――ありがとうございます。では・・・すぅ・・・はぁ・・・。ヴィヴィオーーーー！　好きだぁぁぁぁぁーーーー！　僕の恋人になってくれぇぇぇぇぇーーーー！――

息子（フォルセティ）のあまりに突然なヴィヴィオへの愛の告白に、観客席に居った母（わたし）さんを始めとした一同はホンマにビックリした。そうゆう関係になるまで秒読み段階やなって、なのはちゃんやフェイトちゃんとも話してたから、２人が付き合うことに関しては暗黙の了解やった。さらに驚いたのは、カメラを向けられたヴィヴィオがその場で受けたことや。

――はいっ！　わたしからもお願いしまーーーーす！！――

（ルシル君の事情は解ってるけど、ルシル君もフォルセティくらいに気持ちええ告白をしてほしかったな～）

フォルセティとヴィヴィオが公式に結ばれたことで、コロナは自動的に失恋したわけやけど、あの子たちの付き合い方は全然変わらへんかったから、コロナも納得してくれたんやろうな～。そんなことを思い返しながら私の分のトロピカルジュースのグラスが空になってることを確認。そんで「イプシロン。ごちそうさまや！」と、ホテルアルピーノの従業員の１人、元"スキュラ"姉妹の五女イプシロン・アルピーノに声を掛けた。

「はい。はやて、お代わりは要りますか？」

「ううん、もう結構やよ。おおきにな」

「イプシロンは自分の仕事をしてるだけです」

イプシロンを始めとした"スキュラ"姉妹もこの世界に留まって1年やな。ホテルアルピーノの従業員が板についた働き者や。私のグラスだけやなくて、同じようにお代わりを断ったシグナムとアインスのグラスもトレイの上に載せて、「ごゆっくりです」と、新しく建てられた湖岸食堂（日本の海の家みたいな木造店やね）に戻ってく。外からでも見える厨房には"スキュラ"の長姉アルファと末妹ゼータが、私たちの昼食の下拵えをしてくれてる。

「よーし！　私もシャルちゃんにドーン！」

「ちょっ、はやて！？　抱き付きならいいけど、水着の状態で胸を揉むのはダメーーー！」

「む、うーん・・・？」

2年ほど前にチームナカジマ合宿に付き合った時、こうしてシャルちゃんだけやなくてなのはちゃん達のも堪能させてもらったんやけど・・・。なんや「シャルちゃん、ちょうしぼんだ？」って感想がポロッと口から零れてしまう感触が伝わってきた。

「んなっ！？　バストサイズはずっと維持してるんですけど！？　そういうはやてはどうなわけ！？」

背後から抱き着いてる私の両腕を掴み取ったシャルちゃんは勢いよく腰を曲げて、そのまま私を背負い投げ。背中から湖面に叩き付けられた私は大慌てで体勢を立て直して、「ぷはっ！」と足を付いて立ち上がった。

「けほっ、けほっ！　シャ、シャルちゃん！　さすがに水の上での背負い投げはアカン！　受け身の効果が全然あらへん！」

「ごめんごめん。んじゃ、今度はわたしが測ってあげよう！」

「うひゃい！？」

私の背後からシャルちゃんが両手を伸ばしてきて、あろうことかビキニトップスの中に手を差し込んで来て、じかに揉んできた。顔がカッと熱くなって、「ふむふむ、なるほど～」と遠慮なく揉みしだいてくるシャルちゃんに「降参！　降参や！」って、シャルちゃんの手を私の胸から離そうとするんやけど、完全に力負けしてるから上手くいかへん。

「な？　シャルちゃん！　ホンマごめん！」

「むむ？　はやて、ちょっと大きくなった？　まさか！　フォルセティがルシルみたいに成長したから、ルシルに代わってあの子に揉ませ――」

「るかぁぁぁ――――！　母親が息子にそんなことをさせるわけあるかい！」

シャルちゃんに全力でツッコみを入れつつ、私はシャルちゃんに向かって体重をかけて、一緒に仰向けに倒れ込んだ。足腰もシャルちゃんに比べればよわよわな私やけど、足を掬われやすい水の中なら体重をかけてしまえば一緒に倒れることくらいは可能って判断や。

「「ぷはっ！」」

同時に立ち上がって、お互いにズレた水着を直してからレスリングポーズで対峙する。と、そこで「やめなさい」とゆう呆れ声と一緒に私とシャルちゃんの頭が叩かれた。私の頭を優しく叩いたのは「アリサちゃん」で、シャルちゃんの頭を割と強い力で叩いたのは「アリシア」ちゃんやった。

「あんたらね、遊びだろうがマジだろうがアホなことやってんじゃないわよ」

「そうそう♪　胸が大きくなっただの小さくなっただのくだらないよ。どうせ私に比べればみんな小さいんだし、そんなつまらない話なんてしてないでさ、もっと遊ぶべき！」

チーム海鳴で一番のバストサイズを誇るアリシアちゃんが腕を組んでそう言うた。両腕の上に乗っかってるその大きな胸に視線がいく。シャルちゃんと目配せをして、頷き合うと同時に2人でアリシアちゃんの胸に手を伸ばしてこれでもかってくらいに揉みしだく。

「な、なんでぇぇぇぇーーーーー！？」

「この生意気おっぱいめ！」

「アリシアちゃんの胸は変わらへんな！　大きくて形もええままや！」

「なんでキレ気味！？　やあああああ！」

私とシャルちゃんに滅茶苦茶にされるアリシアちゃんを見たアリサちゃんが逃げようとして、それに気づいたシャルちゃんが「わたしが揉んで、アリサの胸を大きくしてあげるよ～？」ってアリサちゃんをロックオンした。

「大きなお世話よ！　それにこれ以上大きくなっても邪魔なだけよ！」

私より大きな胸を持つアリサちゃん。確かに騎士のような戦い方をするアリサちゃんにとって大きな胸は邪魔になるんやろうけども・・・。モヤモヤッとする心を落ち着かせるために私は「こうなったらみんなの胸を揉まへんと」って考えに至る。まずは、目が合った「すずかちゃん」からやな。

「え？　ちょっ、はやてちゃん？　落ち着こう？」

シグナム、シャマル、アインスを除いたチーム海鳴のバストサイズランキングは、アリシアちゃん、すずかちゃん、フェイトちゃん、シャルちゃん、アリサちゃん、なのはちゃん、私となる。２位のすずかちゃんの胸を揉めばご利益があるかもしれへん。

「落ち着いてるよ？　以前みたいにちょーっと揉むだけや」

「え～と・・・逃げちゃダメ？」

「うん、アカン♪」

身体能力で圧倒的に勝ってるすずかちゃんが本気を出せば、私から逃げ切るのは簡単なはずなんやけど、すずかちゃんは苦笑いしながらスッとその豊満な胸を私に向けて差し出した。それで頭の冷えた私は手を合わせて拝んでから、すずかちゃんの胸を揉んだ。それからなのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃんと続けて揉ませてもらった。

「次は・・・」

馬鹿なことをやってる私たちから距離を取って遊んでるフォルセティ・・・とゆうより、ヴィヴィオ達に目を向けた。ヴィヴィオもアインハルトも徐々に大人モード時に近い体型に成長してるから揉み応えのあるサイズやし、コロナ達ももちろんええサイズや。

「よーし！　そんじゃあヴィヴィオ達に行ってみようか！」

「ちょう待って、シャルちゃん」

さすがにこれ以上の馬鹿な真似は出来ひんと自制した私はストップを掛けるんやけど、シャルちゃんは「コンプするのがわたし流」なんて言い出して、ビクッと肩を震わすヴィヴィオ達に向かって歩き

出した。そんなシャルちゃんの前に立ちはだかるのは・・・

「シャルさん、母さん」

「「フォルセティ・・・！」」

「シャルさんも母さんも恥ずかしいことしないでくれる？　ヴィヴィオは僕の彼女で、アインハルトさん達は大切な友達なんだ。手は出させないよ。それでも無理にでも来ようものなら、僕が相手になる」

インターミドル男子の部世界チャンプのフォルセティ。見て、あれが私の自慢の愛息子や。ヴィヴィオ達を護るように堂々と立つフォルセティの勇姿にドキドキする私なんやけど、シャルちゃんは「めっちゃ複雑な気分」ってガックリ肩を落とした。

「フォルセティ、格好いいんだけどさ。見た目がルシルにそっくり過ぎてこう・・・ヴィヴィオに寝取られた感があってさ・・・。それにルシルがロリコンっぽく見えてもいるんだよね・・・」

「そ、それは・・・」

うん、まぁ気持ちは理解できる。フォルセティもこの1年で心身ともに大きく成長して、シャルちゃんの言うようにルシル君を幻視させる。一緒に過ごしててドキッとするときも何度もあるし、ヴィヴィオ達が遊びに来たときには"好きだ"って想いを目いっぱい視線に載せてヴィヴィオを見たりするから、ジェラッと来るのは内緒や。

「母さん。母さんは当然やらないよね？」

「う゛っ・・・も、もちろんや！」

「しかしわたしは止まらない。むしろフォルセティと組んず解れつは望むところ。お姉さんと楽しい事をしよっか？　フォルセティ」

チロっと舌を出して笑うシャルちゃんの姿にフォルセティは腰が引けた。私やと止められへんから応援要請しようかとしたとき、「ちょっと待ってください！」とヴィヴィオがフォルセティの隣に並んだ。

「わたしだって黙っていないですよ。フォルセティはわたしの・・・その、か、彼氏だから！！」

顔を真っ赤にしてそう言い切ったヴィヴィオの姿にシャルちゃんは「ぐはっ！」と、胸を銃で撃たれたようなリアクションをしてから湖に沈んでった。そんでプカァっと仰向けで浮いて来て、「独り身が辛い・・・」ポツリと漏らした。そんなシャルちゃんを私とすずかちゃんで砂浜に戻して、「何をやっているのだか」と呆れてる"スキュラ"の次女ベータに預けた。

「さて、そろそろ戻るか」

「ああ」

ビーチチェアから降りたシグナムとアインスが軽くストレッチをしてると、「暇ならこっち手伝えー」って砂浜ですごく立派な出来のミッド地上本部の砂像を造ってるヴィータ、リイン、アギトが2人に声を掛けた。泳ぐ気満々やった2人はちょう困ったような顔になった。

「あ、じゃあ私とザフィーラが行くわ。シグナムとアインスは泳いできていいわよ」

シャマルがそう言うて浜に上がろうとしたその時、管理世界にて緊急事態が発生したことを知らせる特殊コール音が、浜に設けられた丸テーブルの上に置かれたデバイスからけたたましく鳴り響いた。意識が日常から仕事モードへと切り替わる。みんなそれぞれキーモニターを展開して、通信を繋げてきた相手と顔を合わせた。

私たち局員組に通信を繋げて来たのは同一人物で、「クロノ君！」やった。基本的にチーム海鳴への緊急連絡は、クロノ君かリンディ統括官かレティ総部長の3人から来ることになってるから、今回も例に漏れずやな。

「何かあった？　アイリ」

シャルちゃんに通信を繋げてきたのはアイリやった。ルシル君と一緒に公式に死亡となったアイリやけど、今はシャルちゃん達に付いて騎士団に入団して、藍木春菊騎士隊インディゴ・マルガレーテってゆう、再教育された元最後の大隊の融合騎をメンバーとした隊のリーダーになってる。

（アイリ・・・）

ルシル君と違くて私たちのところへ帰ってきてくれたアイリの今後の処遇をどうするかって話になったことで、私たちはある嘘を世間に吐くことにした。"T・C・"との戦いで運よく生き残りはしたんやけど、瀕死の重傷を負ったことで密かに静養してたとか、死亡扱いにしてたのは"T・C・"の追撃を避けるためとかな。深く詮索されたら怪しまれるやろうけど、マスコミや世間はそれを受け入れてくれた。

そんなアイリが局に入り直さずに騎士団に入ったのはまだええけど、八神の家を出て騎士団員の寮に入ってしまったのは寂しいわ。

――はやてのお家に居ると、どうしてもマイスターのことを思い出しちゃうの。留まっちゃうとアイリ自身がダメになっちゃいそうだし、出て行こうと思うのね。・・・ごめんね。お世話になりました――

そうゆう理由で八神家を出てったアイリやけど、交流が無くなったわけやない。今日は休暇が合わんかったから居らんけど、魔導師ランク昇級試験で合流が遅れるスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ルールー、リヴィと一緒に、明日合流する予定やった。

そんなアイリやクロノ君から私たちに伝えられたのは、ミッドの北から西にかけての5ヵ所で正体不明の巨大生物が複数出現して派手に暴れ回って、そやけど人に危害は与えようとはせず、その生物同士が争って被害を拡大させてるとのこと。

『問題は並の武装隊の攻撃ではビクともしないというところだ。今

は第零技術部が開発してくれた動物型戦闘デバイス・ファイティングビーストや、現場近くに偶然居合わせた高ランク魔導師たちが対応してくれているが、それでは足りないのが現状だ』

『局から応援要請を受けた教会騎士団も似たような感じだね。だからフィレスの銀薔薇とシャルの白金桜、アイリの藍木春菊にも出撃命令が出たの』

『そういうわけで、君たち高位ランク魔導師・騎士にも出撃してもらうことになった。こちらで勝手にチーム分けをさせてもらったが、何か意見があれば反映するつもりだ』

八神家、なのはちゃんとフェイトちゃんとアリシアちゃんとアリサちゃん、すずかちゃんはシスターズと合流、シャルちゃんは自分の隊と合流とゆう形や。みんなはその組み分けに納得してるし、そのままで出撃することになった。

「ウーノ。こちらすずか。直通トランスポートで、私たちをミッドのある４つのポイントへ転送してほしいんだけど・・・」

『事情や転送先座標はクロノ提督らから伺っています。こちらもすでにフル装備させたトーレ、セッテおよび追加の予備戦力としてファイティングビーストのタイプウルフ、イーグルをそれぞれ２０機、計４０機を待機させています』

「了解。じゃあ早速、転送をお願い」

今すぐにも出撃とゆうことでフォルセティ達と軽く挨拶を交わし、防護服に変身した私たちはそれぞれのポイントへと転送された。私ら八神家が転送されたんはミッド北部はアーレンス地区。ベルカ自治領ザンクト・オルフェンに近い隣のフリートヘルム地区にはシャルちゃんとアイリの部隊が向った。

「状況は切羽詰まってる！　みんな、行くよ！」

アーレンス地区に転送された直後から耳に入るのは、近場の陸士隊や警ら隊の指示に従って避難してる民間人の悲鳴やった。武装隊が展開してる結界からは衝撃波が零れ出て、周囲の建物に甚大な被害をもたらしてる。そんで結界が破壊されると、交代要員が新しく再展開とゆう切迫した状況や。すぐにでも大暴れしてる正体不明の生物を制圧するべく、私たちは空へと上がった。

『こちらチーム八神！　お待たせしました！　これより正体不明の生物たちの鎮圧に入ります！』

『了解です！　ご武運を！』

武装隊の展開してる結界には進入可・脱出不可の一方通行効果があるから、私たちは苦労せずに結界の中に入ることが出来た。そんで、ここアーレンス地区に混乱を招いた存在を目視。
全身の至る所にいろんな種類の生物の頭蓋骨を付けたイグアナのような真っ黒な巨大生物と、額やお腹や背中にダビデ像の顔のような石像を付けたティラノサウルスのような真っ白な巨大生物が、突進や噛み付き、尻尾での打撃などの攻撃を繰り返し、その影響で周囲

の建物を破壊してるって感じやな。

「でっけぇ・・・」

『昔観た特撮にあった怪獣大決戦みたいです』

『やべぇな。ゴ〇ラとかキングコ〇グとか思い出す』

リインとアギトがそんな感想を漏らした。サイズは違うけどジュラ〇ックパークシリーズを私は思い出しなぁ・・・って、そんな悠長なことをしてる暇はあらへん。すぐに私たちは2頭の巨大生物の鎮圧に動き出す。まずはあの2頭を引き剥がすところからや。私とシャマルとザフィーラ、ヴィータとシグナムの二手に分かれて、私とシャマルとザフィーラはイグアナを、シグナムとヴィータはティラノに向かった。

『主はやて。やはり力ずくでいきますか？』

「『そうやね・・・。言葉が通じるとは思えへんし、全力で行くよ！』ザフィーラは私に付いて来て！」

「承知！」

「シャマルはリンカーコアの摘出準備！」

「判りました！」

"夜天の書"を開き、「『爆ぜよ。夜天彩る極光！』」と、私が持ちうる魔法の中でも最強クラスの呪文を詠唱。直感とゆうか本能とゆうか、今目の前で激突してる2頭の巨大生物は普通の魔力保有生物とは生物としての格が違うと告げてるから、手加減無用の一撃を選択した。

「貴様は・・・！」

「こっちだ！」

――火龍一閃――

――ギガントシュラーク――

シグナムが大きく伸長させた炎の剣を振るってティラノを後退させると、ヴィータが超巨大化させた"アイゼン"を振り下ろした。ヴィータの一撃は見事に頭部を捉えて、ティラノを地面に叩き伏せた。私も負けてられへんとイグアナに向かって"シュベルトクロイツ"を向ける。対するイグアナは私を気に掛けることなく、ググっと立ち上がろうとしてるティラノにのみ意識を向けてる。

「（クロノ君の報告通りやな。人には危害を加えようとせえへん）ポラールリヒト・ノーヴァ！」

そんなイグアナに向けて魔法を放った。イグアナを中心に夜天結界が発生して、結界内に発生する無数の強大な雷撃が一斉に襲撃。そのまま結界を野球ボールサイズにまで圧縮して、イグアナをもっと

広い場所へと移動させるためにその場から離れる。

『主はやて！　イグアナの抵抗が激しく、もうもちません！』

『もうか！？　もうちょい維持できひ――』

私の側に浮いて追従してた魔力スフィアからバキバキ！とヒビ割れる音がして、そのヒビから雷撃が漏れ出た。さすがにもうアカンと判断して、割と広い公園へと射出する。そんでイグアナが自力で魔力スフィアを破壊するより早く、威力を最大限に発揮させるためにこちらから魔力スフィアを爆破した。

強烈な放電と魔力爆破に呑まれながらイグアナは公園の芝生の上に落下して、背中から激突した。仰向けからうつ伏せに戻ろうともがくイグアナに「旅の鏡！」を発動したシャマル。こうゆう巨大生物には転送魔法によるリンカーコア摘出が一番ええ手や。

"クラールヴィント"の転送鏡に手を突っ込んでイグアナのリンカーコアを探すシャマルやったけど・・・

「きゃうん！？」

「「『シャマル！？』」」

転送鏡からブワッと溢れ出た黒い靄を全身に受けたシャマルは、まるで感電したかのように硬直して、気を失ったのか墜落し始めた。すぐにザフィーラが助けに入ってくれたおかげでシャマルは助かった。そやけどザフィーラらしくない「様子がおかしい！」と切羽詰まった声を上げた。

「ＡＨＨＨ

イグアナとティラノの攻撃は掠めるだけでも危険なもの。そやから悔しいけど今は離脱して、シャマルの治療を最優先や。シグナム達と合流して、外の武装隊に鎮圧が遅れることを伝え、私たちは少し離れたビルの屋上に降り立った。ここなら肉眼でイグアナとティラノの戦闘を確認できる。

――静かなる癒し――

屋上に横たえさせたシャマルの肌は、バグったテクスチャを貼られたような妙なものに変色してて、それが体を蝕んでるのかずっと苦痛に呻いてる。そんなシャマルを治すために治癒魔法を発動させるんやけど、全くと言っていいほどに効果が見られへん。

「なんでや！」

『主はやて。私も手伝いますので、いったんユニゾンを解除させてください』

アインスからの提案を受け入れてユニゾン・アウト。そんで2人でシャマルに治癒魔法を掛ける。それでもシャマルの容態は一向に良くならへん。焦りだけが募る中、アインスが「やはりこれは・・・」と、何か知ってるようなことを口にした。

「おいアインス！　お前はこの呪いみてぇなもんが何か知ってんのか！？」

「呪い・・・。ああ、まさしく呪いだ。あのイグアナのような生物、信じがたいことだがおそらくは――」

アインスがそこまで言いかけた時、どこからともなく教会で聞くような綺麗な鐘の音が響いてきた。空から光の柱が降ってきたかと思えば、そこからティラノと同じ真っ白な体、体の両側面に無数の人面像、２つの頭部を持つ、全長数kmはあろう「龍・・・！？」が出現した。長大な胴に比べて小さな両前脚には、ルシル君の神器〝グングニル〟のような、クリスタルの剣身を持つ長剣が握られてる。

「ここで新手かよ！」

「いや！　アレだけではないぞ！　あちらの地面からも何かが来る！」

シグナムの視線の先、地面から氷の柱が勢いよく何十本と突き出してきて、その表面からイグアナと同じように真っ黒な体、骸骨や氷の尖塔を体表面から生やした、巨大な二足歩行の巨大な翼竜（こっちは西洋風や）が這い出てきた。そんでイグアナとティラノに加勢するかのように龍と竜も戦闘を開始。建物の破壊は一気に進み、さらに結界も容易く破壊されるほどの魔力流が発生。結界が消失して元の世界に戻っても４頭の巨大生物は暴れ続ける。

『あ、あんなの、どうやって止めればいいです・・・？』

『無理だぜ・・・』

「しかし、この災害級の戦闘をこのまま見過ごすわけにはいかへん！」

「そういうこった！　気合を入れろ、リイン、アギト！」

『は、はいです！』『お、おう！』

結界の再発動までの時間稼ぎとしてシグナムとヴィータが巨大生物たちに向かおうとした矢先、空で一際強烈な閃光が発生した。また新手か？と絶望する中、収まった閃光の中から現れたものを見て、私だけやなくてみんなが「え・・・？」と漏らした。

光の中から現れたのは人で、男性２人に女性１人。男性の１人は王政ローマ時代の男性が着てたようなトゥニカとトガを身に纏い、太陽の仮面を付けてる。女性はクロスホルタービキニ、腰にパレオを巻いた格好なんやけど腰から下はなんと魚で、人魚ってことが判る。澄んだ青色の長い髪は風に靡いてて、ホンマに綺麗や。

私たちが目を見張ったのは残りの男性の姿や。銀色の髪、黒衣を身に纏い、蒼く輝く菱翼１０枚、剣翼１２枚の翼を背負い、左手にはクリスタルの穂を２つ有する大槍を携えてる。

「うそやろ・・・？　これは夢なんか？」

早鐘を打つ心臓、浅く速くなる呼吸に、自然と私は自分の胸に手を添えた。顔は見えへんから断定は出来ひんけど、どうか本人であってほしいと願いを込めて私は全力で叫んだ。

「ルシルくぅぅーーーーーーん！！！！！」

私の声にその男性がピクッと反応して、私たちの方を見た。私たち

がここに居ることにビックリしてるのが遠目でも判る。

「はやてぇぇぇーーーーーー!!」

そんで私の名前を叫びながら、私の元まで文字通りの飛んで来てくれた。こんな状況やとゆうのに私とルシル君は互いに両腕を広げ、そのまま抱きしめ合った。

Ｓａｇａ３４三界の戦宴～Ｃｒｉｓｉｓ～

†††Ｓｉｄｅルシリオン†††

私が目を覚ましてから1年ほどが経過した。
意識上では全くと言っていいほど時間は進んでいないのだが、ガーデンベルグから受けた致命傷から護るためにフェンリルが施してくれた時間凍結封印の中で眠っている間、私は"界律の守護神テスタメント"なる存在となっていた。
"界律"という存在は既知だったが、その守護神という存在は知らなかった。"界律"に属する力は神や天使という教えしか知らなかったからだ。そんな知らぬ力だった"テスタメント"となっていた時間はおよそ2万年。気が遠くなるとかいうレベルを超越した年月だ。が、アースガルドで経過した時間はおよそ7千年。"テスタメント"の在る"界律"の頂点である"神意の玉座"は過去・現在・未来、あらゆる世界と繋がっているから起きる差だったようだ。

（はやて達と共に過ごした記憶しか残っていないから、マリア、恩人であるお前のことが判らないのが辛いよ）

"テスタメント"時代の記憶は"神意の玉座"によって消されたのだが、私のことをずっとサポートしてくれていたらしいマリアという"テスタメント"のおかげで、私ははやて達と過ごした記憶を取り戻すことが出来た。思い出せたのは、はやてと恋をした世界と、その記憶から補完されて思い出せたフェイトと恋をした世界の2つ。ただ、マリアと出会った記憶は取り戻せなかった。

（だから礼の1つも出来ない。また会いたいものだが・・・。彼女の出身世界も年代も判らない。無理な願いなんだろうな）

ともかく、私は"堕天使戦争"に勝利し、人間としての人生を取り戻すことが出来たのだ。残る人生を全うすることだけを考えよう。と、朝の身支度の1つである洗顔によって濡れた顔をタオルで拭い取り、女顔の所為で威厳が足りないと考えて伸ばした口ひげと顎ひげの乱れを整える。

「お父様。お目覚めでしょうか？」

「ああ、もちろん。鍵は開いているから入ってくれ」

「失礼します。おはようございます、お父様。朝食をお持ちしました」

「おはよう、プリム。すまないな、給仕のような真似をさせて」

私室のドアをノックされ、そう声が掛けられた。入室の許可を出すと、"戦天使（ヴァルキリー）"の1体で、第七世代ランドグリーズの隊長を任せているプリメーラが、朝食の載ったワゴンを押して入ってきた。そしてあの子がリビングの中央に在る楕円テーブルに食器を並べていくのを見届ける。

「いえ。好きでやらしてもらっていますので。むしろこの仕事の取り合いが私たちヴァルキリー内で起きています」

「そうなのか？　その割にはこの1年、ほとんどがお前が私の給仕、いや秘書のようなものだったが？」

「お父様。じゃんけんは運ではないのです」

そう言って軍服にエプロンという恰好をしたプリムは胸を張った。なるほど、じゃんけんで当番を決めているわけか。プリムの演算能力や身体のスペックは高いからな、何かしらの確勝法を持っているのだろう。

「そ、そうか。少しは加減もしてやってくれ」

「・・・判りました」

私と長く一緒に居られることに幸せを感じてくれているプリムを始めとした"ヴァルキリー"は、シエル達の遺体を霊廟に安置した翌日、無事に再起動と相成った。フェンリルは軍拡ということで"ヴァルキリー"の再起動に不安を抱いていたが、いま現在、上位次元世界はとある危機に陥っており、そのおかげで"ヴァルキリー"は1つの世界が有するには過剰戦力だと危険視されるばかりか、再起動を全力で望まれた。さらに言えば追加の"ヴァルキリー"開発すら提案されるほどだった。

（まぁ相手が相手だ。私が同盟世界の政治家なら、ヴァルキリーの戦力は有用と考えるだろうな）

プリムに見守られながら食事を続け、そして食後の紅茶を頂いていると、廊下とリビングを隔てるドアがノックされた。するとプリムは小さく「チッ」と舌打ち。チラリと見ると、あの子はスッと顔を逸らした。

「どうぞ」

「失礼します。おはようございます、お父様」

「失礼しまーす！　おはよー！　お父様！」

元気よく室内に入って来たのは双子の"ヴァルキリー"で、身長155㎝以下の通称少年組に属する姉リオ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア、妹ミオ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア。その2人に「おはよう。何の用かな？」と挨拶を返し、ここにやって来た理由を聞く。

「本日の秘書官を担当することになったんだ！」

「いつもいつもプリムが秘書も給仕もやるから、あたし達はずっと不満だったんです」

「はあ。そういうわけで、残念ながら私の給仕仕事は午前中だけとなりました。少しばかり調子に乗り過ぎたようです」

昼食や夕食はまた別の"ヴァルキリー"が給仕をしてくれるそうだ。今後しばらくは給仕も秘書も出来ないと嘆息しながら、プリムは食

器を片付けて部屋を後にした。プリムを見送ったリオとミオから本日の私のスケジュールを聞く。

「お父様。午前はヴァルキリーと一緒にアグレッサーとして魔術部隊と演習です」

「午後は１４時から予定１６時までアースガルド軍総督として、三界大戦について同盟世界の各界防軍長との会議だよ」

「判った。アグレッサーにはどのヴァルキリーが選出される？」

「凶狩の紫炎ティーナ、凶狩の蒼水ナーティア率いるヒルド隊になります」

「演習を行うのはアースガルド魔術軍の９０１から９０３の空戦部隊、計３０名だよ」

私が封印されている間に神秘は蘇り、魔術師が再び生まれることが多くなった上位次元世界。再誕戦争時には数の少なかった空戦の出来る魔術師も増えたが、しかしやはり当時の魔術師に比べれば空戦術師も陸戦術師もはるかに弱い。現代の魔術師を鍛え、今現在人類が相手にしている脅威との戦争で、被害を少しでも抑える。それが私の総督としての仕事だ。

（政治家にはなりたくないからという理由で軍人への復帰だったが、まさかいきなりトップに就かされるとはな。まぁ戦いしか能がない私には天職とも言えるから文句はないが）

リオとミオからスケジュールを聞き、早速仕事に出かけようとしたその時、室内の至る所に空間モニター（私が魔法技術を基に魔術式を開発し、同盟世界に広めた）が展開され、ＥＭＥＲＧＥＮＣＹのメッセージと共に警報を鳴らした。さらに別のモニターが展開され、『マスター！』と切羽詰まった声で私を呼んだ「フェンリル！」が表示された。

『アールヴヘイムとユングガルドよりマス――ルシリオン総督とヴァルキリーの出撃要請があったの！　ヘイズヘイムとギンヌンガガブの２つの世界にて両勢力の下級から中級戦力の出現を確認！　ヘイズヘイムではおよそ１５０対１５０、ギンヌンガガブではおよそ３００対３００！　下級戦力は魔術師でも相手になるけど、中級となってくるとマスターやヴァルキリー級が必要になる！』

「判った！　リコ、エリス、リナ」

『『『はい。お父様！』』』

私が通信を繋げたのは"ユグドラシル"の最下層ノルニルの泉に設置している"ノルニルシステム"。モニターが３つと展開され、女性３人の姿が表示された。

"ヴァルキリー"システムを管制する戦天使統括システムの管制プログラム、長女のアプリコット。再誕戦争時はヨツンヘイム連合に与する世界を監視させ、現在は同盟世界の看守を任せる世界看守システムの管制プログラム、次女のエリスリナ。アースガルドとビフレスト、ビフレストと他世界を繋ぐ転移門を創り出す、時空間支配

システムの管制プログラム、三女のリナリアの３人だ。

「エリス。ヘイズヘイムとギンヌンガガブとの映像を」

『はい。ただいま』

新しく展開されたモニターに人類の脅威となっている２つの勢力が映し出される。およそ６００の暴力が衝突し合い、互いを殲滅しようとしている。それだけなら放っておいても問題ないのだが、その２つの勢力は人類に対しても敵対心を抱き、攻撃対象にしていることだ。ユングガルト政府の監視を受けているギンヌンガガブは無人世界だが、ヘイズヘイムはアールヴヘイムの姉妹世界、つまり有人世界だ。被害を出すわけにはいかない。

「まったく。召喚者無しで表層世界（にんげんかい）に来てほしくないな、魔族には」

「それを言ったら天属もですよ。勝手に魔族との戦争を始めて、魔族に戦いを挑みながらついでみたく人間にも戦争を仕掛けてきたんですし」

「魔族も魔族でケンカを売ってきたんだよね。嫌になるよ」

そう。人類は今、天属――天使と魔族の戦争に巻き込まれ、しかも両方から敵対されている。私が目覚める３０年ほど前から始まったらしく、天界・魔界・人間界を巻き込んだこの戦乱のことを、当時の各界政府は三界大戦と称した。

「リコ」

『はい。フェンリルと相談した結果、ギンヌンガガブにはアルヴィト、ラーズグリーズの２隊を、お父様の供としてランドグリーズ隊を出撃させます。異論はありますか？』

「いや無い。ただ、どちらにも空戦部隊をいくつか投入させろ。実戦でさらに経験値を積ませたい」

『了解です。即座に出撃可能なのは演習の準備に入っている９０１、９０２、９０３空戦隊ですので、招集を掛けます』

「リナ。ヘイズヘイムの方は一刻を争う。すぐに出撃するから、ヴァルハラ中央中庭に転移門を用意しておいてくれ」

『うん、判った！』

"ノルニル"姉妹との通信を切り、戦闘モードになっているリオとミオに「行くぞ」と声をかけ、共に中央中庭を目指して駆け出す。Ｕ字階段室の吹き抜けを一気に降り、正面扉を蹴破る勢いで開く。宮殿を囲う城壁の正門と正面扉の間に広がる中央中庭。そこにクルックス率いるアルヴィト、氷月率いるラーズグリーズ、プリム率いるランドグリーズ隊と、空戦の出来る魔術師３０人が整列しており、リオとミオがランドグリーズの隊列に加わった。

「総督。ランドグリーズ！」

「アルヴィト！」
「ラーズグリーズ！」
「９０１！」
「９０２！」
「９０３！」
「「「「「いつでも出撃できます！」」」」」

各隊の隊長の言葉に頷き、空戦隊で最も練度の高い９０１をギンヌンガガブへ投入し、９０２と９０３は私のサポートと万が一の避難誘導を担当してもらうことを伝え、リナリアに各世界へと通じる転移門を空に展開してもらう。飛翔術式を発動したままの転移の方が、転移直後のトラブルにも対応しやすい。
各隊長が部下に飛翔術式の発動を命じ、各人がふわりと体を浮かせて高度５ｍほどで再整列。私も瞬神の飛翔コード・ヘルモーズを発動。

『宮殿から見て右側がヘイズヘイム往き、左側がギンヌンガガブ往きになるから注意してね』

リナリアの言葉に頷き返し、私は「出撃！」と号令を掛け、それぞれの転移門に飛び込んだ。視界が真っ白に染まり、その白い空間を通る。視線の先に見えてきた門状の穴を通り過ぎればそこはもうへ

イズヘイム。５km程度しか離れていない場所に在る城塞都市、その周囲に拡がる平原の上空に私たちは転移した。目下では天使と魔族が殺し合いをしているの肉眼で視認。

（また、命の奪い合いの世界に戻ってきたな・・・）

胸の内で何度目かになるか判らない愚痴を零した。この１年で殺し合いは数十回と行ってきた。天使を殺し、魔族を滅し続けてきた。はやて達の居る次元世界でも管理局の暗部として暗殺仕事をしてきたが、ここまでの命の奪い合いは再誕戦争以来だ。

「９０２、９０３は私と共に空襲を行い、ランドグリーズ隊は流れ弾が都市に向かわないように防壁を担え」

アースガルドの魔術師には人造兵装の神器を配布してある。再誕戦争時の物だったり、この１年で私が作成した神器だったりと、天属・魔族の中級中位ならギリギリ通用するような物だが。そこにブーストを掛けてやれば、安全に対抗できることはこれまでの戦闘で確認している。

「女神の保護（コード・フリーン）！」

上級の自己強化術式、力神の化身コード・マグニのバリエーションのフリーンを発動。自分以外の友軍にマグニを付加するというものだ。魔力や身体のみならず、対象の神秘も増大させることが出来るため、魔術師であれば絶大な効果を与える。しかし"魔力炉（システム）"を有していない人間には一切効果が無い。私のフリーンを受けた３０名

の部下たちが、銃器型神器を一斉に構える。

「交戦（エンゲージ）！」

――銃軍嬉遊曲（ガンパレード・ディヴィルティメント）――

一斉に銃口より放たれる魔力砲や魔力弾。それらが地を駆けて激突している両勢力に次々と着弾していく。私たちの参戦にようやく気付いた連中は私たちを見上げ、それぞれの攻撃で反撃してきた。

「散開！　我が手に携えしは確かなる幻想！」

――軍神の戦禍（コード・チュール）――

創世結界"神々の宝庫ブレイザブリク"に保管されている神器群を展開、そして「ジャッジメント！」の号令の下に射出して、迫る攻撃を真っ向から迎撃していく。ガーデンベルグとの闘いで大多数を失ってしまったが、同盟世界の協力のおかげでそこそこ数を取り戻すことが出来た。

そこからは空戦の出来る天使や魔族と三つ巴の戦闘だ。時に天使と利用して魔族を討ち、魔族を盾にして天使もろとも殺す。"ヴァルキリー"からの支援もあって、本来は人間では勝てないとされている中級天使も、魔族を利用したことで快勝で終わった。が、しかしテレビゲームよろしく、雑魚戦の後にはボス戦が待っているものだ。

「総督！　鐘の音です！　これはまさか・・・！」

９０２空戦隊長が焦りに染まる声でそう言った。日本の寺にある鐘のような重い音ではなく、教会など西洋の鐘のような高い音が３回ほど鳴り、空がカッと視界が潰されるほどの光量で光った。光が収まったのが判り、目を開けてみれば天属の新手が空を泳いでいた。

「ハロムエル・・・！」

全長数kmはあろう体を有する純白の龍が６体。天属上級三隊智天使所属、神の夢の名を持つハロムエル。１つの頭部につき２４の目を持つ双頭、体の両側面には青年の頭像が無数に並び、その目を光らせている。波打つ背びれの上には天使の輪ヘイロウが虹色に輝き、頭部付近に生える脚には"グングニル"や"グラム"の同種を思わせる神器、クリスタル状の剣身を持つ剣を持っている。

「総督！　あちらからは氷山竜（シガオンケラハ）が出現します！」

氷の狂気という意味の名前を有する魔族魔獣属竜種の一種、漆黒の体と骸骨や氷の尖塔を体表面から生やした巨大な翼竜シガオンケラハが５頭と現れた。３０ｍ以上の体長を持ち、人類に対し特に敵意を持つ魔界中層の魔族だ。しかもその実力は竜種ということで下層や最下層の魔族に近い。面倒な連中が来てくれたものだ。

「９０２、９０３は即時離脱！　今のお前たちでは敵わない！　ランドグリーズは空戦隊の離脱をサポートしつつ都市の防衛！　プリムとソアラは私をサポートだ！」

「「了解です！」」「「了解！」」

ランドグリーズの隊長である雷撃系最強のプリムと、副隊長の騎兵ソアラを残し、他の"ヴァルキリー"と空戦隊は離脱させる。シガオンケラハであればギリギリにはなるが勝てる。しかしハロムエルは別だ。全盛期だった再誕戦争時の私ですら1対1でようやく拮抗できるような上位存在だ。それが8体など馬鹿げた冗談だ。

（シガオンケラハを利用しつつハロムエルの数を減らす。これしか私たちが生き残る術はな――）

そこまで考えたところで、それは起きた。鐘の音がまた響き、さらに新手が来たのかと絶望しそうになったが、空が燃え上がり、炎が魔法陣のような幾何学模様に変化したのを見て、「来てくれたか」と安堵した。

「プリム、ソアラ。援軍だ。巻き込まれる前に下がるぞ」

「「了解です！」」

その模様より降り注ぐ炎の雨がハロムエル6体に直撃すると、アレらは聞くに堪えない悲鳴を上げて墜落し始める。その光景を離れたところで見守っていると、「旦那様」と真後ろからそう声を掛けられた。

「「「っ！？」」」

全く気配が無かったためビクッとした私は勢いよく振り向き、同様

に驚きつつも構えを取っているプリムとソアラが、私に声を掛けた女性を取り囲む。それを私は手を挙げることで制止し、私は「貴女も来てくれるとは思わなかったよ」と苦笑いを浮かべた。

「他人行儀は止してください旦那様」

「以前も話した通り、私はテスタメント時代の記憶が無く、貴女の主である魔界最下層支配権の6位ルリメリア、7位リルメリアの姉妹のことも忘れている。当然、貴女のこともだ、ヘネット」

水着姿の魔族魔人属人魚種マイムザラッハ一族であるヘネットに、以前伝えたことをもう一度伝える。"テスタメント"時代、私はどうやら魔界に行ったらしい。何故その時にアースガルドに寄れなかったのか覚えがないが、魔界で私は姉妹と出会い、幻想一属を支配できる"フォン・シュゼルヴァロード"のファミリーネームを貰い、さらに求婚されたとのこと。意味が解らん。とにかく、姉妹が支配する二大国家に住まう魔族から"旦那様"と呼ばれることになった。すごいな、私・・・。

「シガオンケラハはわたくしが相手をしますので、旦那様方は見学なさっていてください」

「頼む」

ヘネットは最下層に存在する海中国家シュゼルヴァケティアの国防軍所属の魔人で、その実力は全盛期の私と同程度だが、有する神秘は圧倒的に彼女が上だ。私では倒し切れない天属や魔族ですらも余

裕で倒せるだろう。シガオンケラハがヘネットに気付くと、体から生える氷塔から冷気を放出させつつ口を大きく開き、咆哮と共に吹雪の砲撃を発射。

「大人しく魔界へ帰りなさい、愚か者」

対するヘネットは右手を軽く振るい、地面からとんでもない量の水を噴出させて津波とした。氷と水であれば、水が一方的に凍らされて終わり・・・とはならなかった。凍結されても圧倒的な水量と水圧によってシガオンケラハの砲撃をねじ伏せる。水は奴らを押し流し、最後はドーム状の檻と化した。奴らは水の檻から脱出できず次々と溺れていき、最後は溺死体のようにぐったりしたことでヘネットは水の檻を解除。地面に横たわるシガオンケラハはピクリとも動かなくなっていた。

「ハロムエルもシガオンケラハも、これで終わりだな」

ハロムエルに攻撃を加えた炎。その術者が私たちの元へと降下してきた。トゥニカとトガを身に纏い、太陽の仮面を付けてた男性。私は彼に「ありがとうございます、エツヴァエル」と頭を下げた。彼は小さく頷き、地面でのたうち回るハロムエルを見下ろした。エツヴァエルは天属上級三隊熾天使に属する天使だ。実に頼もしい。彼もそうだが魔族のヘネットがなぜ同族である天使や魔族と戦うのか。それにはもちろん理由がある。両勢力内で内乱が起きているのだ。始まりは天界で起きた内乱。天使を束ねる者、神が反逆者によって斃されたのだ。反逆者は不干渉となって久しい魔界の制圧、魔族の掃討を掲げ、さらに人類の完全支配を目論んだ。もちろん神の

仇を討たんとする勢力と衝突するのは必然だった。

（魔族も魔族で、抗戦ついでに人類の魂を自分たちの燃料（えさ）にしようと企んでいた勢力が活発化。魔界の勢力を真っ二つに割った）

そんな最悪な状況下で表層世界の人類が滅びていない理由がこれ、天属・魔族内に味方がいる、だ。エツヴァエルやヘネットも暗黙の三界不干渉賛同派で、人類の味方をしてくれている。

「ご迷惑をお掛けしましたね旦那様。全魔獣属の長であるウリベルト様の方からシガオンケラハ一族の長に罰を下していただくよう、リルメリア様にお伝えしておきます」

『我からも謝罪を、人の王。反逆者が迷惑を掛けた』

「いえ。・・・やはりトドメは・・・？」

のたうち回るたびに地面を大きく揺らすハロムエル６頭は、ヘイズヘイムの民にとっては迷惑極まりない。それを判っているエツヴァエルは『罰として苦しませているが、すぐに刺そう』と、ハロムエルの周囲に無数の火球を発生させた。出来るだけ大地にダメージを与えないように伝えようとした時・・・

「あら？」『む？』

「転移門・・・！」

ハロムエルと、しぶとく生きていたシガオンケラハは、この場から逃亡するべく地面に転移門を開き、ずぶずぶと入り込んで行き始めた。エツヴァエルが手を振って火球を発射し、６体中５体の頭を貫いて絶命させたが１体は逃した。

「往生際の悪い！」

ヘネットも新たに生成した巨大な水剣を創り出して一斉に射出するが、４頭が壁となるように動いて最後の１頭の転移を手助けした。ハロムエル１体とシガオンケラハ１頭の逃亡を許したが、その他の天使や魔族を打ち取れたことから今回の戦闘は勝利と言えるだろう。

「旦那様。わたくしは逃走したシガオンケラハの討伐に向かいますので、ここで失礼いたします」

『我も、反逆者を許すわけにはいかぬ』

「では、私たちはここヘイズヘイムの政府に、今回の戦闘の報告をしに行きま――」

そこまで言いかけたところに私の前にモニターが側に展開され、焦りに染まる看守システム管制のエリスが『お父様！　大変！です』と私を呼んだ。

「何があった？」

『ヘイズヘイムからの転移反応を追ってみたのですが、天使・魔族

ともに下位次元世界に移動したことが判りました！　転移先はどうやら有人世界のようです！』

「は・・・？」

下位次元世界は、はやて達が住まうミッドガルドという世界のある次元だ。"テスタメント"ですら一定周期で開く境界門を通らなければ、アースガルドの在る上位次元世界と行き来できないという隔絶された場所だ。

「（往きたい。現在の下位次元世界がはやて達の生きている時代なのかは判らないが、それでももう一度だけでいいから、あの次元世界と繋がりたい・・・！）エリス！　転移門は開けるか！？」

『上位次元世界と下位次元世界の境界が曖昧になっている今なら、私の能力でも十分に可能です！』

「すぐに頼む！　ランドグリーズと９０２、９０３は待機。ヘイズヘイム政府から連絡があれば応対を頼む！」

「了解です。お気を付けて！」

境界に綻びが出来ている理由は解らないが、移動できるのは確実のようだ。エリスの返答に私の心臓は早鐘を打ち、ゴクッと生唾を呑む。そしてすぐにエリスに転移門を開いてもらい、自ら開いた転移門を潜るエツヴァエルとヘネットと共に下位次元世界へと飛ぶ。境界間を通り抜け、下位次元世界の有人世界に無事に到着したのだが

・・・・。

「っく！（体の中から神秘が抜けるような感覚・・・・！　制限された・・・・！？）」

「これは驚きましたね。神秘が強制的に制限されました」

『これが下位次元世界・・・・。神秘があまりに薄く、体の構築がしづらい』

ほぼ同時に転移を終えたヘネットとエツヴァエルも、下位次元世界のある種の洗礼を受けた。輪郭がぼやけるエツヴァエルや、呼吸が浅く速くなるヘネット。ハロムエルとシガオンケラハも神秘を制限されているのを期待しつつ、周辺を確認。

「・・・ここは・・・まさか！」

「ルシルくぅぅーーーーーん！！！！！」

「っ！！」

見知った建物を視認したところで、私の名前を呼ぶ声。見ずとも判る声の主。覚醒、記憶を取り戻してからおよそ1年。たった1年逢わなかっただけだが、永遠に逢えないと諦めていた私からすればこの再会はあまりにも・・・嬉しくて、涙が溢れてしまう。声のした方へと体を向け、この目でしっかりと彼女の姿を捉える。

「はやてぇぇぇーーーーー!!」

思わず私ははやての元へと急降下し、私を迎え入れようと両腕を拡げて待ってくれている彼女の胸に飛び込んだ。

Ｓａｇａ３５王は再び舞い降り、そして・・・～Ｃｏｍｐｌｅｘｒｅｕｎｉｏｎ～

†††Ｓｉｄｅアイリ†††

ミッドチルダに突如出現した、並の魔導師や騎士じゃ太刀打ちできない程にヤバい生物。これまで確認されたことがない種で、生物同士で戦ってるんだけど、それが原因で街や自然が破壊されてた。唯一の救いは、民間人や迎撃に来た魔導師たちに対して危害を加えようとしないこと。そのおかげで今のところ死者は出てない。

（退避時の混乱での負傷者だけはどうしても出ちゃうけどね）

管理局を辞めて教会騎士団に入団したアイリは、元最後の大隊の融合騎を率いる部隊、藍木春菊騎士隊インディゴ・マルガレーテの隊長を務めてる。率いる融合騎をその都度任務に適した騎士に預けるのが仕事で、今回も例に漏れずに各融合騎を配置し、アイリはシャル率いる白金桜騎士隊プラティーン・キルシュブリューテと一緒して、ユニゾンしないままで個の戦力として奮闘中。

「こいつら、やっぱ魔族でしょ！　本能で判るわ！」

――光牙烈閃刃――

「同意！　ルシルや先祖の記憶の中で出てきた魔族を思い起こさせる姿をしているし！」

――崩天雷舞――

「だよね！　Ｔ・Ｃ・のアーサーが実はまだ残ってたり、とか？」

――氷柱弾雨（セリオン・エクサラシオン）――

「それはそれで、ルシルの影響が残ってるわけだから、嬉しいような切ないような、って感じ！」

――ルフト・クーゲル――

「しかし、あの不気味な獣どもとは違い、獣どもと戦っている白い巨人は何者でしょうか！？」

――業火拳衝――

シャル達が一斉に攻撃を加えるのは、３ｍくらいある巨大な目玉。本来白い部分は真っ黒で、眼球全体に幾何学模様が描かれていて、上下左右から触手を生やし、背部には４対の黒翼を生やしてる。そんな奴がえっと・・・６０体くらい居て、ミヤビの言う白い巨人に群がって触手の先に付いてる鉤爪で突いたり引っ掻いたりしてるけど、空に浮遊してる巨人の肌は石造りっぽいからダメージが入ってないように見える。

「（頭部と下半身の無い胴体。有るのは長い両腕。・・・顔は胸と腹と背中に３つ・・・）たぶんだけど、天属じゃないかな？　マリ

アがみんなに見せたマイスターの記憶には出てこなかったようだけど、テスタメント時代の記憶の中に、あんなのが居たよ」

――コード・シャルギエル――

アイリも氷槍を１２本と展開して、「ジャッジメント！」の号令で射出。狙いは目玉で、理由は数が多いし気持ち悪いから。アイリ達の攻撃を目玉は迎撃も防御も回避もしないで受け入れた。よろけたり吹っ飛びはしたりするけど、ダメージは入ってない感じ。

「もし魔族なら、こっちも神秘で攻撃しないとダメかな～」

――悪魔の角（ディアブロ・クエルノ）――

攻撃を加えたアイリ達に一切構うことなく白い巨人にばかり突っ込む目玉たち。セレスが面倒くさそうにそう言って、さらに氷の螺旋杭を４０発を再発射。目玉はやっぱり何のアクションもせずに受け入れて、霜を被りながら巨人に攻撃続行。

「決まり。どうする？　すぐに魔術師化して、一気に叩き潰す？」

「ちょっと待って、クラリス。１つ気になってることがある。・・・わたし達が到着するまで局や騎士団が攻撃を加えてたのにアイツらまったく反撃しないし、わたし達に代わっても同様だった」

「だから？」

「だから、無視されてる理由がもし、わたし達が魔術じゃなくて魔法を使っているからじゃないか？ってこと」

「どうせ通用しないから、鬱陶しいけど無視しようっていうことか・・・。あ、そうか、なるほど。逆に脅威となるかもしれない魔術師と化した瞬間、目の色変えて反撃してくるかもしれない、と。じゃあ、どうする？　あの巨人、４０階建てビルと同じくらいに長くデカい両腕を振り回しているから、その風圧で周辺被害がとんでもないし・・・」

「結界が解除された瞬間、この辺りが更地になってしまうやもしれませんね」

「それだけは何としても避けないといけないんだけど、さて、どうしたものか・・・」

アイリ達が確認できただけでも武装隊の結界は三度も破られてる。これ以上は武装隊の魔力が持たない。そうなる前に、「わたしの創世結界に閉じ込める。そこで決着をつけよう」ってシャルが提案したところで・・・

「止せ。人の身では相手にならん。ここは儂らに任せて、そこで大人しく見ているといい」

どこからともなく聞こえた年老いた男性の声。直後、巨人の頭上か

ら何かが降って来て、巨人と激突した。巨人の3つある口から悲鳴めいた叫び声が発せられ、降って来た何かと一緒に地面に墜落。その直後、目玉が横一列に整列して、墜落時に巻き起こった砂塵の方へと目の正面を向けた。

「な・・・何が起きたの・・・？」

「巨人の背中に誰か居る！」

砂塵が晴れて、空から落ちてきた何か――人物を肉眼で視認できるようになった。着物に羽織姿の、おじいちゃん一歩手前って感じの男性が1人。巨人の背中に有る大きな顔を踏み蹴りで粉砕したその人の額には結晶のような「角・・・！？」が2本と生えていて、ミヤビが「私と同じ・・・？」ってうわ言のように発した。

「あっ、巨人が起き上がる！」

「各騎、警戒！　ちょこっと離れるよ！」

近くの低層ビルの屋上に降り立って様子見。男性の2つの角が真っ赤に染まると同時に強烈な発光を見せた。それを合図としたかのように目玉たちが一斉に巨人を包囲。そして左右の両腕を大きく伸長させて隣の目玉の両腕とガシッと掴み合うと、天まで伸びる筒状の結界が展開された。

――鬼刻炎昌――

男性の全身から炎が上がったかと思えば、グングンと高くなっていって最終的には炎の巨人となった。バンヘルドの真技を思い起こさせる様で、炎の巨人は起き上がろうとしてた白の巨人の背中を踏みつけて、さらに両腕を掴み取った。

「おおおおおおおおお！！」

雄叫び1発。白の巨人の両腕をもぎ取って、炎を点けた腕で白の巨人をボコボコに殴り始めた。もぎ取られた自分の腕で殴られまくる白の巨人は抵抗も出来ず、最後は腕と一緒に粉砕された。結界内に転がる白の巨人の破片をこの後どうやって処理しようかなって考えてると・・・

「カメアエルの遺骸はこちらで処理しよう。ガナンマターハ族の方々、お頼みします！」

炎の巨人が消失し、そこから出てきた男性が目玉に向かってそう呼びかけると、目玉たちは結界を解除して白の巨人――カメアエルの遺骸らしい破片に向かって殺到。目玉部分がパカッと裂けると、気色悪い色の口が現れた。ギザギザの歯と4枚の長い舌があって、舌で破片を取るとそのまま口に運んで、バリボリと食べ始めた。みんなで「うへぇ」って引いてると、アイリ達の居る屋上に来るために男性がビルの外壁を駆け上がってきた。

「ほっ・・・と。お嬢さん方、怪我などはしておらんか？　人類を護るのが儂らの目的でもあるからのぉ」

額から生える角を消失させながらそう言ってきた男性に、まずは怪我をしてないこと、助けてくれたことへの感謝を述べてから、シャルが「時空管理局です。事情を伺っても？」って仕事に入った。

「この下位次元世界の秩序維持組織だったかい？　儂から話すのもやぶさかではないが、儂以上に適任が今、こちらに向かって来ておる。もう少し待っておれ」

男性はそう言って屋上の縁に腰掛けて、着物の袂からひょうたんを取り出した。そしてコルクのような栓を抜くとグイッと呷って、「美味ぇ！」って幸せそうに息を吐いた。まるで時代劇を観てるかのような光景だね。

「お楽しみ中申し訳ありません。私から個人的に質問があるのですが、よろしいでしょうか？」

「おう、そうそう！　儂もお嬢さんと個人的に話してみたかったのだ。お嬢さん、大戦の折、儂らディアヴァルネール族で唯一、大戦に参戦した分派の末裔だろう？　ラグナロクで全滅しただろうとウリベルト狼が仰っておったと、先祖から語り継がれてきたが・・・。子を成し、その血をこの下位次元世界で繋いでおったとは。いやぁ、めでたい」

ミヤビが「え？　え？」って混乱したから、男性はお酒を飲むのを中断していろいろとミヤビに伝えた。まずは自分の名前はラアルで、魔界最下層の奥地にある魔族魔人種鬼人ディアヴァルネール族の国ヤッフェル出身で、国の行政を司る本家の元目付役だったそう。

「待って待って。最下層の魔族がウリベルト達以外にも居たなんて、シャルロッテ様やルシルの記憶でも確認できなかった・・・。その分派っていうの、アースガルド同盟、ヨツンヘイム連合、どっちに加勢していたの？　鬼人なんて戦場で見かけたら、絶対にシャルロッテ様も憶えてるはずなのに・・・」

「国に伝わっている話では、どっちつかずの第三勢力だったそうな。鬼人が周囲に知られなんだのは、どうやら角を発現せずに、素の状態で戦いを楽しんでおったからだそうだぞ。儂ら一族は酒・戦、逆境・困難好きという、困った癖を持っておってな。人間の世界の史実に残っておらんのはそういうことだろうて！」

そう言って大笑いするラアルはひょうたんの栓を抜いたところで、「おー、来おった、来おった。お嬢さん方、あの者がいろいろと説明してくれるぞ」って言って空を見上げた。アイリ達も空を見上げて、そこに居た人物を視認。アイリ達は「え？」って目を疑った。だって、もう二度と逢えないって思ってた「マイスター？」が、剣翼１２枚を背負ってその場に居たんだから。

「ルシル・・・？」

「え、うそ！？」

「本物！？」

「ビックリ」

「ルシル副隊長・・・！？」

難度も目を擦って幻じゃないことを確認したアイリは、はやて達も一緒だってことに気付いた。はやて達と一緒にマイスターがゆっくりとここ屋上に降りてきて、「久しぶり」って声を掛けてくれた。もう無理だ、我慢できない。

「～～～～っ！　マイスター！　マイスター！　マイスター！　マ～イ～ス～タァァァ～～～～！」

もう二度と逢うことが叶わないと絶望してた、マイスターとの再会。それが今、叶った。人間としての肉体に戻ってるマイスターを正面からハグして、その胸板に何度も頬擦りをする。その間、マイスターはアイリの頭を優しく何度も撫でてくれてる。

「久しぶりだな、アイリ。こちらの世界でもあれから1年しか経っていないと、はやて達から聞いたよ」

「うぅ・・・。1年でも、また逢えると、もう逢えないとじゃ精神的に全然違うよ！」

「そうか・・・そうだな。私も、同じ思いだ」

離れようとしないアイリに苦笑するマイスターは、「シャルも、みんなも、元気そうで何よりだ」ってシャル達に声を掛けた。

「ルシル・・・・！　どうして・・・・！　ううん、そんなことどうだっていい！　ルシル！」

マイスターから離れがたいのを我慢して、シャルのために一旦離れる。シャルがマイスターの胸に飛び込むのを見守ってると、はやて達がアイリ達の元にやって来た。はやての目も若干赤く腫れてるっぽいから、やっぱ再会で泣いちゃったのかな。

「またルシル君と逢えるなんて、思いもせえへんかった」

「うん。・・・アイリ、マジで絶望してたからね。・・・はやて。これ、夢じゃないんだよね？」

「さっきアイリがハグしたのは幻やったか？」

「ううん。本物だったよ」

身長も匂いも変わっちゃってるけど、それでもアイリを撫でてくれる手の優しさは全くと言っていいほど変わってなかった。マイスターは確かに・・・帰って来たんだ。

†††Ｓｉｄｅアイリ⇒イリス†††

ルシルが帰って来た。もう逢えないと覚悟してたから、この再会はあまりにも予想外、だけど最高に嬉しいし幸せだ。アイリと入れ替わるようにルシルの胸に飛び込んだわたしの背中を、ルシルは優しくポンポンと叩いてくれる。

「ルシル。本当にルシルなんだよね？　クローンとか、実はまだテスタメントとかじゃないよね？」

「もちろん。ガーデンベルグを救い、ユルソーンを破壊して無事にテスタメントの契約を果たし、アースガルドに帰ることが出来た。正真正銘、一度限りの人生しか歩めない肉の体だ」

わたしからのハグもそこそこにして、ルシルはルミナ達とも和やかに挨拶を交わした後、「いろいろと聞きたいことはあるだろうが、もう少し待ってくれ」って頭を下げた。今回の魔族や、たぶん天使なんかの来襲に関しては事情を一番知ってるのはルシルだろうから、今すぐにでも聞きたいんだけど・・・。

「なのは達の方に向かった私の協力者から連絡を待っているんだ。一度に説明した方が互いに楽だろうからな」

「協力者って・・・」

少し離れたところでミヤビと何か話してるラアルっていう、最下層の魔人（の割には神秘を感じないんだけど）をチラッと見る。最下層の魔族の協力者って、割とすごいんじゃ・・・。そんなことを考えてると、「よし。終わったな」ってルシルがホッと一息吐いた。

「ルシル？「ルシル君？」「マイスター？」

わたしとはやてとアイリがほぼ同時にルシルに駆け寄った。その様

子にルシルはちょっと苦笑いを浮かべて、「各地に出現した天属・魔族の掃討が終わった」って言って、空間キーボードを展開。キーを打とうとしたところで手を止めたから、わたし達は小首を傾げた。

「・・・はやて。現在の本局長は誰だ？　あれから1年少ししか経っていないのだから、おそらく今なおアンダーソンか？」

「あ、ううん。半年前の局長選考会議で、リンディさんが局長になったんよ」

「おお！　それはすごい！　それならはやて。リンディさんに取り次いでくれないか？」

「了解や」

「シャル。聖王教会のトップは今なおマリアンネさんか？」

「うん。わたしから母様に連絡して、ルシルにバトンタッチすればいいんだよね」

「ああ。頼む。じゃあ私は・・・」

「マイスター！　アイリは！？　アイリは何をすればいい！？　なんでもするよ！」

わたしとはやては、母様とリンディさんがルシルと通信できるようにメールを出して調整を始める中、アイリが自分にも仕事が欲しい

ってルシルに詰め寄った。ルシルは少し考えた後、「それなら、なのは達と通信を繋げてくれ」って指示を出した。

「ヤヴォール！　チーム海鳴に全体通信を掛けるよ！」

ルシルとの別離以降、全くと言っていいほど見せてくれなかった満面の笑顔を浮かべるアイリに、リインとアギトが「アイリが笑ってくれた！」って喜び合ってる。

『イリス、どうしたの？　あなた、今は正体不明生物の制圧任務に出ているはずよ』

メールの返事を待ってると、携帯端末がバイブ機能で振動したからモニターは展開せず、コールに応じた。耳に当てていた携帯端末の受話口から聞こえてきたのは母様の声。今も仕事で忙しいだろうからメールをしたんだけど・・・。

「聖下。お忙しい中、申し訳ありません。それについてなのですが、今回の正体不明生物来襲について、事情を知る関係者と接触しました。その関係者が、母様やリンディ・ハラオウン本局長と同時通信で説明したいと言っています」

『なんとまぁ、いきなり両組織のトップと話したいだなんて・・・。礼儀のなっていないその関係者とやらは、いったいどういう方なの？』

クローンでもなく"テスタメント"でもない、本来の肉体に戻ったルシルがアースガルドからミッドチルダに戻って来たことを、呆れ

る母様に伝えて、通話を続けながら携帯端末のカメラをルシルに向けて映像を送る。

『あら！？　うそうそ、本当にルシル君！？　ルシル君が戻って来たなんてあなたが言い出すから、我が娘ながらとうとう心をヤッてしまったのね、と不安になったけど！』

「病むならルシルと別れた直後です。きちんとお別れをしましたし、狂うことなどありえません」

ニヤニヤが収まらず緩み切った顔を浮かべてる自覚をしながら、わたしは「驚いたでしょ。ルシルが人間の体で戻って来てくれたの」って、任務中なために上司と部下という立場を守るべきところを、思わず母と子という立場で母様に答えてしまった。

『それならルシル君争奪戦も再開になるのかしら？　人に戻っているのならルシル君の寿命やら記憶消失の問題もないのでしょ？　今度こそ、ルシル君のハートをかっさらっちゃいなさい！』

「それは・・・うん・・・」

母様含めた家族には、わたしとはやてとルシルの三角関係がすでに決着していて、わたしが負けたことをまだ伝えてない。ルシルははやてを選んで、最後の最後で２人が結婚式を挙げたことをアイリから聞いた。もちろん公的な手続きなんてものはしてなくて、２人だけで決めたもの。

（はやてとアイリが、ルシルのことで嘘を吐くわけもなく・・・。わたしの初恋は終わった）

ルシルもいなくなってしまったことで、この想いに区切りをつけて前に進もうと、ヴェロッサからの告白を受け入れるかどうかを迷っていたところでこの再会だ。消そうと思ってたルシルへの想いが再燃したのがハッキリと判る。ルシルがはやてを選んだのは確かなんだから、諦めるのが筋なんだろうけどさ・・・。

『『ルシル君！？』』『『『ルシル！？』』』

モヤモヤしながら母様と話してると、背後からなのは達の驚きの声が聞こえてきた。そちらに目を向けると、大き目のサイズのモニター が展開されていて、なのは達がルシルが居ることに本気で驚いてる様子が映し出されてる。

『え？　ええ！？　ホントにルシル君！？』

なのは達も、ルシルがクローンじゃないかとか"テスタメント"じゃないかとか、いろいろと不安がってたけど、ルシルがわたし達にさっき言ったように「ちゃんと人間だよ。今までと違い、死ねば1発アウトのな」って自分の心臓付近の胸に右手を添えた。

『・・・ていうかさ、ルシル。アンタ・・・髭生やしてんの！？』

『剃ったら？　なんかオッサンみたいに見えるよ？』

アリサとアリシアが、ルシルの口ひげとあごひげにツッコみを入れた。当然わたしも、ルシルがひげを伸ばしてることには気付いてたし、なーんか似合わないな～とか、アリシアの言うように老けて見えるな～とか、思ってはいたけど口には出さなかった。

「今の私は、アースガルドの魔術師軍を統べる総督という役職に就いている。仮にも軍のトップだからな、少しでもこの女顔に威厳を持たせたくて、ひげを伸ばしたんだが・・・。駄目か？」

『うーん。ん？　軍総督って言った？　ルシルって、王族で、しかも王だったのよね？』

『そう言えば・・・。ルシル君、総督と王様と兼任しているの？』

「いや。私が目覚める千年以上も前に王政は廃止されていた。それに、私自身も封印されてから6千年以上経過した世界の政治に参加しようとは思わなかったからな。再誕戦争を生き残った生粋の魔術師として、そしてセインテストないしアースガルド最後の王だった者として、せめて最高クラスの何かしらの役職を、とのことで、軍を治めることになったんだ。人間だった頃も、テスタメントだった頃も、ずっと戦いばかりだったからな、政治家になるよりかは合っているよ」

そう言って首を竦めたルシル。ルシルの肉体では6千年、意識で言えば2万年近く、アースガルドの進歩を見ることが出来なかった。目を覚ましたら故郷がガラリと変わってたなんて、どういう気持ちなんだろう。

「まぁ、そういうわけで、今の私は軍人なんだ。・・・で、やっぱり髭はおかしいか？」

『『おかしい』』

あくまでルシルのヒゲは変だっていうアリサとアリシアだけど、ルシルにはルシルの考えがあるんだし、「わたしは良いと思うよ」って言っておく。続いてなのは達も、悪くない、みたいな肯定派。リンディさんとの通信の準備を続けてるはやては「格好ええけど・・・」って濁した。

「・・・評判が宜しくないのは解った。やはりこの女顔がダメなんだろうな。持って生まれた顔を弄るのは気が進まないが整形でもするか。ザフィーラくらいに男らしい顔であれば、ひげなんて要らな――」

ルシルがとんでもないことを言い出したから、最後まで言わさずにわたし達は「却下」と下した。威厳とかどうでもいいからルシルらしさを失わせるような真似はしてほしくない、っていうのがわたし達みんなの意見だ。

「髭は帰ったら剃るとして・・・。みんなの1年はどうだったんだ？　1年の間に何か変わったこととかあるか？　私は今言ったように王での復帰はせずに軍隊の長となり、あとは・・・ヴァルキリーも無事に再起動できたよ」

「アイリね！　アイリ、今は騎士団に所属していて、元大隊の融合騎を束ねる隊長なんだよ！」

「ちなみにミヤビを含めたわたしたち特騎隊前線組も揃って局を辞めて、騎士団に再入団。んで、特騎隊と同じように即応遊撃部隊を立ち上げて、わたしが率いてるよ」

「銀薔薇と対を成す白金桜として、管理世界の犯罪者どもにもう恐怖を植え付けてるよ」

「私やアリシアは特に変化は無いけど、エリオがね、保護隊で自分の班を持つことが出来るようになったんだ」

「もちろんキャロもフリードも一緒だし、後輩っていうか部下も出来たんだよ！」

「私は変わらず教導隊で頑張っているかな。あ、ヴィヴィオの選手ランキングがまた上がったのは大事な変化だね～」

「そうそう！　なあなあ、ルシル！　フォルセティの奴がよ、すげえんだ！」

「そうですよ、ルシル君！　ヴィータちゃんの言う通り、フォルセティがすごいんです！」

「フォルセティ、インターミドルの男子の部で世界チャンプになったんだぜ！」

「判定にまでもつれ込んだのだけど、見事に判定勝ちだったのよ！」

「ああ。あの反撃は実に見事だった」

「驚いたのは、フォルセティが優勝インタビューの際に、ヴィヴィオに愛の告白をしたことだ」

「あ、うんうん！　ヴィヴィオもね、カメラが回ってるのにＯＫしちゃって！　まぁ、母として、娘の恋は応援していたし？　フォルセティも良い子だから反対なんてないんだけどね！」

わいわいとこの１年での変化をルシルに伝えてると、『イリス。そろそろ私も、ルシル君とお話がしたいわ』と母様との通信を繋げてたのに放置してたことを思い出した。母様にごめんなさいをして、「ルシル。母様も話がしたいって」って、携帯端末を操作して、モニターを展開させる。

『ごきげんよう、ルシル君。お久しぶり』

「お久しぶりです、マリアンネ聖下。ご無理を言って申し訳ありませんでした」

『いえいえ♪・・・娘たちからは不評だったようだけど、私はルシル君のお鬚、格好いいと思うわよ。ま、６０手前のおばさんだから、若い子の感性とはすこーしズレがあるけれどね』

「いえ、そう言ってもらえると嬉しいですし、マリアンネ聖下も変わらずお美しいですよ」

『ま♪　あなたも変わらずお上手ね♪　ところで、ルシル君はこの1年で何かあったかしら？　王ではなく総督という、軍のトップになっているというのは聞いていたわ。他には？』

「他ですか？　再誕戦争当時にアースガルドと同盟を組んでいた世界、それに私が封印されている間に新しく同盟を結んだ世界との繋がりがあって・・・あ」

そこまで言いかけたルシルは口を閉ざし、「まぁいろいろとです」なんて切り上げたから、わたし達は「ん？　なに？」ってジッと見詰めて、言いかけた言葉の先を促す。それでもルシルは「いやー、普通さ、普通」とはぐらかすだけ。

『まさかとは思うけど・・・。恋人でも作ったとかかしら？』

「っ！！　いや！　ちがっ！　違いますよ！　恋人なんていません！　永遠の別れになるかもとはいえ、はやてに告白し、公式とは言えずとも結婚式を挙げた以上、はやて以外の恋人を作るつもりはありませんし、結婚なんて以ての外。セインテストの血も私の代で終わり・・・と、考えていたのですが・・・」

『へ？　あ、ほぅ、そうなの～。はやてさんと・・・ふーん』

母様がチラッとわたしを見てきたから、わたしはスッと顔を逸らし

てその視線から逃れた。だって、失恋したなんて親に言いにくいでしょ。母様からの視線からさらに逃れるべく、ルシルの話の最後が気になったから、「考えていたのですが、の先を教えてくれる？」って聞いた。

「ルシルの代でセインテストは終わり。そう考えていたけど・・・ってことは、だよ？」

「終わらなかったってことになると思うんやけどな、さっきの言い方やと・・・な？」

「・・・アースガルドの政府高官が、原初王オーディンから紡がれているセインテスト王家の血筋、それを絶やすなど以ての外だと叱られてね。どうしても子を成して、セインテストの血を未来へ繋げてほしいと。しかし、先ほど言った通り私にははやてへの想いを貫き通すという決意があった。それでも高官たちは折れず、その妥協案として・・・そう言った行為をせずに子を残すための精子提供ということになった。ほ、ほら、ミッドにもあるだろう？　精子バンクが。あれと同じ・・・ような感じなんだが・・・」

わたしとアイリとはやての3人でルシルに詰め寄ると、ルシルが申し訳なさそうに答えてくれたんだけど・・・。こればかりは責めることは出来なくて、わたし達は「大変だったね・・・」って声を掛けた。生まれが特別だとこういった問題が出るのは仕方ないと思う。何よりルシルは本当にすごい人物だからなおさらね・・・。

「で、マイスター。子どもは何人くらいいるの？　きっと1人2人

って感じじゃないでしょ？　あ、でも答えたくなかったら答えなくてもいいんだけどね」

「・・・アースガルドの四王族は、セインテスト王家以外の本家は潰れているんだが、分家はなんとか残っていたんだ。その分家の中で未婚かつ希望者に、その・・・提供したわけだ。さらに、同盟世界のアールヴヘイム、スヴァルトアールヴヘイム、ニヴルヘイムには王族本家が残っていて、希望女性にも・・・。半年後には、１００人ほどの子どもが生まれる予定だ」

ルシルの言葉にわたし達は「１００人・・・！？」って絶句。ルシルはそんなわたし達、特にはやてに「誓ってそういう行為はしていない」って詰め寄った。うーん、完全にはやてを選んだからこその行動だよねこれ。はあ～～と深い溜息が出る。

「え、あぅ、う、うん。信じるよ？　そやから安心してな」

顔を真っ赤にして詰め寄ってきたルシルから1歩後退するはやて。その様子にルシルは「すまない！」って慌てて離れようとしたんだけど、はやてがルシルの腕を取って制止させた。２人の纏う雰囲気に気まずくなる。２人のその姿が悔しいやら微笑ましいやら。

「コホン。いい雰囲気のところ悪いんだけど、はやて。携帯端末、鳴ってない？」

「ふえあ！？　あ！　あー、ホンマや！」

はやてが携帯端末のコールを受けて、メールを確認した後、「ルシル君。リンディ本局長との通信、いつでも出来るよ」と報告。

「あ、ああ！　ありがとう、はやて。すぐにでも頼むよ。アースガルドに帰らないといけないからな」

「っ！　了解や！」

ルシルの、アースガルドに帰る、って言葉に一瞬だけ泣きそうになったはやてだったけど、すぐにリンディ本局長との通信を行うために準備に入った。繋がるまでの間にアイリは「マイスター。帰るの？　また逢えるよね？」って聞いた。

「・・・すまない。私は、ルシリオン・セインテスト・アースガルドだ。本来いるべき世界で、最期まで生きると決めている。帰るよ。ただ、二度と逢えないということはないと思う。せっかくアイリ達と同じ時間の中で生きていることが判ったんだ。いつでもすぐにとはいかずとも逢いに来たいとは思う。ただ・・・」

アイリの頭を撫でて、そこまで言いかけたところで、『ルシリオン君。お久しぶりね。お元気そうで何よりだわ』と、展開されたモニターに映し出されたリンディ本局長が笑顔で挨拶した。

「はいっ。お久しぶりです、リンディ本局長。あなたもお元気そうで」

それから、ルシルから今回の事件の顛末が語られた。天界、魔界、

人間界の三界を巻き込んだ戦争が、アースガルドを中心とした上位次元世界で勃発してること。ミッドチルダを中心とした下位次元世界に影響が出たのは今回が初めてで、今後も天属と魔族が下位次元世界に現れるかもしれないことなどなど。
そんな大事な話の中で、わたしはまったく違うことを考えてた。性行為をせずともルシルの子どもを得られたあちらの世界の女性たちのこと。

（ルシルとの子どもなんて・・・めっちゃくちゃ羨ましいんですけどぉぉぉぉーーーーーーー！！）

一度にいろんな事が起きた今日、わたしは自分の不憫さに全力で叫びたくなってしまった。

Ｅｐｉｌｏｇｕｅ彼らの物語は今ここに終わる

†††Ｓｉｄｅはやて†††

ルシル君との再会からもう2年半くらい経ったかな。世界はあれから結構変わったと思う。
まず、上位次元世界と下位次元世界ってゆう概念を管理世界中に広めることから始まったんやったな。方法はユーノ君を始めとする学者にそれとなく伝えて、そこから民間に伝播させてくって感じやった。半年もすれば次元世界が2つあるってことは認知されるようになった。

（そんで次に、境界の存在が伝播されたんよな・・・）

2つの次元世界を隔てる障壁――境界。同時期に広められることになった正体不明生物である天属と魔族は、その境界に開いた穴（ルシル君がガーデンベルグと闘う際に通ったのと同じやつやね）を越えてやって来る存在で、互いの戦争に人類が巻き込まれ、天界・魔界・人間界の三界の存亡を懸けた戦争に発展してしまったことも・・・。

（さすがに今の管理世界は科学に傾倒してるから、天使や悪魔みたいなオカルトを心底信じられる人は数少ない。そやから一纏めにしてアンノウン、天界・魔界についても纏めてアナザーと呼称することを、ルシル君とリンディ本局長とマリアンネ聖下が決めたらしい。個体別の名前は、ルシル君から局や教会に伝えられて、それを正式

名として使うようになってる）

この２年半の間に"アンノウン"が出現したのは１２回。その際には本局・教会と同盟を結んだアースガルドおよび同盟世界統合軍――"スヴィズリル"が上位次元世界から降りてきて、フィレスさんやトリシュ、アンジェを加えたシャルちゃんたち新生白金桜騎士隊プラティーン・キルシュブリューテと一緒にこれを迎撃。協力してくれる天使や魔族も大勢いてくれてるおかげで、今のところは甚大な被害は起きてへん。

（同盟会議は生中継として管理世界中に流れて、その時にリアンシェルトによって秘匿されてきた再誕戦争のことや魔術、ルシル君の真実、Ｔ・Ｃ・事件時に亡くなったルシル君はクローンだったことなどが明かされたんやったな・・・）

ルシル君関連のことだけでも一騒動が起きたのに、管理局が保管してる書物で最古なのは６千年前のもので、それ以前に起こってた再誕戦争時代の資料などがアースガルドから提供、公表されたことで、各管理世界の歴史学会は大騒ぎ。上位次元世界に渡って、さらに歴史を学びたいと言う学者が、上位次元世界の代表とも言えるルシル君と繋がりがある本局や教会に詰めかけることがあった。

「（私たち八神家のところにも来るかと心配やったけど、そこは自重してくれたから助かったわ・・・って！）あ、あー！　おおおーーー！」

「行けるか！？」

「行けますよ！」

自宅のリビングでテレビ鑑賞してる私とリインとアギトは、モニターに映る映像に白熱してる。内容は今年のインターミドルチャンピオンシップ男子の部、世界チャンピオンを決める大一番。管理世界最強の１０代男子を決めるべく、２人の男の子が激しい攻防を繰り広げてる。

片や私の大切な愛息子、フォルセティ。片や因縁のライバル選手。一昨年の試合は勝ったフォルセティがチャンピオンになって、去年はフォルセティの負け。そんで今年の今日、三度目の決戦となった。序盤から熾烈を極めた魔法戦、中盤は近接格闘戦、終盤の今は最後の力を尽くしての得意戦法の応酬。フォルセティは射砲撃、相手選手はバインドからの格闘。

「「「フォルセティ！」」」

応援にも熱が入る。本当なら去年までと同じように会場にまで行って、直接声援を送るんやけど・・・。今の私の体やとそれも難しく、私の身の回りを世話をしてくれるリインとアギト、それにアインスが、休職中の私と一緒にフォルセティを応援してくれてる。

「フォルセティ。頑張っていますね。主はやて、リイン、アギト。コーヒーのお代わりを淹れてきました」

「おおきにな、アインス」

「ありがとうです！」「あんがと！」

ソファの前にある脚の短いテーブルの上に置かれた空のコップに、アインスがコーヒーを注いでくれた。コップを手にモニターに視線を戻した。ちょうどフォルセティが、相手選手のバインドの収縮を魔力弾で弾いて遅らせ、逆にバインドで拘束したうえで特大の一撃へ。

「「「コード・エンデン・クリーク！！」」」

フォルセティの背中から切り離されて空中砲台と化した銃翼ゲヴェーア・フリューゲル８挺と、フォルセティの拳銃型デバイス・"エマナティオ"２挺から放たれるのは、計１０発の集束砲。至近距離での魔力爆発にフォルセティも相手選手も飲み込まれた。相打ち覚悟の一撃って誰もが思うやろうけど、フォルセティには、アイリから伝えられたルシル君の術式がある。

（魔力吸収（イドゥン）と多層甲冑（ゴスペル）。集束砲の魔力を利用してゴスペルを展開できてれば、きっと・・・）

魔力爆発で起きた白煙がリングを覆い隠したんやけど、すぐにほぼ中央で何かが衝突したことによる衝撃波で煙が消し飛んだ。衝突と正体はフォルセティと相手選手が最接近してて、２人が最接近しての攻撃やな。相手選手の拳はフォルセティの頬――正確には頬を護るように展開されてた小型シールドに防がれて、フォルセティは右手の"エマナティオ"を相手選手の腹部に突き出してた。

――コード・カノーネ――

一切の容赦のない零距離砲撃が"エマナティオ"の銃口から放たれて、相手選手の残り僅かなポイントを０にした。この瞬間・・・

「フォルセティの！」

「王座奪還だぜぇぇぇーーーー！！」

ソファから勢いよく立ち上がってハイタッチを交わすリインとアギトの言うように、フォルセティが再び世界最強の１０代男子であることが決定した。私も動き回って喜びを表したいんやけど、激しい動きはご法度やから大人し～く座ったまま「アインス！　ばんざーいや！」って、両腕を上げる。

「ば、ばんざーい・・・！」

「ばんざーい！」

「ばんざーい！」

「「「「ばんざーい！」」」」

最後は私、アインス、リイン、アギトの４人で万歳三唱。フォルセティのインタビューが始まるまでの間、世界代表戦のダイジェストが流れる。フォルセティが選抜戦で相手選手と戦う映像が始まったから・・・

「ほら、あゆ。お兄ちゃん、ホンマにすごいことを成し遂げたんよ？
自慢のお兄ちゃんやね」

私は大きくなったお腹を撫でながら、あと2ヵ月ほどで生まれる子ども、あゆにそう伝える。東風と書いて"あゆ"。春から夏にかけて吹く東寄りの風で、氷を解き、春を告げる風とゆう意味の雅語の1つでもある。
私とルシル君との間に出来た、愛しい愛しい大切な娘や。そう。私とルシル君は再会後にちゃんと結婚式を挙げて、正式な夫婦となった。今の私の名前は、はやて・セインテスト。あーでも、仕事上はこれからも八神を名乗らせてもらうことになってる。

（セインテストの後にアースガルドを使わへんのは、王位返上によってルシル君もアースガルド姓を使わんくなったから・・・）

サイドボードの上に載ってる写真立てに収められた、数ある写真をチラッと見る。その内の1つには、タキシード姿のルシル君（ひげは綺麗に剃ってある）とウェディングドレス姿の私が写ってる。
フィヨルツェンとリアンシェルトの魔力でテラ・フォーミングされた第2世界ベルカ。そのベルカに聖王教会本部が移されてから最初に結婚式を挙げたのが、私とルシル君の組やった。今でもハッキリと思い起こせるほどに幸せな時間やったな。

「あゆ～。元気に生まれて来いよ～」

「そうですよ～。お姉ちゃん達も、あゆと会える日を心待ちしてい

るですよ～」

私の両隣に座り直したリインとアギトが、私のお腹を優しく撫でながら声を掛けてくれた。私も「お母さんも、早く会いたいよ～」って声を掛けて、あゆやルシル君と一緒に過ごせるようになった未来に思いを馳せる。

「ルシルも、こちらの世界で一緒に過ごせればいいのですが・・・」

「んー、ルシル君にはルシル君の立場、仕事もあるからな～」

写真の1つを見る。戦闘甲冑と同じデザインの軍服姿のルシル君が"戦天使ヴァルキリー"達や、私たち人類に協力してくれてる魔族、中でも最高クラスの魔人であるシュゼルヴァロード姉妹と写る写真がある。

ルシル君はアースガルドの魔術師軍の総督やし、結婚式を挙げるためにミッドにもう一度訪れてくれたルシル君は、同盟世界の各軍隊の総指揮も任されるようになったって言うてたし。しかも今は大きな戦争中や。そう簡単には一緒に過ごすことは出来ひん。

「そやけど・・・お互いの居場所で頑張ろうって、ルシル君と決めたからな。本音を言えば一緒に居られへんのは確かに寂しいけど、離れてても心は繋がってる。新(あゆ)しい命も一緒やし、アインス達も居るし、上位・下位間でも通信できるようになってくれたし、大丈夫や」

「そうですか・・・。そうですね。あなたとルシルは強い絆で結ば

れていますから」

「はやてちゃん。幸せになりましょうね」

「あたしらもルシルも一緒にな！」

「そうやね。家族みんなが幸せになるんや！」

いつか必ず迎えることが出来る平和な世界で、家族みんなで面白楽しく過ごせる未来に思いを馳せた。

†††Ｓｉｄｅはやて⇒ルシリオン†††

「マイスター！　フォルセティ、王座を奪還したってヴィータからメール来たよ！」

私の側に控えてくれているアイリが、あの子自身の携帯端末をこちらに向けて教えてくれた。フォルセティは今日、インターミドルの決勝戦だった。私も直接応援に行きたかったのだが、残念ながら予定がブッキングしてしまったことで叶わなかった。

「おおー！　それはお祝いしないと！　どこでパーティする？　フライハイトの家で開く？」

「そうだな。そこのところは妻に相談してみないとな」

「つ・・・！　妻・・・妻かぁ。・・・あなたとはやてが結婚して

から2年経つっていうのに、まだ吹っ切れてないわたしが居て・・・。ごめん」

はやてのことを妻と表現した瞬間、申し訳なさそうにシャルが謝ってきた。彼女も私を想い慕ってくれた女性の1人だ。私はシャルではなくはやてを選んだ。頭を掻いて暗い表情を浮かべるシャルに「すま――」と謝ろうとすると、彼女の側に立って、同隊メンバーと話をしていたトリシュが「謝ってはいけません」と私を制した。

「「トリシュ・・・？」」

「ルシルさん。あなたへの想いを捨てきれないイリスの問題です。それに、はやてを選んだのはルシルさんです。選んだ者として、選ばれなかった者への謝罪は酷です。ですから胸を張ってください」

「あ、あはは、そうだね。うん、わたしの問題だ。そういうわけで、ルシルは謝らず、堂々としてればいいよ」

「・・・それに、イリス。あなた、この戦争が終わったらルシルさんから、その・・・アレです、えっと・・・」

「むっふっふ～♪　精子提供を受けるのだ！　妻の座ははやてに渡ったけど、わたしもルシルとの間に子どもを儲けられるんだから、割と悪くない！」

先程までの暗い表情はどこへやら。シャルが腕を組んで堂々とした仁王立ちで言いきった。そうなのだ。私は三界大戦終結後、シャル

に精子提供することになってしまっていた。元はアースガルド含めた同盟世界の王族の希望者のみだったんだが、ミッドを始めとした下位次元世界と行き来が出来るようになると同盟世界の王族からこう提案されるようになった。

――下位次元世界で子を成した場合、ルシリオン総督の魔術師の才は引き継がれるのでしょうかね――

――ミッドガルド、いえ今現在はミッドチルダでしたか。ミッドチルダに想い人がいるため、総督は我々の娘や孫との結婚をしないとのことでしたね――

――想い人は魔術師ではなく、魔導師でしたわね。スヴァルトアールヴヘイムの魔術師からこんな報告が。ミッドチルダには、再誕戦争時に活躍していた騎士国家レーベンヴェルトの貴族、フライハイト家、それにアルファリオ家、ヴィルシュテッター家、ヴァルトブルク家、さらにはヨツンヘイムの皇族の分家まで存続しているようですわ――

――総督。ここは1つ彼女たちにも遺伝子提供なさってはどうでしょう？　良いお付き合いをしているとのことですし、希望者を募っては如何か？――

本当に頭にくる会合だった。そのつもりがあったのかどうかは判らないが、私やはやて達を実験動物のように扱う言い方にさすがの私も、"彼女たちを愚弄するおつもりか？"と敵意増しましで言い放ったからな。それで押し黙ったことであの連中も懲りたことだとは

思うが・・・。

（その話をはやて達にしたのが最大の過ちだった・・・。私の阿呆め・・・）

私の子が欲しいとシャルが真っ先に飛びついてきたのだ。もちろん、そんな事は絶対にないから諦めるようには言ったのだが、シャルは全く諦めてくれなかった。だから、はやてに相談したのだが・・・。

――私はええよ。シャルちゃんとは最後の最後までライバルやったし、私もシャルちゃんの立場やったら駄々こねたやろうし。気持ちは痛いほど解るんよ。そやから私は、シャルちゃんとルシル君の間に子どもが出来ることには抵抗あらへんよ。そやけどシャルちゃん。これだけは肝に銘じておいてな？　ルシル君は、わ　た　しの旦那や。シャルちゃんに子どもが出来て安定期に入ったら・・・――

――りょーかい、了解！――

私の意見はどこへ行ったのか。はやてとシャルが2人だけで話を進めるものだから、今度はシャルのご両親であるマリアンネ聖下とリヒャルト卿に相談してみた。娘がおかしな事をしようとしていると知れば、必ず反対してくれると考えたからなのだが・・・。

――私は構わないわよ？　それが娘が納得したうえで出した答えだっていうのなら。ただ、母親としては、しっかりと籍を入れてから子どもを作ってほしいって願っていたわ――

――私の可愛い可愛い愛娘の純潔を、結婚もせずに散らし、孕ませ、父親として認知することなくポイ捨てするだと？　そんなこと許せるものか！　お前を・・・殺す！！――

モニター越しでも判るほどリヒャルト卿の殺気は本物だったな。父親としては当然の反応だ。ただ1つ言わせてもらえれば認知するつもりだ。だからポイ捨てなんて人聞きの悪いことには反論させてもらう。とまぁ、リヒャルト卿は反対派だが、マリアンネ聖下が賛成派になったことでシャルの勢いは膨れ上がり、結果としてこの三界大戦終結後にシャルに精子提供することになった。

「ていうか、トリシュ。あなた、しどろもどろになりすぎ。初心なフリしてさ。もうじき結婚するんでしょ？」

「だから慣れてるんじゃないの？」

「キスは何回くらいしたのでしょう？」

「おっぱい揉まれた？」

「な、慣れてない！　してない！　揉ま・・・ああもう！　この話はおしまい！」

私たちの話を聞いていたらしいルミナがそう言ってトリシュの頬を人差し指でぐりぐりした。彼女の言うようにトリシュは、かつて率いていた騎士隊の元同僚と結婚することになったそうだ。ルミナやセレスがニヤニヤしながらトリシュに詰め寄り、シモの話というこ

とでトリシュは顔を真っ赤にした。

「まったく。これから大事な一戦を戦い抜かなければならないというのにこの子たちったら・・・」

「シャル隊長たち、男性も近くに居らっしゃるのになんて話を・・・」

「騎士フィレス、ミヤビ」

"戦天使(ヴァルキリー)"や協力してくれている魔族や天属とも普通にコミュニケーションを取り、本作戦の作戦を再確認していたフィレスと、彼女に付いて回っていたミヤビが戻って来て、それぞれシャル達の話にリアクション。フィレスは呆れからの嘆息。ミヤビは顔を真っ赤にしてモジモジしている。

ミヤビと言えば、この2年半で最も驚いたのが彼女の出生の秘密だ。彼女がまさか、魔界最下層の魔人の血を継いでいたとは。ディアヴァルネール族と呼ばれる魔人種で、ミヤビと同じような結晶角を具現化して、その戦力を引き上げるという能力を持つ鬼人。

（再誕戦争時に、同盟軍にも連合軍にも属することなく両勢力にケンカを売っていたそうだ。確かに、ヴァルキリーから所属不明の魔術師に何度も襲撃されているという報告は受けていたような気はする。おそらく、その魔術師が鬼人だったのだろう）

そんなミヤビは、この2年半で魔界最下層に在る鬼人の里ヤッフェルに三度ほど赴いている。"ラグナロク"の影響で人間の世界――

表層世界に取り残された分派の末裔、そのクローンであるミヤビは、自分の血の故郷に興味を持ち、私がアースガルドへ帰還する際には有休を取って付いて来ていた。ミヤビの淑女然とした性格・立ち振る舞いがあちらの鬼人たちにも受け、快く迎え入れられているようだ。だから鬼人が今日みたく下位次元世界に訪れた際は、ミヤビがパイプ役となってくれてもいる。

「お疲れ様です、騎士フィレス、それにミヤビも」

「あなたも。すごいわね。これだけの仲間がいる中での戦闘なんて生まれて初めてで、ちょっと興奮しているわ」

「お疲れ様です、ルシル総督。ディアヴァルネールのオルファ戦隊長と会ってきました。作戦については概ね了解していましたけど、彼らは逆境や不利な状況下での戦闘が好きということなので、本能に負けて力をセーブするしもしれない、と・・・」

「なるほど。まぁ味方の最下層魔族は彼らだけではないから、その辺りは甘んじて受け入れよう。・・・シャル！　ヴァルキリー各隊長は一度集まってくれ！　作戦のおさらいだ！」

私の一声にトリシュをからかっていたシャルや、"ヴァルキリー"の隊長たちが集まった。空間モニターを展開し、本戦闘の作戦を改めて伝える。

「これから行われるのは、三界大戦の最終決戦と呼称しても過言ではない大一番だ。現在、天界にて反逆者のリーダーを務める大戦勃

発の元凶、七元天使セメルエルが、他の七元天使たちと戦闘している。狙いはセメルエルを上位次元世界のヒミンガルドに墜とすためだ」

七元天使は上級三隊トップである熾天使より上位の階級で、その存在はまさに神に等しい圧倒的なもの。本来であれば私たちのような人間、魔術師では到底太刀打ち出来ない相手だ。だが、表層世界に墜ちてしまうと、表層世界のバランスを崩さないように神秘が制限される。それでも太刀打ち出来ないほど強いが・・・。

「で、ヒミンガルドで待機している他の上級天使や上位魔族が、今度はここ下位次元世界の第５無人世界マイフィアにセメルエルを墜とす。その際にセメルエルに味方する反逆天使も一緒に墜ちてくるだろうから、そんな反逆天使群を撃破するのが私たちの仕事となる」

セメルエルは、一緒に墜ちてきた味方の天使・魔族が相手をする。私たち魔術師の神秘では、脅威となる神秘が一定以下にまで制限されようとも届かないからだ。だから雑魚が対セメルエル組の邪魔をしないようにするという、脇役に徹しなければならない。まぁ脇役と言っても危険性は高く、最悪戦死という結果が考えられる戦闘になるのは必至だ。

「何か聞いておきたいこと、言っておきたいがあれば言ってくれ」

「うーん、特には無いかも。対天使戦も１２回は繰り返してるし、戦果も十分に挙げてるし」

「ルシルから借りてる神器のおかげで、いい感じに勝ってきてるもんね」

セレスは自分が手にしている大剣型神器、蒼の混沌剣"アスル・カオス"を見せてきた。彼女の先祖であるヨツンヘイム皇族に受け継がれてきた神造兵装の1つで、再誕戦争時に回収しておいたソレを託した。ちなみにフィレスにもヨツンヘイム皇族の神器の1つ、兄弟剣である蒼の正義剣"アスル・フスティシア"を渡してある。クラリスには、彼女の前世グレーテルが使用していた神器、神造兵装の101位・白謳の聖剣"アルブス・フィデース"を渡し、アンジェには、前世のチェルシーの神器である指揮棒型の神造兵装番外位・"転輪杖ヴォース・ヴィルジェン"を渡し、トリシュには弓型の神造兵装93位・天上聖弓"ルーナ・ベッルス"を渡してある。ちなみにルミナは、"界律の守護神テスタメント"や"霊長の審判者ユースティティア"が扱う干渉能力を人の身で使えるため渡していない。ミヤビも鬼人の国でリミッターの外し方を学び、今や最下層の魔人と同程度の神秘を扱えるようになったため、神器所持は逆に弱体化させる可能性があることで彼女にも渡していない。

「（天界製の神器だからと言って天属に通用しないわけではないからな。アースガルドや同盟世界に眠っていた神器を有効活用だ）シャルとセレスは無いらしいが、トリシュ達は何かないか？」

私からの確認にトリシュを始めとした騎士や各隊長は「ありません」と答えた。実際、どれだけ綿密な作戦を立てようとも無駄になる可能性が高いのが今回の決戦だ。私がみんなに伝えられるのはただ一言、生き残れ、だ。神秘を扱える魔術師であろうとも所詮は人間。

巨像に挑む蟻のようなものだ。行き当たりばったりな戦闘になる可能性が高い。だから「深追いはせず、自分の命を最優先で頼む」と伝えた。

『お父様。ヒミンガルドで動きがありました。セメルエルを含めた反逆天使が、作戦通りに天界より墜ちてきました』

世界看守システムの管制プログラムであるエリスリナから連絡が入った。それはつまり、「いよいよ開戦だな」ということになる。私の周囲に集まっているシャル達や"ヴァルキリー"達の空気が張り詰めるのが判る。

「通信はこのまま繋げておいてくれ」

『かしこまりました。ヒミンガルドの映像を投影しておきます』

新たに展開された大モニターに、少なくとも１０００体の天使が映し出された。全長３０cmほどの小型天使から、数kmほどの大型天使など様々で、天使同士が熾烈な戦闘を繰り広げていた。さらに最下層魔族も紛れて大暴れしているから混沌そのものだ。

「ヴァルキリー各隊は所定の位置へ移動。シャル達も移動しておいてくれ。あと、いつでもすぐに移動できるようにな。所定の位置に転移されるようにしてあるが、状況によってはズレる可能性がある」

「んっ、了解！　んじゃ行こうっか！　白金桜騎士隊（プラティーン・キルシュブリューテ）、出撃！」

シャル、ルミナ、セレス、クラリス、ミヤビ、トリシュ、フィレス、アンジェの騎士たちが飛び立って行くのを見送る。続いて"ヴァルキリー"総勢８００体も方々に散り、天使・魔族たちも作戦どおりに所定位置へと向かっていく。

「アイリ。私たちも行くぞ」

「ヤヴォール！　全力全開でサポートするね！　マイスター！」

――ユニゾン・イン――

いつまでも変わらずに私の融合騎で居続けてくれているアイリとのユニゾンを果たし、"神槍グングニル"を手に空へと上がる。

『マイスター。絶対に勝って、はやて達の・・・家族のところへ帰ろうね！』

「ああ！　大手を振って帰ろう！」

『お父様！　七元天使が転移門を開きました！』

エリスからの報告を聞いた直後、空に無数の歪みが発生と同時に鐘の音が轟いた。私は全体通信で「来るぞ！　注意しろ！」と伝えた。歪みの中から次々と白い怪物たちが出現してきた。人型から獣型、簡潔に説明できない形状型の天使たちだ。

『でっか！　何アレ！　アレがセメルエル！？』

直径が１．５㎞ほどの正二十面体を体とし、四面には顔像、四面には龍・虎・亀・鳥の頭部、十面には鎖のような触手、一面には裸の男性の上半身、一面には裸の女性の上半身が生えている。どれがセメルエルの本体かは判らないが、とにかく体の大きな天使だ。

「ウリベルトとシュゼルヴァロード姉妹も降りてきたか」

魔界最下層の各国を管理する支配権の内の３柱もようやく出現。ウリベルトは再誕戦争当時に最強だった魔術師フノスと引き分けた魔獣属の女王で巨狼。ルリメリア、リルメリアのシュゼルヴァロード姉妹は幻想一属を支配する魔人だ。

「はやて、あゆ。みんな・・・。私を支えてくれ。・・・行くぞっ！！」

そうして私たちは、人類に脅威をもたらす元凶であるセメルエル以下反逆天使たちを相手に交戦を開始した。

・―・―・回想終了だ・―・―・

「どうだろう？　ここが、私の生まれ故郷であるアースガルドだ」

「うん。すっごく綺麗や場所やね。・・・風の中に花の香りが混じってるのがええ感じや。すぅ・・・はぁ・・・。うん、ここがルシル君の生まれ育った世界なんやな」

「ああ。もっと早くにはやてやあゆ、みんなを連れて来たかったが、

三界大戦の後始末が長引いてね。でも、やっと招待することが出来たよ」

隣に立つ妻はやて、そして3年前に生まれた愛娘あゆに、目の前に広がるアースガルドの大地の感想を問う。はやては抱きかかえているあゆの頭を撫でながら答えてくれて、あゆは目の前に飛んで来た花弁に夢中だな。必死に手を伸ばして掴み取ろうとしているから、代わりに私が取って「どうぞ」と差し出す。

「ありがとー！　ママ、おはな！」

「うん！　綺麗やね～♪　パパからのプレゼントや！」

「パパ？　にーちゃ？」

悲しいかな。あゆは、私とフォルセティの区別がまだハッキリとつかないのだ。だから一度、はやてはあゆの視線を私に向けさせ、「この人がパパ」と言い、次いでヴィヴィオ達と談笑しているフォルセティに視線を向けさせ、「あの人はお兄ちゃん」と言った。

「パパ！　にーちゃ！」

「そうや。パパとお兄ちゃんや」

「なあ、はやて。私はそんなに若く見えるか？　もう３３歳を超えているんだが？」

「うーん。リンディさんや桃子さんくらいには、かな？　普通に２０代前半でも通用するよ」

きゃっきゃと喜ぶあゆに、私とはやては顔を見合わせて苦笑。何気ないやり取りなのに、私の胸の内は幸せでいっぱいだった。

セメルエルや反逆天使たちとの決戦から早３年。私はようやく、はやてがいつか言っていた願いである、私の故郷に行ってみたい、を叶えることが出来た。しかも実娘が一緒だ。いや、フォルセティやシグナムら家族、なのはら友人、ヴィヴィオ達も一緒だから、その感動もひとしおだ

「コレ、何で出来てるんだろ～？」

「炎のようでいて熱くもないですし・・・」

「不思議な物質だね～」

「ねえねえ！　足元！　薄っすらだけど下が見えるよ！　うわっ、高っ！」

「高所恐怖症の方には辛いものですね。私は違いますけど」

私たちは今、アースガルドと防衛世界ビフレストを繋ぐ転移門の１つの前に居るのだが、転移門から元セインテスト王領グラズヘイムへと続く炎のように揺らめく虹の大橋の上で、ヴィヴィオ達は虹の橋が何で出来ているのかと考えている。

「ユグドラシル。本当にてっぺんが見えないね。フェイト、アルフ、リニス」

「うん。すごいね。あの中にも街があるっていうんだからさらに・・・」

「あそこ、あとで案内してくれるのかな？」

「一般の方もいらっしゃるようですし、後でルシルさんに聞いてみましょう」

フェイト達からそんな会話が聞こえてきた。もちろん"ユグドラシル"内も案内するつもりだ。が、さすがに全階層とはいかないから、案内する場所は限られてくるが。

「とても澄んだ空・・・。空気も美味しくて・・・。思いっきり飛んだら気持ち良いんだろうな～」

「あ、それ解りますよ、なのはさん！　あたしもウイングロードで、この心地いい風の中を突っ切りたいです！」

「私もです！　フリードに乗って、エリオ君と一緒に空のお散歩してみたいです！」

「ほんっと、あんたらは仲良いわね～。結婚式には呼びなさいよ？」

「「うえ〝っ！？」」

三界大戦終結後、セメルエルが滅びたことが影響なのかは判らないが、上位次元世界と下位次元世界を隔てる境界がさらに薄くなり、管理局の次元航行艦でも自由にとはいかないが往来が可能となった。だから今回も、すずかの第零技術部が保有している"ベルリネッタ"でビフレストへ赴き、そこからアースガルドへの専用転移門で来たわけだ。

「アースガルド巡りもいいんだけど、あたしはヴァルキリーの隊長格と一戦交えて経験値を積みたいわ」

「奇遇だな、アリサ。私も同じことを考えていた。私としてはアーフィと言う双剣の副隊長と剣を交えてみたい」

「シグナムもアリサもマジでバトルジャンキーだな、おい」

「せっかく私たちをアースガルドに招待してくれたのだから、少しは戦闘から離れなさい」

「そうですよ。こんなに素晴らしい景色なのですから、楽しまないのは罪ですよ」

「シャマルやリインの言う通りだぜ。休暇を模擬戦で過ごすなんて馬鹿なすることだぜ？」

上位と下位という区別も、魔法技術での移動が可能になったということで廃止することも決まり、まずは管理局が運営している次元航

行船運用会社からミッド～ビフレスト間の便を出すことも決まっている。ゆくゆくはビフレストだけでなくアールヴヘイムやニヴルヘイムなどの他世界との便、民間会社も参入する予定だ。

「難しいかもしれないけど、私はルシル君にヴァルキリーに関するデータを少しだけ見たいかも。あ、もちろん技術を盗みたいわけじゃなくて、ちょっとした興味心で・・・！」

「僕も、実はアースガルドの知識の蔵に行ってみたいな～とは思っているんだけど・・・」

「「ユーノがそう言うなら私たちも行ってみたい！」」

技術者であるすずかや学者であるユーノ、その内縁の妻であり同じ学者にしてＳｔ・ヒルデ魔法学院教師であるセレネとエオスは、己の知識欲に真っ直ぐで、以前からそう漏らしていたことも知っているため、「あとで開発棟と蔵にも案内するよ」と伝える。

「ヴァルキリーの隊長格との模擬戦も、まぁ聞いてみるよ。開発者――父と言ってもあの子たちの意思を曲げる命令は下せられないからな」

およそ７千年越しに２つの次元世界が元に戻るということで、その歴史的な出来事に新暦という暦も変更するかどうかという提案があり、正暦か真歴か、はたまた別のか、８０を超える管理世界の政府代表との会議も開かれている。もちろん私を含めたアースガルド政府や各同盟世界政府も参加している。

「僕はすずかが往きたいところに往くだけなんだけど・・・。ローフェティタはどう？」

「正直、どっちでもいい。月村すずか。私は未だに貴女とケリオンが付き合うことを認めたわけじゃないから。そもそも神器と人間の間に愛だの恋だの・・・。いい？　私もケリオンも、今は人の姿を取っているけど人間じゃないの。１００年生きれば御の字の人間と、寿命なんてものが無い神器。別れは必定、悲恋は必至。それでもいいわけ？」

アールヴヘイムに在る、数万と存在する転移門の中の最高位、"ケリオン・ローフェティタ"。その意識体であるケリオンとローフェティタも今この場に居る。何故ならアースガルドとミッドチルダが交流を開始したことを、私がアールヴヘイムに赴いてケリオンに伝えたからだ。ローフェティタの考えも十分理解できる。それでも私は、すずかとケリオンを再会させてあげたかった。

「判ってる。私とケリオン君はどうしたって過程は築けないって・・。だけど、同じ時間を過ごせないとしても一緒に居て、思い出を作っていける」

「永遠を生きる僕は、確実にすずかの最期を看取ることになるだろうけど、それを不幸とは思わない。すずかの言うように思い出を宝物にして生きていく。というか、ローフェティタだって昔はアールヴヘイムの王族に恋してたじゃないか」

「そ・・・！　それはそうだけど！　あれは私の片思いで終わったからダメージが少なかっただけ！　けど貴方たちは両想い！　きっと心のダメージは・・・！」

「それについてはもうすずかと話合ってるから、たぶん大丈夫」

「うん。心配してくれてありがとう、ローフェティタさん」

「むぅ・・・。そもそもルシリオン陛下が悪いのですよ！　陛下が私たちにすずかのことを教えなければ！」

「おっと、私に飛び火してきたか。いずれアールヴヘイムを始めとした世界とも交流が始まる。となれば遅かれ早かれすずかとケリオンの再会は訪れていた。なら、２人のために早い方が良かった、と思うのだが？」

「それははそうですけど～～～！」

ローフェティタは自身の美しい黒髪をガシガシと掻き乱し、納得も理解もしているが感情で認められないと言った風だ。そんなローフェティタ達の様子に、「そんなことよりいつまで我らを突っ立たせておるのだ？」と、不満げに言いながら私の太もも裏を蹴っ飛ばしてきたのは「ディアーチェ？」だった。

「うぬに一言感謝するべく来ただけというに、こんなところにまで連れて来られようとはな。ゲストとして扱わぬのならさっさとエルトリアに帰らせろ。我らは忙しいのだ」

「まぁまぁディアーチェ。異世界人によるエルトリア侵攻も落ち着き、復興も順調。博士もきっと休みを許してくれますよ」

「そうですね。博士も私たちに少しは休むように何度か言っていましたし」

「平和も復興も大事だけど、ボクはもうちょこっと戦っていたかったな～」

「不謹慎でありますよ、レヴィ。私たちだけではジリ貧となり、敗北は確定だったであります」

「そうですよ。・・・ルシルさん。エルトリアの住民を代表し、改めてお礼をさせてください。ルシルさんがヴァルキリーを派遣してくれたおかげで、侵攻軍を完膚なきまでに叩き潰し、さらに本拠地まで潰滅させることが出来たのですから」

「そうよ～♪　復興に関しても手を貸してもらって、すっごく助かってるわ」

はやて達と再会後、何度目かの食事会の際になのはがふと、シュテル達ともまた逢いたいな、と漏らしたことが始まりだった。私としても逢えることなら逢ってみたいという気持ちもあり、早速再会する方法を思案。いくら行き来が難しい距離とはいえ、こうまで再会が難しいのはおかしいのでは？と考えた私は、私と同じ魔力を有する使い魔、エフェルヘリンズの反応を元にエルトリアを探してもら

えるよう"ケリオン・ローフェティタ"に頼んだのだが・・・。

（まさか、未来とは思わなかったな・・・）

エルトリアという世界は今の時代でも存在するが、エフェルヘリンズの居るエルトリアは今の時代から３００年ほど未来なのだそうだ。なるほど、アミタ達が行き来が難しいと言うわけだ。時間渡航など夢の技術。しかし、その問題はすぐに解決できる。そう、"ケリオン・ローフェティタ"だ。あらゆる距離、あらゆる時間にも転移できる最高位の転移門の力を使えば、ミッドとエルトリアを繋げることが出来る。

（そして、なのはがエインヘリヤル・シュテルから聞いていたエルトリア侵攻は現実で、シュテル達は敗北寸前まで追い込まれていたことが判った。だから・・・）

三界大戦も終わり、同盟世界の遊撃警察としての役割となって少しばかり暇をしていた"ヴァルキリー"、炎熱系最強のティーナ率いるヒルド隊を派遣した。科学には優れていたが神秘の一切ない侵攻軍など"ヴァルキリー"の敵ですらなく、ディアーチェ達と協力することで本拠地まとめて半年で壊滅させることが出来た。それが４ヵ月前の出来事だ。

「いや、気にしないでくれ。友人を助けるのは当然のことだし、エフェルが世話になっているし、派遣したヴァルキリーも久しぶりに戦えて満足していたしな。利害も一致していたわけだ」

「それでも、本当にありがとうございました！」

「ハグして感謝を示したいけど、もう妻子持ちだからやめておくわ♪」

「そうしてもらえると助かるよ、キリエ」

和気あいあいと話している中、ずっと黙っていたアイルが「すずか。少しくっつき過ぎではありませんの？」と、すずかとケリオンの肩が触れ合っていることに不満を漏らした。

「え、そうかな？　普通だよ」

「いいえ。ローフェティタと同じで、私もすずかとケリオンのお付き合いは認めませんわ。仮にも私のオリジナル。同じ顔をしているあなたが、私とは深い付き合いの無いケリオンとベタベタ、イチャイチャとされるのは少々不快ですわ」

「でも不思議だね。すずかと同じ顔立ちなのに、僕は君に全くと言っていいほど何とも思わない。やっぱり見た目じゃないんだ。だから安心していいよ、アイル。僕はすずか一筋だから。だから君も、顔は同じでも自身とすずかは別人だって思うといいよ。そうすれば不快な思いなんてしなくなるから」

「すっごくイラつきますわ、あなた」

ケリオンとアイルの中で火花が散る。そんな2人に落ち着くように

言うアリサ達、ユーリ達を眺めていると、シャルがススッと私の隣に移動してきた。

「シャルロッテ様でも一度も足を踏み入れることの出来なかったアースガルドの地を、こうしてわたしが踏めるなんて・・・。しかも、ルシルとの間に生まれた息子と一緒に・・・。ね？　シグルド。ほら、パパですよ～♡」

ベビーキャリア（抱っこ紐とも言うな）を装着しているシャルの胸には、1歳半の赤ん坊は寝息を立てている。名をシグルド・フライハイト。再誕戦争が始まるより前に実在したと言われているアースガルドに伝わる英雄の名前だ。名前負けしないように強く清く育てていくと、シャルは宣言していた。そんなシグルドは母親であるシャルが差し出した人差し指を握り、「あーうー」と笑顔を浮かべた。

「ふあー！　可愛い！　あゆもシグルドも可愛すぎて、アイリ、にやけちゃうよー！」

当初ははやてとシャルがずるいと駄々を捏ねていたアイリだったが、あゆやシグルドが生まれてくると一気に落ち着き、良いお姉さんとして面倒を見てくれている。ちなみに今もなお教会騎士団の融合騎部隊、藍木春菊騎士隊の隊長としてミッド住み。主離れの時期なんだと少し寂しくなった。

「トリシュ達も来られたら良かったんやけどな」

「あの子は臨月だし、産休取ってるわたしやはやてとは違ってルミ

ナ達は通常勤務だしね」

はやてとシャルが向き合ったことで、あゆとシグルドが近くなる。異母姉弟関係になる2人は互いに手を伸ばし、きゅっと優しく握り合った。その微笑ましい光景にアインス達も、なのは達も笑顔になった。もちろん私も。

「なあ、ルシル君」「ねえ、ルシル」

「ん？」

私に同時に声を掛けてきたはやてとシャルに振り向くと、2人は一度互いの顔を見合わせた後にこう聞いてきた。

「「幸せ？」」

その問いを聞いたとき、私はこれまで自分が歩んできた人生が一気に脳裏を過った。まったく普通の人生ではなかったな。特に"界律の守護神テスタメント"というものが。ただ、そのおかげで今の私があるのも事実。事実ならぬ人生は小説より奇なり、だな。自分の半生を小説にしたら売れ・・・ないか。

「もちろん、幸せだ。私には勿体ないほどだよ。はやてとシャルとの間には子どもが出来、アイリやアインス達、なのは達が支えてくれている。これ以上の幸せなんて考えもつかないよ。だから・・・私は、この人生を愛している」

虹の橋を再び歩き出しながらそう答える。ルシリオン・セインテスト・アースガルドという人生を諦めなくて良かった。万感の思いを載せての発言だったんだが、くっさいセリフを吐いたとすぐに思って顔が熱くなる自覚をする。何か言い直した方がいいのか、または開き直るべきか、さてどうしようかと思っていたら、はやてが私の右腕を、シャルが私の左腕を抱きしめた。そしてアイリは、私の背中に飛び乗った。

「私も！」「わたしも！」「アイリも！」

「「「この人生を愛してる！」」」

はやて達も、そしてなのは達も「愛してる！」と大合唱。恥ずかしいやら照れ臭いやら複雑な思いが生まれたが、みんなのノリがそんなものを押し流していった。だから私はもう一度・・・

「愛してる！！」

大きな声で、アースガルドの遥かなる青い空に響き渡るように、告げた。

父様、母様、ゼフィ姉様、シエル、フノス、イヴ義姉様、カノン、ステア、セシリス、フォルテシア、プレンセレリウス、ジークヘルグ、カーネル、マリア、そしてシェフィリス。随分と遠回りになったが、私は大切な人たちと愛を伝え合い、幸せになったよ。

「ありがとう」

魔道戦記リリカルなのはＡＮＳＵＲ

Ｆｉｎ

番外コーナー…うらばな～～ザ・ファイナル！

ルシル
「ようやく終着点にたどり着けた・・・」

シャル
「本当にお疲れ様、ルシル。エグリゴリはみんな救えた、ルシルは人間に戻りアースガルドへ無事帰還、はやてとイリスと、余計な女たちとの子を成し、ハッピーウェディングエンド！　最終回はヒロインと結婚して終わるっていうテンプレだったけどね」

ルシル
「救いがあったっていいじゃないか。確かにはやてやイリス以外の女性たちとのアレコレはやり過ぎだと思うが」

シャル
「まぁ原初王オーディンのさらに過去から続くとされる神話級の血筋だしね、セインテストって。絶やすのは確かに勿体ないかも」

ルシル
「でも数がな～。まぁいいさ。人間として一回限りの人生を、愛するはやてや家族、友人たちと過ごせて行けるという結末があるだけで大満足だ」

シャル
「イリスもちゃっかり子ども生んでるし、私としても満足のいく結

末だと思うよ。さて、そんな旅路の果てを描いたラストエピソードのうらばなを始めていこうか」

ルシル
「まずは人物紹介だな」

――ライカン・アル・バウワーブ
犯罪組織"フッケバイン"に所属する男。金髪ロングヘア、真っ白なシャツとスーツ姿。フッケバインの刺青は右手の甲に入れている。保有ディバイダーは"ディバイダー９６４ハーム"と銘打たれた、銃身が上下二連、スコープの代わりにギザギザした刃が付けられたスナイパーライフル。
病化特性は"加速"。思考や身体の機動力を常時加速させることが出来る

――カイロン・アル・バウワーブ
犯罪組織"フッケバイン"に所属する男。ロングの金髪をポニーテール、サメの歯が描かれた防塵マスク、真っ赤なシャツとスーツ姿。刺青は左手の甲に入れている。
保有ディバイダーは"ディバイダー９５７カイエン"と銘打たれた、銃身先端からグリップ下部へと繋がる刃のあるナックルガードが付けられているリボルバー拳銃。
病化特性は"不倒"。自分の体から切り離された部位を操ることが出来る。

――ロンシャン・ヴィオッティ
犯罪組織"フッケバイン"に所属する女。黒い髪をシニヨン、キャ

ミソール、ショール、ロングスカートという格好をし、刺青は胸元に入れている。
保有ディバイダーは"ディバイダー５５０グルックナー"。何かしらの巨大生物の牙のような形状のもの。
病化特性は"変態"。攻防速すべてに優れたドラゴン形態を始め、狼や鳥や人魚といった様々な姿に変身できる。

――グランダム・ティアック
犯罪組織"フッケバイン"に所属する男。フッケバインの刺青が彫られたスキンヘッドにサングラス、インナーは着ずに龍が刺繍されたＴシャツ、虎が刺繍されたハーフパンツにサンダルというラフな格好。
保有ディバイダーは"ディバイダー９１８スパイダー"。様々な形状の刃を有する十徳ナイフ型。
病化特性は"増殖"。脳の詰まった頭部以外の肉体の部位を好きなだけ増やすことが出来る。

シャル
「原作の"魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ"が未完で終わっちゃったから、こっちで勝手にオリジナルキャラを作ったわけだけど・・・」

ルシル
「やはり、リリカルなのはシリーズに血生臭い展開は必要ないと、望まれていなかったんだろうか。原作でカレンが旅に出ている親戚がどうのこうのと言っていたから、出せたようなものだったが。本来のメンバーも見てみたかったな」

シャル
「ちなみにサイファーの完全戦闘形態・鎧装、カレンの使った技、千匹皮、七羽鴉、十二猟師もオリジナルね。カレンはグリム童話のタイトルを技名にしてるから、作者もグリム童話からちょっと名前を変えて使わせてもらったんだよね」

――フォード・テルスター・スリュムヘイム
再誕戦争末期、ヨツンヘイム連合主導４界の１つ、深林世界スリュムヘイムの最後の王。セミロングの緑ヘアを七三分け。ダークブルーの瞳、月桂冠を被り、銀色のモーニングコートとスラックス、アスコットタイ、革靴という出で立ち。
植物を操る術に長けるスリュムヘイム術者の中でも最強と謳われていた、戦死した父王以上に優れているとされる。
アンスールのメンバーの１人にして煉生世界ムスペルヘイムの第１王女ステアに一目惚れし、大戦中に何度も求婚したが悉くフラれ、最後はステアとアリスの共闘によって戦死した。
――使用魔術
・レプロチェ
意：非難／蔓を操っての行う技の総称
・クテル
意：カッター／葉を手裏剣のように飛ばす
・アレグレ・バイレ
意：愉快なダンス／種子弾丸を打ち出す植物を生やす
・アグッハ・ヴェネノーサ
意：毒針／様々な形状の毒針を飛ばす
・ニエブラ・ベネノーサ

意：毒霧／様々な効果を有する毒霧を発生させる
・モレスタル
意；嫌がらせをする／複数の木々を生やす
・アタケ・デ・ライス
意：根の攻撃／生やした木々の根を使っての攻撃の総称
・ドラゴーン・デ・アルボル
意：木の龍／木や枝を龍に見立てて操っての攻撃
・オハ・ベネノーサ
意：毒の葉／毒性植物の槍を作り出す
・ベサル
意：キスをする／吸血植物の槍を作り出す
・ナシオン・デ・ラ・プラデラ
意：草原の民／草のフィールドを作り出す。異常環境に強いが燃える大地には弱い
・エキポ・プロテクトル
意：防具／体を覆う植物の鎧を作り出す
・アルマ・デ・エスピナス
意：棘の鎧／茨で出来た武器を作る
・フィエスタ・デ・コミダ
意：食事会／食人植物を生みだす
・カニョン・デ・ヒラソル
意：向日葵砲／大気中の魔力を吸収し、放射する花を作り出す
・フィエスタ・デ・バイレ
意：ダンスパーティ／木人を多数造り出す
・エクスペクタクロ・デ・コミコ
意：コメディアン・ショー／蔦や木で巨大な腕や足を作りだす
・ディアブロ・デ・ラ・プランタ

意：植物の悪魔／上記の強化版で、巨人の上半身を造り出す
・真技ディオス・デ・ラ・プランタ
意：植物の神／上記のさらに強化版で、巨人の全身体を何体も造り出す
・真技サタナス・デ・ラ・プランタ
意：植物の魔王／毒性をはらんだ植物で組まれた巨人
・創世結界・フィエスタ・デ・デスペディダ
意：送別会／フォードの魔術を一斉に発動できる世界を生み出す
詠唱：青々と広がるは果てに死地なる定めが草原。草は茂り、花は咲き、樹は満つ。蔓蔦はうねり、花弁は舞い、地気根は蠢く。其は絶望なりや。否、希望なり。恐れることなかれ。其は醜悪なりや。否、美麗なり。蔑むことなかれ。其は悪性なりや。否、良性なり。危ぶむなかれ。我は植物の神に愛されし申し子。我が言の葉に今こそ応じよ

――プリムス・バラクーダ・ウトガルド
再誕戦争末期、ヨツンヘイム連合主導４界の１つ、夢幻世界ウトガルドの歴代最年少の女王。レモン色の髪はワンサイドアップ。オレンジ色の瞳はツリ目。薄桃色のプリンセスタイプドレス。
幻影魔術に優れた術者を輩出するウトガルドの最後の女王。自世界民にすら恐れられるほどの幻術特化魔術師で、洗脳系薬学にも優れている天才少女。アリスを洗脳した薬もプリムスによって作り出された物。
ヴィーグリーズ決戦にて、"アンスール"のシエル、カノン、そしてアリスとの激戦の後に戦死。
――使用魔術
・破滅の猛獣／アタケ・デ・ベスティア

意：獣の攻撃／1体の獣型の幻影を生み出す
・殲滅の凶獣園／パルケ・ソオロヒコ・デ・デストルクシオン
意：破壊の動物園／数体、数十体の獣型の幻影を生み出す
・壊滅の幻人／アタケ・デ・ソルダド
意：兵士の攻撃：人型の幻影を生み出す
・尽滅の蹂躙軍／フエルサス・デ・オクパシオン
意：占領軍／数十人という人型の幻影を生み出す
・可憐なる私よ此処に／セグンド・プリムス
意：第二のプリムス／自分の分身を生み出す
・清楚なる私よ彼方へ／インテルカンビオ
意：交換／幻影と自分の位置を取り換える、一種の転移術式
・神騙す夢幻／レフィナド・イルシオン
意：洗練された幻影／質量を持った自身の幻影体を生み出すと同時、その場より１００ｍ以上の距離を強制転移する、緊急脱出用術式
・創世結界・心狂わす道化の国／テアートロ・エンガニョソ
意：偽りの劇場／対象の記憶を読み取り、そこから対象にとっての悲劇・絶望を繰り返し体験させる、精神破壊特化の真技

――レオン・レイ・ヴァナヘイム
再誕戦争末期、ヨツンヘイム連合主導４界の１つ、戦導世界ヴァナヘイムの王。七三分けの黒髪、柔和な赤い瞳。首の下から膝上までを覆う黒いタイツの上にキトンという出で立ち。中遠距離術式を一切持たず、鍛えに鍛えた筋骨隆々とした肉体の強化術式のみで、当時の連合四王最強と謳われていた術者。
末期中盤にて、天敵である多数の神器を同時に扱えるルシリオンと会敵。神器の雨で術式を突破されて戦死。
後に娘のヴェロニカが王となり、戦争を引き継ぐ。しかしヴィーグ

リーズ決戦にて父レオンと同様にルシリオンに討たれ戦死。大戦終結後、息子カトラスが"堕天使計画"を実行し、"アンスール"に一矢報いたが、洗脳した"エグリゴリ"達により殺害され、ヴァナヘイム王家は途絶えた。

――使用魔術

・パトリオタ

意：愛国者／ヴァナヘイム式における基本魔術。全身を魔力で覆う全身強化

・エヘクトル

意：処刑人／自己強化の1つで、攻撃力を強化

・グアルディア

意：番人／自己強化の1つで、防御力を強化

・ピオネロ

意：先駆者／自己強化の1つで、機動力を強化

・ティラドル

意：射手：視覚強化

・マゴ

意：魔導師／自己強化の1つで、魔力攻撃力の強化

・サビオ

意：賢者／自己強化の1つで、魔力防御力を強化

・レイ・デ・ラ・ゲラ

意：戦争の王／魔力消費を度外視した全自己強化の一斉発動

・真技サタナス・デ・ラ・ゲラ

意：戦争の魔王／全魔力を用いての短期決戦用の自己強化

――アーサー・ブラック・セダン

再誕戦争末期、複合世界ミッドガルド主星ミッドガルドの防衛軍に

所属する召喚魔術師。切り揃えられた赤い髪、水色の切れ長の瞳、ココアブラウン色の軍服姿。ヨツンヘイム連合の数ある部隊の内、１２個の特務部隊を治める１２人の部隊長、"特務十二将"の一角でもある。

大戦末期、"アンスール"や"ヴァルキリー"の参戦以前は脅威とされていた召喚術師だったが、広域系を扱える術者の多い"アンスール"・"ヴァルキリー"に苦戦を強いられることが多くなり、対抗するために禁呪に手を出す。上位魔族召喚を単独で行い精神汚染され、狂気に支配されて暴走、果てに"アンスール"のシェフィリスによって討たれる。

――使用魔術

・震天弓

雷撃の弓を生成する

・迅雷

直射弾を放つ

・雷放陣

雷撃を全身から放っての全身防御

・電衝

雷撃を纏わせた打撃技の総称

シャル

「まさかまさかのＡＮＳＵＲシリーズ第一章・大戦編の敵組織のトップや幹部が敵として出て来るなんてね」

ルシル

「私たちアースガルド同盟軍からすれば敵だが、シャルから見れば味方だろ？」

シャル
「ハッ、冗談！　ミッドガルドは元々アースガルド同盟とヨツンヘイム連合の戦争に参加するつもりなんて無くて、中立のまま終わるのを待つはずだったのに・・・。連合の連中が無理やりミッドガルドを巻き込んで来たんだから、味方と言うより敵だよ、敵！」

――ガーデンベルグ・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。完成機としては長子となるが、兄として試作機ロヴァルが存在している。
最初の完成機として全属性を扱えるように調整されており、各属性の魔力剣を生成して戦うというスタイルだったが、魔造兵装2位・"呪神剣ユルソーン"のレプリカを主装備としてからは魔力刃付加というスタイルに変更した経緯を持つ。
――使用魔術
：雷霆・斬烈閃
羽根の形をした雷撃系魔力を"ユルソーン"に付加しての直接・放出斬撃
：雷霆・斬烈爪
雷撃系魔力を身体に付加する
：浄火・斬烈閃
羽根の形をした炎熱系魔力を"ユルソーン"に付加しての直接・放出斬撃
：浄火・斬烈爪
炎熱系魔力を身体に付加する
：凍波・斬烈閃

羽根の形をした氷雪系魔力を"ユルソーン"に付加しての直接・放出斬撃
：凍波・斬烈爪
氷雪系魔力を身体に付加する
：風雅・斬烈閃
羽根の形をした風嵐系魔力を"ユルソーン"に付加しての直接・放出斬撃
：風雅・斬烈爪
風嵐系魔力を身体に付加する
：光瑳・斬烈閃
羽根の形をした閃光系魔力を"ユルソーン"に付加しての直接・放出斬撃
：光瑳・斬烈爪
閃光系魔力を身体に付加する
：影夜・斬烈閃
羽根の形をした闇黒系魔力を"ユルソーン"に付加しての直接・放出斬撃
：影夜・斬烈爪
闇黒系魔力を身体に付加する
：豪地・斬烈閃
羽根の形をした土石系魔力を"ユルソーン"に付加しての直接・放出斬撃
：豪地・斬烈爪
土石系魔力を身体に付加する
：皇魔・斬烈閃
羽根の形をした無属性魔力を"ユルソーン"に付加しての直接・放出斬撃

：皇魔・斬烈爪
無属性魔力を身体に付加する
：呪刻・斬烈閃
"ユルソーン"の保有する魔力を解放して発動する真技の１つ。魔造兵装２位という強大すぎる神秘を含んだ魔力刃を"ユルソーン"に付加しての直接・放出斬撃。大半の上位神器すらも破壊できる威力を有し、掠るだけでも必殺効果を発揮する
・呪神・断界閃
上記の真技発動中にのみ扱えるもう１つの真技。展開している魔力刃を無数に枝分れさせ、全方位に斬撃を加える。
・顕召・界支七精／プロヴィデンス・セイバー
ガーデンベルグが"ユルソーン"を主装備にする前に開発していた真技。炎熱、氷雪、風嵐、雷撃、閃光、闇黒、土石、無属性の魔力で構築された２ｍの大剣８本を翼のように展開し、さらに８属性の魔力を一纏めにした大剣１本を生成。それら９本の魔力剣での多斬撃術式。
・高き者にして強き者／バリエンテ・ディオス
意：勇敢な神
最後のヴァナヘイム王カトラスの固有スキル＋人格データの強制発動。魔力を使わず、上位神器クラスの能力と神秘を身体に付加させるうえ秘匿性が高いために察知されにくく、初見必殺のプログラム。
・マルバド・サルド
意：悪質な挨拶／触れているものに神秘の波動を打ち込む。上位神器クラスの神秘であるため、十分に致命傷になりうる。
・氷装甲冑／セレシウス
氷雪系魔力を纏う、対氷雪系防性術式
・風装甲冑／シルフ

風嵐系魔力を纏う、対風嵐系防性術式
・地装甲冑／ノーミード
土石系魔力を纏う、対土石系防性術式
・火装甲冑／サラマンダー
炎熱系魔力を纏う、対炎熱系防性術式
・雷装甲冑／ヴォルト
雷撃系魔力を纏う、対雷撃系防性術式
・光装甲冑／シャイン
閃光系魔力を纏う、対閃光系防性術式
・闇装甲冑／シャドウ
闇黒系魔力を纏う、対闇黒系防性術式
・元装甲冑／マクスウェル
無属性魔力を纏う、通常防性術式
・最速神駆／ヘルモーズ
短距離高速移動術式
・天空翔駆／グリンブルスティ
開発者ルシリオンの剣翼アンピエルと同様の効果を発揮する８枚の剣翼を展開する、空戦機動形態。

――リアンシェルト・ブリュンヒルデ・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の１体。女性型として初であるため長女とされている。開発者シェフィリスも連なるニヴルヘイム王家を外見モデルにしおり、ニヴルヘイム王家の扱う氷雪系に特化するよう開発された。魔術開発能力に優れ、自力で創世結界を生み出せた最初の"ヴァルキリー"でもある。
女性型"ヴァルキリー"の長姉であることに誇りを持ち、誰からも

姉と慕われる。
――使用魔術
・拒絶し反射するは輝ける鏡面／アダナクラスィ・エネルゲイア
意：エネルギー反射。純粋魔力系術式を跳ね返す鏡盾を展開する
・この手で触れたものは等しく眠りへ／ズィアヴロスィ・プロセフヒ
意：祈りの浸食。触れているものを凍結させる
・天壌に靡くは輝ける氷幕／アヴレァ・ピュッロン
意：花弁のカーテン／無数の氷の花弁でオーロラをつくる
・雪人降臨祭／キオナンソロポス
意：雪だるま／巨大な雪だるま軍団を落下させる
・想うが故に叶いたる願望／プロセフヒ・アグノス
意：純粋なる祈り／開発者ルシリオンのコード・エイル並の効果を発揮する治癒術式
・我が氷雪に炎熱に届かない／ニパス・アスピス
意：吹雪の盾／いかなる炎や熱も通さない極寒の吹雪を発せさせる
・氷刃舞う砕嵐／テュエッラ・クスィフォス
意：刃の大嵐／氷の薔薇の花弁による包囲攻撃
・炎熱を奪取せし雪風／ピュレトス・エピクラテーシス
意：熱の征服／対象から熱を奪って凍傷を起こし、体を腐らせたり一気に凍らせて砕いたりする
・天魔万象を凍てつかせる氷華／コーリスモス・アントス
意：別離の花／対象を巨大な花に飲み込ませて全身を切り咲き、さらに傷口から凍結させる
・蒼天に座して輝く氷神十二冠／コキュートス・アステール
意：氷結地獄の星／惑星丸ごと覆えるほどの巨大な魔法陣を１２枚と展開し、魔法陣の内側の気温を下げ、外側からの攻撃を問答無用

で凍結させ、内側を氷漬けにする攻防一体の防性結界
・蒼天に座して穿つ氷王八冠／アペルピスィア・アペレフセロスィ
意：絶望の解放／空対空地多弾連続凍結砲撃を放つ大魔法陣８枚を展開する
・星を墜とす／フォティア
意：発射／上記の術式の発射号令
・蒼天に座して曇る氷精四冠／ニパス・ウラノス
意：天の吹雪／吹雪や雪崩を発生させる魔法陣４枚を展開する
・猛威振るう雪墜打／キオノスティヴァス・スフィリ
意：槌雪崩／膨大な質量を持った雪崩で相手を圧し潰したり、防壁とする
・召喚・雪皇鯨／ペークシス・パライナ
意：氷結鯨／大小様々な氷の鯨を造り出す
・衝きて凍らす大氷柱／ピュセーマ・クルスタロ
意：氷柱の爆風／生成した氷の尖塔で対象を突き、接触個所から凍結を行う
・天花護盾／クリュスタッロス・アントス
意：結晶花／シェフィリス直伝のニヴルヘイム式氷雪系術式の１つ。雪の結晶状の盾を展開する
・美麗散華／エレオス・ソヴァロ
意：荘厳なる慈悲／シェフィリス直伝のニヴルヘイム式氷雪系術式の１つ。氷の花弁を無数に生成し、槌のようにして対象を叩き潰す
・其の散り様は儚く美しく／カタレフスィ
意：崩壊／氷で作り出したものを崩壊させる
・万華運ぶ惨酷の氷流禍／ディミオス・エカト・エカトミリオ
意：１億の処刑人／無数の花弁を龍のようにして操り、対象に突撃させる

・無間景氷河界／コキュートス・エオニオティタ
意：永遠の氷結地獄／旧真技。超広域凍結術式。術式の発動中は、自身の魔術効果を強化できる
・極寒薔薇園／ロドン・パラディソス
意：楽園の薔薇／リアンシェルトが自力で開発した創世結界にして新真技。地平線の彼方まで氷で出来た薔薇が咲き誇る世界を創世する。
――詠唱：私の両手は、大切な存(ひと)在達の血に塗れて。かつて抱いた想いは今、私の存在を大きく軋ませる。この身には、もう貴方への想いはあってはいけない。そんな私に許されるのは、その存(ひと)在達を傷つけた罪に苛まれ、己を罰する時間のみ。あれから幾星霜。己を許せずにいられない私は、苦しさから逃れたくて心が凍てつくことを願う。だけど懸命に消し失わせようとした想いへの未練に泣き、いつか貴方の手で滅ぼされる日を待ち望み続けながら涙する。この庭園に咲き誇る薔薇と共に散り逝くその時を、いつか必ず迎えられますように。

シャル
「ほんっっっ

――パイモン・エグリゴリ
番外コーナー：う・ら・ば・な～～～～ファイブ！と同文
――使用術式
・封鎖防壁
何重もの魔力防壁
・捕え縛る水霊の愛手／コムモトコス
意：聖母の褒美（コムモドゥム・セオトコス）／生成した水の手で相手を捕まえる
・跳ね返す揺ぎ無き水塊／ブークライム
意：スライムの盾（ブークリエ・スライム）／弾力のある水の塊を生成する
・逆巻く激流の暴威／アベルドール
意：水渦（ヴィアベル・ヒュドール）／水の渦で自身の周囲を薙ぎ払う
・飛翔する衝撃の飛沫／リターフェラ
意：飛ぶ宝石（リターチ・スフェラ）／水の弾丸を発射
・静穏なる碧色の瀑雷／ポスィドトゥーヌス
意：海神の星（ポスィドナス・ネプトゥーヌス）／水の機雷を作る
・激動する水霊の歯牙／ヴァダーヒスモス
意：水の咆哮（ヴァダー・ヴリヒスモス）／今日水圧の水流を放つ
・瓦解せる喰飲の龍咆／アルティフォドス
意：突撃する鉤爪（アルティーリョ・エフォドス）／水で構成されたを龍を突撃させる
・絡み付く泉湖の水精／リムヴォースト
意：湖の尾（リムネー・フヴォースト）操った水で対象を飲み込み拘束する
・深淵へ誘いたる微睡の水霧／ラフェルニオン

意：夢霧（アラフェル・エニュプニオン）睡眠性の霧を発生させる
・止め処なき水塵の流壁／デファンクテース
意：防御滝（デファンス・カタッラクテース）／上空から多量の水を降らせて障壁と成す
・流麗なる乙女／ウンディーネ
吹き抜けのある水柱で自身を覆う
・奪取せし大食らいの渦流／ダンフティス
意：盗賊の舞（ダンス・クレフティス）／魔力を吸収する水流を発生させる
・苛烈なる殲滅の大瀑布／ウアスクテース
意：最大限の滝（ウアスヴェイジ・カタッラクテース）／最大水量の塊を対象の頭上から降らせる
・千変万化の水纏鎧／ゼーユンプラーチ
意：人魚の鎧（ゼーユングファー・プラーチイェ）／人魚の形状をした水の塊で全身を覆う
・偉大なる蒼に染まる水星／ミールキアーステール
意：美しき星の大洋（ジャミール・アキアーン・アステール）／創世結界にして真技。地表が海のみの世界を創る

――クルックス・アルヴィト・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。第2世代アルヴィト隊の隊長を務める、顕地の槍の二つ名を有する土石系最強の"ヴァルキリー"。
開発者の2人が土石系を苦手としたり使えなかったりということで、土石系最強と当時から有名だったカーネルの協力の下に開発された。ルシリオンとシェフィリス以外の人間が開発に携わった最初の機体

でもある。
――使用魔術
・砂槍・一閃
超振動している砂の刃を纏った穂による攻撃の総称
・砂槍・穿突
槍を地面に突き刺し、直径５０ｍ圏内限定で任意の場所から切断力に優れた砂の刃を発生させる。
・岩槍・一閃
穂や石突に岩石を纏わせ、切断力や貫通力より打撃・破壊力を最優先する一撃の総称
・岩槍・穿突
槍を地面に突き刺し、任意の場所に破壊力に優れた岩の槍を突き出させる。
・晶槍・一閃
水晶を穂と石突に纏わせての攻撃の総称。
・晶槍・穿突
槍を地面に突き刺し、任意の場所に貫通力に優れた水晶の槍を突き出させる

――ティーナ・ヒルド・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。第3世代ヒルド隊の隊長を務め、凶狩の紫炎の二つ名を有する炎熱系最強の"ヴァルキリー"。
炎熱系最強の魔術師であるステア、ほぼ同位であるセシリスの協力の元に開発された。
性格は自己強化したうえで前線に突撃する特攻大好きな、ヘルヴォ

ル隊に相応しいミサイル気質。それでもヒルド隊の長を務められているのは妹の存在が大きい。年少組であり陽気な性格ながらしっかりした妹ナーティアや部下たちがティーナの特攻気質を抑え、なんだかんだヒルド隊は上手く機能している。

――使用魔術

・火葬拳／フレイム・シェル

炎を纏った拳での打撃

・火葬砲拳／フレイム・カノン

拳に纏わせた炎を、拳打と同時に炸裂させる

・火葬墳炎／イラプション・エラ

炎のフィールドを発生させ、至る所から炎を噴き出させる

・火葬疾駆／フレイム・チャージ

炎を纏っての突進

・火葬爆砲／エクスプロージョン・コメット

単発の火炎砲弾。任意の場所で爆破できる

・火葬円壁／ファイアウォール

炎の城塞を発生させる

・火葬煉棺／ルナティック・クルメイション

真技。対象を掴んだ状態で爆炎を発生させ、そのまま相手を燃やし尽くす

・大火葬殲滅爆火／スキャタリング・ファイアワークス

真技。発生させた巨大な火柱から無数の火炎弾を四方八方に放ち、一斉炸裂させて広域空間を殲滅する

――ナーティア・ヒルド・ヴァルキュリア

ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。第3世代ヒルド

隊の副隊長を務め、凶狩の蒼水の二つ名を有する。開発者２人の協力の元に新たに開発された水流系という属性に特化した"ヴァルキリー"。
水流系初の実験機として開発され、最初機ロヴァルの協力、後続機たちと共にアップデートを繰り返すことで、水流系の完成機へと至った。水流系の扱いに関しては開発者２人よりも優れている。
身長が１５０㎝以下の子ども型、通称"年少組"の一員で、暫定リーダーとなっている。ナーティアが開発されるまでに年少組モデルは９体と開発されているが、年少組内で開発順ではなく役職で決めようと話になり、渋々だがナーティアは受け入れた。
――使用魔術
・水陣震穣波／リグル・ウェイブ
多量の水を素手で掴み上げて波を発生させ、対象を押し流す。多量の水のある場所限定
・蠢縄洗辱手／ヒュミリエーション・バインド
魔力を吸収する水の縄で相手を拘束する。触れた個所の魔力を奪うため、魔力の服なども消去される
・飛翔瀑水珠／スプラッシュボム
生成した水の弾丸を放つ
・九頭海龍神／ディセント・ミソロジー
９つの水龍を生成する
・流海水撃砲／アクア・ストリーム
高水圧の水を放出する砲撃
・瀑波大帝国／フラッド・エンパイア
真技。水のフィールドを造る
――氷月（ひづき）・ラーズグリーズ・ヴァルキュリア

ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。第４世代ラーズグリーズ隊の隊長を務める、瞬凍の狩り手の二つ名を有する氷雪系最強機体。
リアンシェルトを皮切りに開発され続けてきた氷雪系における完成機。ニヴルヘイムと同じ氷雪系術式に優れたヨツンヘイム魔術師に対して優位を取るために、初の絶対的な対氷雪系として開発された。対象の氷雪系術式の効果を受けない通常防壁――肌、自身の氷雪術式を相手の氷雪術式に無理やり割り込ませて破壊する対抗術式を有する。
――使用魔術
・砕氷牙
対氷雪系術式の魔力を付加
・針通勁
防御貫通効果を有する刺突

――アーフィ・ラーズグリーズ・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。幻界の司書の二つ名を有するラーズグリーズ隊の副隊長。儀式系に特化した"ヴァルキリー"シリーズの最初機で、保有術式の数で言えば全"ヴァルキリー"の中で一番とされる。
儀式系シリーズの"ヴァルキリー"は基本全属性を操れるが、アーフィは炎熱系を好んでよく使う。
――使用魔術
・轟火之砲光
単純な火炎砲撃。単純ゆえにアーフィは１０００発まで一斉発射で

きる
詠唱：奔れ、紅蓮の砲光。敵に向かいて燃え穿て
・火獄之弾牢
何十発と言う火炎弾で対象を包囲し、一斉着弾、そして爆発による
ダメージを与える
詠唱：囲め、無限花火。敵を覆いて焼き払え
・炎壁之穹窿
ドーム状の炎の膜で防御する
・炎人之焚腕
ルシルのコード・イロウエルを元とした炎の巨腕の召喚
詠唱：猛れ、炎の巨人。汝の炎腕にて燃やし尽くせ
・炎人之降臨
炎で構築された人形を召喚する
詠唱：参ぜよ、炎の巨神。汝の進軍にてすべてを灰燼に帰せ
・煉獄之火宴
対象の足元から炎の竜巻を噴出させて焼き殺す
詠唱：火は命の光にして死の影。十方世界を悉く照らしては焼き滅
ぼす。生ける者よ、一天四海を燈す希望の光り火を見よ。死せる者
よ、冥土幽界を焼く絶望の禍つ火を見よ
・火天之王
任意空間を爆破させるというもの。同時に最大２００か所を爆破す
ることが可能
詠唱：自己の願望成就。その道程は他者の蹴落とし也。落とされし
者等が築くは無残無念の　敗衄（はいじく）の山。其の頂きに立つは望みを成し
得た勝利の王。王は叶えし願いの頂で大いに笑う
・光火之咆哮
閃光と爆音による対象の視聴覚封じの、言うなればスタングレネー

ド
・渦炎之煉圏
炎の渦を盾として、攻撃を防ぐというもの。最大で直径１ｋｍまで広げる事が可能
・エンシェント・ロジック
幾何学模様の盾を展開する。
・リベレーション・フォース
魔導書のページを切り離しての攻防一体

――カレン・ラーズグリーズ・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の１体。砂城の童姫の二つ名を有する、ラーズグリーズ隊に所属する土石系"ヴァルキリー"。年少組ということで幼い少女の外見をしているが、喋り口調はかなり古風。第１世代ブリュンヒルデ以降の"ヴァルキリー"は、それぞれの属性の最強を誇る"アンスール"メンバーが協力して開発されているため、カレンは自分の開発に携わったカーネルに対しても特別に深い愛情を抱いている。１９０cmの高身長のカーネルに対し自身は１４３cmの低身長であることをよく思っておらず、放し方だけでも大人っぽくなりたいという考えから古風な口調に変化させた経緯を持つ。
――使用魔術
・セグワーチェ・ファンタズマ
意：幻想の子分／砂でローブ姿の人型を作る
ロッチャ・プロテツィオーネ
意：保護岩／岩で壁盾を作る。砂で作るサッピア、結晶で作るクリスタッリッザツィオーネ、土で作るテッラの３種がある

・テッレーノ・カンノーネ
意：地砲／石礫と砂を螺旋状に渦巻かせて横に放つ砲撃
・ソルプレーサ
奇襲／対処の足元から岩石の壁を突き出させる
・マルテッロ・ソルプレーサ
意：奇襲槌／巨大な岩の壁を生み出し、相手に向かって倒れさせる
・テンペスタ・ディ・サッピア
意：砂嵐／1つから複数の砂嵐を発生させる
・ミーナ
意：地雷／地表にトラップを仕掛ける
・トッレ・トンバ
意：墓塔／岩石の塔を地面より突き出させる
・スパーダ・グランデ・ディ・アンジェロ
意：天使の大剣／土や岩や砂や結晶といった、様々な大地の素材で巨大な剣を造る
――サッピア・スパーダ――
意：砂剣／砂で形作られた剣

――レンマーツォ・ヘルフィヨトル・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律稼働人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。第5世代ヘルフィヨトル隊の隊長を務める、星貫の射手の二つ名を有する狙撃系最強機体。
最初の狙撃系機であり実験機である第1世代ブリュンヒルデのフィヨルツェンが得た実戦データが反映され、狙撃系として最高値スペックを得ている。狙撃系機体もそうだが、各シリーズの"ヴァルキリー"達は得た経験をシリーズ内の機体に反映させていくため、隊

長・副隊長・隊員の役職の区別はあるものの最終的にはスペック的に差異は無くなるようになっている。
――使用魔術
・蹂躙せし螺旋角／アーク・ヒーリックス
暴風の矢を放つ
・最果て穿つ一角／スナイプアローー
長距離狙撃用の魔力矢
・捻じ伏せる破壊角／ブレイク・スティンガー
鏃型の魔力弾を打ち込み、爆発させることで障壁などを破砕する
・追翔せし破滅角／ワンダリング・ターミネイターー
誘導型の矢を放つ

――レイル・ヘルヴォル・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律型人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。シュヴァリエルを隊長とするヘルヴォル隊の副隊長を務め、法界の司書の二つ名を有する。
"ヴァルキリー"の中でも数少ない儀式系術者の1機で、保有する魔術の数も姉である幻界の司書アーフィに並んで多い。全属性を操れるように開発されているが、レイルは好んで無属性術式を多用する。
――使用魔術
・フュルギア
意：北欧神話に登場する、人に付き添う霊的存在／真技の1つ。保有する数多くの魔術から選んだ5つの術式を持たせた分身体を作り出す。最大で6体を作り出すことが出来る
・スティールハンド

魔力で創り出した半透明の腕で相手に触れ、魔力や体力などを奪う
・フィストカノン
魔力で創り出した半透明の腕を砲弾として射出する
・ハンマーアーム
魔力で創り出した腕による打撃全般
・パームシールド
魔力で創り出した手の平を盾とする防性術式
・スクイーズマター
魔力で創り出した手で対象を握り潰す

――エッタ・ヘルヴォル・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律型人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。シュヴァリエルを隊長とするヘルヴォル隊に所属。鋼弾の銃撃手の二つ名を有する。少女型だが一人称は"僕"で、性格はおどおどしたネガティブ系。しかし戦場では、コルトＭ１８５５リボルビングライフルをモデルとした"星填銃ゲンドゥル"、モーゼル・シュネルフォイヤーＭ７１２をモデルとした"星填銃スケグル"による精密にして無慈悲な銃撃にて、数多くの連合術師を殺害する冷酷無比な暗殺者として名を馳せた。

――リッタ・ヘルヴォル・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律型人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。シュヴァリエルを隊長とするヘルヴォル隊に所属。鋼拳の特攻者の二つ名を有する。エッタの妹にあたるが、１７０㎝の高身長、一人称が"俺"など口調や性格が男勝りということもあって、妹どころか姉妹とすら聞か

なければ判らないほどの凸凹姉妹である。
手の甲側に鋼のプレートをあしらった指ぬきグローブ型神器、"鋼甲ライデンシャフト"を装備し、素手での殴り合いという近接特化機体。そのため戦場ではいつも姉リッタの援護を受けている。
――使用魔術
・イグニッション
魔力炉(システム)の稼働率を上げ、スペックを上昇させる自己強化
・ヒーティング・ソウル
魔力炉(システム)の出力をさらに上げて全身を発熱させ、魔力出力・神秘増大を行う二段階目の自己強化

――プリメーラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律型人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。雷撃系最強の"ヴァルキリー"で、ランドグリーズ隊の隊長を務める。
以下"えぴそ～ど・ツゥーのう・ら・ば・な。その2っ♪"同文。
――使用魔術
・震破
雷撃を付加した打撃技の総称。肘槍は肘打ち、指槍は貫手、掌槍は掌底、拳槍は正拳、膝槍は膝蹴り、脚槍は突き蹴り
・雷閃指弾
小さく圧縮した雷球を親指で弾いて飛ばす
・疾閃雷翔駆
超高速移動
・天墜翔雷拳
雷撃で形作られた拳を放つ
・雷覇双天槌

両手に発生させた直径２ｍほどの雷球を投げ放つ
・通天晃雷落
一瞬にして雷雲を発生させ、地上に向けて雷撃を降らせる
・障破雷靠打
中国武術・八極拳の１つ、鉄山靠。正式名称を貼山靠。雷撃を纏っての背面体当たり
・蹴破斬雷舞
雷撃を纏わせた薙ぎ払い蹴り。蹴りの軌道に合わせて弧を描く雷撃が発生
・円噴地雷陣
踏み込みと同時に雷撃が付加された衝撃波を放射状に放つ
・紫電轟鞭天
雷撃の鞭による広域攻撃
・掌掴雷凄劾
対象を鷲掴んだ手より放電する零距離攻撃
・双打雷重拳
左拳を打って雷撃の拳を放ち、間髪入れずに右拳を打つことで放たれる雷撃の拳が途中で合流。さらに巨大かつ高速となって敵を打ち砕く
・天環襲雷華
真技。敵を空高く吹き飛ばし、追随すると同時アースガルド魔法陣を展開。敵を追い抜くと同時に反転して、敵を魔法陣へと叩き落とし激突させる。敵に向かって急降下し、強大な雷を纏った拳を打ちつける。

――ソアラ・ランドグリーズ・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律型

人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。プリメーラを隊長とするランドグリーズ隊の副隊長を務め、戦駆の騎将の二つ名を有する。
プリメーラと同様に雷撃系に特化した"ヴァルキリー"であり、雷撃系魔力で動物を生成し、それに騎乗する戦闘スタイル。
身長が１５０㎝以下の子ども型、通称"年少組"の一員だが、ソアラは若干抵抗を抱いている。しかし８世代の中で下から2番目のランドグリーズシリーズということもあって活動年数も低い方なため、若いことには変わらないからと渋々諦めている。
――使用魔術
・ダンツァ・ブリッツ
意：雷撃の舞踏／雷光で創った動物を突撃させる
・インボカシオン・アポストロ
意：使徒召喚／雷光で動物を創りだす
・マルソ・カヴァリエーレ
意：騎兵行軍／作り出した動物と共に敵へと突撃する
・ジャヴェッロット・トゥオーノ
意：雷の投槍／槍に雷撃を纏わせ、突く動作と共に雷撃の槍を発射する
・インヴィタ・ディストルツィオーネ
意：破壊を招く／雷撃を纏わせての攻撃の総称
・スクード・シニストラ
意：左の盾／左腕に魔力の籠手を展開する。他に右腕のデストラがある
・アルマトゥーラ
意：鎧／魔力を全身に纏わせる防御

――クリスト・ゲイルスケルグ・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律型人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。再誕戦争に投入された"ヴァルキリー"の最終世代、第8世代ゲイルスケルグ隊の隊長を務める、黒煌の紡ぎ手の二つ名を有する闇黒系最強の"ヴァルキリー"。
最終世代ということで完成度は先行機体のどれよりも高く、安定した性能を発揮できる。闇黒系最強の魔術師であるフォルテシアの協力の元に開発され、クリストは開発者2人だけでなくフォルテシアのことも母として慕っている。
・モンターニュ・ノワール
意：黒い防御／限界まで硬質化を高めた影の障壁を発生させる
・ピュニシオン・マルトー
意：槌罰／前面に展開した魔法陣に神器を打ち付け、放射面より魔法陣のサイズに合わせた影の円柱を勢いよく出現させる
・ヴォラール・ショーヴル・スリ
意：蝙蝠の盗賊／闇で出来たコウモリを無数に解き放ち、対象に殺到させる。噛みつくと魔力を吸収し、クリストの元に戻ってその魔力を供給する
・アシエ・キャラパス
意：鋼の甲羅／両腕のバックラー部より影の渦を発生させ、防いだ攻撃を削り取って無力化させる

――ラスティア・ゲイルスケルグ・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律型人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"の1体。再誕戦争に投入された"ヴァルキリー"の最終世代、第8世代ゲイルスケルグ隊の副

隊長を務める、５００体目の最終ロールアウト機。二つ名は終葬の奏旗。年少組のサブリーダー。
最終開発機ということで隊長のクリストよりも基本スペックは高く、保有魔力量も"ヴァルキリー"一。　"アンスール"メンバーの術式が込められた神器、"ポータブルキングス"によってメンバー達の術式を扱える。そのため連合術師に"アンスール"が居ると思わせる偽装が出来、ゲイルスケルグ隊は陽動作戦を多々任されていた。

――ロヴァル・ヴァルキュリア
ルシリオンとシェフィリスの両名によって創り出された完全自律型人型魔道兵器・"戦天使ヴァルキリー"、その試作機。第１世代ブリュンヒルデより先に開発された真の長子。外見は開発者２人に子どもが出来た際の見た目をシミュレーションして決められ、まさに父ルシリオンと母シェフィリスの子どもに相応しい者と言える。
後の弟妹たちの誕生のために無茶なアップロードも受け入れ、さらに生まれた弟妹たちの実戦投入前の模擬戦相手として活動していた。
全属性の他に試作水流系をアップロードされたロヴァルは、水流系の"ヴァルキリー"達のために開発者２人や試作機ナーティアと研鑽を重ね、さらに後継機の協力も始まり、ようやく水流系を完全なものへと昇華させた。
５００体の"ヴァルキリー"の開発終了後、ガタが来ていたロヴァルは延命処置のために再誕戦争終結後まで休眠モードにされたのだが、思いのほか修復がうまくいかず、そうこうしているうちに堕天使戦争が勃発。ルシリオンがアースガルドへ帰還するまで眠り続けていた。
名の由来：北欧神話に登場する、人間の先祖、高名な戦士を意味するロヴァル。

シャル
「敵としてヴァルキリーのエインヘリヤルを出したんだよね？　なんでルシルにとって味方、子どもなのに悪事を働かせようとしたわけ？」

ルシル
「元々は連合の特務十二将か、もしくは完全なオリジナルキャラを出す予定（すでに設定は出来ていて、途中まで使っていた）だったようだ。が、どうせなら私を慕ってくれている子ども達を出した方が流れとしては自然じゃないか？という考えから、ヴァルキリーを採用（まるまる変更）したそうだ」

シャル
「ルシルたち同盟と敵対してた連合幹部が、敵だったルシルの味方をするというのもおかしな話だし、どうせなら無条件で指示を聞いてくれそうなヴァルキリーを選ぶよね」

ルシル
「四王は、出すタイミングがヴァルキリーより早くなっただけで使う気は元々あったようだ」

シャル
「生前の私が出来なかった四王への恨みを、イリスたち転生者がぶつけてくれるっていう展開は個人的に良かったね。勝敗を付けられなかったのはいただけないけどね」

ルシル
「本来は決着をつけさせる予定だったが、エインヘリヤルとはいえ再誕戦争末期では最強クラスだったからな。1対多数だからといって弱体化している現代の魔術師が連中に勝つのはどうなの？ということで、お蔵入りになってしまった」

――ノイエーラ・スルーズル・ヴァルキュリア
リアンシェルトの協力の元にイリュリアの技術部が開発した、試作型氷結の融合騎ヌンマー・ヌル・ヌル・ヌル・ズィーベン――現アイリ・セインテストの本来の名前。ヴァナヘイムに無理やり追加された自己進化プログラムが将来的に御しきれなくなると考えたリアンシェルトは、いずれ暴走するであろう自身を殺すための追加戦力がルシリオンに必要と考え、自身の神秘や術式を強制的に無効化・弱体化させるプログラムを組み込んだアイリの製作を決定。イリュリア技術部に気付かれることなくリアンシェルトはそのプログラムを追加することに成功。
当初からアイリとルシリオンの融合同調率が高かったのは、リアンシェルトが仕組んでいたことによるもの。リアンシェルトの危惧は正しく、対リアンシェルトであったアイリのおかげでルシリオンは勝利することが出来た。
名の由来：ノイはドイツ語で、新しい。エーラはドイツ語で、時代。スルーズル／北欧神話に登場するヴァルキュリアの1人、強き者を意味するスルーズル。

ルシル
「初めてアイリとユニゾンしてから心のどこかで感じていた違和感の答えが↑だった。まさか、初めから私専用の強化パーツ・・・と

言うのはアイリに失礼だな、そう相棒だったとは。リアンシェルトの覚悟にも、アイリにもずっと救われていたんだな、私は・・・」

――七元天使

天界にて神の手足となる、熾天使、智天使、座天使、主天使、力天使、能天使、権天使、大天使、天使の九階級から隠された、真の最上位階級。神の創造物でありながら神と等しい権威、権能を有する。神の創造物であるため反抗心を抱くことはなかったが、突如として反逆者が誕生し、天界を二分する事件が発生した。

メンバーは、神の祈願テフィラーエル、神の禁忌タヴーエル、神の奇跡ネスエル、神の福音ベソラーエル、神の秘密ソッドエル、神の伝説アガダーエル、神の象徴セメルエルの七柱

――セメルエル

天界に反逆を起こし、人間界や魔界を巻き込んだ三界大戦の勃発を引き起こした七元天使の一柱。神の象徴の意味を持つ名を有する。神の下す人間界・魔界への不干渉の盟約に不満を抱き、同じ不満を持つ他天使を唆して反逆戦争を引き起こす。

――アグダエル

天使九階中上級三隊熾天使所属。神の親指の意味を有する天属。

――エツヴァエル

天使九階中上級三隊熾天使所属。神の人差し指の意味を有する天属。上級三隊の天属には珍しい人型天使。

――ダムエル

天使九階中上級三隊熾天使所属。神の血の意味を有する天属で、反逆に加担した堕天使。

――ハロムエル
天使九階中上級三隊智天使所属。神の夢を意味を有する天属で、反逆に加担した堕天使。

――ヘルトエル
天使九階中上級三隊智天使所属。神の自由を意味を有する天属で、反逆に加担した堕天使。

――ケエヴエル
天使九階中上級三隊智天使所属。神の痛みを意味を有する天属。

――カメアエル
天使九階上級三隊座天使所属。神のお守りを意味を有する天属。

――ダットエル
天使九階中中級三隊主天使所属。神の信仰を意味を有する天属で、反逆に加担した堕天使。

――シガオンケラハ
魔界中層に棲む魔獣属竜種シガオンケラハ族。シガオンは狂気、ケラハは氷を意味する。巨体を誇る翼竜で、体表面にいくつもの骸骨や氷の尖塔を生やす。中層の魔族ではあるが竜種ということもあって、有する神秘は下層・最下層でもおかしくはない。

――ディアヴァルネールのラアル
魔界最下層の奥地にある魔族魔人種鬼人属ディアヴァルネール族の国ヤッフェル出身で、国の行政を司る本家の元目付役。酒・戦、逆境・困難が何よりも好きな戦闘狂の鬼人で、魔界最初期では先陣を切って様々な魔族と殴り合っていた、1万年を生きる最古参。ディアヴァルは悪魔、（ア）ネールは人間の意。

――ガナンマターハ
魔界の全階層の至るところに棲まう、魔獣属奇怪種。目玉の形状をしているが実は口だけしかない魔族。魔族の死骸を主食とし、魔界最初期で起きていた魔族対天属においては天使を主食としていた。ガナンは庭師、マターハは迷宮という意。

――マイムザラッハのヘネット
最下層に存在する海中国家シュゼルヴァケティアの国防軍に所属する、魔族魔人属人魚種マイムザラッハ族の人魚。シュゼルヴァケティアを治めるシュゼルヴァロードの双子姉妹に忠誠を誓っており、双子が恋するルシリオンのことを"旦那様"と呼ぶ。ヘネットは双子の母親であるマナメリアとも知己で、娘ルリメリア、リルメリアの誕生にも立ち会っている。マイムは水、ザラッハは輝くの意。

シャル
「まさかまさかの、天界、魔界の戦争に人間界が巻き込まれた三界大戦なるものが起きていたなんてね～」

ルシル
「私も驚いたよ。魔界との繋がりは再誕戦争で終わっていたし、天

界なんてさらに大昔。基本的に人間とは比べるまでもない絶対的な強者であるそんな連中との戦争。それを聞いたときは私も面を喰らったよ。勝てるわけがないと」

シャル
「だけど味方の天属や魔族がいてくれた。それがホントに救いだったよね」

ルシル
「まったくだ。三界大戦の主役は天属と魔族だったからな。私やイリス達は脇役ですらなかったような気がするよ。人間でも敵う両勢力の反逆者をチマチマ狩っていただけだったからな」

――ツヅミ、アサヒ、オウチ、ミナト、ヒトヤ――
"T・C・"のメンバーとして当初設定されていた敵キャラ。鼓、旭、杞、湊、獄の名前を持つ、結晶のような角を持つ少女たち。ミヤビ・キジョウと同様に結晶角を発現させると魔術師化する。角の形状はひとりひとり違い、ツヅミはクワガタの顎のような角2本、アサヒは鹿のような枝角2本、オウチはサイのような一本角、ミナトは羊のような巻き角2本、ヒトヤは小さな六角錐角3本。
メンバーは一貫して巫女服のような和装。武器などを一切用いずに徒手空拳のみで戦う。属性はひとり1つで、ツヅミは風、アサヒは火、オウチは地、ミナトは氷、ヒトヤは雷となっている。神秘の濃度はミヤビをも超える、

シャル
「ん？　ミミルと同じディアヴァルネールの鬼人のクローンなんだ

よね？　プライソンってそんなに生み出していたの？」

ルシル
「いやまさか。パイモンがプライソンの研究所から勝手に拝借していたものを使ったようだ。ミヤビよりツヅミ達のスペックが高いのは、単純にプライソンよりパイモンのクローン生成技術が高いからだな。リアンシェルトの消滅後にパイモンから紹介されたわけだが、正直ミヤビのことを考えると犯罪者として働かせたくはなかった。ほぼ姉妹と言って過言じゃないからな。私たちの問題に巻き込むわけにはいかなかったから、設定をすべて破棄してヴァルキリーの登場に変更したわけだ」

シャル
「割と作り込んだ設定だったのに勿体ない気持ちもあるけどね。最終章のラストエピソードでさらに新キャラ追加して、決着の付け方や後日談での在り方とかを考えるのが途中で面倒くさくなったというのが真実だろうけどさ」

ルシル
「それを言ってやるな」

――スマル＆スヴァリ
光煌世界アールヴヘイム出身の妖精エルフ、またをアールヴ。ルシリオン達"アンスール"が参戦した再誕戦争末期以前よりアースガルドにて働いているエルフ達のリーダー。
夏という意味を持つスマルは執事服を着た老齢の男性エルフ。気位の高い女を表す言い方の１つであるスヴァリはメイド服を着た２０

代半ばほどの女性エルフ。

――シグルリン

光煌世界アールヴヘイム出身の妖精エルフ、またをアールヴ。外見は１０歳ほどの少女だが、１０００年を生きている。保有者が限りなく少ない空間干渉能力を有し、支柱塔"ユグドラシル"内に無限の広さを持つ墓地、天空廟"ユグドラシル・マウソレウム"を常時展開している。

名の由来：シグルリン／北欧神話に登場するスヴァーヴニル王の娘、ムナルヘイム第一の美女シグルリン。

――アノル＆イシル・セインテスト・アースガルド

ゼフィランサス、ルシリオン、シエルの両親。戦闘の才能も魔力もあまりなかった自分たちから、魔術師として最高クラスの魔力や複製スキルを保有するルシリオンが生まれたことに歓喜。１０００年と続く戦争を勝利と言う形で終結させるために、親心を努めて排除してルシリオンを兵器として育てることを決意。

結果、ルシリオンは神器王と謳われることになるほどの実力者に育ったが、娘のゼフィランサスやルシリオン本人から心底嫌われてしまうことになる。結局、娘や息子と和解することなく戦死してしまった。

名の由来：アノル／Ｊ・Ｒ・Ｒ・トールキンの作ったエルフ語で『太陽』。イシル／左記と同様で、『月』を意味する。

――あゆ・セインテスト

ルシリオンとはやての間に生まれた実娘。東風と書いて"あゆ"。春から夏にかけて吹く東寄りの風で、氷を解き、春を告げる風とゆ

う意味の雅語の1つでもある。

――シグルド・フライハイト
ルシリオンとイリスの間に生まれた実息。再誕戦争よりはるか以前に英雄と謳われていた魔術師シグルドから名を拝借。

シャル
「むふ、むふふ、くふふふふ！　あーっはっはっはっはっはっは！！」

ルシル
「ど、どうした・・・？」

シャル
「イリスに子どもが生まれた！　しかも相手はルシル、あなた！
私では叶えられなかったことを、私の転生者が叶えたの！　私はそれだけで満足！」

ルシル
「あ、あー、うん。私としても人間としての人生を取り戻すことが出来、はやてと結ばれたことは満足、最高級の幸せだ」

シャル
「だね！　さてさて、あらかた紹介できたよね。そう言えば、私やルシルの術式一覧はどうなの？　やっとく？」

ルシル
「いや。魔術・魔法一覧は元々、次のエピソード執筆時に使うため

の一種の辞典的役割として書いたものなんだが、本エピソードで終わることで書く必要性が無いんだ。術式を羅列しても面白くないから、もういいんじゃないか？という話だ」

シャル
「ふーん。まぁ確かに面白味は無いよね～。え？　じゃあ１０年以上続いたＡＮＳＵＲシリーズ、これにて終わり？　本当に？」

ルシル
「ああ、終わりだ。番外編だし、そんな感動的な終わりでなくても問題ないだろ？」

シャル
「それはまぁそうだけど・・・。なら、打ち上げと行こうよ！　打ち上げ！」

ルシル
「打ち上げ・・・？」

シャル
「そ♪　ほらほら、なのは達みんなが待っているから、早く行こう♪」

ルシル
「あ、ああ！　行こう！」

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~509

魔道戦記リリカルなのはANSUR～Last codE～
2022年03月08日　00時00分発行